聖人の伝記

聖ディミトリ・ロストフスキー（トゥプタロ）

聖ディミトリ・ロストフスキーの『チェチイ・ミネイ』に基づき編纂された、ロシア語による聖人伝

＊＊＊

目次:

はじめに *35*

1月 *52*

1月1日 **52**
聖殉教者ヴォニファティウスの受難 52
慈悲深き聖ボニファティウス、フェレンティウス司教の伝 58
オミリトの大司教、聖グリゴリオスの生涯。 61
聖殉教者イリヤ、プロヴァ、アリスの記念日 76
聖殉教者ポリエウクトスとティモテオスの記念日 77

1月2日 **77**
聖イグナティオ・テオフォロス（神を運ぶ者）聖司祭殉教者の受難。 77
アンティオキアの主教、聖フィロゴニオスの記念日 86
セルビアの大司教、聖ダニエルの生涯 87

1月3日 **93**
聖女ユリアニアと彼女と共に殉教した者たちの殉教日 93
聖ペトロ、キエフおよび全ロシアの総主教の生涯 100
聖殉教者テミストクレスの記念日 105

1月4日 **105**
聖大殉教者アナスタシア・ウゾレシテリツァ、その師クリソゴン、フェオドティア、および彼女と共に殉教した者たちの殉教 105

1月5日 **116**
聖なる父ニフォンタ、キプロス司教の生涯 117
クレタ島の十人の殉教者たちの受難 131
ネオケサリアの主教、聖パウロの記念日 133

1月6日 **134**
聖エウゲニアの生涯と殉教。 134
聖ニコラオス修道士の記念日。 149

1月7日 **151**
主なる神、また私たちの救い主イエス・キリストの降誕の物語。 151
キリストの降誕の説教 160
三賢者の礼拝に関する伝承 169

1月8日 **174**
聖母マリアが幼子イエスを連れてエジプトへ逃れた物語 174
義なる王ダビデの生涯 177

聖ヨセフ、至聖なる聖母マリアの婚約者の記念日 189
聖なる殉教者エウフィミオス、サルディスの司教の記念日 191
聖エヴァレストの記念日 192
聖コンスタンティン・シナドスキーの記念日 193

1月9日 194
聖第一殉教者兼大助祭ステファノの殉教 194
聖なる尊者殉教者にして信仰告白者テオドロスと、その兄弟である尊者テオファノスの生涯と受難 に記されている 200
コンスタンティノープル大司教、聖テオドロスの記念日 211

1月10日 211
ニコメディアで焼かれた二万人の殉教者たちの殉教 211

1月11日 222
ヘロデ王によってベツレヘムで殺害された1万4千人の幼児の記念日 222
「眠らぬ修道院」の修道院長、私たちの尊き父マルケルの生涯 225
聖マルコ・ペシェルニクと聖テオフィロス・プラチリヴィの伝記。 234
聖ファデオス・殉教者の記念日 239

1月12日 239
聖女アニシアの殉教 239
聖殉教者フィレテルの記念日 244
聖ゾティコス・シロトピタテルの記念日 245
ケサリアの聖テオドラの記念日 247
コンスタンティノープルの聖テオドラの記念日 248

1月13日 249
私たちの聖母メラニア・リムリャニナの生涯。 249

1月14日 258
キリストの割礼の説教 258
私たちの聖なる父、ケサリアの大司教ヴァシレイオス大聖人の生涯 262
聖殉教者ヴァシレイ・アンキルスの記念日 288

1月15日 289
私たちの尊い父セラフィム・サロフの生涯 289
私たちの聖なる父、ローマ教皇シルヴェストルの生涯 323
聖テオゲノス、パリオス司教、聖司祭殉教者の記念日 335

1月16日 335
聖殉教者ゴルディウスの受難 335
聖預言者マラキの記念日 339

1月17日 340
七十人の使徒たちの祝日 340
聖エウスタフィオス、セルビア大司教の生涯 354
聖ゾシマ尊者殉教者と聖アファナシウス殉教者の記念日 357

1月18日 357
聖殉教者テオペンプトスとテオナの殉教 357
聖シンクリティキアの記念日 361
聖アポリナリアの生涯 361
聖預言者ミカの記念日 369
聖グリゴリオス・クリティオスの記念日 370
聖フォスティリオスの記念日 371
聖ミーナの記念日 371

1月19日 372
主の洗礼 372
主の顕現に関する聖ヨハネ・クロソストモスの説教 374
主の顕現の説教 376

1月20日 384
主の先駆者にして洗礼者、聖ヨハネの祝日。 384
主を洗礼した聖ヨハネ・洗礼者（前駆者）の右手の伝承 385

1月21日 388
聖殉教者ユリアヌスとヴァシリスサ、および彼らと共にいた者たちの生涯と受難 388
聖グリゴリー・ペチェルスキーの記念日 398
聖ドムニカの記念日 402
聖ゲオルギオス・ホゼヴィトの記念日 403
聖殉教者カルテリオの記念日 406
聖イリヤ・プスティンニクの記念日 407
聖殉教者テオフィロスとエラディオスの記念日 407
聖エミリアン・殉教者の記念日 408

1月22日 408
聖殉教者ポリエウクトスの殉教 408
聖フィリッポス、モスクワ都主教の記念日 412
聖エウストラティオスの記念日 417
聖預言者サメイの記念日 418
聖ペトロ、セバスティアの司教の記念日 419

1月23日 419
我らの聖なる父、ニッサの司教グリゴリオスの生涯 419
メリティノの主教、聖ドメティアンの記念日。 423
聖マルキアノスの生涯 423
聖パウロ・コメルスキーの記念日。 426

1月24日 429
尊き父テオドシオス大聖人の生涯 429
アンティオキアの聖テオドシオスの記念日 442
聖ミハイル・クロプスキーの記念日 442

1月25日 445
聖殉教者タチアナの受難 445
セルビアの大司教、聖サヴァの生涯 448
聖殉教者ペトロ・アベサロミトの殉教 469
聖殉教者メルティウスの記念日 471

1月26日 471
聖殉教者エルミルとストラトニクの殉教 471
ニジビエの主教、聖ヤコブの伝記 475
ウスティエにあるロストフのボリソグレブ修道院の隠遁者、我らの尊き父イリナルクの生涯 479

1月27日 497
シナイとライフェにおける聖なる父たちの最初の迫害 497
シナイとライフェにおける聖なる父たちの二度目の殉教 506
聖ニナ（使徒に等しい）の生涯——イヴェリアの伝道者 510
聖ステファノの記念日 528

1月28日 528
我らの尊き父、フィヴェイのパウロの生涯 529
聖ヨハネ・クシュチニクの伝 533

聖殉教者パンソフィアの記念日 541

1月29日 541
聖使徒ペトロの尊い鎖への礼拝。 541
聖殉教者スペウシッポス、エレウシッポス、メレウシッポス、その祖母レオニラ、および彼らと共に殉教した者たちの受難。 543
聖殉教者ダナクト（朗読者）の記念日 549

1月30日 549
尊者アントニオス大聖人の生涯 549

1月31日 570
聖なる父アファナシオス、アレクサンドリアの大司教の生涯 570

2月 589

2月1日 589
我らの尊き父、エジプトのマカリアの伝記 589
我らの尊き父、アレクサンドリアのマカリオスの生涯 611
聖殉教者エウフラシアの記念日 620
ケルキラの大司教、聖アルセニオスの記念日。 621

2月2日 621
尊者エウフィミオス大聖人の生涯 621
聖殉教者ヴァッサ、エウセビオス、エウティキオス、ヴァシリダスの記念日 641
聖殉教者インナ、ピンナ、リムマの記念日 641

2月3日 641
私たちの尊い父、マクシムス・殉教者の生涯。 642
聖殉教者ネオフィトスの受難 665
聖女アグニアの生涯と殉教 669
聖殉教者ヴァレリアヌス、カンディダ、エウゲニウス、アキラの記念日 674

2月4日 675
聖使徒ティモテオの生涯 675
聖なる殉教者アナスタシオス・ペルシヤニンの生涯と受難。 679
聖殉教者マヌエル、ゲオルギオス、ペトロス、レオントス、シオニオス、ガブリエル、ヨハネス、レオントス、パロドス、およびその他377名、彼らと共に殉教した者たちの記念日 690

2月5日 690
アンキルの司教である聖司祭殉教者クリメント、聖殉教者アガファンゲル、および彼らと共に殉教した者たちの生涯と受難 690
聖パウリヌス・ミロスティヴィイ、ノーラ司教の生涯 708
我らの尊き父、コストロムスのゲンナディイの伝記 711
聖マウシマ・シリンの記念日 718
沈黙の聖サラマンの記念日 718
第6回全地公会議の記念日 719

2月6日 720
聖母クセニア（俗名エウセヴィア）の生涯 720
聖殉教者バビラ・シチリアスおよびその弟子ティモテオとアガピオスの記念日 728
聖マケドニア・プスティニク（隠者）の記念日 729

2月7日 729
聖父グリゴリオス・テオロゴス、コンスタンティノープル総主教の生涯 729
聖殉教者フェリサタとその七人の息子たちの記念日。 743
尊者ポプリウスの記念日。 744
尊者マラ・ペヴツの記念日。 744

2月8日 745
聖クセノフォンタス、聖マリア、およびその息子たちヨハネスとアルカディオスの生涯。 745
尊者シメオン・ヴェホイの記念日。 756
聖殉教者アナニア長老、ペトロ獄吏、および彼らと共に殉教した七人の戦士たちの記念日 757
聖ヨセフ・ソロンスキの記念日 757

2月9日 758
聖ヨハネ・クラマトリオス（金口）の聖遺骨の移送 758

2月10日 762
私たちの尊い父エフレム・シリンの伝記 762
ペチェールスクの聖エフレム、ペレヤスラフの司教の伝記。 769
聖エフレム・ノヴォトルジスキーの記念日。 771
聖パラディオス・プスティニクスの記念日。 771

2月11日 772
聖殉教者イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の聖遺骨の移送。 772
ペチェルスクの隠者、私たちの尊い父ラウレンティウスの伝記 772
聖殉教者シルヴァノ司教、ルカ助祭、モキア朗読者への追悼 774
聖殉教者ロマン、ヤコブ、フィロフェイ、イペリキオス、アビバ、ユリアヌス、パリゴリアスの記念日 774

2月12日 774
三人の偉大な全地教師、バシレイオス大聖人、グリゴリオス神学者、ヨハネス・クラマトルスの記念日。 774
聖殉教者テオフィロス・ノヴォイの記念日 777
聖殉教者イポリトス、ケンソリヌス、サヴィヌス、処女クリシア、およびその他の二十人の殉教者たちの記念日 777
尊者ジノンの記念日 778

2月13日 779
聖なる奇跡行者であり無償の奉仕者であるキルとヨハネ、ならびに聖殉教者アファナシアとその三人の娘たち、テオクティスタ、テオドティア、エウドクシアの殉教 779
ノヴゴロドの主教、聖ニキータの生涯。 782
聖殉教者ヴィクトリヌス、ヴィクトル、ニキフォロス、クラウディウス、ディオドロス、セラピオン、パピウスの記念日。 785
聖殉教者トリフェナの記念日。 785

2月14日 785
聖殉教者トリフォンの受難 785
ビフィニアの隠者、聖ヴェンディミアンの記念日 793
聖殉教者ペルペトゥアと、彼女と共に殉教した聖少年たちサティル、レヴォカト、サトルニル、セクンダ、および聖フィリシタタ（妻）の記念日 793

2月15日 794
主の奉献の祝日 794

2月16日 799
聖シメオン・ボゴプリイムツの記念日。 799
聖殉教者ブラシアの記念日 801
聖殉教者アドリアンとエヴヴルの記念日 801
聖なる信仰深いウグリチ公ロマン、奇跡行者の生涯 802
聖預言者アザリヤの記念日。 804
聖殉教者パピウス、ディオドロス、クラウディアヌスの殉教 804

2月17日 804
尊い父イシドール・ピルシオツキーの記念日 805
我らの尊き父、ニコラオス・イスポヴェドニク、ストゥディオス修道院のイグメノスの生涯 808
聖キリル、ノヴォエゼルスクの奇跡行者の記念日 815
聖殉教者アヴラミイ、アルヴィル司教の記念日。 817

ある敬虔な隠者についての追憶 817

2月18日 819
聖殉教者アガフィアの殉教日 819
聖殉教者テオドゥリアの殉教 825
私たちの聖なる父、チェルニヒウの大司教テオドシオスの生涯 828

2月19日 836
聖女ファウスタと、彼女と共に殉教したエヴィラシアおよびマクシマの殉教 836
聖殉教者ドロテアと、彼女と共に殉教したクリスティーナ、カリスタ、テオフィラの殉教 841
聖殉教者ユリアンの記念日。 848
スミルナの司教、聖ヴコルスの記念日 849
聖殉教者マルファとマリア、および彼らの兄弟である聖殉教者リカリオン少年の記念日。 849

2月20日 850
我らの聖なる父、ランプサキオスの司教パルテニオスの生涯。 850
私たちの尊き父、エフェソスのルカの伝記 857
ニコメディアで殉教した千三人の聖殉教者たちの記念日。 870

2月21日 872
聖大殉教者テオドロス・ストラティラトスの殉教。 872
聖預言者ザカリア・セルポヴィツの記念日。 880

2月22日 884
聖殉教者ニキフォロスの受難 884
聖なる殉教者、シチリアの司教マルケッルス、キプロスの司教フィラグリウスの記念日 887

2月23日 887
マグネシアの司教である聖殉教者ハラランピオス、および彼と共に殉教したポルフィリオスとヴァプトス、ならびに三人の女性殉教者たちの殉教記念日。 887
ペチェルスクの奇跡行者、聖プロホールの生涯。 897
聖エンナファ、聖ヴァレンティーナ、聖パヴラの記念日。 900

2月24日 901
聖司祭殉教者ブラシアス（セバスティアの司教）および彼と共に殉教した者たちの生涯と受難 901
聖テオドラ王妃の記念日。 907
聖ディミトリ・プリルツキー、ヴォロゴダの奇跡行者の記念日 907
聖なる信仰深い公爵ヴェセヴォロドの記念日。彼は聖なる洗礼においてガブリエルと名付けられた。 909

2月25日 912
私たちの聖なる父、アンティオキアの大司教メレティオスの生涯。 912
私たちの聖なる父、モスクワおよび全ロシアのミトロポリス、奇跡行者アレクシオスの生涯 918
マリーナという名で男性の装いをして修業に励んだ聖女マリアと、その父である聖エウゲニオスの生涯 922
コンスタンティノープル総主教聖アントニオスの記念日 926

2月26日 926
私たちの尊い父マルティニアヌスの生涯、および聖女ゾエとフォティニアの記念日。 927
セルビア王、聖シメオン・ミロトチヴィの記念日 937
アレクサンドリアの大司教、聖エウロギオスの記念日 938

2月27日 938
聖アウクセンティウスの行伝 938
ペチェルスクの隠者、聖イサアクの生涯 941
聖マロンの記念日 945
カリアの主教、聖アブラハムの記念日 945
聖なる忠実なチェルニゴフ公ミハイル・ヴセヴォロドヴィチとその家臣フェオドールの聖遺骨の移送 946

2月28日 946

七十人の使徒の一人である聖使徒オニシモスの生涯と殉教 946
聖エウセビオス・隠者の記念日 950

3月 951

3月1日 951
十二人の殉教者、長老パンフィロスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教 951
聖マルフ司教およびマルティロポリで殉教した聖殉教者たちの記念日。 954

3月2日 955
聖大殉教者テオドロス・ティロンの殉教 955
聖マリアムナの記念日。 960
聖殉教者ミーナ・カリケラドの聖遺骨発見 961

3月3日 961
聖父レオ、ローマ教皇の記念日 961
我らの聖なる父、殉教者フラヴィアヌス、コンスタンティノープル総主教の記念日 965
聖アガピトス・殉教者、シナドの司教の記念日 970

3月4日 972
尊者ドシフェイの生涯。彼は尊者ドロフェイの弟子である。 972
聖使徒アルキッポス、フィリモン、アプフィアの記念日 979
聖ラヴラの記念日。 981
聖エウゲニオスとマカリオス両殉教者の記念日。 982

3月5日 983
カターニアの司教、聖レウスの生涯 983
聖サドク、ペルシャの司教および彼と共に殉教した128人の殉教者たちの殉教 985
ローマ教皇聖アガフォンの記念日。 987

3月6日 987
シムヴォリの隠者、私たちの尊い父ティモフェイの記念日 987
アマストリドの主教、聖ゲオルギオスの記念日。 988
私たちの聖なる父、アンティオキアの司教エウスタフィオスの生涯 988

3月7日 1003
聖殉教者マウリキオスとその子フォティノス、および彼らと共にいた70人の戦士たちの殉教。 1003
シリアの隠者、聖ファラシオスの記念日。 1009
シリアの隠者、聖ヴァラダトの記念日。 1009
聖アファナシオス・殉教者の記念日。 1010

3月8日 1010
聖司祭殉教者ポリカルプ、スミルナ司教の生涯と殉教 1010
聖ヨハネ、アンティオキオス、アントニノス、モーセの記念日 1018
聖ゼヴィン、ポリクロニオス、モーセ、ダミアンの記念日 1019

3月9日 1019
主の先駆者にして洗礼者ヨハネの尊い頭部の第一および第二の発見。 1019
ペチェルスクの聖エラスムスの記念日 1025

3月10日 1026
私たちの聖なる父、コンスタンティノープル大司教タラシオスの生涯 1027

3月11日 1036
我らの聖なる父、ガズの司教ポルフィリオスの生涯 1036

3月12日 1049
私たちの尊い父、殉教者プロコピオス・デカポリトスの記念日 1049

尊者ファラレイの記念日。 1051
ペチェルスクの長老ティトの伝記 1052

3月13日 1054
聖アレクサンドリア総主教、聖司祭殉教者プロテリオスの生涯と受難。 1054
私たちの尊い父、バシレイオス・イスポヴェドニクスの記念日 1057
聖殉教者ネストル、マギディウス司教の記念日 1057
聖女マリーナとキラの記念日 1057

3月14日 1058
尊き父カッシアン・ローマ人の記念日 1058
聖ヨハネ（別名バルサノフィオス）の記念日 1059
聖殉教者テオクティリスト、ペリキトス修道院長の記念日 1060

3月14日 1060
聖なる敬虔な殉教者エウドキアの生涯と殉教 1060
聖殉教者ネストルとトリヴィミウスの殉教。 1081
聖殉教者アントニナの受難 1082
尊者ドムニナの記念日 1082

3月15日 1082
聖テオドトス（キリニオスの司教）の聖殉教の日。 1083
聖殉教者エウファリアの記念日 1087
我らの聖なる父アルセニウス、トヴェリ司教の生涯 1087

3月16日 1095
聖殉教者エウトロピオス、クレオニコス、ヴァシリスコスの殉教。 1096

3月17日 1103
ヨルダン川で生活した、我らの尊き父ゲラシモスの生涯。 1104
聖殉教者パウロとその妹ユリアニア、および彼らと共に殉教した者たちの受難 1107
私たちの尊い父ヤコブ・断食者の生涯 1119

3月18日 1125
聖殉教者コノン・イサヴリアの生涯と受難 1126
聖殉教者コノン（通称「菜園師」）の記念日。 1132
聖イシキオス・ポストニクスの記念日 1133
聖マルコ・ポストニクの記念日 1134
聖殉教者エウロギオスの記念日 1135

3月19日 1135
聖殉教者コノンとその息子コノンの受難――イコニアにて殉教した者たち 1135
42人の聖殉教者たちの受難 1140
聖アルカディオス（および殉教者ユリアヌスとエヴヴロス）の記念日 1151

3月20日 1151
聖エフレム、ヴァシリー、エウゲニー、エルピディウス、アガフォドール、エフェリウス、カピトンの各聖司祭殉教者たちの殉教。彼らはそれぞれ異なる時代にヘルソンの司教を務めた。 1151
聖エミリアンの記念日 1154
聖パウロ殉教者の記念日 1155
神が、施しを受ける人々の運命を明らかにされた隠遁者の物語 1156

3月21日 1157
聖テオドリトス、アンティオキアの司祭、聖殉教者の受難 1157
ニコミディアの司教、殉教者テオフィラクトの記念日 1160

3月22日 1162
アルメニアのセバスティアにおける四十人の殉教者たちの殉教 1162

聖殉教者ウルパシアヌスの受難 1169
聖ケサリウスの記念日 1171

3月23日 1171
聖殉教者コドラトスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教 1171
ニコミディアの聖殉教者コドラト、および彼と共に殉教した聖殉教者サトリン、ルフィン、その他諸聖人の殉教 1175
私たちの尊い母アナスタシア（後に去勢者アナスタシウスと改名された）の記念日 1186

3月24日 1189
聖人たる我らの父、ソフロニオス・プレムードロス、エルサレム総主教の記念日 1189
聖なる殉教者ピオニオス、スミルナの司祭、および彼と共に殉教した者たちの 1195
聖なる父エウフィミオス、ノヴゴロド大司教の記念日 1204

3月25日 1207
聖なる父テオファン・殉教者の生涯 1207
聖人伝：我らの父、グリゴリオス・ドエスロヴォス、ローマ教皇 1217
義人フィネアスの記念日。 1223

3月26日 1224
ツァレグラード総主教ニキフォロスの聖遺骨の移送 1224
聖殉教者アレクサンドルの記念日 1226

3月27日 1226
私たちの尊い父ヴェネディクトの生涯 1226
聖エウスキモス・殉教者の記念日 1240

3月28日 1240
聖殉教者アガピオス、ププリオス、ティモラオス、ロミロス、アレクサンドロス、アレクサンドロス、ディオニシオス、ディオニシオスの記念日 1240
聖殉教者ニカンドロスの記念日 1241
聖司祭殉教者アレクサンドルの記念日 1242

3月29日 1243
聖使徒アリストヴロスの記念日 1244
聖殉教者サヴィンの記念日 1244
聖殉教者トロフィモスとファラの受難 1245
聖殉教者パパの記念日。 1248

3月30日 1248
神の僕、聖アレクシオスの生涯 1248
聖殉教者マリーナの受難 1256
私たちの尊い父マカリー・コリャジンスキーの生涯 1256

3月31日 1266
聖人である我らの父、エルサレムの大司教キリルの記念日 1266
私たちの尊き父、奇跡行者アニンの生涯 1270
聖殉教者トロフィモスとエウカルピオスの記念日 1275

4月 1276

4月1日 1276
聖殉教者クリサンフォスとダリアの殉教 1276
聖殉教者パンハリアの記念日 1286

4月2日 1288
私たちの尊い父たち、ヨハネ、セルギウス、パトリキウスの殉教、記念日。 1288
聖殉教者フォティナの受難 1293

聖女アレクサンドラとクラウディアの殉教 1296
聖ニキータ・殉教者の記念日。 1297

4月3日 1297
尊き父ヤコブ、司教にして殉教者の記念日 1297
カターノの主教キリル、我らの父の聖人記念日 1298
コンスタンティノープル総主教、私たちの父トマス聖人の記念日 1298

4月4日 1299
聖司祭殉教者ヴァシリー、アンキルスの長老の受難。 1299
聖女ドロシダの記念日。 1305

4月5日 1307
聖司祭殉教者ニコンの生涯と殉教 1307
ペチェルスク修道院のイグメン、我らの尊き父ニコンの生涯 1313
聖殉教者フィリトスとリディアの記念日 1317

4月6日 1318
聖なる父アルテモン、セレウキアの司教の記念日 1318
私たちの尊い父ヤコブ・殉教者の記念日。 1318
ペチェールスク修道院で起こった奇跡の回想。 1320

4月7日 1321
至聖なる聖母マリアの受胎告知の説教 1321

4月8日 1329
聖大天使ガブリエルの祝日 1329
聖イリネイ、シルミアの司教、聖殉教者の受難 1334
私たちの尊い父マルカの生涯 1337
ゴート族の26人の殉教者の記念日 1342
私たちの尊い父ヴァシリー・ノヴォイの生涯 1343

4月9日 1373
エジプトの隠者であり、隠遁者である、私たちの尊き父ヨハネ・プロゾルリーの生涯 1373
聖女マトロナ・ソロンスカヤの記念日 1383
聖殉教者マヌイルとテオドシオスの記念日 1384

4月10日 1384
我らの尊き父エウストラティオス・ペチェルスキーの生涯と殉教 1384
聖殉教者イオナとバラキシオスの記念日 1387
私たちの尊い父、イラリオン・ノヴォイの記念日 1387
私たちの尊い父ステファノス殉教者の記念日。 1388
タクシオテの戦士に関する物語 1389

4月11日 1390
我らの尊き父マルコ、アレフシウス司教の殉教。 1390
私たちの尊い父、隠遁者ヨハネの記念日 1393
ビフィニアの司教、殉教者エウスタフィオス聖父の記念日 1395

4月12日 1395
尊き父ヨハネ・ラダーの生涯 1395
聖預言者ヨアダの記念日 1403
誰をも非難しなかった修道士の話。 1404

4月13日 1404
聖イパティオス・奇跡行者、ガングラ司教の記念日 1405
ルフィナにおける、私たちの尊い父イパティオスの記念日 1407
聖アポロニオスの記念日。 1408

聖殉教者アヴダとベニヤミンの記念日 1408
聖イオナ、キエフおよび全ロシアの総主教の帰天....1409
聖なる義人ヨセフ・プレクラースキーの伝 1415

4月14日 1434
聖母マリア・エジプトの伝記 1435
尊き父エウフィミオス・スーズダリの記念日。....1446

4月15日 1450
聖殉教者アンフィアノスとエデシオスの殉教。....1450
私たちの尊き父、奇跡行者ティトスの記念日 1452
アレクサンドリアで 、マクシミアヌス帝の治世下において殉教した聖ポリカルプの記念日 1453

4月16日 1453
私たちの尊い父、殉教者ニキタの生涯。 1453

4月17日 1463
聖なる父ヨセフ、賛美歌作家でありカノンの作者である方の記念日....1463
聖殉教者フェルヴーファの受難。 1469
聖ゾシマの記念日 1472

4月18日 1473
聖殉教者アガフォポドスとテオドゥルの殉教 1473
我らの尊き父マルコ・アテネの聖行 1480
尊者ププリウスの記念日 1487
私たちの尊い父、殉教者プラトン聖人の記念日....1488
テオドラ・ソロンスカヤ聖女の記念日。 1491

4月19日 1492
聖人伝：我らの父エウティキオス、コンスタンティノープル大司教....1492
聖プラトニダの記念日 1499

4月20日 1500
私たちの尊い父、ミティレネの総主教ゲオルギオス・イスポヴェドニクの記念日 1500
聖殉教者カリオピオスの受難 1502

4月21日 1505
ノヴゴロドの司教、我らの尊き父ニフォントの生涯....1505
聖人たる私たちの父、ローマ教皇ケレスティヌスの記念日....1509
聖殉教者パヴシリポスの受難。 1510
聖使徒ヘロディオン、アガヴァ、ルファ、アシンクリト、フレゴント、エルミアの記念日。 1510

4月22日 1511
聖殉教者エウプシキオスの殉教 1511
聖ヴァディム大修道院長殉教者の受難。 1513

4月23日 1515
聖殉教者テレンティウスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教....1515

4月24日 1518
聖アンティパ（ペルガモスの司教）の殉教 1519
聖殉教者プロケッサスとマルティニアヌスの記念日....1521

4月25日 1522
聖母アファナシアの生涯 1523
私たちの尊き父イサアク・シリンの生涯。 1528
聖殉教者ジノン、ヴェロニアの司教の記念日 1530
私たちの尊い父、殉教者ヴァシレイオス、パリオス司教の記念日....1531

聖アンフサの記念日。 1531

4月26日 1532
聖司祭殉教者アルテモンの殉教 1532
聖殉教者トマイダの記念日。 1538
聖殉教者クリスケントの受難。 1540

4月27日 1541
聖マルティヌス・イスポヴェドニク、ローマ教皇の殉教。 1541
リトアニアの聖殉教者アントニウス、ヨハネス、エウスタフィオスの殉教 1547
聖殉教者アルダリオンの受難 1550
千人の聖殉教者たちとアザトの受難 1550

4月28日 1551
聖殉教者サヴァ・ゴトフの殉教 1551
聖使徒アリスタルコス、プダ、トロフィモスの記念日 1555
聖女殉教者ヴァシリッサとアナスタシアの記念日 1555

4月29日 1556
聖殉教女アガピア、ヒオニア、イリナの殉教 1556
聖殉教者イリーナの殉教。 1562

4月30日 1562
ペルシアの司教、聖殉教者シメオンの殉教 1562
聖人伝：我らの父、メリティノスの主教アカキオス 1566
聖殉教者アドリアンの受難 1569
我らの尊き父ゾシマ、ソロヴェツ修道院のイグメンの生涯 1569
聖人である我らの父アガピト、ローマ教皇の記念日 1581

5月 1582

5月1日 1582
聖グリゴリオス・デカポリトスの弟子である、私たちの尊い父ヨハネの記念日。 1582
聖殉教者ヴィクトル、ゾティク、ジノン、アキンディン、セヴェリアンの記念日。 1583
聖殉教者ヨハネ・ノヴォイの殉教 1584
私たちの聖なる父、ハルキドン司教コスマス・殉教者、および尊者アウクセンティウスの記念日 1587

5月2日 1588
尊い父ヨハネ・ヴェホペシェルニクの記念日 1588
聖殉教者クリストフォロス、フェオナ、アントニノスの記念日 1588
ピシディアのアンティオキア司教、私たちの尊い父ゲオルギオス・イスポヴェドニク（殉教者）の記念日 1589
コンスタンティノープル総主教、尊き父トリフォンの記念日 1589
聖ニキフォロスの記念日 1591

5月3日 1592
シナイ山の修道院長、我らの尊き父アナスタシオスの記念日 1592
聖アナスタシオス・シナイタ、アンティオキア総主教の記念日 1593
聖グリゴリオス、アンティオキア総主教の記念日。 1596
私たちの尊い父テオドロス・トリキナの記念日 1597

5月4日 1597
聖殉教者イアンヌアリオスの受難 1598
聖殉教者テオドロスの受難 1600
聖殉教者イサキイ、アポロス、コドラトスの記念日 1603

5月5日 1603
私たちの尊い父、アナスタシウポリの司教テオドロス・シケオスの生涯 1603
私たちの尊い父、修道士ヴィタリオスの生涯 1621

5月6日 1625
聖大殉教者ゲオルギオス・ポベドノスツの殉教 1625

5月7日 1647
私たちの尊い父、聖トマ・ユロディヴィの記念日。 1647
聖殉教者サヴァ・ストラティラトスと彼と共にいた七十人の戦士たちの記念日 1648
私たちの聖なる母、奇跡を行うエリサベタの記念日。 1649
聖殉教者パシクラトスとヴァレンティンの受難 1650
聖殉教者エウセビオス、ネオン、レオントス、ロンギノスおよび彼らと共に殉教した者たちの殉教 1651

5月8日 1651
聖使徒・福音記者マルコの生涯と殉教。 1651
私たちの尊い父シルヴェストル・オブノルスキーの記念日。 1659

5月9日 1661
聖殉教者ヴァシレイ、アマシウス司教の殉教日 1661
聖人伝：我らの父ステファノ、ペルミの司教 1667
聖なる義人グラフィラの記念日 1676

5月10日 1677
主の親族である聖使徒兼殉教者シメオンの記念日 1677
私たちの聖なる父ステファノ、ウラジミロ＝ヴォリンの司教の生涯 1678

5月11日 1680
聖使徒イアソンとソシパトル、および聖殉教者ケルキラの処女の記念日 1680
聖殉教者マクシムス、ダダ、クインティリアヌスの殉教 1682
聖人としての記念：我らの父キリル、トゥロフの司教 1684

5月12日 1686
キジクで殉教した九人の聖殉教者たちの記念日 1686
私たちの尊き父、奇跡行者メムノンの記念日 1688

5月13日 1688
聖使徒ヤコブ・ゼベダイの記念日。 1688
聖人である私たちの父、ドナト司教の記念日。 1691

5月14日 1694
聖預言者エレミヤの生涯と殉教 1694
私たちの尊き父パフヌティウス・ボロフスキーの生涯 1714
聖殉教者ヴァタの殉教 1731

5月15日 1731
聖殉教者エスペルとゾイの殉教 1731
ロシアの公爵ボリスとグレブ、聖殉教者たちの苦難と奇跡 1735

5月16日 1757
聖殉教者ティモテオスとマヴラの殉教 1757
ペチェルスクの修道院長、私たちの尊き父テオドシオスの生涯 1765
私たちの尊い父、奇跡行者ペトロの記念日 1788

5月17日 1789
聖女ペラギアの殉教 1789
聖殉教者シルヴァノス、ケシウス司教の殉教 および彼と共に殉教した四十人の殉教者たち 1797
聖殉教者アルヴィアヌス司教 およびその弟子たちの受難 1798
聖殉教者エラスムスの受難。 1798

5月18日 1799
聖大殉教者イリーナの殉教 1799

5月19日 1811
聖なる義人にして多き苦難を耐え忍んだヨブの生涯 1811
聖殉教者バルバラ（戦士）および彼と共に殉教した者たちの受難 1818
かつて強盗であった聖バルバラの記念日。 1819

5月20日 1821
聖殉教者アカキイの受難 1821
天に現れた主の尊き命を与える十字架の御しるしの記念 1830

5月21日 1832
尊き父アルセニオス大聖人の生涯 1832
聖使徒にして福音記者、神学者ヨハネの記念日 1847

5月22日 1848
聖預言者イザヤの生涯 1848
聖殉教者クリストフォロスの受難。 1858
ミルリキの大司教、聖ニコラオスの聖遺骨の移送に関する伝承 1860

5月23日 1862
聖使徒シモン・ゼロテの記念日 1862
聖イシドーラ・ユロディヴァの生涯 1863
聖タシシアの記念日 1865
聖シモン、ウラジーミルおよびスーズダリの司教の伝 1867
聖殉教者イシキアの受難 1870
聖殉教者アルフィア、フィラデルファ、キプリアン および彼らと共に殉教した他の聖人たちの受難 1871

5月24日 1871
聖司祭殉教者モキアの殉教。 1871
スラブ人の教師である、尊い父メフォディオスとコンスタンティノス（修道名キリル）の生涯と業。 1876

5月25日 1910
私たちの聖なる父、コンスタンティノープル大司教ゲルマノスの生涯。 1910
聖なる父サヴィン、キプロスの司教の記念日 1914
リノキル司教、私たちの聖なる父ポルヴィウスの記念日。 1915
私たちの聖なる父エピファニオス、キプロス大司教の生涯 1915

5月26日 1941
聖殉教者グリケリアと、彼女と共に拷問を受けた獄吏ラオディキアの殉教 1941
聖殉教者アレクサンドルの殉教 1949
シナドの主教、私たちの尊い父パヴシカキエの記念日 1962
聖ゲオルギオス・イスポヴェドニクの記念日。 1963

5月27日 1963
聖殉教者イシドールの受難 1963
私たちの尊き父セラピオン・シンドニトスの生涯 1966
聖殉教者マクシムスの受難 1969

5月28日 1970
尊者パホミオス大聖人の生涯 1970
我らの尊き父エウフロシノス、プスコフの奇跡行者の記念日 1995
ラリシスの主教、私たちの尊い父アキリイの記念日 1997

5月29日 1997
パホミイの弟子である、私たちの尊い父テオドール・オスヴィャシェンヌイの生涯 1998
聖なる乙女ムーサの記念日 2005

5月30日 2006
聖使徒アンドロニコスと、その助手ユニアの記念日 2007

聖殉教者ソロホンの記念日 2007

5月31日 2008

聖殉教者テオドトスと、彼と共に殉教した七人の乙女たち――ファイナ、クラウディア、マトローナ、テクサ、ユリア、アレクサンドラ、エウフラシア――の殉教記念日 2008

聖なる殉教者ペトロ、ディオニシオス、アンドレイ、サウロ、クリスティーナ、イラクリオス、パヴリン、ヴェネディムの殉教。 2023

聖殉教者シメオン、イサク、ヴァフティシスの受難。 2026

6月 2026

6月1日 2026

聖司祭殉教者パトリキウスと、彼と共に殉教した三人の司祭、アカキウス、メナンドロス、ポリエンの受難 2026

エジプト人聖殉教者カルフの殉教 2030

ウグリチの大公ヨハネ（修道名イグナティウス）、ヴォロゴダの奇跡行者の帰天 2030

我らの尊い父、ゴトフの主教ヨハネの記念日。 2032

6月2日 2033

聖殉教者ファラレイの受難 2033

アスカロンの聖殉教者の受難。 2036

全ロシアの総主教であり、奇跡を行う者であるアレクシオスの尊い遺骨の発見と移送 2039

6月3日 2042

聖使徒同等のコンスタンティン王とその聖母ヘレナの生涯 2042

聖なる信仰深い公爵コンスタンティンとその子ら、ミハイルとテオドール、ムロムの奇跡行者の記念日。 2060

6月4日 2061

聖殉教者ヴァシリスカの殉教 2062

6月5日 2070

尊者ミハイル・懺悔者の記念日 2070

聖ミハイル・チェルノリツァの殉教 2072

ポロツクの修道院長、聖エウフロシニアの生涯 2073

6月6日 2079

私たちの尊い父シメオン・ディヴノゴルツの記念日 2079

聖殉教者メレティオス・ストラティラトスと、彼と共に殉教した1318人の戦士たちの殉教 2095

聖殉教者セラピオンと、彼と共に殉教したカリニカス、テオドロス、ファウストの受難 2096

我らの尊き父、ニキタ・ストルプニク、ペレヤスラフの奇跡行者の記念日 2096

6月7日 2099

聖フェラポンティオス、キプロス司教、聖殉教者の記念日 2099

6月8日 2101

聖殉教者ゲオルギオス・ノヴォイの殉教 2101

尊き父ヨハネ・プサイハイトの記念日 2104

七十人の使徒の一人、聖カルパの記念日 2104

聖使徒アルフェイの記念日 2106

6月9日 2106

聖殉教者テオドラとディディモスの殉教 2106

聖なる司祭殉教者フェラポントの記念日 2110

キエフおよび全ロシアの奇跡行者である聖キプリアン、フォティオス、イオナの尊い遺骸の移送 2110

我らの尊き父フェラポンティ、ベロゼルスクの奇跡行者の記念日 2111

6月10日 2113

聖殉教者エリコニダの殉教 2113

私たちの尊い父、ハルキドン司教ニキタの記念日 2117

ロストフの主教、聖イグナティウスの記念日 2118
聖殉教者エラディオスの記念日 2119

6月11日 2120
聖殉教者テオドシアの記念日 2120
聖女テオドシアの殉教 2121
聖なる狂人ヨハネ、ウスチュジの奇跡行者の記念日。 2125

6月12日 2127
尊き父イサアク・殉教者の生涯 2127

6月13日 2130
聖殉教者エルミアの受難 2131
聖哲人殉教者の受難 2133

6月14日 2134
聖殉教者ユスティヌス・フィロソフォスの生涯と受難 2134
聖殉教者ユスティノスとその仲間たちの殉教 2141
ペチェルスクの聖アガピト、無償の医師の生涯 2144
私たちの尊い父、グルシツキー修道院のイグメン、新たな奇跡行者ディオニシオスの記念日 2147

6月15日 2149
聖ニキフォロス・殉教者、コンスタンティノープル総主教の聖人伝 2150
聖大殉教者ヨハネ・ノヴォイの受難 2159

6月16日 2165
聖殉教者ルキリアヌスと、彼と共に殉教した四人の少年、クラウディウス、イパティウス、パウロス、ディオニシウス、および聖処女パウラの記念日 2165
聖ルキアノ司祭殉教者の生涯と受難 2167

6月17日 2174
聖なる父ミトロファン、コンスタンティノープル総主教の記念日 2174
聖殉教者コンコルディウスの受難 2176
聖殉教者フロンタシウス、セヴェリヌス、セヴェリアヌス、シラヌスの殉教 2178
我らの尊き父ゾシマ、バビロン主教の生涯。 2180

6月18日 2183
聖殉教者ドロテオス、ティルスの司教の記念日。 2183
エジプトの殉教者にして隠遁者、尊き父アヌヴィウスの帰天 2184
尊き父テオドロス・プスティニクスの記念日 2186
キエフ都主教、至福のコンスタンティンの死に関する物語 2187
聖殉教者たちの受難：マルキアヌス、ニカンドロス、イペレヒイオス、アポロン、レオニドス、アリアス、ゴルギオス、セリニオス、イリニオス、パムヴォン 2189

6月19日 2190
我らの尊き父ヴィッサリオン聖人の生涯。 2190
尊い父イラリオン・ノヴォイの記念日 2192
聖なる殉教者アルケライ、フェクラ、スザンナの受難 2195

6月20日 2199
聖マルケッロ・ローマ教皇および彼と共に殉教した聖人たちの殉教 2199
聖女キリアキア、カレリア、マリアの記念日 2209
聖殉教者マルケリンの記念日。 2210

6月21日 2211
聖エフレム、アンティオキア総主教の生涯 2211
尊き父ゾシマの記念日。 2214
聖大殉教者テオドロス・ストラティラトスの聖遺骨の移送 2216

6月22日 2217
我らの聖なる父キリル、アレクサンドリアの大司教の生涯 2217
クシュトの修道院長、尊者アレクサンドルの記念日。 2231

6月23日 2232
我らの聖なる父ヴァッシアン、ロディの司教の生涯 2232
聖テオファンの記念日。 2240
聖殉教者ティモフェイ、プルス司教の記念日 2240
聖殉教者アレクサンドルとアントニナの殉教 2241

6月24日 2245
聖使徒バルトロマイの生涯と受難 2245
聖使徒バルナバの生涯と受難。 2250

6月25日 2260
尊者オヌフリオ・ザ・グレートの生涯 2260
我らの尊き父、アトス山のペトロの生涯。 2273

6月26日 2282
聖殉教者アキリナの殉教 2283
私たちの聖なる父トリフィリウス、レウクシウス司教の生涯 2287

6月27日 2290
聖預言者エリセイの生涯と奇跡 2290
私たちの聖なる父、コンスタンティノープル総主教メフォディオスの生涯。 2303

6月28日 2310
聖預言者アモスの記念日。 2310
聖殉教者ドゥーラの受難 2313
殉教者ドゥリ聖人の記念日 2319
聖殉教者ヴィタ、モデスタ、クリスケンティアの殉教 2323
至福のヒエロニムスの生涯 2334

6月29日 2348
私たちの聖なる父、奇跡行者ティホーン、アマフントの司教の生涯 2348
私たちの尊き父、ルホフの奇跡行者ティホンの記念日 2350

6月30日 2350
聖殉教者マヌエル、サヴェル、イスマイルの殉教 2350

7月 2356

7月1日 2356
聖殉教者レオントス、イパティオス、テオドゥロスの殉教 2356

7月2日 2363
主の肉親である聖使徒ユダの記念日 2363
尊き父パイスィオス大聖人の生涯 2366
聖殉教者ゾシマ・戦士の受難 2385
私たちの尊い父、隠遁者ヨハネの記念日。 2389

7月3日 2390
聖人伝：我らの父、レウキオス・殉教者。 2390
聖メフォディオス、パタル司教、聖殉教者の記念日。 2397
聖殉教者アリストクリオス、ディミトリアン、アファナシオスの記念日 2398
聖殉教者インナ、ピンナ、リムマの聖遺骨の移送 2399

7月4日 2400

聖殉教者ユリアヌス・タルシアニスの記念日 2400
尊者ユリウス司祭とユリアヌス助祭の伝記 2401

7月5日 2404
聖司祭殉教者エウセビオス、サモサタ司教の生涯と受難 2404
聖殉教者ジノンとジナの記念日。 2410

7月6日 2410
聖殉教者アグリピナの記念日 2411
テオフィロスの悔い改めの物語 2411
ウラジーミルの奇跡を起こす聖母イコンの祝祭 2420

7月7日 2421
聖ヨハネ・洗礼者（主の洗礼者）の降誕に関するシナクサール 2421
聖ヨハネ・クロマトスによる、主の聖なる預言者、先駆者、洗礼者ヨハネの降誕に関する説教 2424

7月8日 2429
聖フェヴロニアの生涯と殉教 2429
聖なる信仰深い公爵ペトロと公爵夫人フェヴロニア（修道名ダヴィドとエウフロシニア）、ムロムの奇跡行者の記念日 2446

7月9日 2447
「ティフヴィンスカヤ」と呼ばれる、奇跡を行う聖母マリアのイコンの顕現 2448
「オディギトリア」と呼ばれる、奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンについて 2463
リドの、あるいはローマの聖母マリアの奇跡を起こすイコンについて 2465
私たちの尊い父、テッサロニキのダビデの記念日 2469

7月10日 2470
私たちの尊き父、旅人を受け入れたサンプソンの聖伝。 2470
聖セヴィルの記念日 2476

7月11日 2477
聖殉教者キュロスとヨハネの尊い遺骸の移送 2477
聖パウロの記念日 2481

7月12日 2482
栄光に満ち、万人に称えられる至高の使徒ペトロの聖人伝、功績、および受難 2482
聖なる、栄光に満ち、万人に称えられる最高使徒パウロの生涯、功績、および受難 2494

7月13日 2510
栄光に満ち、万人に称えられる十二使徒の祝日：ヤコブ・ゼベダイの子（4月30日）、ヨハネ（9月26日）、フィリポ（11月14日）、バルトロマイ（6月11日）、トマス（10月6日）、マタイ（11月16日）、ヤコブ・アルフェオ（10月9日）、ユダ（タダイ）（6月19日）、シモン・ゼロテ（5月10日）、マティア（8月9日）の祝日 2510

7月14日 2511
聖殉教者コスマスとダミアンの殉教 2511
尊い父ペトロの記念日 2514
聖殉教者ポティトの受難 2515

7月15日 2524
ヴラヘルナ教会における聖母マリアの尊い衣の安置に関する伝承 2524
私たちの聖なる父、エルサレム総主教ユヴェナリウスの記念日 2527

7月16日 2529
聖殉教者ヤキンフの受難 2530
不眠の修道院の初代院長、私たちの尊い父アレクサンドルの生涯 2534
聖殉教者モキアとマルコの殉教 2544

7月17日 2545

聖なる父アンドレイ、クレタの大司教の記念日 2545
聖なる義人マルタの生涯 2546
聖殉教者テオドトスとテオドティアの殉教。 2552
聖テオドール、キリネの司教、聖殉教者の受難 2552
尊者エウフィミオス、スーズダリの奇跡行者、我らの父の聖遺骨発見の日 2553

7月18日 2555
我らの尊き父、アフォンのアファナシイの生涯 2555

7月19日 2571
尊者シソイ・ザ・グレートの記念日 2571
聖女ルキアと、彼女と共に殉教したリクサおよびその他の聖女たちの殉教。 2574
聖殉教者コイントの受難。 2575
聖殉教者マリーナ、マルファ、アヴディファクス、アヴヴァクム、キリク、長老ヴァレンティン、アステリウス、およびその他多くの聖人たちの殉教 2575

7月20日 2582
尊い父トマ・マレインの記念日 2582
聖殉教者ペレグリン、ルキアノス、ポンペイオス、イシキオス、パピオス、サトルニヌス、およびゲルマヌスの殉教 2583
聖エピクテト司祭と聖アスティオン修道士、両聖殉教者の生涯と受難。 2583
聖殉教者キリアキアの殉教 2593

7月21日 2594
聖大殉教者プロコピオスの殉教 2595
カザン聖母像の顕現を記念する、至聖なる神の母マリアの祝日 2609

7月22日 2609
聖司祭殉教者パンクラティオス、タウロメニオス司教の記念日 2609
尊者パテルムフィオスとコプリオス、および彼らと共にいた平信徒アレクサンドロスの生涯と殉教 2611
聖パテルムフィオスの記念日 2616
尊者コプリイの記念日。 2619
我らの聖なる父、エデスの主教テオドロスの行伝 2620

7月23日 2643
尊き父アントニー・ペチェルスキーの記念日 2643
聖殉教者アポロニオスの受難 2655
聖殉教者ヴィアノールとシルアノの受難。 2656
アルメニアのニコポリスで殉教した聖45人の殉教者たちの受難。 2656
ペルシャから帝都モスクワへ、我らの主イエス・キリストの尊い衣が移された物語 2662

7月24日 2666
聖大殉教者エウフィミア・オール・グローリーの奇跡の記念日 2666
聖なる洗礼名エレナである、祝福された公妃オルガの帰天 2674
聖殉教者キンデイの記念日 2685

7月25日 2686
聖殉教者プロクルスとイラリウスの殉教。 2686
尊き父ミハイル・マレイナの記念日 2689
聖殉教者ゴリンドゥーヒの受難。 2690

7月26日 2694
聖大天使ガブリエルの祝日 2694
聖ステファノス・サヴァイオスの記念日 2696
聖セラピオンの記念日 2696
聖なる父ユリアヌスの生涯 2696
聖殉教者マルキアノスの受難 2702

7月27日 2702
聖使徒アキラの記念日 2702
聖エリヤの記念日 2705
聖殉教者ユスタの記念日 2707

7月28日 2707
聖殉教者キリコスとユリッタの受難 2707

7月29日 2710
聖司祭殉教者アフィノゲノスとその十人の弟子たちの殉教 2710
聖女ユリアの殉教 2713
聖殉教者アンティオコスの受難 2716
聖殉教者パウロおよび彼と共に殉教した聖女アレフティナとヒオニアの殉教 2717

7月30日 2717
聖大殉教者マリーナの殉教 2717

7月31日 2723
聖殉教者エミリアンの殉教 2723
私たちの尊き父パムヴァの生涯 2726
私たちの尊き父、ヨハネ・多苦の聖人の生涯 2731
聖殉教者ヤキンフの受難 2733

8月 2734

8月1日 2734
聖母マクリナの生涯 2734
私たちの尊い父ディイの生涯 2740

8月2日 2744
聖預言者エリヤの生涯と奇跡 2744
私たちの尊い父、チュフロムスクの、ガリチの大奇跡行者アブラアミオスの記念日 2757

8月3日 2758
聖預言者エゼキエルの生涯 2758
キリストのために聖なる狂人となったシメオンと、その同伴者ヨハネ、尊き父たちの生涯 2764

8月4日 2789
使徒に等しい聖なる香油を携えたマリア・マグダレナの伝記 2790

8月5日 2811
聖司祭殉教者アポリナリオスの殉教。 2812
聖殉教者トロフィモスとテオフィロスの記念日 2821

8月6日 2821
聖女クリスティーナの殉教。 2821
我らの尊き父ポリカルプ、ペチェルスクのアルヒマンドリトの生涯 2825

8月7日 2829
聖女エウプラクシアの生涯 2829
聖オリンピア・ディアコニッサの伝記。 2847

8月 2851
尊き父モーセ・ウグリンの生涯 2851
聖殉教者エルモライの記念日 2856
聖女殉教者パラスケヴァの受難 2857

8月9日 2857
聖大殉教者パンテレイモンの殉教。 2857

尊者アンフィサ修道院長を記念して 2869

8月10日 2869

七十人の使徒のうち、プロホル、ニカノール、ティモン、パルメンの聖使徒たち 2870
聖殉教者エウスタフィオスの記念日 2871
聖殉教者アカキオスの記念日 2872
聖殉教者ユリアヌスの受難 2872

8月11日 2875

聖女セラフィマの殉教 2875
聖殉教者カリニコスの受難 2880

8月12日 2882

聖使徒シラ、シルワノ、クリスケントおよび彼らと共にいた者たち 2882
聖殉教者ヴァレンティンの受難。 2884
聖殉教者ポリクロニオスの受難 2888
聖ヨハネ・ヴォイナ（戦士）の記念日 2892

8月13日 2892

聖義人エウドキム 2892
聖殉教者ユリッタの記念日 2895

8月14日 2895

主の尊き、命を与える十字架の由来 2896
旧約聖書の殉教者たち、祭司エレアザル、マカベオ家の七兄弟、その母ソロモニア、および彼らと共に殉教した者たちの受難 2898
聖殉教者レオティン、アッタ、アレクサンドル、キンデイ、ミンシフェイ、キリアク、ミネイ（ミネオン）、カトゥン、エウクレアの殉教 2905

8月15日 2906

聖第一殉教者兼大助祭ステファノの聖遺骨の移送 2906
聖なる義人、モスクワの奇跡行者、祝福されたヴァシリーの永眠 2912

8月16日 2913

私たちの尊い父たち、イサアク、ダルマート、ファウスト 2913
敬虔なるコスマ、去勢された隠者の生涯 2915

8月17日 2916

エフェソスの七人の少年聖人 2916

8月18日 2925

聖殉教者ポンティウスの生涯と受難 2925
聖殉教者エウシグニオスの記念日 2934
ローマ教皇ファヴィウスの殉教を偲ぶ日 2935

8月19日 2936

『シナクサール』　主の変容の日 2937
主の変容の日の説教 2938

8月20日 2944

私たちの尊き父ピメノス・多病の聖人の生涯 2944
修道士オラの帰天 2948
聖ドメティオス尊者殉教者の記念日 2951
聖殉教者マリーナとアステリアの殉教 2952

8月21日 2954

「トルグの」と呼ばれる、その尊く奇跡を起こすイコンの顕現を記念して、聖母マリアを祝う日 2954
聖なる父、奇跡行者ミロン、クレタ島の司教の記念日。 2956

私たちの聖なる父、キジケの司教エミリアン・殉教者の記念日 2957

8月22日 2958
聖使徒マティアの殉教 2958
聖殉教者アントニオの受難 2962
聖殉教者ユリアヌス、マルキアヌス、および彼らと共にイコンのために苦難を受けた他の聖人たちの記念日。 2962

8月23日 2963
聖殉教者ラウレンティウス大助祭、教皇シクスト、および彼らと共に殉教した者たちの殉教 2963

8月24日 2972
キエフ・ペチェルスク修道院の修道士、私たちの尊い父テオドールとヴァシリーの生涯。 2972
聖女ソサナと彼女と共に殉教した者たちの殉教 2979
聖殉教者エウプラ・ディアコンの記念日 2987

8月25日 2990
聖殉教者フォティオスとアニキタ 2990
聖アレクサンドロス司教（コマン司教）、聖殉教者の記念日 2992

8月26日 2994
聖殉教者イポリト 2994

8月27日 2996
キエフ・ペチェール修道院における聖母マリアの尊き御昇天教会の建立について 2996
ペチェルスクの修道院長、尊い父テオドシオスの聖遺骨の移送 3007
聖預言者ミカの記念日。 3013

8月28日 3017
至聖なる我らの主の母、神の母にして永遠の処女マリアの御眠り 3017

8月29日 3034
エデッサからコンスタンティノープルへの、人の手によらずして現れた我らの主イエス・キリストの聖像の移送 3034
聖ヨハネ・ダマスコスによる、聖なるイコンへの礼拝に関する説教 3039
聖殉教者ディオミデスの記念日 3040
同日、聖ヘリモンの記念日 3041

8月30日 3041
聖殉教者パトロクルの殉教 3041
私たちの尊い父アリピオス・ペチェルスキーの伝記 3046
聖殉教者ストラトン、フィリッポス、エウティキアノス、キプリアンの殉教記念日 3052
聖殉教者ミロンの記念日 3052

8月31日 3053
聖司祭殉教者エミリアンおよび彼と共に殉教した者たちの殉教 3053
聖殉教者フローラとラウラの記念日 3057
聖殉教者エルマ、セラピオン、ポリエンの記念日 3059

9月 3060

9月1日 3060
聖殉教者アンドレイ・ストラティラトの殉教 3060
ドンスカヤ「 」の聖母イコンを称える祝日 3065
聖殉教者ティモフェイ、アガピイ、フェクラの殉教記念日 3065

9月2日 3066
聖預言者サムエルの生涯 3066
聖殉教者セヴィルと百人隊長メムノン、および彼らと共に殉教した三十七人の殉教者たち。 3078

9月3日 3079
聖使徒（七十人使徒の一人）ファデオスの生涯 3079
聖殉教者ヴァッサとその子ら、テオグニオス、アガピオス、ピスタの記念日 3084

9月4日 3085
聖殉教者エウラリアの殉教。 3085
グルジアの聖母マリアのイコンを称える祝日 3088
聖殉教者アガフォニカ、ゾティカ、テオプレピア、アキンディナ、セウィリアヌス、および彼らと共に殉教した他の聖人たちの記念日 3090
同日は、尊者アンフサ、聖司祭殉教者アファナシオ司教、および聖アンフサの二人の従者ハリシマとネオフィトの記念日である 3091

9月5日 3091
リヨンの司教、聖殉教者イリネイの殉教 3091
コンスタンティノープル総主教聖カリニコスの記念日 3098
聖殉教者ルッパの記念日 3100
聖エウティキオスと聖フロレンティウスの記念日 3101

9月6日 3103
聖殉教者シラの受難 3104
聖殉教者エウティキオスの記念日 3114
聖殉教者タティオンの記念日 3115

9月7日 3116
聖使徒ティトス 3116
聖使徒バルトロマイの尊い遺骸の移送 3119
エデッサにてアリウス派の手により殉教した、キリストの聖なる殉教者たちの記念 3120
コンスタンティノープル総主教、聖ミーナの記念日。 3123

9月8日 3124
聖殉教者アドリアンとナタリアの殉教 3124
ウラジーミル聖母イコンの出会いを記念する祝日 3136

9月9日 3139
尊者ピメーン大聖人の生涯 3139
聖殉教者ククシと断食者ピメンの記念日 3149
聖リベリウス殉教者、ローマ教皇の記念日 3150
コルドゥブ司教、殉教者オシアス尊師の記念日 3150
聖ピメン（パレスチナ人）の記念日 3151

9月10日 3152
私たちの尊い父モーセ・ムリンの生涯 3152
我らの尊き父サヴァ・クリペツキー、プスコフの奇跡行者の記念日 3158
聖なる義人アンナの記念日 3159

9月11日 3160
主の聖なる預言者、先駆者、洗礼者ヨハネの首が切断されたという伝承 3160
主の先駆者聖ヨハネの首の切断の日に際しての、聖ヨハネ・クロソストモスの説教 。 3163

9月12日 3168
聖アレクサンドル、聖ヨハネ、聖パウロ、コンスタンティノープル総主教 3168
聖なる信仰深い公爵アレクサンドル・ネフスキーの生涯 3175
我らの尊き父アレクサンドル・スヴィルスキーの記念日。 3199
尊き父クリストフォロスの記念日 3202
私たちの尊い父ファンティンの記念日 3204

9月13日 3205

聖殉教者キプリアン、カルタゴの司教の生涯と殉教 3205
コンスタンティノープル総主教聖ゲナディオスの記念日 3220
至聖なる神の母の尊い帯の安置。 3222

9月14日 3223
インディクト（新年の初日）における説教 3223
尊き神を宿した父シメオン・ストルプニクの生涯 3230
義人イエス・ナヴィンの記念日 3245
ミアシンの修道院にある至聖なる聖母マリア大聖堂の記念日 3245
40人の断食を行う聖処女たちと、その師であるアムムンの記念日 3246
聖殉教者カリスタとその実の兄弟エヴォドおよびエルモゲンの記念日 3247

9月15日 3247
聖殉教者ママンタの生涯と受難 3247
コンスタンティノープル総主教、聖ヨハネ・ポストニクスの生涯 3254
ニコメディアで殉教した3618人の殉教者を記念して 3256

9月16日 3256
聖司祭殉教者アンフィモス、ニコミディアの司教、および彼と共に殉教した多くの聖人たちの生涯と受難 3256
同日、聖殉教者ヴァシリサの殉教記念日 3263
同日、聖司祭殉教者アリスティオンの記念日 3264

9月17日 3264
聖司祭殉教者バヴィラと、彼と共に殉教した三人の少年たちの殉教 3264
聖預言者モーセ・神視者の生涯 3270
聖殉教者テオドール、ミアン、ユリアヌス、キオンの記念日 3285
ニコミディアの聖バヴィラと、彼と共に殉教した84人の子供たちの記念日 3286
聖殉教者エルミオニアの記念日 3286

9月18日 3288
聖預言者ザカリアの生涯 3288
聖殉教者ウルヴァン、テオドール、メディムナ、および彼らと共に殉教した多くの聖人たちの記念日 3291
聖殉教者アヴディウスの記念日 3292
聖殉教者フィファイラとフィヴェイの記念日 3292
聖公グレビの殉教 3292
アフィルにおける聖使徒ペトロの祝祭 3293
聖殉教者ユウェンティヌスとマクシムスの記念日 3293

9月19日 3294
ホネフにおける聖大天使ミカエルの奇跡の記念日 3294
聖殉教者ロミラの受難 3303
聖殉教者エウドクシオスの受難 3304
ゴルティノの主教、聖殉教者キリルの記念日 3308
聖ダビデの生涯 3308
聖殉教者キリアコス、ファウスト、アビブの記念日 3310

9月20日 3310
聖殉教者ソゾントの殉教 3310
聖使徒エヴォドとオニシフォロスの記念日。 3312
聖殉教者エウプシキオスの記念日 3312
我らの聖なる父、ノヴゴロドの大司教ヨハネの生涯 3313

9月21日 3319
聖母マリアの降誕の説教 3319

9月22日 3324
聖なる義人、神の父ヨアキムとアンナの生涯 3324

聖殉教者セウィリアンの受難 3328
ディアコン・ソゾントが見た、神の隠れた義人、祝福されたニキタの記念日 3332
エフェソスにおける第三回全地公会議の記念日 3334
ヴォロコラムスの聖ヨセフの記念日 3335
敬虔なるテオファン、断食者かつ殉教者の記念日 3336

9月23日 3337
聖殉教者ミノドーラ、ミトロドーラ、ニムフォドーラの生涯と受難 3337
聖女プルケリアの生涯 3344
荒野の山で発見された三人の聖女たちの記念日 3349
聖殉教者バリプサヴァの記念日 3351
聖使徒アペリウス、ルカ、クレメンスの記念日 3351

9月24日 3352
男性の装いで修道生活を送った、私たちの尊い母テオドラの生涯と功績 3352
聖エウフロシノスの記念日 3365
聖殉教者イイの記念日 3367
聖殉教者ディオドロスとディディモスの記念日 3368

9月25日 3368
聖殉教者オートノムの生涯と殉教 3368
ニコミディアの司教、聖殉教者コルヌートの記念日 3371
聖殉教者ユリアンの記念日 3371

9月26日 3372
エルサレムのキリスト復活聖堂の修復に関する説教 3372
聖殉教者コルニリウス百人隊長の生涯 3375
聖殉教者ゴルディアヌス、マクロヴィウス、イリアス、ゾティクス、ルキアヌス、ヴァレリアヌスの記念日 3380
アトロエの聖ペトロの記念日 3381
聖殉教者セレウコス、ストラトニクス、クロニデス、レオンティウス、セラピオンの記念日 3381

9月27日 3381
主の尊き命を与える十字架の建立に関する伝承 3382
聖殉教者パピウスの記念日 3387

9月28日 3387
聖殉教者ニキタの受難 3387
聖フィロフェイ、司祭にして奇跡行者の記念日 3390
聖殉教者ポルフィリイの記念日 3390
聖殉教者マクシムス、アスクリアダス、テオドトスの記念日 3391

9月29日 3391
全き称賛に値する大殉教者エウフィミアの殉教 3391
聖殉教者セバスティアナの記念日 3397
聖殉教者メリティナの記念日 3397
聖殉教者リュドミラの記念日 3398
キエフ都主教聖キプリアンの記念日 3399
聖ドローフェイ・隠者の記念日 3400

9月30日 3401
聖女ヴェラ、ナデージダ、リュブヴィ、およびその母ソフィアの殉教記念日 3401
聖殉教者アガフォクリアの記念日 3408
聖殉教者テオドティアの記念日 3409

10月 3410

10月1日 3410

我らの尊き父エウメニオス、ホルティン司教 3410
聖殉教者アリアドナの記念日 3412

10月2日 3412
聖殉教者トロフィモス、サヴァティオス、ドリメドントスの殉教 3412
聖殉教者ゾシマ（隠者）の殉教 3417
スモレンスクおよびヤロスラヴリの奇跡行者、聖なる信仰深い公テオドールとその子ダビデおよびコンスタンティンの記念日 3419

10月3日 3421
聖大殉教者エウスタフィオス・プラキダス、その妻および子供たちの生涯と殉教 3422
チェルニゴフの公ミハイルと、その家臣テオドロスという聖なる殉教者たちの受難――不義なるバトゥによって苦しめられた者たち 3434

10月4日 3440
聖使徒コドラト 3441
聖殉教者イパティオスとアンドレイの記念日 3441
聖殉教者エウセビオスとプリスカの記念日 3442
聖イサキオスおよびメレティオス両司教の記念日 3443
聖ディミトリイ、ロストフ都主教、奇跡行者の生涯 3443

10月5日 3461
聖司祭殉教者フォキオス、シノプス司教の殉教日 3461
「果樹園の守り手」と呼ばれる聖殉教者フォカスの生涯と受難 3462
聖預言者ヨナの伝 3464
尊者イオナ司祭の記念日 3470
かつて徴税人であった聖ペトロの生涯 3470

10月6日 3474
尊く栄光ある預言者、主の先駆者にして洗礼者ヨハネの受胎を記念する説教 3474
聖殉教者アンドレイ、ヨハネ、ペトロ、アントニンの記念日 3476
聖殉教者イライダの記念日 3477
聖ポリクセニアの生涯 3477

10月7日 3480
聖第一殉教者、使徒に等しいテクラの生涯と殉教 3480
聖コプリイの記念日 3487
我らの尊き父ニカンドル・プスコフの聖伝 3488

10月8日 3499
尊き母エウフロシニアの生涯 3499
私たちの尊き、神に愛された父、ラドネジの奇跡行者セルギイの生涯と奇跡 3507
スーズダリの聖エウフロシニアの伝記 3537
尊者殉教者パフヌティウスの記念日。 3538

10月9日 3539
聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの生涯 3539

10月10日 3554
聖殉教者カリストラトスの生涯と受難 3554
私たちの尊い父、ソロヴェツキーのサヴァティイ、奇跡行者の生涯 3559
聖使徒マルコ、アリスタルコス、ジナの記念日 3564
聖殉教者エピカリアの記念日 3565
聖イグナティオの記念日。 3565

10月11日 3565
尊者ハリトン・殉教者の生涯 3566

聖預言者バルクの記念日 3572
聖殉教者アレクサンドロス、アルフェイ、ゾシマ、マルコ、ニコン、ネオン、イリオドロスの記念日。 3572
チェコの公ヴィャチェスラフの聖人伝 3573

10月12日 3575
私たちの尊い父キリアクの聖伝 3576
聖殉教者ダダ、ガヴェッダイ、カズドイの記念日 3583
聖テオファンの記念日 3587

10月13日 3587
大アルメニアの司教である聖殉教者グリゴリオスと、彼と共に殉教した三十七人の処女たちの生涯と受難 3587
ペルシュマ川沿いの修道院の院長であり、ヴォロゴダの奇跡行者である、我らの尊き父グリゴリイの生涯 3595
聖ミハイル、キエフおよび全ロシアのミトロポリス、奇跡行者の記念日 3596

10月14日 3598
聖母マリアの庇護の祝日の説教 3598
聖使徒アナニアの殉教 3604
聖ロマン・スラドコペヴェツの記念日 3607
聖サヴァ・ヴィシェルスキーの伝記 3609
聖殉教者ドムニンの記念日 3615
聖ミハイル・ゾヴィイスキーと彼と共に殉教した人々の記念日 3616

10月15日 3616
聖司祭殉教者キプリアンおよび聖殉教者ユスティナの生涯と受難 3616
聖アンドレイ（キリストのために狂人となった者）の生涯 3625

10月16日 3638
聖ディオニシオス・アレオパゴイテの聖伝と殉教 3638
聖ディオニシオスによる、聖カルポスと二人の罪人に関する物語 3643
ケサリアの主教、聖ヨハネ・ホゼヴィトの記念日 3644
祝福されたイシキオス・ホリヴィトスの記念日 3645

10月17日 3646
カザン大司教グリアとトヴェリ司教バルソノフィイの聖人伝。 3646
聖なる殉教者イエロフェイ、アテネの司教の記念日 3650
尊者アモン聖人の生涯 3651
私たちの尊い父パウロ・プレプロストイの伝記 3653
聖殉教者ガイオス、ファウストス、エウセビオス、ケリモンの記念日。 3657
聖殉教者ダヴィクタとその娘カリステニアの記念日 3658
カペトリアの長老ペトロ聖殉教者の記念日 3658

10月18日 3659
聖殉教者ハリティナの受難 3659
ペチェルスクの聖ダミアンの生涯 3662
ペチェルスクの聖エレミヤの伝記 3663
聖マタイ・ペチェルスキーの伝記 3664
聖殉教者マメルファの記念日 3665
モスクワの聖人ペトロ、アレクシオス、イオネ、フィリッポスの祝日 3665
アレクサンドリアの主教、聖ディオニシオスの生涯 3666

10月19日 3674
聖使徒トマスの生涯と殉教 3675

10月20日 3684
聖殉教者セルギイとバクハの殉教 3684
聖殉教者ユリアヌスとケサリウスの記念日 3690
聖殉教者ポリクロニオスの記念日 3690

我らの尊き父セルギイ・ヌロムスキー、ヴォロゴダおよびオブノルスクの奇跡行者の生涯 3691

10月21日 3699
私たちの聖母ペラギアの生涯 3699
聖タイシアの生涯 3707
聖ペラギア処女の記念日 3709

10月22日 3710
聖使徒ヤコブ・アルフェエフの生涯 3710
聖アンドロニクスと聖アファナシイの伝記 3711
聖なる義人アブラハムの行伝 3717
聖ペトロの記念日 3727
聖ポプリアの記念日。 3728

10月23日 3728
聖殉教者エウランピオスとエウランピアの殉教 3728
聖テオフィロスの生涯 3732
聖殉教者テオテクノスの受難 3734
聖ヴァッシアンの記念日。 3735

10月24日 3735
聖使徒フィリッポスの生涯 3735
聖テオファン（殉教者、カノン制定者）の生涯 3736
聖女殉教者ジナイダとフィロニラの記念日 3738
主イエス・キリストのイコンから現れた奇跡の記念 3738
第7回全地公会議の記念 3740

10月25日 3745
聖殉教者タラハ、プロヴァ、アンドロニクの殉教 3745
カノンの作者、コスマス・マイウムス 3757
慈悲深き聖マルティン、トゥール司教の伝記 3758
聖殉教者ドムニカの記念日 3770
マルタの聖遺物の移送を記念する祝祭 3770

10月26日 3775
聖殉教者カルプ、パピラ、アガフォドール、アガフォニカの記念日 3776
聖殉教者フロレンティウスの記念日 3783
聖ニキータ・殉教者の記念日 3783
聖殉教者ベニアミン・ディアコンの記念日 3785

10月27日 3785
聖殉教者ナザリウス、ゲルヴァシウス、プロタシウス、ケルシウスの受難 3785
聖パラスケヴァの生涯。 3791
聖ニコラ・スヴィャトシの生涯 3795
聖シルヴァノ聖司祭殉教者の記念日 3799

10月28日 3799
尊き父エウフィミオス・ノヴォスの生涯 3800
アンティオキアの司祭、聖殉教者ルキアノスの生涯と受難 3807
聖殉教者サルヴィルとヴェヴェイの記念日 3810
カターノの司教、聖サヴィナの記念日 3811
スーズダリの聖ヨハネ司教の伝記 3811

10月29日 3821
聖殉教者ロンギヌス百人隊長の生涯と殉教 3821

10月30日 3825

聖アンドレイ・クリトス（殉教者）の受難 3825
聖預言者ホセアの記念日 3829
聖コスマスとダミアンの殉教 3830
聖なる義人ラザロ（四日目のラザロ）の記念日 3831

10月31日 3832
聖使徒兼福音記者ルカの生涯 3832
聖ユリアヌスの生涯。 3837

11月 3839

11月1日 3839
聖預言者ヨエルの記念日 3840
聖殉教者ウアールと、彼と共に殉教した七人のキリスト教教師たちの殉教、ならびに福者クレオパトラとその子ヨハネの記念日 3841
尊き父ヨハネ・リルスキーの記念日 3848

11月2日 3850
聖殉教者アルテミオス 3850
義人アルテミオス、ヴェルコルスの奇跡行者の記念日 3858

11月3日 3862
尊き父イラリオン大聖人の生涯 3862
聖イラリオン・メグリンスキーの記念日 3877
聖殉教者ダシウス、ガイウス、ゾティクスの記念日 3878

11月4日 3878
聖アヴェルキオス（使徒に等しい者）、イェラポリス司教の記念日 3878
聖殉教者アレクサンドロス司教、イラクリオス戦士、および四人の女性――アンナ、エリサベタ、テオドティア、グリケリア――の記念日 3886
ボリソグレビ修道院の創設者である、ロストフの聖テオドールと聖パウロの記念日 3886

11月5日 3891
聖使徒ヤコブ、主の肉親の兄弟の生涯と受難 3891
聖ヤコブ・ボロヴィツキーの記念日 3895
コンスタンティノープル総主教聖イグナティオスの記念日 3896

11月6日 3897
聖殉教者アレファの殉教 3897
ペチェルスクの聖アレファの生涯 3912

11月7日 3914
聖マルキアヌスとマルティリウスの殉教 3914
聖殉教者アナスタシオスの記念日 3915

11月8日 3915
聖なる栄光ある大殉教者ディミトリオスの受難と奇跡 3915

11月9日 3924
聖殉教者ネストルの受難 3924
聖ネストル・年代記作家の生涯 3926
聖殉教者カペトリナとエロティイダの記念日 3927

11月10日 3928
聖大殉教者パラスケヴァの殉教 3928
聖なる殉教者キリアコス、エルサレム総主教の記念日 3931
聖殉教者テレンティウスとネオニラの記念日 3932

11月11日 3932
聖大殉教者アナスタシア・ローマ人の記念日 3933
隠遁者アヴラミオスと至福のマリアの生涯 3938
我らの尊き父、ロストフのアヴラミイの生涯 3947

11月12日 3951
エーゲ海主教聖殉教者ジノヴィオスと、その妹ジノヴィアの殉教 3952
聖殉教女エウトロピアの記念日 3954
聖使徒テルティウス、マルコ、ユストス、アルテミスの記念日 3954
シラクーサの司教、聖マルキアノの記念日 3955

11月13日 3955
聖殉教者エピマコスの記念日 3955
聖使徒スタキオス、アムリア、ウルヴァン、ナルキッサ、アペリウス、およびアリストヴロスの記念日 3956
聖スピリドンと聖ニコディモの生涯 3957

11月14日 3958
聖コスマスとダミアノ、無償の奉仕者にして奇跡行者の生涯と奇跡 3958
聖殉教者ケサリウスとダシウスの記念日 3961
ゴート王子の聖殉教者エルミニンゲルドの受難 3961
聖女キリエナとユリアニアの記念日。 3962
聖殉教者ヨハネとヤコブの記念日 3963

11月15日 3963
聖殉教者アキンディン、ピガシウス、アネンポディストスの殉教 3963
聖マルキアノスの記念日 3971

11月16日 3972
聖殉教者アケプシム司教、ヨセフ司祭、アイファル助祭の殉教 3972
リッダにある聖大殉教者ゲオルギオスの聖堂の奉献式 3982
聖アケプシモスの記念日 3983
聖殉教者アッティクス、アガピア、エウドクシア、カテリア、イストゥカリア、パクトヴィア、ニクトポリオンの記念日 3983

11月17日 3984
尊き父ヨアンニキオス大聖人の生涯 3984
聖殉教者ニカンドロス司教とエルメアス司祭の受難 3996
至福のシモン・ユリエヴェツキーの帰天 3997

11月18日 3999
聖ガラクティオンとエピスティマの聖徒殉教者たちの生涯と受難 3999
聖イオナ、ノヴゴロド大司教の伝記 4007
聖使徒パトロス、エルマ、リナ、ガイア、フィロロスの記念日 4015
アレクサンドリアの聖グリゴリオス司教の記念日 4015

11月19日 4016
聖パウロ・殉教者、コンスタンティノープル大司教の生涯 4016
私たちの尊き父、ノヴゴロドの奇跡行者ヴァルラアム聖人の生涯 4021
カザン大司教聖ゲルマノスの伝 4023
聖ルカの記念日 4027

11月20日 4028
聖殉教者イエロンとその仲間たちの殉教 4028
聖殉教者メラシッポス、カシニア、アントニノスの記念日 4032
聖殉教者アウクタ、タウリオン、テッサロニキアの記念日 4033
聖ラザロの記念日 4033

11月21日 4034
聖大天使ミカエルおよびその他の天の無形の軍勢の祝日 4034

11月22日 4039
尊き母マトローナの生涯と功績 4039
聖テオクティスタの生涯。 4049
聖ヨハネ・コロフの伝記 4053
聖殉教者オニシフォロスとポルフィリオスの記念日 4056
聖エウストリアとソシパトラの記念日。 4057
聖殉教者アントニオスの記念日 4058
聖殉教者アレクサンドロス・テッサロニキスの記念日。 4058

11月23日 4058
聖殉教者オレストスの殉教。 4058
殉教者ミリヤの受難 4062
聖使徒オリンポス、ロディオン、ソシパトラ、エラスト、クワルトの記念日 4064

11月24日 4065
聖大殉教者ミナの殉教 4065
聖殉教者ヴィクトルとステファニダの殉教 4072
聖殉教者ヴィケンティウスの殉教。 4075
私たちの尊い父、テオドロス・ストゥディトスの生涯 4079
聖ステファン・デチャンスキー、セルビア王の生涯 4097
キリストのために聖なる狂人となったモスクワの至福のマクシムを記念する日 4108

11月25日 4109
アレクサンドリア総主教ヨハネス・ミロスティヴィの生涯 4109
敬虔なるニロス・ポストニクスの記念日。 4123
聖預言者アキアの記念日 4124
ロストフの奇跡行者、聖ヨハネ・ブラサトの生涯 4125

11月26日 4126
コンスタンティノープル総主教、聖ヨハネ・クラマトリオス（金口）の生涯 4126
聖殉教者アントニヌス、ニキフォロス、ゲルマン、マネファの記念日 4162

11月27日 4163
聖使徒フィリッポスの生涯 4163
テッサロニキの大司教、聖グリゴリオス・パラマスの生涯 4170
フィリッポス・イラプスキの聖人伝 4179
敬虔なるユスティニアヌス帝とテオドラ皇后の記念日 4184

11月28日 4185
聖殉教者グリア、サモン、アビブの殉教 4185
聖殉教者エルピディオス、マルケッルス、エウストキオスの記念日 4196
聖殉教者ディミトリオスの記念日 4197

11月29日 4197
聖使徒・福音記者マタイの生涯と殉教 4197

11月30日 4202
聖父グリゴリオス・奇跡行者、ネオケサリアの司教の生涯 4202
我らの尊き父、ラドネジの修道院長ニコンの伝記 4214
聖ラザロ・ピセツの記念日 4222

12月 4223

12月1日 4223

聖殉教者プラトンの受難 4223
聖殉教者ロマンと少年ヴァルルの殉教 4228
聖殉教者ザケイとアルフェイの記念日 4230

12月2日 4231
聖預言者アヴディアの生涯 4231
聖バルラアムとインドの王子ヨアサフ、およびその父であるアヴェニール王の行伝 4232
聖殉教者ヴァルラアムの受難 4253
ペチェルスクの聖バルラアム伝 4261
聖殉教者アザと彼と共にいた150人の戦士たちの記念日 4263
聖殉教者イリオドールの記念日 4264

12月3日 4265
私たちの尊い父グリゴリオス・デカポリトスの生涯 4265
コンスタンティノープル総主教聖プロクルの伝記 4270
聖殉教者エウスタフィオス、テスペシオス、アナトリアスの受難 4272
聖殉教者ダシウスの記念日。 4278
聖殉教者ニルサとヨセフの記念日 4279
聖殉教者ヨハネ、サベリウス、イサアク、イパティウス、および彼らと共に殉教した他の聖人たちの記念日 4279

12月4日 4281
至聖なる神の母、永遠の処女マリアの神殿入りの伝承 4281

12月5日 4288
聖殉教者キキリアおよび彼女と共に殉教した聖殉教者ヴァレリアヌス、ティヴルティウス、マクシムスの殉教 4288
聖使徒フィリモン、アルキッポス、アプフィアの記念日 4295
義人ミカエル・ヴォイナを記念する 4296
聖殉教者プロコピオスの記念日 4297
聖殉教者メニグナの記念日。 4298
聖アガッヴァの記念日 4299

12月6日 4299
我らの聖なる父、イコニオス司教アンフィロキオスの生涯 4299
私たちの聖なる父、アクラガンティの司教グリゴリオスの生涯 4302
聖殉教者シシニオスの記念日 4321
聖殉教者テオドロスの記念日 4322

12月7日 4322
聖大殉教者エカテリーナの生涯と殉教 4322
聖大殉教者メルクリウスの殉教 4336
スモレンスクの聖殉教者メルクリウスの記念日 4343
聖シモン・ソイギンスキーの記念日 4345
尊者マストリディアの記念日 4346

12月8日 4347
聖クレメンス、ローマ教皇、聖司祭殉教者の生涯と受難 4347
聖なる殉教者ペトロ、アレクサンドリアの大司教の生涯と受難 4356
聖ペトロ・モルチャニクの記念日 4360

12月9日 4360
私たちの尊い父アリピオス・ストルプニクスの生涯 4360
聖ヤコブ・隠遁者の記念日 4365
キエフの聖ゲオルギオス大殉教者教会奉献記念日。 4365

12月10日 4366
聖殉教者ヤコブ・ペルシヤニンの殉教 4367
聖ロマン記念日 4374

ロストフの主教、聖ヤコブの記念日 4374
エレノポリスの司教、聖パラディオの記念日 4376

12月11日 4377
聖ステファノ・ノヴォイの殉教 4377
我らの聖なる父、ロストフの大司教テオドロスの生涯 4401
聖殉教者イリナルクの記念日 4405
聖ステファノ・ノヴォと共に、聖なるイコンのために苦難を受けた聖殉教者たちの記念日 4406

12月12日 4406
聖アカキオス・シナイの記念日 4406
聖殉教者パラモンの記念日 4407
聖殉教者フィルメンの記念日。 4408

12月13日 4408
聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの功績と受難 4408
インドの大司教、聖フルメンティウスの記念日。 4420

12月14日 4422
聖預言者ナウムの記念日 4422
聖なる義人フィラレート・ミロスティヴィイの生涯 4424

12月15日 4440
聖預言者アバクムの記念日 4440
聖殉教者ミロピアの受難 4443
ペチェルスクの聖アファナシイの伝記 4444
セルビア王聖ステファノの伝 4445
聖ヨハネ、イラクレモン、アンドレイ、テオフィロスの記念日 4447

12月16日 4447
聖預言者ゾフォニアの記念日 4447
私たちの尊い父、ヨハネ・沈黙者の生涯 4450
聖サヴァ・ストロジェフスキーの帰天 4459

12月17日 4463
聖大殉教女バルバラの生涯と殉教 4463
私たちの尊き父ヨハネス・ダマスキノスの生涯 4476
聖ヨハネ・ポリヴォツキーの記念日 4488

12月18日 4489
我らの尊い父、聖サヴァの生涯と功績 4489
聖カリオーン修道士とその子ザカリアの記念日 4520

12月19日 4522
聖ニコラオス、ミルリキの大司教、聖人かつ奇跡行者の生涯 4522

12月20日 4544
私たちの聖なる父、ミラノの司教アンブロシウスの生涯 4544
聖ニラ・ストロベンスキー、ノヴゴロドの奇跡行者の生涯 4558
聖殉教者アフィノドールの記念日 4560
聖パウロ・ポヴィンニクの記念日 4560

12月21日 4561
私たちの尊い父パタピオスの生涯 4561
聖使徒ソスフェン、アポロ、キファ、ティキコ、エパフロディト、ケサリの記念日 4563
アフリカにおいてアリウス派の手によって殉教した聖なる殉教者たちの記念日。 4565

12月22日 4566

聖母アンナの受胎。この日、彼女は聖母マリアを身ごもった。 4566
聖預言者アンナの記念日、預言者サムエルの母....4567
聖ステファノス・ノヴォシヤテル（新光者）の記念日....4569
キプロス大司教、聖ソフロニオスの記念日 4570

12月23日 4571
聖殉教者ミーナ、エルモゲン、エウグラフの殉教....4571
聖ヘメルの記念日 4584
聖トマス・デフルキンの記念日 4584

12月24日 4587
私たちの尊い父ダニエル・ストルプニクの生涯....4587
ペチェルスクの聖ニコン・スホイの伝記 4603
聖殉教者アケプシオスとアイファロスの記念日。 4605
聖殉教者ミラクスの記念日 4606
聖ルカ、新柱頭者の記念日。 4607

12月25日 4608
聖スピリドン・トリミフントスの生涯 4608
聖なる殉教者アレクサンドロス、エルサレム司教の記念日....4620
聖殉教者ラズムニクの記念日 4621

12月26日 4621
聖殉教者エウストラティオス、エウゲニオス、アウクセンティオス、マルダリオス、オレストスの殉教 4621
聖女ルキアの殉教 4639
聖アルセニオス・ラトルスキスの記念日 4643

12月27日 4643
聖殉教者フィルス、レウキオス、カリニコス、フィリモン、アポロニオスおよび彼らと共に殉教した者たちの殉教日....4643

12月28日 4657
聖司祭殉教者エレウフェリウスとその母アンフィアの殉教....4657
聖ステファノ・イスポヴェドニク、スロジ大司教の伝記....4662
聖パウロ・ラトルスキの記念日 4666
聖殉教者エレウフェリオス・クヴィキュリアリウスの記念日....4667
聖パルド・隠者の記念日 4668

12月29日 4668
聖預言者ハガイの記念日 4668
至福の女王テオファニアの生涯。 4669
聖殉教者マリーナの記念日 4673

12月30日 4674
聖預言者ダニエルと、彼と共にいた三人の聖なる少年たち、アナニア、アザリヤ、ミサイアの生涯 4674
聖ダニエル・殉教者の記念日 4689

12月31日 4689
聖殉教者セバスティアンとその仲間たちの生涯と殉教....4689
エルサレムの大司教、聖モデストの記念日 4705
アミイの司教、聖フローラの記念日 4706
聖ミハイル・シンケルの記念日。 4707

はじめに

聖ディミトリ・ロストフスキーの『ミネイ・チェチイ』は、古くから変わらず、ロシア正教徒にとって愛読される書物であり続けています。スラブ語で記されたこの『ミネイ・チェチイ』は、17世紀から19世紀にかけて、数多くの部数が流通しました。　その印刷は現在も続いており、需要も衰えることはありません。しかし近年、こうした需要に加え、モスクワ総主教庁印刷所には、ロシア語版の『ミネイ・チェチイ』を希望する申し出が寄せられるようになりました。　こうした要望の数は年々ますます増加しており、これは同書への切実な需要があることを明確に示している。　この需要に応えるため、モスクワ・シノダル印刷所の所長であるS. D. ヴォイトは、『ミネイ・チェチイ』のロシア語訳版の出版に尽力した。この件に関する彼の請願は、聖シノドの首席検事であるK. P. ポベドノスツェフ氏およびその同僚であるP. I. オストロウモフ氏から啓蒙的な共感と精力的な支援を得て、成功を収め、1900年5月、聖シノドはモスクワ・シノダル印刷所に対し、ロシア語版『ミネイ・チェチイ』の初版発行を開始することを許可した。

この膨大な出版物の制作にあたり、モスクワ印刷所には委員会が設置され、その構成員には、主に高等神学教育を受けた多くの聖職者および世俗の人々が名を連ねた[1]。 委員会の委員長を務めるのは、モジャイスクのパルフェニー主教であり、聖シノドの決定により、新版『ミネイ・チェチイ』の検閲も彼に委ねられている。策定された計画によれば、この出版物の基礎となるのは、聖ディミトリウスによる『ミネイ・チェチイ』のテキストである。　さらに、ミネイにおいて聖人の記念日だけが記載されている場合には、その聖人に関する情報は『プロローグ』から引用される。聖人の伝記の本文には、多様な解説注釈が添えられる。　また、この版には、各地で崇敬されているロシア、南スラブ、グルジアの聖人たちの伝記も収録される予定である。ロシアの聖人に関しては、委員会は、わが国の様々な図書館や修道院に所蔵されている写本を参考にしつつ、多くの伝記を新たに作成することになる。

新しい伝記の編纂には長期にわたる調査や様々な機関との連絡が必要であるため、かねてより待ち望まれている出版物の刊行を遅らせないよう、ロシアの聖人の伝記は完成次第、個別の号として印刷し、その後、4ヶ月分とは別に特別な補遺としてまとめられることとし、 当面は、ディミトリ・ロストフスキーの『ミネイア・チェティイ』に収録されている完全版および要約版の聖人伝を、各月の書籍に収録することとします。ロシアの聖人伝を編纂するにあたっての聖人伝資料の選定および編集において、委員会はモスクワ神学アカデミーおよびモスクワ大学のV. O. クリュチェフスキー教授の指針に従っています。

---

[1] 委員会は以下のメンバーで構成されている：プロトイェレイ・スミルノフ・P・A、司祭：アルセーニエフ・I・V、アルセーニエフ・N・V、ベリャチェフ・M・I、ミロフスキー・H・M、ムレトフ・S・D、ポロゾフ・A・A、ピャティクレストフスキー・A・M、ピャトニツキー・P・I、ソロヴィエフ・イ・R、ストラホフ・S・V、フデル・イ・I——氏：ボゴヤヴレンスキー・S・K、ヴェルジボロヴィチ・M・O、ドロフェエフ・V・P、ズヴェレフ・A・V、イタリンスキー・A・D、ケドロフ・N・I、 ポゴジェフ・エ・N、ポゴレロフ・V・A、ロザノフ・H・P、ストルジェントソフ・M・I、トルシュ・K・A、ウシャコフ・D・N——カサトキン・S・V、モルチャノフ・S・I、ポクロフスキー・A・A、サハロフ・S・N、セルギエフスキー・H・F、　ソボレフ・A・M、スタヴロフスキー・S・I、トロイツキー・N・I（後者の8名は編集作業に参加している）。

また、同大学のM・I・ソコロフ教授も本出版事業に参加しており、ロストフ・ヤロスラヴリ地方のロシアの聖人および一部のスラブの聖人の伝記を編纂する作業を担当している。　一方、『ミネイ・チェチイ』の刊行に関する編集作業は、印刷所管理者の補佐であるA. S. オルロフと、印刷所の校正担当者であるA. N. ソロヴィヨフに委ねられている。

「聖人の伝記と賛美は、その輝きにおいて星に似ている。すなわち、星は天に定位置を定められ、天の下のすべてを照らし出している。それらはインド人からも見え、スキタイ人からも隠れることなく、大地を照らし、海を照らし、航行する船を導く。 その名こそ、その多さゆえにすべてを知ることはできなくとも、その輝かしい善行には驚嘆する。 聖人たちの輝きもまた同様であり、たとえその遺骸が墓に封じられていても、その力は地上の境界に限定されるものではない。我々は彼らの生涯に感嘆し、神が御心に適う者たちを称えるその栄光に驚嘆する」。

シメオン・メタフラスト

* * *

あなたがたに神の御言葉を宣べ伝えた導き手たちを覚え、彼らの生涯の終わりに目を向け、彼らの信仰に倣いなさい

ヘブライ人への手紙13:7

様々な功績によって神に喜ばれた聖なる修道者や殉教者たちの生涯と行いに関する物語や記録は、キリスト教会の創設当初から存在している。　これらの物語の礎を築いたのは、聖福音記者ルカであり、彼は『使徒行伝』において、私たちの救い主の最初の主要な弟子たちやその他の信徒たちの功績と苦難を描写した。　それより少し前、聖使徒パウロは、自身の書簡の一つにおいて、キリストへの信仰を自らの生涯と殉教の死によって刻み込んだ指導者たちを記念するよう、キリスト教徒に命じていた。　神に霊感を受けた語り手の模範に従い、首席使徒の戒めを守りながら、キリスト教徒たちは常に聖人たちの生涯と行いに関する記録を丹念に保存してきました。

最も早く記録されたのは、聖なる殉教者たちに関する記述や伝承であった。キリスト教の普及と確立において、殉教は極めて重要な意義を持っていた。　信仰のために勇敢に死へと向かった殉教者たちの不屈の精神と揺るぎなさは、異教徒たちの心に深く響き、しばしば拷問者たち自身が、犠牲者たちの不平を言わない姿を見て、キリスト教に改宗することさえあった。このように、テルトゥリアヌスの言葉を借りれば、キリスト教殉教者たちの血は、新たなキリスト教徒の種となったのである。

聖なる殉教者たちの死の日を正確に記録し、キリスト教徒たちはその日に集まって彼らの記念を祝った。「キリストの証人たちが亡くなる日を覚えておきなさい」と、カルタゴの聖キプリアンは自身の聖職者たちに書き送った。「そうすれば、私たちは殉教者たちの記念とともに、彼らの記念を祝うことができるからです」。　この目的のために、キリスト教会には、牢獄や法廷でキリスト教徒たちに起こったすべての出来事を記録する特別な書記たちがいた。周知の通り、こうした書記たちは、キリスト教徒に対する最初の迫害の時期に、聖クリメイヌスによってローマの各地区に配置されたのである。　異教の政府がこれらの書記官たちに死刑を脅かしたにもかかわらず、キリスト教徒への迫害が続く間、記録は絶え間なく続けられた[2] 。これらの記録には、時に拷問を行う裁判官たちの質

[2] 古くから、キリスト教徒に対する迫害は計10回あったとされており、具体的には以下の皇帝たちによるものである：ネロ（54–68）、ドミティアヌス（81–96）、トラヤヌス（98–117）、マルクス・アウレリウス（161–180）、セプティミウス・セウェルス（193–211）、　マクシミヌス（235–238）、デキウス（249–261）、ヴァレリアヌス（253–259）、アウレリアヌス（270–276）、ディオクレティアヌス（284–305）によるものである。実際には、広範囲にわたる組織的な迫害は10回未満であったが、局所的かつ偶発的な迫害ははるかに多かった。　迫害の原因について、古代のキリスト教徒たちは皆、悪魔の悪意にあると見ていた。悪魔はキリスト教会と戦い、その拡大を阻止する最も効果的な手段の一つとして、キリスト教徒への迫害を試みていたのである。この見解は、エウセビオス・ケサリアスが著書『教会史』の中で述べている

問や、それに答える殉教者たちの返答に関する詳細な情報が含まれており、「殉教者記録」として知られている。　こうした記録の中には、殉教者たちの裁判の最中に作成された、裁判記録そのものが含まれているものもある。これらは公式の裁判記録の写しであり、キリスト教徒たちは多額の代金を支払って異教徒から入手していたものである。

殉教者の殉教日は、その殉教者が所属していた教会だけでなく、他のすべての教会でも祝われた。なぜなら、各教会のキリスト教徒たちは、自分たちの教会で殉教した者たちについて、他の教会に知らせ合っていたからである。　例えば、聖ポリカルプが殉教したスミルナの教会は、このことをフィラデルフィアの教会に書簡で伝え、他の教会にもこの書簡を転送するよう依頼した。聖なる殉教者たちの苦難の記述は、大きな尊敬を集めていた。それらは、聖書の朗読に続いて、教会の集会で読まれていた。　聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）の殉教録から推測できるように、この慣習はすでに2世紀には存在していた。殉教者エウストラティオスの古代の伝記には、聖人の殉教録が読まれる時間帯――すなわち、詩篇の詠唱後の早課――についても明記されている。　そして418年、カルタゴ公会議は、殉教者の記念日には教会で彼らの受難を朗読するという規則を定めた。

キリスト教徒への迫害が終わり、キリストの教会が国家において支配的な地位を占めるようになると、教会内には、殉教者に関するすべての記録や物語を一堂に集めることを目標とした、思慮深く賢明な人々が現れました。そうした収集家の第一人者は、ケサリアのエウセビオス・パンフィルスでした[3]。　彼はまず、ディオクレティアヌス帝の治世下で殉教したパレスチナの殉教者たちの伝記を収集した。その後、伝承によれば、彼はコンスタンティヌス大帝に対し、ギリシャ・ローマ帝国のすべての司法機関から殉教記録を書き写すよう要請した。　皇帝の勅令により、そのような記録はすべてエウセビオスに送られ、彼はこれらの記録に基づいて『古代殉教録』を編纂した。この集成には、すべての教区における殉教者、司教、信仰の証人、聖女、処女たちに関する伝承が収められていた。ある説によれば、この書は20巻からなり、別の説によれば16巻から成っていたとされる。しかし、7世紀初頭には、エウセビオスのこの集成はすでに極めて希少なものであり、アレクサンドリア教会にもローマ教会にも、その写本を見つけることはできなかった。　こうした事情を鑑みれば、エウセビオスの著作が全編として現代まで伝わらず、他の著述家たちの著作の中にその一部のみが見出されるのは驚くべきことではない。おそらく、エウセビオスの書物は出版後まもなく、後続の伝記収集者や編纂者たちによって広められ、補完されたため、やがてその本来の形態と最初の編纂者の名を失ってしまったのだろう。　さらに、エウセビオスの著作全体を写本することが困難かつ費用がかさむため、それはいくつかの部分に分割され、それらの断片が後世、さまざまな国の文献に見られるようになったのである。

。　ローマ帝国に関しては、その観点からすれば、キリスト教徒を迫害する理由は数多くあった。キリスト教徒は、皇帝の肖像に酒を注いだり香を焚いたりして敬意を表することを拒み、皇帝陛下の威厳を冒涜していた。彼らは国家の神々からの背教者であり、法律で禁じられた宗教を信奉する者たちであった。　異教徒たちは、奇跡的な治癒を、法律で禁じられた魔術の仕業だと考えていた。キリスト教は、宗教、国家、生活様式、道徳、社会生活および家庭生活といった異教の体制を全面的に否定するものであった。　皇帝や支配者たちは、キリスト教徒を国家と社会の基盤を揺るがす陰謀家や反逆者と見なした。祭司たちは、キリスト教徒が自分たちへの信頼を損なうとして、彼らに対する敵意を煽った。教養があり、学問や芸術を尊ぶ人々は、キリスト教を野蛮で危険な迷信と見なした。　一方、偶像や異教の祭事に盲目的に執着する無学な民衆は、キリスト教徒を不信心者と見なし、彼らに対する刑罰や異教の法の執行に熱心に協力した。

[3]　*エウセビオス*（268–340）は、長い間パレスチナのケサリアで司教の座に就き、当時の多くの重大な出来事に深く関わっていた人物であり、「教会史の父」として、また神学者として知られ、その著作はキリスト教教会において高く評価されていた。　彼は広範な学識に優れており、その背景には、エウセビオスの友人であり、ケサリア教会の長老であったパンフィルスの大きな影響があった。二人の友情は極めて親密かつ誠実なものであったため、エウセビオスは友人を偲んで、自身の名にパンフィルスの名を併記し、「エウセビオス・パンフィルス」として知られるようになった。

エウセビオス以外にも、聖人の伝記をまとめ上げた人物として、メソポタミアの司教である聖マルファが知られている。彼は、ペルシアで殉教した人々の苦難を、歴史的な正確さをもって記述した。 「私がそのすべての苦しみ、判決、そして死について記述した殉教者たちについては、そのうちの何人かについては、彼らが私の時代に殉教したため、私自身が目撃者であった」と*聖マルファは*述べている。 一方、それより以前の殉教者たちの物語については、高齢の司教たちや、真実を愛し信頼に足る長老たちの証言に基づいて記した。彼らは、自分たちの時代に起こった殉教者たちの行いを、自ら目撃していたのである。」

殉教者たちの血によって御自身の教会を広め、確立し、勇敢な忍耐と数え切れないほどの苦しみをもって信仰の真理を証しした者たち（[4] ）を通して、私たちの主イエス・キリストは、御自身の信徒たちを救い、栄光に導くための他の道も示された。 キリストの教会を揺るがしたものの、滅ぼすことはできなかった激しい迫害の後、主は教会に平和と安らぎを与え、この時に教会の中に新たな御自分の聖徒たちを現されました。 キリスト教徒の間には、偉大な修道者たちが輝きを放ちました。彼らは、ある者は神の御言葉の教えと宣教によって、ある者は聖なる生活と他者への徳の指導によって、ある者は断食と肉体の情欲を自発的に抑制することによって、またある者はその他の様々な労苦や行いによって、その名を轟かせました。 キリスト教の殉教者たちの苦難が綿密かつ詳細に記述されたように、新たな修道者たちの労苦もまた、忘れ去られることはなかった。 神の御心に適う者たち（ ）に関する新たな一連の教会伝承が現れた。これらの伝承は、いくつかの教会史的著作のほか、パテリカ、シナクサリ、およびそれらに類する、多かれ少なかれ簡潔な様々な集成書に見出すことができる[5]。

「パテリカ（πατερικα）」、「ゲロニティカ（γερονιτικα）」、「モナヒカ・ビブリア（μοναχικα βιβλια）」といった総称で呼ばれていた一連のギリシャ語パテリカは、15～16世紀にかけて編纂された。その中でも最も有名なものは以下の通りである：

1) エジプトの*『大リモナール』*（[6] ）。現存しないが、これに基づいて『スキトス・パテリカ』や『アズブチカ』（聖なる長老たちの格言集）が編纂された。

2) *『ラウサイク』*：エジプトの修道士たちについて記した書物であり、その生涯は5世紀に目撃者であるパラディオス司教が、カッパドキアの統治者ラウサのために記述したものである；

3) *『神を愛する者たちの物語』*、すなわちシリアの隠者たちに関する書物で、テオドリトス・キルス（†457年）によって編纂されたもの；

4) *『対話』（または『対話録』）*。イタリアの隠者たちの生涯と奇跡に関する物語を収録したもので、593年頃に聖グレゴリウス大司教によって執筆された。彼はこの著作により「二語者」と呼ばれ、その165年後にラテン語からギリシャ語へと翻訳された；

5) *『霊の牧場』*は、修道士ヨハネス・モスクス（†622年）によって編纂された、パレスチナ、エジプト、シリアの敬虔な教父たちの格言、奇跡、および偉業を収録したものである。

これらに挙げられた文献――殉教録、修道者の事績集など――は、月暦、シナクサリオ、および*『ミネイ・チェチイ』*（聖人の生涯と功績を月ごとにまとめた読経集）の基礎となった。

---

[4] ギリシャ語で殉教者は「μάρτυς」と呼ばれ、これは（真理の）*証人を意味*するため、殉教者に関する記録は「*マルティロロギオン*」と呼ばれる。

[5] *パテリク*（πατερικόν – βιβλίονを意味する）は、ロシア語で*「オテチニク」*、すなわち「教父たちの書」または「教父たちに関する書」を意味する。これは、修道者たちに関する短い物語や、彼らの教訓的な言葉から成る集成書の呼称である。– *シナクサール*（ギリシャ語のσυνάγω――集める、まとめるに由来）――キリスト教徒の教会集会での朗読用に編まれた書物で、聖人の偉業や殉教者の苦難に関する簡潔な物語、および後に「プロローグ」と呼ばれるようになった完全な伝記を収録している。

[6] *リモナール*――ギリシャ語の「λειμών」（牧草地、草地）に由来する。

ギリシャの月暦やシナクサリオスとしては、以下のものが知られている：

1) 皇帝ヴァシレイオスの命により編纂された*月暦*（10〜11世紀）；

2) バシレイオスの月暦よりも編纂年代が*古いペトロスのシナクサール*（最古の写本は1249年）；

3) 11〜12世紀の*クラロモンタンのシナクサール*。その構成はペトロフのシナクサールに近い。

さらに、2種類の「詩的シナクサール」が存在した。これらは、各伝記の前に聖人を称える2、3行の詩が置かれていたことから、そのように呼ばれている。詩的シナクサールは、前述の非詩的シナクサールを基に、12〜13世紀に編纂されたものである。

テオドロス・ストゥディトスの証言によれば、8世紀末にはキリスト教会においてすでに12冊の『ミネイ・チェチイ』が存在していた。その内容は多岐にわたっていた。聖人伝に加え、主要な祝祭日に際して、最も著名な教父たちの言葉が盛り込まれるようになった。 一部の殉教記録や、修道者たちに関する古代の伝承は、賛辞へと書き直され始めた。さらに、一部の古代の聖人伝は、より洗練され美しい文体で書き直されるようになった。

この後者の種類の著作において、著名な*シメオン・メタフラスト*はその業績によって他のすべての人々を凌駕した。コンスタンティヌス帝の命により[7]、彼は可能な限りすべての古代の聖人伝を収集し、月や日付ごとに整理することを任された。 聖なる修道者たちの栄光に対する強い熱意に駆られ、シメオンは彼らに関する物語を収集しただけでなく、その多くを改訂し、一部を短縮し、そして何よりも重要なこととして、古風で重苦しく、多くの点で理解しにくい表現を、彼と同時代の明快で優れた文体へと置き換えた[8]。 シメオンによって改訂された聖人伝は、約500編に上るとする説もある。さらに、122編の聖人伝は彼が新たに執筆したものである。メタフラストは、聖人伝に加え、主の祝日、聖母マリアの祝日、および一部の聖人の祝日に際して、教会の偉大な教父や教師たちの著作から選りすぐった称賛と教訓に満ちた言葉を付加した。

古代キリスト教会においても、ロシア正教会においても、教会の礼拝中に聖人の伝記を読む慣習が厳格に守られていた。より一般的だったのは、早課において、カノンの第六歌の後、コンダクとイコスに続いて読むことであり、これらと「プロロジオス」と呼ばれる簡潔な伝記とは非常に密接な関係があった[9]。 このため、ロシア正教会では非常に早い時期から、スラブ語訳の『プロローグ』が存在していた。当初は『シナクサール』と呼ばれていたが、その後、その最初の項目である「πρόλογος」（すなわち「序文」）にちなんで、*『プロローグ』*と呼ばれるようになった。

スラブ語のプロローグには三種類があった。

第一の種類は、皇帝バシレイオスのギリシャ語の月暦を基礎としており、11世紀後半にスタウディオス修道院の修道士イリイア（ペトロフのシナクサリオスからの追悼記事）とモキシイのミトロポリス・コンスタンティノス（65の詳述された伝承）によって補完されたものである。

---

[7] コンスタンティノス7世皇帝は912年から959年まで在位し、学術的な著作を愛好したことでも知られていた。彼の治世中の957年、コンスタンティノープルで大公妃オルガが聖なる洗礼を受けた。

[8] この功績により、シメオンは「メタフラスタス」という称号を授けられた。これは「語り手」「翻案者」を意味する。シメオンはコンスタンティノープルで生まれ、世俗および神学の高等教育を受け、皇帝の秘書を務め、極めて重要な外交任務を遂行し、コンスタンティノープル教会の大ロゴフェト、パトリキウス、そして帝国のマギストルを務めた。ギリシャ正教会において、シメオン・メタフラストは聖人として列聖されている。

[9] *コンダクは*、聖人の活動の主な特徴を物語形式で簡潔に伝えるものであり、イコスはこれらの特徴に基づいて聖人を称え、各特徴の冒頭に「喜びなさい」という呼びかけを添えて述べている。ロシアの聖人伝の最も古いものは、その構成において、広範に普及したコンダクやイコスそのものである。

第二の種類のプロローグは、第一の種類と古代の『ミネイ・チェティイ』に基づいて、スラブ人によって編纂された。

第三の*ものは韻文形式のもの*で、14世紀に最も古いギリシャ語の韻文プロローグ『[10]』から翻訳されたものである。

『ミネイ・チェティイ』のスラブ語訳も、スラブ文字の誕生初期にさかのぼるものと見なすべきである。もっとも、この時代から『ミネイ・チェティイ』全12巻がすべて現存しているわけではない。具体的には、11世紀からは南スラブ語写本による3月の巻が1冊、12世紀からは5月の巻の断片[11]が残っている。　しかし、非常に古い写本を踏襲している15世紀の写本（13世紀および14世紀のものは存在しない）に基づけば、10～11世紀にはスラブ人が12ヶ月分すべての『ミネイ・チェチイ』の完全な翻訳を持っていたと考えられる。　スラブ語訳は、メタフラストによる改訂の影響をわずかに受けたギリシャ語版『ミネイ』に基づいて行われた。

スラブ語訳には、非常に早い時期から『パテリク』が登場した。スラブ語の写本では、構成の異なる『パテリク』を区別することなく、主に「スキトス派のパテリク」という名称が用いられているが、リモナールについては、ほとんどの場合、「シナイ派のパテリク」または「ツヴェトニク」と呼ばれている。　シナイ派およびスキト派のパテリクに関するロシア語写本は、すでに12～13世紀に遡り、13世紀の多くの著者に知られていた。16世紀以降、パテリクは数多くの写本として保存され、広く利用された。

ルーシにおいて、パテリク『霊の牧場』が初めて出版されたのは1628年のことである。聖グリゴリー・ドヴェオスロヴァの『対話録』は、1671年にシメオン・ポロツキーによって翻訳された。

遥か昔、ギリシャ語からスラブ語へ「*祝祭書*（βιβλία　πανηγυρικά）」が翻訳された。これらは2種類に分けられる。

第一の「*ミネイ型*」は、その記事の順序において『月別ミネイ』に連なるものであり、すなわちその記事は、9月から始まる一年間の月ごと、日ごとの祝祭日の順に配置されている。この種には、主の祝日や聖母マリアの祝日に関する賛美の言葉、聖人の伝記、そして祝日や教会の祝典の由来に関する物語が含まれている。

第二の種類の『祝祭日集』――「*トリオデ型*」――には、四旬節および花祭りのトリオデの順序、すなわち「徴税人とファリサイ人の週」から「諸聖人の週」に至るまで、週ごとに並んだ記事が収録されている。この種類の記事の大部分は、その週の意義に即した説教と、いくつかの賛辞で構成されている。

---

[10] 第一の種類の最も古い写本は以下の通りである：1) *ロブコフスキー写本*（モスクワのエディノヴェルチェスキー修道院図書館所蔵）、9月までの半年間を収録しており、1262年のものとされている； 2) *ソフィイスキー写本*（サンクトペテルブルク神学アカデミー図書館所蔵）は1250年以前に書かれ、こちらも9月までの半年間を収録している； 3) *印刷版*（モスクワ・シノダール印刷所の図書館所蔵）は13～14世紀のもので、3月24日から8月25日までの伝承と記念日が収録されている。スラブ語の羊皮紙プロローグの最大のコレクション（30点以上）は、同じモスクワ・シノダール印刷所の図書館に所蔵されている。 第2の種類の最古の写本は、14世紀の*活版印刷本である*。詩体プロローグの最古の写本は、1370年の*セルビア*写本（モスクワ・エディノヴェルチェスキー修道院の図書館所蔵）である。 印刷版の『プロローグ』は、前述の3種類すべてに基づいて編纂された。その初版は1641年に出版され、9月までの半年間分が収録されていた。完全版として初めて出版されたのは1642年から1643年にかけてである。印刷の過程で、数回にわたり訂正や追加が行われた。

[11] 11世紀の『ミネイア』（3月分）は、グロドノ県ベロストク市近郊のスプラースリ修道院で発見されたため、通常「スプラースリ写本」と呼ばれている。12世紀の『ミネイア』（5月分）は、モスクワのウスペンスキー大聖堂の図書館に所蔵されている。

ブルガリアで翻訳された『ミネイ』式祝典暦は、非常に早い時期にルーシに伝わった。というのも、12世紀にはすでにそのロシア語写本が存在していたからである。ルーシにおける『ミネイ』式祝典暦の変遷の歴史は、主に以下の点に集約される。

1) ギリシャ語の聖人伝の削減、

2) ロシアの項目の追加、

3)「トリオドの祝典暦」との統合。

18世紀には、古代の『ミネイ・トルジェストニク』を模範として、一部は印刷された序文や福音書に基づいて、新しいものが編纂された。

トリオドの祝典書もまた、ブルガリアで翻訳された。ルーシにおけるこの種の祝典書の変更点は、以下の通りである：

1) トゥロフの主教キリル（12世紀）の言葉の追加、および

2)　15世紀にグリゴリー・ツァンブラクの言葉が追加されたこと（ウヴァロフ市の図書館所蔵の最古の写本、1473–1477年、[12]）。

一方、ロシア教会の漸進的な発展に伴い、ロシアの聖人たちの伝記も次第に増えていった。その最初の編纂者たちは、聖ボリスとグレブの伝記を著したヤコフ・チェルノリゼツ（修道士）（1074–1088）と、聖ボリスとグレブに関する物語と、聖テオドシイ・ペチェルスキーに関する物語の2つの物語を著した聖ネストルであった。

15世紀の文献には、ギリシャの『パテリク』[13]を模倣して編纂された『*ペチェルスクのパテリク*』が登場する。これは、ペチェルスク修道院の修行者たちや修道院そのものに関する、奇跡に満ちた簡潔な物語を集めたものであった。　このパテリクの基礎となっているのは、ウラジーミル司教シモン[14]と、ペチェルスク修道院の修道士ポリカルプによる物語である。

シモンの14の物語は、ポリカルプへの書簡という形式で書かれている。そのうち9つはペチェールスクの奇跡行者たちについて、5つはペチェールスクの主教会堂の建設に伴って起こった奇跡について語っている。

シモンの語録集は、彼自身の語り based on に基づき、ポリカルプによって補完された。ポリカルプは、ペチェルスクのアルヒマンドリト・アキンディンへの書簡という形式で、さらに11編の物語を執筆した。

これらの『パテリコン』の主要な部分には、後にいくつかの後世の記述や、より初期の著作が加えられた。具体的には、『パテリコン』の冒頭に置かれたネストルによる聖テオドシオスの伝記、および「ペチェルスク修道院がその名を得た由来」　、およびペチェルスクの最初の修道士たちに関する伝承が加えられた。これらは『初期年代記』から引用され、パテリカでは同じネストルによるものとされているが、実際には聖テオドシオスのある修道見習い兼弟子、おそらく後にキエフのミハイロフ修道院のイグメンとなったシルヴェストルによって編纂されたものである。　現存するペチェル

---

[12] 『トリオドの祝祭暦』は1647年に出版された（『ソボルニクと呼ばれる書』）。1700年、この版はギリシャ語およびスラブ語の書物に基づいて訂正された。

[13] 『ルグ・ドゥホヴヌイ』、『ラヴサイク』、『アズブヌイ・パテリク』など。ペチェールスク・パテリクの最古の写本は1406年のものであり、トヴェリの司教アルセニイのために写本され、現在は帝国立公共図書館に所蔵されている。

[14] *聖シモンは*、ペチェールスク修道院の修道士であり、ウラジーミルのロズデストヴェンスキー修道院のイグメン（院長）を務め、1215年からはウラジーミルおよびスーズダリの司教となり、1226年に逝去した。その聖遺骨はキエフの洞窟に安置されており、記念日は5月10日である。

スキー・パテリクの写本の多さは、それが私たちの先祖たちに愛読されていたことを物語っている[15]。

ロシアの聖人の伝記は、当初、主に聖人に関する記録、すなわち「記憶」という性格を帯びていた。 それは淡々とした簡潔な物語であり、時折、登場人物の台詞や 聖書からの引用によってのみ活気づけられていた。しかし、ギリシャ語の聖人伝の翻訳が増加し、特に聖人の祝日に捧げられる賛辞や教訓といった教会説教作品の影響を受けて、15世紀以降、ロシアの聖人伝は新たな様相を帯びるようになった。

そうした作品の中で最初のものが、聖キプリアンによって編纂された聖ペトロ大主教の伝記であった。「義人には称賛がふさわしい――と、編者は伝記の序文で述べている――そして私も、牧者への愛に駆られて、聖人にささやかな称賛を捧げたいと思う」。 聖人の伝記を、その人物を称える言葉として捉えるというこの視点から、キプリアンは、従来の聖ペトロの伝記があまりにも単純で淡白であり、そのような目的には適していないと考えた。そのため、彼はより詳細で華麗な伝記を新たに執筆し、聖人への荘厳な賛辞をもって締めくくった。

ロシアの聖人の伝記におけるこの新しい傾向は、修道士エピファニオス[16]によってさらに確立され、発展させられた。彼が編纂したペルミのステファノスとラドネジのセルギイの伝記には、雄弁術の手法が豊富に用いられ、「美辞麗句」、すなわち雄弁さが存分に発揮されている。

そして、ロシアの聖人の伝記編纂において最も傑出した人物は、パホミイ・ロゴフェト[17]であった。彼と同時代のロシアの教会界において、彼は書物による学識の代表者と見なされ、その知性と英知は誰をも凌駕していた。 そのため、大公も、大主教も、ノヴゴロドの司教も、トロイツェ＝セルギエフ修道院のイグメンも、皆、パホミイに、この聖人やあの聖人について執筆するよう依頼した。パホミイは自身の著作において、聖人伝の画一的な文学形式を確立し、その後、ロシアの聖人伝「執筆者」たちはこれを多く模倣することとなった。

---

[15] その数世紀にわたる歴史の中で、『キエフ・ペチェルスク修道院伝』は、ペチェルスク・ラヴラの関係者たちによって数多くの改訂が加えられてきた。その中でも最も重要なものは以下の通りである：1) 1460年、聖職者であり、後にペチェルスク修道院の規則制定者となったカッシアンの命により、その記事が補足され、整理された； 2) 1847年から1866年にかけて、キエフ・ペチェルスカヤ・ラヴラのアルヒマンドリト、イオシフ・トリズナの命により、パテリクは改訂され、年代記的な記事が追加された；3) 1661年、同ラヴラのアルヒマンドリトであるインノケンティ・ギゼルの祝福のもと、印刷された； この版の『パテリク』は、ペチェルスクの修道者たちの生涯を完全にまとめた一連の伝記から構成されており、そのため、古来の『パテリク』に含まれていた書簡や物語は、各修道者に関する情報をまとめる各章に分割され、互いに補完し合う形となっている； 4) しかし、1661年のロシア語版に先立ち、キエフのパテリクは、ムスティスラフの司教シルヴェストル・コッソフによって、ポーランド語で要約版として刊行されていた。 オシャンおよびモギレフの司教）によって、1635年にポーランド語で要約版として刊行されていた。これは、ペトル・モギラ都主教の意向に基づき、ペチェルスクの修道士たちの聖性を否定し、キエフが東方総主教たちではなく教皇からキリスト教の信仰を授かったと主張するラテン系ポーランドの著述家たちに対抗することを目的としていた。

[16] *エピファニオス・プレムードリーは*、聖セルギイの弟子であり、14世紀末から15世紀初頭にかけて生きた。コンスタンティノープル、アトス山、エルサレムに滞在し、1420年にトロイツェ＝セルギエフ修道院の修道司祭兼告解司祭として死去した。

[17] *パホミイ*はセルビア出身のアトス山の修道士で、1440年頃にモスクワに現れた。20年間をトロイツカヤ・ラヴラで過ごし、そこで聖人伝の編纂や書籍の写本作業に従事した。ノヴゴロドの大司教イオナは、ノヴゴロドの聖人たちの聖人伝を編纂させるため、彼を自身の元へ呼び寄せた。

ロシアの聖人伝史における新たな時代を切り開いたのは、マカリー大主教の活動である[18]。彼の時代は、ロシアの聖人たちの新たな聖人伝が特に豊富に生まれた時期であった。この豊富さは、1547年および1549年の公会議において多くの聖人が列聖されたことに起因する。 これらの公会議のうち最初のものが終わった後、各教区の主教たちは、新たに現れた偉大な奇跡行者たちの伝記、カノン、そして奇跡を収集し、1549年の公会議でそれらを認定した上で、これらの伝記とカノンに基づき、多くの新たに現れたロシアの聖人たちを祝うことを定めた。しかし、マカリーの主な業績は、彼の*『大ミネイ・チェチイ』*であった。

まだノヴゴロドの大司教であった頃、マカリーは当時のすべての宗教文献、あるいは彼自身の言葉を借りれば、「ロシアの地に存在するすべての尊い書物」を収集するという大事業に着手した。この自身の業績について、マカリイ自身は次のように述べている。「私は、ヴェリキー・ノヴゴロドで大司教を務めていた頃、これらの聖なる偉大な書物を執筆し、また収集し、一箇所にまとめ上げた。その期間は十二年に及んだ[19]、 多大な財産と多くの様々な筆記者を動員し、銀やあらゆる栄誉を惜しまず、さらに、外国や古代の諺を修正し、ロシア語に翻訳するという多くの労力を費やした。神が我々に理解を授けてくださった分だけ、修正することができたが、 しかし、今日に至るまで修正されていない部分も残っており、これについては、神の御加護のもと、後世の人々が修正できるよう残しておいた」。モスクワにおいて、マカリイは、当初のノヴゴロド版には含まれていなかった相当数の作品を自身の集成に追加した。

『マカリエフスキー・ミネイ＝チェチイ』の内容は極めて多様である。そこでは、各日付ごとに二つのプロローグ[20]が掲載されており、これらは聖人の生涯や殉教、その日の祝日に関する簡潔な情報、およびその日の祝日とは関係のない、教訓的な読物としての様々な短い記事を包含している。続いて、聖人の詳細な生涯、聖遺物の発見に関する物語（これらは以前、数多くの叢書や単独で存在していたもの）、そして「祝典集」と呼ばれる特別な叢書に収められていた称賛や祝賀の言葉が掲載されている。 このほか、『マカリエフ・ミネイ』には、当時知られていたその他の霊的文学作品、聖書の大部分、多くの教父たちの著作、ならびにスラブおよびロシアの聖職者や霊的著述家たちの著作、パテリコン（その中にはキエフ・ペチェルスクのパテリコンも含まれる）および類似の著作[21]が

---

[18] *マカリイ*（1482年～1564年）は、全ロシア都主教であり、聖パフヌティイ・ボロフスキーの弟子であった。1526年、モジャイスク・ルジェツキー修道院のアルヒマンドリトからノヴゴロド大司教に任命され、1542年にはモスクワ都主教の座に就いた。 彼はイオアン・グロズヌイの寵愛を受け、どの派閥に属していようとも、同時代のすべての人々から尊敬を集めた。マカリイはロシア正教会および文学の歴史において重要な位置を占めている。彼がモスクワ都主教を務めた期間における主要な出来事としては、1）1547年および1549年の教会公会議、2） 1551年の「百人公会議」、3) 1563年のモスクワ初の印刷所の開設。ロシアの聖人たちの古来の伝記を収集し、新たな伝記を編纂するため、マカリイは多くの有識者を周囲に集めた。その中で彼は、指導者や編集者であるだけでなく、熱心な協力者でもあった。

[19] すなわち、1529年から1541年までの期間である。 ここで引用されているマカリイの言葉は、いわゆる『年鑑』に収録されており、これは『ミネイア』に付録として添えられている。同『年鑑』からは、ミネイアに登場する司教の一人が1552年に『聖母被昇天公会議』に収録されたこと、そしておそらくこの頃にはミネイアの編纂が完了していたことがうかがえる。そのため、ミネイアの編纂には少なくとも20年を要したと推定されている。

[20] スラブ人によって作成されたプロローグの第二の形式は、詩形式のものである。

[21] マカリエフ『ミネイ』の既知の写本のうち、主なものは以下の通りである。1) *ツァールスキー写本*：マカリイによってイオアン・グロズヌイ皇帝に献上され、当初はおそらく皇帝の宮殿に保管されていたもので、現在はモスクワのシノダル図書館に所蔵されている。 2) *ウスペンスキー写本*：マカリーによってウスペンスキー大聖堂に寄進されたもので、同所に所蔵されている；3) *ソフィイスキー写本*：1541年にマカリーによってノヴゴロドのソフィイスキー大聖堂に寄進されたもので、サンクトペテルブルク神学アカデミーの図書館に所蔵されている。これらの写本のうち、完全に網羅されているのはウスペンスキー写本ただ一つである。 ツァーリ版には3月と4月が欠けており、ソフィイ版には7ヶ月分（9月～11

収録されている。　総じて言えば、これは当時のロシアの宗教的教養を網羅した完全な百科事典であった。

1600年、モスクワのチュドヴォ修道院において、13巻からなる『チェティ・ミネイ』の編纂が完了した。「というのも、11月は二つに分かれているからである」。現在、保存されているのは11巻のみである。その内容は、各月の序文において次のように定義されている：　「そこには、祝祭日の言葉や預言者の説教、使徒たちの殉教と賛美、すべての聖人の生涯、聖殉教者たちの殉教、敬虔な父たちの生涯と功績、聖なる敬虔な女性たちの苦難と功績、そして新たな奇跡行者たちが記されており、　また、キエフの洞窟の『パテリク』や、その他の書物も……」。後者の中には、とりわけ『シナイのパテリク』や、教皇グレゴリウス大帝の『ローマの対話集』が収録されている。　マカリー大主教の『チェチイ・ミネイ』とは異なり、チュドフ版には序文がなく、祝祭日暦からの引用も少ない。また、マカリーの集成には収録されていない新しい記事も含まれている。

マカリエフスキー『ミネイ』より1世紀遅れて、1627年から1632年にかけて、トロイツェ＝セルギエフ修道院の修道士ゲルマン・トゥルポフによって『チェチイ・ミネイ』が編纂された。その内容は、ほぼ例外なくロシアの聖人たちの伝記や伝説で構成されている。

ほぼ同時期に、セルギエフ・ポサドのキリスト降誕教会の司祭、イオアン・ミリュティンも『ミネイ』の編纂に取り組んでいた。　彼は3人の子供たちと共に、8年間（1646～1654年）にわたり、聖人の伝記を書き写した。「私は――」と彼は序文で述べている。「修道院の『ミネイ・チェティイ』から書き写した」、つまり、ゲルマン・トゥルポフが編纂したトロイツカヤ・ラヴラの『ミネイ』からである。　一部の補足は、1642年から1643年の印刷版『プロログ』に基づいて行われている。イオアン・ミリュティンは単に記事を収集しただけでなく、それらを再構成もした。彼の『ミネイ』には、マカリエフ派の『ミネイ』には見られない、ロシアの聖人に関する記事や伝記が数多く含まれている。　各月のあとがきには、次のような四行詩が掲載されている。「天の高さは測り知れず、地の広さと長さは計り知れず、海の深さは測り知れず、聖人たちの奇跡は数えきれず、理解しがたいものである」[22]。

一方、北ルーシでは古代の文書や、その中に含まれる聖人の伝記が無傷のまま保存されていたのに対し、南ルーシの教会は、タタール人の侵攻や、ポーランドおよびリトアニアによる略奪の結果、多くの貴重な宗教書、そしてそれとともに聖人の伝記をも失ってしまった。　そのため、魂の救いとなる読書を愛する人々は、ここではポーランド語に翻訳された西欧の殉教者録に甘んじざるを得なかったが、それらは多くの点で正教の精神と相容れないものであった。このような痛ましい不便を解消したいと願ったキエフ都主教ペトル・モヒラ[23]は、スラブ語による聖人伝の出版に深く心を砕いた。 この目的のために、彼はギリシャ語の聖人伝 を新たに翻訳することを計画し、すでにアトス山からシメオン・メタフラストの聖人伝を書き写していた。しかし、この著名なキエフの首席主教の早すぎる死により、彼は構想していた事業を成し遂げることはできなかった。

月、2月、5月～7月）しか収録されていない。マカリイの『ミネイ』は現在、国民教育省傘下の考古学委員会によって刊行されている。

[22] チュドフ版およびミリュティン版『ミネイ』はモスクワ・シノダル図書館に、トゥルポフ版はトロイツェ＝セルギエフ修道院図書館に所蔵されている。

[23] *ペトル・モギラ*（1596–1647）は、モルダヴィアおよびワラキアの君主の息子であり、1627年にキエフ・ペチェールシクのアルヒマンドリトに選出され、1633年に大主教の位に叙任された。

彼の後を継ぎ、キエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラのアルヒマンドリト、イノケンティ・ギゼル[24] が、聖人伝の出版に多大な熱意をもって尽力した。 ペトル・モギラがすでに準備していたこの著作のための資料に加え、イノケンティはモスクワ総主教イオアキムにマカリオスの『大ミネイ・チェティ』を要請し、その最初の3ヶ月分が彼に送られてきた。 しかし、当時の戦乱により学問に専念することが許されなかったため、イノケンティもまた、この偉大な事業を成し遂げることは叶わなかった。

彼の後継者であるアルヒマンドリト・ヴァルラアム（[25] ）は、計画されていた聖人伝の刊行に深く共感し、その実現に向けて全力を尽くした。しかし、彼は自らこの事業を引き受けることをためらい、この仕事に適し、他の事柄に気を取られにくい人物を探し始めた。 彼の選択は、バトゥリンのクルピツキー修道院の修道士ディミトリイ（俗名ダニイル・トゥプタロ）に落ち、これはロシアの聖人伝史において画期的な出来事となった。

才能に恵まれ、並外れて勤勉で謙虚なキエフ学校の学生であったディミトリイは、当時の戦時情勢により課程を修了する前に学校を去らざるを得なくなり、若くして修道生活に入った。早くに学校を離れた彼は、民衆の宗教的気風との生きたつながりを保ち、その霊的な必要を鋭く理解していた。 孤独を好み、瞑想的な精神傾向を持ち、かつ学問への熱烈な愛を抱いていたディミトリは、修道院において、学校で始めた教育を独力で完成させ、自身の素晴らしい才能を磨くための十分な余暇を見出した。 アルヒマンドリト・ヴァルラームが彼に提案を持ちかけたとき、ディミトリイはすでに西ルーシで名高い説教者となっており、司教や修道院がこぞって彼を招き、その心のこもった言葉を聞こうとしていた。

ディミトリは、あらゆる重要な事柄に取り組む時と同様に、献身的な熱意と自らの力への不信を抱きながら、課せられた任務に着手した。 「勤勉な人であり、――アルヒマンドリト・ヴァルラームは彼についてこう記している――長い間謙虚に拒み続けたものの、神の助けと、聖母マリアおよびすべての聖人たちの祈りに希望を託し、彼に託された務めを果たした」 ディミトリ自身による記述からは、彼が時折、早朝の礼拝が始まるまで作業に没頭し、その作業は夢の中でも続き、[26] の象徴的な幻視の中でさえも続いていたことがうかがえる。

聖ディミトリは1684年にその偉大な事業に着手した。 1685年、それまでコンスタンティノープル総主教の管轄下にあったキエフ都主教区が、モスクワ総主教への完全な従属を果たした。モスクワ総主教は直ちに、キエフ都主教区におけるすべての重要な教階的措置および学術的事業が、必ず自身の祝福を得て行われることを要求した。 このため、聖ディミトリのために『マカリエフ・ミネイ』の次の四半期分（12月、1月、2月の分）が必要となった際、アルヒマンドリト・ヴァルラアムは、総主教にこれらの書籍の送付を依頼するとともに、聖人の新しい伝記を総主教の祝福と校閲のために提出することを約束した。 しかし間もなく、総主教は『ミネイ』の返送を要求した。要求された書籍を特使とともにモスクワへ送り返す際、聖ディミトリは総主教に次のような手紙を送った（1688年）：

---

[24] プロイセン出身の*イノケンティ・ギゼルは*、若くしてキエフに移住し、正教に改宗した。その後、キエフ学校の校長を務め、1656年から死去するまでキエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラのアルヒマンドリトを務めた。

[25] *ヴァルラーム・ヤシンスキーは*、キエフ学校の卒業生であり、その後同校の校長およびキエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラの住職を務めた、学識豊かな人物であった。1690年、彼はキエフ都主教に叙任された。

[26] 本書の9月21日の聖ディミトリイの伝記を参照のこと。

「あなたの聖職、私たちの父であり大牧者である御前において、私もまた、たとえ最下位であり、ほとんど知られていない者ではありますが、　この拙い筆致（自力では書けなかったため）をもって、貴殿の聖なる御足元にひれ伏し、最も聖なる大牧者である貴殿のもとで、名指しされ、称えられる者となれるよう願っております……貴殿は……書籍についてお書きになりました……　それらの書物は、バトゥリン修道院において、これまで私の不肖の手に委ねられ、注意深く読まれてまいりました。それらから多くの恩恵を受け、そこに記された聖人の生涯に深く共感したため、　それらに記された聖人の生涯に深く共感し、感謝の念を込めてそれらを貴殿の聖なる御手に差し上げるとともに、小ロシア教会から私に託された聖なる使命に従い、神の御加護のもと、私の力及ぶ限り、弱さの中にあっても尽力し、偉大なるマカリー（モスクワおよび全ロシアの総主教）の著作や、　書物や他のキリスト教史家たちの著作を参考にし、9月1日から2月最終日までを網羅する*6ヶ月分の聖人伝『　』を執筆いたしました*。これは、聖人たちが成し遂げた偉大な業績、物語、行い、そして彼らの苦行や受難について、あらゆる点において、それらの偉大な聖典と合致する内容となっております。　すでに記されたこれらの聖人の伝記は、その大部分が、一部の貴族たち、とりわけペチェルシの聖ラヴラにおいて、語り継がれてきたものである。　さて、多くの人々の好意と要望に応え、キリスト教徒の霊的益となるよう、*これを印刷物として刊行したい*と考えております。このことについては、ペチェルスクの尊いアルヒマンドリト様からの度重なる書簡によって、特に励まされております。　*このような事業は*、神の教会にとって（私の考えでは）決して無益なものではないため、*貴殿の*至高なる大司教としての*祝福を賜りたく存じます*。　そして、貴殿の牧者としての祝福に導かれ、教えられ、助けられ、私が目の前の事業を立派に成し遂げ、教会の教義に則り、この6ヶ月間に執筆した文章を印刷物として刊行できるようになりますように。　それらが神の御加護と貴殿の大司教の祝福により完成し、刊行された暁には（主が御望みになり、我らが存命であるならば）、他の書物にも着手し、貴殿の聖下にお辞儀を捧げ、他の聖書について申し上げたいと存じます」。　しかし、この手紙に対する返答はなかった。そこで翌1689年、キエフ大修道院は『ミネイ・チェティイ』の最初の4分の1の印刷に着手し、同年中にそれを完了させ、費用と責任を自ら負った。　約束に反して、アルヒマンドリト・ヴァルラアムは、出版準備の整った写本を総主教に送ることはせず、その最終的な審査を自身と聖会（ソボル）の長老たちに委ねた。　総主教は直ちに非難の手紙を送り、自身の審査と祝福なしに書籍が印刷されたことへの不満を表明するとともに、出版物中のいくつかの誤りを指摘し、誤りが発見されたページを修正済みのものと差し替えるよう命じ、今後、自身の許可なしに『ミネイ・チェチイ』の他の巻を印刷してはならないと命じた。　もっとも、これらの非難は出版者たちのみを対象としたものであった。

一方、『ミネイ』の編纂者に関しては、同年1689年の終わりに、彼自身が総主教からその作業を継続する許可を直接受けた。そして翌1690年、すでにキエフ都主教となっていたヴァルラアムは、モスクワからディミトリイのもとへ、新総主教アドリアンからの祝福と称賛状を届けた。　感謝の返書の中で、聖ディミトリは総主教に対し、12月、1月、2月分の『マカリエフ版ミネイ』を改めて送ってほしいと依頼した。「もし貴殿の総主教殿がご快諾くださるなら、　――と彼は記した――私たちが執筆している聖人の伝記との整合性を図るため、前述の3ヶ月分の聖書を、この不肖の身へ一時的に送ってくださるようお命じいただければ、神の御加護により、*夜を徹してそれらに没頭し*、多くの益を汲み取り、それを世に活字で出版するよう努めたいと存じます」。

要請された書物を受け取った聖ディミトリは、まもなく『ミネイ』の第2四半期分（12月、1月、2月）を出版の準備を整え、1692年5月9日に自らそれをキエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラの印刷所に持ち込んだ。 しかし、この書物が世に出たのは1695年2月になってからであった。このような遅れの原因は、おそらくヴァルラアム都主教によるこれらの書物の入念な校閲にあったと思われる。さらに、編者自身もダンツィヒから「ボランドの書」を受け取った後、印刷準備が整った原稿とそれら

を照合し、より入念に推敲を加えたかったためである。 『チェティイ・ミネイ』の第2四半期の序文において、聖ディミトリイは第1四半期の疑わしい箇所や誤りをいくつか訂正した。

これらの書物はモスクワの総主教のもとへ送られ、その際、聖ディミトリは総主教に対し、とりわけ、書面による祝福をもって「不適格な」編纂者を励まし、彼に課せられた務めを果たすよう努めさせ、 聖人の伝記の執筆に全力を尽くし、「私が執筆したものを教会の判断に委ね、とりわけ神の知恵に満ちた大司教、キエフのヴァラアム大主教に提出する」と記した。 「そして、その大牧者の御祝福を」と聖ディミトリオスはさらに記している。「本書をより美しく飾り、また、聖シメオン・メタフラストや他の多くの歴史家たちによって集められた、本書に記された聖人たちの奇跡的な行いの信憑性を疑いようのないものとするために、私はあえてこの新しい書物にもその御祝福を添えさせていただいた」。 聖ディミトリオスは、キエフ都主教ヴァルラアムが「私が罪深い身でありながら、 主の御加護のもと、貴殿の首席司牧者としての祝福により、私が執筆したものを、最初の二巻と同様に、彼が精読してくれるよう、またこの件について、貴殿が彼の尊厳なる方へ個別に書簡を賜ることをお願いいたします。 また、私の当面の業務および、モスクワならびに全ロシアのミトロポリットである至福のマカリーの『大ミネイ・チェティイ』が、貴殿の聖座の大聖堂に所蔵されていることに関し、3つの 月――3月、4月、 5月の3つの『 』を、強く要望いたします。謙虚に懇願いたしますが、聖下におかれましては、当初の3ヶ月間のように、聖人の伝記の執筆に合意を得るため、これらを当方に一時的に派遣してくださいますよう、ご命令ください。」

その後、聖ディミトリはアドリアン総主教から新たな承認状を受け取り、そこには次のように記されていました。 「主が、*残りの六ヶ月間も*、御子の愛を持つ皆様が、何らかの形で尽力し、この事業を神の御心に適うものとして、また教会にとって有益なものとして完遂できるよう、お助けくださいますよう祈ります。それゆえ、この件に対し、改めて祝福を授けます。 あなたもまた、教会の息子として、また我らの教区のキリスト者として、キリスト者たちのための共通の利益と我らの願いのために尽力してください……これを最初に企てた者たちの永遠の栄光と永遠の記憶のために。なぜなら、我らは、あなたが健康と神の御心にかなう生活、そして幸福のうちに…… 完全な生涯を送り、天において、神によって定められた聖徒たちの列に加わり、主の御前に立つことができるよう、お祈りいたします」。 喜びと勇気を得たディミトリイは、『ミネイ・チェチイ』の第3四半分の出版準備を始め、それは1700年に印刷された。最後の四半分は、すでにロストフで、大司教としての多忙な務めの合間を縫って完成され、1705年9月に刊行された。

『ミネイ・チェティイ』の聖ディミトリウス編には、聖人の伝記のほか、主の祝日や聖母マリアの祝日、聖遺物の移送に際する祝祭に関するシナクサリ、さらにはその祝祭の歴史に由来する教訓的な言葉も収録されている。 これらの言葉は、古代の教父たちの誰か、あるいは聖ディミトリウス自身によるものである。ミネイ・チェチイの第一四半期と第二四半期の冒頭に掲載された「教師、著述家、歴史家、物語者」の二つのリストからも明らかなように、聖ディミトリウスは多種多様な資料を参照していた。 これらのリストには、ギリシャ語またはラテン語で現存する著作を持つ、最も著名な教父や教導者たち、古代の教会史家、そして記述された出来事の多くの同時代人や目撃者たちが、長々と列挙されている。 さらに、聖ディミトリオスは各聖人の伝記そのものにおいても、自身が参照した出典を明記している。こうした個別の出典明示において、最も頻繁に見られるのはシメオン・メタフラストの名である。

ロシアおよびスラブの聖人の伝記に関しては、聖ディミトリオスは『マカリエフのミネイ・チェチイ』、『プロロゴス』、『ペチェルスクのパテリク』、ならびにキエフ・ペチェルスク大修道院やその他のロシアの修道院の様々な叢書から引用している。 上記の参考文献に加え、聖ディミトリ

は、スリヤの『聖人伝』[27] およびボランディスト派によって刊行された『聖人行伝』[28] を手元に置いていた。　これらの著作のうち、前者はメタフラストの名で知られる聖人伝が収録されていた点で重要であり、後者は前者よりかなり遅れて刊行されたもので、聖人に関する物語のギリシャ語原文が掲載されていた。

聖ディミトリオスは、自身の『ミネイ・チェティ』を編纂するにあたり、内容に一切の変更を加えることなく、理解しやすくするため、原典の記述を文字通りスラブ語に翻訳したり、古風なスラブ語の表現を修正したりすることが多かった。しかし、大部分の場合、彼は様々な出典から伝承を編纂せざるを得なかった。　そのような場合、聖ディミトリウスは様々な資料を一つにまとめながら、ある資料に欠けている部分を別の資料から補ったり、原典の形式を変更して、例えば墓碑銘や讃辞を単なる歴史的記述に変えたり、物語を裏付けるために他の歴史家の証言を引用したり、あるいは単にそれらを指摘したりした。　聖ディミトリオスは、原典のテキストを省略することが非常に多かった。その省略とは、序文や結語の削除、また時には聖人の生涯における出来事や状況の記述における細部の省略であった。ディミトリオスは、こうした省略が必要であることを認めつつ、『ミネイ・チェチイ』の第2四半期の序文で次のように述べている。

「本書に記されたすべては、第一巻と同様に、要約として書かれたものであり、あたかも大洪水のような歴史の川から、数多ある教会の歴史を小さな器である本書に汲み取ったものである。　もし、聖人の　な行い、物語、そして奇跡を、すべて一貫した長い文章で書き記そうとする者がいたとしても、その生涯をすべて書き記すには時間が足りなくなるだろう。これは、かつての教会の著述家たちにも起こったことである。　また、人間の力不足を考慮し、ここに記されたすべてを簡略化したのは、各聖人の生涯が、その記憶のために気楽に読まれるようにするためである。なぜなら、気力が衰えた人々は、短い言葉さえも敬うことや耳を傾けることを怠るのだから、ましてや長い文章の読解にはなおさら嫌気が差すのである。　多くの聖人の伝記は、大聖書やその他の写本において、言葉が過剰に用いられて非常に冗長に記されており、それらの一つ一つを、たとえ熱心に読もうとしても、二、三日でようやく読み終えるのがやっとである。　それゆえ、この書物では、聖人の一つの行跡のみを記述し、余分な言葉や長々とした記述は省略したのである」。

聖師が『ミネイ・チェティイ』の最終巻の執筆に忙殺されていた頃、キエフ・ペチェールスク修道院のアルヒマンドリト、イオアサフ・クロコフスキーが、彼に新たな仕事を引き受けてほしいと依頼した。これについて、聖師自身、友人のテオロゴスに次のように書き送っている。[29]「ペチェルスクのアルヒマンドリト神父が、この不肖の身である私に手紙を送り、9月、10月、11月の3ヶ月分からなる*最初の巻を、以前よりも充実した内容とし*、すでにこの世を去った聖人たちの伝記を付記した上で、*再版に向けて再び校正を開始してほしいと*、貴殿に申し上げたいと伝えてきました。」

---

[27] ケルンの修道士ラウレンティウス・スールイは、1569年から1575年にかけて、自身の著作『Vitae Senetorum Orientis et Occidentis』を初めて刊行した。1618年にはすでに第4版が刊行されていた。

[28]　*ボランド派*とは、アントワープの学識ある修道士たちであり、聖人の伝記の研究と刊行に従事していた。この活動は1643年にヨハネス・ボランドによって始められた。ボランド派の刊行物『Acta Sanctorum』には、東方教会および西方教会のすべての聖人に関する記述が収録されている。　ボランド派は、主に聖人の生涯と行跡に関する原典や古代の文献を出版した。当初はギリシャ語の記述をラテン語訳のみで掲載していたが、その後、ギリシャ語の原本そのものも併載するようになった。　聖行録の刊行には通常、その聖人を称える祝祭の起源、その生没時期、遺骨の移送時期に関する広範な批判的研究が前置きされている。　モスクワ神学アカデミーの図書館に所蔵されている、聖ディミトリウス・プロログス所有の書物の余白に記された注記から明らかなように、彼はボランディスト派の刊行物の最初の6巻（1月～5月分）を参照していた。

[29] モスクワ印刷局の校正官。

この要請を受けて、聖人は亡くなるまで自身の著作の完成に尽力し続け、いくつかの修正を加えた。これらの修正は、『ミネイ・チェティイ』の第2版に反映され、キエフ大修道院は聖人の死去から1年後にその刊行に着手した。 第1四半巻は1711年に、第2四半巻は1714年に、いずれもアルヒマンドリト・アファナシイ・ミスラフスキーの在任中に印刷された。第3四半巻は1716年、アルヒマンドリト・イオアンニキイ・セニュトヴィチの在任中に刊行された。 第4巻については、印刷が完了する前に、1718年にキエフの印刷所と図書館を完全に焼き尽くした火災の犠牲となってしまった。

200年にわたり、読み書きのできるロシアのあらゆる階層の人々は『聖ディミトリ・ロストフスキーのチェティイ＝ミネイ』を敬虔に読み、読み書きができない人々はそれを聴き、そこに道徳的啓発と教会史的知識の尽きることのない源を見出し、その編纂者の名を畏敬の念をもって口にしていた。

1741年、キエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラは、聖ディミトリ・ロストフスキーの『チェティイ・ミネイ』の印刷を再開しようとしていた。 その直前に、ラヴラは聖シノドから、「以前の教会刊行物以外のいかなるものも新たに印刷してはならない。また、それらの古い教会書物についても、印刷に先立ち、大ロシアの活字を用いて同種の教会書物と照合し、それらに不一致や特別な方言が含まれないようにしなければならない。 また、その他のいかなる書籍も、旧版・新版を問わず、神学評議会に届け出ず、同評議会からの許可を得ずに印刷してはならない。これにより、そのような書籍において東方教会への反感や、大ロシアの印刷物との不一致が生じないようにするためである」。

この命令を受けて、キエフ・ペチェールシク修道院のアルヒマンドリト・ティモフェイ・シェルバツキーは、聖シノドに対し、同修道院における『ミネイ』第3版の印刷を許可するよう要請した。 許可は下りたが、その条件として、「聖なる父たちの行伝を収録した当該書籍は、印刷に付す前に、アルヒマンドリトが他の学者たち、ならびに聖書および教会史に精通した人々と共に、あらゆる危険な点に細心の注意を払い、確実に検証しなければならない。もしそれらの中に、聖書や 『霊的規則』および教令に反する点、あるいは信憑性に欠け、教会の教師や信仰の歴史家によって正当と認められておらず、極めて疑わしいと判明した箇所が見つかった場合は、その聖人の伝記の末尾に注記するか、可能であれば修正すること。 また、韻律や方言に関しては、そのすべてにおいて大ロシアの書物と必ず一致させなければならない」。 このような勅令を受けたアルヒマンドリットは、この仕事を任せられる有能な人材が十分にいないこと、また聖人の伝記と照合するために必要な古書もすべて揃っていないことを答えた。というのも、1718年に修道院の図書館が跡形もなく全焼してしまったからである。 聖シノドは、それらの書物がモスクワのシノダル図書館あるいは印刷局の図書館にあるはずだと見込んで、アルヒマンドリトに対し、それらの書物の目録を作成して送付するよう命じた。しかし、目録は作成されなかった。

その一方で、聖シノドと外務局は、モンテネグロのミトロポリットから『ミネイ・チェティイ』の出版を早めるよう要請を受けていた。 「なぜなら」と大主教は記している。「セルビア人、ブルガリア人、ダルマチア人、そしてクロアチア人の諸民族は皆、心からそのような書籍を入手することを切望しているが、入手する手段がないからである」。 この願いに応えるため、聖シノドは自ら『ミネイ・チェチイ』を出版することを決定し、当時サンクトペテルブルクに在住していたノヴゴロド神学校の学長であるアルヒマンドリト・イオアサフ・ミトケヴィチ （のちにベログラード主教）と、アレクサンドロ・ネフスキー神学校の学長であるイエロディアコン・ニコディム・プチェンコフにその改訂を委ねた。 彼らの参考資料として、様々な教義書や歴史書に加え、修道司祭ステファン

・プリビロヴィッチによる序文の注釈[30]、キエフ大修道院から送られてきた抜粋、そしてロストフ都主教アルセニイによる所見[31]が提供された。同都主教には、同時に聖ディミトリイの伝記を執筆する任務も委ねられていた。

イオアサフとニコディムは、1755年11月6日に彼らに課せられた任務に着手し、翌1756年10月までにその作業を完了した。 彼らの修正は、小ロシア語の単語の代わりにスラブ・ロシア語の単語を導入し、平易な表現をより高尚な文体に置き換え、一部の表現や、さらには物語全体さえも完全に削除するというものであった。 これらの修正に加え、『ミネイア・チェチイ』において、「大ロシア語の文法に従い、スラブ方言の特性に基づき、文の順序や語尾を変更する」という修正を行うことが必要であると認められた。 この作業は、すべて印刷所の校正者に委ねられた。1756年12月31日、モスクワの印刷所で印刷が開始され、1759年にシノダル版『ミネイ・チェチイ』が刊行された。この版は、現在に至るまで変更されることなく再版され続けている。

聖シノドの委嘱により、イオアサフとニコディムは『ミネイ・チェチイ』の新版のために特別な序文を執筆し、これも今日に至るまで印刷され続けている。この序文では、とりわけ読者からの次のような疑問が想定されている。 「知恵と教え、聖なる生涯、そして最期には不朽と奇跡によって称賛された聖ディミトリウスに次ぐ者が、何かを修正することは許されるのか？」これに対し、「どのような理由から、その『ミネイ・チェチイ』が聖シノドによって修正されたのか」が詳細に説明されている。 エウセビオス・ケサリアス、シメオン・メタフラスト、マカリオス大主教らの著作に言及しつつ、序文の執筆者は次のように述べている。「そして、キリストの聖ディミトリオスもまた、あらゆる謙虚さと知恵をもって、第一巻において自ら犯した見落としや誤りを認め、それらを自ら訂正した上で、 他の巻に見つかる可能性のある誤りについては、あらゆる歴史的真実が、より確かな証拠によって互いに凌駕し得ることを知っていたため、教会の検討と訂正に委ねている」。

古代のキリスト教徒は、聖人の伝記を読む際、その道徳的・教訓的な有益性を主な目的としていた。 あらゆる脅威や、この迫害やあの迫害のさなかに迫害者たちから向けられるあらゆる誘惑に立ち向かうために、キリスト教徒たちは、殉教録に見出された忍耐、献身、そして神への愛という崇高な模範によって、自らを戒め、励ましたのである。 迫害が終わった後も、キリスト教徒たちは、この世の誘惑から身を守るために、聖人の伝記を読むことに熱心に取り組み続けた。古代の聖人伝がもたらす霊的・道徳的な益は、次の言葉に鮮やかに表されている。 「もし神の教会がそれらに益を見出さなかったならば、それらを受け入れることはなかったであろう。なぜなら、それらは巧妙な虚偽の言葉や修辞的な技巧によって構成されたものではなく、全体として健全かつ謙虚な言葉を持ち、心を打ち砕き、魂を和らげることができるからである。それらは、真に救いを求める者にとって、甘美であり、有益なのである。」

古代の教会ではそうであったように、私たちの間でもそうであった。ロシアの読者が聖人伝に何を求めていたかについては、古ロシアの聖人伝の著者の一人が次のように伝えている。 「聖人の伝記は」と彼は言う、「魂に神への畏れを植え付け、恐れを追い払い、悪を捨てさせ、善を受け入れるように導く。なぜなら、それらの伝記を読む者は、自らの行いを省み、悪を捨て去ることを考えるようになるからだ。聖人の伝記こそが、私たちの魂にとっての光であり、啓蒙である」。 ある古くからのロシアの叢書には、次のような祈りの言葉が見られる。「あなたの知られざる、秘められた英

---

[30] キエフ、その後モスクワのアカデミーの教師であり、最終的にはアレクサンドロ・ネフスキー修道院の修道士となった。

[31] *アルセニー・マツェエヴィチ*（1697–1772）*は*、1742年から1765年までロストフ教区を統括した。

知よ、私に告げてください。私はあなたに信頼を置きます、神よ、　どうか、御自身の知恵の光をもって、私の心と思いを照らしてください。単に書かれた教義を信じるだけでなく、それを実践できるように。*聖人たちの教えや生を*、自分自身の罪*となる*ようではなく、私の魂の刷新と啓発、そして救い、さらには永遠の命への導きとして受け止められるように。」　聖ディミトリオスは、彼の時代、多くの人々が眠りから覚めると、祈りの最中に　主への祈りの呼びかけと、その日の聖人への祈りを捧げることを自らの義務としており、同時に、その聖人の生涯の主要な出来事を、たとえ[32]の序文からの短い抜粋であっても、思い起こそうとしていたことに気づきました。

確かに、霊的な教訓や啓発を求める者は、聖人の伝記の中に、その渇望を満たすための豊かな糧を常に見出すことができる。殉教者たちの不屈の勇気や不敗の忍耐、そして彼らの上に、また彼らを通して行われたしるしや奇跡に現れる、神の力の多様な現れは、実に教訓的である。　また、信仰の擁護者たちが教義を説く際の説得力にも、大きな教訓が込められている。裁判における殉教者たちの答弁からは、信仰の真理を告白する生きた声が聞こえてくる。彼らは、その神聖な尊厳を完全に確信し、自らの血をもってその告白を刻み込む覚悟さえ持っていたのだ。

信仰の殉教者たちは、自らが告白する真理を擁護するために多くを語ることはなく、簡潔に語った。しかし、彼らの答えは極めて誠実で、揺るぎないものであったため、彼らの中に息づく真理を見抜けないのは、凶暴な拷問者たちだけだった。教会の教父や教師たちの著作、聖人の伝記、殉教の記述において、様々な教義的真理の立証と解明、そして誤った教えの反駁を見出すことができるのと同様に。　異端者から正教を守り、教会の教えへの忠誠のために苦難を受けた聖なる主教や修道者の伝記には、彼らが苦難を耐え抜いた教義の明確な説明と、それらの教義に反する誤謬に対する警告が見て取れる。この点において、特に教訓となるのが、聖像崇敬の擁護者たちの生涯と苦難である。

聖人の伝記には、クリスチャンが人生で直面する様々な困難を解決するための根拠がしばしば見出されます。そのため、修道者の長老たちは、人生のあらゆる特別な状況に対して、常に聖人たちの生涯から適切な例を挙げて示すことができます。　思い起こせば、安息日に空腹の者が穀物の穂を揉んでよいのかというファリサイ派の問いに対し、主ご自身がダビデの例を挙げられたことを忘れてはならない。ここから、律法に明確に規定されていない行動の許容性または不許容性について疑念が生じた際には、聖人たちの例に導かれることが可能であることがわかる。

そもそも、聖人の伝記は豊かな宝庫であり、そこから誰もが霊的生活を充実させるために必要なものをすべて得ることができる。

「聖人伝の書物は――『ミネイ・チェティム』の序文に記されているように――敬虔なる読者であるあなたに、魂の益となるよう捧げられている。今必要なのは、ただ熱意と読む意欲だけであり、それらを読み進めるうちに、神の英知と偉大さに驚嘆せずにはいられず、それを崇めずにはいられなくなるだろう。　あなたは、神が御自身の栄光へと至る道を、いかに多様に人々に示されたかを見るでしょう。あらゆる身分や地位の人々が、これらの書物の中で自分にとってふさわしい模範を見出すことができるでしょう。最高権力者たちは、自分たちと同様の神の油注がれた者たち――慈悲と真理をもって自らの王国を治め、キリストの教会を守り、その成長をもたらした者たち――を。　キリストの教会の牧者たち――偉大な教会の教師や聖人たちは、信仰のために善く羊の群れを牧し、奮闘し、今や大牧者と共に喜びを分かち合っている；　隠遁の生活を選んだ者――断食者、祈りの人、自発的な苦行者、その他、苦難によって天の御国を勝ち取り、今やその喜びを味わっている者たち；軍司令官や戦士たち――地上の王に仕えつつ天の王にも仕え、肉体の敵に勝利を収めることで魂の敵

[32] ちなみに、この事情がきっかけとなり、聖ディミトリは『*殉教者伝要約*』と題する新たな著作に着手することとなった。その序文の中で、彼は次のように述べている。　「聖人伝を様々な場所から集め、四冊の三ヶ月ごとの書物に要約したに続き、さらに簡略化し、月暦の順序に従ってこの小さな書物にまとめ、古来の慣習に従って『殉教者伝』と名付けることを企てたのである」。この著作は、不明な理由により、まさに序盤で中断されてしまった。

をも打ち破り、今や苦行の模範であるキリストと共に祝賀している者たち；　裁判官や行政官――真理を愛し、裁判において慈悲を重んじ、賄賂や偏見を受け入れず、孤児や貧しい者をも平等に裁いた者たち；商人――強欲ではなく、不義の利益を求めず、正しい商売によって天の御国を買い取った者たち；　庶民――魂の正しさ、無償の労苦、そしてキリスト教の美徳において自分たちと同じような者たちであり、その生涯をそうして過ごし、多くの者がそのすべての栄光と華やかさをもってしても到達し得ない場所にたどり着いた者たちである。あとは、誰もがそれぞれの模範に倣い、示された道を歩むのみである」。

1月

1月1日

12月19日（旧暦）

聖殉教者ヴォニファティウスの受難

記念日 12月19日

かつてローマにアグライダという名の女性が住んでおり、その父アカキオスはかつて市の長を務めていた。　若く美しく、両親から相続した豊かな財産を持ち、夫を持たない自由な生活を送っていた彼女は、肉体の弱さに打ち勝ちきれず、淫行と罪にまみれた日々を過ごしていた。　彼女には、家と領地の管理人を務める忠実な奴隷がいた。彼は若く、美しかった。その名はヴォニファティウスといい、アグライダは彼と不義の関係を結び、肉欲を満たしていた。　このことを語ることに恥じる必要はない。なぜなら、これから語られるのは、彼女たちの生活における至福に満ちた驚くべき変容についてだからである。聖人たちが称賛される際、彼らの過去の罪についても黙して語られることはない。それは、誰もが若い頃から至福で義にかなっていたわけではなく、他の人々と同様に堕落した肉体を持っていたが、真の悔い改め、　内面の良い変容と偉大な美徳によって、その聖性を輝かせたのである。これについて『聖人伝』に語られているのは、私たち罪人までもが絶望することなく、速やかに改心へと急ぐためである。神の助けがあれば、たとえ罪を犯した後であっても、自らそれを望み、そのために努力するならば、聖人となることが可能であることを知るためである。　そして実際、救いの望みなどなさそうに見える罪人が、予想を超えて聖人となり、さらにキリストの殉教者となるという、心を和ませるその物語は実に素晴らしいものです。それは、聖ヴォニファティウスのように、情欲に溺れた生活の中で罪に仕えていたが、後に信仰の証人となり、　勇敢な修道士、そしてキリストのために栄光ある苦難を耐え抜いた殉教者となった。ボニファティウスは放蕩な生活を送っていた頃、罪の奴隷ではあったが、称賛に値する美徳をいくつか備えていた。彼は貧しい者たちに慈悲深く、旅人たちに愛に満ち、不幸に見舞われたすべての人々に思いやりを示し、　ある者には惜しみない施しを、ある者には愛をもって安らぎを与え、またある者には共感をもって助けの手を差し伸べた。改心への固い決意を抱いていたヴォニファティウスは、悪魔の策略から救い出し、自らの欲望や情欲を制する力を与えてくださるよう、しばしば神に祈った。　そして主は御自分のしもべを見捨てず、彼が罪の汚れにさらに深く沈むことを許さず、むしろ、彼の不浄な行いが彼の流された血によって洗い清められるよう、御心によって導かれた。それによって、彼の魂はまるで王の紫の衣のようになり、殉教者の冠を戴くこととなった。これは次のようにして成し遂げられた。

当時、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われており、深い偶像崇拝の闇が東方全土を覆い、多くの信者がキリストのために拷問を受け、殺害されていた。　ヴォニファティウスの夫人アグライデには、救いとなる考えと、自らの家に殉教者の聖遺物を安置したいという強く抗いがたい願望が浮かんだ。使用人の中でヴォニファティウスほど忠実で、命令を忠実に遂行する者はいなかったため、彼女は彼を呼び寄せ、その願いを打ち明け、二人きりの場でこう言った。

「キリストの兄弟よ、あなた自身もご存知の通り、私たちは多くの罪によって穢されており、来世や救いなど全く気にかけていません。それでは、私たちは神の恐るべき審判の日に、どのようにしてその場に立つのでしょうか。そこでは、私たちの行いに応じて、厳しい苦しみを受けるよう裁かれることになるのです。」　しかし、ある敬虔な男性から、もし誰かがキリストの殉教者たちの聖遺物を持ち、それを崇敬するならば、その人は救いへの助けを得て、その家では罪が増すことはなく、ひいては聖なる殉教者たちが授かったような永遠の至福にさえ達することができる、と聞いたのです。　今や、多くの人々がキリストのために偉業を成し遂げ、自らの体を拷問に委ねて殉教者の冠を得ていると言われています。私のために役立ってください。今こそ、あなたが本当に私を愛しているかどうかを示す時が来ました。　さあ、キリスト教徒への迫害が行われている国々へ急いで向かい、　聖なる殉教者の一人の聖遺物を私に持ち帰れるよう努めなさい。そうすれば、それを私の元で尊く安置し、その殉教者のために教会を建て、常に彼を私の守護者、擁護者、そして神の御前で絶えず執り成しをしてくれる者とするのだ。

アグライダの話を聞き終えると、ボニファティウスは喜んで彼女の提案に同意し、旅に出る用意が万全であることを表明した。　女主人は彼に多くの金を渡した。というのも、贈り物や金なしでは殉教者の遺体を手に入れることはできなかったからである。不信心な迫害者たちは、キリスト教徒が聖遺物に対して抱く強い愛と熱意を見て、それをただで渡すことはせず、高値で売りつけ、そのようにして多額の収入を得ていたからである。　ヴォニファティウスは女主人から多くの金を授かった。その一部は殉教者の遺骸の買い取りに、残りは貧しい人々への施しに充てるためであった。また、様々な香や布、そして尊い殉教者の遺体を包むために必要なあらゆるものを用意した。さらに多くの奴隷や助手、馬を連れて、彼は旅立つ準備を整えた。　家を出る際、彼は笑いながら女主人にこう言った。

「奥様、もし私が殉教者の遺体を一つも見つけられず、キリストのために拷問を受けた私の遺体があなたの元へ運ばれてきたら――その時は、それを敬意を持って受け入れてくださるでしょうか？」

アグライダは笑いながら、彼を酔っ払いであり罪人だと罵り、非難してこう言った。

「今こそ、私の兄弟よ、嘲笑する時ではなく、敬虔であるべき時です。　旅の途中、あらゆる不品行や嘲笑から身を守るよう心掛けなさい。聖なる行いは誠実かつ品位をもって行わなければならない。この旅路において、あなたは謙虚さと節制を保つべきだ。あなたが聖遺物に奉仕しようとしていることを忘れないでほしい。私たちには、それらに触れるどころか、一瞥することさえも値しないのだ。　平安のうちに旅立ちなさい。そして、しもべの姿をとられ、私たちのために御自身の血を流された神が、私たちの罪を赦し、あなたに御自身の天使を遣わし、あなたを善き、安らかな道へと導いてくださいますように。

ヴォニファティウスは女主人の指示を心に刻み、旅に出た。その間、自分の穢れた罪深い手で何に触れなければならないのか、心の中で考えを巡らせていた。　ヴォニファティウスは、かつての自分の罪を深く悔い改め、断食を決心した。肉を食べず、ワインを飲まず、神への畏れを抱くことができるよう、熱心に、そして頻繁に祈ることにした。　畏れは注意の父であり、注意は内なる平安の母であり、そこから悔い改めの始まりと根源が生まれる。こうしてヴォニファティウスは、神への畏れ、自己への注意、そして絶え間ない祈りから始め、自らの内に悔い改めの根を植え付け、完全な生活への渇望を育んでいった。

ヴォニファティウスが小アジアに到達し、キリキアの有名な都市タルス[33]に入ったとき、そこではディオクレティアヌス帝とその共同統治者マクシミアヌスの治世下で、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われており、信者たちは過酷な拷問にさらされていた。　ヴォニファティウスは奴隷たちを宿に置き、休息を取るよう命じたが、自身は休むことなく、以前耳にしていた殉教者たちの苦しみを見に行くために直ちに出かけた。拷問の現場に到着すると、ヴォニファティウスは、キリスト教徒たちに加えられる拷問を見物するために集まった大勢の人々を目にした。　彼ら全員に告げられた罪はただ一つ、キリスト教の信仰と敬虔な生活だけだったが、彼らに課せられた拷問は不平等で、それぞれ異なっていた。ある者は逆さ吊りにされ、その足元の地面には火が焚かれていた。　ある者は十字架のように四本の柱に縛り付けられ、ある者は鋸で切り裂かれた状態で横たわり、ある者は拷問者たちに鋭利な道具で削られ、ある者は目をえぐり出され、ある者は四肢を切り落とされ、ある者は杭に縛り付けられ、地面から持ち上げられた後、杭が地面に打ち込まれ、首まで突き刺さる状態となり、　ある者は骨を砕かれ、ある者は手足を切り落とされ、毛糸玉のように地面を転がっていたが、すべての顔には霊的な喜びが浮かんでいた。なぜなら、人間には耐え難い苦痛に耐えながらも、彼らは神の恵みによって強められていたからである。　福者ヴォニファティウスは、これらすべてを注意深く見つめていた。時には殉教者たちの勇敢な忍耐に驚き、時には自分にも同じ栄冠を望み、やがて神への熱意に満たされてその場の真ん中に立ち、すでに二十人ほどいた殉教者たち全員を抱きしめ、皆の耳に届くように大声で叫んだ。

「キリストの神は偉大なり！　神は偉大である。なぜなら、御自分のしもべたちを助け、これほど大きな苦しみの中で彼らを強めてくださるからだ！」

そう言い終えると、彼は再び殉教者たちに口づけをし、愛を込めて彼らの足にキスをした。そして、足のない者たちについては、体の他の部分を殉教者たちに抱きしめ、胸に押し当てながら、彼らを「　」と祝福した。なぜなら、彼らは勇敢に短期間の苦痛に耐え抜いたため、 彼らは直ちに永遠の安息と慰め、そして果てしない喜びを得るだろうからである。その一方で、ヴォニファティウスは、自分もまた殉教者たちと共にこの偉業に加わり、彼らが「偉業の創始者」であるキリストから授かる冠の共同受領者となれるよう、自らのために祈った。　民衆全員が彼に視線を注いだ。とりわけ、聖なる殉教者たちを苦しめていた裁判官は、目の前にいるヴォニファティウスを、よそ者であり見知らぬ人物として見て、彼は尋ねた。「彼は誰で、どこから来たのか？」そして直ちに彼を捕らえて自分の元へ連れてくるよう命じ、こう尋ねた。

「お前は誰だ？」

「キリスト教徒です！」と聖人は答えた。

しかし、裁判官は彼の名前と出身地を知りたがった。それに対し、聖人はこう答えた。

「私の第一の、そして最も愛する名は『キリスト教徒』です。私はローマからここへやって来ました。もし両親から与えられた名前も知りたいというのなら、私はヴォニファティウスと呼ばれています。」

「さて、ヴォニファティウスよ」と裁判官は言った。「私がお前の肉と骨を引き裂く前に、我らの神々に近づき、彼らに生贄を捧げよ。そうすれば、お前は多くの恩恵に浴し、神々をなだめ、お前に迫る苦痛から解放され、我々から多くの贈り物を受け取ることになるだろう。」

これに対し、ヴォニファティウスはこう答えた。

「お前の言葉に答えることさえすべきではないが、私はすでに何度も繰り返してきたことを改めて言う。私はキリスト教徒だ。お前に聞かせるのはそれだけだ。もしそれを聞きたくないのなら、私を好きに扱え！」

---

[33] キリキアは、小アジア南東部のローマ属州である。タルスは、この属州の南部、肥沃な平野に位置し、キドネ川沿いにある、同属州でも有数の大都市であり、同川はそこからほどなくして地中海に注いでいる。現在でも、かなり重要な商業都市である。

ヴォニファティウスがこう言い終えるやいなや、裁判官は直ちに彼を裸にし、逆さ吊りにして激しく殴打するよう命じた。聖人は激しく殴打され、その体からは肉が塊ごと剥がれ落ち、骨がむき出しになった。　しかし、彼はまるで苦痛を感じていないかのように、また受けた傷を気にも留めず、ただ聖なる殉教者たちを見つめ続けていた。彼らの苦しみの中に自らの模範を見出し、彼らと共にキリストのために苦しむことを許されたことに慰めを見出していたのである。その後、拷問官は彼への拷問を少し和らげるよう命じ、再び言葉で説得しようと試みながら、こう言った。

「ヴォニファティウスよ、この拷問の始まりが、お前にどちらを選ぶべきかの指針となるように。お前はすでに耐え難い苦しみを味わったのだ。さあ、この呪われた者よ、正気を取り戻して犠牲を捧げよ。さもないと、直ちにさらに大きく、最も苛烈な苦しみにさらされることになるだろう。」

聖人はこう反論した。

「なぜ私に不敬なことを命じるのか、この狂人よ！　私はお前の神々のことなど聞くことさえできないのに、お前は私に彼らに犠牲を捧げろと命じるのか！」

すると裁判官は激しい怒りに駆られ、聖人の手足の爪の下に鋭い針を突き刺すよう命じたが、聖人は目と心を天に向け、黙って耐え忍んだ。　その後、裁判官は新たな拷問を思いついた。彼は鉛を溶かして聖人の口に注ぎ込むよう命じた。鉛が溶け始めた時、聖人は両手を天に向けて、こう祈った。

「わが主なる神、イエス・キリストよ、私が耐えてきた苦しみの中で私を強めてくださった方よ、今この時も私と共にいて、私の苦しみを和らげてください。　あなたは私の唯一の慰めです。どうか、あなたがサタンとこの不義な裁判官に打ち勝つよう助けてくださるという、明らかなしるしを私に与えてください。あなたのために――あなたがご存じの通り――私は苦しんでいるのです。

この祈りを終えると、ボニファティウスは聖なる殉教者たちにも向き直り、彼らの祈りによってこの恐ろしい苦痛に耐え抜くことができるよう助けてくれるよう懇願した。拷問者たちは彼に近づき、鉄の道具で口を開かせ、喉に鉛を流し込んだが、聖人に害を及ぼすことはできなかった。　拷問の場に立ち会っていた者たちは、その残虐さを目の当たりにして身震いし、こう叫び始めた。

「キリスト教の神は偉大なり！　王であるキリストは偉大なり！　主よ、我らは皆、あなたを信じます！」

そう叫びながら、皆は近くにある偶像の神殿に向かい、それを破壊しようとしました。一方、裁判官に対しては激しく非難し、彼を殺そうと石を投げつけました。裁判官は裁判席から立ち上がり、恥じ入って自宅へ逃げ帰りましたが、ヴォニファティウスは彼を拘束するよう命じました。

翌朝、騒動が収まり、民衆の反乱が一時的に鎮まると、裁判官は再び裁判席に現れ、ヴォニファティウスを呼び寄せ、キリストの御名を冒涜し、キリストが十字架にかけられたことを嘲笑した。聖人は、主に対する冒涜を許さず、自らも裁判官を苛立たせる多くの言葉を口にし、今度は無情な神々を罵り、それらを崇拝する者たちの盲目さと狂気を糾弾した。それによって裁判官の怒りをさらに煽り、裁判官は直ちに樹脂の釜を溶かすよう命じ、聖 殉教者をその中に投げ込んだ。 しかし、主はそのしもべを見捨てなかった。突然、天使が天から降りてきて、釜の中の殉教者に水を注いだ。すると、樹脂が注ぎ出されたとき、周囲に激しい炎が立ち上り、その炎は近くに立っていた多くの不敬虔な異教徒たちを焼きつけた。一方、聖人は樹脂や火によるいかなる害も受けず、無傷で釜から出てきた。　その時、拷問官はキリストの力を目の当たりにし、自分自身が被害に遭うのではないかと恐れ、直ちにヴォニファティウスを剣で斬首するよう命じた。兵士たちは殉教者を捕らえ、斬首の場へと連行した。聖人は、祈りのために少しの時間を求めて許しを得ると、東の方角に向き直り、こう祈った。

「主よ、主なる神よ！　どうか御慈悲を私に授け、私の助けとなってください。私の愚かにも犯した罪ゆえに、敵が天への道を塞ぐことのないよう、私の魂を安らかに迎え入れ、あなたのために血を流し、最後まで信仰を守り抜いた聖なる殉教者たちと共に私を数えてください。　また、キリス

トよ、あなたの尊い御血によって贖われた、私に親しいあなたの民たちを、あらゆる不義と異教の迷いから救い出してください。あなたは祝福され、永遠に存続される方だからです！

このように祈り終えると、ボニファティウスは剣の下に頭を垂れ、斬り殺された。その傷口からは、血と共に乳が流れ出た。 この奇跡を目撃した異教徒たちは、約550人が即座にキリストへと回心し、忌まわしい偶像を捨てて、信徒たちに加わった。これが聖ヴォニファティウスの最期であった。彼は家を出て旅立つ際、笑いながら女主人に、後に実際に証明し、成し遂げたことを予言していたのである。[34] 。

一方、聖ヴォニファティウスの友人たちや、聖遺骨を探すために彼と共に来たアグライダの奴隷たちは、何が起きたのか全く知らず、宿屋に座って聖ヴォニファティウスを待っていた。 夕方になっても彼が戻ってこないのを見て、彼らは不思議に思い、一晩中、そして翌日の朝になっても彼の姿が見えないと、彼について悪口を言い始め（後に彼ら自身が語ったところによると）、彼がどこかで酒に酔い、娼婦たちと時間を過ごしているのではないかと推測した。

「ほら」と彼らは笑いながら言った。「これが、聖遺物を探しに来た我らのヴォニファティイというやつだ！」

しかし、彼がその次の夜も、三日目になっても戻ってこなかったため、彼らは戸惑い始め、街中を歩き回り、彼の行方を尋ねて探し回った。 偶然か、あるいはむしろ神の御心によってか、彼らは[35] の兄弟である人物に出くわし、ここへやって来た一人の旅人を見かけなかったかと尋ねた。その男は、昨日、キリストのために拷問の場で苦しみ、死刑を宣告され、剣で斬り殺されたある異国の男がいたと答えた。

「分かりません」と彼は言った。「それが、あなたがたが探している人物でしょうか？ その人物はどのような風貌だったのですか？」

彼らはヴォニファティウスの外見――背が低く、赤毛であること――を説明し、顔の特徴についても伝えた。すると、その男は彼らにこう言った。

「おそらく、それがあなたがたが探している人物でしょう！」

しかし、彼らはそれを信じず、こう言った。

「君は、俺たちが探している男のことなんて知らないだろう。」

そして、互いに話し合いながら、ヴォニファティウスの以前の性格を思い出し、彼を罵り、こう言った。

「酒飲みで放蕩者が、キリストのために苦しむなんてあり得るのか！」

しかし、コメントリアの兄弟は自分の主張を譲らなかった。

「外見上、あなたがたが言うようなその男は、昨日も一昨日も、確かに裁判で拷問を受けていた」と彼は言った。「ところで、何があなたたちを妨げているのか？ 行ってみれば、彼が斬り殺された場所に横たわっているその遺体を、あなたたちの目で確かめることができるだろう。」

彼らはその男の後に続き、殉教の現場へと向かった。そこには、殉教者の遺体がキリスト教徒に持ち去られないよう、軍隊の衛兵が立っていた。先頭を歩いていた男は、首を切られて横たわっている殉教者を指さし、こう言った。

「これが、あなたがたが探している人ではないか？」

彼らが殉教者の遺体を見たとき、すぐにその友人を識別し始め、別々に置かれていた頭部を胴体に合わせると、それがボニファティウスであることを完全に確信し、大いに驚いた。同時に、彼について悪意のある考えを抱き、悪口を言っていたことを悔やみ、 、聖人の心の内や善意を知らずに

[34] 聖殉教者ヴォニファティウスは、290年12月19日に殉教した。

[35] コメンタリシオの職位と職務については、987ページ、注1を参照のこと。

、彼を非難し、その生き方を嘲笑したことに対する罰が自分たちに降りかかるのではないかと恐れたのである。

彼らが聖人の顔を見つめ、深い驚きに包まれていると、突然、ヴォニファティウスが少しずつ目を開き始め、まるで友人を見るかのように慈愛に満ちた眼差しで彼らを見つめ、口元には微笑みが浮かび、顔は輝いており、まるで自分に対する彼らのすべての過ちを赦しているかのような様子だった。

彼らは恐怖と喜びが入り混じり、温かい涙を流しながら彼のそばで泣き、こう言った。

「キリストのしもべよ、私たちの罪を赦してください。私たちは不当にあなたの生き方を非難し、無分別にもあなたを罵ったのです！」

その後、彼らは不信心者たちに金貨500枚を渡すと、聖ヴォニファティウスの遺体と頭部を運び出し、香油を塗って清らかな布で包み、聖櫃に納めて、殉教者の遺体を主人の妻のもとへ運ぶため、自宅へと向かった。　彼らがローマに近づいたとき、神の天使がアグライデの夢に現れてこう言った。

「かつてはあなたのしもべであったが、今や私たちの兄弟であり、共に仕える者となったその人を受け入れる準備をしなさい。かつてはあなたの奴隷であったが、今やあなたの主となるその人を受け入れ、畏敬の念をもって彼を敬いなさい。なぜなら、彼はあなたの魂の守護者であり、あなたの命の守り手だからである。」

彼女は目を覚ますと恐怖に襲われ、直ちに数人の高名な聖職者を連れて、かつて奴隷として旅立たせた聖殉教者ヴォニファティウスを迎えに出た。そして、彼が戻ってきた際には、涙を流しながら畏敬の念をもって、主人として彼を自宅に迎え入れた。　そして彼女は、聖人が旅立つ際に語ったあの預言を思い出し、聖ヴォニファティウスが彼自身の罪と彼女の罪のために、神に喜ばれる犠牲となったように導いてくださった神に感謝した。ローマから50スタディオン離れた彼女の領地[36]　で、アグライダは聖殉教者ヴォニファティウスの名に因んで素晴らしい教会を建て、そこに聖遺骨を安置した。その後、殉教者の祈りによって多くの奇跡が起こり、病人に様々な癒しがもたらされ、人々から悪霊が追い出され、聖人の墓前で祈る多くの人々が願いを叶えられたのである。

その後、至福のアグライダ自身も、全財産を貧者や困窮者に分け与え、世俗を捨て、さらに18年間を深い悔い改めの中で過ごし、安らかに息を引き取り、聖殉教者ヴォニファティウスの傍らに葬られ、彼と共に眠ることとなった。[37]。

こうして、この二人の聖人は、かつての生活を奇跡的に一変させ、幸いな最期を迎えた。一人は血をもって自らの罪を洗い流し、殉教の冠に値し、もう一人は涙と厳しい生活によって、肉欲の汚れから自らを清めた。　そして二人はともに、主イエス・キリストの御前で義とされ、汚れなき者と認められた。主イエス・キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

---

[36] スタディオンは88サジェーンの長さの単位である。したがって、50スタディオンは9ヴェルスタにほぼ等しい。聖ヴォニファティウスの頭部は、その後1200年にコンスタンティノープルで、ロシアの巡礼者アントニーによって目撃された。ローマにある聖ヴォニファティウスの教会（かつてアグライダによって彼のために建てられたもの）の上には、その後、神の人である聖アレクシオスに捧げられた、より広大な教会が建設された。下層の教会から新しい上層の教会へと移され、その聖具室には現在、彼らの尊い頭部が別々に安置されている。

[37] ローマの聖殉教者たちの記録および聖山（アトス山）のニコディモスによるギリシャ語のシナクサリオスによれば、アグライダは数々の功績の後、奇跡を行う力や悪魔を追い払う力さえ授かり、聖人の列に加えられ、その記念日は聖殉教者ヴォニファティウスと共に祝われている。

慈悲深き聖ボニファティウス、フェレンティウス司教の伝

記念日：12月19日

聖ヴォニファティウス（[38]）は、イタリアのトゥスキ地方（[39]）の出身であった。彼は幼い頃から貧しい人々への愛に際立っており、誰かが裸でいるのを見かけると、自分の服を脱いで　その裸の人に着せていたため、家に戻る時には、時にはキトンがなく、時には上着がない[40] ことがあり、自身も貧しい未亡人であった母親は、しばしば彼に腹を立ててこう言った。

「あなた自身も貧しいのに、乞食に服を着せるなんて、無駄なことをしているわ。」

ある日、彼女は一年分のパンが備蓄されていた穀物倉に入ったが、そこには何も残っていなかった。息子のヴォニファティウスが密かにすべてを乞食たちに配ってしまったのだ。母親は顔を叩きながら泣き出し、こう叫んだ。

「ああ、なんてこと！　一年分の食糧をどこから手に入れればよいのか。自分や家族を何で養えばよいのか？」

ヴォニファティウスは彼女の元へ駆けつけ、慰め始めた。しかし、激しく泣きじゃくる母を言葉ではどうにもなだめられなかったので、しばらくの間、穀物倉から出ていくよう懇願した。母が外に出ると、ヴォニファティウスは穀物倉の扉を閉め、地面にひれ伏して神に祈り始めた――すると、たちまち穀物倉は小麦で満たされた。　ヴォニファティウスは神に感謝を捧げ、母を呼び戻した。母は穀物倉が穀物で満たされているのを見て、心を慰められ、神を賛美した。　それ以来、彼女は息子が貧しい人々に好きなだけ施しをすることをもう禁じなかった。なぜなら、息子には、施しをしても貧しくならず、神に願うことは何でも与えられるという、それほど偉大な信仰があるのを見たからである。ヴォニファティウスの母は家に鶏を飼っていたが、キツネにさらされ、貧しい未亡人に損害を与えていた。　ある日、少年ヴォニファティウスは家の戸口に立っていると、いつものようにキツネが現れ、鶏をさらって山へと逃げ去るのを目撃した。母が悲しむことを案じて、彼は教会へと駆け込み、地面にひれ伏して、祈りの中で神にキツネの仕業を訴え、こう言った。

「主よ、私が母の労苦の成果を糧にできないことが、果たして御心に適うのでしょうか？それなのに、狐が来ては私たちの食べ物を奪っていくのです！」

祈りを終えたヴォニファティウスは家に戻ると、まさにそのキツネが庭にやって来て、口にくわえた盗んだ鳥を運んでくるのを目にした。キツネはヴォニファティウスの前でその鳥を生きたまま放し、自身はすぐに息絶えた。　このように、神は御自身に希望を置く者たちの祈りを、些細なことにおいても聞き入れてくださる。神は私たちに対して偉大な御摂理をお持ちであり、私たちが神から小さな恵みを受けることで、可能な限り、より大きな恵みも受けられると希望を持てるようにしてくださるのだ。

聖ヴォニファティウスはその後、フェレンティヌス[41] の司教に任命され、彼の数多くの奇跡については、聖人の従者であり、その行いをすべてこの目で見ていた長老ガウデンティウスが語っている。フェレンティヌスの司教区は極度の貧困状態にあり、それは敬虔な人々にとって謙遜の守り手となるものであった。　司教は、教会に属するぶどう畑からの収入一つを除き、生計を立てるための教会財産を一切持っていなかった。　ある日、激しい雹が降り、実をつけたすべてのブドウの木を打ち砕き、一部の木にわずかな房が残るのみとなった。至福のヴォニファティウスはブドウ畑に入り、す

---

[38] 聖ヴォニファティウス・ミロスティヴィは6世紀に生きた。

[39] トゥスキア――別名エトルリア――は、ティレニア海とアペニン山脈の間に位置し、ローマの北にある、イタリア中部の古代地域である。

[40] ヒトンとは、ギリシャ語で下着（シャツ）を指す名称であり、東方の諸民族においては、スヴィタまたはスヴィトカと呼ばれる、上着として着用される質素で粗い衣服のことである。

[41] フェレンティン――イタリアの古代エトルリアにあった都市で、現在はフェレントの遺跡となっている。

べてが打ち砕かれているのを見て、このような貧しさの中でさらに大きな困窮に直面することになったことを神に感謝し始めた。　やがてブドウの収穫期が訪れると、ヴォニファティウスはいつものように見張りを立て、残されたブドウの房を厳重に守るよう命じた。ある日、彼は孫であるコンスタンティウス長老に、司教の屋敷にあるすべてのワイン用の器を洗い、慣例に従ってタールを塗るよう命じた。　長老はこれを聞いて、ワインもないのにワイン用の器を準備するよう命じられたことに大いに驚いた。なぜ器を準備する必要があるのかと尋ねる勇気はなかったが、命令に従い、慣例通りにすべてを行った。　ヴォニファティウスはぶどう畑に入り、ぶどうの房を摘み取ると、それらを搾り機（[42]）へと運び、そこにいた全員に退出を命じた。そして、自分はある少年一人を残し、その少年に、これらのわずかなぶどうの房をすべて搾り機で搾り出すよう命じた。　ワインが搾り機から少しずつ流れ出し始めると、聖人はそれを器に受け、用意されたすべての水差しに少しずつ注ぎ、それらを祝福した。その際、器がほんの少しワインで濡れる程度になるよう、ワインを均等に分け配った。こうして、ヴォニファティウスはすべての器を祝福し、長老を呼び寄せ、慣例に従って貧しい人々がやって来て、器に入っている新しいワインを受け取れるよう、彼らを集めるよう命じた。すると、搾り器の中のワインが増え始め、貧しい人々が持ち寄ったすべての器がいっぱいになった。　聖人は、訪れた者全員にワインが十分に行き渡ったのを見て、少年には搾り場から出るよう命じ、ワインの貯蔵庫を閉め、封印を施して教会へと向かった。　三日後、ヴォニファティウスは長老コンスタンティウスを呼び寄せ、祈りを捧げた後、ワイン貯蔵庫の扉を開けた。すると、　祝福のために少しずつワインが注がれていたすべての器や水差しが、泡立つワインで溢れかえり、それが　はみ出し、地面までもがワインで染まっていた。もし司教が貯蔵庫に入るのを少しでも遅らせていたら、地面全体がこぼれ出たワインで覆われていたであろう。長老はこれを見て大いに驚いたが、聖人は、虚栄に満ちた人間の名声を恐れ、避けるため、このことを誰にも話さないよう彼に命じた。　またある時、聖殉教者プロクルの記念日が祝われた際、同じ町に住むフォルトゥナートという名の貴族が、聖殉教者への礼拝が終わった後、聖ヴォニファティウスに自分の家に来て祝福を与えてほしいと頼んだ。聖人はこれを断らなかった。なぜなら、フォルトゥナートが信仰と真の愛をもってそう頼んできたからである。　ヴォニファティウスは、神聖な礼拝を執り行った後、フォルトゥナートの家へ食事に訪れた。彼が慣例に従って食事の前に祈りを捧げようとしたその時、道化師の一人が猿を連れて戸口に立ち、シンバルを鳴らし始めた[43]。聖人はその音を聞いて怒りを覚え、こう言った。

「ああ、この不信心者は死んでいる、まさに死んでいる。私は食事にやって来たが、いつものように神を賛美するために口を開く間もなく、彼は私を先回りして、猿を連れてきてキンバルを鳴らし始めたのだ！」

さらに彼はこう付け加えた。

「さあ、彼に食べさせ、飲ませてやれ。だが、彼は死んでいるのだと知っておけ。」

その不信心な男は、パンとワインを受け取ると、門から出ようとしたが、その直後、背後から大きな石が突然落ちてきて頭を直撃した。道化師は地面に倒れ、半死半生の状態で人々に抱えられて自宅へ運ばれ、翌日、聖人が予言した通り、息を引き取った。　このように、神の聖なる御使いたちを畏敬し、敬うべきである。彼らは神の宮であり、神が彼らの中に宿っておられるからである。聖人が怒るとき、彼の中に住まわれる神も共に怒り、その時、聖人は一言で自分を侮辱した者を懲らしめることができるのである。　またある時、同じ長老コンスタンティウス、すなわち聖人の孫が、自分の馬を二十枚の金貨で売り、その金を聖櫃[44]に入れてから、用事のために出かけた。すると予期せず

---

[42] トチロ――熟したブドウを圧搾して果汁からワインを醸造するための穴。ブドウは、専用の器具を用いるか、あるいは単に足で踏み潰して圧搾された。

[43] キムヴァル – 古代の打楽器で、金属製の皿からなり、その中央には右手に装着するためのベルトや紐が取り付けられていた。キムヴァルは、左手に装着した別のキムヴァルに打ち付けることで音を奏でた。

[44] コヴチェジェツ――小型の箱。

、多くの物乞いが司教のもとへやって来て、しつこく彼にまとわりつき、何か助けてほしいと懇願した。　聖人は彼らに与えるものが何もないため、心の中で嘆き、助けも与えずに乞食たちを帰すことを望まなかった。そこで、馬の代金として受け取ったコンスタンティウスの金を思い出し、小箱が置かれている部屋へ行き、罪の意識から祝福を捧げて小箱を開け、金貨を取り出して貧しい人々に与えた。　長老が戻ってきて、金庫が開いているのを見て、中に金がないことに気づくと、ひどく憤慨し、大騒ぎをして、怒りを込めて叫び始めた。

「私はもうここにはいられない！」

その叫び声に、司教の屋敷にいた者たちが皆駆けつけ、司教自身もやって来て、優しい言葉で彼をなだめ、説得しようとした。しかし、彼は苛立ちを隠さず、聖人にこう答えた。

「お前のところの皆は快適に暮らしているのに、私だけが居場所もなく、安らかに暮らすこともできない。私のお金を返してくれれば、お前のところから去ってやる。」

司教は聖母マリアの教会へ向かい、フェロン（[45]）を身にまとい、両手を天に掲げ、目を天に向け、主がどこからか、彼が長老から受け取ったのと同じだけの金貨を送り、それを長老に返してその怒りを和らげてくださるよう祈った。　聖人は祈りながら自分自身に目を向けると、フェロンに突然現れた二十枚の金貨を目にした。それらは天に向かって上げられた両手の間にあり、まるで今まさに鋳造され、火から取り出されたばかりであるかのように輝いていた。　神に感謝を捧げた後、司教は教会を出て、怒り狂う長老の服の上に金を投げつけ、こう言った。

「ほら、お前が嘆いていた金を受け取れ。そして、私の死後、お前のけちさゆえに、お前はこの教会の司教にはなれないことを知っておけ！」

実際、その通りになった。その長老は司教の座を得るために金を貯めていたのだが、神の人の発した言葉は決して空しく終わることはなく、コンスタンティウスは長老の位にとどまったまま生涯を終えた。

かつて、二人のゴート人がラヴェンナ[46]へと向かっていたが、旅人として聖ヴォニファティウスに司教館で温かく迎えられた。彼らが去る際、ヴォニファティウスは見送りながら、自ら木製の器にワインを注ぎ、祝福のしるしとして旅路の糧として彼らに与えた。　その器は小さかったため、ワインはたった一回の食事分しか持たないはずだった。二人はそれを受け取って立ち去り、必要な時にその器からワインを飲んだが、器の中のワインは微塵も減らず、常に満杯のままであった。　ラヴェンナで数日間過ごした後、旅人たちは引き返し、再び聖人のもとを訪れ、祝福に感謝を捧げるとともに、同じワインが入った器を聖人に差し出し、旅の途中、どこにも他のワインを飲まなかったにもかかわらず、器の中のワインは依然として尽きなかったと伝えた。

また、その国の聖職者の一人である誠実な男性が語る話についても、触れておくべきだろう。

「かつて、聖ヴォニファティウスは」と聖職者は語る。「自分のブドウ畑に入ると、そこかしこに無数のイモムシがいて、ブドウ畑全体がそれらで覆われており、葉っぱはすべて枯れてしまうところだった。　そこで聖人はイモムシたちにこう言いました。『我らの主イエス・キリストの御名によって命じる。ここから立ち去り、二度とこの草を食べてはならない。』すると、神の御心にかなう者の言葉に従い、数多くのイモムシはたちまちブドウ畑から出て行き、一匹も残らなかったのです。

御自身の聖徒たちを栄光に輝かせ、御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださる主なる神よ、彼らを通して、御自身も永遠に栄光を受けられますように。アーメン。

---

[45] フェロン――司祭の祭服の一つで、リザと呼ばれる。古代には、司祭も司教も礼拝を行う際にフェロンを着用していた。現在では、長老のみがこれを着用している。

[46] ラヴェンナ――アドリア海に面した港湾都市で、アペニン半島の北東岸に位置していた。アウグストゥス帝によって堅固に要塞化され、イタリアの要衝と見なされていた。　ホノリウス以降、西ローマ帝国の皇帝たちはここに居を構えていた。ラヴェンナは現在も存続しており、同名のイタリア州における主要な繁栄都市となっている。

オミリトの大司教、聖グリゴリオスの生涯。

記念日：12月19日

聖グリゴリウスは当初、メディオランの町で修業に励み、そこで神の御選びにより、助祭の位において教会奉仕の燭台として輝いた。その後、他の町や村々も、彼をキリストの御名の説教者、そして偶像崇拝の虚飾を根絶する者として迎えた。　グリゴリウスは、敬虔な両親アガピオスとテオドティアの息子であり、敬虔さと神への畏れの中で育てられ、若き頃から神の恵みに満ち、奇跡を行う者であり、癒やしの者でもあった。主は彼を司教の位での奉仕のために備え、そのことを啓示や先見の明を持つ長老たちを通じて彼に告げておられた。　グリゴリーがメディオランにあるある隠者の元を訪れたとき、その隠者は彼の将来すべてを予言した。彼は透視能力者であり、グリゴリーがまだ彼から三十ポプリシュ[47] も離れた場所にいたときに、彼が自分の元を訪れることさえ予見していたのである。隠者はそのことを自分の使用人に語った。　そこにはもう一人、[48] に記されているような、神のために世を離れ、山中で暮らしていたスキームの老修道士がいた。グリゴリーはその老修道士のことを知ると、彼のもとへ向かった。彼がその老修道士が住む山に近づいたとき、空中に炎の柱が見え、恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。　その後、気を取り直して立ち上がり、その炎のような幻影が何なのか見に行きました。遠くからは炎のように見えたのですが、近づいてみると、彼に向かって歩いてくる隠遁者がいました。その隠遁者は近づくと、彼に口づけをし、グリゴリーと呼びかけました。しかし、彼はグリゴリーと面識など一度もありませんでした。　グリゴリーはこの偉大な長老のもとで二日間過ごし、そこで驚くべき幻視を授かった。真夜中、彼はこの神に愛された男が、祈りを捧げるために両手を広げ、地面から浮き上がり、空中に立っているのを見た。グリゴリーはこの幻視に驚いたが、翌朝、長老は彼を呼び寄せ、穏やかで柔和な声でこう言った。

「行け、友よ、兄弟よ！そして、私が語ることを聞きなさい。あなたが私のところに来たのは、私に対して明らかにされたあなたに関するすべてを知るためなのだ。あなたはローマを目にし、聖殉教者ヴォニファティウスとアグライダの教会で祈りを捧げ、そこからアレクサンドリアへと船出するべきだ。 その後、エチオピアで真理の言葉を宣べ伝え、 、オミリットの都市ナグラン[49] へと向かうのだ。そこはオミリットの王ドゥナアンに征服され、使徒の教えの宣教を必要としている。そこで偉大で栄光ある業を成し遂げた後、あなたは死に、義人の住む場所へと移り住むことになる。　しかし、オミリトに住む不従順なユダヤ人たちからは多くの苦難を受けることになるだろう。それでも、神を良き助け手として、神があなたを導き、教え導いてくださるおかげで、彼らの多くを神へと回心させることになるだろう。また、そこでアレクサンドリアの総主教によって、大司教の位に叙階されることになる。

これを聞いた聖グリゴリウスは、長老が予言するに値しない者だと語り、まだ隠者のもとにとどまりたいと願った。先見の明のあるその男は、グリゴリウス自身が目撃した幻視についても彼に語

---

[47] ポプリシュチェは距離の単位であり、現在の690サジェニに相当した。30ポプリシュチェは、およそ41ヴェルスタの距離に相当する。

[48] スキームニクとは、スキーマを受けた修道士のことである。 スキマとは、ギリシャ語（sxiya）で「姿」「様」「位階」を意味する言葉である。スキマとは、キリストへの自己犠牲と奉仕という、新たかつ最も厳格な誓願と結びついた修道生活の最高段階を指し、世からの完全なる離脱であり、キリストと一つになることを切望する心である（フィリピ1:2）。

[49] オミリテ族――アラビア湾沿岸に居住していた南アラビアの住民。キリスト教の初期の数世紀、アラビアには11の異なる部族が居住していたが、そのうちオミリテ族とサベア族の2部族のみがキリスト教を信仰していた。 残りの部族は、ユダヤ人との絶え間ない交流の中で、その大部分がユダヤ教の律法に従っていた。オミリ族は、エチオピアの首都アクスマの第二代司教であるテオフィロス・インディアンによってキリスト教の教えを受けた。– ナグラン、あるいはアナグラン――アラビア湾の岸辺に位置する広大で人口の多い都市であり、その住民は例外なくキリスト教を信仰していた。

った。　彼は、最高位の使徒であるペトロとパウロが、グリゴリイの肩にオモフォール（[50] ）を授けているのを見ていた。それは、グリゴリイが受けることになる司教職の恵みを予兆するものであった。聖グリゴリイは、自分だけが密かに目撃した出来事さえも見逃さなかったこの長老の驚くべき先見の明に深く感嘆し、こう言った。

「神を愛する者たちの中にこのように働かれる神に栄光あれ。主の御心が行われますように！」

二日後、長老は彼を見送ると、愛を込めて彼の頬に口づけをし、グリゴリーは、そのような神聖な人物との別れを惜しみ、彼への愛の炎に燃え、絶えず彼のことを思いながらその場を去った。グリゴリウスはそこからまずカルタゴへ赴き[51]、長い間そこに住み、神の御言葉を宣べ伝え、あらゆる病を癒やした。　その後、神の御心により、彼はローマへと向かい、聖殉教者ボニファティウスとアグライダの聖堂で祈りを捧げた。聖使徒ペトロの墓前にたどり着き、涙を流しながら地にひれ伏したとき、彼には幻が見えた。目の前には天の扉が開き、並外れた光が輝いていた。　すると、聖使徒ペトロが右手に鍵を握り、天の扉から現れ、偉大な栄光と輝かしい顔つきで彼のもとへと歩み寄り、明るい眼差しで彼を見つめながらこう言った。

「わが子グリゴリーよ、私は主の御慈悲によりここに参った。その前に、私は他の使徒たちと共に、オミリトの町ナグランに滞在し、ドゥナアンのユダヤ人から、我らの主イエス・キリストのために苦難に遭っている者たちのそばに寄り添い、一人ひとりを敬虔の道に堅く立たせていたのだ。神の御加護により、彼らは皆、律法を犯すユダヤ人の意志に抵抗し、敬虔に堅く立ち、真理のために苦難を受け、今や不滅の栄光に与った先人たちと共に天国におられる。　私はこの町を訪れるためにここへやって来たが、教会の擁護者である兄弟パウロは、エルサレムで私と別れ、ペルシアへと向かった。　さて、わが子よ、善き道を歩みながら、主を喜ばせるよう努めなさい。絶えず主の律法を学び、この世の命と美しさが夢や影のように過ぎ去ることを悟りなさい。もし、始めたように主の御心に従って歩み、その道を全うするなら、あなたは幸いである。そうすれば、多くの人々を神への畏れへと導くことになるだろう。　今や、主ご自身によって、天にあなたの玉座が用意されており、あなたは私たちと共に報いを受けることになる。

そう言い終えると、使徒は立ち去り、幻は終わった。グリゴリーは我に返ると、再び地面に倒れ込み、自分を呪われた者、罪人だと叫んだ。　長い祈りの後、彼は自分の住まいへ戻り、その夜、夢の中で聖使徒パウロが彼に聖油の入った器を差し出すのを見た。これは、彼に与えられようとしている司祭職と主教職の恵みの前兆であった。　グレゴリーは、夢の中で使徒の手からこの聖油を受け取ると、 すぐに目を覚まし、喜び、こう歌った。*「わが心から善き言葉が流れ出た」*（詩編44:2,8）。なぜなら、神は私に喜びの聖油を注いでくださったからである。

その後、彼はローマを後にし、アレクサンドリアへと向かった。その間、常に心を神に向け、徳をますます高め、神の英知と知性、そして神からの偉大な賜物に満たされていった。　当時、敬虔

---

[50] オモフォロス――（ギリシャ語で「肩を覆うもの」の意）は、七つの司教の祭服の一つであり、肩にかけられ、前後に垂れ下がるもので、四つの十字架の模様がある。　象徴的な意味において、オモフォルは迷い出た羊、すなわち人類を表しており、主はそれを見いだすと、ご自身の肩に担ぎ上げ、ご自身の羊、すなわち天使たちと結びつけたのである。　また、司教は十字架によって、キリストの受難に従うという自らの意志を示している。キリストが自らの十字架を肩に担ぎ、十字架にかけられたように、司教もまた、苦難を拒むことなく、キリストの十字架を自らの肩に担ぐのである。なぜなら、十字架は苦難の象徴だからである。

[51] カルタゴ――北アフリカに位置する、フェニキア人による最も古く、名高い植民地であり、古代史において絶大な勢力を誇ったが、紀元前146年に滅ぼされた。 古代カルタゴの廃墟の上に、初期のローマ皇帝たちの時代に新たなカルタゴが興り、それは非常に長い期間にわたり、大いなる栄華を誇って存続した。　カルタゴでは、異教的なギリシャ・ローマ式の信仰が非常に盛んに発展しており、その直接的な結果として、長きにわたり迷信や魔術が根強く残り、いわゆる「魔術」が発達していた。

な王たちが統治していた。ギリシャではユスティン[52]、エチオピアではエレズヴォイが君臨していたが、オミリト地方を治めていたドゥナアンは、キリスト教徒に対する迫害を開始し、自らの王国からキリストの名そのものを根絶やしにしようと試みた。　彼は策略を用いて、キリストを信じる者たちが住む栄えある都市ナグランを制圧し、数え切れないほどのキリスト教徒を滅ぼした。ある者は火あぶりにし、ある者は剣で斬り殺し、敬虔なアレフ公と最も高貴な市民たちをも殺害した。　このことを聞いた敬虔な王ユスティンとエレズヴォイは、無実のキリスト教徒たちの血が無意味に流されたことを深く嘆いた。ユスティンはエレズヴォイに[53]という書簡を送り、無実の血が流されたことへの復讐を果たすため、不敬虔なドゥナアンに対して戦争を仕掛けるよう説得した。　称賛に値する王エレズヴォイは、熱意に燃え、全軍を召集して、不敬虔な王ドゥナアンに対して戦いを挑んだ[54]。この大戦争の最中、エレズヴォイは神の助けにより、ドゥナアンの軍団を打ち破り、その全軍を完全に殲滅し、ドゥナアン自身とその親族を剣で斬り殺した。　ドゥナアンの王国を掌握したエレズヴォイは、ユダヤ教や異教の迷信を熱心に一掃し、その地で我らの主イエス・キリストの御名の栄光を広めていった。　ユダヤ人やオミリトに居住していた異教徒の多くは洗礼を受けたいと願ったが、彼らには司教も司祭も助祭も、聖職者は一人もいなかった。なぜなら、教会の階層を構成する聖職者たちはすべてドゥナアンによって殲滅されていたからである。そこで、福者エレズヴォイはアレクサンドリアの総主教に懇願した。　神がどのようにしてオミリト地方におけるキリスト教の復興を助けてくださったかを詳細に語った後、王は、総主教に対し、聡明で徳高く、聖書に精通した人物を選び、その者を司教に叙階した上で、教会に必要なすべての物資を携えてオミリト地方へ派遣してくれるよう懇願した。　この書簡がアレクサンドリアに届くと、総主教はすべてのキリスト教徒と共に、不信心者たちに対抗して天からキリスト教徒に送られた神の助けを喜び、ふさわしい人物を丹念に探し始め、その者を司教に叙任して、一刻も早くエレズヴォへ送り出そうとした。　多くの者が総主教のもとに連れてこられたが、その誰一人として聖職にふさわしいとは見なされなかった。そこで総主教は夜、主ご自身がそのような奉仕にふさわしい人物を選び、彼に示してくださるよう、神に熱烈な祈りを捧げた。　祈りの最中、聖使徒マルコが幻として総主教の前に現れ、最近アレクサンドリアに来て、あるレオンティウスの家に滞在している助祭グリゴリウスを見つけ出し、彼を司教に叙階してエレズヴォへ遣わすよう命じた。主がグリゴリウスをここに導かれたのは、まさにこのためであったからである。翌朝、総主教は直ちにレオティオスの家を探させるよう命じ、その家を見つけると、そこに住んでいたグリゴリウスを呼び寄せ、彼が誰で、どこから来たのかと尋ねた。　その後、総主教は彼に自分の幻視について語り、教会の窮状を伝え、司教の聖職を受けるよう促した。一方、グリゴリウスは、メディオランで、アレクサンドリア総主教による按手礼を通じて大司教の聖職を受けることになるだろうと予言した隠者の言葉を思い出し、涙を流してこう言った。

「主の御心が成りますように。大主教様、主の御命令に従い、お望みのままになさってください。」

総主教は直ちにグリゴリウスを司祭に叙階し、続いて大司教として按手した。　その際、驚くべき奇跡が起こった。礼拝と叙階の最中、グリゴリウスの顔つきが一変し、聖霊の恵みに照らされて火のように輝き、その衣からは芳香を放つミールと香りが立ち上り、その香りは教会全体を満たした。　この現象は礼拝の間中続き、すべての人の視線は聖グリゴリウスに注がれ、皆がこの奇跡に驚嘆した。エレズヴォイの使節たちもこれを目撃し、その光景に驚き、後に見たすべてを王に報告した。

---

[52] ビザンツ皇帝ユスティヌス1世は、518年から527年まで在位した。

[53] ビザンツ皇帝は、ナグラナ市の住民の運命に熱心に介入した。というのも、この都市は紀元25年にローマの将軍エリウス・ガッルスによって征服され、ローマ皇帝の庇護下にあったからである。

[54] エチオピア王は、キリスト教徒であるオミライト族を擁護することを自らの義務と考えていた。なぜなら、彼らはキリスト教そのものをエチオピアから受け入れており、おそらくアウクスム大司教区の管轄下にあったからである。

叙階式と総主教との霊的な対話を終えた後、聖グリゴリウスはエレズヴォイの使節団と共に送り出された。彼には、その位にふさわしい聖職者たちと、教会を設立するために必要なすべてのものが携行されていた。まもなく彼らはエチオピアに到達し、その後オミリトの地へと向かった。　エレズヴォイ王はグリゴリウスの到来を大いに喜び、さらに、グリゴリウスが神の啓示によって選ばれた者（　）であり、叙階の際（[55]）に聖霊の恵みが彼の上に奇跡的に現れたことを知ると、その喜びは一層深まった。王はグリゴリウスを大いなる栄誉をもって迎え、温かくもてなし、その全領土を彼の裁量に委ねた。　グリゴリーと共にオミリト地方の諸都市を巡りながら、王は新しい教会を建設し、不敬虔なドゥナアンによってキリストのために殺害された聖殉教者たちの墓を装飾し、異教徒たちを洗礼へと導いた。　ナグラネ・エレズヴォイの町では、殉教者アレファの息子を公爵に任命し、そこにキリストの復活を称える壮麗な教会を建てた。また、聖母マリアを称える別の教会、そして聖殉教者アレファと彼と共に苦難を共にした者たちの名を冠した三つ目の教会を、かつて聖殉教者が住んでいた家からそう遠くない場所に建立した。　また、他の都市にも多くの教会が建てられ、グリゴリウス自身がそれらを奉献し、ここに司祭や助祭を任命して、キリストの羊の群れを彼らに託した。　ドゥナアンの死後、ほぼ36ヶ月の間、祝福された王エレズヴォイはオミリトの地に留まり、ここでの諸事をすべて整えた後、エチオピアの国にある自身の王座に戻ることを望んだ。　聖グリゴリウスと共に、すべての貴族、王子、ボヤール、顧問たちを召集し、彼は彼らと協議を始めた。すなわち、オミリト王国に即位させるために、信仰深く、賢明で、柔和かつ神を畏れる人物を誰に選び、油を注ぐべきかについてである。すべての顧問たちは王にこう答えた。

「あなたが知っている者、あるいは神があなたに示される者を、その人に任せてください。私たちの中には、あなたのような知恵を持ち、王冠にふさわしい者は一人もいないのですから。」

そこで王は、大司教に向き直って言った。

「これはあなたのお任せです、敬愛すべき父であり、私たちの師よ！ ここに、あなたの御前に、すべての公爵、貴族、戦士、大小を問わず、あなたが望む者を呼び寄せ、我らの主イエス・キリストの御名によって王位に油を注いでください。私たちエチオピアから来た者たちは皆、神の御心があれば、故郷へ帰りたいと願っております。」

聖なる大司教はこう答えた。

「敬虔な王よ、あなたはよく見通しておられます。あなたの心が神の御手に委ねられているように、あなたの言葉もまた神から与えられたものです。いかなる事柄についても、まず天におられる天の父に尋ね、御父の御心に従って行動するのが常に最善です。」

そう言うと、聖なる大司教は席から立ち上がり、彼らから少し離れて東の方角に向き直ると、ひざまずいた。目と心を天に向け、両手を天に掲げ、一人ひとりの人生と思いを御存知である神が、王位にふさわしい人物を彼らに示してくださるよう、熱心に、そして長く祈りを捧げた。　大司教が祈っている最中、突然、主の見えざる力が、アブラミイという名の男を空中に持ち上げ、王エレズヴォイの前に立たせた。皆は恐怖に駆られ、長い間こう叫び続けた。

「主よ、憐れみ給え！」

すると大司教は言った。

「ほら、あなたがたが王位に就かせるよう求めていた人物だ。彼をここに王として残しておきなさい。我々は彼と心を一つにし、神がすべてのことに助けてくださるだろう。」

そして、このような神の御心に対し、皆は大きな喜びに包まれた。その後、エレズヴォイ王は、神によって現されたアヴラミイという男を連れ出し、王都アファレにある至聖なる三位一体の聖堂

[55] 叙階（ヒロトニア）とは、ある聖職の位に就かせるための儀式のことである。

へと導き、彼に王の紫の衣[56]を着せ、その頭に王冠[57]を戴かせ、その後、聖グリゴリウスによって彼への塗油の儀式が執り行われ、王たちとすべての人々のために無血の犠牲が捧げられ、両王は大司教の手から神聖な秘跡を拝領した。祝典の終わりに、出席者全員がこう叫んだ。

「エレジュー、エチオピアの王よ、長寿あれ！　そして、キリストを愛するオミリトスの王アブラミウよ、長寿あれ！」

そして再び、二人を合わせてこう繰り返した：

「エレズヴォイとアブラミイ、敬虔で神を愛する両王に、長寿あれ！」

そして、「長寿を」の賛歌を三度歌った。その後、皆が声を揃えて叫んだ：

「我らの至聖なる大司教、導き手であり師であるグリゴリウスに、平和で健やかな長寿を。すべてのキリスト教の軍勢と、すべての信徒に、長寿を！」

その後、王の宮殿に入ると、皆は喜び、宴を催し、主なる神、救い主、そして敬虔な王たちを称えて喜び祝った。

エレズヴォイは、オミリトの地にさらに三十日間留まり、新王に敬虔さを教え導き、王国を公正に整え統治すること、そして何事においても、自身の霊的父である聖なる大司教グリゴリウスに従うよう助言した。　エレズヴォイはエチオピア軍から1万5千人の勇敢な戦士を選び出し、王国を助け守るために彼らを新王のもとに残し、エチオピアへと帰還した。　その後まもなく、彼はこの世の王位を捨てて荒野へと退き、ある修道院の近くにある暗い独房に閉じこもり、死ぬまでそこから一歩も外に出ることなく、そこに住む修道士たちから窓越しに食事を受け取り、長い間、苦行者の厳しい生活を送った後、天の御国へと旅立った[58]。　これほど高貴で裕福な王が、すべての人々に謙遜と自発的な貧しさの模範を残したのである！彼の死後、修道士たちによって次のような出来事が語られた。ある若い修道士が、修道院から奉仕の任務を命じられて出かけた際、頻繁に酒場へ立ち寄り、そこで酒に酔いしれて、不純な肉欲の罪に陥っていた。　そしてある日、いつものように罪を犯し、砂漠を通って修道院へ戻っている途中、彼は通り抜けられない場所に入り込んでしまった。そこへ、大きな蛇が彼に襲いかかり、噛みつこうとした。修道士は逃げ出し、蛇を振り切ろうとあちこちへ身をかわしたが、蛇は素早く彼に追いついた。　ついに修道士は逃げ場を失うほど追い詰められ、蛇が彼を飲み込もうと襲いかかってきたその時、修道士は至福の王エレズヴォイのことを思い出し、蛇に向かってこう言った。

「義人にして至聖なるエレズヴォイの祈りによって――私から離れよ。」

蛇は、まるで聖なるエレズヴォイの名に恥じ入ったかのように立ち止まり、神の御命により人間の声を得て、修道士にこう言った。

「神の御使いが私の前に現れ、あなたの不潔さと罪ゆえにあなたを食い尽くせと命じたのに、どうしてあなたを赦せるだろうか。あなたは、清らかに主に仕えるという誓いを立てながら、罪によって自らの体を汚し、それによって聖霊を怒らせているのだから。」

修道士は、人間の声で語り、自分の行いを糾弾する蛇の言葉を聞いて、黙り込んだまま震え上がり、誓いを立てて蛇に容赦を懇願した。蛇は彼に言った。

「なぜ私を呪うのか？　まずお前自身が、二度と肉欲を満たさないことを私に誓え。そうすれば、私はお前を放っておく。」

修道士は誓いを立て、こう言った。

「天にまします神と、高潔な王エレズヴォイの祈りによって誓います。今、肉欲の不浄によって怒らせた私の主を、二度と怒らせないことを。」

---

[56] ポルフィラ――紫色の高価な衣服で、通常、君主の上着や儀式用の衣装を構成していた。

[57] ディアデマ――古代の王たちが頭に戴いた冠、すなわち王冠のこと。

[58] エチオピア王、聖エレズヴォイの没年は553年から555年頃とされている。教会では10月24日に彼を記念する。

修道士がそう言い終えるやいなや、突然、天から火が降り注ぎ、彼の目の前で蛇を焼き尽くした。恐怖と戦慄に襲われた修道士は、自分の修道院へと戻り、それ以来二度と罪を犯すことはなく、清らかな悔い改めのうちに生涯を閉じた。

敬虔なアヴラミイ王の治世中、大司教グリゴリーは、多くの都市に学識豊かで雄弁な司教たちを任命し、王に対し、国内にいるユダヤ人や異教徒たちに洗礼を受けるよう命じ、従わない場合は死刑に処すよう助言した。　この件に関する王の勅令が発布されると、多くのユダヤ人や異教徒が、死を恐れて妻や子供たちと共に聖なる洗礼を受け始めた。そこで、律法に最も精通した年長のユダヤ人たちが、あらゆる都市から集まり、秘密の会合を開いて、どうすべきか協議し、互いに次のように話し合った。

「もし我々が洗礼を受けないならば、王の命令により、我々も、妻も、子供たちも皆殺しにされてしまうだろう。」

その中のある者たちは言った：

「早すぎる死を避けるために、王の命令に従おう。しかし、密かに我々の信仰を守り続けよう。」

他方、ある者たちは、偽善的にではなく、公然とユダヤの律法を守り続けるよう勧めた。そうすれば、（彼らが言うには）人の手による死を免れ、復讐者である神の手に落ちることなく、さらに悪いことに滅びることもないからだ。しかし、ある者たちはこう反論した：

「我々の神は、この偉業を我々に求めておられないことが分かる。なぜなら、敬虔な我らの王ドゥナアンとその全軍を、神はエレズヴォイの手に渡されたのだから。我々は、どうすべきか分からない。」

また、こう言う者もいた：

「もし我々が自らの律法を保ち、無傷でいたいと望むなら、この国から一人ずつ密かに立ち去り、各自が持ち物を持ち去るべきだ。そうすれば、肉体だけでなく魂までも滅ぼすことにはならないだろう。」

また、別の者たちは反論した。

「もし逃げ出そうものなら、キリスト教徒に見つかり、殺されてしまうだろう。」

そして皆、どうすべきか途方に暮れていた。彼らの間には、エルヴァンという名の、旧約聖書全体に通じ、極めて雄弁な、最も賢明な律法教師が一人いた。彼は彼らにこう言った。

「あなたがたは皆、無駄なことを言っている。あなたがたが提案していることは、利用できない。もし私の言うことを聞きたいのなら、私と一緒に王と大司教グリゴリウスのもとへ行き、彼らに、信仰と律法について私たちと論争するために、彼らが望む教師を任命するよう伝えよう。　もし彼らが私たちに勝てば、私たちは進んでキリスト教徒になる。しかし、もし彼らが自らの誤りを暴かれたならば、彼らが私たちに、私たちの律法から離れるよう不当に迫っていることを、彼ら自身も理解するだろう。彼らを試して、彼らの信仰がどのようなものか確かめようではないか。もしそれが真実であれば、私たちはメシアがすでに到来していたことを信じるだろう。ただ、私たちはそれを知らなかっただけなのだ。　もし彼らの信仰が偽りであることが判明すれば、我々は神のために死ぬのだと悟り、熱意をもって死を受け入れるだろう。

エルヴァンがそう言い終えると、皆は恐れをなして言った。

「あなたがキリスト教徒を助けているのはわかっている。私たちの信仰が真実であることを知らないのか。どうしてそれを捨てられるだろうか？」

エルヴァンは答えた。

「兄弟たちよ、私はあなた方に偽りの言葉を一つも語ってはいない。しかし、いずれにせよ、あなた方は洗礼を受けることを余儀なくされるのだと知っておいてほしい。　もしあなたがたが私の言うことを聞かなければ、私はあなたがた一人ひとりに対して無罪である。なぜなら、たとえ議論を

通じて彼らの信仰を試すことはなくとも、結局は試すことなくそれを受け入れ、彼らの言う通りにしなければならないからだ。もしあなたがたが彼らの信仰を受け入れなければ、彼らはあなたがたを殺すだろう。

これを聞いた者たちは皆、エルヴァンの言葉に従い、嘆願書を作成して王に送った。王はそれを読み、激しく怒り、彼ら全員を死刑に処そうとしたが、グリゴリウスの助言なしには何事も行いたくなかったため、自制し、その嘆願書を彼に手渡した。聖人はそれを読み、こう言った。

「ユダヤ人たちの言うことは正しく、称賛に値する。強制されるよりも、自らの信念に基づき自発的に信仰するほうがよいのだ。王よ、彼らを放っておきなさい。まずは我々と論争をさせ、その後、お望みのままに彼らを処遇すればよい。」

王は聖人の助言を受け入れ、ユダヤ人たちは論争に備えるため40日間の猶予を与えられ、自分たちが望む教師を見つけ、恐れることなく論争の場へ来るよう命じられた。　期限が過ぎると、数え切れないほどのユダヤ人が集まり、彼らの中には、律法に精通し、論争に備えていた最も賢明なラビたち[59]　も少なからず含まれていた。　信仰をめぐる論争は、首都アファラで行われ、王とその全シンクリト、大司教と全聖職者、そして論争を聞きに来た大勢のキリスト教徒が立ち会った。そこには、ユダヤ人たちも、彼らの律法学者、学者、教師たちを伴って現れた。　ユダヤ人たちは、律法と預言書の書物に精通し、哲学にも長けたエルヴァンを主たる演説者として司教の前に立たせた。合図とともに静寂が訪れ、大司教とエルヴァンとの対話と論争が始まった[60]。

論争の要点は以下の通りであった。

長い沈黙の後、皆が対話に耳を傾ける準備が整うと、聖大司教グリゴリウスは、賢明なユダヤ人の教師エルヴァンおよび集まった全員に向かって、次のように語りかけた。

「夜が過ぎ去り、真理の太陽が輝き出した今、なぜあなたがたは、その光に逆らい、彼を信じずに論争を続けているのか？」

エルヴァンは言った。

「もし『真理の太陽』が輝き、私たちがあなたの言うようにその光に逆らい、真の神を信じているのなら、ましてや異教徒であるあなた方は、異質な教えを抱えている以上、神から与えられた神の律法を非難することで、なおさら真理の光に逆らっていることになるではないか。」

大司教は答えた：

「我々は異教徒だが、我々は誰のものか――被造物であり、創造物ではないか？」

エルヴァンは答えた：

「明らかに、神の被造物であり、神の創造物である。」大司教は言った：

「もし私たちも、あなた方と同様に神の被造物であるならば、一体あなた方は私たちよりもどのような優れた点を持っているというのですか？」

エルヴァンは反論した：

「それは、エジプト人との比較において私たちが持っているものです。」

「エジプト人のことを思い出してくれたのは良かった」と大司教は答えた。「それでは、彼らに対する君たちの優位性を示してみよ！」

エルヴァンは言った：

「イスラエルの民がエジプトを脱出した際、神がモーセを通してエジプトの地や紅海、砂漠でなされた偉大な奇跡について、あなたは読んだことがないのですか？神はエジプト人を溺れさせ、イスラエルの民を救われたではありませんか？」

---

[59] ラビ――ユダヤ教の教師。

[60] これらの論争について――聖ディミトリオスが記しているように――『マカリアのミネイア・チェチイ』には、演説の数、提起された質問や回答の多さ、そして全般的な読書の量が多すぎるため、彼によって詳述されていない特別な書物がある。

大司教は答えた。

「あなたたちとエジプト人の間には何の違いもない。彼らの神は海で彼らを溺れさせたが、あなたたちはその悪意ゆえに地上で滅ぼされたのだ。」　紅海をまるで乾いた地を歩くかのように渡ったにもかかわらず、あなたたちは岸辺で溺れ、砂漠で苦しみながら生涯を終えた。六十万人以上の人々のうち、カレブとヨシュア・ナヴィンのただ二人だけが、約束の地を目にする栄誉に浴したのだ[61]。では、神はエジプト人に対して、あなたたちをどのように尊ばれたというのか?

エルヴァンは尋ねた。

「では、神は荒野で誰にマナをお与えになったのですか?」大司教は言った:

「あなたならどちらが良いと思うか。エジプトで食べていた肉か、それとも荒野に送られたマナか?」

エルヴァンは答えた:

「もちろん、マナの方が良いに決まっています。」

大司教は反論した。

– それなのに、なぜあなたは過去を振り返り、大釜で煮た豚肉やニンニク入りの玉ねぎ、あらゆるエジプトの食べ物を欲しがり（民数記 11:5）、マナを憎むようになったのですか?

その後、至聖なる三位一体をめぐる議論が始まった。

エルヴァンは言った:

– 神がシナイ山で*「聞け、イスラエルよ。主、私たちの神は、唯一の主である。主以外に神はいない」*（申命記 6:4）と仰せられたのに、どうしてキリスト教徒は父、子、聖霊という三つの神を信じるのでしょうか。　したがって、キリスト教徒は唯一の神ではなく、三つの神を崇めることで、律法に背いているのではないか?」

大司教はこれに異議を唱え、私たちは唯一の神、すなわち万物の創造主を、父、子、聖霊という三つの位格において、一つの神性として崇めていると述べ、その証拠としてダビデの次の言葉を引用した。　*「主の御言葉によって天は造られ、その口の息によって、そのすべての軍勢は造られた」*（詩編32:6）。この言葉の意味は、とグリゴリウスは説明した、次のようなものである。 主は父なる神であり、その御言葉は子なる神であり、その御口の霊は聖霊なる神である。こうして三つの神聖な位格が明らかにされるが、神性は唯一である。なぜなら、子と聖霊は父と同質であり、同本質であり、同位格であり、同位に坐しているからである。　また、主の十字架と死について、聖グリゴリウスはユダヤ人に対して、旧約聖書の記述、預言、および予言を引用した。例えば、*「あなたの命はあなたの目の前でぶら下がる」*（申命記 28:66）、「毒のある木をその食物に混ぜる者が来る」（エレミヤ書 11:19）――といった箇所や、ノアの箱舟が十字架の予型であったこと、イサクの犠牲の際、子羊が代わって捧げられたサベクの園（創世記 22:13）、ヤコブがその先端にひれ伏したヨセフの杖（創世記 47:31）、ヤコブがヨセフの息子たちに与えた十字架の形をした祝福（創世記 48:13–15）、海を割ったモーセの杖　（出エジプト記 14:11–29）、アマレク人に対する勝利のためにモーセが両手を天に掲げたこと（出エジプト記 17:8–14）、荒野に掲げられた青銅の蛇（民数記 21:4–9）、メレの苦い水を甘くした木　（出エジプト記 15:22–26）、そして律法に記されている他の多くの神秘的な予言について。 議論は夕方まで続き、 双方が激しく論じ合い、互いに反論を交わしたが、すべての議論において勝利を収めたのは大司教であった。なぜなら、聖書に記されているように、*「あなたがたが語るのでなく、あなたがたの父の御霊があなたがたの中で語られるからである」*（マタイ 10:20）と、聖霊が大司教を通して語られたからである。　夕方になっても議論はまだ終わっていなかったため、王は座から立ち上がり、大司教も同様に立ち上がり、集会は翌朝まで議論を先送りして解散した。

[61] 民数記 14:24, 30；民数記 26:65；民数記 32:1；申命記 1:36。

一方、ユダヤ人たちはエルヴァンを取り囲み、喜びながら彼を抱きしめ、口づけをし、キリスト教徒に対して十分に強く反論したことを称賛した。これに対し、エルヴァンは彼らにこう言った。

「真の神が私たちを助けてくださるよう祈ってください。あなた方もお分かりの通り、大司教は狡猾な人物であり、彼に打ち勝つのはいかに困難か。」

しかし、彼らはエルヴァンを励まし、恐れずに勇敢に彼と語り合うよう促した。朝になると再び集会が開かれ、王と大司教が現れ、エルヴァンを伴ったユダヤ人たちもやって来ると、再び論争が始まった。しかし、その日も、三日目も、四日目も、さらには五日目になっても、論争は決着しなかった。　この数日間、王は全シンクリトを率いて論争に立ち会い、発言者たちの言葉を喜びをもって聞き、神から授けられた大司教の至高の知恵と分別を称えていた。実際、多くの預言者の言葉が解釈され、聖書の多くの神秘的な箇所が解き明かされたとき、耳を傾けるべきこと、心に留めるべきことが確かにあったのである。　イエス・キリストの受肉と聖母マリアについての議論において、大司教は預言者イザヤの言葉を引用した。*「見よ、処女が身ごもって、男の子を産む」*（イザヤ書7:14）。「マリアが産んだのは神ではなく、ただの人間だ」というエルヴァンの反論に対し、大司教は次のように答えた。*「その名はインマヌエルと呼ばれる。これは『神は我々と共におられる』という意味である」*（マタイ1:23）。

エルヴァンはこう言った。

「女性の胎内が、どうして神性の恐るべき偉大さを収めることができたというのか？」

大司教はこう答えた：

「それは、神がアブラハムと共に食事をしようと来られた時、マムレの樫の木の下でアブラハムの住まいが神を受け入れたのと同じである（創世記18章）。」

エルヴァンは反論した。

「では、どうして神性の炎が女性の体を焼き尽くさなかったのか？」

大司教はこう答えた：

「シナイ山で火が荊の茂みを焼き尽くさなかった（出エジプト記3:2–4）のと同じように、神性も処女の胎を傷つけなかった。処女は子を産み、なおも処女であり続けたのだ。」

エルヴァンは反論した：

「処女からの誕生は幻であり、現実のものではない。なぜなら、出産の際に胎が傷つかないなどということはあり得ず、それが誤りであることは誰の目にも明らかだからだ。」

大司教はこう答えた：

「アバクムがダニエルのいる獅子の穴に入った時、穴の扉は閉ざされ、封印されていた。教えてほしい、彼は扉を開けず、封印を破ることなく、どうやって中に入り、出てきたのか？（ダニエル書14:30–40）

論争が終わった三日目に、エルヴァンは逃げ出そうとしたが、ユダヤ人たちは彼をしっかりと押さえつけ、こう言った。

「もしあなたが私たちを置き去りにすれば、私たちは皆、滅びてしまう。もう少しここに留まり、あらゆる手段で反論し続けてくれ。果たして神は私たちを助けてくださらないというのか？　たとえ論争で敗れたとしても、私たちには他の抵抗手段があり、それによって彼らは私たちを打ち負かすことはできないのだ。」

議論の最中、エルヴァンがキリスト教徒に対し、彼らがイコンを崇拝していることを非難し始め、イコンを「偶像」と呼び、それらに頭を下げる者たちを「偶像崇拝者」であり「神の律法の敵」であると断じ、神が「偶像やあらゆる形像を作ってはならない」[62] と命じたと語ったとき、大司教は彼にこう尋ねた。

---

[62] 十戒の第二の戒め。

「ノアの時代に大洪水が起こったとき、彼はどのようにして助かったのですか？」

エルヴァンは答えた：

「木で作られた箱舟によってです。」

大司教は反論した：

「神は箱舟なしにノアを大洪水から救うことができたのか、それともできなかったのか、あなたはどう思うか？」

エルヴァンは答えた：

「できたと思います。神には何でもできると書かれているからです。」

大司教は反論した：

「もし神にそれができたのなら、なぜ義人を救うために箱舟が必要だったのでしょうか？それならば、ノアは自分の救いについて、神ではなく箱舟に感謝すべきではないでしょうか？」

エルヴァンはこう答えた：

「いいえ。称賛すべきは神であり、魂のない被造物ではありません。」

大司教は言った：

「しかし、あなたは、魂のない被造物である箱舟によって、神がノアを救われたと信じているではないか。それと同じように、神はこれらの目に見えるイコンを通して、私たちに御自身の恵みを授けてくださる。なぜなら、それらは魂を持たないとはいえ、私たちの救いのために定められているからだ。」　イコンを見つめる時、私たちは心で原型へと向かい、神に喜ばれる熱意へと高められる。なぜなら、私たちが描いているのは偶像ではなく、言葉では言い表せない神性ではなく、人間としての主イエス・キリストだからである。　ノアが箱舟での救いについて、祭壇を築いて神に感謝を捧げたように、私たちもキリスト・神に感謝し、その御姿を書き記すことで、肉眼による御姿の観想を通じて、心の洪水から救い出されるのです。　私たちは、いわば別の箱舟として、主の人間性を認めているのです。主はその人間性を通して私たちの罪を背負い、ご自身の神性によって私たちを聖別し、天へと引き上げてくださいました。　肉眼で見ることができた御方を、私たちは絵の具で描き、御人性の至聖なる姿を表現し、その肉体の姿を通じて、御神性にも共に礼拝を捧げ、御父と聖霊と同様に、御方にふさわしい礼拝をもって崇め敬うのである。

一方、エルヴァンは聖なるイコンを誹謗し続け、こう語った。

「私は、あなたがたのキリスト教の寓話に驚かされる。それによれば、神は、壁や板に描かれた、一度も歩いたことも話したこともないイコンに、ご自身の恵みをお与えになるというではないか。」

これに対し、大司教は反論としてこう尋ねた。

「教えてほしい、　エルヴァンよ、なぜ神はエリヤの[63] に、エリシャには与えなかった御恵みを授け、生ける預言者よりも魂のない　を優先されたのか。預言者自身はヨルダン川を渡ることができなかったが、　によって水を分け、乾いた地を歩いた。エリシャには成し得なかった奇跡を、なぜ魂のない は成し遂げることができたのか （列王記下2:13–15）。なぜ、エジプトの地で奇跡を行っていたモーセ自身ではなく、その杖に神は奇跡を起こす力を授け、それによって水を血に変え、海を分け、その他多くの恐ろしくも栄光に満ちた奇跡を成し遂げさせたのでしょうか？　さらに、幕屋[64] 、

[63] ミロト――羊の皮、羊毛；――上着、マント、レインコート。

[64] 幕屋――ユダヤ人の移動式神殿。荒野を放浪していた時代に、主の命令と指示に従って彼らによって建てられ、ソロモンがエルサレムに壮麗な神殿を建設するまで存在していた。

契約の箱[65]、マナ[66]が入った金の壺[67]、十戒の石板とアロンの杖、祭壇、香炉、七枝の燭台――これらすべては、たとえ人間の手にによって作られた、目に見え、触れることのできる無機物であったとしても、神の恵みを受けていなかったと言えるだろうか？　しかし、それらは神の栄光に包まれ、雲に満たされ、雲に囲まれており、祭司やレビ人以外の誰にも近づくことは許されず、神聖で聖なるものであったため、誰もそれらに触れることはできなかった。もし旧約聖書においてそうであったのなら、新約聖書において聖なるイコンに与えられる恵みに、なぜ驚く必要があるだろうか?

エルヴァンは再び反論した：

「詩篇にはこう書かれています。*『彼らの偶像は銀や金、人の手による造り物である』*（詩篇113:12）。それゆえ、あなた方のイコンもまた、人の手によって造られたものである以上、偶像に他なりません。」

大司教は反論した：

– 神を知らない異教徒たちの偶像が、まさに偶像であることに私は何ら異議を唱えない。なぜなら、それらは、魔術師、呪術師、殺人者、淫行者といった、あらゆる不義の中で不敬虔に生涯を送った者たちの姿に似ているからであり、彼らは皆、そのような生活ゆえに悲惨な死を遂げたのである。 彼らの記憶を留めるために、ある者たちは といった偶像を作り、その後を継ぐ者たちは、サタンに惑わされ、目がくらまされて、それらを神として崇め、拝んでいる。　あなた方もまた、偶像を崇拝し、息子や娘を犠牲として捧げ、無実の血、すなわちカナン人の偶像――それらはまさに偶像である――に捧げられたあなた方の息子や娘たちの血を流していた。　さて、私たちが今、神の聖徒たちの像を描いているのは、それらが偶像ではなく、尊いイコンだからです。私たちは、神を知り、神を信じ、義によって神に喜ばれ、誠実で聖なる、神に愛された人々であり、神の恵みによって数多くの奇跡を行った人々の姿を描くのです。　彼らは死者をよみがえらせ、病者、盲人、足の不自由な者、中風の人を癒やし、ハンセン病患者を清め、悪霊を追い出し、その最期は尊く、その記憶は永遠に栄光に満ちている。*「主の御目には、その聖徒たちの死が尊い。　その記憶は永遠に揺らぐことなく、義人は永遠に記憶される」*（詩編115:6、111:6）。

エルヴァンが再び、「イコンは偶像と何ら変わらない」と悪口を言ったとき、大司教はこう言った。

「エルヴァンよ、お前の衣服も幕屋も、どちらも羊毛と亜麻でできているが、それらは同じ力を持っているだろうか。お前の杖と、アロンの枯れた杖は、同じ栄誉を受けているだろうか。お前の家に置いてある水差しと、マナが入った壺は、同じものだろうか。　あなたが体の必要品を収める箱と、契約の箱――その栄光は等しいのか？　あなたが家の中で明かりとして灯す火と油を、金の七枝の燭台と比べることができるか？　あなたが住む家と、ソロモンが建てた神殿――それらを互いに同列に扱えるか？　決してそうではない。むしろ、あなたはこれらすべてをはるかに尊んでいる。なぜなら、それらには時折、神の恵みが宿っていたからである。このようにして、あるものは偶像――地獄に堕ちた邪悪な者の像――であり、またあるものは神の聖なる御使いのイコンであり、そこに描かれた者の祈りによって、主の神の恵みが私たちに注がれるものであることを理解せよ。

エルヴァンは天使たちについても語り、彼らは無形であると述べた。それは、*「御自身の天使たちを霊として造られた」*（詩篇103:4）と書かれている通りである。それにもかかわらず、キリスト教徒たちは恥じることなく、彼らをイコンに描き、無形の霊に肉体の姿を与えている。これに対し、大司教は次のように答えた。

---

[65] 契約の箱――モーセによって造られた箱であり、契約書はユダヤ民族の聖なる宝であった。　それは杉の木で造られ、内側も外側も純金で覆われていた。その中には、十戒が刻まれた石板、荒野を旅する間、ユダヤ人が糧としたマナが入った金の壺、そして花を咲かせたアロンの杖が収められていた。

[66] マナ――ユダヤ人が40年間にわたる荒野の放浪の間に、神が天から授けた奇跡の糧。

[67] スタムナ――水差しのような形をした器

「お前は自分が何を言っているのか分かっていない。なぜなら、我々こそが、あなた方自身から天使を描くことを学んだのだから。」

エルヴァンは反論した：

「私たちには、そのような習慣は決してありませんでした。」

大司教は尋ねた：

「旧約聖書全体を学んだくせに、それを知らなかったのか？」

エルヴァンは反論した。

「主にかけて誓いますが、私たちの間に天使の像が描かれ、崇められていたことなど、かつて一度もなかったと断言します！」

これに対し、大司教は言った。

「まことに、あなたがたがこの慣習を始めたのだ。ソロモンが神のために神殿を建てたとき、聖所の上には、祭壇を覆う栄光のケルビムを置かなかったか？　また、聖所の第一の扉の上にも、第二の扉の上にも、ケルビムを置かなかったでしょうか？　　さらに、モーセが設けた幕屋においても――契約の箱の上にはケルビムの像がなかったでしょうか。また、垂れ幕にはケルビムの顔が刺繍されていなかったでしょうか。そして、これらすべての天使の像は、幕屋や神殿とともに、あなた方によって崇められていなかったでしょうか？　もしあなたがたが、無形の存在を描いて崇拝したのなら、なぜ、肉体を持ちながら神に喜ばれた聖人たちの姿を表現し、崇敬する私たちを非難するのですか。

このようなこと、そしてこれに類する多くのことが、論争の四日目に語られた。そして夕方になり、王と大司教が席を立つと、集会は解散した。翌朝には論争が終わり、勝者の祝賀の場面を見られるだろうと期待してのことだった。　ユダヤ人たちは、エルヴァンが巧みに答弁し、大司教に質問を投げかけたことを喜び、彼を励ましてこう言った。

「よく戦っている。恐れるな。さらに強く立ち続けよ。神があなたと共にいるのがわかるからだ。心を恐れるな。王はあなたたち二人の話を喜んで聞いているようだ。」

エルヴァンは彼らにこう答えた。

「兄弟たちよ、私の見る限り、あの男は知性と弁舌の才において私をはるかに凌いでおり、私が彼に打ち勝つことは不可能です。あなたがた自身も、私のすべての論拠を反駁し、恥をかかせ、無価値なものにしてしまったのを耳にされたはずです。」

翌朝、まだ早いうちに、最も賢明なユダヤ人たちが再びエルヴァンのもとを訪れると、彼は彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、正直に申し上げましょう。私は大司教に敗れるでしょう。なぜなら、昨夜、幻の中でモーセと、私たちが論争していたイエスを見かけたからです。　私は、彼らがまるで何らかの聖所の屋根の上に立って語り合っているのを見ました。そして、モーセがイエスに頭を下げ、両手を胸元に下げ、まるで縛られているかのようにし、主なる神の前に立つかのように畏敬の念を持ってイエスの前に立っているのを見ました。私はこれに驚き、口を開いてこう言いました。

「主よ、モーセよ、あなたがしていることは正しいことなのでしょうか？」

すると彼は振り返り、私を制してこう言った。

「やめてください。私は主なる神に礼拝を捧げているだけで、罪を犯しているわけではありません。私はあなたのような者とは違い、私の創造主であり主である方を信仰しているのです。なぜあなたは真理に背いて、義なる大司教を困らせるのですか？　来るべき日には、あなたも彼に打ち負かされ、私と同じように主イエス・キリストに礼拝を捧げることになるでしょう。」

「兄弟たちよ、私はその光景を目撃したが、それが何を意味するのかは分からない。しかし、神ご自身が御心のままに事を運ばれるその日まで、私は大司教に異議を唱え続け、我々の律法を貫き通すつもりだ。」

これを聞いた多くの人々は疑念を抱き、困惑した。やがてその日が訪れ、公会議が開かれると、王はシンクリトを、大司教は聖職者団を率いて現れ、大勢の民衆が集まった。そこに、エルヴァンも彼を助ける律法学者たちと共に姿を現し、以前と同様に論争が再び始まった。　大司教がアレクサンドリアから連れてきたある学識ある書記官[68]は、速記の達人であり、その場に立ち会い、大司教とエルヴァンの両者が発したすべての言葉を書き留めていた。大司教の口を通して働かれた聖霊の助けにより、敵対する側は打ち負かされ、我々の側、すなわち主を信じる側は勝利を収めた。　大司教はあらゆる議論において勝利を収めたが、エルヴァンは弱まり、彼を助けていたユダヤ人の律法学者たちも弱まっていった。しかし、悪意が彼らの目を曇らせ、耳はよく聞こえず、真理から目を閉ざしていた。　そこで、聖人の言葉に続いて、信仰の力と奇跡が現れ、憎悪に満ちた者たちを糾弾し、彼らの不信仰を恥じ入らせる必要があった。そして、実際に次のようにしてそれが起こったのである。

エルヴァンが論争で完全に敗北しかけたとき、彼は叫んだ。

「なぜ我々は長々とした議論で時間を浪費しているのだ！　私がこの論争に決着をつけてやる。大司教よ、もし私がイエスを『真の神』であると信じることを望むなら、生けるイエスを私に見せてくれ。私が彼を見て、彼と語り合えるようにしてくれ。そうすれば、私はあなたがたキリスト教徒が我々を打ち負かし、勝利したことを認める。」

エルヴァンがそう言うと、集まっていたユダヤ人たちは叫んだ。

「先生、どうか懇願します。惑わされてキリスト教徒になることのないよう、もっと勇気を奮い起こし、真理に堅く立ち続けてください。私たちの先祖の唯一の神ほど真実なものは他にないことを、あなたもご存じでしょう。」

エルヴァンは怒りを込めて彼らに言った。

「何という空虚な言葉だ！　聞いてくれ、もし神が、預言者たちが予言した『あの方』が存在すると私に確信させてくださるなら、これ以上何を待つ必要があるというのか？」

大司教は、彼が諂うのではなく、心からそう言っているのを見て、彼に言った。

「エルヴァンよ、お前は大きな試練を突きつけ、その願いは力の及ばないほど高い。なぜなら、お前が求めているのは人間ではなく、神そのものだからだ。しかし、お前と共にある者たちが信仰を持ち、信者たちの心が確固たるものとなるために、神にはそれを成し遂げる力がある。ただ、私がどのようにしてお前を納得させればよいか、はっきりと言ってみよ。」

エルヴァンは答えた。

「もし、あなたが言うように天に御主がおられるのなら、その御主に懇願してください。――ここへ降りてきて、私に姿を現し、私が御主と語り合えるようにしてください。そうすれば、主にかけて誓います、私は直ちに御主を信じ、洗礼を受けます。」

エルヴァンがそう言い終えると、集まっていたユダヤ人たちは一斉に叫んだ。

「確かに、大司教よ、あなたの言葉の真実を実際に証明してください。あなたのキリストを見せてください。そうすれば、私たちは反論の余地もなく、畏れをもって彼を信じるでしょう。」

そして皆、叫び声を上げながら聖グリゴリウスに詰め寄り、もしキリストが十字架にかけられて死んだ後も生きておられるのなら、彼にキリストを実際に示してほしいと求めた。その後、ユダヤ人たちは互いにこう言い合った。

「もし大司教が私たちに彼のキリストを見せてくれたら、私たちはどうすればよいのか？　ああ、悲しや。意に反して、私たちはキリスト教徒にならざるを得なくなるだろう。」

一方、他の人々はこう言った。

「もし彼がキリストを見せてくれるなら、なぜ彼を信じないのか？」

---

[68] ノタリオス――速記官。この名称は、最も重要な国家会議の議事録を作成した皇帝の秘書たちだけでなく、総主教の秘書たちも指していた。

また、ある者たちはこう言った。

「殺された者として死んだ方を、どうして示すことができるというのか。その死からこれほど長い年月が経っているというのに。棺の中の骨や筋はとっくに崩れ去ってしまったというのに、その御体や御霊がどこにあるというのか？」

大司教は、この件の重要性を論じ、彼らの強い執拗さを見て、全身全霊で主に身を委ね、心の中でこう考えた。もし自分が主キリストに彼らの願いを叶えてくださるよう懇願しなければ、反対派が大いに勝利を収め、　ユダヤ人たちは勝利者となり、キリスト教徒はまるで敗北したかのように見なされ、敵はキリスト教徒を嘲笑し、誹謗するだろう。そして、希望を込めてユダヤ人の集まりにこう言った：

「もしキリストが望まれるなら、私はあなたがたにキリストをお見せすることができるでしょう。しかし、あなたがたもよくご存じの通り、もし私がキリストをお見せしても、あなたがたがキリストを信じようとしないならば、その瞬間、剣があなたがた全員を滅ぼしてしまうでしょう。もし私が、自分の不甲斐なさゆえに、主をお見せすることができないのであれば、それからはあなたがたの自由の意志に従って行動してください。」

これを聞いたユダヤ人たちは、悲しみと喜びが入り混じった気持ちになった。悲しかったのは、もし彼がキリストを彼らに見せれば、意に反してキリストを信じざるを得なくなることを恐れたからであり、喜んだのは、彼がキリストを見せなければ、彼らは自由に自分たちの信仰にとどまることができるという希望を抱いたからである。　しかし、エルヴァン大司教と彼と共にいた最も賢明な律法学者たちにとっては、その言葉は心地よいものであった。彼らは互いにこう語り合った。

「私たちの先祖によって殺され、死んで棺に封じられ、弟子たちに盗み出された人間が、500年経って生きているなどということはあり得ない。」

聖グリゴリウスは、福音書に記された主の御言葉を知っていた。*「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この山に向かって『ここからあそこへ移れ』と言えば、山は移る。あなたがたには、不可能なことは何もない」*（マタイ17:20）という主の言葉を心に留め、神への揺るぎない信仰を持ち、神を堅く信頼して、席から立ち上がり、少し離れた――祈りに適した場所へと移動した。　王も民衆も皆、神に対するこのような大いなる大胆さと大司教の信仰――彼がこれほど恐ろしい行いに敢えて挑むこと――に驚き、畏敬の念を抱き、何が起こるかを恐る恐る待ち構えていた。聖人は集まりから少し離れ、十字を切って祈りを捧げ始めた。　謙虚に膝を折り、全身を天へと向け、彼は出席者全員に聞こえるよう、長く力強く祈りを捧げた。その祈りの中で、神の御言葉の受肉に関するすべての神秘と、キリストが人々の間で過ごされた生涯――降誕から、自発的な受難、十字架、死、三日目の復活、そして天への昇天に至るまで――を思い起こした。そしてついに、こう言った。

「主よ、この石のように硬くなり、悪意によって目がくらんだ人々に、御自身の生ける御姿を現してください。御名のゆえに、　そして、彼らがこの目で、私たちのために身にまとい、天に昇られたあなたの命を与える人間性を目撃できるようにしてください。そうして、あなたを見た彼らが、真の神であるあなたと、あなたを遣わされた父と聖霊を信じるように。」

彼が祈りを終え、皆が彼をじっと見つめていると、突然地震が起こり、東の方角から恐ろしい雷鳴が響き渡り、大地が揺れ動いたため、皆は恐怖のあまり倒れ伏した。　やがて皆が恐怖から立ち直り、少しずつ立ち上がって東の方角に目を向けると、天が開け、炎と太陽の光に満ちた明るい雲がそこから地上へと降りてくるのが見えた。　その雲の中に、すべての人類の中で最も美しい方、私たちの主イエス・キリストがお見えになった。その御顔は言葉では言い表せないほど輝き、稲妻のような衣をまとい、光を放っておられた。　特別な動きで雲の上を歩みながら、主は地上に近づき、雲の上で大司教の真上に立ち、言葉では言い表せないその美しさをもって、すべての人の目と心を御自身に引き寄せられた。かつてファヴォレ山で弟子たちがそうであったように、その栄光の輝きは直視に耐えがたく、　皆、地面にひれ伏した――王も貴族たちも、老若男女を問わず民衆も皆そうであった

。一方、ユダヤ人たちは大きな戦慄に襲われ、あちこちへ飛び散りながら逃げ出そうとした。神聖な光の輝きが彼らを焼き尽くし、見ることもできない主の栄光が、彼らを大きな恐怖で包み込んだからである。　しかし、彼らは逃げることさえ、その場から動くことさえできなかった。なぜなら、目に見えない力が彼らを留めていたからである。一方、天からの力に支えられた大司教は、エルヴァンに向かって大声で呼びかけた。

「エルヴァンよ、これこそ、あなたが多くの語り伝えを耳にしてきたお方である。この方を見よ。そして、唯一の聖なる方、唯一の主、イエス・キリストが、父なる神の栄光のうちにおられることを信じなさい。アーメン。」

しかし、エルヴァンは呆然として、何も答えることができなかった。そして、主の御声が聞こえた。

「司教の祈りによって、あなたがたの先祖たちによって十字架につけられた方が、あなたがたを癒やしてくださるのだ。」

この声を聞いて、皆はさらに震え上がり、恐怖に襲われて地面に倒れ込んだ。　かつてダマスコへの道中で、天からの光に包まれ、上からの声が響いたとき、サウロが地面に倒れ、目を開けていても何も見えなかった（使徒行伝9:3–8）ように、彼らもまた、目は開いていたにもかかわらず、何も見えず、ただ嘆き、苦々しく泣き叫んだ。　その出来事が終わった後、主の御前にある種の神聖な音が聞こえ、主の足元にあった明るい雲が、主をすべての人の目から隠した。主が上へ昇られるにつれ、その雲は四方から徐々に主の足跡に沿って濃くなり、やがて神の栄光が天に消え去り、目に見えていたすべてのものが視界から消え去るまで続いた。　王とすべてのキリスト教徒たちは、長い間、主の跡を追って大胆にこう叫び続けた。

「主よ、憐れみたまえ！」

一方、高潔な大司教は顔を地面につけて横たわり、涙を流しながら人々のために主への祈りを捧げていた。その後、公会議に集まったすべての人々――王とシンクリト、そして民衆――は、大司教グリゴリーを特別な敬意と畏敬の念をもって崇め、その聖性と祈りの力に驚嘆した。一方、ユダヤ人たちは互いにこう尋ね合った。

「兄弟よ、何か見えるか？」

すると、皆がこう答えた。

「何も見えない。」

そして皆、エルヴァンに向かって叫んだ。

「先生、私たちはどうすればよいのですか？」

エルヴァンは答えた。

「キリスト教の神を見たことで、あなたたちだけが盲目になったのか、それともキリスト教徒たちも同様に被害を受けたのか？」

これを聞いたキリスト教徒たちは言った。

「私たちはキリストの恵みによってはっきりと見えています。今や私たちの目は以前よりも健康です。あなた方だけが、不信仰のゆえに盲目になっているのです。*『報復の神、主よ、報復の神よ、御自身を現してください』*（詩篇93:1）。あなた方が不適格でありながら神をご覧になったため、神はあなた方の視力を奪われたのです。」

そこで、エルヴァンはすべてのユダヤ人とともに、大司教に涙ながらに懇願し、彼らの失明した目を癒やし、聖なる洗礼を授けてくれるよう求めた。大司教は彼らに尋ねた。「あなたがたは、主イエス・キリストを心から信じているか？」すると、皆が確信を持って信じていると証しした。　すると直ちに、大司教と彼と共にいた司教たち、そして長老たちは、彼らに説教を行い、洗礼の秘跡を

執り行い始めた。　ユダヤ人たちが聖なる洗礼槽[69] に入ると、たちまち彼らの目からある種の鱗が剥がれ落ち、全員が肉眼と霊的な目によって視力を取り戻し、*「心で信じて義と認められ、口で告白して救いを得る」*（ローマ10:10）　そして、エルヴァンをはじめとして、皆が父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けた。エルヴァンは、王自らが洗礼の代父を務め、聖なる洗礼において「レフ」という名が与えられた。王は彼を賢明で名誉にふさわしい人物として、自身のシンクリトに迎え入れ、パトリキウスに任命した[70] 。　エルヴァンは当初の過ちを深く悔い改め、心の中で絶えず主の御出現を思い起こしながら、恐怖と驚きに打ちひしがれていた。

「なんと、」と彼は言った。「私たちの先祖たちが十字架につけて葬り、私たちが死んだと思っていた主イエス・キリストが、生きておられるとは！」

そして涙ながらに叫んだ。

「主イエス・キリストよ、生ける神の御子よ！　私の無知ゆえに罪を犯したことをお赦しください。」

また、聖なるエルヴァン大司教を神の御使いとして崇め、彼と離れることを望まなかった。こうしてオミリトの国は聖なる信仰の光に照らされた。すべての町や村で、ユダヤ人だけでなく異教徒までもが洗礼を受けた。国中に大きな喜びが広がり、人々と共に天使たちも、このような回心と人間の魂の悔い改めを喜び、すべての人々の救いを願われる神が賛美された。

その後、聖なる大司教グリゴリウスは王に、ユダヤ人が互いに同居せず、キリスト教徒と共に住むよう命じるよう助言した。それは、彼らが秘密の集会や協議を行わないようにするためであった。王は次のような法律を公布した。

「ユダヤ人の者は、娘をユダヤ人の家系の者と結婚させてはならず、キリスト教徒を婿に迎えること。また、ユダヤ人の息子は、ユダヤ人の娘を妻に迎えてはならず、キリスト教徒の娘を求めること。もし誰かがこの法律に背くことを敢えてすれば、その者は剣によって斬首されるものとする。」

大司教がこうした措置を講じたのは、ユダヤ人がキリスト教徒と混ざり合うことで、数年後には旧約聖書の古き信仰や慣習を完全に忘れ去ってしまうようにするためであった。　至る所に静寂が漂い、完全な謙遜と敬虔さが至る所で輝いていた。王は大司教と共に神の前で熱心に務め、主キリストへの徹夜礼拝を行い、人々の魂の救いを顧み、慈悲深く、正義をもって王国を統治した。　敬虔なアヴラミイ王は、オミリトの地に30年間暮らした後、聖グリゴリイから自身の死の日を告げられてこの世を去り、アファレの町で栄誉をもって埋葬された。　王の死から間もなく、私たちの聖なる父グリゴリイは、その羊の群れを守り、使徒と預言者たちに基づく信仰を確固たるものとし、神の栄光のために多くのしるしと奇跡を行なった後、12月19日にその生涯を閉じ、同じ町にある大聖堂の納骨堂（[71] ）に栄誉をもって葬られた。　オミリス地方全体が彼を悼んで涙を流したが、とりわけ洗礼を受けたユダヤ人たちは深く悲しんだ。なぜなら、彼は善良で慈悲深く、人々に愛され、神に喜ばれる父であったからである。聖グリゴリーは、他の聖なる司教たちと共に神の御前に立ち、彼らと共に父と子と聖霊を、永遠に賛美している。アーメン。

聖殉教者イリヤ、プロヴァ、アリスの記念日

記念日：12月19日

[69] 洗礼盤――洗礼の秘跡を行う際に用いられる器。
[70] すなわち、わが国の名門貴族に相当する最高階級に列せられた。
[71] 聖グリゴリウスは552年頃に亡くなった。

聖イリヤ、プロヴァ、アリスはエジプトの出身であった。彼らはキリスト教の信仰を告白し、神の栄光への熱意から、キリストのために苦難に遭い、牢獄に閉じ込められていた人々を訪ね、苦しみの中にある彼らを慰め、傷を癒やした。 ある日、彼らはキリキア地方[72]へ向かい、アスカロン[73]の城門に差し掛かった際、城門のすぐそばで凶暴な異教徒の衛兵たちに拘束された。衛兵たちは彼らをスパイと見なし、フィルミリアヌス公の前に引き出した。公による尋問の際、彼らは自らをキリスト教徒であると明かし、そのために残酷な拷問を受けた。　聖アリスは最初に数々の拷問を受け、火刑に処された。続いて聖プロヴも拷問を受け、剣で斬り殺された。最後に、多くの苦痛を経た後、聖イリヤもまた剣で斬り殺された[74]。

聖殉教者ポリエウクトスとティモテオスの記念日

記念日：12月19日

聖殉教者ポリエウクトスは、ケサリア[75]の出身であり、そこでキリストについて熱心に説教を行い、多くの異教徒を偶像崇拝から聖なるキリスト教の信仰へと改宗させた。その説教のゆえに、彼は捕らえられ、牢獄に投じられた。　キリストを否定するよう執拗に説得された末、全身を鉄の爪で引き裂かれ、さらに顎を砕かれた後、灼熱の炉に投げ込まれた。

その頃、モーリタニアの[76]では、助祭ティモテイオスがキリストの信仰を成功裏に宣教していた。このため、彼は多くの過酷な苦難にさらされた。　彼は牢獄に投じられ、飢えと渇きに苦しめられ、釈放された後、偶像に犠牲を捧げるよう説得されたがこれを拒み、祈りを捧げながら、彼のために用意された燃え盛る火の　へと歩み寄り、神に息を引き取った。彼の遺骨は、信者たちによってマウリタニア地方の[77]に尊く安置された。

1月2日

12月20日（旧暦）

聖イグナティオ・テオフォロス（神を運ぶ者）聖司祭殉教者の受難。

記念日：12月20日

トラヤヌスがローマ皇帝の座に就いた当時[78]、アンティオキア教会の司教は、その異名と行いから「神を宿す者」と呼ばれた聖イグナティウスであり、使徒ペトロの後継者である聖エヴォドスの後を継いで司教職に就いた。　シリアの壮麗な首都アンティオキアは、ローマ帝国においてローマに次ぐ最大の都市であり、約20万人の住民を擁していた。この地は、聖使徒ペトロとパウロの宣教活動の舞台であり、彼らの死後には、小アジアにおける聖使徒ヨハネの活動もこの地に影響を及ぼした。現在、アンティオキアは、トルコのアジア側にある、海から10ヴェルスタほど離れた貧しい町アンタ

---

[72] キリキア――小アジア南東部の沿岸地域。
[73] アスカロン――パレスチナ、地中海沿岸にある古代のペリシテ人の都市。
[74] これらすべての殉教者たちは308年に殉教した。
[75] ここでの「ケサリア」とは、当然ながら小アジア東部のカッパドキアのケサリアを指す。
[76] マウリタニア――北アフリカに位置するローマの沿岸属州。
[77] 聖殉教者ポリエウクトスと助祭ティモテイオスは、4世紀初頭に殉教した。
[78] トラヤヌス皇帝は98年から117年まで在位した。

キエとなっている。–聖使徒ペトロは47年から67年までアンティオキア教会を統率し、その後継者である聖使徒エヴォドは68年まで、聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は68年から107年まで統率した。　この神聖なるイグナティオス・テオフォロスについては、次のような逸話が伝えられている。彼がまだ幼子であった頃[79]、主イエス・キリストが地上に人々と共に住み、神の御国について民に教えておられた時、ある時、イグナティオスの両親は、幼子を抱きかかえたまま、群衆の中に立ち、救い主の口から発せられる神の御言葉を聞いていた。　彼らに目を留めた主は、幼きイグナティウスを呼び寄せ、民衆の中に立たせ、抱きしめて腕に抱き上げ、こう言われた。

「*もしあなたがたが立ち返って、子どものようにならなければ、天の御国に入ることはできない。また、わたしの名によってこのような子ども一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである*」（マタイ18:3,5；マルコ9:37；ルカ9:48）。

こうして聖イグナティウスは「神を運ぶ者」と呼ばれた。それは、彼が受肉された神に抱かれていたからであり、また、聖使徒パウロのように、諸国民や王たちの前で神の御名を宣べ伝えるために選ばれた器として、心と口の中に神を宿していたからである[80]。　彼は当初、聖ヨハネ・テオロギオス[81]の弟子であり、スミルナの司教である聖ポリカルプ[82]と共に学んでいた。その後、すべての聖使徒たちの助言により、彼はアンティオキアの司教に任命された。この地は、他のどの場所よりも早く「キリスト者」という名称が現れた場所であった[83]。教会の指導を引き受けた彼は、敬虔さを説くために全力を尽くし、あらゆる面で使徒的な熱意を示した。　この聖なる主教は、天使の群れに倣って、教会において二つの声部、すなわち合唱団による神聖な賛美歌の歌唱を定めました。というのも、彼は神の啓示に恵まれ、天使の群れが交互に歌っているのを目撃したからです。一方が歌っているときは他方が黙り、他方が歌っているときは一方が耳を傾け、一方が歌を終えると、　もう一方が歌い始め、このようにして天使の群れ　は、互いに賛美歌を受け渡すかのように、聖三位一体を賛美していた。このような啓示を受けた聖イグナティオスは、まず自身のアンティオキア教会でこの聖なる賛美歌の順序を定め、そこからこの素晴らしい儀式はすべての教会[84]　でも受け入れられた。　この神に愛された司教は、教会の儀式を適切に統率する良き指導者であり、キリストの秘跡を執り行う完璧

---

[79] 聖イグナティオの出生地や時期、そして初期の教育については、明確な情報が残されていない。彼はシリア出身であり、シリア語の名「ヌロノ」は「燃える」を意味する。同様に、「イグナティオ」という名も、ラテン語の「ignis（火）」に由来すると考えられている。

[80] 聖イグナティウスに他者から与えられた、また彼自身が書簡の中で自らを用いた「神を宿す者（Θεοφόρος）」という称号は、彼自身の説明によれば、「心にキリストを宿す者」を意味していた。　イエス・キリストが聖イグナティオを腕に抱いていたという伝承は、シメオン・メタフラストの著作に初めて見られ、そこから聖ディミトリオスの『チェティ・ミネイ』にも受け継がれた。この伝承によって、聖イグナティオの異名「Θεόφορος」（すなわち「神を運ぶ者」）は、「Θεοφόρος」（すなわち「神に運ばれる者」）へと変化した。

[81] 聖グリゴリオス・デュオロゴスは、聖イグナティオスについて、彼が使徒ペトロの教えを直接受けた者でもあり、また他の者たちは使徒パウロの教えを直接受けた者でもあったと記している。「聖ヨハネス・クラマトルスは、使徒たちについて、『言葉においても、また言葉に尽くせぬ点においても』と述べている」（聖イグナティオスに関する第42講を参照）。

[82] 聖使徒ヨハネによってスミルナの司教に任命された聖ポリカルプは、聖イグナティウスと親密な友情を結び、神の教会に対する彼の務めを分かち合い、彼の死後は「アジア全土の指導者」となった。聖ポリカルプの記念日は2月23日である。

[83] 『使徒言行録』11章には、アンティオキアの使徒バルナバについて、*「彼らは一年間、教会に集まり、多くの人々を教え、アンティオキアの弟子たちはそこで初めて『キリスト者』と呼ばれるようになった」*と記されている。

[84] このことについては、教会史家ソクラテスが証言している。これがいわゆる「アンティフォニー」と呼ばれる歌唱であり、現在でも教会の礼拝で用いられており、旧約聖書の詩篇、あるいはその有名な部分から成り、二つの聖歌隊が節ごとに交互に歌い上げるものである。

な奉仕者であった[85]。そして後に、獣に食わせられるという殉教を遂げたが、これについては後述する。　スキタイ人との激しい戦争[86]において、トラヤヌス帝は勝利を収めた。トラヤヌスは、異教の神々の助けによって敵に打ち勝ったと考え、その恩に報いるため、至る所で犠牲を捧げて神々に感謝を捧げ、将来においても神々が彼の戦争と統治を順調に進めてくれるよう願った。すると、キリスト教徒に対する激しい迫害が始まった。　皇帝は、キリスト教徒たちが異教の神々に犠牲を捧げることを拒むだけでなく、その虚偽を暴いて神々を冒涜していることを知り、自らの命令に従わないキリスト教徒を至る所で殺害するよう命じた。その後、この皇帝がアルメニア人やパルティア人に対する別の戦争に出征した際、アンティオキアに立ち寄ることとなり、　そこで、聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は、ピラトによって死刑を宣告され、十字架に磔にされたキリストを神として崇め、貞操の保持や、富および人生におけるあらゆる快楽を軽蔑することに関する律法を定めているとして、王の前で誹謗中傷された[87]。　これを聞いたトラヤヌスは、聖人を呼び出し、全シンクリトの前で彼にこう言った。

「『神を宿す者』と呼ばれるお前は、我々の命令に逆らい、アンティオキア全体を堕落させ、そのキリストに従わせているのか？」

神聖なるイグナティウスはこう答えた。

「はい、私です。」

王は尋ねた。

「『神の担い手』というその名は、どういう意味か？」

聖人は答えた。

「自分の魂の中にキリストなる神を宿す者こそが、神を宿す者である。」

「では」と王は尋ねた。「お前は、そのキリストを自分自身の内に宿しているのか？」

聖人は答えた。

– 確かに抱いています。なぜなら、*「彼らの中に*住み、*彼らと共に歩む」*（IIコリント6:16）と書かれているからです。王は言った：

「では、お前の考えでは、我々は常に心の中に神々を留め、敵に対する助け手として彼らを頼りにしていないというのか？」

神を宿す者は答えた。

「あなたが偶像を神々と呼ぶことは、私にとって痛ましいことです。なぜなら、唯一の真の神、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものの創造主は、唯一の主イエス・キリスト、神の独り子であり、その御国には終わりがないからです。　もしあなたが御方を知っていたなら、王よ、あなたの紫の衣も、冠も、そして玉座も、さらに力強いものとなっていたでしょう。

「イグナティウス！」と王は言った。「その話はよして、むしろ私の言葉に耳を傾けなさい。もし私に喜ばれ、私の友の一人になりたいと望むなら、私たちと共に神々に犠牲を捧げなさい。そう

---

[85] 40年にわたる教会指導の期間中、聖イグナティオスは、聖ヨハネス・クロイソストモスの言葉によれば、美徳の模範であった。　ドミティアヌスの迫害（95～96年）の際、彼の弟子たちが記すところによれば、彼は「祈りと断食という舵取り、教えに対するたゆまぬ努力、そして熱意をもって動揺に立ち向かい、気弱な者や経験の浅い者が誰一人として溺れることのないようにした」という……　苦難の最中も、その後も、「神の司祭は、聖書の解説によって一人ひとりの魂を啓発した」。

[86] それは106年のことだった。

[87] ここから、聖イグナティウスの殉教の物語が語られる。　これに関する詳細な情報は、アンティオキアからローマへと彼に同行した目撃者たち――同行者たち――によって記された殉教記録に保存されています。一般的な見解によれば、彼らはフィロンとアガフォニドという二人の助祭であり、聖イグナティウスはスミルナ人およびフィラデルフィア人への書簡の中で彼らに言及しています。

すれば、すぐにあなたは偉大なるディヤ[88]の大祭司となり、シンクリトの父と呼ばれることになるだろう。」

聖人はこう答えた。

「私がキリストの大司教である以上、ディヤの大祭司になることに何の益があるだろうか。私は常にキリストを賛美し、その自発的な死に倣うために、自らを完全に犠牲に捧げようとしているのだ。」

王は言った:

「誰に自分を犠牲に捧げようというのか? ポンティウス・ピラトによって十字架に釘付けにされたあの者にか?」

聖人は答えた:

「罪を十字架に釘付けにし、罪の支配者である悪魔を打ち砕き、十字架によってそのすべての力を打ち負かしたお方に、私が捧げ物となりますように。」

王は言った:

「イグナティウスよ、お前は正気でもなければ、正しい判断力も持っていないようだ。もし王の意志に従い、皆と共に神々に犠牲を捧げることがどれほど有益かをよく理解していれば、キリスト教の書物にこれほど惑わされることはなかっただろう。」

神を宿す者は、さらに意気込みを強めてこう言った。

「たとえあなたが私を野獣の餌食にしようとも、十字架に磔にしようとも、剣や火にさらそうとも、私は決して悪魔たちに犠牲を捧げることはない。 私は死を恐れず、一時的な利益も求めない。ただ永遠のものを望み、私のために死んでくださった私の神、キリストのもとへ至ることだけを、あらゆる手段を尽くして目指しているのだ。

そこで、シンクリトに参加していた者たちは、イグナティウスを誤りに陥らせようと、こう言った。

「ほら、お前は自分の神が死んだと言っているが、死者がどうして誰かを助けることができようか。ましてや、不名誉な死を遂げた者がなおさらだ。一方、我々の神々は確かに不死であり、不死であるとされているのだ。」

神の御使いはこう答えた。

「私の主であり神であるイエス・キリストは、私たちのために受肉され、私たちの救いのために自ら進んで十字架の磔刑、死、そして埋葬を受け入れ、その後、三日目に復活し、 敵の力を打ち砕き、打ち倒し、天に昇られました。そして、そこから再び降りてきて、堕落した私たちを回復させ、私たちが追放された楽園へと再び導き入れ、かつて持っていたものよりも多くの恵みを授けてくださいました。 しかし、あなたがたが崇める神々のうち、このようなことを成し遂げた者は一人もいない。彼らは邪悪で不法であり、多くの害悪をもたらした者たちであり、狂った人々に、自らの神性について取るに足らない幻想しか残さなかった。その後、彼らから偽りのベールが剥がれ落ちたとき、彼らが何者であったか、そしていかに恥ずべき最期を遂げたかが明らかになった。

聖イグナティウスがこう語ると、王とシンクリトは、彼がさらに自分たちの神々を辱めることを恐れ、彼を牢獄へ連行するよう命じた。王自身は一晩中眠らず、どのような刑でイグナティウスの命を奪うべきか考え抜き、この死こそが最も残酷であると判断して、彼を野獣の餌食にすることを思いついた。 朝、王はこれをシンクリトに告げると、皆が同意したが、ある助言があった。すなわち、イグナティウスをアンティオキアでは獣に食わせないこと。そうすれば、彼が信仰のために殉教の死を遂げたとして市民の間で称賛されることもなく、また他の人々が彼を見てキリスト教への信仰を強めることもないだろう、というのである。 そこで、彼を足枷をはめたままローマへ連行し、そこ

[88] ディオス、すなわちゼウスおよびユピテルは、ギリシャ人とローマ人の主たる異教の神である。

で獣に食わせればよいと提案した。長い道のりで疲れ果てた彼にとって、ローマでの処刑はさらに過酷なものとなるだろう。また、ローマ市民の誰も彼が誰であるかを知らず、単に悪党の一人が死んだと考えるだけで、彼に関する記憶は一切残らないだろうと考えたのである。　この助言は皇帝の意にかなったため、皇帝はイグナティウスに死刑判決を下し、ローマでの祭りの最中、民衆がすべて集まる場で、彼を野獣に引き渡して引き裂かせることにした。こうして聖人は、あたかも天使や人々に対する恥であるかのように、不信心者たちによって裁かれたのである（Iコリント4:9）。

神に愛されたイグナティウスは、自分に対するそのような判決を聞くと、こう叫んだ。

「主よ、あなたに感謝します。あなたが私に、あなたへの完全な愛を証しする栄誉を与え、あなたの使徒パウロと同じように、私を鉄の鎖で縛ることをお許しくださったからです。」

彼は喜びをもって、あたかも美しい真珠の首飾りのように、その足枷を身にまとった――それは、来世において復活する際に身につけたいと願った、尊い装飾品であった[89]。　王は軍を率いて戦いに赴き、重い足枷に縛られた神聖な殉教者は、十人の残酷で容赦のない兵士たちに引き渡され、ローマへと送られた。アンティオキアを出発する際、彼は教会のために熱心に祈りを捧げ、その群れを神に委ねた。　すべての信徒たちは彼を思って泣き、苦々しく嗚咽したが、彼に熱い愛を注いでいた者たちは、彼の後を追って旅立った。　アンティオキアからほど近い、セレウキアの港で、聖イグナティウスは兵士たちと共に船に乗り込んだ。その船は小アジアの海岸沿いを航行する予定であった[90]、そして長く危険な航海の末、スミルナに到着した。　そこでイグナティウスは、神聖な使徒であり、スミルナの司教であり、かつての同門の聖ポリカルプと出会い、彼を歓迎し、神に導かれた対話によって慰め合い、自らの束縛を喜び、その足枷を誇りに思いました。　何しろ、主のために身柄を拘束されたこの鎖ほど、彼にとってこれ以上ない栄光となるものがあっただろうか。また、彼は、アジアの諸教会や都市から、彼に会いたいと、またその口から神聖な言葉を聞きたいと願って集まってきた他の司教たち、長老たち、助祭たちとも面会した。　言葉と模範をもってキリスト者たちの信仰を強め、当時生じ広がりつつあった異端に一層警戒し、使徒の伝承を厳格に守るよう諭しながら、聖イグナティウスはポリカルプ、ひいては教会全体に対し、彼が一日も早く獣の餌となり、主の御前に立つことができるよう、　彼の魂が向かっていた主の御前に。彼らが動揺し、彼の死や自分たちとの別れを望んでいないのを見て、　イグナティウスは、ローマにいる信者たちも同様に動揺し、彼が獣に引き渡されることを耐えられず、何らかの妨げを設け、もしかすると、彼を獣の餌食にするよう命じられた者たちに手を上げ、それによって殉教と望み通りの死への開かれた扉を閉ざしてしまうのではないかと恐れた。　そこで彼は、自分の苦難の道が遮られることなく、むしろ速やかに獣たちに引き裂かれて、愛する主のもとへ移れるよう、彼らのために祈ってほしいという願いを彼らに送ることに決めた。

彼は次のように書いた。

――至高の父と、その独り子イエス・キリストの偉大さによって恵みを受けた教会、すなわち、イエス・キリストの愛によって成し遂げられたすべてのことを喜ばれる御方の御心により、愛され、啓発された教会の、神の御名にふさわしい、栄光に満ち、祝福され、称賛に値し、崇敬すべき、清く、第一の地位にある教会の、イグナティウス・神の御名にふさわしい者――　私たちの神、イエス・キリストの愛によって成し遂げられたすべてのことを御心に適うとお認めになる御方の御意志により、愛され、啓発された教会、――ローマ管区の首都に本拠を置く、神にふさわしく、栄光に満ち、祝福され、称賛に値し、崇敬に値し、清く、愛において第一であり、キリストの名を冠し、　御父の

[89] 聖イグナティオスのエフェソの信徒への手紙を参照のこと。

[90] これは、有罪判決を受けた者たちが、特別に用意された船ではなく、たまたま見つかった船に乗せられ、その船が用事に応じて航行し、あちこちの場所に立ち寄っていたためである。

名を冠する教会――私は、御父の御子イエス・キリストの御名によって、この教会に挨拶を捧げます。肉と霊において、主のあらゆる戒めによって互いに結ばれ、神の恵みの満ち溢れる豊かさを分かち合うことなく受け、あらゆる異質な色から清められた[91]は、私たちの神、イエス・キリストにおいて、限りない喜びを願っています。　――神への祈りによって、私は、あなたがたの神にふさわしい御顔を拝見したいと切に願っていたことを、ついに叶えていただきました。キリストのために束縛されている私は、もし神の御心によって私が最後までたどり着くことを許されるならば、あなたがたに口づけをすることができることを願っています。　良いスタートを切ることができました。もし恵みにあずかることができれば、私の運命を妨げられることなく果たすことができるでしょうか。というのも、私はあなたがたの愛が私に害を及ぼすのではないかと恐れているからです。あなたがたにとっては、したいことを行うのは容易ですが、もしあなたがたが私を憐れんでくださるなら、私にとって神に到達することは困難になるからです。あなたがたが、これまで神に喜ばれてきたように、人ではなく神に喜ばれることを願います。　なぜなら、もしあなたがたが沈黙を保つならば、私にはもはや神に到達するこれほど好都合な機会はなく、またあなたがたにとっても、より優れた行いによって自らを称える機会も失われてしまうからです。もしあなたがたが私について沈黙を守るなら、私は神のものとなりますが、もしあなたがたが私の肉体に愛を示すならば、私は再び闘いの場へ出なければなりません[92]。　今や祭壇はすでに整っているのだから、私が神に捧げられること以外、私のためにこれ以上何もするな。そして、愛をもって合唱団を組み、キリスト・イエスにおいて父に賛美の歌を歌ってほしい。神がシリアの司教に、東から西へと招く栄誉をお与えになったことを。この世から神のもとへ旅立ち、神のうちに輝きを放つことは、私にとって素晴らしいことだ。　あなたはかつて誰に対しても嫉妬したことはなく、他の人々にも同じことを教えてきました。あなたがたが、自らの教えで説いていることを、行いによって裏付けてくださることを願います。[93]。ただ、私のために神に内なる力と外なる力を求めてください。そうすれば、私はただ語るだけでなく、望みも持つようになり、単にキリスト者と呼ばれるだけでなく、実際にキリスト者となることができるでしょう。　もし私が本当にキリスト者であるならば、そう名乗ることもできるでしょう。そして、世がもはや私を見なくなる時、初めて私は真に忠実な者となることができるのです。目に見えるものは何一つ永遠ではありません。*「目に見えるものは一時的であり、目に見えないものは永遠です」*（IIコリント4:18）。　私たちの神、イエス・キリストは、御父の御許におられるとき、より大きな栄光のうちに現れます。キリスト教とは、沈黙の信念にあるのではなく、行いの偉大さにあるのです。とりわけ、世がそれを憎むときこそ、その真価が表れます。私は諸教会に書き送り、すべての人に告げます。もしあなたがたが私を妨げない限り、私は進んで神のために死ぬつもりです。　お願いです。私に 不適切な愛を示さないでください。私を獣の餌として放っておき、獣たちを通して神に到達させてください。私は神の麦です。獣の歯に砕かれて、キリストの清いパンとなるようにしてください。　むしろ、これらの獣たちをなだめて、彼らが私の棺となり、私の体を何も残さないようにしてください。そうすれば、死後、私が誰かの重荷になることはありません。そうして初めて、私の体さえもこの世に見られなくなった時、私は真にキリストの弟子となるのです。私がこれらの道具を通じて神へのいけにえとなるよう、キリストに私のために祈ってください。　ペトロやパウロのように、私はあなたがたに命じるのではない。彼らは使徒であり、私は有罪判決を受けた者である。彼らは自由であり、私は今なお奴隷である。しかし、もし苦難に遭うならば、私はイエスの解放された者となり、御内で自由な者としてよみがえるだろう。今、私はこの束縛の中で、世俗的なものや虚しいものを何も望まないようにと教

[91] すなわち、偽りの教え
[92] すなわち、この世の戦いの場において。
[93] 聖イグナティウスはここで、キリストのために死ぬことの栄光について語っている。

えている。　シリアからローマへの道中、陸でも海でも、昼も夜も、私はすでに獣たちと戦っている。十頭のヒョウ、すなわち、彼らに施される恩恵によってますます凶暴になる兵士の一団に縛られているのだ[94]。彼らの侮辱によって私はさらに多くを学んでいるが、それによって自分を正当化しているわけではない（Iコリント4:9）。 ああ、もし私のために用意された獣たちから逃れられさえすれば！　彼らが貪欲に私に襲いかかってくるよう祈る。私は彼らを誘い込み、すぐに私を食い尽くさせるつもりだ。彼らが一部の人々を恐れて手を出さなかったようなことにはさせない。もし彼らが自発的にそうしないなら、私は彼らを強制する。許してほしい、これが私にとって有益であることを私は知っているのだ。　今、私はようやく弟子になり始めたばかりだ。目に見えるものであれ、見えないものであれ、何ものも私をイエス・キリストのもとへ行くことを妨げることはできない。火や十字架、獣の群れ、切り裂き、引き裂き、骨の砕き、手足の切断、全身の粉砕、悪魔の激しい苦しみ――それらすべてが私の上に降りかかろうとも、ただキリストに到達できればよいのだ。　この世の快楽も、この世の王国も、私にとって何の益にもならない。全地を支配するよりも、イエス・キリストのために死ぬほうがましだ。「*人が全世界を獲ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか*」（マタイ16:26）。　私は、私たちのために死なれた御方を求め、私たちのために復活された御方を切望する。私が言っているのは利益のことだ。兄弟たちよ、どうか私を許してほしい！　私の生きることを妨げず、私の死を望まないでほしい。私は神の者でありたい。私をこの世に引き渡さないでほしい。私を清らかな光のもとへ放ち出してください。そこへ至れば、私は神の人となるでしょう。私の神の受難に倣う者とならせてください。自ら神を内に宿す者は、私が何を望んでいるかを理解し、私の心を占めているものを見て、私に共感してくれるでしょう。この世の支配者は、私を惑わせ、神に向けられた私の願いを打ち砕こうとしています。　ですから、そこにいるあなたがたのうち、だれも彼を助けてはなりません。むしろ、私のもの、すなわち神のものとなってください。イエス・キリストを呼び求めながら、世を愛するような者になってはなりません。嫉妬があなたがたのうちに宿ることのないように。たとえ私自身が別のことをお願いしたとしても、私の言葉には耳を貸さず、今こうしてあなたがたに書いていることを、もっと信じてください。　私は今、死を切望しながら、生きている身であなたがたに書き送っている。私の愛は十字架につけられ、もはや私の中には物質を愛する炎はない。しかし、私の中で語りかけ、内側から「父のもとへ行きなさい」と私を呼びかける「生ける水」[95] がある。私にとって、朽ちる食物にも、この世の快楽にも、何の甘美さもない。　私が望むのは、神のパン、天のパン、命のパン、すなわち、ダビデとアブラハムの血筋からこの終わりの時に生まれた神の御子、イエス・キリストの御体です。そして、神の飲み物、すなわち、朽ちることのない愛であり、永遠の命である御血を望みます。　もはや人のような生を送りたくはありません。しかし、あなたがたが望んでくださるなら、この願いは叶うでしょう。どうか、あなたがたも御恵みを得られるよう、願ってください。この短い手紙をもって、お願いいたします。私を信じてください。父が真実をもって語られた、偽りのない御口であるイエス・キリストが、私が真実を語っていることをあなたがたに明らかにしてくださるでしょう。　私が目的地にたどり着けるよう、私のために祈ってください。私がこの手紙を書いたのは、肉によるものではなく、神の御心によるものです。もし私が苦難に遭うなら、それはあなたがたが私を愛した証であり、もし私がその栄誉に値しないなら、それはあなたがたが私を憎んだ証です。　あなたがたの祈りの中で、シリアの教会を覚えていてください。そこには、私の代わりに、今や神が牧者となっておられます。ただイエス・キリストだけが、その教会において司教の務めを果たし、あなたがたの愛がそこにあるのです。しかし、私はその一員と呼ばれることを恥じています。なぜなら、私はその中最下位の者であり、また追放された者として、その資

[94] イグナティウスの看守たちへの、処遇を和らげるためのキリスト教徒による贈り物への言及。
[95] 生ける水、すなわち、殉教の死において人を奮い立たせ、強める聖霊のこと。ヨハネ4:10、7:3を参照。

格がないからです。しかし、もし私が神のもとへたどり着くことができれば、神の憐れみによって、何かになるでしょう。　――私の霊と、イエス・キリストの御名によって、私を単なる通りすがりの者ではなく[96]として受け入れてくださった諸教会の愛が、あなたがたに挨拶を申し上げます。なぜなら、私の肉体の旅路の途中にあった教会でさえなく、街まで私を迎えに出てくれた教会もあったからです。　私はスミルナから、尊きエフェソの信徒たちを通じて、この手紙を書き送ります。私のそばには、他の多くの人々と共に、クロク――私にとって憧れの名前――がいます。神の栄光のために、私より先にシリアからローマへと向かった人々については、すでにご存じかと思います。彼らに、私がすぐ近くにいると伝えてください。彼らは皆、　神とあなた方にとってふさわしい人々です。あなた方は、あらゆる点で彼らを安心させてあげなければなりません。–私はこれを、9月カレンダスの9日前に[97]、すなわち8月28日[98]に、あなた方に書き送りました。イエス・キリストの忍耐をもって、最後まで強められてください。アーメン。

イグナティウスは、彼に同行していたエフェソスのキリスト教徒数名を通じてこの書簡を送り、彼らは最短ルートでローマへ向かった[99]。しばらくして、聖人自身も兵士たちに護衛されてスミルナを出発し、トロアスに到着した。そこで彼は、アンティオキアでの迫害が収まり、教会に平和が戻ったという喜ばしい知らせを受けた。　すべての祈りの中で、見捨てられた自分の教会を心に留めつつ、彼はすべての信徒にその教会のために祈るよう求めた。羊の群れの平穏に対する喜びが強ければ強いほど、彼はより穏やかな心持ちで死を迎えようとしていた。　そのような心境の中で、彼は（キリシリアの）フィラデルフィアの信徒たちやスミルナの信徒たちへの手紙を書き、キリスト教徒たちにアンティオキア教会の喜びの出来事に積極的に参加するよう促した。特に、彼はスミルナの聖ポリカルプ司教に手紙を書き、　スミルナの司教である聖ポリカルプに手紙を書き、アンティオキアの教会を慰めるために聖職者の中から誰かをアンティオキアへ派遣するよう依頼し、他の教会に対しても同様の措置を講じるよう書簡を送るよう託した[100]。トロアから、聖イグナティウスはネアポリス（マケドニア）へと船出し、フィリッポポリスとマケドニアを徒歩で通り抜け、道中で教会を訪れ、そこで教えを説き、弱っている兄弟たちを励まし、またすべての人に、元気で節度ある生活を送るよう命じた。　エピルスを通り抜けた後、聖イグナティウスはエピダムヌスで再び船に乗り込み、アドリア海とティレニア海を経てイタリアへと向かった。　遠くからプテオラ（カンパニアの都市）を目に

---

[96] すなわち、あたかもイグナティウスが彼ら自身の司教であるかのような愛をもって。

[97] ローマ暦ではそのように数えられていた。

[98] 107年

[99] スミルナからローマへは二つのルートがあった――一つは群島と地中海を経由する海路、もう一つはマケドニアを経由する陸路である。イグナティウスは後者のルートで連行されたが、エフェソスのキリスト教徒たちは船で出発し、イグナティウスの書簡を彼の到着より先にローマへ届けることができたはずである。　しかし、陸路であれば、老齢に苛まれ、スミルナでの足取りが遅くなっていたイグナティウスよりも先に、彼らがローマに到着するのは当然のことだった。　スミルナから、聖イグナティウスは、エフェソス人、マグネシア人（イオニアのメアンドロス川近くの都市マグネシア）、およびトラリア人（アジア）に向けて三通の手紙を送った。彼らは、聖なる囚人であるイグナティウスを歓迎するために、司教や長老、助祭たちをスミルナに派遣していたのである。　これらの書簡の中で、聖イグナティオスは教会から寄せられた愛に感謝し、信徒たちに御霊の一致を守り、司教や長老たちに従うよう勧告するとともに、偽りの教師たち――キリスト教をユダヤ教の単なる補足としか見なさないユダヤ主義的なキリスト者たち、　キリスト教をユダヤ教の単なる補足としか見なしていなかった者たちや、救い主の誕生、受難、復活という真理を否定し、そもそも彼に人間的な側面を一切認めなかったドケティストたちに対して警告を発している。

[100]　さて、聖イグナティオスの書簡は全部で七通が伝承されている。これらは当初ギリシャ語で書かれたが、その後シリア語、アルメニア語、さらに後にスラブ語、そして近年ではロシア語へと翻訳された。　これらの書簡の内容は、主に、教会の内的・外的な一致を守るようキリスト教徒に勧めるもので構成されており、それゆえ、聖イグナティウスを「一致の教師」と呼ぶことは妥当である。彼自身もまた、一致のために召された者であると自覚していたからである（『フィラデルフィア人への書簡』より）。さらに、その大部分は当時の偽りの教えに対する批判を目的としている。

したとき、彼はここで上陸し、かつて使徒パウロが同様の偉業を成し遂げるために通ったのと同じ道筋でローマへ向かおうと考えた。　しかし、強風のため船は岸に近づくことができず、聖イグナティウスは一日のうちにローマからほど近いポートの港に到着した。兵士たちは、すでに終盤に差し掛かっていた見世物に間に合うよう、ローマへと急いでいた[101]。　その間、アンティオキアの司教が到着したという噂が広まり、集まったキリスト教徒たちは、喜びと深い悲しみを胸に彼を出迎えた。中には、民衆を説得して、義人の死という血なまぐさい見せ物を中止させようとした者もいた。　しかし、イグナティウスは、自分への愛ゆえにそうしないよう懇願し、同席していた兄弟たちと共にひざまずき、神の御子に、教会のため、迫害の終息のため、そして信者である兄弟たちの間の相互の愛が保たれるよう祈った。　その後、聖イグナティウスはローマへ連行され、皇帝の命令により都市の司教に引き渡された。その司教は、神を宿すイグナティウスを見て皇帝の書簡を読み上げると、直ちに猛獣を準備するよう命じた。　祝祭の日が訪れ、聖人は処刑の場へと連行された。シリアの司教が野獣に投げ込まれるという噂が至る所に広まっていたため、街中の人々がこの光景を見物するために集まっていた。闘技場に立たされた聖人は、明るい表情で民衆に向き合い、その勇敢な魂を誇りに思い、キリストのために死を受け入れることを喜びながら、大声でこう言った。

「私のこの偉業を見守るローマの諸君よ！　私が処刑を受けるのは、いかなる悪行のためでもなく、いかなる不法行為によって死刑を宣告されたのでもない。ただ、私の唯一の神のためである。私はその神への愛に包まれ、その神へと強く憧れているのだ。　私は神の小麦であり、神にとって清らかなパンとなるために、獣の歯によって粉砕されるであろう。

聖人がそう言い終えるやいなや、獅子たちが彼に放たれた。獅子たちは即座に襲いかかり、聖人を引き裂いて食い尽くし、堅い骨だけを残した。こうして、獣たちが聖人の棺となるという願いが叶えられ、神は御自分に仕える者の願い通りにこれを許されたのである。　神は、御自身の聖なる御名の栄光のために、聖預言者ダニエルが穴の中にいた時や、聖テクラが処刑された時のように、聖人の目の前の獅子の口を封じることもできた。しかし、神は御自身の全能の力を称えることよりも、むしろ御自身のしもべの願いと懇願を叶えることを選ばれたのである。　これこそが、聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）の最期であり、その偉業であり、神への愛であった。

その光景が終わると、聖人がスミルナから手紙を送っていたローマ在住の信者たちや、彼と共に来た者たちの何人かが、殉教者の残された遺骨を集め、彼を嘆き悲しみながら、107年12月20日、城外の特別な場所に、敬意を込めて安置した。[102]。

「私たちはこの光景をこの目で目撃し」――聖イグナティウスの殉教を記した記述者たちはこう語っている――「一晩中、家で涙を流し、ひざまずいて祈り、この出来事について主が私たちを慰めてくださるよう懇願した。」　その後、私たちが少し眠りにつくと、私たちの中には、聖イグナテ

101　これらの見世物や演目は、いわゆる「サトゥルナリア」であり、その続きであり締めくくりとなるのが「シギラリア」であった。これらは、ローマの異教徒たちの見解によれば、彼らの神サトゥルヌスの治世に存在した「黄金時代」を記念して、12月17日から7日間続いた。

102　『チェチイ・ミネイ』の聖ディミトリ・ロストフスキーの巻には、聖イグナティウスの生涯について次のような記述がある。「聖イグナティウス・ボゴノセツについて、ある人々は次のような話も伝えている。彼が獣の餌として引き立てられた際、絶えずイエス・キリストの御名を口にしていたため、不信心者たちは、なぜその御名を絶えず繰り返しているのかと尋ねた。　聖人は、自分の心にイエス・キリストの御名が刻まれており、心の中に常に抱いている御方を口で告白していると答えた。聖人が獣に食い殺されたとき、残された骨の中から、神の御心により、獣の手が及ばなかった聖人の心臓が保存されていた。　それを見つけた異教徒たちは、聖イグナティウスの言葉を思い出し、彼の言葉を真実かどうか確かめようと、その心臓を二つに切り裂いた。すると、切り裂かれた心臓の内側の両面に、金色の文字で「イエス・キリスト」と刻まれているのを見つけた。　このように、聖イグナティウスは、その名にふさわしく、また実際に「神を宿す者」であり、常にその心の中にキリストなる神を宿し、神を思う心をもって、まるで葦の棒で書かれたかのように記されていたのである。

ィウスが突然私たちの前に現れて私たちを抱きしめるのを見た者もいれば、私たちのために祈っているのを見た者もおり、また、まるで大変な労苦の後に汗だくになって、主の前に立っているのを見た者もいた。　これを喜びをもって目にし、眠りの中の幻を悟ると、私たちは恵みの与え主である神を賛美し、その聖なる方を称え、また、その方が殉教された日と年を記録しました。それは、その殉教の日に集まり、この修道士であり、キリストの勇敢な殉教者との交わりを持つためでした。

聖イグナティウスの死、その勇敢で寛大な心、そして恐れを知らず、喜びをもって自らの神であるキリストのために死へと向かったことを知ったトラヤヌス帝は、彼を悼んだ。　また、キリスト教徒たちが善良で柔和な人々であり、節制して暮らし、清らかさを愛し、あらゆる悪事を避け、非の打ち所のない生活を送り、帝国の秩序に何ら反するところはないが、ただ多くの神々を崇めるのではなく、唯一のキリストを崇めているという話を耳にすると、　トラヤヌスは彼らを処刑するために捜索するよう命じることはせず、平穏に暮らすことを許した。　その後、聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）の尊い遺骸は、栄光のうちにアンティオキアへ移送された。[103]　それは、都を守り、病める者を癒やし、この羊飼いの群れ全体を喜ばせるためであり、三位一体の唯一なる神の栄光のためであり、すべての者から永遠に賛美される神の栄光のためである。アーメン。

コンダク、第3声：

あなたの輝かしい功績は、馬小屋に生まれた御方の到来を、すべての人々に告げ知らせる。あなたは、愛に満ちて御方に満たされることを切望し、獣に食い殺されることを厭わなかった。それゆえ、あなたは「神を宿す者」と称され、全知のイグナティオよ。

アンティオキアの主教、聖フィロゴニオスの記念日

記念日：12月20日

福者フィロゴニオスは幼い頃から熱心に聖書を学び、神の助けによりそれらを完全に理解し、聖なる教えを指針として、その聖なる生涯によって輝きを放った。　フィロゴニオスには妻と娘がおり、弁護士として常に法廷に通っていた。そこで彼は常に不当な扱いを受ける人々を擁護し、彼らに助けの手を差し伸べ、　未亡人や孤児、貧者や困窮者を虐げる者たちに対して立ち向かった。そして、彼はその徳高い生活によって輝きを放った。　妻の死後、彼は司教の座に就いた[104]　。当時、キリスト教会は大きな混乱に陥っていた。異教徒によるキリスト教徒への迫害はすでに止んでいたものの[105]、教会にはさらに激しい嵐が吹き荒れ、すなわち異端の動乱が始まっていたのである。　フィロゴニオスは司教として、良き羊飼いのように、自らの羊の群れをしっかりと守り、その知恵をもって異端の詭弁を分析し反駁することで、それらの混乱を鎮めた。　この功績に対し、聖ヨハネス・クラマテ

---

[103] 聖イグナティオスの聖遺骨の移送は1月29日に祝われる

[104] フィロゴニオスは、妻の死後、民衆によって法廷から無理やり連れ出され、その正義のゆえに318年に司教に任命された。

[105] キリスト教信仰に対する最後の迫害は、マクシミアヌス帝とガレリウス帝（305～311年）およびリキニウス帝（307～324年）の治世下で行われた。この時、フィロゴニオスは真理と正義への愛に基づき、キリストの信仰と迫害されるキリスト教徒を力強く擁護し、殉教者としての姿を現した。　そして、迫害を受けていた信仰が、使徒に等しいコンスタンティヌスの時代から異教に打ち勝つようになると、キリストの教会の敵である悪魔の新たな策略により、アリウス派の異端が生まれた。しかし、民衆によって司教に選出され、若き頃から優れた教育を受けていたフィロゴニオスは、虚偽の異端的な思索を熱心に糾弾した。

ィオス（[106]　）も彼を称賛し、彼についてより詳細に伝えている。こうして、敬虔な天使のような生涯を送り、神に喜ばれるよう委ねられた霊的な群れを導いた聖フィロゴニオスは、安らかに天の父の栄光に満ちた御国へと旅立った（[107]）。

セルビアの大司教、聖ダニエルの生涯

記念日：12月20日

聖セルビア大司教ダニエルは、古代セルビアの最も栄光に満ちた時代、セルビア王ステファン・ウロシュ2世・ミリュティン[108]　、ステファン・ウロシュ3世・デチャンスキー、そしてステファン・ドゥシャンのもとで生きた。 彼は名門の領主の家系に生まれ、裕福な両親[109] の息子であった。両親には多くの息子や娘がいたが、彼らはダニエルがまだ幼い頃にすでに他界していた。　幼い頃、ダニイルは両親に、学問を学ぶために先生のもとへ預けてほしいと頼んだが、他の子供たちの死に心を痛めていた父と母は、息子と別れたくなかった。しかし、少年は自分の意思を貫いた。ある親戚に助けを求め、両親に内緒でその親戚と共に先生のもとへ逃げ出したのである。　師は、連れてこられた少年が誰の子であるかを知っており、熱心に彼の教育に取りかかった。少年は並外れた才能と勤勉さを示し、やがて同級生や学校の仲間たちを凌駕し、自ら他者を教えることができるようになった。

両親は当初、深く嘆いていたが、息子の居場所と成績の良さを知ると、心を改め、すべてを神の御心に委ねた。

その間、青年の中には、貞潔、清らかさ、断食、徹夜祈祷、そして祈りといった、堅固な人々が備える美徳への渇望が芽生え始め、修道生活への関心が強まっていった。　彼は修道士たちとの出会いを求め、彼らに相応の敬意を払い、修道生活について語り合った。その結果、やがて彼自身も修道士になりたいという願いが燃え上がり、神に修道者の位を授けてくださるよう祈った。　すでにこの頃、聖都エルサレムや聖山アトス山での奇跡について多くを耳にしていた彼は、これらの聖地を訪れたいという強い願望に燃えていた。しかし、そのための時はまだ来ていなかった。

ダニエルが成人すると、セルビア王ステファン・ウロシュ・ミリュティンは、彼の立派な資質を聞きつけ、彼を宮廷に招き入れ、寵愛し、身近に置いた。　しかし、高貴な家柄であり、君主と親しい関係にあったにもかかわらず、ダニエルは驕ることなく、宮廷においても謙虚に振る舞い、修道生活への思いを片時も忘れなかった。

敬虔なミルティン王は、しばしば自国を巡礼の旅に出かけ、教会や修道院を訪れ、聖遺物を崇拝し、惜しみなく施しを施していた。そうした旅の一つに、ダニエルも王の随行員として同行していた。 ソポチャンの聖三位一体修道院[110] に立ち寄った際、常に修道士たちとの会話を好んでいたダニイルは、まさに自分の望みにぴったりの一人の修道士に出会った。彼はこの修道士に、若き貴族が修道士の剃髪を受けるのを手助けしてくれる、良き助言者であり支援者を見出した。

ミルティン王と随行団がソポチェでの巡礼を終え、皆が労をねぎらって休息にふけっていた時、敬虔な若者は、前述の修道士の助けを借りて、夜陰に乗じて密かに修道院を抜け出した。　彼の新しい導き手は、彼をイブレ川沿いのコンチュルにある聖ニコラエ修道院へと連れて行った。この修道

---

[106] 386年、聖ヨハネス・クロイソストモスはフィロゴニオスを称える演説を行った。

[107] 323年頃、安らかにこの世を去った。

[108] ミリュティンは1262年から1320年まで統治した。

[109] ダニエルの生年・出生地および世俗名は不明である。

[110] サポチャ、サポチャネはラシュキ川の源流に位置し、旧セルビアのノヴィ・パザルから馬車で3時間の距離にある。かつてネマニッチ家の所有地であったトロイツキ修道院は、現在では廃墟と化している。

院の修道院長ニコディム――王宮から逃れてきた者――によって、ダニエルという名で修道士としての剃髪を受けた。

かねてより修道生活を切望していたダニイルは、その栄誉に浴すると、熱意をもって修道誓願を果たすようになった。他の修道士たちと共に熱心に礼拝に参加し、日中は修道院のあらゆる務めをこなす一方で、夜になると一人きりで徹夜祷、神への黙想、そして絶え間ない祈りに身を捧げた。祈り、感極まって流す涙と悔い改めの涙、断食、そしてその他の修行は、すぐに彼を他の修道士たちの模範とした。　彼の功績の評判は修道院の外にも広まった。やがて、当時のセルビア大司教エウスタフィオス2世[111] の耳にもその名が届き、教養豊かで敬虔な聖職者を必要としていた大司教は、ダニエルを自分の元へ呼び寄せたいと考えた。　エウスタフィオスは度々ダニエルを召し出そうとしたが、かねてより望んでいた修道院生活に慣れ親しんでいたこの高貴な修道士は、出家した場所を離れることを望まなかった。そのため、大司教はミルティン王に働きかけ、国王自らが修道士に大司教のもとへ出頭するよう命じるよう要請せざるを得なかった。

エウスタフィオスに温かく迎えられたダニイルは、まもなく彼によって司祭修道士に叙階され、ジチェ修道院[112] にある大司教の宮廷に留め置かれた。

大司教のもとで過ごしている間も、ダニイルは修道誓願を一切破ることなく、修道生活を送り続けた。　しかし同時に、ダニエルは大司教からの様々な指示を遂行し、教会の運営業務にも従事した。ダニエルは端正な顔立ちと美しい声で知られ、預言者イザヤの言葉を借りれば、「王たちの前で、意味深く、理にかなった言葉を語るという主からの賜物」を持っていた。

ダニエルはかねてより、聖なるアトス山を訪れたいと願っていた。　さらに、セルビア初の君主である聖ステファン・ネマニャ――セルビア初代大司教である聖サヴァの父――は、アトス山にセルビアのヒランダル修道院を建立した。ステファンは修道名シメオン・ネマニャとして、またその息子である聖サヴァも同様に、この修道院で修行に励んだ。　そのため、アトス山のヒランダル修道院は、セルビア人にとって永遠に最も尊い聖地となった。ミリュティン王はこれを再建し、かつての古く小さな修道院の代わりに、海岸からほど近い場所に素晴らしい修道院を築いた。　当時の修道院長キリアコスの要請により、ミリュティン王は修道院を守るため、海岸沿いに「ピルグ」、すなわち要塞化された塔を建設し、海賊から修道院を守るために「救世主教会」を併設した。

前述のイグメン・キリアクはまもなく亡くなった。エウスタフィイ大司教とミリュティン王は、ふさわしい後継者の選出に配慮し、協議のために教会会議を招集した。会議は満場一致で、修道士ダニイルを選出した。　こうして、かねてより聖アトス山を訪れることを切望していたダニイルは、当時すでに名高く、とりわけセルビア人にとって重要なヒランダル修道院のイグメンに直ちに任命された。

神がダニエルをヒランダル修道院のイグメノスに任命されたその時代は、聖アトス山だけでなく、ギリシャ王国全体にとっても困難で厳しい時期であった。当時、オスマン・トルコ軍はすでにコンスタンティノープルへと進軍しており、アジアで圧力をかけているだけでなく、海を越えてヨーロッパへの侵入も試みていた。　ギリシャの王たちは、異教徒からキリスト教徒を守るためにあらゆる手段を講じていた。自国の戦力に加え、あらゆる手段を尽くして外部からの支援を求めた。こうして、セルビアのミルティン王も、アジアにおけるトルコ軍との戦いで、ギリシャのアンドロニコス1世を支援した。　その後、ギリシャ王は傭兵部隊、すなわちスペインのカタルーニャ人たちに頼らざるを得なくなった。様々な民族から集められたこの傭兵部隊は契約を守らず、すぐにトルコ人と結託し

[111] エウスタフィオス2世は、1286年から1304年までセルビアの大司教を務めた。

[112]　現在も存続しているジチャ（ジッチャ、ジディチャ）修道院は、イブラ川の右岸、セルビア・モラヴァ川との合流点からほど近い、現在のセルビア王国の領土内に位置している。

、支援者や守護者から、瞬く間に正教会のキリスト教王国の熾烈な敵へと変貌した。　彼らはバルカン半島全域で略奪、破壊、放火を繰り返した。ギリシャ沿岸では、海賊、とりわけヴェネツィアの海賊たちが猛威を振るった。陸上の敵であるカタルーニャ人、そして海上の敵である主にヴェネツィア人たちは、 や聖山アトスさえも容赦しなかった。 アトス山の修道院の富に関する誇張された噂は略奪者たちを引き寄せ、彼らは住民に一切の容赦を与えず、身分や年齢を問わず、人々を捕らえ、殺害し、略奪した。

これらの略奪者たち――キリスト教徒ではあるがラテン系であった――から、セルビア系のアトス山ヒランダール修道院でさえも免れることはできなかった。

そのような困難な時期に、聖ダニイルはヒランダル修道院のイグメンに任命された。

ミリュティン王とエウスタフィオス大司教は、聖ヒランダル修道院への豊かな献品を携えて、ダニエルを見送った。かねてよりアトス山で修行することを切望していた聖ダニエルは、喜びをもって長年の願いを実現し始めた。　彼は全身全霊で修道生活の修行に打ち込み、救いの道に敵である悪魔が様々な形で投げかけるあらゆる誘惑を断固として打ち破った。修道院長の手本と、その雄弁な指導や教えは、修道院において敬虔さ、一致、秩序、そして互いの愛を支え、広めていった。

しかし、霊的な偉業に加え、イグメン・ダニイルは、聖なる山全体を荒廃させ、破滅に追い込んだ前述の盗賊たちから修道院を守るという、外的な闘いの偉業も成し遂げなければならなかった。堅固で設備の整ったヒランダル修道院には、多くの修道士や周辺の一般住民、女性や子供たちが、ここでの避難場所と食糧を求めて集まってきた。

修道院の備蓄はすべて、苦境に立たされた人々の糧として提供されたが、それも底をついてしまった。至る所で飢餓が広がっていた。　荒廃したこの国では、人々だけでなく家畜までもが飢えで死んでいった。耐え難い苦難に直面し、ヒランダル修道院の修道士たち自身も救いを求めて逃げ出したが、彼らもまた敵に捕らえられて奴隷にされたり、餓死したりした。ただ、揺るぎない強さを持ち続けたイグメン・ダニイルだけが、決して気力を失わなかった。 彼は3年半にわたり、要塞化された修道院に籠城した。敵は何度も修道院の門に迫り、強行突入を試みたが、成功せず、再び戻ってくると誓って引き下がった。ダニエルは、修道院に残っていた人々と共に、主なる神への絶え間ない祈りを捧げながら、倦むことなく防衛を続けた。

差し迫った恐ろしい危険を鑑み、思慮深く先見の明のあるイグメンは、修道院に身を隠していた人々から、修道院を守るという誓約と人質を取り、その宝物を救い出し、一時的に自身の守護者であるセルビアのクラウ・ミリュティンのもとへ避難することで危機を乗り切ることを決意した。

修道院に残った者たちに多額の金を渡した後、ダニイルは数人の修道士たちと共に、聖具や宝物、さらには修道院の家畜までも持ち出し、敵に占領され荒廃した土地を通り抜けてセルビアへと向かった。　神の御加護により、あらゆる危険を乗り越え、彼は無事に当時のセルビアの首都スコピエへとたどり着いた。ミルティン王はイグメン・ダニイルを喜んで迎え入れ、危険が去るまで自分の元にとどまるよう説得した。　しかし、ダニイルは修道院の財宝と家畜をミリュティンに預けて、あらゆる苦難、さらには殉教さえも耐え抜く覚悟で、帰路についた。

帰路では、再び盗賊や敵からの様々な危険に遭遇した。ある場所で、ある領主が彼に襲いかかり、捕らえて略奪しようとしたが、ダニイルに同行していた者たちは無事に襲撃者を打ち負かし、敵を縛り上げ、連れ去り、その領地の境界を越えてからようやく解放した。

ヒランダル修道院に戻ると、イグメン・ダニイルはまず、アトス山や周辺地域で依然として暴虐を働いていた敵から、将来にわたり修道院を守り抜くことを最優先とした。　数人の信頼できる者に資金を渡し、彼らを港へ派遣してパンを買い付けさせ、また修道院を守るための武装した者たちを雇わせた。　このようにして修道院の防衛体制を整えた後、ダニイル自身は、霊的な対話を求めて、

また安全のためにも――敵はヒランダル修道院のイグメンを捕らえる機会を伺っていたからである――アトス山のルシク修道院にいる自身の霊的指導者のもとへ身を寄せた。　ヒランダル修道院には二人の裏切り者がおり、彼らはルシク修道院にやって来て、欺瞞によって自らのイグメンを敵に引き渡そうとした。しかし、先見の明があり洞察力に富んだダニイルは、敵がルシク修道院を包囲し、それを焼き払いダニイルを捕らえようとしたにもかかわらず、彼らを無力化することに成功した。　しかし、神はダニイルをこの危険から救われた。敵同士が争いを起こし、予期せず修道院から立ち去ったのである。

迫り来る危険から救われたことを神に感謝した後、ダニイルは自身の霊の子らや同行者たちと共に、アフォン山にあるキシロポタム修道院へと海辺へ向かった。この修道院もまた、セルビアの大司教聖サヴヴァによって 設立され、支援されていたのである。 ここでダニイルは、自身と両親を祈念のためのシノディクに登録し、数日間を祈りに費やした後、自身のヒランダル修道院へと戻った。

一方、3年以上にわたり恐ろしい災禍と荒廃をもたらしていた外部の敵は、次第にアトス山を去り始め、山には少しずつ平穏が戻り始めた。これらの敵を鎮圧し、追い払うことにおいて、ギリシャ王アンドロニコスとセルビア王ミリュティンが協力した。

アフォン山に平和と静けさが回復した後、　セルビアの聖地をこれほどたゆまず熱心に守り抜いたダニイルは、静寂と孤独に満ちた修道生活を送るため、ヒランダールの修道院長職を弟子ニコディムに譲り、アトス山のカレイ修道院へと退いた。　そこには聖サヴァのケリアがあり、聖サヴァの規則に従った沈黙と孤独の生活を送るための場所であった。ダニエルはここで修道生活を送りながら、自ら祈り、夜通しの立ち祷り、礼拝、そして詩篇の詠唱を行っていた。　このケリアに身を置いたダニエルは、霊的な修行に全身全霊を捧げた。その名声はアトス山全体に広まり、多くの人々が霊的な慰めと教えを求めて彼のもとに訪れるようになった。

ダニエルがカレイの隠遁生活を送っていた頃、彼の故郷であるセルビアで戦争が勃発した。ミルティン王に対して、その弟ドラグギンが反旗を翻したのである。ドラグギンはハンガリー王の支援を得て、ウロシュ・ミルティンからセルビアの王位を奪い、自身の息子ウロシツに譲り渡そうとしていた。ミルティンは極めて危険な状況に置かれていた。　敵の侵攻を恐れた彼は、バンスキー修道院に財宝を集めたが、その保管を任せられる信頼できる人物がいなかった。当時、司教の死により、バンスキー教区は指導者を失っていた。　そこで、ミルティン王は、かつてヒランダル修道院のイグメンを務めた活動的なダニエルを思い出し、彼を招くため、カレアにいるダニエルの元へ次々と使者を派遣した。隠遁生活に専念していたダニエルは長い間断り続けていたが、王の執拗な要請に屈して承諾し、ついにミルティン王のもとへ赴いた。　王は自らの厳しい状況を説明し、バンスキー修道院で集められた財宝を手渡して、ダニイルにそれらを保護するよう依頼するとともに、バンスキーの司教座に就くよう提案した。　ダニーリは聖なる山での隠遁生活を手放すことを非常に惜しんでいたが、ミルティン王は、戦争が無事に終結したら再び聖なる山へ戻れることを約束し、ついに彼を説得してその提案を受け入れさせた。

ミルティン王が弟ドラグギンの反乱による困難を無事に乗り越えると、　ダニイルは再び聖山への帰還を願い出た。王がセルビアに残るよういくら説得しても、彼はやはり愛するヒランダールへと戻り、そこで前述のピルゲ、すなわち塔に身を寄せ、再び隠遁の修行に専念した。　いつものことだが、とりわけこの頃は、聖書の読書と研究に没頭していた。

聖ダニエルはかねてより、聖都エルサレムを訪れ、キリスト教の聖地に参拝したいという願いを抱いていた。そして今、ついにその志を遂げる好機が訪れたと考えた。彼はエルサレムへの旅の準備を始めた。

このことを知ったセルビア王ミリュティンは、深く悲しんだ。彼はダニエルが自分から完全に離れていくことを望んでいなかった。ダニエルは、頼りになり、有益な助言を与え、様々な形で助力してくれる人物として、王にとって欠かせない存在だったのだ。　王はダニエルに、その計画を延期

し、エルサレムへの旅の代わりにセルビアに戻るよう説得し始めた。セルビアでは、彼を待っている様々な仕事や栄誉があったからだ。ダニエルは王の強い要望を受け入れた。　バンスカ司教区は廃止され、修道院長職へと改組された。ダニイルはセルビアの大司教サヴァ3世のもとで暮らすこととなり、サヴァ3世は彼を将来の自身の後継者として、自身の邸宅に個室を用意した。 というのも、ミリュティンはダニエルにセルビアへの帰国を説得する際、将来、聖サヴァのセルビア大主教の座を彼に約束していたからである。

サヴァ3世はその後まもなく死去した。しかし、その後任として、理由は不明ながらダニイルではなく、彼の弟子であるヒランダル修道院の修道院長ニコディムが選出され、ダニイルはホルム教区を任された[113]。

1320年10月20日、30年にわたりセルビアを統治し、その領土を拡大して国に大きな栄光をもたらした敬虔なセルビア王ステファン・ウロシュ2世・ミリュティンが崩御した。ダニイルは を通じて王の病状を知らされ、その臨終と埋葬に立ち会った。埋葬は、ダニイルがかつて司教を務めていたバンスクの聖ステファン修道院にあるミリュティンの追悼堂で行われた。

セルビアの王位には、ミリュティンの息子である聖ステファン・ウロシュ3世・デチャンスキーが即位した[114]。

戴冠式の直後、彼はダニエル司教を呼び寄せ、自身の側近とした。ダニエルは、幼い頃からダニエルを慕い、父の治世の長い年月を通じて賢明な助言者として、とりわけ困難な逆境における自身の支援者かつ守護者として高く評価していたのである。

ステファン・デチャンスキーは、コンスタンティノープルでの幽閉からの解放と、父との最終的な和解を、ダニエルの取り成しと働きかけに負っていた。

こうしてダニエルは、セルビア王の常任の師であり、助言者、そして補佐者となった。ステファン・デチャンスキーの治世の初めには、国内だけでなく国外からも困難が立ちはだかった。　新王は、反乱を起こした内部の敵、すなわちドラグティン王の息子である従兄弟のヴラディスラフや、父方の実弟コンスタンティンといったライバルたちから身を守らなければならなかった。　また、自身とセルビアを外部の敵からも守らなければならなかった。ブルガリアのミハイル王は、ステファン・デチャンスキーの姉である妻ネドゥを追い払い、セルビアに対抗するためにギリシャ人との接近と同盟を図っていた。ステファン・デチャンスキーは、武力による防衛を行う一方で、平和協定や交渉にも頼らざるを得なかった。　当時、こうした交渉に、ダニエル司教ほど適任な人物はいなかった。彼は多岐にわたる人生経験と並外れた雄弁さ、とりわけ王たちの前で語る手腕を兼ね備えていたからである。　こうして、ステファン・デチャンスキー王の要請と委任を受け、ダニイルはブルガリアのミハイル王およびコンスタンティノープルのアンドロニコス2世への使節任務を大成功のうちに果たした。

君主からの様々な任務を遂行する中で、ダニエルは愛する聖山アトス山を忘れることはできず、機会があるたびにそこへ赴いていたが、もはや長くそこに留まることはできなかった。　かくして、前述の使節任務を遂行した後、彼は再びアフォン山へ赴こうとしたが、1323年5月13日にセルビアのニコディム大司教が死去したため、セルビアへ戻らざるを得なくなった。　王によって招集された聖職者および支配者たちの公会議は、同年9月14日、満場一致でダニエルを「セルビアおよびポモル地方全土の大司教」と宣言した。当時、彼は50歳であった。

---

[113] ホルム教区、あるいはザホルム教区は、現在のヘルツェゴヴィナに位置していた。

[114] 1321年1月6日、11月11日の聖ステファン・デチャンスキーの伝記を参照のこと。

大司教の座につくと、ダニエルは、心から愛する祖国と教会の繁栄のために、全精力を注ぎ込んだ。何よりもまず、当然のことながら、彼は教会の内部および外部の整備に注力した。　教養ある人物として、彼は聖職者の間で、書物による学びの奨励や学校・書籍の普及を通じて、教養の向上に努めた。

礼拝や教会関係者の生活においては、厳格な儀礼、秩序、そして荘厳さの確立に心を配った。教会に必要な書物が備わるよう多大な配慮を払い、それまでセルビアには存在しなかったような書物も数多く教会の使用に導入された。

ダニエル大司教は、その長い生涯を通じて、建設や経営の分野で豊富な経験を積んだ。セルビア教会の最高指導者の地位に就くと、彼はその広範な知識と経験を実務に活かした。　セルビア王の理解を得て、彼はその熱意をもって、セルビアの教会の外観整備に全力を注ぐことができた。　彼は、新しく壮麗な教会を建立し、古い教会を修復・改築し、内外を装飾し、教会用具、聖職者の衣、聖書を備え付け、イコンや壁画で飾った。　教会の建設や装飾のために、彼は必要な、しばしば高価な資材をセルビア国内だけでなく国外からも調達し、職人を招くだけでなく、例えばアドリア海沿岸から教会の鐘といった物品そのものを注文した。

彼は特に、ジチェとペチにある2つの大司教座大修道院の教会の建設と装飾に多大な労力と心血を注いだ。ある場所では、セルビア国内および国外での数多くの旅の途中で直面した危険から救われたことへの感謝の印として、　彼は「ツァレグラードのオディギトリア」と呼ばれる聖母マリアに捧げる壮麗な大聖堂を建設した。この大聖堂には、洗礼者ヨハネとセルビアの大司教聖アルセニオスに捧げる二つの小聖堂が併設されており、そのすぐそばには聖ニコラオス・チュドトヴォルツに捧げる小さな教会も建てられた。　その教会を内外ともに華やかに装飾し、必要なものをすべて備え付けた後、彼はこの教会において、ギリシャの修道士たちが　のギリシャの聖書とギリシャの修道院の典礼に従って礼拝を行うよう定めた。　別の場所では、以前から存在していた聖使徒たちと聖ディミトリオスの教会、および彼らが建設した聖母マリア教会に、ギリシャの教会を模して、貴重な材料を用い、内外に様々な装飾を施した共同の食堂（トラペザ）を増築し、　また、その近くには、上部に聖ダニエル・ストルプニクに捧げられた教会を備えた「ピルグ」、すなわち要塞化された塔を築いた。

セルビアの各地、例えばマグリチェ要塞や、エリツェ、リジツェなどの町において、ダニエル大司教は、教会に属する多くの教会、修道院、その他の建物を新築、あるいは修復した。

教会やその他の建物の建設に加え、ダニエルは大修道院や教会の至る所で、様々な教会機関の運営を支えるために、菜園、果樹園、ブドウ畑、そして農業全般の整備と運営に尽力した。

ダニエル大司教の統治時代は、セルビア教会の内面的・外面的両面において最も繁栄した時期であり、当時の多くの歴史的建造物が今日まで保存されている。

ステファン・デチャンスキーの治世において、ダニエルは常任かつ首席の顧問を務めた。セルビアとブルガリアの間で戦争が勃発し、ステファン・デチャンスキーが息子のステファン・ドゥシャンと共に遠征に出た際、ダニエルは王家の後見人および国の最高統治者として残された。　王は大司教ダニエルの名宛てに戦場からの報せを送り、大司教は勝利を授かるよう祈りを捧げた。そして、ヴェルブジュの戦いでセルビア軍がブルガリア軍に決定的な勝利を収めた際、ダニエルはセルビア全土で感謝の祈りを捧げるよう命じた。　ステファン・デチャンスキー王は、勝利を授けてくださった神への感謝の印として、ブルガリア軍の敗北後に戦利品として手に入れた財宝を用いて、デチャニに壮麗な「主の昇天大聖堂」を建立することを決意した。　この貴重な芸術的価値を持つ教会の建設地選定と建設において、ダニイル大司教は極めて積極的な役割を果たした。彼は修道院の創設者であり建

設者であるだけでなく、資金提供者でもあった。彼は自らの資金で教会のほんの一部を建設し、それを自身のための霊魂の救済の記念とした[115]。

敵に対する勝利の祝賀から間もなく、ダニエル大司教はセルビアの内乱という過酷な状況に直面することとなった。この内乱において、敬虔なステファン・デチャンスキー王は、息子のステファン・ドゥシャンが知らぬふりをしていた暗殺者たちの手により、殉教的な死を遂げることとなった[116]。

ステファン・ドゥシャンがセルビアの独裁王となると、武力によって国境を拡大し、セルビアとセルビア正教会に新たな栄光をもたらした。彼はいくつかのギリシャ地域を征服した後、「セルビア人とギリシャ人の王」の称号を名乗り、セルビア大司教をセルビア総主教の位に昇格させた。 これは1346年のことだったが、ダニエル大司教はこれらの出来事を目にすることはなかった。彼は1337年12月20日に安らかにこの世を去った。

聖ダニエル大司教は、敬虔な修行者、教会および国家の指導者としてだけでなく、教養豊かな学識者であり作家としても有名である。 彼の伝記を著した弟子は、ダニエルの並外れた博識、読書への愛、他者への啓蒙への情熱、そしてセルビアにおける書籍の普及への尽力――それは単に既存の書籍の写本を作成するだけでなく、新しい書籍の編纂や翻訳にも及んでいた――について証言している。 どちらの分野においても、ダニエル自身は生涯にわたり倦むことなく尽力した。 著述家として、彼は『セルビアの王と大司教の伝記』という膨大かつ貴重な著作を後世に残した。ダニエルは祖国を熱烈に愛し、その多くが聖人の列に加わっている過去の王や大司教たちの偉業や功績が、忘れ去られることのないよう配慮した[117]。 ダニエルは自らの模範と尽力により、当時のセルビアの文学の発展に大きく貢献し、とりわけ、彼が愛したヒランダル修道院において、長きにわたりセルビアの精神的啓蒙の中心地として機能していた同修道院において、その功績は顕著であった。

1月3日

12月21日（旧暦）

聖女ユリアニアと彼女と共に殉教した者たちの殉教日

記念日 12月21日

不敬虔なローマ皇帝たち――東ではディオクレティアヌス、西ではマクシミアヌス――の治世下、ビザンツ帝国の都市ニコメディア[118] では偶像崇拝がはびこっていた。当時、その地にはアフリカンという名の、異教の不敬虔さに深く傾倒した裕福で高貴な人物が住んでおり、彼にはユリアニアという名の娘がいた。 ユリアニアが思春期を迎え、美しさを花開かせると同時に、知性と善良な人柄も現れ始めた頃、エレウシウスという名の宮廷高官が、他の求婚者たちを先回りして、彼女と事前に婚約を交わした。ただし、結婚の挙式は彼女が成人するまで延期されていた。 その間、ユリアニ

---

115 これらの一連の出来事の詳細については、本『ミネイア・チェティイ』の11月11日の項にある、前述の聖ステファン・デチャンスキーの伝記を参照のこと。

116 同伝記を参照のこと。

117 ダニエルのこの著作は、時に『系図』とも『王系図』とも呼ばれるが、後世の補遺を加えて印刷されており、その補遺には、彼の弟子の一人が執筆したダニエルの伝記も含まれている。これは、1016ページの注記で示されたダニチッチの版に収録されている。

118 ニコメディアについては、954ページの注7を参照のこと。

アはキリストに関する福音の説教を聞き、キリストを信じ、密かにキリスト教徒となった。　天、地、海、火を目の当たりにして、彼女はこれらすべてを創造された方を求め、被造物を通して創造主を知ることを学んだ。聖使徒パウロが言うように、「神の目に見えない御姿、すなわち、神の永遠の力と神性とは、世界の創造以来、被造物を見ることによって、はっきりと知ることができる」（ローマ1:20）のである。そして彼女は心の中でこう思索した。「崇拝すべき真の神はただお一人だけである！　魂のない偶像は神ではなく、悪霊の住処に過ぎない」。それ以来、彼女は熱心に祈りと聖書の読誦に打ち込み、昼夜を問わず主の律法を学んだ――熱心な異教徒であり、悪霊の友であり、キリスト教徒の敵であった父親に内緒で。　一方、ユリアニアの母もまた異教徒ではあったが、キリスト教の信仰を拒絶してはいなかった。とはいえ、彼女はどちらの信仰にも特に心を配っておらず――偶像を熱心に崇拝することもなければ、キリストを敬うこともなかったため、娘がどのような信仰を保っているかには関心を払わなかった。　こうして、母の無関心のおかげで、聖ユリアニアは父からキリストへの信仰を容易に隠し、祈りと聖書の読誦に励むことができた。　心の中に神への愛に満ち、敬虔さに確固としていた彼女は、婚約者を断り、不信心な者との結婚を避け、偶像崇拝者から処女性を堅く守り、悪魔の僕から体を清く保つにはどうすればよいかと考えを巡らせていた。

そこで、結婚の日が近づくと、ユリアニアは婚約者のエレウシオスに使いを送り、こう告げさせた。

「無駄に結婚の準備をしないでください。あなたがこの国の司教にならない限り、私はあなたと結婚することに同意しないことを知っておいてください。」

聖女は、エレウシオスがその地位に就くことは不可能だと確信し、こうして彼との結婚を回避しようとしたのである。　しかし、彼女への愛に心を奪われたエレウシウスは、執拗に司教の地位を求め始めた。時には熱心な嘆願を、時には豪華な贈り物を、時には有力な取り成し役を通じて、王にその地位を授けてくれるよう懇願したのである。　そして長い時が経ち、多くの財産を費やした後、彼は、たとえ苦労はしたものの、悪魔の助けを借りて、望みを叶えた。というのも、悪魔は聖なる乙女の善意を妨げようと、エレウシウスを助けたからである。エパルフとなった彼は、直ちに婚約者に使いを送り、こう告げさせた。

「喜びなさい、ユリアニアよ。栄光に浴した私を花婿に得たのだから。私は今やエパルヒスなのだ！　さあ、結婚の準備をしなさい。」

ユリアニアは、でっち上げの口実によってエレウシオスの罠を逃れられなかったと悟ると、長い間心に秘めていたことを率直に明かし、使者を通じて彼にこう答えた。

「あなたが司教の地位に就かれたのは喜ばしいことですが、もし私の神にひれ伏さず、私が仕えている主イエス・キリストに仕えないのであれば、結婚相手は他を探してください。あなたは私にはふさわしくありません。なぜなら、私と同じ信仰を告白しない者を夫に望まないからです。」

これを聞いたエレウシウスは、婚約者の態度の変化に驚き、激しく怒った。彼は彼女の父アフリカヌスを呼びつけ、こう問い詰めた。

「なぜ、お前の娘は私たちの神々をも拒み、私を嫌悪するのだ？」

その際、エレウシウスは使者を通じて伝えられた彼女の言葉をすべてアフリカーヌに告げた。

これを聞いたアフリカヌスは、このような予期せぬ事態に戸惑い、驚いた。そして、彼自身もその邪悪な神々を熱心に崇拝していたため、エパルコスと同様にユリアニアに対して激しく怒りを露わにした。家に戻ると、彼はまず穏やかに、父親らしく娘に尋ね始めた。

「教えてくれ、愛しき娘よ、わが目の甘い光よ。なぜあなたは結婚を拒み、エパルフの求婚を断ったのか？」

ユリアニアは、その話など聞く気すらなく、こう答えた。

「やめてください、父上！　私の希望である主イエス・キリストに誓って申し上げますが、エレウシウスは、まず私の信仰を受け入れない限り、私と結婚することはありません。なぜなら、肉体は結ばれていても、精神は分かれており、互いに敵対し合うような結婚など、いったい何の意味があるというのでしょうか？」

すると、ユリアニアの父は怒りに我を忘れ、叫んだ。

「お前は正気を失ったのか、この忌まわしい女よ。それとも苦しみを楽しむのか？」

「キリストのための苦難を愛しています」と、聖なる乙女は答えた。

「偉大なる神々――アポロンとアルテミス[119]　――に誓って」とアフリカヌスは叫び、「お前の体を獣や犬に食わせよう」と言った。

聖女は答えた：

「それなら、なぜ躊躇するのですか！　犬たちを連れて来なさい、獣たちを連れて来なさい。そして、もし可能なら、私にとって一つの死の代わりに多くの死が訪れましょう。なぜなら、私はキリストのために何度も死に、そのたびにキリストから報いを受けることを喜びとするからです。」

そこで父は、狡猾な手段で彼女を自分の望みに従わせようと、怒りを抑え、優しく彼女に語りかけ、自分の言うことを聞かないよう懇願し、説得し始めた。しかし彼女は、善き希望に満ちて、反論し、恐れずにこう言った。

「まさかあなたも、耳がありながら聞こえない、あの耳の聞こえない神々と同じなのでしょうか？　エレウシオスがまず私のキリストを拝むことに同意しない限り、彼とは交わることができないと、私は誓ってあなたに言ったではありませんか？」

これを聞いた父は、彼女を部屋に閉じ込めた。その後、再び彼女を部屋から連れ出し、涙を流しながら優しく慈愛に満ちた言葉で、聖女に神々を崇め、エレウシオスを愛するよう説得し始めた。しかし、気高い乙女は再び叫んだ。

「私は神々に犠牲を捧げず、偶像には拝まず、不敬虔なエレウシオスを愛したりはしない！　ただキリストのみに拝し、キリストを崇め、キリストを愛する！」

すると父は激怒し、ユリアニアを掴んで容赦なく殴り始めた。彼女を地面に投げつけ、髪を掴んで引きずり回し、足で踏みつけた――それは親としての振る舞いではなく、拷問者そのものであり、親としての憐れみを微塵も示さず、激しい怒りと抑えきれない憤りの中で、娘への自然な愛情さえも忘れていた。　そして、彼が疲れ果てるまで彼女を殴り続けたため、その聖なる乙女はかろうじて一命を取り留めた。その後、彼は彼女を婚約者であるエレウシオス司教のもとへ送り返し、彼に彼女を好きにさせることにした。　しかし、彼女に軽蔑されていた彼は、彼女に対して激しい怒りに満ちていた。怒りをむき出しにし、彼女に向かって歯ぎしりしながら、彼女が自分を嫌悪し、愛を拒んだことを、自分にとって大きな不名誉だと考えていた。それゆえ、彼女が自分の手に渡され、彼女に対する権力を得たことを、彼は大いに喜んだ。　そこで彼は（彼は地方総督であったため）、神々を崇拝しなかったという名目で、実際には彼女からの軽蔑に対する復讐として、彼女を公の場で裁こうと企てた。裁判官の席に着くと、彼はキリストの羊である彼女を尋問のために連れてくるよう命じた。

聖処女ユリアニアが、自らの婚約者エレウシオスの前で裁判に臨み、夜明けのようにその美貌を輝かせたとき、皆は彼女の美しさに驚嘆し、一斉に彼女へと視線を向けた。エレウシオスは、　彼女を一瞥しただけで、たちまち心を和らげ、その怒りは愛へと変わった。　当初、彼は彼女に厳しい

[119]　アポロン――古代ギリシャ人やローマ人に最も崇敬された異教の神の一人で、太陽と知性の啓蒙、さらには社会秩序の神、法の守護者、そして未来を予言する神とみなされていた。　アルテミス――別名ダイアナ――は、ギリシャ人にとってよく知られた異教の女神であり、月を体現し、森と狩猟の守護神とされていた。この女神への奉納は、非常に華やかで壮麗に行われた。

言葉を一つもかけることができなかったが、その乙女を自分のものにしたいという欲望に駆られ、穏やかで優しい口調で語りかけ始めた。彼は彼女にこう言った。

「信じてほしい、最も美しい乙女よ。もし私を夫に選んでくれれば、たとえ神々への生贄を捧げることに同意しなくても、君を待ち受けるあらゆる苦しみから解放されるだろう。私は君にそれを強いるつもりはない――ただ、私との結婚に同意してくれればよいのだ。」

それに対し、キリストの花嫁はこう答えた。

「どんな言葉も、どんな苦しみも、死そのものでさえも、あなたがキリスト教徒となり、聖なる洗礼を受けるまでは、私をあなたと結婚させることはできません。」

「愛しい人よ、もし王の怒りを恐れていなければ、私もそうするだろう」とエレウシウスは答えた。「なぜなら、王がこのことを知れば、この高位の地位だけでなく、命までも奪われてしまうからだ。」

聖女は言った。

「もしあなたが、その王――死すべき者であり、一時的な存在であり、肉体には権威を持つが魂には持たない――をそれほど恐れるのなら、私はどうして、すべての王に権威を持ち、あらゆる息吹と魂を支配する不死の王を恐れないでいられましょうか。そして、どうしてその王の敵と夫婦の絆を結ぶことができるというのですか？！」　もしあなたの奴隷の一人が、あなたの敵と親しくなったとしたら、それはあなたにとって喜ばしいことだろうか。それとも、そのことであなたは自分の奴隷に怒りを覚えるだろうか。だから、私を説得できると期待して、自分を欺いたり、空虚な言葉を並べたりしてはならない。　もし望むなら、あなたも私の神に祈りなさい。もしそうしないなら、私を殺し、火の中に投げ込み、傷だらけにし、野獣に引き渡し、どんな苦痛でも与えてください。　しかし、私はあなたの言うことを聞きはしない。あなたは私に忌まわしい存在だからだ。あなたとの結婚は、私にとって悪魔との友情に等しく、あなたとの結婚は、私の目の前に置かれた悪臭を放つ棺桶に他ならない。

これを聞いて、エレウシウスは怒りに燃え上がり、その表情が一変した。というのも、不浄な愛とは、軽蔑され、嫌悪される時にそうなるものだからである。彼はユリアニアを裸にし、手足を縄で縛って十字架のように広げさせ、その後、乾いた腱や枝で残酷に打ち据えるよう命じた。　聖女は六人の兵士によって鞭打たれ、拷問者たちが疲れ果てるまで、長い間その苦痛に耐え続けた。彼女は本来、肉体が弱かったにもかかわらず、勇敢にその苦痛に耐え抜いた。

兵士たちに鞭打ちを止めるよう命じた後、エパルヒはユリアニアにこう言った。

「ユリアニアよ、これはお前の苦しみのはじまりに過ぎない。もし偉大なるアルテミスに犠牲を捧げなければ、比類なきほど大きな苦しみがお前を待っているのだ。」

しかし、殉教者は、依然として彼女を自分の意志に従わせようと望んでいたエレウシアの言葉を聞くよりは、むしろ苦痛に耐えることを選んだ。そしてこう答えた。

「ああ、あなたは実に狂気であり、無分別だ！　なぜまだ私を苦しめないのか？　何を待っているのか？　私は、あなたが私を苦しめる準備ができている以上に、苦しみを受ける覚悟ができているのだ。」

すると、聖女は髪を掴まれて吊るされ、一日のかなりの時間をその状態で過ごしたため、頭の皮膚が体から剥がれ、顔は腫れ上がり、眉は上方に引き上げられてしまった。一方、エレウシオスは彼女への愛ゆえにまだわずかな希望を抱き、優しく彼女に身を惜しむよう説得した。　彼の優しい言葉や懇願が全く効果を挙げなかったとき、彼はさらに激怒し、激しく焼かれた鉄で彼女の脇腹を焼いたり、体の他の部分を火傷させたりするよう命じた。その後、彼女の両手を縛り、鋭い鉄で太ももを貫き、かろうじて息のある状態で彼女を牢獄に放り込んだ。

牢獄の中で、聖ユリアニアは地面に倒れ伏し、神にこう叫んだ。

「主よ、わが神よ、全能にして、力において無敵、御業において強き方よ！　ダニエルを獅子から、フェクラを火と野獣から救われたように、どうか私からこの苦しみを取り除き、私を襲った病から救い出してください！」　私の父も母も私を見捨てましたが、主よ、どうか私から離れないでください。かつて海を渡ったイスラエルの民を守り、その敵を溺れさせたように、今、私をも守ってください。　また、私に立ち向かうエレウシア、そして彼と共に、私の救いを妨げようとするサタンを、打ち砕いてください、無敵の王よ！

ユリアニアがこのように神に祈り、その祈りがまだ彼女の口に留まっているとき、目に見えない敵である悪魔が、光り輝く天使の姿に変身し、目に見える形で彼女の前に現れて言った。

「ほら、ユリアニアよ、あなたは今、激しい苦しみを受けているが、エレウシウスはあなたのために、それよりもさらに激しく、まことに耐え難い苦しみを用意している。あなたが牢獄から連れ出されたら、直ちに神々に生贄を捧げなさい。さもなければ、激しい苦痛にこれ以上耐えられなくなるだろう。」

聖女は尋ねた。

「あなたは誰ですか？」

悪魔は答えた。

「私は天使だ。神はあなたを深く気遣っておられるため、私をあなたの元へ遣わされたのだ。神は、あなたが総督の言うことを聞き、多くの苦しみによってあなたの肉体が滅びることのないよう望んでおられる。主は慈悲深く、苦しめられて弱ったあなたの肉体のゆえに、このことを赦してくださるだろう。」

これを聞いて、殉教者は驚き、戸惑った。現れた者は、外見は天使だが、その言葉は敵のものだとわかったからである。そこで、心の底からため息をつき、目に涙を浮かべて、こう言った。

「わが主よ、宇宙の創造主よ。天の軍勢が唯一あなたを賛美し、多くの悪魔たちが震えおののく方よ！　あなたのために苦しむ私を軽んじないでください。そうすれば、私の敵がいつの日か甘美と苦味を混ぜ合わせ、私に与えてしまうことがないように。教えてください、私にそのような言葉を語ったのは誰ですか？ 自分をあなたのしもべと呼ぶのは誰ですか？

聖女はそう叫ぶと、たちまちその祈りは聞き届けられ、天から声が響いた。

「勇気を出せ、ユリアニアよ！　私はあなたと共にいる！　あなたのもとに来た者については、好きなようにせよ。私はあなたに彼に対する権威と力を与える。そして、彼自身から、彼が誰であり、なぜあなたのところに来たのかを知りなさい。」

その直後、次のような奇跡が起こった。たちまち足枷が解け、彼女の太ももから鉄の鎖が落ちた。すると聖女は、健やかで力強い体で地面から立ち上がった。一方、悪魔は神の力に抑え込まれ、目に見えない鎖で縛られたまま立ち尽くし、逃げることができなかった。　聖なる殉教者は、彼を逃れられない奴隷のように捕らえ、まるで法廷で尋問するかのように、彼が誰であり、どこから来て、誰に遣わされたのかを問い詰め始めた。悪魔は、嘘に満ちていたものの、創造主の苦しめる力に強制され、意に反して真実を語り始めた。

「私は」と彼は言った。「悪魔、闇の最初の君主の一人であり、私の父であるサタンから、あなたを誘惑し、惑わすために遣わされた者だ。なぜなら、私たちはあなたの祈りと、あなたの処女としての貞潔、そして勇敢な忍耐によって、大きな苦しみを受けたからである。」　私は、かつて楽園でエバに、破滅へと導く神の戒めを破るよう唆した者だ。私はカインに、弟のアベルを殺すよう仕向けた。私はネブカドネザルに、デイレの野に金の偶像を建てるよう教えた。私はユダヤ人たちを惑わし、偶像を崇拝させた。　私は、賢明なソロモンを、女性への情欲を煽って狂気に陥らせた。私はヘロデに幼児虐殺を唆し、ユダには師を裏切り、自ら首を吊るよう仕向けた。　私はユダヤ人たちにステファノを石打ちにさせるよう仕向け、ネロにはペトロを逆さ磔にし、パウロを剣で斬り殺すよう仕向けた。

これを聞いた聖ユリアニアは、新たな奇跡を起こした。彼女は悪魔に（神によって縛られていた目に見えない束縛とは別に）さらに束縛と傷を負わせ、縛り上げた上で殴り始めたのである。驚くべきことに、聖女は、形もなく物質的でもない霊を、物質的な束縛で縛り、殴ることができたのだ！なぜなら、悪魔を逃げられないように縛りつけ、目には見えないが実在する痛みをもって懲らしめる神の力が、彼を神の愛する花嫁の支配下に委ねたからである。　そして、悪霊は、まるで神の手から受けるかのように、その乙女の手から苦痛に耐えた。なぜなら、物質的な鞭打ちとともに、悪霊は非物質的な傷も受けたからである――それは、悪魔の奴隷が真に苦しみを受けるものだった。

「ああ、哀れな私よ」と彼は叫んだ。「今、私はどうすればよいのか、どうやって逃げればよいのか？！　私は多くの人々を惑わし、災難に陥れたが、今や私自身も惑わされ、災難に陥ってしまった。私は多くの人々に傷を負わせたが、今や私自身、乙女の手に縛られ、その手で傷つけられている。　多くの人々を自分の奴隷にしたが、今や私自身が捕虜であり奴隷として拘束されている。おお、我が父よ――サタンよ！　なぜ私をここに送ったのか？　処女性ほど強いもの、殉教者の祈りほど堅固なものはないことを、まさか知らなかったというのか?

こうして聖ユリアニアは一晩中悪魔を苦しめ続け、朝になると、司教は、もし彼女が生きているなら、彼女を牢屋から連れ出すよう命じた。　聖女は歩きながら悪魔を引きずり、道端にあった泥の山に投げ込んだ。その後、彼女はエレウシオスの前に現れた。かつての美しさと端正な顔立ちを取り戻し、全身は健康そのもので、まるで何の苦しみも味わったことがないかのようだった。驚いた拷問官は彼女に言った。

「教えてくれ、ユリアニアよ。いつ、どのようにしてそのような魔術を身につけたのか？　そして、どのような術によって、これほど早く傷を癒やし、その痕跡さえも全く見当たらないほどになったのか？」

聖女はこう答えた。

「私はいかなる魔術も知らないが、私を癒したのは、言葉では言い表せない、全能の神の力である。その力は、あなただけでなく、あなたの父であるサタンをも恥じ入らせ、私をあなたたち二人よりもはるかに強くしてくれたのだ。　あなたも、あなたの主である悪魔も、私の足元にいる。なぜなら、私はあなたが仕えているその支配者を縛り上げ、あなたの苦しみなどなかったかのようにしたからだ。　かくして、わがキリストは、この地においてあなたがたの力を滅ぼし、あの世においては、あなたとあなたの父、そしてあなたがたの僕たちのために、永遠の火と恐ろしいタルタロス、漆黒の闇、そして休むことのない虫に満ちた場所を用意しておられる。あなたはまもなくそこへ送られることになる。

すると、拷問官は聖女の口から永遠の火について聞くと、直ちに一時的な大火を準備するよう命じ、炉は激しく燃え上がらせられ、聖女はそこに投げ込まれた。　しかし、彼女は炎の中に無傷で立ち、そこで主に向かって祈りを捧げ、その目から涙を流した――すると突然、そのわずかな涙があたかも二つの大きな泉のようになり、火をすべて消し去った。

ニコメディアの民は皆、この奇跡に深く感銘を受け、キリストを信じるようになったのは、男性約五百人、女性百三十人であった。彼らは皆、まるで口を揃えたかのように、こう叫んだ。

「神はただひとり、殉教者ユリアニアが賛美するお方こそが唯一の神であり、私たちは彼を信じ、異教の偶像崇拝を拒む。　我らはキリスト者である！剣が降りようとも、火が降りようとも、いかなる最も残酷な死が訪れようとも、我らはユリアニアと共に、唯一の真の神のために死ぬ覚悟がある！

彼らがこのように皆に聞こえるよう叫ぶと、総督は直ちに武装した兵士たちを連れてくるよう命じ、信仰を告白した者たちを、見物に集まった群衆から隔離した上で、剣で斬り殺すよう命じた。そしてその命令は実行された。しかし、彼らは皆、喜びをもって剣の下に首を差し出し、自らの血をもって洗礼を受けながら、キリストのために死んでいった。　その後、拷問官は抑えきれない怒りに

燃え、聖女の衣服を剥ぎ取り、激しく沸き立つ大釜に投げ込み、あたかもある種の食物であるかのように長時間煮込むよう命じた。　しかし、この大釜は聖女にとって、まるで労働後の温かい風呂のようであった。なぜなら、それは彼女の体に少しも害を及ぼさず、あたかも洗礼槽のように彼女を清めたからである。主の御使いが彼女のもとへ降りてきて、彼女を無傷のまま守ってくださったからである。　一方、炉からの炎は周囲に立っていた者たちへと襲いかかり、かつてバビロンの炉で起きたのと同じことをした――炎にさらされた者たちは皆、焼き尽くされたのである。その後、大釜は破裂し、殉教者は無傷のままそこから出てきた。人々は驚きながら、まるで高い塔であるかのように彼女を取り囲んだ。実際、聖女の身長は誰よりも高くなっていたからである。

この様子を見て、拷問官は、これまでのあらゆる拷問が目的を果たせなかったため、これ以上何をすべきか途方に暮れた。　その乙女に嘲笑され、恥をかかされたと感じた彼は、自分の髪を引っ張り、顔を引っ掻き、衣服を引き裂き、激しい怒りから、自分の神々に対して多くの冒涜的で侮辱的な言葉を浴びせた――彼らに仕えていながら、たった一人の乙女にさえ打ち勝てなかったと。その後、彼は聖なる殉教者ユリアニアを剣による斬首に処す判決を下した。

一方、聖女によって牢獄に縛られていた悪魔は再び現れ、遠くに立ち（彼はまだ聖殉教者を恐れ、彼女から受けた打撃を覚えていたため）、人間の姿という目に見える形で、彼女の死刑判決を喜び、兵士たちに彼女を早急に捕らえて処刑するよう急かした。　聖なる乙女が威圧的な眼差しで彼を見つめると、彼はたちまち震え上がり、叫んだ。

「ああ、私は悲惨だ！この容赦のない乙女が、また私をその手で捕らえようとしている！」

そう大声で叫ぶと、悪魔は姿を消した。

兵士たちは殉教者を捕らえ、斬首の場へと連行した。聖女は、まるで婚礼に向かうかのように、喜びと歓びに満ちて、婚礼の殿堂へと急いで歩んでいった。　祈りを捧げ終えると、彼女は聖なる頭を剣の下に差し出し、剣によって斬り落とされた。こうして彼女は、愛する花婿――主キリスト――と結ばれた。彼女は、その方のために喜んで苦難に耐えたのである[120]。

当時、何らかの用事でニコメディアに滞在し、ローマへ戻る途中だったソフィアという名のローマ人女性が、キリストの殉教者ユリアニアの遺体を持ち帰った。　それを自宅に持ち帰った彼女は、その後、その殉教者にふさわしい壮麗なユリアニア教会を建立し、その中に彼女の聖遺骨を尊く安置した。

一方、エレウシウスにはまもなく神の裁きが下った。彼が海を航行していたとき、嵐が吹き荒れ、船が難破し、船に乗っていた者たちは皆、溺死した。　エレウシウス自身は――彼にとって大きな災いと苦しみとなるが――溺死を免れ、ある島に漂着したが、そこで犬たちに引き裂かれてしまった。

こうして、不義な者は恥辱のうちに滅び、無実で聖なる処女ユリアニアを殺害したというその行いにふさわしい報いを受けたのである。

これこそが、キリストの花嫁ユリアニアの殉教の偉業であり、その苦難に満ちた最期であった。

彼女は生後9年の時にエレウシウスと婚約したが、18歳の時に自らの血をもって不死の花婿と結ばれ、主のために自らの魂を捧げ、今や天の宮殿において、すべての被造物から永遠に賛美される主キリストと共に喜びを分かち合っている。アーメン。

[120] 聖ユリアニア処女と、彼女と共にいた500人の男性および130人は、304年に殉教した。

コンダク、第3調:

貞潔の美徳によって清められ、苦難の冠を戴いたユリアニエよ、今や、困窮や病に苦しむ者たちに癒やしを与え、あなたの聖遺物箱に近づく者たちに救いを与えてください。キリストは神聖な恵みと永遠の命を注ぎ出しておられるからです。

聖ペトロ、キエフおよび全ロシアの総主教の生涯

記念日：12月21日

聖ペトロ、キエフおよび全ロシアの総主教は、ヴォルィン地方[121] で、敬虔なキリスト教徒の両親[122] のもとで生まれた。 彼がまだ母の胎内にいた頃、ある日曜日の夜明けに、母は次のような幻を見ました。まるで自分が子羊を抱いているかのように思えたのです。その子羊の角の間からは、葉が茂り、多くの実と花を咲かせる木が生えており、その枝の間には、光を放ち、芳香を漂わせる無数の蝋燭が灯っていました。

目を覚ました母は、この不思議な幻に戸惑ったが、その後、主はその幻を成就させ、御自身の賜物をもって息子を豊かにしてくださった。

聖ペトロは生後7歳で聖書の学びに預けられたが、当初は成績が振るわず、両親はそれを大いに嘆いた。しかし、これは彼が人からの知識よりも、神からの知恵をより多く受け取るためであった。そして実際、聖ペトロはそのようにして知恵を得たのである。

ある日、彼は夢の中で、聖職者の装いをしたある男が自分のところにやって来て、こう言うのを見た。

「わが子よ、口を開けなさい！」

ペトロがそうすると、現れた人物は右手で彼の舌に触れ、彼を祝福して、その喉を甘美さで満たした。

目を覚ますと、少年は誰の姿も見えなかったが、心の中に、ある種の甘美さと喜びを感じた。

この時から、聖ペトロは師が教えることを素早く理解するようになり、やがて聖書全体を学び尽くし、学問において同年代の者たちをすべて凌駕した。

ペトロが十二歳になると、彼は生まれ故郷に近い修道院に入り、修道士の一員として受け入れられた。そこで彼は修道院の務めを果たし、厨房へ水や薪を運び、修道士たちの毛皮の衣を洗い、冬も夏も決してその規律を怠らなかった。 彼は誰よりも早く礼拝に参列し、誰よりも遅く帰った。教会では畏敬の念を持って立ち、神の御言葉を熱心に聞き、決して壁にもたれかかることはなかった。また、指導者には常に従順であり、謙遜と沈黙をもって兄弟たちに喜んで仕えた。 修道院長の意向により、彼は助祭に叙階され、 その後、司祭にも叙階された。彼は聖なるイコンを描く術も身につけた[123] 、そして描く際には、心と思いをすべてこの世から遠ざけ、神への思索に満たされながら、徳ある生活に熱心に努めた。

---

[121] ヴォルィーニは、ロシアの南西部にあたる地域である。

[122] 聖ペトロの両親は裕福な人々であり、ボヤール階級、あるいは商人階級に属していたため、聖ペトロは後に自らの資金で修道院を建立することができたのである。

[123] 古代の伝記によれば、聖ペトロはイコン画の技法を極めて熟達し、「奇跡のイコン画家」となった。 その証として、現在もモスクワの大聖母被昇天大聖堂に、彼が描いた二つの聖母イコンが保存されている。「聖母被昇天」と、彼の名にちなんで「ペトロフスカヤ」として広く知られるもう一つのイコンである。

その修道院にかなり長い間滞在した後、修道院長の祝福を得て、聖ペトロはある人里離れた場所へ赴き、ラーテ川沿いに自らの住処を構えた[124]　。そこで彼は、我らの救い主イエス・キリストの名を冠した教会を建て、短期間のうちに多くの修道士たちが彼のもとに集まった。

聖人は慈愛に満ち、悪意がなく、自らを誰よりも末席に位置づけていました。柔和さをもって皆を教え導き、熱心に施しを行い、助けを求める乞食や旅人を決して手ぶらで帰すことはなかったため、その徳高い生き方の評判は公爵の耳にも届きました。そのため、彼はすべての人から敬われ、誰もが彼からの教えを受け入れていました。

その頃、コンスタンティノープルからミトロポリス・マクシムス[125]　がルーシに到来し、民衆に神に献身する教えを説いていた。聖ペトロは、祝福を受けるために兄弟たちと共に彼の元を訪れ、自ら描いた「至聖なる我らの主の母、聖母マリア」のイコンを献上した。　神の聖人は彼と兄弟たちを祝福し、その聖なるイコンを受け取ると、それを大いなる敬意をもって大切に保管した。

しばらくして――聖マクシムが天に召されたとき――あるゲロンティウス[126]　という者が、聖職を横取りし、聖職者の衣、聖衣室、牧者の杖、さらにはペトルが自ら描き、聖マクシムに献上したあのイコンまでも奪い取り、ルーシの総主教になろうと望んでコンスタンティノープルへと向かった。

そこで、ヴォリン地方の公爵[127]　は、聖ペトロに対し――時には自ら懇願し、時にはボヤールたちを通じて説得しながら――キエフ都主教座への叙任を受けるためにコンスタンティノープルへ行くよう提案し始めた。というのも、ゲロンティウスのその厚かましさ、　彼は評議も選出も経ずに、聖職の位を強引に奪い取ろうとしたのである。*「門から入らず、別の所からよじ登った」*（ヨハネ10:1）。

一方、至福のペトロは長い間その申し出を拒み続けていたが、ついに大公やボヤール、聖職者会議に懇願され、旅立った。大公は、ペトロを主教の座に就かせたいという願いを表明する書簡を、至聖なる総主教およびその聖職者会議全体に送った。

ゲロンティウスが海路でコンスタンティノープルへ向かった際、航海は彼にとって不順なものとなった。激しい嵐が吹き荒れ、逆風と高波に見舞われたため、彼は途中でかなりの時間を費やすことになった。一方、聖ペトロにとっては、同じ海上で穏やかな順風が吹き、彼はまるで夢の中を泳ぐかのように海を渡り切った。

ちょうどその頃、ゲロンティウスには、前述の至聖なる御母のイコンが幻として現れ、こう告げた。

「老僧よ、あなたは無駄に労している。あなたが求めている聖職の位は、あなたには与えられないからだ。　しかし、私を描いた者――ラツの修道院長ペトロ――すなわち、わが子であり神である方の奉仕者であり、また私自身の奉仕者である彼は、聖職者の座に就き、わが子である主キリストが、私から受けた御自身の血を流して救われた民を正しく導き、神に喜ばれる生き方をし、　老境に至り、喜びをもって万物の主のもとへ旅立つであろう。

124　この場所は、ガリチ・ヴォルィーニ公国の首都リヴィウの北に位置していた。ラタ川は現在のオーストリア領東ガリチアを流れ、左岸から上流の西ブグ川に合流している。– 救世主（変容）の名に因んで建てられた聖ペトロ修道院は、現在では存在せず、その跡地には、同じく救世主の名を冠した教区教会を持つ村が建っている。

125 ギリシャ出身の聖マクシムは、1283年から1304年までロシア正教会を統率した。

126 ウラジーミル修道院の修道院長の一人。

127　ここで言うのは、もちろんガリツィア＝ヴォルィーニ公ユーリー・リヴォヴィチのことである。彼はゲロンティウスの独断専行に憤慨していたが、それはとりわけ、ヴォルィーニでは、主教座がキエフから遠く離れたウラジーミルへ移されたことに不満を抱く人々が、どこかの南の地に大主教を置きたいと望んでいたからである。とりわけユーリー公は、大主教座がガリチに置かれることを望んでいた。　ユーリー公は強大な権力を持ち、ガリツィア全土を支配しており、さらには「ルーシの王」と称されていた。

ゲロンティウスは恐怖に駆られて目を覚まし、その幻視を皆に語った。

ついに、聖ペトロはコンスタンティノープルにたどり着いた。当時、コンスタンティノープル総主教であったアファナシオスは、その美徳をもって全地総主教座を輝かせていた、素晴らしい人物であった[128] 。 ペトロが総主教のもとを訪れると、教会は芳香に満たされた。天からの啓示を受けた総主教は、その芳香がペトロの到来によるものであると悟り、喜びをもって彼を祝福した。その後、彼の来訪の理由を知った総主教は、聖職者会議を招集し、彼らは慣例に従ってその件を検討した。ペトルは、生まれる前からこの地位に定められていた者として、聖職者としての資格が認められた。

こうして、総主教は神聖な礼拝の最中、この驚くべきペトロを聖職に叙任した[129] 。その際、神の御心に適う者の顔は、叙任の瞬間にこれほどまでに輝き、皆が驚嘆してこう言った。

「まことに、この人は神の御心によって我々のところへ来られたのだ」と語り、皆は霊的な喜びに満たされた。

数日後、ゲロンティオスもコンスタンティノープルに到着し、（本意ではなかったものの）自分に起こったすべてのことを語った。すると総主教は、彼から聖職者の衣、尊いイコン、牧者の杖、そして教会用具を受け取り、それらすべてを真の牧者であるペトロの手に委ねた。

その後、至聖なる総主教は、聖なる祝福されたペトロに長きにわたり十分な教えを授け、彼に祝福を与えた上で、栄誉をもってコンスタンティノープルから送り出した。

聖ペトロは自身の教区に到着すると、すべての人々に平安と祝福を授け、神から託された羊の群れを、ある場所から別の場所へと巡りながら、熱心に教え導いた[130] 。

しかし、悪しき敵はこれを我慢できず、聖ペトロに対して陰謀を企て、ある者たちに彼を聖人として認めないよう唆した。とはいえ、そうした者たちの多くは後に悔い改め、聖人を受け入れ、彼に従うことで、彼から赦しを得た。

しばらくして、狡猾な敵は、トヴェリの司教アンドレイ[131] に聖ペトロへの嫉妬を煽った。アンドレイは、言葉を慎むことなく、この義人について虚偽の噂を広め、多くの虚偽かつ冒涜的な言葉を書き記して、至聖なる総主教アファナシイのもとへ送った。 総主教は驚き、これを信じがたいことだと考えたが、それでも教会の聖職者の一人をロシアの地へ派遣し、そこでペレヤスラヴリの町で公会議が招集された[132] 。 その公会議には、ロストフのシメオン司教、ペチェルスク修道院の院長である聖プロホール、諸公爵、ボヤール、司祭、修道士、そしてその他大勢の人々が参列した。トヴェリのアンドレイ司教が公会議に召喚されると、事件の調査が始まったが、ペトルに対して偽証人たちが立ち上がった際、大混乱が生じた。 悪の張本人は隠れることなく、皆の面前で暴かれた。 アンドレイの悪意と誹謗中傷は暴かれ、その虚偽の誹謗者は皆の前で恥をかかされ、屈辱を味わわされた。一方、聖ペトロは彼に何の害も与えず、赦しを与え、皆に十分な教訓を与えた後、平和のうちに公会議を閉会させた。彼自身は労苦に労苦を重ね、与えられた才能を百倍に増やし、孤児たちの父としての役割を果たした。

---

[128] アファナシイ2世――1303年から1311年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[129] 聖ペトロは、1308年、マクシム大主教の死去から3年後に、全ルーシの大主教に任命された。

[130] 叙任の翌年、聖ペトロ大主教はウラジーミルへ移り住んだ。そこでは、彼の前任者が全ロシア大主教座を置いていた。その後、彼は教区を視察するために旅立った。こうして彼はノヴゴロド、ブリャンスク、その他の都市や地域を訪れた。

[131] トヴェリの主教アンドレイは、リトアニア公爵家の出身であった。彼は大主教の座に就くことを志していた。その高貴な家柄と、南部で選出された大主教に対する一部の人々の不満が、彼に最高位の聖職への夢を抱かせたのである。 その後、彼は主教座から解任され、1323年に、自身が以前に建設したショシェ川（ヴォルガ川の右支流）沿いのボゴロディツキー修道院で死去した。

[132] 公会議は1310年、あるいは1311年初頭に招集された。会場はペレヤスラヴリ・ザレスキー――現在はウラジーミル州の郡庁所在地である。

その頃、セイトという異端者[133] が現れ、キリストの教会と正教の信仰に反する教えを説いた。神の聖人は彼を破門に処し、その悪辣な異端者はまもなく悲惨な最期を遂げた。

その後、神の御心に適う者ペトロは、栄光ある都市モスクワへと到着した。当時、この都市は、あらゆる美徳に満ち、貧者や聖職者に対して慈悲深く、教会を愛し、聖典に親しんでいた、敬虔な大公イオアン・ダニリロヴィチ[134] の支配下にあった。 聖人は彼を深く愛し、他のどの場所よりもその都市で長く暮らすようになった[135] 。彼は敬虔な大公に対し、モスクワに「我らの至聖なる主の母、神の母、永遠の処女マリアの被昇天」に捧げる石造りの教会を建設するよう助言し、次のように説得した。

「わが子よ、もし私の言葉に従い、至聖なる聖母マリアに捧げる教会を建ててくれるなら、あなたは他の公爵たちよりもさらに名声を博し、あなたの街も称賛されるだろう。聖人たちがそこに住み、その手は敵に対して高らかに掲げられ、神はその地で栄光を受け、私の遺骨もここに安置されることになるだろう。」

聖人の助言に従い、公爵は教会の建設に取り掛かった[136] 。教会の礎が据えられると、毎日建設作業が行われ、聖人自らが、工事が途切れることなく進むよう見守っていた。

聖ペトロが安らかにこの世を去る少し前、イオアン・ダニロヴィチ公は次のような夢を見ました。彼の眼前には、頂上が雪に覆われた高い山が現れ、すると突然、雪が溶けて消えてしまいました。公がその印象深い夢を聖人に話すと、聖人はこう言いました。

「高い山はあなた、公爵様であり、雪は私、この世を去り、まもなく永遠の命へと旅立つべき謙虚な者です。」

神の啓示によって自らの死が近いことを予見した神の聖人は、建設中の至聖なる聖母マリア教会の祭壇の近くに、自らの手で墓所を造った。そして墓所が完成したとき、再び神から死に関する啓示が与えられた。 喜びに満ちた聖人は教会へ赴き、神聖な礼拝を執り行い、すべての正教の王や公爵、自身の霊的な息子である敬虔なヨハン公、そしてロシアの地に住むすべての敬虔なキリスト教徒のために祈りを捧げた。その後、彼は故人への追悼の祈りを捧げ、聖体拝領を行った。 教会から戻ると、聖師は聖職者全員を呼び寄せ、慣例に従って訓示を与えた後、彼らを帰した。その頃、聖師は貧者や困窮者、教会、修道院、そして聖職者たちに多くの施しを施していた。 その間、彼の体は急速に衰えていった。臨終の日が訪れると、聖人は当時、街を統治していた（その頃、公爵自身は街にいなかったため）千人隊長ヴェリャミノフを呼び寄せ、こう言った。

---

133 年代記によれば、「セイタ」とは、当時ハン・ウズベクがタタール人の間で熱心に広めていたイスラム教の教師たちを指す言葉として頻繁に使われているが、聖ペトロが当該のセイタに対して「異端者」との宣告と教会からの破門を下したことは、彼がキリスト教徒であり、 キリスト教の教義を著しく歪曲していた人物であり、セイットという名は、彼がイスラム教の特定の思想に傾倒していたことから付けられたものである。 ある情報によれば、セイトはノヴゴロドの大司祭であり、イスラム教特有の官能的な生活への情熱に駆られ、修道者の貞潔に対してこれほどまでに激しく説教したため、多くの修道士が修道生活を捨てて結婚に至ったという。セイトの告発は、聖人が教区を視察していた際にあった。

134 ここで言及されているのは、もちろんモスクワ大公イオアン1世ダニロヴィチ・カリタであり、聖アレクサンドル・ネフスキーの祖父である聖ダニイル（モスクワ公国の創設者）の孫にあたる。彼は1328年から1340年まで統治し、 「カリタ」と名付けられたのは、貧しい人々への愛に溢れ、彼らに施すため、常に金銭を入れた「カリタ」（袋）を携えていたからである。

135 聖ペトロは、神の恵みによって啓示を受け、モスクワの輝かしい未来を予見した。当時はまだ人口の少ない都市であったが、彼はモスクワが分裂し荒廃したロシアの諸地域をその傘下に集めることを見通し、ウラジーミルの代わりに、永遠にモスクワに留まり、そこで埋葬されることを決意した。 こうして、大主教座はウラジーミルからモスクワへと移され、これはモスクワの隆盛と（当時の分領公たちの内紛という状況下における）平和の堅固な基盤、そしてロシアの偉大さにつながるものとなった。

136 すなわち、ウスペンスキー大聖堂は、後に大公イオアン3世ヴァシリエヴィチの治世下でその跡地に建設され、現在の姿で現存する大聖堂であり、1470年に奉献された。

「ほら、わが子よ、私はこの世を去ろうとしている。私の最愛の息子であるイオアン公とその子孫には、永遠に神の慈しみと平安、そして祝福を残しておく。」

その後、その他の手配も済ませた聖ペトロは、教会の建設を完成させるために、金入りの袋を彼に手渡した。すべての人に平安を授けた後、彼は晩課を唱え始め、まだ祈りの言葉が口をついて出ている最中に、自ら両手を神に向けて挙げたその瞬間、その魂は主のもとへと旅立った[137]。

公爵は聖人の帰天の報を聞くと、悲しみに暮れてすべてのボヤールたちと共に急いで街へと向かい、民衆は皆、彼の帰天を嘆き悲しんだ。その尊い遺体を寝台に安置すると、慣例に従って教会へと運ばれた[138]。

その時、ある不信仰に囚われた男が、正教徒の群衆の中に混じって聖人の遺体のそばに近づき、心の中で彼を侮辱し始め、こう考えた。

「この死者は一体誰なのか。公爵自らが、これほど多くの民衆を率いて見送っているが、なぜ彼にこれほどの栄誉が与えられているのか？」

そう考えた瞬間、彼は聖人が棺の上に座り、墓所へ運ばれるまでの間ずっと、左右の民衆に祝福を与え続けている姿を目撃した。そこでその男は、この神の御使いの聖性を信じ、見たことを民衆に語った。　聖ペトロの聖遺骨を教会へ運び、彼自身が用意した石造りの墓に安置した。そこでは今日に至るまで聖遺骨が眠り続け、信仰をもって訪れる人々に様々な奇跡をもたらしている。　ある若者は、生まれつき両手が弛緩して全く動かせず、口元に手を運ぶことさえできなかった。彼はこの聖人の墓を訪れ、涙ながらに祈ると、たちまち両手が力強くなり、健康を取り戻した。また、聖人はある身が曲がった者を癒やし、耳の聞こえない者に聴力を授けた。　また、長年盲目であったある人は、ここに来て祈ると、突然目が見えるようになった。他にも多くの恵みが、今日に至るまで、聖ペトロの尊い聖遺骸に信仰をもって訪れる者たちに奇跡的に注がれている——三位一体において賛美される神の栄光と誉れのために、永遠に。アーメン。

トロパリオ、第4声：

かつて不毛の地であったよ、今や喜び躍れ。まことに、キリストはあなたの中に灯火を示され、世に輝き、我らの病と苦しみとを癒やしてくださるからである。キリストのゆえに、大胆に喜び、歓喜せよ。まことに、聖人は至高者の御業を成し遂げる者である。

別のトロパリオ、第8調：

最も祝福された都モスクワよ、喜び躍れ。その中に、太陽の暁のごとく、全ロシアを奇跡の光で照らす司教ペトロを擁しているのだから。彼は病を癒やし、彼に叫び求める者たちから、闇のごと

---

[137] 聖ペトロ大主教は1326年12月21日に逝去した。

[138] 聖ペトロ大主教の聖遺骨は、彼が着工したが未完成だった聖母被昇天教会に安置され、同教会は翌1327年に完成し、奉献された。　トクタミシュの侵攻の際、タタール人は聖ペトル大主教の墓所を、そこに財宝があると思い込んで荒らした。その際、聖母被昇天大聖堂も壊滅的な火災に見舞われた。　1471年、旧聖母被昇天大聖堂が取り壊され、新しい大聖堂の建設が始まった際、招集された聖公会は聖人の遺骸を取り出すことを決定した。その棺は火災により破壊されていたが、神の御心に適う聖人の遺骸は、無傷のまま保存されていた。　聖遺骨の移送が執り行われ、これを記念して、8月24日にこの移送を祝う祝日が定められた。　モスクワの初代主教の聖遺体は当初、公開されていたが、貴重な銀製の聖遺物箱を略奪したポーランド軍の侵攻後、密かに安置され、1812年までその状態が続いた。この年、ナポレオンは、おそらくトフタミシュと同じ意図で、聖人の墓を開けた。　フランス軍がモスクワから撤退した後、モスクワ大司教アウグスティヌスは、大主教ペトロの朽ちることのない聖遺体を厳かに公開し、1813年8月30日の聖母被昇天大聖堂の奉献式に際しては、聖遺体が大聖堂の周囲を巡行された。聖ペトロからは、回勅のような形式をとった二つの教訓が残されている。

く病を追い払う。至高の神の司教よ、喜びなさい。あなたによって、あなたの羊の群れにこの光がもたらされるのだから。

コンダク、第8調:

わが地の選ばれし、驚くべき奇跡行者よ、今日、あなたへの愛をもって駆け寄り、神を宿す者への賛歌を紡ぎます。主への大胆さをもって、私たちを様々な苦境から救い出してください。そうして、あなたにこう呼びかけましょう。「わが都の守護者よ、喜びなさい。」

聖殉教者テミストクレスの記念日

記念日：12月21日

聖テミストクレスはデキア王の治世に生き、リキアのミラという町で羊飼いをしていた[139] 。当時、地元の地方総督アスクレピオスは王の命によりキリスト教徒への迫害を開始し、とりわけ聖ディオスコリデス[140] を探していたが、彼は身を隠して山へ逃れていた。 にディオスコリドスを捜索するために派遣された一行は、羊を放牧していたテミストクレスに出くわし、ディオスコリドスの行方を尋ねたが、彼は隠れている人物のことを明かさず、こう言った。

「ここには誰もいない！」

しかし、自らをキリスト教徒だと名乗り、彼らの前でキリストを告白したことで、テミストクレスは地域の統治者アスクレピオスの元へ連行された。 領主は彼を殴打するよう命じ、聖人は腹部を殴打され、腹が破裂するほどに傷つけられた後、木に吊るされた。その後、木から降ろされた殉教者は、鋭い棘のついた鉄の柵の上を引きずられ、全身が傷だらけになり、切り刻まれた。こうして彼は神に息を引き取った[141] 。

1月4日

12月22日（旧暦）

聖大殉教者アナスタシア・ウゾレシテリツァ、その師クリソゴン、フェオドティア、および彼女と共に殉教した者たちの殉教

記念日12月22日

聖アナスタシアは、名高い都市ローマで生まれた。彼女は気高さと、心と体の美しさ、善良な気質、そして柔和さによって際立っていた。彼女の父プレテクスタトゥスは元老院議員であり、ギリシャの異教を信仰していた。一方、母ファウスタはキリストを信じていた。 少女時代、アナスタシアは母によって、学識で知られ、とりわけその敬虔さで名高いある立派な男性のもとで教育を受けるよう託された。その名はクリソゴンであった。彼はキリスト教徒であり、キリストの神聖な教えをよ

---

[139] リキア――小アジア南部の沿岸地域――は、かつてパンフィリア総督府の一部であった。テオドシウス帝がこれをパンフィリアから分離し、その首都はミリアとなった。395年以降、リキアはビザンツ帝国の領土となり、6世紀からはイスラム教徒の支配下にある。

[140] 聖ディオスコリドスの記念日は、同じく12月21日である。

[141] 聖テミストクレスは251年に逝去した。

く知っており、後に殉教者となった。この聖なる男性から、アナスタシアは単に読み書きを学んだだけでなく、　彼女はまた、目に見えるものも見えないものすべての源であり、心からの敬虔な願いのすべてが向かう目標であり、唯一の真の神、万物の創造主であり完成者である御方を知ることを学んだ。そして彼女は熱心にキリスト教の書物を読み、昼夜を問わず主の律法に学び、神への愛をもって心を堅くした。

アナスタシアがクリソゴンのもとでの学びを終えると、人々は彼女を賢く美しい乙女として、満場一致で称賛するようになった。

その間、アナスタシアの祝福された母ファウスタはこの世を去った。一方、聖人の父は彼女の望みに反して、同じく元老院議員の家系に生まれ、ギリシャの信仰を奉じていたあるポンプリウスという男に彼女を嫁がせた。こうしてアナスタシアは、不信仰な男のもとへと連れ去られ、忠実な者が不実な者に、キリストの羊が狼に引き渡されたのである。　しかし、彼女の嗚咽が天に届き、昼夜を問わず祈りを捧げていた神は、彼女を守ってくださった。聖女は処女性を失うことなく、不潔な夫も彼女の清らかな体を穢すことはなかった。アナスタシアは、自分には慢性で治癒不可能な女性の病があるふりをし、夫の妻になることはできないと語った。　時折、夫は力ずくで、もみ合いの末に、彼女から自分の情欲を満たそうと試みたが、アナスタシアは守護天使の見えない助けにより、彼の手から逃れ、こうして彼女は清らかな処女のままでいた。

しばしば、豪華な衣装や高価な装飾品を脱ぎ捨て、密かに乞食のようなぼろ服を身にまとい、アナスタシアは家を出た。彼女に常に付き添っていた一人の女奴隷を除き、誰にも知られずに。　アナスタシアはこの女奴隷と共に、すべての牢獄を巡り、金で看守から中に入る許可を買って、キリストのために苦しむ人々を訪ね、できる限り敬虔さと熱意をもって彼らに仕えた。　彼女は囚人たちの手や足を洗い、汚れで絡まった髪を梳かし、血を拭き取り、傷口を清潔な布で包み、一人ひとりに食べ物と飲み物を差し出した。そして、十分に奉仕を終えると、家へと戻った。

こうした活動のため、彼女はしばしば家を出なければならず、そのことは夫の目に隠れることはなかった。夫はアナスタシアが囚人たちを訪ねていることを知り、彼女に対してさらに激怒した。もともと、彼女が夫との夫婦生活を拒んだことに苛立っていたため、そのことで彼女をひどく責めていたのだ。　そして、アナスタシアの活動については、彼女に付き添っていた女奴隷から知ることになった。その裏切り者の女が、すべてを彼に話してしまったのである。

アナスタシアを激しく殴打した後、その不法な夫は聖女を別の部屋に閉じ込め、看守を付け、彼女が部屋から出られないようにした。　聖女は、キリストのために投獄されている人々のことを思い、彼らを訪ねたり、奉仕したり、必要なものを届けたりできないことを深く嘆いていた。とりわけ、アナスタシアの心は、彼女の師である聖クリソゴンに会えないことで痛んでいた。

聖クリソゴンは、すでに二年間、牢獄に囚われ、さまざまな苦難に耐え続けていた。自由の身だった頃、アナスタシアは頻繁に彼を訪ねていた。しかし今、監禁され、厳重な監視下に置かれているため、彼女は師を訪ねることができなかった。

この敬虔な妻の父であるプレテクスタトゥスが亡くなると、夫はアナスタシアを特に厳しく弾圧するようになった。プレテクスタトゥスの莫大な財産はすべて、彼には他に子供も親族もいなかったため、唯一の娘であるアナスタシアに相続されたのである。　そこでポンプリウスは、義父の死を機に、自身の肉欲的な欲望に同意しなかったことへの憎しみから、アナスタシアを殺害し、彼女の全財産を相続して、他人の金で別の妻と暮らすことを企てた。彼は聖女を囚人や奴隷のように扱い、日々彼女を拷問し、苦しめた。　これは、彼女が密かにクリソゴンに書き、ある老女を通じて送った手紙から知られている。その手紙は次の通りである。「キリストの聖なる殉教者クリソゴンへ、アナスタシアより。私の父は偶像崇拝者だったが、母ファウスタは常に清く敬虔なキリスト教徒としての生活を送っていた。　そして母は、私がまだ赤ん坊の頃から、私をキリスト教徒として育ててくれました。母の死後、私は異教徒との結婚という重い重荷を背負うことになりました。しかし、神が私に憐

れみをお示しくださったおかげで、私は病気のふりをして彼の寝床をうまく避け、今では昼も夜も、私の主イエス・キリストの御足にすがりついています。　一方、私の夫は、不届きで卑劣な偶像崇拝者たちと共に私の遺産を浪費し、あたかも自分のものであるかのように私の富を誇示している。そして、私を魔女であり、彼の異教の信仰に敵対する者として、あまりにも過酷な監禁状態に追い込み、私には主の御許に魂を委ね、死んで倒れることしか残されていない。　もちろん、主のために苦しみ、主を告白して死ぬことは喜ばしいことですが、神に捧げることを誓った私のすべての富が、不義で神に背く者たちの手によって浪費されていくのを見ることに、私は深く悲しんでいます。　それゆえ、神の御使いよ、どうか主キリストに熱心に祈ってください。もし主が、私の夫がいつか信仰を持つことを知っておられるなら、彼を生かしておいてくださるように。あるいは、もし彼がずっと不信仰のままであるならば、彼をこの世から去らせ、神を敬う者たちにその場所を譲らせるように。　彼にとっては、神の御子を告白せず、御子を告白する者たちの妨げとなるよりは、死んだほうがましです。私はキリストを証人として呼び求めます。もし私が自由の身となれば、聖徒たちに仕えることに生涯を捧げ、すでにそうし始めているように、彼らを熱心に世話するでしょう……神の御使いよ、どうかご無事でいてください。そして、私を憐れんでください」。　この手紙に対し、聖アナスタシアには次のような返事が届いた。「クリソゴンからアナスタシアへ。この世の嵐や動揺に翻弄されているあなたのもとへ、まもなく水の上を歩まれるキリストが来られ、そのただ一言で、あなたに向かって吹き荒れる敵の誹謗中傷の風を鎮めてくださるでしょう。　荒れ狂う海のただ中にあって、あなたのもとに来られるキリストを辛抱強く待ち望み、預言者の言葉をもって絶えず叫び求めなさい。*『わが魂よ、なぜ落胆し、なぜ動揺するのか。神に望みを置け。わたしはなお、わが救い主、わが神を賛美するであろう』*（詩篇41:6）。神からの二倍の報いを待ち望みなさい。なぜなら、あなたにはこの世の遺産が返され、天の遺産が与えられるからです。主は、私たちが安逸の中でうたた寝しないように、時として悪を許し、御恵みを遅らせられるのです。敬虔に生きる人々に災いが降りかかるのを見ても、動揺してはなりません。　主はあなたを拒絶されているのではなく、試みられているのです。また、聖書の言葉にあるように、*「人に頼る者はのろわれ、主に頼る者は祝福される」*（エレミヤ書17:5,7）と、人の手による守りは永続しないことを知ってください。すべての罪からしっかりと、そして力強く身を守り、唯一の神に慰めを求め、その聖なる戒めを守り続けなさい。まもなく、あなたに平和な日々が戻ってくるでしょう。　夜の闇の後に光り輝く日が差し込み、厳しい冬の後に暖かい春が訪れるように、あなたのもとにも黄金に輝く晴れやかな日々が訪れるでしょう。その時、あなたはキリストの御名のために苦しむすべての人々に一時的な慰めを与え、ご自身も間違いなく永遠の至福に与かることでしょう……主よ、あなたを救い、私のために祈ってください」。

まもなく、アナスタシアは、容赦のない不信心な夫から新たな死に至るほどの侮辱を受けることとなり、彼女は再び聖クリソゴンに手紙を書いた。その手紙には次のように書かれていた：「キリストの殉教者クリソゴンへ、アナスタシアより。私を覚えて、私のために祈ってください。私がその愛ゆえに耐えている苦しみ――それはあなたのもとへ遣わされた老女があなたに語るでしょう――について、主が私の魂を受け入れてくださいますように」。

聖人は彼女にこう返答した。「クリソゴンからアナスタシアへ。光には常に闇が先行し、病の後はしばしば健康が戻り、死の後は私たちに命が約束されている。　幸福な者にも苦しむ者にも、すべての人に同じ結末が待っている。それは、悲しむ者たちが絶望に囚われることのないように、また喜びに浸る者たちが驕りに陥ることのないようにするためである。私たちの命という小舟が旅立つのは一つの海であり、私たちの魂はただ一人の舵取りのもとで航海を続けるのだ。　ある者の船はより頑丈で、荒波を無傷で通り抜けるが、他の者の船は脆弱な小舟であり、凪のときでさえ沈没寸前である。救いの港へたどり着こうとしない者たちの滅びの時が近づいている。　そして、キリストの清き奉仕者よ、全き思いをキリストの十字架に注ぎ、主の御業に備えよ。あなたが自らの望みをもってキ

リストに仕えるとき、苦しみから勝利のうちにキリストのもとへ、至福の生活へと移り行くであろう」。

この手紙によって、聖クリソゴンは、彼女の残酷な夫ポンプリウスの差し迫った死を予言した。そして実際、ポンプリウスはまもなく、ペルシャ王への使節としてペルシャへ派遣された。旅立つにあたり、彼は海を渡らなければならなかった。　彼が乗っていた船は、突如として吹き荒れた嵐の中で沈没し、彼は溺死した。こうして、この忌まわしい男は命を落とした。一方、聖アナスタシアは処女性を守り抜き、まるで鳥が猟師の網から逃れるかのように自由を取り戻した。自由とともに、彼女は両親から残された全財産も受け継いだ。　そして彼女は、もはや誰からも妨げられることなく、牢獄に閉じ込められた者たちを訪ね回るようになった。彼女は、自分の財産だけでなく、キリストの聖なる殉教者たちにも奉仕した。それと同時に、彼らを慰め、賢明な言葉をもって、キリストのために勇敢に耐え忍び、恐れずに死を迎えるよう励ました。

当時、ディオクレティアヌス帝はアクイレイアに滞在しており[142]　、一人のキリスト教徒も密かに自分の手から逃れることができないよう、全力を注いでいた。　ローマから、牢獄が膨大な数のキリスト教徒で溢れ、彼らは様々な拷問にもかかわらず、自らのキリストを否定せず、そのすべてにおいて、彼らが従順であり、その教えにすべて従っているキリスト教の教師クリソゴンに支えられているという報告が彼のもとに届いた。　王は、すべてのキリスト教徒を拷問にかけ、処刑するよう命じ、クリソゴンを自分の元へ送るよう命じた。王は、もし彼の頑なさを打ち負かせれば、他のキリスト教徒たちも容易に屈服させられるだろうと考えていた。

クリソゴノスが試練を受けるために王のもとへ連行される際、アナスタシアも遠くから師の後を追っていた。

その聖なる人物を目にした王は、まず彼と語り合いを始め、穏やかにキリストを捨てるよう説得した。

「クリソゴンよ、私の良き助言を受け入れよ」と、不義の支配者は言った。「我々の信仰に加わり、神々に喜ばれる行いをし、悲しみではなく喜びを、無益なものではなく有益なものを選びなさい。　そうすれば、お前は苦しみから解放され、切望していた自由を手に入れるだけでなく、さらに、偉大なる都市ローマの統治者となるのだ。

聖人はこれに対し、こう答えた。

「私は唯一の神を知った。その方は私にとって、いかなる光よりも尊く、いかなる自由よりも切望すべきものである。その方は私にとって、人生そのものよりも尊く、あらゆる宝物よりも有益である。私は心からその方だけを信じ、口でその方を告白し、魂でその方を崇め、万人の目の前でその方の前にひざまずく。　しかし、悪霊が宿るあなたの多くの神々を崇めることはしない。私は彼らについて、ソクラテス[143] が語ったのと同じように考えている。「あらゆる手段を尽くして 彼らから遠ざからなければならない。なぜなら、彼らは人々を誘惑し、周知の魂の殺し屋だからだ」。そして、あなたが私に差し出す贈り物や栄誉は、夢や闇以上に価値があるとは思わない。

142　アクイレイアは、ローマの植民地から発展した、北イタリアの都市である。ナティソン川沿いに位置し、アドリア海からそれほど遠くない場所にあった。成立後まもなく、アクイレイアは大きな商業都市となり、北や東方の諸国、そしてアドリア海周辺へと続く軍用道路がここを通っていた。　帝国時代、この地はイタリアの玄関口として機能していたため、しばしば軍隊がここに集結した。その後、この都市は野蛮な民族であるフン族によって完全に破壊され、住民の一部はポー川のラグーン地帯へ逃れ、そこでヴェネチアの建都に加わった。

143　ソクラテスは、紀元前5世紀から4世紀初頭にかけてアテネに生きた古代ギリシャの賢人・哲学者である。同時代の人々を遥かに凌駕する高邁な世界観で知られていた。　ちなみに、彼は多くの異教の神々を信じず、一神教徒、すなわち唯一の神のみが存在すると主張していた。このため、ソクラテスは不敬罪で告発され、その罪に加え、若者を堕落させたという（不当な）容疑もかけられ、毒殺による死刑を宣告された。　紀元前399年5月、ソクラテスは毒杯を飲み干し、弟子や崇拝者たちに囲まれて息を引き取った。この哲学者の弟子の中で最も有名なのはプラトンであり、彼は師と同様に一神教徒であった。

王は、クリソゴンのこのような自由奔放な言葉をこれ以上聞くことができず、兵士たちに彼を捕らえさせ、人里離れた場所へ連れて行き、首を刎ねるよう命じた。 聖人の遺体は、[144] の海岸に投げ捨てられた。そこは、聖なる生活を送る長老ゾイロスと、肉と魂において姉妹である三人の乙女——アガピア、ヒオニア、イリーナ——の住居からそう遠くない場所であった。 この長老は、神からの啓示によって聖クリソゴンの遺体の在り処を知り、切り落とされた頭部と共にそれを回収し、聖櫃に納めて自宅に隠した[145] 。そして三十日が過ぎたとき、聖クリソゴンが幻の中で彼に現れ、こう言った。

「知れ、これから9日間のうちに、あなたの近くに住む三人のキリストの乙女たちが殉教の苦難に遭うことになる。あなたは主のしもべアナスタシアに、彼女たちが殉教の冠を授かるまで、彼女たちを世話し、勇気の業へと奮い立たせるよう伝えなさい。 あなたもまた、自らの労苦の甘美な実を享受できると、堅く希望を抱きなさい。まもなくあなたもこの世の生活から解放され、キリストのために苦難を受けた者たちと共に、キリストのもとへ導かれるだろう。

聖アナスタシアにも同様の啓示がありました。そして、神の御霊に導かれて、彼女はかつて会ったことのない長老の家を訪れ、彼にこう尋ねました。

「あの乙女たちはどこにいるのですか。彼女たちの殉教の死が、幻の中で彼に示されたのです。」

その後、彼女たちの居場所を知ると、彼女たちはその場所へ向かい、一晩を共に過ごし、神への愛と魂の救いについて語り合った。そして、その言葉をもって、彼女たちがキリスト、すなわち彼女たちの花婿のために、血を流すまで勇敢に立ち向かうよう力強く励ました。 また、ゾイロス長老のもとで、彼女はキリストの聖殉教者クリソゴンの聖遺骨——彼女にとって愛すべき師のそれ——を目にし、その前に温かい涙を流して深く嘆き、自らの魂を彼の祈りに委ねた。その後、彼女はアクイレイアへと戻った。

その直後、聖クリソゴンが長老ゾイルに告げた予言が成就した。この長老は九日が過ぎると主のもとへ召され、聖女アガピア、ヒオニア、イリナは捕らえられ、ディオクレティアヌス帝のもとへ連行されて尋問を受けた。 王は、時には甘言を、時には脅しを用いて、彼女たちに偶像への生贄を捧げるよう長く説得したが、その目的を達成できず、ついに彼女たちを牢獄に閉じ込めた。

一方、聖アナスタシアは、いつもの習慣に従って囚人たちを訪ね、それらの聖処女たちの元へやって来て、キリストの絶え間ない助けへの信頼と、主の敵に対する輝かしい勝利への希望を彼女たちの心に呼び起こし、慰めた。

その間、王は国政の用事でマケドニアへ赴かなければならなかった[146] 。そのため、聖なる乙女たちは拷問官ドゥルキティウスに預けられた。彼は彼女たちを拷問し苦しめた後、あるコミトであるシシニウス[147] に引き渡し、拷問を任せた。シシニウスは聖アガピアとヒオニアを火の中に投げ込んだ。 そこで彼女たちは神に魂を捧げ、その肉体は火の中にあっても無傷のまま残された。一方、聖イリナはシシニウスの兵士の一人に、強力な弓から放たれた矢で傷つけられ、その後、聖女は息を引き取った。 聖アナスタシアは、彼女たちの清らかな遺体を受け取り、香りのよい白い死装束で包み、敬虔に選ばれた場所に安置し、彼女たちの苦しみを和らげた。

---

144 ここでいうのはもちろんアドリア海であり、これは地中海の一湾であり、イタリアとバルカン半島の間に位置している。

145 その後、聖クリソゴンの聖頭はローマに移され、そこではすでに教皇シマクス（498–514年）の時代に、この殉教者に捧げられた教会が存在し、彼の聖頭がそこに安置されていた。一方、聖人の遺体はヴェネツィアにある。

146 マケドニアとは、エラダ（ギリシャ）の北、アドリア海と群島の間にある国を指していた。現在、この地域にはヨーロッパ・トルコを構成する2つの州がある。1つは東部に位置し、古代の名称であるマケドニアを冠しており、もう1つは西部に位置し、アルバニアと呼ばれている。

147 コミティとは、かつては各州の高官の随行者（側近）を指し、後には皇帝の随行者もそう呼ばれるようになった。

その後、アナスタシアは町から町へ、国から国へと巡り歩き、どこへ行っても束縛されたキリスト教徒たちに奉仕し、自らの資金で囚人たちに食べ物や飲み物、衣服、そして必要なものをすべて届け、病人に医療的援助を施した。　彼女は、過酷な試練にさらされ、肉体が衰弱しているすべての人々にとっての慰めであり、金を使って、長期にわたる厳しい束縛からの解放をもたらした。だからこそ、アナスタシアは「束縛を解く者」と呼ばれたのである。彼女は密かな配慮によって、多くの人々の束縛を解いたからである。　ある者には安らぎをもたらし、またある者には自らの手で治療を施し、　治癒不可能な傷を癒やし、半死半生だった者たちを、その献身的な介護によって蘇らせ、彼らに待ち受ける新たな苦難に立ち向かうための健康と力を与えた。

病者や不幸な人々を助けたいと願って、彼女は医療の技術を学び、自ら負傷者を治療した。彼女は、キリストのために手足を折られたり傷つけられたりして、手も足も動かせない人々を、自分の腕に抱くことを厭わず、自ら彼らの口に食べ物を運び、水を飲ませ、膿を拭き取り、かさぶたに包帯を巻いてあげた。　そして、キリストの最も甘美な御名を告白するために苦しむ人々の姿を通して、キリストご自身に仕えること――それこそが、彼女にとって唯一の喜びであり、楽しみであった。彼女は全力を尽くしてこれに心を配り、あらゆる手段を尽くしてこれを追求し、この業に魂を込めて取り組む中で、自らの生来の弱さを克服し、寛大さと勇気、神と隣人への愛、そして常に神に近き聖なる殉教者たちへの配慮によって際立っていた。彼女はダビデと共にこう語ったのである。　*「神よ、あなたの思いは、私にとってなんと高貴なものでしょう」*（詩編138:17）。

マケドニアに滞在し、そこでいつもの務めに従事していた聖アナスタシアは、ビフィニア地方のニケアという町[148] 出身の、ある非常に若い未亡人テオドティエと知り合った。 夫の死後、彼女は三人の幼い息子たちを残され、マケドニアで暮らし、未亡人としての日々を、キリスト教への熱心な信仰と敬虔な行いの中で過ごしていた。　至福のアナスタシアは、しばしばその未亡人の元を訪れ、彼女をキリストの忠実な僕として愛し、神への至甘き愛について彼女と交わす心温まる会話に慰めを見出していた。その愛ゆえに、多くの聖人たちが自らの魂を捧げたのである。　時が経つにつれ、テオドティアがキリスト教徒であることが知れ渡り、その高潔な未亡人は捕らえられ、尋問のために王のもとに連行された。

彼女がこの不敬虔な法廷に立たされたとき、王を取り巻く者の一人、レウカディウスという男が、彼女の美しさに心を奪われた。彼女は美しく、気品に満ちていたからである。彼は王に、テオドティアを殺さず、自分に嫁がせてほしいと懇願した。　王は、夫がすぐに彼女を偶像崇拝へと改宗させられるだろうと期待して、その申し出を受け入れた。

レウカディオスはテオドティアと子供たちを自分の家に連れ帰り、キリストを捨てて自分の妻になるよう、懇願し、説得し、甘言を弄し、脅しなど、ありとあらゆる手段を尽くした。テオドティアは彼にこう答えた。

「もしあなたが、私の富や財産を欲しがっているがゆえに、私を妻にしようと躍起になっているのなら、私は喜んですべてをあなたに差し出します。どうか、私がキリストのために働くことを許してください。そうすれば、あらゆる富の代わりに、ただキリスト一人を相続することができるのですから。」　もしあなたが私の美しさに惹かれて私を欲し、私を私のキリストから引き離そうとしているのなら、それは不可能なことを目指しているのだと知っておきなさい。なぜなら、私の美しさを醜さに、命を死に変えることの方が、私の心をキリストから引き離し、あなたとの結婚に同意させることよりも容易だからです。

その頃、レウカディオスは、どこかへ旅立つ王に随行しなければならなかった。彼はテオドティアを自宅に残して旅立ち、長い間戻ってこなかった。　一方、フェオドティアは多少ほっとした気持ちで、聖アナスタシアと共に囚人たちの世話をし、病人を癒やし、死者を葬り、生きている者たち

[148] ニカイアは、ビフィニアの近くにあった都市である。

を大いなる功業へと励ました。すると、ディオクレティアヌス帝のもとへ再び、各都市の牢獄がキリスト教徒で溢れかえっており、新たな囚人を収容する場所がないという報告がもたらされた。　そこで、不敬虔な迫害者は、牢獄を空けて他のキリスト教徒を受け入れられるようにするため、すべての囚人を様々な処刑方法で殺害するよう命じた。そのためにある一夜が定められ、その間に、数え切れないほどの殉教者たちが、決して消えることのない光である主キリストのもとへと召された。　ある者は剣によって息を引き取り、ある者は水に溺れ、ある者は火の炉で焼かれ、またある者は生きたまま大地の奥底へと飲み込まれた。深い堀や穴は人々で埋め尽くされ、土や石で覆い隠されたのである。

翌朝、キリストを愛する至福のアナスタシアは、いつもの習慣通り、ある牢獄を訪れたが、高潔な殉教者たちの姿が見当たらず、哀れな叫びと嗚咽で空気を満たした。そこに居合わせた兵士たちが、なぜそんなに泣いているのかと尋ねると、彼女はこう答えた。

「昨日この牢屋にいた私の神の僕たちを探しているのです。今、彼らがどこにいるのか分かりません。」

兵士たちは、彼女がキリスト教徒であることを知ると、直ちに彼女を捕らえ、イリュリア地方の総督フロルス[149]のもとへ連行した。聖女が総督の前に連れて行かれると、総督は彼女に尋ねた。

「お前はキリスト教徒か？」

聖アナスタシアはこう答えました：

「まことに、私はキリスト教徒です。あなたが忌まわしいと思うものは、私にとっては尊いものです。そして、あなたがたにとって恥とされるキリスト教徒という名は、私にとっては名誉であり、誇りです。」

すると、イゲモンはアナスタシアの出身について詳しく尋ね始め、彼女が名門のローマの家系出身であることを知ると、驚いてこう尋ねた。

「何があなたを、あなたの栄光ある故郷であるローマを捨てて、ここへ来るようにさせたのですか？」

聖女は彼にこう答えました。

「他でもない、私を御自身のもとへと呼び寄せられた、私の主の御声です。その御声に従い、私は故郷と友人を後にし、私のキリストの十字架を背負い、元気よく、喜びをもってキリストの後を追って歩んだのです。」

これに対し、イゲモンは言った：

「お前が信じるそのキリストは、どこにいるのだ？」アナスタシアは答えた：

「キリストがおられない場所などありません。キリストは天にも、海にも、地にもおられます。キリストは、御名を呼び求め、御名を畏れるすべての人々の内に宿り、彼らの心を照らし、常に彼らと共にいてくださるのです。」

イゲモンは尋ねた。

「お前の言う、お前のキリストを恐れる人々は、いったいどこにいるのか？　私たちに教えてくれ。そうすれば、彼らを見分けられるだろう。」

聖女は答えた。

「これまで彼らは私たちと共にこの地上にいて、肉体を持って生きていましたが、今はこの世を去り、天にいて、高みから私たちを見守っています。キリストのために受け入れた死が、彼らにこの至福をもたらしたのです。私も彼らの仲間入りをし、彼らと同じ道を歩みたいと願っています。」

---

[149] イリュリアはアドリア海沿岸の東部を占め、北西はサヴァ川、南東はドリナ川に接していた。現在、この地域にはダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、およびアルバニアのごく一部が含まれている。　イリュリアはマケドニアに隣接していたため、マケドニア各地の牢獄に収監された者たちに慈善活動を行っていた聖アナスタシアは、イリュリアの領内にも足を踏み入れることができた。そのため、彼女はイリュリアのイゲモン（総督）のもとに連行されたのである。

イゲモンは、王が彼女のことを知るまでは、この高貴なローマ人女性に対して何も手出しができなかった。そこで彼は、アナスタシアに関するすべての事情を記し、それを特別な報告書としてディオクレティアヌスに送った。ディオクレティアヌスは、アナスタシアの両親や夫、そして彼女自身についても知っていた。　彼女が両親から受け継いだ財産を貧しいキリスト教徒たちのために費やしていることを知ると、皇帝は聖女を自分の元へ連れてくるよう命じ、彼女を目の当たりにすると、自分の神々よりも富を愛していたため、彼女の財産状況について問い詰め始めた。

「父から受け継いだ富はどこにあるのか？」聖女は勇敢にこう答えた。

「もし、私のキリストの僕たちに奉仕するために使える宝物や財産がまだ少しでも残っていたなら、私はキリスト教徒の血を求める者たちの手に身を委ねたりはしなかったでしょう。　しかし今や、私はキリストに捧げるためにすべての財産を使い果たしてしまい、残っているのはこの肉体ただ一つだけである。それゆえ、私はこの肉体さえも、私の神への捧げ物としたいと願っている。

聖女が自由気ままに語り、その勇気を目の当たりにした王は、言葉で彼女を屈服させ、先ほど聞いたばかりの彼女の財産から何かを手に入れるという希望を失った。　彼は、彼女の賢明な言葉によって恥をかかされることを恐れ、これ以上彼女と会話を続けることを避け、彼女を地方長官のもとへ連れて行くよう命じ、こう言った。

「王の威厳として、狂った女と会話するのはふさわしくない。」

地方長官は聖アナスタシアに優しく尋ねた。

「なぜ、あなたの父がそうしていたように、神々に犠牲を捧げようとしないのですか。なぜ神々を見捨てて、キリストを崇拝するのですか。あなたはキリストのことを知らないでしょう。彼はユダヤ人の間で生まれ、彼らによって悪人として殺されたのですから。」

アナスタシアはこう答えた：

「私の家にも、金や銀、銅の神々や女神たちがいました。私は、彼らがただ無為に立ち尽くし、鳥の止まり木や、クモやハエの住処に過ぎないのを見てきました。だから私は、鳥やクモ、ハエが神々や女神たちに与えていた不名誉から彼らを解放するために、彼らを火の中に投げ込んだのです。そして火の中から、彼らは　私のもとへ、金貨、銀貨、銅貨となって現れた。そのお金で、私は多くの飢えた人々を養い、裸の人々に衣服を与え、弱者を助け、困窮している人々の必要を満たした。こうして、何の役にも立たず、ただ無為に立っていたあの神々から、私は多くの人々のために益を引き出したのだ。

その言葉を聞いた地方長官は、激怒して叫んだ。

「お前の不敬な行いなど、聞く耳も持たない。」すると、聖女は微笑みながらこう答えた。

「裁判官よ、あなたの理性を不思議に思うわ。どうして私の行いを『不敬な行い』と呼べるのかしら。　もしあの無機質な偶像たちに、ほんの少しでも感情や力があれば、破壊者たちの手から自らを解放したり、破壊者たちに復讐したり、あるいは少なくとも叫んであなた方に助けを求めたりできたはずではありませんか？　しかし、彼らは自分たちの存在すら知らず、自分に何が起きているのかも分かっていないのです。

聖人の言葉を遮って、裁判官は言った。

「我らの神聖なる王は、あなたに命じられた――余計な話はすべて脇に置き、次の二つのうちいずれかを選ぶのだ。神々への生贄となるか、あるいは惨めな死を遂げるか、のいずれかだ。」

聖女はこれに対し、キリストのために死ぬことは滅びることではなく、永遠の命に入ることを意味すると答えた。

長い議論の末、聖女が断固として譲らないことを悟った地方総督は、そのことを王に報告した。ディオクレティアヌスは激しい怒りに駆られ、聖アナスタシアをどうすべきか考え込んだ。　側近

の一人が皇帝に、彼女をカピトリーノ神殿の祭司ウルピアヌス[150] に引き渡すよう助言した。彼に、キリストを否定するよう説得するか、拷問で強制するか、あるいは従わなければ死刑に処し、もし彼女の死後に財産が残れば、それをカピトリーノ神殿に没収させるというものであった。 この助言は皇帝の意にかなったため、彼は聖アナスタシアを、すべての神々の最高祭司であるウルピアンに引き渡した。

ウルピアンは、脅しよりもお世辞で彼女を説得できると期待し、敬意を込めて彼女を自分の邸宅へ招いた。 長い間、優しく説得した後、彼は彼女に、この世のあらゆる華やかさとあらゆる種類の拷問器具を兼ね備えた、正反対の品々を並べて選択を迫った。一方には宝石、もう一方には両刃のナイフが置かれ、 こちらには、貴重な水晶の装飾が施された金の寝台があり、あちらには、燃える炭で満たされた赤熱した鉄の寝台がある。こちらには、[151] のネックレス、イヤリング、様々な金や真珠の装身具があり、あちらには、足枷、鎖、鉄の束縛がある。 ここには明るい鏡やあらゆる種類の女性の装いがあり、あちらには、肉体を引き裂くために用意された鉄の櫛や槍がある。一方には貴重な衣裳があり、他方には、拷問者が殉教者に負わせた傷を通常、さらに悪化させるために用いた破片や木屑がある。

この狡猾で悪辣な男は、一体なぜこのようなことをしたのか。なぜ彼は、贅沢な品々の向かいに拷問と苦痛の道具を、喜びをもたらすものの向かいに憂鬱を誘うものを、そして心を和ませるものの向かいに恐ろしい品々を並べたのか。それは、キリストの花嫁を、あるもので魅了し、またあるもので脅かすためである。 しかし、彼女は何にも気を留めなかった。彼女は、心を和ませるものを何も望まず、悲しみや落胆を招くものを恐れもせず、そこから逃げようともせず、むしろ女性の装いよりも、拷問の道具を喜んで見つめていた。こうして、その呪われた者には、預言者が語ったことが起こった。*「偽りは自らを欺く」*（詩編36:12）と預言者が語ったことが、この呪われた者に起こったのである。そして、狡猾な祭司は、予感することなく、自らの恥と屈辱となるようすべてを仕組んでしまった。というのも、アナスタシアはその時、キリストに対するさらに大きな勇気と愛を示したため、異教の祭司の狡猾な企ての虚しさと、その欺瞞の無益さが露呈したからである。 彼が聖女にこう言ったとき：

「両側から、好きなものを選んでください」

彼女は、目の前に並べられた贅沢品や宝石類を見渡して、こう言った。

「これらすべては、悪魔よ、あなたと、あなたに仕える者たちのものだ。あなたたちは、これらと共に永遠の滅びへと落ちるだろう。」

そして、鎖や拷問器具に目を向けると、聖アナスタシアはこう述べた。

「これらの物に囲まれてこそ、私は、私の切望する花婿であるキリストにとって、より美しく、より喜ばれる存在となるでしょう。私はこれを選び、あれを拒みます。これは私の最愛の主のために愛し、あれは憎みます。」

そこで司祭は、彼女を憐れみ、彼女が心を変えることをあきらめずに、三日の猶予を与えた。しかし、殉教者は悲しげにこう言った。

---

150 カピトリーノは、カピトリーノの丘に位置するローマの中心的な要塞であり、帝国の最高政府機関が集中していた場所である。ここにはカピトリーノのユピテル神殿があり、これはローマの主要な聖域とみなされ、宗教的および政治的な事柄に関する元老院の会議が頻繁に開かれていた。 この神殿は二度破壊されたが、そのたびに壮麗な姿で再建された。最後に再建されたのは、ドミティアヌス帝の治世下（西暦62年または70年）のことである。異教時代のローマにおいて、カピトリーノのユピテル神殿の大祭司は、国家において多大な敬意と極めて重要な地位を享受していた。

151 モニスタとは、鎖や紐に硬貨を連ねたネックレスのような装身具のことである。 興味深いモニスタの例が、イタリアのラヴェンナにある聖ヴィタリオ教会で発見されている。そこには、女性たちに囲まれたテオドラ皇后を描いたモザイクがあり、すべての女性が、多かれ少なかれ豪華で、数列の装飾からなるモニスタを身につけている。

「なぜ先延ばしにするのですか？　なぜ今すぐ私を苦しめようとしないのですか？　私が今言っていること以外、あなたから聞く言葉はありません。私はあなたの神々に犠牲を捧げず、あなたやあなたの王の意志に従うこともありません。　その代わりに、私が魂を託す、永遠の王であり、唯一の不死の神である私の神に、賛美の捧げ物を捧げます。あなたが脅かす拷問など、私は軽蔑します。なぜなら、永遠の命であるキリスト以外、何も得ようとは望まないからです。

祭司は彼女に尋ねた。

「まさか、あなたもキリストと同じような死を選ぶというのか？」

殉教者は、キリストの死について聞くと、喜びに満たされ、こう言った。

「アーメン、アーメン！　私の王であるキリストよ、私にもそのようにしてください！」

司祭は尋ねた。

「『アーメン』という言葉には、どのような意味があるのですか？」

聖女は答えた：

「あなたには、この言葉『[152]　』を理解することも、口にすることもふさわしくない。分別ある者なら、腐った器に貴重な香油を注ぐようなことはしない。」

そこでウルピアンは、聖アナスタシアをかつての隣人や友人である知人の女性たちの元へ三日間預けるよう命じた。彼女たちが、父なる神々のもとへ戻るよう説得するためである。あの狡猾で不敬虔な女たちは、ありとあらゆることをした！　彼女たちは、この世の美しさと甘美さを思い起こさせながら、アナスタシアにどんな助言を、女性にとってどれほど愛らしく心地よい言葉を囁きかけたことか！しかし、聖女は耳が聞こえないかのように、また口を開かないかのように、一切耳を貸さなかった。　その三日間、彼女は口に食べ物も飲み物も一切摂らなかったが、心の中で絶えず、彼女の花婿であるキリストに呼び求めていた。三日後、大祭司ウルピアンは、聖アナスタシアが信仰の告白において、揺るぎない柱や不動の山のように堅固であることを見て、彼女に拷問を宣告した。　しかし、まずこの呪われた男は、彼女の美しさに心を奪われ、キリストの清らかな鳩を自らの不浄さで汚そうとした。ところが、この不信心者が彼女に触れようとした瞬間、彼は突然目が見えなくなり、恐ろしい痛みが頭を締め付け、狂人のように叫びながら、助けを求めて自らの神々に祈り求めた。　彼は、自分が仕えていた者たちから助けを得られると期待して、偶像の神殿へ運ばれるよう命じたが、助けの代わりに大きな害を受け、命の代わりに死を迎えた。なぜなら、彼はその邪悪な魂を吐き出し、自分の神々のいる場所――すなわち地獄――へと移り住んだからである。この奇跡の噂は多くの人々の間に広まり、聖なる殉教者アナスタシアは自由の身となった。　そこから出た彼女は、前述の霊的な姉妹であるテオドティアのもとへ向かった。テオドティアは依然として、都市長レウカディオスの家に滞在していた。そして、自分が経験したすべての出来事と、神が彼女を通して行い、彼女に御慈悲を示してくださったその奇跡について、詳しく語った。　その直後、ビフィニアからレウカディオスも戻ってきた。彼はまた以前と同じことを繰り返し、相変わらず、時には甘言を、時には脅しを用いて、テオドティアを二つの不義――彼の不敬虔な神々への礼拝と、彼女にとって恥ずかしく憎むべき彼との結婚――へと誘おうとした。　ついに、あらゆる手を尽くしても、アナスタシアがここに留まっている限り何事も成し遂げられないと悟った残忍な男は、さらに激しい怒りに燃え上がった。彼はアナスタシアを拘束して裁判にかけ、フェオドティアとその子供たちを縛り上げたままビフィニアのアンフィパトス・ニキータのもとへ送った[153]　。そして、フェオドティアに関するすべての事情を彼に手紙で伝えた。

---

[152]　「アーメン」はヘブライ語で、「真実である、正しい、そうあれ」という意味である。この言葉は旧約聖書と新約聖書の両方の聖典に頻繁に見られ、一度は、永遠の真理である神の御子ご自身に対しても用いられている（黙示録3:14）。太古の昔から、「アミン」という言葉はキリスト教の礼拝においても用いられてきた。

[153]　アンフィパトとは、最高位の地方長官の称号であり、その支配下には、イゲモンと呼ばれる統治者たちを擁するいくつかの州がありました。

福者テオドティアがこのプロコンスルのもとに連行されたとき、プロコンスルは尋問の際、彼女に拷問をちらつかせた。それに対し、テオドティアの長男で、エヴォドという名の幼い少年が、プロコンスルにこう言った。

「裁判官よ、私たちは、肉体を朽ち果てさせ、魂に不死をもたらす拷問など恐れません。私たちが恐れるのは、魂も肉体も火の地獄で滅ぼすことのできる神なのです。」

裁判官は、そのような言葉を聞くと、その場で、母親の目の前で、少年を血が出るまで鞭で打つよう命じた。　母親はそれを見ながら喜び、神の御言葉で息子を励まし、あらゆる苦しみを勇敢に耐え抜くよう説得した。この拷問の後、フェオドティヤはギルタクという名の恥知らずな男に引き渡され、彼に汚されることとなった。　しかし、その男が貞潔な神のしもべに近づき、彼女に触れようとしたその瞬間、彼女のそばに立っている輝く若者の姿が見えた。その若者は彼を威圧的な眼差しで見据えると、顔面を激しく殴りつけ、男は血まみれになった。　この奇跡をアンフィパトもはっきりと目撃したが、貞潔な者たちの清らかさを守ってくださる神を悟るどころか、彼はさらに狂気に駆られ、これを魔術の仕業だと決めつけた。　彼は炉をできるだけ激しく燃え上がらせ、その中に母親と三人の子供たちを投げ込むよう命じた。そして聖テオドティアは、その胎内に宿した祝福された子らと共に、神に喜ばれる生贄となった。彼女は炎の中で息を引き取った[154]。

その頃、聖アナスタシアはイリュリアの総督のもとで鎖につながれていた。

この男は金に目がなく、アナスタシアが莫大な富を所有していると聞くと、密かに彼女を自分の元へ連れてくるよう命じ、こう言った。

「お前は裕福で、多額の金銭と多くの財産を持っていることを私は知っている。それにもかかわらず、お前はキリスト教の信仰を守っており、そのことも自ら隠そうとはしていない。さあ、お前のキリストの戒めを果たせ。キリストは、あらゆる富を軽んじ、貧しい者となるよう命じているのだ。お前の富を私に譲り渡し、私をお前の財産の相続人にせよ。　そうすれば、君には二重の利益がある。キリストの戒めを果たすことができ、さらに我々の手から解放されて、恐れず、妨げられることなく、自分の神に仕えることができるのだ。

至賢なるアナスタシアは、これに対し賢明にこう答えた。

「福音書には、私の主の御言葉があります。*『あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい。そうすれば、天に宝を持つことになる』*（マタイ19:21）。　誰がそれほど愚かであり、あなたのような金持ちに、貧しい人々に属するものを与えるだろうか？　誰がそれほど分別がなく、贅沢に溺れ、快楽と自己満足に浸っているあなたに、貧しい人々の糧を与えるだろうか？　もし私が、あなたが飢え渇き、裸で病に伏し、牢獄に投げ込まれているのを見たら、その時こそ、私はキリストが私たちに命じられたすべてを、あなたのためにふさわしい形で果たすでしょう。あなたに食べ物を与え、飲み物を与え、服を着せ、訪ねて行き、仕え、助け、必要なものをすべて差し出すのです（マタイ26:34–45）。

イゲモンはこれらの言葉に激怒し、怒りに任せて聖女を薄暗い牢獄に閉じ込め、三十日間飢えさせよと命じた。しかし、彼女は自らの希望である主キリストを糧としていた。主は彼女にとって、甘美な糧であり、苦しみの中での慰めであった。　毎夜、聖殉教者テオドティアが現れ、彼女の心を喜びで満たし、彼女を力づけてくれた。アナスタシアは聖女と多くのことを語り合い、多くのことを尋ねた。その際、彼女はこう尋ねた。

「どうしてあなたは死後、私のところへやってくるのですか？」

テオドティアは、殉教者の魂には神から特別な恵みが与えられており、この世を去った後も、望む人のもとを訪れ、語りかけ、慰めることができるのだと説明した。

---

[154] 聖テオドティアとその息子たちが苦難を受け、殉教した場所は、ビフィニアのニケアという都市であった。

三十日が過ぎたとき、イゲモンは、アナスタシアが飢えで衰弱することなく、健康で顔色も明るく保たれているのを見て、看守たちが彼女に食べ物を渡しているのだと思い込み、激怒した。　ついに、彼は彼女をより堅固な牢獄に閉じ込めるよう命じ、その入り口を自らの印章で封印し、最も忠実な看守を配置して、聖アナスタシアをさらに30日間、飢えと渇きで苦しめた。そして聖殉教者は、この間、昼夜を問わず涙だけを糧とし、神に熱心に祈りを捧げた。　この三十日が過ぎると、イゲモンはアナスタシアを牢屋から連れ出し、彼女の表情が依然として変わっていないのを見て、様々な悪行により死刑を宣告された他の者たちと共に、彼女を死刑に処した。彼ら全員は海に沈められることになっていた。

死刑囚の中には、エウティキアンという名の敬虔な男が一人いた。彼はキリストのために全財産を捨てており、同じ死刑を宣告されていた。　こうして、彼らは全員船に乗せられ、海へと漕ぎ出した。海が深くなったところで、兵士たちは船にいくつかの穴を開け、自分たちはあらかじめ用意されていた小舟に乗り移り、岸へと向かった。　そして、船がもう沈みかけようとしたその時、船に乗っていた者たちは突然、聖なる殉教者テオドティアが帆を操り、船を岸へと導いているのを見た。船はまもなく岸にたどり着いた。　の沈没から救われたのを見たすべての死刑囚たちは驚き、二人のキリスト教徒エウティキアヌスとアナスタシアの足元にひれ伏し、キリストの信仰を授けてくれるよう懇願した。

無傷で岸に上がった彼らは、エウティキアノスとアナスタシアから信仰の教えを受け、洗礼を受けた。溺死から救われ、キリストを信じた人々の総数は百二十名であった。

イゲモンは間もなくこのことを知ると激怒し、彼らを捕らえてあらゆる方法で処刑するよう命じ、殉教者アナスタシアについては四本の柱に縛り付けて火あぶりにするよう命じた。　こうして、祝福された「束縛からの解放者」は、その苦難に満ちた偉業を成し遂げ、肉の束縛から解き放たれ、天の切望された自由へと旅立った[155]　。彼女の尊い遺体は、火にも傷つけられることなく、ある敬虔な女性アポリナリアによってイゲモンの妻から懇願して引き取られ、彼女はそれを自身のブドウ畑に尊厳をもって埋葬した。　やがて、教会への迫害が収まると、彼女は殉教者の墓の上に教会を建立した。

さらに多くの年月が経ち、聖アナスタシアの尊い遺骸は広く称えられるようになった。そこで、それらは大いなる栄誉をもって、統治の都コンスタンティノープルへと移された。それは、この都を守り救うためであり、父と聖霊と共に、唯一の神性において永遠に賛美される、我らの神キリストの栄光のためである。アーメン。

コンダク、第2調:

試練と苦難の中にあり、あなたの聖堂へと駆け寄る者たちは、あなたの中に宿る神聖な恵みから尊い賜物を受け取ります、アナスタシアよ。あなたは常にこの世に癒やしをもたらすからです。

1月5日

12月23日（旧暦）

[155] それは304年頃、12月22日のことでした。

聖なる父ニフォンタ、キプロス司教の生涯

記念日12月23日

尊者ニフォントは、パフラゴニア地方のプラギオン[156]という町出身であり、アガピトという名の著名な人物の息子であった。少年時代、彼はコンスタンティヌス大帝によってコンスタンティノープルからパフラゴニアへ派遣された総督サヴァティオスの元へ預けられた。その総督は、少年の教育のため、自身の副官[157]を伴わせて、コンスタンティノープルにいる妻のもとへ送り出した。少年は総督の邸宅に住んでいた長老ペトロスに師事し、学業に秀でていたため、熱心に学び、優れた成績を収めた。幼い頃のニフォントは、善良で、穏やかで、柔和で、謙虚であり、教会に行くことを好んでいた。しかし、青年期に入ると、彼は悪い仲間たちの影響で少しずつ道を踏み外し始めた。青年たちは、もし神への畏れをもって育てられていなければ、悪い手本に容易に流されてしまうものである。また、大人たちの中でも、善良な者は悪しき者に容易に染まってしまう。それは、*「反抗的な者たちと共にいれば、あなたも堕落する」*（詩篇17:27）と記されているように、大人の中でも善良な者が悪に染まりやすいのであれば、なおさら、本来、善よりも悪に傾きやすい若者たちの間では、この傾向がより顕著である。*「人の心の思いは、幼い頃から悪である」*（創世記8:21）と書かれている通りである。こうして、若きニフォントもまた、怠惰で無為な生活を送り始め、節度なく食べ、酒に溺れるようになり、放蕩な若者たちから無駄話や汚い言葉を覚え、道化師たちの芝居を見に行くようになり、やがては不道徳な行いにまで手を染め、夜通し仲間たちと不法行為にふけり、不浄な罪によって身を汚し、さらに、彼は盗みを働き、誰とでも口論し、喧嘩をするようになり、他の若者たちにとっても誘惑の種となった。なぜなら、彼自身があらゆる不法行為を犯しただけでなく、他の多くの人々をも同じ道へと誘い込んだからである。ニフォントの知人であるヴァシリーという男は、常に彼にこう言っていた。

「哀れなニフォントよ！　お前は肉体は生きているが、魂はすでに死んでおり、人々の間を歩いているのはお前の影に過ぎない。」

しかし、ニフォントはこうした言葉を無視したり、罪を悔やんで泣きじゃくったりしたが、それでも悪しき習慣を改めることなく、まるで海に沈むかのように悪事に溺れていった。そして、自らの救いを完全に絶望して、こう言った。

「私はもう滅びてしまい、悔い改めに立ち返ることはできない――それならせめてここで、この世の快楽を満喫しよう。」

そして悪魔はニフォントの心をこれほどまでに苛立たせ、彼はもはや全く祈ることができなくなってしまった。まるで心に常に石がのしかかっているかのようだったからだ。一方、ニフォントが住んでいたあの婦人は、彼のそのような放蕩な生活を見て、心を痛めながらこう言った。

「ああ、私はなんて不幸なのだろう！　なぜ私にこのような災いが降りかかったのか？」

彼女は何度も彼を諭し、口論し、叱りつけ、殴ったが、彼は改める気配を見せなかった。この話が語られるのは、神の憐れみがどれほど偉大であるかを示すためである。神はその憐れみによって、不適格な者から誠実な者を引き出し、罪人から義人を作り出される――そして、神の愛に勝る罪などないということを示すためである。私たち罪人にとっても、多くの不法に溺れている私たちが絶望することなく、ニフォンのように悔い改めによって改心する手本となるように。なぜなら、彼はいわば罪の器であったが、その後、真の悔い改めによって聖霊の器となったからであり、そのことはこれから続く物語から今まさに知ることになる。

---

[156] 小アジアの北部に位置する。

[157] プロトヴェスティアリウスとは、コンスタンティノープル宮廷における役職の一つである。プロトヴェスティアリウスは、皇帝の衣装（ワードローブ）を総括して監督する役割を担っていた。

ニフォントにはニコディムという友人が一人いました。ある日、ニフォントが彼のところへやって来ると、ニコディムは彼を一目見て愕然とし、驚きながらその顔を見つめました。ニフォントは彼に尋ねました。

「なぜ、まるで見知らぬ人のように、そんな目で見るのか？」

ニコディムはこう答えた

「信じてくれ、兄弟。今ほどお前の姿が恐ろしいと思ったことはない。お前の顔は、エチオピア人のように恐ろしいぞ。」

その言葉を聞いて、若者は恐怖を感じると同時に恥ずかしさも覚え、手で顔を覆い、悲しげにその場を去った。道中、彼は独り言のようにこう呟いた。

– ああ、罪深い私よ！ もしこの世で私の魂も体も黒いのなら、神の裁きの場ではどうなるというのか？ どうすれば神の御前に現れることができるのか？ ああ、不幸な私よ！　今、私の魂はどこにあるのか？　ああ、私は不幸だ！　どうすればよいのか？　まだ悔い改めることはできるのか？　私を悔い改めへと導き、まだ救われることができるかどうか教えてくれる人はいるだろうか？　神の御前でこれほど多くの悪事を働いた私が、どうして神に「私を憐れんでください！」と言えるだろうか？

ニフォントは他にも多くのことを独り言のように呟き、ついに悲しみと疲れを抱えて家に戻った。彼の心の中では、相反する思いが激しく葛藤していた。　善なる思いは彼にこう語りかけた。「夜、神に祈りなさい。神が望まれる通りに、あなたを導いてくださるだろう」。しかし、悪しき思いはこれに反発し、こう言った。「もし祈りのために立ち上がれば、正気を失い、狂人となり、皆があなたを嘲笑するだろう」。

悪魔は彼の心に恐怖を植え付け、その魂を激しく動揺させた。しかし彼は、少し気力を取り戻すと、自分自身にこう言い聞かせた。

「私が放蕩な生活を送っていた時は、何の災いも降りかからなかった。まさか今、神に祈ろうとするこの時に、何か災いが降りかかるというのか？　私にこのようなことを吹き込む、不浄で狡猾な悪魔よ、呪われよ！」

夜、ニフォントはベッドから起き上がり、泣きながら胸を叩き、こう言った。

「かつてはどれほど敬虔に、徳高く生きていたことか。しかし今や、罪に激しく傷つけられて、私は死んでしまった。だが、*『わが神、主よ、私はあなたに望みを置く。私を救ってください。悪魔が、救い手のない時に、獅子のように私の魂を襲い、苦しめることのないように』*（詩編7:3）。」

彼が祈りを捧げながら東の方角を見つめていると、突然、濃い闇が彼を包み込み、近づいてきて、彼を衰弱と病、そして計り知れない恐怖に陥れた。恐怖に駆られたニフォントは寝台に横たわり、自分の罪を嘆き、泣き叫んだ。　朝、彼は教会へ行き、目を上げて聖母マリアのイコンを見つめ、叫び声を上げてこう叫んだ。

「憐れんでください、キリスト教徒の守護者よ、喜びに満ちた清き方よ！　あなたの偉大なる慈悲によって私を助けてください。あなたは悔い改める者たちの拠り所であり、希望なのですから。」

その言葉を聞いたとき、聖母マリアの像は微笑み、その御顔は喜びに満ちていた。ニフォントはこの奇跡を目にして驚き、喜び、心から歓喜し、こう言った。

「ああ、神の愛の深さよ！ 主よ、御前に罪を犯した者たちに対して示される御慈悲は、なんと偉大なのでしょうか！ 主は彼らのために、御自身の聖母マリアをお与えになり、彼女が御大いなる御威光への祈りの仲介者となられるようにされたのです！」

長い祈りの後、愛を込めて聖母マリアのイコンに口づけをすると、彼は外へ出て、心の中でこう呟いた。

「見よ、呪われた魂よ、神は私たちをどれほど愛しておられるか。それなのに、私たち自身は神から逃げている。神は私たちに、御自身の聖母マリアを執り成し手として与えてくださったのに、私たちはこの助け手さえも拒んでいるのだ。」

その後、夢の中で悪魔が彼に現れた。かつて悪事において仲間だった少年のような姿をした悪魔は、まるで深い悲しみに沈んでいるかのように、悲しげに立っていた。ニフォントは彼を見て言った。

「なぜそんなに悲しんでいるのか？」

悪魔は答えた。

「もう三日も前から、お前は友人のニコディモのもとへ行き、堕落してしまった。そのことを私は嘆き、お前が私を軽んじたことを耐えられないのだ。」

するとニフォントは言った。

「なぜ、それがそんなにあなたを悲しませるのか？」

しかし、悪魔は顔を背け、彼に答えようとはしなかった。　その瞬間、ニフォントは目を覚ました。悪魔が自分の悔い改めを悲しんでいるのだと悟ると、彼は急いで起き上がり、教会へ向かった。そして、聖母マリアのイコンに心と目を注ぎ込み、再び聖母が微笑んでいるのを見、心に神聖な甘美さを感じるまで祈り続けた。

ある日、祈りのために教会へ向かう途中、ニフォントは道で乱暴を働いているある男を見かけ、心の中で彼を非難した。神の聖堂に着き、いつものようにイコンを見つめると、彼は突然、怒りと厳しさを帯びた顔で自分から背を向ける聖母マリアの姿を見た。　ニフォントは恐怖に襲われ、目を伏せて心の中でこう呟いた。

「ああ、罪深い私よ！　私にはただ一つの喜びがあった――主の御母よ、あなたの至聖なる御姿である。それさえも今や、その御顔を私から背けている。一体、何のためになのか、私にはわからない！」

その後、心の中で考えを巡らせていると、彼は突然、あの罪人を裁いたことを思い出し、そのために主の母が彼から顔を背けたのだと悟った。大声で泣きながら、彼は言った。

「神よ、この罪深い私をお赦しください。私はあなたの尊厳と権威を横取りし、あなたの裁きに先立って隣人を断罪してしまいました。しかし、主よ、私を憐れんでください。私の魂はあなたに望みを託しています。これからは決して、兄弟を断罪することはありません。」

ニフォントは涙ながらにさらに多くのことを語り、再びイコンに目を向けると、それが相変わらず微笑んでいるのを見た。それ以来、彼は他人を裁くことのないよう、細心の注意を払うようになった。　いつもそうだったのだが、彼が何か罪を犯すと、聖母マリアの像は顔を背け、それによってニフォントは教訓を得て、改心した。

ある日、ニフォントが汲み桶で井戸から水を汲んでいたとき、悪魔が彼を突き飛ばした。彼は両足を滑らせて井戸に落ち、落下する途中で汲み桶につかまり、こう叫んだ。

「御母よ、助けてください！」

するとたちまち、彼は井戸の上にある丸太の上に無傷で立っていた。この時から、聖母マリアが自分を守ってくださっていることを悟ったニフォントは、常にその御名を口にするようになった。その後、彼はキリストの復活祭から四旬節の半ばまでの間、病に伏すことになったが、その病の間、彼はただ次の一言だけを繰り返し口にしていた。

「わが神に栄光あれ、わが助け手である聖母マリアに栄光あれ。」

「半節期」の水曜日の前の月曜日、彼は次のように祈った。

「わが主なる神よ、半節の日に、あなたの聖なる秘跡を拝領させてください。私の魂は、あなたの御体に満たされることを切に願っているからです。」

その後、彼は眠りにつき、次のような幻を見ました：　二人のまばゆいばかりの女性が、香油を運ぶ女性たちのように彼の寝床のそばを通り過ぎた。一人は王の深紅の衣をまとい、オリーブの枝を手にしていた。もう一人は彼女に似ており、その後ろを歩き、ある聖なる物を収めた小さな器と、聖なる油に浸した枝を持っていた。二人は寝床に近づくと、立ち止まった。　すると、王家の深紅の衣をまとった女性が、もう一人の女性にこう言った。

「見てごらん、アナスタシア、この若者は何に苦しんでいるのか？」アナスタシアは彼女にこう答えた[158]：

「お嬢様、彼は自分の節制のない言葉のせいで苦しんでいます。というのも、彼が健康だった頃、その口は決して閉ざされることがなかったからです。今、主は、彼があの世で全世界と共に裁かれることのないよう、彼を懲らしめておられます。神は彼を深く愛しておられ、だからこそ懲らしめておられるのです。お嬢様、もしお望みなら、彼を憐れみ、助けてください。」

王妃は王家の深紅の衣を身にまとい、こう答えた。

– 憐れんであげましょう。ただ、私たちが向かう場所へ彼を連れて行ってください。アナスタシアは彼の手を取り、聖使徒たちの教会へと連れて行った。すると、王妃は彼女にこう言った：

「祭壇で灯っているランプの油を取り、彼の頭から足先まで塗ってあげなさい。」

彼女は油を塗りながら言った。

「ほら、ご見てください、御母様、私はあなたの命令を果たしました。」

王家の深紅の衣をまとった御夫人は微笑んで、こう言った。

「これは、私たちがここに来た目的である慈悲のしるしです。」

そして、手に持っていたオリーブ油の枝をニフォンに渡し、次のように言った。

「よく見て、理解しなさい。この枝は主の恵みによるものです。私がこれをあなたに与えるのは、今や寛大なる神の慈しみがあなたに注がれたからです。さあ、今こそ悪魔たちと戦い、葦や干し草を折るように、容易く彼らを打ち負かしてください。」

ニフォントは彼女の足元にひれ伏し、目を覚ますと、この幻視が聖母マリアの祝福を意味していたことを悟った。彼は即座に回復して床から起き上がり、火曜日には食事を摂り、聖体祭の当日には教会へ赴き、大いなる喜びをもって神の聖体拝領を受けた。　このようにして、神の御加護により、至福のニフォントは以前の罪深い生活を捨て、世俗を離れ、修道士となった。彼は熱心に修行に励み、懸命に労苦し、肉体を死に至らしめ、それを霊に服従させ、涙と厳格な悔い改めの中で日々を過ごした。　彼は、無駄話を慎むことに努め、さらに悪口や中傷を避けるよう心がけ、もし不注意から不適切な言葉や罵倒を口にしてしまった場合は、自分の顔を40回強く叩くことを自らに課した。また時には、口の中に石をくわえ、長い間それを噛みしめながら、こう自分に言い聞かせた。

「不義の者よ、悪口を言うくらいなら、石を噛んだほうがましだ。」

しばしば、小屋に閉じこもり、服を脱いで、何かで全身を激しく打ちつけ、時には傷口から肉片が剥がれ落ちるほどだった。彼はかくも執拗に目に見えない敵と戦ったが、その敵もまた彼と激しい戦いを繰り広げ、あらゆる悪を彼に与え、その不屈の勇気を打ち砕こうと画策していた。　祈りの最中、悪魔は彼の前に現れた――時には目の前で跳ね回る鳥の姿で、時には彼に襲いかかる黒い犬の姿で――彼を怖がらせて祈りを中断させようとしたが、彼は十字を切って悪魔を追い払った。　彼が空腹を感じると、悪魔は様々な魚や肉の料理、そして美味しい食べ物を彼にもたらしたが、そのたびに聖人はこう言った。

「食物は私たちを神に近づけるものではない[159]　――悪魔よ、その食物を自分で食え、あるいは、人々が自分の腹を神とみなす場所へ持って行け。」

---

[158] ここで言うのは、もちろん、12月22日に記念日が祝われる聖殉教者アナスタシア・ウゾレシテリツァのことです

[159] 参照：コリントの信徒への手紙一　8:8。

聖人が目を覚ましているとき、悪魔は彼にうたた寝や深い眠りを誘ったが、聖人はそれに気づくと、杖を手に取り、自分自身を痛めつけながらこう言った。

「私はお前に食べさせ、飲ませてやったのに、お前はさらに眠りたがるのか。さあ、この杖でお前を静めてやる。」

もし彼が肉欲を感じたことがあれば、丸一週間パンを口にせず、肉欲を死滅させるまで飢えと渇きに身をさらした。激しい渇きに襲われた時、彼は水を注ぎ、自分の前に置き、それを見つめながらこう言った。

「この水はなんて美味しいことか！」

それから、口に少し水を含み、舌で味わってから地面に吐き出した。悪魔は、この聖人のような忍耐に耐えきれず、大声で叫んだ。

「お前は私を打ち負かした、ニフォントよ！」

しかし、聖ニフォントは、悪魔たちに対する勝利を自らの功績や節制ではなく、神の力と助けによるものと見なし、こう答えた。

「私ではなく、御自分のしもべたちを守ってくださる私たちの神の力が、あなたを打ち負かしたのだ。」

神は、ニフォントに試練が訪れることを許された。それは、彼が炉の中で金のように試され、主の恵みにふさわしい者と認められるためであった。その試練とは、彼の精神を損なうことであり、悪魔の誘惑によって、それは四年間も続いた。　ある日、ニフォントは夕方から朝まで祈りを捧げていたが、突然、右から左へと駆け抜ける恐ろしい物音を耳にした。　聖人は恐怖に襲われ、この騒音は何なのかと考えた。するとすぐに、悪魔が轟くような咆哮と猛烈な怒りを伴って現れ、聖人にこれほどの恐怖を植え付けたため、彼の精神は曇ってしまった。ようやく我に返り、祈りを捧げ、十字を切ろうとしたその瞬間、悪魔が彼に襲いかかり、こう言った。

「祈りをやめろ。そうすれば、私はお前と戦わない！」

すると、聖人はこう答えた。

「決してお前の言うことなど聞かない、不浄な霊よ。もし神が私を滅ぼせと命じられたのなら、感謝してそれを受け入れる。もしそうでないなら、まもなく神の助けを借りてお前を打ち負かすぞ！」

これに対し、悪魔は言った。

「お前は間違っている、ニフォントよ。神などいない。神はどこにいるというのか？」と。悪魔はそう言い続け、彼の心を惑わせ、曇らせようとした。しかし、聖人はこう答えた。

「悪魔よ、お前は狂人のように語っている。なぜなら、*『狂人は心の中でこう言った。「神などいない』』*（詩篇13:1）と書かれているからだ。」

彼は祈ろうとしたが、できなかった。言葉を口にはしたものの、心は彼の思い通りに動かなかった。聖人は心を乱され、深く嘆いた。それ以来、彼は正気を失い苦しんだ。そして、少し正気を取り戻すと、また悪魔が絶え間なく彼に「神などいない」と言い続けたが、聖人はこう答えた。

「たとえ私が淫行に陥ろうとも、人を殺そうとも、あるいは他のどんな罪を犯そうとも、私のキリストからは決して背を向けはしない。」

すると悪魔は再び彼に言った。

「何をおっしゃるのか。キリストなどいるのか？　キリストなどいない。私だけがすべてを支配し、すべてを治めているのだ。神やキリストがいると、誰があなたに言ったのか？」

「お前は私を惑わすことはできない、闇の権力よ！」と聖人は答えた。「私から離れよ、あらゆる真理の敵よ！」

しかし、悪魔は引き下がらず、聖人の心を曇らせ、「神などいない」と言わせようと、ひたすら彼と戦った。　こうして聖人は四年間、悪魔と戦いながら、自らを祈りに駆り立て続けた。ある日

、祈りの最中に、神は存在するのかと疑念を抱いた彼は、救世主のイコンに目を向け、心の底からため息をつくと、イコンに向かって両手を差し伸べ、こう言った。

「神よ、わが神よ、なぜ私を見捨てられたのですか？[160]　あなたが神であり、あなた以外に何者もいないことを私に知らせてください。そうすれば、私は敵の誘惑に屈することはありません。」

そう言い終えると、彼はイコンに描かれたキリストの御顔が太陽のように輝いているのを見、同時に言葉に尽くせない芳香を嗅ぎ取った。恐怖に駆られて彼は地面に倒れ込み、こう言った。

「主よ、お赦しください。私はあなたを疑い、あなたを試みました。私の神よ、今、私はあなたが唯一の神であり、すべての被造物の創造主であると信じます。」

地面に横たわったまま、彼は頭を回して救い主の像を見つめると、奇跡を目にした。主の像が、まるで生きた人間であるかのように、目と眉を動かしていたのである。ニフォントは叫んだ。

「わが神は祝福され、その栄光ある御名は今、そして永遠に祝福されますように。アーメン！」

その時から、ニフォントには神の恵みが降り注いだ。というのも、彼の試練はすでに四年間続いていたからである。それ以来、彼の顔はいつも明るく陽気な表情を浮かべていたため、ある人々は首をかしげ、こう言った。

「これはどういうことか。長年、不機嫌そうにしてきたのに、今では喜び、陽気になっているのか？」

聖人は悪魔たちに対して勇気を示し、彼らを嘲りながらこう言った。

「神などいないと主張していた者たちは、今どこにいるのか？」そして、絶え間ない祈りによって彼らに打ち勝った。かつての自分の罪について思いを巡らせ、彼は心の中でこう言った。

「さあ、罪深いニフォントよ、教会へ行こう。主の前に私たちの罪を告白しよう。そこには寛大な父が私たちを待っておられる。」

そして彼は教会へと向かった。教会の扉に近づくと、ニフォントは両手を天に掲げ、苦々しい嘆き声を上げて叫んだ。

「主イエス・キリストよ、わが神よ、魂も心も死んだこの私をお受け入れください。悪口を言い、魂も体も汚れたこの罪人をお受け入れください。どうか御顔を背けず、主よ、こうおっしゃらないでください：　『お前が誰か知らないが』などと言わず、私の祈りの声に耳を傾け、私を救ってください。あなたは罪人の死を望んでおられず、あなたが私の声を聞き、私の罪を赦してくださるまで、私はあなたから離れません。」

この祈りの最中、突然、天から激しい音が聞こえ、聖人は歓喜のうちに、雲の中に現れた輝かしい御方の御顔を見ました。そして、かつて放蕩息子の父がそうしたように（ルカ15:20）、その御方が両手を差し伸べて聖人を抱きしめ、首に口づけをしながらこう言われました：

「ここに来てよくやった、わが悲しむ子よ！　私はあなたを思って深く悲しみ、嘆いていた。あなたがいつ――夕べであれ、朝であれ――私のもとに戻ってくるのかと待ちわびて、私の心は燃えるように焦がれていた。今、私は喜び、今、私は歓喜している。あなたが心を尽くして私のもとに戻ってきたのを見て。」

その後、ニフォントはこの出来事を弟子に語り、その際、激しく泣いた。　その後、彼が再び祈っていると、神の天使が現れ、香油で満たされた杯を持って、それを彼の頭上に注いだ。すると、その場所は芳香に満ちた。また、彼が自分の体を打ち、傷を負わせているときにも、天使が降りてきて、彼の周りで香を焚き、その場所に芳香を広げた。

至福のニフォントの霊的な目はこれほどまでに開かれていたため、彼は人間の心の秘密を知り、天使たちと友人のように公然と語り合い、悪魔たちもはっきりと見ることができた。　ある日、聖

[160] 詩篇21:1の表現。

アナスタシア教会から自分の小屋へ帰る途中、彼はある娼婦の家の門のそばで、若者の姿をした天使が悲しげに泣いているのを見かけ、涙の理由を尋ねた。すると天使はこう答えた。

「私は神によって、ある一人の人間を守るために遣わされました。その人は今、この家で娼婦と共に眠り、私をひどく侮辱しています。彼が犯す不法を見過ごすことはできません。神の御姿がどれほどの闇に沈んでいるかを見る時、どうして泣かずにいられましょうか。」

聖人は彼に言った。

「では、なぜ彼を懲らしめて、罪から遠ざけないのか？」

「私にはその力がないのです」と天使は答えた。「彼が罪を犯し始めて以来、彼は悪魔の奴隷となっており、私には彼に対する権威がないからです。神は人間を自由意志を持って創造し、狭い道と広い道を示されたのです。そうして、人間が望む道を進むようにされたのです。」

すると、聖ニフォントは弟子にこう言った。

「淫行の罪ほど忌まわしいものはない。しかし、もし淫行者が悔い改めれば、神はその者を他の不義を行う者たちよりも早く受け入れられるだろう。なぜなら、この罪は悪魔の唆しによって生じる自然の本性そのものであり、この情欲は、熱心な祈り、厳しい断食、そして様々な肉体の自制によって追い払われるからである。」

聖人はまた、悪霊たちが人々の間を彷徨い、非難や中傷、争い、そして様々な苦悩を植え付けることで人々を誘惑している様子も見て取っていた。　ある日、彼は仕事をしている一人の男を見かけた。すると、悪霊がその男のところへやって来て、耳元で囁き始めた。その近くで別の男が働いていたが、悪霊がそこへもやって来て、その男の耳元で囁いた。すると、二人は仕事を放り出して、言い争い始めた。そこで、聖人は立ち上がり、こう言った。

「おお、悪魔の誘惑よ！　いかにして人々の間に敵意をまき散らすことか！」

ある時、虚栄の悪魔が彼に襲いかかり、こう言った。

「お前はこれから奇跡を行い始め、お前の名は全地に広まるだろう。なぜなら、お前は神に喜ばれたからだ。」

すると、その聖人はその悪魔にこう言った。

「待て、私がお前にしるしを見せてやる。」

そして、目の前にある石を見つけると、こう言った。

「石よ、お前に命じる。ここから立ち去り、別の場所へ移れ。」

しかし、石は微動だにしなかった。そこで聖人は悪魔に言った。

「ほら、これがお前の贈り物だ、悪魔め！」

そして、その悪魔の顔に唾を吐きかけ、祈りを捧げると、悪魔はたちまち姿を消した。またある時、ニフォントはある聖職者の後ろを悪魔が付き従い、彼に邪悪で冒涜的な考えを吹き込んでいるのを見た。その男は、悪魔の策略を感じ取ると、頻繁に振り返って悪魔に唾を吐きかけていた。聖人はその悪霊にこう言った。

「悪魔よ、神の僕たちを惑わすのはやめなさい！この魂が滅びの道へ行くことで、お前に何の得があるというのか？」

悪魔は答えた。

「我々には何の得もないが、我々の王と、我々を支配する諸侯たちから、人間と戦うよう命じられているのだ。もし諸侯たちが、我々が人間と戦っていないと知れば、我々は残酷に打ちのめされるのだ。」

またある時、聖人は、歩きながら祈りをささやく一人の修道士を見ました。その口からは炎が噴き出し、天にまで達していました。彼と共に、火の槍を手にした守護天使が歩んでおり、その槍で修道士から悪魔たちを追い払っていました。　キリストの復活祭の前日、聖土曜日（大土曜日）の夕方、ニフォントは人々と共に教会に立っていたところ、使徒たちや多くの聖人たちと共に、聖母マリ

アが教会に現れ、母なる愛を込めて参列者たちを見つめているのを見た。　聖母は、その中から自分の救いを切に願う者を見かけると大変喜び、怠慢な者たちを見ると首を振り、涙を流された。しかし、両手を広げて、すべての人が救いを得られるよう、神に皆のために祈りを捧げられた。　これを見て、聖人は、至聖なる聖母マリアがキリスト教徒を見捨てず、常に彼らを助けてくださっていることに、言葉に尽くせないほどの喜びを感じた。そして、彼女こそが彼自身の助け手であり、守護者でもあったのである。

ある日、ニフォントが眠っているとき、突然、武器を手にした悪魔が現れ、彼を殺そうとして襲いかかった。しかし、神の力によって阻まれた悪魔は、聖人に何の害も与えることができず、歯ぎしりしながらこう言い放って逃げ去った。

「おお、マリアよ！　あなたはいつも、私にとってこの残酷な人間から私を追い払ってしまうのだ！」

聖人は、その言葉によって悲しむ人々を導き、慰める賜物を持っていた。ある兄弟が悲しみに暮れて聖人のもとを訪れ、こう尋ねた。

「父よ、私はどうすればよいのでしょうか？」　邪悪な悪魔たちにひどく悩まされています。食事をしている時も、飲んでいる時も、あるいは祈りを捧げている時も、彼らは私の心に、時には異端を、時には私の主イエス・キリストと、その聖母マリア、そして聖なるイコンに対するひどい冒涜を吹き込みます。いつか天から火が降りてきて、私を生きたまま焼き尽くしてしまうのではないかと恐れています。

聖人は彼にこう答えました。

「兄弟よ、私の助言を受け入れてください。海が荒れ狂うとき、それは波を立て、岩に打ち砕きますが、その波は再び海へと戻ります。悪魔が送り込む邪悪な思いも、人間の魂に同じように作用するのです。もし人がその助言に耳を傾け、それに従えば、悪魔に屈服して滅びた多くの人々と同じように、滅びてしまうでしょう。　しかし、もし誰かが邪悪な思いとの戦いで屈することなく、むしろさらに勇気を奮い起こして悪魔を軽蔑しつつそれに抵抗するなら、悪魔の悪意は悪魔自身に跳ね返り、その人は神から報いを受けるのだ。　そして、わが子よ、耐え忍び、祈りと断食をもって悪魔に抵抗しなさい。そうすれば、悪魔はすぐにあなたから逃げ去るだろう。中傷や怒りには気をつけなさい。それらは何よりも冒涜を招くからだ。

こうして、兄弟に教えを授けた後、彼は彼を平穏のうちに送り出した。尊者には、病を癒す賜物も失われてはいなかった。ある女性が歯痛を訴えて彼の元を訪れ、聖人に癒やしてくれるよう懇願した。彼は彼女にこう言った。

「私たちは罪深く、卑しい人間です。神ご自身があなたに憐れみをお示しにならない限り、あなたを癒すことはできません。」

そう言うと、ニフォントは教会へ行き、祈りを捧げた後、至聖なる聖母マリアのイコンの前にあるランプから油を取り、患部の腫れ全体に患人の顔に塗った。すると、たちまち痛みは消え去り、癒やされたその女性は、神を賛美しながら去っていった。　また、以前彼に食事を届けていた別の女性が病気になり、すでに死の淵に瀕していたとき、彼は祈りによって彼女を癒やし、彼女は健康を取り戻した。　彼は透視の眼で、肉体を離れた人間の魂までも見ることができた。ある時、聖アナスタシア教会で祈りを捧げていた彼は、天を仰ぎ見ると、天が開き、多くの天使たちがいた。その中には地上へ降りてくる者もいれば、人間の魂を天へと運んでいく者もいた。　すると、彼は二人の天使が、ある魂を運んで上へと向かっているのを見ました。彼らが放蕩な徴税人の宿に近づくと、悪魔のような徴税人たちが現れ、怒りを込めてこう言いました。

「これは我々の魂だ。よくもまあ、それを通り過ぎようなどというのか？」

天使たちは答えた。

「その魂に、あなたがたが自分のものだと主張できるような印がどこにあるのか？」

悪魔たちは言った：

「彼女は死ぬまで、自然の罪だけでなく、反自然的な罪までも犯して自らを汚し続けた。さらに、隣人を非難し、悔い改めずに死んだ。これについて、どうお答えになるか？」

「我々は信じない」と天使たちは答えた。「あなたたちにも、あなたたちの父である悪魔にも、この魂の守護天使に尋ねるまでは信じない。」

そこで守護天使に尋ねると、彼はこう言った。

「確かに、この魂は多くの罪を犯しましたが、病に倒れたとき、泣きながら神に自分の罪を告白し始めました。もし神が彼女を赦されたのなら、その理由は神のみがご存知です。神にはその権威があるからです。神の義なる裁きに栄光あれ！」

そこで天使たちは、悪魔たちを恥じ入らせ、その魂を連れて天国の門へと入っていった。

その後、聖人は、天使たちがもう一人の魂を運んでいるのを見ました。すると、悪魔たちが彼らに向かって駆け寄り、叫びました。

「何をするのだ、お前たちは魂を運んでいるが、その正体も知らずに。例えば、この魂――貪欲で、恨み深く、強盗を働いた者――を運んでいるように！」

天使たちはこう答えた。

「私たちはよく知っている。彼女は確かにそうした行いをしたが、泣いて悔い改め、罪を告白し、施しをした。それゆえ、神は彼女を赦されたのだ。」

すると、悪魔たちはこう言い始めた。

「もしこの魂が神の慈悲に値するのなら、世界中の罪人たちをすべて連れて行けばいいではないか！　それでは、我々は一体何のために苦労しなければならないのだ！」

これに対し、天使たちはこう答えた：

「謙虚さと涙をもって自分の罪を告白するすべての罪人は、神の慈悲によって赦しを受ける。しかし、悔い改めずに死ぬ者たちは、神によって裁かれるのだ。」

こうして悪霊たちを恥じ入らせた天使たちは、その場を通り過ぎていった。さらに聖人は、神を愛し、貞潔で慈悲深く、すべての人を愛したある人の魂が運ばれていくのを見た。悪霊たちは遠くからそれを見て歯ぎしりしたが、神の天使たちは天の門から出てきてその魂を迎え入れ、このようにその魂を歓迎した。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。あなたは彼女を敵の手の中に置き去りにせず、地獄の深淵から救い出してくださった。」

しばらくして、至福のニフォントは、悪魔たちがその魂を地獄へと引きずり込むのを目撃した。それは、主人に飢えさせられ、殴打されていたある奴隷の魂であった。彼はそのような苦しみには耐えきれず、悪魔の唆しに従って縄を手に取り、首を吊って自殺したのである。　一方、その守護天使は遠くを歩きながら苦々しく泣いており、悪魔たちは喜んでいた。泣いている天使には、神からローマの街へ行き、その時にそこで洗礼を受けていたある新生児を守るよう命じられた。聖人はまた、天使たちに空中で運ばれているもう一つの魂も目撃したが、そこへ悪魔の大群が待ち構えていた。彼らが第四の試練の場にたどり着く前に、悪魔たちは聖なる天使たちの手からその魂を奪い取り、侮辱を加えて深淵へと投げ込んだ。それは聖エレウフェリオス教会の聖職者の一人の魂であった。この聖職者は、淫行、魔術、強盗によって絶えず神を怒らせていたが、悔い改めることなく突然死し、悪魔たちは喜びに沸いた。

聖人はコンスタンティノープルに聖母マリアの名を冠した教会を建立し、その教会に身を置き、多くの異教徒をキリストの信仰へと改宗させた。悪魔は、ニフォントが多くの者を悪魔の誘惑から遠ざけたことを許せず、約千匹もの悪魔を率いて彼の元へやって来た。彼らは夜、聖人に襲いかかり、苦しめようとした。　彼の住居全体が悪魔で埋め尽くされていた。しかし彼は十字架の力によって

悪魔たちを制し、神の助けと聖なる天使の加護を得て、悪魔たちを一人ずつ捕らえ、ニフォントの名が唱えられる場所には近づくことさえしないと誓わせるまで、それぞれに千回の打撃を与えた。

ある日、兄弟たちと魂の益について語り合っていた際、ニフォントは次のような出来事を思い出した。

「この町に、ある高貴な人のもとに、ヴァシリーという名の奴隷がいた。彼は仕立て屋だったが、気性が荒く、口が悪く、反抗的で、道化師のような男だった。彼はすべての時間を遊びや、姦淫者たちとの肉欲的な不浄な罪に費やし、主人の教えには耳を貸さなかった。　しかし、慈悲深い主の驚くべき摂理により、彼は次のようにして救いを得た。人々の罪に対する神の許しにより大飢饉が起こり、主人们は食糧不足のため、自分の奴隷たちを追い出し始めた。彼の主人もまた、ヴァシリーを追い出した。　ヴァシリーは去り、その初日に食料を手に入れるために衣服を売り払い、その後は裸で歩き回り、施しを乞い始めた。当時は冬であり、彼は寒さに震え、身が凍えるほどだった。ついに、彼は力尽きてある通りに横たわった。しばらくすると、彼の足の指が腐り始め、やがて足そのものも腐り始めた。　ヴァシリーは、これを自分の罪に対する罰だと考え、ただ「すべてに神に栄光あれ！」と言う以外、何も語らず、耐え続けた。こうして彼は二ヶ月間、屋根のない路上で横たわり、自分の罪を嘆き、泣きじゃくっていた。　たまたまその道を、ニキフォールという名のキリストを愛する人が通りかかった。苦しむヴァシリーの姿を見て、彼は使用人たちに命じて彼を自分の家へ運び込ませ、そこで愛情を込めて彼を慰め、自らの手で寝床を整え、食事を与えた。二週間後の土曜日、病床のヴァシリーはこう語り始めた。

「聖なる天使たちよ、あなたがたが来てくださったことを私は喜びます。少し休んでから、一緒に行きましょう。」

すると天使たちは言った。

「いいえ、早く行きなさい。主があなたを呼んでおられますから。」

「少し待ってください」とヴァシリーは答えた。「借金を返すまで。ある友人から銅貨十枚を借りたのですが、まだ返せていません。そのせいで、悪魔にこの世で引き留められてしまわないか心配なのです。」

そして天使たちは、ヴァシリーが十枚の銅貨を集めて、借金していた相手に送るまで待った。そして、彼は神に息を引き取った。

「ほら、子供たち、」とニフォントは話を締めくくった。「神の御心とはこういうものであり、神はご自身の御心に従って、いかにして罪人を救われるか、というのだ。」

ある日、ある聖人が弟子を連れて、いわゆるアポニアの宮殿に隣接する教会へ祈りを捧げにやって来ました。聖人はそこで神聖な礼拝を執り行っていたところ、聖人の霊的な目が開かれ、天から降りてきて祭壇と司祭を包み込む炎を見ました。　また、「三聖」の賛美歌が歌われている最中、四人の天使が現れ、聖歌隊と共に歌った。そして使徒書簡が朗読されると、聖使徒パウロが朗読者の後ろからその様子を見守っているのが見えた。さらに福音書の朗読が始まると、その言葉はまるで灯火のように天へと昇っていった。　供物の奉献の際、教会の幕が開き、天が開け、不思議な芳香が漂った。その後、天使たちが「キリスト・神に栄光あれ！」と歌いながら降りてきた。　彼らは美しい少年を連れてきて、ディスコス（[161]　）の上に置き、自ら玉座を取り囲んで聖なる供え物に奉仕した。また、二人のセラフィムと二人のケルビムが少年の頭上に浮かび、その翼で彼を覆っていた。　供物

[161]　ディスコス（ギリシャ語で「皿」の意）とは、子羊、すなわち、聖体礼儀において聖霊の招きにより真のキリストの御体へと変容するプロスフォラの一部が載せられる皿のことです。　プロスコミディアの際、プロスフォラから子羊を取り出し、それをディスコスに載せる時、主の降誕が想起され、ディスコスは幼子イエスが置かれた飼い葉桶を象徴している。そのため、ディスコスには、飼い葉桶に横たわる神人である幼子が描かれることがある。　しかし同時に、プロスコミディアにおいて、ディスクス上の小羊に切り込みを入れ、供物を祭壇から聖壇へ移す際、主の十字架上の受難、その死、そして墓への安置が想起され、ディスクスはゴルゴタと救い主の墓を象徴する。

の聖別と畏れ多い秘儀を行う時が来ると、最も輝かしい天使の一人が近づき、ナイフを手に取って少年を刺し、その血を聖杯に注ぎ、少年をディスクスに載せると、自ら再び畏敬の念をもって元の場所に戻った。　その後、神聖な秘跡の聖体拝領が始まると、聖人は、聖体を受ける者たちの中には、太陽のように輝く顔をした者もいれば、エチオピア人のように暗く陰鬱な顔をした者もいるのを見た。そこに立っていた天使たちは、誰が聖体拝領に近づくかを注視し、ふさわしい者には栄冠を授けたが、ふさわしくない者からは背を向け、彼らを嫌悪した。　聖なる礼拝が終わると、彼は、その少年が突然、天使たちの腕に抱かれて再び完全な姿を取り戻し、天へと昇っていくのを見た。これは後に、聖人自身が弟子に語ったことであり、その弟子は多くの人々の益となるようこれを書き留めたのである。

ある日、聖人は自ら建立した至聖なる聖母マリア教会へ向かう途中、道で非常に悲しげな表情のエチオピア人が歩いているのを見かけた。それは悪魔の首領であり、その背後には他の悪魔たちも続いていた。彼らが近づき、教会の聖歌を耳にすると、下級の悪魔たちは自分たちの首領を罵り始め、こう言った。

「見よ、かつて我々が支配下に置いていた者たちが、今やイエスの御名を賛美しているではないか。我々の力はどこへ行ったのか？　我々は打ち負かされ、我々の王国は崩壊してしまった。」悪魔たちはこのように彼らの首領を罵倒したが、彼は彼らにこう言った。

「悲しむな、落胆するな。まもなく、キリスト教徒たちがイエスを見捨て、我々を賛美するように仕向けてやる。」

彼らは少し歩くと、三十人の男たちに出くわした。悪霊の首領はそのうちの一人に近づき、耳元で囁いた――すると、その男は正気を失い、下品な言葉を吐き、笑い、恥知らずな歌を歌い始めた。その後、彼らは歩きながら楽器を奏でている音楽家に出会った。　その聖人は、あるエチオピア人が全員を一本の縄で縛り、音楽家の後ろに引きずっているのを見た。そして、彼らは皆、踊りながらその音楽家の後を追った。大勢の群衆が彼らに加わり、さらに先へと進んでいった――そして踊り、恥ずべき歌を歌った。それは、悪霊たちが彼らの心を捕らえて引きずっていたからである。　ある裕福な男が、自分の家からその様子を見て、音楽家に銅貨を一枚渡し、自分の前で踊ってほしいと頼んだ。音楽家がその銅貨をポケットに入れたとき、悪霊たちはそれを奪い取り、地獄にいる父であるサタンのもとへ送り、こう告げた。

「喜びなさい、我らの父よ！　我らの君主アラジオンが、我らの敵であるキリスト教徒たちが、演奏の対価として渡した銅貨という供物を、あなたに送ってくれました。」

それを受け取ったサタンは喜び、こう言った。

「子らよ、我らの捧げ物が増えるよう努め、キリスト教徒を打ち負かせ。」

そして再び、その硬貨を音楽家のポケットに戻した。一方、至福のニフォントは、霊の目をもってこれを見て、苦々しくこう言った。

「ああ、遊びを通じて悪魔たちに捧げ物を捧げる者たちよ、なんと悲しいことか！」

そして、聴衆に対し、邪悪で放埒な遊びは悪魔に由来するものであるから、それらに近づかないよう戒めた。　ある時、祈りの後、聖人は霊的な恍惚状態にあり、長さと幅が等しい広大な野原を目にした。そこには、大隊ごとに分けられた多くのエチオピア人が立っており、大隊の総数は三百六十五――重罪の数に等しかった。　最も肌の色が濃い一人のエチオピア人が、まるで戦いに備えるかのように部隊を整えながら兵士たちの数を数え、こう言った。

「私を見よ、何も恐れるな。私の力があなたたちと共にあり、あなたたちを導くのだ！」

数人の悪魔が様々な武器を数多く持ち込み、各連隊に配った。その後、悪魔は各連隊に魔法と呪術の力を与え、キリストの教会を襲うべく、彼らを全地へと放った。聖ニフォントがそれを見つめていると、突然、ある声が聞こえてきた。

「ニフォントよ、東を向き、見よ。」

彼は振り返ると、清らかで美しい野原が見え、そこにはエチオピア人よりもさらに多くの、数え切れないほどの――数十万もの――白い衣をまとった戦士たちが、皆、戦いに備えて武装して立っていた。すると、太陽よりも明るい一人の男が現れ、こう言った。

「主サバオトはこう命じられる。全地を巡り、キリスト教徒を助け、彼らの命を守れ。」

これを見た聖人は、御自身の教会を助けてくださる神を賛美した。

聖ニフォントはすでに老齢に差し掛かっていた。神から次の幻視において予言されていた聖職の位を受ける時が訪れた。彼はある野原を見た。そこには無数の羊が満ち溢れていたが、羊飼いは一人もいなかった。聖人はこう考えた。

「まさか、羊飼いのいないこの羊たちは、狼を恐れないのだろうか？」するとすぐに、聖使徒パウロに似た聖なる人物が現れ、こう言った。

「なぜ何もしないで王の羊たちを見つめているのか。なぜ彼らを牧さないのか？」

聖ニフォントはこう答えた。

「まさか私が王の羊を放牧するなんて。私はその仕事に不慣れですし、とても力不足です。」

すると、現れたその人は言った。

「王は、しばらくの間だけ羊を放牧するように命じられた。その後、安らぎを得て、あなたは偉大な報いを受けるだろう。」

そう言い終えると、その人物は彼に杖を渡し、羊と囲いを任せて去っていった。目を覚ました聖人は考えた。 「これはどういうことだろうか？」――そして、現れたその男が聖使徒パウロであり、羊は人々、柵は教会であることを悟った。彼は、まるで王都[162] で司教に任命されるのではないかと、ひどく恐れた。そしてニフォントは心の中でこう言った。「私は、誰に対しても支配権を持たないよう神に懇願したはずなのに？ それなのに、神は私に権威を与えようとしておられる！ 預言者ヨナ（ヨナ書2）のように振る舞い、ここから逃げ出そう！」と。弟子を連れて、彼は自分の修道室を出て、船に乗り込んだ。穏やかな風に乗って、船はすぐにアレクサンドリアに到着した。そこでは当時、ディオクレティアヌス帝の時代にキリストのために殉教したペトロの後を継いで教会を統率していたアレクサンドロス[163] が総主教を務めていた。 その同じ日、キプロス島のコンスタンティアの住民たちがやって来て、アレクサンドロス総主教に、彼が見いだすにふさわしい人物を司教に任命してほしいと懇願した。というのも、彼らの牧者であるクリストフォロス――聖なる、尊敬すべき人物――が天に召されたからである。総主教は彼らにこう言った。

「神がそのような人物を私に示してくださるまで、少し待ってください。」

そしてその夜、総主教は聖使徒パウロの御姿を目にし、パウロは彼にこう尋ねた。

「コンスタンツィアの町に、誰を司教として任命するつもりか？」

総主教は答えた。

「分かりません。神が御心に適う方をお選びになるでしょう。」

現れた方はこう言いました。

「神があなたにふさわしい者を示してくださる。ただ、明日、聖職者全員と共に教会にいて、入ってくる人々を見守りなさい。そして、私とあらゆる点で似ている者を見かけたら、その者に羊の群れを託しなさい。」

翌朝、総主教は教会に座り、入ってくる人々の中に現れた人物に似た者がいないか見守っていた。一方、このことを何も知らなかったニフォントは教会へ向かい、道中で弟子にこう言った。

「心に何とも言えない悲しみと喜びを感じている。もしかすると、私たちに何かが起こるのではないか！」

---

[162] すなわち、コンスタンティノープルにおいて。

[163] 聖アレクサンドロスは、312年から326年までアレクサンドリアの総主教を務めた。その記念日は5月29日である。

そう言いながら、彼は教会に入った。彼を見た総主教は、首席助祭にこう言った。

「アファナシイ、この人の顔は、聖使徒パウロの肖像に似ていないか？」

「はい、父上」と大助祭は答えた。「確かにその通りです。彼はキリストの教会を牧会するにふさわしい方です。神の天使が彼と共に歩み、語りかけているのが見えます。さらに、彼の頭には宝石でできた冠も輝いています。」

そこで総主教は聖人を呼び寄せ、歓迎の言葉をかけ、二人は席に着いた。大助祭はニフォンに微笑みながら言った。

「なぜ逃げたのですか、神父様。今や、ご自身の望みとは裏腹に、その場所へ来てしまったのですから。」

そして、聖人は自分に何が起こるのかを知ると、ため息をついてこう言った。

「ああ、私は不幸だ！私は罪深く、このような権威を受けるに値しない！」

総主教は答えた。

「ああ、もし私がそれほど不適格であったなら！」

そう言い終えると、彼は立ち上がり、神聖な聖体礼儀を執り行い、尊者ニフォントを聖職者の位に叙階した。その後、数日の間に彼を助祭、そして司祭に叙階し、さらに司教の位へと昇格させた。神によって遣わされたこのような牧者に対し、皆が喜びに沸いた。　司教に叙任された後、ニフォントはアレクサンドリアに三日間留まり、そこにいた聖なる人々と語り合った。　その後、総主教はニフォントを彼の司教座へと送り出し、彼に敬意を表すため、自身の大助祭や他の聖なる人々を同行させた。彼らは9月4日にキプロスの都市コンスタンティアに到着し、ニフォントに信徒の群れを委ねると、神を賛美しながらアレクサンドリアへと戻っていった。　神の聖人ニフォントは、キリストの羊の群れを熱心に牧し、信者たちの救いを顧みるようになった。彼は孤児や未亡人の父であり、病人の無償の医師であり、弱者への施し手であった。その上、彼は数え切れないほどの奇跡を起こし、そのすべてを書き記すことさえ不可能であった。このため、彼はすべての人々から深く愛され、敬われた。　羊の群れを絶えず気遣っていたある日、彼は、杖に寄りかかり、まるで悲しみに沈んでいるかのように、街へと向かい、道中で頻繁に休憩している大柄なエチオピア人を見かけた。聖人は、それが悪魔であることを悟り、彼に向かって叫んだ。

「おい、悪党め、なぜ、そしてどうしてここに来ることを敢えてしたのだ？」

エチオピア人は、まるで彼を食い尽くそうとするかのような怒りの眼差しで彼を見つめ、こう言った。

「お前がここにいると聞いたので、お前と、お前の羊たちを打ち砕きに来たのだ。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「弱者め！　お前自身が打ち砕かれているのに、私まで打ち砕こうというのか？　ある修行者がお前たちと戦っているのを見たが、お前たちの悪魔三十体が彼との戦いで力尽きてしまった。誰がそんなお前の弱さを笑わないというのか！」

「それを不思議に思うな」と悪魔は言った。「もし私がかつての力を持ち続けていれば、お前を打ち砕くのは朝飯前だっただろう。だが、イエスが十字架にかけられて以来、私は確かに無力になってしまったのだ。」

聖人はこう答えた。

「さて、もし私が私のキリストに祈れば、お前はどうなるのだ、恥知らずめ？」

「わかっている」と悪魔は答えた。「お前には多くの力があることは知っている。だが、私に害を及ぼさないでくれ。そうすれば、私はお前の街から去り、二度と近づかない。」

これを見て、聖人は、神が彼を守り、その羊の群れを邪悪な悪魔から守ってくださっていることに感謝した。

キリストの教会を短期間統率した後、聖ニフォントは死期が近づき、その三日前に自らの死を予知した。その時、かつて大助祭であり、その後アレクサンドロスの死後、アレクサンドリア教会の座に就いた偉大なアファナシオスが彼の元を訪れた[164] 。 彼 には、ニフォントの死が近いことを神からあらかじめ告げられていたため、彼は全聖職者たちを率いて、神の御心にかなう者に最後のお別れを告げに訪れたのである。ニフォントはアファナシウスを見て、彼にこう尋ねた。

「なぜ、祝福された父よ、私のような罪人のところまでわざわざお越しになったのですか？」

「私は、あなたが明日、天のエルサレムへ旅立たれることを知りました」とアファナシイは答えた。「あなたとお話ししに参りました。どうか、神の御座の前に立たれる際には、私をも覚えてください。そうすれば、私も主の憐れみを受けることができますように。」

「あなたもまた、父よ」と聖人は言った。「神聖な礼拝を執り行う際には、私の不甲斐なさをも覚えていてください。」

その夜、聖ニフォントは自分自身と自分の信徒たちのために長く祈った。すると、主の天使が現れ、彼を慰めるとともに、彼に永遠の安息が用意されているという知らせをもたらした。朝の賛美歌を歌っている最中、彼は肉体の病にひどく苦しむようになったため、弟子にこう言った。

「わが子よ、地面に藁の敷物を敷いてくれ。」

弟子がその指示に従うと、ニフォントはすっかり病に倒れた状態でその藁マットの上に横たわった。日が明けると、アファナシオス・ザ・グレートが彼の元を訪れ、そばに座って尋ねた。

「父よ、病は人間にとって益となるものでしょうか、それともそうでないのでしょうか？」

聖人はこう答えました。

「火で焼かれると錆が落ちる金のように、人も病に罹ることで自らの罪から清められるのだ。」

それから、少しの間沈黙した後、涙を流し、続いて微笑むと、その顔は明るくなり、こう言った。

「聖なる天使たちよ、ようこそ！」

少しして、彼はこう言った。

「喜びなさい、聖なる殉教者たちよ！」そして、その顔はさらに輝きを増した。しばらくして、彼はさらにこう言った。

「祝福あれ、至福の預言者たちよ！」

その時、聖アファナシウスの霊的な目が開かれ、彼は、すべての聖人たちが、一人ひとり別々に、その至福なる方を歓迎しているのを見た。それからニフォントは喜びながら言った。

「司祭たちよ、敬虔なる者たちよ、そしてすべての聖人たちよ、あなた方を歓迎します！」

――そして黙り込んだ。まもなく、彼はこう叫んだ。

「喜びなさい、喜びに満ちた方よ、わが赤き光、わが助け手、わが砦よ。私はあなたを賛美します、善き方よ。あなたの慈しみと恵みを私は覚えているからです！」

その後、彼は黙り込み、その顔は太陽のように輝き、そこにいた者たちは皆、恐怖に襲われた。芳しい香りも漂い、やがて天から声が聞こえ、彼を永遠の安息へと招いた。こうして彼は、12月23日、その高潔で聖なる魂を神の御手に委ねた。 街中が嘆きと苦悶の泣き声に包まれ、聖ニフォントは聖使徒大聖堂に栄誉をもって埋葬された。罪人に対して慈悲深く、聖人の中でも驚くべき方である父と子と聖霊を、今、常に、そして世々限りなく賛美する。アーメン。

---

[164] 聖アタナシオス大聖人は、326年からアレクサンドリアの総主教を務めました。この偉大な聖人は、アリウス派の異端者たちに対して、正教を熱心に擁護しました。聖アタナシオスは多くの著作を残しており、それらはいかなる敵によっても正教が打ち砕かれることのないことを示す、不朽の記念碑となっています。 373年に逝去した。その記念日は教会において1月18日に祝われる。

クレタ島の十人の殉教者たちの受難

記念日：12月23日

ローマ皇帝デキウスは、クレタ島に[165] 、自身と同じ名を持つデキウスを総督に任命した。彼は、その皇帝と同様に、残虐さ、拷問、そしてキリスト教徒への迫害において酷い人物であった。クレタ島に到着すると、デキウスは直ちにキリストを信じる者たちをすべて捜し出し、自分の元へ連れてきて拷問にかけるよう命じた。こうして、信仰の堅固なキリスト教徒たちが彼の元へ連れてこられ、数々の拷問と苦痛の末、様々な方法で処刑された。その頃、十人の最も高潔な男たちが捕らえられ、拷問者の元へ連行された。 彼らは 、さまざまな都市の出身であった。ゴルギノス[166] の都市からは、テオドゥルス、サトルニヌス、エウポル、ゲラシウス、エウニキアヌス。キオスからはゾティクス。エピネイからはポンピウスとアガフォプス。キドニアからはバシリデス。イラクリアからはエヴァレスト[167] ； それでもなお、彼らは皆、天国の永遠の至福を等しく求めていた。彼らは拷問者の前に引き出され——そこで、彼らはどれほど勇敢な言葉を口にし、どれほどの勇気を示し、どれほどの苦痛に耐え、その忍耐をもってどのような苦難をも克服したことか！ 彼らは殴られ、拷問され、地面を引きずられ、石で打たれ、嘲笑され、唾を吐きかけられた。こうして三十日間、彼らはあらゆる侮辱に耐え続けた。12月28日に裁判が予定され、イゲモンが着席すると、勇猛さと気概に満ちた殉教者たちが最後の裁判へと連行された。 イゲモンは狂おしいほどの怒りに駆られ、その残酷な手で聖なる殉教者たちを滅ぼそうと望んでいたが、彼らは最期の息を引き取るまで耐え抜く覚悟だった。殺人者たるイゲモンは怒りを込めて彼らを見つめ、こう言った。

「お前たちは一体どんな狂人だ。分別も、時の経過も、何が有益かを教えてくれなかったのか？」

そして、まるでその怒りだけで彼らをすでに威嚇したかのように、こう付け加えた。

「犠牲を捧げよ。さもなくば、これ以上お前たちに何も言うつもりはない。お前たちは、従おうとしないデキウスがどのような者か、身をもって知ることになるだろう！」

これに対し、殉教者たちはこう答えた。

「イゲモンよ！我々はすでに長い間、言葉と行いをもって、神々に犠牲を捧げることも、あなたの命令に従うこともないことを十分に示してきたではないか。」

イゲモンは彼らの言葉を遮って言った。

「では、お前たちは苦痛など微塵も気にしていないのか、不信心者どもよ？」

「我々は苦しみなど全く恐れてはいない」と聖人たちは答えた。「むしろ、キリストのために受けるこの霊的な祝宴、すなわち殉教を準備し、我々に与えてくださったことに、むしろ深く感謝しているのだ。」

イゲモンは言った。

「そうはいかない。お前たちは、多くの賢明な人々が神々の筆頭であるディヤや、 レイ、その他の神々[168] を崇める多くの賢明な人々の前で恥じることなく冒涜している。今、お前たちは、そ

---

[165] クレタ島（別名カンディア）は、地中海の東部に位置している。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「諸島の女王」と呼ばれていた。 この地におけるキリスト教は、使徒の時代にはすでに始まっていた。その最初の礎は、聖霊が使徒たちの上に降臨した出来事の目撃者たちによって築かれた。というのも、その場にクレタ人もいたからである（使徒行伝2:11）。その後、使徒パウロによって、この地でキリスト教は確立され、広められた。

[166] ゴルティナ、あるいはゴルティンは、古代においてクレタ島のレフェエ川（現在のイエロポタモ）沿いに位置する重要な都市であった。古代都市の遺跡は現在も残っている。

[167] キオス、エピネイ、キドニア、イラクリア——これらはクレタ島にあるさまざまな都市である。

[168] ディエスまたはゼウス、ヘレ、レイについては、989ページの注1を参照のこと。

の勇気が失われるだけでなく、お前たちと同じような反抗的な者たち――もしそのような者がいるならば――さえも恐れを抱くような苦痛にさらされることになるのだ。

これに対し、心強い男たちは再びこう答えた。

「イゲモンよ、ディヤやその母レイについて語るな！　それは我々にとって目新しい話ではない。その出自や生涯、性情については、父たちから聞いて知っているのだ。　彼はあまりにも節制を知らず、不道徳であったため、女性だけでなく男性とも不貞を犯し、魔術や妖術を用いて本来の姿を変え、別の姿をとった。それはすべて、ますます甚だしい不貞行為のためであり、絶えず恥ずべき行いで自らを穢していた。　同じ情欲に駆られた者たちは、彼の忌まわしい行いを真似した――悪を真似ることほど容易なことはあるだろうか？　――彼らは彼を神と称え、神殿を建て、彼に生贄を捧げるようになった。それは、自分たちが望むことが神にとっても喜ばしいことであるかのように見せかけ、淫行や節制のない生活が、神に憎まれるどころか、悲しいかな、神に喜ばれるものと認められるようにするためであった。

神の聖徒たちはそう語ったが、イゲモンは彼らが正しいと悟り、怒りに苛まれていた。民衆はさらに激昂し、殉教者たちに襲いかかり、もしデキウスが声と手の合図で民衆の騒ぎと叫びを鎮めなければ、彼らを素手で引き裂いてしまったであろう。　静寂を取り戻すと、彼は殉教者たちにどのような残酷な死を課すべきか考え始めた。すると直ちに、総督の命令により、拷問人たちは聖人たちを捕らえて拷問にかけ、彼らに様々な苦痛を与え始めた――その残虐さと苦痛の度合いはどれも同じであった。　そのうちのひとりは絞首刑に処され、鉄の爪で引き裂かれた。筋が引きちぎられ、肉片が地面に落ちた。他の者たちは、肋骨が骨まで届くほど石や鋭い杭で殴打された。また、鉛の重い打撃によって、関節が砕け、骨が折れ、粉々になった者もいた。一人ひとり、異なる方法で拷問された。このような残酷な拷問について聞くだけでも痛ましいものであり、慈悲深い者にとっては、その苦しみを目の当たりにするのが耐え難いように、その詳細な列挙を聞くこともまた辛いことである。　しかし、殉教者たちはそのような苦痛を全く動じることなく受け入れていた、あるいはより正確に言えば、喜びをもって耐え忍んでいた。周囲に立っていた者たちには、彼らが痛みによって苦しんでいるというよりは　、むしろ苦痛が不十分であることを惜しみ、さらに大きな苦痛を望んでいるかのように見えた。　皆が、まるで何か新奇で驚くべきものを見るかのように、彼らを見物に駆けつけた――信者も非信者も。密かに信仰を守り続ける信者たちは、苦難に耐える者たちの勇気に感嘆し、それを通じて自らの信仰を確固たるものにするために急いでいた。一方、非信者たちは、聖人たちの忍耐を嘲笑し、彼らの恐ろしい拷問を眺めながら、その苦しみを愉しもうとしていた。　それどころか、彼らはわずかな同情すら示さなかったばかりか、イゲモンや拷問者たちに、さらに残酷な行為を煽り立てた。彼らに煽られたイゲモンは命令を下し、拷問者たちはそれを実行した。その間、告示役はこう叫んでいた。

「自分たちの身を守りなさい。権力者に服従し、神々に生贄を捧げなさい。」

しかし、殉教者たちは、そのような残酷な苦しみの中でも、その勇気と忍耐によって、民衆も、告示者も、拷問者たちも、総督自身も、そして何よりも彼らの主であるサタンとそのすべての勢力を凌駕していた。すべての殉教者は、まるで互いに合意したかのように、こう叫んだ。

「我らはキリスト者であり、キリストのために捧げられた生贄である。たとえ一万回死ぬことになろうとも、喜んで死ぬ！」

聖なる殉教者たちがあらゆる苦痛をものともしなかったとき、サタンの熱心な僕であるデキウスは、彼らを説得し、犠牲を捧げさせることを諦め、彼らに死刑判決を下した。聖者たちは、剣による斬首の刑に処されるため、街からそう遠くない場所へと連行された。その場所は、その国の住民たちによって「アロニイ」と呼ばれていた。　その場所へ向かう道中、殉教者たちは新たな、そして並外れた姿を現した。苦難の間ずっと彼らは心を一つにし、意見も一致していたが、最後には、誰が最初に剣の下へ進み、先に栄冠を受けるかということについてのみ議論し始めたのである。しかし、こ

の議論を止めたのは、聖殉教者の一人であるテオドゥルスであった。　――「最後に剣の下に首を差し出す者が、真っ先にその栄冠を受けることになる」と語った。「もし、目の前で他のすべての友が斬首され、死んでいくのを見て、少しも恐れることなく、いかなる悲しみも示さず、顔色さえ変えなければ、その者は真に最も栄光ある修行者であり、勝利者となるだろう」と。　皆はテオドゥロスの言葉に同意した。まず彼らは、神への共同の賛美歌を歌った。

「『*主を賛美せよ。主は、私たちを彼らの牙の餌食となさなかった。私たちの魂は、鳥のように、捕らえる者の網から逃れた*』（詩編123:6–7）。その後、指定された場所に着くと、一人ひとりが次のような祈りを捧げた：

「主よ、あなたのしもべたちを赦し、私たち自身、そして私たちの親族や友人、さらには祖国全体のために流される私たちの血を受け入れてください。彼らが無知の闇から解放され、明るい目でキリスト教の信仰を仰ぎ見、あなた、まことの光、永遠の王を知ることができますように！」

彼らの祈りの後、聖なる勝利に満ちた頭部が一人ずつ切り落とされ、彼らの魂は喜びをもってキリスト・神のもとへと昇っていった。首を切られた後、拷問者たちが去ると、その場に残ったキリスト教徒たちの一部が、殉教者たちの聖なる遺体を集め、敬意を込めて埋葬した[169]。

迫害が終わり、敬虔さが再び輝きを取り戻したとき、ゴルティナ市の司教である祝福されたパウロは、コンスタンティノープルに到着すると、聖人たちの遺体を、剣で斬首された後に埋葬されていたアロニアからゴルティナへ移す許可を求めた。　クレタ島に戻り、多くのキリスト教徒――その中には聖人たちの殉教の場に立ち会った者たちもいた――を率いてアロニアの地を訪れた彼は、聖人たちの遺体が横たわっていた土を掘り起こすと、まるで湿気の中にあったかのように、神の御心によって無傷かつ完全な状態で保存されていた遺体を見つけ出し、それらを栄光のうちに、都市の守護と、　助けを必要とするすべての人々のために。彼らの祈りによって、私たちもまた、彼らに用意された天の恵みにあずかる者となることができますように。私たちの主イエス・キリストの恵みと愛によって。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

コンダク、第4調：

殉教者たちの尊い苦難は、馬小屋で生まれようとしている御子を私たちに予兆する暁の光であり、その御子は聖母によって種なしに産み出された。

ネオケサリアの主教、聖パウロの記念日

記念日：12月23日

私たちの聖なる父パウロは、ネオケサリアの司教であった[170]　が、その徳によってこれほどまでに名声を博したため、その驚くべき名は、当時ニコメディアを治めていたリキニウス[171]　の耳にも届いた。キリスト教徒に対する残酷な迫害を始めたリキニウスは、パウロを自分の元へ呼び出した。

---

169 これは2世紀半ばのことである。

170 聖テオドリトスは、パウロをエウフラテス川のほとりに位置する要塞都市ネオケサリアの司教と呼んでいる。

171　リキニウスは307年から324年まで、ローマ帝国の東半分で統治し、当初はガレリウス皇帝の共同統治者として、その後単独で統治した。　一方、西側でコンスタンティヌス大帝が皇帝となった際、異教徒であったリキニウスは当初、キリスト教徒に対してほぼ好意的な態度をとっていたが、コンスタンティヌスが断固としてキリスト教の庇護者であることを宣言すると、　リキニウスは、コンスタンティヌスが東方をも支配下に置こうとしていると疑い、また自身の臣民であるキリスト教徒たちがコンスタンティヌスに同情し、彼に従おうとしていると見なして、キリスト教会の激しい迫害者となった。

使者が聖人を王の裁判の場に連れて行くと、まず脅しで彼を屈服させようと試み、飢えで苦しめた後、殴打を始めた。聖人はこれらすべてを勇敢に耐え抜き、その忍耐力に誰もが驚嘆した。　その後、さらに次のような拷問が加えられた。火花を散らすほど熱せられた鉄の輪を、鍛冶屋が鉗子を使って聖人の手のひらに乗せ、もう一方の手のひらでその輪を覆わせ、両手をクランプで締め付け、鉄が冷めるまでその状態を維持させたのである。　そのせいで、聖人の両手の運動筋は萎縮して感覚を失い、指はもはや曲げることも伸ばすこともできなくなってしまった。その後、尊い父は縛られてユーフラテス川のほとりに連行され、そこで牢獄に閉じ込められた。

コンスタンティヌス大帝がローマを離れ、東方で完全に即位し、その際の発布した勅令において、すべての臣民がキリスト教徒となることを望んだとき、キリストの名のために追放や投獄されていた者たち全員に自由が与えられ、皆がそれぞれの故郷へと帰還した。　その時、私たちの聖なる父パウロもまた自由の身となり、主教の座に就き、かつて隠遁者であった頃と同様に敬虔さを輝かせ、ニカイアで開催された第1回全地公会議[172] に他の318人の聖なる父たちと共に出席し、 聖パウロは、そこで主イエスの傷跡をその身に負っていた者たちの一人でした[173]　。公会議に出席した教父たちの中には、手を失った者、耳を失った者、鼻を失った者、目を失った者、あるいは体に何らかの傷を負った者がいました。　ある者はキリストのために殴打や骨の折れ、関節の引き裂きを耐え忍び、またある者は火による焼灼や身体の部位の削ぎ取りに耐えた。　その中には、至福のパウロもキリストの信仰のために高潔に苦難を耐え忍んだ一人であり、彼もまた棍棒による殴打の痕を負い、その聖なる両手は火傷を負って曲がり、機能しなくなっていた。この公会議は、不敬虔な異端者アリウスに対して開かれたものであり、彼は神の裁きにより、その場で破門の宣告を受けた。　公会議の後、聖父たちは皇帝に謁見した。その際、福者コンスタンティヌス皇帝は福者パウロの手を取り、それを口づけし、自らの目や体の他の部位に当てながら、こう宣言した。

「私たちの神、キリストのためにこれほどまでに苦難を耐え忍んだ方を歓迎し、今や力のないこの焼け焦げた手に口づけをすることができるとは、なんと大きな喜びであろうか。」

その後、聖パウロは故郷の都市に戻り、主教座に就き、長年にわたり信徒たちを導いた後、安らかに主のもとへ帰った。

1月6日

12月24日（旧暦）

聖エウゲニアの生涯と殉教。

記念日 12月24日

父マルクス・アウレリウス[174] の後を継いで即位したローマ皇帝コモドゥスの治世7年目、フィリップという名の著名な貴族がエジプト全土の総督に任命された。この任命を受けたフィリップは、妻クラウディアと子供たちを連れて、ローマからアレクサンドリアへと移り住んだ。　彼にはアヴィ

---

[172] 325年、

[173] 使徒パウロの例に倣って、彼はガラテヤ人への手紙6章17節で、「私は、私の体に主イエスの傷跡を背負っている」と叫んでいる。

[174]　マルクス・アウレリウスは、ローマ皇帝として161年から180年まで在位した。その息子コモドゥスは、180年から192年まで在位した。

トとセルギウスという二人の息子と、美貌と清らかな心を持つ唯一の娘エウゲニアがいた。本物語は、そのエウゲニアの生涯について語られるものである。

フィリップは、ローマの法律と先祖の慣習に従ってエジプトを統治した。彼は魔術師や呪術師を大いに嫌っており、あらゆる手段で彼らを迫害した。　また、彼はユダヤ人も嫌っており、ユダヤ人の名前を聞くことさえ耐えられないほどであった。最も寛大に接したのはキリスト教徒であり、王の命令により彼らをアレクサンドリアから追放したものの、この都市の郊外では平和に定住し、自分たちの神に仕えることを許した。フィリップは、キリスト教徒の清らかな生活と知恵を尊重していた。　彼自身もギリシャ哲学に熱心に取り組み、娘のエウゲニアにもその教えを授け、彼女に哲学の深い知識を身につけてほしいと願っていた。さらに、フィリップはエウゲニアに、ラテン語とギリシャ語を流暢かつ美しく話すよう指導した。明晰な知性と勤勉さを兼ね備えたエウゲニアは、学問において容易に頭角を現した。　一度耳にしたことや読んだことは、常にしっかりと記憶に留め、あたかも銅板に刻まれたかのように心に刻み込んでいた。彼女は顔立ちも美しく、体もほっそりとしていたが、それ以上に素晴らしく美しいのは、その清らかな心と処女の純潔さであった。　そのため、ローマで最も高名な貴族の一人であるアクイリンは、彼女を自分の息子アクイリウスに嫁がせたいと願った。しかし、両親が彼女に、この高貴な若者と結婚することに同意するかと尋ねたとき、エウゲニアはこう答えた。

「夫は、家柄ではなく、人生において最も優れた人を選ぶべきです。なぜなら、共に暮らすのは彼自身であって、彼の家系ではないからです。」

他にも、高貴で裕福な若者たちが彼女との婚約を望んだが、彼女は皆を断った。表向きは彼らの生活様式が気に入らないという理由を掲げていたが、実際には処女の純潔を愛するあまり結婚を避けていたのである。なぜなら、彼女の唯一の願いと関心事は、処女であり続けることだけだったからである。

こうして、神聖な平和を受け入れるための美しく清らかな器が整えられ、まもなく、彼女の善行に真の信仰が続き、エウゲニアは清らかな心で、敬虔の清らかな泉へと歩み寄った。彼女が神へと立ち返るきっかけとなったのは、次のような出来事であった。　偶然か、あるいはむしろ神の御心によって、彼女は聖使徒パウロの書簡を読むことになった。　注意深く読み、その意味を理解するうちに、エウゲニアは宇宙を創造した唯一の真の神の存在を知った。そして、かねてより聖霊を受け入れるためにあらかじめ清められ、備えられていた彼女の心は、たちまち啓発された。彼女は心の中でキリストを固く信じたが、両親の怒りを恐れて、口に出して公然と告白することはできなかった。

皇帝の命令により、エウゲニアが熱心に教えを聞きたがっていたキリスト教徒たちがアレクサンドリアから追放されたとき、彼女は両親に、田舎の静寂の中で休息するという口実で、実際には自分の願いを叶えるために、最も近い領地の一つへ行く許可を懇願した。　エウゲニアの意図に気づかぬまま、両親は彼女をその領地へ送り出した。宦官や奴隷たちと共に馬車に乗って、あるキリスト教徒の集落にある修道院の前を通りかかったとき、エウゲニアは塀の向こうから修道士たちが歌う声を耳にした。*「異教の神々はみな悪魔であるが、主こそが天を創造された」*（詩篇95:5）。この言葉を聞き、父の誤りに恥じ入った彼女は、心の底からため息をつき、二人の宦官――一人はプロト、もう一人はヤキンフ――にこう言った。

「あなたたちは私と共に学問を十分に修めてきた。私たちは共に、ソクラテス、アリストテレス、プラトンといった哲学者たちの教え、ストア派のよく知られた誤謬、そしてエピクロス[175]　の思想を深く理解し、同様に他のソフィストや詩人たちの著作も読み、研究してきた。」　君たちももちろん理解しているだろうが、これらすべては、多くの人々を欺くような「真実」の似姿以外に何の実

[175] ソクラテス、プラトン（その弟子）、アリストテレス（プラトンの弟子）、エピクロス――紀元前4世紀に生きた著名なギリシャの哲学者たち。

体も持たない、単なる寓話に過ぎないのだ。　また、ギリシャ人たちが自らの英知を誇り、その中には神など存在しないとあらゆる手段で証明しようとする者もいれば、神々は多数存在すると考え、ある神々を偉大であり、他の神々を卑小であると見なす者もいることも、私たちには周知の事実である。一方、キリスト教徒たちは、たった一言で彼ら全員を打ち負かす。すなわち、　*「異教の神々はすべて悪魔である」*（詩篇95:5）と。なぜなら、これらの 異教の神々への信仰は真の狂気であり、滅びへと導くからである。一方、キリスト教の教えである*「主は天を造られた」*（詩篇95:5）という言葉は、唯一の神を公然と認め、私たちに普遍的な主についての知識を与えてくれる。　これに従って、彼らの使徒パウロも教えている。唯一の神の存在を証明する彼の書簡を、私は昨日と一昨日読んだ。そして私は、この使徒の言葉を、非常に明快で信頼に値するものとして信じている。なぜなら、それらは行いに基づいて信仰を築いているからである。　使徒は書簡の中で、救いへの道を明確に示しており、もしあなたがたが望むなら、その指針に従うことができます。私はもはやあなたがたの「女主人」とは呼ばず、姉妹であり、共に仕える者として接したいと思います。なぜなら、私たちには共通の主であり父である神がおられるからです。　それでは、兄弟たちのように心を一つにし、考えを一つにして、共にキリストに帰依することを決めましょう。私は、キリスト教の司教エリイがここに修道院を建立し、そこで修道士たちが昼夜を問わず絶え間なく賛美歌を歌って神を賛美していると聞きました。　司教はこの修道院を、あるテオドロスという長老に任せたそうです。彼の奇跡的な行いについては、祈りによって盲人の目を開かせ、悪霊を追い払い、一言であらゆる病を癒やすと伝えられています。　また、この修道院には、いかなる場合でも女性の立ち入りが許されていないとも伝えられている。それゆえ、私の髪を刈り上げ、男装をさせ、夜になって私をそこへ連れて行ってほしい。我々は夜遅くに街へ戻ることにしよう。すべての奴隷たちは戦車の前を歩かせ、あなたたち二人は後ろについてくるのだ。　私は静かに戦車から降り、皆の目から隠れてこっそりと逃げます。戦車は空のまま家へ戻り、私たちは神の僕たちのところへ向かいます。

エウゲニアのその言葉も、彼女の意図も、二人の宦官の心に深く響き、夜が訪れると、彼らはあらかじめ取り決めた通りに実行した。　夜遅く、街へ戻る途中、彼らはエウゲニアを戦車から密かに降ろし、従者たちの誰にも気づかれないようにした。人目につかない場所に身を隠すと、彼女に男装をさせ、乙女の髪を切り落とし、修道院へと向かった。　修道院にたどり着く前に、彼らはイリオポリスの司教である聖エリヤ[176]　が近づいてくるのを見かけた。エジプトには、司教が修道院や教会を巡回する際、民衆が賛美歌を歌いながら付き従うという慣習があった。　ここでも、イリヤ司教の前後には約一万人の男たちが列をなし、歌い、こう叫んでいた。

「*『敬虔な者の道はまっすぐであり、あなたは敬虔な者の道を平らにされる』*（イザヤ書26:7）。

そのような言葉を耳にしたエウゲニアは、友人たちにこう言った。

「この聖句の意味を深く考え、その言葉のすべてが私たちにどれほど当てはまるか気づいてください。私たちが真の神について語り合っていたとき、*『異教の神々はすべて悪霊であるが、主は天を造られた』*（詩篇95:5）という歌声を耳にしました。そして今、私たちが偶像崇拝から背を向け、キリストのもとへ至ろうとするこの旅路に出たところ、数千人の人々が私たちを迎え、声を揃えてこう歌っているのです。「*義人の道はまっすぐであり、あなたは義人の道を平らにされる」*（イザヤ書26:7）。そして私には、これは偶然ではなく、神の御心によるもののように思える。この人々がどこへ向かっているのか見てみよう。もし私たちと同じ修道院へ向かっているのなら、彼らに加わり、まるで友人であるかのように共に歩もう。

歌いながら進む民に加わった彼らは、道中である一人の男に尋ねた。

「周囲の人々に囲まれてロバに乗っているこの老人は、いったい誰ですか？」

[176] イリオポリスは、エジプト南部（北部）にある都市である。

すると、それはエリイ司教であり、幼い頃からキリスト教徒で、修道院で育った人物だと答えが返ってきた。彼がまだ少年だった頃、隣人から火を持ってくるよう遣わされた際、燃える炭を自分の服に包んで野原へ持ち帰ったが、服は焦げなかった。それほど彼は幼い頃から神に愛されていたのである。

「数日前」と、尋ねられた人物は話を続けた。「この辺りにザリイという名の魔術師が現れ、様々な策略や魔術で人々を惑わせていた。彼はエライア司教を『欺き者』と呼び、自分については『キリストによって人々に遣わされた善良な導き手』だと語っていた。　そこで、多くのキリスト教徒が集まり、あなたがたが見ている私たちの父のもとへやって来て、こう言った。「私たちは、ザリイが『自分はキリストに遣わされた』と主張しているのを耳にしました。ですから、彼をあなたの交わりに受け入れるか、あるいは、もし彼の言葉が偽りであるならば、彼を拒絶してください。そうすれば、私たちは、言葉の論争で勝利した方の後についていきます。」　聖なる司教エリイはザリイとの論争を受け入れた。彼はキリストに希望を置いていたのに対し、ザリイは自分の悪霊たちに頼っていたのである。論争の日が定められ、イリオポリスの中心に場所が用意された。　魔術師ザリイは自身の魔術を携えて現れ、一方、司教は神の霊に導かれた言葉を持って現れ、民を祝福してこう言った。*「今、あなたがたは、肉となって来られた神の御霊が、神から来られたものであることを知るであろう」*（Iヨハネ4:2）。そしてザリイに向き直り、彼との壮大な言葉の論争を始めた。しかし、その魔術師は欺瞞に長け、高慢で、　言葉遣いが乱暴であった。彼は真理の力ではなく、恥知らずな饒舌によって勝利を収めようとした。そのため、柔和で悪意のない司教は彼に論破することができず、民衆はザリイが論争で司教に打ち勝っていることを嘆いた。　これに気づいたエリイは、騒ぎを鎮めるよう求め、民にこう語った。「今、私たちは使徒パウロが弟子テモテに与えた指示に従うべきである。*『無益で、聞く者の混乱を招くだけの論争には加わってはならない』*（IIテモテ2:14）。」　しかし、誰かが『私たちがこの使徒の証言を、真理を明らかにするためではなく、恐れから引用している』と誤解しないよう――街の真ん中で焚き火を燃やし、私たち二人が共に炎の中に入ろう。そして、どちらが燃え尽きないか、その者がこそ真のキリストの使徒である。この提案は民衆全員の心に響き、直ちに巨大な焚き火が燃やされた。　司教は魔術師に炎の中へ入るよう呼びかけたが、魔術師はこう答えた。「あなたがこの試練を提案したのだから、あなたが先に火の中へ入りなさい。」　十字を切って天に向かって両手を挙げると、司教は焚き火の中へと入り、巨大な炎に囲まれながらも約半時間その場に立ち続けたが、全く火傷を負うことはなかった。火は彼の髪の毛にも、衣服にも触れることはなかった。彼はザリアにも火の中に入るよう呼びかけたが、ザリアは恐怖に駆られて逃げ出そうとした。　すると、民衆は彼を捕らえ、無理やり火の中に投げ込んだ。魔術師はたちまち燃え上がり、聖なる司教エリイが、半分焼けてはいたもののまだ息のある彼を火の中から救い出さなければ、完全に焼けてしまっていたであろう。　その後、その魔術師は不名誉な形でイリオポリスの境界から追放された。そして、あなたがたが見ているこの司教は、どこへ行こうとも、至る所で民衆に神聖な賛美歌を歌われながら付き添われている。

この物語に耳を傾けながら、至福のユージニアは心から喜び、驚き、深くため息をつき、ついに彼女と語り合っていた男性（その名はエウトロピオス）に熱心にこう懇願し始めました。

「お願いです、ご主人様。偶像からキリストへと改宗を望む私たちのことを、聖なる司教様にお伝えください。私たちは兄弟であり、皆の合意のもと、キリスト教徒となり、この修道院で共に暮らし、決して互いに離れることなく過ごすことを決心しました。」

「今はその話は控えておいてください」と夫は答えた。「司教が修道院に入られ、旅の疲れを少し休まれるまでは。そして、適切な時が来たら、あなたの願い通り、司教にあなたたちのことをお伝えしましょう。」

彼らが修道院に近づくと、修道士たちが司教を迎えに出てきて、こう歌った。*「神よ、私たちはあなたの民のただ中で、あなたの恵みを受けました」*（詩編47:10）。

司教や民衆と共に、その装いと短い髪で若者のように見えたエウゲニアと、彼女の宦官たちも修道院の中に入った。　教会で神聖な礼拝を執り行い、断食者たちの慣習に従って夜10時に少し食事をとった後、聖エリイは労苦から休息し、夢の中で次のような幻を見た。　ある男たちが、ギリシャの女神の一人に似た女性の像を両手で担ぎ、まるで神であるかのように、供物や礼拝をもって崇めていた。人々が惑わされ、偶像崇拝に陥っているのを見るのは司教にとって耐え難いことであり、彼はその中にいた女神に向かってこう言った。

「神の被造物であるあなたが、人々から神として崇められ、唯一の神にふさわしい礼拝を受けることが、果たして相応しいことでしょうか？」

この言葉を聞いた女神は、直ちに自分を崇拝していた男たちのもとを離れ、司教の後を追ってこう言った。

「あなたが私を私の創造主のもとへ導き、彼に私を委ねてくださるまでは、あなたを離れることも、あなたから離れることもありません。」

眠りから覚めた司教は、この幻視について深く考え込んだ。すると、エウトロピオスが彼の元へやって来て、こう言った。

「大主教様！三人の少年、実の兄弟たちが、異教の礼拝を心を一つにして捨て、この修道院でキリストに仕える者たちの仲間に加えられることを願い、本日、大主教様の後を追って修道院に入り、涙ながらに私に、彼らのことを大主教様の聖座へ報告するよう懇願しました。」

司教は大きな喜びのうちにこう叫びました。

「主イエス・キリストよ、今、このような喜ばしい知らせを聞くことを私に許してくださったことを感謝いたします！」

そして、直ちにその三人の若者たちを呼び寄せるよう命じました。彼らが二人きりで入ってきて司教の前に現れると、聖司教はまず祈りを捧げ、その後、父のように愛情を込めてエウゲニアと語り合い、彼らの名前や出身、故郷について尋ねました。少女らしい照れくささを隠しきれず、エウゲニアは謙虚に答えました。

「私たちは栄光ある都市ローマ出身で、故郷もローマです。私たちは血のつながった兄弟です。一番上の者の名はプロト、もう一人はヤキンフ、そして私はエウゲニオスと申します。」

彼女を優しく見つめながら、エリー司教は言った。

「エウゲニアよ、君がエウゲニイと呼ばれるのは正しい。君の名前『[177]　』は君の精神と調和している。なぜなら、君は高貴で男らしい魂を持ち、あらゆる点で男そのものだからだ。」　その決意を心にしっかりと抱き、女性としての本性を克服しなさい。そうすれば、あなたは男らしく成長し、キリストにあって確固たる者となるでしょう。あなたは妻でありながら、神への愛ゆえに女性としての姿や名前を捨て、キリストのために男性として振る舞おうとしているのですから。　私がこう言うのは、あなたを非難するためでも、あなたの女性としての性質を責めるためでも、あなたの決意を揺るがそうとするためでもなく、ただ、神があなたをどれほど慈しんでおられるかを知ってほしいからです。神は、あなたに関するすべて――あなたが誰であるか、どのように私のところに来るか、そして誰があなたと共に私のところに来るか――を、何も隠すことなく私に明らかにしてくださいました。　さあ、エウゲニアよ、その外見に劣らず、精神においても勇敢であるよう努めてほしい。というのも、私の主は、あなたがご自身を清らかな器として主に捧げ、処女性を汚れなく保ち、この世の誘惑を拒んできたことも、私に明らかにしてくださったからである。

続いて、プロトとヤキンフに向き直り、聖人はこう言いました。

「あなたがたは名目上は奴隷だが、霊においては自由である。なぜなら、あなたがたの霊は、この世の何ものにも奴隷にされていないからだ。それゆえ、私ではなく、主イエス・キリストご自身

[177] エウゲニアは、ギリシャ語から訳すと「高貴な」、「気高い」という意味である。

があなたがたにこう言われる。*『もはやあなたがたを奴隷とは呼ばない。友と呼ぶ』*（ヨハネ15:15）。　あなたがたは、そのような自由ゆえに幸いであるが、キリストとの交わりと一致ゆえに、なおさら幸いである。あなたがたは心を一つにして、キリストのくびきを負うことに同意し、幸いなエウゲニアの決意を少しも妨げることなく、彼女と共に、主に仕えるという熱意と願いに燃えているからだ。　そして、彼女がこの世を去るとき、あなた方も彼女と共に、主から彼女と同じ冠と報いを受けるにふさわしい者とされるでしょう。

エウゲニアと宦官たちが司教と交わしたこの会話には、誰も立ち会っていなかった。エウゲニアに対し、エリイは男性の装いを続けるよう命じた。なぜなら、彼女の秘密を知る者は誰もいなかったからである。そして彼女は、司教が彼ら全員に洗礼を授け、修道者の列に加えられるまで、宦官たちと共に修道院を去ることはなかった。

さて、聖女がプロトスとヤキンフと共に、奴隷たちに内緒で戦車から降りて以来、何が起きたのか、また彼女の両親がどれほど彼女を案じていたのかを見ていこう。

空の戦車はそのまま進み続け、すでに家へと近づいていたが、奴隷たちは何が起きたのか気づかずに、その前を歩き続けていた。家の使用人たちは、灯りを手にエウゲニアを迎えに出た。戦車に近づくと、それが空であることを知り、女主人の姿が見えないことに大いに戸惑った。　彼女の父、母、兄弟、そしてすべての使用人たちは動揺し、至る所で叫び声、悲鳴、すすり泣き、そして激しい泣き声が響き渡った。街中では噂が広まり、アレクサンドリアの人々は、総督の娘に何が起きたのかと驚いた。エウゲニアを探すため、大勢の奴隷が至る所に派遣された。　彼らは街中だけでなく、エジプト全土をくまなく探し回り、道中や家々で出会った商人、農民、旅人など、誰一人として聞き逃すことなく尋ね回ったが、至高者の右手が定められた時が来るまでその宝庫に守っていたあの貴重な真珠について、どこからも何の情報も得ることができなかった。

両親は昼夜を問わずエフゲニアを嘆き、慰めようのないほど泣きじゃくり、しばしば彼女の名を呼び、顔を掻きむしり、頭に灰を振りかけ、疲労と心の悲しみから地面に倒れ込んだ。

「エフゲニア、我らが愛しき娘よ」と彼らは叫んだ。「我らの光よ、どこへ我らの目から姿を隠したのか？　我らの慰めよ、どこに身を潜めたのか？　我らの希望よ、まさかお前は亡くなってしまったのか？」

両親は娘を嘆き、兄弟たちは姉を泣き、奴隷たちは女主人を悼んで涙を流した。市民たちもまた、エフゲニアを悼み、善良な主であり統治者である統治者の悲しみに心を寄せた。　その後、人々は占星術師や魔術師に問いかけ始め、失踪した乙女について何か神々が告げてくれるのではないかと期待して、偶像に数多くの生贄を捧げた。しかし、彼らからも何も知ることができなかった。占星術師や魔術師は、偽り深く無知であったため沈黙を守り、偶像は魂を持たない存在であったからだ。
ついに、アレクサンドリアの住民の一人が、統治者を慰めるために作り話を思いついた。すなわち、神々がエウゲニアの美しさに魅了され、彼女を天界へ連れ去り、自分たちの仲間に加えたという啓示を受けたと主張したのである。悲嘆に暮れていた父はこの作り話を信じ、悲しみの中で少しばかり慰められ、辛うじて涙を喜びへと変えた。　彼は直ちに、最愛の娘に似た黄金の偶像を鋳造するよう命じ、それをアレクサンドリアの目立つ場所に安置し、新たな祭典や数多くの生け贄を捧げることで、エウゲニアを新たな女神として国民全体に崇めさせた。そして、それによって自らの悲しみを和らげようとしたのである。 しかし、 、エウゲニアの母クラウディアと兄弟のアヴィト、セルギウスは、その作り話を信じず、エウゲニアを偲んで絶え間なく、慰めようのないほど泣き続けた。

その間、男装し、男の名を名乗り、厳しい生活様式ゆえに男性と見なされていたこの祝福された乙女は、前述の修道院で暮らし、修道者の従順を熱心に果たし、神に仕えていた。彼女は神の教えにおいてこれほどまでに秀でていたため、二年後にはすでに聖書全体を暗記していた。　また、彼女の魂は平安に満ち溢れていたため、誰もが彼女を天使の一人と見なしていた。キリストの力と汚れなき処女性によって隠されていた彼女の女性としての本質を、誰も見抜くことはできなかったが、その

生き様と完璧な品格によって、人々は驚嘆させられた。　彼女の言葉は謙虚で、親しみやすく、穏やかで、寡黙であり、神への畏敬と教訓に満ちていた。礼拝に彼女より先に到着する者はおらず、彼女より後に去る者もいなかった。　彼女はすべての人にとって益となり、教訓となった。悲しむ者を慰め、喜ぶ者と共に喜び、怒りや激昂に駆られた者を一言で謙虚にさせ、高慢な者に対しては、彼女の謙虚な生き様を見るだけで、その高慢さを即座に鎮め、柔和な者へと変えた。

しばらくして、彼女は神から奇跡を行う賜物を受けた。彼女が病人を訪ねると、彼女の到来そのものによって即座に病が追い払われ、病人は完全な健康を取り戻した。彼女の二人の宦官、プロトとヤキンフは、常に彼女のそばに寄り添い、彼女の生き方を模範とし、忠実な僕であり友人であった。

彼女が神に帰依してから3年後、その修道院のイグメンが亡くなり、集まった修道士たちは満場一致で、彼女を自分たちのイグメンにしてほしいと懇願した。彼らは、神によって守られていた秘密――すなわち、彼らのエウゲニオスが本来は男性ではなく女性である――を知らなかったのだ。彼らは、その修道院のすべての断食者たちの生活とは比べものにならないほど、彼女の賢明で清らか、そして神に喜ばれる生き様を見ていたため、長い間、彼女に自分たちの指導者となるよう懇願し、強く促した。　一方では、妻である彼女が男性たちを統率することは不適切であり、法に反することだと懸念しつつも、他方では、これほど多くの誠実な修道士たちの熱心な懇願を欺き、拒絶することを恥じて、聖女は彼らにこう言った。

「お願いです、兄弟たちよ、聖なる福音書を持ってきてください。」

そしてそれが持ち込まれると、彼女はこう続けた。

「キリスト教徒として、いかなる決定を下すに際しても、まず第一に主キリストご自身に尋ねるべきです。この件についてキリストが私たちに何を命じられるかを見てみましょう。そして、その御心に従いましょう。」

兄弟団全員の面前で福音書を開くと、そこには次のような言葉が記されていた。*「あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、あなたがたのしもべとなりなさい。あなたがたのうちで第一になりたいと思う者は、あなたがたの僕となりなさい」*（マタイ20:26–27）。

この言葉を読み終えると、聖女はこう叫びました。

「さあ、私はキリストの御命令と、皆様のお願いに従います。私が皆様の愛のしもべとなり、僕とならせてください。」

そして皆は、彼女の承諾を喜びました。そして、名目上はエウゲニウス、実際にはエウゲニアであった彼女は、その修道院の院長職を引き受け、皆にとっていわば囚人であり奴隷のようになり、絶えず兄弟たちのために働き、水を運び、薪を切り、すべての独房を掃除し、大きな熱意をもって皆に仕えました。　エフゲニアは、住居として門番の個室を選んだ。それは、個室の優劣によって自分だけが他者より上であるかのように見せないためであった。修道院の務めに励みながらも、彼女は決まった教会の礼拝、すなわち早課、時課（特別な日には聖体礼儀）、そして晩課を決して欠かすことはなかった。　そして、神を賛美しなかった時間は無駄に失われたものだと彼女は感じ、神を賛美することなく一時間たりとも過ぎ去らないよう、細心の注意を払っていた。　彼女の手には仕事があり、口には絶え間ない祈りがあった。そして彼女は、人々から悪霊を追い出す力を授かり、また、ここで詳しく語るには時間が足りないほど多くの奇跡を行う恵みも与えられた。しかし、ここでは、聖女に対する迫害がどのように始まったか、そして彼女の生涯と苦難のその後の経過と結末について語ろう。

アレクサンドリアに、メランフィアという名の女性がいた。彼女は財産には恵まれていたが、善行においては貧しかった。彼女は熱病にかかり、一年以上もその病に苦しんでいた。　彼女の邸宅は、エウゲニアが住んでいた修道院の近くにありました。ある日、エウゲニウスという名の修道士があらゆる病気を癒やしていると耳にした彼女は、急いで彼の元へ駆けつけ、自分の病を癒やしてくれ

るよう懇願しました。　彼女を憐れんだエウゲニアは、聖油を塗ってあげた。すると彼女は、その瞬間、体内にあった病の原因となる有害なものをすべて吐き出し、回復して、徒歩で自分の領地へと戻った。 しばらくして、彼女は の純銀製の器を三つ用意し、それらにお金を満たして、受けた癒やしへの感謝の印として、その無私無欲な医師のもとへ送った。しかし、エフゲニアはその贈り物を受け取らず、次のように言って彼女のもとへ返送した。

「私たちは、私たちの神によるあらゆる恵みに満ち溢れ、余りあるほどです。愛するメランフィアよ、これらすべてを貧しい人々や困窮している人々に配ることをお勧めします。」

贈り物が返送されてきたのを見て、メランフィアは深く悲しんだ。修道院に戻ると、彼女はあらゆる懇願を尽くし、あらゆる頼みごとでエウゲニアに、持参した贈り物を断らないよう強く訴えた！　ついに、彼女は苦労の末、修道院長エウゲニウスを説得し、礼拝用の品々が保管されている教会の器物庫へ器を運ぶよう命じてもらうことに成功した。

それ以来、メランフィアはエウゲニウスを頻繁に訪ねるようになり、彼に強い恋心を抱くようになった。しかし、男性の服装と名前の下に女性が隠れていることなど、彼女は知らなかった。　彼がいかに若く美しく見えるかを見て、メランフィアは、そのような若者がいつまでも清らかなまま生きられるとは考えもしなかった。そして、自身の病が治ったのは、聖性によるものではなく、彼の医術のおかげだと考えるようになった。　そして日ごとに、彼と肉体的関係を持ちたいという欲望がますます高まり、その欲望を満たすための都合の良い時と場所ばかりを探していた。　そしてある日、修道院からほど近い自分の邸宅にいたメランフィアは、その若い修道士への不純な情欲に駆られ、病気のふりをして、彼に「二人きりで会いに来て、前回と同じように助けてほしい」と頼むよう使いを送った。

彼女の元を訪れた聖エウゲニアは、病気ではなく肉欲に苦しむメラフィアの寝台の前に腰を下ろした。エウゲニアの顔を見つめながら、メラフィアは、長い間胸に秘め、燃え盛らせてきた欲望をこれ以上隠し通すことはできなかった。　彼女は恥知らずな口を開き、かつてエジプト人の女性、ペンテフルの妻がヨセフを誘惑したように（創世記39:7–20）、彼を魅了し、罪へと誘う淫らな言葉を語り始めた。

「私はあなたへの耐え難い欲望と愛に包まれているの」と彼女は言った。「そして、あなたが私の全財産の主人となり、私の夫となることに同意してくれるまで、私の心は安らぐことができないわ。　なぜあなたは、不必要な禁欲によってむなしく身を蝕み、自らの意思で若き日の日々を貧困と困窮の中で台無しにし、これほどまでに体を衰えさせ、顔の美しさを枯れさせているのですか？　ここに広大な領地があり、ここに金や銀、宝石、高価な衣服が山ほどあり、数多くの男奴隷と女奴隷がいるのです！　さあ、ついにあなたも私を見ているでしょう。若く美しい私を。今年になって未亡人となり、しかも子供もいないため、私の富を相続する者などいないのです。あなたがそれを相続し、私の主人となり、支配者になってください。

メランフィアは、エウゲニアを誘惑するために、これらすべて、そして他にも多くのことを語った。しかし、敬虔なエウゲニアは、この淫婦の恥知らずさに恥じ入り、威厳をもって彼女にこう答えた。

「黙れ、女よ、黙れ！　そして、古き蛇の毒で私を傷つけようと試みるな。お前は自らを悪魔の巨大な住処にしてしまったことが私にはわかる。神の僕たちから離れよ、誘惑者よ。お前の富は、お前のような好色な者たちに相続させよ。私たちの富は、キリストと共に貧しさにあるのだ。」　結婚に関しては、私たちの心がいつの日か肉欲の快楽を思い浮かべることさえあってはならない。ああ、至福の純潔よ、私たちはあなたを朽ちゆく富と引き換えに売ったりはしない！　ああ、聖なる処女性よ、私たちはあなたを淫行によって汚したりはしない！　おお、神の母であり処女である方よ、私はあなたに信頼を置きます。私は自分の誓いを破ることはありません！私たちにとっての唯一の結婚

とは、キリストへの愛であり、唯一の富とは、天に備えられている恵みであり、唯一の遺産とは、真理の認識なのです！

そう言うと、聖女はすぐに立ち上がり、自分の修道院へと去っていった。一方、メランフィアは言い表せないほどの恥と、同時に怒りに満ちて、町へと向かい、統治者の元を訪れてこう言った。

「あるキリスト教徒の青年が、医師を装い、私の領地からそう遠くない修道院に住んでいますが、私の家を訪ねてきました。私は彼に治療のために私の寝室に入ることを許しました。　しかし、彼は私を不貞で恥知らずな女の一人と見なし、最初は甘い言葉で私を誘惑し、やがて暴力を振るおうとしたのです。　もし私が叫ばず、召使いが私の呼び声に駆けつけてこなかったなら、この恥知らずな若者は、まるで野蛮人が捕虜を犯すかのように、きっと私を強姦して汚していたことでしょう。

メラフィアのこうした言葉に、統治者は激しい怒りを覚え、直ちに家来たちを遣わして、医師と呼ばれる青年エウゲニオスだけでなく、彼と共に暮らしている者たち全員を捕らえさせ、鉄の足枷をはめて監禁させた。　しかし、エウゲニオスと共にいた修道士全員を一つの牢獄に収容することはできなかったため、彼らは様々な牢獄に分散させられた。　この出来事の噂はアレクサンドリア全土だけでなく、周辺の都市にも広まり、キリスト教徒たちは異教徒たちから多くの侮辱や罵倒を浴びせられた。　というのも、メラフィアの話を聞いた者たちは皆、彼女の言葉を真実だと信じたからである。彼女は異教徒たちの間でも、その誠実さと高貴な家柄で知られていたからである。

修道士たちに対する裁判と処刑が行われる日が定められた。統治者は、彼らの一部を野獣の餌食にしようとし、他を火あぶりにし、またある者を木に吊るし、残りの者たちを様々な拷問で滅ぼそうとしていた。そして、定められた日が訪れると、市内だけでなく、その周辺地域からも大勢の人々が集まった。　また、非常に多くのキリスト教徒も集まり、その中には多くの長老や数人の司教もいた。彼らは、罪のない神の僕たちの最期を見届け（キリスト教徒たちは、その誹謗中傷が虚偽であると確信していた）、遺体を引き取り、尊厳ある埋葬を行うためにやって来たのである。

総督フィリッポスが息子のアヴィトとセルギウスを伴って到着し、裁判官のために用意された定位置に着くと、直ちに、その正体はまだ誰にも知られていなかった聖女エウゲニアが、重たい鉄の足枷を嵌められた宦官や他の修道士たちと共に、処刑場の真ん中に引き出された。　すると、民衆は声を張り上げて叫んだ。

「この不敬虔な無法者どもを滅ぼせ！」

一方、総督は、（彼らが言うところの）悪の首領であるキリストの汚れなき子羊を、審問のために自分のそばに連れてくるよう命じ、彼女の前にあらゆる拷問器具を並べさせ、準備万端で威圧的な死刑執行人たちを待機させた。

そして、聖エウゲニアは、父や兄弟たちの目の前で裁判の場に立っていた。いかなる悪にも無実であり、男性の修道服に身を包み、すぐに正体を見破られないよう、深く頭を垂れていた。総督は彼女に向き直り、威圧的な口調で尋ねた。

「答えよ、不法なキリスト教徒よ。お前たちのキリストは、お前たちに悪事を働き、狡猾な手段で高潔な女性たちを誘惑し、お前たちの邪悪な欲望を満たすよう命じたのか？」　答えよ、不信心者よ。いかにして貴女は、高貴なるメランフィア夫人の邸宅に踏み込み、その高潔な純潔を穢すよう強要したのか？　医師を装って狡猾に振る舞ったお前は、結局は敵であり強姦犯であった。今や、お前はその恥知らずで厚かましい企てに対し、相応の刑罰を受けることになる。悪人である以上、悪しき死を遂げるのだ。

統治者は激しい怒りを込めてそう語ったが、至福のエウゲニアは穏やかにこう答えた。

「私の主、イエス・キリスト――私が仕えるお方は、清さを教え、汚れなき処女性を守る者たちに永遠の命を約束しておられます。　メラフィアが私たちを虚偽の告発で誹謗していることは、今すぐ証明できます。しかし、敗北し、その罪を暴かれた彼女に何らかの害が及ぶよりは、私たち自身が苦難に耐え、忍耐の果実を失わないほうがよいのです。　とはいえ、もしあなたが、あなたの王た

ちの名にかけて、この偽証者に何の害も与えないと私に誓うのであれば、私たちは今すぐ、彼女が不当に私たちを告発している罪について彼女に尋問し、彼女自身がその罪に問われることになることを明らかにしましょう。

統治者が彼女に誓いを立て、求められたことを果たすと約束した後、エウゲニアはメラフィアに向かってこう言った。

「メラフィアよ、あなたの名前『[178]』そのものが、闇と混沌を物語っている！　あなたは虚偽の中傷によって、キリスト教徒たちに数多くの苦痛をもたらした。さあ、私たちを拷問し、焼き、打ちのめすよう要求しなさい！　しかし、キリストの僕たちは、あなたが偽って描くような者たちではないことを、よく覚えておきなさい。」　さあ、あなたが私たちの罪の目撃者だと名指したあの女奴隷を連れて来なさい。そうすれば、彼女の口から嘘が暴かれ、真実が明らかになるだろう。

しかし、連れてこられたその女奴隷は、女主人に気に入られようと、嘘に嘘を重ねた。なぜなら、彼女に女主人に対して何かを言うことなど到底できなかったからだ。

「私は知っている」と彼女は言った。「この恥知らずな若者は、しばしば庶民の女性たちと不義を犯している。彼は厚かましい男で、何度も私にも言い寄ってきたし、ついには私の女主人にも手を出そうとしたのだ。」　正午に女主人の寝室に入ると、彼はまず医師のように健康を気遣うふりをして彼女と会話を交わしたが、やがて恥知らずな言葉を口にし始め、ついには　彼女に暴行を加えようとし、もし私が急いで他の女中たちを呼び集め、この淫乱な男の手から女主人を救い出さなかったならば、おそらくその不法な行為を成し遂げていたことでしょう。

裁判官は他の女中たちを召喚するよう命じましたが、彼女たちもまた、女主人を助けるために修道士エウゲニウスの不利な証言をしました。すると、総督は激しい怒りを露わにして叫びました。

「これほど多くの証人がお前を打ち負かし、お前の不法を暴いているというのに、この不信心者よ、お前は彼らに何と言葉を返せるというのか？」

「今こそ語る時が来ました」と聖エウゲニアは答えた。「沈黙の時は終わったのです。私たちに対して無尽蔵に吹き込まれている嘘が勝利を収めることなく、異教徒たちの間でキリスト教徒に関する悪評が広まらないよう、自由に真実を告白する時が来たのです。　実のところ、私は生涯の終わりまでこの秘密を守り続け、それによって将来のキリストの裁きの場で、私たちに向けられた偽りを暴き、私が愛ゆえに守り続けてきたその方に対して、私の清さを証明したかったのです。　これまで私が細心の注意を払って隠してきたことを、今や明らかにせざるを得ません。それは、不法が無実を打ち負かすことのないように、また異教の不敬虔が敬虔で貞潔なキリスト教徒の生活を嘲笑したり、軽んじたりすることのないようにするためです。　私が真実を明かすのは、虚栄心からではなく、イエス・キリストの御名を賛美するためです。　この聖なる御名の力は、神を畏れる妻たちでさえも夫にふさわしい尊厳を授けられ、また、キリスト教の教師である使徒パウロが言うように、同じ性別の者が異性の人々よりも信仰において優れていることはあり得ないほどである。「神の御前では、男と女との区別はない。*『あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである』*」　（ガラテヤ3:28）。それゆえ、私もまた、信仰を置き、魂を込めて愛し、すべての希望を託したキリストのために、生活においても外見においても、妻というよりはむしろ夫の如くありたいと願った。そして、唯一の最も清く朽ちることのない天の花婿に、私の処女性を捧げ続けたのである。

そう言いながら、彼女は上着を引き裂き、聖く清らかな処女の身体の一部を露わにした。すると、総督は彼女が女性であることを知った。そこでエウゲニアは彼にこう言った。

「主よ、あなたは私の肉親の父であり、クラウディアは私の母、そしてあなたと共に座っているアヴィトとセルギイは私の兄弟です。　そして私自身は、キリストへの愛ゆえにこの世とそのすべての快楽を捨てた、あなたの娘エウゲニアです。こちらがプロトとヤキンフ、私の宦官たちです。私

[178] メランフィアは、ギリシャ語から訳すと「黒い色の」という意味である。

は彼らと共にキリストの教えを受け入れました。　そしてキリストは、その憐れみによって、私をあらゆる欲望と情欲に打ち勝つ者となさるという恵みを私に示してくださいました。私は、主が最後まで、今の私そのままの姿を守ってくださると、揺るぎなく信じております。

彼女がまだ話を終える前に、父と兄弟たちは、彼女の言葉と、そして彼女の顔つきの一部（彼らは彼女をじっと見つめていたからである）から、彼女が確かにエウゲニアであることを認めた。たちまち、言葉に尽くせない喜びと涙に包まれ、彼らは席から飛び起き、彼女のもとへ駆け寄った。彼女を抱きしめ、口づけし、喜びの涙を流し、この世のどんな光も、エフゲニアがいなければ彼らにとって喜びではなくなっていたという事実を、突然彼女を見つけ出したことに喜びを爆発させた。すぐに、彼女の母クラウディアにも、娘のエフゲニアが見つかったことが伝えられた。　クラウディアは急いで駆けつけ、最愛のエフゲニアを目の当たりにすると、ありとあらゆることをし、まるで死から蘇ったかのように娘を見つめながら、優しい言葉を次々と浴びせた。その光景を目にした人々は驚き、大声で叫んだ。

「キリストは唯一、真の神は唯一、キリスト教の神のみ！」

また、殉教者たちの遺体を埋葬するために、司教や長老たちと共に集まった多くのキリスト教徒たちも、言葉に尽くせない喜びに満たされ、次のように歌った。*「主よ、あなたの右の手は力によって栄光を受け、主よ、あなたの右の手は敵を打ち倒した。　『私たちの神のように偉大な神は、隠されたことを明らかにし、秘められたことを暴き、知者たちを彼らの狡猾さによって捕らえる』*（出エジプト記 15:6；詩篇 76:14；ヨブ記 5:13）。

その後、金糸で織られた宝石で飾られた衣が運ばれてきた。エウゲニアの両親と兄弟たちは、彼女の意思に反してその衣を着せ、皆が彼女を見ることができるよう高い場所に座らせ、失われた者を見出したことを共に喜び祝った。　直ちに、エウゲニアと共に束縛されていた修道士たちの足枷が解かれ、彼らは慈しみを注がれ、真のキリストの僕として崇められるようになった。

一方、メランフィアは大きな恐怖と恥に打ちひしがれ、裁判の場から立ち去る間もなく、天から火が彼女の家へと降り注ぎ、すべての富や財宝とともに家を根こそぎ焼き尽くし、何一つ跡形も残らなかった。　そして、アレクサンドリアおよびエジプト全土のすべての信者たちにとって、大きな喜びとなった。とりわけ、統治者フィリッポス自身が、妻や息子たち、そして家族全員と共に洗礼を受け、我らの主イエス・キリストを信じたとき、多くの異教徒たちが聖なる洗礼を受け、キリストの教会に平和がもたらされたのである。

これらの出来事の直後、総督フィリッポスはセヴェルス王とアントニヌス王に[179]　書簡を送り、その中で、国民全体の福祉にとって極めて重要なキリスト教徒を都市から追放することは、ローマ帝国にとって有益ではないと記した。　王たちはその助言に従い、エジプトのすべての都市で、キリスト教徒たちは平和を享受しつつ、自らの住処、土地、教会、そして地位を取り戻し、キリスト教の敬虔さは繁栄した。

しかし、聖なるものには常に敵の嫉妬が付きまとい、罪は美徳と戦いを繰り広げる。今なお、アレクサンドリアの最も高位の偶像崇拝者たちの中には、キリスト教徒の数が日増しに増え、偶像を崇拝する者の数がますます減少していくのを目の当たりにするのが耐え難いと感じる者たちがいた。父なるサタンに教え込まれた彼らは、統治者フィリッポスに対する誹謗中傷を携えて王たちの元へ向かった。

「実に九年間も」と彼らは言った。「フィリッポスはエジプトの国を良く治め、王の法律を厳格に遵守してきた。　しかし、彼に今何が起きたのか、我々には分からない。彼はすっかり変わってしまったのだ。彼は我々の先祖の神々への奉仕を捨て、民全体を、ユダヤ人たちがパレスチナで十字

[179]　ローマ皇帝セプティミウス・セウェルス（在位：193年～211年）は、息子のアントニヌスを共同統治者に据えていた。

架にかけ、処刑したと（誰もが主張する）あの者を崇拝するように引きずり込んでいる。　もはや、貴殿方の王の法律に対する敬意も、当然の服従も存在しない。彼は私たち全員よりも、不敬虔なキリスト教徒たちを優先している。その多くは、我々の神々の神殿を訪れては、数え切れないほどの冒涜の言葉を浴びせ、神々を『木』や『感覚のない石』、『魂のない偶像』と呼んでいる。

こうした言葉や類似の言辞によって、彼らは両王をフィリッポスに対する怒りに駆り立て、両王は彼に次のような書簡を送った。

「至高なる王よ、我らより前に統治し、あなたの敬虔さと先祖代々のローマの神々への崇敬を知っていた王は、あなたをアレクサンドリアの統治者ではなく、いわばエジプトの王として任命し、あなたが死ぬまでこの国を絶えることなく統治し、他の誰もあなたの地位に就かないことを定めた。我々もまた、この名誉を不可侵のものとして守ってきたが、それはあなたが神々の友であり、奉仕者であった間だけのことである。しかし今、あなたは神々をも捨て、我々に対して敵意を抱いているという話を耳にしている。　それゆえ、我々は、あなたが以前のようにローマの神々を崇拝し、これまで通り栄誉と名声を享受し続けるか、あるいは、神々を拒み続けるのであれば、直ちにその地位を捨て、所有財産を放棄するよう命じる。

王の書簡を読み終えると、総督は病気を装い、すべての財産を売り払い、その一部を教会に、また一部を貧しい人々に配る時間を確保した。

福者フィリッポスは雄弁の才に恵まれており、その説教によって多くの高貴なギリシャ人を説得してキリスト教に改宗させ、また、臆病で信仰に揺らいでいる者たちを励まし、確固たる信仰へと導いた。

そして、彼の財産がすべて売り払われ、分配されると、彼は統治者の地位を退き、直ちにアレクサンドリアのすべてのキリスト教徒が彼を司教に選出した。　しばらくして、ローマからテレントという名の別の統治者が彼の後任として到着した。彼はフィリップを殺害しようとしたが、民衆を恐れていた。というのも、皆が自分たちの司教のために命を捧げる覚悟をしていたからである。　そこで彼は密殺者を雇った。彼らは聖人の部屋に入り、神に祈りを捧げている一人きりの聖人を発見すると、剣で彼を斬りつけ、外へ出て姿を消した。このことはたちまち街中に知れ渡り、至る所で大きな泣き声、悲鳴、そして騒然とした混乱が広がった。　民衆に自分の陰謀が露見することを恐れたテレンティウスは、直ちに殺し屋たちを捜し出し、彼らを牢獄に閉じ込め、重い足枷で縛り上げた。まるで彼らを残酷な拷問と処刑に処そうとしているかのように。　一方、福者フィリッポ司教は、負った傷から三日間生き延び、主のもとで殉教の死を遂げ、殉教の冠を授かった。司教としての在任期間は一年三ヶ月であった。彼は、イジウムとして知られる市内の、自ら建てた教会に埋葬された。

殺人者たちをしばらく牢獄に閉じ込めた後、総督テレンティウスは、あたかも皇帝の命令であるかのように彼らを釈放した。その時、聖なる司教が彼の命令によって殺害されたことを、誰もが悟った。　父の死後、聖エウゲニアはキリスト教徒の処女たちを周囲に集め、彼女たちと共に神に仕え続け、貞潔な生活を送った。一方、彼女の母クラウディアは広大な旅人宿を建て、旅人や病人の世話に身を捧げた。　かなりの時が経った後、彼女は二人の息子と、祝福された娘エウゲニアを連れて故郷のローマに戻り、そこで自分の領地に定住した。ローマ政府　はアヴィタとセルギウスを好意的に迎え入れ、そのうちのひとりはカルタゴの地方総督[180]　に、もうひとりはアフリカの王室総督に任命された。

一方、聖エウゲニアはローマに暮らしながら、密かに多くの乙女たち――高貴な貴族の娘たち――をキリストへと導き、貞操を守るよう諭していた。当時、ローマにはヴァシラという名の、王家の出身で両親の死後に孤児となった一人の若い乙女が住んでいた。　彼女は成人するまで叔父のエリンに預けられ、王たちによって、勇敢さと高潔さで知られるポンペイという名の若者と婚約させられ

[180] アフリカ北部の古代都市。現在、その跡地にはチュニスがある。

ていた。しかし、両親の死後、ヴァシラはまだ非常に幼かったため、結婚は数年先送りされていた。キリストの名やエウゲニア、彼女の処女としての清らかな生活、そしてキリストの力によってなされる奇跡について頻繁に耳にするうちに、彼女の心は燃え上がった。主は神秘的な御業によって、彼女を御自身の天の御殿へと招いておられたからである。彼女には二つの願いがあった。キリストについて確かな知識を得ること、そしてエウゲニアに会うことである。　しかし、婚約者に知られてしまうことを恐れたこと、また当時ローマでキリスト教徒への迫害が行われていたことから、彼女自身でエウゲニアのもとへ赴き、彼女と語り合うことはできなかった。　そこでヴァシラは、エウゲニアに忠実な使用人を遣わし、たとえ書面であっても、キリストについて告げ、どのようにキリストを信じるべきかを教えてほしいと頼んだ。

聖エウゲニアは、この使者に大いに喜んだ。母や宦官たちと共に、手紙では人の口から発せられる言葉ほどには教えられないと判断し、彼女は宦官たちに準備を命じ、いわばヴァシラへの贈り物として彼らを送り出そうとした。彼らを送り出す際、エウゲニアは次のように記した。

「愛する姉妹ヴァシラよ、ここに私の忠実な二人の僕、去勢されたプロタスとヤキンファを、贈り物として送ります。彼らは幼い頃から私と共に育った者たちです。彼らを、私からの生きた手紙として受け止めてください。」

ヴァシラは、外見は奴隷だが、実のところキリストの使徒である彼らを喜んで受け入れた。彼らは昼夜を問わず彼女と語り合い、聖なる信仰を教えた。彼女は、彼らの口から発せられる神の言葉を常に注意深く、喜びと感動をもって聞き、全き心で、万物の創造主である唯一のキリスト教の神を信じたのである。　このことを知らされたローマ教皇、福者コルネリウス[181] は、密かに彼女の元を訪れ、聖三位一体の名において彼女に洗礼を授けた。その後、彼女の叔父エリンもキリストを信じるようになり、ヴァシラはエウゲニアと気兼ねなく会い、彼女との聖なる楽しい会話を楽しむことができた。 毎晩、エウゲニアは叔父の庇護のもと、何の妨げもなく彼女の家を訪れていた。

このようにして、聖エウゲニアとその祝福された母クラウディアは、多くの人々をキリストへと導いた。ローマのキリスト教徒の未亡人たちは皆、クラウディアのもとで、処女たちはエウゲニアのもとで安らぎを見出し、心身ともに安らぎを得ていた。　毎週土曜日の夜、聖ローマ教皇コルネリウスは、クラウディアの家に祈りと詩篇を送り[182] 、彼女たちが一晩中祈り、神を賛美するようにした。そして朝、雄鶏が鳴くと、　教皇自らが彼女たちの元を訪れ、キリストに回心した者たちに洗礼を授け、神聖な典礼を執り行い、すべての女性に聖体拝領を授けた。こうして、神の教会は迫害の中でも、茨の中の百合のように増え、繁栄していった。　聖なる処女エウゲニアとヴァシラはどれほど多くの処女を、聖クラウディアはどれほど多くの女性を、そして至福の宦官プロトとヤキンフはどれほど多くの若者たちを、神へと導いたことか!

やがて、不敬虔な王ヴァレリアヌスとガリアヌスが即位すると[183] 、キリスト教徒への迫害は激化した。王たちは、すべてのキリスト教の教師を殺害するよう命令を下し、何よりもまず、聖コルネリウス教皇を殺害するためにその行方を追った。

その頃、聖ヴァシラと出会った聖エウゲニアは、彼女にこう言いました。

「主は、あなたがまもなく、その貞潔のために殉教の冠を受けることを私に啓示してくださいました。」

「主は私にも、あなたについてこう告げられました」とヴァシラは答えた。「あなたは二重の殉教の冠を受けるでしょう。一つはアレクサンドリアであなたが耐えた苦難と試練のため、もう一つはキリストのために苦しみの中で流す血のためです。」

---

[181] 聖コルネリウスはローマ教皇として、251年から252年までローマ教会を統率した。

[182] すなわち、当時としては希少で、所有する者が少なかった礼拝用書物。

[183] ヴァレリアヌス――ローマ皇帝。253年から260年まで在位した。その息子ガリアヌスは、260年から268年まで在位した。

すると、聖女エウゲニアは両手を天に向けて上げ、こう言った。

「主イエスよ、至高者の御子よ、私たちの救いのために、御母である聖母マリアから生まれ給うた方よ、あなたが私に託してくださったすべての乙女たちを、朽ちることのない処女性を保ったまま、あなたの永遠の栄光の御国へと導いてください！」

そして、彼女とヴァシリアと共に座っていた多くのキリストの乙女たちに向き直り、至福のエウゲニアはこう言った：

――ぶどうの収穫の季節がやってきました。ぶどうの房は摘み取られ、やがてワインとなって王の食卓に供されます。そして、このぶどうの房の血によって飾られない強大な王国や高位の地位など、一つとしてありません。それゆえ、私の枝たちよ、私の心のぶどうの房たちよ、主のために備えなさい。　貞潔は私たちを神に近づけ、天使に似せ、それは永遠の命の母であり、聖なるものの友であり、天国への安全な道であり、喜びの女王であり、奇跡の力の指導者であり、信仰の温もりであり冠であり、愛の要塞であり確証である。　私たちは、何事にもこれほど尽力し、何事にもこれほど心を配るべきではありません。ただ、汚れなき貞潔を保つことこそが最も重要であり、さらに栄光あることは、貞潔のために死ぬことです。　この世の虚しく欺瞞に満ちた快楽とは、現れては一時的な喜びをもたらし、消え去れば永遠の苦しみをもたらすもの。束の間の笑いを与えては、永遠の涙で打ちのめし、すぐにしおれてしまう快楽の花を見せつけては、消えることのない悲しみをもたらし、　現世での幸福な生活を約束しておきながら、将来は永遠の苦しみへと陥れるものか。これらすべてのために、愛しき乙女たちよ、これまで私と共に貞潔の業に励んできた者たちよ、初めのように主の愛の中に留まり続けなさい。　今、あなたがたには一時的な嘆きの日々が訪れましたが、それは永遠の御国で喜び、歓喜できるようになるためです。私はあなたがたを聖霊にお委ねします。聖霊があなたがたを清く、汚れのないまま守ってくださると信じています。もはや私の肉体の姿を見ようとするのではなく、霊の目をもって私の行いと振る舞いを眺めてください。

このように諭した後、エウゲニアは一人ひとりに口づけをし、泣いている者たちを慰めた。そして、ヴァシラと共に祈りを捧げ、口づけを交わしてから、二人は別れた。その日、聖ヴァシラの侍女の一人が、女主人の婚約者であるポンペイウスのもとへ行き、彼にこう言った。

「ご主人様、王様たちが私の女主人をあなたに嫁がせることをお約束されたことは存じております。あなたはすでに六年以上も、彼女が成人するのを待ち続けておられ、まだ結婚に至っていません。　今、あなたに伝えに来たのは、もう彼女と結婚する必要はないということです。というのも、彼女の叔父であり養育者である人物はキリスト教徒であり、彼女自身も全身全霊でキリスト教の信仰に改宗し、今ではあなただけでなく、この世のすべてを忌み嫌っているからです。　彼女には、エウゲニアから送られてきた二人の宦官がおり、彼女は彼らを自分の主人として崇め、まるで不死の神々であるかのように、毎日彼らの足に口づけをしている。この宦官たちこそが、キリスト教の魔術を教える師たちなのである。

女奴隷の話にポンペイウスは激しい怒りに駆られ、席から飛び起きると、すぐにヴァシラの教育者であるエリンのもとへ向かった。

「この数日、私は結婚することを決めた」と彼は言った。「それゆえ、無敵の王たちが私に妻として授けてくれたその娘に、会わせてほしい。」

教育係は、ポンペイウスが彼女たちがキリストを信じるようになったことを知ったのだとすぐに察し、こう答えた。

「ヴァシラが幼く分別がなかった間は、私は彼女を瞳の如く大切に守り、ふさわしい方法で育ててきました。　しかし今や、彼女はすでに成人し、分別も身についており、その高貴な家柄ゆえに、完全に自由であり、誰の支配にも服さないことを望んでいる。それゆえ、君に彼女と会うことを許すかどうかは、私の権限外である。それは彼女自身の同意次第だ。

さらに怒りを募らせたポンペイウスは、ヴァシラの住居へと向かい、扉を叩きながら、門番たちにヴァシラに自分の来訪を告げるよう命じた。

しかし、彼の来訪を知ったヴァシラは、彼を中に入れようとはしなかった。「若者が乙女と二人きりで語り合うのはふさわしくない」と彼女は答えた。「乙女にとって、男性の顔を見るだけでも不適切である。それに、ポンペイウスがどのような意図で私のところに来たのか、私にはわからない」。

恥じ入ってその場を去ったポンペイは、数人の貴族を説得し、彼らと共に王たちの足元に駆け寄り、自分の婚約者とエウゲニアに対する訴えを述べた。

「おお、輝かしい王たちよ」と彼は言った。「ご自身のローマ人である私たちを助けてください。そして、エウゲニアが説く新しい神への信仰を、この街から追放してください。　古くから、自らをキリスト教徒と称する者たちは民に害を及ぼしてきました。彼らは我々の法律を踏みにじり、我々の神々を、あたかも虚しい偶像であるかのように軽蔑し、自然の法則そのものを歪め、婚約した花婿と花嫁が結婚することを許しません。　結婚がなければ、一体どこから人が生まれるというのか。もし人が生まれなければ、あなたがたは一体誰を支配するというのか。ローマ民族の軍勢と力はどこから生まれるというのか。誰が敵を打ち負かすというのか。わが祖国はどのように存続し、人々の生活はどのように成り立つというのか。

ポンペイウスは涙を流しながら、この種の言葉を数多く語った。ガリエヌス帝はすべての貴族たちと共に彼を憐れみ、直ちに、乙女ヴァシラに対し、婚約者と結婚するか、さもなければ剣によって処刑されるかのいずれかを選ぶよう命じた。　また、エウゲニアについては、神々に生贄を捧げるか、さもなければ拷問の末に死ぬよう命じた。さらに、王はすべてのキリスト教徒を死刑に処すよう命じた――キリスト教徒だけでなく、あえてキリスト教徒を匿おうとする者までもが、同様に処刑されることとなった。

王の命令が聖処女ヴァシラに伝えられると、彼女は大声で、恐れることなくこう答えた。

「私の花婿は、王の王、キリスト、神の御子です。彼以外には、朽ちゆく人間など知りたくありません。」

この言葉を言い終えるやいなや、彼女は即座に剣で斬り殺された。また、二人の聖なる宦官、プロトとヤキンフも捕らえられ、邪悪な神ディウ[184]　を崇拝するために偶像の神殿へと引きずり込まれた。しかし、聖人たちが神殿に入るやいなや、偶像は彼らの足元に倒れ、塵と灰へと崩れ去った。このことを知った都市の統治者ニキティウスは、彼らが魔術を用いて神ディウを打ち砕いたと考え、彼らの首を刎ねるよう命じた。　一方、聖エウゲニアを自分の元へ呼び出し、魔術について問い詰め始めた。聖女は彼に答える際、唯一真の神について、その御名さえも悪魔たちが恐れおののき、偶像と共に崩れ落ちるほどであることを、詳細かつ賢明に語り始めた。　彼女の言葉に耳を貸そうともしなかった王は、彼女を犠牲の捧げ物としてダイアナ神殿へ連行するよう命じたが、彼女が神殿に足を踏み入れる間もなく、神殿は偶像とともに崩れ落ちた。このことを知った王は、彼女の首に石を縛り付けてティベリス川に投げ込むよう命じた。　しかし、その命令が実行されると、石はたちまちほどけ、聖女は水の上を陸地を歩くかのように進んだ。そこで彼女は再び捕らえられ、激しく燃え盛る炉に投げ込まれたが、炉は突然冷め、聖女に何の傷も負わせることなく、彼女は全く無傷のままそこから出てきた。　その後、彼女は深く暗い堀に投げ込まれ、十日間飢えに苦しめられたが、神の恵みの

[184] 聖エウゲニア、クラウディア、ヴァシラ、プロトス、ヤキンフの殉教は262年頃であった。プロトスとヤキンフの墓は、366年に教皇ダマススの治世下で開かれ、その上にまもなく教会が建てられた。 現在、プロトの聖遺骨はローマのフィレンツェ人による洗礼者ヨハネ教会に、ヤキンフの聖遺骨はオスティアの使徒パウロ教会に、エウゲニアの聖遺骨は12使徒教会に、ヴァシラの聖遺骨はプラクセダ教会に安置されている。

光は聖女を照らし続け、天から食糧が送られてきた。堀の中に、主イエス・キリストがエウゲニアの前に現れ、こう言われた。

「わたしは、あなたが全霊と全心を尽くして愛し、今も愛し続けているあなたの救い主であり、そのためにあなたがこれらの苦難に耐えているのだ。わたしはあなたを偉大な栄光で包み、言い表せないほどの喜びで満たしてやる。　また、私がこの地上で清く処女の胎から生まれたまさにその日に、あなたを私の天の住まいへと迎え入れることも、あなたにとってのしるしとなるであろう。

この主の御現れは、聖なる処女の心を言い表せないほどの喜びで満たし、彼女は肉体を離れる時を喜びをもって待ち望むようになった。キリストの降誕のまさにその日、処刑人が堀へと遣わされ、剣をもって彼女を殺した[185]。

こうして、聖なる敬虔な処女エウゲニアは、この世の生涯と地上の苦難に終止符を打ち、永遠で至福に満ちた生涯の始まりを迎えたのである。　彼女の祝福された母クラウディアは、家来たちと共に、その聖なる尊い遺体を運び出し、ローマからほど近い一族の領地に埋葬した。そこは、聖エウゲニアが生前、多くの信者の遺体を埋葬していた場所であった。

ある夜、母が彼女の墓前で泣いていると、聖エウゲニアは他の多くの乙女たちと共に、偉大な栄光に包まれて母の前に現れ、こう言いました。

「わが母よ、喜び、楽しみなさい。キリストは私を聖徒たちの喜びの中へ、また私の父を総主教たちの列へと導いてくださいました。復活の日には、主はあなたをも永遠の喜びの中へ迎え入れてくださるでしょう。」　あなたの息子たち、すなわち私の兄弟たちに、洗礼によって授かったキリスト教徒としての身分を最後まで聖なるものとして守り抜くよう命じてください。彼らが肉体だけでなく、霊においても私の兄弟となり、そうして私たちが一族全体を神への恵み深い捧げ物として捧げることができるように。

聖女がこのように母に語りかけたとき、多くの聖なる天使たちの声が聞こえてきた。彼らは、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を讃え、賛美していた。罪深い私たちからも、その神に永遠の栄光と賛美がありますように。アーメン。

聖ニコラオス修道士の記念日。

記念日：12月24日

私たちの尊い父ニコライは、もともとギリシャのニキフォロス王[186]　の軍司令官であり、多くの軍団を指揮下に置いていた。　ある日、ニキフォロス王がブルガリア人と戦っていた際、ニコライもまた自らの兵士たちを率いて出陣した。夕方、彼はある宿屋に入り、宿屋の主人と共に夕食をとり、祈りを捧げて就寝した。　ところが、夜の第二番目と第三番目の見張りの時間帯[187]　、宿屋の娘が、罪を犯そうとする悪魔的な欲望に駆られて、静かに軍司令官の寝床に近づき、彼を起こして、罪深い言葉で淫行へと誘い始めた。

「その悪魔的な狂おしい欲望から立ち返れ、乙女よ」と総督は彼女に言った。「そして、自らの処女性を汚そうなどとは望まず、私という呪われた者を地獄の深淵へと突き落とそうなどとはするな！」

---

185 『聖人暦』の聖ヒエロニムスや他のいくつかの資料によれば、聖エウゲニアは12月25日に殉教した。

186 ビザンツ帝国のニキフォロス1世は、802年から811年まで在位した。

187　古代において、住居や都市を敵の襲撃やその他の脅威から守るため、見張りを数組に分けて、適切な交代によって疲労を防ぐようにしていた。そのため、時間は見張りの交代ごとに数えられ、「第一番の番」「第二番の番」といった具合であった。

彼女は少し恥じ入るとその場を離れたが、ほどなくして再び彼の元へ近づき、貞潔な男を罪へと誘い始めた。総督は再び彼女を追い返したが、彼女は悪魔に煽られて淫らな情欲に燃え上がり、三度目に彼の元へやって来た。その時、至福の総督は彼女にこう言った。

「ああ、呪われた女よ。あらゆる恥知らずさと狂気に満ち、情欲の奴隷となった者よ！　悪魔たちが、お前の貞操を汚し、お前の一族全体とすべての人々にとっての笑いもの、恥辱とし、お前の魂を永遠の苦しみへと突き落とそうと、お前を煽動していることに気づかないのか？　また、私のような不適格者が、異民族との流血の戦いに赴こうとしていることも、お分かりにならないのか？　戦いに赴くことで、どうして私が自分の体を穢すことなどできようか！　いや、神が私を助けてくださる。私は決して穢されることはない！

彼はこのこと、そして他にも多くのことを、恥知らずな乙女に語り、恥じ入らせながら彼女を追い返した。日が明けると、総督は起き上がり、祈りを捧げた後、旅を続けた。その翌夜、彼は夢の中で、ある空中の場所に立っている自分を見た。　その傍らには「力ある方」が座っており、その方の右足は左足の上に組まれていた。

「両側にいるあの戦士たちが見えるか？」と、その方はニコライに尋ねた。

「はい、主よ」と彼は答えた。「ギリシャ人がブルガリア人を打ち負かしているのが見えます」

すると、その義なる将軍の前に現れたその方は、彼にこう言った。

「我々を見てごらん。」

その「力強い方」に目を向けると、軍司令官は、その方が左足を右足の上に組んでいるのを見た。その後、義人ニコライは戦士たちの方を振り返ると、ブルガリア軍が勢いを増し、容赦なくギリシャ軍を打ち負かしているのを見た。

戦いが終わったとき、強者は正義の将軍にこう言った。

「戦死者の遺体をよく調べ、何が見えるか告げよ。」

見回してみると、軍司令官は戦場全体が死体で覆われているのを見た。その真ん中には、草が生え、何もない場所が一つあり、その広さはたった一人の人間が横たわれる程度だった。

「主よ」と彼は言った。「戦場全体が、容赦なく殺されたギリシャ人の死体で覆われていますが、ただ一か所だけ、たった一人の人間が横たわれるだけの場所があります。」

「これについてどう思うか？」と、その時、強き者が彼に尋ねた。

すると、総督は彼にこう答えた。

「私は無知な者であり、主よ、学のない人間ですので、これを理解できません。」

すると、あの恐ろしい御方は彼にこう言われた。

「この空っぽで草が生い茂った場所――一人の人間が横たわれるほどの広さ――は、お前のために用意されていたのだ。お前はそこに横たわり、仲間たちと共に殺され、その空虚を埋めるはずだったのだ。　しかし、昨夜、お前は三度も戦い、罪へと誘い、殺そうとした悪意に満ちた蛇を勇敢に退けた。それゆえ、お前自身、死から逃れることができたのだ。この草が生い茂る場所　は空のままにされ、お前は魂も体も救われたのだ。　残りの生涯、あなたは死から救われた者として、わたしに仕えることになるだろう。

これらすべてを見て聞いて、義人ニコライは戦慄し、恐怖と戦慄に包まれて眠りから飛び起き、立ち上がって、自分の兵士たちのために神に祈りを捧げた。　やがて戦いが始まり、双方が激しい激闘を繰り広げた。当初はギリシャ軍が優勢でブルガリア軍を圧倒していたが、その後、ブルガリア軍は突如として勢いを盛り返し、ギリシャ軍を圧倒し始めた。まるで猛獣のように、彼らは勇敢にギリシャ軍の大隊に突撃し、容赦なく打ちのめしながらギリシャ軍を追い詰めた。　まもなく、ギリシャ軍はすべてブルガリア軍の剣によって倒され、ニキフォロス王自身もわずかな従者たちを連れて、かろうじて逃げ延びることができた。

その時、ギリシャ軍団の指揮官であった聖ニコライは、自身の夢が現実となったのを見て、死から救われたことを神に感謝し、その地位を捨てて修道院へと退いた。そして、戦死した兵士たちのために、嘆き悲しみ、涙を流した。　聖なる修道服を身にまとい、長年にわたり神に熱心に仕えた彼は、先見の明を持つ偉大な教父の一人となった。そして、彼は天において、私たちの主イエス・キリストと共に栄光に与ることを許された。主イエス・キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

1月7日

12月25日（旧暦）

主なる神、また私たちの救い主イエス・キリストの降誕の物語。

記念日12月25日

イエス・キリストの降誕は、次のようにして起こった。それは、その至福の母である至聖なる処女マリアが、義人であり、すでに高齢（彼は八十歳であった）であったヨセフと婚約した後であった。 聖グリゴリオス・ニッサス[188] および聖エピファニオス・キプロスの証言によれば、聖母マリアは、彼女の処女性を守り、彼女を世話してもらうために、結婚という形をとってヨセフに託されたのである。　二人が同居を始める前から、彼女は聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。ヨセフはマリアの名目上の夫であったが、実際には、神に捧げられた彼女の処女性を守る守護者であり、彼女の汚れなき生活の証人であった。　なぜなら、主は、至聖なる処女によるご自身の受肉の秘密を悪魔から隠すことを望まれたからであり、そのために、敵が*「見よ、処女が身ごもる」*（イザヤ書7:14）とイザヤが預言したあの処女であることを知らぬよう、御母の処女性を結婚という形で覆われたのである。 このことについて、アレクサンドリアの大司教聖アタナシオス[189] は、次のように証言している。「ヨセフは、あたかも夫を持つかのように処女が称えられるため[190]　、また、物事の真実そのものが悪魔から隠され、悪魔が　これから起こることを知らず、神がどのようにして人々と共に住まわれることを御心に適うのかを知らないようにするために、この秘儀に奉仕しなければならな

---

[188] 聖グリゴリオス・ニッサス、 聖バシレイオス大主教の弟であり、カッパドキアのニッサの司教であった。4世紀の最も著名な教父の一人であり、アリウス派に対する熱心な闘争と、神学、哲学、説教に関する数多くの著作で知られている。その中でも特に注目すべきものは以下の通りである：　『大説教』――この中で聖父は、ユダヤ人や異教徒にキリスト教の真理を説得する手本を示している；聖グリゴリオスと彼の姉である聖マクリナとの間で行われた、彼らの兄である聖バシレイオス大主教の死後の「魂と復活」に関する対話；　さらに、様々な異端者に対する多くの論駁、聖書に関する数多くの講話、そして説教がある。聖グリゴリウスは394年に逝去した。教会では1月10日に彼の記念日が祝われる。

[189]　聖アタナシウス大聖人、アレクサンドリアの大司教は、アリウス派の異端に対する正統信仰の著名な擁護者であり、真理のための勇敢な殉教者であり、アレクサンドリア教会を長きにわたり統率する中で5度の追放に遭い、ついに多くの労苦と迫害の末、373年に帰天した。 彼は、神の御子に関する正統な教義を擁護するために多くの著作を残した。 彼の最も有名な著作は以下の通りである。『ギリシャ人に対する論駁』（Kata　'Ellinon）では、異教を論破しており、その他にも、アリウスの教義を反駁し、神の御子と父なる神との同一本質に関する正統な教義を擁護することを目的とした多くの著作がある。 また、詩篇の注解など、いくつかの解釈書やその他の著作もある。教会は5月2日と1月18日に聖アタナシウスを記念している。

[190]　ユダヤ人においては、メシアの出現以前、処女性はむしろ軽蔑の対象であり、結婚のみが完全に祝福された状態として尊ばれていたことが知られている。

かった」（キリスト降誕の説教）。また、聖バシレイオス大主教[191]は次のように述べている。「ヨセフとの婚約は、この世の支配者（すなわち悪魔）から、神の御子の受肉を隠すために行われたのである」（キリスト降誕の説教）。聖ヨハネス・ダマスコス[192]も同様に次のように述べている。「ヨセフは、処女マリアから夫なしにキリストが誕生することを知らずに、悪魔が退き、すなわちヘロデを煽動したり、ユダヤ人たちを嫉妬に駆り立てたりすることをやめるように、夫としてマリアと婚約したのだ。なぜなら、悪魔は、イザヤが『*見よ、処女が身ごもって子を産む*』（イザヤ書7:14）と予言したその時から、どの処女も夫なしに身ごもって、処女のままで子を産むことがないように、すべての処女たちを鋭く監視していたからである。　神の御計画により、聖母マリアとヨセフの婚約が整えられ、それによって闇の君主から、至聖なる神の母の処女性と、神の御言葉の受肉が隠されることとなったのである」。　夫婦の秘儀が成就する前から、至聖なる聖母マリアは聖霊によって胎内に子を宿しており、計り知れない神をその内に宿す彼女の聖なる胎は日ごとに大きくなっていった。　とりわけ、エリサベトのもとで三ヶ月を過ごした後、御自身がご自宅に戻られたとき（ルカ1:56）、その妊娠は明らかになった。御腹の中の神聖な胎児は日ごとに成長し、幼子キリストの誕生の日がますます近づいていた。　これを見たヨセフは、大きな困惑と悲しみに包まれた。彼は、彼女が処女の誓いを破ったのだと思ったからである。深い動揺の中、この義なる老人はこう語った。「どうしてこんなことが起こり得たのか？　私は彼女と関係を持ったことはなく、心の中でさえ彼女に対して罪を犯したことはないのに、彼女は妊娠している。　ああ、どうしてこんなことが起きたのか？　誰が彼女を惑わしたのか？　そして、私はどうすればよいのか、わからない。彼女を律法違反者として告発すべきか、それとも、彼女と私に降りかかる恥を恐れて黙っているべきか？　もし私が彼女を告発すれば、もちろん、モーセの律法に従って彼女は石打ちの刑に処されるだろう。そうなれば、私は彼女を凄惨な死に追いやった加害者のように見なされてしまう。もし告発しなければ、私は姦淫者たちと同罪となってしまう。一体どうすればよいのか？途方に暮れている。　こっそりと彼女を解放し、彼女が望むところへ行かせてやろうか。あるいは、私の目がそのような辱めを見なくて済むよう、私自身が彼女から離れて遠い国へ去ろうか」。このように考えを巡らせながら、義人ヨセフは聖母マリアのもとへ近づき、聖ソフロニオス・エルサレムスが証言するように、彼女にこう言った。　「マリアよ、私があなたの中に目にするこの事態とは何なのか？　栄誉の代わりに恥辱、喜びの代わりに悲しみがある。誇りとするべきところを、あなたは私に非難をもたらした。私は祭司たちから、教会においてこれほど清らかなあなたを受け入れたのに、今、目に映るのは何なのか？」[193]　。また、聖アタナシオス・アレクサンドリアも、このことについて次のように語っている。「ヨセフは、聖母マリアが胎内に宿しているのを見たが、その内にどれほど偉大な宝が秘められているかを知らず、戸惑いなが

---

[191] 聖バシレイオス大聖人（カッパドキアのケサリアの大司教）は、4世紀の最も偉大な聖人の一人であり、聖グリゴリオス・テオロゴスや聖ヨハネス・クラマトルスと共に「全教会の教師」の称号を授けられた。　敬虔な家庭環境で真のキリスト教教育を受け、その後、パレスチナのケサリアおよびアテネの学校で幅広い学術教育を修めた彼は、アリウス派の論争が教会を激しく揺るがし、分裂させていた、教会にとって最も困難な時期に、その奉仕を始めた。　ポンティウス地方の荒野で長期にわたり、極めて厳格な修道生活を送った後、364年に司祭の聖職に就き、370年にはケサリアの大司教の座に就いた。　この地位において、彼はアリウス主義に対して正統信仰を断固として擁護し、アリウス派の異端を熱烈に支持していた当時の皇帝ヴァレンティヌスによる、彼を味方につけようとする執拗な働きかけにもかかわらず、揺るぎなく正統信仰の守護者としての立場を貫いた。　彼の数多くの著作のうち、特に有名なのは、『六日創造説に関する講話』、『預言者イザヤに関する講話』、『詩篇に関する講話』、アリウス派に対する多くの論著、修道規則、典礼、数多くの説教、書簡、祈りなどである。聖バシレイオスは379年に逝去した。彼の記念日は1月1日に祝われる。

[192] 聖ヨハネス・ダマスコスは、当初ダマスカスの統治者であったが、後にエルサレムの有名な聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイ修道院の修道士となり、偶像破壊の異端に対する正教の著名な擁護者であり、『正教の信仰の正確な解説』（最初の『教義学』）や、多くの教会聖歌の著者である。 8世紀末に逝去した。その記念日は12月4日に祝われる。

[193] キリストの降誕前祝日の礼拝より、第一王の時のトロパリオ。

ら彼女にこう尋ねた。「マリアよ、あなたに何が起きたのですか？　あなたは、神殿の聖なる前庭で育てられた清らかな処女ではありませんか？　あなたは、男たちの顔を見ることを拒んだマリアではありませんか？　祭司たちでさえ結婚を説得できなかったのは、あなたではないか、マリアよ？　処女の薔薇を枯れさせないと誓ったのは、あなたではないか、マリアよ？　あなたの貞節の宮殿はどこにあるのか？　あなたの処女の清らかさを守っていた部屋はどこにあるのか？　あなたの恥じらいに満ちた顔はどこにあるのか？　「私は恥じ入っているが、あなたは厚かましく振る舞っている。なぜなら、私はあなたの罪を隠しているからだ」。ヨセフがこれらすべてを彼女に語りかけたとき、ああ、なんと清らかな子羊、汚れなき鳩、貞潔な乙女は恥じ入ったことか。ヨセフのそのような言葉に顔を赤らめて！　彼女は、大天使が彼女にもたらした福音や、エリサベトが彼女について語った預言について、彼に打ち明けることを敢えてしなかった――彼女は、虚栄心が強く、称賛を好むように見られることを恐れたため、そうすることを敢えてしなかったのだ。　このことについては、前述の聖アタナシウスも証言しており、彼はマリアがヨセフにこう語ったと伝えている。「もし私が自らについてあなたに語れば、あなたは私を虚栄心の強い者だと思うでしょう。もう少し待ってください、ヨセフ。そうすれば、羊飼いたちが私についてあなたに教えてくれるでしょう」。　聖母マリアは、ヨセフの戸惑いに対して、「　」とだけ答えました。「今に至るまで私を汚れなき処女として守ってくださる主が生きておられる。私は罪を知らず、誰も私に手を触れたことはない。私の中に宿っているものは、神の御心によるものであり、神の御業によるものである。」　ヨセフは人間として、人間的な考えを抱き、彼女の受胎が罪によるものだと疑った。しかし、彼は義人であったため、彼女を非難することを望まず、密かに彼女を去らせようとした。あるいは（シリア語訳に記されているように）、密かに彼女を置き去りにし、つまり彼女から遠く離れた場所へ逃げ出そうと考えたのである。　彼がそう考えたとき、主の御使いが夢の中に現れて、「ダビデの子ヨセフよ、恐れることなく、あなたの妻マリアを迎え入れなさい」と言った。　天使が聖母をヨセフの妻と呼んだのは、不貞に関する彼の考えを否定するためである（なぜなら、ヨセフはマリアが不貞によって身ごもったと考えていたからである）。　天使は、いわばヨセフにこう語ったのである。「彼女はあなたと婚約している妻であり、他の夫に属しているわけではない」。これについて、至福のテオフィラクトは次のように述べている：[194]

「天使はマリアをヨセフの妻と呼び、それによって、彼と婚約していた彼女が他の男性と関係を持っていなかったことを示している。また、処女性とともに、正当な婚姻関係も尊重されるようにするためでもある」。聖バシレイオス大主教も次のように論じている。　「天使はマリアを『処女』であり、かつ『夫と婚約している者』と呼んだ。それは、処女性を尊び、結婚を非難しないためである。処女性は聖なる誕生に不可欠なものとして選ばれ、結婚の始まりである婚約は、その誕生が不法な関係によるものだと誰にも思われないよう、法に従って行われた。　また、ヨセフがマリアの清らかさの常なる証人となり、彼女が処女性を汚したかのような非難にさらされないようにするためでもあった。彼女には（ヨセフという形で）婚約者がおり、彼は彼女の人生の証人であり守護者であった」（キリスト降誕の説教）。　天使はヨセフにこう言います。「恐れることなく、マリアをあなたの妻として迎え入れなさい」。　この言葉は、「婚約に基づき妻を受け入れ、また神に捧げた誓い（聖グリゴリオス・ニッサスと至福のヒエロニムスはこのように解説している）に従って処女を受け入れよ。なぜなら、彼女はイスラエルの民の中で、死に至るまでその処女性を汚されることなく守ることを神に誓った最初の処女だからである。　しかし、恐れるがよい。彼女の中に生まれた子は聖霊によるものだからである。彼女は御子を産むだろう。そして、あなたは彼に名をつける――父として名をつけるのだ。たとえあなたがその誕生に関与していなかったとしても、父が通常、自分の子供に名を

194　福者テオフィラクトは、ブルガリアのアクリダの大司教であり、四福音書への注解で知られており、その注解では多くの点でヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）に従っている。1085年頃に没した。

つけるように、アブラハムが自分の息子をイサクと名付けたように（創世記21:2）それと同じように、あなたも、実の父ではなく、ただ名目上の父に過ぎないとはいえ、父として彼に仕え、彼に名前を付けることになるのだ」。聖テオフィラクトは、天使の口を通してヨセフにこう語っている。 「あなたは幼子のご誕生には何ら関与していなかったが、私はあなたにこの（父としての）地位を与えたい。あなたが彼に名前を授けるためである。彼はあなたの血筋ではないが、あなたは彼に名前を付ける。それによって、あなたは父としてなすべきことを彼に対して行うことになる。 では、どのような名か。イエス、すなわち『救い主』という意味である。なぜなら、御方は御自分の民をその罪から救われるからである。」 ヨセフは眠りから覚めると、主の御使いの命じたとおりにし、婚約していた妻を迎え入れた。彼女は、処女の誓いによって主に捧げられた清らかな処女であり、聖霊によって世界の救い主を身ごもった主の母であった。 彼は彼女を婚約者として迎え入れ、主の処女として彼女に深い敬意を払い、救い主の母として畏敬と畏れをもって仕えた。 *「彼女が産むまでは、彼女を知らなかった」*（マタイ1:25）、すなわち（テオフィラクトの解説によれば）、妻として彼女と関係を持ったことは一度もなかった。 なぜなら、義人である彼が、結婚のためではなく、結婚という形を借りてその処女性を守るために、主の神殿から彼に与えられた彼女と、どうして交わることができようか。神に永遠の処女性を誓った主の乙女に、どうして触れることができようか。 どうして彼が、自らの主であり創造主である方の無原罪の母に触れることができようか。また、福音書が「産むまで」と述べているのは、聖書における慣用表現であり、「まで」という言葉は、終わりのない時間を意味して用いられているのである。 なぜなら、ダビデもこう言っている。「主はわが主に言われた。*『あなたの敵をあなたの足のもとに置くまで、わたしの右に座しなさい』」*（詩篇109:1）[195]。ここでの考えは、主である御子が、主である父の右に座しておられるのは、御父の敵を御父の足もとに置くまでという期間に限られる、というものではない。むしろ、御父の敵が御父の足もとに服従した後もなお、主である御子は、勝利者として、果てしない世々限りなく、さらに栄光に満ちて座しておられる、ということである。 これと同様に、聖ヨセフについても次のように記されている。 *「彼女は産むまで、彼とは関係を持たなかった」*（マタイ1:25）――これは、 ある異端者たちが[196] 考えていたように、その後で彼が彼女と関係を持つべきだったという意味ではなく、そのような御子、すなわち受肉された神が誕生した後、 また、その誕生の際に起こった、ヨセフが自ら目撃したあの偉大な奇跡の数々を経て、この敬虔な老人は、彼女に触れることさえ敢えてしなかったばかりか、しもべが主人に敬意を払うように、神の母として畏れと震えをもって彼女に仕え、深く崇敬したのである。「まで」という言葉について、聖テオフィラクトは次のように語っている。「聖書は通常、大洪水について語ったようにこう述べている。*『水が地から消え去るまで、カラスは箱舟に戻らない』*（創世記8:7）。そして、カラスはその後も戻らなかった。

また、キリストもこう言われている。*『見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる』*（マタイ28:20）。では、世の終わりが来れば、主はもはや私たちと共にいないというのか。それどころか、その時こそ、果てしない永遠の世にわたり、主はなおさら私たちと共にいてくださるのだ。 ここでも同様に、「産むまでは」と記されている。すなわち、キリストの誕生前も誕生後も、ヨセフは聖母マリアと関係を持たなかったということである。それは、主が世の終わりまで、そして世の終わり後も、絶えず私たちと共にいてくださるのと同じことである。 そもそも、ヨセフ

---

195 この詩篇は、メシアであるキリストが敵たちに対して勝利を収め、その聖なる人性が賛美されることが記されているため、預言的あるいはメシア的な詩篇の一つである。

196 至聖なる聖母マリアの永遠の処女性を否定した異端者たちは、まず第一に、4世紀のアラビアにおけるいわゆるアンティディノマリアニ派であり、聖エピファニオス・キプロス人は彼らに対して論じました。続いて、4世紀末には、ヘルヴィディウス、修道士ヨヴィニアヌス、そしてサルディスの司教ボノズがいました。 ヘルヴィディウスとヨヴィニアヌスに対しては、聖ヒエロニムスが論駁した。

が、聖母から救い主が言葉に尽くせぬ御生まれをなされたことを知った後、どうして聖母に触れることができようか？」

救い主の誕生後も、至聖なる聖母の無垢な処女性については、次のような事実からも明らかに示されている。すなわち、ヨセフが妊娠した聖母について疑いを抱き、彼女が暴力によって処女性を奪われてはいないかとさえ考えたとき、天使が現れてマリアを彼の妻と呼び、 「恐れることはない」と天使は言い、「あなたの妻であるマリアを受け入れなさい」と告げ、それによって（前述したように）彼女の不貞に関するヨセフの疑念を打ち消した。 その後、キリストの降誕後、ベツレヘムやエジプトで、この義人である老人がすでにマリアの清らかさと、聖霊によって生まれた神の御子についての啓示を受けていた時に、同じ天使がヨセフの前に現れた際、天使はもはや聖母マリアを彼の妻とは呼ばず、 ただ「生まれた御子の母」と呼んだ。なぜなら、福音書には次のように記されているからである。*「彼らが去った後、主の御使いが夢の中でヨセフに現れて言った。『起きて、幼子とその母*（あなたの妻ではない）*を連れて、エジプトへ逃げなさい』」*（マタイ2:13）。そしてエジプトでも、天使はヨセフにこう言います。*「起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ行きなさい」*（マタイ2:20）。これは、天使がヨセフを結婚へと導いたのではなく、幼子とその母に仕えるよう導いたことをはっきりと示しています。 したがって、ヨセフは、マリアが長子である御子を出産するまで、彼女を妻として知らなかっただけでなく、神の御子が誕生した後も、マリアは朽ちることのない処女であり続けたのである。このことについては、教会のすべての偉大な教師たちが一致して証言している。

また、[197] によると、至聖なる処女マリアがすでに胎内に御子を宿していた頃、（天使がヨセフに現れた後のことだが）アンニンという名の律法学者の一人が彼らの家を訪れ、妊娠した処女を見て、急いで大祭司やシネドリオンの全員のもとへ行き、こう言ったという。 「あなたがたが義人と呼んでいた大工のヨセフは、不法な行いを犯した。彼は、主の神殿から彼に預けられていた乙女を密かに姦淫し、汚した。そして今、彼女は身ごもっている。」 大祭司が遣わした役人たちは、ヨセフの家へ行き、その律法学者が言ったとおり、マリアが身ごもっているのを見つけた。彼らはマリアをヨセフと共に連れ出し、大祭司と全サンヘドリンのもとへ連れて行った。 すると、大祭司は処女マリアに言った。「聖所の至聖所で育てられ、天使の手から食物を受け、天使の歌声を聞いてきたあなたが、主なる神を忘れたのですか。一体、何をしたのですか。」彼女は泣きながら答えた。「私の主なる神が生きておられる限り、私は清く、男を知りません。」 その後、大祭司はヨセフにも言った。「お前は一体何をしたのか？」彼は答えた。「私の主なる神に誓って、私は彼女とは無関係です」。すると大祭司は彼に言った。 「あなたは、あなたの子孫が祝福されるようにと、神の力強い御手の下に頭を垂れることをせず、イスラエルの子らの知らないところで、主に捧げられた処女と交わった。それゆえ、あなたたちは彼女と共に、告発の水（[198] ）を飲まなければならない。そうして主が、すべての人の前であなたたちの罪を明らかにされるためである」。

---

197 この物語は、外典である『ヤコブの福音書』（いわゆる「第一ヤコブ福音書」）の第15章および第16章に収録されている。また、この物語は、例えば『マリアの誕生と救い主の幼少期の物語』など、他の多くの外典にも、若干の異文はあるものの、繰り返し登場している。

198 ここで言及されているのは、もちろん、モーセの律法（民数記5章）に基づき、夫が妻の姦通を疑った場合に執り行われた、よく知られた儀式である。 疑いをかけられた者は祭司のもとに連れて行かれ、祭司は犠牲を捧げた後、聖水を土器の器に注ぎ、そこに幕屋（あるいは幕屋に取って代わった神殿）の床の塵を加え、妻の頭を露わにし、その後、彼女の手にパンの供え物を置くと、 自ら手に聖水を持ち、その水に対して次のような厳粛な呪文を唱えた。すなわち、彼女が潔白であればこの水は彼女にとって罰とはならないが、有罪であれば、彼女の太ももが枯れ、腹が膨れ上がるような呪いとなるというものだった。その他のいくつかの儀式を経て、祭司は妻にこの水を飲ませた。 興味深いことに、外典の福音書によると、大祭司自身（司祭ではなく）がこの儀式を行い、しかも聖母マリアだけでなく、ヨセフに対しても行ったとされている。

そして、神はモーセを通して、モーセの書（民数記）第5章に記されているような裁きを定められた。　もし、ある男または女が姦淫の疑いをかけられ、その事実を認めない場合、その者には主の神殿において、特別な聖なる儀式と定められた手順に従って、誓いの水が与えられた。　そして、その水を飲んだ後、神の裁きとして、姦淫を犯した者に対して、その不義を明らかにするある種の告発のしるしが現れた。　まさにこの水をもって、大祭司は相応しい儀礼に従い、まずヨセフに、次にマリアに飲ませたが、彼女には何の告発のしるしも現れなかったため、民は彼らの罪が露見しなかったことに驚嘆した。そこで大祭司は彼らに言った。

「もし主なる神があなたがたの罪を明らかにされなかったのなら、平安のうちに去りなさい。」

そして彼らを解放した。ヨセフは聖母マリアを連れて自分の家に入り、喜びながらイスラエルの神を賛美した。

その後、カエサル・アウグストゥスから、全土で人口調査を行うよう命じられた[199]　。人々は皆、それぞれの町へ登録に行くことになった。　ヨセフもまた、ガリラヤのナザレという町から、ユダヤのダビデの町、すなわちベツレヘムへと向かった。彼はダビデの家系に属していたからである。彼は、婚約者であり、身ごもっていたマリアと共に、登録を受けるためであった。　ベツレヘムは、エルサレムから南へほど近い小さな町で、山岳地帯のヘブロンへと続く道沿いに位置し、　ザカリアの家が立ち、大天使による受胎告知の後、聖母マリアが洗礼者ヨハネの母エリサベトを訪ね、挨拶を交わした場所である。　このように、ベツレヘムはエルサレムとヘブロンの間の道の途中に位置しており、ガリラヤの町ナザレからは、三日ほどの道のり、あるいはそれより少し遠い距離にある。　ベツレヘムが「ダビデの町」と呼ばれるのは、ダビデがそこで生まれ、またそこで王として油注ぎを受けたからである。また、ラケルもそこで亡くなり、ダビデの父イッサイの墓も同地に位置しているとされている（創世記35:19）。　ベツレヘムの以前の名称はエフフラファであったが、ヤコブがそこで羊の群れを飼っていたとき、この場所を「パンの家」（ベツレヘム）と名付けた。それは、霊によって予見し、その場所で天から降るパン（ヨハネ6:51）、すなわち主キリストが生まれることを予告していたからである。　また、ベツレヘムの東側、ダビデの井戸の向かい側――かつてダビデが激しい渇きに襲われ、*「ベツレヘムの門にある井戸から、誰が私に水を飲ませてくれるだろうか」*（列王記下23:15）と語った場所――には、ベツレヘムの町が位置する岩山の中に洞窟がある。　この洞窟からそう遠くない場所に、サロメの所有する畑がありました。彼女もまたベツレヘムの住民であり、聖母マリアとヨセフの両方の親戚にあたる人物でした。

ヨセフが町に近づいた頃、まだ結婚を知らない清らかな花嫁の出産の時が訪れ、彼は、産む者が自らの胎内の祝福された子をこの世に迎えるために、心地よい場所を見つけられるような宿を探し始めた。　しかし、戸籍登録のために押し寄せた大勢の人々によって、宿屋は満室になるだけでなく、町全体が人で溢れかえっていたため、彼は宿を見つけることができなかった。そこでヨセフは、宿屋に彼らの居場所がなく、しかも日がすでに暮れかけていたため、あの洞窟へと身を寄せた。　その洞窟は家畜の宿として使われていたが、まさにその場所で、至聖にして至福の聖母は真夜中に神に熱心に祈りを捧げ、神への思索にふけり、主への渇望と愛に満たされたまま、12月25日[200]　に、何の苦

---

[199]　アウグストゥス、ローマ初代皇帝（紀元前15年～紀元14年）。彼の正式な名は、ガイウス・ユリウス・カエサル・オクタヴィアヌス・アウグストゥスであった。彼はオクタヴィウスと、ユリウス・カエサルの妹ユリアの娘アクティアスの息子であった。　アクティウムの海戦において、彼はマルクス・アントニウスを破り、広大なローマ帝国の唯一の支配者となった。　彼の治世中に、福音書（ルカ2:1）に記されている、帝国全土で行われた人口調査が実施され、それが聖ヨセフと聖母マリアをベツレヘムへと向かわせるきっかけとなった。

[200] キリストの降誕がまさに12月25日にあったという伝承は、非常に古くからある。すでに『使徒の規定』（第5巻、第12章）には、「兄弟たちよ、祝祭日を守りなさい。とりわけ、キリストの降誕の日を、10月（decembri）の25日に祝うよう

しみもなく私たちの主イエス・キリストを産み落とした。　夫との交わりの喜びなしに身ごもった方にとって、苦しみなく産むことはまさにふさわしいことでした。彼女は、「　」と語り、結婚の喜びを知らず、それに与ることもなかったのです[201]　。そして、彼女が清らかさの中で身ごもったゆえに、苦しみなく産んだのです。聖グリゴリオス・ニッサスは次のように述べています：　「処女が身ごもり、処女が胎内に宿し、処女が産み、処女は処女のままであった。地上にこれほどの奇跡はかつてなかった」（『キリスト降誕の説教』）。また、聖ダマスコスはこう述べている。「すべての古代の奇跡の中でも、この新しい奇跡に勝るものはない。夫なき母が子を産んだことを、誰が知ろうか」[202]。　聖母マリアは、アダムが妻なしでエバを生み出したのと同様に、夫なしでキリストを産み出しました。これについて、聖金口ヨハネ[203]　は次のように述べています。「アダムが妻なしで妻を生み出したように、ここでも聖母は夫なしで夫を産み出し、それによってエバに対する夫たちの義務を果たしたのです。　アダムは、その体から肋骨が取り出されても無傷のままであり、聖母もまた、御子を産んだ後も朽ちることのないままであった」（『キリストの降誕に関する説教』）。　そして、燃え尽きぬ荊の茂みや紅海において、あたかも影のように予表されていたことが成就した。「荊の茂みも燃え尽きることなく」（教会は歌う）、「そのように、あなたは処女として産み、処女のままであった」[204]　。また別の箇所では、「海は渡ることのできないまま残り、 汚れなき御方は、インマヌエルの誕生後も朽ちることなくあり続ける」[205]　。このように、その処女性を損なうことなく、永遠の処女マリアは受肉した神を産み出した。そして、この誕生は、助産婦の通常の助けや介助なしに成し遂げられた。聖アタナシオス・アレクサンドリアスは、福音書の次の言葉について論じている際、そのことを証言している：　*「そして、彼女は長子である御子を産み、おくるみに包んで飼い葉桶に寝かせた」*（ルカ2:7）――について次のように語っている。「聖母の神秘的な誕生を見よ。彼女自身が産み、彼女自身がおくるみに包んだのだ。世俗の女性たちでは、一人が産み、もう一人がおくるみに包むが、至聖なる聖母の場合はそうではない。　御自身で産み、御自身で布を巻かれた。御自身、痛みを知らぬ母であり、助産術を学ばぬ産婆でありながら、御自身は、いかなる者にも、その不浄な手で至聖なる御降誕に触れさせなかった。御自身で、御自身から生まれた御子に仕え、御自身で布を巻き、飼い葉桶に寝かせられた」。同様に、聖キプリアンもこう述べている：　「降誕の時も、降誕後も、聖母は神の力によって処女のままであった。彼女は痛みなく出産し、助産婦の助けを一切必要とせず、自らが出産者であり、出産の介助者でもあった。それゆえ、彼女は御子に敬虔な世話を捧げている。　御子に触れ、抱きしめ、口づけし、乳首を差し出し、これらすべてを、出産時に通常伴うようないかなる病気や肉体の衰弱もなく、喜びをもって行っている」。　かくして、彼女ご自身が処女

にしなさい」と記されている。 また、2世紀のアレクサンドリアのクレメンスも、12月25日をキリストの降誕の日として指摘している。もっとも、迫害によってキリスト教の礼拝の自由が制限されていた最初の3世紀の間、東方の一部の地域では、キリストの降誕祭が1月の主顕節と統合されていた。この慣習は、アルメニア人によって今日に至るまで受け継がれている。

[201] 聖母マリアの受胎告知の第2ステヒラ、「主よ、私は叫びました」の調。

[202] 詩篇唱のステヒラ、第2声。

[203]　聖ヨハネス・クラマトルス（金口ヨハネス）、コンスタンティノープル大司教は、4世紀末から5世紀初頭にかけて活躍した著名な教父であり、とりわけ数多くの説教集によってその名を知られている。その並外れた雄弁さから、「金口」という異名を得た。 当初（そして生涯の大部分）はアンティオキアで司祭として過ごしたが、4世紀末にはコンスタンティノープル大司教の座に就いた。生涯のこの最後の時期、彼は皇帝アルカディウスの妻である皇后エウドクシアから多くの迫害を受け、　アルカディウス帝の妃であるエウドクシア皇后から多くの迫害を受け、アルメニアへの流刑の地で生涯を閉じた（407年）。彼の記念日は11月13日と1月30日に祝われる。正教会で一年の大半に行われる聖体礼儀は、彼に由来するものである。

[204] 第2声部の『ドグマティック』。

[205] 第5声の教義歌。

の御手をもって、朽ちることのないご自身の御降誕（神聖な幼子）に仕え、親族である老女サロメを待っていた。ヨセフは、至聖なる乙女に仕えるために、彼女を呼びに行くのだった。　しかし、サロミアが到着した時には、すでにその業は成し遂げられていた。なぜなら、産み落とした方ご自身が、御子を抱き、おくるみに包み、飼い葉桶に寝かせながら、奉仕をなさっていたからである。

聖殉教者ジノン司教はさらに、祖母が到着した際、その誕生が処女によるものであり、苦痛を伴わないものだったことを信じず、通常の助産術の手法を用いて、この誕生が真実であるかどうかを確かめようとしたと伝えている。　しかし、その大胆不敵な行いに対し、即座に罰が下った。すなわち、その試みを敢行しようとした彼女の手は、突然、火のような病に冒され、激しく腫れ上がり、萎えてしまったのである。　すると、その痛む手を神聖な幼子に当てたとき、彼女はたちまち癒やされ、以前と同じように健康になった。その時、サロメアは、母が聖母であり、幼子が神であることを信じるようになった[206]。

その後、汚れなき母であり、新生児である御子への並外れた奉仕者である彼女は、あらかじめそのために用意され、ナザレから持ち込まれた、亜麻製の白く清らかで薄いおくるみに、その愛おしい御子を包み、同じ洞窟にあった飼い葉桶に寝かせ、　神であり、自らの創造主である御子にひれ伏した。このことについて、聖ヨセフ（ ）――カノンの作者（[207] ）――は、至聖なる乙女に次のように語りかけている。　「受肉された御子よ、人間の姿をとられた御子よ、御母は御手を差し伸べて、母として拝み、口づけを捧げながらこう言われました。『わが子よ、最も愛しい子よ、私はこのようにあなたを抱きしめています。その御手によって全被造物を支えておられるあなたを』」[208]。確かに、神の御子である聖母は、飼い葉桶に横たわる御自身から生まれた御子に、地までひれ伏して礼拝し、その周囲には目に見えない天使の軍勢が驚嘆の念を抱きながら取り囲んでいた。

そして、飼い葉桶のそばには、牛とロバが繋ぎ止められていた。これは、「牛は主人の飼い葉桶を知り、ロバは主人の飼い葉桶を知る」（イザヤ書1:3）という聖書の言葉が成就するためであった。　この牛とロバは、ナザレのヨセフによって連れてこられた。ロバは、身ごもった聖母を旅の途中で背に乗せて運ぶために連れてこられ、牛は、ヨセフがそれを売って、カエサルの命令によって課せられた税を納め、また自分自身の必要な物も購入するために連れてきたのである。　この二つの言葉を持たない動物たちは、飼い葉桶のそばに立ち、当時の冬の寒さの中、その息で幼子をお温めし、こうして主であり創造主である方にお仕えしたのである[209]。ヨセフは、生まれた御子と、その御子を産んだ御母の両方にひれ伏した。なぜなら、彼はその時、彼女から生まれた御子が聖霊によるものであることを悟ったからである。聖アタナシウスも次のように述べている。　「まことに、ヨセフは、彼女が長子である御子を産むまでは、彼女を知らなかった。処女が彼女の中に宿した御子を身ごもっている間、ヨセフは彼女を知らず、彼女の中に何があるのかも、彼女の中で何がなされているのかも知らなかった。　しかし、彼女が産んだとき、彼は初めて悟った。その時、ヨセフは処女について、彼女の力がどれほど強大であったか、そして彼女がどのような存在となるにふさわしいと認められたかを悟った。その時、彼は、乳を飲ませながらも、同時に処女の朽ちることのない純潔を保っている処女を見て、悟った。その時、彼は、処女が産んだにもかかわらず、産婦に特有の体験を何も味わわなかったことを悟った。　その時、彼は、割ることのできない岩が、霊的な岩に乳を与えているこ

---

[206] この伝承は『ヤコブの第一福音書』に由来する。

[207] 聖ヨセフ・ペスノピセツ（聖歌作家）は、シチリア出身で、後にテッサロニキのある修道院で修道生活を送った。皇帝レオン・アルメニアヌスによる偶像排斥運動の際、正教のために多大な苦難に遭った。　別の偶像排斥派皇帝テオフィロスのもとでヘルソネスへ流刑に処されたが、そこから皇后テオドラによって呼び戻された。883年に没した。その記念日は4月4日に祝われ、多くの聖歌、とりわけ多くのカノン（約48曲）が歌われる。

[208] 12月23日のキリスト降誕前夜祭の礼拝では、晩課の三歌集の第9歌が歌われる。

[209] この伝承もまた、外典の福音書から引用されたものである。例えば、『救い主の幼少期の物語』に見出すことができる。

とを悟った[210] 。その時、ヨセフは、イザヤが彼女についてこう記していたことを悟った。「見よ、処女は胎内に受け入れる」。 聖アファナシオスのこれらの言葉は、その時にヨセフが秘儀の力を悟り、それを悟って畏れと喜びをもってひれ伏し、この神秘の目撃者かつ奉仕者となることを許してくださった受肉された神に感謝したことを証明している。– キリストの誕生の時刻については、多くの信頼できる著述家たちが、それは安息日の後に続き、主の日（日曜日）に先立つ真夜中であったと述べており、この報告は第6回全地公会議[211] の見解と一致している。同公会議は、主の日（日曜日）の祝祭について次のように説明している。「その日、神は光を創造され、その同じ日、主は御自身をこの世に生み出されることをお選びになった。その同じ日、主はヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられ、その同じ日、人類の贖い主である慈悲深き御方は、私たちを救うために死からよみがえられ、その同じ日、主は御自身の弟子たちに聖霊を注がれた」。 なぜなら、確かな伝承によれば、主は金曜日の受胎告知の時に処女の胎内に宿られ、また金曜日に受難されたのと同様に、主は日曜日にお生まれになり、また日曜日によみがえられたからである。そして、神が*「光あれ」*（創世記 1:3）と仰せになった日曜日、 また、*「光があった」*（創世記 1:3）その同じ日に、御自身、すなわち永遠に存在する光が、この世に輝きを放たれるのがふさわしかったのである。そして、キリストが夜、しかもその特定の時刻に生まれられることについては、ソロモンの知恵の書において預言的に予告されており、そこには次のように記されている。 *「まことに、すべてが静寂に包まれ、夜がその流れの半ばに達したとき、あなたの全能の御言葉は、威厳ある戦士のように、天の王座から滅びゆく大地の真ん中へと降りてきた」*（知恵の書 18:14–15）[212] 。 キリストの降誕 の際、宇宙においても偉大な奇跡が起きた。すなわち、私たちの主が純潔に封印された処女の門を通って降りてこられたまさにその時刻、その洞窟の岩から突然水の泉が湧き出し、ローマでは地中から油の泉が湧き出てティベリス川へと流れ込んだ。 「永遠」と呼ばれた偶像の神殿は崩壊し、偶像は粉々に砕け散り、その同じ場所の空には三つの太陽が現れた。また、スペインではその同じ夜、太陽よりも明るい雲が現れ、ユダヤの地では、冬であるにもかかわらず、エンガドのブドウ畑が花を咲かせた[213] 。 とりわけ奇跡的だったのは、福音書に記されている通り、天使たちが賛美の歌を歌いながら天から降りてきて、人々の前にはっきりと姿を現した出来事である。その経緯はこうである。聖ヒエロニムスの証言によれば、キリストが生まれた洞窟の向かいには、「アデル」と呼ばれる非常に高い塔があり、そこには羊飼いたちが住んでいた。 その夜、彼らの中の三人がたまたま目を覚まして羊の群れを見守っていたところ、天の軍勢の最高位にある天使（聖キプリアヌスの説によれば、聖なる使者ガブリエルであった）が、天の栄光に輝き、その光で彼らをも照らし出しながら、大いなる輝きを放って彼らの前に現れた。 彼を見た彼らは、ひどく恐れました。 しかし、現れた天使は、彼らに恐れを捨てて恐れるなと言い、救い主の誕生によって全世界にもたらされた喜びを告げ知らせた。その際、彼は自分の告げ知らせが真実であることのしるしも示した。*「おむつに包まれ、飼い葉桶に寝かされている赤ん坊を見つけるだ*

---

[210] これらの言葉には、明らかに聖書の二つの箇所が念頭に置かれている： ダニエル書2章（ここで聖預言者ダニエルは、ナブコドノソル王に像に関する夢を解き明かし、また、手のない岩が切り出された切り分けられない山において、至聖なる処女と、彼女によるキリストの超自然的な誕生が予表されている箇所）、ならびにコリントの信徒への手紙第一 10:4（ここで使徒パウロは「石」について言及している。

[211] 第6回全地公会議は、680年、コンスタンティノス・ポゴナトス帝の治世中に、受肉した救い主キリストには一つの意志しかないと説いたモノフェリテ派の異端に対抗して招集され、この異端を非難した。公会議はコンスタンティノープルで行われた。

[212] 『ソロモンの知恵』のこの箇所（知恵18:14–15）は、本来、神の全能の御業によってエジプトの長子たちが打たれ、ユダヤ人の長子たちは滅ぼしの天使によって救われたあの夜を指している。 聖ディミトリオスは、この箇所をキリストの降誕という恵み深い夜に関する預言として引用している。おそらく、あの夜（エジプトの夜）が神の民にとって救いとなったのと同様に、この夜（ベツレヘムの夜）もすべての人々に救いをもたらしたという根拠に基づいているのだろう。

[213] おそらく、これらの伝承は、聖ディミトリ・ロストフスキーによって、キリストの降誕に関する西欧の伝承から借用されたものであり、そのうちのいくつかは、我々の古ロシアの写本や印刷された集成にも受け継がれている。

*ろう」*と彼は言った。　*天使がそう語っている最中、突然、空から大勢の天の軍勢の歌声が聞こえてきた。彼らは神を賛美し、「天には神に栄光、地には平和、人々に神の御心」と歌っていた*　（ルカ2:12–14）。この天使の出現と天の軍勢の賛美の後、羊飼いたちは互いに相談し合い、天使の言葉が真実であるか確かめるために急いでベツレヘムへ向かった。そして彼らはそこへ行き、聖母マリアと聖ヨセフ、　その婚約者、そして飼い葉桶に寝かされ、おくるみに包まれた幼子を見ました。そして、これが人類を救うために来られた、待ち望まれたメシアである主キリストに違いないと確信し、彼らは幼子にひれ伏して、自分たちが見聞きしたこと、そしてこの幼子について天使から告げられたことをすべて語りました。　そして、それを聞いた者たち（ヨセフ、サロメア、そしてその時そこに集まっていた人々）は、羊飼いたちの言葉に驚嘆した。とりわけ、苦しみなく御子を産まれた聖母マリアは、これらの言葉をすべて心に留め、深く噛みしめた。　そして、羊飼いたちは、神を賛美し、称えながら帰っていった。こうして、私たちの主イエス・キリストの降誕が成し遂げられた。私たち罪深い者たちからも、御父と御霊と共に、今、そして永遠に、世々限りなく、主イエス・キリストに栄光と誉れ、礼拝と感謝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

キリスト、わが神よ、あなたの降誕により、知恵の光が世界に輝きました。その光によって、星に仕える者たちは、星に導かれて、正義の太陽であるあなたにひれ伏し、東の空の高みからあなたを導くことを学びました。主よ、あなたに栄光あれ。

コンダク、第3調：

今日、処女は本質を超えた御子を産み、地は近づきがたい御方に飼い葉桶を捧げ、天使たちは羊飼いたちと共に賛美を唱え、東方の三博士は星を頼りに旅をする。まことに、私たちのために、永遠の神である幼子がお生まれになったのである。

キリストの降誕の説教

12月25日の記念

天の使者は、ベツレヘムの羊飼いたちに、救い主がこの世に来られたというしるしとして、おくるみに包まれ、飼い葉桶に寝かされている幼子を示します。彼は彼らにこう告げるからです。*「おくるみに包まれ、飼い葉桶に寝かされている幼子を見つけるでしょう」*（ルカ2:11–12）。　もしかすると、おくるみに包まれた幼子を見ることは大したしるしではないと考える人もいるかもしれない。なぜなら、生まれたばかりの赤ん坊は通常、おくるみに包まれているものだからである。　もし天使が、キリストの降誕　を証しし、明確に立証するために、例えば東方の三博士に東の星を見せたように、あるいはシヴィラ[214]　がアウグストゥス帝に、太陽の中に赤ん坊を抱く乙女を見せたように、何か異例のものを示していたなら、それは偉大なしるしであったでしょう。　しかし、もし誰かが霊的な目で、そのおくるみに包まれた幼子に現れている神秘をじっくりと見つめようとするならば、天使が羊飼いたちに示したしるし、すなわち、飼い葉桶に横たわるおくるみに包まれた幼子こそが、偉大なしるしであることを見出し、悟るであろう。　なぜなら、この幼子は、その降誕によって、星や太

[214]　シビルとは、異教徒の予言者たちのことである。そのうちの何人か、例えばクケイのシビルやエリトリアのシビルなどについては、古代のキリスト教の著述家たちによって、救い主に関する予言や、新約聖書の時代全般に関する予言が帰せられていた。

陽よりも明るく、神を知る光の世界を世に明らかにしたお方であり、そのおくるみは雲よりも広く、その飼い葉桶は天よりも広大である。そこには、計り知れないキリスト・神が横たわっておられたからである。　さあ、私たちの心の目をキリストの幼少期に向けよう。なぜなら、世々限りなく世界を創造し、永遠の昔から私たちのために救いを備えてくださった方が、私たちの老いた性質を新たにするために、幼子としてこの地上に現れたからである。*「幼子を見つけるでしょう」*と天使は言った。

もしかすると、キリストはこの世に幼子としてではなく、ダビデの預言に従って巨人として来られるべきだったと考える人もいるかもしれない。ダビデはメシアの到来について次のように予言した。*「彼は花婿のように、その宮殿から出て来る」*（詩編18:6）（すなわち、聖母マリアの胎内から）、*「巨人のように喜び、競技場を駆け抜ける」*（詩編18:6）[215]。それゆえ、天使は「巨人のような者」ではなく、「幼子」を見つけると告げたのかもしれない。　しかし、キリストの幼少期について考えてみれば、天使がそのような言葉を語った別の理由が見えてくる。キリストの降誕が、通常の人間の誕生とは異なり、非凡かつ超自然的なものであったように、その幼少期もまた、他の赤ん坊の幼少期とは異なっており、非凡なものであった。　すべての新生児は弱く、無知であり、長い成長期間を経て、力や知性が現れ、それとともに成長し始めるまでは、自分の中に力も持たず、何もすることができません。　しかし、この新生児、すなわち私たちの主イエス・キリストは、力と知性を兼ね備えてお生まれになった。それゆえ、天使は、無敵の力と計り知れない知恵を併せ持つこの御子こそ、この世で類を見ず、かつてない唯一無二の奇跡であると指し示しているのだ。　その無敵の強さと力については、今日の祝祭において、教会は預言者イザヤと共に「*神は力強く、支配者、平和の君*」（イザヤ9:6）と讃えることで、決して黙してはいません。　「獅子は爪によって知られる」とどこかに書かれている。ユダの部族に属する獅子であるキリストは、幼き日の爪（すなわち、幼少期）から、*「主は力強く、強大であり、主は戦いに強い」*（詩篇23:8）ことが示されている。この生まれたばかりの御子の強さと力が、いかに偉大であるかに注目しよう。御子の誕生の知らせが広まり始めるとすぐに、*「ヘロデは恐れおののき、エルサレム中も彼と共に恐れおののいた」*（マタイ2:3）。　幼子はまだ言葉を話さないのに、すでにこの地で名を馳せる者たちを震え上がらせている。まだおくるみに包まれているのに、すでに迫害者たちを恐怖に陥れている。まだ飼い葉桶の中にいるのに、すでに王座に座する者を震撼させている。

ある極めて優れた医師は、この世で偉大で、名高く、栄光に満ちた者、あるいは王や勇敢な戦士となるべき者たちには――彼の言葉によれば――幼い頃から（すなわち乳児期から）、自らの将来の権力や将来の偉業を予示する傾向があると伝えている。　また、この医師は、ペリクレス[216]がまだ生まれていないうちに、すでに夢を通じてギリシャ人を震え上がらせたこと、アレクサンドロス[217]がまだ生まれていないうちに、すでにすべての人からユピテルの息子[218]であり、王国の支配者と呼ばれていたと述べている。　また別の記述によれば、フリギアの王ミダス[219]がまだ赤ん坊だった頃、眠っている間にアリたちが小麦の粒を運んできて、彼の口の中に置いていったという。これは、彼が将来、数え切れないほどの富を得ることを予示していたのである。　同様に、私たちの王であり主である、今まさに生まれたばかりの幼子も、幼少の頃から、ご自身の将来の力と御業について明確な兆しを示しておられます。主を愛する者たちに用意されている将来の富については、主の御計画により

---

[215] 文字通り、詩篇18篇のこの箇所は太陽を指しており、詩篇の作者はそれを花婿や、その宮殿から出てくる巨人になぞらえている。聖ディミトリオスは、ここにメシア・キリストの世への出現に関する預言的な示唆を見出している。

[216] ペリクレス――紀元前5世紀に生きた、古代アテネの著名な政治家。

[217] すなわち、紀元前4世紀に生きた、東方のほぼ全域を征服した名高い征服者、アレクサンドロス大王のことである。

[218] ユピテルまたはゼウス――古代ギリシャ人とローマ人の主神（ユピテルはローマでの呼称、ゼウスまたはゼーヴェスはギリシャでの呼称）。

[219] ミッド、あるいはミダス――多くの伝説的な物語が残されている、半神話的なフリギアの王。

、最も遠い国々から金、レバノン産香料、スミルナが主のもとに運ばれてくるというしるしが示しています。　死と悪魔に対する彼の将来の勝利、そして全地獄に対する彼の勝利は、彼がヘロデとエルサレム全体を震撼させ、動揺させたという事実によって予表されている。目に見える世界と目に見えない世界に対する彼のその権威は、　に彼の人間性に与えられるものであり、彼はある時こう言うであろう。「*天と地の一切の権威が、わたしに与えられている*」（マタイ28:18）と語られることになるその権威は、御意志により、御降誕を天使たちや羊飼いたちが仕え、東方の三人の王が、ダビデの預言「*地のすべての王国が彼を礼拝する*」（詩篇71:11）に従って礼拝を捧げるという事実によって、あらかじめ示されているのである。　なぜなら、主が「王たちの王」として、地上の三人の王たちから礼拝と献げ物をもって敬われたとき、この預言はすでに成就したからである。　ヒッポの教会の首座である、至福のアウグスティヌス（[220]　）は、このことについて次のように見事に語っている。「主イエスよ、あなたの降誕のしるしとは、このようなものです。あなたが海の上を歩かれるとき、海の波があなたの足の下で静まる前に；あなたの命令によって風が静まる前に；　御言葉によって死者がよみがえる前に；御死の瞬間に太陽が暗くなり、御墓からの復活の際に大地が揺れ動き、御昇天の際に天が開かれる前に；　これらすべてやその他の驚くべき御業をあなたが成し遂げられる前に――その前に、あなたはまだ母の腕に抱かれつつ、同時に全世界の主として御自身を現しておられる」。　新生児である主イエス・キリストの力と強さはかくも偉大であり、幼少の頃からすでに、全能の主としてはっきりと現れている。神の力は偉大であり、まことに、神の力は弱さの中でこそ完全に現れるのである（IIコリント12:9）。　なぜなら、幼子という小さくて弱々しい姿の中に、私たちはイエス・キリストの偉大な力を見るからである。教会は、生まれた主を子羊に例え、主を「子羊」と呼び、羊飼いたちによる礼拝の絶え間ない祈りの中で、次のような言葉で主を賛美するとき、この力を指し示しているのだ。　「この御方を、マリアの胎内で育まれた汚れなき小羊として見よ。歌いながらこう告げる：『喜びなさい、小羊であり羊飼いの母よ』[221]。」

ここで、処女から生まれたキリストは、小羊に喩えられ、小羊と名付けられました。しかし、小羊にはどのような強さ、どのような力があるのでしょうか。その力はまことに打ち勝つことのできないものであり、それは次のことからわかります。　かつて、神学者ヨハネは、その啓示の中で、さまざまな場所――海、深淵、そして荒野――から現れる様々な獣や蛇を目撃しました。それらは多くの恐ろしい頭を持ち、口を開けており、その口の中には致命的な毒が満ちており、その姿を見るだけで極めて恐ろしいものでした！　それらはすべて、聖書が「*彼らは子羊と戦いを繰り広げる*」（黙示録17:14）と語るように、ただ一匹の子羊に対して立ち向かうのである。　おそらく、これらの蛇や獣たちが子羊と戦う様子を見て、誰かがこう考えるかもしれない。「最も弱い獣の一匹でさえ、すぐに子羊を捕らえて引き裂いてしまうだろう。そうなれば、大きな獣たちはもはや戦う相手がいなくなってしまう」と。　しかし、小羊の力を見てください。小羊は彼らに対してこれほど強固に武装しているため、そのすべての獣の力は、小羊の働きによって突然打ち倒され、地中に消え去ります。それは、「*小羊は彼らに打ち勝つ。なぜなら、小羊は主の主、王の王だからである*」（黙示録17:14）と書かれている通りです。　まことに、これこそが小羊の偉大な力である！この小羊は神の御子を象徴しており、蛇や獣は悪魔とその手下たちを意味している。　ここで、熟考に値する点がある。なぜ天使は、これらの象徴を通して神の御子とその敵との戦いを示しながら、受胎告知の際に聖母マリアに告げられ、割礼の際に与えられた、天から授かった御子の真の名を明かさなかったのか。なぜ「これらの人々はイエス・キリストと戦いを繰り広げる」と言わず、　「これらの人々は子羊と共に戦う」と言ったのでしょうか。それはまさに、御方がご自身の誕生の時点で、名を与えられるのを待つことな

[220]　聖アウグスティヌス。北アフリカのヒッポの司教であり、西方教会の著名な教父。教義上の問題に関する多くの著作を残したほか、聖書の様々な書物や個々の箇所についての解説も数多く残している。430年に没した。

[221] 第4イコス。

く、すでに敵を打ち倒しておられるからです。まだ子羊のように干し草の上で休んでおられるにもかかわらず、御方はすでに心の中の蛇や獣を打ち砕き、葦のようにそれらを砕き、土の器のように粉砕しておられるのです。　預言にはこう記されている。*「彼らは彼に『マゲル・シェラル・ハシュ・バズ』という名を付けた。なぜなら、その子が『父よ、母よ』と口にできるようになる前に、ダマスコの富とサマリアの戦利品がアッシリアの王のもとに運ばれるからである」*（イザヤ書 8:3–4）[222]。この生まれたばかりの子羊は、自分が獅子となり、「この勝利者はユダの部族から出た獅子である」（黙示録 5:5）と言われる時を待ってはいない。この幼子は、巨人のように力強く成長する時を待ってはいない。　この幼子は、その若き肢体がサムソンのような力を得る時を待ってはいない[223]。しかし、母の乳首を吸い始める前に、　、この幼子は敵を打ち負かす。この幼子が、自らの口で自分の名や、その至聖なる母の名を口にできるようになる前に、この幼子は、ふさわしくない者たちの名を命の書から消し去る。　この幼子がお成長に伴い、男としての力を身につけ始める前に、すでに強者たちを王座から引きずり下ろします。*「小羊は彼らに打ち勝つ。なぜなら、小羊は主の主、王の王だからである」*（黙示録 17:14）。　これこそが、私たちの小羊の強さであり、神の御子が生まれながらに備えている、この無敵の力なのです！

　　また、御子は知恵をも併せてお持ちになります。なぜなら、幼子としての強さと力をお持ちである方は、同時に知恵もお持ちだからです。*「わが主は偉大であり、その強さは偉大であり、その知恵は測り知れない」*（詩篇146:5）。　*「長老たちよりも知恵がある」*（詩編118:100）という言葉を当てはめるにふさわしい幼子は、果たして存在するだろうか。この言葉は、神の御子にのみ当てはまるのである。　普通の乳児は、生まれた当初は成長するまで何も理解できず、成長しても理解できるようになるためには教えを必要とするものである。　しかし、この神聖な幼子は、御降誕以前と同様に、御降誕においても、至高の知恵そのものであり、神性の深遠な知恵と理性を備えている（ローマ 11:33）。幼子としての姿においては時の制約に服しているが、知恵においては永遠に存在していたのである。　私たちのために幼子も生まれ、また、預言者ダニエルは、古き日（すなわち、深遠な長老）の姿として、神を見ました（ダニエル書 7:9–13）[224]　。その子は、また（同時に）父でもあります。イザヤ預言者は、今、その降誕において次のように語っています。*「来たるべき世の父」*　（イザヤ9:6）。この「父」という呼称は、子供たちにはふさわしくなく、成人男性にふさわしいものであり、母の乳を飲む乳児を「父」と呼んだ者は、これまで誰もいなかった。それにもかかわらず、預言者は躊躇することなく、生まれたばかりのキリストを「父」と呼んでいる。　なぜでしょうか。それは、その神性を受けた幼子の中に、古よりおられる父と同じ知恵、同じ英知があることを示すためです。最も英知に富んだ父が自分の子供たちに対してそうであるように、聖母マリアから生まれたこの天の幼子も、私たちに対してそうしてくださるのです。　そして、今や救い主が私たちのために誕生されたことを、私たちはどのようなしるしによって確信するのでしょうか。それは、御方が幼子として、私たちにとって父となられるからです。では、御方はどのような形で私たちにとって父となられるのでしょうか。　その様子を聞いてみましょう。御自身が誕生されるのと同時に、御方は私たちをも死から命へと再生させてくださいます。それはまさに、かつて死んでいたが後に生き返った放蕩

222　ここでは、主が預言者イザヤに下した命令が述べられている。すなわち、自分の息子に「まもなく捕らえられ、むなしく（突然）倒される」という名をつけるよう命じたのである（スラヴ語、クリスマスイブの晩課にて）。　この名は、預言者の同時代人にとって、ユダヤ民族がシリア王国およびイスラエル王国に対して間もなく勝利を収めるというしるしとなるはずであった。一部の解釈者は、この預言者の息子への神秘的な名付けに、いわばメシアの栄光と威力の原型を見出している。聖ディミトリオスは、この意味でこの箇所を引用している。

223　サムソン――イスラエルの士師の一人で、その並外れた力によって知られる人物である。サムソンの物語は『士師記』13章、14章、15章、16章に記されている。

224　老いは、神の永遠性の象徴であった。この箇所で、聖ディミトリオスは、幼子イエスを「老いた者」と呼ぶことで、神としてのその永遠の存在を示そうとしているのである。

息子の物語に登場する福音書の父と同じです。その父は、死んでいた息子を命へと再生させるために、息子の首に抱きつき、彼に口づけをしました。　この父の口づけは、息子にとって、彼の霊的な死の原因であった罪が赦されたというしるしでした。なぜなら、罪によって死がもたらされるからです。そして、死の原因である罪が、赦しによって罪人から取り除かれた後、死んでいた者はたちまち生き返ったのです。　なぜなら、夜が過ぎれば昼が来るのと同様に、人から暗い罪の死が取り除かれた後、魂にとっての命である神の恵みが輝き始めるからである。　まことに、私たちの救い主キリストは、ご自身の降誕において私たちに口づけをされ、罪によって死んでいた私たちを御自身の恵みによって生かしてくださった。それゆえ、キリストは幼子としての姿において、私たちにとって至賢なる父となられるのである。　そして、私たちの救い主キリストが御降誕の際、私たちに口づけをされたことを理解するために、『雅歌』において、ある神を愛する人物が、神との交わりをいかに熱烈に願っているかに注目しましょう。*「彼がその唇の口づけで、私を口づけしてくださいますように！」*（雅歌 1:1）[225]。 では、神の口づけを望んでいるのは一体誰なのか、知りたいと思いませんか？ 聖アンブロシウス[226] の言葉を聞いてみましょう。彼は、私たちの本性、すなわち私たちの肉体こそが、神の御子の受肉を通じて、神の愛と神への親密さを求め、あたかも顔を合わせて神を仰ぎ見、聖なる口づけによって口と口を合わせて神に口づけすることができるようにと願っているのだと述べています。　この師は、次のように語っています。「（『雅歌』に登場する、神を愛するその顔とは）アダムの姿において、蛇の毒にまみれ、罪の悪臭によって腐敗していた、まさにその肉体であることを理解しましょう。　その肉体は、多くの預言によって、神が来られ、蛇の誘惑を無効にし、聖霊の恵みを注いでくださることを知ったとき、こう祈って言ったのです。『どうか、その方が御自身の口で私に口づけをしてくださいますように』と。 そして、聖金口ヨハネス（ ）は、異教徒から集められた教会の立場から、次のように語っている。「私、異教徒からなる教会は、主がモーセやイザヤ、エレミヤ、その他の預言者たちを通して私に語りかけることよりも、むしろ主ご自身が私と直接語り合ってくださることを望んでいる。　それゆえ、主ご自身が現れてくださり、私が主と口と口を合わせて語り合えるように。主が来て、御自身の口で私に口づけをしてくださることを願う。私は、エレミヤが主についてこう語っているのを聞く。*『人の心は、何よりも欺瞞に満ち、極めて腐敗している。誰がそれを知ることができるだろうか』*（エレミヤ書 17:9）[227] ？　私は御自身その方を望みます。御自身が現れ、御自身の口づけで私を口づけしてくださることを。私はアモスが御方についてこう語っているのを聞きます。*「ある方がダイヤモンドの垣根の上に立っておられ、その手にはダイヤモンドを持っておられた」*（アモス書 7:7）[228]。しかし、私は御自身をお求めしている。御自身が来られ、御自身の口による口づけで私を愛撫してくださることを願っている」。これらの聖なる教師たちの言葉から、神の口づけが私たちの性質と結びつくこと、すなわち神の御子の受肉であることがはっきりと示されている。　なぜなら、口づけにおいて口が口に接するように、救い主の受肉においても、神の性質が人間の性質に接し、それと結びついたからである。こうして、御降誕において、私たちの救い主キリストは、父として私たちに口づけをされた。これはダビデが次のように預言した通りである。　*「真実と平和は互いに口づけを交わす」*（詩篇84:11）。この箇所について、注釈者のエウフィミ

---

225 引用されたテキストは『雅歌』1:1から取られており、そこでは、花婿の口づけを切望する花嫁が、救い主を早急に目撃し、彼から救いを得たいと切望する人類を象徴している。

226 ミラノの聖アンブロシウス司教は、東方正教会における聖バシレイオス大主教と同様の重要性を、西方正教会において持っていたと言える。　というのも、聖アンブロシウスも聖バシレイオスと同様に、アリウス派に対する正統信仰の熱心な擁護者・守護者として特に名声を博したからである。彼は多くの著作を残しており、その中には神の言葉を解説するもの、信仰の教義を説くもの、キリスト教の美徳を説くものが含まれている。 – 聖アンブロシウスは397年に逝去した。その記念日は12月7日に祝われる。

227 ここで引用されているエレミヤの預言は、神の御子の受肉という不可解さを象徴するものとして捉えられています。

228 ここで引用されているアモスの預言において、聖父はメシアの神聖な力に関する予言を見出しています。

オス（ジガベン）は、「平和」を神の性質と解釈している。なぜなら、唯一の神こそが義なる裁き主であり、「真実」とは、この性質に内在する真の柔和さゆえに、キリストにおける人間の性質を指すからである。　これら二つの本性について、互いに口づけし合ったと語られるのは、キリストにおいて、それらが緊密な結合、調和、そして同意を保っているからである。[229]

　　また、この口づけによって、私たちの救い主キリストが、ご自身の降誕において、私たちを罪の死から神の恵みの命へとよみがえらせてくださったことも、まことに真実である。　『列王記下』（4列王記4:28–30, 34–35）には、次のように記されている。サマリア人の妻が、カルメル山に滞在していた預言者エリシャに、彼女の家に入って　死んだ息子をよみがえらせてほしいと懇願したとき、預言者は直ちに自ら向かうことはせず、まず自分の僕ギエゼイを杖を持って遣わし、その杖を少年の顔の上に置くように命じた。しかし、死んだ少年は声も上げず、ギエゼイの言うことにも耳を貸さなかった。　やがて預言者自身が亡くなった少年のところへ来ると、自分の口を少年の口に当てて息を吹きかけた――すると、少年は目を開いた。預言者が自分の口を少年の口に当てることによって、まるで口づけをするかのように、死んだ少年に命が与えられたことに注目してほしい。　まことに、預言者の口が少年の口に寄せられたとき、そこには口づけがあり、その口づけによって死者がよみがえったのである。これはキリストの受肉の変容であった。罪によってこの世に入り込んだ死は、生き始めたばかりの最初の少年、アダムをさらっていった。　女性、すなわち人間の自然は、感極まって神にこう呼びかけます。*「主よ！天を傾けて、降りてきてください」*（詩編143:5）、*「御顔を輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます」*（詩編79:4）。主なる神は直ちに御自身で来られるのではなく、エリシャが自分のしもべを遣わしたように、主もまず御自身のしもべたち――律法の杖を持つ預言者たち――を遣わし、彼らがその杖を少年、すなわちアダムの子孫の上に置くようにされた。しかし、この少年はまだ生き返っておらず、人々は依然として死の闇と影の中に留まっていた[230]。　しかし、主ご自身が受肉して来られ、聖書に記されているように、ご自身の神性の唇を人類の唇に寄せ、ご自身の唇の接吻をもって私たちを愛でられたとき、その少年は即座に起き上がり、死者はよみがえった（*大賛美の前に歌われる復活の聖母賛歌*）。　――私たちは、キリストの降誕において、死から命へと甦ったのである。これはある古き物語に似ている。ある善良な友人が、愛する友人が敵の毒の剣で傷つけられているのを見て、その致命傷をいかにして癒やすか、熱心に心を砕いた。しかし、医師たちは彼にこう告げた。「その傷は治癒不可能だ。毒を染み込ませた剣は、肉体を傷つけ大きな傷を負わせただけでなく、その毒によって全身を蝕んでしまった。したがって、友人はいずれにせよ死を迎えることになる。ただ、もし誰かが次のような方法で、自らの健康を代償としてその毒を償うならば別だが――　自分の口をその傷に当て、そこから毒を吸い出すという方法だ。「そうすれば、あなたの友人は――と医師たちは言う――容易に治癒するだろうが、その代わりに、毒を吸い出した者はいずれにせよ死んでしまうだろう」。　これを聞いた真の友愛者は、自らの命さえ惜しまなかったにもかかわらず、それでもなお、自分自身よりも友を愛し、友の健康を自らの命よりも優先して、　――前述の方法で友人を癒やした――すなわち、自分の口をその傷に当てて毒を吸い出し、自らの死をもって友人に健康を授けたのである。これと同様に、私たちの主なる神も、　、地獄の戦士の罪という毒の剣によって傷つけられた私たちに対して、同じことをなさった。　まず私たちから死に至る害を取り除かずに、その傷を癒やし、死から救い出すことのできる者は誰もいませんでした。ケルビムの上に座しておられる至高なる御方ご自身、すなわち完全なる医師であり、魂と肉体の創造主が、御自身の口、すなわち御子をお遣わしになるまでは、これほど完全な医師は現れませんでした。　なぜなら、聖書において聖霊が「父の指」と呼ばれているように――*「わたしは神の指であ*

---

[229]　エウフィミオス・ジガベン（あるいはジガデン）は、12世紀前半のコンスタンティノープルの修道士であり、著名な教義学者かつ聖書の注釈者である。彼の注釈は、独自の著作というよりは、過去の教父たちの解釈をまとめたものに過ぎない。

[230] 参照：ルカ 1:79。

*る」*と主は言われ、*「悪霊を追い出す」*（ルカ11:20）――同様に、神の御子もまた「父の口」と呼ばれているからである。それは次のように記されている通りである。「*その口の息によって、彼らの全軍は」*（詩篇32:6）。したがって、主なる神は、人類への愛から、私たちの傷ついた本性に、御自身の口、すなわち御自身の愛する御子を当てられたのである。「神は、この世をこれほどまでに愛されたので、御自身の独り子さえも与えられた」（ヨハネ3:16）。 では、私が言う「口」とは一体何を指すのでしょうか。神の御子は、傷ついた私たちの本性と結びつき、その罪の毒を自ら引き受けられました。世の罪を背負われた御子は、私たちの罪を背負い、御自身の健全さを私たちの代わりに捧げることで、私たちを癒やしてくださったのです。　それによって、主は御自身の「口づけ」、すなわち受肉を通して、私たちを恵みに満ちた命へと再生させ、こうして幼子としての御姿において、私たちの救い主、至賢なる父、熟練した医師、そして愛すべき友として御自身を示されたのです。　さあ、キリストの幼少期、すなわちキリストがどのようにして生まれたかを見てください。そこには、打ち勝つことのできない力と、測り知れない英知が宿っているのです。　そして、天使が羊飼いたちに、救い主である幼子――その誕生において他のどの幼子とも異なり、並外れた幼子――がこの世に来られたしるしとして、力強く、賢明で、強靭かつ至高の知恵を持つ幼子であることを示したのは、まさに正しいことでした。　ここにしるしがある。あなたがたは、おくるみに包まれた幼子を見つけるだろう。その幼子のおくるみさえも、神秘に満ちているからだ。聖アンブロシウスはこう述べている。「キリストはおくるみに包まれるのは、あなたがたが死の粗末な衣から解き放たれるためである。そこにこそ、キリストの布の神秘が込められている。すなわち、死が私たちを包んだ、朽ちゆく粗末な衣を脱ぎ捨てるためである」。アンブロシウスの言葉を注意深く考察してみよう。なぜ彼は「一つの衣」とは言わず、「衣を脱ぎ捨てよ！」と言ったのだろうか。　私は、彼がここでアダムの粗衣を指していると考える。なぜなら、アダムは堕落の後、二種類の粗衣――葉の粗衣と皮の粗衣――を持っていたからである。葉の粗衣は楽園におけるもので、アダムとエバが自ら作ったものである。*「彼らはイチジクの葉を縫い合わせて、自分たちの腰に帯を作った」*（創世記 3:7）。 一方、皮の衣は楽園の外で、神がアダムとその妻に「皮の衣」を作り、彼らにそれを着せた時のものです（創世記3:21）。　これら二つの衣はいずれも儚いものであった。なぜなら、その葉もまた、人間に死をもたらした木から取られたものであったからである。実際、教会の教師の中には、アダムが実を食べることを禁じられたその木がイチジクの木であったと考える者もいる。また、皮は殺された獣から取られたものであった。　木の葉の衣は、アダムが神に背いたことを象徴しており、それによって彼は、木の葉が木から落ちるように、神から離れてしまった。一方、皮の衣は、肉欲、すなわち言葉にならない情欲のしるしであった。しかし、新しいアダムであるキリストは、布に包まれて生まれ、人間をこれら二つの衣から解放するために来られたのである。　すなわち、不従順と無言の欲望から解放するためである。なぜなら、キリストの聖なるおくるみは、神秘的に従順と純潔の両方を象徴しているからである――前述の教会の教師、聖アンブロシウスが説明しているように、それは従順を象徴しているのである。

「この神秘を見よ」と彼は言う。「処女の胎から、しもべであり、かつ（同時に）主である方が現れた。しもべは働くためである。なぜなら、おくるみに身を包む者は、仕えるために身を包むからである。主は、支配するためである。　『あらゆる名にまさる御名を彼に授けたその奉仕は、まことに尊い。なぜなら、他者にとっては恥であるものが、キリストにとっては栄光だからである』」。この言葉に注目しよう。「おくるみに身を包む者は、奉仕のために身を包むのである」。　つまり、布で腰を締めることはキリストの従順を表しており、なぜなら、働き、仕える者は従順な者だからである。そして、福音書にあるある主人の命令に従って、従順な者は自ら腰を締めるのがふさわしい。*「私に夕食を用意し、腰を締めて、私に仕えなさい」*（ルカ17:8）。そして、私たちの主は従者の地位を自ら引き受けられました。なぜなら、主はご自身についてこう言われているからです。「彼らは

わたしに仕えるために来るのではなく、わたしが彼らに仕えるのである」[231] 。主は、福音書の言葉*「まことに、あなたがたに告げる。彼は腰に布を巻き、彼らを席に着かせ、近づいて彼らに仕えるであろう」*（ルカ12:37）に従い、私たちに仕えるために布を腰に巻かれるのです。 そして、その従順な奉仕によって、キリストはアダムの不従順を癒やされる。古いアダムは不従順であったが、新しいアダムは*「死に至るまで従順であった」*（フィリピ2:8）。このようにして、キリストの従順というおくるみによって、アダムの不従順というぼろ服は解きほぐされるのである。 また、清さに関しては、なぜ古いアダムが皮の衣で覆われていたのに対し、新しいアダムが（確かな事実として）亜麻の布で覆われていたのか、さらにその布が、あらかじめ聖母マリアによってそのために用意されていたのか、と熟考すれば、主の布に神秘的に表されている清さも見て取れるでしょう。 人間の間では、外見の装いがその人の内面の思いや気質と一致することがよくあり、それゆえに、外見の装いを通して、人の内なる心がはっきりと現れるのである（ 、コリントの信徒への手紙二 4:16）。 高慢なヘロデ王[232] は、『使徒行伝』に記されているその日、王の衣を身にまといましたが、その衣は彼の内なる高慢さにふさわしいものではなかったでしょうか。まことにそうであったのです。聖書が*「玉座に座り」*（民の前で高慢に）、*「彼らに語りかけ」*（使徒行伝 12:21）。その誇り高き装いを通して、内なる高慢がはっきりと表れていた。謙虚で神を畏れる王妃エステル[233] は、かつて必要な時に王の威厳にふさわしい装いを身に着けたが、それは高慢からではなく、ユダヤ民族を脅かす危険に直面したためであった。 三日が過ぎ、祈りを終えると、彼女は喪服を脱ぎ、祝祭用の衣装を身にまとった（エステル記 4–5）。この最後の衣装は、彼女の清らかな魂と、その善良で純粋な意図にふさわしいものではなかっただろうか？ もちろん、そうであった。聖書が言うように、*「彼女は美しく着飾り、すべてを見通す神、救い主を呼び求めた」*（エステル記 5:1）のであり、彼女の外見の美しさは、内面的な心の美しさと調和していたのである。 アダムについても思い起こそう。彼が楽園で罪を犯したとき、人間からいわば野獣のようになってしまった。獣となったのは、禁断の果実を盗んだからであり、野獣的になったのは、その時、砂漠の獣のように走り回り、身を隠し始めたからである。彼のそのような獣のような性質には、内面の気質と外見の服装が互いに調和するように、獣の皮で作られた衣服がふさわしかったのである。聖グリゴリオス・ニッサスも（モーセの生涯において）これを同様に理解しており、次のように述べている。 「内面において、獣のような気質によって魂を歪めてしまった者たちは、獣の皮を用いるがよい」。なぜ古きアダムがぼろ服を着ていたのか、そしてなぜ新しいアダムであるキリストが亜麻の布に包まれているのか、その理由を理解せよ。 グリゴリオスとイシドール[234] の証言によれば、亜麻は聖書において清らかさの象徴である。だからこそ、旧約聖書においても、祭司の衣は亜麻で作られており、それは祭司たちの汚れなき清らかな奉仕のしるしであった。この点について、聖ヒエロニムスも同意しており、ファビオラへの書簡[235] の中で次の

---

[231] マタイ20:28、マルコ10:46を参照。

[232] すなわち、ローマ皇帝カリグラからユダヤの統治を委ねられたヘロデ・アグリッパのことである。 彼はユダヤ人の気に入られようとして、キリスト教徒への迫害を開始し、聖使徒ヤコブ・ザベデウスを処刑し、使徒ペトロを牢獄に投獄したが、そこから聖使徒は天使によって奇跡的に救い出された。 ヘロデ・アグリッパの死は、彼が王の衣装を身にまとい、ケサリアの広場で民衆の前に姿を現し、おべっか使いたちが彼を神と呼び始めた直後に起こった（使徒言行録12:21–23参照）。

[233] エステル。敬虔なユダヤ人女性で、ペルシャ王アッスワイール（おそらくアルタクセルクセス・ロンギマヌス）の王妃となり、邪悪な高官アマンがユダヤ人に対して企てた虐殺から、自らの民を救った。『エステル記』にそのことが記されている。

[234] 聖イシドール・ペルシオテ。5世紀のエジプトの修道士であり、聖書の多くの箇所を解説した200通の手紙の著者である。その記念日は2月4日である。

[235] ファビオラは、ローマの貴族の娘であり、福者ヒエロニムスの弟子で、彼と文通を交わしていた。

ように述べている：　「私たちがキリストに身を包む準備をして、皮の衣を脱ぎ捨てる時、私たちは、いかなる汚れも持たず、すべてにおいて清い亜麻の衣を身にまとうのです」。亜麻の衣は清さのしるしとして定められていますが、ああ、私たちの救い主キリストはなんと清いことでしょう！　*「その手は清く、心は清く、罪を犯すことはなく、その口には偽りがありません」*（詩篇23:4、31:2）。主はそれほど清く、最も清く輝く星でさえ、その清らかさの前に色あせてしまうほどです。聖書にはこう記されています。*「星でさえ、主の前では不浄である」*（ヨブ記　25:5）。そして、聖母マリアから生まれたこの至聖なる幼子には、皮や獣の毛皮の衣はふさわしくなく、内面と外面の清らかさが互いに調和するよう、清らかな亜麻布と白いおくるみがふさわしかったのです。　しかし、おくるみの意味はこれだけにとどまらない。なぜアダムは獣の皮を身にまとい、キリストは亜麻のおくるみを身にまとうのか。皮は、他の何ものにも増して身体と密接に結びついている。　それゆえ、皮は身体をこれほど強固に包み込むため、大きな力を込めて初めて身体から剥ぎ取ることができる。一方、亜麻は肉体とは無縁であり、それ自体が独立して存在し、肉体とのそのような結びつきを持たない。まさにここに、なぜアダムが皮を身にまとい、キリストが亜麻を身にまとったのかという、究極の根拠があるのだ。　アダムは肉的な者であった。彼は自らの肉をあまりにも愛し、最悪の状況――神の怒りを買うような状況――にあっても、それを捨てようとはしなかった。しかし、彼はその肉と共に――皮と肉が一体となって――創造主を怒らせた。それゆえ、主は彼を*「肉的なことを考える者」*として、肉的な皮のぼろ服を着せたのである　（ローマ8:5）。一方、キリストは、確かに肉をまとって現れたものの、ご自身が清さの源であられるゆえに、いかなる肉をも超えておられた。それゆえ、キリストは肉とは一切無縁の亜麻布の布に包まれ、それによって、肉への愛着と無言の情欲という皮のぼろ服を解き放たれたのである。　キリストの布の秘跡に注目しよう。これらの布は、私たちの罪の傷に貼られる絆創膏である。それらは私たちの目から涙を拭い取り、私たちを神との最も親密な結びつきへと、そして神への完全な愛へと、切っても切れない絆で結びつける。また、包まれた幼子が横たわっていた飼い葉桶にも、神秘的な意味が込められている。　このことについて、聖テオドリトス（　）がどのように語っているか聞いてみよう。「見よ」と彼は言う。「天を豊かにする御方の、この貧しい住まいを。ケルビムの上に座しておられる御方の飼い葉桶を見よ。御方の天の富を思い巡らしながら、御方の地上の貧しさを見よ。　恵みに富む神は、私たちがその貧しさによって豊かになるために自ら貧しくなられた。そして、私たちが神の自発的な貧しさと謙遜を学ぶことができるよう、天の王は飼い葉桶に寝かされたのである」。　また、聖キプリアンはこう言っている。「主が飼い葉桶に置かれるのは、私たちが家畜のような生活を改め、（罪の快楽という）干し草ではなく、天のパンを糧とするためである」。　さらにテオドリトスはこう述べています。「神の御言葉が飼い葉桶に置かれたのは、言葉を持つ者も持たない者も（すなわち、義人も罪人も）、自由かつ妨げられることなく、救いの糧をいただくためである」。[236]

これこそが主の飼い葉桶の秘跡であり、天使が羊飼いたちに示した、救い主のこの世への到来を告げる明白なしるし、すなわち、飼い葉桶に横たわる、布に包まれた幼子である。そして、これはまことに偉大なしるしである。なぜなら、すでに聞いたように、そこには偉大な秘跡が満ち溢れているからである。

それゆえ、私たちのために生まれ給うた神聖なるその幼子に、すべての被造物からの栄光と感謝と礼拝が捧げられ、また、その御子を産み給うた清き御母、至福の聖母マリアに、すべての世代から永遠に栄光と賛美が捧げられますように。アーメン。

[236] 福者テオドリトスは、シリアのキルスの司教であり、特に聖書の注解で知られている。彼は5世紀に生きた。

三賢者の礼拝に関する伝承

記念日：12月25日

「イエスは、ヘロデ王の治世の頃、ユダヤのベツレヘムで生まれた……東方の三人の博士が来た」（マタイによる福音書2:1）――彼らは単なる一つの東方諸国からではなく、聖なる教父たちの著作に見られるように、この件について異なる見解を示すさまざまな国々から来たのである。 その中には、東方の三博士がペルシャ出身であったとする意見もある[237] ；聖金口ヨハネス、聖キリロス・アレクサンドリアス、テオフィラクトらがそう考えている――その根拠は、特にその国で占星術が盛んであったこと[238] 、そしてそこで王になるには、あらかじめこの術を学ばなければならなかったという点にある。 一方、他の者たちは、三賢者がアラビア出身であったと考えている[239] ；この見解を支持しているのは、聖殉教者ユスティヌス[240] 、聖キプリアン、聖エピファニオスであり、その根拠は、この国が金、乳香、没薬に極めて富んでいたことにある[241] 。また、三賢者がエチオピアから来たとする者もいる[242] ； かつてサバの女王、すなわちエチオピアの女王が、ソロモンの英知に耳を傾けるためにエルサレムを訪れたからである[243] 。これは、至福のヒエロニムスの解説によれば、現在の出来事、すなわち、三賢者が霊的なソロモン――すなわち神の英知であるキリスト――のもとを訪れたことを予表していたのである （聖ヒエロニムス、『イザヤ書注解』）。また、ダビデはこう言っている。*「エチオピアは神に向かってその手を伸ばす」*（詩編67:32）。 ところで、これらに挙げられた国々――東方の国々であり、互いに隣接している――は、金、レバノン産品、香料に恵まれており、そのすべてにおいて魔術や占星術が広く行われていた。 さらに、これらの国の賢者たちにとって、輝く星について預言したバラムの預言[244] は決して知られていないものではなく、その預言は彼らの中で、一部は口頭で、一部は文書によって、代々受け継がれていた。 、三人の賢者のうち一人はペルシア出身、もう一人はアラビア出身、そして三番目はエチオピア出身であったというのが最も妥当な説であると考えられる。なぜなら、彼らが異なる国々から来たことについては、ダビデの預言にその示唆があり、そこには次のように記されているからである。「*ペルシアと諸島の王たちは彼に貢ぎ物を捧げ、アラビアとサバの王たちは贈り物を携えて来る*」 （詩篇71:10）。これは、聖書の注解者たちが推測するように、贈り物を携えてキリストのもとに来るはずだった東方の三博士について、ダビデが予言したものである。ダビデの「パルシスの王たち」という言葉は、「海の向こうの」という意味である。なぜなら、「パルシス」は「海」を意味するからである； したがって、ここ

---

237 ペルシャ――アラビア、小アジアを一方に、インドおよびトルキスタンを他方に挟まれた国。

238 この術は、星やその他の天体の動き、およびそれらの位置関係に基づいて人々の運命を決定し、また将来の出来事について予言を行うというものであった。

239 アラビアは、アジア南西部に位置する広大な国であり、シリアとパレスチナの南にある半島を占めている。

240 聖殉教者ユスティヌス・フィロソフは、かつては異教徒であったが、後にキリスト教に改宗し、哲学の研究とキリスト教徒としての立場を両立させた人物である。 彼の著作の中でも特に注目すべきは、キリスト教徒を擁護するためにアントニヌス・ピウス帝とマルクス・アウレリウス帝に提出した2つの弁明（アポロギア）と、ユダヤ人トリフォンとの対話である。聖ユスティヌスは、マルクス・アウレリウス帝の迫害の下で殉教した。彼の記念日は6月1日に教会で祝われる。

241 レバノン――礼拝の際に香を焚くために用いられた芳香のある樹脂の一種。スミルナ――植物界に由来する芳香物質（ミルラの樹皮から採れる樹液）で、死者の埋葬の際に用いられ、遺体の腐敗を防ぐ役割を果たした。

242 エチオピア――アフリカの紅海沿岸に位置する国で、現在のアビシニア。

243 参照：列王記下 10:1–13。

244 バラム――モアブ王バラクがユダヤ人を呪わせるためにメソポタミアから呼び寄せた預言者であるが、神の御霊の突然の働きにより、ユダヤの民に祝福を宣言し、その際にメシアの出現を予言した（ヤコブから出る星に関するバラムの預言）。 民数記 22:23–24を参照。

ではペルシアを、海の向こうにある国として理解すべきである[245]。「アラブスティアの王たち」は明らかにアラビアを指している。また、ダビデが「サバも贈り物を携えて来る」と語っているのはエチオピアを指しており、サバとはエチオピア全土の首都である都市だからである。したがって、その三人の賢者は、ペルシア、アラビア、エチオピアの出身であった。彼らが「賢者」と呼ばれるのは、悪魔的な魔術や邪悪な呪術を弄ぶ者という意味ではなく、アラビア人、シリア人、ペルシア人、エチオピア人、その他の東方の諸民族の間で、賢者や占星術師を「賢者」と呼ぶ習慣があったからである。 そして、これらの賢者たちは、魔術師や呪術師の類ではなく、最も賢明な占星術師や哲学者たちであった[246]。彼らが「王」と呼ばれるのも、多くの国を支配する強大な王という意味ではなく、それぞれが自分の都市や特定の領地を授かったという意味である。 というのも、聖書では個々の都市の支配者を「王」と呼ぶのが通例であり、これは創世記14章からも明らかである。そして、それらの王たちが具体的にどの都市の出身であったかについては、確かな記録はない。ただ、東方の国々から来たこと、そして彼らが携えてきた三つの贈り物――金、レバノン、スミルナ――の数に合わせ、三人の王であったことだけが知られている。 彼らはそれぞれ自分の国から旅立ったものの、一つの星に導かれて、神の御計画により旅の途中で合流し、互いの意図を知り合った後、かつて偉大なる占星術師バラムが次のように予言したあの星に従って共に歩んだのである。 *「ヤコブから星が現れ、イスラエルから杖が立ち上がる」*（民数記24:17）。では、この星とは一体何だったのでしょうか? 金口ヨハネスとテオフィラクトは、それが天上の、あるいは目に見える天体の一つではなく、星の代わりに現れたある種の神聖かつ天使的な力であったと主張している。なぜなら、すべての星は世界の創造以来その存在を持っていたが、この星は世の終わりに、神の御言葉の受肉の際に現れたからである。 すべての星は天に定位置を持っているが、この星は大気中で見えた。すべての星は通常、東から西へとその軌道をたどるが、この星は異例にも東から南へ、エルサレムの方向へと動いた。 すべての星は夜にのみ輝くが、この星は昼間も太陽のように輝き、その輝きと偉大さにおいて天の星々を比類なく凌駕していた; すべての星は、他の天体、すなわち太陽、月、そして天体の全体系と同様に、一定の運動と軌道を持っているが、この星は時として進み、時として止まっていた。テオフィラクトも次のように述べている。「三賢者が進むときは星も進み、彼らが休息するときは星も止まっていた」。 その星が現れた時期については、解釈者によって見解が分かれている。ある者は、それが救い主が聖母から生まれたまさにその夜、まさにその時刻に現れたと主張するが、この見解は信じがたい。なぜなら、もし星がその時に現れたとすれば、東方の三博士が遠くから短期間でエルサレムにたどり着くことなど、どうして可能だっただろうか。 ヨセフは、神の子の誕生から40日が経過し、神殿での律法に定められた清めの儀式を終えると、直ちに、ナザレの自宅にて、旅に必要なものだけを持って、急いでエジプトへと向かった。 一部の者は、あの東方の三博士たちが速い馬を乗り回し、急ぎ足で旅をして、キリストの降誕から13日目にベツレヘムに到着したと主張しているが、それはあり得ない話である。 何しろ、彼らは王であり、速足者ではなかった。王の地位と威厳にふさわしい贈り物や多くの従者を伴い、さらに旅に必要な家畜や物資も携えていたのだから。それゆえ、ペルシャ、アラビア、エチオピアからベツレヘムの町まで、13日間で到着することなど、どうして可能だったというのか。 さらに、彼らはエルサレムでヘロデ王によってしばらく留め置かれ、大祭司や律法学者たちが召集されて尋問された後、キリストがユダヤのベツレヘムで生まれるべきであることが明らかになるまで、そこに留まらなければならなかった。 一方、聖エピファニオスも属する他の解釈者たちは、星はキリストの降誕の瞬間に現れたが、三賢者は2年が経過してから礼拝に訪れ、すでに2歳になっていた幼子キリストを見つけたと述べている。 この見解は、ヘロデ王が、東方の三博士

[245] ペルシャがパレスチナから海を隔てた場所にあるというのは必ずしも正確ではない。なぜなら、ペルシャ湾はペルシャとアラビアだけを隔てているからである。

[246] 哲学者とは、世界や人間の起源、美徳、あらゆる存在の究極の目的、人間の人生の意味など、さまざまな問題の研究に従事した人々である。

から入念に聞き出した時期に基づき、2歳以下の幼児を殺害するよう命じたという事実に基づいている。 しかし、聖テオフィラクトは、このような見解を明らかに 誤りであると指摘している。なぜなら、教会全体で受け入れられている正しい解釈によれば、東方の三博士は、キリストがまだ洞窟におられた時にベツレヘムでキリストに礼拝を捧げたのであり、2年が経過した時点で、キリストはベツレヘムにおられたどころか、パレスチナにさえおらず、エジプトにおられたからである。 なぜなら、聖ルカの証言によれば、40日目に神殿で清めの儀式が行われ、そこで長老シメオンが主と出会った後、 主の律法に従ってすべてが成し遂げられた後、聖ヨセフと聖母マリアは幼子と共に直ちにユダヤではなくガリラヤへ、ベツレヘムではなく自分たちの町ナザレへと戻り、そしてナザレから天使の命に従ってエジプトへと向かったのである。 では、なぜ東方の三博士たちは、2年が経過した後、ベツレヘムでキリストを見つけることができたのだろうか。古代ギリシャの歴史家ニキフォロス（[247]）は、星がキリストの降誕の2年前に東の空に現れ、東方の三博士たちは2年間かけてエルサレムへ向かい、ちょうど降誕の瞬間に到着したと伝えている。 どうやら、この歴史家も、2歳以下の乳幼児を虐殺したという福音書の記述に同意しているようだが、彼の見解も信頼性に欠ける。なぜなら、東方の国々からエルサレムまでは2、3ヶ月で歩いて行ける距離であるのに、なぜ東方の三賢者が2年もの長い旅を必要としたというのか？ たとえ彼らが王たちらしく、ゆっくりと長い時間をかけて旅をしたとしても、それでも旅に6ヶ月や7ヶ月以上を費やしたとは考えにくい。なぜなら、ペルシャ、アラビア、エチオピアといった東方諸国は、エルサレムからそれほど遠くはなく、それらの国々とエルサレムとの間に2年もの道のりがあるはずがないからだ。 では、星が現れた時期について、どの見解が正しいのだろうか。私は、聖ヨハネス・クロソストモスとテオフィラクトの見解が正しいと思う。これらの教父たちは次のように述べています。「星はキリストの降誕以前に東方の三博士の前に現れました。彼らは旅に長い時間を費やすことになっていたため、救い主の降誕のかなり前に星が現れ、彼らがベツレヘムに到着した際、まだおくるみに包まれているキリストに礼拝を捧げることができるようになったのです。 注目すべきは、これらの教父たちがその星の出現時期を「2年前」と特定していない点であり、単に「かなり前のこと」と述べているだけで、いわば「数ヶ月前」という意味である。 ザラトウストとテオフィラクトによる、星がキリストの降誕の前に現れたというこの解釈に基づき、大天使の福音と聖霊の導きによって、 御言葉が、処女の汚れなき胎内に宿り、受肉されたまさにその日、その時刻に、誕生の九ヶ月前に、東の空に星が現れたと理解すべきである。 このように理解することで、私たちは前述の教父たちの証言から逸脱することなく、同時に、三賢者が旅の途中で2年間も信じがたいほど足を引きずっていたという説を退けることができる。また、殺害された幼児たちが2歳であったことについては、彼らの記念日に改めて述べることにする。 さて、先ほど述べたように、キリストの降誕の9ヶ月前、受胎告知の時期に、三賢者は東の空に星を目撃し、当初は驚きと戸惑いの中で、「これは一体どのような星なのだろうか」と考えを巡らせた。 もしかすると、それは空に輝き、彗星がそう予兆するように、何らかの災いを告げる流星[248]ではないだろうか。[249] 。実際、その星は、あの国々において、人命を奪う敵に対する災いを予兆していた。すなわち、偶像の崩壊、悪霊の追放、そして聖なる信仰の光の輝きである。 その後、この星が単なる偶然のものではなく、神聖な性質と神の似姿を持つものであると悟った東方の三博士は、

[247] ニキフォロス・カリストは、14世紀のギリシャの歴史家であり、『教会史』を後世に残した人物である。

[248] 隕石――最新の説によれば、崩壊したある惑星（惑星とは、運動する星のこと）の破片であり、時に地球の地表に落下するものである。

[249] 彗星――天球上を規則的な軌道を描かずに動き、長い期間を経て現れる天体。古代の考えによれば、彗星は時代によって様々な災厄や不幸の前兆とされていた。

バアラムによる古代の預言を思い出し、また、インドのシビル・エリトレア[250] が同じ星について予言したことも理解した。 とりわけ、ローマ教皇聖レオンが指摘するように、神ご自身から密かに啓示を受けた彼らは、全宇宙の主であり王である方が、バラアムが予言した通り「*イスラエルから一人の人が立ち上がる*」（民数記24:17）――と予言された通り、イスラエルにおいて生まれようとしている全宇宙の主であり王の誕生の時が来たこと、そしてそれが古くから予告されていた御方の星であることを、ローマ教皇聖レヴォが理解していた。彼らが、まさにその通りであると疑いなく信じ、旅の準備を万全に整えてそれぞれの国を出発し、すでに述べたように、旅の途中で合流し、心を一つにして旅を続けた。 その間、星が現れてから九ヶ月が過ぎ、キリストの降誕の時が近づいていた。彼らはパレスチナの境界に近づき、ついにキリストの降誕のまさにその日に、ユダヤの首都エルサレムに到達した。 彼らがエルサレムに近づいたとき、彼らを導いていた星は、 突然、彼らの目から消え去った。というのも、もしその同じ星がエルサレムでも輝いていたら、民は間違いなくそれを見て、その星に従って賢者たちと共にキリストのもとへ向かってしまっただろうからである。 そうなれば、ヘロデも、嫉妬深いユダヤ人の会堂の長たちも、生まれたばかりのキリストがどこにいるかを知り、嫉妬のあまり、彼を時期尚早に殺してしまっていたことでしょう。 しかし、私たちの救いをより良く導く神の御心は、星を隠れるよう命じられた。その理由の一つは、幼子を探し求める者たちが洞窟の場所を知らないようにするためであり、また、悪意に満ちたユダヤ人の民の目が、あの驚くべき星を見るに値しないからであり、さらに、彼らの信仰を試すためでもあった。 ――メシアの到来を告げた東方の三博士たちの言葉を信じるか、そして世界の救い主であるキリストを知ろうとするか。もしそうしないならば、それが彼らにとってさらなる非難となるように。至福のテオフィラクトはこのことについて次のように論じている。「東方の三博士たちは、何のために来たのか？」と彼は言う。 ユダヤ人たちを非難するためである。なぜなら、異教徒である東方の三博士さえも信じたのであれば、ユダヤ人たちはどのような答えを返せるというのか。東方の三博士は遥か遠い国々からキリストに拝礼するために来たのに、キリストを自分たちの間にいながら、ユダヤ人たちは彼を迫害したのだ。」

東方の三博士たちは、首都エルサレムに入ると、生まれたばかりの王についてこう尋ねた。「*ユダヤ人の王は、どこで生まれたのか。 『私たちは東の方でその星を見、彼に拝礼しに来たのです』*」（マタイによる福音書2:2）。すると、この知らせはたちまち民を驚かせ、ヘロデ王やエルサレムのすべての指導者たちを動揺させた。王はすべての大祭司や律法学者たちを呼び集め、彼らに尋ねた。

「キリストはどこで生まれるはずなのか？」

王は、自分の王国を奪われるのではないかと恐れ始め、生まれたばかりの王をどのように殺すべきか考えを巡らせた。キリストがベツレヘムで生まれることを知ると、王は東方の博士たちを呼び寄せ、星が現れた時期について聞き出した。 そして、その欺瞞を隠し、不義な思いと邪悪な意図を抱きながら、狡猾にこう言った。

「行って、その幼子についてよく調べてきなさい。見つけ次第、私に知らせてくれ。私も行って、その子に拝礼したいから」（マタイ2:8）。

東方の三博士がエルサレムを去ると、すぐに彼らを導く星が現れ、彼らの前を歩み、彼らはその星が再び現れたことに大いに喜んだ。そして、その星は彼らをベツレヘムの洞窟へと導き、幼子がおられた場所の上で止まるまで、彼らの前を歩み続けた。 幼子がおられたその住まいの真上で、星

---

250 エリトレアのシヴィラ、すなわちエリトレアという都市出身のシヴィラのことである。この都市は、おそらく紅海の沿岸、エチオピア（現在のアビシニア）に位置していた。ここで、エリトレアのシヴィラは誤って「インドの」と称されている。– もっとも、他にも3つのエリトレアが存在した。1つはギリシャのベオティアに、もう1つは小アジアに、3つ目はエトリアにあった。

は止まった。すなわち、星は高みから降りてきて、地上に近づいたのである。もし星がもっと低く降りてこなければ、それがどの場所の上にあるのかを知ることはできなかっただろう。聖金口ヨハネに従う至福のテオフィラクトも、次のように論じている。 「これは並外れたしるしであった」と彼は言う。「なぜなら、星は高みから降りてきて、地上に近づき、東方の三博士にその場所を示したからだ。もし星が高みにとどまっていたなら、彼らはキリストがおられた特定の場所をどうやって知ることができただろうか。どの星も多くの場所を支配しているからだ。 あなたが自分の家の上空に月を頻繁に見るのと同じように、私にも月は自分の家の上にあるように思えるし、誰もが同様に、まるで月や何らかの星が自分たちの上だけに浮かんでいるかのように感じるのだ。同様に、あの星も、下りてきて幼子の上空に留まっていなければ、キリストを明確に指し示すことはできなかっただろう。」この奇跡から、あの星は天の穹蒼にある星の一つではなく、神の特別な力であったことがわかります。 こうして、福音書が語るように、東方の三博士たちは家に入ったとき、探していた方を見つけたのである。この点に基づき、多くの人は、彼らがキリストを洞窟ではなく、町の家の一つで見つけたと考えている。というのも、福音書は洞窟ではなく家について言及しているからである。 この見解によれば、福音書はあたかも次のように語っているかのようです。「人口調査のために集まった大勢の人々が散っていった後、宿屋やベツレヘムの市民の家々も空いたため、その時、聖母と幼子も洞窟からある家へと移されたのです。 しかし、聖殉教者ユスティノス、金口ヨハネス、ニシアのグレゴリオス、そしてヒエロニムスは、主は生まれた洞窟に、40日目に執り行われる清めの儀式が行われる時まで留まっておられ、東方の三博士もそこで主を見出したと述べている。 このようにされたのは、地上の王たちが、新生王の御国が富や虚栄、宮殿にあるのではなく、貧しさと謙遜、そして世俗の栄光への軽蔑の中にあることを知るためであった。 また、この出来事の目的は、彼らが長い旅路を敢行し、王宮で見つけることを期待していた「その方」を、このような貧しさの中で見つけた際にも、後悔も不平も漏らさなかった彼らの信仰が、より強く現れることにもあった。

洞窟で主を見つけた賢者たちは、ひれ伏して主を礼拝した。すなわち、単なる礼拝ではなく、神にふさわしい礼拝であり、人間としてだけでなく、神としても礼拝したのである。なぜなら、聖イレネウスと教皇レオンが述べているように： 「主の恵みによって神秘的に啓示されたあの東方の三博士たちは、幼子を見て、その方が神であることを悟り、信じた。それゆえ、彼らはその方を王としてだけでなく、神としても礼拝した――神にふさわしい礼拝、すなわち『 』である。それゆえ、*『ひれ伏して、宝物を開いて、その方に贈り物を捧げた』* （マタイ 2:11）と記されており、*「主の御前に空の手で現れてはならない」*（出エジプト 23:15）という命令を果たしたのである。では、どのような贈り物だったのか。金、乳香、没薬である。金は王として、乳香は神として、没薬は死すべき人間として （聖テオフィラクト）。というのも、ユダヤ人は死者の遺体を無傷のまま保存しようと、没薬でその体を塗っていたからである。このようにして、三人の王は三位一体の唯一なる御方を三つの贈り物をもって崇め、これらの贈り物によって御方の中に存在する二つの本性を告白したのである。これについて聖レウスは次のように述べている： 「彼らは、レバノンの木を神に、没薬を人に、金を王に捧げ、神性と人性を一体として正しく崇め、心でこれを信じ、贈り物によって告白している」。

新生王を殺害しようと企むヘロデのもとへ戻らないよう、彼らに現れた天使から夢の中で告げを受けた後、東方の三博士たちは別の道を通ってそれぞれの国へ戻り、そこでキリストの教師および宣教者となった。これはニキフォロスによる確かな証言によるものである。 なぜなら、彼らは神の子キリストがこの世に来られたことを宣べ伝え、自分たちが信じていたように人々にキリストを信じるよう教えたからであり、彼らが死後、聖人の列に加えられたことは疑いようがない。彼らの名は次の通りである。第一はメルキオール。年老いて白髪で、長い髪と髭を生やしていた。 彼は王にして主なる御方に金を捧げた。第二はガスパール、若くひげがなく、頬の赤い顔をした者。彼は受肉された神に乳香を捧げた。第三はバルタザール、顔色が浅黒く、長いひげを生やした者。彼は死すべき人

の子に没薬を捧げた。　彼らの遺体は、長い年月を経て、まずコンスタンティノープルへ、次にメディオランへ[251] 、そしてケルンへ[252] 移され、受肉されたキリスト・神を称えるためであった。御子をお生みになった御母と共に、御方に私たちから永遠の栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第6調:

かつて父より母なしに生まれ、今日、地上で父なしに御身から受肉された方。それゆえ、星は東方の三博士に福音を告げ、天使たちは羊飼いたちと共に、あなたの言葉に尽くせぬ降誕を讃えるのです、恵み豊かな方よ。

1月8日

12月26日（旧暦）

聖母マリアが幼子イエスを連れてエジプトへ逃れた物語

記念日12月26日

東方の三博士がベツレヘムを去った後、　主の御使いが夢の中でヨセフに現れ、新生児イエス・キリストとその母である聖母マリアと共にエジプトへ逃れ、そこから戻るよう命じられるまでそこに留まるよう命じた。それは、ヘロデが幼子を探し出して殺そうとしているからであった。　ヨセフは起き上がり、夜中に幼子とその母を連れて、エジプトへと向かった。　しかし、そこへ出発する前に、彼はソロモンの神殿で、主の律法に定められたすべてのことを果たした。というのも、至聖にして無原罪の聖母の清めの日がすでに到来していたからであり、その神殿で、長老シメオンと預言者アンナが私たちの主を迎えたのである。　その後、律法に定められたすべてのことを果たしたヨセフは、ナザレの自分の家へと向かった。聖ルカは次のように記している。*「そして、彼らは主の律法に従ってすべてのことを果たした後、ガリラヤの自分たちの町ナザレに戻った」*（ルカ2:39）。ここから明らかなように、彼らはベツレヘムから直ちにエジプトへ向かったのではなく、まず主の神殿へ行き、次にナザレへ、そして最後にエジプトへ向かったのです。このことについては、聖テオフィラクトもマタイによる福音書の注解の中で次のように記して証言しています。「問:　なぜ福音書記者ルカは、主がご誕生から40日が経過し、シメオンという長老と出会った後、ナザレへ戻られたと述べているのか?　それなのに、ここでは聖マタイが、主はエジプトから戻った後にナザレに来られたと述べているのはなぜでしょうか?　答え:知っておいてほしいのは、福音書記者ルカは、福音書記者マタイが言及しなかったこと、すなわち、主が（ルカによれば）ご自身の誕生後にナザレへ行ったという事実について言及しているということです。　一方、マタイは、その後に起こったこと、すなわち、私たちの主がどのようにしてエジプトへ逃れ、そこから戻った後、再びナザレへ向かったかについて語っているのです。　概して、福音書記者たちは互いに矛盾しているわけではないが、キリストがベツレヘムからナザレへ移られたことについてはルカだけが言及しており、エジプトからナザレへ戻られたことについてはマタイが語っているのである」。　さて、主の神殿を出た後、聖なる巡礼者たち

---

[251] メディオラン（現在のミラノ）は、北イタリアにある都市で、古代リグリアの首都であった。

[252]　ケルン（古代名:コロニウム・アグリッピナ）は、ドイツのライン川沿いにある古代都市で、その荘厳な大聖堂で有名である。西欧のキリスト教徒の敬虔な信仰によれば、この大聖堂には三賢者の聖遺物の一部が安置されているとされる。聖ディミトリオスもまた、ケルンがこの聖遺物を所蔵していると見なしている。

はまずナザレへ向かい、直ちに自宅の整理を整えた。そして、旅に必要なものをすべて持ち、近所の住民に気づかれないよう、夜陰に乗じて急いでエジプトへの道へと向かった。　その際、彼らは奉仕のために、ヨセフの長男ヤコブも連れて行った。彼は後に「主の兄弟」と呼ばれたが、これは10月23日の教会聖歌にも歌われている通りである。そこには次のように歌われている。　「兄弟よ、あなたは現れし者、弟子、そして神の奥義の目撃者であり、彼と共に逃れ、エジプトにてヨセフと共にいた」[253]　。ここから、ヤコブもまた聖家族と共にエジプトへの道に同行し、旅の間、彼らに仕えていたことが明らかである。　そして、主がエジプトへ逃れたのは、一部には、御自身が霊や幻影ではなく、受肉した真の人間であることを示すためであり（聖エフレムは変容の説教の中で、次のように述べてこれを指摘している：　「もし主が肉体を帯びておられなかったなら、ヨセフは一体誰と共にエジプトへ逃げたというのか」と述べている）；また、人間的な怒りや激怒から逃れることを私たちに教え、誇り高ぶってそれに立ち向かうのではなく、そこから逃れるべきであることを示すためでもあった。金口ヨハネも次のように説明している：　「その逃避において――と彼は語った――主は、私たちに激怒に道を譲る、すなわち人間の激怒から逃れることを教えておられる。そして、全能者でさえ逃れるのであれば、私たち高慢な者たちは、それによって自らを危険にさらさないことを学ぶのである」。　主がエジプトへ逃れた目的は、エジプトを偶像から清めること、そして聖教皇レオンが言うように、子羊の犠牲によって初めて十字架の救いのしるしと主の過越が予表されたこの国なしには、至聖なる犠牲の秘跡が備えられないようにするためでもあった。　また、イザヤの次の預言が成就するためでもあります。*「主は軽やかな雲に乗って、エジプトに来られる。そして、主の御顔の前に、エジプトの偶像は震えおののく」*（イザヤ19:1）。この箇所において、聖アンブロシウスは「雲」とは、御子を腕に抱いてエジプトへ連れて行かれた聖母マリアを指し、エジプトの神々の偶像が倒れたと解釈している。　その雲、すなわち聖母マリアは軽やかである。なぜなら、彼女はいかなる罪や肉欲、あるいは夫婦生活の経験といった重荷にも縛られていないからである。

また、義人ヨセフと聖母マリア、そして幼子イエスがエジプトへ向かう途中、ある人里離れた場所で強盗に襲われ、旅に必要なわずかな荷物を載せ、時には自分たちも乗っていたロバを奪われそうになったという話も伝えられている。　その強盗の一人が、並外れた美しさを持つ幼子を見て、その美しさに驚嘆し、こう言った。

「もし神が人間の姿をとられたとしても、この幼子よりも美しい姿にはなりたくなかっただろう。」

そう言うと、彼は仲間の強盗たちに、この旅人たちに危害を加えないよう命じた。すると、聖母マリアはその強盗にこう言った。

「この御子が、あなたが御身を守ってくださったことに対し、寛大な報いを与えてくださることを知っておきなさい。」

この強盗こそ、後にキリストの磔刑の際、十字架の右側に掛けられ、主から「*今日、あなたはわたしと共に楽園にいるだろう*」と言われた人物であった（ルカ23:43）。　そして、「この幼子こそがあなたに報いてくださる」という聖母マリアの預言が成就したのである。

彼らがエジプトの地に入り、フィヴァイダ地方に差し掛かったとき、エルモポリスという町に近づいた[254]　。この町の入り口の近くには、「ペルセイア」と呼ばれる非常に美しい木が生えていた。地元の住民たちは、彼らの偶像崇拝の慣習に従い、　その高さと荘厳な美しさゆえに神として崇め、礼拝し、供物を捧げていた。というのも、その木の中には、彼らによって　と崇められていた悪魔が住んでいたからである。　聖母マリアが神聖な幼子と共にその木に近づくと、木はたちまち激しく

---

[253] 詩篇集より、第2詩篇。

[254]　フィヴァイダ――古代に名高いエジプトの都市テーベの地域。この名称は、その主要都市の名にちなんで、上エジプト（南部）全体を指すこともあった。エルモポリス――古代エジプトの主要都市の一つで、異教の重要な宗教的中心地として機能していた。

揺れ動いた。それは、悪魔がイエスの到来を恐れ、逃げ去ったからである。　そして、その木は、その頂を地面にまで傾け、その創造主と、その母である聖母マリアにふさわしい礼拝を捧げた。さらに、その木は、多くの葉の茂った枝の陰で彼らを炎天下から守り、疲れ果てた聖なる旅人たちに休息の機会を与えた。　そして、その木は、主がエジプトに来られたことの明らかなしるしとして、その傾いた姿のまま残った。主がその母とヨセフと共にこの木の下で休息をとられた後、この木は癒しの力を授かった。その枝に触れることで、あらゆる病が癒やされたからである。　その後、聖なる巡礼者たちはまずその町に入り、そこにあった偶像崇拝の神殿に足を踏み入れたところ、たちまちすべての偶像が倒れた。この神殿について、パラディオスは『ラウサイコス』[255]　の中で次のように言及している：　「我々は」と彼は言う、「そこ（エルモポリ）に偶像崇拝の神殿を見ましたが、救い主の到来の際、その中のすべての偶像が地面にひれ伏しました。　また、『シレン』と呼ばれるある村でも、キリストが聖母マリアと共にその神殿に入られた際、一つの神殿にあった三百六十五体の偶像が倒れた[256]。

そして、エジプト全土においても、主の到来の際、偶像は粉々に砕け、悪霊たちはそこから逃げ去り、この出来事によって、聖預言者エレミヤがエジプトに滞在中に予言した次の言葉が成就した。　「処女の母が、飼い葉桶で生まれた幼子と共にここに来られる時、すべての偶像は倒れ、すべての神々の像は打ち砕かれるであろう」。　このエレミヤの預言以来、エジプト人には、寝台に横たわる聖母と、その傍らで飼い葉桶に寝かされ、おくるみに包まれた幼子を描いた像を崇拝する習慣があった。　ある日、プトレマイオス王がエジプトの祭司たちに、なぜそのようなことをするのかと尋ねると、彼らは「これは、ある聖なる預言者によって私たちの最も遠い先祖に告げられた秘密であり、私たちはその預言の成就と、この秘密の解明を待っているのです」と答えた。

その後、聖なる旅人たちはエルモポリの町から少し離れた方向へと進路を変え、宿営地を探して、イリオポリの近くにある「ナタレア」と呼ばれる村に入った[257]　。ヨセフはこの村の近くで、聖母マリアと主キリストを置き去りにし、必要な物資を調達するために村へと向かった。　すると、聖なる旅人たちをその木陰に迎え入れたあのイチジクの木が、上から下まで二つに裂けて、その上部を垂れ下ろし、まるで彼らの頭上に天蓋や天幕を形成するかのようにした。　また、下の方、その根元にある裂け目には、まるでくぼみのような、滞在に適した場所が形成され、そこで聖母マリアは幼子を抱いて横になり、旅の疲れを癒した。　その場所は、今日に至るまで、キリスト教徒だけでなくサラセン人からも深く崇敬されており、サラセン人たちは今もなお（信頼できる目撃者たちの証言によれば）、そこで休息された聖母と幼子に敬意を表して、木の裂け目にオリーブ油の灯を灯し続けている。　ヨセフと聖母マリアはその村に留まりたいと思い、その木からそう遠くない場所に小屋を見つけ、そこで暮らし始めた。　神聖な幼子のご加護により、もう一つの奇跡も起こった。すなわち、彼らの住まいとあの不思議な木の近くで、突然、生ける水の泉が現れたのである。聖母マリアはその泉から生活に必要な水を汲み、幼子を入浴させるためにも用いた。　その泉は今日に至るまで存在して

---

[255] パラディオス・エレノポリス（368年～430年）はガラティアの出身であった。388年にアレクサンドリアに到着し、そこから沈黙の修行のために近隣の砂漠へと退き、その後ベツレヘムに移住した。399年、小アジアのビフィニアにあるエレノポリスの司教に選出された。　その後、アルカディウス帝は、彼を聖ヨハネス・クラマトルスの支持者として上エジプトへ追放したが、408年にアンティノイへ移され、412年にヘレノポリスの司教座へ復帰した。　カッパドキアの総督ラウスの依頼により、420年に彼は聖なる修道者たちの伝記と彼らに関する伝説を集めた書物を編纂し、彼に敬意を表してこれを『ラウサイコス』と名付けた。――エレノポリスのパラディオスの記念日は、乳製品を許される土曜日である。

[256] 聖母マリアが幼子イエスと義人 ヨセフと共にエジプトへ旅立ち、そこで過ごした日々に関する詳細、またキリストの降誕に関する見解や詳細は、外典の福音書、特にいわゆる「救い主の幼少期の福音書」や、　『マリアの誕生と救い主の幼少期の物語』として知られる外典の著作からも借用されている。また、彼女の家族がエジプトに入国した際にエジプトの偶像が倒れたという伝承は、救い主へのアカフィストにも言及されており、そこには「わが救い主よ、偶像たちはあなたの威光に耐えかねて倒れた」と記されている（第6イコス）。

[257] イリオポリスは、下（北部）エジプトにある都市である。

おり、非常に冷たく、体に良い水が湧き出ている。さらに驚くべきことに、エジプト全土において、これが唯一の「生ける水」の泉であり、その村で名高いものである。これをもって、聖母マリアとキリストがエジプトに滞在した物語は終わる。彼らはそこで数年間を過ごした。　しかし、主がエジプトで何年を過ごされたかについての正確な記録は残っていない。聖エピファニオスは2年、ニキフォロスは3年、ゲオルギオス・ケドリンは5年と述べている。一方、アモニオス・　・アレクサンドリアスなどの一部の人々は、7年であったと考えている。 いずれにせよ、ヘロデの死までそこにいたことは疑いようがない。福音書にも*「そこで、ヘロデが死ぬまでそこにいた」*（マタイ2:15）と記されている通りである。

その後、ベツレヘムの乳児たちが殺され、忌まわしきヘロデが惨めな最期を遂げた後、主の御使いが再び夢の中でヨセフに現れ、エジプトの地からイスラエルの地へ戻るよう命じた。「（御使いは言った）*『幼子を探していた者たちは皆、死んだからである』*」。　ヨセフは起き上がり、幼子とその母を連れて、イスラエルの地の最も良き、かつ広大な部分を占めるユダヤへと向かった。しかし、父ヘロデに代わってアルケライがユダヤで王となっていると聞くや、彼はそこへ行くのを恐れた。というのも、ヘロデは三人の息子を残していたからである。長男のアルケライ、次男のヘロデ・アンティパス、そして三男で末っ子のフィリポである。彼らは皆、父の死後、互いに王位を争ったため、ローマの皇帝のもとへ赴いた。それぞれが父の王国を継ごうとしていたからである。　カエサルは、誰にも王としての栄誉を与えず、王国を四つに分割し、それらをテトラルキアと呼んだ。長兄のアルケラオにはユダヤを、ヘロデ・アンティパスにはガリラヤを、末弟のフィリポにはトラコニテ地方を与えた。　また、アビリヌスには、かつてヘロデの友人であったが、後に嫉妬から彼に殺されたリサニオスの長男リサニオスに与えた。彼ら全員をローマから送り出す際、カエサルは、アルケラオに対し、自分の管轄地域を善良かつ思慮深く統治するならば、王としての地位を与えると約束した。　しかし、アルケラオは残虐な父に全く劣らず、多くの人々を拷問し殺害した。というのも、エルサレムに到着するとすぐに、彼は無実の民三千人を殺害し、祝祭の日には、神殿の真ん中で、集まったユダヤ人全員の目の前で、多くの市民を拷問するよう命じたからである。　このような残虐さのため、数年後、彼は誹謗中傷を受け、権力を剥奪され、流刑に処された。　ヨセフは帰国した際、この邪悪なアルケライが、王の称号こそ持たないものの、実権を握って統治していることを聞き、ユダヤへ行くのを恐れた。しかし、以前にも彼に現れたあの天使から夢の中で知らせを受けると、ガリラヤ地方、すなわちヘロデ・アンティパスの領地、　アーケライの兄弟であるヘロデ・アンティパスの領地へと向かった。というのも、このヘロデは、その兄弟よりも穏やかに民を治めていたからである。そしてヨセフは、以前住んでいたナザレの町にある自分の家に定住した。それは、預言者たちによって主キリストについて預言された、「彼はナザレ人と呼ばれる」という言葉が成就するためであった。彼に永遠の栄光あれ。アーメン。

義なる王ダビデの生涯[258]

記念日 12月26日

聖なる王であり預言者であるダビデは、ユダ族の出身であった。父イッサイはベツレヘムの長老の一人であり、八人の息子をもうけたが、ダビデはその末っ子であった。ダビデが少年期に達すると、父は彼に羊の群れの世話を任せた。　少年は羊の群れの中で人里離れた生活を送り、父の財産を

[258] 義人であるダビデ王とヨセフ・婚約者の記念日は、キリストの降誕後の週に行われ、そのため「神の父の週」とも呼ばれる。もしこの週が1月1日、すなわちキリストの降誕の祝日後になる場合、前述の聖人たちのための礼拝は12月26日に行われる。

守っていました。ライオンや熊が現れて群れから羊をさらっていくと、ダビデはそれらを追いかけて獲物を取り戻しました。獣が彼に襲いかかると、ダビデはそのたてがみを掴み、打ち倒して殺しました。　主はその少年を守られた。彼は敬虔であり、怠惰を好まなかったからである。彼は弦楽器を自作し、暇な時には歌やその楽器の演奏に励んだ。　神から授かったこの芸術の才能を、ダビデは神への奉仕、すなわち神の聖なる御名を賛美するために用いた。絶えず神を想う心を抱きながら、少年は弦を弾き、神のすべての被造物や人間の生活の中に現れる天の父の英知と慈愛を歌い上げた。

当時、イスラエルの王はサウルであった。彼はいくつかの行いによって、主の命令への不従順を露呈し、自らの力と欲望を、万王の王の御心と憐れみよりも優先させていることを示した。そこで主は預言者サムエルに命じ、サウルに次のように告げさせた。

「あなたが主の御言葉を拒んだため、主もまたあなたを拒まれ、あなたはもはや王ではない。」

その直後、主はサムエルをベツレヘム人のイッサイのもとへ遣わされた。「彼の息子たちのうちから、わたしが王を見いだした」と主は言われたからである。　ベツレヘムに到着すると、預言者は町の長老たちに、イスラエルの神へのいけにえを捧げる準備をするよう命じ、イッサイとその息子たちもこれに招いた。　イッサイの息子たちがやって来ると、サムエルは長男のエリアムを見て、彼が神に選ばれた者だと思ったが、主は預言者にこう言われた。

「その容姿や背の高さを見てはならない。わたしは彼を拒んだ。わたしは人のように見ない。人は外見を見るが、主は心を見るからだ。」

そして、イッサイの七人の息子のうち、誰一人としてサムエルに啓示が与えられなかったため、彼はイッサイに、子供たちは全員ここにいるのかと尋ねた。老人は、羊の世話をしている息子がもう一人いると答えた。預言者はその少年を呼び寄せるよう命じた。ダビデが来ると、主はサムエルに言われた。

「立ち上がって、彼に油を注ぎなさい。この人こそ、その者だからである。」

預言者は、持参していた油の入った角を取り出し、兄弟たちの真ん中でダビデに油を注いだ。その日から以後、主の御霊がダビデの上に留まった。その後、サムエルはベツレヘムを去り、少年は以前の仕事に戻った。

一方、サウルからは主の御霊が離れ、彼は狂気の病に冒された。その発作は苦痛を伴うものであり、サウルは常に苛立ちを覚え、暗い思いに苛まれていた。　そこで、宮廷の者たちは、発作の最中にその演奏で王を落ち着かせられるよう、ハープを巧みに弾く者を招くよう主君に助言した。サウルはこれに同意し、すると宮廷の一人がダビデを推した。　王の命令により、18歳の羊飼いの若者が王宮に呼び出された。サウルが病の苦しみで身もだえしているとき、ダビデはハープを奏で、神に喜ばれるようにした。すると、サウルの気分は和らぎ、良くなり、悪霊は彼から離れていった。　ダビデは王に大変気に入られ、王の従者となったが、宮廷での奉仕は常時のものではなく、彼は故郷の町に長期にわたって戻る機会があり、羊飼いの仕事を続けていた。

まもなく、ペリシテ人たちがイスラエルの地へ侵攻してきた[259]　。彼らはユダ族の領土に入り、ソコフとアゼクの間のエフェス・ダムミムに陣を敷いた[260]　。サウルはイスラエルの軍勢を率いて、そこから南へ2ヴェルスタほど離れた場所に陣を敷いた。 両陣営の間には広大な谷が広がっていた。ペリシテ人は、古代に慣例となっていた一騎打ちによって戦争に決着をつけようと企て、彼らの陣

259　ペリシテ人――ハムの息子メシュライムの子孫。エジプト人と血縁関係にあるこの民族は、パレスチナの南西部、地中海沿岸のセフェル渓谷に居住していた。

260　ソホフ（現在のシュウェイケ）は、エルサレムの南西約24ヴェルスタに位置する丘陵地帯の町である。アゼク（現在のデイル・エル・アズベク）は、ソホフの北約13ヴェルスタにある。　エフェス・ダムミム（血の境界）は、現在のベイド・ファゼブ（流血の家）の場所にあり、アゼクの南2ヴェルスタに位置する。

営から、ゲファの出身でエナク族の巨人ゴリアテが現れた[261]。彼の身長は六肘と一ペニ（[262]）、すなわち4アルシンと14ヴェルシュクあり、全身を銅製の完全な戦装束で覆われていた。それは、重さ五千シケル（[263]）の鱗状の鎧、兜、膝当て、盾であり、手には重さ六十シケルの鉄の槍を携えていた。ゴリアテはイスラエルの軍勢に向かって、こう叫んだ。

「あなたがたの中から一人を選び出し、私のもとへ下ってこさせよ。もし彼が私を殺せば、私たちはあなたがたの奴隷となる。しかし、もし私が彼を打ち負かせば、あなたがたは私たちの奴隷となり、私たちに仕えることになる。」

巨人の恐ろしい姿はイスラエルの子らを震え上がらせ、彼らのうち誰もゴリアテと一対一で戦う決心がつかなかった。ゴリアテは日ごとに傲慢さを増し、四十日間も立ち続けてイスラエル人をののしり続けた。

当時、ダビデの兄弟たちはペリシテ人に対抗して出陣した兵士たちの中にいた。ある日、イッサイは末の息子を軍勢のもとへ送り、兄弟たちの安否を確かめ、少量の食糧を届けるように命じた。その若者は、軍隊が整列し、叫び声を上げて戦いの準備をしていた時に、軍需物資の輸送隊に到着した。ダビデは兄弟たちに会おうと、急いでイスラエル軍の隊列へと向かった。　彼が兄弟たちと話をしている最中、ペリシテ軍の陣列からゴリアテが現れ、高慢な言葉を吐き始めた。その巨人の姿を見たイスラエル人たちは恐怖のあまり逃げ散り、隊列の中では次のような声が上がっていた。

「もし誰かがゴリアテを殺せば、王はその者に莫大な富を与え、自分の娘を嫁がせ、その父の家をイスラエルの中で自由の身にしてくれるだろう。」

イッサイの若き息子は、ペリシテの巨人の傲慢さに深く憤りを感じた。

「この割礼を受けていないペリシテ人が、どうして生ける神の軍勢をこれほどまでに侮辱できるのか」と、ダビデは憤りを込めてイスラエルの兵士たちに語った。

その若者の言葉は王の耳に入り、王は彼を呼び寄せた。ダビデがサウルにゴリアテと戦うことを許してほしいと懇願した際、その言葉には神の助けに対する強固な信仰がにじみ出ていたため、王はついにこう言った。

「行け。主があなたと共におられるように。」ダビデは、サウル王の命令で身に着けさせられた武具を拒んだ。彼はそれに慣れていなかったからだ。彼は羊飼いの杖と投石器、そして小川で拾った滑らかな石を五つ入れた袋を手に取り、その装備でゴリアテに向かって進んだ。

ペリシテの巨人による嘲笑や罵倒に対し、ダビデはこう答えた。

「お前は剣と槍と盾を持って私に向かってくるが、私は、お前が侮辱したイスラエルの軍勢の神、主サバオトの名によって、お前に向かっていくのだ。　今、主はあなたを私の手に渡される。私はあなたを殺し、あなたの首を切り落とし、あなたの死体とペリシテ軍の死体を空の鳥と地上の獣に与えよう。そうすれば、全地がイスラエルに神がおられることを知るだろう。そして、この集まった者たちすべてが、主が剣や槍によって救われるのではないことを知るだろう。

そして、神の助けへの希望は、その若者を失望させることはなかった。ダビデの投石器から的確に放たれた石が、巨人の額を強烈な勢いで打ち、ゴリアテは地面に倒れた。するとダビデは彼のもとへ駆け寄り、彼自身の剣でその首を切り落とした。　ダビデの偉業に衝撃を受けたペリシテ人は逃げ出し、イスラエル軍は彼らの陣営を占領すると、敵を自国の国境まで勝利のうちに追撃した。

倒した巨人の首を手に持ち、ダビデはサウル王の前に現れた。大喜びした王は、その若者を側近に留め、民全体の喜びのもと、彼を軍司令官に任命した。　勝利者たちが帰還する道中、イスラエ

---

[261] エナクの子らを、ユダヤ人の偵察隊は巨人と呼んだ（民数記13:34）。彼らがゲフェに住んでいたことについては、ヨシュア記11:22を参照のこと。

[262] ユダヤの長さの単位：肘は12ヴェルシュクに相当し、ピャデン（足）は6ヴェルシュクである。

[263] ヘブライのシクルは3ゾル、34、40ドルに相当した。

ルのすべての町で盛大な出迎えが行われ、女性たちはティンパニやキンバルを奏でながら踊り、次のようなリフレインのある勝利の歌を歌った。

「サウルは千人を打ち破り、ダビデは数万人を打ち破った。」

ダビデに対する民のこのような愛情の表れは、王にとって不快なものだった。サウルは預言者から、主が彼から王位を取り去り、それをダビデに与えたことを知ると、ダビデを自分の後継者と見なし始め、その若者に疑いの目を向けるようになった。サウルを苦しめていた重い病は、このためさらに悪化し、王は時折狂乱状態に陥った。　こうした発作の最中、王を落ち着かせるためにハープを弾いていたダビデに、二度も槍を投げつけたが、神の御霊に守られていた若者は死を免れた。その後、サウルはダビデを恐れ、彼を自分のそばから遠ざけて千人の隊長に任命した。　この役職において、ダビデはあらゆる事柄において賢明に行動し、それによって民からの愛をさらに深めたが、これはサウルを大いに不快にさせ、彼はダビデの死を企てるようになった。

当初、王は狡猾な手段を用い、ダビデをペリシテ人に対する危険な遠征へと送り出した。「私の手ではなく、ペリシテ人の手が彼に下るように」と、サウルは悪意を抱いていた。　ダビデを戦場に送り出す際、王は長女メロバとの結婚を約束したが、結局彼女を別の者に嫁がせ、ダビデには次女メルコラとの結婚を提案した。その条件として、ダビデにさらに危険な遠征を命じたのである。

「王の婿になるなど、私のような貧しく取るに足らない者には、到底務まりません」と、若き将軍は、その過分なお言葉に対し、謙虚に答えた。

主は御自身の選ばれた者を守り、彼は毎回勝利を収めて帰還したため、その名は広く知れ渡り、サウルはダビデを愛していたメルコラを彼に嫁がせることを余儀なくされた。その後、サウルの嫉妬はさらに強まり、彼は生涯にわたってダビデの敵となり、義理の息子を殺すという意図を公然と口にするようになった。

サウルの息子の一人である勇敢なヨナタンは、ゴリアテに勝利した頃から、ダビデを自分の魂のように愛しており、二人の若者は固い友情で結ばれていた。父の邪悪な意図を知っていたヨナタンは、サウルにこう言った。

「王よ、あなたのしもべダビデに対して罪を犯さないでください。彼はあなたに対して何の罪も犯しておらず、その行いはあなたにとって大いに有益なものです。　彼はペリシテ人を打ち倒すために自らの命を危険にさらし、主はイスラエル全土に大きな救いをもたらされました。あなたはそれを見て喜びました。それなのに、なぜ無実の血を流す罪を犯し、理由もなくダビデを殺そうとするのですか？」

王はダビデを殺さないと誓い、王と義理の息子との間には良好な関係が築かれたが、それは長くは続かなかった。まもなくペリシテ人との戦争が始まり、その中でダビデは決定的な勝利を収めた。　その時、サウルは狂気のあまり、目の前でハープを弾いていたダビデを、再び槍で壁に突き刺そうとした。ダビデはなんとか逃げ出し、自分の家に身を隠した。王は兵士たちを遣わして家を包囲させ、ダビデが出てきたら捕らえて殺そうとした。　無実の苦難に遭った者の状況は絶望的だったが、ダビデは絶望することなく、祈りに慰めと助けを求め、その様子は彼が霊感を受けて詠んだ第58篇の詩篇に描かれている。

「わが神よ、わたしの敵からわたしを救い出してください」とダビデは叫びました。「わたしに立ち向かう者たちから、わたしを守ってください。見よ、彼らはわたしの命を狙い、強者たちが、わたしの罪や過ちのためではなく、主よ、何の罪もないのに、集まって武装しているのです。」　どうか私を助け、私を見守ってください。彼らには力がありますが、私はあなたに逃げ込みます。私の守り手は神だからです。

こうしてダビデは叫び求めた。すると主は、愛する妻の手によって、彼を避けがたい破滅から救われた。妻は夫を窓から縄で下ろしたのである。

この時から、ダビデの放浪生活が始まった。王は義理の息子を、*「山を駆け回るヤマウズラのように」*（サムエル記上26:20）追跡した。ダビデは、イスラエルの集落にも、かつての彼の勝利を覚えていた隣国ペリシテ人の町々にも、身を寄せる場所を見つけることができなかった。　ヨナタンは王をなだめようと試みたが、それは無駄だった。王はダビデの妻さえも他の男に嫁がせ、大祭司アヒメレクとその一族は、義理の息子に同情しているのではないかと疑ったサウルによって処刑された[264]。しかし、ダビデは両親をモアブ王のもとに預けることで、王の怒りから彼らを守ることができた[265]。預言者ガドを通じて与えられた神の啓示に従い、ダビデはユダ族の領内に入り、ベツレヘムの南にある山岳地帯や荒野で王から身を隠した。彼の周りにはサウルに不満を抱く者たちが集まり始め、やがてダビデは400人にも及ぶ、勇敢で好戦的な者たちからなる部隊の指導者となった。この部隊を率いて、ダビデは自ら王に追われながらも、それでもなお、自国民のために奉仕し続けた。彼は、ユダヤの山地にある、ペリシテ人に占領されていた町ケイラから彼らを追い出し、また、その山地で放牧されている家畜を、砂漠の略奪者たちの襲撃から守った。

ダビデは自分の命を神の御手に委ね、主はその油注がれた者を守られた。すなわち、ダビデがケイラに滞在し、サウルがそこで彼を捕らえようとしていたとき、主はダビデに、町の住民が彼を王に引き渡そうとしていることを明らかにされた。そのため、ダビデはその部隊と共にその町を去り、*「彼らは行ける所へ行った」*（サムエル記上23:13）。死海の西岸にある、植生が全くない山岳地帯のシフとマオンの荒野に避難場所を見つけたダビデは、王の軍勢に包囲されそうになったが、その頃、サウルはペリシテ人の襲撃の報を受け、一時的に追跡を中止せざるを得なかった。　敵を撃退した王は、ダビデを捕らえるために軍を率いて荒野から戻ってきた。峡谷や洞窟が点在するこの荒涼とした地で逃亡者たちを探していたサウルは、ある日、ある洞窟に入った。そこにはちょうど、ダビデと彼の側近数人が隠れていた。　暗闇に潜む敵に気づかずに、サウルはマントを脱いだ。その間、ダビデを取り囲んでいた者たちは王だと気づき、その指導者にこう言った。

「今日こそ、主があなたに告げられた日です。『見よ、わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは彼を、お望みのままに扱ってよい』と。」

ダビデは答えた。

「主が、私の主である主の油注がれた者に手を下すようなことを、私に許されるはずがありません。彼は主の油注がれた者だからです。」

彼は慎重にサウルのマントの端を切り取り、王が洞窟から出て少し離れたところで、彼を呼び止めた。サウルが振り返ると、ダビデは地にひれ伏して礼をし、王に悪意ある中傷を信じないよう説得し始めた。

「父よ」と若者は言った。「私の手にあるあなたの衣の端を見てください。私はあなたの衣の端を切り取っただけで、あなたを殺したわけではありません。私の手には悪も欺きもなく、私はあなたに対して罪を犯していないことを、どうかご自身で確かめてください　。それなのに、あなたは私の命を奪おうと、私の命を狙っているのです。　主が私とあなたとの間を裁き、主が私のためにあなたに報復してくださいますように。しかし、私の手はあなたには及びません。主は私の件を吟味し、裁き、あなたの御手から私を救い出してくださいます。

サウルは、自分が迫害していた男の寛大さに深く心を打たれ、涙ながらに自分の過ちを認めた。その後、王は都に戻ったが、ダビデは荒野をさまよい続けた。

サウルがダビデの気高い行いを覚えているのも長くは続かなかった。彼自身の猜疑心に加え、ダビデの勢力が強まり、彼に同情する者たちがますます増えていったことが、王に追跡を再開させるきっかけとなり、サウルは三千の部隊を率いて再び荒野へと向かった。　ダビデは王の動向を注意深

---

[264] アヒメレクは、放浪中のダビデが彼のところに来た際、聖なるパンとゴリアテの剣を彼に与えた。このことがサウルに知れ渡ったため、サウルは大祭司がダビデに同情しているのではないかと疑った。

[265] モアブ人は、ロトの子マンナの子孫であり、死海の東方に住んでいた。

く見守り、王がある高台に陣を敷くと、王の陣が見渡せる山の上に陣を構えた。　サウルの戦力をより正確に把握するため、ダビデは側近の一人であるアベッサと共に、夜陰に乗じて王の陣営に潜入した。王の将軍たちの警戒は極めて緩く、王の天幕のそばにさえ見張りがいなかったため、ダビデと彼の仲間はそこへ入り込んだ。　サウルはぐっすりと眠っており、その枕元には地面に突き刺さった槍が立っていた。アベッサはこの槍でサウルを刺し殺そうと申し出たが、ダビデは言った。

「主は生きておられる！　主が彼を打たれるように。あるいは、彼の定められた日が来て死ぬか、あるいは戦いに赴いて死ぬか。しかし、主の油注がれた者に、私が手を下すことを、主は決して許されない！」

彼は天幕にあった槍と水の入った鉢を取り、王の命が再び自分の手の中にあることをサウルに見せつけ、誰にも気づかれることなく陣営を後にした。自分の陣営に戻ると、

ダビデは大きな声で、王の護衛が不十分であるとして、王の将軍たちを叱責し始めた。サウルはダビデの声を聞き、遠くから彼と会話を交わした。

王はこう言った。

「私は罪を犯した。戻って来い、わが子ダビデよ。私はあなたに害を加えるつもりはない。今、私の命はあなたの目には尊いものだからだ。私は無分別な行いをし、多くの過ちを犯した。」

ダビデは答えた。

「ここに王の槍があります。少年の一人が来て、それを取り上げさせてください。主が、それぞれの行いに応じて、その正しさと真実さに基づいて報いてくださいますように。主は王を私の手に渡してくださいましたが、私は主の油注がれた者に手を下すことを望みませんでした。　そして、あなたの命が私の目にはどれほど尊かったかのように、私の命も主の目には尊ばれ、主が私をお守りになり、あらゆる災いから救い出してくださいますように。

別れの際、サウルは主の御名によってダビデを祝福し、それ以来、二人は二度と会うことはなかった。

ダビデには、サウルの善意や約束を信用できない多くの理由があったため、イスラエル王国の境界を離れ、ペリシテ人の地に移住する方が自分にとって安全だと考えた。　その南の国境にはセケラグという町があり、ペリシテの王は、ダビデとその支持者たち（その数は600人にのぼった）の居住地としてこの町を割り当てた。ここからダビデは、イスラエル民族の古くからの敵である砂漠の住民たちに対して遠征を行った。　その間、ペリシテの王はイスラエルの地に対して恐ろしい侵攻を仕掛け、ダビデとその部隊もこれに参加するよう要求した。　自らの民を深く愛していたダビデにとって、この要求に応じることは言葉に尽くせないほど辛いことだったが、ここでも彼が常に固く信頼していた神の助けは彼を見捨てなかった。ペリシテの諸侯たちは、ユダヤ人である彼が祖国の敵の忠実な同盟者にはなり得ないのではないかと疑い、ダビデにセケラグへ戻るよう強く求めたのである。帰路の途中、彼は自分の町がアマレク人[266]　によって荒らされ、自分や支持者たちの家族や財産が奪われ、砂漠へと連れ去られたことを知った。　ダビデの部隊内では動揺が広がり、敵に捕らえられた息子や娘たちへの深い悲しみから、ダビデの仲間たちは彼を石で打ち殺そうとした。しかし、ダビデは主なる神への信頼を固め、略奪者たちを追跡し、彼らの戦利品をすべて奪い返した。

その間、ペリシテ人とイスラエル人の間で繰り広げられていた戦いは、ゲルブイの山々[267]　でイスラエル側の敗北に終わった。この戦いで、サウルとその息子ヨナタンは戦死した。　彼らの死の知らせをダビデにもたらしたのはアマレク人であり、彼はその際、サウルからの依頼により、ペリシテ人に追われていたサウルを殺したと語った。その話を聞いたダビデは叫んだ。

「どうして主の油注がれた者を殺そうとして、手を下すことを恐れなかったのか？」

---

[266] アマレク人はエサウの子孫であり、この民はペリシテの地とエジプトの間の土地に住んでいた。

[267] これらの山々は南側からエズレロン谷を囲んでおり、この谷はガリラヤとサマリアを隔てている。

そして、その使者を処刑するよう命じた。ダビデは、自分を迫害したサウルと、親愛なる友ヨナタンに対する心からの深い悲しみを、霊感に満ちた歌に込めた。

「ゲルブイの山々よ」と詩篇の作者は叫ぶ。「あなたたちの上に露も雨も降らず、実を結ぶ畑もないように。なぜなら、そこには強者の盾、すなわちサウルの盾が打ち倒されているからだ。たとえ彼が油を注がれた者であったとしても。」　サウルとヨナタンは、生前も親しく心を一つにし、死後もなお離れることはなかった。彼らは鷲よりも速く、獅子よりも強かった。「私はあなたを悼む——わが兄弟ヨナタンよ、あなたは私にとって非常に愛おしい存在であった。あなたの愛は、私にとって女性の愛よりも尊かった。」

サウルとヨナタンを悼んだ後、ダビデは神の啓示に従い、ユダ族の領地へと移り、すべての従者たちと共にヘブロンに定住した[268]。ここでダビデは油を注がれ、イスラエル王国の南部地域の王として宣言された[269]。一方、残りの地域では、サウルの息子エボセイが王位に就いたが、彼を王位に就かせたのは軍司令官アベニールであった。王国の分裂は約2年間続いたが、預言者サムエルを通して語られた神の言葉によれば、イスラエルに対する権威はサウルの家系に留まることはできなかった。イェボセイは自身の護衛のうちの2人の裏切り者によって殺害され、殺害者たちは彼の首をダビデのもとに持ち込み、報奨金を得ようとした。　しかし、ダビデはライバルの死を悼み、こう叫んだ。

「あらゆる苦しみからわたしの魂を救い出された主にかけて！　サウルが死んだという知らせを携えてきて、自分を喜びの使者だと思っていた者を、セケラゲで捕らえて殺し、報奨を与える代わりにしたのだ。それならば、今、悪人たちが無実の人をその家、その寝床で殺したのだから、　どうして私があなたがたの手からその血を求めず、あなたがたをこの地から根絶やしにしないというのか！

こうして、殺人者たちは処刑された。その後、ヘブロンにイスラエルのすべての部族の代表者が集まり、民の歓呼の中、ダビデはイスラエル全土の王として油注がれた。

ダビデの最初の事業は、新たな首都の建設であった。この目的のために、彼はユダ族とベニヤミン族の境界に位置し、かつてカナン人の部族であるエブス人の支配下にあった堅固な要塞を選んだ。エブス人が自発的にダビデにそれを譲ることを拒んだため、　彼の軍司令官ヨアブがその要塞を強襲して攻略した。ダビデはこの要塞をエルサレム、すなわち「平和の都」と名付け、ここに新しい宮殿を築いた。　新しい首都はまもなく華やかで豊かに繁栄し、その後、人類の救いの事業における最も重要な出来事の舞台として、世界でも最も著名な都市となった。　自分の首都を聖別し、自らも主の栄光が宿る場所に極めて近い場所に身を置くため、ダビデはエルサレムに幕屋を設けた。それは、モーセが神の命により荒野に建てたもの、すなわちダビデの時代にガバオンにあったもの[270]　と、あらゆる点で同じものであった。　ダビデは、神の民の至聖なるもの、すなわち契約の箱を、カリアフ・ヤリムからここへ移した[271]。聖物の移送は、非常に厳粛に行われた。行列には、七万人に及ぶイスラエル人が参加した。　当初、契約の箱は戦車に乗せられて運ばれていたが、戦車が揺れた際に、それを支えるためにあえて契約の箱に触れたあるイスラエル人が主によって死に至らされたため、残りの道のりでは、レビ族の祭司たちが契約の箱を手に担いで運んだ。　契約の箱を運ぶ者たちが六歩進むごとに、子牛と羊を主へのいけにえとして捧げた。行列は、詩篇の詠唱、ラッパやその他の楽器の轟音、そして民の歓声に導かれて進んだ。　王自身も、畏敬の念に満ちた歓喜のうちに、王の衣を

---

[268] ヘブロンはパレスチナで最も古い都市の一つであり、ベツレヘムの南約20ヴェルスタに位置し、そこにはアブラハム、イサク、ヤコブという先祖たちとその家族（ベツレヘムに埋葬されたラケルを除く）の墓がある。

[269] それは紀元前1055年頃のことでした。

[270] 現在はエル・ジブという村となっており、エルサレムから北へ2時間の距離にある。

[271] カリアフ・ヤリム——ガバオンの近くにあるカナン人の町。

脱ぎ捨て、祭司の亜麻布の衣を身にまとったまま、主の契約の箱の前で踊った。契約の箱が幕屋内の所定の位置に安置されると、ダビデは主への全焼のいけにえと平安のいけにえをささげ、主サバオトの名によって民を祝福した。　サウル王の死後、ダビデによって迎え入れられた妻メルコラは、契約の箱の移送時の王の振る舞いを非難した。彼女は、その行為が女性の目にも王の威厳を傷つけるものだと見なしていたからである。しかし、ダビデはこう答えた。

「主の前で踊り、喜び歌おう。そして、私はさらに身を低くし、自分の目にはさらに取るに足らない者となるが、あなたが言及した女中たちの前では、私は栄光に輝くであろう。」

ガバオンの古代の幕屋の時と同様に、「ケルビムの上に座する主サバオトの名が記された」神の契約の箱においても、ダビデはモーセを通じて与えられた律法に従って礼拝の秩序を確立した。この目的のために、彼は神の奉仕に任命されたレビの子孫を班に分け、彼らの間に奉仕の務めを割り当てた。　最も著名な音楽家や歌手が選ばれ、彼らは整然とした聖歌隊を結成し、礼拝のための賛美歌を作曲するとともに、「ラッパやシンバル、そして様々な楽器を奏で」て神を賛美することとなった。　そうした人物にはエマン、アサフ、エファンがおり、彼らの先頭に立っていたのはダビデ自身であった。試練の年月に、彼は特別な洞察力で神の摂理の道を深く見極め、霊感に満ちた詩篇の中に自らの敬虔な想いを絶えず注ぎ込んでいた。

これらの聖なる歌の中で、ダビデは迫害による不当な苦しみのもつ重さと深さを描き出し、また詩篇によって恐怖に苛まれる自分を慰め、自らの悲しみを和らげ、人間の不正に対する正当な怒りや憤りを鎮めた。　また、それらの中で神の御前に深い悲しみを注ぎ出し、神の助けを請い求めた。さらに、賛美の歌によってダビデは、苦難を不平を言わずに耐え忍ぶよう自らの精神を奮い立たせ、助け主である神への信頼を強め、危険の中にあっても絶え間なく注がれる神の御配慮と御加護に対して、神に賛美と感謝を捧げた。　その際、救済への希望を込めて自らの苦しみを表現する中で、迫害を受けた詩篇の作者は、預言的な精神をもって、その賛美歌の中で遠い未来へと心を飛ばし、受難者であるキリストを仰ぎ見ました；　その無実の苦しみの中に、預言者である詩篇の作者は、悪に対する全世界的な勝利と、新しい正義の王国の到来を予見したのである[272] 。 ダビデが全イスラエルの王となったとき、彼はその卓越した賛美の才能を、民の中に信仰と敬虔の精神[273] 、祖国への愛[274] 、勇気[275] 、正義[276] 、そしてその他の美徳を育むために用いた。 ダビデの治世におけるすべての重要な出来事は、詩篇を詠む君主である彼の敬虔な魂による歌の奔流に彩られていた。賢明なシラフの息子の証言によれば、ダビデは*「あらゆる業を終えるたびに、賛美の言葉をもって至高者に感謝を捧げた。彼は心から歌い、その創造主を愛した。　また、祭壇の前に賛美者を配置し、彼らの歌声で賛美を美しく響かせた。彼は祭りに威厳を与え、彼らが主の聖なる御名を賛美し、早朝から聖所を賛美の歌で満たすよう、時を厳格に定めた*」（シラ書 47:9–12）。

主の御名の栄光を熱心に求めたダビデは、預言者ナタンにこう言った。

「見よ、私は杉の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の下にある。」

預言者は、王が主のための恒久的な神殿を建てるという意図を是認したが、その同じ夜、主から啓示を受け、それをダビデに伝えた。主は預言者を通してダビデにこう言われた。

「あなたの生涯が満ち、あなたが先祖たちと共に眠るとき、わたしはあなたの後に、あなたの身から生まれるあなたの子孫を立て、その王権を堅くする。彼はわたしの御名のための家を建て、わたしは彼の王座を永遠に確かなものとする。わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子と

---

[272] 詩篇 33；詩篇 51；詩篇 53；詩篇 55；詩篇 56；詩篇 58；詩篇 14。

[273] 詩篇 1；詩篇 11；詩篇 13；詩篇 14；詩篇 18；詩篇 23；詩篇 28；詩篇 35；詩篇 63；詩篇 103；詩篇 104；詩篇 121；詩篇 144。

[274] 詩篇 132。

[275] 詩篇　9；詩篇　19；詩篇　20；詩篇　32など。

[276] 詩篇14；詩篇36など。

なる。もし彼が罪を犯したとしても、　わたしは彼を、人々の杖と、人の子らのくつわをもって懲らしめる。しかし、わたしがあなたの目の前で拒んだサウルから取り去ったように、わたしの恵みを彼から取り去ることはない。あなたの家とあなたの王国は、わたしの目の前で永遠に揺るぎないものとなり、あなたの王座は永遠に堅く立つであろう。

この崇高な約束は、ダビデとその子孫に対する神の特別な御好意の最も重要な証拠であり、王の預言的な視線を、彼の王国の将来の運命へと照らし出し、高めたのである。　預言者であり詩人であるダビデは、この約束の中に、ダビデの子である、　すなわち、世界の救い主キリストについて、彼を「永遠の昔から存在する神の御子」として告白し、自らをそのしもべと呼び、周囲の諸国民に対する自らの勝利の中に、キリストの敵の敗北と、その支配の世界的な広がりを見出し、荘厳な賛美歌の中でキリストの王国の将来の栄光を告げ知らせるのである。

こうしてダビデはイスラエル全土を治め、民全体に対して正義と公正を施した。サウル王の晩年に混乱に陥っていたイスラエル王国の内政を立て直し、ダビデは、何よりも　、自身がその代表者であるイスラエルの天の王、神に喜ばれることと、民の利益を第一に考えた。　彼の一生の目的は、神から与えられた律法を遵守し、それをすべての臣民に遵守させることだけでした。ダビデのこのような統治のおかげで、彼の首都エルサレムは、彼の死後も長年にわたり「正義に満ちた忠実な首都」であり続けました。神の御心に対するダビデの完全な服従は、異民族に対する輝かしい勝利という形で実を結びました。　彼の治世下で、イスラエル王国は、契約が結ばれた際にアブラハムの子孫に約束された境界にまで達した。ダビデの勝利のおかげで、その支配領域は紅海からユーフラテス川まで広がり、南はアラビア砂漠に至り、北はシリアを制圧し、西は地中海で終わっていた。　当時のイスラエルは、多くの属国を支配下に置く強大な国家であり、国内は豊かであった。これは戦利品による富に加え、ユダヤ王の臣民とその財産が完全に安全に守られていたことによるものであった。　このように神の恵みがはっきりと示されていたため、ダビデに残されたのは、謙虚に神に感謝し、神の聖なる御名の栄光のために善を行うことだけだった。　しかし、人間に固有の弱さや不力さはダビデにも例外ではなく、地上の栄光と華やかさに囲まれた彼は、こうした弱さを露呈してしまい、その結果、彼にとって非常に重い代償を払うこととなった。

東方の他の君主たちと同様に、ダビデには数人の妻と側室がおり、それに伴う王宮の贅沢と華やかさは、ダビデの道徳的な性質を甘やかし、緩ませる影響を与えていた。　そのため、ある日、宮殿の屋上を散歩していた際、隣の庭で水浴びをしている美しい女性を目にしたとき、彼は自分の中にある罪深い情欲を抑え込むことを拒み、その女性を自分の元へ連れてくるよう命じた。　この女性はビルサビアという名で、当時遠征中だったダビデの軍司令官ウリヤの妻であり、王の子を身ごもってしまった。　このことを知ったダビデは、当初、夫から自分の罪を隠そうとし、そのためにウリヤを妻のいるエルサレムへ呼び寄せたが、それがうまくいかなかったため、総司令官に命じて、戦いの最中にウリヤを最も危険な場所に配置させた。ウリヤは戦いで殺され、ビルサビアはダビデの妻となり、彼に息子を産んだ。　ダビデが行ったこの行いは、主の目に悪と見なされた。王を責めるために預言者ナタンがダビデのもとに来て、主の御名によってこう言った。

「なぜあなたは主の御言葉を軽んじ、主の御目に悪と映ることを行ったのか。あなたがわたしを軽んじ、ウリヤの妻を娶ったゆえに、あなたの家から剣が永遠に離れることはない。」

同時に、預言者はビルサベから生まれた子の早すぎる死を予言した。その子は実際に病に倒れ、ダビデは七日間、食事も睡眠も取らずに、完全に人目を避けてその子のために祈り続けた。その子が息を引き取ったとき、　ダビデは謙虚に神の御心に従った。その服従は、犯した罪に対する彼の悔い改めがどれほど誠実で深かったかと同じくらい完全なものであり、彼の心の砕けは、熱烈な悔い改めの詩篇に表れ、それは永遠に、悔い改めるすべての罪人の悔い改めの祈りとなった（詩篇50篇）。

犯した罪に対する神の裁きは、まもなくダビデの一族に、一連の忌まわしく血なまぐさい出来事として現れた。　ダビデが異なる妻たちからもうけた二人の愛息、美男子のアムノンとアベサロム

の間で、アムノンがアベサロムの妹ファマレを辱めたことをきっかけに、死を賭けた敵対関係が勃発した。兄アベサロムはこの不名誉に対する復讐として、宴会の最中にアムノンを裏切り、殺害し、国を逃れた。　王は最愛の息子たちの死を深く嘆き、数年を経てようやくアベサロムに王宮への帰還を許した。しかし、この多大な恩恵に対し、不義の息子は父に極度の恩知らずな仕打ちで報いた。　彼はすでに老齢のダビデに対して反乱を起こした。民衆の苦境に迎合し、お世辞を並べることで、アベサロムは多くの支持者を集めることに成功し、ヘブロンで自らを王と宣言した。強力な陰謀が企てられ、民衆はアベサロムの元へ集まり、その数は増え続けた。

これを聞いたダビデは、少数の側近を連れて安全のためヨルダン川東岸の地へ退くことを決めた。大祭司は契約の箱を携えて王に同行しようとした。

しかし、ダビデは大祭司にこう言った。

「神の箱を町に戻し、その場所に安置しておきなさい。もし私が主の御目にかなうなら、主は私を連れ戻し、御自身と御住まいとを私に見せてくださるでしょう。しかし、もし主が『あなたを好ましく思わない』とおっしゃるなら、私はここにいます。主が御心に適うように、私を扱ってください。」

ケドルの小川[277]　を渡ると、ダビデはオリーブ山へ向かった。彼は歩きながら泣き、頭には覆いを被り、裸足で歩いた。彼と共にいた者たちも皆、それぞれ頭に覆いを被り、歩きながら泣いた。民の中の良識ある者たちは、老いた王の苦境に同情したが、この機会を利用して、罰せられることなく苦しむ者を侮辱する者たちもいた。　あるサウルの家系に属するセメイという者が、王を大胆に罵り、石や泥を投げつけた。これに憤ったダビデの同行者たちは、その厚かましい者を処刑する許可を求めたが、苦しむ王はこう言った。

「彼を放っておきなさい。悪口を言わせておきなさい。主が彼にそう命じられたのだから。もしかすると、主は私の屈辱を憐れみ、今の彼の悪口に対して、私に恵みをもって報いてくださるかもしれない。」

この神の憐れみへの同じ希望は、感動的な賛美歌『[278]　』にも表れており、そこでは、父であり君主としての自尊心を傷つけられた老いたダビデが、あの困難な時期に主の前で自らの魂を注ぎ出していた。

そして主は、御自分のしもべを、彼に降りかかった災いから救い出された。　ヨルダン川の向こう側では、正統な王の周りに強大な軍勢が集結し、ダビデはその指揮権を、実績のある将軍たちであるヨアブ、アベッサ、エフェイに委ねた。彼らの助言に従い、自ら軍の後方に留まったダビデは、将軍たちに、かつての息子であるアベッサロムの命を助けてくれるよう懇願した。　しかし、この願いは聞き入れられなかった。アベサロムの軍勢が打ち破られたとき、彼自身は逃走して助命を図った。森の中を猛スピードで駆け抜ける最中、アベサロムは豊かな髪が樫の木の枝に絡まり、木にぶら下がってしまった。　そこでヨアブに追いつかれ、射殺された。反逆した王子の傷だらけの遺体は、モーセの律法の規定に従い、不従順な子は石打ちの刑に処されるという定めにより、巨大な石の山で塞がれた穴に投げ込まれた。　このことを知った不幸な父は、息子にされた悪事を思い出すこともなく、上階の部屋へ行き、泣きながら、歩きながらこう言った。

「わが子アベサロムよ、わが子よ、わが子アベサロムよ！ ああ、誰か、お前の代わりに私が死ねる者はないだろうか、アベサロムよ、わが子よ、わが子よ！」

ダビデは、神がイスラエルの地に下された民の災いによっても、心の苦しみを受けた。それは三年にわたる飢饉と、三日間続いた疫病であった。　ダビデは、主の御心に対して謙虚かつ従順な姿

[277] この川はエルサレムの東側を流れていた。

[278] 詩篇　6；詩篇　31；詩篇　37；詩篇　38；詩篇　142。

勢でこれらの試練を受け入れ、自分自身と民の罪のために祈りと全焼のいけにえを捧げ、神の正義を和らげようとした。

治世の最後の数年間は、平穏な日々が続き、ダビデは、神の御心により後継者が成し遂げることとなる偉大な事業、すなわち主の神殿の建設に向けた準備に費やした。　聖なる建物のすべての構造物の設計図が作成され、礼拝に必要なすべての備品の図面が作成され、神殿を完全に建設するために必要なすべての資材が収集され、あらゆる分野の職人も集められた。　ダビデはこれらすべてを、生前に民の長老たちの面前で、主の御言葉に従って王位を継ぐことになっていた息子ソロモンに引き継いだ。その際、長老たちは自らも豊かな献金を捧げ、民はその熱意を喜び祝った。　王は霊感に満ちた祈りの中で、神殿の建設のために自ら蓄えた財宝と、この偉大な事業のために臣民たちが自発的に捧げた献げ物とを、共に主に奉献した。

「私はいったい誰であり、私の民はいったい誰なのか。どうして私たちに、これほどの大いなる捧げ物ができるというのか！」とダビデは叫んだ。「しかし、すべてはあなたから来たものであり、あなたの手から受けたものを、私たちはあなたに捧げたのです。　わが神よ、あなたが心を試み、清い心を愛しておられることを私は知っています。私は清い心からこれらすべてを捧げました。そして今、ここに集まっているあなたの民も、喜びをもってあなたに捧げているのを見ます。主よ、私たちの父祖であるアブラハム、イサク、イスラエルの神よ！　どうか、あなたの民のこの心の向きを永遠に保たれ、彼らの心をあなたへと向かわせてください。また、私の息子ソロモンには、あなたの戒めと啓示と定めを守り、これらすべてを成し遂げ、私が準備を整えた神殿を建て上げることができるように、正しい心をお与えください。

その直後、ダビデはソロモンを王に立て、大祭司サドクによって王として油注がれた。民は皆喜び騒ぎ、ダビデのすべての家来たちは彼を祝賀した。そして、老いて衰えに苦しむ王は、寝台の上でひれ伏して言った。

「イスラエルの神、主を賛美します。主は今日、私の子孫の中から、私の王座に就く者を立ててくださいました。私の目もそれをこの目で見ています。」

そして、主はイスラエルの全民族の目の前でソロモンを高め、イスラエルの歴代の王のうち、彼以前の誰にもなかったような王国の栄光を彼に授けられた。　イッサイの子ダビデは、イスラエル全土を治め、その治世は四十年に及んだ。ヘブロンで七年、エルサレムで三十三年を治めた。そして、長寿を全うし、人生と富と栄光に満ちてこの世を去り、その子ソロモンが彼の後を継いで王となった。

聖使徒ペトロは、ダビデ王を預言者と呼んでいる（使徒行伝2:30）。また、聖アタナシオス・アレクサンドリアスは、詩篇20篇の解説の中で次のように教えている。「ダビデ王は、その子孫から世界の救いが生まれたという事実そのものによって、すでに高く称えられている。なぜなら、彼はこれを心から願い、そのために祈っていたからである。　それゆえ、彼には、頭部を栄光に包む、ある種の純金の冠（詩篇20:4）として、これが与えられたのである。なぜなら、すべての民の中で、ダビデは主と、肉による御子と共にあれを称えられているからである。　この救いは、彼にとって単なる冠にとどまらず、願いであり、長寿であり、栄光であり、華やかさであり、喜びであり、楽しみであり、希望であり、揺るぎない慈しみでもあったのである」。　詩篇第50篇の*「私は不義な者たちにあなたの道を教え、不敬虔な者たちはあなたに立ち返るでしょう」*（詩篇50:15）という言葉の解説において、聖ヨハネ・クロソストモスは、詩篇の作者の口を通して、主に対する次のような告白を述べている。

– あなたは私に、御子を啓示し、御子を私に知らしめてくださったという、このような栄誉を授けてくださいました。私は、あなたが人間の性質を帯びた御子をお持ちであることを知り、あなたが御自身と並んで座する御方をお持ちであることを悟り、そして私は、全世界に十字架、　埋葬、地

獄への降下、御子の復活を告げ、御子の裁きについて語り、異邦人の救いについて語り、使徒たちの選びについて語り、ユダヤ人たちの拒絶について語り、教会の召命について語り、処女たちの姿について語り、御子が御あなたの右に座しておられることについて語ったのです」。–「そう、ダビデよ」と聖なる父は続ける。「あなたはすべての事柄について預言を宣べ伝えた。それなのに、なぜ*『神よ、私に清い心をお与えください。私の内に正しい霊を新たにしてください』*（詩編50:12）と叫ぶのか。あなたは王であり、王冠を戴き、紫の衣をまとう。しかし、　――と彼は言う――これらすべては草や、夜や、夢に過ぎない。私は別の美しさを求めている。聖霊を私に与えてください。そうすれば、あなたが再び私と語り合い、私もあなたと語り合うことができる。聖霊は私から離れてしまった。まるで鳩が汚れを見るやいなや飛び去るように。私は聖霊を取り戻したい。そうすれば、私は来て、あなたの御前に現れるだろう。　今、私はあなたの御前で大胆さを失い、これを耐え忍ぶことができない。」ご覧なさい、ダビデが神の御前でいかに告白しているかを。さあ、罪という悪がいかに大きいかを見てください。姦淫、殺人、律法への違反、主の戒めの破り。私がこれを言うのは、預言者を非難するためではなく、彼の速やかな悔い改めを示すためです。　罪を犯すのは一瞬、悔い改めるのはそれよりもさらに速い。ウリヤの妻と姦淫を犯した後、彼はその罪に打ちのめされ、詩篇を書き始めると、こう叫んだ。

「*神よ、あなたの大きな憐れみによって、私を憐れんでください*」（詩篇50篇）。

そして、完全な悔い改めによって、彼は罪の完全な赦しを得た。義人である王――預言者――の人物像や、試練に満ちたその生涯の出来事の中に、神に賢明な教父たちは、肉においてダビデの子である、私たちの主イエス・キリストとその地上の生涯への示唆を見出している。　聖金口ヨハネは、ダビデの謙虚さ、謙遜、そして柔和さについて論じ、次のように教えている。

「そして、柔和なダビデはゴリアテを打ち倒し、軍勢を追い払い、勝利を収めた。そもそも、柔和な者には、自分に加えられた侮辱を赦し、他者に加えられた侮辱に対して復讐することが常である。キリストもまた、そのように行われたのである」。　聖アタナシオス・アレクサンドリアスは、詩編51篇、56篇、58篇の注解において、これらの詩編が、サウルによるダビデの苦難を描写することで、恩知らずなイスラエル人　（サウルが彼らを象徴している）に恩恵を与え、彼らの誹謗中傷によって迫害されたキリストは、ユダの姿を予表し、イスラエルが悪行のゆえに神の導きから拒絶された後、すべての異邦人が招かれることを告げ知らせたのである。　これに応じて、私たちの主イエス・キリストは預言者たちによってしばしばダビデの名で描かれ、キリスト教徒はダビデの子孫と呼ばれ、救い主キリストの支配はダビデの鍵、その御座はダビデの御座、キリストの教会はダビデの家と呼ばれています。

神の霊感を受けたダビデの物語は、後に『詩篇』という一冊の本にまとめられた。アレクサンドリアの聖アタナシウスは、これをある預言者が成し遂げたことを証言している。至福のテオドリトスは、自身の詩篇注解の中で次のように教えている。　「ある人々は、すべての詩篇がダビデのものであるわけではなく、他の者たちによって書かれたものもあると述べている。なぜなら、そのような解釈に基づき、ある詩篇はイディフムに、別のものはエファムに、またあるものはコレの子らに、さらに別のものはアサフに帰属させられたからである。彼らは『歴代誌下』から、　、彼らもまた預言者であったことを知ったのである。　私はこのことについて何も断言しない。なぜなら、すべての詩篇がダビデのものであるか、あるいは一部は前述の人々によるものであるかによって、私にとっての益が増すだろうか。それらはすべて神の御霊の働きによって書かれたものであることが明らかであるのだから。神の預言者ダビデも、また彼らも、『歴代誌』において預言者と呼ばれていることを私たちは知っている。　預言者には、詩篇に記されているように、自らの舌を御霊の恵みの道具として捧げることがふさわしい。「わが舌は、速筆の書記の杖のようだ」（詩篇44:2）。とはいえ、多数派の

見解が優先されるべきであり、著述家の大部分は、詩篇がダビデに帰属すると主張していたのである」。

聖バシレイオス大主教は、キリスト教生活における詩篇の重要性を次のように述べている。「*すべての聖書は神の霊感によるものであり、有益である*」（IIテモテ3:16）、それは聖霊によって書かれたものであり、魂の普遍的な薬箱として、私たち人間すべてが――各自が自身の病に対して――その中に癒やしを見出せるようにするためである。なぜなら、「*柔和さは大きな罪を覆う*」と記されているからである（伝道の書10:4）。しかし、預言者たちはあることを教え、歴史家たちは別のことを教える。ある書物では律法が示され、別の書物では流麗な説教の形で教えが提示される。一方、詩篇はすべての書物の中から有益なものを網羅している。それは未来を預言し、出来事を想起させ、生きるための律法を授け、行動のための規範を示す。　要するに、それは善き教えの総合的な宝庫であり、一人ひとりに有益なものを丹念に探し出してくれるのである。　それは、魂の古くからの傷を癒やし、最近傷ついた者には速やかな治癒をもたらし、病んだものを回復させ、傷ついていないものを支える。そして、概して、人間の生活において様々な姿をとって魂を支配する情欲を、可能な限り根絶する。　さらに、それは人の心に静かな喜びと安らぎをもたらし、それによって理性を節制あるものにする。詩篇は魂の静寂であり、平和の与え手であり、反抗的で波立つ思いをおさめ、魂の苛立ちを和らげ、節制を欠いた心を節制へと導く。　詩篇は、友情の仲介者であり、遠く離れた者たちの結束であり、敵対する者たちの和解である。なぜなら、神に向かって一つの声を上げた相手を、もはや誰が敵と見なすことができようか。　それゆえ、詩篇の詠唱は、私たちに最大の恵みの一つ――愛――をもたらす。それは、団結への架け橋として、人々が一つになって調和のとれた姿となるよう導くものである。　詩篇は、悪魔からの避難所であり、天使たちの保護の下に入る道であり、夜の恐怖に対する武器であり、日中の労苦からの安らぎであり、乳児にとっての安全であり、青春時代の装飾であり、老人への慰めであり、女性にとって最もふさわしい装いである。詩篇は荒野に息吹を与え、市場に節制をもたらす。　初心者のためには教義の基礎であり、上達者にとっては知識の増進であり、完成者にとっては確証である。これこそが教会の声である。これは、私たちが歌いながら共に有益なことを学べるよう配慮した、教師の賢明な工夫である。　教えには、甘美な歌声が織り交ぜられており、退屈を和らげる心地よいものとともに、言葉の中に含まれる有益なことも、気づかぬうちに受け入れることができるようになっている。なぜなら、強制されて学んだことは長く心に残らないが、インスピレーションと喜びをもって受け入れられたものは、魂にしっかりと根付くからである」。

「詩篇には、さらに驚くべき点がある。　――聖アファナシオス・アレクサンドリアスはこう教えている――他の書物において、聖人たちが語る内容やその主題について、読者はそれをまさにその記述の対象となっている人物たちに結びつけ、また聴き手は、語られている人物たちとは自分たちを区別し、もし物語られる行いに驚き、それに競い合うとしても、それはすべて模倣に過ぎない。　しかし、詩篇を手に取る者は、もし救い主に関する預言が、他の聖書と同様に、通常の驚きと畏敬の念をもって読み流されるとしても、残りの詩篇はすでに、あたかも自分の言葉であるかのように読み、　また、それを聞く者も、あたかも自ら口にしているかのように心を動かされ、賛美歌のすべての言葉が、あたかも本当に自分のものかのように身近に感じられるのである」。

「神なる父を、ダビデ王を皆で賛美しよう。彼から処女の杖が生まれ、彼女からキリストの花が輝き、アダムとエバを塵の中から呼び起こし、慈愛に満ちた方である」（その日のスティヒラ、「主よ、私は叫びました」）。

聖ヨセフ、至聖なる聖母マリアの婚約者の記念日

記念日：12月26日

聖ヨセフは王家の出身であり、ダビデとソロモンの家系に属し、マトファトの孫、エリエゼルの曽孫、血筋においてはヤコブの息子であり、律法上はエリヤの息子であった[279]。というのも、彼の祖父マトファトは、父ヤコブが生まれる前に亡くなっていたからである。 一方、マタファトの妻、すなわちヤコブの母は、ダビデの子ナファンの一族に属するメルキエに嫁ぎ、エリヤを産んだ。イリヤは結婚したが、子を残さずに亡くなった。その後、同じ母から生まれたが父の異なる兄弟であるヤコブが、律法に定められていた通り、彼が子を残さずに亡くなった場合、その兄弟がその妻を娶り、兄弟の子孫を継がせなければならないという規定に従い、その妻を娶った。 この律法に従って、ヤコブは兄の妻を娶り、この聖なるヨセフ、すなわちキリストの婚約者をもうけた。そしてヨセフは、すでに述べたように、両者の息子であった。血筋においてはヤコブの息子であり、律法上においてはイリヤの息子であった。 だからこそ、聖ルカ福音書は、キリストの系図を記すにあたり、ヨセフの父をエリヤと名指し、キリストについて次のように述べている。「*その子は、人々が思っていたように、ヨセフの子、エリヤの子、マタタウの子であった*」（ルカ3:23–24）と、ヤコブの代わりにエリヤを挙げているのである。– この聖ヨセフについては、西方と東方のキリスト教徒の間で様々な見解が存在する。西方では、彼は死ぬまで処男であり、全く結婚しなかったとされているが、東方では、妻を持ち、子供をもうけたと主張している。 このように、古代ギリシャの歴史家ニキフォロスは、聖ヒッポリュトスに倣って、彼がサロメと結婚したと伝えているが、（彼は付け加える）ベツレヘムにいて主の「名付け親の祖母」とされたあのサロメのことだとは思わないでほしい、それは別のサロメであった。 というのも、前者のサロメはエリサベトと至聖なる神の母の親族であったのに対し、このサロメは、洗礼者ヨハネの父ザカリアの兄弟アゲイの娘であったからである。アゲイとザカリアは、ともに祭司バラキヤの息子たちであった。聖ヨセフはこのアゲイの娘であるサロメを妻として、四人の息子をもうけた。 ヤコブ、シモン、ユダ、ヨシヤ、そして二人の娘、エステルとファマル、あるいは他の説によればマルファである。また、聖なる香油を携えた女性たちの週の聖人暦には、ゼベダイと結婚したサロミアという名の三番目の娘も加えられている。 一方、ゲオルギー・ケドリンは、ヨセフの二人の娘について言及し、そのうちのひとりであるマリアが、ヨセフがエジプトから帰国した後、ヨセフの兄弟クレオプスに嫁いだと述べているが、そのマリアは、マルファあるいはファマルと同一人物であると思われる[280]。 彼女がどの娘であれ、またヨセフに娘が何人いようとも、いずれにせよ、ヨセフが結婚しており、息子や娘を持っていたことは疑いようがない。妻サロメの死後、聖ヨセフはかなりの期間、寡夫として清らかな生活を送った。 聖福音書において、彼の聖く汚れなき生涯は、次のような、簡潔ではあるが極めて称賛に値する言葉で証しされている。*「彼女の夫ヨセフは、義人であった」*（マタイ1:19）。これ以上の証しがあるでしょうか。彼はそれほど義人であり、その聖さにおいて他の義なる先祖や族長たちをも凌駕していました。なぜなら、聖母マリア、神の母の婚約者であり、名目上の夫となるにふさわしい者は、いったい誰だったでしょうか。 また、キリストの「名目上の父」となるという、これほどの栄誉が誰に与えられたでしょうか。まことに、主はこの御心にかなう人を見出し、彼に御自身の*「知られざる、隠された知恵」*（詩篇50:8）を啓示し、彼を私たちの救いの秘儀の奉仕者となさったのです。 まことに、彼はその徳に満ちた生涯

---

279 義兄弟婚（レビラート）の慣習とは、夫が子供を残さずに亡くなった場合、彼より長く生き残った兄弟が、古来の慣習（創世記38章以降）に従い、義兄弟（jabam, levir）として、兄弟の未亡人（義妹）と結婚しなければならないというものであった。 この律法は、モーセによって『申命記』（申命記25:5–10）に記されている。ここで興味深いのは、レビラートがペルシャ人、インド人、アフガニスタン人、ドルーズ教徒、コーカサス地方の部族の大部分など、東方の多くの民族にも存在しているという点である。 レビラート婚の法律によれば、レビラート婚から生まれた子供たちは、この法律に基づき義兄が妻として迎えた未亡人の子供とみなされ、これこそが「兄弟の子孫を継がせる」ことを意味していた。

280 ここで付け加えるならば、グルジアの聖人暦において、聖なる香油を捧げた女性たちの列に、聖ファマール（タマリーという名で）も崇敬されている。 明らかに、グルジア教会に伝わるこの伝承は、ファマールがヨセフの娘であり、後に姉のサロメ（義人の長老のもう一人の娘）と共に香油を捧げた女性であったという説と類似している。

ゆえに、そのような栄誉と奉仕にふさわしい人物であった。彼がすでに八十歳という高齢になったとき、聖母マリアは彼と婚約し、彼女の処女性を守るために（肉体的で実質的な結婚のためではなく）彼に託されたのである。　そして彼は、あらゆる敬虔さと畏れをもって、彼女を神の母として、また自身と全世界の主であり支配者である方として仕えました（夢の中に現れた天使からそのことを確信させられたのです）。　また、彼女から生まれた神の御子に対しても、エジプトへの逃避の際も、そこから帰還した後も、ナザレに滞在している間も、自らの労働によって生計を立てながら仕えた。彼は大工であり、王家の出身でありながらも貧しい人であったからである。　主は貧しさのうちに生まれようとなさったからである。王家の血筋からは肉体のみを受け継ぎ、王としての栄光や富、支配権は受け継がなかった。それゆえ、主はご自身の至聖なる母をも貧しい者としてお選びになり、　ご自身の名目上の父をも貧しい者としてお選びになり、謙遜の模範を示されたのである。　わずか百十年の生涯を送った後[281]　、聖ヨセフは安らかに息を引き取り、シェオルにいた先祖たちの元へと旅立った[282]　。そこへ、人類を解放し救うために来られた待望のメシア、主キリストが到来したという喜びに満ちた確かな知らせを携えて行ったのである。主キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

トロパリオ、第2調：

ヨセフよ、ダビデの神の父なる奇跡を宣べ伝えよ。あなたは処女が産むのを見、羊飼いたちと共に神を賛美し、東方の三博士と共に礼拝し、天使からの知らせを受け取った。キリスト・神に、私たちの魂を救ってくださるよう祈り求めてください。

コンダク、第3調：

今日、ダビデは神聖な喜びに満たされ、ヨセフはヤコブと共に賛美を捧げる。キリストとの血縁によって冠を受け、彼らは喜び、地上で生まれし方を言葉に尽くせぬほど讃える。「寛大なる御方よ、あなたを崇める者たちを救いたまえ。」

聖なる殉教者エウフィミオス、サルディスの司教の記念日

記念日：12月26日

聖エウフィミオスは、コンスタンティヌスとイリナの治世[283]　に生き、その敬虔さによって、キリストの教会における修道生活において、輝く星のように名声を博した。　この功績により、彼は司教の位を授けられ[284]　、第2ニカイア（第7全地）公会議[285]　に出席し、そこで恐れを知らず熱心に異端者たちと戦い、彼らを恥じ入らせた。また、彼は王たちから、反乱や騒乱が横行する地域へ、様々な国家的任務を帯びて派遣されることもあった。　その後、ニキフォロス[286]　が即位すると、聖エウフ

281　この、義人ヨセフが110歳であったという伝承は、彼が111歳でこの世を去ったという説と一致しており、これについては外典『大工ヨセフの物語』にも言及が見られる。

282 シェオル――地獄、死者の住処。

283 コンスタンティンとイリーナは、前者が780年から797年まで、後者が797年から802年まで在位した。

284 聖エウフィミオスはサルディスの司教（ミシア、小アジア）であった。

285 この聖像破壊派に対する公会議は787年に開かれた。

286 ニキフォロスは802年から811年まで在位した。

ィミオスは他の正教会の司教たちと共に、ある乙女への強制的な修道入りを理由として[287] 、西方のパタラレア[288] へ追放され、それ以来、殉教による死を迎えるまで、自身の司教区には戻ることなく、その統治も行わなかった。 29年後、ギリシャ国家の皇帝の座に獣のようなレウスが就いた時[289] 、聖人は流刑地から呼び出され[290] 、皇帝の前に引き出され、聖像崇拝について尋問を受けた。 彼はいつものように、異端の不敬を大胆に糾弾し、拷問者に教会からの破門を宣告した。王は殉教者に激しく怒り、彼を再びアッス市へ流刑とした[291] 。 その後まもなく、皇帝レウスは王位から追放され、剣によって命を落とした。彼の後を継いだのは、 「口が不自由な」と呼ばれた皇帝ミカイルであった。この皇帝の治世下、聖人はアッスから呼び出され、聖像崇拝を放棄するよう強要された。しかし、彼は恐れを知らず、皆が聞くところで次のように宣言した：

「私たちの主イエス・キリストの御姿――その人間性において――を崇拝しない者は、破門とする。」

このため、彼はまず鞭打ちの刑に処され、その後、クレタ島へ追放された[292] 。そこで彼は薄暗い牢獄に閉じ込められ、さらに残酷な拷問を受けた。彼は四本の柱に縛り付けられ、牛の腱で打ち据えられたため、その体は無数の傷で覆われ、腫れ上がった。 その後しばらく生き延びた後、この聖なる殉教者は安らかに神のもとへ息を引き取った[293] 。

聖エヴァレストの記念日

記念日：12月26日

小アジアのガラティア教区出身の聖エヴァレストは、高貴な家系の両親を持っていたが、その名前は不明である。当時、ビザンツ帝国の皇帝はレオンであり、彼は聖像崇拝を激しく迫害したが、剣によって命を落とし、神に敵対する者としてふさわしい最期を遂げた。 その後を継いだのはミカエル[294] であり、彼もまた正教に対して不審なほど敵意を抱いていた。

エヴァレストという少年は、成人するにつれ、十分な教育を受け、すべての人にとって「使徒のように」振る舞った（Iコリント9:22）：両親には従順であり、友人や隣人に対しては親しみ深く、見知らぬ人にも身近な人にも愛想が良く、常に、あらゆる事において誠実であり、その愛をもってすべての人に思いやりを示した。 このように、少年時代からエヴァレストは神の戒めに従って生き

---

287 実際には、スタディオス派の修道士たちと共に、破門されたものの皇帝ニキフォロスによって復権されたエコノモス・ヨセフと交わりを拒んだ者たち全員に対して迫害を加えた不法な皇帝を告発したためであり、その告発は、皇帝コンスタンティノス6世が最初の妻の存命中にテオドティアと結婚した件に関するものであった。

288 パタラレアは、シチリアとチュニジアの間、アフリカに近い島である。

289 レウ5世アルメニア人――ビザンツ皇帝、813年から820年まで在位。

290 聖エウフィミオスは教会の支柱であり、流刑地にあっても、聖テオドロス・ストゥディトスの証言によれば、多くの人々を啓発し、その蜜のように甘美な教えによって人々を神へと導く灯火であり、それによって異端者である皇帝に不安を与えていた。 815年に流刑地から尋問のために呼び出された聖エウフィミオスは、ニキフォロス総主教や他の正教会の司教たちと共に、皇帝の偶像破壊政策を熱心に非難した。

291 アッスは、ミシア地方のアドラミティス湾に面した要塞都市である。

292 別の伝承によれば、聖エウフィミオスは黒海沿岸のアクリテに幽閉されたという。

293 聖エウフィミオスは、ミカエル2世「口ごもる者」の息子テオフィロス帝の治世下、840年頃に逝去した。ニコディモスの証言によれば、殉教者エウフィミオスの聖遺骨は、黒海沿岸のフラキア地方にあるアンキアレスに安置されており、多くの奇跡を起こしている。

294 820年に即位したミカイル2世「口ごもる者」皇帝は ニキフォロス総主教、聖テオドロス・ストゥディトス、およびレオン・アルメニアヌスの治世下で聖像崇拝のゆえに迫害を受けた他の正教徒たちを監禁から解放したが、聖像崇拝を復活させることはせず、家庭内での頻繁な聖像崇拝のみを許可した。

たいという熱意に燃え、修道生活への愛を抱くようになった。　その間、彼の父は用事でコンスタンティノープルへ赴き、エヴァレストも父と共にそこへ向かった。そこで彼は、名誉ある社会的地位を築いていたある親戚であるパトリキウス・ヴリエニウスに迎えられた。　その数日後、テオドラ皇后はブルガリアへ使節団を派遣する必要が生じた[295]　。大使には、前述のパトリキウス・ヴリエニウスが任命された。彼は、高潔なエヴァレストも同行させた。彼らがスクペールと呼ばれるある場所[296]にたどり着くと、そこで立ち止まり、しばらくの間滞在した。　ここで、至福のエヴァレストは、ある特別な事情、すなわち神の御計画により、長老の位を授かり、その後、修道生活を送る中で、彼の魂が常に愛をもって切望していたもの、すなわち修道生活への入会を果たし、こうして彼がこれほどまでに渇望していた主の軛を自らに負うこととなった。　ちょうどその頃、彼は不朽の名著であるエフレモスの書を手に入れ、それを読み、そこに示された教訓に心を動かされ、　エヴァレストはエフレムの敬虔な教えを熱心に実践する者となり、その心の在り方と徳高い生活により、旅の安全を祈る手紙を託され、祈りを込めてスタウディオス修道院へ送り出された[297]　。　この修道院に到着すると、彼は受け入れられ、修道生活への献身に全身全霊を捧げた。そして、兄弟たちの中で霊的生活において特に高い境地に達している一人を見出し、彼と親しくなり、努力に努力を重ね、この兄弟と完璧への登り詰めを競い合った。他の者たちはそれに 気づいていなかったが。 彼の食事は、わずかな一片の乾いたパンだけであり、調理された食事は週に一度だけ摂っていた。　彼のその他の偉業や労苦については語り尽くすことさえ不可能だが、裸の体に重い鉄の鎖を肩に担ぎ、腰には帯を締めていたことだけでも十分である。そして彼はその高潔な生活によって当時すべての人を凌駕し、このように神に喜ばれる生き方を七十五年間送った後、主のもとへ息を引き取った[298]　。

聖コンスタンティン・シナドスキーの記念日

記念日：12月26日

聖コンスタンティンはシナデの町[299]　で生まれ、ユダヤ人の家系に属していた。まだ幼かった頃、ある日母に付き添っていた彼は、あくびをして唇に十字を切ったキリスト教徒を目にした。それを真似て、彼も同様の動作をするようになった。　その一方で、こうした外見上の類似が、彼にキリスト教信仰の内面的な内容にも注意を向けるきっかけとなった。彼は魂の奥底で神の恵みの温もりを感じ、その顔は輝きに満ちた。天からの神秘的な導きに照らされ、彼は何日も、まるで肉体の糧を忘れてしまったかのように、空腹さえ感じなかった。　これは周囲の人々にとって誘惑となった（Iコリ

---

[295] 野蛮な民族であるブルガール人は、817年頃、 アドリアノープルを壊滅させ、マヌイル大司教を捕虜とした（彼と共にあえぎ死した377人の殉教者の記念日は1月22日に祝われる）。その後、彼らはギリシャ人と和平を結ぶことを余儀なくされ、人質を差し出すことさえ迫られたが、その中にはブルガリアのボリス公の妹も含まれていた。　彼女はその後、コンスタンティノープルでキリスト教の教育を受け、テオドラという名で洗礼を受けた。850年以降、彼女はブルガリアに戻り、兄をキリスト教へ導いた。とりわけ彼女の影響のおかげで、ボリス公はキリスト教を受け入れ、864年に洗礼を受け、ミハイルと名付けられた。

[296] スクペール（スコプラ）――アルバニア、バルカン半島にある地域。

[297]　コンスタンティノープルのストゥディオス修道院――5世紀半ばのレオ大帝の治世に創設され、8世紀後半のコンスタンティノス・コプロニモス帝の治世には、 コンスタンティノス・コプロニモス帝の治世下で設立されたが、8世紀後半には偶像破壊派によって甚大な被害を受け、正教徒を率いて偶像破壊派と戦った聖テオドロス・ストゥディテスの時代に最大の栄光を極めた。15世紀半ば、トルコ人によって修道院は破壊され、教会はモスクへと改築された。

[298] 聖エヴァレストは825年頃に逝去した。彼はコッコロヴィ修道院に埋葬された。

[299]　シナド、あるいはシンナディは、フリギア北部の山脈の近くにある都市で、そこには有名なシンナディの大理石採石場があった。現在はエスキカル近郊のガサフにある遺跡である。

ント1:23）。あるユダヤ人の少女が一度、彼を大胆に嘲笑したが、その報いとして、まず「尊き十字架」のしるしによって死に至らしめられ、その後、生き返らされた。　このように清く信仰に満ちた心で主の御声に耳を傾け（ヘブライ人への手紙4:7）、彼は肉親のもとを離れ、あたかも神聖な雲の導きに従うかのように[300]　、「魂の救い」と呼ばれる場所へとたどり着いた。そこには当時、徳と修道者の偉業に輝いた偉大な人々が住んでいた。　彼はその修道院の院長に自己紹介し、自身のことを詳細に語った。院長は十字架を持ってくるよう命じ、彼にそれを口づけするよう命じた。　祝福された彼は喜びをもって聖なる十字架に口づけを始め、それを自らの頭の上に載せた。すると、その頭には直ちに、この至聖なる武器の印が刻まれ、それはその後も、彼の死に至るまで消えることなく残った。その後、彼は聖なる洗礼を受け、コンスタンティンという名を授かった。　洗礼の後、彼は近くの場所へ退き、そこで熱心に霊的生活に身を捧げた。修道者の位を受けたいと願った彼は、剃髪する前からすでに厳格な敬虔さにおいて誰よりも優れており、聖使徒パウロの模範と教えに従って生活を送っていた。　そして、コンスタンティンが神に対して修道誓願を立てたとき、その場には芳しい香りが満ち溢れ、教会の扉が自ずと彼の前に開かれた。　その心の清らかさゆえに、彼はさらに特別な賜物にも恵まれた。すなわち、彼は透視能力者であり、各兄弟の心の内さえも彼の前には明らかであったのである。この修道院から、彼はオリンポス山への旅に出た[301] 、その後、アッタリア[302] に到着し、不思議な方法で急流を渡り、リキアのミレや他の多くの場所を訪れ、再びオリンポス山へと戻った。　ここでコンスタンティノスは、腰まで土に埋められた状態で、40日間、食事を摂らずに過ごした。その後、自らの意志に反して聖職に就き、修道者の務めを怠ることなく、さらにアトロイ[303]　へと旅立った。8ヶ月前に自らの死を予言し、その予言通り、安らかに主のもとへ旅立った[304] 。

1月9日

12月27日（旧暦）

聖第一殉教者兼大助祭ステファノの殉教

記念日：12月27日

私たちの主イエス・キリストが、私たちの救いの秘跡を成し遂げられた後、天に昇られ、御父から使徒たちに炎の舌のような姿で聖霊を降臨させられたとき（使徒言行録2:1–4）、 初期の教会（エルサレム教会）が成長し始めた頃、まもなく、ギリシャ人[305]　とユダヤ人のクリスチャンとの間に不和が生じました。ここでいうギリシャ人とは、偶像を崇拝し、聖書で通常「異邦人」と呼ばれている人々を指すのではありません。　当時、異邦人にはまだキリストへの信仰への道が開かれておらず、救いの御言葉も宣べ伝えられていなかった。大執事ステパノが殺害された後も、異邦人を信徒の集

---

[300] 出エジプト記13:21。聖人がたどり着いた場所は、シリアのシナイ山であり、そこではすでに3世紀の頃から聖なる隠者たちが修行に励んでいた。

[301]　オリンポス山は小アジアにある山で、その周辺には当時名高い修道院があり、ヨアンニキオス・メーガロスなどの偉大な修行者たちがそこで修行に励んでいた。

[302] アッタリアは、パンフィリアの沿岸都市であり、紀元前半世紀にアッタロス2世フィラデルフォスによって建設され、彼の名にちなんで名付けられた。

[303] アトロイア――オリンポス山からほど近い都市。

[304] 聖コンスタンティンは8世紀に生活し、修行に励んだ。

[305]　「エリン人」とは、異教世界のさまざまな国々に住み、広く普及していたエリン語（ギリシャ語）を話していたユダヤ人のことであり、彼らは祭りの際にはエルサレムを訪れ、長期間滞在していた。

いに受け入れるようになるまでには、まだしばらく時間がかかった。異邦人の中で最初にキリスト者となったのは、百人隊長コルネリウスであった（使徒行伝10章）。 しかし、聖ペトロが彼に洗礼を授けたやいなや、割礼を受けたユダヤ人キリスト者たちは、ペトロが割礼を受けていない者たちのところへ行ったことに憤り、ペトロが天から下ってきた布の幻について彼らに語るまで、彼に不平を言い続けた（使徒行伝11:5–18）。 そこで彼らは落ち着きを取り戻し、神を賛美してこう言った。

「どうやら、神は異邦人にも悔い改めの道を授けてくださったようだ。」

つまり、聖ステファノの存命中にユダヤ人に対して不平を述べたギリシャ人たちは、異邦人ではなく、同じくユダヤ人の出身であり、モーセから与えられた同じ律法を遵守していたが、さまざまな国々に散らされていた人々であった（聖使徒ヤコブもその手紙の中で次のように書いている： 「*散らされている十二部族よ、喜びなさい*」（ヤコブ1:1）と記しているように）、ギリシャ語を習得した（ただし信仰や風俗は受け継いでいなかった）者たちであり、それゆえエルサレムに住んでいた者たちは彼らを「ギリシャ人」と呼んでいたのである。 同様に、金口ヨハネスも次のように述べている。「『使徒行伝』に言及されている『ヘレニスト』とは、ユダヤ人でありながらギリシャ語を話していた者たちを指すものだと私は考える」。 こうしたギリシャ系キリスト教徒たちの間で、エルサレムのユダヤ人キリスト教徒たちに対する不満が生じた。その不満とは、日々の奉仕の割り当てにおいて、ギリシャ系未亡人たちが軽視されていたことに対するものであった。すなわち、彼女たちには下働きが割り当てられたり、食料や衣服の配分が少なく、質も劣るものが与えられたりしていたのである。

このような状況の中、聖なる十二使徒たちは、当時いたすべての信者たちを呼び集め、こう言った。

「私たちが神の御言葉をほったらかしにして、食事の配給に気を取られるのはよくありません。ですから、兄弟たちよ、あなたがたの中から、聖霊と知恵に満ちた七人を選び出してください。彼らをこの務めに任命し、私たちは祈りと御言葉の奉仕に専念しましょう」（使徒行伝6:2–4）。

この聖なる使徒たちの提案は、集まった信徒全員によって承認され、彼らは直ちに、信仰と聖霊に満ちたステパノ、フィリポ、プロホロス、ニカノール、ティモン、パルメノス、そしてアンティオキア出身のニコラオスを選出した。

これらの選ばれた者たちの名前そのものが、彼らがエルサレムに住んでいたユダヤ人ではなく、ギリシャ語圏に住んでいたユダヤ人の出身であることを示している。なぜなら、彼らの名前はユダヤ式ではなく、ギリシャ式だからである。 その中の一人、ステファノは、後に主によってパウロという名で信仰と使徒の務めへと召されたサウロの親族であった。一方、パウロはキリキアのタルソスという町[306] の出身であった。 したがって、この七人の男性は、貧しい未亡人たちに奉仕するためにギリシャ人から選ばれたのである。それは、これまで自分たちの未亡人が軽視されていることを嘆いていたギリシャ人たちが、ついに心を落ち着かせ、不平や不満を言うのをやめるためであった。

選ばれた者たちは皆、使徒たちの前に連れて行かれ、使徒たちは祈りを捧げ、彼らに手を置いて、執事（奉仕者）として任命した。

その筆頭はステパノであり、彼は信仰と力に満ちていたため、首席執事と呼ばれた。神の恵みにより、彼は信徒たちの間で多くのしるしと奇跡を行った。聖書に彼の奇跡について言及されていないとしても、それは全く驚くべきことではない。なぜなら、主キリストご自身の御業についても、次のように記されているからである。 「*もしそれらをすべて書き記そうとすれば、世界そのものでも、その書物を収めきれないだろう*」（ヨハネ21:25）。とはいえ、聖ステファノが、最も古参の使徒たちと同様に、病人に手を置いて癒やしたことは、十分に根拠を持って言えることである。 さらに、彼は言葉と行いの両面で力強い人物であり、信者たちを信仰に堅く立たせ、不信仰なユダヤ人たち

[306] キリキアは、小アジア南東部の沿岸地域である。タルススはキリキアの主要都市であり、現在もなお繁栄している。

を戒め、律法と預言者たちの言葉を用いて、彼らが嫉妬のゆえに、何世紀にもわたって待ち望まれていた神の御子、メシアを不当に殺害したことを証明した。　そしてある日、ユダヤ人、パリサイ人、サドカイ人、そしてギリシャ系ユダヤ人の間で、私たちの主イエス・キリストをめぐって論争が巻き起こったとき、ある者は「彼は預言者だ」と言い、またある者は「彼は詐欺師だ」と言い、　またある者は「彼は神の子である」と言ったとき、聖ステファノは高台に登り、すべての人々に主キリストについて福音を宣べ伝え、こう語った。

– 兄弟たちよ！なぜあなたがたの間で争いが激化し、エルサレム全体が派閥に分かれてしまうのか。あなたがたのうち、私たちの主イエス・キリストを信じた者は幸いである。なぜなら、主は、私たちを罪から解放するために、天から降りて来られ、世界の創造以前から選ばれた、至聖にして至清きおとめから生まれ、　主は私たちの弱さと病を自ら引き受け、背負い、盲人の目を開き、らい病人を清め、悪霊を追い出された。

しかし、彼らはその言葉を聞いて、ステパノと論争を始め、彼を反駁しようと努め、彼が宣べ伝えた主を冒涜した。これは『使徒行伝』に次のように記されている。

「いわゆるリベルティン派やキリネ派、アレクサンドリア派のシナゴーグに属する者たち、またキリキアやアジアからの者たちの一部が、ステパノと論争を始めた」（使徒行伝 6:9）。

というのも、ギリシャ人の間に混じって様々な遠方の国々に住んでいたユダヤ人たちは、エルサレムに独自のシナゴーグを持っていたからである。　このように、エルサレムには、主要なユダヤ人の大シナゴーグのほかに、さまざまな国から来た移民、すなわち各地に住むユダヤ人たちのシナゴーグが数多くあり、各国のユダヤ人たちは、エルサレムにある自分たちのシナゴーグにのみ、子供たちを送り込んで神の律法を学ばせていた。　また、彼ら自身も、毎年ソロモンの神殿に礼拝に訪れる際、それぞれのシナゴーグに滞在し、そこで集まり、そこで学んでいた。これは『使徒行伝』第2章からも明らかである。「エルサレムには、ユダヤ人、天の下のあらゆる民族から集まった敬虔な人々、パルティア人、　メディア人、エラム人」などがいた（使徒行伝2:5–9）。すなわち、パルティア、メディア、エラム[307]　、およびそこに挙げられたその他の国々に住んでいたユダヤ人たちが、今や祭りのためにエルサレムにやって来たのである。　これに応じて、エルサレムにはキリキア、アレクサンドリア、キレネのシナゴーグがあった[308] 。リベルティナのシナゴーグ[309] については、かつてローマのポンペイウスに捕虜にされた者たち[310]　の子孫である特別なユダヤ人の一族がそこにいたと伝えられている。彼らは後に自由の身となり、そのため「リベル」と呼ばれていた。これは「自由な者」を意味する。　同様に、聖金口ヨハネスも次のように述べている。「リベルティン人とは、ローマ人から自由を授けられた者たちのことである。そして、エルサレムには様々な国からの移住者が住んでいたため、彼らはそこに自分たちのシナゴーグを持ち、そこで律法の朗読に耳を傾け、祈りを捧げていた」。

リベルティン、キリネ、その他のシナゴーグでのこれらの集まりは、ステファノと論争したものの、彼が語っていた知恵と御霊に抗うことはできず、聖ステファノはその時、真理の言葉によって世界の三つの地域――ヨーロッパ、　アジア、アフリカという「世界の三つの地域」を、真理の言葉

307　これらはすべて、かつては強大な王国であったが、後にローマ帝国に服属した属州であり、カスピ海とペルシャ湾の間に位置していた。　パルティアは、カスピ海の南東に位置する広大な国である。メディアは、カスピ海の南、イランの西部にあたる。エラムは、メソポタミアの向こう側、ティファ川の対岸に位置し、同川に沿って南へペルシャ湾に至る地域であった。

308 キリネア――上リビアの地域で、アフリカの北岸、エジプトの西に位置していた。

309　リベルティニ（ラテン語で「自由な者」、あるいは「解放奴隷」の意）――ローマとの戦争、特に紀元前60年頃のポンペイウスの時代において、ローマ軍に敗れたユダヤ人たち。

310　ポンペイウス――著名なローマの軍司令官兼征服者。後にローマで共和政が崩壊すると、三頭政治の一人として、国家の3分の1を独裁的に統治した。

によって打ち負かした。すなわち、ヨーロッパを、ヨーロッパにあるローマから来たリベルティン人を通じて、アジアを、アジア出身のキリキア人を通じて、アフリカを、アフリカ出身のキリネ人およびアレクサンドリア人を通じて打ち負かしたのである。

彼らもまた、ステファノが説く、太陽よりもまばゆい真理に対して反論する力を持たなかったため、彼に対して怒りに燃え上がり、嫉妬に満ちて、　嘘をつくことに慣れた同調者たちの一部をそそのかし、ユダヤ人の最高シナゴーグに対して、ステファノがモーセと神を冒涜する言葉を語っているのを聞いたと告発させた。　こうして民衆や長老たち、律法学者たちを扇動すると、彼らは聖ステファノに襲いかかり、彼を捕らえてシナゴーグに連行し、大祭司たちや大勢の律法学者たちの前に引き出した。そこで、偽りの証人たちも連れてこられ、彼らは次のように主張した。

「この男は、この聖なる場所と律法に対して冒涜的な言葉を絶えず口にしており、私たちは、彼が『ナザレのイエスがこの場所を破壊し、モーセが私たちに定めた慣習を変えようとしている』と語っているのを聞いた。」

しかし、聖ステファノは、かつてのモーセのように、神の御使のように、神の恵みの光を放ちながら、この殺意に満ちた集会のただ中に動じることなく立っていた。彼の顔つきは一変し、集会にいた者たちは皆、彼を見つめると、その顔が天使の顔のように見えたのである。

大祭司は彼に尋ねた。

「証人たちがあなたについて語っていることは、真実か。」

聖人は口を開き、長い演説を述べた。彼は、メシアの到来に関する約束を最初に受けたアブラハムから語り始め、その後、モーセに至るまでの全歴史を語り、モーセについては深い畏敬と尊敬の念をもって回想し、　それによって、偽証者たちに対して、自分自身がモーセをも、モーセを通じて与えられた神の律法をも、決して冒涜する者ではないことを明確に示し、反論した。さらに、彼らの先祖こそが冒涜者であったことを、より明確に立証した。

「私たちの先祖たちは、彼に従うことを望まず、むしろ彼を拒み、心をもってエジプトへと向かったのです（使徒行伝7:39）」と彼は語った。

その後、彼が聖なる場所を冒涜したという別の誹謗に反論して、こう言った。

「ソロモンは主のために神殿を建てた（使徒行伝7:47）。」

この言葉によって、彼はあたかもこう言いたかったかのようだった。「私は、神の御心によりソロモン王によって賢明に築かれ、雲として現れた主の栄光によって聖別された聖なる場所を尊び、私は、神の栄光のために人々が築いた神殿を尊ぶが、それと同時に、神は物質的ではなく、人の手によらない神殿、すなわち清らかな人間の魂の中にこそ、より深くお住まいを好まれることを告白するのだ」

「至高なる方は、人の手によって造られた神殿にはお住まいでない」と彼は言った。「神が預言者を通してこう言われているように、*『天はわたしの御座であり、地はわたしの足台である。あなたがたは、わたしのためにどこに家を建てようというのか。主は言われる。わたしの安息の場所はどこにあるのか。これらすべては、わたしの手によって造られたのである』*」（イザヤ書 66:1–2）。

ついに、かつてのエリヤのように神への熱意に満たされた聖ステファノは、集まった人々全員に対して非難の演説を繰り広げた。

「心も耳も割礼を受けていない、不義な人々よ。あなたがたは、先祖たちと同様に、常に聖霊に逆らっている。先祖たちが迫害しなかった預言者が、いったい誰がいるというのか。彼らは、義人（約束されたメシア）の到来を予告した者たちを殺した。そして今、あなたがたは、その義人を裏切り、殺害する者となっているのだ」（使徒行伝 7:51）。

聖人のこの言葉は、大祭司や律法学者たちに言い表せないほどの激怒を呼び起こし、彼らはこれを聞いて皆、心の中で激しく憤り、ステパノに向かって歯ぎしりした。

しかし、ステパノは彼らの怒りに耳を貸さなかった。彼は聖霊に満たされており、その聖霊こそが彼を勇敢にし、神の霊感に満ちた者とならせていたからである。　天を見上げると、彼は神の栄光を見た。それまで彼は、ただそれを目にするという願いに満たされ、完全な信仰をもってそれを達成することを固く望んでいたが、今や、まだ息を引き取る前に、それを仰ぎ見ることとなり、死に近づく者として、それを至福の始まりとして迎えた。　彼はまた、天に立たれ、あたかも彼が肉体から解き放たれ、より早く御許に辿り着くのを待っておられるかのように見える、主であり救い主であるキリスト・イエス御自身をも見出した。そして、主ご自身がいらっしゃるその場所に、主のしもべもまたいるのである[311]。

そして、彼が見たことをすべての人々に告げ、大声で叫んだ。

「見よ、私は天が開き、神の右に立っておられる人の子を見る」（使徒行伝7:56）。

彼はこの幻を隠さなかった。これは、聖なる人々が通常行っていたこととは異なっていた。彼らは、もちろん謙遜のゆえに、神から与えられた啓示を明かさなかったが、彼は、信者たちが信仰を確固たるものにし、不信仰な者たちが恥じ入るようにと、この栄光に満ちた啓示をすべての人に告げたのである。　さらに彼は、自分の後に続く殉教者たちに対しても、キリストのために苦しむ者にとって、天に昇ることを妨げるものやいかなる試練もなく、まっすぐで自由な道が開かれ、天の門は開かれ、報いが用意されていることを確信させるために、このことを行ったのである。　殉教の模範者ご自身が、立って待っておられる。主の栄光そのものが、天の門で殉教者を出迎えるのである。それゆえ、聖なる第一殉教者は、まるで自分の後に続く者たちをも同じ殉教の冠へと招くかのように、自分が見ているものを皆の耳に語り聞かせたのである。

しかし、預言者たちを殺すことに慣れ、律法と預言者たちを成就された主ご自身に反逆した嫉妬深いユダヤ人たちは、自ら偽り者であるため、真理の言葉を耐えられず、聖ステファノの啓示に耳を傾けることを拒み、　代わりに大声で叫び、耳を塞ぎ、一斉に彼に襲いかかって殺意に満ちた手をかけ、かつて城壁の外で苦難を受けることをお選びになった主イエスと同様に、彼を町から連れ出し、主の善良で忠実なしもべを石で打ち殺した。　そして、聖人に石を投げつけやすくするため、偽証者たちと殺人者たちは上着を脱ぎ、サウロという名の若者の足元に積み重ねた。彼は、殺されようとしている者の同族であり親族ではあったが、旧約聖書に対する盲目的な嫉妬から、他の誰よりも彼に対して激しい憤りを抱いていたのである。　使徒行伝によれば、サウロはその殺害を是認していた（使徒行伝8:1）。　また、聖ヨハネス・クロイソストモスはこのことについて次のように述べている。「サウロは、ステファノを打ちのめすために自分の手がもっと多くあればと嘆き、ただ、自分がその衣服を見張っていた多くの偽証者たちの手によって殉教者が打ちのめされていることだけに満足していた」。

聖ステファノがイッサファトの谷（エルサレムとエレオンの間、岸辺に多くの石が転がるケドルの小川のほとりにある）で殺害されていたまさにその時、遠く離れた　ある高台で、山の上からその様子を見下ろすように、聖母マリアが聖ヨハネ・テオロゴスと共に立ち、ステファノのために主とその御子に熱心に祈りを捧げていた。ステファノが忍耐を強められ、その魂が御手の中に受け入れられるよう願って。　ああ、いかに甘美なことか。たとえ残酷な石打ちの打撃によるものであったとしても、天の高みからは最も甘美なるイエス様が、地上の山からは最も甘美なる御母様が、最愛の弟子と共に彼の偉業を見守っておられたのだから！　また、聖ステファノは、次々と降り注ぐ石の雨に打たれ、全身を血で染め、力が衰え、肉体の束縛から解き放たれつつも、心の中で自分自身のことではなく、自分を殺そうとする者たちを案じ、自分自身よりも彼らを深く思いやり、死の直前に祈りました。なぜなら、彼は直立したまま、自分自身についてこう語ったからです。

[311] 救い主の御言葉による。ヨハネによる福音書12章26節を参照。

「主イエスよ、私の霊をお受けください」（使徒行伝 7:59）。その後、ひざまずいて、自分を殺そうとする者たちのために祈り、こう叫んだ。

「主よ、この罪を彼らに帰さないでください」（使徒行伝7:60）。

これらの言葉を残して、聖人はその清らかな魂をキリストに委ねた。こうして、この善良な修道士は息を引き取り、あたかも深紅の花や血に染まった石のように、最初の殉教者は栄光に包まれ、彼が見た開かれた天へと、栄光の主であり王である御方の元へ入り、無限の御国において御方と共に統治することとなった。

彼は五旬節の直後に聖なる使徒たちによって大助祭に叙階され、主の昇天のあったその年の12月27日に殉教した。生年は30歳を少し超えたばかりであった。その容姿は美しかったが、その魂はそれ以上に美しかった。

その聖なる遺体は、獣や鳥に食われるままに放置され、昼夜を問わず埋葬されないまま横たわっていた。そして、その翌夜になってようやく、エルサレムで著名なユダヤ教の律法学者ガマリエル[312]（彼自身も後に息子アヴィヴと共にキリストを信じるようになった）が、誠実で忠実な人々を遣わし、 密かに聖人の遺体を運び出し、エルサレムから20スタディオン[313] 離れた、カファルガマラと呼ばれる自身の領地へ運び、そこで尊厳をもって埋葬し、その上に大いなる嘆きを捧げた。 「石で打ち殺され、死体となって横たわっているあの柔和な子羊を見て、誰が泣かずにいられようか！」と、金口は語っている。

それから何年も後、敬虔なギリシャの女王エウドキア、すなわちテオドシウス2世の妃[314] は、エルサレムを訪れ、聖なる第一殉教者ステファノスが殺害され、大地が 彼の尊い血で染まったその場所に、彼にちなんで[315] 美しい教会を建立し、キリスト・神に栄光を捧げた。彼に永遠の栄光あれ。 アーメン。

トロパリオ、第4声：

キリストの第一殉教者であり使徒よ、あなたは善き業をもって奮闘し、迫害者たちの不義を糾弾した。不義な者たちの手によって石で打ち殺されたが、天の御手より冠を受け、神に向かって叫び求めた。「主よ、彼らにこの罪を帰さないでください。」

コンダク、第3調：

主は昨日、肉体を帯びて我らのところに来られ、今日、しもべは肉体から去りゆく。昨日、肉体を帯びて王として生まれ、今日、しもべは石で打ち殺される。それゆえ、最初の殉教者であり神聖なるステファノは、その生涯を閉じたのである。

---

312 ガマリエルは、エルサレムのサンヘドリンで高い地位を占め、民衆から広く尊敬されていた著名なユダヤ人の律法学者であり、「律法の栄光」と呼ばれていた。伝承によれば、彼は息子のアヴィブと共に、使徒ペテロとヨハネによって洗礼を受けたという。

313 約3.5ヴェルスト。

314 テオドシウス2世（若きテオドシウス）は、408年から450年まで在位した。

315 教会は460年に奉献された。その規模は非常に大きく、最大1万人を収容できた。

聖なる尊者殉教者にして信仰告白者テオドロスと、その兄弟である尊者テオファノスの生涯と受難[316]に記されている

記念日12月27日

キリストのために苦難を受けた殉教者たちの中には、キリスト教の信仰のために奮闘し、自らの偶像崇拝という迷いを擁護する異教徒たちに立ち向かった者たちがいる一方で、正しい信仰のために、キリスト教徒でありながらも正統な信仰を持たない者たちに対して奮闘し、前者と同じくらい大きな苦労を背負った者たちもおり、それゆえに彼らと同等の栄冠を授かった。　後者の列には、素晴らしく偉大なテオドロスが名を連ねている。

テオドロスは、神がアブラハムに嗣業として与え、まさに「約束の地」と称されるべきパレスチナで育った。なぜなら、そこから預言者や族長の全列が生まれただけでなく、キリストご自身も肉によればそこから生まれ、また神に喜ばれる使徒たちの全団もそこから出たからである。　その同じ地が、この信仰の灯火であり、敬虔の柱である聖テオドールを世に送り出したのである。というのも、彼の高貴な両親[317]　は、キリスト教徒と呼ばれることこそが彼らのすべての財産であり富であったが、聖都エルサレムに住んでいたからである。

聖テオドロスは若くしてすでに偉大な知恵を身につけ、少年時代にはもはや少年らしい知性ではなく、子供らしい遊びに興じたり、見世物に夢中になったりする代わりに、常に神の聖堂に身を置き、善く誠実な行いを眺め、そこから教訓を得ることほど彼にとって楽しいことはなかった。　同時に、彼は両親に対しても、一切の異議を唱えることなく従順であった。一言で言えば、この尊者は、実り豊かな果樹園のように、人生の初めから、将来どのような人物になるかを示していたのである。

彼が成長すると、両親は彼を聖サヴァの修道院（[318]　）に、ある学識豊かで徳の高い長老のもとへ預け、聖書の神聖な書物を学び、それと同時に神への畏敬の念も身につけるようにした。　テオドールには、テオファンという名の弟がいた。彼はテオドールより年下だったが、徳においては彼に劣らなかった。彼は兄と共に、同じ長老のもとで学びを受けていた。鋭い知性を備えていたテオドールは、短期間のうちに教えられた書物による知恵をすべて習得した。　それだけでは満足せず、より高い知識の習得を志して、彼は修道院を離れ、知恵に満ちたある高齢の男性を見つけ、彼に弟子として受け入れてくれるよう懇願した。　この人物から、聖テオドールは外的な知恵を完全に習得しただけでなく[319]　、　霊的な知恵においても確固たる修養を身につけた。彼は長老から、この世とすべての世俗的なものを軽んじることを学び、世俗と霊的な両方の学問を完璧に習得した後、再び聖サヴァの修道院に戻った。

修道士となり、神に喜ばれる行いを実践する中で、テオドールはその生き様によって多くの人々を凌駕した。　彼以上に柔和な者は、そこに誰がいようか。彼より悪意のない者は？　彼より節制の厳しい者は？　沈黙を守るべき時、何かを語るべき時、あるいは何らかの務めを果たすべき時を、彼ほど見極めていた者はいるだろうか。そうすることで、自らの沈黙を破ることなく、適切な時に有益な言葉を述べる機会を逃さず、修道院の務めを怠ることなく。　テオドールほど、肉体を死なせ、舌と目を抑え、心の思いの攻撃を退けた者が、他に誰がいようか？　こうした彼の美徳により、神の御心と修道院の兄弟全員の願いに従い、エルサレムの聖師は彼を司祭の位に叙階した。こうして、聖サヴァの修道院は、美徳という蜜を熱心に集める勤勉なミツバチとして、彼をその中に迎えたのである。　フェオドールについてさらに述べるならば、彼は預言者エレミヤに喩えられる。エレミヤにはこ

---

316 聖テオファンの肖像については、『聖人伝』（オクチャブリ刊）245ページを参照のこと。

317 この聖人の父は、12月5日に記念される長老イオナであった。長老イオナの記念日は9月22日である。

318 言うまでもなく、これは後に聖テオドロスの父が逝去した、あの「聖サヴァ修道院」のことである。

319 「外的な知恵」とは、世俗的な知恵のことであり、これは「霊的な知恵」あるいは「内的な知恵」と呼ばれる宗教的知識と区別してそう呼ばれていた。

う告げられている。*「わたしがあなたを母の胎内で形造る前に、わたしはあなたを知っていた。あなたが母の胎から出る前に、わたしはあなたを聖別した」*（エレミヤ書1:5）。 というのも、彼がまだ少年としてラヴラ[320] に住み、前述の長老から読み書きを学んでいた頃、この神に霊感を受けた人物は、この素晴らしい若者がキリストのために殉教という最期を遂げ、この世での修道生活を終えるだろうと預言したからである。これは、後の物語が示すように、後に現実のものとなった。

当時、イコノクラシズムという異端が再び頭をもたげた。この異端は、レウ・イサウリアヌス[321]、コンスタンティノス・コプロニモス[322] およびその息子レウ[323] の時代に教会から根絶され、敬虔な女王イリーナとその息子コンスタンティノス[324] によって招集された第7回全地公会議[325] において破門されていたものである。 この異端を再び復活させたのは、不義の王レフ・アルメニア人[326] であり、彼の初期の生涯についてここで少し触れておくのが適切だろう。ニキフォロス[327] の治世下、彼は当初アルメニア近衛隊の長であったが、その後、高位の重臣となり、東部軍の指揮官となった。 その後、彼は狡猾な手段を用いて王位に就き、善良で敬虔なミハイル王（通称ランガヴァ[328] ）を廃位させ、彼を修道士にさせました。その際、彼はミハイルの息子たちであるイグナティオスとテオフィラクトを去勢し、ミハイルを妻や子供たちと共に流刑の地へ追放しました。

至聖なるニキフォロス総主教が、大聖堂でアルメニア人のレウスの戴冠式を執り行い、その頭に王冠を戴かせたとき、聖職者の手には、まるで茨のような痛みを感じた。あたかも手にした王冠が茨に変わり、痛みを伴う刺し傷を与えているかのようであった。 そこで至聖なる総主教は、これが、この王が後にキリストの教会にもたらすであろう大きな苦難と災厄の明らかなしるしであると悟った。

当初、邪悪な王は、自らの内に潜む異端を隠し、王位を固めるまでは、あたかも敬虔であるかのように振る舞っていた。しかし、ブルガリアとの大戦争で輝かしい勝利を収めた後、彼はついに、内に秘めていた悪意の毒を吐き出し、公然と偶像破壊者としての本性を露わにした。 その経緯はこうである。戦場から戻った王は、かつて自分が王になると予言し、その予言が的中したある隠遁者を思い出した。その予言への感謝の意を表そうと、王は忠実な家臣一人を伴い、金や銀の器、様々な料理、インド産の香料といった様々な贈り物を彼に送った[329]。 しかし、 使者は、その隠者にはもう会うことができなかった。彼はすでに亡くなっており、その代わりに同じ隠居所に彼の弟子サヴァティ

---

320 ラヴラ、すなわち聖サヴァ修道院。

321 皇帝レウ・イサウリア人（717年～741年）は、教会から聖像を追い出し、それらを破壊するよう命じた最初の聖像破壊者であった。

322 コンスタンティノス・コプロニモス皇帝（741年から775年）は、偶像破壊の異端を強く支持した。彼はコンスタンティノープルで、自ら「全地公会議」と名付けた公会議を招集し、そこで聖像崇拝は否定された。

323 皇帝レオン（通称ホザール）は、775年から780年まで在位した。彼は偶像破壊運動を支持したが、その姿勢は弱かった。

324 聖イリナ皇后（レウ・ホザールの妻）は、夫の死後、息子のコンスタンティノス・ポルフィロゲネトス皇帝（在位：780年～792年）が幼少であったため、当初は彼の名において、その後（797年～802年）は自身の名において帝国を統治した。

325 第7回全地公会議は887年にニカイアで招集された。同公会議は聖像崇拝を承認し、コンスタンティノス・コプロニモス帝の時代に開かれた公会議を異端であると認定した。

326 レウ・アルメニア人皇帝は813年から820年まで在位した。

327 ニキフォロス1世皇帝は802年から811年まで在位した。

328 ミカエル1世・ランガヴ皇帝は、811年から813年まで在位した。

329 インドの香料とは、インドから持ち込まれた香料のことである。インドは、東アジアの大きな南半島に位置する国であり、古くから芳香植物で知られていた。

イが住んでいたからである。使者は、師に送られた王の贈り物を受け取り、王のために祈ってほしいと彼を説得し始めた。　しかし、サヴァティイは贈り物を拒絶し、それとともにそれを届けた使者までも拒絶し、皇帝がイコンを崇拝し、かつての皇后イリーナと元総主教タラシイによって定められた教義に従っていることを理由に、皇帝を王位にふさわしくない者だと断じた。　その際、この忌まわしい男はイリーナとタラシウスを中傷し、前者を「雌猫」と呼び、後者を「民衆を扇動する者」と呼んだ。また、ツァーリ・レフに対しては、近い将来、イコンを偶像として拒絶しなければ、すぐに王位と命を失うことになると脅した。

使者は皇帝のもとに戻ると、修道士から聞いたことをすべて報告し、さらに同じ内容に関する書面によるメッセージも伝えた。　困惑した王は、最も信頼する顧問の一人であるテオドト――メリシオスの貴族ミハイルの息子[330]　、通称カシテル――を呼び寄せ、二人きりでどうすべきか相談した。　テオドトはとっくに偶像破壊の異端に染まっており、自らの不敬を公然と告白する好機をただ待ち構えていた。彼は王に次のような助言を与えた。

「ダギスタンの修道院には」と彼は言った、「ある聖なる修道士が住んでおり、彼は奇跡を起こす者であり、先見の明を持つ者です。彼と話し合い、彼の助言通りに振る舞うべきです。」

王がそれに同意すると、テオドトスは密かにダギスタンの修道院へと急ぎ、彼が目をつけていた、実は異端者であった修道士のもとへ向かった。彼の元へ着くと、彼はこう言った。

– 今夜、王が粗末な服装であなたの元を訪れ、信仰やその他の事柄について語り合い、あなたから賢明な助言を得ようとするだろう。あなたは、かつての王レウ・イサウリアヌスが拒絶した教義を受け入れ、神の聖堂から偶像（あの忌まわしい者は聖なるイコンをそう呼んでいた）を追い出すよう、彼を説得せよ。　その後、もし彼がこれを行わなければ、まもなく命とともに王国も失うことになる、と彼を脅かすように努めよ。もし彼がこれを履行すると約束するなら、預言者として彼に長寿と安泰な治世を予言せよ。

このようにして、異端者テオドトスと、同じく異端者である修道士は、彼らの企てに心を傾けやすい王を、自分たちの不敬虔な行いに引き込むよう共謀した。　テオドトスの狡猾さについて何も知らなかった王は、夜中に起き上がり、（正体を悟られないよう）粗末な服を着て、この偽りの奇跡行者であり、偽りの預言者のもとへ向かった。　彼の案内役は、やはりあのテオドトであった。彼らが前述の修道士のもとへ到着し、会話が始まると、修道士は王のそばに立ち、あたかも神の啓示によって王の身分を知ったかのように、驚きの表情を浮かべてこう言った。

「王よ、粗末な服の下に王としての威厳を隠して、私たちを欺いたのは良くない行いでした。しかし、あなたがそうされたとはいえ、神の御霊の恵みにより、私たちは長くその事実を知らされないままではいられず、あなたが単なる一般人ではなく王であることを明らかにされました。」

王はこの言葉に戦慄し、修道士の聖性と洞察力を確信すると、その預言の賜物と奇跡を行う能力を信じた。　彼は、その修道士が命じることに容易に同意し、その口から語られる預言のすべてを微塵も疑うことなく、魂にとって破滅的で蛇の毒に満ちた異端者の助言を、健全で魂に有益なものとして受け入れた。　彼は直ちに、自分と同じような異端者テオドトスに教え込まれたその修道士の助言をすべて実行すると約束し、聖なるイコンに対する迫害を繰り広げるという邪悪な意図に満ちてその場を去った。そして、激しい嵐のように、この不敬虔な王はキリストの教会の平穏を乱し始めた。

[330] メリッサ――フリギア地方の都市で、小アジア半島の西側半分の中央部一帯を覆っていた。

その不敬虔な企てに加担しなかった至聖なるニキフォロス総主教を、彼はプロコニススへ流刑に処した[331]; 同様に、彼は「大村」[332]として知られる修道院の院長テオファンや、テオドロス・ストゥディトス[333] 、そして彼に強く抵抗した他の多くの偉大で神に霊感を受けた教父たちをも追放し、遠方の地に幽閉した。 そして、キリストの復活のまさにその日、 、彼は前述の異端者テオドトス・メリシオス（通称カシテロス）を総主教の座に就けた。彼はまさに、*「聖なる場所に立つ荒廃の憎むべきもの」*（マタイ24:15、ダニエル9:27）であった。

そこで神は、王の不義に対する義なる怒りをもって、遅滞なく御自身の裁きをもって彼を罰し、異民族による突然の侵攻を許された。 彼らは東方の砂漠に住むアラビア人であり、全軍を挙げてギリシャの領土に侵入し、土地を荒廃させ、パレスチナの修道院を襲撃した。その中には、聖サヴァの修道院も含まれており、そこでは至福のテオドロスが弟のテオファンと共に修道生活を送っていた。 聖都エルサレムの至聖なる総主教は、これが罪に対する懲罰であり、聖なるイコンへの冒涜と拒絶に対する神の怒りの結果であると悟った。 正教への熱意に駆られ、彼はこの炎を鎮め、先祖代々の伝承を破り、革新を導入する者たちによって行われている悪を糾弾する方法を模索し始めた。 幾度かの探求の末、彼はこの任務にふさわしい人物として、敬虔な生活と知恵で知られ、神聖な熱意に満ち、揺るぎない勇気をもって正教の守護に立っていた聖テオドロスを見出した。 祈りで彼を守り、キリストへの希望を確固たるものにした後、総主教は彼を都へと送り出し、不法を糾弾させた。

至福のテオドールは、従順な息子として、その命令を拒むことはなかった。正しい信仰のために、数多くの労苦を厭わず、苦難を受け入れ、さらには聖なるイコンの名誉のために自らの命を捧げる覚悟さえあった彼は、喜んでその命令に従った。 弟のテオファンを伴い、テオドールは旅立ち、まもなく王都に到達した。そこで彼はまず、牧者ではない傭兵、すなわちコンスタンティノープルの偽総主教テオドトス・メリシオスを、恐れることなく異端であると糾弾した。 聖人は、彼が統治下にある者たちを堕落させ、キリストの羊の群れを、異端の教えという有害な食物で養い、正統信仰の教会を荒廃させ、邪教の礼拝所を築いていることを公然と非難した。 その後、皇帝自身の前に進み出て、鋭い剣のような神の言葉を口にしながら、テオドールは皇帝を厳しく戒め、彼が自らの魂を滅ぼしているだけでなく、欺瞞によって人々を堕落させ、神の民をも破滅へと引きずり込んでいることを明確に証明した。 同時に、彼は王に対し、不敬虔な思索を捨てて、再び敬虔な生活に戻るよう懇願した。

「そうすれば――」と彼は言った。「あなたは主をなだめ、あなたの上に重くのしかかっている神の怒りの杯を、すべて飲み干すことなく済むかもしれない。」

その男の率直な言葉、説得力、穏やかな人柄、そして恐れを知らぬ大胆さに驚いた王は、その叱責を穏やかに受け入れた。王は彼を再び呼び寄せ、親しげに会話を始め、彼が誰なのか、どこから来たのか、そしてその大胆な言葉によって何を成し遂げようとしているのかと尋ねた。 聖人は王に自分の故郷とパレスチナからの来訪を告げると、訪れた理由についても語った。すなわち、天の王が御自身のイコンにおいて冒涜され、不義に迫害される御使いたちを通じて侮辱されているのを見て、神の栄光を公然と擁護するために、あえて王のもとへ来たのだと。

「地上の王を天の王よりも恐れることはふさわしくない」と彼は語った。「王たちが神を怒らせるならば、彼らを糾弾するのが我々の義務である。」

---

331 プロコニス――マルマラ海に浮かぶ島で、現在はマリアラと呼ばれる。イコノクラズムの動乱の際、多くの殉教者たちの流刑地となった。

332 言うまでもなく、聖テオファンはコンスタンティノープルの貴族の息子であり、彼が要職に就いていたレフ・ホザール皇帝の死後、修道生活に入った。彼の記念日は3月12日、リヴダカ川のほとりにあるシグリアンの森林に覆われた山々で祝われる。

333 テオドロス・ストゥディテスは、有名なストゥディオス修道院の院長である。彼の記念日は11月11日に祝われる。

その後、聖人は聖なる信仰の教義を説き、神のイコンにふさわしい崇敬を捧げるべきであることを教えた。聖書から多くの箇所を引用し、聖なるイコンを崇敬することは、キリストへの愛と憧れの表れであると同時に、私たちの信仰の証しであり、キリストの受肉を告白する証しでもあると付け加えた。　王は長い間彼と論争し、自身の迷信から多くの反論を繰り広げたが、無駄であった。なぜなら、その神聖な人物の言葉はダイヤモンドのように堅固であり、その信仰は堅固な壁のように揺るぎなかったからである。長い論争の末、テオドロスは王を論争で打ち負かし、王の見解の不当性を証明した。　では、その悪辣な王は一体何をしたのか。彼は諂いによって揺るぎない者を動揺させようと企み、懇願や贈り物、そして栄誉の約束をもって、テオドールを自分と同じ考えに導こうとしたが、成功しなかった。王からの度重なる説得の後、聖人は勇敢かつ恐れを知らずに彼にこう言った。

「王よ、あなたは、大司教があなたの頭に冠を戴かせた際、神に立てた誓いを忘れてしまった。あなたの魂を憐れみ、教会にその装飾を返せ。正義と強き裁き主である神に戦いを挑んではならない！」

すると王は、偽りの柔和さを捨て、生まれつきのものであり、その名にふさわしい獣のような猛烈な怒りを露わにした。　彼は、キリストの殉教者テオドロスとその兄弟テオファンを長く激しく鞭打つよう命じ、その後、　、彼らを海の河口へと流刑に処し、誰であれ彼らに食物、飲み物、衣服を与えることを禁じた。それは、不敬虔な王が言ったように、「悪しき者たちは悪しき死を遂げる」ためであった。

しかし、聖人たちがキリストのイコンのために苦しみ、寒さ、飢え、渇きに苛まれているとき、「復讐の神、主」は、その不義な者に御自身の正義の裁きを下すことを遅らせなかった。間もなく、獣と同じ名を持ち、獣と同じ残虐さを備えた彼は、獣と同様に刺し殺され、獣と同じ死を遂げた。この死は、その不義な息子が死ぬ少し前に、王の母が受けた特別な啓示によって予兆されていた。彼女はすでに長年未亡人であり、節制ある生活を送っていた。　ある日、彼女は夢の中で次のような幻視を見た。まるでヴラヘルナの聖母マリア教会（[334]　）へ向かっているかのようであり、扉をくぐると、白い衣をまとった多くの男たちに囲まれた、あるまばゆいばかりの乙女に出くわした。その間、教会は血の川に覆われていた。　その乙女は、白い衣をまとった男性の一人に、粘土の器に血を汲み入れて満たし、それを不敬虔な王の母に渡し、飲ませるよう命じました。これを見た王の母は、恐怖に駆られてこう言いました。

「私は未亡人であるため、もう何年も肉を食べておらず、血のついたものは口にしません。どうしてこの血を飲めるというのですか？」

すると、至聖なる聖母は怒りを込めて彼女に問いかけた。

「なぜあなたの息子は、血にまみれることをやめず、それによって私と私の神聖な御子を怒らせ続けるのですか？」

そこで夢は途切れ、王の母は恐怖と戦慄のうちにたちまち目を覚ました。それ以来、彼女は絶えず涙ながらに、王である息子に対し、聖なるイコンを破壊したり、そのせいでキリスト教徒の血を流したりするのをやめるよう諭し続けた。　しかし、異端の従順な僕であり、狡猾な欺瞞者である「第二のユダ」は、改心することはなかった。

その直後、今度は王自身に、彼の苦痛に満ちた最期の6日前に、二度目の幻視が訪れた。幻視の中で、イリーナとコンスタンティヌスの治世に総主教を務め、すでに久しくこの世を去っていた聖タラシウスが現れた。　タラシウスは幻視の中で激しい怒りを露わにし、ミハイルという名の男に、

---

[334]　ヴラヘルナは、コンスタンティノープルの西側に位置する地区である。ビザンツ帝国の全盛期には、その聖地によって東方全土にその名を知られていた。 特にヴラヘルナは、皇帝レオ1世「大帝」（在位457年～474年）によって建設された聖母教会で知られていた。レオ1世の治世下、474年にパレスチナから移送された聖母マリアの尊い衣が、この教会に安置された。　ここには、聖母の衣とともに、金細工の聖櫃の中に、聖母の頭巾（オモフォール）と腰帯の一部も保管されていた。

剣で王を斬るよう命じた。その命令に従い、ミハイルは王に剣で強烈な一撃を加え、彼を貫いた。王はこれらすべてを自らの目で目撃し、これが何を意味するのか理解できずに、大きな戦慄を覚えて目を覚ました。

聖タラシイ修道院に、自分を殺そうと企むミハイルという人物が住んでいるのだと考え、彼は直ちに修道士たちを呼び寄せ、ミハイルについて尋問した上で、彼らの間にいるミハイルを差し出すまで、修道士たちを鎖で縛り留めておくよう命じた。

この頃、コンスタンティノープルには、ミハイルという名の、通称トラヴェイまたはヴァルボス[335] 、アモレア[336] 出身の某軍司令官が住んでいた。かつて彼は、レウスが王位につくのを大いに助け、彼に忠実であり、愛されていたため、レウスは彼の息子の名付け親さえ務めていた。 しかし、その後、何らかの理由で王に怒りを抱いたミハイルは、友情を敵意へと変え、友人たちと宴を催す際、しばしば酔っ払った状態で、不注意にも王を中傷するようになった。 ミハイルがツァーリに敵意を抱いているのを見て、ツァーリの隠れた敵の一部が彼に加わり、その数は少なくなかった。彼らはツァーリを殺害し、ミハイルを王位に就かせることを謀った。口が軽いミハイルはこれを隠さず、どこかで「自分がツァーリになる」と自慢してしまった。 この言葉が王の耳に入り、王は直ちにミハイルを捕らえ、生きたまま火あぶりにする判決を下した。縛られたミハイルはすでに風呂の炉へと連行され、その傍らには、自らの目で彼の最期を見届けたいと願う王が立っていた。それは12月24日、キリスト降誕の前夜のことだった。 王の妻テオドシアはこれを知ると、急いで自室から飛び出し、怒りを込めて王を非難し、神聖な秘跡（ ）を受けるべき聖なる日さえも尊ばないとして、王を「神に背く者」とまで呼んだ。 王は彼女の言葉に従い、ミハイルを戻すよう命じ、火刑を別の時期まで延期した。そして、王妃の方を向き、こう言った。

「妻よ、私はお前の命じた通りにした。今日はお前の怒りに満ちた諭しに従ったが、これから何が起こるかは、お前自身も、そして我らの子供たちも目にするだろう。」

この言葉によって、不義の王は知らず知らずのうちに自分自身についての予言を口にしてしまった。なぜなら、彼の死は間近に迫っていたからである。

王は、手錠をかけられたミハイルの監視を、パピイという名の宮殿の衛兵の一人に任せた。そして、王自身は囚人の手錠の鍵を手に取り、その夜一晩中、眠れぬまま悲しみに沈んでいた――何をすべきか分からず、その心は苦悩に苛まれていたのだ。 王は起き上がると、囚人の様子を見に行った――彼は何をしているのか。死刑囚にありがちなように、泣いたり嘆いたりしているのだろうか？パピウスの部屋に通じる隠し扉をそっと開けると、王は自分にとって全く予想外の一幕を目にした。すなわち、嘆き悲しんでいる姿を見られると期待していたミカエルが、パピウスの高く装飾された寝台の上で深い眠りについており、一方のパピウス自身は、むき出しの地面の上でうたた寝をしていたのである。 王は、死刑囚がこれほど敬意を払い、安らかにしているのを見て恐怖に駆られ、ミハイルだけでなくパピウスまでも滅ぼすと脅して、怒りながらその場を去った。これを、同じ部屋にいた一人の少年が耳にしていた。 王の来訪に気づいた少年は、ミハイルとパピウスを起こし、王が訪れて二人を殺すと脅したことを伝えた。皆が恐怖に震えた。そこでミハイルは、パピウスの反対もなく、あるテオクティストという者を同志たちの元へ遣わし、次のように伝えるよう命じた。

「もしあなたがたが今すぐ、遅滞なく、我々が協議したことを実行に移さなければ、明日、私は王にあなたがたのことを告げ、一人ひとりを個別に告発するつもりだ。そうすれば、私だけが悲惨な死を遂げるのではなく、あなたがたも皆、私と共に死ぬことになるだろう。」

陰謀の共犯者たちは、そのような脅しに怯え、集まって、自分たちとミハイルを差し迫った災いと死からどう救うかを考え始めた。時は真夜中で、教会ではキリストの降誕を祝う恒例の徹夜祷が

---

335 名称：「トラウリウス」はラテン語、「ヴァルボス（バルバ）」はギリシャ語である。ロシア語では、どちらも「口が不自由な者」を意味する。このミハイルは後に皇帝となり、820年から829年まで在位した。

336 アモレア――小アジアのフリギア州にある都市。

始まろうとしていた。　相談した末、彼らは衣服の下に武器を隠し、王宮へと続く、いわゆる「象の木」へと向かった。そこで、その扉を通って宮廷教会に入っていく王室の聖歌隊員たちに紛れ込み、彼らと共に、あたかも徹夜祷に参加するかのように教会に入った。　王もまた教会にやって来て、いつものように右側の聖歌席に立ち、その非常に力強い声で自ら聖歌を歌い始めた。

すでにカノンが歌われ、第七の歌が近づいていた頃、陰謀者たちは互いに小声で話し始めた。

「ここで何もしないで立っているのか？ もうすぐ歌が終わる。一体何を待っているんだ？」

まさにその時、皇帝はキリスト降誕の祝日に捧げられる第二カノンの第七イルモスを力強く歌い始めた。すると、陰謀者の一人が衣服の下から剣を取り出し、皇帝に襲いかかったが、狙いを外してしまった。　王の代わりに、右側聖歌隊の指揮者を斬ってしまったのである。それは、その指揮者が王と背丈が似ていたからか、あるいは寒さのため、王と同様に頭部を覆っていたからか。指揮者が頭部を露わにしたとき、その誤りが明らかになった。　一方、皇帝自身は彼らの企みを見抜くと、祭壇へと駆け込み、十字架を掴んで扉のところで身を守り、陰謀者たちの攻撃をかわした。しかし、そこへ背丈の非常に高い恐ろしい戦士が近づいてきた。その戦士を見た皇帝は、神の祭壇を盾に、自分に危害を加えないよう懇願し始めた。

「今は呪文を唱える時ではなく、殺す時だ」と戦士は答え、レフ・アルメニアンに武器で強烈な一撃を加え、彼を容赦なく打ちのめし、十字架の先端ごと片腕を切り落とした。すると、残りの戦士たちも王の全身を斬りつけ始めた。　床に倒れたレフは、自らの血の池の中に横たわり、まだ息をしていた。彼がまだ息をしているのを見て、兵士の一人が彼の首を切り落とした。

こうして、獣のように殺害されたこの不法な王は、夜明けの頃、凄惨な苦しみの中で息を引き取った。彼が殺されたのは、まさに初めて救い主の聖像を地面に投げ捨て、唾を吐きかけ、足で踏みつけようとしたその場所であった。　レフ・アルメニア人は7年5ヶ月間統治したが、その残虐さにおいては、古代の偉大な教会迫害者たちに匹敵するものであった。殺害後、彼の遺体は町の広場に投げ捨てられ、一日中そのまま放置された。彼の死を悼む者は誰一人おらず、町全体が歓喜に沸いた。

さらに伝えられるところによれば、この忌まわしいイコン冒涜者が殺害されたまさにその時刻、天から喜びの声が聞こえ、多くの人々にこの不義の王の死を告げたという。この声を聞いた一部の船乗りたちはその時刻を記録し、後に、その時刻に確かに、その名にふさわしく　、獣のような血に飢えた者が滅びたことを知った。　そして、彼の子供たちには、彼自身が前任者であるミハイル・ランガヴァ王の子供たちに加えたのと同じことが、倍の程度で降りかかった。前述の通り、彼はミハイルの二人の息子を去勢したが、同様に、彼の四人の息子たちも去勢されたのである。　コンスタンティノスと名付けられ、王位継承者となっていたヴァシリー、サヴァティイ、グリゴリー、そしてテオドシイである。テオドシイは去勢後の病に耐えきれず、死去して父と共に埋葬されたが、コンスタンティノスと名付けられたヴァシリーは、同じ病により半身不随となった。彼らは皆、母親と共に幽閉された。

レフの殺害後、兵士たちはミハイルのもとへ向かい、彼の足に足枷をつけたまま王座に就かせた（というのも、前述の通り、足枷の鍵はレフ王自身が保管していたからである）。

その後、日が明けるやいなや、彼らは足枷を解き、彼を大聖堂へと連れて行った。こうして、ミハイル・トラヴェイは、キリストの降誕のまさにその日に王位に就いた。

ミハイルの即位後まもなく、キリストのすべての殉教者たちは監禁から解放され、何の妨げもなくそれぞれの家へと戻った。新しい王ミハイルは正教徒ではなく、同じ偶像排斥の異端の信奉者ではあったが、正教徒を迫害することはなく、各人に自分の信じるままに信仰する自由を与えた。　彼は神の御言葉に無知な人物であり、書物を読むことにも関心を示さなかったが、世俗の喧騒と生計の心配に没頭していた。

しかし、福者テオドールは弟のテオファンと共に、故郷であるパレスチナではなく、宣教の地として割り当てられたコンスタンティノープルへと戻り、公然と敬虔さを説き始め、多くの人々を偶像排斥の異端から遠ざけ、真の信仰へと導いた。

当時、コンスタンティノープルには、ヨハネス・[337] という名の男が住んでいた。彼は皇帝と同じ異端を信奉しており、皇帝から大きな影響力を持っていた。 修道服を身にまとい、偽善的に美徳の模範であるかのように振る舞うことで、彼は皇帝だけでなく、最高政府の多くのメンバーをも欺き、彼らは彼の言葉に耳を傾け、あらゆる面で彼の狡猾な助言に従った。彼は、異端者テオドトの後を継いで総主教の座に就いたが、彼自身もまた同様の異端者であった。 王都全体を照らす正教の二大灯火であるテオドロスとテオファノスが自由の身でいることを快く思わなかった彼は、二人を牢獄に閉じ込め、その後、面談のために呼び出して長く論争を繰り広げたが、彼らに打ち勝つことができなかったため、王から特別な勅令を勝ち取り （彼は皇帝の師であり、首席顧問であったからである）。この勅令により、聖テオドールと聖テオファンは、ソスフェニイ[338] として知られる国へ流刑に処された。しかし、尊い殉教者たちにとって、異国の地はキリストのために、いわば故郷となった。彼らはどこにあっても、キリストのイコンのために苦難を受ける覚悟ができていたからである。

その直後、ミハイル王は崩御し、王位には息子のテオフィロス[339] が就いた。彼は他の誰よりも熱心に偶像排斥の異端に傾倒しており、再び教会への迫害を開始した。 再び聖なるイコンが投げ捨てられ、冒涜されるようになり、正教徒に対する拷問、牢獄、裁判の準備が再開され、あらゆる種類の不当な拷問が再び行われるようになった。 多くの人々は拷問を恐れて従ったが、後に悔い改めた。この頃、テオドロスにも新たな苦難が降りかかった。皇帝は、彼が信仰を揺るがすことなく、その言葉に屈しないこと、そして自ら聖像を崇敬するだけでなく、他の人々にもそうするよう教えていることを知った[340] 。 直ちに、不敬虔な王は聖テオドロスを裁判にかけるよう命じ、王の命令により、聖人は弟のテオファンや他の正教徒たちと共に、拷問を受けるために都市の司教のもとへ連行された。 長い言葉の論争や、統治者による甘言や脅迫の末、テオドールが彼の説得に屈しなかったため、聖人は裸にされ、長い時間をかけて太い鞭で激しく打ち据えられた。拷問者たちが彼を打つのをやめると、彼は法廷の真ん中に、裸で血まみれの姿のまま立ち、キリストのために受けた傷を、天使たちや人々の前で誇らしげに示していた。 司教はこの光景を不適切だと感じたが、聖人はこう言った。

「私は闘士であり、わが主のイコンのために敵と戦うためにここへ来た。闘士たちは通常、裸で戦いに臨むものだ。もし、今あなた方から傷を負わされている信徒たちのうち、誰かが力尽きそうになっているのを見かけたら、 、直ちに彼の代わりに、私の体を打たせるつもりだ。そうして、彼の忍耐の不足を補うのだ。」これこそが、私が裸で立っている理由である！

おお、力強い男よ！おお、自由な言葉よ！おお、神への熱意よ！その後、テオドールと彼の兄弟は再びアフシアへの流刑に処された[341] 。彼らが道中やその地で耐え抜いた数々の苦難――足枷、嵐、飢え、灼熱の太陽、夜の霜、中傷、毎日の死の淵、そして反乱――を、誰が語り尽くせようか？誰が、新たな傷や打撃、耳を引き裂かれるような痛みを詳細に数え上げることができるだろうか。キリストのために、彼らは長い追放生活とともに、これらすべての苦難を喜んで耐え抜いた、とだけ言えば十分だろう。

---

337 ここで言及されているのは、当然ながら、テオフィロス王の教育者であり、後に（832年から842年まで）コンスタンティノープル総主教となったヨハネス・グラマティコスである。彼は幽閉の末に死去した。

338 ソスフェニオスは、コンスタンティノープル近郊の地域である。

339 テオフィロス皇帝の治世は829年から842年までであった。

340 聖テオドロスのこの啓蒙活動の記念碑となっているのが、彼が残した教訓である。また、彼には『イコン崇敬に関する考察』および『正教の信仰について』という書物が帰せられている。

341 アフシア、別名オフィウッサは、ツァーグラード近郊の島である。

二年が過ぎ、彼らは再び皇帝の命令によりコンスタンティノープルへ連行され、皇帝自身の審問にかけられた。というのも、皇帝は彼らを自らの異端の信仰へと引き込みたいと強く望んでいたからである。この期間に彼らが何を耐え抜いたかは、後にキジケの司教ヨハネス宛てに書いた書簡[342]から明らかである。　この書簡の中で、彼らは自らについて次のように語っている。「私たちが王宮に連行され、門をくぐったとき、王は私たちにとって非常に恐ろしく、怒りに満ちた姿に見えた。大勢の廷臣たちが四方から私たちを取り囲み、私たちは遠くから王に頭を下げた。

すると王は、荒々しい声と厳しい口調で、私たちに自分のそばへ近づくよう命じ、こう尋ねた。

『お前たちはどこの国で生まれたのか？』

私たちが「モアブの国です」[343]と答えると、彼は再び尋ねた。

「なぜここへ来たのだ？」

そして、私たちが答える間もなく、彼は私たちの顔を殴るよう命じた。そして長い間、激しい打撃が浴びせられ、私たちは床に倒れそうになった。もし私が（テオドール曰く）私を殴っていた者の服をつかまなかったなら、王の玉座の足元に倒れていただろうが、服につかまりながら、私はじっと打撃に耐えた。殴打が止むと、王は再び尋ねた。

「なぜここに来たのか？」

我々は黙り込み、下を向いていた。殴打による苦痛からまだ立ち直れていなかったからだ。すると王は、近くにいた高官に激昂して向き直り、激しい怒りに燃え、下品な罵声を浴びせながら言った。

「彼らをここから連れ出し、顔に烙印を押して、二人のサラセン人[344]　に引き渡せ。そうすれば、彼らが彼らを自分たちの国へ連れ去るだろう。」

その近くには、ある詩人が立っており、私たちについて書き上げた詩が記された紙を手に持っていた。

王は彼にそれらを読み上げるよう命じ、こう付け加えた。

「もし詩が下手だとしても、気にするな。」

すると彼はこう答えた。

「彼らを嘲笑するには、これだけの詩で十分です。」そこにいた誰かがさらにこう言った。

「陛下、それらは最高の詩にすら値しません。」

その後、次のような詩が朗読された。

誰もがあの都を訪れるのを好むのだから、
神の御言葉の清らかな御足が
宇宙を再建するために――
至聖なる場所に現れたのは
現れたのだ。
そこで多くの恥ずべき行いを犯し、
不信仰と邪悪さゆえに、
彼らは背教者としてそこから追放され、
しかし、王都に逃げ込んでも、
ここでもその狂乱の暴挙を止めようとはしなかった。
それゆえ、悪党として顔に烙印を押され、

---

342 キジクは、小アジア北西部、マルマラ海の南岸に位置する都市である。

343　モアブ地方はパレスチナにあり、死海の東岸に位置していた。その境界は、西が死海、北がルベン族の領地、東がアラビア砂漠、南がエドムであった。

344 キリスト教の著述家たちは、すべてのイスラム教徒、とりわけアラブ人をこのように呼んでいた。

非難され、再び追放された。

詩の朗読を聞き終えると、王は私たちを護送するよう命じた（聖人たちはそう語っていた）。私たちが外に出ると、誰かが追いつき、引き返すよう命じて、急いで私たちを王のもとへ連れ戻した。

私たちを見ると、王はこう言いました。

「去る際、お前たちは『我々は王を侮辱した』と呟いていたようだ。だが、まずは私がお前たちを侮辱してから、解放してやる。」

そう言うと、彼は私たちを裸にするよう命じた。私たち二人が裸にされた後、最初に私（テオドール）が殴られ始めたが、その際、王自らが拷問者たちを手助けし、絶えずこう叫んでいた。

「もっと強く殴れ！」

そして、彼らは容赦も慈悲もなく、私の肩や胸を殴り続けた。殴られている間、私は大声で叫んだ。

「我らはあなたに対して何の罪も犯していない、王よ！」

そしてまた：

「主よ、憐れみ給え！ 至聖なる聖母マリアよ、我らを助けに来てください！」

その後、彼らは私の兄を殴り始めたが、兄もまた同じように叫んでいた：

「御子と共にエジプトへ逃れた至聖なる聖母よ、私の苦しみを見守ってください！主よ、主よ、弱い者を強者の手から救い出される方よ、私たちから御助けを取り去らないでください！」

私たちを思う存分虐げた後、王は再び私たちを監禁するよう命じた」。

これらすべては、勇敢な殉教者たち自身が、キジケの司教に宛てて記したものである。

四日後、彼らは再び司教のもとに連れて行かれ、司教は優しくこう言った。

「ただ一度、私たちと共に聖体拝領をしてくれれば、あなたがたが望む場所へ行くことを許そう。」

しかし、福者テオドロスは彼にこう答えた。

「司教よ、あなたの提案は、まるで誰かが私にこう言うようなものだ。『ただ一つお願いがある。あなたの首を切り落とすことだけ許してくれ。そうすれば、どこへでも行ってもよい』と。知っておいてほしい。私たちを正統信仰から遠ざけることは、天と地を入れ替えて、地を上に、天を下にするのと同じくらい難しいのだ。」

そこで、県知事は彼らの顔に前述の詩句を刻み込むよう命じた。殉教者たちが最近受けた傷はまだ癒えておらず、彼らに凄まじい痛みを与えていた。それにもかかわらず、彼らは板の上に仰向けで縛り付けられ、特別に用意された道具で顔を刺され、前述の詩句が刻み込まれた。　一日中、彼らはこの刻印によって苦しめられ、太陽が沈み、薄暮が訪れたときになってようやく、拷問者たちは拷問を止めた。エパルハのもとを去る際、刻印を施された殉教者たちはこう言った。

「ここにいるすべての者よ、知っておきなさい。楽園の番人であるケルビムは、我々が到着した際、我々の顔に刻まれたこの文字を見て退き、その炎の武器を下ろし、我々に楽園への自由な道を開くであろう。なぜなら、今や我々に課せられたこの新たな拷問は、古来かつてなかったものだからである。　いずれにせよ、これらの刻印はキリストの御顔にも刻まれることになり、その罪はあなた方にも及ぶであろう。なぜなら、主は*こう言われているからだ。「あなたがたが、これらのわたしの最も小さな兄弟の一人にしたことは、わたしにしたのである」*（マタイ25:40）。

聖なるイコンのために受けたこの新たで非人道的な拷問の後、血がまだ流れ止まないうちに、聖人たちは牢獄に閉じ込められ、その後、当時総主教であった前述のヨハネの命令により、再びビフ

ィニアのアパメアへ流刑に処された[345] 。 その際、彼らがそこで亡くなった際には、遺体を埋葬することなく、動物の死骸のように町の遥か彼方に捨て去るよう命令が下された。 聖なる殉教者たちが流刑地へ向かう途中、当時、聖なるイコンを守るために同じく流刑に処されていた聖メフォディオスが住んでいた島を通りかかることがあった。彼はそこで、二人の強盗と共に墓のような洞窟に閉じ込められており、ある漁師から食料を恵まれていた。 道中で偶然その漁師と出会った聖人たちは、彼から聖メフォディオスのことをすべて聞き出した。護衛の兵士たちの残酷さゆえに彼と直接会うことはできなかったため、彼らは同じ漁師の助けを借りて、次のような短い詩を書き、彼に送った。

生ける死者、そして死せる命の与え手、
地上で生き、地を踏みにじる者へ、
囚人たちが囚人へ、書き記した言葉を。

聖メフォディオスはこの詩を読み、心を慰められた。さらに漁師の話から敬虔な殉教者たちのことを知ると、彼らをそのような偉業へと導いた神に感謝を捧げ、彼らに次のような詩を書き送った:

天の書に記された者たち、
顔に刻印された二人、
死より先に葬られた者たち、
生きたまま埋葬された同志が、あなた方を歓迎する。

戦士たちに連行された聖人たちは、キリストへの敬虔な信仰の確かなしるしを額に刻みながらアパメアに到達し、そこで牢獄に閉じ込められた。すでに高齢であった聖テオドールは、数多くの傷と耐え抜いた苦難の末、ここで息を引き取った。 聖第一殉教者ステファノスの記念日に、彼は主のもとで安らかに息を引き取り、キリストのために負った鎖に縛られた、最も苦難に満ちた肉体を残して、永遠の安息へと旅立った。 肉と霊の両方において彼の兄弟であった聖テオファンは、兄弟との別れを嘆き、彼の墓前で葬送の賛美歌を歌った後、彼を木製の棺に納めた。 ある徳の高い長老が、聖テオドロスの帰天の際、たまたまアパメアに滞在しており、天使たちの歌声を耳にしたと伝えられている。その歌声は、殉教者の魂が天使たちと共に天へと荘厳に昇天したことを、高みから告げていたという。

テオフィロス王の死後、教会には平和がもたらされた。敬虔なテオドラ王妃は、息子のミカエルと共に[346] すべての聖なる父たちを流刑先から解放し、彼らに栄誉と称賛を捧げた。 その時、聖テオファンも牢獄からの解放を許された。彼は他の聖人たちと共にコンスタンティノープルへ赴き、異端に対する勝利の印を額に掲げ、聖なる父たちの間で、天使たちの中のケルビムのように崇敬された。 四旬節の最初の週に、聖なるイコンが盛大な祝典とともに教会に運び込まれた[347] 。この祝典に際し、至福のテオファンは美しいカノンを書き、詠んだ[348] 。

その後、彼はニカイアの都の総主教に任命され、かつて墓の洞窟に幽閉されていたあの聖メフォディオス総主教によって按手を受けました。 このようにして正教の光が輝き、キリストの恵みによって、120年にわたり神の教会を混乱させ、暗くしていた偶像排斥の異端の闇は完全に追い払われた。

---

345 ビフィニアのアパメアは、シリアのアパメアと区別するためにそう呼ばれていた。ビフィニアは小アジアの北西部にある地域である。

346 ミカエル3世皇帝（在位842年～867年）は即位から4年が経過していたため、855年まではその母である聖テオドラ皇后が国政を執っていた。

347 それは842年2月19日のことだった。この日は正教の勝利の日と名付けられ、毎年、大斎の最初の日曜日に祝われることになっていた。

348 テオファンは正教を擁護する多くの著作を残しており、特に148にも及ぶカノンの著者として知られている。彼の代表的なカノンには、正教の週のカノン、使徒たちに関するすべてのカノン、そして故人に関するカノンがある。さらに、聖テオファンは特定の日々のためのスティヒラも執筆した。

その直後、キリストの殉教者である聖テオドロス（[349] ）の聖遺骨が、アパメアからハルキドン（[350] ）へと移され、そこから、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神の栄光のために、多くの癒しがもたらされた。アーメン。

コンスタンティノープル大司教、聖テオドロスの記念日

記念日：12月27日

聖テオドロスはコンスタンティノープル出身であり、同地で教育を受けた。成人すると、まずその並外れた敬虔さにより、「大」 教会の司祭に叙階された[351]；その後、シンケル[352] およびスケヴォフィラクス[353] に任命された。 コンスタンティノープル総主教の逝去後、彼はすべてのボヤール、皇帝自身、とりわけ聖公会によって、教会の統治を引き受けるよう強く求められ、コンスタンティノープル総主教の位に就いた（[354] ）。 しばらくして、敵による悪意ある誹謗中傷により、彼は総主教の座から追放されたが、その後、真実が勝利を収め、聖テオドロスは再び総主教の座に就いた[355] 。神の教会を立派に統治した後、彼は2年余りを経て、安らかに主のもとへ旅立った[356] 。

1月10日

12月28日（旧暦）

ニコメディアで焼かれた二万人の殉教者たちの殉教

12月28日の記念日

マクシミアヌス皇帝の治世2年目[357] 、すでにキリスト教徒に対する残酷な迫害が準備されていたにもかかわらず、キリストの聖なる信仰は整えられ、繁栄しており、神に愛された教会の牧者や教師たちは、正統な教義を公然と告白していた。 その中には、当時、ニコミディアの[358] 教会の名高い司教であり、義にかなった生活と言葉の賜物によって飾られていた聖キリルもいた。彼の説教のおかげで広まっていったキリスト教の信仰は、すでに王宮にまで届き始めていた。 皇帝の側近の多くが、偶像から背を向け、キリストへと立ち返り始めていた。このことを知ったマクシミアヌスは、直ちにキリストの教会に対する迫害を開始しようと企てたが、その頃、彼には蛮族との戦争が控えていた。 そこで彼は、まず外部の敵に立ち向かい、彼らを打ち負かしてから、次に内部の戦争——敵では

---

[349] これは、彼の兄弟テオファンが存命中のことであり、その兄弟は聖テオドロスに、頭字詩を織り込んだカノンを捧げています。「兄弟よ、私はあなたへの真の賛美を紡ぎます。」

[350] ハルキドンは、コンスタンティノープルの対岸、小アジア側のボスポラス海峡沿岸に位置していた。

[351] すなわち、聖ソフィア大聖堂のことである。

[352] シンケル——教会行政を司る総主教評議会のメンバー。シンケルたちは総主教からの様々な指示を遂行し、常に総主教の傍らにいてその生涯を間近で目撃しており、死後はしばしば後継者となった。

[353] スケヴォフィラクス——聖器保管係、聖具室長。

[354] これは676年のことだった。

[355] 聖テオドロスは678年に総主教の座から追放され、683年に復位した。

[356] 聖テオドロスは686年頃に死去した。

[357] マクシミアヌス2世ガレリウス——ローマ皇帝ディオクレティアヌスの娘婿であり共同統治者、後にその後継者となった（305年～311年）。

[358] ニコメディア——大理石海のほとりに位置する小アジアの繁栄した都市であり、ディオクレティアヌス帝およびその後継者たちの治世下において、ローマ帝国東部の首都であった

なく、自らの臣民であり忠実な側近である、祈りと正しい信仰によって祖国を支えるキリスト教徒たち――を宣言することに決めた。　彼がエチオピアとの戦争に向かい、ニコミディアを去ったとき、聖なる信仰の光はさらに明るく輝き、異教徒たちを照らし出した。一方、キリストの軍勢はその間、その数を増やし、迫り来る戦いに備えていた。

当時、ニコミディアには、王宮で育てられたドムナという名の美しい乙女がいた。王は彼女を自らの邪悪な神々に捧げ、処女性を守ることを命じ、宮殿で最高位の偶像崇拝の巫女とした。

神の御摂理により、新約聖書の書物が彼女の手に渡り、それを読むうちに、その乙女の魂は啓発され始めた。彼女は、このような霊的な宝を見出したことを喜び、唯一の神に対するキリスト教徒の偉大な信仰に驚き、これまで無知と迷いの闇の中にいたことを心から嘆いた。　キリスト教の信仰をより深く理解し、その一員になりたいと切に願った彼女は、少しも躊躇することなく、あるキリスト教徒の娘――高貴な貴族の娘――を呼び寄せ、彼女から教えを受けた後、夜陰に乗じて誰にも知られぬよう、聖キリル司教のもとへ向かった。　聖書について十分に教え、十字の印を授けた後、司教は彼女に「[359] 」と宣言し、ある聖なる 助祭、アガピオスという人物に、彼の指導の下で、彼女が断食と祈りによって聖なる洗礼に備えるよう命じた。　ドムナは、命じられたことをすべて密かに行っていたため、彼女と同じく温厚な気性の宦官[360] であるインディサという名の者以外、誰もそのことを知らなかった。インディサは彼女と共に聖なる信仰に改宗し、同じく洗礼を受ける準備を進めていた。　司教が定めた期限が到来すると、ドムナとインディスは洗礼を受けた。こうして、まだ十四歳にも満たないこの乙女は、最初の誕生――肉的な誕生――の直後に、第二の誕生――霊的な誕生――を遂げたのである。

宮殿に戻った彼女は、それ以来、祈りと断食、そして聖書の読誦以外に何事にも従事しなくなった。　ある日、『使徒言行録』を読んでいると、彼女は次の箇所にたどり着いた。*「土地や家を持っている者は皆、それを売り、その代金を使徒たちの足もとに置いた」*（使徒言行録4:34–35）。

聖ドムナは、自分も同じようにしようと決心した。自分の全財産、金や銀、真珠や宝石、高価な衣服、そして乙女としての装飾品をすべて集め、それを秘密裏に自分の霊的指導者である聖キリルのもとへ持ち込んだ。　それらすべてを、あたかも使徒たちの足元に置くかのように彼の足元に置き、これらを売却して得た金を、彼自身の手で貧しい人々に配るよう懇願した。そして、その願いは叶えられた。その直後、聖キリルは世を去り、神のもとへ帰った。　聖キリルの教えをすべて心に深く刻み、ドムナは昼夜を問わず神に喜ばれるよう努め、志を同じくする霊的な兄弟である宦官インディスと共に、熱心に神に仕えた。彼女はインディスと共に、水と御霊によって新生したのである[361] 。主の律法を学びながら、彼らは毎日夕方まで断食し、夜遅くに口にする食事は、乾いたパンと水だけだった。王から与えられ、毎日届けられる食事は、飢えた人々を満腹にさせたが、彼らはそのすべてを密かに貧しい人々に配っていたからである。　このように神に喜ばれる生活を送っていた彼らは、山の上にある町（マタイ5:14）のように、いくらあらゆる手段を尽くして慎重に身を隠そうとしても、隠れることはできなかった。彼らの敬虔さは、覆いから取り出された灯（マタイ5:15）や、畑で見つかった宝（マタイ13:14）のように明らかになった。こうして、この聖なる二人が信者たちの模範となり、不信仰者たちへの恥となることは、神の御心にかなうことだったのである。

ドムナとインディスの毎日の断食について、宮殿全体を統括し、王の食卓を司る宦官長が知ることとなった。　彼は、彼女たちの生活がこれほど厳格であることに驚嘆するどころか、拷問に訴え、長い間彼女たちを殴打し、支給された食糧を何に用いているのかを自白させようとした。しかし、

---

[359] 「オグラシェニエ」とは、聖なる洗礼を受ける準備をしている者たちに対する予備的な試練と、信仰の真理の教えを指す。その期間は40日から3年まで続き、状況によっては数日に短縮されることもあった。

[360] 「宦官」とは、本来「去勢された男性」を意味する。古代には、王宮で卓越した地位を占めていた宦官たちの奉仕によって、高貴な女性たちを囲むという慣習があった。

[361] 福音書の表現によれば（マタイによる福音書3:5参照）。

彼女たちは自らの徳を隠し、それを認めることを拒んだ。　すると、ある宦官――出身も信仰もペルシャ人――が近づき、宦官長に二人の美徳について語り始めた。彼はそれをあたかも悪行であるかのように描き出し、その話に中傷や侮辱を交えて語った。　彼は、ドムナとインディスの穏やかで清らかな生活、食事を控えていること、そして彼らに届けられる食料を、王の敵である貧しいキリスト教徒たちに配っていることについて語った。

「真実を知りたければ」と彼は最後に言った。「彼らの貯蔵庫を開けてみれば、私の言葉が嘘ではないことがわかるだろう。」

そこで、宦官の長であり、同時に王宮の管理官でもあった男は、鍵を手に取り、彼らの住居と貯蔵庫を調べに行った。　それらを開けてみると、聖なる十字架、新約聖書、地面に敷かれた二枚の葦の敷物、土製の香炉、蝋燭、そして聖体（[362]　）が入った小さな木製の器以外には、何も見つからなかった。

「だが、金はどこにあるのだ」と彼はその時彼らに尋ねた。「高価な衣服やその他の貴重品、装飾品はどこにあるのだ？」

答えが得られなかったため、彼は再びドムナとインディスを拷問にかけたが、成果は得られなかった。そこで彼は、王に彼女たちのことを報告するまで、彼女たちを別の場所に連行し、監禁しておくよう命じた。　聖なる乙女が監禁のために住居から連れ出される際、彼女は密かに新約聖書の書物を手に取り、衣服の中に隠した。その書物は小さく、隠すのは容易だった。一方、インディスは同じように、神の秘跡が入った小さな器を持ち出した。　二人は閉じ込められ、長い間、飢えと渇きに苦しめられた。不義な拷問者である　は、飢えた者たちを養う者たち自身も餓死するようにと決めたのである。　長い間食事を摂れなかったため、若い乙女は肉体の病に陥った。しかし、鳥や獣を慈しみ、御手を差し伸べ、御心によってあらゆる生き物を満たしてくださる方（詩編144:16）、神――摂理者――は、長きにわたる飢えで衰弱した御自分のしもべたちを見捨てられませんでした。ある夜、神は御自分の天使たちを彼らのもとに遣わされ、天使たちは暗闇の中で彼らを天の光で照らし、驚くべき食事――天の糧と並外れた飲み物――を差し出し、去って行きました。　ドムナとインディスは、差し出されたものを口にして力を取り戻し、これまで経験した苦難を忘れ去った。　天使たちの現れに慰められ、天使の糧で満たされた二人は、顔に輝きを宿し、まるで喜びの宮殿に座しているかのように、*「私の魂は乳と油で満たされ、私の口は喜びの声を上げてあなたを賛美します……神よ！　あなたは私の神、私は夜明けからあなたを求めます。私の魂はあなたを渇望し、私の肉体はこの荒れ果て、乾ききった、水のない地であなたを慕ってうめいています」*（詩篇62:6,2）。

その直後、宦官の長がやって来て、彼らが飢えに屈したかどうかを確認した。彼は、この方法で彼らを自分に服従させられると考えていたからである。しかし、彼らが喜びに満ち、顔は輝き、心は楽しげであるのを見て、彼は、何も達成できなかった怒りと残酷な扱いを、偽りの柔和さに変えた。　彼は彼女たちに以前と同じ最初の住居に住み続けるよう命じ、食料や衣服、金や銀、そして少女たちの装いなど、必要なものをすべて豊富に与え、以前と変わらない量を支給し続けた。　しかし、聖ドムナは再び密かにすべてを貧しい人々に配り、食べ物だけでなく、貴重な衣装までも与えた。彼女のもとへ、まるで養い主であるかのように大勢の貧しい人々が集まってくるのを見て、彼女は宝石や真珠で飾られた帯やその他の装飾品をすべて取り、それらをディアコノス・アルピオスに送り、これらを売却して得た金を貧しい人々の糧に充てるよう頼んだ。　その後、罪人たちとの同居や、偶像崇拝の不義に満ちた宮殿での生活をどうにかして避ける方法を考えを巡らせていた聖ドムナは、サウルの追跡から逃れ、ゲフの王アンフスの前で狂人を装った神の父ダビデのことを思い出した（サムエル記上21:13）。　彼女もまた狂人のふりをし、倒れ込み、よだれを垂らし、体を震わせ、叫び声を

[362]　初期のキリスト教徒の間には、毎日聖体拝領を行う習慣があったが、毎日聖体礼儀を執り行うことは不可能であったため、聖体は信徒の自宅に持ち帰られていた。

上げ始めた。このことを知った王宮を統括する宦官長は悲しみに打ちひしがれ、どうすれば彼女を治せるのかと途方に暮れた。　キリスト教徒がそのような病気を癒やすと聞き、彼はキリスト教の司教である聖アンフィモスを呼び寄せ、王が戦場から戻るまでに彼女を癒やすよう、その娘を彼に託した。また、宦官のインディスを彼女の世話役として付けさせた。

ドムナの真意を霊的に見抜いた司教は、喜んで彼女を受け入れ、ある女子修道院へ送り出した。ドムナは、不信心者たちとの生活を脱し、キリスト教徒たちと共に暮らす恵みにあずかることができたことを、言葉に尽くせないほど喜び、歓喜した。

しばらくして、マクシミアヌスは戦勝の栄光を携えて凱旋した。敵に対する勝利を、戦いに強き至高の神ではなく、自らの無機質な偶像の功績だと主張した彼は、それらに不敬な生贄を捧げて感謝を示すとともに、キリスト教徒への迫害を開始しようとした。　街の中心に観覧会場を設けると、彼は宮殿から金や銀の偶像を運び出し、それらを王座に据え、花で飾り立て、肥えた雄牛を犠牲として捧げ始めた。　王は祭司たちに、周囲に立ち並ぶ民衆に犠牲の血を振りかけるよう命じた。すると直ちに、観客の中にいたキリスト教徒たちは、偶像への犠牲の血で穢されることを避けるため、群衆の中から離れ始めた。これを見た王は、民衆に向かって大声でこう言い放った。

「どこへ行くのだ、光よりも闇を好み、宇宙を支えるこれらの神々の存在を信じない人々よ。この真の祝典と勝利が見えないのか？　かつての恵みにどれほど多くの恵みが加わっているか、すべてが平穏に保たれているか、日々新たな恵みがもたらされ、かつては持っていなかったものを今や我々が手に入れていることなど、見えないのか？　我々の栄光が如何に高まり、王国が如何に拡大し、ある都市はすでに征服され、他の都市もまた我々に征服されようとしていることなど、見えないのか？　他民族の王国が我々に服従し、すべてが我々の望む通りに進んでいることにお気づきではないのか？これらすべてが、我々が仕える神々の御業によるものではないと、いったい誰の御業によるというのか？好天、適度な雨、そして神々から授けられる豊かな実りこそが、このことをあなた方に確信させてくれるだろう。

このように、不義の王は虚偽を真実であるかのように語り、さらに多くのことを語ろうとしていたが、「*主の裁きは真実であり、すべては正しい*」（詩篇18:10）と称される主は、もはや嘘が真実を凌駕して誇り高ぶることを許されなかった。突然、晴れた日の真昼、太陽が輝いている最中に、恐ろしい雷鳴が轟き、空は暗い雲に覆われ、激しい風と嵐、稲妻と雹を伴う激しい雨が降り注いだ。こうして、不義な者たちに対する神の怒りがはっきりと現れた。ある者たちは、　雷鳴に怯えて死人のように倒れ、他の者たちは逃げ出そうとして互いに押し合い、群衆の中で多くの者が踏みつけられて命を落とした。王自身も、恐怖と戦慄に襲われ、恥じ入ながら宮殿へと逃げ帰った。　こうして、その光景は終わり、忌まわしい生贄を伴う神を冒涜する祭りは中断された。大雨が降り注ぎ、川は氾濫して田畑を水浸しにし、ちょうど収穫の時期であったため、農民たちの労苦はすべて水泡に帰した。しかし、これらすべては、不義な者たちが天にまします唯一の神の力強い御手を知るためであった。　しかし、悪意に目がくらんだ冷酷な王はこれを理解しなかった。真の神の力を悟るどころか、彼はさらに大きな狂気に陥り、「恐るべき方、王たちの命を奪う方」（詩篇75:13）に対して戦いを挑んだのである。

その直後、宮殿に鎮座する十二の主要な偽りの神々の祭司たちの中にドムナとインディスの姿が見当たらないことを知った王は、彼らの行方を尋ねた。ドムナは正気を失い、その病を治すことのできる人々の元にいること、またインディスは彼女を守り仕えるためにその傍らに置かれていると告げられると、　マクシミアヌスは、彼らを神々の奉仕から解放した宦官長に激しく怒り、その地位を剥奪し、クラウディオポリス[363]　でラクダの世話をさせるという、最も恥ずべき不名誉な処罰を下した。その後、インディスを呼び寄せ、王は彼を以前の職務、すなわち王宮に立つ神々への奉仕へと戻

[363] クラウディオポリスは、小アジアのキリキア地方にある都市の一つである。

した。　しかし、インディスは王の知らぬところで、自身が信じる唯一の真の神のみに仕え続けた。その間、マクシミアヌスはキリストの教会を公然と迫害し始め、聖なる教会を破壊し、偶像崇拝の神殿を建設した。　彼は帝国のすべての地方の長として、キリスト教徒を容赦なく拷問するよう命じられた残忍な者たちを任命した。皇帝自身こそが、残虐さの点で筆頭かつ第一の拷問者であり、キリスト教徒を殺害し、根絶やしにし、罪なき者の血をまるで水のように流した。　時には、狡猾な言葉で彼らを欺こうとし、その後、その悪辣な欺瞞に従わなかった者たちを拷問と死に追いやった。ある場所に身を隠していた至聖なるアンフィモス司教を探し求め、見つけられなかったマクシミアヌスは、ある日、武装した兵士たちを大勢引き連れて、まるで狼が羊の群れに飛び込むかのように、自らキリスト教の教会に踏み込んだ。　民衆に向き直ると、彼は時として甘言を、時として脅しを用いて、すべての人を自らの迷信へと引き込もうとした。ついに彼はこう言った。

「その虚しい信仰から背きなさい。もし背かないならば、処刑がすぐにでもあなたたちを襲うだろう。あなたたちが集まっているこの聖堂を見よ。まもなく、私はあなたたちと共にこれを焼き払うつもりだ。」

キリスト教の長老である聖グリケリウスは、勇敢に彼に立ち向かい、恐れを知らぬ言葉でその不法者を恥じ入らせた。

「王よ、あなたが約束した贈り物は、私たちを惹きつけるものではありません。また、あなたの脅しなど、私たちは恐れてはいません。」　この世にあるすべてのものは、あたかも夢のようだと私たちは考えており、キリストのために最も残酷な拷問に耐えられないことさえ、悲しみであり、神の懲罰であると受け止めている。あなたは野蛮人に対する勝利を誇っているが、キリスト教徒の女性や子供たちからさえ敗北を喫している。なぜなら、私たちのキリストの力は明らかに打ち勝てないものだからだ。　最近の雷鳴や稲妻、あの異常な雷鳴と雨を誰が忘れることができようか。あなた方の多くは突然死に、地上の実りは予期せぬ洪水によって滅びた。これは、あなたがすべてを真の神ではなく、偽りの神々に帰したことによって引き起こされた、神の怒りの明らかなしるしであった。　我々はあなたの迫害を恐れない。万物の王が天から我々に武器を授けてくださった。我々は、今あなたが自分の兵士たちを武装させ、守っているのと同じように、その武器で武装し、身を守っているのだ。あなたに立ち向かい、我々は驚くべき勝利を収めることを固く信じている。なぜなら、打ちのめされながらも我々は打ち勝ち、倒れながらも勝利するからである。

王はこれらの言葉を聞いて心の中で激しく怒りを燃やしたが、それでも誰にも害を加えることなく教会から出て行った。そして、教会にいた敬虔な民は、そのような不屈の勇気を見せた聖グリケリウスを称賛した。　しかし、怒りを長く抑えきれなかった王は、まもなくグリケリウスを捕らえ、自らの不正な裁判にかけ、何の尋問もなしに残酷な拷問を加えるよう命じた。そして、拷問者たちが疲れ果てるまで、殉教者は打ち続けられた。彼が殴打されている間、告示役はこう叫んでいた。

「グリケリウスよ、口を慎め。高慢になるな、反抗的になるな、不逞になるな。王とローマの法律を敬え。」

しかし、拷問者たちよりも強い殉教者は、天の王に向かってこう叫んだ。「主イエス・キリストよ！　あなたが私を強めて、あなたについて語らせたように、あなたのために苦しみを受けることも強めてください。そうして、これらの苦しみによって、私がより大きな報いにふさわしい者となることができますように」。

火が燃え上がるように、この言葉によって、拷問者マクシミアヌスの怒りはさらに激しく燃え上がった。　彼は自ら拷問の場に立ち会い、処刑人たちが殉教者の肉体に、大地がその血で染まり、肉から露わになった骨が見え、殉教者のすべての四肢が砕け散るまで、さらに残酷な打撃と傷を負わせるよう命じた。それでもなお、舌だけは自由に語り続けていた。

「私はキリスト教徒であり、唯一の真の神であるキリストの僕である。主はただひとり、私の主であり、王はただひとり、私の王である！」

グリケリウスのそのような言葉をこれ以上聞くに耐えられなくなった拷問官は、彼を城の外で焼き殺すよう命じた。そして彼は、神への芳しい供え物となり、神に喜ばれる全焼のいけにえとなった。

まもなく、再び神に忌み嫌われる異教の祭りが訪れた。生贄の動物たちは、宮殿内に設けられた十二の主神を祀る神殿へと連れて行かれた。　白い衣をまとって歩く祭司たちを見渡し、その中にインディスの姿が見当たらないと、王は彼の行方を尋ねた。一方、インディスは粗布を身にまとい、自分の部屋に閉じこもり、不信心者たちの滅びを嘆き、泣き悲しんでいた。このことが王に報告された。　王は直ちにインディスを呼びつけ、彼が喪服を身にまとい、泣き悲しんでいる姿を見て、事態を悟った。そして、彼の信仰や生い立ちを問うこともなく、手足と首に足枷をはめさせ、牢獄に投獄するよう命じた。　その後、王は以前言われたことを忘れて、再びドムナについて問い詰め始め、まるで酔っ払ったかのように怒りを露わにし、何度もこう繰り返した。

「ドムナはどこだ？ ディアナとミネルヴァの巫女はどこにいる？」

彼には再び、彼女が正気を失ったため、宦官長が彼女を宮殿から追放したと答えられた。そこで王は宦官長のことを思い出し、彼を斬首し、ドムナを至る所で捜索するよう命じた。この王の命令は、ドムナが滞在していた修道院にも伝わった。　彼女を隠し通すことは不可能だと悟った修道院の修道院長アガフィアは、ドムナの髪を男のように短く切り、男装させた。そして涙ながらの祈りを捧げて彼女を守り、ドムナを聖なる修道院から送り出した。そうすれば、その乙女は男装して男たちの間に身を潜め、誰にも見破られることはないだろうと考えたのである。　ドムナを探していた者たちは、どこを探しても彼女を見つけることができなかった。これにより、王の怒りはさらに激しさを増し、彼はすべての修道院を破壊し、乙女たちを辱め、暴行によって汚すよう命じた。すると直ちに、まるで都市全体が野蛮人に占領されたかのように、街の至る所で災厄と荒廃が巻き起こり始めた。体力が強かった乙女たちは、山や荒野へ逃げ、洞窟や地の裂け目に身を隠した。彼女たちは、無法者たちと共に暮らすことや、卑劣な者たちの手に落ちるよりは、むしろ獣たちと共に生き、獣に引き裂かれることを選んだのである。　一方、逃げることに失敗した乙女たちは捕らえられ、ある者は裁判と拷問へと引きずり出され、またある者は民衆の遊郭へと連行され、穢されることとなった。しかし、キリストの力は彼女たち全員を強め、恥をかかされることも、冒涜されることもなく守り抜いた。その中には、テオフィラという名の乙女が一人おり、彼女は他の乙女たちの中でも特に際立ち、まるで星々の間の月のように、その美しさと魅力、高潔さと清らかな生き方で輝いていた。恥知らずな兵士たちが彼女を無理やり遊郭へと引きずり込もうとしたとき、彼女は天に向かって目と両手を上げ、涙ながらにこう叫んだ。

「おお、わがイエスよ、わが愛よ、わが光よ、わが息よ、わが処女性とわが命の守り手よ、あなたの花嫁を見守ってください！　見えない私の花婿よ、私を見捨てず、急いで助けに来てください。あなたに誓った私の処女の誓いが破られないように。もはや祈る時間さえ残されていないのですから！」　あなたの御名を告白するこの魂を獣たちに引き渡さないでください。あなたの羊が狼たちに引き裂かれることのないように。私の花婿よ、あなたの花嫁を守ってください！清さの源よ、私の貞潔を守ってください。そうして、天使たちに賛美されるあなたの御名が栄光を受けるように。

彼女はそう祈り、神はすでにその祈りの成就を準備しておられた。　彼女が、公然と罪を犯す女たちの不浄な住処に連れて行かれたとき、キリストの汚れなき花嫁を汚そうと、不浄な欲望に満ちた兵士の一人が彼女のところへ入ってきた。すると、彼が彼女に近づいた途端、即座に死んで地面に倒れ、息を引き取って彼女の足元に横たわった。　その間、他の兵士たちは外で彼の退出を待っていたが、彼がこれほど長く遅れていることに苛立ち、自分たちもそこに入りたいと願っていた。　ついに、そのうちのひとりが、罪深い欲望に駆られて我慢できなくなり、中に入ったが、友が死んでいるのを見て恐怖に襲われた。さらに、聖なる乙女を照らす、近づくことさえできない光を見たとき、彼は即座に視力を失い、盲目となって、外へ出るために手で壁をさぐり始めたが、外へ出ることはでき

なかった。　同じ運命をたどったのは、恥知らずにも不純な欲望を抱いて乙女のもとへ入っていった他の多くの者たちでもあった。このことが外で待っていた者たちの耳に入り、彼らは皆、情欲のためではなく、何が起きたのかを見ようと一斉に集まってきた。すると、乙女が端正に腰を下ろし、小さな 本を朗読しているのを見た。それは彼女が手元に保管していた福音書であった。 その傍らには、言葉に尽くせない光を放ち、稲妻のような眼差しを向けている美しい若者が立っていた。その若者を見た不信心者たちは、たちまち大きな恐怖に駆られて逃げ出した。一方、他の人々は叫んだ。

「キリスト教の神に匹敵する者は誰か？」

夜が更けると、光を放つ若者はその娘をそこから連れ出し、大聖堂まで連れて行き、玄関先に立たせてこう言った。

「平安あれ。」

その後、彼はその場を去り、聖女テオフィラは恐怖と喜びに包まれたまま残された。恐怖は、彼女の守護者が去ってしまったからであり、喜びは、悪党たちの手に渡ることを無事に免れたからであった。　教会の扉に近づくと、彼女は扉を開けてもらうために叩き始めた。というのも、神への徹夜祈祷を行うために中に集まっていたキリスト教徒たちは、不敬虔な異教徒たちを恐れて扉を閉ざしていたからである。　ある助祭が中から、誰が叩いているのかと尋ねた。テオフィラの声を聞き分け、それが彼女だと確信すると、彼は教会に集まっていた人々にそのことを告げた。扉が開かれると、人々は一斉に聖なる乙女のもとへ駆け寄った。彼女の由緒ある家柄も、聖なる生き様も、皆に知られていたからである。　彼女が不信心者たちの暴行からいかに救われたか、また主が力強い御手をもって彼女の処女性を損なわれることなく守り、彼女にどのような恵みを施されたかを知ったとき、人々はどれほど喜び、そして涙を流しながら神を賛美したことか！　なぜなら、彼女は、隠すべきではなく、むしろ宣べ伝えるべきである神の輝かしい奇跡を隠さなかったからである。聖なる乙女はひれ伏し、喜びの涙で教会の床を濡らし、皆が主キリストに一斉に感謝を捧げた。

その頃、王の前で、最も高貴な貴族や王宮の主要な家臣のうち数名が、キリスト教の信仰に属しているとして告発された。その中には、軍事的功績と民政における功労で名声を博し、イタリア総督の称号を冠していたドロフェイという人物がいた。　彼と共に、マルドニウスやミグドニウス、その他、その功績で名高いが、信仰と敬虔さにおいてさらに名高い高官たちもいた。彼らが尋問のために連行されると、王は当初、彼らを激しく叱責し、その後、長く容赦なく鞭打たせ、手錠をかけて牢獄に投獄させた。　キリスト教徒が捕らえられ、拷問を受け、様々な処刑に処される日が一日たりともなかった。しかし、やがてキリストの降誕祭[364]　が訪れ、新生児に豊かな供物が捧げられることになっていた。信者たちは皆、教会に集まった。その時、不敬虔なマクシミアヌスの不敬虔な家臣たちが彼の元へやって来て、こう言った。

「王よ！今日はキリスト教徒にとって偉大な祝日であり、彼らは、これが自分たちの神の誕生日であるかのような作り話をでっち上げ、この出来事を祝うために皆、教会に集まっています。　それゆえ、獲物が網から逃げ出さないよう、兵士たちに教会の入り口を占拠するよう命じ、教会の門の前に我らの神々への祭壇を設置させよ。そして、布告役には、彼らに直ちに教会から出てきて、神々に犠牲を捧げるよう命じさせよ。　もし彼らが従うならば、あなたは王としての御心に従って彼らを処遇すればよい。しかし、もし我々の助言に従うおつもりなら、兵士たちに教会を四方から包囲させ、火を放ち、あなたに従わないキリスト教徒を一人残らず滅ぼすよう命じなさい。　このようにして、あなたの王国にとって危険で有害な者たちを一挙に根絶やしにすることで、将来にわたってあなたは心配する必要がなくなるでしょう。

彼らがまだ話を終える前に、マクシミアヌスは彼らの言葉を遮って叫んだ。

[364] これは西暦303年のことである。

「偉大なる神々に誓って、私はとっくの昔から自らこれを企てていたのだ。なぜ今までにその計画を実行できなかったのか、自分でも分からない！　神々よ、今こそあなた方に大いなる感謝を捧げねばならない。なぜなら、あなた方がそう仕向けたおかげで、私の家臣たちにも、我が王国にとって有益なこの計画がちょうど思い浮かんだのだから。」

そして彼は直ちに、親衛隊の長たちに、大勢の兵を率いてキリスト教の教会へ向かい、麻の繊維や木屑、その他の燃えやすい物で教会を取り囲み、そこから出るすべての出口を武器を構えて厳重に警備し、一人のキリスト教徒も彼らの手から逃れられないようにするよう命じた。　これらすべてが実行されると、王から遣わされた布告者が教会に入り、中央に立って大声でこう宣言した。

「ここに集まった者たちよ！　私を遣わした宇宙の支配者マクシミアヌス王は、あなた方に二つの選択肢を提示する。一つは、教会から出て、直ちに神々に生贄を捧げれば、命は助かる。　そのための祭壇はすでに扉の前に用意されている；あるいは、もし従わなければ、ここにいる　全員が共に惨い死を遂げることになる：火はすでに用意されており、教会は周囲を薪で囲まれている。それゆえ、早くどちらを選ぶか決めよ。　そう言うと、彼は黙った。すると、祭壇のそばに立っていた大助祭――その心は神の恵みの炎に燃え上がっていた――が、民衆に向かってこう言った。

「愛する、心を一つにした兄弟たちよ！ バビロンで三人の若者が[365]、数日前、彼らの記念を祝った際、その真の信仰における揺るぎない勇気と強さに、私たちは言葉に尽くせないほど驚嘆した。彼ら自身が賛美の歌を歌い、すべての被造物を、あたかも炎の中にいるのではなく、柔らかな花々の間を散策しているかのように、万物の主を賛美するよう呼びかけたのだ！　そして私たちは彼らを称賛しただけでなく、彼らの栄冠の共同参加者になりたいと願った。さあ、私たちもあの三人の少年たちに倣おう。今この時代そのものが、私たちにそうするよう呼びかけているのだから。なぜなら、マクシミアヌス王はネブカドネツァルに似ている。二人の名前は異なるものの、その迫害と不敬虔さにおいては非常に似通っており、互いに一致しているからだ。　あの人々が、まだ少年であり、しかもたった三人であり、真の信仰のために高潔な偉業を成し遂げた先例を一つも持たないにもかかわらず、あれほど見事に奮闘したのに、　私たちの方が彼らよりはるかに人数が多く、実に数え切れないほどである。私たちの多くはすでに高齢であり、キリストのために勇敢に苦難に耐えた多くの模範を目の前にしている。それなのに、これほどの人数と年齢でありながら、つかの間の命に執着し、　臆病で気弱な姿を見せ、私たちを偉業へと招くこの時を、あたかも大きな恵みであるかのように活用せず――私たちを創造し、私たちのために御自身の魂を死に委ねられた神のために、この一時的な生を軽んじず、私たちの死によって、私たちの堅固で揺るぎない信仰の証しを立てないなどということは、恥ずべきことではないでしょうか？！　まことに、それは計り知れない恥辱となるでしょう。私がこう言うのは、もし私たちの苦しみに対して何の報いも与えられないという場合を想定してのことです。　しかし、この世の苦しみは、死後に私たちに与えられる報いに比べれば取るに足らないものです。この世の、苦難に満ちた短い命の代わりに、私たちには永遠で苦痛のない命が約束されており、すぐに枯れてしまう栄光を軽んじたことへの報いとして、朽ちることのない栄光が、そして奪われることのない富と、決して悲しみに変わることはない喜びが与えられるのです。　果たして、私たちはまだこの世の生活を望むのでしょうか！この好機を活かして、キリストのために死んで、その永遠の命に一刻も早く到達するよう、もっと努力しないのでしょうか。兄弟たちよ、主の祭壇を見上げ、私たちの真の主であり神である方が、今、私たちのためにその上で犠牲として捧げられていることを悟ってください。　私たちもまた、この聖なる場所で、主のために私たちの魂を捧げようではありませんか。そして、ある種のいけにえのように、それらを全焼のいけにえとして主に捧げようではありませんか。

[365] すなわち、アナニア、アザリヤ、ミサイア（ダニエル書3章）のことであり、彼らの記念日は12月17日である。

聖なる大助祭はそう語り、皆はキリストのために死のうという熱意に燃え上がり、声を揃えて叫んだ。

「我らはキリスト者、我らはキリスト者である、王よ。お前の偽りの神々を崇めることは決してない！」

このことがマクシミアヌスに伝えられると、彼は教会とそこにいたすべてのキリスト教徒を焼き払うよう命じた。その間、信者たちは教会に集まっていたすべての洗礼志願者を集め、彼らに聖なる洗礼を一刻も早く授けるために四つのグループに分けました。　洗礼と堅信式が執り行われた後、全員が聖体拝領を受けた。その最中、不敬虔な王の命令により、兵士たちは教会の周囲に積まれた小枝や藁に火を放った。教会の壁はすぐに燃え上がり、四方から教会を取り囲んだ大炎は天へと立ち上り、内部に侵入してすべてを瞬く間に焼き尽くしていった。　焼かれるキリスト教徒たちは、三人の若者の歌を詠み上げ、あらゆる被造物に賛美を唱えるよう呼びかけながら、神に向かって大声で叫んだ。そして、彼らが賛美を終える間もなく、聖なる魂を主の御手に委ね、平和のために屠られた汚れなき小羊への喜ばれるいけにえとした。　焼死者の数は二万人に達した。こうして、聖なる殉教者たちの栄光に満ちた軍勢は、戦いの教会から勝利の教会へと移り、果てしない喜びの祝祭を祝うこととなった。

五日が過ぎても、火はなおも教会の残骸を焼き続け、煙が立ち上っていた。しかし、焼かれた遺体からは悪臭がするどころか、その煙は何か尋常ではない、芳しい香りを放っていた。　焼け跡から漂う素晴らしい芳香が空気に満ち、東の空に太陽が昇る時のような黄金色の輝きが見えた。一方、マクシミアヌスは、街にいたキリスト教徒をすべて滅ぼし尽くしたと思い込み、競技や馬の闘技、様々な見世物に興じていた。

ニコミディアには、その見世物が繰り広げられていた場所の近くに、異教の女神ケレラ（366）を祀る巨大な神殿があった。ある日、マクシミアヌス帝は全軍と民衆を率いてその神殿を訪れ、女神に生贄を捧げていた。　その時、ジノンという名の将校の一人が、真の信仰への熱意に駆られ、そのような不敬な見世物を許すことができず、高い場所に立ち、皇帝に向かってこう叫んだ。

「王よ、あなたは感覚のない石や声なき木に犠牲を捧げることで、誤った道を歩んでいる。これはまさに悪魔の欺瞞であり、その崇拝者たちを破滅へと導くものである。よく考えよ、マクシミアンよ。肉体の目と霊的な目を合わせて天を仰ぎ、目に見える被造物からその創造主を知りなさい。被造物を通して、その創造主がどのようなお方であるかを悟り、血や言葉を持たない動物の犠牲の煙ではなく、汚れなき人間の魂と清らかな心をお喜びになる神を、敬虔に崇めることを学べ！

これを聞いたマクシミアヌスは、ジノンの口を石で砕き、顔と歯を打ち砕くよう命じ、その後、かろうじて息のある状態で城外へ連れ出し、剣で殺害させた。こうして、聖殉教者ジノンは殉教の冠を戴いた。

その間、聖ドロフェイはインディスや他の仲間たちと共に、足枷をはめられたまま座していた。至福のアンフィム司教は、自身の隠れ家から頻繁に手紙を送って彼らを訪ね、彼らを励まし、信仰において堅固であるよう諭し、偉業に挑むよう鼓舞した。　ある日、不信心者たちは、アンフィムからの書簡を携えて殉教者たちのもとへ向かっていた助祭テオフィロスを捕らえ、王のもとに連行した。司教の書簡を読み終えると、王は激怒した。そこには、王の意にかなう内容ではなく、聖徒たちにとって有益なことが書かれていたからである。王は直ちにドロフェイとその仲間たちを自分の元へ連れてくるよう命じた。　彼らを怒りの眼差しで見つめ、叱責した後、アンフィモスの書簡を読ませた。一方、彼らは助祭の姿を見て心から喜び、遠くから明るい眼差しと喜びに満ちた表情で彼を迎え、聖人の言葉を心に刻み込んだ。助祭を怒りの眼差しで見つめ、王は威圧的な口調で彼に言った。

366　ケレラまたはデメテルは、ギリシャ・ローマ神話の農業と豊穣の女神である。彼女を称える祝祭は非常に広く行われていたが、その内容は不道徳なものだった。

「言え、この忌まわしい者よ、誰が君にこの手紙を渡したのか、そしてその者はどこに隠れているのか？」

助祭はまず心の中で神に祈りを捧げ、それから恐れずにこう答えた。

「この手紙を私に渡したのは、今や自分の群れから遠く離れていながらも、彼らを諭し、敬虔へと導いている牧者です。とりわけ今、狼や他の獣の襲来を知った彼は、自分の羊たちに対し、彼らがなすべきことを大声で命じ、告げ知らせています。　しかし、彼が告げている言葉は彼自身のものではなく、私たちの至高にして最初の羊飼いから借りたものです。その方はこう言われました。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはなりません。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきです」*（マタイ10:28）。　さて、私はすでに、誰が私にこのメッセージを授けたかをあなたに告げたが、それを送った者がどこにいるかについては、私は言わない。私の羊飼いの元からこれほど多くの恵みを受けた私が、その裏切り者になるなどということは、明らかな狂気である。　その人物は、私たちがいなくともすぐに明らかになるだろう。なぜなら、神の御声によって告げられたように、山の頂上にある町は隠れることができないからだ（マタイ5:14）。

助祭の大胆な言葉をこれ以上聞くに耐えられなくなった王は、直ちにその正直な舌を切り落とすよう命じ、その後、城の外で石や矢で彼を殺害させた。　その後、王は様々な拷問を用いて、残りの聖なる殉教者たちをも死に至らしめた。ドロテオスは首を刎ねられ、マルドニアは火あぶりにされ、ミグドニアは生きたまま穴に土を埋められ、ゴルゴニア、インディス、ペトロは首に石臼の石を縛り付けられて海に投げ込まれた。　こうして、キリストの勇敢な殉教者たちは、それぞれ異なる死に方をしたものの、同じ道を歩み、主なる神のもとへと旅立ったのである。

その間、聖ドムナはある山にある洞窟に身を隠し、洞窟の周囲に生えている植物を糧として暮らしていた。聖なる殉教者たちの死を耳にすると、彼女は、彼らがこの世の悲しみに満ちた生活という谷から、永遠の喜びに満ちた憧れの地へと移ったことを心から喜び、心を躍らせた。　とりわけ、彼女はインディスについて深く喜んだ。彼は、彼女にとって霊的な同志であり、洗礼を通じて共に霊的な新生を分かち合った兄弟であったからだ。自らを殉教の業に備え、天からの助けを祈りつつ、彼女は、彼ら全員の中で自分だけがまだ殉教という同じ道を通って主のもとへ旅立っていないことを嘆いた。　その後、彼女は山を下り、霊的な母アガフィアに着せてもらったあの男装のまま、町へと入った。探しに来た聖アガフィアの姿が見当たらず、ドムナは彼女が他の多くの乙女たちと共に教会で焼死してしまったことを悟り、苦々しく泣き崩れた。 彼女は 、アガフィアの死を嘆いたのではなく、キリストのために彼女と共に死ぬことができなかったことを悲しんだのである。そして、焼失した教会の跡地に立ち、ドムナは泣きじゃくり、その涙で灰を濡らした。夜が更けると、彼女はインディスや他の殉教者たちが溺死させられた海岸へと向かった。　すると、そこに立って漁網を準備していた漁師たちは、聖なる乙女を見て、その男装から男だと勘違いし、こう言った。

「おい、若者よ、ここに来て手伝ってくれ。何か釣れたら、君にも分け前をやるから。」

彼女は喜んで彼らの助けに向かった。漁網を投げ入れ、その後岸に引き上げようとしたとき、網の中にものすごい重みを感じ、それを陸に引きずり上げるのに苦労した。月は明るく照らしており、彼らは大量の魚と、その獲物の真ん中に横たわる三人の殉教者、ゴルゴニウス、インディス、そしてペトロの遺体を見つけた。　漁師たちは大きな恐怖に襲われ、急いで網と獲物をまとめ、遺体を地面に置くと、小舟に乗り込んで対岸へ逃げようと急いだ。彼らはその幻の青年にも同行を呼びかけたが、彼は彼らと一緒にいくことを拒んだ。　そこで彼らは、労いの印として捕れた魚の一部と少しのパンを彼に与え、その場を離れていった。一方、聖女ドムナは殉教者たちの遺体のそばに近づき、一人ひとりを、とりわけ最愛のインディスを認めるや、言葉に尽くせない喜びで彼らを抱きしめ、口づけし、その上にあふれんばかりの熱い涙を流した。　立ち上がると、彼女は海上に、帆を下ろし、櫂だけで岸に近づいてくる船を見かけた。　聖なる殉教者たちの遺体から離れ、ドムナは船に近づき、

船員たちに声をかけ、自分の魚を見せた。その魚が売られていると思い、買いたいと思った船長は値段を尋ねたが、ドムナは「ただで持って行ってください」と答えた。すると船長は戸惑いながら言った。

「キリストの御名にかけて、正直に言え。その魚をいくらで売るつもりだ？」

キリストの名を耳にした聖ドムナは、その船に乗っているのがキリスト教徒であることを悟り、聖なる殉教者たちの遺体について、彼らが受けたあらゆる拷問について、そして彼らの名前について彼らに語った。　すると船長は直ちに仲間たちと共に清らかな布と香油を持ち出し、聖人たちの遺体を包んで城壁へと運んだ。そこでは、川からほど近い門のそばで、聖ドロフェイが最期を迎えていた。そこで彼らは敬虔に殉教者たちの遺体を埋葬した。　ドムナが自分たちと同じ信仰を持っていることを知り、しかも彼女を少年に見間違えた船長は、彼女に自分と一緒に船に乗るよう懇願し始めた。

「私たちの生涯の終わりまで、ずっと一緒にいましょう」と彼は言った。

しかし、彼女は承諾せず、彼に旅を続けるよう告げた。

「私はここに残ります」と彼女は言った。「私の命の終わりはもう間近ですから。生前、精神と信仰によって結ばれていた聖人たちの遺体から、私の遺体が引き離されるのは望みません。」

そこで船長は、彼女に十分な量の金を渡した。それは肉体の必要のためではなく――彼女にはそのような必要はなかったから――聖人の墓を敬うための香や乳香を買うためであり、そして彼は自分の旅路へと出発した。一方、聖ドムナは昼夜を問わず殉教者たちの墓のそばに留まり、香を焚き、香りを捧げ、涙を流しながら祈りを捧げた。

しかし、光の業が闇の中を歩む者たちの前から隠されることなどあり得ず、また聖ドムナの殉教への願いが叶わぬままであることもなかった。なぜなら、彼女の聖さと敬虔さが、彼女を明らかにしていたからである。王のもとへ、ある若者がキリスト教徒の墓を巡り、香を焚いているという報告が届いた。王は笑いながら言った。

「彼もまた、彼らと同じ死を遂げるべきだ。そうすれば、死後にはもはや何の意味も持たない者たちに、そのような敬意を払うことがいかに無意味であるかを、身をもって知るだろう。」

そう言うと、彼は直ちに彼女を斬首するよう命じた。そして、聖ドムナは聖なる殉教者たちの墓の前で祈りを捧げていた最中に、剣で殺害された。　彼女の尊い遺体は、不信心者たちによって火で焼かれた。ちょうどその頃、長い拷問の末、聖殉教者エウフィミオスも剣で殺された。こうしてニコミディアは、殉教者たちを星のように輝かせ、驚くべきグリケリウス、至福のジノン、テオフィロスによってその数を二万人に満たした。　彼らに加え、ドロフェイ、マルドニオス、ミグドニオス、インディス、ゴルゴニオス[367]　、ペトロス、そして三人の聖なる処女アガフィア、テオフィラ、美しいドムナも加わった。そして、この聖人たちの列を締めくくったのは、真の神であるキリストの栄光のために殉教したエウフィミオスであった。父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光と誉れあれ。アーメン。

トロパリオ、第2調：

主の受難の殉教者たちよ、あなたがたの血に潤された大地は幸いであり、あなたがたの御体を宿したこの地は聖なるものです。あなたがたは戦いの業において敵に打ち勝ち、大胆にキリストを宣べ伝えました。その御方に対し、私たちの魂が救われるよう、善き方として祈ってください。

[367] 聖殉教者ゴルゴニウスの聖遺骨は、後にローマへ移された。

コンダク、第2調：

聖なる信仰によって魂を堅くし、苦難の炎を受け入れ、二つの闇を耐え忍び、聖母より生まれし御方に叫び求めた殉教者たちよ。ペルシャの王たちの献げ物、すなわち金と没薬とレバノン香のように、あなたのために捧げる私たちの全焼の捧げ物を受け入れてください、永遠の神よ。

1月11日

12月29日（旧暦）

ヘロデ王によってベツレヘムで殺害された1万4千人の幼児の記念日

12月29日の記念日

ヘロデは、東方の三博士に嘲笑されたのを見て、大いに怒った（マタイ2:16）。では、彼は誰に対して怒ったのか。一方では、彼を嘲笑した東方の三博士に対して、他方では、生まれたばかりのユダヤの王に対してである。　東方の三博士に対しては、彼らが自分のもとに戻ってこず、幼子について報告しなかったことに怒り、キリストに対しては、キリストが自分の王国を奪い取るのではないかと恐れて怒った。なぜなら、キリストの王国が*「この世のものではない」*（ヨハネ18:36）ことを知らず、　ヘロデは、キリストがこの世の王国を支配するだろうと考えていた。では、すでに去ってしまった東方の三博士に復讐することも、見つけることのできないキリストを殺すこともできなかった、この忌まわしいヘロデは、いったい何をしたのか。彼は、罪のない幼子たちに怒りをぶつけたのである。　凶暴な獣が傷つけられたとき、しばしば自分を傷つけた相手を見もせず、目の前にあるものにまっすぐに飛びかかり、怒りに任せて、あたかもその傷の原因であるかのようにそれを引き裂くように、　それと同じように、怒りに苛まれ、その怒りの原因となる者を見つけられなかったヘロデは、自分に対して何の罪もない幼子たちにその怒りを向けました。　彼は、まるで戦争に出るかの如く武装した兵士たちを遣わし、*「東方の博士たちから聞き出した時期に基づき、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下のすべての幼児を殺し尽くす」*ように命じた（マタイ2:16）。ヘロデは、東方の三博士が指摘した星の出現時期を覚えていた。聖金口ヨハネや聖テオフィラクトの解釈によれば、その星はキリストの降誕よりも前に現れたという。しかし、具体的にはどれくらいの期間前だったのだろうか。もしそれが受胎告知のまさにその瞬間に現れたとすれば、聖母マリアへの受胎告知からキリストの降誕までには九ヶ月が経過していたことになる。　しかし、東方の三博士はまさに降誕の日にエルサレムに到着し、ベツレヘムでキリストに礼拝を捧げた後、別の道を通って自国へと帰っていった。　そのため、ヘロデ王は彼らに嘲笑されたことをすぐには気づかず、当初は、彼らが探していた幼子を見つけられず、自らの過ちを恥じて、自分の元へ現れることを恐れ、恥じ入りながら密かに故郷へ戻ったのだと考えていた。　その後、四十日が経った頃、ソロモンの神殿で輝かしい出来事が起こった。長老シメオンと預言者アンナは、清めの日に聖母マリアによって連れてこられた神聖な幼子[368]　とここで出会い、キリストについて証しし、民衆に彼について多くの福音を明らかに宣べ伝えた。　主の奉献の日に神殿で起こったすべての出来事の噂は、エルサレム中に広まり、王の耳にも届いた。　そこでヘロデは、これこそがまさに探していた幼子であり、賢者たちがベツレヘムで見つけた新生王について語ったことが真実であったと悟った。しかし、賢者たちはヘロデの権威を軽んじて

[368]　モーセの律法によれば、乳児の母（乳児が男児の場合は40日後、女児の場合は80日後）は、神殿の祭司のもとへ行き、1歳の小羊か鳩2羽を神へのいけにえとして捧げなければならなかった。この儀式は「清め」と呼ばれた。　（レビ記12:2–5）

、彼のもとへ戻らなかった。 不法なヘロデは並外れて激怒した。彼は直ちに、 狡猾さと秘密の策略を用いて幼子を見つけ出そうとしたが、ヨセフが幻を見た直後に幼子と共にエジプトへ逃げていたため、見つけることはできなかった。ヘロデがキリストを見つけ出そうとする試みは一年にわたり続いた。　その後、何らかの理由でローマのカエサルのもとへ赴く必要が生じたが、ヘロデは、まだ探していた幼子を見つけられていないことに大いに動揺していた。というのも、自分の不在の間に、新たな王が現れて民衆から称賛され、ユダヤの王国を奪われてしまうのではないかと恐れていたからである。　そこで彼は直ちに、ベツレヘムのすべての幼児を殺害し、それによって生まれた王をも共に滅ぼそうと心に決めた。そして、この不法な幼児虐殺は、キリスト降誕の初年、12月29日に行われた。この日、教会では虐殺された幼児たちの追悼を祝うことが慣例となっている。　星が現れてから、その時点で一年九ヶ月が経過していた。また、ヘロデが二歳以下の乳児を殺害したのは、恐怖心からであり、より確実な安全を確保するためであった。　聖ザラトウストは次のように述べている。「ヘロデが2歳以下の乳児を殺害するよう命じたことを不思議に思うな。拷問者の中には怒りと恐怖が入り混じっていたのだ。それゆえ、ヘロデは極めて慎重になり、大きな恐怖から、それより年長の者たちまでも殺害の対象としたのである」。 これに沿って、エウフィミオスも次のように述べている[369]：「ヘロデは、星が東方の三博士の前に即座に現れたのではなく、その出現よりずっと前に幼子が生まれたと考えていた。より確実を期すため、彼は時期を2年早めるよう命じたのである」。

乳児たちは様々な方法で殺された。ある者は剣で斬られ、ある者は石や壁に叩きつけられ、またある者は地面に投げつけられて足で踏みつけられ、手で絞め殺され、引き裂かれてバラバラにされ、刺し貫かれ、真っ二つに切り裂かれた。母親たちは苦々しく泣き叫び、その大きな叫び声は天にまで届いた。　彼女たちは髪や衣服を引き裂き、自らを痛めつけた。それゆえ、預言者エレミヤの言葉が成就したのである。*「ラマで声が聞こえる。泣き声と嗚咽と大きな叫び声。ラケルは自分の子供たちのために泣き、慰めを受け入れようとしない。彼らはもういないからだ」*（エレミヤ31:15；マタイ2:18）。

ラマとは、ベニヤミン族の領内にある丘の上に位置する町の名称であった。一方、ラケルについては、ある人々はそれをベツレヘムと呼んでいた。なぜなら、そこには族長ヤコブの妻であり、ベニヤミンの母であるラケルが埋葬されていたからである。彼女の墓に由来して、ベツレヘムはラケルの名で呼ばれるようになった。　そこで、ラケレ、すなわちベツレヘムで乳児たちが虐殺されたとき、ベツレヘムからそれほど遠くないラマの町でも、殺された子供たちを悼んで泣く母親たちの泣き声、すすり泣き、そして激しい叫び声が聞こえたのである。　この泣き声については、二人の聖ヨハネ、すなわち「金口」ヨハネとダマスコのヨハネが、それぞれその一部を描写している。そのうちの最初の聖ヨハネは、次のように語っている。

それを見て、母親たちは殺人者たちにこう尋ねた。

「なぜ私たちの子供たちを殺すのですか？　彼らは王様やあなたたちに、どんな恨みでも抱いていたというのですか？」

しかし、なぜこの無意味な殺戮が行われているのかと答える者は誰一人おらず、この大きな悲しみの中で彼女たちを慰める者もいなかった。彼女たちは悲鳴を上げて兵士たちに訴えかけた。

「私たちを憐れんでください、憐れんでください！　あなたたち自身にも母親はいないのですか？ 母の愛を知らないのですか？ 妻はいないのですか？ あなたたちも母親に愛されて育ったのではないのですか？ 自分の子供たちにも同じことが起こるのではないかと恐れないのですか？ 私たちを憐れんでください！　私たちの子供たちを奪わないでください。まずは私たち自身を殺してください

[369] エウフィミオス・ジガベンは、12世紀のビザンツの神学者である。異端史や、四福音書、詩篇、雅歌の注解を著した。

。子供たちの死など、私たちには耐えられないのです！私たち自身を刺し殺してください！もし私たちの子供たちがあなたたちに何か悪事を働いたのなら、私たちも子供たちと共に死なせてください！

こうして彼女たちは心の底からの苦悩に叫び、悲しみに狂い、恥を忘れて衣服を引き裂き、嘆きから胸を打ち、顔を抉り、髪を引きちぎり、天を証人として呼び求め、神にこう訴えた。

「おお、我らの主よ、神よ！　王のこの甚だしい残虐さとは何のことでしょうか。彼はあなたの御業に逆らっています。あなたが創造されたものを、彼は殺し、あなたが私たちに与えてくださった子供たちを、彼は私たちから奪い去るのです！　もし私たちの赤ん坊たちがこれほど残酷な死に遭わなければならないのなら、なぜ私たちは男の子たちをこの世に生み出したのでしょうか？」

聖ヨハネス・ダマスコスは、この嘆きについて次のように語っている。　子供たちを産む際の苦しみを耐え抜いた母たちは、殺された乳児たちの遺体のそばに座り、髪を解き放ち、天に向かって両手を挙げ、自らの髪を引っ張り、その髪に土をまき散らし、天を証人として呼び求め、涙を流しながら、まるでそこにいるかのように、不在のヘロデ王に向かってこう語ったのです：

「王よ、私たちに向けられたこの命令は、いったいどういう意味なのでしょうか？あなたは自分の子供たちの父親ではないのですか？親が子供たちに抱く愛がいかに大きいか、あなたは知らないのですか？星があなたを侮辱したのですか？それなら、なぜあなたは矢を天に向けて放たず、私たちの乳首から乳を枯らしてしまうのですか？　東方の三博士が、　、あなたに害を与えたというのか？それなら、なぜペルシャと戦わず、ベツレヘムの子供たちを殺すのか？　もし新しい王が生まれ、あなたが書物からそのことを知ったのなら、ガブリエルを捕らえて牢獄に閉じ込めよ。

まもなく、十四千人にのぼる聖なる幼子たちが虐殺された後、神の裁きは、その殺人者であるヘロデ王自身をも襲った。　聖テオフィラクトが語るように、彼の最期は残酷なものだった。高熱と内臓の病、足の腫れ、鼻孔の閉塞、全身の震え、そして四肢の崩壊に苛まれ、悪辣な王は虫に食われながら、恐ろしい苦痛のうちに息を引き取った。　また、ベツレヘムの乳児たちを虐殺しただけでは満足できず、最期の瞬間においても、エルサレムの最も高貴で名高い市民たちを数多く処刑したとも伝えられている。こうして彼は、ユダヤ人の大祭司ヒルカンを処刑したほか、以前「　「キリストはどこで生まれるべきか？」と尋ね、彼に「ユダヤのベツレヘムで」と答えた者たちをすべて処刑した。

その後、彼は彼ら全員を剣で殺害した。そしてこれは彼らにとって神の義なる裁きであり、エジプトで天使がヨセフに告げた通り、彼らは皆、ヘロデと共に激しい苦しみの中で息を引き取った。

「幼子を探していた者たちは死んだ。」

明らかに、キリストの幼子を探し求めたのはヘロデ一人だけではなく、彼のすべての顧問、大祭司、律法学者たちであった。それゆえ、死んだのはヘロデ一人だけではなく、彼と共に幼子の命を探し求めた者たち全員であった。幼子は神ご自身によって殺されたが、彼らはヘロデによって殺害されたのである。　彼らが共感した相手によって、彼らは残酷な最期を遂げたのである。そして、彼ら全員がキリストを殺そうとしており、ヘロデと心を一つにしていたことは、次のことから明らかである：　神殿や民衆の前でキリストについて証しをした、義人であり神を受け入れた長老シメオンが亡くなった際、彼らは、これほど聖なる人物、至賢なる師、先見の明ある預言者、そして万人に尊敬される長老にふさわしい、尊厳ある埋葬を彼に施すことを拒んだのである。　また、彼らは聖なる預言者ザカリアをも死に追いやった。それは、既婚女性が立つべきではない処女たちの場所に、幼子と共に清めの儀式のために神殿に入った聖母マリアを立たせたからである。このことについては、グリゴリオス・ニッサス、キリロス・アレクサンドリアス、アンドレイ・クリティスが言及している。

これを目にした律法学者やパリサイ人たちは激怒したが、ザカリアは彼らに立ち向かい、この御母が御子をお産した後もなお清らかな処女のままであることを証しした。　彼らは彼を信じようとしなかったが、そこで聖人は、人間の性質はあらゆる被造物と同様にその創造主に服従しており、創

造主の全能の御心によって、御自身の被造物を御自身の御意のままに整え、処女が子を産んでも、出産後もなお処女であり続けるようにすることができるのだと語った。

「それゆえ」と彼は言った。「私はこの母を、真の処女として、乙女たちの仲間に加えたのである。」

律法学者たちは、ザカリアを明らかな律法違反者として心の中で激しく憤り、嫉妬に駆られて、幼子のお母様が処女たちの列に加えられたこと、そして幼子についてそのような証言がなされたことの両方に怒りを燃やした。　彼らはヘロデの前でその感情を隠さず、彼に露わにし、直ちに幼子を探し始めたが、見つけることはできなかった。というのも、その間にヨセフがマリアを連れてエジプトへ逃げていたからである。　それ以来、律法学者たちは聖ザカリアに対して激しい怒りを抱くようになり、彼と共に、長老シメオンに対しても怒りを向けた。シメオンはまもなく亡くなったが、彼らは彼にふさわしい埋葬を施さなかった。一方、ザカリアはその後、彼らの要請により、ヘロデによって死刑を宣告された。　ベツレヘムの幼児虐殺の際、聖ザカリアは、息子のヨハネを殺害に差し出さなかったという理由で、教会と祭壇の間で殺害された。こうして、律法学者たちとファリサイ派の人々は、聖母マリアについての彼の証言と、彼女を神殿の乙女たちの場所に置いたことに対して、彼に復讐したのだ。　まもなく、彼ら自身も、自らの王であるヘロデの手によって当然の処刑を受けた。彼らが他人に用いた尺度で、彼ら自身も測られたのである。彼らとは別に、ヘロデによって、シネドリオン（[370]　）と呼ばれる集まりに属する70人の最も賢明な男たちも斬首された。その中からただ一人だけを生かしておいたが、その者にも両目を潰すよう命じた。　当時、エルサレムには、極めて賢明で、名高く、万人に愛された二人の教師がいた。アヴリフェイと呼ばれるユダと、マタイ・ガルグロエイである。ヘロデは彼らを、友人たち数名と共に生きたまま焼き殺すよう命じた。しかし、それよりもさらに以前、ヘロデは自らの家族に対して猛烈な弾圧を加えていた。　弟のフェロル、妹のサロメ、そしてダビデの家系に属する彼女の夫、自身の妻である　マリアムナ――彼女もまたダビデの家系に属していた[371]　――、彼女との間に生まれた息子アンティパトラ、さらに二人の息子アリストヴロスとアレクサンドロス、その他多くの者を、何の罪もないまま死に追いやった。　ついに、死の床に就いたヘロデは、最も忠実な兵士たちに、まだ数多く鎖につながれて囚われている他のユダヤ人の名士たちについて、次のように遺言した。すなわち、彼が息を引き取った際には、兵士たちは直ちにこれらすべての囚人を殺害せよ、と。　ユダヤ人たちが彼の死を喜ぶことなく、むしろこれほど多くの同胞が殺されたのを見て嘆き悲しむようにと[372]　。こうして、悪人は自らもまた邪悪な死を遂げ、多くの者を共に滅ぼした。彼は、志を同じくする者たちと共に、黄泉の底へと落ちた。　一方、キリストのために殺された聖なる幼子たちは、天使たちと共に天に迎え入れられた。なぜなら、このような子供たちのこそ、まことに天の御国（ルカ18:16）に属するからである。私たちの主キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

「眠らぬ修道院」の修道院長、私たちの尊き父マルケルの生涯

記念日：12月29日

聖マルケルはシリアのアパメアという町出身で、名門かつ裕福なキリスト教徒の家庭に生まれました。幼い頃に両親を亡くした彼は、偉大なるアンティオキアへと赴き、そこで様々な学問を学び

---

[370]　サンヘドリン――ユダヤ人の最高裁判所であり、国家の政務も管轄していた。70～72名のメンバーで構成され、大祭司の主宰の下で集まっていた。

[371]　ヘロデは、ダビデの子孫からメシアが生まれるという預言を知っていた。そのため、彼は同時代のダビデの子孫をすべて根絶やしにしようと努め、自分の親族さえも容赦しなかった。

[372] 幸いなことに、この命令は実行されなかった。

ました。やがてそれらを完全に習得すると、内面的で霊的な知恵も得たいという願いに燃えるようになりました。　そのためにマルケルは、徳に優れた人々が数多くいると聞いていたエフェソスへ向かうことを決意した。アンティオキアを出発すると、彼はまず、アパメアで所有していた父からの豊かな遺産をすべて貧しい人々に施し、このようにして世俗のすべてを捨て去り、まもなくエフェソスに到着した。　そこで敬虔なある人の家に身を寄せ、最高の霊的完成に達していたプロモトスという人物の指導の下、徳の修練に励み始めた。そして、至福のマルケルは、彼やエフェソスの他の聖なる人々の徳ある生き様を見つめることで、大きな霊的恩恵を受けた。　まるで様々な花で冠を編むかのように、彼は神に喜ばれる生き方の様々な模範を眼前にして、様々な徳を学んでいった。　自発的な貧しさの中で暮らし、自らの労働によって肉体の必要を満たしていた。美しい文字を書く才能に恵まれていた彼は、夜を祈りに、昼を写本に費やした。それらの写本は適正な価格で売り、その収益の一部を自身の生活費に充て、残りを貧しい人々に施した。これが、彼の徳ある生活の始まりであった。
その後、ビザンティウムに、行いと言葉において極めて賢明で偉大であり、多くの人々を救いへと導くことのできるあるアッバ・アレクサンドロス[373]　が住んでいると聞き、マルケルはエフェソスを離れ、急いで彼の元へ向かった。　当時、聖アレクサンドルは聖ミナの教会で兄弟たちと共に暮らしていたが、後に彼は海辺に有名な修道院を建立し、そこで昼夜を問わず絶え間ない詩篇の詠唱によって神を賛美するよう命じる新しい規則を導入した。兄弟たちは教会で、時間ごとに交代しながら歌を歌っていた。　ビザンティウムに到着したマルケルは、この修道院のヤコブという名の修道士と知り合い、彼に連れられてアバ・アレクサンドルの元へ行った。　アッバは、彼の中に神の恵みを見出し、彼に修道服を授け、マルケルとヤコブについて、彼らが多くの神聖な賜物に恵まれるだろうと予言した。すなわち、二人のことについて、彼は次のように語った。

「アンドレイは最初にキリストの足跡をたどったが、ヨハネが彼に追いついた。」

彼はヤコブをアンドレイと呼び、マルケルをヨハネと呼んだ。というのも、両者が等しく神への熱意に燃えているのを見たからである。ヤコブは使徒アンドレイのように、いち早くキリストの軛を背負ったが、マルケルは使徒ヨハネのように、多くの賜物において彼を上回っていた。　そしてマルケルは、その汚れなき貞潔と神に導かれた英知によって、まさに聖ヨハネ――処女であり神学者――に似ていた。　この修道院で十分な期間修業を積んだマルケルは、先見の明という賜物を授かり、師であるアバ・アレクサンドルの死が間近であることを予見し、またアバの死後、修道院長職の栄誉 が自分に与えられることも見抜いたため、マルケルは密かに修道院を去った。 まだ若かった彼は、年長者たちを統率したり、配下を置いたりすることを望まず、自ら誰かの指導下にあることを好んだ。彼は周辺の地域を巡り歩き、様々な形で修行に励む修道父たちを訪ね、その一人ひとりから特別な恩恵を受けた。　その間、聖アレクサンドルは主のもとへ召された。修道院の兄弟たちは皆、満場一致でマルケルを後任に望んだが、どこを探しても彼が見つからず、深く嘆いた。マルケルが見つからなかったため、彼らはあるヨハネという、高齢で分別のある人物を修道院の長に任命した。　この選出を知った聖マルケルは、直ちに自分の修道院に戻り、修道院の兄弟たちは皆、彼の帰還を喜んだ。アバ・ヨハネは彼を深く愛していた。なぜなら、彼はまるで右腕のように、アバ・ヨハネにとって非常に頼りになる存在だったからである。　しばらくして、アッバ・ヨハネは修道院を、より人里離れた場所、ビフィニアの[374] 、ソスフェニアの町[375] の対岸にある「イリネウム」と呼ばれる場所に移した。「イリネウム」とは「平和な」という意味であり、世間の噂や喧騒から離れたこの場所は、修

[373] その記念日は2月23日である。「アッバ」とはヘブライ語で「父」を意味し、東方では修道生活の指導者をそう呼んでいた。
[374] ビフィニア――小アジアの地域で、黒海とマルマラ海の沿岸に位置し、主要都市はニコメディアである。
[375] ソスフェニオスは、コンスタンティノープルの近郊に位置する小さな町である。

道士たちにとってまさに平和な避難所であった。　移転後の修道院においても、聖アレクサンドロスによって定められた従来の規則が変わらずに守られ、修道士たちは昼夜を問わず交代で教会において神を賛美するよう命じられていた。この規則ゆえに、修道院は「眠らぬ者たちの修道院」という名称で呼ばれていた。　新しい場所での建設工事全般および修道院の運営は、あらゆる事柄において忠実で手腕に長けた人物であるマルケルに委ねられた。まもなく彼は修道院の最高責任者となることになっていたが、それは彼自身がその先見の明ある目で予見していたことであり、また神によって修道会の兄弟たちの何人かに明らかにされていたことでもあった。　近隣の修道院のイグメンであるマケドニオス（ドゥホボルツ（霊闘者）であったマケドニオスではなく、別の者である。前者は「[376]　（神に拒まれた者たち）」の一人であったが、後者は「敬虔な者たち」の一人であった）、　先見の明のある人物であったが、彼は尊者マルケルに対し、彼が言葉の群れの牧者となるだけでなく、その徳高い生活と聖性ゆえに、その名そのものが全地に称えられるようになると予言した。

「多くのギリシア人や異邦人――」と彼は言った。「彼に教えられた者たちは、先祖代々の迷いを捨てて神に立ち返り、神は彼を通して栄光を受けるであろう。」

一方、聖マルケルは極めて謙虚な人物であり、修道院のロバの世話を自ら行うことさえ厭わなかった。そのため、言葉を持つ羊の群れの牧者となるにふさわしい彼に対し、兄弟たちはようやく懇願して、言葉を持たない動物の世話をやめるよう説得することに成功した。

ほどなくして、アッバ・ヨハネは主のもとへ召され、至福のマルケルは「眠らぬ者たちの修道院」の修道院長に任命された。彼は貧しい者たちに非常に慈愛深く、毎日、多くの飢えた人々を養った。そして神は、彼の善き奉仕を助けてくださった。　かつて主が五千人の人々を養うために五つのパンと二匹の魚を増やされたように（マタイ14:18–21）、マルケルの修道院でも、わずかな食糧が不可視かつ奇跡的に増え続け、修道者たちだけでなく、多くの貧者や旅人の日々の糧にも十分足りるほどであった。これについては後ほど詳述される。

マルケルの「霊的な群れ」は増え続け、修道士たちの数も日々増えていった。マルケルの徳に惹かれて彼のもとに集まったこれほど多くの霊的な人々のためには、より広々とした敷地、より広大な礼拝堂、大量の食糧備蓄、そして人間の生活に必要なその他の物資が必要となった。　一方、マルケルは当時、乞食たちの糧食のためにすべての財産を使い果たしていた。しかし、聖人が全き信頼を寄せていた神は、御自身の僕たちを見捨てず、次のようにして必要なものをすべて与えてくださった。

ファレトリウスという名の、大いなる富を持つ男がいた。　敬虔な生活を愛するようになった彼は、まだ幼い二人の息子を連れて聖マルケルのもとを訪れ、修道士になりたいという願いを表明した。彼は自分の全財産を修道院に寄付し、まもなく二人の息子と共に修道士の位を授かった。　彼が寄進した土地には、まず美しく広々とした新しい石造りの教会が建てられ、続いて修道院の塀全体が改築され、多くの新しい修道室が建てられ、老朽化した修道室は改修された。さらに、病院や旅人宿も設けられ、必要な施設の建設はすべて完了した。　修道院のための食料、衣類、その他の必需品も、ファレトリオが寄進した資金によって調達された。かくして、神　、すなわち摂理者なる神は、信徒たちを顧みておられる。*「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる」*（マタイ6:33）。そして、聖マルケッロと、その修道院で確立された絶え間ない賛美の誉れは至る所に広まり、多くの人々がこの規律に倣い、自らの修道院に導入するとともに、聖マルケッロに指導を請うた。　そして、エデムから川が流れ出たように[377]　、マルケルの修道院からも、さ

---

[376]　異端者マケドニウスは、聖霊を神として認めず、父と子の神性および栄光に参与しない被造物であると見なした。マケドニウスの異端は、381年の第2回全地公会議で非難された。

[377] つまり、最初の人類の楽園のことである。そこから4つの川が流れ出ていた：フィソン、ギホン、ティグリス、そしてユーフラテス（創世記2:10–14参照）。

まざまな国や都市にあるすべての修道院へと、修道生活の規則や慣習、そして絶え間ない教会賛美が広まっていった。　どの修道院でも、マルケルの修道院出身の修道士たちが院長を務め、至る所で「眠らぬ者たちの修道院」の規律が守られていた。というのも、マルケルは、その国に存在するすべての修道院の規律の最高責任者であり、大修道院長であり、法制定者であり、管理者であったからである。　そして、多くのギリシャ人や異教徒が、前述の先見の明を持つマケドニアの預言に従い、マルケルの教えによって真の神へと回心した。こうして、昼夜を問わず神を賛美する地上の天使たちの数は、ますます増えていった。

さて、ここで尊者マルケルの奇跡についても語らなければならない。

ある三人の司教が野蛮人に捕らえられていたが、捕虜から解放されて故郷へ帰る途中、その道が敬虔なるマルケッロの修道院のそばを通っていたため、彼らは道から外れて彼の元を訪れた。　聖マルケルは彼らを愛情を込めて迎え入れ、安らぎを与えた。そして、彼らが帰路につこうとしたとき、非常に貧しい人々である彼らに、旅の糧として何かを与えたいと考えた。ユリアナという名の会計係を呼び寄せ、聖マルケルは貯蔵庫にいくらのお金があるかと尋ねた。

「銀貨十枚です[378]」と、彼は答えた。

そこでマルケルは、その全額を三人の司教たちに渡すよう命じたが、会計係は行って、一人につき銀貨一枚ずつしか渡さず、残りは修道院の必要のために留保してしまった。　聖人は霊によってこのことを見抜き、会計係を呼びつけて、残りの銀貨も必ず司教たちに渡すよう命じた。そこで会計係は彼らにさらに2枚ずつ渡し、こうして9枚を使い果たしたものの、10枚目はやはり手元に残しておいた。これは、毎日修道院を訪れる貧しい人々のためにそうしたのである。　その後、ある敬虔な人が、御霊に導かれて尊者のもとにやって来て、修道院の必要のために九十タラント[379]　の金を献じた。そこで、尊者マルケルは会計係のユリアヌスを呼びつけ、怒りを込めて彼の吝嗇を非難し始めた。

「見よ、神はこの敬虔な人の手を通じて、私たちに百タラントを送ろうとしておられた。しかし、お前が私の命令に背いて銀貨一枚を横取りしたため、私たちに百倍の報いを与えようとしておられた私たちの共通の摂理者は、私たちから十タラントを奪い取ってしまったのだ。」

恥じ入った会計係は、彼の足元にひれ伏し、許しを請いました。

また、この聖人は病める者を癒す恵みも備えていた。彼は、口の中に痛みを伴う腫瘍を抱えていた修道士エルピディオを、ただ触れただけで癒した。　また、彼はその触れる力によって、激しい胃の病に苦しみ、いかなる治療も効かず、すでに生きる希望を失っていた修道士ステファノを癒やした。聖人は彼の腹と背骨に触れることで、彼を癒やしたのである。　前述の会計係ユリアンが病に倒れ、すでに死の淵に近づいていたとき、聖人は彼に、魂と肉体の両面における癒やしを与えた。　まず、修道院長（イグメン）の命令に背かず、一時的な富に頼らず、すべての人を等しく顧みてくださる神に信頼するよう彼に教えた。こうして彼の魂を正した後、聖人は彼の肉体の病も癒やした。

さらに驚くべき出来事についても語っておくべきである。　あるユダヤ人が不治の病に苦しんでいた。彼の体には悪臭を放つ潰瘍ができていた。医師たちのあらゆる治療法がすでに無力であることが判明し、患者が治癒を絶望したとき、彼は最後の希望として、この迅速で無私無欲な治療者である聖マルケッロに助けを求めた。　聖人はそのユダヤ人に信仰について尋ね、彼の不信心を知ると、まず不信心を捨ててキリスト教の信仰を受け入れなければ、癒やしを得ることはできないと告げました。　ユダヤ人は、癒やしを得次第、直ちにキリストに帰依すると約束した。その懇願に心を動かされた長老は、自らの祈りによって病人を癒やし、癒やされた男は直ちにキリスト教の信仰を受け入れた。しかし、まだ四日も経たないうちに、ユダヤ人は再び不敬虔な生活に戻ってしまった。　かつての病もまた彼に戻ってきた。信仰に続いて癒やしが訪れたのと同様に、　、背教の後に再びかつての

[378] 1シルバー（銀のディナール）は22コペイカに相当した。

[379] タラントはおよそ1500ルーブルに相当した。

病が襲ったのである。　意に反して再び聖人に助けを求めることを余儀なくされた彼は、再び不敬虔な行いを捨て、敬虔な生活に戻り、悪意のない父の慈悲に身を委ねた。　再び癒やしを受けた彼は、数日後、また「*豚が泥の中に転げ回るように*」（IIペトロ2:22）と、以前と同じ過ちを犯し、さらに過酷な病に襲われた。

さて、その不信心者はどうしたか。彼は再び恥知らずにも聖人に助けを求めた。こうして、そのことが何度か繰り返された。ついに、聖人は彼にこう言った。

「知れ、人よ。あなたが欺いているのは私ではなく、キリストである。なぜなら、あなたを癒やしているのは私ではなく、キリストだからだ。そして、あなたは、口ではキリストを敬いながら、心ではキリストから遠く離れている（マタイ15:8）という、あなたの心の不義を、キリストのすべてを見通す御目から隠すことはできない。　――口では敬虔を公言しながら、実際には以前の不義へと傾いているのだ。いかなる偽りもなく、心を尽くしてキリストに立ち返りなさい。そうすれば、あなたはたちまち癒やされるだろう。肉体だけでなく、魂までもが癒やされるのだ。

しかし、不敬虔で愚かなユダヤ人は聖人にこう答えた。

– どんな苦しみを味わおうとも、先祖の信仰を決して捨てはしない。

この言葉を聞いた聖人は黙ってその場を去ったが、ユダヤ人は修道院から少し離れたところで突然倒れ、肉体も魂も死んでしまった。このことを知った聖父は涙を流し、こう言った。「*あなたがたの神、主を試してはならない*」（申命記6:16）。

さて、信者たちの癒やしに関する物語を続けよう。キルという名の男がいた。彼は後に修道生活において偉大な人物となり、多くの人々の益となり、信仰を強めることに貢献したが、修道に入る前は、並外れた体力と格闘の技に長けていた。　ところが、神の御許しにより、悪魔が彼を足先から頭頂まで膿病で襲った。かつてのヨブのように、彼の皮膚だけでなく、肉や腱までもが腐り果て、むき出しの骨だけが見える状態となった。この男の苦しみがいかに大きかったか――言葉では到底言い表せないほどであった。　そして、いかなる人間の治療法によっても彼は癒されることはなく、ただ神の御力によってのみ癒されることとなった。その神の御力を授ける者こそが、聖マルケルであった。病人が涙を流しながら彼のもとに駆け寄り、癒やしを懇願すると、聖人は直ちに天に向かって両手を挙げ、慣例に従って病人のために熱心な祈りを捧げた。　そして、その手のひらで患部に触れながら、こう言った。

「おお、善良な人よ！　このような苦しみによって打ち負かされるべきではない。また、目に見えない敵と戦っている者が、肉体のことを気にかけるのはふさわしくない。希望を持ちなさい。もしあなたが至高者をあなたの避難所として選ぶなら（詩編90:9）、この腫れ物はあなたの体の聖殿から去るだろう。」

聖人はそう語り、その病は直ちにその人から去った。　潰瘍は、エゼキエルの預言（エゼキエル38:8）に描かれているように、誰の目にも明らかなほど肉で覆われ始め、筋は修復され、関節は強くなり、皮膚で覆われていった。そして、キルは予想をはるかに超えて、急速に回復した。　そして、神の御使いは、神から与えられた恵みによって、自らの手で触れた人々だけでなく、遠く離れた人々に対しても、驚くべき癒やしをもたらした。

ある助祭エウゲニオスの妻は、出産の時を迎えていたが、産むことができず、医師も助産婦も彼女を助けることができなかった。すでに誰もが彼女の命を絶望視しており、彼女は意識を失ったまま横たわっていた。その時、夫である助祭エウゲニオスは、聖人の足元にひれ伏し、涙ながらに助けを懇願した。　聖人は祈りを捧げ、パンに祝福を授けてから、それを助祭に渡し、一刻も早く病める妻の胸の上に置くよう命じた。その指示が実行されるやいなや、妻は赤ん坊を産み、苦しみから解放された。

意識を取り戻すと、彼女はこう尋ねた。

「私の苦しみを和らげてくださった修道士はどこにいらっしゃるのですか？　私を死から救ってくださった方はどこにいらっしゃるのですか？」

彼女が言及している修道士が誰で、どのような顔立ちなのかという問いに対し、その女性は自分に現れた修道士の容貌を説明した。すると皆、それが彼女のもとに現れて死から救い出したのは、敬虔なマルケルであったことを知った。

この至福の父は、修道生活においてこれほどの完成度に達していたため、その清らかさと聖性ゆえに、天使たちが彼と共に暮らしていた。ユーフラテス川沿いにあるある修道院のイグメン（院長）[380]、セルギイは、その尊者について多くの話を聞いていたため、彼に会いに訪れたが、そこで目にしたものは、マルケルについて語られていた話よりも比べものにならないほど素晴らしいものだった。　ある日、二人が共に祈りを捧げていたとき、セルギイは、敬虔なマルケルがひざまずくと、二人の輝く天使が両　側から彼を支え、地面から持ち上げているのを見た。そして、祈りの最中、彼の顔は稲妻のように輝いていた。　これを見たセルギイは恐怖に震え上がり、その魂は恐怖のあまり、ほとんど肉体から抜け出そうとしたほどであった。

また、他の偉大な教父たちにも、神は御自身の聖人マルケルに関する啓示を与えられた。　デスの修道院の修道院長エリセイは、聖人にお目にかかり、その生涯を知りたいと願っていた。彼がそのことを神に祈ったとき、主は幻の中でマルケルをその実の姿のまま彼に示し、その高潔な徳の高さを明らかにされた。　このことについて、エリセイは後に、たまたま彼のところにいた聖マルケルの弟子ペトロに語った。

エウクシノス海[381]　に面したポンペイの町にある修道院の修道院長ガヴディオルには、マルケッロが律法者モーセに匹敵する神の恵みを授かっていることが啓示された。ガヴディオルは、マルケッロの弟子エウラシオにこのことを証言した。　まことに、この聖人は預言の賜物を持っていた。なぜなら、彼が誰かに予言したことは、常に実現したからである。　ある日、ある非常に吝嗇な司教が彼の元を訪れた。聖人は、貧しい人々に施しをするために、彼に2ズラトニク[382] を貸してほしいと頼んだが、司教は「自分には持っていない」と言って断った。すると、聖人は預言者のように彼にこう言った。

「まもなく、あなたは自分の肉体さえも失うことになる。その肉体は墓に受け入れられるが、あなたの金は修道院の兄弟たちのものとなるだろう。」

その通りになった。二日も経たないうちに司教は亡くなり、その財産は預言者の予言通り、彼の修道院に譲り渡されたのである。預言者は、遠く離れた未来の出来事を、あたかも目前にあるかのように見通していた。ある日、彼の弟子たちは、修道院の用事でエウクシノス海を船で航行していた。　激しい嵐が吹き荒れ、海は荒れ狂い、彼らはもはや命の絶望を感じていた。その時、聖人が彼らの前に現れ、彼らを救い、無事に港へと導いた。 彼らがアンキラの町[383] にいたとき、パウロという名の弟子の一人が重病に陥り、彼と共にいた修道士たちは、彼をそこに置き去りにしようかと考え始めていた。その時、病人は心の底からため息をつき、涙を流しながら叫んだ。

「マルケル師よ、あなたの祈りはどこへ行ったのですか？　あなたは私を神に委ねたのに、私は今、滅びようとしています。そして何より悲しいことに、あなたの群れの外で、兄弟たちから遠く離れて滅びようとしているのです！」

---

[380] ペルシャ湾に注ぐ大河で、その源流はアルメニアの山々にある。

[381]　現在は黒海と呼ばれる。かつては嵐が多いことから「アクシンスキー」、すなわち「不運な」と呼ばれていたが、その沿岸にギリシャ人が徐々に定住するようになると、彼らはそれを「エウクシンスキー」、すなわち「もてなしの心のある」と呼ぶようになった。

[382] ズラトニク（金ディナール）は25シルバーニクに相当し、つまり約5ルーブル60コペイカである。

[383] アンキラ（現在のアンゴラ）は、小アジアのガラティア地方にある古代都市である。

こうして、アンキラの町で病人は涙ながらに語り、修道院にいた聖人はその嘆きと苦しみを知り、弟子であるケサリウスに、奉仕のために派遣された兄弟の一人が悲しみと病に苛まれていると告げた。　聖父は立ち上がって彼のために祈ると、パウロはたちまち回復した。ケサリウスはその時刻を覚えていたが、兄弟たちが戻ってきたとき、聖父が彼の病を予見して祈っていたまさにその時刻に、パウロがアンキラで回復していたことが判明した。

ある時、神は大地に大飢饉をもたらされた。修道院の穀物倉庫の責任者であるマルクという名の男が、尊者のもとを訪れ、穀物がすでに底をつきかけており、パンはせいぜい十日分しか残っていないと報告した。

「行ってきなさい」と聖人は彼に答え、「何も心配せずに、自分の務めを果たしなさい」と続けた。

アッバが、どこか遠くからパンが豊かに届けられることを期待しているのだと思い込んだマルクは、いつものように、修道院の兄弟たちの必要分だけでなく、貧しい人々にも穀物庫からパンを配り続けた。　五日が過ぎ、穀物庫にはもうほとんどパンが残っていなかった。マルクは再びアッバのもとへ行き、穀物が底をついたことを報告した。しかしアッバは、最初と同じように、彼を自分の務めへと送り返し、そのことを気にするなと命じた。　二日後、穀物倉にはもう何も残っておらず、マルクは困惑しながらアッバのもとへ戻った。尊者は立ち上がり、穀物倉へと向かい、マルクに鍵を開けるよう命じた。

マルクは、一粒の穀物も残っておらず、開ける必要はないと誓って主張したが、それでも鍵を開けた。すると、彼はあらゆる種類の穀物で満たされた穀物倉を見て恐怖に襲われた。一方、尊者は彼の不信仰を叱責した。　それ以来、飢饉が過ぎ去るまで、穀物倉は尽きることはなかった。管理人が一日に消費した分だけ、翌日には同じだけ穀物が満たされていたのである。こうして聖人は、飢饉の間、修道院の兄弟たちだけでなく、大勢の乞食や貧者、旅人、そして　な来訪者たちをも養った。主の御使いマルケルによって成し遂げられたこれらの主の御業はすべて驚くべきものだが、さらにその後には、よりなお不思議な出来事が続く。

あるパウロという人物――前述の人物ではなく、別の修道院に属する別の修道士――が、重い病に苦しんでいたため、聖人に「自分のところに来てほしい」と懇願して使者を送った。　マルケルの修道院に到着した使者は、聖人がハルキドン司教[384]　と教会の教義について語り合っているところに出くわした。聖人は、司教との教会に関する対話を終えるまでは、病人のもとへ赴くことができなかった。　その間に病人は息を引き取り、聖人が到着した時には、すでに故人へのすべての儀式が執り行われ、遺体は埋葬のために運び出されようとしていた。　大いなる信仰に満ちた聖なる父は、肉眼と霊の目を天に向け、いつものように心の奥底で神に熱心に祈りを捧げ、それから亡くなった人の上に手を置いた。そこにいた者の中には、心の中で嘲笑し、こう言う者もいた。

「この老人は、横たわる兄弟の死を信じず、手で確かめているのか？」

彼らがそう考えている最中、聖人がその手で故人に触れると、故人は突然生き返り、起き上がって寝台に座り、話し始めた。皆はこの恐ろしい奇跡に恐怖と戦慄を覚えたが、聖人は立ち会った者たちにこのことを口外しないよう命じた。しかし、神の偉大さと、聖人に与えられたその高き賜物は、隠しきれるものではなかった。

また、聖マルケルが邪霊に対して持っていた力と権威についても述べておくべきである。大風によって吹き飛ばされる塵のように、彼の祈りによって人々の体から邪霊が追い出された。ある時、邪霊にひどく苦しめられていた四人の憑依者が彼のところに連れて来られ、彼らは聖人にこう叫んだ。

「私たちを追い出してください。あなたには私たちを支配する力があるのですから！」

---

[384] ハルキドンは、小アジアのマルマラ海沿岸にある都市で、第4回全地公会議の開催地として有名である。

しかし、聖人は黙ったままで、彼らを見ることさえせず、ただ心の中で神にこう祈った。

「主よ、あなたの被造物を憐れんでください！」

彼は、悪霊たちが狡猾な言葉で自分を驕りに陥れようとしていることをよく知っていた。そして、聖人が沈黙を保っている間に、悪霊たちは彼の謙遜に打ち負かされ、去っていった。

しかし、私たちの尊い父の奇跡を詳細に語り尽くせる者がいるだろうか。彼に注がれた神の恵みを測り知れる者がいるだろうか。彼がそのような業を成し遂げることができたその偉大な信仰を、言葉で表現できる者がいるだろうか。すべてを語り尽くすには時間が足りないだろう。　ここに、数え切れないほどの奇跡の一つを挙げよう。それは、私たちにとって益となり、また、聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神を賛美するのに十分なものである。ある時、ビザンティウムで大火災が発生し、街全体が炎に包まれた。それは、住民たちの罪に対する神の懲罰であった。　激しい旋風のようにすべてを飲み込み、すべてを灰に変えていく、この抑えきれない火の勢いを消し止める術はまったくなかった。街全体が四方八方から炎に包まれていたため、たった一軒でも火事から免れるという希望はもはやなかった。　このことを知った聖マルケルは、天に向かって両手を挙げ、目から涙を流しながら祈りを捧げた。すると、火はたちまち止まり、それ以上広がらなかった。そして、街の半分が救われた。まるで聖人の涙の滴が、大雨が降ったかのように、火の勢いを一瞬にして消し去ったからである。

その後、さらに次のような出来事が起こった。アスパルの息子で、アルダヴリウスという名の貴族がいた。彼は気性が荒く、信仰はアリウス派であったが、部下のヨハネという男に激怒し、彼を殺そうとした。身を隠す場所がなかったヨハネは、聖マルケッロの修道院へ逃げ込んだ。　アルダヴリウスはこのことを知り、奴隷たちを遣わして彼を連れ戻そうとしたが、聖マルケルは彼を引き渡さなかった。貴族は再び奴隷たちをマルケルのところへ送り、ヨハネを直ちに引き渡すよう懇願すると同時に脅迫も加えたが、聖マルケルは彼らも手ぶらで帰した。　そこで激怒したアルダヴリウスは、武装した兵士たちを送り込み、力ずくでヨハネを修道院から引きずり出し、抵抗する者を剣で殺すよう命じた。　そして、兵士たちが武器を構えて修道院を取り囲み、塀を制圧しようとしたとき、修道士たちは聖人のもとへ駆け寄り、泣きながら、ヨハネを兵士たちに引き渡すよう懇願した。彼のために自分たちも無実の罪で命を落とさないようにと。　しかし、聖人は兄弟たちの言葉に従わなかった（彼は極めて慈悲深く、罪のない者を死に追いやることを望まなかったからである）。そして、霊的な武器、すなわち尊き十字架の力に頼り、その十字架を盾として、自ら兵士たちのもとへ出向いた。するとたちまち、すべての兵士たちに大きな恐怖が襲いかかった。彼らは、太陽のように輝き、その周囲を大きな炎と稲妻、そして雷鳴が取り巻く十字架を目にしたのである。　兵士たちは武器を投げ捨て、恐怖に駆られて自分たちを派遣した者のもとへ逃げ帰った。この話を聞いたアルダヴリウスもまた恐怖に襲われ、怒りを抑えてヨハネを許した。

ここでアルダヴリウスとその父アスパルについて言及された以上、聖人に啓示された彼らの最期についても述べておくのは無駄ではないだろう。ゴート族の[385]　部族出身のアスパルは、王に次ぐ名門かつ権勢を誇り、全ギリシャ軍を統率していた。　彼には二人の息子がいた。長男のアルダヴリウスと、次男のパトリキウスである。彼は多くの点で王に反対しようと努め、一族全員を率いて王家に密かに敵対していた。また、アスパルはアリウス派を支援したことで、キリストの教会に多大な害を及ぼした。　一方、敬虔でキリストを愛するレウ王[386]　（「大」と称される）は、柔和で神を畏れる人であり、ある時は悪意のなさから、またある時は、当時多くのアリウス派が混在していたギリシャ軍全体の勢力がアスパルの家門に忠誠を誓い、彼に従っていたため、しばらくの間これを忍耐強く耐

[385]　ゴート族、あるいはゴート人は、もともとバルト海の南東部に居住していたゲルマン族である。その後、東ゴート族と西ゴート族に分かれ、ヨーロッパのほぼ全域に散らばった。ゴート族はキリスト教を受け入れたが、それはアリウス派による歪められた形であった。

[386] 457年から474年まで在位した。

え忍んだ。 この不義な一族は、まもなく滅びる運命にあった。 聖マルケルは、彼について夢の中で次のような幻視を見た。一頭の獅子が蛇と戦っていたが、その蛇は計り知れないほど巨大で、尾で獅子を打ちのめし、圧倒していた。敗れつつある獅子は嘆き、蛇の周りをむなしく回り続けていたが、蛇に何の害も与えることができなかった。 その後、獅子と蛇の両者は、戦いに疲れ果てて休息をとった。しばらくして、獅子は休息を取り、力を振り絞ると、まるで眠りから覚めたかのように突然、激しい怒りを込めて蛇に襲いかかり、地面に叩きつけて打ち負かした。 この幻視を見たアッバ・マルケルは、アスパルが王の手によってその一族ごと滅びると予言した。なぜなら、幻視に現れたライオンは王レフを、そして巨大な蛇はアスパルを象徴していたからである。アスパルはまさに、アリウス派の邪悪な教えによって正教を傷つけ、害を及ぼす蛇そのものだったのだ。 ほどなくして、聖人の幻視と予言は現実のものとなった。敬虔な王レウスは、その慈悲と慈愛をもって、アスパルとその息子たちを和解させ、敵を友に変え、彼らを敬虔な道へと導こうと努めた。 そこで彼は、自身の娘アリアドネを、アスパルの末息子パトリキウスと婚約させた。パトリキウスを後継者として王位に就かせようとしたのである。王には実の息子がなく、義理の息子を王位に就かせるつもりだったからである。 しかしその時、敬虔な民の間で不満の声が上がった。王の娘婿がアリウス派であったため、人々は皆、キリストの教会がアリウス派の誹謗中傷と悪意によって最後まで辱められ続けるのではないかと恐れたのである。すべての正教徒は、司教や司祭たちと共に集まり、聖なる長老マルケッロを伴って、 ヒッポドローム[387] にいる王のもとへ赴き、異端者を王位に就かせてはならないと告げ、王の娘婿には、アリウス派の異端を放棄するか、あるいはどうしてもその異端に留まりたいのであれば、王位を受け入れてはならないと求めた。

民衆をなだめるため、レウス王はあらゆる手段を尽くして、娘婿を正教へと導くと約束した。義理の息子は、たとえ偽善からとはいえ、真の信仰に帰依したものの、民衆の不満は収まらなかった。その頃、アスパルの陰謀と悪意が露見した——彼が王冠を狙っていただけでなく、息子たちと共に王の首を狙い、殺害を企てていたことが明らかになったのである。 そこで、民衆はアスパー家の陰謀に耐えかねて一斉に反旗を翻し、あらゆる手段で彼を滅ぼそうとした。しかし、アスパーは恐怖に駆られ、息子たちと共にハルキドンへ逃れ、殉教者エウフミアの教会に立てこもった。その際、大勢の兵士が教会の周囲を取り囲み、彼の安全を守っていた。 しかし、王の和解を求める言葉を受けて、彼はそこから出て、再びツァールグラードに戻った。その直後、アスパル自身とその息子アルダヴリウスは、王の命令によりジノンによって殺害された。 また、皇帝の娘婿であるパトリキウスは流刑に処され、彼と婚約していた王女アリアドネは、後に皇帝レオの死後、ギリシャ王国を継承した[388]であるジノンに嫁がされた。こうして、聖人の預言通り、レオに打ち負かされた不敬虔なアスパル一族は滅びた。

さて、再び尊者マルケッロの話に戻ろう。民衆が聖職者や長老たち、そして尊者マルケッロと共に、ヒッポドロームにいるレウ王のもとへ向かっていたとき、多くの信者たちは、神の天使が 美しい若者の姿で、白い衣をまとい、金の帯を締めた姿で、聖マルケルを付き添い、その腕を支えている姿を目撃する栄誉に浴した。人々は、彼が民衆と共に歩む間も、そして帰路につき、自らの住居の扉に至るまで、その間ずっとその光景を目撃していた。扉まで彼を導き終えると、天使は姿を消した。 このことから、私たちの祝福された父マルケルが、いかに神に愛されていたかが明らかである。なぜなら、神はマルケルに仕えるために御自身の天使たちを遣わし、旅の途中で彼を導き、守らせたからである。 そして、聖書の言葉「*主は御自身の御使いたちに、あなたについて命じられる——あなたのすべての道においてあなたを守れ*」（詩編90:11）が、彼に 実現したのである。

[387] ヒッポドロームとは、馬の競技が行われる場所であり、また、あらゆる大規模な集会の場としても利用されていた。
[388] ジノンは474年から476年まで在位した。

六十年にわたり修道生活を送った後、尊者マルケルはついに、至福の最期を迎えようとしていた。　そして彼は、先見の明において預言者たちに、信仰と神への揺るぎない信頼において総主教たちに、日々の肉体の死において殉教者たちに匹敵した。また、神を仰ぐことにおいては預言者モーセに似ており、恵み、柔和さ　ダビデに等しく、信仰への熱意においては使徒ペトロに、貞潔と神学においてはヨハネに、そして癒しの恵みにおいてはすべての使徒たちに等しかった。なぜなら、彼はすべての人にとって癒しの源であり、奇跡的な恵みの川であったからである。　尊者が病床に伏していたとき、多くの修道士たちが涙を流しながら彼の周囲を取り囲んだ。その中には、ルキアヌスという名の、高貴な家柄でありながら、この世のすべてを軽蔑し、修道者の道に入り、他の誰よりも徳高い生活を送っていた人物がいた。　他の誰よりも激しく泣きながら、彼は聖人に、舵手のない船のように、この世の生活の海で誘惑の波に翻弄されながら苦しむことのないよう、ご自身の導きから彼を見捨てず、ぜひともご自身と共に連れて行ってくださるよう懇願した。彼を見つめて、聖人はこう言われた。

「勇気を出しなさい、わが子よ。私がこの世を去った後、まもなくあなたも私の後を追うことになるのだから。」

近隣の修道院からは修道院長や修道士たちが集まり、帝都からは聖職者や高官たちが、病床にある彼を見舞い、最後の口づけを捧げるためにやって来た。　聖人は一人ひとりにふさわしい教えを授け、魂の救いと永遠の命について彼らと長く語り合った。その後、彼は彼らにしばらく自分のそばを離れるよう命じた。それは、少し眠りたいという意思を示しているかのようであった。　やがて皆が退いた後、彼は至福の、永遠の安息の眠りにつき、その聖なる魂を神の御手に委ねた[389]　。彼は、自ら建てた教会に埋葬された。一方、至福のルキアノスは彼の棺の前で絶え間なく泣き続けていたが、五日目に、聖者が幻の中で彼に現れ、こう言った。

「なぜ悲しんでいるのか。私が神にあなたのために執り成し、あなたはすぐに私のところに来られると信じていないのか。」

その幻視から3日後、ルキアノスは主のもとで息を引き取り、父であり師である人物より8日長く生きた。こうして、尊者マルケルは自身の死後、その預言を成就させ、約束通り、愛する弟子ルキアノスをすぐに自身の元へ迎え入れ、徳高い生涯によって同等の地位に至った聖人たちと共に、　すべての聖人の中で最も聖なる主のもとに、永遠の喜びと歓びのうちに立ち、私たちもまた、彼の祈りによって、そして私たちの主イエス・キリストの恵みによって、その恵みにあずかることができますように。主イエス・キリストに、世々限りない栄光がありますように。アーメン。

聖マルコ・ペシェルニクと聖テオフィロス・プラチリヴィの伝記。

記念日：12月29日

至福のマルコが修業に励んでいた時代については、彼の在世中に、私たちの尊い父テオドシオスの尊い遺骨が洞窟から聖なる大聖堂へと移されたという出来事が、最もよく物語っている。　聖なる「天使の姿」を受け入れた後、至福のマルコは洞窟に定住し、そこで生活しながら、自らの手で多くの部屋を掘り起こすことに専念した。それは、祈りの修行のため[390]　だけでなく、亡き兄弟たちを埋葬するためでもあり、掘り出した土は自らの肩に担いで運び出した。　こうして彼は、天における偉大な報いを待ち望みつつも、地上でそれを受け取ることを望まず、この神に喜ばれる業に絶え間な

[389] 聖マルケルは486年頃に没した。

[390]　ペチェルスク修道院の修道士たちには、孤独な祈りのために洞窟へと籠もる習慣があった。そのために、洞窟の壁に窪みを掘り抜いたが、それらは今でも洞窟内で確認することができる。

く励んだ。というのも、誰かが彼の労苦の対価として何かを受け取るよう強要しても、彼はすぐにそれを受け取ったものを貧しい人々に与えていたからである。　さらに、この福者は鉄の帯を腰に締め、生涯を通じてそれを身につけ、昼も夜も祈りに費やした。　絶え間ない祈りと共に、至福のマルコは厳格な断食も実践した。主ご自身も断食と祈りを結びつけておられたからである[391]　。それゆえ、この聖人は、内部が空洞の銅製の十字架から、この正しい尺度で水を節度を持って飲み、その量もこの正しい尺度で測っていた。 このように 、彼は人類の古くからの敵である「霊を貪る者」[392] を完全に打ち負かし、自らの肉体を死に至らしめた。それは、閉じ込められことだけでなく、労働や足枷、睡眠の断ち切りや飢え、暗い洞窟での沈黙だけでなく、土を掘ることや鉄の帯、徹夜や断食によっても成し遂げられたのである。　天使のような姿で過ごしていた聖人は、実際にもあたかも肉体を持ち合わせないかのように振る舞い、死を恐れることはなかった。むしろ、死こそが、大天使のラッパのような彼の声を恐れたのである。なぜなら、私たちの尊い父マルコは、主からそのような奇跡を行う力を授かっていたため、死者でさえも彼の命令に従ったからであり、それは数多くの奇跡によって証明されていたからである。　ある時、彼がいつものように墓穴を掘っていたところ、長い労働の末に力尽きてしまい、その墓穴は狭く、十分に広げられていなかった。ところが、ちょうどその時、以前から病を患っていたある修道士が亡くなり、マルクが掘った墓穴以外に彼を埋葬する場所がなかった。　死者は洞窟に運ばれ、かろうじてその狭い墓に納められた。すると、兄弟たちはマルクに対して不平を言い始めた。墓が狭すぎるため、故人を適切に安置できず、聖油を注ぐこともできなかったのだ。しかし、洞窟の修道士は謙虚に彼らに頭を下げて、こう言った。

「お許しください、父たちょ。私の力の及ばぬところがあり、墓を完成させることができませんでした。」

しかし、彼らはさらに激しく彼を責め立て、非難し続けた。そこで、その聖人は死者にこう言った。

「兄弟ょ、場所が狭いのだから、あなた自身が体をずらして、聖油を受け取り、ご自身に注いでください。」

死者はたちまち手を伸ばし、少し体を起こして聖油を受け取ると、それを自分の顔と胸に十字架の形に注ぎ、再び器を返した。そして、皆の目の前で横になり、体を整えて安らかに息を引き取った。

この驚くべき奇跡を目の当たりにして、皆は強い恐怖と戦慄に包まれた。

またある時、ある兄弟が長い闘病の末に亡くなった。彼の友人の一人が、慣例に従ってスポンジで彼の体を拭いた後、愛する友人の遺体が安置される場所を見たいと願い、洞窟へと向かい、聖なる洞窟の住人マルコに尋ねた。

すると、聖人は彼にこう答えました。

「行って、その兄弟に、私が彼のために墓を掘るまで、翌朝まで待てと伝えてくれ。そうすれば、彼は永遠の命の安息へと旅立つだろう。」

「父ょ」と、その兄弟は洞窟の聖人に答えた。「私はすでにスポンジで彼の遺体を拭き清めました。一体誰にそう伝えるようにおっしゃるのですか？」

「お前は、その場所がまだ準備できていないのを見ているだろう」とマルコは再び彼に言った。「だから、行って、亡くなった者にこう伝えなさい。『罪深いマルコがこう言っている。兄弟ょ、私がお前のために墓を準備するまで、今日一日だけここに留まってくれ。そうすれば、私が知らせよう。そして明日、お前は待ち望んでいたキリストのもとへ旅立つのだ』と。」

391　これは、悪霊の追い出しについて主イエス・キリストが語られた言葉からも見て取れる。*「この種は、祈りと断食によってのみ追い出される」*（マタイ17:21）。

392 すなわち、常に御霊に逆らうことを望む者（ガラテヤ5:17）のことである。

兄弟は従い、修道院に着くと、修道者たちが皆、亡き人のためにいつもの賛美を捧げているところだった。そこで彼は亡き人にこう言った。

「兄弟よ！マルクは、あなたのための墓がまだ準備できていないと言っています。ですから、明日までここで待っていてください。」

彼がその言葉を口にした途端、皆の驚きの中、死者は即座に目を開き、その魂が体に戻った。そして彼はその日と翌晩を生き続け、誰とも一言も交わさず、ただ目を開けたままじっと見つめていた。朝になると、その兄弟は再び洞窟へ行き、場所の準備ができているか確かめた。聖マルコは彼に言った。

「行って、蘇った者にこう伝えなさい。『マルコがこう言っている。この一時的な生を捨て、永遠の生へと移りなさい。あなたの霊を神に委ね、あなたの体は聖なる先人たちのそばに、この洞窟に安置されなさい。なぜなら、あなたのために墓はすでに用意されているからだ』と。」

その兄弟は戻ると、これらすべてを蘇った者に伝えた。すると彼は直ちに目を閉じ、その霊を神の御手に委ね、洞窟内の用意された墓に尊く葬られた。　そして、皆はこの輝かしい奇跡――死者が聖人の言葉によって蘇り、またその言葉によって再び息を引き取ったこと――に驚き、熱心に神を賛美した。

また別の時、次のような出来事があった。同じペチェルスク修道院に、ヨハネとテオフィロスという二人の兄弟がおり、互いに心からの愛を寄せ合っていた。彼らは若き日から、あらゆる事において心を一つにし、同じ熱意をもって神に仕えていた。　彼らは、主が彼らに死ぬよう命じられた時に備え、自分たちを埋葬するための共同の墓を掘ってほしいと、聖マルコに懇願した。長い時が経ち、年長のテオフィロスは修道院の用事でどこかへ出かけていたが、年下のヨハネは神に喜ばれ、病に倒れて亡くなり、 の洞窟にある用意された場所に葬られた。 数日後、テオフィロスが戻り、兄弟の死を知って深く悲しんだ。彼は数人の兄弟を連れて洞窟へ向かい、故人がどの場所に葬られたのかを見ようとした。すると、故人が彼らの共同墓地の上段に葬られているのを見て、テオフィロスは憤り、マルコに対して激しく不平を言い始めた。

「なぜ兄弟を私の場所に葬ったのか。私は彼より年長なのだから！」

しかし、謙虚な洞窟の修道士は彼に頭を下げて、こう言った。

「許してください、兄弟よ。私が過ちを犯しました。」

それから、亡き人に向かってこう言った。

「兄弟よ、立ち上がって、この場所を年上の兄に譲りなさい。あなた自身は下の場所に横たわってください。」

すると、聖人の言葉通り、死者はたちまち起き上がり、下の場所に横たわった。テオフィロスと共に来た者たちは皆、この奇跡を目撃し、深い畏怖と戦慄に襲われた。　一方、聖マルコに不平を漏らしていた兄弟は、彼の足元にひれ伏し、許しを請いました。「父よ、私は兄弟をその場所から移動させたことで罪を犯しました」と彼は言いました。「どうか、彼に元の場所に戻って横になるようお命じください」。

しかし、聖マルコは彼にこう答えた。

「主ご自身が、この亡き者の肉体が、死後もなおあなたへの愛を保ち、あなたの年長者としての地位に従い、あなた方の二人ために用意された共同墓の上部から身を引いたことを示すよう、こう仕組まれたのです。　主は、あなたの不平によって私たちの間に生じた敵意を終わらせ、あなたが私に対して憎しみや敵意を抱かないようにと、このように定められたのです。死者をよみがえらせることは神の御業です。私は罪深い人間ですから、この亡き者に『起き上がって、再び上の場所に横たわれ』と言うことはできません。　あなたが彼に命じてみてはどうだろうか。彼はあなたの言うことを聞くのではないか。また、あなたはもはや洞窟から出てはならず、直ちに長としての地位を受け継ぎ、今すぐここに葬られるべきであったことも知っておきなさい。しかし、あなたはまだ旅立つ準備が

できていないのだから、行って、自分の魂の救いを務めなさい。そうすれば、数日後に、あなたはここに運ばれてくるだろう。

これを聞いて、テオフィロスは深く嘆き悲しんだ。彼は、その場で倒れて死んでしまうだろうと思い、修道院までたどり着けることさえ望めなかった。かろうじて我に返ると、彼は自分の独房に戻り、慰めようのない泣き声に身を任せた。彼は持ち物をすべて人に分け与え、自分にはシャツとマントだけを残した。　彼は毎日、死の刻を待ちわびており、誰も彼の苦々しい泣き声を止めることはできなかった。慰めようとする者たちは、かえって彼をさらに激しい嗚咽へと追い込んだ。そして、誰も彼に美味しい食事を口にさせることはできなかった。彼の涙は昼も夜も、彼にとっての糧となっていた（詩篇41:4）。日が明けると、彼は涙で顔を洗いながらこう言った。

「夕暮れまで生き延びられるかどうか、わからない。」

夜になると、彼は再び涙で目の光を曇らせながら、こう言った。

「朝まで生きられるかどうか、誰が知るだろうか！　朝、眠りから覚めた多くの人々が、夕方まで、あるいは死以外の眠りまでたどり着けなかった。また、眠りについた多くの人々が、その寝床から起き上がらなかった。ましてや、まもなく死を迎えるという知らせを受けた私が、どうして生き延びられると期待できようか？」

そして絶えず泣き、断食を続けながら、主がその計り知れない寛大さによって、悔い改めの時間を与えてくださるよう祈った。長年にわたりこのように過ごした結果、彼は肉体を極限まで衰弱させ、骨が数えられるほどになり、多くの涙のせいで視力を失ってしまった。

一方、私たちの尊い父マルコは、主のもとへ旅立つ時が近づいていることを悟ると、テオフィロを呼び寄せ、こう言った。

「兄弟よ、あなたにこれほど深い悲しみを与えたことをお許しください。そして、私のために神に祈ってください。私はもう、この世を去ろうとしているのですから。」　もし私にその勇気があるならば、主が私たち二人に御自身の至聖なる御顔を仰ぎ見させ、そこで互いの姿を見出し、私たちの尊い父たちであるペチェルスクのアンソニーとテオドシウスと共にいられるよう、主にお祈りすることを忘れはしない。

テオフィロスは涙ながらに彼に答えた。

「なぜ私を置き去りにするのですか、父よ？　私を連れて行ってくださるならそうしてください。さもなければ、ここで私に視力を取り戻させてください。私の罪のゆえに、あなたが亡くなった私の兄弟をよみがえらせた時、私はあなたの目の前の洞窟で死んで倒れていたに違いないと知っています。しかし、あなたの聖なる祈りのゆえに、主は私の悔い改めを待ちながら、私を憐れんでくださったのです。　そして今、あなたは私がお願いしていることを叶えてくださるでしょう。すなわち、私をあなたと共に主のもとへ連れて行ってくださるか、あるいは視力を取り戻させてくださるかのどちらかです。

「悲しむな、兄弟よ」と、聖マルコは彼に答えた。「主のために肉眼を失ったことを。なぜなら、あなたは霊の目で見え、真の知恵を持っているからだ。そして、私は、　、あなたの失明の原因となったことを幸いだと考えている。　私は、あなたの魂のために有益なことを願い、またあなたの肉的な高慢を謙遜へと導くことを願って、あなたに死を予告したのだ。なぜなら、*「砕かれた心と謙遜な心」*（長老としての地位を誇らない者）を、*「神よ、あなたは軽んじられない」*（詩篇50:19）からである。　それゆえ、このはかない光を見る必要はない。むしろ、主の御栄光を、永遠の光の中で仰ぎ見ることができるよう、主に願い求めよ。そして、死を望んではならない。たとえあなたの望みに反してでも、死は訪れるのだから。　しかし、これがあなたの旅立ちの前兆となるでしょう。あなたが亡くなる三日前、あなたの失明は癒やされ、あなたは目が見える状態で主のもとへ旅立ち、そこで尽きることのない光と、言葉に尽くせない栄光を仰ぎ見るでしょう。

テオフィロスの死に関するこのような預言を残した後、私たちの尊い父マルコもまた、主のもとでこの地上の仮の生涯を終え、天の永遠の命へと移り、復活の源そのものである[393] イエスと、すべての聖なる預言者たちと共に、死者を支配し預言した者として、天に召されたのである。 その奇跡を起こす聖遺骨は、彼自身が自ら墓を掘った洞窟に安置されており、信仰をもってその尊い聖棺に駆け寄るすべての人々に、尽きることのない癒やしをもたらしている。 そこには、聖人が身に着けていた鉄の鎖や、彼が水を飲んだ銅の十字架も安置されており、その十字架は彼の口によって深く聖別され、奇跡の力を授けられたのである。 なぜなら、信仰を持ち、断食をしてこの尊い十字架から聖水を飲む者は、誰であれ、いかなる治療用の水よりも確実に、奇跡的な癒やしを受けるからである。

一方、至福のテオフィロスは、父であり師である聖マルコとの別れ、そして日々待ち受ける自らの死を嘆き、苦々しく泣きじゃくり、その嗚咽を倍増させた。洞窟住人の預言を思い起こすたび、彼は泉のように涙を流したが、それによって涙はますます溢れ出た。 至福のテオフィロスには、祈りに励んでいる最中に涙が溢れ出るたびに、器を差し出してその上で泣き、長年にわたりその器を涙で縁まで満たすという習慣があった。 やがて、聖マルコの約束通り、彼の視力は再び戻った。その時、テオフィロスは自分の死が近いことを悟った。そこで彼は、自分の涙が神に喜ばれるよう、熱心に神に祈り始め、天に向かって両手を挙げ、こう言った。

「人を愛する主よ、主イエス・キリスト、わが神よ！ 罪人の死を望まず、彼らの回心を待ち望み、私たちの弱さを知っておられる、至聖なる王、慈愛に満ちた慰め主、病める者の癒やし、罪人の救い、力尽きゆく者の支え、倒れる者の立ち上がりよ、この時にあなたに祈ります！ この不肖の私に御慈悲を注ぎ、私の苦い涙の奔流をお受けください！ あなたの尽きることのない慈愛の深淵を私の上に注ぎ、空中の試練において私が誘惑にさらされることのないよう、[394] また闇の君の支配下に陥ることのないよう、あなたの偉大な聖人たちの祈り、すなわち私たちの尊い父たち、 ペチェールスのアントニオスとテオドシオス、そして古来よりあなたに喜ばれてきたすべての聖人たちの祈りのゆえに。

至福のテオフィロスがこの祈りを唱えたとき、主の御使いが美しい若者の姿で彼の前に現れ、こう言いました。

「テオフィレよ、あなたはよく祈っているが、なぜ、あなたが流した涙の量で自分を誇っているのか。」

そして天使は、テオフィルの器よりもはるかに大きく、まるで高価な香油のような芳香に満ちた自分の器を彼に見せた。

「これこそが、あなたの涙だ」と、そのとき天使は言った。「あなたが神への祈りの中で心から流し、手やタオル、あるいは衣服で拭った涙、あるいはあなたの目から地面に落ちた涙である。私はそれらをすべてこの器に集め、私の主であり創造主である方の御命により、大切に保管してきた。そして今、私はあなたに喜びを告げ知らせるために遣わされた。そうしてあなたが喜びをもって、*「泣く者は幸いである。彼らは慰められるからである」*（マタイ5:4）と言われた方の元へ旅立てるように。

そう言い終えると、天使はその場に器を残して姿を消した。 一方、福者テオフィロスは、修道院長を呼び寄せ、天使の出現とその言葉について語り、また、涙で満たされた二つの器――一つは彼自身のもの、もう一つは天使のもので、あらゆる香りを凌ぐ芳香を放っていた――を見せ、自身の

---

393 すなわち、復活の端緒を開き、最初に復活された方。

394 「ミタールスト」とは本来、関税が徴収される関所を意味し、そこから派生して、収賄や迫害が行われる場所を指すようになった。霊的な意味において、「ミタールスト」という名称は、肉体を離れた魂が、神による裁きを受ける前に、空中で悪霊たちによって行われる拷問を意味する。

死後、それらを自分の遺体に注ぐよう頼んだ。　視力を取り戻してから三日後、彼は至聖三位一体を仰ぎ見るために主のもとへ旅立った。その尊い遺体は、彼が愛した兄弟である　の至福のヨハネの隣、聖マルコに近い洞窟に安置された。　そして、天使の器から彼に香油を注いだため、洞窟全体が芳香に満たされた。その後、もう一つの「涙の器」も彼に注がれた。それは、地上で涙を流して種を蒔いた者が、天において喜びをもって刈り取るためであった。　この喜びは、彼の師である洞窟の聖マルコ、すなわち奇跡を行う者の執り成しによって与えられたものであり、また、三位一体において賛美される神の恵みによってあらゆる慰めがもたらされた。今、そして常に、そして世々限りなく、神にすべての栄光があるように。アーメン。

聖ファデオス・殉教者の記念日[395]

記念日12月29日

聖ファデオは、偶像排斥の異端がはびこっていた時代に生きた。彼が他の者たちと共に捕らえられ、裁判にかけられた際、邪悪な偶像排斥者たちは、彼に聖なるイコンを足で踏みつけさせようとしたが、それを成し遂げることはできなかった。　そこで彼らは次のようにした。救い主のイコンを地面に置き、聖ファデオを無理やりその上に立たせたのである。彼は激しく抵抗したが、力強い男たちに押さえつけられ、意に反して聖なるイコンを踏まざるを得なかった。すると、拷問官は彼にこう言った。

「ほら、お前は自分のキリストのイコンを踏みにじっているではないか。なぜこれ以上、我々に抵抗するのだ？今こそ、我々と心を一つにするべきだ。」

しかし、キリストの殉教者は彼にこう答えた。

「呪われし者よ、不義な者よ、あらゆる不浄に満ちた者よ！　私は自らの意志でこれを行ったのではない。決してそうではない。お前の狡猾さと不正な裁きによって、無理やり強要されたのだ。私は、私の神であるキリストの聖像を崇拝し、それに口づけし、そのために喜んで死のうとしているのだ。」

この言葉に恥をかかされた不敬虔な拷問官は、聖人が死ぬまで棍棒で打ち据えるよう命じた。そして、彼がすでに死んだと判断されると、足をつかんで街の外へ引きずり出した。死人のように市場や泥の中を引きずられ、聖ファデエは城壁の下に投げ捨てられた。　ある敬虔なキリスト教徒がそこで彼を見つけ、まだ息のあるうちに泥を洗い流した。その後、聖ファデウスはさらに三日間生き続け、神に息を引き取った[396]。

1月12日

12月30日（旧暦）

聖女アニシアの殉教

記念日12月30日

---

[395] 「殉教者」とは、信仰による迫害のさなかに、公然とキリスト教徒であることを告白し、拷問に耐えながらも生き残った人々を指します。彼らはキリスト教徒の間で特別な尊敬を集め、堕落したり信仰を捨てたりした者たちを教会に再び迎え入れる権利を与えられていました。

[396] 聖ファデエ・殉教者は818年に逝去した。

不義な皇帝マクシミアヌスの治世下[397] 、栄光ある都市テッサロニキ[398] に、ある乙女が住んでいた。　アニシアという名の少女がいた。彼女は裕福なキリスト教徒の両親の娘であり、両親は彼女を神への畏れをもって育てたため、彼女は年を重ねるよりもむしろ徳を積んで成長していった。というのも、両親は彼女を乳よりもむしろ信仰と敬虔の真理で養ったからである。　幼少期を過ぎ、アニシアが美しい乙女に成長すると、両親は彼女に学問の知恵をすべて丹念に教え込んだ。聡明なアニシアはすべてを素早く容易に習得し、その教えにふさわしい実りを実際に示した。 神の聖霊 に満たされた彼女は、まさに天使のような気質を備えており、その顔は比類なき美しさで輝いていた。この頃、彼女はめったに家を出ず、自室で若き美しさを隠しながら、しばしば悲しげにこう独り言をつぶやいた。

「ああ、若さの欺瞞に満ちた人生よ。ある者を滅ぼし、またある者に滅ぼされるもの！老いは素晴らしいが、ああ、私はなんと不幸なことか！時の長さが私を悲しみで満たす。なぜなら、老いを迎えるまで長い年月を待たねばならず、長い年月が私と天国とを隔てているのだから！」

そしてアニシアは、ひざまずき、地面にあふれんばかりの涙を流しながら、キリストに助けを求めることを決してやめることはなかった。両親が主のもとへ旅立ち、彼女が父の財産の相続人となったとき、自分の富をどうすべきか考え始めた。　というのも、彼女の両親は、銀や金の莫大な財宝、広大な領地、膨大な家畜の群れ、数え切れないほどの男女の奴隷、高価な絹や金糸で織られた衣服、真珠や宝石で飾られ、その輝きがまばゆいばかりの金製の器類を蓄えていたからである。　これらすべてを見て、聖アニシアはこう言った。

「これほど多くの地上の富に囲まれて、どうすれば救われるのか？　いかにして古の蛇である悪魔の頭を踏みつけ、その力を打ち破ればよいのか？　しかし、私は何をすべきか知っている。私は蛇に対して、蛇自身の狡猾さを用いるのだ。　彼自身が毎年、古びた皮を脱ぎ捨てて生まれ変わるように、私もまた自分の富から解放されるのだ。なぜなら、それらは悪用する者に甚大な害をもたらし、それらを集める者すべてを治癒不可能な毒で蝕み、吝嗇で慈悲のない者たちをその枷と網で縛りつけるからだ。　領地を所有することは怒りを助長し、欺瞞と不正な手段で富を蓄積させる。高価な衣服は虚栄心を煽り、罪へと誘い込む。金の鎖や首飾りは、人々にそれを見られ、称賛されることを望むがゆえに、高慢に頭を上げさせるのだ。　私は彼らに対してこうするつもりだ。彼らが私に対して不自然な支配権を握る前に、私が彼らの自然な支配者となるのだ。真に彼らの支配者となり、彼らを善のために使い尽くしつつ、同時に彼らが生み出す誘惑からは身を遠ざける。　私はそれらのために堅固な守りを見つける。それらを宝物のように、未亡人や孤児、貧しい人々の家に預けるのだ。そして、私の忠実な保証人である主は、私に二倍どころか百倍の報いを与え、私を永遠の命の共同者にしてくださる。　すべてを分け与え、すべてを無傷のまま、百倍に増やされて受け取り、分け与えた後、キリストの十字架を背負う。なぜなら、そうすれば、地上のものを地上に残し、天の御使いたちと共に天で暮らすために、キリストに従うことが容易になるからである。　破滅的で不純な生活を避け、朽ちることのない命と霊的な功績を望むほうがよい。私は一時的なものを永遠のものへと変える。朽ちることのない結婚を尊び、貞潔を守り、創造主のために自分の体を清く保つ。今こそ、市場があるうちに買い物をしなければならない。　迫害や追跡が、天における私の報いとなるように。拷問者や苦しみは、私に楽園の慰めへの道を開き、傷や牢獄は、私をキリストの宮殿へと導いてくれるように。なぜなら、報いを受けるのは男性だけではなく、女性もまた冠にふさわしいからである。

彼女は心の中でそう語り、涙を流しながら祈った。

---

[397] マクシミアヌス皇帝は284年から305年まで在位した。

[398]　ソロウン、あるいはテッサロニキは、マケドニアの極めて重要な古都であり、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフェリウス湾の奥深くに位置していた。　現在、この都市はサロニカという名で、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコにおける第一の商業・製造業の都市であり、非常に多くの人口を擁している。

「主よ、イエス・キリストよ！　わが光よ！　不死の源よ！　朽ちることなき根源よ、処女の胎内に言葉に尽くせぬ御姿で宿り、御降誕後も朽ちることなき御母マリアを守り抜かれた方よ！　慈愛に満ちた主よ、私も処女たちの列に加わり、御宮から締め出されることのないよう、お導きください！　私を賢い乙女たち（マタイ25:1–12）の仲間に加え、消えることのない灯火をもってあなたにお会いできる恵みを授けてください。そうして、汚れなくその業を成し遂げ、あなたの栄光に与る者とならせてください！

このように祈った後、聖アニシアは直ちに自分の全財産を売り払いました。しかも、その価値に見合う価格ではなく、また市場での売買で通常行われるような方法でもありませんでした。彼女は買い手にこう言ったのです。

「この売り物たちは、貧しい人々や困窮している人々のものだと知ってください。ですから、公正な価格を定めてください。そうすれば、あなたもまたある種の報いを受けることになるでしょう。主は義なる方であり、真実を愛し、真実に基づいて報いてくださるからです。」

すべての財産が売り払われると、彼女は得られた金を貧しい人々や投獄されて苦しむ人々に配り始めた。聖女は自らすべての牢獄に入り、必要なものをすべて提供しただけでなく、特に多くの拷問や傷を負って自力で身の回りの世話をすることができない囚人たちに、自ら手を差し伸べて世話をした。　彼女はそうした人々を、軟膏を塗ったり傷を包帯で巻いたりして治療し、悲しむ者を慰め、病床に伏す者を訪ね、自身の富から彼らを助けました。広場や通りを巡り、寛大な手をもって、　見つける限りのすべての貧者や、膿の溜まりに横たわる病人に、惜しみない援助を与えました。その際、彼女は心の中でこう語りました。

「私は、審判の日に水の一滴にも及ばない富の中に、慰めや快楽を求めることはしない。」

そして、アニシアは最後の硬貨まですべてを使い果たし、自分のために何も残さなかったとき、ある部屋に閉じこもり、自らの手で肉体に必要な食物を調達し、額に汗を流して自分のパンを味わい、使徒の*「働きたくない者は、食べるな」*　（テサロニケの信徒への手紙第二3:10）という言葉を忠実に守り、キリスト教徒は自らの労働によって生計を立てるべきであると考えた。祈りと断食に励み、アニシアはまるで肉体を離れて生きるかのように生活した。苦行と厳しい生活に慣れ親しんだ彼女は、昼は労働と聖書の読解に、夜は詩篇の詠唱と祈りに費やした。　彼女の寝床は大地であり、柔らかい寝床の代わりに葦の敷物一枚、暖かい毛布の代わりに薄っぺらなぼろ服を身にまとい、睡眠もごくわずかだった。彼女はこう自分に言い聞かせていたからである。

「私の敵が目を覚ましている間、私が眠るのは危険だ。」

その際、聖女はあふれんばかりの涙を流し、そのため息は口から発せられる言葉よりも多かった。彼女はこれほどまでに神の愛に包まれていたため、祈りのためにひざまずくとき、まるで救い主の足元にひれ伏し、その足に口づけをし、自分の髪で主の足についた塵を拭い去っているかのように感じられた[399]。この思いは、かつて主の足を涙で洗い、自分の髪でそれを拭ったあの女性が泣いたように、彼女の中に涙の泉を湧き上がらせた（ルカ7:36–50）。そして彼女には、肉体の束縛から解き放たれ、キリストと共に生きたいという絶え間ない願いがあった。　そして彼女は、祈りながら胸を打ち、こう語った。

– 全能の主よ、神よ、御子イエス・キリスト――私たちの主であり、神であり、救い主――の父よ、御自身の栄光の御座に坐しておられる方よ！　あなたには、数えきれないほどの大天使たちが仕え、数えきれないほどの[400]　が、御座、支配、権威、権能の命令に従い、ケルビムたちがあなたを賛美し、セラフィムたちが絶えず[401] を称え、三聖の賛歌を叫び続けています！　あなたは、御自身に

[399] 聖アニシアの礼拝、「主よ、私は叫びました」の第2ステヒラ。

[400] 闇――一万。

[401] セラフィム、ケルビム、玉座、主権、力、権威、支配、大天使、天使――聖なる教会が計9つとみなす天使の位階。

反逆した霊たちを地獄の深淵に沈め、御恵みを失った蛇を破れない鎖で縛り、その玉座を地上に打ち倒し、天の奉仕と至福の生活を奪い、十字架の恥によってその高慢を打ち砕かれた方です！　あなたは、御自身の汚れなき御胎から、御言葉なる神、すなわち私たちの魂の永遠の救い主を、聖霊と聖母マリアによってお遣わしになり、御言葉によって滅びゆく者を救い、弱き者を強め、打ち砕かれた者を癒やしてくださった方！　私は、謙遜で罪深いあなたのしもべとして、心を尽くしてあなたを呼び求めます。すべての人間の思いを知り、私の心にあなたへの熱き愛を燃え立たせてくださったあなたよ、どうか来て、このふさわしくないあなたのしもべを救ってください。私はあなたを慕い、あなたを求め、私の全力を尽くしてあなたにすがりついているからです。　主なる神の御子よ、砕かれた心と謙遜な霊をもってあなたに捧げる私の祈りをお受けください。　私を見捨てないでください、イエス・キリストよ。あなたは私のために十字架に釘付けにされ、頬を打たれ、私のために胆汁と酢を飲み、苦い死を味わわれ、三日目に死からよみがえり、天に昇り、今や御父の右に座しておられます。私を恥じ入らせたり、あなたのしもべたちの数から追い出したりせず、あなたの聖なる十字架の模範に従って、キリスト教徒としての最期を迎えられるよう、私をお導きください！　私を御あなたの苦難の仲間とさせてください。そうして、御あなたの御前に現れるにふさわしい者とならせてください。私を御あなたに忠実な者として守ってください！*「私の肉体は御あなたの畏れに震え、御あなたの裁きを恐れます」*（詩編118:120）、*「私の目を、虚しさを見ないようそらしてください。あなたの道において、私にいのちを与えてください」*（詩編118:37）、しかし*「私の目を開いてください」*、と私はあなたに願います、*「そうすれば、あなたの律法の不思議を見ることができます」*（詩編118:18）。 詩篇118– 。私は母の胎内からあなたに委ねられています、あなたは私の主です！*「私の父も母も私を見捨てたからです」*（詩篇26:10）。 しかし、主よ、あなたは私を受け入れてくださいました。私の道を正しいものとしてください。あなたのしもべが恥をかくことのないように、むしろ*「私に幸いのしるしを示してください」*（詩編85:17）と、私の願いを叶えてください。なぜなら、*「主よ！　私のすべての願いはあなたの御前にあり、私の嘆きはあなたから隠されることはない」*（詩編37:10）。そして再び、神なる父よ、あなたに祈ります。私、あなたのしもべに罪が及ばぬよう、私をお助けください。私は自分自身をあなたへのいけにえとして捧げるからです。　どうか、私を、羊や子牛の全焼のいけにえとして、また　肥えた子羊の群れとして受け入れてください。私のいけにえが御前に捧げられますように。そして、私に、御方の汚れなき小羊、イエス・キリストに従うことをお許しください。御方と共に、聖霊と共に、世々限りなく、栄光と誉れと力が御方にありますように。アーメン。

このように祈り終えると、聖アニシアは立ち上がり、十字の印を切った。これらすべてを、人類の邪悪な敵は見ており、彼女の天使のようであり天上の生き様を耐え忍ぶことができなかった。彼は、彼女がすでに霊において天に留まり、心を尽くしてキリストのために苦難を受けることを望んでいるのを見て、彼女に対して歯ぎしりし、彼女の部屋を揺るがし、転覆させようと企てた。しかし、彼女が至る所で十字架の印によって守られているのを見て、まるで目に見えない打撃に追われるかのように逃げ去った。　とはいえ、時折、彼は聖女に怠惰や落胆を植え付けることに成功することもあったが、彼女は絶え間ない祈りを壁のようにして身を守り、即座にその狡猾さを打ち砕いた。そして、真理の敵は嘆き、こう自問した。

「ああ、哀れな私よ！　私は天使たちを天から引きずり下ろし、多くの強者を屈服させたが、今や若者や乙女たちが私を嘲笑っている。彼らは生よりも死を愛し、死の冠を戴いて天へと駆け上がり、この世を私に空っぽのまま残していくのだ。　殺される殉教者たちの血は私を慰めてくれたが、彼らの信仰と偉業、そして説教は、都市や民族全体を変えてしまった。私の神殿は破壊され、神託所は沈黙し、祭壇は倒され、かつては歓喜していた祭司たちは落胆している。　私の破滅を招くかのように、至る所に十字架が掲げられ、私の王国は衰退しつつある。苦しみの中で喜びを見出す者たちは

、墓の中では恐ろしい存在となるからだ。彼らは私を焼き、打ちのめし、あらゆる場所から追い払う。そして、私が彼らに対して考案したものは、かえって私にとってさらに苦い災いとなってしまった。しかし、私は彼らをどうすべきか知っている。ある新しい策略を思いついたのだ。

すると、敵はすぐに次のような策を練り出す。　聖なる殉教者たちの栄光を忘却の塵の中に葬り去り、後世の世代が彼らを記憶から消し去り、その偉業を無名にし、記録を抹消しようと、嫉妬深い敵は、もはや王や軍司令官ではなく、ごく平凡で最下層の人々によって、至る所でキリスト教徒たちが裁判も審問もなしに虐殺されるよう仕組んだ。　この悪意に満ちた敵は、神が求めているのは言葉ではなく、ただ善意のみであることを理解していなかった。

膨大な数のキリスト教徒を滅ぼした後、マクシミアヌスは悪魔の唆しにより、まるで力尽きたかのように装った。　罪なき者たちの血を十分に味わった彼は、血に飢えた獣のようになった。その獣は、肉に飽きてこれ以上食べたくなくなると、あたかも温厚であるかのように振る舞い、通り過ぎる動物たちを無視する。同様に、この不敬虔な拷問者も、殺戮に嫌悪感を抱くようになると、温厚なふりをした。彼はこう言った。

「キリスト教徒を王の目の前で殺害するなど、ふさわしくない。なぜ彼らを尋問し、裁き、その言葉や行いを記録する必要があるのか？」　なぜなら、これらの記録は、同じキリスト教の信仰を告白する者たちによって読み継がれ、代々伝えられ、彼らの記憶はその後永遠に称えられることになるからだ。それならば、なぜ私が、尋問も記録もなしに、彼らを動物のように屠殺するよう命じないのか。そうすれば、彼らの死も知られず、彼らの記憶も沈黙の中に消え去るだろうに。」

そのような決断を下すと、不敬虔な王は直ちに至る所に布告を出し、望む者は誰でも、裁判も殺人に対する処罰も恐れることなく、恐れずにキリスト教徒を殺害できるようにした。そして、毎日、あらゆる国や都市、村々、広場や道端で、数え切れないほどのキリスト教徒が虐殺されるようになった。　信者に出くわした者は誰でも、その人がキリスト教徒であると知るとすぐに、一言も発することなく、手近にある何かで殴りつけたり、ナイフで刺し貫いたり、剣やその他の手近な武器、石や棒で切り刻んだりして、まるで獣のように殺した。こうして、聖書の次の言葉が成就したのである。*「しかし、あなたのゆえに、私たちは毎日殺され、屠られる羊のように扱われている」*（詩編43:23）。

キリスト教徒にとって過酷なこの時代、キリストのために死ぬという熱意を心に燃やしていた聖アニシアは、ある時、御霊に導かれて自分の部屋を出て、主の神殿へ向かおうとした。いわゆるカサントリオティの門をくぐると、群衆の騒ぎを耳にした。　その日、不信心者たちは太陽の祭りを祝い、不浄な生け贄を捧げていた。すると、向かいから歩いてきた王の兵士の一人が、美しい乙女、聖アニシアを見て、悪魔そのものにそそのかされて彼女を止め、こう言った。

「待て、乙女よ。どこへ行くのか教えてくれ。」

彼の恥知らずさと厚かましさを見て、これが敵の誘惑だと悟った彼女は、彼の目の前で十字を切って身を守った。　しかし、兵士は乙女の貞淑な沈黙を恥じるどころか、それを自分への侮辱であり軽蔑の表れだと見なし、まるで獣のように――狼が羊を捕らえるかのように――彼女を掴み取った。彼はまことに獣よりも獰猛であり、恐ろしい声で彼女に問いただした。「お前は誰だ？　どこから来たのだ？」 彼の で傲慢な手と、彼女に向けられた挑発的な視線から逃れたいと願って、キリストの羊は柔和な答えで彼を退けようと試み、こう言った。

「私はキリストのしもべであり、教会へ向かっているのです。」

しかし、その内に宿る悪魔に駆り立てられた恥知らずな戦士は、彼女にこう言い返した。

「お前を放すわけにはいかない。我々の神々に生贄を捧げる場所へ連れて行く。今日こそ、我々は太陽を祝う祭日だからな。」

そう言いながら、彼は彼女の頭にかぶっていた覆いを無理やり剥ぎ取り、顔を完全にさらそうとした。しかし、彼女は勇敢に抵抗し、頭部をさらすことを許さなかったばかりか、彼の顔に唾を吐きかけ、こう言い放った。

「悪魔よ、私の主イエス・キリストが、お前に禁じ給え！」

すると、その兵士はキリストの名を聞くに耐えられず、腰に差していた剣を抜き、彼女の脇腹を突き刺して貫いた。聖なる乙女は地面に倒れ、流れ出る血と共に、その聖なる魂を、愛し、生涯を通じてそのために死ぬことを切に願っていた主キリスト・神の御手に委ねた。　この光景を目撃した通行人たちは、すでに息絶え、血にまみれて横たわっている彼女の周りに集まった。ある者は彼女の若さと残酷な最期を嘆き、またある者は、罪のない人々を滅ぼすためにこのような過酷な法律を制定した不敬虔な王を非難した。　信者たちの中には、彼女の尊い遺骸を回収し、敬意を込めて、カサントリオティの門から二ヴェルスタ離れた、大通りの左側に埋葬した者もいた。その後、アニシアの埋葬地の上に礼拝堂が建てられた。　これは、この世にマクシミアヌスが君臨していた時代に起こった出来事であるが、信者たちの上には、終わりのない永遠にわたり、我らの主イエス・キリストが君臨しておられる。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがあるように。アーメン。

聖殉教者フィレテルの記念日

記念日：12月30日

ある日、ディオクレティアヌスがニコミディアに到着したとき、あるキリスト教徒の存在を告げられた。王は直ちに彼を呼び寄せ、自分の元へ連れてくるよう命じたが、その姿を見たとき、驚愕した。聖人は背が高く、非常に美しかったからである。そのため、ディオクレティアヌスは彼を人間ではなく神と呼んだ。そして王は彼に言った。

「教えてくれ――お前はどこの出身か？　名前は？　そして、どのような家柄なのか？」

聖人はこう答えた。

「私はここニコメディアで生まれ育ちました。エパルホスの息子であり、キリスト教徒として信仰を持ち、キリスト教徒たちと共に暮らしています。」

王は彼を自分のそばに呼び寄せ、最初は優しい言葉で彼を説得しようとしたが、その一方で、我らの主イエス・キリストを冒涜する言葉を口にしていた。聖人はその神を冒涜する者から身を引くと、天を仰ぎ見てこう言った。

「わがキリストを冒涜する者を、それが王であれ、他の誰であれ、その口を封じ給え。」

するとたちまち地震が起こり、恐ろしい雷鳴が轟き、王やその周囲の人々は震え上がった。その後、フィレテルは灼熱の炉に投げ込まれた。しかし、聖人は祈りを捧げると、炉は崩れ落ち、火は消え、彼は無傷で出てきた。　王は、今まさに起こった奇跡に感銘を受け、また彼の美貌と高貴な家柄に心を動かされ、彼が望む場所へ自由に行くことを許した。

その後、ニコメディアでマクシミアヌス[402]　が統治していた頃、聖人は再び王の前で誣告された。そして再び王の前に引き出されると、彼は、全世界の創造主であり摂理者である私たちの神、キリストを告白した。　このため、まず棍棒で殴打され始めた。拷問者たち、すなわち処刑執行人たちは、その熱意のあまり完全に力尽きてしまい、かろうじて息のある状態で地面に倒れ込んだが、聖人

[402] マクシミアヌス2世ガレリウスは、ディオクレティアヌス帝の娘婿であり後継者であり、306年から311年にかけてローマ帝国の東部を統治した。

はまるで痛みを感じていないかのようであり、あたかも苦しんでいるのが自分ではなく、他の誰かであるかのように見えた。キリストが彼をそのように強めておられたのである。　その後、彼は絞首刑に処され、削り刑にさらされた。続いて野獣に食わせようと放り出されたが、獣たちはただ聖人の足元で転げ回っていただけだった　。――彼を無理やり神殿に連れ込み、そこで偶像に拝ませようとしたが、殉教者は神に祈りを捧げると、偶像は粉々に砕けて地面に倒れ落ちた。　そこで王は、聖人を剣で斬り殺すよう命じたが、彼を捕らえた使用人の手はたちまち萎えてしまった。王の命令を執行しようとしたもう一人の者にも、同じ運命が待ち受けていた――聖人の首を切り落とそうと剣を振り上げた瞬間、その手は動かなくなってしまった。　その後、殉教者は牢獄に投じられ、鎖で縛られた。そして、彼が服従する気配を微塵も示さなかったため、王は彼をプロコンニス[403]　への追放に処し、そこで彼は縛られたまま送り出された。　道中、彼は数多くの奇跡を起こした。悪霊を追い出し、ハンセン病患者を清め、その他あらゆる病気を治した。ただ一言で偶像を倒し、見事に建てられた偶像崇拝の神殿に触れると、それは基礎まで崩れ落ちた。　これらすべての奇跡的なしるし、とりわけ最後の神殿の崩壊は、多くの人々をキリストへの信仰へと導いた。その中には、聖人を流刑地へ連行するよう命じられていた六人の兵士とその指揮官も含まれていた。

殉教者と彼を護送する兵士たちがシグリア地方[404]　に到着すると、そこでも聖人は多くの奇跡を起こしたが、周囲の人々は、この近くに住むエウヴィオト[405]　という名のキリスト教徒がおり、彼はキリストのために領主から多くの残酷な苦難を強いられたものの、無傷のままであり、偉大な奇跡を起こしていると告げた。　これを聞いた聖フィレテルは、エウビオトを訪ねて会うことを決意した。その時、至福のエウビオトの前に主の天使が現れ、こう言った。

「あなたの庵を出て、ある場所へ行き、あなたの同胞であるフィレテルを迎えなさい。」

隠者は直ちに庵を出て、住んでいた山を下り始めた。一方、フィレテルは、ある村人の指示に従い、エヴィオトに会いに行く道を進みながら、彼と離れることを望まず、信仰を持ち洗礼を受けた隊長と六人の兵士たちと共に、シグリアンの山を登り始めた。　少し進むと、彼らは自分たちの方へ降りてくる至福のエヴィオトに出会い、互いに挨拶を交わして、互いに喜びに満たされた。霊的に喜びを分かち合いながら、彼らは皆、聖エヴィオトの住む山へと登り、そこで七日間を共に過ごした。そして、至福のフィレテルは、愛をもって望んでいた眠りについた。すなわち、彼が愛し、また彼を愛してくださったキリスト・神のもとへ旅立ち、その霊を神の御手に委ねたのである[406]　。至福のエウビオトは、彼を自身の住まいの場所に埋葬した。　11日が過ぎると、聖人を護衛していた隊長と六人の兵士たちも息を引き取り、彼らは皆、聖殉教者の聖遺物の近くに埋葬された。

聖ゾティコス・シロトピタテルの記念日

記念日：12月30日

尊者ゾティクスは名門かつ由緒ある家系に生まれ、ローマで育った。若き頃から世俗的・霊的なあらゆる知恵を学び、その結果、最初のキリスト教皇帝であるコンスタンティヌス大帝に重用され

[403] プロコンニス――マルマラ海に浮かぶ島で、現在はマルマラと呼ばれる。
[404] シグリア地方――小アジアのキジク近郊にある山岳地帯。
[405] 聖殉教者エヴィオトの記念日は12月18日。
[406] 聖殉教者フィレテルの死は311年に起こった。

た。 この敬虔な君主が帝国の首都をローマからコンスタンティノープルに移した際[407] 、至福のゾティクは他の側近たちと共にこの都市へ移り住み、そこでマギストリアンの位を授けられた[408] 。

しかし間もなく、世俗の名誉や虚栄を捨てて、彼は司祭の職に就いた。アブラハムが自分の茂みを開放したように、聖ゾティクもまた、貧しい人々を受け入れ、養うために自分の家を開放した。住む場所を失った人々、旅人、病人を宿に迎え入れ、未亡人、身寄りのない者、孤児たちにとって真の父であった。

その頃、街では、東洋で常に猛威を振るっていた病――ハンセン病が蔓延していた。病気の拡大を食い止めるため、ハンセン病患者をすべて海に投げ込むという命令が出された。慈悲深いゾティクは、神の愛に燃え上がり、王のもとへ赴き、こう言った。

「おお、王よ！ あなたのしもべである私に、できるだけ多くの金をください。そうすれば、私はあなたのために貴重な真珠や、あなたの器に飾る輝く宝石を買うことができます。私はこうしたことに非常に精通しているからです。」

ゾティクを愛していた王は、その願いを叶えるよう命じた。そして、この神に愛された善行の奉仕者は、金を受け取ると、喜びと歓びに満ちて王宮を後にした。 彼はその金を最も有意義な用途に充てた。地方長官から、ハンセン病患者を捕らえて海に投げ込むよう命じられていた兵士たちに対し、聖ゾティクスは金を使ってその不幸な人々を買い戻し、自らの保護下に置いたのである。 コンスタンティノープルの近く、ボスポラス海峡の対岸にあるある山の上に、彼はハンセン病患者のための病院を建設し、そこで彼らを安らぎに導いた。こうして彼は、偉大なるコンスタンティヌスから授かった金すべてを、ハンセン病患者や病人のために使い果たした。

その間、この敬虔な皇帝は亡くなり、王位にはその息子コンスタンティウス[409] が就いたが、彼は父の敬虔さを継ぐことはなかった。彼はアリウス派の異端に陥り、正教徒を迫害した。 聖ゾティクスもまた、彼から苦難を強いられる運命にあった。ゾティクスが父から宝石を購入するために金を持ち出したと告げ口した悪意ある者たちの讒言により、皇帝はゾティクスを呼び出し、こう尋ねた。

「我々の宮廷用品のために、真珠やその他の宝石を用意したか。それらを購入するために、お前は我らの父上からあれほど多くの金を奪ったではないか？」

ゾティックはこう答えた。

「王よ、船を用意してください。そうすれば、あなたがこれまで見たこともないような富をお見せしましょう。」

その後、王と共にボスポラス海峡の対岸へ渡ると、彼は王を病院へと案内し、ハンセン病患者や病人を指さしながら言った。

「ほら、王よ、これこそが、あなたの救いのために、私が多大な苦労と高価な代償を払って手に入れた、美しい宝石と輝く真珠です。」

王は聖人に激怒し、彼を野生のラバに縛り付け、野原や道を駆け巡らせるよう命じた。 ラバに引かれて岩の上を引っ張られる中、聖人は激しい苦痛に苛まれた。その全身は鋭い岩に引き裂かれ、やがてラバが彼を山から一気に引きずり下ろしたとき、その骨さえも砕け散り、彼は主の御手に魂を委ねた[410] 。 そして、彼が息を引き取ったその場所からは、清らかで甘い水が湧き出し、この水に

---

[407] 330年、かつてビザンティウムと呼ばれていた都市が「新ローマ」と改称され、盛大な聖別式が執り行われた。もっとも、この名称がビザンティウムに用いられることは稀であり、コンスタンティヌス大帝の名にちなんで、主にコンスタンティノープル、すなわち「コンスタンティヌスの都」と呼ばれていた。

[408] 「マギステル」とは本来「教師」を意味するが、ビザンツ帝国の皇帝時代には、この称号は宮廷における最高位の官職の一つ、いわば現在の宮内大臣に相当する地位を指していた。

[409] コンスタンティウス皇帝は337年から361年まで在位した。

[410] これは4世紀の半ば頃にあたる。

よってあらゆる病が癒やされた。これは、神に愛された聖人の栄光のためであり、三位一体の唯一の神の栄光と誉れのためであり、その神は万民によって永遠に賛美され、崇められている。アーメン。

ケサリアの聖テオドラの記念日

記念日：12月30日

聖テオドラは、ケサリアの聖アンナ修道院で修道生活を送った。彼女は、レウ・イサウリアヌスとその息子コンスタンティノス・コプロニモスの治世[411] に生き、由緒ある名門の出身であった。父はテオフィロスという名で、パトリキウスという高い位階にあり、母はテオドラと呼ばれていた。このテオドラの母は、長年にわたり子を授からず、心を痛め、熱心に神に祈りを捧げていた。とりわけ、彼女は涙ながらに聖母マリアに懇願し、聖母マリアの母である義人アンナに倣うような恵みを受けた。すなわち、テオドラの不妊は解消され、彼女は身ごもり、娘を産んだのである。 娘が成長すると、母は彼女を、生まれながらにして神に捧げられた者として、聖アンナの教会へ連れて行った。少女テオドラは修道院に受け入れられ、そこで敬虔な修道院長による慈愛に満ちた指導の下で暮らし、聖書について教えを受けた。 一方、この若き修道女の敬虔で徳高い生活は、そこに自らの恥辱を見出した全悪の悪魔にとっては耐え難いものであった。そこで悪魔は、偶像破壊派の皇帝レウスに、この汚れなき子羊を自身の宮廷高官の一人と結婚させるよう思いつかせた。 彼女は無理やり連れ去られ、修道院の姉妹たちから引き離されるという耐え難い悲しみを抱えながら、コンスタンティノープルへと連れて行かれた。そこではすでに彼女の結婚に向けた準備がすべて整えられており、皇帝の命により、婚礼の殿堂も用意されていた。しかし、この悪辣な企ての結末は、思いがけないものとなった。 かつて、サラに対する淫らな欲望に駆られたエジプト人を懲らしめ（創世記12:10–20）、リプシミアの貞操を犯そうとしたティリダトスの力を打ち砕いた神（[412] ）は、奇跡的な方法でテオドラをも、強制結婚による穢れから救い出したのである。 婚礼の宴の最中、スキタイ人が首都を襲撃した[413] 。新郎は直ちに敵対勢力へと派遣されたが、最初の戦闘で命を落とした。一方、大混乱の中、キリストの清らかな子羊であるテオドラは、訪れた好機を捉え、婚礼の宴に出席していた者たちの目につかないように姿を消し、金、 銀、宝石、そして高価な宝石で飾られた衣服を携えて海辺へ向かい、船に乗り込み、喜びながら自分の修道院へと戻り、すべてに神に感謝した。 その後、王の役人の一人が、姿を隠したテオドラのことを知り、修道院にやって来て、彼女がすでに修道服を身にまとい、ぼろ服を着ているのを見つけたが、神の摂理により、彼女を放っておいた。 こうして迫害者たちから完全に解放された聖テオドラは、禁欲の修行によって肉体を極限まで衰弱させ、皮膚越しに骨が透けて見えるほどであった。 彼女の食事は、たった一片の小さなパンだけであり、それも二、三日に一度だけだった。彼女の唯一の衣服は粗い羊毛でできており、寝床は鋭い石が敷かれ、その上に粗末なぼろ布がかけられていた。こうして彼女は徹夜祈りを守り、不本意ながらも重い眠りに落ちる

---

411 レウス3世・イサウリア人は717年から741年まで在位し、その後を息子のコンスタンティノス5世・コプロニモス（741年～775年）が継いだ。これらの皇帝は、最初の偶像破壊者たちであった。

412 アルメニア王ティリダトスは、ローマ皇帝ディオクレティアヌスと親交があった。ディオクレティアヌスは、キリスト教徒のリプシミアを妻に迎えようとしたが、彼女は逃げ出し、アルメニアのある修道院に身を隠した。ディオクレティアヌスはティリダトスに、彼女を見つけ出して自分のもとへ送るか、あるいは望むなら自ら妻に迎えるよう求めた。 リプシミアの驚くべき美しさを知ったティリダトは、彼女を手に入れたいという情熱に燃え上がり、彼女を迎えに行く使者を送った。しかし、豪華な贈り物を携えて派遣された使者たちは、雷に打たれ、恐ろしい恐怖に駆られて戻ってきた。激怒した王は軍隊の一隊を派遣した。リプシミアは王のもとに連行され、王の寝室へと案内された。王は彼女に暴行を加えようとしたが、ペルシア軍を打ち破った勝利者でさえ、キリストの花嫁であるその乙女を屈服させることはできなかった。

413 スキフィアとは、ビザンティウムの北東、ポントス（黒海）沿岸に位置する国のことである。

ときも、しばしば一晩中眠らずに過ごした。　これらの苦行に満足せず、彼女は自らの体を鉄の鎖で縛り、すべての関節や四肢を極限まで消耗させたため、その骨からは悪臭が漂っていた。こうして長年にわたりあらゆる美徳に満ち溢れ、彼女は老いることのない至福の生活へと移っていった[414]。

コンスタンティノープルの聖テオドラの記念日

記念日：12月30日

聖テオドラはギリシャ人出身で、莫大な富を持ち、当初はキリスト教徒として結婚生活を送っていた。夫の死後、彼女は主の戒めに従い、*「自分の十字架を背負い」*、キリストに従うために修道者となった（マルコ8:34;　マタイ16:24）。これは、ローマ[415]の治世下、聖ヴァシレイオス・ノヴォスが生きていた頃のことであった。聖ヴァシレイオスは、テオドラの家に、彼のために特別に設けられた祈りの小部屋に住んでおり、彼女の指導のもと、彼女は敬虔な生活を送っていた。こうして老齢に至るまで生き、彼女は12月の30日にこの世を去った。　そして、聖テオドラの魂が肉体から離れ、聖なる天使たちに運ばれようとしたとき、聖ヴァシレイオスは、彼女の魂を助けるため、いわば贖いのための資金として、自分の懐から小さな宝箱を取り出し、天使たちに手渡した。

そのヴァシリーにはグリゴリーという名の弟子がおり、彼は祈りを込めてヴァシリーに尋ねた。

「テオドラはどこにおられるのですか？」

そしてある日、グリゴリウスが眠っているとき、明るい姿の若者が彼の前に現れて言った。

「急いで行きなさい。聖ヴァシリーがあなたを呼び、テオドラを見せてくれるそうです。」

グリゴリーはたちまち楽園の門へと引き上げられ、その後、聖なる場所へと導かれた。そこで彼は聖ヴァシリーとフェオドラを見出し、皆で共に喜びを分かち合った。そしてグリゴリーは尋ねた。

「テオドラ様！　あなたはあの恐ろしい死の瞬間をどのように乗り越え、邪悪な霊たちからどのように逃れたのですか？」

すると彼女は順を追ってこう語った。

「私の魂が肉体から離れたとき、恐ろしいエチオピア人たちが現れ、私の生前の行いをすべて記した巻物を見せながら、豚のように金切り声を上げ、私に向かって歯ぎしりをしていました。その後、天使たちが私を連れ去り、試練の場を巡らせました。　最初の試練は「虚偽」、二番目は「誹謗」、三番目は「嫉妬」、四番目は「自尊心による根拠のない傷つきやすさ」、五番目は「激しい怒り」、六番目は「高慢」、七番目は「悪口と卑猥な言葉」、八番目は「強奪とお世辞」、　第九は虚栄心、第十は金銭への執着、第十一は酩酊、第十二は恨み深さ、第十三は魔術、第十四は呪術と護符の使用、　第十五は、暴食と偶像崇拝；第十六は、姦淫；第十七は、殺人；第十八は、窃盗；第十九は、淫行；第二十は、不慈悲。　そして、もしどの試練の場においても、私の義を証明するために私の善行の証言だけでは不十分であった場合、天使たちは聖ヴァシレイの善行の賜物から、私の善行にそれを加えてくれた。　こうして私はすべての試練を何事もなく通り抜け、この至福の地へと導かれた。もし魂が罪深いものであれば、それはエフィオパたちの手に委ねられ、彼らはその魂を苦しめ、苦痛へと追い込むのである。

すると、グリゴリウスはすぐに目を覚まし、夢見心地の中で見たことや聞いたことを私たちに語った。私たちはそれを聞いて驚き、天の住まいにおいてテオドロスに御自身の御恵みを授けてくださった偉大なる神、私たちの救い主に感謝した。

---

[414] 聖テオドラの死は、8世紀後半に訪れた。

[415] ローマヌス1世ラカペノス皇帝は、919年から944年までビザンツ帝国を統治した。

1月13日

12月31日（旧暦）

私たちの聖母メラニア・リムリャニナの生涯。

記念日12月31日

良い木から良い実が生まれるように、聖なる枝もまた聖なる根から生じる。これは、敬虔なキリスト教徒の両親の間に生まれた聖女メラニアの例に見られる。　彼女の父と祖父は、最高位の元老院議員の一人であった。成長するにつれ、メラニアは自らの処女性を清らかに保ちたいと切に願い、しばしば全力を尽くして両親にそう懇願した。　しかし、彼女は両親にとって唯一の娘であり、数え切れないほどの領地や富を継ぐ他の相続人がいなかったため、聖女が十四歳になったとき、両親は彼女の意志に反して、彼女を、身分の同等の十七歳のアピニアヌスという男性に嫁がせた。　結婚が成立した後も、メラニアは「処女性までは無理でも、清らかさは守りたい」という思いと願いを捨てず、あらゆる手段で夫に節制を勧め、しばしば涙ながらにこう諭した。

「もし私たちが清らかに共に暮らし、若き日に肉欲に溺れることなく神に仕えることができたなら、どれほど幸せだったことでしょう。それは私が常に願い、今も願っていることです！　そうすれば、私たちはあなたと共に、神に喜ばれる素晴らしい人生を送ることができたでしょう。もし、若さに特有のあなたの情熱があなたを支配し、私の願いを叶えることを妨げ、肉欲に打ち勝つことができないのなら――私を置いていき、私の願いの妨げにならないでください。　身代金として、私は自分の全財産、男奴隷や女奴隷、財宝、金や銀、その他数え切れないほどの資産をあなたに差し出します。これらすべてを自由に使いなさい。ただ、私を肉欲的な関係から解放してください。

こうした言葉を聞いたアピニアンは、彼女の願いを完全に拒むことはしなかったが、全面的に承諾することもなく、ただ優しくこう言った。

「私たちの財産を継ぐ後継者が生まれるまでは、それは叶いません。もしそのような後継者が生まれたなら、その時こそ私もあなたの善意に遅れを取らないでしょう。なぜなら、善行や神への志において、妻が夫に先んじるのは好ましくないからです。」　神が私たちの夫婦の間に子を与えてくださるまで待ちましょう。そうして、その時にこそ、あなたが望むような生活に共に歩み始めましょう。

メラニアは夫のこの意向に同意し、やがて神は彼らに娘を授けられた。娘が生まれた後、メラニアはまるで自分の負債を返済するかのように、娘のために貞操の誓いを立てた。彼女は、自分の意志に反して嫁がされたために守ることができなかったことを、娘には守ってほしいと願ったのである。

その後、新たな生活に向けて準備を進める中で、彼女は節制と肉体の抑制を自らに課し始めた。断食をし、肉欲の快楽を一切断ち、美しい衣服や高価な女性の装飾品を身に着けることを拒み、浴場にも行かなかった。　そして、夫や両親が風呂に行くよう説得しても、彼女は体を露わにすることはなく、顔だけを洗ってそこから出て行った。さらに、女中たちにそのことを誰にも話さないよう命じ、口止めのために贈り物をした。その際、彼女は夫に約束の履行を要求した。

「私たちにはすでに、」と彼女は言った、「私たちの財産を継ぐ娘がいる。だから、あなたが約束したように、夫婦の交わりは控えることにしましょう。」

しかし、彼は妻の言うことを聞き入れなかった。

メラニアは、彼の反対を見て、父、母、夫、子供、そしてすべての富を置き去りにして、未知の国へ密かに逃げることを企てた。それほどまでに、彼女は神への渇望と清らかに生きたいという願いに強く駆られていたのだ。　もし、ある賢明な人々からの助言が彼女を引き止めていなければ、彼女はすぐにそうしていたでしょう。彼らは彼女に、次の使徒の言葉を取り上げてこう思い出させたのです。*「結婚している者たちについては、私が命じるのではなく、主が命じられるのです。『妻は夫と離婚してはならない』」*そしてまた、*「妻よ、どうしてあなたは、夫を救うことができないと断言できるのか。あるいは、夫よ、どうして妻を救えないと断言できるのか？」*（Iコリント7:10–16）。

かくして、夫を救いたいという思いに駆られ、彼女は逃亡の考えを断念した。しかし、妻としての義務を果たすことは彼女にとって辛いことだった。彼女は密かに体に硬い毛皮の衣を身に着けており、夫と二人きりになることが分かっている時だけ、夫に自分のそのような生活を知られないよう、それを脱いでいた。　ところが、ある時、父の妹がこれに気づき、その毛皮の衣を嘲笑し、そのことを理由に聖女を苛立ちさせ、侮辱し始めた。メラニアは涙ながらに、知ったことを誰にも話さないよう彼女に懇願した。その直後、メラニアは二度目の妊娠をし、出産の時期が近づいていた。　聖殉教者ラウレンティウスの記念日が訪れた。聖女は一晩中眠らずに、ひざまずいて祈りを捧げ、詩篇を詠み続けた。その間、彼女は自然の痛みに耐えようと努めた。朝が訪れたが、彼女はその過酷な祈りを止めようとはしなかった。　産婦の激しい痛みは極限まで強まったが、彼女は依然として祈りのためにひざまずき続け、ついに徹夜の祈りの労苦と自然の病に耐えきれなくなった。その時、彼女は激しい苦痛の末、男児を出産した。　聖なる洗礼を受けたその赤ん坊は、たちまちこの世を去り、天の御国へと旅立った。この出産の後、メラニアは重病に陥り、死の淵に立たされた。夫は彼女の枕元に立ち、彼女への切ない想いや後悔のあまり、自らもかろうじて息をしている状態だった。　悲しみに暮れた彼は急いで教会へ駆けつけ、泣きながら神に祈り、愛する妻の癒やしを懇願した。一方、メラニアは、夫を自分の意図に導くのに好機だと見抜き、彼がまだ教会にいる間に、次のように伝えさせた。

「もしあなたと私が生き続けたいのなら、もう二度と私に手を出さないことを神の前で誓ってください。そうすれば、私たちは生涯、清らかに共に生きることができます。」

メラニアの夫は、彼女を言葉では言い表せないほど愛し、彼女の健康を自分のものよりも優先していたため、彼女の意志に従い、神の前で彼女と清らかに生きることを誓った。使いが戻ってこのことをメラニアに伝えると、彼女は喜び、心が軽くなった。　彼女の肉体の病は、霊的な喜びに取って代わられ、メラニアは、病を通じて彼女の心の最も切なる願いを叶えて助けてくださった至高なる方を賛美した。

メラニアが病床から立ち上がったとき、神に捧げられた処女の美しい花である彼女の娘は、神のもとへと旅立った。娘の死は、アピニアヌスを清らかさを守ることに一層傾かせた。とりわけ、メラニアが絶えず彼にそうするよう説き続けたからである。

「ほらね」と彼女は、娘が亡くなった時にこう言った。「神ご自身が、私たちに清らかな生き方を求めておられるのがわかるでしょう？もし神が、私たちの肉的な夫婦関係を続けることを望んでおられたなら、子供たちを私たちから奪うことはなかったはずです。」

こうして、アピニアンとメラニアは、肉体的で自然な夫婦生活の後、より高次で霊的な結婚生活に入り、断食、祈り、労苦、肉欲の抑制に励みながら、互いに徳を積むよう励まし合った。　二人は、すべての財産を貧しい人々を通じてキリストに捧げ、自分たちはこの世から完全に背を向け、修道士になることに同意した。しかし、メラニアの両親は、どうしてもこれを許そうとしなかった。
そしてある夜、アピニアンとメラニアが、　この世の狡猾に張り巡らされた罠からいかにして逃れられるかについて、深く嘆き、互いに相談していたとき、突然、天から神の恵みが彼らを照らした。
彼らは、知性では理解できず、言葉では表現できないほど、天から降り注ぐ偉大な芳香を感じ取り、その霊的な喜びに満たされて、すべての悲しみを忘れてしまった。　それ以来、聖人たちは霊的な恵

みへのさらなる渇望に駆られるようになった。世と世にあるすべてのものが彼らには嫌気がさし、彼らはすべてを捨ててどこかへ逃げ出し、修道士になることを決意した。しかし、神の摂理は、彼らが望むものを達成するための別の道を用意していた。

まもなくメラニアの父が亡くなり、アピニアンとメラニアは行動の自由を得た。しかし、彼らはキリストに捧げることを誓った多くの財産を持っていたため、すぐにこの世や故郷と決別することはなかった。　貧しい人々にすべての財産を配り終えるまでの間、彼らはローマ郊外にある自分たちの領地の一つを住処として選び、厳格に清らかさを保ちながら暮らした。この至福の夫婦がこのような神に喜ばれる生活を選んだ当時、アピニアヌスは24歳になりつつあり、メラニアは20歳を終えようとしていた[416] 。 若さが通常、肉欲の炎に燃え上がるようなその年代において、この聖なる夫婦が肉的な本性を超えた生活を送り、バビロンの炉の中の少年たちのように、その炎に焼かれることなく留まっていたことは、まことに偉大な奇跡である。

これらすべては、メラニアの導きのもとで成し遂げられた。彼女は、主の賢いしもべとして、自分自身と夫の両方を厳しく見守り、夫にとって主の道における教師であり、導き手であり、指導者であった。このような素晴らしい生活を送りながら、彼らは自分の財産を売り払い、困っている人々に惜しみなく援助の手を差し伸べていた。

その頃、神は彼らに一つの試練をお与えになった。アピニアヌスの兄弟であるセヴェルという男は、この至福の夫婦の生活を見て、アピニアヌスとメラニアを何とも思わなくなり、彼らの財産の一部を奪い始めた。　しかし、二人が自分に抵抗せず、奪われた財産を気にも留めていないのを見ると、彼はさらに大きなことを企み、すべてを自分のものにし始めた。アピニアンとメラニアは、その寛容さゆえに、神に希望を置き、これを耐え忍んだ。　彼らを悲しませたのはただ一つ、キリストに捧げるつもりだった財産が嫉妬深い者の手に渡っていくのを見て、貧しい人々の財産が奪われていくことを嘆いたことだった。　しかし、御自分のしもべたちを守り、彼らを迫害する者の手から救い出される主は、セウェルスに対抗して、敬虔な女王ヴェリナを立てられた[417] 。彼女はアピニアンとメラニアの神に喜ばれる生き方を耳にし、セウェルスが彼らから財産を奪っていることを知ると、二人を自分の元へ呼び寄せ、敬意をもって迎え入れた。　敬虔な夫婦が、粗末な服を身にまとい、謙虚な様子で女王の前に現れたとき、女王は彼らの貧しさと謙虚さに深く感銘を受けた。そして、メラニアを抱きしめながら、こう言った。「このような生き方を選んだあなたは、なんと幸いなことか！」その際、女王はセウェルスへの復讐を約束した。しかし、メラニアとアピニアンは、復讐に訴えるのではなく、セウェルスを諭して、これ以上彼らに害を及ぼさないようにしてほしいと懇願した。

「私たちにとって」と彼らは言った、「誰かを傷つけるよりは、傷つけられることを耐えるほうがましです。なぜなら、聖書は、頬を打たれた者は、もう一方の頬も差し出せと命じているからです（マタイ5:39）。「女王様、あなたが慈悲深く私たちを守ろうとしてくださることに感謝いたしますが、セウェルスへの復讐はお願いいたしません。それどころか、私たちのために彼に何の害も及ばないよう願います。　今後、彼らが私たちに対して悪行を働き、私たちのものではなく、キリストとキリストの僕たち、孤児や未亡人、貧者や困窮者たちに属するものを奪うことをやめてくれるだけで、私たちにとっては十分です。

さらに彼らは女王に対し、イタリアのローマ管区だけでなく、シチリア[418] 、スペイン、ガリア、ブリタニアにある都市や集落といった広大な領地を、いかなる妨げもなく自由に売却できるよう懇願した。　メラニアの両親はそれほど裕福であったため、王を除けば、彼らより裕福な者は誰もいなかった。王妃はアピニアンとメラニアの願いを聞き入れ、彼らがどこにあろうとも、すべての領地を妨げられることなく売却する自由を与えられた。　メラニアは王の妹にいくつかの高価な贈り物を

[416] メラニアの人生におけるこの転機は、401年に訪れた。
[417] ヴェリナは、396年から423年にかけてローマ帝国の西部を統治したゴノリウス帝の妃である。
[418] シチリアは、アペニン半島（イタリア）の南西端に近い地中海に浮かぶ大きな島である。

贈りたいと願ったが、妹は、キリストに捧げられた品々を受け取ることを冒涜であると考え、提示されたものの中から何も受け取ろうとしなかった。

ついに、アピニアンとメラニアは、王宮から彼らの滞在先へと、大いなる栄誉を帯びて帰還した。

彼らがキリストに捧げた富の規模については、当時、ローマにある彼らの家を適正な価格で買い取れる者が誰もいなかったという事実から推し量ることができる。　その後、その家が蛮族によって放火され、火災で著しく損傷した際、初めてその価値を下回る価格で売却され、売却益は貧しい人々に配られたのである。　このように、アピニアンとメラニアは、ヨブよりも神に対してより大きな熱意を示したと言える。なぜなら、ヨブは自らの意志に反して富を失った際に神に感謝したのに対し、この二人は貧しさを志して、自発的にそのような富を放棄したからである。　当初、そのような生活は彼らにとって悲しみに満ち、非常に困難なものに思えたが、やがてそれは軽くなり、あらゆる慰めに満ちたものとなった。なぜなら、キリストの*「くびき」は「良きもの」*であり、*「その荷は軽い」*からである（マタイ11:30）。

悪魔は、敬虔な夫婦を金銭欲で誘惑しようと企んだ。　ある日、売却した領地から大量の金が持ち込まれたとき、悪魔は彼らの心に金への執着を植え付けようとした。しかし、メラニアは古の蛇の策略を見抜き、即座にその頭を打ち砕き、金を塵と見なし、貧しい人々に惜しみなく施した。この聖女は、自身のことを次のように語っている。

「私には、高く美しい場所に建つ屋敷のある一つの領地がありました。それは私たちの所有するどの領地よりも優れていました。その一方は海に面しており、山からは船が航行する様子や、漁師たちが魚を捕る様子が見えました。　反対側には高い木々がそびえ立ち、作物が植えられた畑や果樹園、豊かなブドウ畑が見えました。ある場所には豪華な浴場が設けられ、別の場所には泉がありました。あちらでは様々な鳥のさえずりが聞こえ、こちらには柵で囲まれた場所にあらゆる種類の獣がいて、それらを狩ることもできました。　そして、敵は私に、その美しさゆえにこの領地を大切に守り、売らずに自分のために残してそこに住むべきだという考えを吹き込みました。しかし、神の恵みにより、私はそれが敵の策略であると悟り、心を天上の住まいに向け、直ちにその領地を売却し、得た金を私のキリストに捧げました。

敬虔な夫婦がイタリアの領地を売却した後、彼らの施しは、水量の豊かな川のように、地の果てまで流れ出しました。　彼らはメソポタミア、フェニキア、シリア、エジプト、パレスチナへと、多くの施しを送り続けた――教会や男女の修道院、宿屋や病院、孤児や未亡人、鎖につながれた者や牢獄に囚われた者たち、さらには捕虜の身代金のためにも。　西も東も、彼女たちの手から注がれる寛大な施しで満たされていた。時には、静かで人里離れた場所に島を丸ごと買い取り、そこに修道院を建てて、聖職者たちの維持に委ねた。　至る所で、彼らは聖なる教会を金や銀、司祭用の金糸織りの祭服で飾り立て、教会の威厳を高めるために惜しみなく資金を投じた。　その後、イタリアにある領地のほんの一部を売却せずに残し、彼らはまだ存命だった母メラニアと共に船に乗り込み、シチリアへと向かった。その目的は、一部には現地の所有地を自ら売却するためであり、また一部には、彼らの霊的指導者である至福のパウリヌス司教を訪ねるためでもあった。

彼らの出発直後、蛮族がローマを襲撃し[419]、剣と火によって都市の周辺地域およびイタリア全土を荒廃させた。　聖人たちは、神の助けにより、この災難に先立って自らの領地を売却することができたのは、賢明な判断であった。なぜなら、神からのいかなる報いもなく無駄に失われるはずだったものが、彼らにとっては永遠の命における百倍の報いへと変わったからである。　さらに彼らは

[419] 言うまでもなく、ゴート族とはゲルマン系部族の一族であり、408年、409年、410年にローマを包囲し、ついに略奪した。

、野蛮人による激しい破壊が訪れる前に、ロトがソドムを去ったように[420] 、イタリアを離れ、この世の健康も無傷のまま保つことができた。シチリアに立ち寄り、その道中でノーラの聖パウリヌス司教[421] と面会した後、彼らは現地にあった領地に関する手続きを整え、リヴィアとカルタゴ[422] へと船出した。

彼らが海を航行していると、激しい嵐と大波が巻き起こり、それは何日も続いた。船内の淡水はすでに底をつきかけていたが、漕ぎ手や使用人は大勢おり、皆が激しい渇きに苦しんでいた。 聖メラニアは、主が彼女たちが選んだリビアへの道に祝福を与えていないことを悟り、神が船を が望む場所へと導いてくださると信じ、風向きに合わせて帆を翻すよう命じた。 風に運ばれて、彼らはある島にたどり着いた。彼らの到着直前に、野蛮人たちが突然この島を襲撃し、島を占領して、大勢の男女を連れ去った。そして、残された住民たちには、「もし望むなら、速やかに人質を身代金で買い戻せ。さもないと、人質は全員斬首される」と告げた。 島の住民たちは深い悲しみに沈んでいた。資金が乏しかったため、身代金を支払える者はごくわずかだったからだ。

その頃、メラニアとアピニアンが乗った船が島に停泊した。その島の司教は、ローマからの船が到着したと聞き、捕虜の身代金について助けを求めにやって来たが、予想以上の支援を得ることができた。 彼らを憐れんだメラニアとアピニアンは、すべての捕虜の身代金に必要とされるだけの金を差し出した。 彼らがその島を出航すると、穏やかで追い風となる風が吹き、まもなくカルタゴに到着した。そこで船を降りると、彼らは教会や修道院に施しを行い、貧者や病人の生活を楽にするなど、数多くの慈善活動を行った。

こうした善行を積み重ねながら、彼らはカルタゴからほど近いタガスタという町に定住した。タガスタの司教は、聖アウグスティヌスの友人であるアリピウス[423] であり、彼は言葉と学問に長け、彼を訪ねてくるすべての人々を賢明に導いていた。 この善良な牧者に心を寄せたアピニアンと聖メラニアは、彼の教会を豪華に装飾し、そのために多くの土地を購入した。さらに、彼らはそこに二つの修道院を設立した。一つは80人の修道士を収容する男子修道院、もう一つは130人の修道女を収容する女子修道院であり、これらの修道院に土地と必要な物資をすべて提供した。 聖メラニアは、次第にますます厳しい断食に身を慣らしていった。最初は1日おきに食事をとっていたが、やがて2日おきになり、ついには土曜日と日曜日を除いて一週間ずっと断食するようになった。彼女は時折、本の写本に取り組んだ。というのも、彼女の筆跡は非常に美しく、誤り一つなかったからである。また、時には貧しい人々のための衣服を縫うこともあった。 書き写した本は販売に出し、その労働で得たお金を貧しい人々に配った。彼女は聖書の読解にも熱心に励んだ。仕事や筆書きで手が疲れると、読解の練習をし、まるで自分の目に仕事を課すかのようにしていた。 もし長時間の読書で目が疲れても、聴覚が助けとなった。彼女は他の人に読ませ、自分はそれを聞いていたからである。彼女は毎年三回、旧約聖書と新約聖書を読み通す習慣があり、最も重要な箇所は記憶に留め、常に口にしていた。 彼女は夜、わずか2時間ほどしか眠らず、それもベッドの上ではなく、地面に敷いた粗末な藁マットの上で眠った。彼女は、「泥棒がいつやってくるかわからないのだから、常に警戒していなければならない」と語っていた。

---

420 ロトは、ユダヤ人の始祖であるアブラハムの甥である。叔父から離れて、彼は家族と共にソドムに定住した。ソドムは、後に死海が形成された場所にある谷に位置する都市であった。 ソドムの住民たちがその罪によって神の怒りを買い、神がソドムを滅ぼすと宣告したとき、天使からそのことを事前に知らされていたロトは、妻と娘たちと共にソドムから逃げ出した。

421 ノラという町は、イタリア南部のカンパニア地方にありました。聖パヴリンは409年から431年までノラの司教を務めました。彼の記念日は1月23日です。

422 北アフリカ、ほぼイタリアの対岸に位置していた。

423 アリピウスは391年にタガステの司教座に選出された。

彼女は、自分に仕える少女たちにも、このような禁欲的な生活様式を身につけさせた。また、多くの若者たちをも、清らかに生き、処女性を守るよう導いた。彼女は多くの異教徒の魂をキリストのもとに引き寄せ、神のもとへと導いた。

カルタゴでの7年間の生活の後、メラニアはエルサレムにある聖地を訪れたいと願った。母と、かつては夫であったが、今では霊的な兄弟であり同行者となったアピニアンと共に船に乗り込み、彼らと共に海を渡った。　彼らが乗った船は、順風に乗って無事にアレクサンドリアに停泊した。そこで彼らは、アレクサンドリアの大司教である聖キリルを歓迎した。　彼との交わりを満喫した後、彼らは再び海へ出航し、聖都エルサレムに到達した。ここに到着すると、彼らは深い感動と言葉に尽くせない喜びを胸に、主と至聖なる神の母が御自身の聖なる足跡をもって聖別された聖地を巡礼した。　主の聖墓の前では、至福のメラニアは毎晩、夕暮れから祈りのためにその場に留まった。そこで彼女は、主の聖墓にひれ伏し、それを抱きしめ、口づけをしながら、涙を流して、主キリストに心からの祈りを捧げた。

メラニアとアピニアヌスがエルサレムに滞在している間、ある忠実な友人が、彼らが残してきたイタリアの領地を売却し、その代金をエルサレムにいる彼らに送った。

エルサレムを訪れた後、二人はさらにエジプトへ赴き、そこで修道士たちを訪ね、自らの財産をもって彼らに仕えたいと願った。二人は海路で旅立ち、非常に高齢で疲れ果てていた母親を聖都に残した。その際、母親には、彼らの住居としてオリーブ山に家を建てるよう依頼された。

エジプトでは、メラニアは霊的な兄弟であるアピニアンと共に、荒野の修道士たちを訪ね、彼らの神に霊感を受けた言葉から魂に大きな恵みを受けた。同時に、彼らはそこで困窮している人々に対して、 な寛大さを示した。 しかしその一方で、彼らは、差し出された施しを受け取ろうとはせず、まるで蛇の毒牙から逃れるかのように金から逃げ去る、そのような無欲な修道士たちにも数多く出会った。その中にはエフェスティオンという名の修道士がおり、彼もまた、数枚の金貨を受け取るよう懇願されたが、それを断った。　彼の庵を回り、隠者の持ち物を調べたメラニアは、藁の敷物と水差し、少量の乾いたパン、そして塩が入った箱しか見つけることができなかった。彼女はそっとその箱に金を入れ、塩で覆った。　彼らが隠者の元を後にしたとき、このメラニアの行動は老隠者に見逃されなかった。彼は金貨を見つけると、彼らを追いかけて走り出し、立ち止まって自分を待てと大声で叫んだ。彼らが立ち止まると、老隠者は手に持っていた金貨を見せながら、こう言った。

「私にはこれは要らない。何に使うか分からない。自分の持ち物を持ち帰れ。」

二人は答えた。

「もしあなたには必要ないのなら、他の人に譲ってください。」

しかし、老人はこう反論した。

「このあたりで、誰がこれを必要とするというのか？ 何に使うというのか？ ここが人けのない場所であることは、君たちもわかっているだろう。」

彼らはそれでも老人から金を受け取ることを拒んだため、老人はそれを川に投げ捨て、自分の小部屋に戻った。

その後、旅人たちは再びアレクサンドリアに到着し、続いてニトリア[424]　へと向かい、あちこちの隠者の住居を巡った。それはまるで、さまざまな花の間を飛び回り、そこから蜜を集めるミツバチのようなものだった。　その後、彼らは聖なる隠者たちから得た多くの有益な教訓を胸に、エルサレムへと戻った。そして、期待通り、オリーブ山に自分たちのための住居がすでに用意されているのを見つけた。そこで彼らは定住した。

424　ニトリア――アレクサンドリアの南、ナイル川の西、リビア砂漠の近くにある山。この山の名前は、山に隣接する湖に存在したニトラ（硝石）に由来する。

メラニアは狭いケリアに閉じこもり、自分からは誰にも会わず、また誰にも自分を見られないようにするという誓いを立てた。週に一度だけ、彼女の母と霊的兄弟であるアピニアンが彼女を訪ねてきた。彼女はこのような隠遁生活の中で十四年間を過ごした。その間、善行と聖なる希望に満ちたメラニアの母が世を去った。　聖女は、亡き母にふさわしい追悼の儀式を執り行った後、さらに狭く、非常に暗い部屋に再び閉じこもり、そこで1年間を過ごした。彼女の評判は至る所に広まり、多くの人が霊的な恵みを求めて彼女のもとを訪れるようになった。そこでメラニアは、他者の救いに奉仕するために、隠遁生活から身を現した。　彼女は九十人以上の乙女たちを集めて修道院を設立した。彼女のもとに、明らかな罪人である者たちも多く集まったが、彼女に悔い改めの道を教えられ、彼女たちは神に喜ばれる生活を送り始めた。メラニアは自分の修道院のために修道院長を選び、自身は奴隷のように皆に仕え、母のように皆の世話をした。　彼女は修道女たちに様々な美徳を教えた。まず第一に清らかさ、次に、それなしにはいかなる美徳も完全なものとはなり得ない愛、そして謙遜、従順、忍耐、そして悪意を持たないことである。教訓として、彼女は次のような物語を語った。「ある時、ある若者が、ある偉大な長老のもとを訪れ、その弟子になりたいと願った。　すると、その長老は、最初から弟子のあるべき姿を示すため、彼に杖を取らせ、門のそばに立っている柱を、飛びかかって足で蹴りながら、力いっぱい叩くよう命じた。弟子は長老の命令に従い、無機質な柱を全力を込めて叩いた。長老は若者に尋ねた。

「お前が叩いたこの柱は、抵抗したり、怒ったりしたか？　その場から逃げ出したり、お前に向かって襲いかかってきたりしたか？」

若者は答えた。

「いいえ！」

すると、老僧は言った。

「それなら、もっと強く叩きなさい。そして、その一撃ごとに最も残酷な言葉を浴びせなさい。苛立ちを与え、非難し、名誉を傷つけ、罵り、あらゆる手段で中傷しなさい。」

若者がそうすると、老人は尋ねた。

「侮辱された柱は、お前に怒りを露わにしたか？　お前に対して何か言ったか？　抗議したり、非難したりしたか？」

若者は答えた。

「いいえ、師よ！　感覚も魂もない柱が、どうして怒ることができるでしょうか？」

老人は再び言った。

「もし君がこの柱のように、自分を打つ者に怒らず、打撃から逃げず、命令する者に逆らわず、叱責に対して反論せず、あらゆる苦難の中でも常に柱のように揺るぎないままでいられるなら、来なさい。私たちの弟子になりなさい。そうでなければ、我々の門の近くにも近づいてはならない。

このように、聖女は姉妹たちに忍耐と悪意を持たないことを教え、姉妹たちはこの有益な模範から教訓を得た。　聖メラニアは、自ら設立した修道院の修道女たちを教え導きつつ、同時にその修道院に壮麗な教会を建立し、預言者ザカリア、第一殉教者ステファノ、そして四十人の殉教者たちの聖遺物によってその教会が聖別されるよう尽力した。

これらの出来事の後、かつては肉親の夫であった彼女の霊的兄弟、至福のアピニアンは、主なる神に喜ばれ、すでに修道者の身として主のもとへ旅立った。メラニアは彼を尊厳をもって埋葬し、その後、自らも間近に迫った死を待ちながら、この世を去る準備を始めた。しかし、神の摂理は、他者を救うために彼女の命を延ばした。　アピニアンの死後、メラニアはさらに男子修道院を設立し、そのためにすでに残っていた最後の財産をすべて神の栄光のために捧げた。このようにして、霊的にはとっくに貧しさを体得していた彼女は、肉体においても貧者となったのである。

その頃、メラニアのもとに、コンスタンティノープルから、彼女の叔父であるヴォルシアン・ロマーヌスからの書簡が届いた。このヴォルシアンは、当時ローマのアンフィパトの職に就いており

[425] 、西ローマ皇帝からの特別な命を受けてビザンティウムへ派遣されていた。 東方へ到着すると、彼は姪である聖女メラニアに会いたいと願った。そこで、彼はわざわざエルサレムにいる彼女のもとへ使者を送り、ビザンティウムへ来て自分と面会するよう求めた。 当初、メラニアは叔父がギリシャ式の多神教を信仰していたため、彼のもとへ行くことを拒んでいた。しかしその後、霊的指導者たちの助言に従い、彼を神へと導くことができるという希望に駆られて、彼の元へ向かった。 旅の途中、聖女が立ち寄ったすべての都市で、至る所で彼女に多大な敬意が払われた。神は御自身を賛美する者を賛美されるからである。司教や司祭、都市の長老たち、そして民衆が彼女を出迎え、皆がまるで天から降りてきたかのように愛をもって彼女を迎えた。それは、彼女の美徳と聖なる生活の光が全世界に輝いていたからである。 首都においても、彼女はテオドシウス2世皇帝、その皇后エウドキア、そしてプロクルス総主教によって、大いなる栄誉をもって迎えられた。 彼女は叔父のヴォルシアンが病に伏しているところに出くわした。彼女を見た叔父は、その修道女の装いと肉体の自制に深く驚いた。というのも、長きにわたる断食と労苦によって彼女の顔はやつれ、かつての美しさは色あせていたからである。そしてヴォルシアンは叫んだ。

「愛しきメラニアよ、お前は一体どうなってしまったのだ！」

しかし、長々と語る必要はあるだろうか。メラニアの人柄もさることながら、聖プロクルス、そして何よりも、敬虔なキリストのしもべによる神に霊感を受けた対話と有益な諭しによって、まもなく彼女の叔父はギリシャの不敬虔を捨て、聖なる洗礼を受けたのである。 聖なる秘跡を受けた彼は、その数日後に神のもとへ息を引き取り、聖メラニアの手によって埋葬された。

ビザンティウムでのかなり長期にわたる滞在中、メラニアは、当時教会を大いに混乱させていたネストリウス派の異端から多くの人々を正統な信仰へと導き、また多くの正教徒が背教するのを防いだ。主は彼女に、ネストリウス派の異端者たちの巧妙に練られた言葉によって決して打ち負かされないような恵みを授けてくださったからである。 聖女は聖書を深く熟知しており、生涯のすべての年月をその読解に費やし、聖霊の恵みに満たされていた。 朝から晩まで、様々な人々が彼女と語り合い、正教について尋ねましたが、彼女は極めて賢明な答えを返したため、首都全体がその英知に驚嘆しました。その後、この聖女は再びエルサレムに戻り、死期が近づくにつれ、安らかな最期を迎える準備を整えました。

彼女には癒しの賜物が与えられており、多くの病を癒やした。彼女が成し遂げたこれらの癒やしのうち、彼女の中に宿った神の恵みの証として、いくつかを紹介しよう。

エウドキア皇后[426] は、聖メラニアを自身の霊的母と仰ぎ、エルサレムを訪れた。その目的は、聖地を参拝することと、自身の霊的母を訪ねることの双方にあった。

道中、彼女は足を脱臼して激しい痛みに襲われ、一歩も歩けなくなってしまいました。ところが、聖メラニアが彼女の足にほんの少し触れただけで、その足は元通りになったのです。

ある若い女性は悪霊に苦しめられており、その悪霊は彼女の口を固く閉ざして開くことができなくしていた。彼女は一言も発することができず、食事も口にすることができず、死が待ち受けていた——悪霊の苦しみのためというよりは、長期間の飢餓によるものだった。聖メラニアは、この女性を聖油を塗って祈りによって癒した。 悪霊は彼女から去り、口が開いて神を賛美し感謝することができるようになり、食事を口にしたことで、彼女は健康を取り戻した。

別の女性は妊娠しており、出産の時が訪れていた。しかし、胎内で子供が死んでしまったため、出産することができなかった。激しい痛みに苛まれ、彼女は死の淵に立っていた。しかし、聖メラニアはこの女性を祈りによって助けた。 病める女性の胸に帯が巻かれるやいなや、彼女は胎内の重

[425] アンフィパト——数つの州を管轄する地域の長官。

[426] エウドキア皇后——408年から450年まで在位した東ローマ皇帝テオドシウス2世の妃。

荷から解放された。死んだ胎児が体外に出て、彼女の体は軽くなり、以前は一言も発することができなかったのに、言葉を話し始めたのである。

神のもとへ旅立つ時が近づいていることを予感した聖女は、エルサレムとその周辺、ベツレヘム、ガリラヤの聖地を巡礼した。　キリストの降誕祭が訪れると、彼女はキリストが生まれた馬小屋での徹夜祈祷に参加し、そこで、常に彼女のそばに寄り添っていた親族である姉妹の一人に、これが彼女にとって最後のキリスト降誕祭の祝典になると告げた。　聖女の親族は、その言葉を聞いて、悲しみのあまり泣き崩れた。その後、聖第一殉教者ステファノの記念日に、メラニアは、自身が建立した修道院内にあるステファノの教会で徹夜祈祷に参加していた。その修道女が聖第一殉教者の殉教について朗読する際、彼女は自らこう付け加えた。「私が皆さんにこれを朗読するのは、これが最後です。」　その時、修道女たちの間から彼女を悼む大きな嗚咽が湧き上がった。彼女たちは、聖女がまもなくこの世を去ることを悟ったのである。一方、メラニアはいつものように、神に導かれた言葉をもって長く彼女たちを慰め、徳について説いた。その後、彼女は教会に出て、こう祈り始めた。

「わが主なる神よ。私は初めからあなたを選び、愛し、肉体の夫や富、名声、この世の快楽よりもあなたを優先し、生まれた時から私の肉体と魂をあなたに委ね、あなたのために禁欲に身を捧げ、骨さえも肉に張り付くほどに、　――私の右の手を導き、御霊の導きをもって私を教え導いてくださった方――今、どうか私の祈りの叫びをお聞きください。そして、この私の涙が、私への御慈悲の奔流を呼び起こしますように。　私の自発的かつ不本意な罪の汚れを清めてください。いかなる妨げや障害もなく、御自身への道を私に備えてください。そうすれば、空中の邪悪な悪霊たちが私を引き留めることはありません。　不死なる御方よ、あなたは私たちの死すべき本性を御存知です。人を愛する御方よ、あなたは、汚れのない人間などいないこと、たとえ一日しか生きていなくても、敵が何らかの罪を見出せない者などいないことを御存知です。しかし、主よ、私のすべての罪を顧みず、あなたの裁きの座において、私を清くしてください。

聖メラニアはそう祈り、まだ祈りを終える前に、肉体の痛みを感じ始めました。しかし、病に衰えつつあっても、彼女はそれでも労苦を止めず、いつもの教会の礼拝に出席し、朝から姉妹たちに教えを説いていました。　その後、彼女を訪ねて聖職者たちと共に来られたエレフテロポリの司教[427]の手から、至聖なる神の秘跡を拝領し、死の訪れを待ち望みました。その際、聖女との別れを深く嘆き悲しむ親族や、すべての姉妹たちを慰め、皆に最後の口づけで別れを告げた後、次のように語りました。

「神の御心通り、こうして実現したのです。」

そう言い残すと、彼女は質素な寝台に横たわったまま、目をしっかりと閉じ、両手を胸の上で十字架の形に組んで、神の御手に息を引き取った[428]。

彼女の葬儀には、聖都周辺にあるすべての修道院から修道士や修道女たちが集まり、一晩中彼女のそばで詩篇を歌い、その後、彼女を尊厳をもって埋葬した。　そして、彼女の聖なる魂は、彼女が愛し、生涯を通じて熱心に仕えてきた主なる神のもとへと旅立った。今や、すべての聖人たちと共に、神の栄光に与りながら、彼女はそこで、私たち罪人のために、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神に祈りを捧げている。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

---

[427]　エレウフェロポリ――パレスチナ南部の都市で、エルサレムとガザを結ぶ道沿いに位置する。現在、この地にはセフェル平野からユダヤ高地へと続く出口付近に集落がある。この集落の近くには、古代エレウフェロポリの遺跡が残っている。

[428] それは439年12月31日のことだった。

1月14日

1月1日（旧暦）

キリストの割礼の説教

1月1日の記念

私たちの主イエス・キリストは、誕生から八日が過ぎた後、割礼を受けることをお許しになりました。一方では、主は律法を全うするためにそれを受けられました。「*わたしは律法を破るために来たのではなく、全うするために来たのだ*」と主は言われました（マタイ5:17）；なぜなら、主は律法に従われたのは、律法に奴隷のように縛られていた人々をそこから解放するためであったからです。使徒が言うように、「*神は御子を遣わし、律法に従わせて、律法の下にある者たちを贖うためでした*」（ガラテヤ4:5）。 他方、主は、ご自身が真に人間の肉体をまとうことを示し、また、キリストが真の人間の肉体をまとうことなく、ただ幻として生まれたと主張する異端者の口を封じるために、割礼を受けられたのである[429] 。すなわち、主はご自身の人間性を明らかにするために割礼を受けられたのである。 なぜなら、もし主が私たちの肉体をまとうことがなかったならば、肉体ではなく幻影が割礼を受けるなどあり得るだろうか。聖エフレム・シリンはこう述べている。「もしキリストが肉体ではなかったのなら、ヨセフは誰に割礼を施したのだろうか？ しかし、御方が真に肉体であった以上、人間として割礼を受け、その幼子は、人の子として、確かに御自身の血に染まった。御方は、人間の性質を持つ者にふさわしく、病に苦しみ、痛みで泣かれた」。しかし、それだけでなく、御方は、私たちのために霊的な割礼を確立するためにも、肉的な割礼を受けられたのである[430] ； なぜなら、肉に関する古い律法[431] を終わらせた後、主は新しい、霊的な律法の基礎を築かれたからである。そして、旧約の肉的な人がその感覚的な肉を割礼したように、新しい霊的な人は、怒り、憤り、嫉妬、高慢、不純な欲望、その他の罪や罪深い欲望といった、魂の情欲を割礼しなければならない。主が八日目に割礼を受けられたのは、ご自身の血によって、来るべき御生を私たちに予表されたからであり、それは通常、教会の教師たちによって「第八の日」あるいは「第八の時代」と呼ばれている。主の割礼に関するカノンの著者である聖ステファノ[432] は、次のように述べている。 「それは、主が肉において割礼を受けられた、絶え間ない第八の世の未来の命を象徴している」[433] 。また、聖グリゴリオス・ニッサスは次のように述べている。「律法によれば、割礼は第八日に執り行われるべきであり、この第八という数は、来るべき第八の世を予示していた」[434] 。 また、旧約聖書における割礼は、洗礼および原罪の清めの型として定められていたことを知っておくべきである。もっとも、その罪は割礼によって完全に清められることはなかった。それは、キリストが私たちのために自発的に苦しみの中で御自身の至聖なる血を流されるまでは、あり得なかったことである。 割礼は、真の清めの単なる予型に過ぎず、真の清めそのものではなかった。真の清めは、主が罪をこの世から取り除

---

429 ドケティ派と呼ばれる異端者たちは、神が弱き人間の肉体を身にまとうことはできず、キリストが苦しみ、死んだのは人々の錯覚に過ぎないと説いていた。

430 すなわち、後述するように、人の内から罪深い情欲を取り除く洗礼のことである。

431 旧約聖書は、主に人間の外的な行いに関する規定を含んでいた。

432 ステファノス・サヴァイテス

433 主の割礼の礼拝、第4歌のカノン。

434 聖書において数字の「七」は完全さを意味する。したがって、この世の生命の永続性を示すために、聖なる教父たちは「七世紀」あるいは「七日」という表現を用い、第八世紀あるいは第八日は、当然ながら、来世の生命を指すものとなっていた。

き、それを十字架に釘付けにされたこと[435] 、そして旧約の割礼の代わりに、水と御霊による新しい恵みの洗礼を定められたことである。 当時の割礼は、いわば原罪に対する刑罰であり、ダビデが言うように、割礼を受ける幼児が不義のうちに受胎し、その母が罪のうちに彼を産んだ（詩篇50:7）というしるしであったため、幼い身体には傷跡が残っていたのです。 しかし、私たちの主は罪のない方でした。なぜなら、主はあらゆる点で私たちに似ておられましたが、ご自身には罪がなかったからです。 モーセが荒野に造った青銅の蛇が、外見は蛇に似ていたが、その中には蛇の毒はなかった（民数記21:9）のと同様に、キリストもまた真の人間でありながら、人間の罪とは無縁であり、超自然的な方法で、 清く、夫を持たない母（ ）から生まれました。罪のない方であり、御自身こそが律法の制定者であられたキリストには、あの痛みを伴う律法上の割礼を受ける必要などなかったはずですが、 しかし、主は全世界の罪を自ら負うために来られ、使徒が言うように、罪を知らない方を、神は私たちのために罪のいけにえとされた（IIコリント5:21）ため、主は罪のない方でありながら、あたかも罪人のかのように割礼を受けられたのである。 そして、割礼において、主はご自身の誕生の時よりもさらに大きな謙遜を私たちに示された。なぜなら、誕生の際、主は使徒の言葉にあるように、「人の姿をとられ、*外見も人のようになった*」（フィリピ2:7）のであり、 一方、割礼においては、罪人の姿をとられ、罪のために定められた苦痛を、あたかも罪人のように耐え忍ばれた。そして、ご自身が罪を犯していないにもかかわらず、無実の者として苦しみを受け、まるでダビデの言葉を繰り返すかのように、「私が奪わなかったものを、私は支払わなければならない」（詩篇68:5）、すなわち、「私が関与していないその罪のために、割礼の病を受け入れる」と。彼が受けた割礼によって、彼は私たちのために苦難を始め、最後まで飲み干さなければならないその杯を味わうことを始め、十字架に架けられたとき、「 *「成し遂げられた」*（ヨハネ19:30）と宣言されたのです！今、主は包皮から血の一滴を流し出しておられますが、その後、その血は主の全身から奔流となって流れ出るでしょう。 キリストは幼少期から苦難に耐え始め、苦しみになじんでいかれる。それは、完全な大人となったとき、より激しい苦難に耐えうるようになるためである。なぜなら、勇気の偉業には若き日から慣れ親しむべきだからである。労苦に満ちた人間の生涯は、朝が誕生であり、夕べが死である一日に似ている。 かくして、朝、おくるみの中から、神性を持つ人であるキリストは、御自身の務め、すなわち労苦へと出かけていかれる――御自身は幼少の頃から労苦の中にあり、夕暮れまで御自身の働きを続けられる（詩篇103:23）。その夕暮れとは、太陽が沈み、全地が暗闇に包まれる、第九時までのことである。 そして、キリストはユダヤ人たちにこう言われる。*「わたしの父は今なお働いておられる。わたしも働いている」*（ヨハネ5:17）。では、主は私たちのために何をなしておられるのか。それは、私たちの救いである。*「地の上で救いを備えてくださる方」*（詩篇73:12）。 そして、この業を完全に成し遂げるために、主は朝から、若き日から、肉体の病に耐え始め、同時に私たちを御自身の子供として心から思いやり、御自身――キリスト――が私たちの中に現れるまで、その業に取り組み続けられるのです[436] 。

朝早くから、主はご自身の血をもって種を蒔き始め、夕方には私たちの贖いの素晴らしい実を収穫されるのです。 愛すべき幼子には、割礼の際に「イエス」という名が与えられました。この名は、大天使ガブリエルが、御子が聖母マリアの胎内に宿る前に、すなわち、至聖なる聖母が伝令の言葉を聞き入れる前に、また「 *「見よ、主のしもべです。あなたの言葉どおりになりますように。」*（ルカ1:38）と答える前、すなわち、至聖なるおとめが天使の言葉を聞き入れる前、その言葉が告げられる前のことでした。なぜなら、彼女のこの言葉によって、神の御言葉は直ちに肉となり、彼女の

[435] コロサイ2:14。罪は「隔て」であり、すなわち、罪は障害物、仕切りとして立ちはだかり、人間を神から隔てていた。しかしその後、罪は十字架に釘付けにされ、すなわち、あらゆる力を失い、もはや人間が神との交わりに入ることを妨げることはできなくなった。

[436] ガラテヤ4:19。「その姿が現れる」――私たちの中にキリストの御姿がはっきりと刻み込まれるので、私たちは「クリスチャン」という名にふさわしい者となるのである。

至聖なる胎内に宿ったからです。　かくして、受胎以前に天使によって名付けられた至聖なる御名「イエス」は、割礼の際、主キリストに与えられ、それが私たちの救いの知らせとなったのである。なぜなら、「イエス」という名は「救い」を意味するからであり、同じ天使がヨセフの夢に現れて、「*その名をイエスと名付けなさい。彼は自分の民をその罪から救うからである*」（マタイ1:21）と語った通りである。　また、聖使徒ペトロは、イエスの御名について次のように証言しています。「*天の下で、人々に与えられた名の中で、私たちが救われるべき名はこの名以外にありません*」（使徒4:12）。この救いの御名「イエス」は、すべての世の初めより、三位一体の御議においてあらかじめ定められ、記され、今に至るまで私たちの救いのために守られてきた。そして今、かけがえのない真珠のように、人類の贖いのために天の宝庫から持ち出され、ヨセフによってすべての人に明らかにされたのである。この名には、神の真理と知恵が明らかにされている（詩篇50:8）。この名は、預言者の言葉にあるように、*「わたしの名を畏れる者たちには、正義の太陽が昇る」*（マラキ4:2）と、太陽のようにその輝きで世界を照らした。　香りのよい没薬のように、その香りで全宇宙を満たした。聖書に「注がれた没薬――それはあなたの香油の香りである」（雅歌1:2）とあるように、器の中に残されたままの没薬――すなわち御名――ではなく、注ぎ出されたものである。　なぜなら、香油が器の中に収められている間は、その芳香も中に閉じ込められているが、それが注ぎ出されると、たちまち空気を芳香で満たすからである。イエスの御名の力は、あたかも器の中に隠されているかのように、永遠の御計画の中に秘められていた間は、知られていなかった。　しかし、その御名が天から地上に注がれるやいなや、まるで割礼の際に注がれた芳香ある香油が、赤子の血と共に注がれた時のように、即座に全宇宙を恵みの芳香で満たし、今やすべての民は、主イエス・キリストが父なる神の栄光のために[437] であることを告白している。 イエスの御名の力は今や明らかにされた。なぜなら、その驚くべき御名「イエス」は、天使たちを驚かせ、人々を喜ばせ、悪霊たちを恐れおののかせたからである。悪霊たちでさえも信じ、震えおののいているのだから（ヤコブ2:19）； その御名によって、地獄は揺れ動き、冥界は動揺し、闇の君は消え去り、偶像は倒れ、偶像崇拝の闇は追い払われ、その代わりに、敬虔の光 が輝き、この世に来るすべての人を照らすのである（ヨハネ1:9）。 この御名は、あらゆる名にまさるものであり、天にある者、地にある者、また陰府にある者のすべてのひざが、イエスの御名の前にひざまずくためである（フィリピ2:10）。 このイエスの御名は、敵に対する強力な武器である。聖ヨハネ・クライストロフォロスもこう述べている。「イエスの御名によって常に敵を打ち倒せ。天にも地にも、この武器より強力なものは見当たらないからである」。キリスト・イエスを愛する心にとって、この最も尊い御名「イエス」はなんと甘美なことか！　この御名を持つ者にとって、なんと喜ばしいことか！　なぜなら、イエスは愛そのものであり、甘美そのものだからである。この至聖なる御名「イエス」は、イエスの愛に捕らえられた、イエスのしもべであり囚人である者にとって、なんと愛おしいことか！　イエスは心の中に、イエスは口に、イエスは心で義を信じる所に、イエスは口で救いを告白する所にあります（ローマ10:10）。　歩んでいようとも、座っていようとも、あるいは何をしていても――イエスは常に目の前におられます。使徒はこう言いました。「私は、あなたがたのところでは、イエス以外には何も知らない者であるようにと決心したのです」（Iコリント2:2）。 なぜなら、イエスに固くすがりつく者にとって、イエスは心の啓発であり、魂の美しさであり、体の健康であり、心の喜びであり、苦難における助け手であり、悲しみにおける喜びであり、病気における治療であり、あらゆる災いにおける慰めであり、救いへの希望であり、また、イエスを愛する者にとって、イエスご自身が報いであり、報いそのものだからです。

[437] ピリピ2:11。すなわち、主イエスは、ご自身が引き受けられた御業によって、父なる神を栄光に輝かせられた

かつて、ヒエロニムスの伝承によれば、神の不可解な御名は、大祭司が額に身につけていた金の板に刻まれていた[438]。しかし今や、神聖なる御名「イエス」は、その割礼の際に流されたイエスご自身の真の血によって刻まれている。　そして、その御名はもはや物質的な金の上にではなく、霊的なもの、すなわちイエスのしもべたちの心と口の上に刻まれている。それは、キリストが*「彼は、わたしの御名を宣べ伝えるために、わたしが選んだ器である」*（使徒9:15）と語られたあの者に刻まれていたのと同じである。　最も甘美なイエスは、御名が最も甘美な飲み物として器に盛られることを望んでおられます。なぜなら、主は愛をもって主を味わうすべての人にとって、まことに甘美な方であり、詩篇の作者もまた、そのような人々に向かってこう語っているからです。*「味わって、主がいかに良き方であるかを知れ」*（詩篇33:9）！ 主を味わった預言者は、*「主よ、わが砦よ、わたしはあなたを愛します」*（詩篇17:2）と叫びます！ 主を味わった聖使徒ペテロもまた、*「見よ、私たちはすべてを捨ててあなたに従いました。私たちは誰のところへ行きましょうか。あなたには永遠のいのちの言葉があります」*（マタイ19:27；　ヨハネ6:68）。この甘美さによって、聖なる殉教者たちの激しい苦しみはこれほどまでに和らげられ、彼らは最も恐ろしい死さえも恐れることはなかった。　「誰が私たちを――と彼らは叫んだ――神の愛から引き離すことができようか。苦しみも、危険も、剣も、死も、生も、何ものも。なぜなら、愛は死のように強いからである」（ローマ8:35, 38；雅歌8:6）。　では、言葉に尽くせない甘美さ――イエスの御名――は、どのような器に宿ることを好むのだろうか。もちろん、苦難と不幸の炉で鍛えられ、イエスのために負った傷という宝石で飾られた金のような器であり、*次のように*語る者である。*「私は、自分の体に主イエスの傷跡を背負っている」*（ガラテヤ6:17）。その甘美さは、そのような器を求め、イエスの御名は、そのような器に宿ることを望んでおられるのです。　イエスが割礼の際に御名を受け、血を流されたのは、決して無駄なことではありません。これにより、主は、御名を宿すべき器が血に染まらなければならない、と語っておられるかのようです。なぜなら、主が御名の栄光を現すために選ばれた器――使徒パウロ――を御自身のもとに迎えられたとき、直ちにこう付け加えられたからです。　*「また、わたしの名のために、彼がどれほど苦しみを受けるべきかを、わたしが彼に示そう」*（使徒9:16）。血に染まり、傷だらけになったわたしの器を見よ――そうして、イエスの御名は、血の赤み、病、そして罪と戦い、血を流すほどに奮闘する者たちの苦しみによって刻み込まれるのである（ヘブライ12:4）。

さあ、愛を込めてあなたに口づけを捧げましょう、最も甘美なるイエスの御名よ！ 私たちは熱心に、あなたの至聖なる御名を礼拝します、最も甘美で、すべてに寛大なイエスよ！　私たちは、救い主イエスよ、あなたの至高の御名を賛美し、割礼の際に流されたあなたの血にひれ伏します。悪意のない幼子であり、完全なる主よ！　ここに、あなたの至聖なる御名と、私たちのために注がれたあなたの最も尊い御血、そして、朽ちることなくあなたを産み出されたあなたの無原罪の御母のために、あなたのあふれんばかりの慈しみを懇願します。私たちにあなたの豊かな憐れみを注いでください！イエスよ、あなたご自身によって私たちの心を甘く満たしてください！　イエスよ、あなたの御名によって、至る所で私たちを守り、護ってください！イエスよ、あなたのしもべである私たちを、その御名によって印し、刻印してください。そうして、私たちがあなたの来るべき御国に受け入れられ、そこで天使たちと共に、イエスよ、あなたの至聖にして輝かしい御名を永遠に賛美し、讃歌することができますように。 アーメン。

トロパリオ、第1声：

天上の炎の玉座に、初めなき御父と、御自身の神聖なる御霊と共に座しておられるイエスよ、あなたは、処女であり、汚れなき御母から、この地上に生まれ出ることをお許しになりました。それ

[438] 大祭司の頭巾に取り付けられた金の板には、神（エホバ）の御名が刻まれていた。

ゆえ、あなたは生後八日目に割礼を受けられました。　あなたの至福の御計画に栄光あれ、あなたの御配慮に栄光あれ、あなたの御慈悲に栄光あれ、唯一の人を愛する方よ。

コンダク、第3調:

主はすべての者の割礼を受け入れ、人間の罪を、善として切り取り、今日、世界に救いを与えられます。天において、創造主の階層の長であり、光を放つ神の秘儀の守り手であるキリストのバシレイオスが喜びます。

私たちの聖なる父、ケサリアの大司教ヴァシレイオス大聖人の生涯

記念日：1月1日

神に深く愛された大聖人であり、教会の神智に富んだ教師であるバシレイオスは、コンスタンティヌス大帝の治世下、西暦330年頃、カッパドキアの都市ケサリア[439] で、高貴かつ敬虔な両親の間に生まれた。コンスタンティヌス大帝の治世は324年から337年までであった。　父もまたバシレイオス[440]　と呼ばれ、母はエメリアであった。敬虔さの最初の種は、若き日に聖グリゴリオス・テオロゴス（奇跡行者）の口から直接教えを受ける栄誉に浴した敬虔な祖母マクリナと、同じく敬虔な母エメリアによって、彼の魂に蒔かれたのである。　一方、ヴァシリーの父は、キリスト教の信仰について彼を導いただけでなく、世俗の学問も教えた。父自身、修辞学、すなわち演説術や哲学を教えていたため、それらの分野に精通していたのである。　ヴァシレイが14歳頃になったとき、父が亡くなり、孤児となったヴァシレイは、ネオケサリアからそう遠くない、イリス川[441]　のほとりにある祖母マクリナの所有する別荘で、2、3年間を過ごした。この別荘は後に修道院へと改築された。　ここからヴァシリーは、母を訪ねるために頻繁にケサリアへも足を運んだ。母は他の子供たちと共に、自身の出身地であるこの街に住んでいた。

マクリナの死後、ヴァシレイは17歳の時に再びケサリアに移り住み、現地の学校で様々な学問に励んだ。　並外れた聡明さのおかげで、ヴァシレイオスはすぐに教師たちと同等の知識レベルに達し、さらなる知恵を求めてコンスタンティノープルへと向かった。当時、その地では若きソフィスト、リヴァニオス[442]　がその雄弁さで名声を博していた。しかし、ヴァシレイオスはここにも長く留ま

439　カッパドキアはローマ帝国の属州であり、小アジアの東部に位置し、バシレイオス大帝の時代には、その住民の教養の高さで知られていた。　11世紀末、カッパドキアはトルコ人の支配下に入り、現在に至るまでその支配下にある。ケサリアはカッパドキアの主要都市であり、ケサリアの教会は古くからその大司教たちの教養の高さで知られていた。ここで学業の基礎を築いた聖グレゴリオス・テオロゴスは、ケサリアを「啓蒙の首都」と呼んでいる。

440　バシレイオスの父もまたバシレイオスという名で、慈善活動で知られており、高貴で裕福な娘エメリアと結婚していた。この結婚から、5人の娘と5人の息子が生まれた。長女のマクリナは、この円満な結婚生活に忠実であり続け、貞節に身を捧げた（彼女の記念日は7月19日）。　5人の兄弟のうち、1人は幼少期に亡くなり、3人は司教となり聖人として列聖され、5人目は狩猟中に命を落とした。 生き残った息子たちの長男はバシレイオス、その次にグリゴリオス（後にニッサの司教となり、1月10日に記念される）、そしてペトロス（当初は単なる修道士であったが、後にセバスティアの司教となり、1月9日に記念される）が続いた。–ヴァシレイオスの父は、おそらく臨終間際に司祭の聖職に就いたものと思われる。これは、グリゴリオス・テオロゴスがヴァシレイオス大帝の母を「司祭の妻」と呼んでいることから推察できる。

441　ネオケサリア――現在のニクサル――は、小アジア北部のポンテ・ポレモニアカの首都であり、その美しさで有名である。特に、そこで（315年に）開催された教会公会議で知られている。イリス川はポンテを流れる川で、アンティタウロス山脈を源流としている。

442　ソフィスト――主に修辞学の研究と教育に専心した学者たち。――リヴァニウスは、後にヴァシレイオスがすでに司教となっていた時期にも、彼と書簡のやり取りを続けていた。

ることなく、アテネ――、かつて全ギリシャの知恵の母と称された都市[443]――へと旅立った。アテネでは、エヴヴラという名の著名な異教の教師の講義を受けるようになったほか、イベリアとプロエレシアという他の二人の著名なアテネの教師の学校にも通った[444]。この頃、ヴァシレイオスはすでに二十六歳になっており、学問に並外れた熱意を示していたが、同時にその清らかな生活態度によって、万人の称賛に値する人物でもあった。彼にとってアテネには二つの道しかなかった――一つは教会へ、もう一つは学校へと続く道である。　アテネで、ヴァシリーは別の偉大な聖人――当時同じくアテネの学校で学んでいた神学者グレゴリオス――と親交を深めた[445]。バシレイオスとグリゴリオスは、その高潔さ、柔和さ、貞潔さにおいて互いに似通っており、まるで一つの魂を分かち合っているかのように深く愛し合っていた――そして、この相互の愛はその後も永遠に続いた。　ヴァシリーは学問に没頭しすぎて、書物に埋もれていると、食事をすることさえ忘れてしまうことがよくあった。彼は文法、修辞学、天文学、哲学、物理学、医学、そして自然科学を学んだ。　しかし、これらの世俗的かつ地上の科学は、より高次で天上の啓示を求める彼の精神を満たすことはできず、アテネに約5年間滞在した後、ヴァシリーは、世俗の科学ではキリスト教的な自己研鑽において確固たる支えを得られないと感じた。　そこで彼は、キリスト教の修行者たちが住み、真のキリスト教の教えを十分に学ぶことができる国々へ向かうことを決意した。

こうして、グレゴリオス・テオロゴスがアテネに残り、すでに自ら修辞学の教師となっていた一方で、ヴァシレイオスは、修道生活が栄えていたエジプトへと向かった[446]。そこで、あるポルフィリオスというアルヒマンドリトのもとで、彼は神学著作の膨大なコレクションを発見し、その研究に丸一年を費やす一方で、断食の修行にも励んだ。　エジプトで、ヴァシリーは、フィヴァイデに住んでいたパホミオス、マカリオス長老、アレクサンドリアのマカリオス、パフヌティオス、パウロスなど、同時代の著名な修道者たちの生活を観察した。　エジプトから、バシレイオスは聖地を巡り、現地の修道士たちの生活を知るために、パレスチナ、シリア、メソポタミアへと向かった。　しかし、パレスチナへ向かう途中、彼はアテネに立ち寄り、そこでかつての師であるエヴヴロスと対談し、また他のギリシャの哲学者たちと真の信仰について論争を交わした。

師を真の信仰へと導き、自ら師から受けた恩に報いたいと願ったヴァシリーは、街中をくまなく師を探し回った。長い間見つからなかったが、ついに城壁の外で、エヴヴルが他の哲学者たちと何らかの重要な話題について議論している最中に彼と出会った。　議論に耳を傾け、まだ自分の名前を明かさずに、ヴァシリーは会話に加わり、即座に難問を解決し、その後、自ら師に新たな質問を投げかけた。聞き手たちが、一体誰があの有名なエヴヴルにそう答えて反論できるのかと首をかしげていると、エヴヴルはこう言った。

「これは、ある神か、あるいはヴァシリーに違いない[447]。」

443　アテネ――ギリシャの主要都市であり、古くからギリシャの知性と才能の精鋭たちを惹きつけてきた。かつては、ソクラテスやプラトンといった著名な哲学者、またエスキロス、ソフォクレス、エウリピデスなどの詩人たちがここに住んでいた。――「ギリシャの英知」とは、当然ながら異教の学問、異教の教育を指す。

444　当時最も著名な哲学教師であったプロエレシオスは、皇帝ユリアヌスがキリスト教徒による哲学教育を禁止した際、自身の学校を閉鎖したことからも明らかなように、キリスト教徒であった。イベリウスがどのような宗教を信仰していたかについては、何も知られていない。

445　グリゴリオス（ナジアンゾス）は、後にしばらくの間コンスタンティノープル総主教を務め、その卓越した著作によって「神学者」という異名を得たことで知られている。彼はケサリアの頃からヴァシレイオスと面識があったが、親しい友人となったのはアテネでのことだった。彼の記念日は1月25日である

446　エジプトは古くから、キリスト教の修道生活が特に盛んに行われていた地であった。同様に、そこには数多くのキリスト教の学者たちがおり、その中でも最も著名だったのはオリゲネスとアレクサンドリアのクレメンスであった。

447　すなわち、エヴヴロスの見解によれば、バシレイオスは普通の人間の知性の域を超えた知性を持ち、その点において神々に近づいていたのである。

ヴァシリーの正体を知ったエヴヴルは、友人や弟子たちを帰らせ、自らヴァシリーを自宅へ招き入れ、二人は丸三日間、ほとんど食事を口にすることもなく語り合った。その際、エヴヴルはヴァシリーに、哲学の本質的な価値とは何であるか、彼の見解を尋ねた。

「哲学の本質は」とヴァシリーは答えた、「それが人間に死を思い起こさせることにあるのです[448]。」

その際、彼はエヴヴルに対し、この世の儚さと、そのすべての快楽が、最初は確かに甘美に見えるものの、それらに過度に執着してしまった者にとっては、後に極めて苦いものになってしまうことを指摘した。

「これらの慰めとは別に」とヴァシリーは言った、「天に由来する、別の種類の慰めがある。両方を同時に享受することはできない——*『だれも、ふたりの主人に仕えることはできない』*（マタイ6:24）——しかし、私たちはそれでもなお、世俗に縛られた人間として可能な限り、真の知恵のパンを分け与え、たとえ自らの過ちによって美徳の衣を失った者であっても、路上で裸の人を憐れむように彼を憐れみ、善行の庇護の下へと迎え入れるのだ。

続いて、ヴァシリーはエヴヴルに悔い改めの力について語り始めた。かつて彼が見た、人間を交互に惹きつける美徳と悪徳の像、そしてその周囲に、まるで娘たちのように様々な美徳が立ち並んでいる悔い改めの像について説明した[449]。

「しかし、エヴヴルよ」とヴァシリーは付け加えた。「私たちには、そのような人為的な説得手段に頼る必要はない。私たちは、心からそれを求める者なら誰でも理解できる、真実そのものを握っているのだ。すなわち、私たちは、いつかすべての人々が復活すると信じている——ある者は永遠の命へ、またある者は永遠の苦しみと恥辱へと。」　預言者たちは、このことをはっきりと語っている。イザヤ、エレミヤ、　ダニエル、ダビデ、そして神聖な使徒パウロ、さらに、私たちに悔い改めを呼びかけ、迷い出た羊を見つけ出し、悔い改めて帰ってきた放蕩息子を愛情を込めて抱きしめ、口づけし、美しい衣と指輪で飾り、彼のために祝宴を催してくださった主ご自身が、はっきりと語ってくださっているのだ（ルカ15章）。　主は、十一時に来た者たちにも、一日の重荷と炎天下に耐えた者たちにも、等しく報いを与えてくださる[450]。主は、悔い改め、水と御霊によって新たに生まれ変わった私たちに、こう書かれているとおりに与えてくださる。「神が御自身を愛する者たちのために備えておられるものは、人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」[451]。

ヴァシリーが、アダムの堕落から始まり、贖い主キリストの教えで終わる、私たちの救いの歴史を簡潔にエヴブルに伝えたとき、エヴブルはこう叫んだ。

「おお、天より現れたヴァシリーよ！　あなたを通して、私は唯一の神、全能の父、万物の創造主を信じ、死者の復活と来世の命を待ち望みます。アーメン。さあ、これが私の神への信仰の証です。残りの生涯をあなたと共に過ごします。そして今、水と御霊による新生を願います。」

すると、ヴァシリーは言った。

「今より永遠に、私たちの神は祝福されます。神は、エヴヴルよ、真理の光であなたの心を照らし、極度の迷いから、御自身の愛を知る境地へとあなたを導かれたのです。　もしあなたが——ご自身が言われたように——私と共に生きたいと望むなら、この世の生活の罠から逃れ、いかにして私たちの救いを求めていくべきか、説明しましょう。私たちの全財産を売り払い、その金を貧しい人々

448　つまり、死を新しい人生への移行と捉え、それゆえに恐れずにこの世を去る者だけが、「哲学者」という名誉ある名にふさわしいのである。

449 古代において、このような比喩は、聴衆により強い印象を与えるために、道徳家たちによってしばしば用いられた。

450 すなわち、東洋では非常に厳しい暑さ、灼熱のことである（マタイ20:12）。

451 すなわち、私たちが今、いかなる手段を用いても想像することさえできないもの（Iコリント2:9）。

に施し、私たち自身は聖なる都へ赴き、そこにある奇跡を目撃しましょう[452] ；そこで私たちは信仰をさらに強めることでしょう。

こうして、貧しい人々に全財産を分け与え、洗礼を受ける者に求められる白い衣[453] を購入した後、彼らはエルサレムへと向かい、道中、多くの人々を真の信仰へと導いた。

アンティオキア[454] に到着すると、彼らはある宿屋に泊まった。 その頃、宿屋の主人フィロクセンの息子は、深い憂いを抱いて入り口に座っていた。彼はソフィストのリヴァニアの弟子であり、彼から ホメロスの詩作[455] をいくつか受け取り、それらを雄弁な演説に書き直そうとしていたが、それができず、その難題に直面して深く嘆いていた。ヴァシリーは彼が悲しんでいるのを見て、尋ねた。

「何に悲しんでいるのか、若者よ？」

フィロクセネスはこう答えた。

「たとえ私が悲しみの理由をあなたに話したとしても、あなたから何の助けが得られるというのですか？」

しかし、ヴァシリーが執拗に問い詰め、若者が悲しみの理由を話しても無駄にはならないと約束すると、少年はソフィストと詩のことについて語り、その詩の意味を明確に伝えられないことが悲しみの原因だと付け加えた。 ヴァシリーは詩を受け取ると、それを平易な言葉に置き換えながら解説し始めた。少年は驚きと喜びを隠せず、その訳文を書いてほしいと頼んだ。そこでヴァシリーは、ホメロスのその詩を三つの異なる方法で訳し、少年は喜びながらその訳文を受け取り、翌朝、自分の師であるリヴァニオスのもとへ向かった。リヴァニオスはそれを読み、驚きながらこう言った。

「神の摂理に誓って、今の哲学者たちの中に、このような解釈ができる者は一人もいない！ 一体誰がこれを君に書いてくれたのだ、フィロクセン？」

少年は言った。

「私の家には一人の旅人がいて、その人がこの解釈を、あっという間に、何の苦労もなく書き上げてくれたのです。」

リヴァニオスはすぐにその旅人に会おうと宿屋へ急いだ。そこでヴァシレイオスとエヴヴロスを見かけると、彼らの予期せぬ到着に驚きつつも、喜びを隠せなかった。彼は二人に自分の家に泊まるよう勧め、二人が訪ねてくると、豪華な食事を振る舞った。 しかし、ヴァシレイオスとエヴヴロスは、いつもの習慣通り、パンと水を口にした後、あらゆる恵みの与え主である神に感謝を捧げた。その後、リバニウスは彼らに様々な詭弁的な問いかけを始めたが、二人は彼にキリスト教の教えを説いた。リバニウスは彼らの話を注意深く聞き終えると、この教えを受け入れる時機はまだ来ていないが、もし神の摂理の御心であれば、誰もキリスト教の教えに抗うことはできないだろうと述べた[456]。

「ヴァシリーよ、もしあなたが、私の元にいる弟子たちのために、自らの教えを説くことを拒まなければ、あなたは私に大きな恩を施してくれることになるだろう」と彼は締めくくった。

まもなくリヴァニアの弟子たちが集まり、ヴァシリーは彼らに教え始めた。それは、彼らが心の清らかさ、肉体の無欲、慎ましい振る舞い、穏やかな口調、控えめな言葉、 飲食の節制、年長者

---

[452] すなわち、キリストの墓やゴルゴタなど、さまざまな名所のことである。

[453] 現在と同様に、古代においても、新しく洗礼を受けた人々は、罪からの清めを受けたしるしとして、白い衣を身にまとっていた。

[454] ここでは、もちろん、オロンテス川沿いにあり、「大」と呼ばれていたシリアのアンティオキアのことを指している。

[455] ホメロスは、紀元前9世紀に生きたギリシャの偉大な詩人であり、『イリアス』や『オデュッセイア』といった有名な叙事詩を著した。

[456] すなわち、哲学や異教の宗教をキリスト教の信仰に置き換える時がまだ来ていなかったということである。リヴァニウスは異教徒のまま亡くなった（391年頃、アンティオキアにて）。

に対する沈黙、賢者の言葉への注意深さ、目上の人への服従、同輩や下位の人々への偽りのない愛を身につけ、悪しき者や情欲に駆られた者、肉欲の快楽に執着する者から遠ざかり、話すことを減らして聞くことと深く考えることを増やし、言葉に軽率さを示さず、　多弁にならず、他人を軽蔑して嘲笑せず、慎み深さを身に着け、不道徳な女性とは会話を交わさず、目を下に向け、心を神に向け、論争を避け、教師の地位を求めず、この世の栄誉を何とも思わないこと。　もし誰かが隣人のために何かを行うならば、神からの報いと、我らの主イエス・キリストからの永遠の報いを期待すべきである。バシレイオスはリヴァニアの弟子たちにこのように語り、弟子たちは大きな驚きをもって彼の言葉に耳を傾けた。その後、彼はエヴヴロスと共に再び旅立った。

彼らがエルサレムに到着し、信仰と愛をもってすべての聖地を巡り、そこで万物の唯一の創造主である神に祈りを捧げた後、その都市の司教マクシムス[457] の元を訪れ、ヨルダン川[458] で洗礼を授けてくれるよう懇願した。　司教は彼らの偉大な信仰を見て、その願いを聞き入れた。司教は自分の聖職者たちを連れて、ヴァシリーとエヴヴルと共にヨルダン川へと向かった。　彼らが川岸にたどり着くと、ヴァシリーは地面にひれ伏し、涙ながらに神に、信仰を強めるための何らかのしるしを示してくださるよう祈った。その後、畏敬の念を抱きながら立ち上がり、衣服を脱ぎ捨てると同時に、「*古き人の以前の生き方*」[459] も*捨て去り*、水の中に入って祈りを捧げた。 聖職者が彼に洗礼を授けようと近づいたとき、突然、炎のような稲妻が彼らの上に降り注ぎ、その稲妻から現れた鳩がヨルダン川に飛び込み、水面を揺らして天へと飛び去った[460]　。岸辺に立っていた人々はこれを見て、畏敬の念を抱き、神を賛美した。　洗礼を受けたヴァシリーは水から上がり、司教は彼の神への愛に感嘆し、キリストの復活の衣を彼に着せ[461]　、その際に祈りを捧げた。彼はエヴブルにも洗礼を授け、その後、二人に聖油を塗り、神の賜物を授けた。

聖都に戻ったヴァシリーとエヴブルは、そこで一年間過ごした。その後、彼らはアンティオキアへと向かい、そこでヴァシリーはメレティオス大司教によって助祭に叙階され、その後、聖書の解説に専念した[462] 。しばらくして、彼はエヴブルと共に故郷のカッパドキアへと帰った。 彼らがケサ

---

457 マクシムス3世――エルサレム総主教――在位は333年から350年まで。

458　古代のキリスト教徒たちは、聖なる洗礼を受けるのが非常に遅かった。その理由の一部は謙遜からであり、また一部は、死の直前に洗礼を受けることで、洗礼によってすべての罪の赦しを得られるという考えによるものであった。

459 すなわち、先祖から受け継いだ原罪から解放されるということである（エフェソ4:22）。

460　この奇跡は、ヨルダン川で洗礼を受けた救い主キリストの上に、鳩の姿で聖霊が降臨した出来事を彷彿とさせるものでした。

461 主イエス・キリストは、棺の中に安置されている間、白い布に包まれていた。

462　聖バシレイオス大主教には多くの著作がある。聖バシレイオスのすべての行いが並外れた偉大さと重要性を帯びていたように、彼のすべての著作もまた、キリスト教の崇高さと偉大さという同じ特徴を色濃く反映している。　その著作において、彼は説教者であり、教義論者・論争家であり、聖書の解釈者であり、道徳と敬虔の教師であり、そして最後に、教会礼拝の整備者でもある。　彼の説教の中でも、その力強さと情熱の点で傑出しているとされるのは、高利貸しに対するもの、酩酊と贅沢に対するもの、栄光について、そして飢餓についての説教である。　聖バシレイオスは書簡の中で、当時の出来事を生き生きと描写している。多くの書簡には、愛、柔和、恨みの赦し、子育てに関する優れた教訓や、金持ちの吝嗇や高慢への批判、むやみな誓いへの警告、あるいは修道士たちへの霊的助言が記されている。　教義学者および論争家として、彼はアリウス派の偽教師エウノミオスに反対して書かれた3冊の書物、およびサベリウスとアノメイ派に対する、聖霊の神性に関する論考においてその姿を現している。さらに、バシレイオス大聖人は、エウノミオスもその擁護者であったアエティウスに反対して、聖霊に関する特別な書物を著した。　教義に関する著作には、聖バシレイオスのいくつかの説教や書簡も含まれる。聖書の注解者として、聖バシレイオスは『創世記』に関する9つの説教によって特に名声を博し、そこでは神の言葉だけでなく、哲学や自然科学の知識にも精通していることを示した。　また、詩篇や預言者イザヤ書の16章に関する彼の説教も知られている。『六日創造論』や詩篇に関する説教は、いずれも教会で語られたものであり、そのため解説に加え、勧告、慰め、教訓も含まれている。　彼は、その著名な『若者に宛てた異教の著述家たちの利用法に関する訓示』や、修道生活に関する二冊の書物において、敬虔に関する教えを扱った。正典に数えられる著作には、バシレイオス大帝がいくつかの司教たちに宛てた書簡が含まれる。–グレゴリオス・テオロゴスは、バシレイオ

リアの町に近づいたとき、ケサリアの大司教レオントスは、夢の中で彼らの到着を告げられ、バシレイオスがやがてこの町の大司教になるだろうと告げられた。　そこで大司教は、自身の首席助祭である[463]　と数名の名誉ある聖職者を呼び寄せ、彼らを町の東門へ派遣し、そこで出会う二人の旅人を敬意を込めて自分のもとへ連れてくるよう命じた。　彼らは出向き、ヴァシリーとエヴヴルが街に入ってくるのに出会い、彼らを大司教のもとへ連れて行った。大司教は彼らを見て驚いた。というのも、まさに彼らこそが夢の中で見た人物だったからである――そして神を賛美した。　彼らにどこから来たのか、　と名乗るのかと尋ね、その名前を知ると、大司教は彼らを食事の席へ連れて行き、もてなすよう命じた。そして自ら、聖職者たちと町の重鎮たちを召集し、神からバシレイについて幻視で告げられたことをすべて語った。すると聖職者たちは口を揃えて言った。

「あなたの徳高い生涯ゆえに、神があなたの王位の後継者を示されたのだから、その者に対してはあなたの望むままに扱ってください。神の御心が直接指し示したその人は、まことにあらゆる尊敬に値するからです。」

その後、大司教はヴァシリーとエヴヴラを呼び寄せ、彼らが聖書をどの程度理解しているかを知りたくて、彼らと聖書について語り合った。彼らの言葉を聞いて、大司教は彼らの深い知恵に感嘆し、彼らを自分の元に残して、特別な敬意をもって接した。　一方、ヴァシレイオスはケサリアに滞在中、エジプト、パレスチナ、シリア、メソポタミアを旅し、それらの国々に住む修道者たちの生き様を観察して学んだのと同じような生活を送っていた。　こうして、彼らの生き方に倣い、彼は善良な修道士となり、ケサリアの大司教エウセビオス[464]　は、彼を長老（プレスヴィテル）に任命し、ケサリアの修道士たちの指導者に据えた。　長老の聖職に就いた聖バシレイオスは、その奉仕の務めに全時間を捧げたため、かつての友人たちとの文通さえも断った[465]　。彼が集めた修道士たちの世話、

ス大帝の著作の価値について次のように述べている。「どこを見ても、唯一かつ最大の喜びは、バシレイオスの著作と作品である。彼以降、著述家たちは彼の著作以外に富を必要としない。あらゆるものの代わりに、彼一人だけで、学び手たちの教育には十分となった」。　「優れた市民演説家になりたいと願う者には――」と、学識ある総主教フォティオスは言う。「デモステネスもプラトンも必要ない。ただ、バシレイオスの言葉を模範として学びさえすればよいのだ。」　聖ヴァシレイオスは、そのすべての言葉において卓越している。彼はとりわけ、清らかで、優雅かつ荘厳な言葉遣いを身につけており、思考の構成においても彼に勝る者はいない。彼は説得力を、心地よさと明快さと結びつけている」。聖グリゴリオス・テオロゴスは、聖ヴァシレイオスの知識と著作について次のように述べている：　「バシレイオス以上に、知識の光によって啓発され、御霊の深みを見通し、神と共に神について知られているすべてのことを探究した者がいるだろうか。バシレイオスにおいて、美は徳であり、偉大さは神学であり、歩みは神への絶え間ない志向と昇華であり、力は御言葉の播種と分かち合いであった。　それゆえ、私は躊躇することなくこう言える。「彼らの声は全地を巡り、彼らの言葉は宇宙の果てまで、その言葉は宇宙の果てに至る」と、聖パウロが使徒たちについて語ったように（ローマ人への手紙10, 18）……。　――私が彼の『六日』を手に取り、声に出して読むとき、私は創造主と対話し、創造の法則を理解し、かつて――ただ一つの見解を師としていた頃よりも――さらに創造主に驚嘆する。　偽教師たちに対する彼の告発の言葉を目の前にするとき、私はソドムの火を見る。その火によって、悪意に満ちた不義な舌が焼き尽くされるのだ。聖霊についての言葉を読むとき、私は自分の中にいる神を新たに発見し、彼の神学と観想の階段を登りながら、真理を語る大胆さを自分の中に感じる。　彼が視力の弱い人々のためにも分かりやすく解説した他の解釈を読むとき、私は一文字にとどまらず、表面だけを見るのではなく、さらに先へと進み、ある深みから新たな深みへと進み、深淵に深淵を呼びかけ、光をもって光を得て、至高の意味に到達するまで歩み続けるべきだと確信する。　彼が修道者たちを称賛する文章に没頭するとき、私は肉体を忘れ、称賛されている人々と対話し、偉業への意欲を掻き立てられる。　彼の道徳的かつ実践的な言葉を読みるとき、私は心と体を清め、神に喜ばれる神殿の器となり、そこに御霊が神の栄光と神の威力を讃える賛美者として響き渡り、それによって変容し、整えられ、ある人間から別の人間へと変わり、神聖な変容を遂げるのである」　（聖グリゴリオス・テオロゴスによる聖バシレイオスへの墓前説教）。

[463] 古代教会において、大助祭たちは司教の最も身近な補佐役として大きな役割を果たしていた。

[464]　エウセビオスは、民衆の要望により、官職から直接司教の座に就いたため、神学者や信仰の教師として特別な権威を持つことはできなかった。

[465] この時期、彼の最も重要な務めの一つは、神の言葉を説くことだった。彼はしばしば、毎日だけでなく、朝と夕方の1日2回も説教を行った。時には、ある教会での説教を終えた後、別の教会へ赴いて説教することもあった。 バシレイオス

神の御言葉の説教、その他の牧会上の務めが、彼に他の事柄に気を取られることを許さなかった。それにもかかわらず、彼は新しい職場ですぐに、教会の事務にまだ十分な経験を持たない大司教自身でさえ享受していなかったほどの尊敬を勝ち取った。というのも、大司教はカテキズム受講者の中からケサリアの司教座に選出されたからである。 しかし、司祭としての任期が1年も経たないうちに、エウセビオス司教は、人間の弱さゆえに、バシレイオスに対して嫉妬と敵意を抱き始めた。 聖バシレイオスはこのことを知り、嫉妬の対象となることを望まなかったため、ポンティウス砂漠へと去っていった[466] 。ポンティウス砂漠で、バシレイオスはイリス川沿い――かつて彼の母エメリアと妹マクリナが隠遁し、彼女たちが所有していた土地――へと身を隠した。 マクリナはここに修道院を設立した。その近く、鬱蒼とした森に覆われ、冷たく澄んだ水が流れる高い山の麓に、ヴァシレイは住み着いた。 その荒野の静寂と穏やかさはヴァシリーにとってあまりにも心地よく、彼はここで生涯を終えるつもりだった。ここで彼は、シリアやエジプトで目にした偉大な聖人たちの行いを模範とした。 彼は極度の苦行に励み、身を覆うものは一枚の衣――サラチツァとマント――だけだった。また、羊毛の衣も身につけていたが、それは夜間にのみ、人に見られないようにするためであった。食事はパンと水だけで、この質素な食事を塩や根菜で味付けしていた。 厳しい禁欲生活のため、彼は非常に青白く痩せ細り、極度の衰弱状態に陥った。彼は決して風呂に入らず、火も灯さなかった。しかし、ヴァシリーは自分自身のためだけに生きていたわけではない。彼は修道院に修道士たちを集め、手紙を通じて友人のグリゴリーをも荒野へと招き寄せた。

その隠遁生活の中で、ヴァシリーとグリゴリーはすべてを共に行い、共に祈りを捧げた。二人は以前多くの時間を費やしていた世俗の書物の読解をやめ、聖書のみに専念するようになった。 聖書をより深く学びたいと願って、彼らは自分たちより前の時代の教父や教会作家、とりわけオリゲネスの著作を読んだ。またここで、バシレイオスとグリゴリオスは聖霊の導きにより、修道共同体の規則を著した。この規則は、現在でも東方教会の修道士たちの大部分が指針としているものである[467] 。

は説教の中で、キリスト教の美徳の素晴らしさを、聴衆の知性と心に生き生きと説得力を持って明らかにし、悪徳の醜さを糾弾した。また、美徳を追い求め、悪徳から遠ざかるよう促し、自らも熟練した修行者であったからこそ、すべての人に完全性を達成するための道を指し示した。 彼の解釈そのものは、何よりもまず、聴衆の霊的な啓発に向けられている。たとえ彼が「平和の創設」の物語を解説する際であっても、彼はまず第一に、「平和こそが神を知るための学校である」（『六日創造』に関する第1講）であることを示し、それを通じて、大小、美しく、多様で、数え切れないほどの神の被造物に現れる、創造主の英知と慈愛に対する畏敬の念を聴衆の心に喚起することを目的としている。 第二に、彼は、自然が常に人間に道徳的な善き生き方を教えていることを示したいと考えている。四足動物、鳥、魚、爬虫類の生活様式、性質、習性――すべてが、たとえ一日の命しか持たないものであっても――「地の主」である人間にとって、教訓となる教訓を引き出す機会を与えてくれるのである。 彼は、自身の表現によれば、他の書物にある有益な要素――預言、歴史、教訓――をすべて兼ね備えているという『詩篇』を解説する際、主に詩人の言葉をキリスト教徒の生活や活動に当てはめている。

466 ポントスは小アジアの地域で、黒海の南岸、ネオケサリアからそう遠くない場所にある。ポントスの砂漠は不毛であり、その気候は健康にとって決して好ましいものではなかった。バシレイオスがここで暮らしていた小屋には、頑丈な扉も、まともな囲炉裏も、屋根さえもなかった。 食事の際には確かに温かい料理が供されたが、グリゴリオス・テオロゴスの言葉によれば、そのパンはひどく硬く、一口かじると最初は歯が滑り、次に歯に挟まって抜けなくなってしまうほどだった。 共同の祈りや聖書の朗読、学術書の研究に加え、ヴァシリー大聖人、グリゴリー・ボゴスローヴ、そして他の修道士たちは、ここで自ら薪を運び、石を切り出し、菜園の野菜の手入れを行い、さらには巨大な肥料を積んだ荷車を自ら引いて運んでいた。

467 これらの規則は、かつてから現在に至るまで、東方全土の修道士たち、とりわけ我々のロシアの修道士たちの生活指針となっている。バシレイは自身の規則において、隠遁生活や孤独な生活よりも共同生活を優先している。なぜなら、他者と共に暮らすことで、修道士はキリスト教の愛の実践に奉仕する機会をより多く得られるからである。 バシレイは、修道士に対し、修道院長への無条件の服従を義務づけ、旅人に対してはもてなしの心を示すよう命じているが、特別な料理を振る舞うことは禁じている。 断食、祈り、そして絶え間ない労働――これこそが、バシレイオスの規則によれば修

肉体の生活に関しては、バシレイオスとグリゴリオスは忍耐の中に喜びを見出していた。彼らは自らの手で働き、薪を運び、石を削り、木を植え水やりをし、肥料を運び、重い荷物を運んだため、彼らの手には長い間たこが残っていた。　彼らの住まいには屋根も門もなく、そこには火も煙も決してなかった。彼らが食べたパンは、あまりにも乾燥していて焼きが足りず、歯で噛み砕くことさえ困難だった。

しかし、やがてヴァシレイとグリゴリイの両名が荒野を去らなければならない時が訪れた。当時、異端者たちに揺さぶられていた教会が、彼らの奉仕を必要としていたからである。グリゴリイは、正教徒を助けるために、ナジアンズにいる父グリゴリイのもとへ迎え入れられた。父はすでに高齢であり、異端者たちと断固として戦う力を持っていなかった。　一方、ヴァシリーは、ケサリアの大司教エウセビオスに説得されて帰還した。エウセビオスは手紙で彼と和解し、アリウス派が攻撃を仕掛けていた教会を助けてほしいと懇願していたのである[468]。　至福のヴァシレイオスは、教会のこのような窮状を目の当たりにし、その益を隠遁生活よりも優先して、隠遁生活を捨ててケサリアへと赴き、そこで多大な労力を費やし、言葉と著作によって正統な信仰を異端から守った。　やがて、エウセビオス大司教が、ヴァシレイオスの腕の中で神に息を引き取ると、ヴァシレイオスは司教会議によって大司教の座に就き、叙任された。　その司教たちの中には、高齢のグリゴリオス、すなわちグリゴリオス・ナジアンゾスの父もいた。老齢により体力が衰え、疲れ果てていた彼は、ヴァシレイオスに大司教職を受け入れるよう説得し、アリウス派の誰かが大司教の座に就くのを阻止するため、自分をケサリアへ連れて行くよう命じた。

ヴァシレイオスはキリストの教会を立派に統治し、弟のペトロを長老に叙階して教会の務めを補佐させ、後に彼をセバスティアの司教に任命した[469]　。この頃、彼らの母である福者エメリアは、90歳を超えてこの世を去り、主のもとへ帰った。

しばらくして、福者ヴァシリーは、自らの言葉で神に血なき犠牲を捧げることができるよう、またそのために聖霊の恵みが授けられるよう、神にその知恵を照らしてくださるよう祈った[470]。六日目の七日、ヴァシリーが教会の祭壇の前に立ち、パンと杯の奉献を始めようとしたとき、主ご自身が使徒たちと共に幻として現れ、こう言われた。

「あなたの願いに従い、あなたの口は賛美で満たされ、あなたが自らの祈りの言葉を唱えながら、血を流さない奉仕を執り行えるように。」

その後、ヴァシリーは次のような言葉を語り、書き留め始めた。「わが口が賛美に満ち、あなたの栄光を歌い上げんことを」、「主なる神よ、私たちを造り、この命へと導き給え」など、聖なる典礼の他の祈りたちである。祈りが終わると、彼はパンを掲げ、次のような言葉で熱心に祈った。

「聞き入れ給え、　主イエス・キリスト、我らの神よ、天の御住まいと御国の御座の御前で、来たりて我らを聖別し、この山に御座し、ここにて我らと共に目に見えぬ御姿で留まり給え。そして御手をもって、御自身の至聖なる御体と御血を、我々すべての人々に授けてください」[471]。　聖職者がこの

道士が従事すべきことであるが、その一方で、彼らは周囲の不幸な人々や、介護を必要とする病人のニーズを忘れてはならない。

468　異端であるアリウス派は、キリストは被造物であり、永遠に存在するものではなく、父なる神と同一の本質を持つものではないと教えた。この異端の名は、319年にこれらの思想を説き始めたアレクサンドリア教会の長老アリウスに由来する。

469 セバスティア――カッパドキアにある都市。

470 コンスタンティノープル大司教プロクルス（5世紀半ば）は、当時の多くのキリスト教徒が教会の礼拝のの長さに不満を表明するようになったことを受け、聖バシレイオスがより簡潔な典礼を制定したと述べている。そのため、彼は通常の共同の祈りを短縮すると同時に、聖職者による祈りを充実させた。– 聖体礼儀のほか、バシレイオス大聖人は、a) 聖体拝領前の祈り、b) 聖霊降臨祭前夜の祈り、c) 悪霊に取りつかれた者に対する祈りと呪文を制定した。

471 聖バシレイオス大教皇の典礼における祈り。

儀式を執り行っていると、エヴブルと高位の聖職者たちは、祭壇と聖職者、そして聖ヴァシリーを取り囲む白い衣をまとったある光り輝く男たちを照らす天の光を見た。これを見た彼らは大きな恐怖に襲われ、地面にひれ伏し、涙を流しながら神を賛美した。

その頃、ヴァシリーは金細工師を呼び寄せ、ヨルダン川の上空に現れた鳩を模して純金で鳩を製作するよう命じ、それを聖なる祭壇の上に安置し、あたかも神聖な秘跡を守護するかのようにした。

主なる神は、バシレイオスが存命中に、いくつかの奇跡的なしるしによって、彼の聖性を証しされた。 ある時、彼が聖務を執り行っていた際、あるユダヤ人が、聖なる秘跡がどのようなものかを知りたくて、あたかもキリスト教徒であるかのように他の信者たちに混じり、教会に入ると、聖ヴァシレイが赤ん坊を両手で抱き、それを粉々に砕いているのを目撃した。 信者たちが聖人の手から聖体を受け取り始めたとき、そのユダヤ人も近づき、聖人は他のキリスト教徒たちと同様に、彼にも聖体の片割れを差し出した。 それを手に取ると、ユダヤ人はそれが確かに肉であることを悟り、聖杯に口をつけると、そこには確かに血があるのを見た。彼は聖体拝領の残りを隠し、家に帰って妻に見せ、自分の目で見たすべてを彼女に語った。 キリスト教の秘跡が実に畏れ多く、栄光に満ちたものであると信じた彼は、翌朝、聖ヴァシリーのもとへ赴き、聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願した。ヴァシリーは神に感謝を捧げると、直ちにそのユダヤ人とその家族全員に洗礼を授けた。

ある日、聖人が道を歩いていると、ある役人に不当な扱いを受けた貧しい女性が、ヴァシリーの足元にひれ伏し、その役人が非常に尊敬している人物として、彼女のことを役人に書いてくれるよう懇願した。 聖人は紙を取り[472]、その役人へ次のように書いた。「この貧しい女性が私のところに来て、私の手紙があなたにとって大きな意味を持つと言いました。もしそうであるなら、そのことを行動で証明し、この女性に慈悲を示してください」。 これらの言葉を書き終えると、聖人はその紙片をその貧しい女性に手渡し、彼女はそれを受け取って上司のもとへ届けた。手紙を読んだ上司は、聖人へ次のように返事を書いた。「聖なる父よ、あなたの手紙の通り、私はその女性に慈悲を示したいのですが、彼女は一般市民と同じ税金を納める義務があるため、それを行うことはできません」。聖人は再び彼に次のように書き送った。「もしあなたが望みながらもできなかったのなら、それは構わない。しかし、もしあなたにできたにもかかわらず、そうしようとしなかったのなら、神はあなた自身を困窮者の列に加え、あなたが望むことを何もできなくされるだろう。」 聖人のこの言葉はまもなく現実のものとなった。その少し後、王はその長官が民衆に甚大な迫害を加えていることを知り、怒りを露わにし、彼を投獄して、被害を受けた者全員に賠償を支払わせたのである。 その役人は獄中から聖ヴァシリーに嘆願書を送り、彼に憐れみを持ち、その取り成しによって王をなだめてくれるよう頼んだ。ヴァシリーは急いで王に彼のために取り成しを願い出ると、六日後に、その役人を処罰から免除する勅令が下った。 その長官は、聖人が自分に対してどれほど慈悲深いかを知ると、急いで聖人のもとへ駆けつけ、感謝の意を表した。そして、前述の貧しい女性には、彼女から徴収した額の二倍に相当する財産を、自身の所有地から与えた。

この神に愛された者、大バシレイオスが、カッパドキアのケサリアでキリストの聖なる信仰のために勇敢に戦っていた頃[473]、神を冒涜し、キリスト教徒を激しく迫害した異端者ユリアヌス王[474]は、キリスト教徒を滅ぼすと豪語しながら、ペルシアへの遠征に出陣していた。 その頃、聖バシレイオスは教会で至聖なる聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げていた。そのイコンの足元には、槍を持った戦士の姿をした聖大殉教者メルクリウスの像が描かれていた。戦士メルクリウスは、カッパド

---

[472] ハルティア――古代に筆記に用いられたパピルス紙または羊皮紙；写本、巻物（3マカベオ4:15；2ヨハネ1:12）。

[473] 「もしバシレイオスがいなければ――教会史家ソゾメンはこう述べている――エウノミオスの異端はタウロスまで、アポリナリオスの異端はタウロスからエジプトまで広がっていただろう」。

[474] ユリアヌス「背教者」は361年から363年まで在位した。皇帝となった彼はキリスト教の信仰から背き、異教の復活を人生の目標とした。そのため、彼は「背教者」と呼ばれている。

キアのケサリアで殉教の死を遂げた（記念日は11月24日）。　彼は、キリスト教徒の迫害者であり滅ぼし手であるユリアヌスが、ペルシア戦争から生還することを神が許さないよう祈っていた。すると、至聖なる聖母マリアのそばに立っていた聖メルクリウスの像が変化し、殉教者の姿がしばらくの間見えなくなってしまった。　しばらくして、殉教者は再び姿を現したが、その手には血まみれの槍が握られていた。まさにその瞬間、ユリアヌスはペルシャ戦争の戦場で、神の敵を滅ぼすために至聖なる聖母マリアによって遣わされた聖殉教者メルクリウスに貫かれたのである。

聖バシレイオス大聖人は、このような神の恵みにも恵まれていた。彼が聖体礼儀の最中に聖なる供物を捧げると、聖なる祭壇の上に浮かんでいた神の供物を載せた黄金の鳩が、神の力に動かされて三度震えたのである。　ある日、バシレイオスが礼拝を執り行い、聖なる供物を捧げている際、聖霊の降臨をその震えによって示す、いつもの鳩のしるしが現れませんでした。バシレイオスがその理由について思案していると、リピダ[475]　を掲げていた助祭の一人が、教会の中に立っていたある女性を見つめていることに気づきました。　ヴァシリーはその助祭に聖なる祭壇から退くよう命じ、七日間の断食と祈り、徹夜で祈りを捧げ、自身の財産から貧しい人々に施しを行うという悔悛の行いを課した。　それ以来、聖ヴァシリーは、神聖な礼拝が行われている間、いかなる女性も祭壇を覗き見ることができないよう、教会の祭壇の前に幕と仕切りを設けるよう命じた。また、従わない者については、教会から追い出し、聖体拝領から排除するよう命じた[476]。

聖ヴァシレイが司教を務めていた当時、アリウス派の異端に目がくらんでいた皇帝ヴァレント[477]　が、キリストの教会を混乱させていた。彼は多くの正統派の司教たちをその座から追放し、その代わりにアリウス派を据え、また、気弱で臆病な者たちには、自らの異端に加わるよう強要した。バシレイオスが、自らの信仰の揺るぎない柱として、恐れを知らずに座に留まり、他の人々に対し、神に憎まれる偽りの教えであるアリウス派を忌み嫌うよう励まし、説き伏せているのを見て、皇帝は怒りと内なる苦悩に苛まれた。　領内を巡回し、至る所で正教徒を激しく弾圧しながら、皇帝はアンティオキアへ向かう途中、カッパドキアのケサリアに到着し、そこでヴァシレイオスをアリウス派の側に引き込むためにあらゆる手段を講じ始めた。　彼は自分の軍司令官、貴族、顧問たちに、懇願や約束、あるいは脅しを用いて、ヴァシレイオスを説得し、皇帝の望みを叶えるよう促した。　また、皇帝の同調者たちも聖人に執拗に説得を試みた。さらに、皇帝の寵愛を受けていた一部の貴婦人たちは、自分の宦官を聖人のもとへ送り込み、皇帝と同じ考えを持つよう執拗に勧めた。しかし、信仰において揺るぎないこの聖職者を、正統派から離反させることは誰にもできなかった。　ついに、モデスト司教[478]　がヴァシリーを呼び出し、お世辞めがましい約束で彼を正統派からの離反へと誘導することができないと分かると、財産の没収、追放、そして死をもって激しく脅し始めた。しかし、聖人はその脅しに対して大胆にこう答えた。

「もしあなたが私の財産を奪ったとしても、それによってあなたが豊かになるわけでもなく、私を貧乏にするわけでもない。私のこのぼろぼろの服や、私の全財産である数冊の本など、あなたには必要ないだろう。」　追放など私には意味がない。なぜなら、私は場所に縛られていないからだ。今私が住んでいる場所も私のものではなく、どこへ追放されようとも、そこが私の場所となる。むし

475　リピダ――（ギリシャ語で「オパハロ」、ハエを追い払うための道具）。これは、かなり長い柄のついた金属製の円盤で、その表面には六翼のセラフィムが描かれている。助祭たちは司教の礼拝の際、聖なる供え物に虫が落ちないように、これを扇いだり、聖なる供え物の上で揺らしたりする。　同時に、リピダは、聖体礼儀の聖なる儀式において、その上に描かれた聖なる天使たちが同席し、私たちと共に奉仕していることを思い出させてくれます。リピダは主教による礼拝で使用されますが、司祭による礼拝では、代わりに「ポクロヴェツ」が用いられます。

476　幕は、本来、教会堂内の女性たちが立つ区画の前に設置されていた。これらの幕は聖体礼儀の執行中に下げられ、女性たちは教会堂から追い出される恐れがあるため、この間、幕を持ち上げることは禁じられていた。　また、祭壇は教会の他の空間から、貫通式の格子で仕切られており、これが後に現在のイコノスタスへと変化した。

477 皇帝ヴァレントは364年から378年まで在位した。

478 このエパルフは東方全域の統治者であり、同時にプレトリアン兵、すなわち皇帝近衛兵の指揮官でもあった。

ろこう言うべきだろう。私が*「旅人であり、寄留者」*であるところならどこでも、そこが神の場所である（詩編38:13）。　そして、拷問など私に何ができるというのか？――私はそれほど弱く、おそらく最初の打撃だけが私にとって痛みを伴うだろう。死は私にとって恵みである。それは、私が生き、労苦し、そしてかねてより憧れてきた神のもとへ、私をより早く導いてくれるからだ。

これらの言葉に驚いた統治者は、ヴァシリーにこう言った。

「これまで、これほど大胆に私に語りかけた者は誰もいなかった！」

「はい」と聖人は答えた。「それは、あなたがこれまで司教と話す機会がなかったからです。」　他のあらゆる事柄においては、私たちは柔和さと謙遜を示しますが、神のこと、そして神に逆らって反抗しようとする者たちについては、　――そのとき、私たちは他のすべてを何とも思わず、ただ唯一の神のみに目を向けます。そうすれば、肉体を苦しめる火や剣、獣、鉄さえも、私たちを脅かすどころか、むしろ喜びをもたらすことになるでしょう。

聖バシレイオスの不屈の精神と不撓不屈の姿勢をヴァレンティヌスに報告する際、モデストはこう言った。

「陛下、我々は教会の長に打ち負かされました。この男は脅しよりも高く、論証よりも堅固で、信念よりも強いのです。」

その後、王はヴァシレイを煩わせないよう命じ、自分が変わったことを示すのを恥じて彼との交わりは拒んだものの、より体裁の取れる言い訳を探し始めた。

主の顕現の祝日が訪れた。王は随行者たちと共に、ヴァシリーが奉仕していた教会に入り、民衆の中に身を置くことで、教会との一体感を装おうとした。　教会の荘厳さと秩序を眺め、信徒たちの賛美歌と祈りに耳を傾けながら、王は驚嘆し、自分のアリウス派の教会では、これほどの秩序と荘厳さを一度も見たことがないと語った。　聖ヴァシレイオスは王のもとへ歩み寄り、聖書に基づいて彼を教えながら語りかけ始めた。この対話を耳にしていたのは、たまたまその場に居合わせたグリゴリオス・ナジアンゾスであり、彼はこの出来事を記録に残した。それ以来、王はヴァシレイオスに対して好意的な態度を示すようになった。　しかし、アンティオキアへ戻ると、彼は再びバシレイオスに対して苛立ちを募らせた。悪意ある者たちに煽られ、彼らの讒言を信じて、バシレイオスを追放に処したのである。ところが、皇帝がこの判決書に署名しようとしたとき、彼が座っていた玉座が揺れ、署名に使うはずだった杖[479] が折れてしまった。　王は別の杖を手にしたが、それにも同じことが起こった。三本目でも同じことが起きた。その後、王の手が震え出し、恐怖に襲われた。この中に神の御力を見出した王は、その文書を破り捨てた。　しかし、正教の敵たちは再び、ヴァシレイについて王に執拗に働きかけ、彼を放っておかないよう迫った。そこで王は、アナスタシウスという名の高官を派遣し、ヴァシレイをアンティオキアへ連行させた。この高官がケサリアに到着し、王の命令をヴァシレイに伝えると、聖人はこう答えた。

「わが子よ、私は少し前に、皇帝が愚かな者たちの助言に従い、私の幽閉に関する勅令に署名し、それによって真理を覆い隠そうとして、三本の葦を折ったことを知った。　無感覚な葦の杖たちは、その抑えきれない勢いを食い止め、王の不当な判決の道具となるよりは、むしろ自ら折れることを選んだのである。

アンティオキアに連行されたヴァシレイオスは、エパルハの裁判にかけられ、「なぜ王が信奉する信仰に従わないのか」という問いに、次のように答えた。

「私が真のキリスト教の信仰から逸れて、不敬虔なアリウス派の教義の信奉者になることなど、決してあり得ない。なぜなら、私は先人たちから、同質（エディノスーシオス）[480]　への信仰を受け継ぎ、それを告白し、賛美しているからだ。」

---

[479] 古代の人々が執筆に用いた道具は、ペン、鉛筆、あるいはグリフェルのようなものであった（詩篇44:1–3参照）。

[480] すなわち、神の御子は父なる神と同質であり、父と等しいということである。

裁判官は彼に死刑をちらつかせたが、ヴァシリーはこう答えた。

– それでどうだというのか？　私が真理のために苦しみを受け、肉体の束縛から解放されることなど、とっくに望んでいることだ――ただ、あなたが約束を破らないでほしい。

エパルヒは王に、ヴァシリーが脅しを恐れておらず、その信念は揺るがず、心は不屈で堅固であると報告した。王は怒りに燃え上がり、どうすればヴァシリーを滅ぼせるか考え始めた。　しかし、まさにその時、王の息子ガラトが突然病に倒れ、医師たちはすでに彼の死を宣告していた。彼の母は王のもとへやって来て、苛立ちを露わにこう言った。

「あなたが誤った信仰を持ち、神の司祭を迫害しているから、この少年は死にかけているのだ。」

これを聞いたヴァレントは、ヴァシリーを呼び寄せ、こう言った。

「もし神が汝の信仰の教えを喜ばれるのなら、汝の祈りによって我が子を癒やせ！」

聖人はこう答えた。

「王よ！もしあなたが正教の信仰に改宗し、教会に安寧を与えるならば、あなたの息子は生き延びるでしょう。」

王がこれを果たすと約束すると、聖ヴァシリーは直ちに神に祈りを捧げ、主は王子の病を和らげてくださった。その後、ヴァシリーは栄誉をもって自身の座へと送り出された。これを見聞きしたアリアニ派の人々は、嫉妬と憎悪に燃え上がり、王にこう言った。

「私たちにもそれができたはずだ！」

彼らは再び王を惑わし、王は彼らが自分の息子に洗礼を施すことを阻止しなかった。　しかし、アリア派が王の息子を洗礼のために連れ去ったとき、彼は彼らの腕の中で即座に息を引き取った。この光景を、前述のアナスタシウスがこの目で目撃し、西方を治めていたヴァレンティニアヌス王[481]――東方王ヴァレンティヌスの兄弟――にそのことを伝えた。　ヴァレンティニアヌスは、この奇跡に驚き、神を賛美し、アナスタシウスを通じて聖バシレイオスに多額の贈り物を送った。バシレイオスはそれを受け取り、自身の教区内の都市に病院を設立し、そこで多くの病弱者や貧しい人々に宿を提供した。

また、至福のグリゴリオス・ナジアンゾスは、聖ヴァシレイオスが、かつて彼に対して非常に厳しかったその教区長モデストさえも、彼が病のさなかに謙虚に聖ヴァシレイオスの聖なる祈りによる助けを求めた際、祈りによって重い病から癒やしたと伝えている。

しばらくして、モデスタの後任として、エウセビオスという名の王の親族が教区長に任命された。彼の在任中、ケサリアには、若く、裕福で、非常に美しい未亡人が一人住んでいた。彼女の名前はヴェスティアナといい、元老院議員であったアラクサスの娘であった。　この未亡人を、エウセビオス司教は力ずくでとある高官に嫁がせようとしたが、彼女は貞淑であり、神の栄光のために未亡人としての清らかさを汚すことなく保ちたいと願っていたため、結婚を拒んだ。　彼女が、力ずくで連れ去られ、結婚を強要されようとしていることを知ると、教会へ逃げ込み、神の司教である聖バシレイオス（[482] ）の足元にひれ伏した。 聖ヴァシレイオスは彼女を保護し、彼女を迎えに来た者たちに教会から引き渡すことを拒み、その後、密かに彼女を女子修道院へ、自身の姉である聖マクリナのもとへ送り出した。　至福のヴァシリーに激怒したエパルヒは、兵士たちを派遣してその未亡人を教会から力ずくで連れ出させようとしたが、そこで彼女が見つからなかったため、聖人の寝室で彼女を探すよう命じた。エパルヒは道徳に欠ける人物であったため、ヴァシリーが不純な意図で彼女を自分の元に留め置き、寝室に隠しているのだと考えた。　しかし、どこを探しても彼女が見つからなかった

[481] ヴァレンティニアヌスは364年から376年まで在位した。

[482]　古代の教会には、コンスタンティヌス大帝の時代以来、いわゆる「庇護権」が認められていた。無実の罪で迫害された者たちは教会に身を隠し、当局はそれによって彼らの無実を確認する時間を得ることができた。

ため、彼はヴァシレイを自分の元へ呼び出し、激しい怒りで彼を罵り、もしその未亡人を引き渡さなければ拷問にかけると脅した。しかし、聖ヴァシレイは拷問を受ける覚悟を示した。

「もしあなたが私の体を鉄で削るよう命じるなら」と彼は言った。「それによって、ご覧の通り私をひどく苦しめているこの肝臓の病が癒やされるでしょう。[483]」

その時、この出来事を知った市民たちは、男性だけでなく女性までもが、武器や棒を手に、皆一斉にエパルヒの宮殿へと駆けつけ、聖なる父であり自分たちの牧者である聖バシレイオスのために、エパルヒを殺そうと意気込んでいた。もし聖バシレイオスが民衆をなだめていなければ、エパルヒは殺されていたことだろう。　一方、司教は、このような民衆の激昂を目の当たりにして大いに恐れ、聖人を無傷かつ自由の身として解放した。

ヴァシレイオスの奇跡を目の当たりにし、司教の座を継いだエラディオスは、高潔で聖なる人物であり、次のように語っている。プロテリウスという名の正教徒の元老院議員が、聖地を巡礼中に、娘をある修道院に送り、神に仕えさせようと決意した。　しかし、古来より善を憎む悪魔は、プロテリウスのある奴隷の中に、主人の娘への情念を煽り立てた。自分の願いが叶わないと悟り、その情念を娘に打ち明けることもできずにいた奴隷は、その街に住むある魔術師のもとへ行き、自分の苦境を打ち明けた。　彼は、魔術師が魔法を使って主人の娘と結婚できるよう手助けをしてくれるなら、多額の金を支払うと約束した。魔術師は最初は断ったが、ついにこう言った。

「望むなら、私の主である悪魔のもとへ送ってやろう。お前が彼の意志に従う限り、彼はこの件で助けてくれるだろう。」

すると、その不幸な奴隷はこう言った。

「彼が私に命じることは何でも、すべて果たすことを誓います。」

すると、魔法使いはこう言った。

「お前のキリストを否定し、その旨の誓約書に署名するつもりか？」

すると、その奴隷は言った。

「望みを叶えてくれるなら、それさえも構いません。」

「もしそのような約束をするのなら」と魔術師は言った、「私もお前の味方になってやろう。」

それから、紙を取り出して、悪魔に次のように書き記した。

– わが主よ、私は人々をキリスト教の信仰から遠ざけ、あなたを信じる者を増やし、あなたの支配下に置くよう努めなければならない。そこで、今、この手紙の持参人である、乙女への情熱に燃える若者をあなたのもとへ送り、彼の願いが叶うよう、あなたに助力を賜りますようお願いいたします。　それによって私も名声を博し、貴殿のもとへより多くの崇拝者を引き寄せることができるだろう。

悪魔へのこのような手紙を書き終えると、魔術師はその若者に手紙を渡し、次のように告げて送り出した。

「この夜更けに、ギリシャ人の墓地[484]　へ行き、紙を天に向けて掲げよ。そうすれば、すぐに悪魔のもとへ案内してくれる者たちが現れるだろう。」

哀れな奴隷は急いでそこへ向かい、墓地で立ち止まると、悪魔たちを呼び出し始めた。するとすぐに、悪意に満ちた精霊たちが彼の前に現れ、喜びながらその惑わされた者を彼らの主のもとへと

483　バシレイオス大聖は極めて病弱な人物であり、しばしば体力を完全に失っていた。「絶え間なく続く激しい高熱は――彼自身が記しているように――私の体をこれほどまでに消耗させ、私は蜘蛛の巣と何ら変わらないほどになった。私にとってどんな道も通れず、どんな微風でさえ、水泳者にとっての波よりも危険である……　私には病気が次から次へと襲いかかる」。

484 異教徒の墓は、不浄なものとして、古代のキリスト教徒の間では悪魔が好んで棲みつく場所と見なされていた。

連れて行った。高い玉座に座る悪魔と、それを取り囲む闇の邪悪な精霊たちを見た奴隷は、魔術師からの手紙を悪魔に手渡した。 悪魔は手紙を受け取ると、奴隷に言った。

「私を信じるか？」

すると、奴隷は「信じます」と答えた。

悪魔は再び尋ねた。

「お前のキリストを否定するか？」

「否」と、その奴隷は答えた。

すると、サタンは彼に言った。

「キリスト教徒どもは、よく私を騙すものだ。私の助けを求めるときは私のところへやって来るが、目的を果たすと、また私を否定して、あなたたちのキリストのもとへ戻っていく。そのキリストは、慈悲深く人を愛する者として、あなたたちを受け入れてくれるのだ。　さあ、お前が自発的にキリストと洗礼を否定し、永遠に私のものとなることを約束し、審判の日から私と共に永遠の苦しみを受けることを誓うという受領証を私に渡せ。そうすれば、私はお前の願いを叶えてやる。

その奴隷は文書を受け取ると、悪魔が望んだ通りに書き記した。　すると、魂の破滅者、古の蛇（すなわち悪魔）は、姦淫の悪霊たちを送り込み、彼女の中にその若者に抱く強烈な愛を掻き立てた。彼女は肉欲に駆られて地面に倒れ込み、父に向かって叫び始めた。

「私を憐れんでください、あなたの娘を憐れんでください。そして、私が全身全霊で愛してしまったあのあなたの奴隷と、私を結婚させてください。もしあなたが、たった一人の娘である私のためにこれをしてくれないなら、私はまもなく激しい苦しみの中で死んでしまうでしょう。そして、審判の日に、あなたは私のことについて責任を問われることになるでしょう。」

これを聞いて、父は恐怖に襲われ、泣きながらこう言った。

「ああ、罪深い私よ！　私の娘に一体何が起きたのか？　誰が私の宝を奪ったのか？　誰が私の子を惑わしたのか？　誰が私の目の光を曇らせたのか？　娘よ、私はあなたを天の花婿に嫁がせ、あなたが天使たちのようになり、詩篇や霊的な賛美歌（エフェソ5:19）の中で神を賛美することを望んでいた。そして私自身も、あなたのために救いを得られることを望んでいたのに、あなたは恥知らずにも結婚のことを口にするのか！　私の子を、悲しみと共に冥界へ連れ去らないでくれ、我が子よ。奴隷と結婚して、その高貴な身分を汚してはならない。

しかし彼女は、父の言葉を聞き入れず、ただこう言った。

「私の望み通りにしてくれないなら、私は自殺するわ。」

父は、どうすればよいか分からず、親族や友人の助言に従い、娘が凄惨な死を遂げるのを見るよりは、彼女の望みを叶えてやるほうがましだと納得した。自分の奴隷を呼び寄せ、娘を妻として与え、広大な領地も譲り渡し、娘にこう言った。

「さあ、不幸な娘よ、嫁ぎなさい！　だが、後でこの行いを深く後悔することになるだろうし、これによって何の得にもならないだろう。」

この結婚が成立し、悪魔的な企みが実行されてからしばらくして、新郎が教会に通わず、聖なる秘跡も受けていないことが判明した。このことは、彼の不幸な妻にも告げられた。

「あなたは知らないのか」と彼女に言われた。「あなたが選んだ夫は、キリスト教徒ではなく、キリストの信仰とは無縁の人物なのだと。」

彼女はこれを聞いて、ひどく悲しみに打ちひしがれ、地面に倒れ込み、爪で自分の顔を引っ掻き、疲れを知らずに両手で胸を叩きながら、こう叫んだ。

「両親の言うことを聞かなかった者は、これまで誰一人として救われたことがない！　私のこの恥を、誰が私の父に告げようか？　ああ、不幸な私よ！　私はなんと破滅的な境遇に陥ってしまったことか！　なぜ私は生まれてきたのか、なぜ生まれた時に死ななかったのか？」

彼女がそう泣き叫んでいると、夫がその声を聞きつけ、急いで駆け寄って、なぜ泣いているのかと尋ねた。事情を知ると、彼は彼女を慰め、自分について伝えられたことは嘘だと語り、自分はキリスト教徒だと説得した。彼女は彼の言葉に少し落ち着きを取り戻すと、こう言った。

「もしあなたが私を完全に納得させ、この不幸な私の魂の悲しみを晴らしたいのなら、明日の朝、私と一緒に教会へ行き、私の目の前で聖体拝領をしてください。そうすれば、あなたを信じます。」

不運な夫は、真実を隠し通せないことを悟り、本意に反して、自分が悪魔に身を売ったことなど、すべてを彼女に打ち明けざるを得なかった。彼女は女性の弱さを忘れ、急いで聖ヴァシリーのもとへ駆けつけ、彼にこう叫んだ。

「キリストの弟子よ、私を憐れんでください。父の意志に背き、悪魔の誘惑に屈してしまったこの不従順な者を憐れんでください！」――そして、夫についてすべてを詳細に語った。

聖人は彼女の夫を呼び寄せ、妻が彼について語っていることが本当かどうか尋ねた。夫は涙ながらに答えた。

「はい、神の聖者よ、それはすべて真実です！もし私が黙っていれば、私の行いがそれを叫び立てるでしょう」――そして、自分がどのようにして悪魔に身を委ねてしまったかを、順を追ってすべて語った。

すると聖人は言った。

「再び、我らの主イエス・キリストのもとへ立ち返りたいか？」

「はい、そうしたいのですが、できません」と彼は答えた。

「なぜですか？」とヴァシリーは尋ねた。

「それは――」と男は答えた。「私がキリストを否定し、自らを悪魔に売り渡すという誓約書に署名してしまったからです。」

しかし、ヴァシリーは言った。

「そのことを嘆く必要はない。神は人を愛しておられ、悔い改める者を受け入れてくださるからだ。」

一方、妻は聖人の足元にひれ伏し、こう懇願した。

「キリストの弟子よ！　できる限り、私たちを助けてください。」

すると、聖人はその僕にこう尋ねた。

「お前は、まだ救われることができると信じているか？」

すると、彼は答えて言った。

「信じております、ご主人様。私の不信仰をお助けください。」

その後、聖人は彼の手を取り、十字を切って祝福し、教会の塀の内側にある部屋に彼を閉じ込め、絶えず神に祈るよう命じた。聖人自身も三日間祈りを捧げた後、悔い改める者を訪ね、こう尋ねた。

「気分はどうだ、わが子よ？」

「私は極めて悲惨な状態にあります、大司教様」と若者は答えた。「悪魔たちの叫び声や恐怖、銃撃、そして槍での殴打に耐えられません。悪魔たちは私の誓約書を手に持ち、『お前が我々のところに来たのであって、我々があなたのところに来たのではない！』と言って、私を罵倒しているのです。」

すると聖人はこう言いました：

「恐れるな、わが子よ。ただ信じなさい。」

そして、彼に少しの食べ物を与え、十字の印を切って祝福し、再び彼を閉じ込めた。数日後、聖人は再び彼を訪ねてこう言った。

「子よ、元気か？」

すると、少年は答えた。

「遠くから彼らの脅しや叫び声はまだ聞こえますが、姿は見えません。」

ヴァシリーは彼に少しの食べ物を与え、彼のために祈りを捧げた後、再び彼を閉じ込めて去った。それから四十日目に彼の元を訪れ、こう尋ねた。

「子よ、元気か？」

すると、彼は言った。

「順調です、聖なる父よ。夢の中で、あなたが私のために戦い、悪魔を打ち負かす姿を見たからです。」

祈りを捧げた後、聖人は彼を牢から連れ出し、修道室へと連れて行った。翌朝、彼は教会の聖職者全員、修道士たち、そしてキリストを愛するすべての人々を呼び集め、こう言った：

–

兄弟たちよ、人を愛する神を賛美しよう。今まさに、善き羊飼いが、迷い出た羊を肩に担ぎ[485]、教会へと連れ戻そうとしているのだから。今宵、私たちは神の慈しみに懇願し、神が私たちの魂の敵に打ち勝ち、恥をかかせてくださるよう祈らなければならない。

信者たちは教会に集まり、悔い改める者のために一晩中祈りを捧げ、「主よ、憐れみたまえ」と叫び続けた。

朝になると、ヴァシリーは悔い改める若者の手をとり、民衆全員と共に教会へと導き、詩篇や賛美歌を歌いながら進んだ。すると、悪魔は恥知らずにも、その破滅的な力をすべて携えて目に見えない形でそこに現れ、聖人の手からその若者を引き離そうとした。すると、若者は叫び始めた。

「神の聖者よ、私を助けてください！」

しかし、悪魔は若者に立ち向かうにあたり、これほどまでの厚かましさと恥知らずさを発揮し、聖ヴァシリーにも苦痛を与えながら、若者を連れ去ろうとした。そこで、聖人は悪魔に向かってこう言い放った。

「最も恥知らずな人殺し、闇と滅びの君よ！　お前が自分自身や、お前に従う者たちに招いた滅びで、まだ満足できないのか？　果たして、お前はわが神の被造物を迫害することをやめないつもりなのか？」

すると悪魔は彼に向かって叫んだ。

「ワシリイよ、お前は私を侮辱している！」――そして、この悪魔の声を多くの者が耳にした。すると、聖人はこう言った。

「主が、おまえを禁じ給わんことを、おお、悪魔よ！」

すると悪魔は再び彼に言った。

「ヴァシリー、お前は私を侮辱している！　私の方から彼のもとへ行ったのではなく、彼が私のもとへ来たのだ。彼は自分のキリストを否定し、私に誓約書を手渡した。その誓約書は今、私の手の中にあり、審判の日に全能の審判者にお見せするつもりだ。」

すると、ヴァシリーはこう言った。

「わが主なる神を賛美します！　お前がその誓約書を返さない限り、この人々は天に向かって掲げた手を下ろすことはないでしょう[486]。」

その後、聖人は民衆に向かってこう言った。

「悲しみのうちに手を挙げ、『主よ、憐れみたまえ！』と叫びなさい。」　そして、民が天に向かって手を挙げ、長い間涙ながらに「主よ、憐れみたまえ！」と叫び続けた後、その若者の受領証

[485] 東方の羊飼いが疲れ果てた子羊を肩に乗せるように、肩に担ぐのだ。

[486]　古代のキリスト教徒には、祈りの際に両手を天に向かって掲げる習慣があった。そこから、私たちの教会歌にはこう歌われている。「わが手の挙げは夕のいけにえなり」（晩課のスティヒラ）。

が、皆の目の前で空を飛んで、聖ヴァシリーの手にまっすぐに届いた。この受領証を受け取ると、聖人は喜び、神に感謝を捧げ、それから皆の前でその若者に声高に言った。

「兄弟よ、この受領証のことを知っているか？」

青年は答えた。

「はい、神の聖人よ、これは私の誓約書です。私自身の手で書いたものです。」

すると、聖バシレイオス大聖人は直ちに皆の目の前でそれを細かく引き裂き、その若者を教会に招き入れて神聖な聖体拝領を授け、出席者全員に豊かな食事を振る舞った。その後、若者に教訓を与え、ふさわしい生活の規範を示して、彼を妻のもとへ返した。若者は、絶え間なく神を賛美し、感謝し続けた。

そのエラディオスは、聖ヴァシレイについてさらに次のような話を伝えている。ある時、私たちの偉大なる父ヴァシレイは、神の恵みに満たされ、聖職者たちにこう言った。

「さあ、子らよ、私について来なさい。そうすれば、私たちは神の栄光を見、共に私たちの主を賛美することになるでしょう。」

そう言って彼は町を出たが、彼がどこへ行こうとしているのか、誰も知らなかった。その頃、ある村に、長老アナスタシオスとその妻テオグニアが住んでいた。二人は四十年間、互いに貞潔を保って暮らしており、多くの人はテオグニアが不妊だと思っていた。というのも、二人が秘密にしていた清らかな貞潔について、誰も知らなかったからである。　一方、アナスタシウスはその聖なる生活により、神の御霊の恵みを受けるにふさわしい者とされ、予知の力を持つ者となっていた。バシレイオスが自分を訪ねてくることを霊によって予見し、彼はテオグニアにこう言った。

「私は畑を耕しに行く。姉よ、あなたは家を片付け、昼の九時にろうそくを灯して、聖なる大司教ヴァシリーを迎えに出てくれ。彼は私たち罪人を訪ねてきてくれるのだから。」

彼女は主人の言葉に驚いたが、その命令に従った。聖ヴァシリーがアナスタシアの家からそう遠くないところまで来たとき、テオグニアは彼を迎えに出て、頭を下げた。

「お元気ですか、テオグニア様？」とヴァシリーは尋ねた。彼女は、彼が自分の名前を呼んだのを聞いて恐怖に襲われ、こう答えた。

「お元気です、聖なる司教様！」

すると、聖人はこう言った。

「お兄様のアナスタシウス様は、どこにおられますか？」

彼女は答えた。

「あれは兄弟ではなく、私の夫です。畑へ出かけてしまいました。」

すると、ヴァシリーは言った。

「彼は家にいる。心配するな！」

それを聞いて、彼女はさらに恐怖に駆られた。聖人が彼らの秘密を見抜いたと悟ったからである。そして、震えながら聖人の足元にひれ伏し、こう言った。

「神の聖なる方よ、罪深い私のために祈ってください。あなたが偉大で驚くべき御業をなされる方だと、私にはわかりますから。」

聖人は彼女のために祈りを捧げ、さらに先へと進んだ。彼が長老の家に入ろうとしたとき、アナスタシウス自身が彼を出迎え、聖人の足に口づけをして言った。

「私の主の聖なる方が、どうして私のところへお越しくださったのでしょうか。」

聖人は、主の名において彼に口づけを贈り、こう言った。

「キリストの弟子であるあなたに出会えてよかった。さあ、教会へ行って、神の礼拝を捧げよう。」

その長老は、土曜日と日曜日を除く週のすべての日に断食をする習慣があり、パンと水以外は何も口にしなかった。彼らが教会に着くと、聖ヴァシレイはアナスタシウスに聖体礼儀を執り行うよう命じたが、彼はこう言って拒んだ。

「司教様、聖書に*『小さい者は大きい者によって祝福される』*（ヘブライ7:7）と書かれていることをご存知でしょう。」

すると、ヴァシリーは彼にこう言った。

「他のあらゆる善行に加え、従順さも持ちなさい。」

アナスタシウスが聖体礼儀を執り行っている際、聖なる秘跡の奉献の最中に、聖ヴァシレイオスと、それにふさわしい者たちは、火の姿で降りてきて、アナスタシウスと聖なる祭壇を取り囲む聖霊を目撃した。　神聖な礼拝が終わると、皆はアナスタシウスの家に入り、彼は聖バシレイオスとその聖職者たちに食事を振る舞った。

食事の席で、聖人は長老に尋ねた。

「その宝物はどこから得たのか。また、あなたの生涯はどのようなものか。私に語ってほしい。」

長老は答えた。

「神の聖者よ！私は罪深い者であり、一般の税を納める義務があります。私には二組の牛がおり、そのうち一組は私が自ら耕し、もう一組は雇い人が耕しています。　一組の牛で得た収穫は、旅人の世話に充て、もう一組の牛で得た収穫は税金の支払いに充てています。妻も私と共に働き、旅人や私の世話をしています。

そこでヴァシリーは彼に言った。

「彼女を、実のところそうであるように、あなたの姉妹と呼びなさい。そして、あなたの美徳について私に語ってください。」

アナスタシウスは答えた。

「私はこの世で何の善行も成し遂げてはいない。」

すると、ヴァシリーは言った。

「立ち上がって、一緒にいこう」と。そして立ち上がると、二人は彼の家の部屋の一つへと向かった。

「この扉を開けてくれ」とヴァシリーは言った。

「いいえ、神の聖者よ」とアナスタシウスは言った。「そこには家財道具以外何もないので、入らないでください。」

するとヴァシリーは言った。

「だが、私はまさにそれらの物のためにここに来たのだ。」

しかし、長老はやはり扉を開けることを拒んだため、聖人はその言葉によって扉を開き、中に入ると、そこには激しいハンセン病[487]　に冒された一人の男がいた。その男の体の多くの部分はすでに腐って떨어져しまっていた。彼のことについては、長老本人と彼の妻以外、誰も知らなかった。

ヴァシリーは長老に言った。

「なぜ、このあなたの秘宝を私から隠そうとしたのですか？」

「この人は短気で口が悪いのです」と長老は答えた。「ですから、彼が何か言葉であなたの聖性を傷つけることのないよう、彼を見せるのを恐れていたのです。」

すると、ヴァシリーはこう言った。

「あなたは立派な善行をなそうとしているが、今夜、私も彼に仕えさせてほしい。そうすれば、あなたが受けるその報いに、私も加わることができるだろう。」

---

[487] ハンセン病は、人の全身を蝕む病気であり、しかも伝染性である。

こうして聖ヴァシリーはハンセン病患者と二人きりになり、扉を閉ざして一晩中祈りを捧げ、翌朝、彼を全く無傷で健康な姿のまま連れ出した。　一方、長老とその妻、そしてそこにいた者たちは皆、この奇跡を目撃して神を賛美した。聖ヴァシリーは、長老と親しく語り合い、そこにいた者たちに教えを説いた後、自分の家へと戻った。

荒野に住んでいた聖エフレム・シリン[488]　が聖ヴァシレイの話を耳にすると、神に、ヴァシレイがどのような人物であるかを示してくださるよう祈り始めた。そしてある日、霊的な恍惚状態にあるとき、彼は天にまで届く火の柱を目にし、次のように語る声を聞いた。

「エフレムよ、エフレムよ！　この火の柱をどのように見ているか、それこそがヴァシリーそのものである。」

聖エフレムは直ちに、通訳を連れて――彼はギリシャ語を話すことができなかったため――ケサリアへ向かい、主の顕現の祝日にそこに到着した。　遠くに立ち、誰にも気づかれることなく、彼は、明るい衣を身にまとい、大いなる荘厳さをもって教会へ向かう聖ヴァシレイオスと、同じく明るい衣をまとった聖職者たちを見かけた。エフレムは同行していた通訳者に向き直り、こう言った。

「兄弟よ、どうやら我々の努力は無駄だったようだ。この方は、私がこれまで見たこともないほど高位の方だからだ。」

教会に入ると、エフレムは誰にも見られない隅に立ち、こう独り言を呟いた。

「*『一日の重荷と炎天下』*（マタイ20:12）*を耐え抜いた*我々は、何も成し遂げられなかった。しかし、人々からこれほどの栄光と名誉を賜っているこの方は、同時に火の柱でもある。これは驚くべきことだ。」

聖エフレムが彼についてこのように考察していたとき、聖霊の啓示によってそのことを知ったバシレイオス大帝は、自分の大助祭を彼のもとへ遣わし、こう命じた。

「教会の西の門へ行きなさい。そこでは、教会の隅で、もう一人の男――ほとんどひげがなく、小柄な男――と一緒に立っている修道士を見つけるだろう。彼にこう言いなさい。『行って祭壇に上がりなさい。大司教があなたを呼んでいる』と。」

そこで、大助祭は人混みを必死でかき分けて進み、聖エフレムが立っていた場所まで行き、こう言った。

「父よ！お願いです、行って祭壇へ上がってください。大司教があなたを呼んでおられます。」

エフレムは、通訳を通じて大助祭の言葉を聞き、こう答えた。

「あなたは間違っています、兄弟よ！私たちはよそ者であり、大司教とは面識がありません。」

大助祭は、そのことをバシレイオスに伝えに行った。バシレイオスはその時、民衆に聖書を説いていた。すると、聖エフレムは、説教していたバシレイオスの口から炎が噴き出しているのを見た。

その後、ヴァシリーは再び大助祭にこう言った。

「行って、あのよそから来た修道士にこう伝えなさい。『エフレム様！お願いです、聖なる祭壇へお上がりください。大司教があなたをお呼びになっています。』」

大助祭は行って、命じられたとおりに告げた。エフレムはこれに驚き、神を賛美した。そして地面にひれ伏して、こう言った。

「まことにヴァシリーは偉大だ。まことに彼は燃える柱であり、まことに聖霊がその口を通して語っておられるのだ！」

---

[488] 聖エフレム・シリンは、著名なキリスト教の修道士であり、著述家です。その記念日は1月28日です。エフレムが「シリン」、すなわち「シリア人」と呼ばれるのは、彼が生まれたメソポタミアが、古代にはシリアに属していたためです。

それから、大助祭に、聖務が終わった後、人目につかない場所で彼に拝礼し、挨拶をしたいと大司教に伝えてほしいと頼んだ。

聖なる礼拝が終わると、聖ヴァシリーは聖器室に上がり、尊者エフレムを呼び寄せ、主の御名において彼に口づけをし、こう言った。

「ご挨拶申し上げます、父よ。あなたは荒野においてキリストの弟子たちを増やし、キリストの力によってそこから悪霊を追い払われた方です！　父よ、なぜあなたは、罪深い人間に会いに来られるという、このような労苦を自ら引き受けられたのですか？　主があなたの労苦に報いてくださいますように！」

エフレムは通訳を通じてバシレイオスに答え、心に抱いていたことをすべて語り、同行者と共に、バシレイオスの聖なる御手から聖体拝領を受けた。その後、バシレイオスの家で食卓に着くと、聖エフレムは聖バシレイオスにこう言った。

「至聖なる父よ！　ただ一つの恵みをお求めいたします。どうか、それを私に与えてください。」

バシレイオス大聖人は彼にこう言った。

「何が必要か言ってください。あなたが私のためにこれほど遠い旅を敢行してくださったのですから、私はあなたに多大な恩義を感じています。」

「父よ、私は知っています」と尊いエフレムは言った。「神は、あなたが神に求めるものはすべて与えてくださることを。そして私は、神の御慈悲に懇願して、私にギリシャ語を話す能力を与えてくださるよう願いたいのです。」

ヴァシリーはこう答えた。

「あなたの願いは私の力の及ぶところを超えています。しかし、あなたが確固たる希望を持って願っているのですから、尊敬すべき父であり、荒野の導き手であるあなたと共に、主の神殿へ行き、あなたの祈りを叶えてくださる主にお祈りしましょう。なぜなら、こう記されているからです：*『主を畏れる者の願いを主はかなえ、彼らの叫びを聞き、彼らを救われる』*（詩編144:19）。

都合の良い時を選んで、彼らは教会で祈りを始め、長い間祈り続けました。その後、バシレイオス大聖人はこう言いました。

「なぜ、敬虔な父よ、あなたは長老の聖職にふさわしいにもかかわらず、その叙階を受け入れないのですか？」

「私は罪深い者だからです、大主教様！」とエフレムは通訳を通じて答えた。

「ああ、もし私にもあなたの罪があればいいのに！」とバシレイオスは言い、さらにこう付け加えた。「地に向かってひれ伏しましょう。」

二人が地にひれ伏すと、聖ヴァシレイは敬虔なエフレムの頭に手を置き、助祭の叙階の際に定められた祈りを唱えた。それから彼は敬虔なエフレムに言った。

「さあ、今こそ私たちを地面から立ち上がらせてください。」

するとエフレムには、突然ギリシャ語が理解できるようになり、彼は自らギリシャ語でこう言った。「神よ、御恵みをもって、私たちを護り、救い、憐れみ、守ってください」[489]。

皆は、エフレムにギリシャ語を理解し話す能力を与えた神を賛美した。聖エフレムは、霊的な喜びのうちに、聖バシレイオスと共に三日間を過ごした。バシレイオスは彼を助祭に叙任し、彼の通訳を長老に叙任した後、二人を平穏のうちに送り出した。

ニカイアの街[490]　に、ある時、不敬虔な王が立ち寄った。すると、アリウス派の異端者たちの代表者たちが王に、その街の大聖堂から正教徒を追い出し、その教会を彼らのアリウス派の集まりに

[489] ペンテコステの日の晩課で、助祭が唱える小エクテニアからの一節。

[490] ニカイアは、小アジアのビフィニア州にある都市である。ここでは、325年に第1回全地公会議が開かれた。

譲るよう懇願した。　王自身も異端者であったため、その通りに実行した。すなわち、力ずくで正信者から教会を奪い取り、それをアリウス派に譲り渡し、自身はコンスタンティノープルへと向かった。数多くの正信者たちが深い悲しみに沈んでいたその時、すべての教会の共通の擁護者であり守護者である聖バシレイオス大主教がニカイアにやって来た。　その時、正教徒の信徒たちは皆、叫び声を上げ、泣きながら彼の元へ駆け寄り、　、王から受けた不当な扱いについて彼に訴えた。聖人は、自らの言葉で彼らを慰めると、直ちにコンスタンティノープルにいる王のもとへ赴き、王の前に進み出てこう言った。

「『*王の権威は裁きを愛する*』（詩編98:4）。それなのに、王よ、なぜあなたは不当な判決を下し、正教徒たちを聖なる教会から追放し、その管理を異端者たちに委ねたのですか？」

すると、王は彼にこう言った。

「また私を侮辱するつもりか、ヴァシリー！　お前にそんな振る舞いはふさわしくない。」

ヴァシリーは答えた。

「真実のためなら、死んでも構わない。」

二人が論争し、言い争っている間、そこにいたデモスフェンという名の王室の料理長がそれを聞いていた。彼はアリウス派を助けようと、聖人を非難する粗野な言葉を口にした。

すると聖人はこう言った。

「ほら、我々の目の前には、無学なデモスフェン[491]がいるではないか。」

恥をかかされた料理長は再び何か反論しようとしたが、聖人はこう言った。

「お前の仕事は料理について考えることであって、教会の教義を煮詰めることではない。」

こうしてデモスフェンは恥をかかされ、黙り込んだ。王は、怒りに駆られたかと思えば恥じ入ったりしながら、ヴァシリーに言った。

「行って、彼らの件を調べてこい。ただし、同信者たちの手先にならないよう、裁きを下せ。」

「もし私が不当な裁きを下したなら」と聖人は答えた。「私を投獄し、私の同信者たちを追放し、教会をアリウス派に明け渡してください。」

王の勅令を受け取った聖人はニカイアに戻り、アリウス派の人々を呼び寄せてこう言った。

「王は、あなたがたが武力によって占拠した教会をめぐり、あなたがたと正統派との間で裁きを行う権限を私に与えた。」

すると、彼らはこう答えた。

「裁きなさい。ただし、皇帝の裁きに従って[492]。」

すると聖人はこう言った。

「さあ、アリア派の者たちよ、正統派の者たちよ、皆で教会へ行き、その扉を閉め、鍵をかけて封印せよ。アリア派の者たちは自分たちの封印を、正統派の者たちは自分たちの封印を押し、両側に堅固な警備を配置せよ。それから、まずアリア派の者たちが三日三晩祈りを捧げた後、教会に近づきなさい。　もし、あなたがたの祈りによって教会の扉が自ずと開かれるならば、その教会は永遠にあなたがたのものとなる。もしそうならなければ、我々は一晩祈りを捧げた後、聖なる賛美歌を歌いながら、[493]　の行列を組んで教会へ向かう。もし教会が我々に向かって開かれるならば、我々はそれを永遠に所有する。もし私たちにも開かれないならば、その教会は再びあなた方のものとなる。

この提案はアリウス派の者たちに好意的に受け止められたが、正教徒たちは聖人を非難し、彼が正義ではなく王への恐れに基づいて判断したと嘆いた。その後、双方が聖なる教会を厳重に封鎖す

---

[491] デモステネスは古代ギリシャで最も著名な演説家であり、キリスト降誕前の384年から322年まで生きた。

[492] すなわち、王自身が裁くのと同じように。

[493]　リティアとは、ギリシャ語で「熱心な祈り」を意味する。これは通常、神殿の外で行われていたが、現在では前庭で行われている。

ると、封印された教会には警戒の厳しい見張りが配置された。　アリウス派の人々が三日三晩祈りを捧げた後、教会へとやって来たが、奇跡は何も起こらなかった。彼らは朝早くから第六時（正午）まで、立ちながら「主よ、憐れみたまえ」と叫び続けて祈った。　しかし、教会の扉は彼らの前では開かず、彼らは恥じ入って立ち去った。そこで、バシレイオス大帝は、正教徒全員を妻や子供たちと共に集め、街を出て聖殉教者ディオミドの教会へ向かい、そこで徹夜祈祷を執り行った後、朝になって皆と共に封印された大聖堂へと向かい、次のように詠唱した。

「聖なる神よ、聖なる力ある方よ、聖なる不死なる方よ、我らを憐れみ給え！」

教会の扉の前で立ち止まると、彼は民衆にこう言った。

「天に向かって両手を挙げ、心を込めて『主よ、憐れみたまえ！』と叫びなさい。」

その後、聖人は皆に静まるよう命じ、扉に近づくと、三度十字を切って祝福し、こう言った。

– キリストの神は、常に、今、そして永遠に、世々限りなく祝福されますように。

民衆が「アーメン」と叫ぶやいなや、たちまち大地が揺れ動き、錠が砕け、扉が外れ、封印が解け、まるで激しい風と嵐にさらされたかのように門が開き、扉が壁に激突した。聖ヴァシリーは歌い始めた。

「*門よ、その頂を挙げよ。永遠の扉よ、開けよ。そうすれば、栄光の王が入り込まれる！*」（詩編23:7）。

その後、彼は多くの正教徒たちと共に教会に入り、神聖な礼拝を執り行った後、人々に喜びをもって帰らせた。そして、その奇跡を目撃した数え切れないほどのアリウス派の人々は、自らの迷いから立ち返り、正教徒の仲間に加わった。　このバシレイオスの公正な裁きと、その輝かしい奇跡について王が知ると、極めて驚き、アリウス派を激しく非難した。しかし、不義に目がくらんでいた彼は正教に改宗することはなく、その後、惨めな最期を遂げた。　すなわち、彼がトラキア地方での戦いで負傷した際、逃げ出して藁が積まれた納屋に身を隠した。　追っ手たちはその納屋を取り囲み、火を放った。王はそこで焼死し、消えることのない炎の中へと旅立った[494]　。王の死は、私たちの聖なる父ヴァシレイオスが天に召された後であったが、聖人が天に召されたのと同じ年であった。

ある時、聖バシレイオスの前で、彼の兄弟であるセバスティアの司教ペトロスが誹謗中傷された。彼については、司教に叙階される前に別れた妻と、依然として同居を続けているかのように言われている――司教が結婚していることはふさわしくないからだ。これを聞いたバシレイオスは言った。

「そのことを教えてくれてよかった。私もあなた方と共に赴き、彼を糾弾しよう。」

聖人がセバスティアの町に近づいたとき、ペトロは霊によって兄弟の到来を知った。というのも、ペトロもまた神の御霊に満たされており、その妻と見なされていた女性とは、妻としてではなく、姉妹として、貞潔に暮らしていたからである。　そこで、彼は聖ヴァシリーを迎えに、街から八ポプリシュ[495]ほど出て行き、大勢の随行者を連れた兄を見て、微笑んでこう言った。

「兄弟よ、まるで強盗のように、なぜ私に立ち向かってきたのか？」

互いに主の御名において口づけを交わした後、二人は町に入り、聖四十殉教者の教会で祈りを捧げた後、司教の邸宅へと向かった。ヴァシリーは自分の嫁を見て、こう言った。

「こんにちは、私の姉よ、いや、むしろ主の花嫁よ。私はあなたのためにここへ来たのです。」

彼女は答えた。

「あなたもこんにちは、最も尊き父よ。私もずっと前から、あなたの尊い足に口づけしたいと願っていました。」

---

[494] これはアドリアノープルという都市、現在のブルガリアで起こった出来事である。

[495] ポプリシュチェとは距離の単位であり、現在の690サジェンに相当した。

そしてヴァシリーはペトロに言った。

「頼む、兄弟よ、今夜は妻と共に教会で一夜を明かしてほしい。」

「お命じになることは何でもいたします」とペトルは答えた。

夜が更け、ペトルが妻と共に教会で休んでいると、そこには聖ヴァシリーと五人の徳高い男たちもいた。真夜中頃、彼はその男たちを起こして言った。

「私の兄弟と義理の娘の上に、何が見えますか？」

すると彼らは言った。

「神の天使たちが、彼らにそよ風を吹きかけ、その清らかな寝床に香油を塗っているのが見えます。」

そこでヴァシリーは彼らに言った。

「黙っておきなさい。見たことを誰にも話してはならない。」

翌朝、ヴァシリーは民衆に教会に集まるよう命じ、燃える炭の入った火鉢をここに運ばせた。その後、彼は言った。

「私の敬愛すべき嫁よ、あなたの衣を広げなさい。」

彼女がそうすると、聖人は火鉢を運んでいた者たちに言った。

「その衣の中に、燃えている炭を入れてやりなさい。」

彼らはその命令に従った。すると聖人は彼女にこう言った。

「私が言うまで、この燃えさしをその衣の中に置いておきなさい。」

その後、聖人は再び燃え盛る炭を持ってくるよう命じ、弟にこう言った。

「兄弟よ、お前のフェロン（[496]）を広げなさい。」

彼がその命令に従うと、ヴァシリーは使用人たちに言った。

「火鉢の炭をフェロンに注ぎ入れなさい」と命じ、彼らはそうした。

ペトルとその妻が長い間、燃え盛る炭を衣服の中に抱えていたにもかかわらず、何の害も受けなかったのを見て、それを見た人々は驚き、こう言った。

「主は御自身の聖なる者たちを守り、この地上においても彼らに恵みをお与えになる。」

やがて、ペトロと妻が炭を地面に投げ捨てたとき、そこから煙の臭いは全く感じられず、彼らの衣服も焼け焦げてはいなかった。　その後、ヴァシリーは前述の五人の徳高い男たちに、自分たちが目撃したことを皆に伝えるよう命じた。彼らは民衆に、教会の中で、神の天使たちが至福のペトルとその妻の寝台の上を舞い、彼らの清らかな寝床に香油を塗っているのを目撃したことを語った。その後、人々は皆、御自身の聖徒たちを人間の虚偽の中傷から清めてくださる神を賛美した。

私たちの尊い父ヴァシレイの時代、ケサリアには高貴な家柄の、極めて裕福な未亡人が一人いた。彼女は快楽を追い求め、肉欲にふけり、完全に罪の奴隷となり、長年にわたり淫らな不潔な生活を送っていた。　しかし、すべての人に悔い改めを望まれる神（IIペトロ3:8）は、その恵みをもって彼女の心にも触れられ、その女性は自らの罪深い生活を悔い改めるようになった。ある日、一人きりになった彼女は、自らの数え切れないほどの罪について深く考え込み、自分の境遇をこう嘆き悲しんだ。

「ああ、罪深く、淫らな私よ！　私が犯した罪について、義なる裁き主に対して、いったいどう答えればよいのか？　私は自分の体の神殿を貶め、自分の魂を汚してしまった。ああ、罪人の中でも最も重い罪を犯した私よ！」　私の罪を誰に例えればよいのか？娼婦か、それとも徴税人か？しかし、私ほど罪を犯した者はいない。そして――とりわけ恐ろしいのは――私は洗礼を受けた後も、こ

[496]　フェロンとは、古代において一般的に、袖がなく、体のあらゆる側面を包み込むような、長くて幅の広い上着のことを指した。　キリスト教会は、救い主とその使徒たち――彼らがまさにそれとは限らないにせよ、類似した上着を着用していた――への敬意から、フェロンを聖なる祭服の一つとして採用し、古来より司教や司祭にこれを着用させてきた。

れほど多くの悪を行ってしまったのだ。神は私の悔い改めを受け入れてくださるのか、誰が教えてくれるというのか?

そうして泣きじゃくりながら、彼女は若き日から老いに至るまでに行ったすべてのことを思い返し、座ってそれを羊皮紙に書き記した。そして最後に、最も重い一つの罪を書き加え、その羊皮紙を鉛の封印で封じた。　それから、聖ヴァシリーが教会へ向かうタイミングを見計らって、彼女は彼のもとへ駆け寄り、その羊皮紙を手に彼の足元にひれ伏して、こう叫んだ。

「神の聖なる方よ、私を憐れんでください。私は誰よりも多くの罪を犯しました！」

聖人は足を止め、彼女に何を望んでいるのかと尋ねた。すると彼女は、封印された紙を聖人の手に差し出し、こう言った。

「ご覧ください、司教様。私のすべての罪と不義をこの紙に書き記し、封印いたしました。どうか、神に愛される方よ、これを読んだり封印を解いたりなさらないでください。ただ、あなたの祈りによってそれらを清めてください。なぜなら、私にこの思いを抱かせてくださった方が、あなたが私のために祈ってくださる時、あなたの祈りを聞いてくださることを信じているからです。」

ヴァシリーは紙を受け取ると、天を仰ぎ見てこう言った。

「主よ！　このことは、あなたのみが可能とされます。あなたが全世界の罪を御自身に負われたのであれば、なおさら、このたった一人の魂の罪を清めることもおできになるはずです。私たちのすべての罪は、あなたには数え尽くされていますが、あなたの憐れみは計り知れず、測り知れないからです！」

そう言うと、聖ヴァシリーは紙片を手に持ちながら教会に入り、祭壇の前にひれ伏して、その女性のために一晩中祈りを捧げた。

翌朝、聖なる礼拝を執り行った後、聖人はその女性を呼び寄せ、受け取ったままの状態で封印された紙片を彼女に手渡し、こう告げました。

「女よ、*『神以外に、誰が罪を赦すことができるか』*（マルコ2:7）という言葉を聞いたことがあるか？」

すると彼女は言った。

「はい、敬虔な父よ、その言葉は聞いております。だからこそ、神の御慈悲を懇願していただきたいと、あなたにお世話をお願いしたのです。」

そう言うと、その女性は自分の文書を開封し、そこに記されていた自分の罪がすべて消し去られているのを見た。ただ、その後で彼女が書き加えたあの重い罪だけは、消されていなかった。これを見て、女性は恐怖に襲われ、胸を叩きながら聖人の足元にひれ伏し、こう叫んだ。

「至高の神のしもべよ、私を憐れんでください。あなたが私のすべての罪を憐れみ、神に赦しを請うてくださったように、この罪についても、完全に清められるよう、どうか神に懇願してください。」

大司教は彼女への憐れみから涙を流し、こう言った。

「立ちなさい、女よ。私もまた罪深い人間であり、憐れみと赦しを必要としている。　あなたの他の罪を清めてくださったお方が、まだ清められていないあなたの罪をも清めてくださるでしょう。もしあなたが今後、罪から身を守り、主の道を歩み始めるならば、赦されるだけでなく、天の栄光にもあずかることになるでしょう。　私があなたに勧めるのはこうだ。荒野へ行きなさい。そこにはエフレムという名の聖なる人がいます。この文書を彼に渡し、人愛の神にあなたのための憐れみを請うよう頼みなさい。

その女性は、聖人の言葉に従って荒野へと向かい、長い道のりを歩いて、至福のエフレムの修道院を見つけた。扉をノックして、彼女はこう言った。

「罪深い私を憐れんでください、尊き父よ！」

聖エフレムは、彼女が自分に会いに来た目的を霊によって悟り、こう答えた。

「私から離れなさい、女よ。私は罪深い人間であり、私自身も他の人々の助けを必要としているのだから。」

すると彼女は、彼の前に一枚の紙を投げ出し、こう言った。

「私をあなたのもとへ遣わしたのは、大司教ヴァシリーです。あなたが神に祈り、この紙に書かれた私の罪を清めてくださるよう。残りの罪は彼が清めてくれましたが、この一つの罪について、どうか祈ることを拒まないでください。私はあなたのもとへ遣わされたのですから。」

すると、聖エフレムはこう言った。

「いいえ、わが子よ。あなたの多くの罪について神に懇願できた方なら、ましてや一つの罪についてならなおさら懇願できるでしょう。さあ、行ってください。彼が主のもとへ旅立つ前に、まだ生きているうちに彼に会えるよう、今すぐ行ってください。」

そこで、その女性は聖人に頭を下げて礼を述べ、ケサリアへと戻った。

しかし、彼女がここへ到着したのは、ちょうど聖ヴァシレイオスの葬儀の最中だった。彼はすでにこの世を去っており、その聖なる遺体は埋葬の地へと運ばれていた。葬列に出くわした女性は、大声で泣き叫び、地面にひれ伏して、まるで聖人が生きているかのようにこう語りかけた。

「ああ、神の聖なる方よ、私はなんと不幸なことでしょう！　ああ、この不幸な私よ！　あなたは、私に邪魔されることなくこの世を去るために、私を荒野へ送り出したのですか？　そして今、私は手ぶらで戻ってきてしまいました。荒野への困難な旅を無駄にしてしまったのです。　どうか神がこの様子をご覧になり、あなたが自ら私に助けを差し伸べることができたにもかかわらず、私を他の人のもとへ送り出したというこの件について、私とあなたの間を裁いてくださいますように。

そう叫びながら、彼女は聖人の寝台の上にその紙を投げ捨て、自分の悲しみを人々に訴えた。すると、聖職者の一人が、その紙に何が書かれているのか見ようと、それを手に取り、紐を解いたが、そこには何の文字もなかった。紙はすっかり真っ白になっていた。

「ここには何も書かれていません」と彼は女性に言った。「あなたは、ご自身に現れた神の言い表せないほどの慈愛に気づかずに、むなしく悲しんでいるのです。」

民衆は皆、この奇跡を目撃し、御自分のしもべたちに、また彼らの取り次ぎによって、そのような力を与えられた神を賛美した。

ケサリアには、ヨセフという名のユダヤ人が住んでいた。彼は医学に極めて精通し、静脈内の血液の流れを観察することで、患者の死が3日あるいは5日後に訪れることを見極め、さらには最期の時刻さえも指摘することができた。　神に愛された私たちの父ヴァシリーは、彼が将来キリストに帰依することを予見し、彼を深く愛していた。そして、しばしば彼を招いて語り合い、ユダヤ教の信仰を捨てて聖なる洗礼を受けるよう説得した。しかし、ヨセフは次のように言って拒んだ。

「私が生まれた信仰こそ、その信仰のまま死にたいのです。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「私にもあなたにも、あなたが*『水と御霊によって生まれ変わる』*（ヨハネ3:5）までは、死ぬことはない、と信じてほしい。なぜなら、そのような恵みなしには、神の御国に入ることはできないからだ。あなたの先祖たちは、*『雲と海の中で』*（1コリント10:1）洗礼を受けなかったのか？　彼らは、霊的な岩であるキリストの予型である岩から水を飲んだのではないのか。キリストは、　、私たちの救いのために処女から生まれた。このキリストをあなたの先祖たちは十字架につけたが、彼は葬られた後、三日目に復活し、天に昇って父の右の座に着き、そこから生ける者と死んだ者を裁きに来られるのだ。

聖人は、魂に有益なことを他にも多く彼に語ったが、ユダヤ人は依然として不信仰のままであった。やがて聖人の臨終の時が近づくと、彼は病に倒れ、あたかも彼の医療的援助を必要としているかのように、そのユダヤ人を呼び寄せ、こう尋ねた。

「ヨセフよ、私についてどう思うか？」

そのユダヤ人は聖人を診察すると、家来たちにこう言った。
「埋葬の準備をすべて整えてください。今にも死が訪れるでしょうから。」
しかし、ヴァシリーは言った。
「お前は自分が何を言っているのか分かっていない！」
ユダヤ人は答えた。
「信じてください、司教様。あなたの死は、日が沈む前に訪れるでしょう。」
すると、ヴァシリーは彼に言った。
「もし私が朝、六時まで生き延びたら、その時はどうするつもりだ？」
ヨセフは答えた。
「それなら、私が死んでも構いません！」
「そうだ」と聖人は言った。「死ね。だが、罪に死んで、神のために生きよ！」
「おっしゃる意味は分かっています、師よ！」とユダヤ人は答えた。「だから、あなたに誓います。もしあなたが朝まで生き延びれば、私はあなたの願いを叶えます。」
そこで聖ヴァシリーは、ユダヤ人の魂を救うために、朝まで自分の命が保たれるよう神に祈り――その願いが叶った。翌朝、彼はその男を呼び寄せたが、男はヴァシリーが生きているという使用人の言葉を信じなかった。それでも、すでに死んだと思っていた彼に会おうと、その場を訪れた。しかし、彼が実際に生きているのを見ると、まるで狂乱状態に陥ったかのように、やがて聖人の足元にひれ伏し、心の底からこう叫んだ。
「キリスト教の神は偉大であり、神以外に神はいない！私は神に背くユダヤ教を捨て、真のキリスト教の信仰に改宗する。聖なる父よ、どうか直ちに私に、そして私の家族全員に聖なる洗礼を授けてください。」
聖ヴァシリーは彼にこう言った。
「私が自ら、この手であなたに洗礼を授けよう！」
ユダヤ人は聖人の元へ歩み寄り、聖人の右手に触れながら言った：
「司教様、あなたの力は衰え、全身がすっかり力尽きています。あなたご自身では、私に洗礼を授けることはできません。」
「私たちには、私たちを強めてくださる創造主がおられるのです」と、ヴァシリーは答えた。
そして、立ち上がって教会に入り、民衆全員の面前で、そのユダヤ人とその家族全員に洗礼を授けた。聖人は彼に「ヨハネ」という名を授け、その日自ら聖体礼儀を執り行い、彼に神の聖餐を授けた。　聖人は、新しく洗礼を受けた者に永遠の命について教えを説き、また、自分の霊的な羊たちすべてに戒めの言葉を語りかけた後、第九時までの間、教会にとどまった。　その後、すべての人に最後の口づけと赦しを与えた後、彼は神の言い尽くせぬ恵みすべてに感謝し始め、まだ感謝の言葉を口にしていたその瞬間、魂を神の御手に委ね、司教として眠りについた司教たちの仲間に加わり、また「偉大なる言葉の雷鳴」[497] として、379年1月1日、 グラティアヌス帝の治世下[498] 、彼は父ヴァレンティニアヌス帝の後を継いで即位した。
聖バシレイオス大主教は、八年六ヶ月十六日間、神の教会を牧会し、その生涯の総年数は四十九年であった。
一方、改宗したばかりのユダヤ人は、聖人が亡くなったのを見て、その顔にひれ伏し、涙ながらにこう言った。
「まことに、神の僕ヴァシレイよ、もしあなた自身が望まなければ、今この時も死ななかったはずだ。」

[497] すなわち、雄弁さ、説得力、そして言葉の力という特別な才能を備えていた者を指す。
[498] グラティアヌスは375年から383年まで（当初は父ヴァレンティニアヌス1世と共に）帝国を統治した。

聖ヴァシレイの埋葬は画期的な出来事であり、彼がどれほど高い尊敬を集めていたかを示していた。キリスト教徒だけでなく、ユダヤ人や異教徒までもが、　の通りに大群衆となって押し寄せ、故人の聖人の棺の周りに執拗に詰め寄った。　聖バシレイオスの葬儀には、聖グリゴリオス・ナジアンゾスも参列し、聖人の死を深く悼んで涙を流した。　ここに集まった大司教たちは、墓前の賛美歌を歌い、偉大なる神の御使いヴァシリーの尊い遺骸を、聖殉教者エウプシキオス教会[499]　に埋葬し、三位一体の唯一なる神を賛美した。神に永遠の栄光あれ。アーメン[500]。

トロパリオ、第1声：

あなたの教えは全地に広まった。あなたは御言葉を、神にふさわしい方法で教え、存在の真髄を明らかにし、人間の慣習を美しく飾ったからである。尊き父よ、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください[501]。

コンダク、第4調：

あなたは教会にとって揺るぎない礎となり、人々に奪われることのない主権を授け、あなたの教えによってそれを確固たるものとした、天に現れし尊きバシレイオスよ。

聖殉教者ヴァシレイ・アンキルスの記念日

記念日：1月1日

聖殉教者ヴァシリーは、アンキラの貴族の一人であった[502]　。背教者ユリアヌス帝の治世中[503]、キリスト教の信仰を告白し宣教したため、彼は捕らえられ、イゲモン・サトゥルニヌスの前に引き

499　現在、聖バシレイオスの聖遺物がどこにあるかは不明である。アトス山（聖アファナシオス修道院）では、彼の頭部のみが展示されている。一方、西欧の著述家たちの伝承によれば、彼の聖なる遺体は、十字軍遠征の際にケサレアから持ち出され、十字軍によって西方のフランドルへと移されたという。

500　教会への功績と、並外れて高潔で苦行に満ちた生涯により、聖バシレイオスは「大」と称され、「教会の栄光と美」、「宇宙の光であり目」、「教義の教師」、「学識の殿堂」、「生の指導者」として称えられている。　聖バシレイオス大主教を記念する徹夜祈祷において、教会は主の割礼を記念して二つの聖句を読み上げ、さらに全教会の教師であり聖人であるバシレイオスを称えて、義人の高い完全さと、彼らが隣人に与える恵みについて語る聖句を一つ読み上げる（箴言 10, 31–32, 11:1–12）。聖人を称える朝の福音書（ヨハネ 10: 1–9）は、羊のために自らの命を捧げる真の羊飼いの尊さを説いている。　1月1日に聖バシレイオス大主教を記念して行われる聖体礼儀では、同聖人を称える使徒書簡の朗読を通じて、教会は最も完全な大祭司――聖バシレイオス大主教が自らの生涯において模範とした神の御子――について告げ知らせる（ヘブライ人への手紙 7: 26–8: 2）。　聖バシレイオスを称える典礼における福音書（一つは割礼の祝日、もう一つは聖バシレイオスに捧げられたもの）は、霊的に貧しい者、義に飢え渇く者、そしてキリストの信仰のために迫害される者たちの幸いについて、イエス・キリストの教えを宣べ伝えています（ルカ　6, 17–23）を説き、聖バシレイオス大主教もまたその一人であった。

501　「神にふさわしい教えを授けた」という言葉は、聖バシレイオスの偉大な学識、すなわち彼が自然の法則について深い知識を持っていたことを示している。　聖バシレイオスは多くの著作を残しており、その中で、とりわけ、神による万物の極めて賢明な構成について解説している。「人間の慣習を美しく飾られた」という言葉は、聖バシレイオスが多くの規則や規約を著し、それによって多くの敬虔な慣習を定着させたことを示している。

502 アンキラは、小アジアのガリア州（現在のアンゴラ）の主要都市である。

503 ユリアヌスは361年から363年まで在位した。

出された。イゲモンから「キリストを信じるか」と問われると、ヴァシリーは力強い声でこう叫んだ。

「彼以外に神はいない。」

こうして聖人は、微塵の恐れもなくキリストへの信仰を証ししたが、そのために残酷な拷問にさらされた。彼は木に吊るされ、その体は鉄の器具で容赦なく削り取られた。

その後、この勇敢なキリストの殉教者はコンスタンティノープルへ送られ、そこで再び同じ過酷な試練にさらされた。　その後、拷問者たちは殉教者の体を猛烈な力で引き伸ばし、その骨が関節から外れるほどにした。その際、キリストの戦士である彼の皮膚を帯状に切り取り、赤熱した鉄の針で体を刺し貫いた。

聖ヴァシリーは、神の力に支えられ、これらすべての拷問を勇敢に耐え抜いた。ついに拷問者たちは彼を灼熱の炉に投げ込んだ。神の力によって　の炎から無傷で守られたヴァシリーは、手錠をかけられたままコンスタンティノープルからケサリアへ[504]　連行され、そこで野獣に引き裂かれる刑に処された。　聖ヴァシリーは熱烈な祈りを捧げながら殉教の冠を待ち望み、雌ライオンに引き裂かれた後、その冠を授かった[505]。

聖なる受難者の親族や友人たちの何人かは、彼の聖なる遺骨を丁寧に集め、香を塗って布で包み、尊厳をもって埋葬した。その後、聖殉教者ヴァシリーの墓のそばに教会が建てられた。

1月15日

1月2日（旧暦）

同日は、ネストル（ロシア最初の年代記作者）の後を継いで年代記を編纂し、12世紀に生き、近くのアントニイの洞窟で朽ちることなく眠る、聖シルヴェストル・ペチェルスキーの記念日である。

私たちの尊い父セラフィム・サロフの生涯

1月2日の記念日

聖セラフィム、サロフの長老は、クルスクの出身であり、同市の著名な商人階級に属する敬虔で裕福なモシュニン家の両親の間に生まれた。彼は1759年7月19日に生まれ、聖なる洗礼においてプロホールと名付けられた。　父のイシドールは神の教会に対して深い熱意を持っており、母のアガフィヤは夫以上に敬虔さと慈善の心で知られ、人々に敬愛されていた。 生後3年目に、プロホールは父を亡くし、彼を育てるのは敬虔な母アガフィアただ一人となった。彼女の導きのもと、彼はキリスト教の敬虔さと、祈りおよび神の聖堂への愛を育んで成長した。　幼い頃から、この聖人には神の驚くべき御加護が現れており、彼が神に選ばれた恵まれた者であることをはっきりと予示していた。ある日、母は夫の時代に着工された教会の建設現場を見回っていた際、7歳のプロホールを連れて、建設中の鐘楼の最上階へと登った。　不注意から、少年は鐘楼から地面へと転落してしまった。アガフィアは、息子が死んでしまったと思い、恐怖のあまり鐘楼から逃げ出したが、驚くと同時に喜びをもって、彼が無傷で立ち直っているのを見た。こうして、この恵まれた少年の上に、聖書の言葉が成就したのである。　**「あなたに災いが降りかかることはなく、災いがあなたの住まいには近づかない。**

[504] ここでの「ケサリア」とは、当然ながらカッパドキアのケサリアを指す。

[505] 聖殉教者ヴァシリーは362年頃に亡くなった。

主は御自身の御使いたちに、あなたのすべての道においてあなたを守れと命じられる。彼らはあなたをその手で支え、あなたの足が石につまずくことのないようにする」（詩篇90:10–12）。

プロホールが10歳になった時、読み書きの教育が始まり、少年は教会文学を急速に習得していった。彼は聡明な知性と優れた記憶力を示しつつ、同時に柔和さと謙遜さを備えていた。しかし、突然、彼は重い病に倒れ、家族は彼の回復を望めなくなった。　彼にとって辛いこの時期、プロホールは眠りの中で聖母マリアの御姿を夢に見、聖母は彼を訪ねて病を癒やすと約束された。ほどなくして、聖母の御言葉は実現した。ちょうどその頃、クルスクでは「聖母マリアの御徴」の奇跡のイコンを先頭に、十字架行列が行われていた[506]。雨と泥のため、巡行の行列は道を短縮するためにモシュニナの庭を通ることにした。敬虔なアガフィヤは急いで病の息子を運び出し、彼を聖母の奇跡のイコンに近づけたところ、少年は完全に回復した。

敬虔な少年は、聖書やその他の神聖で魂に有益な書物を学び、その心をすべて神に向け、その清らかな魂は神への愛に燃え上がっていた。　一方、商売を営んでいた彼の兄は、少しずつプロホールをその仕事に慣れさせようとしたが、少年の心はその仕事には向いていなかった。彼の魂は、朽ちることなく尽きることのない霊的な宝を自ら手に入れようと切望していたのである。　平日に聖体礼儀に出席する機会はなかったものの、プロホールはそれにもかかわらず、神の教会を訪れない日はほとんどなく、夜明けとともに起きて早課を聞くようにしていた。　また、日曜日や祝日には、特に自由な時間を利用して霊的・教訓的な書物を読むことを好んでおり、時には同年代の仲間たちに声を出して読み聞かせることもあったが、それ以上に孤独と静寂を好んでいた。プロホールの母親は息子の志向に気づいていたが、彼の願いに反対することはなかった。　そして、この敬虔な若者が十七歳になったとき、彼は世を捨てることを固く決意し、母の祝福を受け、それ以来決して手放すことのなかった銅の十字架を授かって、修道生活に身を捧げた。

世俗を離れた後、この至福の者はまずキエフ・ペチェルスカヤ修道院へ巡礼に向かった。そこで、ドシフェイという名の先見の明のある隠遁者が、この若者にキリストの善良な修行者としての資質を見出し、サロフの隠遁地へ行って救いを求めるよう祝福した。[507]。

「来なさい、神の子よ」と、先見の明のある長老は若き修行者に語りかけた。「サロフの修道院に留まりなさい。この場所はあなたにとって救いとなるでしょう。神の御加護により、あなたはそ

506　「ズナメンスカヤ」の聖母イコンは、クルスクのズナメンスキー修道院に所蔵されている。別名「コレンナヤ」とも呼ばれるのは、1597年にクルスクから27ヴェルスタ離れた場所で、後に「聖母マリアの降誕（現在は共同生活）修道院」が設立された場所の木根元で、奇跡的に発見されたためである。　奇跡を起こす「コレンナヤ」の聖母の御現れイコンを称える盛大な祝祭は、11月27日と9月13日に行われる。これは、イコンがコレンナヤ修道院からズナメンスキー修道院へ戻ってくる日であり、イコンは毎年、復活祭後の第9金曜日までにコレンナヤ修道院へ移送され、9月12日までそこに留まる。

507　タンボフ州テムニコフ郡にあるサロフ男子修道院は、テムニコフ市から37ヴェルスタの場所に位置している。1770年、サロフ川がサティス川に合流する地点、かつてタタール人の町サラクリチがあった場所に、修道長イオアンによって創設された。　この場所は、それ以前から徳高い修行者たちの功績によって聖別されていた。当初は修道士フェオドシイ、その後ゲラシムがおり、両者ともこの地の将来的な重要性を明らかに予言する様々な神の御しるしを目撃していた（例えば、上空から降り注ぐ炎の光線や、多くの鐘が鳴り響く轟音などである ）。修道院の創設から6年後、サローヴェに初めて建てられた教会の頂上に十字架を掲げる日と定められた日、修道院が位置する山で、夜間に鐘が鳴り響いたが、そこには鐘は一つもなかった。同じ現象が正午前に再び起こり、作業していた者たちを異様な光が照らし出した。　修道長ヨハネの後継者たちの中でも、建築家エフレムは、その苦行的な生活と修道院の整備において特に際立っている。サロフの隠遁地は、古くから修道規則の厳格な遵守と、そこに住む隠遁者たちの苦行的な生活で知られていた。　現在、サロフの隠遁修道院は、ロシアの修道院の中でも最も整備され、経済的にも安定した修道院の一つに数えられている。そこには7つの教会があり、その聖具室は、そこに収められている礼拝用具の卓越した価値、美しさ、そして優雅さにおいて際立っている。この修道院は広大な土地を所有している。

こでこの世の旅を終えることになるでしょう。聖霊、すなわち善き者たちの宝が、聖地におけるあなたの生涯を導いてくださるでしょう。」

先見の明のある長老の教えに従い、プロホールはサロフの修道院へと向かった。そこで彼は、修道院の院長であるパホミイ長老に温かく迎えられた。パホミイ長老は、柔和で謙虚な修道士であり、断食と祈りに深く励み、修道士たちの模範となっていた人物であった。　プロホールの善き志を見抜いたパホミイは、彼を修道見習いの列に加え、かつて修道院の会計係を務めていた長老で司祭修道士ヨシフの指導下に置いた。　長老のもとで修道院内の奉仕に従事していたプロホールは、修道院の規則や規定、そしてパン焼き場、聖体パン製造所、大工房などでの様々な兄弟たちの奉仕を熱心に果たした。さらに、彼は教会で聖具係の務めも果たしていた。　彼は決して怠けることはなく、絶え間ない労働によって、修道士にとって最も危険な誘惑の一つである退屈から身を守ろうと努めていた。

「この病は、祈り、無駄話を控えること、身のこぶりの範囲内での手仕事、神の御言葉の朗読、そして忍耐によって治るものだ」と、彼は後に自身の経験から語った。「なぜなら、この病は臆病、不注意、そして無駄話から生じるものだからだ。」

プロホールは礼拝に誰よりも早く出席し、どんなに長く続こうとも、礼拝の間ずっと微動だにせずに立ち続けていた。　教会の外では、彼は自分の小部屋にこもることを好んだ。手仕事やその他の奉仕に従事しながらも、彼は絶えず心と記憶の中にイエスの祈りを留め、その力によって様々な敵の誘惑に打ち勝っていた。　サロフ修道院の静寂と沈黙に満足することなく、この若き修行者は、修道院長からの祝福を受けて修道院の塀の外、修道院の森の奥深くへと完全な隠遁生活を送っていた一部の長老たちに倣い[508]、――自身の である長老ヨシフの祝福を得て、彼は暇を見つけては森の奥深くへと赴き、祈りの沈黙に身を委ねた。彼は祈りと節制、断食を結びつけ、水曜日と金曜日には一切の食物を口にせず、その他の日には一日一度だけ食事をとった。　誰もが、この並外れた修行者に対して敬意と愛情を抱いていた。彼の絶え間なく際立った功績は、その深い謙虚さにもかかわらず、隠しきれるものではなかった。　とりわけ、パホミイ長老とヨセフ長老は、まるで実の息子であるかのように、彼に深い愛情と信頼を寄せた。この愛情と、サロフの修道士たちがこの若きキリストの修行者に対して抱いた普遍的な敬意は、次の出来事によって特に鮮明に表れた。

1780年、プロホールは重病に倒れた。全身が腫れ上がり、彼は激しい苦痛に耐えながら、硬い寝台の上で動けずに横たわっていた。医師はおらず、病気はどのような治療法にも応じなかった。どうやら、それは水腫だったようだ。 病は3年間続き、その半分の期間を彼は寝たきりで過ごした。しかし、プロホールの口からは決して不平の言葉が漏れることはなかった。彼は全身全霊、肉体も魂も主にお委ねし、絶えず祈りを捧げ、涙で寝床を濡らしていた[509]。 プロホールの霊的指導者であり師である長老ヨセフは、病気の間、彼に単なる修道見習いとして仕えた。修道院の院長である長老パホミイは、常に彼のそばに寄り添っていた。長老イザヤや他の長老たち、そして兄弟たちもまた、彼を深く気遣った。　ついに、パホミイは病人の命そのものを危惧し、断固として医者を呼ぶよう勧めた。しかし、この祝福された人は、それ以上に断固とした決意で、医師の助けを拒んだ。

「私は、聖なる父よ」と彼は長老に言った。「魂と肉体の真の医者である、私たちの主イエス・キリストと、その聖母マリアに身を委ねました。もしあなたの愛がそう判断されるならば、主のために、この貧しい私に天の治療（すなわち、聖体拝領）を与えてください。」

---

[508] 例えば、サロフで修道生活を始め、最晩年を同地で過ごした、ヴァラアム修道院の著名なイグメン（修道院長）であり復興者であるナザリイ、イエロモナフ（司祭修道士）ドシフェイ、そしてとりわけその功績で名高い、長きにわたり沈黙の修道士であったスキモナフ（隠遁修道士）マルクなどが挙げられる。

[509] 苦しみと病の中にあっても、「私の涙は私の寝床を濡らす」（詩編6:7）と叫んだ聖なる詩人の模範に倣って。

そこで、長老ヨセフは病人の願いと自らの熱意により、プロホールの回復を祈って徹夜祈祷と聖体礼儀を執り行った。礼拝には、苦しむ者のために熱心に祈ろうとする兄弟たちが集まった。聖体礼儀の後、プロホールは懺悔を行い、病床の上でキリストの聖なる秘跡を拝領した。

そして聖体拝領の後、言葉に尽くせない光の中に、使徒ヨハネ（神学者）とペトロに付き添われた至聖なる聖母マリアが彼の前に現れた。聖母は神聖な御顔で神学者の方を向き、プロホールを指さしながらこう言われた。

「この人は、我らの同族である！」[510]

その後、彼女は右手を彼の頭の上に置くと、たちまち病人の体を満たしていた膿が、右脇にできた穴から流れ出し始めた。ほどなくしてプロホルは完全に癒やされ、病気の原因となった傷跡だけが、まるでその驚くべき癒やしの証であるかのように、彼の体に残り続けた。　聖母マリアが現れたその場所には、まもなく、神の特別な御計画により、二つの祭壇を備えた二階建ての教会が建てられ、その隣には、プロホールの壊れた修道室があった場所に病院が設けられた。　セラフィムは、修道院長の依頼により、この建設のための寄付金を集め、自らの手で下層の病院教会にヒノキの祭壇を造り上げた。　この祭壇が聖別されると、聖セラフィムは生涯の終わりまで、主にこの教会で聖体拝領を行った。それは、この場所で彼に示された神の偉大な恵みを絶えず記念するためであった[511]。

サロフの修道院で8年間、見習い修道士として過ごした後、プロホールは1786年8月18日、27歳の時に修道士としての剃髪を受け、そこで「 セラフィム」という新しい名を授けられた。 修道者の位を受けると、新しい名「[512] 」の意味そのものが、セラフィムに天使たちの神への清らかで熱烈な奉仕を思い起こさせ、主への奉仕に対する彼の願望と聖なる熱意をさらに強めた。　セラフィムは労苦と功績をさらに重ね、内なる神を想う黙想に没頭し、以前よりも一層孤独な生活を送るようになった。

それから1年余りが経った頃、聖人は司祭助祭の位に叙階された[513] 。それ以来、彼は約6年間、この位においてほぼ絶え間なく奉仕し、労苦に労苦を重ね、新たな功績を積み重ね、霊に燃え、神の愛に燃え盛っていた。　日曜日や祝日の夜は、休息をとることなく、礼拝が始まるまで祈りの規則に従って立ち続け、徹夜で熱心に祈りを捧げた。そして、神聖な礼拝が終わった後も、長い間教会に残り、聖具を整え、主の祭壇の清浄さを保つことに心を配った。　それにもかかわらず、至福のセラフィムは労苦をほとんど感じず、疲れもせず、その後に長い休息を必要ともしなかった。しばしば食事や飲み物のことをすっかり忘れてしまい、休息のために席を立つ際には、なぜ人間は天使たちのように絶え間なく神に仕えることができないのかと嘆いた。

セラフィムの魂は、美徳と神を想う黙想の階段をますます高く登っていった――そして、まるで彼の燃えるような聖なる熱意に応えるかのように、　主は、恵み深い天の幻によって彼を慰め、そ

510　「*我らの*」という*表現は*、明らかに、聖セラフィムが聖母マリアに対してとりわけ熱心な祈りを捧げていたことを示しており、それゆえに彼自身も聖母の特別な庇護と執り成しのもとにあったことを意味する。これは、聖人の生涯そのものから得られる数多くの例によって明確に裏付けられている。

511　このことについて、後に長老は自ら非常に頻繁に、また非常に多くの人々に語っていた。聖セラフィムによって建立された祭壇は、1786年8月17日にソロヴェツキーの聖ゾシマと聖サヴァティウスを称えて聖別され、今日に至るまでその場所に立っている。上段の祭壇は、主の変容の名に捧げられた。　――この建設のための資金集めという困難な取り組みが行われていた間、セラフィムは故郷のクルスクにも滞在していたが、敬虔な母はすでに他界していた。母の死後、家督を完全に引き継いだ彼の兄は、プロホールに対し、修道院の教会建設のために惜しみない援助を提供した。

512　ヘブライ語の「セラフィム」という言葉は、「炎」「燃え盛る」を意味する。さらに、一部の解釈によれば、「高潔な」「高貴な」という意味もある。　これは本来、天使の名前であり、天の階層において神に最も近い位階の一つに属し、至高者の御座の前で第一位に位置する、光り輝く霊たちを指す名称である。　――この名は、プロホールが修道士としての戒律を受けた際、本人の知らぬ間に、また本人の同意もなく与えられたものである。これは、神に喜ばれる生活へのプロホールの熱意を見抜き、彼の中に神へのさらなる燃え盛る情熱を先見の明をもって予見していた修道院の指導者たちが、彼に対して抱いていた評価の表れと見なすことができる。

513 それは1787年12月のことだった。

の行いを強めてくださった。彼は、心の清さ、絶え間ない節制、そして魂を絶えず神へと高めることの結果として、それらの幻を凝視することができるようになったのである。　こうして、時折、教会の礼拝の最中に、彼は聖なる天使たちを仰ぎ見た。彼らは、白い金糸を織り込んだ衣をまとい、稲妻のような若者の姿で、兄弟たちと共に奉仕し、賛美を歌っていた。彼らの歌声は、言葉では表現できず、この世のいかなる旋律にも例えることができなかった。　「**わが心は蝋のようになり、**溶けてしまった」（詩編21:15）――彼は後に、詩編作者の言葉を借りて、こうした天上の現象を目撃した際に感じた、言葉に尽くせない喜びを振り返った。　そして彼は、その喜びのあまり、当時は何も覚えていなかった。ただ、教会に入ったこと、そしてそこから出てきたことだけを覚えていた。

しかし、ある時、聖週間の神聖な典礼の最中に、この尊者にはとりわけ恵み深く、記念すべき幻が与えられた。それは聖木曜日のことだった。　礼拝を執り行っていたのは、敬虔な長老パホミイとヨセフ、そして至福のセラフィムであった。パホミイは、若くして信仰に熟達したこの修道士に深く心を寄せ、神聖な礼拝をほぼ常に彼と共に執り行っていたからである。　セラフィムが小入堂とパレミアの後、「主よ、敬虔な者たちを救いたまえ」と叫び、王の門に出て「世々限りなく」という言葉と共に、参列者たちに向かって説教台に向かったとき、突然、まるで太陽の光のような並外れた光が上から彼を照らし出した。　その輝きに目を向けたとき、至福のセラフィムは、栄光に包まれた「人の子」の姿をした我らの主イエス・キリストを仰ぎ見た。主は太陽よりも明るく、言葉では言い表せない光に輝き、まるで蜂の群れのように、天使、大天使、ケルビム、セラフィムといった天の軍勢に囲まれていた。　主は教会の西側の門から空を歩いて来られ、説教壇の前に立ち止まると、御両手を挙げて、奉仕者たちと祈る者たちを祝福された。　その後、主は王の門の近くにある聖像の中へと入っていかれた[514]　。至福に満ちた彼の心は、主への燃えるような愛の甘美さの中で言い表せない喜びで満たされ、天の恵みの神聖な光に照らされた。そして彼自身も、この神秘的な幻視によって瞬く間に姿を変え、その場から動くことも、一言も発することもできなくなってしまった。　多くの人がこれに気づいたが、　、誰もこの出来事の真の原因を理解できなかった。 直ちに二人の修道助祭がセラフィムのもとへ近づき、彼を祭壇へと案内した。しかしその後も、彼は約二時間にわたり同じ場所に動かないで立っていた――ただ、その顔色だけが刻一刻と変化していた。ある時は雪のような白さに覆われ、ある時は生き生きとした赤みがその顔に浮かんでいた。　典礼を執り行っていた長老のパホミオスとヨセフは、セラフィムが予期せぬ脱力感を覚えたのではないかと考えた。長期間の断食を経た聖木曜日に、特に古くから彼を敬愛していた至福のセラフィムにとっては、それはごく自然なことだったからだ。しかしその後、彼には幻視があったのだと理解した。　セラフィムが正気を取り戻すと、長老たちは彼に何が起きたのか尋ねた。セラフィムは柔和に、子供のような無邪気さをもって、その幻視について彼らに語った。　霊的生活に熟達した長老たちは、その話を心に留めた。そして、至福のセラフィムに対しては、高ぶることなく、神の前での自身の何らかの価値について、心に有害な考えを抱かないよう諭した。しかし、当時、前述の長老たち以外には、至福のセラフィムがどのような驚くべき神の御訪れに恵まれたのかを知る者はいなかった。

そして聖人は、この恵み深い天の幻視の後、自分自身や自身の霊的な賜物について驕ることなく、むしろさらに謙遜の道に堅く立ち続けた。　深い謙遜に包まれながら、彼はますます力を増し、

514　ここで注目すべきは、聖セラフィムの恵み深い幻視が、典礼の中で、聖職者たちが祭壇へ入る際、あたかも天そのものへと向かう行列を描写するその瞬間に起こったという事実である。その際、司祭は密かな祈りの中で主に対してこう願うのである。　「主よ、我らの神よ、天において天使と大天使の位階と高貴さを定められる方よ、あなたを賛美するために、我らが聖所に入る際、聖なる天使たちも我らに仕え、あなたを賛美するために共に参入させてください。そのとき、『聖なる神、聖なる力ある方、聖なる不死なる方、我らを憐れみ給え』という天使の三聖歌が歌われるのです。」　このように、この幻視は、私たちが神聖な典礼の間に、天の力が目に見えない形で私たちと共に奉仕し、その時に栄光の王ご自身――キリスト――が私たちと共に臨在しておられると信じることは、決して無駄ではないことを、はっきりと示したのです。

絶えず霊的な自己卑下に努め、主の十字架の王の道を忠実に、揺るぎなく歩み続けた。　この時から、セラフィムはさらに沈黙を求めるようになり、以前よりも頻繁にサラフの森へ祈りのために赴くようになった。そこには、彼のために修道院の隠れ家が設けられていた。　朝から晩まで修道院で過ごし、礼拝を執り行い、修道院の規則と奉仕を全うした後、夕方には夜の祈りのために隠遁の独房へと向かい、早朝には再び修道院に戻って職務を遂行した。

1793年、セラフィムは生後35年目に修道司祭の位に叙階された（[515]　）。そしてこの位においても、彼は以前と同様に、しかしさらに深い愛をもって、長い間絶え間ない聖職の務めを続け、毎日、信仰と畏敬の念をもって聖なるキリストの秘跡に与り続けた。

その直後、聖セラフィムはさらに高次の修行に身を投じ、自ら進んで荒野へと退いた。これは、彼が深く慕っていた師であり指導者であった、至福の長老パホミオスが亡くなった後のことであり、パホミオス自身も臨終の際、この修行を彼に祝福していたのである。　指導者の遺体を悲しみの涙を流しながら埋葬した後、セラフィムは、新たな住職であり、自身の霊的父である長老イザヤの祝福を受け、砂漠での沈黙の修行のために修道院を後にした[516]。

聖セラフィムの庵は、サロフカ川のほとり、修道院から5〜6ヴェルスト離れた高い丘の上にある鬱蒼とした松林の中にあり、ストーブのある小さな木造の部屋一つで構成されていた。庵のそばに、聖人は小さな菜園を作り、その後、養蜂場も設け、それらを柵で囲った。　セラフィムの近くには、他のサロフの隠者たちも人里離れた場所で暮らしており、様々な高台から成り、森や低木、そして隠者たちの庵が点在する周辺一帯は、まるで聖山アフォンそのものを彷彿とさせるようであった。そのため、聖人は自身の隠遁の丘を「アフォン山」と名付け、森の中の他の最も人里離れた場所にも、さまざまな聖地の名前を付けた。　エルサレム、ベツレヘム、ヨルダン川、ケドルの小川、ゴルゴタ、オリーブ山、ファヴォラ――まるで、救い主の地上での聖なる出来事を生き生きと　思い描くかのように。彼は救い主に自らの意志と生涯を完全に委ねていたのである。　聖なる福音書の朗読を絶えず実践していた彼は、とりわけこれらの場所で、その名にふさわしい福音書の出来事を読むことを好んだ。　ベツレヘムの自身の果樹園では、福音書の賛美を歌った。**「天には神に栄光、地には平和、人々に神の御心！」**[517]　。サロフキのほとりでは、あたかもヨルダン川のほとりにいるかのように、聖ヨハネ・バプティスタの説教と救い主の洗礼を思い起こした。　サロフカのそばにあるある山では、主が説かれた「八福」の説教に耳を傾け、また「変容の山」と呼ばれる別の高台では、使徒たちと共にいるかのように心の中で、変容された主の栄光を仰ぎ見た。　鬱蒼とした密林の奥深くに身を潜め、彼は福音書に記された「この杯を私から取り去ってください（[518]　）」という主の祈りを思い

---

[515]　1793年9月2日、タンボフのテオフィロス司教は、修道院の指導部の推薦に基づき、セラフィム神父がその功績において他の修道士たちよりも計り知れないほど優れており、それゆえに教会奉仕の最高位に昇進するにふさわしいことを明確に認めた。

[516]　それは1794年11月20日（尊者がサロフの隠遁所に到着した日）のことでした。現在でも、サロフの修道院には、尊者セラフィムが隠遁所の独房で支障なく生活できるよう発行された許可証の写しが1通、建設者である長老イザヤの署名とともに保管されています。　その許可証の文面は次の通りである。「本許可証の発行者である、サロフの隠遁地の修道士セラフィムは、社会生活への不適応、すなわち（絶え間ない独房での徹夜祈祷、　教会での奉仕に絶えず従事し、長年にわたり夜間のわずかな休息を除いて立ちっぱなしであったことによる病気のため、セラフィムは隠遁生活に入る前に病に倒れた。彼の足は腫れ上がり、そこに潰瘍ができ、その結果、彼はしばらくの間、聖職を執り行う能力を失った。　この病は、彼が隠遁生活を選んだ大きな動機となった。また、その熱心さ（すなわち、沈黙と孤独を要する、彼特有の並外れた修道者の苦行）と、長年にわたる　（試練、修道者としての試練）を経て、神の御名において心の平安を得るためだけに、また聖なる父たちの規定に従って彼に与えられた規則に基づき、今後、彼が同一の場所に滞在することを誰も妨げてはならないことをここに確認し、これを承認する――建設者であり修道士イザヤ、1797年11月20日。　その真正性を証明するため、ここに印章を押印する。

[517] ベツレヘムの牧者たちへの、クリスマスにおける天使たちの賛美。（ルカ2:14）。

[518] ゲッセマネの園にて、十字架上の受難に先立ち。

起こし、主の内なる苦しみによって魂の深みまで揺さぶられ、自らの救いを求めて涙の祈りを捧げた。彼が「エレオンの山」と呼んだ山では、キリストが天に昇られ、神の右の座に着かれた栄光を仰ぎ見た。

聖セラフィムは、常に同じ、質素で、むしろ粗末とも言える服を着ていた。頭には使い古したカミラフカ、肩には白い布で作られたローブのような半カフタン、手には革の手袋、足には革の靴下と草履を履いていた。 そのローブには、かつて母が彼を聖なる修道院へ送り出す際に祝福した、あの同じ十字架が常に掛けられており、肩の後ろには、この修道者が常に持ち歩いていた聖福音書が入った袋が掛かっていた。その福音書は、キリストの恵み深い軛と軽い荷を負うことの救いについて、常に彼に思い起こさせていた。 この熱心なキリストの修道士にとって、すべての時間は絶え間ない祈りと詩篇の詠唱、聖書の朗読、そして肉体労働の中で過ぎていった。

寒い時期には、尊者は小枝や枯れ木を集め、自分の小さな斧で薪を切り、質素な小部屋を暖めていた。夏には、自ら耕し、肥料を施した小さな菜園で働き、そこで採れた野菜を主な糧としていた。土壌の肥料とするため、暑い夏の日に湿地へコケを採りに行き、 ——そして、彼は裸になり、腰に帯を巻くだけでそこに入ったため、沼地の上を飛び交う蚊や他の昆虫たちが彼の体を激しく刺し、その体はしばしば腫れ上がるだけでなく、青ざめ、血が固まってこびりつくほどであった。 しかし、この神の修道士は、 主のために自ら進んで耐え、さらにはそれらを喜びさえした。なぜなら、彼が後に語ったように、「情欲は、自発的なものであれ、神の摂理によってもたらされたものであれ、苦しみと悲しみによって根絶される」からであり、それゆえ、魂の最も完全かつ確実な浄化のために、自ら進んで苦しみを引き受けたのである。 こうして苔を集めた後、神の御使いは畝を耕し、種を蒔き、水をやり、草取りをし、野菜を収穫した。その間、絶えず神を賛美し、神聖な聖歌を歌うことで、その静かで聖なる喜びを注ぎ出し、単調な肉体労働の合間に自らの精神をリフレッシュさせ、高揚させていた。 明晰な記憶力を持ち、幼少の頃から教会の礼拝に敬虔に耳を傾けていた セラフィムは数多くの教会聖歌を暗唱しており、静寂に包まれた孤独な荒野での労働の合間にそれらを歌うことを好んだ。また、聖人に最も親しかった人々の中には、これらの聖歌の多くが、その土地や彼の孤独な修道生活と深く結びついていることに気づいた者もいた。 こうして聖セラフィムは、特に次のような賛美歌を頻繁に歌うことを好んだ。「**全き栄光**」[519] ——自身の荒野の守護者であると見なしていた聖母マリアに捧げるもの—— **「荒野には絶え間ない神聖な渇望があり、それは虚しい世とは別の存在である」**[520] ——これは荒野の生活を表現し、隠者の魂を神聖な対象へと高揚させるアンティフォン——、また、人の魂を神の愛という偉大な業、世界と人間の創造へと引き上げる聖歌、例えば: 「**言葉によって創造され、霊によって成し遂げられるすべての真理は、それを担う者たちの中にある**」[521]、**「御命令をもって、不浄な地へ降りて来てください」**[522] など。

そして、この労働の祈りの最中、菜園や養蜂場、あるいは森のどこかで作業に励んでいると、尊者は霊的な奥義の極めて深い黙想に没頭し、気づかぬうちに作業を中断し、道具は手から落ち、両手は下がり、その目は顔に、自己内省による独特で恵み深い表情を浮かべた。 長老は魂のすべてを注いで自己の内面に没入し、心で天へと昇り、 な神の観想の中に漂っていた。そして、そのような瞬間に誰かがそばにいたり、通りかかったりしたとしても、誰も尊者様の恵みに満ちた静寂と安らぎを乱すことを敢えてせず、皆、静かにその場から身を引いた。 セラフィムは、あらゆる物事、あらゆる行いの中に、それらが霊的生活と密接に関わる側面を見出し、そこから教訓を得て、その知的な眼を天へと向けていた。例えば、薪を割る際、一、三回斧を振るうだけで、彼は三位一体において賛美される唯一の神の偉大な秘儀の黙想に深く没頭した。

---

[519] 主の母への日曜日の晩課（ドグマティック）ー第1声。

[520] 主日アンティフォン第2番、第1声、早課にて

[521] 復活祭のカノン第3歌のイルモス、第3声。

[522] 復活祭のカノンの第3歌のイルモス、第8声。

肉体的な労働に加え、尊者セラフィムは、霊的な完成へとますます高みへと至るために、心と精神の最も高尚な修養に没頭し、多くの書物、とりわけ聖書、そして教父たちの著作[523]　や礼拝用の書物を読み耽った。　彼にとって最初の書物は聖福音書であり、彼はそれを常に携え、決して手放すことはなかった。　修道生活、心の清さ、神との祈りの対話、霊的な内省、そして聖書や魂に有益な書物への膨大な読書量――これらによって彼の心は光に照らされ、神の言葉の意味を明確に理解し、魂のすべてをもってその真髄を深く悟ることができた。　彼は荒野において、毎日、福音書と使徒書簡から数節ずつを選び、自分自身のために解説を加えながら読むことを、恒常的な規則として定めた。「魂を養うには――と彼は後に語った――神の言葉が必要である。なぜなら、神の言葉は天使のパンであり、神を渇望する魂はそれによって養われるからである。　とりわけ、新約聖書と詩篇の読誦に励むべきである。聖書の読誦によって知性が啓発され、それによって神聖な変容を遂げるのである。　自分の心を、あたかも主の律法の中に漂うかのように訓練し、その導きに従って自らの生活を整えるべきである。人目を避けて神の御言葉を読み、聖書全体を深く理解して読み通すことは、非常に有益である。　このような修練一つだけでも、他の善行に加え、主は人を御自身の慈悲から見捨てず、理解の賜物を授けてくださる」。そして、聖なる長老は、神の御言葉を読む絶え間ない修練によって、この恵み深い理解の賜物を得ると同時に、心の平安と、心の感動という至高の賜物も得たのである。　聖書の中で、彼はもはや一つの真理だけでなく、霊の温もりも求めており、聖なる朗読の最中に、しばしば彼の目から感動の涙が流れた。長老自身の告白によれば、その涙によって人は全身が温められ、いかなる言葉よりも心と知性を喜ばせる霊的な賜物に満たされるという。

毎日、尊者は『定式詩篇集』に従い、最も古くからのキリスト教の隠遁者たちの慣例に従って、修道者の祈りの規則を執り行っていた。　また、時折、第1、第3、第6、第9の時刻の礼拝、晩課、小晩課、就寝前の祈りを唱え、読み上げ、さらにしばしば、晩課の代わりに、一度に千回の礼拝を行い、真夜中の祈りやその他の教会礼拝を捧げた。あらゆる祈りの形態と段階を極めた彼は、　彼は、いわゆる「知的な祈り」という境地にとどまらず、この世で最も高い祈りの観想の頂点にまで達した。それは、心と精神が祈りの中で一つになり、思いが散漫になることなく、心が霊的な温もりに包まれ、その中でキリストの光が輝き、内なる人全体に平安と喜びを満たす状態である。

このように一週間、荒野で祈りに専念した後、聖セラフィムは日曜日や祝日の前日にサロフの修道院を訪れ、晩課、徹夜祷、あるいは早課に耳を傾け、早朝の聖体礼儀で聖体拝領を行い、　その後、晩課まで、それぞれの必要を抱えて訪ねてくる兄弟たちを受け入れ、それから一週間分のパンを携えて、自身の荒野の独房へと戻っていった。大斎の最初の週はすべて修道院で過ごし、その間、断食し、懺悔し、聖体拝領を行った。

この祝福された長老は、祈りの修行に加え、厳しい節制と断食の修行も併せて行っていた。隠遁生活を始めた当初、彼は日曜日に修道院から一週間分として持ち帰った、硬く乾いたパンを糧としていたが、そのパンの中でもかなりの量を、彼を深く慕い、しばしば彼の祈りの場を訪れる荒野の動物や鳥たちに分け与えていた。　長老は野生の獣たちさえも畏敬の念を抱かせていた。例えば、巨大な熊が頻繁に彼のもとを訪れ、彼はその熊に餌を与えていた。彼の言葉に従って、熊は森へ去り、その後また戻ってくると、長老は熊に餌を与え、時には訪問者たちに熊に餌をやることを許した。その後、聖セラフィムは断食をさらに厳格にし、パンさえも断ち、その体をそのような節制に慣れさせ、使徒の　な言葉にあるように、**「自分の手で働き」**（Iコリント4:12）、自分の菜園で採れた野菜だけで養生するようになった。　また、大斎の最初の1週間は、土曜日の聖体拝領まで一切食事を摂らなかった。修道院からパンを受け取ることを完全にやめた彼は、2年半以上にわたり修道院からのいかなる支援も受けずに暮らしており、兄弟たちは、夏だけでなく冬の間も、この長老が一体何を食べ

---

[523]　特に、次のような修道的な教父たちの著作が挙げられる。すなわち、聖ヨハネ・ラダー、アッバ・バルソノフィオス、エフレム、イサアク・シリア人、マルガリータ（主に聖ヨハネ・クロソストモスの著作から成る）などである。

て生きていたのかと首をかしげていた。 死の直前に至って初めて、長老は親しい数人に、約3年間、夏に摘んで冬用に乾燥させておいた「スニティ」という草（[524] ）の煎じ汁だけで栄養を摂っていたことを打ち明けた。

その一方で、多くの人々が、霊的な指導や慰めを求めて頻繁に彼を訪ねるようになり、この至福の隠者の静寂を乱すようになった。 サロフの修道者たちの多くが、助言や指導を求めて、あるいは単に彼に会いたいというだけで、彼の元を訪れました。人々を見抜き、見分ける術に長けていた長老は、ある者たちからは距離を置き、沈黙を守りました。しかし、彼に対して真に霊的な必要を抱いている者たちについては、喜んで受け入れ、愛をもって助言や指導、そして霊的な対話を通じて彼らを導きました。 そのような人々には、例えば、彼の常連の訪問者であったスキモナフのマルクやイエロディアコンのアレクサンドル[525] などがいた。しかし、彼らでさえ、長老が神への思索に完全に没頭しているのを見つけると、その安らぎを乱すことを恐れ、祈りの行いが終わるのを待つか、あるいはしばらく待ってから、静かに長老の元を後にした。 尊者のもとには、外部からの訪問者もいた。 もし、荒野の独房の外で、長老が森の中で誰かと予期せず出会った場合、通常、会話を交わすことなく、謙虚に頭を下げてその場を立ち去った。なぜなら、沈黙によって、後に彼が自身の教訓の中で語ったように、誰も悔い改めることは決してなかったからである。 しかし、概してセラフィムは、自身の沈黙を乱す訪問者を苦々しく思っていた。特に、女性が訪ねてくることは彼にとって重荷であった。しかし、彼女たちへの教えを拒むことは、神に喜ばれないことだと考えていたため、そうすることはできなかった。 そこで聖なる長老は、女性には聖アトス山への立ち入りが禁じられているという偶然の根拠に基づき、この禁止を、自身が同じ名をつけた自身の丘にも拡大することを決意した。 ある日、神聖な典礼が行われている最中に修道院を訪れたセラフィムは、そのことについて、サロフの建設者である長老イザヤに祝福を求めた。イザヤは、しばらく戸惑った後[526] 、「至福の胎」と呼ばれる聖母マリアのイコンを用いて、彼に祝福を与えた[527] 。 同時に、長老セラフィムは、自身の願いが叶い、女性たちが彼の隠遁の丘への立ち入りを禁じられるよう、神と至聖なる聖母マリアに熱烈な祈りを捧げた。それは、一部の兄弟たちだけでなく、ましてや信徒たちにとって、つまずきや誘惑の石とならないようにするためであった。 この願いに対する神の御許しを確かめるため、彼は、キリストの降誕祭を終えてサローフから自身の隠遁の庵へ戻る途中、通りかかった木の枝が屈むというしるしを求めた。そして、12月26日の夜、サローフへ神聖な聖体礼儀に参加するために向かった際、 地面が急勾配で下っている場所に差し掛かったとき、小道の両側から、樹齢数百年の松の木から巨大な枝が道に倒れ込み、彼の隠居所への通路を塞いでいるのを目にした。しかし、夕方まではそのようなものは何もなかった。 そこで聖なる長老は、神への深い感謝の念に駆られ、ひざまずいた。この出来事から、自分の願いが主の御心にかなっていることを悟ったのである。そして自ら急いで、自分の住居へと続く小道を丸太で塞いだ。それ以来、女性だけでなく、一切の部外者に対する彼の住居への立ち入りは完全に禁じられた。

この偉大な長老の such な偉業を目の当たりにして、人類の古来の敵は、あらゆる種類の誘惑や策略をもって彼に立ち向かった。 こうして、彼は修行者に様々な恐怖を植え付け、時には扉の外

---

[524] ロシアに広く分布する草本植物で、地下茎によって旺盛に繁殖する。その大部分は雑草であり栄養価も低いものの、民間療法では特定の病気の治療に用いられ、若い葉は時に野菜としてスープの具として使われることもある。

[525] 前者は月に2回ほど彼を訪ねてきたが、後者は一度だけだった。聖セラフィムは、彼らと魂の救いに関する様々な話題について、喜んで語り合った。

[526] 聖セラフィムに祝福を与えながら、イザヤは首をかしげてこう言った。「5ヴェルスト先から、妻たちが立ち入らないように見張るなんて、一体どうすればいいのですか？」しかし、セラフィムは信仰と確信をもってこう答えた。「あなたが祝福してくださるだけで、彼女たちの誰も私の山に登ることはもうありません。」

[527] このイコンは、福音書の言葉（ルカ11:27）にちなんで名付けられ、「あなたを宿した胎と、あなたを養った乳房は幸いである」と名付けられたこのイコンは、諸聖人の週と12月26日に祝われる。まさにその日、長老セラフィムは、修道院の建設者イザヤに、女性たちが彼の荒野の山に立ち入らないよう、祝福を求めたのである。

でまるで野獣の遠吠えのような音を響かせたり、時には大勢の群衆が彼の庵の扉を壊し、枠を打ち破り、長老に木の切り株を投げつけるかのような幻影を見せたりした。　時には昼間も、しかし特に夜、尊者セラフィムの祈りの最中に、彼の目の前には突然、まるで　のように、自分の修道室が崩れ落ち、四方八方から恐ろしい獣たちが猛烈な咆哮を上げて押し寄せてくる光景が浮かび上がったりした。時には、蓋の開いた棺が目の前に現れ、そこから死者が起き上がってくることもあった。　その後、ある信徒が純真な心で「神父様、悪霊を見たことはありますか？」と尋ねると、彼は微笑みながらこう答えた。「彼らは忌まわしい存在だ。罪人が天使の光を見ることはできないのと同じように、悪霊を見るのも恐ろしい。なぜなら、彼らは忌まわしいからだ」。　しかし、こうした恐ろしい幻視や恐怖、誘惑――時には肉体的苦痛を伴うこともあったが――を、この恵み深い長老は、温かい祈りによって乗り越え、主の尊き命を与える十字架の力によって打ち勝った。　長老セラフィムは、度々野心の霊に誘惑され、様々な修道院のイグメンやアルヒマンドリトに選出された[528]；　しかし、彼はそのような場合、常に揺るぎない確固たる決意と深い謙遜を併せ持ち、これらの任命を拒み、真の修道生活を目指し、修道生活において自らの魂と隣人の救いのみを求め続けた。

聖なる長老の謙遜と英知を見て、悪魔は彼に対して激しい心の戦いを仕掛けた[529]　。その戦いは、偉大な修道士たちでさえ倒れてしまうほどの強さで続けられた。その時、長老セラフィムは、重い心の苦しみの中、私たちの救いの源である主イエス・キリストと、その聖母マリアに心からの祈りを捧げると同時に、悪魔の策略を排除し根絶するために、古代のキリスト教の柱上修行者たちの模範に倣い、新たな、より高次の祈りの修行に身を投じることを決意した。　深い原生林の奥深くで、夜陰に紛れて誰にも見られぬまま、彼は祈りの業を強めるために高い花崗岩の岩の上に登り、その上で長く祈りを捧げた。立ち続けたり、ひざまずいたりしながら、心の底から徴税人の祈りを叫んだ。

「神よ、罪深い私に憐れみをお与えください！」

この新しい柱修道士は、自分の修道室にも小さな石を置き、朝から晩までその上で祈りを捧げた。その石を使うのは、極度の疲労から休息をとるため、あるいはわずかな食事で体力を少し回復させるためだけだった。この偉大な修行において、聖セラフィムは千日千夜を過ごした。　敵は完全に打ち負かされ、心の戦いは終息した。しかし、この並外れた祈りの修行と、ほぼ3年間にわたる立ちっぱなしの生活により、長老は極度の肉体的消耗に陥り、足に重く痛みを伴う潰瘍ができ、それは彼が死ぬまで治らなかった。　そしてようやくその時、彼は耐え難いほど過酷な柱上修行を終わらせた。この修行は、古代においてもごく少数の修行者しか敢行しなかったものである。しかし、長老の存命中は、彼が人々の好奇の眼差しから巧みに隠し通したこの並外れた祈りの偉業について、誰も知らなかった。　イザヤ長老の後任となったイグメン・ニフォンに対し、タンボフの主教閣下からセラフィムに関する秘密の問い合わせがあり、これに対しサロフの修道院長は次のように答えた。　「セラフィム神父の功績と生涯については我々は承知している。しかし、どのような秘密の行いがあったのか、また岩の上で1000日1000夜立ち続けたことについては、誰にも知られていなかった」[530]　。　そして、至福の死を迎える直前に至って初めて、尊者セラフィムは、他の多くの修行者たちの例に倣い、自身の生涯における諸事情の一つとして、サロフの修道兄弟たちのうち数名に、この驚くべき功業に

---

[528]　このように、聖セラフィムはアラティール市（シンビル州の県都）の修道院長に任命され、アルヒマンドリトの位に叙任されることになっていた。　というのも、一方ではサロフの隠遁地が、その修道者の中から他の修道院へ優れた院長を度々送り出していたこと、他方では、教会当局がセラフィム長老をよく知っており、そのような長老をアッバ（院長）として、ある修道院の院長に任命することが多くの人々にとっていかに有益であるかを理解していたからである。　また別の機会には、セラフィムはクラスノスロボドスキーのスパースキー修道院の建設責任者に指名された。しかし、どちらの場合も、長老の熱心な願いと、修道者たちの相互の愛および合意により、彼は他のサロフの修道士たちに代わられた。

[529]　「戦い」とは、修道的な禁欲的表現であり、悪魔が自分に抵抗する修道士たちに課す、執拗かつ長期にわたる誘惑を意味する。この悪魔との闘いゆえに、修道士たちは禁欲主義者の言葉ではしばしば「霊的な戦士」と呼ばれる。

[530] 修道院の文書には、イグメン・ニフォントによるこの評が下書きの形で保存されている。

ついて語った。その時、聞き手の一人が、この功業は人間の力を超えていると指摘した。これに対し、聖なる長老は信仰に満ちた謙虚さをもって次のように述べた：

「聖シメオン・ストルプニクは四十七年間、柱の上に立っていた。私の労苦が、彼の功業に匹敵するだろうか？」

すると、対話者が「おそらく、その当時、長老は人を強める恵みの助けを感じていたのだろう」と指摘すると、尊者はこう答えました。

「はい、そうでなければ人間の力だけでは足りなかったでしょう……私はこの天からの賜物――光の父から上より降りてくるもの――によって、内面から支えられ、慰められていました。」

それから、少し間を置いて、こう付け加えた。

「心に感動があるとき、神も私たちと共におられるのです[531]。」

恥をかかされた悪魔は、聖なる長老を荒野から追い出すために、新たな策略を練り始めた。悪魔は悪人どもを彼のもとへ送り込み、森で長老と出会った彼らは、長老が訪ねてくる信徒たちから受け取っているかのように、金銭を要求し始めた。　長老は、誰からも金を受け取っていないと答えた。しかし、彼らはそれを信じず、悪党の一人が彼に襲いかかったが、かえって自ら転んでしまった。セラフィムは並外れた体力を持っており、斧を手にすれば三人の強盗に対抗して身を守ることができた。しかし、彼は救い主の言葉を思い出した。**「剣を取る者は皆、剣によって滅びる」**（マタイ26:52）。そして、斧を下ろし、両手を胸の前で十字架の形に組み、穏やかにこう言った。

「お望みのままにどうぞ。」

ある悪党が斧を振り上げ、その斧の背で長老の頭を激しく殴りつけたため、彼の口や耳から血が噴き出した。聖セラフィムは意識を失って倒れた。悪党たちは、斧の背や薪、さらには手足を使って、彼を激しく殴り続けた。　ついに、彼が息をしていないことに気づき、死んだと判断すると、彼らは彼の手足を縄で縛り、犯行を隠蔽するためにその遺体を川に投げ捨てようとした。　自分たちは、戦利品があると期待して長老の独房に駆け込んだが、独房の中をくまなく調べ、ひっくり返し、壊し尽くしたにもかかわらず、聖なるイコンと数個のジャガイモ以外には何も見つからなかった。その時、彼らは恐怖と後悔に襲われた。自分たちにとって何の利益もないのに、聖なる、物欲のない神の僕を殺してしまったのだと悟り、逃げ出した。　その間、セラフィムは意識を取り戻し、なんとか両手をほどくと、殺人者たちの赦しを神に祈り、辛うじて自分の小部屋まで這って行き、そこで一晩中、激しい苦痛に苛まれながら過ごした。翌日、彼は大変な苦労の末、聖体礼儀の最中に修道院へとたどり着いた。　その姿は凄惨を極めていた。髪は血で濡れ、もつれ、ほこりや汚れにまみれ、顔と手は殴打され、耳と口は血で固まり、数本の歯が打ち抜かれていた。　この惨状に愕然とした修道士たちの問いかけに対し、長老は黙っていたが、修道院長であるイサイア長老と修道院の告解司祭を呼び寄せ、起こった出来事を語った。　こうして、悪魔の嘲笑をよそに、セラフィムは修道院にとどまることを余儀なくされた。彼は耐え難いほどの苦痛に苛まれ、かろうじて息をしている状態で横たわり、一切の食事を口にしなかった。　そうして八日が過ぎた。そこで、彼の命が危ぶまれると、医師を呼び寄せた。医師たちはセラフィムを診察し、頭蓋骨が砕け、肋骨が折れ、胸部が踏みつけられ、全身のあちこちに致命的な傷を負っていることを確認し、これほどの暴行を受けても長老が生き延びたことに驚嘆した。　長老の苦痛を和らげるためにどのような措置を講じるべきか協議するため、兄弟たちは彼の独房に集まった。同時に、修道院長を呼びに行った。そして、修道院長が来るという知ら

---

[531] 聖セラフィムが修行に励んだ石は、現在も保存されており、彼の死後もしばらくの間、当初あった場所にそのまま残されていた。　修道院の兄弟たちや巡礼者たちがそれらを見に訪れることが多いため、セラフィム修道院の荒野には、かつての小道の代わりに、後に馬車が通れるほど広い道が開かれた。　多くの人々が、岩の上に立ち、祈りの姿勢をとるセラフィム長老の姿が刻まれた石の破片を削り取って持ち帰ったため、森の奥で尊者様が祈りを捧げていたあの大きな岩は、今ではディヴェエフ修道院に保存されている破片一つだけが残っている。　また、長老が自身の独房で祈りを捧げていたあの石も、同修道院に保管されている。

せが届いたまさにその瞬間、尊者セラフィムは意識を失い、穏やかで安らかな眠りについた。　夢の中で、彼はかつて、まだ修道見習いの頃、死の病に伏していた時に見たのと同じような、驚くべき幻視を目にした。聖母マリアが、王の紫の衣をまとい、天の栄光に包まれて彼の元へ近づいてきた。その背後には、使徒ペトロと神学者ヨハネが続いていた。　病床のそばに立ち止まると、至聖なる聖母は右手の指で病人を指し示し、医師たちが立っている方向へとその清らかな御顔を向け、こうおっしゃった。

「なぜ、そんな苦労をされているのですか？」

それから、再び長老セラフィムの方を向いて、こう言われました。

「この人は、私の血筋に属する者だ！」

その後、その場にいた者たちが全く予期していなかったこの幻視は終わり、修道院長が独房に入ると、病人はすでに意識を取り戻していた。　イザヤ神父は、医師たちの助言と助けを受けるよう、切実に、そして愛情を込めて彼を説得し始めた。しかし、病人は、自らの絶望的な状況にもかかわらず、これほどまでに世話を焼かれたにもかかわらず、皆の驚きをよそに、今は人間からのいかなるな援助も望まない、と断固として答え、修道院長に、自分の命を神と至聖なる聖母マリアに委ねることを許してほしいと懇願した。　修道院長は長老の願いを叶えるしかなかった。長老は、神からの驚くべき御訪問を受けてから数時間にわたり、言葉に尽くせない、この世のものとは思えないほどの喜びに包まれていた。その後、長老は落ち着きを取り戻し、病の苦しみから解放され、徐々に体力が回復していくのを感じた。　しばらくすると、彼はすでに床から起き上がり、小部屋の中を少し歩き始め、夕方には食事をとった。その日から、彼は再び少しずつ霊的な修行に励むようになった。

病に倒れてから、長老は修道院に約5ヶ月間滞在した。その病気のせいで、彼は背中を丸めてしまったが、これは以前にも、ある時薪割り中に木に押しつぶされた際にすでに目立っていたことだった。しかし、再び隠遁生活を送る力を自分の中に感じ取ったセラフィムは、修道院長に、自分を荒野へ送り出してくれるよう懇願した。　長老イザヤや修道士たちは、彼に修道院に永遠に留まるよう懇願した。　しかし、尊者は、自分に起きたような襲撃など何とも思っておらず、どんな侮辱が降りかかろうとも、死ぬまで耐え抜く覚悟があると断固として答えた。そこでイザヤ神父はその願いを祝福し、セラフィムは自分の荒野の独房に戻った。

その直後、長老を殴打した強盗たちが発見された。彼らは、ある地元の地主タティシェフの農奴たちであった。　そこで、聖セラフィムは愛をもって彼らを赦し、修道院長と地主に対し、彼らを罰しないよう懇願した。もし罰が下されれば、自分はサロフの修道院を去り、密かに他の遠く離れた聖地へ退去すると宣言したのである。　長老の懇願により、悪党たちは許されたが、神は御自身の御使いのために彼らを懲らしめられた。まもなく、激しい火災が彼らの住居を完全に焼き尽くしたのである。そこで強盗たちは悔い改め、涙ながらに聖セラフィムに許しと聖なる祈りを請い、彼の祝福を受けて徳のある生活の道へと立ち返った。

その崇高な功績と神に喜ばれる生涯により、聖なる長老は神から透視の恵みの賜物を受けました。しかし、それゆえに彼は人々の称賛をますます避け、沈黙を重んじました。

1806年、サロフ修道院の院長であった長老イザヤは、病状の悪化と高齢を理由に職務から退き、修道者たちは満場一致でその後任として聖セラフィムを選出した。　しかし、セラフィムは、その深い謙遜さゆえに、また荒野と沈黙への限りない愛ゆえに、この任を辞退した。そこで、幼少の頃からセラフィムと親交のあったニフォント神父が修道院長に選出された。　一方、長老イザヤは、自身の病と体力の衰えにより、6ヴェルスト離れた荒野にいる聖セラフィムの元へ足を運ぶことができなかった。しかし、彼との対話を通じて得られる慰めを失いたくはなかったため、そのことを深く嘆いていた。　そこで兄弟たちは、熱意をもって、両者の肉体の衰えを考慮し、高齢のイザヤを修道院へ、聖セラフィムのもとへ運ぶようになった。しかし間もなく、聖セラフィムにとって霊的生活において最も親しい友であったこの最後の一人も、主のもとへ旅立ってしまった。　この喪失はセラフィム

に深い悲しみを刻み込み、それ以来、彼はこの儚い現世の生活、来世、そしてキリストの最後の審判について、これまで以上に頻繁に深く思いを巡らせるようになった。同時に、彼は心から愛していた至福のパホミオス、　ヨセフ、イザヤの魂の安息を祈るようになり、修道院の墓地を通りかかるたびに、彼らの墓の前で、彼らや他のサロフの長老たち、修道者たちのために、至高なる御方へ熱烈な祈りを捧げ、その祈りの熱意と高みから、彼らを「地から天に至るまで燃える者たち」と呼んだ。　また、長老は他の人々に対しても、祈りの中で彼らをより頻繁に記念するよう遺言した。例えば、サラフに頻繁に訪れ、セラフィムに会いに来ていたある知人の尼僧に対し、セラフィムは次のような戒めを与えた。

「私のところへ来る時は、墓に立ち寄り、三度頭を下げて、神に、御自分のしもべたち――イザヤ、パホミイ、ヨセフ、マルコ、そしてその他の者たちの魂を安らかにしてくださるよう願い、それから心の中でこう言いなさい。『聖なる父たちよ、お赦しください。そして私のために祈ってください』と。」

長老イザヤの死後、聖セラフィムは修道生活そのものを変えることはなかったが、沈黙という厳しい修行を自らに課すことで、その修道生活に新たな様相を与えた。　砂漠に訪問者が来ても、彼は外に出て行かなかった。もし彼が森の中で誰かと偶然出会ったとしても、地面にひれ伏し、その人が通り過ぎるまで決して顔を上げなかった。彼はこのような沈黙の中で約三年間を過ごした。　その期間が満ちる少し前から、彼は日曜日や祝日にもサロフの修道院を訪れることをやめてしまった。一人の兄弟が、特に冬の間、長老が自分で育てた野菜がない時期には、彼の荒野の独房に食事を運んでくれた。食事は週に一度、日曜日に届けられた。　兄弟が玄関に入ると、長老は心の中で「アーメン」と呟き、顔を地面に向けてうつむきながら扉を開けた。　そして、兄弟が去って初めて、長老はテーブルの上に置かれたトレイに、小さなパンの欠片や少量のキャベツを載せ、次の日曜日に持ってきてほしいという合図とした。

しかし、これらはすべて沈黙の表層的なしるしに過ぎなかった。老修道士のこの極めて困難な修行の本質は、実際には社交からの外的な隔絶にあるのではなく、心の沈黙、すなわち、最も純粋で完全な神への献身のために、あらゆる世俗的な思念を断ち切ることにあるのである。

兄弟たちの多くは、この恵み深い長老が彼らとの交わりから遠ざかり、沈黙という修行を自らに課したことを深く残念に思い、　中には、彼が孤独を好むことをまるで非難するかのように、兄弟たちと親しく交わり続けることで、自らの魂の整えに支障をきたすことなく、言葉と模範をもって彼らを導くことができたはずだと指摘する者さえいた。　しかし、これらすべての非難に対して、長老は聖イサアク・シリンの「世の中で飢え渇く者たちを満腹させることよりも、沈黙の安らぎを愛せよ」という言葉と、聖グレゴリオス・テオロゴスの「神のために神学を論じることは素晴らしいが、それよりも、人が神のために自らを清めることの方がさらに良い」という言葉で答えた。

そして、尊者セラフィムが自ら引き受けたこの極めて困難な沈黙の修行は、彼の義なる魂を最も完全な形で清め、照らし出し、さらに深く、より高い次元へと神の観想の奥義へと導き上げ、荒野の隠者との戦いに臨む悪魔を完全に無力化したのである。　この修行がセラフィムにどのような霊の実をもたらしたか――それについては、間違いなく彼自身の経験にも基づいているであろう、沈黙に関する聖なる長老の教えから、はっきりと判断することができる。　「私たちが沈黙の中にいるとき――」と、後に尊者セラフィムは語った。「その時、敵である悪魔は、人の心の奥底にあるものに対して何も為し得ない。これは、心の中の沈黙について理解すべきことである。それは沈黙を守る者の魂に、様々な霊の実を結ばせる。　孤独と沈黙からは、感銘と柔和さが生まれる。他の霊的実践と結びつくとき、沈黙は人を敬虔へと高める。沈黙は人を神に近づけ、いわば地上の天使のようにする。ただ自分の小部屋に座り、注意を払い、沈黙を守り、あらゆる手段を尽くして主の御許に近づこうと努めなさい。そうすれば、主はあなたを人間から天使へと変えてくださる用意がある。**「見よ、わ**

たしが顧みる者は、へりくだり、霊において砕かれ、わたしの言葉に震える者である」（イザヤ書66:2）。　沈黙の果実として、他の霊的な獲得に加え、魂の平安がもたらされる。沈黙は静寂と絶え間ない祈りを教え、節制は心を散漫にさせない。　ついに、これを獲得した者には、平安な状態が待っている」。このようにして、聖セラフィムは沈黙の修行を歩み、最高の霊的賜物に到達するにつれ、新たな恵み深い慰めも受け、心の中で言葉に尽くせない**「聖霊による喜び」**（ローマ14:17）を感じていた。

美徳と修道生活の階段をさらに登り、聖セラフィムはさらに高い段階である隠遁の修行を自らに課した。それは次のようにして起こった。　当時、イザヤの後にサロフ修道院の院長を務めていたのはニフォント神父であり、彼は神を畏れ敬う高潔な人物であると同時に、教会の規律と秩序を厳格に守る熱心な擁護者でもあった。一方、セラフィムはイザヤの死以来、沈黙の誓いを立て、まるで隠遁生活を送るかのように、自分の荒野で人里離れた生活を送っていた。　以前は、日曜日にサロフの修道院へ赴き、聖なる秘跡を受けていた。しかし、石の上での長時間の立ちっぱなしが原因で足の病を患い、もはや歩くことさえできなくなっていた。　多くの修道士たちはこの状況に戸惑い、一体誰が彼に聖体拝領を授けているのかと不思議に思っていた。そこで、修道院長はついに、上級司祭修道士たちを集めて修道院会議を招集し、長老セラフィムの聖体拝領に関する問題を彼らの裁定に委ねた。　協議の結果、長老たちはセラフィムに次のように提案することを決めた。もし健康で足腰が丈夫であれば、これまで通り日曜日や祝日に修道院へ赴き、聖体拝領を受けること。もし足が不自由であれば、永久に修道院の独房に移り住むことである。　総会の決定により、日曜日にセラフィム長老に食事を運んでいた修道士を通じて、彼がどちらを選ぶかを尋ねることにした。その修道士はそうしたが、最初の時は長老は一言も答えなかった。　その修道士には、次の日曜日にもう一度、修道院評議会の提案をセラフィム長老に伝えるよう命じられた。その時、セラフィム長老は修道士に祝福を与えると、彼と共に徒歩で修道院へと向かった。その際、病気のため、以前のように日曜日や祝日に修道院へ歩いて行くことができないことを身振りで示した。　それは1810年5月8日のことで、聖セラフィムが50歳の誕生日を迎えた日であった。15年間の荒野での生活を経て修道院に戻ったセラフィムは、自分の独房に立ち寄ることなく、病棟へと向かった。それは徹夜祈祷が始まる前の昼のことだった。鐘の音が鳴ると、長老はウスペンスキー教会での徹夜祈祷に現れた。　長老セラフィムが修道院に定住することを決意したという噂が瞬く間に広まると、すべての修道士たちは大きな驚きに包まれた。その翌朝、5月9日、聖ニコラエの聖遺骨移送の日に、セラフィムは例年通り、病院の教会で早朝の聖体礼儀に参加し、キリストの聖なる秘跡を拝領した。　教会を出ると、彼は建築家ニフォントの独房へ向かい、彼から祝福を受けた後、かつての修道院の独房に身を寄せた。しかし、その際、長老は誰をも自分の元へ招かず、自らどこへも出ず、誰とも一言も交わさず、こうして新たな、極めて困難な隠遁の修行を自らに課したのである。

隠遁生活における聖セラフィムの功績については、ごくわずかなことしか知られていない。というのも、彼は誰をも自分の元へ近づけず、誰とも一言も交わさなかったからである。彼の独房には、最も必要な物さえ何もなかった。常に灯がともっていた聖母マリアのイコンと、椅子代わりになっていた切り株の断片、それだけがすべてであった。　彼は自分自身のために火さえも用いなかった。シャツの下の肩には、**「霊が救われるため」**（Iコリント5:5）**に**、肉体を死なせるための5ヴェルシュコの大いなる鉄の十字架を紐で吊り下げていた。しかし、鎖や毛皮の衣は決して身につけなかった。　「言葉や行いで私たちを侮辱する者がいても――と彼は言った――もし私たちが福音の教えに従ってその侮辱に耐えるなら、それこそが私たちの鎖であり、毛皮の衣である。これらの霊的な鎖と毛皮の衣は、鉄のそれよりも尊いのだ」。　聖セラフィムは、砂漠にいた時と同じ服を着続けました。飲み物は水のみ、食事はオートミールと白ザワークラウトだけでした。水と食事は、隣に住んでいたパヴェルという名の修道士が彼に届けていました。　その修道士は、長老の独房の前で祈りを捧げた後、食を扉の前に置いた。そして、隠遁者は誰にも見られないよう、大きな布で身を覆い、皿を受け

取ると、ひざまずいたまま、あたかも神の手から受け取るかのように、それを自分の独房へと持ち帰った。　その後、食事を済ませると、食器を元の場所に戻し、再び布で顔を隠した。これは、ククル（[532]）の下で顔を隠していた砂漠の隠者たちの例に倣ったものである。

隠遁生活における長老の祈りの修行は、誰にも知られていなかった。ただ、それらが極めて厳しく、偉大で、多岐にわたっていたことだけが知られている。ここでも彼は、神聖な典礼を除き、相変わらず自身の隠遁の規則とすべての毎日の礼拝を行っていた。さらに、彼はしばしば「知的な」祈り、すなわちイエスへの祈りや聖母マリアへの祈りを行っていた。[533]　祈りの際、聖なる長老は時折、イコンの前に立ちながら、いかなる祈りも唱えず、礼拝の動作もせず、ただ心の中で主を思索することで、深い瞑想的かつ祈りの境地に没入した。　一週間の間に、彼は新約聖書全体を順番に読み通した。月曜日から木曜日までは四つの福音書を、毎日一つずつ読んだ。玄関のドア越しに、彼が読みながら新約聖書を独り言のように解説している声が聞こえることがあり、多くの人々が彼の言葉を聞きに訪れ、そこから喜び、慰め、そして教訓を得ていた。　隠遁生活を送っていたすべての年を通じて、長老は毎週の日曜日と祝日には、キリストの聖なる秘跡を拝領していた。死の刻を決して忘れず、それをより鮮明に思い描き、目の前により近く見据えるために、聖セラフィムは自分のために棺を作ってもらい、それを隠遁生活の独居室の玄関に置くよう頼んだ。　聖なる長老の願いは叶えられた。一枚の樫の木から蓋付きの棺が彫り出され、それは塗装もされずに、常に玄関に置かれていた。長老はここで頻繁に祈りを捧げ、この世からの旅立ちに備えていた。サロフの兄弟たちとの会話の中で、至福のセラフィムはこの棺についてしばしばこう語った。

「私が死んだら、兄弟たちよ、どうか私をこの棺に納めてください。」

霊的な修行に加え、この修道士は肉体労働も取り入れ、時折、新鮮な空気で疲れ切った老人の胸をリフレッシュさせていた。　夜明け前の朝、まだ皆が眠っている頃、聖なる長老はしばしば、イエスの祈りを唱えながら、墓地や墓碑の間、あるいはその他の場所を素早く行き来し、小さな薪の束を静かに、修道室に最も近い場所へと運び続けていた。　ある日、見習いの修道士――起床の役目を担う者が、その光景に心を動かされ、長老のもとへ駆け寄り、その足に口づけをして祝福を求めたとき、セラフィムは彼を祝福してこう言った。

「沈黙を守り、自分自身に耳を傾けなさい！」

五年間、閉鎖生活を送った後、聖なる長老はその制限を幾分緩和した。当初はあくまで外見上の変化に過ぎなかった。彼の小部屋の扉は開かれており、誰でも彼を訪ねることができたが、　彼の指導を必要とする者たちの質問に対しては、神の前で沈黙の誓いを立てていたため、答えることなく、黙々と自らの霊的修行を続けていた。　当時タンボフの司教であったイオナは、サロフの修道院を頻繁に訪れており、ある時、セラフィム神父に直接会いたいと願い、その目的で彼の独房に近づいた。しかし、尊者セラフィムは、神に対する誓いを堅く守り、人に気に入られようとすることを恐れて、今回もまた沈黙と隠遁の生活を守り通した[534]。　どうやら、当時、聖セラフィムにとって隠遁生活を終える時はまだ来ていなかったようだ。このことを理解していたのが大主教であり、イグメン・ニ

---

[532]　ククルとは、肩まで垂れ下がる縁を持つ修道士の頭巾の一種であり、古代教会において修道服の一般的な付属品であった。

[533]　修道士たちの言葉では、「知的な」祈りとは、修行者が魂のすべてを沈黙の中でその祈りに没頭する、瞑想的で神を想う祈りのことを指す。

[534]　この状況において、聖セラフィムは、隠遁と沈黙の行いにおいて彼を模範としていた聖アルセニオス・ザ・グレートの例に倣ったのかもしれない。アレクサンドリアの大司教テオフィロスは、アルセニオスを訪ねたいと思い、彼が自分に対して門を開いてくれるかどうかを事前に確かめるために使者を送った。　アルセニオスはこう答えた。「もしあなたのために門を開くなら、すべての人々のためにも開くことになる」。するとテオフィロスは言った。「それなら、私は彼のもとへ行くのはやめておこう」。

フォントから長老の独居室の扉をフックから外すよう提案された際、「私たちが罪を犯すことのないように」と言ってこれを拒否し、長老を静かに過ごさせたのである。

しかし、その直後、聖セラフィムにとって、隠遁生活と沈黙の修行を完全に終える時が、まさに訪れたのである。　完全な自己否定、忍耐、謙遜、そして恥じることのない信仰をもって、共同生活の修道士、隠遁者、柱上修行者、沈黙の修行者、そして隠遁生活者としての道を歩み抜いた彼は、偉大な心の清らかさを獲得し、神から最高の霊的な恵みの賜物を受けるにふさわしい者となった。そしてその時、至高の御心により、彼は沈黙を捨て、すべてを神に、神のために捧げる生活――この世からの至高の離脱に満ちた生活を続けつつ、その愛と、神から授かった教導の恵み、　透視の力、奇跡と癒やし、そして霊的な導き、祈り、慰め、助言によって、その世界に奉仕することとなったのである。このようにして、聖セラフィムは、いわゆる「長老の務め」[535]　という至高の業を自ら引き受け、その中でその多難かつ義に満ちた生涯を全うした。

この偉大な長老の功業は、彼がまだ5年後に、すでに彼を訪ねてくる人々、とりわけ修道士たちとの対話を始めるところから始まった。　彼らとの対話において、聖セラフィムは主に、すべての修道規則の遵守を確固たるものにするよう導き、教会の祈りを欠かさず行い、また聴くこと、謙虚に自分の奉仕を厳格かつ熱心に果たすこと、　食事の席では神を畏れて座ること、正当な理由なく修道院の外に出ないこと、独断や勝手な行動を控えること、互いに平和を保つことなどを説いた。その後、この聖なる長老のもとには、外部の世俗の人々も訪れるようになった。　彼の独居室の扉は、早朝のリチュルギーから夜8時まで、すべての人に開かれていた。そして長老はすべての人を受け入れ、一人ひとりに祝福とそれにふさわしい簡潔な教えを授けていた。　この恵み深い長老は、通常、ローブのような長い白い衣と半マントを身にまとい、エピトラヒリオンとポルーチャを身につけて訪問者を迎えていた。もっとも、ポルーチャは、聖なるキリストの秘跡を受ける日曜日や祝日のみ着用していた。

聖なる長老は、心から謙虚に悔い改める人々や、キリスト教の霊的生活に対して熱心な姿勢を示す人々を、とりわけ深い愛をもって迎え入れた。彼らとの対話を終えると、聖セラフィムは、彼らがうつむいた頭にエピトラヒリの端と自身の右手を置くのが常であった。　その際、彼は彼らに、自分の後に続いて短い悔い改めの祈りを唱えるよう促し、その後、自ら「[536]　」という赦しの祈りを唱えた。それにより、訪れた人々は良心の安らぎと、ある種の特別な霊的な喜びを得た。　その後、長老は、自身の修道室にある「憐れみの聖母」の聖像（彼はこれを「聖母のイコン」と呼んでいた）の前に灯されていたランプの聖油を用いて、来訪者の額に十字架の形を描いて塗った　――「*すべての喜びの喜び*」――と呼んでいた。また、それが正午前（すなわち、食事を摂るべき時間前）であった場合には、*大聖水*（エピファニーの水）*を*飲ませ、アンティドーラ、あるいは徹夜祈祷で聖別された祝福のパンを少し与えて祝福した；　その後、それがいつの時間帯であろうと、一人ひとりとキリストの口づけを交わし、キリストの復活の救いの力を思い起こさせ、　、聖母マリアの像や、自身の胸に下げた十字架に接吻させていた。　何らかの特別な病や心の苦しみについて打ち明けてきた人々に対しては、その状況に応じた特別な、慈愛に満ちた父のような助言と霊的な癒やしをもって慰め、安らぎを与えた。その他の場合、長老はキリスト教徒全般に向けた教訓、特に神への絶え間ない思い、祈り、そして貞潔について説いた。　こうしたあらゆる場面において、彼は特に、常に口と心に主の祈りである「主の祈り」、大天使の祈りである「聖母マリアよ、喜びなさい」、　「使徒信条」、そ

535　長老の務めは、修道生活における最も崇高な修行の一つであり、選ばれたごく少数の人々のみが成し遂げることができる。これは、「長老」による修道士たちや、霊的な慰めや助言を必要とするすべての来訪者への霊的指導と癒やしである。　自発的に師のもとを訪れる弟子たちは、師の前で自らの魂のすべてをさらけ出し、師への完全な服従を捧げる。一方、師はキリスト教の愛という最も困難な業と、彼らの魂に対する神への大きな責任を引き受けるのである。

536　長老は、東方において「聖別された者」、すなわち聖職の位を持つアヴマたちの間で今なお続く慣習に従って、これを行っていた。

してイエスの祈り――「主イエス・キリスト、神の御子よ、罪人である私を憐れんでください」――を常に口と心に留めておくよう遺言として残した。彼はこれらを特に効果的で救いをもたらすものと考えていた。　その他の訪問者の中には、時折、聖セラフィムのもとを訪れる貴族や国家要人もおり、彼は彼らに対して相応の教えを与え、ふさわしい敬意とキリスト教的な愛をもって接し、彼らの地位の重要性に留意しつつ、そこから聖なる正教会と祖国への忠誠を説いた。　皇族も長老を訪ねてきた。例えば1825年には、ミハイル・パヴロヴィチ大公が彼から祝福を受けた。しかし、特に多く訪れたのは、聖なる長老の聖性と透視能力を信じて、彼に教えだけでなく、時には生活上の援助をも求めてきた庶民たちであった。　――彼はそうした人々を精神的に慰めるだけでなく、その透視の力によって彼らの悲しみや困窮を助け、例えば貧しい農民たちには、失くしたり盗まれたりした財産がどこにあるかを示しつつ、その際、沈黙を守るよう戒めた。　また、彼はしばしば病人を癒やし、そのような際には、前述の彼の独房に掲げられた「憐れみの聖母」の聖像の前に吊るされたランプの油を、彼らの体に塗って癒やした。　しかし、それにもかかわらず、聖セラフィムは依然として自分の隠遁生活を完全に捨て去ったわけではなかった。沈黙の誓いを解き、訪問者を受け入れるようになったとはいえ、彼自身はどこへも出ず、自分の小部屋から一歩も外に出なかった。

やがて、聖セラフィムにとって、隠遁生活を完全に終える時が訪れた。しかし、その決断を下す前に、彼は隠遁生活の公的な終結について、神の至高の御心を求める祈りを捧げた。　そして1825年11月25日の夜、長老の夢の中に聖母マリアが現れ、その日祝われる聖クレメンス・ローマと聖ペトロ・アレクサンドリアと共に、彼に隠遁生活から出て修道院を訪れることを許した。　翌日、眠りから覚めていつもの祈りの規則を済ませた後、彼はその願いをイグメン・ニフォンに伝え、彼からそのための祝福を受けた。この時から、聖セラフィムは自分の荒野の庵を訪れ、そこで祈りを捧げるようになった。

特に頻繁に、長老はいわゆる「神学の泉」へと足を運んだ。この泉は修道院から2ヴェルスタ離れた場所にあり、セラフィムがサロフに入会する以前から古くから存在していたが、荒廃していた。水盤は丸太の積み重ねで覆われ、土で埋め尽くされており、　水はたった一本のパイプからしか流れ出ていなかった。泉の近くにある柱には、聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスのイコンが掲げられており、それがこの泉の名前の由来となっていた。この場所は、聖セラフィムに大変愛された。彼の希望により、泉は清掃され、修復された。　水溜まりを覆っていた土の盛り土は取り除かれ、その代わりに新しい丸太小屋とパイプが設置された。ここで長老は長い時間を過ごし、神への黙想と肉体労働に励んだ。というのも、病気のため、以前の修道室にはもう行くことができなくなっていたからである。長老はサロフカ川で小石を集め、それを使って泉の水溜まりを平らにし、　その傍らに畝を作り、野菜を植えた。泉の近くの小高い丘には、長老のために窓も扉さえもない小さな丸太小屋が設けられ、壁の脇から土の入り口を通って中に入るようになっていた。壁の下をくぐり抜けて、聖セラフィムは労働の後にこの粗末な隠れ家で休息し、真昼の暑さから身を隠していた；　その後、扉とストーブを備えた新しい独房が彼のために建てられたが、窓はなかった。ここで、この荒野で、彼は平日の日々を過ごし、夕方には修道院に戻っていた。この場所は「セラフィム父の下方の荒野」と呼ばれるようになり、泉は「セラフィム父の井戸」と呼ばれるようになった。

この謙虚で腰の曲がった老人が、鍬[537]　や斧に支えられながら、荒野で薪を割ったり、畝を耕したりしている姿は、胸を打つものだった。彼は、縁のない粗末なカミラフを被り、　肩には布製の白いローブを羽織り、その中には福音書と、自らの肉体を死に至らしめるための石や砂の荷が収められていた。なぜそんなことをするのかと尋ねる人々に対し、長老はこう答えた。

[537]「モティカ」とは、鍬、「キルカ」とは、鋤、「ザスタプ」とは、鉄製のシャベルのことである。

「私は、私を苦しめる者を苦しめているのだ。」

この恵み深い長老を訪ねる人々の数は著しく増えた。修道院で彼を待つ者もいれば、砂漠まで訪ねてきて、彼に会いたいと切望し、祝福と教えを受けようとする者もいた。　聖セラフィムが聖なる秘跡を受けた後、マント、エピトラヒリ、そして腕輪を身につけて、自分の小さな荒野の隠れ家へと戻ってくる姿は、見る者の心を打つものだった。彼の歩みは、周囲に群がる大勢の人々によって遅らされていた。　しかし、その間、彼は誰とも話さず、誰にも祝福を与えず、まるで誰のことも見ていないかのように、聖なる秘跡の恵みの力についての思索に深く没頭していた。この恵み深い長老を深く尊敬し、愛していたイグメン・ニフォントは、聖セラフィムを訪れる人々の多さについて、次のように語っていた。

「セラフィム神父が（最初の、そして遠い）荒野に住んでいた頃は、人々が訪れないよう、自分の住む場所への入り口をすべて木で塞いでいました。しかし今では、誰をも受け入れるようになったため、私は真夜中になっても修道院の門を閉めることができません。」

それ以来、神は聖セラフィムを通して、信者たちに真に偉大で尊い宝を開示された。とりわけ、恵みに満ちた長老の魂を癒やす会話は、ある種の特別な愛に満ちており、同時に静かで活力を与える力に満ちており、聴く者の心を深く慰めた。　そして、訪問者に対する彼の接し方はすべて、何よりもまず、深い謙遜と、すべてを赦す、力強いキリスト教の愛によって特徴づけられていた。　彼の言葉は、たとえ冷淡で無情な心でさえも温め、魂を霊的な悟りで照らし出し、涙と悔恨に満ちた悔い改めへと導き、根深い罪人や絶望した罪人でさえも、改心と救いの可能性に対する慰めの希望を呼び起こし、魂を恵み深い平安で満たした。　この神の御使いは、誰に対しても厳しい非難や叱責で打ちのめすことはなく、誰にも重い負担を課すことはなかった。彼はしばしば戒めの言葉を口にしたが、その言葉は謙遜と愛によって穏やかに包み込まれていた。　助言によって良心の声を呼び覚まそうと努め、救いの道を指し示しましたが、その方法は、聞き手が最初はその話が自分の魂についてであることに気づかないほどでした。しかしその後、恵みによって味付けられた言葉の力は、必ずやその効果を発揮したのです。　聖セラフィムは、その言葉も、人生全体も、そしてすべての行動も、常に神の御言葉、教父たちの著作、そして神に喜ばれた聖人たちの生涯から得られる教訓的な模範に基づいていました。　その際、長老はとりわけ、正教の信仰において最も勇敢な擁護者であり、闘士であった聖人たちを深く敬っていた。例えば、　バシレイオス大聖人、グリゴリオス神学者、ヨハネス・クラマティス、ローマ教皇クレメンス、アレクサンドリアのアタナシオス、エルサレムのキリロス、ミラノのアンブロシオスなどであり、常に信仰の不動性を守るよう説き、正教の純粋性が何にあるかを説明することを好んだ。　また、彼は自国の教会の聖人、例えばモスクワの聖ペトロ、アレクセイ、イオアン、フィリッポ、ディミトリイ・ロストフスキー、聖セルギイ、ステファン・ペルムスキーなどについて語ることも好んでおり、彼らの生涯を救いへの道の指針として示していた。　この恵み深い長老のすべての説教は、前述した特質に加え、聴衆のニーズに直接即しており、彼らの生活や、サロフの聖セラフィムを訪ねてきた個々の必要や事情に最も密接に関連していたという点でも、特別な力を持っていた。

聖セラフィムは、特に正教の純粋さを守り抜きました。ある分裂派の人から、「現在の教会の信仰と、昔の信仰のどちらが優れているか」と問われた際、この長老は力強くこう答えました。

「そんな戯言はやめなさい。我々の生活は海であり、聖なる正教会は船であり、舵取りは救い主ご自身である。」　もし、そのような舵取りがいながら、人々が自らの罪深い弱さゆえに、この世の海を辛うじて渡り、全員が溺れることから救われるわけではないのなら、お前は自分の小さな舟で一体どこを目指しているのか。そして、舵取りなしに救われるという希望を、何に基づいて抱いているのか？

ある時、サロフの修道院に、膝が胸まで縮こまってしまうほど体が歪んでしまった病の女性が運ばれてきました。彼女が聖セラフィムの独房に運び込まれると、聖人は彼女に、どこから来たのか、なぜそのような病にかかってしまったのかを尋ね始めました。　その女性は率直に、何も隠すことなく、長老の前でまるで告白するかのように心の内を明かした。彼女は正教会で生まれたが、偽りの教えに深く染まった分裂派の男と結婚し、　夫とその家族からの長年にわたる影響により、彼女は正教から遠ざかってしまい、その報いとして神が突然彼女を懲らしめたのだ。まるで火傷を負ったかのように体が焼けるような痛みを感じ、その後激しい痙攣が始まった。恐ろしいほどの痛みが、この不幸な女性を四年間も苦しめ続け、その間、彼女は足も手も動かすことができなかった。　恵み深い長老は病人に、今や私たちの母なる聖なる正教会を信じているかと尋ね、肯定的な答えが返ってくると、三本の指を交差させて十字を切るよう命じた。しかし彼女は、手さえも　上げられないほど衰弱していると答えた。　しかし、尊者が祈りを捧げながら、手元に吊るされていたランプの聖油で彼女の胸と手に塗ると、病は瞬く間に去り、彼女は癒やしを与えてくれた長老に感謝を捧げた。人々は、この奇跡を目の当たりにして驚嘆し、その知らせは修道院とその周辺に瞬く間に広まった。

清らかな精神ゆえに透視の賜物を得ていた聖セラフィムは、人々が相談のために訪れた事情を彼に打ち明ける前に、彼らの内面の感情や心の奥底にある思いに直結した教えを与えることがしばしばあった。そのため、そのような場面において彼の言葉は、より一層抗いがたい力を持って響いた。ここに、その特に印象的な一例がある。

ある日、好奇心から、功労あるL中将がサロフを訪れた。修道院の建物を視察したが、魂に何も得るものがなかったため、彼はすでに帰ろうとしていた。しかし、プロクディンという名の地主が彼を引き止め、隠遁者である長老セラフィムに会ってみるよう説得した。　高慢な性格の将軍は当初断ったが、プロクディンの執拗な説得に折れて、長老に会うことに同意した。彼らが小部屋に足を踏み入れるやいなや、長老は彼らを迎えに出てきて、将軍の足元に頭を下げた。その謙虚な姿に、高慢な将軍は深く感銘を受けた。　一方、プロクディンは、自分まで修道室に同席すべきではないと悟り、玄関へと退いた。そして、勲章を身につけた将軍は、約半時間にわたり長老と語り合った。数分後、セラフィムの修道室から泣き声が聞こえてきた。それは、まるで幼子のように泣いている将軍の声だった。　30分後、扉が開き、聖セラフィムが将軍の両腕を支えて連れ出した。将軍は顔を両手で覆ったまま、泣き続けていた。勲章と軍帽は、彼が長老の独房に置き忘れていた。長老はそれらを持ち出し、軍帽に勲章を付けた。　その後、この将軍はこう語った。「私はヨーロッパ中を旅し、様々な人々を知っているが、サロフの隠遁者が私を迎えてくれたような謙虚さを目の当たりにしたのは人生で初めてだった。また、長老が私の生涯の最も秘められた詳細に至るまで見抜いたような、そのような洞察力が存在することなど、これまで知らなかった」と。　ちなみに、セラフィムとの会話の最中、将軍の勲章が落ちてしまったが、その時、長老はこう指摘した。

「それは、君がそれに値しないのに受けたからだ。」

恵み深い長老の愛は、まるで万物を包み込み、限りないもののように見えた。彼は、母親が最愛のひとり息子を愛する以上に、すべての人、一人ひとりを愛しているかのようだった。　隣人のどんな苦しみや悲しみであれ、彼がそれを分かち合わず、自らの魂に受け入れず、そしてそれを癒やすための適切な治療法を見つけ出さないようなものはなかった。　こうして彼は、正教会のロシアの人々の目には、苦しむ者、重荷を負う者、悲しむ者、憤りを感じる者、神の慈悲と恵み深い助けを求めるすべての人々のための避難所、精神的な支え、そして慰めとなった。　あらゆる年齢、身分、立場、そして男女を問わず、人々はまるで子供のような純真な信頼をもって、彼の前で心と魂を、疑いや困惑、霊的な必要や悲しみ、過ちや罪深い思いなどを、誠実かつ率直に打ち明けた。　それらの謙虚な告白において、偽りの恥や隠し事など一切なく、しばしば恵まれた長老自身が助けに駆けつけ、訪問者の魂を透視するように読み取り、その人の前で声に出してその罪や思いを開示した。　そして、慈愛に満ちた聖なる長老は、すべての人を満足させ、慰めた。富める者も貧しい者も、素朴な者も学

識ある者も、卑しい者も高貴な者も、誰も彼のもとを、安堵と心の平安、真の教えと恵み深い慰めを得ずに去ることはなかった。　特に彼の生涯の最後の10年間は、毎日千人、時には二千人以上もの人々が彼のもとに集まってきた。　しかし、聖なる長老はこれを煩わしく思うことなく、誰とでも魂の益となるよう語り合う時間を見つけ、一人ひとりに、その人にまさに必要なことを簡潔な言葉で説明した。そして、誰もが彼の偉大な愛とその恵み深い力を感じ取り、堅く石のように固まった心を持つ人々でさえ、しばしば涙が溢れ出ることもあった。

しばしば、聖セラフィムは多くの人々から嫉妬や非難、あるいは困惑を招いた。それは、彼が誰をも区別することなく受け入れ、すべての人に等しく善を行い、性別、身分、財産、あるいは道徳的資質を問わず、訪れる人々全員に等しく耳を傾け、慰め、導いたからである。　これについて、聖セラフィムは度々こう語っていた。

「仮に私が自分の修道室の扉を閉ざしたとしよう。慰めの言葉を求めてやって来る人々は、神の名にかけて扉を開けてほしいと私に懇願し、私から返答を得られなければ、悲しみに暮れて家路につくだろう……そのとき、私は神の最後の審判の場で、神に対してどのような弁明ができるだろうか？」

またある時、ある修道士が長老に「あなたは皆に何を教えているのですか」と尋ねると、長老はこう答えました：

「私は教会の教えに従っている。教会はこう歌っている。**『神の言葉を隠してはならない。その御業を宣べ伝えよ』**[538]。」

このように、聖なる長老は、訪ねてくるすべての人を受け入れることを、良心の務めであり、人生の義務であると考えていました。そして、そのことについて、神は最後の審判の日に彼に説明を求めるであろうと。　しかし、それにもかかわらず、長老は、自分を訪ねてきた人々が自分の助言に耳を傾け、教えに従い、罪と滅びの道から徳と救いの道へと歩みを変えるのを見ても、それを自分の行いの成果として誇ったりはせず、何も自分に帰することなく、すべてのことを「感謝すべき方」である神に祝福を捧げ、そのような時にはこう語った。

「**主よ、私たちではなく、私たちではなく、あなたの御名に栄光を帰してください。あなたの慈しみと、あなたの真実のために**」（詩篇113:9）。

また、彼は同じことについて次のように語った。

「私たちは、イエス・キリストの教えに従い、この世のあらゆる喜びを自分の中から取り除かなければなりません。キリストはこう言われました。**『悪霊たちがあなたがたに従うことを喜んではならない。むしろ、あなたがたの名前が天に記されていることを喜べ』**（ルカ10:20）。」

ある日、ウラジーミル州の商人と、ヴィソゴリスカヤ修道院の建設者であるアントニー神父[539]が、同時に聖セラフィムの修道室を訪れた。聖人は愛を込めて、穏やかに、そして優しく、その商人の欠点を指摘し、それにふさわしい教えを授けた。　その恵み深い長老の言葉は、心の温もりに満ちあふれていたため、その言葉の宛先であった商人だけでなく、たまたまその場に居合わせたアントニー神父までもが、涙を流すほど心を打たれた。商人が小部屋を出た後、アントニー神父は聖なる長老にこう語りかけた。

「師よ！人の魂は、鏡に映る顔のように、あなたの前ではさらけ出されています。この信心深い者の話をまだほとんど聞いていないのに、あなたはすでに彼にすべてを語り尽くしておられました。今、私はあなたの心があまりにも清らかで、隣人の心の中に隠されたものは何一つないのだと悟りました。」

---

[538] 受難週の火曜日の晩課において、「主よ、私は叫びました」のスティヒラより。第4声。

[539] 後に、トロイツェ＝セルギエフ・ラヴラの有名な代理修道院長となった人物。

しかし、聖セラフィムは、まるで相手の口を塞ぐかのように、その手に自分の手を重ねてこう言った。

「そうではない、わが喜びよ。人の心はただ主のみに開かれており、心を知るのは神のみである。そして**『人の内なる生活に至るまで、心の奥底に至るまで』**（詩篇63:7）とあります。」

「しかし、神父様、どうして――」とアントニー神父は再び尋ねた。「商人に一言も尋ねることなく、彼に必要なものはすべておっしゃったのですか？」

すると、聖セラフィムは謙虚にこう答えました：

「彼は他の人々やあなたと同じように、神のしもべのもとへやって来たのです。私、罪深いセラフィムは、自分が罪深い神のしもべであると信じています。主がご自身のしもべとして私に命じられることを、私は助けを求める者に伝えるのです。」　私の心に最初に浮かぶ思いは、神の導きであると受け止め、相手の心の内を知ることなく、ただ神の御心がその人の益となるよう私に示していると信じて語るのです。　鍛冶屋が鉄を扱うように、私も自分自身と自分の意志を主なる神に委ねます。神の御心に適うままに行動し、私自身の意志は持ちません。神の御心に適うことを、そのまま伝えるのです。

ところで、聖セラフィムのこの恵み深い洞察力は、実に並外れたものでした。手紙を受け取ると、彼はしばしば封を開けることなくその内容を知り、「貧しいセラフィムよりこう伝えてください」などと返答していました。　彼が安らかにこの世を去った後、当時すでに返事が書かれていた、そのような開封されていない手紙が数多く見つかった。聖なる霊によって、この長老は、一度も会ったことのない、彼から数千ヴェルストも離れた場所に住む多くの修行者たちと心を一つにしていたのである。　ザドンスキーの聖母修道院の隠遁者ゲオルギーの中に、「もっと人里離れた場所へ移るべきではないか」という考えが浮かんだとき――彼自身以外、誰もこの秘密の迷いを知らなかった――突然、サロフの荒野から父セラフィムを訪ねてきたある巡礼者が彼の元へやって来て、こう言った。

「セラフィム神父が、あなたにこう伝えるよう命じました。『これほど長い間隠遁生活を送りながら、自分の居場所を去ろうとするような敵対的な思いに打ち負かされるのは恥ずべきことだ。どこにも行ってはならない。至聖なる聖母マリアが、ここに留まるよう命じておられる』と。」

そう言うと、その旅人は一礼して去っていった。その後、彼を探したものの、修道院の中にも外にも、もはや彼の姿は見つからなかった。

神の御使いミトロファン、すなわちヴォロネジの初代司教について、また彼の今後の列聖については、まだ何も聞かれていなかった。　いかなる啓示も、いかなる御出現もまだなかった。それにもかかわらず、聖セラフィムは、自らの手で記した数行の文章の中で、ヴォロネジの大司教アントニー殿下に対し、神の御愛する者ミトロファンの聖遺骨の発見を祝賀していた。

ある平信徒、A.G.ヴォロティロフという人物に対し、長老は度々、三つの大国がロシアに反旗を翻し、国をひどく疲弊させるだろうと語っていた。しかし、正教のため、主はロシアを憐れみ、守ってくださるだろうとも。当時、この言葉の意味は理解できなかったが、その後の出来事が、長老がクリミア戦争について語っていたことを明らかにした。

1831年以降、セラフィムは多くの人々に迫り来る飢饉を予告し、彼の助言に従って、サロフの修道院では6年分のパンを備蓄した。その結果、修道院では飢饉に見舞われることはなかった。 ロシアで最初のコレラが発生した際、尊者は、サローフにもディヴェエヴォにもコレラは流行しないと公然と予告した。そして、これらの予言は完全に的中し、最初のコレラ流行の際、サローフでもディヴェエヴォでも、一人として亡くなる者はいなかった。

長老は過去も未来も等しく見通しており、数語で人のこれからの人生を概説し、一見奇妙に思えるような説教や助言をしましたが、後になって状況がそれを裏付け、それらは洞察に満ちたものであることが明らかになりました。

先見の明という賜物に加え、主は尊者セラフィムにおいて、肉体の病や不調を癒す恵みも引き続き示された。　それより以前、1823年、長老が隠遁生活を完全に終える前に、神から授けられたこの奇跡的な恩寵の最初かつ最も顕著な現れの一つとして、アルダトフスキー郡の隣人である地主M.V.マントロフの、いかなる治療にも応じなかった病気を癒やしたことが挙げられる。　病状が深刻化し、患者の足から骨の破片さえ脱落するほどになり、医学的治療へのあらゆる希望が失われたとき、　マントロフは、親しい人々や知人の助言に従い、自身の領地ヌチから40ヴェルスト離れたサロフへ赴き、当時すでにその聖なる生活がロシア全土に広まっていたセラフィム神父のもとを訪れることを決意した。　大変な苦労の末、マントーロフは、その恵み深い隠者の庵の玄関に運び込まれ、涙ながらにこの恐ろしい病からの癒やしを懇願した。すると、長老は心からの同情と父のような愛をもって、彼に「神を信じているか」と尋ねた。　病める者から、神への揺るぎない信仰を三度も力強く誠実に確約された後、尊師は優しくこう言った。

「わが喜びよ！　もしあなたがそのように信じているのなら、信じる者には神からすべてが可能であることも信じてください。ですから、主があなたをも癒してくださることを信じなさい。そして、この貧しいセラフィムが祈りを捧げましょう。」

その後、彼は自分の小部屋へ退き、しばらくして、「憐れみの聖母」の聖像の前に吊るされたランプから聖油を取り出し、マントロフに足を露わにするよう命じて、患部に聖油を塗った。　するとたちまち、体を覆っていたかさぶたが瞬く間に剥がれ落ち、マントロフは癒やされ、誰の助けも借りずにサロフの奇跡行者の小部屋から出て行った。　マントロフが癒やされたことを感じ取り、喜びのあまり尊者の足元に飛び込み、その足に口づけをして癒やしへの感謝を捧げると、長老は彼を持ち上げながら、厳しくこう言った。

「セラフィムの務めが、人を死なせたり生かしたり、地獄へ落としたり天へ上げたりすることだとでも思っているのか、神父よ？　それは、御自身を畏れる者たちの意志を成し遂げ、その祈りに耳を傾ける唯一の主の御業である。全能の主と、その聖母マリアに感謝を捧げよ。」

そう言い終えると、謙虚で賢明な神の御使いは、マントロフを見送った。

1827年に聖なる長老が成し遂げた、ある女性アレクサンドラ――庭師レベデフの妻――の癒やしも、同様に驚くべきものであった。　彼女は一年以上にわたり、一見理由もなく襲ってくる恐ろしい発作に苦しんでいた。その発作は嘔吐、歯ぎしり、全身の痙攣を伴い、その後、患者は完全な意識喪失に陥った。このような発作は毎日繰り返されていた。　医師たちがこの病を治そうと投与した薬は全く効果がなく、　しかし、ある経験豊富で信仰深く誠実な医師が、この患者に特に心からの同情を寄せ、彼女のために全精力を注ぎ、知識と医療技術を尽くした末、ついに彼女に「全能の神の御心に委ね、神に助けと保護を請うべきだ」と助言した。なぜなら、人間には彼女を治すことなど誰にもできないからである。　この言葉は、病人の周囲の者たちを深い悲しみに陥らせ、彼女自身も絶望の淵に突き落とした。そしてある夜、見知らぬ、非常に年老いた女性が彼女の前に現れた（　）。病人が恐怖のあまり聖十字架への祈りを唱え始めると、その女性は彼女にこう言った。

「私を恐れないでください。私も人間ですが、今はこの世ではなく、死者の国から来たのです。病床から立ち上がり、急いでサロフの修道院へ、セラフィム神父のもとへ行ってください。彼は明日、あなたを待っており、あなたを癒やしてくださるでしょう。」

病人は勇気を振り絞って彼女に尋ねた。

「あなたは一体誰で、どこから来たのですか？」

現れた女性は答えた。

「私はディヴェエフスカヤ共同体の者です。初代修道院長はアガフィヤです。」

翌日、家族は病人をサロフへと連れて行ったが、道中、彼女は恐ろしい失神や痙攣に襲われた。病人がサロフに到着したのは、遅い聖体礼儀の後、修道士たちの食事の最中で、その時には尊者様は閉室され、誰の面会も受け付けていなかった。　しかし、病人が彼の独房に近づき、いつもの祈り

を捧げる間もなく、長老は彼女のもとへ出てきて、その両手を握り、自分の独房へと招き入れた。そこで彼は彼女にエピトラヒリオンを掛け、主と至聖なる聖母マリアに向けて静かに祈りを捧げた。その後、病人にエピファニーの聖水を飲ませ、聖体の断片とパン三枚を与え、こう言った。

「毎日、聖水と一緒に乾パンを一つずつ摂りなさい。そしてディヴェエヴォへ行き、神のしもべアガフィアの墓を訪ね、土を少し取り、できる限り深く頭を下げなさい。彼女（アガフィア）はあなたを憐れみ、あなたの癒やしを願っているのだ。」

さらに祈りについていくつかの簡潔な教えを授けた後、尊者は病人を安らかに送り出した。すると、その瞬間、彼女の病は極めてはっきりと、まるで何らかの音を立てて去っていった。その後、病は彼女に戻ることはなく、彼女は多くの息子や娘に恵まれた。

聖セラフィムは重病の者たちに対して数多くの奇跡的な癒やしを成し遂げたが、その多くは記録に残されている一方で、他のものは彼に恩恵を受けた人々の心の石板にのみ刻まれたままである。神の御心に適う者の生涯を簡潔に語るだけでは、それらすべてを書き記す余地はないだろう。　これらすべてのケースにおいて、先述したように、長老は病人の体に、自身の小部屋の「*憐れみ深き聖母*」のイコンの前に灯されていたランプの油を塗る習慣を持っていました。そして、なぜそうするのかと尋ねられると、次のように答えていました。

「聖書には、使徒たちが油を塗ったと書かれており、それによって多くの病人が癒やされた。私たちが使徒たちに倣う以外に、誰に倣えばよいというのか？」

そして、尊者によって油を塗られた病人は、癒やされたのである。

セラフィムの独房には多くのランプが灯り、大小さまざまな蝋燭が、幾つもの丸い托盤の上でほのかに燃えていた。ある訪問者が「これは一体何のためか」と心の中で思ったとき、洞察力に富んだ長老はこう答えた。

「ご存知の通り、私には、私を慕い、私の『製粉所の孤児たち』（セラフィム・ディヴェエフスキー修道院の修道女たち）に施しをしてくださる方々が大勢いらっしゃいます。彼らは私に聖油や蝋燭を捧げ、彼らのために祈ってほしいと頼んでくるのです。　そこで、私が祈祷規則を唱える際、まず最初に一度、彼女たちのことを記念するのです。しかし、規則の箇所ごとに彼女たちの名前を繰り返し挙げることはできませんので、彼女たちのためにこれらの蝋燭を神への捧げ物として供えるのです――一人につき一本の蝋燭、あるいは数人のために一つの大きな蝋燭を――そして、必要に応じて、名前を挙げずにこう祈ります：　主よ、これらすべての人々、あなたのしもべたちを覚えてください。彼らの魂のために、この貧しい私が、あなたにこれらのろうそくと燭台を灯しました。　そして、これが私、貧しいセラフィムによる人間的な作り話でも、あるいは単に神聖な何ものにも基づかない私の熱意だけでもないことを示すために、聖書の言葉を引用して裏付けたいと思います。　聖書には、モーセが主の声を聞き、主が彼にこう言われたと記されています。「**会幕の啓示の箱の垂れ幕の外で、アロン［とその子ら］は、夕暮れから朝まで、常にこれを主の御前に置かなければならない。これはあなたがたの代々の永遠の定めである**」（レビ記24:3参照）。　それゆえ、神の聖なる教会は、聖なる教会堂や忠実なキリスト教徒の家において、主、神の母、聖なる天使たち、そして神に喜ばれた聖人たちの聖なるイコンの前に、キャンドルやランプを灯す習慣を定めたのである。

また、「セラフィモフの井戸」と呼ばれるようになった神学的な泉について、長老は後に次のように語りました。

「私は、この井戸の水が病気を癒す力を持つよう祈りました。

すると、この泉の水は、今日に至るまで保たれている、特別で並外れた治癒の力を得た。この水は、たとえ何年もの間、蓋のされていない器の中に置かれていても、腐らない。　どの季節であっても、病人も健常者も、厳しい寒さの中でもこの水で体を洗い、その恩恵を受けている。　痛ましい潰瘍にひどく苦しんでいた多くの人々に対し、聖セラフィムはこの泉の水で体を洗うよう命じ、皆がそれによって癒やされた。　この水で体を洗ったことで視力を取り戻した者もいれば、それを口にし

たことで内臓の病から速やかに癒やされ、重い病の床から健康で元気な姿で起き上がった者もいた。ある女性、M.V. シピャギナは重病を患っており、病による恐ろしい苦悩を感じていました。彼女は熱心であったにもかかわらず、断食日には規則で定められた食事をとることができませんでした。聖セラフィムは彼女に、その泉の水を飲むよう命じました。 その後、彼女は何の強制もなしに喉から大量の胆汁を吐き出し、癒やされた。前世紀30年代のコレラ流行の際、遠く離れた国々からも多くの信者が「セラフィムの井戸」に集まり、信仰によってその治癒の恵みを受け、安らぎと癒やしを得た。 例えば、エカテリノスラフ県に領地を持っていたテプロフ中尉は、その地でコレラによる多大な死者が出始めた際、家来たちが次々と病に倒れるのを見て、かつて聖セラフィムが、まるで何気なく彼にこう言っていたことを思い出した。

「もしあなたが苦難に直面したら、貧しいセラフィムの庵を訪ねなさい。彼はあなたのために祈ってくれるだろう。」

この言葉を思い出した彼は、妻と共に、この致命的な病から彼らを救ってくれるよう、遠隔で長老セラフィムに祈りを捧げることにした。するとその夜、夢の中で長老がテプロフの妻の前に現れ、彼女に「神学の泉」へ行き、そこから水を汲んで、テプロフ夫妻も使用人たちも、その水を飲み、体を洗うようにと命じた。 神の御使いセラフィムの取り成しの力を完全に信じて、テプロフ夫妻は泉へと向かい、その水を飲み、体を洗い、さらにその水を樽いっぱいに汲み、自分たちの領地へと持ち帰った。 そして実際、テプロフ家の病人たち――その多くはすでに死の淵にいた――は、送られてきたその水だけを飲むことで驚くべき癒やしを受け、それ以来、テプロフ家の領地でコレラで亡くなる者は一人もいなくなった。

しかし、聖セラフィムは地上のことだけを見ていたわけではない。天の神秘も幾度となく彼に啓示された。ある時、聖なる長老に対して幼子のような純真さをもって接していた修道士ヨハネと、神の聖人たちの生涯、彼らの賜物、そして天の約束について長時間にわたって語り合った後、聖セラフィムは彼に何度かこう繰り返した。

「わが喜びよ、お願いだ。平安の霊を身につけなさい。そうすれば、あなたの周囲で千の魂が救われるだろう。」

その後、その尊師はご自身についてもこう語られました。

「私は、私の主イエス・キリストの御言葉、**『わたしの父の家には、住むべき所がたくさんある』**（ヨハネ14:2）に心を慰められました。」そして、この貧しい私は、この言葉に心を留め、その天の住まいをこの目で見たいと願い、主イエス・キリストにそれらを見せてくださるよう祈りました。すると、主は私という貧しい者から御慈悲を奪うことなく、 こうして私は、その天の住まいへと連れ去られた――ただ、肉体と共にだったのか、それとも肉体から離れてだったのかは分からない。神のみぞ知る、それは計り知れないことだからだ。そして、私がそこで味わった天の喜びと甘美さについては、あなたに語ることは不可能である。

そう言い終えると、尊者は黙り込み、少し前かがみになり、頭を垂れ、目を閉じた。そして、右手の掌を差し伸べ、穏やかに、静かに胸元で動かしていた。 その顔は不思議なほどに変わり、あまりにも並外れた光を放っていたため、直視することさえできなかった。そして、その唇や、悟りを開いた顔のあらゆる表情には、これほどまでに霊的な喜びが輝いており、まるで地上の天使のようで、何かを感動しながら見つめ、耳を傾けているかのようだった。

そうして30分ほどが過ぎた後、修道士はこう語りかけた。

「ああ、愛する者よ、もしあなたが、天国で義人にどのような喜び、どのような甘美さが待ち受けているかを知っていたなら、この世の生活において、感謝を込めて苦難に耐える決意をしたことでしょう。 たとえこの修道室そのものが虫で満たされ、それらが私たちの生涯を通じて私たちの肉

を食い尽くしたとしても、その天の喜びを失わないためなら、喜んでそれを受け入れなければならないのだ。

この恵み深い長老の影響力は、サロフの修道院だけに留まりませんでした。彼は、地元の女子修道院の発展においても極めて重要な役割を果たしました。 特に感動的だったのは、1780年頃にウラジーミル州の地主であり、大佐の未亡人であるアガフィヤ・セメノヴナ・メルグノヴァによって設立されたディヴェエヴォの修道共同体に対する、聖セラフィムの関係であった。若くして夫を亡くした彼女は、自分の人生を神に捧げる決意を固め、その目的のために多くの聖地を巡礼した。 そして、サロフ修道院から12ヴェルスタほど離れたディヴェエヴォ村で休息していたとき、彼女は半睡の状態で聖母マリアを目撃し、その場所にとどまり、カザンの奇跡の聖像に捧げる教会を建立するよう命じられた。 その後、アレクサンドラという名で修道に入ったメルグノワに、 をはじめとする他の修道女たちが加わり、こうしてディヴェエフ修道院の礎が築かれた。この修道院は、聖セラフィム・サロフスキーの名と切っても切れない関係にある。 さらに、ディヴェエフ修道院の創設者自身も、臨終の際、当時修道助祭であった聖セラフィムに姉妹たちの将来の行方を託し、また、サロフの修道院長であった至福の老長老パホミイも、この世を去るにあたり、ディヴェエフの共同体の世話も彼に委ねた。 聖セラフィムは、真に父のような愛と配慮をもって彼女たちを世話した。 ディヴェエフの修道女たちは、祝福や様々な悩みへの解決を求めて彼の元を訪れ、自分たちの必要を伝えていた。長老は、共同体の生活や規則に細心の注意を払いながら、彼女たちに善き、そして魂に有益な助言を慈愛をもって授けていた。

聖人の祈りにより、彼に特別な信仰を寄せ、その祈りによって癒やしを受けた慈善家たちの資金のおかげで、ディヴェエフの共同体は著しく拡大した。これは、共同体の人口増加そのものが求めていたことでもあった。 それと同時に、聖セラフィムは、共通の統率と指導の下で修道院を二分し、ある距離を置いた場所に特別な塀を囲んで、独立した礼拝堂を備えた新しい修道室を建て、いわば新しい小修道院が現れた。 「これには」と彼は語った。「主と聖母マリアの御心がある」。神の御心にかなう者がこのように行ったのは、清らかな処女たちが、ある期間結婚生活を送った未亡人たちと一緒に暮らすことは不適切であり、有益ではないと考えたからである。 至聖なる聖母の指示に従い、長老はこのために、カザン・ディヴェエフスカヤ教会から100サジェンの距離にある、この目的のために寄進された土地を選び、新たに取得した土地にはディヴェエフの修道女たちのために専用の水車小屋を建設した。 このようにして、聖セラフィムは、前述のアガフィヤ・セメノヴナ・メルグノヴァによって設立された以前の共同体とは別の、いわゆる「セラフィモ・ディヴェエフスカヤ」という独自の共同体を設立した[540] 。

ディヴェエフの修道女たち、とりわけ聖セラフィムが新たに分離された共同体の修道女たちを「自分の製粉所の孤児たち」と常々呼んでいた者たちの世話をしながら、 彼は、苦難に満ち、厳しい欠乏に苛まれる修道生活における彼女たちの悲しみを絶えず慰め、気弱な者たち——その中には世俗の生活に戻ろうとする者さえいた——を留め置いた。当時、修道院には何の保障もなかったため、多くの者が極度の欠乏に耐えかねていたのである。 しかし、聖セラフィムの恵み深い影響のおかげで、ディヴェエフスカヤ修道院は、聖なる長老の父のような導きの下で、神に奉仕する修道生活を求める修道女たちをますます惹きつけるようになった。中には、聖なる長老の祈りによって癒やされたことへの感謝の念から、ディヴェエフスカヤ修道院で自らの生涯を神に捧げる者もいた。 また、聖長老はその先見の明により、幼少期からある者たちをあたかもこの道に定められたかのように見抜き

[540] 1842年7月27日、両部門を構成する共同生活を行うディヴェエフスカヤ修道院の承認に関する聖シノドの勅令が下された。 1861年、ディヴェエフスカヤ共同体は三等女子修道院に昇格し、現在ではロシアで最も信徒が多く、設備の整った女子修道院の一つとなっており、1000人、さらにはそれ以上の修道女を収容している。

、その定められた使命の精神に基づき、修道院への入所へと導いた。そして、共同体のシスターたちが、物質的な保障の欠如や状況の不確実性を理由に、共同体の将来を案じて　そのことを心配して騒ぎ立てると、長老は彼女たちを慰め、「この場所は天の女王ご自身が彼女たちのために選ばれたものであり、女王があらゆる面で助けてくださる。そうすれば、彼女たちには自分たちのパンも教会もあり、教会の規則もサロヴェのようになるだろう」と語り、また「貧しいセラフィム」である自分は、常に彼女たちのためにひざまずいて祈っていると述べた。　ディヴェエフスカヤ修道院の修道女たちは、尊者セラフィムに完全に従順であった。長老の祝福なしには、何事も始めなかった。ある修道女が一時的に修道院を離れようとしたときは、出かける前も、修道院に戻った後も、祝福を受けるために尊者の元を訪れた。

ディヴェエフスカヤ修道院の修道女たちのために、セラフィムは特別な祈りの規則を残したほか、聖具室や教会の財産の管理などに関する指導も与えた。当初、「製粉共同体の」修道女たちは、独立した専用の礼拝堂を持っておらず、それは彼女たちにとってかなり大きな不便となっていた。しかし、神の御心にかなう者が前述のマントロフを奇跡的に癒やした後、彼は長老への感謝の念から、その信念に従って自身の領地を売却し、全財産を「製粉共同体の」修道女たちのための大きな石造りの礼拝堂建設に捧げた。　この教会は、キリストの降誕と聖母マリアの降誕に捧げられた二つの祭壇を持つものとして建てられ、1829年に奉献された。

手仕事の労苦と功績に関しては、聖セラフィムはディヴェイの修道女たちに対し、庶民にふさわしい労働に専念するよう定めた。 しかし、絵画や 、絹や金糸を使った刺繍、その他、ある程度の知的な集中を要し、芸術や贅沢品に属する類の作業については、長老は許可しようとしなかった。

長老のこうした遺言はすべて、ディヴェイェの共同体において厳格に遵守された。それらから逸脱することは、通常、修道院にとって不愉快な結果を招いたが、セラフィムは自らの祈りによって、修道院を困窮や災難から守っていた。　例えば、尊者は、自身が建立したキリスト降誕教会において、常に詩篇が朗読され、救世主のイコンの前には消えることのない蝋燭が、聖母マリアのイコンの前には消えることのないランプが灯り続けるよう遺言し、さらに、この遺言が正確に履行されれば、ディヴェエフの共同体は困窮や災難に遭うことはなく、そのための油も決して尽きることはないだろうと付け加えた。　しかしある日、教会係の女性が、皆が教会から出て行った後、油がすっかり燃え尽きてランプが消えているのを見つけた。しかも、それは最後の油だった。その時、彼女は長老セラフィムの遺言を思い出し、彼の言葉が実現しなかったのだから、他の予言も信用できないのだと考えた。　恵み深い長老の先見の明に対する信仰が、彼女の中から薄れ始めていた。しかし突然、パチッという音が聞こえ、彼女がうつむいてみると、ランプが灯り、油で満たされており、その中に二枚の小さな紙幣が浮かんでいた。　動揺した彼女は、奉仕先であるエレナ・ヴァシリエヴナ・マントロヴァ老婦人のもとへ急ぎ、その不思議な幻視について語ろうとした。道中、ある農民に出くわし、彼は両親の冥福を祈るために、消えることのないランプの油代として300ルーブルの紙幣を彼女に託した。

ディヴェエフの修道女たちへの遺言にとどまらず、はるかに先を見据えていた聖セラフィムは、生前に大聖堂を建設するための場所をすでに用意していた。それまでは、修道女たちは祈りの場として教区の教会を利用していたのである。

「私たちにも、母上、」と彼はディヴェエフの年老いた修道女の一人を慰めながら言った。「私たち自身の大聖堂ができるでしょう。私たちの土地には、私たち自身の家畜――羊や牛――もいます。母上、どうして落ち込む必要があるでしょう？　すべてが私たちのものになるのです。修道女たちは畑を耕し、小麦を蒔くことになるでしょう。」

大聖堂の建設を念頭に、師はカザン教会の近く、旧修道院と新修道院の中間地点に建設地を選び、土地購入のための資金も調達した。しかし、諸事情により、大聖堂の建設は無期限に中断された。

こうしてセラフィムは、前述のアガフィヤ・セメノヴナ・メルグノヴァによって設立された以前の共同体とは別の、いわゆる「セラフィム＝ディヴェエフスカヤ」という独自の共同体を形成した。　しかし、精神的には、彼はメルグノフの共同体をディヴェエフスカヤ共同体から切り離すことはなく、両者の創始者を修道女アレクサンドラ（メルグノヴァ）と見なし、その記憶を深く敬っていた。また、新しく設立された共同体の守護者としては、長老は聖母マリアを認めていた。

「ほら、修道女よ、知っておいてください」と、彼はある年配の修道女にこう語った。「この場所は、天の女王ご自身が御名の栄光を現すために選ばれたのです。御方があなた方の盾となり、守りとなってくださいます。」

同様の配慮と愛をもって、聖セラフィムは、アルダトフ修道院[541]　およびゼレノゴルスク女子共同体[542]　についても世話を焼いた。これは、驚くべき幻視の中で、これら三つの女子修道院の指導と整備を彼に託した聖母マリアの恵み深い約束を果たすためであった。

生涯の終わりに近づくと、この聖人は神から並外れて素晴らしい恵みの賜物を受けました。彼はもはや自分の小部屋の扉を二度と閉めることはなくなりました。隣人との接し方において、彼には常にキリスト教的な柔和さと謙遜の精神がはっきりと表れていました。　修道者たちとの対話も、信徒たちとの対話も、その驚くべき簡素さによって、非信者や信仰の薄い人々でさえも深く、抗いがたい感銘を与え、彼らを救いをもたらす悔い改めの道へと導いた。　素朴な人々も、学者も、そして分派者たちも、彼との対話から大きな霊的な啓発と慰めを得た。この恵まれた長老には、透視の賜物と奇跡を行う力がますます高まっていった。　セヴァストポリの戦役に参加した多くの将軍、将校、兵士たちの証言によれば、尊者から旅立ちの祝福と聖水を授かり、戦場で信仰をもって「主よ、長老セラフィムの祈りによって憐れみをお与えください！」と繰り返し唱えた者たちは　と唱えた者たちは、極度の危険や避けられない死が目前にあっても、無傷で無事であり続けた。聖セラフィムは、　、普通の凡人には到底予測できない未来について、魂に有益な教えを頻繁に与え、また、教えを求める者たちの心の内にある疑問を、彼らが口にする前に先読みして読み解くことができた。　ある日、二人の若い女性が彼の元を訪れた。一人はすでに年配で、若き頃から神への愛に燃え、修道生活を求めていた。もう一人は若く、修道生活など全く考えていなかった。　しかし、聖なる長老は、前者に対して「修道への道はないが、結婚すれば幸せになれる」と言い、後者に対しては「あなたは修道女になる」と告げ、彼女が修行することになる修道院の名前まで挙げた。　二人の乙女は、困惑と不満を抱えて長老のもとを去ったが、その後の展開は長老の言葉を裏付けるものとなり、聖なる長老の予言は正確に的中した。　人間の魂は、まるで鏡に映る顔のように、その尊者にはさらけ出されていた。偽りの羞恥心から長老の指摘を恐れる者たちに対しては、長老自らが彼らの罪を語り、あたかもその場で犯されたかのように告発した。　しばしば、この神の御使いは、その姿と簡素な言葉だけで罪人たちに自覚をもたらし、彼らは自らの悪癖を改めようと決意した。ある時、一人の農民が群衆をかき分けて彼のもとへ近づこうとしたが、そのたびにまるで誰かに突き返されるかのようだった。ついに長老自身が彼に声をかけ、厳しく尋ねた。　「お前はどこへ押し入ろうとしているのだ？」農夫の顔には大粒の汗がにじみ、彼はそこにいた全員の前で、深い謙遜の念を抱きながら、自らの悪癖、とりわけ直前に犯した窃盗について声に出して悔い改め始めた。彼は、そのような光の御前に現れるに値しないことを自覚していたのである。

聖なる隠者からは尽きることのない癒しの力が溢れ出ていたが、彼はかつて指摘された際、これらは「貧しい」自分によるものではなく、聖母マリアとキリストの使徒たちの祈りの取り次ぎによるものだと、謙虚に反論していた。　セラフィムの泉から水を飲み、顔を洗った人々は皆、彼の祝福

---

[541]　1861年、1800年頃に町民のヴァシリッサ・ドミトレヴァ・パホモヴァによって設立されたポクロフスカヤ・アルダトフスカヤ共同体は、三等修道院の地位に昇格した。

[542] 現在は、スパソ＝ゼレノゴルスキー第三級共同生活女子修道院となっている。

により、それぞれの病から驚くべき癒やしを受けた。この水は、尊者セラフィムの祈りによって、そのような治癒の力を授かっていたのである。　両手が完全に麻痺していたある修道士に対し、長老は聖水を盛った器を取り、「これを受け取って飲め」と言った。その修道士は水を飲み、癒やされた。

また、彼は、自分の独房で聖母マリアのイコンの前に常に灯されていたランプの聖油を用いて、他の人々を癒やした。　コレラで死の淵にあったある農民を、この神の御使いは、聖母マリアのイコンにその体を当てさせ、聖水を飲ませ、修道院を一周して大聖堂に入り、そこで祈るように命じた。そこで、長老の予言通り、「神の慈悲」が死にかけていたその人を癒した。　多くの者にとって、聖セラフィムは生前から夢の中の幻として現れ、致命的な病気から癒やした。特にコレラの流行時には、セラフィムの泉から汲み出された聖水によって、神の御慈悲により、個人だけでなく村全体の人々までもが癒やされた。　神に愛されたこの聖人は、時にはただその存在や十字架、そして祈りだけで、悪霊に取り憑かれた人々を癒やした。セラフィムの祈りは神の前で非常に力強く、死の床にある病人が回復した例さえあった。例えば、あるヴォロティロフという男の妻が死の淵に瀕していた。その夫は、この聖人に深い信仰を抱いていたため、病める妻を助けてほしいと涙ながらに懇願した。しかし、長老は「その妻は死ぬ運命にある」と告げた。するとヴォロティロフは、涙を流しながら長老の足元にひれ伏し、妻の命と健康が回復するよう祈ってほしいと懇願した。　聖人は十分ほど「深い」祈りに没頭した後、目を開き、ヴォロティロフを立ち上がらせ、喜びながらこう言った。「さあ、わが喜びよ、主はあなたの妻に命をお与えになる。　平安のうちに家へ帰りなさい」。ヴォロティロフは喜び勇んで家へ急ぎ、そこで、聖セラフィムが祈りの修行に励んでいたまさにその瞬間に、妻が安堵を感じていたことを知った。まもなく、彼女は完全に回復した。

また、ある長老には死が近いと予言し、彼らがキリスト教式の葬儀を受けずに永遠の世界へ旅立たないよう願った。また、他の者たちには、悔い改めなければ神の懲罰が下ることを戒めるために、そのことを予言した。　神の御許に召されたトロイツェ＝セルギエフ修道院の代理院長、アルヒマンドリト・アントニー（[543]　）――当時ヴィソゴリ修道院の建設責任者であった――に対し、彼は「神の摂理によって彼に託される偉大なる修道院」への、早くて予期せぬ転任を予言した。

その多難な生涯の終わりに近づくにつれ、尊者（プレポボドニー）は苦難を和らげるどころか、これまでの功績に加え、新たな労苦と偉業を重ねていった。老修道士は、生涯の最後の数年間、床に座り、背中を壁にもたれかけ、足を伸ばして眠っていた。　時には頭を石や木の切り株に預けたり、あるいは自身の　にある袋やレンガ、薪の上に横たわったりした。そして、この世を去る時が近づくと、ひざまずき、両肘をついて顔を床に向け、両手で頭を支えながら眠った。　食事は一日に一度、夕方に摂り、身に着ける服は粗末で貧相なものだった。ある金持ちから、なぜそんなぼろ服を着ているのかと尋ねられると、老人はこう答えた。

「イオアサフ王子は、隠者ヴァルラアムから授かったマントを、王の紫の衣よりも尊く、高価なものだと見なしたのだ」[544]。

聖セラフィムは、すでにこの世からは完全に死んでいたが、同時に、この世に生きる人々のために、限りない愛をもって神の御前で祈りを捧げ、執り成しを続けることを決してやめることはなかった。　天国は彼にとって、まさに故郷となっていた。クルスクからの訪問者がセラフィムに、親族に何か伝言はないかと尋ねると、彼は救い主と聖母マリアの聖像を指さし、微笑みながらこう言った。

「これが私の家族です。そして、生きている家族にとって、私はすでに生ける屍なのです。」

---

[543] アントニー（俗名A. G. メドヴェージェフは、モスクワ都主教フィラレートのもとで著名な協力者・側近として知られ、1831年から1877年までトロイツェ＝セルギエフ修道院の代理院長を務めた。彼は聖人の個人的な意向によりこの職に選出され、長きにわたる代理院長在任期間中、修道院をあらゆる面で繁栄した状態に導いた。

[544] 『ミネイ・チェチイ』11月19日の項を参照。

当時、ロシア全土は、尊者セラフィムを偉大な修行者であり奇跡行者として知っており、敬っていた[545]。ある時、祈りの最中に長老が宙に浮いているのが目撃された。それを見た者が恐怖のあまり叫ぶと、長老は、自分が癒やした病が再発する恐れがあるとして、自分の死までそのことを誰にも話さないよう厳しく禁じた[546]。

亡くなる1年10ヶ月前、聖セラフィムは聖母マリアの恵み深い御訪問を受ける栄誉に浴した。それは受胎告知の祝日、3月25日のことだった。その二日後、彼はこのことを、ディヴェエフの敬虔な一人の老尼に告げた。彼女は、この驚くべき御出現を拝見する恵みにあずかり、彼女や他のディヴェエフの修道女たちが、苦難に満ちた修道生活の中で慰めを得られるようにと願ったのである。神の御心に適う聖人は、その老女に何も恐れる必要はないと告げ、自らひざまずいて両手を天へと掲げました。すると、まるで強い風が吹くかのような音が聞こえ、その後、教会の聖歌が響き渡りました。

「見よ、栄光に満ちた、至聖なる御母、私たちの聖母マリアが、私たちのもとへおいでになる！」と、尊者は言った。

小部屋はまばゆい光に包まれ、不思議な芳香が漂った。

先頭には、咲き始めたばかりの花の枝を手にした二人の天使が歩いていた。その後に、白く輝く衣をまとった聖ヨハネ・洗礼者や福音記者ヨハネ・神学者が続いた。さらにその先には、十二人の聖なる乙女たち――殉教者や聖女たち――に付き添われた聖母マリアがいた。天の女王は、「悲しみの聖母」のイコンに描かれているようなマントを身にまとい、並外れた光と言葉に尽くせない美しさを放っていた。マントの上には、いわばエピトラヒルがかけられ、手には手杖を持っていた。頭上には、十字架で多彩に飾られた高貴で美しい冠が輝いており、その光は、聖母マリアご自身の神聖な御顔と同様に、直視することさえできないほどであった。聖女たちは、冠を戴き、言葉に尽くせない天上の栄光と美しさを纏い、二組ずつ聖母マリアの後を歩いていた。修道室は突然広々となり、太陽の光よりも明るく、より白い特別な光で満たされた。至聖なる聖母は、まるで親しい人のように、慈愛に満ちてその尊い長老と語り合っていた。一方、老女は恐怖のあまりひれ伏したが、聖母は彼女をなだめて立ち上がるよう命じた。そして聖なる乙女たちは、苦難に満ちた人生を送る老女を慰めながら、自らの輝く冠を指し示し、それらが地上の苦しみと侮辱の報いとして授かったものであると語った。至聖なる聖母は、尊いセラフィム長老と長く語り合ったが、老女はその会話を聞き取ることができなかった。彼女が聞き取れたのは、至聖なる御母が、ディヴェイの乙女たちを見捨てないよう彼に懇願し、彼に御自身の助けと取り成しを約束されたことだけだった。幻視は、聖母が聖なる乙女たちの冠を指し示しながら、他の乙女たちや修道女たちにも同じものを与えると約束したところで終わった。その後、聖なる長老に向き直り、こう付け加えた。

「まもなく、わが愛する者よ、あなたは私たちのもとに来るでしょう。」

その後、聖母は彼に祝福を与え、そこにいたすべての聖人たちも彼に別れを告げた。

修道者の徳と功績という階段をますます高く登りつめた聖セラフィムは、ついにこの世を去る時が近づいた。死の1年前、彼は極度の衰弱を感じていた。この時、彼は72歳になっていた。彼はもはや自分の隠遁所へもあまり足を運ばなくなり、サロヴェでさえ、大勢の訪問者を迎えることに疲れ

---

545 正教会の敬虔な司祭や主教たちは、その功績と霊的生活によって際立っていたため、尊者セラフィムに対して深い敬意と信仰を抱き、彼に手紙を書き、助言を求めた。とりわけ、その聖なる生活と修道者としての功績で知られたヴォロネジの大主教アントニーは、彼に対して深い敬意を抱いていた。神の御愛する者が安らかに永眠して間もなく、彼は彼について次のように語った。「我々は一コペイカの蝋燭のようなものだが、彼は一プードの蝋燭のようで、その生涯を通じて、また至聖なる三位一体の前での現在の大胆さによって、常に主の御前で燃え続けているのだ。」

546 この出来事は、その尊者によって麻痺を治された息子の証言に基づき、E.S.Sh.公妃によって立証された。この際、長老は病人がその光景を目撃していることに気づくと、彼に「沈黙を守る」よう厳しく命じ、自分の死まではそのことを口外しないよう告げた。そして、その息子はその指示に従った。

を感じるようになっていた。　絶え間ない徹夜祈祷、千日千夜にわたり早朝から石の上で祈りを捧げて立っていたこと、そして強盗たちによる残酷な拷問によって、足には激しい痛みが伴い、生涯の終わりまで彼に安らぎを与えることはなかった。足にできた潰瘍からは絶えず膿が流れ出ていたが、しかし、聖人は、神が彼を愛する者たちに用意してくださった天の喜びと栄光を感じながら、その姿は明るく、喜びに満ちた精神を保ち続けていた。

相変わらず多くの信者に恵み深い癒やしを与え、その驚くべき透視の賜物によって多くの人々の生活の改善と救いに貢献していた聖セラフィムは、やがて自らの死が近いことも予言し始めた。他の人々に最後の訓示を与える際、彼は「もう君とは会えないだろう」と繰り返し口にしていた。また、他の修道者や信徒たちに対しては、今後、自らの救いに関するあらゆる手配や配慮を自ら行うよう勧め、二度と会うことはなく、永遠の別れとなることを告げ、自分への祈りを求めた。　この期間、聖なる長老は、自身の願いにより準備された棺の上で、住居近くの回廊にしばしば見かけられた。そこで彼は来世について深く思索にふけり、しばしば苦々しい泣き声を漏らしていた。また、ディヴェイの修道女たちの一部に対しても、このことについてほのめかしたり、時には率直に語ったりし、次のように繰り返していた。

「私の力は衰えつつある。これからは皆で生きてくれ。私はあなた方を主と、その聖母マリアにお任せする。」

何人かは、神に愛されたこの聖人に、間近に迫ったサローヴェの大斎期間中に彼を訪ねるための神の祝福を求めたが、彼はこう答えた。

「その時には私の扉は閉ざされ、あなた方は私を見ることはできなくなるだろう。」

また、外見からも、聖セラフィムの命が急速に尽きつつあることがはっきりと見て取れたが、その精神は以前にも増して冴え渡っていた。　彼は、親しい友人や同志たち――例えば、ナデエフスカヤの荒野で修行に励んでいた忠実な弟子である至福の修道司祭ティモン――に対しても、自身の死が近いことをほのめかし、彼に魂を救うための最後の教えを授けた。

「さあ」と彼はティモン神父に繰り返した。「さあ、この小麦を蒔きなさい。肥沃な土地にも、砂地にも、岩場にも、道端にも、茨の中にも蒔きなさい。どこに蒔いても、やがて芽を出し、成長し、実を結ぶだろう。たとえ時間がかかっても。」　そして、あなたに与えられた才能を地中に隠してはならない。そうすれば、あなたの主から懲らしめられることはないだろう。むしろ、商人たちに委ねよ――彼らが代価を支払ってくれるように。

聖セラフィムの至福の帰天の四ヶ月前、1832年8月、タンボフのアルセニー主教（のちのキエフ都主教）が、彼の隠遁地を訪ねた。サロフを見学した後、主教はセラフィムの隠遁地を詳細に視察し、　その質素な独房を詳細に視察し、さらに、独房の壁とストーブの間に位置する小さな部屋にも足を踏み入れた。そこは、神の御心にかなう者がしばしば祈りの修行に励んでいた場所で、人が一人入るのもやっとの狭さであり、座ったり肘をついたりすることは到底できなかったため、立ったりひざまずいたりした姿勢でしか過ごすことができなかった。　その際、聖なる長老は、大主教に「貧しく罪深いセラフィムより」という贈り物として、数珠、麻布に包まれたロウソクの束、赤ワインの入った器、そして木油の入った瓶を捧げた。　大主教は、その献品を快く受け取ったものの、その意味を理解できなかった。しかし、その後の出来事が、この神の修道士が自らの死が近いことを暗示的に告げており、ワイン、油、ろうそくを自身の追悼のために用意していたことを示した。彼は大主教に対し、口頭でもそのように依頼していたのである。　その後、アルセニイ大主教は聖なる長老の願いを忠実に果たし、キャンバスと数珠は手元に残し、残りの品々は聖セラフィムを偲ぶ追悼の聖体礼儀において、その追悼のために用いた。

尊者様は、自身の死が近いことをほのめかし、侍者に何度もこう語っていました。

「まもなく死が訪れる！」

サロフの長老の一人に教えを授けた後、彼はろうそくに息を吹きかけるよう命じ、それが消えるとこう言った。

「私もこうして消えていくのだ。」

臨終間近、聖人は親しい人々数名に手紙を送るよう依頼し、修道院へ来るよう呼びかけ、また、駆けつけることができない人々に対しては、自分の死後、彼らに魂に有益な助言を伝えてほしいと頼み、その依頼の理由として次のように付け加えた。

「彼ら自身は、もう私の姿を見ることはないのだから！」

1833年を迎える前に、尊師はウスペンスキー大聖堂の祭壇の脇に自身の墓の場所を定めた。入寂の一週間前、キリスト降誕の祝日に、彼は聖体礼儀に参列し、キリストの聖なる秘跡を拝領した。礼儀の後、修道院の建設者であるイグメン・ニフォントと懇談し、特に年少の兄弟たちの世話を頼むとともに、死後は自ら用意した棺に埋葬されるよう遺言した。　1833年1月1日の日曜日、聖なる長老は最後となるゾシモ・サヴァティエフスカヤ病院教会を訪れ、すべてのイコンに口づけをし、自ら蝋燭を灯した後、慣例に従ってキリストの聖なる秘跡を拝領した。　聖体礼儀の終わりに、彼は祈りを捧げていた兄弟たち全員に別れを告げ、皆に祝福を与え、口づけをし、慰めながらこう語った。

「救われよ、落胆するな、目を覚ましていなさい。今日、あなた方のために冠が用意されているのだ。」

その後、聖なる長老は聖なる十字架と聖母マリアのイコンに口づけをし、さらに祭壇の周りを一周して慣例通りの礼拝を捧げた後、北側の扉から聖所を出て行った。それはあたかも、ある門――誕生の道――を通じて人はこの世に入り、別の門――死の門――を通じてこの世を去ることを示しているかのようであった。

その日、長老の隣室に住むパウロ兄弟は、しばしば長老の侍者としての務めを果たし、食事を持ってきていたが、長老が自分が用意しておいた埋葬の場所に三度ほど出て行き、そこでかなり長い間立ち止まって地面を見つめているのに気づいた。　その夜、同じ修道士は、長老が自分の独房で、キリストの復活を讃える復活祭の歌を歌っているのを耳にした。

翌日、1月2日、パヴェル神父は早朝のミサに出席するため、午前6時に自分の独房を出たところ、玄関で煙と焦げ臭い匂いを感じた。セラフィムの独房では、長老が決して消すことのないろうそくが常に灯っており、彼はこれに関するあらゆる忠告に対して、たいてい次のように答えていた。

「私が生きている限り、火事は起きない。しかし、私が死んだとき、私の死は火事で明らかになるだろう。」

まさにその通りになった。

いつもの祈りを捧げた後、修道士パヴェルは長老の部屋の扉をノックしたが、鍵がかかっていた。そこで彼は、長老が自分の隠れ家へ行き、部屋で火事が起きているのではないかと推測し、そのことを他の者たちに伝えた。

扉の内側の掛け金を外して開けてみると、火はなかったが、散乱して置かれた本や、多くの信者が熱心に長老に捧げてきた様々な麻の品々がくすぶっており、長老自身の姿も声もどこにも見当たらなかった。　くすぶっていた品々を消し止め、起きたことを早朝の典礼に出席していた他の修道士たちにも伝えた。　多くの修道士たちが長老の独房へと駆けつけた。ろうそくに火を灯すと、彼らはセラフィムがいつもの白いローブを身にまとい、祈りの修行を行う定位置で、首に銅製の十字架を下げ、小さな祭壇の前でひざまずいている姿を見出した。　胸の前で十字に組まれたその両手は、アナロイの上にある本の上に置かれていた。それは、聖母マリアのイコンの前で彼が祈りの規則を行っていた本であった。長老が眠ってしまったのだと思い、修道士たちは彼を起こそうとしたが、彼の魂はすでにこの地上の体を離れ、創造主のもとへと帰っていた。　セラフィムの目は閉じていたが、その顔は神への思索と祈りに満ちて生き生きとしており、その身体はまだ温かかった。

修道院長ニフォンタ修道長の祝福のもと、　兄弟たちは、この世を去った修行者の遺体を清め、修道服を着せ、生前に彼が用意しておいた樫の棺に納めた。その棺には、彼の遺言に従い、最愛の弟子であり、トロイツェ＝セルギエフ修道院の代理院長であるアルヒマンドリト・アントニーから送られてきた、聖セルギイの真珠細工の肖像画が飾られていた。

聖なる長老の死の知らせは瞬く間に広まり、サロフ周辺の住民たちがこぞって修道院に駆けつけた。　特に深い悲しみに沈んだのは、ディヴェエフの修道女たちであった。彼女たちは、最愛の霊的父であり保護者であった彼を失ったのである。そして、彼女たちの悲しみは、霊的指導者として彼の代わりとなる者が誰もいなかったために、なおさら慰めようのないものとなった。

聖セラフィムが安らかに永眠されたその夜、クルスク県グリンスカヤの荒野で修行に励んでいた修道士フィラレートは、早課を終えて教会から出てくると、兄弟たちに空に輝く異様な光を指し示し、こう語った。

「これこそが、義人の魂が天へと旅立つ姿だ！今、セラフィム師の魂が天へと昇っている。」

その後8日間、聖セラフィムの遺体はウスペンスキー大聖堂で公開された。この至福の長老の墓は、彼自身がかねてから定めていたまさにその場所に用意された。サラフの修道院は、埋葬の日を迎える前から、近隣 の国や州から集まった何千人もの人々で埋め尽くされていた。 皆が心を一つにして、この恵み深い長老の死を悼んだ。埋葬の日、聖体礼儀にはあまりにも多くの人々が詰めかけたため、棺の周囲に置かれた地元の蝋燭は、蒸し暑さのために次々と消えてしまった。聖セラフィムの遺体の埋葬は、サロフの修道院長ニフォントと多数の修道士たちによって執り行われ、　遺体は大聖堂の祭壇の右側に埋葬された。墓の上には後に、墓廟の形をした鋳鉄製の記念碑が建てられ、そこには「神の栄光のために72年、6ヶ月、12日間生きた」という銘が刻まれた。

そして、至福の御帰天後も、聖セラフィムは、信仰をもって彼に祈りを捧げるすべての人々に、様々な癒やしと奇跡をもたらし続けた。　そして、この世の旅路を終えた後も、彼は人々に変わらぬ愛と助けを与え続け、彼らとのあらゆる関わりの中に、言葉では言い表せないほどの深い思いやりの宝を注ぎ込み、生前と同様に、計り知れない優しさをもって彼らを「わが喜び」と呼び続けた。特に頻繁に、彼はサロフの修道士たちやディヴェエフの修道女たちの前に現れ、彼らを癒やし、慰めていました。

そうして、長老セラフィムの至福の生涯が終わってから半年も経たないうちに、ディヴェエフ修道院のある修道女が悪霊に取り憑かれたような発作に襲われた。　しかし、ある夜、彼女はまるでディヴェエフの教会にいるかのように感じ、そこには聖セラフィムもいた。長老は、その病人と、そこにいたもう一人の修道女の手を取り、まるで彼女を祭壇へと導くかのように、彼女と共に祭壇の周りを一周すると、彼女は突然、体が軽くなり、気分が良くなったのを感じた。　目を覚ますと、彼女は十字を切って完全に正気を取り戻した。完全に健康な状態で目覚め、それ以来、以前のような発作に襲われることはなく、完全な健康を保っていた。

ディヴェエフスカヤ修道院の別の修道女は、目に重い病を患っていた。1835年の大晦日の前夜、彼女は夢を見た。夢の中で、彼女はティフヴィンの聖母教会にいて、王の門から白い衣をまとった聖セラフィムが現れ、空気を差し出し、それで目を拭くように命じた。

彼女は彼に尋ねた。

「それはあなたですか、神父様？」

セラフィムはこう答えました。

「なんと、わが喜びよ、あなたは不信仰者だ！　あなた自身が私に頼んだではないか。私があなたたちのところでミサを執り行っているのに、信じないとは。」

その後、長老の姿は見えなくなった。それ以来、その尼の目の病は治った。

「スヴィャトゴルツ」の名で知られ、皆から尊敬されていたアトス山のロシア人修道士、イエロモナフ・セラフィム（スキマ名セルギイ）は、自身の修道室の日記に次のように記している。

「1849年、私は病に倒れた。その病は命に関わるもので、生き延びられるとは思わなかった。どんな治療法も私を回復させることはできなかった。私は絶望した。1850年の夜遅く、ふと誰かが私に静かにこう言った。　『明日はサロフの長老、セラフィム神父の命日だ。彼のために追悼の聖体礼儀と追悼の祈りを捧げなさい。そうすれば、彼はあなたを癒やしてくれるだろう』。この言葉は私を大いに慰めてくれた。私はセラフィム神父を個人的に知ることはなかったが、1838年にサロフを訪れた際、彼への信仰と愛を抱くようになったのだ。　1839年、夢の中で心からセラフィム神父のために祈りを捧げ、大声で「尊きセラフィム神父よ、私たちのために神に祈ってください！」と歌っていたとき、その思いはさらに強まった。ただ、福音書を読む段になって、どの箇所を読むべきか――聖人のものか、それとも別の箇所か――分からなくなってしまった。　すると突然、誰かが私にこう言った。「マタイによる福音書の36番目の箇所を読みなさい」。その神秘的な声の言葉を聞いた瞬間、私は目を覚ました。それ以来、今日に至るまで、私はセラフィム神父が神に愛された偉大な聖人であると心から信じている。しかし、話を本題（すなわち、1849年の私の病気についての話）に戻そう。セラフィム神父を偲ぶよう促す秘められた啓示に従い、私自身は彼のために聖体礼儀や追悼礼拝を執り行う力がなかったため、誰かに依頼した。そして、それが行われた途端、私の病気は去った。私は並外れた安らぎを感じ、不快な苦痛から解放された。　それ以来、今日に至るまで、神の恵みによって健康を保っている」。

1858年、ディヴェエフスカヤ修道院の修道女エウドキヤは、大斎の第5週の水曜日、他の姉妹たちと共に巨大な共同の氷室に氷を詰め込んでいたところ、不意に足を滑らせ、3サジェンもの高さから底へと転落した。　彼女は息絶えたかのように倒れ、脇腹と頭に耐え難いほどの痛みを訴え、わずかな接触でも長時間の失神に陥った。駆けつけた医師は、彼女の状態を極めて危険であると診断した。 その後2週間、彼女は痛みのためにほとんど眠れなかったが、聖木曜日の真夜中、彼女は浅い眠りに落ちた。その夢の中で、聖セラフィムが彼女の独房に入ってきて、「私は自分の貧しい者たち（彼は生前、自分の世話に委ねられたディヴェエフの修道女たちをそう呼んでいた）を見舞いに来た。ここには久しぶりだ」と語った。病床の彼女は苦々しい涙を流しながら、「神父様、　、私の脇腹が痛くてたまらないのです！」と叫んだ。すると長老は、右手の三本の指を組み、痛む箇所に三度十字を切って、「絆創膏と包帯を当ててあげる」と言い、その後、姿を消した。　エウドキアは目を覚ましたが、小部屋はすっかり空っぽで静まり返っていたので、彼女は再び眠りについた。午前5時、彼女は痛む側を下にして横たわったまま目を覚ましたが、痛みは全く感じなかった。　長老セラフィムが現れたことを思い出し、彼女は「長い間、打撲した場所に絆創膏が貼られているような感覚があった」と語った。その日、彼女は誰の助けも借りずに一人でベッドから起き上がり、自分の奇跡的な治癒について皆に語った。

長老は多くの人々に癒やしを与え、自分の泉の水を飲み、それで体を洗うよう勧めていた。そうして、長老の死から2年後、ディヴェエフスカヤ修道院のある修道女が高熱に襲われ、死の淵に立たされていたが、その際、手を動かす能力を完全に失っていた。　すると彼女は夢の中で、尊者を見ました。尊者は「なぜ私のいる泉へ来ないのか」と尋ね、病んだ手を握って持ち上げ、「必ずそうしなさい」と命じました。　目を覚ますと、その修道女は自分の手が癒やされているのを感じた。そして、修道女たちが彼女をサロフのセラフィムの泉へ連れて行き、その水を浴びせると、彼女は完全に回復した。

聖セラフィムに特別な敬意を抱いていたテプロフ中尉は、1834年、足に病を抱えた3歳の娘を連れてサロフを訪れた。長老の墓前で追悼の祈りを捧げた後、彼らは子供をセラフィムの泉へと連れて行った。長老の祈りによって主が病める者を憐れんでくださることを固く信じていたからである。その泉の水を娘に飲ませ、足を洗った後、修道院へ水を持ち帰り、その水を用いて聖水祝福の祈りを

捧げるつもりだった。しかし、修道院の入り口で、少女は乳母の手から抜け出し、まるで健康な子のように前へ駆け出し、完全な癒やしを得たのである。

1856年、コストロマ州副知事A・A・ボルツコの唯一の息子（8歳）が、胃の痙攣に悩まされ始め、それは恐ろしく衰弱させる発作を伴う重篤な病へと発展し、両親は息子の命が危ぶまれるほど絶望していた。 その頃、コストロマ女子修道院の修道見習い修道女S・D・ダヴィドヴァが、病児の母親にセラフィム・サロフスキーの生涯と功績を記した書物を贈った。両親はそれを読み始め、その聖人に現れた神の恵みの御業に驚嘆した。 ある夜、その子は夢の中で、天使たちに囲まれた救い主を見ました。救い主は、病児に、やがて訪ねてくる長老の命じることを実行すれば、回復すると約束されました。その後、長老が現れ、自らをセラフィムと名乗り、こう言いました。

「健康になりたいのなら、サロフの森にある『セラフィムの泉』と呼ばれる泉から水を汲み、三日間、朝と夕方に頭、胸、手、足を洗い、その水を飲みなさい。」

朝、少年はその夢を両親に話したが、両親は水をどう手に入れればよいか途方に暮れ、嘆いていた。翌朝、少年は別の夢を語った。そこには天使たちに囲まれた聖母マリアが現れ、愛を込めて老人の言葉に従うよう命じたという。 まさにその日、サロフへ旅に出ていたダヴィドヴァ夫人が戻ってきたので、両親はセラフィモフの泉から水を手に入れる手助けをしてほしいと頼んだ。すると彼女は直ちに、その水を瓶に詰めて送ってくれた。そして長老の教えに従ったところ、子供は徐々に回復し、完全に元気を取り戻した。

また、聖セラフィムは、強盗や泥棒から人々を救い、彼らに脅しを込めて奇跡的に姿を現した。ある時、ムロムの森を巡礼者が歩いていた。人里離れた場所で恐ろしい叫び声とうめき声を耳にした彼女は、持ち歩いていたセラフィムの像を取り出し、自分自身とその叫び声が聞こえてきた場所に向かって十字を切った。 ほどなくして、その近くで2人の傷だらけの人が発見され、彼らは「強盗たちが自分たちを殺そうとしたが、突然逃げ出した」と語った。 その後捕らえられた強盗たちは、ムロム森での強盗行為を悔い改めながら、犠牲者に最後のとどめを刺そうとしていたまさにその時、突然森から、白髪で腰が曲がり、しわくちゃのカミラフカを被った修道士が、白いローブをまとい、指を突きつけながら「さあ、捕まえたぞ！」と叫んで飛び出してきたと語った。 そして、その背後には杭を持った群衆が追いかけていた。彼らは、旅人から取り上げたセラフィムの肖像を見せられ、その人物だと認めた。

生前にその長老を知り、深く敬っていたシャツクの商人ペタコフスカヤ夫人の夢に、ある時、聖セラフィムが現れてこう言った。

「昨夜、泥棒たちがあなたの息子の店に押し入ったが、私はほうきを手に取り、店の周りを掃き始めたところ、彼らは逃げ去った。」

実際、朝になってみると、すべての錠前が引きちぎられていたが、店は無事であり、手つかずのままだった。

1865年、あるバー夫人の家で、クリスマスを前に、慣例通り貧しい人々に施しを配っていた時、聖人は腰を曲げた白髪の老人の姿で現れた。施しを配っていた女性に、彼は施しを求めて来たのではなく、女主人本人に会いたいのだと説明した。 ある使用人が別の使用人に「あれはおそらく浮浪者だろう」とささやくと、老人は「女主人がおられる時にまたすぐに伺う」と約束して立ち去った。施しを配っていた女性は後悔の念に駆られ、彼を追って玄関先へ駆け出した。しかし、彼は姿を消しており、女主人にはそのことは一切隠された。

すると、その不審な使用人に対し、誰かが夢の中でこう言った。

「お前は無駄なことを言った。あなたのところに来たのは浮浪者ではなく、神の偉大な長老だったのだ。」

その翌朝、バー夫人の元へ、熊に乳を与える聖セラフィムの絵が描かれた小包が郵便で届けられた。その絵を見て、前日に聖なる老僧と会話を交わした者たちは、それが彼であることを認めた。

尊者セラフィムは、その至福の帰天後も、多くの他の奇跡的なしるしや癒やしを示した。尊者セラフィムの死去から70年間にわたり、主の御前で彼の執り成しを信じ、祈りを捧げて彼に助けを求める人々の信仰によって、絶え間なく癒やしが起こり続けた。　1891年、聖セラフィムの墓の上に礼拝堂が建てられた。聖なる長老の崇高な修道生活への記憶と、その祈りの執り成しの力への信仰は、時が経つにつれて衰えるどころか、正教徒の民衆のあらゆる階層においてますます高まり、確固たるものとなっていった。　長老セラフィムの聖性に対する民衆の信仰を全面的に共有し、聖シノドは、神の御心にかなう者を称えるための適切な措置に着手することが必要であると、繰り返し認めてきた。　1895年、タンボフの主教は、長老セラフィムの祈りによって現れた奇跡的な徴と癒やしについて、特別委員会が行った調査結果を聖シノドに提出した。調査対象となった事例は94件に上った。　その後、タンボフの主教は、1897年の初めと終わりの2回にわたり、聖セラフィムの祈りによって起こった奇跡的な徴や癒やしについて、様々な人物が提出した書面による陳述書の写しを、聖シノドに提出した。そしてついに、1902年7月19日、長老セラフィムの誕生日に、皇帝陛下、ニコライ・アレクサンドロヴィチ皇帝陛下は、故人の祈りの功績と、その記憶を偲ぶ国民全体の熱意を顧みられ、聖シノドで既に着手されていた敬虔な長老の列聖に関する手続きを最後まで遂行するよう望まれる旨を表明された。　翌1903年の初め、聖シノドは、長老セラフィムの祈りによって行われた奇跡の真実性と信憑性を完全に確信し、彼を神の恵みによって栄光を受けた聖人の列に加え、その尊い遺骸を聖遺骨として認定することを決定した。　両陛下の御厚意により、それらの遺骸のために豪華な金メッキを施した銀製の聖遺物箱が製作された。　この新たに現れた神の御心に適う者の荘厳な列聖式は、1903年7月19日、皇帝陛下および皇后陛下、その他の皇族の皆様、そして数万人の民衆の臨席のもとで行われ、　これらは、サロフの奇跡行者、聖セラフィムの祈りの取り次ぎによってもたらされたものでした。

その祈りによって、主なる神が私たちすべてをあらゆる苦しみや病から守ってくださいますように！　聖徒たちにおいて驚くべき神に、あらゆる誉れと栄光と礼拝が捧げられますように――今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

トロパリオ、第4調：

若き日からキリストを愛した、祝福された者よ。ただそのお方のみのために熱心に奉仕することを切望し、絶え間ない祈りと労苦をもって荒野で精進し、心を動かされてキリストの愛を勝ち得、神の母に愛され選ばれた者となった。　それゆえ、我らはあなたに叫びます。「セラフィムよ、尊き父よ、あなたの祈りによって我らを救い給え。」

コンダク、第2調：

この世の美しさ、そしてその中にあり朽ちゆくものを捨て去り、尊き父よ、あなたはサロフの修道院に身を置かれました。そしてそこで天使のように生き、多くの人々にとって救いへの道となられました。それゆえ、キリストはあなたを、セラフィム父よ、栄光に輝かせ、癒しと奇跡の賜物をもって豊かにしてくださったのです。　それゆえ、我らはあなたにこう叫びます。「喜びなさい、セラフィムよ、尊き我らの父よ。」

私たちの聖なる父、ローマ教皇シルヴェストルの生涯

記念日：1月2日

聖シルヴェストルはローマで生まれた。彼は聖なる信仰の中で育てられ、クィリヌス司祭のもとで学問と良き道徳を学んだ。　成人すると、彼は旅人を深く愛する者となり、神と隣人への愛から

、旅人を自宅に迎え入れ、彼らの足を洗い、もてなして、彼らに完全な安らぎを与えた。　アンティオキアから、キリストの聖なる人であり殉教者であるティモフェイ司教（[547]　）が、キリストの御国の福音をここで宣教するためにローマを訪れたとき、シルヴェストルは彼を自宅に迎え入れ、その聖なる生き様を目の当たりにし、その教えに耳を傾けるうちに、美徳と信仰においてさらに深まりを見せた。　シルヴェストルの家に1年数ヶ月滞在したティモフェイは、多くのローマ人を偶像崇拝から真の神へと改宗させたが、そのために都市総督[548]　タルクィニウスによって牢獄に投じられた。　長期間にわたり束縛され、牢獄に囚われた後、彼は拷問を受けたが、それでもなお偶像への生贄を捧げることを拒んだため、剣で斬り殺され、殉教の死を遂げた。福者シルヴェストルは、夜間に彼の聖遺体を運び出し、相応しい葬送の賛美歌を唱えながら、自身の家で埋葬した。　その後、テオニシアという名の敬虔な女性が、ローマの司教メルキアードの祝福を得て、自らの資金で聖ティモセオに捧げる教会を建立した[549]　。メルキアードは、この教会に聖殉教者の遺骨を移した。　一方、都市総督タルクィニウスはシルヴェストルを呼び出し、ティモテオの死後に残された財産を要求し、偶像への生け贄を捧げるよう強要し、従わなければ恐ろしい拷問を与えると脅した。しかし、シルヴェストルは総督の予期せぬ早すぎる死を予見し、福音書の言葉を引用して彼にこう言った。

「*今夜、あなたの魂はあなたから取り去られる*」（ルカ12:20）。そして、あなたが私にしようとしていることは、決して実現しないだろう。

この言葉に激怒した総督は、聖人を鉄の足枷で縛り、牢獄に投獄するよう命じ、自身は夕食の席に着いた。　夕食の最中、彼の喉に魚の骨が詰まり、医師の助けを借りても、いかなる手段を用いても取り除くことができなかった。夕食時から真夜中まで苦しみ続けたタルクィニウスは、聖人の予言通り息を引き取り、翌朝、親族たちは泣きながらその遺体を埋葬の地へと運んだ。一方、信者たちは喜びながらシルヴェストロを牢獄から連れ出し、　それ以来、彼は信者だけでなく、非信者からも崇敬されるようになった。というのも、プレフェクトの宮廷に仕える者たちの多くが、シルヴェストルの予言が実現したのを見て恐れをなして、主人のように自分たちにも何らかの不幸が降りかかるのではないかと恐れて、彼の足元にひれ伏したからである。　また、その奇跡に心を動かされた者たちは、率直にキリストへと立ち返った。その直後、聖シルヴェストルはローマ教会の聖職者団に迎え入れられ、教皇マルチェッリノから司祭の位を授かった[550]　。ローマ教皇メルキアードの死去後、彼は全員の満場一致で教皇に選出され[551]　、司教の座に就いた。　彼は、燭台の上で明るく燃える蝋燭のように人々の目に留まり、新たな使徒としてキリストの羊の群れを牧し、その言葉と行いによって彼らを救いの牧草地へと導いた。

一部の聖職者が奉仕の義務を忘れ、世俗的な事柄に没頭していることに気づくと、彼は彼らを再び教会の奉仕へと立ち返らせるとともに、聖職者の中には誰も商売に従事してはならないという布告を出した。また、彼はローマのキリスト教徒のために、曜日の新しい名称を定めた。　当時のローマ人は、私たちが「日曜日」と呼ぶ最初の日を「太陽の日」と呼び、残りの日は「月」「火星」「水星」「ゼウス」「金星」「土星」の日と呼ばれていた[552]　。　異教の神々の不敬な名を忌み嫌ったシルヴェストルは、この日が私たちの主の栄光に満ちた復活（　）が成し遂げられた日であることから、最初の日を「主の日」（[553]　）と呼ぶよう命じ、その他の日は、現在のローマのキリスト教徒が呼ん

---

[547]　古代の教会において、「殉教者」とは、迫害のさなかに公然とキリスト教徒であることを表明し、拷問に耐えながらも生き延びたキリスト教徒のことを指した。こうした人々はキリスト教社会において特別な尊敬を集め、そのため、信仰を捨てた者たちと教会との和解の権利が認められていた。

[548] プレフェクト――都市の長。

[549] 聖メルキアデ――311年から314年までローマ教皇を務めた。

[550] 聖マルチェリン――296年から304年までローマ教皇を務めた。

[551] 古代においては、司教の選出に民衆が関与していた。

[552] これらはすべて、ローマ人が崇拝し、それぞれの日の守護神とされていた神々であった。

[553] 「日曜日」という呼称は、すでに『ヨハネの黙示録』において用いられている。

でいる通り（[554] ）に呼ぶようにした。 また彼は、キリストが亡くなり、地獄に下ってそれを滅ぼし、そこから私たちの先祖であるアダムや他の先祖たちを救い出すために下ったあの土曜日だけ、キリスト教徒が断食を行うよう定めた。その他の土曜日には断食することを禁じた[555] 。

当時、ローマのタルペイアの岩の下にある深い洞窟[556] には、巨大な蛇が巣くっており、異教徒たちは毎月、それを神として犠牲を捧げていた。この蛇が洞窟から出てくると、その毒息で空気を汚染し、その場所の近くに住む多くの人々、とりわけ子供たちが次々と命を落としていた。 聖シルヴェストルは、人々をこの有害な蛇から救い、不信仰[557] から真の神へと立ち返らせるべく、町に住むキリスト教徒たちを呼び集め、三日間断食と祈りを捧げるよう命じました。そして、彼自身も誰よりも熱心に断食と祈りに励みました。 ある夜、聖使徒ペトロが幻として彼に現れ、数人の司祭と助祭を連れて、恐れることなく蛇が住む洞窟へ向かうよう命じました。 洞窟の入り口で、シルヴェストルは神聖な礼拝を執り行い、その後、洞窟の中に入り、主イエス・キリストの御名を呼び、その蛇を閉じ込めて、二度とそこから出てこられないようにしなければならなかった。 聖人は使徒の命に従って洞窟へ向かい、聖なる礼拝を執り行った後、中に入り、そこに何らかの扉を見つけると、それを閉めてこう言った。

「キリストの再臨の日まで、この扉が開かれることのないように！」

こうして、洞窟に蛇を閉じ込めた聖人は、その脱出の道を永遠に断ち切った。 異教徒たちは、シルヴェストルと彼の聖職者たちが蛇に食い殺されるだろうと考えていた。しかし、彼が無傷で洞窟から出てきたのを見て驚いた。それ以来、蛇が二度と外に出てこなくなったのを見て、多くの人々が真の神の力を悟り、信者たちの仲間に加わった。

当時、ローマ帝国を統治していたのはコンスタンティヌス大帝であった。彼は、キリストを心から信じてはいたものの、まだ聖なる洗礼を受けてはいなかった。 彼は、誰もキリストを冒涜したりキリスト教徒を迫害したりしてはならないという勅令を出し、偶像崇拝の神殿を閉鎖し、異教の生贄の儀式を中止するよう命じたほか、追放されていたキリスト教徒を解放し、牢獄に閉じ込められていた者たちを釈放した。 同時に、皇帝は請願者に耳を傾け、あらゆる正当な願いを叶え、自身の財産から貧しい人々に惜しみない施しを施した。ローマ市内および帝国の各地で、コンスタンティヌスはキリスト教の教会を建立するよう命じた。 キリストの教会は日ごとに成長し、信徒の数は増え続け、一方、偶像崇拝は衰退していった。これは信者たちを大いに喜ばせた。ローマにはすでに多くの信者がおり、彼らはキリスト教徒になりたがらない者たちをすべて都市から追放しようとしたが、皇帝は民衆に対し、次のように述べてこれを禁じた。

---

554 ローマ教会では古くから、曜日を『フェリア』と呼んでいる。これは「礼拝の日」を意味し、ラテン語の語源から、キリスト教徒が毎日神への奉仕を行う義務があることを示している。 月曜日は「第一フェリア」、火曜日は「第二フェリア」といった具合である。土曜日については、ローマのキリスト教徒の間でユダヤ教由来の名称が維持されており、日曜日は「*主の日*（ドミニカ）」という古くからの名称で呼ばれている。

555 土曜日については、『使徒の規則』（第64規則）にも同様の記述がある。 ヴァルサモンはこの規則の注解において、ユダヤ教徒のように見られないよう、土曜日には断食を行わないと指摘している。しかし、土曜日に断食が禁じられているということは、単に、大土曜日のように夕方まで完全に食事を控えるべきではないという意味に過ぎず、大土曜日以外のすべての土曜日には 肉食を許されることを示唆するものではない。教会規則によれば、安息日には、聖体礼儀の直後に、ワイン、オリーブ油、および教会の規則に従った食物、すなわち肉食期間には肉食を、断食期間には断食食を摂取することが許されている。

556 タルペイの岩は、カピトリーノの丘の南側にある険しい岩です。この岩が「タルペイ」と呼ばれるのは、サビニ人がこの要塞を攻略した際、カピトリーノの司令官の娘タルペイをここから突き落としたことに由来します。その高さは海抜150フィートです。

557 異教徒には多くの神々がいたが、彼らは真の神を知らなかった。それゆえ、聖使徒パウロは彼らを「神を信じない者」と呼んでいる（エフェソの信徒への手紙 2:12）。

「我らの神は、誰かが強制されて御自身に帰依することを望んでおられない。自らの意思と善意をもって御自身に近づく者には、神は御心を留め、慈愛をもってその者を受け入れてくださる。それゆえ、各人は望むままに、完全な自由をもって信仰し、互いに迫害し合うことのないようにせよ。」

この皇帝の言葉に、民衆はさらに大いに喜び、皇帝が各人に、各自の望むままに自分の信仰に従って生きることを認めていることを悟った。

喜んだのはローマの信者たちだけでなく、帝国全土の信者たちでもあった。なぜなら、至る所でキリストのために苦難に遭っていた信者たちが束縛や牢獄から解放され、流刑地からキリストの殉教者たちが帰還し、迫害者たちを恐れて荒野に身を隠していたキリスト教徒たちが恐れることなく家路につき、至る所で迫害が終息したからである。

しかし、キリスト教の古くからの敵である悪魔は、このような教会の平和と、広まりゆく敬虔の光という光景を耐えられず、当時故郷のビフィニアに住んでいた王の母、称賛に値するヘレナに訴えかけるよう、ユダヤ人たちに思いつかせた[558]。

「あなたの息子である王は、不義を捨て、偶像の神殿を破壊したことは、よくやったことだ」と彼らはヘレナに言った。 しかし、イエスを信じ、彼を神の子であり真の神として崇めているのは良くない。彼はユダヤ人であり、魔術師であり、自らの魔術の力で引き起こした様々な幻影によって人々を惑わせていたのだ。ピラトは彼を犯罪者として、拷問の末、十字架に架けたのである。 それゆえ、女王よ、あなたは王をそのような迷いから救い出さなければならない。そうしなければ、神が王に怒りを向け、王に何らかの不幸が降りかかることになるだろう。

これを聞いたヘレナは、そのことを書簡で息子のコンスタンティヌスに伝えた。手紙を読んだ彼は、母に返書を送り、このことを伝えたユダヤ人たちが彼女と共にローマへ来させ、そこでキリスト教の司教たちと信仰をめぐる論争を行うよう命じた。 どちらの側が勝利すれば、その側の信仰こそがより正しいということになる。女王がこの王の命令をユダヤ人たちに告げると、直ちに、自らの律法を学び、預言者の教えやギリシャ哲学にも精通し、論争に備えていた多くのユダヤ人の学者たちが集まり、彼らは皆、ヘレナ女王と共にローマへと向かった。 その中には、[559] という名のザムブリという、最も賢明なラビが一人いた。彼はギリシャ哲学とユダヤの書物を完璧に習得していただけでなく、同時に偉大な魔術師でもあった。 ユダヤ人たちは彼にすべての希望を託しており、もし彼が言葉の論争でキリスト教徒に打ち勝てなくても、その魔法の奇跡によって彼らを打ち負かすだろうと考えていた。

ユダヤ人とキリスト教徒の論争の日が訪れると、王は全シンクリトに囲まれて玉座に着き、[560]、聖シルヴェストルが少数の随行者を伴って王の前に現れた。その中には、当時ローマを訪れていた数人の司教も含まれていた。 続いて、百二十人のユダヤ人も入室し、直ちに議論が始まった。皇后ヘレナは幕の後ろに座ってその議論に耳を傾け、王は参謀団と共に、双方の主張について議論を交わしていた。 まずユダヤ人たちは、キリスト教側からは彼らと論争するために最も賢明な十二人のキリスト教徒を派遣するよう要求したが、聖シルヴェストルはこれに反対し、次のように述べた。

「我々は多くの人々に希望を置くのではなく、すべての人を強めてくださる神に希望を置いている。神の助けを呼び求め、こう言うのだ。『目覚めよ、神よ。あなたの御業を裁き給え！』」[561]

「それは私たちの聖書の一節だ」とユダヤ人たちは反論した。「私たちの預言者がそれを記したのだ。あなたは私たちの書物ではなく、あなた自身の書物の言葉を使うべきだ！」

シルヴェストルはこれに対し、次のように答えた。

---

[558] 小アジアの北西部の州。

[559] ラビ――パレスチナにおける名誉称号で、旧約聖書の律法に精通した傑出した教師や解釈者に与えられる。

[560] シンクリト――王の最も重要な顧問や高官からなる、軍事および民政の政府。

[561] 若干改変された表現（詩篇34:23）。

「確かに、最初にあなたがたに伝えられたのは旧約聖書と預言者たちの説教でしたが、それらは同時に私たちのものでもあります。なぜなら、そこには私たちの主であるキリストについて多くが記されているからです。」　それゆえ、私たちの論争はあなた方の書物に基づいて行われるべきである。なぜなら、あなた方の書物は私たちの書物ともなった一方で、私たちの書物はあなた方にとって異質であり、あなた方は私たちの書物よりもむしろ自分たちの書物を信じるからだ。それゆえ、私たちはあなた方の書物に基づいて、あなた方が反対している真理をあなた方に示そう。敵の手から武器を奪い取り、その武器で敵を打ち負かすとき、そのような勝利はより輝かしく、より明白なものとなるだろう！」

「この司教の言葉は」と王は言った。「もっともであり、この点において彼に異議を唱えることはできない。なぜなら、ユダヤ人たちよ、もしキリスト教徒たちがあなた方の書物から、彼らのキリストなる神についての証しを提示するならば、当然、彼らに優位が立ち、あなた方はあなた方自身の書物によって打ち負かされることになるからだ。」

シンクリトの全員がこの王の決定を称賛した。すると、ユダヤ人たちはキリスト教徒たちに次のように語り始めた。

「私たちの全能の神は、『申命記』の中でこう言われています。『今、見よ、見よ、わたしこそがそれであり、わたし以外に神はいない』（申命記 32:39）。それなのに、どうしてあなたがたは、単なる人間であり、私たちの先祖たちが十字架につけたイエスを神と呼ぶのですか？　どうして、父――私たちも信じている方――と、神の子と呼ぶイエス、そして三番目の神を聖霊と呼ぶという、三つの神を導き入れるのですか？　そのような信仰を持つことは、自分以外の神はいないと教えている万物の創造主である神に背くことではないのですか？」

これに対し、神に導かれたシルヴェストルは次のように答えた。

「もしあなたがたが、いかなる偏見や苛立ちもなく、自らの知性をもって聖書に深く入り込めば、私たちが神の御子と聖霊を告白する際に、何も新しいことを導入していないことを確信するでしょう。なぜなら、それは私たちの言葉ではなく、神の預言者たちの書物に記された神の啓示だからです。　まず第一に、預言者であり王であるダビデは、あなたがたの先祖たちが私たちの救い主に対して反旗を翻すことを予告して、こう言いました。「なぜ、諸国民は騒ぎ立ち、諸部族はむなしいことを企むのか。主とその油注がれた者に対して、共に謀りを練るのか。（詩篇 2:1–2）したがって、 ここで、彼をキリストかつ主と呼ぶことで、預言者は一人の人物ではなく、二人の人物を指し示している。そして、キリストが神の子であることは、同じ預言者が次のような言葉で告げている。*「主はわたしに言われた。『あなたはわたしの子。わたしは今日、あなたを産んだ』*」（詩篇2:7）。産んだ者と、産まれた者とは別々である！

これに対し、ユダヤ人たちはこう言った。

「神が産んだと言うのは、無情なものを情あるものにしてしまう。ある特定の時に生まれ、一時的な存在であった子が、どうして神であり得るのか。なぜなら、*『今日』*という言葉は特定の時を指し示しており、その子を永遠の神として認めることを許さないからだ。」

シルヴェストルはこう答えた：

– 私たちは、神に関して情動的な誕生があったとは言っていない。私たちは、神性は情動を伴わないものであり、御子の誕生は、思考から言葉が生まれるようなものであったと告白する。　私たちは、父から子への一時的な誕生という教義を提唱するのではなく、時間の制約を受けないその永遠の誕生を信じる。なぜなら、時間の創造主は、父と聖霊と共に子であり、時間の創造主ご自身が時間の支配下にはないことを知っているからである。　また、「わたしは今、あなたを産んだ」という表現は、天上の、永遠の神の誕生を指すのではなく、特定の時に起こり、私たちの救いのために受け入

れた肉において成し遂げられた、地上の誕生を指すのである[562]　。預言者は、キリストが永遠の神であることを知っていたため、「*神よ、あなたの御座は永遠に続く*」（詩篇44:7）と語ったのである。そして、後に成就することとなる受肉を予告して、彼はこう言った。*「あなたはわが子である！　わたしは今、あなたを産んだ」*。したがって、*「あなたはわが子である」*という言葉によって、彼は一時的なものではなく、永遠の御子の誕生を指し示しているのであり、また、　*「わたしは今、あなたを産んだ」という言葉は*、特定の時に成し遂げられた御子の誕生を指し示している。*「わたしは今、あなたを産んだ」*と語ったことで、預言者は、特定の定められた時に成し遂げられるべき御子の誕生さえも、父なる神ご自身がご自身に帰属させていることを示した。なぜなら、それは御父の御心によるものでなければならないからである。　しかし、*「わたしは今、あなたを産んだ」*という表現そのものが、神の誕生の永遠性を指し示している。そこには過去や未来の作用はなく、常にただ一つの現在のみが存在する。また、聖霊については、同じダビデが次のように証言している。「主の言葉によって天は造られ、その口の息によって、そのすべての軍勢は造られた」（詩篇32:6）。このように、彼はここで三つの位格について言及している。すなわち、神である父、その至高かつ無情な誕生ゆえに「御言葉」と呼ばれる御子、そして聖霊である。また別の箇所では、彼はこう述べている。*「あなたの聖霊を私から取り去らないでください」*（詩篇50:13）。　また、*「あなたの御霊から、どこへ逃げようか」*（詩篇138:7）ともある。これらの言葉によって、預言者は、すべてを御自身で満たす聖霊が存在することをはっきりと示している。さらに、「*あなたが御霊を送られると、それらは造られる*」（詩篇103:30）とも述べている。これらすべてはダビデによって語られたのではないだろうか。しかし、神を目撃したモーセも、創世記の中で次のような神の言葉を引用している。*「われわれは、われわれの像と似姿とに従って、人を造ろう」*（創世記 1:26）。では、もし神のそばに他の御方がおられなかったとしたら、神は一体誰と語っていたのだろうか。　誰も、神がこれを天の軍勢に語ったなどとは言わないだろう。なぜなら、*「わたしたちの姿に」*というその言葉自体が、そう考える余地を全く与えていないからである。神と天使たちとは、姿も似姿も同一ではなく、その実体や力も神とは同じではない。神の実体は神のものであり、天使の実体は天使のものである。　したがって、その対話には*「我らの姿に似せて」*という言葉を神が語った相手として、別の誰かがいたと仮定しなければならない。この「別の誰か」とは、語りかける神と同一の本質を持ち、姿と似姿において神と完全に同一である存在でなければならなかった。　では、父と同一の本質を持ち、栄光と権威において父と等しく、変わることのない神の像である御子以外、それが誰であることができようか。　、私たちが父と子と聖霊が存在すると信じ、断言するとき、一体何を新たに導入しているというのか。　もし異教徒たちがこれを信じがたく、根拠のないことだと感じるとしても、それは驚くべきことではない。彼らは聖書を知らないからだ。しかし、聖なる預言者たちの言葉を学んでいるあなたがたが、なぜこれを信じないのか。彼らの中には、私たちについて預言しなかった者は一人もいないではないか。

その後、聖シルヴェストルは至聖なる三位一体についてさらに詳しく語ろうとしたが、王は彼の言葉を遮り、ユダヤ人たちにこう言った。

「司教が聖書から引用したその言葉は、ユダヤ人諸君、あなた方の書物でも同じように読まれているのか？」

彼らは答えた。

「その通りです。」

すると、王は言った。

「さて、至聖なる三位一体をめぐるこの論争において、君たちは敗れたように思える。」

– いいえ、慈悲深い王よ――ユダヤ人たちは反論した――シルヴェストルが私たちに勝つことなど決してありません。もし私たちも彼に対して、持っているものをすべて述べれば。私たちは多く

[562] ほぼすべての教父たちは、この表現を、神の御子が人間の肉体に一時的に生まれられたことに関連付けている。

のことを言うこともできたでしょうが、三位一体についてこれほど熱心に論争しても無駄だとわかっているのです。　私たちが話しに来たのは、神が一人なのか三人なのかということではなく、ナザレの者が神ではないということなのです。　たとえ三つの神が存在すると仮定したとしても、それでもなお、イエスが神であると信じるべきだという結論には至りません。彼は神ではなく、人間から生まれ、罪深い人々と共に暮らし、徴税人と共に食べたり飲んだりし、福音書に記されているように、悪魔に誘惑され、その後、弟子に裏切られ、捕らえられ、嘲笑され、殴打され、胆汁と酢を飲まされ、衣服を剥ぎ取られ、兵士たちの間でくじ引きによって分けられ、十字架に釘付けにされ、死んで葬られた。　そのような者が、どうして神と呼べるというのか？王よ、我々が今、キリスト教徒たちに対して非難しているのは、まさにこの点、すなわち彼らがこの新しい神を世に広めているということである。それゆえ、もし彼らがその神について何か言えることがあり、何らかの証拠を持っているのなら、我々に語ってみよ！

その後、聖シルヴェストルが語り始めた。

「我らユダヤ人は、あなたがたが考えているような三つの神を認めているのではなく、唯一の神を信仰しており、その神を、三つの位格、すなわちイポスタシスとして存在される方として崇め、礼拝しているのです。　あなた方は、最初の質問への回答として私があなた方の書物から引用した言葉の正当性について判断し、それについて論争すべきでした。しかし、今やあなた方はそのことについて語ることを拒んでいるのですから、あなた方自身が望んでいるように、私たちの主イエス・キリストについて語り合いましょう。　次の点から始めましょう。万物を存在へと導かれた神は、人間を創造し、その者があらゆる悪に傾いているのをご覧になったとき、滅びゆく御自身の御業を軽んじられることなく、御子に、御自身と不可分の一体として（神は至る所に存在されるからです）、この地上に降りて来られるよう御心をお示しになりました。そこで、　御子は降りてきて、処女から生まれ、律法の下に入られました。*「律法の下にある者たちを贖うため」*（ガラテヤ4:4–5）です。そして、御子が処女から生まれることについては、神の預言者イザヤが次のように預言しました。*「見よ、処女が身ごもって、男の子を産む。その名は『インマヌエル』*と呼ばれる」（イザヤ書7:14）。この名は、ご存じの通り、神が人々に臨在されることを示しており、ギリシャ語に訳すと「神は我らと共におられる」という意味である。このように、預言者ははるか以前から、神が処女から生まれることを預言していたのである。

ユダヤ人たちは反論した：

「私たちのヘブライ語のテキストでは、預言者イザヤの書に『処女』という表現はなく、『若い娘』――つまり若い女性――について言及されているだけです。あなた方は聖書を歪曲し、自分の書物に『若い娘』の代わりに『処女』という言葉を書いたのです。」

聖シルヴェストル司教はこう答えた。

「もしあなた方の書物に『乙女』ではなく『若い女性』と書かれていたとしても、『若い女性』と『乙女』は結局同じことではないのか？」　預言者イザヤが神の御名においてアハズに、「あなたの神、主から、深みか高みかのしるしを求めよ」[563]　と告げたとき、アハズは「求めない。主を試すようなことはしない」[564]　と答えました。すると預言者は、*「それゆえ、主ご自身があなたがたにしるしを与えられる」*と言いました。それはどのようなしるしでしょうか。*「見よ、処女が身ごもる」*というものです。　もしあなたがたが、預言者が処女についてではなく少女について語ったと言い、また少女は処女ではない[565]　と主張するならば、預言者が約束したしるしもしるしとは呼べない。

---

[563] *深み*、すなわち地上または地底へ；*高み*、すなわち天から。

[564]　アハズは預言者を信じていなかったが、それを率直に言う勇気はなく、そのため、ユダヤ人が奇跡を要求して主を試みることを禁じたモーセの律法の言葉（出エジプト記17章）を、偽善的に自分の弁明として引用した。

[565]　*「乙女」*、すなわち若い女性全般――既婚者かもしれないし、まだ未婚の少女かもしれない――とユダヤ人たちは解釈した。この解釈は誤りである。　ここで用いられている言葉、ヘブライ語聖書における「アルマ」は、語源からして、

なぜなら、もし少女が、 結婚して子を産んだとしても、そこには何の奇跡もなく、ごく普通の出来事だからである。 しかし、夫との交わりを持たずに子を産むことは、まさに奇跡である。これは「自然の法則」を超えた、並外れた出来事である。 したがって、あなたがたの書物に記されているあの処女は、主が彼女を通してしるしを与えると約束されたからであり、まさに、夫を知ることなく超自然的に御子を産むというしるしであった。 そして、私たちは「乙女」という言葉を「処女」と書き換えたからといって聖書を歪めたわけではなく、むしろ、人間の自然を超越するこの驚くべき神のしるしを、より明確に理解できるよう、その真意を正確に表現したのです。 さて、土から造られたアダムと、その肋骨から造られたエバを除いて、男性の子種なしに生まれた人間が誰がいるだろうか。また、夫と交わることなく出産した女性がどこにいるだろうか。 したがって、もしあの乙女が、自然の理に反してではなく、自然の理に従って夫と結ばれて胎内に子を宿したのであれば、神が与えると約束されたいかなるしるしもなかったはずであり、それは単に人間の本性にとってありふれた出来事であったに過ぎない。 しかし、清らかな処女が夫なしに聖霊によって身ごもったのだから、これこそが神の新たで輝かしいしるしとみなされるべきであり、約束通り、自然の理を超え、清らかな処女から生まれた神が今、私たちと共におられるのである」。

「しかし、マリアから生まれた方は『インマヌエル』ではなく『イエス』と呼ばれているのだから」とユダヤ人たちは反論した。「ということは、その方は預言者を通して神が約束された方ではなく、別の方ということになるのではないか？」

聖シルヴェストルはこう答えた。

– 聖書では、時折、名前のかわりにその人物の活動が記されることがある。例えば、*「彼に『マゲル・シェラル・ハシュ・バズ』という名を付けよ」*（イザヤ書 8:3）といった具合である。 もし実際にそのような名前で呼ばれる人物が決して存在しなかったとしても、キリストは敵に打ち勝ち、彼らから戦利品を奪わなければならなかったため、預言者はキリストの名に代わって、キリストが成し遂げなければならないその御業を指摘したのです。同じ預言者は、エルサレムについても次のように述べています。「そのとき、人々はあなたについてこう言うだろう。『正義の都！』」 （イザヤ書 1:26）その都市を「正義の都」と呼んだ者は誰もおらず、誰もがその通常の名称である「エルサレム」と呼んでいるが、当時エルサレムは神の前で改心したため、そこで起こった出来事に基づいて、預言において「正義の都」という名が与えられたのである[566] 。 また、聖書の中には、名前の代わりに何らかの出来事が示されている箇所も見られる。神が人々と共に住まわれることについては、預言者バルクが次のように語っているのを聞いてほしい。 *「この方こそが私たちの神であり、この方に匹敵する者は他にいない。この方は知恵のすべての道を見出し、それを御自分のしもべヤコブと、愛するイスラエルに授けられた。その後、この方は地上に現れ、人々の間を歩まれた」*[567] 。また、この方が悪魔に試みられることについては、ゼカリヤが次のように預言している： *「そして彼は、主の御使いの前に立つ大祭司イエスと、彼に敵対するためにその右手に立つサタンを、私に示した。主はサタンに言われた。『主があなたを禁じられるように、サタンよ。主があなたを禁じられるように、悪魔よ』」*[568] 。また、彼が捕らえられることについては、ソロモンの書に次のように預言されている。 *「不義な者たちは心の中でこう言った。『義人に罠を仕掛けよう。彼は私たちにとって重荷であり、私たちの行いに逆らっているからだ』」*（箴言 2:1, 12）。また、主がご自身の弟子によって

非常に若く、まだ成長途上の処女のみを指す。さらに、旧約聖書全体を通じて、この言葉が既婚女性を指して用いられたことは一度もない。

566 すなわち、そこには、聖使徒パウロが「義の王」（ヘブライ人への手紙 7:2）と呼ぶ、世界の救い主が生まれたからである。

567 （バルク 3:36–38）、すなわち、常に至高の知恵をもって行動し、目標へと至る最善の道を知っておられる方である。

568 （ゼカリヤ書 3:1–2）。悪魔が主の前で誹謗したユダヤ人の大祭司イエスは、多くの教父たちによって、イエス・キリストの予型であると認められている。キリストもまた、悪魔とその手下たちから様々な攻撃を受けたのである。

裏切られることについては、詩篇の作者が次のように予言している。*「私のパンを食べた者が、私に対して踵を上げた」*（詩篇40:10）。また、偽証者についてはこう言っている。*「偽りの証人たちが、わたしに立ち向かったからである」*（詩篇26:12）。そして、その十字架刑についてはこう述べている。*「わたしの手と足は刺し貫かれた。わたしのすべての骨を数え上げることができるほどである」*[569]。この同じ預言者は、キリストの衣の分配についても予言した。*「彼らは私の衣を分け合い、私の服をめぐってくじを引く」*（詩篇21:19）。また、胆汁入りの酢を飲まされたことについて、彼はこう言った。*「彼らは私に胆汁を食として与え、私が渇いている時に酢を飲ませた」*[570]。さらに、その埋葬について、彼は次のように予告した。*「あなたはわたしを陰府の穴に置かれた」*（詩編87:7）。また、あなたがたの先祖であるヤコブも、御霊によってこれを予見し、こう言った。*「彼は身をかがめ、雄獅子や雌獅子のように横たわった」*[571]。

主キリストに関する聖なる預言者たちのこれらの証言や、その他多くの証言を引用して、聖シルヴェストルはユダヤ人たちを打ち負かした。なぜなら、聖霊ご自身が彼の口を通して語られたため、彼はキリストが処女から生まれた真の神であることを明確に証明したからである。

すると、ユダヤ人たちは言った。

「神がなぜ人間の肉体に生まれなければならないのか？　神は他の方法で人類を救うことはできなかったのか？」

聖人はこう答えた。

「神にとって不可能なことは何もない。しかし、かつて悪魔に打ち負かされた者こそが、悪魔を打ち負かさねばならなかったのだ。悪魔に打ち負かされたのは人間であった――それは、通常の自然の摂理に従って、男性の種から生まれたのではなく、土から、それも処女のように清く汚れのない土から造られた人間であった。　――なぜなら、その土は当時まだ神によって呪われておらず、殺された兄弟の血によっても、動物の殺害によってもまだ穢されていなかったからである。したがって、その土は腐敗しつつある死体によって汚染されておらず、いかなる不浄で不道徳な行いによっても穢されてはいなかったのだ。　そのような土から、私たちの先祖のために肉体が造られ、神の息吹によって命が吹き込まれたのである。　しかし、あらゆる悪意に満ちた悪魔がそのような人間に打ち勝ったのであれば、悪魔自身もまた、同じ人間によって打ち負かされなければならなかった。そして、まさにその方こそが、私たちの主イエス・キリストである。主は、自然の慣習や法則に従って生まれたのではなく、アダムが罪に汚染されていない土から生まれたのと同様に、清く聖なる処女の胎内から生まれたのである。　そして、アダムが神の息吹によって生かされたように、この方もまた、至聖なる処女に降りた聖霊の働きによって受肉し、完全なる神であり完全なる人となられました――罪を除いてはすべてにおいて、神性と人性という二つの本性を持ちながら、一つの御姿の中に備わっておられます。それゆえ、人間性は私たちのために苦しみを受け、神性は無情のままであった。

これについて、聖人は次のような例を挙げた。

「太陽の光に照らされた木が斧で切り倒される時、その木が切り倒されても、太陽の光は切り倒されることはない。同様に、神性と結ばれたキリストの人性こそ、たとえ苦しみを受けたとしても、その苦しみは神性には及ばなかったのだ。」

569（詩篇　21:17–18）、すなわち、キリストの御体が十字架に架けられたとき、その骨ははっきりと浮き出て、数え切れるほどであった。

570（詩編 68:22）。胆汁とは苦味、酢とは酸味のことである。これらの物質は、聖テオドリトスの解釈によれば、飲み物を苦く不快なものにするために加えられたものである。

571（創世記 49:9）。ヤコブはここで本来、自分の息子ユダについて語っていたが、教父たちの解説によれば、ユダについて述べられたことはすべて、最良の意味において、ユダがその型であった主イエス・キリストにも当てはめるべきである。

聖シルヴェストルが提示したこれらの論証を、王と全シンクリトは承認し、彼を論争の勝者とした。なぜなら、ユダヤ人たちはもはやシルヴェストルに対して反論する言葉を持っていなかったからである。すると、魔術師ザムブリウスが王にこう言った。

「シルヴェストルは雄弁で議論に長けており、その言葉で我々を圧倒しているとはいえ、それでも我々はそれゆえに先祖代々の律法から背くことはなく、我々の先祖たちが満場一致で死に追いやったその人物に従うこともない。　そして、私たちが崇める神はただひとりであり、他に神はいないということについては、私はシルヴェストルのように言葉ではなく、実際の行動をもって証明する用意がある。王よ、ただここに大きく獰猛な雄牛を連れてくるよう命じてほしい。そうすれば、直ちにあなたの権威と、ここに居合わせる者全員が、私たちの神以外に神はいないことを確信するだろう。

すると、出席者の一人が言った。

「私の牧場には、そんな雄牛がいます。町の門からそう遠くない場所です。その雄牛には、誰も軛を付けることはできませんし、手で撫でたり、触れたりすることさえできないのです。」

王は直ちにその雄牛を連れてくるよう命じた。その間も会話を続けながら、聖シルヴェストルはザムヴリウスに尋ねた。

「なぜその雄牛が必要なのか。そして、連れて来られたら、それをどうするつもりなのか？」

ザムブリウスは答えた。

「我らの神の力を証明したいのだ。なぜなら、もし私がその雄牛の耳元で囁けば、それは即座に息絶えるだろう。死すべき存在は神の御名を耐えられず、その御名を聞いた者は生き延びることはできないからだ。　そして、私たちの先祖たちも、生け贄として雄牛が連れて来られた際、その名を雄牛の耳元で囁いた。すると雄牛たちは、大きな咆哮を上げて即座に倒れ、息絶え、こうして生け贄として準備が整ったのである。[572]

シルヴェストルは反論した。

「しかし、もしその名が、お前の言う通り、それを聞く者をすべて殺すものなら、どうしてお前はその名を知ることができたのだ？」

ザムヴリウスは答えた：

「お前は我々の敵だから、この秘密を知ることは許されない。」

ザムブリウスがそう答えると、王は彼に言った。

「もしその秘密を司教に明かしたくないのなら、私たちに明かしてくれ。というのも、その名前がどこかに書かれているのを読んで知ることができると仮定しない限り、この件は実に疑わしいからだ。」

ザムブリウスは答えた：

「皮であれ、紙であれ、木であれ、石であれ、その他いかなるものであれ、その名の刻印を宿すことはできない。なぜなら、それを記した者自身も、記された媒体も、即座に滅びてしまうからだ。」

「では教えてくれ」と王は言った。「お前自身は、どうやってそれを知ったのだ？　言葉として伝えられず、文字で記されなければ、それを知ることはできないはずではないか？」

– 王よ、――ザムブリイは答えた――私は七日間断食し、その後、新しい銀の洗面器に清らかな流水を入れて祈りを捧げました。すると、目に見えない指が水の上に言葉を書き記し、それによって私は神の御名を知ることとなったのです。

すると、賢明なシルヴェストルは言った。

---

572 これはザムブリヤによる虚偽の作り話であった。律法（レビ記1章以降）に記されているように、雄牛は祭司たちによって屠られていた。

「もしあなたが本当に、おっしゃる通りの方法でその御名を知ったのなら、それでも、誰かの耳元でその名を囁くとき、あなたは、それを聞かされる相手と同じように、その御名を自分自身でも聞こえないのですか？　そして、それを聞いたあなた自身は、死なないのですか？」

魔術師は答えた。

「すでに言った通り、お前は我々の敵だから、この秘密を知るべきではない。それに、言葉で説明するより、実際にやって見せる方が一番良いではないか？」　二つのうち一つを選べ。お前が、お前のナザレ人の名を呼び、雄牛を殺して、我々もそのナザレ人を信じるようにするか、あるいは私が雄牛の耳元で我らの神の名を囁き、雄牛を殺すか。そうなれば、お前は我らの神を信じざるを得なくなるだろう。

これを聞いた出席者たちは皆、ザムブリウスの決定に賛同したが、聖なる司教が彼らをなだめたにもかかわらず、キリスト教徒たちは迷い始めた。

王はザムブリヤにこう言った。

「まず、お前は約束を果たすべきだ。なぜなら、一言で雄牛を殺すと約束したのだから。」

魔術師は答えた。

「王よ、もし私にそうするよう命じるのなら、わが神の力を目の当たりにしてください！」

そう言うと、彼は、屈強な男たちでもやっと引き回せるほどの雄牛に近づき、その角に丈夫な縄を引っ掛けた。　雄牛のそばに近づくと、ザムブリは耳元で何かをささやいた。すると雄牛はたちまち、激しい咆哮を上げて体を震わせ、その場で死んでしまった[573]　。これを見た者たちは皆、大いに驚いたが、ユダヤ人たちは大声で叫びながら手を叩いて言った。

「我々は勝利した、勝利した！」

そこでシルヴェストルは王に、皆を静めるよう命じるよう頼み、静寂が訪れたとき、司教はユダヤ人たちにこう言った。

「全能の神が『*わたしは死なせ、また生かし、打つ者であり、また癒す者である*』（申命記32:39）と語られたと、あなた方の書物にも記されているではないか？」

すると彼らは答えた。

「はい、その通り書かれています。」

すると、シルヴェストルは言った。

「もしザムブリウスが神の御名によって雄牛を殺したのなら、その同じ御名によってそれをよみがえらせてみよ。なぜなら、神は善を行われる神であり、悪を行われる神ではない。神の本質において、善を行うことは神にふさわしいが、悪を行うことは神の本質に反する。神の御心は常に善であり、常に善を行おうとされるのである。」　時折、神は他者の利益のために、何らかの悪をもって誰かを罰することがあるが、それは神がそれを望んでいるからではなく、私たちの悪行によって神がそうせざるを得なくなるからである。　それゆえ、もしザムブリウスが、神がその本質そのものから好まれないことを容易に成し遂げたのであれば、神にとって自然なことを成し遂げることは、なおさら容易なはずだ。彼が、その雄牛を殺したのと同じ神の名によって、その雄牛を生き返らせさえすれば、私は彼の信仰に改宗しよう。

「王よ！」とザムブリウスは反論した。「シルヴェストルはまた言葉の論争を仕掛けようとしているが、明白な事実が示された今、言葉など何が必要だろうか？」

そしてシルヴェストルに向き直り、彼は続けた。

「もしあなたも、司教よ、何らかの力を持っているのなら、あなたのイエスの御名によって奇跡を起こしてみせなさい！」

573　聖シルヴェストルは、この出来事を悪魔の仕業であると見なしている。古代の教父や教会の教師たちの教えによれば、当時の悪魔たちは、キリスト教の勢力が強まるのを妨げるためにあらゆる手段を講じていたからである。

「お望みなら」と聖シルヴェストルは答えた。「私は、キリストの聖なる御名を呼び求めることによって、あなたが殺したあの雄牛を蘇らせることで、私のキリストの力をあなたにお見せしましょう。」

「シルヴェストルよ、無駄に自慢しているだけだ」とザムブリウスは反論した。「雄牛が生き返るなどあり得ない！」

そこで王はザムブリウスに言った。

「さて、お前の言うところでは不可能なことを、もし司教が果たして成し遂げたなら、お前は彼の神を信じるか？」

ザムブリウスは答えた。

「王よ、誓います。もしその雄牛が生き返るのを見たら、キリストこそが神であると告白し、シルヴェストルの信仰を受け入れます。」

ユダヤ人たちも皆、同じように言った。そこで司教はひざまずき、涙を流しながら神に熱心に祈り、その後、立ち上がって天に向かって両手を挙げ、皆の聞こえるようにこう唱えた。

「主イエス・キリストよ、神の子であり、神である方よ、　死なせたり生かしたり、傷つけたり癒したりすることのできる御方よ、御名の至聖にして命を与える御名を呼び求めることによって、ザムブリウスが悪霊を呼び出して殺したあの雄牛を生き返らせてください。多くの者の救いのために、御奇跡が成し遂げられる時が来たからです。　今この時、あなたのしもべである私の祈りを聞き入れ、あなたの至聖なる御名が栄光を受けるようにしてください！

祈りを終えると、彼は雄牛に近づき、大声でこう宣言した。

「もし、私が宣べ伝えている、聖母マリアから生まれたイエス・キリストが真の神であるならば、立ち上がり、自分の足で立ち、かつての凶暴さを捨てて、柔和になりなさい！」

聖人がそう言い終えるや否や、雄牛はたちまち生き返り、立ち上がって、静かに穏やかに立っていた。聖人はその角から縄を外すよう命じ、こう言った。

「来たところへ戻り、誰にも害を与えず、静かにしていなさい。それが、私たちの神、イエス・キリストの命じるところである！」

そして、かつては極めて凶暴だったその雄牛も、静かに立ち去っていった。それを見た人々は皆、まるで声を一つにしたかのように叫んだ。

「シルヴェストルが説く神は偉大なり！」

一方、ユダヤ人たちはザムブリウスと共に聖人の元へ駆け寄り、その尊い足に抱きつき、神に彼らのために祈り、キリスト教の信仰に受け入れてくださるよう懇願した。　また、聖ヘレナも、議論に耳を傾け、その様子を眺めていた幕の後ろから身を乗り出し、そこから出て聖人の足元にひれ伏し、キリストを真の神であると告白した。　ザムブリオスを筆頭とするそこにいたすべてのユダヤ人と、数え切れないほどの大勢の人々が、真の神に立ち返り、キリストの教会に加わった。

このキリスト教の聖なる信仰の祝典の後、聖シルヴェストルは残りの生涯を、キリストの教会への絶え間ない労苦と配慮に捧げ、その後、自分に託された神の羊の群れを立派に導き、深き老齢に達して[574] 、主のもとへ帰った。 彼は司教の座に二十一年と十一ヶ月在任した。今や、永遠の命において、彼は天使たちと共に、父と子と聖霊、すなわち三位一体の唯一の神を賛美している。彼に、私たちからも永遠の栄光がありますように、アーメン。

574　ローマ教皇聖シルヴェストルは、335年に逝去した。その遺骸は、ローマから1マイル離れたサロリア街道沿いの聖プリスキラのカタコンベに埋葬された。

コンダク、第4調:

司祭たちのうち、あなたは司祭として現れ、神を宿す王であり、断食者たちの友であった。それゆえ、今や天使たちの群れと共に喜び、天において歓喜している、父よ。栄光ある牧者シルヴェストルよ、あなたの記念を愛をもって捧げる者たちを救い給え。

聖テオゲノス、パリオス司教、聖司祭殉教者の記念日

記念日：1月2日

聖なる殉教者テオゲンは、パリアの都市の司教であった[575] 。リキニウス帝の治世下[576] 、フリギア[577] で兵士たちに捕らえられ、トリブーン[578] ザリキンティウスによって兵役を強制された。しかし、これに抵抗したため、四本の柱に吊るされ、棒による残酷な殴打を受けた。　聖人は勇敢に拷問に耐え、その際、オプシオン[579]　とトリブーンには脛の骨折を、リキニウスには敗北を予言した。その後、テオゲネスは牢獄に投獄され、そこで聖人はあらゆる食物を拒み続けた。リキニウスにそのことが報告されると、彼は聖人を海に投げ込むよう命じた。　そこで聖人は、処刑執行者たちに祈りの時間を求めた後、東を向いて立ち、両手を天に掲げ、三時間にわたって祈りを捧げた。祈りの最中、彼は並外れた光に包まれ、その結果、処刑執行者たち――船員や一部の兵士たち――はキリスト教の信仰に改宗した。　こうして聖殉教者テオゲンは、海の深みに沈められ、その聖なる魂を主の御許に委ねた[580]　。その後、キリスト教徒たちは彼の遺体を水から引き上げ、城壁の近くに埋葬した。聖テオゲンの聖遺物の前では多くの奇跡が起こり、様々な病気が癒やされた。

1月16日

1月3日（旧暦）

聖殉教者ゴルディウスの受難

記念日1月3日

キリストの殉教者ゴルディウスは、カッパドキアのケサリアでキリスト教徒の両親の間に生まれ、正統なキリスト教の信仰の中で育てられた。成人すると、彼は軍務に就き、百人隊長の地位に任命された。それは、彼が肉体の強靭さと精神力の両面で多くの人々を凌駕していたからである。

当時、ローマ皇帝リキニウス[581]　は、キリスト教徒に対してその憎悪のすべてをぶつけ、キリストの教会に対して神に敵対する手を差し伸べた。すべての市場や人通りの多い場所には、キリストを崇拝してはならないという皇帝の命令と勅令が布告され、この皇帝の禁令に違反した者はすべて死

575　パリオス――ゲレスポント（ダーダネルス）に面した都市で、小アジア北西部のミシア州にあり、ランプサコスとキジクの中間に位置する。

576 リキニウス – コンスタンティヌス大帝と共同統治を行ったローマ皇帝。

577　フリギア――小アジアの広大な地域であり、当初は半島西側の半分の中央部全体を網羅していた。さらに、後にミジアに編入されたプロポンティス（大理石海）の南岸からヘレスポントに至る地域も含まれていた。したがって、パリオス市は4世紀、304年から320年にかけてフリギアにも属していた。

578 トリブヌス――属州軍の最高司令官。

579 オプティオ――センチュリオンの補佐官。センチュリオン――100人からなる軍事部隊であるセンチュリアの長。

580 聖殉教者テオゲネスは、320年頃に殉教した。

581 リキニウスは、307年から321年にかけてローマ帝国の東部を統治した皇帝である。

刑に処されることとなった。　人々は皆、石や木で造られた偶像の前に引き出され、人の手による造り物に礼拝するよう強要され、従わない者は拷問によってこれに従わされた。街全体に混乱が広がり、キリスト教徒の財産は略奪され、家は荒らされ、人々は殴打された。敬虔な女性たちは街中を引きずり回され、　――若者への憐れみも、老人への敬意もなかった。何の罪もない者たちが、悪人のように苦しめられた。牢獄は人で溢れかえり、良家や裕福な家々も住人を失った。キリストを信じたというただそれだけの理由で追放された人々によって、荒野は埋め尽くされた。　父は自分の息子を死に追いやった　、息子は自分の父を裁判にかけ、兄弟は兄弟に対して狂乱し、奴隷は主人に反旗を翻した。悪魔は人々の魂に、まるで恐ろしい狂気の夜のようなものを招き寄せたため、人々はまるで暗闇の中にいるかのように、互いを認識できなくなっていた。　礼拝所は不信心者たちの手によって荒らされ、聖なる祭壇は倒され、いかなる供物も、香も、神聖な礼拝を行うことのできる場所もなかった。すべてが、あたかも暗い雲のように、落胆に包まれていた。　神の僕たちは追放され、あらゆる敬虔な集会は恐怖の中で行われ、悪魔たちは、犠牲の煙と血で宇宙を穢しながら、歓喜に沸いていた。

こうした災難を目の当たりにし、ゴルディウスは自ら進んで街を去ることを決意した。　軍用の帯を脱ぎ捨て[582]　、富や親族、友人、奴隷、そして世俗の安楽、さらにはこの世の平和とその快楽を愛する人々が渇望するあらゆるものを捨て去り、彼は人跡未踏の深い荒野へと去っていった。偶像崇拝者たちとの交わりよりも、獣たちとの生活を自らにとってより楽しいものと見なしたからである；　彼は聖なる預言者エリヤに倣った。エリヤはシドンの偶像への礼拝を目撃すると、ホリブ山へと退き、洞窟に入り、神を求め、そして人間の目で見ることのできる限りにおいて、その神を確かに見たのである（列王記下19章）。　このゴルディウスもまた、都市の騒動、市場の喧騒、役人の傲慢、中傷者たちの法廷――売り買いし、誓いを立て、嘘をつき、悪口を吐く者たち――から逃れ、また、遊びや嘲笑、そして都会の不品行な歓楽からも逃れた。なぜなら、彼には清らかな耳と、　清らかな目、そして何よりも、神を仰ぎ見ることのできる清らかな心を持っていたからだ。彼は神聖な啓示に恵まれ、*「人によらず、また人を介さず」*（ガラテヤ1:1）、「真理の御霊」（ヨハネ15:26）という偉大な師によって、偉大な神秘を知った。　そこから、人生がいかに無益で短く、夢や影のようであるかという思索へと移り、彼は魂の全力をもって天国での永遠の住まいを切望し、強き戦士のように、断食、徹夜、祈り、そして神の言葉による教えによって戦いに備え始めた。　とりわけ、彼は、街全体が邪悪な神マルス――より正確には、戦いを好む悪魔[583]　――の祭りを執り行うその日を、心待ちにしていた。その日が訪れると、民衆は皆、馬の競走を見るためにサーカスに集まり、高い席に陣取った。その時、街には誰も残っていなかった。　馬の疾走や騎手の技を見守る観客の中には、自らの命を顧みず、この無益な集まりを避けようとしなかった多くのキリスト教徒もいた。その日、奴隷たちは労働から解放されてそこに集まり、学校から子供たちが駆けつけ、さらに淫らで恥知らずな女性たちもそこにいた。

こうして、サーカスは馬のレースを熱心に眺める数え切れないほどの人々で埋め尽くされた。その時、勇猛で気高きゴルディウスは、高い山からサーカスへと降りてくると、群衆を恐れず、どれほど多くの武装した手に身を委ねることになるかなどとは微塵も躊躇せず、揺るぎない心と恐れを知らぬ魂をもって、サーカスに詰めかけた人々をかき分けて中央に立ち、聖書の言葉を体現した。　*「義人は獅子のように勇敢である」*（箴言 28:1）[584]　。それだけでなく、彼はそのような大胆さをもってサーカスの広々とした場所に立ち、使徒たちのように大声で預言者イザヤの言葉を宣言した。　*「わたしを求めなかった者たちが、わたしを見つけた」*（イザヤ書　65:1）と宣言し、彼がやむを得ずここに連れてこられたのではなく、夜の闇の中で彼を捜し求めたユダヤ人たちの手に自ら身を委ねら

[582] 軍隊で名誉ある地位に就いていた者たちの特徴は、剣を吊るすための特別な帯を身につけていたことである。
[583] ローマの戦神マルスは、ローマ国教において最も重要な神々の一人として崇められていた。
[584] つまり、義人は獅子のように何ものをも恐れない。

れた主キリストに倣い、自発的に殉教の業に身を捧げていることを、彼らに明確に示した。　サーカスに居合わせた人々が、自分たちの前に立っているのが誰であるかを知ると、たちまち叫び声が上がった。信者たちは喜びのあまり拍手を送ったが、非信者たちは裁判官に向かって、ゴルディウスを処刑するよう命じるよう叫んだ。　場内は叫び声と騒然とした雰囲気で満たされ、人々は馬にも御者にも目を向けなくなった。戦車の車輪の音が空気を満たしても無駄だった。誰もゴルディウス以外のものを見ようとはせず、ゴルディウスの言葉以外は何も聞こうとしなかったのだ。　サーカス全体が叫び声で満たされ、その叫びは風のように空中に響き渡り、馬の騒音を覆い隠した。そして、告示係が沈黙の合図を送ると――トランペットは鳴り止み、笛の音は静まり、楽器の音も途絶えた。誰もがゴルディオだけを見つめ、誰もが彼の一言だけに耳を傾けていた。　そこには、競技場の秩序を監督し、競技参加者への賞を授与する都市の統治者も座っていた。聖人はすぐに彼の前に連れて行かれ、次のような質問が投げかけられた。

「彼は誰で、どこから来たのか？　どの家系、どの一族の出身なのか？」

そこでゴルディウスは、自身のすべて――どのような位階にあったか、なぜ職務を捨てて荒野へ退いたのか、そしてなぜ戻ってきたのか――を語った。

「私が戻ってきたのは」とゴルディウスは言った。「あなたの命令を無視し、私の希望であり守りであるイエス・キリストを信じることを、実際の行動をもって示すためです。また、あなたがその残忍さにおいて多くの人々を凌駕していることを知ったため、私はあえてこの日を、私の決意と誓いを果たすのにふさわしい時として選んだのです。」

この言葉を聞いて、総督の怒りは火のように燃え上がり、彼はその猛烈な怒りをすべて聖ゴルディウスに向けました。

「処刑人を呼べ！」と彼は叫んだ。「鞭はどこだ？　鉛の玉はどこだ？　車輪はどこだ？　車輪で彼を引き裂き、その肉体を[585]　に引き裂かせよ。木に吊るし、処刑の道具を持ってこさせよ。野獣に食わせ、剣で斬り落とし、深淵に投げ込ませよ。」　とはいえ、これだけではこの不敬な男にはまだ足りない。彼は一つの死ではなく、多くの死に値するのだ。

すると、聖ゴルディウスはこう言った。

「まことに、もしキリストのために死ぬことを望まなかったなら、私は自分自身に大きな害を及ぼしたことになるだろう！」

この言葉は、総督をさらに激しい怒りに駆り立て、彼の生来の残忍さを増幅させた。しかし、彼がますます残酷になるほど、聖ゴルディウスは苦しみの中でもますます勇敢な姿を見せた。　いかなる拷問も、いかなる死をもたらす道具も、彼が固く決意した志を揺るがすことはできなかった。天を仰ぎ見ながら、彼は詩篇の句を歌った。*「主が私の味方であるから、私は恐れない。人が私に何ができるというのか？」*（詩篇 117:6）そしてさらに、*「私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるから」*（詩篇22:4）；そして、聖書から学んだこれらに類する言葉を、ゴルディウスは自らを勇気と忍耐へと奮い立たせながら詠んだ。彼は恐怖とはほど遠い存在であり、自ら苦しみを求めるほどであった。

「何だ、」と彼は言った。「なぜ躊躇しているのか？　なぜ立ち止まっているのか？　私の体を切り刻み、粉々に砕き、お望みのままに私を苦しめよ。私に約束された恵みを受けるという希望を奪ってはならない。あなたがたが私の苦しみを強めれば強めるほど、私は主からより大きな報いを受けるのだ。」　この世の苦しみは永遠の喜びをもたらし、あなたがたが我々の体に与える傷の代わりに、我々は万人の復活の日に輝かしい衣を授かるだろう。恥辱の代わりに、天の冠が与えられる。悪人どもと共に裁かれる代わりに、我々は天使たちと共にいることを許されるのだ。

[585] 初期のキリスト教徒に対する拷問器具。

怒りや拷問をもって聖ゴルディウスを聖なる信仰から引き離すことができなかった邪悪な都市長官は、甘言で彼を誘惑し始めた。というのも、悪魔にはそのような習性があるからだ――臆病な者を脅かし、堅固な者を讃辞で軟化させ、気を緩ませるのだ。　そこで、拷問官は聖人に様々な贈り物を差し出し、さらに王の名においてより大きな報奨を約束した。

「王は」と彼は言った、「君に軍隊での高い地位、広大な領地、富と名声、そして君が望むものすべてを与えるだろう。」

聖人はその約束を聞くと、その狂気ぶりを嘲笑してこう言った。

「まさか、天の御国よりも優れたものを、私に与えることができるというのか？」

すると、不信心な都督は怒りに任せて剣を抜き、処刑人を呼ぶよう命じ、聖ゴルディウスを斬首に処す判決を下した。大勢の民衆が見守る中、処刑が行われる直前、ゴルディウスは彼を知る人々に取り囲まれ、抱きしめられ、最後の口づけを贈られた。　彼らは涙ながらに、自ら死を招いたり、若さの真っ盛りに命を絶ったり、皆に愛されるこの太陽をこの世に残さないでほしいと懇願した。彼らは、せめて口先だけでもキリストを否定するよう彼に勧め、こう言った。

「一言で死を免れることができる。口先だけでもキリストを否定しなさい。心の中では、好きなように彼を信じればよい。神は言葉ではなく、語る者の思いに耳を傾けるからだ。そうすれば、裁判官の怒りを和らげ、神をなだめることができるだろう。」

しかし彼は、海の真ん中にそびえ立つ岩のように、たとえ激しい波が打ち寄せてきても決して砕けることのない岩のように、その堅い決意を揺るがすことはなかった。　また、岩の上に建つ家が、いかなる強風にも、豪雨や氾濫する川にも崩されることがないのと同じように、その堅固な男もまた、自らの信仰において揺るぎなかった。

そして、霊的な目を通して、悪魔が彼の知人たちの周りをうろつき、ある者には涙を流させ、またある者には嘆願や悪意ある助言を促しているのを見たとき、殉教者は主の涙に満ちた言葉をもってこう言った。「*わたしのことを泣いてはならない*」（ルカ23:28）と語り、代わりに、キリスト者を迫害する神の敵たちのために泣いてほしいと願った。すなわち、「*私たちのために火を用意し、自らもゲヘナに火をつけ、怒りの日に自分たちに怒りを蓄えている者たち*」（ローマ2:5）のために泣いてほしいと。　私の心を痛めつけるのはやめてください。私は、ただ一度だけでなく、何度も、私たちの主イエス・キリストの御名のために死ぬ覚悟があるからです。

ゴルディウスに、口先だけでキリストを否定するよう勧めた者たちに対し、彼は次のように答えた。

――キリストの恵みによって与えられたこの舌を、私はその創造主を否定するよう強いることはできません。「*なぜなら、心で信じて義と認められ、口で告白して救われるからです*」（ローマ10:10）。幼い頃から崇めてきた主を、どうして否定できましょうか。　私は聖なる信仰の中で育てられました。もし私が神を否定したら、天は愕然とするのではないでしょうか？天の星々は、私の前からその光を隠してしまうのではないでしょうか？　大地は私を許容してくれるだろうか、それとも生きたまま私を飲み込んでしまうだろうか。「*だまされてはならない。神は侮られる方ではない*」（ガラテヤ6:7）[586]「主は私たちの口から出る言葉によって私たちを裁き、私たちの言葉によって私たちを義と認め、また私たちの言葉によって私たちを罪に定める」（ルカ19:22;　マタイ 12:37）。主の恐ろしい警告を、あなたは聞いたことがないのですか。「*もしだれかが人々の前でわたしを否むなら、わたしも天の父の前でその人を否む*」（マタイ 10:33）。それなのに、なぜあなたは私に、口で私の神を否むよう勧めるのですか？　まさか、自分の命を延ばすためでしょうか。まさか、一時的に死を免れ、数日間の命を得ようとするためでしょうか。しかし、そうすれば私は永遠の命を失ってしまうのです。まさか、肉体の苦痛を避けるためでしょうか。しかし、そうすれば、病のない場所で義人た

[586] つまり、神を欺くことはできない。

ちに用意された恵みを見ることはできません。　もし私が、短命な命と引き換えに、永遠の苦しみと魂の滅びを買い取るなら、それは明らかな狂気です。いいえ、私もあなた方に忠告します。もしあなたがたがそれほど愚かな考えを持っているのなら、分別と真理を学び、「*偽りを捨てて、真理を語りなさい*」（エフェソ4:25）と、「*主イエス・キリストが、父なる神の栄光のために*」（フィリピ2:11）と告げなさい。なぜなら、「*天にある者、地にある者、また地の底にある者のすべてのひざが、イエスの御名の前にひざまずく*」（フィリピ2:10）とき、あらゆる舌がそのような言葉を口にするからです。

こう語り、自らに十字架の印を切った後、聖ゴルディウスは恐れずに処刑場へと向かい、その顔の輝きを失うことなく、まるで背後に処刑人がいないかのように、またまるで自分の前に、自らの魂を委ねようとしている天使たちが見えているかのような心境で、処刑の場に立ち止まった。　剣によって斬り殺されたとき、彼は至福の命を得た。ラザロのように、喜びの叫び声に包まれながら、彼は永遠の安息の地へと移され、そこで報いを受けつつ、天使たちと共に、自らのために苦難を耐え忍んだキリスト――すなわち、その御名のために殉教したキリスト――を永遠に賛美している。

コンダク、第8調：

あなたの汗は、栄光に満ちた者よ、全地を潤し、その尊い血によって、高き者よ、全世界を喜ばせました。神に賢き者よ、あなたの祈りによって、信仰をもってあなたを讃え、祝福し、ふさわしい賛歌を唱えるすべての人々を救い給え。万人に称えられる、多くの苦難を耐え忍んだ者よ。

聖預言者マラキの記念日

記念日：1月3日

聖預言者マラキは、ザブロン族の出身であった[587]　。彼は、ユダヤ人がバビロン捕囚から帰還した[588] 後のネヘミヤの時代[589] に生き、預言を行った。その頃、エルサレムの神殿は再建され、そこで礼拝が行われ、祭司たちによって犠牲が捧げられていた。　その敬虔な生き様は民を驚嘆させ、民は彼の清らかな生活が神の天使のようであるのを見て、彼を「マラキ」と呼んだ。これは「主の天使」を意味する。預言者の務めに召されたマラキは、信仰、律法、そして敬虔さの熱心な擁護者となった。　ユダヤ人が捕囚から帰還した後、彼らの道徳的・宗教的な状態には多くの混乱が見られ、それは祭司たちの怠慢と無頓着さによってさらに増幅され、深刻化していった。この状況は、預言者を憤慨させ、心を痛めずにはいられなかった。彼は民と祭司たちに対して、力強く、威厳ある非難を繰り広げた。　預言者は、民と祭司たちが神に対してふさわしい畏敬の念を持たず、粗末な供え物を捧げていること（マラキ1章）を非難し、　また、祭司たちに対しては、彼らの不正、正しい道からの逸脱、戒めの不遵守、そして律法に関する偽善によって、神の名を汚し、民に惑わしをもたらしていることを非難した（マラキ2:1–9）。　民の背信と先祖の契約の破り、すなわち妻たちに対して不法な行い

---

587 ザヴロンは、族長ヤコブとリアとの間に生まれた六番目の息子である。 – その部族の領地は、パレスチナ北部の地中海からゲネサレト湖に至る最良の地域を占めており、北はアシェル族およびネフィリム族の領地と、南はイスラエルの大平原を占めていたイッサカル族の領地と接していた。

588 すなわち、紀元前約400年のことである。

589 ネヘミヤはユダヤ人で、ペルシャ王アルタクセルクセス・ロンギマヌスの酒務官であった。 その後、彼は半壊状態にあったエルサレムに城壁を築き、バビロンから多くのユダヤ人をエルサレムへ導いた学識ある祭司エズラと共に、捕囚後のエルサレムにおけるユダヤ人の宗教的・市民的生活を再建した。　自身の功績を、彼の名で知られる書物に記し、それは聖書の一部となった。

をし、正当な妻を不当に拒絶し、異邦人の女を妻に迎えること（マラキ2:10–16）を厳しく糾弾し、聖なる預言者マラキは、彼らの魔術や姦淫、偽りの誓い、傭兵への報酬の滞納、寡婦や孤児への虐待、魔術や姦淫、偽りの誓い、傭兵への報酬の滞納、寡婦や孤児への虐待といった様々な悪行についても、神の裁きを警告した。　魔術や姦淫、偽りの誓い、傭兵への報酬の未払い、未亡人や孤児への虐げ、寄留者の拒絶、そして神の神殿への十分の一献金や供え物に関する律法の不履行についても（マラキ3:5–12）。最後に、預言者はユダヤ人たちを、彼らの神への冒涜、すなわち「神に仕えるのは無駄であり、神の定めを守り、喪服を着て神の御前に立つのは無益だ」という、傲慢で冒涜的な言葉について非難した。また、不義を行い、不法を行う者たちの方が、より幸福に暮らし、自分のことをうまく切り盛りし、無事であるかのように語ったことについても非難した（マラキ3:13–15、2:17）。これらの悪を糾弾する一方で、聖なる預言者マラキは、第二神殿の栄光を予見し、メシアの到来、その到来に先立つ洗礼者ヨハネの出現、不義な者たちに対する神の来るべき裁き、義人の栄光、そしてすべての民の前での神の栄光の広がりを、極めて明確に預言した（マラキ1:5, 11、2:1–5、3:16–18、マラキ4）。

聖預言者マラキは若くしてこの世を去り、故郷の村スファで先祖たちと共に葬られた。彼は旧約聖書の最後の預言者であったため、教父たちからは「預言者たちの封印」と呼ばれている[590]。

コンダク、第4声：

預言の賜物に富む預言者よ、あなたはキリストの到来と世の救いをあらかじめ告げ知らせ、その輝きによって世界は照らされた。

1月17日

1月4日（旧暦）

同日、シケリアのククメの修道院長、聖**テオクティスト**の記念日（†800年）。

七十人の使徒たちの祝日

記念日：1月4日

十二使徒に加え、主イエス・キリストはさらに七十人の弟子を選ばれました。聖ルカ福音書はこれについて次のように記しています。「その後、主はさらに七十人の弟子を選び、二組ずつに分けて御自身の先頭に立たせて遣わされた」（ルカ10:1）。十二人は、主の生涯の証人として主のそばに留まり、七十人は、主キリストが訪れる予定の町々で先に宣教を行い、人々が救い主キリストを受け入れる準備を整えた。その後、主の弟子たちの多く、そしてもちろん七十人のうちにも多くの者が、キリストから離れ、主に仕えることをやめてしまった。　聖ヨハネ福音書は次のように記している。「弟子たちの多くはイエスから離れ、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人

[590] 預言者マラキの名を冠した書物は、「小預言者」の書物の中で最後のものとして残っている。それは4章から成り、彼の預言的な演説を一つ記しており、おそらくは彼が口頭で語った多くの演説の本質を表しているものと思われる。　この説教の内容は、預言者の同時代であるユダヤ民族の道徳的欠点を糾弾し、神の懲罰を警告し、救い主の到来を約束するものである。マラキ書の預言書はメシア的な預言に満ちており、そのメシア的な性格（マラキ書3:1–3, 6–7, 12、17–18、4:4–6）には、主の先駆者の到来に関する預言が含まれており、聖ヨハネ・バプティストを称えるすべての祝日に、パリアミアとして朗読される。

に言われた。『あなたたちも、去って行きたいのか』」 （ヨハネ6:66–67）そして、キリストの受難の日が訪れると、キリストの弟子たちの数はさらに減り、十二使徒の一人さえもキリストから離れてしまった時には、七十人のうち、キリストのそばに残っていた者はほとんどいなかった。 キリストの復活後、十二使徒の列にはマタイが加わったが、七十人の列はすぐには満たされず、 十二使徒たちや、聖使徒パウロの説教によってキリストへと導かれた人々の中から、少しずつ補充されていったのである。パウロは、その同じ第一級の聖徒の列に召され、ペトロと共に、その列における首席となったのである。

聖書、聖なる教父たちの伝承、古代の歴史家たち、そして信頼できる教会の伝承者たちの記述に基づき、七十人の使徒たちの列を次のように描くことができる。

七十人の使徒の筆頭は、主の兄弟である聖ヤコブであり、聖使徒パウロはガラテヤ人への手紙の中で、彼について次のように言及している。「*私はエルサレムへ上り、ペトロに会った。しかし、使徒たちの中では、主の兄弟ヤコブ以外には、誰にも会わなかった*」 （ガラテヤ1:18–19）。伝承によれば、彼はエルサレムの初代司教に任命され、キリストご自身が地上におられた間に、この職に選ばれ、叙階されたとされています。 エルサレムでキリストを宣教していた際、使徒ヤコブはユダヤ人たちによって神殿の屋根から地面へ突き落とされ、その後、石打ちに遭い、頭部を棍棒で殴打されて息を引き取った[591] 。

聖福音記者マルコは、聖使徒ペトロの指導の下で『聖福音書』を著しました。ペトロは自身の第一公同書簡の中で、次のように彼について言及しています。「*バビロンの、あなたがたと同様に選ばれた教会と、私の息子マルコが、あなたがたに挨拶を送ります*」（Iペトロ5:13）。 その聖使徒ペトロ自身が、マルコをアレクサンドリアの司教に任命しました[592] 。そこで、キリストについて説教したため、偶像崇拝者たちは彼を縛り上げ、石の上を引きずり回し、殴打しました。その時、主イエス・キリストが現れ、彼を天の栄光へと招き、使徒は主の御許に息を引き取りました[593] 。

聖福音記者ルカは、聖使徒パウロの指導の下で『聖福音書』を著した。パウロはコロサイ人への手紙の中で、彼について次のように言及している。*「愛する医師ルカが、あなたがたに挨拶を贈ります」*（コロサイ4:14）。 また、彼は『使徒言行録』を著し、主にベオティア地方で、キリストについて多く説教した[594] 。[595] 。アカイアで殉教した[596] 。

聖クレオパは、聖ヨセフ・婚約者の弟である。彼はエマオへの道中で聖ルカと共に、復活後の主を目撃し、その後、ある家 に集まっていた弟子たちの前に現れ、そこでパンを裂かれた復活したキリストを認めた（ルカ24:13–35）。 キリストについての説教のため、聖クレオパはユダヤ人たちによって殺害された[597] 。

聖シメオンは、肉親として主と血縁関係にあり、エルサレムにおいて使徒ヤコブに次ぐ第二代司教となり、そこで、十字架につけられたキリストのために自らも十字架にかけられ、その生涯を閉じた。[598]

---

[591] 彼の記念日は、10月23日に教会によって執り行われる。

[592] アレクサンドリアは、紀元前331年にアレクサンドロス大王によって、地中海沿岸、下（北）エジプトのナイル川河口に築かれた有名な都市である。古代には、極めて豊かな商業・工業都市であった。 現在、アレクサンドリアは地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられ、人口は23万人に達する。

[593] その記念日は4月25日

[594] 聖使徒兼福音記者ルカの記念日は、正教会において10月18日に祝われ、その聖遺骨の移送日は4月22日である。

[595] ベオティアは、ギリシャ中部の地方である。

[596] 聖グリゴリオス・テオロゴスが、ユリアヌス皇帝に関する最初の説教の中で、このことを証言している。

[597] 伝承によれば、まさにその家で、彼は聖ルカと共に、キリストがパンを裂かれたことによって、復活されたキリストを認めたという。

[598] 彼の記念日は、教会によって4月27日に定められている。

聖バルナバは、使徒たちによってその名を与えられたが、以前はヨシヤと呼ばれていた（使徒行伝4:36）。彼については、『使徒行伝』（使徒行伝11:24）および聖使徒パウロのガラテヤ人への手紙に言及されている：　*「私は、」*と使徒パウロは言う、*「バルナバと共にエルサレムへ行った」*（ガラテヤ2:1）。この使徒バルナバは、聖使徒パウロと共に福音宣教に尽力し、最初はローマでキリストについて説教し、その後、メディオランで司教に任命された[599] 。 彼は故郷であるキプロス島で、キリストの信仰を迫害する者たちによって石打ちに遭い、この世を去りました。キリスト教徒たちは彼を尊厳をもって埋葬し、彼の遺言に従って、かつてバルナバ自身が書き写し、常に手放すことのなかった『マタイによる聖福音書』を棺に納めました[600] 。

聖ヨシヤ、あるいはヨセフは、バルサバやユストとも呼ばれた。『使徒言行録』に彼のことが記されており、そこには、彼がマタイと共に、背教した使徒ユダ・イスカリオテの後任として選ばれたと述べられている（使徒言行録1:23）。 また、聖使徒パウロのコロサイ人への手紙においても、使徒がコロサイの教会の信徒たちへの挨拶を列挙する中で、*「また、ユストと呼ばれるイエス」*と述べている（コロサイ4:11）。 教会の教師たちは、このヨシヤは、ヤコブ、シモン、そしてイスカリオテではないユダと同様に、ヨセフ・婚約者の息子であり、エレウフェロポリス[601] で司教の座に就き、そこで殉教の死を遂げたと説いている。[602]

聖タダイは、当初は聖ヨハネ・バプティスタの弟子であり、その後キリストの弟子となった。彼は、十二使徒の一人である聖使徒ユダ・タダイ（またはレビ）とは区別する必要がある。彼はエデスの君主アヴガルに洗礼を授け、そのハンセン病を癒した。 キリストの福音を宣べ伝えるための長きにわたる労苦の後、彼は主のもとで安らかに眠った[603] フェニキアの都市ベリテにて[604] 。

使徒パウロに洗礼を授けた聖アナニア（使徒行伝9:10–18）は、当初ダマスカスの司教であった[605] 。聖アナニアはエレウフェロポリスで生涯を閉じ、そこでイゲモン・ルキアノスの命令により石打ちの刑に処された[606] 。

聖なる第一殉教者ステファノは、大助祭として、キリストのために石打ちの刑に処され、最初に殉教の冠を受けたため、「第一殉教者」と呼ばれている[607] 。 死の直前に、彼は天が開き、神の右に立つ「人の子」の姿をした主イエスを見る栄誉に浴した（使徒言行録7:55）。

---

[599] メディオラン（現在のミラノ）は、北イタリアのロンバルディア地方にある最も重要な都市であり、極めて古くに創設され、常に大きな重要性を持ち続けてきた。

[600] 聖使徒バルナバの記念日は、6月11日に特別に祝われる。

[601] エレウフェロポリは、南パレスチナにある都市で、エルサレムとガザを結ぶ道沿いに位置する。現在、この地には、セフェル平野からユダヤの高地へと続く出口付近に集落が立地している。その近くには、古代エレウフェロポリの遺跡が残っている。

[602] 10月30日にその記念が祝われる

[603] 聖使徒ファデオの記念日は、教会によって8月21日に祝われる

[604] ベリト（現在のベイルート）は、地中海沿岸に位置するフェニキアの古代都市であり、 5世紀には繁栄し、修辞学、詩、法学の高等教育機関で名声を博した。現在は、アジア・トルコ領シリアの主要な行政都市であり、シリア沿岸部で最も重要な貿易拠点であり、人口は18万人に達する。

[605] ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市であり、世界でも最も古い都市の一つである。パレスチナの北東、アンチ・レバノン山脈の東麓にある美しく肥沃な平野に位置し、市内を流れるバラデ川沿いに広がっている。 現在、オスマン帝国に属するダマスカスは、アジアで最も豊かな都市の一つであり、人口は15万人に達している。

[606] 使徒アナニアの記念日は、聖教会によって10月1日に祝われる。

[607] 聖第一殉教者ステファノスの記念日は、教会によって年に3回祝われます。すなわち、聖人が殉教した12月27日、その聖遺骨が発見された9月15日、そして聖ステファノスの聖遺骨がエルサレムからコンスタンティノープルへ移された8月2日です。

七人の助祭の一人である聖フィリッポは、サマリアで魔術師シモンに洗礼を授け（[608]　）、カンダキア女王の宦官にも洗礼を授けた（使徒行伝8:26–39）。彼はトラッリ市の司教を務め（[609]　）、そこで多くの人々にキリストの信仰を広めた後、高齢のうちに主のもとへ帰った。[610]

聖プロホルは、七人の執事の一人（使徒行伝6:5）であり、聖使徒ヨハネ・テオロゴスの同伴者であり、その働きに加わった。彼はビフィニアの都市ニコメディアの初代司教[611]　であり、その後、アンティオキア[612]でキリストを宣教し、そこで殉教した。

七人の助祭の一人である聖ニカノールは、最初の殉教者である聖ステファノが石打ちにされたのと同じ日に、キリストを信じた二千人と共に殺害された。　これは、『使徒言行録』に記されている通り、エルサレム教会に対して起こった大迫害の最中に起きたことである（使徒言行録8:1）。

七人の助祭の一人である聖ティモンは、アラビアのヴォストラ市の司教であった[613]　。彼はキリストの御名を宣べ伝える中で、ユダヤ人やギリシャ人から多くの苦難を受けた。その後、燃え盛る炉に投げ込まれたが、無傷でそこから出てきて、やがて主のもとへ帰った。

七人の助祭の一人である聖パルメンは、使徒たちから託された福音宣教の務めを果たし、使徒たちの目の前で殉教した[614]。

聖ティモテオは、聖使徒パウロと共にキリストの福音を宣べ伝える働きに励み、パウロは彼に二通の手紙を書き送りました。彼はエフェソスの司教を務め[615]、そこで殉教の死を遂げました[616]。

聖ティトもまた、聖使徒パウロと共に福音を宣べ伝える働きに従事しました。聖使徒パウロは、自身の書簡の中で彼について言及しています（IIコリント2:12–13、12:18；　テモテへの手紙第二4:10）で彼について言及しており、彼宛ての手紙も書いています。聖ティトスは、クレタ島のゴルティナの大司教でした。高齢で安らかにこの世を去りました。[617]

聖使徒パウロが特別な手紙を送った聖フィリモンは、ガザの司教でした[618]　。ネロ帝の治世中に殉教しました。[619]

608　サマリアは、パレスチナの国あるいは地域として、ヨルダン川の西側、パレスチナの中央に位置していました。その境界は、北がガリラヤ、南がユダヤ、東がヨルダン川、西が地中海でした。　サマリアは、サマリア地方の主要都市であり、かつてはイスラエル王国の首都でもあったが、エルサレムから北へ約3ヴェルストの距離に位置していた。現在、この古き栄光の都市は石一つ残っておらず、その跡地には、さびれた小さな村サブスティエ（かつてのセバスティア）が建っている。

609 トラリアは、小アジア北西部に位置するリディアの都市である。

610 使徒フィリポの記念日は、教会によって10月11日に祝われる。

611　ニコメディア――小アジア北西部、ビフィニア地方にある豊かで繁栄した都市。かつて繁栄を極めたニコメディアからは、その輝かしい過去を物語る多くの遺跡が今も残されている。

612　アンティオキア――シリアの首都であり、最も古く、最も豊かな都市である。アンティオキアはオロンテス川のほとりに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れた、レバノン山脈とタウロス山脈の間に位置している。現在、アンティオキアはトルコの支配下にあり、人口1万人ほどの小さく貧しい町となっている。

613　ボストラはアラビアにある都市である。古代には豊かな商業都市であった。現在は廃墟となっている。現存する石造りの店舗が長く連なる様子は、かつてのその威光と富を物語っている。

614 聖使徒プロホロス、ニカノール、ティモン、パルメンの記念日は、7月28日にまとめて祝われる。聖ニカノールの記念日は12月28日、聖ティモンの記念日は12月30日である。

615　エフェソスは、小アジアのアシア州の主要都市であり、カイストル川沿いに位置していた。現在、古代都市エフェソスの跡地には、*アイシャ・ソリュク*と呼ばれる貧しいトルコの村がある。

616 聖使徒ティモテオの記念日は、教会によって1月22日に祝われる。

617 聖使徒ティトの記念日は8月25日に行われる

618　ガザは、ペリシテ人の最も古い都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の境界線として機能していた。その後、この繁栄した都市はすべての重要性を失い、今では砂丘と惨めな廃墟だけが、かつてここに偉大な都市が存在したことを物語っている。 ここからほど近い場所に、同じ名前を持つ、より後世に築かれた新しい都市がある。

619 正教会は、聖使徒フィリモンの記念日を2月19日に祝う

聖オニシモは、聖使徒パウロがフィリモンへの手紙（フィリモン1:10–19）の中で言及している人物であり、スペイン、ギリシャ、小アジアでキリスト教を宣教した。聖イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の死後まもなく、ローマで石打ちの刑に処され、殉教した。[620]

同じく聖使徒パウロがフィリモンへの手紙の中で、*「キリスト・イエスのために、私と共に囚人となっているエパフラスが、あなたに挨拶を伝えます」*（フィリモン1:23）と述べている聖エパフラスは、コロサイの都市およびラオディキアとイェラポリスの教会の司教であった[621]。彼は聖使徒パウロと共にローマで投獄されており、パウロはそこからコロサイの信徒たちに次のように書き送った。*「あなたがたの仲間のエパフラスが、イエス・キリストのしもべとして、あなたがたが完全であり、神に喜ばれるすべてのことに満たされるよう、常に祈り続けています。私は、彼があなたがたや、ラオディキアやヒエラポリスにいる人々に対して、大きな熱意と配慮を持っていることを証します」*（コロサイ4:12–13）。

同じフィリモンへの手紙に言及されている聖アルキッポは、聖エパフラス（ローマで投獄されていた）の後を継ぎ、コロサイの町の司教となりました[622]。これについて、聖使徒パウロはコロサイの信徒たちに次のように書いています。*「アルキッポにこう伝えてください。『主において引き受けた務めを、しっかりと果たすように気をつけなさい』」*（コロサイ4:17）。そこで聖アルキッポは殉教の死を遂げた。[623]

聖シラは、聖使徒パウロの弟子であり、最も親しい協力者であり、パウロと共に神の言葉を宣べ伝え、多くの苦難、傷、投獄に耐えた（使徒16:13–24）。彼については『使徒言行録』に次のように記されている。*「パウロはシラを選び、教会を堅く立てた」*（使徒15:40–41）。その後、彼はコリントの司教となり[624]、神の御言葉を宣べ伝えることに多大な労力を注ぎ、しるしと奇跡を行って、主のもとへ帰った。[625]

聖シルワンは、聖使徒ペトロとパウロと共に神の御言葉を宣べ伝えました。聖使徒ペトロは、その一般書簡の中で、彼について次のように言及しています。「*私は、あなたがたの兄弟であり、忠実な者であると私が思うシルワンを通して、あなたがたにこのことを簡潔に書き送りました」*（Iペトロ5:12）。また、聖使徒パウロもコリントの信徒への第二の手紙の中で次のように述べています。*「なぜなら、私たち、すなわち私とシルワノが、あなたがたのところで宣べ伝えた神の御子イエス・キリストは」*（IIコリント1:19）。使徒シルワノはテッサロニキの司教でした[626]。そこで、キリストの聖なる信仰を確立するための働きの中で数多くの苦難に耐え、ついにキリストのもとへ召されました。

---

620 ローマ皇帝トラヤヌスの治世下、紀元109年頃のことである。聖使徒オニシモスの記念日は2月15日に祝われる

621 小アジアの都市。

622 コロッソスは、フリギアの南西部、リコス川沿い、ラオディキアとイェラポリスの近くに位置する都市である。古代には、大規模で人口が多く、豊かな都市であった。現在では、ホカス山の斜面にある小さな村となっており、その周辺には古代都市コロッソスの遺跡が今も残されている。

623 聖使徒アルキッポスの記念日は、教会において2月19日に祝われる

624 コリント――アハリア地方の美しく肥沃な平野に位置する、最も古く、著名で豊かな商業都市であり、コリント湾の南東端、イオニア海とエーゲ海の間に位置する。現在、古代コリントの遺跡は、クロントと呼ばれる現在のコリントの近くにあり、その人口は約5000人である。

625 その記念日は7月30日に祝われる

626 ソロン、あるいはテッサロニキは、マケドニアの極めて重要な古都であり、エーゲ海（群島）に面した広大なソロン湾、あるいはフェルメイ湾の奥深くに位置していた。現在、この都市はテッサロニキという名で、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコにおける第一の商業・製造業の都市であり、非常に多くの人口を擁している。

聖使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』（2テモテ4:10）で言及している聖クリスケント[627]は、ガラティア[628] の司教を務め、その後、ガリアでキリストを宣教しました。 そこで、ヴィエンヌの町[629] で、クリスケントは自身の弟子であるザカリアを司教に任命し、再びガラティアに戻り、そこでトラヤヌス帝の治世[630] に殉教した。

使徒行伝において、「*会堂の長クリスプは、家族全員とともに主を信じた*」（使徒言行録18:8）と記されており、また聖使徒パウロがコリントの信徒への手紙の中で「*クリスポに洗礼を授けた*」（コリントの信徒への手紙一1:19）と述べている人物である。彼は、ペロポネソス半島に近いエーゲ海とイオニア海の間に位置するエギナ島の司教であった[631]。安らかにこの世を去った。

聖エペネトは、聖使徒パウロがローマ人への手紙の中で、「*私の愛するエペネトに挨拶を伝えてください。彼はキリストのためにアカイアで最初に信じた者です*」（ローマ16:5）と述べている人物であり、カルタゴの司教であった[632]。

聖アンドロニクスは、聖使徒パウロが同じローマ人への手紙の中で、「*アンドロニクスに挨拶を伝えてください*」と述べ、彼を自分の親族であり、幼なじみであり、自分より先にキリストを信じた最も重要な使徒の一人（ローマ16:7）と呼んでいる人物であり、パノニアの司教でした[633]。 安らかに永眠した[634]。

聖使徒パウロが同じ書簡の中で、「*私の愛するスタキオにも挨拶を伝えてください*」（ローマ16:9）と述べている聖スタキオは、聖使徒アンドレアス・プロトマートロスによってビザンティウムの初代司教に任命された。 聖スタキオスは、彼と共にアルギロポリスに[635] 教会を建立し、そこには多くの信徒が集まり、彼は彼らにキリストの戒めを説きました。

聖使徒パウロが同じ書簡の中で、「*主において私の愛するアンプリオに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:8）と述べている聖アンプリオは、ディオスポレ[636] の司教であり、そこでキリストを宣教しました。 オディッセの町[637] で、キリストについての説教[638] のゆえにギリシャ人によって殺害され、この世を去りました。

---

627 その記念日は7月30日である。

628 ガラティア――小アジアの、山岳地帯ではあるが肥沃な小規模な州で、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置している。その名は、ガリア系あるいはケルト系の起源を持つ好戦的な部族であるガラティア人から由来している。

629 ヴィエンナ（現在のヴィエンヌ）は、ローマ時代の植民地であり、後にゲルマン諸部族によって設立された様々な国家の首都となった都市で、ローヌ川の左岸に位置している。現在、この都市にはローマ時代の遺跡が数多く残されている。

630 トラヤヌス――ローマ皇帝――は98年から117年まで在位した。

631 ペロポネソス――ギリシャの南部。

632 カルタゴ――北アフリカに位置する、最も古く有名なフェニキア人の植民地であり、古代史において絶頂期の繁栄を極めたが、紀元前146年に破壊された。古代カルタゴの廃墟の上に、初期のローマ皇帝の時代に新カルタゴが築かれ、非常に長い期間にわたり輝かしい繁栄を誇った。

633 パノニア――ローマ帝国のドナウ川沿岸における重要な地域の一つであり、現在はハンガリーの一部を構成している。

634 聖使徒アンドロニクスの記念日は、教会によって年に3回、5月17日、7月30日、2月22日に祝われる。

635 アルギロポリス（現在のフンドゥクリ）は、ペラとガラタに近いコンスタンティノープルの郊外であった。

636 ディオスポルはパレスチナにあり、エルサレムの北西に位置していた。

637 オディッサはミシア地方、小アジア北西部に位置する都市であり、現在のヴァルナは、バルカン半島の北東斜面、黒海沿岸にある港町で、25,000人以上の住民を擁している。

638 その記念日は教会によって10月31日に祝われる

聖使徒パウロが同じ書簡の中で、「*キリストにある私たちの協力者、ウルバヌスに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:9）と述べている聖ウルバヌスは、マケドニアの司教であり[639]、殉教して亡くなりました[640]。

聖ナルキス（記念日は10月31日）は、聖使徒パウロが同じ書簡の中で「*ナルキスの家の者たちで、主にある者たちに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:11）と述べている人物であり、アテネの司教であった[641]。

聖使徒パウロが同じ手紙の中で、「*キリストにあって試練を経たアペレに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:10）と述べている聖アペレは、スミルナの司教でした[642]。

聖使徒パウロが同じ書簡の中で、「*アリストヴロの家の忠実な人々を挨拶してやってください*」（ローマ16:10）と述べている聖アリストヴロは、ブリタニアの司教であり[643]、そこで長い労苦と苦難の末に亡くなりました[644]。

聖ヘロディオン、あるいはロディオンは、聖使徒パウロが同じ書簡の中で「*私の親族であるヘロディオンに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:11）と述べている人物であり、パトラの司教を務めていた[645]。ローマで殉教した[646]。

聖アガブは預言の賜物を持っていた。『使徒言行録』には、彼について次のように記されている。「*ユダヤからアガブという名の預言者がやって来て、パウロの帯を取り、自分の手足を縛って言った。『聖霊はこう言われる。この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人たちにこのように縛られ、異邦人の手に引き渡されるであろう』*」（使徒言行録21:10–11；参照11:28）。使徒アガブは多くの国で宣教を行い、多くの人々をキリストへと導きました。[647]

聖ルフ（その記念日は4月8日）は、聖使徒パウロが『ローマ人への手紙』の中で、「*主において選ばれたルフに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:13）と述べている人物であり、ギリシャの都市フィヴァスで司教を務めていた[648]。

同じ書簡（ローマ16:14）に言及されている聖アシンクリトは、小アジアのヒルカニア地方の司教であり、そこでキリストの名のために多くの苦難に遭いました[649]。

同じ手紙（ローマ16:14）に言及されている聖フレゴントは、トラキアの都市マラフォンで司教を務めていました[650]。

---

639 マケドニアはギリシャの北、イリュリア、トラキア、エーゲ海、そしてゲトス（またはバルカン）の間に位置していた。一時期、独立国家を形成し、特にアレクサンドロス大王の治世下で隆盛を極め、名声を博した。使徒たちの時代、マケドニアはローマ帝国の一部であった。現在はトルコが支配している。

640 聖使徒ウルバノの記念日 10月31日

641 アテネ——古代ギリシャ国家の首都。その建築物、彫像、商業・工業の発展、そしてとりわけ学校で名高かった。ここには、後世（紀元前6世紀）に至るまで、古代諸国の住民が教育を受ける有名な哲学学校が存在していた。

642 スミルナは、エーゲ海（あるいはエーゲ諸島）の東岸に位置するイオニア地方の有名な商業都市であり、小アジアで最も古い都市の一つである。スミルナは、聖使徒ヨハネ・テオロゴスによってキリスト教の光がもたらされた。 現在、スミルナはトルコに属しているが、今日に至るまで正教の信仰が保たれている。この都市は今もなお、オスマン帝国で最も繁栄し、人口の多い都市の一つである。

643 ブリタニア——イングランドの古称。

644 聖使徒アリストヴロスの記念日は、教会によって年に2回、3月16日と10月31日に祝われる。

645 パトラ、あるいはパタラは、小アジアのリキア州（現在のアナトリア）にある海辺の商業都市である。フェニキア人によって建設されたが、現在は廃墟となっている。

646 聖使徒ヘロディオンの記念日は、教会によって4月8日と11月10日に祝われる。

647 その記念日は4月8日

648 テベスは、ギリシャのベオティア地方の主要都市である。

649 その記念日は4月8日

650 マラトン——マケドニアの北東に位置していたフラキア地方の古代都市。

同じ手紙（ローマ16:14）に言及されている聖エルムは、フィリッポポリスの司教であり[651]、そこで殉教して亡くなりました[652]。

同じ手紙（ローマ16:14）に言及されている聖パトロスは、ネアポリス[653]およびプテオラキア[654]の司教であり、そこで多くの人々をキリストへと導いた[655]。

同じ書簡で言及されている聖エルミウス（正教会では、聖使徒エルミウスの記念日が年に2回、4月8日と5月31日に祝われる）は、ダルマチアの司教であった[656]。

聖使徒パウロは『ローマ人への手紙』の中で、これら5人の使徒について次のように言及しています。「*アシンクリト、フレゴント、エルマ、パトロ、エルミオに挨拶を伝えてください*」（ローマ16:14）。

聖使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』（2テモテ4:21）で言及している聖リンは、聖使徒ペトロの後を継いでローマの司教であった[657]。

聖使徒パウロがローマ人への手紙の中で、「*私のもてなしの主であり、全教会の者であるガイオスが、あなたがたに挨拶を伝えています*」（ローマ16:23）と述べている聖ガイオスは、聖ティモテオの後を継いでエフェソスの司教を務めました。

聖使徒パウロが同じ書簡の中で、「*フィロロガスを挨拶してください*」（ローマ16:15）と述べている聖フィロロガスは、聖使徒アンドレアスによってシノペの司教に任命され（[658]）、そこで安らかに息を引き取りました。[659]

聖ルキオ、あるいはルカ（その記念日は9月10日）は、聖使徒パウロが同じ書簡（ローマ16:21）で言及している人物であり、シリアのラオディキアで司教を務めていた[660]。

同じ書簡（ローマ16:21）で言及されている聖イアソンは、タルソスの司教であり[661]、そこでキリストの名のために多くの苦難に遭った。高齢で安らかに息を引き取った[662]。

ローマ人への手紙（ローマ16:21）にも言及されている聖ソシパトルは、イコニオスの司教でした[663]。ソシパトルは安らかに息を引き取りました[664]。

最後の3人の使徒について、聖使徒パウロはローマ人への手紙の中で次のように記している。「*私の親しい者たちであるルキオ、ヤソン、ソシパトルも、あなたがたに挨拶を送っています*」（ローマ16:21）。

---

651 フィリッポポリス――フラキア地方の古代の要塞都市で、現在は東ルメリアに位置し、マリツァ川沿いにあります。今日でも、その産業と人口の多さにおいて非常に重要な都市です。

652 その記念日は、教会によって3月8日と11月5日に祝われる。

653 ナポリ – イタリア王国の同名の州の州都で、ナポリ湾の北岸に位置する。

654 プテオラは、カンパニア州のナポリ近郊、ティレニア海沿岸に位置するイタリアの海辺の都市である。

655 聖使徒パトロスの記念日は11月5日

656 ダルマチア――イリュリア州の南部地域であり、北はパノニア、西はイタリアおよびアドリア海と国境を接していた。

657 その記念日は11月5日

658 シノプ――黒海南岸に位置する都市。

659 その記念日は11月5日

660 ラオディキア・シルス――かつてはフリギアの主要都市であり、その南西部、小アジアのリクス川沿いに位置し、盛んな交易で知られていた。現在では、荒廃したエスキ・ガッサラの集落にある、一つの低い丘の上の遺跡だけが、その古代都市の記念碑となっている。

661 タルス――キリキア（小アジア南東部の州）の南部に位置する、人口の多い大都市。肥沃な平野にあり、キドネ川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点からほど近い。現在でも、タルスは依然としてかなり重要な商業都市である。

662 使徒ヤソンの記念日は4月28日である

663 イコニアは、小アジア内陸部の高地にある肥沃な平野、タウロス山脈の麓に位置する都市である。かつてはリカオニアの主要都市であったが、現在はコニアと呼ばれ、トルコ・マライジア地方カラマニア地域の中心都市となっている。

664 その記念日は4月28日

聖オリンパン、あるいはオリンプは、聖使徒パウロが同じ書簡（ローマ16:15）で言及している人物であり、 ローマにおける聖使徒ペトロの殉教の場に立ち会い、その後、聖使徒ヘロディオンと共にネロの命により斬首されたと、メタフラストは聖使徒ペトロとパウロの祝日の説教の中で記している[665]。

聖テルティウスは、聖使徒パウロの『ローマ人への手紙』を執筆した。このことについて、彼自身が同書簡の中で次のように述べている。*「主において、この手紙を書いた私、テルティウスも、あなたがたに挨拶を申し上げます」*（ローマ16:22）。 彼は聖ソシパトロに次いでイコニアの第二代司教となり、そこで殉教の栄冠を勝ち取った[666]。

同じ書簡（ローマ16:23）で聖使徒パウロが言及している聖エラストは、エルサレム教会の助祭兼会計係であり、後にパネアデの司教となった[667]。

同じ書簡で言及されている聖クワルト（またはクワート）は、ベリテの司教であった。

聖使徒パウロは、この二人の使徒について次のように記している。「*市の会計係であるエラストと、兄弟クワルトが、あなたがたに挨拶を伝えます*」（ローマ16:23）。

聖エヴォドは、聖ペトロの後を継いでアンティオキアの司教となりました。聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は、アンティオキア人への書簡の中で彼について言及し、*「あなたがたの父であり、あなたがたの最初の牧者である、祝福されたエヴォドを記念しなさい」*と述べています。彼は殉教の死を遂げました[668]。

聖オニシフォロスは、聖使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』の中で次のように言及している人物である。 *「主がオニシフォロの家に恵みをお与えになりますように。彼はたびたび私を慰め、私の束縛を恥じなかったからです」*（IIテモテ1:16）と記されている聖オニシフォロは、コロフォン[669]およびキリネ[670]の司教でした。殉教して亡くなりました[671]。

聖使徒パウロがフィリピの信徒への手紙の中で、*「私とクリメントと共に労苦した」*（フィリピ4:3）と述べている聖クリメントは、サルディスの司教であった[672]。

聖クリスパの後を継いでコリントのユダヤ人シナゴーグの長を務めた聖ソスフェンは、聖使徒パウロによってキリスト教に改宗させられた。 『使徒言行録』には彼について次のように記されている。*「 、すべてのギリシア人は、会堂の長であるソスフェンを捕らえ、裁判所の前で彼を殴打した」*（使徒言行録18:17）。聖使徒パウロ自身も、コリントの信徒への手紙の中で、自身の名と共に彼の名を挙げている。その手紙は次のように始まる。 *「神の御心により、イエス・キリストの使徒として召されたパウロと、兄弟ソスフェン」*（Iコリント1:1）。その後、聖使徒ソスフェンはコロフォンの司教となりました[673]。

---

665 聖使徒オリンポスの記念日は11月10日

666 聖使徒テルティウスの記念日は、教会によって10月30日に祝われる

667 パネアダ――パレスチナ北部の都市。別名、ケサリア・フィリッポ。

668 聖エヴォドの殉教は、キリスト降誕後66年、ローマ皇帝ネロによる迫害のさなかに起こった。エヴォドの記念日は9月7日である

669 コロフォン――小アジア北西部に位置するリディアの古代都市。近年、この都市の遺跡が発見された。

670 キリネアは、同名の地域の主要都市であり、アフリカ北岸、エジプトの西に位置するリビアにありました。ここは北アフリカで最も華やかで豊かな都市でした。現在、その面影は遺跡のみとなっています。

671 聖使徒オニシフォロスの記念日は、教会によって9月7日と12月8日の2回祝われる。

672 サルディカ――古代のサルディス、あるいはサルディは、小アジア北西部に位置するリディアの豊かな都市であり、かつては富で知られたクレオス王の首都兼居城であった。使徒たちの時代には、まだ重要な都市であり、早くからキリスト教教会も設立されていた。 現在、ここには取るに足らない小さな村があるだけで、かつてのこの都市の栄華を物語るのは廃墟だけである。

673 聖使徒ソスフェンの記念日は、教会によって年に2回、3月30日と12月8日に祝われる。

聖アポロは『使徒行伝』に次のように言及されている。*「アレクサンドリア出身のユダヤ人アポロという者が、雄弁で聖書に精通した人物としてエフェソにやって来た。　彼は主の道の初歩を教えられており、熱意に燃えて、主について正しく語り、教えていた」*（使徒言行録18:24–25）。聖使徒パウロもコリントの信徒への第一の手紙の中で彼について言及し、「*私が植え、アポロが水を注ぎ、神が成長させてくださったのです」*（1コリント3:6）と述べている。その後、アポロはクレタ島に滞在した[674]、さらにその後、ケサリアの司教となった[675]。

聖ティキコスは、『使徒言行録』（使徒20:4）や、聖使徒パウロのコロサイ人への手紙（コロサイ4:7）、エフェソ人への手紙に言及されており、そこには次のように記されている。　*「あなたがたも私の様子を知ることができるように、愛する兄弟であり、主において忠実な奉仕者であるティキコスが、すべてをあなたがたに知らせるでしょう。私は、あなたがたが私たちのことを知り、彼があなたがたの心を慰めるために、彼をあなたがたのところへ遣わしたのです」*（エフェソ6:21–22）。また、テモテへの第二の手紙において、使徒パウロは次のように述べています。*「私はティキコスをエフェソへ遣わした」*（IIテモテ4:12；参照：テトス3:12）。ティキコは、聖ソスフェンの後を継いでコロフォンの司教となりました[676]。

聖エパフロディトは、聖使徒パウロのフィリピの信徒への手紙に言及されており、そこで使徒パウロは次のように述べています。*「しかし、私は、私の兄弟であり、協力者であり、戦友であり、またあなたがたの使者であり、私の困窮の際の奉仕者であるエパフロディトを、あなたがたのところへ遣わすことが必要だと考えました」*
（フィリピ2:25）。エパフロディトはアドリアカの司教でした[677]。

聖使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』の中で、*「旅立つ際には、私がトロアデのカルポのところに置いてきたフェロンと書物を持ってきてください」*（IIテモテ4:13）と述べている聖カルポは、フラキアのベリアの司教であった[678]。平穏のうちに生涯を閉じた[679]。

聖コドラトはアテネとマグネシアの司教であり、そこで主の御言葉を宣べ伝える中で、アテネの人々の手によって殉教の死を遂げた[680]。これはハドリアヌス帝の治世下でのことである[681]。

聖マルコ、すなわちヨハネは、パウロとバルナバの同行者として『使徒言行録』に何度も言及されており、例えば次のような箇所がある：　*「バルナバとサウロは、任務を遂行した後、エルサレムから（アンティオキアへ）戻り、マルコと呼ばれるヨハネも連れて行った」*（使徒行伝12章など）

674　クレタ島（同名の主要都市に由来してカンディアとも呼ばれる）は、地中海の東部、エーゲ海の南に位置している。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「諸島の女王」と呼ばれていた。　この地におけるキリスト教は、使徒の時代にはすでに始まっていました。その最初の礎は、聖霊が使徒たちの上に降臨した出来事の目撃者たちによって築かれたものであり、その場にクレタ人も同席していたからです（使徒言行録2:11）。現在、クレタ島はトルコが支配しています。

675 聖使徒アポロスの記念日は、教会によって年に2回、3月30日と12月8日に祝われる。

676 その記念日は12月8日に祝われる

677　アドリア、あるいはアドリアカは、黒海沿岸のフラキア地方にある都市で、フラキアとの国境に位置していたマケドニアの都市フィリッポスからほど近い場所にある。

678　ベリアは、マケドニア東部に位置する都市である。西暦40年から65年の間に、使徒パウロがこの地でキリスト教を宣教した。現在はヴェリア、あるいはカラ・ヴェリア（黒いヴェリア）と呼ばれており、人口は約10,000人である。

679 使徒カルパの記念日は5月26日である

680 その記念日は9月21日

681 ハドリアヌス――ローマ皇帝――は117年から138年まで在位した。

と記されているが、彼はフェニキアのビブロスで司教を務めていた[682] 。 聖マルコは多くの奇跡を行い、その恵みの力は極めて強大で、彼の影一つで病人が癒やされたほどであった[683] 。

聖ジナは、「律法学者」、すなわちモーセの律法の教師という異名を持ち、聖使徒パウロがテトスへの手紙の中で「*律法学者ジナを、私のところへ送るよう手配してください*」（テトス3:13）と述べている人物であり、ディオスポレの司教であった。

使徒行伝（使徒19:29）や、聖使徒パウロのコロサイ人への手紙（コロサイ4:10）およびフィリモンへの手紙（フィリモン1:23）に言及されている聖アリスタルコスは、アパメアの司教でした[684] 。

聖パウロが『テモテへの第二の手紙』の中で、*「プードもあなたに挨拶を伝えています」*（IIテモテ4:21）と述べている聖プードは、ローマ元老院議員であった。彼は敬虔な人物であり、自宅に聖使徒ペトロとパウロ、そして多くの信者たちを迎え入れた。 その後、彼の家は「牧者の教会」と呼ばれる教会へと改められ、伝承によれば、聖使徒ペトロがそこで聖職を執り行ったとされています。

使徒行伝（使徒行伝20:4、21:29）で二度言及され、また聖使徒パウロが同じテモテへの手紙の中で、「*トロフィモは、ミリテで病に伏しているまま残してきた*」 （IIテモテ4:20）と記されている聖トロフィモは、使徒プードスおよびアリスタルコスと共に、あらゆる迫害の中で使徒パウロに同行し、ついに聖使徒パウロがネロ帝の治世下のローマで剣によって斬り殺された際、二人の仲間と共に首を刎ねられた[685] 。

聖マルコ（その記念日は10月30日）は、使徒バルナバの甥であり、ビフィニアのアポロニアデの司教であった[686] 。聖使徒パウロは、コロサイ人への手紙の中で、前述の使徒アリスタルコスと共に彼について言及している： *「私と共に投獄されているアリスタルコスと、バルナバの甥マルコが、あなたがたに挨拶を送ります」*（コロサイ4:10）。

聖アルテマス（記念日は10月30日）は、聖使徒パウロが『テトスへの手紙』の中で*「アルテマスをあなたのところへ送る時」*（テトス3:12）と述べている人物であり、リストラで司教を務めていました[687] 。

使徒行伝（使徒18:1–3）や使徒パウロの手紙（ローマ16:3–4など）に言及されている聖アキラは、ヘラクレアの司教であり、 また、アジアとアカイアで神の言葉を宣べ伝え、その宣教のゆえに殉教の栄冠を受けた[688] 。

聖使徒パウロがコリントの信徒への第一の手紙（Iコリント16:17–18）で言及している聖フォルトゥナートは、キリストの御名を宣べ伝えるためにたゆまず労苦し、多くの労苦の末、至福の死を迎えた。

聖使徒パウロが、同じコリントの信徒への手紙の中で、フォルトゥナトと共に言及している聖アカイクについて、次のように述べています。 *「ステファノ、フォルトゥナト、アカイコスの到着*

---

682 ビブロス——フェニキアの古代都市で、トリポリスとベリトスの間、海からほど近い場所に位置し、アドニス崇拝の中心地として有名であった。ここにはアドニスのために壮麗な神殿が建てられていた。 現在、ビブロスの跡地にはジェベルと呼ばれる小さな集落があり、住民はわずか600人である。この集落は、ローマ時代や十字軍時代の遺跡、そしてエジプトやフェニキアの古代遺物が埋葬されている広大な墓地に囲まれている。

683 教会では9月27日にその記念日を祝う。

684 アパメアは、シリアの都市の一つです。

685 使徒アリスタルコス、プード、トロフィモスの記念日は、聖教会において4月15日に祝われる

686 アポロニアダは、小アジア北部のビフィニア地方にある都市で、後にリディアに編入された。

687 リストラは、フリギアと国境を接する小アジア中部の地域、リカオニアにある都市の一つである。ここで使徒パウロは足の不自由な人を癒やし、異教徒たちはこの奇跡を目撃して、パウロとバルナバを神々として崇めた（使徒言行録14:6–18）。

688 その記念日は7月14日である

を喜んでいる。彼らはあなたがたの不在を私のために補ってくれた。彼らは、私とあなたがたの心を慰めてくれたからである」（Iコリント16:17–18）。

使徒行伝（使徒17:34）に言及されている聖ディオニシオス・アレオパゴスは、当初アテネの司教であったが、その後ガリアでキリストを宣教し[689]、そこで斬首された。彼もまた使徒の列に属していたことを証言しているのは、パレスチナ・ケサリアの司教エウセビオス[690]であり、彼は70人の使徒を列挙する中で次のように述べている。「彼らに加え、アレオパゴスのディオニシオスという人物を挙げよう。ルカは『使徒言行録』の中で、彼がアテネにおけるパウロの説教によって信仰に導かれたと記している。」

聖シメオン、通称ニゲル。聖使徒ルカは『使徒行伝』の中で彼について次のように言及している。*「アンティオキアにある教会には、いくつかの預言者と教師たちがいた。バルナバ、そしてニゲルと呼ばれるシメオンである」*（使徒行伝13:1）。彼もまた使徒の列に属していたことを、聖エピファニオスが証言しており、彼を使徒たちの間に位置づけている。なぜなら、彼は使徒たちの名前を次のように列挙しているからである。「マルコ、ルカ、ユスタ、バルナバ、アペリウス、ルファ、ニグラ（すなわちシメオン・ニグラ）、およびその他の七十二人[691]。このように、聖エピファニオスは、これらの「小使徒」の数が72名であり、聖シメオン・ニゲルがその中のひとりであったことを私たちに証明している。さらに、聖ヨハネス・ダマスコス[692]は、『オクトイコス』の第5声の水曜日の晩課において、十二使徒に続いて七十二人の使徒の集会についても言及し、次のように述べている。「全能の十は二において完全に現れ、七十二人の一致した集会を見よ。」

これらすべての使徒たちの恵み深い祈りによって、私たちもまた、天の至福に与る者となり、私たちの信仰の最高使徒であり大司祭であるイエス・キリストを仰ぎ見ることができるよう、父なる神と聖霊と共に、世々限りなく、アーメン。

パレスチナのケサリアの司教エウセビオスは、その『教会史』第1巻第12章において、次のように記している。「（十二人の）キリストの使徒一人ひとりの名は、福音書の証言によって誰にでも十分に知られているが、七十人の使徒の完全かつ正確な名簿は、どこにも存在しない。しかし、この件を注意深く検討すれば、聖使徒パウロのただ一つの証言に立脚するだけでも、七十人以上の使徒を見出すことができる。パウロはコリントの信徒への第一の手紙の中で次のように述べている。*「（キリストは復活の後）ケファに現れ、次に十二使徒に現れ、その後、一度に五百人以上の兄弟たちに現れた。そのうちの多くは今も生きているが、ある者はすでに眠りについた」*（Iコリント15:5–6）。キリストの福音を宣べ伝える働きに尽力し、初期の教会において、聖なる使徒たちと同様に信仰によって様々な国々を照らし、それゆえに使徒の名にふさわしい多くの人々のうち、ここでは特に何人かについて言及したい。

---

689 ガリア――現在のフランス。

690 エウセビオスは、パレスチナのケサレアで長期間にわたり司教の座に就き、当時の多くの重要な出来事に深く関わった人物である。教会史の父として、また神学者として知られ、その著作はキリスト教教会で高く評価され、広範な学識を誇った。268年から340年まで生きた。エウセビオスは、殉教者に関するすべての記録や物語を、『古代の殉教録』と題する集成にまとめ上げた。この叢書には、すべての教区における殉教者、司教、信仰の証人、聖女、処女たちに関する伝承が収められていた。ある説によれば20巻、別の説によれば16巻から成っていたとされる。

691 聖エピファニオスは、聖ヨハネス・クラマトルスの同時代人であり、キプロス島で36年間にわたり司教を務めた。著名な教父であり、当時の異端に対抗する多くの著作を残した。408年に死去した。その記念日は5月12日に祝われる。

692 聖ヨハネス・ダマスコスは、傑出したキリスト教の聖歌作家であり神学者で、776年に逝去した。聖像派として聖像を熱心に擁護したため、聖像破壊派によって片手を切断されたが、神の御心により、その手は再び体に生えついた。彼の記念日は、教会によって12月4日に祝われます

聖ラザロは、四日間死んでいたが、主によって復活させられた。エルサレム教会への迫害の際、聖第一殉教者ステファノが殺害された後、彼はユダヤの境界から追放され（使徒8:1）、主の聖なる弟子である　マクシムス、そして生まれつき盲目であったが主によって癒やされた聖ケリドニオスと共に、櫂のない舟に乗せられて海に放り出された。神の御心により、その舟はキプロス島にたどり着き、聖ラザロはキドニアの町でキリストについて説教を始めた。　その後、彼はこの町で使徒バルナバによって司教に叙階され、同じキプロス島で安らかに息を引き取った。彼の聖遺体は、長い年月を経て、その島で「四日目のラザロ、キリストの友」[693] と刻まれた大理石の棺の中で発見された。

アリマタヤ出身の聖ヨセフ[694]　は、イエス・キリストの秘密の弟子であり、後にピラトからその至聖なる御遺体を請い受けた（ルカ23:50–52；マタイ27:67；マルコ15:42；　ヨハネ19:38）もまた、嫉妬深いユダヤ人たちによってユダヤの地から追放され、イングランドでキリストを宣教し、そこでこの世を去った。イングランドの人々は、彼を自国の使徒として崇敬している[695] 。

聖ニコデモは、夜にイエスのところへやって来てその教えに耳を傾け（ヨハネ3:1–2）、ユダヤ人たちに、イエスご自身の言葉を聞き、その行いを吟味する前に、イエスを裁かないよう良き助言を与え（ヨハネ7:50–51）、 その後、ヨセフと共にイエスの遺体を葬り、香油を塗った（ヨハネ19:39）――彼もまた、キリストへの信仰と使徒たちの宣教のためにユダヤ人たちから迫害を受け、ユダヤから追放された[696] 。

聖ガマリエルは、聖使徒パウロの師であった。　彼は、聖使徒たちの宣教に関して、シネドリオンに賢明な助言を行い、次のように述べました。「もしこの働きが人間によるものなら、それは滅びるでしょう。しかし、もし神によるものなら、あなたがたはそれを滅ぼすことはできません。あなたがたが神に敵対する者とならないよう、気をつけなさい」（使徒6:34–40）。　大助祭ステファノが殉教した後、彼はその遺体を引き取り、エルサレムからほど近い自分の村に埋葬した。また、キリストの宣教のために追放された聖ニコデモを匿い、その死後には、聖第一殉教者ステファノの墓の近くに埋葬した。その後、[697] 自身もそこに埋葬された。

エチオピアの女王カンダキアの宦官は、道中で聖使徒フィリポによって洗礼を受け（使徒言行録8:26–39）、この女王をキリストへと導いた人物であり、エチオピアにおけるキリストの最初の宣教者となった[698] 。彼はそこで殉教の死を遂げた。

聖ザケイは、自らの家で主を喜んで迎え入れ、主から*「今日、この家に救いが訪れた」*（ルカ19:1–10）という言葉を聞いた。　主の昇天後、ザケイは聖使徒ペトロに従い、彼によってパレスチナのケサリアの司教に任命された[699] 。そこで彼はキリストについて説教した[700] 。

---

[693]　聖ラザロ（四日目のラザロ）の記念日は、10月17日に教会で祝われ、この日は彼の聖遺骨がキプロス島からコンスタンティノープルへ移されたことが記念される。

[694] エウセビオスとヒエロニムスによれば、アリマタヤはラマ、あるいはラマファと同じであり、エルサレムの北へ2時間の道のりにあるエフレモ山上の都市で、リダからそう遠くない場所にある。別名、ラマファイム・ツォフィムとも呼ばれる。　そこは、キリストの弟子の一人（ヨハネ19:38）であり、ユダヤ人の最高法院の議員でもあったアリマタヤのヨセフの故郷であり、彼は岩に彫られた自身の墓にイエス・キリストを葬った。

[695] 聖ヨセフの祝日は定められていないが、香油を携えた女性たちの週にその名が記念される。

[696] 聖ニコデモの記念日は、教会において8月2日および「香油を携えた女性たち」の週に祝われる。

[697]　聖ガマリエルの死と共に、キリストを信じたその敬虔な息子アヴィブも亡くなりました。聖ガマリエルと聖アヴィブの記念日は、教会において8月2日に祝われます。

[698]　エチオピアはアフリカにあり、現在のアビシニアに相当する。ナイル川上流に位置し、北はエジプトのフィヴァイダ地方、西はリビア、南は南エチオピア、東はアラビア湾および紅海と国境を接していた。

[699]　パレスチナのケサリアは、地中海東岸にある都市で、ユダヤ王ヘロデによって古代都市ストラトンの跡地に建設され、カエサル・アウグストゥス（ローマ皇帝オクタヴィウス・アウグストゥス）にちなんで名付けられた。　この都市は度重なる破壊に見舞われ、現在その跡地には、野生植物に覆われた廃墟が残るのみである。

[700] 聖ザケイの記念日は、教会暦の32週目、四旬節のトリオディが始まる前に祝われる。

聖コルネリウス百人隊長は、聖使徒ペトロによって洗礼を受け（使徒言行録10）、後に彼によって司教に任命され、スケプシアの町でキリストを宣教し[701]、そこで安らかに息を引き取った[702]。

聖ロンギヌス百人隊長は、主の十字架のそばで警護に当たり、イエスがまことに神の子であることを告白した（マタイ27:54）。 主の埋葬後、ロンギヌスは再び主の御墓の番人となり、キリストの復活を目の当たりにし、そのことを皆の前で証言した。その後、彼はカッパドキアでキリストについて説教を行い、そこで殉教した[703]。

聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は、伝承によれば、主が腕に抱き上げ、使徒たちを指して「あなたがたが子どものようにならなければ、天の御国に入ることはできない」（マタイ18:2–5、マルコ9:37）と語った、まさにその子どもである。 聖使徒ペトロによってアンティオキアの司教に叙階され、そこでキリストについて説教しました。ローマでライオンに引き裂かれて殉教の死を遂げました[704]。

聖ポリカルプはスミルナの司教であった。彼は使徒たちと同様に、絶え間なく神の言葉を宣べ伝え、新たに改宗したキリスト教徒たちへの手紙を書き、また、自らの羊たちの幸福と霊的な益のために弛まぬ配慮を注いだ。 福者シメオン・メタフラスト[705] は、聖イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の伝記の中で、ポリカルプを「神聖な使徒」と明言し、次のように述べています。「彼らはスミルナに到着し、そこで聖イグナティオスは、自身の同門である神聖な使徒、聖ポリカルプに口づけをした」。ローマで殉教の死を遂げました[706]。

聖エロフェイは、アテネのアレオパゴスの一員であった。彼は聖使徒パウロからキリスト教の信仰を教えられ、同パウロによってアテネの司教に任命された。他の聖使徒たち と共に、聖エロフェイもまた、聖母マリアの被昇天の後、エルサレムにある聖母マリアの御墓へと空を飛んで運ばれた。 殉教の死を遂げた[707]。

聖アンティパ、ペルガムの司教も、キリストに関する使徒的な宣教のために苦難を受けた[708]。彼について、主イエス・キリストご自身が、聖ヨハネ神学者の『黙示録』の中で次のように語られた。*「私の忠実な証人アンティパは殺された」*（黙示録2:13）。

聖ディミトリオスは、聖使徒ヨハネ・テオロゴスが第三の手紙（3ヨハネ1:12）で言及している人物である。聖ディミトリオスは、アジアの都市フィラデルフィアの司教であった[709]。

---

[701] スケプシアは、小アジア西部のミシア州にある都市である。

[702] 聖コルニリウスの記念日は9月13日である。

[703] 聖ロンギヌス百人隊長の記念日は、教会によって10月16日に祝われる

[704] 聖イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の記念日は、教会によって年に2回祝われる。1月29日は、弟子たちによってその遺骨がローマからアンティオキアへ移されたことを記念する日であり、12月20日は聖人の没日である。

[705] シメオン・メタフラストは、10世紀（940年）の著名な教会作家であり、『聖人伝』の編纂者・収集者である。彼はコンスタンティノープル皇帝コンスタンティノス7世（912–954年）の命を受けてこの作業を行った。 聖なる修道者たちの栄光に対する強い熱意に駆られ、シメオンは彼らに関する物語を収集しただけでなく、その多くを改訂し、一部を短縮し、そして何よりも重要なこととして、古風で難解、かつ多くの点で理解しにくい表現を、彼と同時代の明快で優れた文体に置き換えた。 この功績により、シメオンは「メタフラスタス」という称号を授けられた。これは「語り手」「改作者」を意味する。この分野における彼の著作は、後に聖ディミトリ・ロストフスキーの『チェティイ・ミネイ』の主要な出典となった。

[706] 聖ポリカルポの記念日は2月23日

[707] 聖殉教者エロフェイの記念日は10月4日

[708] その記念日は、聖教会において4月11日に祝われる

[709] フィラデルフィアは、小アジアのリディア地方にある都市で、サルドスの近く、トモロス山の麓に位置する。その名は、創設者であるペルガモン王アシュタル2世・フィラデルフォスに由来する。古代には、多くの住民を擁する豊かで繁栄した都市であった。 現在は、トルコ統治下にある小さなキリスト教の町である。

コンダク、第2声：

キリストの弟子たち、七十人の御姿を、神聖なる忠実なる者たちとして、賛美の歌をもって讃えよう。彼らによって、私たちは皆、不可分なる三位一体を崇めることを学んだのであり、彼らは神聖なる信仰の灯火として留まっている

聖エウスタフィオス、セルビア大司教の生涯[710]

記念日：1月4日

聖エウスタフィオスは、13世紀後半、1262年から1320年までセルビアを統治した敬虔なセルビア王ステファン・ウロシュ2世・ミリュティンの時代に生き、修業に励んだ。彼はブディムル地方[711]で、敬虔な両親の間に生まれた。　両親を深く愛していた彼は、幼い頃から神への愛を育んでいった。虚しい遊びを避け、善良な品性を身につけるよう努め、常に教会に通い、神聖な聖歌や朗読に心を込めて耳を傾け、聞いたことを記憶に留め、その意味を理解しようと努めた。　ある日、彼は両親のもとへ行き、こう言いました。

「私には学ぶという強い願望が湧いてきました。どうか私を学問の道へ進ませてください。」

両親はその言葉を聞いて大いに喜び、愛する子にそのような善き願いを授けてくださった神に感謝し、教師を探し出し、息子をその教師のもとへ預けて学問の教えを受けさせた。聖霊の恵みに導かれて、彼はすぐに学業を修め、若い生徒でありながら、多くの賢明な教師たちにも引けを取らないほどになった。　その青年は、食事や飲み物、衣服のことなど全く考えもせず、気にも留めず、両親のことさえほとんど考えなかったが、心を神の教えに完全に注ぎ、心の愛と希望のすべてを主に託した。　そして、より成熟し、自らの召命について深く思索を重ねた後、彼は実家を離れ、主の道を歩むことを決意した。彼はゼト地方[712]　にある、ゼトの司教座が置かれていた大天使ミカエルの修道院へと向かった。　そこで、ネオフィト司教から修道士の戒律を受け、修道誓願を厳格に守りながら、修道生活を始めました。　節制と清らかな生活で際立ち、断食と徹夜祈祷によって身を鍛えながら、彼は昼夜を問わず教会での礼拝に欠かさず駆けつけ、独房での祈りの規則を厳格に守り、残りの時間は神への黙想と内省的な祈りに没頭した。　何の財産も持たなかった彼は、修道院から支給される定量の食料や衣服の中から、貧しい人々に配る分を節約しようと努めた。

修道院の静寂の中で完全な謙遜をもって修行に励んでいた彼は、しかし間もなく、古代の教父たちに倣う偉大な修行者として、その国全体にその名を知られるようになった。

自修道院での修道生活に満足することなく、エウスタフィオスは聖都エルサレムを訪れ、主の御墓や、主の受難の地にあるその他の聖地を礼拝したいという熱望に燃えていた。　その意図を誰にも明かすことなく、彼は主イエス・キリストに熱烈な祈りを捧げ、聖都への旅を無事に成し遂げ、人類の救いのために御自身の血を流され、偉大な奇跡を行われたその場所を拝見できるよう、主の御加

---

710 聖エウスタフィオスの伝記は、彼より少し年下の同時代人であるセルビアの大司教聖ダニエル2世によって執筆され、彼の著書『系譜』または『王家史』に収録された。　本書における最良の版は、1866年にダニチッチによって刊行された『セルビア王および大司教の生涯』（292～319ページ）である。聖ダニエルの伝記については、12月20日の項を参照のこと。

711 ブディムル地方、すなわち「ジュパ」は、現在のモンテネグロ北東部でセルビア人のヴァソエヴィチ族が暮らす地域に位置していた。現在、その地にはブディムルという村がある。　古代、ブディムル教区は聖ゲオルギオス修道院に主教座を置いていたが、この修道院は現在もグシニェの町の北、ベラネ村に半壊した状態で残っている。

712 ゼタ地方、ゼタ、あるいは古代のディオクレアは、現在のモンテネグロにあたる。聖ミカエル修道院は、コトル湾の東岸、コトル市の南、ほど近い場所に位置していた。

護を願った。　この敬虔な人の祈りは聞き届けられた。神を畏れる旅の仲間をどこで見つけようかと彼が思案していたところ、まるで主ご自身が遣わされたかのように、二人の修道士が彼の前に現れ、会話の中で、彼らが主の聖墳墓とキリストの尊い受難の跡に礼拝するためにエルサレムへ向かっていることを告げた。　主なる神に感謝を捧げ、その至聖なる御像と大天使ミカエルの御像に礼拝を捧げた後、彼は心の中に喜びと歓びを抱き、かねてより切望していた旅路へと踏み出した。

神の御加護により、彼は容易かつ無事に旅を終え、エルサレムにたどり着いた。そこで彼は、畏敬の念をもって主の聖墳墓と、主の受難の地にあるすべての聖所に礼拝を捧げた。彼は急ぐことなくすべての聖地を巡り、それらを静かに眺めてその美しさを堪能した。　また、エルサレムの周辺地域も訪れ、そこには敬虔で神を畏れる修道士たちが住んでいた。彼は彼らの生活様式や修行の様子を観察し、その教えを心に刻んだ。

聖地で長い時間を過ごした後、彼は帰路についたが、直接故郷へ帰るのではなく、聖山アトスへ向かった。そこでの修道生活を見学し、修行や心身の清らかさに関する魂に有益な対話を楽しみたいと願ったからである。

聖山に到着すると、聖エウスタフィオスは、聖シメオン――世俗名では偉大なるセルビアのジュパン、ステファン・ネマニャ――とその息子サヴァ（初代セルビア大司教）によって建立された、ヒランダルにある聖母マリアのセルビア修道院に身を寄せた。　そこで彼は、並々ならぬ熱意をもって修道生活に専心し、謙虚さと従順さをもって、服従として割り当てられたあらゆる仕事をこなし、すべての教会礼拝を欠かさず参列し、夜には一人きりで祈りと神への黙想にふけった。こうして彼は長年にわたり過ごし、アトス山のすべての修道者たちの間で知られるようになった。　多くの古参の長老たちだけでなく、若い修道士たちも頻繁にエウスタフィオスを訪れ、愛と霊的な慰めをもって、魂を救うための対話を交わした。

数年にわたるこのような修道生活の後、聖山全体の評議会と総会の合意により、エウスタフィオスはヒランダル修道院のイグメノス（院長）に任命された。修道院の長となったエウスタフィオスは、さらに熱心に修行に励み、あらゆる労働と徳において模範を示し、言葉と行いをもって人々を導いた。　このように重要な地位に就き、徳高い生活を送った聖エウスタフィオスは、アトス山の修道者たちだけでなく、一般信徒からも、庶民だけでなく、貴族や王たちからも、大きな名声と万人の愛を集めるようになった。　誰もがエウスタフィオスに敬意を表そうと急ぎ、惜しみない贈り物を捧げた。しかし、彼はそれらの贈り物を自分のために蓄えることはせず、寛大な心で貧しい人々、未亡人、孤児、そして生計や住む場所のない人々に分け与えた。

このような資質と美徳を備えていたため、尊者エウスタフィオスがゼト教区の司教に選出され、按手礼を受けたのも不思議ではない。同教区こそ、彼が修道誓願を立てた場所であった。　主教となったエウスタフィオスは、霊的生活と教会事務に精通しており、牧会の職務を大いなる成功を収めて遂行し、セルビアで最も傑出した主教となった。　セルビアの大司教イオアンニキが逝去した際、敬虔なセルビア王ステファン・ウロシュ・ミリュティンは、司教、修道院長、ボヤールらを招集して公会議を開き、この公会議は満場一致で、この敬虔なゼト司教エウスタフィオスをセルビア大司教の座に選出しました。　敬虔なエウスタフィオスは、その謙虚さゆえに、大きな責任を伴うこの高位の聖職を辞退しようと試みたが、その言葉は聞き入れられず、まもなく全公会議の面前で厳かに大主教の座に就いた。　聖エウスタフィオスは神の御計画に従い、自らが受けるに値しないと考えていた神の偉大な慈しみに、熱烈な祈りをもって主なる神に感謝を捧げた。

自らの魂の救いのためにたゆまぬ努力を続ける一方で、聖エウスタフィオスは、彼に託されたセルビア教会の繁栄にも熱心に心を配った。　当時、セルビアの大司教座はすでに莫大な富を保有していたが、聖エウスタフィオスは、管轄区域内のどの教会も　生活必需品に不自由することのないよう全力を尽くし、大司教座の貯蓄から貧しい教会の必要に惜しみなく充てた。

聖エウスタフィオスがセルビア教会を統率したのはわずか数年であった。高位の大司教座に就いてから7年後、彼は病に倒れ、死が近づいていることを悟った。臨終の病床にあっても、彼は不平を漏らすことなく、この地上の世界から天の御国へと旅立つことを喜びをもって待ち望んでいた。当時、自身の大司教座であるジチェ（[713] ）に滞在していた彼は、熱心に準備を進めるとともに、安らかな最期を授けてくださるよう主に祈りを捧げた。　病床の周りには、セルビア正教会の聖職者たちが一堂に会していた。近隣の司教たち、修道院の院長や修道士たち、そして教会の聖職者全員である。皆、師であり大牧者である彼の最期が近づいているのを見て、涙を流していた。しかし、病床から身を起こした彼は、涙を流す者たちに向かってこう語った。

「そのような哀れみはよしてください。*『私と共に主を賛美し、共にその御名を称えよう』*（詩編33:4）。」

そこにいた者たちは皆、涙を拭って、魂の旅立ちを祈り、賛美歌を歌い始めた。その後、聖エウスタフィオスは聖体拝領を行い、少し休んだ後、周囲の人々にこう語りかけた。

「さあ、愛する者たちよ、互いに最後の口づけを交わそう。私はもう、あなた方と別れるのだから。」

この別れの言葉は、聖エウスタフィオスの霊的な子らに多くの涙を誘った。ついに、彼は天に向かって両手を挙げ、こう宣言した。

「すべての人の死の時を知っておられる、神々の神、主の主よ、私の霊を御手に委ねます！」

かくして、聖エウスタフィオスは、主を喜びながら、尊厳と栄光のうちにこの世を去った。

棺の周りに集まった聖職者たちは、信徒たちと共に、ジチェの救世主教会で厳粛な葬儀を執り行い、遺体を、かつてエウスタフィウス自身が用意しておいた大理石の棺に納めました。

埋葬後まもなく、前述の救世主教会内で、故人の棺の周囲で様々な徴や奇跡が起こり始めた。時には棺のそばでまるでろうそくが燃えているかのように見え、時には夜、棺のそばから何千人もの人々が集まっているかのような話し声やざわめきがはっきりと聞こえた。救世主教会で奉仕していたある男は、鼻の病に苦しんでいた。彼は多くの治療法を試み、治療のために多額の金を費やしたが、効果はなかった。　この世の手段への希望を失った病人は、救世主教会で、聖エウスタフィオスの聖遺骸のそばに立ち、あらゆる礼拝のたびに絶え間なく祈りを捧げながら、主なる神と御母マリアに熱烈な祈りを捧げた。　ある夜、病人は夢の中で、現実と同じように、いつものようにエウスタフィオスの聖遺骸の横に立っているのを見た。そこへ、聖職者の装いをした威厳ある男性が現れ、何が必要なのかと尋ねた。病人は順を追ってすべてを話した。すると、現れた男性はこう言った。

「主は私を遣わしてあなたを癒やすようにお命じになった。ただ、これ以上罪を犯さないように。さもないと、さらにひどい目に遭うことになる。」

そう言うと、彼は病人に十字を切って、その傷に触れた。病人は尋ねた。

「あなたはどなたですか、聖なる司教様？」

現れた男は答えた。

「私はキリストのしもべ、エウスタフィオという名の修道士であり、この場所に横たわっている者だ。」

病人は目を覚まし、恐怖に襲われた。彼は戦々恐々として、当時のヤコブ大司教のもとへ急ぎ、この奇跡的な幻視について大司教と全聖職者たちに報告した。すると病人はその場で完全に癒やされ、皆が主と聖エウスタフィオスを賛美した。　エウスタフィオスの棺の周りでは、奇跡が次々と起こり始めた。ある日、彼の大理石の棺の上に、驚くほど美しい三輪の花が咲いているのが見つかった。その棺は完全に乾いた石そのものであり、土も、ましてや水分さえも一切なかったにもかかわらず

[713] 現在も存続しているジチャ（ジッチチャ、ジディチャ）修道院は、イブラ川の右岸、セルビア・モラヴァ川との合流点からほど近い、現在のセルビア王国の領土内に位置している。

である。　この奇跡的なしるしは、神が御自身の聖人を称え、その肉体を朽ちることのないものとして新たにされているのだと、すべての人々に思わせた。ちょうどその時、その修道院の修道士の一人である教会係の者に、夜の幻の中で、手に炎の武器を持った恐ろしい若者が現れ、怒りを込めてこう言った。

「なぜ、このようなしるしを見てなお、何もしないのか？　あるいは、故人の遺体が朽ち果てる運命にあるのではなく、地中から取り出されるべきであることを理解していないのか？」

これらすべての奇跡は、敬虔なウロシュ・ミリュティン王に伝えられた。王は大司教と協議した上で、棺を厳粛に開けるよう命じた。すると、その中から聖エウスタフィオスの遺体が朽ちることなく発見され、新しい棺に納められて公開された。　しばらくして、敵の侵攻による危険を鑑み、大司教ヤコブの尽力により、聖エウスタフィオスの聖遺骨はジチからイペク（またはペチ）[714]　へと移され、現地の聖使徒ペトロとパウロの大司教座大聖堂に安置された。

聖ゾシマ尊者殉教者と聖アファナシウス殉教者の記念日

記念日：1月4日

聖殉教者ゾシマはキリキア出身であり[715]　、荒野で修業に励んでいた。不敬虔なディオクレティアヌスの命令により[716]　、彼は捕らえられ、キリストへの信仰ゆえに拷問にさらされた。　彼は赤熱した鉄で耳を焼かれ、汚物で満たされた大釜に投げ込まれ、足を縛られて逆さ吊りにされ、様々な拷問にさらされた。しかし、奇跡的に聖人は死を免れた。　彼が拷問を受けている最中、砂漠から一頭のライオンが現れ、人間の声で語りかけた。この奇跡を目撃した者たちは皆恐怖に襲われ、ゾシマは解放された。[717]　のアファナシイは、残酷な拷問の末にも無傷の彼を見て、キリストを信じ、洗礼を受けた。ゾシマはアファナシイと共に荒野へ退き、そこで祈りの修行に励む中、ある山の裂け目で、二人は共に安らかに主のもとへ魂を捧げた。

1月18日

1月5日（旧暦）

聖殉教者テオペンプトスとテオナの殉教

記念日1月5日

ディオクレティアヌス帝は、自らキリスト教徒に対して始めた迫害の初年、ある時旅の途中でニコミディアの町を訪れ、そこで多くの偶像を安置してそれらを崇拝した。

数日後、都市の近郊でニコミディオスの司教テオペンプトス（彼はディオクレティアヌスによるキリスト教徒迫害において最初に殉教した人物である）が捕らえられ、皇帝の裁判にかけられた際、次のように述べた。

---

[714]　イペク、ペシュト、ペチは、セルビア大司教たちの第二の居所であった。この町と修道院は現在も存在しており、旧セルビア（トルコ領）のビストリツァ川沿い、その上流でベリ・ドリン川に合流する地点に位置している。

[715] キリキア――地中海に面した小アジア南東部の地域。

[716] ディオクレティアヌス――284年から305年まで在位したローマ皇帝。

[717] コメンタリシウス――囚人の管理官であり、囚人の数を記録していた。

「あなたが崇拝しているこれらの神々――銀や金、木や石でできたもの――は、決して神ではありません。なぜなら、それらは息をすることも、話すことも、善いことも悪いことも行うこともできないからです。しかし、全能の天の神は、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造されたのです。」

聖人がこのように、そしてキリスト教の信仰について他にも多くのことを語っていると、王は怒りを露わにして彼に言った。

「私がお前を呼び出したのは、議論するためではなく、黙ってアポロン神に生贄を捧げるためだ。」

聖テオペンプトスはこれに次のように答えた。

「そのような神々には、私は決して犠牲を捧げませんし、あなたが私に課そうとするどんな拷問にも決して怯えることはありません。なぜなら、*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない』*（マタイ10:28）と書かれているからです。そして、あなたは私の体に対する権威を持っているのですから、お好きなようにしてください！」

そこで王は、聖なる司教を投げ込むために炉を熱くするよう命じ、兵士たちは朝から正午まで、炉をできるだけ高温に熱し続けた。その時、聖なる司教は彼らにこう言った。

「少し待ってください。そうすれば、私の主なる神の御力をあなた方に示しましょう。この炉は、その聖なる御名のゆえに、私のために熱されているのです。」

そう言うと、聖人は燃え盛る炉の中に飛び込み、その真ん中に座った。兵士たちは、彼がすぐに焼けてしまったと思い込み、その場を去った。しかし真夜中、聖人は炉から出て王の寝室へと入った。その扉は彼の前に自然と開いた。そして王を起こすと、こう言った。

「私は、イエス・キリストに仕えるテオペンプト司教です。あなたが私を殺せと命じたにもかかわらず、私は死んではおらず、生きています。」

そう言うと、彼は再び炉の中に入った。王は聖人を見てその言葉を聞くと、恐怖に襲われ、強い恐怖のあまりまるで身動きが取れなくなった。翌朝、王は兵士たちを呼び寄せ、こう言った。

「私が投げ込むよう命じたあのキリスト教徒を、燃え盛る炉に投げ込んだか？」

兵士たちは答えた。

「陛下、お命じになった通りに行いました。彼を投げ込み、彼は昨日、炎の中で亡くなりました。」

するとディオクレティアヌスは立ち上がり、兵士たちと共に炉へと向かった。そこで彼は、燃え盛る炉の真ん中で聖なる司教が歌い、神を賛美している声を耳にした。これには王は極めて驚愕し、聖人が無傷で炉から出てきたとき、王は周囲の人々にこう言った。

「見よ、キリスト教の魔術がいかに強大であるか。キリスト教徒たちは、あるイエスという者の名において、その魔術的な業を行っていると聞いた。」

その後、王は直ちに犬を連れてきて炉に投げ込むよう命じた。司教が奇跡的に無傷で残ったように、犬も無傷で残るか確かめるためであった。しかし、犬はたちまち焼けてしまった。これを見た王は、神の僕にこう言った。

「お前は不信心者であるとして、最も残酷な拷問にかける。お前は人を惑わす者であり、魔術師であると確信したからだ。」

王は彼を狭い牢獄に閉じ込め、王が裁きを下すその日まで、パンも水も与えないよう命じた。神の人は、神に支えられながら、その牢獄で二十二日間、飲食なしに過ごした。その期間が過ぎると、王は兵士たちに言った。

「さあ、あのキリスト教徒がまだ生きているのか、それともすでに死んでいるのか、見に行こう。」

しかし、彼がまるで王の饗宴の後のように生き生きと喜びに満ちているのを見て、ディオクレティアヌスは激怒し、その祝福された司教を牢屋から引きずり出すと、自分の服を引き裂き、両手を叩きながら言った。

「見よ、キリスト教の魔術がいかに強力か！」

しかし、その祝福された司教はこう答えた。

「哀れな者よ、いつまで目を曇らせたままなのか。私が信じる真の神を、いつまで認めようとしないのか。神は私に力と強さを与えてくださった。それゆえ、私はあなたに打ち勝ち、あなたが私のために考案するあらゆる拷問を乗り越え、それらを軽んじることができるのだ。」

王はこの言葉を聞くと、聖人の右目をえぐり取り、それを殉教者の右手に置かせ、その後、彼を牢獄へ連行するよう命じた。聖人がそこで祈り始めると、牢獄の中で彼の前に大いなる光が輝き、たちまちその目の瞳孔が開き、もう一方の目と同様に、完全で健やかな状態に戻った。　このことを知り、聖人を見た王はさらに激怒し、こう言った。

「ローマのアポロン[718]　に誓って、お前のあらゆる策略や魔術を打ち砕くことのできる、より強力な魔術師を見つけるまでは、決して諦めはしない！」

そう言うと、王は再び彼を牢獄へ連行するよう命じ、自らも支配下にあるすべての国々に次のような布告を送った。

「もし、キリスト教の魔術を打ち破ることができる魔法使いがいるならば、できるだけ早く現れよ。その者には、多大な贈り物と偉大な栄誉が与えられるであろう」と王は記した。

すると、テオナという名の魔術師が現れ、ディオクレティアヌスの御前に進み出て、こう言った。

「陛下の命により、私はキリスト教の魔術を一刻も早く打ち砕くために参りました。そして、陛下に約束したことは必ず果たします。」

これを聞いて、皇帝は喜び、こう言った。

「私の牢獄には、あるキリスト教の王子が一人いる。もしその魔法の力を打ち砕いてくれたら、我々は君に多大な栄誉を与える。」

フェオナはこれに対し、こう言った。

「そのキリスト教徒に、私の前で何か奇跡を行わせてみよ。そうすれば、あなたの目の前で、そのすべての業を打ち砕いてみせる。」

王はこれを聞いて喜び、フェオナに言った。

「しかし、まずはお前が何かしらの奇跡を成し遂げるのを見たいものだ。」

そこでフェオナは、最も獰猛な雄牛を自分のところへ連れてくるよう求めた。雄牛が連れて来られると、フェオナはその耳元で何か言葉を囁き、その瞬間、雄牛は二つに裂けて、それぞれの部分が別々に横たわった。

すると、驚愕した王は言った。

「なるほど、お前はキリスト教の魔術を打ち破ることができるのだな！」

「もう少し待ってください、王よ」とフェオナは答えた。「そうすれば、この奇跡の偉大さをすべて理解できるでしょう！」

そう言うと、彼は天秤を持ってくるよう命じ、その上に雄牛の二つの部分を載せた。すると、両方の重さは全く同じであった。その直後、ディオクレティアヌスは聖テオペンプト司教を呼び寄せ、彼を魔術師の向かいに立たせると、こう言った。

「お前は詐欺師であり、魔術師だと知っている！この魔術師はエジプトからやって来た。今、お前たち二人のうち、どちらが魔術においてより優れているかを知りたいのだ。」

---

[718] ギリシャ・ローマ神話における神。知性の啓蒙の守護神、太陽の神として崇められていた。

すると、テオナは司教にこう言った。

「私はお前の前で、私の魔術の力を二通り示してやる。もしそれらが君に害を及ぼさなければ、私も君の神を信じるつもりだ。」

小麦粉で二つの丸いパンを焼き、司教にそれを食べるよう勧めた。司教はそれを受け取って食べたが、その味は蜂蜜のように甘く、彼に何の害も及ぼさなかった。

それを見て、テオナは驚き、こう言った。

「お前に、私の術のもう一つの奇跡的な力を試してみせる。もしそれがお前に害を及ぼさなければ、私はお前の神を信じる。」

彼は水が入った杯を取り、そこに有毒な草を一本入れ、毒の効力を強めるために最も強力な悪魔たちを呼び寄せ、それから聖人にその水を飲ませた。

聖人が何の害も受けずにそれを飲み干すと、フェオナは即座に聖なる司教の足元にひれ伏し、こう言った。

「唯一のイエス以外に、頼るべき神は他にいない！」

そして王にこう言った。

「私はキリスト教徒であり、十字架にかけられた方を崇拝します！」

これを聞いた王は大きな動揺を覚え、こう叫んだ。

「キリスト教の魔術師たちの奇跡は実に偉大だ！」

そして、二人を牢獄へ連行するよう命じた。そこで聖なる司教は、テオンに信仰を教え、彼をシネジア（「知恵に満ちた者」という意味。彼は清らかな心でキリストなる神と主を理解し、悟ったからである）と改名し、彼に洗礼を授けた。

翌朝、王は聖なる司教を自分の元へ呼び寄せ、彼の前に頭を垂れてこう言った。

「やあ、魔術師たちの師よ。」

そして、彼に不敬虔なギリシャの信仰に改宗するよう説得し始めた。　しかし、聖人が神々への生贄を捧げることを拒むと、王は彼を地面に仰向けにして広げ、手足を四本の木に縛り付けるよう命じた。そして、八人でやっと運び出せるほどの大きな石柱の破片を持ってこさせ、それを聖人の腹の上に載せた。　しかし、聖なる司教が神に祈りを捧げると、たちまち彼の腹の上に置かれていたその石が、自ら浮き上がり、彼から遠く、およそ十五キュビトの距離まで吹き飛ばされた。　そこでディオクレティアヌスは、聖人を 足から逆さ吊りにし、首に重い石を結びつけ、朝から午後3時までその状態で吊るし続けるよう命じた。　その後、彼は聖人が足から吊るされていた縄を突然切断するよう命じた。彼は、聖人が落下した際に重い石に押しつぶされ、体を打ち砕かれて、そのようにして不名誉な死を遂げるだろうと考えていた。しかし、それが行われたとき、聖なる司教は神の力によって、しっかりと自分の両足で立ち上がった。その後、拷問官は彼に死刑判決を下した。

聖人はそれを喜んで聞き、大声でこう叫んだ。

「わが主イエス・キリストの父なる神を賛美します。神は、私が常に待ち望んでいたその日を迎えることを、私に許してくださったのです。それゆえ、主よ、どうか私を永遠に、そして今この時にも覚えてください！」

そう言うと、彼はひざまずき、首を斬られて、至聖なる三位一体を告白しながら、安らかに息を引き取った。

その後、王はキリストを信じた魔術師テオンを自分の元へ連れてくるよう命じた。しかし、甘言でも脅しでも彼を偶像への生贄に導くことができなかったため、王は彼を深い堀に投げ込み、土で埋め尽くすよう命じた。　さらに、凶暴な馬たちが連れてこられ、堀に投げ込まれた聖人の上に積ま

れた土を、その足で踏み荒らした。こうして、聖テオナは土をまかれ、長い間馬の足に踏みつけられながら、主のもとへと旅立った[719]。

聖なる殉教者たち、テオペンプト司教とテオナ（別名シネシオス）は、ディオクレティアヌス帝の治世下、ニコメディアにおいて、至高の王、我らの主イエス・キリストの御支配のもとで、その苦難に満ちた偉業を成し遂げた。主イエス・キリストに、父と聖霊とともに、永遠の栄光あれ。アーメン。

聖シンクリティキアの記念日

記念日：1月5日

聖シンクリティキアは、エジプトのアレクサンドリアで生まれた。彼女の両親はマケドニアから[720]移住してきた貴族の出身で、その敬虔さで知られ、非常に裕福であった。 彼女が少女の年齢に達すると、その並外れた美貌と、誰もが認める高潔な品性に魅了された多くの貴族や裕福な若者たちが、彼女との結婚を望みました。しかし、彼女は結婚を望まず、若き頃から天の花婿であるキリスト・神への愛に燃えていました。 それゆえ、彼女は外見を飾ることではなく、内面を磨くことに心を砕き、断食と貞潔、そして清らかな心によって魂を清め、キリストの目にかなう者となるよう努めた。全精神を神に向け、彼女は人々を罪へと駆り立てる目に見えない敵、悪魔に打ち勝った。 両親の死後、彼女は全財産を貧者や困窮者に施し、自らも世を捨て、神のために極度の貧困に至るまで身を捧げ、視力を失った妹を連れて、親族の墓所に身を寄せた。 彼女は修道者の地位をこれほどまでに偉大だと考えていたため、彼女を憐れんでくださった神に、どのように感謝してよいか分からなかった。修道生活初期の頃、彼女は多くの人々を凌駕していたが、自らの功績を隠していた。彼女はパンをわずかに、水もごく少量しか口にしなかっただけでなく、そのパンもふすまで作られたものだった。 敵からの攻撃が彼女に向けられると、彼女は断食をさらに厳しくした。彼女の功績の評判は多くの女性たちを惹きつけ、彼女に教訓を求めてきた。長い間、彼女はそれらの願いに沈黙をもって応えていたが、執拗な懇願により、彼女の周りに集まり共同生活を送るようになった多くの修道女たちに、ついに教えを授けることになった。 生涯の終わりに、彼女はかつて義人ヨブが受けたのと同じ試練を誘惑者から受けた。激しい病に襲われ、全身が瘡蓋に覆われ、衰弱し、潰瘍や蛆に蝕まれてしまったのである。 こうして彼女は三年間と六ヶ月間、医師の治療を受けることを拒み、ただ神のみに希望を託して苦しみ続けた。やがてこの世を去る時が近づくと、彼女は幻視の中で聖なる天使たちや、彼女を呼び寄せる輝かしい乙女たちの姿を見、天国の住まいの光景を目にした。 この幻視の後、彼女は修道女たちに語りかけ、肉体を離れる日と時刻を予言した。それは、その三日後に起こるはずだった。 彼女が語った通りになった。すなわち、3日後、彼女が定めた時刻に、彼女は多くの病に苛まれ、激しい潰瘍に苦しんでいた肉体から離れ、殉教者として、天国で聖人たちが享受するような苦痛のない生活へと、主のもとへ旅立ったのである[721]。 彼女は地上で約八十年間、多くの労苦と偉業に満ちた生涯を送り、今や永遠の天の住まいにおられる。

聖アポリナリアの生涯

記念日：1月5日

[719] 彼は303年に死去した。
[720] マケドニア――バルカン半島南部、ギリシャの北に位置するローマ帝国の属州。
[721] 聖シンクリティキアは350年頃に没した。

ギリシャの王アルカディオス[722]の死後、その息子テオドシウス[723]はわずか8歳の幼子であり、王国を統治することができませんでした。　そのため、アルカディオスの兄弟であるローマ皇帝ゴノリウス[724]　は、若き王の保護とギリシャ王国全体の統治を、最も重要な高官の一人であるアンフィパトス[725]、すなわちアンフェミオス[726]という名の、賢明で極めて敬虔な人物に委ねた。 このアンフィパトは、テオドシウスが成人するまでの間、当時の人々から皆、王として敬われていた。それゆえ、聖シメオン・メタフラストも、この伝記を書き始めるにあたり、「敬虔な王アンフェミオスの治世に」と記し、この物語全体を通じて彼を王と呼んでいる。　このアンフェミオスには二人の娘がいた。そのうちの一人、末娘は幼い頃から不浄な霊に取り憑かれていたが、長女は若い頃から聖なる教会で祈りに時間を費やしていた。この長女の名はアポリーナリアであった。　彼女が成人すると、両親は彼女をどのように嫁がせるか考え始めたが、彼女はそれを拒み、両親にこう言った。

「私は修道院に入り、そこで聖書を学び、修道院の生活様式を見たいのです。」

両親は彼女にこう言った。

「私たちはあなたを嫁がせたいのです。」

すると彼女はこう答えました。

「結婚したくはありません。しかし、神が御自身の聖なる乙女たちを清らかに守られるように、私をも神への畏れをもって清く保ってくださることを願っています！」

両親は、彼女がまだそれほど幼いのにそのようなことを言い、これほどまでに神への愛に満たされていることに、大変驚いた。しかし、アポリナリアは再び両親に懇願し、彼女に詩篇や聖書の読み方を教えてくれる修道女を誰か連れてきてほしいと頼んだ。　一方、アンフェミオスは、娘を嫁がせたいと考えていたため、彼女のその決意を大いに嘆いた。しかし、少女がその願いを曲げず、求婚してきた高貴な若者たちから贈られたあらゆる贈り物を拒み続けたため、両親は彼女にこう言った。

「娘よ、一体何を望んでいるのか？」

彼女はこう答えた。

「お願いです、私を神に捧げてください。そうすれば、私の貞節に対する報いを受け取れるでしょう！」

彼女の決意が揺るぎなく、堅固で敬虔であることを見て、両親は言った。

「主の御心に従おう！」

そして、経験豊富な修道女を彼女の元へ連れて行き、その修道女が彼女に聖書を読み解くことを教えた。その後、彼女は両親にこう言った。

「どうか、私を旅に出させてください。そうすれば、エルサレムの聖地を見ることができます。そこで私は、尊き十字架とキリストの聖なる復活に祈りを捧げ、礼拝いたします！」

---

722 アルカディウスは、ローマ帝国の分割に伴い、父テオドシウス1世「大帝」の後を継ぎ、395年から408年まで東ローマ帝国、すなわちビザンティウムで統治した。

723　テオドシウス2世はアルカディウスの息子で、祖父のテオドシウス1世「大帝」と区別するために「若き」と呼ばれた。408年から450年までビザンティウムで統治した。

724　ゴノリウス――テオドシウス大帝のもう一人の息子――は、帝国の分割の際に西方を受け継ぎ、395年から423年まで在位した。

725 アンフィパトス（ギリシャ語: Ανθύπατος）、あるいはプロコンスルとは、ビザンツ帝国の高官であり、特定の地域や州の統治者という公職に就いていた。

726 アンフェミウス――アポリナリアスの父――は、405年からプロコンスル、すなわちアンフィパトスを務めた。 彼は宮廷で大きな影響力を持っていたため、408年に皇帝アルカディウスが死去すると、その弟で西ローマ帝国の皇帝であったゴノリウスは、このアンフェミウスをアルカディウスの8歳の息子テオドシウスの後見人に任命し、東ローマ帝国全体の暫定統治を彼に委ねた。　そのため、アンフェミオスは伝記の中で「王」と呼ばれている。彼については、至福のテオドリトスが言及しており、聖ヨハネス・クラマトルスから彼宛ての手紙も現存している。

両親は彼女を手放したくなかった。彼女こそが家の中で唯一の慰めであり、もう一人の姉が悪魔に取り憑かれていたため、両親は彼女を深く愛していたからである。　アポリーナリアは長い間、両親に懇願し続け、ついに両親は本心とは裏腹に、彼女を行かせることに同意した。彼らは彼女に多くの男奴隷と女奴隷、そしてかなりの量の金と銀を与え、こう言った。

「これを受け取って行きなさい、娘よ。そして、あなたの誓いを果たしなさい。神は、あなたが神のしもべとなることを望んでおられるのだから！」

彼女を船に乗せると、両親は彼女に別れを告げ、こう言った。

「娘よ、聖地で祈る際には、私たちのことを思い出してくれ！」

すると彼女は彼らにこう言った。

「あなたがたが私の心の願いを叶えてくださったように、神もまたあなたがたの願いを叶え、苦難の日にあなたがたを救ってくださいますように！」

こうして、両親と別れを告げた彼女は、航海に出た。アスカロン[727]　に到着すると、海の荒れのため数日間そこに留まり、その地のすべての教会や修道院を巡り、祈りを捧げ、困窮している人々に施しをした。　そこで彼女はエルサレムへの旅の同行者を見つけ、聖都に到着すると、主の復活と尊き十字架に礼拝を捧げ、両親のために熱心に祈りを捧げた。この巡礼の期間中、アポリーナリアは女子修道院も訪れ、その運営のために多額の寄付を行った。　同時に、彼女は余剰の奴隷たちを解放し始め、彼らの奉仕に対して惜しみなく報いを与え、彼らの祈りに身を委ねた。数日後、聖地での祈りを終えたアポリナリアは、ヨルダン川を訪れた際、彼女と共に残っていた者たちにこう言った。

「兄弟たちよ、あなたたちも解放したいのですが、まずはアレクサンドリアへ向かい、聖ミーナに礼拝を捧げましょう。」

すると、彼らは言った。

「お嬢様のおっしゃる通り、そうしましょう！」

彼らがアレクサンドリアに近づくと、その到着を知ったプロコンスル[728]　は、彼女を出迎え、王女のように歓迎するよう、高官たちを派遣した。しかし彼女は、用意された栄誉を望まず、夜中に街に入り、自らプロコンスルの邸宅を訪れて、彼とその夫人に挨拶をした。するとプロコンスルと夫人は彼女の足元にひれ伏し、こう言った。

「なぜそのようなことをなさったのですか、奥様?　私たちはあなたをお迎えに遣わしたのに、奥様ご自身が頭を下げて私たちのところへお越しになったのです。」

聖アポリナリアは彼らにこう言った。

「私に喜びを与えてくださるおつもりですか?」

すると彼らは答えた。

「もちろんです、奥様!」すると聖女は彼らにこう言った。

「さあ、すぐに私を解放してください。礼儀作法で私を煩わせないでください。私は聖殉教者ミネに祈りを捧げに行きたいのです。」

そして彼らは、彼女に貴重な贈り物を捧げて敬意を表した後、彼女を見送った。聖女はそれらの贈り物を貧しい人々に配った。その後、彼女は数日間アレクサンドリアに留まり、教会や修道院を巡った。　その際、彼女が滞在していた家で一人の老婆を見つけ、アポリナリアは彼女に惜しみない

---

[727] アスカロンは、パレスチナの地中海沿岸、ガザとアゾトの間に位置する、5つの主要なペリシテの都市の一つである。ユダ族の領地として割り当てられ、同族によって征服されたが、その後独立し、他のペリシテの都市と同様にイスラエルと敵対関係にあった。

[728] プロコンスル――地方の統治者。

施しを与え、密かにマント、パラマンド[729] 、修道帽、革の帯、そして修道服の男性用衣類一式を買ってくれるよう頼んだ。老婆は承諾し、それらすべてを購入して聖女のもとに持参し、こう言った。

「神のご加護がありますように、母よ！」

修道服を受け取ったアポリーナリアは、同行者たちに知られないよう、それを自分のところに隠した。 その後、彼女は身辺に残っていた奴隷たちを、一人の年老いた奴隷と一人の宦官を除いてすべて解放し、船に乗り込んでリムノス島へと向かった。そこで彼女は四頭の動物を雇い、聖殉教者ミナの聖遺骸が安置されている場所へと向かった。 聖人の遺骨に拝礼し、祈りを捧げた後、アポリナリアは覆われた馬車に乗って、そこに住む聖なる父たちに拝礼するため、隠遁所へと向かった。彼女が旅立ったのは夕方であり、彼女は宦官に馬車の後ろに控えるよう命じ、前方にいた奴隷に馬を操らせた。 一方、聖女は覆いの掛かった馬車に座り、修道服を身に着けて、密かに祈りを捧げ、自分が着手した事業において主の助けを請い求めていた。暗闇が訪れ、真夜中が近づいた頃、馬車はある泉のそばにある沼地に差し掛かった。その泉は後に「アポリナリアの泉」と呼ばれるようになった。戦車の覆いをめくると、福者アポリナリアは、二人の従者、すなわち宦官と御者がうたた寝しているのを見た。そこで彼女は世俗の服を脱ぎ捨て、修道士の男装を身にまとい、その際、神に向かって次のように祈った。

「主よ、あなたは私にこの生き方の端緒を与えてくださいました。どうか、あなたの聖なる御心に従い、私が最後までそれを貫き通せるよう、お導きください！」

その後、十字を切ってから、彼女は従者たちが眠っている間に静かに戦車から降り、沼地に入り、戦車がその場を離れるまでそこに身を隠していた。 聖女はその沼地のそばの荒野に身を寄せ、彼女が愛した唯一の神の御前にて、独り暮らした。神は、彼女の内なる神への深い慕情をご覧になり、御右の手で彼女を覆い、目に見えない敵との戦いにおいて彼女を助け、ナツメヤシの実という形で肉体の糧を授けてくださった。

やがて、聖女が密かに降りた戦車がさらに先へと進み去ると、使用人、宦官、そして老人は、夜が明ける光の中で目を覚まし、戦車が空っぽであることに気づいて大いに恐れた。彼らは主人の衣服しか見当たらず、聖女本人の姿はどこにも見当たらなかった。 彼らは、彼女がいつ降りたのか、どこへ、どのような目的で向かったのか、しかもなぜすべての衣服を脱いでいたのか、理解できず、ただただ驚いていた。彼らは長い間彼女を探し、大声で呼びかけたが、見つからなかったため、他にどうすればよいか分からず、引き返すことに決めた。 こうしてアレクサンドリアに戻ると、彼女たちはアレクサンドリアの総督にすべてを報告した。総督はその報告に極めて驚き、直ちにアンフィパトス・アンフェミオス、すなわちアポリナリアの父に、詳細を記した書簡を送り、彼女の馬車に残されていた衣服を宦官と老人に託して彼のもとへ送り返した。 アンフェミオスは、プロコンスルの手紙を読み終えると、妻でありアポリナリアの母である女性と共に、最愛の娘の衣服を見つめながら、長く、悲しみに打ちひしがれて共に泣き続けた。そして、彼らと共に、すべての貴族たちも涙を流した。その後、アンフェミオスは祈りを込めてこう叫んだ。

「神よ！ あなたは彼女を選ばれたのです。どうか、あなたの畏れの中に彼女を堅く立たせてください！」

---

[729] パラマンド（アナラヴとも呼ばれる）は、修道服の一部である。古代において、パラマンドは2本の帯から成り、キトン（上着）やシャツの上から十字架の形に肩にかけられ、キリストの十字架の重荷を肩に担うことを象徴していた。 あるいは、パラマンドは二重の羊毛の帯で構成され、首から垂れ下がり、脇の下で十字形に肩を包み込み、その後、下着を締め付けるようにして着用された。 その後、これらの帯や紐には、キリストの受難を描いた小さな亜麻布の布片が胸元に付けられるようになり、その端を帯や紐で十字形に結んで腰に巻くようになった。これは助祭のオラリウムに似た様式である。 修道士の中には、修道服の上にパラマンドを身に着ける者もいれば、現在のようにヒトン（下着）の上だけでなく、その上にさらに着る者もいた。現在では、修道服の上に長いパラマンドやアナラヴを身に着けるのは、スキムニキ（隠遁者）のみである。

その後、再び皆が泣き崩れると、貴族たちの中には、次のような言葉で王を慰める者もいた。

「これこそ、徳高い父の真の娘であり、敬虔な王の真の系譜です！陛下、このことで、あなたの徳が万人の前で証明されました。神は、その徳ゆえに、あなたにこのような娘を授けられたのです！」

このように、そして他にも多くの言葉を述べることで、彼らは王の深い悲しみをいくらか和らげた。そして皆、アポッリナリアのために神に祈り、神が彼女をそのような生き方に堅く立たせてくださるよう願った。なぜなら、彼女がいわば困難な隠遁生活へと旅立ったことを理解していたからであり、実際、その通りになったのである。

聖なる乙女は、戦車から降りたその場所で数年間を過ごし、蚊の群れが雲のように立ち上る沼の近くの荒野に身を置いた。　そこで彼女は、悪魔と、かつては王宮の贅沢の中で育った乙女の体のように柔らかかったが、やがてまるでカメの甲羅のようになった自らの肉体と闘った。彼女は労苦と断食と徹夜祈祷によってその肉体を枯らし、蚊の餌食にしていた上、さらに太陽の灼熱にもさらされていたのである。　やがて主は、彼女が聖なる隠遁者の父たちの間に安住の地を見出し、人々が自らの益のために彼女のことを知るよう望まれたとき、 、彼女をその沼地から導き出された。 ある夜、天使が彼女の夢に現れ、スキート（隠遁者の集落）へ行き、ドロフェイと名乗るよう命じた。そこで彼女は、その姿が男性なのか女性なのか誰にも確信を持って判別できないほどであったが、その居場所を後にした。ある朝早く、彼女が荒野を歩いていると、聖なる隠遁者マカリオスに出会い、彼は彼女にこう言った。

「神の祝福を、父よ！」

彼女もまた彼に祝福を求め、互いに祝福し合った後、二人は一緒にスキートへと向かった。聖人が尋ねた。

「あなたはどなたですか、父よ？」

彼はこう答えた。

「私はマカリオスです。」

すると彼女は彼に言った。

「どうか、父上、私をあなたの兄弟たちと一緒にいさせてください！」

長老は彼女をスキートに連れて行き、彼女が女性であることに気づかず、彼女を修道士だと見なして、一室を割り当てた。神は、後にすべての人々がそこから大きな益を得、御自身の聖なる御名の栄光となるよう、この秘密を彼に明かさなかった。マカリオスが彼女の名前を尋ねると、彼女は答えた。

「私の名はドロフェイです。ここに滞在している聖なる父たちのことを聞き、もし私がそれにふさわしい者であれば、彼らと共に暮らすためにここへ来ました。」

すると、長老は彼女に尋ねた。

「兄弟よ、君には何ができるのか？」

するとドロフェイは、命じられることは何でも行うと答えました。そこで長老は、彼女に葦でマットを編むよう指示しました。そして聖なる乙女は、荒野の父たちがそうするように、男性たちの真ん中にある特別な独房で、男性のように暮らすようになりました。神は、誰にも彼女の秘密を覗き見させませんでした。　彼女は昼夜を問わず、絶え間ない祈りと手仕事に明け暮れた。時が経つにつれ、彼女は厳格な生活態度によって修道士たちの間で際立つようになった。さらに、彼女には神から病を癒す恵みが与えられており、ドロフェイという名は皆の口に上るようになった。なぜなら、誰もがこの「ドロフェイ」と見なされた彼女を愛し、偉大な修道士として敬っていたからである。

かなりの時間が経つと、アンフェミオス王の末娘であり、アポッリナリアの妹である彼女に取り憑いていた悪霊は、ますます激しく彼女を苦しめ、こう叫んだ。

「もし私を荒野へ連れて行かないなら、私は彼女を放っておかない。」

悪魔はこの策略に訴えたのは、アポリーナリアが男性たちの間に暮らしていることが露見し、彼女をスキタから追い出すためであった。そして、神が悪魔にアポリーナリアについて何かを語らせることを許さなかったため、悪魔は彼女の妹を苦しめ、彼女を荒野へ送り出そうとしたのである。高官たちは王に、彼女を修道院の聖なる父たちの元へ送り、彼女のために祈ってもらうよう助言した。王はその通りにし、多くの従者を伴ったこの憑かれた娘を、荒野の父たちの元へ送り出した。

一行が修道院に到着すると、聖マカリオスが迎えに出てきて、こう尋ねた。

「子らよ、なぜここへ来たのか？」

すると彼らはこう答えました：

「敬虔なる我らの君主アンフェミオスが、娘を遣わしました。どうかあなたがたが神に祈りを捧げ、彼女の病を癒やしてくださるよう願っております。」

長老は、王の重臣の手から彼女を受け取ると、彼女をアッベ・ドロテウス、すなわちアポリナリウスのもとへ連れて行き、こう言った。

「この娘は王の娘であり、ここに住む修道士たちの祈りと、あなたの祈りを必要としている。主からこの癒しの力が授けられているのだから、彼女のために祈り、癒やしてあげなさい。」

アポリナリアはこれを聞いて泣き出し、こう言った。

「罪深い私のような者が、どうして悪霊を追い出す力があるとみなされるのでしょうか？」

そして、ひざまずいて、長老にこう懇願した。

「父よ、私の数え切れないほどの罪を嘆くのをやめてください。私は弱く、このような事柄において何一つ成し遂げる力などありません。」

しかし、マカリイは彼女にこう言った。

「他の父たちも、神の力によって奇跡を行っていないでしょうか？　あなたにも、この務めが与えられているのです。」

すると、アポリナリアはこう言った。

「主の御心が成りますように！」

そして、悪霊に取りつかれた女を憐れみ、彼女を自分の修道室に迎え入れた。そこで自分の妹だと知った聖女は、喜びの涙を流しながら彼女を抱きしめ、こう言った。

「ここに来てくれてよかったわ、姉さん！」

神は、男性の装いと名で自分の性別を隠し続けていたアポリナリアのことを、悪霊に明かすことを禁じられた。そして聖女は祈りによって悪魔と戦った。　ある日、悪魔が特に激しくその娘を苦しめ始めたとき、至福のアポリナリアは、神に向かって両手を挙げ、涙ながらに妹のために祈った。すると、悪魔は祈りの力に抗うことができず、大声で叫んだ。

「おっと、大変だ！　ここから追い出される、私は去るぞ！」

そして、その娘を地面に倒すと、彼女の中から出て行った。聖アポリナリアは、回復した妹を連れて教会へ行き、聖なる父たちの足元にひれ伏して、こう言った。

「罪深い私をお赦しください！　私は皆様の間に暮らしながら、多くの罪を犯してしまいました。」

聖父たちは、王から遣わされた使者を呼び寄せ、癒やされた王女を彼らに引き渡し、祈りと祝福を込めて王のもとへ送り出した。　両親は娘が元気な姿を見て大いに喜び、すべての貴族たちも王の幸福を喜び、神のこの偉大な慈悲を賛美した。というのも、その娘が健康を取り戻し、顔立ちも美しく、穏やかな人柄になっているのを目の当たりにしたからである。　一方、聖アポリナリアは、父たちの間でさらに謙虚に振る舞い、次々と新たな偉業を成し遂げていった。

その後、悪魔は再び狡猾な手段に訴え、王を悲しませ、その家を汚し、さらに偽りのドロテウスを貶め、害を加えようとしました。悪魔は再び王女に取り憑きましたが、以前のように彼女を苦しめるのではなく、彼女を妊娠した女性のように見せかけました。　そのような状態の彼女を見て、両

親は極めて当惑し、誰と罪を犯したのかと問い詰めたが、心身ともに清らかなその娘は、自分でもどうしてそうなったのか分からないと答えた。　両親が彼女を殴打して、誰と関係を持ったのかを白状させようと迫ると、悪魔は彼女の口を通してこう言った。

「私がスキートで暮らしていたあの独房に住む黒衣の修道士こそ、私が堕落した原因なのです。」

王は激しく怒り、そのスキトを破壊するよう命じた。王の軍司令官たちは兵士を率いてスキトにやって来ると、王女をこれほど残酷に辱めた修道士を引き渡すよう怒りを込めて要求し、抵抗した場合はスキトの修道者全員を皆殺しにするとも脅した。　これを聞いた修道士たちは皆、極度の動揺に陥ったが、至福のドロフェイは王の家来たちのところへ出て行き、こう言った。

「私があなたがたが探している者です。私一人を罪人として連行し、他の修道士たちは無実であるとして放っておいてください。」

これを聞いた修道士たちは心を痛め、ドロフェイに「私たちもあなたと一緒に行きます！」と言った。彼らは、彼がその罪の責任を負うべきではないと考えていたからである。しかし、至福のドロフェイは彼らにこう言った。

「主よ！　あなた方はただ私のために祈ってください。私は神とあなた方の祈りに希望を置き、まもなく無事にあなた方の元へ戻れるだろうと信じています。」

そこで、彼らは全員で彼を教会へと連れて行き、彼のために祈りを捧げ、神に委ねた後、アンフェミオスから派遣された使者に彼を引き渡した。しかし、アバ・マカリオスや他の修道士たちは、ドロフェイに何の罪もないと確信していた。ドロフェイがアンフェミオスの前に連れて行かれると、彼はその足元にひれ伏してこう言った。

「敬虔なる陛下、どうか忍耐強く、黙って、私があなたの娘について語ることを聞いてください。しかし、すべてをお話しするのは二人きりの時だけです。そのお嬢様は清く、いかなる暴行も受けてはいません。」

王と王妃はそこでドロフェイと二人きりになり、彼はこう言った。

「神の名にかけてお願いいたします――真実を知った後、私を私の住む場所へ帰してくださることをお約束ください。」

二人がそのことについて王としての約束をしたとき、聖アポリナリアは彼らにこう言った。

「神の御加護と聖なる先人たちの祈りにより、私、この謙虚な者が、お嬢様を癒やしたのです。」

王と王妃は驚きで言葉を失ったかのように、敬意を込めて聖女の言葉を聞き入った。

「今、私は、無実の人々を誹謗する悪魔を恥じ入らせるために、これまで慎重に秘めてきた大きな秘密を、あなた方に明かしましょう」

そう言うと、彼女は胸の覆いを外し、王と王妃は、目の前にいるのが男性ではなく女性であることを知った。

「父上」と、その聖女は言った。「私はあなたの娘、アポリーナリアです！」

これを聞いて、両親は最初、恐怖と驚きでまるで死んだかのように固まってしまったが、やがて彼女を自分の娘だと認めるや、この上なく喜び、その日、喜びの涙をたっぷりと流した。その後、彼らは聖女アポリナリアのもとへ、妊娠しているとされていた彼女の妹を連れて行き、こう言った。

「この修道士を知っているか？」

彼女はこう答えた。

「ええ、それは確かに、神の力によって私を癒やしてくださったあの方です。」

そして、聖人の足元にひれ伏し、その娘は自分の胎を癒やしてくれるよう懇願した。アポリナリアは、地面に倒れていた妹を助け起こすと、その腹に手を置いた。すると、悪霊はたちまち逃げ去り、その娘は以前のように健康を取り戻した。これを見た両親は神を賛美し、こう言った。

「まさに、これが私たちの娘、アポリナリアだ！」

こうして王宮には喜びの涙が溢れ、それまで消息が分からなかった長女アポリナリアが思いがけず見つかったこと、そしてもう一人の娘が不当な汚名から解放されたことを祝った。　聖アポリナリアは両親のもとで数日間過ごし、自分のことを詳しく話した。その話を聞いた両親は、神の驚くべき御摂理を賛美した。

聖女が自分の住処へ戻ろうと決心したとき、両親は彼女に、自分たちの元に残ってほしいと懇願した。しかし、彼女を説得することはできず、さらに、彼女の秘密が明らかになる前に、彼女を住処へ帰すと約束した王としての誓いを破ることも望まなかった。　かくして、両親は自らの望みに反して、愛する娘を見送った。泣きじゃくり、嗚咽しながらも、同時に、神への奉仕に身を捧げたこの徳高い娘を心から喜び、心の中で喜んでいた。一方、福者アポリナリアは両親に、自分のために祈ってほしいと頼んだ。すると両親は彼女にこう言った。

「あなたが身を捧げた神が、あなたを神への畏敬と愛のうちに完成させ、その慈しみであなたを包んでくださいますように。そして、愛する娘よ、あなたの聖なる祈りの中で私たちを覚えていてください。」

両親は、聖なる父たちの必要のために修道院へ持っていくよう、彼女に多くの金を渡そうとしたが、彼女はそれを受け取ろうとしなかった。

「私の父たちには、この世の富など必要ありません。私たちが気にかけているのは、天の恵みを失わないことだけです。」

こうして、祈りを捧げ、愛する娘を抱きしめて口づけを交わしながら長く涙を流した後、王と王妃は彼女を住まいの地へと送り出した。一方、聖女は主を喜び、喜びに満ちていた。

彼女が修道院に戻ると、修道院長や兄弟たちは、兄弟であるドロフェイが無事で健やかに戻ってきたことを喜び、その日、主への感謝を込めて祝宴を催した。　王のもとで彼女に何が起きたのか、誰も知る由もなかった。また、ドロフェイが女性であるという事実も、依然として知られずにいた。そして、聖アポリナリア――この「ドロフェイ」と見なされていた女性――は、以前と変わらず、修道院の兄弟たちの中に身を置き、自らの独房で暮らしていた。しばらくして、神のもとへ旅立つ時が近づいていることを悟ると、彼女はアッバ・マカリオにこう言った。

「父よ、どうか私にお慈悲を。私があの世へ旅立つ時が来たら、兄弟たちが私の体を洗ったり、清めたりしないようにしてください。」

すると、長老はこう言った。

「そんなことがあり得るでしょうか？」

彼女が主のもとへ召された時[730]　、兄弟たちは彼女を清めようとやって来たが、目の前に女性が横たわっているのを見て、声を張り上げて叫んだ。

「栄光あれ、キリストなる神よ。御許に多くの隠れた聖人たちをお抱きになる方よ！」

聖マカリオスは、この秘密が自分に明かされなかったことに驚いた。しかし、眠りの中の幻視の中で、ある人物が現れ、彼にこう言った。

「この秘密があなたから隠されていたことを嘆く必要はない。あなたは、古の時代に生きた聖なる父たちと共に栄冠を授かるにふさわしいのだ。」

現れた者は、その際、至福のアポリナリアの生い立ちと生涯について語り、彼女の名前を挙げた。眠りから飛び起きた長老は、兄弟たちを呼び集め、見たことを語った。皆は驚き、御自身の聖人たちにおいて驚くべき御業をなされる神を賛美した。 修道者たちは聖人の遺体を整え、 の教会の東側にある聖マカリアの墓所に、敬意を込めて埋葬した。この聖遺物からは、我らの主イエス・キリストの恵みにより、多くの癒しがもたらされた。主には永遠の栄光あれ、アーメン。

[730] 約470年。

聖預言者ミカの記念日

記念日：1月5日

聖預言者ミカ（イェムブライの子）[731] は、神の預言者エリヤの同時代人であり、イスラエルの王アハブ[732] およびユダの王ヨシャファト[733] の時代に生きた。ミカは口頭で預言を行い、アハブによるシリアに対する戦争の悲惨な結末を予告した。 ある日、ヨシャファトはアハブを訪ねるためにサマリア[734] にやって来た。 シリア人が支配していたガリラヤの町ラモフ[735] が、かつてはイスラエル王国に属していたことを思い出したアハブは、ヨシャファトに、共同で軍を率いてシリアに対して戦争を行うよう要請した[736] 。敬虔なユダ王はこれに同意したが、出陣する前に預言者たちの口から神の御心を知りたがった。 そこでアハブは、バアルの預言者たちを自分のもとに呼び寄せた[737] 。これらの偽預言者たちは、サマリアの城門で豪華な玉座に座る両王の前に進み出て、アハブにシリア人に対する勝利を予告した。しかしヨシャファトは、ここに主の預言者がもう一人いないかと尋ね、その者を通して主に問いかけることを求めた。

「主にお尋ねできる人がもう一人います」とアハブは答えた。「しかし、私は彼を好んでいません。彼は私について良いことを預言せず、いつも悪いことばかり預言するからです。その人は、イェムブライの子ミカです。」

「王よ、そんなことをおっしゃらないでください」とヨシャファトは反論した。

すると、アハブは直ちにミカを呼び寄せるよう命じた。

王は彼に尋ねた。

「ミカよ、我々はラモト・ガリラヤへ進軍すべきか、それとも控えるべきか。」

ミカは答えた。

「私は、羊飼いのいない羊のように、山々に散らばっているイスラエルの子ら全員を見ました。主はこう言われました。『彼らには指導者がいない。それぞれが平安のうちに自分の家へ帰れ。』」

そこでアハブは、預言者ミカを牢屋に閉じ込め、自分（アハブ）が無事に帰還するまで、彼にパンと水をほんの少しずつしか与えないよう命じた。

---

731 この預言者ミカは、いわゆる「小預言者」12人の一人には含まれず、紀元前9世紀に生きていた。「小預言者」の一人である聖預言者ミカは、彼より約130年後に生き、預言を行った。

732 アムリヤの子アハブは、イスラエルの王であった。彼は、シドンの王の娘である不義なイゼベルと結婚し、彼女と共にイスラエル王国に、シドンの神々であるバアルとアスタルテへの新しい偶像崇拝を導入した。 彼の治世には、神の預言者エリヤ（テシュベ人）がおり、アハブの不義を厳しく非難した。

733 アサの子ヨシャファトは、敬虔なユダ王であり、紀元前914年から889年まで在位した。

734 サマリア――イスラエル王国の首都。この都市は、紀元前925年にイスラエルの王アムリ（アハブの父）によって建設され、アッシリア王サルマナッサルによる王国の滅亡に至るまで、イスラエルの王たちの首都および居城であり続けた。

735 ラモフ――ガリラヤの都市で、現在はサルトと呼ばれ、ガリラヤ山の麓に位置する。――ガリラヤ――ヨルダン川東岸の地域。

736 シリア――広義には、地中海とユーフラテス川の間に広がる広大な土地を意味する。独立していた時代、この地は多くの王国に分かれていたが、その中で最も強大だったのはダマスカス王国であり、本稿ではこれを指すものと理解される。 イスラエルの王ヴァッサとアムリヤの治世中、シリアの王ベナダドは、イスラエルのいくつかの都市を制圧した。 アムリヤの息子アハブが王位についた際、前王の息子であるベナダド2世はサマリアそのものを包囲したが、捕虜となり、父が征服した都市をアハブに返還して和平を結ぶことを余儀なくされた。しかし、ガリラヤのラモフはシリア人の手に残った。

737 バアルはフェニキア人の主神であり、彼らはその名のもとに主に太陽を崇拝していた。イゼベルと共にイスラエル王国にバアルとアスタルテの崇拝を導入したアハブは、特にバアルの偽預言者たちを庇護し、約千人を王室の費用で養っていた。

それに対し、ミカはこう言った。

「もし無事に帰還するならば、主は私を通して語られたのではないということになる。」

アハブは聖ミカヤの預言の言葉を聞き入れず、シリア人に対して戦争を仕掛けたが、最初の戦いで致命傷を負った[738]、ヨシャファトは軍を率いてユダへ戻った。

聖グリゴリオス・クリティオスの記念日

記念日：1月5日

私たちの聖なる父グリゴリオスは、760年にクレタ島[739]で、敬虔な夫婦テオファンとユリアニアの間に生まれた。良き家庭教育のもと、彼は学問的な教育も受けた。当時、正教の信仰を守る殉教者たちは、異端の偶像破壊者たちから激しい迫害を受けていた。　幼少の頃から正教に献身し、正しい信仰をその純粋なままに守り抜きたいと切に願っていた若者は、ある日、家から食糧を携えてセレウキア[740]　へと向かった。彼はここでかなりの期間を過ごし、パンと水だけで身を支え、敬虔な行いを通じて神に喜ばれる生活を送った。

偶像破壊者レオ4世皇帝の死後[741]、聖グリゴリウスは20歳の時に、聖地エルサレムへ赴き、その聖遺物を拝礼した。 そこで彼は12年間を過ごし、アラブ人[742]やユダヤ人からの残酷な迫害を忍耐と喜びをもって耐え抜いた。そこから聖グリゴリウスはローマに移り住み、そこで天使の修道服を授かり、その姿で修行に励み、禁欲によって肉体を死なせた。

811年、コンスタンティノープル総主教聖ニキフォロス（[743]）は、皇帝ミカエル・クロパラトス（[744]）の戴冠式に関する公会議の書簡を携え、シナドの司教であり殉教者である聖ミカエル（[745]）を、教皇聖レオ3世（ ）のもとへ派遣した。 ローマで、聖ミカエルは聖グレゴリオスと精神的に親しくなり、コンスタンティノープルへ戻る際、彼を同行させ、その後、アクリテ岬の修道院[746]　に彼を住まわせた。　ここで聖人はキリストのために自らを大きな苦行にさらした。裸足で歩き、服は一枚しか持たず、わずかなパンと水からなる食事を2、3日に一度しか口にしなかった。　藁の敷物の上で眠り、深い穴を住処として選び、そこで当時キリスト教教会を揺るがしていた混乱を痛切に嘆いた[747]　。その後、聖なる修道士は狭い独房に閉じこもった。そこから彼は、革の服一枚だけを身にまとい、修道院の塀のそばに置かれた大桶に水を汲みに行くために外へ出た。　この重労働を終えると、尊者は自分の独房に引きこもり、そこで修道規則を実践した。このように善き行いに励んだ末、彼はその聖なる魂を神の御手に委ねた[748]。

---

738 これは紀元前878年頃のことである。

739　クレタ島は、同名の主要都市にちなんでカンディアとも呼ばれ、地中海東部、エーゲ海の南に位置していた。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「諸島の女王」と呼ばれていた。

740　古代には、小アジア、メソポタミア、シリア、パレスチナなど、セレウキアという名の都市がいくつか知られている。クレタ島からの地理的な近さを考慮すると、ここでは小アジア南東部のキリキア地方にある沿岸都市を指すと解すべきである。

741 レウスはビザンツ帝国の皇帝で、776年から780年まで在位した。

742 アラブ人は636年、カリフ・ウマルの治世下でエルサレムを攻略した。

743 795年から816年まで。

744 ミハイル・クロパラト（別名ランガヴ）は、811年から813年まで在位した。

745 5月23日は彼の記念日である。

746 小アジアのマルマラ海沿岸。

747　言うまでもなく、東方では偶像破壊派による動乱が、西方では聖霊が父と子から発出するという新しい教義が、それぞれ波紋を広げていた。

748 聖グリゴリウスは820年頃に亡くなった。

聖フォスティリオスの記念日

記念日：1月5日

聖フォスティリウスは、東の空に輝く太陽のように、闇の中にいる人々を照らし出した。高い荒野の山に籠もり、彼は絶え間なく神に祈りを捧げ、断食、夜通しの祈り、あらゆる欠乏に満ちた生活によって、自らの 肉体を死に至らしめた。 その偉大な苦行によって、彼は宇宙の光のように輝き、自身が名乗った「[749] 」という名にふさわしい存在となった。主の戒め*「わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従え」*（マタイ16:24）という主の戒めを果たすことにより、尊者フォスティリイは聖霊の住まいとなりました。神から授かった恵みによって、彼は信仰をもって彼のもとに駆け寄る人々の病やあらゆる傷を癒やしました。

栄光ある預言者エリヤと同様に、私たちの尊い父フォスティリオスもまた、天から糧を受け取っていました。しかし、預言者について聖書が語っているように（列王記下17:6）、彼に食物を運んできたのはカラスではなく、主の御使いでした。 この天の使者は、毎日決まった場所に聖人のためのパンを置いていった。そして、聖なる人に訪問者がやってくると、聖人はその場所で、訪問者たちの分までのパンも見つけ出したのである。 この神の御恵みによる輝かしい奇跡は、カルミルの山における聖預言者エリヤの時代のように、ほんの数日間だけ行われたのではなく、尊者フォスティリオスが隠遁と沈黙の中で過ごした長きにわたる年月を通じて、絶え間なく続いた。

その後、神の御加護により、フォスティリオス尊者が修道院を設立し、そこに多くの修道士たちが集まるようになると、彼は以前のように天からパンを受け取ることはなくなり、自らの労苦によって得た食物を彼らに供するようになった。 これは、神が御自身の恵み深い助けに疲れ果てたからでもなく、聖人の祈りを拒まれたからでもなかった。ましてや、聖なる父自身も、キリストの戒めを心に留め、決して食物について祈ることはなかったのだ。*「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる」*（マタイ6:33）という戒めを心に留めていたため、決して食物について祈ることはなかった。しかし、主は彼らの労苦の対価として食物を与えることを望まれ、それゆえ、御自身の御使いフォスティリオに対し、誰からも何も受け取らず、必要なものはすべて自らの労苦によって得るよう命じられたのである。 自らいかなる供え物も受け入れない聖人は、兄弟たちに対しても、祈り、霊に益となる読書、そして手仕事に熱心に励むよう教え、自らもその点において彼らにとって絶え間ない模範となった。

聖フォスティリオの存命中に、教会内でいくつかの異端が生じた。この惑わしを断ち切るため、多くの教父たちによる公会議が招集され、聖フォスティリオもそこに招かれた。 この新たな試練からも、聖フォスティリウスはひるむことなく、公会議に参集すると、勇敢かつ説得力を持って正統な信仰を告白したため、多くの異端者たちが教会の交わりへと立ち返った。 また、他の者たちは、この偉大な修道者の聖なる生き方に感化され、修道者となった。その祈りによって、彼がこの世にいた間も、また主の顕現祭の前日の夕方に神のもとへ召された後も、多くの奇跡が成し遂げられたのである。

聖ミーナの記念日

記念日：1月5日

[749] フォスティリオスはギリシャ語の名（「光」に由来）で、「光をもたらす者」を意味する。

私たちの尊い父ミナは、キリスト降誕後6世紀、シナイ山の共同生活修道院の一つ[750] で修行に励みました。彼は50年にわたり、様々な修道者の務めを果たしました。この修行者の安らかな死から3日後、すべての兄弟たちが教会に集まり、教会の規定に従って故人の葬儀を執り行いました。 この礼拝の最中、聖堂は突然、故人が横たわっていた場所から漂う香りに満たされた。修道院長命令により、故人である聖ミナの遺骨が納められた棺が開けられると、出席者全員が、彼の両足から二つの小川のように芳香を放つ聖油が流れ出ているのを目撃した。その時、修道院長は兄弟たちにこう言った。

「ご覧なさい。これは、生前に故人の両足が担った労苦から、いわば汗として湧き出たものです。この香りは、その労苦が神に受け入れられたことの証しです。ですから、あなた方も清い良心と全き熱意をもって、課せられた務めを果たし、主なる神、私たちの救い主から労苦に対する報いを受けられるようにしなさい。」

1月19日

1月6日（旧暦）

主の洗礼

1月6日の記念日

私たちの主イエス・キリストは、エジプトから帰られた後、ガリラヤに留まられました。 ご自身が育ったナザレの町に留まり、30歳になるまで、ご自身の神性の力と英知を人々から隠しておられました。というのも、ユダヤ人においては、30歳未満の者が教師や祭司の職に就くことは不可能だったからです。 それゆえ、キリストもまた、その定められた年齢に達するまでは、宣教を始めず、御自身を神の子であり、*「天を通過された大祭司」*（ヘブライ人への手紙4:14）であることを明らかにされませんでした。 ナザレでは、キリストは聖母マリアと共に暮らしておられました。最初は、義父である大工のヨセフが存命の間、彼と共に大工の仕事に従事しておられ、その後、ヨセフが亡くなると、 御自身でその仕事を続け、御自身の労苦によって御自身と聖母マリアの糧を得られ、私たちにも勤勉さを教えられたのである（ルカ3:23）。そして、この世での生涯が三十年に満ち、イスラエルの民に御自身を現す時が近づくと、福音書が語るように、「*神の御言葉が、ザカリアの子ヨハネに、荒野で臨んだ*」 （ルカ3:2）――それは、彼に水で洗礼を授けるよう命じ、また、ヨハネが世に現れたメシアを見分けるためのしるしを告げた御言葉であった。 これについて、洗礼者ヨハネ自身が説教の中で次のように語っている。「*わたしを水で洗礼を授けるように遣わした方が、わたしにこう言われた。『御霊が下って、その方の上にとどまるのを見たら、その方が聖霊で洗礼を授ける方である』*」（ヨハネ1:33）。

こうして、ヨハネは神の御言葉に従い、ヨルダン川一帯を巡り歩き、*「罪の赦しのための悔い改めの洗礼」* （ルカ 3:3）と宣べ伝えた。なぜなら、彼はイザヤが預言した*「荒野で叫ぶ者の声：『*

---

750 シナイ――主がモーセを通じてユダヤの民に律法を授けた山である。これは、紅海（チェルムノエ海）半島にあるホリブ山脈の峰の一つである。 この山脈は、狭い岩だらけの峡谷が走り、キリスト教初期から多くの洞窟があり、そこでいくつかのスキートや修道院を築いた修道者たちにとって、愛される場所となった。 シナイの隠者たちの中でも特に有名なのは、後にコンスタンティノープル総主教となった聖ヨハネ・ポストニク、著書『天梯』の著者である聖ヨハネ・レステヴィチク（晩年はシナイ山、すなわちそこに位置する修道院群のイグメンを務めた）、その他多くの隠者たちである。

主の道を整え、私たちの神の道筋を平らにせよ』」（イザヤ40:3；ルカ3:4参照）と告げた方であったからである。　こうして、ユダヤ全土の人々やエルサレムの人々が彼のもとへ出て行き、皆、ヨルダン川で彼から洗礼を受け、自分の罪を告白した（マルコ1:5）。その時、イエスもガリラヤからヨルダン川へヨハネのもとに来られ、彼から洗礼を受けようとなさった（マタイ3:13）。イエスが来られたのは、ヨハネが民にイエスについて次のように宣べ伝えていた時であった。「*わたしより力ある方が、わたしの後に来られる。その方の靴のひもを解くことさえ、わたしにはふさわしくない。わたしはあなたがたに水でバプテスマを授けてきたが、その方は聖霊であなたがたにバプテスマを授けてくださる*」（マルコ1:7–8）。この宣教の後、イエスは洗礼を受けに来られました。御方は、無罪で汚れなく、至聖なる聖母マリアから生まれ、御自身こそがあらゆる清さと聖さの源であられたため、本来これが必要ではなかった。しかし、御方が全世界の罪を御自身に負われたゆえに、洗礼によってそれらを清めるために川へと来られたのである。　また、水の性質を聖別するためにも、そして私たちのために聖なる洗礼の浴槽を整えるためにも、イエスは洗礼を受けに来られた。さらに、ヨハネが、洗礼を受ける者に降りてくる聖霊を目撃し、天から父なる神の声を聞いたとき、キリストについて偽りのない証人となるためにも、イエスはヨハネのもとに来られたのである。

「しかし、ヨハネはイエスを引き留めて言った。『私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが私のところに来られるのですか？』」　（マタイ3:14）彼は御霊によって、三十年前、母の胎内で*「喜び躍った」*（ルカ1:44）あの方を認識していた。それゆえ、アダムから全人類へと受け継がれた不従順の罪の下にある者として、自らもイエスに洗礼を求めようとしたのである。　しかし、主はヨハネにこう言われた。*「今はそのままにしておきなさい。このようにして、私たちはすべての義を全うすべきだからである」*（マタイ3:15）。

聖ザラトウストは、ここで「義」とは神の戒めを意味すると解釈しており、あたかもイエスがこう言われたかのようです。「私は律法に与えられたすべての戒めを全うし、残っているのは洗礼に関するただ一つの戒めだけであるから、私もこれを全うすべきである」。　また、ヨハネの洗礼もまた神の戒めであった。これは、ヨハネの次の言葉からも明らかである。*「私を水で洗礼を授けるように遣わされた方が、私に言われた」*（ヨハネ1:33）。では、誰が遣わしたのか。明らかに、神ご自身である。　「福音書に記されているように、*神の御言葉がヨハネのもとに来た*」（ルカ3:2）。また、イエスが三十歳の時に洗礼を受けたのは、三十歳という年齢が――金口ヨハネやテオフィラクトの言葉を借りれば、 あらゆる罪に傾きやすいからである。 というのも、若年期は肉欲の炎にさらされやすいが、三十歳――男としての力が完全に開花する時期――になると、人は金銭への執着、虚栄心、激昂、怒り、そしてあらゆる罪に支配されてしまうからである。　それゆえ、主キリストは、人間の生涯のあらゆる年齢において律法を全うし、私たちの全存在を聖別し、情欲に打ち勝ち、死に至る罪を避ける力を私たちに与えるために、この年齢になるまで洗礼を受けることを遅らせられたのである。

洗礼を受けた後、主は直ちに、何の遅れもなく、水から上がられました。ある伝承によれば、聖ヨハネ・バプティストは、彼のもとで洗礼を受ける者一人ひとりを首まで水に沈め、その人がすべての罪を告白するまでその状態を保ち、その後、洗礼を受ける者に水から上がることを許したといいます。　しかし、罪のないキリストは水の中に留められることはなく、それゆえ福音書には、主が直ちに水から上がられたと記されている（マタイ3:16）。

主が水から上がられたとき、主の上で天が開かれ、上から稲妻のような光が輝き、鳩の姿をした神の御霊が、洗礼を受けられた主の上に降りてきた。ノアの時代に鳩が洪水の水が引いたことを告げたように、ここでも鳩の姿は、罪の洪水の終わりをあらかじめ示していたのである。　聖霊が鳩の姿で現れたのは、この鳥が清く、人を愛し、柔和で、悪意がなく、不浄なものを一切許さないからである。同様に、聖霊は清らかさの源であり、人間愛の深淵であり、柔和さの師であり、平和の調停者である。さらに、聖霊は、罪という不浄な泥沼にまみれている人間からは常に遠ざかるのである。

そして、聖霊が鳩のように天からキリスト・イエスに降りたとき、「*これは、わたしの愛する子、わたしの心に適う者である*」という声が聞こえた（マタイ3:17）。そして、御子には、世々限りなく栄光と権威がある。アーメン。

主の顕現に関する聖ヨハネ・クロソストモスの説教

記念日：1月6日

愛する者たちよ、私は祝賀し、喜びを分かち合いたい。なぜなら、啓示の聖なる日は、祝祭の印であり、祝賀の日だからである。　この日は、ベツレヘムの馬小屋を刻印するものであり、そこでは、古よりおられる方が、母の胸に抱かれた赤ん坊のように、飼い葉桶に横たわっておられた。また、この日はヨルダン川の源泉を開き、そこでは、その同じ古よりおられる方が、今や罪人たちと共に洗礼を受け、御自身の至聖なる御体によって、世に罪の赦しを授けておられる。　前者の場合、聖母マリアの胎内から生まれた御方は、幼子たちにとっては幼子として、母にとっては息子として、東方の三博士にとっては贈り物として、羊飼いたちにとっては、聖書の言葉にあるように、羊のために御自身の命を捧げる「善き羊飼い」として現れました（ヨハネ10:11）。　第二の事例、すなわちご自身の洗礼の際、主はヨルダン川の水に下り、徴税人や罪人たちの罪を洗い流すために来られました。この出来事の並外れた奇跡性について、英知に満ちたパウロはこう叫んでいます。*「すべての人の救いとなる神の恵みが現れた」*（テトス2:11）。今や、世界はそのあらゆる部分において照らされている。何よりもまず天が喜び、天の高みから降りてくる神の声を人々に伝え、聖霊の御臨在によって空気は聖別され、水の本質もまた、あたかも肉体とともに魂をも洗い清めることを学んでいるかのように聖別され、地上のすべての被造物が歓喜に沸いている。　ただ悪魔だけが、その権勢を打ち砕くために用意された聖なる洗礼槽を見て、泣いているのである。

では、福音書には他に何が記されているだろうか。*「イエスはガリラヤからヨルダン川へやって来て、ヨハネから洗礼を受けようとした。しかし、ヨハネはイエスを引き止め、言った。『私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが私のところに来られるのですか』」*（マタイ3:13, 14）。　主がしもべの前に立っておられるのを見た者がいるだろうか。王が自分の兵士の前で頭を垂れているのを見た者がいるだろうか。羊に道を指し示される羊飼いを見た者がいるだろうか。競技会の主催者が、走っている選手から賞を受け取っているのを見た者がいるだろうか[751]？　*「私はあなたから洗礼を受けなければならない」*――すなわち、主よ、あなたが世に授けようとするその洗礼を、あなたご自身が私に授けてください。私は、先祖の罪の重荷を負い、蛇の毒を体内に宿しているため、あなたに洗礼を授けていただく必要があります。　私は、古の罪の汚れを洗い流す必要がありますが、あなたはいったいどのような罪のために洗礼を受けに来られたのですか？預言者もあなたについて証しし、*「彼は罪を犯さず、その口には偽りさえなかった」*（イザヤ書53:9）と語りました。救いを与えてくださるあなたが、どうして清めを求めるのでしょうか？　洗礼を受ける者たちは、慣例に従って、　自分の罪を告白します。しかし、あなたは全く罪のない方であるのに、何を告白するというのですか？　なぜ、私に教えられていないことを私に求めるのですか？　私の力を超えることを行う勇気はありません。光を洗い清める方法も知りませんし、義の太陽を照らす術もありません。夜は昼を照らすことはできず、金は鉛よりも清くはなり得ず、粘土は陶工を正すことはできず、海は泉から水の流れを借りることはなく、川は一滴の水をも必要とせず、清さは汚れによって聖別されることはなく、有罪判決を受けた者が裁判官を自由の身にすることはない。　*「私はあなたから洗礼を*

[751] リスタニアとは、ギリシャで公共の祭典や競技会において公に行われていた走りの競技である。この競技で勝利した者には、賞を授与する特別な長老たちから賞が与えられた。

受けなければならない」。死者は生者を起こすことはできず、病人は医師を癒やすことはできない。そして私は、自分の本性の無力さを知っている！ *「弟子は師より偉くはなく、しもべは主より偉くはない」*（マタイ10:24）。 ケルビムたちは畏れをもって私に近づくことはなく、セラフィムたちは私にひれ伏すこともなく、「三聖の賛歌」[752] を唱えることもない。私には天の玉座はなく、星が東方の三博士に私を告げることもなかった。あなたの御心に適ったモーセでさえ、*「あなたの後ろ」*（出エジプト記33:23）としか言えなかったのに、どうして私があなたの至聖なる御頭に触れるなどという大胆なことをできるでしょうか？ なぜあなたは、私の力をはるかに超えることを私に命じられるのですか？ 私には、神に洗礼を授けることのできる手などありません。*「私はあなたから洗礼を受けなければなりません」*。 私は年老いた母から生まれました。なぜなら、自然は御命令に逆らうことはできなかったからです。母の胎内にあり、自ら語る術もなかった当時、私は母の口を通して語り、今や自らの口をもって、処女の聖櫃に収められた、計り知れない御方を賛美いたします[753]。 私はユダヤ人たちのように盲目ではありません。なぜなら、あなたが、人間を癒やすために一時的にのみ奴隷の姿をとられた主であることを知っているからです。あなたが私たちを救うために現れたことを知っています。あなたが、人の手によらず山から切り出された石であり、その石を信じる者は決して欺かれることがないことを知っています。 あなたの謙遜を示す目に見えるしるしによって、私は惑わされることはありません。そして、私は霊によって、あなたの神性の偉大さを悟っています。私は死すべき者ですが、あなたは不死の御方です。私は不妊の母から生まれましたが、あなたは処女から生まれました。私はあなたより先に生まれましたが、あなたより優れているわけではありません。私はただ、あなたより先に説教の場に立つことしかできなかったが、あなたに洗礼を授けることは敢えてしない。私は知っている、あなたが木の下に置かれた斧（マタイ3:10）であり、ユダヤの園にある実を結ばない木々を切り倒すその斧であることを。 私は、情欲を切り落とす準備の整った鎌を見て、まもなく至る所に癒やしの泉が開かれると告げました。なぜなら、あなたのユダヤ人にとって、立ち入ることのできない場所などどこにあるというのでしょうか。 あなたは一言でらい病人を清め、あなたの衣の端に触れるだけで出血は止まり、あなたの命令一つで、麻痺した者は再び力を取り戻す。 あなたはカナンの女の娘を、御自身の奇跡の粒で満たし、息吹によって盲人の目を開かれます。それなのに、どうして私にあなたに手を置くよう求めておられるのですか？ *「私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、地を見下ろすだけで地が震えるほどの方でありながら、私のところに来られるのですか」*（マタイ3:14；詩篇103:32）、水の上を地の上を歩くかのように歩まれる――私が説教のさなかに何度も叫んだ、あの御方よ。「*私よりも力強い方が私の後に来られる。私はその方の靴の紐を解くことさえ、身がこわくてできないほど、その方にふさわしくないのだ！*」（マルコ1:7）。 私はただ、あなたの言い表せないほどの慈愛に依り頼み、あなたの計り知れない人間愛に希望を置きます。その愛ゆえに、あなたは娼婦でさえ、あなたの至聖なる足を拭い、あなたの至聖なる頭に触れることを許されるのです。

さて、主は彼に何とおっしゃったでしょうか。*「今はそのままにしておきなさい。このようにして、私たちはすべての義を果たすべきだからです」*（マタイ3:15）。御言葉に仕えよ、人の声のように。主人に仕える奴隷のように、王に仕える戦士のように、陶工に仕える粘土のように。恐れるな、大胆にわたしを洗礼せよ。なぜなら、わたしは世界を救うからだ。わたしは、死んだ人間の本性を生き返らせるために、自らを死に委ねるのだ。 あなたは、わたしの命じにもかかわらず、なおも手を差し伸べるのをためらっている。しかし、ユダヤ人たちは、わたしを死に渡すために、間もなく恥じることなく、その不義な手をわたしに差し伸べるだろう。「今はそのままにしておきなさい。そう

---

[752] これは、御座に坐す神を仰ぎ見る栄誉に浴した預言者イザヤの幻を指しており、御座を取り囲むケルビムとセラフィムが、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主よ！ 全地は御栄えに満ちている！」（イザヤ書6:3）と賛美していた場面である。

[753] 言うまでもなく、聖母マリアの胎内を指しています。

すべきだからである」。わたしの愛に満ちた御心により、わたしはすべての世の初めから、人類を救うことを決めていた。　人々のために、私は人間となった。私がただの一人の人間として洗礼を受けに来るということに、これほど驚くべきことがあるだろうか。私がそうするのは、私の手で造った被造物を軽んじず、地上の性質を恥じないからである。私は永遠の昔から変わらぬままであり、新たな性質を受け入れたが、それにもかかわらず、私の本質は不変のままである。「今、あなたたちを放っておく」。　なぜなら、人類の敵は、天から追放され、地からも追放された後、水の性質の中に巣くっているからであり、わたしもそこから彼を追い出すために来たのである。預言者がわたしについて告げたように、*「あなたは水の中で蛇の頭を砕かれた」*（詩篇73:13）*「今、去れ」*。　この敵は、私を人間として誘惑しようとしているが、私はその無力さを証明するためにこれを耐え忍んでいる。私は彼にこう告げるからだ。*「あなたの神、主を試してはならない」*（マタイ4:7；申命記6:16）。

おお、新たな奇跡よ！　おお、言い表せない恵みよ！　キリストが偉業を成し遂げ、私が栄誉を受ける。キリストが悪魔と戦い、私が勝利者となる。　御方は水の中で蛇の頭を砕かれるが、私はまるで真の格闘家であるかのように[754]　の栄冠を戴く；御方は洗礼を受けられるが、私からは汚れが取り除かれる；御方に聖霊が降るが、私には罪の赦しが与えられる；御父は御子を御自身の愛する御子として証しされるが、私は御子のゆえに神の子となる；　御身に天が開かれ、私はその中に入る。洗礼を受ける御前の前に天の御国が現れ、私はそれを相続として受ける。御身に父の声が向けられ、私は御と共に招かれる。　父は御子を喜ばれ、私をも拒まれることはない。私としても、天から御声を賜った父、地上で洗礼を受けられる御子、そして鳩のように降りてこられた聖霊、三位一体の唯一の神を賛美する。私はこの神を、いつまでも礼拝し続けるであろう。アーメン。

主の顕現の説教

1月6日の記念日

ヨルダン川の水上で主の顕現を祝うにあたり、私たちの主なる神が、かつてにも水の上にお現れになり、さまざまな驚くべき御業を行われたことを思い起こしましょう。　例えば、主が紅海の海面の上に現れたとき、「深淵の底を露わにされた」[755]　、そしてご自分の民を乾いた地の上を歩ませられました。また、箱舟に乗ってヨルダン川を渡られたとき、この川の水を逆流させられました。*「ヨルダン川は、」と記されているように、「後戻りした」*（詩編113:3）。　最後に、初めに、神の御霊が*水の上を*漂っていたとき（創世記1:1）、神は天と地、鳥、獣、人間、そして目に見える世界全体を創造された。

そして今、ヨルダンの水の上には、三位一体の唯一なる神が現れています。父は御声として、子は肉として、聖霊は鳩の姿として。では、神はこの御出現において何を行われるのでしょうか。神は新しい世界を創造し、すべてを新しくされます。それは、祭りの前のトロパリオで歌われているように、最初の世界とは異なる新しい世界を作り出すことと同じです。　*「古いものは過ぎ去り、今やすべてが新しくなった」*と聖書は語っている（IIコリント5:17）。最初の世界はその性質上重く、天へと昇ることはできず、あたかも据え付けられたかのように立つことのできる陸地を必要としていた。　しかし、ヨルダン川の水から生み出された新しい世界は、あまりにも軽いため、陸地を必要とせず、地上に築かれることもなく、「障壁を持たず、高みを求める」ものであり、水の中からヨルダン川の上方に開かれた天の門へと素早く突き進んでいく。　*「イエスはすぐに水から上がられた。すると、天が開かれた」*（マタイ3:16）。世俗の重荷に苦しむ第一の世界にとって、もし天に到達することを望むならば、地上に据えられ、その頂が天に届くような梯子が必要だっただろう——しかし、ヤ

[754] この表現は、古代の慣習——公開のレスリング大会で勝者に月桂冠を授ける——に由来しています。
[755] 主の洗礼の第一イルモス。

コブはそれをただ眺めただけであり、彼自身はその梯子を登ることはなかった。 ——しかし、新しい世界においては、梯子なしでも天に登ることが可能である。では、どのようにしてか。見よ、梯子の代わりに、神の御霊が鳩の姿となって水の上を飛んでいる。これは次のような意味を持つ。人類はもはや、地を這う爬虫類や這い回る動物としてではなく、羽のある鳥として、洗礼の水から立ち上がるのである； それゆえ、聖霊はバプテスマの水の上を鳥のように現れ、バプテスマの水によって生み出した御自身の雛たちを、梯子なしに天へと導き上げようとしたのである。そしてここには、モーセの歌の言葉が成就している。*「御自身の雛たちの上を飛び回る」*（申命記32:11）、あるいは、ヒエロニムスの翻訳にあるように、「自分の雛たちに飛ぶよう促す」という。まさにこのような新しい世界を、神はヨルダン川の水の上での御出現によって創造される。それは地にしがみつくことなく、羽根を持つ鳥のように、翼を広げて開かれた天へと飛び立とうとするのである。

ここで聖書の次の言葉を思い起こそう。*「神は言われた、『水は生き物を生み出し、鳥は天の大空を飛び回れ』」*（創世記1:20）という聖書の言葉を思い起こし、今や世界の刷新に伴いヨルダン川の水の上に現れた聖三位一体の一位が、洗礼の水からその霊的な雛たちを引き出し、彼らが美徳の翼でヨルダン川の上に開かれた天へと舞い上がるよう、飛ぶよう呼びかけている様子を見てみましょう。 しかし、これを考察する前に、教会の教師たちの教えに基づき、水と御霊から生まれるすべての人が天の雛であることを確認しておこう。聖ヨハネ・クロソストモスは次のように述べている。「以前は、*『水は生き物、すなわち生き生きとした魂を生み出せ』*と語られていたが、 しかし、キリストがヨルダンの水流に入られて以来、水はもはや*「這う生き物、生ける魂」*を生み出すのではなく、理性ある霊的な存在——すなわち、 、地を這うことなく、鳥のように天へと舞い上がる魂——を生み出すようになった。それゆえ、ダビデもこう言ったのである。*「私たちの魂は鳥のようだ」*（詩編123:7）。 この鳥は地上のもの rather than 天上のものです。なぜなら、洗礼を起点として私たちのために備えられている住まいは、聖書の言葉によれば、天にあるからです」。また、聖グリゴリオス・ニッサスは、洗礼を受けた後に以前の悪行に立ち返る者たちを戒め、次のように述べています：「洗礼を受けた厚顔無恥な者たちは、何らかの理由で狂乱状態に陥ったかのように、洗礼の水によって得た救いを失ってしまう。彼らはキリストの体に葬られたことで、鷲の翼を身にまとい、それによって、恐れを知らぬ霊たちであるあの天の鳥たちのもとへ舞い上がる能力を得ているにもかかわらずである」。 次の言葉に注目しよう。「（洗礼によって）キリストの体に葬られた彼らは、鷲の翼をまとい、それによって舞い上がることができる」。この聖なる教師は、洗礼の水から上がる人々が、天へと舞い上がる鳥となることを説得力を持って証明している。しかし、これは歴史からも見て取れることである。

イリオポリスの司教である聖ノンヌスは、アンティオキアで公然と罪を犯していたペラギアを神へと立ち返らせるべき時、ある夜、夢の中で次のような幻視を見た[756]： 彼は教会で聖体礼儀を執り行っているところ、突然、泥まみれの黒い鳩が自分の周りを飛び回り始めた。彼はその鳩を捕まえ、洗礼盤で洗い清めると、鳩はたちまち雪のように清らかで美しい姿となり、そこからまっすぐに天へと飛び去っていった。 この幻視は、この祝福された神父が、ある罪深い女性を主のもとへと導き、聖なる洗礼によって彼女を啓発することを示していた。 かくして、聖なる洗礼の水は、人を天の鳥に変えるほどに力強いのである。ヨルダン川の水もまた、人に翼を与え、その翼で「目の前に広がる天」へと飛翔できるようにする。

しかし、この現象にはヨルダンの水による人間の本性の刷新が描かれているだけでなく、現れた三つの崇敬すべき神性の御姿も、さまざまな鳥の姿をとっている。そう、聖書は神の父を鷲に例えていることを私たちは知っている。*「鷲が自分の巣に雛を呼び寄せるように」*（申命記32:11）。 ま

[756] 参照：10月8日の聖ペラギアの生涯

た、御子も雌鶏に例えられていることが記されている[757] ：「*エルサレム、エルサレム*」と主は言われる。「*鳥が雛を翼の下に集めるように、わたしも何度となく、あなたの子供たちを集めようとしたのに*」（マタイ23:37）。 最後に、聖霊なる神もまた、ヨルダン川の上で鳩の姿を現されたことを私たちは知っている。では、なぜ至聖なる三位一体の御方は、これら三種類の鳥に例えられるのだろうか。 まことに、それは、御三方がバプテスマの水から、霊的にそのような雛たちの群れを導き出されるからであり、すなわち、人々を霊的な雛とし、ある者は鷲のように、ある者は雌鶏のように、またある者はまるで鳩のようにされるからである。

天において祝賀する教会は、戦いの教会から生まれた神の忠実な僕たちを、天の住まいで三つの特別な姿、すなわち教師の姿、殉教者の姿、そして処女の姿に分けます。 これら三つの位階は、洗礼の水から生まれ、そこから導き出された三つの雛の群れであると言っても、間違いではないでしょう。 教師の群れとは、空を舞い、目を閉ざすことなく太陽の輝きを見つめる鷲の群れである。なぜなら、聖なる教師たちは、神を心に留め、あたかも翼を持つかのように高く舞い上がり、明るい知性という目をもって三位一体の神の光を凝視し、自らと他者を英知で照らすからである。 殉教者たちの姿は、多くの雛を持つ雌鶏の群れである。なぜなら、彼らはキリストのために自らの血を流すことによって、キリストに多くの他の子らを産み出したからである。殉教者たちの血は、確かに、先駆的な教会のために多くの子らを生み出し、その数は天の星や海辺の砂よりも多くなったのである。 処女たちの姿は、清らかな鳩の群れである。なぜなら、彼女たちは自らを神への生けるいけにえとして完全に捧げ、肉欲ではなく、唯一の主を喜ばせることに心を尽くしているからである。これら三つの霊的な鳥の群れは、前述したように、洗礼の水の中で生まれたのである。それがどのようにして起こるのか、考えてみよう。

『雅歌』にはこう記されている。*「あなたの目を私からそらしてください。その目が私を動揺させるからです」*（雅歌6:4）。これは、「主よ、あなたの慈愛に満ちた眼差しで私を見守り、その目を私からそらさないでください。あなたの慈しみによって、私は天へと舞い上がる鳥となるからです」という意味である。 また、ヨルダン川での御降臨の際、神は人間の性質に目を留められた。父なる神は、御子の頭上に天を開いて目を留められ、御子なる神は、ガリラヤのナザレからヨルダン川へ来て、ヨハネから洗礼を受けるために目を留められた――目を留められた、と私は言う。なぜなら、アダムの罪のすべての汚れ、 私たちの性質のあらゆる弱さを、神は集めてここに持ち込み、それらを洗い流し、私たちを罪から清めるためであった――そして、洗礼を受ける神なる人へと降りてこられた聖霊なる神もまた、私たちに目を留められたのである。 私たちに目を留められた三位一体の唯一の神は、果たして人間の本性を高揚させなかったというのか。まことに高揚させたのである。なぜなら、 、この神聖な御まなざしによって、たちまち鷲や雌鶏や鳩の群れ、すなわち教師、殉教者、そして処女たちの姿が現れたからである。これを聖書に基づいて説明しよう。

ある神学者は、神の御座の前で受けた啓示の中で、まるで水晶のようなガラスの海を見ました（黙示録4:6）； この海は聖なる洗礼の神秘を表していた。なぜなら、神の御座と、神の御座に近づこうとする人間との間には、洗礼の水があり、聖書の言葉にあるように、まず洗礼の海を渡らなければ、天の御座に座しておられる神に近づくことはできないからである： *「水と御霊によって生まれなければ、だれも神の国に入ることはできない」*（ヨハネ3:19）。しかし、なぜこの、洗礼の神秘を象徴する海は、ガラスや水晶でできているのでしょうか？ 聖書の注解者たちは、それが「ガラス」であるのは、バプテスマを受ける人の魂を清める清らかさを備えているからであり、「水晶」であるのは、人の心に堅固さを与えるからだと説くことは周知の事実である。 さらに、それがガラスと水晶である理由は、ガラスや水晶を通して太陽の光が通り抜けるのと同様に、神の恵みが洗礼の秘跡を通して浸透し、それによって人に届き、その魂の聖殿を照らすからでもあります。 最後に、神の御

[757] ココシュ――ひなを温める雌鶏；雛を守る母鳥。

座の前にあり、洗礼の秘跡を象徴する海が、ガラスと水晶でできているのは、御座に就いておられる至聖なる三位一体が、あたかもガラスと水晶の鏡のように、その中に映し出され、見えるようになるためである。なぜなら、聖なる洗礼において、三位一体の御姿が現れたからである。 *「だから、行って――とイエス・キリストは言われた――すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らに洗礼を授けなさい」*（マタイ28:19）。 人間的な理屈で言えば、もし父なる神が鷲のように御座に着いておられるならば、御座の前にある海には、あたかもガラスや水晶の鏡のように、鷲の姿が映し出されるはずである。 もし神の御子が、雌鶏のように御座に着いておられるなら――御自身が福音書の中でそう名乗っておられるからです――御座の前にあるその海には、あたかも鏡の中に映るように、雌鶏の姿が現れるはずでした。 もし聖霊がその御座に鳩として座しておられるならば、その海にも鳩の姿が現れるはずであった。しかし、これらのイメージが持つ霊的な意味を解き明かそう。

私たちは、神の御座の前に見える海が、聖なる洗礼の神秘を象徴していると述べました。その洗礼において、洗礼を受ける私たちの肉体は、まるでガラスが *「肉と霊のあらゆる汚れ」から清められるように*（IIコリント7:1）、清められ、私たちの魂は、まるで水晶のように強められ、輝きを増すのです。 そして、私たちの洗礼の際、三位一体の神がこの神秘的なガラスと水晶を見つめられるとき、そこにはまことに三位一体の御姿が現れるのです。 神である父が霊的な鷲として、あるいは神である子が霊的な雌鶏として、あるいは聖霊が霊的な鳩として見つめていようとも、常にその神秘的なガラスと水晶、 すなわち、洗礼を受ける私たちの性質は、それらの霊的な鳥たちの姿をその内に映し出し、鷲の雛、あるいは雌鶏の雛、あるいは鳩の雛、すなわち、三位一体において唯一なる神――父と子と聖霊――の子となるのである。それは次のように述べられている通りである。*「御名によって私たちを信じる者には、神の子となる権能を授けてくださった」*（ヨハネ 1:12）。 至聖なる三位一体は、ヨルダン川の水で洗礼を受ける人間の本性を顧み、その中に御自身の姿を映し出し、雛鳥のように、鷲、雌鶏、鳩の霊的な翼を授けられた。すなわち、戦いの教会において、教師、殉教者、貞潔な者たちを数多く生み出されたのである。 かくして、至聖なる三位一体の各御方が、ヨルダン川の水からそれぞれの特別な霊的な雛を導き出されたことは明らかである。父なる神は、鷲のように、ヨルダン川から霊的な鷲、すなわち教会の教師たちを導き出された。聖キリロス・エルサレムスはこう述べている。「世界の始まりは水であり、福音の始まりはヨルダンである。 水から昼の光が輝き出ました。なぜなら、初めは水の上を漂っていた神の御霊が、闇の中から光が輝くよう命じたからです。ヨルダン川から、聖なる福音の光が輝き出ました。全世界の最初の教師であるキリスト――神の力であり、神の知恵――は、どこから教えを始められたのでしょうか？ ヨルダンの水からではなかったでしょうか。*「その時から」*――福音書にはこう記されています――*「イエスは宣教を始め、『悔い改めよ』と語り始めた」*（マタイ4:17）。そして直ちに、御後に多くの教師たちが現れました。彼らは、イエスが宣教のために遣わした聖なる使徒たちです。 このように、水は自然界の鳥たち（創世記 1:21）にも、霊的な鳥たちにも命を与えたのです。なぜなら、ペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネ（マタイ 4:18, 21）は、どこから使徒的・教師的な奉仕へと召されたのでしょうか。 水からではなかったでしょうか。主は漁師たちの中からご自身の使徒たちを選ばれました。サマリアの女は、なぜ自分の町で真のメシアを宣べ伝える者となったのでしょうか。ヤコブの泉の水からではなかったでしょうか（ヨハネ4:6–7）。また、目が見えるようになった盲人は、なぜキリストの奇跡的な力の証人として立ち上がったのでしょうか。 シロアムの洗礼槽の水からではなかったでしょうか（ヨハネ 9:7）？ これらすべては、聖なる洗礼を予表するものでした。その洗礼において、魂の盲目さは癒やされ、罪の汚れは洗い流され、教会の教師たちは神の知恵を受けるのです。 なぜなら、洗礼によって人に与えられる恵みによって、人は偉大な知恵を得ることができるからであり、そこから信仰の導き手たちには霊的な翼が生え、聖書の言葉にあるように、*「鷲のように翼を広げ、飛んでも疲れることはない」*（イザヤ40:31）のである。

御子なる神は、迷い出た子らを自らの翼の下に集める母鶏のように、洗礼の水の中から御自身の雛たち――聖なる殉教者たち――を導き出されます。御自身こそが、誰よりも先に、水で洗礼を受けた御自身の肉体を傷に捧げ、誰よりも先に、私たちのために十字架上で御自身の命を捧げられたのです。それは、私たちもまた、御方のために死ぬ覚悟を持つためです。　ここで使徒の言葉を思い起こそう。*「キリスト・イエスにバプテスマを受けた私たちは、その死にバプテスマを受けたのです」*（ローマ6:3）。これは、あたかも使徒がこう言ったのとほぼ同じ意味である。「キリストにバプテスマを受けた者は皆、キリストのために死ななければならない。すなわち、*『キリストの死に倣って、キリストと結び合わなければならない』*（ローマ6:5）。そして、その死の中にバプテスマを受けた者とは、まさに*「あなたのゆえに、私たちは毎日殺されている」*（詩篇43:23）と語る聖なる殉教者たち以外、誰がいるだろうか。他に誰がこれほどまでに*「その死の様相においてキリストと結びつけられた」*（ローマ6:5）と、主が*「小羊のように、屠られるために引かれていった」*（イザヤ53:7）その死に、聖なる殉教者たちほどに「*私たちを、屠られるために定められた小羊と見なしている*」（詩篇43:23）と語る者たちがいるだろうか。　それゆえ、彼らについてこう歌われているのです。「神の小羊を宣べ伝えたあなたがたは、小羊のように屠られる運命にある」[758]。聖なる49人の殉教者たちは、聖カリストラトスと共に湖に投げ込まれ、「御子の死の模様に倣った」（*彼らの記念日は9月27日*）、また聖ロミロスと共にアルメニアの荒野で同じ日に磔にされた一万人の殉教者たち（*彼らの記念日は9月6日*）も同様であった。そして、キリストのために自らの血を流したすべての聖なる受難者たちは、キリストの死にあって洗礼を受けた者として、*「キリストの死に倣う」*ものとなったのである。　彼らは、洗礼の水の中にいる時点で、すでに殉教の冠を受けるよう定められていたのである。普通の雌鶏には、餌の中から最も良質な穀粒を選び出し、それを見つけると雛たちを呼び寄せる習性がある。　すべての美徳が霊的な糧であることを真実として受け入れたならば、誰もが、愛以上に優れた穀物も、愛以上に高い美徳もないことを認めざるを得ない。*「しかし、愛はすべてにまさる」*（Iコリント13:13）――そして、まさにそのような愛こそが、愛する者のために自らの魂を捧げるものである。　*「だれも、自分の友のために自分の命を捧げるほど、大きな愛はない」*（ヨハネ15:13）。この愛という種を見つけ出し、御自身の雛たちに示されたのは、霊的な母鶏――主キリストであり、主は友のために御自身の命を捧げられた。*「あなたがたは――と主は使徒たちに言われた――わたしの友である」*（ヨハネ15:14）。この一粒に、召された雛たち――聖なる殉教者たちは集まり、愛に駆られて主のために自らの命を捧げ始めた。ある殉教の女性が主に向かってこう告げているように：「私の花婿よ、あなたを愛しています。あなたのために苦難を受け入れます」[759]。では、これらの霊的な雛たちは、どこからこの愛の一粒へと召されたのだろうか？　それは、彼らが主の死の中に浸された洗礼の水からではなかったでしょうか。聖アナスタシオス・シナイテスの言葉に耳を傾けましょう[760]。彼は、キリストの肋骨から流れ出た水が洗礼の水となった、賢明な強盗について次のように述べています：　「これらの鳥たち（すなわち、天の霊たち）のもとへ、主の肋骨から流れ出た命を与える水から、すべての鳥の中で最も優れた者、すなわち聖なる強盗が飛び去った。彼は、鳥たちの群れの中にあって、鳥たちの王であるキリストと共に空を舞い、楽園へと舞い上がったのである。」

聖霊なる神は、鳩のように、洗礼の水から御自身の雛たち――肉体も魂も清らかな鳩、すなわち処女たち――を導き出される。　なぜなら、主イエス・キリストにおいて、人間の性質が聖霊の寛容と働きによって神性との結びつきを得、ヨルダン川の水で清められるまでは、結婚は処女性よりも

[758] 追悼礼拝より。

[759] 殉教者たちのトロパリオより。

[760] 聖アナスタシオス・シナイテスは、7世紀のギリシャ・東方教会における傑出した神学者の一人である。その記念日は4月23日。

尊ばれ、神の栄光のために守られる処女の清らかさについては、ほとんど知られていなかったからである。 *「肉から生まれたものは肉である」*[761] 。当時、肉だけが子を産み、霊は実を結ばなかった。それゆえ、神はかつてこう言われた。*「わたしの霊がいつまでも人々に軽んじられることはない。彼らは肉だからである」*（創世記6:3）。 しかし、人間の性質がヨルダン川に下り、そこに聖霊が降臨したとき、突然、聖霊によって、肉的なものではなく霊的なものを志向する、至高の結婚である処女性が誕生した。これは、神学者ヨハネの言葉「*御霊から生まれたものは霊である*」（ヨハネ3:6）の通りである。 そして、霊は肉よりも尊いものであるため、主と一つの霊として結ばれる貞潔は、肉的な夫婦の結合よりも尊いものとなった。ヨルダン川においてキリストとの霊的な夫婦の結合に至った私たちの本性は、実り豊かとなり、そこから数多くの貞潔な姿を生み出した。 そして、このような霊的な結婚関係は、貞潔以外の何物も生み出すことはできない。これは預言者ゼカリヤも、「*若い娘たちにはぶどう酒がある*」（ゼカリヤ9:17）と述べたことで示している。預言者が「娘たち」と呼ぶのは、貞潔な姿のことを指している。 預言者の言葉によれば、聖霊はワインのように注がれ、処女たちを生み出す。なぜなら、聖霊がその恵みを注ぐところには、処女性が生まれずにはいられないからである。聖ヒエロニムスは、聖書（ ）の翻訳において、この箇所の意味を「処女を生み出すワイン」という言葉で見事に表現している。 実際、聖霊の恵みのそのぶどう酒は、かつて使徒たちに注がれ、彼らを深く酔わせたため、ある人々には彼らがぶどう酒に酔っているように見えたほどであり、彼らをそのような純潔な者たちへと変え、彼らの中にいかなる悪徳も残らず、鳩のように清く、傷のない者となったのである。 聖霊降臨の祝日に、教会は次のように歌います。「救いの御霊は、清らかな使徒たちの心を造り上げる」[762] 。 さて、今やそのぶどう酒はヨルダン川の水に注がれている。聖霊のぶどう酒と混ざり合った洗礼の水が、預言の言葉「処女を生むぶどう酒」に従って処女性をもたらすこと、しかも使徒が次のように語っているような処女たちをもたらすことを、誰が疑うだろうか。 *「わたしはあなたがたをただひとりの夫に婚約させ、キリストに清い処女として献げるためである」*（IIコリント11:2）と語っているような処女たちを産み出すのか。私たちの性質と神との霊的な結婚から、御霊によって処女性が生まれ、聖霊はその処女性を洗礼の水から導き出し、天の住まいへと導き入れるのである。

このように、ヨルダン川に現れた至聖三位の各御方は、バプテスマの水からそれぞれの特別な霊的な雛たちを導き出し、彼らを導き出した後、与えられた美徳の翼で、開かれた天へと飛翔するよう呼びかけられる。

第一に、父なる神は、霊的な鷲として、御自身の雛たち――すなわち霊的な鷲、つまり教師たち――を、特別な翼を持つ者として飛翔へと招き出されます。教会はこれについて次のように歌っています。「神は飛来した雛たちに与え、彼らは天へと舞い上がった」。[763] では、それらの雛たちにはどのような翼があるのでしょうか。疑いなく、万人に共通する他の美徳に加え、二つあります。それは「行い」と「言葉」です。言葉で他者に教えることを、自ら行いによって実践する者こそが、真の教会の教師であり、高く舞い上がる鷲なのです。 そして、霊的な鷲の翼がまさに「言葉」と「行い」であることを、預言者エゼキエルの書には明確に示されている。彼はかつて、それぞれ四つの翼を持つ四つの生き物が神の戦車を引いているのを見た。それらの生き物は、その翼で音を立てていた。 *「彼らが進むとき、私は*――と預言者は言う――*彼らの翼の音を聞いた。それはまるで多くの水の音のように、全能者の声*（あるいは、シムマハの訳によれば、力強い神の雷鳴のように）、*軍営の騒ぎのような激しい音であった」*（エゼキエル1:24）。 まことに、それは偉大な声であり、並外れた賛歌であった！ とはいえ、驚くべきなのは声そのものというより、むしろその声がどこから発せられていたかという点である。その声は喉頭から発せられたものではなく、言葉は舌から出たもので

[761] （ヨハネ3:6）。

[762] ペンテコステのカノン、第5歌より。

[763] 教会礼拝より。

もなく、賛歌は口から出たものではなく、それらの生き物の翼から発せられていたのだ。　預言者はこう言っている。「わたしは彼らの翼の音を聞いた」。彼らは歌っていたが、喉で歌ったのではなく、神を賛美していたが、雄弁で饒舌な口や舌でそうしたのではなく、飛んでいたその翼そのものであった。「わたしは彼らの翼の音を聞いた」。

ここにはどのような秘密が隠されているのだろうか?　その秘密とはこうである。神の戦車を引く動物たちは、教会の教師たちを象徴している。彼らは、全宇宙に神の御名を広めるために選ばれた器であり、その教えによって、キリストの教会――いわば神の戦車――を、天へと続く正しい道へと導く。その戦車の中には、何万もの信じる魂が乗っているのだ。　また、声を発し、歌うそれらの生き物の翼は、教師の行いと言葉を象徴している。飛ぶことを可能にする翼は、教会の教師自身がまず徳の模範を示さなければならないこと、すなわち、万人の面前で、神に喜ばれる生活を送り、あたかも鳥のように天へと舞い上がらなければならないことを示している。　また、それらの動物の翼から発せられる声は、教えの言葉を象徴している。教師は、その飛翔の力に見合った声を上げなければならない。すなわち、信徒たちを教えつつ、同時に自らも教える通りに生きなければならないのである。なぜなら、神に喜ばれる生活の翼が見えない限り、教師の声は何の益ももたらさないからである。　ヨルダン川の上で開かれた天へとまっすぐに舞い上がるのは、言葉という翼だけでなく、もう一つの翼――徳ある生活――に乗って飛ぶ教師、すなわち言葉と行いの両方で同時に教える教師だけである。　巧妙に紡がれた言葉や、甘い口調、あるいは響き渡る声だけで、教師も生徒も天へと昇ることは、善行という翼ほどには容易ではない。

御子なる神は、まるで霊的な母鶏のように、その雛たち――聖なる殉教者たち――に飛び立つよう呼びかけておられます。　そして、他の一般的な美徳とは別に、彼らにのみ備わっている美徳の翼とは、次の二つである。すなわち、信仰と告白である。この殉教者の翼について、使徒は次のように述べている。*「なぜなら、心で信じて義と認められ、口で告白して救われるからである」*（ローマ10:10）。　心の中の揺るぎない信仰が一方の翼であり、王や拷問者たちの前で、口をもってキリストの御名を大胆に告白することがもう一方の翼である。最初の　、天国へと飛び込んだ霊的な鳥、すなわち十字架上でキリストと共に苦難を受けた賢明な強盗は、まさにこの信仰と告白という翼に乗って飛び立ったのである。　なぜなら、私たちのために自ら進んで苦難を受けられた主が、すべての人に見捨てられ、主と共に死ぬと誓ったペトロでさえ主を否んだその時、一人の強盗だけが心で主を信じ、口で告白し、主を王であり主であると称して、*「主よ、　――と彼は言った――あなたが御国に来られる時、私を思い出してください」*。キリストの弟子たち全員から信仰が失われていた（マタイ26:56）その時、この強盗の信仰はなんと偉大であったことか!　すべての信者たちがキリストについて惑わされていた時、彼一人だけは惑わされることなく、信仰をもって主に祈った。それゆえ、彼は主から次のような言葉を聞いたのである：　*「まことに、あなたに告げる。あなたは今日、わたしと共に楽園にいるであろう」*（ルカ23:42–48）。聖アンブロシウスはこれについて次のように述べている。「楽園がキリストを受け入れたその瞬間、楽園は強盗も受け入れたが、この栄光を強盗に授けたのは、ただ一つの信仰であった」。　かくして、この鳥、すなわちキリストと共に十字架に架けられた殉教者が、他のいかなる翼によってもなく、ただ口をもって告白した信仰によってのみ、楽園へと舞い上がったことは明らかである。「この栄光は」と聖アンブロシウスは言う、「強盗に与えられたのは、ただ信仰によるものだった」。

最後に、鳩の姿で現れた聖霊なる神は、御自身の雛たち――すなわち処女たち――にも飛ぶよう呼びかけられる。なぜなら、人を翼のある鳥とし、最も高い領域へと入り込めるようにすることは、聖霊の特性だからである。　聖ダマスキノスはこう詠んでいる。「聖霊よ、あらゆる救いの源よ。もし御霊がふさわしい者に息を吹き込まれれば、その者はすぐに地上のものから離れ、舞い上がり、高みへと昇り、山を築き上げる。御霊は、霊的な鳩である聖なる処女たちに対しても、山を築き上げ

、彼らに飛ぶよう呼びかけられる。」[764] 。そして、それらの鳩が持つ美徳の特別な翼とは、肉と霊の死である。また、肉の死が、人を天へと昇らせる翼の一つであることについては、聖アンブロシウス・ミラネンシスが、福音書の言葉*「あなたがたは多くの鳥よりも優れている」*（マタイ10:31）という言葉を解説する際、次のように述べている。「神の律法を履行する志を持ち、罪から脱した肉体は、その清らかな感性によって魂の本性に似せられ、霊的な翼に乗って天へと昇っていく」。 ここで教会の聖なる師は、魂の本性に似るということについて語っていますが、その背景には「肉の死」が念頭に置かれています。すなわち、悪が善に従い、肉が霊に服従するとき、つまり人が罪から解放され、感覚を清める際に、肉の真の本性があたかも魂の本性へと移行するかのような状態です。これは「肉の死」なしには不可能なことです。 自らの肉体を死なせたとき、人は鳥のように軽やかで羽ばたくようになり、霊的な翼に乗って天へと舞い上がるのである。 かくして、天へと舞い上がる貞潔のための肉体の死は、最初の翼である。なぜなら、清さを守ろうとする者には、何よりもまず自らの肉体を死なせることがふさわしいからであり、聖霊は預言者ダビデの言葉を用いて、キリストに次のように語りかけることで、このことを示している。 *「あなたの衣はすべて、スミルナ、アルロイ、カシアのようだ」*（詩編44:9）。ここで、聖書の注解者たちは、スミルナを情欲の死、アルロイを謙遜、カシアを信仰と解釈している[765] 。 これらの芳香は、キリストの衣、すなわち御自身の聖なる教会、そして、キリストが肉体をまとい、清く聖く生きる者たちの内に宿ることで、まるで衣のように身にまとわれた信者たちから発せられているのである。 さて、聖霊はあたかもこう語っているかのようです。「情欲の死、謙遜、そして信仰は、貴重な香りのように、あなたの教会から、また、これらの美徳を心の中に、あたかも香りを保存する器のように保っている清く純潔な人々から、あなたの御父の御前で芳しく漂っているのです。」 しかし、問いたい。聖霊は、キリストの教会を様々な美徳によって称賛する中で、なぜとりわけ信者たちの情欲の死を称え、特に「謙遜」を第一の位置に据えるのだろうか。 まことに、それは、不法な欲望の抑制、肉欲の快楽の断絶、そして肉の死の後に、他のすべての美徳が、あたかもその指導者の後を追うかのように続くことを示すためである。したがって、聖霊の霊的な雛たち、すなわち、天を自らの巣としたいと願う処女たちは、何よりもまずこの翼、すなわち肉の死を持つ必要がある。

彼らの第二の翼は、霊の死である。これは、行いにおいて罪を犯さないだけでなく、霊においてそれを望まず、心の中でそれを思い巡らさないことにある。肉体は清くても、同時に様々な不適切な欲望を抱き、不浄なことを思うことに快楽を見出すことがある。 使徒が*「肉と霊のあらゆる汚れから自分を清めよう」*（IIコリント7:1）と勧めるのは、決して無駄なことではない。これらの言葉は、 肉と霊の汚れという二重の汚れが存在することをはっきりと証ししている。 なぜなら、肉体は行いにおいて、霊は思いや心の向きにおいて、その姿を現すことに慣れているからである。ただ肉体のみを汚れのないまま保ち、思いや欲望によって汚されている魂を清めようと努めないような貞潔は、自らの清さを誇り、天の栄光に到達することを望んでも無駄である。 なぜなら、鳥が片方の翼だけでは飛べないのと同様に、肉体的な清さのみを持ち、霊的な清さを持たない処女は、天の御殿に入ることはできないからである。しかし、その両方の清さを大切に守る者は、鳩のように、「鳩の姿」で現れた方の後を追って飛んでいくであろう。

さて、私たちは、世界の刷新の際、ヨルダン川の水の上に現れた三位一体の唯一の神が、洗礼の水から教会の霊的な雛たち――教師、殉教者、貞潔な者たち――を導き出し、彼らを「開かれた天」へと招かれたことを聞いた。 それゆえ、教師たち、殉教者たち、処女たちと同様に、私たち罪人

---

[764] 復活祭のアンティフォン（第6声）。

[765] スミルナ――アラビアやエチオピアに自生するミルラの木から採れる芳香のある樹脂。この樹脂は、聖なる塗油、芳香や燻香、身体の塗布やマッサージ、とりわけ死者の遺体の防腐処理や塗油に用いられた。 スタクティ――これもまた、病気の治療に用いられる芳香性の軟膏である。カシア――木の枝を覆う、薄くて芳香のある樹皮である。これは、芳香のある軟膏や香料の調合、また治療にも用いられた。

からも、ヨルダン川に現れた父と子と聖霊なる神に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と賛美と礼拝と感謝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

主よ、ヨルダン川で洗礼を受けられたあなたに、三位一体への礼拝が現れました。御父の声が、あなたを「愛する御子」と呼んで証しし、鳩の姿をした御霊が、御言葉の確証を告げ知らせたからです。現れ給え、キリストなる神よ、そして世を照らし給え。あなたに栄光あれ。

コンダク、第4調：

主よ、あなたは今日、全宇宙に現れ、あなたを賛美する者たちの心に、あなたの光が輝きました。あなたは来られ、現れました、近づきがたい光よ。

1月20日

1月7日（旧暦）

主の先駆者にして洗礼者、聖ヨハネの祝日。

記念日1月7日

主の顕現の祝日の翌日、教会は創世の初めから、尊く栄光ある預言者、主の先駆者にして洗礼者ヨハネの祝祭を執り行っています。主の頭に手を置いて、神の洗礼の秘跡に奉仕した方を、特別な祝祭をもって称えることは、まさにふさわしいことでした。　かくして、主の洗礼の祝日の直後、洗礼者ヨハネは「ソボル」において賛美歌をもって崇められ、称えられます。「ソボル」という言葉自体は、今まさに称えられている偉大なる先駆者であり洗礼者であるヨハネを讃え、その栄光を称えるための礼拝を行うために、人々が教会に集まることを意味しています。　このような共同礼拝は、世界中のすべての教会で行われてきたし、今も行われているが、特に厳粛に行われるのは、洗礼者ヨハネの名に捧げられた教会である。かつてヨルダン川畔の教会――彼がキリストに洗礼を授けた場所――や、セバスティア[766] ――ヘロデ王によって殺害された後、彼が埋葬された場所[767] ―― また、聖福音記者ルカ（　）によって当初、彼の右手が持ち込まれたアンティオキアや、後にその聖なる右手

766　セバスティア――サマリアの主要都市である。この都市は、アウグストゥスからヘロデ大王に贈られた後、ヘロデ大王が都市を完全に再建・美化を行い、アウグストゥスへの感謝の意を込めて「セバスティ」または「セバスティア」（「アウグストゥスの都市」を意味する）と名付けたことから、この名称が付けられた。

767　言うまでもなく、ヘロデ・アンティパスは、ヘロデ大王の息子であり、テトラルヒ（すなわち、パレスチナの4分の1を統治する支配者）の称号をもって、ガリラヤとペリアを統治していた。　彼には、アラビアの王アレファの娘である正妻がいたが、彼女を拒絶し、実弟フィリッポスの妻であるヘロディアを奪い取った。　主の先駆者聖ヨハネは、この不法な結婚についてヘロデを非難した。そのため、ヘロデは彼を、死海近く、アラビアとの国境にあるマケロン要塞に投獄した。　そこで、悪意に満ちたヘロディアは、宴会の最中に訪れた好機を利用し、娘のサロメを通じてヘロデに洗礼者ヨハネの首を求め、不法な王は宴会の真っ最中に洗礼者の首を斬り落とすよう命じ、その命令は実行された。　その首はヘロディアに運ばれ、彼女は悪意に満ちた喜びのあまり、洗礼者ヨハネの舌を刺し貫いた。一方、遺体は要塞の外に投げ捨てられ、そこで洗礼者ヨハネの弟子たちによって発見された。弟子たちはその遺体を尊厳をもってセバスティアへ運び、そこで埋葬した。

がアンティオキアから移されたコンスタンティノープルにおいても同様であり、　そこでは特に、洗礼者ヨハネの祝祭が厳かに執り行われた。というのも、その右手は聖なる神現祭の前夜、すなわち水の聖別が行われるまさにその日に移されたからである。まるでその時、洗礼者ヨハネご自身が目に見えない形で水の聖別のために来られたかのようであり、王たちや民衆全体に大きな喜びがもたらされた。　それゆえ、主の顕現の翌日には、大いなる祝典をもって洗礼者ヨハネの祝祭が執り行われ、その後も引き続き祝われてきたのである。　そして私たちも、霊的な喜びをもって、この偉大なる先駆者であり洗礼者ヨハネの記念祭を執り行い、彼が私たちのために主キリストに、天にある永遠の、人の手によらず造られた聖殿で祝宴を催す教会に私たちを集めてくださるよう取り成してくださるよう祈ります。そこでは、私たちは祝う者たちの声を聞き、神の永遠の顕現を称える祝宴を執り行うことができるのです。　そこで私たちは、御自身の聖徒たちに御自身を明らかに示される神の御顔を、キリストと共に仰ぎ見て満たされ、すべての天の御使いたちと共に、父と子と聖霊を永遠に賛美することができるのです。アーメン！

主を洗礼した聖ヨハネ・洗礼者（前駆者）の右手の伝承

記念日：1月7日

不法な王ヘロデによって、主の洗礼者である聖ヨハネ・バプティスタの首が斬り落とされた後、その尊い遺体は弟子たちによって、サマリアの有名な都市セバスティアにある預言者エリシャの墓の近くに埋葬された。　その後、聖福音記者ルカがキリストを宣教し、多くの国や都市を巡ってセバスティアにやって来た際、ここから故郷のアンティオキアへ向かうことを考えていたが、この使徒は、聖なる先駆者である洗礼者ヨハネの遺体を持ち帰り、アンティオキアへ運ぼうと考えた。　その遺体は朽ちることなく完全な状態を保っていたが、セバスティアの住民たちは洗礼者ヨハネの聖遺物を深く崇め、大切に保管していたため、持ち出すことはできなかった。　そのため、聖福音記者ルカは、聖ヨハネの遺体から、私たちの主イエス・キリストに洗礼を授けた右の手だけを切り離すことができた。彼はその右手を、ある種の貴重な宝物として、自身の故郷であるアンティオキアへと持ち帰った。それは、この街で受けた教育に対する感謝の印として、アンティオキアに捧げるためであった。それ以来、洗礼者ヨハネの聖なる右手は、そこから数多くの奇跡が起こったため、アンティオキアのキリスト教徒たちによって深い敬虔をもって守られてきた。長い時が経ち、ユリアヌス・アポステート[768] が王位に就いた。彼は公然とキリストを否定し、偶像を崇拝した。 彼は、かつてキリスト教徒を迫害した異教の皇帝たちと同様に、神の教会を迫害し始め、生きているキリスト教徒を追放し殺害しただけでなく、死者にさえも猛烈な怒りを向けた。　聖なる信仰のために殉教した聖人たちの遺骸を棺から引きずり出して焼き払い、神の聖堂やあらゆる聖なる場所を灰と化した。　ある時、彼はアンティオキアにも現れた。その目的の一つは、その忌まわしい神アポロン（[769]　）に卑劣な生贄を捧げること――その偶像は、ダフネと呼ばれる町の近郊に置かれていた――であり、もう一つは、キリスト教徒を迫害し、見つけ出せた聖所を焼き払うことだった。　アンティオキアのキリスト教徒たち

768　ユリアヌス・アポステート（背教者）は、コンスタンティヌス大帝の甥であるコンスタンティウスであり、同帝の共同統治者としてローマ帝国の西部諸州を統治していた。361年に皇帝に即位すると、彼はキリスト教の信仰から背き、異教の復活を人生の目標としたため、「背教者」と呼ばれるようになった。 363年まで在位したが、その年、ペルシアとの戦争で戦死した。

769　アポロンは、ギリシャ・ローマの異教の神々の中で最も崇敬された神の一人である。太陽の神、知性の啓蒙、詩と音楽、さらには社会の繁栄と秩序の神として崇められていた。さらに、彼は未来を予言する神であり、医療の神でもあった。

は、彼の到着を聞くと、迫害者がその聖なる手を冒涜したり焼き払ったりしないよう、ゴニアと呼ばれる市内の塔の一つに洗礼者ヨハネの聖なる手を急いで隠した。　ユリアヌスはアンティオキアに現れ、そこでキリスト教徒に多くの害を加えた後、洗礼者ヨハネの右手を探し始めた。しかし、その捜索が徒労に終わったため、パレスチナの都市セバスティアに対し、頭部と右手を除いてそこにあった洗礼者ヨハネの遺体全体、　――ならびに洗礼者ヨハネの墓と聖堂を破壊し、焼き払うよう命じ、歴史家ニキフォロスとケドリンの記述[770] によると、その命令は実行された。 しかし、至福のシメオン・メタフラスト[771]　は、焼かれたのは洗礼者ヨハネの遺体ではなく、他の誰かの遺体であったと伝えている。というのも、エルサレム総主教は、ユリアヌスの命令を事前に知ると、密かに棺から洗礼者ヨハネの聖遺骨を取り出し、保存のためにアレクサンドリアへ送ったからである；　その代わりに、ある死者の遺骨を棺に納め、メタフラストの記述によれば、洗礼者ヨハネの聖遺物の代わりに、その遺骨が棺や教会とともに焼かれたのである。

その不義な王が滅び、真の信仰が再び世界に輝きを取り戻すと、聖ヨハネの御手は、まるで覆いの下から灯台が取り出されるかのように、隠されていた塔から取り出された。キリスト教徒たちは再びその御手に崇敬を捧げるようになり、以前と同様に、そこから奇跡が起こるようになった。これらの奇跡のうち、次のことを述べておこう。

アンティオキアの領内には、巨大で恐ろしい大蛇が棲みついており、異教徒たちはそれを神として崇め、毎年、神への捧げ物として生贄を捧げていた。　この生贄として、通常、特別に選ばれた清らかな処女が指名され、その処女は、蛇が住む洞窟の近くに設けられた観覧席からこの光景を見守る民衆全員の目の前で、蛇に食われることになっていた。　蛇は洞窟から這い出し、その恐ろしい姿、ヒスヒスという鳴き声、大きく開いた口で人々を恐怖に陥れた。そして、差し出された生贄を捕らえ、唇で噛み砕きながら食い尽くした。このような生贄として、アンティオキアの市民の娘たちがくじ引きによって選ばれた。 ある年、このくじはアンティオキアのキリスト教徒の娘に当たった。 そのキリスト教徒は、涙ながらにキリスト神と聖ヨハネ・バプティストに、娘をこの残酷な死から救ってくださるよう祈り求めた。その忌まわしい祭りの当日が迫ると、父親は叫び声を上げ、泣きながら神に懇願し、聖ヨハネ・バプティストの助けを求めた。　その時、彼は洗礼者ヨハネの聖堂――そこには洗礼者の右手が安置されていた――へと向かい、聖堂の管理人に、聖堂の扉を開けてもらい、その尊く聖なる右手に礼拝を捧げさせてほしいと熱心に懇願した。　しかし、彼には秘密の目的があり、その目的を達成するために、胸元に数枚の金貨を隠していた。彼がその聖なる御手が納められている聖櫃の前で礼拝を始めると、まるで偶然のように胸元から金貨をこぼしてしまった。　金に目がない鍵番は、急いで金貨を拾い集めようとしたが、そのまさにその瞬間、そのキリスト教徒は洗礼者ヨハネの聖なる手を口づけし、こっそりと小指の関節を一つ歯で噛み切り、それを隠し、祈りを捧げた後、その指の関節を持ち去ってその場を去った。　その娘が不当に死刑に処されることになっていた日が訪れ、真夜中頃、人々が処刑場に集まったとき、父親もまた、娘を蛇の餌として連れて行きながら、心の中で救いを求めて神に祈りを捧げてその場へ現れた。　すると、恐ろしい大蛇が洞窟から這い出し、ヒスヒスと音を立て、大きく口を開けて、そのために用意された生贄――少女――へと這い寄り、彼女を食い尽くそうとした。しかし、父は娘から一歩も離れず、全知の救い主キリスト・神とその洗礼者ヨハネに助けを求めた。　蛇がすぐそばまで這い寄り、さらに大きく口を開けたとき、少女の父は洗礼者ヨハネの聖なる指を蛇の喉の奥深くに突き刺し、蛇は即座に息絶えた。　こうして乙女は凄惨な死から救われ、彼女の父は喜びの涙を流しながら、大きな声で救い主なる神とその聖なる

---

[770]　ニキフォロス・カリスト――教会史家であり、コンスタンティノープルのソフィア修道院の修道士。1350年頃に没した。ケドリン――同じく著名な教会史家で、11世紀末から12世紀初頭にかけて活躍した。

[771] シメオン・メタフラスト――10世紀にコンスタンティノープルに生きた、著名な聖人伝の編纂者（940年頃に没）。

洗礼者に感謝を捧げ、主なる神がどれほど偉大な奇跡を成し遂げられたかを民衆全員に説明した。その光景を目撃していた民衆は、蛇が死んでいるのに対し、乙女が生き延びて父と共に神を賛美しているのを見て、最初はこれほど輝かしい奇跡に大変驚き、恐怖を覚えたが、やがて喜びに満ち、口を揃えて唯一の真の神、　天に御住まいであり、謙遜な者たちを見守ってくださる神を、口を揃えて賛美し始めた。こうしてアンティオキアでは盛大な祝賀と祝宴が始まった。多くの異教徒がキリストを神として信じ、キリスト教徒の仲間に加わったからである。　その偉大な奇跡が起こったまさにその場所に、聖ヨハネ・バプティスタの名を冠した、壮大で美しい教会が建てられた。　伝えられるところによれば、この教会では、主の尊き十字架の挙揚の祝日に、司教が洗礼者ヨハネの尊き右手を掲げると、その手は時にまっすぐに伸び、時に曲がることがあった。前者は小麦やあらゆる果物、野菜の豊作を予兆し、後者は不作と飢饉の前兆とされた。

神の御許しにより、アラブ人がアンティオキアとその全領土を支配するようになると、この偉大な宝物――聖ヨハネ・バプティスタの尊い御手――もまた、いわば捕虜となったのである。　敬虔なキリスト教の王たちは、先駆者の尊い御手をアラブ人の支配下から取り戻し、自らの都に安置しようと多大な努力を払ったが、長い間その目的を達成できず、金銭やその他のいかなる手段を用いても何も成し遂げることができなかった。　しかし、コンスタンティヌスとロマンという紫血の兄弟の治世[772]、この地上のあらゆる宝物よりも貴重な贈り物は、次のようにして手に入れられた。

アンティオキアのある助祭、ヨブという名の者に、神ご自身が啓示を与え、洗礼者ヨハネの聖なる御手をアラブの支配下から、キリストの敬虔な信仰が輝いている国へと運び出すよう命じられたのである。　その聖なる御手は、聖使徒ペトロに捧げられたアンティオキアの最も美しい教会に安置されていたため、ヨブはこの教会で奉仕するようになり、自分が企てたことをより円滑に遂行できるよう、教会の聖器保管係と親交を深めた。　彼は何度も聖器保管係を説得して自分の計画に協力させようとしたが、相手はどうしても承諾しようとしなかった。そこでヨブはある日、盛大な宴会を開き、聖器保管係を招いた。　ヨブは彼を熱心にもてなしたが、その人物が大量のワインを飲んでその場で眠り込んでしまうと、ヨブは密かに教会へ行き、聖櫃を開けて洗礼者ヨハネの手を取り出し、自分のところに隠した。聖具管理人は朝目覚めたが、その消失に気づかなかった。　一方、ヨブは一刻の猶予もなく、聖なる御手を携えてアンティオキアを去り、キリスト教王国の境界へと急いだ。アンティオキアのキリスト教徒や野蛮な政府に、聖なる御手の奪取が知られ、追手が差し向けられることを恐れたからである。　しかし、神の御加護のもと、聖洗者ヨハネの祈りによって守られ、彼はまもなくキリスト教の領土にたどり着いた。ハルキドン[773]　に到着すると、彼は自分が持ち歩いていたものを明かし、アンティオキアから持ち帰ったこの宝物をキリスト教徒たちに見せた。　このことは直ちに敬虔な王たちに伝えられ、彼らは期待をはるかに超えるこの知らせを聞いて、言葉に尽くせない喜びに満たされ、直ちにハルキドンへ王室の船を派遣した。　この船には、至聖なる総主教と、最も高名な元老院議員数名が乗船しており、彼らは洗礼者ヨハネの御手を受け取り、敬意を込めて首都へと運ぶことになっていた。　ハルキドンから、総主教自らが手にした聖なる御手を載せた船が帰還した際、王たちと民衆全員が岸辺に繰り出し、あたかも天から目に見えぬ形で降りてきた聖洗者ヨハネご自身を出迎えるかのように、詩篇や賛美歌、蝋燭の灯火、そして香を焚いて敬意を表した。　敬虔な心で聖なる御手に接吻した後、王たちはそれを宮殿の教会に安置した[774]　。この聖ヨハネ・バプティ

---

[772] ビザンツ皇帝コンスタンティノス8世ポルフィロゲネトスは912年から959年まで在位し、その弟ロマンは919年から944年まで在位した。したがって、919年から944年にかけて、兄弟は共同で統治を行った。

[773] ハルキドンは、ビフィニア北西部、ボスポラス海峡の岸辺、コンスタンティノープルの対岸に位置する都市である。

[774]　この聖なる洗礼者ヨハネの右手は、14世紀から15世紀初頭にかけて、コンスタンティノープルを訪れたロシアの巡礼者たちによって拝観された。この聖遺物は1484年まで同地に安置されていたが、その年、ロードス騎士団に引き渡された。騎士団は地中海の島マルタに拠点を確立すると、受け継いだこの聖遺物を同地へ移した。　1799年、この聖遺物はマル

スタの御手の移送は、聖なる神現祭の前夜、水の聖別式に先立って行われた。　そしてこの祝祭が執り行われ、その直後に、預言者たちの中で最も高き聖ヨハネ・バプティストを称え、また三位一体の神ご自身を讃えるために、大いなる喜びをもって洗礼者ヨハネの祝日が祝われた。神は万民から永遠に賛美され、崇められている。アーメン。

トロパリオ、第2調：

義人の記念を賛美をもって称え、主の証しはあなたにふさわしい、先駆者よ。あなたはまことに預言者たちの中で最も尊い者であることを示し、また、宣べ伝えられた御方を水の流れの中で洗礼を授けるにふさわしい者とされたからである。　それゆえ、真理のために苦難を受けながらも喜びつつ、あなたは、ハデスにいらっしゃる神が肉となって現れ、世の罪を取り除き、私たちに偉大な憐れみを与えてくださることを宣べ伝えました。

コンダク、第6調：

ヨルダン川は、御身の受肉による到来を恐れ、恐怖のあまり後退した。預言者としての務めを果たすヨハネは、戦慄して身を隠した。　天使の軍勢は、水の流れの中で肉体を帯びて洗礼を受けられる御姿を目にして戦慄し、闇の中にいたすべての者は、現れ、万物を照らされた御方を賛美して、光に包まれた。

1月21日

1月8日（旧暦）

聖殉教者ユリアヌスとヴァシリスサ、および彼らと共にいた者たちの生涯と受難

記念日1月8日

聖ユリアヌスは、エジプトの都市アンティノエ[775]　で、高貴かつ裕福な両親の間に生まれた。若き頃から処女の清らかさを愛し、生涯の最後までそれを守り抜きたいと願った。この清らかさを他のあらゆる美徳の基盤とし、神を畏れつつ、熱心に聖書を読み、研究に励んだ。　ユリアヌスはギリシャの知恵とキリスト教の教えを学び、世俗の哲学にも親しむ一方で、聖書全体を深く研究した。18歳になったとき、彼は両親にとって唯一の息子であり、家系を継がせたいと願っていたため、両親は彼に結婚を迫り始めた。　しかしユリアヌスは、あらゆる手段を尽くして結婚を拒んだ。両親や親族が、結婚を迫る助言や懇願で彼をひどく煩わせ始めたとき、貞潔な若者は、熟考のために一週間の猶予を求めた。　彼はその一週間を、断食と祈りと涙の中で過ごし、昼夜を問わず、自分、ユリアヌス

タの騎士団によってガッチナへ運ばれ、パヴェル1世皇帝への献上物となった。その後、サンクトペテルブルクの冬宮殿内にある「御手のなき救世主の御像」教会へ移された。この出来事を記念して、10月12日が祝日と定められた。

[775]　アンティノイアは、中エジプトと上エジプトの境界に位置する、かなり重要な都市であった。現在、この都市には廃墟しか残っていない。　これらの遺跡の周囲には、岩に彫り込まれた数多くの洞窟がある。その中の多くの壁には十字架の印が刻まれており、ここに教会や修道院が存在していたことを物語っている。修道院の個室が設けられていた地下の回廊は、遠くまで続いている。

が神に誓った貞潔を、神が守ってくださるよう懇願し続けた。　七日目の夜、断食と祈りで肉体が疲れ果てたユリアンは、横になって眠りについた。すると夢の中で主が現れ、彼を慰め、励まし、こう言われた。

「両親の意志と助言に従うことを恐れるな。なぜなら、君が娶る妻は、君の貞操を損なうことも、君をわたしから引き離すこともないからだ。　そればかりか、――お前のために、彼女もまたその貞操を守り抜くであろう。そしてその後、お前も彼女も、処女・童貞として、わたしが天の御国に迎え入れる。なぜなら、お二人の模範に従って、多くの若者たちが処女・童貞となり、天の御国の相続人となるからである。　わたしは常にあなたと共にあり、あなたの中に宿り、あなたのあらゆる肉欲と肉体の戦いに打ち勝つ。そして、あなたと結婚するその乙女を、わたしはわたしの望むような者とする。　また、彼女もまた、あなたの善意に従うことを望むようにし、あなたたちは二人とも、あなたたちのために用意された宮殿で、天使たちの姿と、自然によって分けられながらも、わたしへの信仰によって結ばれた、数えきれないほどの男女の処女たちと共に、わたしを見るようになる。そして、あなたは彼らにとって模範となるのだ。

そう言うと、主はユリアヌスに触れ、こう言われた。

「勇気を出しなさい。そして、あなたの心を強くしなさい！」

このように神聖な御姿によって力づけられ、慰められた高潔な若者は、眠りから飛び起き、こう言った。

「主なる神よ、私たちの心を試される方よ、この世の甘美さと慰めを私から遠く追い払い、私の清さを守り、私の助け手となってくださると約束してくださったことに感謝します。　私は、あなたが*「人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*（Iコリント2:9）もの、すなわち、あなたを愛する者たちのために備えてくださったものを、私に与えてくださることを固く信じています。　そして、あなたが私にあなたの道を歩むことを許してくださるのですから、あなたご自身が、私にとって、また、　の清さを愛するすべての人々にとって、善き道となってくださるよう、あなたに祈ります。　主よ、あなたはご存じです。私が生まれたその日から、あなたが私を召してくださったこの時に至るまで、私はあなた以外には何も愛さず、何も望んでこなかったことを。それゆえ、私の口から出た誓いを確かなものとし、それを成就させてください。

寝室から出てきた若者は、両親に対し、彼らの願いを叶えることに同意し、結婚を拒まないことを告げました。両親は喜びに満ち、直ちに、身分の高さや富の点で息子にふさわしい娘を選び始めました。　ついに、彼らはヴァシリーサという娘を見つけた。彼女は両親の唯一の娘であり、その美しさと徳の高さで際立っていた。そして、彼女はユリアヌスと結婚式を挙げた。　結婚の祝宴の後、新郎新婦が寝室へと案内され、扉が閉まると、花嫁は、ユリやバラ、その他の香りのよい花々が咲く庭園のような、並外れた芳香を感じた。彼女は驚きながら新郎に言った。

「これはどういうことでしょうか、ご主人様？今は冬なのに、まるで春のように香りのよい花々の香りが漂ってきて、その香りにすっかり魅了されてしまい、他のことは何も考えられなくなってしまいました。」

すると、彼女の婚約者である至福のユリアヌスはこう言った。

「あなたが感じているその香りは、並大抵のものではなく、清らかさを愛し、処女性を汚れなく保つ者たちに永遠の命を与えるキリストから発せられているのです。　さあ、もしあなたが私と共にキリストの戒めを守り、キリストに喜ばれたいと願うなら、私たちは全霊を尽くしてキリストを愛し、キリストのために清らかな処女性を守り続けましょう。私たちは現世においてキリストの選ばれた器となり、来世でキリストと共に王座に就き、決して互いに離れることはありません。

この言葉に、至福の花嫁ヴァシリッサはこう答えました。

「救い以上に必要なものなどあるでしょうか。処女性を守り抜くことで、私たちは永遠の命と共にその救いを得るのです。私はあなたの言葉を信じ、あなたと共に、最期まで処女性を守り続け、私の主であるキリストからの報いを受けたいと願います。」

彼女がそう言うと、聖ユリアンは神に礼拝を捧げるために地面にひれ伏し、地面に身を横たえて神に向かって叫びました：

「主よ、あなたが私たちの中で始められた御業を、どうか成し遂げてください！」

一方、ヴァシリッサという乙女は、婚約者が祈っているのを見て、自らも祈り始めた。すると突然、婚礼の寝室の土台が揺れ動き、その部屋には並外れた光が輝き、寝室で灯されていたろうそくさえも、天の光の前では色あせてしまった。　そして、偉大なる神聖な幻が現れた。一方には、栄光の王キリストが数えきれないほどの処女たちと共に、もう一方には、私たちの至聖なる御母マリアが乙女たちの姿と共に現れ、　そして両側から、人間の耳がまだ聞いたことのない、言い表せないほどの甘美さに満ちた天の賛美歌が聞こえてきた。

その時、金色の帯を締めた二人の輝かしい男がユリアヌスとヴァシリスに近づき、二人を抱き上げ、彼らの寝台の上に置かれた、大きく美しい一冊の本を見せた。　また、寝台の周りには、金色の杯を手にした四人の威厳があり、端正な老人が立っており、香りで満たされたそれらの杯からは、部屋いっぱいに広がる不思議な芳香が漂っていた。すると、老人の一人が言った。

「これらの杯は、あなた方の完全さを象徴しています。なぜなら、あなた方はこの世の一時的な快楽に打ち勝ち、人間の知性ではまだ理解し得ない永遠の命へと向かったことで、至福を得ているからです。さあ、ユリアヌスよ、この『命の書』に書かれていることを読みなさい！」

すると、ユリアヌスはその書物を見下ろし、そこに自分と妻の名前が記されているのを見た。そこには金色の文字で、次のように書かれていた。

――わたしへの愛のためにこの世を捨てたユリアンは、*「女たちと交わって自分を汚さなかった者たち」*（黙示録 14:4）の仲間に加えられるであろう。また、ヴァシリッサは、その清らかさと汚れなき処女性ゆえに、わたしの至聖なる母である真の処女マリアに付き従う乙女たちの列に加えられるであろう！

ユリアンがこれを読み終えると、本は閉じられ、両側に立っていた光り輝く男たちと乙女たちは、声を揃えて叫んだ。

「アーメン！」

すると、長老は再びユリアヌスとヴァシリスサに向き直り、こう言った。

「あなたがたが見ているこの書物には、清く、節制を重んじ、言葉に真実があり、慈悲深く、謙虚で、柔和であり、偽りのない愛を持ち、あらゆる厳しい試練や悲しみ、災難に耐え抜いた人々、――キリストを深く愛し、その愛ゆえに父、　、母、妻、子供、領地、富を捨て、さらにキリストのために自らの命さえも捧げることを恐れなかった人々。今や、あなた方も彼らの列に加わったのです。

この尊い長老の言葉の後、神聖な幻は消え去り、至福に満ちた夫婦は、並外れた喜びに満たされ、その夜の残りの時間を詩篇を詠みながら過ごした。　日が明けると、彼らの両親や親族、そして結婚式に招かれた他の賓客たちは、新郎新婦の肉的な結びつきを祝ってまだ宴を繰り広げており、彼らの驚くべき霊的な結びつきについては、微塵も気づいていなかった。　こうしてユリアンとヴァシリッサは、完全な清らかさと貞節のうちに共に暮らし、その汚れなき処女の純潔を損なうことなく保ち続けた。しかし、彼らはこの秘密を人々から隠していたため、主ご自身が多くの人の益となるようそれを明らかにされるまで、両親や親族を含め、誰も彼らの貞潔な生活を知らなかった。

ユリアンとヴァシリッサの結婚から間もなく、両親が他界し、彼らに豊かな遺産を残した。二人は霊的生活のための自由を得て、自分たち自身の救いだけでなく、他の人々の救いにも奉仕しよう

と決意した。　そのために、彼らは男子修道院と女子修道院の二つの修道院を建立し、別れて出家した――彼は男子修道院で、彼女は女子修道院で。そこで修道者たちを集め、彼らの指導者となった。

聖ユリアヌスの修道院には、神に熱心に仕える1万人もの修道士たちが暮らしていた。主は彼にそのような恵みを与えられたため、魂を救いたいと願う人々が四方八方から彼のもとに集まってきたのである。　彼らは家や妻、両親、親族、財産、そしてこの世のあらゆる快楽を捨て、天の御国へと導いてくれるよう、自らの魂を彼に委ねた。　同様に、聖ヴァシリッサもまた、自身の修道院に最大千人の清らかな処女たちを集め、キリストの花嫁とし、さらに多くの女性たちをも導いた。そして、両方の修道院は、まるで二つの楽園の庭園であるかのように、天使のような清らかさが咲き誇り、貪欲な不浄の悪魔に対して貞潔が勝利を収めていた。

しかし、今こそ聖人たちの最期について語る時である。彼らが、神によって集められた子らと共に、天の住まいへと移り、キリスト・神に向かって「これこそ、主が私たちに与えてくださった子供たちです」と叫んだ様子についてである。[776]

当時、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスという二人の不義な王が統治しており[777]、キリスト教徒に対しては激しい迫害が繰り広げられていた[778]。この迫害は国から国へと広がり、キリストの教会を揺るがしながら、聖ユリアヌスと聖ヴァシリッサが住んでいた国の国境にも迫っていた。多くの信徒たちは動揺と恐怖に陥ったが、しかし、至福のユリアンとヴァシリッサは、断食と祈りに専念し、涙ながらに神に懇願した。神が、御自身を信じる者たちと、彼らが集めた修道者たち、そして一人残らずすべての人々を、堕落や滅びから守り、彼ら全員が天の御国に入ることができるようにと。　主はこの祈りを聞き入れ、特別な幻の中で聖ヴァシリッサに現れ、彼女にはまもなくこの世を去り、永遠の安息へと至る運命にあると告げられた。　しかし、それよりも先に、彼女の世話を受けていたすべての聖なる乙女たちがこの世を去ることになると告げられた。それは、彼女より後に残った乙女たちが、苦しみへの恐れから信仰を捨て、聖なる仲間の列から除外されることがないようにするためである。　そのために、ヴァシリッサは、彼女の世話の下で暮らしていた聖なる乙女たちが神のもとへ移るまで、あと半年この世で生きることになる。　そしてヴァシリッサの死後、彼女の霊的な兄弟であるユリアンは、多くの兄弟たちと共に殉教の偉業を成し遂げ、その勇気で敵を打ち破り、*「あなたの主人の喜びとなるため」*（マタイ25:21）に、処女性と殉教という二重の冠を受けるべく、この世を去ることになる。そして、まさにその通りになった。　半年の間に、聖ヴァシリッサが集めた乙女たちは皆、自然な死を経て、不死の花婿である主の天の宮殿へと移り、その中で生き残ったのはヴァシリッサただ一人となった。ほどなくして、それらの聖なる乙女たちは皆、王のような輝かしい衣を身にまとって彼女の夢に現れ、こう語った。

「私たちの母よ、あなたと共に主であり私たちの王である方に礼拝を捧げるのを待っています。さあ、行って、私たちをキリストにお伝えください。あなたは私たちをキリストの花嫁にしてくださったのですから！」

---

[776] この表現は（イザヤ書8:18）に由来する。預言者の確約によれば、イスラエルの子らが頼るべきメシアは、彼らを一時的かつ永遠の敵から救い出し、天の主である神のもとへ導いて、*「見よ、私と、主が私に与えてくださった子供たち」*と言うであろう。

[777] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは、西暦284年から305年まで在位した。「マクシミアヌス」とは、ここではディオクレティアヌスの娘婿であるマクシミアヌス・ガレリウスを指し、彼は東方の共同統治者であり、ディオクレティアヌスの死後は後継者となった（306年から311年まで）。

[778] ディオクレティアヌス帝によるキリスト教徒への迫害は303年に始まった。迫害のきっかけとなったのは、ディオクレティアヌス帝を説得してキリスト教徒に対する一般法を公布させたマクシミアヌス・ガレリウスであった。この法律は、キリスト教の礼拝所を破壊し、聖書を焼き払い、キリスト教徒からすべての市民権と公職を剥奪することを定めていた。ディオクレティアヌス帝時代の迫害は、第一に拷問の残虐さ、第二に一斉に処刑される殉教者の数の多さ――1日に10人から100人以上――という点で際立っていた。

眠りから覚めた聖女ヴァシリッサは、大いに喜びました。それは、彼女が集めた乙女たちが皆*「あなたの主の喜び」の中*に入ったこと、そして、彼女のために天の住まいが用意されていたことが分かったからでした。　彼女はこれらすべてを、自分の霊的兄弟である聖ユリアヌスに語った。そして数日後、熱心な祈りの最中に、彼女は不死の花婿である神の御手にその霊を委ね、聖ユリアヌスは彼女の聖なる遺体を、ふさわしい栄誉をもって埋葬した。

その直後、その地に総督マルキアヌスが妻と息子を連れて現れ、キリスト教徒を激しく迫害し、彼らを拷問と死に追いやった。　ユリアヌスが貴族の出身であり、キリストを信仰していること、また彼と共に暮らし、同じ信仰を告白する多くの兄弟たちがいることを知ったマルキアヌスは、有力な市民たちを彼のもとへ遣わし、皇帝の要求通り、ユリアヌスに偶像への生け贄を捧げるよう説得させた。　当時、聖ユリアヌスの修道院には、近隣の町々から多くの司祭、助祭、その他の聖職者たちが、司教たちと共に集まっていた。彼らは皆、主への愛に燃え、主のために喜んで殉教の死を受け入れる覚悟をしていた。　統治者から遣わされた使者が彼らの前に現れると、集まった者たちは皆、自分たちにはただ一人の王、すなわち天に御臨在される主イエス・キリストがおられ、主は彼らに偶像やそこに潜む悪魔を崇拝せず、ただ唯一の真の神のみを崇拝するよう命じられたと答えた。　そして今、彼らはキリストに従い、その御名のために直ちに死ぬ覚悟がある、と。使者は総督のもとへ戻り、聞いたことを報告した。総督は激怒し、ユリアヌス一人を捕らえるために軍隊を派遣し、修道院とそこにいた者全員を焼き払うよう命じた。　こうして、祝福されたユリアヌスは捕らえられ、縛られて牢獄へ連行された。一方、修道院にいた1万人に及ぶ修道者たちは、そこにいた司教や聖職者たちと共に、神への芳しい供え物として、修道院ごと焼き尽くされた。　その後も長い間、その場所では、通常、神聖な礼拝が行われていた時刻――第1、第3、第6、第9の時刻――に、大勢の聖歌隊による甘美な歌声が聞こえていた。また、その同じ場所で、さまざまな病気からの数多くの癒しが起こった。それは、まさにその歌声を聞く恵みにあずかった病人たちに対してであった。

翌朝、聖ユリアヌスは総督の裁判にかけられた。聖人は、狡猾な言葉や甘言で説得されたり、処罰の恐怖で脅されたりしたが、脅しにも説得にも耳を貸さなかった。そこで、彼らは節の多い棒で容赦なく彼を打ち始めた。　この拷問の最中、一本の棒が打撃の勢いで折れ、その破片が統治者の親族の一人の目に飛び込んで傷つけたため、統治者はさらに激しい怒りに駆られた。聖なる殉教者は統治者にこう言った。

「よく聞け、マルキアンよ！　お前の最も熟練した祭司たちを全員集めさせ、彼らに自分たちの神々や女神たちの名を呼び、お前の親族を癒やすよう懇願させよ。　もし彼らがそれを成し遂げられないならば、私は私の主イエス・キリストの名を呼び求め、彼の失った肉眼を取り戻すだけでなく、彼の心の目をも、真理を見ることができるようにしてやる。

統治者はその提案を受け入れ、すべての祭司を集めて、最寄りの偶像の神殿へ行き、そこで生贄を捧げ、神々や女神たちに、負傷者の目を癒やすよう懇願するよう命じた。祭司たちは赴き、命じられたことを実行したが、数多くの生贄を捧げた後、自分たちの神々から次のような言葉を聞いた。

「我々の元から立ち去れ。我々は永遠の炎に囚われ、闇の中にいるのだ。我々自身、何も見ることができないのに、どうして盲人の視力を取り戻してやれるというのか？　そして、ユリアヌスが至高の神に捧げた祈りはあまりにも強大であるため、彼が拷問を受け始めて以来、我々のゲヘナにおける苦しみは百倍も重くなったのだ。」

神殿にこの悪魔のような言葉が響き渡ると、そこにあった五十体もの偶像はすべて、たちまち倒れ、粉々に砕け散った。

すると、統治者は聖ユリアヌスに向かって叫んだ。

「魔術師め！　お前の呪術は実に強力で、我らの神々さえも打ち砕いてしまったではないか！だが、お前の約束通り、失明した者に以前の視力を取り戻させてくれるかどうか、見てやろう。」

そして統治者は、裸の殉教者に汚物を浴びせるよう命じた。そうすれば、統治者の言う通り、彼の魔法のような奇跡の力が退散するはずだったからだ。しかし、その汚物の悪臭は突然、驚くべき芳香へと変わり、空気を満たしたため、皆が驚きに打ちのめされた。　聖ユリアヌスは、傷ついた男の目の上で十字を切って主の御名を呼び求めた。するとたちまち、その病人は　癒され、その目は以前のように見えるようになった。悪意に目がくらんだ総督は、この癒やしをキリストの力ではなく魔術のせいにしたが、癒やされた男は大声で叫んだ。

「まことに、イエス・キリストこそが真の神であり、ただ御方だけを崇め、礼拝すべきである！」

そこで総督は、癒された者の首を刎ねるよう命じた。こうして、肉体的にも霊的にも目を開かれた彼は、自らの血によって洗礼を受け、目に見えない神を霊的に仰ぎ見る境地へと旅立った。

一方、聖ユリアヌスに対しては、不敬虔なマルキアヌスが、手足に重い足枷をはめるよう命じ、その姿のまま街中を引き回して人々の嘲笑の的とし、通りで立ち止まるたびに様々な拷問を加えるよう命じた。この拷問と侮辱が行われている間、告示役はこう叫んだ。

「神々にひれ伏さず、王の命令を軽んじる者たちは、このように処罰されるのだ！」

やがて、拷問者たちが聖人と共に、統治者の唯一の息子であるケルシウスという名の少年が学問を修めていた家へと到着したとき、聖人を見つめていたその少年は、仲間たちに、驚くべきものが見えると告げた。仲間たちは彼に何が見えるのかと尋ねると、ケルシウスはこう答えた。

「兵士たちに手錠をかけられて連行されているあの有罪判決を受けたキリスト教徒の周りに、多くの輝かしい若者たちが取り囲んでいるのが見えます。その中には、彼に奉仕し助けを与える者もいれば、彼の頭に、その輝きが太陽の光さえも凌ぐほど眩しい冠を授ける者もいます。」　このような神を信じ、その御役に立つことは、実に素晴らしいことだと私は思います。神は御自分の僕たちをこのように守り、このような栄光で飾ってくださるのですから。友よ、信じてください。もしこのキリスト教徒の神が、私の神となってくださるなら、私もまた、そのような僕になりたいと願っています！

そう言い残して、ケルシウスは書物や美しい衣服を捨て、この世に自分の所有物をすべて残し、聖人の後を急いで追いかけた。殉教者の足元にひれ伏し、彼は叫んだ。

「あなたを私の第二の父としたい。肉による不義な実の父、義人の敵、拷問者からは、私は完全に離反する。私はあなたに加わる。私もあなたと同じように、これまで知らなかった私の主であり救い主であるキリストのために、苦しみを受けたいと願うのだ！」

ユリアヌスを拷問していた兵士たちは驚き、街中の人々がこの異例の光景に駆けつけ、統治者の息子が殉教者に抱きつき、その傷に口づけをするのを見て驚嘆した。そして、その少年は民衆にこう言った。

「知っておいてほしい。私は総督の息子だ。これまで、不義な父と共に、罪のない聖人たちを迫害してきた。しかし、それは無知ゆえの行いだった。今や、神を知り、神に知られた者として、偽りの神々を拒み、父と母を否定し、自分の富を軽んじる。　私はキリストを告白し、彼を信じ、また、私は至福のユリアヌスの信奉者であることを宣言する。なぜ躊躇しているのか、家来たちよ、兵士たちよ？　行って、私の両親に、私が真の神を知り、その忠実な僕と共にいたいと願っていることを告げよ。

このことがケルシウスの父と母に伝えられると、彼らはこの予期せぬ知らせを聞いて深く悲しみ、直ちに少年を迎えに人を遣わし、ユリアヌスの元から連れ戻して家に連れて帰らせようとした。しかし、幼子たちを守る神は、誰も彼に触れることができないようにされた。というのも、彼に触れた者は誰でも、即座に手や肩に激しい痛みを感じたからである。そのため、誰も彼を抱き上げ、殉教者から引き離そうとはしなかった。　このことを知った総督は、二人を一緒に自分の元へ連れてくるよう命じ、祝福されたユリアヌスにこう言った。

「お前は自分の狡猾さをもって、私の希望をすべて奪おうとし、その幼い心を悪しき言葉で惑わせ、親への愛を根絶やしにしようとしているのだ！」

総督がそう語っている最中、ケルシエの母が、男女の親族たちを大勢引き連れて駆けつけた。彼女は髪を引きむしり、胸元の衣服を引き裂き、その叫び声はあまりにも凄まじかったため、総督自身も衣服を引き裂き、殉教者にこう言った。

「残酷なユリアヌスよ！　父と母の苦しみ、そして親族全員の泣き叫ぶ姿を見て、この無実の若者を、お前の魔術の力から解放してくれ！　我らに唯一の息子を返して、我が家に後継者であり主である彼を戻してくれ。そうすれば、私も王たちに汝のために請い、汝の罪が赦され、無傷のまま自由の身となるよう願おう。

聖ユリアンはこれに対し、次のように答えた。

– 私はあなたの助けを必要とせず、あなたの王たちからの赦しを求めているわけでもない。ただ、私の主イエス・キリストに、私が殉教の業を全うしたとき、狼の胎内で生まれた子羊[779]　、そしてすべての信者たちと共に、焼かれた者たちの列に加えられるよう、ただそれだけを懇願する。　あなたの目の前には、肉によればあなたから生まれたが、今や霊によって新たに生まれ変わり、私と共にキリストを信じる者がいます。彼自身もすでに成人しています――彼自身にあなたに答えてもらい、彼自身に母の涙を憐れみ、彼を育てた乳房を思いやってもらうようにしてください。

これに対し、高潔で分別のある若者はこう言った。

「茨からはトゲが伸びますが、トゲは茨から生まれたからといってその芳香を失うことはなく、また、トゲを生み出す茨も、それゆえにその鋭い棘を失うことはありません。」　それゆえ、わが両親よ、あなたがたはいつものように、茨のように罪なき者たちを苦しめ続けなさい。そして、私を、信者たちに芳香を放つ薔薇のように放っておいてください。滅びの道に立つ者たちはあなたがたに従わせ、闇の王国から光の王国へと移ろうとする者たちは、私に従わせてください。　わが主イエス・キリストのために、私はあなた方、両親を拒絶します。あなた方は、自分たちの神々への敬意から、この息子を苦しめてください。私は、この一時的な死を通して、永遠の命に到達したいのです。私は、あなた方にとって善でありながら、自分自身にとって悪であることはできません。また、あなた方への愛を、永遠の喜びよりも優先させることもありません。なぜ躊躇するのですか、父よ？アブラハムが自分の息子にしたように、私にもそうしてください！　剣を手に取り、私、あなたの息子をキリストへの生贄として捧げなさい。もし、親としての自然な愛情がそれを妨げるのであれば、私を最も残酷な拷問者たちの元へ送り出してください。そうすれば、私は私の主、イエス・キリストのために苦しみを受けることができるのです。あなた方の嗚咽や涙は無駄です。それらは、私の信仰を翻させることはできないからです。

これを聞いた総督は、ユリアヌスとケルシウスを悪臭のする薄暗い牢獄へ連行するよう命じたが、彼らがそこに入った途端、牢獄の闇は光へと変わり、悪臭は芳香へと変わった。　その場に居合わせた二十人の兵士たちはキリストを信じるようになったが、福者ユリアヌスは長老ではなく、信者たちに洗礼を授けることができなかったため、彼は悲しみに沈んだ。しかし、神を畏れる者たちの願いを叶えてくださる神は、彼らに長老を遣わされた。

その町には、非常に高貴な家柄の男が一人いた。彼は、かつての皇帝の一人であるカリーナの親族であったため、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝から深く尊敬されていた[780]　。この

---

[779] 言うまでもなく、ケルシウスは、キリスト教徒を激しく迫害した統治者マルキアヌスの息子である。

[780]　カリンは、ローマ皇帝カラの息子である。兄のヌメリアヌスと共に、カラの即位時にカエサルに任命され、カラがパルティアに対して行った遠征の間、皇帝としての権限をもって西部諸州を統治した（283～284年）。　カーが戦死し、兵士たちがディオクレティアヌスを皇帝に擁立した際、カリンはこれに反旗を翻したが、敗北し、285年に暗殺者の手によって命を落とした。

男は家族全員とともにキリスト教の信仰を公言していた。　彼とその妻は、信仰と敬虔さの中でこの世を去り、七人の息子たちを残した。彼らは年齢こそ若かったが、知恵においては成熟していた。両親への敬意から、皇帝たちは彼らに父の信仰を告白し、恐れることなく自分たちのキリストを賛美することを許した。　そのため、彼らにはアントニウスという名の長老がおり、その手から聖なる秘跡を受けていた。神は彼らに特別な啓示を与え、その長老と共に牢獄へ行き、そこに囚われていたユリアヌスとケルシウスを訪ねるよう命じられた。　彼らが夜そこに赴くと、天使が先導し、その天使が触れるだけで牢屋の扉が開いた。彼らは牢屋に入り、聖なる囚人たちに口づけをし、彼らと共に神に祈りを捧げた。　長老は、総督の息子である祝福された少年ケルシウスと二十人の兵士に洗礼を授けたが、その兄弟たちのうち七人は、キリストのために彼らと共に苦難を分かち合うことに熱意を燃やし、牢獄から出ることを拒んだ。　これを知ったイゲモンは、王たちからキリスト教の信仰を自由に告白することを許されていた者たちが、自ら束縛と拷問へと向かうことに驚き、兄弟たちを呼び寄せ、王たちからそのような許可が与えられているのだから、家に帰って好きなようにキリストを賛美すべきだと、長い間説得した。しかし、彼らは束縛と牢獄を求め、自由を望まなかった。

「王冠にふさわしくないのは、かつてるつぼで溶かされ、精錬されなかった金である」と彼らは言った。「それと同じように、私たちも、キリストへの信仰が金のように試練を経なければ、私たちのキリストにふさわしい者とはなれないのだ。」　葉ばかりを茂らせて実を結ばない木には、ほとんど価値がない。それと同じように、私たちが信仰の素晴らしい実をキリストに捧げなければ、キリストに喜ばれることはないだろう。

そこで、総督は彼らの願いを叶えるよう命じ、自らも王に彼らのことを報告すると約束した。

こうして、祝福された若者たちは総督のもとから家へは戻らず、牢獄へと戻り、聖ユリアヌスとケルシウス、そして二十人の戦士たちの元へ行った。彼らには長老アントニウスも同行した。一方、総督は王たちへ、ユリアヌス、自身の息子ケルシウス、戦士たち、そしてその七人の兄弟たちについての報告を送った。　しばらくして、王たちから、「不屈の頑なさを示す者はすべて焼き殺せ。もし彼らが魔術によって火の被害を免れた場合は、総督自らが適当な方法で彼らを処刑せよ」という命令が届いた。　王たちからそのような命令を受けた総督は、町の真ん中に裁判の場を設けるよう命じ、民衆の前に座ると、聖ユリアヌスとその一団全員――ケルシウス、七人の兄弟、長老アントニウス、そして二十人の戦士たち――を自分の前に立たせるよう命じた。　総督は、悔い改めなければ処刑するという王の命令を指摘し、彼らに偶像崇拝を勧めた。しかし、彼らは大胆にも正しい信仰を貫き、悔い改めなければ天の王が偶像崇拝者に永遠の滅びを定めていると主張した。こうして、互いの言い争いが長く続いた。

その時、法廷の前を、埋葬に向かう一人の死体が運ばれていった。総督はその死体を見て、それを自分のところへ連れてきて、自分の前に置くよう命じた。民衆は、総督がその死体をどうするつもりなのか分からず、戸惑っていた。

そこで総督は聖ユリアヌスに言った。

「あなたの師であるキリストについては、十字架にかけられる前に死者をよみがえらせたと伝えられている。あなたの師がそうされたように、あなたもこの死者をよみがえらせてみよ。そうすれば、彼が本当に神であるかどうかが明らかになるだろう。」

聖ユリアヌスはこう答えた。

「盲人にとって、太陽が昇ると言われても何の益があるだろうか？」

「格言はよせ」と総督は言った。「もしお前と、お前の神に力があるのなら、私が言った通り、この死者をよみがえらせなさい。」

すると、聖ユリアヌスはこう答えた。

「あなたの不信仰は、主からのそのような奇跡を見るに値しないものですが、それでも今すぐにそれをご覧になるでしょう。なぜなら、主の神聖な力が現れる時がすでに到来しており、神がそれ

を成し遂げられることをあなたがたに知ってもらうためです。私は、主が、私が信仰をもってお願いするすべてのことを私に与えてくださり、あなたがたの前で私を恥じ入らせないことを願っています。」

そう言うと、聖ユリアヌスは天に向かって目と心を向け、皆が聞こえるように祈りを捧げた。その間、彼の顔は光に満ちて輝いていた。

そして、彼は次のような祈りを捧げた。

「主イエス・キリスト、真の神の子よ。あなたは、世の初めから父より生まれ、定められた時が満ちたとき、無原罪の聖母マリアから、種なしに人の肉体をまとわれました！　今、天の高みから私たちを見下ろし、あなたの敵を恥じ入らせ、あなたを信じる者たちを強めてください！今、あなたの天の御座から私の祈りを聞き入れ、この死者をよみがえらせてください。そうすれば、生きている者たちは霊的に死なず、霊的に死んだ者たちは、あなたの全能の御業を見て生き返るでしょう。

彼はしばらくの間そう祈り、それから亡くなった者に向かってこう言った。

「乾いた土よ、四日間も死んでいたラザロをよみがえらせた御方の御名によって、あなたに告げる。よみがえり、自分の足で立ち上がれ。」

聖人がそう言い終えるやいなや、死者はたちまち生き返って立ち上がり、民衆は皆、恐怖に襲われた。そして、よみがえった者は大声でこう宣言した。

「ああ、神のしもべの祈りと、その汚れなき処女性とは、なんと全能なことか！　私は一体どこへ連れて行かれ、どこから連れ戻されたのか？」

総督マルキアヌスは、その出来事を注意深く見守り、驚いていたが、悪霊に目を曇らされていたため、そこにキリストの力の働きを見出すことができず、すべてを魔術の仕業だと考えた。その後、復活した者を嘲笑おうとして、彼に尋ねた。

「どこから戻ってきたのだ？」

しかし、その男は次のような言葉で詳しく答えた。

「私は、見知らぬエチオピア人たちに連れ去られた。彼らは巨人のような体躯で、恐ろしい姿をし、燃えるような目をしており、ライオンのような牙と鷲のような爪を持っていた。彼らからは、どうやら慈悲を期待することはできなかったようだ。　彼らは喜びながら私を地獄へと引きずっていったが、私がすでに深淵の入り口に差し掛かったとき、あのエチオピア人たちは、　、大地から取り出された私の肉体が大地に還されるのを待ち始めた。しかし突然、地獄全体が騒然となり、神の玉座から声が聞こえてきた：

「わが愛するユリアヌスのために、この魂をその肉体へと戻せ！」

すると直ちに、白い衣をまとった二人が現れ、不浄な者たちの手から私を引き取り、この世へと連れ戻した。それは、私を復活させてくださった方を通して、生前に私が否定していた真の神を、死後に知ることができるようにするためであった。

これを聞いた総督は当惑し、どうすべきか分からなかった。しかしその後、民衆の動揺を恐れて、復活した者を聖ユリアヌスや他の聖人たちと共に牢獄へ連行し、その扉を自身の印章で封印するよう命じた。　そこで、聖ユリアヌスは、聖アントニオ司祭に、復活した者を洗礼に与えるよう命じた。そして、この聖なる洗礼において、彼はアナスタシウスという名を与えられた。これはギリシャ語から訳すと、「復活した者」という意味である。

翌朝、総督マルキアヌスは、聖なる殉教者の数に合わせ、31個の樹脂樽を用意し、その半分まで樹脂と硫黄を充填するよう命じ、同時に聖人たちを焼くための薪や小枝を大量に用意させた。　すべての準備が整うと、縛られたキリストの受難者たちが牢獄から連れ出され、その際、ユリアヌスとケルシウスは一緒に縛られた。民衆の多くは、何の罪もない、これほど若く美しい若者たちが死へと向かうことを哀れみ、涙を禁じ得なかった。聖ユリアヌスは彼らにこう語った。

「金が火を通って、さらに清らかになるのを妨げてはならない！」

統治者は、心の中で苦悩していた息子の焼死を見ることを拒み、王の命令を執行するために代理人を残して、悲しみに暮れながらその場を去った。そこで、各聖人はそれぞれのために用意された樹脂入りの樽に収められ、その後、すべての樽を薪や藁、小枝で囲んで火が放たれた。　これらの樽から立ち上る炎は高さ三十キュビトにも達したが、聖人たちは炎の中に立ち、歌いながら神を賛美していた。やがて樽も焚き木もすべて燃え尽きると、聖人たちは生き残り、無傷で、その顔は喜びに輝いていたことがわかった。　これを見た民衆は皆、驚きを隠せなかった。このことが統治者に報告されると、彼は急いで自分の目で確かめようとし、実際に確認して、完全に困惑してしまった。　しかし、彼は再び聖人たちを牢獄へ連行するよう命じた。そこへ、息子が生き延びて無傷であることを知った彼の妻、ケルシウスの母も急いで駆けつけた。息子を見て、彼女はキリストを信じ、牢獄の中でアントニウス長老によって洗礼を受けた。彼女の名はマリオニラであった。　一方、総督は、妻がキリスト教の洗礼を受けたことをすぐに知ると、彼女もまた牢獄に投獄した。

その後、法廷の席に着くと、彼は聖なる二十人の戦士と七人の少年兄弟を剣で処刑するよう命じ、ユリアヌスとケルシウス、そして長老アントニウス、アナスタシウス、そして妻のマリオニラについては、改めて裁くことに決め、そのため彼らを鎖につないだままにしておいた。

裁きの日が訪れると、聖人たちは、あたかも王の意志と統治者の助言に従い、偶像に拝礼しようとしているかのように装った。　このため、彼らは喜びをもって偶像の神殿へと連行されたが、行列が神殿に近づいたとき、聖ユリアヌスが神に祈りを捧げると、たちまち神殿は崩れ落ち、そこにいたすべての祭司と、その他千人もの人々を押しつぶした。　神殿が立っていた大地そのものが裂け、その裂け目から噴き出した炎が、彼らに近づこうとした異教徒たちを焼き尽くした。　その後、聖人たちは再び牢獄へと連行されたが、そこで祈りを捧げていると、かつて彼らに先立って殉教した無数の殉教者たちが、白い衣をまとい、天上の賛美歌を歌いながら、輝きの中に現れた。　その中には、最近剣によって斬り殺された二十人の戦士と七人の兄弟たちがいた。また、聖ヴァシリッサも、彼女に随行する聖なる乙女たち全員を率いて現れ、聖ユリアヌスに、彼がまもなく仲間たちと共に偉業を成し遂げ、この世の生涯を終え、栄光のうちに天の都へと入ることを告げた。

「あなたには、天の御国が開かれています」と彼女は言った。「私たちの主イエス・キリストが、あなたを御自身のもとに迎え入れ、あなたと共にいる者たちも同様に迎え入れてくださいます。そして、総主教たち、預言者たち、使徒たち、殉教者たちの御姿が、祝賀のうちにあなたたちを出迎えるでしょう。あなたたちは、彼らと共に永遠に過ごすことになるのです。」

そう言うと、彼女は姿を消し、彼女と共に現れたすべての聖人たちも去っていった。囚人たちは、言葉に尽くせない喜びと心の歓びの中に残された。

その後、拷問官は再び裁判の座に就き、聖人たちを連れ出して、様々な拷問にかけた。まず、彼は聖人たちの手足の指に、油を染み込ませた糸を巻きつけ、その糸に火をつけるよう命じた。しかし、聖人たちの手足に巻かれた糸は燃え尽きたものの、彼らに何の害も及ぼさなかった。　次に、彼は聖ユリアヌスとケルシウスの頭から　の皮を剥ぎ取るよう命じ、また、祝福された長老アントニウスとアナスタシウスには目をえぐり出すよう命じた。聖マリオニラを拷問しようとしたとき、処刑人たちの手が麻痺してしまい、彼女に触れることができなかった。　その後、聖人たちは野獣の餌にされようとしたが、神の力によって野獣の口が塞がれ、彼らは野獣からも守られた。ついに、統治者はすべての牢獄から死刑判決を受けた犯罪者たちを集め、聖なる殉教者たちを彼らと共に処刑するよう命じた。　この命令が実行されると、彼は全員を処刑場へ連行するよう命じ、殉教者たちも同様に連れて行かせた。その際、彼は自分の息子や妻さえも容赦しなかった。こうして聖人たちは、犯罪者た

ちと共に剣で斬り殺され、この世を去った[781] 。 彼らへの処刑が終わるやいなや、地震が発生し、市内の建物の3分の1が破壊され、偶像が置かれていた場所は一つとして無傷で残らなかった。同時に稲妻が走り、雷が轟き、雹が降り注ぎ、この嵐によって多くの異教徒が命を落とした。 マルキアヌス総督は、最初は恐怖のあまり死にかけたが、その後まもなく病に倒れ、実際に亡くなった。彼の体内に生じた蛆に食い尽くされたのである。

聖人たちの処刑が行われた翌夜、司祭たちと敬虔な人々が、殉教者たちの遺体を回収するためにやって来た。しかし、これらの聖なる遺体は多くの死体の真ん中にあったため、彼らはそれを見分けることができず、ひざまずいて祈りを捧げた。 すると、聖人たちの魂が乙女の姿で現れ、それぞれの魂は自分の遺体のそばにいました。これにより殉教者たちの聖なる遺体であることを確認した一行は、それらを回収し、教会の祭壇の下に埋葬しました。 そして、御自身の聖徒たちを栄光に輝かせる神は、聖なる殉教者たちの遺体が埋葬されたその場所に、生ける癒しの泉が湧き出るよう命じられた。そして、主イエス・キリストの恵みにより、その水と聖徒たちの祈りによって、あらゆる病が癒やされた。主イエス・キリストに、世々限りない栄光がありますように。アーメン。

聖グリゴリー・ペチェルスキーの記念日

記念日：1月8日

ネオケサリアが聖グリゴリー・チュドトヴォルツを誇りに思うように、聖なる大ペチェルスク修道院もまた、この聖人と同名の尊者をもって誇りとしている。 神が、様々な奇跡によって名声を博した聖アントニオと聖テオドシオという御自身の聖人たちを通して御自身の偉大さを示されたとき、同時に、神は奇跡を行う者として聖グリゴリオも選び、彼を御自身の聖ラヴラへと召された。かくして、 この至福の者は、聖アントニオが洞窟で隠遁生活を送っていた当時、修道院を統括していた聖テオドシオのもとを訪れ、彼から修道者の衣を受け、無所有、清浄、謙遜、服従、その他の美徳を確固たるものとし、とりわけ祈りに励んだ。 短期間のうちに多くの功徳を積み、彼は奇跡を行う賜物を受け、とりわけ神から悪霊に対する権威を授かった。悪霊たちは、遠くから聖人を妬み、こう叫んだ。

「おお、グリゴリーよ！ お前の祈りで我々を追い出すつもりか。」

実際、グリゴリーは、あらゆる礼拝の後、呪文のような祈りを唱える習慣を持っていた。 打ち負かされた敵は、至る所から追い出されながらも、聖人に対して悪意を抱き、その徳行の功績を阻もうと企んだ。自らそれを行う力を持たなかったため、彼は悪人たちに聖人を襲わせた。もっとも、聖人には祈りと聖歌が記された書物以外、何の財産もなかった。 そこで、ある夜、盗賊たちがグリゴリオスの小部屋を訪れ、隠れて、長老が早課のために教会へ出かけるのを待ち、彼の全財産を奪おうとした。しかし、至福の聖人は、小部屋の真ん中で神に祈りながら一晩中眠らなかったため、彼らの到来に気づいた。彼は彼らに対しても、次のような言葉で祈り始めた。

「神よ！ 敵に奉仕するために無駄に疲れ果てた御自分のしもべたちに、眠りを授けてください。」

神は老修道士の祈りを聞き入れられ、泥棒たちは五日五晩も眠り続けた。やがて、多くの兄弟たちの見守る中、聖人は彼らを起こし、こう語りかけた。

---

[781] これは313年のことであり、当時エジプトとアフリカを統治していたのは、かつて（305年から）マクシミアヌス・ガレリウスの共同統治者であったマクシミン・ダザ（311–313年）であった。この頃、西方ではすでにコンスタンティヌス大帝が統治していた。

「いつまで、私から物を盗もうとして、無駄に張り込みを続けるつもりか？　さっさと家に帰れ！」

しかし、彼らは目を覚ましても、長い間何も食べていなかったため力が尽きてしまい、その場から動くことができませんでした。そこで、聖人は彼らに食事を勧め、食べさせてから、彼らを帰しました。　このことを知った市の統治者は、彼らを罰するよう命じた。しかし、自分のせいで彼らが苦しみを受けることになったことを悲しんだグリゴリーは、統治者のもとへ行き、自分の本を数冊贈り、泥棒たちを解放した。残りの本は売り払い、得た金を貧しい人々に配りながら、こう言った。

「どうか、私から盗もうという誘惑に駆られて、これ以上誰かが災いに遭うことがないように！」　かくして、*「あなたがたの財産を売り払い、施しをなさい。朽ちることのない宝倉、天に尽きることのない宝を備えなさい。そこには盗人が近づかず、虫も食わない」*（ルカ12:33）と仰せになった主の御心は、果たされたのである。

一方、泥棒たちは、自分たちに起こった奇跡をきっかけに、以前の行いに立ち返ったものの、悔い改め、同じペチェルスク修道院を訪れ、修道士たちのために働くようになった。　しかし、敵は邪悪な企みを諦めなかった。尊者グリゴリーには、野菜を植え、果樹を育てている小さな菜園があったが、ある日、敵は他の盗賊たちをそそのかしてその菜園に侵入させ、袋に野菜を詰め込ませた。しかし、彼らが袋を背負って立ち去ろうとしたとき、それができず、袋の重さに押しつぶされながら、丸二日二晩もその場に立ち尽くすことになってしまった。そこで彼らは叫び始めた。

「聖なる父グリゴリーよ！　私たちを解放してください。私たちは自分の罪を悔い改め、二度とこのようなことはしません。」

彼らの叫び声を聞いて修道士たちが駆けつけ、彼らを捕らえたが、その場から連れ去ることはできなかった。そこで修道士たちは泥棒たちに尋ねた。

「いつここに来たのか？」

泥棒たちは答えた。

「もう二日二晩、ここに立っています。」

修道士たちは彼らに言った。

「しかし、私たちはここを何度も通り過ぎたが、あなたたちの姿には気づかなかった。」

すると、盗賊たちはこう答えた。

「もし私たちが、あなたがたが私たちのそばを通り過ぎるのを見ていたら、涙ながらに長老への取り成しを懇願していたでしょう。ただ、完全に力尽きてしまった時になって初めて、私たちは叫び始めたのです。聖なる奇跡行者様にお願いして、私たちを解放してくださるよう、どうか取り成してください。」

ちょうどその時、グリゴリーがやって来て、彼らにこう言った。

「お前たちは生涯を怠惰に過ごし、他人の財産を盗み、自ら働くことを拒んできた。それゆえ、これからは残りの人生をこの場所で立ち尽くして過ごすことになるだろう。」

彼らは涙ながらに長老に解放を懇願し、二度と盗みをしないと誓った。

長老は彼らを憐れみ、こう言った。

「もし、働き、自分の手で他人を養うと約束するなら、あなたたちを解放してやろう。」

泥棒たちがその言葉に背かないと誓うと、グリゴリーは彼らにこう言った。

「あなた方を支えてくださる神に感謝します！これからは聖なる兄弟たちのために働き、その労働の成果をもって、彼らが必要とするものを届けてください。」

そう言い終えると、彼は彼らを解放した。盗賊たちは、あの小さな果樹園で犯した悪行を償うため、ペチェールスク修道院の菜園で懸命に働き、その労働の末に生涯を終えた。

しかし、狡猾な誘惑者は、三度目にもまた、そのような巧妙な策略で聖人を陥れようと試みた。ある日、グリゴリーのもとへ、助けを必要としているふりをした三人の物乞いが現れ、尊者を試そうとした。そのうち二人は、三人目を指さしながら、次のような嘘を語った。

「父よ！この私たちの友は死刑を宣告されています。彼が身代金を支払って死を免れることができるよう、何かを彼に与えてくださるようお願いします。」

しかし、聖人は、この作り話が真実になることを予見し、悲しみのあまり涙を流し、こう言った。

「この人は哀れだ。彼の滅びの日が来てしまったのだから！」

すると彼らは言った。

「父よ、もし何かを与えてくださるなら、彼は死なずに済みます。」

彼らは、彼から何かをだまし取り、それを自分たちで分け合おうとして、そう言ったのである。しかし、先見の明のある奇跡行者は、こう言った。

「たとえ私が渡したとしても、あいつはいずれにせよ死ぬんだ！　ところで、教えてくれ。あいつはどんな死に方をすべきなんだ?

「彼は木に吊るされるだろう」と、詐欺師たちは答えた。

「その通りだ」と、先見の明を持つ男は言った。「明日、まさにその通りになるだろう。」

そう言うと、彼は洞窟へと降りていった。そこは、好奇の眼差しや世俗の喧騒から身を隠し、普段祈りを捧げていた場所だった。そこから残っていた本を運び出し、訪れた者たちに手渡して言った。

「これを受け取ってください。もし必要がなくなったら、返してください。」

彼らは本を受け取ると立ち去り、笑いながらこう言った。

「これを売って、得た金を分け合おう。」

聖人の所有する果樹を見て、彼らは言った。

「今夜、またここに来て、この果実を摘み取ろう。」

夜になると、三人の盗賊が再びやって来た。その時、グリゴリーは自分の洞窟で祈っていたが、彼らは老修道士が祈っていた洞窟の入り口を外部から塞いでしまった。その中の一人――絞首刑に処されると言われていた男――が木に登り、リンゴを摘み始めた。　その時、彼が掴まっていた枝が折れ、彼は落下した。彼を見張っていた他の二人の盗賊は恐怖のあまり逃げ去った。一方、落下した男は別の枝にぶら下がったままとなり、しかも誰も彼を救い出す者がいなかったため、すぐに窒息死してしまった。

グリゴリーは閉じ込められていたため、兄弟たちと共に教会で早朝の礼拝に参加することができなかった。そこで兄弟たちは教会を出て、聖人がいつもの習慣に反して早朝の礼拝に来なかった理由を探しに行った。すると、彼らは木にぶら下がった死体を目撃し、恐怖に襲われた。　彼らはすぐに、洞窟に閉じ込められていたグリゴリーを見つけ出した。グリゴリーは洞窟から出てくると、吊るされていた男を降ろすよう命じた。その後、他の者たちと一緒にやって来て死体を見つめていた共犯者たちを見ると、彼はこう言った。

「見よ、あなたがたの卑劣な嘘が真実となった。なぜなら、*『神は侮られることはない』*（ガラテヤ6:7）からだ。もしあなたがたが私を閉じ込めていなければ、私は来て彼を助けていたであろう。しかし、敵があなたがたに*『虚しいものや偽りのもの』*を守るよう教えたがゆえに、あなたがたは*『汝の慈悲深い方』を見捨ててしまったのだ*。」[782]

厚かましい嘲笑者たちは、聖人の言葉が現実となったのを見て、彼の足元にひれ伏し、許しを請うた。グリゴリーは彼らにペチェールスク修道院での労働を命じ、それ以来、彼らは額に汗して働

[782] 大土曜日のイルモス、第6歌、参照（ヨナ 2:9）。

き、自らの手で得た糧で自分や他の人々を養うことができるようにした。　こうして彼らは、ペチェールスク修道院で、聖母マリアの僕として、また私たちの尊い父であるアントニウスとテオドシウスの弟子たちとして、子供たちと共に働きながら生涯を終えたのである。

さて、ここで尊者自身の苦難に満ちた最期について語るべき時が来た。

ある日、修道院の水器に不浄な動物が入り込んでしまったため、尊者様はそれを清めるためにドニエプル川へ下り、水を汲みに行かれた。　その時、ロスティスラフ・ヴェセヴォロドヴィチ公[783]が、修道院で祈りを捧げ、ポロヴェツ族との戦い[784]　に向けた祝福を受けるために、その場所を訪れていました。彼は弟のウラジーミル・モノマフ[785]　と共に、その戦場へ向かうところでした。ロスティスラフの従者たちは、古の敵にそそのかされ、長老を嘲笑し、不適切な言葉で彼を苛立ちさせました。　しかし、長老は預言的な霊によって、彼らに死の脅威が迫っていることを見抜き、こう言った。

「おお、子らよ！　あなたがたは心に感動を抱き、皆に自分たちのために祈りを求めるべきなのに、神に逆らう悪を行っている。さあ、自らの滅びを嘆き、罪を悔い改めよ。そうすれば、最後の審判という恐ろしい日に、多少の慰めを得られるだろう。なぜなら、神の裁きにおいて、あなたがたはすでに、君主と共に溺れ死ぬと定められているからだ。」

一方、ロスティスラフ公は、この聖人の言葉を聞いても信じようとはせず、彼が単に脅しているだけであって預言しているのではないと考え、怒りを込めてこう言った。

「私が泳ぎに長けているというのに、なぜ私に水による死を予告するのだ？　いや、お前自身がそのような死を遂げるだろう！」

そして直ちに、神への畏れを忘れ、彼は長老の手足を縛り、首に石を掛けさせ、水の中に投げ込むよう命じた。

こうして、聖なる老人は溺死させられたのである！

兄弟たちは二日間彼を探したが、見つけることはできなかった。ところが三日目に、聖人の遺品をいくつか持ち帰ろうと彼の独房を訪れたとき、彼らは思いがけず、手足を縛られ、首に石を掛けられたまま、独房の中で死んでいる彼を発見した。　彼の衣服はまだ濡れており、顔は明るく、全身はまるで生きているかのようだった。　修道士たちは、独房が施錠されていたにもかかわらず、一体誰が、どのようにしてこの長老をここに運び込んだのかと不思議に思ったが、その後、神に賛美を捧げた上で、その聖人の奇跡的な遺骸を敬意を込めて運び出し、洞窟に安置した。そこでは、今なおその遺骸は朽ちることなく安置されている。

一方、ロスティスラフは、自らの犯した罪を顧みず、怒りに燃え、祝福を受けるために修道院に入るという自身の約束に反して、修道院に入ることをさえ拒んだ――そして、神の祝福は彼から遠

783　ロスティスラフ・ヴェセヴォロドヴィチは、ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチの息子であり、ヤロスラフ・ムドリーの孫で、キエフの南、アルテ川とトルベジェ川沿いに位置するペレヤスラフで公爵を務めていた。現在、ペレヤスラフはポルタヴァ県の県都である。

784 ポロヴェツ人は、テュルク系に由来する遊牧民族であり、9世紀後半から南ロシアの草原地帯に居住し、タタール人の侵攻に至るまで、ルーシに対して絶え間なく壊滅的な襲撃を繰り返していた。彼らの襲撃は迅速かつ突発的に行われた。ルーシの諸公は、ポロヴェツ族に対抗するため、国境沿いに要塞を築き、ポロヴェツ族の領土の奥深くへと遠征を行った。ここで言及されているそのような遠征の一つは、キエフ大公スヴィャトポルク・イジャスラヴィチ（在位1093年～1113年）が、大公即位初年に敢行したものである。

785 ウラジーミル・モノマフは、モンゴル侵攻以前の時代において、最も傑出したルーシの公の一人であった。 父のヴセヴォロドが亡くなった際、彼はキエフ市民からの愛顧にもかかわらず、キエフ大公の座には就かず、代わりに従兄弟のスヴィャトポルク・イジアスラヴィチを呼び寄せ、一族の長として彼に大公の地位を譲った。　この頃、彼はチェルニヒフを治め、さらにスモレンスク公国も支配していた。スヴィャトポルクの死後、彼はキエフ大公の座に就き、そこで死に至るまで統治を続けた（1113年～1125年）。

ざかってしまった。　ウラジーミル・モノマフだけが、祈りと祝福を請うために修道院を訪れた。その後、ルーシの諸公がトリポリ付近に到達し[786]、ストゥグナ川を渡ったとき[787]、彼らは軍勢をポロヴェツ人に向けて進軍させた。　彼らの軍勢は持ちこたえられず、逃げ出した。ウラジーミル公も逃げ出し、ペチェールシクの聖人たちの祈りと祝福により、無事に再びストゥグナ川を渡った。一方、ロスティスラフは全軍を率いて川で溺死し、こうして聖人の預言「邪悪な殺人者がどのような尺度で測ったか、その尺度で彼もまた測られるであろう」[788]が成就したのである。　一方、悪意のない奇跡行者グリゴリーは、命の泉を見出し、*「天よりも高い」*（詩編148:4）水のほとりで、永遠の甘美の流れを味わいながら、栄光と誉れにふさわしい主の御名を賛美し、今までも、そして永遠に、そして果てしない世々まで。アーメン。

聖ドムニカの記念日

記念日：1月8日

聖ドムニカは、テオドシウス大帝の治世中、まだ異教徒であった頃、他の四人の乙女たちと共にカルタゴからコンスタンティノープルへやって来た[789]。彼女はキリスト教を受け入れ、清らかな天の信仰の教えに従って生きるという強い願望に燃えていた。　コンスタンティノープルの大司教である聖ネクタリオス[790]は、彼女について特別な啓示を受けました。そのため、彼女を受け入れた彼は、彼女に聖なる洗礼を授けただけでなく、彼女を助祭に任命しました[791]。皇帝レウスは、彼女に城壁の外の土地を贈りました。　この土地で、聖ドムニカ（ ）は聖ザカリアに捧げる修道院を設立し、周囲に処女たちを集めて共に暮らし、断食に励みました。　彼女は数多くの奇跡を起こした。例えば、海上の嵐で遭難しかけていた船乗りたちを、祝福を込めて海に油を注ぐことで救い、それによって波が静まった。また、彼女は預言の賜物も持ち、王の死を予知し、予言した。　ある時、彼女は天から天使が降りてきて水の性質を聖別するのを目撃し、また神の神秘に関する他の啓示も受けた。聖女は、レウスとゼノンの治世[792]まで生き、大いなる老齢に達して安らかに息を引き取り、その際、主のもとへ旅立つ時を予言していた。

---

[786] 現在はキエフ県の町である。

[787] ストゥグナ川は、ドニエプル川の右支流で、キエフ州のヴァシリコフ郡を流れる。かつてこの支流は、かなり大きな川であった。

[788] （マタイ7:2）――そこでは、この箇所は次のように記されている。*「あなたがたがどのような裁きで裁くなら、そのようにあなたがたも裁かれる。あなたがたがどのような尺度で量るなら、そのようにあなたがたにも量られる」*。

[789] テオドシウス大帝――379年から395年まで在位したローマ皇帝。その治世において、キリスト教はローマ帝国で完全に確立された。

[790] 聖ネクタリオス総主教は、381年から397年までコンスタンティノープル教会を統率した。彼の記念日は「チーズの土曜日」に行われる。

[791] ディアコニサ――ギリシャ語で「奉仕者」を意味する。これは教会における特別な身分を指す呼称であり、その制度は使徒の時代にまで遡る（ローマ16:1；参照 1テモテ5:3–10）。 ディアコニスの職には、主に年配の（40歳以上）未婚の女性や未亡人が選ばれた。彼女たちの務めは、改宗しようとする女性や少女たちに、洗礼の際にどのように振る舞うべきかを指導すること、彼女たちの洗礼の際に司教を補佐すること、そして司教に代わって額以外の体の部位に聖油を塗ること、　礼拝中の女性たちの秩序と品行を監督し、病者や投獄されている者を訪問し、拘束されている懺悔者や殉教者に奉仕し、貧しい人々を助けることなどが挙げられる。　ディアコニスに関しては、いくつかの教会法上の規定があり、具体的には、第4回全地公会議の第15条、第4回全地公会議の第14条、および聖バシレイオス大主教の第44条である。

[792] ここで言及されているのは、当然ながら在位期間が1年未満（474年）であった皇帝レウス2世のことである。皇帝ゼノンは474年から491年まで在位した。聖ドムニカは、ゼノンの治世の初期、およそ474年に死去した。　彼女は少なくとも385年より前にコンスタンティノープルに到着しており、当時すでに間違いなく20歳以上であった（なぜなら、ネクタリオス総主教は間もなく彼女を助祭に叙任することが可能だと判断したからである）ことから、聖ドムニカは100歳を超えてこの世を去ったことになる。

聖ゲオルギオス・ホゼヴィトの記念日

記念日：1月8日

聖ゲオルギオス・ホゼヴィト[793] は、キプロス島[794] で、敬虔な家庭に生まれた。彼の兄イラクリドは、両親が存命のうちに聖都エルサレムへと向かった。　そこで、主イエスの足跡と血によって聖別された場所を礼拝した後、彼はヨルダン渓谷[795] へと赴き、コロマノヴァと呼ばれる修道院[796] に定住して、修道者となりました。一方、聖ゲオルギオスは両親のもとに残り、敬虔さと神への畏れの中で育てられました。

ゲオルギーの両親が亡くなると、孤児となった少年は、両親から受け継いだ全財産とともに、ある親戚の保護下に入った。　その親族は彼を深く愛し、自分の一人娘を彼に嫁がせたいと願った。しかし、聖人は世俗の虚栄を嫌がり、妻との共同生活を望まなかったため、修道院のイグメンであった別の親族のもとへ身を隠した。　ゲオルギウスの居場所を突き止めたのは、彼を見捨てた親族の一人で、この温厚な若者を自分の霊的な息子にしたいと願っていた人物だった。彼はゲオルギウスが身を隠していた修道院長のもとを訪れ、その若者を返せと要求し始めた。　このことを知ったゲオルギーは、密かにその修道院を離れ、出航する船に乗り込み、キプロスから聖都エルサレムへと向かった。聖地を参拝した後、彼はヨルダン川流域へと下り、コロマンの修道院にいる兄のもとを訪れた。しかし、兄は彼がまだ若く、ひげも生えていないのを見て、聖なる父たちの戒めに従い、ひげが生えるまでは彼を修道院に留めておくことを拒み、代わりに「フジヴァ」と呼ばれる、我らが至聖なる御母の修道院（[797] ）へと連れて行き、そこの修道院長に引き渡した。 そこで聖ゲオルギオスは修道服を身にまとい、修道生活の道を歩み始めた。神の栄光と自らの魂の救いのために労苦し、彼はとりわけ謙遜と従順に励んだ。神はその御心に適う者を称え、奇跡を行う賜物を授けた。　そして、修道院の兄弟たちは皆、この若き少年、しかも修道生活を始めたばかりの者に、これほどの完成度と神への大胆さを見出し、大いに驚嘆した。しかし聖人は、この世の虚しい名声に惑わされることを恐れ、密かに修道院を去り、再び兄のいるラヴラへと戻った。

ここに定住すると、彼は兄弟と共にいわゆる「古い教会」を占め、そこで彼らは祈りと神への黙想、そして隠遁者の務めに専念した。兄弟たちは、誰かが訪ねてくる場合を除いて、温かい食事を用意することはなかった。

ある日、アッバ・イラクリドスは兄にこう言った。

「斧を持って、薪を切りに行こう！」

---

[793] ホゼヴィティとは、ホゼヴィト修道院またはフジフ修道院の修道士たちを指す。

[794] キプロス島は、地中海の北東端、シリア沿岸からほど近い場所に位置している。

[795]　ヨルダン渓谷はヨルダン川沿いに位置しており、人口がまばらなこの地域は、古くから隠遁者たちに愛されてきた場所であった。こうして、聖預言者ヨハネ・洗礼者もここに身を隠し、悔い改めを説く説教を行った。　キリスト教時代、この谷には数多くの様々な修道院が存在していた。

[796] コロマノフ修道院は、死海とヨルダン川の近くに位置していた。

[797]　フズィヴ修道院は、エルサレムとエリコの間、フズィヴまたはホゼヴァの砂漠にあり、聖都からヨルダン川へ向かう巡礼者が通常通る大通りの右側に位置し、ヨルダン川沿いの低地へ下る道からも遠くない場所にあった。　この修道院は荒涼とした地に位置していた。渓谷から50サジェン（約100メートル）の高さにそびえ立つ教会や修道士たちの独房は、まるで岩だらけの断崖に張り付いているかのようであった。フズィヴァ修道院は5世紀に創建された。その最初の創設者の名は不明である。　その後、この修道院は「ラヴラ」と呼ばれるようになり、6世紀、7世紀、8世紀には、修道者たちの厳格な生活で特に名声を博し、絶大な繁栄を極めた。12世紀にはこの修道院はまだ存在していたが、その後の運命については何も知られていない。ごく最近、この修道院は再建された。

弟が斧を手に取ると、兄は、彼らの修道室の近くに生えていた実のならないヤシの木を切り倒すよう命じた。ゲオルギオスは兄に頭を下げ、こう頼んだ。

「いいえ、父よ、それを切り倒さないでください。もしかすると、葉を私たちに与えてくれるかもしれません。」

しかし、兄は威圧的な口調で言った。

「切り倒せ。もう何年も実をつけていないのだ。なぜ場所を占有しているのだ？」

するとゲオルギーは、再び謙虚に頭を下げて、こう言った。

「まもなく実を結ぶと保証します。」

その言葉を聞いて、イラクリドスは折れ、それ以来、そのヤシの木は数多くの美しい実を結び始めた。

その頃、エリコには、聖なる修道士たちから愛されていたある地主が住んでいた。彼には、幼い一人息子が亡くなっていた。父は亡き息子を籠に入れ、収穫したばかりの果実で覆い隠すと、急いでそれを修道院へと運んだ。　イラクリドスとゲオルギオスの修道室に入ると、彼は長兄の前に籠を置き、自分の農作物を祝福してほしいと頼むと、すぐにその場を去った。籠から果物を取り出し、その中で亡くなった赤ん坊を見つけたイラクリドスは、弟にこう言った。

「その男を呼びなさい。彼は私たち罪人を誘惑しようとしているのだから。」

しかし、ゲオルギウスは彼にこう反論した。

「悲しんだり怒ったりしないでください、父上。信仰をもって、慈愛に満ちた憐れみ深い神を呼び求めましょう。もし神が私たち罪人の祈りを聞き入れ、この赤ん坊を蘇らせてくださるなら、父上は信仰の報いとして、私たちから生きている赤ん坊を受け取られるでしょう。　もし神がこれをなそうと望まれないならば、私たちは罪人であるゆえに、神に対してその苦難を救うほどの大胆さを持ち合わせていなかったと、父に伝えましょう。

長老は兄弟の言うことを聞き入れ、二人は涙を流し、心を砕いて祈りを捧げた。そして、御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださる、あまねく慈愛に満ちた主は、彼らの祈りを聞き入れ、その赤ん坊を蘇らせられた。そこで、兄弟たちは父親を呼び寄せ、生きている赤ん坊を彼に手渡し、この奇跡について誰にも話さないよう命じた。

こうして、聖イラクリドと聖ゲオルギオスは、あらゆる謙遜と慎みをもって、平和に、神に喜ばれるように共に暮らした。彼らの間に口論や意見の相違があったことを耳にした者は誰もおらず、互いに対して、あるいは他の誰かに対して、軽蔑の影さえ見せたこともなかった。

しばらくして、イラクリドは生後七十歳に達してこの世を去った。アッバ・ゲオルギオスは、独り修道室に残され、兄弟の死を嘆き悲しむ一方で、その生涯と労苦を立派に模範としていた。　さて、誰が彼の隠遁生活における偉業、たゆまぬ祈り、そして神への思索について語ることができるだろうか。誰が彼の節制と断食について語ることができるだろうか。その修道生活により、この長老は助祭の位を授かり、助祭としての職務において、しばしば聖職者たちの礼拝を補佐した。　その間、修道院ではイグメンが死去し、新たな院長選出をめぐって大きな分裂と不和が生じた。そこで聖ゲオルギオスは、この混乱に耐えかね、悲しみを抱きつつコロマンを去り、再びフゼヴィツキー修道院に定住した。そこでは、修道院のイグメンから与えられた独立した独房に住んだ。

以前の隠遁生活の場所で修行を続ける中、聖ゲオルギーはワインも、オリーブ油も、パンも、衣服も一切手に入れず、ゴミの山を回りながらぼろ布を集め、それらを縫い合わせて自分の衣服を作り、そのぼろ布で寝床も整えた。　修道院に住む修道士たちには、一週間分の長老や来訪者の食卓の残り物――野菜であれ、果物であれ、あるいは骨でさえも――を彼のために取っておいてくれるよう頼んだ。その後、彼はそれらすべてを石臼で挽き、小球状に成形して天日干しにした。そして、その小球を水と一緒に、二、三日後に食事として摂取した。　さらに、長老は兄弟たちが自分抜きでパンを焼かないよう頼んだ。彼は、そのような聖地でこの仕事に従事する者には天国で大きな報いがある

と信じていたからである。パレスチナでは、その地の偉大な聖地を参拝しに来る旅人たちに、余ったパンを振る舞うのが慣習だったからだ。 パン焼き場では、他の仕事よりも優先して、 聖ゲオルギオスは窯に火を焚いていた。この作業は、夏の時期、激しい暑さで教会の燭台の上のろうそくさえも溶けてしまうような場所では、とりわけ過酷なものだった。 しかし、聖ゲオルギオスは、いかなる酷暑にもめげることなく、一日に二回、三回とパン焼き場でたゆまず働き、窯を焚き、パンを焼いていた。他の兄弟たちはそのような仕事を耐えられず、常に交代していた。そのため、皆はゲオルギオスのたゆまぬ労苦に驚き、彼を「鉄の男」と呼んだ。

こうして、この地上の天使であり天の人である彼は、自らの功績によって他の人々を励ましながら、精進を続けた。

やがて、ペルシャ軍が聖地へ侵攻した際[798] 、彼は一時的にフゼヴィツカ修道院を離れ、コロマンへ身を隠した。しかし、危険が去ると、長老は再びフゼヴィツカへ戻った。そこで彼は再び修道者の務めに専念すると同時に、彼の神に導かれた言葉を聞きに来るすべての人々を教え導いた。 彼は誰一人として教訓に満ちた対話を欠かすことなく、すべての人を神の言葉と敬虔さにおいて導いた。

敬虔に生き、神に喜ばれた聖ゲオルギオスは、大老齢に達して天の住まいに召された。この長老の至福の最期について、その弟子である聖アントニオスは次のように語っている。

「多くの労苦の末、私たちの聖なる父ゲオルギオスは病に倒れ、その病により息を引き取りました。彼が亡くなったその晩、神の御計画により、多くの訪問者が訪れ、私は奉仕に大いに忙殺されていました。そして、長老のそばに座っていた兄弟たちの何人かが、たびたび私のところに来て、こう言いました。

『長老があなたを尋ねておられます。「アントニーはどこにいるのか？ 彼を私のところへ呼んでくれ。私はもう死にそうだ」とおっしゃっています』

私は、従順を果たしたいという気持ちと、長老のもとへ行きたいという気持ちの間で、すでに心が二分されていた。すると、長老は霊によってそれを察知し、遣わされた者たちを通じて私にこう告げた。

「悲しむな、戸惑うな、わが子よ。ただお前の務めを果たせ。私はお前が来るまで待っている。」

訪問者たちが食事を終えて立ち去り、別の訪問者がやってくるまでの間、時間はほぼ真夜中まで延びたが、長老はまだ生きていた。私は命令を果たし、訪問者たちを見送ってから、彼の元へ行った。彼が私を見ると、抱きしめて口づけをし、祝福を授けた後、東の方角に向き直って言った。

「行け、わが魂よ、今や主のもとへ、行け。」

そう三度言い終えると、彼は主の御許に息を引き取った。こうして彼は、平和に、静かに、明らかに神の御手に霊を委ねてこの世を去った。*それは、「義人の魂は神の御手の中にあり、苦しみは彼らに触れることはない」*（箴言 3:1）と記されている通りであり、また、*「主の御目には、その聖徒たちの死が尊い*」ともある通りである。[799] 私は、彼が主の御許に息を引き取ったことを知ると、彼の胸にすがりつき、この尊い父を失ったことを嘆き、泣き崩れた。 そして、詩篇や賛美歌、霊的な歌を唱えながらその遺体を整え、敬虔な父たちの墓に葬った。今や彼は聖人たちの列に加わり、私たちと全世界のために共に祈ってくださっている」。アーメン。

---

[798] ペルシア人の侵攻は614年、ペルシア王ホズロイ（在位580年～628年）の指揮の下で行われた。

[799] 詩篇115:6。

コンダク、第4声調:

最も輝かしい光よ、ゲオルギオスよ、あなたは現れ、神聖な光で、あなたを誠実に呼び求める者たちを照らしました。水の流れの中に現れ、地上の者たちを照らされた主キリストに、私たちのために祈ってください。

聖殉教者カルテリオの記念日

記念日：1月8日

聖カルテリウスは、ディオクレティアヌス帝の治世[800]　に生き、カッパドキアのケサリアにおいて、プロクラートル[801]　ウルヴァネの治世下で、司祭でありキリストの信仰の教師であった。彼は神の聖堂を建立し、　自身の周りに多くの信徒を集め、彼らに、キリストを父と聖霊と共に、唯一の真の神として崇めるよう教えた。　この熱心なキリストの僕に対して、プロクラートルに讒言が持ち込まれた。そこで、この祝福された司祭は迫害から身を隠した。しかし、主が彼に現れてこう言われた。

「行け、カルテリイよ、そして総督の前に出よ。わたしはあなたと共にいる。あなたはわたしの御名のために多くの苦難を受けることになるが、多くの人々があなたを通して信仰を持ち、救われるであろう。」

聖人は大きな喜びに満たされ、主を賛美し、検事長に自身の居場所を告げた後、牢獄に投獄された。聖カルテリウスが検事長の前に引き出されると、検事長は彼にセラピスへの生贄を捧げるよう命じた[802]。聖人の祈りにより、この偽りの神の像は地面に倒れ伏した。　そこで、検事長の命令により、十六人の兵士が、四人の使用人に地面に押さえつけられたキリストの殉教者を棒で打ち始めた。その後、拷問者たちは聖カルテリウスを木に吊るし、カミソリで彼の手足の爪を切り落とし、鉄の鉤でその肉体を苛んだ。

その時、主の天使が聖なる殉教者の前に現れ、その苦しみを和らげたため、キリストの戦士はこれほど過酷な拷問にもかかわらず無傷のままであった。

拷問者の命令により、彼は木から降ろされ、足の裏を鉄の棒で貫かれ、胸に赤熱した鋤を載せられ、赤熱した鉄の椅子に座らされ、赤熱した鉄の棒で足を引っ張られた。その後、この祝福された殉教者は再び牢獄に投げ込まれた。

夕方、我らの主イエス・キリストは、その勇敢な受難者に現れ、その足枷を解き、牢獄から導き出された。その時、迫害者たちによって負わされた傷から癒やされた聖なる殉教者を見た多くの人々は、聖なる洗礼を受け始め、同時に、自分たちが苦しんでいた病気からも癒やされたのである。

再び迫害者たちに捕らえられた聖カルテリウスは、新たな拷問にさらされた。　その手足には重い石が吊り下げられ、さらに処刑人たちは棒で腹を殴りつけ、火で焼いたり、ぽっかりと開いた傷口に硫黄や樹脂を注いだり、口の中に溶けた鉛を流し込んだり、頭には真っ白に熱した兜をかぶせたりし、ついにはこの聖なる殉教者を火の中に投げ込んだ。　主への感謝の歌を歌いながら、聖カルテリウスは無傷のまま炎の中から出てきた。

---

[800] ディオクレティアヌスは284年から305年まで在位した。

[801]　プロキュラトルは、本来、ローマ帝国の各属州において裁判を管轄していた。その後、プロキュラトルたちは、皇帝の財源となる税収を徴収するために皇帝の属州へ派遣されるようになった。重要度の低い属州は、プロキュラトルによって統治されていた。

[802]　セラピス――エジプトの神で、異教時代の末期にはローマ帝国でも崇拝されていた。死者の魂の神として崇められ、病気や死からの救い主として呼び求められた。

その時、拷問の場に居合わせたあるユダヤ人が激怒し、槍を掴んで聖殉教者の肋骨に致命的な一撃を加えた。傷口からは大量の水が流れ出し、それが焚き火を覆い尽くした。その後、血が流れ出し、キリストの殉教者はその聖なる魂を神に委ねた[803]。

聖イリヤ・プスティンニクの記念日

記念日：1月8日

聖イリヤは若くして修道生活に入り、フィヴァイダスのアンティノイ近郊にある人里離れた過酷な荒野で、75年間を完全な隠遁生活の中で過ごした[804]。彼が荒涼とした砂漠の山頂で成し遂げた偉大な功績は、言葉では到底語り尽くせない。彼はそこから一度も人里へ出ることなく、鋭い岩の間を縫うように敷かれた、足を踏み入れるのもやっとの狭い小道を通ってのみ、人々が彼のもとを訪れることができた。

熱心な訪問者たちは、洞窟の石造りのひさしの下に座る老僧を見かけた。洞窟は暗く、その隠者をかろうじて見分けるのがやっとだった。彼は老衰のため全身が震えていた。というのも、彼の生涯は110年以上に及んでいたからである。他の隠者たちは、尊者イリヤについて、彼がいつ山に定住したのか誰も覚えていないと語っていた。

老齢になると、彼は朝と夕方にそれぞれ小さなパンを三切れずつ、それに塩漬けのオリーブを三粒ずつしか口にしなかった。一方、若き日には、一週間に一度しか食事をとらなかった。教訓を求めて彼を訪ねてくる人々に対し、彼は次のように説いた。「サタンの支配下に身を委ねてはならない。悪魔の力の現れには三つあり、これらは修道士たちの罪の堕落によって引き起こされる。第一は忘却、第二は怠惰、第三は情欲である。修道士に忘却が襲いかかると、怠惰が生まれ、そこから情欲が生じ、情欲によって人は堕ちてしまう。しかし、もし修道士が注意深く、神への畏れを持っているならば、彼には怠惰も邪な欲望も生じない。それゆえ、サタンはこのような者に対して無力であり、そのような人を罪に陥れることはできず、その人は神の恵みによって救われるのである」。

真の修道生活の良き模範を示した聖イリヤは、深き老齢のうちに主のもとへ帰った。

聖殉教者テオフィロスとエラディオスの記念日

記念日：1月8日

聖殉教者である助祭テオフィロスと平信徒エラディオスは、リビアで殉教した[805]。彼らは、私たちの主イエス・キリストを真の神であると恐れずに告白し、異教の偽りの神々を罵倒し、偶像崇拝者たちを非難したため、総督に捕らえられ、拷問にさらされた。キリストの聖なる殉教者たちは、まず残酷に鞭打たれ、次に鋭い陶器の破片で体を削り取られた。手足を縛られた後、処刑人たちは彼らの股間を火で焼いた。こうした拷問のたびに、拷問者たちは殉教者たちにキリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう強要したが、聖テオフィロスとエラディオスはキリストへの愛において揺るぎない姿勢を貫いた。不屈の姿勢を見せたため、拷問者たちは彼らを侮辱しながら地面を引きずり

---

[803] 304年。

[804] フィヴァイダ地方は、上エジプトの主要都市であるテーベにちなんでその名が付けられた。アンティノイアの町の近くには、多くの隠遁者の庵や修道院があった。

[805] リビア――エジプトの西、北アフリカに位置する地域。

回し、石で骨を砕いた。その後、この勇敢な殉教者たちは、自らのために苦難を耐え忍んだキリストから栄冠を授かった[806]。

聖エミリアン・殉教者の記念日

記念日：1月8日

キジケスの司教エミリアン[807]は、815年、皇帝レオン・アルメニア人の治世下で、聖像崇敬のために殉教した[808]。8月8日にも彼の記念日が祝われる。

1月22日

1月9日（旧暦）

聖殉教者ポリエウクトスの殉教

記念日：1月9日

ローマ皇帝デキウスとワレリアヌス[809]の時代、アルメニアの地[810]にあるメリティネという町に、ネアルコスとポリエクトという二人の尊敬される戦士が住んでいた。彼らは、実の兄弟の間でさえめったに見られないほどの互いへの愛を抱いており、それぞれが友を自らの命や息吹のように愛していた。　ネアルコスはキリスト教徒であり、信仰に堅固で、主の律法を忠実に守る者であった。一方、ポリエウクトスは異教徒であり、まだ真の信仰の光に照らされてはいなかった。しかし、彼はキリスト教の慣習に従って生活し、様々な美徳に励んでいたため、実りの多いオリーブの木と呼ぶにふさわしい人物であり、ただ神の教会に加わることを欠いていただけであった。　ネアルコスは彼をキリスト教の　信仰へと改宗させようと努め、しばしば聖書を読み聞かせ、唯一の真の神について語り、同時に偶像崇拝の虚しさと忌まわしさを指摘した。しかし、ポリエウクトにとって、神によって定められた回心と救いの時は、まだ訪れていなかった。　まもなく、市場や街頭では、不敬虔な王たちの神を冒涜する勅令が読み上げられるようになった。その勅令は、すべての人々に彼らの忌まわしい神々への礼拝を強要し、この命令に従わない者には様々な拷問や処刑を脅かす内容であった。　ネアルコスは、キリストの忠実な僕として、死に備え始めた。しかし同時に、彼は友人ポリエウクトスのことを案じ始めた。王の脅威を恐れてキリスト教徒になるだろうと期待していた彼が、結局は不信仰のままであり、それゆえに永遠の救いを失ってしまうのではないかと考えたからである。　このことを絶えず嘆き、友を待ち受ける破滅を嘆き悲しむうちに、ネアルコスは顔つきさえも変わり、その様子のすべてが心の動揺を物語っていた。　ポリエウクトスは、友人がこれほど動揺しているのを見て、その悲しみの理由を尋ねた。しかし、ネアルコスが何も語らなかったため、ポリエウクトスもまた、友人の深い悲しみに共感し、悲しみに沈んだ。ついに、ポリエウクトスはネアルコスに特に切実に尋ねた。

---

[806] これは4世紀初頭のことである。

[807] キジクは、小アジア北西部、マルマラ海の南岸に位置する都市である。

[808] レウ5世（アルメニア人）――ビザンツ皇帝――は813年から820年まで在位した。

[809] ローマ皇帝デキウスは249年から251年まで、ヴァレリアヌスは253年から259年まで在位した。

[810]　メリティナという都市は、ローマ皇帝トラヤヌス（98–117）によって建設された。これは、かつて小アルメニアの北部を構成していた小アジアのカッパドキア地方に位置していた、同名の国の主要都市である。

「私が何か君を傷つけたのか？　私の過ちは何だ？　友を許せないほど、私がどんな恐ろしいことをしたのだ？」

するとネアルコスは、涙を流し、心の底からため息をついて、こう言った。

「友よ、私たちの愛と親交が終わりを迎えなければならないと思うと、私は意気消沈し、魂の底から悲しみに暮れるのだ。」

これを聞いて、ポリエウクトスは深く悲しみ、こう言った。

「どうしてそんなことがあり得るのか、友よ？　なぜそんなあり得ないことを言うのか？　死さえもそれを断ち切ることのできないのに、なぜ私たちの愛が終わらなければならないのか？」

「親愛なる友よ」とネアルコスは答えた。「私たちの別れが、自然な死よりも辛いものになるだろうということが、私の魂の奥底まで重くのしかかっているのだ。」

ポリエウクトスは、ネアルコスが何を言っているのか理解できず、友人を強く抱きしめ、さらに切実に彼に尋ねた。

「教えてくれ、ネアルコス。この別れとは一体どういうことなのか、説明してくれ。もう君の沈黙には耐えられない。もし君が黙り続け、何も教えてくれないなら、すぐに私の死体を目の当たりにするだろう。」

すると、ネアルコスは彼にこう言った。

「最愛のポリエクトよ！　今や至る所で読み上げられている王の勅令が、我らをあなたと引き離すのだ。なぜなら、私はキリスト教の信仰に属し、あなたは異教の信仰に属しているからだ。そして、私が処刑される時、あなたは私を見捨て、私から離れていくことになるだろう。」

これを聞いて、賢明なポリエウクトスは、ネアルコスが何を望んでいるかを即座に理解し、神の恵みに照らされて、神聖な事柄について思いを巡らせた。彼は数日前に見た幻を思い出し、こう言った。

「恐れるな、愛する友ネアルコよ！　私たちはあなたと別れることはない。なぜなら、私は夢の中で、あなたが仕えるキリストを見かけたからだ。キリストは私のそばに近づき、私が着ていた服を脱がせて、金色のボタンが付いた、新しく、美しく、高価な別の服を着せてくださった。さらに、翼のある馬も与えてくださったのだ。

ネアルコスはこれを聞いて喜び、その幻視について、古い衣を脱ぎ捨てて新しい衣を身にまとうことは、人生がより良い方向へと変わることを示していると説明した。

「あなたには」と彼は言った、「異教の不義を捨て、真の信仰をもってキリストに身を包むことが待っている。そして、翼のある馬は、天への早急な移行を意味しているのだ。」

そして彼はこう言った。

「ほら、あなたはすでにキリスト、すなわち真の神を知ったのだ！」

ポリエウクトスは答えた。

「いつ私がキリストを知らなかったというのか？　あなたがキリストについて語ってくださった時、私の心は燃え上がらなかったか？　あなたが聖なる福音書を読み聞かせてくださった時、私はその言葉に驚嘆しなかったか？」　私に欠けていたのはキリスト教の名だけだった。心の中では、私はすでにキリスト教徒だったのだ。なぜなら、私は常に、虚しい偶像を捨てて、主キリストの僕となるにはどうすればよいかということばかり考えていたからである。さあ、ネアルコスよ、何をためらうのか？ 行動をもって、キリストへの献身を証明しよう！

ネアルコスはその言葉に心を打たれ、喜びに満たされた。しかし、友人が自分の財産や妻、子供たち、さらには自分の命さえも惜しむのではないかと恐れたため、彼はこの世の虚しさについて語り始め、目に見えない恵みや天の栄光を説き始めた。

「私にとって、ポリエクトよ」と彼は言った。「富も、名声も、軍人としての名誉も――この世のいかなるものも、キリスト・イエスにあって生きることに比べれば、それほど貴重でも、それほ

ど切望されるものでもない。私が望むのはそれだけだ。それ以外のすべては、私にとって取るに足らないものに思える。」

一方、ポリエウクトスは、まるで彼を試すかのように、こう言った。

「では、あなたは自分の軍人としての地位がもたらす名誉を大切に思わないのですか？」

ネアルコスは答えた。

「ポリエクトよ、あなたはまだ、主キリストが御自分のしもべたちのために用意してくださった真の名誉と栄光、そして絶え間ない至福を、まだ理解していないようだ。」

これに対し、ポリエウクトスは言った。

「あなたは、天のキリストのもとで私たちのために用意されている栄光、名誉、至福について、私が何も理解していないと思っているのか？　しかし、私はこの点においてあなたよりも先を行っていると思う。なぜなら、先ほど話したように、私はすでに幻の中で王のマントを受け取ったからだ。」　しかし、私があなたに尋ねたいのはこれだ。キリスト教の秘跡を受けずに、キリストのもとへ近づき、その戦士となることはできるのか?

「その点については疑う必要はない、忠実な友よ」とネアルコスは答えた。「*『神は、これらの石からでも、アブラハムの子らを興し出される』*（マタイ 3:9）。なぜなら、神は御自身に立ち返る者に対して、その憐れみの扉を誰に対しても閉ざされることはなく、後から御自身のぶどう園に来る者にも、一日中働いた者たちと同じ報酬をお与えになるからだ[811] 。 そうして、主は十字架に架けられた強盗に楽園の門を開き、短い信仰の告白に対して、他の人々が多くの労苦を費やして得たような報いを与えられたのである。

これを聞いて、ポリエウクトスは言った。

「まことに、真の神であるキリストに栄光あれ！この時から、私はこの世のあらゆる虚しさを捨て、キリストのしもべであることを公言し、主が命じられるままに仕える。さあ、私は行って、キリスト教徒たち、そして私の主であり神であるイエス・キリストに対して発布された王の勅令を読み上げよう。」

そう言い残して、ポリエウクトは広場へと向かい、王の勅令を読み上げた後、人々の前でそれに唾を吐きかけ、引き裂いた。　その後、人々がひれ伏していた偶像が神殿から運ばれてくるのを見て、彼はまずその異教の愚かさを嘲笑したが、やがて偶像に拝礼するふりをしながら、それらを一つずつ掴み、土器のように地面に叩きつけて粉砕し始めた。こうして彼は、計十二体の異教の神々を粉砕した。　ちょうどその時、ポリエウクトスの義父であるフェリックスがここにやって来た。彼は王たちからキリスト教徒を迫害するよう命じられていたのだ。ポリエウクトスによって自分たちの神々が破壊されたのを見て、彼は深く悲しみ、嘆きながらこう言った。

「ああ、悲しや！今や私は予期せず我が子らを失ってしまった。神も人も、このような行いをしたポリエウクトを容赦することはないだろうから。」

一方、ポリエウクトスは、魂のない偶像が破壊されたことを喜びながら、義父にこう言った。

「なぜ動揺しているのですか、父上？　今、私はあなたの神々がどれほど無力であるかをはっきりと示しました。もし他にもそのような神々がいたら、ここに連れて来させなさい。そうすれば、キリストの僕たちがそれらをいかに侮辱するか、あなた自身の目で確かめることになるでしょう。」

「我らの全能なる王たちは、そのような者たちを直ちに処刑するよう命じられた。お前はすでに死の淵に立っており、処刑が待っている――それ以外にあり得ない。王の命令を覆すことはできないからだ」とフェリクスは答えた。　しかし、私はあなたに多少の寛大さを示そう。家に帰って、妻や子供たちに別れを告げることは許そう。

[811] 主の「ぶどう園の労働者」のたとえ（マタイ20:1–16）を参照のこと。

「私がこの世のものを捨て、天のものを求め、永遠のことを考えているのに、どうして妻や子供たちのことを悲しむことができようか」と聖人は反論した。「もしお前の娘が私について来たいと望むなら、彼女は至福を得るだろう。もしそうでなければ、お前の神々と共に滅びるだろう。」

これを聞いて、フェリックスは義理の息子を思って泣き出し、彼にこう言った。

「ああ、哀れな私よ、愛する我が子ポリエクトよ！　お前までもが、キリストの魔法のような力に惑わされてしまったのか。」

聖ポリエクトはこれにこう答えた。

「キリストが私を真理の認識へと招かれたことは隠しません。御自身の神聖で全能なる右の手をもって、主は私を闇から光へ、死から生へと導き出し、迷いから正しい道へと向かわせ、御自身の軍勢の一員として加えるにふさわしい者と認めてくださいました。」

聖人がそう言うと、拷問者たちは彼を捕らえ、口を殴り始めたが、彼はそれを意に介さなかった。その時、彼の妻もやって来て、父であるフェリクスと共に彼のために泣き出した。聖人は義父にこう言った。

「ああ、邪悪な偶像に仕える最も不義な者よ！　なぜ、お前の涙や娘の涙で、私をキリストの信仰から離反させようとするのか？　なぜポリエウクトスのことを嘆くのか。お前はむしろ、自分自身、すなわち、この世の王たちに仕えることで、自らを永遠の火にさらしているという事実について、はるかに深く嘆くべきではないか？

一方、聖人の妻であるパヴリーナは、泣きじゃくりながら彼にこう言った。

「どうしてしまったの、私の最愛の夫ポリエウクトス？　何があなたを惑わして、私たちの十二の神々を打ち砕こうとしたの？」

すると聖人は微笑みながら彼女にこう言った。

「もし私一人であなたの十二の神々を打ち負かし、打ち砕いたのなら、あなたにはもはや助けを求める相手などいない。あなたには神々が残っていないのだから。私の言うことを聞いてくれ、パヴリーナ。天にまします唯一の真の神を知り、その神にひれ伏し、この世の命を永遠の命と取り替えなさい。」

聖人とその妻のこの会話を聞いていた、彼らの周りに立っていた多くの異教徒たちは、その言葉に心を打たれ、真理を知って魂が感動し、キリストへと立ち返った。　一方、市の裁判官たちとすべての評議員たちは集まり、聖ポリエウクトスを裁判にかけるよう要求し、時には甘言を、時には脅しを用いて、彼を再び偶像崇拝へと引き戻そうと試みた。しかし、彼らの試みが失敗に終わると、彼らは聖人に死刑判決を下し、剣による斬首を宣告した。

聖人は言葉に尽くせないほどの喜びをもって死へと向かい、付き添う民衆に、ある輝かしい若者と語り合っており、その若者が彼を力づけ、この世のすべてを忘れるよう命じていると語った。しかし、その若者は殉教者以外には誰にも見えなかった。　また、群衆の中に、真の神への信仰における友であり、信仰の父である至福のネアルコスを見かけると、彼は彼に向かって叫んだ。

「さようなら、愛する友よ。私たちの間で結ばれた愛の絆を忘れないでくれ！」

こう言い放つと、彼は剣の下に聖なる頭を差し出し、キリスト・イエスのために処刑され、自らの血で十字架の印を刻んだ[812]。

聖ポリエウクトスは、アルメニアの都市メリティネにおける最初の殉教者であり、その死は、戦いの教会を拡大し、勝利の教会を充実させることに寄与した。これは、両教会の頭であられるキリスト・神の栄光と誉れのためであり、父と聖霊と共に、キリスト・神に、限りない世々限りなく、あらゆる栄光と誉れが帰されるべきである。アーメン。

[812] それは295年のことだった。

聖フィリッポス、モスクワ都主教の記念日

記念日：1月9日

聖フィリッポス大主教は、[813]　、帝都モスクワにて、敬虔かつ高貴な両親のもと、名門ボヤール家であるコリチェフ家の出身として生まれた。父ステファンは、大公ヴァシリー・イオアンノヴィチの側近ボヤールの一人であった。　敬虔な母バルバラは、修道女となり、ヴァルソノフィアという名で生涯を閉じた。彼らの敬虔な生活と美徳の証しとして、神は彼らに恵みの実を授けられた。すなわち、彼らから祝福されたフィリッポが生まれ、聖なる洗礼においてテオドロスと名付けられたのである。　両親は彼をあらゆる点で敬虔に育て上げた。彼が少し成長すると、学問の修業に送り出され、彼は並外れた熱意をもって学業に励み、その一方で、子供の年齢にふさわしい遊びや娯楽を避けていた。こうして、テオドールは間もなく、あらゆる学問の知恵と、魂に有益な読書術を身につけた。両親は、彼のそのような善良な振る舞いを見て、 そのことを喜んだ。 しばらくして、フェオドールには乗馬を教えるために「少年たち」[814]　が付けられたが、彼はそれに全く熱心ではなく、乗馬よりも、聖人や高潔な人々の生涯が記された書物を読むことを好んだ。そしてそれを通じて、徳を磨くことを学んでいたのである。　その後、彼は武術の訓練も受けるようになったが、それでも彼の魂の敬虔な姿勢は変わらなかった。彼は同年代の若者たちや彼らの放埒な生活を避け続けたため、多くの人々が彼のそのような敬虔さに驚嘆した。

大公ヴァシーリー・イオアノヴィチの死後[815]　、王国の統治権は、その息子である全ロシア大公イオアン・ヴァシーリエヴィチ[816]　が引き継いだ。この頃、すでに成人していたフェオドールは、宮廷に招かれて皇帝に仕えることとなり、幼い大公イオアン・ヴァシーリエヴィチから愛と寵愛を勝ち取ることに成功した。　しかし、フェオドールが宮廷に仕えた期間は長くは続かなかった。彼が30歳に達したとき、彼を見守ってくださった神の特別な摂理により、聖体礼儀が執り行われている最中に教会に入る機会があった。そこで彼は福音書の言葉、*「だれも、ふたりの主人に仕えることはできない」*（マタイ6:24）を耳にした。この言葉に深く心を打たれた彼は、この言葉が自分自身にも当てはまると心に思い巡らし、世俗の生活を捨てようと決心した。ソロヴェツキー修道院[817]　を思い出し、そこで修道士たちが熱心に修行に励んでいることを知ると、彼はそこへ身を隠すことを決意した。聖遺物の前で祈りを捧げ、涙ながらに聖人たちの奇跡を起こす聖棺にひれ伏し、聖遺物に接した後、フェオドールは祈りを胸に旅立った。誰にも知られぬよう密かに王宮、祖国、そして家族を後にし、必要最低限の衣服だけを携えて[818]。 まず彼はヴェリキー・ノヴゴロドの境界内、オネガ湖[819]へとたどり着き、そこでヒジャフという集落の農家の家に身を寄せた。家主は彼の善良な人柄と謙虚さを見て、羊の世話を任せた。こうして神は彼に対し、言葉を持つ羊たちを世話する前に、まず言葉を持た

---

[813] 1507年2月11日。

[814]　「オトロキ」とは、古代ルーシにおいて、公爵の親衛隊の最年少の成員を指し、後に一般的には公爵の側近として信頼される家臣を指すようになった。彼らは、その多くが軍事の術にも精通しており、主君からの様々な命令を遂行していた。ボヤールたちにも、彼ら独自の「オトロキ」がいた。

[815] ヴァシーリー4世・イオアンノヴィチ――1505年から1533年までモスクワ大公を務めた。

[816] イオアン4世ヴァシリーヴィチ・グロズヌイ――1533年からモスクワ大公となり、1547年にツァーリの称号を授かり、1584年まで在位した。

[817] ソロヴェツキー第一級スタウロピギア修道院は、最北端の白海のソロヴェツキー島にあり、アルハンゲリスクから306ヴェルスタの距離にある。15世紀から存在し、創設当初から修道士たちの厳格な苦行生活で名声を博した。

[818] それは1537年の半ばのことだった。

[819] オネジ湖はロシア北部、オロネツ州に位置し、ラドガ湖に次いでヨーロッパで2番目に大きな湖である。

ない羊たちをしっかりと世話するよう定められたのである。　その間、両親はあちこちの町をくまなく探し回ったが、どこにも見つからず、彼を思って深く嘆いた。一方、敬虔な若者は、前述の集落でかなりの日数を過ごした後、そこからソロヴェツキー島へと旅立ち、ソロヴェツキー修道院のイグメンに迎え入れられ、修道院の務めに従事するよう命じられた。　彼は神への畏れを胸に、熱心さと謙虚さ、そして純粋な心をもって、命じられたことをすべて忠実に果たした。薪を割り、菜園の土を掘り起こし、石を運び、時には肩に汚物を担いで運び出し、その他にもさらに過酷な労働をこなした。何度か、一部の修道士たちから侮辱を受けたり、さらには殴打されたりすることもあったが、彼は決して怒ることはなく、喜びと謙遜をもってすべてを耐え忍び、彼が誰で、どこから来たのかを知る者は誰もいなかった。

こうして忍耐の試練を経たテオドールは、イグメンに修道士としての剃髪を求めた。彼はフィリッポという名で修道士として剃髪された。彼はイオンという名の経験豊富な修道士のもとで奉仕することになり、その修道士からあらゆる美徳を教え込まれた。

その後、修道院長は彼を厨房に送り、そこで彼は謙虚に兄弟たちのために働き、火をおこし、薪を割った。その務めを十分な期間務めた後、フィリッポスはそこから修道院の鍛冶場に移り、そこで怠ることなく薪や水を運ぶ労働に励んだ。

そして、鍛冶場で働く者たち全員から、その勤勉さを称賛された。そこで、名声を避けるため、彼は修道院を離れて荒野へと赴き、そこで心を神に向け、ひたすら祈りに専念した。　聖フィリッポスは、ソロヴェツキーの森にある荒野で長い間修行に励み、その後、再び修道院に戻って日々の務めに従事した。　イグメン・アレクシイは、彼が修道生活においてこれほど熱心に精進し、深い謙遜に満ちているのを見て、大いに喜び、彼を自分の側近として手元に置き、初級修道見習いたちの監督を任せた。　フィリッポスはこれらすべてを熱心に遂行し、修道院長からの祈りと祝福に支えられながら、この務めに九年間を費やした。その後、修道院長アレクシオス（　）は、老衰により修道院の運営を辞退し、兄弟たちの協議を経て、聖フィリッポスを修道院長に任命した（[820]）。 しかし、聖人は指導者の地位を受け入れたものの、以前の生活様式を少しも変えませんでした。それどころか、彼は修業をさらに励み、肉体的労苦に身を捧げましたが、そのことで称賛され、尊敬されているのを見ると、それを虚しいものと見なしました。というのも、彼は若き頃から謙遜の徳に恵まれていたからです。　そのため、彼は修道院長職を辞し、再び荒野へと退き、私たちの神であるキリストの尊い御体と御血の聖体拝領のためだけに修道院を訪れるようになった。修道院の運営は、以前の修道院長アレクシイが引き継いだが、彼はそれから一年半後にこの世を去った。そこで、修道士たちの願いにより、聖フィリッポスは再び修道院長職を引き受けた。　彼はさらに偉大な功績に身を捧げ、徳においてさらに高い境地に達した。一方、ソロヴェツキー修道院は彼の統治下で繁栄し、美しく整えられた[821]　。その間、聖フィリッポスの名声は、敬虔なツァーリ兼公ヨハン・ヴァシリエヴィチにも届い

[820] それは1548年のことでした。

[821] ソロヴェツキー修道院を18年間にわたり統括した間、イグメン・フィリッポスは修道院を全面的に改修し、 その中に「聖母マリアの被昇天」と「主の変容」の2つの石造りの教会を建立し、礼拝への招集に使われていた「ビル」や「クレパ」（金属製の板）の代わりに鐘を導入し、修道士たちのために2階建ておよび3階建ての修道室と病院を建設した； 修道院の主な収入源である塩田を増設・改良し、水車小屋を設置し、家畜小屋とトナカイの飼育を始め、運河で湖々をつなぎ、湿地を干拓し、森に伐開地を作り、道路を敷設した。　修道院長としての地位に就いたフィリッポは、再び大公イオアン・ヴァシリエヴィチにその名を知られ、彼の寵愛を勝ち取った。　ツァーリは、彼に様々なヴォロスティ、村、その他の領地に関する勅許状を授け、真珠で刺繍された豪華な祭服と、ソロヴェツキーの聖人ゾシマとサヴァティイの棺を覆う2枚の覆いを贈り、その後、プレオブラジェンスキー教会の建設のために1,000ルーブル、2つの鐘、 宝石と真珠をあしらった金製の十字架2つ、そして修道院の様々な特権を再確認するための新たな勅許状を送った。

た。 その頃、全ロシアの大主教アファナシーが職を退いた[822] 。ツァーリは、聖フィリッポをロシア大主教座に就かせたいと望み、そこで「霊的な助言」を求めて聖人をモスクワに呼び寄せた[823] 。 当時、正教徒たちは当初、平和と愛に満ちて暮らしていた。しかし、敵（悪魔）はこれを見て、古来より真理を憎んでいたため、激しい嵐を巻き起こし、正教徒たちの間に愛の代わりに互いへの憎しみを煽り立てた。宮廷のボヤールたちの間では、争い、激しい敵対関係、そしてあらゆる種類の悪意が互いに渦巻き始めた。 彼らの狡猾さと内紛は、皇帝自身の中に激しい怒りと憤りを呼び起こした。ボヤールたちによるそうした悪意ある讒言のせいで、皇帝は自らの忠実な家臣や近親者、友人さえも恐れるようになり、ボヤールたちを敵や反逆者と見なして、彼らに対して抑えきれない怒りを抱くようになった。 こうして彼は国を二分し、「オプリチニキ」と呼ばれる特別な近衛兵を組織した。彼らは王の側近として仕え、独自の統治機構を構成していた[824] 。オプリチニキは与えられた権力を濫用し、民衆を虐げ、財産を奪い、略奪に殺害や拷問を伴わせた。 一方、ツァーリは彼らの忠誠と献身を信じていたため、彼らを制圧する手立ては見つからなかった。この頃、ツァーリはソロヴェツキー修道院からフィリッポを召し出した。彼を丁重にもてなしたツァーリは、彼を大主教の座に就かせたいという自身の意向を伝えた。 フィリッポスは、その謙虚さゆえに、この高位を辞退しようとしたが、やがてツァーリの断固たる意向に屈せざるを得なくなり、[825] に大主教の座に就いた。当初はすべてが平穏で、ツァーリは聖人を敬い、彼に好意を抱いていた。 しかしその後、オプリチニクの残虐行為が極限に達すると、福者フィリッポスは、オプリチニクの暴挙を止めるよう王に懇願し、処刑について王自身を非難するようになった。 すると、ツァーリは聖人に激しい怒りを抱き、拷問や流刑で脅した。しかし、彼はダイヤモンドのように揺るぎない姿勢を保ち、ツァーリの脅しを意に介さず、 真実を語り続けることをやめなかった[826] 。嘆かわしいことに、聖職者の間にも、ただツァーリに気に入られようと努める裏切り者が現れた。 ノヴゴロドの大司教ピメンや、彼に同調する数名[827]

---

[822] アファナシーはモスクワおよび全ロシアの総主教であり、1564年から1566年まで総主教の座に就いていた。

[823] これは、フィリッポが最高聖職者の位に就くこと、そしてそれがツァーリの願いであり意志であることを意味していた。

[824] オプリチニキは、公爵、貴族、ボヤールの子息の中から選ばれた。彼らは、オプリチニナのために割り当てられた特別なヴォロストに自身の領地を持っており、彼らの維持のために特別な都市さえも割り当てられていた。オプリチニキには独自の権利と特権があった。 ロシアの他の地域は「ゼムシュチナ」と名付けられ、国家と国民の一般事務を管理するため、ゼムスキー・ボヤールたちの管轄下に置かれた。

[825] フィリップは高位の大司教の位を受け入れることを拒み、こう語った。「私の力を超える務めを引き受けることはできません。主の御名において、私を解放してください。なぜ、小さな舟に大きな重荷を背負わせるのですか？」 しかし、ツァーリが執拗に迫り続けたため、フィリッポスは、ツァーリの意志に従うが、その条件として、ロシアの地を苦しめているオプリチニナを廃止することだと宣言した。ヨハンは、自分に対して悪意を抱く者たちがいるため、オプリチニナはツァーリと王国にとって必要不可欠であると答えた。 聖フィリッポは、王がオプリチニナを廃止しなかったからといって、宮廷やオプリチニナの事柄に干渉したり、大主教座を去ったりせず、かつての大主教たちがそうしていたように、王と相談するよう説得された。 このようにして、聖フィリッポは、自らの良心に従って、無実の者たちが迫害されることを嘆き、福音の真理を語る自由と義務を守り抜いた。これは古くからロシアの聖人たちの特質であった。

[826] 聖フィリッポに対する敵意を、特に熱心に皇帝に煽ったのはオプリチニキたちであった。彼らは聖人を誹謗中傷し、大主教が皇帝が憎むボヤールたちの味方であり、彼らの道具となっているという確信を皇帝に植え付けた。 やがてオプリチニキたちの暴挙が激化し、ツァーリが微塵も改心せず、悪行や残虐な処刑を繰り返すようになると、聖人はツァーリへの秘密の諭しが不十分であると悟り、ツァーリとオプリチニキたちに対して、公然と、国民全体に向けた非難を繰り広げた。

[827] その中には、スーズダリの司教パフヌティイ、 リャザン司教フィロフェイ、そしてとりわけ、聖母受胎告知大聖堂の首席司祭エウスタフィイ――彼は皇帝の告解司祭であったが、フィリッポによって何らかの過失を理由に職務停止処分を受け、密かに、あるいは公然と、大司教に対する中傷的な言葉を絶えず皇帝に告発し続けていた。

は、王の顧問であるマリュータ・スクラトフ[828] やヴァシリー・グリアズヌイ[829] およびその同志たちと共に、聖人に対して様々な陰謀を企て、彼を座から引きずり下ろそうとし、王にその意図を貫くよう説得した。　しかし、ツァーリは単にフィリッポを大主教の座から追放するだけでは満足しなかった。その直後、虚偽の証人たちの告発を受けて、彼はスーズダリのパフヌティイ司教とヴァシリー・テムキン公をソロヴェツキー修道院へ派遣し、フィリッポの過去の生活実態を調査させた。　ソロヴェツキー修道院に到着すると、使節たちは王の意に沿うよう振る舞うようになった。ある修道士には諂いや賄賂で、別の修道士にはより高い霊的栄誉を約束して、また別の修道士には脅迫を用いて、聖人に対する非難を口にさせるよう説得した。　一方、フィリッポについて真実を語った誠実な長老たちには、激しい殴打を加え、聖人について不適切なことを話すよう命じた。しかし、彼らは敬虔に満ちており、こうした侮辱をすべて喜びをもって受け入れ、口を揃えてフィリッポについての真実を語り続けた。すなわち、修道院での彼の生活は、神にかなった清らかなものであったと。　しかし、王の使節たちはそれを聞く耳を持たず、必要なことを済ませるとモスクワへ戻った。その際、彼らはソロヴェツキー修道院のイグメン・パイシイを連れ帰った。彼には司教の位が約束されていたが、他にも聖フィリッポに対して偽証を行った誹謗者たちがいた。　直ちに、聖人に対する裁判を行うための公会議が招集された。ソロヴェツから到着した誹謗者たちは、彼らの偽証が記された巻物をツァーリに提出した。　皇帝は、フィリッポスに対する、自身の意にかなう書面による証言を耳にすると、それを公の場で読み上げるよう命じた。その後、偽証者たちは聖人に対して口頭で誹謗中傷を始めた。聖人は弁明することなく、自身の聖職の象徴をすべて脱ぎ始めた[830]　が、皇帝は裁判の判決を待つよう命じた。 翌日、聖フィリッポス大主教がウスペンスキー大聖堂で聖務を執り行っていた際[831] 、皇帝は自身のボヤリンであるアレクセイ・バスマノフを、多数のオプリチニクを率いてそこへ派遣した。大聖堂に入ると、バスマノフは民衆全員の耳に届くように、大主教の罷免に関する判決を読み上げるよう命じた。　その後、オプリチニキたちは野獣のように聖人に襲いかかり、聖職者の法衣を剥ぎ取り、粗末でボロボロの修道服を着せ、恥辱のうちに教会から追い出し、荷馬車に乗せてボゴヤヴレンスキー修道院へと連行し、その間ずっと罵声と暴行を浴びせ続けた[832] 。 その後、皇帝の命により、フィリッポスはトヴェリのオトロチ修道院へ流刑に処された[833] 。その際、聖人 は看守たちから多

---

[828] マリウタ・スクラトフ＝ベルスキー――ドゥーマの貴族であり、イオアン4世「恐怖のツァーリ」のお気に入りのオプリチニクで、その残虐さで知られ、恐怖のツァーリのほぼすべての悪行に加担した人物である。　マルユータ・スクラトフとその悪行の記憶は民謡に受け継がれ、その名さえも「悪党」の代名詞となった。

[829] ヴァシリー・グリアズニーは、イオアン4世「恐ろしい王」のお気に入りであり、信頼を寄せられたオプリチニクであった。

[830]　パイシイ大主教は、その厚かましい中傷に対し、ただ穏やかにこう言い返した。「わが子よ、蒔いた種は必ず刈り取ることになる」。　その後、ツァーリと参列者全員に向き直り、彼は死を全く恐れておらず、無実の殉教者として死ぬことを、ミトロポリトの位にありながら現在の恐怖と不法を黙って耐え忍ぶことよりも選ぶと宣言し、続いて白いクロブクとマントを脱ぎ始めた。

[831] それは1568年11月8日のことだった。

[832]　そこで聖フィリッポス大主教は、重くのしかかる足枷に縛られ、飢えに苛まれながら、悪臭漂う牢獄に丸一週間閉じ込められた。その後、彼は聖ニコラオス（奇跡行者）修道院、いわゆる「旧修道院」へと移送された。　聖フィリッポが受けた苦難だけでは満足せず、ツァーリは彼に仕えていたボヤールの子供たちをも拷問と処刑にさらした。彼の親族であるコリチェフ家からは、10人が次々と殺害された。 そのうちの1人、聖人が特に愛していたイワン・コリチェフの首を、ツァーリは聖人のいる牢獄に送り届けた。聖人はその首の前で地面にひれ伏し、祝福を授け、愛を込めてその首に口づけをしてから、持ってきた者に返した。

[833]　オトロチ・ウスペンスキー第二級修道院はトヴェリにあり、13世紀以前に創建された。聖人が投獄され、殉教した場所は、常に湿気と暗闇、そしてむっとした空気が支配する、じめじめとした陰鬱な地下室である。　17世紀に、この受難の聖人を記念して祭壇を設けようとした際、それは2階に設置されたが、1833年から34年にかけてようやく、地下に聖大

くの苦難を強いられた。聖人が監禁されてから約一年が経過し、看守たちによる様々な苦難に打ちひしがれていた。 その頃、ツァーリはノヴゴロド[834] へ旅をしてツヴェリに近づいた際、聖フィリッポのことを思い出し、前述のマリューター・スクラトフを彼のもとへ遣わした。マリューターは突然、聖人の独房に入ってきた。一方、聖人はその3日前に、傍らにいた者たちにこう語っていた。

「わが修業の終わりが近づいた」と語り、我らの神キリストの尊く命を与える聖体拝領を受けた。聖フィリッポの修道室に入ると、マリューター・スクラトフは偽りの敬虔さを装って聖人の足元にひれ伏し、こう言った。

「聖なる主よ、私が大ノヴゴロドへ向かうことを、皇帝に祝福してください。」

しかし、聖人はマリュタにこう答えた:

「好きにすればよい。だが、神の賜物は欺きによって得られるものではない。」すると、冷酷な悪党は、枕でその義人を窒息死させた。[835] 。

一方、聖フィリッポに反旗を翻した敵たちは、まもなく神の懲罰に遭った。ツァーリは、聖なる人物に対する自身の不当さと敵たちの狡猾さを悟り、彼らを各地の修道院へ流刑に処すよう命じ、また一部を処刑した[836] 。

イオアン・ヴァシリエヴィチ王の死後、ロシア王国の王位には、その息子である敬虔な王であり大公であるフェオドール・イオアンノヴィチが就いた[837] 。 彼の治世7年目、聖フィリッポの帰天から21年目に、ソロヴェツキー修道院のイグメン・ヤコフと修道士たちは、敬虔なツァリに対し、聖人の遺体をオトロチャ修道院からソロヴェツキー修道院へ移すよう懇願した。 王はこの願いを許可し、彼らは聖人の遺体を無傷の状態で発見した。その衣服さえも腐敗の兆しを見せず、聖人の聖遺物からは聖油が流れ出し、その香りで空気が満たされた。 修道士たちは聖フィリッポの遺体を敬意を込めて自らの修道院へ移し、聖人自身がそのために用意していたまさにその場所に埋葬した[838] 。 敬虔なるアレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝の治世中[839] 、聖フィリッポス大主教の朽ちることのない聖遺体は、ノヴゴロド大主教ニコーン[840] によって、ソロヴェツキー修道院から第一主教座であるモスク

殉教者バルバラに捧げる付属礼拝堂を建設することが可能となった。 この付属教会の祭壇は、かつて聖人の監禁場所があった床下の位置にある。大聖堂の北西の角、聖フィリッポの墓があった場所には礼拝堂が設けられている。大聖堂内には、聖フィリッポの聖遺骸箱があり、そこには聖人の肖像と聖遺物が収められている。

834 これはむしろ、グロズヌイによるノヴゴロドへの壊滅的な襲撃であり、同地の住民がポーランド王に降伏する用意があるという報告がツァーリに伝えられていたためであった。 6週間にわたり、ツァーリはノヴゴロドで凄惨な処刑を行い、それによって数千人のノヴゴロド市民や周辺の村人が命を落とした。市民、特に富裕層の住居だけでなく、すべての修道院や教会も略奪された。

835 それは1569年12月23日のことだった。

836 ノヴゴロドの大司教ピメンは、聖フィリッポの死去からわずか2週間後に司教座から追放され、極度の侮辱を受けた後、ヴェネフ修道院に幽閉され、そこでまもなく死去した。 ツァーリの寵臣マリューター・スクラトフは、その悪行の直後、トルジク近郊で捕虜となっていたクリミア人によって殺害され、ツァーリ自身もかろうじて死を免れた。 イグメン・パイシイはヴァラアム島に幽閉され、そこで息を引き取った。修道士ゾシマと、同じく聖フィリッポスを誹謗した他の10人の修道士たちは、各地の修道院に分散させられた。同様の神の懲罰が、聖人の他の敵たちにも下った。

837 フェオドール・イオアンノヴィチは1584年から1598年まで在位した。

838 それは1591年のことだった。聖フィリッポの遺体は当初、彼が建立した教会の玄関下に安置されていた。そこは、彼がソロヴェツキー修道院の院長であった頃、師である長老イオナの墓の隣に自ら墓穴を掘った場所であった。そして1646年、その遺体は教会堂の内部へと移された。

839 ツァーリ・アレクセイ・ミハイロヴィチは1645年から1676年まで在位した。

840 その後、全ロシアの著名な総主教となり、礼拝書や儀式を改訂した。

ワへと尊厳をもって移送され、ウスペンスキー大聖堂の新しい聖棺に安置され、今日に至るまで公開されたまま安置されている[841]。

私たちの神に栄光あれ、今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

聖エウストラティオスの記念日

記念日：1月9日

聖エウストラティオスは、タルシス地方[842]で、裕福で敬虔な両親、ゲオルギイとメゲファの間に生まれた。両親から善良な道徳を教えられて育った彼は、二十歳に達すると、神に仕えたいという強い願いに駆られ、両親のもとを離れてオリンポス山[843]にあるアウガロスの修道院へと駆け込んだ。そこでは、すでに彼の母方の二人の叔父、グリゴリーとヴァシリーが、すでに修道生活を通じてその高潔な生き方で名声を博していた。前者がその修道院のイグメンであった。彼らに受け入れられ、髪を剃ったエウストラティオスは、厳しい修道生活を送り始め、その謙虚さと柔和さゆえに皆から愛された。彼は世俗のことに全く関心を示さず、一着の羊毛の衣と、寝る時に使う羊皮の敷物以外には何も持っていなかった。彼には自分の独房も、自分のものと呼べる特別な場所さえなかったため、たいていはその場その場で、それもほんの少しだけ眠っていた。長老たちは彼について、出家したその日から、眠るときに体をまっすぐに伸ばすことはなく、また、75年にわたる修道生活の間、一度も左側を下にして横になったことはなかったと語っていた。彼が修道院でこのように修行に励んでいる間に、前述の尊い父たち――グリゴリーとヴァシリー――が他界し、兄弟たちの特別な懇願により、至福のエウストラティオスは修道院の運営を引き受けざるを得なくなった。しかし、そこで「獣」の名を冠した男、レフ・アルメニア人（[844]）が、ミハイル王に反旗を翻し、彼を王国から追放して、王の笏を不法に掌握してしまった。彼はすでに沈静化していた偶像破壊運動を再び煽ろうとしたため、すべての正教徒は迫害から逃れるべく、家や修道院を後にした。尊者イオアンニキオス大聖人の助言に従い、至福のエウストラティオスもまた修道院を離れ、不敬虔な王が殺害されるまで、山や荒野を放浪した。その王の死後、聖なる教会が再びイコンで飾られ、それらへの礼拝が行われるようになると、他の修道院長たちと共に自らの修道院に戻った者たちと共に、至福のエウストラティオスもアウガロフ修道院に戻り、以前と同様に怠ることなく修道院の務めに励み、兄弟たちと共に働いた。彼の口からは絶えず祈りが絶えず、礼拝の最中、聖なる祭壇に立っているときでさえ、彼は心の中で絶えず「主よ、憐れみたまえ！」と繰り返していた。

また、彼は多くの奇跡も成し遂げ、それらは疑いなく、彼の生活が神に喜ばれるものであったことを証ししていた。そして、この世を去る時が来ると、彼は兄弟たちを呼び集めて、こう言った。

「私の旅立ちの時が来ました。ですから、愛する子らよ、あなたがたが受け継いだ教えを守り続けてください。この世のすべての恵みははかないものであることを知ってください。それらは一時

---

841 聖フィリッポ大主教の聖遺骨の移送は1652年に行われた。この移送を記念する祝日は7月3日に定められている。さらに、聖フィリッポの記念日は、モスクワの聖人であるペトロ、アレクセイ、イオナの記念日とともに、10月5日にも祝われる。

842 ここでいうタルシウス地方とは、もちろんキリキア、すなわち小アジア南東部の州を指す。タルシウスという名称は、同地方の主要都市であるタルサに由来する。タルサは、同地方の南部、キドネ川のほとりの肥沃な平野に位置し、地中海に注ぐ河口からほど近い場所にあった。そこは大きく、人口の多い商業都市であり、その商業的な重要性は現在に至るまで保たれている。

843 オリンポス山は、小アジア北西部の州であるビフィニアに位置していた。この山には、数多くの様々な修道院が存在していた。

844 ビザンツ帝国の皇帝レウス5世アルメニア人（偶像破壊者）は、813年から820年まで在位した。

的なものですが、来世の恵みは永遠なのです。あなたがたもまた、救われる者たちの仲間入りができるよう努めてください。」

そう言うと、彼は祈りを捧げ、彼らに十字の印を施し、天を仰いでこう言った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます！」

そう言い残して、彼は主のもとで安らかな眠りについた。わずか九十五年の生涯を送った後、彼は永遠の命へと移り、聖人の列に加えられた。

聖預言者サメイの記念日

記念日 1月9日

神の聖なる預言者サメイは、ソロモンの治世中[845]、シロ[846]で生まれた。ソロモンの息子であり後継者であるロヴォアムの治世[847]において、ユダヤ王国は分裂した。ユダ族とベニヤミン族はロヴォアムに忠実であり続けたが、残りの十部族はナバトの息子エレボアムを王として認めた。そこでロボアムは、イエロアハムによって離反したイスラエルの部族を武力によって自らの支配下に戻そうと、大軍を召集した。すると、主は神の人サメヤに啓示を与えられた。

「ユダの王ソロモンの子ロバムと、ユダとベニヤミンの全家、およびその他の民に告げよ。主はこう言われる。『あなたがたの兄弟であるイスラエルの子らと戦って、戦いを起こしてはならない。それぞれ自分の家に戻れ。これはわたしによることだからである。』」

王と民は主の命令に従い、兄弟殺しの戦争は未然に防がれた（列王記下12:21–24；歴代誌下11:1–4）。

ロボアムの治世第五年、彼が主から背いたため、ユダ王国はエジプトの王スサキム[848]の侵攻を受けた。ファラオの膨大な軍勢はユダのすべての要塞を占領し、エルサレムに迫った。その時、預言者サメイが、敵から逃れて首都の城壁の中に身を隠していたロボアムとユダの諸侯たちのところへやって来て、彼らにこう告げた。

「主はこう言われる。あなたがたはわたしを見捨てた。それゆえ、わたしもあなたがたをスサキマの手に委ねる。」

これを聞いた王とユダの人々の指導者たちは、心を改め、こう言った。

「主は正しい。」

その後、神の人サメイに新たな啓示が与えられた。主は彼にこう言われた。

「彼らは悔い改めた。だから、わたしは彼らを滅ぼすことはせず、まもなく彼らを救い出す。また、わたしの怒りがスサキムの手によってエルサレムに注がれることはない。しかし、彼らは彼のしもべとなる。それは、わたしに仕えることと、地上の王国に仕えることとの違いを知るためである。」

預言の言葉は成就した。スサキムはエルサレムを荒廃させ、エジプトへ去り、ロボアムはさらに十二年間王位にあり、主の怒りは彼から離れた（歴代誌下 12）。聖なる預言者サメイによって、ロボアムの治世に関する記録も記された。

---

[845] キリスト降誕前の1020年から980年まで。

[846] シロは、パレスチナのエフレイムの部族の地にある都市であり、ここにはモーセが設けた証しの幕屋が建てられていた。

[847] キリスト降誕前980年から963年まで。

[848] スーサキム（エジプトの年代記ではシェションケ）は、第22王朝（ブバスティド朝）の初代ファラオであった。

聖ペトロ、セバスティアの司教の記念日

記念日：1月9日

聖ペトロはバシレイオス大帝の兄弟であり、両親の十人目の、そして末っ子であった。聖ペトロの教育には、姉のマクリナが深く関わった。彼女は彼に最も高尚な教育を与え、幼少の頃から神の御言葉の学習を通じて彼の知性を鍛えた。　マクリナの献身的な世話のおかげで、若きペトロは徳の高みに達し、兄であるグリゴリオス・ニッサスによれば、「その後の生涯において、徳の卓越性においてバシレイオス大主教に劣らなかったようだ」と評されている。　ペトロスが成人すると、ヴァシレイオスはカッパドキアのケサリアの司教となり、彼を長老に叙階した。　その後、聖ペトロはアルメニアのセバスティアの司教に任命された[849] 。司教として、彼は381年にコンスタンティノープルで開催された、マケドニウスに反対する第2回全地公会議[850] に出席した。4世紀末に死去した。

1月23日

1月10日（旧暦）

我らの聖なる父、ニッサの司教グリゴリオスの生涯

記念日1月10日

聖グリゴリオス・ニッサスは、聖バシレイオス大主教の実の弟であり、彼よりはるかに年下であった。これは、聖グリゴリオス・ニッサスが聖バシレイオス大主教を自身の師であり父であると称していることからも明らかである。聖グリゴリオスの生年については、不明である。　彼の幼少期の教育は、聖バシレイオスも教えたのと同じ敬虔な祖母マクリナが担当した[851] 。また、文法や修辞学の初歩的な指導は父親から受けた。12歳の時に父親が亡くなった後は、ケサリアの修辞学の師たちからさらに学びを深めた。　グリゴリウスがケサリアの異教の学校で得た知識は、その後、独学による学術的な研鑽と、聖ヴァシレイオス大聖人からの教えによって補完された。グリゴリウスは、自身の言葉によれば、聖ヴァシレイオス大聖人に多大な恩義を感じていた。　天賦の才と学問への勤勉さを兼ね備えていた聖グリゴリウスは、修辞学[852] や哲学[853] を成功裏に修め、世俗の演説家としての地位を目指して準備を進めていた。しかし、神の御心は異なり、当時、世俗的な活動や世俗の学問に傾倒していたグリゴリウスの心の中にも、まもなく変化が訪れた。　ある日、母の邸宅で、四十人の殉教

---

[849] アルメニアのセバスティアは、小アジアの北東部に位置していた。

[850] マケドニオスは、341年から360年にかけて、中断を挟みつつコンスタンティノープル総主教を務めた。彼は、聖霊について誤った教えを説いた異端の創始者であった。彼は聖霊を神として認めず、父と子の神性および栄光に参与しない被造物であると見なした。　381年の第2回全地公会議はこの異端を非難し、聖霊が真の神であるという正統的な教義を確立した。さらに、この公会議ではニカイア信条が改訂された。　そこに5つの新しい条項（8～12）を追加し、聖霊、教会、秘跡、死者の復活および来世への信仰に関する教義を盛り込むことで、公会議は、現在に至るまで保存されてきた形にこれを整えた。

[851] これに関する詳細、および聖グリゴリオス・ニッサスの両親については、1月1日の聖バシレイオス大主教の伝記を参照のこと。

[852] 修辞学――雄弁の規則を含む学問。

[853] 哲学（ギリシャ語から訳すと「知恵の愛」）――知恵の学問――は、人間の理性の探究に基づき、存在に関するより高次で抽象的な問題、すなわち存在の本質、神、世界と人間の起源および法則、人間の使命、そして世界の存在の究極の目的などについて扱う。

者の聖遺物の移送を記念する祝宴が開かれることになった。当時ケサリアで学んでいたグリゴリーも、この家族の祝宴に招かれた。　自分の学業から引き離されたこと、また祝宴が別の、より都合の良い時期まで延期されなかったことに不満を抱いていたグリゴリーは、庭で行われ、一晩中続いた礼拝の聖歌を無関心で、注意を払わずに聞いていた。そしてついに、自分のあずまやの一つに退き、眠りについた。　すると夢の中で、彼は庭に入ろうとするが、光に包まれた戦士たちが彼を通そうとせず、そのうちのひとりの取り成しのおかげで、かろうじて罰を免れることができた。　この恐ろしい夢はグリゴリーに強い印象を与え、彼は世俗的な活動や学問を捨てて、聖書や魂を救う書物の読誦に専念するようになり、やがて礼拝の集会で聖書を朗読する「アナグノスト」の務めを引き受けた。　しかし、そのような心構えは当初、グリゴリウスの心に長く根付くことはなかった。　キリスト教徒が修辞学や文法の指導者となることを禁じたユリアヌス・アポステート（[854]　）の死後、グリゴリウスは再び愛する活動へと立ち返り、修辞学の教師という道を自ら選んだ。これは友人たちの不満を招き、聖グリゴリウス・テオロゴス（[855] ）からは厳しい非難を浴びることとなった。 とはいえ、グリゴリウスが修辞家としての名声を追い求めたのは長くは続かなかった。まもなく、禁欲的な志向を持つ家族や友人たちの影響を受け、彼は全身全霊を信仰の典籍の研究に捧げるようになり、世俗を捨てて荒野へと退き、イリス川のほとりにバシレイオス大帝によって設立された修道院に身を寄せた。　その後まもなく、聖バシレイオスは、アリウス派の異端と戦うための忠実な助手としてグリゴリウスを必要とし、彼をニッサの司教に任命した[856]　。聖グリゴリウスは、真のキリストの羊飼いとして行動し、教会を立派に統率し、敵の陰謀から教会の平和を守った。　敬虔な妹テオズヴァは、彼の元でディアコニッサ（女性執事）を務め、教会の務めにおいて兄を大いに助けたため、後に彼女の死は彼にとって大きな損失となった。

ヴァレンティヌスの治世[857] 、聖グリゴリオス・ニッサスは、アリウス派の統治者たち[858] から不当な迫害を受けた。ポンテの総督[859] デモスフェンは、アンキラ[860] で、政府に服従する司教たちによる公会議を招集し、そこでグリゴリオスは教会財産の不正使用という虚偽の告発を受け、司教座を剥奪された。　デモスフェンの命令により、聖人は逮捕され、護送されてアンキラへ送られたが、その道中、兵士たちの粗暴な扱いにより多大な苦痛を強いられた。その後、彼は逃亡を決意し、護衛の目を逃れて安全な場所に身を隠した。　翌年、ニッサでポンテスとガラティアの司教たちによる新たな公会議が招集された。聖グリゴリウスは裁判に出頭せず、再び欠席裁判により罷免された。しかし、司教座を剥奪されても、グリゴリウスは手をこまねいてはいなかった。彼は正教を擁護し、正教徒

---

[854]　ユリアヌス・アポステート――ローマ皇帝。361年から363年まで在位した。キリスト教徒に対する公然たる迫害は行わなかったものの、キリスト教を根絶し、異教を復活させることを目指し、そのためにあらゆる手段を講じた。

[855]　聖グレゴリオス・テオロゴス（ナジアンゾス）――偉大な全教会の教師であり、聖バシレイオス大帝の友人兼同志。その記念日は1月25日に祝われる。

[856] それは372年の初めのことだった。ニッサは、カッパドキア（小アジアの広大な東部地域）の北西部にある都市である。

[857] ヴァレントは、ローマ帝国の東部を統治した皇帝であり、364年から378年まで在位した。

[858]　アリウス派の異端は、アレクサンドリアの長老アリウスにちなんで名付けられた。彼は、神の御子は父なる神から永遠に生まれ出たものではなく、時間の中で無から父によって創造されたものであり、父と同質でもなく、同等の栄光も持たないと説いた。この異端は、キリスト教全体を覆そうとする傾向にあった。

[859]　ポントスは、小アジア北東部に位置し、黒海沿岸にある地域であり、その名称も黒海に由来している（「ポントス」はギリシャ語で「海」を意味し、古代において黒海は「エウクシノス海」と呼ばれていた）。

[860]　アンキラは、ガラティア（小アジアの中央部に位置し、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアに囲まれた小アジアの小さな州）にある、非常に古くから繁栄してきた都市であり、現在はアンゴラと呼ばれているが、今なお小アジアで最も重要な商業都市の一つである。 375年には、アンキラで聖グリゴリウスを非難する公会議が開かれ、彼は追放された。

たちを慰めるために、各地を転々とした。　ヴァレンティヌスの死後、聖グリゴリウスは司教座に復帰し、信徒たちから熱狂的に迎えられた。その直後、彼は、師として深く愛し尊敬していた聖バシレイオス大主教[861] の死に心を痛めた。 一周忌には、彼を偲ぶ追悼の言葉を捧げ、師としての彼への感謝の念と敬意から、人間の記述が欠けており、他の人々がまだいくつかの未解決の疑問が解明されることを望んでいた『六日間の創造』の記述を完成させた。同年、聖グリゴリオス・ニッサスはアンティオキア公会議[862] に参加した。 この公会議では、信仰の分野に精通した人物をアラビアとパレスチナの教会を視察するために派遣することが決定された。これらの地域では、聖母マリアの無原罪の処女性を崇敬しないアンティコマリアン派や、聖母マリアを神格として崇めるコリリディアン派といった異端によって、信仰が冒涜されていたからである。　平和と信仰を確立するため、聖グリゴリオスが選ばれた。この旅に出発する前に、彼は姉である至福のマクリナを訪ねた[863]　。彼女の葬儀の後、彼はアラビアにおいてアンティオキア公会議で与えられた任務を無事に果たしたが、　しかし、敬虔な喜びをもって聖地を巡礼したエルサレムでは、委ねられた任務のすべてを遂行することができず、そこでも罪や迷いが人々の心の中で強固な支持を得ていることを、悲しみを込めて記した。　その間、聖グリゴリオスが不在の間に、彼の教区には再びアリウス派の教えが持ち込まれ、帰国後にようやく辛うじてこれを打ち砕くことができた。同時に、彼は、亡くなった司教の後継者が異端者になることを恐れた住民たちの要請に応じて、イヴォラとセバスティアの司教選出[864] に参加した。 テオドシウス大帝の治世[865] に、異端者マケドニウス[866] に対抗してコンスタンティノープルで第2回全地公会議が招集された際、聖グリゴリオス・ニッサスは他の聖なる教父たちと共にその場に臨み、敬虔の擁護者として、神の聖書に基づく真理の力によって反対者たちに異議を唱え、彼らを恥じ入らせた。　この公会議において、聖グリゴリオスの尽力により、ニカイア信条に聖霊に関する条項が追加され、さらに第9、第10、第11、第12条項も信条に付加された。概して、グリゴリオス・ニッサスは公会議の主要な指導者の一人であった。

他の司教たちと共に、彼は聖グリゴリオス・テオロゴスの承認にも関与し、彼と至福のヒエロニムスに、エウノミオスに対する自身の著作『[867] 』を読み聞かせた。 聖グレゴリオス・テオロゴスに対して、　の異端的な偽教義に染まっていた、あるいは異端者に好意的であった一部の聖職者たちから激しい闘争が巻き起こり、その結果、彼がコンスタンティノープルの主教座を去らざるを得なくなった際、　――聖グリゴリオス・ニッサスは、他の多くの人々と共に、あらゆる手段を尽くしてこの敵対関係を解消しようと努めたが、それを成し遂げることができなかったため、聖グリゴリオス・テオロゴスの後継者として、洗礼志願者の中から選出されたネクタリオス[868]　に対し、信仰と新たな召命について助言を与えた。　コンスタンティノープル滞在中、聖グリゴリオス・ニッサスは二つの

---

[861] 379年、

[862] アンティオキア公会議は379年に開かれた。

[863]　聖人が死の床にある敬虔な妹と交わした会話の成果として、後にグリゴリウスは「魂」と「復活」に関する著作を著した。

[864] イヴォラとセバスティアは、カッパドキアの都市である。

[865]　テオドシウス大帝――ローマ皇帝――は379年から395年まで在位し、キリスト教の熱心な庇護者であり、異端者に対する正教の擁護者であった。

[866] 第2回コンスタンティノープル公会議は381年に開催された。

[867] エウノミオスは、4世紀後半の異端の首謀者であり、アリウス派の過激な代表者であった。

[868]　聖ネクタリオスは、428年から431年までコンスタンティノープル総主教座を統括した。彼の記念日は「乳製品を摂る土曜日」に祝われる。

説教を行った。一つは聖グリゴリオス・テオロゴスが首都の司教に選出された際のもので、もう一つはメレティオスの葬儀における追悼説教であった。

第2回全地公会議の直後、グレゴリオスは教会の混乱を収拾し、正統信仰を確立するために、ある教会から別の教会へと移らざるを得なかった。というのも、第2回全地公会議において、彼はポンテ地方の正統信仰を守る3人の大牧者の一人として指名されていたからである。 383年、聖グリゴリオス・ニッサスはコンスタンティノープルで開催された公会議に出席し、そこで御子と聖霊の神性について説教を行った。 386年、彼は再びコンスタンティノープルを訪れ、そこで著名な演説家として、万人に愛された皇后プラキッラの棺の前で説教を行うよう依頼された[869] 。394年、彼は再びコンスタンティノープルで、アラビアの教会問題の解決のために招集された公会議に出席した[870] 。

聖グリゴリウスは、忠実かつ真摯な牧者として、自らの信徒たちを信仰と敬虔さにおいて熱心に導いた。時には、数日間連続で説教を行うこともあった。 同時に、彼は裁判官の前で不幸な人々の代弁者であり擁護者でもあり、貧しい人々への憐れみ、忍耐、平和を愛する心、そして率直さによって際立っていた。高齢に達した聖グリゴリウスは、主のもとで安らかに息を引き取った[871] 。そして、聖なる教会にとって有益かつ貴重な多くの著作を残した[872] 。

コンダク、第2声調:

教会の神聖なる司教であり、知恵の誠実な秘言者、ニシスの明晰な知性を備えたグリゴリイは、天使たちと共に喜び、神の光を享受しつつ、私たちすべてのために絶えず祈りを捧げておられます。

---

[869] プラキッラは、テオドシウス大帝の妃であり、敬虔なキリスト教徒として知られ、キリスト教的な慈善活動で際立っていた。ギリシャ正教会では、9月14日に彼女の記念日が祝われる。

[870] 394年のコンスタンティノープル地方公会議は、ネクタリオス総主教の主導のもと、同じ主教座（アラビアのボツラ）を巡って対立していた二人の司教（アガピオスとバガディオス）間の紛争を解決するために招集された。

[871] 聖グリゴリオス・ニッサスは、4世紀末、394年のコンスタンティノープル公会議の直後に逝去した。

[872] 聖グリゴリオス・ニッサスは、数多くの著作を残しており、それらにおいて彼は、時には霊的な雄弁家として、時には異端を糾弾する教義学者として、時には聖書の解釈者として、また時には道徳の教師として登場している。 彼の雄弁な才能は、アンティオキアのメレティオス、バシレイオス大聖人、聖マクリナ、殉教者テオドロス・ティロンへの追悼演説、洗礼、復活祭（5つの説教）、キリストの昇天、ペンテコステ、主の奉献祭における説教に見られる。 聖グリゴリオスの教義に関する著作の中で最も優れたものは、『エウノミオスに対する12の論駁』と、『カテキズム』である。後者は、異教徒やユダヤ人の改宗に際してどのように行動すべきか、また異端者を論破する際にはどうすべきかについての指針をまとめたものである。 エウノミオスに対する著作において、その教義を反駁する中で、グリゴリウスは神の御子の神性を立証し、同時に聖三位一体に関するキリスト教の教義全体についても一部解説している。この聖三位一体の教義、とりわけ聖霊の神性について、聖グリゴリウスは、同時代の誤った見解から守るため、次のような多くの他の著作を通じて擁護した。 マケドニウス派に対する『聖霊に関する説教』、御子と聖霊の神性に関する説教、シンプリキウスへの『信仰に関する書簡』、アヴラリウスへの『神は三体ではない』という書簡、ギリシャ人への書簡、アリウスおよびサヴェリウスに対する説教などである。 さらに、聖グレゴリオスの教義に関する著作には『六日論』があり、そこでは、聖バシレイオス大主教が『六日論』の中で未解決のまま残した、世界に関する高尚な問題について論じているほか、『マニ教徒に対する論駁』、 「人間の創造」に関する論考、研究『洗礼を受けずに亡くなった子供たちについて』、および『魂と復活について』という著作がある。聖書の解説として、聖グリゴリウスは考察の形式でいくつかの著作を執筆した。すなわち、『コヘレトの書』第3章に関する8つの対話、 『雅歌』に関する15の講話、詩篇の題名に関する2つの考察と第6詩篇に関する講話、主の祈りに関する5つの講話、八福の八つの戒めに関する8つの講話。 道徳的・禁欲的な著作には、キリスト教の完全性、神にかなう人生の目的、真の修道生活、貞潔、貧しい人々への愛などに関する3つの論考が含まれる。さらに、聖グリゴリオスからは最大28通の手紙が残されている。

別のコンダク、第1声：

聖なる方よ、心の目で目を覚ましておられ、世に倹約な羊飼いの姿を示され、御自身の知恵の杖と温かい執り成しによって、狼のような悪名高い者たちをすべて追い払い、群れを無傷で守り抜かれた、全知のグリゴリイよ。

メリティノの主教、聖ドメティアンの記念日。

記念日：1月10日

聖ドメティアヌスは、ユスティヌス2世の治世[873] に、敬虔で裕福な両親、テオドールとエウドキアの間に生まれた。 学業を終えると結婚しましたが、間もなく妻がこの世を去ると、彼は霊的な知恵を求める性向と神への愛から、直ちに世俗を離れ、断食の生活を送りました。 その後、神の御心により、30歳の時にメリティン教会の主教に任命された[874] 。彼は自らの羊の群れにとって良き牧者であっただけでなく、他の民族にとっても導きの光であり助け手であり、公共の福祉に尽力する者として、ギリシャ王国全体に多大な恩恵をもたらした。 聖人は、マウリキオス王[875] によって、国家統治の務めのため、何度もペルシア[876] へ派遣され、ペルシア王ホズロイの面前で仲介役を務め、ギリシャ人とペルシア人の間の和平条約の締結に貢献した。 また、ホズロイ[877] に反旗を翻し、ペルシアの王位を大胆にも狙ったあるヴァラム公を、彼は権力から追放し、ギリシャ人の属国とした。 これにより、ドメティアヌスはマウリキオス帝の寵愛を受ける友となった。帝は彼に大量の金と領地を賜ったが、彼はこれらすべてを聖なる教会や、貧しい人々の糧となるための施し屋に施した。帝都コンスタンティノープルに到着後、彼はまもなく安らかに天の御王のもとへ旅立った[878] 。 その尊い遺体は、皇帝とその参謀団、そして多数の聖職者たちが参列する中、大いなる栄誉をもって埋葬され、故郷の都市メリティナへと移送された。聖ドメティアヌスは、生前も、また天に召された後も、私たちの神キリストの栄光のために多くの奇跡を成し遂げた。

聖マルキアノスの生涯

記念日：1月10日

マルキアヌスとプルケリアの治世において、古ローマ[879] 出身の、徳高き人物である至福のマルキアヌスが、その美徳によって名声を博した。彼の両親は敬虔で高貴、かつ裕福な人々であった。彼らが古代ローマから新ローマへ移住した際、息子マルキアヌスも連れて行った。彼は熱心に学問に励み、善良な品性を身につけていた。 彼は *「神の家の戸口に立つこと」*[880] （詩篇83:11）を愛し、教

---

[873] ユスティヌス2世（若きユスティヌス）は、ビザンツ帝国の皇帝であり、565年から578年まで在位した。

[874] メリティナ（別名メリテネまたはメリタ）は、小アルメニアの首都である。

[875] マウリキウスは、582年から602年まで在位したビザンツ帝国の皇帝である。

[876] この国はアジアに位置し、ペルシャ湾の近くにある。 当初、この国は近隣の諸民族に交互に支配されていたが、ササン朝（西暦226年から7世紀まで）の即位に伴い、ペルシア人は政治的に独立した民族となり、ギリシャ・ローマ帝国と頻繁に戦争を繰り広げた。聖ドメティアヌスの活動もこの時期に属する。

[877] ここでいうのは、590年から628年まで在位したペルシャ王ホズロー2世のことである。

[878] 聖ドメティアヌスは601年に帰天した。

[879] ここで指しているのは、ギリシャ・ローマ帝国および現在のイタリア王国の首都である。このローマは「古代」ローマと呼ばれている——聖コンスタンティヌス大帝が首都としたコンスタンティノープルとは対照的であり、そのため後世、この都市は「新」ローマと呼ばれるようになった。

[880] つまり、神の宮を訪れ、そこに留まることを好んだのである。

会の礼拝に欠かさず出席していたため、　当時の総主教は彼を気に入り、自身の聖職者に任命した[881]。　しばらくして、彼は年齢こそ若いが、知恵と清らかな生活においては年長者であることに気づいた。というのも、*「知恵は人にとって白髪であり、汚れなき生活は老いの年である」*（箴言4:9）[882]からであり、彼を長老の位にふさわしいと認め、その後、大教会の会計係[883]に任命した[884]。 両親がこの世を去ったとき、至福のマルキアヌスには多くの財産が残された。彼は一人っ子であったため、両親の全財産は彼一人に相続されたのである。　彼はこの富を世俗的な必要のために費やすことはせず、すべてを神に捧げました。貧しい人々に施しを行い、老朽化した主の聖堂を修復し、新しい聖堂を建設して装飾したのです。彼は多大な費用をかけて、聖殉教者アナスタシアに捧げる美しく新しい教会を建立しました。　ある時、友人の一人が、この教会の建設と装飾にこれほど多くの金を費やすことに驚きを表明すると、聖人は彼にこう言った。

「もしあなたに娘がいて、彼女を何らかの高貴な人物に嫁がせたいと思ったなら、彼女を宝石で飾るために多額の金を費やさないだろうか？」　それゆえ、今や、*「人の子らよりも美しい方」*（詩編44:3）[885]と婚約し、その方のために自らの血を流した、キリストの最も美しい花嫁のために教会を築こうと決意した以上、私が自分の財産を惜しむことなどあるだろうか。ましてや、そのような装飾に心を配らないはずがないではないか。

このように、聖なる教会の美しさのために惜しみなく、快く施しを行う人こそが、この至福の聖人であった。しかし、自分自身に対しては倹約家で、容赦のない人であった。衣服の装飾を完全に拒み、粗末な衣を身にまとうだけでなく、時にはその粗末で必要不可欠な衣服さえも脱ぎ捨て、それを求める人々に与えていた。その様子は、以下の話からうかがうことができる。　聖アナスタシア教会が建設され、あらゆる栄華をもって装飾されると、その奉献式は、かつて彼女がかつてキリストのために苦難の末に殉教した日である、12月22日、すなわちこの殉教者の記念日に執り行われた。　至聖なるゲナディウス総主教は聖職者一同を率い、皇帝はシンクリトス（宮廷高官）および民衆を率いて、この教会へと厳粛な行列を組み、聖殉教者アナスタシアの聖遺骨を、小さくて老朽化した教会から、マルキアヌスが建立した新しく大きな教会へと移送した。　この行列の最中、尊者マルキアヌスが他の司祭たちと共に、フェロン[886]　を身にまとい、聖人の遺骨が載せられた馬車の前を歩いていたところ、ある貧しい男が近づいてきて、彼に施しを求めた。　聖マルキアヌスは、身に着けている服一着以外には何も持っておらず（生涯を通じて、着替え用の服を二着すら所有したことはなかった）、その乞食を何も与えずに帰すことを望まなかったため、人目につかないように一行から離れ、人目につかない場所へと向かった。　服を脱いでその乞食に与え、裸の体にフェロンだけをまとったまま、主の御言葉「*あなたに求める者には与えなさい*」（マタイ5:42）に従って行いを成し遂げた。自分

---

[881] 「クリリック」とは、ギリシャ語で「（神の）遺産」を意味する「クリル」に由来する。 古来より、教会の階層制度や、教会での奉仕において様々な下位の役職（聖歌隊員、朗読者など）に就く者たちを総称してこう呼ばれてきた。なぜなら、これらすべての人々は、神への特別かつ直接的な奉仕に身を捧げた者たちだからである。

[882] この表現の意味は、人間の真の（霊的な）年齢は、生きた年数によってではなく、到達した知恵の程度と、道徳的に清らかな生き方によって決まるということです。　どちらの点においても、若いうちに高い完成度に達することもあれば、逆に、白髪交じりの老齢であっても、子供のような無分別さや極めて未熟な道徳性を併せ持つこともある。

[883] 教会における「イコノモス」という役職は、4世紀に教会の財産が増大するにつれて登場した。第4回全地公会議の第26条では、この役職について、すでに古くから存在していたものとして言及している。　イコノムの職務には、司教の監督の下、教会の財産（特に不動産）および教会運営の管理が含まれていた。この役職には、長老や助祭、さらには聖職位を持たない聖職者であっても、その誠実さと有能さが認められれば選出されることがあった。

[884] すなわち、コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂のことである。

[885] すなわち、人間の子らの中で最も尊い（さらに）キリストのことである。

[886] フェロニウとは、古代において、キリストや使徒たちが身に着けていたもの（IIテモテ4:13）と同様に、体をあらゆる方向から覆う、袖のない長い上着を指す。そのため、教会はこれを聖職者の祭服の一つとして採用した。　なお、ロシアでは聖務を行う際の利便性を考慮して、その前部が切り取られているが、ギリシャでは現在もなお古代の形態が保たれており、聖マルキアヌスは、礼拝中に手を使う必要が生じるまで、この衣で身体の裸身を完全に覆うことができた。

の列に戻ると、彼は以前と同様に長老たちの間を歩いたが、彼がそうしたことについては誰も知らなかった。皆が教会に入り、聖別式を執り行い、聖殉教者アナスタシアの聖遺骨を敬意を込めて安置すると、至聖なる総主教は、マルキアヌス聖人にも自分と共に神聖な典礼を執り行うよう命じた。　手の清めの時が近づくと、マルキアヌスはフェロニアで身を覆い、誰にも裸であるのを見られないよう周囲をきょろきょろと見回した。そこにいた司祭や助祭たちは彼を見ると、フェロニアの下に、王の貴重なポルフィラのように金に輝く、 ある驚くべき衣があるのを見た。 これに対し、ある者は驚き、またある者は憤り、心の中で「長老がそのような衣装を着て歩き回り、聖体礼儀を執り行うべきではない」と呟いた。とりわけ、神が御自分のしもべの裸身を覆われたこの驚くべき衣装は、彼が至聖にして命を与える聖体聖血を拝領しようとしたとき、すべての人の目に明らかになった。　ある司祭たちが、このことを至聖なるゲナディオス総主教に報告した。

総主教はこう言った。

「私も、あなたがたが言うのと同じ光景を目にした。」

礼拝が終わると、彼は聖マルキアノスを聖器室（[887]）に呼び寄せ、こう叱責し始めた。

「兄弟よ、何をしているのか。慣例を超えた衣装を身にまとっているのか。司祭というよりむしろ王にふさわしいようなその衣装で、聖体礼儀を執り行うのは果たして良いことなのか。」

聖人は謙虚に彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「お許しください、大主教様。私はおっしゃるようなことはしておりません。私は若い頃から、美しく高価な服を着ることに慣れていないのです。今さらそんな服を着るはずがありません。」

「我々は皆、あなたが王の衣装を身にまとっているのを見た。なぜ否定するのですか？」と総主教は彼に言い、彼を立ち上がらせるよう命じた。

フェロンを開くと、彼らは彼の裸の体を目にし、驚いた。総主教の問いかけに対し、聖人は本意に反して、キリストのために最後の衣服を物乞いに与えたことなど、あったことをすべて率直に語らざるを得なかった。　これを聞き、また彼のフェロンの中に王の衣装があるのを見た者たちは皆、神を愛する者たちにこのような秘められた恵みを与える神を賛美した。それ以来、彼の慈悲に満ちた生涯は多くの人々に知られるようになった。

この聖人は、自発的な貧しさをこれほどまでに耐え忍び、財産を軽んじていたため、ある時、雨の中を歩き回って服を濡らしてしまった際、自分の部屋に戻って扉に鍵をかけ、炭に火をつけてその濡れた服を乾かし始めた。というのも、普段着る別の服を持っていなかったからである。　その頃、総主教はいくつかの用事で執事を呼び出す必要が生じた。使いがマルキアノを呼びに行くと、彼の部屋は鍵がかかっており、外から「早く総主教のもとへ来い」と呼びかけた。彼は行くことを約束したが、服がまだ乾いていなかったため、現れなかった。　そのうちのひとりが覗き穴から中を覗くと、彼が炭火の上で服を乾かしているのを見て、一緒にいた者たちにそのことを告げた。彼らは戻ると、そのことを総主教に報告した。

「これを不思議に思うな」と総主教は言った。「マルキアヌスは若き頃から自発的な貧しさと謙遜を学び、唯一の神に全身全霊を捧げてきた。彼は実際に使徒の言葉を実践しているのだ。『衣食あれば、それだけで満足せよ』（テモテへの手紙I 6:8）。」

これを聞いた者たちは、そのようなしもべたちを擁する神を賛美した。そのような徳高い生活に対して、神は彼に奇跡を行う賜物――悪霊を追い出し、病人を癒やす力――を与えられた。　ある日、聖アナスタシア教会で祝祭が行われ、大勢の人が集まっていたとき、ある妊婦が、教会内の混雑を避けて教会の屋根に登ったが、誤ってそこから地面に転落し、亡くなってしまった。　聖マルキアンは、祝祭が泣き声によって暗く覆われるのを見るに耐えられず、両手を天に掲げて神に熱心に祈っ

[887] 予備の聖器や聖衣が保管されていた部屋。

た。すると、その女性は突然生き返り、健やかに立ち上がった。また、彼女の胎内に宿っていた胎児も無事であった。人々は、この輝かしい奇跡に驚嘆した。

ある日、コンスタンティノープルで大火災が発生し、炎がすでに聖アナスタシア教会を取り囲んだとき、聖マルキアヌスは教会の屋根に登り、天に向かって両手を挙げて祈りを捧げた。　するとたちまち、火は引き返し、その抑えきれない炎を食い止め、聖人の祈りによって、まるで大水のように、火は完全に消し止められ、教会の建物には何の損傷も与えられませんでした。

聖マルキアヌスは、海辺にある、かつて聖イリナに捧げられた古びてすでに崩れかけていた教会があった場所に、彼女と別の殉教者である聖イリナに捧げる教会を建立し、さらにその近くにあった聖テオドロスと聖イシドールの教会も改修し、必要なものをすべて備えさせた。　高齢に達し、安らかな最期を迎える前、彼は夜な夜な街を歩き回り、死体を見つけた場所では、その遺体を洗い清め、衣服を着せてあげた。その際、彼は死者にこう語りかけた。

「立ちなさい、兄弟よ、口づけをしよう！」

死者は聖人の言葉に従って起き上がり、彼の唇に口づけをすると、再び眠りについた。　聖人は多くの娼婦たちを救った。時には諭し、時には惜しみない援助をもって、彼女たちに夫を選び、律法に従って生きるよう導いた。また、貧困の影響でそのような生活に身を任せていた者たちについては、前述の父の財産から密かに与え、保障することで、貞潔な生活へと導いた。　この祝福された人物を、神は御自身のものとして迎え入れ、天使たちは彼を称え、聖人たちは彼を敬い、王たちは彼の前で畏敬の念を抱き、民衆は彼に驚き、彼を通して神を賛美した。一方、悪霊たちは彼を恐れ、彼を避けた。聖マルキアヌスは、聖イリナに捧げられた教会の完成と奉献に先立って、この世を去った。臨終の際、彼はこう語った。

「主よ！　この二者を御手に委ねます。御自身が創造された私の魂と、御心に従って私が築いた教会とを。」

聖マルキアノスの遺体は、聖ヨハネ・洗礼者修道院（ダニイル修道院とも呼ばれる）に、聖殉教者モキアの教会の近くで、栄光のうちに埋葬された。　また、聖イリナ教会の建設を完成させたのは、マルキアヌスとプルケリアの死後に即位したレウス大帝[888]　の妃である敬虔なヴェリナ皇后であった。　彼女は教会を完成させ、屋根を金で飾り、内部をあらゆる豪華さで装飾した。これは、尊者マルキアヌスの記憶を偲び、父と聖霊と共に永遠に栄光あるキリスト・神ご自身を称えるためである。アーメン。

聖パウロ・コメルスキーの記念日。

記念日：1月10日

聖パウロは、栄光に満ちた都モスクワで生まれ、育った[889]。　両親は彼を結婚させようとしたが、聖パウロはそれを望まず、密かに実家を後にし、何も持たずに、プリルクと呼ばれる地へと向かった。そこは、ラドネジの奇跡行者である聖セルギイによって設立された「命の源なる三位一体」修道院[890]　の領地内にあった。　ここで、主なる神であり、我らの救い主イエス・キリストの降誕を称え

888　レウ1世（大帝）は474年に死去した。伝記によれば、ヴェリーナは夫の存命中に教会の建設を完了しており、また前述の聖マルキアンの祈りによる火災の鎮火は471年とされていることから、聖人の死は471年から474年の間であったと推定される。

889 1367年頃

890 現在のトロイツェ＝セルギエフ修道院。

る修道院[891] において、この祝福された若者は修道士の剃髪を受けました。ここで短期間過ごした後、聖パウロは聖セルギイの修道院に移り、そこで偉大な長老の霊的指導の下、15年間、隠遁者の独房[892] で暮らしました。 その後、聖パウロは尊者セルギイに、荒野へ退き、場所を転々としながら完全な孤独の中で暮らすことを許されるよう、祝福を請いました。

その後、この至福の修行者は、ベロエ湖にある聖キリルが設立した「至聖なる聖母マリアの被昇天修道院」[893] へと向かった。聖キリルのもとで、聖パウロはしばらくの間、人里離れた独房で暮らしたが、その後再び荒野へと去り、オドロル川へと向かった。 そこで短期間の隠遁生活を送った後、聖パウロはガリチ地方にある「至聖なる聖母マリアの大修道院」[894] へと赴き、隠遁者の小部屋に身を寄せたが、修道院の院長によってそこから追放され、ヴォルガ川沿いのゴロデツ（ ）へと移り、そこでフェオドロフスキー修道院[895] に滞在した。 その後、様々な荒野で人里離れた生活を送りながら修道者の修行に励み、やがてコメルスキーの森[896] にたどり着いた。

ここで、グリアゾヴィツァ川のほとりに、尊者（プレポボドニー）は大きなシナノキの大木の空洞に身を寄せた。聖なる隠者はこの空洞で3年間を過ごし、昼夜を問わず祈りと断食に明け暮れ、涙を流しながら神に仕えた。 その後、聖パウロは、現在彼の尊い修道院がある場所[897] へと移りました。そこで尊者（聖パウロ）は生涯の終わりまで留まり、厳格な断食を続けました。彼の糧はパンと水であり、それもごくわずかな量でした。この食事を彼は土曜日と日曜日にのみ口にしました。 それ以外の日は、聖パウロは全く食事を摂らず、孤独な独房で祈りと賛美にすべての時間を費やした。この祝福された隠者は、キリストのために大きな苦難に耐え、悪魔たちからも多くの苦しみを味わったが、神の恵みに支えられて、これらすべてを乗り越えた。

ある時、悪霊たちが聖人の小部屋に押し寄せ、それを破壊しようと企んだが、至福のパウロは悪霊の策略を恐れず、キリストの十字架の力によって悪魔を打ち負かした。 またある時、聖人は強盗たちに襲われ、残酷な暴行を受け、小部屋を略奪された後、手足を縛られたまま放置された。尊者様は数日間、小部屋で横たわっていたが、やがて神の導きにより、善良な人々が荒野を訪れ、この至福の老僧の縛りを解いてくれた。 聖人は、キリストの御名のために、これらすべてを不平一つ言わずに耐え忍んだ。この聖なる隠者の隠遁の庵には、多くの森の鳥たちが集まってきた。また、血に飢

---

891 ウグリチ郡プリルカにあるキリスト降誕修道院は、後世においても聖三位一体・セルギエフ大修道院の管轄下にあった。

892 聖パウロは、トロイツコ・セルギエフ修道院で、厨房と食堂での奉仕に従事していた。聖パウロの隠遁生活を祝福する際、聖セルギイは彼に命を与える十字架を授け、それは現在もオブノルスクの聖パウロ修道院に保管されている。

893 聖キリル（記念日は6月9日）によって創設されたキリロフ・ベロゼルスキー修道院は、ノヴゴロド州キリロフ郡の郡庁所在地にあり、ノヴゴロドから602ヴェルスタの距離にある。 聖キリルと聖パウロの時代、その地方で最も近い町であるベロゼルスクは、修道院から37ヴェルスタの距離にあった。

894 チュフロムスクのアヴラアミエフ修道院（大修道院）は、聖母マリアの帯の場所として、コストロマ州ガリチ郡に位置していた。同修道院は聖アヴラアミ・ガリチスキーによって設立された。 設立後まもなく、聖アヴラアミイはこの修道院を去り、そこから13ヴェルスタ離れた場所にヴォチ修道院を設立し、そこで1375年に逝去した。彼の記念日は7月20日に祝われる。

895 現在は、ニジニ・ノヴゴロド県バラフニン郡、ヴォルガ川の左岸にあるゴロドツェ村（かつては町）に位置する、廃寺となった修道院である。1164年に大公ゲオルギー・ヴセヴォロドヴィチによって創建された。 この修道院には、1263年11月4日、オルダから帰還途中に逝去したアレクサンドル・ネフスキーが最期を遂げた独房が保存されている。

896 オブノールスカヤ・ヴォロスティにあるコメルスキーの森は、ヴォロゴダ州の南部の全域に広がり、オブノラ川、ヌルマ川、コメラ川およびそれらの数多くの支流が横切っていた。

897 ヴォロゴダ県グリアゾフツェ郡の郡庁所在地から15ヴェルスタ離れた場所、ヴォロゴダ県とヤロスラヴリ県を流れ、コストロマ川に注ぐオブノラ川の支流であるヌルマ川のほとりにある。

えた野獣たちもここを訪れたが、聖人の祈りによって柔和になり、至福の父が命じることはすべて従った。

聖パウロは、自分が定住した場所で何度も教会の鐘の音を耳にし、後に至聖三位一体の名を冠した教会が建てられることになる一箇所で、光を目撃した。　弟子アレクシオスを伴い、尊者（聖人）はモスクワへ向かい、この天からの啓示について聖フォティオス都主教に語った。聖主教は、その荒野に教会を建てることを尊者に祝福し、アレクシオスを司祭の位に叙階し、教会の建設のために多額の施しを与えた上で、聖人を平安のうちに送り出した。　コメルスクの荒野に戻った聖人は、「命の源である三位一体」[898]　の名を冠した教会を建立し、修道士たちを集めて修道院を設立し、その院長として前述の修道司祭アレクシオスを任命した。　一方、私たちの祝福された父パヴェルは、相変わらず人里離れた自分の独房で暮らし、土曜日と日曜日にのみ修道院を訪れ、その際に弟子たちを教え導いた。彼は主の戒めと聖なる父たちの規則に従って生活していた[899]。

その頃、タタール人がコストロマ市を襲撃し、これを焼き払い、周辺の集落を荒廃させた。多くの正教徒が異教徒によって殺害され、他の人々は捕虜となり、妻や子供たちと共に奴隷として連れ去られた[900]。 その直後、聖パウロは、この世の労苦から永遠の言い表せない安息へと、 主のもとへ召され、弟子たちに自身の輝かしい記憶を残した。聖人は1429年1月10日に逝去し、その生涯は112年に及んだ[901]。

トロパリオ、第1声：

若き日から神の愛に燃え上がった尊者パウロよ、この世のあらゆる美しいものを憎み、ただキリストのみを愛し、そのために内なる荒野に身を置き、獣たちと共に生き、すべてをキリストに捧げた。　それゆえ、すべてを見通す御目は、あなたの労苦をご覧になり、奇跡の賜物をもって、またこの世を去った後も、あなたを豊かにしてくださった。それゆえ、私たちはあなたに叫びます。「私たちすべてのために絶えず祈ってください。あなたの尊い御名を、歌の中で常に称える者たちのために。」

898　教会を建立した後、聖パウロは聖フォティオス都主教に対し、教会の奉献のためのアンティミンズと、修道院を設立し修道士たちを集めるための祝福を、書面で要請した。聖フォティオス都主教は、修道院の設立を祝福し、聖パウロと修道士たちに訓示を記した書簡とともに、アンティミンズを送った。　「あなたが私のところにいた時――」と聖師は記している。「わが子よ、覚えておられるだろうか。あなた自身が、霊的な修道院長とはどうあるべきかについて、多くを語っていた。彼はすべての人々の模範でなければならない。最後の審判の日、彼は自分に託された魂について答えを問われることになるのだ。私もまた、そのことについて書いているのだ」。　修道者たちへの訓示の中で、聖人は彼らに対し、修道誓願を堅く、揺るぎなく履行するよう説いている。

899　聖パウロは、修道者たちにパホミオス大聖人とキノヴィアークのテオドシオスの共同生活規則を守るよう遺言し、修道士たちが何かを自分のものだと考えることを許さず、すべてが共有されるべきだとしました。個室には、イコンと書物以外、クワスさえも置いてはならないとされました。　修道士たちは食堂で喉の渇きを癒さなければならなかった。教会、食堂、そして労働の場において、聖人は沈黙を守るよう命じ、自らの労働によって生計を立て、貧しい人々を忘れないよう戒めた。

900　1429年1月6日、タタール人はコストロマを荒廃させた。まさにその日、弟子たちが聖人に会いに来ると、彼はため息をつき、涙を流した。その理由を尋ねられた聖パウロは、次のように答えた。　「この日、この時刻、不信心なタタール人たちはコストロマの街を占領し、火と剣で焼き払い、多くの人々を捕虜として連れ去った――これらすべては、私たちの罪のゆえであり、私たちが心のままに歩んでいるからである」。

901　聖パウロは、1547年2月26日のモスクワ公会議において聖人として列聖された。その聖遺骨は、オブノル修道院の大聖堂の地下に安置されている。

コンダク、第8調：

あなたはすべての知的な願いを神に向け、心から揺るぎなく神に従い、荒野に住み着き、そこで天使のように生き、多くの人々にとって救いへの道となりました。このゆえに、キリストもあなたを栄光に輝かせ、奇跡の賜物をもって豊かにしてくださったのです。　それゆえ、我らは皆、あなたにこう叫びます。「喜びなさい、尊きパウロよ、荒野の住人よ。」

1月24日

1月11日（旧暦）

尊き父テオドシオス大聖人の生涯

記念日1月11日

聖テオドシオスは、カッパドキアのモガリオン村[902]　で、敬虔な両親――父プロエレシオスと母エウロギア――の間に生まれ、品行方正に育てられ、学問を修めた。　少年が思春期を迎え、聖書を十分に学んだ頃、教会で礼拝書から指定された箇所を読み上げるよう命じられた。彼は誰にも劣らない、甘美で巧みな朗読者であった。聴衆の益となる教訓の言葉を読み上げながら、彼自身もそこからさらに多くの益を得ていた。　主の御声に耳を傾けるうちに――ある時はアブラハムに「あなたの地と親族を離れよ」（創世記12:1）と命じられ、またある時は福音において「永遠の命を得るために、父、母、兄弟を捨てよ」（マタイ19:29）と説かれる――　彼は心を燃やし、霊を燃え立たせ、すべてを捨てて、狭く苦難に満ちた道をキリストに従って歩みたいと切望した。これを思い巡らしながら、彼は神にこう祈った。*「主よ、あなたの道を私に示してください。そうすれば、私はあなたの真理のうちに歩みます」*（詩篇85:11）。

その後、神に信頼を置き、彼はエルサレムへと向かった。これはマルキアヌス帝の治世[903]　、その生涯の終わりにあたる時期であり、ハルキドン[904] で、ディオスコロス とエウティキオス[905] をめぐる第四回全地公会議[906] が召集されようとしていた頃であった。 アンティオキア[907] を通過する際、福者テオドシウスは、聖シメオンに会い、彼から祝福と祈りを授かりたいと願った。彼は聖シメオンのもとへ向かい、柱の近くまで来たとき、聖シメオンの声を聞いた。

「ようこそ、神の僕テオドシウスよ！」

一度も会ったこともなく、自分のことを知らない人物から名前を呼ばれたのを聞いて、テオドシウスは驚き、ひざまずいて、先見の明のある父に頭を下げた。その後、彼の招きに応じて、彼は聖

---

[902] カッパドキア――小アジア東部の地域。西暦11年、ティベリウス帝の治世下でローマの属州となった。

[903] マルキアヌス――ビザンツ帝国の皇帝で、450年から457年まで在位した。

[904] ローマ属州ビフィニアの主要都市。ボスポラス海峡のアジア側岸、ビザンティウムの対岸に位置していた。

[905] 第4回全地公会議で非難されたエウティキオスは、イエス・キリストには神性という単一の本性しかないと説いたが、聖なる教会は常に、イエス・キリストにおいて、融合せず、かつ分離しない二つの本性――神性と人性――を認めてきたし、今も認めている。　ディオスコーロス――アレクサンドリア（エジプト）の総主教であり、エウティキオスの教義の追随者で、449年の公会議でその教義を確立しようとした人物である。

[906] 451年、

[907]　ここでいうのは、もちろん「大」と呼ばれたシリアのアンティオキア、すなわちオロンテス川沿いにあり、セレウコス・ニカトルによって建設され、彼が自身の父アンティオコスの名にちなんで名付けた都市である。そこにはセレウコス朝の一族の王たちが常駐しており、ローマ皇帝の時代には、東方の首都でさえあった。　アンティオキアにおいて、イエス・キリストの弟子たちは初めて「キリスト者」と呼ばれるようになった。

人のいる柱の上に登り、その尊い足元にひれ伏した。　聖人は、神に導かれた若者を抱きしめて口づけし、彼が「言葉の羊」の牧者となり、多くの者を「心の狼」から救うだろうと予言した[908]　。さらに多くのことを予言し、彼に祝福を与えて送り出した。　テオドシウスは、聖人の祝福に支えられ、同行する指導者や守護者の代わりにその聖なる祈りを頼りに、自らの進むべき道を歩み、エルサレムに到達した。それはユヴェナリウス総主教の時代のことであった。　そこで聖地を巡り、復活教会にある主の聖墓の前で祈りを捧げた後、彼はどのような生き方を始めるべきか――隠遁生活か、それとも救いを求める他の者たちとの共同生活か――と熟考した。　そして彼は、悪霊と戦う方法をまだ全く学んでいない状態で、一人で沈黙を守るのは危険であるという確信に至った。　「もし世俗の戦士の中に、軍務に就いたばかりの頃、まだ戦いの術に不慣れで訓練も受けていないにもかかわらず、即座に戦いの真っ只中に飛び込むほど愚かな者が一人もいないとすれば、私のような者は、　――聖人は自らにこう語りかけた――まだ自分の手を武器に、指を戦いに慣れさせず、また天からの力に支えられていない私が、どうして一人で、隠遁生活の中で、この世の闇の支配者たち、権威者たち、支配者たち、そして天の下にある悪意の霊たち（エフェソ6:12）に立ち向かおうなどということができるだろうか。　私はまず、聖なる修道者たちに加わり、経験豊かな父たちから、目に見えない敵とどう戦うかを学ばなければならない。そうして、やがて、孤独と沈黙から生まれる実も結ばれるだろう」。　このように賢明に判断した――彼には、他の美徳に加え、あらゆることをよく見極めることのできる完全な分別があったからである――彼は直ちに、自分にとっての師を探し始めた。

当時、エルサレムとその周辺に住むすべての修道士の中で最も著名だったのは、ロンギンという名の老修道士[909] であり、彼は古来より「ダビデの柱」[910] と呼ばれてきた柱のそばに自分の小部屋を持っていた。そこに閉じこもり、彼は丹念に美徳という甘美な蜜を醸し出していた。　彼の元を訪れた聖テオドシウスは、修道生活の第一歩を踏み出し、魂のすべてをその長老に委ねて、あらゆる徳を彼から学んだ。というのも、その尊者（レポド）は、言葉と生き方において偉大であったからである。　かなり長い時が経った後、彼は長老によって――自身の望みとは裏腹に――「古き座」と呼ばれる場所[911] へと移された。これには次のような理由があった。 ある敬虔な女性、誠実な未亡人でありキリストの奉仕者であるグリケリアという名の女性が、その場所に聖母マリアの教会を建立し、尊者ロンギヌスに対し、テオドシオスを新しく建てられた教会のそばで生活させるよう、数多くの熱心な懇願を繰り返したからである。　弟子は父と別れたくはなかったが、父の命に従い、そこへ移り住んだ。彼がそこに滞在するにつれ、その徳行の評判は至る所に広まった。　徳は、それを身につけた者を明らかにするように、夜に灯された蝋燭がそれを携える者を照らし出すのと同じである。そして、魂の救いを求める者たちが聖人のもとを訪れるようになり、彼の生き方を模範としたいと願う者たちが彼の周りに集まり始めた。

そこでしばらく過ごした後、その聖人は安らぎのなさに煩わしさを感じるようになった。というのも、彼は人々からの称賛や噂を好まなかったからである。　彼はそこから、洞窟のある山へと去った。その洞窟は、古くからの伝承によれば、　、贈り物を携えてベツレヘムのキリストのもとを訪れ、別の道を通って自国へ帰った三人の東方の博士たちが、旅の疲れを癒やし、夜を明かした場所であった（マタイによる福音書 2:1–12）。　聖テオドシウスは、「かつての住処」からその洞窟へと移り住んだ。彼がそこへ移り住んだのは、神の特別な御計画によるものであった――その場所に栄光に

908　ここで「想像上の狼」とは、悪魔および、人々を迷信や不敬虔へと誘い込む悪魔の僕たち一人ひとりを指す。この表現全体における比喩は、ヨハネによる福音書10章12節から借用されている。

909 聖ロンギノス（ギリシャ正教会）の記念日は11月17日と、乳製品を禁じる土曜日である。

910 エルサレム要塞内のヤッファ門付近にある古代の塔。

911　ギリシャ語で「カフィスマ」、あるいは「カフィスマ教会」と呼ばれる。エルサレムとベツレヘムのちょうど中間に位置していた。

満ちた修道院[912]　が建てられ、キリストなる神のもとへ霊的な戦士たちの軍勢が集まるためであった。

居住地を変えたことで、この至福の聖人は同時にその生き方も変え、より厳しい道を歩み始めた。彼の願いは、常に主のすべての戒めを守ることであった。　彼は神の愛にこれほど深く包まれていたため、自らの魂の力をこの世の何ものにも向けず、ただ唯一の創造主である神のみに全き心を注ぎ、全霊、全心、全思念をもって神を愛し、その愛を、詳細に語り尽くすことさえできない肉体の労苦と偉業という行いそのものによって示そうとしたのである。　彼の祈りは絶えることなく、徹夜祷を続け、涙は常に泉から流れ出る水のように彼の目から溢れ出ていた。彼の断食は計り知れないほどであった。三十年間、彼はパンを一切口にせず、ナツメヤシの実、ソチヴ[913]　、あるいは砂漠の草や根のみを糧としていたが、それも飢え死なない程度にしか摂取しなかった。　砂漠の物資不足のためにそうした食べ物さえ手に入らないときは、水に浸したナツメヤシの種を糧とし、魂は絶えず神の言葉によって養われ、内なる神の御姿によって満たされていた。　このようにして生きるうちに、彼は明るい星のように輝き、パレスチナのすべての住民に知られるようになった。山の上にある町は隠れることができないからである（マタイ5:14）。徳を愛する者たちの何人かが彼の元を訪れ、洞窟での彼との荒野の生活を、賑やかな都会の生活よりも好んだ。

当初、聖人の弟子は七人いた。神に従って生き始めた者にとって、死を思い起こすことほど有益なものはなく――それは真の知恵とも呼ばれ、そう考えられている――聖人は弟子たちに墓を掘るよう命じた。そうして、その墓を見つめることで、まるで目の前にあるかのように、死を思い起こすことを学ぶためであった。　墓が完成すると、聖人はそれを見にやって来て、墓の上に立ち、まるで微笑んでいるかのように、心の目でこれから起こることを見通しながら、弟子たちにこう言いました。

「ほら、子らよ、墓は出来上がった。あなた方の間に、この墓を自らで新たに満たすために、死を迎える準備ができている者はいないだろうか？」

聖人がそう言うと、そこに立っていた弟子の一人、ヴァシリーという名の司祭が、すぐに他の者たちに先んじて、長老の前にひざまずき、顔を地面につけて、死んでその墓に葬られるための祝福を求めた。

「父よ、どうか祝福してください」と彼は言った。「私がこの墓を新たにし、死について学んでいる兄弟たちの中で、私が最初に死者となることを許してください。」

長老はその願いを聞き入れ、生けるヴァシリーのために、すでに亡くなった者のための追悼の儀式に従い、3日目、9日目、そして40日目に追悼の祈りを捧げるよう命じた。　すべての追悼が終わると、祝福されたヴァシリーも、何の病気もなく息を引き取った。まるで甘い眠りに落ち、安らかに休んだかのように、彼は主のもとへ旅立った。彼の埋葬から四十日が過ぎた頃、長老はヴァシリーを目撃した。彼は規則の時間中に兄弟たちの真ん中に現れ、彼らと共に賛美歌を歌っていた。　長老は、他の者たちの目も開かれ、現れたその姿を彼らも見るようにと、神に祈った。彼を見た兄弟の一人、アエティウスという名の者は、喜びのあまり両手を伸ばして彼を抱きしめようとしたが、現れた者はたちまち姿を消し、見えなくなってしまった。去り際に、彼は皆に聞こえるようにこう言った。

「父たちよ、兄弟たちよ、逃げなさい。逃げなさい。もうここで私の姿を見ることはないだろう！」

これは、尊者テオドシオスの徳の最初の証しであった。すなわち、彼には、その教えに従って死をも厭わないような弟子がおり、肉体の死の後も魂は生き続けていたということである。これは、

---

[912] ラヴラ – （ギリシャ語で「都市の一区画、路地」の意）修道院長の住居を取り囲む塀の中に、都市の路地のように配置された一連の独房。古来より、「ラヴラ」という名称は、信徒が多く重要な修道院を指すのに用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられるようになった。

[913] 穀物やエンドウ豆、インゲン豆、野菜を煮込んだスープ。

福音書にある主の御言葉、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネ11:25）の通りである。　この長老に神から与えられた他の驚くべき恵みの現れについては、次の物語から明らかになるだろう。

キリストの復活の祝日が近づいていた。当時すでに十二人になっていた聖人の弟子たちは、祝日に食べるものが何もない――パンも油も、　、何よりも、このような輝かしい祝日に、礼拝のためのプロスフォラもワインもなかったため、神聖な典礼が行われず、聖体の拝領もできなくなることを嘆いていた。彼らは密かに、師に対して互いに不満を漏らしていた。　しかし、神への揺るぎない希望を抱いていた彼は、兄弟たちに神聖な祭壇を飾り、嘆かないよう命じた。

「あの御方――」と彼は言った、「かつてイスラエルの民を荒野で養われた方[914]、そしてその後、わずかなパンで何千人もの人々を満腹にされた方[915]、その方が私たちをも顧みてくださるでしょう。なぜなら、その方は力において以前より弱くなったわけでもなく、この世を顧みる熱意が薄れたわけでもなく、その方は永遠に唯一の神だからです。」

「そう、希望を持って」と尊者は語り、その言葉はたちまち現実のものとなった。かつてアブラハムが森の中で、いけにえとして用意された雄羊に出くわしたように（創世記22:13）、この祝福された長老のもとにも、神の御摂理により、必要なものがすべて揃っていたのである。　日没の頃、ある敬虔な人が彼らの洞窟を訪れ、自宅から二頭のロバに載せて、荒野で断食する修道者たちのために様々な食料に加え、聖体拝領を行うためのプロスフォラとワインも運んできた。　これを見た聖人の弟子たちは喜び、彼らの長老が神からどのような恵みを授かったかを悟った。彼らは喜びのうちに過越祭を祝い、持ち込まれた食料は五旬節の間ずっと持ちこたえるほどあった。その後、再び食糧が尽き、兄弟たちは飢えに苦しみ、嘆き悲しんだ。　その頃、ある裕福な男がパレスチナのすべての修道院に多額の施しを行っていたが、洞窟にあるテオドシオスの修道院だけは、その存在を知らなかったため、援助を差し控えていた。　そこで兄弟たちは修道院長にせがんで、自分たちの存在をその恩人へ知らせ、他の修道院と同様に、生計のための施しを受けられるようにしてほしいと頼んだ。　聖テオドシオスは、世の誰にも知られることを決して望まず、人々に頼るのではなく、御手を差し伸べ、御心によってすべての生き物を満たしてくださる神（詩篇144:16）にのみ頼り、弟子たちを慰め、彼らにこう教え導いた。「神の恵みを辛抱強く待ち望め。　あらゆる飢えた魂を満たしてくださる方――もし神が、言葉を持たない家畜や、神に呼び求めるカラスたちの雛にさえ食物を与えてくださるのなら（詩篇146:9）、ましてや、理性を持ち言葉を話す被造物に、必要な食物を欠かすことなどあり得ない――と。　聖人がこのように気弱な兄弟たちを慰めていると、大量の食糧を積んだロバを連れたある男が彼らのところへやって来た。彼はテオドシオスの洞窟へ向かうのではなく、食糧を運んで、どこか別の場所で配るつもりだった。　ところが、彼が洞窟の近くまで来て通り過ぎようとしたとき、ロバは立ち止まり、その場から一歩も動こうとしなかった。主人に何度も鞭打たれても、まるで石のようにその場にじっと立ち尽くしていた。　その男は、自分のロバが神の御心と目に見えない力によって引き止められ、動かないままであることを悟ると、手綱を緩め、ロバが望むままに歩かせることにした。　その馬は、まるで何者かの手に導かれるかのように、洞窟にある聖テオドシオスの修道院へとまっすぐ向かった。そして、その男は、主の祝福と、主がご自身のしもべたちに対して示された御摂理を悟り、持っていた食糧のすべてを、その聖なる長老とその弟子たちに捧げた。　それ以来、聖人の弟子たちは臆病になることをやめ、神に対する彼らの尊い父の揺るぎない信仰と希望を熱心に守るよう努めた。

914　ここではもちろん、主にマナ、すなわち、約束の地へ向かう途上、荒野を旅していたユダヤの民を主が養われた奇跡の食物を指す（出エジプト記16）。

915 もちろん、イエス・キリストによる、5つのパンで5千人以上を養った奇跡（マタイ14:15–21）や、7つのパンで4千人以上を養った奇跡（マタイ15:32–38）も含まれる。

修道者の数は日々増え続けた。聖なる父が満たされていた恵みの泉が、徳を愛する多くの魂を引き寄せていたからである。彼らは、霊的な水を渇望する「知恵ある雌鹿」（詩篇41:2）と呼ぶにふさわしい人々であり、その中には、聖なる父と共に暮らすためにやって来る高官や富裕層も少なくなかった。　洞窟は、これほど多くの人々を収容するには手狭になっていった。修道士たちは聖なる父のもとへ近づき、洞窟の近くに修道院を建立し、神の言葉に従う羊たちのために広々とした囲いを設けるよう、執拗に懇願し始めた。

「父よ、修道院建設の資金については心配なさらないでください。ただお命じください。私たちの手だけで、この事業を成し遂げるのに十分です」と彼らは言った。

聖人は、自分こそが非常に多くの羊の群れの牧者となるよう求められていること、そして自らの沈黙が破られようとしていることを悟り、様々な思いに揺れ動いた――沈黙を、偽りのない母のように手放したくないという想いと、兄弟たちへの配慮を軽視できない重要な事柄だと考える思いとの間で。なぜなら、人は 自分自身のためだけに生きるべきではなく、 はるかにそれ以上に――隣人のために生きるべきであり、その模範こそが主キリストご自身であった。主は弟子たちを集め、言葉の羊たちの牧者となられ、彼らのために御自身の魂を捧げられたのである。　このことを思索する中で、聖テオドシウスは、沈黙を守るべきか、それとも兄弟たちの救いを顧みるべきか、どちらを選ぶべきか迷い、その思いは時として一方に、時として他方へと傾いていった。　では、この至福の者はどうしたのか。彼はすべてを神に委ねた。神は、沈黙の果実を失うことなく、また兄弟たちを導き世話することによる報いも失うことなく、その両方を一つの益のために結びつけることができるからである。なぜなら、修道者の生活は、肉体の隔離によって強められるのではなく、善への堅固さと心の平安によって強められるからである。　尊者はまた、聖シメオン・ストルプニクの預言も心に留めていた。彼は、尊者が「言葉の羊」を牧するようになることを予言していたのである。　とはいえ、彼は自ら引き受けたこの事業を神の御心にお委ねし、もし神が修道院の建立を御望みならば、そのことを知らせてくださるよう、また、修道院の礎を据えるべき場所を奇跡的なしるしによって示してくださるよう、神に祈った。　香炉を取り、冷たい炭で満たすと、火を灯さずに香を載せ、荒野を歩きながら次のように祈った。

「神よ、数多くの偉大な奇跡をもってイスラエルを確信させ、御自分の御使いモーセに対し、様々なしるしをもって、御民を統率する重荷を引き受けるよう説得された方。杖を蛇に変え、健やかな手をハンセン病で白く変え、その後再び健やかな手に戻された方（出エジプト記 3:3, 6:7）；水を血に変え、またその血を容易に水に戻された方（出エジプト記 7:20）；ゲデオンに羊毛による勝利のしるしを与えられた方（士師記 6:37–38）、万物の創造主であり全能者よ；ヒゼキヤの命の延長を、階段を逆戻りした影によって示された方　（列王記下　20:1–11；イザヤ書　38:7–8）；エリヤの祈りを聞き入れ、不義な者たちを悔い改めさせるために天から火を送り、薪やいけにえ、石や水を焼き尽くした方（列王記上　18:38）　今なお、あなたは同じ神であられます。どうか、あなたのしもべである私の声を聞き、あなたが喜ばれる場所を示してください。そうすれば、私はあなたの御威光にふさわしい聖なる神殿を建て、あなたのしもべたち、すなわち私の弟子たちのための住まいを整えたいのです。　どうか、これらの炭が御自身の栄光のために、また多くの人々に真理を知らしめ、宣べ伝えるために、御自身の御心によって自然に燃え上がるような場所を、必ずや示してください。

このように、あるいはこれに類する言葉を祈りながら、彼は修道院の建設に適していると思われる場所を巡り歩いた。　彼は荒野を遠くまで進み、香炉の中に収められた、依然として燃え上がらず冷たいままの炭を携えたまま、クティラと呼ばれる場所、そしてスモリャノエ湖のほとりに到達した[916]　。そして、炭が燃え上がらず、自分の願いが叶わないのを見ると、洞窟に戻ることを決意した

[916]　これは、死海の西岸にある砂漠の一部の名称であり、この地域では「スモリアン」または「アスファルト」と呼ばれている。

。　彼が引き返している途中、洞窟ももうすぐそこだったとき（ああ、不死の王よ、あなたの力を誰がふさわしく賛美できようか！）、香炉から突然、芳しい煙が立ち上った。それは、炭が激しく燃え上がったからであった。　聖人は、ここが神の御心により、言葉ではなく火によって奇跡的に示された、修道院が築かれるべき場所であると悟った。聖人の弟子たちは直ちに作業に取り掛かり、基礎を築いて教会、修道室、そして塀を建て、まもなく至高者の助けにより、広々とした修道院を整備した。

聖テオドシオスのラヴラは名高く栄え、そこには共同生活が確立された。　主はこの修道院にあらゆる豊かさをお与えになり、そこに住む者たちが善行による霊的な富に恵まれるだけでなく、肉体に必要なものも欠くことがないようにされた。そして、そこで安らぎを見出したのは、修道士たちだけでなく、信徒、旅人、よそ者、貧者、病者、体の不自由な人々でもあった。　なぜなら、聖テオドシオスは慈悲深く、人を愛し、慈しみ深く、すべての人にとって思いやりのある父であり、すべての人にとって親しみやすい友であり、すべての人にとって献身的な僕であり奉仕者であったからである。彼は病人の傷やかさぶたを清め、血を洗い流し、自らの手で彼らの腹を縛り、あらゆる奉仕を尽くした。　また、あらゆる場所から訪れる人々に対しても深い愛を示し、彼らをもてなし、慰め、必要なものをすべて与えた。聖人は、病める者、飢える者、裸の者、旅人にとって、共通の避難所であり、共通の診療所であり、共通の家であり、共通の宴であり、共通の宝であった。　皆、その愛と慈悲と寛大さに慰められ、彼は誰一人として見下すことはなかった。修道院で食事の世話をする者たちは、時には一日に、訪れる人々、旅人、物乞いたちに百食もの食事を振る舞うことがあったことに気づいていた。それほどまでに、この尊い父は人を愛し、旅人を愛していたのである。　御自身こそが愛である神（Iヨハネ4:8）は、御自身の聖徒が隣人に対して示すそのような愛をご覧になり、その修道院を祝福された。その結果、わずかな量の食物がそこでは目に見えないほど増え、数え切れないほど多くの人々を満腹にさせたのである。

ある時、パレスチナで飢饉が起こり、花祭りの週に、多くの乞食や貧しい人々が、いつもの施しを受けるために、至る所から修道院の門前に集まった。　弟子たちは、これほど多くの求道者たちに施すだけの食糧　がないことを嘆き、そのことを聖人に告げた。すると聖人は、彼らを怒りの眼差しで見つめ、不信仰を叱責してこう言った。

「さあ、門を開けて、皆が入れるようにしなさい！」

乞食や貧しい人々は中に入ると、列をなして座った。

尊者は弟子たちに彼らにパンを与えるよう命じた。弟子たちは、何も見つからないだろうと絶望しながらパン屋へ向かったが、パン屋を開けてみると、そこにはパンが山積みになっていた。それは、万物の摂理者である神の手が、御自分のしもべの信仰のために、そこを満たしてくださったからであった。　修道者たちは、この奇跡を称えて神を賛美し、彼らのアッバが神に対して抱く大きな信頼に驚嘆した。

また別の時、聖母マリアの被昇天の祝日に、多くの民衆が修道院を訪れたが、　これほどの大勢に振る舞うには食糧が足りなかったが、聖テオドシウスは天を仰ぎ、数個の小さなパンを祝福して人々に振る舞うよう命じた。すると、神がかつて五つのパンを増やされたように（マタイ14:21；　ルカ9:14）のように、神がこれらのパンを増やしてくださったのである。そのため、人々は道中の分として、各自が必要なだけ持ち帰ることができた。修道士たちは残ったパンのくずを集めて多くの籠に詰め、天日干しにして、かなりの期間にわたってそれを糧とした。　また、修道院には数え切れないほどの人々が何度も集まり、これほど多くの人々に水を飲ませるには井戸さえも足りないように思われたほどだったが、万物の養い主である神の尽きることのない御手によって、皆は十分に満たされた。

聖人は多くの宿屋や様々な病院を設立し、特に指導者や労苦の末に老いた人々のための施設を設けた。さらに、山や洞窟に住む人々をも訪ね、まるで父親が子供たちを思うように、心を配り、彼

らのことを深く案じた。　彼は、彼らの肉体と魂の両方に必要なものをすべて届け、彼らを教え導き、多くの人々を悪魔の惑わしから救い出した。

修道院には、一つの民族や一つの言語だけでなく、様々な民族や言語の修道士たちが集まっていたため、彼は各民族がそれぞれの言語で神を賛美できるよう、他の教会も設立した。　こうして、聖母マリアの大聖堂ではギリシャ人たちが[917]、別の聖堂ではイベリア人たちが[918]、三つ目の聖堂ではアルメニア人たちが[919]　、ダビデの規定に従い、一日七回、それぞれの言語で礼拝の賛美を歌った。「一日に七度、あなたを賛美します」（詩編 118:164）と彼は言った。 病人のために特別な教会が設けられていた。また、至聖なる秘跡の聖体拝領の際には、すべての兄弟たちが各教会から一つの大聖堂に集まり、そこでギリシャ人たちが賛美を歌い、全員が共に聖体拝領を行った。　聖なる父によって霊的に再生され、父なる教えのもとで育てられ、徳へと導かれたすべての兄弟たちの数は、六百九十三名であった。彼らの多くは、霊的な英知と知恵に満ちた聖テオドシオスから良き統治を学んだ後、他の修道院で牧者となっていた。　彼は自分の群れを、杖で懲らしめるのではなく、言葉で薫陶して導いた――その言葉は、塩で溶かされた[920]　であり、魂に響き、内なる動揺の最も深いところまで浸透するものであった。言葉とともに、彼は行いによっても教え、自らを群れの手本として示した。　それゆえ、誰かを優しく諭すときでさえ、彼は多くの人々にとっては恐ろしい存在であり、誰かを戒めるときでさえ、彼は親切で礼儀正しかった。　彼について驚くべきことは、世俗の学問を学んでおらず、ギリシャの書物にも精通していなかったにもかかわらず、その説教は極めて詳細で、書物に没頭し、雄弁術を極めた者たちでさえ、彼には及ばなかったということである。　なぜなら、彼は人間の知恵からではなく、まるでもう一人のエレミヤであるかのように、密かに彼に語りかける神の御霊の恵みによって教えていたからである。「わたしはわたしの言葉をあなたの口に置いた」（エレミヤ書 1:9）。　また、この聖人は、魂に益となる多くのことを語った。その中には、彼自身の言葉もあれば、使徒たちの教え、教父たちの遺訓、そしてバシレイオス大主教の禁食に関する言葉もあった。彼はバシレイオス大主教の生き方に倣い、その神に導かれた書物を特に愛していたのである。彼の数多くの偉大な教えの中から、次の短い一節を思い出しておくのがよいだろう。

「兄弟たちよ、私たちの罪のためにご自身を捧げられた主イエス・キリストの愛のために、どうかお願いいたします。ついに私たちの魂の救いを考え、過去の生活の虚しさを悔い改め、神とその御子の栄光のために、未来に熱心になりましょう。 怠惰や現在の弛緩に留まることなく、この 日を気落ちして過ごし、善行を始めることを明日に先送りしてはなりません。そうしてこそ、私たちの魂の審判者の御前に善行なきまま立たされることもなく、喜びの宮殿から追放されることもなく、無駄に、そして絶望的に、無駄に過ごした人生について泣き悲しむこともないでしょう。　悔い改めがもはや何の役にも立たない時に泣き叫ぶことのないように。今こそ好機であり、今こそ救いの日である。今世は悔い改めの時であり、来世は報いの時である。今世は行いの時であり、来世は報いを受ける時である。今世は忍耐の時であり、来世は慰めの時である。　今、神は悪の道から立ち返る者たちの助け手であるが、その時には、神は人間の行い、言葉、思いに対する恐るべき裁き主となり、その御前から何ものも隠れることはできない。　今、私たちは神の寛容に恵まれているが、その時には、ある者は永遠の苦しみへ、またある者は永遠の命へと復活し、それぞれが自分の行いに応じて報いを受ける時、神の正義を知るだろう。私たちを御自身の天の御国へと招いておられるキリストへの従順を、いつまで先延ばしにすべきだろうか。今こそ、我々は正気を取り戻すべきではないか。　虚しい生

---

[917]　ギリシャ人は、太古の昔から現在のバルカン半島の大部分と近隣の島々を占めていた民族であり、キリスト教時代においても、彼らは常に聖地において相当な数で暮らしており、現在もそうである。

[918] イベリア人、すなわちイベリア（現在のジョージア）出身の者たちである。

[919]　アルメニア人は聖地の近隣に住んでいた。アルメニア自体は、北はコルキス、イベリア、アラバニアと、西は小アジアと、南はメソポタミアと、南東および東はミディアとシリアと国境を接していた。

[920] すなわち、理にかなった、教訓に満ちた言葉（コロサイ 4:6）。

活から、福音の完全さへと立ち返るべき時ではないでしょうか？　主の恐ろしくも凄まじいその日、神の右手に立つ者たち（[921]　）――善行によって神に近づいた者たちは天の御国に迎え入れられ、一方で左側に立つ者たち（[922]　）――善行を欠いたために拒絶された者たちは、火のゲヘナ、永遠の闇、そして歯ぎしりの苦しみの中に閉じ込められる――その時、私たちはそれをどのように見つめるのでしょうか？　私たちは天の御国を望んでいると言いながら、それをいかにして得るかについては気にかけていない。主の戒めを果たすことに少しも労を惜しまず、私たちの虚しい心によって、死に至るまで罪と戦った者たちと同等の栄誉を期待しているのだ」。

このように弟子たちを教え導きながら、尊師は彼らに救いへの究極の熱意を抱かせるよう促した。彼はあらゆる点で温和な人柄であったが、敬虔さが踏みにじられる場面においては、灼熱の炎のようであり、切り裂く斧のようであり、あるいは抗し難い兵器のような存在であった。

当時、アナスタシウス[923]が統治しており、彼はレウス大帝[924]とゼノン[925]の後を継いで王位についた。当初、彼の治世は甘美な楽園のようであったが、後にまるで滅びの場であるかのように明らかになった。彼は、自分の群れを迷わせ、滅ぼし、羊に濁った水を飲ませるような牧者たちのようになってしまった。 というのも、彼はエウティキオスと首のないセヴェロス[926]の異端に堕ち、それによって神の教会を混乱させ、聖なる教父たちによるカルキドン第四公会議を拒絶し、正統派の司教たちをその座から追放して、その代わりに異端の司教たちを据え、　また、正統派の多くの人々を――ある者には脅迫で、ある者には栄誉や贈り物で――自分との同調へと誘い込んだ。彼はその諂いのある狡猾さをもって、信仰において揺るぎない柱である、我らの尊い父テオドシオスにも手を出そうとした。 その誘惑の企てとは、彼が尊師に30リットル[927]の金を送ったことにある――表向きは貧しい人々の糧や衣服、病人のための必要経費のためであるかのように見せかけつつ、実際には、パレスチナ全土が耳を傾け、その知恵と助言に従っていた尊師の好意を勝ち取ろうとしたのである。　偉大なる父は、王の狡猾さを看破し、まるで雲の中を飛ぶ鷲のようであった。誰にも近づけず、手の届かない存在であり、むしろ自らその罠を仕掛けた者を捕らえることさえできた。　彼は、王の信仰を無分別にも軽んじているように見えず、また王の怒りを招く口実を与えないよう、送られてきた金を拒むことはしなかった。さらに、その金による施しを通じて、神に王への憐れみを請い、王を真の道へと導くためでもあった。　しかし、その施しは全く成果を挙げなかった。なぜなら、その金は真実からではなく、狡猾さをもって送られたものだったからである。王は、テオドシウスが金を受け取ったことから、彼を自分と同じ考えを持つ者だと期待したが、その期待は虚しいものだった。

やがて、王は使者を介して、聖者に、彼が期待していた信仰の告白――すなわち、エウティキオスとセウェルスの教えに合致するものを――要求するようになった。　聖人は、すべての隠者たちを集め、強き男として、また霊的軍勢の指導者として、異端の邪説に断固として立ち向かい、王には次のような書簡で答えた。

「王よ！　私たちに二つの選択肢しかないとき――すなわち、指導者を失った者たちに従い、自由を奪われて不義に生きるか、あるいは聖なる教父たちの真の教義に従って誠実に死ぬか――そのとき、私たちが　死を選ぶことを知ってください。なぜなら、私たちは新しい教義を受け入れず、かつて生きた教父たちの律法に従うからです。　また、これとは異なることを主張する者たちについて

---

[921] すなわち、右側（マタイ 25:34）。

[922] すなわち、左側（マタイ25:41）。

[923] アナスタシオス1世（ディコル、あるいはフラキア人）は、491年から518年まで在位した。

[924] 457年から474年まで在位した。

[925] 474年から491年まで在位した。

[926] 無頭派（ギリシャ語：アケファロイ）――6世紀の異端者たちで、アレクサンドリアのセウェロスの追随者たち。彼らは司教も司祭も秘跡も一切認めず、単性論者の過激派であった。

[927] リトラ – ポンド。72ゾルトニクに相当する重量単位。銀では最大42ルーブル、金では最大506ルーブルの価値があった。

は、敬虔な心をもって拒絶し、呪いにかける。そして、指導者なき者たちによって強制的に按手された者は、誰一人として受け入れない。キリストよ、王よ、このようなことが私たちに起こりませんように！　もしそのようなことが起これば、今や彼らによって冒涜されている神を真理の証人として呼び求め、死に至るまで抵抗するであろう。祖国のためにも、正教のためにも、たとえこれらの聖地が炎に包まれて滅びゆくのを目の当たりにしたとしても、喜んで我らの魂を捧げる。　なぜなら、実際にはその聖地が異端者たちから冒涜を受けているのであれば、単に「聖地」と呼ばれるという名目だけに何の意味があるというのか。私たちは、聖なる全地公会議に反する言葉を口にするどころか、そのようなことを考えることさえ決して決心しない。 その第一の公会議は、アリウス[928] に対して集まった三百十八人の教父たちによって飾られており、彼らはこの呪われた者を破門し、教会の体から切り離した。なぜなら、彼は本質において御子を御父の本質から切り離し、誤った信仰の教義を持ち込んだからである。　第二の公会議は、神の導きにより、聖霊を冒涜したマケドニウスを裁くためにコンスタンティノープルに召集された。 第三回公会議は、エフェソス[929] にて、聖母マリアから授かったキリストの肉体を冒涜した、不敬で不道徳なネストリウス[930]　を裁くために、威厳をもって召集された。その後、ハルキドンにて六百三十人の神を崇める教父たちによる公会議が開かれ、彼らは最初の公会議たちと一致した宣言を行い、その内容を詳述した。　彼らは、ディオスコロスと共に、呪われ、不敬虔なエウティキオスを教会の聖なる体から断ち切り、使徒的信仰を確立し、それに反する考えを持つ者はすべて、キリストの教会から破門した。　これらの公会議に背く者に対しては、火が我々に燃え上がり、剣が我々に向けられ、最も残酷な死が我々に降りかかり、さらには、もし可能ならば、一度だけでなく、数え切れないほど多くの回、死が我々に降りかかるように。　しかし、われらは決して真の敬虔から背くことはなく、先人たちが勇敢に受け入れたものを、拒絶することによって汚すこともない。その証人となるのは、彼らが信仰のために払った労苦と数多くの功績である。そして、このことは、われらと、神とわれらに従うことを善とみなす者たちによって、堅く、変わることなく守られていくであろう。　そして、あらゆる理解を超える神の平安（フィリピ4:7参照）が、あなたの権力の守護者であり導き手となりますように」。

この書簡によって、尊師は敬虔さに対する自らの偉大な熱意を明確に示した。これを読んだ王は恥じ入り、幾分謙虚になり、一時的に国内における正教徒への迫害を中止した。彼は謙虚な態度で尊師に返書を送り、教会の混乱については他者を非難した。

「神の御使いよ」と彼は記した。「この革新について、我々に非はない。我々は、すべてを見通す神の御目を大胆に証人として呼び求める――この混乱は、他者よりもはるかに多く、沈黙のうちに信仰の教義と公会議を尊ぶべきであった者たちによって引き起こされているのだ。　それどころか、彼らは皆、言葉と地位において他者より優れているように見せようと望み、互いに攻撃し合い、私たちをも自分たちの側に引き込もうとしている。あなたの尊師もご存じの通り、自分たちを正統派だと自認する一部の修道士や聖職者たちが、私たちが述べたように自らの優越性を示そうと努める中で、これらの惑わしを引き起こしたのである。」

しかし、皇帝は一時的に謙虚な態度を見せたものの、しばらくすると再び正教に対して反旗を翻した。　そして再び、至る所、聖都エルサレムでさえも、聖公会議、とりわけカルキドン公会議を

---

[928] 第1回（ニカイア）公会議は325年に開催された。

[929] エフェソス――リディア（小アジア西部）の有名な都市で、小アジア全土の首都と見なされていた。長い間、聖使徒ヨハネ・テオロゴスの居住地であった。第3回全地公会議は431年にここで開かれた。

[930] コンスタンティノープル大司教（428年から431年）を務めたネストリウスは、タルソスの司教ディオドロスやモプスエウスの司教テオドロスに続き、イエス・キリストにおける二つの本性の結合に関する正統な教義を歪曲した。　彼は、至聖なる聖母マリアから生まれたのは神人ではなく、単なる人間であると説いた。まるで自然な方法で生まれたかのように、しかも情欲や欠点から無縁ではなかったというのである。この教えによれば、神性は、イエスという人間が最終的に善に確立された後になって、初めて彼と結合したことになる。

否定する王の布告が公布された。再び、霊的な戦士である聖テオドシオスは、すでに高齢であったにもかかわらず、若者に劣らぬ勇猛な活躍を見せた。　皆が恐怖のあまり沈黙し、非常に多くの者が同意を示していたその時、尊者テオドシウスは自身の修道院からエルサレムへと赴き、エルサレムの偉大な教会において、通常司祭が民衆に聖書の朗読を行う高台に立ち、手で沈黙の合図を送ると、大声でこう宣言した。

「四つの全地公会議を、四つの福音書と同様に尊ばない者は、破門されよ！」

そう言い放つと、彼はまるで天使のように民を震撼させ、反対者たちのうち誰も反論する勇気はなかった。　その後、彼は弟子たちの中から信仰に最も熱心な者たちを呼び集め、彼らと共に周辺の町や村を巡り、　迷信を根絶し、敬虔さを確立していった。このことを耳にした皇帝は、彼を追放の刑に処した――その不運な皇帝は、死がすでに自分の目の前まで迫っていることを知らなかったのだ。　聖人は流刑に処されたが、アナスタシウス王はまもなくこの世の命を絶ち、その後、キリストの殉教者テオドシウスは、正教のために流刑に遭った他の者たちと共に、直ちに自らの修道院へと戻った。 古代ローマの司教フェリクス[931] や、アンティオキアの司教エフレム[932] も彼に手紙を送り、真の信仰のために追放に耐え、死をも厭わなかったというその熱意を称え、多くの賛辞をもってこの聖人を称えた。しかし、そろそろ聖人の奇跡に関する物語に移るべき時が来た。

当時、アナスタシウス王の邪悪な勅令が聖都エルサレムで布告された際、そのためにパレスチナの修道院からすべての修道院長たちが集められ、前述の通り、聖テオドシウスも弟子たちを連れてそこへやって来た。 そして、この公会議全体は、イェラフィオン[933] と呼ばれる場所で行われた。この場所は、コンスタンティヌス大帝によって築かれた座であり、そこで毎年、主の尊い十字架の挙揚式が行われていた。

その頃、胸に医師たちが「カンクルム」[934]　と呼ぶ病を患っていたある女性が、長い間苦しめられ、医師たちからも何の緩和も得られずに、その場所へやって来て、聖なる父たちの御像の近くで、疲れ果てて立っていた。　その中の一人（後にスキイ修道院のイグメンとなった聖イシドールであった[935]　）に近づき、彼女は涙ながらに自分の病について語り、その大聖堂に聖テオドシウスはいるか、またその姿はどのようなものか、と尋ねた。イシドールは指でその聖人を指し示した。　彼女は近づいて後ろに立ち、血の病を患っていた女性が主の衣の端に触れたように（マタイ 9:20–22）、聖人の身に着けていた修道服にひそかに触れると、たちまち癒やされた。このことは聖人の目にも隠れることはなく、聖人はその女性にこう語りかけた。

「勇気を出しなさい、娘よ。私の主はこう言われた。*『あなたの信仰があなたを救った』と*」（マタイ9:22）。

至福のイシドールは、起こった奇跡をこの目で見ようと急いでその女性のところへ駆け寄ったが、かつて不治の潰瘍があった場所には、もはや痕跡すら残っていなかった。

アナスタシウス王の死後、流刑から戻った聖なる父テオドシウスは、祈りを捧げるためにベツレヘムへ赴くことを習慣としていた。　ある日、労苦から一息つこうと、彼は道から外れて聖マルキアノスの修道院へと向かった。聖マルキアノスは、この大切な客を愛情を込めて迎え入れたが、その

---

931 ローマの司教フェリクスは、526年から530年までローマ教会を統率した。

932 聖エフレムは、528年から545年までアンティオキアの主教座に就いていた。

933　この名は、コンスタンティヌス大帝によって建設されたいわゆる「マルティリウム」内にある特別な礼拝堂の名称であった。生命を与える十字架は4世紀末にもそこに安置されており、毎年、特に受難週、とりわけ聖金曜日に掲げられていた。　この礼拝堂は常に施錠されており、その鍵は「スタウロフィラクス（十字架の守護者）」と呼ばれる特別な司祭によって保管されていた。

934　ここでいう「不治の病」とは、おそらく現在「キャンサー」、すなわち「がん」と呼ばれるものを指すものと思われる。

935 ベツレヘムの南に位置し、聖ハリトン（9月28日に記念される）によって設立された、パレスチナで最も有名なラヴラの一つである。

時はパンも小麦も持っていなかったため、もてなすものが何一つなかった。　二人がかなり長い間、霊的な対話を交わした後、食事の時間になったので、マルキアヌスは弟子たちに、ソチヴォを炊いて出せるよう命じた。一方、テオドシウスは、彼のそのような貧しさを見て、自分の弟子たちに、袋から取り出し、家から旅の途中に持ってきた自分のパンを差し出すよう命じた。　彼らが食事をしていると、聖マルキアヌスは聖テオドシウスにこう言った。

「父よ、貧相なもてなしを用意したことをお許しください。また、パンを差し出さなかったことを責めないでください。私たちは非常に貧しくなってしまい、小麦が全くないのですから。」

そう言ったとき、尊者テオドシウスはマルキアヌスの髭を見つめると、どこからかそこに一粒の小麦の実が混じっているのを見つけた。右手でそっと静かにそれを取り除くと、彼は喜びの笑みを浮かべて言った。

「ほら、小麦があるではないか。どうして『小麦がない』などと言うのですか？」

至福のマルキアヌスは、自分の髭から取り出されたその一粒を、まるで肥沃な種であるかのように喜びながらフェオドシオスの手から受け取ると、聖フェオドシオスの祝福により、耕された畑よりも多くの実を難なく結ぶと信じて、それを穀物倉に運ぶよう命じた。そして、その通りになったのである。　テオドシオスが去った後、朝になって弟子たちが穀物倉の扉を開けようとしたところ、そこには小麦が溢れんばかりに積まれており、　、扉さえ開かないほどだった。マルキアヌスは、この奇跡が起きたこと、そして小麦が増えたことへの感謝を伝え、尊者テオドシオスのもとへ使者を送った。

聖人はこう答えました。

「私ではなく、あなたこそが小麦を増やしたのです、父よ。なぜなら、その穀物はあなたの髭から取られたものだからです。」

アレクサンドリアの著名な女性[936]　が、幼い息子を連れて聖テオドシオスの修道院を訪れた。その少年は、遠くから聖なる父の姿を見かけると、指をさして母に向かって叫んだ。

「ほら、あの人が、私が井戸で溺れ死なないように、手を握って助けてくれた人だよ。」

母は聖人の足元にひれ伏し、次のように語った。

「この少年は」と彼女は言った。「同年代の子供たちと遊んでいる最中、不注意から最も深い井戸に落ちてしまい、私たちは彼がそこで命を落とし、溺死したのだと思っていました。すでに亡くなったかのように彼を嘆き悲しみながら、私たちは一人の男を井戸に下ろし、少年の遺体を水から引き上げさせようとしましたが、水面に浮かんでいる子供を生きている状態で発見したのです。　私たちが驚き、どうして溺れなかったのかと尋ねると、彼はこう話してくれたのです。「ある年老いた修道士が現れて、私の手を握り、水面に浮かせてくれたのです」。

それ以来、私はその少年を連れて、町や村、山や砂漠を巡り歩き、その父を見つけるまで探し続けています。そしてついに、私はあなた様を見つけ、あなた様によって溺死から救われた私の子供も、あなた様を認識しました。

別の女性は、出産の際に非常に苦しんでいました。彼女は死産を繰り返しており、そのたびに極めて激しい苦痛に苛まれていました。彼女は多産でありながら、実子を持たない状態でした。多産であるのは頻繁に出産していたからであり、実子を持たないのは、生まれた子供たちが皆死産だったからです。　彼女は涙ながらに、聖テオドシオスに、これ以上死産を繰り返さず、その激しい苦しみが和らぐよう、彼女のために祈ってほしいと懇願した。さらに、男の子を産んだ際には、その子を自分の名前である「テオドシオス」と名付けることを許してほしいとも願った。

936　古代には、この名を持つ都市がいくつか知られていた。ここでは、地中海に面したエジプトの首都アレクサンドリアを指す。この都市は学問と富で名高く、紀元前332年にアレクサンドロス大王によって建設された。

「もしあなたが、私から生まれる子にあなたの名前を付けることを許してくださるなら、その子は生きて生まれてくることを願っています」と彼女は言った。

聖人は彼女の願いを聞き入れ、彼女のために神に熱心に祈りを捧げた。そして、その女性が産む時が来ると、以前のような苦しみはなく、安産で、生まれた子は生きており、男の子であったため、聖人の名で名付けられた。　母乳を飲む時期が終わり、少し成長すると、その子は修道院に連れて行かれ、聖なる父のもとで神への修道生活へと奉献された。　また、ベツレヘムに住む別の女性も、次々と亡くなっていく子供たちを嘆いていたが、生まれたばかりの赤ん坊にその聖人の名を付けたことで、その子の命を救うことができた。その子は健やかに育ち、優れた建築家となるなど、才気あふれる人物となった。

ある時、イモムシやイナゴがパレスチナを荒らした。聖人はその頃すでにかなり高齢で、歩くこともできなかった。しかし、彼は弟子たちに、農作物が滅びの危機に瀕している畑へ連れて行くよう命じ、そこでイナゴやイモムシを止め、こう言った。

「私たちすべてに共通する主が、あなたがたに命じられる。人の労苦の成果を滅ぼしたり、貧しい人々の糧を食べたりしてはならない。」

するとたちまち、イナゴは雲のように散り、イモムシは死んでしまった。

ある時、兄弟たちは衣服をひどく必要としており、裸を覆うものさえ持っていなかった。彼らは尊者のもとを訪れ、懇願して彼を煩わせた。尊者自身、衣服を買う資金がなかったため、彼らに同情を示すことしかできなかったが、主の約束の言葉を引用してこう言った。

「*明日のことを心配してはならない。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる。あなたがたの父は、あなたがたが何を必要としているかを、あなたがたが求める前から知っておられるからである*」（マタイ6:34, 33, 8）。

聖人がこのように兄弟たちを慰めていると、ある男がやって来た。彼は誰にも知られておらず、自分が誰でどこから来たのかについても語らなかった。彼は修道院の必要のために百枚の金貨を修道院長に渡し、立ち去った。　尊者は、神のこのような御摂理に感謝を捧げた後、その金を兄弟たちの衣服代に充て、皆が長い間衣服に困ることはなかった。

ボストルの[937]　教会の牧師ユリアンは、若い頃に聖者から書物の読み方を学んだことがあり、彼について次のように語った。

「ある時」と彼は言った。「私たちはこの聖なる父と共にボストラへ行った。すると、とりわけ悪意で知られたある女性が私たちに出くわすと、怒りを込めて聖なる父を見つめ、彼を詐い者であり嘘つきだと罵った。すると直ちに、彼女には神からの懲罰が下った。彼女は突然倒れ、息を引き取ったのである。」

「またある時」と彼はさらに語った。「私たちは、北方の異端を信奉する修道士たちがいる修道院の前を通りかかった。彼らは私たちを見ると、通常の賛美の時間より早く兄弟たちを集めるために、教会の木槌を打ち鳴らし始めた。[938] 」 尊者は、彼らが私たちに対して何らかの陰謀を企てていることを察し、義なる怒りに燃え上がり、主の言葉を預言的にこう語った。

「*ここには石一つ残らず、すべてが破壊されるだろう*」（マタイ24:2）。

この言葉はすぐに現実のものとなった。ほどなくして、アガリア人[939]　が夜間にその修道院を襲撃し、中のあらゆるものを略奪し、すべての修道士を捕虜にした後、聖人の予言通り、修道院に火を放ち、その場所を荒廃させたのである。

937　ヴォストラ、あるいはボストラは、聖地にある都市であり、古代にはヨルダン川を越えたマナセ半部族のレビ人の町の一つであった。

938　ビロは、「打つ」という言葉に由来し、信者たちを共同の礼拝に招集するために叩く木製または金属製の板のことである。我々の国ではビロは鐘に取って代わられたが、ギリシャでは今でも使用されている。

939 すなわち、アラブ人。アブラハムとハガルの息子イシュマエルを祖とする人々。

「東方のコミト」と呼ばれたギリシャ軍の長、キリクという名の将は、戦場では勇敢でありながら神を畏敬する人物であり、ペルシャ人に対する遠征に出発するにあたり[940]、まずエルサレムを訪れ、聖地を参拝し、敵に対する神の助けを得ようとした。　彼はテオドシオスの修道院にも訪れた。というのも、その尊者なる父の聖性に関する評判は至る所に広まり、すべての人を彼のもとに引き寄せていたからである。　聖人と語り合う中で、彼はそこから大きな恵みを受けた。すなわち、自分の弓や大軍に頼るのではなく、ただ一人の助け手である神を知り、その無敵の力に希望を置くべきだと教わったのである。なぜなら、神にとっては、たった一人が千人を追い払い、二人が数万の敵を敗走させることなど容易なことだからである。　このような教えと対話を通じて、この伯爵は聖人に対して深い愛を抱くようになり、戦いの盾として用いるため、聖人が身に着けていた羊毛の衣を彼に懇願して手に入れた。　ギリシャ軍がペルシア軍と激突し、激しい戦いが繰り広げられたとき、聖テオドシオスの羊毛の衣を鎧のように身にまとった伯爵は、矢や槍、剣から無傷で済み、並外れた勇気を発揮した。戦争が終わって帰還すると、彼は再び聖人のもとを訪れ、こう告げた。

「戦いの最中、父上ご自身が私を助け、敵にとって恐るべき存在にしてくださり、私たちがペルシア軍に勝利するまで支えてくださったのを、私はこの目で見たのです」と彼は言った。

聖テオドシオス大聖人は、遠く離れた場所にいるこのコミトだけでなく、多くの場所で他の多くの人々にも現れ、迅速な助けをもたらした。　彼は、荒波や嵐の中で船上で死の危機に瀕している者、砂漠を彷徨う者、あるいは野獣の口に捕らえられた者たちを、災いから救うために現れた。ある者には夢の中で、またある者には現実の中で。

彼は人間だけでなく、言葉を持たない動物たちにとっても、迅速な助け手であった。ある旅人がロバを連れて歩いていた。道中で出会ったライオンは、人間には目もくれず、ロバに飛びかかり、引き裂いて食い尽くそうとした。恐怖に震えながら、その男は聖人の名を大声で呼び、こう言った。

「神の僕テオドシウスよ、助けてください！」

すると、聖人の名を聞いたライオンは、たちまち振り返り、砂漠へと走り去った。

また、この聖人の先見の明に関するエピソードも思い出されよう。ある時、すでに臨終が近づいていた頃、彼は兄弟たちが集まるよう、木槌を打つよう命じた。皆が集まると、彼はため息をつき、涙を浮かべてこう言った。

「祈らなければならない、父たちよ、兄弟たちよ、祈らなければならない。なぜなら、私はすでに東の国に迫りつつある神の怒りを見ているからだ。」

その後、六、七日が経った頃、大地震がアンティオキアを破壊したという知らせが届いた。それはまさに、尊者が主の怒りを見て、兄弟たちに祈るよう命じたその瞬間のことだった。

その後、私たちの尊い父テオドシオスは、至福の死を目前に控え、丸一年もの間、病床に伏していました。彼の口からは絶えず祈りが絶えず、眠りに落ちたときでさえ、その唇は動き続け、慣れ親しんだ詩篇や祈りを口ずさんでいました。　そして聖人が目を覚ますと、その口には詩篇がのぼり、ダビデの*「夜も、私は主に向かって歌を歌う」*（詩篇41:9）という言葉が彼に当てはまるのでした。　彼はしばしば徳について説き、兄弟たちに教えを授けていた。そして、亡くなる三日前、彼は愛する三人の司教を呼び寄せ、神のもとへ旅立つことを告げると、彼との別れに泣きじゃくり、嗚咽する者たちに最後の口づけを与えた。　その3日後、神への祈りの最中に、彼はわずか105年の生涯を終え、神に息を引き取った。神は彼の帰天を次の奇跡をもって称えられた。アレクサンドリア出身のステファノという名の男が、長い間悪霊に取りつかれていた。　尊者のお亡くなりになった後、その男は彼の棺に触れると、苦しめていた悪霊から解放され、癒やされた。たちまち至る所で聖人の死が知れ渡り、あらゆる都市から大勢の人々や修道院の修道士たちが集まった。　エルサレムの総主教ペト

[940] 彼らの国は西はスージアナ、北はメディアとパルフィア、東はカルメリアと国境を接し、南はペルシャ湾に面していた。 かつてペルシア人はメディア人、ギリシャ人、パルティア人に従属していたが、西暦226年以降、独立を果たし、ローマ帝国と頻繁に戦争を繰り広げた。

ロも司教たちを伴って参列し、私たちの父テオドシオスの聖なる遺体は、主イエス・キリストの栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美される方の栄光のために、彼が当初住んでいた洞窟に、尊厳をもって埋葬された。アーメン。

コンダク、第8調:

主の庭に植えられ、その尊い徳によって美しく花開いたあなたは、荒野において子らを数多く増やし、あなたの涙の雲に潤された、神の御庭の羊飼いたちよ。それゆえ、我らはこう呼びかける。「喜びなさい、テオドシオス父よ。」

アンティオキアの聖テオドシオスの記念日

記念日：1月11日

敬虔なテオドシオス・断食者は、アンティオキア[941] の出身であった。その両親は敬虔な人々であり、彼は彼らから主の律法に関する良き教えを受けた。　私たちの救い主の至高の戒め（ルカ14:26,27）に従い、至福のテオドシオスは、実家や親族、富、その他の世俗の恵みを捨て、海辺の森林地帯へと退き、そこで小さな修道室を建て、そこに住み着きました。　ここで聖人は、毛皮の衣を身にまとい、重い鎖――一つは首に、もう一つは腰に、そして三つ目は両手に――を巻いて、高潔な修道生活を送った。聖テオドシウスは、すべての時間を祈りと労働に費やし、それによって肉欲、高慢、その他の人間の情欲を制圧した。　彼の頭髪は、足まで覆うほどに伸びていた。聖人は、時には縄を編み、時には菜園で働き、自ら畝を掘り、種を蒔き、野菜を収穫した。それらは、後に聖人自身と、彼を訪ねてくる人々の糧となった。

聖テオドシオスの偉業の評判はますます広まり、多くの人々が、この至福の隠者のそばに住み、その生き方に倣いたいと願うようになった。彼らを受け入れた聖テオドシオスは、自らの荒野を天国の住まいの如き場所へと変えた。　ある日、聖人の修道院があった地域に、アガリア人[942] が侵攻してきた。敵は周辺を荒らし尽くし、修道院にも損害を与えたが、その際に修道院に神の力が宿っているのを感じ取り、すぐに撤退した。　この襲撃をきっかけに、聖人は荒野を離れ、故郷へと戻った。そこで彼は小さな修道室を建て、数人の弟子たちに囲まれながら、自らの救いの道を歩み続けた。新たな修行の地でしばらく過ごした後、聖テオドシウスは安らかに主のもとへ帰った[943] 。

聖ミハイル・クロプスキーの記念日

記念日：1月11日

ヴェリキー・ノヴゴロドから15ヴェルスタ離れた、ヴェリャジ川のほとりに、「クロプスキー」と呼ばれる修道院があり、その中には「命の源である聖三位一体」に捧げられた教会があった[944] 。かつてこの修道院はほとんど知られていなかったが、後に聖ミハイルの奇跡のおかげで広く名声を

941　小アジアやシリアには、この名を持つ都市がいくつか知られている。ここでは当然、シリアのアンティオキアを指す。

942 すなわち、アラブ人（後にこの名称はイスラム教徒のアラブ人に引き継がれた。――*編集者注：AV*）

943 アンティオキアの聖テオドシウスは412年頃に没した。

944　この修道院の創建時期は正確には不明であるが、ノヴゴロドの南、イルメン湖から3ヴェルスタの地点に位置している。

博すようになった。　この修道院のイグメン（修道院長）は、徳の高いテオドシイであった。彼の在任中に、至福のミハイルがクロプスキー修道院を訪れたのである[945]。

聖ミハイルがどこからこの修道院に来たのか、また彼の両親が誰であったのかは、今に至るまで不明のままである。この出来事は夏に起こった。その時、修道者たちは皆、早課に参加していた。カノンの第九歌の際、神聖な礼拝を執り行っていた修道司祭は、聖堂に香を焚き、聖堂の近くにある自身の独房へ香を焚きに行く途中、　しかし、教会へ向かう際に鍵をかけたはずの独房の扉が開いているのを見つけ、中に入ると、修道服を着た人物が座っているのを目にした。その人物の前にはろうそくが灯っており、彼は『使徒行伝』を書き写していた。　教会に戻った修道士は、その光景を修道院長と兄弟たちに報告した。彼らは礼拝が終わるとその独房へ向かったが、内側から鍵がかけられていた。修道院長は祈りを捧げたが、独房からは応答の声は聞こえなかった。彼らは扉を叩き始めたが、扉は依然として閉ざされたままだった。　そこで修道院長は、玄関の屋根を取り外すよう命じた。中に入ると、内側の扉も施錠されていた。修道院長の命令により扉をこじ開け、皆が小部屋に入ると、そこには座って何かを書いている長老がいた。修道院長は彼に尋ねた。「教えてくれ、お前は人間か、それとも霊か？」長老は修道院長の言葉を繰り返した。　修道院長は祈りを捧げると、長老も修道院長と同じ祈りの言葉を口にした。そこで修道院長は、その来訪者に十字を切って香を焚きかけたが、長老は香を避けるように身をよじり、狂人ぶった振る舞いを見せた。

聖ミカエルは修道士たちと共に礼拝堂に入り、聖体礼儀に参加した。その間、彼は聖歌隊席で修道院の聖歌隊員たちと共に歌った。修道院長は彼に使徒書の朗読を任せたが、その朗読の美しさと霊感に満ちた様子に、皆は心の底から慰められた。聖人が定められた朗読を執り行った食事会が終わると、　修道院長は聖ミカエルを、彼が住むことになっている独房へと案内した。それ以来、この聖人は「命の源なる三位一体」修道院に留まり、教会や食事の席で朗読の務めを果たし、その朗読を聞く者たちは皆、深い感動を覚えた。

しかし、修道院長も修道者たちも、この新しくやってきた兄弟の名前や、どこから来たのか、またその出自が何であるかを知ることはできなかった。ある日、コンスタンチン・ディミトリエヴィチ公がクロップ修道院を訪れた[946]　。食事の席で聖ミハイルの朗読を耳にした公は、彼のそばに近づき、その人物が誰であるかを見分け、こう言った。

「この人は、マクシモフの息子ミハイルだ。」

聖人はこれに対し、次のように答えた。

「私を創造されたお方だけが、私が誰であるかをご存知です。」

すると、修道院長はこう言った。

「わが子よ、なぜ自分の名前を言わないのか？」

すると聖人は、自分の名前がミハイルであることを認めた[947]。

クロプスカ修道院での生活の間、聖ミハイルはパンと水だけを口にし、それも週に一度、ごく少量であった。長時間の祈りの修行の後に疲れを感じると、聖人は地面に直接横たわって休息をとった。彼の独房には、身を覆う衣服以外、いかなる財産も もなかった。 尊者ミハイルがキリストのた

---

[945]　それは1408年6月23日のことであり、大公ヴァシーリー・ディミトリエヴィチ（1389–1425年）と聖フォティイ大主教の治世下であった。

[946] 大公ディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーの末息子は、1389年、父の死の4日前に生まれた。 兄である大公ヴァシーリー・ディミトリエヴィチは、彼にトシヤとウスチュジュナの領地を与えたが、1419年、コンスタンチン・ディミトリエヴィチが兄の命令に背いたため、兄はこの領地を剥奪し、コンスタンチンはノヴゴロドへ逃れた。彼は以前、1408年に同地で大公の代理を務めていた。 彼は追放の地で2年間を過ごし、その間にクロプスキー修道院に「命の源である三位一体」に捧げる石造りの教会を建立した。

[947] 聖ミハイル・クロプスキーはボヤール（貴族）の家系に生まれました。

めに成し遂げた偉大な労苦について語り尽くすことは不可能である。その苦行と節制により、彼の体はまるで影のようになった。

当時、ヴェリキー・ノヴゴロドとその周辺では、3年間も続く干ばつに見舞われていた。小川だけでなく、川までもが干上がってしまった。そこで、聖ミハイルの祈りにより、修道院の近くで地響きが起こり、豊かな水を湧き出す泉が現れた。その泉は、今もなお、修道者たちや訪れる人々の必要を満たしている。[948] 干ばつの後、その地方では飢饉が訪れ、その間、大勢の貧しい人々がパンを求め修道院にやって来るようになった。修道院長は備蓄が尽きることを恐れ、どうすべきか途方に暮れていた。しかし、聖ミハイルは、主が七つのパンで四千人を養われたことを指摘し、修道院長を説得して、飢えた人々全員に食事を与えるよう促した。 そこで、修道士たちがこれに不満を漏らしたとき、聖ミハイルは彼らと修道院長をパン倉庫へと案内した。すると、彼らは驚愕しながら、聖人の祈りによってパンの備蓄が全く減っていないことを目の当たりにした。 聖ミハイルは、ヴェリキー・ノヴゴロドの陥落について多くの預言を行い[949] 、キリストの御名によって多くの奇跡を成し遂げた後、安らかに主のもとで息を引き取った[950] 。 その尊く、多くの苦難を経た遺体は、修道院長と修道士たちによって、聖ミハイルが修業に励んだ「命の源なる三位一体」修道院[951] に埋葬され、大聖堂の右側に安置された。そこでは今日に至るまでその遺体が眠り続け、信仰をもって訪れる人々に様々な癒やしをもたらし、我らの神キリストの栄光を現している。

トロパリオ、第8調:

地上でキリストのために自らを荒廃へと委ね、この世の美しさを決して憎み、断食と渇きによって肉欲の遊びを枯らし、地上で寝泊まりし、暑さや寒さ、雨や雪、その他の気象の厳しさからも決して退くことなく、 また、神を宿す尊きミカエルよ、あなたは徳によって魂を、炉の中の金のように清め、今や天において至聖なる三位一体の御座の前に立っておられます。どうか、大いなる大胆さをもって、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第8調:

聖霊の力により、あなたは神の言葉を語った古の預言者たちのようになられました。知られざる秘密の事柄や、神の御計画の成就にふさわしい事柄を語り、またキリストに関する多くの奇跡を行い、人々を驚かせ、喜びの祝宴を設け、こう叫ばせました: 御自身の聖なる者たちを賛美される神に栄光あれ。

---

948 今なお、クロプスキー修道院では、伝承によれば、干ばつの際に聖ミハイルの祈りによって湧き出た泉を源とする井戸が公開されている。6月23日、聖ミハイルが修道院に到着した記念日に、周辺の村々からここへ十字架行列が行われる。

949 ある時、至福のミハイルはヴィャジツキー修道院に滞在していた。すると突然、彼は鐘楼に現れ、すべての鐘を鳴らし始めた。 人々が「これはどういうことか」と尋ねると、聖人は狂人ぶってこう答えました。「今、モスクワには喜びがある」と。さらに、大公に息子イワンが生まれたと付け加え、その子は近隣諸国にとって脅威となり、ノヴゴロドを征服し、その慣習を変え、金を取り上げ、完全に自らの支配下に置くだろうと語りました。 実際、1440年1月22日にイワン・ヴァシリエヴィチ公が誕生し、彼は1471年にノヴゴロドを征服した。ノヴゴロドは1480年にモスクワ大公国に完全に併合された。

950 クロプスキー修道院で、聖ミハイルは44年間を過ごし、1452年に帰天した。

951 聖ミハイルの記念日は、1547年の公会議により、各地で祝うことが定められた。

1月25日

1月12日（旧暦）

聖殉教者タチアナの受難

聖殉教者タチアナの殉教

記念日：1月12日

聖殉教者タチアナは、古代ローマで高貴な両親の間に生まれた。彼女の父は三度も執政官を務めたが、密かにキリスト教を信仰しており、神を畏れる心で知られていた。彼は娘である聖タチアナを敬虔さと神への畏れをもって育て上げ、聖書を教えた。　聖タチアナが成人すると、彼女は処女性と貞潔のうちに生涯を過ごすことを望みました。彼女はキリストの花嫁であり、キリストへの愛に燃え、昼も夜もただキリストのみに仕え、祈りと断食によって肉体を死なせ、それを霊に服従させました。　その徳高い生涯により、彼女は教会に仕えるにふさわしい者と認められた。彼女はディアコニサに任命され、無形の天使たちのように、肉体をまとったまま神に仕えた。そして、キリスト・神は、その花嫁に殉教の冠を授けられた。彼女は次のように殉教した。　不敬虔な皇帝アントニヌス・ヘリオガバルス[952]　が自国のローマ人によって殺害され、その遺体が侮辱されながら街中を引きずり回された末、テヴェレ川[953] に投げ込まれた後、16歳の若き少年アレクサンドロス[954] が皇帝の座に就いた。彼の母はマメイアという名のキリスト教徒であった。　彼女からキリストを敬うことを学んだが、キリストの信仰とは相容れないものであった。というのも、彼は同時に偶像への奉仕を続け、それらを古代ローマの神々として崇拝していたからである。彼の宮殿には、キリストや異教徒に崇められていたアポロンの像[955] 、旧約聖書のアブラハムや異教のオルフェウス[956] 、その他多くの像が置かれていた。　キリスト教徒の娘を母に持つアレクサンドロス自身は、キリスト教徒を迫害しなかったが、彼の総督、地方の統治者、および執政官たちは、キリスト教徒を激しく弾圧した。アレクサンドロス自身が若すぎたため、国家の統治は評議会のメンバー数名に委ねられていた。その中でも中心的な存在だったのが、都市の総督（エパルヒ）[957]　ウルピアンであり、彼は気性が荒く、キリスト教徒の宿敵であった。　これらの顧問たちは、皇帝の名においてすべてを統治した。彼らこそが、ガリラヤ人（彼らがキリスト教徒をそう呼んでいた）に対し、至る所でローマの神々を崇拝するよう強制する勅令を各地に発し、従わなければ凄惨な拷問や死さえも与えると脅した。　そして、キリスト教徒がこの命令に従っているかどうかを監視するために、キリスト教徒の最も凶悪な敵であり、悪魔の忠実

952　ローマ皇帝アントニヌス・ヘリオガバルスは、218年から222年まで在位した。彼は極めて堕落した人物であり、そのためすぐに兵士たちの軽蔑を招いた。　彼は従兄弟である貴族のアレクサンドロス・セウェルスを養子にしたが、後にこれを後悔して彼の命を狙おうとしたところ、兵士たちによって殺害された。

953 ティブルス川は、アペニン山脈を源流とし、そのほとりにローマ市が位置する川である。

954 アレクサンドロス・セウェルスは222年から235年まで在位した。

955　アポロン――ギリシャ・ローマの多神教において最も崇敬された神の一人。太陽と知性の啓蒙、さらには社会の繁栄と秩序の神として崇められ、法の守護者であり、未来を予言する神でもあった。

956　オルフェウスは、ギリシャ神話に登場する歌手の英雄であり、ギリシャ人の信仰によれば、その歌声の力は極めて強大で、木々や岩を動かし、野生の獣を従わせることができたとされる。

957　エパルコス――地方長官。また、この名称で要塞の長、司令官を指すこともあった。――ウルピアンは、王に最も近い重臣の一人であった。

な僕である以下の者たちが選ばれた。コミット[958] のヴィタリウス、クヴィキュラリウス[959] のヴァス、ドメスティクス[960] のカイ。 その時、ローマにおいても、またローマ帝国の全地域においても、キリスト教徒の血が水のように流れた。彼らは容赦されることなく、拷問にさらされ、死に追いやられた。

その頃、聖処女タチアナも異教徒たちに捕らえられ、アポロンの神殿へ連行された。彼らは彼女に、この偶像を拝むよう強要しようとした。 しかし彼女は真の神に祈りを捧げると、突然地震が起こった。アポロンの偶像は倒れて粉々に砕け散り、神殿の一部も崩れ落ちて、多くの異教徒や祭司たちを押しつぶした。 その偶像に宿っていた悪魔は、大声で叫び、泣きわめきながらその場から逃げ去った。その際、誰もがその叫び声を聞き、空を駆け抜ける影を目撃した。

そこで、不信心者たちは聖なる乙女を裁判と拷問の場へと引きずり出した。まず彼らは彼女の顔を殴り、鉄の鉤で彼女の目をえぐり出した。 長い拷問の末、拷問者たち自身が力尽きてしまった。というのも、キリストの殉教者の体は、彼女に傷を負わせようとする者たちにとって、まるで金床のように堅く、聖なる殉教者よりもむしろ拷問者たちの方が、より大きな苦痛を味わったからである。 そして、天使たちは目に見えない形で聖女のそばに立ち、聖タチアナを苦しめる者たちに打撃を与えた。そのため、拷問者たちは不義な裁判官に叫びかけ、 に拷問を止めるよう命じるよう懇願した。彼らは、自分たちの方が、この聖なる無垢な乙女よりもはるかに苦しんでいると訴えたのである。 一方、タチアナは勇敢に苦しみを受け入れながら、拷問者たちのために祈り、主が彼らに真理の光を開いてくださるよう願った。 そして、彼女の祈りは聞き入れられた。天の光が拷問者たちを照らし、彼らの霊的な目が開かれた。彼らは聖女を取り囲む四人の天使を見、天から聖なる乙女に向けられた声を聞き、彼女の前にひれ伏して、こう懇願し始めた。

「真の神のしもべよ、私たちをお赦しください。私たちの意志に反して、あなたに苦しみを与えたのですから。」

彼ら全員（その数は八人であった）はキリストを信じ、自らの血をもって洗礼を受けた。というのも、彼らはキリストを告白したために残酷に拷問され、ついには首を刎ねられたからである。

翌日、不義な裁判官は法廷の席に着くと、再び聖タチアナを拷問に連れてくるよう命じた。彼女は、全く無傷の状態で拷問者の前に現れた。その顔は穏やかで、喜びに満ちていた。裁判官は聖なる乙女に対し、偶像に犠牲を捧げるよう説得したが、その努力は徒労に終わった。 そこで彼は、聖女を裸にし、剃刀で切り刻むよう命じた。彼女の処女の体は雪のように白く、切り刻まれると、傷口からは血の代わりに乳が流れ出し、まるで香油の入った壺から漂うかのように、素晴らしい香りが広がった。 聖女は天を仰ぎ、こうした苦しみの中でも祈りを捧げた。その後、彼女は十字架の形に地面に横たえられ、長い間杖で打ち続けられたため、拷問者たちは疲れ果て、頻繁に交代を余儀なくされた。というのも、以前と同様に、神の天使たちが目に見えない形で聖女のそばに立ち、聖なる殉教者に打撃を加える者たちに傷を負わせていたからである。 拷問者の手下たちは、誰かが鉄の棒で自分たちを殴っていると言いながら、力尽きていった。ついに、そのうちの九人が天使の右手に打たれて死に、残りの者たちはかろうじて息のある状態で地面に倒れ込んだ。 一方、聖女は裁判官とその手下たちを非難し、彼らの神々は魂のない偶像に過ぎないと語った。すでに夕方になりつつあったため、聖女は牢獄に投じられた。そこで彼女は一晩中、主に祈りを捧げ、主を賛美し続けた。 天の光が彼女を照らし、神の天使たちも彼女と共に神を賛美した。朝になると、彼女は再び裁判の場に引き出された。聖なる殉教者が全く健康で、以前よりもさらに美しい顔つきをしているのを見て、皆は驚き、感嘆した。 まず、彼らは優しく、またお世辞を交えて、彼女に自分たちの偉大なる女神――デ

---

[958] コミタスとは、当初は地方の高官の随行者を指したが、後には皇帝の最も身近な側近を構成する随行者を指すようになった。

[959] クヴィキュラリウス――皇帝の寝殿係、寝所係。

[960] ドメスティクスは、ローマ皇帝の護衛隊である。

ィアナ[961] ――に犠牲を捧げるよう説得し始めた。聖なる乙女は、彼らの助言に従うふりをした。彼女はディアナの神殿へと連行された。ディアナの偶像に宿っていた悪魔は、聖なる乙女の接近を感じ取り、大声で叫び始めた。

「ああ、悲しや、悲しや！　天の御方よ、あなたの御霊からどこへ逃げればよいのか。この神殿の隅々から燃え上がる炎が、私を追い立てているではないか！」

聖女は神殿に近づくと、十字を切って祈りを捧げ、天を仰いで祈り始めた。すると突然、恐ろしい雷鳴が轟き、稲妻が閃いた。天から降り注いだ火が、偶像のある神殿や生贄、祭司たちを焼き尽くし、　多くの異教徒が稲妻に焼かれ、死体となって地面に倒れ伏した。そこで、聖タチアナはプレトール[962] へと連行され、そこで吊るし上げられ、鉄のフックで拷問され、さらには乳房さえも引きちぎられた。　その後、聖女は牢獄に閉じ込められたが、再び輝かしい天の天使たちがこの殉教者の聖女のもとに現れ、彼女の傷を完全に癒やし、その勇敢な苦難を称えた。翌朝、聖タチアナはサーカス（[963] ）に連行され、恐ろしいライオンが放たれ、聖女を食い散らすよう仕向けられた。 しかし、その獰猛な獣は聖女に手を出さなかった。獅子は彼女に寄り添い、従順に彼女の足を舐めていた。そして、獅子を劇場から檻へと連れ戻そうとしたとき、獅子は突然、エウメニアという名の高位の貴族に襲いかかり、彼を引き裂いてしまった。　聖タチアナは再び吊るされ、再びその肉体を削り取られ始めたが、再び天使たちが目に見えない形で拷問者たちに打撃を与え、彼らは死んで倒れた。そこで聖女は火の中に投げ込まれたが、火も彼女に害を及ぼさなかった。炎の勢いは、あたかもキリストのしもべを敬うかのように、弱まっていったのである。　しかし、不信心者たちは、これらすべての驚くべきしるしをキリストの力によるものではなく、魔術によるものと見なした。彼らは、聖女の魔法がもはや効力を失うことを期待して、彼女の髪を刈り落とした。彼らは、聖女が自分の髪に何らかの魔法の力を秘めており、それゆえ何によっても彼女を傷つけることはできないと考えていた。　そこで彼らは、彼女の髪を 刈り落とし、ゼウスの神殿[964] に彼女を閉じ込めた。不信心者たちは、聖女が髪を失ったことで魔術の力も失ったため、もはや彼らの神を傷つけることはできないと考えていた。聖女はその神殿に閉じ込められたまま、二日間を過ごした。　常に彼女を照らしていた天の光は、神殿の中にも満ち溢れ、天使たちは彼女を励まし、慰めた。三日目に、祭司たちが民を率いて、彼らの神ゼウスに犠牲を捧げるためにやって来た。神殿の扉を開けると、彼らは自分たちの偶像が倒れて粉々になっているのを見、聖タチアナは主なる神の御名に喜びに満ちておられた。　そこで彼女は法廷へと連行された。裁判官は、彼女をどう処遇すべきか分からず、死刑を宣告し、聖タチアナは剣によって斬り殺された。[965] 彼女と共に、彼女の父も処刑された。彼もまたキリスト教徒であることが判明したからである。　まず、拷問者たちは彼から名誉ある称号を剥奪し、すべての財産を没収した。死刑を宣告された彼は、キリストの御名のために、娘と共に剣によって命を落とした。二人は共に、主からキリスト・神による殉教者の冠を授かるにふさわしい者とされ、神に永遠の栄光あれ。アーメン。

---

[961] ディアナ、別名アルテミス――ギリシャの月と狩猟の女神。

[962] プレトール――ローマの行政官、すなわち裁判官が審理を行う裁判所。

[963] 「サーカス」とは、一連のベンチや壁で囲まれた広場のことを指した。そこでは、戦士同士や戦士と野獣との闘いが繰り広げられた。この広場、すなわちアリーナには、キリスト教徒も投げ込まれ、その後、サーカスの敷地内の特別な檻に収容されていた猛獣が放たれた。

[964] ゼウス、あるいはユピテルは、異教徒から天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていたギリシャ・ローマの神である。

[965] 聖殉教者タチアナは、アレクサンドロス・セウェルスの治世第4年、すなわち226年に、キリスト教徒に対して行われた迫害の際に殉教した。

コンダク、第4調:

汝の苦難の中で輝きを放ち、汝の血に染まり、美しい鳩のように天へと舞い上がった殉教者、タティアナよ。それゆえ、汝を崇める者たちのために、絶えず祈り給え。

セルビアの大司教、聖サヴァの生涯[966]

記念日：1月12日

聖サヴァは、独立したセルビア国家の創設者として名高い、セルビアの大ジュパン・ステファン・ネマニャ（修道名シメオン）の息子であり、教会からはセルビアの守護聖人として崇められている。　ステファン・ネマニャは12世紀に生きた。彼はセルビア領土の大部分を統一し、政治的独立をもたらした。その息子サヴァは、独立したセルビア教会の創設者となった。

サヴァは、ステファン・ネマニャとその妻アンナの子供たちの中で最年少でした。すでに数人の子供をもうけていた両親は、主に向かって、祖国に敬虔さを広め、その名を輝かせるような息子をもう一人授けてくださるよう祈りを捧げました。そして、その願いが叶った後は、死ぬまで貞潔を保つと誓いを立てました。　両親の祈りは聞き入れられ、彼らには息子が生まれ、聖なる洗礼において、彼らはその子をラシュコ、あるいはロスティスラフと名付けた。それは、息子自身だけでなく、彼と共に彼らの愛する祖国もまた、霊的な栄光の中で成長していくことを予見していたかのようであった。

神の恵みに喜び、両親は息子の良き教育に全力を尽くした。幼少期を過ぎると、彼らは息子を特別な部屋に移し、教育者を付け、適時に読み書きを学ばせるよう配慮した。　両親の特別な祈りによって授けられたその少年には、神の恵みが絶えることがなかった。彼は肉体を成長させ、精神的に高みへと至り、敬虔さと清らかさの中で生活を送ることで、両親に計り知れない慰めを与えた。

教育を終えると、両親は彼に独立した領地を与えた。そこでは、彼は使用人たちと共に自立して暮らし、狩猟や、高貴な若者にふさわしいその他の娯楽を楽しむことができた。

若者は実家を離れた。しかし、世俗的な楽しみには心を奪われなかった。　彼の思いと心は、まったく別の事柄に占められていた。彼が最も頻繁に思い起こしたのは、詩篇の言葉「*主を畏れる人は幸いである*」と、救い主の言葉「*父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を負ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない*」（詩篇111:1；マタイ10:37–38）。彼を惹きつけたのは「*主の道*」――すなわち、この世を捨て、何よりもまず天の御国と義を求め すること――であった。　空しい遊びにふける代わりに、ラツコは修道生活について深く思索にふけり、主が彼にふさわしい御道を示してくださるよう祈った。ラツコは聖山アトスでの修道生活について耳にしており、自分が知りたいことをすべて教えてくれる人に出会えることを切に願っていた。　そして、神は彼に、聖山をよく知る一人の修道士を送ってくださった。それは、アフォンのロシア人修道院「パンテレイモノフ修道院」出身のロシア人修道士であった。彼は、この高貴な若者のあらゆる願いを叶え、アフォンのすべての聖なる修道院や、聖山におけるあらゆる種類の修道生活について語ってくれた。

966　聖サヴァの伝記は、彼の弟子であるヒランダル修道院の修道士ドメティアヌスによって執筆された。本書は、この伝記を基礎としている。ダニチッチによって『聖シメオンと聖サヴァの生涯』という書籍として出版された（ベオグラード、1865年）。　著者が不明な別の伝記も存在するが、これはドメティアノスの伝記の直後に執筆されたものであり、いくつかの追加情報を含んでいる。これもまた、1860年に同じダニチッチによって刊行され、聖シメオンのドメティアノスによる伝記と同様に、本稿において考慮されている。

その巡礼の修道士の語りは、敬虔な若者の意図と期待に完全に合致していた。彼はその場で揺るぎない決意を固め、世俗を捨ててアトス山で修行に励むことを神に誓った。世俗の生活を捨てようと決心した時、その若者はわずか十七歳だった。

主なる神に熱心に祈りを捧げた後、彼は数人の敬虔な男たちに、自分の決意を実行する手助けをし、同行者となってくれるよう説得し、直ちに旅立ち、まずは実家へ向かった。　父と母は、愛しい息子の帰来にこの上ない喜びを感じ、この機会を祝って宴を催し、あらゆる方法で彼に愛情を注ごうと努めた。

両親の家に数日間滞在した後、ラスツコは、あらゆる種類の獲物が豊富な、少し離れた人里離れた荒野へ狩りに行かせてほしいと両親に頼んだ。　両親は快く承諾した。両親の祝福を受けたラスツコは、忠実な仲間たちを伴って旅に出たが、それは荒野で獣を狩るためではなく、魂の救済のための修行を積むために、聖なるアフォン山へ向かうためであった。

無事にアフォン山に到着したラスツコは、ロシアのパンテレイモン修道院に身を寄せた。そこでは、ある修道士が以前、彼にアフォン山での修行生活について詳しく語っていた。

まもなく、両親は息子の行方が分からなくなったことに気づいた。息子が、他ならぬロシア人修道士に誘われ、他でもないアトス山へと向かったのではないかと察したステファン・ネマニャは、直ちに上級軍司令官の一人を大部隊を率いて派遣した。　ギリシャ皇帝イサアク・アンゲロスから[967]、アフォン山のプロトゥ（住職）およびすべての聖山修道者に対する厳命を受け、ステファン・ネマニから委任されたテッサロニキ地方総督の軍事部隊がアフォン山に到着し、聖パンテレイモン修道院で捜索中の貴族の逃亡者を発見した。　ネマニの忠実な家臣は、探していた人物をこれほど早く見つけられたことを大いに喜び、彼を深く案じていた両親のもとへ若者をすぐに連れ戻し、その功績に対して相応の報奨を得られることを期待していた。　逃亡者が自発的かつ進んで故郷へ戻ることを期待せず、その意図を断ち切るため、使者たちは若者の目を離さず、彼が再び姿を隠さないよう厳重に見張っていた。　しかし、ラスツコはとっくの昔に、いかなる障害があろうとも、アトス山で修道士の剃髪を受け、そこに留まることを決意していた。この決意はパンテレイモノフ修道院のイグメンにも知られており、彼はこの勇敢な若者を支援することを決意した。

ある土曜日のこと、ラスツコは、父から彼を迎えに送られてきた兵士たちと、その地の住民たちのために、盛大な饗宴を催すよう命じた。饗宴の後、皆が眠りについた頃、修道院長の指示により、慣例に従って神殿での夜の徹夜祈祷に皆を呼び集める鐘が鳴らされた。　修道士たちだけでなく、兵士たちも教会へ行くことになっていた。饗宴と長時間の徹夜祈祷で疲れ果てた警備兵たちは、カフィズムの朗読中にそれぞれの席で眠り込んでしまった。　この状況を利用し、ラストコは自分の使用人の一人に、自分の服を着て礼拝が終わるまで自分の席に立つよう命じ、自身は聖なる祭壇へと向かい、そこで修道誓願を立て、着替えた後、誰にも気づかれることなく教会から出て行った。　ある年老いた修道士と共に、彼はピルグ、すなわち塔に登り、そこに身を隠した。時間を無駄にすることなく、そこでサヴァという名で修道士の剃髪を受け、修道服を身にまとった。

夜の徹夜祷が終わりに近づいた。明け方、警備兵たちは目を覚まし、恐怖に駆られて、自分たちが捜していた若者が再び姿を消してしまったことを確信した。彼らは激しい憤りを抱いて修道院の修道士たちに詰め寄り、暴力をちらつかせながら、その若者を引き渡すか、あるいは彼がどこへ行ったかを明かすよう要求した。　塔の上から大きな騒ぎが聞こえ、自分のせいで修道士たちが多くの苦難を強いられるかもしれないと案じた隠遁者は、塔の窓から身を乗り出し、剃髪した頭と修道服を見せながら、こう叫んだ。

[967] イサアク・アンゲルは1185年から1195年まで在位した。

「私はここにいる。だが、もはやラスツコではなく、修道士サヴァだ。これが私の剃髪した頭と、かつての公爵の衣装だ。私に何が起きたかの証拠として、これらを私の両親のもとへ届けてほしい。」

恐ろしい悲しみが老いた軍司令官とその一行を襲った。彼らのすべての労苦は水の泡となった。もはや、若者を別れた時のままの状態で両親のもとへ連れ戻すことは不可能であり、そもそもその必要もなかった。彼はこの世を捨ててしまったのだから。

ステファン・ネマニによって派遣された使節たちは、悲しみに暮れながら、故郷へと帰路についた。

聖パンテレイモンの修道院に残った、新たに修道衣をまとった修道士サヴァは、修道生活を始め、彼を受け入れてくれたロシアのパンテレイモン修道院の建設のために多額の金を寄付した。

しばらくして、アトス山のヴァトペド修道院で盛大に祝われる聖母マリアの受胎告知の祝日が訪れた。この祝祭には、アトス山のすべての修行者が招かれていた。威厳ある修道士サヴァも招待状を受け取った。　彼は大きな喜びと熱意をもって、アトス山の修道者たちの長を筆頭に、アトス山のすべての修道士たちが集まるこの栄えある祝典へと向かった。アトス山のすべての権威者たちから丁重にもてなされたサヴァは、聖母マリアが特に愛した聖地であるアトス山で、本格的な教会の祝典を目の当たりにする機会を得た。　彼は目にしたもの、耳にしたものすべてに深く感銘を受け、直ちに聖母マリアの修道院に留まることを決意し、ヴァトペド修道院のイグメンであるテオスティリクトに対し、修道院の兄弟団の一員として受け入れてくれるよう熱心に懇願した。　サヴァの心からの願いは受け入れられ、叶えられた。彼は一般の修道士の一員となり、修道士としてのあらゆる義務と従順を熱心に果たし始めた。ヴァトペド修道院に入会した直後、サヴァは、自分を深く感動させ、長年の敬虔な願いを満たしてくれたこの修道院に、多額の寄付を急いで行った。

一方、ステファン・ネマニャが息子の行方を捜すために派遣した使者がセルビアに持ち帰った知らせは、両親だけでなく国全体をも深く震撼させた。王家の若者が実の家族と世俗のすべてを捨て、修道士になったのだ！　当初、両親は息子と引き離されたことを悲しんだが、やがて万事には神の御心があることを悟り、敬虔なキリスト教徒として、息子を神の僕と見なし、彼から自分たち自身だけでなく祖国にも恵みがもたらされることを期待して、悲しみを喜びへと変えた。

両親は思いと感情を整理し、サヴヴェに涙ぐましい手紙を送った。その手紙の中で、別離を惜しみつつも、同時に主なる神に栄光を帰し、　その英知をもって万事を善きものへと導かれる主を共に賛美しつつ、息子に両親を訪ね、故郷のセルビアに来て皆に慰めをもたらすよう説得し、懇願した。そして、再会後は何の妨げもなく彼を聖山へ戻すと約束した。

両親は手紙とともに、息子の個人的な必要のためだけでなく、アトス山の教会や貧しい人々に施すためにも、多額の金を送った。

聖サヴァはこの両親からの手紙に慰められましたが、故郷へ帰ることを望みませんでした。彼は、切望し、無事に定住していたアトス山で修行を続けることに熱意を燃やしていたのです。

ヴァトペド修道院に滞在していたサヴァは、聖なるアトス山を頻繁に巡礼し、聖なる修道院を訪れて祈りを捧げ、偉大な修行者たちに会い、彼らと語り合い、霊的な啓発を得たいと願っていた。素足で質素な服を身にまとい、彼はアトス山全域を歩き回り、最も険しく高い岩山に登り、断崖や急流を渡り、人間がようやくたどり着けるような山の岩場に、まるで鳥のように身を潜めている孤独な修行者たちを探し求めた。　こうした巡礼を行うにあたり、サヴァの目的は、アトス山の修道生活を見て学びたいという自身の願望を満たすことだけにとどまらなかった。同時に、彼は、通常、孤独なアトス山の修道士たちである貧しい人々を物質的に助けたいと願っていた。彼らを助けるために、彼は自身が豊富に持っていた財産を惜しみなく注ぎ込んだ。

アトス山を巡るこうした旅の途中、彼は幾度となく大きな危険にさらされたが、主は彼を助けてくださった。当時、アトス山は海賊にひどく悩まされていた。彼らは海岸に上陸して修道院全体を略奪し、海岸近くの海上でも陸上でも、通行人や旅人を待ち伏せして襲っていた。　サヴァは時折、温かいパンを焼き、自らそれを修道院の荒野へと運び、温かい料理や調理された食事を一切口にせず、様々な植物を糧としていた孤独な修行者たちに配る習慣があった。サヴァは、聖なる四旬節の土曜日にこれを行うことを好んでいた。　ある土曜日の早朝、ラバに温かいパンを積んで、彼は急いで出発した。裸足で先頭を歩き、キリストの修行者たちに慰めを届けたいという熱意に燃えていた。道は海沿いに続いており、サヴァは「ミロポタム」と呼ばれる場所の近く を通過していた。 そこで強盗たちに襲われ、彼自身も同行者たちも捕らえられてしまった。サヴァは、旅路がこれほど突然に妨げられたことに深く落胆した。心の底から、主なる神に救いを求めて祈りを捧げると、主は彼を救われた。強盗たちは尋問を始めた。

「お前は誰だ？　どこから来たのか？」

サヴァはこう答えた。

「私はマカリア神父の弟子です。昨日、ある霊的な用事でエスフィグメンへ私を遣わしてくださったのですが、兄弟たちが今朝まで私を引き留め、長老たちへの祝福としてパンを私と共に送るよう手配してくれました。というのも、大きな修道院には、キリストのために苦難に耐え、　キリストのために苦しみ、主なる神が送ってくださる施し以外に慰めを持たない者たちを慰めるために、パンを送るという慣習があるのです。

聖サヴァのこの言葉は、強盗たちの冷酷な心を和らげ、彼らは信仰に心を打たれてサヴァを解放したため、彼はちょうど間に合うように長老のもとへたどり着くことができた。　ちょうど祈りを始めようとしたその時、修道院に海賊たちも現れた。彼らは自分の行いを悔い改め、サヴァの後を追ってやって来て、長老の姿を見ると、祝福を請い、道中で起こった出来事をすべて語った。　長老は神の御言葉をもって彼らを導くと、彼らは心を打たれ、長老を信頼するようになった。これらの海賊たちは、著名な貴族たちの一員であった。彼らは長老に尋ねた。

「キリストの御名において教えてほしい。この修道士（すなわちサヴァ）は、本当にあなたの弟子なのか？　我々は彼に、ある輝かしいしるしを見ている。」

長老はこう答えた。

「キリストの御名において、わが子らよ、こう言おう。この修道士は神の弟子であり、我々にとっては兄弟の一人である。彼は敬虔なセルビア王の息子だ。全き慈愛の神が、御自身のしもべたちを訪ねるために彼を我々の元へ遣わされたのだ。ご覧の通り、　彼は自らの王国を離れ、この荒野を巡り、荒野や山々、洞窟や地の深淵で、キリストのために苦しむ者たちを訪ね、慰め、養い、衣を与えている。まるで太陽のようにすべてを照らし、慈しみを与え、永遠の命における憐れみと慰めを待ち望んでいるのだ。　これを聞いた強盗たちは、サヴァの足元にひれ伏し、祝福を請いました。彼と長老の両方から祝福を受けた彼らは、二度と強盗を働かないと誓い、それぞれの家へと帰っていきました。

もう一つの同様の出来事は、聖サヴァがアトス山の聖アファナシオス修道院を訪れた際にも起こった。サヴァは数人の修道士に付き添われて、船で海を渡り修道院へ向かっていた。彼らが修道院に近づいたとき、強盗たちに襲われ、捕らえられてしまった。　サヴァの同行者の一人が、どうにかして強盗の手を逃れることができ、彼は急いで聖アファナシオス修道院へと駆けつけ、イグメンに彼らに降りかかった災難を報告した。イグメンと修道者たちはこれを聞いて大いに動揺し、直ちに、聡明さで知られた修道者の一人を派遣した。　その間、聖サヴァは盗賊の手に落ちたまま、心の中で主に向かって救いを求めて祈り続けていた。やがて、修道院から派遣された修道士が現れ、盗賊たちにこう声をかけた。

「ご到着おめでとうございます！修道院へようこそ。そこでは休息をとることができ、必要なものはすべて手に入りますよ！」

そして、若い修道士サヴァを一瞥すると、狡猾な修道士はまるで激しい怒りを露わにするかのように彼に言った。

「お前は一体どこへ来たんだ？修道院長が送ったのはこんな場所ではないはずだ。それなのに、お前は勝手なことをしているのか？」

そして、まるでサヴヴァを殴りつけようとした。サヴヴァは恐怖に駆られたかのように彼から飛び退き、舟から飛び降りて走り去った。　驚愕した強盗たちは、起きたことすべてに呆然として、何も言わなかった。しかしその後、サヴヴァが身を隠した修道院で彼を見かけ、彼が誰であるかを知ると、自分たちの手からどれほどの宝物を逃してしまったかについて、互いに深く後悔した。

修道院でしばらく過ごし、修道院長や修道士たちと共に精神的・肉体的な慰めを受けた後、聖サヴァは無事にヴァトペド修道院へと戻った。

敬虔な両親から受け継いだ財産を活かし、聖サヴァはヴァトペド修道院内の教会の建設と装飾に着手した。まず第一に、彼は大聖堂の東側にある修道院の要塞内に、聖母マリアの降誕を称える教会を建立した。　その後、同じ要塞内、前述の聖堂の隣に、聖ヨハネ・クラマトリオスに捧げる教会を建立し始めた。彼は、やがて年老いた権力者である父ステファン・ネマニャもここに定住することを心に願っていた。

これら2つの新しい教会の建設と装飾が完了すると、サヴァはヴァトペド修道院の主教会である「聖母マリアの受胎告知」に捧げられた教会も放置しなかった。この教会は瓦葺きであったが、サヴァはその屋根が脆弱であると判断し、錫板に葺き替えた。これには少なからぬ資金が必要とされた。

その後、サヴァは修道院の塔、すなわちピルゲの中に、キリストの変容を称える教会をさらに建設した。

これらの主要な建造物に加え、聖サヴァはヴァトペド修道院の主教会である受胎告知教会の内装装飾や祭具にも惜しみなく資金を投じた。これらすべての貴重な品々は、セルビアの地からやってきた聖山の偉大な恩人への記憶として、後世に伝えられている。

アフォンに敬虔な父ステファン・ネマニウを招き入れたいという思いが、聖サヴァの頭を離れなかった。　彼はついに、両親に雄弁な書簡を送る決心を固めた。その書簡の中で、父に対し、地上の王国を捨て、天使のような姿となり、聖山へ移り住むことで、天の王国への道を求めるよう説得した。

ステファン・ネマニャは、かねてよりこのことを考えていた。彼はかねてより、世俗の権力や世俗のあらゆるものを捨て、修道生活を送ることを望んでいた。そして今、息子の説得力ある言葉を受けて、彼はその決意を実行に移すことにした。　志を同じくする敬虔な妻アンナと相談した後、ステファン・ネマニャは息子のステファンを呼び寄せ、国中の貴族や当局者たちの面前で、彼にセルビアの統治権を委ね、大ジュパンに任命し、自身は世俗の地位を退く意向を表明した。　貴族や家臣たちに別れを告げると、彼は全員に豊かな報奨と贈り物を与え、奴隷には自由を与え、貧しい者たちを保護した。　このようにして世俗とのあらゆる絆を断ち切った後、彼は修道誓願を立て、シメオンという名を受け、自ら建設したストゥデニツァ修道院において、司教カリニクの手によって修道衣を授かった。

妻のアンナも彼の例に倣い、同じくその司教の手によって修道衣を授かり、ある女子修道院に入りました。

出家後の当初、新たな王家の修道士シメオンは、ストゥデニツキー修道院で過ごし、修道規則に慣れ、最初の修道務めを果たした。　多くの貴族たちは、君主の敬虔さに倣おうと、世俗の生活に留まることを望まず、出家して、かつての君主と共に新たな道を歩むことを決意した。シメオンがアトス山へ向かうことを決めたとき、彼らは彼に従った。

聖山へ向かう際、シメオンは大量の金、衣服、馬、馬具、その他様々な品々を携えていった。そしてヴァトペド修道院に到着すると、これらすべてを、彼が住むことになっていた修道院、そしてそこで彼を待っていた息子のサヴァへの寄進として捧げた。

まだ若きサヴァと、今やシメオンという名を持つその年老いた父という、二人の高貴な修道士が再会する光景は、感動的かつ不思議なものであった。この並外れた出来事は、アトス山全体を騒然とさせた。聖山のプロトから最も質素な修行者たちに至るまで、誰もがこの素晴らしい修道士たちを見たいと願った。　ヴァトペド修道院には、最も人里離れた険しい渓谷や洞窟から、これまで一度も隠れ家から出てきたことのない修行者や沈黙の修道士たちまでもが押し寄せ、この二人の気高き修道士が彼らの山にやって来て、共に修行に励むという、不思議で並外れた光景を堪能しようと望んだのである。

アトス山の修行者たちだけが、驚きをもってそのような神の僕たちの話を聞き、その姿を見つめていたわけではない。彼らに関する知らせは、当然ながら都にも届き、人々がこの出来事に驚嘆しただけでなく、多くの高官や貴族たちも彼らの例に倣ったのである。

アトス山に新しくやってきた高貴な修道士シメオンは、以前から知っていたすべての修行者たちを一目で見分けることができた。そして、彼は誰一人として、その慈愛と恩恵から外すことはなかった。貧しい人々に多くの施しを施した後、彼はアトス山のすべての修道院に、自身の記念として金や教会用品を贈り物として送り届けた。　とりわけ、彼を兄弟の一員として受け入れてくれたヴァトペド修道院には、修道院長に多額の金と、礼拝堂用の多くの祭服やその他の教会用品、さらには修道院の用途のための馬やロバ、馬具などを贈った。

病に蝕まれ衰弱していたシメオン長老は、それでも教会の礼拝を耳に留めたいと願い、主聖堂である受胎告知教会の祭壇側に、祭壇が見える窓のある小部屋を増築し、その窓を通して毎日、教会の礼拝を見守り、その声を聞いていた。

一方、聖サヴァは、両親の世話をしながらも、修道士としての日々の修行を怠ることなく、聖なる山において慈善活動や建築事業を広く展開していた。　強盗たちによって破壊され、荒れ果てていた聖ステファノ教会に目を留めた彼は、それを修復し、修道士たちがそこで生活できるよう必要なものをすべて整え、この修道院をヴァトペド修道院の管理下に委ねた。　この小さな修道院の整備にあたって、彼は盗賊の襲撃から守るために、要塞と見張り塔（ピルガ）の建設にも力を注いだ。

ヴァトペド修道院には、近隣や遠方から多くの巡礼者が訪れ、熱心さから修道院のために働く人々も大勢いた。これらの人々の多くは、しばしば何も持たず、修道院の施しだけで生計を立てていた。　人愛に満ちたサヴァは、こうした人々の苦境を深く心に留めた。彼は、これらの人々が困窮することなく、修道院に負担をかけることなく常に食事と飲み物を得られるよう、ヴァトペド修道院の財源に多額の寄付を行った。

また、並外れて有名な修行者たちの噂を聞き、その姿を一目見たいというだけの理由で修道院を訪れる人々も大勢いました。サヴァはそうした人々全員を、自らの資金で手厚くもてなしました。求めてくる者は多く、誰一人として満足できないままにされる者はいませんでした。

聖サヴァはヴァトペド修道院に二つの部屋を設け、一方は父シメオンの名を、もう一方は自身の名を冠した。これらの部屋は、彼らを永遠に記念するものとして残された。

修道院内の老朽化し、放置されていたものはすべて、彼が改修し、修復した。

聖サヴァは、アトス山とその周辺に、荒れ果てて誰も耕作していない多くのメトヒア（すなわち修道院の領地）があるのを見て、それらをヴァトペド修道院のために取得することを決断した。

ビザンツ皇帝の許可を得て、それらを開墾し、修道士を住まわせ、彼と彼の両親を受け入れてくれた修道院のためにその土地を固めた。

一方、長老シメオンは、ヴァトペドでしばらく過ごした後、長年の願いであった、聖なる山全体を巡り、聖なる教会に参拝し、修道者たちを訪ねて語り合うことを実行することに決めた。

聖サヴァと共に、彼らはまずカレヤ修道院へ向かった。そこにはアトス山の総長が滞在していた。　彼の祝福を受け、聖なる場所に礼拝を捧げた後、シメオンとサヴァは修道院に多額の金銭、そしてとりわけ貴重な品々――教会用器やその他の備品、祭服、覆い布など――を惜しみなく寄進した。　こうした寄進により、二人は修道院の第二の創設者として永遠にシノディク（記録簿）に名を刻まれた。というのも、最初の創設者はギリシャ王ミハイルであり、彼は病気からの回復への感謝として、至聖なる聖母マリアの名を冠した教会を建立したからである。

同様に、シメオンとサヴァは、ポルタティッサと呼ばれるイヴェルスの至聖なる聖母修道院、およびアトス山の聖アファナシオス大修道院を訪れた。これらの修道院も彼らの寄進によって豊かになり、そこでも二人のセルビア人慈善家は第二の創設者として記録された。

修道院や隠棲地を訪れ、多額の寄付を行う中で、シメオンとサヴァは至る所で修道士たちに贈り物をし、困窮しているすべての人々に惜しみなく施しを配った。

この旅の途中、セルビア人修道士たちは、自分たちの修道院を建立できる場所を探していた。しかし、そのためにはギリシャ王の許可が必要だった。その許可を求める機会が、まもなく訪れた。

ヴァトペド修道院の修道院長は、修道院の用事で皇帝のもとへツァールグラードへ急行しなければならない事態に直面した。修道士たちとの協議の席で、修道院長はサヴヴァに、自分の代わりにコンスタンティノープルへ行ってくれるよう頼んだ。サヴヴァは快く承諾した。

コンスタンティノープルで、彼はアレクセイ王[968]　に温かく迎えられた。ステファン・ネマニャは、この王の義父にあたっていた。王は、もちろん、ネマニャが修道者となったことやアトス山に滞在していることを以前から知っていたため、彼らの生活について詳しく尋ねた。

サヴァに多大な敬意を表した後、皇帝はシメオンにも豪華な贈り物を送った。

王はヴァトペド修道院のすべての請願を快く受け入れた。この際、サヴァは王に個人的な願いを申し出た。すなわち、アトス山にあるヒランダールという名の、荒廃した小さな修道院を、彼と彼の父に譲ってほしいというものであった。　王は快くこれに同意し、その修道院とそれに付属するすべてのメトヒアを授け、これを勅書で承認した。

アトス山に戻ったサヴァは、喜びながらその成功を父に報告した。ヒランダールを所有権として受け取った彼らは、それを自分たちが住んでいたヴァトペド修道院に併合し、その整備に着手した。

この獲得は、シメオンとサヴァ自身にとっては満足のいくものであったが、聖地を参拝するためにアトス山に大勢押し寄せていた彼らのセルビア人同胞たちにとっては満足のいくものではなかった。　そうした敬虔な巡礼者の一人が、聖サヴヴァに助言を求めた。アトス山に、祖国にとって恒久的かつ独立した避難所となり、セルビアから来た志願者が修道誓願を立て、修行に励むことができるような修道院を設立してはどうか、という提案であった。　この提案は、祖国を深く愛し、その繁栄を切に願っていた聖サヴァの心に深く響いた。彼はこのことを師である長老シメオンにも伝え、シメオンもまたこの計画を承認した。

サヴァはヴァトペド修道院のイグメンに対し、セルビア人のための修道室を建設し、彼らのための特別な修道院を設立するために、荒れ果てた一画を譲ってほしいと申し入れた。しかし、イグメンは、そのような慈善家たちがヴァトペドを去ってしまうことを懸念し、この要請には同意しなかった。　そこでサヴァとシメオンは、アトス山のプロト（総長）およびアトス山修道院の総会に願いを

[968] アレクセイ・アンゲロスは1195年から1203年まで在位した。

申し出た。プロトを筆頭とする総会は、この願いを快く受け入れ、セルビア人用の修道院を設立するために、空いている場所ならどこでも選んでよいと提案した。

こうして、老齢のシメオンはサヴァと共に、再びアフォン山を巡る旅に出た。老齢のため馬に乗ることができなかったシメオンは、二頭の馬の間に固定された担架に乗って旅をした。　彼らは多くの美しい場所を目にしたが、やはり彼らのお気に入りのヒランダリ修道院に勝る場所は見つからなかった。旅から戻り、その考えをヴァトペド修道院のイグメンに伝えると、イグメンは、高貴な修道士たちが怒ってヴァトペド修道院を完全に去ってしまうことを恐れて、ついに同意した。

そこで聖サヴァは、修道院の最終的な整備に取りかかった。まず第一に、彼は「聖母マリアの受胎告知」に捧げられたヒランダル修道院の古くからの本堂を修復し、拡張した。修道院の周囲には、高い見張り台、すなわち塔を備えた城壁を築いた。　城壁の内側には、修道士たちが暮らすための広々とした住居を建てた。修道院の領地を拡大したいと考えた彼は、プロトおよび聖山のすべての住民に対し、マレウという小さな集落をヒランダルに編入する許可を求めた。

すべての建物を華やかに装飾した後、聖サヴァは父シメオンと共にヴァトペドからヒランダリへ移り住み、そこで二人は共に修行に励むようになった。

再建された修道院を自身とセルビアのためにより確実に確保しようと、サヴァは父と相談した後、再びツァルグラードのアレクセイ皇帝のもとへ向かった。　皇帝に温かく迎えられたサヴァは、アトス山で自分たちが成し遂げたすべてのことを皇帝に報告し、自分たちと祖国セルビアのために、その創建した修道院を再び確固たるものにしてほしいと願い出た。同時に、この事業への皇帝自身の個人的な関与も求めた。　皇帝はこれに共感し、彼らの獲得したすべてのものを承認するとともに、自らの名においてアトス山にある「ジグ」という名の皇帝直属の修道院を彼らの所有として下賜し、勅書をもってこれを承認した。　ヒランダール修道院は、それに併合されたすべての取得地および寄進地とともに、王室直轄のスタウロピギア修道院に編入され、こうしてアトス山において特別な優遇措置を受ける立場に置かれた。

聖サヴァと彼の父である長老シメオンは、サヴァが皇帝のもとからこれほどの成果を挙げて戻り、皇帝の勅書をプロトゥスおよびアトス山の長老会議に手渡したとき、大いに喜んだ。長老会議は皇帝の意志に従い、ジグ修道院をヒランダリ修道院の所有に移管した。　まもなく新たな取得も行われ、長老会議から聖殉教者修道院が購入された。また、ヒランダリ修道院の利益のために、創設者たちによって、彼らの故郷であるセルビアに多くのメトヒア、すなわち収益をもたらす領地が寄進された。

こうして、ヒランダリという総称の下に、アトス山にある最大14の個別の修道院と領地が統合され、これに加え金銭的な寄付も相まって、セルビア人出身の200人の修道士たちに、十分に裕福な生活が保障されることとなった。　ヒランダル修道院を将来にわたってセルビアの所有として確保するため、創設者たちは、シメオンの長男であり聖サヴァの兄弟であるセルビアの大ジュパン・ステファンに、セルビア君主の世襲領としてその管理を委ねた。

こうして、アトス山にセルビア人のための修道院を設立するという、聖シメオンと聖サヴァの切なる願いは無事に実現した。物質的な基盤が整い、シメオンとサヴァの偉業によって名声を博したヒランダル修道院は、セルビア人だけでなく、他の正教会のスラブ人にとっても、長きにわたりキリスト教教育の中心地となった。

ヒランダールにおける修道生活について、聖サヴァは共同生活を行う修道院の規則に従って整え、自身の規律を著し、それを後世の修道者たちの指針として残した。

聖なる山には、共同生活を行う修道院だけでなく、その他の様々な修業形態も存在していた。多くの修道士たちは、スキト（隠遁）の道を自ら選んだ。2人または3人ずつ集まり、沈黙と神への黙想に身を捧げたのである。

聖サヴァは、様々な形態の修道生活について熱心に学び、それらすべてにおいて自らを試みようと努めた末、スキトでの修行を志した。スキトでの修道生活は、カレヤと呼ばれる修道院の周辺で特に広く行われていた。　そこで聖サヴァは一画を購入し、そこにシハスタリヤ、すなわち「沈黙の修道院」を設立し、その隣にエルサレムの聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイに捧げる教会を建て、2人か3人の修行者がそこに滞在できるようにした。　このシハスタリアで、彼自身もしばらくの間、沈黙と神への黙想の修行に励み、ここで実践するための規則を著した。この規則は、その後も修行者たちの指針として役立った。

その間、彼の年老いた父シメオンは、この世を去る時が近づいていた。尊者サヴァは、常に父を絶え間なく気遣い、最期の瞬間まで父のそばを離れなかった。ある夜、サヴァは長老の死を予感し、一晩中祈りを捧げながら徹夜した。　父の寝床のそばに修道士の一人を残し、自身は朝の礼拝へと向かった。ほどなくして父の元へ呼ばれ、父が臨終の準備をしているのを見た。サヴァは父を寝台から降ろし、深い謙遜のしるしとして、床に敷かれた藁マットの上に寝かせ、その状態で教会の玄関、すなわちパペルティへと運んだ。　そこで、シメオン長老はまるで眠りから覚めたかのように、息子と、その周りに集まったヒランダル修道院の兄弟たちを祝福し始めた。その時、何か物音が聞こえ、シメオン長老は「すべての息あるものは主を賛美せよ」という詩篇を、最初から最後まで歌い始めた。　皆が天使たちの歌声を耳にしたが、長老もまた天使たちと共に歌い――そして息を引き取った。永遠に祝福された者の死を悼む嗚咽が響き渡り、サヴァは喜びと悲しみの涙を同時に流した。喜びは、老人の祝福された最期を目撃できたことによるものであり、悲しみは、自分の父であり同志であった者を失ったことによるものであった。

厳粛な葬儀の後、故人の遺体はヒランダルスの聖母マリア教会の大理石の棺に納められた。

老修道士は臨終の前に、息子のサヴァに対し、時が来たら自分の遺骨を故郷のセルビアに移すよう遺言し、それは後に実行された。

こうして、尊者サヴァは再びアトス山に一人残され、祈りの中で亡き父を絶えず偲びながら、霊的な修行に励んだ。　亡き父は夜ごとの幻視の中でたびたびサヴァの前に現れ、彼を慰め、天の住処にいることを明かし、サヴァが故郷で信仰と敬虔の事業を成し遂げることになると予言した。

サヴァは以前と同様に、いや、さらに熱心に慈善活動に打ち込んだ。　彼は絶えず貧しい者や物乞いに施しを与え、困窮者を助け、支援を必要とする修行者たちを探し出して支え続けた。また、教会や修道院の建設、あるいは修復・維持に関する助けを求めるどんな要請も断ることができず、アトス山だけでなく、他の、しばしば遠く離れた場所でも支援を行った。　時折、故郷から様々な形で送られてくる彼の通常の資金が底を突くこともあった。しかし、そのような時には天からの助けが現れた。ここに、至聖なる神の母の取り次ぎによって聖サヴァに起こった奇跡がある。

聖サヴァは度々コンスタンティノープルを訪れ、慣例に従って修道院や教会に施しを行っていた。とりわけ、彼は至聖なる聖母エヴェルゲティッサ（恵みの母）の教会を深く愛していた。　父が存命の頃から、彼は一族の追悼のために多額の寄付を行っていた。その後、父と共にこの聖堂のために毎年献金を捧げるようになった。そしてついに、聖サヴァはコンスタンティノープルを訪れる際の滞在先を確保するため、自費で修道院に別館を建てたのである。　そうした訪問の際のある日、ある敬虔で容姿端麗な女性が彼の元を訪れ、神の御心により、ヒランダル修道院の領地内にある聖なる山で、二つの場所（　）の地中に、サヴァが自身の必要に応じて利用できる宝が隠されていることを彼に伝えるよう命じられたと告げた。　聖サヴァの伝記作者は、この啓示がサヴァに聖母マリアご自身から与えられたものであると述べているが、彼はその謙虚さゆえに、それを公には明かさなかった。聖山に戻った後、尊者サヴァは受けた指示に従い、実際に二か所で宝を発見したが、それを自分の利益のためではなく、貧しい人々や乞食への施し、そして聖山の教会や修道者たちを支援するために用いた。

アトス山の修道院、特に海岸沿いのものは、しばしば海賊、すなわちコルサールたちに襲撃され、荒らされていた。ある時、彼らはカラカルの修道院を襲撃し、財宝を略奪するとともに、修道院長を含む修道士たちを捕虜として連れ去り、少なくとも奴隷として売り飛ばそうとした。　海賊たちは身代金を期待して、捕虜たちを聖アファナシオス・アフォンスキイ大修道院へ連行した。大修道院の修道者たちは海賊から彼らを買い戻したが、その条件として、カラカル修道院の自治権を剥奪し、それを大修道院の付属修道院（メトヒオ）として従属させることだった。　その後、身代金を支払って解放された修道院長と修道士たちは、容赦なくカラカッラから追放された。そこで彼らは、変わらぬ支援者であるサヴヴァに助けを求めた。サヴヴァは修道士たちの苦境を深く憐れみ、　再びラヴラからカラカッラ修道院をそのすべての権利とともに買い戻し、追放された者たちをそこへ戻し、盗賊による破壊の後、修道院を再建して、礼拝と平穏な修道生活再開に必要なあらゆるものを備えた。

同様に、彼は盗賊による略奪で荒廃していた「キシロポタム」と呼ばれる聖四十殉教者修道院を再建し、壁画で豊かに装飾し、必要なものをすべて備え付けた。こうして聖サヴァは同修道院の新たな寄進者となり、ここに自らの王家の名代を永遠に刻み込んだのである。

聖サヴァは毎年、ヒランダールで、亡き父の命日に厳粛な追悼式を執り行っていた。その際には、彼の招きに応じて、プロトを筆頭とするアトス山のすべての修道院から修道士たちが集まった。天からの啓示により、敬虔なサヴァは、父が死後、聖人の列に加わり、地上の民の前でもその栄光が称えられるよう主に祈っていることを知っていた。そして、その敬虔な願いが虚しいものにはならないと希望し、信じていた。

長老シメオンの年次追悼祭の前日、聖サヴァは夕の礼拝の後、プロトに、翌朝シメオンの棺の前で主に対し、彼の栄光について祈ってほしいと懇願し、教会の鍵を彼に手渡した。　自身はセルビア人の同志たちと共に、ピルゲ（塔）にある別の教会へ朝の礼拝のために向かった。　早課の「大賛美」の最中、突然、教会全体に尋常ならざる芳香が漂い、教会にいた者全員を甘美な霊的な喜びへと導いた。そしてその時、大理石の棺の中に安置されていた長老シメオンの枯れた骨から、芳香を放つ聖油が滲み出ているのが確認された。　このことを、早課を司式していたプロトに伝えられ、彼は急いで聖サヴァに報告した。サヴァは大きな喜びをもって兄弟たちと共に長老シメオンの棺へと駆けつけ、自らの熱い信仰を恥じることなく正当化した神の偉大な慈悲を、この目で確かめた。　感動の涙を流しながら、彼は、奇跡的に恵み深い香油を滲み出させた聖遺物箱に口づけをした。多くの病人や悪霊に取りつかれた者たちが、その芳しい香油を塗られ、聖遺物箱に触れることで癒やされた。　これらの奇跡を受けて、アトス山の修道士たちの公会議は、この新たな奇跡行者を先人の聖人たちの列に加え、聖シメオン・ボゴプリイメツと共にその記念日を祝うことを定めた。公会議は聖サヴァに、ステイヒラとカノンを編纂し、奇跡の記録をまとめるよう命じ、彼はまもなくその任務を遂行した。

ヒランダールでは、聖シメオンの栄光称えを記念して三日間祝賀が行われた。聖サヴァは祝典に集まったすべての人々のために豊かな食事を用意し、皆に惜しみなく贈り物を与えて見送った。

聖サヴァはすでにかなりの年月を修道生活に捧げていたが、依然として質素な修道士であり続けた。聖山のプロト・ドメティオスは、特にサヴァを敬い愛していたため、かねてより彼に聖職に就くよう説得していたが、サヴァは自分にはその資格がないと考え、長い間拒み続けていた。　ついにドメティオスの説得に折れ、彼はまず助祭、そして司祭への叙階を受けることを決意した。その叙階は、アトス山で聖職叙階を行う権限を持っていた近隣の町イエリッソのニコラオス司教がヒランダール修道院に招かれて執り行われた。

しばらくして、聖サヴァは修道院の用事でテッサロニキへと向かい、そこでフィロカリア修道院に滞在した。彼は同修道院の支援者であり、創設者としても知られていた。　テッサロニキ都主教コンスタンティノスは、イエリソスのニコラオス司教からサヴァについて多くの話を聞いており、度重なる対話を経て、サヴァを、自身およびイエリソスのニコラオス　、カサンドラのミハイル、アド

ラミスのディミトリオス各司教と共に大聖堂で奉仕するよう招いた。　これらの主教たちは、公会議において彼にナベドレンニク（腰布）を身に着けることを許可し、アルヒマンドリトの位に叙任した。この新たな栄誉を帯びて、彼はヒランダールに戻った。

アトス山で起こったすべての出来事について、聖人はセルビアにいる実の兄である大ジュパン・ステファンに詳細に報告した。また、新たに現れた奇跡行者――彼らの父――の棺から取った聖油、奇跡の記述、そして礼拝の儀式も送った。

権力者ステファンはこれらの書簡を大いなる喜びをもって受け取り、セルビア全土も彼と共に喜んだ。ステファンは、聖人ご自身の遺志にも沿う形で、シメオンの聖遺骨をセルビアへ移送することを切に望んでいた。

弟ヴォルカンによって引き起こされた内戦による災難の最中、　ステファンは聖サヴァに長文の手紙を書き、セルビアに来て、聖シメオンの聖なる聖遺骨を移送するよう熱心に説得した。その聖遺骨から流れ出る聖油の恵みの力が、彼らの祈りによって祖国を平穏に導くであろうと深く信じていたからである。

聖サヴァは、兄弟の願いと、同時に父の遺言を遅滞なく果たした。　聖遺骨を運び上げると、彼は多くのアトス山の修道士たちに付き添われて、それらをセルビアへと運んだ。まだセルビアの国境に到達する前、彼は兄に聖遺骨が近づいていることを知らせた。ステファンは聖職者、高官、そして民衆に囲まれて出迎えた。　かつての偉大なジュパンであった父と、美徳に満ちたその息子であるアルヒマンドリト・サヴァの聖遺骨が祖国に帰還するのを目にした時、この再会に際して人々の喜びは計り知れないほど大きかった。ステファンは聖遺骨に熱烈に口づけをし、長い別離の末に兄弟と抱き合った。

聖シメオンの聖遺骨は、彼が建設したストゥデニツァ修道院に安置された。同修道院で彼は修道誓願を立てたが、聖遺骨からは聖油が豊かに湧き出し、病を奇跡的に癒やし、信仰をもって駆けつけたすべての人々に霊的な喜びをもたらした。

聖サヴァも、彼に同行したアトス山の修道士たちと共に、同胞たちの喜びの声に包まれながら、同じくストゥデニツァ修道院に定住した。

ここに滞在する傍ら、修道院や都市、村々を巡りながら、サヴァは絶えずすべての人々に信仰と敬虔さを説いた。皆は、祖国に平和と静寂が訪れ、信仰と善良な道徳が確固たるものになっていく様子を、安堵の念を抱いて見守った。兄弟間の争いは収まり、ヴォルカンは兄に従った。

慣例に従い、聖サヴァは施しを行い、教会に寄付をし、老朽化した教会を修復し、新しい教会を建立した。これは彼がアトス山で行っていたことと同じであり、祖国にもたらした、誰の目にも明らかな恩恵にもかかわらず、彼は今なおアトス山へ戻ることを切望していた。　彼は、権勢ある兄ステファンに対し、聖山への帰還を許してほしいと何度も懇願したが、ステファンは兄に、自分のそばに残り、教会と信仰のために奉仕するよう熱心に説得した。　ステファンは聖サヴァに対し、ストゥデネツ修道院のイグメノス（院長）職を引き受けるよう提案した。すでにアルヒマンドリトの位に叙任されていたサヴァには、その資格が十分にあったのである。　しばらく迷った後、サヴァは、二人の兄弟やすべてのセルビア人にとって大切なこの修道院を統率することに同意し、教会堂の建設や、至る所での信仰と敬虔さの普及にたゆまぬ努力を注いだ。

聖サヴァは弟のステファンと共に、新しい「ジチュの救世主修道院」（主の昇天を称えるために）を設立することを決意し、この修道院は後にセルビア大司教区の主教座修道院となった。　この修道院をはじめとする数々の修道院を設立するにあたり、聖サヴァはアトス山で目にしたような修道生活の慣習――キノヴィ、ラヴラ、シハスタリヤ――をそれらに導入した。　祖国全土で神の御名が讃えられることを願って、聖サヴァは可能な限り多くの教会を建立しようと努め、それが叶わない場

所では、少なくとも聖十字架を掲げ、それを見る者すべてが十字架にかけられたキリストを思い起こせるようにした。

聖サヴァは、生前からすでに奇跡を行う賜物を受けていた。ある時、ストゥデニツキー修道院で、彼は道端でダビデの詩篇を歌いながら、無力な状態で施しを乞うている麻痺患者を見かけた。サヴァは人間の弱さに涙を流し、その麻痺した男を教会内の救世主のイコンの前に運び、病人のために熱心に祈りを捧げ、聖シメオンの聖櫃から聖油を塗って、その罪を赦した。

その麻痺した男は、健やかな体で立ち上がった。この奇跡的な治癒の知らせは至る所に広まり、各地の病人がストゥデニツァ修道院へと駆けつけ、治癒を求めて聖サヴァの祈りにすがった。サヴァは祈りを捧げ、父の聖遺骸から取り出した聖油で病人に塗布すると、彼らは癒やされた。

サヴァの活動と、新たな聖油を流す奇跡の行者シメオンに関する評判は、セルビアおよび周辺諸国の注目を集めた。当時の困難な時代において、多くの人々がセルビアの大ジュパン・ステファンに避難を求め、保護を得ていた。聖サヴァの奇跡的な祈りは、そうした人々にも及んでいた。

セルビアの大ジュパン・ステファンのもとへ、保護を求めて逃れてきたのは、ブルガリアのボヤリン、ストレズであった。彼は、ラテン人がツァルグラードを占領した際にソリュンへの遠征で戦死したブルガリア王カロヤンの親族であった。新たなブルガリア王ボリス（あるいはボリル）は、ストレズを前王の親族として引き渡すよう要求した。　ステファンは、保護を求めて逃げてきたこの逃亡者を引き渡すどころか、あらゆる庇護を与え、さらにはヴァルダール川沿いのプロセックという町とその周辺地域を彼の領地として与えた。しかし、ストレズは恩知らずで残酷な人物であった。彼は臣民を苦しめ、ついにはステファンに対して反乱を起こした。　血なまぐさい戦いが起きようとしていた。聖サヴァは深く心を痛め、流血を防ぐために自らの手段を講じた。彼は勇敢にもストレズの陣営へと赴き、驚くべきことに、ステファンの宮廷で彼と面識のあったこの残忍な支配者から温かく迎えられた。　サヴァは、無駄な流血を避けるよう、その意図を撤回するよう、ステファノの恩恵を思い出し、教会で聖なる福音書の前に結ばれた「兄弟の絆」という盟約を思い出すよう、あらゆる手段を尽くして彼を説得した。しかし、ストレズは頑として譲らなかった。そこでサヴァは、自分とステファノの間のことについては神が裁きを下されるだろうと言い、その場を去った。　その夜、サヴァは主に向かって熱烈な祈りを捧げ、恩知らずのストレズの武器を彼自身に向けさせるよう願った。するとその夜、ストレズの前に正体不明の恐ろしい若者が現れ、ストレズの武器を奪い取り、彼を打ち倒すと、姿を消した。　ストレズは悲鳴を上げ、自分を打ち倒した者をサヴァの使者だと考え、サヴァを呼んでくれるよう懇願した。しかし、サヴァは陣営を去っており、彼を見つけることはできなかった。ストレズは息を引き取り、その軍勢はたちまち散り散りになり、流血の事態は収まった。

聖サヴァは、彼が熱烈に愛した故郷において、多くの有益かつ善き行いを行った。しかし、聖なる山への愛は強く、彼はその山を慕い、絶えずそこへ戻ろうと切望していた。彼はこの願いを何度も兄弟のステファノに打ち明けたが、ステファノは悲しみを込めてその言葉を聞き、あらゆる手段を尽くしてサヴァを自分のそばに留めようとした。　サヴァはしばらく留まったが、その後も再び帰還を願い出て、ついに決心した。威厳あるステファンは、悲しみをこめて彼をギリシャの国境まで見送ったが、この離別もまた一時的なものに過ぎないという希望を捨ててはいなかった。サヴァを見送る際、彼の同胞たちも皆、心を痛めていた。

セルビアからのサヴァの送別がどれほど悲しかったかといえば、アトス山での彼の出迎えは、ヒランダル修道院の修道士たちだけでなく、アトス山のすべての住民にとっても、それと同じくらい喜びに満ちたものであった。

サヴァは新たな熱意をもって、再び聖山で修行に励み、孤独と沈黙、そして神への思索に身を委ねた。しかし同時に、彼は慈善活動も続けていた。それは、彼にとってどこにいても欠かすことの

できないものであった。彼は再び貧しい人々を気遣い、乞食に施しを与え、教会に寄付をし、修行者たちを助けた。

こうして数年が過ぎた。セルビアでは、サヴァの離脱を惜しみ、彼の帰還を願っていた。ステファン兄弟も、この件について何度も彼に手紙を送った。しかし、サヴァは依然として断固として譲らなかった。ところが、ある出来事が起こり、それが皆にサヴァの祖国への帰還を特に切望させることになった。それは、聖シメオンの聖遺物箱から聖水が流れ出していたのが、突然止まってしまったことである。　人々は皆、この現象を神の怒りと見なし、シメオンの遺骸の前でサヴァが祈りを捧げることを切に願った。恐怖に駆られたステファンは、サヴァに説得力のある書簡を送り、セルビアに来て、自分や国民全員と共に、聖油を流す長老シメオンの遺骸の前で、聖油の恵みが戻るよう祈ってほしいと懇願した。　聖サヴァはこの懇願に応じましたが、今回も自らセルビアへ赴くことはせず、ある修道士イラリウスを遣わし、　彼に、聖なる眠りについた父シメオンへの熱烈な祈りの書簡を託した。その書簡は、礼拝と祈願式の後、ステファン王と民衆の面前で、聖人の墓の前で朗読されることになっていた。　その書簡の中で、実の息子はシメオンに語りかけた――まるで父が霊的な息子に語りかけるかのように。というのも、生前の長老シメオンは、世俗を捨てて救いへの修道者の道を選ぶよう彼を説得したサヴァを、まさにそのような存在として認めていたからである。　修道士イラリウスは、サヴァの指示通りにすべてを遂行した。シメオンの棺の前でサヴァの書簡が読み上げられると、突然、教会全体に芳香が漂い、棺からは再び恵み深い聖油が流れ出し、そこにいた病人たちを即座に癒やした。　人々は皆、主なる神の偉大な慈悲に熱心に感謝し、その修行者サヴァの霊的な力に驚嘆した。この奇跡は、セルビア全土に慰めと励ましをもたらした。

当時、ラテン人によって甚大な被害を受けた正教会の東方では、大きな出来事が起こった。帝都コンスタンティノープルは1204年にラテン人によって陥落した。ギリシャの皇帝と総主教は、荒廃した王国を再建し、多大な苦難を強いられた正教を確立するために、新たな拠点を模索せざるを得なかった。　隣接する正教国であるブルガリアとセルビアにもそれぞれの苦難と困難があり、セルビアとブルガリアの君主たちは、この困難な時代において、自国の独立と純粋な正教を守り抜くために懸命に尽力した。　聖サヴァは、同時代のスラブ人の中で誰よりも、正教会の東方の情勢や苦難、必要性を熟知していた。　ギリシャ王国の繁栄期には、彼がしばしばコンスタンティノープルを訪れ、王たちと交流を持っていたように、今、災難の時代にあっても、彼はギリシャの王や総主教との交流を絶やすことはなかった。　テオドロス・ラスカリス王と総主教は当時、小アジアのニカイアという都市に居を構えていた。この都市は、かつて第1回および第7回全地公会議が開催されたことで名高い。聖サヴァには、ヒランダル修道院（アトス山）の諸事や、故国セルビアの窮状など、皇帝や総主教のもとへ赴く必要が少なからずあった。彼はニカイアへ向かうことを決意した。

テオドロス・ラスカリス王は、セルビアの大ジュパンと親密な親族関係にあった。すなわち、ステファンの息子、つまり聖サヴァの実の甥は、テオドロス・ラスカリス王の娘と結婚していたのである。　セルビアの王家は、ステファン・ネマニ（当時すでに聖シメオンとして称えられていた）をはじめ、歴代の君主たちとも血縁関係にあり、彼らから尊敬を受けていた。そして今や、セルビアとギリシャの君主間の関係は、血縁関係だけでなく、ラテン人からの自由と正教の防衛という共通の課題によっても、とりわけ親密なものとなっていた。　それゆえ、聖サヴァがニカイアで王と総主教から、単に好意的にだけでなく、極めて温かく迎えられたのも不思議ではない。ヒランダル修道院に関するサヴァのあらゆる要望は、完全に受け入れられた。

しかし、聖サヴァの思いと関心はヒランダル修道院だけに留まらなかった。それらは、祖国が必要とするものや利益、そして国家および教会における独立と自主性にも、同様に注がれていたのである。

賢明なサヴァは、今こそセルビアが教会の自立を獲得するための好機が訪れたと判断した。

ヒランダル修道院に関する用事を済ませた後、聖サヴァはセルビア教会に関する重要な要請をテオドロス王に申し入れた。彼は、祖国における信仰の状況を雄弁かつ詳細に説明し、　正教の東部において、南スラブ人やギリシャ人の間で不敬虔なボゴミル派の異端が広まり、またギリシャ人および正教のスラブ人双方に対して西からラテン人が侵攻してきたという困難な時代において、正教の純潔性を守り維持するための苦労と成果を指摘した。　しかし、信仰におけるこれらの取り組みと成果を確固たるものにするためには、サヴァが論じたように、セルビアには、これまでのようにコンスタンティノープル総主教によって任命される司教が一人いるだけでは不十分であり、　独立した、すなわち自治権を持つ大司教を置く必要があった。その大司教こそが、セルビアの聖職者会議と共に、自ら教区を設立し、そこに司教を任命する者である。このような重要な要請は、当初、王と総主教を困惑させた。　しかし、熟考と議論を重ねた結果、王も総主教も、この要請を受け入れることで、セルビアにも恩恵をもたらし、自分たち自身にとっても大きな利益となることを認めた。　セルビアは、独立した大司教を得て新たな教区を設立することで、正教を擁護し確立することが容易になり、ラテン教会の誘惑に屈することなく、近隣諸国の中でその地位を高めることになるだろう；　ギリシャは、この恩恵への感謝として、帝国の敵との戦いにおいて、セルビアの君主を友であり同盟者として得ることになる。

このように、この重要な問題が基本的にセルビアにとって有利に解決された際、聖サヴァは、自身に同行していた長老修道士の一人をセルビア大司教の位に就けるよう要請した。　しかし、王も総主教も、サヴァの提案に従うことは不可能だと判断した。彼らは、請願者本人と仲介者以外を、この高位に就かせるつもりはないと述べた。このような事態の展開は、謙虚なサヴァにとって全く予期せぬことであり、彼はそのようなことを微塵も考えていなかった。　しかし、皇帝と総主教の意志は揺るぎなかった。慣例に従って主なる神に祈りを捧げ、皇帝や総主教、そして同行者たちの説得に耳を傾けたサヴァは、この中に神の御心を見出し、承諾した。　王は、自治大司教という高位に就かせるために必要なすべてのものを、自身の国庫から支給するよう命じた。そして1222年、聖母マリアの被昇天の祝日に、全地総主教ゲルマンは、王や貴族たちの立ち会いのもと、サヴァをセルビア大司教に叙階した。

寵愛を受け、高位に就き、王と総主教から豊かな賜物を授かったサヴァは、帰路についた。海路を経て、彼は聖山アトスにたどり着いた。サヴァが大主教に叙任されたという知らせは、彼の帰還に先立って広まっていた。　アトス山のすべての修道者たちは、プロトから最末の隠者に至るまで、新任の大主教から祝福を受け、彼を歓迎しようと努め、急いで駆けつけた。特にヒランダル修道院では喜びがひとしおであったが、同時に悲しみもあった。この修道院の偉大な創設者であり、かけがえのない修道士たちの指導者との別れが、おそらく永遠のものとなるかもしれないからである。　アトス山の主要な修道院の院長やイグメンたちは、次々とサヴァに、それぞれの修道院を訪れ、司教としての礼拝を執り行い、何人かを助祭や司祭に叙階するよう懇願した。　聖サヴァはこれらの願いを丹念に叶えた。彼がこれほど敬い、愛していた修道院を再び訪れ、そこで祈りを捧げることが、彼の心に大きな喜びをもたらしたのである。

ヒランダル修道院の兄弟たちに、彼の定めた規則と戒めに従って生きるよう最後に諭した後、聖サヴァは、後にセルビアで重要な聖職に就かせるつもりだった弟子や同志である多くの修道士たちに付き添われて、故郷へと旅立った。　サヴァは、これほど愛した聖なる山と別れることに悲しみを覚えたが、故郷へ向かうその旅路で果たすべき奉仕の崇高さを自覚することで、心を慰めていた。

アトス山から、サヴァは名高い都市テッサロニキへと向かった。そこで彼はまず、大殉教者ディミトリオス（聖油を流す者）の聖遺物に礼拝を捧げ、その後、古くから親愛と深い友情で結ばれていたテッサロニキの主教、コンスタンティオス都主教のもとを訪れた。　サヴァは、この大主教と教会運営の困難な課題について多くの対話を交わし、助言や指針を求めた。聖サヴァはテッサロニキに

相当な期間滞在し、自身の修道院であるフィロカリアで暮らしたが、この修道院には新たな豊かな寄進をもたらした。

博学なサヴァは、ここで過ごした時間を書物の研究に捧げた。独立した教会を運営するためには、教会法や民法が必要だったからである。サヴァは、自身が完璧に習得していたギリシャ語で書かれたそれらの書物を収集し、スラブ語へ翻訳することに取り組んだ。　その労苦の成果として、スラブ語版の『舵取りの書』が刊行され、その後、この書物はセルビア人だけでなく、ブルガリア人やロシア人によっても教会運営に活用されることとなった。

このようにして崇高な務めへの準備を整えたサヴァは、まず兄であるセルビアの大ジュパン・ステファンに、自身に起こったすべての出来事と帰還の旨を伝える書簡を送った上で、故郷へと向かった。

ステファンとセルビア全土は、大司教の位についたサヴァの帰還を大いに喜んだ。セルビアの国境では彼のために盛大な出迎えが用意されていたが、ステファンは病気で床に伏していたため、自らその場に出席することはできなかった。　貴族や民衆から大いなる喜びをもって迎えられたサヴァは、兄のもとへ赴き、祈りによって兄を病床から起こし、祝福し、兄弟として頬に口づけをした。

そこで、二人の兄弟は直ちに教会の整備に取り掛かった。以前から建設が着手されていたジチュ修道院を早急に完成させ、そこに大司教座を置くことを決めた。

兄弟と再会し、教会事務に関する必要な初期措置を講じた後、聖サヴァはストゥデニツァ修道院へと向かい、父の墓と、東方への旅に出る前にアルヒマンドリトとして統率していた修道士たちの元を訪れた。

癒しの香油を豊かに滲み出していた聖シメオンの墓に口づけをした後、サヴァは修道士たちへの教化と教会事務の整備に取り組みました。

こうして大司教の権威を授かった彼は、アトス山の修道生活を手本として、セルビアにおける修道生活の定着という事業をより断固として推進するようになった。彼は、一般的な教会の礼拝だけでなく、修道院内の規則や修道者の行動規範全般に関して、秩序と規律を定めた。

すでに以前、聖サヴァは弟のステファンと共に、ジチェに主の昇天を祀る大聖堂を備えた新しい修道院の礎を築いていた。ここをセルビアの大司教座として確立することが決定された。サヴァはそこへ向かい、修道院の建設と装飾を迅速に完成させることに着手した。

大司教となった聖サヴァの、最優先かつ最も重要な関心事は、セルビア教会の整備であった。サヴァはセルビア領全域を12の教区に分割し、主に自身の弟子や同志の中からふさわしい人物を選出して、各教区に司教を任命した。　新任の司教たちには、信徒をどのように導くべきかを教え、教会運営のための法典を授けた。

しばらくして、サヴァは真の正教の信仰を強固にするため、司教、聖職者、信徒からなるセルビア全土の教会公会議を招集した。　当時、セルビアでは信仰の面で多くの混乱が見られた。不敬虔なボゴミル派の異端が存在し、異教の残滓もあり、キリスト教徒の間には全般的に様々な混乱や悪習が蔓延していた。公会議において、聖サヴァは正教の確立について、広範かつ雄弁な説教を行った。そこで正教の信仰告白が改めて示され、異端について議論が行われ、様々な迷信や混乱、悪習を根絶するための措置が講じられた。

その過程で、教会での結婚式を挙げずに同棲している人々が多数いることが判明した。その多くは長年そのような生活を送っており、すでに子供、中には成人した子供さえも持っていた。　聖サヴァは弟子たちの中からふさわしい者を選び出し、彼らをプロトポプ（主任司祭）に任命して国中に派遣し、まだ結婚式を挙げていない夫婦を結婚させるよう命じた。その際、両親とともに、すでに成人した子供たちも一緒に結婚式を挙げるよう指示が出された。また、これらのプロトポプたちには、国の宗教生活におけるその他の欠点を根絶する任務も課せられた。

セルビアの君主はそれまで「大ジュパン」の称号を名乗っていたが、一方、近隣の君主たちは「ツァール」や「王」の称号を持っていた。　サヴァの弟ステファンは、自国の勢力と重要性にふさわしく、王冠を戴くことを望んでいた。セルビアには戴冠式を執り行える独立した教会の指導者がいたため、これは今や十分に可能となっていた。聖サヴァは、ジチ修道院の大聖堂でこの儀式を執り行った。　近隣諸国の王たちはローマ教皇から王冠を授かっていたため、セルビアの君主が近隣諸国から王として承認されるためには、ローマ教皇に同意を求める必要があると判断された。その結果、同意が得られ、王冠が送られてきた。しかし、この事実は教皇への服従には至らず、正教にも害を及ぼすことはなかった。

セルビアの台頭は、隣国のハンガリー王ヴラディスラフにとって不快なものであり、彼はセルビアの初代王ステファンに対して戦争を仕掛ける用意があった。流血を避けたいと考えたステファンは、兄であるサヴァ大司教に、ハンガリー王のもとへ赴き、この件を平和的に解決するよう依頼した。　サヴァは大使として派遣され、好意的に迎えられたが、王は一切の譲歩を拒んだ。しかし、サヴァの奇跡的な祈りが、事態を円満な結末へと導いた。次のような奇跡が起こった。王との交渉は暑い日に行われた。暑さと渇きに苛まれたサヴァは、氷を差し出すよう求めた。　しかし、貯蔵庫の氷は溶けてしまっていた。そこで聖サヴァは主に向かって祈りを捧げると、突然雲が現れ、稲妻が走り、雷が鳴り響き、大地を覆うほどの大雹が降り注いだ。サヴァは雹を器に集めるよう命じ、祝福の祈りを捧げた後、自らそれを味わい、王に差し出しながらこう言った。

「陛下の氷が溶けてしまったため、私は主なる神に祈りを捧げました。すると、主は私たちにこの涼しい恵みをお与えくださったのです！」

皆はこの奇跡に驚き、聖サヴァを畏敬の念を持って敬うようになった。王はセルビアに対する態度を一変させ、戦争の考えは捨てられた。　さらに、王はサヴァに対してこれほどの敬意と尊敬を抱くようになり、彼に自分の罪を告白し、赦しを請いたいと願った。サヴァはこれを丁寧に執り行い、王にラテン教を捨てて正教に立ち返るよう説得し、その説得は実を結びました。

セルビアに戻った聖サヴァは、すべてを弟に語り、二人は共にこれらの恵みに神に感謝を捧げた。

ステファン・ファースト・クラウン王は高齢に達し、しばしば病に倒れるようになった。彼は死の前に天使のような姿となり、兄サヴァの手によって修道士となることを切望していた。しかし、大司教は「まだその時が来ていない」と言って、この願いを拒んでいた。　ある日、ステファンが重病に陥ったが、聖サヴァは遠方へ出かけていた。直ちに彼を呼び寄せる使者が送られた。サヴァは直ちに病床の兄弟のもとへ急いだが、道中で新たな使者と出会い、王はすでに亡くなっており、急ぐ必要はない――彼はもうこの世にいない――と告げられた。　しかし、聖サヴァはそれどころか、むしろ歩みをさらに速めた。兄弟を時宜にかなって天使の姿へと導けなかったことを嘆き、主に対し、兄弟を生きとし生ける者の列に留めてくださるよう祈り続けたのである。　するとどうだろうか。サヴァが熱烈な祈りを捧げながら兄弟の寝床に近づくと、そこに生命の兆しを見出し、ステファンは即座に目を覚ました。聖サヴァは喜び、ステファンに「　シメオン」という名を持つ偉大な天使の姿を与え、彼に臨終の口づけを捧げた。　ステファン王――修道名シメオン――は、兄である聖サヴァの腕の中で静かに息を引き取った。その遺灰は、父である聖シメオン・ネマニの聖遺箱の隣、ストゥデニツァ修道院に安置された。

セルビアの王位には、ステファン・ペルヴォヴェンチャニーの長男ラドスラフが就き、聖サヴァによって厳かに王冠を授けられた。

聖サヴァはかねてより、聖地を訪れ、主の聖墓に参拝し、我らの救い主の生涯と死によって栄光に包まれた地を巡りたいという強い願いを抱いていた。また、パレスチナの有名な修道院を訪れ、パレスチナの修道者たちの生活を見たいとも願っていた。　そこでサヴァは、その考えと決意を甥で

あるラドスラフ王に伝えた。王にとって、賢明な助言者であり指導者となり得た叔父と別れるのは辛いことだったが、彼の願いを断る勇気はなく、旅の資金として多額の金を渡して送り出した。

聖サヴァは、セルビア領であったアドリア海沿岸を経由し、自身の船に乗り込み、聖地へと向かった。　航海を無事に終え、まもなく聖都エルサレムに到着すると、そこでエルサレム総主教アファナシオスに温かく迎えられ、エルサレムとその周辺の聖地を巡礼し、礼拝を始めた。　彼は総主教と共に、偉大なる復活教会で礼拝を捧げ、また総主教の祝福を得て、シオン、ベツレヘム、ゲッセマネ、エレオンの丘、ベタニヤにある他の著名な教会でも礼拝を行った。　これらすべての教会や、彼が訪れた他の聖地においても、サヴァは惜しみなく施しを行い、聖なる教会の維持、整備、装飾のために献金を捧げた。

聖サヴァは、ヨルダン川へ赴き、神現の地と洗礼者ヨハネの洞窟教会を参拝し、そこから聖ゲラシモスの修道院を経由して再びエルサレムへと戻った。　しばらく休息をとった後、彼は同名の聖人である聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイの有名な修道院へと向かい、そこで修道者たちから敬意をもって迎えられた。そこから死海へと旅し、沈黙の修道士たちの洞窟を訪れ、彼らと対話を交わした。　また、大エウフィミオスとキノヴィアルヒのテオドシオスの修道院も訪れた。エルサレムに戻ると、そこから再びナザレやファヴォルなど、さまざまな場所へと旅をした。

エルサレムに滞在し、修道院やその他の注目すべき場所を巡りながら、聖サヴァは自分自身のためにも、また祖国のためにも有益なものを得ようと努めた。彼は教会の規律や規則を学び、書籍を収集し、教会の統治や魂の救いについて、博識な聖職者や修道者たちと語り合った。　さらに、祖国のために多くの聖遺物や教会用具を収集した。

聖地を見渡し、聖地に礼拝を捧げた後、サヴァはギリシャ王ヨハネス・ヴァタツェのもとへ向かった。ヴァタツェは当時まだニカイアに居を構えており、サヴァは以前、ヴァタツェの義父である前王テオドロス・ラスカリスに会いに訪れたことがあった。　聖サヴァは王、とりわけ王妃から温かく迎えられた。王妃は以前、実の父の時代に聖サヴァに会っており、彼に対して深い愛情と敬意を抱いていたのである。王と王妃は、セルビアの大司教に国庫からの資金と、聖なる教会のための高価な祭具を惜しみなく贈った。　サヴァは、軍隊の護衛を伴った王室の船で、栄誉をもって送り出された。彼は聖アトス山へ向かい、そこで修道誓願を立てたヴァトペド修道院やイヴェル修道院などを訪れたが、主に自身のセルビア人修道院であるヒランダル修道院に滞在した。　アトス山のすべての修道者たちは、かつての同志であり兄弟である彼を再び見ることができて喜んだ。慣例に従い、聖サヴァは自身の資金だけでなく、ギリシャの王と王妃から賜った資金からも、教会や修道士、貧しい人々に対して惜しみなく施しを行った。

聖アトス山を後にしたサヴァは、テッサロニキへと向かった。そこでは、ニカイアの王とは独立して、アンゲロス家のテオドロスが自らを王と称して権力を握っていた。　この統治者にとっても、セルビアにとっても、動乱の時代に平和を保つことは重要であったため、聖サヴァはテオドロスに温かく迎えられ、このサヴァのテッサロニキ訪問はセルビアに少なからぬ利益をもたらした。

そこからサヴァは故郷へと向かった。この知らせを受け、セルビア王ラドスラヴは聖職者、貴族、民衆を伴ってサヴァを出迎えた。この再会は、聖サヴァにとっても、君主を筆頭とするセルビア国民にとっても、喜びに満ちたものであった。

長い旅の疲れを、父である聖シメオン・ミロトッツァの墓があるストゥデニツァ修道院で癒やした後、サヴァ大司教は信仰と教会の事業に熱心に取り組み始めた。

まず第一に、彼は、修道名シメオンとして知られた兄ステファン・ペルヴォヴェンチャニーの死を偲び、ストゥデニツァ修道院で聖職者会議を招集した。礼拝と特別な祈願の後、聖　サヴァは、故人の棺を開けるよう命じた。そこには朽ちることのない聖遺骨が発見され、その芳香が聖堂を満た

した。　この新たな神の御恵みに対し、人々の喜びは計り知れないほど大きかった。そこで、聖ステファン・ペルヴォヴェンチャニーと聖サヴァの共同の聖遺物安置所へ、聖遺物を厳かに移すことを決定し、二人が新たに設立したジチュの大修道院へと運ばれた。

その後、聖サヴァは、自身のセルビア大司教区全域の教区を巡回し、司教としての裁きを行い、欠点を是正し、信仰と敬虔について教え、貧しい者や困窮している者たちに惜しみなく施しを行い、教会や修道院に慈善を施した。　この巡行において、サヴァによって教えや指導を受けなかった者は一人もいなかった。貴族も、兵士も、庶民も、彼からキリスト教生活に関する賢明な教えを聞いたのである。

しかし、聖サヴァは重い苦難も味わわなければならなかった。ラドスラフ王と、兄に対して不法に反旗を翻した弟のヴラディスラフとの間で、内紛が起きたのである。　ラドスラフ王は当初、民衆の愛を享受していたが、その後、特に家庭生活におけるいくつかの不適切な行いによって、人々の反感を買ってしまった。多くの貴族が彼から離反し、反旗を翻した弟の側に付いた。　ラドスラフは王位から追放され、アドリア海沿岸のドラチへ逃れたが、そこであるフランク系のラテン人支配者から暴行を受けたため、再び逃亡せざるを得なかった。　彼は叔父であるサヴァ大司教のもとで避難と保護を得た。サヴァは、波乱に満ちた世俗の生活を送った後、修道生活の中で安らぎを求めるよう彼を説得した。ラドスラフはサヴァによってヨハネという名で修道士として剃髪され、短期間修道生活を送った後、この世を去った。

ラドスラヴの死後、聖サヴァは、今やすべてのセルビア人に認められていた末の甥ヴラディスラヴに、セルビア王冠を授けた。ヴラディスラヴは叔父を深く敬い、その教えに従い、敬虔な行いにおいて父や祖父に倣うよう努めた。　聖サヴァの祝福のもと、彼はミレシェフに、荘厳な「主の昇天」教会を自ら建立した。

聖サヴァはセルビア教会の繁栄のために献身的に、そして愛を込めて尽力し、大主教として多くの善行を行い、多大な貢献を果たした。しかし、彼の魂はやはり、遠く離れた聖地や、隠遁生活における修行へと向かっていた。　そして、内なる衝動に従い、彼は大司教の重責を捨て、再び東へと旅立つことを決意した。彼はその思いをヴラディスラフ、司教たち、そして貴族たちに率直に伝えた。　皆が熱心に、自分の羊の群れを離れないよう懇願したが、聖サヴァは断固として譲らず、まだ訪れたことのない聖地を巡礼しなければならないと言い、その後、戻ってくれば、残りの生涯を彼らと共に静寂な修業に専念すると語った。

教会公会議を招集し、彼は弟子たちの中で最もふさわしい人物である修道士アルセニウスを選び、後継者としてセルビアの大司教に叙階した。そして自身は、信徒たちに訓示を与えた後、再び遠い旅路へと旅立った。

今回も彼はダルマチアから海路を進んだ。当時の海には至る所に海賊がはびこっていた。　サヴァが莫大な財宝を携えているという噂が広まった。海賊たちはサヴァの船を待ち伏せし、襲撃しようとしていたが、サヴァの熱心な祈りにより、船乗りたちは待ち伏せしていた海賊たちを巧みに回避し、イタリアのブリンディジという安全な港にたどり着いた。　海賊たちは悔い改め、同じ港に到着すると、聖サヴァに許しを請いました。さらなる旅路へと向かった聖なる巡礼者は、新たな危険に遭遇しました。　恐ろしい嵐が吹き荒れた。船員たちは船の操船を拒み、天からの助けだけを待った。彼らは皆、心を一つにしてサヴァに祈りを捧げ、その祈りと取り成しを求めた。サヴァは船員たちに支えられながら、風に向かって両手を天に掲げ、主なる神に熱心に祈りを捧げた。　そして主はその祈りを聞き入れられた。突如として嵐は静まり、皆は主なる神と聖サヴァに感謝を捧げた。パレスチナの港町アクロに到着すると、聖サヴァは、以前フランク人から買い取った「聖サヴァ修道院」の敷地内に滞在した。　サヴァの祈りによって海の嵐が鎮められたという奇跡の評判は、船乗りたちを通じて民衆の間に広まり、多くの人々がこの奇跡的な長老に会って、彼から祝福を受けようと押し寄せた。

アクラから、聖サヴァは別の船で、大ケサレアとヨッピ、すなわちヤッファを経由して、海路でエルサレムへと向かった。

エルサレムでは、聖ヨハネ・テオロゴス修道院に滞在した。この修道院は、彼が以前、聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイ修道院の修道士たちに管理を委ねるために買い取り、譲り渡していたものである。 この修道院の修道士たち—— ——が喜びをもって彼を出迎えると、彼は聖遺物を礼拝するためにキリストの復活教会へと向かった。そこで彼はエルサレムの総主教アファナシオスと面会し、総主教は彼の旅路や聖サヴァの故郷、そして彼が通ってきた国々での戦争や平和について詳しく尋ねた。 聖サヴァは総主教と共に礼拝に参加し、総主教はこの機会に、サヴァの功績、善行、そして奇跡について、出席者たちに預言的な言葉で語った。

エルサレムではサヴァはすでに知られており、彼の再登場は、彼の祈りと恩恵を求める多くの人々を惹きつけた。

聖ヨハネ・テオロゴス修道院に居を定めた聖サヴァは、聖地を巡礼し、修道者たちと懇談した。その多くは、特に聖サヴァ修道院において、以前から彼と親交のあった者たちであった。しかし、サヴァの巡礼はエルサレムの聖地だけにとどまらなかった。 エルサレムから、彼はいくつかの遠方への旅に出た。例えば、彼はエジプトのアレクサンドリアを訪れたいと願った。

そこで彼は、アレクサンドリア総主教から好意と敬意をもって迎えられた。総主教はすでにこの著名なセルビアの大司教について多少の知識を持っていたが、この度の直接の面会で、彼の故郷について詳しく尋ねた。 聖サヴァはアレクサンドリアで聖なる教会を訪れ、聖遺物に敬意を表し、至る所で供物を捧げた。また、総主教座大聖堂では、多額の寄付を行い、自身の家系名を教会の記録簿に記した。総主教とは、互いに豪華な贈り物を交換した。

総主教から、信頼でき、知識豊かな修道士たちの指導者たちを紹介された聖サヴァは、アレクサンドリア近郊の荒野を巡り、隠遁生活の様子を見学し、隠者たちと語り合うために旅に出た。彼はマレオテやリビアの荒野を訪れた。 彼は愛と謙遜の心をもって、その修行が救いへの最も完全な道として万人に称賛されていた沈黙の修道者たちを求め、彼らから教えを受け入れた。 そこから彼はフィヴァイダや、隠遁生活で名高い「黒い山」へと向かい、シリアやペルシアのいくつかの地を訪れ、ついにエルサレムへと戻った。

しばらく休息をとった後、彼は新たな旅——シナイへの旅——に出発した。ヨルダン渓谷を通り抜け、バビロンに到達すると、そこでアナニア、アザリヤ、ミサイアの三人の少年の墓に参拝した。 現地のスルタンは彼に好意を示し、エジプトのスルタンへの案内人を手配した。エジプトのスルタンもまた聖サヴァに敬意を表し、彼をシナイ山へと案内した。

シナイでは、聖サヴァはシナイの司教に温かく迎えられ、至聖なる神の母修道院に身を寄せた。 シナイ山で、聖サヴァは聖なる四旬節の間ずっと修行に励み、聖地を参拝し、現地の修道生活を学び、この聖なる地で祖国のために祈りを捧げた。

シナイから、聖サヴァは再びエルサレムへと戻った。しばらく休息をとった後、彼は改めてすべての聖地を巡り、それらに礼拝を捧げ、その後、新たな旅の準備を始めた。 エルサレムの総主教アファナシオスや、聖サヴァ修道院の院長ニコライ、さらには総主教庁の聖職者全員や修道院の兄弟たちと心から別れを告げた後、聖サヴァはアンティオキアの街へと向かい、そこでアンティオキア総主教から温かく迎えられた。 アンティオキア市内の聖なる教会を巡礼した後、聖サヴァはディヴナ山にある聖シメオンの聖棺を参拝するための旅に出た。

アンティオキアから、サヴァはアルメニアとアナトリアを経由してコンスタンティノープルへと向かった。陸路の旅は無事に済んだが、海上で彼は重い病に倒れてしまった。 同行者たちは彼の命が危ぶまれると、数日間何も口にしていない彼に食事を摂るよう説得したが、サヴァは新鮮な物以外は何も口にすることができなかった。しかし、陸地までは遠く、船の舵取りは、その目的で停泊す

ることをきっぱりと断った。　サヴァの同行者たちはこのことを彼に伝えたが、彼は「すべてに神の御心があるのだから、嘆いてはならない」と言って彼らをなだめた。するとちょうどその時、波が大きな生きた魚を、病に伏しているサヴァが横たわっていたまさにその場所へ船に打ち上げた。サヴァはその魚を指さして言った。

「ほら、主なる神が私たちに必要なものを送ってくださったのだ！」

その魚は調理され、船に乗っていた者たちは皆、それを食べて満腹になった。聖サヴァは新鮮な食事で体力を回復し、すっかり元気を取り戻して立ち上がった。一方、この出来事に恥じ入った舵取りは、司教に許しを請うた。

コンスタンティノープルに到着すると、聖サヴァはまず、聖母エヴェルゲティッサ修道院へ向かい、そこで滞在用の部屋を確保した。その後、そこから街の中心部にある　の聖使徒アンドレイ教会へと向かい、当時コンスタンティノープルを統治していたラテン系の magistriたちと、様々な事柄について協議を行った。

コンスタンティノープルからの聖サヴァの通常の旅路は、おそらく聖山を経由し、そこから故郷へ戻るものだった。しかし、神は彼の道筋を別のものへと導かれることをお望みになった。　聖サヴァはコンスタンティノープルから海路で黒海沿岸のメセムヴリアの町へ渡り、そこからブルガリアの首都テルノフへと向かい、自身の義理の親であるブルガリア王ヨアン・アセンを訪ねた。ヨアン・アセンの娘は、聖サヴァの甥にあたるセルビア王ヴラディスラフの妻となっていた。　ブルガリア王はサヴァを盛大に迎え、首都テルノフで彼を大いなる栄誉をもってもてなし、自身の宮殿と使用人を彼の利用に供した。聖サヴァは主の顕現祭の前夜、四十殉教者大聖堂で洗礼水を聖別し、翌朝はブルガリア総主教と共に礼拝を執り行った。

まもなく、ブルガリアの王は聖サヴァの祝福を受けて、狩りのために都を離れた。その間、聖サヴァは重病に陥り、死が近づいていることを感じていた。

彼は弟子や側近たちを呼び集め、臨終の遺言を述べた。東方への旅の途中、彼は祖国のために数多くの聖遺物や貴重品――聖遺骨、聖器、書物、祭服、その他の教会用具――を集めていた。これらの品々の多くは寄贈されたものであり、多くは購入したものだった。　彼はこれらすべての宝物を、どこへ送るべきかを正確に割り振り、自らの帰郷に先立って故郷へ送り出した。

その間も病状は悪化の一途をたどっていた。ある土曜日の夕方、サヴァは弟子たちを呼び寄せ、しばらく休むよう命じた。それは、その後、彼らにはさらに長い徹夜が待っていたからである。真夜中、聖サヴァは特別な霊的な喜びに満たされ、主への熱烈な祈りの中で自らの最期を待ち望んだ。そしてまもなく、弟子たちの見守る中で息を引き取った。

弟子たちは、故人の遺体を敬虔に安置した後、埋葬の準備に取りかかった。直ちにブルガリア王へ通達が送られ、王はブルガリア総主教ヨアキムに対し、テルノヴォの「四十殉教者教会」で聖サヴァを厳かに埋葬するよう命じた。その命令は栄光と名誉をもって遂行された。　王は、セルビア大司教の埋葬に際し、自身の国庫から多額の金を貧者や困窮者に配るよう命じた。聖サヴァ自身も、臨終の際、自身の埋葬と追悼のために、「四十殉教者教会」へ金銭や物品、国庫からの資金を寄進するよう遺言していた。

聖サヴァの帰天から数年後、後継者であるセルビア大司教アルセニイとセルビア王ヴラディスラフは、故人となった初代セルビア大司教の遺骨をテルノヴォから祖国へ移すことを決定した。王は、亡き牧者の遺骨を移送する許可を求めるため、義父のもとへ使節団を派遣した。　しかし、ブルガリアのツァール・ヨアン、総主教、そして民衆は、彼らにとっても貴重なその棺をどうしても手放そうとはしなかった。彼らは、もし棺が放置されたままなら、セルビア人が遺骨の移送を要求するかもしれないが、その墓所は主教会堂にあり、豪華に装飾され、あらゆる配慮をもって守られていると答えた。

ヴラディスラフは二度目の使節団を派遣したが、これも成功しなかった。そこで彼は、貴族や司教たちを伴い、義父のもとへ自ら赴くことを決めた。しかし、ヴラディスラフの直接の懇願でさえ、当初はブルガリアのツァールを説得して聖サヴァの遺体を譲り渡させることはできなかった。　王ヨハネは義理の息子をどれほど親しみを込めて、敬意を払って迎え入れたとしても、ブルガリア人にとっても大切なその棺を手放す気はなかった。しかし、天から授かった夜の幻視によって、王ヨハネはセルビア王と民衆の願いに反対することをやめたのである。　幻視の後、イオアン王は、これが人間の意志ではなく、神の御心であることを悟った。

聖サヴァの遺骨の移送は、厳粛に行われた。移送の準備として棺を開けたところ、遺体は腐敗していないことが判明した。　長い旅に備えて万全の用意を整え、祈りを捧げた後、聖遺骨を棺から取り出し、旅立ちました。ヴラディスラフ王は、すべてがこれほど迅速かつ順調に進んだことに驚嘆しました。というのも、幻視に励まされたブルガリア王は、サヴァの遺体を渡すことを決心したものの、依然として不満を完全に払拭できていなかったからです。

しかし、聖遺物が運び出されて間もなく、ネオフィトという名の麻痺を患っていた修道士が、聖サヴァの棺のそばにあった木の板の上に横たわった。その木に触れたことで、彼は突然、癒やされたのである。　この奇跡はブルガリアの人々に大きな喜びをもたらした。聖サヴァの奇跡の力は、彼の埋葬地において、また聖遺骨が運び去られた後もなお保たれていたのである。その後も、「四十人の殉教者」の教会に聖サヴァの棺が安置されていた場所では、多くの奇跡が起こった。

聖遺物を運ぶ行列がセルビアの国境に近づくと、アルセニイ大司教は、司教やその他の聖職者たち、そしてボヤールや大勢の民衆と共に、霊的な喜びと歓びをもって聖歌を歌いながら出迎えた。

深い喜びと慰めを胸に、皆は聖サヴァの朽ちることのない聖遺物に口づけをし、セルビア王ヴラディスラフが自身の魂の安息の地として建設したばかりのミレシェヴォ修道院へ、厳かに運び込んだ。　そこにはすでに、ヴラディスラフによって聖サヴァの聖遺骨を安置するための立派な棺が用意されており、セルビアの各地から大勢の人々が聖遺骨を見ようと集まってきた。

しばらくして、聖サヴァが弟子の一人に現れた。聖サヴァは、主が彼をこの世から召して以来、棺の中に留まるべきではなく、教会に安置され、すべての人々の目に触れるべきであると告げた。

そこで、再びその聖遺骨を地中から取り出し、木製の聖櫃に納めて、大聖堂の中央に安置した。

聖サヴァは、その長い聖なる生涯において、個々の人々のためにも、そしてとりわけ祖国セルビアのためにも、多くの善行を成し遂げた。彼はセルビアにおいて信仰と敬虔さを強め、教会の階層制度と適切な教会運営を確立し、修道生活の模範を示した。　彼は自らの数多くの著作の中に、その遺訓のすべてを託した。

そして、彼と同時代を生きた人々、そしてその後のあらゆる時代の人々――セルビア人だけでなく、すべての正教徒――は、この聖人、偉大な恩人であり、セルビアの地および全正教会の守護者を崇め、今もなお崇め続けています。

トロパリオ、第3調：

命への道を導く導き手、大司教、そして師よ、あなたは、最初に到来した聖サヴァよ、あなたの祖国を啓蒙し、聖霊によってそれを生み出し、心の楽園にオリーブの木のように、あなたの至聖なる子らを植え付けました。　それゆえ、使徒であり聖人として、あなたを同席者として崇める私たちは、キリスト・神に、私たちに大いなる憐れみをお与えくださるよう、あなたに祈ります。

コンダク、第8調：

偉大なる首席聖職者であり、使徒たちの協力者として、教会はあなたを称え、尊き者よ。しかし、キリスト・神に対して大胆に祈る者として、あなたの祈りによって、私たちをあらゆる苦難から救い出してください。そうして、私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、神に賢き父サヴォよ。」

聖殉教者ペトロ・アベサロミトの殉教

記念日：1月12日

アベサロミトと呼ばれるペトロは、エレウフェロポリス[969] の出身であり、キリスト教徒に対する迫害[970] が激化した際、アヴロン[971] の町で捕らえられた。彼がセヴェル総督の尋問に連行されると、総督はこう尋ねた。

「お前の名は？」

ペトロは答えた。

「父の名はアベサロミットですが、洗礼の際に授かった聖名はペトロです。」

「どの家系に属しているのか？」と総督は尋ねた。

ペトルは答えた：

「私はキリスト教徒です。」

「あなたはどの位階ですか？」と総督が尋ねた。

「クリスチャンという身分以上に高貴で立派な身分など、私にはありえません」とペトルは答えた。

「両親はいるか？」と統治者は尋ねた。

「いいえ」とペトロは答えた。

「お前は嘘をついている」と統治者は言った。「お前には両親がいると聞いたからだ。」

「福音書において、私は主の御名を告白するために歩むとき、すべてのものを捨て去るよう命じられています（ルカ14:26；マタイ10:37、19:29；マルコ10:29–30；ルカ18:29–30）」と、ペテロは答えた。

「王の命令については知っているか？」と総督は尋ねた。

「知っています」とペテロは答えた。「私の神、まことの永遠の王が命じられたことを。」

総督は言った。

「慈悲深き王たち[972] は、すべてのキリスト教徒に対し、神々に犠牲を捧げるか、あるいは様々な刑罰によって滅ぼされるかのいずれかを選べと命じられた。」

ペトルは答えた。

「しかし、真の永遠の王は、生ける神ではなく偶像に犠牲を捧げる者は、永遠に滅びると命じられた。公正に判断してほしい。天の王のこの戒めを破ることは許されるだろうか？」

---

969 エレウフェロポリ――アスカロンの東、地中海と死海の間に位置していたパレスチナの都市。4世紀には重要な都市であったが、現在ではその痕跡すら残っていない。

970 言うまでもなく、約303年に始まった迫害は、東ではディオクレティアヌス、西ではマクシミアヌス（284～305年）の治世末期に起こったものである。

971 マケドニアにある都市で、同名の湾に面した賑やかな港を持つ。

972 即位後まもなく、ディオクレティアヌスは共同統治者としてマクシミアヌス・ヘルクレスを選出し、彼に帝国の西半分を任せて、自身は東半分を統治した。292年には、帝国の統治のために、カエサルという称号を持つコンスタンティウス・クロルスとガレリウスの2人をさらに側近として選んだ。

「よく聞け」と統治者は言った。「神々に犠牲を捧げ、我らの王たちの命令に従え。」

ペトロは答えた。

「私は、人間の手で造られたもの――あなたがたと同じような木や石の神々――に犠牲を捧げるつもりはない。」

「お前は我々を侮辱している」と統治者は反論した。「私がお前を死刑に処すことができることを知らないのか？」

「私はあなたを侮辱しているわけではない」とペトロは答えた。「ただ、主の律法に書かれていることを言っているだけだ。*『彼らの偶像は、人の手で作られた銀や金であり、口、目、鼻、耳、手、足はあるが、話すことも、見ることも、嗅ぐことも、聞くことも、触れることも、歩くこともできない』*。主は聖書の中でこう言われている。*「それらを作る者たちや、それらに頼る者たちは、それらに似るであろう」*（詩篇113:12–16）。[973] もし主から来た聖霊が預言者たちの口を通してこのように語られたのなら、どうしてあなたは、私があなたを耳が聞こえず口が利けない者、石や木の偶像に例えて侮辱したかのように言い、さらには私に、あなたのような者になるよう勧めるのか。

統治者は言った。

「私の言うことを聞き、自分の身を憐れみ、神々に犠牲を捧げなさい。」

ペテロは答えた。

「もしあなたがたの神々に犠牲を捧げず、真理から背かないなら、それこそが私を憐れむことになる。しかし、あなたは不信仰者であるから、私にも神の律法にも信じようとしない――神々に犠牲を捧げる者は滅びる、と。それなのに、なぜ躊躇しているのか？　命じられた通りにせよ。」

「私はまだ待っている」と総督は答えた。「お前が考えを改め、神々に犠牲を捧げて、それによって苦しみから解放されるのを。」

「無駄に待っているだけだ」とペトロは答えた。「お前の企てたことを実行し、お前の父である悪魔の意志に従え。私はあなたがたの意志には従わない。私が熱心に仕えている主イエス・キリストが、私にそれを許さないからだ。」

統治者は彼を絞首刑にするよう命じ、それから彼に言った。

「どうだ、ペトロ？　神々に生贄を捧げるか、捧げないか？」

「鉄の爪をくれ」と聖人は答えた。「私を削り取れ。私は何度も言った通り、私の唯一の神、その御名のために私が苦しんでいる神以外には、誰にも犠牲を捧げないからだ。」

セヴェル王は彼を残酷に拷問するよう命じた。しかし、神の勇猛な殉教者は、その間、うめき声一つ上げることなく、ただ次のように詠んだ。

「『主からただ一つ願うこと、ただ一つ求めることは、私の生涯のすべての日に、主の家に住むことである』（詩篇26:4）[974]。」

そしてさらにこう詠んだ：

–「私は救いの杯を受け、主の御名を呼び求める」（詩篇115:4）[975]。

彼がそう語ると、総督はさらに激怒し、他の処刑人を呼び寄せた。周囲に立っていた民衆は、地面に大量に流れ出る血を見て、聖なる者を悼みながらこう言った。

「自分の身を考えて、神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、この激しい苦しみから逃れられるでしょう。」

---

[973] 上記の箇所は、いくつかの語句を省略・変更して引用されている。

[974] すなわち、聖殉教者は、主が彼を聖なる教会から離反させることのないよう、常に特に熱心に主へ祈りを捧げていた。

[975] 聖殉教者は、詩篇の言葉を、苦難を自らの救いへの手段と見なし、それに対して神に賛美を捧げるという意味で、自分自身に当てはめている。

「この苦しみは」と聖ペテロは答えた。「私にとっては何の意味もなく、何の痛みも与えない。もし私が自分の神を否定すれば、その時こそ、私は真に最も重く、果てしない苦しみの中に陥ることになるだろう。」

統治者は言った。

「ペトロ、何を言っているのだ？　後で後悔することのないよう、手遅れになる前に神々に生贄を捧げよ。」

「後悔はしないし、生贄も捧げない」とペトロは答えた。

「お前を死刑に処す」と統治者は言った。

「それこそが私の望みだ――私の神のために死ぬことだ」とペトロは答えた。

そこで統治者は、彼に対して次のような死刑判決を下した。

「自らの神の律法のために、無敵の王たちの命令を無視したペトロを、十字架に磔にすることを命じる。」

こうして、キリストのこの勇敢な戦士は、その偉業を全うし、十字架上の磔刑を通じて、主の苦難に与る者となる栄誉に浴した。[976] 。 キリストの殉教者ペトロ・アヴェサラミットは、ローマでマクシミアヌスが統治していた頃、アヴロンという町で殉教した。しかし、すべての上に君臨されるのは、永遠の栄光ある我らの主イエス・キリストである。アーメン。

聖殉教者メルティウスの記念日

記念日：1月12日

聖殉教者メルティウスは、ディオクレティアヌス帝の治世下で兵士であった。ムーア人に対する遠征中[977] 、指揮官は彼に偶像への生贄を捧げるよう強要した。 聖メルティウスは従うことを拒んだため、最も残酷な拷問にさらされた。彼はそれを極めて勇敢に耐え抜いたため、拷問者は恐怖と驚きに打ちのめされ、狂乱状態に陥った。拷問は、聖人の体に無傷の箇所が一つも残らなくなるまで続き、その全身は打撃による傷跡と傷口で覆われてしまった。　その後、牢獄に投げ込まれたキリストの殉教者は、8日間、飢えと看守たちの残虐行為に苦しめられた。その後、主に向かって祈りを捧げた聖なる殉教者は、「神の子よ、私の霊を御手に委ねます」と叫び、自らのために勇敢に苦難を耐え抜いたキリストのもとへと旅立った。

1月26日

1月13日（旧暦）

聖殉教者エルミルとストラトニクの殉教

記念日 1月13日

---

[976] すなわち、イエス・キリストが受けたのと同じ処刑（十字架上の磔刑）を受けるに値する者とされたのです。

[977] ムーア人――アフリカの、黒人部族に属する民族。

不敬虔で極めて熱心な偶像崇拝者であったリキニウス[978] の治世下、すべてのキリスト教徒は苦痛に満ちた死の脅威にさらされていた。彼らはあらゆる国、都市、村々で捜索されていた。 そして、キリスト教徒を見つけ出して皇帝に密告した者は、それによって皇帝の寵愛を得て、大きな栄誉に浴することとなった。そのため、皆が皇帝に気に入られようと、キリスト教徒を探し出し、迫害し始めたのである。

ある日、リキニウスが玉座に座って裁判を行っていると、一人の兵士が彼のところへ近づき、こう言った。

「ここに、エルミルという名のキリスト教徒がおり、キリスト教徒の間で助祭の位にある。彼はかねてよりキリストに仕えており、我らの神々や、王であるあなたを嘲り、あなたとは関わりを持たんとしている。」

これを聞いた王は、エルミルを探し出して捕らえるよう命じた。聖人は、主なる神に向かって両手を挙げて祈っていたところへ、王から遣わされた者たちがやって来た。 キリストのために裁判と拷問を受けることを知ると、彼は喜び、心を躍らせ、兵士たちの後を、無理やり連行されるのではなく、まるで栄誉を受けるかのように、活気に満ちた足取りでついていった。高潔な勇気に満ちて、彼は王の前に現れた。彼を見て、リキニウスは尋ねた。

「言ってみよ、我々が聞いている通り、お前は本当にキリスト教徒なのか？」

「私は」とエルミルは答えた。「キリスト教徒であることを堂々と認めるだけでなく、目に見えない神の前に奉献され、助祭の位として神の御前に仕えていることを宣言します。」

「ならば、助祭、すなわち『[979]』の奉仕者となり、我らの神々にも仕えよ」と王は言った。

王のこの提案に対し、殉教者は軽蔑を込めてこう答えた。

「王よ、あなたは耳が聞こえないか、正気を失っているかのどちらかだ。私は、目に見えない神に仕えているのであって、目には見えるが、何も見えず、助祭とはどういうものかさえ理解できない、あなた方の偶像には仕えていないと、すでに言ったではないか。 あなたは惑わされて、それらを神々として崇めているが、実のところ、それらは魂も耳もない石や木、すなわち人の手によって作られたものに過ぎず、崇拝されるどころか、嘲笑されるに値するものである。

王はもはや殉教者の自由な言葉を聞くことができず、直ちに、拷問のためにあらかじめ用意されていた特殊な銅製の器具で彼の頬を打つよう命じ、その際、次のように宣告させた。

「エルミルよ、口先で生意気なことを言うな。王を敬い、神々に犠牲を捧げ、この苦しみから逃れよ。」

しかし、聖人は、激しい殴打を受けても痛みを全く感じていないばかりか、むしろ拷問者の無力さを嘲笑っているようだった。その後、声を張り上げて、王に向かってこう叫んだ。

「お前は自ら数多くの傷を受け、恐るべき神の御手を身をもって知ることになるだろう。それは、創造主を見捨てて、耳も口も利かない神々に頼るからであり、とりわけ、他の人々の救いを妬むかのように、彼らを無理やり同じ破滅へと導こうとするからだ。」

その後、王は聖エルミルを三日間牢獄に閉じ込めるよう命じた。彼が考えを改め、その大胆さを悔い改めるだろうと期待してのことだった。しかし、殉教者は道中、次のように歌い上げた。

「*主が私の味方であるなら、私は恐れない。人が私に何ができるというのか*」（詩編117:6）。「*私は神に信頼する。恐れない。肉なる者が私に何ができるというのか*」（詩編55:5）。

---

978 リキニウスは当初、東ローマ皇帝マクシミアヌス・ガレリウスの共同統治者として「アウグストゥス」の称号を帯びていた。ガレリウスの死後、ライバルたちを排除した彼は312年に東ローマ皇帝となり、一方、コンスタンティヌス大帝は西ローマ皇帝となった。 コンスタンティヌス大帝がキリスト教徒を庇護していたのに対し、リキニウスは、おそらく彼らがコンスタンティヌスに同情しているのではないかと疑い、キリスト教徒の臣民を弾圧した。その後、リキニウスとコンスタンティヌスの間で戦争が勃発し、リキニウスは敗北して権力を剥奪され、ついに324年に処刑された。

979「ディアコノス」とは、ギリシャ語から訳すと、本来は「奉仕者」、すなわち下級の聖職者を意味する。

そして、牢獄に入る際、彼はこう歌った。

–「*イスラエルの牧者よ！ 耳を傾けてください。ヨセフを羊のように導き、ケルビムの上に座しておられる方よ、御自身を現し、私たちを救いに来てください*」（詩編79:2–3）。

そして主は御自分のしもべを忘れず、彼を慰め、力づけるために御使いを遣わされた。御使いは現れて、彼にこう言った。

「エルミルよ！　勇気を出し、語り続け、黙ることなく、恐れてはならない。まもなく、あなたは拷問者の企てに打ち勝ち、その苦難の報いとして、天より至聖なる冠を受けるであろう。」

こうして神は、御自身の戦士を戦いに備えさせ、彼を力強く支え、戦いのためにその手を強め、その筋肉に、あたかも青銅の弓と救いの盾を与えられた。

三日が過ぎると、王は再びエルミルを裁判に呼び出し、彼にこう言った。

「悔い改めたか。そして、これから待ち受ける苦痛から逃れるために、神々に犠牲を捧げることに同意するか。それとも、いまだに狂気に囚われており、自ら破滅を招こうとしているのか。」

キリストの戦士は、彼を強めてくださった主の栄光を称え、勇敢にこう答えた。

「王よ！　私はすでに一度お答えしました。あなたは私の最初の言葉に満足し、これ以上私に問うべきではありませんでした。私には天の神がおられます。私はその方のみによって生きており、その方のために自らを犠牲として捧げる用意があり、その方から私への大いなる助けを受けることを期待しています。」

「天に住まわれる方が、果たしてあなたを助けてくれるかどうか、見てやろう」と王は言い、直ちに六人の強靭で残忍な戦士たちに命じて、彼を地面に押さえつけ、容赦なく殴打させた。

聖人は、あたかも自分が打たれているのではないかのように、忍耐強くその苦痛に耐え、こうして神に祈った。

「主よ、わが神よ！　あなたは私のために、ポンティウス・ピラトのもとで傷と鞭打ちに耐えられました[980]　。どうか、あなたのために私が受けるこの苦しみの中で、私を強めてください。この苦痛に耐える力を与えてください。そうして、あなたの苦しみに与ることで、私もあなたの永遠の栄光に与るにふさわしい者となることができますように。」

聖人がこのように祈っていると、突然、天から声が聞こえてきて、こう言いました。

「アーメン、アーメン、エルミルよ！　三日後、あなたはこれらの苦しみから解放され、その苦しみに対する偉大な報いを受けるだろう。」

この声は殉教者に大きな勇気と力を与えた一方で、拷問者たちには大きな恐怖と戦慄をもたらした。彼らは地面に倒れ込み、何もできなくなってしまった。王もまた戦慄に襲われたが、神の力を認めようとはしなかった。王の命令により、聖なる殉教者は再び牢獄へと連行された。

殉教者を監視するよう命じられた牢屋の看守は、ストラトニクという男だった。彼は秘密のキリスト教徒であり、聖エルミルの友人でもあった。殉教者の苦しみを見るたびに彼の心は痛んだが、同時にその勇気と不屈の精神に心の中で喜びを感じていた。ただ、自分自身がそのような苦しみに身を投じる決心だけはつけられなかった。

牢獄に入る際、聖エルミルはこう歌った。

「*主は私の光、私の救い。誰を恐れることがあろうか。主は私のいのちの砦。誰を恐れることがあろうか。*」（詩編26:1）

天からの光が彼を照らし、再び声が聞こえてきた。その声は、苦難を勇敢に耐え忍ぶよう呼びかけ、三日が過ぎればその苦難が終わると約束していた。

980　ポンティウス・ピラトはユダヤのローマ総督であり、その治世下で、我らの主イエス・キリストは苦難を受け、死刑に処された。

翌朝、王は再び聖人を法廷に呼び出した。聖人は、明るい顔つきと陽気な眼差し、そして心に喜びを抱いて王の前に現れた。拷問官は首を振りながら殉教者を嘲笑し、こう言った。

「答えよ――あの陰鬱な牢獄は、お前に何の益をもたらしたのか？　耐え抜いた苦しみによって、王の法に従い、神々にふさわしい敬意を払うよう説得されたのか？　それとも、お前の頑なな心を折るために、さらに新たな拷問を考案しなければならないのか？」

「あの暗い牢獄は」と殉教者は答えた。「私を啓発してくれた。私の心は安らかで、喜びに満ち、明るく照らされており、それは私に将来の報いを受けるという確かな希望を与えてくれる。そして私は、なぜあなたが沈んでいる闇――それがあなたの心の目から真実を隠しているという闇――が、少しも晴れないのか、非常に不思議に思う。」

聖人がこのように王の迷いを糾弾すると、リキニウスは叫んだ。

「お前は、どうやら、その節制のない言葉と、厚かましさと狂気によって、公然と私を嘲笑すること以外には何もできないようだ。さあ、答えよ。率直に言え。神々に犠牲を捧げ、我々の命令に従うのか、それとも、お前が受けるに値する拷問に身をさらすのか？」

「王よ、私がどう答えたかはすでに耳にされているでしょう」と、キリストの殉教者エルミルは言った。「これ以上、私から何も聞くことはない。お望みのままに、お考えの通りに行いなさい。」

激怒したリキニウスは、聖人を裸のまま地面に引きずり出し、腹を棒で打つよう命じた。聖人は拷問の最中にも、キリストにある一つの喜びを持ち、心の目をキリストに向け、こう祈った。

「*神よ、急いで私を救い出してください。主よ、急いで私を助けてください*」（詩編69:2）。

聖人の忍耐は拷問者をさらに激怒させ、彼は鷲の爪で聖人の腹を抉るよう命じた。

「自分の内臓を、自分の目で見てやれ」と彼は言った。

それに対し、殉教者はこう語った：

– *「わが心とわが肉体は、生ける神に向かって喜び躍る*」（詩編83:3）。*「わが魂は乳と油で満たされ、わが口は喜びの声をあげてあなたを賛美する」*（詩編62:6）。

ストラトニクスは、友である聖エルミルが受けるこの非人道的な拷問と、その内臓が引き裂かれる様子を見て、泣き出した。

それを見た周囲の人々の何人かが、すぐに王に報告し、こう言った。

「牢屋の看守ストラトニクは、キリスト教の迷信への関与やエルミルとの友情を隠そうとしていません。彼はエルミルを憐れみ、そのために泣いているのです。」

王はストラトニクを呼び寄せ、こう尋ねた。　「お前はエルミルと友か？」ストラトニクスは、真理の弟子として偽りを語ることを望まず、今こそ偉業を成し遂げる時が来たと悟ると、自らをエルミルの友でありキリスト教徒であると名乗り、偶像の無情さとそれを崇める者たちの狂気を糾弾し、天と地の創造主である唯一の神を賛美した。　激怒した王は、ストラトニクを裸にし、全身を棒で打ち据えるよう命じた。苦しみの中、この殉教者は友である聖エルミルに目を向け、こう言った。

「エルミルよ、私のためにキリストに祈ってほしい。私が確固として揺るぎなく信仰を守り、拷問者たちよりも高みに立つことができるよう、主が助けてくださるよう。」

その際、彼はリキニウスに対し、盲目で魂のない偶像への崇拝をやめ、真の神からの懲罰を恐れるよう説得した。その神の御手に落ちることは恐ろしいことだからである（ヘブライ人への手紙10:31）。

聖人は、傷の痛みに耐えきれず沈黙するまで打ち続けられた。その後、王はストラトニクスとエルミル両名を牢獄に投獄するよう命じた。聖ストラトニクスは祈りながらこう言った。

「*『わが先祖の罪を思い出さないでください』*（詩編78:8）。

そして二人は共に神にこう叫びました：

「*神よ、私たちの救い主よ、御名の栄光のために、私たちをお助けください*」（詩編78:9）。

これに応えて、神の御声が聞こえ、こう言われた。

「あなたがたは善戦し、信仰を守り抜いた。それゆえ、義の冠（参照：テモテへの手紙第二4:7–8）があなたがたのために用意されており、明朝、それを受け取るだろう。」

朝になると、エルミルは再び法廷に連行され、リキニウスは彼に尋ねた。

「神々に犠牲を捧げるか？」

「以前あなたに言ったことを、今また繰り返す」と聖人は答えた。「焼こうが、切り刻もうが、好きなように私を苦しめよ。私は、肉体を殺す者たちを恐れないことに慣れているが、魂を殺すことのできない者たちを恐れることはないからだ（マタイ10:28参照）。」

拷問官は、聖人を木に吊るし、その体をナイフで切り刻むよう命じた。残酷な拷問の中、聖人は絶えず祈り、こう言った。

「主よ、わが救い主よ、私の助けとなってください！」

「恐れるな。わたし、あなたの神が、あなたと共にいる。」――彼は天からの声を聞いた。

その後、王は聖エルミルをイストラ川での溺死刑に処した[981]。王はその後、聖ストラトニクスに対しても、神々に生贄を捧げるよう説得した。

「さもないと、お前も、この忌まわしき者よ」と王は言った。「友と同じような苦難に遭うことになるだろう。」

福者ストラトニクスはこう答えた。

「確かに、もしお前の狂った命令に従ったなら、私は呪われた者となっていたでしょう。友がキリストのために死ぬというのに、どうして私が生き延びたいと願えるでしょうか？」

「では、どうする？　まさか、エルミルと共に死にたいというのか？」とリキニウスは尋ねた。

聖ストラトニクスは答えた。

「大いに望みます！真の友とは、苦難を共に耐え、恵みを共に享受すべきものです。キリストのために苦しみ、死ぬこと以上に、私たちにとって喜ばしいことがあるでしょうか？」

成功への望みを完全に失ったリキニウスは、聖ストラトニクスにも同じ死を宣告した――聖エルミルと共に水に沈めて溺死させるというのだ。二人の聖なる殉教者は川へと連行された。道中、彼らは喜びながらこう歌った。

「*天には神に栄光あれ、地には平和、人々に神の御心あれ！*」[982]

兵士たちが彼らをイストル川に連れて行くと、網に入れて深い場所に投げ込んだ。こうして川は聖なる殉教者たちの遺体を受け入れ、天は彼らの魂をその住まいに迎え入れた[983]。三日目に、信者たちは岸辺で彼らの聖なる遺体を見つけ、シンギドン市から十八スタディオン離れた場所に、栄誉をもって埋葬した[984]。その際、彼らは一つの棺に納められた。それは、キリストへの共通の告白、共通の牢獄、共通の拷問、共通の水没、遺体の共同埋葬、そして天における栄光――これらはすべて、私たちの主イエス・キリストの恵みと人間愛によるものである。主イエス・キリストには、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしい。アーメン。

ニジビエの主教、聖ヤコブの伝記

記念日 1月13日

[981] ドナウ川はこのように呼ばれていました。

[982] キリストの降誕における天使の福音の言葉。（ルカ2:14）。

[983] 聖殉教者エルミルとストラトニクの殉教は、315年頃に起こった。

[984] シンギドン――現在のベオグラード。ドナウ川下流の右岸に位置する都市で、セルビアの首都である。

聖ヤコブは、ニジビア[985] という町で生まれた。この町は、ローマ人の手からペルシャ人の手へと移り変わっていた地域の境界内にあり、この聖なる人物が生まれた当時はローマ人の支配下にあった。成人すると、聖ヤコブは荒野へと退き、高い山々で暮らした。 春、夏、秋は森の中で野宿し、冬になるとある洞窟に身を寄せ、そこで寒さをしのいでいた。 彼の糧は、土地が何の耕作もなしに自然に生み出すものであった。彼は森の木々から実を摘み、菜園の野菜に似た食用となる根菜を採り、それをもって、ただ生き延びるのに必要な分だけ、その弱った肉体を養っていた。 このように肉体を律しつつ、この神の聖人は同時に絶えず魂を霊的な糧で満たしていた。 彼は、清めを通じて自分の心を神を見ることに備えさせ、それを聖霊の鏡とし、聖使徒が言うように、主の栄光を顔と顔とを合わせて見つめ、主の御霊によって、栄光から栄光へと、その御姿に似せて変えられていった（IIコリント3:18）。 それによって、彼には神に対する祈りの大胆さが絶えず増し加わり、神に何かを願うやいなや、即座に与えられた。彼は預言的に未来を見通し、聖霊から奇跡を行う恵みが与えられていた。彼の行った数々の奇跡のうち、ごく一部について語り、彼の中に輝いていた神の恵みを、まだ知らない人々に明らかにしよう。

当時、愚かな人々は偶像を崇拝し、魂のない石に神への敬意を捧げていた。 多くの人々は、真の神への崇拝を軽んじただけでなく、徳において完全であり、真理を知り、偶像崇拝を避け、偶像の無価値さを嘲笑し、万物の創造主に礼拝を捧げる者たちさえも憎んでいた。 そこで聖ヤコブは、荒野を後にし、ペルシアへと向かった[986] 。新しく植えられた聖なる信仰の園をこの目で見届け、可能な限り自らも真の信仰の普及に尽力するためであった。

ある日、彼が道中で出会った小川を渡ろうとしたとき、衣服を洗っていた数人の乙女たちが、足を露わにしたまま、異様な服装をした隠者に対し、その威厳ある姿にも、自らの裸体にも恥じることなく、厚かましくも頭をも隠さずに彼の前に立ち、恥知らずな眼差しを向けていた。 そのような恥知らずな振る舞いを見て、聖人は激怒した。彼女たちへの懲罰を通じて神の力を示し、また奇跡を行うことで不信心者たちの偶像崇拝を恥じ入らせたいと願った彼は、小川が湧き出ている泉を呪った。すると、泉も小川もたちまち干上がり、そこには 一滴の水も残らなかった。 また、聖人はこれらの乙女たちをも呪い、彼女たちの恥知らずな若さを、突然の老いをもって罰した。 聖人の奇跡的な言葉により、彼女たちの頭上の黒い髪はたちまち白髪となり、彼女たち自身も突然老いてしまった。それは、まるで若い木の葉が突然霜に襲われたかのように変貌したかのようであった。水が突然消え、一人ひとりの頭に白髪が現れたのを見て、乙女たちは恐怖に襲われ、町に戻ってこのことを皆に語った。

その奇跡を目撃した市民たちは、偉大な奇跡行者である聖ヤコブのもとへ赴き、彼らに憐れみを示し、水を戻してくれるよう熱心に懇願した。その願いに心を動かされた聖人は神に祈りを捧げると、泉は再び水で満たされ、以前のように水が流れ出した。 人々は聖人に、少女たちをも赦し、早すぎる老いの代わりに、再び若さを取り戻させてくれるよう懇願した。 聖人はそれにも応じようとしていたが、乙女たちがどこにいるかと尋ねたところ、彼女たちの姿はなかった。彼女たちは悔い改めて聖人のもとを訪れていなかったからである。そのような悔い改めのなさを理由に、聖人は彼女たちを罰のままにしておいた。それは、彼女たちが神の奇跡的な力を忘れないようにするためであり、また他の人々もこのことから貞節と品行の良さを学ぶためであった。

これこそが、この新しいモーセの奇跡であり、彼は杖の一撃ではなく、聖なる十字架のしるしによってこれを成し遂げたのである。そして、奇跡以上に驚くべきは、彼の柔和さ、すなわち、偉大な預言者エリシャ（列王記下2:24）のように、恥知らずな乙女たちを食い散らすために雌熊を送り込まず、むしろ彼女たちに良識と神への畏敬を教え、わずかな罰——すなわち、外見の美しさを損なう

[985] ニジビア、あるいはニジビダ——メソポタミアのミグドニア州にある、大きく人口の多い都市。

[986] ナジビアはペルシア国境からほど近い場所にあったため、ペルシアへの旅はそれほど困難を伴わなかった。

こと――にとどめたことである。　私たちがこう述べるのは、決して預言者の怒りを貶めるためではなく、ただ、聖ヤコブが預言者と同じ奇跡を行う力を持っていたが、それをキリストの慈愛の精神と新約聖書に則って発揮していたことを示すためである。

ある時、聖ヤコブは、あるペルシャの裁判官が無実の人を不当に有罪判決を下しているのを目撃した。彼は悲しみを抱き、裁判官の不法を糾弾して、近くにあった一つの大きな岩を砕き、塵と化すよう命じた。　これを見た者たちは皆、恐怖に襲われた。不正な裁判官自身も恐れをなした。彼は自分の罪を悔い改め、判決を別の――公正な――ものへと変えた。ここで、この奇跡行者は、主を模倣してこのように行動したのである。　キリストは、ご自身が自発的に苦難を受け入れようとしておられること、また、もし望めば容易に自分の殺害者たちを滅ぼすこともできたにもかかわらず、そうはせず、ただ一言でイチジクの木を枯らしたことによってご自身の力を示された（マタイ21:19）。また、聖ヤコブも主の慈悲に倣い、不義な裁判官を処刑にはかけず、石を砕くことで、その裁判官に正義を教えたのである。　このような聖人の奇跡的な行いは、彼に名声と人々の尊敬をもたらし、彼は本意に反して、故郷ニジビアの住民たちによって司教に選出された。彼自身はそのような高い地位を求めておらず、むしろそれを拒んでいたが、信者たちの執拗な懇願にようやく応じたのである。

人里離れた荒野での隠遁生活をやめ、同胞たちと共に暮らすようになった聖ヤコブは、食事や服装を変えることはなかった。新しい場所でも、彼は以前と同じ生活を送り、以前以上に勤勉に働いた。　断食、地面への拝礼、ぼろ服の着用に加え、今や人々の世話――未亡人や孤児を養い、迫害される者を守り、すべての人を助け、すべての人に徳を教えること――が加わった。しかし、そのような聖職にふさわしい労苦や人々への配慮を、なぜ細かく列挙する必要があるだろうか。　これについては、この重荷を自ら引き受ける者たち、とりわけ、彼らに言葉の群れの養いを託してくださる天の主を愛し、畏れる者たちが知っている。聖ヤコブが司教の位においてより多く労を惜しまず、より多くの善行を積めば積むほど、彼は聖霊の賜物をより多く蓄えていった。

ある日、聖人がある村へ向かっていたとき、道中で乞食たちが近づいてきて、亡くなった人の埋葬費用として施しを請うた。彼らは道端に横たわっている死体を指さしたが、その死体は実際には生きており、ただ死んだふりをしていただけだった。　これらの乞食たちは、遠くから歩いてくる司教を見かけると、そのうちのひとりに死んだふりをさせ、その欺きによって司教からより多くの施しを引き出そうとしたのである。聖人は彼らが求めた施しを与え、亡くなった者のために、神がその罪を赦し、その魂を義人たちの傍らで安らかに休ませてくださるよう祈り、そのまま自分の道へと進んだ。　聖人が去った後、偽りの死者の仲間たちは彼に起き上がるよう言いかけましたが、彼は微動だにせず横たわっていました。というのも、彼は実際にはすでに死んでおり、息も絶えていたからです。乞食たちは、自分たちの嘘が現実となってしまったのを見て、聖人の後を追いかけ、その足元にひれ伏して、自分の罪を悔い改めました。　彼らは、貧しさを言い訳にして、自分たちを許し、死者を蘇らせてくれるよう懇願した。奇跡を行う聖人は、慈悲深い主の模範に従い、彼らを許し、その祈りによって、死者は生き返った。　これは、私たちが見るように、聖霊に嘘をつき、売却した財産の代金の一部を隠したアナニアとサッフィラを突然の死で打ち倒した使徒ペトロの奇跡に似ている（　、使徒行伝5:1）。また、聖ヤコブは、息を止めて死んだふりをしていた男の命を奪った。　しかし、聖ペトロは、聖霊に導かれ、盗みを承知していたため、金を隠し持っていた者たちを死刑に処した。一方、ヤコブは、その貧しい者が偽って死んだふりをしていたことを知らず、自らの祈りによってその者の命を奪ったのである。　ペトロは、自身の言葉によって亡くなったアナニアとサッフィラを死からよみがえらせなかった。なぜなら、救いの説教の始まりには、不義な者たちを威嚇することが必要だったからである――そうすることで、他の人々も恐れを抱くようにするためである。一方、ヤコブは使徒の恵みを持っており、死という罰を一時的なものにとどめ、その後、命を取り戻すことで彼らを慰めたのである。

その直後、神の御子と聖霊が父と同一の本質であることを最も古くから冒涜してきたアリウスは、創造主に対して巧みな言葉を用い、エジプト全土を混乱に陥れた。　その時、キリスト教諸君主の中で最も偉大なるコンスタンティヌスは、いわば第二のゾロバベル（ゾロバベルはダビデの子孫であり、ユダヤ民族の指導者であった；　彼の指導の下、ユダヤ人はバビロンの捕囚から故郷へと帰還した）が、異教の束縛から全世界を解放し、地に倒された神の神殿を再建して高めたコンスタンティヌスは、ニカイアで聖なる教父たちによる第一回全地公会議を招集した[987]。　この公会議の聖なる教父たちの中には、正教の擁護とアリウスを教会から破門することに尽力した、神の聖人ヤコブ、ニジビウスの司教もいました。

ニジビアは、前述の通り、当時ローマ皇帝の支配下にあった。しかし、コンスタンティヌス大帝の死後[988]、ペルシャ王サポル[989]が全軍を率いて到来し、ニジビアの街を包囲して、長期間にわたり攻め立てた。　しかし、聖ヤコブ司教の祈りにより、サポールの努力は徒労に終わり、彼は都市を陥落させることができなかった。そこでサポールは、都市を流れる川の上流で石や土を用いて川をせき止め、その流れを止めた。そして水が十分に溜まると、その水を一気に都市へと放った。　激しい水圧により、城壁は崩れ落ち、街の一部は水没してしまった。市民たちは恐怖に陥ったが、ペルシャ軍は、これで街はすでに自分たちの手に落ちたと思い、歓喜した。

しかし、その日は洪水が障害となったため、彼らは城に攻撃を仕掛けず、翌日の朝に総攻撃を行うことに決めた。　夜が訪れると、司教に鼓舞され、奮い立たされた市民全員が城壁の修復に取りかかり、司教の祈りの助けもあって、城壁は修復され、馬に乗った者も徒歩の者も、はしごなしでは城内へ侵入できなくなるほどになった。　とはいえ、もし住民たちが天からの助けを求めなかったならば、この町は容易に陥落していたであろう。　人々は皆、聖ヤコブ司教に、城壁に登って敵軍を呪ってほしいと懇願した。聖ヤコブは城壁に登り、数え切れないほどのペルシャ軍団を目の当たりにすると、神に祈りを捧げた――彼らに蚊やハエを送り[990]、神の力を悟らせて、都市への包囲を解かせるようにと。　神はそのしもべの祈りを聞き入れ、たちまちペルシャの陣営に蚊とハエの群れを送り込んだ。その刺咬は極めて激しく、馬や象は耐えきれず、手綱や口輪を引きちぎり、抑えきれない勢いであちこちを駆け回った。　これらの蚊やハエは、動物たちだけでなくペルシャ人自身にとっても耐え難いものであり、武装した兵士の大群よりもさらに厄介だった。不敬虔な王自身も、自らの労苦が無駄に終わり、軍勢が蚊やハエによって敗北を喫しているのを見て、困惑し、大きな動揺に陥った。　さらに、彼は城壁の上にこの神聖な人物、ヤコブ司教の姿を見かけ、彼を王だと勘違いした。というのも、彼は王の紫の衣を身にまとい、頭にはまばゆいばかりの輝きを放つ王冠を戴いているように見えたからである。　彼は、城内に王がいないと報告した自分のスパイたちに激怒し、彼らを死刑に処した。　彼は都市への包囲を解き、ハエや蚊に追われながら、自分の領地へと逃げ帰った。この奇跡は、主の御心に適う者が祈り求めたことによって、主が成し遂げられたものである。その祈りは、かつて預言者エリヤが五旬節の者たちに対して求めたように、天から火が敵の上に降り注ぎ、彼らを焼き尽くすこと（　（列王記下1:10–12）や、大地が口を開いて彼らを飲み込むこと（民数記16:31–33）を願ったわけでもなく、ただ　、彼らに蚊やハエを送り込み、神の力を知らしめることだけを願ったのである。　そして実際、その時には大いなる奇跡が現れた。巨大なペルシャ軍は、取るに足ら

---

[987] ニカイア――小アジア北西部のビフィニア州にある都市。コンスタンティヌス帝によって招集された第1回全地公会議は325年に開催され、教会の典礼に「使徒信条」が導入された。この信条は、その後、381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議において補足・完成された。

[988] 使徒に等しい王コンスタンティヌス大帝は337年に崩御した。

[989] 「大帝」の異名で知られるペルシャ王サポル2世は、西暦310年から381年まで在位した。ローマ人との戦いで勝利を収めたことで知られているが、キリスト教に対する残酷な迫害者でもあった。

[990] 「犬のハエ」とは、犬にとって特に有害とされるとされる、刺すようなハエや昆虫の一種、あるいは一般的に特に有害な昆虫を指す。犬のハエは、モーセの時代にエジプト人に対する第四の災いとして現れた。

ない昆虫たちには太刀打ちできず、彼らに打ち負かされて恥をさらして逃げ去ったのである。聖ヤコブが神から授かった恵みはこれほどまでに大きく、その信仰の大胆さもまたこれほどまでに偉大であったのだ！

高齢に達した聖人は、主のもとで安らかに息を引き取った[991]。彼の死からしばらくして、ニジビアの町はペルシャの支配下に入った。信者たちは、その地を去る際、彼らの守護者であり指導者である聖ヤコブの聖遺物を持ち去った。聖ヤコブが生きていた間、この都市が野蛮人の支配下に入ることは決してなかったであろう。なぜなら、偉大なる神の御心にかなう聖人は、私たちの神キリストの無敵の力によって、この都市を彼らから守っていたからである。父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光あれ。アーメン。

ウスティエにあるロストフのボリソグレブ修道院の隠遁者、我らの尊き父イリナルクの生涯[992]

記念日：1月13日

尊者イリナルクは、ロストフ州のコンダコヴェ村（[993]）で生まれた。両親は農民で、父の名はアキンディン、母の名はイリーナであった。聖なる洗礼において、その赤ん坊にはイリヤという名が与えられた。両親は、子供が急速に成長していくのを見て喜んだ。生後二十週で、彼はすでに立ち上がり、歩き始めたのである。両親は息子を、敬虔さとキリスト教の信仰の清らかさの中で育てた。その子は遊びには興じなかったが、謙遜と柔和さを愛し、物静かで、誰に対しても優しく接していた。

まだわずか6歳の時、彼はある日、母親にこう言いました。

「大きくなったら、髪を剃って修道士になります。鉄の帯を身に着け、神のために働き、すべての人々の教師になります。」

母親は幼い息子のそのような言葉に驚いたが、同時に喜びも感じた。この6歳の子供の預言的な言葉は、後にまさにその通りになった。

ちょうどその頃、イリヤの父アキンディンは、村の司祭であるヴァシリーを昼食に招いた。食事の席で、司祭はカリアジンの奇跡行者、聖マカリアの生涯について語った[994]。司祭の話に耳を傾けていたイリヤは、突然こう言った。

「僕も、あんな修道士になるんだ。」

---

991 それは西暦350年頃、7月11日のことだった。聖ヤコブ・ニシビウスは、数多くの奇跡を成し遂げたことから「奇跡行者」と呼ばれ、またその高い霊的知恵から「賢者」とも呼ばれた。現在、アルメニアの啓蒙者である聖グリゴリウスの依頼に応じて聖ヤコブが書いた、アルメニア語による18の言葉が知られている。教義的・道徳的な重要性に加え、聖ヤコブの教訓は、聖書の正しい解釈の模範としても重要である。当然のことながら、この古代の教師は、いかなる技巧や努力も要することなく、聖書から崇高な教義と教訓を導き出している。

992 ここでいうのは、当然ながら、ヤロスラヴリ教区、ロストフ郡にあるボリソグレブ修道院を指し、ウスティエ川沿いに位置し、ロストフからウグリチ方面への道沿いに18ヴェルスタの地点にある。――イリナルクの伝記は、彼と共に30年間を過ごした弟子アレクサンドルによって記された。原本の『行伝』は写本によってのみ知られているが、出版はされていない。かつてボリソグレブ修道院のアルヒマンドリトを務めたアンフィロキオス大主教は、1863年にモスクワで、写本のテキストに忠実な『行伝』の要約版を、図版を添えて出版した。1872年、ヤロスラヴリ教区報に、同じく写本に基づいて編纂されたイリナルフの伝記（N. コルスンスキー著）が掲載され、1873年にはヤロスラヴリで単行本としても出版された。この要約の基礎となっているのは、いくつかの写本を通じて知られる原本の伝記である。

993 コンダコヴォ村は現在、ウグリチ郡にあり、ボリソグレブ修道院の上流にあるウスチエ川沿いに位置し、ウグリチから43ヴェルスタ、ロストフからも同距離にある。

994 カリアジン修道院はコンダコフから40ヴェルスタ離れている。カリアジンのマカリーの記念日は3月17日と5月26日に祝われる。

司祭ヴァシリーは、子供でありながら大人のような言葉を口にするのを見て驚き、厳しくこう言った。

「子よ、よくもそんなことを口にできたな？」

イリヤはこう答えた。

「あなたを恐れない者こそ、そう言うのです。」

イリヤは両親のもとで育った。しかし、その一帯全体で飢饉が起きた。すでに十八歳になっていたイリヤは、父と母と別れ、ニジニ・ノヴゴロドへ出稼ぎに向かった。

息子は2年間も家に帰らず、音沙汰もなかった。 両親は彼を探し出すことを決め、二人の長男――アンドレイとダヴィド――を遣わした。兄弟たちはニジニ・ノヴゴロド近郊のある村で、イリヤが働いていた農家の元で彼を見つけた。兄との再会を喜び、彼らはその農家の元でさらに丸一年を過ごした。

農家の家に滞在中、イリヤはある日、他の人たちと一緒に部屋に座っていると、抑えきれないほど泣き出した。それを見た者たちは皆驚き、慰めることもできず、悲しげに、なぜそんなに泣きじゃくっているのかと尋ねた。彼はこう答えた。

「父の臨終の光景が見えるのです。明るい若者たちが、私の父を葬り場へと運んでいるのです。」

彼を取り囲んでいた者たちは皆、300ヴェルストも離れた場所で、どうして父の死の光景が見えたのかと驚いた。その年のうちに彼が実家に戻り、母に父の安否を尋ねると、父は同年、聖母被昇天の断食期間中に亡くなったと聞いた。そこで彼はその幻視を思い出し、母にこう言った。

「あの時、私は父の姿を見ました。明るい若者が父を葬式の場へと運んでいたのです。」

そして母は、息子を見て、その異様な言葉を聞いて、慰められた。

父の死後、イリヤは母と長兄のアンドレイと共にロストフの街へ移り住み、家を購入して商売を始め、まもなく財産を増やした。

末弟のイリヤは、常に心に神への畏敬の念を抱いており、特に教会に通うことに熱心になり、貧しい人々に施しを行うようになった。貞潔を厳格に守り、世俗の生活を完全に捨て去り、天使のような姿となることを望み、絶えず神の教会に通い続けた。

彼は、アガフォニクという名の商人階級の人物と知り合い、その人は読書を好んでいた。イリヤは彼と親しくなり、魂の救いを求めて、絶えず聖書について語り合うようになった。

このように準備を整えたイリヤは、聖十字架を手に取り、それをもって祝福を受け、旅立つ準備をした。母親から「何をするつもりなのか、どこへ行くのか」と尋ねられると、イリヤはこう答えた。

「ウスティエにある聖殉教者ボリスとグレブの修道院へ、祈りを捧げに行くのだ。」

母は泣き出したが、息子がまだ六歳の頃、すでに「自分は修道士になる」と言っていたことを思い出した。息子は母に頭を下げ、頬にキスをし、旅立った。

ボリスとグレブの修道院に近づき、その姿を見たとたん、イリヤは心から喜び、修道院長のもとへ向かい、頭を下げて祝福を求めた。修道院長は祝福を与え、こう尋ねた。

「子よ、なぜここへ来たのか？」

イリヤはこう答えた。

「父よ、私は天使の修道服を望みます。神の御名において、この無知な農民である私を剃髪し、キリストの選ばれた群れと、あなたの聖なる仲間たちの中に加えてください！」

修道院長は心の眼で、この若者が神から遣わされた者であることを見抜き、喜びをもって彼を受け入れ、天使の修道服を着せ、修道名として「イリナルク」と名付けた。

修道院の慣習に従い、修道院長はイリナルクを長老の指導下に委ねた。そこで若い修道士は、従順と服従、断食と祈りの生活を送ることとなった。

イリナルクが最初の従順の試練を無事に終えた後、修道院長は試練と謙遜のため、彼をパン焼き場に送り出した。そこで彼は、従順と謙遜をもって昼夜を問わず兄弟たちのために働き、肉体的欲求を一切顧みず、神の教会への参拝を決して怠ることなく、他の兄弟たちよりも先に教会にやって来た。　教会に立っている間は誰とも話さず、聖書の朗読の間は座ることなく、常に堅い岩のように立ち続け、礼拝が終わるまで決して教会を出ることはなかった。　イリヤの修道入りを知った彼の友人アガフォニクは、イリナルクを訪ねるために修道院へやって来て、彼の元でかなりの日数を過ごした。イリナルクは友人を修道院から二ヴェルスタほど先まで見送り、彼に口づけをしてから、引き返した。　道中、彼は心の中でどうすれば救われるかを考え、キリロフ・ベロゼルスキー修道院かソロヴェツキー修道院へ行くことを誓った。すると、天から声が聞こえてきた。

「キリロフにもソロヴェツキーにも行くな。ここなら救われる！」

彼はその声に疑念を抱いたが、再び同じ声が聞こえてきた。

「ここで救われるのだ！」

イリナルクは恐れをなして泣き出し、それが何を意味するのか考え込んだ。すると三度目にも、同じ声が聞こえてきた。

「ここで救われるのだ！」

周囲を見回したが、イリナークは誰の姿も見当たらず、この声は天からの啓示であると確信を深めた。

修道院に戻ると、彼は再び以前の務めに励み、夜は祈りと徹夜祷に身を捧げ、眠るのもほんのわずかな時間だけであり、それもベッドではなく、そのまま地面に横たわって眠った。

この務めを終えた後、修道院長はイリナルクを聖堂助手の務めに任命し、彼はそれを喜びをもって務めるようになった。

ある時、イリナルクは裸足の旅人を見かけ、彼を憐れんで、主に向かって次のような祈りを捧げた。

「主イエス・キリストよ、神の子よ。天と地、そして私たちの先祖である最初の人間アダムを御自身の姿に似せて創造し、聖なる楽園で温もりを与えてくださった方よ。どうか、御自身のしもべである私に、御心のままにさせてください。　主よ、どうか私の足に温もりを与えてください。そうすれば、私はこの旅人を憐れみ、自分の長靴を彼の足に履かせてあげることができますように！

そして、イリナルクは自分の長靴を脱ぎ、それを乞食に与えた。その時から、神は彼に忍耐と温もりを与えられた。彼は、あたかも暖かい修道室にいるかのように、凍てつく寒さの中を裸足で歩くようになった。また、その時から、彼は常にぼろぼろの服を着るようになった。

悪魔の唆しによるイリナルクのこのような振る舞いは、修道院長に快く思われず、院長は様々な方法でこの修行者を屈服させようとし始めた。例えば、彼はイリナルクを凍えるような寒さの中、自分の修道室の窓際に二時間ほど立たせて祈らせ、その後、鐘楼で長時間鐘を鳴らすことを強いた。イリナルフはこれらすべてを忍耐強く受け止め、主の御言葉*「私たちは多くの苦難を経て、神の御国に入らなければならない」*（使徒行伝14:22）を心に留めながら、柔和に耐え抜いた。　その後、イグメンはイリナルクを3日間監禁し、食事も水も与えなかった。これはすべて、彼に新しい服を着せ、靴を履かせるためであった。しかし、これでも効果はなかった。そこでイグメンは、彼を再び以前の奉仕に送り出した。　イリナルクは、足が石に凍りついてしまったにもかかわらず寒さを感じなかったイサク・ペチェルスキーの忍耐に倣い、凍てつく寒さの中を裸足で歩き続けた。

イリナルクは、ロストフで金貸しから身代金を要求されているキリストを愛する一人の男がいると聞き、その男を身代金から買い戻そうと決意した。その目的のために、彼は裸足でロストフへ向

かったが、その頃は猛烈な寒波が襲っていた。 修道院から7ヴェルストほど離れたところで、イリナルクは足の指を凍傷にし、寒さに耐えかねて修道院に戻った。 彼は3年間、足に傷ができ血が流れるほどの病に苦しんだが、病中も修道規則を怠ることなく、相変わらず神のために労苦を続けた。主がイリナルクの病を癒やされた後も、彼は相変わらず冬も夏も靴を履かずに歩き、修道院長は相変わらずこのことを理由に彼を謙遜させた。 イグメンは、イリナルフを修道院の外での労働に送り出すことに決めた。この神の宮からの追放、あるいは追放は、修道士を深く悲しませた。彼はそのような迫害に耐えられず、ボリソグレブ修道院を去ることを決意した。 当時、修道院を取り囲んでいた森を通り抜ける際、彼は狼や熊といった猛獣の襲撃に遭ったが、十字を切って身を守り、心の中で祈りを捧げることで、それらを追い払った。 イリナルクはロストフへ赴き、アヴラミエフのボゴヤヴレンスキー修道院へ向かった。修道院のアルヒマンドリトに喜んで迎え入れられ、彼はここで修道士の一員として留まり、まもなく修道院のケラー（物資管理責任者）に任命された。イリナルクは喜びをもって修道士たちのために働き始めたが、その一方で、いかなる教会奉仕も怠ることはなかった。 ケラーとして在任中、彼は修道院の兄弟たちやその他の修道院の奉仕者たちが、節度も自制もなくあらゆる修道院の必需品を無制限に持ち出し、修道院の財産を枯渇させているのを目の当たりにした。これらすべてを見て、彼は心の中で嘆息し、こう祈った。

「尊者アブラアムよ、私があなたの修道院を破滅させる者ではありませんように！」

ある時、イリナルクは夢の中で、聖アヴラアミが自分の独房に入ってきて、こう言うのを見た。

「なぜ嘆いているのか、選ばれし義なる子よ、聖なる楽園の住人よ――なぜ修道院の支出について嘆いているのか？ 彼らには遠慮なく与えなさい。彼らはここで贅沢に暮らそうとしているが、あなたは飢え、裸同然の身だからだ。 そして、あなたは天の御国で豊かに暮らし、天の糧を味わうだろう。一方、彼らは永遠に飢え続けるのだ。この場所に関しては、私は至高の創造主を懇願し、嘆願した。私の家が、修道院の必要に飢え、ここに住む者たちにとって尽きることのないものとなるよう。」

眠りから覚めると、イリナルクはもはや誰の姿も見えなかった。それ以来、彼は心を落ち着かせ、何の疑いもなく施しを行うようになった。

ある日、教会で聖体礼儀に立ち、ケルビムの賛歌の最中、イリナルクは泣き出し、教会中に響き渡るほど激しく嗚咽した。驚いたアルヒマンドリトが彼のところへ近づき、こう言った。

「誠実な長老よ、なぜそんなに泣き、嗚咽しているのですか？」

「私の母が亡くなりました！」とイリナールクは答えた。

アルヒマンドリットはその言葉に驚き、自らも涙を浮かべた。まだ典礼が終わらないうちに、弟のアンドレイが彼のもとを訪れ、母イリーナが他界したことを告げた。アルヒマンドリットから祝福を受けた後、長老は弟のアンドレイと共に母の家へ向かい、尊厳ある葬儀を執り行った。

母の葬儀を終えてアヴラミエフ修道院に戻ったイリナルクは、別の救いの道について考え始めた。ケラールとしての奉仕は高貴で名誉あるもののように思えたが、彼は自らを低くし、謙遜のうちに修業に励みたいと願っていた。

アヴラミエフ・ボゴヤヴェンスキー修道院を去ったイリナルクは、同じくロストフにある聖ラザロ修道院（[995] ）に移り、そこで人里離れた独房に身を置き、三年間と六ヶ月間を過ごした。その間、涙と祈り、悲しみと窮屈さの中に身を置き、飢えに耐え、数日間何も口にしない日が続いた。ここでは、聖ヨアン・ユロディヴィイが頻繁に彼を訪ね、二人の修行者は霊的な対話の中で慰めを見出していた。

[995] 現在、修道院はとっくに存在せず、その跡地には聖ラザロの教区教会が建っている。

長老イリナルクは欠かさず神の教会に通い、しばしば至聖なる聖母マリア大聖堂へ赴き、涙を流しながら祈りを捧げた。

ある時、礼拝から戻った彼は、自分の独房に座り、涙と嘆息を込めてキリストの殉教者ボリスとグレブに祈りを捧げ、こう叫んだ。

「聖なる殉教者ボリスとグレブ、そして修道院の兄弟たちよ！　あなた方の修道院には多くの場所があるのに、罪深い私には場所がありません。」

座っているうちに彼はうたた寝をしてしまい、浅い眠りの中で次のような光景を見た。聖なる殉教者たちがラザレフ修道院に向かって歩いてくる。彼は彼らに尋ねた。

「聖なる受難殉教者ボリスとグレブよ、まだ先まで行くのですか？」

「長老よ、私たちはあなたを追って来ているのです」と彼らは答えた。「私たちの修道院へおいでください！」

彼は眠りから覚めると、窓のそばで誰かが祈りを捧げているのが聞こえた。小さな窓を開けると、ボリス・グレブ修道院の修道士エフレムが立っており、こう言った。

「師よ、建築家のヴァルラームが私をあなたのもとへ遣わしました。誓約を果たすために、私たちの修道院へお越しください。建築家が尋ねています。馬車が必要ですか、それともご自身で修道院までお越しになりますか？」

長老イリナルクはこう答えた。

「建築家のヴァルラアム様には平安と祝福がありますように。私はそのうち、自分で修道院へ参ります。」

その頃、彼はすでに重い鉄の枷を身に付け、足には足枷をはめられていた。

まもなく彼は身支度を整え、大きな喜びを胸に、誓いを果たすためボリソグレブ修道院へと向かった。道中、重くのしかかる鎖の重さに疲れ果て、彼は一休みしようと腰を下ろし、うとうとと眠り込んでしまった。　夢の中で、彼は蛇が自分に這い寄ってきて噛みつこうとするのを見たが、杖でその喉元を叩くと、蛇は這って去っていった。老修道士は眠りから覚め、立ち上がり、十字を切って、何の害も受けずに歩き続けた。

修道院を目にすると、彼は心から喜び、門に近づき、熱心に祈りを捧げた。　修道院に入ると、ちょうどその時は聖体礼儀が行われており、彼は教会に入り、所定の場所に立ち、祈りを捧げてから、建設責任者に頭を下げた。建設責任者のヴァルラアムは、イリナルクの到着を大いに喜び、愛情を込めて彼にキスをし、自分の隣に座らせた。

悪魔のような嫉妬から、ニキフォールという名の長老の一人が近づき、建設者にこう言った。

「なぜその長老を受け入れたのか。彼はイグメナの言うことを聞かず、ぼろぼろで薄っぺらな修道服を着て裸足で歩き、体に多くの鉄の装具を身につけているではないか。」

しかし、建築師ヴァルラアムは、悪魔の唆しに従って動いていたその長老を杖で追い払い、再び喜びをもってイリナルフを修道院に迎え入れ、彼に専用の独房を与えた。

聖イリナルクは欠かさず教会に通い、畏れと震えをもって立ち、聖なるイコンの前で熱心に祈りを捧げた。とりわけ、彼は私たちの主イエス・キリストの磔刑と苦難を描いたイコンを頻繁に仰ぎ見ていた。ある日、そのイコンの前に立ち、彼は涙ながらに次のような祈りを捧げた：

「義なる太陽、我らの最も輝かしい光、人を愛する主、イエス・キリストよ！　主よ、あなたはこれほど大きな苦難に耐えられました。十字架刑、侮辱、唾を吐きかけられ、頬を打たれ、酢と胆汁を飲まされ、そして私たちの救いのために、ご自身の被造物である、無知で不法なユダヤ人の群れや、これらの人々の嫉妬から、これらすべてを耐え忍ばれたのです！　今、主よ、罪深く愚かなこの田舎者である私が、いかにして救われ、唯一のイエス・キリスト、神の御子、十字架にかけられ、父

と聖霊と不可分の一体として三位一体において賛美される御方に、御心に適う者となれるかを、お示しください！主よ、私の上に御心が行われますように！

そしてその瞬間、主の御姿からイリナルクに啓示が下った。

「自分の小部屋へ行き、隠遁者となり、外に出るな。そうすれば救われるのだ！」

イリナルクは建築家のヴァルラアムのもとへ赴き、隠遁生活、すなわち、主の福音の言葉「*神の御国に入るには、多くの苦難を経なければならない*」（使徒言行録14:22）に従って、小部屋で絶えず祈り続けることについて、彼から祝福を請いました。 「*自分の命を救おうとする者は、それを失い、わたしと福音のために自分の命を失う者は、それを救うのである*」（マルコ8:35）。「「*今、飢えている者は幸いである。彼らは満ち足りるからである*」（ルカ6:21）。建築家ヴァルラアムは、彼が隠遁生活を送り、修道室から絶え間なく祈りを捧げるよう祝福した。

「そして神は、今この時、ロシアの地と、キリストの偉大な殉教者ボリスとグレブ、そして私たちの尊い父たちテオドールとパヴルの家を栄光に輝かせられた！」と、イリナルフの弟子であり、この伝記の著者である修道士アレクサンドルは叫ぶ。「神は、彼らを立派な人々、苦難に耐えた者たち、教師、そして導き手として栄光に輝かせられたのだ！」

それ以来、イリナルフは大胆にも新たな修行に取り掛かった。修道室に閉じこもり、古の時代や初期の修道士たちが、いかにして荒野や島々、洞窟で暮らし、儚い世を愛さず、その虚栄に目を向けることさえ拒んだかを思い起こしながら、絶え間なく祈りを捧げるようになったのである。

その修行を始めたイリナルクは、長さ三サジェニの鉄の鎖を自ら作り、それを使って木製の椅子に自分を縛り付けた。彼の動きはすべて、この鎖の長さによってのみ制限されていた。この鎖に加え、彼は他にも鉄の重りを身に付け、額に汗を流しながらその重みの中で労苦に耐えた。 彼は兄弟たちから多くの侮辱や嘲笑に耐えなければならなかったが、それを柔和に受け止め、彼らのために神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ！ これを彼らの罪としないでください。彼らは、あなたのしもべたちが何をしているのか、知らないのです、主よ！」

その頃、アレクセイという名の男がイリナルクのもとを訪れ、彼の生き方――多くの苦難、断食と祈り、強さと謙遜、そして絶えず身にまとっていた重い鎖――に感銘を受けた。彼はイリナルクに懇願し、自分を受け入れて主の戒めを教えてくれるよう頼んだ。 長老は、その願いが清らかな心から生じているのを見て、喜びと愛をもってその来訪者を受け入れ、司祭と助祭を呼び寄せ、彼に修道服を着せ、アレクサンドルという名を授けた。 このアレクサンドルはイリナルクの最初の弟子となり、彼の指導の下、修道室で常に共に暮らし、昼夜を問わず、深い従順と断食と祈りに熱心に励んだ。

イリナルクの隠遁所を訪ねてきたのは、彼の古くからの友人である、ロストフとモスクワの聖なる愚者、通称「大帽子」こと、至福のヨハネであった。修行者との会話の中で、ヨハネはこう言った。

「長老イリナルフよ、半グリヴェンカの重さ（つまり1/4ポンド）の銅製の十字架を百個作ってくれ。」

「私のような貧しい者には、そんなに作ることはできません」とイリナルフは答えた。「私は極貧の状態にあるのです。」

ヨアンは反論した。

「これは私の言葉ではなく、主なる神の言葉だ。『*天と地は過ぎ去るが、主の言葉は決して過ぎ去らない*』（マタイ24:35）。語られたことはすべて実現する。神があなたを助けてくださる。」

そして、ヨハネは長老に他にも多くのことを語った。

「あなたにそのようなことが起こるとしても、驚かないでください。人間の口では、そのすべてを表現したり書き記したりすることは不可能です。神はあなたに馬を与えてくださいます。そして

、神から与えられたその馬には、あなた以外の誰も乗ることができず、あなたの後にあなたの席に座る者もいないでしょう。」

イリナルクの偉大かつ困難な功績について、ヨハネが語ったこれらの比喩的な預言の言葉は、現実のものとなった。イリナルクと別れる際、ヨハネはさらに次のように預言的に語った。

「主なる神は、東から西に至るまで、御自身の忠実な弟子たちに、人々を導き教え、世を不法な酩酊から遠ざけるよう命じられた。この酩酊のゆえに、主は異民族を我らの地へ送り込むであろう。そして、これらの異民族は、お前の多くの苦難に驚嘆するだろう。彼らの剣はお前に傷を負わせず、彼らはお前を、より忠実な者たちよりも称賛するであろう。」– 私はモスクワのツァーリのもとへ行き、土地を請うつもりだ。そこ、モスクワには、目に見える悪魔も目に見えない悪魔もこれほど多くいるため、ホップの支柱を立てることさえほとんど不可能だろう。しかし、聖三位一体はその御力によって、それらすべてを追い払ってくださるだろう。

このように、至福のヨハネは、自身の迫り来る死と、モスクワへのリトアニア軍の侵攻について語った。

その後、長老イリナルクは、至福のヨハネの言葉に従い、さらに熱心に働き、祈りを捧げるようになり、常に銅の十字架のことを考えていた。ある日、彼は夢の中で友人が訪ねてきて銅の十字架をくれるのを見、また別の時には、別の友人が鉄の杖をくれる夢を見た。そしてどうなったか？　数日後、実際に友人の一人――ポサドの住民イワン――が訪れ、至福のヨハネの預言通り、尊い十字架を持って来た。イリナルクはそれを使って百個の十字架を鋳造し、神と至福のヨハネに感謝を捧げた。　――もう一人の友人、ヴァシリーという名の男が訪ねてきて、彼に鉄の杖を授けた。イリナルフはそれを受け取り、自分が背負っていた他の「労苦」、すなわち重荷に加えたのである。

ボリソグレブ修道院にはレオンティイという長老がいたが、彼はイリナルヒ長老の徳と労苦に嫉妬し、彼と同様に自らを鉄で縛り、三十三の銅の十字架を身にまとった。　彼はこれらの十字架をイリナルクの弟子アレクサンドルに渡し、自身は長老のもとへ赴き、荒野へ行くための祝福を請うた。イリナルク長老は、強盗に殺されないよう、荒野へは行かないよう彼を説得した。しかし、レオンティウスは祝福を請うことを諦めなかった。

彼を説得することができなかったイリナルクは、祝福を与えたが、別れの際、涙ながらにこう言った。

「愛しい子よ、レオティウス！　お前はもう、この地へ正直な十字架を取りに戻ってはこないだろう。」

「もしそうなら」とレオティウスは答えた。「私の十字架は、あなたに譲りましょう！」

イリナルクと別れを告げた後、レオティウスはペレヤスラフ郡のクルブイにある聖母マリア修道院へと向かい、そこで山賊に殺害された。

イリナルフはレオンティの十字架を、自身の「労苦」の十字架に加え、こうして彼の持つ十字架の総数は百四十二個となった。　この長老は、長さ3サジェニの鎖につながれて6年間労苦した。ウグリチ市のキリストを愛するある人物が、同じく長さ3サジェニの鎖を長老に送ってきたため、イリナルフはこの2本の鎖につながれて12年間労苦した。　ボリソグレブ修道院のある長老、テオドリトという名の者は、自ら3サジェニの鉄の鎖を作り、その中で20年と5週間労苦したが、イグメン・ヘルモゲンは彼に修道院の礼拝に出席し、兄弟たちのために働くよう命じた。　テオドリトは自分の鎖をイリナルフに譲り、こうしてイリナルフの鎖は9サジェーンとなり、彼はその鎖を身に着けたまま労働を続けた。彼は鎖に縛られて計25年間を過ごした。

イリナルクの過酷な生活と厳格な教えの言葉は、修道誓願を守ろうとせず、多くの点でそれを破っていた修道士たちに対する戒めとなった。ボリソグレブ修道院のそのような修道士たちは、敵対

的な唆しに乗せられ、イグメン・ヘルモゲンの元へ赴き、イリナルクの生活様式を非難し、彼について不満を訴えた。

「長老イリナルクは」と彼らは言った。「閉鎖された部屋に籠もって断食し、多くの重い鉄の枷を身にまとい、酒類を飲まず、食事もほとんどとらない。しかも、兄弟たちにも同じことをするよう教えている。すなわち、『労苦』に身を置き、断食し、酒類を口にさえしないよう命じ、それが最大の悪であると説いている。　修道士は天使のようにあり、何事にも嘆かず、自らの肉体を労してはならないと言う。*「多くの苦難を経て、私たちは神の御国に入らなければならない」*（使徒行伝14:22）。また、兄弟たちに奉仕、すなわち修道院の務めを行うことを許さず、代わりに彼らに大きな『労苦』を課している。

敵の唆しと自身の無慈悲さにより、修道院長ヘルモゲンはこれらの誹謗に耳を傾け、神を恐れず、長老の功績や労苦を尊重することもなく、長老イリナルクを修道院から追放した。　長老イリナルクは、主の御言葉「*もしあなたがたが家から追い出されたら、別の家へ行きなさい。わたしは世の終わりまで、あなたがたと共にいる*」（マタイ10:23、28:20）を心に留め、謙虚にこれに従った。

ボリソグレブ修道院から追放されたイリナルフは、再びロストフへ向かい、聖ラザロ修道院に身を寄せた。そこで彼は一年と二週間を過ごし、絶えず断食と祈りに励み、死の刻を思索にふけった。

一方、イグメン・ゲルモゲンは、イリナルクに対して不公正な行いをしたことに気づき、修道院の兄弟たちの前で悔い改め、修道士の一人を遣わしてイリナルクを呼び戻そうとした。遣わされた修道士はこう言った。

「父よ、私たちに対する罪を赦してください。お約束通り、聖殉教者ボリスとグレブが祀られている私たちの修道院へお越しください。」

長老イリナルクは、次のように祈りながら修道院に戻った。

「主イエス・キリスト、神の御子よ、あなたの永遠の恵みを私から奪わないでください。罪深いこの長老に、誓いを果たし通せるようお与えください。」

修道院から追放された責任をすべて自分自身に負わせながら、彼はこう語った。

「主よ、私は兄弟たちに反してこの牢獄のような場所で暮らしています。彼らは義人であり、義なる働きをあなたに捧げていますが、私は不潔な者であり、徳を欠いています。」

彼は再び自分の独房に入り、再び自らに鉄の「労苦」を課し、王とすべての正教徒のために祈り、自分を憎む者たちをも、自分の魂のように愛しながら、修行に励んだ。

主はイリナルフに洞察力、すなわち人間の魂の奥義を悟る力を授けられた。多くの都市から人々が彼のもとに訪れ、祝福を求め、彼から祝福を受けた。多くの神を愛する人々が彼に施しを捧げた。彼はそれを受け取り、喜びをもって貧者や旅人に分け与え、彼らに食料や衣服を供給した。

訪れる者すべてに戒めを教え、彼らを罪から遠ざけ、隠れた過ちを指摘した。彼の祝福を受けた人々は、主の戒めの道へと立ち返った。

ボリソグレブ修道院には、ティホンという名の長老がいた。　いかにして神に喜ばれるかを考えた彼は、自ら「苦行」を課し、鉄の鎖を打ち、その「苦行」の中で七年間座り続けた。この頃、ルーシではすでにポーランドやリトアニアの貴族たちが荒廃と破滅をもたらしており、その侵攻は、至福の聖人イオアンによってイリナルフに予言されていた。　長老ティホンは貴族たちによる襲撃を恐れ、修道院を去った。そして、自分の鉄の鎖をイリナルフに譲り渡した。その鎖はすでに二十サジェンの長さになっていた。　この長い鎖につながれたまま、イリナルフは相変わらず手を休めることなく働き続けた。時には羊毛の巻物を編み、時には修道帽を編み、時には物乞いのための衣を仕立てた。彼は絶えず物乞いに施しをし、困窮する者を助け、強者による迫害から弱者を守り、すべての人々のために神に祈りを捧げた。　長い間、人影を全く見ないこともあれば、過酷な労苦のせいで病に倒

れることもあったが、彼は常にそれを喜びとし、神に感謝した。彼は夜だけ眠り、それも一、二、三時間程度であり、祈りを捧げながら自らの鉄の杖で体を打っていた。

リトアニアの侵攻がまだ起こる前のこと、イリナルフは浅い眠りの中で幻視を見た。モスクワの街がリトアニアによって荒廃し、ロシア王国全体が捕らえられ、各地で焼き払われるというものであった。 目を覚ますと、彼はこれから起こる捕囚と、神の聖なる教会が荒廃することについて、嘆き悲しんで泣き続けた。泣き止んで少し落ち着きを取り戻したとき、突然、上から光が彼を包み込み、その光の中から声が聞こえてきた。

「モスクワへ行き、すべてがそうなることを告げよ。」

彼は十字を切って祈りを捧げた。すると、再び同じ声が聞こえてきた。

「その通りになる！」

老僧は再び十字を切って、こう祈り始めた。

「主イエス・キリスト、神の御子よ！ 罪人である私を誘惑から憐れんでください。私は父と子と聖霊のしもべであり、この世の何ものも見たくはありません。」

しかし、その同じ声が三度聞こえてきた：

「この声に背かず、その通りにせよ。この不従順な一族には、すべてがそうなるだろう。」

長老は幻視と天からの言葉に恐れをなして、修道院長を呼び寄せ、すべてを打ち明けた。修道院長は彼にモスクワへ向かい、ツァーリ・ヴァシーリー・イオアンノヴィチに[996] 、モスクワ王国とロシア全土がリトアニアによる占領に直面することになると告げるよう命じた。

長老イリナルクはモスクワへと向かった。ペレヤスラヴリへの道中、彼はニキツキー修道院の馬小屋がある分かれ道で立ち寄り、友であるニキツキーの助祭オヌフリイを呼び寄せると、自身はペレヤスラヴリの奇跡行者である聖ニキタに祈りを捧げ、その聖遺物に接吻するために向かった。 当時、助祭オヌフリーは高熱に苦しんでおり、悪寒に襲われると、暖を取るためにストーブの中に入り込んでいた。 この病気は悪魔の仕業であるという見方があった。 助祭オヌフリーは、長老イリナルクの祝福を受け、ペレヤスラヴにあるボリソグレブスキー修道院の裏手にある大きな石に対する迷信的な崇拝を廃した。この石には、毎年使徒ペトロとパウロの祝日に、男女や子供たちを含む大勢の人々が集まり、石に敬意を捧げていた。 助祭は、今後人々がその石の周りに集まらないよう、石を穴に投げ込むよう命じた。このオヌフリーの偉業は多くの人々の意に反するものであった。敬虔な助祭は、多くの人々、さらには親族や聖職者たちからも、非難や罵倒、嘲笑——さらには誹謗中傷や、法的な訴追による損害さえも——に耐えなければならなかった。 さらに、病にも見舞われた——しかし、助祭オヌフリーはこれらすべてを揺るぎない強さで耐え忍び、神の慈悲を信じ、死の刻を心に留め、不平を漏らすことはなかった。また、神の敵である様々な呪術師たちに癒やしを求めたりもしなかった。 オヌフレイがイリナルクの元へ入るとすぐに、長老は彼の重い病に気づき、彼に口づけをして、パンの四分の一を与え、祝福してこう言った。

「この糧によって、健やかであれ！」

すると、助祭はすぐに安堵感を覚え、健康を取り戻した。イリナルフは弟子である長老アレクサンドルと共にモスクワに到着した。彼らが到着したのは夜、夜明けの1時間前だった。 朝になると、彼らは聖母マリアの被昇天大聖堂へ向かい、聖母マリアと、奇跡を行なったミトロポリト・ペトロおよびイオネに祈りを捧げた。シメオンという名のボヤールの息子が、ツァーリのもとへ行き、長老の到着を報告した。ツァーリは喜び、イリナルフに聖母受胎告知大聖堂へ来るよう命じた。 長老は教会に到着すると、至聖なる聖母に祈りを捧げ、聖なる十字架でツァーリに祝福を与え、彼に口づけ

---

[996] 言うまでもなく、ここには1606年から1610年まで在位したヴァシーリー・イオアンノヴィチ・シュイスキー大公がいた。

をした。ツァーリもまた、親しみを込めて長老に口づけをし、彼が背負っていた偉大な「苦難」に驚嘆した。長老はツァーリ・ヴァシーリー・イオアンノヴィチにこう語った。

「主なる神は、この罪深い長老である私に啓示を与えてくださいました。私は、ポーランド人に占領されたモスクワの街と、ロシア全土を見ました。そこで、長年にわたる牢獄での生活から抜け出し、このことを告げるために自らあなたの元へ参りました。どうか、キリストの信仰を勇気と勇敢さをもって守り抜いてください。」

そう言うと、イリナルクは教会から出て行った。ヴァシーリー・イオアンノヴィチ王は長老の片腕を、その弟子アレクサンドルはもう片方の腕を支えた。

皇帝は長老に、皇后にも祝福を与えるよう頼んだ。長老はそれに従い、皇帝と共に皇后の居室へ行き、マリア・ペトロヴナ皇后に祝福を与えると、居室から出てきた。皇后は長老の後を追ってタオルを二枚送ったが、彼は受け取ろうとしなかった。ヴァシリー皇帝は彼を説得した。

「神の御名にかけて、受け取ってくれ！」

しかし、イリナルクは皇帝にこう言った。

「私は贈り物のために来たのではない。あなたに真実を告げるために来たのだ！」

皇帝はイリナルクを皇后の居室から送り出し、宮殿のボヤリンに長老をもてなすよう命じた。その後、皇帝は長老に自分の馬車と馬丁を与え、ボリソグレブ修道院まで送り届けるよう命じた。ボヤリンのもてなしを受けた後、イリナルクは帰路についた。モスクワに滞在したのはわずか12時間だった。

ボリソグレブ修道院に戻ると、イリナルフは自分の独房に入り、再び断食と祈りという労苦と修行に専念した。そして、皇帝の馬丁と馬車をモスクワへ帰し、主が御怒りを鎮め、かつてニネベに対してそうされたように、モスクワに憐れみをお与えくださるよう祈った。

尊者イリナルフのモスクワへの旅と災いの予言から間もなくして、リトアニア人――邪悪で凶暴な者たち、そして容赦のないののしり屋たち――がロシアの地に現れた。　当時、我々の国では、ポーランド・リトアニア王国のすべての臣民――ポーランド人（リャフ）、リトアニア人、そしてベラ・ルーシやマロ・ルーシ出身のロシア人――を総称して「リトアニア人」と呼んでいた。このマロ・ルーシ人の中には、多くのコサックがいた。信仰の面では、我々の敵のほとんどすべてがカトリック教徒かユニエイトであり、彼らは正教会の教会やその他の聖地を容赦なく破壊した。　彼らはロシアの土地を侵略し、住民を虐殺し、多くの都市を征服した。例えば、ドミトロフの町を焼き払い、神の教会を冒涜し、聖なる祭壇を倒し、そこから祭服を取り外し、イコンの枠を剥ぎ取り、イコンそのものを投げ捨て、書籍を略奪し、しばしば教会そのものを焼き払った。　多くのロシア人は、処刑を恐れて彼らの支配を認め、貢ぎ物や食糧を差し出した。多くの都市が彼らに服従した。　1609年には、ロストフ・ヴェリキーが陥落し、焼き払われた。聖母マリアの被昇天大聖堂は冒涜され、偉大な奇跡行者レオンティウスとイザヤの聖遺骸、そしてすべての教会用具や財宝が略奪された。男女を問わず、あらゆる年齢層の多くの人々が斬り殺された。　当時、正教徒たちは重税に苦しめられており、その軽減の見通しが立たなかったため、多くの都市が敵から身を守るために城門を閉ざすようになった。これは、　のツァーリ・ヴァシーリー・イオアンノヴィチ・シュイスキーの治世下で、敵が第二の偽ドミトリーを送り込み、彼またはその後見人であるポーランド王への服従を要求した時期であった。

モスクワと皇帝の玉座を掌握することを目的として、敵はモスクワ周辺に集結し、そこから四方八方へ襲撃や略奪を繰り返した。第二の偽帝はトゥシノ村の近くに陣を敷いた。

敵は、イリナルクが修行に励んでいたボリソグレブ修道院も手加減しなかった。ある敵対的な軍司令官ミクリンスキーは、ロストフの町を攻め落とし、ヤロスラヴリ近郊の集落を焼き払い、ウグリチを荒廃させた後、ウスチエにあるボリスとグレブの修道院へとやって来た。　そこで彼は、多くの家臣を従えて長老の独房に入り、その信仰を試そうとした。

「あなたは誰を信じているのか？」

「私は聖三位一体、すなわち父と子と聖霊を信じている」と長老は答えた。

「では、この世の王は誰を崇めているのか？」

すると、長老は声を張り上げてこう言った。

「私はロシアのツァーリ、ヴァシーリー・イオアンノヴィチを主としています。私はロシアに住んでおり、ロシアのツァーリを主としているのです。それ以外、どこにも、誰をも主とはしていません。」

貴族の一人が長老に言った。

「お前は裏切り者だ。我らの王にも、ディミトリにも信仰を置いていないではないか。」

老人はこう答えた：

「あなたの儚い剣など、私は微塵も恐れてはいない。そして、私の信仰も、ロシアの皇帝への忠誠も決して裏切らない。もしそのせいであなたが私を斬りつけるとしても、私は喜んでそれを受け入れる。私の血など、あなたたちにとっては取るに足らないものだ。しかし、私の生ける神には、目に見えず、肉も血も流さずにあなたたちを斬りつけ、あなたたちの魂を永遠の苦しみへと送り込むような剣があるのだ。」

ミクリンスキー卿は驚嘆した。老人の信仰はそれほどまでに強大だったのだ。

しばらくして、敵に対抗するロシア軍が集結し始めた。ミハイル・スコピン＝シュイスキー公はノヴゴロドからロシア軍とスウェーデン軍を率いてやって来て、リトアニア軍に対抗してカリアジンに陣を敷いた。トロイツェ＝セルギエフ修道院の近くからは、サペガ卿が軍を率いて彼に立ち向かった。　しかし、神の御加護と偉大なる奇跡行者たちの取り成し、そして長老の言葉により、モスクワ軍はリトアニア軍を打ち破り、パン・サペガは軍を率いて撤退し、ウスティエにあるボリソグレブ修道院から二泊分の距離の地点に陣を敷いた。彼は修道院を焼き払い、修道士たちを殺害するつもりであった。　修道院には大きな動揺と悲しみが広がり、修道士たちは互いに別れを告げ合っていた。一方、長老イリナルクは弟子であるアレクサンドルとコルニリイを慰め、こう言った。

「異教徒による焼き討ちや斬殺を恐れてはならない。もし我々が焼き殺されたり斬り殺されたりしたとしても、我々は新たな殉教者となり、我らの神であるキリストから天において冠を授かることになるのだ。」

その後、イリナルクは、迫り来る災難からの救いと、敵の心に聖なる修道院への慈悲と憐れみを宿すよう、主なる神に熱烈な祈りを捧げた。その時、キルビツキー中尉が修道院を訪れ、長老の独房に入った。彼は長老から祝福を受け、長老の労苦に感嘆した。　サペガのもとへ戻ると、彼はこう言った。

「ボリスとグレブの修道院で、手足を縛られた三人の長老を見つけました。」

サペガ自身も長老に会いたいと望み、自分の来訪を告げるために一人の貴族を先遣として送った。長老は使者にこう言った。

「もしその方がお訪ねになりたいのであれば、ご自身の意志でこちらへお越しください。」

その返事を聞いたサペガは修道院を訪れ、長老の部屋に入ってこう言った。

「神の祝福を、神父様！　どうしてこれほど大きな苦痛に耐えられるのですか？」

老僧は彼にこう答えた。

「神のために、この独房での苦しみと試練に耐えているのだ。」

多くの貴族たちがサペガにこう言い始めた。

「この長老は、我らの王やディミトリのために神に祈っているのではなく、シュイスキーのツァーリのために神に祈っているのだ。」

老修道士は反論した。

「私はロシアで生まれ、洗礼を受けた。だからロシアのツァーリのために、そして神に祈っているのだ。」

サペガは言った。

「父上の言う通りだ。どの国に住むかによって、そのツァーリに仕えるものだ。」

「お前は強盗に遭ったのか、老僧よ？」と貴族たちは尋ねた。

老僧は答えた。

「凶暴なスシンスキー領主がやって来て、私という罪深い老僧だけでなく、修道院全体を略奪してしまったのだ。」

サペガは言った。

「そのせいで、スシンスキー領主は絞首刑に処されたのだ。」

その後、老僧はサペガ氏にこう助言した。

「ご主人様、どうかご自身の国へお戻りください。ロシアで戦うのはもう十分です！もしロシアを去らず、あるいは再びロシアに来て、神の御言葉に従わなければ、あなたはロシアで殺されることになるでしょう。」

サペガ氏はこの言葉に心を打たれ、こう言った。

「あなたに何を贈ればよいでしょうか。私はここでも、他の国々でも、これほど気丈で恐れを知らない修道士を見たことがありません。」

長老は言った。

「私は聖霊に逆らう者ではありません。聖霊によって養われているのです。聖霊があなたにそう示されるなら、その通りにしてください。」

サペガは言った。

「お許しください、神父様！」――そう言って一礼し、平穏のうちにその場を去った。

その後、サペガは長老に施しとして五ルーブルを送り、自分の軍隊に対し、修道院に何らかの危害を加えることを禁じた。　まもなくサペガは軍を率いてペレヤスラヴリへと向かったが、修道院では、神が破滅から救ってくださったことに大きな喜びが満ちていた。一方、長老は絶えず涙を流しながら、ロシア全土が捕囚から救われるよう神に祈り続けた。

カリアジンでの勝利後、ミハイル・シュイスキー公はリトアニア軍を追撃し始め、ペレヤスラヴリからイリナルフ長老に祝福を求めて使者を送った。イリナルフは彼に祝福とプロスフォラ、そして十字架を送り、次のように伝えるよう命じた。

「勇気を奮い起こせ。そうすれば、神があなたを助けてくださる！」

公はアレクサンドロフスカヤ・スロボダに部隊を派遣し、神の助けにより、ロシアの兵士たちはリトアニア軍を打ち破った。まもなく公自身もそこへ向かい、スロボダに滞在した。　敵は、包囲されていたトロイツキー修道院の周辺やモスクワの周辺から、彼に対抗して集結し始めた。公爵はこれを知り、深く憂慮した。彼は再び使者を尊者イリナルフのもとへ送った。尊者は再び彼に祝福とプロスフォラを送り、次のように伝えるよう命じた。

「勇気を奮い立たせなさい、ミハイル公よ。恐れることはない。神があなたを助けてくださる。」

こうして公はリトアニア軍を打ち破った。その後、公は軍を率いるある軍司令官をトロイツキー修道院へ派遣し、その軍司令官は無事に修道院へと入った。　公は再びイリナルフのもとへ使者を

贈り物と共に遣わした。長老は祝福とプロスフォラを送りつつ、トロイツェへ向かうよう命じ、公はその通りにした。これを聞いたサペガはドミトロフへと向かった。　公爵は無事にトロイツェに到着し、修道院に入って至聖なる三位一体と聖セルギイに祈りを捧げ、神、至聖なる聖母マリア、そしてロシアの奇跡行者たちに栄光を帰した。サペガに対して派遣された軍隊は、ディミトロフの近くで彼を撃破し、サペガはヴォロコラムスクのイオシフォフ修道院へ逃れた。　その頃、トゥーシンからは第二の偽王がカルーガへ逃亡したが、そこで後に殺害された。これらの勝利の後、ミハイル公はトロイツェからモスクワへ赴き、聖母マリアの被昇天大聖堂で祈りを捧げ、ウラジーミル聖母像と聖人たちの聖遺箱に接吻し、喜びをもって自宅へ戻った。

これらの一連の出来事を知っていた長老イリナルクは、弟子アレクサンドルをモスクワのミハイル公のもとへ遣わし、敵を退けるための助けとして彼に授けられた聖なる十字架を返還させた。公は十字架を返し、長老に感謝の書簡と贈り物を送った。アレクサンドルはこれらすべてを師のもとへ届けた。

聖なる十字架を喜びをもって受け取ったイリナルフ長老は、次のような祈りを捧げた。

「栄光あれ、人を愛する主よ、主イエス・キリストよ、　神の子よ、私たちの救いのためにこの尊き、命を与える十字架の上で磔刑と死を耐え忍び、この尊き十字架を通じて私たちの民に憐れみと奇跡を示し、ミハイル公がリトアニアにおいて敵を打ち破り、追い払うよう助けてください。かつてコンスタンティヌス帝の時代に敵を打ち破ったように。

十字架が送られて間もなく、ミハイル公は主のもとへ召された。一方、長老イリナルフによって恥をかかされた人類の敵は、彼に対して新たな陰謀を企てた。

ボリソグレブ修道院には、総主教ヘルモゲンからシメオンという名の新しい修道院長が派遣されたが、彼は苛烈で、慈悲深くなく、節制を欠き、酒に溺れる者であった。　彼は長老イリナルフに教会へ行って祈るよう命じたが、長老は重い鉄の「苦行具」を身にまとっていたため、自分の独房の中さえ自由に歩くことができず、断食と祈りによって昼夜を問わず肉体を枯渇させていた。　冷酷無情なイグメン・シメオンは、その残忍さにおいて異教徒をも凌駕し、修道士たちを連れて長老の独房を訪れ、容赦なく長老が蓄えていたものをすべて奪い取った。 取り上げられなかったのは、4プードの蜂蜜だけだった。そのことを弟子アレクサンドルが長老に伝えた。長老はこの出来事をきっかけに、ある隠遁者の父を思い出した。その隠遁者は強盗たちに襲われ、ある一つの物だけを残されてしまったが、追いかけて行き、「すべてを持ち去ったわけではない」と告げると、強盗たちは心を動かされ、すべてを返したのだ。　ところが今回、イリナルクの命により、弟子アレクサンドルがイグメンに「すべてが持ち去られたわけではない」と報告したところ、イグメンは昔の強盗たちよりも慈悲深くはなく、残っていたものまで持ち去ってしまった。

その同じ晩、長老イリナルクは、白い衣をまとった若者が自分のそばに立っているのを見た。その若者は彼を見つめながら、イグメンの無慈悲な行いについて語り、その後、突然姿を消した。長老は一晩中、祈りにふけっていた。翌朝、修道院長が再び長老の独房を訪れ、長老を独房から連れ出すよう命じた。四人の男が長老の両腕をつかんで引きずり出し、修道院長は他の五人と共に、長老の鉄の鎖を担いでいた。　長老を引きずっている最中、彼の左腕を折られ、教会から三サジェン離れた場所に放り出された。長老はその姿勢のまま九時間留まり、主なる神に祈り続けた。「どうか、この迫害者たちを罪に問わないでください。彼らは、自分が何をしているのかを知らずに、むやみに騒ぎ立てているのですから。」

長老の弟子であるアレクサンドルとコルニリイは、イリナルクから引き離され、他の修道室へと分散させられた。

イリナルフが、皆に見捨てられて一人横たわっていたとき、明るい修道服をまとった若者が彼の前に現れ、こう言った。

「神はあなたの祈りと忍耐をお聞きになりました。もし何かを願うなら、それはあなたに与えられるでしょう。」

その言葉を言い終えると、若者は姿を消した。

一方、イリナルクの弟子アレクサンドルは夜、かつての独房を訪れ、こう祈りを捧げた。

「主イエス・キリスト、神の御子よ！　主よ、この苦難の中で、私たちはいつまで師と共にあり、この獣のような者たちや酔っ払いたちから苦しめられ続けなければならないのでしょうか？　しかし、あなたの聖なる御心が行われますように！」

すると、尊い十字架から彼に声が聞こえた。

「イグメヌスのところへ行き、こう言いなさい。『なぜ神の御定めに逆らうのか？』と」

長老アレクサンドルは教会にやって来て、修道院長にこう語りかけた。

「イリナルフ長老を、彼の弟子たちと共に、彼の独房へ帰してやってください。そうすれば、あなたは神の御定めに逆らって戦うことで、自らの魂を滅ぼすことにはならないでしょう。」

修道院長は長老とその二人の弟子たちに祝福を与えた。長老は自分の独房に戻り、迫害から救われたことを神に感謝し、忍耐の恵みが与えられるよう祈った。すると、天から声が聞こえてきた。

「勇気を出せ、わが苦しむ者よ。わたしは常にあなたと共にいる。わたしはあなたの偉業を待ち望んでいたし、天使たちはあなたの忍耐に感嘆していた。今や、あなたへの迫害はもうない。天の御国で、あなたのために用意された場所が待っているのだ。」

長老イリナルクはその声を聞いたが、誰の姿も見えず、震えながらただ涙を流して祈りを捧げた。

「主イエス・キリスト、神の御子よ、罪深い私を憐れみ、誘惑から救い出してください」と、十字を切って身を守った。

その後まもなく、シメオン修道院長は修道院から追放された。

一方、ミハイル・スコピン＝シュイスキー公の死後、リトアニアは再び勢いを取り戻し、敵軍は再びモスクワの郊外に集結した。　モスクワ市民自身も、敵の讒言に惑わされ、ツァーリ・ヴァシーリーを王座から引きずり下ろし、リトアニア人をモスクワ市内に招き入れた。リトアニア人は、元ツァーリのヴァシーリー・シュイスキーをポーランドへ流刑に処した。モスクワは占領され、荒廃した。

リトアニアは再び、モスクワ周辺の広大な地域を荒らし回った。1612年、リトアニア軍はロストフに侵攻した。リトアニア軍への恐怖から、ボリソグレブ修道院のイグメンは修道士全員を率いてベロエ湖へ逃れたが、長老イリナルクは弟子たちと共に自身の独房に残り、絶え間なく神に祈りを捧げた。　リトアニア軍は修道院を占領し、10週間もそこに留まった。ある貴族が一度、イリナルクの独房を訪れ、こう言った。

「祝福をください、父上！　サペガは、あなたの言葉通り、モスクワの近くで殺されました！」

長老はこう答えた。

「あなた方も自分の国へ帰れ。そうすれば生き延びられる。もし我らの地から去らなければ、あなた方も殺されることになる！」

その貴族は去り、イリナルクの言葉を他のすべての貴族たちに伝えた。すると、貴族たちが長老のもとへやって来るようになり、長老は彼らにこう言った。

「自分の国へ帰れ。もし帰らなければ、殺されることになる。」

ヴォエヴォダの息子で、ヴォインという名の若者が長老のもとを訪れ、自分の国へ帰るために長老から祝福を受けた。　長老は祝福を与えた。軍司令官の息子は地面にひれ伏して礼を述べ、父の

もとへ戻り、その祝福について語った。すると、軍司令官ヨアン・カメンスキー自身も長老の庵を訪れ、地面にひれ伏して礼を述べ、こう言った。

「父よ、私の息子に祝福を与えたように、私も自分の領地へ帰ることを祝福してください。」

すると、長老は彼に祝福を与え、こう言った。

「ただ、修道院と修道者たち、そしてロストフの街には手を出さないでくれ。」

こうしてカメンスキー氏は、修道院にもロストフの町にも手を出さずに、自らの領地へと去っていった。修道院では、危機を脱したことを祝って再び喜びに包まれた。

一方、モスクワ市内はもちろん、全土において、リトアニア軍がモスクワに居座ったことによる大きな動揺と悲しみが広がっていた。至る所、とりわけニジニ・ノヴゴロドでは、主なる神がその慈悲を示し、モスクワの街を敵から清め、この地を大きな苦難から救ってくださるよう祈りが捧げられた。

ニジニ・ノヴゴロドの人々は、ニジニ近郊に住んでいたドミトリー・ミハイロヴィチ・ポジャルスキー公を知っていた。ニジニ・ノヴゴロドの人々は、彼にモスクワへ向かい、敵を駆逐するよう懇願し始めた。彼らは、彼のために兵士や資金、戦時の物資を集め、提供し始めた。　彼を補佐し支援するため、ニジニ・ノヴゴロドのポサド人であるコスマ・ミニンが選ばれた。軍司令官も地方選出の代表者も考えを一つにし、すべてのことを共同の協議と合意のもとで行った。　そして神は彼らに御加護を授けられた。彼らは集結した全軍を率いてヤロスラヴリへと進軍し、そこで陣を敷いた。あらゆる都市から、信仰と祖国を守り、神の聖なる教会のために命を捧げたいと願うロシア人たちが、彼らの元へと集まり始めた。

ヤロスラヴリにディミトリ・ミハイロヴィチ・ポジャルスキー公が軍を率いて到着したとの報を聞き、モスクワ近郊に駐屯していたロシア民兵の指導者の一人であるドミトリー・ティモフェーヴィチ・トルベツコイ公は、急いでモスクワへ向かうよう使者を送った。　しかし、ポジャルスキー公とコスマ・ミニンはモスクワへ向かうことを恐れていた。そこでは、ロシア民兵の間で意見が一致しておらず、ロシア軍の指導者の一人であるイワン・ザルツキーが、モスクワ近郊で別の軍司令官プロコフィイ・ペトロヴィチ・リャプノフを殺害していたからである。

すべてを見守り、すべてを理解していた長老イリナルフは、ディミトリ・ミハイロヴィチ・ポジャルスキー公に祝福とプロスフォラを送り、イワン・ザルツキーを恐れることなく全軍を率いてモスクワへ向かうよう命じた。

「神の栄光を見ることになるだろう」と、長老は公に伝えるよう命じた。

公爵は長老の言葉に喜び、恐れずに全軍を率いてモスクワへと向かい、ロストフで一休みした。そこから、ポジャルスキー公爵とコスマ・ミニンは、長老イリナルフから直接祝福を受けるため、わざわざボリソグレブ修道院へと向かった。　長老はモスクワへの遠征を祝福し、助けとなるよう自身の十字架を彼らに授けた。長老から祝福と十字架を受け取った公は、喜びをもって軍を率いてロストフからペレヤスラヴリへ、そしてペレヤスラヴリからトロイツェへと向かい、そこで立ち止まって至聖なる三位一体と聖セルギイに礼拝を捧げた。

トロイツェから、ポジャルスキーは軍司令官のドミトリー・ロパティン公をモスクワ方面のトルベツコイ公のもとへ派遣した。トルベツコイはこれを喜び、一方、モスクワ近郊にいたザルツキーは逃げ出した。

その間、モスクワに籠城していたリトアニア軍のもとへ、物資を携えた新たな兵力が到着した。これを聞いたトルベツコイ公は、ポジャルスキー公に使者を送り、全軍を率いて速やかにモスクワ近郊の救援に向かわせるよう要請した。ニジニ・ノヴゴロドのヴォエヴォダは直ちにトロイツァからモスクワへと進軍した。　神の御加護とモスクワの聖人たちの取り成しにより、ロシア軍はリトアニア軍を打ち破ることができた。その後、ポジャルスキー公はキタイ・ゴロドを制圧したため、リトアニア軍はモスクワのクレムリンに籠城するのみとなった。　ほどなくしてクレムリンも降伏し、ディミトリ・ミハイロヴィチ・ポジャルスキー公はクレムリンに入り、至聖なる聖母マリアとモスクワの聖人たちに祈りを捧げた。

そして、主がモスクワをリトアニア人から清めてくださったことに、モスクワには大きな喜びが満ちた。

一方、ウスチエ川沿いのボリソグレブ修道院では、当時大きな悲しみに包まれていた。修道院はリトアニア人によって数度にわたり略奪され荒廃し、修道院には何も残っていなかった。それにもかかわらず、修道院からは 、兵士たちの食糧として多額の貢納が要求されていたのである。 修道院長と修道士たち、そして修道院に属する農民たちは、長老イリナルフのもとを訪れ、彼の弟子アレクサンドルをモスクワへ派遣することを祝福してほしいと頼んだ。　長老は彼らの願いを聞き入れ、すべてを彼らの裁量に委ね、嘆願書と共に弟子をモスクワへ送り出した。そして、敵対者たちに対する援護として与えられた「聖なる十字架」をポジャルスキー公から受け取るよう彼に命じた。

アレクサンドルがモスクワに到着したとき、ポーランド王がヴィャーズマから自国へ去ったことを受け、街には大きな喜びが広がっていた。

長老アレクサンドルはドミトリー・ミハイロヴィチ・ポジャルスキー公のもとを訪れ、長老イリナルフからの祝福とプロスフォラを彼に手渡した。　公爵はイリナルフからの使者の到着を喜び、リトアニアによる荒廃を理由に、ボリソグレブ修道院が兵士たちに物資を一切支給しないよう命じる書状を彼に手渡した。アレクサンドルは公爵から書状と聖十字架を受け取り、修道院へと戻った。

修道院のために特権を得たことに修道院長は喜び、また、アレクサンドルがイリナルフの独房を訪れ、聖十字架を返還し、公爵からの挨拶を伝えたとき、イリナルフもまた喜んだ。

神の御心と、全土の公爵、　ボヤール、ヴォエヴォダ、大主教、アルヒマンドリト、修道院長、そしてその他の人々の裁定により、1613年、若きミハイル・フェオドロヴィチ・ロマノフ公が皇帝の座に選出され、モスクワにてロシアに属するすべての領土の支配者として即位し、皇帝の冠を戴いた。 ロシア全土は、この待望の新しいツァーリの即位を喜び祝った。

しかし、ウグリチやヴォログダをはじめとする多くの地方や都市では、依然として続く略奪による大きな悲しみが広がっていた。主にカザックの部隊が多くのキリスト教徒の血を流し、町や村を荒廃させていたのである。　これらの略奪者や破壊者から国土を浄化するため、ミハイル・フェオドロヴィチ皇帝は、自身のボヤリンであり軍司令官であるボリス・ミハイロヴィチ・リコフ公を、大規模な軍勢を率いて派遣した。リコフ公はヤロスラヴリへと向かった。

その頃、リトアニア軍とカザックがダニロフスコエ村（現在のヤロスラヴリ州ダニロフ市）に侵入してきた。リコフ公は、かつてのロシアの将軍たちと同様に、祝福を求めるため、長老イオアキムを長老イリナルフのもとへ遣わした。　長老は公にプロスフォラと祝福を送り、リトアニア軍を追うよう命じた。公は長老の祝福を喜び、遠征に出発した。　二週間にわたり敵を追跡し、ニジニに到達する手前のコストロマで追いつき、神の御加護により敵を撃破し、多くの者を捕虜としてモスクワのツァーリのもとへ送った。　そこからリコフはヴォログダへ戻り、ヴォログダ県とベロゼルスク県を略奪していたコサックたちに対抗した。公はコサックたちの追撃隊を派遣した。コサックたちはベロゼルスクからウグリチへと向かい、そこで二週間駐留していた。リコフはそこに自軍の連隊を派遣

し、コサックたちをモスクワへと追い払った。　公爵自身は、敵を追ってモスクワへ向かう途中、ボリソグレブ修道院に立ち寄り、殉教者ボリスとグレブに祈りを捧げ、長老イリナルフから直接祝福を受けた。さらにモスクワへと進軍したリコフ公爵は、カザック軍に追いつき、彼らを捕虜として捕らえ、ツァーリのもとへ連行した。

神の御慈悲と、至聖なる聖母マリアおよびモスクワの奇跡行者たちの取り成し、そして隠遁者イリナルクの祈りと涙によって、コサックの略奪団が殲滅されたことを受け、大きな喜びが広まった。

それ以来、ルーシには平穏が訪れた。一方、長老イリナルフは相変わらず絶え間なく祈りを捧げ、涙を流し、断食を行い、巡礼者たちを受け入れ、強者による迫害から虐げられた者たちを守り続けた。

生前から、神は御自身の御心に適う者イリナルクを奇跡によって栄光に輝かせられた。彼の祈りによって、神は病人と悪霊に取りつかれた者を癒やし、信仰をもって彼のもとに訪れた者たちに対して、彼の祝福には奇跡的な力があった。　イリナルクの伝記を著した、彼の弟子アレクサンドルは、ボリス・グレブスの隠遁者であり苦行者であったイリナルクの生前に、その祈りによって成し遂げられた九つの神の奇跡を記録した。

聖イリナルクのもとには、さまざまな病に苦しむ人々、とりわけ悪霊に取りつかれた者たちが、自ら訪ねてきたり、連れてこられたりした。長老は祈りを捧げ、患者たちにも祈りと断食を命じ、自らの聖なる十字架を彼らの上に置き、しばしば自分の鎖の一部を患者に巻きつけたり、その鎖の上に横たわるよう命じたりした。　時には、遠く離れた場所から病人のためにイリナルフに祝福を求めて使者が送られることがあり、彼は祝福を与え、同時にプロスフォラや十字架を送り返した。それを使って水を聖別し、病人に飲ませたのである。　こうして、尊者イリナルフは、ダヴィドヴァ村の[997]の悪霊に取り憑かれた者を、自身の十字架をその者に掲げることで癒やした。また、　ヴォシュチャディニコフ村の[998]　の別の悪霊に取り憑かれた者は、暴れ回るその者に弟子アレクサンドルが長老の鎖を掲げ、病人を長老と至聖なる聖母マリアの聖像の前に連れて行った際に癒やされた。　ボリソグレビ修道院で精神錯乱に陥ったヴォエヴォダ、ボヤール・マテイ・ティフメネフの息子に対し、尊者イリナルクは自身の十字架をその身に掛け、自身の鎖に繋ぎ、護衛として二人の兵士を付けさせた。こうして病人は一晩中その状態で過ごしたが、朝になると長老はヴォエヴォダを教会へ祈りを捧げるよう送り出した。聖体礼儀の後、病人は健康な姿で戻ってきたが、尊者イリナルクは彼に一週間断食し、肉も食べず、ワインもビールも飲まないようにと命じた。　同様に、修道院で正気を失っていた農民ニキフォロスも癒やされた。長老は、自分の十字架を彼に掛けさせ、鎖で菜園に縛り付けるよう命じた。　一時間後、長老は十字架と鎖を外し、病人にその鎖の上に横になるよう命じた。そこで彼は一晩中眠り、目覚めた時には完全に健康になっていた。

イリナルクが送った十字架で聖別された水を飲んだり、その水を振りかけられたりしたことで、ボヤールの息子であるロマンという名の男は頭痛から、ある農民の妻は目の病気から、ウグリチのある憑依された女性、そしてモスクワのある書記官の妻は、ある重い病気から、それぞれ癒やされた。

やがて、尊者イリナルクの最期の時が訪れた。義に満ち、多くの苦難を耐え抜いたこの男は、弟子たちを呼び寄せ、こう語った。

「わが兄弟たち、そして共に信仰を歩む者たちよ！　お願いである。今、私はこの世を去り、私の主なる神イエス・キリストのもとへ旅立つ。私のために、神と聖母マリアに祈ってほしい。私の

[997] ダヴィドヴォ村は、ボリソグレブ修道院からウグリチ方面への道沿いに20ヴェルスタの場所に位置している。
[998] ヴォシュチャディニコフ村は、ボリソグレブ修道院から10ヴェルスタ、ウグリチ街道の右側に位置している。

死後、慈悲深い天使たちが私の魂を迎え入れ、私が敵の罠や天上の試練を、あなたがたの聖なる祈りによって免れるように。私は罪深い者だからである。　そして、私の主たちよ、私の死後は、断食と祈り、労苦、徹夜と涙の中に留まり、また互いに不平を言わず愛し合い、従順と服従のうちにあってください。あなたがたは、キリストの「八福」の戒めを知っているからです。

尊師はこれらすべての戒めを語り、弟子たちに他にも多くの教えを与えました。

師が最期の息を引き取ろうとしているのを見て、弟子たちであるアレクサンドルとコルネリウスは深く心を動かされ、苦々しい涙を流しながらこう叫んだ。

「ああ、私たちの慈愛に満ちた羊飼いであり、師よ！今や、あなたが最期の息を引き取られるのを目の当たりにしています。私たちは誰にすがればよいのでしょうか。誰から教えを授かればよいのでしょうか。誰が私たちの罪深い魂を顧みてくださるのでしょうか。　しかし、お願いです。もしあなたが神の御前で恵みを得られるなら、この世を去った後も、あなたの聖なる御心にかなうままに、絶え間なく神と聖母マリアに私たちのために祈ってください。なぜなら、私たちの隠された苦しみはすべて、あなたには知られているからです。

長老イリナルクは弟子たちにこう言いました：

「私は肉体としてはあなた方から離れますが、霊においてはあなた方と切っても切れない関係であり続けます。」

そして、さらにこう付け加えました：

「もし誰かが、神から与えられ、贖われ、修道院長や兄弟たちから懇願して得たこの私の修道院を迫害し始めたなら、神と神の母が彼らを裁かれるように。」

その傍らには、修道院の兄弟たちも立ち会っていた。兄弟たちや弟子たちにキリストの御名において赦しを与え、最後の口づけを交わした後、尊者イリナルクは祈りの姿勢を取り、長く祈りを捧げ、静かに主のもとへ旅立ち、永遠の安息に入った。

尊者イリナルクの逝去は、1616年1月13日、聖殉教者エルミルとストラトニクの記念日にあたる金曜日から土曜日にかけての夜9時に訪れた。ロストフおよびヤロスラヴリのキリル大主教（[999]）の祝福と命により、スキモナフ・イリナルクの埋葬は、ボリソグレブ修道院のイグメン・ペトル、彼の霊的指導者であるイエロモナフ・ティホン、助祭ティト、そして弟子である長老アレクサンドルとコルニリイによって執り行われた。　尊者イリナルクの遺言により、その棺は彼自身が用意した洞窟に安置された。

長老イリナルフの死後、彼の「義の業」が残された。それは、銅製の十字架142個、肩に担ぐ7つの業具、首に巻いていた20サジェン（約36メートル）の鉄の鎖、鉄製の足枷、　手や胸に身につけていた銅と鉄の枷18個、　の帯に付けていた重さ1プードの束、そして自身の肉体を謙遜させ、目に見えない悪魔を追い払うために用いた鉄の杖[1000]。これらの「苦行」という義の行いの中で、長老イリナルクは三十八歳四ヶ月を過ごし、世俗の生活では三十年間を過ごした。合計して、彼は六十八歳四ヶ月を生きた。

---

[999] キリル4世は、ツァーリ・ボリス・ゴドゥノフの死の際、ロストフ都主教として言及されている。彼は偽ディミトリによってその座を追われたが、後継者であるフィラレート（後に総主教となる）が捕虜にされた際、ロストフの人々は再びキリルを招き、彼は1616年に死去するまで司教職を務めた。

[1000] 修行者イリナルクが身にまとっていた鉄の鎖やその他の重りの大部分は、現在もボリソグレブ修道院に保管されている。その一部は、同修道士のアシジの聖遺骸が安置されている教会堂内に、また一部は、かつて同修道士が住んでいた独房があった場所に建てられた特別な木造の建物の中に収められている。　これらの品々の詳細な説明と図版は、前述のアンフィロキオス大主教の著書に見ることができる。　1878年、ヤロスラヴリおよびロストフの大主教ニロスの祝福のもと、イリナルクの「遺品」の一部である鎖やその他の品々は、村人たちの要望に応じて、イリナルクの故郷であるコンダコフ村の教会に移されました。これについては、前述のN. N. コルスンスキーの著書を参照のこと。

尊者イリナルクの逝去後、その棺の周りでは多くの奇跡が起こった。伝記の著者であり、彼の弟子であるアレクサンドルは、様々な病、とりわけ悪霊に取り憑かれた状態からの十三の奇跡的な治癒を記録している。　病人の上には、通常、イリナルクの「命を与える労苦の十字架」が置かれ、時には彼の鎖や、彼が背負っていた他の重荷が置かれた。また、彼の墓から土を取り、その土に染み込んだ水を飲んだ。その後も、数多くの奇跡が起こった。

そして現在でも、尊者イリナルクへの祈祷の際、多くの苦しむ人々が、その治癒力を信じて、彼が残した重荷のいくつかを身にまとっていることは珍しくない。

1月27日

1月14日（旧暦）

シナイとライフェにおける聖なる父たちの最初の迫害

1月14日の記念日

1月14日には、シナイ山[1001]　の修道院や洞窟、およびシナイに隣接する沿岸のライフェの荒野で修行に励んでいた修道士たちが、二度にもわたって迫害を受けたことが記念される。最初の迫害は4世紀に行われた。この出来事は、その目撃者であるエジプトの修道士アモニオスによって記述されている。アモニウスはこの出来事を次のように語っている。

「ある日、私がアレクサンドリア地方のカノヴォと呼ばれる場所で、ささやかな独房に座っていたとき、パレスチナへ行こうという思いが浮かんだ。　キリスト教徒たちが不敬虔な迫害者たちから絶え間ない苦しみを受けている様子や、私たちの聖なる父であるペトロ総主教が、信徒の群れをしっかりと導く機会を奪われ、あちこちを転々とし、身を隠さざるを得ない様子を、私は黙って見過ごすことはできなかった。　同時に、私は、私たちの主イエス・キリストが、私たちに対する御計画の神秘を成し遂げながら歩まれた、エルサレムの聖地を参拝したいと願っていました。　そこに着くと、私は神のすべての驚くべき御業に深く喜び、聖なる場所に参拝することを私に許してくださった慈悲深い主に対して熱心に感謝を捧げました。その後、私は数人の修道士たちと共に荒野へと向かい、神の御加護により、十八日かけてシナイ山に到達し、そこで聖なる場所に参拝しました。　そこに滞在している間、私は天使のようなシナイの修道父たちとの交わりや会話を楽しみ、日々の霊的益のために、彼らのそれぞれの独房を訪ねて回った。　彼らには次のような規則があった。彼らは毎日、自分の独房で黙って座っていた。しかし、土曜日の夕方、日曜日の到来とともに、全員が教会に集まり、共に徹夜祈祷を行った。翌朝、聖なる典礼においてキリストの不死の聖なる秘跡を拝領すると、一人ひとりが再び自分の独房へと戻っていった。　彼らの姿は天使のようであった。厳しい禁欲と絶え間ない徹夜により、彼らの肉体は衰弱しており、彼らはまるで肉体を持たないかのように生きていた――情欲を刺激し、養うようなものは一切口にしなかった。 彼らはワインも、油も、 パンも一切口にせず、わずかな量のナツメヤシの実やドングリだけで満足し、それだけで命をつないでいた。しかし、巡礼者のために、修道院長が時折パンを用意することもあった。

[1001] シナイ山はシナイ半島の中心部に位置している。これは実際には花崗岩の岩盤からなる山群であり、険しく起伏に富んだ谷に切り裂かれ、囲まれている。アラブ人からは現在、「トゥール」山、あるいは「ジェベル・トゥール・シナ」と呼ばれている。　旧約聖書において、イスラエルの民はシナイ山で神と契約を結び、神から律法の戒めを受けた（出エジプト記20章）。キリスト降誕後4世紀から5世紀にかけて、シナイ山は、その峡谷や洞窟に住む多くのキリスト教の隠者たちで知られていた。

それから数日後、この国には「ヴレミアン」と呼ばれる多くの野蛮人たちが突然襲来した[1002]。彼らは、周辺で見つけたすべての修道士たちを容赦なく打ちのめした。 我々は、ピルガ[1003] の近くに住んでいたが、動揺し、不安に駆られた。そこで、ドゥロイという名の聖なる修道院長と共に、急いで要塞化された場所に集まった。彼はまさにキリストの僕であり、誰よりも並外れた忍耐と柔和さを備えていたため、一部の人々は彼をモーセとも呼んでいたのである。　前述の野蛮人たちは、ホリブ[1004] に住むすべての修道院長たちを殴打し、テフロヴィルでは多くの聖人を殺害し、キダルでも多くの聖人を殺害し、シナイ山の周辺地域も荒廃させた。彼らは私たちのもとにもやって来て、どこからも抵抗を受けることなく、私たちを殺害しかけた。　しかし、心を尽くして御名を呼び求める者たちに御助けを現わされる慈悲深い神は、山の頂上に大いなる炎をお遣わしになった。私たちは、山全体が煙に包まれ、そこから天へと昇る火が噴き出しているのを目撃した。この光景を目の当たりにして、私たちは戦慄し、恐怖のあまり死にそうになった。　地面にひれ伏して、私たちは主に向かって、私たちを脅かす災難が過ぎ去るよう祈った。野蛮人たちはその炎を目にした途端に恐怖に襲われ、即座に逃げ出した。中には武器を投げ捨て、ラクダを置き去りにした者さえいた。彼らにとって、この恐ろしい炎の光景はまったく耐え難いものだったからである。　私たちは、御自身に立ち返る者を決して見捨てない神に感謝し、賛美を捧げた。その後、私たちは桟橋から降り、あちこちで剣によって殺された三十八人の司祭たちを見つけた。彼らは皆、捕らえられたその場所で殺されていた。　彼らの遺体には多種多様な傷が数多くあった――その殉教の死の様相を、いったい誰が描き表すことができようか。そのうち二人のイザヤとサッバはまだ息があったが、重傷を負い、かろうじて息をしている状態だった。私たちは直ちに、大いなる涙を流しながら殺された長老たちを葬り、生き残った者たちの世話をした。　そもそも、これほど多くの、そしてこのような父たち――義人であり聖人である男たちが、哀れな姿で地面に横たわっているのを、苦々しく悼まずにいられるほど残酷で無慈悲な者が、いったい誰がいようか？　ある者は頭が完全に切り落とされ、別の者は片側だけ皮でつながっている状態だった；　ある者は真っ二つに切り裂かれ、ある者は手足を切り落とされ、ある者は目をえぐり出され、またある者は頭から足まで真っ二つに切り裂かれていた。そもそも、私たちが聖人たちの遺体を収容し、埋葬する際に目にしたすべてのことを、誰が詳細に語り尽くせようか。まだ生き残っていた二人の兄弟は、激しい苦痛に苛まれながら横たわっていた。　そのうちのひとり、イザヤという名の者は、夜中の二時に亡くなったが、もうひとりのサヴァは生き残っており、彼の傷はそれほど重くなかったため、回復への希望があった。彼は自らの苦しみについて神に感謝していたが、聖なる父たちと共に死ぬ栄誉に浴せなかったことを嘆き、泣きながらこう語った：

– 罪深い私よ、哀れな私よ！キリストのために苦しみ、死んだ聖なる父たちの列に加わることのできなかった私よ！哀れな私よ、十一時になって拒絶された（マタイ20:6参照）不肖の僕よ。すでに救いのキリストの御国の門口に立っていたにもかかわらず、そこに入ることができなかった私よ！

彼は涙ながらに神に祈り、こう言った。

「全能の神よ、人類の救いのために御独り子をお遣わしになった、唯一にして慈愛に満ちた人間愛の御方よ、私を先に逝った聖なる先人たちから引き離さないでください。むしろ、私を通して彼らの数が四十人となるよう、満たしてください！」　主イエス・キリストよ、どうかこの願いをお聞き入れください。私は生まれた時からあなたの弟子であり、あなただけを愛してきたのですから！

1002 ヴェレミアン族とは、現在のベドウィンに相当し、エジプトの南および西部に居住していたリビアの盗賊民族である。これらの野蛮人たちはローマ皇帝たちでさえ恐れていたため、ディオクレティアヌス帝は金銭や領土の割譲によって彼らからの脅威を回避しようとした。

1003 ピルグ――ギリシャ語で「要塞」「塔」を意味する。修道院内の要塞化された見張り所をこう呼んだ。

1004 ホリブ――アラビア砂漠にある山で、シナイ半島が東部を構成する同じ山脈の西側の高地である。ここで、燃え尽きることのない燃える荊の茂みの中で、神がモーセに現れた（出エジプト記3章）。この山の近くには、ここで言及されているキダルとテフロビルもあった。

このような祈りを捧げている最中、聖なる父たちが殴打されてから四日目に、彼は主の御手にその霊を委ねた。

私たちがまだ悲しみに暮れ、涙を流していたとき、あるイスマイル人[1005] が私たちのところに来て、ライファ[1006] と呼ばれる内陸の荒野に住んでいたすべての修道士たちが、野蛮人たちによって皆殺しにされたと告げた。この荒野は、私たちから二日以上の道のりにあり、黒海　の海岸沿いの海辺に位置していた。そこには12の泉があり、『民数記』（民数記33:9）に記されているように、70本のナツメヤシがあったが、その数はその後かなり増えた。　私たちはその男に、どのような状況で、何人の修道士たちが殴打されたのかを尋ねたが、彼はそれについて何も語ることができなかった。というのも、彼自身も他の人々から聞いた話として、ライフェに住んでいた修道士たちは、年長者から年少者まで例外なく全員殴打されたということだけを知っていたからである。数時間後、別の者からもこの知らせが裏付けられた。　そして数日後、シナイ山に定住するために、その地の修道士の一人がやって来た。彼のことを知ったシナイ山のイグメン、ドゥラ神父は、聖なる父たちに降りかかったすべての出来事、そして彼自身がどのようにして逃亡に成功したのかについて、詳細を知りたがり、彼に丹念に尋ね始めた。すると、その修道士は次のように語った。

「父上、私は彼らと少しの間――わずか二十年ほど――共に暮らしましたが、そこには長く暮らしていた者たちもいました。ある者は四十年、ある者は六十年、中には七十年も過ごした者もいました。」　この地域は非常に平坦で広大であり、その長さは七十ポプリシュに及び、東側は山――まるで何らかの壁のように――によって、黒海[1007] の岸辺まで遮られています。そこには多くの隠者が住んでおり、使徒の言葉（ヘブライ人への手紙11:38）に従い、荒野や山々、洞窟や地の峡谷をさまよっていた。山のふもとには教会があり、毎週、これらのまさに天の如き人々がそこに集まっていた。　この地上に生きながらも、彼らは心も生活様式も天使たちのようでした。彼らは自らの肉体を、あたかもそれが自分のものではなく他人のものであるかのように酷使し、魂をただ一つの美徳ではなく、数多くの美徳で飾っていました。　彼らの苦難と死、ひいては悪魔たちから受けたあらゆる誘惑を描き出そうとすれば、愛する皆さん、彼らの美徳のすべてを順を追って語ることはできません。しかし、私は一、二人の修道士についてお伝えしましょう。それだけで、他の者たちの生活やあり方について理解するには十分でしょう。

彼らの間には、モーセという名の一人の長老がいました。生まれは隣国のファラン[1008] 出身で、彼は若き頃から修道生活を愛していました。彼は、かつてそこに住んでいた修道士たちの院長を務め、七十三年もの間、修道生活を送りました。　修道院の近くにある一つの洞窟に住んでいた彼は、まさに第二のエリヤ・テシュビ人[1009] そのものであった。なぜなら、主は彼が主にお願いしたことは何でも与えてくださったからである。　奇跡的なしるしとあらゆる病の癒やしによって、彼はファランの領内に住むすべての住民、そしてこの国に住んでいたイスマイル派の人々をもキリスト教へと改宗させた。　モーセが行う奇跡や癒やしを目の当たりにして、人々は皆、キリストへの信仰に満たさ

1005 イシュマエル人――族長アブラハムの息子イシュマエルの子孫。

1006 ライファ――ファランの近く、紅海の東岸に位置し、シナイから二日間の道のりにある場所。

1007 チェルムネ、いわゆる紅海は、インド洋に面した細長い海峡であり、アラビア半島をエジプトから、またアジアをアフリカから隔てている。

1008 ファラン――パレスチナ、エジプト、エドム、シナイ半島に囲まれた砂漠と山岳地帯である。ファランの山で、神は聖霊として現れ、イスラエルの70人の長老たちの上に降りた（民数記9:10–30）。また、ダビデもこの地で身を隠していた。

1009 エリヤ・フェスヴィ人――旧約聖書の預言者の中で最も著名な人物であり、ガリラヤの町フェスヴィ（ネフタリ族の領地）の出身である。真の神を熱心に崇拝し、アハブとイゼベルの時代に不義と偶像崇拝を厳しく糾弾し、多くの奇跡によって名声を博した。　彼はホリブ山で神と語り合う栄誉に浴し（列王記下19章）、ヨルダン川を奇跡的に渡った後、火の戦車に乗って生きたまま天に上げられ、その恵みとともに奇跡を行う力を後継者のエリシャに授けた。

れ、洗礼を受けてキリストの聖なる教会に加わった。聖なる父は、悪霊に取りつかれた者たちも数多く癒やした。それは、キリストの恵みにより、彼が悪霊に対しても権威を持っていたからである。修道生活を始め以来、彼は一度もパンを口にしなかった。旅人のために少量のパンを常備してはいたが、それは彼を訪ねてくるエジプト人たちが与えてくれたものだった。彼自身は、数個のナツメヤシの実と水だけで満足していた。また、そのナツメヤシの木から、自分の衣服も作っていた。　誰よりも厳格な沈黙の中で時を過ごし、自分の思いを告白しにやって来る人々のためだけにその沈黙を破った。彼はそうした人々を、注意深く、柔和な態度で迎え入れた。睡眠はごくわずかで、それも朝の礼拝の後だけであり、夜の間は一睡もせずに過ごした。　四旬節の間、聖木曜日まで、彼は誰とも言葉を交わさなかった。この期間中、彼の食事はおよそ20個のナツメヤシの実、飲み物は水一杯で、弟子によれば、これだけでキリストの受難の日までしばしば持ちこたえることができたという[1010]。ある時、四旬節の期間中、悪霊に取りつかれていたエチオピアのある部族の長、ヴェディアンを癒やすために、彼のもとに連れてこられた。長老の庵まで一ポプリシュの距離に近づいたとき、悪霊はヴェディアンを地面に倒し、こう叫び始めた。

「ああ、私は悲惨だ！　私をどこへ連れて行くというのか！　この男を、一瞬たりとも誘惑し、惑わすことさえできなかったのだ！」

そう言い終えると、悪霊はヴェディアンの体から出て行き、ヴェディアンは即座に回復し、他の多くの人々と共にキリストを信じ、その後、聖なる洗礼を受けた。この義人について他にも多くのことをお話しすべきだが、時間の都合上、ここでは割愛せざるを得ない。彼は、我々を襲った野蛮人の手によって命を落とした。

この驚くべき、そして至福に満ちた父には、彼と同じ名を持つ、同じくモーセと呼ばれる弟子がいた。彼はフィヴァイダ地方[1011]の出身であり、父のもとで46年間、沈黙を守り、父の規則から何一つ逸脱することなく過ごし、他の若い修道士たちの模範となっていた。　当初、私も彼と共に暮らしていたが、その後、彼の極端な禁欲主義を理由に、彼から離れた。聖なる父たちと共に、彼もまた殺害された。　これらの父たち一人ひとりの生涯と美徳を振り返り、語ることは大いに有益であろう。しかし、時間の都合上、他の者たちについては触れないことにし、もう一人の義人についてのみ述べることにする。

彼らの間には、アナリチン出身のヨセフという名の聖父が一人いました。海から二ポプリシュの距離に住み、自らの手で住居を建てた彼は、聖なる生活を送る人であり、真に賢明で徳の高い人物でした。彼はその場所に約三十年滞在しました。　彼の弟子は彼と一緒に住んではいなかったが、彼からそう遠くない別の修道室に住んでいた。ある日、ある兄弟が教えを求めてこの聖ヨセフのもとを訪れた。彼は扉を叩いたが、返事が聞こえなかったので、小さな窓から中を覗き込むと、老人が修道室の真ん中に立ち、まるで頭から足先まで炎に包まれているかのように見えた。　彼は恐怖のあまり倒れ込み、まるで死人のように呆然としたまま、2時間ほど横たわっていた。我に返ると、彼は小部屋の入り口のそばに座り込んだ。神への思索に没頭していた長老は、その出来事に気づいていなかった。5時になると、その兄弟は再び扉を叩いた。長老は彼を中に入れ、尋ねた。

「わが子よ、いつ来たのか？」

「四時間か、それ以上経ちました」と彼は答えた。「来たのはその頃ですが、父上のお邪魔にならないよう、今までノックしませんでした。」

聖なる長老は、その兄弟が自分に起きたことを知っていることに気づいた。しかし、そのことについては何も言わず、彼に魂に益となる教えを与えた後、平穏のうちに彼を見送った。しかし、その兄弟が去った後、この尊い長老は、世間の称賛を恐れて、自分の小部屋を離れ、姿を消した。　数

[1010] すなわち、キリストの受難、すなわちキリストの苦難を偲ぶ聖金曜日（大金曜日）の早課までである。

[1011] フィヴァイダ――古代に名高いエジプトの都市テーベの地域。この名称は、その主要都市にちなんで、上エジプト（南エジプト）全体を指すことにも用いられた。

日後、弟子であるゲラシウスが長老の独房を訪れたが、そこにはもう長老の姿はなかった。その後、彼がその荒野でどれほど長老を探しても、その捜索はすべて徒労に終わった。彼は苦い涙を流しながら長老の独房に戻り、せめてそこで自分の魂の慰めを見出そうと、そこに住み着いた。

六年の月日が流れ、ある日、午後九時頃、誰かが小部屋の扉をノックした。外に出ると、ゲラシウスは小部屋のそばに立っている自分のアッバの姿を突然目にした。その予期せぬ出現に驚愕し、これは霊ではないかと考えたが、それでも喜びながら彼にこう言った。

「父よ、祈りを捧げてください。」

長老は祈りを捧げ、弟子と口づけを交わしてから、こう言った。

「わが子よ、最初に祈りを求めたのはよくやった。悪魔の策略は実に多岐にわたるからだ。」

兄弟は彼に言った。

「なぜあなたは父たちのもとを離れ、私という息子を置き去りにしようとしたのですか。それゆえ、私はこれまで悲しみと涙に暮れてきたのです。」

「わが子よ！」と長老は答えた。「私がなぜ去ったのか、それは神のみがご存知だ。しかし、知っておいてほしい。実のところ、この瞬間に至るまで、私はこの場所も、お前も決して離れることはなかった。そして、神父たちと共に、教会で、私たちの神であるキリストの聖なる不朽の秘跡を、一週間たりとも欠かさず拝領していたのだ。」

兄弟は、長老が彼らの間に暮らしていたのに、誰も彼に気づかなかったことに大いに驚いた。

「なぜ今になって、父よ、あなたの息子である私のところへ来られたのですか？」と彼は尋ねた。

長老はこう答えました。

「わが子よ、すでに私の死の時が訪れた。だから、お前が私を葬ってくれるために来たのだ。」

兄弟に多くの魂に有益な教えを授け、彼を敬虔な信仰に確固たるものにした後、長老は天に向かって両手を挙げ、彼のために祈りを捧げ、そして安らかに主のもとで息を引き取った。 兄弟の が私たちにこのことを話してくれた直後、私たちはヤシの枝を手に持ち、賛美歌を歌いながら彼を教会へと運びました。その時、故人の顔は、かつて預言者モーセのときのように輝いていました（出エジプト記34:29–30, 35）。 私たちは、彼を、先に召された聖人たちや神聖な父たちと共に葬りました。他にも多くのことをお話しできるのですが、ここでは控えます。なぜなら、そろそろ野蛮人たちの話に移るべき時だからです。あなたがたは、彼らが聖なる父たちをいかにして殺害したのかを知りたがっているのがわかります。

これら祝福された父たちは、実に徳高く、完全な貧しさの中で生活しながら、主のためにあらゆる苦難を堅く耐え忍び、絶えず祈りと神への黙想に身を置いていた。 私たち全員で、そこに四十三人住んでいました。そしてある日、二人の見知らぬ男たちがやって来て、エチオピアの国から船で海を渡り、大勢の野蛮人がやって来たと告げました。

「我々が小舟で航行していたところ、彼らに捕らえられ、捕虜にされたのです」と、その来訪者たちは語りました。「『町への道を示せば、その見返りに命を助けてやる』と言われました。我々は意に反して約束せざるを得ませんでしたが、彼らから逃れるために南風が吹くのを待ち構えていました。」 神の御加護により、私たちは夜間に小舟で彼らの手から逃れることに成功した。そこで、しばらくの間は用心するようにと警告しておく——あの野蛮人たちがあなたの隠れ家を発見し、皆殺しにしてしまわないように。彼らの数は三百人だ。

このことを知ると、私たちは海辺に見張り番を配置し、船が見えたら知らせてくれるよう頼んだ。私たち自身は徹夜礼拝に集まり、主が私たちの魂の益となるものを送ってくださるよう祈った。

夜の一時、帆を掲げた船が姿を現し、私たちの方へと向かってきました。ファランに住む信徒たちは、妻や子供たちを守るために戦いの準備を整えました。その数は、女性や子供を除いて二百人

でした。　一方、私たちは柵で囲まれた自分たちの教会に集まった。野蛮人を乗せた船は、舵手の操船により埠頭に到達すると、夜通し、山の陰に隠れ、泉の近くにある西岸に停泊していた。　夜が明けると、野蛮人たちは舵手を縛り上げて船から連れ出し、船にはたった一人を残した。その者が船で逃げ出さないよう、彼らは仲間の一人を監視役として残した。泉のそばに上陸すると、彼らは地元住民と戦闘を開始し、双方から非常に多くの矢が放たれた。　弓術に熟練していた野蛮人たちは勝利を収め、住民たちを敗走させ、そのうち百四十七人を殺害した。残りの者たちは、それぞれ逃げられる場所へ逃げ去ったが、その妻や子供たちは、不敬虔な野蛮人たちに捕らえられてしまった。　その後、彼らは野獣のように、前述の我々の囲いへと突進し、我々のところに大量の金があるだろうと期待していた。囲いの壁を取り囲むと、彼らは我々を大声で罵り始め、その獰猛な叫び声で我々を威嚇しようとした。　このような災難と悲しみの中で、私たちは何をすべきか分からず、ただ泣きながら神に叫び求めた。私たちの中には、この悲しみを勇敢に耐え抜く者もいれば、泣く者もいれば、祈り、神に感謝する者もいた。それでも皆、互いに慰め合いながら、こう叫んだ。

「主よ、憐れみたまえ！」

私たちの修道院長である聖パウロは、教会の真ん中に立ち、私たちにこう語った。

「父たちよ、兄弟たちよ！　私、この罪深く、誰よりもふさわしくない者の言葉に耳を傾けてください。あなたがたは皆、よくご存じの通り、私たちは主イエス・キリストへの愛ゆえに、この虚しい世から離れ、この過酷な荒野に身を置き、飢えと渇き、そして極度の貧困の中で、主の善き軛を負うにふさわしい者とされました。　私たちは、主の天の御国に与るにふさわしい者とされるために、この世のあらゆる虚しさを軽んじてきました。そして今、死が私たちを訪れること以外、何も望んでいません。もし私たちの主が、この虚しい人生から私たちを早く解放し、御自身のもとに迎え入れようとしておられるのなら、なぜ私たちは悲しみにふけり、嘆く必要があるのでしょうか。それどころか、むしろ喜ぶべきではないでしょうか。　私たちは喜び、主に感謝すべきであり、決して落胆してはなりません！主の栄光を仰ぎ、その聖なる神聖な御顔を仰ぐこと以上に、私たちにとって愛おしく、甘美なことが他にあるでしょうか。父たち、兄弟たちよ！　私たちが、私たちより先に生きた聖なる殉教者たちを、いかに常に称え、賛美してきたか、また、キリストの御名のために彼らが受けた苦難を互いに語り合いながら、彼らに倣いたいという熱意に燃えていたことを思い出してください。ついにその時が訪れ、来世において彼らと共にありたいという私たちの願いが叶おうとしています。ですから、落胆したり、悲しんだり、恐れたりすることなく、全力を振り絞って気を取り直し、毅然として死を受け入れなさい。そうすれば、神は愛をもってあなた方を御国にお迎えくださいます。

修道士たちは口を揃えて答えた。

「尊き父よ、おっしゃる通りに行動いたします。なぜなら、*『主が私たちに与えてくださったすべての恵みに、どのように報いようか。救いの杯を受け、主の御名を呼び求めよう』*（詩編115:3–4）とありますから。」

東を向き、天に向かって両手を挙げ、私たちの聖なる父はこう叫ばれました：

「主イエス・キリストよ、全能の神よ、私たちの希望であり助けである方よ！　私たち、あなたのふさわしくないしもべたちを忘れないでください。私たちの苦難と悲しみを覚えてください。私たちの魂は深く悲しみに満ちているからです。この苦難の時に私たちを強めてください。私たちの魂を、喜ばれるいけにえとして、ご好意をもって受け入れてください。あなたには、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。

そして、皆が「アーメン」と言うやいなや、聖なる祭壇から、皆の耳に届くように声が響き渡った。

「*疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう*」（マタイ11:28）。

その声に、私たちを恐怖と戦慄が襲い、皆の膝と心は弱り果てた。主が言われたように（マタイ26:41）、霊は目覚めていても、肉体は弱いからである。それゆえ、私たちはすでに自らの命を絶望し、ただ天に向かって顔を向けるばかりであった。　その間、野蛮人たちは何の抵抗にも遭うことなく、長い丸太を使って私たちの塀を乗り越えてきた。　扉を開けると、彼らは手に抜刀した剣を握りしめ、まるで野生の狼や猛獣のように中に押し入った。教会の入り口には、エレミヤという名の、威厳ある風貌の聖なる老人が座っていた。彼らはその老人を捕らえると、こう要求し始めた。

「お前たちの親分を差し出せ！」

その老人は、彼らの獰猛な顔つきや手に握られた抜刀した剣を見て、微塵も動じることなく、彼らを見つめてこう言った。

「キリストの敵どもよ、なぜ私を脅かすのか？　あなたがたが尋ねていることについては、何も話さない。」

その近くには修道院長も立っていた。野蛮人たちは、この男の勇敢さに驚いた――彼は彼らを恐れるどころか、かえってさらに挑発しているかのようだった。彼らの驚きはやがて怒りへと変わった。彼らは彼の手足を縛り、裸のまま自分たちの真ん中に立たせ、矢を放ち始めた。　義人の全身は矢で傷だらけになった。このようにして悪魔に勇敢に立ち向かい、蛇の頭を打ち砕いた彼は、誰よりも先に殉教の冠にふさわしい者とされ、老若を問わず人々に苦難の模範を示した。

その後、私たちの聖なる父パウロも異教徒たちの前に進み出て、指で自分自身を指し示しながら、こう叫んだ。

「ほら、私がお前たちが探している者だ！」

そして、この勇敢なキリストのしもべは、恐れを知らずに自らを敵の手に委ねた。彼は、不信心者たちが自分を殺す前に与えるであろう傷や苦痛など、考えることさえ拒んだ。

「教えてくれ、金をどこに隠している？」と彼らは尋ねた。

彼は、いつものように静かに、穏やかにこう答えた。

「信じてください。私は生涯を通じて、あなたがたが私の身にまとっているこのぼろぼろの服以外、この世のものは何も手に入れていません。」

そう言いながら、彼は手元の服を取り出して見せた。

すると、野蛮人たちは彼の全身を矢で傷だらけにし、石で頭を打ち砕きながら、「富をよこせ」と叫んだ。何も得られず、長い拷問の末、彼らは彼の頭を真っ二つに切り裂いた。その結果、頭の半分が両肩にぶら下がり、片方は一方へ、もう片方はもう一方へと向いていた。　他にも数多くの傷を負わされた彼は、先に殺された父――彼に次いで悪魔を打ち負かした二人目の者――の足元に、死体となって横たわっていた。一方、不肖の私は、聖人たちの痛ましい死、彼らの血、そして地面に横たわる遺体を見て恐怖に駆られ、身を隠して逃げ延びる場所を探し始めた。　教会の左側にナツメヤシの枝が転がっているのに気づくと、私はそこへ駆け寄り、野蛮人たちが私たちの聖なる父パウロを拷問している間に、その下に身を隠すことができた。　その際、私には必ず次の二つのうちのいずれかが起こるだろうと考えていた。すなわち、ここで身を隠して死を免れるか、あるいはここで見つかり、聖父たちと共に殺されるか、のいずれかである。　不敬虔な野蛮人たちは、前述の二人の司祭が息を引き取った後、彼らを置き去りにして教会に乱入した。狂ったように叫び、剣を振り回しながら、彼らは司祭たちめがけて突進し、老若男女を問わず、例外なく容赦なく皆殺しにした。

この話を語る際、その修道士は苦々しく泣き、すすり泣いた。アモニウスが伝えるところによれば、彼の語りは、私たち側からも大きな泣き声とすすり泣きを引き起こした。皆、大いに泣いた。涙は小川のように私たちの目から流れ出し、衣服を濡らした。

「兄弟たちよ」と、その修道士は涙ながらに語り続けた。「私の目が見たすべての悲惨な光景を、いったいどのように表現し、どのように書き表せばよいのでしょうか！　そこには、アダムという名の偉大な父が一人いました。彼には、十五歳ほどの若い弟子セルギイがいました。彼は幼い頃か

らセルギイを育て上げ、修道生活と 悪魔との戦いについて教えていました。 野蛮人たちは、セルギイの美しさと若さに憐れみを感じ、彼を殺さなかった。彼らは彼の手を引いて外へ連れ出し、自分たちと一緒に連れて行こうとした。その若者は、自分たちが父や兄弟たちと共に殺されることはなく、不敬虔な野蛮人たちに付き従わなければならないと悟ると、苦々しく泣きじゃくった。　その後、気力を奮い立たせ、あらゆる恐怖を振り払い、彼は勇敢に野蛮人の元へ駆け寄り、その剣を奪い取って、ある野蛮人の肩を斬りつけた。彼はこれにより、野蛮人たちの怒りを自分に向けさせ、殺してもらおうとしたのである。彼の願いは叶った。　怒りに狂った蛮族たちは、彼をバラバラに切り刻んだ。剣の斬撃を受けながらも、彼は微笑みながらこう言った。

「私たちを生きたまま罪人たちの手に渡さなかった主を賛美します」――そして、主のもとで息を引き取った。

私はそのすべてを目撃し、慈悲深く、人を愛する神に、不義な野蛮人たちが私に気づかないよう、そしてそうして聖人たちの遺体を埋葬する者が残るようにと祈った。

殺された聖なる父たちの遺体は、聖なる教会全体を血で満たした。彼らは恐れも悲しみもなく死を受け入れ、自らの運命を喜び、神に感謝していた。　彼らの思いは主に向けられていた。義にかなった生涯を通じて、彼らは自らを聖霊の宮とした。世の虚栄と空しさを軽んじ、ただ神のみに従い、ついに様々な拷問の中で御名のために命を落としたのである。

一方、野蛮人たちは修道士たちを皆殺しにした後、修道院全体を捜索し始め、そこにはあらゆる富が山ほどあるだろうと期待していた。不信心者たちは、聖なる修道士たちがこの世のいかなる物も求めず、肉体に宿りながら天使のようであったことを知らなかった。　これらすべてが起きている間、私は、身に一滴の血も流していなかったにもかかわらず、まるで死人のように横たわっていた。私は、野蛮人たちが宝物を探して枝の山を持ち上げるのではないかと恐れていた。私はしばしばその下から外を覗き、いつになったら彼らが私のところに来て、私を見つけ出し、他の者たちと同じように私を殺すのかと待ちわびていた。　死が目の前に迫り、私は神に、もし御心ならば私を救ってくださるよう祈った。実際、野蛮人たちは枝の束に近づいたが、神は彼らの心と目を曇らせた。彼らはそれを取るに足らないものだと見なし、立ち去った。　その後、亡くなった聖なる父たちを置き去りにし、略奪品も何も見つからなかった彼らは、再び埠頭に戻り、海路で帰路につこうとした。しかし、その場所に着くと、自分たちの船が難破しているのを発見した。というのも、船の警護のために残されていた舵手が、一緒にいた野蛮人に内緒で、船のロープを切断していたからである。　風が船を岸に打ち寄せ、船は岸に激突して大破した。一方、舵手は野蛮人を殺害すると、逃げ出して山中に身を隠した。船を失った野蛮人たちは、どうすればよいか、どうすれば自国へ帰れるのか分からなかった。　絶望と激しい怒りに駆られ、彼らは剣を手に捕虜たちへ襲いかかり、女性や子供を問わず全員を殺し尽くした。その後、火を放ち、すべてのナツメヤシの木を焼き払った。

その間、ファラナ市からは、ライフで聖なる父たちが虐殺されたという噂がすでに伝わっていたため、選りすぐりの戦士たちが600名にも及ぶ大軍を率いてやって来た。これを知った蛮族たちは戦いの準備を整え、日の出とともに海岸で来襲者たちと交戦した。　双方から数多くの矢が放たれ、数で勝っていたファランの住民たちが優勢となり、すでに多くの野蛮人を倒していた。野蛮人たちはもはや生き延びる望みがなかったため、防御に徹し、第九時までの間持ちこたえた。彼らは、多くの負傷者を除いても、ファランの住民八十四人を殺害した。　一方、野蛮人たちは、敵に降伏することも、その場から退くこともなく、一人残らず倒れた。その間、私は少しずつ気力を取り戻し、隠れていた場所から這い出した。殺された聖人たちの遺体を触ってみると、ドムナ、アンドレイ、オリオンの3人を除いて、すでに全員が亡くなっていたことがわかった。 その中でもドムナは、脇腹の重傷により激しい苦痛に苛まれていた。アンドレイは多くの傷を負っていたものの、それほど重くはなかったため、一命を取り留めた。一方、オリオンは全く傷ついていなかった。野蛮人が彼の右脇腹を剣で斬りつけたが、剣は彼の体に全く触れず、衣服を貫いて左側から抜け出てしまった。　野蛮人は、オ

リオンが殺されたと思い込み、彼を置き去りにして他の者たちに向かった。一方、オリオンは殺された者たちの間に横たわり、まるで死んだかのように見えた。やがて立ち上がった彼は、私と共に聖人たちの遺体を巡り、彼らに降りかかった悲劇を嘆き、泣きじゃくっていた。

その後、ファランの住民たちは、野獣や猛禽類に食い荒らされるままに、野蛮人たちの遺体を海岸に残し、仲間の遺体を集めて、泉のある山の麓で泣きながら彼らを葬った。それから彼らは私たちのところへ戻ってきた。　彼らと共に、以前述べたように、聖モーセによって悪霊に取りつかれていた状態から癒やされた彼らの首長ヴェディアンもやって来た。彼と共に教会に入ると、私たちは、まるで獣に引き裂かれた羊のように、地に倒れ伏しているキリストの群れを見て、嗚咽し、胸を叩き、苦々しく泣いた。　尊い長老たちは、敬虔な白髪に飾られ、まるで天使のように若々しく見えた。なぜなら、彼らの徳高い生き方が、朝の暁の光のようにその顔に輝いていたからである。　キリストのしもべたちと殉教者たちは、恐ろしく重傷を負って横たわっていた。ある者は肩から腹にかけて傷を負い、別の者は　のように真っ二つに切り裂かれて横たわっていた。ある者は首を切り落とされ、ある者は目をえぐり出され、三番目の者は手足を切り落とされ、四番目の者は心臓に槍を突き刺されていた。　こうして彼らは皆、体にさまざまな傷を負ったまま息を引き取った。生前、彼らは常に主イエスの死をその身に負い、イエスの命が彼らの体の中に現れるようにしていた（IIコリント4:10）。神に喜ばれる生涯を送った後、彼らは最期の瞬間に自らの血によって栄光に包まれ、それによって聖徒の列に加えられた。

私たちは聖人たちの遺体を一か所に集めた。敬虔なヴェディアン公は、他の者たちと共にファランから白い衣を持ち寄り、私たちは三十九人の聖なる父たちを埋葬した。　その時にそこにいた者たちは皆、ヤナギやナツメヤシの枝を手に取り、詩篇を歌いながら、そして苦い涙を流しながら、聖人たちの尊い遺骸を共に運びました。ドムナを除く全員が一緒に埋葬されました。前述のドムナは、ローマ人出身で、まだ生きていましたが、　夕方になると、彼もまた主のもとで息を引き取った。彼は聖なる父たちの隣に埋葬された。キリストの聖なる殉教者たちは、1月14日、午後9時に息を引き取った。アンドレイ神父とオリオン神父は、そこに留まるべきか、去るべきか、決断に迷っていた。しかし、私はこの場所の悲しみと荒涼とした様子に耐えられず、殺害された神父たちへの涙を抑えきれず、こうして皆さんのもとへやってきました。敬虔なヴェディアンは、頻繁に私を訪ね、必要なものをすべて届けることを約束して、そこに留まるよう私を説得しましたが。　父上たち、どうか今度は、あなたがたが私からここでの出来事を詳しく聞いたのと同じように、ここで起こったことすべてを私に話してください。

「我々は」とアモニウスは言った、「ここで起きたことすべてを彼に語り、神の驚くべき御業――ある同じ日、同じ日に、あちらでもこちらでも聖なる父たちが殺されたこと――に驚嘆し、再び皆で共に泣き、嗚咽した。我らの尊き父ドゥラが立ち上がり、こう言った。

「愛する者たちよ！聖なる殉教者たちは、キリストの選ばれた僕として、今やその功績を殉教の冠で刻みつけたことで、まことに天の御国における至福と、偉大な栄光と名誉に値する者となったのだ。　私たちも、先日の災難から生き残った者として、自らの身を守りつつ、彼らに主への祈りを捧げていただき、私たちも彼らと共に天の御国を相続できるよう願いましょう。さあ、今こそ、野蛮人の手から私たちを救ってくださった神に、感謝の賛美を捧げましょう。

彼はこうした言葉で私たち全員を勇気づけ、私たちの心の悲しみを喜びへと変え、私たちの魂を慰めてくれた。

私、罪深いアモニウスは、神の御加護によりエジプトに戻り、この一連の出来事を記しました。私はもはや、かつて「カノヴォ」と呼ばれていた場所には戻らず、メンフィス近郊の小さな修道室

に身を寄せました[1012] 。そこで暮らす中で、私はしばしば畏敬の念を抱きながら、キリストの尊い殉教者たちの苦難と偉業を思い起こしています。　彼らと共に、主が私たちにも御自身の天の御国に与ることを許し、主を愛するすべての人々と共に、言葉に尽くせぬ朽ちることのない恵みを享受させてくださいますように。なぜなら、主にはあらゆる栄光、　栄光と礼拝は、御父なる神、すなわち初めなき御父と、至聖にして善き、命を与える御霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、アーメン。

トロパリオ、第4調：

私たちの父なる神よ、御自身の柔和さをもって常に私たちと共にいてください。御慈悲を私たちから取り去ることなく、この世における彼らの祈りによって、私たちの生涯を導いてください。

コンダク、第2調：

世の噂から逃れ、静かな安息の地へと移り住み、殉教の血と断食の労苦によって冠を授かりました。それゆえ、殉教者たちや聖なる者たちと共に、一つの住まいに住む者たちとして現れました。

シナイとライフェにおける聖なる父たちの二度目の殉教

記念日：1月14日

シナイの聖なる父たちに対する最初の迫害から長い年月が過ぎ、再び、聖ニロス・ポストニクスの時代に、野蛮人たちがシナイ山を襲撃した。　彼らは、紅海からアラビアとエジプトの間を経てヨルダン川に至るまで広がる砂漠を遊牧し、都市や家屋ではなく、天幕の中で暮らしていた。場所から場所へと移動しながら、彼らは良質な水と家畜の牧草地が見つかる場所では、より長い期間、陣を張って滞在した。　彼らは生計を立てるために、何らかの職人仕事や商売、あるいは農業に頼るのではなく、獣の狩猟、そして主に強盗によって生計を立てていた。剣や弓、槍で武装した彼らは、他人の集落を襲撃し、道中で強盗を働くことだけに専念していた。

神のためにシナイ砂漠での隠遁生活を選んだ聖なる父たちは、ある者は洞窟や岩の裂け目に、ある者は水源の近くに建てられた小さな小部屋に、またある者は教会のそばで暮らしていた。　彼らの食料は、生の根菜やナツメヤシ、そしてその地域で採れる野菜であった。　彼らのうち、パンを口にする者はほとんどいなかった。というのも、彼らは極めて節制した生活と厳しい断食の中で過ごしていたからである。ある者は1日おき、あるいは2日、3日に一度食事をとったが、週にたった一度だけ、衰弱した肉体を養うために食事をとる者さえいた。　彼らの生活は皆、天使のそれに似ていた。まるで自分の肉体を忘れているかのように、彼らは自らの魂を大切にし、ただ主を喜ばせることだけを考えていた。彼らは熱心に、そして情熱を込めて主に仕え、昼夜を問わず主を賛美した。　絶え間なく祈りを捧げ、詩篇を詠みながら、彼らは皆、日曜日に教会に集まり、一晩中祈りを捧げた後、朝に聖体拝領を行い、その後、再びそれぞれの修道室に戻って沈黙を守っていた。

その中には、聖ニロス・ポストニクもいた。　以前、彼はコンスタンティノープル（ツァールグラード）で[1013] の教区長を務め、誠実な夫婦生活を送り、二人の子供をもうけていた。その後、妻との合意のもと、彼は世俗を離れた。ニルの妻は娘を連れてエジプトへ移り住み、そこである女子修道院に入り、修道者の生活を送った。　一方、至福のニロスは息子のテオドゥロスと共にシナイ山へ

[1012] メンフィス（またはメンフィ）は、古代エジプトの強大な首都であり、中エジプトのナイル川沿い、本流とその支流（都市の西側を流れる）の間に位置していた。

[1013] エパルク――都市または地域の長。

と退隠した。そこで彼は、野蛮人によってもたらされた惨劇を目の当たりにし、後にこの聖なる父たちへの虐殺について記述した。　山で生活する中、聖ニロスは近隣に住む聖父たちを訪ねる習慣があった。ある日、彼は息子と共に山を下り、聖父たちのところへ行ったところ、彼らはちょうど共同の食事の最中だった。その場所の長老である至福のテオドゥルスは、食事の最中に、とりわけ次のように言った。

「果たして、私たちが死ぬまで、もう一度皆でこの食卓を囲むことができるだろうか？」

彼は、迫り来る災難を霊的に予見してそう言ったのである。翌日、早課の後、野蛮人たちが突然、聖地を襲撃した。　狂犬のように、彼らは修道院を取り囲み、荒々しい叫び声で空気を震わせながら、中にいる者たちを恐怖に陥れようとした。その後、彼らは貯蔵庫へと突進した。そこには、断食者たちのために集められたわずかな食料と、修道士たちが過酷な労働に耐えられるよう、冬の間備蓄されていた乾燥野菜が保管されていた。　まず野蛮人たちはこの食料を略奪し、次に司祭たちが集まっていた教会へと殺到し、全員をそこから引きずり出し、彼らのぼろぼろの衣服を剥ぎ取り、高齢の長老たちを殺しやすくするために裸のまま一列に並べた。　前日に自らの死を予言していた聖地の司祭、至福のテオドゥルスに対し、彼らは真っ先に剣の下に頭を垂れるよう命じた。二人の獰猛な風貌の蛮族が、抜いた剣を両脇に構えて彼の両側に立った。剣の下に頭を垂れても、彼は何の恐れも見せず、ただ静かにこう言った。

「主は祝福された！」

二人の蛮族は、次々と彼を斬りつけた。一撃は背骨から顎まで、もう一撃は肩から胸まで貫き、この義人は地面に倒れた。その後、長老と共に暮らしていたもう一人の長老も捕らえられ、殺害された。その長老には、一人の少年が仕えていた。　野蛮人たちはその少年に対し、散らばった果物を拾うよう命じた。その際、彼らはあたかも、奉仕に適した者として彼を容赦しようとしているかのような素振りを見せた。しかし、少年が身をかがめて果物を拾い始めると、後ろに立っていた野蛮人の一人が、気づかれないように剣を抜き、少年を激しく斬りつけ、殺害した。

他の修道士たちが殴打されている最中、野蛮人の中には、明らかに神からの特別な導きによって、他の修道士たちに逃げるよう手で合図を送った者たちがいた。体力が強く、走ることができた者たちは、実際に走り出し、谷を越えて野蛮人にとって立ち入りにくい山へと向かった。　力を振り絞って、至福のニロスも彼らと共に逃げ出し、こうして　死を免れた。一方、彼の息子テオドゥルスは野蛮人たちの手に残された。彼は非常に美男子であったため、彼らは彼を殺さず、縛り上げて連れ去り、神の代わりに崇めていた「朝の暁」への生贄として捧げるつもりだった。　真の神を知らなかった彼らは、偶像にも拝礼せず、異教の神々を誰一人として崇めなかった。彼らはただ朝の暁にのみ仕え、常に最良の戦利品をそれに捧げ、とりわけ、捕虜となった若者たちの中で最も美しい者をその栄光のために生贄として捧げることを好んだ。その目的のために、彼らは聖ニロスの息子をも生かしておいたのである。

近隣にある他の修道院も略奪し、各地で多くの聖なる父たちを殺害した後、野蛮人たちは去っていった。

ニロス・ポストニクは、山の頂上から息子が捕虜として連れ去られる様子や、聖なる父たちの残酷な死を目の当たりにし、慰めようもなく泣き崩れ、涙ながらにこう語った。

――ああ、至福なる、三度も至福なる父たちよ！　今や、あなたがたの禁欲の労苦はどこへ行ったのか？　絶え間ない苦難の耐え忍びはどこへ行ったのか？　あなたがたの多くの功績に対して、冠は授けられたのか？　これが長きにわたる修道生活の報いなのか？　まさか、あなたがたは目の前の道を無駄に歩んできたというのか？　美徳のために災難に耐えることは、果たして正当なことなのか？　まことに、あなたがたが殺されたとき、神の摂理はあなたがたを見捨て、正義は殺人者たちに対してあなたがたの無実を守りませんでした。むしろ、不浄な手が聖なる御体に刃を向けることを許され、不義は勝利を誇り得てしまったのです。　なぜ、荊の茂みはかつての炎を燃え上がらせず、不

法者たちを焼き尽くさなかったのか（出エジプト記3:2）？　なぜ大地は口を開いて彼らを飲み込まなかったのか。かつてコレイアとその同調者たちが飲み込まれたように（民数記16:32）？　かつてシナイ山から響き渡った、不義な者たちを震え上がらせるはずの恐ろしいラッパの音、稲妻、そして雷鳴（出エジプト記19:16）は、なぜ轟かなかったのか？　――しかし、全能者の報いは遅れた。神は天から殺人者たちを打ち倒すこともなく、また、殺されようとしている者たちを全能の御手によって救い出すこともなかった――それは、異教徒たちが奇跡を目の当たりにして、神の無敵の力を知るためであった。 かくして、聖なる先祖たちは、言葉を持たない犠牲のように無力なまま、[1014] の藪の中で、まさに律法が授けられたその山の上で倒れた。エジプト人を海に沈め、海の底に彼らの墓を用意した（出エジプト記14:28）あの力は、その時どこにあったのか？　イスラエルの敵を雹で打ち倒し、血を流すことも苦労することもなく、御自分の民に勝利をもたらしたあの力（ヨシュア記10:11）は、どこにあったのか？ ダニエルに害が及ばぬよう、獅子の口を閉ざし（ダニエル書6:16）、バビロンの若者たちのために火の勢いを鎮め、それによって彼らの敬虔さを明らかにされた（ダニエル書3:24）全能の神は、その助けをどこに隠されたのでしょうか？　どうして主は、あたかも彼らが主の助けに値しないかのように、彼らを無防備なままにしておき、御自身のこれらのしもべたちの美徳を隠すことができたというのでしょうか？

この聖人は、心の痛みと深い悲しみゆえにそう語ったのである。激しい苦しみによって打ちのめされた魂は、時に思慮なく多くのことを口にしてしまう傾向がある。　なぜなら、神の助けはしばしば義人たちを見捨て、彼らを迫害者たちの手に委ね、様々な苦しみや不当な死へと導くことがあるからです。それは、彼らの徳が金のように精錬され、彼らの信仰が灯火のように輝き、それによって彼らが天においてより大きな報いを受けるにふさわしい者となるためなのです。　疑いなく、これらの尊者たちも、以前に選ばれた先人たちの父たちと共に、聖なる殉教者の列に加えられ、今やキリストの御国において栄光に輝いている。

夕暮れが迫ると、聖ニールと彼と共に生き残った者たちは、殺害された聖人たちの遺体を埋葬するために、あえて山を下りた。彼らは、長老テオドゥルがまだ息をしていて、かろうじて言葉を交わすことができる状態であるのを見つけた。彼らは一晩中彼のそばに座り、涙を流した。すると、長老は彼らにこう言った。

「私たちを襲ったこの災難を見て動揺してはならない。サタンは、神に『御心に適おうとする者たちを誘惑させてください』と願い求めるのが常だからだ。同様に、彼はヨブを災難で打ちのめす許可を求め、その際、ヨブの子供たちまでも滅ぼしてしまったのだ。」　しかし、苦行を授ける主は、なぜ御自身の苦行者たちを敵の手に委ねるのかをご存知である。それは、忍耐強い苦難に耐える者たちに、最も偉大な報いを与えるためである。　もし主がヨブに、彼が失ったものの二倍を報いた（ヨブ42:10）のであれば、主を愛し、主のために苦しむ者たちには、比べものにならないほど大きなものが待っている――*「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*（Iコリント2:9）。

そう語り、周囲の人々に別れを告げた後、長老は息を引き取り、他の殺害された修道士たちと共に、日の出前に埋葬された。その間、　の野蛮人から逃れてきた一人の若者が修道院に現れた。彼はボヤリン・マゲドンの奴隷であり、当時、国家統治の用事でたまたまこの地を訪れていたのだった。　このボヤリンは、道中で息子と共に野蛮人たちに捕らえられていた。彼らは二人を略奪した後、まず父親の目の前で息子を殺害し、続いて彼自身をも殺害した。　一方、そのボヤリンの奴隷の一人であった若者は、逃げ延びて荒廃した修道院に駆け込んだ。まるで追われて追いつかれそうであるかのように、恐怖に震えながら。聖ニロスは、この若者にどうやって逃げることができたのかと尋ねた。すると彼はこう語った。

[1014] クピナ――とげのある低木。これにちなんで、その低木に覆われたシナイ山もその名で呼ばれている。

「私はあなたの息子と一緒に縛られていました。昨日、野蛮人たちは互いに話し合い、相談し始めました――彼らの言葉を理解している捕虜の一人が私に密かに教えてくれたのですが――夜が明けると、夜明けの光に私たち二人――私とあなたの息子――を犠牲に捧げるつもりだったのです。そのために、彼らはすでに石で祭壇を築き、その上に薪を積んでいました。　私はこのことをあなたの息子に伝え、もし逃げ出さなければ、もう二度と日の出を見ることはできないだろうと告げた。しかし彼は、捕まることを恐れてその場に留まり、こう言った。

「もしそれが神の御心であるならば、たとえ誰かが最も険しく人知れぬ場所に身を隠したとしても、死を免れ、身を隠すことは不可能だ」

私は真夜中、野蛮人たちが夕方からひどく酔っ払ってぐっすり眠っている隙に、私を縛っていた縄を解き、蛇のように這って彼らの陣営の遥か彼方まで抜け出し、それから立ち上がって猛然と走り出し、恐怖に駆られてまるで翼を生やしたかのように駆け抜けた。　彼らが私の逃走に気づき、追いかけてきて追いつかれるのではないかと恐れていた。今でもなお、その恐怖と戦慄から逃れることはできない。野蛮人たちが私の目の前で他の人々に加えた残酷な拷問が、今も鮮明に脳裏に焼き付いており、まるで今この瞬間も自分の目でそれを見ているかのようだ。

そして、その若者は多くの聖なる父たちが殺害されたことについて語った。

「あるのどかな場所――水があった場所で――野蛮人たちは休息のために立ち止まった」と彼は語った。　すると、彼らは山の中に小さな洞窟を見つけた。そこへ駆け寄ると、そこから威厳のある老僧を引きずり出し、山から引きずり下ろして石で打ち殺した。その後、さらに少し進むと、痩せて顔色の悪い若い修道士を捕らえ、石で打ち殺した。　その後、彼らは森が鬱蒼と生い茂る場所に出くわし、そこには小さな洞窟があり、一人の隠者が身を隠していた。彼は年齢こそ若かったが、その魂の偉大さにおいては老成していた。野蛮人たちが彼に出てきて衣服を差し出すよう要求すると、隠者はこう答えた。

「私が生涯を過ごしてきたこの住まいを、私の棺としてください。ここで私を殺してください。しかし、これまで一度も見たことのない自分の裸を見たくないため、服は脱ぎません。私を殺す時に、あなたたち自身でそれを脱がせてください。そうすれば、私は死んでおり、自分のことなど何も知らなくなるでしょう。」

野蛮人たちは再び彼に詰め寄り、その荒野にある秘密の修道院の場所を明かすよう要求し、そうすれば命を助けると約束した。しかし、彼はこう答えた。

「聖なる人々が住む場所を知ってはいるが、神の僕たちを裏切る者にはなりたくないので、あなたたちには教えはしない。」

この隠者の気概と勇気に、不信心者たちは激怒し、洞窟に侵入して、剣で彼をバラバラに切り刻んだ。さらに砂漠の奥へと進んだ彼らは、三人の修道士に出くわすと、彼らに襲いかかり、剣で殺害した。　その後、彼らは遠くから、互いに少し離れた場所に立つ二つの修道院を目にした。二手に分かれてそこへ向かったが、そこで彼らが何をしたのか、またどの修道士を殺したのか、それについては私は知らない（そう語ったのは、逃げ延びたあの若者だった）；　私が遠くから目撃したのは、一人の修道士が逃げ、野蛮人たちが追いかけて矢を放ち、彼を撃ち抜く様子だけだった。その後、彼が力尽きて倒れると、彼らは剣や槍で彼を殺害した。その翌夜、私は先ほどお話しした通り、逃げ出した。あなたの息子の行方は、神のみぞ知る。　私は彼を生かしておいたが、生きる望みはない。なぜなら、夜明けが来れば、彼は必ず犠牲として捧げられ、死ぬ運命にあったからだ。

これを聞いて、聖ニロスは悲しみに打ちひしがれ、息子の死を嘆き泣いた。何よりも彼を苦しめたのは、息子が不信心者たちによって生贄として殺されなければならないということだった。彼は次のような言葉で神に祈り求めた。

「わが主よ、先祖たちの神よ！　あなたを産み出された聖母マリアのため、あなたの慈しみのゆえに――どうか、わが子が野蛮人の手によって滅びることを許さないでください！」

そして神は、その特別な御摂理によって、少年テオドゥラスを無傷のまま守られた。野蛮人たちは日の出までぐっすりと眠り続けていた。　目を覚まして、明けの明星がすでに沈んでおり、生贄として残されていた少年の一人が逃げ出したのを見て、彼らはいつもの生贄の儀式を行うことをやめ、残った少年を自分たちのところへ連れ去った。　一方、ファランの住民たちは、アガリアの領主アマンのもとへ使者を送り、彼の配下の盗賊たちが和平条約に違反して修道士たちを襲撃し、彼らに甚大な被害を与えたと訴えた。　その頃、聖ニールは生き残った修道士たちと共に荒野へと向かい、殺害された聖人たちの遺体を探し出し、埋葬しようとした。　すると、ベフラムではプロクルスが、ゲフェではイパティオスが殺害されており、イサクはサライルという名の修道院で殺され、マカリオスとマルコスは隣の荒野で、ベニヤミンはエリムの向こうで、エウセビオスはフォレで、イリヤはアゼで殺害されていたことが判明した[1015]；最後のイリヤは、まだ息をしている状態で発見された――彼らは彼を修道院の独房に運び込んで安置し、自分たちは他の者たちの埋葬のために戻った。しかし戻ってみると、彼もまた水の入った器のかたわらで息を引き取っていた。多くの傷のために渇きに苦しんでいた彼は、水をひと口飲んだ途端、その場で倒れて死んでしまったのである。　見つけられた者全員を埋葬した後、彼らはファランへ向かい、アガリアンの公爵から派遣された使者がどのような知らせをもたらすかを確認した。彼らが街に入ろうとしたその時、公爵からの平和的な使者を伴った急使たちも同時に戻ってきた。　その書簡の中で、王は、このような悪行を敢行した強盗たちを直ちに処罰し、死刑に処することを約束していた。また、ファランの住民に対しては、恐れることなく王のもとへ赴き、生き残っている捕虜を身代金なしで連れ帰るよう命じていた。　ファランの住民たちは集まり、アガリアの公爵のもとへ向かった。彼らと共に、聖ニロスも、自分の息子の安否――捕虜として生きているのか、それともすでに野蛮人の手によって命を落としたのか――を知るために同行した。そして彼は、息子が生きていることを知った。息子はエメスという町に売られていた[1016]、その町の大司教が彼を身代金で買い戻し、自分の聖職者にしていたのである。これらすべてについて、聖ニロス・ポストニク自身、自身の説教の中で詳しく語っている。その地に着くと、聖ニロスは息子が無事で健康であることを確認した。　これに大いに慰められた彼は、神に感謝した。司教は彼を愛情をもって迎え入れ、長老の位を受けるよう説得し、その後、聖ニロスと息子のテオドゥロス両名を、栄誉をもって自身の住処へと送り出した。　彼らはシナイ山、かつての居住地へと向かい、そこで長きにわたり暮らした[1017]。そして、主イエス・キリストに熱心に仕え、やがて聖なる父たちの列に加わり、天において主の御前に立つ栄誉に浴し、永遠に神を賛美した。アーメン。

聖ニナ（使徒に等しい）の生涯――イヴェリアの伝道者

記念日：1月14日

イヴェリアおよび全東方正教会において今なお守られている敬虔な伝承によれば、　イヴェリア（グルジアとも呼ばれる[1018]）は、無原罪の聖母の御領地である。神の特別な御心により、聖母はそこで人々の救いのために、御子であり主であるイエス・キリストの福音を宣べ伝えるという使命を授かったのである。

[1015] ここでは、紅海の東岸にあるファランの砂漠およびシナイ半島の近郊の地域を指す。

[1016] エメサは、地中海に注ぐオロンテ川の東に位置するシリアの都市である。

[1017] 聖ニロスと聖テオドゥルスは5世紀に安らかに息を引き取った。彼らの遺体はユスティヌス2世皇帝によってコンスタンティノープルに移され、オルファノトロフィオ（孤児院）内の聖使徒教会に安置された。

[1018] イヴェリア、すなわちグルジアは、ザカフカズ地方にある国であり、ロシアへの編入（1801年1月18日）以前は独立した王国であり、時代によって国境が異なっていた。　狭義において、現在「グルジア」という名称は、グルジア人が人口の大部分を占めるティフリス県を指す場合が最も多い。

聖ステファノス・スヴィャトゴレツは、私たちの主イエス・キリストが天に昇られた後、弟子たちはイエスの母マリアと共にシオンの上階の部屋に留まり、キリストの命令――エルサレムを離れず、主からの約束を待つこと――に従って、慰め主を待ち望んでいたと語っている （ルカ24:49；使徒1:4）。使徒たちは、神によってどの国で福音を宣べ伝えるよう任命されるかを確かめるために、くじを引くことにした。聖母マリアはこう言われた。

「私も皆さんと一緒にくじを引きたい。そうすれば、私も分け前がないままにはならず、神が私に示してくださる国を得ることができるから。」

聖母マリアの御言葉に従い、彼らは畏敬と畏怖の念を抱きながらくじを引いた。その結果、聖母マリアにはイヴェリアの地が割り当てられた。

このくじを喜びをもって受け取った聖母マリアは、聖霊が炎の舌の形で降臨すると、直ちにイヴェリアの地へ向かおうとされた。しかし、神の御使いは彼女にこう言った。

「今はエルサレムを離れるな。しばらくの間、ここに留まりなさい。くじによってあなたに割り当てられたその地は、やがてキリストの光によって照らされ、あなたの支配がそこに続くことになるだろう。」

ステファン・スヴィャトゴレツはこのように語っている。イヴェリアの啓蒙に関するこの神の定めは、キリストの昇天から三世紀を経て成就し、その成就者となったのは、疑いようもなく、至福の聖母マリアであった。 定められた時が過ぎると、御母は御自身の祝福と助けをもって、聖女ニーナをイヴェリアへの布教へと遣わされた。

聖ニナはカッパドキアで生まれ、高貴で敬虔な両親――聖大殉教者ゲオルギオスの親族であるローマ総督ザヴロンの娘であり、エルサレム総主教の妹であるスザンナ――の唯一の娘であった。12歳の時、聖ニナは両親と共に聖都エルサレムを訪れた。そこで、神への愛に燃え、修道生活を通じて神に仕えたいと願った父ザヴロンは、妻との合意のもと、エルサレムの至福の総主教から祝福を受けた。 その後、幼い娘ニナに涙ながらに別れを告げ、彼女を孤児の父であり未亡人の守護者である神に託すと、彼は去ってヨルダン砂漠に身を隠した。そして、この神に愛された人の修行の地も、その死の地も、誰にも知られぬままとなった。 聖ニナの母スザンナは、彼女の兄である総主教によって聖堂にディアクニサとして任命され、貧しい女性や病める女性たちに奉仕することとなった。一方、ニナは敬虔な老女ニアンフォレのもとで育てられることになった。 この聖なる乙女は、非常に優れた才能に恵まれており、わずか2年の間に、神の恵みの助けにより、信仰と敬虔の規範を理解し、しっかりと身につけた。 彼女は毎日、熱意と祈りを込めて聖書を読み、人々の救いのために十字架の苦しみと死を耐え忍ばれた神の御子キリストへの愛に心を燃やしていた。 彼女が、救い主キリストの磔刑や、その十字架の周りで起こったすべての出来事について記された福音書の物語を涙ながらに読んでいるとき、彼女の思いは主のキトンの行方に留まった。

「神の子のこの地上のポルフィラは、今どこにあるのでしょうか？」と彼女は師に尋ねた。「これほど偉大な聖遺物が、地上から失われてしまったなどということはあり得ないはずです。」

そこでニアンフォラは聖ニナに――彼女自身が伝承から知っていたことを―― すなわち、エルサレムの北東にはイヴェリアという国があり、その中にムツヘトという都市[1019] があり、キリスト

[1019] ムツヘトは、グルジアの古都であり、現在はティフリス県ドゥシェティ郡にある小さな集落である。アラグヴァ川がクル川に合流する地点に位置し、ティフリスから北西へ20ヴェルスタの距離にあり、南コーカサス鉄道およびグルジア軍用道路の駅がある。 ムツヘトは4世紀初頭にはすでに存在しており、5世紀末にヴァフタング・グルグ＝アスラン王が首都をティフリスに移すまで、グルジアの統治者の居城であり続けた。同世紀、ムツヘトは「ムツヘトのカトリコス」の称号を持つ総主教の居城となった。 ムツヘトは何度も敵の侵攻を受け、町は根こそぎ破壊され、その結果、完全に荒廃してしまった。かつてのムツヘトの栄華を今に伝える遺構としては、12使徒に捧げられた古代の大聖堂とサムタヴリ教会が挙げられる。

の磔刑の際にくじ引きでその衣を手にした兵士によって、キリストのキトンがまさにそこへ持ち去られたということ（ヨハネ19:24）を伝えた。　ニアンフォラはさらに、この国の住民である「カルトヴェリ」[1020]、また彼らと隣接するアルメニア人、そして多くの山岳部族が、今なお異教の迷いと不敬虔の闇に沈んだままであると付け加えた。

聖ニナの心には、この老女の言葉が深く刻み込まれた。彼女は昼夜を問わず、至聖なる聖母マリアへの熱烈な祈りを捧げた。聖母が、彼女にイヴェリアの地を目にする恵みを授け、聖母の御手によって織り上げられた、聖母の愛する御子である主イエス・キリストのキトンを探し出し、それに口づけをさせ、　聖母ご自身が指で織り上げられた、愛する御子である主イエス・キリストのキトンを探し出し、それに口づけをすることが許されるよう、また、キリストの聖なる御名を、キリストを知らないその地の民に宣べ伝えることができるよう、懇願した。そして、至福の聖母マリアは、そのしもべの祈りを聞き入れられた。聖母は夢の幻の中で彼女に現れ、こう言われた。

「イヴェリアの地へ行き、そこで主イエス・キリストの福音を宣べ伝えなさい。そうすれば、あなたは主の御前に好意を勝ち取るでしょう。そして、私があなたの守護者となります。」

「しかし、どうすればよいのでしょうか」と、謙虚な乙女は尋ねました。「私のような弱い女が、これほど偉大な奉仕を果たすことができるでしょうか？」

それに対し、聖母マリアは、ブドウのつるで編まれた十字架をニーナに手渡しながら、こう言いました。

「この十字架を受け取りなさい。それは、目に見える敵も目に見えない敵もすべてから、あなたを守る盾となり、防壁となるでしょう。この十字架の力によって、あなたはあの国で、私の愛する御子であり主である方への信仰という救いの旗を掲げることになるでしょう。*その方は、『すべての人が救われ、真理を知るようになることを望んでおられる』のです*（テモテへの手紙第一 2:4）。」

目を覚まして、自分の手に不思議な十字架があるのを見た聖ニナは、喜びと感極まりの涙を流しながらそれを口づけした。それから、自分の髪でそれを結び、叔父である総主教のもとへ向かった。　至福の総主教は、彼女から聖母マリアの御出現と、永遠の救いについて福音を宣べ伝えるためにイヴェリアの地へ行くよう命じられたことを聞くと、そこに神の御心の明らかな表れを見出し、この若き乙女に福音宣教の偉業へと向かうための祝福を与えることをためらわなかった。　そして、遠い旅に出るのにふさわしい時が来ると、総主教はニナを主の聖堂の聖なる祭壇へと導き、聖職者の手を彼女の頭に置いて、次のように祈った。

「主なる神、我らの救い主よ！　この孤児である乙女を、御自身の神性を宣教するために送り出すにあたり、彼女を御手に委ねます。キリストなる神よ、彼女があなたについて福音を宣べ伝えるあらゆる場所で、彼女の伴侶であり導き手となってくださるよう、お恵みください。また、彼女の言葉に、誰も抗うことも反論することもできないような力と英知をお与えください。　また、至聖なる神の母、聖母マリアよ、すべてのキリスト教徒の助け手であり守護者であるあなたよ、異教の民の間にあって、あなたの御子、私たちの神キリストの福音を宣べ伝えるために、あなたご自身が選ばれたこの乙女を、目に見える敵にも見えない敵に対しても、天からの御力をもって守り給え。　どうか、常に彼女にとっての覆いであり、打ち破ることのできない守りとなってください。そして、彼女があなたの聖なる御心を全うするまで、あなたの慈しみをもって彼女を見捨てないでください！

その頃、聖都から53人の乙女たち――友人同士である彼女たちは、一人の王女リプシミエと、彼女たちの指導者ガイアニアと共に、アルメニアへと旅立った。　彼女たちは、古のローマから、不敬虔な皇帝ディオクレティアヌスの迫害を逃れてきたのだった。その皇帝は、王女リプシミアが処女の誓いを立て、天の花婿であるキリストに身を捧げていたにもかかわらず、彼女と結婚しようとして

[1020] カルトヴェリ人は、本来グルジア人であり、彼らと親族関係にあるコーカサス族の諸民族である。

いた。 聖ニナは、これらの聖なる乙女たちと共に、アルメニアの国境[1021] および首都ヴァガルシャパト[1022] にたどり着いた。聖なる乙女たちは、町の外れ、ブドウの搾り機の上に設えられた小屋に住み着き、自らの手で働きながら生計を立てていた。

まもなく、残忍なディオクレティアヌスは、リプシミアがアルメニアに潜伏していることを知った。 彼は、当時まだ異教徒であったアルメニアの王ティリダトス[1023] へ手紙を送り、リプシミアを探し出してローマへ送るか、あるいは望むならば彼女を妻に迎えるよう求めた。なぜなら、彼女は――と彼は書いた――非常に美しいからである。 ティリダトスの家来たちはすぐにリプシミアを見つけ出し、王が彼女を見たとき、彼女を妻にしたいと告げた。しかし、聖女は大胆にも彼にこう言った。

「私は天の花婿であるキリストと婚約しています。それなのに、あなたのような不信心な者が、どうしてキリストの花嫁に触れるなどということができるのですか？」

不信心なティリダトは、獣のような情欲と怒り、そして恥に駆られ、聖女を拷問にかけるよう命じた。 数多くの残酷な拷問の末、リプシミアは舌を切り取られ、両目をえぐり出され、全身をバラバラに切り刻まれた。聖リプシミアの聖なる友人たち全員と、彼女たちの指導者ガイアニアにも、まったく同じ運命が待ち受けていた[1024] 。

ただ聖ニナ一人だけが、奇跡的な方法で死を免れた。目に見えない手に導かれるように、彼女はまだ咲いていない野生のバラの茂みに身を隠した。仲間たちの運命を目の当たりにして恐怖に打ちのめされた聖ニナは、彼女たちのために祈りを捧げながら天を仰ぎ見ると、上空に明るい光に包まれた天使が、明るい光の帯を腰に巻いて立っているのを見た。 香の立つ香炉を手にし、多くの天の住人たちに付き添われて、彼は天の高みから降りてきた。一方、地上からは――まるで彼を迎え出すかのように――聖なる殉教者たちの魂が昇り、それらは光り輝く天の住人たちの群れに加わり、彼らと共に天の高みへと舞い上がった。

これを見て、聖ニナは泣きながら叫んだ。

「主よ、主よ！ なぜ私を、これらのエヒドナやアスピドたちの間に一人残されるのですか？」

これに対し、天使は彼女にこう言った。

「悲しむな。少し待て。あなたもまた、栄光の主の御国へと迎え入れられるからだ。それは、あなたを取り巻く棘だらけの野生の薔薇が、庭に植えられ、手入れされた薔薇のように、香りのよい花で覆われる時である。」 さあ、今こそ立ち上がって北へ向かいなさい。そこには豊かな収穫が熟しているが、刈り取る者がいないのだ（ルカ10:2）。

この命に従い、聖ニナは一人でさらなる旅路へと出発し、長い旅の末、彼女にとって見知らぬ川のほとり、ヘルトヴィシの集落の近くにたどり着いた。その川とはクラー川であり、西から南東へと流れ、カスピ海に至るこの川は、イヴェリア中部一帯を潤している[1025] 。 川のほとりで、彼女は羊

1021 アルメニアは、クラー川とティグリス川・ユーフラテス川の上流の間に位置する山岳地帯であり、かつてはアラム王にちなんで名付けられたアルメニア人が居住していた。現在、アルメニアはロシア、ペルシャ、トルコに分割されている。

1022 ヴァガルシャパト――かつてはアルメニア王国の首都（ヴァガルシャク王によって建設された）であったが、現在はエリヴァン県エチミアジン郡の村であり、エリヴァン市から18ヴェルスタの距離にある。

1023 ティリダトは286年に即位し、当初はキリスト教徒を激しく迫害していたが、その後、聖殉教者アルメニアのグリゴリウス（記念日は9月30日）によってキリスト教に改宗させられ、それ以来、熱心なキリスト教徒となった。302年、彼の治世下でアルメニア全土がキリスト教に改宗した。

1024 これらの聖なる殉教者たちの記念日は、その死がティリダト王およびアルメニア全土のキリストへの回心の契機となったことを記念して、正教会では9月30日に祝われる。

1025 クーラ川は、コーカサス地方で最も偉大な川であり、源流からアラクス川と合流してカスピ海に注ぐまでの全長は1244ヴェルスタである。

飼いたちに遭遇し、彼らは長い道のりに疲れ果てた旅人に少しの食べ物を与えてくれた。これらの人々はアルメニア語の方言を話していたが、ニーナはアルメニア語を理解していた。それは老女ニアンフォラが彼女に教えてくれたものだった。彼女は羊飼いのひとりに尋ねた。

「ムツヘトという町はどこにあるのですか？ ここから遠いかしら？」

すると、その羊飼いはこう答えた。

「あの川が見えますか？　その川岸を、はるか下流へとたどったところに、偉大な都市ムツヘトがあります。そこでは、私たちの神々が君臨し、私たちの王たちが統治しているのです。」

そこからさらに旅を続ける中、聖なる巡礼者はある日、疲れ果てて岩の上に腰を下ろし、こう考え込んだ。主は彼女をどこへ導こうとしているのか？　彼女の労苦はどのような実を結ぶのだろうか？　そして、これほど遠く、これほど過酷な旅は、果たして無駄にはならないだろうか？　そんな思いにふけりながら、彼女はその場で眠りにつき、夢を見た。そこには威厳ある姿の男が現れた。彼の髪は肩まで垂れ下がり、手にはギリシャ語で書かれた巻物が握られていた。彼は巻物を広げ、それをニナに手渡し、読むよう命じた。そして、彼は突然、姿を見えなくしてしまった。　眠りから覚め、自分の手に不思議な巻物があるのを見て、聖ニナはそこに記された次の福音書の言葉を読み上げた。*「まことに、あなたがたに告げます。この福音が全世界で宣べ伝えられるところでは、彼女の記念として、また彼女がしたことも語られるでしょう」*（女）（マタイ26:13）。　*「男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」*（ガラテヤ3:28）。*「イエスは（女性たちに）言われた。『恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに告げなさい』」*（マタイ28:10）。　*「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのであり、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである」*（マタイ10:40）。*「わたしはあなたがたに、口と知恵とを与える。それによって、あなたがたに敵対する者たちは、誰もそれに反論したり、立ち向かったりすることができない」*（ルカ21:15）。　*「あなたがたが会堂や、役人や権力者の前に引き出されたとき、どう答え、何を話すべきか、あるいは何を言うべきか、心配してはならない。その時には、聖霊が、あなたがたに言うべきことを教えてくださるからである」*（ルカ12:11–12）。*「また、体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*（マタイ10:28）。*「だから、行って、すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らにバプテスマを授けなさい。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。アーメン」*（マタイ28:19–20）。

この神聖な啓示と慰めに支えられ、聖ニナは熱意と新たな熱意をもってその旅を続けた。　道中で過酷な労苦、飢え、渇き、そして野獣への恐怖を乗り越え、彼女は古代カルタリの都市ウルブニセ[1026] に到達した。そこで約一ヶ月間、ユダヤ人の家に身を寄せながら、彼女にとって未知の民の風俗、習慣、言語を学んだ。

ある日、この町のすべての男性、そして近隣からやって来た者たちまでもが、偽りの神々を崇拝するために首都ムツヘトへ向かうことを知った聖ニナは、彼らと共にそこへ向かった。　彼らが街に近づいたとき、ポンペイの橋の近くで、ミリアン王とナナ王妃の行列に出くわした。大勢の民衆に囲まれながら、彼らは街の向かい側にある　の山頂へと向かっていた。そこで、アルマズと呼ばれる無機質な偶像を崇拝するためであった。

正午までは晴天が続いていた。しかし、この日――聖ニーナがイヴェリアの国を救うための使徒としての使命の目的地に初めて到着した日――は、前述の異教の偶像がそこで君臨する最後の日となった。民衆の群れに導かれるように、聖ニーナは山へと向かい、偶像の祭壇がある場所へと向かった。　自分にとって都合の良い場所を見つけると、そこから主たる偶像アルマズを目にした。その姿は、並外れて背の高い人間に似ていた。金メッキを施した銅で鋳造され、金色の鎧を身にまとい、頭

[1026] 伝承によれば、ウルブニシの町は、イアフェトの曽孫にあたるムヘトスの息子ウプレスによって、紀元前2340年に建設されたとされる。

には同じく金色の兜を被っていた。　片方の目はヤコブ石で、もう片方はエメラルドでできており、どちらも並外れた大きさと輝きを放っていた。アルマズの右側にはカツィという名の小さな金の偶像が、左側にはガイムという名の銀の偶像が立っていた。

民衆の群衆は、王と共に、自分たちの神々の前に狂おしいほどの畏敬と戦慄を抱いて立っていた。その間、祭司たちは血の犠牲を捧げる準備を進めていた[1027]。そして、その準備が終わり、香が焚かれ、生贄の血が流れ出し、ラッパと太鼓が鳴り響くと、王と民は、魂のない偶像の前で顔を地面につけてひれ伏した。　その時、聖なる乙女の心は預言者エリヤの熱意に燃え上がった。魂の底からため息をつき、涙を浮かべて天を仰ぎ見ながら、彼女は次のように祈り始めた。

「全能の神よ！　御自身の数多の憐れみによって、この民を、唯一の真の神である御自身を知るよう導いてください。風が地上の塵や灰を吹き飛ばすように、これらの偶像を吹き飛ばしてください。御自身の全能の右の手によって創造し、御自身の神聖な御姿をもって尊ばれたこの民に、憐れみの眼差しを向けてください！　主よ、主権者よ、あなたは御自身の被造物を深く愛し、堕落した人類の救いのために御自身の独り子さえも捧げられました。どうか、これらのあなたの民の魂をも、闇の支配者の破滅をもたらす力から救い出してください。その支配者は彼らの知性ある目を盲目にし、救いへの真の道を見えなくさせています。　主よ、どうか私の目には、ここに誇らしげに立つ偶像たちが完全に打ち砕かれるのを、見させてください。この民も、地の果てに至るまで、あなたが与えてくださる救いを悟り、北も南も共にあなたを喜び祝い、すべての民があなたを礼拝するよう、　唯一の永遠の神、御独り子である私たちの主イエス・キリストを礼拝するようになりますように。御名に永遠の栄光がありますように。

聖女がこの祈りをまだ終えぬうちに、突然、西から雷雲が立ち上り、クーラ川の流れに沿って急速に駆け抜けていった。危険を察知した王と民は逃げ出したが、ニーナは岩の裂け目に身を隠した。雷鳴と稲妻を伴う雲が、偶像の祭壇が立っていたその場所の上で炸裂した。　かつて威風堂々とそびえ立っていた偶像は粉々に砕け散り、神殿の壁も瓦解して塵と化した。さらに、豪雨の激流がそれらを渓谷の底へと突き落とし、川の水が下流へと流していった。こうして、偶像も、それに捧げられた神殿も、跡形もなく消え去った。　一方、神に守られた聖ニナは、岩の峡谷の中で無傷のまま立ち、周囲で突然荒れ狂い始めた自然の猛威を静かに見守り、やがて再び天から輝かしい太陽が照り輝いた。　そして、これらすべては、主の栄光に満ちた変容の日に起こったことである――ファヴォール山で輝いた真の光が、イヴェリアの山々において、異教の闇をキリストの光へと初めて変容させたその日である。

翌日、王も民も自分たちの神々を探したが、無駄だった。神々を見つけられず、彼らは恐怖に駆られ、こう言った。

「アルマズ神は偉大だが、それよりもさらに偉大な別の神がおられ、その方がアルマズ神を打ち負かしたのだ。　まさか、古代アルメニアの神々を恥じさせ、ティリダテス王をキリスト教徒にしたのは、キリスト教の神ではないのか？」――しかし、イヴェリアではキリストについて聞いた者は誰もおらず、彼がすべての神々を超える神であると説く者もいなかった。一体何が起こったのか、そしてこれからどうなるのか？

それから長い時が経った後、聖ニナは旅人のふりをしてムツヘトの街に入り、自らを捕虜だと名乗った。彼女が王の庭園へ向かうと、庭師の妻アナスタシアが、まるで旧知の友であり、かねてより待ち望んでいたかのように、急いで彼女を迎えに出た。　聖人に頭を下げて敬意を表すと、彼女は聖人を自宅へ案内し、その後、聖人の足を洗い、頭に油を塗って、パンとワインを振る舞った。アナスタシアとその夫は、子供がおらず、孤独を嘆いていた　ため、ニナに姉妹のように自分たちの家に住み続けてほしいと懇願した。　その後、聖ニナの希望により、アナスタシアの夫は庭の隅に彼女の

[1027] 偶像への生贄として、乳児や若者までもが捧げられていたという伝承がある。

ために小さなテントを設けた。その場所には、現在もサムタヴル女子修道院の敷地内[1028] に、聖ニナを称える小さな教会が建っている。　聖ニナは、この小屋に聖母マリアから授かった十字架を安置し、そこで昼夜を問わず祈りと詩篇の詠唱に明け暮れました。

この小屋を起点として、聖ニナの輝かしい功績と、キリストの御名の栄光のために彼女が成し遂げた数々の奇跡の連鎖が始まった。イヴェリアにおいて、キリストの教会が最初に得たものは、キリストのしもべを自らの家に迎え入れた敬虔な夫婦であった。　聖ニナの祈りによって、アナスタシアは不妊の苦しみから解放され、後に子宝に恵まれた幸せな家庭の母となっただけでなく、イヴェリアにおいて男性に先駆けてキリストを信じた最初の女性ともなった。

ある女性が、大声で泣き叫びながら、死にかけている自分の子供を街中を運び歩き、皆に助けを求めて叫んでいた。聖ニナは病の子供を受け取ると、葉で整えた寝床に寝かせ、祈りを捧げた後、ブドウのつるで作った十字架をその幼子に掲げ、その後、泣き叫んでいた母親のもとへ、生き生きと元気な姿で子供を返した。

この時から、聖ニナは公然と、そして広く民衆に向けて福音を宣べ伝え、イヴェリアの異教徒やユダヤ人たちに悔い改めとキリストへの信仰を呼びかけ始めた。彼女の敬虔で、義に満ち、貞潔な生活は万人に知れ渡り、人々の視線、耳、そして心を聖女へと引きつけた。　多くの人々――とりわけユダヤ人の妻たち――が、神の御国と永遠の救いに関する新しい教えを、彼女の蜜のように甘い口から聞くために、頻繁にニナの元を訪れるようになり、密かにキリストへの信仰を受け入れ始めた。その中には、カルタリンのユダヤ人の大祭司アビアファルの娘シドニアと、他の6人のユダヤ人女性がいた。　やがてアビアファル自身も、イエス・キリストに関する古代の預言と、それらがメシアであるキリストにおいてどのように成就したかについて、聖ニナが解説するのを聞いた後、キリストを信じるようになった。その後、アビアファル自身は次のように語っている。

「モーセの律法と預言者たちは、私が宣べ伝えているキリストへと導いているのです」と聖ニナは私に語りました。「キリストこそが律法の終着点であり、完結なのです。世界の創造から始まり――私たちの書物にも記されている通り――この素晴らしい女性は、約束されたメシアを通して神が人々の救いのために備えられたすべてのことを私に語ってくれました。　イエスは、預言の予言通り、まことにメシアであり、処女の御子です。嫉妬に駆られた私たちの先祖たちは、彼を十字架に釘付けにして殺しましたが、彼は復活し、天に昇り、再び栄光のうちに地上に来られます。彼は、諸国民が待ち望む方であり、イスラエルの栄光そのものです。　聖ニナは、その御名によって、私の目の前で、神の力のみが成し得る多くのしるしと奇跡を行いました。

聖ニナはこのアビアファルと頻繁に語り合う中で、主のキトンに関する次のような話を彼から聞きました。

「私は両親から、そして両親は彼らの父や祖父から聞いた話ですが、エルサレムでヘロデが統治していた頃、 ムツヘテやカルタリ地方全域[1029] に住むユダヤ人たちは、ペルシャの王たちがエルサレムにやって来て、ダビデの子孫であり、母から生まれ、父を持たない新生児の男児を探しており、彼をユダヤの王と呼んでいるという知らせを受け取った。　彼らはダビデの町ベツレヘムにある粗末な馬小屋でその御子を見つけ、王にふさわしい黄金、癒しの力を持つ没薬、そして芳しい乳香を献げ、御子にひれ伏した後、自国へと帰っていった（マタイ2:11–12）。

[1028] サムタヴルの女子共同生活修道院は、ティフリス県にあり、ドゥシェタ市から31ヴェルスタ離れた、アラグヴァ川がクル川に合流する地点に位置する。

[1029] カルタリニア――これはクラー川流域の国の名称である。カルタリニアはかつて、カヘティと共にイヴェリア王国の構成の一部であった。– ユダヤ人は古くからイヴェリアに居住しており、バビロン捕囚の後、そこに定住した。彼らは自らの慣習を忠実に守り、過越祭の期間にはエルサレムを訪れていた。そこで彼らは、キリストの生涯、その教え、そして奇跡についての話を耳にしたのである。

それから三十年が過ぎた――すると、私の曽祖父エリオズは、エルサレムの大祭司アンナから次のような内容の手紙を受け取った。

「かつてペルシャの王たちが贈り物を携えて礼拝に訪れたあの方が、成人し、ご自身がキリスト、メシア、そして神の子であると説き始めた。

エルサレムに来て、モーセの律法に従って彼に課される死を、この目でご覧になりなさい。」

エリオズが他の多くの人々と共にエルサレムへ向かおうとしたとき、大祭司エリヤの家系に属する敬虔な老女である彼の母は、彼にこう言った。

「行け、わが子よ、王の召しに従って。しかし、お願いだから――彼らが殺そうと企んでいる御方に対して、不信心者たちと手を組んではならない。　その方は、預言者たちが予告したお方であり、賢者たちにとっては謎であり、世の初めから隠されていた秘密であり、諸国民への光であり、永遠の命そのものである。

エリオスはカレニオのロンギヌスと共にエルサレムへ赴き、キリストの磔刑に立ち会った。一方、彼の母はムツヘタに残っていた。過越祭の前日、彼女は突然、まるで釘を打ち込むハンマーの打撃のような感覚を胸に感じ、大声で叫んだ。

「今やイスラエルの王国は滅びた。その救い主であり解放者を死に追いやったからだ。この民は今後、その創造主であり主である方の血の罪を負うことになる。ああ、私がこれより先に死んでいればよかったのに。そうすれば、この恐ろしい打撃を聞くこともなかっただろう！　もうこの地上で、イスラエルの栄光を見ることはできないのだ！」

そう言い終えると、彼女は息を引き取った。一方、キリストの磔刑の場に立ち会っていたエリオズは、くじ引きでそのキトンを手に入れたローマ兵士[1030]からそれを買い取り、ムツヘトへ持ち帰った。　エリオズの妹シドニアは、無事に帰還した兄を歓迎し、母の不思議で突然の死と、その最期の言葉について彼に語った。　そこでエリオズは、キリストの磔刑に関する母の予感を裏付けるとともに、姉に主のキトンを示した。シドニアはそれを受け取ると、涙ながらに口づけをし、その後、それを胸に押し当てた途端、その場で息を引き取った。　そして、いかなる人間の力も、亡くなった彼女の手に握られたこの聖なる衣を引き剥がすことはできなかった――王アデルキー自身でさえも、貴族たちを連れてこの乙女の異例の死を目撃し、彼女の手に握られたキリストの衣を取り上げようとしたが、できなかったのだ。　しばらくして、エリオズは妹の遺体を埋葬し、キリストのキトンも彼女と共に葬った。その埋葬は極めて秘密裏に行われたため、今に至るまでシドニアの埋葬地を知る者は誰もいない。　一部の人々は、その場所が王宮の庭園の中央にあり、そこでは当時から自然に生え、今では木陰を作る杉の木が立っていると推測している。信者たちは四方八方からその杉の木のもとに集まり、ある種の偉大な力としてそれを崇めている。そして、その杉の木の根元の下に、シドニアの棺が確かに安置されているとされている。

この伝承を耳にした聖ニナは、夜ごとにこの杉の木の下へ祈りを捧げに訪れるようになった。しかし、彼女は、その根元に本当に主のキトンが隠されているのかどうか疑っていた。だが、この場所で彼女に見えた神秘的な幻視は、この場所が聖なるものであり、将来名声を博すことになることを彼女に確信させた。　そうして、ある夜、真夜中の祈りを終えた後、聖ニナは次のような光景を目にした。周辺のあらゆる国々から、黒い鳥の群れが王の庭へと集まってきて、そこからアラグヴェ川[1031]へと飛び立ち、その水で身を清めていたのだ。しばらくして、鳥たちは空へと舞い上がったが、その姿はすでに雪のように白くなっていた。そして、杉の枝に降り立つと、楽園の歌声で庭園を満たした。　これは、周辺の民が聖なる洗礼の水によって啓蒙され、杉のあった場所には真の神を称える神殿が建てられ、その神殿において主の御名が永遠に賛美されるという、明らかなしるしであった。

[1030] 主の衣、すなわちヒトンの安置式は、グルジア語で行われる。

[1031] アラグヴァ川は、クラー川の左支流であり、ムツヘタ付近でクラー川に合流する。その長さは100ヴェルストである。

さらに聖ニナは、互いに向き合っていたアルマザ山とザデナ山が、まるで揺れ動いて倒れたかのように見えるのを目撃した。　また、彼女は戦いの音や、まるでペルシャの戦士たちの姿をとって首都に侵入したかのような悪魔の軍勢の叫び声を聞き、さらにホズロイ王の声に似た恐ろしい声が、すべてを滅ぼすよう命じているのも耳にした。　しかし、聖ニナが十字架を掲げ、空中に十字の印を描きながらこう告げた途端、この恐ろしい幻影はすべて消え去った。

「黙れ、悪魔どもよ！　汝らの支配は終わりを告げた。見よ、ここに勝利者がおられる！」

これらのしるしによって、神の御国とイヴェリアの民の救いが近づいていることを確信した聖ニナは、絶えず民に神の御言葉を説き続けた。彼女と共に、キリストの福音を宣べ伝えるために尽力したのは、彼女の弟子たち――とりわけシドニアとその父アビアファルであった。　アビアファルは、かつての同信者であったユダヤ人たちとイエス・キリストについて、これほど熱心に、そして執拗に論争したため、彼らから迫害を受け、石打ちの刑に処せられることさえあった。しかし、ミリアン王が彼を死から救ったのである。　そして王自身も、心の中でキリストの信仰について考え始めた。というのも、彼は、この信仰が隣国のアルメニア王国に広まっただけでなく、ローマ帝国においても、コンスタンティヌス帝がキリストの名と十字架の力によってすべての敵を打ち破り、キリスト教徒となり、キリスト教徒の守護者となったことを知っていたからである[1032]。　当時、イヴェリアはローマの支配下にあり、ミリアンの息子バカルはローマに人質として送られていた。そのため、ミリアンは聖ニーナが自身の都でキリストを宣教することを妨げなかった。 キリスト教徒に対して 憎悪を抱いていたのは、ミリアンの妻であるナナ女王だけであった。彼女は残酷な女性であり、無機質な偶像を熱心に崇拝する者で、イヴェリアに女神ヴィーナスの像を建立した[1033]。 しかし、「弱き者を癒やし、乏しい者を満たす」[1034] 神の恵みは、やがてこの精神的に病んでいた女性をも癒やした。 女王は病に倒れ、医師たちが懸命に治療すればするほど、病状は悪化し、女王は死の淵に立たされた。その時、女王の側近の女性たちは、事態の深刻さを悟り、彼女に懇願し始めた。それは、旅人ニナを呼び寄せてほしいという願いだった。ニナは、自身が説く神への祈りだけで、あらゆる病や不調を癒やす力を持っていたからである。　女王はこの旅人を自分の元へ連れてくるよう命じた。聖ニナは、女王の信仰と謙虚さを試すように、使者にこう言った。

「もし女王陛下が健康になりたいとお望みなら、この天幕へお越しください。そうすれば、私の神であるキリストの力によって、ここで癒やされることを私は信じています。」

女王はこれに従い、担架で聖女の天幕へと運ばれるよう命じた。その後ろには、息子のレフと大勢の民衆が続いた。　聖女ニーナは、病の女王を自分の葉のベッドに寝かせるよう手配すると、ひざまずき、魂と肉体の医者である主に向かって熱心に祈りを捧げた。その後、自分の十字架を取り、それを病人の頭、足、そして両肩に置き、こうして彼女に十字の印を施した。　彼女がこれを終えるやいなや、女王はたちまち病床から立ち上がり、健康を取り戻した。主イエス・キリストに感謝を捧げた女王は、その場ですぐに聖ニナと民衆の前で――そしてその後、自宅では夫であるミリアン王の前で――キリストこそが真の神であると大声で告白した。　彼女は聖ニナを親しい友とし、常に語り合う相手とし、その聖なる教えによって自らの魂を養った。その後、女王は賢明な長老アビアファルとその娘シドニアを身近に迎え入れ、彼らから信仰と敬虔さについて多くのことを学んだ。　ミリアン王自身（ペルシャ王ホズロイの息子であり、グルジアにおけるササン朝王朝の始祖）は、キリストを神として公に告白することをまだ躊躇しており、それどころか、熱心な偶像崇拝者であろうと努めていた。　ある時、彼はキリストの信者たち、そして彼らと共に聖ニナまでも抹殺しようとさえ企て

[1032] コンスタンティヌス大帝は306年から337年まで在位した。

[1033] ヴィーナス――ギリシャ・ローマ神話の美と愛の女神。彼女を称える祭典では、極度の放縦と淫乱な行いが繰り広げられた。

[1034] 司祭の秘跡の成就の祈りより。

たが、そのきっかけは次の出来事であった。　ペルシャ王の近親者であり、学識豊かでゾロアスター教の熱心な信奉者である人物が、ミリアンの元を訪ねてきたが、しばらくして重度の悪霊に取り憑かれた病に陥ってしまった。　ペルシャ王の怒りを恐れたミリアンは、使者を介して聖ニナに、王子の元へ来て彼を癒やすよう懇願した。聖ニナは、王の庭園の中央にある杉の木の下に病人を連れてくるよう命じ、彼を東を向かせて両手を天に掲げさせ、次の言葉を三度繰り返すよう命じた。

「サタンよ、お前を拒絶し、神の子キリストに身を委ねる！」

取り憑かれた者がそう言い終えるやいなや、悪霊は彼を激しく揺さぶり、まるで死人のように地面に倒した。しかし、聖女の祈りに抗うことはできず、悪霊は病人の体から出て行った。王子は回復すると、キリストを信じるようになり、キリスト教徒として自国へ戻った。　ミリアンは、この王子がいなくなったことに対して、彼が死んだ場合以上に恐怖を覚えた。というのも、ミリアンの屋敷で親族がキリストに改宗したことを、火を崇拝するペルシャ王の怒りを恐れていたからである。王は、この件を理由に聖ニナを死刑に処し、町にいるすべてのキリスト教徒を根絶やしにすると脅し始めた。

キリスト教徒に対するこのような敵意に駆られたミリアン王は、気分転換に狩りをするため、ムクランの[1035]森へと向かった。そこで同行者たちと語り合う中で、彼はこう言った。

「我々は、キリスト教の魔術師たちに、この地で彼らの信仰を説くことを許してしまったため、神々の恐ろしい怒りを招いてしまった。　とはいえ、まもなく私は、十字架とそこに磔にされた方を崇める者たちをすべて剣で殲滅してやる。王妃にもキリストを否定するよう命じるつもりだ。もし彼女が従わなければ、他のキリスト教徒たちと共に彼女をも滅ぼしてやる。

そう言い放つと、王は断崖絶壁のトホティ山の頂上へと登った。すると突然、明るい昼間が真っ暗な闇へと変わり、かつてアルマズの偶像を倒したのと同じような嵐が吹き荒れた。稲光の閃光が王の目を眩ませ、雷鳴は彼の随行者たちをすべて散り散りにした。 絶望した王は、 自らの神々に助けを乞い求めたが、神々は声を上げず、その声にも耳を傾けなかった。頭上に生ける神の懲罰の手を感じた王は、こう叫んだ。

「ニナの神よ！　わが目の前の闇を払いのけてください。そうすれば、私はあなたの御名を告白し、賛美いたします！」

するとたちまち周囲が明るくなり、嵐も静まった。キリストの御名一つに宿るその力に驚嘆した王は、東の方角に向き直り、両手を天に掲げて、涙ながらにこう叫んだ。

「あなたのしもべニーナが宣べ伝える神よ！ あなたこそ、まことにすべての神々の上に立つ唯一の神です。今、私はあなたからの私への偉大な慈しみを目の当たりにし、私の心は喜びと慰め、そしてあなたとの親密さを感じています、祝福された神よ！
この場所に、私は十字架の木を立てよう[1036] 。そうすれば、今、あなたが私に示してくださったしるしが、永遠に記憶されることになるでしょう！

王が首都へ戻る途中、街の通りを歩いているとき、彼は大声でこう叫んだ。

「すべての民よ、ニナの神、キリストを賛美せよ。彼は永遠の神であり、彼のみが永遠にすべての栄光にふさわしいのだ！」

王は聖ニナを探し求め、こう尋ねた。

「私の救い主である神を信じるあの巡礼者は、どこにいるのか？」

その頃、聖女は自分の天幕の中で夕べの祈りを捧げていた。王と、王を迎えに出た王妃は、大勢の民に囲まれてその天幕にたどり着き、聖女を見ると、その足元にひれ伏した。その時、王はこう叫んだ。

[1035] ムツヘタ市の北西20ヴェルストの地点。

[1036] トホティ山の頂上には、現在もミリアンによって建立された教会が建っている。

「おお、わが母よ！　私を教え導き、あなたの偉大なる神、すなわち私の救い主の御名を呼び求めるにふさわしい者にしてください！」

それに対し、聖ニナの目からは抑えきれない喜びの涙が溢れ出た。その涙を見て、王と王妃も泣き出し、続いてそこに集まっていた民衆も皆、声をあげて泣き出した。この出来事の目撃者であり、後にその記述者となったシドニアは、次のように語っている。

「この神聖な瞬間を思い出すたびに、霊的な喜びの涙が思わず私の目からこぼれ落ちるのです。」

ミリアン王のキリストへの帰依[1037]は断固たるものであり、揺るぎないものでした。ミリアンは、当時のギリシャやローマにとってのコンスタンティヌス大帝がそうであったように、グルジアにとってそのような存在でした。　主はミリアンを、すべてのイヴェリアの民の救いの指導者として選ばれた。ミリアンは直ちに、ギリシャのコンスタンティヌス王のもとへ使節を派遣し、民に洗礼を授け、キリストの信仰を教え、イヴェリアに神の聖なる教会を設立し確立するために、司教と司祭を派遣してほしいと要請した。　一方、使節たちが司祭たちを連れて戻ってくるまでの間、聖ニナは絶え間なく民にキリストの福音を教え、それを通じて魂の救いと天の御国を受け継ぐための真の道を示した。また、彼女は彼らにキリスト・神への祈りを教え、こうして聖なる洗礼を受ける準備を整えた。

王は、司祭たちが到着する前から神の聖堂を建設することを望み、聖ニナの指示に従って、自身の庭園内、すなわち前述の偉大な杉が立っていた場所にその場所を選び、次のように語った。

「この朽ちゆく、はかない庭園が、朽ちることのない霊的な庭園へと変わり、永遠の命の果実を実らせるように！」

杉は伐採され、その六本の枝から六本の柱が彫り出され、それらは何の苦労もなく、建物内の定められた場所にしっかりと据え付けられた。　ところが、大工たちが杉の幹そのものから削り出した七本目の柱を、神殿の土台に据えようと持ち上げようとしたとき、誰もが一斉に驚愕した。いかなる力を使っても、その柱をその場から動かすことができなかったからである。　夕暮れが迫ると、悲しみに沈んだ王は、これが一体何を意味するのかと考えながら自宅へと帰った。民衆も散っていった。ただ聖女ニーナだけが、弟子たちと共に一晩中、建設現場に残り、祈りを捧げながら、切り倒された木の切り株に涙を流していた。　早朝、聖女ニーナの前に、炎の帯を腰に巻いた不思議な若者が現れ、彼女の耳元で三つの神秘的な言葉を囁いた。それを聞いた聖女は地面に倒れ込み、彼に頭を下げた。その後、その若者は柱に近づき、それを抱きしめると、空高く持ち上げた。 その柱は、 稲妻のように輝き、街全体を照らし出した。王と民衆はこの場所に集まり、　恐怖と喜びの入り混じった気持ちでこの不思議な光景を見つめながら、誰もが、この重い柱が誰にも支えられていないのに、時には肘[1038]の20ほど地上に浮き上がり、時には下がって生えていた切り株に触れるのを不思議に思った。ついに、柱は動きを止め、その場にじっと静止した。　柱の土台の下から、芳香を放ち、癒しの力を持つ香油が流れ出し、様々な病気や傷に苦しむ人々は皆、信仰をもってこの香油を体に塗ると、癒やされた。　ある生まれつき目の見えないユダヤ人は、この光を放つ柱に触れた途端、たちまち目が見えるようになり、キリストを信じるようになって、神を賛美した。　七年間も重い病に伏していたある少年の母親は、彼をこの命を与える柱のもとに連れて行き、聖ニナに彼を癒やすよう懇願し、彼女が宣べ伝えるキリスト・イエスがまことに神の子であると告白した。　聖ニナがその柱に手を触れ、その手を病人の上に置いた途端、少年は即座に回復した。命を与える柱に人々が異例の勢いで集ま

[1037] それは西暦323年以降のことである。多くの年代記には、276年から338年まで、さまざまな年が記されている。ミリアンは263年から342年まで在位した。　ミリアンが司教に関する使節団を派遣したコンスタンティヌス大帝は、東部地域の統治者でありキリスト教迫害者であったリキニウスを廃位した後、323年にローマ帝国の東西両半分の唯一の支配者となった。

[1038] 「ロコート」、あるいは「ラコート」とは、10 1/2ヴェルシュクに相当する長さの単位である。

ったため、王は建築業者に対し、その周囲に柵を設けるよう命じた。　それ以来、この場所はキリスト教徒だけでなく、異教徒たちからも崇敬されるようになった。まもなく、イヴェリア地方で最初の木造の教会堂の建設も完了した。

ミリアン王がコンスタンティヌス帝に派遣した使節団は、帝から大いなる栄誉と喜びをもって迎えられ、帝からの多くの贈り物を携えてイヴェリアへ帰還した。彼らと共に、王の命により派遣されたアンティオキアの大司教エウスタフィオスが、司祭二名、助祭三名、そして礼拝に必要なすべての品々を携えてやって来た。　そこで、ミリアン王はすべての地方総督、軍司令官、そして宮廷の者たちに対し、必ずや首都に集まるよう命じた。彼らが集まると、ミリアン王[1039]、王妃、そして彼らの子供たちは全員、全員の面前で直ちに聖なる洗礼を受けた。　洗礼場は、クレー川にかかる橋の近くに設けられた。そこはかつてユダヤ人エリオズの家があり、その後、異教の祭司たちの神殿があった場所であった。そこで司教は軍司令官や王室の重臣たちに洗礼を授けたため、この場所は「ムタヴァルタ・サナトラヴィ」、すなわち「重臣たちの洗礼槽」と呼ばれるようになった。　その場所より少し下流では、二人の司祭が民衆に洗礼を授けていた。人々は、聖ニナの言葉を心に留めながら、大きな熱意と喜びをもって洗礼を受けにやって来た。「水と聖霊による再生を受けない者は、永遠の命と光を見ることはなく、その魂は地獄の闇の中で滅びてしまう」というその言葉である。　司祭たちは周辺のすべての町や村を巡り、人々に洗礼を授けた。こうして、カフカスの山岳民族――彼らはまだ長い間異教の闇の中に留まっていた――を除き、カルタリ全土はまもなく平和的に洗礼を受けた。ムツヘタのユダヤ人たちも洗礼を受けなかったが、大祭司アビアファルだけは、家族全員と共に洗礼を受けた。彼と共に洗礼を受けたのは、伝承によれば強盗バラバの子孫であるという50のユダヤ人家族であった（マタイ27:17）。　ミリアン王は、聖なる洗礼を受け入れたことへの好意の印として、ムツヘタの上方に位置する「ツィヘ・ディディ」と呼ばれる土地を彼らに贈った。

こうして、神の御加護と、主による福音の宣教の御承認により、アンティオキアの大司教エウスタフィオスは、聖ニナと共に、数年でイヴェリアの国をキリスト教化させた。　ギリシャ語による礼拝の儀式を確立し、ツァレグラードの教会を模して建設されたムツヘタ初の十二使徒に捧げられた教会を奉献し、若きキリストの教会に平和を授けた後、エウスタフィオス大司教はアンティオキアへ戻った[1040]；イヴェリアの司教には、アンティオキア教区に属していた長老ヨハネを任命した。

数年が経過した後、敬虔なミリアン王はコンスタンティヌス帝のもとへ新たな使節団を派遣し、自分の王国において誰も救いの言葉を聞く機会を奪われることがないように、また、恵みあふれる永遠のキリストの御国への門がすべての人に開かれるように、できるだけ多くの司祭をイヴェリアに派遣してくれるよう懇願した[1041]。　また、彼は石造りの教会を建設するために、熟練した建築家をグルジアに派遣するよう要請した。コンスタンティヌス大帝は、聖なる愛と喜びをもって、ミリアンの願いを叶えた。　彼はミリアンの使節たちに、大量の金や銀に加え、当時（西暦326年）すでにコンスタンティヌス大帝の母である聖ヘレナによって発見されていた、命を与える主の十字架の木の一部（台座）を授けた。　また、主の清らかな御手がに釘付けにされた釘の一本も彼らに授けた。さらに、[1042]の十字架、救い主キリストと至聖なる聖母

1039　グルジアの歴史から明らかなように、グルジア人、特に上流階級の人々は、キリスト教に改宗した後も、自らの民族的な名前を変えなかった。

1040　ここで言及されているのは、もちろんシリアのアンティオキアである。これはシリアで最も古く、最も豊かな都市の一つであり、同国の首都でもあった。現在、アンティオキアはトルコにある小さな町となっている。

1041　一方、他の説では、ミリアンがコンスタンティヌス大帝と直接面会し、自らエルサレムへ旅して、主の十字架を称える修道院を建設するため、ロトの奇跡があった場所を懇願したとされている。

1042　これらの計り知れない価値のある贈り物を受け取ったことは、グルジアの年代記には明記されていない時期を示唆している――すなわち、ミリアンの使節団が326年から330年の間にコンスタンティノープルに滞在していたということであ

マリアのイコン、そして教会の礎となる聖殉教者たちの聖遺物も与えられた。　その頃、ミリアンの息子であり後継者であるバクーリイは、人質としてローマに滞在していたが、父のもとへ解放された。

ミリアンの使節たちは、多くの司祭や建築家たちを伴ってイヴェリアへ戻る途中、カルタリ地方の境界にあるエルシェティ村[1043] に最初の教会の礎を築き、この教会のために[1044] 、主の十字架[1045]の釘を残した。 彼らはティフリスから南へ40ヴェルスタ離れたマングリセ村に2番目の教会を建立し、ここに前述の「命の木」の一部[1046] を遺した。 また、ムツヘタには、主の変容に捧げられた石造りの教会が彼らによって建立された。王の希望と聖ニナの指示により、それは王の庭園内、聖ニナの天幕の近くに礎が据えられた。彼女は、この壮麗な教会の完成を目にすることはなかった。　王や民衆から捧げられた栄光や称賛を避け、キリストの御名をさらに大いに讃えるために奉仕したいという熱意に燃え、彼女は人混みの多い街を離れ、アラグヴァの水を欠いた高地へと向かい、そこで祈りと断食によって、カルタリアに隣接する地域での新たな伝道活動に備え始めた。　木々の枝に隠れた小さな洞窟を見つけ、そこで暮らすようになった。ここで彼女は、涙を流しながら祈りを捧げることで、岩から水を湧き出させた。　この泉からは今もなお、涙のように水滴が滴り落ちているため、人々はこれを「涙の泉」と呼んでいる。また、乾ききった母親の乳房に乳を与えることから、「乳の泉」とも呼ばれている。

当時、ムツヘタの住民たちは不思議な光景を目撃した。数夜にわたり、新しく建てられた教会の上空には、星の冠を戴いた輝く十字架が浮かび上がっていたのだ。　そして、夜明けが訪れると、この十字架から最も明るい四つの星が分離し、一つは東へ、もう一つは西へと向かい、三つ目は教会、司教の邸宅、そして街全体を照らし、四つ目は聖ニナの隠れ家を照らした後、一本の雄大な木が生えている岩山の頂上へと昇っていった。　ヨハネ司教も王も、この幻視が何を意味するのか理解できなかった。

しかし、聖ニナはその木を切り倒し、そこから四つの十字架を作り、一つは前述の断崖[1047] に、もう一つはムツヘタの西、トティ山――王ミリアンが最初に失明し、その後視力を取り戻して真の神に帰依した場所――に立てるよう命じた。　三つ目の十字架は、王の義理の娘であり、レヴァの妻であるサロメに渡し、彼女が自身の都市ウジャルメにそれを掲げるよう命じた。四つ目の十字架は、カヘティの女王ソジ（ソフィア）の領地であるボドビ（ブディ）の集落のために用意したもので、聖ニナはまもなく、彼女をキリスト教の信仰へと改宗させるために、自らその地へ向かった。

長老ヤコブと一人の助祭を伴い、聖ニナはムツヘタの北、アラグヴァ川とイオラ川[1048] の上流にある山岳地帯へと向かい、カフカスの山岳集落に福音の説教を宣べ伝えた。　チャレティ、エルツォ、ティオネティなどに住む野性的な山岳民族たちは、福音の言葉に宿る神の力と、キリストの聖な

る。このうち、326年には主の十字架が発見され、330年にはコンスタンティノープルの聖別式が執り行われ、古代ローマから首都がここへ移されたのである。

[1043] 現在はアハルツィフ県にある。

[1044] それはすでに長い間、廃墟と化している。

[1045] 13世紀半ば、この釘はルスダニの息子であるダヴィド9世王によって、司教のミトラの冠に打ち込まれた。その後、1681年にこのミトラはアルチル王によってモスクワへ移され、現在もウスペンスキー大聖堂に保管されている。

[1046] この聖遺物は失われたとされているが、グルジアの動乱の時代に、この木が多くの断片に分割され、その形で個人の家々に持ち込まれたと考える方が妥当だろう。そして現在でも、グルジアの諸侯の家系に伝わるイコンの中に、この「命を与える木」の重要な断片を見ることができる。

[1047] その後、この場所には聖十字架を称える教会と修道院が建立された。教会は現在も現存しているが、修道院は14世紀にティムールによって破壊された。 十字架はムツヘティ大聖堂に移され、1725年にテムラズ2世王によって銀で装飾され、現在も祭壇の後ろに安置されている。

[1048] イオラ川は、アラザニ川の右支流（クラー川の左支流）である。イオラ川の大部分はティフリス県に位置しており、同川沿いには、聖ニナの伝記にも言及されている郡都ティオンスティがある。

る宣教者の祈りによって現れた奇跡的なしるしの影響を受け、キリストの御国の福音を受け入れ、自分たちの偶像を破壊し、長老ヤコブから洗礼を受けた。　その後、コカベティを通り抜け、すべての住民をキリスト教の信仰へと改宗させた聖なる宣教者は、カヘティの南へと向かい、その聖なる功績と地上の旅の終着点であるボドビ（ブディ）の集落に到達すると、そこに定住した。　山の斜面に天幕を張り、日中は　夜も聖なる十字架の前で祈りを捧げる日々を送るうちに、聖ニナはすぐに近隣の住民たちの注目を集めるようになった。人々は、キリストの信仰と永遠の命への道について、彼女の心に響く教えを聞くために、絶えず彼女の元へ集まるようになった。　当時、ボドビにはカヘティの女王ソジャ（ソフィア）が住んでいた。彼女もまた、他の人々と共に、この素晴らしい説教者の言葉を聞きにやって来た。ある時、一人で訪れてその説教を心ゆくまで聴いた彼女は、その後、もはや彼女のもとを離れたくなくなった。彼女は、聖ニナの救いをもたらす説教に対して、心からの信仰に満たされていたのである。　ほどなくして、ソフィアは宮廷の重臣たちや大勢の民衆と共に、ヤコブ長老から聖なる洗礼を受けた。

こうしてカヘティで、イヴェリアの地における使徒的奉仕の最後の業を成し遂げた聖ニナは、神から自らの死が近づいているという啓示を受けた。　このことをミリアン王への手紙で伝えた聖ニナは、王とその王国に、神と聖母マリアの永遠の祝福、そして主の十字架の打ち破ることのできない力による守りを祈り求め、さらに次のように記した。

「私という旅人であり、よそ者である者は、今やこの世を去り、先祖たちの歩んだ道へと向かいます。王よ、どうかヨハネ司教を私のところへお送りください。私が永遠の旅路に備えられるよう、彼に手配していただきたいのです。なぜなら、私の死の日がすでに近づいているからです。」

その手紙はソフィア女王自身から送られてきたものであった。それを読み終えると、ミリアン王、そのすべての廷臣、そして司教を筆頭とする聖職者たちは、急いで臨終の床にある女王のもとへ駆けつけ、まだ息のある彼女に会った。　大勢の民衆が聖女の臨終の床を取り囲み、涙を流してその床を濡らした。多くの病人が、その床に触れることで癒やされた。　生涯の終わりに近づき、聖ニナは、病床で涙を流して懇願する弟子たちの執拗な願いに応え、自らの出自と生涯について語った。一方、ウジャルムのサロミアは、聖ニナの語りを書き留め、その内容はここに簡潔にまとめられている（サロミアの記録を基に、聖ニナに関するその後のすべての伝承が編纂された）。聖ニナはこう語った。

「私の貧しく、怠惰な生涯を書き記し、それがあなた方の子供たちにも知られるようにしなさい。また、あなた方の信仰と、私を愛してくださったその愛についても同様です。たとえ遠い子孫であっても、あなた方が自らの目で目撃し、その証人となった神のしるしについて知ることができるように。」

その後、彼女は永遠の命についていくつかの教えを説き、司教の手からキリストの御体と御血という救いの聖餐を敬虔に受け、新しく設立されたカヘティの教会が孤児とならないよう、今自分がいるその粗末なテントの中で遺体を埋葬するよう遺言し、　そして、安らかに主の御手に息を引き取った[1049]。

王と司教、そして彼らと共に民衆全体は、信仰と敬虔さにおける偉大な修道女の死に深く悲しんだ。　彼らは聖人の尊い遺骸をムツヘタの主教座聖堂へ移し、命の柱のそばに埋葬しようと決意したが、いかなる努力を尽くしても、聖ニーナが自ら選んだ安息の地からその棺を動かすことはできなかった。　キリストの福音を広めたこの女性の遺体は、ブディ（ボドビ）の集落にあった彼女の質素な天幕のあった場所に埋葬された。その墓の上には、まもなくミリアン王が建設を始め、その息子であるバクル王が完成させた[1050]が建てられ、聖ニナの親族である聖大殉教者ゲオルギオスの名にちな

[1049] 聖ニナは西暦335年に逝去した。

[1050] 西暦342年、

んで聖別された。　この教会は何度も改修されたが、一度も破壊されることはなく、今日までその姿を留めている。この教会を拠点として、カヘティ全土で最も古いボドビ大主教区が設立され、そこから福音の宣教は東コーカサスの山奥にまで広まっていった。

全能の神は、聖ニナの遺体を朽ちることなく栄光に包み、彼女の遺言に従って地中に秘められた（そして彼女の死後、グルジアでは聖人の遺骸を公開する習慣はなかった）。彼女の棺の周りでは、数え切れないほどの絶え間ない御徴と奇跡が起こった。　これらの恵み深いしるし、聖ニナの聖なる天使のような生涯、そして彼女が始めて栄光のうちに成し遂げた使徒的働きは、アンティオキア教会の祝福のもと、若きイヴェリア教会に、聖ニナをイヴェリアの使徒に等しい伝道者として認め、彼女を聖人の列に加え、彼女の栄光ある死の日である1月14日を、彼女を称える毎年恒例の祝日として制定した。　この祝日が制定された正確な年は不明であるが、聖ニナの死後まもなく制定されたことは明らかである。というのも、その直後からイヴェリアでは、使徒に等しい聖ニナの名を冠した教会の建設がすでに始まっていたからである。　現在に至るまで、ムツヘタの対岸にある聖ニナに捧げられた小さな石造りの教会は、今もなお現存している。この教会は、ヴァフタング・グルグ＝アスラン王[1051] によって、聖ニナが初めてその祈りによって偶像アルマズを滅ぼしたあの山の上に建てられたものである。

また、異教徒の隣国からの度重なる攻撃にさらされていたイヴェリア教会を、救いの箱舟として受け入れたロシア正教会は、聖ニナを「使徒に等しい」として崇敬することに、決して疑いを抱いたことはなかった。　そのため、イヴェリヤ教会の指導者の座に就き、「グルジアのエクザルフ」[1052] の称号を持つ同教会の聖職者たちは、使徒同等者ニナの御名によって、特に女子学校の校舎内に、すでに数多くの教会を奉献してきた。　また、元グルジア総代理の一人であり、後に全ロシア教会の首座となったイシドール大主教は、聖使徒同等のニナへの礼拝式さえもグルジア語からスラブ語に翻訳し、1860年に聖シノドの祝福を得て、教会での使用のために刊行した。

ロシア教会の長姉である正教会のイヴェリ教会は、その創立者である聖ニナを、聖なる洗礼によってイヴェリア全土を啓蒙し、何千もの魂をキリストへと導いた「使徒に等しい聖人」として称えているのは当然のことである。　なぜなら、もし一人の罪人をその誤った道から立ち返らせ（ヤコブ5:20）、無価値なものから貴重なものを引き出す者（エレミヤ15:19）が、神の口であるとするならば、　それならば、かつて真の神を知らなかった多くの民を、破滅的な異教の惑わしから神へと回心させた彼女は、どれほどさらに真に神の口であったことか！　彼女は、私たちの神であるキリストの御国において聖徒の群れに加わった。キリストには、父と聖霊とともに、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れと感謝と礼拝がふさわしい。アーメン。

ここで、次のことについても触れておくのは無駄ではないでしょう。現在のジョージアの領土内（カヘティ、カルタリニア、イメレティ、グリア、ミングレリア、アブハジア、スヴァネティ、オセチアの一部、そしてダゲスタンを含む）　特にカスピ海西岸一帯には、聖ニーナ以前からも、数は少ないながらもキリスト教徒が存在しており、カフカス山脈において救い主キリストの福音を最初に宣べ伝えたのは、まさにその「最初に召された使徒」アンドレイであり、伝承によれば、その宣教の言葉によってキエフの山々も福音を聞いたとされる。　グルジアの年代記に記録され、『チェティ・ミネイ』（11月30日の項[1053] ）の記述とも一致する古くからの伝承によれば、使徒アンドレイは以下の場所でキリストについて説教したとされている。アハルツィハの南西、[1054] にあるクラルジェト；

[1051] 彼は西暦446年から459年までグルジアで統治した。

[1052] エクザルクとは、特定の地域の教会を統括する大司教のことである。現在、ロシアではグルジアの大司教がエクザルクの称号を冠している。

[1053] 聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの記念日は11月30日に祝われる。

[1054] アサルツィフ――ティフリス州アハルツィフ郡の郡庁所在地。

アドフヴェラ（現在のアツフーリ村、ボルジョム渓谷の入り口近く）；アブハジアのツフム（現在のスフミ・カレ市）、ミングレリア、および北オセチア。　アツフルでは、使徒は教会を設立し、そこに聖母マリアの奇跡を起こす聖像を残しました。この聖像はその後、キリスト教徒の間だけでなく、信仰を持たない山岳民族からも深く崇敬され続け、現在もクタイシ市の近くにあるガエナト修道院（[1055]）に「アツフル聖像」として保存されています。使徒アンドレイの同行者であるシモン・カナニテは、野蛮なスアヌ人（スヴァネツ人[1056]）に聖なる福音を説いたが、彼らは彼を石で打ち殺した。地元の伝承によれば、彼の墓は古代都市ニコプシア、あるいはアナコピアにあるという。

聖母マリアが聖ニーナに授けたブドウのつるで作られた聖なる十字架については、次のようなことが知られている。西暦458年まで、ニーナの十字架はムツヘタの主教座聖堂に保管されていた。その後、火礼拝者たちがキリスト教徒への迫害を始めた際、聖なる十字架は修道士アンドレイによってムツヘタから持ち出され、当時まだ同じ信仰を共有していたグルジア領内のアルメニア、タロン地方へと移され、当初はアルメニア人によって「ガザル・ヴァンク」と呼ばれていた聖使徒教会　（ラザロ大聖堂）と呼ばれていた聖使徒教会に当初保管されていた。その後、ここでも　、キリスト教徒が崇めるあらゆるものを徹底的に破壊したペルシャの魔術師たちによる迫害が始まると、ニナの聖十字架は、アルメニアの要塞であるカポフティ、ヴァナケ、　カルセ、およびアニの町といったアルメニアの要塞に運び込まれ、隠された。この状態は西暦1239年まで続いた。この時、グルジアの女王ルスダンは、司教たちと共に、当時アニの町を支配していたモンゴルの軍司令官チャルマガンに対し、ニナの聖十字架を、本来その所有地であるグルジアへ返還するよう懇願した。　そして、この聖なる十字架は再びムツヘタの主教座聖堂に安置された。　しかし、ここでもその安息は長くは続かなかった。敵による冒涜を避けるため、ニナの十字架は何度も山中に隠された。時には、今もなおカズベクの小高い山に建つ聖三位一体教会に、時にはアナヌレの要塞にある古代の聖母マリア教会に、と。1749年、グルジアのミトロポリット・ロマンは、グルジアからロシアへ向かう際、密かにニナの十字架を持ち出し、当時モスクワに滞在していたツァレヴィチ・バカル・ヴァフタンゴヴィチに手渡した。　その後、約50年間にわたり、この十字架はニジニ・ノヴゴロド州リスコヴェ村にある、1724年にロシアへ移住したヴァフタンガ王の子孫であるグルジアの諸侯の領地で保管されていた。　前述のバカルの孫であるゲオルギー・アレクサンドロヴィチ公は、1801年にニナの十字架をアレクサンドル・パヴロヴィチ皇帝に献上し、皇帝は、この偉大な聖遺物を再びグルジアに返還することを快諾した。それ以来、今日に至るまで、聖ニナの使徒的業のこの象徴は、ティフリスのシオン大聖堂において、祭壇の北側の扉の近く、銀で覆われた聖櫃の中に保管されている。　この聖櫃の上部板には、聖ニナの浮き彫りの像と、尊き命を与える十字架の力によって彼女を通じて成し遂げられた奇跡が描かれている。

聖ニナがエルサレムからイヴェリアへ、その主のキトンを探しにやって来たことについては、グルジアの年代記は簡潔に記しているに過ぎない。　それらの証言から、聖ニナが確実に発見したのは、主のキトンが隠されていた場所、すなわち、亡くなった乙女シドニアと共に、尊き主のキトンも

[1055] ガエナツキー–イメレティ教区に属する聖母マリアの降誕を祝う男子修道院で、クタイシから8ヴェルスタの距離に位置する。12世紀初頭に創設された。現地では「ゲラティ」または「ゲラツキー」という名称でも知られている。

[1056] スヴァネティ族は、カフカース山脈に暮らす小規模な山岳民族であり、古くから「スヴァノフ」または「スアノフ」の名で知られ、イングル川の上流、エルブルス山の南麓、およびコナ川の右支流であるツヘニス・ツカリ川沿いに居住している。　古代、スヴァネティ族は主に略奪を営み、近隣のミングレリア、イメレティ、グルジアのどの支配者にも服従しなかった。　15世紀末になってようやく、グルジアの諸侯たちは下スヴァネティにおける支配を確立し、ザカフカズ地方の農民解放に至るまでその勢力を拡大した。自由なスヴァネティ人は、1853年になって初めてロシアの支配下に入った。

埋葬されていた墓のみであったことが分かる。この墓に生えていた杉は、聖ニナの命により伐採されたものの、　しかし、シドニアの棺、そしてその中に収められた主の衣が隠されていたその切り株は、無傷のまま残されていたとされている。これは、ある夜、ニーナがこの切り株のそばで涙ながらに祈っていた際、彼女の耳元で三つの神秘的な言葉を囁いた、光に満ちた人物の命令によるものだと考えられている。　そう考えられているのは、それ以来、ニーナが杉の根を取り除き、シドニアの棺を掘り起こそうとは二度と考えなかったからであり、また、彼女にとってこれほど尊い主のキトンを他のどこかで探そうともしなかったからである。

ある時、ミリアン王が、使節たちがコンスタンティヌス帝から命を与える主の十字架の木の一部と釘を受け取ったにもかかわらず、それらをムツヘトに持ち帰らず、前者をマイグリスに、後者をエルシェティに残してしまったことを嘆いていた際、彼女は王を慰めた。聖女は王にこう語った。

「悲しまないでください、王よ！　そうなるべきだったのです――あなたの王国の国境もまた、キリストの十字架の神聖な力の保護の下にあり、キリストの信仰が広まるためです。あなたにとっても、あなたの首都にとっても、この地に尊き主のキトンが留まっているという恵みだけで十分なのです。」

聖ニナの存命中も、その死後も、杉の木の根元にある主のキトンの存在は、柱とその根元から治癒力と芳香を放つ聖油が滲み出ることで示されていた。この聖油が流れなくなったのは、13世紀にキトンが地中から掘り出された時だけであり、　また、好奇心からこの場所に手を触れることを敢えてした不信仰者たちへの懲罰を通じて、聖なるキトンの存在が示されていた。　12世紀半ば（1150～1160年）にグルジア教会を統率し、その聖なる生活と英知で知られていたカトリコス・ニコライ1世（[1057]）は、当時多くの人々が、命の柱の下に本当に主のキトンがあるかどうかを疑っていたことに気づき、　次のように語った。「そうした人々の疑念は当然のことである。なぜなら、主のキトンはかつて公開されたことがなく、誰もそれを見たことがないからだ。しかし、かつてのしるしや奇跡、そして今、皆の目の前で起こっているもの――それらはすべて、聖なる柱を媒介として、主のキトンから生じているのである。」　主のキトンから生じた奇跡を列挙する中で、カトリコス・ニコライは、あるトルコ人　スルタンの妻が、好奇心からシドニアの棺を開けて主のキトンを見ようとしたところ、地中から噴き出した火に焼かれた出来事を回想している。　また、彼女が送り込んだタタール人の墓掘り人たちは、目に見えない力に打ち倒された。

「これは奇跡だ」と彼は言う。「多くの人が目撃しており、誰もが知っていることだ。」

カトリコス・ニコライの死の約40年前、ティフリスとムツヘトは、確かにセルジューク・トルコ軍に占領されていたが、彼らはその後、1089年から1125年まで在位したダヴィド・ヴォゾブノヴィテル王によってグルジアから追放された。　カトリコス・ニコライは、絶え間なく流れ出る聖油を、常に誰の目にも見える恒久的な奇跡であると指摘していた。

「誰もが、柱の東側にある湿り気を見ることができます」と彼は言う。「無知ゆえに、ある者たちはその場所を石灰で塗りつぶそうとしましたが、聖油の滲み出しを止めることはできませんでした。そして、そこからどれほどの癒しがもたらされたか――私たちは皆、その証人なのです。」

[1057] カトリコス（ギリシャ語で「全地」の意）とは、グルジア自治教会の最高位聖職者の称号であり、ヴァフタンゲ・グルグ＝アスラン王（446～459年）の治世下、同教会がアンティオキア総主教庁からの独立を勝ち取ったことに伴い、この称号が定着した。　グルジア教会がロシア教会の一部となった際、1811年以降、その最高位聖職者はエクザルクと呼ばれるようになった。6世紀半ばからは、カトリコスという称号はアルメニア教会の最高位聖職者にも用いられるようになった。

このカトリコス・ニコライは、命を与える柱の下で主のキトンが発見されたことを記念する礼拝式を制定した（後にこの礼拝式はカトリコス・ヴィッサリオンとアントニーによって修正・補足された）。その際、彼は次のように語った。

「神ご自身が立てられた柱と、その下にある私たちの救い主イエス・キリストのキトンを、輝かしい祝祭をもって飾るべきである。」

（カトリコス・ニコライから引用した記述は、これで終わる）。

前述の命を与える柱からの聖水の湧き出しは、神の御心により、主のキトンが地中から取り出された時に止んだ。

「それは――名も知れぬグルジアの著者が語るように――グルジア全土にとって苦難の時代であった、タメルランの野蛮な軍勢の侵攻の頃、 より正確にはチンギス・ハーン[1058] の時代であり、彼らがティフリスを占領し、その住民約10万人を虐殺し、ティフリスのすべての教会とシオン教会を破壊し、すべてのキリスト教の聖地を冒涜した。シオンの奇跡を起こす聖母マリアのイコンも例外ではなく、彼らはキリスト教徒自身にそのイコンを足で踏みつけさせた。 その後、彼らはムツヘトの町へと襲いかかったが、その住民たちは司教たちと共に、森や人里離れた山の峡谷へと逃げ込んだ。その時、ある敬虔な人物が、ムツヘトの滅亡を予見し、その聖堂の聖所を野蛮人たちの冒涜にさらしたくなかったため、神への祈りを捧げた後、シドニアの棺を開け、そこから尊い主のキトンを取り出し、それを大司教に手渡した。 一方、ヴァフタンク・グルグ＝アスラン王が築いた壮麗な建造物であるムツヘタ神殿は、その際に基礎まで破壊されてしまった。 それ以来、主のキトンはカトリコスの聖具室に保管され続け、1414年から1442年までグルジアを統治したアレクサンドル1世王によって、ムツヘティの聖堂がかつての威容を取り戻すまで（現在もなおそこに安置されている）その状態が続いた。 主のキトンは当時、この大聖堂に運び込まれ、より安全に保管するため教会の十字架の中に隠され、17世紀までそこに留まっていた。 1625年、ペルシャのシャー・アッバースは、イヴェリアの地を征服・占領した後、当時すでにグルジアを後援していたロシア帝国の宮廷の好意を得るため、ムツヘティ大聖堂から主のキトンを取り出し、 宝石で飾られた金の聖櫃に納め、特別な書簡を添えて、当時在位していたミハイル・フェオドロヴィチ皇帝の父である全ロシアの至聖なるフィラレート総主教へ、かけがえのない贈り物として送った。 敬虔なミハイル皇帝とフィラレート至聖総主教は、この偉大な贈り物を喜びをもって受け入れ、 この世のいかなる最も貴重な贈り物をも遥かに凌駕するこの贈り物を受け取り、当時モスクワに滞在していたギリシャの司教たちや賢明な長老たちから、主の衣――私たちの神であり救い主であるイエス・キリストのキトン（ヨハネ19:23–24）――に関する、彼らに伝わる伝承を集めた。これらの伝承は、ここに記されている内容と一致している。祈りと断食を経て、この衣を病人に着せた後に数多くの奇跡的な治癒がもたらされたことを通じて、それがまことにキリストの衣であることを確信した彼らは、 皇帝と総主教は、モスクワの聖母被昇天大聖堂の西側右隅に、宝石で飾られた特別な部屋を設けるよう命じ、そこにキリストの衣を安置した。 現在もなお、その衣はそこに安置されており、人々は皆、それを見つめ、相応の畏敬の念をもって崇敬している。そして今日に至るまで、その衣からは病人の癒やしと、信仰をもって訪れるすべての人々への助けがもたらされている。 ロシア正教会では、フィラレート（ ）総主教の時代以来、7

[1058] 1228年頃、ムツヘティの聖堂も破壊された。一方、ティムールは1387年にグルジアに侵攻したが、その時点ではムツヘティの聖堂はすでに存在していなかった。この聖堂は15世紀にアレクサンドル1世王によって再建された。

月10日[1059] に、主のキトン、すなわち衣の安置の祝日が定められた。イヴェリア正教会では、主のキトンの祝日が10月1日に定められたのは12世紀になってからのことであるが、 しかし、イヴェリア、とりわけムツヘタにおいては、この日が――現在と同様に――明るく祝われていたと考えられる。それは、最初のキリスト教王ミリアンの時代からではないにせよ、少なくとも5世紀、すなわちヴァフタンガ・グルグ＝アスランの輝かしい治世の時代からはそうであった。　この祝日は、彼が古代のミリアン王の神殿の跡地に建設した、新しく壮麗なムツヘタの神殿の奉献を記念する重要な日として祝われていた。

聖ニナのトロパリオ：

神の御言葉の奉仕者、使徒的説教において最初に召されたアンドレイや他の使徒たちに倣い、イヴェリアの啓蒙者であり、聖霊の器である、聖ニノよ、使徒に等しい聖女よ、キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

聖ステファノの記念日

記念日：1月14日

ヒノラクスの聖ステファノは、パレスチナにおいてその聖なる生涯によって輝きを放ちました。若き頃から修道生活を目指し、彼はヨルダン川沿いに位置する敬虔な人々の修道院や、エルサレムからほど近い荒野にある聖人たちの修道院、すなわち　エウフィミオス大聖人、サヴァ聖者、テオドシオス大聖人の修道院を訪れました。各修道院で聖人は修行に励み、自らの体験を通じてその規則を学びました。その後、聖人はレオン・イサウロス帝の治世下でコンスタンティノープルへ赴き、聖なる総主教ゲルマンに迎えられました。　彼はしばらくの間、その元で暮らし、霊的生活について学びつつ、自らも聖人にとって有益な助言者となった。その後、聖ステファノはヒノラクコ修道院（[1060]）を設立し、そこには多くの修道士が集まった。聖人は彼らを主の教えと善き訓戒によって育て上げ、キリストの御業を成し遂げるにふさわしい境地へと導いた。　地上で徳高く生き、絶え間ない祈りによって天の住人たちに近づいた聖ステファノは、天の住まいに旅立つ時が近いという啓示を受けた。　肉体を離れた後、その聖なる魂は、清らかさに満ちていたため、天使たちを通じて主によって栄光のうちに迎え入れられた。兄弟たちのうち数名は、この尊者による天上の住まいに向かう栄光に満ちた旅立ちを目撃する栄誉に浴し、そのことを多くの人々に伝えた。

1月28日

1月15日（旧暦）

[1059] 主の聖衣は四旬節の期間中にロシアへ持ち込まれたため、その祝日は7月10日（ミハイル・フェオドロヴィチ王の戴冠式の前日）に繰り上げられた。

[1060] すなわち、「ガチョウの池」のそばにある。ギリシャ語の「ガチョウ」と「池」に由来する。この修道院は小アジアのビフィニア州（小アジア北西部）にあり、ハルキドンからほど近く、コンスタンティノープルの対岸に位置している。

我らの尊き父、フィヴェイのパウロの生涯

記念日1月15日

尊者アントニオスが弟子たちと共にエジプトの荒野に住んでいた頃[1061]、彼はある日、自分ほど完全な修道士は他にいない、自分より先に荒野に定住し、これほど孤独な生活を選んだ者は誰もいない、という思いが頭をよぎった。彼自身、後にこう語っている。そう考えたとき、幻の中で次のような声が聞こえてきたという。

「アントニオよ！　あなたより先にここへ来て、あなたよりも完全な神のしもべが一人いる。もし望むなら、遠く離れた荒野で彼を見つけることができる。ただ、彼が主のもとへ旅立つ前に、急いで彼のところへ行きなさい。」

これを聞いて我に返ると、長老は直ちに杖を手に取り、啓示されたその人物を一刻も早く見つけたいと切に願いながら、急いで荒野へと向かった。　正午になり、日差しが激しく、石さえも灼熱するほど暑くなった。老人は肉体は疲れ果てていたが、精神は冴えており、一度踏み出した道を後戻りするつもりはなかった。どこへ進めばよいのかは分からなかったが、彼は揺るぎない決意を保ち、こう言った。

「神は約束された通り、御自分のしもべを私に示してくださると信じている。」

この過酷で人跡未踏の砂漠を歩む中、老人は獣の足跡以外には何も見なかった。旅を始めてすでに二日目となり、二晩目を祈りに費やしたが、彼はこれからどこへ向かえばよいのか分からなかった。　三日目の夜明け、彼は突然、山の縁を歩きながら遠吠えする雌狼を目にした。遠くからその狼を追って進むと、神の聖なる御使いパウロが住む洞窟にたどり着いた[1062]。老修道士は洞窟を見て喜びに満たされたが、その住人はアントニウスの接近に気づくと、扉を閉ざしてしまった。　近づいて老修道士は扉を叩いたが、返事はなく、彼は外で立ち尽くし、叩き続けても無駄だった。扉を開けてもらえないと悟ると、彼は洞窟の入り口の前で地面にひれ伏し、苦労して探し出したその人物に会えるよう、中に入ることが許されるよう、第六時（正午）まで祈り続けた。

聖人はこう言った。

「開けてくれ、キリストの僕よ、開けてくれ！　あなたは私が誰で、どこから、なぜ来たのかを知っているはずだ。神があなたにそれを明かされたのだから。私自身も、あなたの聖なる御顔を見るに値しないことは承知している。それでも、あなたに会うまではここを離れない。」　神が私をあなたに明らかにしてくださったのなら、身を隠さないでください。あなたは獣たちを受け入れているのに、なぜ人間を拒むのですか？私は長い探求の末にあなたを見つけ出し、今こうして扉を開けてくれるよう叩いているのです。もしあなたが扉を開けてくれないなら、私はあなたの戸口で死に、あなたはここで私の遺体を葬ることになるでしょう。

彼は涙ながらに他にも多くのことを語り、その厳しさを責めた。すると、神の御使いは洞窟の中から彼に答えて言った。

「脅しで頼んだり、涙ながらに責めたりしてよいものか。私が扉を開けないことに驚いているようだが、それは、あなたがここで死ぬために来たことを自慢しているからだ。」

そう言い終えると、聖人は扉の錠を開け、二人は互いに抱き合い、口づけを交わした。互いの名前を呼び合ったのは、神がそれぞれの心に相手の名前を明らかにしてくださったからである。二人が座ると、聖アントニオはこう言った。

[1061] 聖アントニオス大聖人は、修道生活の最初の確立者である。彼の記念日は1月17日である。彼が修行に励んだ洞窟は、エジプト南部、ナイル川の東岸にある、荒涼として人里離れたフィヴァイダ地方に位置していた。

[1062] ホルジム山にある聖パウロの洞窟は、アントニオ山から直線距離で4ヴェルスタ以内の場所にありますが、非常に高く険しい崖で隔てられているため、その周囲を迂回するには非常に長い時間がかかり、そのため聖アントニオは全行程に約2日を要しました。

「喜びなさい、パウロよ。選ばれた器、燃える柱、この荒野の住人よ！」

聖パウロは答えた。

「あなたが来てくれてよかった。全宇宙を照らす太陽よ、救われる者たちの導き手よ、神の御口よ、荒野に住み、そこから悪魔を追い払った方よ！　しかし、なぜあなたは、私のような罪深く取るに足らない人間のもとへ来るという、これほど大きな労苦を背負ったのですか？」　ほら、あなたの目の前にいるのは、白髪が乱れ生えた老いぼれであり、まもなく塵と朽ち果てようとしている人間だ。　しかし、愛には障害などない――それゆえ、あなたはここへ来てくださったのです。どうか教えてください、今、人々はどのように暮らしているのか、世界はどのような状況にあるのか？　依然として偶像崇拝者はいるのか、そして同時に、信者たちへの迫害は続いているのか？

「あなたの祈りのおかげで」とアントニウスは答えた。「世は平穏を保ち、迫害は終わり、教会は真の神を賛美しています。しかし、あなたが迫害について言及されたのですから、お願いです――神のために、あなた自身について話してください。そして、なぜこの遠い荒野へと世を離れてきたのか、その理由を教えてください。」

– 私は[1063]、フィヴァイデ[1064]で生まれた――と聖パウロは語り始めた――私には姉が一人いたが、両親は生前に彼女を嫁がせてしまった。両親自身も正教徒であったため、私に世俗的な教育を与えつつ、正教の信仰の真理についても教えてくれた。死の床で、両親は豊かな財産を私たちの間で分け与えた。　両親の死後、私の姉の夫は、強欲から、私に相続されるはずだった財産を横取りしようと企み、私をキリスト教徒として不信心な公爵に引き渡して拷問にかけさせ、そうして私を滅ぼし、私の相続財産を手に入れようとした。 当時の皇帝はデキウス[1065]でした。彼はすべてのキリスト教徒を迫害し、彼が考案した残酷な拷問への恐怖から、フィヴァイダ全土が戦慄に震えていました。その頃、あるキリスト教徒の青年が不敬虔な迫害者たちに捕らえられました。彼らは、彼をキリストの信仰から背かせようと長い間拷問を加えましたが、無駄でした。　ついに、彼は花咲き乱れ、芳しい香りのする庭園に連れて行かれ、豪華な寝台に仰向けに寝かされた後、手足を柔らかい縄で寝台に縛り付けられた。皆が庭園から去ると、若者を罪へと誘惑させるため、一人の若い娘がそこに送り込まれた。　恥知らずなその娘は、青年を抱きしめ、口づけし、あらゆる手段を尽くして彼を惑わそうとした。これほど多くの苦痛に耐えてきた後、この勇敢な殉教者は一体何をしたのだろうか？　――肉欲の誘惑という危険に直面すると、彼は自分の舌を噛み切り、それを淫婦の顔に吐きつけた。凄まじい痛みによって自らの情欲を打ち勝ち、その血で淫婦の顔と衣服を汚し、キリストの恵みによって、自ら清らかさを守り抜いた。　キリスト教の信仰を堅く守り通したもう一人の若者は、数々の拷問を受けた後、裸にされ、全身に蜂蜜を塗りたくられ、両腕を肩で縛られた状態で炎天下に晒された。彼らは、ミツバチやスズメバチ、マルハナバチに刺され、耐えきれずに偶像への生贄を捧げることに同意するだろうと考えていた。　しかし、この勇敢な殉教者は、全身が刺され、血にまみれて人間の姿さえ失うほどであったにもかかわらず、キリストを否定することはなかった。　これらすべてを目の当たりにし、さらに――姉の涙も血縁関係も抑えきれないほど、私の義兄の憎悪がますます高まっているのを見て、私は彼にすべてを置き去りにし、この荒野へと逃げ出した。　神の御加護により、私は徐々にこの場所へとたどり着きました。内部に泉のあるこの洞窟を見つけたとき、主ご自身がここに

[1063] フィヴァイのパウロの生年は、その伝記に基づいて次のように推定される。アントニオスがパウロのもとを訪れたとき、パウロはすでに91年間砂漠に滞在しており、22歳の時にその地へ籠もっていた。 したがって、彼は113歳であった。251年に生まれたアントニウスが彼を訪ねたのは90歳の時であった。したがって、聖パウロは228年頃に生まれたことになる。

[1064] フィヴァイダとは、古代に名高いエジプトの都市フィヴァの地域を指す。また、その主要都市の名にちなんで、上エジプト（南部）全体もこの名で呼ばれていた。

[1065] デキウス――ローマ皇帝。キリスト教に対する残酷な迫害者であり、249年から251年まで在位した。

私の住まいを定められたのだと悟りました。私はここに定住し、ナツメヤシの実を食べ、葉で衣服を作って暮らしています。

聖人がそう語っていると、突然、くちばしにパンをくわえたカラスが飛んできた。静かに彼らの前にパンを置くと、カラスは飛び立ち、空の中に姿を消した。至福のアントニウスの驚きの様子を見て、聖パウロは言った。

「これは、慈悲深く、人を愛する主が、私たち、御自分のしもべたちに昼食を送ってくださったのです。私はもう六十年間、半分のパンを受け取っています。しかし、あなたが訪ねてきてくださったことを機に、主キリストは恵みを倍にし、御自分の戦士たちに丸ごとのパンを送ってくださったのです。」

このパンを受け取ると、神の偉大な聖人たちは互いに祝福し合い、それを割るよう求め合った。それぞれが相手を自分より尊い存在として敬っていたのである。聖パウロは客として尊いアントニオを敬おうとし、一方、アントニオは家の主人であり年長者である聖パウロを敬おうとした。そして、二人は長い間、愛を込めて互いに譲り合っていた。　ついに、至福のパウロはパンの片端を取り、もう片方を聖アントニオの手に渡した。すると、そのパンはたちまち真ん中で自然に二つに割れ、二人はそれぞれ半分ずつを受け取った。

泉のほとりに腰を下ろし、キリストの僕たちは食事をとり、満腹になった。その後、彼らは清らかで非常に心地よい水が出るその泉から水を飲んだ。感謝の祈りを捧げた後、彼らは再び腰を下ろし、夜明けまで一晩中語り合った。日が明けると、聖パウロはアッバ・アントニウスにこう言った。

「兄弟よ、私はかねてより、あなたがこの荒野に住んでいることを知っていた。あなたと共に暮らし、共に私たちの主にお仕えしたいと願っていたのだ。　しかし、私が常に喜びをもって待ち望んでいた死の時が訪れた。*「この世から解放され、キリストと共にいること」*（フィリピ1:23）を願っていたのだ。そこで主は、あなたが私の謙虚な遺体を葬り、土に還すために、あなたを私のところへ遣わされたのである。

これを聞いて、アントニオスは涙ながらに叫びました。

「父よ、私を一人にしないでください。どうか私をあなたと共に連れて行ってください！」

「あなたは自分のことではなく、隣人の幸福を気にかけるべきです」と聖パウロは答えた。「もし、肉の重荷から解放されて、小羊に従って天国へ行くことがあなたにとって幸福であるならば、他の兄弟たちの利益のためには、あなたがまだしばらくの間、彼らを導き、励まし続けることが求められているのです。」　お願いだ、一刻も早く自分の修道院へ行き、アファナシウス司教から贈られたマントを持ってきて、それで私の体を覆ってほしい。

聖パウロがそう求めたのは、マントを必要としていたからではありません。　彼は、長い間ナツメヤシの葉を身にまとっていたその朽ちゆく肉体が、裸であれ覆われてあれ、地中に葬られることなど気にかけていなかった。彼が望んだのは、孤独な静寂の中で魂が肉体から離れることだけだった。だからこそ、彼は聖アントニオを修道院へと送り返したのだ。

アントニウスは、アファナシウスとマントについて聞いたことに大いに驚いた。パウロの中に、いわばキリストご自身を見出し、彼の中に宿る神を崇め敬っていた彼は、もはや彼に異議を唱えることを敢えてしなかった。　長い間、黙って涙を流しながら、彼の目や手に口づけをし、その後、急いでその命令を実行に移した。自らの望みとは裏腹に、体は衰えつつも、精神をもって老いの弱さを克服し、修道院へと向かった。彼が自分の独房に近づくと、二人の弟子が彼を迎え、こう尋ねた。

「父よ、一体どこにそんなに長くいらっしゃったのですか？」

「ああ、悲しいことだ、わが子らよ」とアントニオスは答えた。「悲しいことだ、罪深い、偽りの修道士である私にとって。私はただ修道士と名乗っているに過ぎないが、真にエリヤであり、荒野のヨハネである方を見た。私はまことに、楽園にいるパウロを見たのだ。」

弟子たちはその話を詳しく聞きたがり、彼に語ってほしいと懇願した。しかしアントニオスは、手で口を覆いながら言った。

「すべての事には時がある。語る時もあり、沈黙する時もある（伝道の書3:1–7）。」

そして、マントを手に取り、少しも休むことなく、道中の食糧さえ持たずに、彼は外へ出て、再び急いで荒野へと向かった。それは、聖パウロがまだ生きているうちに彼に会おうとしたからである。もし遅れてしまえば、パウロが自分なしで亡くなってしまうのではないかと恐れていたのだ。

翌日、第三の刻、道中にあるアバ・アントニオスは、空中に天使の列と預言者や使徒たちの集いを見、その真ん中に、太陽よりも輝きながら天へと昇っていく聖パウロの魂を見た。　聖アントニオは地面にひれ伏し、頭に砂をまき散らし、泣きながら叫んだ。

「なぜ、パウロよ、私を置いていったのか？　なぜ最後の口づけもせずに去っていくのか？　これほど長い間、私はあなたのことを知らなかったのに、ようやく知ったというのに、あなたは私を置いていくのか！」

その後、至福のアンソニーは、残りの道のりをまるで翼で空を飛んでいるかのような速さで進み、その速い歩みゆえに足元の地面さえ感じなかったと語った。　やがて彼は洞窟にたどり着き、中に入ると、聖人が両手を天に向かって広げ、顔も天を向いたままひざまずいているのを見た。聖人が生きて祈っているのだと思い、アントニウスも彼と共に祈りを捧げ始めた。　一時間が過ぎたが、聖パウロからは言葉も祈りのため息も聞こえなかったため、至福のアントニウスは彼に近づき、彼がすでに亡くなっているのを見て、この聖なる人の肉体が死後も、すべての生きとし生けるものがその御前にある神に礼拝を捧げ続けているのだと悟った。　彼は長い間泣きじゃくり、尊者聖なる遺体に口づけをした。それから、持参したマントで遺体を包み、キリスト教の慣習に従って、埋葬の際に唱えられる詩篇を歌い始めた。しかし、墓を掘るための鍬を持参していなかったため、聖人の埋葬をどのように執り行えばよいか、彼には思い浮かばなかった。

「修道院に戻って道具を取りに行くべきだろうか？」と彼は考えた。「だが、そこまでは三日の道のりだ。ここに留まるべきか？　しかし、鍬がなければ何もできない。」「むしろここに留まり、キリストよ、あなたの戦士のそばで、最期の息を引き取り、ふさわしい死を遂げよう！」

彼がそう考えていると、突然、砂漠の奥深くから二頭のライオンが現れ、咆哮をあげながら、まるで聖人の死を悼むかのように泣き叫んでいた。アントニウスは最初、少し怯えたが、その後、子羊のように柔和な獣たちが聖人の遺体のそばに横たわり、哀れみを込めて咆哮し、まるで泣いているかのように見えるのを見て、これらの獣の柔和さに驚嘆した。　そして、彼らは爪で地面を掘り始め、かなりの深さの穴を掘ると、再び聖人の遺体に寄り添い、まるで別れを告げるかのように激しく咆哮した。その後、聖アントニオのもとへ近づき、まるで祝福と祈りを求めているかのように、彼の手と足を舐め始めた。　聖人は、獣たちまでもが神の前にひれ伏しているのを見て、キリストを賛美し、こう言った。

「主よ、御心のままに、木から落ちる葉一枚、空を飛ぶ鳥一羽でさえ、御心なくして地に落ちることはありません。どうか、御心に従い、これらの獣たちに御祝福をお与えください。」

それから、手で荒野を指し示し、獣たちにそこへ去るよう命じた。獣たちが姿を消すと、アバ・アントニオスは、生後113年でこの世を去った最初の隠遁者である聖なる尊い父パウロの尊い遺体を埋葬した[1066]。埋葬後のその夜、尊者アントニオスは聖人の墓のそばで、涙と祈りを捧げながら過ごした。そして朝になると、ナツメヤシの葉で編まれた聖人の衣を持ち帰り、自らの修道院へと戻った。　修道院に戻ると、彼は弟子たちの教訓となるよう、そのすべてを詳しく語った。そして、聖パ

[1066] 聖パウロ・フィヴァイオスは341年に逝去した。その遺体は、ビザンツ皇帝マヌイル・コムネノス（1146〜1180年）の命により、コンスタンティノープルに移され、聖母ペリヴレプタ修道院に安置された。　その後、1240年にヴェネツィアへ、そして最終的にハンガリーのオーフェンへ移された。頭部の一部はローマにある。

ウロの衣を非常に大切に守り、尊び、年に二度――聖なる復活祭と聖霊降臨祭――にしかそれを身にまとうことはなかった。

聖なる父パウロとアントニオの祈りにより、主キリストが私たちを御自身の聖徒たちの列に加えられますように。父と聖霊と共に、主キリストに、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖ヨハネ・クシュチニクの伝[1067]

記念日：1月15日

コンスタンティノープルでは、レウス大帝の治世[1068]、エウトロピウスという名の裕福で名高い軍人高官が、妻のテオドラと共に暮らしていた。 彼には三人の息子がおり、そのうち二人は王室に仕え、すでに高い地位に就いていたが、三番目で末っ子のヨハネスという名の息子については、様々な学問を学ばせることにした。 まだ12歳の少年であったヨハネは、同年代の子供たちの中でもひときわ際立っており、教師たちでさえ、その才能と幼い年齢にしては並外れた成長ぶりに驚嘆していた。しかし、彼は世俗的な学問だけでなく、霊的な知恵においても秀でていた。 聖霊の恵み深い導きのもと、彼は柔和で、悪意がなく、謙虚な少年へと成長し、授業が終わると、子供らしい遊びに興じるのではなく、聖なる神霊に導かれた書物を読んだり、熱心に教会の礼拝に出席したりして時間を過ごした。 彼の心は神への愛に温められ、その魂の中では、その愛の炎が力強く燃え上がり始めていた。

ヨハネがこのように敬虔さにおいて目覚ましい進歩を遂げていた頃、ある日、ある修道士が、この福者が学んでいた家に入ってきた。彼を見た少年は尋ねた。

「師よ、どこから来られ、どこへお出かけなのですか？」

「私は『眠らぬ者たち』の修道院[1069]から来たのです」と修道士は答え、「聖地を参拝するためにエルサレムへ向かっています。」

胸を熱くしたヨハネは、修道生活や祈り、断食、絶え間ない賛美歌、そして修道士たちのその他の功績や労苦について、彼に尋ね始めた。修道士は、少年の敬虔さと分別を見抜き、自分の修道院のあらゆる慣習や規則について詳しく語って聞かせた。

ヨハネは修道士の話を注意深く聞き終えると、こう尋ねた。

「父上、あなたはまたご自身の修道院に戻られるのですか、それともエルサレムに残られるのですか？」

「私は」と修道士は答えた。「修道院長から戻るよう命じられており、もし神の御心があれば、聖地にお辞儀をしてから、直ちに帰ります。」

すると、ヨハネは修道士の右手を握り、こう言った。

1067 聖ヨハネが「藪の聖人」と呼ばれるのは、その修道生活の最期を「藪」、すなわち、テントの中で、極度の貧困と困窮の中、裕福で高貴な両親の家の近くで、両親に正体を知られずに過ごした――そして、この同じテントに埋葬され、その後、両親はその「小屋」の場所に、彼の名を冠した教会を建立した。

1068 レウス1世「大帝」――ビザンツ皇帝。在位は457年から476年まで。

1069 ここで言及されている「眠らぬ者たちの修道院」は、ビフィニア（小アジア北西部）にあり、コンスタンティノープルに存在した同名の修道院をモデルにして設立されたもので、その修道院はメソポタミアから移築され、4世紀末に聖アレクサンドロスによって設立されたものであった。 この修道院の規律と修道生活は、とりわけ厳格なものであった。 この修道院の名は、修道士たちが昼夜の24時間に合わせて24の組に分かれ、ダビデの詩篇を長く詠み上げながら、二交代制で絶え間なく主を賛美したことに由来する。そのため、この修道院での礼拝は途切れることなく、決して止まることがなかった。 同様の修道院が、ビフィニアのソスフェニウラという町の近くにも、聖アレクサンドルの弟子たちであるヨハネとマルケルによって設立された。

「父上、あなたに内密の話をしたいのです。」

そして、彼を脇へ連れて行き、こう語りかけた。

「私の話を聞いてください、父よ――お願いです――そして、私に慈悲を授けてください。私には、この虚しい世を捨ててキリストに仕えたいという強い願いがあります。しかし、両親は私について全く異なる考えを持っています。彼らは、年上の兄弟たちよりも私を愛しているため、私に何らかの高位な役職に就かせ、結婚させたいと考えているのです。　しかし、私は聖なる教会で神の御言葉を頻繁に聞き、自ら聖典を読むうちに、この世のものはすべて虚しいものであり、ただ一つ有益なことは、この世を捨てて、あなた方の修道者の姿でキリストに仕えることだけだと悟りました。私たちの救いを望まれる神にかけて、あなたが自分の修道院に戻る際、私を連れて行ってくださるよう懇願します。

この言葉に、修道士は、神ご自身がその少年を御自身のもとに招いておられるのを感じた。彼は、帰還の際に少年を連れて行くことを誓い、こうして二人は別れた。

修道士がエルサレムへ旅立った後、至福のヨハネは福音に従って生きたいと願い、両親に福音書を買ってほしいと頼み始めた。キリストの言葉を学び、キリストに喜ばれる行いを実践できるようになるためであった。両親は、息子が聖書に対してこれほど熱心であるのを見て、大いに喜んだ。両親は直ちに熟練した写本師を雇い、美しい福音書の写本を作らせた。そして、その本を金で縁取り、宝石で飾り立てた。そうすることで、息子を熱心にその本を読むように誘うためであった。すなわち、本の中に記されたキリストの言葉の甘美さだけでなく、本の外見的な美しさもまた、彼を惹きつけるようにしたのだ。そのような福音書が完成すると、両親はそれを息子に贈った。　聖なる書を喜びをもって受け取ったヨハネは、熱心にそれを読み始めた。彼の心はキリストの言葉に癒やされ、日ごとに神への愛をますます燃え上がらせながら、自分の心の秘密を打ち明けたエルサレムからの修道士の帰還を心待ちにしていた。

長い時が経ち、その修道士が戻ってくると、ヨハネは大きな喜びをもって彼を出迎えた。

「さあ、わが子よ、約束通り戻ってきた」と修道士は言った。「もし望むなら、君を修道院へ連れて行ってあげよう。」

至福のヨハネはこう答えた。

「あなたを健やかな姿で戻してくださり、再びあなたにお会いできる恵みを授けてくださった神に感謝します。私は旅立つ準備ができています。しかし、もし両親が私を行かせたがらないとしたら、どうすればよいのでしょうか? 私の母は心がとても繊細で、私が彼らのもとを離れたいと知れば、地面に涙を流し、私を引き留めて、こうして私の願いを阻んでしまうでしょう。」　お願いです、父よ、私の親族や知人の誰も、私の出発や、私がどの道を通って去ったかを知らないよう、こっそりとここを離れましょう。

「そうしよう、わが子よ、お前の望む通りに」と修道士は言った。「そして、神がお前の心の願いを叶えてくださいますように。」

こうして彼らは海辺の船着き場へと向かい、船を見つけると、その船主に、不眠の修道院まで連れて行ってくれるよう頼み始めた。しかし、船主は運賃として多額の金を要求した。というのも、彼は船に大きな積荷が待っている上、帰路のチャーター料も必要だと語ったからである。

ヨハネは彼に尋ねた。

「お前の船で満載の貨物を運ぶのに、いくらかかるんだ? 」

「百ズラトニツだ」と船主は答えた。

「待ってくれ、兄弟よ、三日間だけ待ってくれ」とヨハネは言った。「そうすれば、お前の船をチャーターする。」

彼と話を終えると、ヨハネと修道士はそこを去った。二人きりになると、ヨハネは修道士に言った。

「船主は運賃を高く要求しているが、私にとって両親からこっそりと離れることの方が、それ以上に高い代償だ。だから、両親のところへ行って、いくつかの必要に充てるための金をくれと頼んでくるつもりだ。」

「行け、わが子よ」と修道士は答えた。「主が、御心のままに、お前の願いを叶えてくださいますように。」

実家に戻ったヨハネは、母にこう言った。

「母上、一つお願いしたいことがあるのですが、なかなか口に出せません。」

「望むことは何でも言いなさい、息子よ」と母は答えた。

「私の学友たちは皆」とヨハネは言った。「一度や二度ではなく、何度も私を家に招いてくれたのに、私は一度も彼らを家に招いたことがなく、そのもてなしに報いることもできませんでした。彼らの前で恥ずかしくて、もうその恥ずかしさのせいで学校に行くことさえできなくなってしまいました。」どうか、仲間たちをもてなすのに必要なだけのお金をください。

「朝まで待ってごらん」と母は答えた。「お父さんに話してあげるから、必要な分はくれるわ。」

母がヨハネの願いを夫に伝えると、夫は息子への愛情から、彼に百ズラトニツを与えた。これは、少年の善意が叶うよう、神の特別な摂理によるものだった。

息子に金を渡すと、父は彼を忠実な使用人の監督下に置き、少年が不必要にお金を使わないよう見張るよう命じた。ヨハネは喜びながらその使用人と一緒に海辺へ向かい、こう言った。

「美味しい魚を探して買おう。」

船に近づくと、彼は使用人を学校へ送り出し、こう言った。

「行って、仲間たちが集まっているか確かめてきて、それからまた私のところに戻ってきなさい。」

使用人が去ると、ヨハネは修道士と共に船に乗り込んだ。船頭に賃金を支払うと、彼らは岸を離れ、旅立った。ヨハネは両親から贈られた福音書も持参し、道中それを読みながら慰めを得ていた。

使用人は学校から戻ると、岸辺で長い間ヨハネを探したが、見つからなかったため、少年は家に帰ったのだと思った。そこで彼は主人のもとへ行き、ヨハネの行方を尋ねた。　直ちに、至る所で彼を必死に探し始めた。しかし、コンスタンティノープルやその周辺での長時間の捜索も実を結ばず、エウトロピオスの家では、最愛の息子ヨハネの行方を案じて、人々は苦々しく泣きじゃくっていた。　一方、ヨハネが旅の途中にある間、神は明らかに彼を助けておられた。神は船に順風を送り、旅人たちはほどなくして「眠らぬ者たちの修道院」へとたどり着いた。　そこで、その修道士はマルケロス修道院長と兄弟たちに、少年ヨハネについて知っていることすべてを語り、また、彼がどれほどの信仰と熱心な献身をもって修道生活への入会と主への奉仕を志しているかについても語った。

少年が極めて若いのを見て、修道院長は彼にこう言った。

「わが子よ！　君はまだ非常に若いため、修道者の行いを果たし、厳しい断食を守ることは難しいだろう。さらに、当修道院には、修道者となることを志す者を直ちに剃髪させるのではなく、その真意と敬虔な行いへの熱意を長い期間にわたって試練を経て確認するという慣習がある。　したがって、もし我々と共に修道生活を送りたいと望むなら、まずは修道服を着用せずに当修道院でしばらく暮らし、我々の生活をよく観察し、そのような労苦に耐えられるかどうかを自ら試してみなければならない。

すると、至福のヨハネはイグメンの足元にひれ伏し、痛切に泣きながら、こう懇願し始めました。

「お願いです、父よ、今すぐ私に修道服を着せてください。　私の若さではなく、私の熱意を見てください。私は心の底から、あなたの天使のような姿にふさわしい者と認められることを切望し

ているのです。私の願いを拒まず、至聖なる、同質にして命を与える三位一体の御名において、私を修道士としてこの修道院に受け入れてください。

修道院長は、少年の熱意と涙に心を打たれ、彼の中に宿る聖霊の恵みを鮮やかに感じ取り、直ちに彼を受け入れ、修道衣を授けることに同意した。そしてその後、彼に修道院の服従のすべての段階を着実に歩み、経験豊富な長老たちから学ぶよう命じた。

ヨハネは、ついにその願いが叶うと、熱意と謙遜をもって命じられたことをすべて実行し、修道者の修行において徐々に進歩を遂げ、やがて徳においてこれほどの完成度に達し、自分より先に修道生活に入った者たちをも凌駕し、すべての人にとって、絶え間ない祈り、　柔和な従順、そして最も厳しい断食を忍耐強く耐え抜くことの模範となった。彼はしばしば、何日も何も口にせず――ただ、聖なる、命を与えるキリストの聖体のみを摂取し――それだけで身を支えていた。イグメン自身でさえヨハネに驚き、彼にこう言った。

「わが子よ！　若いうちに、なぜそのような偉業に挑むのか。過度な断食によって体力が衰え、健康を損なって、今後の偉業やキリストの栄光のための奉仕ができなくならないよう、気をつけなさい。」

ヨハネは、いつものように謙虚にイグメヌスに頭を下げて、こう答えた。

– 聖なる父よ、この不肖の僕を赦してください。そして、怠惰で気弱な私のために祈ってください。主が私に偉業を成し遂げる力を与え、私の弱さを支えてくださいますように。

そのような功業に励みながら、至福のヨハネは修道院で六年間を過ごした。すると、あらゆる善を憎む敵――悪魔が、彼に立ち向かってきた。　ヨハネがさらなる功業を成し遂げる力を弱め、主の戒めを履行する上でのその立派な進歩を妨げ、阻むために、悪魔は彼の中に両親への思いを呼び覚まし、父と母が彼に注いだ偉大な愛を思い出すたびに、両親への憐れみによって彼の心を苦しめるように仕向けた。　悪魔はヨハネに次のような考えを吹き込み始めた。「今、両親は君がいなくてどうしているだろう？　君が彼らの知らぬ間に家を出てしまったから、彼らはどれほど嘆き、悲しみ、泣いていることか！　――父は泣き、母はすすり泣き、兄弟たちは嘆き、親族や知人たちはあなたを憐れんでいる。あなたのせいで、父の家全体が悲しみに包まれているのだ」。さらに、あの悪しき者は、両親の富や名声、兄弟たちが享受している栄誉、その他さまざまなこの世の虚しい恵みを、彼の記憶に呼び起こした。　悪魔は昼夜を問わず絶えずそのような考えで彼を惑わせたため、ヨハネはついに肉体の力が極度に衰え、かろうじて息をしている状態となった。厳しい禁欲と修道者の苦行、そして内なる思考の苦しみによって――その力は陶器の破片のように乾ききり、[1070] 、その肉体は風になびく葦のようになり[1071] 。

修道院長は、ヨハネが日ごとに衰えていくのを見て、彼にこう言った。

「わが子よ、私はかつて、神は御自分のしもべたちに過度な労苦を求めず、むしろ、聖なる御名の栄光のために、各自が自分の力の及ぶ範囲で神に仕えることを望んでおられる、とあなたに言ったではないか。わが子よ、あなたは当時私の言葉に従わなかった。その結果、今や過度な断食と耐え難い労苦によって、すでに力尽きてしまったのだ。」

「私を枯れ果てさせたのは断食ではありません、父よ」とヨハネは答えた。「私を疲れ果てさせたのは労働でもなく、悪しき者によって吹き込まれた思いが、すでに長い間、昼も夜も私を苦しめているのです。」

そう言って、ヨハネは両親や実家についての思いについて、イグメンに打ち明けた。イグメンは彼にこう言った。

[1070] この表現は（詩編21:16）から引用されたものである。

[1071] この表現は（マタイによる福音書11:7）から引用されたものである。

「以前にも言ったではないか、わが子よ。修道者の行いは重く、修道士たちは多くの労苦や敵の攻撃、そして言葉に尽くせない誘惑を背負っているのだと。」

この言葉を語りながら、イグメンは涙を流し、ヨハネのことを思うと長い間泣き続けた。しかし、万事を益に変えてくださる神は、イグメンの心に特別な秘められた働きかけをなさり、ヨハネが両親のもとへ行くことを妨げてはならないと彼に示された。主は、後に彼の中で御自身の御心を驚くべき形で成し遂げようとしておられたのである[1072]。 修道院長はヨハネが望む場所へ行くことを祝福し、ただ、敵の罠から慎重に身を守り、旅の途中で清さを保つよう諭した。

「たとえ両親のもとへ行くとしても」とヨハネは答えた。「そこでも、神の御加護と皆様の祈りによって、私は敵の首を打ち砕き、その無力さを示してやります。」

その後、ヨハネは旅の準備をするために自分の独房へと向かった。 その準備とは、他の何ものでもなく、ただ祈りと涙、心の嘆き、そしてひざまずくことだけから成っていた――主が敵に勝利を許さず、ご自身が知っておられ、望まれる通りに、その道を御自身の善き、そして全き御心によって導いてくださるよう願うためであった。 翌日朝、イオアンは修道院長のもとへ行き、その足元にひれ伏して、修道院を去ることに対して怒らないでほしいと懇願し、父のような祝福と聖なる祈りで彼を見送ってほしいと頼んだ。

すると、修道院長はすべての兄弟たちを呼び集め、ヨハネが彼らのもとを去ろうとしていることを告げ、彼のために祈るよう命じた。一方、ヨハネ自身は別れを告げながら、兄弟たちにこう語った。

「悪魔が、両親に会うという口実で、私をこの聖なる場所から完全に追い出そうとしていることは承知しています。しかし、私は神と、そして皆様の聖なる祈りに希望を託しています。そうすれば、両親にも会えるでしょうし、悪魔の誘惑に打ち勝ち、悪魔を打ち負かすことができるでしょう。」

その後、皆は教会へ行き、そこで涙ながらにヨハネのために祈った。修道院長は、彼の旅立ちを祝福してこう言った。

「行け、わが子よ。父と子と聖霊の御名によって。そして、我らの主イエス・キリストが、あなたと共に歩み、御心に従ってあなたの道を導いてくださいますように。」

他のすべての修道院長たちもまた、両手を挙げて彼に祝福を与えた。ヨハネは彼ら全員に口づけをし、こう言った。

「主があなた方を救われますように、父たちよ、兄弟たちよ。主があなた方を救われますように――主によって祝福されたこの共同体の、善良な修道者たちよ。私をその共同体に愛をもって迎え入れてくださったあなた方ですが、私は今、神に喜ばれるこのような人々と共に暮らすに値しない者として、その共同体から離れなければなりません。」

そう言い残して、彼は修道院を出て、旅路についた。

修道院から一スタディオン[1073] の距離を離れたところで、彼は振り返り、修道院を見て苦々しく泣き出した。彼はひざまずき、すすり泣きながら地面に涙をこぼし、神に祈りを捧げた。それから彼は立ち上がり、再び旅路についた。自らを神に委ね、神の摂理と加護に希望を託しながら。 道中、彼はぼろぼろの服を着た一人の物乞いに遭遇した。ヨハネは彼に声をかけ、こう言った。

「兄弟よ、君の服がとても古びて、あちこち破れているのが見える。お願いだから、それを私に譲ってくれ。その代わり、私の最高の服を君にあげる。」

乞食は大変喜び、すぐに自分のぼろ服を脱いでヨハネに渡すと、ヨハネは代わりに自分の一番良い服を彼に与えた。

[1072] この表現は（詩編15:3）（スラブ語訳）から引用されたものである。

[1073] この距離は87 1/2サジェンに相当する。

ヨハネがコンスタンティノープルに近づくと、遠くから両親の家を見て、顔を地面につけてひれ伏し、次のように祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、私を見捨てないでください！」

夕暮れ時となり、聖ヨハネはここで夜が更けるのを待った。真夜中になると、実家の門に近づき、再び地面にひれ伏してこう祈った。

「主イエス・キリストよ！　これが私の父の家です。私はこれを見ることを切に願っていました。しかし、そのために御恵みを失うことのないよう、どうかお許しください。主よ、お願いいたします。天より助けと力を授けてください。悪魔の誘惑に打ち勝つ力を与えてください。悪魔が私を支配し、私が堕落することのないよう、どうかお守りください。そして、この場所で私の生涯を立派に全うさせてください。

こうして彼は夜明けまで祈り続けた。日が昇り、扉が開いて、他の奴隷たちを統率する家の管理人が出てきたとき、彼はぼろぼろの服を着た物乞いを見て、こう尋ねた。

「お前は誰だ？　どこから来た？　なぜここへ来るなどという無礼を働くのか？　さっさとここから立ち去れ。今にも主人がお出でになるからだ。」

「ご覧の通り」とヨハネは穏やかに答えた。「私は物乞いで、頭を休める場所がありません。どうか、ご主人様、私を憐れんでください。ここから追い出さず、この隅に留まることをお許しください。」　私は誰にも害を及ぼしません。あなたが私を憐れんでここに留まることを許してくださるなら、あなた自身も神の恵みを受けることになるでしょう。

その乞食を憐れんだ家主は、彼をそのままにしておいた。しばらくして、ヨハネの両親が家から出てきて、王宮へと向かった。彼らを見た聖人は涙を流し、心の中でこう呟いた。

「ついに私の願いが叶った――両親の姿が見える。だが、悪魔よ、お前は喜んではいられない。なぜなら、私の主の恵みによって、私に向けられたお前の灼熱の矢など、私は何とも思わないからだ。」

そして再び、彼は心の底から神に呼びかけた。

「主イエス・キリストよ、最後まで私を見捨てないでください！」

福者ヨハネは門の隅で動かないまま、ラザロのように（ルカ16:20）、あるいは灰の山の上のヨブのように（ヨブ2:8）、そこに横たわっていた。彼の父は、門のそばに横たわる貧しい物乞いを見て、自分の食卓から食べ物を送るようになり、こう言った。

「この乞食の忍耐は偉大だ。住む家もなく、冬も酷暑も、霜も雨も耐え忍んでいる。まことに、このような者こそが天の御国を相続するのだ。」　彼のために、神はもしかすると私たちをも救ってくださるかもしれない。だからこそ、神は彼を私たちの元へ導かれたのだ――彼に慈悲を示すことで、私たちもまた、そのおかげで後に神から憐れみを受けるにふさわしい者とされるためである。誰が知るだろうか――もしかすると、今まさに、私たちの愛する息子ヨハネも、同じような貧困に耐えているのかもしれない。私たちは彼の居場所さえ知らない。私たちはこの乞食に対して、もしそのような状況に置かれたら、他の人々から私たちの息子に望むのと同じことをしているのだ。

ある日、ヨハネの母が家を出ると、この乞食がぼろ服姿で糞の山の上に横たわっているのを見かけました。彼女はそれをあまりにも嫌悪感を覚える光景だと感じ、使用人たちにこう言いました。

「この忌々しい男をここから引き離しなさい。彼がここに横たわっているのを見ている限り、私はここへ来ることはできない。」

使用人たちは直ちに彼を別の場所へ引きずり去った。聖人は、もはや遠くから父の家の門を眺めることしかできなかった。ある日、門から出てきた家の管理人を見かけると、彼はその人を呼び寄せ、こう言った。

「お願いです、ご主人様。あなたが最初から私に親切にしてくださったように、今も私を憐れんで、小さな小屋を作ってください。そうすれば、奥様が私の姿を見ることなく、私にも寒さをしのぐための、せめて何かの覆いができるでしょう。」

管理人はヨハネの願いを聞き入れ、まもなく小さな小屋を建てた。聖人はその小屋に留まり、すべての時間を神への祈りに費やした。　毎日、司祭は自分の食卓から彼に食事を送った。ヨハネは感謝してそれを受け取ったが、自分を訪ねてくる他の貧しい人々にそれを分け与え、自身は常に飢えと渇きに耐えていた。そのような極端な節制と断食のせいで、彼はひどく痩せ細り、骨の関節が一つ一つ数えられるほどになった。

丸三年もの間、ヨハネはこのような生活を辛抱強く耐え忍び、自分が両親の息子であることを両親に隠していた。 そして3年が過ぎたとき、至聖にして慈愛に満ちた我らの主イエス・キリストは、御自分のしもべの忍耐と謙遜をご覧になり、彼の苦難と労苦に終止符を打つことを定められました。主は幻の中で彼に現れ、こう言われました：

– 喜びなさい、ヨハネよ。あなたは、わが最愛の弟子である処女ヨハネに倣った者である[1074]。あなたはすべてを捨てて、清らかな処女の身をもってわたしに従ったからだ。今や、あなたの人生の終わりが近づき、あなたの大きな苦しみも終わりを迎えようとしている。三日後、あなたはわたしのもとに来て、義人の安息を受け継ぐことになる。

幻から我に返ると、ヨハネは涙ながらに主に祈り始め、こう言った。

「主よ、わが神よ、私のような不適格な者に義人の安息を授けてくださることを感謝いたします。しかし、わが主よ、どうか私の両親のことも覚えてください。御自身の偉大な憐れみをもって彼らを憐れみ、彼らの罪を清めてください。あなたはただひとり、善であり、深く憐れみ深い方だからです。」

そのような祈りの後、彼は前述した両親の召使い、すなわち家政係を呼び寄せ、こう言った。

「初めから今に至るまで、あなたは私に慈しみ深くしてくださった。お願いです、主よ、最後まで慈しみ深くいてください。　ただ一つお願いがあります。行って、ご令室にこう伝えてください。『あなたが門から追い出すよう命じたあの物乞いが、私を通じて次のように懇願しています。「主キリストの御名において、この貧しい私を軽んじないでください。どうか私のところへお越しください。あなたとお話ししたいことがあるのです。」』

使用人は、その乞食の言葉を女主人に伝えた。すると女主人は言った。

「あの物乞いが、私に何を話したいというの？　私は彼を見るのも耐えられないのに、さらに私と話をしたいなんて。」

彼女はこれを夫に話したが、夫は彼女をなだめてこう言った。

「行け、妻よ。乞食を嫌がってはならない。神ご自身が乞食たちを選ばれたのだから。」

それでも、彼女は夫の言うことを聞き入れず、行くことを拒んだ。聖ヨハネは再び彼女のもとへ使いを送り、こう伝えた。

「三日後に私は死ぬ。もし私と会って話をする気がないなら、後でひどく後悔することになるだろう。」

彼女は迷い始めた――行くべきか行かないべきか――。それは、乞食の言うことを聞きたいというよりも、彼が一体何を伝えたいのかという好奇心からであった。彼女はようやく優柔不断さを克服し、行く決心をした。それは、彼の死が迫っているという話を聞き、彼から何か新しいことを知ることができると期待したからに他ならなかった。　彼女は家を出て、使用人たちに、乞食を連れてきて自分の前に座らせるよう命じた。聖ヨハネは重い病気のため、もはや自力で近づくことができなかったからだ。正体を悟られないよう、彼は顔を覆い、彼女にこう語りかけた。

[1074] すなわち、聖ヨハネ・テオロゴスである。

「もう間もなく、奥様、私はあなたから与えられている宿と助けを必要としなくなるでしょう。そして、福音書にある主の御言葉『*あなたがたが、　これらの私の小さな兄弟たちの一人にしたことは、私にしたことである*』（マタイ25:40）に従い、あなたの施しに対する報いはすでに用意されています。」　私は、この貧しさゆえに何の財産も持ち合わせていませんが、あなたに何らかの祝福を残したいと思っています。しかしその前に、お願いがあります。私が言うことを実行すると誓ってください。そうすれば、あなたは祝福を受けるでしょう。

彼女は、彼が言うことを実行すると誓った。すると、聖ヨハネはこう頼み始めた。

「お願いです、奥様。私が死んだら、私のテントが立っているその場所に私を葬ってくださるよう手配してください。今私が身に着けているこのぼろ服以外の、いかなる衣服でも私を覆うことを許さないでください。私はもはや、それ以上の名誉ある場所や、より良い衣服に値する者ではないのですから。」

その後、彼は胸元から福音書を取り出し、彼女に手渡しながらこう言った。

「これが、あなたにとってこの世での慰めとなり、あなたとあなたの夫、すなわち私の主君にとって、永遠への善き道となりますように。」

彼女は福音書を受け取ると、それを手にとって、片面からもう片面へと見比べながら、心の中でこう思った。

「この福音書、私の主人が息子のために製本してくれたものとよく似ているわ！」

そして、彼女は立ち上がって、それを夫に見せた。夫はそれを見て、こう言った。

「これは確かに、私たちが最愛の息子に贈ったあの福音書そのものだ。他のものじゃない。さあ、行って尋ねてみよう。なぜ彼がこれを持っているのか、そして私たちの息子ヨハネについて何か知っているかどうかを。」

両親は二人で彼のところへ行き、こう語りかけました。

「聖なる、命の源である三位一体の名にかけて、頼むから教えてくれ。この福音書はどこで手に入れたのか、そして私たちの息子ヨハネはどこにいるのか？」

もはや心の苦しみをかくしきれず、涙をこらえきれなくなった彼は、こう答えた。

「私はあなた方の息子ヨハネです。そして、これはあなた方が私に贈ってくださったあの福音書そのものです。確かに、あなた方に悲しみを与えたことは私の過ちですが、あなた方が贈ってくださったこの福音書のおかげで、私はキリストを愛し、その善き軛を忍耐強く負うことを学んだのです。」

これを聞いて、両親は息子の枕元にひれ伏し、彼を抱きしめ、長い間、あふれんばかりの涙を流した。　同時に、彼らの心は喜びと悲しみで満ち溢れていた。愛する息子がようやく見つかったことを喜びつつも、彼がこれほどまでに貧しくみすぼらしい姿で発見されたこと、そして門のそばに横たわっていた時に彼だと気づかなかったことを、心から嘆いていたのである。　近所の人々、友人、知人たちが皆、彼らの元へ集まった。ヨハネの帰還の噂は街中に広まり、人々は皆、神を賛美しつつ、この出来事に驚嘆した。その間、聖ヨハネは自らの魂を神の御手に委ねた[1075]。 神は、ヨハネの生涯が、その最期の瞬間においても、世俗的な栄誉によって穢されることなく、また親の愛からも離れているままであることを望まれた。それゆえ、主は彼を御自身のもとに急いで迎え入れ、彼がこの世や世俗的な交わりとは無縁のまま、天の住まいに入ることができるようにされたのである。

[1075] 聖ヨハネ・クシュチニクは5世紀後半の初頭に逝去した。教皇フォルモザの時代（896年）、ローマにはこの聖人を称える教会が建てられ、そこには彼の聖遺物の一部が安置されていた。巡礼者アントニオスは1200年、コンスタンティノープルにある彼の宮殿の門前でその聖遺物を目撃した。　十字軍（1204年～1261年）によって、彼の頭部はコンスタンティノープルからベザンソンへ移され、遺骨はローマの同名の教会に安置されているが、コンスタンティノープルからいつここに移されたのかは不明である。

誓いを忘れて、母は彼から古びたぼろ服を脱がせ、金糸で織られた高価な服を着せた。しかし、予期せず、その直後に彼女は体がぐったりとし、危険なほど重病に陥った。ヨハネの父エウトロピウスは言った。

「我々は息子の意志を尊重しなければならない。彼は、このような高価な服を着たまま葬られることを望んでいないのだから。」

聖人の遺体から世俗の衣服を脱がせ、再び乞食のようなぼろ服を着せると、ヨハネの母テオドラはたちまち癒やされ、以前のように健康を取り戻した。聖ヨハネの尊い聖遺骨を、両親は彼が暮らしていたのと同じ天幕に埋葬した。　その後、彼らは息子の棺の上に教会と大きな旅人宿を建て、自らの全財産を旅人の世話や貧しい人々の糧のために寄付した。その直後、彼ら自身も安らかに息を引き取り、息子の棺の上に建てたその教会に埋葬された。

これこそが、聖なる尊者ヨハネ・クシュチニクの生涯であり、キリストのために彼が耐え抜いた功績と労苦であり、悪魔との戦いである。悪魔に打ち勝った彼は、今や、私たちの主イエス・キリストの恵みにより、勝利を祝う教会の内で天の冠を授けられている。主イエス・キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

聖殉教者パンソフィアの記念日

記念日：1月15日

聖パンソフィオスは、アレクサンドリアの総督[1076]　ニロスの息子であった。莫大な富を所有していたニロスは、息子の教育に惜しみなく資金を投じ、聖パンソフィオスは、その優れた才能に加え、幅広い世俗的教育とともに、キリスト教の真理に関する確固たる知識を身につけた。　父の死後、聖人はその富を貧しい人々の救済に充て、その後、世俗的な考えを捨てて主を求めるために荒野へと退いた。　彼は27年間、隠遁生活を送り、心を地上の事柄から天の御国への黙想へと向け、絶え間なく神への祈りに身を捧げた。この聖なる隠者の徳高い生き方の評判は、キリスト教徒迫害者であったデキウス帝の治世下にいたアレクサンドリアの総督[1077] の耳にも届いた。 総督の裁判に召喚された聖パンソフィオスは、異教徒たち自身が語る神々に関する物語を用いて異教の教えの虚偽を暴き、真実性に満ちた証拠をもって、キリストこそが神であることを説き、それによって迫害者の傲慢を恥じ入らせた。

このため、キリストの殉教者は残酷な鞭打ちの刑に処され、こうして殉教の冠を授かった[1078] 。

1月29日

1月16日（旧暦）

聖使徒ペトロの尊い鎖への礼拝。

記念日 1月16日

[1076] プロコンスルとは、ローマ帝国の属州を統治していた人物のことを指す。
[1077] プレフェクトとは、都市の長のことである。
[1078] 3世紀半ば。

聖使徒ペトロは、ヘロデ王の命令により[1079]、牢獄に投じられ、二本の鉄の鎖で縛られた。

しかし、夜、彼が二人の兵士の間に寝ていたとき、主の御使いが彼の脇腹を突いて起こし、牢屋から連れ出した。その際、使徒の手から鉄の鎖が落ちた、と『使徒行伝』（使徒12:7）に記されている。 ペトロが鎖と牢獄から奇跡的に解放されたという知らせはエルサレム中に広まり、 ——そして、信者たちの中には、こっそりとその鎖を持ち帰り、それを手元に保管する者もいた。それは、その鎖を見つめることで、あたかも最高位の使徒ペトロその人を目の前にしているかのように感じられるためであった。ペトロは牢獄から出た直後、神の言葉を宣べ伝えるために他の国々へと旅立ち、エルサレムには戻らなかったからである。 これらの鎖は、かつて使徒の体がしっかりと縛られていたことから、癒しの力を授かっていた。 聖使徒パウロの頭巾やスカーフが、彼の汗が染み込んでいたため、病気を癒やし、悪霊を追い払ったことはよく知られている（使徒行伝19:12）。聖ペテロの鎖も、かつて使徒の体をしっかりと締め付けていたため、同様の効果を発揮した。 信者たちは深い畏敬の念をもってこれらの尊い鎖を崇め、礼拝を捧げ、貴重な遺産として代々大切に保管した。その際、親は子に、子はまたその子孫に、これらの鎖がどのような偉大な囚人に触れていたのか、そして誰の体によって聖別されたものなのかを説明し続けた。 こうして、それらはエルサレムの至聖なる総主教ユヴェナリウスの手に受け継がれた。そして、敬虔な女王エウドキア、 テオドシウス王 の妻[1080]が、滞在中に多くの教会を建設し、王室の財を投じて聖地を美しく飾り立てたエルサレムからコンスタンティノープルへ帰還した際、ユウェナリウス総主教は、彼女の敬虔さと聖地への愛を称え、数多くの霊的な宝物を贈った。 その中には、聖使徒ペトロの尊い奇跡を起こす鎖[1081]も含まれていた。 コンスタンティノープルに戻った後、エウドキアは鎖の一つを、大聖ソフィア大聖堂内にある聖使徒ペトロの礼拝堂に献納し[1082] 、もう一つは、ローマ皇帝ヴァレンティニアヌス3世と結婚していた娘のエウドクシアのもとへローマへ送った。[1083] 母と同様に敬虔であったエウドクシアは、この貴重な贈り物を愛情を込めて受け入れ、エクスクイリウムの丘に聖使徒ペトロに捧げる教会を建立し、そこにこの鎖を、ローマで発見されたもう一つの聖使徒ペトロの鎖——ネロによる拷問の際に彼を縛ったもの——と共に安置した[1084] 。 その後、聖使徒ペトロを記念し、称え、また我らの神キリストの栄光のために、1月16日にこれらの尊い鎖を崇敬する祝祭を行うことが定められた[1085] 。

[1079] ここで言及されているのは、もちろんヘロデ・アグリッパ1世、すなわちヘロデ大王の孫であり、ユダヤの王で、聖使徒ヤコブ・ゼベダイを剣で殺害し、使徒ペトロをも滅ぼそうとした人物である。 ローマ皇帝カリグラ（37–41年）およびクラウディウス（41–54年）の治世中にユダヤを統治した。使徒ペトロが牢獄から奇跡的に解放された直後、天使に打たれて重病により死去した。

[1080] テオドシウス2世（若き）——ビザンツ皇帝、408年から450年まで在位した。

[1081] 聖使徒ペトロの聖なる鎖は、439年までエルサレムに保管されていたが、その年に皇后エウドキアがユウェナリウス総主教からそれを受け取った。

[1082] ここで言うのは、もちろんコンスタンティノープルにある、コンスタンティヌス大帝によって建立された、神の知恵（ソフィア）に捧げられた大聖堂のことである。その後、この大聖堂は537年にユスティニアヌス大帝によって見事に修復・拡張されたが、 1453年、コンスタンティノープルがトルコ軍に陥落すると、モスクへと改築された。ユスティニアヌス帝時代の聖ソフィア大聖堂は、今日に至るまで、ビザンチン様式におけるキリスト教建築の最も傑出した、最も荘厳な記念碑であり、その発展の最盛期を象徴している。

[1083] ヴァレンティニアヌス3世 – ローマ皇帝；在位は423年から455年まで。

[1084] ネロ——ローマ皇帝、在位54～68年。彼の命により、使徒ペトロは殉教した（約67年）。——ネロの命により使徒ペトロが縛られた鎖は、2世紀にローマで発見された。

[1085] ローマの「鎖の祭日」は、2世紀初頭、教皇アレクサンドロス（在位109～119年）の時代に、ローマの牢獄に収容されていた使徒ペトロの鎖を記念して制定された。当時、その鎖は崇敬され、口づけされていたが、その後、エルサレムから送られてきた鎖によって、この祭日は新たな意義を帯びるようになった。この祭日は、ローマ教会において8月1日に祝われる。

トロパリオ、第4調:

ローマを離れず、あなたが身に着けていた尊い鎖を携えて、使徒たちの首席者よ、私たちのところへ来られました。その信仰を崇めつつ、私たちは祈ります。神へのあなたの祈りによって、私たちに大きな憐れみをお与えください。

コンダク、第2調:

キリストという岩は、信仰の岩を輝かしく賛美し、首席使徒の弟子たちを称えます。ペトロよ、あなたの尊い鎖という奇跡は、すべての人を祝祭へと招き、罪の赦しを授けてくださいます。

コンダク、第2調:

至高にして第一の使徒、神の真理の弟子、偉大なるペトロを讃え、その信仰によって鎖に口づけし、罪の赦しを受けます。

聖殉教者スペウシッポス、エレウシッポス、メレウシッポス、その祖母レオニラ、および彼らと共に殉教した者たちの受難。

記念日：1月16日

聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネの弟子、聖ポリカルプは、聖霊の導きにより、キリストを信じる信徒の群れをさらに増やそうと願い、弟子たちを様々な国へ派遣し、彼らが至る所で恐れることなく神の御言葉を宣べ伝えるようにした。 ガリア[1086]において、皇帝の勅令によりキリスト教徒に対する迫害が至る所で起こり、彼ら全員が死刑を宣告されていることを知った聖ポリカルプは、神の司祭であるアンドキオスとベニグナ、そして第三の者である助祭フィルスをその地へ派遣した。　彼らは真に徳高く、神に献身的で、熱心に働き、愛をもっていつでも福音を伝えるために、陸であれ海であれ、喜んで旅立つ用意があり、キリストのために受ける苦難や死を恐れるよりも、むしろそれを切望していた人々であった。司教からの命令を受けると、彼らは直ちに船に乗り込んだ。彼らを見送る際、聖ポリカルプ司教は次のような言葉で激励した。

「行け、勇敢な者たちよ。キリストの恵み深い助けにより、主のためにしっかりと立ち続けよ。キリストの至聖なる御名を聖なる告白によって、あなたがたは多くの同志を得、彼らと共に勝利を喜び、栄光と永遠の誉れに到達するであろう。　あなたがたの労苦の豊かな実りが増し加わり、あなたがたの聖なる功績を目の当たりにして、義人たちの天国の住まいにおける喜びがさらに高まるように！

聖ポリカルプによるこれらの祝福、そして他にも多くの祝福に導かれて、彼らは船に乗り込み、まもなく、神の特別な導きにより、マッシリアの海岸[1087] に到着した。陸に上がると、彼らは直ちに旅立ち、神の御使いが彼らの先頭に立って歩いた。 エドゥヤと呼ばれる町[1088] に到着すると、彼らは神の御摂理により、ファウストという極めて高潔な上院議員に出会い、彼は名誉と愛をもって彼ら

[1086] ガリア――現在のフランス。

[1087] マッシリア――南ガリアの海辺の都市で、優れた要塞化された港を有し、南ガリアにおけるローマ文化の最も重要な中心地の一つであった。　現在はマルセイユと呼ばれ、フランスの「ローヌ河口」県の県都であり、人口30万人以上を擁するフランス最大の海運貿易都市である。ローヌ川の河口とトゥーロンの間に位置し、リヨン湾の東側の入り江沿い、プロヴァンス・アルプスの岩だらけの支脈の麓にある。 古代、ここからキリスト教が南ガリア全土に広まった。

[1088] エドゥアは、パリの南東、ロワール川とソーヌ川の間に位置する、ガリアの古代都市である。

をもてなした。　彼が、客たちが長老であることを知ると、自分の家族や親族、知人たちを聖なる洗礼を通じてキリストのもとへ導いてくれるよう、熱心に彼らに懇願した。彼自身はすでにキリスト教徒であったが、キリスト教への迫害のため、秘密裏に信仰を守っていたのである。　彼は自分の息子である青年シンフォリアヌスも彼らのもとに連れてきた。その後、この青年は聖人たちの教え、そして何よりも神の摂理により、状況がそれを求めたとき、キリストのために殉教することとなった。ファウストは青年を司祭たちに紹介し、聖ヴェニグナに彼に洗礼を授けるよう、また聖アンドキオに彼の代父となるよう懇願した。そして、神の僕たちは父親の敬虔な願いを叶えた。

その後、ファウストは自分の妹とその孫たちのことを思い出し、こう言った。

「私にはレオニラという実の妹がおり、彼女はリンゴニアの[1089] 都市の一つに住んでいます。彼女には三人の孫――息子の子供たちで、生まれつきの双子――がいます。彼らは素晴らしい教育を受けてはいますが、父たちの例に倣って異教のままであり、偶像を崇拝しています。　一方、彼らの祖母であり、私の妹である彼女は、孫たちをキリストの戦士とし、キリストへの奉仕に捧げたいと願っています。神の司祭の皆様、どうか彼女を助け、始めた事業を最後まで成し遂げてください。この高貴な一族全体を啓蒙してください。

これを聞いた聖人たちは、宣教のために分かれることを決めました。アンドキオスはフィルスと共にアウグストドニオスの村[1090] へ向かい、そこで多くの人々をキリスト教へと改宗させた後、殉教の死を遂げました。一方、ファウストは聖ヴェニグナを、リンゴニオスの町にいる自分の姉のもとへ送り出しました。

ファウストの妹レオニラは、まるで天から降ってきたマナであるかのように、聖ヴェニグナを大いなる喜びをもって迎え入れた。 その日、彼女の孫たちは、女神ネメシス[1091] への不浄な生贄を捧げるため、パスマシアと呼ばれる集落にいたが、帰宅する際、祖母に生贄の肉の残りを持ってきた。しかし、彼女は不浄な異教の生贄を忌み嫌って、その肉を犬に食わせるために捨て、聖なる長老ベニグネの立ち会いのもと、孫たちに向かって次のように語った。

「愛しい孫たちよ！　私たちの主イエス・キリスト、真の生ける神を知りなさい。天使たちやすべての被造物がふさわしい礼拝を捧げるその方は、御言葉によって全世界を創造し、御命令によって天の高さを広げ、地の広さを広げ、海の深淵を集め、 それらを砂で囲み、 天を星々で飾り、その上に二つの偉大な天体を据え、それらが御自身の光で御自身が創造されたすべてのものを照らすようにし、水に魚を住まわせ、地に木々や草を植え、御自身の御心によって、その上にあらゆる動物を創造された。　その後、神は御自身の姿と似姿に従って人間を創造することを御心に留め、彼に知恵、知識、理性の特別な賜物を授けられた。それは、彼がすべての被造物の主である主を熱心に求め、主を知ることを軽んじることで主への不敬を示さないようにし、善を知り、それを悪と見分けることを学ぶためであり、　また、人々を惑わすために悪魔が作り出した無感覚な偶像に、いかなる敬意も払うことなく、それらを不浄なものとして拒絶し、それらとのあらゆる関わりを避けるためです。なぜなら、これらの偶像は、すでに楽園において最初の人間を惑わした悪魔の狡猾さによって、この世に現れたものだからです。愛する孫たちよ！　すべての不浄な偶像を捨て、万物の創造主である、私た

[1089] リンゴニ族――古代ケルト民族の一つで、ベルガエ族の領土内、ソーヌ川上流からマルヌ川およびセーヌ川の源流地域にかけて居住していた。彼らの首都はアンデマトゥンという都市であり、これは当然ながら、現在のラングル――フランス・マルヌ＝シュル＝マルヌ県の都市であり、一級要塞である。

[1090] アウグストドン――エドゥイ族（ガリアのケルト民族）の主要都市。現在はロワール・エ・ソーヌ県のオティュンである。

[1091] 古代ギリシャ人の信仰によれば、ネメシスは、人々の行いに応じて運命や幸福、不幸を配分し、行われた行為に対する道徳的裁きに基づき報いまたは罰を科す女神であった。とりわけ、傲慢な人々に対して復讐し罰を与え、その高慢さを抑え込み、運命によって過度の幸福を与えられた者には、　喪失や不幸をもたらし、公正な均衡が再び回復され、人間が自らの運命を忘れないようにした。

ちの主イエス・キリストを堅く信じなさい。見よ、神の恵みにより、遠く離れた国から、あなたがたの前にいるこの聖なる人が遣わされてきたのです。　彼の言葉に耳を傾けてください。なぜなら、神ご自身が彼の口を通して、あなたがたに御自身の戒めを告げ知らせておられるからです。そして、あなたがたの救いに役立つことを、彼から学びなさい。

祝福されたレオニラが、聖ヴェニグムと共にこのように孫たちを諭したとき、神の恵みが目に見えぬ形で彼らの心に浸透していった。若者たちは驚きながら祖母の言葉を聞き、互いに顔を見合わせながら思索にふけり、やがて皆一斉にこう答えた。

「なぜ、これほど重要な事柄について、今まで私たちに黙っていたのですか？　なぜ、これほど長い間、真理の道と輝かしい光を私たちから隠していたのですか？」

レオンイラは視線を上げ、敬虔に両手を天へと掲げ、孫たちが真理を知り始めていることを神に感謝し、愛を込めて彼らにこう言った。

「わが子よ、そしてあなた方にとっての父――彼は今や冥界へと下ったが、知性も知恵も備わっていなかった。その心はこれほどまでに頑なで、不義の闇に深く沈んでいたため、キリストなる神を信じるどころか、その聖なる御名さえ口にすることさえ拒んでいたのだ。」　不信仰の憎悪に心を完全に支配され、偶像崇拝に目がくらんで真理の光さえ見ることのできなかった者に、神の言葉が一体どのような益をもたらすことができたというのか？　彼のためだけに、私は沈黙を守り、あなたがたにとって有益なことを語らなかったのです。彼の有害な影響によって、あなたがたが正しい道から永遠に逸れてしまうことを恐れていたからです。しかし、今や神の御心により、彼はこの世から去ってしまったので、あなたがたにとってのあらゆる障害は取り除かれました。　今こそ好機です。肉体の目と心の目を開き、天に向け、私たちの主イエス・キリストの恵みの助けを借りて、魂から偶像崇拝へのあらゆる傾向を根絶し、それによって絶え間ない喜びに満たされるようにしてください。

至福のレオニラは、聖なる司祭と共に若者たちにさまざまなことを語りかけ、その言葉に触発されて、若者たちは前夜に見た夢――それは彼らがキリストの信仰に改宗することを予兆するものであった――を思い出し、互いに語り合い始めた。

「私は夢を見た」と、年長のスペウシッポスが言った。「まるで祖母の胸に寄り添い、乳が溢れんばかりの乳首を吸っているようだった。すると祖母は優しく私にこう言った。『飲みなさい、スペウシッポス。この救いの乳を。それを糧として、敵に立ち向かい、輝かしい勝利を勝ち取れるように』と。」

「そして私は」とエレウシッポスが言った。「天の玉座に座り、言葉では言い表せないほどの栄光に輝いているある男性を見た。その輝きで私の目は眩み、全身が恐怖と戦慄に包まれた。　その方は、その輝かしい顔を私の方に向け、こう言われた。「恐れるな。あなたは勝利の冠を授かるにふさわしいのだから！」

三番目の兄弟メレウシッポスは、自分が見た夢について次のように語り始めた。

「私は――それがどのような王なのか自分でも分からないが――笏を手にした偉大なる王を見た。王は私たち三人をまとめて御自身の軍勢に迎え入れ、戦士の帯を授け、高価な代償を払って捕虜の枷から私たちを買い戻し、黄金の言葉で永遠の自由を約束してくださった。そして私にこう言われた。『メレウシッポスよ！　私はあなたたち、　三人の兄弟を、私の側近とし、永遠の報いをもって冠せよう。なぜなら、あなた方の祖母が昼も夜も絶え間なく、あなた方の救いのために私に祈り続けているからだ。そうしてあなた方が真の生き方の道へと導かれ、悪霊の惑わしから解き放たれ、真理の光を見るにふさわしい者となり、死の代わりに命を受け継ぐことができるようにと。」

三人の兄弟が受けたこれらの幻は実に驚くべきものであり、いずれも彼らが神へと立ち返ることを意味していた！　これらの幻に感銘を受け、レオニラと長老の説得にも影響されて、兄弟たちはついに、至福に満ちた祖母のもとへ赴き、こう言った。

「教えてください。あなたの説教によって、私たちが以前の迷いから解放され、救いに至るためには、何をすべきでしょうか？」

聖レオンイラと神の長老は喜び、心の中で主に感謝を捧げながら、こう答えた。

「神のすべての戒めを守り、王の王であるキリスト・神を堅く信じ、不浄な偶像を捨て去り、創造主である神への奉仕に全身全霊を捧げなさい。」

その後、聖なる長老ヴェニグヌスは、若者たちにキリスト教の信仰の真理を丁寧に教え、彼らに洗礼を授け、キリストへの信仰を確固たるものにした。そして自身はディヴィオニオス地方の[1092]ある町へと去り、そこで短期間のうちに多くの人々をキリストへと導いた後、殉教してこの世を去った。

三人の聖なる双子の兄弟は、キリスト教の信仰に確固たる信念を持った直後、使用人を遣わして、前述の女神ネメシスの偶像を破壊するよう命じ、さらに自分たち自身も、家の中にあった十二体の偶像を破壊した。　たちまち、リンゴニア全土に、レオニラの孫たちである、これほど高貴な家系の若者たちがキリストを信じ、偶像を破壊したという噂が広まった。民衆は彼らに対して憤りを募らせ、当局は反旗を翻し、裁判官や異教の祭司たちは怒りに燃えた。　四方から集まった指導者たちは、聖なる若者たちを取り調べ始めた。

「なぜ、突然、そのような狂気があなた方を襲ったのか？　古くからあなた方の先祖が崇めてきた神々への崇拝を捨てよと、誰があなた方に吹き込んだのか？　まさか、王の命令をそう簡単に無視し、ユダヤ人によって十字架にかけられたキリストを神とみなすつもりなのか？」

聖霊に満たされた若者たちは、こう答えた。

「ああ、心は盲目で、永遠の闇に包まれ、罪に固執し、永遠の苦しみと死に定められた者たちよ！　なぜ、悪魔に惑わされたあなたがたは、私たちまでもが、石や、人間の姿に似せて作られた他の何らかの物体に拝礼するよう仕向けるのですか？それらはすべて人の手による造り物であり、魂もなく、感覚もなく、取るに足らないものです。それにもかかわらず、あなたがたは、その狂気ゆえに、それらを神として崇めているのです。　それに対し、私たちの主イエス・キリストは、生ける神であり、私たちの信仰の教えによれば、至聖なる三位一体の他の御方――父と聖霊――と同質であり、神から出た神、光から出た光、輝きから出た輝きであり、常に存在し、今も存在し、これからも存在し続ける、この世のすべてのものの創造主である。

聖なる兄弟たちのこのような言葉は、異教徒たち、とりわけ彼らの祭司や指導者たちを大いに激怒させた。　そのうちのひとり、クワドラトという者は我慢できずに、スペウシッポスとエレウシッポスの頬を平手打ちした。なぜなら、異教徒に反対して語っていたのは、この二人の若者だけだったからだ。一方、メレウシッポスは、兄弟たちが殴打されているのを見て、こう叫んだ。

「なぜ兄弟たちのように、私を殴らないのか？　なぜ私にそのような恩恵を与えないのか？彼らはすでに、私たち全員が切望している苦難を耐え始めているのに、あなたは私に聖なる苦難を耐えさせてくれない。まるで、私をキリストを信じない者、そしてあなたと同じ考えの持ち主だと見なしているかのようだ。」　我々は皆、等しくキリストを堅く信じ、等しくあなた方の異教的な不敬を軽蔑し、キリストから等しい報いを受けることを望んでいるのだ。

「我らの神々への冒涜の報いとして」とクワドラートは言った。「我らは今、あなた方を様々な拷問にかけるつもりだ。」

エレウシッポスはこう答えた。

「あなたがたが私たちに用意する拷問が多ければ多いほど、私たちは神の恵みの中でますます強められるだろう。」

[1092] ディヴィオニの地は、ガリアの東部に位置していた。

「彼らの舌を根元から切り落とさない限り」と、もう一人の不敬虔な指導者パルマットは言った。「彼らは私たちや私たちの神々を冒涜し続けるだろう。」

スペプシッポスはこう答えた。

「もしあなたがたが、その残虐さゆえに、私たちの肉体の舌を切り落としたとしても、私たちは魂の内なる舌をもって神の偉大さを賛美し、あなたがたの悪意によって、キリストへの聖なる信仰を放棄することは決してないだろう。」

「忌まわしき者どもめ！」と、パルマットと三番目の長官ヘルモゲネスは叫んだ。「お前たちは皆、一斉に死刑を自ら招いているのだ。」

「キリストのために死ぬこと――」とスペプシッポスは答えた。「私たちはそれを自らの幸福とみなしています。なぜなら、そうすることで、私たちはより早く、いかなる悲しみもなく、ただ絶え間ない喜びのみがある永遠の命へと移ることができるからです。」

そこで、リンゴニウスの裁判官たち――パルマート、クワドラート、そしてヘルモゲン――は、聖なる若者たちのキリスト教信仰に対する揺るぎない確固たる姿勢を見て、他の者たちへの見せしめとして、彼らにどのような最も残酷な拷問を加え、どのような最も苛烈な刑罰で彼らを処刑すべきか、互いに協議し始めた。　しかし当初、彼らは、皆から尊敬されているレオニラを呼び寄せ、彼女を仲介として若者たちをキリスト教の信仰から離れさせ、再び異教へと立ち返らせようと試みることに決めた。

彼らは彼女にこう言った。

「もし孫たちを苦しみから救い、死から免れさせたいのなら、行って彼らを説得し、彼らが壊してしまった神々を再び造らせ、それらを崇拝させ、相応しい生贄を捧げさせなさい。」

裁判官たちのこうした説得やその他の同様の懇願に対し、レオニラはこう答えた。

「行って、彼らに自分の救いを考えるよう説得してみます。」

彼女が聖なる孫たちの元へ行き、彼らが聖なる信仰において揺るぎないことを知ると、大いに喜んだ。彼女は喜びの涙を流しながら、キリスト・神に感謝し、一人ひとりに愛情を込めて口づけをした。そして、神への長い祈りの後、孫たちにこう言った。

「あなた方の家系には、あなた方ほど高貴で、豊かで、優れており、神に喜ばれる者は一人もいませんでした。キリストの信仰を告白することで、あなた方は一族全体を啓蒙しています。あなた方は若くとも、その知恵において一族の年長者たちすべてを凌駕しています。キリストの戦士となったことで、あなた方は計り知れないほど貴重な宝を手に入れたのです。　ですから、キリストの聖なる律法において揺るぎなく堅固であり続け、キリストへの信仰を盾として、脅しや苦しみをも恐れてはなりません。この世の目に見える王国は、現世のすべてと同様に取るに足らないものであり、まもなく終わりを迎えるでしょう。　一方、目に見えない神の御国は永遠であり、それを願い、それに向かって進むことは、真の知恵にふさわしいことです。短期間の功績によって、あなた方はそれを得ることができ、つかの間の苦しみを通じて、永遠の喜びを手に入れることができるのです。

神の恵みに満ち、信仰に堅固な若者たちを見て、彼女はこれらの言葉を残して彼らをキリストに託し、安らぎを得てその場を去った。

その直後、裁判官たちは聖人たちを呼び出し、神々にひれ伏し、集まった民衆全員の前でそれを大声で宣言することに同意するかどうか尋ねた。　しかし、若者たちは皆の前で公然と、唯一の真の神への信仰と、神への愛ゆえにあらゆる拷問や死をも厭わないという決意を告白し、同時に、偽りであり無価値な異教の神々を否定した。　そこで、聖なる兄弟たちは手足を縛られ、一本の木に吊るされ、ハープの弦のように強く引き伸ばされた。その力はあまりにも強かったため、彼らの体の骨が関節から飛び出しそうになった。しかし、キリストの恵みの力に支えられ、彼らは恐ろしい苦しみをも辛抱強く耐え抜き、自分たちを拷問する裁判官たちを嘲笑った。

聖メレウシッポスは彼らにこう語った。

「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストは、私たちの罪の贖いのために十字架に釘付けにされました。その聖なる木から、私たちは助けと守りとして十字の印を受けました。私たち三人の主のしもべは、この一つの木に吊るされ、主の御名のために殉教者となるのです。」　至聖なる三位一体に捧げられた三人の殉教者たちを支えるその木の実は、幸いなものである。

裁判官たちは、聖なる若者たちが拷問の中でも精神を弱めるどころか、かえってさらに強固になっているのを見て、彼らにこう言った。

「お前たちは、望むようにこの木の上で死ぬのではなく、火の中で滅びるだろう。」

「火によって清められ、炎を通って闇から永遠の光へと移り、神の御前に立つならば、私たちの至福はさらに大きくなるでしょう」と、メレウシッポスは再び答えた。

そこで裁判官たちは、薪や小枝、その他の燃えやすい物を集めるよう命じ、巨大な焚き火を燃え上がらせ、そこに縛られた三人の聖なる兄弟を投げ込んだ。　しかし、聖人たちは、彼らの救い主であるキリストの助けにより、炎の中にありながら無傷のままであった。彼らを縛っていた縄は燃え尽きて崩れ落ち、彼らは、かつてのバビロンの三人の少年たちのように、炎の中を歩き回り、神を賛美した。　不信心者たちは、キリストの僕たちを焼き尽くそうと、さらに激しく火を燃やし立てた。しかし、火が激しくなればなるほど、聖人たちの栄光はより一層明らかになり、ついに長い時間が経って、　火が消えたとき、聖人たちは生きており、無傷で、火傷さえも全く負っていないことが判明した。 彼らはただ拷問者たちを嘲笑い、こう言った。

「私たちには、自分たちが望む時だけ、私たちの神であるキリストのもとへ移る権能が与えられている。しかし、私たちは、この世であなた方の狂気をあざ笑うことに決めたのだ。とはいえ、天の宴に現れるのを遅らせるつもりはない。」

ついに、三人の聖なる双子の兄弟たちは、彼らの魂を天国へと導く準備が整った聖なる天使たちの群れを目の前にして、地面にひざまずき、皆で共に祈りを捧げた後、その聖なる魂を神に委ねた。 彼らの尊い遺体は、町から二ポプリシュの距離[1093] にあるウルヴァトという集落に埋葬され、その後、彼らを称えてその地に教会が建てられ、そこでは奇跡が起こり、病人が癒やされるようになった。

聖なる殉教者たちの死後、イオヴィラという名の一人の女性が、神への熱意に燃え上がり、夫や唯一の幼い息子をも顧みず、不信仰な異教徒たちの前でこう叫んだ。

「私もまたキリストのしもべであり、生けるまことの神であるキリストを揺るぎなく告白する。あなたがたの不浄で取るに足らない偶像は拒絶する。」

彼女は即座に捕らえられ、髪を掴まれて吊るされ、あらゆる拷問にさらされた。それでもなおキリストを否定することを拒んだため、彼女は聖なる少年たちの祖母である聖レオニラと共に、前述のウルヴァトの村へ連行され、そこで二人は共に剣で斬り殺された。　あるネオンという人物は、聖人たちの偉業を目撃し、その苦難を記述した後、その原稿をトゥルヴォンに手渡した。そして自身は公然とキリストへの信仰を告白し、殉教して主のもとへ魂を委ねるまで、打ち続けられた。トゥルヴォン自身も、聖なる殉教者たちの模範に倣い、殉教の死を経て永遠の命へと移った。

これらすべての出来事は、アウレリウス・ヴェラ、別名アントニヌス[1094]　の治世下、1月16日に起こった。より正確には、私たちの主イエス・キリストが世を治めておられた時である。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

[1093] ポプリシュチェは距離の単位であり、現在の690サジェンに相当した。したがって、2ポプリシュチェは1380サジェン（2.5ヴェルスト強）となる。

[1094] マルクス・アウレリウス（別名アントニヌス）は、161年から180年まで在位したローマ皇帝である。

聖殉教者ダナクト（朗読者）の記念日

記念日：1月16日

聖殉教者ダナクトは、イリュリアのアヴロナという町[1095] の出身で、教会の朗読者であった。異教徒の侵攻の際、彼は教会の聖器を異教徒から隠そうとしたが、ある場所で彼らに捕らえられてしまった。 異教徒たちは、彼らの神ディオニソス[1096] に犠牲を捧げるよう彼に強要した。しかし、聖ダナクトは彼らの命令に従わず、剣で刺し貫かれて殉教の死を遂げた[1097] 。

1月30日

1月17日（旧暦）

尊者アントニオス大聖人の生涯

記念日1月17日

聖アントニオはエジプトの出身であった[1098] 。彼の両親は高潔な人々であり、そのキリスト教的な敬虔さで知られていた。彼らは息子を、自分たちと自分の家以外には誰も知らないように育て上げた。　少年期を迎えても、彼は学問に励むことも、他の少年たちと親しくなることも急がず、家に留まりながら心の清らかさを保ち、敬虔さにおいて成長することを志した。　少年時代の遊びにふけることなく、アントニウスは両親と共に神の教会へ通うことを好み、そこで聖書の朗読に耳を傾けながら、そこから自分にとって可能な限りの益を引き出し、彼らが教える通りに生きるよう努めた。彼は、子供によくあるように年長者に甘い食べ物をねだることはなく、そもそも食事にはあまり関心を示さず、与えられたもので常に満足していた。

聖アントニオの両親は、彼が二十歳前後だった頃に亡くなった。両親を亡くし、幼い妹と二人きりになった彼は、当初、家の世話をし、妹をきちんと育て上げることに尽力した。彼はいつものように頻繁に教会を訪れ、　そこで読まれている聖書から、使徒たちがすべてを捨てて救い主に従ったことや、『使徒行伝』の証言によれば、多くのキリスト教徒が自分の財産を売り払い、その代金を使徒たちの足元に置いて、困窮している人々に配ったこと（使徒行伝4:34）を耳にした。 アントニウスは、これらの人々の信仰がいかに堅固であったか、そして天国で彼らにどのような偉大な報いが用意されているかを深く思索した。　そのような思いを巡らせながら、ある日彼は教会を訪れた。そこで突然、キリストが裕福な若者に語った言葉を再び耳にした。*「もし完全になりたいのなら、行って、あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい。そうすれば、天に宝を持つことになる。そして、私に従ってきなさい」*（マタイ19:21）。　アントニウスはこれを天からの啓示と受け止め――

1095 イリュリア――ローマ帝国の領土で、アドリア海沿岸の東部全域とその背後の地域（現在のダルマチア、ボスニア、アルバニア）を包含していた。――アヴロン――イリュリアのアドリア海沿岸にある都市。

1096 ディオニソス、別名バッカス――ギリシャ・ローマ神話のブドウとワイン造りの神。ワインの恵みをもって人々の心を喜ばせ、悲しみや悩みを吹き飛ばす。　当初は彼を称える控えめな祝祭であったが、後に抑制のきかない様相を呈し、乱れた乱交、激しい酩酊、放蕩を伴うようになり、ディオニソス、すなわちバッカス自身も、酩酊の神そのものを体現する存在となった。

1097 聖ダナクトの殉教は2世紀に起こった。

1098 聖アントニオスの故郷は、フィヴァイダ（エジプト南部）の北端、ヘラクレイオポリス地方に位置するコマという村であった。――アントニオスは251年に生まれた。彼の両親はコプト派のキリスト教徒であった。

まるでキリストが彼個人に直接語りかけたかのように――、神殿を出るとすぐに自分の財産を売り払い、その売却で得た多額の金を貧しい人々に施し、弱く幼い妹のためにごくわずかな分だけを残した。　彼には実りの豊かな良質のナツメヤシが三百本あったが、それらを隣人に贈り、自分と妹がそれらの世話に煩わされることから解放された。

その直後、彼が再び教会を訪れ、福音書の中で主が*「明日のことを心配してはならない」*（マタイ6:34）と語られるのを耳にすると、すぐに外へ出て、残りの財産も困窮している人々に配った。もはや自分の家に住むことを望まなかった彼は、妹を、花婿であるキリストへの奉仕に身を捧げた、彼にとって信頼できる知己である処女たち（[1099] ）に託し、彼女たちがその生き方の模範の中で妹が育つようにした。そして自身は、厳格で厳しい修道生活を送り始めた。

当時、エジプトにはまだ修道院は少なく、隠遁生活もまだ広まっていなかった。しかし、キリストに仕え、救われたいと願う者は皆、自分の集落の近くのどこかに身を隠して、徳を磨いていた。当時、アントニオスの村からそう遠くない場所に、若い頃から隠遁生活の中で修道的な修行に励んでいたある長老が住んでいた。彼と会い、そこから魂の益を得たアントニオスは、彼に倣い、自分の村の近辺の様々な場所で隠遁生活を求めるようになった。　その後も、どこかの隠者について耳にするたび、彼は分別あるミツバチのようにその人を探しに出かけ、探し求めていた人物を見つけ出し、その人との面会や会話を通じて――まるでミツバチが蜜を吸い取るかのように――自分にとって何らかの益を得るまで、決して引き返さなかった。

これらが聖人の最初の功績であり、それらを成し遂げるにつれて、彼はますます善き方向へと自らの思いを重ねていった。同時に、彼は「働きたくない者は、食べることもあってはならない」（テサロニケの信徒への手紙第二 3:10）という聖書の言葉を心に留め、自らの労働によって生計を立てていた。　自身の作品の販売で得たお金で、彼はパンを買い、飢えた人々を養った。彼の魂は常に神との祈りの交わりの中にあった。なぜなら、聖書から「絶えず祈りなさい」（1テサロニケ5:17）と知っていたからである。　聖書の朗読には極めて深い注意を払い、読まれた内容を断じて何も忘れることがなく、また主のすべての戒めを厳格に守ったため、彼の記憶は最も神聖な書物に取って代わるようになった。　アントニオスはこのように暮らしており、彼が心の益を得るために訪れ、彼らに従い、それぞれが特に際立っていた美徳――ある者には節制、ある者には活気、ある者には柔和さ、ある者には不眠、またある者には読経への注意深さ――を学ぶために訪れたすべての兄弟たちから愛されていた。　ある者には節制を、ある者には活力を、ある者には柔和さを、ある者には不眠不休の姿勢を、またある者には読書への集中力を模倣しようと努めた。ある者からは断食の偉業を学び、ある者には裸の地面に横たわる姿に感嘆し、ある者の謙遜を称え、ある者の忍耐を称えた。　彼ら全員からの愛を勝ち取り、全員から自分にとって有益なものを得た後、彼は自分の独房に戻り、そこで目にしたすべてについて熟考し、すべての人の美徳を自分の中に吸収し統合しようと努め、前述した美徳のどれ一つとして最下位にならないよう、努力を注いだ。　このように振る舞ううちに、彼は次第に名声において皆を凌駕するようになったが、それでもなお皆からの愛を受け続けていた。近隣の人々や、彼が頻繁に訪ねていた修道士たちは、アントニオのそのような生き様を見て、彼を「神を愛する者」と呼び、ある者は息子のように、またある者は兄弟のように彼を愛した。

アントニオがこのように徳を積み、善の道を確固たるものにしていくにつれ、キリスト教の名を敵視する悪魔は、若者にこれほどの美徳を見過ごすことができず、古来からの狡猾さをもって彼に立ち向かい、誘惑によって彼の善意をそらし、正しい道から逸らそうとし始めた。　悪魔は、売却さ

[1099] 古代教会において、女子修道院が登場する以前、および登場直後の時期には、神への奉仕に全身全霊を捧げ、貞潔の誓いを立てた特別な階級の処女たちが存在した。　こうした人々は「処女」と呼ばれ、教会内で大きな尊敬を集め、教会の栄光と見なされていた。彼女たちは、霊的生活に熟達した年長の指導者たちの指導の下、民家にて沈黙、神への黙想、そして祈りの修行に励んでいた。教会は、しばしば最も尊敬されるディアコニスたちに、彼女たちの指導と監督を任せていた。

れ分配されてしまった財産のこと、妹の生活が不安定なこと、一族の威光、虚しい世俗の名声、様々な食事から得られる快楽、そして世俗の生活のその他の魅力について、アントニウスの記憶に呼び起こした。　同時に、悪魔はアントニウスに、徳の道のりの険しさやその結末の厳しさ、肉体の弱さや修行の長期化を心の中で思い描かせた。こうした多くの考えによって、誘惑者は彼の心を曇らせ、心を堕落させようとした。　しかし、悪魔は、アントニウスが神への祈り、忍耐、そして信仰によって自分に打ち勝ったと悟ると、青年期によくある誘惑に訴えかけた。夜には夢や恐怖、幽霊、物音、声、真夜中の叫び声で彼を惑わせ、昼間にはあからさまな攻撃を仕掛けたのである。　アントニウスは悪魔に断固として抵抗した。悪魔が彼に不浄な考えを植え付けようとしても、アントニウスは絶え間ない祈りによってそれらを追い払った。悪魔が自然な興奮や情欲の動揺によって彼の感覚を快楽へと導こうとしても、彼は信仰と不眠、そして断食によって自らの体を守った。　悪魔は夜になると美しい女性の姿をとって、あらゆる手段でアントニウスの情欲をかき立てようとしたが、彼はゲヘナの消えることのない火と死なない虫のことを思い浮かべて、その情欲を鎮めた；　悪魔は若きアントニウスを、滑りやすく堕落に近い道へと誘い込もうとしたが、彼は最後の審判後の永遠の苦しみについて思い巡らし、誘惑の中でも揺るぎなく魂の清らかさを守り抜いた。　これらすべては、悪魔を恥じ入らせる結果となった。神のようになることを夢見たあの忌まわしき者は、今や一人の若者に恥をかかされたのである。　肉と血に反抗する者は、肉を持つ人間によって打ち負かされたのである。それは、私たちのために肉を受け入れ、それによって肉に敵を打ち負かす力を授けてくださった主が、御自分のしもべを助けてくださったからであり、こうして次々と誘惑にさらされるすべての者が、一人ひとりが使徒の言葉を繰り返すことができるようにするためであった。*「しかし、それは私ではなく、私と共にいる神の恵みである」*（Iコリント15:10）と繰り返すことができるように。

邪悪な蛇は、ついに、その狡猾な誘惑ではアントニウスを打ち負かすことはできないと悟り、いつも追い払われるばかりであることに気づいて、無力に歯ぎしりした。その後、蛇はアントニウスの前に、黒く恐ろしい少年の姿で現れ、泣きながら人間の声でこう言った。

「私は多くの人を誘惑し、多くの人を惑わせたが、今や他の聖人たちと同様に、君の功績によって打ち負かされたのだ。」

実のところ、狡猾な誘惑者は、謙虚な若者を自分に対して過大な自負を抱かせることを狙って、こう語ったのである。

「お前は一体何者だ？　なぜそんなことを言うのだ？」と、聖アントニウスは彼に尋ねた。

「私は淫行の誘惑者だ」と悪魔は答えた。「様々な狡猾な手口で、すべての若者たちをこの罪へと誘い込もうとしている。だからこそ、私は『淫行の精』と呼ばれるのだ。すでに、貞潔の誓いを立てた人々を、どれほど多くこの罪へと誘い込んだことか！　すでに節制の生活を送り始めていた人々を、どれほど多くが、かつての不潔な生活へと引き戻すことに成功したか！　私は、預言者ホセアが堕落した者たちを非難して、「姦淫の霊が彼らを 迷いへと導いた」（ホセア4:12）と語った、まさにその者である。実際、彼らは私に惑わされていたのだ。私もまた、あなた自身を度々誘惑したが、そのたびにあなたによって追い払われてきた。

アントニウスはこれを聞くと、主に感謝を捧げ、以前よりもさらに恐れを知らぬ態度で敵にこう言った。

「お前は多くの点で恥をかかされ、多くの点で辱められている。それゆえ、お前の黒さもお前が取り入れている少年の姿も、お前の無力さのしるしに他ならない。今や、私はもはやお前を恐れない。*『主は私の助け手である。私は敵たちを見下ろす』*（詩編117:7）。

アントニウスのこの言葉に、幽霊はたちまち跡形もなく消え去った。これが、キリストの恵みの力によって勝ち取られた、アントニウスの悪魔に対する最初の勝利であった。　しかし、アントニウスはこの一度の勝利で慢心することはなく、悪魔もまた、一度の敗北でその力が衰えたわけではなかった。なぜなら、悪魔は*「吠える獅子のように歩き回り、誰かを食い尽くそうとしている」*からで

ある（Iペテロ5:8）。 アントニウスは、聖書に記されているように、悪魔の策略は数多いことを心に留め、サタンが肉欲による誘惑で打ち負かされたとしても、さらに過酷で危険な誘惑を仕掛けてくるかもしれないと考え、絶え間なく厳しい修行に励んだ。 それゆえ、アントニウスは、ある点で勝利を収めたからといって、別の点で悪魔に勝利を許さないよう、ますます自分の肉体を消耗させ、服従させていった。 次第にさらに過酷な生活に身を慣らしていく中で、彼は神への奉仕における多くの並外れた行いを日常のものとし、その習慣をまるで第二の天性のようにした。毎日、日没まで断食し、夜通し祈りに費やした。時には二日間も食事を摂らず、四日目の夜になってようやく少し眠りに落ちることがあった。 彼の食事はパンと塩、そして少量の水で成り立ち、寝床は藁マットや羊毛の衣、時には裸の地面であった。油は食事に全く用いなかったし、肉やワインについては言うまでもない。それらは、それほど熱心でない修道士たちでさえ口にしないものだからである。 至福の者は、若者の肉体が油の甘さで柔らかくなってしまっては、敵に打ち勝つことなど不可能であり、使徒の言葉*「私が弱いときに、こそ強い」*（IIコリント12:10）にあるように、肉体を可能な限り過酷な試練にさらすことで、肉体が弱まるにつれて精神が強くなるのだと語った。 日々、次々と新たな試練を引き受けながら、彼は預言者エリヤの言葉を思い起こした。「*主は生きておられる（今日）、私がその御前に立っている*」（列王記上18:15）。[1100] そして彼は心の中でこう自問した。

「聖書に『今日』という言葉が付け加えられているのは、決して無駄なことではない。 なぜなら、エリヤは過去の功績を数えるのではなく、あたかも毎日新たに功績に取り組むかのように、全力を尽くして、神の御前に、神の御顔を仰ぐにふさわしい人間、すなわち、清い心を持ち、神の御心を行う用意のある者として現れようとしていたからである。

彼はさらに、すべての修行者は偉大なるエリヤに倣い、その姿を眼前に置き、まるで鏡を見るかのように、それに照らして自らの生涯を省みるべきであるとも考えていた。そこで彼は、村からほど近い場所にある墓所へと向かったが、その前に知人の一人に頼み、決まった日に食糧を持ってきてくれるよう頼んでおいた。 その知人は彼をその墓の一つに閉じ込め、そこで、人里離れた場所で、聖アントニウスは沈黙に身を委ねた。 これを見た悪魔は、アントニウスがやがて荒野での修行によって自分に対抗する力を身につけるのではないかと恐れ始めた。そこで悪魔は、悪魔たちを集め、神の許しを得て、彼に恐ろしいほどの暴行を加えた。その結果、聖人はその後、身動きも声も出せない状態で横たわることになった。このことについて、彼は後に何度も自ら語っている。 彼に与えられた苦しみは、あらゆる人間の苦しみを超越していた。しかし、主なる神の憐れみにより――神は御自身を信頼する者を決して見捨てない――アントニウスは死ななかった。数日後、前述の彼の知人が、いつもの食事を携えてアントニウスの元を訪れた。 扉を開けて、地面に息絶えて横たわっている彼を見つけると、その知人は彼を抱き起こし、自分の村へと連れ帰った。

このことが知れ渡ると、近所の人々や親族たちがアントニオのもとに集まり、すでに亡くなったかのように、深い悲しみをもって彼のために追悼の儀式を執り行った。 しかし真夜中、皆が疲れ果てて深く眠りについた頃、アントニウスは少しずつ意識を取り戻し始めた。ため息をついて頭を少し持ち上げると、彼をここに運んできた人物だけが眠っていないことに気づいた。 彼を呼び寄せ、誰にも起こさないようにして元の場所へ連れ戻してほしいと頼むと、その願いは叶えられ、アントニーは再び隠遁生活を送るようになった。傷のせいで立つ力もなく、彼はうつ伏せになって祈りを捧げ、祈りが終わると大声で叫んだ。

「悪魔どもよ！ ここにいる、アントニオだ。お前たちとの戦いを避けるつもりはない。もし以前以上に何かを仕掛けてきても、何ものも私をキリストへの愛から引き離すことはできないと知れ。」

その際、聖アントニオは次のように歌った。

[1100] 上記の聖書の言葉は、神の預言者エリヤ・テスビ人によるものである。

「*たとえ軍勢が私に対して立ち向かおうとも、私の心は恐れない*」（詩編26:3）。

すると、善を憎む者――悪魔は、アントニウスがあれほどの殴打を受けた後でも、あえてここに戻ってきたことに驚き、自分の手下の悪魔たちを呼び集め、激怒してこう言った。

「見よ、我々は淫行の誘惑でも、肉体の傷でも、彼を打ち負かすことができなかった。そのどちらを経ても、彼はたださらに大胆に我々を嘲笑っている。さあ、皆、彼とのより強く、より執拗な戦いに備えよ。そうして、彼が誰に挑んだのかを思い知らせてやれ。」

すると直ちに、大勢の悪魔たちが狂乱の如く動き出した。悪魔には人間と戦う手段が数多くあるからだ。突然、地そのものが揺らぐほどの轟音が響き渡り、壁が崩れ落ちた。　するとたちまち、アントニウスの住処に、ライオン、オオカミ、アスピド（[1101] ）、ヘビ、サソリ（[1102] ）、オオヤマネコ、クマの姿をした無数の悪魔が押し寄せ、その場所を埋め尽くした。そして、これらの化け物のそれぞれが、その姿に応じた方法で怒りを露わにした。ライオンはアントニウスを飲み込もうと咆哮し、　水牛は咆哮と角で威嚇し、蛇はヒスヒスと音を立てて身をくねらせ、狼たちは猛然と飛びかかり、オオヤマネコは独自の方法で攻撃の機会を伺った。これらすべての幻影は、その外見において極めて恐ろしく、その咆哮が作り出す騒音はまさにぞっとするほどであった。　アントニウスは、それらに打ちのめされ、苦しめられながら、耐え難いほどの苦痛に苛まれていたが、恐怖に陥ることはなく、気力を保ち、明晰な精神を維持していた。身体の傷は彼に痛みをもたらしていたが、心は揺るぎないまま、まるで敵を嘲笑うかのようにこう言った。

「もしあなたたちに少しでも力があれば、私と戦うにはあなたたちのうちの一人だけで十分だっただろう。しかし、主があなたたちから力を奪われたがゆえに、あなたたちはその数の多さで威嚇しようとしているのだ。あなたたちが理性を欠いた動物の姿をとったこと自体が、あなたたちの弱さの明白な証拠である。」

そして再び、彼は勇敢に彼らに語りかけた。

「もし神の御許しによって、あなたがたに私を襲い、食い尽くす力があるのなら、さあ、私はここにいる――何を躊躇しているのか？　もしあなたがたに私に対するそのような力が与えられていないのなら――なぜ無駄に労力を費やすのか？　十字架のしるしと神への信仰は、私たちにとって打ち破ることのできない防壁となっているのだ。」

こうして悪魔たちは、至福のアンソニーを脅かそうと何度も襲いかかり、無駄な努力を重ねた末、ただ歯ぎしりをするしかなかった。なぜなら、彼らの中には誰一人として成功を収めた者がいなかったばかりか、それどころか、彼ら自身が彼に打ち負かされ、恥をかかされたからである。

慈悲深い主イエスは、御自分のしもべを守り、悪魔たちとのこの厳しい闘いの最中も、彼を見捨てられませんでした。アントニウスが上を見上げると、墓の天井が頭上で開き、闇を払うように明るい光線が彼に向かって降り注いでいるのが見えました。　光が現れると、悪魔は一匹も残らず消え去り、肉体の痛みは瞬時に収まり、悪魔が現れた際に崩れ落ちた墓は、再び無傷の状態に戻っていた。これに主の御訪れを見出し、心の底から深くため息をつくと、聖人は、自分を照らす光に向かって顔を向け、こう叫んだ。

「憐れみ深いイエスよ、あなたはどこにおられたのですか？　あなたはどこにおられ、なぜ最初から私の傷を癒やすために現れなかったのですか？」

すると、彼に声が聞こえた。

「アントニウスよ！　私はここにいたが、お前の勇気を確かめたかったのだ。今や、お前が戦いをしっかりと耐え抜いたのだから、私は常にあなたを助け、全世界であなたを称えるだろう。」

[1101] アスピド――有毒なヘビの一種。

[1102] クモ形類に属する有毒な動物で、尾の先端に毒針を持ち、暑い国に生息し、湿った場所、岩の間、壁のひび割れ、地下室などに棲んでいる。

これを聞いて、アントニウスは立ち上がり、自分が非常に力強いと感じた。まるで、戦いで消耗した以上の力を再び得たかのように思えたのである。その当時、聖アントニウスは三十五歳であった。

その後、アントニウスは当初から指導を求めていた前述の長老のもとへ赴き、彼に懇願して、人里離れた場所にある荒野で共に暮らすよう頼んだ。しかし、長老は老齢であることと、そのような修業のあり方がまだ新しいこと[1103]を理由に断った。アントニオスは恐れを知らず、修道士たちの間では知られていない砂漠の山へと、一人で遠い旅に出た。しかし、敵は彼を誘惑し続け、その決意を阻もうと、道中に銀の皿を投げ捨てた——銀への執着で彼を誘惑するためである。　その皿を見て、アントニウスは敵の狡猾さに気づき、少し立ち止まって考え込んだ。横にある皿を見つめながら、彼は銀という幻影に潜む誘惑者を糾弾し、心の中でこう語った。

「この皿が、どうして砂漠にあるというのか？　ここは獣や鳥の通る道に過ぎず、人間の足跡など一つもない。　それに、もしそれが袋から落ちたとしても、その大きさを考えれば、落とした者に気づかれないはずがない。そして、ここは人里離れた場所なのだから、その人は必ず引き返し、通ってきた道を捜せば、失った物を見つけただろう。　これはお前の、悪魔よ、狡猾な策略だが、これで私の決意を阻むことはできない。*「お前の銀は、お前と共に滅びよ」*（使徒行伝8:20）。

彼がそう言い終えるや否や、その皿は火の煙が散るように、瞬く間に消え去った。

その後のある日、彼は自分の進む道に大量の金が転がっているのを見つけた。彼はまるで火の上を飛び越えるかのように素早くそれを飛び越え、砂漠へと急いだ。　そこで川を渡ると、山の中に柵で囲まれた何とも空っぽな場所を見つけた。そこは長い間荒れ果てていたため、あらゆる種類の毒のある爬虫類や蛇で溢れていた。アントニウスはここに居を構えた[1104]、すると、まるで誰かに追い立てられたかのように、大勢のサソリたちがたちまち四散していった。彼は入り口を石で塞ぎ、6ヶ月分のパンを持参した——フィヴィア人の習慣ではパンを蓄えておくのが常であり、彼らのパンは1年間腐らないことも珍しくなかったからだ——そして、柵の中に少量の水を備え、彼はそこで完全な孤独の中で、隠遁者として暮らし始めた。決して自ら外に出ることはなく、誰をも迎え入れなかった。　年にたった二回、あらかじめ頼んでおいた友人が屋根越しにパンを届けてくれる時だけ、彼はそれを受け取ったが、届けてくれた相手とは一言も言葉を交わさなかった。

多くの人々が、アントニウスに会って心の救いを得ようと彼の住居の扉を訪れると、アントニウスを敵視する不浄な霊たちの様々な声が聞こえてきた。彼らはこう叫んでいた。

「なぜ我々の領地へ来たのか？　この荒野に何の用がある？　他人の領地から立ち去れ。お前にはここで生き、我々の攻撃に耐える力などないのだ！」

このように、悪霊たちとの絶え間ない闘いの中、人々から遠く離れた孤独な生活の中で、聖アントニオは実に二十年間を過ごした。

やがて、自らの救いだけでなく、他者のためにも尽力すべき時が訪れると、アントニオの住居には、彼の苦行の生活に倣おうとする多くの人々が集まり、彼らは無理やり住居の入り口を壊して中に入った。　彼の顔色が明るく、体も健康であるのを見て、彼らは驚いた。あれほどの断食や苦行、そして悪魔との闘いの後でも、顔も体も全く変わっていないとは。この時から、聖アントニオは他の人々にとっても、導き手、牧者、修道生活の師、そして天国への道の指導者となった。　神は彼をこれほどまでに助けられたため、後に彼のもとには数え切れないほどの弟子たちが集まり、彼は彼らをこの世と自分自身からの離脱へと導いた。　ほどなくして多くの修道院が設立され、そこで彼は、年齢や修道生活の期間にかかわらず、新旧の修道士たちを愛をもって修道生活の指導にあたった。ある

[1103] 聖アントニオ大聖人とその同時代人である聖パウロ・フィヴェイスクス以前には、このような修行の形態——隠遁生活——は知られていなかった。

[1104] それは285年のことだった。

日、兄弟たちが集まり、彼に修道生活の規則を与えてほしいと懇願した。彼は声を張り上げてこう答えた。

「神の戒めを守ることを学ぶには、聖書だけで十分である。しかし、兄弟たちが互いに言葉で慰め合うことは、極めて善き行いであると言わざるを得ない。それゆえ、子供たちが父に打ち明けるように、あなたがたが知っていることを私に打ち明けてほしい。そうすれば、私も子供たちに教えるように、長年の経験から学んだことをあなたがたに伝えよう。」　何よりもまず、あなたがた全員にとって共通の原則とすべきことは、　、誰も自ら引き受けた行いを怠ることなく、一人ひとりが、まるで初心者のように、始めたことを常に増やし、広げていくよう努めることです。

アントニオスは話を続け、アファナシオス・ザ・グレートが著した『アントニオスの生涯』に詳細に記されている彼の談話からも明らかなように、多くの有益な教えを彼らに伝えた。この談話の中から、ここでは最も重要な部分のみを引用する。永遠の命について、聖アントニオスは次のように語った。

「この現世において、購入される物の価格は、その価値に等しく、売り手はそれ以上のものを受け取ることはない。しかし、永遠の命の約束は、あまりにも安い代価で得られる。それは、次のように記されている短き生涯と引き換えに、私たちに与えられるのである。　*「我らの生涯は七十年に過ぎず、力ある者でも八十年に過ぎない。その最良の時期でさえ、労苦と病に満ちている」*（詩編89:10）。たとえ私たちが、神に仕えるために労苦し、80年あるいは100年を生きたとしようとも、来世において私たちが統治するのは、何らかの限られた期間ではなく、前述の年数に相当する期間、永遠に統治することになる。しかも、私たちが所有するのは地ではなく天であり、朽ちる肉体を脱ぎ捨てた後、朽ちることのない肉体として再びそれを授かるのである。　それゆえ、わが子らよ、悲しみに沈んではならない。*「今の一時の苦しみは、私たちの中に現される栄光に比べれば、何でもないからである」*（ローマ8:18）。

この世を捨て、自らの行いの意義を誇張しがちな人々について、彼はこう語った。

「世を捨てた者たちのうち、だれも、自分が何か偉大なものを捨てたなどと考えてはならない。なぜなら、天の恵みと比べれば、この地上のすべては取るに足らず、取るに足らないものだからである。　もし全世界を総じて見ても天の住まいには及ばないのであれば、誰もが考えて理解すべきである。すなわち、いくつかのぶどう畑や、畑や家、あるいは微々たる量の金を捨てたからといって、自分が偉大なものを捨てたなどと言うことも、報いが些細なものになることを嘆くこともできないのだ。　まるで、百枚の金貨を手に入れるために、わずかな銅貨を捨てる人のように――たとえ全世界が自分の支配下にあったとしても、それをすべて捨て去る者は、天の御国において、百倍もの大きな報いを受けることになるのである。

地上の富の儚さと美徳の大きな益について、師は次のように語った。

「特にしっかりと心に留めておくべきことは、たとえ誰かが自分の富を手放すことを望まなかったとしても、死は強制的にその人を富から引き離してしまうということである。　そうであるならば、なぜ私たち自身が美徳のために同じことをしないのか。なぜ天の御国のために、この人生の終わりにいずれ失うことになる財産を、自発的に手放さないのか。キリスト教徒は、死ぬ時に持ち去ることのできないものについて、心を煩わせてはならない。　むしろ、死後に私たちを天へと導くもの、すなわち、知恵、貞潔、正義、徳ある生活、分別、貧しい人々への愛、キリストへの揺るぎない信仰、怒りを抑えること、旅人へのもてなし――これらを、魂の全力を尽くして追求しましょう。　これ

らを追い求めるならば、私たちはこの地上においても、心配のない生活を送ることができるでしょう[1105]。

キリスト・神への熱心かつ絶え間ない奉仕について、聖アントニウスは次のように語りました：

「私たちは、キリストの僕であり、創造主であるキリストに仕えなければならないことを忘れてはならない。僕は、過去にすでに働いたという口実で、現在または将来に関する命令の履行を拒むことはできず、以前の仕事で疲れたから今は自由であるべきだなどと言うこともできない。 ——それどころか、主人に喜ばれるため、また怠惰のせいで鞭打ちや罰を受けることのないよう、毎日同じ熱意をもって同じ仕事をこなすのです。 同様に、私たちも常に熱心に神の戒めを守らなければならない。主は義なる報い主であり、どのような罪の中で人が死を迎えようとも、その罪によって裁かれるということを、しっかりと心に留めておくべきである。 このことについて、主は預言者エゼキエルの言葉を通しても明確に証ししておられる。*「彼は、自ら犯した不義のゆえに死ぬ」*（エゼキエル33:13）。だからこそ、呪われたユダは、ある一夜にして、自ら犯した悪行のゆえに、それまでのすべての労苦の成果を失ってしまったのである。 それゆえ、私たちは常に同じ熱意をもって主の戒めを守るよう努めなければなりません。そうすれば、神ご自身が私たちを助けてくださいます。「*神を愛する者たちには、すべてのことが益となる*」と書かれている通りです（ローマ8:28）。

また、怠惰に陥らないよう、アントニーは常に死を心に留めるよう説き、使徒が「私は毎日死んでいる」と語った言葉を引用した。*「私たちは刻一刻と危険にさらされている。私は毎日死んでいる」*（Iコリント15:30）。

「それゆえ」とアントニウスは続けた。「私たち人間も、義にかなった生活を送るよう努め、死の刻を心に留めて、罪を犯さないようにしよう。眠りから覚めたときは、夕方まで生き延びられるとは期待せず、眠りにつくときは、もしかしたら朝まで生きられないかもしれないことを心に留めよう。 私たちの命の定めが分からないこと、そして私たちが完全に神の御手の中にあることを忘れてはならない。こうして毎日を過ごせば、私たちは罪を犯すことも、有害な欲望に惑わされることも、互いに怒り合うことも、この世の富を蓄えることもなく、まるで毎分死を待ち望んでいるかのように、すべての朽ちるものを軽んじるだろう。 女性への愛は私たちにとって何の意味も持たなくなり、情欲の炎は消え去り、私たちは常に心の中で最後の審判の日を念頭に置きながら、互いの罪を赦し合うようになるでしょう； この審判への恐れと、永遠の地獄の苦しみへの戦慄が、あらかじめ肉体的快楽の甘美さを消し去り、魂が罪の深淵に堕ちるのを防いでくれるだろう。

アントニウスは神の御国について、さらに次のように語った：

「ギリシャ人たちは、知恵を求めて海を越え、異国の師たちに空虚な教えについて尋ね回る。しかし、私たちには、天の御国を求めて、ある異国から別の異国へと移ったり、海を渡ったりする必要は全くありません。なぜなら、私たちの主イエス・キリストご自身が福音書の中で、*「神の御国はあなたがたの内にある」*（ルカ17:21）と語っておられ、それを達成するために必要なのは、ただ私たちの善意だけだからです。

悪魔との戦いについて、アントニウスは次のような教えを与えました：

「神ご自身が、私たちの心の中で何が起きているかを常に絶え間ない注意を払って見守るよう、私たちに命じておられます。なぜなら、私たちには戦いに極めて狡猾な敵——つまり悪魔のことです——が存在し、使徒の言葉（エフェソの信徒への手紙6:11–12）にあるように、私たちは彼らとの絶え間ない戦いに直面しているからです。 数え切れないほどの敵が空を飛び回り、敵の大群が四方

[1105] 聖アタナシオス・アレクサンドリアスによって編纂された聖アントニオス大聖人の完全な伝記において、この最後の表現は、全体的な論旨に沿って、次のように伝えられている。「これらの功徳は、私たちがそこに至る前に、地上の柔和な者たちの安息の地（すなわち天国）を私たちのために備えてくれるだろう」。

八方から私たちを取り囲んでいる。　私は、それらの間のすべての違いを皆さんに詳しく説明することはできませんが、彼らが私たちを惑わそうとする、私が知っている方法について、簡潔に述べさせていただきます。何よりもまず、神が悪の根源ではないこと、そして悪魔たちが神の御心によって悪になったわけではないことを、しっかりと心に留めておく必要があります。彼らに起こったそのような変化は、生まれつきのものではなく、彼ら自身の意志によるものでした。　善なる神によって創造された彼らは、当初は善良な霊でしたが、高慢のゆえに天から地上へと追放され、そこで悪に染まり、人々に偽りの夢で惑わし、偶像崇拝を教えました。　一方、私たちキリスト教徒に対しては、彼らが限りなく嫉妬し、私たちが天における彼らのかつての栄光を継承することを恐れ、絶えずあらゆる悪を私たちに対して仕掛けてくる。　彼らが悪に沈む度合いは様々であり、多様である。ある者は不義の深淵へと極限まで堕ちてしまったが、他の者はそれほど邪悪には見えない。しかし、彼ら全員が、それぞれの力の及ぶ限り、あらゆる美徳に対して様々な方法で戦っている。　それゆえ、私たちは神から分別という賜物を受けるために、より一層の祈りと節制の行いが必要である。それは、悪霊たちの違いを見極め、個々の状況において彼らの様々な狡猾さや惑わしを見抜き、それらすべてを、ただ一つのキリスト教のしるし――主の十字架――によって退けるためである。　この賜物を受けた聖使徒パウロは、次のように説きました。*「サタンが私たちに害を及ぼさないように。なぜなら、その企みは私たちには明らかだからです」*（IIコリント2:11）。 私たちも使徒に倣い、自分たちが経験したことを他者に警告し、さらには互いに教え合う必要があります。私自身、悪魔たちによる多くの狡猾な誘惑を目の当たりにしてきました。私はこれを、子供たちであるあなた方に伝えています。警告を受けておくことで、同じような誘惑に直面した際にも、自分を守ることができるようにするためです。　悪魔たちのすべてのクリスチャンに対する憎しみは甚大であり、とりわけキリストの修道士や処女たちに対してはなおさらです。彼らは生活の至る所に誘惑を仕掛け、神に背く不純な思いによって彼らの心を堕落させようと躍起になっています。　しかし、あなたがたのうち、だれもこのことで恐れてはなりません。神への熱心な祈りと断食によって、悪魔たちは即座に追い払われるからです。とはいえ、もし彼らがしばらくの間攻撃を止めたとしても、あなたがたがすでに完全に勝利したなどと思ってはなりません。なぜなら、悪魔は敗北した後、たいていさらに大きな力で再び襲いかかってくるからです。戦術を狡猾に変えながら、　もし思考によって人を惑わすことができないならば、幽霊の姿をとって人を惑わせたり脅かそうとする。時には女性の姿に、時にはサソリの姿に、あるいは神殿ほどの高さのある巨人に、あるいは戦士の大部隊に、あるいはその他のあらゆる幽霊に変身するが、これらはすべて、十字を切るやいなや消え去ってしまう。　もしその誘惑が看破されると、彼らは占い師となり、　の預言者たちのように、未来の出来事を予言しようと試みる。もしこの場合でも恥をかかされると、彼らは戦いの助けとして、あらゆる悪の根源であり中心である自らの主君そのものを呼び出すのである。

私たちの尊い父、アントニオス大聖人は、神に啓示されたヨブの目に現れたのと同じ、まさにそのような悪魔の姿が、自身にも現れたことを何度も語っていた。「その目は夜明けの暁のようであり、その口からは炎が噴き出し、火の粉が飛び散る。　その鼻孔からは、沸き立つ鍋や釜のように煙が立ち上る。その息は炭を赤く燃え上がらせ、その口からは炎が噴き出す」（ヨブ記41:9–10）。悪魔の王は、このような恐ろしい姿で現れたのである。　彼は瞬く間に全世界を滅ぼしたいと願っているが、実際には何の力も持っていない。神の全能が彼を制しているのだ。それは、動物が手綱で制御されるように、あるいは囚人の自由が足枷によって奪われるのと同じである。彼は十字架の印も、義人たちの徳ある生活も恐れている。聖アントニウスはこれについて次のように述べている。

「愛する兄弟たちよ、清らかな生活と神への汚れなき信仰は、悪魔に対して大いなる力を持つのです。」　私の経験から言わせてもらえば、サタンにとって恐ろしいのは、神の御心に従って生きる人々の徹夜、彼らの祈りと断食、柔和さ、自発的な貧しさ、謙虚さ、へりくだり、愛、節制、そして何よりも――キリストに対する彼らの純粋な愛である。　高慢に振る舞う蛇は、神の御言葉*「見よ*

、*わたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を与える*」（ルカ10:19）に従い、義人たちの足によって踏みつけられる運命にあることを、自らよく知っているのです。

聖アントニオは、聴衆の霊的な益のために、さらに次のように語りました。

「悪魔たちは、武装した戦士に化けたり、サソリや馬、獣、あるいは様々な蛇の姿をとったりして、何度私を襲い、私を取り囲み、私がいた部屋を埋め尽くしたことか。　しかし、私が彼らに向かって*「ある者は戦車、ある者は馬に乗るが、私たちは私たちの神、主の御名を誇る」*（詩編19:8）と歌い始めると、神の恵み深い助けによって追い払われ、彼らは逃げ去った。ある時、彼らは非常に明るい姿で現れ、「アントニオよ、私たちはあなたに光を与えるために来たのだ」と言い出した。しかし、私は悪魔の光を見ないように目を固く閉じ、心の中で神に祈り始めた――すると、彼らの神に背く光は消え去った。しばらくして、彼らは再び現れ、私の前で歌い、聖書に基づいて互いに論争を始めたが、私はまるで耳が聞こえないかのように、彼らの言葉に耳を貸さなかった。　彼らが私の修道院そのものを揺さぶることもあったが、私は怯むことなく主に向かって祈り続けた。しばしば私の周りでは叫び声や踊りの音、鐘の音が聞こえたが、私が歌い始めると、彼らの叫びは悲痛な叫びへと変わり、私は彼らの力を打ち砕き、その狂乱に終止符を打ってくださった主を賛美した。

「私の子供たちよ、私がこれから話すことを信じてほしい」とアントニウスは続けた。「ある時、私は並外れた巨人の姿をした悪魔を見た。その悪魔は、自らについてこう言うことを敢えてしたのだ。

『私は神の力であり、知恵である』と、そして私にこう言い掛けたのだ。

「アントニウスよ、私に望むものを求めよ。そうすれば、私はそれを与えよう。」

しかし、私はそれに応えて彼の口の中に唾を吐きかけ、キリストの御名を盾に、全身全霊で彼に襲いかかった。すると、その巨人の姿はたちまち溶けて、私の手の中で消え去った。私が断食をしていた時、彼は再び修道士の姿で現れ、パンを持ってきては私に食べるよう説得した。

「お前は」と彼は言った。「人間であり、人間の弱さから自由ではないのだから、少しは肉体に甘えなさい。さもないと、病気になってしまうかもしれない。」

しかし、私はそれが邪悪な蛇の狡猾な誘惑であると悟り、いつもの武器――キリストの十字架の印――に訴えると、彼はたちまち煙の筋へと変わり、窓の方へと伸びて、そこから消え去った。悪魔たちは、砂漠で突然現れる金の幻影によって、その姿を見せるか、あるいはそれに触れることで私を誘惑しようと、しばしば試みた。また、悪魔たちが何度も私を殴打しようとしたことも隠さない。しかし、私はその暴行を辛抱強く耐え忍び、ただこう叫んだ。

「誰も、私をキリストの愛から引き離すことはできない！」

この言葉を聞くと、彼らは互いに激怒し合い、ついには、私の力ではなく、キリストの御言葉*「私はサタンが稲妻のように天から落ちるのを見た」*（ルカ10:18）に従い、神の御命令によって追い払われたのである。

ある日、悪魔が修道院の門を叩いた。外に出てみると、目の前に巨大な巨人が立っており、その頭はまるで天にまで届きそうなほどだった。そして私が尋ねた。

「お前は誰だ？」

と尋ねると、

「私はサタンだ。」

私は尋ねた。

「ここで何をしたいのか？」

「無駄だ」と彼は答えた。「すべての修道士が私を非難している。そして、なぜすべてのキリスト教徒が私を呪うのか？」

「それは当然のことだ」と私は答えた。「彼らはしばしば、お前に惑わされているのだから。」

「私は彼らに何もしない」と彼は答えた。「だが、彼ら自身が互いに惑わし合っているのだ。何しろ私は呪われ、追放された身なのだ――聖書に*『敵の武器はすっかり失われ、あなたは町々を滅ぼされた』*（詩篇9:7）とあるのを、あなたは聞いたことがないのか。」 そして確かに、今や私はこの世からあらゆる居場所を奪われ、私の支配下にある町は一つも残っておらず、武器も持っていない。あらゆる国のすべての民がキリストの御名を告白し、荒野は修道士たちで満たされている。だから、彼ら自身で身を引き締めて、私をむやみに呪うのはやめてほしい。

そこで、神の恵みに驚嘆しつつ、私は彼にこう答えた。

「この、あなたからはこれほど新しく、前代未聞の告白を、私はあなたの正直さ――あなたにはそれが微塵もない――に帰するのではなく、もっぱら神の力に帰する。 お前は偽りの父である以上、実情を認めざるを得なかったのだ。そして今回は、自らの意志に反して真実を語った。なぜなら、キリストはその来臨によってお前の力を完全に打ち砕き、天使の栄光を奪われたお前は、今やあらゆる不浄の中にあって、哀れで恥辱に満ちた生活を送っているからだ。

――私がそう言い終えるや否や、その悪魔はたちまち姿を消した。

こうして、尊者様は兄弟たちに、キリストによって制圧され、打ち倒された悪魔の力を恐れることなく、神の助けを借りて勇敢に彼らと戦い、キリストへの信仰をもって自らの心を強めるよう説き伏せた。 これを聞いて、兄弟たちは喜び、自分たちの父の教えを心に刻み、その恩恵を受けた。ある者には徳への志がさらに強まり、ある者には以前弱かった信仰が確固たるものとなり、 ある者は思いの誤った惑わしから清められ、またある者の心は恐ろしい幻影の働きから解放され、それでも皆が共に、悪魔の惑わしを軽蔑する活気ある覚悟に満たされ、アントニオに神から与えられた、霊を見分け理解するこの偉大な恵みに驚嘆した。

聖アントニオが住んでいたその山には、数多くの修道院が建ち並び、それらはまるで天幕のように山を覆い尽くし、賛美歌を歌う者、聖書を朗読する者、祈りを捧げる者、断食を行う者、未来の恵みを喜びをもって待ち望み、施しを行うことのみを目的として労苦する者たちといった、神聖な群衆で溢れかえっていた。 彼らの間には互いの愛と調和が支配しており、彼らの住まいは、この世の動揺とは無縁で、敬虔さと正義に満ちた都のようであった。彼らの間には、不品行な者も、ののしる者も、憎む者も、中傷する者も、不平を言う者も一人もいなかった。 ただ、心を一つにして神に仕える多くの修道者たちがいた。そのため、これらの修道院や彼らのそのような生活様式を目にする者は皆、聖書の言葉を叫びながら繰り返さずにはいられなかった。*「ヤコブよ、あなたの天幕はなんと美しいことか。イスラエルよ、あなたの住まいはなんと美しいことか。 川沿いの園のよう、主が植えられた緋色の木々のようだ」*（民数記24:5–6）。

時が経つにつれ、アントニウスはますます熱心に働き続けた。その間、不敬虔なマクシミアヌス王によって、キリストの教会に対する激しい迫害が起こった[1106]。

そして、聖なる殉教者たちがアレクサンドリアへと連行されたとき、聖アントニウスもまた、そのために自らの修道院を後にし、キリストの犠牲者たちに従った。

「さあ、行こう」と彼は言った。「私たちも兄弟たちの輝かしい祝宴へと向かおう。そうすれば、私たち自身もその栄誉に浴するか、あるいは他の人々が奮闘する姿を見ることができるだろう。」

その愛と善意ゆえに、この聖人は真に殉教者であった。しかし、彼はキリストの御名のために苦難を受けることを望んでいたものの、殉教は彼に定められてはいなかった。主は、御自身の羊の群

[1106] マクシミヌス・ダザ――東ローマ皇帝。シリアとエジプトを支配し、306年から313年まで在位した。彼がキリスト教徒に対して行った残酷な迫害は、311年に起こった。

れの益のために、教師であり導き手であるアントニオを守っておられたからである。　彼は聖なる殉教者たちへの献身を公然と示していた。彼らと切っても切れない愛の絆で結ばれ、彼らが鎖につながれている時には世話をし、裁判の場へ付き添い、拷問者たちの前に姿を現し、自分がキリスト教徒であることを隠すことなく、まるでキリストのために苦難を受けることを自ら求めているかのように振る舞った。　しかし、誰も彼に手を下そうとはしなかった。それは、アントニオの命が、彼の殉教的な 死よりも人々のために有益であると見なされたため、神が彼の命を守られたからである。 アレクサンドリアの大司教である聖ペトロが殉教の死を遂げ、迫害が終息した後、至福のアントニオスはかつての修道院に戻り、その後の生涯を通じて信仰と希望において聖なる殉教者たちに倣い、とりわけ厳しい修行と絶え間ない不眠によって自らの肉体を酷使した。　彼の下着は羊毛の衣、上着は革のマントであった。水を渡らなければならない場合を除き、彼は決して体を洗うことはなく、死に至るまで、誰も彼の裸体を見たことはなかった。

ある時、彼が隠遁生活を送り、自分の小部屋に閉じこもって誰の訪問も拒んでいたところ、軍司令官マルティニアヌスが、悪霊に取り憑かれた娘を連れて彼の元を訪れた。彼は扉を叩き、尊者に出てきて祈りを捧げ、苦しむ娘を助けてくれるよう懇願した。アントニオスは扉を開けることなく、上から顔をのぞかせてこう言った。

「なぜ私の助けを求めるのか。私もあなたと同じく死すべき者であり、私たち二人は生まれながらにして等しく無力なのだ。もし私が仕えるキリストを信じるなら、行って、あなたの信仰に従って神に祈りなさい。そうすれば、あなたの娘は癒やされるだろう。」

マルティニアヌスは信仰を持ち、キリストの御名を呼び求め、たちまち癒やされた娘を連れて家路についた。主は、御自分のしもべアントニウスを通して、他にも多くの奇跡を行われた。福音書の中で、主はこう約束された。*「求めなさい。そうすれば与えられる」*（マタイ7:7）と約束され、それに従い、御恵みにふさわしい人を見つけると、奇跡の力も惜しみなく与えられた。多くの悪霊に取りつかれた者たちが、彼の修道室の入り口の前に横たわっていた――扉が閉ざされていたためである――が、彼らは皆、彼の神に喜ばれる祈りによって癒やされた。　アントニオスは、この大勢の訪問者たちが、彼が愛する静寂の中に留まることを妨げていることに気づいた。一方で、彼は、自分を通して行われる数々の奇跡によって、自身の心が驕り高ぶることを恐れていた。そこで、彼は、誰にも知られていない上フィヴァイダへ行くことを決意した。　パンを手に取り、彼は川岸に座り、対岸へ渡るための船を待ち始めた。すると突然、上空から声が聞こえ、こう尋ねてきた。

「アントニウスよ！　どこへ、何のために向かうのか？」

そのような声を聞くのはこれが初めてではなかったため、アントニウスは動じることなく、臆することなくこう答えた。

「ここの人々が私に安らぎを与えてくれないので、自分の力の及ばないことを強要されたり、沈黙を破られたりしないよう、上フィヴァイダへ向かうことにしたのです。」

「もしフィヴァイダへ行くなら」と声は続けた、「そこではさらに大きな困難に直面することになるだろう。もし本当に厳格な隠遁生活を送りたいのなら、今すぐ内陸の砂漠へ向かいなさい。」

「しかし、そこは私にとって見知らぬ場所です。誰がそこへの道案内をしてくれるのでしょうか？」とアントニウスは尋ねた。

それに対し、その声は、通常この道を通ってエジプトへ交易に赴くサラセン人たちを指し示した。彼らはちょうど帰路についていたところだったので、アントニウスは近づき、自分をも連れて行って砂漠まで案内してほしいと頼んだ。彼らは、アントニウスを神ご自身が遣わした旅の仲間と見なして、快く承諾した。　サラセン人たちと共に三日三晩を旅して過ごした後、聖アントニウスは非常に高い山にたどり着いた。その山麓からは良質な水が湧き出ており、山を取り囲む小さな平野には、数本の野生のナツメヤシが生えていた。　アントニウスはこの場所を気に入った――まるで神ご自身が彼に示されたかのように――そして、川岸で目に見えない形で彼と語り合った御方は、確かにこの

山を彼の住処として選ぶよう彼に促したのである。同行者たちからパンを受け取ると、彼はこの山で独り暮らしを始め、彼と共に暮らす者は誰もいなかった。　サラセン人たちは、彼の苦行の生活を見て、パンを届けるようになった。また、時には野生のナツメヤシの実からも、わずかながら慰めを得ることがあった。その後、兄弟たちが彼の居場所を知ると、子供たちが父親にそうするように、愛情を込めて彼に食べ物を送り始めた。　しかし、アントニウスは、それが兄弟たちに負担をかけていることに気づき、彼らをその苦労から解放したいと願い、訪れた者の一人に、鍬と鋤、そして少量の種を持ってくるよう頼んだ。　その人がその願いを叶えると、アントニウスは山を一周し、耕作や種まきに適した小さな場所を選んだ。そこは、上から水を引いて灌漑することができたからである。　そこで土を耕し、種を蒔くと、それ以来、彼は毎年自分のパンを得られるようになった。働きながら、誰にも負担をかけずに、自分の手の労働で荒野で生計を立てられることを喜んでいた。しかし、そこにも多くの人が彼を訪ねてくるようになったため、訪問客をもてなすために、彼はさらにいくつかの野菜――豆やエンドウ豆など――を蒔いた。 当初、動物たちが水を飲みに ここにやって来るようになり、野菜を踏み荒らし、食い荒らしていた。ある日、彼らがいつものようにここに集まったとき、聖人はそのうちの1匹を捕まえ、棒で軽く叩きながら、彼ら全員にこう言った。

「なぜ、私から何の迫害も受けていないのに、私に害を与えるのか。主の御名によって命じる。私から離れ、ここには近づくな。」

それ以来、獣たちはその禁令に従い、二度とやって来なくなった。こうして聖人は、祈りと絶え間ない修行に専念し、人里離れた生活を送っていた。しかし、長老への愛に駆られて、兄弟たちは彼を訪ね、何かお役に立てようと努めていた。　彼らはそれぞれ、オリーブやオリーブ油、あるいはレンズ豆やその他の野菜を持ち寄り、老齢で衰えた体を養ってほしいと懇願した。彼がそこに住んでいた間、どれほどの攻撃に耐えなければならなかったことか。それは、彼を訪ねてきた者たちから、我々は知っているのだ！

まことに、使徒の言葉が彼の上に実現した。*「私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、天上の悪の霊たちに対するものである」*（エフェソ6:12）。そこには、まるで群衆の叫びや武器の音のような恐ろしい叫び声がどれほど響いていたことか――山全体が悪魔たちで満たされているかのようだった！　しかし、聖アントニオスは要塞のようで、ひざまずいて祈ることで悪魔の大群をすべて撃退し、たった一人で彼ら全員に打ち勝った。そして、一人の人間が、絶え間ない悪魔の襲撃も、数多の四足獣や毒蛇も恐れることなく、人跡未踏の荒野で生き抜くことができたというのは、実に驚くべきことである。　ダビデは正しくこう謳った。*「主を信頼する者は、シオンの山のように揺るがず、永遠に存続する」*（詩編124:1）。

ある夜、アントニオスが祈りを捧げ、主に仕えるために徹夜していたとき、突然、彼の修道院全体、さらには周囲の砂漠までもが、恐ろしいほど口を大きく開け、歯をぎしぎしと鳴らす獣たちで埋め尽くされているのを見た。しかし、聖人は、これが敵である悪魔の狡猾な策略であると即座に見抜き、こう言った。

「もし主からあなたがたに、わたしに対する権威が与えられているのなら、わたしはあなたがたに食い尽くされても構わない。しかし、もしあなたがたがサタンの誘惑によって現れたのなら、さっさと逃げ去れ。なぜなら、わたしはキリストのしもべだからだ。」

そして、聖人の言葉通り、すべての獣は神の力に追われ、慌てて逃げ去った。

数日後、同じ敵との新たな戦いが起こった。聖人は、供物を携えて訪ねてくる者一人ひとりに、記念として何か贈り物を渡す習慣があり、そのために籠を編んでいた。籠を編んでいた細い紐を引っ張ったとき、彼は突然、誰かがそれを握っているのを感じた。　聖人は立ち上がり、腰までが人間の姿で、体の残りの半分がロバの姿をした獣を見た。アントニオスは十字を切って言った。

「私はキリストの僕だ。もしお前が私のもとへ遣わされたのなら、ここにいる。逃げはしない。」

するとたちまち、その幻影は他の多くの悪霊たちと共に逃げ出し、姿を消した。

しばらくして、兄弟たちは聖人に彼らを訪ねてくれるよう懇願した。彼らに対する父のような愛に動かされたアントニウスは、水のない土地を旅することになるため、彼らと共にラクダにパンと水を積み込み、旅立った。　道中、持参した水はすべて尽きてしまい、猛暑のため、旅人たちは渇きによる死の危機に瀕していた。　彼らは周辺をくまなく探し回り、窪地などに雨水の残りが残っていないか探したが、無駄だった。ラクダさえも、渇きと灼熱の太陽のせいで息絶えようとしていた。このような窮地に陥り、長老はいつものように祈りの力に助けを求めた。　同行者たちから少し離れた場所で、彼はひざまずき、両手を天に向けて祈り始めた。すると、その場ですぐに泉が現れた。喉の渇きを癒やし、水を蓄えて旅を続けた一行は、無事に彼らを待ちわびていた兄弟たちの元へたどり着いた。　兄弟たちは皆で集まり、長老を迎えに出て、敬意を込めて彼に口づけをし、祝福を受けた。一方、長老は、まるで山から律法や彼らにとって貴重な贈り物をもたらしたかのように、彼らに霊的な糧を与え――年長者の功績を称え、年少者たちに教えを授けた。

ここでしばらく過ごした後、彼はまもなく再び自分の山へと戻っていった。悪霊を制する力を持つ聖人は、多くの悪霊に取り憑かれた人々を癒やし、彼らから悪霊を追い出した。このことについては、アファナシオス・ザ・グレートが著したアントニオスの伝記に詳しく記されている。　聖人はその祈りによって、その他さまざまな病気も癒やし、預言の賜物も備えていた――未来を見通し、遠くにあるものをあたかも目の前にあるかのように見ることができたのである。　ある日、二人の兄弟が遠くから聖者に会いにやって来た。道中、彼らの持っていた水はすべて尽きてしまい、そのうちの一人は神の御心によりすでに亡くなっており、もう一人は力尽きて地面に横たわり、死を待っていた。　その時、山に滞在していたアントニオスは急いで二人の修道士を呼び寄せ、水瓶を持ってエジプトへと続く道を急いで行くよう命じ、こう言った。

「ここへ向かっていた兄弟の一人は、すでに主のもとへ召された。あなたがたが助けに急いで行かなければ、もう一人も死んでしまうだろう。」

修道士たちは、その指示に従って急いで旅立ち、長老が言った通りの状況を見つけた。渇きで衰弱していた兄弟に水を飲ませ、連れ帰った。そして、亡くなった兄弟は埋葬した。　またある時、彼が山の上に座って空を見上げていると、ある魂が、その魂を喜び祝う天使たちに囲まれて天へと昇っていくのを見ました。これに驚いた聖人は、この幻視が何を意味するのかが明らかにされるよう祈りました。すると、彼に声が聞こえました。

「これは、ニトリアに住んでいた修道士アモニウスの魂である。」

アンモニオスは、その伝記（10月4日の項）からも明らかなように、若き頃から死に至るまで厳格な修道生活を送った長老であった。また、アントニオスが住んでいた山からニトリアまでの距離は、13日間の道のりであった。　アントニオスの弟子たちは、師が喜び、驚きを見せているのを見て、その喜びと驚きの理由を説明してほしいと頼んだ。

「今日、アモニウスがこの世を去ったのだ」と、長老は彼らに答えた。

アモニウスは、よくここを訪れていたため、弟子たちにも知られた人物だった。　この日を心に留めたアントニオスの弟子たちは、30日後に訪れた兄弟たちに詳しく尋ね、アモニオスが確かに、長老が彼の魂が天に昇るのを見たまさにその日、その時刻に亡くなったことを彼らから知った[1107]。彼らもまた、アントニオスの魂の清らかさに深く驚嘆した。その清らかさゆえに、彼ははるか遠くで起きた出来事をこれほど早く知ることができたのである。

ある日の九時頃、尊者アンソニーは食事の前に祈りを捧げるために立ち上がったところ、精神が高揚し、自分が空を飛んでいるのを見た。その時、空の悪魔たちが彼の行く手を阻み、昇天を妨げ

[1107] 聖アモニウス（別名アモン）は、ニトリアの砂漠で22年間にわたり隠遁生活を送り、350年頃に没した。彼の記念日は10月4日である。

ようとした。　しかし、天使たちは彼らに抵抗し、足止めする理由を問いただした。悪魔たちは、アントニオスの誕生以来の罪を挙げ始めた。だが、天使たちは彼らを制止し、こう言った。

「生まれつきのことは、主がすでに消し去られた。しかし、彼が修道士となり、神に誓いを立ててからの罪について何か知っているのなら、それについては語ってもよい。」

すると悪魔たちは、その悪意から、アントニウスを中傷し始め、彼が犯したことのない罪で彼を非難した。しかし、それが何の成果も生まなかったため、アントニウスには自由の道が開かれた。正気に戻ったアントニウスは、自分が元の場所に立っていることに気づいた。　その幻に深く動揺した彼は、食事のことも忘れ、一晩中、熱烈な祈りと嘆息、そして人間にはどれほど多くの敵が存在し、魂が天へと至る道のりがいかに困難であるかについて思いを巡らせた。

ある夜、彼は天からの声を聞き、こう告げられた。

「立ち上がれ、アントニウスよ、外に出て見てみよ！」

アントニウスは外に出て、上を見上げると、恐ろしい姿をした、頭が雲に触れるほど背の高い人物を目にし、　また、まるで翼を持つかのような他の存在たちも目にした。彼らは天へと昇ろうとしていたが、恐ろしい巨人は両手を伸ばしてその行く手を阻もうとしていた。そして、ある者たちは実際に捕らえられて下へと投げ落とされ、　一方で、他の者たちは彼をかわして勇敢に上へと飛び去り、そうした者たちに対して、巨人は無力な怒りの中でただ歯ぎしりをするばかりだった。そして再び、アントニウスは声を聞いた。

「よく見て、今、何が見えているのか理解しよう！」

すると、彼の心が開かれ、それが――人間の魂たちが天へと昇っていき、悪魔がそれを妨げようとしていたのだと理解し始めた。悪魔は罪人たちを捕らえて自分の支配下に留めることに成功していたが、聖人たちにはその力が及ばず、彼らを引き留めることはできなかった。　聖人は、そのような啓示を兄弟たちに語ったのは、虚栄心からではなく、彼らのためであった。さらに、彼ら自身も、彼が何かに驚いているのを見ると、彼に起こった幻視について話してくれるよう懇願した。　その顔は常に何らかの特別な恵みに照らされ、輝いていたため、たとえ以前一度も彼を見たことがなかった人であっても、多くの人のうちから即座に彼を見分けることができた。聖人の心の清らかさはその顔の喜びに映し出されており、内面から神の御姿を見る光に照らされて、彼は常に喜びに満ちていた。それは次のように書かれている通りである。　*「喜びに満ちた心は、顔を明るくする」*（箴言15:13）。

外見がどれほど親しみやすいものであったか、それと同じくらい彼は清く、驚くほど揺るぎない信仰の持ち主であった。信仰において、彼は決して背教者たちの側に立つことはなく、彼らが勝手に信仰を歪めているのを見て、決して マニ教徒[1108] やその他の異端者たちと友好的に語り合うことはなかった。ただし、彼らが以前の誤りを放棄する意思を示した場合に限って例外とした。　聖人は、異端者たちとの交わりや対話が魂に害を及ぼすと率直に語った。とりわけ彼はアリウス派を避け、すべての正信者に対しても彼らとの交わりを禁じた。ある時、アリウス派の者たちが彼の元を訪れ、彼らとの会話からその邪信を見抜くと、聖人は直ちに山から彼らから逃げ去り、こう言った。

[1108] マニ教は、キリスト教と、二元論、すなわち太古より二つの独立した原理または王国が存在するという教義を説いたペルシャの宗教ゾロアスター教の原理とを融合させようとした試みの影響を受けて形成された異端である。　マニ教の教えによれば、キリストは、光の父から「流出」によって生じた、単なる「光のエオン（霊）」に過ぎない。　その半分は、あたかも物質に飲み込まれたかのように、可視世界の魂、いわゆる「苦悩するイエス」を構成し、もう半分は、別のエオンである「生命を与える霊」の助けを借りて物質から解放され、太陽の中に宿った。これが、いわゆる「無情のイエス」である。　マニ教の教えによれば、キリストの受肉とは、苦悩するイエスを解放するために、無情のイエスが太陽から降りてきたことである。苦悩するイエスの光の粒子は、サタンによって集められ、それらをより容易に支配するために、人間の姿に閉じ込められたとされる。この教えによれば、キリストの受肉は単なる幻に過ぎなかった（ドケティズム）。道徳的な観点から、マニ教は、自らの内なる肉体を徐々に死滅させることによって、物質からの解放を目指す闘争を説いた。マニ教の異端は、特に4世紀から5世紀にかけて広く普及した。

「彼らの言葉は、蛇そのものよりも毒が強い。」

ある時、アリウス派が「アントニオスは彼らと同じ考えを持っている」という虚偽の噂を流した際、聖人は彼らの厚かましさに驚き、正義の怒りに燃えてアレクサンドリアへと向かった。　そこで、大司教と民衆全員の前で、彼はアリウス派を「反キリストの先駆者」と呼んで呪い、神の御子を被造物ではなく、父と同質であり、世界の創造主である[1109]と告白した；　そして、すべての正統派キリスト教徒は、キリストに敵対する異端が、このような教会の柱によって呪われたことに、大きな喜びに満たされた。その時、性別や年齢を問わず、キリスト教徒だけでなく、異端者、さらには異教徒までもが、尊者のもとに集まり、こう言った。

「神の御使いにお目にかかりたい。」

人々は皆、アントニオをそう呼んでおり、その名は並外れた名声を博していたため、人々は彼の衣の端にでも触れようと殺到し、それによって自分たちに大きな恩恵がもたらされることを願っていた。　アントニオが町に滞在し、その言葉と奇跡によって、当時どれほどの悪霊に取りつかれた者や様々な病に苦しむ者が癒やされ、どれほどの偶像崇拝の神殿が閉鎖され、どれほどの異教徒がキリストの群れに加わったか、言葉では言い尽くせないほどであった。[1110]　ある者たちは、大勢の群衆が聖人を煩わせていると考え、人々を彼から遠ざけようとしましたが、聖人はそのような者たちに穏やかにこう言いました。

「私のもとを訪れる人々の数は、山で私たちが絶え間なく戦っている悪魔の群れほどにも多くはないのです。」

この伝記の著者である聖アファナシオス大聖人は、次のように語っている。アントニオスが帰路についた際、私たちが彼を見送りに出かけたところ、一人の女性が後ろから叫んだ。

「待ってください、神の人よ、お願いです――待ってください！　私の娘が悪魔にひどく苦しめられています。お願いです――私があなたを追いかけていくことで、不幸に見舞われないよう、待ってください！」

この言葉と私たちの懇願に心を動かされた、尊い長老は立ち止まり、それ以上先へ進まなかった。　女性が近づくと、その娘は悪霊によって地面に投げ出されていた。アントニオは心の中で主イエス・キリストに祈りを捧げると、たちまち悪霊は病人の体から離れた。母親と集まった人々は皆、神に感謝を捧げた。アントニオ自身も、愛する荒野へ戻れることを喜びとした。

この聖人についてさらに驚くべきことは、読み書きを学んでいないにもかかわらず、彼が賢明で、極めて分別があったことである。　ある日、ギリシャ出身の異教の哲学者二人が、アントニオを試し、可能であればその知恵に打ち勝つために彼の元を訪れた。彼は山の頂上にいたが、彼らを見かけると、一目で彼らが誰であるかを悟り、自ら出迎えて通訳を通じてこう尋ねた。

[1109] 「神の御子は」とアントニウスは語った。「被造物ではなく、また被造物を生み出す者たちの一員でもなく、父なる神の本質に永遠に共存する御言葉であり、知恵である。アリウス派とは一切交わってはならない。なぜなら、光と闇との間に交わりなどあり得ないからである（IIコリント6:14）。 もしあなたがたが敬虔さを守っているなら、あなたがたはキリスト者である。しかし、神の御子、すなわち父から出られた御言葉を被造物と呼ぶ者たちは、異教徒と何ら変わらない。なぜなら、彼らは被造物を、それを作られた神よりも崇めているからである。　私を信じてください――とアントニウスは続けた――この世の自然の要素そのものが憤り、すべての被造物は、万物を創造された主が自分たちと同列に扱われているのを見て、アリウス派の狂気に対して嘆き悲しんでいるのです。――この時、聖アントニウスはすでに104歳になっていた。それより以前、アリウス派の異端が広まった際、 アントニウスは真理の擁護者として立ち上がった。335年、彼はアリウス派の司教グリゴリウスと、同じく異端者であったアレクサンドリアの行政長官に対し、非難の手紙を書いた。同時に、当時司教の座から追放されていたアレクサンドリアのアタナシウスのために、皇帝コンスタンティヌスに嘆願の手紙を送った。

[1110] 聖アタナシウス・アレクサンドリアの証言によれば、同聖人がアレクサンドリアに滞在したわずか数日の間に、キリスト教に改宗した異教徒の数は、丸一年かけて改宗した者の数を上回ったという。

「賢者たちよ、なぜわざわざ遠くから、分別のない者のもとへ足を運ぶ労を惜しまず、理不尽な者と論争しようとするのか？」

「我々はあなたを愚かだとは考えていない。それどころか、極めて賢明だと見なしている」と彼らは答えた。

「もしあなたがたが、分別のない者のところに来たのなら」と、聖人は再び大胆に彼らに語りかけた。「その労力は無駄だ。　もし、あなたがたが言うように、私が賢い人間であるならば、あなたがたは『賢者』と呼ぶ者に従うべきです。なぜなら、賢く敬虔な者を模範とすべきだからです。もし私があなたがたのところへ行ったなら、私はあなたがたに倣わなければならなかったでしょう。しかし、あなたがたが私を賢者として訪ねてきたのですから、私のようにキリスト教徒になってください。」

そして哲学者たちは、彼の知性の鋭さと、自分たちの目で見た悪魔の追放に驚嘆しつつ、その場を去っていった。

これらと同じような他の学者たちも、彼を無学で文盲な人間として嘲笑しようと、彼の元を訪れた。しかし、彼は次のような論証をもって彼らを恥じ入らせ、黙らせた。

「答えてくれ」と彼は言った。「どちらが先に現れたのか――知性か、それとも文字か。そして、どちらがもう一方を生み出したのか。文字が知性を生み出したのか、それとも知性が文字を生み出したのか？」

「知性が文字を発明し、伝えたのだ」と彼らは答えた。

すると、アントニウスはこう言った。

「それゆえ、健全な知性を持つ者は、文字を必要としないこともあるのだ。」

また、三度目には、あらゆる世俗の知恵を学び、その学識において同時代の人々をすべて凌駕していた人々が彼の元を訪れた。　彼らは巧妙な問いかけで、キリストへの信仰の根拠を彼に問い詰め始めた――明らかに、キリストの十字架を嘲笑する目的で。少し沈黙し、彼らの迷いを嘆いた後、長老はギリシャ語に精通した通訳を通じて、彼らにこう語り始めた：

――キリストの十字架を崇めることと、あなたがたの神々の姦淫、幼児殺害、近親相姦を称賛すること、どちらがより良く、より品位のあることでしょうか。キリストの十字架に現れた死への軽蔑と至高の美徳を讃えることと、あなたがたの堕落した信仰が教える放蕩を称えること、どちらがより良いのでしょうか。　神の御言葉が人間の肉体をまとい、私たちの死すべき性質と結びつくことによって、私たちを天へと導き、天上の、神聖なものへと参与させてくださったと語り、信じることに、これ以上のことがあろうか？　それなのに、どうしてあなたがたは、キリスト教の信仰――すなわち、神の御子キリストが、ご自身の本性に何ら損なうことなく、かつてはなかったものとなり（[1111]）、そして今やそうなったものとして留まっている（[1112] ）――を嘲笑うなどという大胆なことをするのでしょうか。　――もしあなた方自身が、魂を天から降ろし、それを人間の身体だけでなく、蛇や動物の中にも宿らせ、あちこちと移し替え、時には人間に、時には動物に、時には鳥やその他の生き物へと移り住むと主張しているのなら、どうしてそんなことがあり得るのか？　キリスト教の信仰は、神の全能と慈悲を告白するゆえに、まさにこの点において、神の受肉が可能であると見なしている。もっとも、その尊厳は、[1113] の尊厳を排除するものではない。 それなのに、あなた方は、神性の最も清らかな源から流れ出る魂が、その後、低きところへ堕ちるとの空論を語り、さらに、その魂が卑しめられるにつれて変化や変容を被るとまで断言するのです。とはいえ、ここでは、私たちの神で

[1111] すなわち――神人であり、これは神の御子が受肉する前にはなかった姿である。

[1112] すなわち――受肉した神の子である。なぜなら、キリストは天に昇り、その栄光に満ちた人間性をもって父の右の座に着かれたからである。

[1113] すなわち――神性はこれによって制限されることもなく、その栄光が損なわれることもなく、また人間性そのものも本質的な特性を失うことなく、神格化という意味で変化することもない。

あるキリストの十字架について語る必要があります。　十字架やその他の死を耐え忍ぶ方が、あなたの荒唐無稽な作り話を信じて、兄弟であり夫でもあるオシリスを悼むエジプトの女神イシスに崇拝を捧げるよりも、はるかにましではないでしょうか？ あなたの神オシリス[1114]の兄弟である邪悪なティフォンへの信仰を、どうか恥じてください。サトゥルヌスの逃亡[1115]、そして彼が子供たちを不自然に飲み込んだことについて、恥じるべきです。ゼウスの血に飢えた残虐性と淫乱さ、その好色さ――それらはあなた方自身の古代の伝説が語っていることなのです――を恥じるべきです。これがあなた方が信じているものであり、これがあなた方の神々であり、あなた方の神殿を飾るものなのです！
あなた方は十字架と主の苦難を嘲笑しています。　しかし、なぜ彼の復活については黙り込んでいるのか。なぜ彼の奇跡――盲人の視力の回復、聾者の聴力の回復、足の不自由な者の癒やし、ハンセン病患者の清め、海の上を歩くこと、悪霊の追い出し、死者の復活、そしてその他多くの奇跡――に目を向けないのか。それらからは、彼の神聖な力と栄光がはっきりと示されていたではないか。　もしあなたがたが、心に満ちている偏見を捨て去ったなら、イエス・キリストこそが、私たちの救いのために人となられた真の神であることを、即座に確信するはずである。

これらの論証やその他多くの論証によって、尊者（アントニオス）は、議論を交わしていた哲学者たちをこれほどまでに恥じ入らせたため、彼らは彼に一言も反論することができなかった。　これらすべてについて詳しく知りたい方は、アタナシウス大聖人が著した『アントニオスの行伝』を参照されればよい。そこにはこの対話が完全に収録されている。我々は、物語が膨大であることを踏まえ、聖人がギリシャ人たちに語った言葉については割愛し、ここでは聖人自身の生涯において傑出した意義を持ち、また我々にとって最も有益な事績について簡潔に述べることにする。

聖アントニオスには、驚くべき点があった。彼は当時の世界の最果てに住んでいたにもかかわらず、コンスタンティヌス帝とその息子たちコンスタンスおよびコンスタンティウス[1116]は彼を遠隔地から熱烈に慕い、手紙の中で彼に会いに来るよう懇願したのである。

「王たちのところへ行くべきか、行かないべきか？」と彼は弟子たちに尋ねた。

「もし行けば」と弟子たちは答えた、「あなたはアントニオスとなるでしょう。もし行かなければ、アッバ・アントニオスとなるでしょう[1117]。」

[1114] オシリスとは、イシスと並んで国中で崇められていたエジプトの神であり、古代エジプト人の信仰によれば、イシスの夫であり、同時に兄弟でもあった。しかし、その兄弟であるティフォンが狡猾にも彼を箱に閉じ込め、釘で打ち付け、鉛を流し込み、ナイル川に投げ込んだ。　イシスは棺を見つけ出して隠したが、夜になってティフォンがそれを開け、遺体を14の断片に引き裂き、四方八方に散らした。イシスはそれらを集めて埋葬し、ティフォンは長い戦いの末、完全に打ち負かされた。　一方、イシスがナイルの土地を象徴する一方で、オシリスはナイルの豊穣をもたらす神である。より一般的な意味において、イシスの姿は、万物を生み出す母としての大地そのものが神格化されたものであり、対照的にオシリスは、大地に具現化された太陽の生産力を体現していた。　彼はナイルの神であると同時に太陽の神としても崇められていた。　ティフォンとの戦いは、大地に内在する太陽の生産力に対する闘争を表していた。異教徒たちはティフォンの姿を通じて、ある恐ろしい怪物を神格化していた。それは、破滅的な旋風や灼熱の風として、あるいは破壊的な力を帯びて大地や火を吐く山々から噴き出す蒸気として説明されていた。

[1115] サターン、あるいはクロノスは、ウラノス（天）とゲイア（地）の子として崇められていたギリシャ・ローマの神である。父の王座から追放された後、古代の異教徒の信仰によれば、彼は世界に対する支配権を自ら掌握した。　彼は実の妹レーアと結婚したが、自分の子供たちによって王位から追放されるという予言があったため、子供たちは生まれた直後に飲み込んでしまった。その後、彼は息子のゼウスによって王位から追放された。

[1116] コンスタンティウスとコンスタンスは、コンスタンティヌス大帝の息子であり後継者である。コンスタンスは337年から350年までローマ帝国の西部を統治した。コンスタンティウスは337年から361年まで東部を、363年からは西部も統治した。

[1117] アッバとは、修道院の長であり、修道士たちから息子のような畏敬の念をもって敬われる人物である。弟子たちの返答は、アントニウスが去ることなく、これまで通り彼らから深く敬われる霊的な父であり指導者であり続けてほしいという願いを表している。

「それなら」と尊者は言った。「もし行けばアッバではなくなるのなら、行かないほうがましだ」――そして彼は行かなかった。

その後、王たちは彼に、せめて手紙を通じて祝福と慰めを与えてほしいと懇願するようになった。これに対し、聖人は実際に彼らに手紙を送り、その中で、キリストの信仰を告白していることを称賛しつつ、この世の権力に驕ることなく、たとえ王座に就いていようとも、　自分たちが人間であることを決して忘れてはならないこと、そして何よりも、将来訪れる最後の審判において、権力をどのように行使したかについて説明を求められることを心に留めておくよう説いた。聖人は彼らに対し、人々に慈悲深くあり、正義を貫き、貧しい者や不幸な孤児たちの父となるよう説得した。

ある日、修道士たちと共に作業に励んでいたとき、彼はまるで恍惚としたような状態になり、空をじっと見上げながらため息をつき、その後、祈るようにひざまずいて、長い間、苦々しく泣き続けた。その場にいた者たちは恐怖に駆られ、彼が何を見ているのか、執拗に語りかけるよう懇願し始めた。

「わが子らよ、迫り来る災難が訪れる前に死んでしまったほうがよかったのだ」と、長老は深い悲しみをもって答えた。

彼らが再び同じことを懇願し始めたため、聖アントニオは涙を流しながらこう言った。

「言い表せない災いがキリストの教会に迫っており、教会は言葉を持たない家畜のような者たちに引き渡されてしまうだろう。　私は主の神殿の祭壇を見ました。そこには多くのロバがいて、聖なる玉座を取り囲み、その上に置かれたものをすべて激しく引き倒し、床に散らかして足で踏みつけました。そして、ある声がこう言うのを聞きました。『わが祭壇は汚されるであろう！』これこそが、私が嘆き、泣く理由なのです。

この聖人の幻視は、二年後に残酷なアリウス派による迫害が始まったときに現実のものとなった。神の教会は略奪され、聖なる器は汚され、聖なる秘跡には異教徒の不浄な手が触れたのである。当時、不信心者たちの大群がキリストに敵対し、正教徒たちに木の枝を手に持って教会へ行くよう強制した。　後者の理由は、アレクサンドリアの異教徒たちには、ヤシの枝を手に持って神殿に入る習慣があったからであり、アリウス派は、正教徒に対する戦いで彼らの助けを得ようとして、彼らに倣い、自分たちの教会にも枝を持って参拝するようになったのである。　正統派キリスト教の信仰に対して共同で行動することに合意した彼らは、互いの慣習を模倣し合うようになった――アリア派は異教徒を、異教徒はアリア派を。この不敬な慣習に、正統派もアリア派と足並みを揃えるよう強制された。なんと恐ろしいことか！なんと不法なことか！　女性や少女たちは汚され、正教徒の血が教会で流され、祭壇に飛び散り、洗礼盤は異教徒たちの淫らな行為によって穢された。　当時、人々は皆、この出来事をアントニウスの幻視――ロバたちが神の祭壇を踏みにじっているという――の成就であると見なした。そして当時、多くの気弱な人々が、アリウス派への恐れから、彼らの異端の側に転向してしまった。

迫り来る災難について語る一方で、聖アントニオは兄弟たちを慰め、こう語った。

「落胆してはならない、子供たちよ。主が怒られたのと同じように、その後には憐れみも示される。そして教会には再びその輝かしい美しさと力が取り戻され、迫害の中でも揺るぎなくキリストの信仰を守り抜いた者たちは、恵みの光で輝き渡るだろう。その時、蛇たちはそれぞれの巣穴へと戻り、敬虔さはさらに増すことになる。　ただ、自分たちの行いに注意し、アリウス派との交わりが自分たちの破滅につながらないよう気をつけなさい。彼らの教えは使徒的ではなく、悪魔的であり、彼らの父であるサタンのものだからだ。まさにこの理由によって、彼らは幻の中で愚かな動物の姿として描かれたのである。

当時、エジプトにはバラキという名の軍司令官がおり、彼は悪意に満ちたアリウス派に煽られて、キリスト教徒を容赦なく迫害していた。彼は極めて残酷で、広場にて人々の面前で、乙女や修道

士たちさえも裸にし、鞭打ったほどであった。聖アントニオスは彼に次のような内容の手紙を送った。

「あなたに神の怒りが降りかかろうとしているのが見えます。キリスト教徒への迫害をやめなさい。そうすれば、あなたに迫りつつある破滅は遠のくでしょう。」

その不信心者は手紙を読み、ただ嘲笑しただけだった。手紙に唾を吐きかけ、地面に投げ捨て、アントニオスが遣わした使者たちに恥辱的な処罰を加え、聖人を罵倒しつつ、彼に対して様々な悪意に満ちた脅しを浴びせた。しかし間もなく、聖人の預言通り、その不信心者の上に次のような神の懲罰が降りかかった。 その5日後、彼はエジプトの総督ネストリオスと共に、アレクサンドリアにあるヘレウムという場所へ向かった。彼らは最もおとなしく穏やかな馬に乗って旅立った。 すると突然、馬たちが彼らの下で暴れ出し、互いにぶつかり合い始めた。そして、ネストリオが乗っていた馬が、予期せずヴァラキアを牙で掴み、彼を地面に投げ飛ばすと、その体の柔らかい部分を噛み始めた。 その後、彼は死体となって街に運ばれ、そこで三日目にその不敬な魂を吐き出した。そして皆は、この出来事を、迫害者を正当に罰したアントニウスの予言の成就であると見なした。

さて、ここで尊者（ネストリウス）の最期について語るべき時が来た。彼は、自ら滞在していた山頂から、山のふもとに住む兄弟たちの元へ降りて行き、彼らを訪ねることを常としていた。そうしたいつもの訪問の一つで、彼は神から啓示された自身の死が近づいていることを彼らに告げた。

「わが子らよ、私は今回が最後となるだろう」と彼は言った。「この世で再びあなた方に会うことはもう望めない。私はすでに百五歳を生きてきたのだから、そろそろこの世を去り、安らぎを得る時が来たのだ。」

この言葉を聞いて、兄弟たちは深い悲しみに沈み、まるでこの世を去ろうとしているかのように、長老に涙を流し、口づけをした。 しかし、彼は彼らに、衰えることのない熱意をもって勤勉に励み、禁欲の行いの中で落胆することなく、あたかも毎日死に備えるかのように生き、不純な思いから魂をしっかりと守り、聖人たちの模範に従い、分裂派であるメレティア派に近づかず、 不敬虔なアリウス派と交わらないよう説いた。 それどころか、彼は彼らに、先祖代々の伝承を守り、聖書と彼の度重なる教えから学んだ、主イエス・キリストへの敬虔な信仰を、あらゆる点において清く保つよう説得した。

その後、兄弟たちは彼に、自分たちと共に留まるよう執拗に懇願し始めた。皆が、彼の最期の瞬間に立ち会うという栄誉に浴したいと願っていたからである。しかし、彼はこれに同意しなかった。なぜなら、彼らが死後、彼の遺体を厳粛な葬儀をもって弔おうとしていることを知っていたからである。 死後に人々から名誉や栄光という報いを受けることさえ避けようとした聖人は、急いで彼らのもとを離れ、人里離れた場所に身を隠した。兄弟たちに別れを告げると、彼は山頂にある、自身の愛する住まいであり、修行の場である場所へと向かった。 数ヶ月後、彼は重病に倒れた。そこで、過去15年間にわたり共に修行し、老齢の彼に仕えてきた二人の修道士を呼び寄せ、こう言った。

– わが子らよ！聖書に記されているとおり（列王記下2:2、 参照：ヨシュア記23:14）にあるように、*「私は全地の道へと旅立つ」*と、主が私を御自身のもとへ召しておられる。私は天の恵みを味わえることを願っている。しかし、私の愛する子供たちよ、お願いだ——長年にわたる節制の成果を無駄にせず、熱心に、そして成功を収めながら、あなたがたが始めた偉業を続けてほしい。 悪魔たちが私たちにどれほど多くの様々な障害を仕掛けてくるかは、あなた方もご存じの通りですが、その取るに足らない力を恐れてはなりません。イエス・キリストに希望を置き、心を尽くして彼を堅く信じなさい。そうすれば、すべての悪魔はあなた方から逃げ去るでしょう。私があなた方に教えたことをすべて心に留め、敬虔な生活を送るよう努めなさい。そうすれば、間違いなく天において報いを受けるでしょう。 分裂主義者、異端者、アリウス派者たちとのあらゆる交わりを避けなさい。あなたがたもご存知の通り、私は彼らの邪悪な企みとキリストを敵視する異端のため、一度たりとも彼らと

友好的に語り合ったことはありません。何よりも、主の戒めを遵守するよう努めなさい。そうすれば、あなたがたが死んだ後、聖徒たちがあなたがたを親族や友人として、永遠の住まいへと迎え入れてくれるでしょう。　このことを心に留め、深く考え、常に熟考しなさい。もしあなたがたが本当に私のことを気遣い、父のように私を愛し、私の意志を遂行する用意があるのなら、私の遺体をエジプトへ移すことを誰にも許してはならない。そこで私の遺体が盛大な葬儀で葬られることのないように。というのも、私がこの山に身を隠したのは、主にこの理由によるものだからである。　わが子らよ、あなたたち自身で私を地中に葬り、この老人の次の戒めを守りなさい。私の遺体が葬られる墓の場所を、あなたたち以外には誰にも知られてはならない。私の主への信仰によれば、私の遺体は、死者の総復活の際に朽ちることなくよみがえるのだから。　私の衣服は次のように分けなさい。上着（ミロト）[1118] と、私が今身に着けている古びた下着は、アファナシオ司教[1119] に渡し、もう一枚の上着はセラピオン司教[1120] に渡し、羊毛の衣はあなたがたが持ちなさい。さようなら、私の愛する子供たちよ！アントニオは去る。この世では、もはやあなたがたと共にいることはない。

この言葉を聞いた弟子たちが別れを告げて彼に口づけをすると、アントニオスは足を伸ばし、顔に静かな喜びを浮かべ、自分の魂を迎えに来た天使たちをまるで友人であるかのように見つめながら息を引き取り、聖なる父たちの元へと旅立った[1121] 。聖人の弟子たちは、彼の遺言に従い、遺体に衣をまとわせて土に還したが、彼ら以外には、今に至るまで尊者アントニオの埋葬地を知る者はいない。

アファナシイは、弟子たちから聖人の着古した衣と聖油を受け取り、これらの贈り物の中に、あたかも聖アントニウスその人を受け入れたかのようであった。まるで豊かな遺産を授かったかのように喜びに満ち、彼は常に畏敬の念と喜びをもってこれらの衣を見つめ、聖人の聖なる姿を心に思い起こしていた。

以上が、聖アントニオの生涯と最期である。彼への愛と栄光は、あらゆる国々に広まった。彼は、巧みに綴られた著作[1122] 、世俗の知恵、家系の由緒、あるいは莫大な富によって名声を博したのではなく、敬虔な生活によって名声を博したのである。　そして、救い主の御言葉*「わたしを賛美する者を、わたしは賛美する」*（1サムエル2:30）が、彼の上に成就した。彼は、誰もが知るような有名な場所に住んでいたわけではなかった。それどころか、世界の果てに近い、人跡未踏の荒野へと身を隠した。　しかし、そこからでさえ、彼はスペイン、アフリカ、イタリア、イリュリア、さらには古代ローマそのものでさえも、その名を知られるようになった。山の中で意図的に人々の目から身を隠していたアントニウスは、そのような名声を望んでもいなければ、求めてもいなかった。　しかし、主ご自身が、この信仰と敬虔の灯をすべての人々に明らかにし、示された。それは、人々が彼を見

[1118] ミロート――上着、マント、ローブ。

[1119] すなわち、聖アファナシオス大聖人、アレクサンドリア総主教のことである。

[1120] ここでは当然、聖セラピオン、トゥムント（エジプト）の司教を指す。その記念日は5月24日である。

[1121] 聖アントニオス大聖人は、356年1月17日、105歳で逝去した。– 聖アントニオの聖遺骨は、561年にビザンツ帝国のユスティニアヌス帝（527–565年）の治世下で発掘され、アレクサンドリアへ移送された。その後、エジプトがサラセン人に占領されたことを受け、635年頃にコンスタンティノープルへ、　そこから980年頃にヴィエヌ司教区（ガリア、現在のフランス）へ、1491年にはアルル（プロヴァンスの主要都市、フランス南東部）の聖ユリアヌス教会へ移され、現在もそこに安置されている。

[1122] 聖アントニオ・マジョールは教育を受けてはいなかったが、彼にとって聖書と自然が学びの場であり、キリストの恵みが師であった。その恵みは、彼が苦行によって自己を犠牲にするにつれて、ますます彼を照らし続けたのである。　聖アントニオの著作のうち、現在まで伝わっているものは以下の通りである。1）20編の説教。これらは、修道者の美徳、キリストへの信仰、純朴さと無垢さ、謙遜、清らかさ、忍耐、敬虔、貞潔などについて論じている。すべての説教は簡潔であるが、神の教えに満ちている。 2) 書簡――道徳的完全性への志向と霊的闘争について、様々な修道院およびその院長たち宛てに書かれた7通は、聖アントニオがすでに非常に高齢の頃に執筆されたものであり、使徒的な教訓に満ちている。また、同様の内容と性格を持つ13通の書簡がある。 3) 修道生活の手引き、および修道士たちへのその他の訓戒や格言。

つめて徳を学び、この聖人のような生活に驚嘆し、天の父を賛美するためである。天の父には、その独り子と聖霊と共に、永遠に栄光と誉れと感謝と礼拝が捧げられる。アーメン。

トロパリオ、第4調:

熱心なエリヤの徳を模範とし、洗礼者ヨハネの正しい道を歩み、アントニオ神父よ、あなたは荒野の住人であり、あなたの祈りによってこの世界を堅く支えた。それゆえ、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第2調:

世俗の噂を退け、沈黙のうちに生涯を終えられた、あらゆる点で洗礼者ヨハネに倣う最も尊き方よ。我らはあなたを彼と共に崇めます、教父たちの指導者アントニオよ。

1月31日

1月18日（旧暦）

聖なる父アファナシオス、アレクサンドリアの大司教の生涯

記念日1月18日

聖アファナシオス大聖人――この生ける不滅の徳と神に喜ばれる生活の模範は、エジプトの著名な首都アレクサンドリアで生まれた[1123]。その両親はキリスト教徒であり、敬虔で徳の高い人々であった。アファナシオスがまだ少年だった頃、ある出来事が彼の将来の偉大な聖人としての活動を予兆していた。

ある日、アファナシオスは同年代の子供たちと海辺で遊んでいた。子供たちは教会で見たことを真似て、遊びの中で神の聖職者や教会の儀式を演じていた。彼らはアファナシオスを司教に選び、彼はその中の一部を長老、他を助祭と名付けた。 後者たちは、まだ洗礼を受けていない異教徒の子供たちを彼のところへ連れてきた。アファナシオスは、教会で司祭から聞いた聖なる洗礼の秘跡のために定められた言葉を唱えながら、海の水で彼らに洗礼を授けた。それに加えて、彼は自分の子供の年齢にふさわしい教えも添えた。

当時、アレクサンドリアの総主教は聖アレクサンドロスであった[1124]。海からほど近い高台にある自宅の窓からふと海辺を眺めると、子供たちが遊んでいるのが目に入り、彼は驚きの念を抱きながら、アファナシオスが行っている洗礼の様子をじっと見守った。そして直ちに、すべての子供たちを 自分の元へ連れてくるよう命じた。 子供たちに詳しく尋ねながら、総主教は、彼らが具体的に誰に洗礼を授けたのか、洗礼の前にどのような質問をされ、それに対してどう答えたのかを確かめようとした。そして、子供たちが遊びの中で、すべてを教会の規定に従って行っていたことを知った。 その後、聖職者たちと協議した上で、彼はアファナシオスが行った異教徒の子供たちへの洗礼を正当なも

[1123] 聖アファナシオス・アレクサンドリアスは、ディオクレティアヌスによるキリスト教徒への残酷な迫害が始まる直前の297年頃に生まれたが、彼自身にはその迫害に関する個人的な記憶は残されていない。

[1124] アレクサンドリアの主教聖アレクサンドル（アリウス派に対する正教の熱心な擁護者）は、312年から326年にかけてアレクサンドリア教会を統率した。

のとして認め、聖油の塗油によってそれを完成させた。そして、長老の役割を果たしていた子供たちの両親を呼び寄せ、彼らを聖職者となるよう育て上げるよう助言した。　また、聖アレクサンドルはアファナシイの両親を呼び寄せ、彼を敬虔さと学問の中で育て、やがて彼が成人した際には、彼を自分のもとへ連れてきて、神と聖なる教会に奉献するよう命じた。

アファナシオスが学問を十分に修め、幅広い教養を身につけたとき[1125]、両親は彼を聖アレクサンドロス総主教のもとに連れて行き、かつてアンナがサムエルを捧げたように（サムエル記上1章）、彼を神への捧げ物として奉献した。その直後、総主教は彼を聖職者に任命し、アレクサンドリア教会の助祭に按手した[1126]。彼がこの職位に就いて若き日からいかに勇敢に異端者たちと戦い、彼らからどのような苦難を被ったか――そのすべてを列挙することは不可能である。しかし、彼の最も注目すべき功績や行いについては、黙して見過ごすわけにはいかない。当時、不敬虔なアリウスはその狂気の異端を広め、その有害な教えによって教会全体を揺るがしていた。　彼はすでにニカイアで開催された聖なる父たちの第1回全地公会議[1127]　において呪われ、キリストの教会との交わりから破門され、流刑に処されていたにもかかわらず、失脚し、かろうじて生き延びた身でありながら、正統信仰に対する闘いをやめようとはしなかった。彼は弟子や同志を通じて活動し、至る所に異端の毒を広めていった。王の前には、特にニコメディアの司教エウセビオス[1128]をはじめ、同じ異端を信奉する他の司教たちなど、多くの取り成し役がいた。アリウスは彼らを通じて、コンスタンティヌス大帝に恩赦を請い、流刑から解放され、アレクサンドリアへ戻ることを許されるよう求めた。　エウセビオスは、アリウスが正統信仰に反する教えを一切提唱しておらず、教会の教えと矛盾するものを説いて

[1125] アタナシウスの生誕地であるアレクサンドリアは、彼に知性を養うための多くの機会を提供し、彼は多岐にわたる知識を身につけた。彼は法を学び、ギリシャの異教の賢人や詩人たちの著作に触れ、要するに、聖アタナシウスの伝記作家の表現を借りれば、アレクサンドリアの学者たちが意味するところの「諸学問」を学んだのである。　しかし、聖グリゴリオス・テオロゴスが証言しているように、彼がこれに費やした時間はわずかであった。彼の主な関心は、経験豊富な指導者たちの指導の下での聖書の研究に向けられていた。そして聖アファナシオスは、旧約聖書と新約聖書のすべての書を、他の誰一人として一冊すら読み通せなかったほどに深く研究したのである。　聖アタナシウスの初期の著作の一つから推測されるように、彼らはアレクサンドリアのカテキズム学校の指導者たちであった。　アファナシオスの知的な教育は、彼が愛し、知り合う機会を積極的に求めていた修道者たちの共同体の中で完成された。彼は聖アントニオス大聖人を何度も目撃しており、アファナシオス自身もその厳格な生活から、修道者の一人と見なされていた。

[1126] アファナシオスは、まだ少年を少し過ぎたばかりの頃、聖アレクサンドロスの家で寵愛される一員としての地位を得て、彼と「息子と父のように」共に暮らし、こうして、エジプト、リビア、ペンタポリスの100人以上の司教からその権威が認められていた大司教の庇護の下、教会活動の中心地で実り多い数年間を過ごした。アタナシウスは、いわば教会事務に関する書簡のやり取りにおいて、補佐役兼私設秘書のような役割を担うようになった。聖アファナシウスは319年に助祭の聖職に叙階された。この頃にはすでに、アファナシウスは特に『異教徒に対する論駁』と『神の御言葉の受肉について』という著作によってその名を知られるようになっていた。これらは彼が若くして執筆した初期の著作であったが、彼に多くの期待を寄せるに足るものであった。

[1127] 第1回ニカイア公会議（小アジア北西部のビフィニア地方にある都市）は325年に開催された。そこでは、アレクサンドリアの長老アリウスが提唱した異端が暴かれ、非難された。彼は、神の御子は父なる神の本質から永遠に生まれ出たのではなく、時間の中で無から父によって創造されたものであり、父と同一の本質を持つものでもなく、同等の栄光を持つものでもないと説いていた。　この異端には、イエス・キリストの神性およびキリストによる我々の贖いを断固として否定する意図が密かに含まれており、要するに、キリスト教全体を覆すものであった。アリウスの不敬虔が明らかになった際、アタナシウスはアレクサンドリアの大司教である聖アレクサンドロスとアリウスとの闘いに積極的に参加し、それによってアリウス派の反感を買った。　これはまだ全地公会議以前のことであった。そしてニカイア公会議において、当時アレクサンドリア教会の大助祭の位にあり、聖アレクサンドロスを公会議に随行していた聖アタナシウスは、公会議の父たちを慰めるかのように、アリウスを勝利のうちに論破した。

[1128] ニコメディアのエウセビオス司教は、アリウスの友人であり支持者であり、彼を庇護していた。　第1回全地公会議において、彼はアリウスを擁護し、公会議で作成された信条への署名には同意したものの、アリウスを教会から破門することには同意しなかった。このため、また破門された異端の指導者との交わりがあったことからも、彼自身も追放の処分を受けた。　しかし、皇帝の妹コンスタンティアの庇護のおかげで、エウセビオスは流刑地から呼び戻され、再び司教座に就くと、正統派に対して活動を開始した。

いるわけでもなく、ただ嫉妬から司教たちの悪意に苦しめられているに過ぎず、彼らの間の論争は信仰に関するものではなく、単に空虚で抽象的な言葉の争いに過ぎない[1129] と、狡猾に皇帝を説得した。 王は、その純真さと悪意のなさゆえに、異端的な 狡猾さや陰険さを疑うこともなく、その虚偽の保証を信じ、教会間の不和が生じないよう、論争を止め、言葉のことで争うことを禁じるよう命じた。 事件を全く調査することなく、彼はその慈悲深さゆえに、アリウスにアレクサンドリアへ戻ることを許した。 こうして、この不敬虔な異端者は、教会全体にとっての災いとなる形で、アレクサンドリアに戻ってきた。この事態は、正信者たち、とりわけキリストの戦士であり、正教の真の伝承を堅く守る聖アタナシウスにとって、極めて重く、痛ましいものであった。 当時、彼はすでに大助祭の位に就いていた。このキリストの戦士は、狼のようにキリストの教会に侵入した異端者を追及し、その悪意を、自らの著作や説教によって暴き出した。 同時に、アファナシオスは至聖なるアレクサンドロス大司教に対し、皇帝への書簡を執筆するよう促し、自らも彼と共に筆を執り、皇帝が異端の惑わしや作り話に騙されて、今やアリウス―― 正教会から背を向け、神ご自身とすべての聖なる教父たちによって拒絶されたアリウスを受け入れ、彼が教父たちの定めた法規を覆すことを許しているという、その純真さを指摘した。しかし、皇帝はエウセビオスの唆しにより、彼らに対しさらに厳しい書簡で返答し、もし彼らが沈黙しなければ聖職から追放すると脅した。 この敬虔で善良な皇帝がこのように行動したのは、自らの怒りを晴らすためでも、アリウス派に好意を抱いていたからでもなく、たとえ理にかなっていないとしても、教会間に不和が生じないよう熱心に願っていたからであった。 柔和な心で平和を愛する王は、平和などあり得ない場所で平和を求めようとしたのである。なぜなら、異端が正教会と平和に共存することなどあり得ないからだ。

その直後、聖アレクサンドルが帰天された。アレクサンドリアの主教座の後継者として、すべての正教徒の満場一致により、その地位にふさわしい器であるアタナシウスが選出された[1130] 。当時、密かに異端の種を蒔く者たち――アリウス派は、アタナシウスと公然と対立することなく、ひとまず沈黙を守っていた。 しかしその後、悪魔の煽動により、彼らはその狡猾さを露呈し、内面に潜む悪意の毒を露わにした。というのも、聖アタナシウスは、不敬虔なアリウスを教会の交わりに受け入れなかったからである。アリウスは王からのその旨の命令を手にしていたにもかかわらずである。至る所で、アリウス派は罪なき者に対する敵意を煽り、悪意に満ちた中傷を広め、天の住まいを受けるにふさわしいその人物が、地上の聖職者の座から追放されるだけでなく、都市からも追放されるよう画策した。 しかし、アタナシウスは揺るぎなく、ダビデと共にこう謳った。*「たとえ軍勢が私に対して立ち向かおうとも、私の心は恐れない」*（詩編26:3）。

[1129] 第1回全地公会議において、異端の擁護者たちは、自分たちの側に正義が欠けていたため、狡猾な手段で状況を打開しようと企み、他の公会議の参加者たちに、神の子に関する表現が曖昧であり、アリウス派による再解釈の余地を残すような信仰告白を提案した。 しかし、聖なる教父たちは、神の御子が「父の本質から」生まれ、「父と同質である」と告白し、これらの表現を自らの信条に盛り込むことで、「真の神から真の神へ」という古来の信仰を確固たるものとした。この信条には、アリウス派の立場に立っていた者たちでさえ、不誠実ながらも、公会議の全参加者が署名した。その際、彼らは、神の御子の同質性を表すギリシャ語の用語「オモウシオス（ομοούσιος）」を「オミウシオス（ομίουσιος）」――すなわち「類似の本質を持つ」――と読み、あるいは少なくとも後者の意味で理解していた。 エウセビオスは、正統派とアリウス派の間で生じているのは、信仰の本質によるものではなく、信条の用語や表現に対する解釈の違いに起因する単なる誤解や論争に過ぎず、アリウスはニカイア公会議の信条に完全に同意しているかのように、皇帝に事態を説明しようとしたのである。

[1130] 聖アレクサンドロス・アレクサンドリアスは、第1回全地公会議から帰還して5ヶ月後に逝去した。当時、アファナシオスはアレクサンドリアにいなかった。信徒たちを後に残し、死を目前にした老聖人は、さまよう眼差しで周囲を見回し、誰に彼らを託すべきかを探していた。 「アファナシオス、アファナシオス！」――アレクサンドロスは叫んだ――「お前は逃げようとしている。いや！ 逃げられないぞ」。実際、アファナシオスは天から定められた運命から逃れることはできなかった。 先代の牧者によって選ばれ、信徒たちの願いも叶えられ、彼がアレクサンドリアに現れるやいなや、民衆は集まった司教たちに対し、アファナシウスを司教に叙任するよう執拗に要求し、アファナシウス本人の意思に反していたにもかかわらず、望みが叶うまで決して静まることはなかった。

この陰険な企みの首謀者はエウセビオスであった。彼は敬虔の名を冠していたに過ぎなかった[1131]が、実際には不義の器に他ならなかった。 彼は同志たちと共に、王の温厚さを利用し、今こそ好機が訪れたと見なして、アファナシオスを王位から追放するよう皆を扇動した。エウセビオスは、アファナシオスを追放すれば、その後、他の正統派者たちも容易に打ち負かし、アリウス派の教義を確立できると考えていた。　彼は、異端者たちには真実のように映る、この義人に対する不当かつ虚偽の中傷を広め始めた。そのために、彼は金で、メレティオスの追随者であるイシオン（[1132] ）や、狡猾さに長けたエウドモン、そして悪意に満ちたカリニコスを雇った。アファナシウスに対する告発内容は以下の通りであった。

1)　彼がエジプト人に対し、司祭の祭服、亜麻の衣、祭壇の幕や布、その他の教会用具の購入費を納めるよう強要しているという；

2) 王に敵意を抱き、王の命令を軽んじているという；

3) 彼が強欲であり、金で満たされた箱を友人の一人に預けたとされること。 これに加え、偽司祭イスキール[1133] に関する告発も加わった。彼は悪意に満ち、狡猾で、策略に長けていた。通常の叙階を経ずに自ら長老の名を名乗り、数多くの邪悪で不法かつ犯罪的な行為を犯したため、非難や侮辱だけでなく、厳しい処罰に値する者であった。　イスキールに関するすべてを知った聖アファナシオスは、こうした事案の処理において常に綿密かつ慎重であったため、マレオティス[1134] に長老マカリアを派遣し、イスキールの不法な行いについてすべてを調査させた。　一方、イスキロスは尋問と暴露を恐れ、そこから逃亡し、ニコミディアにたどり着くと、エウセビオスの前でアファナシオスを誹謗し始めた。　エウセビオスとその共謀者たちは、この神からの背教者であり、聖なる規則を破った者であるイスキロスを、真の司祭として受け入れ、敬意をもって接した。なぜなら、悪意であれ美徳であれ、自分と似た者を愛するのは自然なことだからである。　彼ら自身、アファナシウスに対する並外れた憎悪から怒りに燃えていたため、イスキルを大いなる喜びをもって迎えた。彼らはイスキルの厚かましさと傲慢さを助長し、もし彼が義人であるアファナシウスに対して何らかの誹謗中傷を仕掛けることができれば、司教の位を授けると約束した。　イスキールは、こうした事柄に狡猾で熟練していたため、無実のアファナシオスに罪を着せようと躍起になった。　彼は、アファナシオスの命令により、長老マカリオスが強盗のように教会に乱入し、激しい怒りを露わにして彼を祭壇から引きずり下ろし、祭壇を倒し、神聖な秘跡が盛られた聖杯を打ち砕き、聖書を焼き払ったと語った。イスキラのこの誹謗中傷を真実として受け入れ、他の誹謗に付け加えたアファナシウスの敵たちは、コンスタンティヌス帝のもとへ赴き、聖アファナシウスを誹謗し始めた。　とりわけ彼らは、アファナシウスが皇帝の書面による指示を無視し、皇帝の命令に従わず、アリウスを教会の交わりに受け入れないとして非難し、皇帝の怒りを煽ろうと努めた。　さらに、この福者に対しては、ある「死んだ

[1131] エウセビオスとは、ギリシャ語で「敬虔な」という意味である。

[1132] リコポリス（フィヴァイデ）の司教メレティオスは、ディオクレティアヌスの迫害の際に教会から離反した者たちの復帰に反対した。エジプト全土の最高司牧者であるアレクサンドリアの大司教聖ペトロスは、堕落した者たちに対してより寛容であったため、この件を理由に彼を教会から破門した。　しかし、メレティオスは、志を同じくする司教たちと共に、主要な地方司教としての権限を自らに付与し、聖ペトロの後継者たちの権威を認めなかった。第1回全地公会議において、メレティオスの分裂は非難されたが、メレティウス派の司教たちは5世紀半ばまで存続した。　326年、メレティオスとその同志たちは、聖アタナシウスがアレクサンドリアの主教座に選出されるのを妨害したが、彼らの意に反して選出が実現すると、アタナシウスが他の者たちに内緒で、6人か7人の司教によって違法に選出されたという中傷を広め始めた。このように、メレティウス派は、彼らが支持していたアリウス派と同様に、アタナシウスの敵対者であった。

[1133] イスキルは司祭ではなかった。確かに、聖アレクサンドロス在任中に、自ら勝手に司教の権限を掌握したコッルフによって司祭に叙階されていたが、324年のアレクサンドリア公会議において、このコッルフは偽司教として罷免され、彼が叙階した者たちはすべて、その叙階が認められなかった。

[1134] マレオティス地方はエジプト北西部、アレクサンドリアの南、湾岸沿いに位置し、教会的にはアレクサンドリア司教の管轄下にあった。

手」をめぐる告発もなされた。すなわち、アファナシウスがその手を通じて、まるで魔法のように奇跡や呪術を行っていたというものである（彼ら自身こそ、真に呪われた、明らかな魔術師であったにもかかわらず）；　その手は、ある聖職者アルセニウスのものであり、アファナシウスの陰謀によって切り落とされたものだとされた。

王はこの件を検討した末、困惑した。彼はアファナシイの徳を熟知していた一方で、彼に対して提起された告発も多かれ少なかれ信憑性があるように思えたからである。そこで彼は中道を選んだ。アファナシイを非難することはしなかったが、同時に彼の件の調査を拒否することもなかった。当時、エルサレムではキリストの復活聖堂の改修記念祭が行われており、各地から司教たちが集まっていた[1135]。そこで王はこの機会を利用し、司教たちにティルス[1136]に集まるよう命じ、アファナシオス大司教に対する告発を徹底的に調査するとともに、アリウス事件についても審議させ、　彼が自ら主張するように、聖なる信仰の教えに従って教え、真の正統な伝承を守っているかどうかを審議するためであった。もし彼が嫉妬によって追放されたのであれば、再び聖職者団および公会議に受け入れられ、教会の体の一員として復帰させるためであり、　もし彼が教会の教えに反して信仰し、不敬虔な教えを説いているのであれば、聖なる法に従って裁かれ、その行いにふさわしい刑罰を受けるように。一方、アルセニオスの件については、皇帝はまず調査を行うよう命じた。それは、もしアファナシウスが有罪であると判明した場合、法に従って彼を非難するためであった。　この件を確実に調査するため、コンスタンティヌスは、アルケライという名の家臣の一人を、フェニキアの君主　ノーンと共に派遣した。彼らがティルスに到着したとき　（当時、アファナシウスは、死んだ手や魔術に関する彼に対する誹謗中傷が暴かれるのを待ちながら、この地に滞在していた）、彼らは、アレクサンドリアから、アファナシウスの不法行為（アルセニウスの手の切断や魔術）を自らの目で見たと主張する、待望の告発者たちが到着するまで、調査を延期した。　この調査の延期は、神の御心によるものであった。それは、この事件の結末が明らかに示している通りである。なぜなら、神は上からすべてを見守り、迫害される者を迫害者から救い出される方であり、アルセニウス自身がティルスに到着できるよう、時間を延ばしてくださったからである。　アルセニウスはアレクサンドリア教会の聖職者の一人であり、職務は朗読者であった。ある重大な罪を犯したため、彼は厳しい裁きと残酷な刑罰に処されるはずであった。それを恐れた彼は逃亡し、長い間、行方不明のまま隠れていた。　一方、アファナシウスの狡猾な敵対者たちは、陰謀を練り上げ、アルセニウスが犯した罪に対する恐怖と恥から、いつの日か姿を現すことなど全く予想もせず、アルセニウスの切断された手が存在すると厚かましく書き、アファナシウスがこの忌まわしい犯罪を犯したという噂を至る所に広めた。　アファナシウスがアルセニウスの手を切り落としたとして裁判にかけられているという噂が各地に広まると、その噂は、行方をくらましていたアルセニウスの耳にも届いた。　父であり恩人である人物の死を悼み、真実が不当にも嘘に打ち負かされていることに心を痛めた彼は、密かにティルスへ赴き、アファナシウス本人の元へ現れて、その高潔な足元にひれ伏した。至福のアファナシウスは、アルセニウスの到来を喜び、裁判が行われるまでは誰にも姿を見せないよう彼に命じた。

コンスタンティヌスの治世30年目[1137]、各地の都市から司教たちがティルスに集まった[1138]。長老マカリオスは兵士たちに連行されてきた。その中には、司教たちと共に裁判を行おうとする軍司

1135 司教たちは、コンスタンティヌス大帝によって、救い主の御遺体が埋葬され、復活が起きた場所の上に建てられた壮麗なキリスト復活教会が奉献される祝典に際し、エルサレムに集まった。この教会は335年9月13日に奉献された。

1136 ティルスは地中海の東岸に位置していた。ここはフェニキアで最も古く、要塞化され、最も美しい海辺の商業都市の一つであり、同時にその首都でもあった。

1137 ここでは、コンスタンティヌス大帝の治世は、その単独統治の開始からではなく、即位当初から数えられている（306年から324年までは帝国の西半分を、324年から337年までは帝国全体を統治した）。

1138 ティルスの公会議は335年、皇帝の役人ディオニシオスの監督の下で開催された。 公会議には、計60人もの司教が参集した。聖アタナシウスは、エジプトの司教48人を率いて到着した。ここには、著名な教区の司教たちも出席していた。アンティオキア教区のフラキル、エルサレム教区のマクシム、テッサロニキ教区のアレクサンドロスである。　聖アタナ

令官や、他の世俗の権力者たちも数名含まれていた。誹謗者たちも現れ、裁判が始まった。　その後、アファナシオスも呼び出された。当初、彼は亜麻製の教会用祭服や幕、さらには貪欲について虚偽の告発を受けたが、その誹謗中傷の虚偽は即座に暴かれ、中傷者たちの悪意が誰の目にも明らかとなった。

その間も、アファナシウスの敵対者たちの悪意に満ちた憎しみは収まる気配を見せなかった。彼らはアファナシウスに対する虚偽の中傷にまだ飽き足らず、一つの陰謀に次ぐ陰謀を、一つの嘘にさらに新たな嘘を重ねていった。　不敬虔な異端者たちは、ある恥知らずな女性を買収し、アファナシウスが彼女の家に滞在中に、彼女の意思に反して不義の行為を行ったという中傷をでっち上げさせた。

裁判が始まると、裁判官たちは席に着き、中傷者たちが召喚された。そして、その女性も法廷に連れてこられた。彼女は、一度も会ったことのない、顔さえ知らないアファナシウスに対して、泣きながら訴え立てた。

「私は神のために、彼を自分の家に迎え入れました」と彼女はアファナシーについて語った。「尊く聖なる人として、自分自身と私の家に祝福がもたらされることを願ってのことでした。ところが、その反対に、私は彼によって苦しめられてしまいました。　真夜中になり、私がベッドで眠っていると、彼は私のところへやって来て、無理やり私を犯しました。家中の誰もが深い眠りについていたため、誰も私を彼の手にから救い出してくれなかったのです。

その恥知らずな女がそう悪口を言い、涙ながらに誹謗中傷を繰り広げている最中、アファナシイの友人である　ティモテイ長老は、彼と共に扉の外に立ち、その誹謗中傷を耳にすると、憤りを覚え、突然法廷の中へ飛び込み、まるで自分がアファナシウスであるかのように、その誹謗者の目の前に急いで立ちはだかり、大胆に彼女に向かって次のように言い放った。

「女よ、お前が言うように、私が夜にお前に対して暴行を加えたというのか？　私なのか？

すると、その女はさらに厚顔無恥にも、裁判官たちに向かって叫んだ。

「この男こそ、私を堕落させ、私の純潔を汚そうとした者です。彼こそが、私の家に滞在し、私の親切に対して、侮辱という報いを返したのです。」

これを聞いた裁判官たちは笑い出し、アファナシイの敵対者たちは大いに恥じ入った。彼らの嘘が露見したからである。　皆、このような厚かましい誹謗中傷に驚き、アファナシウスが彼にでっち上げられた罪において完全に無実であることを認めた。しかし、アファナシウスの敵対者たちは、この聖なる人物を魔術とアルセニウスの殺害で告発し始め、皆の目の前で、一見恐ろしい死者の手を差し出し、恥知らずにもそれを聖人に向けて振りかざしながら、こう叫んだ。

「この手は、言葉なくしてあなたを告発しているのだ、アファナシイよ。この手こそがあなたを暴き出している。この手はあなたを捕らえ、しっかりと拘束し、あなたが裁きを逃れることを許さない。その証言から、あなたは言葉でも、狡猾さでも、いかなる策略によっても逃れることはできないだろう。」　誰もが知っている、アルセニウスという男を、お前は不当に、そして何の慈悲もなく、この手を切り落としたのだ。さあ、ついに私たちに告げよ。一体何のために、どのような目的で、この手を切り落としたのか?

一方、アファナシイは、かつてユダヤ人たちに裁かれながらも、反論も叫びもせず、*「屠られる羊のように」*（イザヤ書53:7）従った主キリストに倣い、辛抱強く彼らの話を聞いていた。彼は最初は黙っていたが、その後、告発に応えて、柔和にこう言った。

「あなた方のうち、アルセニウスをよく知っている者はいますか？　また、これが本当に彼の手であるかどうかを正確に見分けられる者はいませんか？」

シウスは到着後、自身の主教座の位にふさわしい席に着こうとしたが、公会議の議長であるケサリアの主教エウセビオス（著名な教会史家であり、アリウス派の支持者）から、被告人のように立ち続けるよう命じられた。　公会議の審議は、アリウスとその同調者たちに有利に、聖アタナシウスに不利な形で、偏った形で進められた。

多くの者が席から立ち上がり、アルセニウス本人とその筆跡をよく知っていると主張すると、アファナシウスは直ちに、アルセニウスが隠れていた幕を開け、彼に集会の真ん中に立つよう命じた。　すると、アルセニイは両手とも無傷で、健在のまま法廷の中央に立った。そして、その聖人は中傷者たちを怒りの眼差しで見つめながら、こう言った。

「あれはアルセニウスではないか？　あなたがたが言うところの、片腕を切り落とされたあの男ではないか？　アレクサンドリアの誰もが知っているあの男ではないか？」

そして、アルセニウスにまず右手を、次に左手を上に差し出すよう命じると、まるで真理から遠く離れた者たちを呼びかけるかのように、大声で叫んだ。

「ほら、諸君、これがアルセニウスだ！　これが彼の手だ。全く切断などされていないではないか！　もしお前たちにアルセニウスという者がいるのなら、その者を見せよ。そして、この切断された手が誰のものなのかを語れ。その手こそが、この罪を犯したお前たち自身を非難しているのだ。」

このように裁判が行われている最中、王から公会議へ、中傷者たちを厳しく非難し、アファナシオスについては不当な告発から解放するよう命じ、慈悲深く王のもとへ招くという書簡が届いた。その経緯は次の通りである。　アレクサンドリア教会の二人の長老、アピスとマカリオス（縛られて裁判に連行された者ではなく、同名の別の人物）がニコミディアを訪れ、アファナシオスに関するすべて、すなわち敵たちがこの聖なる人物に対していかに虚偽の告発をでっち上げ、不当な審議を仕組んだかを王に語った。　王は、真実と、嫉妬から生じた誹謗中傷を見抜くと、ティルスでの裁判に出席する司教たちに向けて次のような書簡を送った。それが法廷で読み上げられると、エウセビオスの支持者たちは恐怖に襲われ、どうすべきか分からなくなった。　しかし、激しい嫉妬に駆られて、彼らは激昂するのをやめず、すでに一度敗北し恥をかかされたことにとどまらず、他の虚偽の告発に目を向け、法廷に連行されたマカリオスを中傷した。　虚偽の告発者はイスキルであり、偽証人はエウセビオスの支持者たちであった。アタナシウスは以前、彼らを嘘つきで信頼に値しない者として退けていた。アタナシウスは、イスキルが真に正統な司祭であるかどうかを確実に調査することを望み、その後にのみ、彼に対して提起された告発について答弁することを約束した。　裁判官たちはこれに同意せず、マカリオスに対する裁判を続行した。誹謗者たちがあらゆる中傷を尽くした後、審理は延期された。というのも、マカリオスが祭壇を倒したとされる現場、すなわちマレオティスで調査を行う必要があったからである。　当初から嘘つきとして彼に退けられていたまさにその告発者たちが、そのための調査としてマレオテスへ派遣されるのを見て、アファナシウスは、行われている不正に耐えきれず、絶え間なくこう叫んだ。

「正義は消え失せ、真理は踏みにじられ、公正は滅び、裁判官たちから合法的な調査と慎重な審理が失われてしまった！　無実を証明しようとする者が束縛され、事件の審理全体が誹謗者や敵に委ねられ、誹謗者たち自身が、自分たちが誹謗している者を裁くなど、果たして合法なことだろうか？」

かくして聖アファナシオス大聖人は、すべての者の耳に届くようにこのことを訴え、全公会議の前で証言した。しかし、敵や　な嫉妬者たちの数が増え続けるため、何の成果も得られないと悟ると、密かに王のもとへ向かった。すると直ちに、その公会議――いや、むしろ悪意に満ちた集まり――は、不在のアファナシオスを有罪とした。　その後、マレオテスにおいて、聖アファナシオスの敵たちの意志と望みに従って行われた、前述の事件に関する不当な審理が終了すると、自らも追放に値する裁判官たちは、アファナシオスを完全に追放すべきであると決定した。　その後、彼らはエルサレムへと向かい、そこで、口先だけで敬虔さを装い、かつてのニカイア公会議において、神の御子と父なる神との同一本質に関する教義に偽って署名したまさにその者たちが、神に敵対するアリウスを教会の交わりに受け入れた。　しかし、心と口の両方で正統な信仰を守り続けていた者たちは、アリウスの言葉や演説を注意深く熟考し、慎重に検討した結果、多くの言葉や演説の陰に潜む惑わしを

見抜き、まるで狐を捕らえるかのようにそれを突き止め、真理の敵として糾弾した。　その頃、皇帝から別の書簡が届いた（アファナシオスはまだ皇帝のもとへたどり着いていなかった）。そこには、アファナシオスと、すべての告発者および裁判官に対し、直ちに皇帝のもとへ出頭するよう命じる内容が記されていた。　これは公会議の参加者たちの間に大きな恐怖をもたらした。というのも、違法な裁判を行ったアファナシウスの敵たちは、自分たちの不正が暴かれることを恐れていたからである。そのため、彼らの多くはそれぞれの故郷へと散っていった。　一方、エウセビオスとニカイアの司教テオグニオス[1139]、およびその他の数名は、ティルスでの滞在を長引かせるために、ある種のもっともらしい口実を巧みに考え出し、かなり長い間この地にとどまり、王には書簡で返答していた。その間、アタナシウスはニコミディアの王のもとへ赴き、彼に対して持ち出された貪欲の容疑について無実を証明した。　そして、エウセビオスの支持者たちが躊躇し、王のもとへ急いで現れることをためらっている間に、王はアファナシオスをアレクサンドリアの主教座へ派遣し、聖人に対するあらゆる誹謗中傷が根拠のないものであり、不当であることを証明した書簡を添えた。

このように聖アタナシウスが司教座を統率し、アリウスがアレクサンドリアに滞在していた間、アリウス派は民衆の間に大きな動揺と噂を巻き起こした。　至福のアファナシオスは、アリウスがアレクサンドリアだけでなくエジプト全土をも動揺させ、揺るがしていることを目の当たりにせざるを得ず、これらすべてを王に書面で報告し、神に敵対する者であり民を騒がせる者を処罰するよう懇願した。これに対し、王から直ちにアレクサンドリアへ、アリウスを縛り上げて王の裁判にかけるよう命じる勅令が届いた。　アレクサンドリアから王のもとへ向かう途中、アリウスはケサレアに到着すると、志を同じくする者たちと面会した。　ニコミディアの司教エウセビオス、ニカイアのテオグニオス、そしてハルキドンの司教マリア[1140]；彼らは協議を重ね、アファナシオスに対する新たな誹謗中傷をでっち上げた。神を恐れず、無実の男を憐れむこともなく、ただ一つの願い――神聖なるイザヤが言うように、真実を偽りで覆い隠すこと――を抱いていたのである：　「悪を企て、悪行を生む」のは、こう言った者たちである。*「私たちは偽りを自分たちの避難所とし、欺きをもって自分たちを覆うからである」*（イザヤ59:4, 28, 15）。[1141]　このような努力を、不法な異端者たちは、至福のアタナシウスを総主教の座から引きずり下ろし、正教徒たちに対する権力を掌握するために費やした。　こうして彼らは王のもとへ赴いた――アリイは自らの正当性を主張するため、エウセビオスとその共謀者たちは、彼の不当な企てを助長し、真理とアファナシオスに対して公然と偽証を行うためであった。　彼らが王の前に出ると、直ちにティルスで行われた公会議について、そこで何を決定し、アファナシウスに対してどのような判決を下したのかと問いただされた。すると彼らは王にこう答えた。

「王よ！我々はアファナシウスの誤謬そのものについてはさほど悲しんでおりませんが、　しかし、彼が荒廃させた祭壇や、聖なる秘跡の杯を粉々に砕き、また、アレクサンドリアからコンスタンティノープルへ例年送られていた小麦の送付を禁止した[1142]　ことについて、私たちは深い悲しみと

[1139] ニカイアの司教テオグニウスは、ニコミディアのエウセビオスと共に、誰よりも早くアリウスの教義を受け入れ、第1回全地公会議で彼を支持した。その後、正統派の信条には署名したものの、アリウスとの交わりがあったとして追放され、アリウスが帰還すると、　テオグニウスも流刑地から呼び戻された。彼は表向きは偽りの教えを撤回したものの、密かにアリウス派を庇護していた。

[1140] ハルキドンの司教マリウスは、ニカイアのテオグニウスや他の多くの人々と同様に、アリウスの教義に賛同し、ティルスの公会議でアタナシウスを告発し、テオグニウスや他のアリウス派の同志たちと共に、マレオトス事件の調査委員の一人であった。

[1141] 預言者はここで、その罪によって神から引き離されている者たちについて論じている。アファナシウスを非難した者たちも、真実を偽りで覆い隠した点で、そのような罪人たちと同様の行いをしたのである。

[1142] 古くから、その肥沃さで名高いエジプトは、困窮する人々に配給するため、アレクサンドリアを経由して、小麦を積んだ船団をローマへ送り出していた。 330年にコンスタンティヌス大帝がビザンティウムに、自身の名にちなんでコンスタンティノープル、あるいはツァールグラードと名付けられた新たな首都を築いた際、同市の人口増加と維持に必要な財

憤りに駆られているのです：　これは私たちをとりわけ悲しませ、私たちの魂を深く傷つけている。彼のこうした悪行の証人となったのは、　の司教たち、すなわちアダマンティウス、アヌヴィオン、アルヴェスティオン、そしてペトロスであった[1143]　。彼らによってこれらすべての罪を糾弾されたアファナシオスは、その行いに応じて当然受けるべき裁判を免れたものの、罷免を免れることはできず、このような不法な行いに及んだとして、全公会議の満場一致により罷免されたのである。

これらの言葉を聞いて、王は当初、心の中で戸惑いながら沈黙を守っていた。　その後、誹謗者たちを止める術がなかったため、この義人を一時的にガリアへ追放するよう命じた[1144]　――それは、彼が中傷を信じたり怒りに駆られたりしたからではなく、教会を鎮めるためであった（王の真意を確実に知っていた人々が証言している通りである）。　皇帝は、どれほど多くの司教たちがアタナシウスに反旗を翻し、それによってアレクサンドリアおよびエジプトの人々の間にどれほど大きな混乱が生じたかを目の当たりにしていた。そこで、そのような嵐を鎮め、噂を絶ち、これほど多くの司教たちの動揺を癒やすことを望み、彼はその聖なる人物に対し、一時的に都市を離れるよう命じた[1145]。

その後、コンスタンティヌス帝自身が、在位31年目に、65歳で崩御した。臨終の際、彼は三人の息子を王国の後継者として指名した。　コンスタンティヌス、コンスタンティウス、コンスタンスの3人にし、遺言により王国を彼らに分け与え、長男のコンスタンティヌスに王国の大部分を割り当てた。しかし、コンスタンティヌス大帝の死の際、息子たちは誰もその場にいなかったため、彼は遺言書を、アリウス派の秘密の信奉者であったある長老[1146]に託した。この長老は、心の中に異端を密かに抱きつつ、王の遺言書も隠蔽した。多くの人々が、王が臨終の際に遺言を残したかどうかを尋ねても、彼はそれについて何も語らなかった。　この件において、彼は王の宦官のうち数名を秘密の共犯者としていた。長男のコンスタンティヌスが亡くなった父の元へ到着するのが遅れた一方で、コンスタンティウスは急いでアンティオキアを出発し、誰よりも先に到着した。　前述の長老は、彼に密かに父の遺言書を渡した。その際、長老は感謝の印として、コンスタンティウスがアリウス派の側に立ち、彼らを助けること以外、何の報酬も求めなかった。　彼は、コンスタンティウスが、この地上の王国について、不滅の王キリストに感謝する代わりに、キリストを神でも、万物の主でも、創造主でもなく、単なる被造物であると狂おしくまで主張することを望んでいたのである！　前述のエウセビオスとその共謀者たちは皆、この動きに協力し、彼らが待ち望んでいた時が訪れたことを喜んだ。

源を確保するため、この船団の目的を変更した。すなわち、パンを配給するという恩恵はコンスタンティノープルに与えられたのである。配給された小麦の総量は8万メルにも及んだ。このようにして、アファナシオスの敵対者たちは、新たな誹謗中傷を流布して皇帝の怒りを煽り、同時に首都の民衆の動揺を引き起こそうと企んでいた。アファナシオスに不満を抱く民衆は暴動を起こす可能性があり、アファナシオスに敵対する司教たちは、その混乱に乗じて聖人を殺害できると期待していた。　「どうして私がそんなこと（小麦の輸送を止めること）ができるだろうか――」と、アファナシウスは新たな誹謗中傷に対して反論した。「私はただの貧しい一市民に過ぎないではないか？」すると、エウセビオス・ニコミディウスは答えた。「いや、アファナシウスは力強く、裕福な人物だ。彼なら何でもやり遂げられる！」

[1143] これらはいずれも、エウセビオス・ニコミディウス派の支持者であるアリウス派の司教たちであった。

[1144] ガリア――現在のフランスである。

[1145] 聖アファナシウスは、トレヴィ（現在のトリーア）という、古代ガリア北東部（いわゆるベルギカ）の、人口が多く繁栄した主要都市へと送られた。　ここには、コンスタンティヌス大帝も、帝国の西半分のみを支配していた頃、しばしば滞在していた。当時、335年にガリア、スペイン、ブリタニアの統治者となった皇帝の長男コンスタンティヌスが、この地に居を構えていた。　当時、トリーアの司教を務めていたのは、正統信仰の擁護者であるマクシミンであった。彼はアファナシオスを愛情と敬意をもって迎え入れ、アファナシオスもまた彼に対して深い親愛の情を抱き続けた。また、コンスタンティヌス・ジュニアも、この聖人への敬意を抱き、追放による苦しみをやわらげようと努めた。聖アファナシオスはトリーアに2年4ヶ月滞在した。

[1146] アリウス派の長老エウドキオス――まさに、コンスタンティヌス大帝の妹コンスタンティアに対し、アリウスとその同志たちを流刑地から帰還させる件で強い影響力を持っていた人物――のことである。

彼らは、新皇帝がアタナシウスの投獄に関する決定を、公正かつ完全に合法的に行われたものとして承認する場合にのみ、アリウス派の異端の教義を広め、強固にすることができると期待していたのである。 当時、彼らは、王宮に居合わせたプレポジト（宮廷長官）[1147] を自らの異端へと誘い込み、彼と意を同じくさせた。そして彼を通じて、アリウス派の異端という病は、他の宦官たち[1148] にも浸透した。彼らはその性質上、あらゆる悪を受け入れ、他者に広めることに極めて傾きやすい者たちであった。　その後、王妃もまた、神を冒涜する言葉によって徐々に堕落し、自らも同じ異端の毒に感染してしまった。

ついに、王自身も、アリウス派の偽りの教義に惑わされ、自らの主であり支配者であるキリストに背くに至り、こうして神聖なるエレミヤの*「牧者たちはわたしから離れてしまった」*（エレミヤ2:8）という言葉が、キリストにおいて成就したのである。[1149] そしてコンスタンティウスは、アリウス派の偽りの教えを公に承認するよう命じ、すべての司教が彼と同様に振る舞うよう指示し、従わない者に対しては脅しをもって説得するよう命じた。

この大いなる嵐と混乱の中、教会にとって真の舵取り役となったのは、以下の大司教たちであった。すなわち、エルサレムのマクシムス[1150] 、コンスタンティノープルのアレクサンドロス、そして（ここで言及されている）アレクサンドリアのアタナシウスである。アタナシウスは、投獄されていたにもかかわらず、教会を導く舵を離すことなく、自らの言葉と書簡によって正教を擁護し続けた。　一方、ニコミディアのエウセビオスは、志を同じくする者たちと共に、全力を挙げて自らの異端的な偽りの教えを広め、正統派に対して戦いを挑み、キリストの教会を弾圧した。とりわけ、彼らはアリウスの悲惨な最期の後、教会に対して激しく攻撃を仕掛けた。　狡猾で陰険なエウセビオスは、信者たちを大いに惑わし誘惑するために、大いなる栄誉をもってアリウスをコンスタンティノープルに迎え入れた。当時、アタナシウスが流刑中であったため、多くの権力者がアリウスに加担していたことから、彼に立ち向かう者は誰もいなかったからである。　しかし、天よりすべてを英知をもって整える神は、彼らの計画を打ち砕き、アリアスの悪意と命を断ち切った。　生前、彼の舌が正統信仰に対して冒涜的な言葉をどれほど激しく吐き散らしたか、それと同じ、いやそれ以上の力で彼の腹は破裂し、内臓が飛び出し、この忌まわしき者は不浄な場所で自らの血の中に転がり回った[1151] 。 かく

[1147] プレポジト――宮廷および宦官の長。コンスタンティアは、特にアリア派の宦官エウセビオスを重用していた。

[1148] 古代において、「宦官」とは、王宮で王妃や王女の寝室の警護役として仕えた者たちのことを指した。その大半は去勢された者たちであった。　ビザンツ宮廷において、宦官の地位は非常に名誉あるものであった。彼らは概して高位の宮廷貴族であり、君主や国政に対して大きな影響力を持っていた。コンスタンティヌス大帝は彼らを低位の役職に任命し、それによってその影響力を制限したが、コンスタンティウス帝の時代には、宦官たちは宮廷において強い影響力を獲得した。

[1149] この聖句を詳しく読むと、次のようになります。「祭司たちは『主はどこにおられるのか』と言わず、律法の教師たちはわたしを知らず、牧者たちはわたしから離れ、預言者たちはバアルの名によって預言し、助けにならない者たちの後を追った。」　ここで預言者エレミヤは、主の名において、神の慈しみを忘れ、主から背いたイスラエルの祭司たち、支配者たち、そして預言者たちを糾弾している。　聖アファナシオス・アレクサンドリアの伝記作者は、比喩的な意味で、これらの言葉を、キリストなる神への真の信仰から背いたコンスタンティウスおよびアリウス派の司教たちに当てはめている。

[1150] 聖マクシムス3世、エルサレム総主教は、333年から350年までその座に就いていた。彼はキリストの御名のために苦難を受け、殉教者となった。　ティルスの公会議において、アリウス派が正統派の司教たちに対し、アタナシウスに関する不法な判決文への署名を要求した際、上フィヴァイダ地方のタイサの司教であり、マクシミアヌス2世の治世中に殉教した殉教者パフヌティウスは、マクシムスの手を握り、彼を集会から連れ出し、こう言った。　「私たち殉教者にとって、このような公会議に参加することはふさわしくない」。――聖マクシムスの記念日は、ギリシャ正教会において11月17日に祝われる。

[1151] 5世紀のギリシャの教会史家ソクラテスとソゾメノスは、アリウスの死を次のように記述している。 運命の朝、コンスタンティヌス大帝の命令によりアリウスが教会の交わりに受け入れられることになっていた時、彼は並々ならぬ傲慢さを示し、様々な空虚な発言を繰り出しながら、志を同じくするエウセビア派の者たちや、好奇心に駆られ興奮した群衆に囲まれて教会へ向かっていた。　しかし突然、彼は激しい腹痛に襲われ、コンスタンティノス広場の裏手にある便所へと

して、アリオスという、抑制のきかない舌と、異端の悪臭を放つ膿に満たされた邪悪な器に対する、相応しい裁きが下されたのである！

この異端の首謀者がこれほど恐ろしい形で魂と肉体を滅ぼした後、エウセビオスとその共謀者たちは、異端の擁護と普及というすべての労苦を引き受け、至る所で混乱を引き起こした。その際、彼らは宦官たちを、あたかも自らの手であるかのように、熱心な助手として従えていた。　彼らは特に、流刑中のアタナシウスが正教を擁護する書簡を広めないよう、あたかも彼の口を封じ込めようと努めた。しかし、神の摂理は、コンスタンティヌス大帝の長男――同じくコンスタンティヌスと名付けられた者（[1152] ）――の心を憐れみに傾かせた。彼は、年齢も長子としての地位も、兄弟の中で第一であった。　この長男は、聖アファナシオスを監禁から解放し、自身の書簡を添えてアレクサンドリアの主教座へと送り出した。その書簡には次のように記されていた。「アレクサンドリアの教会と民を勝利に導いたコンスタンティヌスは、皆が喜びを分かち合うことを願っている。　おそらく、あなた方のうち、正教の偉大な説教者であり、神の律法の教師であるアタナシウスに最近何が起きたか、また、真理の敵たちが彼に対していかにして総力を挙げて戦いを仕掛けたか、　また、彼には　、迫り来る災難からしばらくの間身をかわすことができるよう、私のいるガリアに滞在するよう告げられたこと、しかし彼が恒久的な追放を宣告されたわけではないこと。　我々は彼に対し、あらゆる配慮をもって接し、彼に予期せぬ不都合が生じないよう気を配った。とはいえ、彼はまことに誰にも劣らぬ忍耐強さを持ち、神への熱意に燃えて、いかなる苦難も容易に耐え抜くことができるのである。我らの父コンスタンティヌスは、彼を早急に総主教の座に復帰させたいと望んでいたが、その意図を実行に移す間もなく逝去し、この件を、この人物に関する最後の遺言を託して、後継者である私に委ねた。それゆえ、我々は、今、あらゆる敬意と盛大な出迎えをもって彼を受け入れるよう、諸君に命じる」。

この皇帝の書簡を携えて、聖アファナシオスはアレクサンドリアに到着し、すべての正教徒たちは喜びをもって彼を迎えた[1153] 。一方、アリウス派の異端に固執する者たちは、互いに悪意ある集会を開き、再び聖人に対する迫害を煽り、民衆の間に混乱を引き起こし始めた。　彼らは聖人を誹謗中傷するために様々な口実をでっち上げた。例えば、彼が公会議の裁きを経ずに総主教の座に復帰し、自らの意思で教会に入ったなどというものである[1154] ；また、彼が様々な騒乱、殺人、追放の原因であるとも非難し、その他、新旧の様々な告発を彼に浴びせた。　同時に、アリウス派の異端に深く染まった民衆が聖アタナシウスに反旗を翻した。ある時、群衆が聖人を取り囲み、侮辱的な言葉を浴びせ、彼を引き裂いて殺そうと手を振り上げた。アタナシウスはかろうじて逃れ、密かに街を脱出することに成功した。　その間、アリウス派の司教たちは至る所に書簡を送り、アタナシウスが公会議の決定によって合法的に罷免されたにもかかわらず、公会議の決定なしに再びアレクサンドリアの主教座に就いたと宣言した。同時に、彼がアレクサンドリアに戻った際に、暴力行為が伴ったかのように噂を広めた。　こうして彼らは、あらゆる国々の都市や教会へのアタナシウスの立ち入りを遮断し

向かった。まもなくそこで彼は気を失い、排泄物とともに内臓が飛び出し、腸、肝臓、脾臓が脱出し、大量の出血を伴ったため、ほぼ即死した。　一方、彼に同行していた者たちは、かなり長い間彼を待っていた。ついに彼を呼びに行くためにその場所へ向かった彼らは、恐ろしい光景に愕然とした。アリア（当時80歳を超えていた）の腹部は破裂し、彼は自分の血の中に浮かぶように横たわり、恐ろしい光景を呈していた。　このアリアの恐ろしい死は、否応なく裏切り者ユダの死との比較を招いた。それは彼の支持者たちの間に深い落胆をもたらし、当然のことながら、正教徒たちからは、彼の全活動に対する究極の裁きとして受け止められた。　そして実際、アリアの死がたとえ自然死であったとしても、いずれにせよそれは恐ろしい突然死であり、そこに神の最高の裁きを見出さざるを得ない。

[1152] コンスタンティヌス2世は、コンスタンティヌス大帝の長男であり、帝国の分割の際、皇帝としてガリアと北アフリカの西部を統治することになった。

[1153] それは338年の終わり頃のことだった。

[1154] アファナシウスの敵対者たちは、ティルス公会議の決定により彼が罷免され、現在は教会の規則に反して世俗当局の命令によって司教座に就いていることを指摘した。

た。その間、アタナシウスの後援者であったコンスタンティヌスは亡くなっていた。彼はアクイラで兵士たちに殺害されたのである[1155]。 アファナシイの敵たちはこの事態を利用し、彼らを庇護していたコンスタンティウス王に聖人に対する激しい怒りを煽り立てた。その結果、王は、アファナシイが生きているならばその居場所を告げたり、殺害された大司教の首を持ち込んだりする者に、財産と栄誉を与えると約束した。　一方、アファナシイは、廃れた井戸の深く、水のない乾いた堀の中にかなり長い間身を隠しており、彼をその場所で守り、食事を与えていた一人の敬虔な信者以外、誰も彼のことを知らなかった[1156]。 その後、至る所で彼を徹底的に捜索し、彼の行方を尋ね回っていたため、アファナシウスがここに潜伏していることを察し始めた者たちが現れ、ある朝、彼を捕らえようとしたとき、彼は神の摂理に導かれて、夜間にその堀から出て、別の場所へと移動した。　そこでも見つかって捕らえられることを恐れて、彼は東方諸国を離れ、西ローマ帝国の領内へと退いた。

当時、西方ではコンスタンティヌス2世の死後、コンスタンティヌス大帝の末子であるコンスタントスが統治していた。ヨーロッパにたどり着いた聖アファナシウスはローマへ向かい、教皇ユリウス[1157]およびコンスタントス皇帝本人に謁見し、自身のことを詳細に語った。 一方、アンティオキアでは当時、東方の司教たちによる公会議が開かれていた。彼らは、コンスタンティヌス大帝が建設を始め 、その息子コンスタンティウスが完成させた教会[1158]の奉献のために集まっていた。このため、東方のすべての司教たちがそこに集結したが、その中にはアリウス派の司教も少なからずいた。後者たちは、皇帝の庇護に便乗して不法な公会議を招集し、当時西部にいた聖アタナシウスを再び破門と宣言した。彼らは教皇宛ての書簡にアタナシウスに対する誹謗中傷を書き連ね、教皇にも彼を破門と認めるよう働きかけたのである。　一方、アレクサンドリアの総主教座には、当初、雄弁さで知られたエメスのエウセビオス[1159]が選出されたが、彼は、アレクサンドリアの人々が総主教アタナシウスをいかに深く敬っているかを知っていたため、これを辞退した。　そこで、アレクサンドリアの総主教座には、カッパドキア出身のグリゴリウス[1160]が据えられたが、彼がアレクサンドリアにたどり着く前に、ローマからアファナシウスがすでに到着していた。その経緯は以下の通りである。

教皇ユリウスは、アファナシウスに対してなされた誹謗中傷を綿密に検討した結果、それらが虚偽であると認め、そのため、彼を再びアレクサンドリアの主教座へ送り出した。その際、彼を罷免

1155 アクイレイア――古代において、アドリア海北部に位置する、上イタリアあるいは北イタリアの大きく重要な都市であった。――ここで340年3月、コンスタンティヌスとコンスタントゥスの間で内戦が勃発し、前者が戦死したのに対し、コンスタントゥスは西方全土の支配者となった。

1156 聖アタナシウスは、隠れ家において、すべての教会の司教たちに向けた力強い訴えを書き上げた。その中で、彼は自らの目の前で繰り広げられた不敬虔のあらゆる恐怖を描き出し、異端者たちに踏みにじられている栄光あるアレクサンドリア教会への援助を懇願した。　しかし、敬虔な牧者たちはただ涙を流し、天からの助けを請うことしかできなかった。アレクサンドリアに押し寄せたアリウス派の大群が引き起こした混乱はあまりにも甚大であり、異端者たちの横暴はコンスタンティウス皇帝の全面的な庇護下にあったため、助けを求める相手などどこにもいなかったからである。

1157 聖ユリウス――アリウス派に対する正統信仰の熱心な擁護者であり、アタナシウスの守護聖人であるローマ教皇――は、337年から352年まで教皇の座に就いていた。

1158 いわゆる「黄金の教会」は、コンスタンティヌス大帝によって壮麗に基礎が築かれ、コンスタンティウスによって再建された。341年1月、ここでアンティオキア公会議が開催された。公会議には90名もの司教が出席した。　公会議の参加者たちは、全地公会議の信条を拒否すると同時に、互いに意見が一致しないまま、3つの独自の信条（半アリウス派的）を次々と公布し、その後さらに4つ目の信条も公布したが、いずれの信条にも、正統派を明確に定義する「同質」という表現を盛り込むことを拒んだ。　信仰の問題を独自の方法で解決した後、彼らはアレクサンドリア教会の諸問題に取り組み始めた。

1159 エウセビオス・エメサスはその教養で知られていた。彼はアレクサンドリアで学び、その後、エウセビオス・ケサリアスに師事した。「エメサス」という名は、彼が司教を務めていた都市（エメサはシリアのアンティオキアより南にある都市）に由来する。彼はコンスタンティウスの寵愛を受け、その遠征に随行していた。

1160 カッパドキアのグレゴリオス（カッパドキアは小アジアの東部地域）はアレクサンドリアで教育を受け、かつて聖アタナシオスの寵愛を受けていた。グレゴリオスは粗野で気性の激しい人物であった。

しようとした者たちを、脅しを交えて厳しく非難する書簡を添えた。聖人は、正統派のアレクサンドリアの人々によって大いなる喜びをもって迎えられた。　一方、そのことを知った敵対者たち（彼らの指導者であるエウセビオス・ニコミディウスは、この時点で既に亡くなっていた[1161] ）は、大いに動揺し、直ちに皇帝に働きかけて、グリゴリオスと共に軍隊をアレクサンドリアへ派遣し、彼を総主教の座に就かせるよう促した。　そこで皇帝は、異端者グリゴリウス――異端者たちによって総主教の座に選出された者――と共に、シリアナという名の軍司令官を多数の武装兵を率いてアレクサンドリアへ派遣し、アファナシオスを殺害し、グリゴリウスを大司教の座に就かせるよう命じた。　ある日、ある祝日の前夜、アレクサンドリアの大聖堂で徹夜祷が行われ、すべての正教徒が牧者アファナシオスと共に教会で祈りを捧げ、聖歌を歌っていたとき、突然、シリアヌスが武装した兵士たちを率いて乱入してきた。 彼は教会内をくまなく探し回り、アファナシオスだけを殺そうとしていた。 しかし、神の御手によって守られていた聖人は、人々に囲まれて密かに教会を抜け出した。ちょうどその頃、夜の闇が訪れていたため、彼は大混乱と大勢の人々の間を気づかれることなく通り抜け、まるで網の真ん中から抜け出す魚のように、こうして死を免れ、その後再びローマへと戻った。　その後、不敬虔なグリゴリウスが、まるで捕食者のようにアレクサンドリアの主教座を占拠した。民衆の間には激しい動揺が広がり、反乱者たちはディオニシオス教会と呼ばれる一つの教会にさえ放火した。

聖アタナシウスは、コンスタンティヌス帝と教皇ユリウスから深い敬意を寄せられ、3年間にわたりローマに滞在した。彼はそこで、コンスタンティノープル大司教である聖パウロを友としていた。パウロもまた、不敬虔な異端者たちによってその座から追放されていたのである。　ついに、コンスタンティウスとコンスタンティヌスの両皇帝の合意により、サルディカで[1162] 、信仰告白の問題およびアファナシウスとパウロの件[1163] について、東方および西方の司教たちによる公会議が招集された。 その中には西方の司教が300名以上、東方の司教が70名強おり、その中には前述のイスキルも含まれており、当時彼はすでにマレオスの司教となっていた[1164] 。アジアの諸教会から集まった司教たち[1165] は、西方側の司教たちがパウロとアタナシウスを公会議から追放するまでは、彼らと顔を合わせることさえ拒んだ。　一方、西方の司教たちは、その要求を聞くことさえ拒んだ。そこで、東方の司教たちは帰路につき、トラキアの都市フィリッポポリス[1166] に到着すると、そこで独自の公会議、あるいはむしろ不法な 集会を開き、同質説を公然と破門した。 この不敬な決定を、彼らは書面で、自分たちに属するすべての教会に送りつけた。これを知ったサルディクスに集まっていた聖なる父たちは、まず第一に、この神を冒涜する集会と、彼らの異端的かつ不敬な信仰告白[1167] を破門とした

[1161] エウセビオス・ニコミディウスは342年に死去した。

[1162] サルディカは、コンスタンティウスとコンスタンティスの両兄弟の領土の境界に位置しており、イリュリア（現在のソフィア、現在のブルガリアの首都）にあった。

[1163] コンスタンティウスは、東方諸主教たちから要請を受けていた正統派の弟の要求を受け入れ、聖アタナシウスを深く尊敬し、彼の無罪を望んでいたため、公会議の招集に同意した。　公会議は344年に開催された。そこでは、1）ニカイア信条を承認し、2）事件を審理してアタナシウスを無罪とし、3）アリウス派の指導者たちを罷免すると宣言し、正統派が彼らと交わりを持つことを禁じ、有罪判決を受けた者たちを破門とした。

[1164] イスキルはアリウス派によって司教に任命された。

[1165] アジアの、すなわち東方の司教たち。その中でも主要な人物は、イラクリウスのテオドール、ネロポリスのナルキス、エフェソスのメノファント、アンティオキアのステファノス、ケサリアのアカキオス、ラオディキアのゲオルギオスであった。

[1166] フィリッポポリスは、サルディカの南東に位置するフラキアの都市である。――フィリッポポリス公会議は、アンティオキアのステファノスの主宰の下で開催された。この公会議は、アタナシオス、コンスタンティノポリスのパウロス、ローマのユリウス、サルディカのプロトゲノス、およびその他の正統派司教たちを再び非難した。　コンスタンティウスはフィリッポポリス公会議の決定を支持し、アファナシウスは他の迫害された者たちと共に、追放されたままとなることを余儀なくされた。――彼はダキアのナイスへ退去した。

[1167] フィリッポポリス公会議は、アンティオキア公会議の信条よりもさらにアリウス派的な新しい信条を策定した。

; その後、彼らはアファナシウスの誹謗者たちを、彼らが占めていた聖職の地位から追放し、ニカイアで制定された信仰宣言を承認して、神の御子こそが神の父と同質であることを明確かつ正確に告白した。

こうした一連の出来事の末、西ローマ皇帝コンスタントは、パウロスとアファナシウスについて兄コンスタンティウスに宛てた書簡の中で、彼らをそれぞれの王座に復帰させるよう懇願した。しかし、兄が彼らの復帰を先延ばしにし続けたため、コンスタント皇帝は再び、より厳しい口調で彼に書簡を送った。 「もしお前が――と彼は書いた――自発的に私の言うことを聞かないのであれば、お前の同意がなくても、私は彼ら一人ひとりをそれぞれの王座に就かせる。なぜなら、その時には私は武力をもってお前を討ちに行くからだ」。兄弟の脅しに怯えたコンスタンティウスは、先に到着していたパウロを受け入れ、栄誉をもって彼の王座へと送り戻した。 その後、彼は柔和な調子の書簡を通じて、ローマから聖アタナシウスを呼び寄せ、彼と対談した後、この人物が極めて賢明で、神の霊感に満ちた人物であることを悟った。アタナシウスの偉大な英知に感嘆し、 コンスタンティウスは彼に多大な敬意を表し、栄光のうちに彼を総主教の座へと帰した。その際、彼はアレクサンドリアの民衆、エジプト全土の司教や諸侯、ネストリウス（[1168] ）という尊厳ある人物、そしてフィヴァイダとリヴィア（[1169] ）の統治者たちに対し、アタナシウスを大いなる栄誉と敬意をもって迎え入れるよう書簡を送った。 前述の王の書簡を携え、この祝福された方はシリアとパレスチナを経由して聖都エルサレムを訪れ、そこで聖なるマクシムス・殉教者から愛情を込めて迎えられた。二人は、キリストのために耐えてきた苦難や試練について互いに語り合った。 かつてアリウス派を恐れて自身の罷免に同意していた東方諸主教たちを召集したアファナシオスは、彼らを一致と交わりへと導き、彼らは彼にふさわしい敬意を捧げた。一方、アファナシオスは、自分に対して犯された彼らの過ちを喜んで赦した。 これは、三度の追放を経て、聖アタナシウスが総主教の座に復帰した三度目のことであった[1170] 。そして、数え切れないほどの労苦、悲しみ、病に耐えた後、彼はようやく少し休息を得て、残りの時間をそれらの苦しみから解放され、安らぎの中で過ごそうと考えていた。ところが、彼には新たな動乱と過酷な災難が迫っていた。 この頃、不敬虔なローマ軍司令官マグネンティウスは、志を同じくする者たちと共謀して、自らの君主コンスタンティヌスを殺害した[1171] 。すると、アリウス派は勢いを増し、キリストの教会に対して激しい闘争を繰り広げた。アファナシウスに対する誹謗中傷と迫害が再び始まり、かつてのあらゆる悪が再燃した。 再びアファナシウスに対する皇帝の勅令と脅迫が現れ、アファナシウスは再び逃亡と恐怖を味わわなければならず、再び国中や海を越えて彼を捜索するようになった。 皇帝は、アレクサンドリアの総主教座に就かせるため、カッパドキア出身のゲオルギオス[1172] を派遣した。彼はアレクサンドリアに到着すると、エジプトを震撼させ、パレスチナを動揺させ、東方全域を混乱に陥れた。 再び、聖マクシムスはエルサレムの主教座から、聖パウロはコンスタンティノープルの主教座から、それぞれ追放された。そして、この頃アレクサンドリアで何が起きていたか[1173] について、聖アタナシウス自身が次のように語っている。「再び、私たちを殺そうとする者たちが――聖アタナシウスはこう語る――アレクサンドリアにやって来て、以前よりもはるかに苛烈な災難が降りかかった。兵士たちが突然教会を取り囲み、祈りの代わりに悲

[1168] アウグスタリウス――ローマ属州の総督。

[1169] フィヴァイダ――エジプト南部の地域。リビア――アフリカ北部、エジプトの西に位置する。

[1170] これは348年のことだった。

[1171] マグネンティウスはコンスタンティヌスに対してその軍を扇動し、コンスタンティヌスは王位から追放された。コンスタンティヌスは逃亡したが、道中でマグネンティウスに殺害された。これは350年の初めのことである。

[1172] このゲオルギオスは教養のない粗野な性格の人物で、当初は軍への食肉供給業者であった。ゲオルギオスは約4年間（357～361年）偽司教を務め、その間、アレクサンドリア教会や正教徒だけでなく、異教徒に対しても多くの苦難と迫害をもたらした。

[1173] これはアファナシウスが不在だった時期のことである。

鳴や叫び声、そして混乱が響き渡った。これらすべては、聖なる四旬節の期間中に起こったことである。　マケドニア人とアリウス派によって選出されたゲオルギオス・カッパドキオスが総主教の座に就くと、悪はさらに増大した。復活祭の七日間の後、処女たちは束縛され、司教たちは縛られて兵士たちに連行され、孤児や未亡人の家は略奪され、街では 、極めて甚だしい略奪が行われていた。 キリスト教徒たちは夜になると街から逃げ出し、家々は封鎖された。聖職者たちは兄弟たちのために苦難に耐えた。これらすべては実に悲惨な状況であったが、その直後に、比類なきさらなる災いが襲いかかった。　聖霊降臨祭の後、民衆は断食を行い、聖殉教者ペトロの墓前で祈りを捧げるために集まった。というのも、誰もがゲオルギウスを忌み嫌っており、彼との交わりを避けていたからである。これを知った狡猾なゲオルギウスは、マニ教の異端を信奉していたストラティラート[1174] セバスティアヌスを扇動して彼らに敵対させた。　セバスティアンは、抜刀した剣や弓矢で武装した大勢の兵士を率いて教会に乱入し、そこにいた人々に襲いかかったが、時刻が遅かったため大半はすでに立ち去っており、祈りを捧げている者はほとんどいなかった。　それでも教会に残っていた者たちに対し、セバスティアンは極めて残酷な苦痛を与えた。彼は巨大な焚き火を燃やすよう命じ、乙女たちを火のそばに立たせ、アリウス派の異端を告白するよう強要した。　しかし、セバスティアンは、彼女たちが火にも脅しにも全く動じないのを見て、彼女たちを強制することができないと悟ると、彼女たちの衣服を剥ぎ取り、容赦なく殴打するよう命じた。そして、彼女たちの顔を激しく打ちのめしたため、長い時間が経った後、親族でさえ彼女たちをほとんど見分けられなくなったほどであった。　また、40人にのぼる男性たちには、新たな拷問が加えられた。拷問執行人たちは、切りたてのナツメヤシの硬く棘のある枝で彼らを恐ろしいほど激しく鞭打ち、肩の皮を剥ぎ取った。その結果、棘が深く肉に刺さったため、何人かは何度も肉を切り取らなければならなかった。　また、痛みに耐えきれず、潰瘍で亡くなった者もいた。　しかし、とりわけ残酷に拷問したすべての乙女たちを、彼は偉大なオアシス[1175] へ流刑に送り、殺された者たちの遺体は、正教徒にも、自軍にも持ち帰らせることを許さなかった。兵士たちは、その遺体を一か所に埋葬せずに隠し、そうすればこの残虐行為が誰にも知られずに済むと考えたのである；　彼らは正気を失い、理性を損なわれた状態で、このように振る舞ったのである。一方、正教徒たちは、正教の信仰を堅く告白した自らの殉教者たちを喜びつつも、その遺体がどこにあるのか分からないことを嘆き悲しんだ。　そしてこのことによって、迫害者たちの不敬虔さと残虐さはさらに露呈することとなった。その後、エジプトとリビアから、アモニウス、モイン、ガイウス、　フィロン、エルミウス、パヴリン、プシノシル、リナモン、アガフォン、アガムファ、マルクス、さらに別のアンモニウスとマルクス、ドラコンティウス、アデルフィウス、アフィノドール、そして長老のイエラクスとディオスコーロスらが追放された。迫害者たちは彼らを極めて残酷に弾圧したため、ある者は道中で、またある者は流刑地で亡くなった。　また、アリアニ派は三十人以上の司教を永久の流刑に処した。彼らの悪意は、アハブのように[1176] 、あまりにも強大であったため、もし可能であれば、彼らは真理を全地の面から追放し、根絶やしにする用意さえあったのである」。

一方、コンスタンティウス王は、弟であるコンスタンティウス王の死後、マグネンティウスを打ち破り、東と西の両方を支配するようになった[1177] 。 彼は東でも西でも、アリウス派の異端を広め

[1174] ストラティラートとは、軍司令官、軍都督のことである。

[1175] オアシス、すなわち「大リビアのオアシス」は、フィヴァイダ砂漠の西側、現在のサハラ砂漠の東部に位置する。ここは古代ギリシャの植民地であり、しばしば流刑地として用いられた。

[1176] アハブ――イスラエルの第八代王。邪悪で権力欲が強く、堕落した妻イゼベルの執拗な要求により、イスラエル人の間に偶像崇拝を広め、真の神に仕える者たちを執拗に迫害した。

[1177] マグネンティウスは、コンスタンスの死後、3年半にわたり、西部においてカエサルの称号を維持していた。コンスタンティウスは彼の支持者たちを散らし、その結果、マグネンティウスは自殺して生涯を閉じた。　その後、帝国全体はコンスタンティウスの統率下で統一され、361年に彼が死去するまでその状態が続いた。

始め、西方の司教たちをあらゆる手段――恐怖や甘言、贈り物、そして様々な誘惑――を用いて、アリウス派の信仰宣言に同意し、その異端を受け入れるよう説得した。　この目的のために、彼はイタリアの都市メディオラーノ[1178] で公会議を招集し、アファナシオスを追放するよう命じた。彼は、アファナシオスが完全に追放され、この世から根絶やしにされて初めて、アリウス派が定着すると考えていた。　当時、皇帝の周囲には多くの同調者が現れた。ある者は恐怖から、またある者は皇帝の栄誉に惹かれてアリウス派を受け入れた。一方、正統信仰に堅固であった者たちは、この不法な公会議を避けた[1179]。その者たちは、ヴェルツェルリの司教エウセビオス、メディオランのディオニシオス、トロサンのロダン、トリヴィリのパヴリン、そしてカラリタのルキフォロス[1180] であった。彼らは、アファナシオスの追放を正統な信仰と真理の否定であると見なし、その追放に関する決議に署名しなかった。その結果、彼らはアリミンへ追放された[1181]；一方、メディオランに集まった他の司教たちは、アファナシウスを罷免すると宣告した。　ここで、エウセビオスとディオニシオスが、この不法な公会議の決議に署名しなかった経緯について述べておく必要がある。アリウス派の司教たちがメディオランに集まり、正統派の他の司教たちを待たずに公会議を開き、アファナシオスの罷免に関する決議に署名したとき、　メディオランのディオニシウスは、最近司教に叙任されたばかりでまだ若かったが、アリウス派の司教たちに説得され、公会議の決定書に署名させられた。というのも、彼は多くの品行方正で長年にわたり奉仕してきた司教たちの前で恥じ入り、本意に反して彼らと共に自分の名前を記してしまったからである。　　その後、正統派のヴェルツェルリヌスのエウセビオス司教――年を重ねた尊厳ある人物――がミラノを訪れた（その不法な公会議がすでに署名をもって終了した後であった）際、ディオニシウスに公会議で何がなされたのかについて尋ねた。　ディオニシオスは、聖アタナシウスに対して行われた不法な裁判について語りながら、いかにして惑わされ、アタナシウスの罷免に同意する署名をしてしまったかという自身の過ちを、深い後悔と悔恨を込めて告白した。　そして、至福のエウセビオスは、まるで父が息子を諭すかのように、ディオニシウスを叱責した。というのも、ディオニシウスにとってエウセビオスは、ある意味では霊的な父のような存在であったからである。それは、エウセビオスがすでに高齢であったこと、また長年にわたり司教を務めていたことによるものであった。　さらに、ヴェルツェルリの司教という地位上、彼はミラノの司教よりも上位に立っていた[1182]。ディオニシウスの心からの悔い改めを見て、エウセビオスは彼に悲しむなと命じた。「私は知っている」と彼は言った。「お前の名が彼らの間から消し去られるために、私が何をすべきかを。」そして、次のようなことが起こった。

　　アリウス派の司教たちは、エウセビオスの到来を知ると、彼を自分たちの集会に呼び出し、自分たちが作成したアファナシオスの罷免を求める告発文（彼らの署名入り）を見せ、彼にもその決定文に署名するよう求めた。　しかしエウセビオスは、彼らの公会議に同意しているふりをし、署名し

[1178] メディオラン――いわゆるキサルピナ・ガリア、すなわち現在の北イタリアに位置する古代都市――は、科学と芸術が栄えた中心地であった。現在のミラノは、イタリアのロンバルディア州において最も繁栄している主要都市であり、多くの住民を擁している。

[1179] この公会議は、ユリウスの後継者であるローマ教皇聖リベリウスの要請により、355年に招集された。公会議には、西方の司教300名近くが出席した。アリウス派はそこでアファナシオスの非難を求めたが、西方側はニカイア信条の当初の署名に固執した。　その時、隣の部屋から公会議の父たちの議論をすべて聞いていたコンスタンティウスは、剣を手に会議場に入り、自らアタナシウスを告発すると宣言した。アタナシウスの非難決議への署名を拒否した者には追放が脅かされたため、一部は署名したが、同意しなかった者たちは追放された。

[1180] ヴェルツェッリ――イタリア北西部の都市。トロサ――ガロンヌ川沿い、フランス南部。トリーア（別名：トレヴィ、またはトリヴィリウム）――モーゼル川沿い、フランス東部。カラーリア――サルデーニャ島（地中海）にある。

[1181] アリミン（現在のリミニ）は、イタリア北東部、アドリア海沿岸に位置する、ウンブリア地方で最も古くから繁栄してきた都市である。

[1182] すなわち、ヴェルツェッリの司教座は、教階上の地位においてミラノの司教座よりも上位と見なされていた。

ようとしているかのように装って、文書を受け取り、署名した司教たちの名前を読み上げ始めた。ディオニシオスの名に差し掛かると、まるで侮辱されたかのように叫んだ。

「私はどこに自分の名前を署名すればよいのか？ディオニシオスの名の下か？断じてありえない！ディオニシオスが私より上位になることなどあってはならない！あなたがたは、神の御子が父なる神と等しくなることはできないと言うではないか。それなのに、なぜ私の息子を私よりも優先したのか？」

そして、長老は、ディオニシオスの名が最上位の場所から消されるまで、署名することを拒み続けた。一方、アリウス派の司教たちは、エウセビオスの署名を強く求め、彼をなだめようとして、ディオニシオスの名を消すよう命じた。　ディオニシウスは自らの手で文書から署名を消し去り、あたかも最年長の司教であるヴェルツェルリのエウセビウスに最上位の座を譲るかのように見せかけ、自身はまるでその下に署名しようとしているかのような態度をとった。　ディオニシウスの名が消され、文字の痕跡さえ残らなくなると、祝福されたエウセビオスは、アリウス派の公会議に偽って同意することをやめ、アリウス派を嘲笑しながら、公然と真理を告白した。

「私はあなたがたの不法によって穢されることはなく、また私の息子ディオニシウスにも、あなたがたの不義に加担させることは許さない。無実の司教を追放するという不法な非難文書に署名することは、神の律法と教会の規則によって禁じられているからだ」と彼は語った。　エウセビオスとディオニシオスは、悪意と不法に満ちたあなたがたの非難文書に、もはや署名しないことを、すべての人に知らしめよう。ディオニシオスをあなたがたとの共犯から救い出し、不法に署名された彼の名を、あなたがたの名簿からいかに抹消すべきかを私たちに教えてくださった神に感謝する。

アリアン派は、エウセビオスとディオニシオスに嘲笑されたのを見て、彼らに暴力を振るおうと手を上げ、数多くの罵詈雑言で侮辱した後、二人を別々の場所に流刑に処した。そして、流刑地で聖エウセビオスを激しく迫害したため、彼はそこで苦しみながら亡くなった。　そのことを聞き、皇帝の命令により、教区の兵士たちが彼を捕らえにやって来ていることを知った聖アファナシオスは、ある神聖な啓示に導かれて、真夜中に司教館を出て、　、神に奉献され、真のキリストのしもべとして暮らしていたある高潔な乙女の元に身を隠した。　彼はコンスタンティウス帝が亡くなるまで彼女の元に身を隠しており、神と、自ら彼に仕え、彼が求めた本を他の人々から持ってきてくれたその一人の乙女以外、誰も彼のことを全く知らなかった。そこに滞在している間、アファナシウスは異端者たちに対する多くの著作を執筆した[1183]。

[1183] 聖アタナシウス大聖人は、古代教会の最も著名な著述家の一人であった。彼は聖書に対する深い知識と神学的な才能に秀でていた。生涯をアリウス派との闘いに費やしたため、その著作にはこの闘争の痕跡が色濃く残っており、主にアリウス派を批判する内容となっている。 聖アタナシウスの著作のうち、最も重要なものは以下の通りである。1）アリウス派に対する四つの論説。ここでアタナシウスは、彼らのあらゆる反論を完全に反駁している。2）コリントの司教エピクテトスへの書簡――イエス・キリストにおける神性と人性について。 3）トゥムイットの司教である聖セラピオンへの四通の手紙。これらは、聖霊が父と子の神性および栄光に参与しない「奉仕的な被造物」であると説いたマケドニアン派に対抗し、聖霊の神性および父と子との平等を立証するものである、 4) 同質性を擁護するためのニカイア公会議の決定に関する書簡、5)　聖霊に関する書。聖アタナシウスは、多くの著作において、アリウス派の動乱や行いを記述し、その記述にキリストの真理を支持する注釈を添えている。例えば、修道士たちに向けて書かれた彼の『アリウス派の歴史』がそれにあたる。　牧会的弁証（擁護）の優れた模範となるのが、聖アタナシウスがコンスタンティウス皇帝に宛てた書簡である。　さらに、聖書解説に関する聖アタナシウスの著作も知られている。その中でも、とりわけ注目されるのは、旧約聖書と新約聖書の書物を列挙している点で極めて重要な、聖アタナシウスの「復活祭の手紙」や、詩篇に関するマルケッリヌスへの書簡である。　また、ヨブ記や雅歌、マタイによる福音書およびルカによる福音書に対する彼の解説の短い断片も残されている。教訓的な著作としては、結婚を非難する者たちに対するアムムンへの書簡や、異端者を教会に受け入れる方法について述べたルフィニアンへの書簡が挙げられる。　聖アタナシウスの最も教訓的な著作の一つは、アントニウス大聖人の伝記である。聖金口ヨハネは、どのような身分の人であっても、アントニウスの伝記を読むよう勧めている。

一方、アレクサンドリアの人々は、自分たちの牧者である聖アタナシウスを探し求め、その目的のために至る所を巡り歩いていた。皆が彼を深く案じ、熱心に探し求めていたため、誰もが彼を見つけるためなら喜んで命を捧げる覚悟であった――そして、聖なる教会は深い悲しみに沈んでいた。一方、アリウス派の異端は、東方だけでなく西方でも著しく勢力を強めていた。皇帝の勅令により、イタリアおよび西方全域において、「異説」――すなわち、神の御子は父とは異なる存在であるという異端の教義――への署名に同意しなかった司教たちは、その座から追放された。　その頃、聖シルヴェストルの後継者である聖ユリウスの後任であったローマ教皇聖リヴェリウスも、正統信仰を貫いたためにローマの教皇座から追放され、その代わりに異端者の中からフェリクスという人物が選出された[1184]。至る所で聖なる教会が長きにわたり弾圧され、迫害されていた後、コンスタンティウス帝の死が近づいた。カッパドキアとキリキアの間にある、「モプシオスの泉」と呼ばれる場所で、彼はそこで王位と命の両方を失った[1185]。同様に、異端者たちによって任命されたアレクサンドリアの偽司教もまた、神の裁きに遭い、「不義の者は騒ぎと共に滅びる」とあり、ゲオルギオスが彼から奪おうとしたアレクサンドリアにある一箇所を巡って反乱を起こしたギリシャ人たちに殺害された[1186]。

コンスタンティウスの死後、ユリアヌスが帝位に就いた[1187]。彼はコンスタンティウスの法令や法律を廃止し、追放されていた者たちをすべて帰還させた。アタナシウスもこのことを知ったが、ユリアヌスがアリウス派の不敬虔な教えに引き込まれるのではないかと懸念していた（当時、ユリアヌスの背教やキリストからの完全な離反はまだ明らかになっていなかった）。それにもかかわらず、聖アタナシウスは真夜中に、身を隠していた前述の乙女の家を出て、アレクサンドリアの教会の真ん中に姿を現した。　すべての正信者たちを包み込んだその喜びを、いったい誰が描き表すことができようか――彼らは彼に会おうと四方八方から集まり、聖職者や市民、そして民衆のすべてが、どれほど大きな喜びをもって彼を見つめ、愛を込めて彼を抱きしめたことか！　彼の到来は正教徒たちに勇気を奮い立たせ、彼らは直ちにアリウス派をアレクサンドリアから追放し、街と自分たち自身を、彼らの牧者であり師であるアタナシウスに委ねた。

一方、不法なユリアヌスは、以前は密かに異教徒であったが、今や公然とその背教を露わにした。王位を固めると、　彼は万人の前でキリストを否み、その至聖なる御名を冒涜し、偶像に拝礼し、至る所に神殿を築き、不敬虔な神々への忌まわしい生け贄を捧げるよう命じた。こうして至る所に祭壇が築かれ、悪臭と煙が立ち込め、動物の生け贄が捧げられ、その血が流された。　教会の偉大な柱であり教師たちから非難されたユリアヌスは、教会に対して残酷な迫害を開始し、迫害のまさに初期の段階で、聖アタナシウスに対して矛先を向けた。　皇帝が同志や賢明な占星術師たちと相談し、さらに魔術師や呪術師たちにも、いかにしてキリスト教をこの世から根絶やしにするかを問いただしたとき、皆の頭に浮かんだのは、アタナシウスをこの世から抹殺し、滅ぼさなければならないということだった。　彼らはこう論じた。「もしその基盤が打ち倒されれば、キリスト教信仰の他の部分も個別に容易に破壊できるだろう」。再びアファナシウスに対する不法な裁判が開かれ、再びアレクサンドリアに軍隊が派遣され、再び街は混乱に陥った。　教会は武装した兵士たちに包囲され、揺さぶられていたが、彼らが探していたのはアファナシオただ一人であり、彼を殺そうとしていた。しかし、彼は以前と同様に神の御手によって守られ、群衆の中を通り抜け、彼を捜す者たちの手を逃れ、夜

[1184] 聖シルヴェストルは314年から335年まで教会を統率した。（彼の記念日は1月2日）。彼の直系の後継者は聖マルコ（336年）であり、その後にアファナシウスの擁護者であり、正統信仰の厳格な守護者であった聖ユリウス（337～362年）、そして最後に聖リベリウス（352～366年）が続いた。　フェリックス2世は、皇帝リベリウス（355–356年）によって追放された後、教皇の座に就き、彼と並行して在位したため、別名「反教皇」と呼ばれている。

[1185] 小アジアの南東部。コンスタンティウスは、ペルシア王サポルとの戦いの後、東方から帰還中に361年11月3日に死去した。

[1186] それは361年12月のことだった。

[1187] ユリアヌス・アポステート、コンスタンティヌス大帝の甥。

にはナイル川にたどり着いた。　聖人がフィヴァイダへ渡るために一隻の船に乗り込んだとき、彼を慕う者たちが追いつき、涙ながらにこう言った。

「またどこへ私たちから離れて行かれるのですか、父よ？　私たちを、羊飼いのいない羊のように、誰に任せて行かれるのですか？」

聖人はこう答えました。

「泣かないでください、子供たちよ。今、目撃しているこの騒乱は、まもなく収まるでしょう。」

そう言うと、彼は自分の旅路へと船出しました。一方、彼の後を急いで追っていたある軍司令官がいました。その司令官は、拷問官[1188] から、アファナシオスに追いつき次第、直ちに彼を殺害するよう命じられていたのです。　すると、アファナシオスと共にいた者の一人が、遠くから船を追ってすでに追いつきつつあるその軍司令官を目撃し、彼であることをはっきりと認めたため、追跡者から逃れるために漕ぎ手たちに、もっと速く漕ぐよう促し始めた。　しかし、聖アファナシオスは少しの間を置き、自分に降りかかろうとしている事態を見通して、漕ぎ手たちに船を再びアレクサンドリアへ向かわせるよう命じた。漕ぎ手たちがこれに躊躇し、アファナシオスの命令を実行することを恐れたとき、彼は彼らに勇気を奮い立たせるよう命じた。　そこで、船を右に転舵し、彼らは迫害者たちに向かってまっすぐアレクサンドリアへと進んだ。迫害者たちに近づいたとき、野蛮人たちの視界はまるで霧に覆われたかのように曇り、見ているようで見ていないかのようになり、彼らはそのまま通り過ぎていった。アファナシオスは彼らに尋ねた。

「誰を探しているのか？」

彼らは答えた。

「アファナシオを探している。どこかで彼を見かけなかったか？」

「彼は今、船で進んでいる」とアファナシウスは答えた。「あなたたちの少し前方を、まるで何者かに追われているかのように走っている。急げば、すぐに彼に追いつくだろう。」

こうして聖人は暗殺者たちの手から逃れることができた。アレクサンドリアに到着すると、彼は街に入り、すべての信者たちは彼の帰還を喜んだ。しかし、彼はユリアヌスの死まで身を隠していた[1189] 。その直後に不敬虔な皇帝が亡くなると、敬虔なキリスト教徒であったヨヴィニアヌスが王位に就いた。　そして再び、アファナシオスは恐れを知らずに自身の座に就き、教会を献身的に統治した。しかし、イオヴィニアヌスの治世も長くは続かず――わずか7ヶ月間[1190]　――ガラティアで亡くなった。その後、アリウス派の異端に染まっていたヴァレント[1191] が王位に就いた。 再び災難が教会を襲った。不敬虔な皇帝は権力を掌握すると、平和の維持や敵に対する勝利には関心を示さず、むしろアリウス派を広め、定着させようと再び画策し始めた。　彼の異端を容認しない正統派の司教たちを、彼はその座から追放した。こうして彼は、まず第一に、アンティオキアの大司教聖メレティオス[1192] を追放した。 キリストの教会を至る所で苦しめていたこの内紛がアレクサンドリアにまで及び、エパルハの命令により兵士たちが聖アタナシウスを拘束しようとしたとき、この福者は密かに街を抜け出し、　にある一族の墓所に身を隠し、そこで四ヶ月間を過ごした――そして、彼の居場所を知る者は誰もいなかった。　そこで、聖アタナシウスを悼み嘆くアレクサンドリア全市は、王たちによってもたらされたこれほど大きく、これほど多くの苦難に苛まれ、大いなる反乱を起こした。アレクサ

[1188] すなわち、ユリアヌス皇帝である。

[1189] ユリアヌスは、363年6月26日、ペルシア軍とのある戦いの最中に戦死した。

[1190] ヨウィニアヌスは364年2月17日に死去した。

[1191] イオウィニアヌスの死後、2月26日に軍はヴァレンティニアヌスを後継者に選出した。ヴァレンティニアヌスは1か月後、帝国の東半分を、熱心なアリウス派信者である弟ヴァレントに譲った。ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[1192] アンティオキア総主教メレティオスは、358年から381年までその座に就いていた。彼は正統信仰の擁護者であったが、そのためにアリア派の陰謀により、何度か総主教の座から追放された。

ンドリアの人々はすでにヴァレンティヌスから離反しようとしており、反乱のために武器を準備していた。

これを知った王は、彼らの離反や反乱、そして内戦を恐れ、本意ではなかったものの、アファナシオスが恐れることなくアレクサンドリアの教会を統率することを許した。 こうして、キリストの老戦士であるアファナシオスは、正教のために長い労苦と多くの功績を積み重ねた後、死を目前にして、自らの司教座で静寂と平安のうちに短期間を過ごした後、主のもとで安らかに息を引き取り[1193]、地上で彼らに倣って奮闘した先人である教父たち、総主教たち、預言者たち、 使徒たち、殉教者たち、そして信仰の証人たちの元へと加わった。彼はこの地上において、彼らと同様に奮闘したのである。彼は47年間司教職を務め[1194] 、アレクサンドリアの司教座の後継者として、自身のすべての苦難を共に分かち合った、祝福された友であるペトロ[1195] を後任に指名した。 そして彼は、主キリストから輝かしい冠と、言い尽くせぬ恵みの報いを受けるためにこの世を去った。主キリストに、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と権威、誉れと礼拝があるように。アーメン。

トロパリオ、第3調:

あなたは正教の柱であり、神聖な教義をもって教会を確固たるものとした、聖アファナシオよ。御父と御子とが同一の本質であることを説き、アリウスを恥じ入らせた。尊き父よ、キリスト・神に祈り、私たちに偉大な憐れみを授けてくださいますように。

コンダク、第2調:

正教の教えを植え付け、悪名の高き茨を刈り取り、聖霊の恵みによって信仰の種を増やし給うた、尊き方よ。それゆえ、われらはあなたを讃える、アファナシオよ。

2月

2月1日

1月19日（旧暦）

同日は、ペチェルスクの助祭マカリア聖人の記念日である[1196]。

我らの尊き父、エジプトのマカリアの伝記

記念日：1月19日

[1193] 聖アタナシウス大主教は、373年5月2日にこの世を去った。
[1194] そのうち20年以上を流刑の地で過ごした。
[1195] アレクサンドリア総主教ペトロス2世は、373年から380年まで教会を統率した。
[1196] 12世紀に生き、修業に励んだ。その聖遺骨はアントニオスの洞窟に安置されている。

エジプトの聖マカリオス（[1197] ）は、エジプトのプティナポル（[1198] ）という村で生まれた。彼の両親は、古代の聖なる先祖であるアブラハムとサラと同じ名前を持っていた。というのも、聖マカリオスの父はアブラハム（彼は長老であった）という名で、母はサラという名だったからである。マカリアの両親の結婚には子が授からなかったため、彼らは貞潔な生活を送ることを決意した。もっとも、互いに離れることなく、共に暮らしていた。こうして長年にわたり、マカリアの両親は肉体的ではなく、霊的な交わりによって結ばれて暮らしていた。　彼らは、節制と断食、頻繁な祈り、絶え間ない徹夜祈祷、惜しみない施し、旅人へのもてなし、そしてその他多くの美徳によって、自らの生活を彩っていた。その頃、神の御心により、野蛮人たちがエジプトを襲い、エジプトの住民の全財産を略奪してしまった。　他の人々と同様に、マカリアの両親もすべての財産を失い、そのため故郷を離れて他の国へ移り住もうとさえ考えていた。しかし、ある夜、マカリアの父アブラハムが眠っているとき、聖なる総主教アブラハムが、白髪交じりの威厳ある老人の姿で、輝く衣をまとって夢の中に現れた。　現れた聖なる総主教は、アブラハムの不幸を慰め、主に信頼を置き、エジプトの国境を離れることなく、同じ国にあるプティナポルという村に移り住むよう命じた。　その際、アブラハム聖祖はマカリアの父に対し、かつてアブラハム聖祖自身がカナンの地で異邦人であった時に、老齢にして息子を授かったように（創世記21:2）、神がまもなく彼にも息子の誕生という祝福を与えると予言した。　眠りから覚めた長老アブラハムは、見た幻を妻のサラに語り、二人は共に神を賛美した。その直後、アブラハムとサラは、ニトリアの荒野からほど近い場所にある、指示された村プティナポルへと移り住んだ。　これらすべては、神の御心によって起こったことであり、それは、彼らから生まれることとなる息子――聖マカリオス――が、後に見ていくように、全身全霊で身を捧げた修道生活を一層深く愛するようになるためであった。　マカリオの両親がプティナポルの集落に住んでいた頃、マカリオの父アブラハムが重病に陥り、死の淵に立たされる事態となった。　ある夜、病床に横たわっていたとき、彼は眠りの中で幻を見ました。そこには、アブラハムが奉仕していた教会の祭壇から主の天使が現れ、彼に近づいてこう言ったのです。

「アブラハム、アブラハム！　病床から起き上がりなさい。」

アブラハムは天使にこう答えました。

「私は病気で、立ち上がることができません。」

すると天使は、病人の手を握り、優しくこう言った。

「神はあなたを憐れんでおられます、アブラハムよ。神はあなたの病を癒やし、御恵みを授けてくださいます。なぜなら、あなたの妻サラは、『至福』という名の息子を産むからです。その子は聖霊の住まいとなり、天使の姿で地上に生き、多くの人々を神のもとへと導くでしょう。」

この幻から目覚めたアブラハムは、完全に健康になったのを感じた。畏れと喜びに満たされた彼は、直ちに妻のサラに、幻の中で見たこと、そして天使が彼に語ったことをすべて話した。そして、この幻の真実性は、彼が重い病気から突然癒やされたことによって裏付けられた。　そして、アブラハムとサラの二人は、限りなく慈悲深い主なる神に感謝を捧げた。その直後、サラは高齢にもかかわらず身ごもり、やがて男の子を産んだ。その子には「マカリオス」（「至福の者」を意味する）という名が与えられ、聖なる洗礼によって聖別された。

少年マカリウスが成人し、聖書の教えを理解するようになったとき、両親は、幻の中でアブラハムの前に現れた天使が彼について予言したことをまるで忘れてしまったかのように、マカリウスに結婚を望んだ。しかし、マカリウス自身にはその気は全くなかった。　それどころか、彼は両親の説

[1197] 聖マカリオスは、「エジプトの」と呼ばれている。これは、同名で同時代の別の修道士が、アレクサンドリア市で生まれ、生涯の大部分を同市で過ごしたため、「アレクサンドリアの」あるいは「都市の」と呼ばれているのとは対照的である。一方、マカリオス・エジプトは、その聖性と英知ゆえに「大」と呼ばれている。 彼は301年頃に生まれた。

[1198] プティナポル、あるいはペジジヴィルは、ナイル川の西岸、現在のエジプトのメヌフ州（メヌフィエ州）の域内、ナイル川流域の南部、いわゆる下エジプトに位置していた集落である。現在、そこには廃墟しか残っていない。

得に全力で抵抗し、唯一の朽ちることのない花嫁――清く汚れなき処女の生活――と婚約することを望んでいた。しかし、両親の意志に従い、マカリオスは彼らに従い、自らのすべてを主の御手に委ね、主が彼に今後の人生の道を示してくださることを願った。　結婚の祝宴が終わり、新婚夫婦が新婚の部屋へと案内されたとき、マカリオスは病気のふりをして花嫁に触れることを避け、心の底から唯一真の神に祈りを捧げ、神に希望を託した。それは、主が近いうちに彼に世俗の生活を捨て、修道士となることを許してくださるよう願うためであった。　数日後、マカリオスの親族の一人が、ニトリウス山[1199]へ出向くことになった。そこには膨大な量の硝石があり、そのために山自体も「ニトリウス」という名で呼ばれていた。　両親の希望により、マカリオスも彼と共に旅立った。ニトリウス湖へ向かう道中、マカリオスは旅の疲れを少し癒やそうと同行者たちから離れて一休みしたところ、眠り込んでしまった。すると、眠りの中の幻視の中で、光に包まれたある驚くべき人物が彼の前に現れ、マカリオスにこう言った。

「マカリイよ！この荒涼とした土地を見渡し、よく観察しなさい。なぜなら、お前はここに定住する運命にあるのだから。」

眠りから覚めたマカリオスは、幻視の中で告げられた言葉を反芻し、自分に何が起こるのかと戸惑っていた。当時、アンソニー大聖人と、内陸の砂漠のどこかで修行し、アンソニーだけがその姿を見たことのある、誰にも知られていない隠者パウロ・フィヴェイオス以外、まだ誰も砂漠に定住していなかった。　ニトリア山への三日間の旅を終え、マカリオスが同行者たちと共に家に戻ると、妻が激しい高熱に苦しみ、すでに死の淵に立っていた。　まもなく彼女はマカリオスの目の前で息を引き取り、清らかな処女として永遠の命へと旅立った。マカリオスは、妻の最期を見届けることを許してくださった神に感謝し、自らの戒めとして、自身の死についても次のように考えた。

「マカリイよ、自分自身に注意を払い、自分の魂を大切にしなさい。あなたもまもなくこの地上の生涯を去ることになるのだから」と彼は言った。

それ以来、マカリイはもはやこの世の何事にも心を留めることはなく、絶えず主の神殿に留まり、聖書の読誦に専念した。マカリイの両親は、彼がどのような生活を送っているかを見て、もはや彼の面前で女性の名前さえ口にすることを敢えてしなかったが、彼のそのような貞潔な生活に大いに喜んだ。　一方、マカリオスの父アブラハムはすでに高齢となり、重病を患い、老いと病のため視力を失ってしまった。至福のマカリオスは、愛と献身をもって、年老いて病に伏す父の世話をした。まもなく、老父は主のもとへ旅立ち、その死から六ヶ月後、マカリアの母サラもまた主のもとで息を引き取った。聖マカリアは両親をキリスト教の慣習に従って埋葬し、葬儀の後、故人の魂の安息を祈って全財産を貧しい人々に施し、肉体の束縛から完全に解放された。　マカリオの心には、もはや自分の秘密を打ち明け、神に喜ばれる生活のための良き助言を得られる相手が誰もいなくなったという大きな悲しみが宿っていた。そこで彼は、救いへの道を導いてくれる良き導き手を神が送ってくださるよう、熱心に祈り始めた。

しばらくして、ある聖人の記念日が訪れた。マカリオスは両親の慣習に従い、その聖人を称えて祝宴を開きたいと考えた。そこで彼は昼食を用意したが、それは近所の人たちというよりは、むしろ物乞いや貧しい人々のために用意されたものだった。　その日、教会の礼拝に出席していたマカリイは、教会に入ってくる一人の威厳ある老僧を見かけた。　その修道士は長い白髪と、ほぼ腰まで届く髭を蓄えており、長期間の断食のため顔色は青白かった。しかし、その佇まいは威厳に満ちており、それは彼の内面の精神も美徳の輝きに彩られていたからである。この老人は、プティナポルという集落からそう遠くない人里離れた場所に、隠遁者の小屋を構えて暮らしていた。　彼はこれまで誰に

[1199] ニトリア砂漠――聖ヒエロニムスが、そこに住んでいた隠者たちの聖性ゆえに「神の都」と呼んだ――は、リビアやエチオピアと国境を接する広大な砂漠であった。その名は、湖に大量のニトラ（硝石）が産出されていた近隣の山に由来する。

も姿を見せたことがなかったが、この日、神の御計画により、村にある教会を訪れ、キリストの聖なる秘跡を拝領した。聖体礼儀が終わると、マカリオスはこの修道士に、自分の家に来て共に食事をとるよう懇願した。　食事が終わり、マカリオスが招いた人々が皆、それぞれの家へ帰った後、マカリオスはその修道士を引き止め、人目につかない場所へ連れて行き、長老の足元にひれ伏してこう言った。

「師よ！　明日の朝、あなたのところへ伺わせていただきたいのです。今後の私の人生について、あなたの経験に裏打ちされた助言を伺いたいのです！」

「来なさい、わが子よ」と長老は答え、「望む時ならいつでも」と言い、そう言ってマカリイのもとを去った。

翌日、早朝、マカリイは長老のもとを訪れ、主のために全力を尽くして働きたいという心の内を打ち明け、同時に、自分の魂を救うために何をすべきか、長老に熱心に教えてほしいと懇願した。長老は一日中、魂に益となる語りかけでマカリウスを自分のそばに留め、日が沈むと、二人は塩を添えたパンを少し口にし、長老はマカリウスに眠りにつくよう命じた。　一方、長老自身は心を天に向け、祈りにふけった。夜が更けるにつれ、彼は恍惚とした状態に入り、白い衣をまとい、翼を持つ修道士たちの集団を目にした。彼らは眠るマカリアの周りを巡りながら、こう言った。

「起きなさい、マカリイよ。神があなたに示された奉仕を始めなさい。これを後回しにしてはならない。怠惰な者は不賢明な行いをするが、勤勉な者はその報いを得るからである。」

翌朝、聖なる長老はこの幻視をマカリオに語り、彼を見送る際、次のように諭した。

「わが子よ！　あなたがなそうとしていることは、速やかに実行しなさい。神は多くの者を救うためにあなたを召しておられるのだから。それゆえ、これからは神に喜ばれる行いに怠惰であってはならない！」

さらにマカリオスに祈り、徹夜祷、断食に関する教えを授けた後、長老は彼を平安のうちに送り出した。　長老のもとから家に戻ると、至福のマカリイは、日々の生活に必要なものさえ残さず、すべての財産を貧しい人々に分け与えた。こうして世俗のあらゆる心配事から解放され、自らもいわば乞食のようになったマカリイは、かねてより望んでいた主への奉仕に全身全霊を捧げるため、再び長老のもとを訪れた。　長老は謙虚な若者を愛情を込めて迎え入れ、沈黙の修道生活の基礎を教え、修道士に一般的な手仕事である籠編みを指導した。その際、長老はマカリオスのために、自分の部屋からそう遠くない場所に独立した小部屋を用意した。というのも、長老自身、人里離れた場所で主に仕えることを好んでいたからである。　長老は新しく設けられた独房に新しい弟子を案内し、祈り、食事、そして手仕事について必要な教えを改めて授けた。こうして、至福のマカリオスは神の助けにより、困難な修道生活を始め、日ごとに修道者としての行いに励んでいった。　しばらくして、プティナポルという村にその地方の司教が訪れることとなった。司教は村人らから至福のマカリオスの功績を聞き、彼を呼び寄せ、本人の意思に反して、まだ若かったにもかかわらず、地元の教会の聖職者に任命した。　しかし、聖マカリアスは、その沈黙の生活をかき乱す聖職者の職務に嫌気がさし、数日後、そこから逃げ出し、別の村の近くの荒野に身を寄せた。　そこへ、ある敬虔な平民が彼を訪ねてきて、マカリオに仕えるようになった。その人はマカリオの手工芸品を売り、その売り上げで彼に食料を買ってあげた。　あらゆる善を憎む悪魔は、自分が若き修道士に打ち負かされているのを見て、彼に対して戦いを仕掛け、様々な策略を巡らせて激しく戦いを挑み、時には罪深い考えを吹き込み、時には様々な恐ろしい姿に変身して彼を襲った。　マカリオスが夜、祈りを捧げながら徹夜していたとき、悪魔は彼の独房を土台から揺さぶり、時には蛇に変身して地面を這い回り、猛烈な勢いで聖人に襲いかかった。　しかし、至福のマカリオスは、祈りと十字架の印で身を守り、悪魔の策略を何とも思わなかった。かつてダビデがそう叫んだように、彼もこう叫んだ。

「『夜の恐怖も、昼に飛ぶ矢も、暗闇を彷徨う疫病も、恐れることはない』（詩編90:5）。」

そこで悪魔は、無敵の者を打ち負かす術がないため、彼に対抗する新たな策略を編み出した。マカリイが修行していた村の近くに住むある男には、娘がいた。その娘に、同じくその村に住むある若者が、妻として迎えてほしいと求婚していた。　しかし、その青年は極めて貧しく、しかも身分の低い者であったため、娘自身はその青年を愛していたにもかかわらず、両親は娘を彼に嫁がせることに同意しなかった。　しばらくして、その娘は身ごもってしまった。彼女が青年に対し、両親にどう答えればよいかと尋ねると、悪意の師である悪魔に操られた青年は、彼女にこう言った。

「近所に住む隠者が、君にそんなことをしたのだと言え。」

娘はその狡猾な助言に従い、無実の修道士に対して、まるで蛇のような舌を尖らせた。そして、両親が娘が母親になるはずだと気づいたとき、彼女を殴りながら、誰が彼女の堕落の原因なのかと問い詰めた。すると娘はこう答えた。

「その責任は、あなたがたが聖人だと思っているあの隠者にあるのです。ある時、私が村の外に出て、彼が住んでいる場所の近くまで行ったところ、隠者が道で私に出くわし、私に暴行を加えました。私は恐怖と恥のあまり、今まで誰にもこのことを話せなかったのです。」

少女のその言葉に、まるで矢で射られたかのように傷ついた両親や親族たちは、一斉に大声で叫び、罵声を浴びせながら聖人の住居へと駆けつけた。彼らはマカリアを小部屋から引きずり出し、長い間殴り続けた後、村へと連れ帰った。　そこで、彼らは砕けた器や陶器の破片を大量に集め、それらを縄で縛って聖人の首に掛け、その姿のまま村中を引き回した。そして、容赦なく彼を辱め、殴打し、突き飛ばし、髪を引っ張って引きずり回し、足で蹴りつけた。その間、彼らはこう叫んでいた。

「この修道士は我々の娘を汚した、皆で殴れ！」

ちょうどその時、ある分別のある男が通りかかった。その光景を目にした彼は、聖人を殴っている者たちにこう言った。

「彼に対する告発が正当なものかどうかも確かめずに、罪のない巡礼の修道士をいつまで殴り続けるつもりですか？ これは悪魔があなた方を誘惑しているのだと思います。」

しかし、彼らはその男の言葉に耳を貸さず、聖人を虐待し続けた。一方、神のためにマカリオに仕え、彼の手工芸品を売っていた男は、聖人から少し離れたところを歩きながら、聖人が殴られるのを止めたり、*「犬のように彼を取り囲んだ」*者たちの手からマカリオを救い出したりすることができず、苦々しく泣いていた。　（詩篇21:17）。そして、聖人を殴打していた者たちは振り返り、罵声と脅しを浴びせながら、その男にも襲いかかった。

「ほら、お前が仕えているあの隠者がこんなことをしたのだ！」と彼らは叫び、怒りと憤りが収まるまでマカリオスを棒で打ち続け、マカリオスは半死半生の状態で道端に取り残された。一方、その娘の両親は、それでもなお彼を放そうとはせず、こう言った。

「彼が、自分の不義を働いた私たちの娘を養うという保証人を提示するまでは、彼を解放しない」

かろうじて息をつきながら、マカリオスは彼に仕えていた男にこう頼んだ。

「友よ！　私の保証人になってくれ。」

その使用人は、聖人のために死んでも構わないとさえ思っており、彼のために保証人となり、傷で完全に力尽きていたマカリオスを抱き上げ、大変な苦労の末、彼の独房へと連れ帰った。傷から多少回復すると、マカリオスは自分の手仕事に一層励み始め、こう自分に言い聞かせた。

「マカリイよ、お前には今や妻と子供たちがいる。だから、彼らに必要な糧を届けるために、昼夜を問わず働かなければならないのだ。」

彼は籠を編んで、指定された人物を通じて販売し、その売り上げをその娘の生活費として送っていた。ところが、彼女が出産の時を迎えたとき、無実の聖人を誹謗中傷した罪により、神の正義の裁きが彼女に下った。　彼女は長い間、産みの苦しみに耐えられず、激しい痛みに耐えかねて、昼夜

を問わず激しく泣き叫びながら苦しんだ。その苦しみを見るにつけ、彼女の両親も共に苦しみ、戸惑いながら彼女に尋ねた。

「一体、あなたに何が起きたのですか？」

すると、その娘は、たとえそれがどれほど望ましくなくても、真実を明かすことを余儀なくされた。大声で叫びながら、彼女は言った。

「ああ、この罪深い私よ！私は、義人を誹謗し、彼が私の堕落の原因だと言ったことで、恐ろしい罰を受けるに値する。この件の犯人は彼ではなく、私と結婚しようとしたあの青年なのだ。」

娘の叫び声を聞いた両親や、そばにいた親族たちは、その言葉に深く衝撃を受けた。そして彼らを強い恐怖が襲い、無実の修道士、すなわち主の僕をこのように侮辱しようとしたことを深く恥じた。恐怖に駆られて、彼らは「ああ、私たちに災いあれ！」と叫んだ。　その間、この出来事の知らせは村中に広まり、老若男女を問わず、村人全員がその娘が住む家へと駆けつけた。そこで、隠者が彼女の恥辱に無実であることを訴える娘の叫び声を耳にした村人たちは、自分たちを激しく責め、皆が慈悲もなく聖人を殴打してしまったことを深く嘆いた。　乙女の両親と相談した後、村人たちは皆、尊者マカリオのもとへ行き、泣きながら彼の足元にひれ伏し、無実の人を侮辱したことで神の怒りが降りかからないよう、許しを請うことに決めた。　彼らのその決意を知ると、マカリオスに仕え、彼のために保証人となっていた男は、急いで彼の元へ駆け寄り、喜びながらこう言った。

「喜びなさい、マカリオ神父よ！　今日という日は私たちにとって幸いであり、喜びに満ちた日です。なぜなら、神は今日、かつてあなたが受けた侮辱と不名誉を、栄光へと変えてくださったからです。そして、私はもはやあなたの保証人である必要はありません。あなたは、情に流されず、義に満ち、極めて栄光ある無実の殉教者であることが証明されたからです。」　今日、神の裁きは、あなたを不当に告発し、無実のあなたを誹謗中傷した女に下った。彼女は重荷から解放されることができず、自分の堕落の原因はあなたではなく、ある一人の若者であったと告白した。　今や、村の住民は老若男女を問わず、皆、悔い改めの心を持ってあなたの元を訪れ、あなたの貞潔と忍耐を称えて神を賛美し、また、あなたを不当に侮辱したことに対する主からのいかなる罰も自分たちに降りかからないよう、あなたに許しを請いたいと願っている。

謙虚なマカリオスは、この男の言葉を悲しみを込めて聞き入れた。彼は人々からの名誉や栄光を望んでいなかった。なぜなら、彼にとっては、人々から名誉を受けるよりも、不名誉を受けるほうがはるかに心地よかったからである。それゆえ、夜が更けると、彼は立ち上がり、その地を去り、まずかつて夢の中で幻を見たニトリオス山へと向かった。　そこで三年間、一つの洞窟で暮らした後、彼はファランの荒野で苦行に励んでいた大アントニオスのもとへ向かった[1200]。マカリオスは、世に生きていた頃からすでに彼のことを聞いており、彼に会いたいと強く願っていたからである。　聖アントニオに温かく迎えられたマカリオスは、彼の最も誠実な弟子となり、長い間彼のもとで暮らした。そこで、完全な徳のある生活を送るための教えを受け、あらゆる面で師に倣うよう努めた。その後、聖アントニオの助言に従い、マカリオスは、隠遁生活を送るためにスキトスの荒野[1201]へと赴いた。そこで彼は、その功績によって大いに輝き、修道生活においてこれほどまでに優れた成果を上げたため、多くの兄弟たちを凌駕し、彼らから「若き長老」という呼び名を与えられた。というのも、彼は若さにもかかわらず、完全に長老らしい生き方を示していたからである。ここでマカリオスは、昼夜を問わず悪霊たちと戦わなければならなかった。　時には悪魔たちは、さまざまな恐ろしい姿に変身して、激怒しながら聖人に襲いかかり、また時には、馬に乗り戦場へと駆け出す武装した戦士たちの姿をとって、大きな叫び声や恐ろしい悲鳴、騒音を立てながら、まるで聖人を殺そうとするかのよ

[1200] ファランは、パレスチナ、エジプト、エドム、シナイ半島に囲まれた、人里離れた山岳地帯である。

[1201] スキトス砂漠は、エジプト北西部に位置するニトリア山から一日の行程（25〜30ヴェルスト）の距離にあった。そこは水のない岩だらけの砂漠であり、エジプトの隠者たちが好んで住んだ場所であり、そこに身を寄せた修道士たちの禁欲的な功績によって名声を博した。

うに彼に襲いかかった。　また時には、悪魔たちは聖人に対して目に見えない戦いを仕掛け、彼に様々な情欲に満ちた不浄な思いを抱かせ、様々な狡猾な手段を用いて、キリストによって築かれたこの堅固な壁を揺るがし、打ち砕こうと試みた。　しかし、彼らは、神を味方とし、ダビデのようにこう叫んだこの勇敢な真理の闘士を、少しも打ち負かすことはできなかった。

「*ある者は戦車（武器）を、ある者は馬を頼るが、私は私たちの主なる神の御名を誇る。彼らは動揺して倒れた。神と共に、私は力を発揮する*」（詩編19:8–9、59:14）。そして神は、私をこれほど獰猛に襲うすべての敵――悪魔たち――を滅ぼしてくださる。

ある夜、眠っていたマカリオスを大勢の悪魔たちが取り囲み、彼を起こしてこう言った。

「起きなさい、マカリオスよ。眠っているのではなく、私たちと一緒に歌いなさい。」

しかし、聖人はこれが悪魔の誘惑であると悟り、起き上がることなく、横になったまま悪魔たちにこう言った。

「*『私から離れよ、のろわれた者たちよ。あなたがたの父である悪魔のために用意された永遠の火の中へ』*（マタイ25:41）――それはあなたたちのためでもあるのだ。」

しかし、悪魔たちは言った：

「なぜ、マカリイよ、そのような言葉で私たちを侮辱し、罵るのか？」

「まさか――」と聖人は反論した。「悪魔の誰かが、誰かを祈りと神への賛美へと目覚めさせたり、徳ある生き方を教えたりすることなどあり得るだろうか？」

しかし、悪霊たちは彼を祈りに招き続け、長い間、それを成し遂げることができなかった。そこで、怒りに満ち、マカリオスからの軽蔑に耐えかねた彼らは、大群となって彼に襲いかかり、殴打し始めた。聖人は主に向かって叫んだ。

「私の神、キリストよ、私を助けてください。*『あなたは救いの喜びで私を取り囲んでくださる。犬たちが私を取り囲み、その口を私に向けて開いているからです』*（詩編31:7、21:14、17–18）。」

すると突然、大勢の悪魔たちが大きな騒音を立てて姿を消した。

またある時、マカリオスは砂漠で籠を編むためのヤシの枝をたくさん集め、それを自分の小部屋へ運んでいた。道中、鎌を持った悪魔に出くわし、聖人を殴ろうとしたが、できなかった。そこで悪魔はマカリオスに言った。

「マカリイよ！　お前のせいで、私は大きな苦しみを受けている。お前に打ち勝つことができないからだ。だから私も、お前がするすべてのことをしている。お前が断食すれば、私も何も食べない。お前が徹夜すれば、私も決して眠らない。ただ一つ、お前が私より優れている点がある。」

「それは何ですか？」と、その聖人は尋ねた。

「お前の謙虚さだ」と悪魔は答えた。「だからこそ、私はお前と戦うことができないのだ。」

尊者マカリオスが四十歳になった時、彼は神から奇跡を行う力、預言の賜物、そして悪霊に対する権威を授かった。同時に、彼は司祭の聖職に叙階され、スキートに住む修道士たちの院長（アッバ）に任命された。　彼の食事や飲み物、すなわち彼がどのように断食していたかについては、多くを語る必要はない。なぜなら、彼のスキトの兄弟たちの中で最も体力の弱い者でさえ、過食や何らかの贅沢な食事の摂取について非難されることがなかったからである。　これは、その地域に豪華な食糧が不足していたことも一因ではあったが、主たる理由は、そこに住む修道士たちの競い合いによるものであった。彼らは断食において互いに模倣するだけでなく、互いを凌駕しようと努めていたからである。一方、この天人のマカリアのその他の功績については、教父たちの間で様々な伝承が語り継がれている。　伝えられるところによれば、この尊者（マカリオス）は絶えず心を高みへと向け、その時間の大部分を、この世の事物よりも神へと注いでいたという。マカリオスはしばしば師である聖アントニオスを訪ね、彼と霊的な対話を交わしながら、多くの教えを受けていた。　マカリオスは、聖アントニオの他の二人の弟子たちと共に、その尊い臨終に立ち会う栄誉に浴し、ある種の最も豊か

な遺産として、アントニオが老いと断食の苦行によって衰弱した体を旅の途中で支えていた杖を受け継いだ。　この杖とともに、聖マカリオスは、かつて預言者エリセイが預言者エリヤの後を継いだように（列王記下2:9）、聖アントニオ大聖人の霊そのものをも受け継いだのである。[1202] この霊の力によって、マカリオスは多くの驚くべき奇跡を起こした。その物語について、これから述べていく。

ある不信心なエジプト人が、既婚の美しい女性に対して不純な情欲を抱いたが、彼女を夫への不貞へと誘うことはどうしてもできなかった。というのも、彼女は貞淑で高潔であり、夫を深く愛していたからである。　彼女をどうしても手に入れたいと強く願ったそのエジプト人は、ある魔術師のもとを訪れ、その魔術の力によって、その女性が自分を愛するように仕向けるか、あるいは彼女の夫が彼女を憎んで追い出すように仕向けてほしいと頼んだ。　魔術師は、そのエジプト人から豪華な贈り物を受け取ると、いつもの魔法を使い、魔術の力で貞淑な女性を悪行へと誘惑しようと試みた。しかし、揺るぎない女性の魂を罪へと誘うことができなかった魔術師は、その女性を見つめるすべての人の目を惑わせ、彼女を人間の姿をした女性ではなく、馬の姿をした動物のように見えるように仕向けた。　その女性の夫が帰宅すると、妻の代わりに馬がいるのを見て恐怖に襲われ、自分の寝床に動物が横たわっていることに大いに驚いた。彼は彼女に話しかけたが、何の返答も得られず、ただ彼女が激怒していることに気づいた。　それが自分の妻に違いないと知っていた彼は、誰かの悪意による仕業だと悟り、深く悲しみ、涙を流した。その後、彼は長老たちを自宅に呼び寄せ、妻を見せた。しかし、彼らもまた目が魔法にかけられていたため、目の前にいるのが人間ではなく動物だとしか認識できず、動物しか見えなかった。　この女性が皆の目に馬のように見えるようになってから、すでに三日が経過していた。その間、彼女は食事をとっていなかった。動物のように干し草も、人間のようにパンも食べることができなかったからだ。そこで夫は聖マカリアのことを思い出し、彼女を荒野の聖人のもとへ連れて行くことを決意した。　まるで動物であるかのように彼女に手綱をはめ、馬の姿をした妻を連れて、マカリアの住居へと向かった。彼が聖人の独房に近づくと、独房のそばに立っていた修道士たちは、なぜ馬を連れて修道院に入ろうとするのかと、彼を非難した。しかし、彼は彼らにこう言った。

「私は、この生き物が聖マカリアの祈りによって、主の憐れみを受けるためにここに来たのだ。」

「彼女に何か悪いことが起きたのですか？」と修道士たちは尋ねた。

「あなたがたが見ているこの動物は」と、その男は答えた。「私の妻です。どうして彼女が馬になってしまったのか、私にはわかりません。しかし、それが起きてからすでに三日が経ちましたが、彼女はこの間ずっと何も食べていません。」

その話を聞いた修道士たちは、すぐに聖マカリオのもとへ駆けつけ、このことを伝えようとした。しかし、聖マカリオはすでに神からの啓示を受けており、その女性のために祈っていた。修道士たちが聖人に起こったことを話し、連れてこられた動物を指さすと、聖マカリオは彼らにこう言った。

「あなた方自身が動物に似ているのだ。なぜなら、あなた方の目は獣の姿しか見ていないからだ。彼女は、女として創造されたがまま、女であり続けており、人間としての本質を変えたわけではない。ただ、魔法の呪縛に惑わされたあなた方の目には、動物のように映っているだけなのだ。」

その後、聖人は水を聖別し、祈りを込めてその水を連れてこられた女性に注ぎかけた。すると、彼女はたちまち本来の人間らしい姿を取り戻し、彼女を見る者たちは皆、人間の顔をした女性を目の当たりにした。　聖人は彼女に食事を与えるよう命じ、彼女を完全に健康な状態に戻した。すると

[1202] これは、聖マカリオスへの礼拝において次のように表現されている（『月別聖人暦』参照――カノンの第6歌のイコス）。

、夫も妻も、そしてこの驚くべき奇跡を目撃した者たちは皆、神に感謝を捧げた。マカリオスは、癒やされた女性に、できるだけ頻繁に神の教会へ行き、キリストの聖なる秘跡を受けるよう諭した。

「これは、あなたが神の聖餐を五週間も受けていなかったために起こったのです」と、聖人は言った。

夫と妻に教えを授けた後、聖人は二人を平安のうちに送り出した。

同様に、マカリオスは、ある魔術師によってロバに変えられ、その姿のまま両親に連れられて聖人のもとに来た一人の乙女をも癒した。また、傷やかさぶたで全身が腐り、虫がうごめいていた別の乙女についても、聖油を塗ることで完全に健康な状態に戻した。

尊者マカリオのもとには、実に多くの様々な人々が訪れました。ある者は祈りや祝福、父のような教えを求め、またある者は自身の病を癒やしてもらうためにやって来ました。　これほど多くの人々が彼のもとに訪れるため、マカリオスには、人里離れた場所で神への黙想にふける時間がほとんどなかった。そこで、聖人は自分の修道室の下に、長さ約半スタディオン[1203] の深い洞窟を掘り、絶えず訪れては彼の神への黙想や祈りを妨げる人々から身を隠すようになった。

聖マカリオスは神から、死者をさえよみがえらせることのできるほどの恵み深い力を授かっていた。そこへ、イエラキットという名の異端者が、エジプトから荒野にやって来て、そこに住む兄弟たちの心を惑わせた。彼は「死者の復活などない」と説いていたのである。　その後、彼は聖マカリオのもとを訪れ、大勢の兄弟たちの面前で、信仰について彼と論争を繰り広げた。彼は言葉の巧みな者であったため、聖人の素朴な言葉遣いを嘲笑した。聖マカリオは、兄弟たちがこの異端者の言葉によって信仰に揺らぎ始めていることに気づき、彼にこう言った。

「言葉で論争しても何の益があるだろうか。それは、私たちの論争を聞く者たちの信仰を揺るがすだけで、信仰を確固たるものにするためではない。主のもとで亡くなった兄弟たちの墓へ行こう。そして、私たちのうち誰に主が死者をよみがえらせる力を授けるか。そうすれば、その者の信仰が正しく、神ご自身によって証しされていることを、皆が確信するだろう。」

兄弟たちはこの聖人の言葉に賛同し、皆で墓地へ向かった。そこで聖マカリオスはイェラキットに、兄弟たちのうち誰か一人の故人を棺から呼び起こすよう命じた。しかし、イェラキットはマカリオスにこう言った。

「まずあなたがそれをやってください。あなたが自らそのような試練を課したのですから。」

そこで、マカリオス聖人は主への祈りを捧げるために身をかがめ、長い祈りの後、天を仰ぎ見て主に向かって叫びました。

「主よ！今、私たち二人のうち、どちらが（あなたを）より正しく信じているかを、あなたご自身が示してください。ここに横たわる死者の一人が棺から起き上がるようにして、それを明らかにしてください。」

そう祈った後、聖人は最近埋葬されたある修道士の名前を呼び、すると死者はすぐに墓の中からその声に応えた。そこで修道士たちは急いで墓を掘り起こし、その中で復活した同胞を見つけた。彼に巻かれていた包帯を解き、彼らは彼を生きたまま墓から連れ出した。この驚くべき奇跡を目の当たりにして、イェラキットは恐怖のあまり逃げ出した。すべての修道士たちは、敵を追い払うかのように彼を追いかけ、その土地の遥か彼方まで追い払った。

また別の機会には、尊者マカリオスもまた、別の死者を復活させたが、そのことについてはアッバ・シソイが語っている。

「私は」と彼は語る。「尊者マカリオスと共にスキトにいました。その時、小麦の収穫の時期が訪れました。兄弟たちのうち七人が収穫の手伝いとして雇われました。収穫の最中、ある未亡人が

[1203] スタディアは、私たちのサジェニで87 1/2に相当する。

私たちの後ろで穂を拾い集めていましたが、その間ずっと泣いていました。尊者マカリオスは、その畑の所有者を呼び寄せ、こう尋ねました。

「この女性に一体何が起きたのですか。なぜ彼女は絶えず泣いているのですか？」

畑の主人は聖者に、その女性の夫が、ある人から預かったお金を、妻に隠し場所を明かす間もなく突然亡くなってしまったと語った。そのため、貸し手は彼女と子供たちを奴隷にしたいと望んでいるのだ。するとマカリオスは彼にこう言った。

「その女性に、私たちが正午に休憩している場所へ来るように伝えてくれ。」

彼女が聖人の言葉に従ってやって来ると、聖マカリオスは彼女に尋ねた。

「なぜあなたはいつも泣いているのですか、女よ？」

「それは――」と未亡人は答えた。「夫が突然亡くなってしまったからです。死ぬ少し前に、ある人から金を預かったのですが、その金をどこに隠したか、私には教えてくれなかったのです。」

「あなたの夫が埋葬されている場所を見せてくれ」とマカリオスは言った。

修道士たちは兄弟たちを連れて、その場所へ向かった。その未亡人の夫の墓に近づくと、聖マカリオスは彼女にこう言った。

「さあ、家へ帰りなさい、女よ！」

その後、祈りを捧げたマカリイは、死者に呼びかけ、彼が預かった金をどこに隠したのか尋ねた。すると、死者は墓の中からこう答えた。

「自分の家の、ベッドの足元に隠しておいた。」

「再び安らかに眠れ」とアッバ・マカリオスは彼に言った。「万人の復活の日が来るまで！」

兄弟たちは、この奇跡を目撃し、激しい恐怖のあまり、尊者の足元にひれ伏した。長老は兄弟たちを戒めるためにこう言った。

「これらすべては私のためではなく、私は無に等しい。しかし、この未亡人とその子供たちのために、神はこの奇跡をなされたのだ。神は罪のない魂を憐れみ、その魂が神に何を願おうとも、それを与えてくださることを知れ。」

その後、聖人は未亡人のもとへ行き、夫が持ち出した金がどこに隠されているかを教えた。彼女は隠されていた財宝を取り出し、その持ち主に返した。こうして、彼女自身も子供たちも奴隷の状態から解放された。この驚くべき奇跡を耳にした人々は皆、神を賛美した。

ルフィン司祭（[1204] ）は、聖マカリオスによる三番目の死者の復活についても語っている。ある時――と彼は語る――、ある無実の男が、聖人の修道室があった場所で起きた殺人事件の容疑をかけられた。　被告人はマカリオスの住居へ駆け込んだが、彼を殺人犯として捕らえ、正当な裁判にかけようとする者たちも、そこへ追いかけてきた。被告人は、殺害された者の血には無実であると神に誓って主張したが、告発者たちは彼を有罪に見せかけようとした。　告発者たちと被告が長い間言い争っている間、聖マカリオスは尋ねた。

「殺された者はどこに埋葬されているのか？」

埋葬場所を知ると、聖人は立ち上がり、彼のもとを訪れた者たちと共にそこへ向かった。墓の前でひざまずいて長い間祈りを捧げた後、聖人は立ち会っていた告発者たちにこう言った。

「今、主ご自身が、あなたがたが殺人罪で告発しているこの男が、果たしてその罪を犯したのかどうかを明らかにしてくださるでしょう。」

そして、マカリオスは大きな声で呼びかけ、殺された者の名を挙げた。すると、その者は墓の中からその呼びかけに応え、聖人は彼にこう尋ねた。

[1204] ルフィン――アクイレイアの司祭――は345年頃に生まれ、410年に没した教会作家である。彼の著作として知られているのは、『修道生活の歴史』、『教会史』、『聖ヒエロニムスの弁明』（2巻）である。

「神の子イエス・キリストの御名によって、ここに連れてこられたその男に、あなたが殺されたのかどうか、私たちに答えるよう命じる。」

するとすぐに、死者は墓の中から明瞭な声で、自分はこの男に殺されたのではなく、殺人の容疑は不当であると答えた。　墓に集まった者たちは皆、この驚くべき奇跡に打ちのめされ、地面にひれ伏した。そして　、聖人の足元にひれ伏し、誰が自分を殺したのか、もう一度死者に尋ねてほしいと切に懇願した。しかし、聖マカリオスは彼らにこう答えた。

「そのことについては尋ねない。無実の人を死から救ったことだけで、私には十分だからだ。有罪の者を裁判にかけるつもりはない。」

ラヴサイクのパラディオス（[1205]）は、聖マカリオスについてさらに次のように語っている。

ある時、悪霊に取り憑かれた若者が、母親によって聖者に連れてこられた。　彼は縛られており、二人の屈強な男に押さえつけられていた。彼には大食いの悪霊が取り憑いていた。そのため、彼は巨大なパンを三つも食べ、大きな器一杯の水を飲み干したが、それらすべてを吐き出し、食べたものや飲んだものをまるで蒸気や煙のように変えてしまった。　食べ物や飲み物は、まるで火に焼かれるかのように、彼の体内で消し去られていった。もしその若者の母親が、彼にそれほど多く食べたり飲んだりすることを許さなければ、彼は自分の排泄物さえも食べていた。彼女は泣きながら、聖マカリアに、息子を憐れみ、この恐ろしい悪霊の憑依から癒やしてくれるよう懇願した。　聖人はその若者のために主に向かって熱心に祈り始め、二日後、若者の状態はすでに楽になり、食べ物や飲み物を求めることも少なくなった。そこで聖人は若者の母親に尋ねた。

「息子さんに、どれくらいの量を食べさせたいですか？」

「10リットル[1206]のパンです」と、その女性は答えた。

しかし、聖人は非難するように彼女に言った。

「なぜそんなに多くを望むのですか、女よ？」

七日間の断食と神への熱心な祈りの後、聖人は若者の体から悪霊を追い出し――聖人の祈りによって、若者は一日に三リットルのパンで満腹するようになった。　若者に、怠惰な生活を送るのではなく、自らの労働によって生計を立てるよう諭した後、聖人は神の恵みにより彼を完全に癒やし、母親に引き渡し、二人を平穏のうちに送り出した。

聖マカリアに関する序文には、さらに次のような話も記されている。ある時、聖人は旅の途中で夜が更けてしまったため、一晩を過ごすために異教徒の墓地に入った。そこで、亡くなった異教徒の古い骨を一つ見つけると、聖人はそれを自分の枕元に置いた。　悪魔たちは、マカリアのそのような大胆な行為を見て、彼に牙をむき、彼を脅そうとして、その骨を女性の名前で呼びながら叫び始めた。

「さあ、風呂へ行って体を洗ってこい。」

この呼びかけに、聖マカリオスが枕元に置いた死者の骨の中に宿っていた悪魔が応えた。

「私の上には巡礼者がいる」と彼は言った。「だから、行くことはできない。」

聖人はこの悪魔たちの策略に怯むことなく、むしろ大胆にもその骨を叩きながら言った。

「できるなら、立ち上がって行け。」

[1205] パラディオス・エレノポリス（368–430年）は、聖ドロフェイの弟子であり、ガリア出身である。388年にアレクサンドリアに到着し、その後、聖ドロフェイも修行していた近隣の荒野へと退き、その後ベツレヘムに移住した。 390年、小アジアのビフィニアにあるエレノポリスの司教に選出された。　その後、アルカディウス帝は、彼を聖ヨハネス・クラマトルスの支持者として上エジプトへ追放したが、408年にアンティノイへ移され、412年にヘレノポリスの司教座へ復帰した。 カッパドキアの総督ラウスの要請により、420年に彼は聖人伝および聖人に関する伝承をまとめた書物を編纂し、彼に敬意を表してこれを『ラウサイコス』と名付けた。この書物の教訓的かつ啓発的な価値を考慮し、教会規則により、四旬節の早課においてその朗読が定められている。

[1206] リトラとは、72ゾルトニクに相当するビザンツの重量単位である。

彼がその言葉を口にした途端、悪魔たちは大きな声で叫び、彼に向かってこう叫んだ。

「マカリイよ、お前はあらゆる面で我々を打ち負かす」と叫び、恥をかかされて聖人から退いた。

またある時、聖マカリオスは荒野を歩いていると、地面に転がっている乾いた人間の頭蓋骨を見つけた。杖でそれを転がしてみると、聖人はまるで何か音がしたかのような音を聞いた。そこでマカリオスは頭蓋骨に尋ねた。

「お前は誰だ？」

「私は」とそれは答えた。「かつてこの地に住んでいた異教の祭司たちの長でした。アッバ・マカリイよ、あなたが神の御霊に満たされ、地獄で苦しむ者たちに憐れみを抱き、私たちのために祈ってくださる時、私たちは少しばかりの安らぎを得るのです。」

「一体どのような安らぎを得ているのか、そして、どのような苦しみを受けているのか、教えてくれ」とマカリオスは尋ねた。

「天が地からどれほど遠く離れているか――」と、頭蓋骨はうめき声を上げて答えた。「それと同じくらい、私たちが置かれている炎は激しく、足元から頭頂まで四方八方から焼き尽くされている。その上、私たちは互いの顔を見ることができない。しかし、あなたが私たちのために祈ってくださる時、私たちは互いの姿を少しだけ見ることができ、それが私たちにとってある種の慰めとなるのだ。」

その答えを聞いて、聖人は涙を流し、こう言った。

「人が神の戒めを破ったあの日は、呪われるべき日だ。」

そして再び、彼は頭蓋骨に尋ねた。

「あなたたちにとって、これ以上に苛烈な苦しみは他にあるか？」

「下の方、私たちのずっと深いところには、他にも多くの苦しみがあります」と、頭蓋骨は答えた。

「その最も苛烈な苦しみの中には、一体誰がいますか？」とマカリオスは尋ねた。

「私たち、神を知らなかった者たちです」と頭蓋骨は答えた。「とはいえ、私たちはまだわずかに神の慈悲を感じています。しかし、神の御名を知りながら、神を拒み、その戒めを守らなかった者たちは、私たちの下で、はるかに重く、最も苛烈な苦しみを受けているのです。」

その後、聖マカリオスはその頭蓋骨を手に取り、地中に埋めてから、その場を去った。

尊者マカリオス――ルフィンは彼についてさらにこう語っている――は、広大な荒野に住み、そこに独房を持っていたが、彼の修道院はさらに下方の別の荒野にあり、そこには多くの兄弟たちがいた。ある日、マカリオスは修道院へと続く道端に座っていた。　すると突然、人間の姿をした悪魔が、毛むくじゃらの服を身にまとい、全身にカボチャをぶら下げて歩いているのを見かけた。マカリオスは彼に尋ねた。

「悪意に満ちた者よ、どこへ行くのか？」

「兄弟たちを誘惑しに行くのだ」と、悪魔は答えた。

「なぜ、そのカボチャを身にまとって運んでいるのか？」とマカリオスは尋ねた。

「兄弟たちへの食事を持っていくのだ」と悪魔は答えた。

「すべてのカボチャに料理が入っているのか？」と聖人は尋ねた。

「すべてに入っている」と悪魔は答えた。「もし誰かが一つを気に入らなくても、別のもの、三つ目のもの……と次々に差し出し、誰もが少なくとも一つは味わえるようにするつもりだ。」

そう言うと、悪魔は立ち去った。

一方、尊者は悪魔が戻ってくるのを見ようと、道端に残っていた。悪魔が戻ってくるのを見ると、マカリイは尋ねた。

「修道院への訪問はうまくいったか？」

「うまくいかなかった」と悪魔は答えた。「そもそも、私がどうやって成功できたというのか？」

「なぜだ？」と聖人は尋ねた。

「すべての修道士たちが私に敵対したからだ」と悪魔は答えた。「誰も私を受け入れてくれなかった。」

「まさか、お前の言うことを聞く修道士が一人もいないというのか？」とマカリオスは再び尋ねた。

「たった一人だけいる」と悪魔は答えた。「その者は私の言うことを聞く。私が彼のところへ行くと、彼はコマのように私の周りをくるくる回るのだ。」

「その者の名は？」と聖人は尋ねた。

「テオペムプトだ！」と悪魔は答え、そう言うと立ち去った。

そこでアッバ・マカリオスは立ち上がり、遠く離れた荒野にあるその修道院へと向かった。兄弟たちは、尊者が自分たちのところへ来ると聞き、ヤシの枝を手に持って出迎えた。そして、尊者が自分の部屋に泊まりたがるだろうと思い、それぞれが自分の部屋を用意した。しかし、マカリオスは修道士たちに尋ねた。

「あなた方のうち、テオペンプトという者は誰か？」

テオペンプトが指さされると、彼はその独房に入った。テオペンプトは大きな喜びをもって尊者を迎えた。テオペンプトと二人きりになると、尊者マカリオスは彼に尋ねた：

「お元気ですか、兄弟？」

「元気です」と彼は答えた。「神父様の祈りのおかげです！」

「何か罪深い思いに誘惑されてはいないか？」と師は尋ねた。

自分の罪深い思いを開示することを恥じて、修道士はこう答えた。

– いいえ！今は何も私を誘惑しません。

すると、マカリオス師はため息をつきながら言った。

「私はもう何年も断食と祈りに励んできたので、皆から尊敬されているが、それでも、この老齢にもかかわらず、不貞の悪霊に強く誘惑されているのだ。」

それに対し、テオペンプトスは言った。

「確かに、師よ。私もまた、不貞の霊に強く囚われています。」

聖人は同様に、その修道士の魂を悩ませている他の罪についても尋ね続け、彼がすべての罪を告白するまで続けた。その後、聖人は修道士に尋ねた。

「どれくらいの期間、断食をしているのですか？」

「第九時までは」と、修道士は答えた。

「夕方まで断食しなさい」と聖人は言った。「そして、聖なる福音書や他の聖なる書物から学び、常に神を想うことに励みなさい。もし何らかの罪深い思いがあなたを襲うことがあれば、それと戦い、決して心を下界へと向けてはならない。常に心を天へと向けなさい。そうすれば、主があなたを助けてくださるだろう。」

このようにテオペンプトスを励ました後、聖人は自分の荒野へと戻った。そこで、道端に座っていると、再び修道院へ向かう悪魔の姿を目にした。聖人は彼に尋ねた。

「どこへ行くのか？」

「兄弟たちを誘惑しに行くのだ」と悪魔は答えた。

そう言うと、悪魔は先へ進んでいった。そして、悪魔が戻ってくるのを見て、聖人は彼に尋ねた。

「兄弟たちはどうだったか？」

「今や皆が私に敵対している」と悪魔は答えた。「かつては私の友であり、いつも私の言うことを聞いていたあの者でさえ、今では誰かに堕落させられたのか、私の言うことを全く聞かなくなった。それどころか、彼は今や他のどの修道士よりも激しく私に敵対している。」　そこで私は、長い時間が経たない限り、もう二度とあの修道院には行かないと誓ったのです。

そう言うと、悪魔は立ち去った。そして、マカリオス尊者は自分の独房に戻った。

ある日、二人の旅人がマカリオス尊者の隠れ家にやって来た。一人は髭を生やしており、もう一人は若く、口ひげしか生えていなかった。二人は尊者に尋ねた。

「アッバ・マカリオの独房はどこにありますか？」

「彼に何を望んでいるのですか？」と聖人は尋ねた。

彼らは答えた。

「スキートの修道士たちから、彼とその生き様について多くの話を聞いてきました。彼に会いに来たのです。」

すると、尊者は彼らにこう言った。

「それが私です。」

彼らは地にひれ伏して礼を捧げ、こう言った。

「私たちはここに定住したいのです。」

聖人は、彼らがまだ若く、裕福な人々であることを見て、こう答えました。

「あなたたちは、ここでは暮らしていけないでしょう。」

すると、年下の者がこう反論した。

「もしあなたが私たちにここにとどまることを許さないなら、私たちは別の場所へ行きます。」

聖マカリオスはその時、こう考えた。「なぜ彼らを追い払って、誘惑に駆られるようにさせるのか。むしろ彼らを受け入れれば、彼らは自ら、荒野での過酷な労働から逃れるためにここを去るだろう」。そして彼らに向き直って言った。

– ここに定住し、もしできるなら、自分たちの修道室を建てなさい。

そして、彼は彼らに斧と、パンと塩が入った籠を与え、荒野の奥へと案内して、ある岩だらけの場所を指し示し、こう言った。

「牧草地から木を運んで、ここに自分の小部屋を建て、ここで暮らしてください。」

その際、尊者は、彼らが砂漠生活の厳しさに耐えられず、そこから逃げ出してしまうだろうと考えた。若者たちはマカリアに尋ねた。

「修道士たちはどのような手仕事をされているのですか？」

「彼らは籠を編んでいる」と、尊者は答えた。

そして、ナツメヤシの枝を手に取り、縄を編み始めながらこう言った。

「これで籠を編むのだ。君たちもそうして、出来上がったものは教会の管理人に渡せ。そうすれば、彼らはその見返りにパンと塩を君たちに持ってきてくれるだろう。」

そして、聖人は彼らを一人きりにした。

若者たちは、聖マカリオスが命じたことをすべて辛抱強く実行し、三年間、彼の元を訪れることはなかった。彼らのことを思い出した聖人は、こう考えた。「この二人の若者は何をしているのか。なぜ自分の思いを打ち明けるために私のところに来ないのか。遠くからやって来る者は多いのに、彼らは近くに住んでいるにもかかわらず、私のところに来ないのだ」。　実は、その若者たちはどこにも出かけておらず、ただ教会へ行き（そこで黙って立ち）、キリストの聖なる秘跡を拝領していたからであった。聖マカリオスは一週間もの間、全く食事を口にせず、神に祈り続けた。彼は、主が二人の兄弟の行いを明らかにしてくださるよう願ったのである。　一週間が過ぎると、聖マカリオスは彼らがどのように暮らしているのかを見たいと願い、彼らの元へ向かった。彼が到着し、彼らの修道

室の扉をノックすると、彼らは扉を開け、聖人を見ると地面にひれ伏して礼をした。聖人は祈りを捧げると、腰を下ろした。　年長の兄弟が年下の兄弟に合図を送ると、年下の兄弟は小部屋から出て行き、年長の兄弟は座って、一言も発することなく籠を編み始めた。午後九時、年下の兄弟がノックをして戻ってくると、少しの煮物を用意し、パンを三切れ並べて食事を勧め、自身は黙り込んだ。

「おいでなさい」と尊者は言った。「パンを味わいましょう。」

そして、主を賛美しながら食べた。その後、若い修道士が水を持ってきて、二人は水を飲んだ。夕暮れが近づくと、修道士たちは尊者にお尋ねした。

「師よ！ ここから去られるおつもりですか？」

しかし、師は彼らにこう言った。

「いいえ！私はここで夜を明かします。」

そこで彼らは、修道院の部屋の片隅に尊者用に藁マットを敷き、もう一方の隅では自分たちも同様に藁マットの上に横になった。夜が更けた。尊者マカリオスは起き上がり、若者たちの美徳を明らかにしてくださるよう、神に祈り始めた。　真夜中、突然、修道室の屋根が開き、強い光が輝いた。しかし、二人の兄弟はその光を見なかった。聖者が眠っていると思い込んだ兄は弟を突き、二人は起き上がると、腰に帯を締め、天に向かって両手を挙げ、ひそかに祈りを捧げた。　聖人は、ハエのように末の兄弟を取り囲む無数の悪魔たちを見ました。悪魔の中には、彼の口元に止まろうとする者もいれば、目元に止まろうとする者もいました。しかし、主の天使が炎の剣を手に現れ、その剣で彼を守り、悪魔たちを追い払いました。一方、長兄のそばには、悪魔たちは近づくことさえ恐れおののいていました。　夜が明けると、二人の兄弟は再び横になり、眠りについた。翌朝、聖マカリオスは、まるで今起きたばかりであるかのように振る舞った。すると、皆が起き上がった。兄は聖人に尋ねた。

「父よ！　私たちが十二篇の詩篇を読み始めましょうか？」

「そうしてほしい」と聖人は答えた。

まず弟が歌い始めると、一節歌うごとに、まるで火のついたろうそくのようなものが彼の口から出て、天へと昇っていった。次に兄が歌い始めた。彼の口からは、まるで長い縄のような火が出て、天にまで達した。　朝の礼拝が終わると、尊者は自分の住居へ退こうとされた。去り際、兄弟たちにこう言われた。

「兄弟たちよ、私のために祈ってください。」

その言葉に答えて、兄弟たちは黙って地にひれ伏して礼を捧げ、聖人は彼らの元を去った。こうして聖マカリオスは、年長の兄弟がすでに徳において完全な境地に達しているのに対し、年少の兄弟にはまだ敵である悪魔が戦いを挑んでいることを知った。　聖マカリオスが兄弟たちを訪ねてから間もなく、年長の兄弟は主のもとへ召され、その死から三日後、年少の兄弟もまた息を引き取った。その後、敬虔な父たちの誰かが聖マカリオスを訪ねてくると、彼は彼らをその二人の兄弟の修道室へ案内し、こう言った。

「さあ、キリストの偉大な僕たちが修業に励んだその場所を見てみましょう。」

ある時、聖マカリオスが祈りを捧げていたところ、彼に声が聞こえてきた。その声はこう言った。

「マカリオよ！　あなたは、近くの町で共に暮らしている二人の女性ほど、徳のある生活においてまだ完全な境地に達していない。」

そのような啓示を受けた聖人は、杖を手に取り、その町へ向かった。そこで、その女性たちが住む家を見つけると、マカリオスは扉をノックした。するとすぐに、女性の一人がノックの音に反応して出てきて、聖人を見ると、大いなる喜びをもって彼を家の中に迎え入れた。聖人は二人の女性を呼び寄せ、こう言った。

「あなた方のために、私は遠く離れた荒野からここへやって来て、この偉大な行いに挑んだのです。あなた方の善行を知りたいのですから、何も隠さずに、そのことを私に話してください。」

「誠実な神父様、私たちを信じてください」と女性たちは答えた。「昨夜もまだ夫たちと寝床を共にしていました。一体、私たちにどんな美徳を見出そうというのですか？」

しかし、修道士は彼女たちに自分たちの生活の様子を話すよう強く求めた。そこで、彼の説得に納得した女性たちはこう言った。

「私たちは以前は血縁関係にありませんでしたが、後に実の兄弟二人と結婚し、もう十五年も皆で一つの家で共に暮らしてきました。共に暮らしてきた間、互いに悪意のある言葉や悪い言葉を一度も口にすることはなく、決して喧嘩をしたこともありません。　しかし、現在に至るまで互いに平和と調和の中で暮らしており、つい最近、心を一つにして、この世の夫たちを離れ、神に仕える聖なる処女たちの仲間に加わることを決意しました。しかし、私たちは夫たちに私たちを解放してくれるよう懇願しても、たとえ強い執念と多くの涙をもって懇願したとしても、彼らを説得することができませんでした。　望み通りの許可が得られなかったため、私たちは神と、そして互いの間で、死ぬその日まで世俗的な言葉を一切口にしないという誓いを交わしました。

彼女たちの話を聞き終えると、聖マカリオスはこう言いました。

「まことに、神は処女であろうと既婚者であろうと、修道士であろうと平信徒であろうと、そのような身分を求められるのではなく、自由な意志そのものを、それ自体が最も重要なこととして受け入れておられる。そして、救いを望むすべての人の内において働き、その人生を導く聖霊の恵みを、各人の自発的な意志に与えてくださるのだ。」

このエジプトの聖マカリオスが生きた時代、エジプトのマカリオスと同じ荒野の地で、もう一人の聖人――アレクサンドリアのマカリオス――が徳高い生活を送っていた。彼は「[1207] のケリア」と呼ばれる修道院の長老であった。この地域は、ニトリアとスキトの間の荒野に位置していた。　この至福のマカリオス・アレクサンドリアは、しばしばエジプトのマカリオス聖人のもとを訪れ、二人は互いに深い愛を抱いていたため、何度も共に荒野を歩いた。不敬虔なアリウス派の皇帝ヴァレント[1208] が即位すると、正教徒に対して極めて苛烈な迫害を開始した。 アレクサンドリアには、皇帝の命令により、アリウス派の司教ルキウス[1209] が多数の軍勢を率いて到着し、正統派の司教であり、聖アタナシオス大司教の後継者である至福のペトロを司教座から追放した。　さらに、ルキウス司教は、すべての聖なる隠遁の父たちを捕らえて追放するために、兵士たちを荒野へ派遣した。最初に捕らえられたのは、二人のマカリア聖人であった。　兵士たちは夜間に彼らを捕らえ、船に乗せて、真の神を知らず、偶像を崇拝していた住民が住むある辺鄙な島へと連行した。その島にいた偶像崇拝の祭司の一人には、悪霊に取り憑かれた娘がいた。　聖人たちが他の修道者たちと共に島にやって来たのを感じると、その娘は彼らに向かって駆け寄り、大声で叫んだ。

「なぜここへ来たのですか？　この島は、私たちにとって古くからの住まいなのですから。」

聖人たちは祈りを捧げ、その娘から悪霊を追い出し、彼女は完全に健康を取り戻した。これを見た彼女の父である偶像崇拝の祭司は、直ちにキリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。また、その島

[1207] ここでいうのは、もちろんケリイの荒野であり、ニトリイ山から南東へ約7ヴェルスト離れた場所にあった。そこは広大な荒野で、隠遁者たちの小部屋が、互いに姿も見えず、声も聞こえないほどの距離を置いて点在していた。　ケリイの砂漠へは、通常、ニトリイ山から孤独を好む者たちが、すでに修道生活において確固たる地位を築いた後に移り住んだ。ここでは彼らはより静寂な生活を送り、彼らの庵は互いに遠く離れていたため、視界も聴覚も、他の兄弟たちとの近接した共同生活によって妨げられることはなかった。　修道士たちは、沈黙を乱さないよう、互いのケリヤに一人で立ち入らないことを規則としていた。土曜日と日曜日にのみ、彼らは共同の礼拝のために教会に集まった。ケリヤの荒野は長老たちによって統治されており、その中でも特に著名だったのがアレクサンドリアのマカリオス聖人であった。

[1208] 皇帝ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[1209] アリウス派のルキウスは、聖アタナシウス大主教の後を継いで、アレクサンドリアの総主教座に就いた。

の住民たちも皆、キリストに帰依し、彼らの異教の神殿をキリスト教の教会へと改めた。　この出来事を知った不敬虔なルキウス司教は、かくも偉大な聖父たちを修道院から追放してしまったことを深く恥じた。そこで彼は密かに使者を送り、至福のマカリオスたちと、彼らと共にいたすべての聖なる父たちを、かつての居住地へ再び戻すよう命じた。　こうして、エジプトのマカリオス聖人は再びスキトスの荒野へ、アレクサンドリアのマカリオス聖人は前述のケリイの地へ戻り、他の敬虔な聖父たちもそれぞれの修道院へと帰還した。

その間、エジプトのマカリオス聖人のもとには、至る所から大勢の人々が訪れていた。ある者は魂の救いを求めて彼から教えを受けようとし、またある者は自身の病の治癒を求めて訪れ、そうした病める者たちが彼のもとに大勢集まってきた。　そのため、旅人や病人が宿を借りられる宿舎を建設する必要が生じた。聖マカリオスはこれを整備した。彼は毎日、一人の病人を聖油を塗って癒やし、完全に健康な状態で家に帰すことを習慣としていた。　聖人は、すぐに癒やされない他の病人が、しばらくの間彼の元で過ごし、その間に神から霊感を受けた教えに耳を傾けることで、肉体だけでなく魂までも癒やされるという、賢明な目的を持ってこのように行っていた。　修道院の宿舎での奉仕のために、尊者はある修道士を任命した。この修道士は悪魔に惑わされ、貪欲という情欲に溺れ、その欲求を満たすために、貧しい人々の生活費として配分されていたものを少しずつ横領するようになった。尊者マカリオスはこのことを知り、その修道士を呼びつけて、次のように説教した。

「ヨハネ兄弟よ！　私の言葉に耳を傾け、この訓戒を受け入れなさい。それがあなたにとって益となるでしょう。　今、あなたを貪欲の霊が誘惑している――それは私に明らかにされているからだ――そして私は知っている。もしあなたが私の教えを受け入れ、罪深い行いをやめるならば、あなたは神を畏れつつ生涯を終え、善行に励み、この地で誉れを得、*『病はあなたの住まいには近づかない』*（詩篇90:10）。しかし、もしあなたが私の言葉に従わず、罪を犯し続けるならば、あなたがその情熱に苦しめられているヒエゼイアの末路をたどることになるだろう（列王記下6:15–16, 20–27）。

しかし、ヨハネは尊者のお言葉に従わず、その悪行を止めようとはしなかった。　尊者マカリアが安らかにこの世を去ってから15年か20年が経ち、その間、前述の修道士は、彼に罠を仕掛けた金銭への執着というユダの誘惑に囚われ続け、貧しい人々のために割り当てられた施しの一部を横領していたが、突然、全身がハンセン病に冒され、　彼は、罪深く集めた財産だけでなく、自らの魂までも失って死んでしまった。

ある日、聖マカリオスは弟子の一人を連れて、スキタからニトリア山へと向かった。彼らがすでに山に近づいたとき、聖人は弟子にこう言った。

「私の少し前を歩いてくれ。」

弟子は聖人の前を歩き、大きな丸太を運んで急いで向かってくる異教の司祭に出くわした。彼を見て、修道士は叫んだ。

「聞こえるか、聞こえるか、この悪魔め！　どこへ行くつもりだ？」

司祭は立ち止まり、修道士を激しく殴りつけ、彼はかろうじて一命を取り留めた。その後、投げ捨てられていた丸太を掴むと、司祭は逃げ去った。しばらくして、彼はマカリオス師に出くわし、師は彼にこう言った。

「逃げろ、勤勉な者よ、逃げろ。」

修道士のその言葉に驚いた司祭は立ち止まり、彼に尋ねた。

「私にどんな良いところを見出したのですか。なぜそんな言葉で私を迎えてくださるのですか？」

「お前が勤勉に働いているのが見えるからだ」と聖人は答えた。

すると、司祭は言った。

「師よ、あなたの言葉に心を打たれました。それによって、あなたが神の人であることがわかったからです。先ほど、ここで別の修道士が私に出くわし、私を罵ったので、私は彼を殴り殺してしまいました。」

そう言うと、司祭は聖者の足元にひれ伏し、その足を抱きしめながらこう言った。

「父よ、あなたが私をキリスト教に改宗させ、修道士にしてくださるまでは、決してあなたを離れません。」

そして彼は聖マカリオスと共に歩み出した。少し進むと、彼らは祭司に殴打された修道士が倒れていた場所にたどり着き、かろうじて息のある彼を見つけた。彼を運び上げ、ニトリア山にある教会へと連れて行った。　そこに住む修道士たちは、聖マカリオスと共に異教の祭司がいるのを見て、大いに驚いた。その後、彼に洗礼を授け、修道士としたところ、彼のおかげで多くの異教徒がキリスト教に改宗した。アッバ・マカリオスはこの出来事を機に、次のような教えを説いた。

「悪しき言葉は」と彼は言った、「善き者をも悪しき者にし、善き言葉は悪しき者をも善き者にするのだ。」

ある日、聖マカリオスはアッバ・パムヴァの修道院を訪れた。そこで長老たちは聖人にこう頼んだ。

「父よ、兄弟たちを啓発する言葉をください。」

彼らの願いを受け入れたマカリオスは、次のように語り始めました。

「お許しください。私は不甲斐ない修道士ですが、ある修道士たちの姿を見てきました。ある時、私はスキトの自分の独房に座っていたところ、内なる荒野へ行って、そこがどのような場所なのか見てみたいという思いが浮かびました。　五年間、私はその思いと戦い続け、これは悪霊に誘惑されているのだと考えていました。しかし、五年が過ぎてもなお同じ思いに苛まれ続けたため、私は内なる荒野へ向かう決心を固めました。そこに着くと、広大な沼地があり、その真ん中に島が見えました。その時、荒野の獣たちが水を飲みにやって来ました。　獣たちの中に、二人の裸の人間の姿が見えた。私は全身が震え上がった。まるで無形の霊を見ているかのように感じたからだ。私がひどく怯えているのを見て、その人たちは私にこう言った。

「恐れることはない。私たちもあなたと同じ人間なのだから。」

そこで私は彼らに尋ねた。

「この砂漠にはどこから来たのですか？」

「私たちはキノヴィアから来たのです」と彼らは答えた。「互いに相談し合った末、ここへ来ることに決めたのです。修道院を去ってから、もう三十年になります。私たちのうち一人はエジプト人、もう一人はリビア人です。」

それから、彼らも私に尋ねた。

「今の世の中はどうなっているのか？川は依然として支流から水を汲み上げているか？大地は相変わらず豊かな実りを生み出しているか？」

私は彼らに「はい」と答えました。そして再び彼らに尋ねました：

「どうすれば私は修道士になれるのでしょうか？」

彼らは私にこう答えました：

「もし人が、この世にあるすべてのものを捨て去らなければ、修道士になることはできない。」

それに対し、私はこう言った。

「私は力不足なので、あなた方のようにはなれません。」

「もしあなたが私たちのような者になれないのなら」と彼らは言った。「それなら、自分の小部屋に座り、自分の罪を悔い改めなさい。」

そこで私は再び彼らに尋ねた。

– 冬が来ると、あなた方は激しい寒さに苦しむことはないのですか? 同様に、非常に暑い夏が来ると、あなた方の体は暑さで焼かれることはないのですか?

それに対し、彼らは私にこう答えた。

「主なる神は、冬には寒さに、夏には暑さに苦しむことのないような体を、私たちに与えてくださったのだ。」

「だからこそ、兄弟たちよ」と、マカリオス聖人はその言葉を締めくくった。「私はまだ修道士にはなっていないが、修道士たちを見たことがあるのだ。」

ある日、スキトスの修道士たちが尊者マカリオスに、どうして彼の体は常に痩せたままでいられるのかと尋ねました。というのも、彼が断食している時だけでなく、食事を摂っている時でさえ、彼の体は常に痩せたままであるからです。

聖マカリオスは、彼に尋ねた者たちに次のように答えた。

「炉の中で燃える薪や小枝をかき回す火かき棒が、常に火で焦げ付くように、常に心を主に向け、ゲヘナの火による恐ろしい苦しみを決して忘れない人にとっては、その恐怖が肉体を蝕むだけでなく、骨さえも乾ききらせてしまうのだ。」

その後、兄弟たちは再び尊者にお尋ねしました:

「父よ、どのように祈るべきか、教えてください。」

尊者は彼らに次のように教えられた。

「祈りには多くの言葉を並べる必要はない。ただ両手を天に掲げ、『主よ! 御心のままに、御自身がご存知の通り、私を憐れんでください」と。もし敵が心の中に罪深い戦いを巻き起こしたとしても、ただ「主よ、憐れんでください」と唱えるだけでよい。主は、私たちにとって何が有益かを御存知であり、私たちに憐れみを与えてくださる。

別の時、アッバ・イザヤは尊者に対し、こう尋ねました:

「父よ、魂の益となる教えを何か教えてください。」

「人々から逃げなさい」と、尊者マカリオスは答えた。

「人から逃げるというのは、どういう意味ですか? 」と、アッバ・イザヤは尋ねた。

尊者は彼にこう答えました。

「自分の小部屋に座り、自分の罪を悔い改めなさい。」

また、弟子であるパフヌティオス[1210]に対しては、聖人はこう言った。

「誰をも傷つけず、誰に対しても中傷してはならない。そうすれば、救われるだろう。」

さらに、聖人は次のような教えも与えた。

「悪評のある兄弟の独房で夜を明かしてはならない。」

別の修道士が尊者のもとを訪れ、こう尋ねた。

「アッバ、救われるためにはどうすればよいでしょうか? 」

「墓場へ行き、死者を罵れ」と、尊者は答えた。

修道士は墓地へ行き、尊者のおっしゃった通りにそこで死者を罵り、石で彼らの墓を壊し、戻って来てそのすべてを尊者に報告した。尊者は彼に尋ねた。

「死者はあなたに何か言いましたか? 」

「いいえ、何も言いませんでした」と修道士は答えた。

すると、聖人は言った。

「もう一度行って、今度は彼らを称えなさい。」

修道士は行って、様々な賛美の言葉で死者たちを称え始めた。

[1210] パフヌティウス司祭。彼はマカリオス聖人と共に、スキトスの修道士たちを統率する重責を担っていた。

「使徒たちょ、聖人たちょ、義人たちょ」と彼は言った。
その後、再び尊者のもとへ戻ると、彼は死者を称えたことを報告した。
「それで、今度は死者たちは何も答えてくれなかったのか？」と尊者は尋ねた。
「いいえ、何も答えませんでした」と彼は言った。
そこで、尊者は彼に次のような教えを与えた。
「ほら、」と彼は言った。「あなたが死者を罵った時も、彼らはあなたに何も答えなかったし、あなたが称賛の言葉で彼らを喜ばせた時も、彼らはあなたに何も答えなかった。　だから君も、もし救われたいのなら、死人のように振る舞いなさい。――侮辱されても怒らず、称賛されても驕らないこと。これらの死人のように振る舞えば、救われるだろう。
兄弟たちは、尊者マカリアについて次のような話も語っていた。もし兄弟たちの誰かが、聖人であり偉大な人物として彼のもとを訪れても、尊者はその者とは何も話さなかった。しかし、もしある修道士が、尊者を少しも敬うことなく、彼にこう言ったとしたら――
「アッバ！ あなたがラクダの追い人だった頃、勝手に硝石を盗んで売っていた時、先輩たちから殴られなかったのですか？」
そして、誰かがこのように尊者にお話しかけると、尊者は喜んでその人と語り合い、その人のあらゆる質問に快く答えてくださった。
ある時、ニトリア山に住む長老たちが、マカリオ聖人のいるスキートへ次のような願いを伝えさせた。
「父ょ！ 多くの兄弟たちがあなたのもとへ訪れる手間を省くため、あなたが主のもとへ旅立たれる前に、どうかあなたご自身が私たちのところへお越しください。」
尊者は彼らの願いを聞き入れ、ニトリア山へと向かった。彼の到来を知ると、そこに住むすべての修道士たちが集まり、長老たちは兄弟たちの霊的啓発となるような言葉を述べてくれるよう、熱心に彼に懇願した。尊者は涙を浮かべながら、次のように語り始めた。
「兄弟たちょ！　泣こうではありませんか。そして、涙が私たちの目から流れ出し、私たちを清めてくれるように。そうしてこそ、涙が苦しみの中で私たちの肉体を焼き尽くすあの場所へ移る前に、私たちは清められるのです。」
尊者の教えに耳を傾け、皆は涙を流し、ひれ伏して彼にこう懇願した。
「父ょ！ 私たちのために主にお祈りください。」
ある時、聖マカリオスは、まだエジプトに住んでいた頃、自分の小部屋で、そこにあった物を盗んでいる泥棒を捕まえた。小部屋の外にはロバが繋いであり、泥棒はそのロバに盗んだ品物を積んでいた。　聖人はこれを見て、自分がその部屋の主であることを泥棒に悟らせず、あたかも他人であるかのように振る舞った。そして、泥棒を妨げるどころか、自ら進んで彼を手伝い、品物を持ち上げてロバに載せるのを助けた。その後、彼を平然と見送ると、心の中でこう考えた。
「私たちはこの世に何も持ってこなかったのだから、ここから何も持ち去ることはできないのは明らかだ。すべては主が与えてくださったものであり、主の御心通りにすべては起こる。すべてのことにあって、神が祝福されますように！」
このマカリア聖人について、修道士たちは、彼がまるで地上の神のようになったと語っていた。なぜなら、神が全世界を見渡しながらも罪人を罰しないのと同様に、マカリア聖人もまた、目にする人間の弱さを覆い隠していたからである。そして彼は、まるで見ていないかのように見、まるで聞いていないかのように聞いていた。
ある時、聖マカリオの弟子の一人が、手作りの品――かごや藁マット――を売るために町へ向かった。　町で、ある娼婦が彼と出会った。彼女は美しい若者を目にして心を奪われ、あたかも彼が売っている籠を買いたいかのように装って、彼を自分のところへ招き入れた。修道士は彼女の悪巧みに気づかず、彼女の家に入った。その女は籠の一つを手に取り、修道士に「いくらで売ってくれるの

か」と尋ね始めた。　しかし間もなく、彼女は彼に淫らな言葉を囁き始め、古代にエジプトの女が貞潔なヨセフを誘惑しようとしたのと同様に、彼を罪へと誘おうとした。修道士は、すでに罪の瀬戸際に立っていたため、自分が大きな危機に瀕していることに気づき、心を天に向け、こう祈り始めた。

「キリストよ、王よ！　御自身の預言者をクジラの腹から救い出された方よ、御自身の聖人、私の父マカリアの祈りによって、私をもこの罪と魂の死から救い出してください。」

するとたちまち、かつて預言者ハバククが天使に抱き上げられたように、彼は目に見えない御手によって抱き上げられ、自分の修道室の真ん中に置かれた。そこで彼は、尊者マカリアの姿を見た。尊者は、弟子に降りかかった災いから彼を救い出してくれるよう、神に熱心に祈っていた。というのも、尊者はその修道士に何が起きたのかを知っていたからである。　彼は心の目で、遠くにあるものをあたかも近くにあるかのように鮮明に見ることができた。弟子を見つけた聖人は、こう言った。

「わが子よ！　人を愛する神に感謝を捧げよう。神は、その神聖な力によって、あなたを罪の堕落から救い出し、かつて使徒フィリポをアゾトへ導かれたように（使徒行伝8:39）、蛇の口や地獄の門からあなたを救い出し、あなたの独房へと導いてくださったのだから。

聖マカリアの祈りは、神の前でこれほどの力を持っていたのです。またある時、聖人自身も空中に引き上げられ、途方もない距離を越えて、向かうべき場所へと運ばれました。彼は修道院から籠を運んでいましたが、長い道のりに疲れ、休むために座り込みました。その時、彼は主にこう祈りました：

「神よ！ 私が疲れ果てていることを、あなたはご存知です。」

するとたちまち、聖人は向かうべき川のほとりにいた。

ここで、この聖なる父の安らかな最期についても述べておくのがふさわしいだろう。そのことについて、彼の伝記を著したセラピオンは次のように語っている。

ついに、尊者マカリオスもまた、死すべき人間として死に身を委ねる時が来た。彼はすでに九十七歳という高齢に達していたからである。その死の時は、尊者にとって未知のものではなかった。彼がこの世を去る少し前、二人の威厳ある人物が幻視の中に現れ、こう告げた。

「喜びなさい、マカリオよ！」

現れた二人のうちの一人は、隠遁者たちの師であり指導者である聖アントニオであり、もう一人は、共同修道生活の創始者である聖パホミオであった。その後、現れた二人はマカリオにこう告げた。

「主イエス・キリストが、あなたにその喜びに満ちた死を告げるために、私たちを遣わされました。今日から九日目に、あなたは永遠の命へと旅立つでしょう。その日、私たちも再びあなたのところへ来て、喜びをもってあなたを連れ出し、私たちと共に主の御座の前に進み出て、不死の命を享受するのです。」

そして、「平安あれ」と告げると、聖人たちはマカリオの目の前から姿を消した。その時、神聖なるマカリオは弟子たちを呼び寄せ、こう言った。

「子らよ！　今や、私がこの地を去る時が来た。私はあなた方を神の慈しみに委ねる。それゆえ、父祖の規則と断食者の伝承を守り続けなさい。」

さらに、聖人は、徳の高い生活において他者よりも優れていると知っていた数名の弟子たちに、霊的な年齢においてまだ幼子のような、新たに修道生活に入る者たちの世話をするよう託した。その後、弟子たちに手を置き、十分に教えを授け、彼らのために祈りを捧げた後、尊者マカリオスは死の準備を始めました。尊者アントニオスとパホミオスが現れてから九日目が過ぎたとき、ケルビムが多くの天使たちを率いて尊者マカリオスの前に現れ、こう言いました。

「立ち上がれ、主の従者よ。そして、我らと共に永遠の命へと移りなさい。目を上げて周囲を見渡せ。全能者が、あなたを御許へ導くために、どれほど多くの無形の聖人たちの御姿を遣わされたか、見てごらん。　見よ、ここに使徒たちの集いがあり、預言者たちの群れがあり、多くの殉教者た

ち、聖主教たち、断食者たち、聖人、そして義人たちがいる。今、あなたの魂を私に委ねよ。神は、その魂が地上の生涯を送る間も、私がそれを守るよう命じられたのだ。　今や肉体の束縛から解き放たれたその魂を、あたかも偉大な宝物であるかのように、私は光栄をもって受け入れ、敵対する勢力を乗り越えて、神の御座へと捧げ、それが世界の初めから神の御座に侍るすべての聖人たちと共に、永遠に喜びを分かち合えるようにいたします。

このようなケルビムの言葉を聞いた後、至福のマカリオスは、その場にいたすべての人々と別れを告げ、彼らのために神に祈りを捧げた。そして、目を天に向け、両手を天に向かって広げ、こう宣言した。

「主よ、私の霊を御手に委ねます！」

そして、この言葉を残して、その至福の魂を主にお委ねし、弟子たちは彼を深く悼んだ。

聖セラピオンの伝記著者[1211] は、聖マカリオの弟子の一人である聖パフヌティオスから聞いた次の話を付け加えている。マカリオの聖なる魂がケルビムによって迎えられ、天へと昇っていったとき、ある修道士たちは心の目で、遠くに立つ空の悪魔たちが叫んでいるのを見たという。

「マカリオよ、なんとあなたは栄光に浴したのだ！」

聖人は悪魔たちにこう答えました：

「私は恐れています。自分が何か善いことをしたとは、微塵も思えないからです。」

すると、マカリアの魂が進む道のさらに上方にいた悪魔たちは、叫んだ。

「まことに、お前は我々の手から逃れたな、マカリイよ！」

しかし、彼は言った。

「いや、まだ逃れなければならないのだ。」

そして、聖人がすでに楽園の門にたどり着いたとき、悪魔たちは激しい叫び声を上げて叫んだ。

「逃れた、逃れた。」

すると、マカリオスは力強い声で悪魔たちに答えた。

「そうだ！　わがキリストの力に守られて、私はお前たちの策略を逃れたのだ。」

これこそが、我らの尊い父マカリオス聖人の生涯、死、そして永遠の命への移行である[1212]。

聖人の生涯の物語を終えて、父と子と聖霊、唯一の神を賛美しましょう。神は聖なる御使いたちによって、永遠に賛美されています。アーメン。

コンダク、第4調：

主は、あなたを節制の家に真に据えられました。それは、朽ちることのない星のように、地の果てを照らす光として、父たちの父、尊きマカリアよ。

[1211] セラピオン――トゥムイト（下エジプト）の司教であり、4世紀初頭の傑出した教会指導者の一人である。彼は『修道規則』を著した。　また、彼の『修道士への手紙』、『エジプトのマカリオス聖人の伝』（コプト語）およびその他の著作も知られている。セラピオンは正統信仰の熱心な擁護者であり、そのために流刑に処されることさえあった。

[1212] 聖マカリオは391年頃に逝去した。聖マカリオが修業に励んだ場所は、今もなお「マカリオの荒野」と呼ばれており、そこには彼の名を冠した修道院がある。聖人の遺骨はイタリアのアマルフィにある。　――聖マカリオの熟達した知恵による貴重な遺産として、五十の格言、七つの訓示、そして二通の手紙が残されている。聖マカリオの対話や訓示の主題は、内面的で霊的な生活であり、とりわけ、瞑想的な隠遁の道においてそれがどのように実践されるかという点に重点が置かれている。　その主題は深遠で理解しがたいものですが、この経験豊かな師の対話と教訓は明快で分かりやすいものです。私たちの中にはあまり馴染みのない「霊的なもの」も、聖マカリアの口から語られると、心と理性に深く響くものとなります。　霊的な高みゆえに曖昧になりがちな事柄も、聖マカリアにおいては、常に単純であり、それゆえに一層印象深い比喩やイメージによって、理解に近づけられている。

別のコンダク、第1調:

殉教者たちの列に加わり、祝福された生涯を終え、柔和な者たちの地においてふさわしく安息なさる、神に愛されたマカリオよ。あなたは荒野をまるで都のように住まわせ、奇跡の神から恵みを受けられた。それゆえ、私たちはあなたを崇める。

我らの尊き父、アレクサンドリアのマカリオスの生涯

記念日：1月19日

アレクサンドリアの聖マカリオスは、アレクサンドリアの町[1213] の出身であった。彼は若い頃は野菜商人をしていたが、40歳の時に聖なる洗礼を受けた。　その後、世俗を捨てて修道士となり、修道生活における修行と労苦に十分に励んだ後、聖職に叙階される栄誉に浴し、それに伴い、「ケリ」と呼ばれる、ニトリアとスキトの間にあるエジプトの砂漠に位置する修道院の院長に就任した。彼はエジプトの聖マカリオスと最も親しい友人であり、ヴァレンティヌスの治世中、アレクサンドリアの偽司教であるアリウス派のルキオスの陰謀により、共に故国から追放された。彼はこの聖マカリオスと幾度も共に暮らした。　二人のマカリアは、その性格や生活様式において互いに非常に似ており、同じ師であり指導者であるアントニオス大聖人を持っていた。彼らはその弟子として、徳のある生活をより高めるための教えを何度も受けたのである。エジプトのマカリアの方が年長であり、先に主のもとへ旅立った。　一方、このアレクサンドリアのマカリオス聖人は、エジプトのマカリオスの死後、さらに数年間生き続けた。ラウサイコスのパラディオス司教は、アレクサンドリアのマカリオス聖人について次のように記している。

「私は、聖マカリオス・エジプトスと友であり、敬虔さにおいて競い合った人物――彼と同じ名を持つ者――を見た。　私が指すのは、アレクサンドリアの聖マカリオスである。彼は「ケリ」と呼ばれる地域で長老を務めており、私もそこで九年間を過ごした。そのうち三年間は聖マカリオスと共に暮らしたが、彼の神に喜ばれる生活の行いや奇跡のうち、あるものは私自身が目撃し、他のものについては、彼と以前共に暮らしていた人々から聞いたのである。　ある時、聖アンソニー大父が、ロープを編んだり籠を編んだりするために集めたナツメヤシの枝を見かけた聖マカリアは、その枝を一束譲ってほしいと頼んだ。すると、聖アンソニーはこう答えた。

「『*隣人のものを欲してはならない*』（申命記5:21）と書かれている。」

しかし、彼がその言葉を口にした途端、すべての枝が、まるで火にさらされたかのように、突然乾いてしまった。これを見たアントニウスはマカリオスに言った。

「見よ、聖霊があなたの上に宿った。あなたは私の後を継ぎ、私の業を継承する者となるだろう。」

しばらくして、尊者マカリオスは荒野を旅していたが、長旅のせいでひどく疲れ果てていた。すると突然、悪魔が現れてこう言った。

「お前はアントニオスの恵みを受けたではないか。なぜそれを利用せず、旅の糧や活力を神に求めないのか？」

聖人は彼にこう答えた。

「主こそが私の力であり栄光です。どうか、神のしもべを誘惑しないでください。」

すると悪魔は、幻影を用いて聖人を誘惑し始めた。聖人の眼前には、様々な食料を積んだラクダが砂漠をさまよっている姿が現れた。　聖人が、まるで自分に近づいてきたかのようなラクダに気

[1213] そのため、「アレクサンドリアの」、あるいは「都市の」と呼ばれるのである。彼の生年は295年とされる。

づき、それが幻影であると悟ると、祈りを捧げ始めた――すると突然、その幻影は大地に飲み込まれてしまった。

ある日、アレクサンドリアのマカリオス聖人が、スキトにいたエジプトのマカリオス聖人のもとを訪れた。　そして、二人が旅立ち、ナイル川を渡ろうとしたとき、大きな渡し船に乗らなければならなかった。その船には、威厳と華やかさを漂わせた二人のトリブヌス（千人隊長）も乗り込んでおり、彼らは銅製の戦車、　金箔を施した手綱を付けた馬、そして鎖や金の帯で身を飾った兵士、武器持ち、護衛たちからなる随行団を従えていた。　これらのトリブノイたちは、ぼろぼろの服を着て隅に立っている二人の尊い長老たちに気づくと、彼らの謙虚で質素な生活を称賛し、千人隊長の一人が長老たちにこう言った。

「世を軽んじるあなた方は、まことに幸いである。」

これに対し、アレクサンドリアのマカリオスはこう答えた。

「我々は確かにこの世を軽んじていますが、あなた方こそがこの世に嘲笑されているのです。知っておきなさい。あなたが口にしたその言葉は、あなたの意志によるものではなく、預言的なものなのです。なぜなら、我々二人は共にマカリオス、すなわち『幸いな者』と呼ばれているからです。」

アレクサンドリアのマカリオスのこの言葉に心を打たれたトリブーンは、家に帰ると衣服を脱ぎ捨て、財産を貧しい人々に分け与え、隠遁生活を選んだ。

ある時、アレクサンドリアのマカリア聖人に、とても美味しそうな新鮮な果実が送られてきて、彼はそれを食べたいと思った。しかしその後、自制心をもってその欲求に打ち勝とうと決意し、同じ食べ物を欲しがっていた、より体力の弱い兄弟の一人にその果実を送り返した。　しかし、その兄弟も、送られてきたものを受け取ると、自分自身がひどく空腹であったにもかかわらず、同じように振る舞った。こうして、その果実は一人からもう一人へと回され、多くの兄弟たちの元を巡った後、最後の一人の兄弟から再び聖マカリオのもとに戻ってきた。そして、誰もそれを口にしようとしなかったため、貴重な贈り物として、無傷のまま返されたのである。　聖マカリオスは、その果実が修道者全員の間に回ったことを知ると、大いに驚き、修道者全員のそのような節制の美徳に対して神に感謝を捧げた後、自身もそれらを一切口にしなかった。

また、聖マカリオは、誰かが何らかの偉業を成し遂げていることを知ると、自らあらゆる手段を尽くしてそれに倣おうとし、同じことを入念に実行した。 例えば、タヴェンク修道院（[1214] ）に住む修道士たちが、大四旬節の間、火で調理された料理を一切口にしないことを知ると、彼は7年間にわたり、火で調理されたもの――焼いたものであれ、茹でたものであれ――を一切口にしないことを自らの戒律と定めた。　さらに、マカリオス聖人はその修行をさらに厳格にし、硬いミレットや水に浸した種子以外は、パンも煮物も一切口にしないようにした。聖人はこのような禁欲生活の中で、実に7年間を過ごした。　ある日、ある別の修道士が一日につきたった1ポンドのパンしか食べないという話を耳にし、彼に倣おうとしたマカリオスは、パンを細かく砕いて、手をかろうじて差し込めるほど開口部が狭い器に入れた。　これに伴い、マカリオス聖人は、その器に一度手を差し入れた際に手に取れる分だけのパンを、一日のうちに食べることを自身の掟とした。

これは、前述のパラディオスが語っているように、聖マカリオスにとって極めて厳しい肉欲の抑制となった。というのも、聖マカリオスは後に微笑みながら次のように語ったからである。

[1214] タヴェンヌ修道院は最初の共同生活修道院であり、上（南）エジプトのタヴェンヌ、その古都ビブの北、ナイル川のほとりに位置していた。　西暦340年頃に聖パホミオス大聖人（記念日は5月15日）によって設立され、その厳格な共同生活修道院規則は、キリスト教世界へと急速に広まった。　タヴェンナ修道院は、古代キリスト教の修道生活史において極めて重要な位置を占め、パホミオスの規則の成功は極めて大きかったため、彼が亡くなる前から、タヴェンナとその周辺には約7000人の修道士が集まっていた。　その後、タヴェンナ――その名称は当初ナイル川にある一つの島を指していたが、後にパホミオスとその弟子たちが定住した川沿いの周辺地域にも広まった――は、その修道院群で名声を博した。

「私は器の中で何度もパンを何切れも掴もうとしたが、器の口が狭かったため、それらを引き抜くことができなかった。このように、私の器は、私が望むほど食べることを許してくれなかったのだ！」

このように飢えながら、マカリオスは一日につき小さなパンの切れ端を一つだけ食べ、水も同様の量しか飲まずに、三年間を過ごした。

また、食事用の油は、一年の間にセクスタリウス一つ分[1215] しか用いなかった。ある時、眠気を完全に克服しようと、彼は二十日間、昼夜を問わず小部屋の屋根の下に入らず、昼は灼熱の暑さの中、夜は寒さで震えながら、眠らないよう全力を尽くしてその周辺に留まっていた。 そして、後に彼が他者の戒めとして語ったところによると、そのような苦行のせいで彼の脳は枯渇してしまい、もしさらに長く独房に入らず眠らなかったならば、正気を失っていたであろう。聖人はこれに付け加えてこう述べた。

「私の力の及ぶ限り、眠りを克服したが、眠りを求める人間の本性には打ち勝つことができず、それゆえにそれに従わざるを得なかったのだ。」

ある時、マカリア聖人は淫欲の悪魔に激しく誘惑された。この敵を打ち負かすため、マカリアは遠く離れた荒野にあるスキトの沼地で、六ヶ月間、裸のまま座り続けることを決意した。そこには、スズメバチほどの大きさの蚊が大量に生息しており、野生のイノシシの皮さえも噛み破ることができるほどだった。 聖人はこれらの蚊に激しく刺され、中には彼がハンセン病にかかっているのではないかと疑う者さえいた。六ヶ月後に彼が自分の小部屋に戻ったとき、弟子たちは声でかろうじて、それが彼らのアッバ・マカリアであることを認識した。しかし、聖マカリアは再び自らを蚊による同様の苦行にさらすことを決意した。 これは、ある日、彼の足を激しく悩ませていた蚊を殺し、そこから大量の血が流れ出た後のことだった。その後、彼は悔い改め、自らを殺人者であり復讐者であると責め続け、裸の身をさらして蚊に刺されるという形で、自らに復讐を果たすまでその自責の念を抱き続けた。

またある時、聖人は庭園と、「キポタフィオン」と呼ばれる墓を見学したいと願った。そこには、ファラオの時代に生きたエジプトの魔術師イアニウスとイアムブリウス（出エジプト記7:11, 22, 8:7）が埋葬されており、そこで悪霊たちと戦おうとしたのである。 というのも、その場所には、前述の魔術師たちが魔術によって集めた、極めて凶暴な悪霊が数多くいると言われていたからである。それらの魔術師たちは兄弟同士であり、その狡猾さと卓越した魔術の技量ゆえに、ファラオから大いに重用され、エジプト全土において極めて大きな権力を握っていた。 砂漠の僻地で、彼らは四角い石を使って庭園を造り、その中に卓越した技術で自分たちの墓を築いた。その墓には大量の金を納め、その周囲には多種多様な木々を植え、また、その場所は低地で湿気が多かったため、大きな井戸を掘った。 魔術師たちがこれらすべてを整えたのは、死後、まるで楽園のように、その場所にあるあらゆる恵みを享受しながら、そこで永遠に生きられると固く信じていたからである。 尊者マカリオスはその場所への道を知らなかったため、船乗りたちが海を渡るように星を頼りに進み、そのようにして徒歩で砂漠全体を横断した。 その際、マカリオスは数本の雄しべを持ち歩き、一日の行程を終えるたびに[1216] 地面に一本ずつ突き刺していった。そうすることで、その目印を頼りに戻ってくることができるようにするためであった。 そして、九日かけて砂漠を横断し、その果てにある果樹園に近づいたとき、夜が更けるにつれて旅の疲れを少し癒やそうと眠りについた。その時、悪魔、 ——キリストの修道者たちの永遠の敵——は、マカリオスが道しるべとして置いていた雄しべをすべて集め、聖人が眠っている間に、その頭のそばに置いた。マカリオスが目を覚ますと、それらの雄しべがすべて自分のそばに置かれ、束ねられているのを見つけた。 これは神の御心によるもので

[1215] セクスタリウスは、古代ローマの液体容量単位であり、その容量は現在のボトル2本分に相当する。

[1216] ポプリシュチェは、私たちの690サジェンに相当した。

あり、聖人の功績をさらに際立たせるため、彼が雄しべに頼るのではなく、かつてイスラエルを四十年にわたりこの広大な荒野を導いた火の柱（出エジプト記14:19–20）のように、神の助けに頼るよう導くためであった。その後、聖マカリオスは自身の旅について次のように語った。

「私が果樹園――いわゆる墓地――に近づいたとき」と彼は語った。「七十体もの悪魔が様々な姿で私に向かって駆け寄ってきた。その中には大声で叫ぶ者もいれば、恐ろしい怒りを込めて私に向かって歯ぎしりをする者もいた。また、カラスのように飛び回り、私の顔に飛びかかってはこう叫んだ者もいた。

「マカリイよ、ここで何を求めているのか？　なぜ我々のところへ来たのか？　我々がかつて、お前たちの修道士たちを誘惑したことがあるというのか？　お前は、かつて我々のものだったものを、お前の住処で、お前と同じような者たちと共に支配しているではないか。お前は、我々のような悪魔たちを追い出した荒野を支配しているのだ。我々は、お前とは何の共通点もない。　なぜ我々の地へ来たのか？　隠者なら荒野に満足すべきだ。この場所は、それを整えた者たちが我々に譲り渡したのだ。お前はここに留まることはできない。なぜ我々の領地に入ろうとするのか？　この場所を整えた兄弟たちの埋葬を行って以来、生きている人間が一人として足を踏み入れたことのない場所なのに。

そして、悪霊たちが激しい叫び声を上げると、聖マカリオスは彼らにこう言った。

「ちょっと中に入って、見てからここを去るだけだ！」

悪魔たちは彼に言った。

「お前の良心にかけて、それを約束しろ。」

キリストのしもべは答えた。

「そうしよう。」

すると、悪魔たちは姿を消した。マカリオスが果樹園に入ろうとしたとき、恐ろしい姿の悪魔が抜刀して現れ、彼の行く手を阻んだ。聖マカリオスは悪魔に言った。

「お前は剣を手に私に向かってくるが、私は主サバオトの名において、イスラエルの神の力によって、お前に向かっていくのだ（サムエル記上17:45）。」

すると、悪魔は彼から逃げ去った。　果樹園の中に入ると、聖人はそこにあったものすべてを観察した。すなわち、鉄の鎖に吊るされた古い銅の桶が一つあるだけの井戸、太陽の熱で乾ききって中身が何も残っていないザクロの実、そして金でふんだんに装飾された美しい墓廟であった。　すべてを詳しく調べ終えると、聖人は何の支障もなくそこから出て、二十日が過ぎた後、自分の修道室へと戻った。帰路の途中、道中に持参したパンと水がすべて尽きてしまった。マカリオスは飢えと渇きで衰弱し、倒れそうになった。　その時――彼が後に自ら語ったところによると――白い服をまとったある乙女の幻影が彼の前に現れ、彼から遠く離れた場所――およそ一ヴェルスタほど――で、澄んだ水が入ったバケツを運んでいた。　少女は頻繁に立ち止まり、彼に水を見せながら、水を飲ませてあげると約束して、自分のところへ来るよう呼びかけた。しかし、聖人は彼女のところまでたどり着く力がなかった。とはいえ、喉の渇きを癒やせるかもしれないという期待に駆られ、彼は並外れた努力を払いながら、三日間も彼女の後を追った。その間、少女は常に彼の前方に現れていた。　すると、水牛の群れ（あちらの方には非常に多く生息している）が現れ、そのうちの1頭が、小さな子牛を連れて、疲れ果て、力尽きた老人の前に立ちはだかった。その乳首からは乳が流れ出していた。その時、聖人は上の方からこう言う声を聞いた。

「近づきなさい、マカリイよ。その乳を飲みなさい。」

彼は近づき、長い間その乳を飲み、体を回復させた。

聖マカリオスはこれに次のように付け加えた。「わが主は、私にさらに大きな御慈悲を示し、私の弱さがただ御自身の善き摂理にのみ頼るよう教えるために、このような奇跡をお示しになった。主の御命により、私はその水牛に、私の庵まで私についてきて、道中ずっと私を養うよう命じました

。従順な水牛は、その創造主の御命に従い、確かに私についてきて、子牛を自分の乳首に近づけず、私一人だけを養ってくれたのです。」

かつて、この聖なる、そして驚くべき人物は、修道士たちが飲むための井戸を掘っていた。尊者が掘っていたその場所には、多くの枯れ枝や茨が生えており、そこから毒蛇が這い出てきて、聖人を噛みついた。

すると聖人は、両手でアスピドの両顎をつかんで引き裂きながら、こう言った。

「わが主があなたを私のもとへ遣わされたのではないのに、どうして私に近づき、私を噛むなどという大胆なことをしたのか？」

そして、なんと奇跡か！ 毒蛇の咬み傷は、聖人に何の害も及ぼさなかった。

タヴェンニシオ派について、彼らの生活規律が非常に厳格であるという話を再び耳にした聖マカリオスは、修道服を世俗の服に着替え、彼らの元へ向かった。砂漠を十五日間旅した後、聖人はまるで世俗の人であるかのように、タヴェンニシオ派の修道院に到着した。 そこで彼は、経験豊富で洞察力に富み、預言の賜物を持つアルヒマンドリト・パホミオス[1217] に会いたいと願った。しかし、当時、パホミオスには、マカリオスが何者であるか、まだ神によって明らかにされていなかった。パホミオスの元へ入ると、マカリオスはこう言った。

「父よ、どうか私をあなたの修道院に受け入れてください。私はそこで修道士として過ごしたいのです。」

パホミオスはこう答えた。

「あなたは年老いており、労働する力もないため、修道士になることはできません。ここの兄弟たちは若き日から修道生活の労苦に慣れ親しんでいますが、あなたはすでに高齢であり、その過酷な修行に耐えられず、衰弱してここを去り、私たちを中傷することになるでしょう。」

そしてパホミオスは、初日も二日目も彼を受け入れず、その状態は七日目まで続いた。マカリオスはその間ずっと厳しい断食を続け、七日目にアルヒマンドリトにこう言った。

「アッバよ、私を受け入れてください！もし私が断食せず、他の兄弟たちと同じことをしなければ、その時は私を修道院から追放するように命じてください。」

そこで聖パホミオスは兄弟たちに、彼を受け入れるよう命じた。兄弟たちは千四百人おり、マカリオスは彼らによって修道院に受け入れられた。その後しばらくして、聖四旬節の断食が始まり、マカリオスは兄弟たちがそれぞれ自分の力の範囲内で断食しているのを見た。 ある者は に夕食をとり、ある者は二日が過ぎた後に、またある者は五日が過ぎた後に食事をし、ある者は一晩中祈りを捧げ、日中は仕事に励んでいた。 彼らに倣って、マカリオス自身もナツメヤシの枝を水に浸し、部屋の片隅に立ち、四旬節の間、復活祭まで、パンも水も口にしなかった。ただし、日曜日に少量の乾燥したキャベツの葉を食べることは例外としていた。 彼がそうしたのは、他の修道士たちに自分が食べているのを見せるため、そして高慢という罪に陥らないためだけだった。隅に立ちながら、聖マカリオスは絶えず働き、労苦から休むことなく、その間一度も座ったり横になったりすることはなかった。 もしやむを得ずその場を離れることがあっても、戻ってくると再び立ち続け、口を開くことも誰とも話すこともなく、ただ沈黙のうちに心を尽くして神に祈りを捧げていた。聖人のそのような修行ぶりを見て、その修道院の修行者たちは自分たちのアッバに怒りを覚え、こう言い始めた。

「なぜ、私たちを恥じ入らせるような、そんな肉体のない者をここへ連れてきたのか？ 彼を追い出すか、さもなければ私たちは修道院を去る。」

兄弟たちからのこの言葉を聞き、マカリオの厳しい断食について知った聖パホミオスは、神に祈りを捧げ、この来訪者が一体誰なのかを明らかにしてくださるよう願った。 そして、その人物が

[1217] すなわち、聖パホミオス大聖人のことである。

マカリアであることが明らかにされた。そこで、聖パホミオスは聖マカリアの手を取り、彼を教会へと案内し、親しみを込めて抱きしめながら言った。

「ようこそお越しくださいました、敬愛すべき父よ！あなたがマカリオであることは知っていますが、あなたは私にその名を明かされませんでした。長年にわたりあなたのことを耳にし、ぜひお会いしたいと切に願っていました。私の弟子たちが、自らの功績や断食を誇り、高慢にならないよう、謙遜を教え導いてくださったことに感謝します。あなたは私たちに多大な恩恵をもたらしてくださいました。」

他の兄弟たちもマカリオスのことを聞きつけ、四方から大勢集まってきて、親しみを込めて彼に口づけをし、彼らのために祈ってほしいと頼んだ。尊者マカリオスは、皆に教えを説いた後、自分の場所に戻った。

この無執着な人物、尊者マカリオスは、さらに次のようなことも自ら語っていた。

「ある時、私は自分の心を、この世の何事にも思いを巡らせず、ただ唯一の神を絶えず観想し、一瞬たりとも神から離れることのないように向けたいと願った。この神への黙想のために、私は五日間を定めた。　そこで、誰も私のところに入れないように、また誰とも会話できないように、私の独房と中庭を閉ざし、月曜日から、私は心に向かってこう命じた。「見よ！天から降りてはならない！　そこには、天使たち、大天使たち、ケルビム、セラフィム、すべての天の軍勢、そしてそれらを創造された神がおられる。だから、天にとどまり、地上の思念に陥らないよう、天の下には降りてはならない。」　このようにして、私は二日二晩にわたり、心を天に向け続けていたが、それによって悪魔を激しく怒らせてしまった。悪魔は炎と化して、私の小部屋にあるすべてのものを焼き尽くし、私が立っていた藁マットさえも燃え上がり、私自身も焼けてしまうのではないかとさえ思った。　これを恐れて、私は三日目にその決意を捨てた。もはや心を天上の思念に留めておくことができなかったため、高慢の罪に陥らないよう、神の御心により、地上の思念へと降りていったのである。

このマカリアス聖人について、パラディオス司教は次のように語っている。

「ある時、彼を訪ねたところ」と彼は語る。「彼の修道室の前で、ある田舎の司祭を見かけた。その司祭の頭は、壊疽と呼ばれる病に蝕まれており、後頭部からは口元まで見えたほどであった。彼は聖マカリオスに癒やしを求めてやって来たのだが、聖人は彼と話すことを望まず、面会を拒んでいた。そこで私も聖人に懇願し、こう言った。

「この不幸な者を憐れみ、彼に答えてください。」

しかし、聖人は私にこう言いました。

「彼は癒やされるに値しない。これは主からの懲罰だからだ。もしあなたが彼の癒やしを望むなら、彼に、これからは聖職の務めを辞めるよう勧めてほしい。」

私は聖人に尋ねた。

「なぜですか？」

すると、聖人はこう答えられた。

「彼は姦淫の後に聖体礼儀を執り行ったため、その報いとしてこのように罰せられているのだ。もし彼が神を畏れ、これまで恐れもせずに犯してきたその罪から離れるならば、神は彼を癒やしてくださるだろう。」

私が――とパラディウスは続けた――そのことをその長老に伝えると、彼は誓いを立てて、二度と聖職の務めを行わないと約束した。その後、尊者マカリオスはその長老を呼び寄せ、こう言った。

「神には隠されたことは何一つない、と信じているか？」

長老はこう答えた。

「はい、父よ、信じております。どうか、罪深い私のために、神に祈ってください。」

するとマカリオスは尋ねた。

「では、あなたは神の前で隠れることはできなかったのか？」

–はい、隠すことはできませんでした――と彼は答えた。

「もしあなたが自分の罪を告白し、その罪に対する神の懲罰を自覚しているのなら」とマカリオスは続けた。「それならば、これからは改心しなさい。」

そして、その長老は自らの罪を告白し、二度と罪を犯さず、聖職の務めも果たさず、世俗の人として生きることを誓った。　その後、聖マカリオスは彼に手を置き、神に彼のために祈りを捧げた。数日後、その長老は壊疽から癒やされ、頭髪も生え揃い、健康を取り戻して自宅へ戻り、神を賛美し、偉大なるマカリオスに感謝を捧げた。

尊者マカリオスは、さまざまな場所にいくつかの修道室を持っていた。一つは内陸の砂漠にあるスキテに、もう一つはリビアに、三つ目は「ケリウ」と呼ばれる場所に、そして四つ目はニトリウス山にあった。彼の修道室には、どれ一つとして扉も窓もなかった。　そして、聖マカリオスは四旬節の間、毎日、これらの小部屋で暗闇の中に身を置いていた。彼の小部屋の一つは、足を伸ばすことさえできないほど狭かったが、もう一つはより広々としており、そこで聖人は訪ねてくる人々と語り合った。その間、彼は悪霊に苦しむ数え切れないほど多くの人々を癒した。

パラディオスは、長年にわたり半身不随であったある高貴な乙女について回想している。彼女はテッサロニキから聖マカリオスのもとへ運ばれてきたのである[1218]。聖人は、二十日間にわたり聖油を塗って神に祈りを捧げることで彼女を癒やし、完全に健康な状態でその乙女を故郷の町へ送り出した。癒やされた後、彼女は各修道院に多額の施しを施した。

またある時、悪霊に取り憑かれ、水腫で全身が腫れ上がっていた少年が、聖者に連れてこられた。聖者は右手を少年の頭に、左手を心臓に置いて、神に祈り始めた。すると突然、少年は大きな声で叫び、直ちに彼の体から膨大な量の水が流れ出した。　その後、少年の体は以前のような自然な状態に戻った。聖油を塗り、聖水を振りかけた後、聖人は少年を父親に引き渡した。その際、聖人は少年に、十四日間は肉を食べず、ワインを飲まないようにと命じた。こうして聖人は少年を健康な体へと導いた。

人類の古くからの敵である悪魔は、聖マカリアの厳格な修道生活と、彼のもとに訪れる病人の数多くの癒やしに対して、激しく憤りを感じた。そこで悪魔は、虚栄心によって彼の心を誘惑し始めた。　聖人の心には、修道室を離れてローマへ向かうべきだという考えが浮かび始めた。その際、彼の心は、それに対するあらゆるもっともらしい動機を提示し、豊かな恵みと悪霊を追い出す賜物を持つ聖人が、ローマで苦しむ人々に多大な恩恵をもたらすことができると示唆した。　聖人は、誘惑する思いに激しく襲われながらも、長い間それらと闘い続けた。ついに、自分の小部屋の敷居に倒れ込み、足を部屋の外へと伸ばしてこう言った。

「悪魔どもよ、できるなら私を引きずっていけ。だが、私からは決して行かない！」

こうして、聖人はその敷居の上で、夜遅くまで横たわっていた。

夜になると、同じ誘惑が再び猛烈な勢いで彼を襲った。そこで聖人は、二チェヴェリク分の容量がある籠を取り、それを砂で満たし、肩に担いで荒野を歩き始めた。そこで、アンティオキア出身の修道士テオセビオスと出会った。彼は聖人にこう尋ねた。

「師よ！　何を運んでいるのですか？　その荷を私に譲り、ご自身は苦労なさらないでください。」

「私は、私を苦しめる者を苦しめているのです」とマカリオスは答えた。「彼が怠惰と無為にふけっているとき、彼は私に放浪するよう呼びかけるのです。」

[1218] ソロウン、あるいはテッサロニキ――マケドニアの極めて重要な古代都市は、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフェルメイ湾の奥深くに位置していた。　現在、この都市はテッサロニキという名で、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコにおける第一の商業・製造都市であり、非常に多くの人口を擁している。

こうして、長い間労苦を重ねた後、尊者は小部屋へと戻った。体は疲れ果てていたが、邪悪な思いには勝利を収めていた。

聖マカリオスの弟子である至福のパフヌティオスは、この聖人について次のように語っている。

――ある日、尊者は庭に座っていた。すると突然、ハイエナが駆け寄ってきて、歯に噛みついた盲目の子ハイエナを運んできた。マカリオスの足元に駆け寄ると、ハイエナはその子を彼の足元に放り投げた。　聖人はその子ハイエナを拾い上げ、その目に唾を吐きかけ、神に祈りを捧げると――子ハイエナは目が見えるようになった。ハイエナは子ハイエナを抱きかかえて逃げ去った。翌朝、彼女は再び尊者のもとに駆け寄り、巨大な羊の皮を運んできた。それを見た聖人はハイエナにこう言った。

「その皮はどこから手に入れたのだ？　まさか誰かの羊を食べたのか？　もし暴力を振るって手に入れたのなら、私は受け取らない。」

ハイエナは頭を地面に下げ、ひざまずくと、持ってきた皮を聖人の足元に置いた。しかし、聖人はその獣にこう言った。

「お前は、もうこれ以上貧しい人々を苦しめず、彼らの羊を食べないことを私に約束するまでは、私はこれを受け取らないと言ったのだ。」

するとハイエナは、まるで聖人の言葉に同意し、彼に従うことを約束するかのように、頭を垂れた。その後、聖マカリオスはハイエナからその皮を受け取り、砂漠の聖なる父たちを頻繁に訪れていた聖メラニア・ローマ人（12月31日没）にそれを贈った。　それ以来、この皮は「ハイエナの贈り物」と呼ばれるようになった。世を捨てた人々の驚くべき点は、神の栄光と聖人たちの名誉のために施しを受けた獣でさえ、その意味を理解し、祝福された者に贈り物を捧げたことにある。　預言者ダニエルのために獅子を従わせた方（ダニエル書14:31）は、ハイエナにも受けた恩恵を理解させ、感謝することを教えられたのである。

前述のパラディオスは、ある時、この尊者のもとを訪れ、思い悩みの念と落胆に苛まれていた（彼自身が後にそう語っているように）、こう尋ねた。

「アッバ・マカリオよ、私はどうすればよいのでしょうか。私を襲う思いが、『お前はここで何もしていない――ここから立ち去れ』と囁くのです。」

聖なる父マカリオスは彼にこう答えました。

「あなたもまた、その思いにこう言いなさい。『私はキリストのために、この城壁を守っているのだ』と。」

パラディオを戒めるために、尊者マカリオスは、尊者マルコ（記念日は3月5日）が、天使たち自身から神聖な秘跡の聖体拝領を受けた話を語った。聖マカリオスは、神聖な典礼の奉仕中に兄弟たちに聖体を与えていた際、その光景をこの目で見ていたのだ。

「私は決して」と彼は語った。「修道士マルコに神聖な秘跡を授けたことはない。しかし、祭壇から天使が彼に目に見えない形でそれを授けており、私はただ、それを授ける者の指を見ただけだったのだ。」

この尊者マルコは、若者の頃、旧約聖書と新約聖書全体を暗記しており、また非常に柔和で節制の身であった。

「ある日、自分の独房で特にやることもなかった私は」と聖マカリオスは語った。「すでにその頃には老齢となっていた彼のところへ行き、彼の独房の入り口のそばに座った。　私は彼を人間の中でも最も高潔な存在だと考えていた――実際、彼はまさにそうであった――そして（当時の私はまだ――とマカリオスは付け加える――純真で世間知らずだったのだが）、その長老が何をしているのか、あるいは何について語っているのかを知りたかったのだ。　一方、彼は修道室の中で、すでに百

歳を過ぎ、歯さえも抜け落ちてしまうほど老いていたにもかかわらず、自分自身と悪魔との戦いを続けていた。彼は独り言のようにこう呟いた。

「一体、何を望んでいるのだ、邪悪な老いぼれよ？　もうワインも飲み、聖油も味わったではないか。老いてなお、この飽くことのない腹の奴隷よ、さらに何を望むというのか？」

マルクは悪魔に向かってこう言った。

「私から離れろ、悪魔め！お前は私との戦いで老いぼれたのだ。　お前は私に肉体の弱さを与え、私がワインを飲み、オリーブオイルを味わうように仕向けた。お前は私を快楽主義者に変えたのだ。果たして、私はまだお前に何か借りがあるというのか？　お前が盗めるようなものは、私の中には何一つない。人類の敵よ！ ついに私から離れ去れ。

聖マカリオスはこのことをパラディオに語り、パラディオはその言葉を書き留めた。また、ルフィン司祭は、このアレクサンドリアの聖マカリオスの伝記に、次のような記述を加えている。

ある夜、悪魔がマカリオスの修道室の扉をノックして、こう言った。

「起きなさい、アッバ・マカリオスよ。大聖堂へ賛美歌を歌いに行こう。」

しかし、神の恵みに満たされていた彼は、敵の策略を見抜き、こう答えた。

「おお、偽り者よ、善を憎む者よ！　聖徒たちの集いとは、お前と何の交わりがあり、何の友情があるというのか？」

「マカリイよ、知らないのか」と悪魔は言った。「我々なしには、教会の聖歌も修道者の集まりも一つとして行われないのだ。さあ、行けば、我々の働きをこの目で見ることができるだろう。」

長老はこう答えた。

「主よ、この狡猾な悪魔を禁じ給え！」

そして、主に向かって祈りを捧げ、悪魔が自慢げに語ったことが真実であるかどうかを、主が明らかにしてくださるよう願い求めた。そして、真夜中の賛美の時間が来ると、マカリオスは大聖堂へ向かい、再び心の中で神に祈り、悪魔の言葉が真実であるかどうかを明らかにしてくださるよう願った。　しばらくして、聖人は教会の中で、まるで飛んでいるかのようにあちこちを素早く走り回る、小さなエチオピア人の少年たちの姿を見ました。修道院には、一人の修道士が詩篇を唱え、他のすべての兄弟たちは座ってそれを聞くという慣習がありました。　すると、これらの小さなエチオピア人の少年たちは、修道士一人ひとりのそばに腰を下ろして笑い、もし彼らが誰かの目に二本の指を触れると、その修道士はすぐに居眠りを始め、もし誰かの口に指を当てると、その人はすぐに正気を取り戻した。　また、ある修道士たちの前では女性の姿で現れ、別の修道士たちの前では、何かを作り出したり、持ち込んだり、様々な用事を済ませようとしているかのように振る舞った。そして、悪霊たちが誰かを嘲笑しながら見せつけた姿は、まさにその修道士たちが心の中で思い描いていたものと同じであった。　一方、一部の修道士たちの前では、悪霊たちが前述のような振る舞いを始めようとしても、ある力によって突然追い払われ、猛スピードで押し出され、もはや彼らの前に立ち止まることも、そばを通り過ぎることもできなくなった。　一方、祈りに全く無関心な、最も弱い兄弟たちに対しては、悪魔たちは彼らの首や肩にまたがり、彼らを辱めた。これを見た聖マカリオスは深くため息をつき、涙を流しながら神に祈り始めた。

「主よ！　どうかこの様子をご覧になり、黙っておられませぬように！　神よ、目覚め給え。そうすれば、あなたの敵は散り散りになり、あなたの御前から逃げ去るでしょう。私たちの魂は侮辱で満たされてしまったのですから。」

礼拝が終わると、アバ・マカリオスは修道士たちを一人ずつ呼び寄せ、礼拝中の賛美歌の間に何を考えていたかを問いただし始めた。皆がそれぞれの思いを告白すると、一人ひとりの思いが、まさに悪魔たちが彼の前で侮辱しながら思い描いていたことそのものであることが明らかになった。

このマカリオス尊者は、さらに別の、より驚くべき、そして恐ろしい話を語っていた。すなわち、修道士たちが聖なる秘跡に臨み、キリストの御体を拝領するために両手を差し伸べていた頃（当時はまだスプーンを使わず、現在でいうアンティドルのように、両手でキリストの御体を受け取り、尊い御血は聖杯から飲んでいた。これは聖金口ヨハネの時代まで続いており、聖テオクティスタの伝記にもその証言がある）、その時、尊者マカリオスは、エチオピア人の兄弟たちの一部が手に燃える炭を握らされ、司祭の手によって授けられたキリストの御体が祭壇へと戻ってしまうのを目撃した。一方、聖体拝領にふさわしい者たちからは、悪霊たちは遠くへ逃げ去っていた。その間、祭壇のそばには司祭と共に主の天使が立ち、司祭と共に神聖な秘跡を配るために手を差し伸べていた。

このように、聖マカリオス師は透視の力に恵まれ、聖体拝領にふさわしい者とふさわしくない者を識別し、悪霊によって吹き込まれる人々の思いを見抜いていた。

尊者マカリオスは、兄弟たちの益と教訓のために、他にも多くのことを語り、怠惰な者を戒め、様々な奇跡を行なった。このように神に喜ばれる生涯を送った後、尊者マカリオスは、生後100年を経て、安らかに主のもとへ旅立った[1219]。

今や彼は、他の尊い父たちと共に、永遠の命の中で、父と子と聖霊、すなわち三位一体の唯一の神を賛美している。罪深い私たちからも、神に永遠の栄光と誉れと礼拝が捧げられますように。アーメン。

聖殉教者エウフラシアの記念日

記念日：1月19日

聖処女エウフラシアは、ニコメディアの町[1220]　の出身であり、マクシミアヌス皇帝の治世[1221]に生きていました。彼女は名門の家系に生まれ、容姿端麗で敬虔であり、キリストに忠実なしもべとして仕えていました。　キリスト教徒への迫害の最中、聖エウフラシアは偶像崇拝者たちに捕らえられ、悪霊への生贄を捧げるよう強要された。彼女が従うことを拒むと、残酷に殴打されたが、彼女は勇敢にその暴行に耐え抜いた。拷問の後、聖エウフラシアは穢されるために一人の野蛮人に引き渡され、その男は彼女を連れ去って自分の家へ連れて行った。　聖女は、御自身を無傷で守ってくださるよう、清き花婿である主キリストに絶えず祈りを捧げていた。そして、不信心な野蛮人が聖女を寝室に連れて行ったとき、エウフラシアは彼に少しの間待ってほしいと頼み、ある奇跡の効力を持つ植物を渡すと約束した。

「もしあなたがこの植物を常に身につけていれば」と彼女は言った。「いかなる敵の武器も、あなたには及ばないでしょう。」

聖女は、まるで魔法使いであるかのように振る舞いながらそう語った。

しかし、野蛮人は彼女にこう言った。

「その植物は後でくれ。」

賢明な乙女はこう答えた。

「この草は女性の手では摘むことはできません。未婚の乙女だけが摘むことができるのです。もし乙女以外が摘んだ場合、その草には何の力も宿りません。」

[1219] アレクサンドリアの聖マカリオスの没年は395年頃とされている。エジプトの聖マカリオスと同様に、アレクサンドリアの聖マカリオスも教会文学者であった。彼の名で現在も知られているのは、1）30章からなる修道規則、 2) 修道士たちへの手紙；3) 魂の旅立ちと死後の状態に関する説教。

[1220] ニコメディア――小アジア北西部、マルマラ海の岸辺、ビフィニア地方に位置する、繁栄した都市である。

[1221] マクシミアヌス・ガレリウスは、ディオクレティアヌス皇帝（284–305年）の娘婿であり共同統治者であり、その後、ローマ帝国東部の皇帝となった（305–311年）。

そこで野蛮人は、エウフラシアがその植物を摘み取るまでは彼女に手を出さないことに同意した。庭に来て、ある植物を見つけると、聖女はそれを摘み取り、野蛮人に見せた。野蛮人は彼女に尋ねた。

「君が言っていることが本当かどうか、どうすれば分かるんだ？」

– それに対し、聖女エウフラシアは摘んだ植物を自分の首に当てて、彼にこう言った。

「鋭い剣を取り、両手で振りかぶって、できる限り強く私の首を斬りつけてください。そうすれば、あなたの剣が私に少しも傷一つつけられないことがわかるでしょう。」

野蛮人は聖女の言葉を信じ、剣を手に取り、振りかぶって激しく斬りつけ、聖エウフラシアの尊い首を切り落とした。彼女は死んで倒れた[1222] 。聖女に嘲笑されたと悟った野蛮人は、歯ぎしりした。　しかし、賢明な乙女は、汚れなく、その花婿であるキリストのもとへと旅立ち、私たちに貞操を守る模範を残した。彼女は、処女性を失うよりは死を選ぶことを選んだのである。

ケルキラの大司教、聖アルセニオスの記念日。

記念日：1月19日

聖アルセニオス、ケルキラの大司教[1223] は、パレスチナ出身の敬虔な両親の間に生まれた。若き頃から神への奉仕に身を捧げ、修道誓願を立てた。厳格な修道生活を送りつつも、聖人は高い教養を備えていた。　成人すると司祭の聖職に就き、その後しばらくしてケルキル大司教に叙任されました。大司教として、彼はその知恵、教導力[1224] 、そして権力者に対して無実の人々を幾度も擁護したことで名声を博しました。　こうして、すでに高齢となっていた彼は、コンスタンティノープルへ赴き、コンスタンティヌス皇帝 の「紫の血を引く者」[1225] による不当な怒りに脅かされていた自身の信徒たちのために請願を行った。コンスタンティノープルからの帰路、アルセニオスはコリント[1226] で病に倒れ、安らかに神のもとへ息を引き取った[1227] 。

2月2日

1月20日（旧暦）

尊者エウフィミオス大聖人の生涯

記念日 1月20日

[1222] 殉教者エウフラシアの死は303年に訪れた。

[1223] ケルキラ島――現在のコルフ島――は、イオニア海に浮かび、ギリシャ北部の西岸に近い。――聖アルセニオスは、コルフ島初代大司教であった。

[1224] その博学で著名なコンスタンティノープル総主教フォティオスは、聖アルセニオスと文通を行っていたが、彼への手紙の中で、ギリシャ文学にも精通した高潔な霊的生活を送る人物として、深い感嘆の意を表している。 – 聖アルセニオスは著述家としても知られており、聖油の秘跡に関するカノン、使徒アンドレアスへの賛辞、そして大殉教女バルバラの苦難に満ちた最期を描いた記述を著した。

[1225] コンスタンティノス・ポルフィロゲネトス、ビザンツ皇帝は、780年から797年まで在位した。

[1226] コリントは、アカイア地方で最も古く、著名で豊かな都市であり、イオニア海とエーゲ海の間に位置するコリント湾の南東端、美しく肥沃な平野に広がっていました。現在、古代コリントの遺跡は、クルントと呼ばれる現在のコリントの近くにあります。

[1227] 聖アルセニオスは8世紀末に没した。

聖エウフィミオスは、アルメニアのエウフラテス川に近いメリティナという町出身であった[1228]。両親のパウロとディオニシアは、ともにキリスト教徒であり、名門の家系に生まれ、美徳に満ちていた。彼らは長年にわたり不妊で子供に恵まれず、そのことを深く嘆いていた。　町の近くにあった聖殉教者ポリエウクトスの教会を訪れるたび、彼らは不妊が解消されるよう常に神に祈りを捧げていた。そしてある夜、彼らが熱心に祈りを捧げていたとき、ある神聖な幻が現れ、次のような声が聞こえてきた。

「慰められよ。神はあなたがたに、慰めを意味する名を持つ息子を授けてくださる。[1229]。なぜなら、その子が生まれるとき、神は御自身の教会に慰めをもたらされるからである。」

この幻の後、ディオニシアは息子を身ごもり、両親は彼が生まれる前から、その子を神に捧げることを誓った。　そして、ついに息子誕生し、彼らは彼をエウフィミオスと名付けた。当時、東方ではヴァレントが、西方ではその甥であるグラティアヌス[1230]が統治していた。アリウス派に悩まされていたキリストの教会たちには、まだ平和も安らぎも訪れていなかった。　コンスタンティヌスの息子コンスタンティウスの治世からヴァレントの死に至るまで、正信徒たちは40年近くにわたり、迫害と暴力を耐え忍んできた。しかし、聖エウフィミオスが生まれたとき、聖なる教会が抱えていたすべての苦難は慰めと喜びへと変わった。　エウフィミオスの誕生からまだ五ヶ月も経たないうちに、不敬虔な皇帝ヴァレントは、フラキアを荒らし回っていた蛮族に打ち負かされ、逃走の最中にアドリアノープル近郊の[1231]にあるある村の納屋に身を隠したが、そこで焼死した。このようにして、この不信心な者は、彼にとっていわば永遠の火への前兆とも言える一時的な火によって、恐ろしい最期を遂げた。この不信心な王の滅亡とともに、アリウス派の勢力もすべて滅び、まもなく、テオドシウス大帝[1232]が即位すると、聖なる教会には静けさと平和が訪れた。

それからそれほど長くは経たないうちに、エウフィミオスの父は世を去った。　一方、ディオニシアは自身の誓いを果たすため、少年エウフィミオスを、メリティン教会のオトリア司教[1233]の霊的指導者であった兄のエウドクシオス司祭のもとに連れて行き、かつてアンナがサムエルを神に捧げたように（サムエル記上1章）、自分の息子を神に捧げた。エウドクシオスは少年を司教のもとに連れて行き、彼についてすべてを語った。すなわち、ある神の御現れと御声の後、不妊の両親が熱心に祈ったゆえに、この子が授けられたこと、そして　、彼は生まれる前からすでに主に仕えるために約束されていたことである。オトリウス司教はこれを聞き、語られたことに驚き、こう言った。

「まことに、神の御霊はこの子の上に宿っている。」

オトリイは、その少年を自分の息子代わりに迎え入れ、その教育に細心の注意を払い、聖職者であるアカキオスとシノディオスという、分別があり徳の高い二人の教師にその任を託した。この二人は、後にそれぞれ、同じメリティノス教会の司教となった。　至福のエウフィミオスが聖書を十分に学び終えると、司教は彼を朗読者とし、また、絶え間ない熱意をもって神に仕えていた彼の母、至福のディオニシアを、自身の教会の助祭に叙任した。　その後、若き頃からその徳高い生活と清らかな貞潔で知られ、教会のすべての下級位階を経てすでに修道士となっていた聖エウフィミオスは、司

1228 アルメニアは、コーカサス山脈の南、小アジアの東に位置する山岳地帯の国であり、大アルメニア（東アルメニア）と小アルメニア（西アルメニア）の二部に分けられていた。メリティナ（現在のマラティヤ）という都市は、小アルメニアの南部、ユーフラテス川の支流の一つ沿いに位置していた。

1229 エウフィミオス――ギリシャ語の「喜ぶ」「慰められる」という動詞に由来し、訳すと「気立ての良い、陽気な」という意味である。

1230 ヴァレントは364年から378年まで、グラティアヌスは375年から383年まで在位した。

1231 トラキアは、バルカン半島の北東部に位置するビザンツ帝国の地域である。アドリアノープルはゲブレ川（マリツァ川）沿いの都市であり、現在は同名のトルコ・ヴィラヤート（州）の主要都市として、規模が大きく人口も多い。

1232 テオドシウス大帝は379年から395年まで在位した。

1233 メリティノスの司教オトリウスは、381年の第2コンスタンティノープル公会議でその名声を高めた。その後、彼は聖人として列聖された。東方教会では4月17日に彼の記念日が祝われる。

祭の聖職に叙階された。　同時に、彼は指導的立場を望んでいなかったにもかかわらず、幼少の頃から修道生活と沈黙を深く愛していたため、その都市にある修道院の世話も任された。そのため、尊者エウフィミオスは、都市から少し離れた場所にある聖殉教者ポリエウクトの修道院に頻繁に滞在していた。　また、聖四旬節の間は、ある人里離れた山へと身を隠し、そこで唯一の神のみが知るところの苦行と労苦に励みながら、沈黙の生活を送っていた。　しかし、修道院の院長職や運営が自身の沈黙の妨げとなることを自覚し、同時に人々の称賛を避けるため、尊者エウフィミオスは二十歳の時に、密かにエルサレムへと向かった[1234]。尊い十字架とキリストの聖墳墓、その他の聖地を礼拝した後、彼は周辺の荒野に住む聖なる父たちを訪ね、一人ひとりの生涯と徳を観察し、彼らに倣うよう努めた。その後、彼は聖都から六ポプリシュの距離にあるファラン修道院[1235]を訪れ、修道院の外の人里離れた場所に空いている一室を見つけ、何一つ持たずにそこに住み着いた。かご編みを学び、自らの労働で生計を立てた。こうして、あらゆる世俗の心配事から解放された彼は、ただ一つ、「いかにして神に喜ばれるか」という関心のみを抱いていた。

聖エウフィミオスには隣人であり友人である、敬虔なテオクティストという人物がいた。彼はテオクティストと深い霊的な愛で結ばれており、二人は一つの意志、神への一つの志、一つの共通の功業を共有していた。　彼らは互いに思いを伝え合い、まるで一方が望むことは他方も同じように望むかのように、二人の心は一つに結ばれていた。まるで二つの体に一つの魂が宿っているかのようであった。　毎年、聖なるエピファニアの八日目が過ぎると、エウフィミオスとテオクティストはクティリイの荒野[1236]へと赴き、そこで花祭りの週[1237]まで滞在し、肉体を断食と労苦で疲れさせつつ、魂を霊的な糧で養った。　その後、彼らはそれぞれ自分の修道室へと戻り、復活されたキリストに捧げるための、豊かな徳の宝を携えていた。このようにファラン修道院で生活していたある時、聖エウフィミオスは、至福のテオクティストと共に、いつものようにクティリイの荒野[1238]へと向かった。荒野を歩いていると、彼らはある岩山にたどり着いた。その近くには荒れた渓谷があり、その奥深くを小川が流れていた。小川の北側、岩山には洞窟があり、そこには獣たちが住んでおり、壁をよじ登ってようやく入ることのできる場所だった。　まるでその場所が神ご自身によって彼らのために用意されたかのように喜び、彼らはそこに定住し、周囲に生い茂る草を糧として暮らし、もはや修道院には戻らなかった。

しばらく時が経ち、神が信者たちの益となるよう聖人らを現すことをお許しになったとき、神の御計画により、ラザリヤの牧者たち[1239]が、その小川へと羊の群れを連れてきた。そして彼らが目を上げて山の上の洞窟の方を見上げると、予期せず岩場を歩いている二人の男に気づき、恐怖に駆られて逃げ出した。すると、聖父たちは穏やかな声で彼らの後を追って叫んだ。

「恐れるな、兄弟たちよ、恐れるな。私たちも人間だが、自らの罪のゆえにこの地に住んでいるのだ。」

すると、羊飼いたちは勇気づけられて彼らのところへ行き、洞窟の中に入った。しかし、そこにはこの世の生活に必要なものが何一つ見当たらなかったため、彼らは驚き、その後、家に帰って家族に聖者たちのことを話した。それ以来、ラザリウスの住民たちが聖エウフィミオスとテオクティス

[1234] 聖エウフィミオスは当時、29歳前後であった。これは406年のことである。

[1235] ファラン修道院、あるいはファレ修道院は、4世紀前半に聖ハリトン（記念日は9月28日）によって、エルサレムから東へ6ミリアリオン（8ヴェルスト強）の距離、エリコへの道沿いに設立された。

[1236] クティリイの荒野は、エルサレムの北東、エリコからほど近い場所にあり、聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイ修道院より死海方面へ下った位置にありました。同修道院は、エルサレムの東に12ヴェルスト離れた場所にあります。

[1237] すなわち、聖エウフィミオスと聖テオクティストは、主の顕現の祭りが終わった後、荒野へと赴き、主のエルサレム入城の祭日、すなわち「棕櫚の日曜日」（花の日曜日、別名「ヴァイ」）までそこに滞在した。

[1238] これは411年のことだった。

[1239] 現在は、クティリイ砂漠からほど近いエル・アザリヤという集落がある。

トスのもとを訪れるようになり、生活に必要な物資を届けるようになった。　一方、ファランの修道院長たちは、聖人たちが戻ってこないことに気づき、彼らがどこにいるのかを知るまで長い間、荒野で彼らを探し続け、見つけ出すと、頻繁に訪ねるようになった。その後、何人かは彼らと一緒に住みたいと願った。　聖エウフィミオスとテオクティストスのもとへ最初にやって来て、修道院へ戻らなかったのは、マリンとルカであった[1240]　。その後、他の人々も次々と集まってきた。というのも、聖エウフィミオスの名声は短期間のうちに至る所に広まり、多くの人々が彼に会いたいと願い、彼の指導の下で修行を積もうと志したからである。　一方、彼はやって来る人々を受け入れつつ、彼らを友である至福のテオクティストの指導に委ねた。というのも、彼自身は何よりも孤独を愛していたからである。ほどなくして、荒野にはキノヴィアが設けられ[1241]、洞窟は教会へと改められた。 聖エウフィミオスは、すべての人々の霊的な医者であった。兄弟たちは一人ひとりが彼の前で自分の良心をさらけ出し、心の内を告白した。彼は、豊かな霊的経験に裏打ちされ、一人ひとりに有益な指導を行い、教え、諭し、父のように懲らしめ、慰めた。そして、聖エウフィミオスはすべての兄弟たちにこう語った。

「兄弟たちよ！　あなたがたが世を離れた目的のために、そのことに励みなさい。そして、自分の救いを怠ってはならない。主の御言葉*『誘惑に陥らないように、目を覚まして祈りなさい』*（マタイ26:41）に従い、常に目を覚ましていなさい。　何よりもまず、世を捨てて修道生活を送ろうとする者は、自分の意志を持つべきではなく、常に従順と謙遜を守り、心には死と審判の時のことを念頭に置き、永遠の火を恐れ、天の御国の栄光を望まなければならないことを知れ。

また、修道士たちは、内なる神への黙想とともに、特に若者は肉体を鍛えるために肉体的な労苦にも励まなければならない、と語った。それは、肉が霊に従うようにするためであり、昼夜を問わず労苦し、怠惰を避けるだけでなく、自分自身にも他者にも仕えた使徒パウロの模範に従うためである。パウロ自身がこう述べているように：　*「私の必要や、私と共にいた人々の必要は、この私の両手が満たしてきたのです」*（使徒20:34）。なぜなら、もし信徒たちが、妻や子供たちを養うために絶え間なく働き、これほど多くの労苦を背負い、苦しんでいるのであれば、その同じ労働から神への捧げ物をなし、施しを行い、税を納めているのです。　それならば、私たちこそなおさら、使徒の戒めに従い（テサロニケの信徒への手紙第二3:10）、怠惰を避け、他人の労苦を食い物にすることのないよう、肉体の必要を満たすために労すべきではないでしょうか。

このように、私たちの尊い父エウフィミオスは、兄弟たちを指導するにあたり、勤勉であるよう促しました。彼は、教会での礼拝中も、兄弟たちの食事の席でも、決して話をしてはならず、どこにおいても沈黙を守り、神の御言葉に耳を傾けるよう命じました。　もし兄弟たち、とりわけ若い者たちのうち、他の兄弟たちよりも厳しく断食しようとする者がいるのを見かけると、彼はそれを是認せず、その兄弟が自分の意志に従うことを許さず、皆と共通の断食の時間と食事の時間を守るよう求めた。　尊者は、兄弟たちが食事の席で節制をもって食べ、腹を満たしすぎず、むしろ必要量より少なめに味わうよう指導した。そうすることで、自らの断食を隠し、公然と明かすことなく、高まる情欲に対して密かに備えるためであった。　聖エウフィミオスのこのような指導と教えに導かれて、兄弟たちは精進し、その名にふさわしい実を結んだ。

さて、ここではサラセン人の首領であるアスペヴェトとテレヴォンについて、彼らがエウフィミオスによってどのようにして神へと導かれたかを語らなければならない。

[1240] マリンとルカは、聖エウフィミオスの有名な弟子たちである。 彼から修道教育を受けた彼らは、隠遁生活を送る修行者としての資質を示し、数年後にはメトパ村（現在のヒルベット・ジュッブ・アル＝ルム、エルサレムから聖サヴァ修道院へ向かう道沿い）付近でその名声を広め、修道院を設立した。　彼らは聖テオドシオス大聖人を修道的な完成へと導き、彼はこの荒野のキノヴィアルホス（修道院長）であり、キノヴィのアルヒマンドリト（大修道院長）であった。

[1241] キノヴィアとは、共同生活を行う修道院のことである。

ペルシアには、アスペヴェトという名のギリシャ人が住んでいた。彼にはテレヴォンという幼い息子がいたが、その子は悪霊に取り憑かれており、その結果、頭から足まで右半身が萎縮してしまっていた。多くの経験豊富な医師を呼び寄せたが、誰も彼を治すことはできなかった。　その後、アスペヴェトは病める息子を連れてアラビアへ移住した。その経緯は次の通りである。当時、ペルシアの魔術師たちによって引き起こされた[1242]　キリスト教徒への迫害が始まった頃、イズデゲルド王[1243]の治世の終わりに、アスペヴェトも含まれるすべての軍司令官に対し、キリスト教徒が一人たりともペルシアからギリシャ人たちの元へ逃亡できないよう、すべての街道を厳重に警備するよう命じられた。　その時、アスペヴェトは、何の罪もないキリスト教徒たちに対するこの甚だしい迫害を目の当たりにし、彼らを憐れんだ。彼は、彼らがペルシアの地から逃れることを妨げなかったばかりか、自らもできる限り彼らを助け、危険や死から守った。その結果、彼は異教徒たちによってイズデゲルド王の前で誹謗中傷された。　拷問を恐れたアスペヴェトは、息子と財産、そして家族全員を連れて、急いでペルシアからギリシャ王国の領内へと逃れた。　ギリシャの王は彼を受け入れ、アラビアでギリシャの支配下にあるサラセン人たちの統率権を彼に委ねた。アスペヴェトがそこに定住すると、息子のテレヴォンは夢の中で聖エウフィミオスを見、キリストに帰依すれば病が癒やされると約束された。　目を覚ますと、テレヴォンはその夢の内容を父に話した。父は直ちに少年を連れ出し、大勢の従者を従えて、聖エウフィミオスと聖テオクティストの修道院へと向かった。修道士たちは、大勢のサラセン人を見て恐怖に駆られた。しかし、聖テオクティストはサラセン人のところへ出て行き、彼らにこう尋ねた。

「ここで何を求めているのか？」

彼らは答えた。

「神の僕エウフィミオスを探しているのです。」

テオクティストは彼らに言った。

「あなたがたが探している者はここに住んでいるが、彼は沈黙を守っているため、土曜日までは誰とも会わない。」

すると、アスペヴェトはテオクティストの手を取り、病気の息子を指さして、彼自身に自分のことをすべて語らせるよう命じた。

少年は語り始めた。

「私は一年前、ペルシアでこの腫れ物を患い、医師たちの医療技術や魔術師たちの呪文をすべて試してみましたが、何の効き目もなく、かえって病状が悪化してしまいました。　こうしてアラビアの地へやって来たが、何の安らぎも感じられず、ある夜、寝床に横たわりながら、果たしていつか癒やされる日が来るのかと考えを巡らせ、独り言のようにこう呟いた。「おお、テレヴォンよ！　ギリシャ人やペルシア人の医療技術はどこにあるのか？　占いや呪術はどこにあるのか？　我らの偶像の力はどこにあり、そこから何の益があるのか？　占星術師たちの空想や、我らの教えの寓話、そして我らの神々への無益な呼びかけはどこにあるのか？　まことに、これらすべては笑われるべき空想に過ぎない。唯一の真の神の御許しなしには、誰の役にも立たないのだから」。　そう考えながら、私は祈りに身を委ね、涙ながらにこう祈った。「天と地を創造された偉大で畏れ多い神よ、もし私を憐れみ、この激しい病から救ってくださるなら、私はギリシャの信仰のあらゆる不義と迷いを捨てて、キリスト教徒となります」。　そう祈った後、私は眠りにつき、夢の中で白髪交じりで大きな髭を

[1242] ペルシアの「マギ」とは、ミディア人の特定の家系に属する祭司階級の成員である。彼らの手にすべての学術教育が集中しており、彼らは宗教儀式を司り、国家の運営において影響力のある役割を果たしていた。　また、彼らには占星術（天体の運行から人の運命を占うこと）、占い、魔術の術も帰せられている。とりわけ、ペルシアの異教は様々な種類の不吉な迷信と結びついていたからである。

[1243] ペルシア王イズデゲルド1世は399年から420年まで在位した。ペルシアの魔術師たちがキリスト教徒に対して起こした反乱は419年のことである。

生やしたある修道士を見ました。彼は私に言いました。「何に苦しんでいるのか？」私が自分の病気を彼に見せると、彼は言いました。「神に約束したことを果たすか？」　私は答えた。「この病から解放されれば、果たします。」すると、その長老は私に言った。「私はエウフィミオスだ。エルサレムから十ポプリシュの距離にある東の荒野、エリコへと続く道の近くに住んでいる。　さあ、もし癒されたいのなら、私のところへ来なさい。そうすれば、神が私を通してあなたを癒してくださるだろう」。私は、夢の中で見聞きしたこれらすべてを父に話しました。そして、幻の中で私に現れた方の命に従って、私たちはここへやって来たのです。どうか、神によって遣わされたその医師を私たちに示してください。

福者テオクティストは、大エウフィミオスのもとへ行き、聞いたことをすべて語った。　大エウフィミオスは、神の御命令に逆らうのは不適切であると判断し、沈黙を破って病人のもとへ行き、神に彼のために祈りを捧げ、十字の印を施した。すると、テレヴォンはまるで一度も病気になったことがなかったかのように、たちまち回復した。　テレヴォンのこの突然の癒やしに驚嘆した異教徒たちは、キリストを信じるようになり、皆、地面にひれ伏して、洗礼を授けてくれるよう懇願した。一方、奇跡行者エウフィミオスは、彼らが心から神を信じたのを見て、彼らに洗礼の説教を行い、まずアスペヴェタに洗礼を授け、彼をペトロと名付けた[1244]。次に、アスペヴェタの妻の兄弟であるマリーナ、続いてテレヴォン、そして彼と共に来たすべてのサラセン人たちに洗礼を授けた。　彼らを四十日間自分のもとに留めた後、尊者エウフィミオスは神の言葉をもって彼らを啓蒙し、信仰を確固たるものにして、　彼らの故郷へと送り出した。一方、テレヴォンの叔父であるマリンは修道院を去ることなく、そこで修道衣をまとい、最期を迎えるまでそこに留まった。　彼は神に大いに喜ばれ、聖テオクティストの後を継いでその修道院の院長となった。そのことは、後述の通りである。さて、彼が修道院に寄進した多額の財産については、その一部は貧しい人々に配られ、一部は修道院の建設と拡張に費やされた。

一方、テレヴォンの奇跡的な治癒の噂が至る所に広まると、無償で治療を行う医師である至福のエウフィミオスのもとへ、四方八方から多くの病人が集まるようになり、彼らは皆、すぐに癒やされ、健康な姿で帰っていった。

その結果、聖人の名はパレスチナだけでなく、周辺地域にも広く知れ渡った。　しかし、尊者エウフィミオスは、自らの沈黙が破られているのを見て、多くの人が訪れて自分を称賛することに悲しみと嘆きを感じた。かつての沈黙を思い出し、密かに「ルヴァ」[1245]と呼ばれる荒野へ去ろうと考えたのである。このことを知った至福のテオクティストは、兄弟たちにそのことを告げた。　そこで、皆が集まり、尊者エウフィミオスの足元にひれ伏し、涙ながらに自分たちを見捨てないでほしいと懇願した。　聖エウフィミオスは彼らを慰めようと、当初はそこを離れないと約束したが、数日後、絶え間ない沈黙の中に留まりたいという願望に駆られ、また世俗の噂にこれ以上耐えられなくなったため、　夜、密かに修道院を出て、ドメティアヌスという一人の弟子を連れて行った。彼は徳の高い生活を送っており、聖人と同様にメリティナ出身であった。そして、ルヴァへと向かった。　死海近くの南の荒野を通り抜け、他の山々から隔てられた「マルダ」[1246]と呼ばれる高い山に登り、そこで水のある井戸と崩れかけた小屋を見つけた。彼はその小屋を改築してそこに住み着き、荒野の草を糧としてしばらくの間暮らした。　その後、聖人は、かつてダビデがサウルから逃れて身を隠した洞窟

[1244] その後、アスペヴェタという名を持っていたペトロスは、サラツィンの初代司教となり、431年のエフェソス公会議（第3回全地公会議）に参加した。

[1245] ルヴァは、死海の北西岸、死海と現在のエルサレム街道、そして聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの修道院との間に位置する砂漠である。

[1246] マルダ――別名モレス――は、死海近くの山である。

を見たいと願い、アリストヴルガディ[1247] の集落近くにあるジフの砂漠へと向かった。その場所を目にした聖エウフィミオスは、そこに修道院を建立した。

修道院建設のきっかけは次の通りであった。アリストヴルガディの村の長老の息子が悪霊に取り憑かれ、大声でエウフィミオスの名を叫んでいた。それは、神が彼に目に見えない形でそう命じたからであった。　一方、その少年の父や親族たちは、エウフィミオスについて、彼が誰であり、どこにいるのかを至る所で入念に尋ね回った。彼がカパルヴァリフ[1248] とアリストヴルタダの間のダビデの洞窟に滞在していることを知ると、病人の父は取り憑かれた息子を彼の元へ連れて行った。息子が聖人を見るやいなや、悪霊は即座に彼を地面に倒し、彼から出て行った。　この奇跡の知らせが広まると、近隣の村々から多くの人々が聖人のもとを訪れ、彼のために修道院を建てた。兄弟たちが彼の周りに集まると、神は彼らに糧を送られた。　聖人はそこで、マニ教の異端に属していた多くの人々を正教へと改宗させ、異端の指導者マネスを呪うよう説得した。その後、訪れる人々の多さに煩わしさを感じた聖人は、弟子ドメティアヌスにこう言った。

「さあ、わが子よ、行こう。尊者テオクティストと修道者たちを訪ねよう。」

そして彼らは出発した。修道院に近づくにつれ、聖エウフィミオスは山の上で気に入った場所を見つけ、後にそこに彼の修道院が建てられた。その場所は平坦で人里離れた場所であり、空気も清々しかった。　そこで彼は、たまたま見つけた小さな洞窟に身を寄せた。その場所には、後に彼がこの世を去った後、その遺体が埋葬された[1249] 。至福のテオクティストは、聖エウフィミオスの到来を知ると、急いで出迎えて彼を歓迎し、修道院の自分の住処に兄弟たちと共に住むよう懇願した。　しかし、エウフィミオスは承諾せず、ただ毎週日曜日には教会の礼拝に参列することを約束しただけだった。アスペヴェト、すなわちペトロは、尊者エウフィミオスが元の場所に戻ったと聞き、　大いに喜び、多くのサラセン人とその妻や子供たちを連れて彼の元を訪れ、彼らに救いの言葉を語ってほしいと懇願した。　老修道士は彼らに教訓を授けた後、アスペヴェトと共に来た者全員をキリストへと導いた。彼らを下方の修道院へ連れて行き、聖なる洗礼によって彼らを啓蒙し、七日間彼らと共に過ごし、教えを説き、信仰を確固たるものにした。その後、沈黙を求めて、彼は自分の洞窟へと戻った。

アスペヴェトのペトロスは、長老が住居を持たず、小さな洞窟で暮らしているのを見て、石工を呼び寄せ、聖人のために三つの住居、小さな教会、そしてパン焼き場を建てた。その後、彼は二つの水路を持つ貯水池を作り、尊者が必要とするすべてのものを満たし、彼が何一つ不自由を感じることのないようにした。　新たに洗礼を受けたサラセン人たちは、もはや尊者から離れようとはせず、常にその教えに満たされたいと願い、聖人に自分のそばに住まわせてほしいと懇願した。　しかし、エウフィミオスは、そうすれば自分の沈黙が完全に破られてしまうことを恐れ、これに同意しなかった。その代わりに、彼らを別の適した場所へ連れて行き、自分たちのために修道室と教会を建てるよう命じ、彼らのために司祭と助祭を任命した。　日ごとに彼らの集まりは増え続け、多くのサラセン人が訪れて聖なる洗礼を受けていたからである。尊者（エウフィミオス）は頻繁に彼らを訪れ、神の御言葉を説いた。　彼らの集落がまるで大きな町のように見えるようになったとき、聖人はエルサレムの総主教ユウェナリウス[1250] に、新たに改宗したサラセン人のために、テレヴォノフの父ペトロを

[1247] ジフの砂漠は、エルサレムの南、ヘブロンの南東に位置するユダヤの砂漠の一部である。その西側と東側には洞窟があり、そのうちの1つには、サウルからの追跡を逃れてダビデが身を隠していた（列王記上第18章以降）。 – アリストヴリアダ – ヘブロン近郊の集落。

[1248] カパルザリク――現在のベニ・ナイム――は、ヘブロンの南東、ヨルダン川沿いの砂漠、川のすぐ近くに位置していた修道院である。

[1249] 現在はデル・ムケリク。聖エウフィミオスの修道院は、下方の修道院から南へ3000歩（約4ヴェルスト）、エリコへの道の右側に位置していた。

[1250] 聖ユヴェナリウス、エルサレム総主教、異端者に対する正教の擁護者は、420年から458年までその座に就いていた。

司教に叙任するよう要請した。こうしてペトロは司教に任命され、聖なる信仰を受け入れた多くのサラセン人の霊的な必要を満たした。

聖エウフィミオスは、沈黙を守っていたその場所に共同生活者を置くことを望まなかったため、キノヴィアもラヴラも設けず、剃髪を求めてやって来る者たちを、下方の修道院にいる聖テオクティストのもとへ送り出した。　また、誰かが肉体の必要のために何かを彼に持ってきた場合も、そのすべてをテオクティストの修道院へ送り返した。やがて神がその場所に多くの修道士を住まわせることをお許しになると、神は偉大なるエウフィミオスに幻の中で、救いのために彼のもとを訪れる者たちを追い返さないよう命じられた。　ある日、カッパドキア出身でシリアで育った三人の実の兄弟、コスマ、クリシッポス、ガブリエルが彼の元を訪れた。彼らは霊的な完成へと向かう熱意に燃えていた。　しかし、長老は彼らを受け入れようとしなかった。その理由の一つは、自らの沈黙を愛していたからであり、もう一つは彼らが若かったからであり、とりわけ、兄弟の中で末っ子のガブリエルが、母の胎内から去勢されており、非常に幼く、顔立ちが女性に似ていたからであった。　するとその夜、尊者のもとに神からの啓示があり、声がかかった。

「この兄弟たちを受け入れなさい。神が彼らを遣わされたのだから。今後、救いを求める者を誰一人として拒んではならない。」

そこで聖人は彼らを受け入れ、その長兄であるコスマにこう言った。

「見よ、私は神の命じられたとおりにあなたたちを受け入れる。だから、あなたも私の命じることを行いなさい。末の兄弟が小部屋から出ることを許してはならない。他の兄弟たちの誰にも彼を見られないようにせよ。なぜなら、修道院に女性の姿が住むことはふさわしくないからである。そうしてこそ、誰に対しても敵意が湧き上がらないようにするためだ。」

その後、聖人は彼にこれから起こることを予言した。

「私の見るところでは」と聖人は言った。「あなたはここに長く留まることはないだろう。神は、スキポポリの教会であなたに司教の座を授けようとしておられるからだ。[1251] 。」

この予言は、その後実際に実現した。

その後、尊者は訪れる者すべてを受け入れ始めた。こうして彼は、アンティオキア出身のドムニナ[1252] ――アンティオキアの大司教ヨハネ[1253] の甥――を受け入れ、 また、アカキオスと共にエウフィミオスの師であったシノディオスの甥にあたる、ステファノス、アンドレイ、ガイアノスという名の3人のメリティン派の兄弟たち、続いてライフの長老ヨハネス[1254]　、アナトリアスとファラッシオス、さらにティベリアダ出身のキリオン[1255] （スキフォポレの聖殉教者ヴァシレイオス教会の長老）をも受け入れ；　彼ら全員を受け入れた後、彼はペトロ司教に、彼らのために小さな修道室を設け、教会をあらゆる装飾で美しく飾るよう命じた。　こうして彼は、ファランの修道院を模して修道院を設立した。そして、エルサレム総主教ユヴェナリウス が、当時ホレピスコプス[1256] であった聖パッ

[1251] スキフォポリは、エルサレムの北に位置する都市である。当時は繁栄し、人口の多い都市であった。現在は、不毛の砂漠の中に位置する貧しい村（ベサン）となっている。

[1252] アンティオキアは、シリアの古代の首都であり、パレスチナの北、地中海に注ぐオロンテ川のほとりに位置している。

[1253] アンティオキアの大司教（総主教）ヨハネは、423年から440年までその座に就いていた。

[1254] ライファ――現在のエト・トル――は、シナイ半島の東岸、紅海沿岸にある集落である。

[1255] ティベリアダ（現在のタバリヤ）は、パレスチナ北部のゲンクサレト湖、あるいはティベリア湖（別名：ガリラヤ湖）の西岸にある都市である。

[1256] 古代教会では、都市や教区の司教のほかに、村の司教も存在し、彼らは（ギリシャ語の「村」に由来して）ホレピスコポスと呼ばれていた。　彼らは都市の司教の監督下で活動し、所管する一定の範囲内の農村教会を管轄し、管轄下の教会のために下級聖職者を選出し、聖なる供え物を捧げ、教会の財産から施しを配ったが、長老や助祭を按手する権限は持っていなかった。　彼らはその活動について都市の首席司教に報告を行い、その直属の補佐役を務めていた。その後、この制度は廃止された。

サリオン[1257] および、長老であり教会の教師であるイシキイ[1258] と共に修道院を訪れ、修道院の教会[1259] を奉献した。当時、エウフィミオスは生後52年であった。 また、総主教はラヴラのためにドメティアヌスとドムニヌスという二人の助祭を任命し、長老にはヨハネスとキリオンが就任した。　偉大なるエウフィミオスは、自身のラヴラの奉献、とりわけ、パトリarchであるパッサリオンと神学者イシヒオスという、二人とも輝かしい灯火であった方々と面会できたことを心から喜んだ。しかし、聖パッサリオンは、その出来事からまだ7ヶ月も経たないうちに、高齢のためこの世を去った。

修道院の奉献から最初の年、修道者たちが尊者エウフィミオスと共に肉体的必要に関して大きな困窮に陥っていた際、当初はドメティアヌス[1260] が会計係に任命された。 ある時、聖都からヨルダン川へ向かっていたアルメニア人の群衆が、道から右へそれて修道院にやって来た。これは、偉大なる父の徳と信仰がさらに輝きを放つよう、神がそう導かれたからである。その数は400人にも及んだ。　彼らを見て、空腹であることに気づいた聖人は、会計係のドメティアヌスを呼び寄せ、こう言った。

「この人々に食事を振る舞いなさい。」

すると、ドメティアヌスはこう答えました:

「父よ！ ケラール（[1261] ）には、十人を満たすだけの食糧がありません。これほど大勢の人々のために、どこからパンを手に入れればよいのでしょうか？」

預言の恵みに満ちた聖人は、こう言われました。

– 行って、私が命じることを実行しなさい。聖霊が、この人々は満腹するまで食べ、私たちにも食糧が豊かに残ると告げているのだから。

ドメティアヌスは、わずかなパンが置かれていたパン倉へ向かったが、神の祝福によって部屋が溢れんばかりに満たされていたため、扉を開けることができなかった。　彼は兄弟たち数人を呼び寄せ、彼らの助けを借りて扉をこじ開けると、パンが部屋から溢れ出た。同じ祝福がワインとオリーブ油にも起こり、器はたちまちすべて満たされた。そして皆が食べて満腹になった。　実に三ヶ月もの間、パンが溢れかえっていたため、扉を元の位置に戻すことができなかった。パンは減ることを知らなかった。かつてシドンのサレプタに住む、旅人を親切にもてなした未亡人のところでも、小麦粉の壺とオリーブ油の瓶が尽きることはなかったのと同じである（列王記下17:14）[1262]。ドメティアヌスはその奇跡に驚き、師の足元にひれ伏して許しを請いました。老修道士は彼を諭し、旅人への慈愛と神への希望について教えを説きました。

それ以来、修道院は繁栄し、あらゆる豊かさに祝福され、修道室の建物も増え続け、教会では毎日神聖な礼拝が執り行われるようになった。　修道院の運営のため、経済担当者は修道者たちの奉仕に役立てるべく家畜を購入せざるを得なかった。修道院には、アジア[1263] 出身の、アウクセンティウスという名の修道士がおり、彼はこの修道院の務めに非常に適していた。　会計係は彼に、修道院のロバやラバの世話をし、放牧するよう頼んだが、彼は従わなかった。そこで会計係は、長老のヨハネとキリオンに助けを求め、彼らと共にアウクセンティウスにこの務めを引き受けるよう懇願したが、彼は彼らにも従わなかった。　安息日になり、偉大なるエウフィミオスと修道院の諸事について話

[1257] 聖パッサリオンの記念日は、チーズの土曜日に行われる。

[1258] イシキオスは後に聖人の列に列せられた。その記念日は「チーズの土曜日」である。

[1259] 429年。

[1260] エコノムとは、修道院の経理を司る人物のことである。

[1261] ケラール――修道院の備品の保管および配給を担当する者。

[1262] チュヴァネツ――小さな容器、小瓶。

[1263] アジア――小アジアの西部。紀元前、ローマ人による征服後にそう呼ばれるようになった。その後、「アジア」という名称は大陸全体にも適用されるようになったが、ここでは当然、小アジアの西部を指す。

し合う機会が訪れたとき、会計係はアウクセンティウスの不従順について尊者にお伝えした。尊者はアウクセンティウスを呼び寄せ、こう言った。

「わが子よ、我らの言葉に耳を傾け、あなたに課せられた務めを受け入れなさい。」

すると、彼はこう答えた。

「できません、敬愛する父よ。私がこれを実行するのを妨げる三つの理由があります。第一に、私は異邦人であり、現地の言語を話すことができないこと。第二に、罪に陥る恐れがあること。第三に、家畜の世話があるため、もはや独房にこもって神を想うことに専念し、沈黙を守ることができなくなることです。」

これに対し、偉大なるエウフィミオスはこう言った。

「神に祈ろう。あなたがそのすべてから何の害も受けないように。神は、あなたが神への畏れゆえに、神のしもべたちに仕えていることをご存じだからだ。」　*『人の子は仕えられるためではなく、仕えるために来た』*（マタイ20:28）と語られる主の御言葉に耳を傾けなさい。また、*「わたしは自分の御心ではなく、わたしを遣わされた父の御心を求める」*（ヨハネ6:30）ともおっしゃっている。

しかし、そのような勧告を受けても、聖アウクセンティウスは心を硬くして聞き入れようとしなかった。そこで聖人は怒りを露わにして、こう言った。

「子よ、我々は君にとって有益なことを助言しているのに、君は聞き入れない。不従順に対する報いがどのようなものか、やがてわかるだろう。」

するとたちまち、アウクセンティウスは悪霊に取り憑かれたかのように地面に倒れ込み、震えながら身悶えした。そこにいた修道士たちは聖人に彼のために祈るよう懇願し、聖人は少し懇願されるやいなや、彼を持ち上げ、十字架の印を切って癒やした。正気に戻ったアウクセンティウスは、聖人の足元にひれ伏して許しを請うた。聖人は彼にこう言った。

「従順は偉大な美徳である。神は犠牲よりも従順を求められるからだ。しかし、不従順は死をもたらす。」

その後、アウクセンティウスのために祈りを捧げた後、聖エウフィミオスは彼を祝福し、こう言った。

「*『あなたは癒やされた。これ以上罪を犯してはならない。さもないと、あなたにさらに悪いことが起こるだろう』*（ヨハネ6:14）。」

その後、アウクセンティウスは自分に課せられた従順の務めを受け入れ、熱心にそれを果たすようになった。

マロンとクリマティオという二人の兄弟は、修道院での過酷な生活に耐えかね、夜中に逃げ出すことを企てた。彼らがすでにその準備を整えた時、その企ては聖エウフィミオスの耳に入った。彼は幻視の中で、悪魔が彼らに手綱をかけ、死を招く罠へと引きずり込もうとしているのを見たのである。　聖人は直ちに二人を呼び寄せ、長い説教を繰り広げ、忍耐について教え、彼らを説得し、その破滅的な企てを断念するよう導いた。　彼は、自分自身を慎重に守らなければならないと語った。アダムは楽園にいながら神の戒めを破ったが、ヨブは腐敗した場所に座しながらもそれを守ったのだ。この論しに、彼は次のように付け加えた。

「私たちが住む場所や同居者に対して、悲しみや憎しみを植え付けるような悪意ある考えを抱いてはならない。　別の場所へ移るよう囁く考えに耳を傾けてはならない。しかし、私たちは常に冷静であり、悪魔の策略から心を遠ざけなければならない。そうしてこそ、移り住むことによって私たちの規律が崩れることを防げるのだ。なぜなら、頻繁に植え替えられる木は実を結ばないからである。　もし誰かが、自分が住んでいる場所で何か良いことを成し遂げたいと願っても、それができない場合、別の場所ならそれを成し遂げられるなどと考えてはならない。なぜなら、善行は場所によって成し遂げられるのではなく、意志と信仰によって成し遂げられるからである。私がエジプトの修道士

たちから聞いたある話を聞いてほしい。　ある兄弟がエジプトの修道院に住んでいましたが、よく怒ったり動揺したりし、口からは常に罵詈雑言が飛び出していました。落胆した彼は修道院を去り、人里離れた場所に身を寄せました。誰とも話す相手がいないなら、怒るという悪癖から解放されるだろうと考えたのです。　ある日、ある用事で水を器に注いだところ、それがひっくり返ってしまった。彼は二度目に水を注いだが、器はまたひっくり返った。三度目も同様のことが起きた。その兄弟は悪魔に惑わされ、器に怒りをぶつけ、掴んで粉々に砕いてしまった。

聖エウフィミオスがそう話すと、クリマティオスは笑った。すると長老は彼を見据えて言った。

「兄弟よ、お前もまた悪魔に惑わされているのではないか。なぜあれほど狂ったように笑うのか。主は笑う者を拒絶し、泣く者を祝福されるとは聞いていないのか？」

そう言うと、聖人はクリマティオスから背を向け、自分の内室へと向かった。するとクリマティオスは、ある種の恐怖と戦慄に襲われ、たちまち地面にひれ伏した。その時、ドメティアヌスがそこにいた。彼は数人の長老たちを集め、聖人の元へ入ると、クリマティオスを許してほしいと懇願した。

その願いを聞き入れた聖人は外に出て、横たわっているクリマティオスを起こし、十字の印をもって彼を癒やし、こう言った。

「これからは自分自身に注意を払い、長老たちの教えを神の言葉であるかのように受け止め、決して軽んじてはならない。そして、私たちがケルビムについて聞いたように、全身を目のようにしなさい。あらゆる方面から自分自身を厳重に守りなさい。あなたは罠の真ん中を歩いているのだから。」

こうして兄弟を戒め、共に逃亡を企てた二人を諭した後、聖人は彼らを確固たる信仰をもって自らの修道室へと送り出した。

当時、エフェソスでは、不敬虔なネストリウスをめぐって第三回全地公会議[1264] が開かれていた。その時、前述のシノディオスがメリティナからパレスチナへ礼拝のためにやって来た。彼は、聖人の若き日にアカキオスと共に、聖人の師であった人物である。エウフィミオスの修道院には、前述の三人の甥、 ステファノス、アンドレイ、ガイアノスという3人の甥がいたため、シノディオスはそこを訪れ、聖エウフィミオスに口づけをして、神の許しによりしばらくの間コンスタンティノープル総主教を務め、その偽りの教えによって全世界を騒がせた不敬虔なネストリウスの異端について彼に語った。 また、正教への熱意に燃えるアレクサンドリアの大司教、至福のキリル[1265] 、およびかつて彼の師であったメリティノスの司教アカキオスについても語った。　聖人は彼らのことを喜びました。かつてアスペヴェトと呼ばれ、当時はすでにサラツィン司教となっていたペトロは、他のパレスチナの司教たちと共にエフェソス公会議へ向かうところでしたが、聖人は彼に対し、キリルとアカキオスの教えに忠実であり続け、あらゆる手段で彼らを守るよう命じました。　公会議の終了とネストリウスの廃位後、ペトロスは帰還し、公会議で起こったすべてのことを長老に詳しく語った。長老は正統信仰が確立されたことを喜んだが、正統派でありながらネストリウスを擁護していたアンティオキアの大司教ヨハネについては悲しんだ。

助祭ドムニンは、叔父のことを案じて、偉大なる父に、叔父を正すためにアンティオキアへ行くことを許してほしいと懇願した。しかし、聖人は彼にこう言った。

「行くな、わが子よ。もし、あなたが召されたその場所に留まり、あなたを荒野から引き離そうとする思いに従わなければ、あなたは徳に励み、神の御前で栄光を受けるだろう。　もし私の言葉

[1264] 431年。

[1265] 聖キリロス・アレクサンドリアス（444年）の記念日は、アファナシオス・アレクサンドリアスと共に、6月9日と1月18日に教会によって祝われる。

に背いて行くなら、叔父の座を受け継ぐことになるだろうが、それは利益にはならず、その座で長く尊ばれることもない。なぜなら、その座はまもなく悪人たちに奪い取られてしまうからだ。

しかし、ドムニンは父の戒めに従わず、父の祝福も得ずにアンティオキアへと向かった――そして、聖[1266]が予言したことはすべて彼に実現した。その後、彼は泣きながら悔い改め、聖人の先見の明に驚嘆しつつ、長老のもとへ戻ってきた。

この私たちの尊い父エウフィミオスについて、その弟子である隠者キリアコス聖人は次のように証言している。「私たちは、土曜日と日曜日を除いて彼が食事をとる姿を見たことがなく、また、極めてやむを得ない場合を除いて誰かと会話する姿も、横になって眠る姿も見たことがなかった。ただ、時折、座ったままうたた寝をしているのを見ただけである。　また時には、彼は両手で、自分の小部屋の隅に張られたロープを握り、身体の必要に迫られて少しだけ眠り、偉大なるアルセニオスの眠りに関する言葉『来い、邪悪な僕よ！』に従っていた。　というのも、彼はその生活において聖アルセニオスに倣い、エジプトからやってくる兄弟たちから彼について語られる話を、喜びをもって聞いていたからである」。

あるアナスタシウスという人物――聖復活教会の器物管理人[1267]――は、偉大なるエウフィミオスに会いたいと願い、友人であるエルサレムの聖職者たちと共に、彼の修道院へと向かった。聖エウフィミオスは、霊によって彼らの到来を予知すると、修道院の会計係クリシッポスを呼び寄せ、こう言った。

「客人を迎える準備をせよ。見よ、エルサレム総主教がやって来る。」

客たちが到着すると、聖人はアナスタシオスを総主教として迎え入れ、総主教として彼と語り合った。そこにいた者たちは皆驚いた。一方、会計係のクリシッポスは近づき、長老の耳元でこう囁いた。

「正直な神父様、ここには総主教はいません。こちらは『器を守る者』アナスタシウスです。」

聖人は驚いて言った。

– 信じてくれ、わが子よ。これまで私は彼が総主教の衣を身にまとっているのを見てきたのだ。そして、まことに私は見誤ってはいない。なぜなら、神があらかじめ定められたことは、必ずその通りに成し遂げられるからだ。

この尊者のお言葉は皆に聞こえるように語られ、やがてアナスタシウスが総主教に任命された時に実現した[1268]。

前述のテレヴォンは、アスペヴェタと呼ばれるペトロ司教の息子であったが、同族の女性を妻に迎え、長い間共に暮らしたものの、妻が不妊であったため子供に恵まれなかった。彼は妻を奇跡を行う者エウフィミオスの元へ連れて行き、こう言って懇願した。

「父よ、神はあなたの祈りに耳を傾けてくださることを知っています。神は、御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださるからです。ですから、あなたの聖なる御名に懇願します。私たちのために、人を愛する神に祈り、私たちに子をお与えくださいますように。」

聖人は彼と妻に三度、聖十字架の印を授け、こう言った。

「神があなた方に子宝を授けてくださいますように。そうすれば、あなた方は三人の息子に恵まれるでしょう。」

[1266] ドムニンは441年から448年まで、アンティオキアの総主教座に就いていた。

[1267] エルサレムの聖復活教会はコンスタンティヌス大帝によって建設され、335年9月13日に奉献された。この教会は主の聖墳墓の洞窟の上に建てられ、豪華で数多くの装飾が施されていた。　教会内には宝石をあしらった祭具が数多くあり、その管理者（ギリシャ語で「スケヴォフィラクス」）こそがアナスタシオスであった。

[1268] アナスタシオスは458年から478年まで、エルサレムの総主教の座に就いていた。

修道院にはエミリアンという名の修道士がいた。ある日曜日の夜明け前、彼は悪魔の誘惑により肉欲に燃え上がり、不浄な思いに惑わされ、心に罪への渇望を感じていた。　たまたま、聖エウフィミオス師が早朝の礼拝のために教会へ向かう途中、情欲に惑わされたその兄弟が立っていた場所を通りかかった。淫らな悪魔の悪臭を嗅ぎ取り、何が起きているかを悟ると、聖人はこう言った。

「神が汝を禁じ給わんことを、呪われた不浄な霊よ。」

すると、その兄弟はたちまち地面に倒れ込み、泡を吹きながら狂乱した。兄弟たちが集まり、ろうそくが持ち込まれると、聖人は兄弟たちにこう言った。

「この兄弟をご覧なさい。彼は若き日から今日に至るまで、徳高く、肉体的にも清らかに生きてきた。しかし今、彼が束の間、肉欲に流され、欲望を抱き、その不浄な思いに浸っていたところ、悪霊に支配されてしまったのだ。私たちもまた、彼のこの苦難から教訓を得よう。　そして、たとえ他人の体に触れず、不浄な罪を犯さなくとも、心の中で淫行を行い、不浄な思いに溺れ、それを抱き続け、それに身を任せ、それに悦びを見出す者は――その者は淫行者であり、悪霊に憑かれているのだと、誰もが知るようにしよう。

これに加え、長老はさらに次のような物語を付け加えた。

「兄弟たちよ、聞いてほしい」と彼は言った。「あるエジプトの修道士たちが私に語ってくれた話がある。ある兄弟についてのことだ。彼は皆から聖人だと見なされていたが、心の中では不敬虔な思いにふけり、心の中で淫行にふけることで、神を怒らせていたのだ。　彼が臨終に近づいたとき、ある先見の明のある長老がそこを訪れ、彼が死の床にあると聞き、住民たちが皆泣きながらこう言っているのを見つけた。「もしこの聖人が亡くなれば、私たちにはもはや救いの望みはない。なぜなら、私たちは皆、彼の祈りによって救われているのだから」。　これを聞いた先見の明のある老人は、この偽りの聖人から祝福を受けようと急いで病人のもとへ向かった。そして、彼の住居に近づくと、ろうそくを手にした大勢の人々や、司祭や助祭たちが、その聖人の厳粛な葬儀のために司教を待っているのを見た。　部屋に入ると、長老は彼がまだ息をしているのを確認し、霊の目で見ると、三叉の矛を握った悪魔が見えた。悪魔はその矛で死にゆく者の心臓を貫き、激しい苦痛を与えながら彼の魂を引きずり出そうとしていた。　その時、聖人は天から「彼の魂は一日たりともわたしを安らかにさせなかった。それゆえ、お前も絶えず彼を苦しめ、その魂を引きずり出せ」という声を聞いた。こうして、その兄弟は苦しみの中で息を引き取った。なぜなら、外見上は聖人のように見えたが、心の内では神を怒らせていたからである」。　「兄弟たちよ、このことに留意しなさい」と、尊者エウフィミオスは続けた。「魂を汚す思いから、細心の注意を払って身を守りなさい。なぜなら、魂が肉体から離れる時、淫行を夢想する者も、実際にその罪を犯す者も、同じ苦しみを受けることになるからだ。　しかし、このエミリアヌス兄弟のために、彼を懲らしめるが死には至らせない神に祈りましょう。神が彼を悪魔と肉欲から解放してくださいますように。

聖人が祈りを捧げると、悪霊は「私は淫行の霊だ」と叫びながら出て行き、まるで硫黄が燃やされているかのような悪臭でその場を満たした。それ以来、エミリアンは不浄な欲望から解放され、神に選ばれた器となった。

その頃、雨が降らなくなり、大干ばつが訪れ、聖書の言葉*「あなたの頭上の天は銅のようになり、あなたの足元の地は鉄のようになる」*（申命記28:23）が成就した。そして、干ばつのため、人々は皆、大きな苦しみの中にあった。　兄弟たちは、聖テオクティストと共に、聖エウフィミオスに神に祈り、雨を乞うよう頼んだ。彼らは、彼の祈りが神の前でどれほど力あるものであるかを知っていたからである。しかし、彼は承諾しなかった。主の顕現の祭りが訪れ、聖　が例年、花週間が始まる直前まで荒野へ赴く日が近づいた。　修道院には、聖都や周辺の村々から大勢の人々が集まり、十字架を掲げて「主よ、憐れみたまえ！」と叫んでいた。そして彼らは偉大なるエウフィミオスのもとへやって来て、神に祈り、雨を降らせてくださるよう願うまでは、彼を荒野へ去らせないようにした。その叫び声を聞いた聖人は彼らのところへ出て行き、こう言った。

「罪人であるこの者に、何を求めているのか。子らよ、私にはこのことについて神に祈る度胸などない。私は罪人であり、他の人々以上に神の憐れみを必要としているからだ。とりわけ、今この神の怒りの時においてはなおさらである。　私たちの罪は私たちを神から引き離し、私たちは神の御姿を曇らせ、神の教会を汚し、欲望や様々な情欲に身を任せて、強奪と嫉妬の中に生き、互いに憎み合っているため、憎まれるに値する者となっている。　このゆえに、主は私たちにこの懲罰を下されたのです。それによって我々が悟り、悔い改めるためです。そして、悔い改めによって自らを正すとき、主は私たちの祈りに耳を傾けてくださいます。なぜなら、*「主は、真実をもって主を呼び求めるすべての人々に近くおられる」*と書かれているからです（詩編144:18）。

聖人がこのように民に語りかけたとき、皆がまるで口を揃えてこう叫んだ。

「父よ、あなたご自身が私たちのために祈ってください。私たちは、神があなたの祈りを聞き入れてくださると信じています。神は、御自分を畏れる者たちの願いを叶えてくださるからです。」

この言葉に心を動かされた聖人は、共にいた司祭たちを連れて教会へ向かい、民衆にも祈るよう命じました。教会でひれ伏すと、彼は涙ながらに神に、御自身の被造物を憐れみ、この地に慈しみと恵みを注ぎ、雨で潤してくださるよう祈りました。　彼が祈っていると、突然南風が吹き、空は雲に覆われ、雷が鳴り響き、激しい雨が降り注いだ。そこで聖人は立ち上がり、祈りを終えると外に出て、民衆にこう言った。

「見よ、神はあなたがたの祈りを聞き入れられた。神はこの夏を、他のどの年よりも豊かに祝福してくださるだろう。それゆえ、あなたがたも、あなたがたに慈しみを示してくださった神に、善行をもって喜ばれるよう努めなさい。」

こう言い終えると、聖人は民を解散させた。そして、雨はその後も何日も降り続き、聖人はいつものように大砂漠へ赴くことができなかった。そして、聖人の言葉通り、その夏は他のどの年よりも豊かな実りに恵まれた。

尊者エウフィミオスが七十五歳になった年、アレクサンドリアの不敬虔な総主教ディオスコロス[1269]に対抗して、ハルキドンで第四回全地公会議が開かれた。この公会議には、司教の位に就いた聖人の弟子たち数名も出席していた。すなわち、イアムニアの司教ステファノス[1270]および、ペトロス・アスペヴェトスの後継者であるサラツィンの司教ヨハネスである。彼らはハルキドン公会議の決定事項を記録し、それを師である聖エウフィミオスに伝えた。　彼はハルキドン公会議で示された信仰告白を受け入れ、それを正統であると認めた。すると、パレスチナの全荒野および多くの修道士たちの間で、その多くが正統ではない信仰を持っていたにもかかわらず、偉大なるエウフィミオスがハルキドン公会議に従うという噂が瞬く間に広まった。　その頃、ある異端者テオドシウスがパレスチナにやって来た。彼は外見上は修道士であったが、実のところ、エウティキオスの偽りの教えに満ちた不信心者であり、　彼は聖なるカルキドン公会議を冒涜し、あたかもそこで正教の教義が拒絶され、ネストリウスの偽りの教えが復活したかのように主張し、その他多くの不適切な虚偽の言葉を広めた。　当時、パレスチナには、敬虔なテオドシウス2世[1271]の妃であるエウドキア皇后がいた。夫の死

[1269] 第4回全地公会議（ハルキドン公会議）は451年に開催された。アレクサンドリアの大司教ディオスコーロス（ディオスコーロス）は、441年から451年までその座に就いていた。　彼は、コンスタンティノープルのある修道院の修道院長エウティキオスと共に、イエス・キリストには神性というただ一つの本性しかなく（このため、この異端はギリシャ語の「一つ」と「本性」に由来する「モノフィシズム」という名称が付けられた）、受肉によって人間の本性が吸収されたと誤って教えた。　公会議において、この誤った教えは非難され、主イエス・キリストを「二つの本性において、混ざることなく、変わることなく、分かたれることなく、切り離されることなく認識される……二つの位格に分割されたり、分けられたりすることなく、唯一かつ同一の御子であり、独り子なる神の御言葉」として告白するよう命じられた。

[1270] ヤムニアは、パレスチナにある都市で、遥か昔にペリシテ人によって築かれた。地中海に面したヤッファ（古代のヨッピ）からほど近く、エルサレムから北西へ12時間の距離にある。

[1271] テオドシウス2世（若きテオドシウス）は408年から450年まで在位した。

後、彼女は聖地で暮らしていた。　そして、前述の異端者テオドシウスは、まずエウドキア王妃を説得してカルキドン公会議を否定させ、その後、多くの隠遁修道士たちを自らの異端に染め上げ、彼らを同調者に引き入れた。　その後、彼は多くの惑わされた修道士たちを率いて、ユウェナリウス総主教に対して反乱を起こした。彼はユウェナリウスに、カルキドン公会議の決定を拒否するよう執拗に説得したが、　、ユウェナリウスがこれを拒むと、総主教の座から追放され、ユウェナリウスはコンスタンティノープルへ赴き、マルキアヌス帝のもとへ身を寄せた。

一方、テオドシウスは、エウドキア皇后の支援と、異端に惑わされて彼を助ける修道士たちの力を背景に、[1272] 総主教の座に就き、正教徒たちに多くの害を及ぼした。 彼との交わりを拒んだ司教や聖職者たちを、ある者は追放し、ある者は拷問し、殺害した。そして、エウフィミオスの修道院にいた者たちを除き、パレスチナの修道士たちをすべて自らの従者に引き込んだ。しかし、偉大なる父エウフィミオスの模範を眼前にして、彼らは正統信仰を堅く守り抜いた。　偽パトリアルヒ・テオドシオスは、尊者エウフィミオスを自分との交わりに引き込もうと多大な努力を払い、絶えず使者を遣わして懇願したり脅したりし、あらゆる手段を尽くして彼を自らの異端に引き込もうとした。　しかし、尊者エウフィミオスは敵の罠にはかからず、まるで堅固な柱や揺るぎない壁のように、その狡猾さにも動じなかった。　毎日送られてくるテオドシウスの狡猾な要求に煩わされた彼は、兄弟たちを召集し、異端を厳重に警戒し、正統信仰を堅く守るよう命じた後、大いなる荒野へと去っていった。兄弟たちの多くは、異端者たちからの迫害を避け、父に倣って荒野へと去っていった。

その頃、ヨルダン川沿いの荒野[1273] には、少し前にリキア[1274] からやって来たゲラシムという名の隠者がいた。彼は修道生活のあらゆる規則を遵守し、不浄な霊たちとの戦いに勝利を収めていた。　しかし、目に見えない悪霊たちを打ち負かし、追い払っていた彼は、目に見える悪霊――すなわち異端者たち――に捕らえられ、惑わされてしまった。というのも、彼はエウティキオスの異端に陥ってしまったからである。そこで、その徳高い生活の名声が至る所に広まっていた尊者エウフィミオスのことを耳にしたゲラシムは、彼が当時滞在していたルヴァの荒野へと彼を訪ねた。　彼に会ったゲラシムは、そこから大きな霊的な恵みを受けた。敬虔なエウフィミオスと共に長い時間を過ごし、その雄弁な言葉による有益な対話や正教に関する教えに満たされたゲラシムは、異端の偽りの教えを捨て去り、正教の信仰へと立ち返り、かつての迷いについて深く悔い改めた。

パレスチナで異端者たちがテオドシオスを通じて引き起こした騒乱は、丸一年も続いた。その後、敬虔なマルキアヌス帝から、偽総主教テオドシオスを捕らえ、その行いに対して裁きと罰を受けるよう命じる勅令が下された。しかし、テオドシオスはこれを知ると、シナイ山へ逃亡し[1275] 、行方不明となった。 そこで、聖エウフィミオスは荒野から自身の修道院へと戻った。

ある時、尊者がある日神聖な聖体礼儀を執り行っていた際、サラセン人のテレヴォンと、クリシッポスの兄弟である宦官ガブリエルは、「三聖歌」の最中に、天から降りてきて聖人を包み込む炎を目撃した。そして、尊者は礼拝が終わるまで、神聖な食卓の前に炎の柱の中に立っていた。　また、尊者ご自身も時折、修道院の兄弟たちの何人かに、天使が自分と共に聖体礼儀を執り行っているのを頻繁に目撃したと語っていた。彼はまた、外見から内面の精神の動きを見抜き、人間の思い、善悪を識別する賜物も持っていた。　兄弟たちが神聖な秘跡を拝領する際、彼は誰がどのような心持ちで拝領しているかを見抜いていた。ある者たちは、ふさわしい態度で拝領したため、聖餐によって清め

[1272] 452年の春。

[1273] ヨルダン砂漠はヨルダン川の西側、エリコからエルサレムにかけて位置し、さらに南へ死海の西岸に沿って広がっていた。そこは荒涼として岩だらけで、乾燥し、不毛な土地であった。

[1274] リキアは、小アジアの南部に位置する地域である。

[1275] シナイ山はアラビアの北西部、紅海の東に位置している。 花崗岩の岩山からなる山群であり、険しく荒々しい谷に切り裂かれ、それらに囲まれているこの山は、アラブ人からはトゥール山、あるいはジェベル・トゥール・シーナと呼ばれている。紅海の入り江が形成するシナイ半島の真ん中に位置している。

られているのが見えた。一方、ふさわしくない態度で拝領しようとした者たちは、まるで死人のような顔色で、心が曇っているのが見えた。それゆえ、尊者は絶えず、使徒たちの言葉をもって皆にこう説いた。

「兄弟たちよ、あなたがたが聖体拝領に臨む際、よく注意しなさい。*『あなたがた一人ひとりは、自分自身を吟味し、そのようにしてこのパンを食べ、この杯を飲むようにしなさい。なぜなら、ふさわしくないまま食べて飲む者は、自分自身に裁きを招くことになるからである』*（Iコリント11:28–29）。この聖なるものは、聖なる者のために備えられているのであり、汚れた者のためではない。もしあなたがたが清い良心を持っているなら、「*主を仰ぎ見る者は皆、光に照らされ、その顔は恥じることのない*」（詩篇33:6）のである。

至聖なるユヴェナリウスが再びその座に就き、教会に生じた混乱を正し始めたとき、女王エウドキアは、 前述のテオドシウスに誘われてエウティキオスの異端に傾いていたため、 どの信仰告白に従うべきか分からず迷い、アンティオキアの聖シメオン・ストルプニクに、有益な助言と指導を求めて使者を送った。すると彼は、彼女に次のように書き送った。

――悪魔は、あなたの美徳の豊かさを目の当たりにし、「あなたを*『小麦のように』ふるいにかける*」（ルカ22:31）よう願い、あの破滅者テオドシウスを通じて、あなたの神を愛する魂を堕落させたのだ。しかし、勇気を出しなさい。あなたの信仰は衰えてはいないのだから。 私は、すぐそばに泉があるにもかかわらず、それを軽んじ、わざわざ遠くから同じ水を汲もうとしたことに、大いに驚いている。そこには神を宿すエウフィミオスがいる。彼の教えに従えば、あなたは救われるだろう。

尊者シメオンからこのような書簡を受け取った女王は、直ちに尊者エウフィミオスについて尋ね始めた。 しかし、彼が決して荒野から街へ出てこないことを知ると、彼女は東の荒野にある高い丘――エウフィミオスの修道院から三十スタディオン離れた場所――に柱を建て、[1276] そこで頻繁に尊者にお会いし、その教えに心を癒やせるようにしようと企てた。 その柱を建て上げると、彼女はそこで隠遁生活を送った。彼女は、当時パッサリオンの後任としてホレピスコプを務めていた前述のアナスタシオスと、十字架の守護者コスモスを聖エウフィミオスのもとへ遣わし、彼に会うことを許してくれるよう懇願した； しかし、二人が到着したとき、修道院には彼の姿はなく、彼はとっくにルヴァへと旅立っていた。彼らは聖テオクティストを伴い、彼と共にその荒野へ向かい、聖エウフィミオスを見つけると、女王のもとへ赴き、迷い出た彼女の魂を救ってほしいと懇願した。そして、ようやく苦労の末、その長老を説得して彼女のもとへ行かせることができた。 偉大なるエウフィミオスを見て、女王は大変喜び、その尊い足元にひれ伏してこう言った。

「今、私は神が私の不甲斐なさに目を留めてくださったことを知りました。」

老僧は、正教について彼女に十分に教えを説いた後、四つの聖なる全地公会議――アリウス派に反対して召集されたニカイア公会議、 マケドニウスに反対して開かれたコンスタンティノープル公会議、ネストリウスに反対して開かれたエフェソス公会議、そしてディオスコロスとエウティキオスに反対して開かれたハルキドン公会議――これら四つの公会議に従うよう遺言し、かつて彼女が対立していたユウェナリウス総主教と和解するよう命じた。さらに彼女のために多くの助言を述べた後、彼は彼女に祝福を与え、彼女のために祈りを捧げて去っていった。 皇后は、その言葉をあたかも神の口から語られたかのように受け止め、それを実際に実行しようと努めた。直ちに聖都へ赴き、至聖なるユウェナリウスとの和解を図り、異端を公然と拒絶して、正教会との交わりに戻った。 これを見て、テオドシウスに惑わされていた多くの信徒や修道士たちが、女王の模範に倣って正教へと立ち返った。

[1276] その塔、より正確には城塞は、エウドキア女王によって、東部砂漠全体で最も高い山、現在のムンタルに築かれた。（30スタディオンは5ヴェルスタに相当する。）

エウフィミアが82歳になった年、[1277] 、当時まだ若かった至福のサヴァが彼女の修道院を訪れた。　長老は彼を受け入れ、下方の修道院にいる聖テオクティストのもとへ送り出し、彼について「まもなく修道生活において他の誰よりも輝きを放つだろう」と予言した。これは、聖サヴァの伝記からも明らかなように、実際に実現したのである。　また当時、カッパドキア出身のマルティリウスと、アラブ出身のイリアが、聖エウフィミオスのもとを訪れた。マルキアヌス帝の暗殺後、ティモテイオス・エリュル[1278] がエジプトで騒乱と反乱を引き起こし、その最中にアレクサンドリア総主教プロテリウス聖下[1279] も殺害された；この反乱に耐えかねたマルティリウスとイリヤはエジプトを離れ、嵐の静まる安息の地として、偉大なるエウフィミオスのもとへ駆け込んだ。聖人は彼らに愛と敬意を捧げた。彼は、二人がやがてエルサレムにおいて、主の兄弟である使徒ヤコブの座に就くことを予見していたのである。　彼は二人を、聖ゲラシモスと共に、クティリイの荒野やルヴィイの荒野へと連れ出し、そこで自身の慣例に従い、棕櫚の主日まで彼らと共に過ごした。毎週の日曜日、尊者様は神聖な聖体礼儀を執り行い、あの偉大な父たちは、尊者様の手から聖なる秘跡を拝領した。

その直後、マルキアヌスの後に即位したキリストを愛するレオ[1280] の治世において、至聖なるユウェナリウス総主教が逝去した。彼の死後、全員の合意により、かつて聖器保管官兼ホレピスコプスであったアナスタシウス[1281] がに選出された。こうして、聖エウフィミオスが、アナスタシウスが彼を訪ねてきた際、聖なる透視の眼で彼が総主教の装束を身にまとっているのを見て語った預言が成就したのである。　このことを思い出したアナスタシウスは、誠実な聖職者たちを聖人のもとへ遣わし、次のように伝えた。「父よ、今やあなたの預言が成就しました。どうか、私があなたの元へ参り、あなたの聖なる御姿を拝むことをお許しください。」

聖エウフィミオスはこれに次のように答えました。

「私は常に、貴殿の聖容を拝し、貴殿との対話を糧としたいと願っております。しかし、貴殿が初めて私のこの貧しい住まいに来られた際は、静かに、わずかな随行者だけを伴ってこられました。ところが、現在の貴殿の位階においては、大勢の随行者を伴わなければなりません。それゆえ、貴殿のご来訪は、私の微力では到底お迎えできないのです。　ですから、聖下には、私のこのささやかな住処までお越しになるご苦労をおかけしないようお願い申し上げます。もしお越しくださるお気遣いをお示しくださるなら、私は喜んでお迎えいたしますが、その場合、他の来訪者たちもお迎えしなければならず、多くの来訪者による騒ぎのため、この場所に留まることは不可能になってしまいます。

これを聞いて心の中で熟考した総主教は、こう自分に言い聞かせました。「もし私が行けば、その長老を侮辱することになる。それゆえ、行かないことにしよう」。しかし、しばらくして、やむを得ない事情により、彼はその尊者のもとを訪れ、面会しました。その件については後述します。

一方、至福の女王エウドキアは、数えきれないほどの教会や修道院、施し所、旅人宿を建立した。彼女が建立した聖ペトロ教会――エウフィミオス修道院からおよそ二十スタディオン離れた場所にある――のそばに、彼女は訪れる人々のために大きく深い水場を造るよう命じた。　五旬節の頃、彼女は自らその場所を訪れて工事の様子を見学し、尊者のもとへ使者を送り、彼に自分のもとへ来てくれるよう頼んだ。それは、彼の祈りと祝福に恵まれ、その教えに耳を傾けるためであった。また、

[1277] 458年。

[1278] ティモテイ（通称エルール）、アレクサンドリアの長老、異端者（単性論者）、ディオスコーロスの支持者

[1279] プロテリウスは451年から457年までアレクサンドリアの総主教を務めたが、マルキアヌスの死後、カルキドン公会議の擁護者としてモノフィシト派によって殺害された（彼の記念日は2月28日）。 彼の後、ティモテイ・エルールが総主教に任命され、460年までその座に就き、司教たちを罷免し、カルケドン公会議の決定を受け入れた者すべてを迫害した

[1280] 聖レウ1世は457年から474年まで在位した。

[1281] アナスタシオス1世は458年から478年まで総主教の座に就いた。

彼女は修道院の共同の必要のために、聖人に献金も贈りたいと考えていた。しかし、偉大なるエウフィミオスは、使者を通じて彼女にこう答えた。

「まだこの肉体の姿で私に会うことを期待してはならない。子よ、なぜあれこれと心配するのだ？ 私は、冬が来る前に、あなたが神のもとへ旅立つだろうと思う。 それゆえ、この夏、旅立ちの準備に励みなさい。そして、まだこの世にいる間は、私を思い出すことに努めてはならない。書面によっても、口頭によっても、私たちへの施しについても、あるいは徴収についても。しかし、万物の主のもとへ旅立った時には、そこで私を思い出してほしい。そうすれば、主の慈愛が望まれる時、私も安らかに迎え入れられるだろう。

これを聞いて、聖女エウドキアは深く悲しんだ。とりわけ「書面によっても、口頭によっても、私を思い出すよう努めてはならない」という言葉に心を痛めた。というのも、彼女は遺言によって彼に多額の収入を残そうとしていたからである。彼女は急いで聖都エルサレムへ赴き、総主教アナスタシオスにエウフィミオスの言葉を伝えた。 当時、皇后は聖第一殉教者ステファノの名を冠した教会を建設しており、その教会がまだ完成していないにもかかわらず、7月15日にその奉献を命じ、多額の収入を割り当てた。その後、彼女は自ら建立したすべての教会を巡り、それぞれの奉献式に立ち会い、各教会に十分な収入を割り当てた。 教会の奉献から4ヶ月が経過した後、敬虔なエウドキア女王は、その魂を神の御手に委ねた[1282] 。

偉大なるエウフィミオスが90歳を迎えた年、聖テオクティストは重い病に倒れた。聖エウフィミオスは病床のテオクティストを見舞い、彼に最後の口づけを授けるために訪れ、友であり同修である彼の死を待ち、その遺体を埋葬するために、その修道院に数日間滞在した。 その病の末、至福のテオクティストは9月3日に息を引き取った[1283] 。総主教アナスタシウスは、テオクティストの死と、聖エウフィミオスがそこにいることを知ると、至福のテオクティストを埋葬したいという口実を掲げて、自身の聖職者たちを率いて急いで向かったが、その真の目的は、聖エウフィミオスに会って口づけをすることだった。 聖エウフィミオスを見かけると、総主教は彼の手を握り、口づけしながらこう言った。

「かねてより、この聖なる御手に口づけしたいと願っておりましたが、今や神が私にその恵みをお与えくださいました。 そして今、敬愛する父よ、私のために主にお祈りください。私に成就したあなたの預言が最後まで保たれるように。また、キリストの教会を治めるよう私を導くために、頻繁に手紙をください。私はあなたの中に神の賜物の働きを見出し、その力を身をもって体験したからです。

すると、聖人は謙虚にこう言われました。

「お許しください、聖なる大主教様。どうか、神への祈りの中で、私を覚えてお祈りくださいますようお願い申し上げます。」

二人は共に、尊いテオクティストの遺体を丁重に埋葬し、互いに語り合って楽しんだ後、別れた。

フェオクティスト修道院の修道院長には、テレヴォノフ家の叔父であり、神に献身した人物であるマリンが任命された。しかし、2年後、彼はこの世を去り、聖エウフィミオスがやって来て、彼を聖フェオクティストのそばに埋葬した。そして、マリンの後任として、高潔な人物であるロンギンを修道院長に任命した。 ある時、1月のこと、このロンギンと共に、至福のサヴァが、大荒野へと旅立つ聖エウフィミオスを見送るために、修道院を訪れた。サヴァの決意を見抜いたエウフィミオスは、彼を連れて荒野での修行の旅に出た。 彼らがルヴェの乾燥した地を歩いていたとき、サヴァは労苦のせいで激しい渇きに襲われ、喉の渇きで力尽きてそれ以上進むことができなくなった。そこで、

[1282] エウドキア皇后は460年に死去し、聖ステファノ教会に埋葬された。

[1283] 聖テオクティストは467年に死去した。

聖エウフィミオスは彼を憐れみ、祈りによって乾いた大地から水を湧き出させた。これは聖サヴァの伝記にも記されている通りである。

数え切れないほどの多くの労苦を経て、聖エウフィミオスは、神の啓示によって予見していた至福の死を迎えようとしていた。　ある年、彼が例年通り荒野へ籠もる時期が訪れ、主の顕現の祝日の8日目、すなわち1月14日、兄弟たちは集まって聖人に会いに来た。ある者は彼を見送るため、またある者は彼と共に旅立つことを期待してであった。その中には、ニトリアから来たマルティリウスとイリヤもいた。　尊者が出発の準備をしておらず、兄弟たちのうち誰が同行し、誰が修道院に残るかについて何の指示も出していないのを見て、彼らは彼に尋ねた。

「尊敬すべき父よ、あなたは明日、荒野へお出かけにならないのですか？」

聖人はこう答えられた。

「今週は皆さんと共に修道院に留まるが、土曜日の真夜中には皆さんと別れるつもりだ。」

聖人は、兄弟たちに神のもとへ旅立つ時を予告してこう言ったのだが、彼らはその意味を理解しなかった。 三日目の1月17日、私たちの尊い父アントニオス大聖人の記念日が訪れ、聖エウフィミオスは教会で徹夜祈祷を行うよう命じた。祈祷が終わると、修道院の長老たちを祭壇の前に呼び寄せ、聖人は彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、これからは、私はあなた方と共に徹夜祈祷を執り行うことはもうない。神はすでに、この一時的な生から私を呼び寄せているからだ。それゆえ、ドメティアヌスを私のところへ送ってくれ。そして朝には、すべての兄弟たちをここに集めてほしい。」

これを聞いた長老たちは声をあげて泣き出し、偉大なるエウフィミオスが語った言葉は直ちに兄弟たちに知れ渡った。朝になると、皆が尊者のもとに集まり、彼は彼らにこう語り始めた。

「父たちよ、兄弟たちよ、そして子供たちよ、主において愛する者たちよ、私は先祖たちの道へと旅立つ。あなたがたは、もし私を愛するなら、私の戒めを守りなさい。何よりもまず、完全さの絆である清らかな愛を身につけなさい。　塩のないパンを食べることができないように、愛のない美徳を保つことはできません。なぜなら、あらゆる美徳は、愛と謙遜によってこそ、強固で不変なものとなるからです。謙遜は、それを重んじる者を美徳の高みへと引き上げ、愛はしっかりと支え、その高みから転落することを防ぎます。なぜなら、*「愛は決して滅びない」*（Iコリント13:8）とあり、愛が謙遜よりも高いことは、私たちの主ご自身の模範から明らかである。主は私たちへの愛ゆえに、自ら進んで謙遜になり、私たちと同じように人間となられたからである。それゆえ、私たちは絶えず主に告白し、賛美を捧げなければならない。とりわけ、この反逆的な世界から身を引いた私たちはなおさらである。　兄弟たちよ、あなたがた一人ひとりは自分自身に注意を払い、体と魂を清く保ちなさい。教会の定例集会を決して欠かさず、修道院のすべての伝承と規則を厳守し、苦難に遭っている人々には力の及ぶ限り助けなさい。　もし兄弟のうち、不純な思いと闘っている者がいれば、その者を絶えず導き、教え、励まし、悪魔に躓くことなく、堕ちることのないようにしなさい。　さらに、この最後の戒めをあなた方に加える。修道院の門は、訪れる者に対して決して閉ざされることなく、旅人に対しては常に開かれていなければならない。屋根の下も旅人と共有し、持っているものはすべて、困窮している人々に分け与えなさい。そうすれば、天から神による豊かな祝福があなた方に注がれるであろう。

これらすべてを兄弟たちに命じた後、聖エウフィミオスは、自分の後を継いで牧者となる人物として誰を望むかを尋ねた。すると彼らは満場一致でドメティアヌスの名を挙げた。しかし聖人は言った。

「それは不可能です。ドメティアヌスは私の後、この世に長く留まることはなく、七日目に私の後を追うことになるでしょう。」

聖人のこの大胆かつ明快な預言に衝撃を受けた兄弟たちは、エリコ出身で、下修道院の会計係であったイリヤを選出した[1284]。エウフィミオスは彼に向き直り、こう言った。

「見よ、すべての父たちがあなたを自分たちの牧者であり導き手として選んだ。それゆえ、自分自身と、あなたのすべての群れに心を配りなさい。」

彼に多くの訓示を与え、兄弟たちの指導について教えた後、尊者は、自身の死後にその修道院で起こるであろういくつかの出来事について予言し、次のような最後の言葉を述べた。

「もし私が神の前で大胆さを得ることができれば、何よりもまず、神に恵みを求めて、あなたがたの後にここで修業を志す者たちと共に、永遠に霊においてあなたがたと共にいられるように願うつもりだ。」

そう言い終えると、尊者はドメティアヌスを除く全員を退室させた。彼は祭壇の中で三日間を過ごし、土曜日の夜に安らかに息を引き取り、この世で九十七年を全うして、先人たちの列に加わった。 それは[1285] 年1月20日のことでした。聖エウフィミオスの逝去の知らせはたちまちパレスチナ全土に広まり、あらゆる修道院や隠遁地から修道士たちが集まり、その中には偉大なるゲラシモスもおり、大勢の人々が集まりました。 至聖なるアナスタシオス総主教も、その聖職者一同を率いて参列した。群衆が多すぎたため、第九時になるまで尊い聖人の遺体を埋葬することができなかったが、ついに総主教の命により兵士たちが群衆を退けた後、聖人の遺体は厳かに埋葬された。皆、聖人との別れを嘆き悲しんだ。 とりわけ、ニトリアからやって来たマルティリウスとイリアは、聖人の預言通り、後にエルサレムの総主教の座に就くこととなったが、彼らが聖人の死を嘆き悲しんで涙を流した。すなわち、アナスタシウスの後にマルティリウスが総主教の座に就き、マルティリウスの後にはサリュスティウス、その後にイリアが[1286]、と聖サヴァの伝記に記されている通りである。 一方、偉大なるエウフィミオスの弟子である至福のドメティアヌスは、師の棺から六日六晩、一歩も離れなかった。そして七日目の夜、聖エウフィミオスが喜びに満ち、明るい顔つきで幻の中に現れ、彼にこう言った。

「お前に用意された安息の場所へ来なさい。主キリストが、お前が私と共にいるよう懇願してくださったのだから。」

言い表せないほどの喜びに満たされたドメティアヌスは、そのことを兄弟たちに告げ、喜びをもって教会へ赴き、主のもとで息を引き取り、父の棺のそばに埋葬された。 尊き父エウフィミオスが世を去った後、その墓の周りでは多くの奇跡が起こり、癒しがもたらされた。[1287] これは、聖なる御使いたちを通して栄光を受ける神、すなわち父と子と聖霊の栄光のためである。アーメン。

トロパリオ、第4調:

産み出さぬ荒野よ、喜びなさい。苦しむことなき者よ、心穏やかにあれ。霊的な願いを叶える男が、あなたに多くの子らを授け、敬虔さを植え付け、節制をもって美徳の完成へと育て上げたからである。その祈りによって、キリストなる神よ、我らの生涯を安らかにしてください。

[1284] すなわち、聖テオクティストの修道院のことである。

[1285] 聖エウフィミオス大聖人は473年に帰天した。――コンスタンティノープルには、ミネ総主教（536～552年）の時代に、聖エウフィミオスにちなんで名付けられた修道院があった。12世紀初頭、ロシア人の修道院長ダニイルは、パレスチナにあるその修道院で、あたかも肉体に宿っているかのように、エウフィミオスの聖遺物を目撃した。

[1286] マルティリウスは478年から486年まで、サリュスティウスは486年から494年まで、イリヤ2世は494年から517年まで、それぞれエルサレムで総主教を務めた。

[1287] 彼らについて、聖エウフィミオスの伝記を著したキリル・スキフォポルスキー――ラヴラ修道院の修道士であり、エウフィミオス本人およびその弟子たち（聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイとヨハネ・モルチャルニク）の同時代人――が詳細に記している。

コンダク、第8調:

あなたの尊き誕生に、被造物は喜びを見出し、また、尊き者よ、あなたの神聖な記念において、多くの奇跡がもたらす安らぎを喜ぶ。それらから、私たちの魂に豊かに与え、罪の汚れを清めてください。そうして、私たちが「ハレルヤ」と歌えるように。

聖殉教者ヴァッサ、エウセビオス、エウティキオス、ヴァシリダスの記念日

記念日：1月20日

聖殉教者ヴァス、エウセビオス、エウティキオス、およびヴァシリドは、ディオクレティアヌス帝の治世中に殉教した。 当初、彼らは王宮に仕え、裕福であり、王のシンクリト[1288]の一員であった。ニコミディオスの司教である聖殉教者テオペンプトの苦難を目撃し、彼らはキリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。 その結果、彼らは不敬虔な皇帝のもとに引き出され、拷問を受けた末、5人の奴隷たちと共に殉教の死を遂げた。聖ヴァスは体の半分まで堀に埋められ、全身を切り刻まれてから、神に息を引き取った。 聖エウセビオスは逆さ吊りにされ、四つ裂きにされた。聖エウティキオスは手足を縛られ、四本の柱の間に激しく引き伸ばされた末、引き裂かれた。聖ヴァシリドは刃物で斬殺された。こうして、彼らは皆、殉教の冠を受けた[1289]。

聖殉教者インナ、ピンナ、リムマの記念日

記念日：1月20日

聖殉教者インナ、ピンナ、リムマ[1290] は、スキフィア、すなわち北方の国[1291] 出身であり、聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの弟子たちであった。彼らはキリストの御名について教え、多くの異教徒を正しい信仰へと導き、洗礼を授けた。 このため、彼女たちは異民族の君主に捕らえられたが、キリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう強要されることはなかった。当時、厳しい冬が訪れており、川は凍りつき、氷の上を人だけでなく、馬や荷車までもが歩くことができた。 首長は、丸太を丸ごと一本ずつ氷の上に立て、聖人たちをそこに縛り付けるよう命じた。こうして、水が波立ち、氷が次第に厚みを増して聖人たちの首まで達したとき、彼らは恐ろしい寒さに苛まれながら、その至福の魂を主の御許に委ねた[1292]。

2月3日

1月21日（旧暦）

[1288] シンクリトス——軍政および民政を担う、最も重要な王の顧問および高官からなる機関。

[1289] 聖殉教者ヴァス、エウセヴィア、エウティキオス、ヴァシリドは、303年にニコメディアで5人の奴隷と共に殉教した。

[1290] 13世紀のセルビアの序文によれば、これらの殉教者はエネン、ニレン、ペンと呼ばれている。

[1291] ここでいうのは、もちろん、ドナウ川の河口からフラキアにかけて広がっていた、いわゆる「小スキティア」のことである。聖インナ、ピンナ、リムマは、ドナウ川の右岸および黒海の西岸に居住していた南スラブ人の農耕部族に属していた。

[1292] 2世紀に殉教した。

私たちの尊い父、マクシムス・殉教者の生涯。

記念日1月21日

その名「[1293] 」だけでなく、その生涯においても偉大であった聖マクシムスは、偉大なる帝都コンスタンティノープルで生まれた。高位の身であり敬虔な両親のもとで育った彼は、本格的な学術教育を受けた。哲学と神学を徹底的に学び、その知恵によって最高の栄誉を勝ち取り、宮廷においても尊敬を集めていた。 皇帝ヘラクレイオス[1294] は、彼の知性と義にかなった生き方を見て、本人の意思とは関係なく、第一秘書という称号を授け、 自身の顧問の一員に加えた。聖マクシムスは宮廷の人々の間で愛され尊敬され、王都全体にとって大いに有益な存在であった。

この頃、私たちの主キリストにおいてただ一つの意志と一つの志のみを認めるモノフェリテ派の異端が現れた[1295] 。この異端は、正統な信仰告白に反して、キリストにおいてただ一つの本質のみを無謀に認めていた以前のエウティキウス派の異端から発展したものであり、正統な信仰告白は、受肉された神である私たちの主において、 二つの本性と二つの意志、二つの志と行為――それぞれの本性に特有でありながら、キリストという一つの御顔において結合されている――を認めることを求めている。なぜなら、キリストは神であり、二つの御顔に分かれることなく、二つの本性において不可分として認識されるからである。モノフェリテ派の異端の擁護者および広め手は、当初、 アレクサンドリアの総主教キル、コンスタンティノープルのセルギウス[1296] 、さらには彼らに誘われてこの異端に傾いた皇帝ヘラクレイオス自身であった。キルはアレクサンドリアで、セルギウスはコンスタンティノープルで、それぞれ地方公会議を招集し、この異端を承認し、その決定を至る所に布告して、東方全土を迷わせた。 ただ一人、エルサレム総主教聖ソフロニオスだけが、この異端に反対し、偽りの教えを受け入れなかった。至福のマクシムスは、異端が王宮にまで浸透し、皇帝自身をも惑わしているのを見て、多くの人々の例に倣って自分も異端に惑わされないか心配するようになった。そこで彼は、その地位と世俗の栄光をすべて捨て、都市から遠く離れた「クリソポリス」[1297] と呼ばれる修道院へと赴き、そこで修道士となった。*「不義の天幕に住むよりは、神の家の敷居に立つことを選ぶ」*（詩編83:11）と願ったのである。[1298] そこで数年後、彼はその徳高い生活により、修道院長（アヴヴァ）に選出された。

一方、総主教セルギイは、皇帝ヘラクレイオスに、彼らの誤った信仰の告白文を執筆するよう働きかけた。この、モノフェリテ派の異端に満ちた文書を、皇帝は「エクフェシス」、すなわち「

[1293] マクシムス（ラテン語：Maximus）は、ギリシャ語で「最も偉大な」を意味する言葉に相当する。聖マクシムスの名と彼の個人的資質および生涯との一致については、その弟子である聖アナスタシオスが、ガングルの司祭テオドロス宛ての手紙の中で指摘している。 – 聖マクシムスは580年頃に生まれた。655年にコンスタンティノープルで行われた2度目の尋問の際、彼は75歳であると述べた。

[1294] 皇帝イラクリウスは600年に即位し、641年まで在位した。

[1295] モノフェリテ派の異端は7世紀初頭に発生し、モノフィシテ派の異端の延長線上にあるものであった。モノフェリテ派は、キリストにおいて一つの意志と一つの神的な働きのみを認め、それによって「神の御言葉」の受肉という教義を歪めた。 一方、正教の教えによれば、意志は本質に属するものであって、位格に属するものではない。したがって、主イエス・キリストは、本質において神であり、本質において人であるため、神的な意志と人間的な意志の両方を持っていた。この後者がなければ、主は本質において完全な人間ではなかっただろう。

[1296] キルスは630年から640年にかけてアレクサンドリアの総主教座に就いていた。セルギオス1世は610年から638年にかけてコンスタンティノープルの総主教であった。

[1297] クリソポリス修道院は、コンスタンティノープル海峡の対岸、現在のスコダール、ハルキドン近郊に位置していた。この修道院は、修道士たちの敬虔な生活で知られていた。ここで聖マクシムスは修道誓願を立て、その後アッバに選出された。「アッバ」はシリア語で「父」を意味する。この称号は修道院の院長に与えられた。

[1298] 詩篇の歌い手は、罪人たちの宮殿で贅沢に暮らすよりも、神の家の「戸口に横たわる」ことを好む。

[1299] 」と呼び、自国においてすべての人にそのように信じるよう命じた。その結果、キリストの教会は混乱に苛まれることとなった。　アッバ・マクシムスは、コンスタンティノープルや東方全土の教会がどのような混乱に直面しているか、また異端者たちがどのように増え、勢力を強めているか、一方で正教が弱体化し、迫害の嵐に揺さぶられている様子を見て、心を痛め、嘆息し、涙を流した。ところが、西欧ではこの異端が支持者を獲得できず、完全に拒絶されていたことを耳にした。ローマ教皇セウェリヌス[1300]　が皇帝の「声明」を受け入れず、その後継者であるローマ教皇、教皇ヨハネス[1301] が公会議においてこの「要約」を破門したため、至福のマクシムスは自身の修道院を離れ、西方の国々へと向かった。彼は古都ローマに避難先を見つけようとした。というのも、サラセン人によるパレスチナへの侵攻[1302] により、エルサレムでの生活が不可能となっていたからである。　彼は、信仰を堅く守り抜く正教徒たちと共に暮らすことを選び、ローマへと向かった。その道中、彼は途中の都市にいるアフリカの司教たちを訪ね、彼らと語り合う中で、彼らの信仰を確固たるものにし、敵の 狡猾な策略を回避する方法や、彼らの[1303] 巧妙に張り巡らされた罠から逃れる方法を教えた；　また、遠く離れた場所にいる者たちには手紙を送り、正統な信仰を説き、異端にはあらゆる手段を尽くして警戒するよう説得した。

この頃、コンスタンティノープル総主教セルギウスが死去し、その地位には同じ異端の信奉者であるピルスが就いた[1304] ；同様に、アレクサンドリア総主教キルも死去し、その後、皇帝自身もこの世を去った。　しかし、死の直前、多くの偉大で聖なる司教や神に賢明な父たちが、彼の信仰宣言を単に拒絶するだけでなく、破門の宣告まで下しているのを見て、皇帝は深く恥じ入り、これは自身の信仰告白ではなく、　かつての総主教セルギウスのものであり、彼自身が「要約」を執筆し、王に署名するよう説得したに過ぎない、と至る所に布告した。　皇帝イラクリオスが亡くなると、後継者となったのは息子のコンスタンティノス[1305]　であったが、彼もまた在位わずか4ヶ月で、継母マルティナによって密かに毒殺された。マルティナは、総主教[1306] の協力のもと、自身の息子イラクリオンを王位に就かせた。しかし、6ヶ月後、すべての高官たちがイラクリオンに反旗を翻した。 彼を捕らえると、彼と母のマルティナの鼻を切り落とし、その後、恥辱と共に追放した。そして、彼らはコンスタンティノスの息子であり、ヘラクレイオスの孫にあたるコンスタンサという名の者を王位に就か

[1299] この信仰宣言は、すべての人に対して拘束力を持つ勅令、すなわち布告の形で公布され、キリストにおける「一つの意志」か「二つの意志」かをめぐるあらゆる論争を禁じた一方で、同時に「一つの意志」の教義を正しい教義として宣言した。しかし、その後も論争は東方教会を揺るがし続けた。

[1300] セウェリヌス――638年から640年までローマ教皇を務めた。

[1301] 教皇ヨハネス4世は、640年から642年までローマ教皇の座に就いていた。

[1302] 7世紀初頭、東ローマ帝国はアヴァール族、とりわけペルシア人からの絶え間ない攻撃にさらされていたほか、アラブ人、すなわちサラセン人からも常に脅威にさらされていた。　637年から640年にかけて、シリア、パレスチナ、エジプトがサラセン人の支配下に入った。これに大きく寄与したのがモノフェリテ派であり、彼らは正教会への敵意から、常に敵の手に身を委ねる用意があった。 エジプト一国におけるモノフィシト派の数は600万人に達したのに対し、正教徒はおよそ30万人しかいなかった。皇帝ヘラクレイオスは、あらゆる手段を尽くしてモノフィシト派と正教会との和解を図った。そのために、彼は『エフェシス』を公布したのである。

[1303] 聖マクシムスは640年頃にアフリカに到着した。それ以前、彼は633年から640年にかけて、アレクサンドリア、コンスタンティノープル、キプロス、小アジア、その他の国々で正教の信仰を擁護していた。北アフリカでは、640年から645年までの5年間を過ごした。

[1304] ピルスは639年にセルギウスの後を継いだ。彼が招集した公会議において、彼はセルギウスの「声明」（エクフェシス）を承認し、異端を擁護する活動を熱心に続けた。

[1305] コンスタンティノス3世は641年にビザンツ帝国の皇帝となった。

[1306] 民間の噂では、ピルス総主教がコンスタンティヌス皇帝の継母マルティナと共謀し、同皇帝を毒殺したと言われていた。　民衆の怒りを恐れた彼は、641年に北アフリカへ逃亡し、総主教の座を去った。650年まで、彼はまずアフリカで、その後ローマで暮らした。

せた。このコンスタンサから後に、ポゴナトス[1307]と呼ばれるコンスタンティノスが生まれた。 コンスタンスの即位後、当時のコンスタンティノープル総主教ピルスは、マルティナの同志であり、世間の見方によれば彼女と共にイラクリオスの息子コンスタンティヌス（新即位したコンスタンス王の父）を毒殺したとされていたが、激しく恐怖し、独断で総主教の位を辞して、アフリカへ追放された。彼の後を継いでコンスタンティノープル総主教の座に就いたのは、同じく異端のモノフェリテ派であったパウロス[1308]であった。皇帝もまた同じ異端に傾倒し、その熱烈な擁護者かつ広め手となった。

尊者がアフリカの地に留まっていた頃、コンスタンティノープル総主教ピルスがそこに到着した。彼は総主教の座から逃れ、各地の都市を巡りながら、正教徒たちを自らの異端へと誘い込んでいた。 もし尊者マクシムスという敵がいなければ、彼はそこでキリストの教会に多大な害を及ぼしたであろう。彼は尊者と出会うたびに、信仰をめぐる論争を何時間も繰り広げたのである。アフリカの司教たちは、その国の統治者であるパトリキウス・[1309] ・グリゴリウスの意向により、両者の信仰論争を聞くためにカルタゴに集まることを余儀なくされた。 公会議が召集され、論争が始まると、神に導かれたマクシムスは、聖書と聖父たちの教義[1310] に基づき、ピルロスの主張を反駁して彼に勝利した。彼は、キリスト・神において二つの本性が存在するように、彼の中には二つの意志、二つの志、そして二つの働きが存在しなければならないことを証明した——ただし、それらは一つの位格において不可分のものである。 論争に敗れたピルスは正教会に加わり、教会から愛と敬意をもって受け入れられ、総主教の称号を授けられた。その際、彼は正教の信仰告白書も著した。その後、彼はローマへ赴き、ヨハネの後継者である教皇テオドロスを訪ねた。 教皇は、彼を正統派のコンスタンティノープル総主教として、敬意をもって迎え入れた。コンスタンティノープルで、ピルスが正統派に加わったという噂が広まると、異端者たちの集団は嫉妬に駆られて暗澹とした。 彼らは虚偽の話をでっち上げ、アフリカの司教たちと教皇が、ピルスの意思に反して、彼らとの一致に加わるよう強要したかのような噂を民衆の間に広めた。この噂は皇帝の耳にまで届いた。 王は直ちに、オリンピアという名の異端者である高官をイタリアへ派遣し、ピルスを再びモノフェリテ派の信仰へと回心させようとした。オリンピアは イタリアに到着すると、ラヴェンナ[1311] に滞在し、ローマからピルスを呼び寄せ、かつての異端へと戻るよう説得した。 一方、ピルロスは、自分の嘔吐物に戻ってくる犬のごとく振る舞い、破門に値する者となり、その後、聖なる教父たちによって、同調者たちと共に破門された。

ちょうどその頃、コンスタンティノープル総主教である異端者パウロの唆しにより、コンスタンス王は、かつて「要約」を著した祖父ヘラクレイオスと同様に、 ——異端に満ちた自身の信仰告白を書き上げ、それを「ティポス（模範）」と称して各地に送り、その通りに信じるよう命じた[1312]

1307 コンスタンスは641年から668年まで、コンスタンティノス4世ポゴナトスは668年から685年まで在位した。

1308 パウロ2世は641年から654年までコンスタンティノープルの総主教の座に就いていた。

1309 ギリシャ・ローマ帝国では、地方の統治者が「パトリキウス」と呼ばれることが珍しくなかった。また、貴族出身者全般も同様に呼ばれた。 パトリキウス・グリゴリウスはカルタゴの統治者であった。カルタゴはチュニスの北東に位置していた。紀元前860年頃、ティルスの女王ディドーによって建設された。紀元前148年にローマ帝国の支配下に入った。西暦439年にヴァンダル族に征服されたが、533年にベリザリウスによってローマ帝国に返還された。697年、アラブ人によって完全に破壊された。

1310 聖マクシムスとピルロスの公開討論は、645年7月に行われた。

1311 ラヴェンナは、アドリア海に面した港を持つ都市で、テッサリアのギリシャ人によって建設された。多くのローマ皇帝がここに主たる居所を置いていたため、この属州は時に「ロマニア」とも呼ばれる。アウグストゥス皇帝はここで艦隊を駐留させていた。

1312 ピルロスの後任であるパヴェル総主教は、セルギオスの例に倣い、コンスタンティヌス帝を説得して、648年に新たな教義勅令「信仰の模範」（ティポス）を公布させた。 この勅令では、論争の的となっている問題——キリストの意志に

。この信仰の模範は、教皇テオドールがすでに死の床にあった頃にローマに届いた。彼の死後、後継者となったのは至福のマルティンであった。　皇帝は、新たに就任した教皇にも、自身が作成した信仰の「ティポス」を受け入れることを望んだが、教皇はこれを拒否し、次のように述べた。

「たとえ全世界がこの正統信仰に反する新しい教義を受け入れようとも、私はそれを受け入れず、福音と使徒たちの教え、そして聖なる教父たちの伝承からも決して離れることはない。たとえ死を遂げることになっても。」

当時ローマに滞在していたクリソポリス修道院のアッバ、聖マクシムス（[1313] ）は、至福の教皇マルティヌスに対し、地方公会議を招集し、「ティポス」と呼ばれる皇帝の信仰告白を、異端的でありキリストの教会の教えに反するものとして非難するよう助言した。　そして、その通りに行われた[1314] 。教皇は、105名の司教たち（その中にはアッバ・マクシムスも含まれていた）を召集し、キル、セルギウス、　ピルロス、パウロの誤り、さらには皇帝の異端的な信仰告白についても審議に付し、これらの偽りの教えを破門に処し、すべての信徒に向けて書簡を送り、正教の信仰を確固たるものとし、異端の誤りを明らかにし、これらからあらゆる手段を尽くして身を守るよう警告した。　皇帝はこれを聞くと、怒りと並外れた激怒に満ち、自身の代理であるテオドロス・カリオポスをイタリアへ派遣し、教皇マルティヌスを捕らえるよう命じた。その際、彼に対して次のような告発を突きつけたのである：　「サラセン人と協定を結び、彼らにギリシャ・ローマ帝国への侵攻と皇帝に対する戦争を教唆した」こと、「聖なる教父たちに受け継がれた信仰を正しく守っておらず、さらに聖母マリアを冒涜している」こと。　ローマに到着すると、皇帝の代理人は公の場で教皇に対してこれらの告発を突きつけた。至福のマルティンは、彼に突きつけられたいかなる罪にも無実であったため、悪意に満ちた誹謗中傷に対して身を守った。

「サラセン人とは」と彼は語った。「私はいかなる協定も結んだことはなく、ただ、サラセン人の間に住み、極度の貧困と困窮の中にいる正教の兄弟たちに施しを送っただけである。　もし誰かが聖母マリアを崇敬せず、彼女を告白せず、彼女に礼拝を捧げないならば、その者は現世においても来世においても呪われるであろう。聖なる使徒たちや聖なる教父たちによって伝えられた聖なる信仰を、正しく守っているのは我々ではなく、むしろ偽りの知恵を振りかざす者たちである。

皇帝の代理人は、教皇の弁明に耳を貸さず、彼がすべての罪に問われるべきであると認定し、さらに彼が違法に教皇の座に就いたという容疑も付け加えた。その後、彼は夜陰に乗じて軍隊を動員し、密かに教皇を捕らえ、皇帝のもとへ送った。教皇はヘルソネソスに幽閉され、そこで息を引き取った[1315] 。

関する問題――については完全な沈黙を守り、最初の5回の全地公会議で承認された内容に満足するよう命じられていた。

[1313] 聖マクシムスは645年の終わりにローマに到着し、645年から655年までの10年間をそこで過ごした。

[1314] 聖マルティン教皇は、以前、前任者であるテオドロス教皇のビザンツ宮廷における使節（すなわち代理）を務めており、コンスタンティノープルに長く滞在していた。　649年5月に教皇の座に就くと、コンスタンティノープルから皇帝の勅令（ティポス）が送られ、それに従うよう命じられた。聖マルティンはこれを拒否し、聖マクシムと共に異端を根絶するための策を模索し始めた。　649年の終わりに、彼は聖マクシムスの参加を得て、ローマで150人の司教からなる、いわゆるラテラン公会議を招集した。　この公会議において、イエス・キリストにおける二つの意志と行為に関する正統的な教義が確認され、異端の擁護者たち――テオドロス・ファランス、セルギオス・コンスタンティノポリス、総主教ピルロスとパウロス、そして最後に　アレクサンドリアのキル、さらにはヘラクレイオスの『エクフェシス』とコンスタンスの『ティポス』が破門宣告を受け、公会議の「決議」はコンスタンス皇帝に送られた。

[1315] 聖マルティン教皇は653年に拘束され、コンスタンス皇帝の命によりコンスタンティノープルへ送られた。聖マクシムスと共に、彼は654年9月にコンスタンティノープルに到着した。1年にわたる旅の間の彼らの運命については、定かではない。　祖国への反逆と皇帝陛下への侮辱の罪に問われた聖マルティンは、ヘルソネスへ追放され、そこで655年9月16日、飢えに苦しみながらこの世を去った。

教皇が捕らえられる数日前、ローマで聖マクシムスとその弟子アナスタシウスが捕らえられ、足枷を嵌められたままコンスタンティノープルへ送られた。これは皇帝の命令によるものであった。皇帝は、モノフェリテ派とその書簡を非難するための公会議が、誰の助言と働きかけによって招集されたかを知っていたからである。　聖者が海路でビザンティウムに到着すると、皇帝から遣わされた者たちが現れたが、彼らの目つきからはすでに強い敵意がにじみ出ていた。彼らは、裸足で衣服も着ておらず、縄で縛られた聖者を恥知らずにも捕らえ、悲嘆に暮れる弟子を伴わせて街中を引きずり回した。　ある薄暗い部屋に連れて行くと、彼らは師を一人きりで閉じ込め、弟子とは一緒にいさせず、弟子を別の牢獄に隔離した。　数日後、聖人は尋問のために王宮へ連行され、上院の全議員が集まる場へ連れて行かれたが、そこには王の姿はなかった。彼がその場に入ると、悪意と敵意に満ちた全員の視線が彼に注がれた。尋問を行う役目は、高官の一人である財務官[1316]に委ねられた。彼は雄弁で、虚偽の告発を巧みに述べ、真実を虚偽に変えることに長けており、真実を歪めることに関しては誰よりも熟達していた。彼はあらゆる悪意と厚かましさを見せつけ、ありとあらゆる非難と侮辱を浴びせた！　彼は、当時生後70歳を超えていた聖人の尊厳ある老齢を恥じることもなく、その瞳に輝く恵みに動揺することもなく、柔和で品位があり、率直で慈愛に満ちた性格も、また「尊者」という称号さえも容赦しなかった。　その間、不義な告発者は、無実の人に対して、真実にも常識にも全く合致しない多くの言葉を浴びせ、その長広舌の中に悪意に満ちた狡猾さ、厚かましさ、そして狡猾な気質を露わにしていたが、それによって彼は、そのすべての言葉において、この上ない恥知らずさと愚かさを露呈していたのである。　当然のことながら、彼は、説得力があり、柔和さと分別に満ちた尊師の反論にしっかりと答えることはできず、ただ自身の言葉の中で無謀さと支離滅裂さを露呈しただけであり、それゆえに打ち負かされたのである。　特に、当時何が語られ、何が行われたか、無実の者にどのような告発が向けられたか、また、偽りある者たちがいかにして自らの虚偽を真実の装いで提示しようとしたか――これらについては、聖マクシムスの弟子であり、かつてローマ教会の[1317]（使節）を務めたもう一人のアナスタシオスが詳細に記述している。ここでは、彼の膨大な叙述の中から、記憶のためにその一部を引用する。

不法な告発者、すなわち財務官という職にある者が聖人の前に立つやいなや、彼は直ちに、悪意のない聖人を罵詈雑言で貶め、脅しをかけ始めた。聖人を「良心のない者」「祖国への裏切り者」「皇帝の敵」と呼び、あらゆる恥ずべき行為や犯罪を彼に押し付けたのである。　そこで聖人が告発者に、なぜそのような告発を向け、どのような裏切りを非難するのかと問いただすと、その高官は彼に対して憤慨すべき中傷を浴びせ、明らかに虚偽の証人を立てた。　彼は、聖人が多くの大都市を野蛮人に売り渡したかのように非難した。すなわち、アレクサンドリア、エジプト全土、そしてペンタポリス[1318]を祖国から切り離し、親しく友好的な関係にあったサラセン人の領土に編入したのだと。聖人は、自分に向けられたその告発が虚偽であり、笑止千万であると説明した。

「修道士よ、都市を征服した者たちなど、私にとって何の関係があるというのか。ましてや、キリスト教徒である私が、サラセン人と交わりを持つことなどあり得ただろうか？　それどころか、私は常に、キリスト教の都市にとって有益なことだけを望んできたのだ。」

しかし、恥知らずな誹謗者は、まるで夢物語のように様々な嘘をでっち上げ、不似合いなほど声を張り上げて、至福のマクシムスが東方の王を誹謗し、西方の王たちの方がより尊敬に値すると述

[1316] 財務官――ギリシャ語の「ガゾフィラクス」。この言葉は、ペルシア語の「ガザ」（財産、富）と、ギリシャ語の「храню」（保管する）に由来する。「ガゾフィラキア」――公の宝物庫――は、王室または教会の財務庫を指す（マルコ12:41、ヨハネ8:20）。

[1317] アポクリシアリオン――ギリシャ語で、王宮における教会関連の請願者、弁護人を意味する。

[1318] このような告発のきっかけとなったのは、かつて聖マクシムに好意を抱いていたアフリカ総督グリゴリウスが、650年頃に帝国から離反したことである。――ペンタポリス――エジプトに隣接するリビアの西部地域。

べたかのように叫んだ。その際、彼は偽証人たちの証言を引用した。　聖人は深くため息をつき、これに対してこう言った。

「私があなた方の手に引き渡され、不当な罪のせいで拷問に耐えていることを、私の神に感謝します。それによって、私の自発的な罪と人生の悪徳を清めることができるからです。　しかし、あなたの虚偽の告発に簡潔に答えるために、まずお尋ねしたい。あなたがたが言及している王への冒涜の言葉を、私自身の口から聞いたのか、それとも他の誰かがあなたにそう伝えたのか?

彼らは答えた:

「私たちは、あなたの口からそれを聞いたという他の人々から聞きました。」

聖人が彼らを呼び出して直接証言するよう求めたところ、告発者たちは、彼らはすでにこの世にいないと述べた。

聖人はこれに対し、こう言った。

「もし、私の口から中傷を聞いた者たちがすでに亡くなったというのなら、なぜ彼らがまだ生きていた頃に、私を尋問に呼び出さなかったのか。そうすれば、あなたたちは余計な労力を省くことができ、私も明らかな罪に対して罰を受けることになっただろう。　しかし、一つ確かなことがある。私に対してなされたあなた方の誹謗中傷が偽りであるのと同様に、私を裁判にかけた者たちも、人の心を試される神を目の前に置いていなかったのだ。　もし私が、あなたがたがでっち上げたあの虚偽の夢「[1319] 」を、かつて少しでも心に思い浮かべたり、誰かに話したり、あるいは誰かから聞いたりしたことがあれば、私は主の再臨を見るに値せず、もはやキリスト教徒とは名乗らないことを誓う!

そこで、グリゴリウスという名の偽証人が呼び出され、彼はローマで、マクシムスの弟子アナスタシウスが皇帝を「司祭」と呼んでいるのを耳にしたと主張し、それは師であるマクシムスから学んだことだと述べた。聖マクシムスはグリゴリウスに反論し、その虚偽の中傷を勇敢に退けた。彼はこう語った。

「グリゴリウスがローマにいた時、彼は私たちと『統一意志』についてのみ語り合い、『ティポス』と呼ばれる教義的著作を受け入れるよう提案してきた。しかし、私たちはそれを拒否し、私たちの魂にとって有益なことを選んだ。あなたが今言っていることについては、私も知らないし、私の弟子も決して口にしたことはない——神が証人である!」　しかし、私は当時、自分の弟子ではなく、グリゴリウス本人に対して次のように語ったことを覚えている。　信仰の教義を研究し、定めることは、聖職者の務めであり、皇帝の務めではない。なぜなら、聖職者には、王に聖油を注ぎ、彼に按手し、聖体拝領の秘跡を執り行い、祭壇の前に立ち、その他すべての神聖かつ至高の秘跡を執り行う権限が与えられているからだ。これが、私が当時語ったことであり、今も語っていることである。この私の言葉を思い出すことを、グリゴリウス自身も否定はしないだろう。もし否定したとしても、それは自分自身を否定することになる。これらすべてについて、誰もが法廷で私を告発するか、あるいは弁護するかは自由である。

どうすべきか分からず、偽証の力に頼っていた告発者たちは、尊師を集会から連れ出した。その後、彼の弟子アナスタシウスが呼び出された。彼らは厳しい言葉や過激な脅しで彼を動揺させようと努め、師に対する誹謗中傷を裏付けるよう説得した。彼らは、ローマで信仰をめぐってピルロスと論争した際、師が彼に残酷に扱ったかのように証言するよう強要した。　アナスタシウスは勇敢にも、師がピルロに何の害も与えなかったばかりか、むしろ特別な敬意をもって接していたと断言した。その率直さに対し、彼らはアナスタシウスの首や顔、頭を拳で殴り始め、こうして暴力によって真実を打ち負かそうとした——そして彼を以前の牢獄へ送り返した。　その後、以前の虚偽の告発や偏

[1319] この夢は、（一見すると）アフリカ総督グリゴリウスの反乱と時期が一致していたが、これについては後述の伝記で詳しく述べられている。その後の尋問の一つにおいて、聖マクシムスは、彼に帰せられた夢を通じてグリゴリウスを反乱に駆り立てたとして、再び告発された。

った尋問だけでは満足できず、彼らは再び聖マクシムを召喚し、新たな誹謗中傷によって彼の不屈の精神を打ち砕こうと企てた。その誹謗中傷とは、聖マクシムがオリゲネス[1320] の教えの信奉者であり、その教えのすべてに同意しているというものであった。　聖人は、それらの虚偽の告発が全く根拠のないものであることを、容易かつ堂々と反駁した。　オリゲネスについては、キリストおよびキリスト教徒との交わりから断絶された者であると述べ、その教えの信奉者たちについては、神の裁きに値する者であると認めた。そこで彼らは再び、聖マクシムスにピルレについて、また彼がコンスタンティノープル総主教から離反し、彼との交わりを拒む理由について問い詰め始めた。　彼らは聖人を他の質問でも試み、皇帝の「ティポス」を受け入れ、それを最も完全かつ必須の教義的信仰表明として特別な敬意をもって扱うよう彼に提案した。　聖人はこれに異議を唱えたが、彼らは多くの辛辣な非難で彼を苛立たせた。しかし、あらゆる論争において尊者マクシムに打ち負かされ、　自らの仕掛けた罠に絡め取られているのを見て、彼らは集会を解散し、クリソポリスのアッバの打ち負かすことのできない勇気を証言するために、急いで皇帝のもとへ向かった。

「マクシムは」と彼らは言った。「弁論において無敵であり、たとえ誰かが彼を拷問したとしても、彼を我々の同志に説得することは誰にもできないのだ！」

その後、聖人は再び牢獄に投じられた。しばらくして、別の論客たちが彼のもとを訪れた。彼らは、頻繁に彼と論争し、威嚇的な言葉で脅せば、はるかに早く彼を自分たちの信仰へと導けるだろうと考えていたのだ。訪れた者たちは、自分たちが総主教から遣わされたと告げ、続いて聖人にこう尋ねた。

「あなたはどの教会に属しているのか。ビザンティウムか、ローマか、アンティオキアか、アレクサンドリアか、それともエルサレムか？」　というのも、これらすべての教会とその管轄地域は一致しているからだ。したがって、もしあなたもカトリック教会に属しているのなら、直ちに私たちと交わりを結ぶがよい――ただし、厳しい追放に遭い、予期せぬ苦難を経験することを望まない限りは。

これに対し、その義人は極めて賢明にこう答えた。

「主キリストは、真の救いをもたらす信仰告白を保持する教会を『カトリック教会』と呼ばれました。この信仰告白ゆえに、主はペトロを『幸いなる者』と呼び、彼の上に『全地教会』を築くと約束されたのです[1321] 。しかし、私は、あなたがたが言うように、すべての教会が交わりに入った根拠となっている、あなたがたの信仰告白の内容を知りたいと思います。　もしそれが真理に反するものでなければ、私もそれから離れることはありません。

使節たちは彼にこう答えた。

「私たちにはあなたとこのことについて話すよう命じられてはいませんが、それでもお話ししましょう。私たちは、二つの本性の違いゆえにキリストにおいて二つの働きを、また、一つの御人格における両本性の結合ゆえに一つの働きを告白しています。」

聖人はこれに対し、次のように述べた。

「もしあなたがたが、二つの働きについて、それらが一つの御人格における二つの本性の結合の結果として一つの働きとなったと言っているのなら、それはつまり、その二つの働きのほかに、あなたがたはさらに新しい、第三の働き、すなわち融合した、あるいは神人合一の働きを認めているということになる。」

[1320] オリゲネスは、3世紀の最も著名なキリスト教の教師である。 数多くの著作において――それらは最も傑出した教父たちでさえ深い敬意を払っていた――オリゲネスは、しかし、正統的ではない異端的な性質を持ついくつかの見解を展開していた。そのため、それらの著作は異端として非難されたが、オリゲネス自身がそれらの非正統的な見解を不変の真理として主張していたわけではない。　その一例が、553年の第5回全地公会議で非難された、魂の先在に関する彼の教義である。

[1321] マタイによる福音書16章17～18節を参照

「いいえ」と使節たちは答えた。「私たちは二つの働きを認めていますが、それらが結合した結果として一つの働きについて語っているのです。」

聖人はこれに対し、次のように反論した：

——あなた方は自ら、揺らぎやすい信仰を作り上げ、神は実在しないにもかかわらず存在し得ると主張しているのです。　なぜなら、もしあなたが、一つの御顔における二つの本性の結合を理由として二つの行為を一つに統合し、その後、本性の相違を理由としてその一つの行為を二つに分割するならば、行為の統一性も二元性も存在しなくなるからである。二元性は統一性によって、統一性は二分化によって、互いに排他的なものだからである。　そればかりか、こうした詭弁は、行為が存在する場（すなわち神人合一）を完全に無効にし、さらには、その本質に固有であり、本質から奪われることも変更されることもないような顕現を欠いているものとして、それを完全に排除してしまうのである。　そうでなければ、聖父たちの解釈によれば、その本質に固有の行為において自らを現さない本質は、存在そのものを失うことになってしまう[1322]　。しかし、私はこれを認めることはできず、聖父たちからそのような信仰を学んだこともない。あなた方は権威を持つ者として、私に対してご自由に処置を下さればよい。

彼らは、これに対して何を反論すべきか分からず、自分たちに服従しない者は破門され、定められた死を受け入れなければならないと述べた。聖人は穏やかに、そして謙虚にこう答えた。

「神の御心が、御名の栄光のために、私の上に成されますように。」

そこで使節たちは総主教のもとへ赴き、聖人が語ったことをすべて伝えた。王は、かつてピラトがユダヤ人たちと相談したように、総主教と相談した上で、聖人をフラキア地方にあるヴィジウ（Vizium）という名の小さな町へ追放することを命じた。[1323]。同様に、その弟子アナスタシオスも、ギリシャ王国の辺境の遥か彼方、異教徒の言葉でペルヴェラと呼ばれる極めて過酷な場所へ、[1324] 流刑に処された。　同様の処置は、この聖人のもう一人の弟子であるアナスタシオスに対しても行われた。彼はかつてローマで使節を務め、後に聖マクシムスの伝記を著した人物である。彼はフラキアの都市メセムブリア[1325] へ追放された。

ちょうどその頃、ローマ教皇である至福のマルティンがコンスタンティノープルに連行され、多くの苦難を経た後、ヘルソネスへ流刑に処された[1326]　。彼が流刑に処されるさらに以前、コンスタンティノープルに滞在していた際に、コンスタンティノープル総主教パウロが死去した。　彼の後を継いで、前述のピルスが総主教に就任した[1327]　が、彼もまた4ヶ月後に死去した。そこで、同じくモノフェリテス派の異端を頑なに信奉するペトロスが総主教の座に就いた[1328]。

[1322] 聖なる教父たちの理解によれば、いかなる本性も、それ自体に固有の作用において現れ出ない限り、存在することも、認識されることもできない。したがって、主イエス・キリストにおいて一つの意志を認めるならば、二つの本性のうちの一方はその存在を失い、存在しなくなるはずである。　同時に、神人合一も消滅することになる。このように、受肉という教義はモノフェリテ派によって歪曲されたのである。

[1323] トラキアは北でカルパティア山脈と接し、イリュリアから南にはマケドニア、エーゲ海（群島）、プロポンティス（マルマラ海）、そして東には黒海が境界となっていた。　このように、古代フラキアには、ハンガリーの東部、トランシルヴァニア、モルドバ、ワラキア、ブルガリア、セルビア、そしてルメリアの東部が含まれていた。　ヴィジアは、フラキア東部、黒海沿岸にある小さな町である。ここはアスティコスと呼ばれる小さな郡の首都であった。その住民たちは、自分たちの町の近くで難破した者たちをすべて略奪していた。

[1324] ペルヴェラ——マケドニアとテッサリアの間に位置する、オリンポス山の峡谷にある都市。

[1325] メセムブリアは、フラキア東部、黒海沿岸にある都市である。

[1326] それは655年のことだった。——タウリカ半島の東側にあるヘルソネス。

[1327] パウロは655年に死去した。

[1328] ペトロスは655年から666年までコンスタンティノープル総主教区を統治した。

長い時が経ち、再び皇帝とペトロス総主教の名において、聖マクシモスに高名な人物たちが派遣された。ビフィニアのケサリアの司教テオドシオス[1329] と、二人の執政官――パウロスとテオドシオス――であり、彼を自分たちの考えに改宗させるためであった。　彼らは聖人を説得するために、尊い方に諂うこともあれば、脅すこともあれば、信仰を試すこともあれば、問い詰めることなど、実に様々な手段を講じた。彼らがヴィジウスの司教と共に現れ、聖人に座るよう命じたとき、テオドシウス司教は彼に向かってこう語りかけた。

「お元気ですか、アッバ・マクシム様？」

彼はこう答えた。

「主が世の初めから私の生涯の境遇をあらかじめ知っておられ、定められた通り、御摂理によって守られているのです。」

テオドシウスはこれに反論して言った。

「どういうことですか？　まさか神は、私たち一人ひとりの行いを、永遠の昔からあらかじめ知っておられ、定められていたというのですか？」

聖人はこう答えた。

「神は、私たちの意志に委ねられている思い、言葉、行いをあらかじめ知っておられます。しかし、私たちに起こるべきことのうち、もはや私たちの力ではどうすることもできず、神の御意志に委ねられているものについては、あらかじめ定め、定められたのです。」

テオドシオス司教は尋ねた：

「では、何が私たちの支配下にあるのか、何がそうではないのか？」

聖マクシムは答えた：

「そのことはすべて、あなたもご存じでしょう、主よ。ただ、この僕を試そうとして、お尋ねになっているのです。」

これに対し、司教は言った。

「実のところ、私はそれを知りません。私たちの支配下にあるものとそうでないものとの違い、また、前者が神の摂理と、後者が神の予定とどのように関連しているのかを理解したいのです。」

聖マクシムスはこう答えました：

「私たちの善行も悪行もすべて、私たちの意志に依存しています。しかし、私たちに降りかかる罰や災難、そしてそれらとは正反対の事柄は、私たちの支配下にはありません。実際、私たちには、私たちを衰弱させる病気や健康そのものに対する支配権はなく、ただ、病気を引き起こす条件や健康を維持する条件に対してのみ支配権があるのです。　また、節制の欠如が病気の原因となり、節制が健康の条件となるのと同様に、神の戒めを守ることは天国の達成の条件となり、守らないことは火のゲヘナに投げ込まれる原因となるのである。

司教は彼に言った。

「なぜ、そのような災難に値するような行いをして、この追放によって自らを苦しめるのですか？」

「私は神に祈っています」と聖人は答えた。「神が、この災いをもって私を懲らしめることで、御自身の戒めを犯した私の罪を赦してくださるよう。」

司教はこれに反論して言った。

「多くの者に災いが降りかかるのは、試練のためではないのか？」

「聖人たちは試練に遭うものです」と、その尊者は答えた。「それは、ヨブやヨセフの場合のように、彼らの秘められた美徳がすべての人々の前に明らかにされるためなのです。」　そして確か

[1329] ビフィニアは、北は黒海、西はミシア、南はフリギアとガラティア、東はパフラゴニアと国境を接していた。現在では、アナトリアの北部を占めている。

に、ヨブは、彼の中に誰にも知られていなかった勇気が明らかになるために試練を受け、ヨセフは、人を聖なる者とする貞潔と節制が明らかになるために災難に見舞われたのである。　また、聖人たちは一人ひとりが、この世で不本意ながら苦しみを受けたとしても、それはまさに、神から許された災いによって、高慢な背教者である悪魔――蛇――を打ち負かすためであった。聖人一人ひとりの忍耐そのものが、試練の結果であったのである。

これに対し、テオドシウス司教はこう言った。

「まことに、あなたの言葉は素晴らしく、教訓に富んでいます。私も常にあなたとこのような事柄について語り合いたいと願っています。しかし、私と私の同行者たち――最も尊いパトリキウスたち――は、途方もない距離をものともせず、別の用件のためにあなたの元へ参りました。どうか、私たちが提案するものを快く受け入れていただき、全宇宙に喜びをもたらしてください。」

「具体的には何でしょうか、ご主人様？」と聖人は尋ねた。「それに、私が一体何者で、どこから来たというので、私の提案への承諾が全世界を喜ばせることができるというのでしょうか？」

司教はこう言った。

「わが主イエス・キリストの真理が不変であるように、私が、そして私の同僚である尊敬すべきパトリキオの諸君がこれから申し上げることもまた不変です。私たちは、私たちの総主教と敬虔な王から直接その話を聞いたのです。」

「では、諸君、お話しください」と聖マクシムスは答えた。「あなたがたは何を望んでおられ、何をお聞きになったのですか？」

すると、テオドシウスが語り始めた。

「皇帝と総主教は、何よりもまず、あなたにこう尋ねたいのです。なぜあなたはコンスタンティノープル総主教座との交わりを断つつもりなのですか？」

聖マクシムスは答えた：

「あなたがたもご存知の通り、過ぎ去った周期の第六インディクト[1330]に採択された革新があります。それらはアレクサンドリアにおいて、当時の総主教キルによって、コンスタンティノープル総主教座によって承認・確定された九つの章が公布されたことから始まりました。他にも、公会議の決定を歪めるような変更や追加（エクフェシスとティポス）がありました。　これらの革新は、ビザンティン教会の最初の代表者たち――セルギオス、ピルロス、パウロス――によって行われ、すべての教会に知られている。これこそが、私、あなたがたのしもべが、コンスタンティノープル教会との交わりを断つ理由である。　上述の者たちによって教会に持ち込まれたこれらの誘惑が滅ぼされ、それらを導入した者たちが排除され、救いの道が障害物から清められ、そうしてこそ、あなたがたはあらゆる異端から清められた、福音の平坦な道を歩むことができるでしょう！　もし私が、コンスタンティノープル教会がかつての姿に戻っているのを見れば、その時こそ、以前と同様にその子の身として彼女のもとへ立ち返り、いかなる人間の説得もなしに、彼女との交わりに入るでしょう。　しかし、そこに異端の誘惑や異端の司教たちが存在する限り、いかなる言葉や行いも、私が彼らと交わりを持つよう説得することはできない。

「しかし、私たちの信仰告白に、いったい何が悪いというのか」とテオドシウス司教は尋ねた。「なぜ、私たちと交わりを持たないのか？」

聖マクシムスはこう答えた：

[1330] インディクトとは、ローマ暦において15年周期の期間、すなわち15年周期を意味する。この周期の最初の年は「第1インディクト」、2年目は「第2インディクト」と呼ばれた。ギリシャやスラブの暦では、9月1日の欄に「インディクトの始まり、すなわち新しい夏の始まり」と記されていた。　ここに引用された聖マクシムスの行伝における「過ぎ去った周期の第6インディクト」という言葉は、「9年前」、すなわち648年と理解すべきである。

――あなたは、救い主の神性と人性が一つの働きであったと信奉していますが、一方で、一つの働きを持つ者には　その者には一つの本質がある、と主張する聖なる教父たちを信じるならば、あなたは聖三位一体を三位一体としてではなく、四位一体として告白していることになります。まるで、受肉が御言葉と同質でありながら、私たちや聖母マリアが持つ人間の本質との同一性から逸脱したかのように。　人間に固有の同一性から逸脱したことにより、あたかも、御言葉が父と聖霊と同質であるのと同じ程度に、御言葉と同質である新たな実体が形成されたかのようです。このようにして、それはもはや三位一体ではなく、四位一体となってしまいます。　同様に、あなたがたが行為を否定し、キリストの神性と人性が一つの意志を持っていたと主張するとき、あなたがたは、善を行うにおけるキリストの自由な自発性を軽視していることになる。　なぜなら、もしどちらの本性にも、それ自体に固有の行為がないのであれば、たとえ誰かに恩恵を与えたいと望んだとしても、善を行う能力が奪われているため、それを行うことはできないからである。実際、行動する能力がなく、その本性に固有の行為がなければ、いかなるものも何かを生み出したり、成し遂げたりすることはできない。他方、キリストの受肉を認めることで、あなたは二つの本性の中に一つの意志を告白することになりますが、それによって、あなたは、キリストの「肉」もまた、その意志によって、父と子と聖霊と共に、すべての時代とすべての被造物の創造者であったと認めることになります。しかし、その本性によれば、肉そのものは創造されたものです。　あるいは、こう言う方が適切でしょう。肉体はその意志において無始である――なぜなら、神の意志は無始であり、神性と同様に始まりを持たないから――しかし、その本質においては、肉体は時間の中で創造されたものである。　しかし、このように告白することは、狂気であるだけでなく、不敬虔でもある。なぜなら、あなたがたは単にキリストにおける一つの意志について語っているだけでなく、それを「神聖な」と呼んでいるからである。そして、神聖な意志には、神性そのものと同様に、始まりも終わりも想定できないのである。　また、あなたがたは、エフェシスとティポスによって、キリストの内に一つの意志も二つの意志も、またその御業についても語ってはならないと要求するとき、キリストの神性と人性を認識させるあらゆる現れと属性を、主キリストから奪い取っているのです。　この意志は一つではありません。なぜなら、あなたがたは人間の意志を神の意志に従属させることによって、それを二つに分けているからです。また、二つでもありません。なぜなら、あなたがたはそれらを一つに融合させているからです。

聖マクシムスがこれや、その弟子アナスタシウスが詳細に伝えている他の多くのことを語ったとき、テオドシウスとパトリキウスたちは自らの誤りに気づき始めた。しかし、司教はこう言った。

「王が記した『ティポス』を、確固たる信仰の教義としてではなく、疑わしい問題を解決する手段として受け入れてください。王はそれを立法の意味で書いたのではなく、信仰の解釈という意味で書いたのです。」

聖マクシムスはこう答えた。

「もしそのティポスが、我らの主の意志と行為の一致を確証する肯定的な法ではないのなら、なぜあなた方は私を野蛮人の国、神を知らない異教徒たちの国へ追放したのですか？　なぜ私はここに、ヴィジアに留まることを強いられているのですか？　なぜ私の同僚たちは、一人はペルヴェラへ、もう一人はメセムブリアへと追放されたのですか？」

その後、モノフェリテ派を非難するためにローマで至福の教皇マルティヌスによって招集された地方公会議のことが話題に上ると、テオドシウス司教はこう言った。

「その公会議は重要ではない。なぜなら、それは皇帝の勅令によらず召集されたものだからだ。」

聖人はこう答えた。

「もし皇帝の命令によって召集された公会議の決定のみが認められるのであれば、正統な信仰などあり得ない。皇帝の命令によって『同質説』に反対するために召集され、そこで『神の御子は父なる神と同質ではない』という神を冒涜する教義が定められた公会議のことを思い出してほしい。」

そうした公会議とは、第一にティルス、第二にアンティオキア、第三にセレウキア、第四にアリウス派のエウドクシアの治世下のコンスタンティノープル、第五にニカイア、第六にシルミア、そして長い時を経て、第七にディオスコロスの議長の下でエフェソスで開催されたものである。　これらの公会議はすべて皇帝の勅令によって招集されたが、それらすべては、不敬虔かつ神に背く信仰宣言が採択されたため、拒絶され、破門の宣告を受けた。さらに、なぜあなたがたは、パウロス・サモサテスを非難し、彼を破門したあの公会議を拒絶しないのか。その公会議の議長を務めたのは、　ローマ教皇ディオニシオス、アレクサンドリアのディオニシオス、そしてこの公会議の議長を務めた奇跡行者グレゴリオスであった。この公会議は皇帝の命令なしに行われたが、その決定は確固としており、反駁の余地がない。正教会は、真かつ不変の教義が確立された公会議のみを、真かつ聖なるものと認めている。　そして確かに、貴殿もご存じの通り、また他の人々にも同様に教えているように、教会法は、あらゆるキリスト教国において、年に二度、地方公会議を招集するよう命じています。それは、私たちの救いの信仰を守るためであり、また是正を要する事柄を正すためでもあります。しかし、教会規則には皇帝の勅令については言及されていません。

長時間にわたる対話と双方の激しい論争の末、聖マクシムスの口からは神の知恵と雄弁が溢れ出し、聖霊に導かれたその言葉は敵対者たちを打ち負かした。敵対者たちは長い間、頭を垂れ、目を伏せて黙り込んでいた。　その後、彼らは心を打たれて泣き出し、立ち上がって聖人に頭を下げ、聖人も同様に彼らに頭を下げた。共に祈りを捧げた後、彼らは喜びをもって聖マクシムスの真の教えに同意し、愛をもってその教えを受け入れた。さらに、彼ら自身もその教えに従って信仰することを誓い、王をも同じように説得できることを望んだ。　そして、その誓いを確かなものとするため、彼らは神聖な福音書、尊い十字架、そして救い主と至聖なる聖母マリアの聖像に口づけをした。　その後、魂に有益な事柄について十分に語り合った後、彼らは互いに主の御名において口づけを交わし、互いに平安を祈り合った上で、テオドシオス司教と二人のパトリキウスはビザンティウムへと戻った。彼らが王に話したすべてのことと行ったことを報告すると、王は激しく怒った。そこでテオドシウスと二人のパトリキウスは、王の怒りを恐れて、再び異端に帰した。　その後、パヴェルというパトリキウスが再びヴィジアへ派遣され、聖マクシムスをコンスタンティノープルへ連行するよう命じられたが、その際は敬意をもって扱うよう指示された。聖マクシムスが連れて来られると、彼は聖テオドロスの修道院に住むよう命じられた[1331]。

翌朝、皇帝は二人のパトリキウス――エピファニオスとトロイロスを――尊者のもとへ遣わした。彼らは多くの貴族たち、一隊の軍勢、そして従者たちを従え、華やかさと虚栄に満ちた威厳を纏って現れた。　彼らと共に、前述のテオドシオス司教もやって来た。聖マクシムは彼を待ちわびており、彼が約束を果たすことを期待していた。その約束とは、彼自身が真に信仰するだけでなく、王やその他の民の代表者全員を正教へと回心させるというものだった。　しかし、テオドシウスは嘘をついた。天の王と聖なる教会に従うよりも、地上の王と虚栄に満ちた世に迎合することを選んだのである。皆が席に着き、尊者にも座るよう説得すると、パトリキウス・トロイルが語り始めた。

「王、すなわち全宇宙の支配者」と彼は切り出した。「神によって確立されたその王権の御心に従い、我らをあなたのもとへ遣わしました。しかしその前に、お答えください。あなたは君主の御心に従うおつもりですか、それとも従わないおつもりですか？」

聖マクシムスは答えた。

「まず、主よ、君主が私に何を命じられるのかをお聞きし、それに応じてお答えいたします。まだ知らないことに対して、どうして答えられましょうか？」

トロイルはさらにこう言い張った。

「あなたが王に服従するかどうか答えるまでは、我々が何のために来たのかは言わない。」

[1331] それは655年のことだった。――大殉教者テオドロスの修道院は、コンスタンティノープルの郊外に位置していた。

その敬虔な聖人は、使者たちが執拗に要求し、険しい眼差しを向け、厳しい言葉で王の意志に従うかどうかを問い詰めているのを見て、こう答えた。

「あなたがたは、この僕である私に、我らの主である王が何を望んでおられるのか教えてくれないのですから、私は神ご自身と聖なる天使たちの御前で、次のように宣言します。もし王が、一時的かつはかないものであり、かつ神に背くものでもなく、魂の永遠の救いにとって害のないことを私に命じられるならば、私は喜んでそれに従います。」

聖人がそう言うと、パトリキウスのトロイルはすぐに立ち上がり、こう言いながら立ち去ろうとした。

「私は去ります。この男が王の御意に従わないことが分かったからです。」

しかし、その直後に騒ぎが起こり、ここに集まっていた大勢の民の間で激しい混乱が生じた。そこで、テオドシウス司教は言った。

「彼に国王の御意志を伝え、その返答を聞きなさい。何も告げず、返答も聞かずに立ち去るのは良くないからだ。」

その後、パトリキウスのエピファニオスが尊者に向かって語りかけ始めた。

「王はあなたに次のように告げるよう命じておられます。東方全体、そして西方の者たちの中でも誘惑に惑わされた者たちは、　あなたを仰ぎ見て騒乱や動揺を引き起こし、信仰から背き、陰謀を企てている。しかも信仰の事柄において、我々と交わりを持つことを望んでいない。それゆえ、主が柔和さをもってあなたの心を和らげ、我々が定めた規定を受け入れて、我々と交わりを持つようにしてくださることを願う。　我らは、愛をもってあなたを受け入れ、大いなる栄光と誉れをもってあなたを教会に迎え入れ、王たちが通常立つ場所の我らの傍らに立たせ、あなたと共に、至聖にして命を与えるキリストの御体と御血の聖餐に与るであろう。　その後、あなたを私たちの父として宣言し、私たちのキリストを愛する都全体だけでなく、キリスト教世界全体に喜びが満ちるでしょう。　なぜなら、あなたが聖なるコンスタンティノープル　教会との交わりに加わるとき、あなたのために、またあなたの指導の下で私たちとの交わりから離れてしまった者たちも、皆、私たちに加わると、私たちは固く確信しているからです。

聖アバ・マクシムスは、テオドシウス司教に向き直り、涙ながらにこう言いました。

「主よ、私たち皆、大いなる審判の日を待ち望んでおります。聖なる福音書、命を与える十字架、そして私たちの救い主イエス・キリストと、その汚れなき母、至聖なる神の母、永遠の処女マリアの聖なるイコンの前で、つい先日語られ、約束されたことを、あなたは覚えておられますか。」

司教は、うつむきながら、穏やかにこう言った。

「敬虔な王が別のことを望まれる以上、私に何ができるというのでしょうか？」

アッバ・マクシムは彼にこう答えた。

「約束を果たすという確固たる決意がなかったのなら、なぜあなたとあなたと共にいた者たちは、聖なる福音書に触れたのですか？」　まことに、天のすべての力が結集したとしても、あなたがたが提案することを私にさせることはできない。なぜなら、もし空虚な名誉や、何の価値もない世間の評価のために、それを愛する者を救う正しい信仰を拒んだとしたら、私は――神に対してではなく――自分の良心に、どのような答えを返せばよいというのか？

聖人がそう言うと、たちまち皆が怒りと狂乱に満ちて立ち上がり、彼に飛びかかって、罵詈雑言を浴びせるだけでなく、彼に手をかけ始めた。　彼を捕らえると、彼らは手で殴りつけ、引きずり回し、床の上をあちこち引きずり回し、突き飛ばし、足で踏みつけ、誰もが彼を殴ろうと手を出そうとした。もしテオドシウス司教が彼らの激怒を鎮め、騒ぎを静めていなければ、彼らは間違いなく聖人を殺していただろう。　聖人を殴ったり苦しめたりするのをやめると、今度は彼に唾を吐きかけ始

め、神の僕を頭から足先まで唾でまみれにした。彼らの忌まわしい唾からは悪臭が漂い、聖人の衣服はすべてその唾で汚されていた。

そこで司教は彼らにこう言った。

「そのようなことをすべきではなかった。彼の答えを聞き、それを王に報告するだけでよかったのだ。なぜなら、教会の規則に属する事柄は、別の方法で裁かれるからである。」

司教は苦労の末、彼らに騒ぎを止め、再び席に着くよう説得した。彼らは、聖人を粗野な罵倒や侮辱的な非難で罵り続けながらも、席に着いた。

その時、パトリキウスのエピファニウスは、怒りに震えながら、聖人にこう怒鳴りつけた。

「言ってみろ、悪魔に取り憑かれた邪悪な老いぼれめ！　なぜそんなことを言うのだ？　お前は我々全員、この街、そして我らの王までも異端者だと見なしているのか？　知っておけ、我々こそがお前よりも真のキリスト教徒であり、お前よりも正統派なのだ。」　我々は、我らの主イエス・キリストにおいて、神性および人性における意志と理性ある魂を認めている。なぜなら、あらゆる理性ある存在は、その本質上、常に自由意志の力と行動する能力を備えているからである。　そもそも、生き物には運動が、知性には意志が固有のものだ。我々は、主が神性のみならず、人性においても意志の力をお持ちであることを認め、とりわけ、主の二つの意志と二つの働きを否定しない。

アッバ・マクシムはこう答えた。

「もしあなたがたが、神の教会が教える通り、また理性ある存在にふさわしいように信じているのなら、なぜ、あなたがたが今述べていることを完全に否定する『ティポス』を受け入れるよう、私に強要するのですか？」

エピファニオスは反論した：

「ティポスは、完全には理解しがたい真理を整理するために書かれたものであり、その表現が特に微妙であるために、民衆が迷い込まないようにするためです。」

これに対し、アッバ・マクシムスはこう答えた。

「それは信仰に反する。それどころか、あらゆる人は正しい信仰告白によって聖別されるのだ。」

すると、パトリキウス・トロイルが反論した：

「ティポスは、キリストにおける二つの意志を否定しているわけではなく、ただ教会の平和のために、それらについて沈黙を強いられているに過ぎない。」

アッバ・マクシムはこれに対し、次のように述べた。

「言葉を黙殺することは、それを否定することに他ならない。聖霊が預言者を通してこう語っておられる通りである。*『彼らの声が聞こえない言語も、方言もない』*（詩編18:4）。したがって、もしある言葉が語られないのであれば、それはそもそも言葉ではないのだ。」

すると、トロイルは言った：

「心の中にどんな信仰を抱こうとも構わない。誰もそれを禁じる者はいない。」

聖マクシムスは反論した：

「しかし、完全な救いは、心の中の信仰だけによるのではなく、その告白にもよるのです。主はこう言われているからです。*『もしだれかが、人の前でわたしを否むなら、わたしもまた、天の父の前でその人を否む』*（マタイ10:33）。　同様に、神聖な使徒もこう教えている。*「心で信じて義と認められ、口で告白して救われる」*（ローマ10:10）。　もし神と神聖な預言者たち、そして使徒たちが、全世界に救いをもたらす信仰の秘義を言葉と舌をもって告白するよう命じているのであれば、人々の救いが損なわれないよう、その告白に関して沈黙を強いることは許されない。

これに対し、エピファニオスは悪意に満ちた声で叫んだ。

「ローマで行われた公会議の決議に署名したか？」

「署名した」と聖人は答えた。

すると、エピファニオスは続けた。

「よくもまあ、理性ある存在にふさわしく、またカトリック教会が教える通りに信仰を告白する者たちを、署名して破門するとは、何という厚かましさだ！」　まことに、我々は独自の裁きにより、お前を街へ連行し、縛られたまま広場に立たせ、すべての道化師や娼婦、そして民衆を集め、彼らにお前の頬を叩かせ、顔に唾を吐かせるのだ。

これに対し、聖人はこう答えた。

「お前の言う通りにしよう。」　もしあなたが、我々が、我らの主において結合した二つの本性、すなわち、キリスト・主において各本性に対応する二つの意志と二つの働きを認める者たちを破門したと主張するのであれば、神性においては真の神であり、人性においては真の人間である主キリストについて、私の主よ、　この公会議の議事録を収めた書物を読んでください。もしあなたがたが、おっしゃったような箇所を見つけたなら、お好きなようになさってください。　なぜなら、私と私の同僚たち、そして公会議の議事録に署名した者たちは皆、アリウスやアポリナリウス[1332]のように、主において一つの意志と一つの働きのみを認め、二つの本性の中に御自身を留め、また私たちの救いを成し遂げる意志と働きの力を備えておられる、私たちの主であり神である方を告白しない者たちを破門したからです。

すると、エピファニオスの友人たちや貴族たち、そして彼らと共に来た者たちは皆、互いにこう語り合った。

「このまま彼の話を聞き続けていれば、私たちは食事も飲み物も口にできなくなってしまう。だから、行って昼食をとり、その後、王と総主教に私たちが聞いたことを報告しよう。ご覧の通り、この忌まわしい者は自らをサタンに売り渡してしまったのだ。」

そう言って、彼らは立ち上がり、昼食をとりに去っていった。その日は聖十字架の挙揚の祝日の前夜であり、すでに徹夜祈祷の時間が迫っていた。食事を終えると、彼らはひどく不満を抱きながら街へと向かった。

翌日（9月14日）、早朝、パトリキオスのテオドシウスが聖マクシムスの元を訪れ、聖人が所有していたすべての書物を没収し、王の名においてこう言った。

「お前は栄誉を拒んだのだから、自らが招いた追放の地へ行きなさい。」

聖なる長老は直ちに兵士たちに連行され、まずセレムヴリアへ連れて行かれ、そこで二日間留められた。その間、セレムヴリア出身の兵士の一人が軍へ赴き、陣営中に噂を流し、「聖母マリアを冒涜する修道士がここに来た」という言葉で民衆を扇動した。　軍司令官は、セレムヴリア市の主要な聖職者たち、ならびに長老、助祭、そして最も尊敬される修道士たちを召集し、彼らを至福のマクシムのもとへ遣わして、彼について「神の母を冒涜している」という噂が真実かどうかを確かめさせた。　彼らが到着すると、尊者マクシムスは立ち上がり、彼らの地位に敬意を表して地面にひれ伏した。彼らもまた聖人にひれ伏し、その後、全員が席に着いた。すると、来訪者の一人である非常に高名な長老が、極めて穏やかに、かつ敬意を込めて尊者マクシムスに尋ねた。

「父よ、あなたの聖性について惑わされた者たちがおり、あなたが私たちの主である清き処女、神の母マリアを神の母として認めないなどと主張しています。そこで、至聖なる同質なる三位一体の名において、あなたに懇願します。真実を語り、私たちの心からその惑わしを取り除いてください。そうすれば、私たちもあなたについて誤った考えを抱いて罪を犯すことはありません。」

[1332] ラオディキアの司教アポリナリウスは、神の御子が受肉した際、不完全な人間性、すなわち人間の魂と肉体のみを受け入れ、人間の知性については神性がそれに取って代わったと説いた。この異端は第2回全地公会議で非難された。

聖マクシムは十字架の形に地面にひれ伏し、その後立ち上がって両手を天に掲げ、涙を流しながら厳粛にこう述べた。

「天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された神の真の母である、私たちの主、賛美に満ちた、至聖にして無原罪の処女、すべての知性ある存在の中で最も尊い方を、告白しない者は、父と子、　聖霊、すなわち同質にして超自然なる三位一体、そしてすべての天の力、聖なる使徒たちと預言者たちの御顔、数えきれないほどの殉教者たち、そして信仰のうちに息を引き取ったあらゆる義人の魂から、今、常に、そして世々限りなく、破門されんことを！」

これを聞いて、皆は涙を流し、次のように彼に祝福の言葉を贈った。

「神があなたを強め、父よ、あなたがその使命をふさわしく、何事もなく全うできるようお導きくださいますように！」

その後、多くの兵士たちがそこに集まり、互いに語り合う父たちの敬虔な言葉を聞き入った。その時、軍司令官の側近の一人が、聖人の言葉に熱心に耳を傾け、彼を追放した政府を非難する兵士たちが大勢集まっているのを見て、聖人を直ちにその場から連れ出し、ペルヴェラへの流刑地へ護送する準備が整うまでの間、さらに二ポプリシュ[1333]先まで連れて行くよう命じた。神の愛に駆られた聖職者たちは、聖人を送り出すため、その二ポプリシュを徒歩で歩いた。聖人を追放先へ連行するために兵士たちが到着すると、聖職者たちは聖人を抱き上げ、馬に乗せた。その後、彼らは涙ながらに聖人を抱きしめ、別れを告げて、自分たちの街へと戻っていった。　聖人はペルヴェラへと連行され、そこで牢獄に閉じ込められた。

長い時が過ぎた[1334]、王は再び、捕囚となっていた聖マクシムスとその二人の弟子をコンスタンティノープルへ連行するよう命じた。彼らが船で都に近づいた時、日没の頃、二人の警備隊長が十人の兵士を率いて現れ、半裸で靴も履いていない彼らを船から引きずり出し、引き離してそれぞれ別々に監禁した。　数日後、彼らは皇帝の御前へと連行された。二人の弟子は中庭で監視下に置かれたままだったが、長老は、高官や多くの高名な人々が列席する御前へと案内された。聖人は、着席している統治者たちの真ん中に立たされた。その時、皇帝の財務官が、苛立ちをにじませた声で彼にこう問いかけた。

「お前はキリスト教徒か？」

老僧はこう答えた。

「万物の神であるキリストの恵みにより、私はキリスト教徒です。」

財務官は怒りに満ちて言った。

「お前は嘘をついている。」

聖人は答えた。

「あなたは私がキリスト教徒ではないと言うが、神は私が常にキリスト教徒であり続けると仰せられている。」

「だが、もしお前がキリスト教徒なら」と財務官は反論した。「なぜ王を憎むのだ？」

「それがどうして分かるのだ？」と聖人は尋ねた。「憎しみとは、愛と同じように、魂の奥底に秘められた感情ではないか。」

「お前の行いからだよ」と財務官は答えた。「お前が王とその王国の敵であることは、誰もが知っている。なぜなら、お前一人だけで、エジプト、アレクサンドリア、ペンタポリス、トリポリ、そしてアフリカをサラセン人に売り渡したのだから。」

「それに関する確かな証拠はどこにあるのか？」と聖人は尋ねた。

[1333]　ポプリシュチェとは、距離の単位であり、現在の690サジェニに相当する。したがって、2ポプリシュチェはおよそ2*2₃ヴェルスタ*となる。

[1334] まさに――5年である。

すると、かつてペトロのサケラリウス（財務官）を務めていたあるヨハネが連れてこられた――[1335]――当時、ペトロはアフリカのヌミディアの総督であった[1336]。このヨハネはこう言った。

「二十二年前のこと、我らが王の祖父は、至福のペトロに対し、サラセン人に対してエジプトへ軍を率いて行くよう命じました。ペトロは、あなたを神の僕として信頼し、有益な助言を求めて手紙を送りました。しかし、あなたは彼に、ヘラクレイオス王とその後継者たちを助けることは神の御心に適わないと返事を送ったのです。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「もしあなたが真実を語っており、ペトロから私への手紙と、私からペトロへの手紙をお持ちなら、それらを見せてください。それらを読ませてください。そうすれば、私は法に従って相応の刑罰を受け入れます。」

ヨハネは答えた。

「私はあなた方の手紙を持っていませんし、互いに手紙をやり取りしたかどうかさえ知りませんが、当時、陣営では皆がそれについて話していました。」

聖人は反論した。

「もし全軍がそのことを話題にしていたのなら、なぜ君だけが私を誹謗中傷しているのか？君は私を見たことがあるのか、あるいは私が君を見たことがあるのか？」

「いいえ」とヨハネは答えた。「私はあなたを見たことがありません。」

すると聖人は、集まった人々に向かってこう言った。

「ご自身で判断してください。このような人々を証人として立てるのは公正なことでしょうか？*『あなたがたがどのような裁きで裁くか、そのようにあなたがたも裁かれる。あなたがたがどのような尺度で量るか、そのようにあなたがたも量られる』*（マタイ7:2）と書かれています。すべての者の義なる裁き主である神から。」

その後、セルギウス・マグダが連れてこられた。彼はこう言った。

「九年前、ローマから来た祝福されたアッバ・トマスが、私に次のように語りました。　教皇テオドロスは、当時ギリシャ帝国から離反していたアフリカの総督グレゴリオスのもとへ、私を遣わしたのだと彼は語った。ギリシャ軍を恐れるな、と彼に伝えるためだった。なぜなら、神の僕であるアッバ・マクシムスは、天の東と西に天使たちの姿が立っているという夢を見たからだ。　そのうち、東側にいた天使たちは、「コンスタンティヌス・アウグストよ、汝は勝利する！」と叫び、西側にいた天使たちは、「グリゴリウス・アウグストよ、汝は勝利する！」と叫んだ。その際、西側の天使たちの声は、東側のものよりも明瞭で、はるかに大きかった。

マグダがこれを語り終えると、財務官は聖人にこう言った。

「神は、あなたをこの街に連れてきて、火で焼き尽くそうとしているのだ。」

聖人はこう答えた。

「私の自発的な罪を、不本意な罰によって清めてくださる神に感謝します。しかし、*『この世は誘惑によって災いに遭う。誘惑が来ることは避けられないが、誘惑をもたらす者には災いが及ぶ』*（マタイ18:7）。まことに、キリスト教徒の前でこのようなことを言うべきではなかったし、ましてや、今生きているが明日には存在しなくなる人々の気に入ることをのみ語り、考える者たちを罰せずに放っておくべきではなかった。これらすべては、グリゴリウスがまだ生きていた頃に明らかにすべきであった。　そうすれば、パトリキウス・ペトロス、アブ・トマス、そして福者テオドロス教皇を

[1335] サケラリウス（saccilus「袋」に由来）は、財務官を意味する。サケラリウスは2つあり、皇帝のものと総主教のものがあった。

[1336] ヌミディアは北アフリカに位置していた。現在はアルジェリアの東部にあたる。

ここに呼び出すべきだった。私は彼らの全員の前で、パトリキウス・ペトロスにこう言っただろう。「お聞きしたいのですが、閣下、あなたのサケラリウスが証言している件について、あなたはかつて私に手紙を書いたことがありましたか。あるいは、私があなたに手紙を書いたのでしょうか？」　同様に、至福の教皇に対してもこう言ったであろう。「おっしゃってください、大司教様。私があなたに夢の話をしたことは一度でもありましたか？」しかし、仮に教皇が夢に関して私を非難したとしても、その責任は彼にあり、私にはない。なぜなら、夢の幻視は自発的なものではなく、法律が罰するのは、人間の自由意志に依存する行為のみだからである。

これに加え、無実で聖なるこの人物に対しては、特に王への冒涜に関するものとして、彼とその弟子たちがローマで王を非難したかのような、その他の誹謗中傷や不当な告発もなされた。　しかし、聖人は自らの無実を証明し、その柔和さをもって、謙虚で、英知に満ち、霊感に満ちた言葉によって、これらの中傷をすべて退けた。

その後、彼の弟子アナスタシウスが別室に連れて行かれた。彼は師について何か悪口を言うよう促されたが、義人である師に対して嘘をつくことを拒んだため、拳で殴打され、その後、彼と師はそれぞれ別々の牢獄へと連れ去られた。

翌日夕方、パトリキウスのトロイルと、王室の食卓を司るセルギウス・エウフラタスが、聖人のいる牢屋を訪れた。彼らは席に着くと、聖人にも座るよう命じて、こう尋ねた。

「アッバよ、教えてほしい。アフリカやローマでピルロスとどのような対話を交わしたのか。また、どのような論拠をもって、彼に自身の教義を捨て、あなたの教義を受け入れるよう説得したのか？」

聖人は答えた。

「もし、私がピルロスとそこで交わした対話や論争を書き留めた私の書物が手元にあれば、すべてを詳しくお話しできたでしょう。しかし、書物は取り上げられてしまったため、思い出せる範囲で申し上げましょう。」

その後、聖人は思い出せることを順を追ってすべて語り、最後に次のように付け加えた。

「私には独自の教義など一切なく、カトリック教会全体に共通する教義のみを信奉しています。私の信仰告白には、それを私独自のものと見なされるような新しい言葉は一つも加えていません。」

すると、使者たちは彼に尋ねた。

「なぜ、君はコンスタンティノープル総主教座との交わりを拒むのか？」

「いいえ」と聖人は答えた。

「なぜですか？」と彼らは尋ねた。

「それは」と聖人は答えた。「この教会の指導者たちが、四つの聖公会議の決定を拒否し、アレクサンドリアで公布された『九つの章』を規範として受け入れ、さらにコンスタンティノープル総主教セルギオスが作成した『エクフェシス』を採択し、そしてついには、最近公表された『ティポス』を受け入れたからです。　その一方で、彼らは『エフェシス』で承認されたすべての事項を『ティポス』において拒否し、何度も自らを教会から破門し、異端であることを自ら露呈してしまった。それればかりか、自ら教会から破門した彼らは、先ごろローマで開催された地方公会議において、罷免され、聖職を剥奪された。では、彼らがどのような秘跡を執り行うことができるというのか？　あるいは、彼らによって按手を受ける者たちの上に、どのような聖霊が降りるというのか？

「つまり、あなた一人だけが救われるということか」と彼らは反論した。「他の者たちは皆、滅びるというのか？」

聖人はこれに対し、次のように答えた。

「バビロンで人々が皆、金の偶像を拝んでいたとき、三人の聖なる少年たちは、誰一人として滅びに定めたりはしなかった。彼らは他人が何をしているかなど気にせず、ただ自分たちが真の敬虔から逸脱しないことだけを考えていたのだ（ダニエル書3章）。 同様に、穴に投げ込まれたダニエルも、ダリウスの律法を遵守して神に祈ることを拒んだ者たちを誰一人として非難せず、自らの義務を念頭に置き、罪を犯して神の律法に背くことによる良心の呵責に苛まれるよりは、むしろ死を選ぶことを望んだのである（ダニエル書14:31）。 私も、神に禁じられることですが、誰かを非難したり、自分だけが救われるなどと言うことはしません。しかし、正しい信仰から少しでも逸脱して良心の苦しみを受けるよりは、むしろ死ぬことを選びます。

「しかし、ローマ人がビザンツ人と手を組んだら、あなたはどうするつもりですか」と使者たちは彼に尋ねた。「昨日、ローマから二人の使節が到着し、明日、日曜日には、総主教と共に聖体拝領を行うことになっているのですから。」

聖人はこう答えた。

「たとえ全宇宙が総主教と共に聖体拝領を始めたとしても、私は彼と共に聖体拝領はしない。なぜなら、聖使徒パウロの書簡から、もし天使たちが新しい教えを説き、何か新しいものを持ち込んだならば、聖霊は彼らさえも破門に処すことを知っているからだ（ガラテヤ1:8）。」

すると、使者たちは尋ねた。

「果たして、キリストにおいて二つの意志と二種類の働きを告白することが、それほどまでに不可欠なのでしょうか？」

「絶対に必要です」と聖人は答えた。「もし私たちが敬虔に考えるのであれば。なぜなら、いかなる存在も、その本性にかなった働きを欠くことはないからです。」 聖なる教父たちは、いかなる被造物も、それ自体に固有の働きなしには、存在することも、認識されることもできないと明確に述べている。もしそれがなく、もし本質が働きの中に現れないのであれば、どうしてキリストを本質において真の神であり、真の人間であると認めることができるだろうか？

これに対し、彼らはこう答えた。

「私たちは、これが真の真理であることを認めます。しかし、教会の平和のために、キリストに認められている性質のどれかを否定するためではなく、教会の平穏を保つために、意見の相違を生む事柄については沈黙を守るよう命じた王を、悲しませないでください。」

すると、神の人は地面にひれ伏し、涙ながらにこう答えた。

「善良で神を愛する王よ、私の不甲斐なさを理由に心を痛める必要はありません。なぜなら、私は、神が認め、告白するよう命じられたことを黙って隠すことで、神を怒らせたくはないからです。 なぜなら、神聖な使徒の言葉によれば、神ご自身が*「教会において、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師」*を置かれた（Iコリント12:28）のであれば、神ご自身が彼らを通して語っておられることは明らかだからです。 また、聖書全体、聖なる教師たちの著作、そして公会議の決定から、私たちは、受肉されたイエス・キリスト、すなわち私たちの主であり神である方が、神性および人性に基づいて意志し、行動する力をお持ちであることを学んでいます。 なぜなら、罪を除いて、御方が神として、あるいは人として認識されるための性質において、御方には全く欠けるところがないからである。 もし主が両方の本性において完全であり、それらに固有のものを何一つ欠いていないのであれば、主が両本性そのものと、それに対応する属性――主がそれらを通して、またそれらの中に留まっておられる本性――を主の中に認めない者は、まことに、主の受肉の神秘を完全に歪曲しているのです。

聖人がこれらやその他多くのことを語り終えると、集まった人々は彼の知恵を称賛し、反論の余地を見出せなかった。そこでセルギイは言った。

「あなた一人だけが皆を悲しませている。まさにあなたのせいで、多くの人がこの地の教会と交わりを持たようとしなくなっているのだ。」

聖マクシムは反論した。

「しかし、私が誰かにビザンティン教会と交わりを持たないように命じたと、誰が断言できるというのか？」これに対し、セルギイはこう答えた。

「まさに、あなたがその教会と交わっていないという事実こそが、多くの人々をその教会との交わりから最も強く遠ざけているのだ。」神の人はこれに対し、こう言った。

「良心が何事かについて私たちを責めるという状態ほど、重く悲しいものはない。そして、良心の平安と承認ほど尊いものはない。」その後、トロイルは、コンスタンティヌス帝の「ティポス」が西欧全土で破門されていることに言及し、聖人にこう言った。

「我らが敬虔な君主の解釈が、これほどまでに貶められているのは、果たして良いことなのでしょうか？」聖人はこう答えました：

「皇帝にそう思わせ、この勅令を発布させた者たちを、神が赦してくださいますように！」

トロイルは尋ねた。

「一体誰が唆し、誰がそれを許したのですか？」

聖人はこう答えた。

– 教会の指導者たちが教えたのであり、高官たちが許したのです。こうして、誘惑による恥辱が、何の罪もなく、いかなる異端とも無縁である王に降りかかっているのです。しかし、かつてその祖父である故イラクリウスが行ったのと同じことを、君主に勧めてください。　かつて、西方の多くの司祭たちが信仰の「要約」を受け入れず、むしろそこで生じている異端を糾弾し非難していることを知ったとき、彼はこの件に関する非難から身を守り、至る所に書簡を送り、「要約」は彼自身のものではなく、元総主教セルギウスのものであると明言した。　現在統治している君主も同様にすれば、あらゆる非難から解放されるだろう。

彼らは長い間黙り込み、首を横に振った後、こう言った。

「アッバ、あなたが勧めることをすべて行うのは、気が引けるし、むしろ不可能です。」

さまざまな話題についてさらに十分に語り合った後、彼らは別れを告げ、友好的に別れた。

その会話から一週間後、次の土曜日、聖人とその二人の弟子たちは再び尋問のために王の御前へ呼び出された。まず、彼の初期の弟子であるアナスタシウスが中へ通され、もう一人のアナスタシウス、かつてローマ教会の使節を務めていた者は、御前の外に留められた。　最初のアナスタシウスが、元老院議員たちの間に座る二人の総主教――コンスタンティノープル総主教トマスと、もう一人の総主教――がいる広間に連れて行かれると、直ちに、尊者マクシムスに対して虚偽の告発をでっち上げた中傷者たちも入ってきた。出席者たちは、アナスタシウスに、彼の師に対する中傷を認めるよう強要した。　しかし、彼は大胆にその嘘を暴き、総主教たちや元老院の前で勇敢に反論した。そして、「ティポス」を破門したかどうかと問われると、彼は、破門しただけでなく、それに対する書物も著したと答えた。すると、高官たちは尋ねた。

「どうだ？　自分の行いが間違っていたと認めないのか？」

「神が許さないでしょう」とアナスタシオスは答えた。「教会の規則に従って正しく行ったことを、悪いことだと見なすなどというのを。」その後、他の多くの事柄について問われた際も、彼は神の助けを借りて答えた。その後、彼は退場させられ、敬虔な長老マクシムが連れてこられた。パトリキウス・トロイロスは彼にこう語りかけた。

「聞いてくれ、アッバよ、真実を語れ。そうすれば神はあなたを憐れんでくださるだろう。なぜなら、もし我々が正当な手続きに従ってあなたを尋問し、あなたに対して提起された告発のうち、たった一つでも真実であることが判明すれば、あなたは法律に従って処刑されることになるからだ。」長老はこう答えた。

「私はすでに申し上げましたが、改めて申し上げます。たった一つの告発でさえ正当である可能性は、サタンが神になる可能性と同じくらいです。しかし、サタンは神ではなく、背教者である以

上、神になることはできません。それゆえ、完全に虚偽であるそれらの告発が真実になることはあり得ないのです。　それゆえ、あなたがたが何をしようとも、好きにすればよい。私は神を敬虔に崇め、不当な扱いを受けることを恐れない。

これに対し、トロイルは反論した。

「だが、お前はあの『ティポス』を破門したのではないのか？」

長老は答えた：

「すでに何度か、破門したと申し上げた。」

「しかし、もしあなたが」とトロイルは言った、「『ティポス』を破門したのなら、ひいては――王をも破門したということになるのではないか？」

「王を破門したわけではない」と長老は答えた。「正教と教会の信仰を覆す憲章だけを破門したのだ。」

「では、どこで破門したのですか？」とトロイルは尋ねた。

「ローマで開催された地方公会議で」と聖マクシムは答えた。「救世主と至聖なる聖母マリアの教会でだ。」

すると、議長が彼にこう尋ねた。

「あなたは我々の教会と交わりを結ぶのか、結ばないのか？」

「いいえ、交わりには入りません」と聖人は答えた。

「なぜですか？」と議長が尋ねた。

「それは、」と聖人は答えた、「貴方の教会が正教会の公会議の決定を拒否したからです。」

「しかし、もし我々の教会が公会議を拒否したのなら」と議長は反論した、「なぜそれらが『月暦ディプティク』（1337）に記録されているのですか？」

「それらの名称や記憶に、いったい何の益があるというのか」と聖人は答えた。「もしそれらの公会議の教義が拒絶されているのなら。」

「あなたは――」と議長は尋ねた。「現在の教会が、かつての聖公会議の教義を拒絶したことを、明確に示すことができるか？」

「お怒りにならず、お許しいただければ」と長老は答えた。「私は容易にそれを示すことができます。」

皆が静まり返ると、財務官が彼にこう尋ねた。

「なぜあなたはローマ人をこれほど愛し、ギリシャ人をこれほど憎むのですか？」

聖人は答えた。

「私たちには、誰をも憎んではならないという神からの戒めがあります。私はローマ人を、私と同じ信仰を持つ者として愛し、ギリシャ人を、私と同じ言語を話す者として愛しているのです。」

「おいくつですか？」と財務官が尋ねた。

「七十五歳です」と聖人は答えた。

「では、あなたの弟子は、いつからあなたに仕えているのですか？」と財務官は続けた。

「三十七年です」と聖人は答えた。

その時、聖職者の一人が叫んだ。

「神が、あなたが至福のピルに施したすべての行いに報いてくださいますように。」

聖人はその聖職者に何も答えなかった。

このかなり長引いた尋問の間、そこにいたどの総主教も一言も口を開かなかった。やがて、ローマで行われた公会議について話題が及ぶと、デモスフェンという人物がこう述べた。

1337 ディプティクとは、追悼録、シノディクスのことを指す。これは、石板のように重ねられた2枚の板であり、そこに生者や死者の名前が記されていた。月ごとのディプティクには、教会生活における最も重要な出来事も記録されていた。

「この公会議は真実ではない。なぜなら、破門された教皇マルティンが招集したからだ。」

聖マクシムスはこう答えた。

「教皇マルティンは破門されたのではなく、迫害を受けたのだ。」

その後、聖人を追い出した彼らは、彼をどうすべきか協議した。　非人道的な拷問者たちは、彼をこれまで通り監禁したまま生かしておくのはあまりにも慈悲深すぎると考え、死よりも過酷な拷問にさらすほうがよいと判断した。そこで、彼らは聖人を都市の総督の手に引き渡した。総督は、聖マクシムスとその弟子たちをプレトリアへ連行するよう命じた[1338]。そこで、無法な拷問官はまず、聖なる長老の衣服を剥ぎ取り、地面に倒すと、その老齢や威厳ある姿にも恥じることなく、また断食の行いによって衰弱したその姿にも心を動かされることなく、鋭い牛の腱で彼を打つよう命じた。聖人はあまりにも残酷に打ちのめされ、地面は彼の血で赤く染まり、その体はこれほどまでに切り刻まれたため、傷ついていない箇所は一つも残らなかった。その後、凶暴な獣は　の怒りを込めて、聖人の弟子たちに向き直り、彼らにも同様に激しく暴行を加えた。彼らが殴打されている間、告示役はこう叫んだ。

「王の命令に従わず、なおも反抗し続ける者たちは、このような苦しみを受けるに値する。」

その後、彼らはかろうじて息のある状態で、牢獄に放り込まれた。

翌朝、聖なる敬虔な人物とその最初の弟子アナスタシウスは、再び牢獄から法廷へと連行された。　聖人はまだ生きていたが、全身が傷だらけで、尊厳ある長老であり、聖なる断食者であり、神に賢明な師であり、神学の殉教者であるその姿を、憐れみなくして見ることはできなかった。全身が血まみれで、深い傷に覆われ、頭から足先まで無傷の箇所などどこにもなかったのだ。　しかし、冷酷な拷問者たちは彼に憐れみを示すどころか、さらに激しい怒りに燃え上がった。　知恵に満ちた教えの川を湧き出させ、異端の思索を打ち砕いていたその雄弁な舌を、喉の奥深くから、一切の慈悲もなく切り落とし、こうして聖人の神学を語る口に沈黙を強要しようとしたのである。　彼の初期の弟子であるアナスタシウスに対しても同じことを行い、その後、再び二人を牢獄に閉じ込めた。しかし、かつて乳飲み子たちに御自身の聖なる御名を賛美する力を与え、また、口がきけない者に言葉を話す能力を与えられた主なる神は、　この御自身の真の忠実なしもべたち、敬虔なるマクシムス・殉教者および告白者、ならびにその弟子である敬虔なるアナスタシウスに対し、舌を切断される前よりも、さらに良く、より明瞭に語る力を与えられた。このことを知ったとき、あの忌まわしい異端者たちはどれほど恥じ入ったことか！　さらに激しい憎悪に燃え上がり、彼らは彼の右手を切り落とし、地面に投げ捨てた。同様に、彼らはその弟子である聖アナスタシウスの手も切り落とした。もう一人の弟子、同じくアナスタシウスという名の、かつてローマ教会の使節を務めていた人物については、彼が時折君主たちの秘書を務めていたため、彼らは容赦した。

その後、聖マクシムスとその弟子はプレトリアから引きずり出され、侮辱されながら街中を引き回された。人々は彼らの切り取られた舌や手を民衆全員に見せつけ、醜悪な声で叫び声を上げ、嘲笑した。　このような非人道的な虐待と不名誉な侮辱の後、三人はそれぞれ別々に、遠くへの流刑に処された。彼らへの配慮は一切なく、食料も衣服もなく、裸足で裸のままであった。彼らは旅の途中で多くの災難と苦難を経験した。　聖マクシムは、重傷のため、馬にも馬車にも乗ることができなかった。　兵士たちは、寝床のような籠を編み、ひどく苦しむ老僧をその中に寝かせ、大変な苦労の末、彼を流刑地へと運ぶことができた。彼らは彼を、ヨーロッパではアラニア[1339]と呼ばれる遠く離れたスキタイの国へと送り届け、シェマリという町の牢獄に閉じ込めた。　一方、彼の弟子である聖ア

[1338] プレトリアとは、裁判が行われた場所のことである。プレトリアの前では、鞭打ち刑が行われることも珍しくなかった。

[1339] アラニアは、アジアのサルマティア、コーカサス山脈の西部、黒海からほど近い場所に位置していた。

ナスタシウスは、舌と片手を切断された後、道中でその多くの苦難と苦しみに満ちた肉体を休め、その魂は神のもとへ移り、不滅の命を得た。

聖マクシムは、最後の流刑の地で、激しい苦しみの中、さらに三年間を過ごした。牢獄に閉じ込められた彼は、老齢に必要な世話も、人道的な配慮も、誰からも受けることができなかった。 やがて主が、彼の病と苦しみ終わらせ、彼を牢獄から天の御国の永遠の広大さと喜びへと導き出そうと望まれたとき、まず地上で一つの神聖な御現れによって彼を慰め、その後、死の時を告げられた。この祝福された苦難の人は大きな喜びに満たされ、常に死を迎える準備はできていたものの、さらに熱心にその準備を始めた。そして、彼にとって喜びに満ちた死の時が訪れると、彼は喜びをもって、若き日から愛し、そのためにこれほど多くの苦難を耐え忍んだキリスト・神の御手に、自らの魂を委ねた。

こうして、キリストの告白者であり殉教者である彼は、その生涯の道を全うし[1340]、主の喜びの中へと入った。彼はその同じ町に埋葬された。聖人の埋葬後、その墓の上には三つの不思議な ランプが見え、言葉に尽くせない輝きを放ち、その場所を照らし出していた。 生前、世の光であったこの聖人は、死後もその輝きを絶やすことなく、今なお、その徳高く苦難に満ちた生涯と、神への深い熱意という模範をもって、すべての人々に光を照らし続けている。 聖人の棺の上に現れたその三つのランプは、神に愛されたこの聖人が、神の御国において決して消えることのない、至聖なる三位一体の輝かしい住まいに移り住み、そこで義人らと共に太陽のように輝き、三位一体の光を仰ぎ見る喜びに浸っていることを示す、明らかなしるしであった。 尊者マクシムスの死後、別の弟子である書記官アナスタシウスが、隔離された状態で生き残った。彼は後に、自身の父であり師である聖人の生涯、功績、そして苦難について、極めて詳細に記述した。 この記述の中から、私たちの益となり、聖なる者たちによって賛美される神、すなわち父と子と聖霊を賛美するのに十分な部分を、ここに要約して引用する。罪深い私たちからも、今、常に、そして世々限りなく、聖霊に栄光と賛美と礼拝が捧げられますように。アーメン。

コンダク、第8調:

三位一体の守護者であり偉大なるマクシムは、神聖なる信仰を明瞭に教え、二つの本性において、また意志と行いにおいて存在するキリストを賛美することを示した。ふさわしく、忠実な賛歌をもって、敬意を込めてこう呼びかけよう。「喜びなさい、信仰の説教者よ。」

[1340] 聖マクシムスの著作は失われることなく残った。第6回全地公会議（680年）は、この殉教者を尊び、異端者たちとその教義を破門した。――聖マクシムスの著作の中でも特に優れたものは、霊的生活を描いたものであり、とりわけ以下のものが挙げられる：1) エルピディオ司祭への愛について（400章）； 2) 同じエルピディオへの問答形式による修道教義；3) 『美徳と悪徳について』500章；4) エパルフ・ゲオルギオスへの高慢に関する書簡；5) クヴィキュラリウス・ヨハネスへの書簡――愛と神への嘆きについて。すべての教義に関する著作において、聖マクシムスは、生前これほど熱心に闘ったモノフェリテ派およびモノフィシテ派をほぼ唯一の対象としている。 モノフェリテ派に対して彼が著したのは、1) キプロスのマリヌス宛ての教義に関する二巻；2) キリストにおける二つの意志、およびキリストにおける行為と意志について、同じくマリヌス宛ての書簡、ならびにその他多数の比較的短い論考である。 モノフィシテ派に対しては、1）正しい信仰の教義とセウェルスへの反論、2）キリストにおける二つの本性についてが著された。また、聖三位一体に関する5つの対話と、長老マリヌスへの「聖霊の起源について」という書簡も彼の著作である。 聖マクシムスは、聖書の解説にもかなり力を注いだ。彼は聖書の解釈に関するいくつかの著作を残している：1）聖書の疑わしい箇所に対する回答；2）難解な主題に関する簡潔な回答；3）詩篇第59篇の解説；4）「主の祈り」の解釈； 5) 『雅歌』の解説。さらに、聖マクシムスには典礼に関する著作――典礼の解説や秘儀の解説――のほか、魂や徳などに関するいくつかの著作が残されている。聖マクシムスの著作は、高尚な教義的・道徳的思索に富んでいる。

もう一つのコンダク、第6調：

三一の光があなたの魂に宿り、あなたは選ばれた器として、至福なる者よ、神性をその終末において示し、理解しがたい真理を語り、至福なる者よ、またマクシムよ、すべての人々に、実在し、始まりなき三位一体を明確に説き明かした。

聖殉教者ネオフィトスの受難

記念日1月21日

ビフィニアの都市ニケア（[1341] ）に、テオドゥルスという名の男が住んでおり、その妻はフローレンティアであった。二人はともに神を畏れるキリスト教徒であり、神の戒めを敬虔に守っていた。彼らには息子が生まれ、ネオフィトと名付けた。聖なる洗礼によって彼を神に導いた後、二人はキリスト教の教えに従って彼を育てた。　少年が年を重ね、知恵を深め、十歳に近づくにつれて学校に通い始めると、彼の中に神の恵みが宿り、幼子たちの口からキリストへの賛美が湧き出た（詩編8:3、マタイ21:16参照）。なぜなら、*聖霊は「御心のままに吹く」*（ヨハネ3:8）のである。少年は奇跡を行う者となった。彼には次のような習慣があった。子供たちが学校から家に帰るとき、祝福された少年ネオフィトは、同年代の最も貧しい子供たちを家に連れ帰り、両親から昼食として与えられた食事を彼らと分け合い、自分だけは空腹のままだった。　その後、彼は町の東門へと向かい、そこで指で十字架を描き、それにひれ伏して、私たちのために十字架に架けられたキリスト・神に祈りを捧げた。一方、彼の仲間たちは、彼の昼食で満腹になった後、彼が東門で祈っている間に彼の元へやって来た。そこには城壁に石があった。　この石を手に叩くと、至福のネオフィトは仲間たちのために、まるで泉から湧き出るかのように水を湧き出させ、彼らはそれを飲んだ。この聖なる少年は毎日そうして、同年代の仲間たちに食事を振る舞い　、石から湧き出る水で奇跡的に彼らを潤していた。その際、彼は彼らにこのことを誰にも話さないよう命じ、彼らは口外しなかった。　こうして、その年、彼の奇跡について知った者は誰もおらず、両親でさえも知らず、ただあの最も貧しい少年たちだけが知っていた。

翌年、神への並外れた愛に満ちたネオフィトの母フローレンツィアは、眠りの中の幻視において、神から、彼女の息子がモーセのように岩から水を湧き出させ、喉の渇いた少年たちに飲ませていることを啓示された。彼女は眠りから覚めると、神に祈り、息子ネオフィトに関するすべてを詳細に明らかにしてくださるよう願った。　すると、天の高みから、言い表せないほどの光を放つ白い鳩が飛来した。ネオフィトの寝床に止まると、鳩は人間の言葉で彼に語りかけた。

「私は、救い主から、お前の寝床を汚れのないまま保つために遣わされたのだ」と鳩は言った。

これを聞いた母親は、恐怖のあまりその場で息を引き取った。たちまち、ニカイアの街中に、テオドロスの妻フロレンティアが突然亡くなったという知らせが広まった。　すぐに、亡くなった女性の家には大勢の人々が集まった――男女、近所の人々、知人など――そして皆、彼女に何が起きたのか、なぜ突然亡くなったのかと首をかしげていた。夫のテオドールはその時、畑にいた。彼はすぐに妻の突然の死を告げられた。　悲しみのあまり衣服を引き裂き、彼は泣きながら急いで家へと戻った。門で彼を出迎えたネオフィットは言った。

「なぜ悲しんでいるのですか、父上？　母は亡くなったのではなく、深く眠りについたのです。」

そして、父と共に家に入ると、彼は母の手を取り、こう言った。

[1341] ビフィニア――小アジア北西部の地域。ニカイア――現在のイシク――は、古代には豊かで繁栄した都市であったが、現在は貧しく人口も少ない。ニカイアでは、第1回および第7回全地公会議が開催された。

「起きなさい、母よ。あなたは深く眠りについてしまったのです。」

母は、まるで眠りから覚めたかのように起き上がり、息子を抱きしめ、愛情を込めて彼に口づけをした。これを見た家の中に集まっていた者たちは皆、神を賛美した。一方、フローレンツィアは、眠りの中の幻視と現実で自分に起こったことを、順を追って夫にすべて語った。そのとき、ネオフィトが石から水を湧き出させたという奇跡も明らかになった。　皆はこれに大いに驚嘆し、そこにいた異教徒の多くは、この一連の出来事を聞き、清く汚れなき少年ネオフィトに宿る神の恵みに感嘆して、我らの主イエス・キリストを信じるようになった。

その間も、鳩は常に聖人の寝床に現れ、寝床の上に止まって人間の声で話しかけていた。ある日、鳩は聖人にこう言った。

「ネオフィトよ、父の家を出て、私についてきなさい。」

聖なる少年は立ち上がり、両親に別れを告げて、鳩の後を追った。鳩は彼をオリンポス山[1342]にある岩の裂け目まで連れて行き、そこにあった洞窟へと飛び込んだ。ネオフィトは鳩の後を追って中に入ると、そこには巨大なライオンがいて、彼はライオンにこう言った。

「ここから出て、別の洞窟を探しなさい。主が、私にここに住むよう命じられたのだから。」

これを聞いたライオンは、舌で彼の足についた塵を舐め取り、去っていった。聖人はそのライオンの洞窟に住み続け、天使によって養われた。　一年が過ぎると、聖人は神の御命により、再びニケアの町へ、すでに死期が迫っていた両親のもとへ向かった。両親に最後の口づけを贈り、彼らを神のもとへ送り出した後、両親が残した財産を貧しい人々に分け与え、再びオリンポス山、かつての住処へと戻った。　そこで彼は、天使のように神を賛美し、天使の手から糧を受け取りながら、15歳になるまでずっと過ごした。

この頃、東方と西方では迫害者ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[1343]が統治しており、ビフィニア地方ではデキウスとその補佐官ウアルが支配していた。キリストの教会は、不敬虔な偶像崇拝者たちによって全世界で迫害されていた。　ちょうどその時、デキウスがニカイアにやって来ると、その布告役は、市内のすべての市民と近隣の住民が神々に犠牲を捧げるために集まるよう告げた。この忌まわしい祭りの日も定められた。ちょうどその頃、王たちもビフィニア地方に滞在しており、彼らもまたニカイアに到着した。　この悪魔的な祭りが始まり、民衆が偶像に犠牲を捧げている最中、神の天使たちは聖ネオフィトをオリンポス山から連れ出し、モーセのように輝かしい顔つきで、ニカイアの広場の真ん中に立たせた。聖人は大声で叫んだ。

「私は、私を探そうともしなかった者たちに自らを現し、私について尋ねもしなかった者たちの前に現れた。それは、不敬虔な信仰の迷いと欺瞞を暴くためである。」

祝祭を行っていた民衆、そして彼らと共にいたデキウス総督は、突然彼らの間に現れた、明るく輝く若者が大声で語りかけるのを見て、驚き、彼が誰で、どこから来たのかと尋ねた。　するとすぐに、市民たちはそれがテオドールとフローレンティアの息子、ネオフィトであることを知った。そこでデキウス総督は、彼にも彼らと共に神々への生け贄を捧げるよう命じた。聖人は大胆に口を開き、こう語り始めた。

「不法者よ、血に飢えた者よ、これほど多くの人間の魂を滅びへと導いて、一体何をしているのか？　お前が悪魔への生贄として連れてくる者たち全員について、お前は恐ろしい責任を負い、火の地獄で永遠に苦しむことになることを、知らないのか？」

[1342] オリンポス――小アジアにある山で、フリギアとビフィニアの境界に位置する。

[1343] ディオクレティアヌス――ローマ皇帝。284年から305年にかけて、帝国の東半分を統治した。マクシミアヌスは西半分を統治した。

デキウス総督はこの非難に激しく怒り、聖なる若者を裸にし、腕を縛って木に吊るし、牛の腱で容赦なく鞭打たせた後、塩を混ぜた酢の中に浸すよう命じた。　聖人は勇敢に苦痛に耐え、周囲に集まった民衆に向かって大声で叫んだ。

「不信心に囚われ、盲目となっている人々よ、悔い改め、この闇から抜け出せ。真の光であるキリスト・神のもとへ来て、聖なる洗礼を受け、永遠の命に与る者となれ！」

統治者は、聖なる若者のその言葉を耳にすると、さらに激しい怒りに満ち、再び彼を木に吊るし、ナイフで肋骨を削るよう命じた。このように苦しめられても、聖ネオフィトは次の言葉以外、何も語らなかった。

「神の子よ、私を憐れんでください！」

すると、王の側近の一人が彼の前に進み出て、こう言った。

「ネオフィトよ、なぜ王の命令に逆らって狂ったように振る舞うのか？神々に犠牲を捧げることを約束すれば、すぐにこの残酷な刑罰から解放されるだろう。」

しかし、聖人は彼にこう答えた。

「私は天の神に賛美の捧げ物を捧げます。しかし、魂のない偶像や、そこに宿る悪魔たちには、決して拝むことはありません。」

そこで総督は家来たちに、聖人の全身をさらに残酷に、交互に削り取るよう命じた。家来たちは交代で容赦なく彼を削り取り、その骨がむき出しになるほどであった。　しかし、聖人は神に支えられ、この拷問の最中もこう歌った。*「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるから」*（詩編22:4）、主よ。

統治者は、どうやっても聖人を屈服させられないと悟ると、聖人への拷問を止め、木から降ろすよう命じ、その際、彼を慰めながらこう言った。

「お前の若さを鑑み、健康を慮って、これ以上大きな拷問は課さない。だが、我らの神々に拝むことを勧める。そうすれば、王たちから最も腕の立つ医師たちが派遣され、すぐにこれらの傷を癒やしてくれるだろう。」

殉教者は彼にこう答えた。

「私には別の医者、すなわち私の主、主イエス・キリストがおられます。私はその方のために苦しんでいるのです。私はその方にのみ希望を置いています。」

そこで総督は、彼を縛って牢獄に閉じ込めるよう命じた。翌朝、総督は王宮へ赴き、王たちにネオフィトスのことを報告した。

「昨日、私は」と彼は言った。「神々にひれ伏そうとしないあるキリスト教徒の若者を縛り上げて拷問した。しかし、彼は苦痛をものともせず、絶えず自分のキリストを呼び求めている。」

王たちは、その青年だけでなく、キリストを信じる者全員を生きたまま焼き殺すよう命じた。総督デキウスと長老ウアルは王宮を出て、「ヘラクレスの学校」と呼ばれる場所[1344]　へと向かった。そこには王の像が安置されており、デキウスは牢獄から青年ネオフィトを連れてくるよう命じた。聖人が連れて来られると、総督は彼に次のように語りかけた。

「ネオフィトよ、ここに来て、神ヘルクレスに犠牲を捧げなさい。そうすれば、あなたは神々に喜ばれ、王たちや我々にとっても好ましい存在となるだろう。」

[1344] ヘラクレス、あるいはヘルクレスは、古代ギリシャの伝承に登場する英雄であり、古代ギリシャ人の信仰によれば超自然的な力を持ち、人間の肉体的な力を体現する存在として、後に彼らから最も愛される神の一人として崇められていた。　肉体的な力の化身として、ヘラクレスはすべてのギムナシオン（体操に特に重点を置いた古代ギリシャの公立学校）およびパレストラ（個人が運営し、少年たちが身体的な発達を遂げるための体育学校）の長であり、守護神として崇められていた。　これらの学校は通常、ヘラクレスに奉献され、その像で飾られていた。多くの場合、これらの運動や体操、陸上競技は、ヘラクレスに奉献された、そのために特別に設けられた屋外の場所で行われていた。

聖人は彼にこう答えた。

「私は、私の神であるイエス・キリストに祈り、神に喜ばれ、御心に適う者となることを願っています。」

そこで、拷問官の命令により、聖ネオフィトを焼き尽くすために炉が激しく灼熱された。彼は炉に投げ込まれ、殉教者の骨さえも残らないよう、その開口部は三日三晩にわたって閉じられた。しかし、聖殉教者ネオフィトは、炎の中にありながら神の露によって涼められ、あたかも安らかな場所にいるかのように喜び、こう歌った。*「主は私の牧者。私は何一つ欠けることがない。主は私を緑の牧場に休ませてくださる」*（詩編22:1–2）。彼は、炉に投げ込まれたバビロンの三人の若者のように（ダニエル書3章）、全く無傷のままであった。

三日が過ぎた後、拷問者の家来たちが炉の蓋を開けて灰を捨てにやって来た。彼らは、炉の火が消え、殉教者の遺体が焼けてしまったと思っていた。　しかし、彼らが口を開けた途端、予期せず炉から巨大な炎が噴き出し、そこに集まっていた多くの不義な者たちを焼き尽くし、無傷で残った者はほとんどいなかった。聖人は大声でこう叫んだ。

「主なるわが神よ、あなたは祝福されます。苦難の只中で私を健やかで無傷に守り、拷問者たちの悪巧みから私を救い、私のために火を露に変え、永遠に消えることのない炎にふさわしい者たちを炎で焼き尽くしてくださったのです！」　主よ、どうか私、あなたのしもべを、あなたの助けによってこの試練を成し遂げるその日まで、恥をかかせないでください。

その後、聖人は火から何の害も受けず、無傷で炉から出てきた。炎による焼死を免れた不敬虔な家来たちは、彼を捕らえて統治者の元へ連行した。　すべての異教徒たちは、この奇跡に驚き、自らの不敬虔さゆえに、それを魔術の仕業だと決めつけた。彼ら自身、悪魔の魔術に満ちていたのだ。悪意が彼らの目を曇らせ、キリストの力を理解することができなかった。

その後、聖人は獣に食い殺される刑に処された。高台が設けられ、裸にされた聖人はそこに固定された柱に縛り付けられ、熊が放たれた。熊は咆哮を上げて聖人に向かって進んだが、近づくと立ち止まり、聖人を見つめた後、元の場所へ戻っていった。　統治者やこの光景を見物するために集まった人々は皆、これに驚いた。続いて、最も獰猛な雌熊が放たれた。この熊は、非常に凶暴で多くの人を殺していたため、年にたった2回しか闘技場に放たれることがなかった。彼女は駆け寄ると、聖人の足元にひれ伏し、彼を神の御心に適う者として崇め、その後、元の場所へ戻っていった。　その出来事が起きている最中、羊飼いたちが、巨大で極めて獰猛なライオンを統治者の元へ連れてきた。彼らの話によれば、そのライオンは五日前に砂漠で捕獲され、それ以来一切餌を与えられていなかったという。大喜びした統治者は、このライオンを闘技場の中へ連れてくるよう命じた。そこには、聖なる殉教者が裸のまま柱に縛り付けられていた。　その獅子は非常に大きく獰猛であったため、皆はその姿を見て恐怖に震えた。獅子は聖人のところまで近づき、彼を見つめると立ち止まり、頭を垂れて、まるで泉から流れ出る川のように目から涙を流し、その後、聖人の足を舐め始めた。　それは、聖ネオフィトがオリンポス山の岩の洞窟で見つけ、別の場所へ送り出し、自身はその洞窟に住み着いたあの獅子であった。聖人はその獅子だと気づくと、かつて聖人に譲り渡したオリンポス山にある最初の住処へ戻るよう命じた。その際、聖人は獅子に対し、決して人間に危害を加えてはならないと禁じた。　獅子は殉教者に頭を下げると、恐ろしい咆哮を上げてその場を去り、闘技場の扉を打ち破って、群衆の中を素早く通り抜けた。皆は獣の獰猛さを恐れ、一斉に逃げ出したが、獅子は誰にも手を出さず、聖人の命に従って、かつての住処である荒野へと駆け去った。　恐怖と戦慄に駆られた拷問官は、これ以上どうすべきか分からず、殉教者を殺すよう命じた。そこには、槍を手にした、獣のようで獰猛な気性の異邦人が一人立っていた。彼は聖人に飛びかかり、槍で胸を突き刺し、貫き通した。こうして、子羊のように屠られた聖殉教者ネオフィトは、[1345] 年1月21日、生後15年4ヶ月の生涯を

[1345] 聖ネオフィトスは、303年から305年にかけて行われたディオクレティアヌスの迫害の中で苦難に遭い、殉教した。

終え、その魂を主の御手に委ねた。今や彼は、永遠の命を受け継ぎ、命の源であるキリスト・神を賛美しており、父と聖霊と共に、永遠に賛美されている。

聖女アグニアの生涯と殉教

記念日：1月21日

聖殉教者アグニアは古代ローマで生まれ、両親によってキリスト教の信仰の中で育てられた。13歳の時、彼女は一時的な死によって永遠の死から解放され、果てしない命を得た。それは、唯一の命の与え主を愛し、若き日から彼に深く結びついていたからである。　彼女は年齢こそ若かったが、知恵においては老成しており――体は若くとも、その魂の白髪は知恵であった（箴言4:9）――顔立ちは美しく、しかし信仰の深さはそれ以上に美しかった。　無原罪の聖母から生まれた至甘きイエスへの愛に燃え、彼女は処女性をもってイエスと婚約し、イエス以外の誰をも花婿として望まなかった。　高貴な家柄で、顔立ちも美しい彼女は、その美しさによって、地方長官シムフロニオスの息子であるある若者の目と心を強く惹きつけた。そのため、彼が彼女が女子学校から帰ってくるのを見たとき、　たちまち彼女への愛に燃え上がり、その後、彼女について尋ねて両親の家を突き止めると、彼女に豊富な贈り物を送り始め、さらに多くのものを約束し、自分の花嫁となり、結婚に同意するよう懇願した。　聖アグニアは、これらすべての贈り物を、まるで屑であるかのように一顧だにせず拒絶した。そして、自分自身については、最良の花婿と婚約しており、彼からより良き、より貴重な贈り物を受けていると語った。彼の花嫁である以上、彼を見捨てたり、彼への献身や愛を裏切ったりすることはできないのだ。　しかし、その若者は日ごとに彼女への愛をますます燃え上がらせ、他のすべての貴族の若者たちと比べて、自分が最も名誉ある、最もふさわしい人物であると自負していた。そして、その乙女が自分からより素晴らしい贈り物を望んでいると考え、彼はより多く、より高価な宝石や真珠、貴重な器や衣服を用意し、自らそれらを彼女のもとに持ち込み、時には直接、時には知人や友人、隣人を通じて、彼女に自分以外の誰をも自分より優先しないよう懇願した。　彼は、自分の高貴な家柄や、富、邸宅、そして彼女が自分と婚約に同意すれば所有することになる相続地を強調した。すると、聖女はより明確に語り始めた。

– 私から離れなさい、罪の炎を煽る者よ、不浄を熱烈に愛する者よ、永遠の死に定められた餌よ！　私から離れよ。もう一人の花婿がすでにあなたに警告したのだから。その方は、私にはるかに素晴らしい装飾品を授け、御自身の信仰の指輪で私を婚約させてくださった。あなたはその方とは、出自においても地位においても比べものにならない。その方は、私に霊的な美しさという別の栄誉を授けてくださった。　彼は私の右手と首に高価な宝石を飾り、耳には計り知れない価値のあるエメラルドのイヤリングを授け、明るく輝く真珠の帯を私に巻き、私が彼以外のいかなる花婿も選ばぬよう、私の顔に印を刻み、金糸で織られた衣を身にまとい、数え切れないほどのネックレスで私を飾ってくださった。　さらに、主は、私が主への信仰を守り通せば与えてくださると約束された、計り知れない宝を私に見せてくださいました。それゆえ、私は最初の花婿を辱めることのないよう、他の誰にも目を向けることはできず、愛の絆で固く結ばれている主を離れることもできません。　御方の高貴さは至高であり、御力は最も強固であり、御美しさは最も素晴らしく、御愛は最も甘美で、あらゆる恵みを凌駕しています。御方はすでに私のために宮殿を用意してくださっています。　その声は私に心地よく響き、その口はすでに私のために蜜と乳を注ぎ出しました。その清らかな抱擁によって、私はすでに心から彼に愛着を抱いています。その肉体はすでに私の肉体と一つとなり、その血は私の顔を彩りました。　御母は処女であり、御父は妻を知らなかった。御使いたちが御方に仕え、太陽と月は御方の美しさに驚嘆する。御方の御命令により死者はよみがえり、御方に触れられることで病人は癒やされる。御方の富は決して減ることはなく、宝庫は空になることがない。　私はただ彼一人に信

仰を置き、自分自身を彼に全身全霊で委ねる。彼を夫として、私は処女のままであり続ける。彼を愛して、私は汚れのないままであり、彼に触れても清らかなままであり、この結婚からは子供は生まれない。この結婚における出産は痛みを伴わず、共に過ごす日々によってその実りは日ごとに増していく。

この言葉を聞いた後、狂おしいほどの情熱を抱く若者は、彼女への熱い愛にさらに燃え上がり、恋の傷に心を苛まれ、悲しみと嘆きから重い病に倒れてしまった。彼が病床に伏し、心の底から深く嘆息を漏らしていたとき、医師たちは彼の心の傷に気づいた。　彼の父は、この一連の出来事を聞き、病の原因を尋ねて知ると、直ちにその娘と彼女の両親のもとへ使者を送り、娘を自分の息子と婚約させようと望んだ。しかし彼女は、前回と同様に、こう言って断った。

「私は、最初の婚約者を決して裏切ることはありません。」

激怒した地方長官は、誰が自分の息子に匹敵し、その家系の高貴さを辱めることができるのか、徹底的に調査しようと試みた。すると、そこにいた一人の者が、アグニアは幼い頃からキリスト教徒であり、キリスト教の魔術にすっかり魅了されて、キリスト教徒が神と認めるキリストを自分の花婿だと考えているのだと説明した。　これを聞いた地方長官は喜んだ。裁判官として、彼女を自らの神々への冒涜の罪で死刑に値すると認定できるからである。さらに、自らの権力をもって、彼女を息子との結婚に強制できると期待していた。彼は直ちに家来たちを遣わして彼女を連行させ、彼女に対する不敬な裁判を始めた。　彼はまず甘言で、次に脅しを用いて、彼女をキリストと、キリストに誓った貞操から引き離そうとした。しかし、キリストの乙女は甘言に惑わされることもなく、脅しを恐れることもなく、気高き精神をもって、甘言も脅しも等しく嘲笑した。　地方総督シンフロニオスは、少女のそのような勇気を目の当たりにして、彼女の両親に話しかけ、婚約について長く話し合った。両親は高貴な家柄であったため、彼らに対して暴力を振るうことを敢えてせず、ただあらゆる手段を尽くして娘を結婚へと説得するよう助言した。しかし、両親は次のように言って拒んだ。

「総督様、私たちには彼女を説得する術がありません。幼い頃から彼女の意志を知っている私たちとしては、彼女が決してそのようなことはせず、決してその決意を曲げないことを承知しているからです。」

そこで統治者は再び、その娘を裁きのために自分の前に連れてくるよう命じ、肉欲的な愛や結婚について多くの言葉をかけました。しかし、あらゆる優しい言葉やお世辞も無力であることが判明すると、彼はついにこう言いました。

「二つのうち一つを選べ。わが息子と結婚するか、あるいは処女を守りたいのなら、女神ヴェスタに永遠に仕えることを誓うのだ[1346]。女神はそうした乙女を求めているのだから。」

この言葉に対し、至福のアグニアはこう答えた。

「たとえあなたの息子が狂おしい情熱に駆られて堕落していたとしても、　とはいえ――生きている人間であり、しかも理性を持ち、聞き、見、歩き、この世の恵みを享受できる者である――もし私が、私のキリストへの誓いのゆえに、彼を見ることもできないのなら、ましてや、耳も口もなく、魂も理性もない偶像を崇めることなど、なおさらできない。　全能の神を冒涜することのないよう、私は無感覚な石の前で頭を下げることはしない。なぜなら、私は疑いなく知っているからだ。天と地を御子を通して創造された方、　私たちの主イエス・キリスト、すなわち私たちのために受肉し、苦しみを受け、葬られ、三日目に復活し、今や天において永遠の御国を治めておられる方以外には、

1346　ウェスタ（ギリシャ神話ではヘスティア）は、古代ローマ人によって家庭の炉、家庭の調和、平和、幸福の女神として崇められていた。彼らの信仰によれば、彼女自身は処女であった。　彼女を称えるために、その像と炉を備えた特別な聖域が設けられ、そこでは消えることのない火が絶えず燃やされていた。この火の世話は、いわゆるウェスタルカと呼ばれる奉仕者たちによって行われていた。彼女たちは、永遠の処女性を誓った清らかな処女たちの中から選ばれ、ローマ人たちの間で大きな尊敬と栄誉を受けていた。

神はいないことを、私は疑いなく知っている。私は、唯一の神であるその方だけを、真の生ける神として崇め、仕える。そして、あなたの偽りの女神と、あなた方のすべての忌まわしい神々を呪う。

これを聞き、総督シンフロニオスは言った。

「お前の若さを憐れみ、我らの神々に対して口にした冒涜は許してやる。お前の知性が未熟であることがわかるからだ。だからお前も自らを憐れみ、神々を怒らせないようにせよ。」

聖アグニアは答えた。

「なぜ、まるで分別のないかのように私の若さを軽んじるのか。そして、なぜ私があなたに何らかの慈悲を求めていると思うのか。　知っておきなさい。信仰の尊さは、生きた年数や肉体の年齢によるものではなく、理性によるものである。全能の神は、年数よりも知性によって人を高く評価し、長寿よりも理性を通じてより多くの恵みを与えてくださるのだ。　そして、あなたがその怒りから私を戒めているというあなたの神々については、放っておきなさい。彼ら自身が私に怒りを向けるがよい。彼ら自身が語り、彼ら自身が私に彼らを崇め、拝むよう命じるがよい。

それに対し、地方の統治者はこう言った。

「どちらか一つを選べ。他の乙女たちと共に、家の名誉を守るために女神ヴェスタに犠牲を捧げるか、あるいは、一族に永遠の恥をもたらすことになり、恥知らずな女たちがいる不道徳な家へ行くかだ。」

聖アグニアは勇敢にこう答えた。

「もしあなたが私の神がどなたかを知っていたなら、そのようなことは言わなかったでしょう。私は、私の主イエス・キリストの力を知っているので、あなたの脅しなど全く意に介しません。なぜなら、あなたの神々にも決して　は崇拝せず、私の処女性は清く、傷つけられることなく保たれると確信しているからです。」　私には、私の体を守る者、神の御使いがいる。そして、私の主イエス・キリスト、すなわち神の独り子――あなたが知らないその方――がいらっしゃる。　主は私にとって、打ち砕くことのできない要塞であり、疲れを知らない守護者であり、絶え間ない擁護者です。それは、あなたがたの神々とは異なります。あなたがたの神々は、家庭で役立つ鍋を作るのに適した銅の塊か、あるいは通りを舗装するための石に過ぎないのです。　神は石の中に住まわれるのではなく、天を御座とされ、また銅やそれよりも高価な物の中に住まわれるのではなく、至高の御国におられ、あらゆる被造物から賛美され、崇められているのです。　あなたやあなたのような者たちは、もし偶像崇拝から真の神へと立ち返らなければ、彫刻家たちが火の中で鋳造し、火の中で溶けてしまうあなたの神々と共に、永遠の炎の中で苦しむことになるだろう。

地方の長は激しく怒り、聖女を裸にし、その裸体を淫らな家へ連行するよう命じ、また、告示役は次のように叫ぶよう命じられた。

「アグニアよ、神々を冒涜した不敬虔な乙女よ、娼婦のように不道徳な家へと連行されるのだ。」

しかし、聖なる乙女が侮辱のために裸にされたその時、神は彼女の希望を見捨てず、御自身の花嫁が嘲笑され、辱められることを許されなかった。　神の御心により、彼女の頭にはたちまち非常に長い髪が生え、まるで厚手の衣服のように全身を覆い隠したため、誰も彼女の裸を見ることはできなかった。　彼女が娼婦たちの家に入ったとき、神の御使いが彼女の処女の純潔を守るために待機しているのを見た。その御使いは、言葉に尽くせないほど眩い輝きで彼女を包み込み、その強烈な輝きのせいで、恥知らずで不敬虔な若者たちの目は彼女を直視することができなかった。　部屋全体が、その全貌を輝かせて輝く太陽のように光り輝き、誰かが好奇の眼差しで彼女を見ようとすると、その光のせいで目に見えない聖なる光によって、その者の目はたちまち激しく眩み、視界が曇ってしまった。　そして、その乙女が祈りを始めると、目の前には、人間の手ではなく、天使の手によって織り

上げられた白い衣が見えた。その衣を身にまとい、自分の年齢にふさわしい姿となった聖女は、こう言った。

「わが主イエス・キリストよ、私を御自分のしもべの一人として迎え入れ、この衣を授けてくださったことを感謝いたします！」

そうして、罪の家は祈りの家となり、悪魔の宴の場は神の栄光の住処となり、娼婦たちの不浄な家は、キリストの花嫁が現れた天使と共に神を賛美し、讃歌を捧げる壮麗な宮殿となった。　ここには、心が堕落し、情欲に燃える多くの人々が訪れましたが、その乙女を取り巻く栄光を恐れ、彼女の貞操を守る神の御力を目の当たりにすると、貞潔な者となり、礼拝を捧げて立ち去りました。　その悪の張本人である、不純な情欲に満ちた若者も、同年代の仲間たちと共にやって来た。彼は聖なる乙女に暴行を加えようとしていたが、自分より先に中に入り、何の成果も得られずに去っていった者たちを見て、彼らを「無価値で弱々しい」と罵り、嘲笑した。　彼は不遜な意図を抱いて、聖女が祈りを捧げていた部屋に入り、天の輝きを目にしたにもかかわらず、主の栄光を称えることもなく、恥知らずにもキリストの花嫁へと突進した。　しかし、彼が彼女に手を触れる前に、悪魔が瞬く間に彼を支配し、力強く地面に叩きつけ、首を絞めて息の根を止めた。　彼と一緒に来ていた若者たちは、彼が部屋で長く留まっているのを見て、彼が罪深い行いをしているのだと思った。そこで、彼の親しい友人の一人が、彼を称え、願いが叶ったことを祝おうとして部屋に入ると、彼が息絶えているのを見つけ、大声で叫び始めた。

「ローマの男たちよ、助けてくれ！この魔女が、その魔術で総督の息子を殺したのだ！」

たちまち大勢の群衆が集まった。その光景を見て、彼女を魔女と呼ぶ者もいれば、若者の死について彼女に非はないと認める者もいた。このことを知った亡き者の父は急いで群衆の中へ駆けつけ、息絶えて横たわる息子を見て、泣きながら聖女にこう訴えた。

「ああ、女の中で最も非人道的で残酷な者よ！　なぜ我が子を殺したのだ？　他の誰かにでも、その魔術の力を示すことはできなかったのか？　ああ、悲しや！　何をしたのだ？　どうやって彼を殺したのか、話せ！」

聖女は穏やかに彼に答えた。

「彼がその意志に従おうとした者、すなわち人類の古来の敵であり、淫行者や神を畏れない者たち、とりわけ処女を堕落させる者たちを支配する者が、彼を殺したのです。　というのも、彼より前にここに入った者たちは、どれほど多く入ろうとも、皆、健在で無事だったからです。彼らは、御使いを遣わして私にこの慈悲の衣をまとわせ、揺りかごの頃からキリストに捧げられた私の処女性を無傷のまま守ってくださった神に、敬意を表したからです。　天使の輝きを見て、彼らは皆、ひれ伏し、　無傷で出て行った。しかし、あなたの息子は、恥知らずで神を畏れない者であったため、入るやいなや、凶暴に振る舞い、狂乱し始め、恥知らずにも私に手を伸ばして触れようとしたとき、　神の天使は直ちに彼をサタンに引き渡し、あなたが目にするこの苦しくも恥ずべき最期を迎えさせた。このように、あなたが考えているような私の魔術によるのではなく、神の天使の権威と命令によって、彼は殺されたのである。

これに対し、統治者は言った。

「では、あなたが魔法でこれを成し遂げたのではないことが明らかになるのは、あなたが自分の天使に懇願して、私の息子を蘇らせてもらった時だけだ。」

聖女はこう答えた。

「あなたがたは不信仰ゆえに、このような奇跡を受けるに値しないかもしれませんが、今こそ、私の主イエス・キリストの御力が現れ、賛美される時が来ました。ですから、皆さん、ここから出て行ってください。私は私の神にいつもの祈りを捧げます。」

そして、彼女が地面にひれ伏して祈っている間、彼女の前に現れた神の天使が、泣き崩れていた彼女を立ち上がらせ、亡くなった若者をよみがえらせた。その若者は家から出てくると、大きな声で叫び始めた。

「天にも地にも海にも、ただひとり神がおられる。それはキリスト教の神である。他の神々は無に等しく、ただ欺きと迷いであり、それらを信じる者たちに永遠の滅びをもたらすだけだ！」

これを見て聞いて、その日、民の多く、すなわち百六十人が信仰を抱き、洗礼を受けた。しばらくして、異教徒たちは彼らと、よみがえらされた若者の首を切り落とした。

このような奇跡に、異教の祭司や魔術師たちは大いに動揺した。彼らは奇跡の噂を広め、民衆の間に大きな動揺を引き起こすと、裁判官に向かって大声で叫んだ。

「我々の間からこの魔女を根絶やしにしてくれ。肉体を殺すだけでなく、魂と心をも揺るがすこの魔女を殺せ！」

シンフロニオスはこの奇跡を目の当たりにして困惑した。　彼は聖女を釈放しようとしたが、祭司たちからの反発や、さらには祖国からの追放さえも恐れて、民衆の動揺を鎮めるためにアスパーシアという名の代理人を残し、自身は、息子の復活後も聖なる乙女を解放できなかったことを嘆きながらその場を去った。　アスパージアは権力を掌握すると、街の中心に火を焚き、聖アグニアをそこに投げ込んで焼き殺すよう命じた。聖女が火の中に投げ込まれると、たちまち炎は二つに分かれ、彼女の周囲に広々とした涼しい空間を作った。それとは対照的に、炎は周囲に立っている者たちに向かって燃え広がり、彼らを焦がした。　一方、民衆は、少女が焼けずにいるのを見て、これを神の全能の御業ではなく、魔術の力によるものと見なし、それについて議論しながら動揺し、冒涜的な声を上げて天を仰いだ。その間、聖なる殉教者は炎の中に立ち、両手を天に掲げて、こう祈った。

「全能なる御方よ、万人に告白され、賛美される、我らの主イエス・キリストの父よ、あなたに栄光あれ。あなたはその御子を通して、私を不義な者たちの手から救い出し、私の魂を汚れから守り、私の体を清く保ってくださったのです！」　今や、聖霊による天の露が私のために火を冷やし、炎は分かれ、火のすべての力は、私を焼き尽くそうとする者たちへと向けられています。尊く賛美される神よ、炎の中にあっても、あなたへと至る恐れのない道を私に与えてくださったことを感謝いたします。　私はすでに、自分が信じていたことが成就したのを見ています。私が望んでいたものを得て、願っていたものを手に入れました。　私は口と心をもってあなたを告白します。私はすべての感覚をもってあなたへと駆け寄り、今、生けるまことの神であるあなたのもとへ、私たちの主イエス・キリストと、世々限りなく生きて支配される聖霊と共に歩み寄ります。アーメン。

この祈りが聖女によって唱えられ、焚き火の炎が完全に消え去ったとき、アスパジウスは民衆の騒動が続くことを恐れ、聖女の喉元に剣を突き立てるよう命じた。こうして、キリストの殉教者アグニアは、自らの血に染まりながら、不死の花婿のもとへと旅立った。[1347]。聖アグニアの両親は、娘の尊い遺体を喜びをもって迎え、街からほど近い、ヌメンタナと呼ばれる道沿いの自分たちの畑に葬った。ここでは、多くの信者たちが祈りのために集まっていたが、特に夜間は、異教徒たちを恐れてのことだった。異教徒たちは、その場所や道中で待ち伏せし、信者たちに多くの迫害を加えていたからである。　ある時、彼らは不意を突いて襲いかかり、投げつけた石で多くの人々を負傷させ、全員を追い散らした。残ったのは、聖アグニアと同年代のエメレンティアナという名の一人の少女だけだった。彼女は勇気を奮い起こし、強盗たちを非難してこう言った。

「なぜ、あなたたち冷酷な者たちは、罪のない人々を石で打ち殺すのですか？　唯一の神を賛美し、祈りによってあなたたちのために多くの恵みを請い求めている者たちに、いったいどのような罪を見出したというのですか？」

[1347] 聖殉教者アグニアは304年に殉教した。

異教徒たちは激怒し、彼女を石で打ち殺した。こうして彼女は、聖アグニーの棺の前で祈りを捧げながら、主のもとへ魂を捧げた。すると直ちに、激しい地震、稲妻、そして恐ろしい雷鳴が起こり、殺人者たちの大部分は天からの裁きを受けて倒れ、息絶えた。　それ以来、異教徒たちは、キリストの殉教者の墓へ向かう信者たちを迫害することをもはや敢えてしなくなった。　一方、聖アグニエの両親は、夜になって長老たちと共にやって来て、血に染まった聖エメレンティアナの尊い遺体を清め、聖アグニエの近くに埋葬した。そして、彼らは愛する娘の墓のそばに絶えず留まり、夜通し目を覚まして泣き続けた。　ある夜、彼らは自分たちのそばを通り過ぎる乙女たちの姿を見た。彼女たちは明るい金糸の織物で飾られ、天の栄光に輝いていた。その中に、彼らもまた、娘である聖アグニアの姿を見出した。彼女は他の乙女たちと同様に輝き、右側には雪よりも白い子羊が寄り添っていた。彼女は仲間の乙女たちに立ち止まって少し待ってくれるよう呼びかけ、両親にこう言った。

「私を死んだ者のように泣かないでください。むしろ、私と共に喜び、祝ってください。私はこれらの乙女たちと共に、光り輝く住処へと移り住み、今や天において、地上で心を尽くして愛した御方と結ばれたのですから。」

そう言うと、彼女は姿を消した。

それから何年も経って、コンスタンティヌス大帝が王位についた。彼の娘コンスタンティアは重病にかかった。彼女の全身は膿んだかさぶたに覆われ、頭から足先まで、健康な箇所は一つもなかった。　医師たちは彼女を助ける術がありませんでした。ある良き助言に従い、彼女は夜、聖殉教者アグニアの棺のもとへ赴き、そこで確固たる信仰と涙をもって祈りを捧げた後、眠りにつきました。そして夢の中で聖アグニアが現れ、彼女にこう告げました。

「勇気を出しなさい、コンスタンティア。神の御子である主イエス・キリストを信じなさい。その御方への信仰によって、今、あなたは傷から癒やされているのです。」

目を覚ますと、コンスタンティアはまるで一度も病気になったことがなかったかのように、すっかり健康を取り戻していた。家に戻ると、彼女は父と兄弟たちに、聖アグニアによってどのように癒やされたかを語った。王宮には大きな喜びが満ち溢れ、街全体もこの偉大な奇跡を称えて神を賛美し、喜びに沸いた。　多くの人々が聖殉教者の墓を訪れるようになり、様々な癒やしを受けた。その後、コンスタンティア王女は父に懇願し、聖殉教者アグニアの埋葬地に、彼女の名を冠した教会を建てるよう求めた。そこで住居を構えた彼女は、他の多くの高貴で名門の乙女たちと共に、生涯を処女として過ごし、その生涯を終えた。　こうして、キリストの乙女であり花嫁である聖アグニアの教会に、彼女を称え讃えるため、また、父と聖霊と共に永遠に賛美される私たちの神、キリストの栄光のために、女子修道院が設立された。アーメン。

聖殉教者ヴァレリアヌス、カンディダ、エウゲニウス、アキラの記念日

記念日：1月21日

これらの聖なる栄光ある殉教者たちは、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、総督リシウスによって迫害を受けた。　まず、ヴァレリアヌス、カンディダス、アキラはトラブゾン山岳地帯で捕らえられた。激しい迫害が始まると、彼らは家や全財産、そしてこの世の虚しいすべてを捨て、山々を放浪し、神に背く偶像崇拝者たちと共に生きるよりは、むしろ獣たちと共に生きることを選んだのである。　捕らえられた三人の殉教者は、まず不信心者たちによってラシウス地方のピナという小さな町へ送られ、現地の牢獄で過酷な監禁生活を送らされた。その後、しばらくしてトラペズントへ連行され（[1348]）、総督リシウスの前に引き出された。聖人たちは、キリストの信仰について尋問され、偶像への生贄を捧げるよう強要されたが、これに服従しなかった。そこで、彼らはまず

[1348] トラペズントは、小アジアの要衝であるポンテ地方の東部、海辺に位置する都市である。

裸の体に皮紐で打ちつけられ、その後、吊るされ、鉄の爪で削られ、その間、燃えるろうそくで焼かれた。　聖なる殉教者たちは、苦しみの中にも彼らの中に目に見えぬ形で宿っていた神の力によって支えられていた。その力が突如として　拷問者たちを恐怖に陥れ、彼らはまるで死人のように地面に倒れ伏した。これを見たリシウスは戦慄し、殉教者たちを牢獄へ連行するよう命じた。　数日後、聖エウゲニオスも捕らえられ、イエス・キリストの御名を告白したために残酷な拷問を受けた。その後、総督が偶像の神殿へ向かうと、殉教者エウゲニオスも彼の後ろに連行された。神殿に入ると、聖人は神に祈りを捧げた。するとたちまち、偶像は倒れ、塵と化して散り散りになった。　そこで、拷問者の命令により、その手下たちは聖人の手足を縄で縛り、地面に引きずり倒して、長い間太い棒で打ち続けた。その後、聖人を裸のまま吊るし、鉄の爪で体を引っかき、蝋燭で焼灼し、傷口には塩を混ぜた濃い酢を注いだ。　その後、四人の聖なる殉教者たちは全員、火の炉に投げ込まれたが、彼らは何の傷も負わずにそこから出てきたため、剣で斬り殺された[1349]。こうして、これらの聖人たちの苦難は終わりを告げた。

2月4日

1月22日（旧暦）

同日は、12世紀末に亡くなり、聖アントニオの洞窟に眠る、ペチェルスクの助祭である聖殉教者アナスタシウスの記念日である。

聖使徒ティモテオの生涯

記念日：1月22日

聖使徒ティモテオはリカオニア地方[1350]の出身であり、その養育と教育は、有名な都市リストラ[1351]で受けた。この都市は、地上の果実の豊かさというよりは、むしろ神によって植えられた実り豊かな枝によって名声を博していた。　しかし、この若き若木は、必ずしも健全な根から生えたわけではなかった。香りのよい薔薇が茨の中から育つように、聖ティモセオもまた、異教的な不敬虔さで知られ、悪徳に深く沈んでいた不信のギリシア人の子孫であった。その息子である聖ティモセオは、後にその父とは対照的に、美徳と高潔な道徳心においてすべての人々を凌駕することとなったのである。　一方、聖ティモテイの母と祖母はユダヤ人の血を引いており、二人とも聖なる義人であり、善行に彩られていた。このことについては、聖使徒パウロが次の言葉で証言している。　*「あなたの涙を思い起こし、あなたに会いたいと願っている。それは、かつてあなたの祖母ロイデと母エウニケの中にあった、偽りのない信仰を思い出し、喜びに満たされるためである。その信仰があなたの中にもあると確信している」*（IIテモテ 1:4, 5）。

まだ少年であった頃、福者ティモテイは、母から肉体的な糧というよりはむしろ主の御言葉によって養われ、異教やユダヤ教の迷いをあらゆる手段で避け、やがて聖使徒パウロ――この神の御声を伝える教会のラッパ――のもとへと帰依した。その経緯は次の通りである。　聖使徒パウロは、キリストの弟子であり使徒であるバルナバと共にリストラを訪れた。このことについて、神聖なるルカは『使徒言行録』の中で次のように語っている。　*「彼らは、リカオニアの町リストラとデルベ、およ*

[1349] 4世紀初頭。

[1350] リカオニア――小アジア南東部の地域。キリスト教はここで聖使徒パウロによって広められた。

[1351] リストルは、リカオニアのイサウリアとの国境にある都市である。現在、リストルの跡地にはラティックまたはラディクという集落がある。

びその周辺へと向かった」（使徒言行録14:6）。　そこに到着すると、聖使徒パウロは偉大な奇跡を行った。母の胎内から足の不自由な者を、たった一言で癒やしたのである。これを見た町の住民たちは大いに驚き、*「人間の姿をした神々が私たちのもとに降りてきた」*と言った。　しかし、彼らが、これらが神々ではなく人間であり、生ける神の使徒であり宣教者と呼ばれ、しかも偽りの神々の敵であり、まさに人々を悪魔の迷いから、足の不自由な者を癒やすだけでなく、死者をもよみがえらせることのできる真の神へと立ち返らせるために遣わされた者たちであることを知ると、　そこで、多くの人々が自らの迷いから立ち返り、敬虔な生活へと向かった（使徒行伝14:8–18）。その中には、夫の死後、未亡人となっていた、この祝福された使徒テモテの母もいた。　彼女は喜びをもって聖使徒パウロを自宅に迎え入れ、彼の生活費や身の回りの世話をし、ついには、その町で成し遂げられた奇跡と、彼から授かった真の信仰の光への感謝の印として、息子である聖ティモテオ（　）を彼の教えに委ねた。　聖ティモシーはまだ非常に若かったが、神の言葉の種を受け入れるのに極めて適しており、その準備も整っていた。聖パウロはこの若者を迎え入れ、彼の中に柔和さと善への傾きを見出しただけでなく、神の恵みをも見抜いた。その結果、彼は肉親である両親[1352]　よりもさらに深く彼を愛するようになった。　しかし、聖テモテはまだ非常に若く、旅の苦労に耐えられなかったため、聖使徒パウロは彼を母の家に残し、神の御言葉について彼を教える熟練した教師たちを付けました。これについては、パウロ自身がテモテへの手紙の中で次のように回想しています：　*「あなたは幼い頃から聖書を知っている」*（IIテモテ3:15）。一方、使徒パウロ自身は、ユダヤ人たちの扇動により民衆から石を投げつけられ、町の外へ引きずり出された後、他の町へと向かった。

数年後、聖使徒パウロはアンティオキアを出て、かつて神の御言葉を宣べ伝えたすべての都市の兄弟たちを訪ねたいと考え、シルワノを伴って、聖テモテが住んでいたリストラ[1353]　へと向かった。　ティモセオが成人し、あらゆる徳において優れた成果を上げており、さらにその地のすべてのキリスト教徒から高い尊敬を集めているのを見て、使徒パウロは彼を使徒としての奉仕に迎え入れ、あらゆる働きにおいて常に共に歩む仲間とし、主のための共同奉仕者とした。　さて、パウロが町を出ようとした際、その地や周辺地域に多数住んでいた一部のユダヤ人たちのために、モーセの律法に従ってテモテに割礼を施した（使徒行伝16:3）。　――それは救いのために必要だったからではなく、新しい恵みは割礼の代わりに聖なる洗礼によって与えられるからである。むしろ、彼らが異邦人の出身であることを皆が知っていたため、ユダヤ人たちが彼について惑わされないようにするためであった。　リストラを後にした聖使徒パウロは、町や村々を巡り、神の御国について教え、福音を宣べ伝え、すべての人を敬虔の光で照らした。　第三の天から輝きを放つ太陽の後の星のように、神聖なるテモテ[1354]　が彼の後を追い、キリストの福音の教えである敬虔の揺るぎない光を受け入れ、高潔な行いと徳ある生き方を学んでいった。これについては、聖使徒パウロ自身も次のように証言している。

1352　これは、使徒パウロがどこでも彼を「自分の息子」と呼んでいることからも明らかである（Iコリント4:17；Iテモテ1:2, 18；IIテモテ1:2, 2:1）。また、このことから、使徒テモテがキリスト教に改宗したのは、使徒パウロのおかげであることがはっきりとわかる。

1353 これは、聖パウロ使徒の第二回伝道旅行の際の出来事であった。

1354　リストラ以降、聖ティモテオは使徒パウロのその後のすべての旅に同行し、そのすべての指示を熱心に遂行した。彼は、リストラからトロア、そしてそこからマケドニアの諸都市を経てギリシャのアテネやコリントに至る第二の旅に同行した。　使徒パウロの第三回伝道旅行では、ティモテオはエフェソで彼に同行した。使徒はそこで長い間滞在し、そこからティモテオをマケドニアへ送り、献金を集めさせ、その後コリントへ送った。使徒はコリントに三年間滞在し、　ティモテオはマケドニアとギリシャでも使徒に同行し、帰路のトロアスやアジアへの道中も彼に付き添った。その後、聖使徒ティモテオはローマで使徒パウロと共に過ごし、彼と共に投獄されたが、後に釈放された。　その後、彼は再び使徒パウロに同行し、小アジアおよびマケドニアの教会を訪問する旅に出た。この時、彼はエフェソス教会の司教に叙階され、こうしてエフェソス教会の初代司教となった。　使徒ティモテオと離れていた間、聖使徒パウロは彼に牧会的な内容の二通の手紙を書いた。

「あなたは、教え、生活、態度、信仰、寛大さ、愛、忍耐、迫害、苦難において、私に従った」（IIテモテ3:10,11）。

こうして聖ティモテオは、選ばれた器である使徒パウロからあらゆる美徳を汲み取り、キリストのために、彼から使徒としての貧しさを受け入れた。 金も銀も、その他のいかなる物質的な富も一切手に入れず、彼は場所から場所へと移りながら、神の御国の福音を宣べ伝えました。 彼は、悪に対して善で報いるという習慣を身につけました。叱責されても祝福し、迫害されても耐え忍び、侮辱されても心の中で喜び、あらゆる面で神の僕としての姿を現し、師に真に倣う者となりました。聖使徒パウロは、自分の弟子がこれほどまでに徳において優れた成長を見せているのを見て、彼をまず助祭に、次に長老に、そしてついに司教に任命した[1355] 。彼はまだ若かったにもかかわらずである。 使徒たちの手置きによってキリストの秘跡の奉仕者となった聖ティモシーは、キリストの教えを宣教する中で、他の使徒たちに劣ることなく、使徒たちの苦難と労苦を最も熱心に模範として歩みました。 若さも、体の弱さも、彼が自ら引き受けた偉業を遂行する上で、決して妨げとなることはなかった。 そのすべての な活動において、彼は精神の偉大さを示しており、そのことは彼の師である聖使徒パウロがコリントの信徒への第一の手紙で次のように証言している。*「もしティモテオがあなたがたのところに来たら、彼があなたがたのもとで安全に過ごせるように配慮しなさい。彼は、私と同じように、主の御業を行っているからである。それゆえ、だれも彼を軽んじてはならない」*（Iコリント16:10–11）。その少し前の箇所で、聖使徒パウロは彼を称賛して次のように記しています。*「私は、主において愛し、忠実な私の息子であるテモテをあなたがたのところへ遣わしました。彼は、キリストにおける私の歩みをあなたがたに思い起こさせてくれるでしょう」*（Iコリント4:17）。 同様に、他の書簡においても、彼は聖ティモテオを自分の兄弟と呼び、次のように述べています。「*イエス・キリストの囚人であるパウロと、兄弟ティモテオ」*（フィレモン1:1）、*「神の御心によりイエス・キリストの使徒であるパウロと、兄弟ティモテオ」*（IIコリント1:1）、*「神の御心によりイエス・キリストの使者であるパウロと、兄弟ティモテオ」*（コロサイ1:1）と記しています。 さらに彼はこう記している。*「私たちは、私たちの兄弟であり、神のしもべであり、キリストの福音を宣べ伝える私たちの協力者であるテモテを遣わしました。それは、あなたがたを堅く立て、あなたがたの信仰を励ますためです」*（Iテサロニケ3:2）。聖テモテを称えるこれらの証言や、その他多くの証言が、使徒パウロの手紙に見られる。 しかし、聖ティモテオはこれを誇りとはせず、謙遜に生き、罪から身を厳しく慎み、絶え間ない労苦と断食によって自らを酷使したため、彼の師でさえ、その功績と断食の様子を見て、彼を深く憐れんだ。 師は聖ティモセオに対し、水だけを飲むのではなく、胃の健康と頻繁な病気を考慮して（Iテモテ5:23）、少量のワインを摂るよう説得した。彼の体は常に病に苛まれていたが、その一方で、魂の清らかさは損なわれることなく、いかなる傷つきからも自由であった。 聖ティモシーは師と共に世界の隅々まで巡り歩いた。エフェソ、コリント、マケドニア、イタリア、そしてスペインと、彼らは神の言葉を宣べ伝えた。それゆえ、彼らについて*「彼らの声は全地に響き渡り、その言葉は宇宙の果てにまで届く」*（詩編18:5）と評されるにふさわしい存在であった。また、聖ティモシーは議論において洞察力に富み、返答も機敏であり、神の言葉を説く際には巧みな演説家、聖書の解説においては魅力的な解釈者、教会の運営や信仰の真理の擁護においては最もふさわしい牧者であった。 とりわけ注目すべきは、彼が豊かな恵みを受けたことであり、それは彼の教えが二つの源から汲み取られたからである。すなわち、彼は聖パウロを師としただけでなく、

[1355] 使徒の言葉を借りれば、聖ティモテオの牧会奉仕への叙任に先立ち、彼に関する預言があった（Iテモテ1:18） その叙任自体は、事前の信仰告白（Iテモテ6:12）に基づいて行われ、聖職の手置きの儀式が執り行われた。その際、彼は召された職務を立派に果たすために、神の特別な恵みの賜物を授けられた（Iテモテ4:12–16）。

キリストの愛する弟子である聖ヨハネからも教えを受けたのである[1356]。さて、聖ヨハネがローマ皇帝ドミティアヌスによって[1357]、パトモス島[1358]へ追放された際、ティモテオは彼の代わりにエフェソスの司教を務め、そこではほどなくして、イエス・キリストに関する証しのために次のように殉教した。

ある日、エフェソスでは「カタゴギウム」と呼ばれる特に盛大な祭りが行われていた。その際、偶像崇拝者たちは、男女を問わず、様々な奇妙な生き物の仮装を身に着け、偶像や棍棒を手に取り、恥知らずな踊りを踊りながら街の通りを練り歩いた。　その際、彼らは不協和音で歌を歌い、まるで強盗のように向かい来る人々に襲いかかり、多くの人を殺害さえした。彼らは他にも多くの卑劣な悪行を働き、それによって自分たちの忌まわしい神々への崇拝を表そうとしていた。これを見た　祝福されたティモテイは、神聖な熱意の炎に燃え上がり、この神に背く光景の現場に現れて、唯一の真の神、我らの主イエス・キリストを公然と勇敢に宣べ伝えた。そして、彼らの神々に関する誤りと自己欺瞞を明確に指摘し、彼らを説得するために有益な多くのことを率直に語った。　一方、異教の迷いの闇の中をさまよっていた彼らは、使徒の言葉を理解も悟りもせず、一斉に彼に襲いかかり、手にした棒で激しく殴打し、容赦なく非人道的に地面を引きずり回し、足で踏みつけ、ついには　彼を拷問の末に死に至らしめた[1359]。その後駆けつけたキリスト教徒たちは、かろうじて息をしている彼を発見した。彼らは彼を城外へ運び出し、彼が息を引き取った後、ギリシャ語で「ピオン」、すなわち「肥沃な」と呼ばれる場所に彼を埋葬した。　それから長い時が経ち、聖使徒ティモテオの尊い聖遺骨は、コンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス王の命により、　エフェソスの聖殉教者アルテミオス[1360]によってコンスタンティノープルへ移され、聖使徒ルカおよび第一使徒アンドレイの聖遺骨と共に、聖使徒教会に安置された。　これは神の御心にかなうことでした。なぜなら、彼らの生涯において、性格、教え、そして福音の宣教のすべてが共通していたからです。それゆえ、死後も共通の墓に葬られることは彼らにふさわしいことであり、とりわけ、天における彼らの安息も、父と聖霊と共に永遠に君臨される、我らの主イエス・キリストの御国において共通のものだからです。アーメン。

トロパリオ、第4調:

慈愛を学び、あらゆる事において節制を保ち、良き良心をもって聖なる装いをまとい、選ばれた器から言い表せない恵みを汲み取り、信仰を守り抜き、等しい歩みを全うした、使徒ティモテオよ、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈り求めてください。

[1356] 西暦60年代、聖使徒ヨハネは、聖母マリアの被昇天まで滞在していたエルサレムを離れ、小アジア、とりわけエフェソで神の言葉を宣べ伝え、それによって使徒テモテの牧会奉仕を直接指導することができた。

[1357] キリスト教を激しく迫害したローマ皇帝ドミティアヌスは、81年から96年まで在位した。

[1358] それは96年のことでした。パトモス島は、エフェソスの南西に位置するエーゲ海（群島）の、不毛で岩だらけの島であり、いわゆるスポラデス諸島に数えられています。

[1359] 聖使徒ティモテオは、97年頃に殉教した。

[1360] 聖大殉教者アルテミオスの記念日は、教会において10月20日に祝われる。使徒たち――福音記者ルカ、初召されたアンデレ、ティモテオ――の聖遺骨の移送は、356年6月24日に行われた。

コンダク、第1調:

神の弟子であり、パウロの同行者であるティモテオを、我ら皆、忠実に讃えよう。彼と共に、ペルシアから星のように輝き、我らの魂の情欲と肉体の病を追い払う、賢きアナスタシオスを崇めよう。

聖なる殉教者アナスタシオス・ペルシャニンの生涯と受難。

1月22日の記念日

聖都エルサレムがペルシャ王ホズロイによって陥落させられた時[1361] 、そして、私たちの主キリストの自発的な受難、磔刑、死、埋葬、そして復活によって刻まれた聖地が、不敬虔な野蛮人たちに占領されたとき、 ——主の命を与える十字架の木さえも捕らえられ、豊富な戦利品と共に[1362] ペルシアへ運び去られたとき、そのペルシアにおいて、キリストの御名の栄光は、命を与える十字架の木から発せられる奇跡によって、太陽のように輝き始めたのである。　それ自体が捕らわれの身でありながら、人々の魂を神へと引き寄せ、まるで釣り針のように人々を捕らえてキリストへと導き、真理の知識によって啓発し、神聖な愛によって心を燃え上がらせた。その時、これから私たちが語る聖なる殉教者アナスタシウスもまた、キリストを知る道へと向かった。

彼は、ラジーと呼ばれる地方にあるラスヌニという村出身のペルシャ人であった。異教徒だった頃の彼の本来のペルシャ名はマグンダトであった。彼は、ヴァヴァという名の魔術師の息子であり、その父は自国で非常に名高い魔術の師として知られ、息子がまだ幼い頃から彼にその術を完璧に教え込んでいた。　マグンダットが青年期に達すると、彼は他の多くの若者たちと共に軍務に就き、首都に留まってペルシャ王ホズローに仕えた。　ペルシア全土を驚嘆させ、並外れた奇跡によって人々を畏怖させた「十字架の木」の栄光と威光について耳にしたマグンダットは、皆が「キリスト教の神がペルシアに来られた」と口々に言うほどであったため、そのことについて熱心に尋ね始めた。　すると突然、彼の魂は、キリストが*「地上に下す」*ために来られたあの炎（ルカ12:49）によって、密かに燃え上がった。この美しい若者は、これほど偉大な奇跡の力を持つその木が一体何なのかを確実に知りたくて、疲れを知らずに多くの人々に問いかけ続けた。　信者たちが、それがまさに、人類の救いのために　が磔にされたあの十字架であり、キリスト、すなわち神の子であり、キリスト教徒によって告白され崇められている方であると彼に説明すると、彼の中には、神の子について最も完全な知識を得たいという内なる渇望が、さらに強く燃え上がった。　彼は次々と質問を投げかけ、その答えの中にさらなる探究のきっかけを見出し、神がどのようにして天から降りてこられたのか、どのようにして人間となられたのか、なぜ、そして誰によって十字架の死に処せられたのか、そしていつ、どこから降りてこられた天へと再び昇天されたのかを知りたいという熱意に燃えていた。　彼は、キリスト教徒たちから語られるキリストの受肉という神聖な神秘に耳を傾け、その耳は愛をもって敬虔の種を受け入れ、その魂は次第に信仰の種を育み、キリストに倣おうとする意欲に駆られていった。マグンダットには血縁の親戚がおり、二人はともに、名高い将軍サインの部隊に所属していた。サインがペルシャ王の命により軍を率いてギリシャ地方への遠征に派遣され、名高いキリスト教都市ハルキドン[1363] に到達したとき、その親戚と同じ部隊に所属していたマグンダットもそこへやって来た。

[1361] ペルシャ王ホズロ2世は、590年から628年まで在位した。

[1362] それは614年のことでした。主の十字架の聖遺物は、628年まで14年間ペルシア人の手にありました。その年、ビザンツ帝国の皇帝ヘラクレイオスがペルシアとの戦いに勝利した後、それをエルサレムに返還しました。

[1363] ハルキドンは小アジアにある都市で、ボスポラス海峡のアジア側岸、コンスタンティノープルの対岸に位置する。451年には、ここで第4回全地公会議が開催された。

敬虔なギリシャ王ヘラクレイオス[1364] がペルシア軍に立ち向かった。そこで、ペルシアの軍司令官サインは、自身の連隊を率いて急いで引き返した。一方、マグンダットは連隊と親族を置き去りにし、神を知らない者たちに囲まれた故郷で富と名誉に浴するよりも、キリスト教徒たちと共に貧しく無名の生活を送ることを選んだ。 彼はまずイェラポール[1365] へと向かった。そこで、ペルシャ出身で、信仰はキリスト教徒、職業は金細工師である一人の男に出会った。その男の家に身を寄せ、マグンダットは金細工の技術を学んだ。　彼の手は仕事に励んでいたが、その心は常にキリスト・神に向けられており、神への愛に燃えていた。彼は師に、聖なる洗礼を受ける準備をさせてほしいと懇願したが、その願いは叶わなかった。ペルシャとの戦争が懸念されていたため、聖なる洗礼は不確定な時期まで延期されていたからである。　その間、師と共に祈りのために教会へ頻繁に足を運ぶ中で、彼は教会の壁に描かれた、聖なる殉教者たちの受難や奇跡を描いた絵を目にした。彼は師に、これが何を意味するのかと尋ねた。　師は聖人たちの偉業と生涯について語ってくれた。彼らがキリストのためにいかに勇敢に死を受け入れ、熱意をもってキリストのために自らの魂を捧げたか、キリストのために拷問者たちからどのような苦難に耐え、天においてキリストからどのような報いを受けたか、といったことである。　これらすべてを注意深く聞きながら、マグンダットは驚き、畏怖の念を抱き、その心は神への熱意によってさらに燃え上がった。イェラポールにしばらく滞在した後、彼は聖なる洗礼を受けるためにエルサレムへと向かった。

聖都エルサレムに到着したマグンダット――後にアナスタシオと名付けられた――は、キリストを愛するある男性、同じく金細工師の家に身を寄せた。彼はその男性に、聖なる洗礼を通じてキリストと結ばれたいという心の願いを打ち明けた。　その男は彼を、キリストの復活の大聖堂の司祭である聖イリヤのもとへ連れて行った。　至福のイリヤは、彼を愛をもって迎え入れ、至聖なるモデスト総主教にそのことを報告し、総主教の祝福を受けて、ペルシャ人マグンダトに洗礼を授け、聖なる洗礼において彼をアナスタシウスと名付けた。その後、八日間彼を自分のもとに留めた。　聖イリヤは彼に、世俗の生活と修道生活、どちらの生き方を選びたいのかと尋ねた。至福のアナスタシオスは、言葉だけでなく、その柔和な人柄によっても、修道者の身分と生活を望んでいることを示した。八日が過ぎ、洗礼の際に身にまとっていた白い衣を脱ぐと、長老は彼をエルサレムの修道院の一つへ送り出した。それはイラクリウス帝の治世10年のことだった。そこで彼は、賢明で徳の高いある長老の指導下に置かれ、その長老はまもなくその修道院の院長となった。　聖アナスタシウスはその長老のもとで、ギリシャ語だけでなく、詩篇やその他の聖書の理解も学び、また修道生活にふさわしい多くの修行について指導を受けた。　それゆえ、彼は皆から愛され、とりわけ師匠から深く愛された。師匠は、彼の修道生活における初期の歩みを踏まえ、今後の成長を見据えて、彼を修道士として剃髪させ、自らの霊的な息子としたのである。

福者アナスタシオスは、徳高く、謙虚で、柔和かつ勤勉な修道士であった。彼は、厨房、パン屋、菜園での作業をはじめ、その他の奉仕の務めも進んでこなした。その一方で、教会の礼拝や規則の朗読を決して怠ることはなかった。　彼の手は常に仕事に忙しく、口は神を賛美することに費やされていた。さらに、彼は聖書や聖なる教父たちの伝記、とりわけ聖なる殉教者たちの受難の物語を読んでいた。それらを読みながら、彼は本に涙をこぼし、心を燃やし、　彼らの忍耐に内なる共感を示していた。　彼自身も、あたかも彼らと共に苦しんでいるかのように、内面では彼らの熱意を模範とし、彼らの最期を称え、その勇気に感嘆し、主キリストに熱心に祈り、御自身のために同様の苦難に耐え、同じように死んで殉教者たちの列に加わることを許してくださるよう願った。　一方、人間の魂の敵は、彼が徳に堅く立っていることに憤り、ペルシアでの彼の過去の生活、彼が捨てた富や名声、父から受け継いだ魔術の術、　軍人としての栄誉、その他の一時的な虚栄を思い出させ始めた。そ

[1364] ビザンツ皇帝ヘラクレイオスは、610年から641年まで在位した。

[1365] イェラポリスは、小アジア西部のフリギア地方にある豊かな都市である。

れによって彼の心の平安を乱し、修道院や聖なる父たちとの共同生活から彼を引き離そうとしたのである。　しかし、聖アナスタシウスが敵に対して確固たる支えとしていた神の助け、そして、自身のすべての思いを打ち明けていた師であり霊的父である人物の祈りと指導により、彼は敵のあらゆる誘惑に対しても、打ち負かされることなく、揺るぎない姿勢を保ち続けた。

聖アナスタシウスが修道院で七年間を過ごし、徳という豊かな霊的宝を蓄えた後、主は次のような幻視を通じて、彼を殉教の冠へと召された。　キリストの復活という輝かしい祝祭が目前に迫った大土曜日の夕方、彼は日中の労苦の後に少し休もうと横になり、眠りにつくと、自分が高い山の上に立っているのを見た。そこへ、宝石で飾られ、ワインで満たされた金の杯を手にした、ある光に満ちた男が近づいてきた。　その男は杯を彼に手渡しながら、「これを受け取り、飲みなさい」と言った。彼はそれを受け取り、飲み干した。　彼の魂はたちまち言葉に尽くせない喜びで満たされ、まだ眠りの中にあっても、これが主が彼を招いておられる、彼が切望していた殉教の死のしるしであることを悟った。[1366] 。目を覚ますと、彼は喜びと歓喜に満ち溢れ、キリストの復活の礼拝が始まる前に急いで教会へと向かった。　そこで、聖具室で、すでに修道院長となっていた自分の霊的父であり指導者を脇に呼び寄せ、その足元にひれ伏し、涙でその足を濡らしながら、この世を去る日がすでに近づいているため、万物の主であるキリストに自分のために祈ってくださるよう懇願した。彼はこう語った。

「聖なる父よ、あなたが私のためにどれほどの労苦を背負ってくださったか、また私がどれほど頻繁に、私に対するあなたの父のような慈愛を濫用してきたか、私は知っています。あなたのおかげで、私の目は真の光を見出し、あなたを通して私は重苦しい闇から解放されました。どうか、あなたの僕である私のために、至福の主へのお祈りを絶やさないでください。」

霊的指導者は彼にこう言った。

「どうしたのだ、わが子よ？　この数日中に、あなたが私たちのもとを離れてあの世へ旅立つことを、どうして知ったのか？」

アナスタシウスは、夢の中で見た幻について深い感動を込めて語り、近い内に必ず死ぬこと――それは誰もが迎える死であれ、あるいは他の何らかの形であれ――を強く主張した。　しかし、キリストのために殉教の死を望んでいることについては、長老にそれを禁じられ、それによってキリストへの熱意の炎が消え、殉教者の冠を失うことを恐れて、口にするのをためらっていた。　霊的指導者は、優しい言葉で長い間彼を慰めた。その日が来ると、聖アナスタシオスは聖体礼儀の最中に聖体を受け、兄弟たちと共に共同の食事に与った。翌晩、彼は夕方から少し眠っただけで、殉教への言葉に尽くせない内なる渇望が眠りを妨げたため、急いで起き上がった。　誰にも知られぬよう起き上がると、身に着けていた修道服以外は何も持たずに、修道院を後にした。

修道院を出た後、聖アナスタシオスはまずパレスチナのディオスポリス[1367] へ向かい、そこからハリジムと呼ばれる山へ登って祈りを捧げた。　他にも多くの素晴らしい場所を通り過ぎ、彼はパレスチナのケサリア[1368] に到着し、そこで聖母マリアの教会に二日間滞在した。その後、彼は同じケサリアにある、聖なる、万人に称えられる大殉教者エウフィミアの教会へ参拝に向かった。当時、パレスチナはペルシャ人の支配下にあり、そこには多くのペルシャ人がいた。　ある時、聖人はあるペ

[1366] 「杯」という言葉は、聖書の言語においても、また古代キリスト教徒の考えにおいても、神によって誰かに与えられた苦難や試練を視覚的に表現するために用いられる。このことから、聖アナスタシウスは、夢の中で見た杯を、まもなく自ら飲み干さなければならない苦難と痛ましい死の杯の前兆として受け止めた。

[1367] ディオスポルは、エルサレムの北西に位置するパレスチナの都市である。

[1368] ケサリア――地中海東岸に位置するパレスチナの都市で、ユダヤ王ヘロデによって古代都市ストラトンの跡地に建設され、カエサル・アウグストゥス（ローマ皇帝オクタヴィウス・アウグストゥス）にちなんで名付けられた。　この都市は度重なる破壊に見舞われ、現在その跡地には、雑草に覆われた廃墟が残るのみである。

ルシャ人の家の前を通りかかった際、ペルシャ人たちが演じている魔術の芸を目撃した。神への熱意に駆られて、彼は彼らのところへ歩み寄り、怒りを込めてこう言った。

「なぜ、あなたたちは自ら迷い、他人を欺いて、その魂をも同じ迷いへと引きずり込むのか？」彼らはその大胆さに驚き、こう尋ねた。

「お前は一体何者だ。よくも我々にそんなことを言うな。」

彼は彼らにこう答えた。

「私もかつて、あなたがたと同じ迷信に囚われていた。私もこの不敬虔な学問に精通し、欺瞞の術に極めて長けていたのだ。」

そう言いながら、聖人は長い間、彼らの不敬虔を糾弾し、彼らの魔術的な狡猾さと欺瞞が、いかに神に逆らい、人々にとって有害であるかを明らかにした。　彼は、自分がいかにして真理を知り、神に立ち返ったかを彼らに語り、彼らにも自分を手本として、同様に真理を知り、魔術を捨てて、悔い改めをもってキリストなる神に立ち返るよう説得した。　しかし、彼らは聖人の言葉に耳を傾けるどころか、ペルシャ人にとってこれほど栄光ある魔術の知識を非難したり、民衆の前で暴露したりしないよう、執拗に彼を説得した。そこで聖人は彼らを置き去りにして、称賛に値する殉教者の聖堂へと急いで向かった。　聖人が彼らから少し離れた途端、裁判所の門のそばに座っていたペルシャの兵士たちが彼に気づいた。聖人が彼らのそばを通り過ぎると、彼らはペルシャ語で互いに話し合いながら、彼についてこう言った。

「あれはスパイだ。」

聖人は、自身もペルシャ人であったため彼らの言葉をよく理解し、怒りを込めて彼らを見つめてこう言った。

「何をおっしゃるのですか？私はスパイなどではなく、私の主イエス・キリストの僕です。私はあなた方よりはるかに優れています。なぜなら、罪人のために天から降りてこられた御方に仕える栄誉に浴したからです。私はあなた方の言葉を理解しています。というのも、私自身もかつて、あなた方が今従事しているのと同じ軍務に就いていたからです。」

すると、兵士たちは彼を捕らえ、裁判所の中にいた指揮官に報告した。指揮官は、彼が誰でどこから来たのかを尋問した後、彼を厳重に監視して牢獄に収容するよう命じた。投獄された聖人は、三日間、食べ物も飲み物も一切口にしなかった。　彼は不信心者たちの手から何も受け取ろうとはせず、キリストのために長年望んでいた苦難を待ち望むことだけで生き延びていた。その頃、マルザヴァンという名のペルシャの王子がパレスチナのケサリアに到着した。彼はその敬虔な囚人のことを知ると、尋問のために彼を縛ったまま自分のプレトリアへ連れてくるよう命じた。　聖人が連れて来られた時、マルザヴァンは他の様々な用事に忙しく、尊いアナスタシオスは縛られたまま少し離れた場所に立っていた。そこには一人のキリスト教徒がいた。彼は、聖母マリアの教会で聖人を見たことがあったため、聖人を認めて近づき、なぜ捕らえられ、縛られ、裁判に連れて来られたのかと静かに尋ねた。

聖人は、自分の心の願い、すなわち、キリストのために苦難を受け、死を望んでいることを彼に語った。　これを聞いたキリスト教徒は、聖人の善意を称え、聖書の言葉で彼を慰め、私たちの主イエス・キリストの御名のために苦しみや死を恐れることなく、主が福音書で語られた次の言葉を心に留め、マルザヴァンの質問に断固として勇敢に答えるよう説得した。　*「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」*（マタイ10:22）。その後、聖アナスタシウスがマルザヴァンの前に引き出されて裁きを受けることになったとき、彼はマルザヴァンにひれ伏すことも、相応の敬意を払うこともなかった。一方、ペルシャ人には、その地位ゆえに君主の前でひざまずくという慣習があった。　しかし、聖人はそうせず、外見上の礼を拒み、恐れを知らぬ眼差しをもって、自らの内なる勇気と高潔な精神を明らかにした。マルザヴァンは彼をじっと見つめ、こう尋ねた。

「お前は誰だ？　どこから来た？　名は？」
聖人は勇敢に答えた。
「私はキリスト教徒だ。もし私の出自を知りたいのなら、私はペルシャ人で、ラザ地方のラスヌニという村の出身だ。かつては魔術師であり戦士だったが、闇を捨てて真の光へと至った。以前の名はマグンダトだったが、今はキリスト教の名でアナスタシオスと呼ばれている。」
マルザヴァンは彼に言った。
「その迷いを捨て、かつての信仰に戻れ。馬や金、その他多くの財産を授けてやろう。」
聖人は彼を見据えて言った。
「キリストよ、私があなたを否定することなど、決してあってはなりません！」
すると、マルザヴァンは尋ねた。
「今、君が身に着けているこの服は気に入っているか？」
聖人は答えた。
「この衣は、天使の衣であるゆえに、私にとってとりわけ心地よいものです。しかも、それはあなたにとっての位階よりも、私にとってはより尊いものです。」
マルザヴァンは怒りを露わにして言った。
「お前の体には悪魔が宿っている。お前は悪魔に教えられたことしか口にしていないのだ。」
聖人は答えた：
「私がペルシャの迷信と不敬虔に囚われていた頃、私の内には狂暴な悪魔が宿っていた。しかし今や、私の救い主であるキリストが私の内に住まわれており、その方があなたの悪魔たちを追い出しておられるのだ。」
これに対し、マルザヴァンは彼に尋ねた。
「一体どうしたのだ？　王が君のことを知れば、十字架にかけるよう命じるだろう。それを恐れないのか？」
「なぜ私が人間を恐れる必要があるのか」と聖人は答えた。「お前と同じように、朽ちゆく存在に過ぎないではないか。たとえ彼が私の肉体を殺したとしても、いかなる策略を用いても私の魂を捕らえることはできないのだ。」
そのような言葉を聞くに耐えられなかったマルザヴァンは、聖人に鉄の鎖――一つは首に、もう一つは足に――をはめさせ、石切り場へ連行し、他の囚人たちと共に絶えず石を運ばせるよう命じた。そこで、この至福の殉教者は、数え切れないほどの過酷な苦難に耐え抜いた。　彼の故郷であるラスヌニの村からケサリアに滞在していた者たち――かつて彼と面識があり、友人や隣人であったペルシャ人たちは、彼に降りかかった事態を目の当たりにして、彼を恥じ、その苦難を自分たちへの不名誉だと見なした。彼らは聖人を罵り、こう言った。
「お前は何をしたのだ？　なぜキリスト教徒になることで、かつての気高い出自を汚し、我々にこのような不名誉をもたらしたのか？　お前は鎖で縛られ、悪党のように死刑を宣告されている。我々の目には耐え難い光景だ。わが国からキリスト教徒になった者はかつて誰一人としていなかったのに、お前が我々にこのような侮辱をもたらしたのだ。」
このような非難の言葉を浴びせながら、不信心者たちはしばしば無実の聖人の体に手をかけ、容赦なく殴りつけ、髭を引っ張り、衣服を引き裂いた。それだけでなく、四人がかろうじて持ち上げられるほどの重い石を、聖人の肩と首に一人で背負わせた。　こうして、首と足に鎖で縛られ、重い石を背負わされたまま、神の御使いは労苦に耐えていた。聖人は、知人であるペルシャ人たちから常にあらゆる種類の迫害を受けていたが、イエス・キリストの御名のために、これらすべてを喜びをもって耐え忍んだ。
しばらくして、マルザヴァン公は再び聖人を自分の元へ連れてくるよう命じ、彼にこう尋ねた。

「もしお前が本当に魔術師の息子であり、魔術の術を知っているのなら、その分野について何か教えてくれ。そうすれば、我々もお前の能力を知ることができるだろう。」

聖人は答えた。

「神よ、私の口からそのような言葉が出ることのないよう、私をお守りください！私は、魔術の策略を思い出すことで自分の心を穢すことも、それについて語ることで自分の舌を穢すことも望みません。」

すると、王子は彼に言った。

「なぜキリスト教徒であり続けるのか？　かつての信仰に戻れ。さもなくば、私がホズラ王に君のことを告げ口することを知っておけ。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「好きにすればよい。お前はすでに王に手紙を書き、返事も受け取っているのではないか？」

公爵は答えた。

「まだ手紙は書いていないが、今書こうと思っている。彼が君についてどう命じようとも、私はその通りにするつもりだ。」聖アナスタシウスはこう答えた。

「私について悪意のあることは何でも書いていい。私はキリスト教徒だ。もう一度言うが、私はキリスト教徒だ。」

そこでマルザヴァンは、聖人を地面に引きずり下ろし、命じられたことを実行することに同意するまで殴り続けるよう命じた。しかし、使用人たちが殴るために殉教者の手足を縛ろうとしたとき、聖人は彼らにこう言った。

「そのままでいてくれ。私を縛ったり拘束したりする必要はない。私は、やむを得ずではなく、自らの意志で、私のキリストのために苦しみを受けたいのだ。私がキリストのために苦しみを受けたいと願うのは、まるで暑い日に冷たい水を渇望する者がそうであるのと同じくらい強いのだ。」

そう言うと、彼は十字を切って、地面にひれ伏し、傷を受ける準備をした。すると、彼らは棒で彼を激しく打ち始めたが、聖人は殴る者たちに向かってこう言った。「少し待って、私の修道服を脱がせてくれ。修道者の身分を辱めさせてはならない！」　私の裸の体だけを打ってください。しかし、あなたがたが私に与える傷は、私は冗談として受け止めていることを知ってください。たとえあなたがたが私を粉々に砕いたとしても、私は決して私の主イエス・キリストを否定することはありません。

しかし、裸のまま打たれながらも、聖人は勇敢に苦痛に耐え、誰にも支えられず、ただ神のために苦しみを受けるという自らの善き意志によって、自らの本性さえも打ち勝っていた。　公爵とそこにいた者たちは皆、彼のそのような忍耐力に驚嘆した。というのも、長く激しい鞭打ちの間、彼は身をかえすことも、叫ぶことも、うめくこともなかったからである。彼の心は、彼のために苦しみを受けた神のみに向けられていた。その後、公爵は聖人への鞭打ちを止めるよう命じ、再び王の名を挙げて彼を脅した。

「私は」と彼は言った。「王に手紙を書き、王はあなたを死刑に処すよう命じるだろう。」

聖人は彼にこう答えた。

「好きなように書きなさい。」

公爵は彼に反論した。

「王を恐れないのか？」

聖人は答えた。

「なぜ私があなたの王を恐れる必要があるのか？　彼もまた、あなたと同じような死すべき人間ではないのか？　彼もまた、あなたと同じように朽ち果てる運命にあるのではないのか？　なぜあなたは、あなたと同じくこの世の塵に過ぎない彼を、私に恐れるよう吹き込むのか？　むしろ、天と

地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造し、永遠に朽ちることのない私の主イエス・キリストを、私は恐れるべきではないのか?

高慢なマルザヴァンは、殉教者の答えに驚き、再び彼を牢獄へ連れ戻すよう命じた。しばらくして、彼は再び彼を呼び寄せ、優しい言葉で誘惑しようと、穏やかに語りかけた。彼は聖人にこう言った。

「お前の魔法の術を思い出し、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、苦しみの中で死ぬこともなく、この目に見える光を失うこともないだろう。」

聖人はこう答えた:

——私はどの神に捧げ物をすべきなのか。太陽か、月か、火か、海か、山や丘か、それともその他のあらゆる自然の要素か。神よ、どうか私が決してあなた方の偶像を拝むことのないようにしてください! なぜなら、私が挙げたすべてのものは、神の子キリストが、私たち人間、すなわち理性ある被造物のために、奉仕と必要を満たすべく創造されたものだからです。 しかし、あなたがたは、悪魔や四足動物、その他あらゆる目に見える生き物に仕えることで誤った道を歩んでいる。まるで、それらが私たちの必要のために造られたのではなく、私たちがそれらのために造られたかのように。あなたがたがそれらを神と呼ぶのは、奇妙で不条理なことだ! あなたがたは神のかたちに造られたにもかかわらず、自分の創造主である神を知らない。もし、あなたがたを造られたキリストを知っていたなら、真の光へと立ち返り、悪魔の支配から解放されていたはずである。

このように語り、さらに多くのことを述べた聖人は、マルザヴァンとすべての聴衆を驚かせた。 マルザヴァンは、甘言でも脅しでも聖人を屈服させられないと悟ると、王から彼をどう扱うかという命令が来るまで、再び彼を牢獄に送り返した。こうして、殉教者は夜間は牢獄に閉じ込められ、昼間は手錠をかけられたまま、他の囚人たちと共に石を運ぶ労働に連れ出されていた。

その間、聖アナスタシウスのことは、彼が修道誓願を立てたあの修道院にも知られるようになった。 すべての修道院長や修道士たちは、彼がキリストのために激しい苦難に遭っているという話を聞き、言い表せないほどの喜びに満たされた。とりわけ、修道院長であり、彼の霊的指導者であり師である人物は、まるで愛する弟子と一体となっているかのように感じ、自分自身が彼の体の中で共に苦しんでいるかのように思っていた。 しかし、修道院の院長である彼は、自ら弟子のもとへ赴くことはできなかったため、慰めの言葉に満ちた手紙を携えた二人の修道士を遣わし、密かに殉教者を訪ねて、苦難を勇敢に耐え抜くよう励ますよう命じた。 一方、彼自身は他の修道院長たちと共に、昼夜を問わず神に彼のために祈り、神が殉教者が御名のために最後まで勇敢に苦難に耐え抜き、聖なる殉教者たちの列に加わり、勝利者となり、冠を戴く者となるよう助けてくださるよう願った。 その頃、聖殉教者アナスタシオスは牢獄に囚われながらも、昼夜を問わず全能の神を賛美し続けていた。彼と共に、マルザヴァンの家来であるある若者が、何らかの罪で有罪判決を受け、もう一人の囚人として収監されていた。彼は聖人と共に、首には一つの鎖、足には別の鎖でつながれていた。 聖人にとってこれはあまりにも辛いことだった。というのも、真夜中に祈りのために起き上がると、 自分の意思に反して、仲間の囚人を起こさざるを得なかったからである。彼は、日中の重労働や石を運ぶことですでに疲れ果て、その後ぐっすりと眠りについていた仲間を邪魔してしまうことを、隣人に対する罪だと自責していた。 そのため、真夜中の祈りを捧げたいと強く願っても、友人を起こしたり安らぎを乱したりしないよう、あえて立ち上がることをためらった。友人の足のそばに自分の足を寄せ、首を友人の首に寄り添わせながら、彼は神へのいつもの祈りを捧げた。そこには、鎖で縛られていない他の囚人たちもいた。 その中には、高潔な家柄で温厚な気性のユダヤ人が一人いた。彼は、昼は石を運ぶ重労働に励み、夜は神を賛美して過ごす聖アナスタシウスを見て、心の中で「この人は一体何者なのか。その最期はどのようなものになるのだろうか」と不思議に思いながら、独り言を呟いていた。

ある夜、聖人がいつものように神に祈りを捧げている間、そのユダヤ人は床に横たわりながら眠っていなかった。突然、牢獄の中に光が見えたので、彼は聖人の方へ目を向けると、牢の扉から白い、輝く衣をまとった男たちが聖人の元へ入ってきて、聖なる殉教者を囲んでいるのを見た。　彼らから放たれる偉大な輝きは、言葉に尽くせない光で牢獄全体を照らし出したが、囚人たちは皆眠っていたため、誰もその光を見ることはなかった。ただ一人、眠っていなかったそのユダヤ人だけが、それをじっと見つめ、大きな驚きをもって心の中でこう呟いた。「聖なる神よ、これらは天使たちだ！」

さらに注意深くその男たちを見つめていると、彼らがオモフォロスを身にまとい、手に十字架を持っているのが見えた。そこで彼は思った。「彼らは司教たちだ」。それから、聖殉教者の方を見ると、アナスタシオスの前に、燃える炭で満たされた金の香炉を持った、輝かしい若者が立っているのが見えた。　彼は香炉に香を納め、殉教者の周りを燻し始めた。その様子を見ていた、眠らずにいた囚人は、隣で眠っていた別の囚人――かつてスキフォポリスの裁判官だったキリスト教徒――を手に触れて起こした。　彼は、その相手にもこの驚くべき明らかな奇跡を見てもらいたかったが、相手が深い眠りについていたため、すぐには起こすことができなかった。やがて、ようやく起こされた相手が目を覚まし、「どうしたのか、なぜ起こされたのか」と尋ねると、ユダヤ人はそこで起きている出来事を指さしながら、こう言った。

「見て、見て！」

しかし、彼がその言葉を口にした途端、幻は消え去ってしまった。そこでユダヤ人は、キリスト教徒に、自分が見たすべてのことを特別な熱意と心からの感動を込めて語り、二人は共にキリスト・神を賛美した。

その直後、マルザヴァン公は、王ホズロイからの返書を受け取ると、尊い殉教者アナスタシウスが収監されている牢獄へ使者を送り、こう告げた。

「王は、お前に対し、『私はキリスト教徒ではない』と一言言うよう命じている。そうすれば直ちに釈放され、その後は好きな場所へ行ってよい。キリスト教徒や修道士たちのところへでも、あるいは故郷へ戻って再び軍務に就くのもよい。」キリストの殉教者はこう答えた。

「私の心や言葉によって、私のキリストを否定するようなことがあってはなりません！」

そこで公爵は再び、自分の代理人を聖人のもとへ遣わし、こう言った。

「お前は多くの人々、とりわけ知人たちを恥じており、それゆえ彼らの前で自分のキリストを否定することを拒んでいることは承知している。　しかし、王の命令は必ず従わなければならない。誰もそれに背くことはできないからだ。だから、もし望むなら、私と他の二人の顧問だけがいる場所で、キリストを否定すると口にすれば、私は直ちに君を解放してやる。　実際、口先だけで背きを表明し、心は口と一致せず、自分の神を信じ続けることで、あなたに何の損失があるというのか？

殉教者は答えた。

「そのようなことは決してあり得ない！　あなたの前でも、他の者の前でも、私は主を否定することはない――公然とであれ、密かにであれ、夢の中でさえも。そして、誰も決して、いかなる手段を用いても、私をそうさせることはできない。」

総督が公爵のもとへ戻り、殉教者から聞いたことを報告すると、公爵は彼を自分の元へ連れてくるよう命じ、こう言った。

「王は、お前を鎖で縛ったまま、ペルシアの王のもとへ送るよう命じた。」

聖殉教者アナスタシウスはこう答えた。

「もしあなたが私を解放してくださるなら、私は自ら、鎖に縛られることなく、あなたの王のもとへ赴くつもりだ。自発的に苦しみ、愛する主キリストのために耐え忍びたいと願っている私に、なぜ鎖をかける必要があるのか？」

公爵は、いかなる手段――　甘言でも脅しでも、殉教者をキリスト教の信仰から自身のペルシャの不敬虔な信仰へと転向させることはできないと悟ると、彼を、同じくキリスト教徒であり、何らかの不当な告発によって有罪判決を受けた他の二人の囚人とともに、五日後にペルシャの王の裁きを受けるために送るよう命じた。その後、聖人は再び牢獄へと連れ戻された。　ちょうどその頃、主の尊き命を与える十字架の挙揚の祭りが近づいていた。　その町には、信仰と生活においてキリスト教徒である、尊敬され名門の身分の男が一人住んでいた。彼はマルザヴァン公に、祝祭の日に修道士アナスタシウスを牢獄から釈放し、キリスト教徒たちと共にこの偉大な祝祭を執り行えるようにしてほしいと懇願した。　マルザヴァンは、この名誉ある市民を尊重し、その願いを叶えるよう命じた。こうして聖アナスタシウスはその日、キリスト教徒たちの元へ解放されたが、なお鉄の足枷を嵌められたままだった。彼を迎え入れたこの敬虔な男は、彼を教会へと連れ、神聖な聖体礼儀に参列させた。十字架上で苦難に遭われた主キリストのために重い足枷を嵌められた殉教者を見ることは、すべての信者にとって大きな喜びであり、二重の祝祭であった。彼を取り囲んだ男女は、喜びのあまり熱い涙を流し、感動のあまりその足枷に口づけをし、キリストのために彼が耐えた苦難を称えた。　聖体礼儀が終わると、彼のために取り成したその男性は、修道院から密かに殉教者を慰め、食糧を調達するために派遣された二人の修道士と共に、聖アナスタシウスを自分の家へと連れて行った。　彼らを温かくもてなした後、時が来ると、彼は再び聖アナスタシウスを牢獄へと連れ戻した。五日後、聖人は他の二人の囚人と共に、足枷を嵌められたままペルシアへと送られた。多くのキリスト教徒が喜びの涙を流しながら彼を見送った。あの二人の修道士もまた、彼を見送った。　そのうちの一人はその後修道院に戻ったが、もう一人は修道院長から、至福のアナスタシウスに付き添い、彼に仕え、その最期を見届け、帰還後に彼が成し遂げた苦難と殉教の偉業について語るよう命じられた。

ペルシアに到着すると、聖なる殉教者アナスタシオスは、ヴィフサリア[1369]と呼ばれる町の牢獄に、他の多くの囚人たちと共に投獄された。その中には、何らかの罪で有罪判決を受けた者もいれば、主にキリスト教徒である捕虜たちもいた。　彼と共に到着した修道士は、エスディンの息子であるあるコルタクトの家に身を寄せた。エスディンは王の最高執事であり、密かにキリスト教を信仰していた。数日後、ホズロイ王は裁判官の一人とトリブーンを派遣し、聖アナスタシウスを尋問させた。　裁判官は聖人のもとを訪れ、彼が誰であり、どこから来たのか、またどのような理由でペルシャの信仰を捨ててキリスト教徒になったのかを尋ねた。キリストの殉教者アナスタシウスは、ペルシャ人の不敬虔な信仰そのものと、その言語を嫌悪し、もはやペルシャ語で話すことを拒んだため、通訳を通じて答えた。聖人はこう語った。

「あなたがたは、神の代わりに悪魔を崇めるという誤りに陥っています。私もかつては、あなたがたのこの誤りに囚われていましたが、今や私は、天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された、全能の主イエス・キリストを信じ、崇拝しています。　私は、あなたがたの信仰が、あなたがたを滅びへと導く悪魔の惑わしであることを十分に知っている。

すると、裁判官は彼にこう言った。

「ああ、哀れな者よ！　ユダヤ人たちは、あなたが崇めているそのキリストを十字架につけたのではないのか？　どうしてあなたは自分の信仰を捨ててキリスト教徒となり、これほどまでに迷い込んでしまったのか？」

聖人は答えた。

「私のイエスがユダヤ人によって十字架につけられたというのは、その通りだ。しかし、なぜあなたは、主がご自身の神聖な御心により、私たちの救いのために自ら十字架の苦難に身を委ねられたという事実を語らないのか？　御方は万物の創造主であり、天から地へ降りてこられ、聖霊の働き

[1369] 別名バルセロエ――アッシリアのセルギオポリスであり、当時ホズロイが置かれていたダスタゲルから約8ヴェルストの距離にある。

によって、至聖にして至福の聖母マリアから受肉された方である。御方は、人類を悪魔の惑わしから救うために、自ら進んで十字架にかかられたのだ。　それなのに、あなた方は悪魔を崇め、太陽や月、火、その他あらゆる被造物を礼拝し、自らの創造主を礼拝していないではありませんか。

裁判官は彼に言った。

「なぜそんなに無意味なことを多く語るのか。王は直ちにあなたに偉大な栄誉を与え、金の帯や良馬、そしてあらゆる財産を授けるだろう。かつての信仰に戻るだけで、あなたは王の重臣の一人になれるのだ。」

聖アナスタシウスは彼にこう反論した。

「貴殿方の王からの贈り物、富、栄誉、名声、そして貴殿方が快く思い、望むあらゆるものを、私はとっくに軽蔑し、憎悪している。これらすべては、私にとって屑や糞のように忌まわしいものだ。修道生活を選び、それを愛するようになった私は、私の神であるキリストの恵みによって得られると信じている永遠の祝福への希望に支えられている。　この高潔な修道者の装いと、この古びたマントこそが、私にとってその確かな保証となっている。それなのに、どうして今になって、私が希望を寄せ、そのためにあらゆる労苦を厭わず、全力を尽くしてきたものを、軽蔑し、拒絶することができるだろうか。一時的な、まもなく滅びゆく王の賜物に、私が惑わされることなどあり得るだろうか？」

これを聞いた裁判官は、そのすべてを王に報告した。王は激怒し、翌朝、聖人を拷問するよう命じた。　朝になると、王から命を受けたその裁判官がやって来て、聖人を牢屋から引きずり出し、まず容赦なく棒で打ちのめし、次に、その脛を二つの重い丸太の間に挟み込み、屈強な男たちに上部の丸太の両端に飛び乗るよう命じて、それらを押し潰そうとした。　こうして長い間聖人を苦しめたが、その不屈の姿勢を見て、裁判官は再び彼を牢獄に投げ込むよう命じ、自身は王のもとへ行って、起きたことを報告しに行った。一方、刑務所の長であるトリブヌスは、密かにキリスト教徒であった。彼は、キリストのために苦しむ囚人たちに奉仕し、あらゆる寛容を示していた。　彼と、聖人に同行していた修道士は、牢獄に入って聖人を訪ね、苦しむ聖人を慰め、励ました。彼らと共に、他のキリスト信者たちも入ってきた。その中には、前述の王の家政官であり、秘密のキリスト教徒であったエスディンの息子たちもいた。　彼らは殉教者の足元にひれ伏し、その足枷に口づけをして、主に対して自分たちのために祈ってくださるよう懇願した。しかし聖人は謙虚な心で、自らを罪深く、不適格であり、他者の祈りと助けを必要としている者と認め、彼らを追い返した。　そこで彼らは蝋を取り、その鎖に当てて、鎖の跡が蝋に写るようにした。彼らはこれを祝福として手元に保管し、様々な病の治癒を願うとともに、その蝋を互いに送り合い、貴重な贈り物として大切にしていた。　しばらくして、再び王から遣わされたその同じ裁判官が、キリストの殉教者のいる牢獄を訪れ、尋問した結果、彼を王の意志に対する不屈の敵と見なした。そこで、彼は聖人を容赦なく棒で殴打した。数日後、三度目にも同じことが起きた。　その同じ裁判官が牢獄に来て聖人を殴打した後、さらに新たな凄惨な拷問を加えた。片方の手に縄をかけ、足には巨大な石を結びつけ、聖人を吊るし上げたのである。こうして聖なる受難者は二時間、吊るされたままだった。　その後、聖人を降ろすと、彼を牢獄に放り込み、自身は王のもとへ赴き、殉教者の不屈の勇気を報告した。その際、彼は王に対し、たった一人のキリスト教徒によって偉大なるペルシャ帝国がこれ以上不名誉にさらされ、侮辱されることのないよう、聖人を早急に処刑するよう助言した。　15日後、王は殉教者アナスタシウスを、彼と同じ牢獄にいた他の多くの囚人たちと共に死刑に処した。

死を目前にした前日、聖殉教者アナスタシウスは牢獄に座り、自らの死が間近であることを予感しつつ、共に囚われていた数人の仲間にこう語った。

「兄弟たちよ、私は明日、ここに共にいる多くの人々と共に息を引き取り、この世から永遠の世界へと旅立つ。しかし、あなたがたは生き残り、数日後には自由の身となるだろう。なぜなら、この不敬虔な王はまもなく殺されるからだ。」

朝になると、裁判官が兵士たちを連れてやって来て、聖アナスタシウスと共に、70人もの囚人を死刑のために牢屋から連れ出した。その中には、大部分が敬虔なキリスト教徒であった。その中には、聖アナスタシウスと共に、ケサリアから鎖でつながれたままペルシアへ連行された二人の囚人も含まれており、彼らもまたキリスト教徒であった。　一方、一部の囚人は牢獄に残された。その中には、聖人が「まもなく解放され、王が死ぬ」と予言した者たちも含まれていた。死刑のために牢獄から連れ出された者たちは、城の外、川の岸辺へと連れて行かれ、そこで一人ずつ、喉に縄を巻きつけられ、苦痛に満ちた絞殺に処された。　一人ひとりを絞め殺すたびに、拷問者たちは聖アナスタシウスに向かってこう言った。

「まさか、お前も彼らと同じように今ここで死にたいというのか？王の意志に従い、生き延びて、王から贈り物や栄誉、名声を受けるほうが、お前にとって良いのではないか？」

聖人は天を仰ぎ、神に感謝を捧げると、彼らにこう答えた。

「私は、私のキリストのために、あなた方によって粉々に砕かれることを望んでいた。この死は私にとって取るに足らないものであり、このわずかな苦しみによって、主が私に聖なる殉教者たちの偉大で言葉に尽くせない栄光へと至る機会を与えてくださったことを、私は主を感謝する。」

こうして、聖なる殉教者アナスタシウスは、他のすべての囚人たちに続いて、喜びをもって死を受け入れ、[1370]　年1月22日に絞殺された。王の前でアナスタシウスの死を証明するため、兵士たちは彼の聖なる首を切り落とし、王のもとへ持ち帰った。一方、彼の遺体は、他の絞殺された者たちの死体と共に、犬に食わせるために投げ捨てられた。　しかし、犬たちは他の死体を貪り食っていたにもかかわらず、聖人の遺体には手をつけなかったばかりか、他の誰にも触れさせまいと、明らかにその遺体を守り始めた。　その後、刑務所の看守であるトリブーンが、聖なる殉教者の尊い遺体を取り上げようとしたとき、遠くから見張っていた兵士たちはそれを許さなかった。彼らの多くはユダヤ教徒であったからである。　夜が更けると、聖アナスタシウスの最期を見届けるために修道院から遣わされた、永遠に記憶される修道士は、エスディンの息子たちから奴隷と多量の金、そして清らかな布を受け取り、犬たちに食い荒らされている他の死体の中に、無傷のまま横たわっている聖人の遺体がある場所へと向かった。　彼は警備兵たちに金を手渡した後、キリストの殉教者である聖人の遺体の元へと近づいた。その上空には、天から輝きを放つまばゆい星が見えていた。彼は遺体を運び出し、そこからほど近い場所にある聖殉教者セルギイの小さな修道院へと運んだ。　そこで彼は、キリストの受難者アナスタシオスの苦難に満ちた遺体を敬意を込めて埋葬し、自身はホズロイ王が殺害されるまでその修道院に留まった。王が殺害されると、聖人が獄中で亡くなる前に予言していた囚人たちも解放された。　こうして、聖人の二つの預言――ホズロイ王の近いうちの暗殺と囚人たちの解放――が成就した。ギリシャ軍がペルシアの領土に侵入すると、聖人に付き添っていた修道士は、自らの修道院へ戻る道が開かれた。彼は修道院に戻り、修道院長とすべての修道士たちに、尊い殉教者アナスタシアについて詳しく語った。　皆は、御自分のしもべを苦難の業へと強めてくださった神を賛美した。修道院の院長は直ちに、その修道士と同行者数名を派遣し、彼らはそこから、愛する弟子でありキリストの殉教者である聖人の聖遺骨を、敬意を込めてその修道院へ運び帰った[1371]。聖殉教者の聖遺物からは多くの奇跡が起こり、病の癒やしがもたらされた――父と聖霊と共に、永遠に賛美される私たちの神、キリストの栄光のために。アーメン。

[1370] 聖殉教者アナスタシウスは528年に殉教した。

[1371] その後、聖アナスタシウス・ペルシア人の聖遺骨はパレスチナへ、そこからコンスタンティノープルへ、そしてコンスタンティノープルからローマへと移され、現在もそこで保管されている（一部は郊外の修道院の一つに、もう一部は聖十字架教会にある）。

聖殉教者マヌエル、ゲオルギオス、ペトロス、レオントス、シオニオス、ガブリエル、ヨハネス、レオントス、パロドス、およびその他377名、彼らと共に殉教した者たちの記念日

記念日：1月22日

これらの聖なる殉教者たちは、ローマ帝国のさまざまな地域出身であり、皇帝レウス・アルメニアヌス[1372]の治世下、アドリアノープル[1373]に暮らしていた。 当時、ブルガリアの王クルムはフラキアとマケドニアを荒廃させ、コンスタンティノープルそのものまで迫り、その後3か月にわたる包囲の末、アドリアノープル（[1374]）を制圧し、虐殺を免れた住民4万人を捕虜とした。 その中には地元の司教も含まれており、異教徒である王は、彼を地面に投げつけ、踏みつけにするよう命じた。クルムは惨めな最期を遂げた。後継者のドゥクムも彼の死後まもなく亡くなり、ブルガリアには恐ろしく非人道的な支配者ディツェングが即位した。 彼は、アドリアノープルの司教マヌイルを真っ二つに切り裂き、聖人の両腕を肩まで切り落とすよう命じ、その後、その聖なる遺体は犬に食わせるために投げ捨てられた。神の怒りはこの凶悪な者を失明させ、まもなくディツェングは自らの臣民によって殺害された。 彼の後を継いだムルタゴンは、キリストを否定せよという彼の命令に従わなかったキリスト教徒たちを激しく迫害し始めた。彼はキリストに忠実な僕たちを牢獄に閉じ込め、拷問で苦しめ、非人道的な苦痛の中で死に至らしめた。 聖ゲオルギオス・デヴェルトスキイ[1375]と聖ペトロは、 の信徒たちをキリストの信仰に堅く立たせていたが、非人道的な拷問者は彼らを最も残酷な棍棒による打撃にさらし、その後、剣で彼らの尊い首を切り落とした。聖職者たちと共に、七人のキリスト教徒も同様の処刑に処された。キリスト教の軍司令官ヨハネスとレオンティオスも剣で首を刎ねられた。 聖レオティオス――去勢されたニカイアの司教――は、異教徒たちによって剣で腹を貫かれた。また、ガブリエルとシオニオスも剣によって殉教の死を遂げた。敬虔なる長老パロドは、石打ちの刑に処された。 この頃、他にも多くのキリストの忠実な僕たちが殴打され、牢獄に投じられた。そして、残忍なムルタゴンだけでなく、ブルガリアの王位を継いだ者たちもまた、キリスト教徒を激しく迫害し、彼らは様々な拷問と苦痛に満ちた死を経て、永遠の御国を勝ち取ったのである。

2月5日

1月23日（旧暦）

アンキルの司教である聖司祭殉教者クリメント、聖殉教者アガファンゲル、および彼らと共に殉教した者たちの生涯と受難

記念日 1月23日

[1372] レウ・アルメニア人――ビザンツ帝国の皇帝で、813年から820年まで在位した。

[1373] アドリアノープルは、トゥンジ川とマリツァ川の合流点にあるフラキア（ヨーロッパ側のトルコ）の都市である。

[1374] 814年。

[1375] デヴェルト――現在のザガラ。黒海沿岸に位置する。

主イエス・キリストの降誕から二百五十年後、ヴァレリアヌス帝の治世[1376] 、ガラティアの首都アンキラ[1377] は、高潔な家系に生まれた聖殉教者クリメントを、多くの霊的賜物という房を豊かに実らせた、みずみずしい若き葡萄の枝のように育んだ。 しかし、彼女の両親は同じ信仰を持っていなかった。父は偶像崇拝に身を捧げる異教徒であり、母はキリスト教徒の両親の娘で、キリスト教の敬虔さと善き行いの中で育てられたキリスト教徒であった。 彼女の名前はエウフロシニアであった。彼女は強制的に嫁がされ、自らの意思に反して不信仰な夫と結ばれた。それは、彼女の両親が聖使徒の*「不信仰な夫は、信仰ある妻によって聖別される」*（Iコリント7:14）という言葉を成就することを望んでいたからである。 しかし、彼らの期待通りにはならなかった。夫は不敬虔の深みに沈んだままであり、偶像崇拝の闇に包まれていたからである。 彼はキリストの光へと立ち返ることを拒んだだけでなく、妻のエウフロシニアをもあらゆる手段で自らの不義へと引きずり込もうとした。彼女もまた、彼を真理の道へと導こうと努め、昼夜を問わず説得し、自らの模範によって救いのある生き方を示したが、彼の心はすでに硬くなっていたため、何の結果も得られなかった。 彼女はキリストに、彼らに憐れみを授けてくださるよう祈った――すなわち、肉体の結びつきによって結ばれている二人が、聖なる信仰において霊的にも一つとなるように。もしそれが不可能であるならば、信仰において心を一つにすることができない以上、肉体的にも別れるようにと。 我らの主イエス・キリストは、そのしもべの祈りを聞き、彼女に憐れみを示され、まもなく彼女を不信仰な夫の束縛から解放された。主は、その夫を、不品行で心が頑なな者として完全に拒絶し、彼を永遠の世界へ旅立たせるよう命じられた。 その異教徒は、まだゆりかごの中にいる幼い長男を妻に残して亡くなった。その子の祝福された母エウフロシニアは、乳よりもむしろ敬虔さをもって彼を育て、その後、聖なる洗礼によって彼をキリストのもとへ導いた。 彼女は彼に「クリメント」という名を与えた。これはギリシャ語から訳すと「ぶどうの若枝」を意味する[1378] 。彼女は預言者のように、彼が真のぶどうの木であるキリストの子となり、キリストへと回心した多くの人々の魂という熟した房をもたらすことを予見し、この名を非常に適切に与えたのである。 その名そのもので、彼女は彼がイエス・キリストの至聖なる御名の著名な証人となり、キリストのために自らの血を流し、魂を捧げ、キリストのための受難者、殉教者となることを予言したのである。彼女は息子に聖書の読み方や善行を教え、あらゆる美徳について指導した。 、少年が年を重ね、知恵も深まり、すでに十二歳に達しようとしていた頃、その母である聖エウフロシニアは、安らかな最期を迎えようとしていた。 そのことを予感し、すでに病床に伏していた彼女は、息子が自分のわずかな物質的な財産の相続人となることよりも、むしろ自分の美徳という非物質的かつ精神的な富の相続人となることを望んだ。母としての慈愛を込めて、彼女は息子を抱きしめ、頬にキスをしながらこう諭した。

「わが子よ、愛しき子よ、ゆりかごの頃から孤児となり、父の存在を知るよりも先に、自分が孤児であることを知った子よ！ しかし、わが子よ、あなたは孤児ではない。あなたにとっての父は、その賜物によってあなたを豊かにしてくださるキリスト・神だからである。 私はあなたを、わが子よ、肉体として産みましたが、キリストなる神はあなたを霊として新たに生み出してくださいました。ですから、主こそがあなたの父であることを知ってください。自分を主の子であると認め、神への養子縁組が無駄にならないよう努めてください。 唯一の主キリストに仕え、キリストに希望を置きなさい。なぜなら、キリストこそがまことに私たちの救いであり、不死の源だからです。キリストは、私たちを御自身と共に天へと引き上げるために、天から私たちのもとへ降りてこられました。キ

[1376] ヴァレリアヌス – ローマ皇帝。253年から259年まで在位した。

[1377] ガラティア – 小アジア中部にある小さな地域。アンキラ – 現在のアンゴラ – ガラティアの繁栄し、人口の多い都市で、今日でも小アジアにとって重要な商業的意義を保っている。

[1378] ギリシャ語の「κλημα」に由来する――折れた若い枝、若芽、ブドウのつる。

リストは私たちを御自身の愛する子とし、神との交わりを確立してくださいました。　この主にお仕えする者は、あらゆる悪魔の策略から解放され、蛇やサソリを滅ぼし、あらゆる敵の力を打ち負かすでしょう。主は、偶像や悪霊を崇拝する不義な王や君主、迫害者たちを恥じ入らせるだけでなく、彼らが崇める悪霊たちの頭をも打ち砕かれるのです。

この会話の最中、聖人の母はあふれんばかりの涙を流し、神の恵みに満たされ、彼に起こるであろうことを預言し始めた。

「お願いです、愛する息子よ」と彼女は言った。「私のすべての病と、あなたへの心配に対する唯一の報いとして、どうか私に与えてください。なぜなら、厳しい時が迫っているからです。　恐ろしい激怒と脅威を孕んだ迫害が、すでに目前に迫っている。それゆえ、私たちの主が言われるように、キリストのためにあなたが支配者や王たちの前に引き出されることに備えなさい（マタイ10:18）。息子よ、私にこの名誉を与えてほしい。キリストのために大胆かつ勇敢に立ち、その御名を堅く、揺るぎなく告白し続けてほしい。　私は、わがキリストに希望を置いている、わが子よ！まもなく、私の名誉のため、そして多くの魂の救いのために、汝の頭に殉教の冠が輝き渡るだろう。だから、苦難の試練に備えて心を整えよ。そうすれば、試練の時が訪れた際に、準備ができていない状態で襲われることはないだろう。災難に試されることは、炉の中の金のように有益であることを知れ。　しかし、恐れることはない。苦しみは一時的なものであり、その報いは永遠である。悲しみはすぐに過ぎ去り、喜びは永遠に続く。この世での恥辱は一時的なものだが、神のもとで永遠の栄光があなたを待っている。　迫害者たちの策略や傷は、せいぜい一日しか続かない。この世の王たちの怒りは殉教者たちによって嘲笑され、彼らの栄光は色あせ、キリストの殉教者たちのために用意された火は消え去る。　彼らの剣は錆びつき、彼らの力は滅びる。それゆえ、あなたを主キリストから引き離すことのできるものは何一つない。あなたは天を見上げ、そこから神による偉大で豊かで永遠の報いを待ち望みなさい。　その偉大さを恐れ、その裁きに戦慄し、その全知の御目に震えよ。なぜなら、主を拒んだ者たちは、彼らのために用意された消えることのない火と、眠ることのない虫による苦しみを受け継ぐからである。　しかし、神の御栄えを知り、決して神から離れることのない者たちには、聖なる殉教者たちと共に、言葉に尽くせぬ喜び、歓喜、そして慰めが待っている。　わが最愛の息子よ、あなたが私の胎から生まれ、主の殉教者となること、そして私が殉教者の母と呼ばれ、キリストのために苦難を受けた息子を通して栄光を受けること――これこそが、あなたの誕生の際に私が負った病や、あなたを育てるための労苦に対する、あなたからの報いであってほしい。　それゆえ、私たちのために苦難を耐え忍ばれた方のために耐え忍ぶよう努めなさい。そうすれば、あなたは主から多くの恵みを受けるにふさわしくなり、私はあなたのために、聖人たちとの交わりにあずかるにふさわしくなるでしょう。見よ、わが子よ、私は死の門の前に立っています。私にとって、明日、この目に見える光は輝きません――しかし、あなたは、キリストにおける私の光であり、主における私の命なのです！　それゆえ、わが子よ、私が抱いているこの希望を裏切らないでほしいと懇願する。使徒の言葉にあるように、子を持つことのために救われるように（Iテモテ2:15）。　わが子よ、私はあなたを産んだのは、あなたを通して、あたかも自分の体であるかのように苦しみを受けるためであった。私から受け継いだ血を、惜しむことなく注ぎ出しなさい。そうすれば、私もその血のゆえに栄誉を受けることができる。あなたの体を傷に捧げなさい。そうすれば、私も、あたかも自ら主のために苦しんだかのように、私たちの主の御前でそれらを喜び祝うことができる。

かつてあるユダヤ人の女性は、敬虔さのために七人の息子を殉教者として神に捧げ、七人の息子の肉体の中で一つの魂として苦しみながらも、打ち負かされることなく耐え抜いた[1379]。しかし、あなたが敬虔さのために熱心に奮闘してくれるなら、私の主の御前で栄光を得るには、あなた一人だ

[1379] ここでは、聖マカベオの殉教者たち――アニマ、アントニナ、グリア、エレアザル、エウセヴォン、アリナ、マルケッラ――の母であるソロモニアを指す。彼らの記念日は8月1日である。

けで十分である。 今や 私はあなたのもとを去り、あなたより先に神の御前に現れることになる。 私は肉体としては去るが、霊としてはあなたと共にあり、あなたと共にキリストの御座にひれ伏し、あなたの苦難を御前で称え、あなたの功績によって栄冠を授かるにふさわしい者となるためである。なぜなら、地中に隠された木の根も、地上にはっきりと見える枝と同じ露に潤されているからである。

こうして、聖なる最期を迎える一日中、祝福された母は、最愛の息子を抱きしめ、その頭、顔、目、口、胸、そして手を口づけしながら、彼を導き続けた。

「ああ、今、私はなんと幸いなことか」と彼女は言った。「殉教者の体の各部位に口づけをしているのだから！」

このように教えに満ちた言葉を語り終えると、彼女は頭を垂れ、その魂を主の御手に委ね、安らかに息を引き取った。

クレメントの実の母が至福の死を遂げて埋葬された後、少年クレメントは完全に孤児となり、唯一の神を父としていた。万物の摂理者であり、孤児や貧しい者たちを慈しむ神は、当時まだ幼かった至福のクレメントに、もう一人の母を与えられた。 その同じ町には、ソフィアという名の、高貴で誠実かつ裕福な女性が住んでいた。彼女は、クレメントの母である至福のエウフロシニアの友人であった。 ソフィアは神に喜ばれる生活を送り、昼夜を問わず祈りに明け暮れていた。子供がいなかった彼女は、息子の代わりにこの至福の少年、聖クリメントを自分の家に迎え入れ、実の子供のように愛し、あらゆる面で彼を世話した。その頃、ガラティアでは大飢饉が起きていた。 不信心な異教徒たちは、子供たちを養うものがなく、自分たちも飢えで死にかけていたため、道端に子供たちを置き去りにしていた。そこで聖クリメントは、自分の第二の母であるソフィアの家にそれらの子供たちを集め、彼女の財産から彼らを養い、衣服を与え、教育し、聖なる洗礼へと導いた。 このようにして、彼はソフィアの家を養育施設兼学校とし、ソフィア自身は多くの子供たちにとって、肉親の母よりもはるかに優れた「神による母」となった。なぜなら、彼女は子供たちを霊的に生み出し、キリスト教の信仰の中で育て上げたからである。

聖クリメントは、まだ非常に若かったにもかかわらず、すでに成熟した大人の知恵を身につけており、若き日から断食と禁欲によって肉体を律し、修道士のように生活し始めた。彼は肉食を控え、パンと穀物だけで食事を済ませ、飲み物は水のみであった。 この点において、彼は三人の聖なる少年たちに似ていた。彼らの体は、断食のおかげで、内なるもの――すなわち自然な情欲――と外なるもの――燃え盛る炉――という二重の火によっても無傷のままであった[1380] 。当時この国に住んでいた数少ないキリスト教徒にとって、至福のクリメントは、あたかも神聖な光のように、すべての人を神を知る光で照らしていた。 しかし、この輝かしい灯火が燭台に据えられる時がすでに訪れていた――美徳をもって輝く聖クリメントが、聖職の階段を登り、できるだけ多くの人々を啓発して、彼らを救いの道へと導くためである。 神の摂理と御心、そしてガラティアにいたすべてのキリスト教徒の満場一致の選出により、彼はまず朗読者となり、その後、助祭、そして長老に任命された。 それから二年後、彼はまだ若くして――当時二十歳にも満たなかった――司教の位に就いた。彼は、若くして知恵と徳において長老たちを凌駕し、老いとは年数の多さではなく、徳ある生活と英知によって決まることを示した、第二のダニエルとなったのである。 司教の位を受けた聖クリメントは、多くの子供たちを集めて書物を教えるだけでなく、長老たちの教師ともなった。異教徒をキリスト教の信仰へと導き、彼らに洗礼を授けることで、彼はキリストの教会をますます拡大させていった。

その後、彼の母である福者エウフロシニアの預言が実現し始め、彼のために殉教の冠が編み上げられ始めた。 キリスト教徒迫害者ディオクレティアヌスは、ローマ帝国の帝位に就くと、在位初年にローマ帝国の全地域、諸侯や長官、総督、イゲモン、軍司令官、都市長らに対し勅令を発し、キ

[1380] ここでは、燃え盛るバビロンの炉の中で焼かれなかった3人のユダヤ人の少年、アナニア、アザリヤ、ミサイアを指す。ダニエル書1章3節を参照。

リストの御名を告白する者すべてを、あらゆる種類の死によって殺害し、滅ぼすよう命じた。　その際、彼は書簡の中で、キリスト教徒の根絶に関する勅令を十分に熱心に実行しようとしない統治者や諸侯全員を処刑すると脅し、そうした者たちにはキリスト教徒と同様の拷問や処刑を科すと定めた。一方、迫害に熱心な者たちには富と栄誉を約束した。　そこで、各地の地方や都市において、王の総督や統治者たちは、ある者は王の怒りを恐れて、またある者は王に気に入られ、栄誉を得たいと願って、国内からキリスト教徒という名そのものを根絶やしにするためにあらゆる努力を傾け始めた。ちょうどその頃、　、王の総督ドミティアヌスがガラティアに到着し、王の命令に従って、キリスト教徒を根絶やしにする目的で熱心に捜索した。アンキラの司教である聖クレメンスは、多くの者に偉大な神々への崇拝を禁じ、彼らをキリストのもとへ導いているという理由で、異教徒たちから誹謗中傷を受けた。　ドミティアヌスは直ちに彼を捕らえて自分の元へ連行するよう命じた。彼はまず、優しい言葉や諂うような言葉で聖人を自分の不敬虔な道に引き込もうとした。彼はこう言った。

「お前に対する誹謗中傷など、私は全く真実とは考えていない。なぜなら、お前の顔立ち、誠実な眼差し、そして穏やかな気質は、お前が立派で、高潔で、賢明かつ理知的な人物であることを示しているからだ。そして、お前について語られたことはすべて、誹謗者たちの子供じみた愚かさを露呈しているに過ぎない。」　さあ、あなた自身について語ってください。もしあなたが、その知恵から少しでも何かを語ってくださるなら、私たちはあなた自身から真実を知ることができるでしょう。

聖なる司教は彼にこう答えた：

「私たちの知恵と理性とは、父なる神の御子キリストであり、その御言葉によって万物が創造されたのです。私たちもまた、彼から言葉と理解の賜物を受けているのです。」

– ほら、もう――と、拷問官は彼の言葉を遮った――君は、初めのうちから無駄話を始めて、知らず知らずのうちに、我々の期待をはるかに超えて侮辱してしまった。だが、君に忠告しておく。こうした無益な話はすべてやめて、我々の神々に犠牲を捧げなさい。　神々を侮る者には苦痛が待ち受けており、神々を尊び崇拝する者には栄誉が待っていることを知れ。その好例が我々だ。これらの神々を尊ぶおかげで、我々はこれほど高い地位に上り詰めたのだ。そして神々の恩恵に感謝し、神々を尊ぶ者には栄誉を与え、崇拝を拒む者には処刑を下しているのだ。

総督のこの言葉に、聖人は笑いながらこう言った。

「総督よ、我々はあなたの言葉とは全く逆の考えを持っています。あなたの賜物は無価値であり、あなたの敬意は不名誉であり、高い地位は捕虜の労働に過ぎないと我々は考えています。　それどころか、不名誉や脅迫、拷問こそが、私たちに喜びと慰めをもたらし、何よりも私たちを神と結びつけてくれるのです。このことを知っていながら、栄誉や贈り物の約束であれ、拷問の脅しであれ、私たちを敬虔さから遠ざけようなどとは、決して期待しないでください。

聖人のこのような言葉は、ドミティアヌスの怒りを招いた。聖人をじっと見つめながら、彼は言った。

「どうやら、穏やかに話しかけただけで、お前の高慢心を煽ってしまったようだ。それも不思議ではない。聞いたところによると、お前は常に子供たちと過ごしているため、彼らと同様に子供のような心を持っているらしいからな。」　しかし、知っておけ。もしお前が犠牲を捧げて神々をなだめなければ、死刑に処されることになる。しかも、お前が望んでいるような安らかな死ではなく、まず多くの様々な拷問を受け、その後、苦しみの中で最も過酷な刑罰によって死ぬことになるのだ。そう、不信心な者として、お前はひどく苦しむことになり、他者にとっての戒めとなるだろう。そうして、彼らもまた、お前の恐ろしい最期から教訓を学ぶことになるのだ。

聖クリメントはこれに対し、次のように答えた。

「あなたが子供たちのことを持ち出した以上、知っておいてほしい。私は子供たちに、あなた方の最も年長で賢明な者たちでさえ知らない知恵を教えるよう努めてきた。なぜなら、真の神の知恵は、この世の賢者や知性ある者たちからは隠され、幼子たちには明らかにされているからだ。　私は

誇りを持って断言する。私は神に知恵と言葉による捧げ物を捧げているのだ。あなたがたの祭司たちが、血の川や煙、あらゆる忌まわしいものを捧げて、あなたがたが崇める神々を喜ばせているのとは、全く異なる。　そして、私が自分の血を私の神のために流し、それを神に捧げる時、たとえ完全にはできなくとも、少なくとも部分的には、私のために血を流してくださった主への報いとなるでしょう。なぜなら、私の王であるキリストは、御自身の尊い血によって私を贖ってくださったからです。

殉教者がこの言葉を大いなる大胆さをもって述べたとき、総督は偽りの温厚さを捨て、本来の本性である残忍さと狂気をはっきりと露わにした。彼は聖人を裸のまま木に吊るし、その後、鋭い鉄の道具でその体を削り、切り刻むよう命じた。　命令を遂行する中、家来たちは殉教者に向かって、王の命令を軽んじてはならないと叫んだ。彼らは聖人の体に、まるで畑を耕すかのように深い溝を刻み込み、その結果、その肉体は塊となって剥がれ落ちた。すでに内臓がはっきりと見えるほどであったが、拷問者たち自身でさえ、この光景を無関心に見ていることはできなかった。　しかし、彼は心の中で少しも動揺せず、表情を変えることもなく、耐え難い痛みから一声も漏らさず、苦情の一言も口にせず、これほど過酷な拷問を受けても呻き声さえ上げなかった。彼は、その苦しみを見守る者たちよりも、はるかに強靭で勇敢であった。まるで、彼を苦しめる者たちよりも、彼自身の苦しみの方が少ないかのようであった。　彼は静かに、殉教の源であるキリスト・神に感謝し、喜びに満ちた顔で天を仰ぎながらこう語った。「キリストよ、私の光であり命、息吹であり喜びであるあなたに栄光あれ！　命の与え主よ、私にこのような救いを授けてくださったことに感謝します。あなたの戒めを果たす道において、私の魂は喜びに満ちました。 あなたの愛のためなら、いかなる 苦しみも私にとっては喜びです。忍耐をもって私を強めてくださるあなたに、栄光あれ！あなたは罪人である私に、その全能の手を差し伸べ、統治者の怒りと私の拷問者たちの手から私を救い出してくださいました。なぜなら、あなたご自身が、すべての悲しむ者たちの避難所だからです」。

聖人がこのように祈ると、拷問者たちは力を失い、拷問をやめた。家来たちが何もしないのを見て、総督は殉教者に言った。

「たった一時間で私の家来たちが疲れ果ててしまったというのに、お前の忍耐によって、私はすでに打ち負かされたと思わないか？」

聖人はこう答えました。

「そうは思いません。しかし、私の中に宿っておられるキリストを信じ、希望を置いています。なぜなら、キリストはあらゆる敵に勝利し、今も勝利し、これからも勝利し続けるからです。」

そこで総督は他の家来たちに、聖人のところへ行き、最初の者たちよりも激しくその肉体を苦しめるよう命じた。彼らもまた、この打ち負かすことのできない殉教者を長い間苦しめ続けたが、やがて自分たちも力尽き、まるで死人のようになってしまった。　総督はそれを見て、時には驚き、時には自分の家来たちの無力さを恥じながら、殉教者を木から降ろすよう命じた。　聖人の姿は見るのも恐ろしいほどで、手で触れることさえ不可能だった。彼は衣服を脱がされたかのように、体を完全にさらけ出していた。血にまみれた骨だけが露わになっており、それが人間だと見分けることさえ困難だった。　総督は、拷問では何も得られないと悟ると、再び穏やかな言葉で殉教者に語りかけ始めた。しかし、殉教者は、キリストの勇敢な戦士にふさわしく、気丈に拷問者に反論し、再び総督を激怒させた。するとドミティアヌスは大声で叫んだ。

「まことに、この男は厚かましい！　顔と口を殴れ。それらの部位はまだ無傷だから、あれほど厚かましく返答できるのだ。それならば、全身も同様に無傷にしてしまえ。容赦なく殴りつけよ。」

すると、役人たちは聖人の顔と口を手のひらで激しく殴りつけ、その強烈な打撃で彼は地面に倒れ込んだ。しかし、地面に倒れた後も、彼らは容赦なく石で彼の口を打ち、歯を砕いた。それに対し、殉教者は喜びながらこう言った。

「総督よ、あなたは私を苦しめるというよりは、むしろ栄誉を与えてくださっているのです。なぜなら、私の主イエス・キリストもまた、口元を打たれ、頬を平手打ちにされたからです。そして、不適格な私でさえ、今や同じことを許されたのです。最初の殉教者ステファノは石打ちにされましたが、私もまた、それによって栄光に浴したのです。　私の苦しみの中で慰めとなるのは、自分が私のキリストの受難に倣っている者であると自覚できることです。また、私より偉大で優れた人々と等しく偉大な栄誉に与かり、同じ苦難を分かち合っているという事実も、すべての苦しみを和らげてくれます。

拷問官は、殉教者のこの気高さに驚き、彼を牢獄へ連行するよう命じた。しかし、彼の全身がただ一つのただれと化していたため、自力で歩くことはできないだろうと考え、使用人たちに手足を抱えて運ぶよう命じた。　しかし、聖人は彼を運ぼうとした者たちを退け、立ち上がって自ら歩み出した。キリストの力に支えられながら、詩篇の言葉を歌い上げた。*「これは、わが頭に害を及ぼさない、最上の香油である」*（詩篇140:5）。これを見た総督は、周囲の人々にこう言った。

「ああ、この男の忍耐と勇気はなんと素晴らしいことか！　王の兵士たちも、あらゆる災難に打ち勝つことができるよう、このようにあるべきだ。　私が再び彼を裁くのはふさわしくない。私は彼をディオクレティアヌス帝のもとへ送るつもりだ。なぜなら、拷問の術に極めて長けている彼を、この男一人だけで打ち負かすことなどできるはずがないからだ。彼は常に、ローマ全市がその裁きを恐れるような拷問や処刑を考案しているのだ。

数日後、聖人は牢獄に囚われたまま、キリストの恵みによって傷を癒やされ、健康を取り戻した。そこで総督は、彼について詳細に記した書簡を添えて、ローマのディオクレティアヌス帝のもとへ彼を送り出した。　聖人が兵士たちに連行され、街を出る際、神にこう祈りました。「おお神よ、天と地、そして全宇宙の王よ。唯一なる御方、万物を満たし、いかなる場所も御摂理から外すことのない御方よ！この街を御手に委ねます。この街と、あなたを信じるすべての者の魂をお守りください。　また、御自身の教会を無傷のまま守り、この町で犬や狼が御自身の小さな群れを追い散らさないようにしてください。御言葉に従う御自身の羊たちが滅びたり、その数が減ったりすることのないよう、御自身の聖なる御名の栄光のために、さらにその数を増やしてください。　私をこの町から完全に遠ざけないでください。私の旅路や苦難のさなかに私と共にいてくださり、かつてヤコブを父の家へ連れ戻し、エサウの手から救い出されたように、またかつて御自分の民に命じてエジプトからヨセフの遺骨を運び出し、父の墓に納めさせたように（創世記36章；　出エジプト記13:19）ように、かつてヨセフの遺骨をエジプトから運び出し、父の棺に納めるよう民に命じられたように、再び私をここへ連れ戻してください。そうして、御名が世々限りなく栄えられますように」。

この祈りの後、聖人は旅立たされた。彼がローマに連行され、不敬虔な王の前に引き出されると、王は殉教者の顔に輝く光と、その肉体の強靭さを見て、大いに驚いた。彼は　、このキリスト教徒がどのような苦難に耐えてきたかを伝えるドミティアヌスの手紙を信じようとはしなかった。　王は、聖人がまるでいかなる苦難も経験したことがないかのように、体は健やかで、顔には活気があふれているのを見た。王は尋ねた。

「お前こそが、あれほど大きな苦痛に耐えた、あの名高いクリメントか？」

それから彼は、聖人に両側から、互いに正反対の多くの異なるものを差し出すよう命じた。一方には、大量の金や銀、大殉教者に高い栄誉を与える皇帝の勅令、貴重な衣服、あらゆる富や特権。もう一方には、拷問の道具――　鉄の鉗子や爪、釘の打ち込まれた鉄の寝台、鋭い剃刀、赤く燃え盛る炭、真っ赤に熱された大釜や兜、先が尖った杭、車輪、重い鎖、その他数え切れないほどの拷問器具。　これが殉教者に提示されたとき、王は彼を一瞥し、手で金や豪華な贈り物を指さしながら、こう言った。

「もしあなたが神々に立ち返り、礼拝と生け贄をもって彼らを崇めるようになれば、これらは我らの神々があなたに与えるものだ。」

聖人は、それらの贈り物を、取るに足らない、卑しく、悪臭を放つ、見るに値もしないものとして目を背け、ため息をつきながらこう言った。

「汝らの神々からのこれらの贈り物が、汝らを滅ぼすものとならんことを！」

すると王は、威圧的な眼差しを向け、拷問器具を指さして聖人に言った。

「これは、我らの神々を信じない者たちのために用意されたものだ。」

これに対し、キリストの勇敢な殉教者は彼にこう答えた。

「もし、お前が考案した拷問が恐ろしいと思うのなら、なぜ神がご自身を信じない者たちのために用意された拷問を軽んじるのか？」　同様に、もしあなたがたの賜物が、地上の恵みを求める者たちにとって魅力的で、驚くべきものであり、尊いものであると見えるなら、神を愛する者たちのために神が用意された天の賜物は、どれほど尊いことか。*「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*（Iコリント2:9）。金や銀は不毛の地から採掘され、人々が外見を飾るために用いるものである。それらは火や鉄によって変質し、錆に蝕まれ、摩擦によって破壊される。強盗に奪われ、泥棒に盗まれることもある。華やかな衣は（カイコの）蛾の仕業であり、蛾の餌である。　それらは、必要に迫られて言葉を持たない動物から奪われた羊毛から作られている。衣服を作る者たちは、それらを身に着けて飾り立てるあなた方よりも、むしろ驚嘆に値する。なぜなら、彼らはある種の技術によって、悪いものを良いものへと変え、物を作り出しているからだ。それにもかかわらず、そのような職人たちは、単純で取るに足らない人間として軽蔑されている。　それとは対照的に、それらの製品で身を飾る者たちは、その華やかさを取るに足らない言葉を持たない動物から借りているにもかかわらず、誇り高く、自画自賛している。しかし、私たちの慈愛に満ちた神の賜物は、誰からも借りたものではなく、神ご自身の不変の財産であり、人間の技術によるものではなく、神の御心によって神の中に留まっているのである。　それらは計り知れない栄光と永遠の尊厳を持ち、時の経過によるいかなる変化も恐れない。虫に食われることもなく、腐敗によって損なわれることもなく、果てしない永遠の歳月を経ても、決して朽ち果てることはない。これに対し、ディオクレティアヌスは彼にこう言った。

「君の言うことは正しいが、理解が浅い。　だからこそ、私はあなたを神々の知識へと導こうと努めているのだ。そのために、あなたに穏やかに語りかけ、人間に期待してはならないと説得している。あなたがたがキリストとして崇めるその方は、ユダヤ人たちから数多くの苦難を受け、ついに殺されて死んでしまったが、私たちの神々は常に不死であり、決して苦しんだことはないのだ。

聖人は答えた。

「王よ、あなたがた的神々が不死であり、無情であるというのは正しい。なぜなら、彼らが一度も生きたことがないのなら、どうして死ぬことができようか。彼らが感覚を持たないのなら、どうして苦しむことができようか。彼らが打ち叩かれ、鍛えられ、切り刻まれ、削られた末に、人間の手から生まれたことを、あなたは知らないのか。　実のところ、あなたの石の神々は斧や鑿で打ち出され、木の神々はナイフやのこぎりで彫られ、銅や鉄の神々は金槌で鍛え上げられた。それ以外にも、数々の侮辱や殴打、冒涜を受けたが、それでもなお、彼らは無感覚のままである。　まことに、それらは不死である。なぜなら、かつて生きたことが一度もないからであり、まるで以前存在したことさえなかったかのように、粉々に砕け散るのだ。　しかし、わが主であり神であるイエス・キリストは、人間としての性質に従い、この世を救い、御自身の神聖な力によって死そのものを滅ぼすために、肉体を死なせることをお選びになった。これを成し遂げられた後、御自身は三日目に復活され、永遠の命のために御自身を私たちに与えてくださった。

ディオクレティアヌスは、聖人のこの自由で大胆な演説を聞いて激しく怒り、彼を裸のまま車輪に縛り付け、車輪を回転させ、鉄の棒で聖人を打ちつけるよう命じた。 車輪が回転する中、 聖人が上にあるときは棒で殴られ、下にあるときは、わざと狭く仕組まれた空間で鋭い杭によって激しく苛まれ、その結果、骨が砕け、最初の拷問の後に再生した肉体が剥がれ落ちていった。何時間も拷問

を受け続けたキリストの殉教者は、次のように祈った。　「主イエス・キリストよ！　私を助け、私の苦しみを和らげ、激しい痛みを取り除いてください。私はあなたを信頼して、自ら傷を受けることを選んだのです。かつてあなたの聖使徒パウロを助けたように、私を助けてください。そして、ひどく傷ついた私の肉体を憐れんでください！　私は、あなたの聖なる御名の栄光と告白のため、またあなたのために大きな苦しみを受け入れるために、無傷で健やかでありたいと願っております。それは、不義な者たちを恥じさせ、その名誉を傷つけるためです。あなたの御名のために私を強めてください。私は、命の与え主であるあなたに希望を置いているのです！」

聖人がこのように祈っている間、車輪は動かなくなり、それを回していた者たちは疲れ果てて力尽きてしまいました。そして聖人は、目に見えない御手によって縛りから解かれ、再び全身が無傷で健やかな状態に戻りました。そこに集まっていた多くの人々は、これを見て驚きながら叫びました。

「キリストの神は偉大なり！」

そして、キリストのぶどうの木である聖クリメントは、自らの苦難の行いから多くのぶどうの房が実ることを霊によって悟り、大声で神に賛美を捧げ、こう叫んだ。　「天の父なる神よ、あなたが、私たちのために苦しみ、私たちの贖いのために尊い御血を流された御独り子のために、この偉大な都で私が苦しみを受けるにふさわしい者と認めてくださったことを感謝します。その御独り子は、ここで聖ペトロが宣教し、　パウロが宣べ伝え、私と同じ名を持つクレメントが賛美し、またオニシモもまたその信仰を告白した方――　（ここでは、聖使徒ペトロとパウロ、そして七十人の使徒のうち、ローマ教皇クレメンス（記念日は11月25日）とオニシモス（記念日は2月15日）を指しています）。　彼らは主のために苦難を受け、死に至ったが、今や天において栄光を受け、地上の多くの人々から崇敬されており、まもなくさらに多くの人々によって、地上の王たちよりも高く称えられることになるだろう。忠実な王たち自身も、彼らにひれ伏すことになるだろう」。

聖人はこう語り、偶像崇拝が闇のように消え去り、キリストの信仰が太陽のように輝き、全宇宙を照らす来るべき時を告げていた。聖人のこの言葉は、迫害者ディオクレティアヌスの心を炎のように焼き尽くし、彼の中にさらに大きな怒りを掻き立てた。　神の力によってなされた奇跡には全く目もくれず、憎悪に目がくらんだ彼は、拷問の残虐さをさらに激化させた。彼は、聖人の口を太い鉄の棒で打ち、歯を砕くよう命じた。　しかし聖人は、この拷問の最中も、家来たちが黙るよう命じて口を封じようとしたにもかかわらず、語り続け、拷問者を苛立たせ続けた。　しかし、強く打てば打つほど澄んだ音を響かせる銅のように、キリストの殉教者は、鉄で口や歯を砕かれ、話すことを禁じられれば禁じられるほど、神の栄光となり、高慢な拷問者を恥じ入らせる言葉を、より力強く叫び続けた。　ついにディオクレティアヌス自身も怒りに疲れ果て、憔悴すると、殉教者を鉄の鎖で縛り、民衆の牢獄に投獄するよう命じた。

聖人が牢獄に閉じ込められていると、夕方になって大勢の人々が彼の元を訪れた。処刑の際、広場にいて聖人の勇気を目の当たりにした、男性や分別ある女性たち、そして子供たちであった。彼らは一斉に聖人の聖なる足元にひれ伏し、聖人から洗礼を授けてくれるよう懇願した。　聖人は、これほど厳しい迫害の中でも、神の証し人の数が増え続けていることを神に感謝した。　聖人は直ちに、彼らにキリストへの聖なる信仰を教え始め、老若男女を問わず全員に洗礼を授けた。というのも、その牢獄には十分な水があったからである。その際、聖人は喜びに満ちてこう歌った。*「罪が赦され、過ちが覆われる者は幸いである」*（詩編31:1）。真夜中になると、天から大いなる光がこの牢獄を照らし、上を見上げた者たちは皆、稲妻のような衣をまとい、翼を広げて聖なる殉教者の元へと降りてくる美しい若者の姿を見た。　彼に近づくと、その若者は聖クリメントの手に清らかなパンとワインの杯を渡し、たちまち姿を消した。聖クリメントは、それがキリストの御体と御血であることを悟り、慣例通りの祈りを捧げた後、夜が明け始めた頃、新たに洗礼を受けた者たち全員に神の秘跡の聖体拝領を授けた。　その後も信者たちは聖人のもとを訪れ、聖なる洗礼を渇望する多くの人々を連れ

てきた。こうしてキリストの羊の群れは増え続け、牢獄はまるで教会のごとく、神への賛美が捧げられる場所となった。これを見た看守たちは、そのことを王に報告した。　そしてある夜、聖なる集いに多くの信者たちが集まっていたところへ、王の命令により兵士たちがやって来て、全員を捕らえ、屠殺される羊のように町の外へ連れ出した。一人ひとりの首を斬る前に、彼らはこう尋ねた。

「生き延びたいなら、キリストを否定するか？」

しかし、死を恐れた者は一人もいなかった。それどころか、皆、主のために死ぬことを選んだ。こうして、キリストのために数え切れないほどの男女や子供たちが斬首された。　ただ一人の若者が処刑人の手から逃れたが、それは死を恐れたからではなく、真の神のために大きな苦難に耐えたいという願いによるものであった。この若者――後述する人物――の名はアガファンゲルであった。

その後、ディオクレティアヌスは再び聖人を裁判に召喚し、長期間にわたる苛烈な拷問を加えた。まず、服を脱がせて地面に引きずり出し、牛の腱で長く激しく打ち据え、次に吊るし上げ、鉄の爪で削り続け、骨がむき出しになり、全身が削り取られるまで続けた。聖人は拷問者にこう言った。

「あなたがたが削り取っているこの肉体は、母の胎から出てきたものとは異なります。それはすでに、総督ドミティアヌスによって、骨から完全に剥ぎ取られて久しいのです。この新しい肉体こそ、私の創造主であるキリストが私に与えてくださったものです。　そして、あなたがたが私の骨からこの肉を削り取ろうとしているが、私は私のキリストを信じている。主は御自身の全能によって、再び私を同じ肉体に包んでくださるだろう。実際、陶工にとって粘土が不足することなどあるだろうか？　それどころか、彼には材料が豊かにあるのではないだろうか？

その後、拷問官はろうそくで彼の脇腹を焼くよう命じたが、聖人は「最も甘美なるイエス」のために、すべてを喜びをもって耐え忍んだ。ディオクレティアヌスは、殉教者の忍耐と勇気に驚き、周囲の人々にこう言った。

「私は多くの忌まわしいキリスト教徒を拷問してきたが、これほど不屈な者はまだ一人も見たことがない。今、この男をニコミディアのマクシミアヌスの元へ、かつてないほど新奇で、前代未聞の物として送ろう。彼にも、この肉体が苦痛に屈しない不屈の精神に驚かせよう！彼もまた、これほど精神が堅固で、肉体が強靭な者には、これまで出会ったことがないだろう。」

彼は聖人を縛るよう命じ、船に乗せて、別の王マクシミアヌスのいるニコミディアへ送るよう指示した[1381]。その際、聖クリメントがローマで彼から、そしてそれ以前にアンキラでドミティアヌスから受けたすべての苦難について、マクシミアヌスに手紙を書いた。　聖人が船に乗り込もうとした時、前述のアガファンゲル――夜のうちに、城の外で剣をもってキリストの羊の群れを殺害していた兵士たちの手から逃れた者――が、彼より先に人知れず船に乗り込み、聖クリメントを待っていた。　聖人が船内に案内されると、彼は聖人の足元にひれ伏し、自分が聖人によって洗礼を受けた者であることを明かした後、信者たちの死や自身の逃亡についてすべてを語り、主キリストのためにあらゆる苦難を共に耐え、共に死ぬために聖人のもとに来たのだと説明した。　聖クリメントは、祝福されたアガファンゲルのキリスト・神に対する熱意と愛を見て喜び、彼の到来そのものを、あたかも神の御使の到来であるかのように受け止めた。　彼は万物の主なる神に感謝を捧げ、若き青年が最後まで耐え抜き、殉教の冠にふさわしい者となるよう、神に勇気と力を与えてくださるよう、強めと助けを懇願した。

航海の最中、聖人たちは昼夜を問わず祈りに専念し、一切食事を摂らなかった。聖クリメントはこれを全く気にも留めず、こう語った。

[1381] マクシミアヌス2世ガレリウスは、305年までディオクレティアヌス帝の娘婿兼共同統治者であり、その後311年まで単独で統治した。

「私の心にはパン、すなわちイエス・キリストご自身がいます。それゆえ、私は飢えることはありません。私には生ける水、すなわちキリストの恵みがあります。それゆえ、私は永遠に渇くことはありません。」

兵士たちは、クリメントとアガファンゲルが何日も食べも飲まもしていないのを見て、彼らを憐れみ、パンと水を差し出した。　彼らはその善行を称えたが、食べ物や飲み物は受け取らず、万物の摂理者である神が彼らを養ってくださると語った。主の御使いが夜、天から食物をもたらし、彼らを力づけてくれたのである。 長い航海の末、彼らはロードス島に上陸した[1382] 。多くの者が食料を買いに船から降りて街へ向かう中、聖人たちは残った兵士たちに、キリスト教の教会へ行き、神の秘跡、すなわち命を与えるキリストの御体と御血を拝領させてほしいと懇願した。その日は日曜日であったからである。　この島の司教である敬虔なフォティンは、聖クリメントの話を聞き、聖職者たちや他のキリスト教徒たちを連れてやって来て、軍隊の長に、クリメントを鎖から解き放ち、弟子であるアガファンゲルと共に、しばらくの間彼らのもとへ行くことを許可するよう懇願した。彼は、遅滞なく彼らを再び船へ連れ戻すことを約束した。　聖クリメントは司教の願いにより解放された。当時、この島にはキリスト教徒が少なかったため、聖人たちは小さな教会に案内された。司教が　に神の福音書の朗読を命じると、聖職者は書物を開き、最初に目に入った次の言葉を読み始めた。　*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*（マタイ10:28）。これを聞いて、聖人たちはため息をつきながら天を仰ぎ、教会に立っていたキリスト教徒たちは彼らを見つめながら泣き出し、やがて教会全体が嘆きと叫び声で満たされた。　そこで司教は、聖クレメントに神聖な典礼を執り行うよう懇願した。聖人が典礼を執り行っている間、一部の聖職者や、それにふさわしい一般の人々の中には、ディスコス（聖体盤）の上に、激しく赤く燃え盛る大きな炭が見える者もいた。そこから言葉に尽くせないほどの輝きが放たれ、聖人と参列者たちを照らし出し、祭壇の上には空中に浮かぶ聖なる天使たちの姿が見えた。この奇跡を目撃した者たちは地面にひれ伏し、聖人を見つめることさえできなかった。礼拝が終わると、フォティン司教は聖人たちや他のキリスト教徒たちを自宅に招き、もてなしを振る舞った。　信者だけでなく異教徒からも、多くの病人が聖クリメントのもとに連れて来られたり、運ばれたりした。キリストの殉教者は、祈りと十字架の印によって彼ら全員を癒した。そのため、多くの異教徒が、キリストこそが真の神であると公然と告白し始め、洗礼を求めた。　兵士たちは、大勢の民衆が聖クリメントのもとに集まってくるのを見て、民衆が囚人を奪い取り、自分たちに襲いかかるのではないかと恐れた。そこで、聖人を連行して船へと連れて行き、再び彼に足枷をはめた。信者たちは、彼と別れたくなく、涙と嗚咽を流しながら見送った。　ついに、聖人と別れを告げ、クレメントの足枷に口づけをした後、兵士たちが「一刻も早くその場を離れよ」と促したため、彼らは引き返した。順風の助けを借りてエーゲ海を渡り、ニコメディアにたどり着いた。

ニコメディアに住んでいた不信心な王マクシミアヌスは、ディオクレティアヌスからの手紙を受け取り、殉教者を見たとき、その並外れた忍耐力と、いかなる拷問にも屈しない不屈の勇気に驚嘆した。

しかし、彼自身は恥をかくことを恐れて拷問を行うことを躊躇し、そのため、拷問を行うよう軍司令官アグリッピヌスに彼を引き渡した。そして、自身は他の国政に多忙であるかのようなふりをした。アグリッピヌスは聖人たちを裁判に呼び出し、クレメントに向かってこう尋ねた。

「お前がクリメントか？」

「私はキリストの僕です」と殉教者は答えた。

総督は、こう言いながら、彼の口を拳で殴るよう命じた。

[1382] ロードス島は、エーゲ海（群島）の南西部に位置する大きな島で、小アジアのカリア地方の南岸から、ごく狭い海峡を隔ててのみ離れている。

「なぜ、王のしもべとは呼ばず、キリストのしもべと呼ぶのか？」

殴打を受けながらも、聖人はこう答えた。

「あなた方の王たちもまた、キリストの僕であるべきです。そうすれば、彼らの統治は平和なものとなり、すべての民は私のキリストの御力によって服従することになるでしょう。」

すると、総督は聖アガファンゲルを見つめ、こう尋ねた。

「お前は一体何者だ？　ディオクレティアヌスの手紙には、お前のことなど何も書かれていない。」

アガファンゲルは天を仰ぎ見て、こう言った。

「私はキリスト教徒だ。この神の僕クレメントを通じて、キリスト教徒という名にふさわしい者とされたのだ。」

これに対し、総督は言った。

「つまり、彼が君を迷わせ、君を待ち受ける残酷な死の原因だということか。」

その後、彼は聖クレメンテを裸のまま吊るし、かみそりでその体を切り刻むよう命じ、同じく裸の聖アガファンゲルには、鞭で激しく打ちつけるよう命じた。　聖クリメントは拷問の最中、神に祈り、アガファンゲルの苦しみを支えてくださるよう願った。これらの拷問の後、総督は二人の殉教者を牢獄に投じるよう命じた。　牢獄には、様々な罪で有罪判決を受けた多くの囚人が収容されていた。彼らは、聖人たちが神に熱心に祈る姿を見、神の天使たちがキリストの僕たちを訪れて慰めているのを目の当たりにし、心を打たれて彼らの足元にひれ伏し、自分たちを彼らの神のもとへ導いてくれるよう懇願した。　神の御心により、そこには洗礼に十分な水があった。聖クリメントは彼らにキリスト教の信仰を教え、全員に洗礼を授けた後、祈りによって牢獄の扉を開き、彼らを解放してこう言った。

「出て行きなさい、子らよ。不義な者たちの手から救われなさい。主イエス・キリストがあなた方を守ってくださいますように！」

翌朝、総督アグリッピンは囚人たちが解放されたことを知ると、聖人に対して激しく怒り、高い土壇を設けて、彼らを野獣の餌食に差し出した。しかし、野獣たちは聖人たちに害を及ぼすことはなく、それどころか、飼い犬が主人に対してそうするように、彼らに親しみを示した。　そこで拷問官は、赤熱した鉄の串で殉教者たちの両手の指を、肘まで回転させるよう命じた。これを見た民衆は、そのような拷問に耐えられず、脅しを交えて総督に対し、無実の人々を解放するよう要求した。しかし、　、総督はさらに激怒し、別の先の尖った灼熱の器具で、彼らの両腕を肩まで回転させるよう命じた。すると、憤慨した民衆は石を拾い上げ、総督に向かって投げつけ、大声で叫んだ。

「キリストの神は偉大なり！」

総督は民衆の動揺と不満を恐れ、逃げ出して自宅に身を隠したが、聖なる殉教者たちは何の妨げもなく、ピラミスと呼ばれる山へと向かった。そこは異教徒たちが普段、自分たちの神々に生贄を捧げていた場所であった。そこで彼らは異教の神殿に入り、祈りによって偶像を打ち砕き、そこから悪霊を追い出した。　数日後、総督は聖人たちの居場所を突き止め、祭司たちや自身の軍勢を率いてそこへ向かった。そこで彼は、太い棒で聖なる殉教者たちを激しく殴打し、彼らの骨を砕いた後、それぞれを石と共に袋に詰め、山から海へ投げ込むよう命じた。　聖人たちは、袋に入ったまま山の急斜面を転がり落ち、海に落ち、深い淵で溺死した。誰もがすでに彼らを死んだものと見なしていた。信者たちの中には、聖人たちが海に投げ込まれたことを知ると、普段死体を打ち上げる海が、聖なる殉教者たちの遺体も打ち上げてくれることを期待して、海岸を歩き回った者もいた。　やがて彼らは、海に浮かんでいる二つの袋に気づき、舟に乗ってそのそばまで近づいた。袋の紐を解くと、聖人たちは全く無傷であることが分かり、彼らは神を賛美した。　その夜、聖人たちは岸辺で休息をとった。神の天使たちが彼らを訪れ、食物を与えて力を与えた。朝になると、聖クリメントと聖アガファンゲルは町へ行き、広場の真ん中に立って人々に神の偉大さを語り、その後、天に向かって両手を広げ

、次のように祈り始めた。　「主イエス・キリストよ、あなたを信頼する私たちを見捨てず、激しい苦しみから救い出し、敵に私たちを嘲笑させることなく、むしろ私たちを通してあなたの聖なる御名を栄光に輝かせてくださったことを、感謝いたします。」

そこには二人の盲人がいた。さらに、片腕のない者と、麻痺した者も一人ずついた。聖人たちは、彼らに手を置くことで即座に癒やした。これを見た民衆は、病人や悪霊に取りつかれた者たちを聖人たちのところへ連れてくるようになった。彼らは皆、殉教者たちの祈りと手の触れによって癒やされた。　主イエス・キリストの御名は、民衆によって大いなる声で賛美された。これを聞いた総督アグリッピンは恐れをなして、困惑しつつ、起こったすべてのことを王に報告しに行った。　王もまた、海で亡くなったと思われていた聖人たちが生きていることが判明したことに、大いに驚いた。そして、聖クリメントがアンキラの出身であることを知ると、王は彼とその弟子をアンキラへ送り返すよう命じ、こう言った。

「彼を育て、教育したその都市が、彼を引き取り、望むままに処刑せよ。」

その後、彼は聖クリメントについてアンキラの領主クリキウスに書簡を送り、縛られた二人の聖人は兵士たちに連れられてアンキラへと向かった。

聖殉教者クリメントは、故郷の町に入ると、喜びのうちにこう語った。

「神よ、私の謙遜な願いを聞き入れてくださったことを感謝します！キリストよ、私が故郷の町を再び見られるようにしてくださったことを感謝します！」

二人の聖人は、クリキウス公に引き渡された。公は彼らを取り調べた後、拷問を始めた。まず、聖クリメントの脇腹を、激しく熱せられた鉄の板で焼かせ、その後、彼を柱に縛り付けて容赦なく打ち据え、その肉体が塊となって剥がれ落ちるほどであった。　一方、聖アガファンゲルについては、吊るし上げ、鉄の爪で削り取るよう命じた。その際、彼は嘲笑しながら彼らに尋ねた。

「体には痛みを感じないか？」

聖クリメントは使徒の言葉をもって答えた。*「たとえ私たちの外なる人が朽ち果てても、内なる人は日ごとに新しくされるのです」*（IIコリント4:16）。

すると、拷問官は鉄の兜を真っ赤に熱して、聖クリメントの頭に被せるよう命じた。それが行われると、聖人の鼻孔、耳、口から濃い煙が立ち上り始めた。　聖クレメントは、言葉に尽くせないほどの苦痛に耐えながら、主に向かってこう叫びました。「尽きることのない泉よ、生ける水よ、救いの雨よ！　あなたの恵みの露で私を癒してください。あなたは私たちを水の中から救い出してくださいました。どうか、あなたのしもべたちを火からも救い出してください。」

聖人がそう祈っている間にも、彼の頭にかぶせられていた鉄の兜はたちまち冷たくなった。これを見たクリキイ公は恐怖に駆られ、彼らをどうすべきか途方に暮れた末、彼らを牢獄に送り、マクシミアヌス王には、起こった出来事を詳細に記した書簡を送った。　夜になると、クレメンテの義母である聖ソフィアが牢獄を訪れた。彼女は大きな喜びと涙を流しながら彼に口づけをし、キリストのふさわしい殉教者となり、苦難に輝かしい勝利を収めた、自分の名付け子である息子を誇りに思った。　彼女は聖人たちの傷や縄に口づけをし、その後、彼らの血を洗い流し、拭き取り、傷口を清潔な布で包んだ。その際、彼女は聖クリメントに、どのように、どこで、誰から苦しめられたのかを詳しく尋ねた。彼女は彼らに食物も持ち込み、彼らの力を回復させた。その後も毎日、彼女は訪れて、キリストの囚人たちに奉仕した。

しばらくして、王からクリキウス公に対し、聖なる殉教者たちをアミシア[1383]と呼ばれる別の都市へ、ドミティウスという名の、より残酷な拷問者である王の総督のもとへ送るよう命じる勅令が下った。　至福のソフィアは、飢饉の際に聖クリメントによって彼女の家に集められ、彼女によって育てられ、その後まるで実の子供たちのようになった子供たちと共に、聖なる殉教者たちを遠くまで

[1383] ポンテ地方、小アジア北部に位置する都市。

見送った。そのうちの何人かは、聖なる殉教者たちと別れたくなく、心からの愛で彼らに引き寄せられ、後を追った。　道中、彼らは皇帝の命令により兵士たちに刺し殺され、そのことは直ちに皇帝に報告された。アミシアでは、聖なる殉教者たちは金曜日の午後2時、ドミティウスによって沸騰する石灰の中に投げ込まれたが、土曜日の午後3時には、健在であることが判明した。 これを見た二人の兵士はキリストを信じ、公に自分たちがキリスト教徒であることを宣言した。そのため、その同じ土曜日、9月7日に、不信心者たちによって十字架にかけられた。　彼らの名はフェンゴンとエウカルピオスである。また、聖クリメントと聖アガファンゲルに対しては、拷問官が肩の皮を剥ぎ取り、長い間棒で打つよう命じた。その後、彼は彼らを赤熱した鉄の床に寝かせ、硫黄と樹脂を注ぎかけて激しく焼くよう命じた。　しかし、聖人たちは、まるで柔らかな王の寝台の上にいるかのように、何の苦痛も感じることなく安らかに横たわり、甘い眠りにつくと、夢の中で主キリストと、その数多くの聖なる天使たちを見ました。主は天上から彼らのところへ降りてきて、こう言われました。

「恐れるな。わたしがあなたたちと共にある。」

目を覚ますと、彼らは喜びながら互いにこの幻について語り合った。聖人たちは、赤熱した鉄の床の上で長い間拷問を受けた。しかし、ドミティアヌスが火が彼らに全く害を及ぼしていないのを見ると、どうすべきか途方に暮れた。彼は彼らを降ろし、牢獄へ連行するよう命じた。　聖人たちはこの牢獄に長く留まった後、当時タルススに滞在していたドミティアヌス帝のもとへ再び送還された。そこへ向かう途中、彼らは渇きに苦しみ、とりわけ彼らを護送する兵士たちは疲れ果てていた。というのも、その土地は荒涼としていて水が一滴もなかったからである。　聖人たちは祈りを捧げると、乾いた大地から生ける水の泉を湧き出させた。皆が水を飲み、喉の渇きを癒やした。兵士たちは、旅に必要なだけの水を携えて進んだ。　この旅の途中、聖クリメントは、神であるキリストに熱心に祈り、神が彼に、生涯を通じて御名のゆえに苦難に耐えることを許してくださるよう願った。すると彼は神から啓示を受け、すでに経過した年数に加え、殉教の業を完全に成し遂げるまで、絶え間ない苦しみの中で二十八年を生きなければならないと告げられた。　聖人はこれを大いに喜んだ。なぜなら、彼は自分の神であるキリストへの言い表せないほどの愛に、全身全霊を捧げていたからである。彼は、キリストのために長い間激しい拷問に耐え、生涯のあらゆる日に何度も死を迎えることを望んでいた。

聖人たちがマクシミアヌス王の前に引き出されたとき、王は、これほど多くの拷問を受けたにもかかわらず、彼らが今なお生きており、屈服していないことに大いに驚いた。　再び尋問しても彼らが屈服しないことを知ると、かつてバビロンのネブカドネツァルがそうしたように、火の炉を燃やすよう命じ、キリストの戦士たちをその中に投げ込んだ。聖人たちはこの炉の中で昼夜を過ごしたが、生き生きとして無傷であった。この奇跡を目撃し、民衆の多くがキリストを信じるようになった。その後、聖人たちは牢獄に投じられ、そこで四年間を過ごした。不義な王は、聖人たちが長期にわたる監禁に疲れ、牢獄で多くの苦難に耐えた末、やがて異教の信仰に帰依するだろうと期待していた。

4年間の投獄期間を終えた後、王は彼らを、いわば王の裁きに値しない者と見なしつつも、一方で、彼らの行動そのものが示した不屈の精神の偉大さに恥じ入ったため、サケルドンという名の極めて残忍な総督に彼らを委ねた。この総督は、数え切れないほどのキリスト教徒を、残酷な拷問と恐ろしい死によって滅ぼした。　彼は、聖なる囚人たちに異教の神々への崇拝を強要しなければならなかった。聖殉教者クレメントとアガファンゲルを、お世辞の言葉でも脅しでも説得できなかった彼は、彼らを裸のまま木に縛り付け、激しく殴打し、その肉体を激しく削り取るよう命じた。その結果、聖人たちの肩や背中は骨がむき出しになるほど完全に削り取られてしまった。　すでにむき出しの骨や関節が見え、肉はすべて剥がれ落ちていました。拷問官は、彼らがすぐに死ぬだろうと考え、彼らを解き放ち、牢獄へ運ぶよう命じました。　しかし、聖人たちが自分の足で立ち、元気そうであり、自ら牢屋へと歩いていくのを見て、彼は深く恥じ入り、怒りと恥のあまり体が衰弱してしまった。彼はかろうじて息をしている状態だったため、家来たちに抱えられて裁判所から自宅へと運ばれた。

牢獄へ向かう聖人たちの体からは、　血と共に肉が断片ごとに剥がれ落ちていた。信者たちは道中でその肉片を砂と共に集め、最も偉大で貴重な宝物として大切に保管した。王がサケルドンの体の衰弱を知ると、笑いながらこう言った。

「ほら、多くのキリスト教徒を打ち負かした名高いサケルドンが、たった二人の手に敗れたではないか！」

その時、マクシムという名の公爵が王の前に立っていた。彼は王に、聖なる殉教者たちを自分の手に委ねるよう懇願し、彼らを犠牲に追い込むか、あるいは拷問で死に至らしめると豪語した。王がこれを許可すると、彼は聖人たちを自分のもとに連れて行ったが、すぐに拷問を始めることはせず、まず何日にもわたって彼らと親しく語り合い、神々に拝むよう説得した。そしてある日、彼らを呼び寄せてこう言った。

「喜べ、諸君。不死の神々は、あなた方を実の息子のように愛し、あなた方のことを気にかけている。神々は夢の中で何度もあなた方のことを私に語り、私の問いかけに対して、あなた方が神々に帰依するだろうとはっきりと告げた。だからこそ、神々はあなた方を滅ぼさないよう、あなた方を拷問する者たちを制止したのだ。神々は、もうすぐ訪れるであろうあなた方の帰依を待っているのだ。」 つい昨夜、神々の中でも偉大なるバッカス[1384]が私の前に現れ、「あの二人の男を私のところへ連れて来い」と告げた。さあ、諸君、バッカスの神殿は開かれ、祭壇は飾り立てられ、供え物も用意されている。さあ、来て、彼に供え物を捧げよ。

聖者たちは彼にこう答えた。

「恥知らずな嘘つきめ、裁判官よ！　あなたの神々は、周知の通り、口をきかない。夢の中でも、彼らは何も語ることができないのだ。そもそも、どのバッカスがお前に話しかけたというのか？ここにはバッカスの偶像が二つある。一つは石製、もう一つは青銅製だ。　もし石のバクスが話したのなら、我々は彼にこう予言しよう。まもなく、彼が粉々に砕かれる時が来るだろう。あるいは、他の石と共に、石で築かれる壁に埋め込まれるだろう。あるいは、ついに火の中に投げ込まれ、砂と化すだろう。　もし銅のバッカスがあなたに語りかけたのなら、まもなく彼は水差しやその他の取るに足らない器に作り変えられるだろう。

これらの言葉を聞くに耐えられなかったマクシムスは、彼らを残酷に拷問し始めた。その拷問とは、次のようなものであった。彼は、串、ナイフ、釘、三叉の矛、その他思いつく限りの極めて鋭利な鉄製の道具を、先端を上向きにし、互いに至近距離で地面に突き刺すよう命じた。　これらの刃先の高さは、足の長さ1フィートに相当した。彼は、聖クリメントを裸のまま背中を下にし、顔を上に向けて刃先に寝かせ、太い棒で殴打するよう命じ、聖アガファンゲルには、溶かした鉛を頭から注ぐよう命じた。　聖クリメントが胸や頭から足先まで全身を棒で打たれている間、彼の全身は下からそれらの鋭い刃物によって突き刺され、切り刻まれていった。　ある鉄の刃は心臓まで、あるものは胸まで、あるものは胃の内部まで突き刺さり、またあるものはついに体を貫通し、上の方からはっきりと見えた。長い拷問の末、拷問者が殉教者をその場所から降ろすよう命じたとき、わずか数人の男たちが大変な苦労をしてようやく彼をそこから解放することができた。　マクシムスは、これほどまでに偉大な忍耐に戸惑い、驚嘆した。とりわけ、いかなる拷問も殉教者たちを神々へと回心させることも、彼らを死に至らしめることもできなかったからである。至高の神ご自身が、御自身の聖なる御名の偉大な栄光のため、また不信心者たちを恥じ入らせるために、彼らの魂が肉体から離れることのないよう守っておられたのである。聖人たちは再び牢獄に投げ込まれた。

このことを知ったマクシミアヌス王は、聖人たちを永久の投獄に処し、そこで彼らは自然死を迎えることとなった。　その時、アフロディシウスという名の、ペルシャ出身の貴族がいた。彼はキ

[1384] バッカス（ギリシャ人にとってはディオニュソス）は、古代ギリシャ人やローマ人によって、ブドウとワイン造りの神、人々の心を喜ばせ、悲しみや悩みを吹き飛ばすワインの恵みの神として崇められていた。

リスト教徒に対するあらゆる最も残酷な拷問を考案することに長けており、これらの殉教者たちを連れ去り、彼らを滅ぼすことを望んで、王に許可を求めた。　許可を得ると、彼は彼らを自分の家へ連れて行き、豪華な食事を振る舞って、彼らをもてなそうとした。彼は彼らに、食べて飲んで、自分と一緒に楽しもうと説得した。しかし、彼らはこう答えた。

「私たちは天の食物と飲み物を摂っています。それらを口にする者は、決して飢えも渇きも知らず、永遠に喜びのうちに過ごすでしょう。」

アフロディシウスは、彼らの拒絶を自分への侮辱と受け止め、こう言った。

「明日、お前たちが求めている別の夕食を用意してやる――それは、最も残酷な死だ。」

朝になると、アフロディシウスは二つの石臼を持ってくるよう命じ、それを聖人たちの首に掛け、彼らを侮辱するために街中を引き回した。　聖人たちが街中を引き回されている間、民衆の中には　狂った者たちが多く、石を手に取って引き回される者たちを打ちのめしたが、他の人々は、彼らのこれほど長く激しい苦しみを見て驚き、彼らを不死身だと考え、キリストに帰依した。　その後、聖人たちは王の命令により、長期の監禁で衰弱して死ぬだろうという考えのもと、終身刑として牢獄に投獄された。　聖人たちは、28年に及ぶ苦難の終わりが近づくまで、長年にわたり牢獄の鎖に縛られて過ごした。このことについては、聖クリメントがタルスにいた頃、王のもとへ連行される際に、神からの啓示によってすでに告げられていた。　すでに、キリストの聖なる殉教者たちの多くは、その苦難の闘いを始め、その生涯を終えていたが、この二人の殉教者は殉教の道を歩み続け、その偉業を成し遂げた。

マクシミアヌス帝の後を継いで、マクシミン[1385] が即位した。この頃、多くのキリスト教徒の血が容赦なく流された。長きにわたり牢獄に閉じ込められていたクリメントとアガファンゲルの監視に飽き飽きした獄吏たちは、マクシミン帝のもとへ赴き、こう言った。

「長年にわたり、多くの皇帝や支配者たちによって、最も残酷な拷問の手段を尽くされてもなお、死ななかったこの二人の囚人について、どうお命じになりますか？」　彼らは今もなお生きており、鎖につながれたままである。生活に必要な世話や配慮は一切受けていないにもかかわらず、彼らは健康で、顔色も明るい。我々は、彼らが不死身であると考えている。

これに対し、マクシミン王はまず、自らの神々が、あの囚人たちからこの世の命さえ奪うことができなかったことを理由に、多くの侮辱的な言葉で神々を罵倒した。その後、彼らについて、誰であり、どこから来たのかと尋ねた。　彼らがガラティアのアンキラという町出身であることを知ると、王は直ちに彼らを、当時アンキラを統治していたルキオス公のもとへ送り返すよう命じた。聖人たちはこれを聞いて大いに喜んだ。というのも、聖クリメントは、故郷の町で修道生活の幕を閉じたいと強く願っていたからである。　彼はこのことを主キリストに祈り求め、願いを叶えていただいた。聖人たちがアンキラの町に連行され、ルキオス総督の尋問に引き出されたとき、総督はすぐには尋問を始めず、まず彼らを過酷な監禁状態に置いた。　その際、彼は聖徒たちの足を枷に閉じ込め、首や手、全身に鉄の足枷をはめさせ、さらに重い石をぶら下げるよう命じた。そのため、聖徒たちは体を動かすことも、足を伸ばすこともできなかった。翌日、彼は聖殉教者アガファンゲルを一人、裁判に連れてくるよう命じた。　当初、彼は聖人を長い間、甘い言葉で誘惑し、自らの異端へと引き込もうと試みた。しかし、その信念の揺るぎなさを目の当たりにすると、拷問を始めた。火で熱した鉄の輪で耳を貫き、燃えるろうそくで肋骨を焼き、ついには剣でその聖なる首を切り落とした。　殉教者の尊い遺体は、前述の、クレメントの母と呼ばれる至福のソフィアが受け取り、清らかな布で包み、香油を塗って、小さなキリスト教の教会があった洞窟に安置した。　不信心者たちによる激しい迫害のため、信者たちは自分たちの教会を持つことができなかったが、洞窟の中に小さな教会を作り、そこ

[1385] マクシミン・ダザ皇帝は、305年から313年までローマ帝国の東半分を統治し、当初は311年に死去したマクシミアン2世ガレリウスと共同統治を行っていた。

で神への礼拝を行っていた。　このように、聖殉教者アガファンゲルは、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの二人の皇帝、そしてアグリッピヌス、クリキア、ドミティア、サケルドン、マクシムス、アフロディシウス、ルキウスといった統治者たちという、さまざまな迫害者たちによって苦しめられた。彼は11月5日に殉教の業を全うした。

聖クリメントは、弟子であり同志である聖殉教者アガファンゲルの死を知り、言葉に尽くせないほどの喜びに満たされた。なぜなら、彼はアガファンゲルを、自分より先に執り成し人として神のもとへ送り出したからである。　地面にひれ伏し、重く縛られた身でありながら、彼は聖アガファンゲルについて、神が彼に人生の旅路を終えさせ、信仰を守り抜き、あらゆる拷問を勇敢に耐え抜き、天国で栄光に輝く聖なる殉教者たちの列に加えられるよう恵んでくださったことに、神に深い感謝を捧げた。　また、彼は自分自身のためにも祈り、神が彼に最後まで耐え抜き、敵の狡猾な首を打ち砕き、憧れの天の住まいへと勝利のうちに移ることを許してくださるよう願った。

聖アガファンゲルの処刑後、拷問官ルキウスは、毎日、牢獄で聖クリメントを拷問するよう命じた。その拷問は次のようなものであった。鋭い枝が散りばめられた杖で、殉教者の顔や頭を打ち、毎日、聖人の体に百五十の傷を負わせた。 こうして聖人は11月5日から1月5日まで拷問を受けた。日中は聖人の体には深い傷が刻まれ、牢獄全体が彼の血で染まるほどであったが、夜になると、聖なる天使たちを通じて彼に注がれる神の恵みが、その傷を癒やした。　異教徒たちは大いに困惑した。毎日訪れても聖人が健在であるのを見て驚愕し、さらに残酷に彼を殴打した。彼らは聖人の頭と顔を、150回にも及ぶ強烈で深い打撃で傷つけた。 主の顕現の祝日が近づくと、王からアンキラの街に、王の元へ召還されたルキアに代わって、アレクサンドルという名の別の総督が到着した。　夜が更け、主の顕現の祝日に伴う徹夜祈祷が行われるはずの時刻になると、聖ソフィアはキリスト教徒たち、そして自分の使用人や、彼女が育てた少年少女たちを呼び集め、彼らと共に聖クレメントのいる牢獄へと向かった。神は、御自身を信じる者たちの意図を助けてくださり、看守たちに深い眠りをもたらされた。　ただ一人の看守だけが眠っていませんでしたが、彼は秘密のキリスト教徒であり、やって来た者たちのために牢の扉を開けました。信者たちは、英知に満ちたソフィアと共に中に入り、聖人を鎖から解き放ち、洞窟にある教会へと連れて行きました。そこで彼らは喜びのうちに祝宴を催し、神に感謝を捧げました。　日が明けると、聖クリメントは神聖な典礼を執り行い、皆は牧者の聖なる御手から聖なる秘跡を授かった。神の司教は集まった人々に広範な説教を行い、その中で自身の死を予言した。彼はまもなく殺されると予言し、次のような言葉で彼らを慰めた。

「恐れるな、兄弟たちよ。あなたがたのうち、誰も滅びたり、傷ついたりすることはない。あなたがたのうち、誰一人として狼にさらされることはない。ただ私と二人の聖職者だけが、私たちのために御自身の命を捧げられた偉大なる大司教キリストのために、自らの命を捧げるだけである。」

彼はまた、迫害がまもなく終わり、　偶像崇拝が消え去り、聖なる信仰が栄えるだろうと予言した。なぜなら、天の王は地上に、聖なる洗礼によって自ら啓蒙され、ローマ帝国の全領土をも啓蒙し、新たなローマを築き上げ、その後、至る所に敬虔さが輝き渡るであろう王を立てられるからである。　このことを自分の信徒たちに予言して、聖殉教者クリメントは聴衆の心を喜ばせた。その後、彼は「母」と呼ばれるソフィアの家へ向かった。ソフィアは教会にいた人々全員を自宅に招き入れ、彼らに盛大な饗宴を振る舞った。 聖クリメントは、1月23日まで彼女の家に滞在した。その間、総督アレクサンドロスは、民衆や統治に関する様々な事案を審議していた。　ついに、キリスト教の司教クレメントが夜間に牢獄から脱出したという報告が彼のもとに届いた。そこで、彼を捜索し始めた。日曜日になると、神の司教である聖クレメントは、洞窟教会へ赴き、神聖な典礼を執り行うために向かった。不信心者たちはこのことを知り、総督に知らせた。　総督は直ちに自ら兵士たちを率いて出向き、教会の内部に入ると、聖クリメントが神の祭壇の前に立ち、血なき犠牲を捧げているところを発見した。総督は兵士の一人に剣を抜いて、司教の首の後ろを斬るよう命じた。　兵士が剣を振り下

ろすと、聖殉教者クリメントの首は神の祭壇と、用意されていた聖体（[1386] ）の上に落ちた。こうして、その血によって、無血の犠牲と聖なる祭壇全体が染まった。信者たちは皆、大きな恐怖と戦慄に襲われた。彼らは自分たちも死を覚悟していたが、　しかし、自分たちのことを嘆いたのではなく、牧者である聖クリメントのことを嘆き、それゆえ大声で泣き叫び始めた。総督は集まった者たちに何の危害も加えずに直ちにその場を去り、聖クリメントと共に祭壇内で斬り殺されたのは二人の聖職者だけだった。彼らの名はクリストフォロスとハリトンであり、二人とも助祭であった。　至福のソフィアは、涙と喜びのうちに、愛する養子――実のところ、霊的な父であり牧者でもあった――の尊い遺体を埋葬の準備をした。彼女は、この地上で彼を失ったことを嘆きつつも、彼が苦難の道を熱心に歩み抜き、主キリストのもとへ旅立ったことを喜んだ。　聖人は、ソフィアとそこにいたすべてのキリスト教徒たちの献身的な尽力により、1月23日、聖殉教者アガファンゲルの棺の近くにある洞窟教会で、二人の助祭と共に栄誉をもって埋葬された。

こうして、聖殉教者クリメントは、28年間にわたりキリストのために数え切れないほどの言葉に尽くせない苦しみを受けながら、その長い苦難の闘いを終えたのである。　ギリシャの歴史家ニキフォロス・[1387] は、彼について次のように述べている。「世界の創造以来、神のために何らかの拷問――すなわち、火、鉄、石、木への吊るし――に苦しんだ者たち、また、サーカスで猛獣と戦わされた者たち、あるいは長期間の足枷による監禁で拷問された者たち、あるいは水、　地中や空中での死、あるいは激しい寒さによって命を落とした者、　灼熱によって命を落とした者、あるいはその他のあらゆる種類の拷問や処刑によって命を奪われた者――そうしたすべての殉教者たちを、聖クリメントとアガファンゲルは自らの苦難によって遥かに凌駕した。　彼は様々な都市で、11人の迫害者たちによって苦しめられた。アンキラではガラティア総督ドミティアヌスから、ローマではディオクレティアヌス帝から、ニコメディアでは軍司令官アグリッピヌスから、再びアンキラではクリキア公から；　アミシアでは皇帝の総督ドミティウスから、タルスでは皇帝マクシミアヌスから、同地では総督サケルドンから、続いて公爵マクシムスと貴族アフロディシウスから、再びアンキラでは公爵ルキウスから、そして最後に軍司令官アレクサンドロスから迫害を受けた。　当時のすべての迫害者たちは、彼を互いに送り合っていた。それは、かつて見られたことのない奇跡のようであった。なぜなら、これほど長い年月、これほど多種多様な残酷な拷問にさらされても、彼は弟子アガファンゲルと共に、打ち負かされることも、揺らぐこともなかったからである」。　御自身の聖なる御名の栄光のために、神、すなわち私たちの主イエス・キリストは彼を強められました。父と聖霊と共に、あらゆる被造物から栄光と誉れと礼拝を受けるにふさわしい方です。アーメン。

トロパリオ、第4調：

敬虔のぶどうの木、苦難の茎、最も神聖な花、神から与えられた実よ、あなたは信者たちに、至聖なる、永遠に咲き誇る者として授けられた。しかし、殉教者たちの同情者であり、共同祭司たちの聖なる指導者として、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈り求めてください。

[1386] 聖クリメントは312年1月23日に逝去した。彼の聖遺骨は長い間コンスタンティノープルに安置され、そこには彼の名を冠した教会が2つあった。 ステファン・ノヴゴロデツ（1342年）と修道助祭ゾシマ（1420年）は、コンスタンティノープルのコンスタンティヌス修道院で彼の聖遺物を目撃した。

[1387] ニキフォロス・カリストは、14世紀のギリシャの教会史家である。

コンダク、第4調:

あなたはキリストの尊き枝であり、多くの苦難に耐えた、称賛に値するクリメンテよ、現れ、苦しむ者たちと共に叫ばれた。「汝は、キリストの殉教者たちにとって、輝かしい喜びである。」

聖パウリヌス・ミロスティヴィイ、ノーラ司教の生涯

記念日：1月23日

神の御心に適う者パヴリンは、アクィタニア[1388] の出身であった。世俗の生活において、彼はローマ皇帝のもとで上級元老院議員の一人であった。彼は敬虔な生活を送り、神を畏れていた[1389] 。彼の妻タラシアは、信仰と徳において夫に似ており、同様に敬虔であった。　自分たちの子供がいなかったため、彼らは貧しい孤児たちを引き取り、まるで自分の子供のように世話をし、食事を与え、神を畏れることを教えた。日ごとに彼らはあらゆる美徳において成長し、貧しい人々に惜しみなく施しをした。　ついには、神に喜ばれるために、彼ら自身も貧者となることを望んだ。彼らは広大な財産を売り払い、そのすべてを困窮者に分け与えた後、自ら進んで貧しい人々のよう自発的な貧しさの中で暮らし、神の摂理に希望を託した。　ある時、彼らがすでに極度の貧困に陥っていたところ、物乞いが施しを求めてやって来た。しかし、彼らにはパン一斤以外、何も持っていなかった。聖パウリンは妻に、この最後のパンさえも物乞いに与えるよう勧めた。

「神が私たちを助けてくださる。だから、神のために求めてくる者に与えることを惜しんではならない」と彼は言った。

しかし、タラシアはそれを与えず、自分たちの昼食に何もなかったため、自分たちの必要のためにそのパンを取っておいた。　その時、ある裕福な友人から遣わされた使者が、聖パウリンのもとを訪れた。その友人が海路で大量の食料を送ったが、まさにその食料を積んだ最後の船が、海の波に飲み込まれて沈没し、乗組員全員が命を落としたという知らせだった。これを聞いたパウリンは妻にこう言った。

「ほら、もしあなたが最後のパンを貧しい人に与えていたなら、食料を積んだ最後の船は海で沈むことはなかっただろう。多くの人々のけちさゆえに、神は彼らの財産を滅ぼされるのだ。」

その後、彼らは財産や世俗の名声、そしてこの世のあらゆる利害関係を捨て去り、ローマを離れてカンパニア地方[1390] へと向かった。そこには、自分たちの生計を立てるために、彼らが所有していたささやかな荘園が残されていたからである。　彼らは、聖殉教者フェリツァータの墓の近くにある、ノロアと呼ばれる町[1391] に定住し、世から身を隠してそこで主に仕えた。しかし、パヴリーナの美徳は長く隠しておくことはできなかった。　その美徳ゆえに、彼はやむを得ずノラ教会の司教座に就かされ、本意に反して司教の位を受け入れた[1392] 。彼は、*「主人が自分のしもべたちの長として立てた」*（ルカ12:42）[1393] 、忠実で賢明な家政管理者として、聖なる心で、たゆまず自分の羊の群れを導いた。　彼は、教えや訓戒によって羊たちを霊的な糧で養い、罪人を悔い改めへと導き、一人ひとりを真理の道へと回心させただけでなく、肉体の糧や羊たちのあらゆる必要にも配慮し、貧者や困窮者、孤児や未亡人を養い、衣食を与え、捕虜たちを身代金を払って解放した。

[1388] アキテーヌ――古代ガリア（現在のフランス）の西部。

[1389] 聖パヴリンは389年、26歳の時に聖なる洗礼を受けた。

[1390] カンパニア――ローマの南、ティレニア海に近い、イタリア中部の古代の地域。

[1391] ノーラ――カンパニア地方で最も古い都市の一つであり、現在も存続している。

[1392] それは409年のことだった。それ以前、彼はスペインのバルセロナで（393年から）長老を務めていた。

[1393] この比喩は、しもべたちの世話をし、いつでも主人の前で報告できる準備ができている、忠実で賢明な家主についての救い主のたとえ話に由来する。

その頃、神の御許しにより、ヴァンダル族がイタリアに侵攻し[1394]、その全土を征服した。 彼らは、ノラという町があるカンパニア地方にも侵入した。多くの村や町を荒らし尽くしながら、彼らはパヴリンの教区にも侵入し、そこで同様の暴挙を働いた。すなわち、大勢の人々を捕虜として連れ去り、海を越えて彼らの故郷であるアフリカへと連行したのである。　そこで、福者パヴリン司教は、司教区に所有していたすべての財産を、捕虜の身代金や、蛮族の侵攻によって貧困に陥った人々の糧に充てるようになり、その結果、彼の手元にはもはや何も残らなくなってしまった。　一方、残忍で非人道的なヴァンダル族の戦士たちが、地中に隠された財宝を明かすよう要求してキリスト教徒を拷問していたとき、聖パヴリンは信者の心に寄り添い、神にこう祈り求めた。　「主よ、どうか私が金や銀のせいで苦しめられるようにしてください。なぜなら、私が自分の富をどこに隠したか、あなたはご存知だからです。それはまさに、あなたの貧しい者たちやみすぼらしい僕たちの手に委ねられているのです。」

ある日、ある貧しい未亡人が彼の元を訪れ、泣きながらこう語った。

「私の息子はヴァンダル族に捕らえられ、アフリカにいるヴァンダル王リギの娘婿のもとにいると知りました。聖なる方よ、どうか懇願いたします。私の生計の唯一の希望であり、老後の支えである息子を身代金で買い戻すためのものを、私にお与えください。」

神の御使いは、懇願する女性に与えられるものがないか、周囲を注意深く探したが、自分自身以外には何も見つからず、その貧しい未亡人にこう言った。

「女よ、私にはあなたに差し出せるものが、自分自身以外には何一つありません。私を受け入れてください。私は奴隷として、あなたの支配下に身を委ねます。私を売って息子を買い戻しなさい。さあ、息子の代わりに私を奴隷として差し出してください。」

その女性は、そのような人物の口からこの言葉を聞いて、これは慈悲というよりはむしろ嘲笑だと思った。しかし、彼は雄弁で英知に富んでいたため、その説得力ある言葉によって、疑いを抱いていた女性を納得させ、自分が嘲笑のためではなく、完全に正当な理由でそう言っていることを理解させた。　彼は、自分の言葉を信じ、息子を解放するために司教を奴隷として売ることにも恐れる必要はないと、彼女を説得した。そこで二人は共にアフリカへ向かい、ヴァンダル族の地に着くと、その貧しい未亡人の息子が暮らしていた王の娘婿である王子の門前に立ち止まった。　王子が家からどこかへ出かけた隙に、未亡人は彼の足元にひれ伏し、涙ながらに息子を解放してくれるよう懇願した。しかし、その野蛮人は高慢な性格ゆえ、息子を解放しようとはしなかったばかりか、彼女の願いさえ聞き入れようとしなかった。そこで未亡人は、神の僕パヴリンを指さしてこう言った。

「この人を息子の代わりに差し出します。どうか慈悲を示して、息子を解放してください。彼は私にとってたった一人の息子なのですから。」

公爵は、神の僕をじっと見つめ、彼に尋ねた。

「お前はどんな職に長けているのか？」

聖パヴリンはこう答えた。

「私はどんな仕事も知りませんが、ただ果樹園の手入れだけは得意です。」

これを聞いて、公爵は喜びました。というのも、彼にはまさにそのような人物が必要だったからです。そこで、公爵は息子をその未亡人に託しました。彼女は息子を連れて家に戻り、一方、聖パウリンは残って働き続け、庭園の管理を引き受け、熱心に労働に励みました。主人は頻繁に庭園を訪れるようになり、庭師と様々なことについて語り合うようになりました。　聖パウリンの賢明で幅広い知識に気づいた主人は、あらゆる事柄について彼と語り合い、使用人の議論を楽しむために、何度

[1394] ヴァンダル族はゲルマン系部族であり、当初は中部ドイツに居住し、後にスペイン南部、さらに北アフリカへと移り住み、そこから近隣の沿岸諸国に対して壊滅的な襲撃を繰り返した。

も家来や友人を置いて出かけた。聖パウリンは毎日、菜園から採れた様々な野菜を昼食として主人に差し出し、主人の手からパンを受け取ると、再び仕事に戻った。

ある日、主人が彼と語り合っていたとき、聖パウリンはこう言った。

「ご主人様、あなたはこれからどこかへ出かけるつもりですね。その間、あなたはヴァンダル王国の継承について手配をしておく必要があります。というのも、その王、すなわちあなたの義父は、予期せぬ死を遂げるからです。もしあなたが不在になれば、他の者があなたのいない隙に王位を奪い取るでしょう。」

公爵は、庭師からこの言葉を聞くと、黙ってはいられず、王のもとへ行ってそのことを告げた。彼は王に全幅の信頼を寄せており、そのために誰よりも王に愛されていたからである。王は疑念を抱き、こう言った。

「お前が話しているその男に会ってみたい。」

王の娘婿はこれに対し、こう答えた。

「今すぐ彼に命じて、昼食用の野菜を菜園から運ばせましょう。そうすれば、あなたも彼に会えるはずです。」

王が昼食をとろうと席に着くと、主人の命令に従って王の食卓用の野菜を運んできたパヴリンが部屋に入ってきた。王が彼を見ると、すぐに動揺し、主人である義理の息子を呼び寄せ、彼から隠そうとしていた秘密を打ち明けた。

「その男から聞いた話は真実だ」と王は言った。「昨夜、夢の中で、私は王座に座り、私を裁くさまざまな公爵たちを見たのだ。彼もまた、その裁判官たちの間に座っていた。彼らの裁きによって、かつて私が授かった杖と権力は私から奪われた。彼に、自分が何者なのか尋ねてみよ。　この男がただの凡人だとは思いません。私は彼が高位の地位にあるのを見たのですから。

すると、王の娘婿は聖パウリヌスを脇へ連れ出し、こう尋ねた。

「あなたは誰ですか？」

神の人は彼にこう答えた。

「私は、あなたが未亡人の息子の代わりに受け入れてくださった、あなたのしもべです。」

しかし、公爵は執拗に問い詰め、彼が今何者になったかではなく、故国では何者であったのかを明らかにするよう求めた。彼は聖人に誓いを立てさせ、自分の秘密を隠さず、すべての真実を明かすよう強く迫った。　神の人は、その尋問に戸惑い、誓いを破ることもできず、自分は司教であると告げた。それを聞いた領主はひどく恐れ、謙虚に彼に言った。

「望むものは何でも私に求めなさい。そうすれば、豊かな贈り物を携えて、あなたの国へ帰れるでしょう。」

神の御使いパヴリンは彼にこう言った。

「あなたがなれる唯一の善行を、私はお願いしたい。私の街と国からここに連行されてきたすべての捕虜を、故郷の地へと自由の身として解放してほしい。」

直ちに、この公爵の熱心な働きかけにより、アフリカ全土からカンパニア地方で捕らえられたキリスト教徒たちが探し出され、聖パウロのもとに連れてこられた。聖なる牧者は、その牧会の「言葉の羊」たち全員と共に、多くの豊かな贈り物と豊富な食糧を携え、栄誉をもって送り出された。彼らは喜びと歓喜に満ちて、船で故郷へと帰還した。数日後、聖人の預言通り、ヴァンダル王リガが死去し、その代わりに彼の娘婿が王位に就いた。

このようにして、聖パヴリンは自らを奴隷の身としながらも、多くの者を奴隷の状態から自由へと導き出した。それは、奴隷の姿をとられ、人類を悪魔の奴隷状態から救い出された主キリストに従ったからである。　ヴァンダル族の奴隷制から解放された後、聖パヴリンは長年にわたり生き、羊のために自らの命を捧げる良き羊飼いとして、託された群れを立派に導き、自らを顧みることなく、貧しい兄弟たちに多くの恩恵をもたらした。　その後、彼は大牧者であるキリスト、すなわち主のも

とへ旅立ちました（[1395] ）。今や、主から百倍の報いを受け、永遠の命を相続し、永遠に主を賛美しています。アーメン。

我らの尊き父、コストロムスのゲンナディイの伝記[1396]

記念日：1月23日

聖なる洗礼においてグリゴリーと名付けられた聖ゲナディイは、リトアニアの地に住んでいた[1397] 、イオアンという名のボヤリンとその妻エレナの一人息子であった。グリゴリーは幼い頃から神の教会に通うことを好み、常に聖職者たちの間に身を置き、すべての礼拝に出席していた。両親は息子のそのような振る舞いに不満を抱き、彼にこう言った。

「なぜそんなことをするのだ？　お前は教会の番人か？　人前で私たちを恥かかせている。私たちと一緒に教会に行くのはこれで十分だ。残りの時間は家にいて、同年代の仲間と過ごすべきだ。とりわけ、夜に安眠を妨げてはならない。」

しかし、グリゴリーはこう答えた。

「親愛なる両親よ、そんな言葉で私を煩わせないでください。私は子供じみた遊びには関わりたくありません。神は御心のままに御業をなされ、人はできることをするものです。そして聖霊は、あらゆる人を真の道へと導いてくださるのです。」

それ以来、グリゴリーは、どうすればロシアの地へ行き、そこで何らかの聖なる修道院に身を寄せ、善行に励むことができるかについて考え始めた。

そして、好機を捉えて両親のもとを離れ、明るい色の服を脱いで貧しい人々に与え、彼らからぼろ服を受け取ってそれを身にまとった。

旅人であり異邦人として、リトアニアの地や荒野、村々、町々を通り抜ける中で、彼は悪人たちに多くの苦難や災難に見舞われた。　しかし、神に守られ、彼はロシアの地へとたどり着き、偉大で栄光に満ちた都モスクワを訪れ、その街を巡りながら、聖なる奇跡行者たちの聖遺物に参拝し、聖なる修道院を訪ね歩き、どこで修道衣をまとい、祈りに身を捧げるべきか考えを巡らせた。

モスクワで、彼はテオドールという名の友を見つけた。彼は若かったが、神を畏れ、同じく修道入りを求めていた。二人はモスクワから共にヴェリキー・ノヴゴロドへと向かい、そこで聖地や教会、修道院を巡った。

[1395] 聖パヴリンは431年6月22日に逝去した。その聖遺物はローマの使徒バルトロメオ教会に安置されている。彼は教会の著述家および教師として、とりわけキリスト教の詩人として名を残した。彼によって35編の賛美歌と50通に及ぶ書簡が残されており、その深い敬虔さゆえに特に重要視されている。　それらには、キリスト教の完全性の高さが生き生きと描かれ、いかにして自分の心を守るべきかが語られている。また、福音的な謙遜や、神と隣人への愛の尊さが述べられ、夫婦の義務や、不幸な人々への甘美な慰めが記されている。 3つの賛美歌は神への美しい祈りであり、他の3つは詩編第1篇、第2篇、第136篇の解説である。　さらに、聖パヴリンの手紙や賛歌には、神の摂理、原罪、聖体、平和のための聖人たちの執り成し、死者のための祈り、そして聖像崇敬について記されている。　聖パヴリンは、自ら建立した教会を聖なるイコンで美しく飾ることを好んだことでも知られています。また、伝承によれば、彼には西暦400年頃にさかのぼるとされる教会用鐘の発明が帰せられています。

[1396] 聖ゲナディオスの伝記と彼に捧げる礼拝式は、同聖人の弟子であり、ゲナディオスが設立した修道院の修道院長であった修道士アレクシオスによって記された。　この『行伝』は多くの写本として現存している。そのうちのいくつかには、著者が自身の著作をテオドロス皇帝とディオニシオス大主教に検閲してもらうよう依頼する文言が含まれており、したがってこの『行伝』は1584年から1587年の間に執筆されたものと推定される。　礼拝式、アカフィスト、および『生涯』は、臨終の訓示とともに、サンクトペテルブルクおよびモスクワのシノダル印刷所でスラブ文字を用いて度々刊行された（例：モスクワ、1888年）。　伝記、奇跡の記述、訓示、および聖遺物の発見に関する物語は、1873年の『ヤロスラヴリ教区報』において写本に基づいて全文が掲載され、同年、ヤロスラヴリで単行のパンフレットとしても刊行された。

[1397] 1644年の聖ゲナディイの聖遺骨発見に関する物語には、彼がモギレフ市の出身であったと記されている。

ノヴゴロドから、彼らはスヴィール川沿いの荒野にいる隠遁者、尊者アレクサンドルの元へ向かい、熱心にこう懇願した。

「聖なる父よ、私たちは主なる神に祈りたいのです。キリストの御名において、私たちに修道服を授けてください。」

聖アレクサンドルはまず、グリゴリエフの友人テオドロスに語りかけ、こう言いました。

「お前、わが子テオドールよ、白頭の獣を導くことになるだろう。」

そしてグリゴリーにはこう言った。

「そしてお前、グリゴリーよ、言葉の羊たちの牧者となり、多くの修道士たちの導き手となるのだ。　行け、わが子よ、コメルスキーの森の尊者コルニリイのもとへ。彼は、神にどのように祈るべきか、また、言葉の羊である修道士たちをどのように牧すべきかを教えてくれるだろう。この私たちの荒野では、若い若者たちが暮らすことは不可能だからだ。しかし、わが子らよ、ここでお望みのだけ、何日でも休んでいきなさい。

彼らは聖アレクサンドルのいる荒野で十四日間を過ごし、彼から祝福を受けて、ヴォログダ市の境界を越え、コメルスキーの森へと向かった。彼らは荒野の奥深く、聖コルニリイ・コメルスキーのもとへ[1398] 到着し、イエスの祈りを唱えながら門を叩いた。

聖コルニリイは門を開け、彼らにこう言った。

「子らよ、どのようにしてその険しい場所を通り抜け、なぜこの貧しい荒野に入ったのか。何を求めているのか。」

彼らはこう答えた。

「我らの主よ、敬虔なるコルニリウス父よ、私たちには修道服を身にまとうという強い願いが湧き上がっております。キリストの御名において、どうか私たちを、神に選ばれた御羊の群れに加え給え。」

聖コルニリウスはグリゴリウスに言った。

「グリゴリイよ、わが子よ、この貧しい私の修道院に入りなさい。そして、テオドールよ、わが子よ、あなたは世俗の生活にとどまり、妻を娶り、子をもうけなさい。」

聖コルニリウスは、聖なる父たちの伝承に従い、グリゴリウスに修道試練を課した。グリゴリウスはこの試練の中でかなりの時間を過ごした後、聖コルニリウスは教会に入り、グリゴリウスを修道士として剃髪し、聖福音書の一節を彼に語った。　*「わたしの名のために、家や兄弟、姉妹、父、母、妻、子供、あるいは土地を捨てた者は、百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。　しかし、多くの人は、先頭にいる者が最後になり、最後にいる者が先頭になるであろう」*（マタイ19:29–30）。その後、長老は新入修道士に対し、父なる者の教えとしての問答を行い、グリゴリーに代わってゲンナディという名を授けた。最後にこう言った。

「わが子よ、古の聖なる父たちの教えを心に刻みなさい。忍耐、愛、謙遜、とりわけ共同の祈りや会衆の祈り、そして独房での祈りを重んじ、偽りのない行いに励みなさい。

ゲナディイの友人テオドールは、アレクサンドルとコルニリイの両聖父の預言に従い、世俗で生涯を過ごし、高齢でモスクワにて永眠した。

尊者ゲナディは、コルニリイの祝福のもと、祈りと労苦、とりわけ修道院の厨房やパン屋などでの雑務に熱心に励んだ。兄弟たちの多くは、ゲナディのそのような行いに憤り、不平を漏らした。

この不平の声を耳にした聖コルネリウスは、聖人を励ましてこう言った。

「ゲナディイよ、兄弟たちのことを嘆いてはならない。彼らは悪魔のささやきによってそう言っているのだ。」

[1398] 聖コルニリイ・コメルスキーは1537年に没し、その記念日は5月19日に祝われる。

その後、善を憎む悪魔が、兄弟たちの間で、さらにはコルニリウス自身に対しても騒動を煽り立てた。　これを見た聖人は怒りを抑えきれず、弟子であるゲンナディィを連れて、新しく設立した修道院を後にし、コストロム地方の荒野、スール湖畔へと向かった。そこは最初の修道院から六十ヴェルスト離れた場所であった。　そこからヴェルスタほど離れた場所に、王に租税を納める養蜂を営む農民たちが住んでいた。これらの農民たちは、コルニリウスとゲンナディウスの到来を大いに喜び、彼らのために小部屋を建て、パンや蜂蜜、その他必要な物資を届けてくれた。というのも、近くには養蜂用の土地、すなわち蜂場があったからである。

聖コルニリウスと聖ゲンナディウスは、祈りと断食に励み、次々と労苦を重ねた。彼らは木を切り、土地を耕し、4つの池を掘った。

ある日、正教の大公ヴァシリー・イオアンノヴィチは、ベロ湖への旅という労を厭わず、自身の誓約に従って平安を祈願しようと決意した。大公が聖コルニリウスの隠遁地に着き、彼がそこから別の場所へ去ってしまったのを見ると、修道者たちに対して深く憤り、こう言った。

「あなたがたの不平と不従順のせいで、コルニリイ神父は自分の隠遁地に住んでいないのだ。」

そして直ちに、従者を遣わして、聖人に元の修道院へ戻るよう懇願させた。聖コルニリウスは大公ヴァシリーの御前に現れ[1399]、その足元にひれ伏し、修道院を離れたことについて許しを請うた。敬虔な大公は彼を立ち上がらせ、こう言った。

「わが愛するコルニリウス神父よ、慈悲深き神に我らのために祈ってください。主なる神が、我らの家系に善行の果実を相続として授け、敬虔な修道院の建設、ロシア王国の繁栄、そしてキリスト教信仰の確立のために、恵みをお与えくださいますように。」

その後、大公は尊者コルニリウスにこう語った。

「父よ、ここにとどまり、あなたの最初の事業と労苦を続けなさい。そして、私たちの命じるところにより、この人里離れた荒野において、あなたが望む弟子を祝福しなさい。」

大公が退席すると、聖コルニリウスは、新しく設けられた荒野において、弟子ゲナディウスを祝福し、そこで神の栄光ある変容の名を冠した教会を建立するよう命じた。

聖ゲナディウスは、コルニリウス師の祝福と大公の命に従い、荒野のすべてを整えた。すなわち、神の教会を建立し、イコンや書物、そしてあらゆる教会の装飾品でそれを飾り立てたのである。

荒野に兄弟たちが増え始めると、彼はラドネジの奇跡行者である聖セルギイの名を冠した、暖房の効いた第二の教会も建設し、最初の教会と同様にそれを飾り立てた。

尊者自身は、絶えず労を惜しまず、兄弟たちに謙遜と忍耐の模範を示した。彼は兄弟たちのために快適な住居を整え、　昼は薪を切り、夜はそれを肩に担いで修道士たちの個室へと運び、厨房やパン屋で働き、修道士たちの毛皮の衣を洗い、蝋燭を作り、クッチャを炊き、プロスフォラを焼き――とりわけ、教会の礼拝、断食、そして祈りにおいて卓越していた。　さらに、彼は自らの身に鎖や鉄の十字架、そして重い鎖を身に着けていた。尊者はこの大きな重荷を、肉体を制するために背負っていたのである。

その結果、至聖三位の恵みが彼の上に宿った。その恵みにあずかった聖人は、ますます偉大な功業を目指し、あらゆる習慣や道徳において弟子たちに模範を示した。なぜなら、彼は言葉よりもむしろ行いによって、上述したようなことを示しながら彼らを教えたからである。

「誰が彼の生涯のあらゆる詳細や、すべての功績と忍耐を描き表すことができようか。あるいは、誰が彼の病や労苦、そして兄弟たちへの配慮を列挙できようか！」　そう叫ぶのは、彼の伝記を著した弟子アレクシオスである。彼はさらに、尊者ゲナディウスを称えるため、そして何よりも神の栄光のために、神の恵みによって、彼の生前および死後に成し遂げられた奇跡について語っている。

[1399] 大公ヴァシーリー4世イオアンノヴィチは、1505年から1533年まで統治した。

ここに、それらの奇跡のいくつかを挙げる。ある時、聖ゲナディウスは弟子であるセラピオンとウアルを伴い、都モスクワを訪れた。彼は、ロマン・ユリエヴィチの妻であるボヤリーナ・ユリアニア・フェオドロヴナに丁重にもてなされた。　ユリアニアはゲンナディウスに、息子のダニイル、ニキータ、そして娘のアナスタシアを祝福してほしいと頼みました。聖人がアナスタシアを祝福した際、こう言いました。

「汝は美しいぶどうの木であり、実り豊かな枝である。汝は我らの忠実な女王となるであろう。」

この言葉を耳にしたボヤリーニャ・ユリアニアは、子供たちやその場に居合わせた人々一同と共に、ゲンナディイがなぜこのような不可解な言葉を口にするのか、またその言葉がどこから彼に伝えられたのかと驚いた。

ボヤリーニャ・ユリアニアは、長年にわたりゲンナディに惜しみなく施しを続けた。

長老が預言的に語ったことはすべて実現した。アナスタシア・ロマノヴナは皇后となり、イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイの最初の妻となった[1400]。彼女は、慈悲深き救い主の御家と尊者ゲナディイに対して深い信仰と敬意を抱き、彼に尊いイコンや祭服、その他教会礼拝に必要な品々を送り続けた。

ある日、病に倒れたボヤリンのボリス・パレツキーが、祈りを捧げるために主の変容修道院を訪れた。聖ゲナディは公爵の来訪を大いに喜び、修道士たちを呼び集め、聖なる門で相応しい祈りを捧げて来訪者を出迎え、自らの杖を彼に手渡した。　その時から、公は健康を取り戻し、神を賛美した。皆も公の回復を喜び祝った。公は聖人と修道者たちに十分な施しを与え、随行者全員と共に自宅へと戻った。　その杖、すなわち長老の祝福を、公は同行していた司祭ヴァシリーに運ばせるよう命じた。しかし、この司祭はなぜか公に腹を立て、聖人の祝福を冒涜して、その杖をコストロマ川に投げ捨ててしまった。　公爵は、長老の祝福を失ったことに深く悲しんだ。ところが、その司祭が自宅に戻ると、妻が亡くなっているのを発見し、しばらくして自身も重い病に倒れてしまった。　そこで彼は、杖の件で公爵と尊者である長老を嘲笑した自らの罪を悔い改め、スパソフ修道院で長老ゲナディイのもとで出家することを誓った。

しばらくして、この司祭はスパソフ修道院を訪れ、尊者のもとにひれ伏して、起きた出来事を語り、自身の無礼を詫び、聖人に、神に選ばれた羊の群れ（　）に自分を受け入れてくれるよう懇願した。　聖人は彼を祝福し、こう言った。「兄弟よ、キリストはこう言われた。*『わたしのもとに来る者を、決して追い出さない』*（ヨハネ6:37）。

その後、聖人は彼を修道士として剃髪させ、ヴァルラアムという名を授けた。ヴァルラアムは、主の変容修道院でかなり長い間修行に励み、その後、聖長老ゲナディイの祝福を受けて、コストロマ市のエピファニー修道院のイグメンとなった。

前述のボリス・パレツキー公は、スパソフの家、すなわちゲンナディエフ修道院に、貴重な鐘を寄進した。

かつて、ヴォロゴダおよび大ペルミの主教キプリアンが重い病に倒れたことがあった。彼は主の変容修道院に対して深い敬意を抱き、また聖長老ゲナディイに対して霊的な愛を寄せていたため、使用人の一人を聖長老ゲナディイのもとへ遣わし、病の機会に訪ねてくれるよう懇願した。　尊者ゲナディイは、弟子である修道士ミサイルとアレクシイを伴ってヴォログダ市を訪れ、キプリアン司教に祝福を請いました。　主教は聖なる長老の来訪を喜び、それまで病床から起き上がることもできなかったにもかかわらず、聖なる長老を迎えに出て、彼と弟子たちに十字の印で祝福を与え、長老の手

[1400] ロシア初のツァーリであり、1533年から1584年まで国家を統治した（1547年にツァーリの称号を名乗った）。

を取って内室へと案内した。聖主教は長い間、その尊い長老と語り合った。　人々は、尊者のお訪ねによって司教の病が和らいだのを見て、大いに驚き、御自身の聖徒たちを通して輝かしい奇跡を行われる神を賛美した。対話のあと、二人は祝福されたパンを口にした。翌日、司教は人々の前で尊者にこう懇願した。

「荒野の導師、尊いゲナディイ父よ、慈悲深い神に私たちのために祈ってください。私の肉体の病を和らげ、足の病を癒やしてくださいますように。」

聖人は聖人にこう答えました。

「人を愛する神は、苦しみから救い、心の病や身体の病を癒やし、苦しむ人々の弱さを和らげてくださいます。この偉大な業は、私たちには成し得ないことです。」　「主よ、聖なる方よ、神にはすべてが可能ですが、人間には何一つできません。ご覧なさい、主よ、あなたは今や一般的な肉体の苦しみからは解放されましたが、あなたの足は、最後の時を思い出させるものとして残され、あなたが息を引き取るその瞬間まで癒されることはないでしょう。平安あれ、主よ、聖なる父よ！」

その後、主教はさらに五年間生き、主のもとへ旅立たれた。

聖ゲナディウスの伝記を著した、その弟子であり、修道院長職の後継者であるアレクシイは、自分自身について次のように語っている。全慈悲の救い主修道院のゲナディウスの兄弟たちから侮辱を受けたアレクシイは、そこからコストロマの街へ去り、主の顕現修道院に身を寄せた。　しかし間もなく重病を患い、教会に立つことさえできなくなった。このため、彼はコストロマからポシェホニヤ近郊のアドリアノフの荒野へと移り住んだ。だが、病は治まらなかった。　神の啓示により、彼は「全き慈悲の救い主」のゲンナディエフ修道院に戻り、ゲンナディイの墓の前に駆け寄って懇願し、自身の気弱さを詫びたところ、癒やしを受けた。

尊者ゲナディイの数多くの死後の奇跡のうち、さらに以下のものを挙げておこう。

あるボヤールの息子、イワン・リハレフは、ゲンナディエフの救世主修道院に自分の村の一つを寄進したが、その後考え直し、その村をトロイツェ＝セルギエフ大修道院に譲り渡した。その直後、彼の息子アレクセイが突然亡くなり、妻は重い病に倒れた。　近所の人や知人たちは、夫がスパソフ修道院を捨てて別の修道院に村を譲り渡したのは良くないことだと口々に言い、ペレヤスラヴ・ザレスキーにいた夫に手紙を書くよう彼女に勧めた。　妻は手紙を書き、すぐに心が軽くなったのを感じた。一方、ペレヤスラヴでは、イオアンもまた病に倒れていた。彼はある種の恐怖に襲われ、顔つきが歪んでしまった。　周囲の人々もまた、なぜスパソフ修道院を去ったのかと彼を責めた。そこでヨアンは妻の手紙と周囲の助言に耳を傾け、村を聖ゲンナディイ修道院に返還し、妻から離れないと誓った。まもなく、彼は病から癒やされた。　ゲンナディイの棺の前で信仰と熱意をもって祈った人々は、歯痛、目の病気、麻痺、とりわけ精神錯乱や悪霊に取り憑かれた状態など、様々な病から癒やされた。

次のような奇跡も起こった。ゲンナディイ修道院のある聖職者助祭が、教会の書物や祭壇布を盗み、アンドマ川までわずか数ヴェルスト進んだところで、体が脱力し、手も足も動かせなくなってしまった。そのことが修道院長に伝えられると、院長は助祭を呼び寄せさせ、彼は書物と共に修道院へ連れ戻された。　助祭は自分の罪を認め、聖ゲナディイの棺にひれ伏して、許しと手足の癒やしを懇願した。そして、聖ゲナディイの祈りにより、神は彼を憐れみ、健康を取り戻させてくださった。

コストロマ市の役人であるルカ・グスティショフは、聖ゲナディウスの奇跡を信じず、スパソヴァ修道院や聖人の棺の前には決して行かないと決めていた。

税関の徴税人（すなわち、宣誓した関税徴収官）に選ばれた彼は、仲間たちと共に皇帝への税金を徴収しに出かけた。しかし突然、彼は重い病に襲われた。頬が腫れ上がり、耐え難いほどの頭痛に襲われ、錯乱状態に陥った。　親族が彼を家に連れ帰ると、彼は死の淵に横たわっていた。意識を

取り戻すと、彼は自身の罪を思い出し、スパソフ修道院へ行き、聖ゲンナディィイの棺を参拝することを誓った。そこで祈祷式を執り行った後、聖ゲンナディィイの祈りによって癒やされた。

ガリツキー郡コレジ地区のラプテフ家出身のある貴族の女性が、4人の息子をもうけていた。そのうちの1人、キリルという名の息子は、ゲンナディィイ修道院で出家することを望み、父の領地から自分に割り当てられた分を修道院への寄進として捧げようとした。　これを知った母親は、息子を激しく叱りつけ、修道院に持ち分を寄付することを許さなかった。すると突然、彼女に耐え難いほどの激しい頭痛が襲った。この病に苦しめられながら、彼女は自分の罪を思い出し、スパソフ修道院へ赴き、聖ゲナディィイの棺の前で祈りを捧げ、息子の持ち分を寄付することを誓った。　すると、彼女は病の苦しみから解放され、まもなくその誓いを果たした。息子はコルニリイという名で修道士となり、彼女は自分に与えられた癒やしを神に賛美した。

聖ゲナディィオスは臨終の前に、弟子たちだけでなくすべての正教徒に向けて、修道生活に関する自身の考えと遺訓を記した教訓を残した。ここに、その簡潔で教訓に富んだ教えを記す。

「命の源なる三位一体と聖母マリアの偉大なるイパツキ修道院の兄弟、キリストにあって、言葉の羊たちの永遠の牧者であるイグメン・ヴァッシアン、また、我らの羊の群れのための救世主修道院の建設者ヨセフ、そして我らの兄弟団全員へ。　私の霊的な兄弟たち、そして共に歩む者たちよ、言っておく。私にとって、日はすでに夕暮れに差し掛かり、斧は根元に置かれている。私はすでにキリストの裁きの座へと旅立とうとしているからだ。主の聖なる戒めのために、祈る際には私を忘れないでほしい。そして、私の棺を見て、私の愛を思い出し、キリストに祈り、私の霊を義人たちの仲間に加えるよう願ってほしい。　そして、わが子らよ、神を畏れ、使徒の教えに従い、あらゆる事において師たちの言葉に従いなさい。正教の王を敬い、聖人たちに栄光を捧げなさい。すべての修道院長は、霊的な良心に従って彼らに従っているのです。　そして、スパソヴァ修道院に住む私の子供たちよ、私たちの群れを任されることになる修道院長に従い、あらゆることに従順をもって彼に従いなさい。とりわけ、修道院長の祝福なしにこの場所を去らないよう、私はあなた方に懇願し、遺言として残します。　兄弟同士で不和を起こさず、光を目指し、闇を捨て去りなさい。あなたがたの生活が、聖なる父たちの伝承に従い、尊者コルニリウスが[1401]に記した通り、また当修道院で定められた修道生活と調和したものとなるように。　そして、敬虔なるイグメン・ヴァッシアンよ、懇願する。あなたの信仰をもって、この修道院を見捨てないでほしい。また、兄弟たちよ、わが子らよ、私たちの共通の伝統を破壊してはならず、教会の公会議から逸脱してはならない。なぜなら、修道士にとって最大の忌むべきことは、教会に行かないことだからである。　教会に来たならば、嘲笑することなく立ち、とりわけ悪口を言わず、何よりも、個室での祈りを怠らないようにしなさい。そうすれば、あなたの肉体も魂も衰えることなく、あなたの労苦も無駄にはならない。なぜなら、怠惰を煽ることで、狡猾なサタンは修道士を生きたまま地獄へ引きずり込もうとするからである。　お願いいたします、私の兄弟たち、そして修道仲間たちよ、あらゆる修道院の務めにおいて怠惰であってはなりません。労苦の中で嘆いたり、落胆したりしてはなりません。なぜなら、あなたがたの労苦は、食べたり飲んだりする機会を得るためのものであるからです。いかなる場合でも、牧師に対して不平を言ってはなりません。不平を言う修道士は、自ら破滅を招くことになるからです。　同様に、教えの言葉を注意深く聞き、善行と慈愛の行いを実践し、怠惰な者たちを奉仕と祈りに励ませ、神の聖所から離れてはなりません。もし修道士が六週間、聖体拝領を受けなければ、その者は修道士ではありません。　さらに、兄弟たちよ、修道院の道具やパン、野菜を盗んではならない。また、自分の気まぐれのために修道院の外へ持ち出してはならない。衣服は皆同じものを着用し、各独房に食料を蓄えてはならない。極度の必要や病気の場合を除き、食堂からパンを持ち出してはならない。　食事は食堂で行い、皆

[1401] 聖コルニリイ・コメルスキーは、自身の修道院のために共同生活規則を著し、そこから聖ゲナディィイが輩出された。この規則は『ロシア聖職階層史』に掲載され、1812年には単行本としても刊行された。

が平等に受けられるようにしなさい。食事と飲み物は、　で定められた時間に摂りなさい。食堂では、食べ過ぎたり飲み過ぎたりしてはならない。それは神の前で忌まわしいことであり、肉体にとっては重荷となり、病の原因となるからである。　また、互いに争うこともふさわしくない。争いを引き起こす者や悪口を言う者は、天の御国を相続することはないからである。同様に、兄弟たちをあちこちへ送り出しておきながら、自分たちは指一本動かさないような、偽善的な者たちもそうである。ああ、悲しや！　苦い地獄の深淵は、怠惰な修道士たちで満たされているが、義人たちは、少しの間耐え忍び、神の戒めを守り通したゆえに、永遠に喜びを享受するであろう。キリストは、心を一つにした者たちを御自身の家にお迎えになる。それゆえ、わが子らよ、あなたがたもまた、永遠の命を得るために、狭い門を通り抜け、苦難の道を歩むよう努めなさい。　また、使用人やその他の労働者たちには、互いに怒ったり敵対したりしてはならないと命じる。あらゆる事において修道院長に従い、その言葉に耳を傾け、兄弟たちを言葉でも行いでも傷つけず、不適切な無礼を働かず、すべての人々に好かれるよう努めなければならない。　修道院の道具や家財道具は、何も失われないよう大切に保管すべきである。他人の財産には手を触れてはならず、決して何も盗んではならない。なぜなら、私財を蓄えることは修道士に大きな害をもたらし、魂を消えぬ火と永遠の苦しみへと陥れるからである。そして、わが子らよ、このような悪と狂気から身を守り、他の人々にもこの私たちの言葉を思い出させてほしい。修道院の務めは、不平を言わず、怠けず、反抗することなく遂行すべきである。そうすることで、人前だけで行動し、偽善者や人に媚びる者とならないようにし、むしろ、人知れず信仰と真実をもって働き、神に喜ばれる者となるよう努めよ。　農民たちを暴力で虐げたり、客人の前で高慢になったりしてはならない。末席に座り、何よりも、誰とも敵対せず、兄弟たちやイグメーンについて偽りの言葉を口にしてはならない。兄弟たちよ、善を行うことに熱心であり、聖なる福音書と使徒の書簡にある神の御言葉から学びなさい。　我らが購入した書物を、主の家（教会）に保管しなさい。わが子らよ、それらを深く読み込み、理解するために心を尽くすべきである。そこには聖なる教父たちの著作がある。もし誰かが神の戒めとキリストの信仰を守るならば、その者は永遠に喜びを得るであろう」。

聖ゲナディィオスは1565年1月23日に逝去した。短い病の末、静かで安らかな最期を迎えた。

聖ゲナディィイの弟子であり後継者であるイグメン・アレクシイは、聖人への賛辞の中でその美徳を列挙し、それゆえに王室でも彼を敬っていたことを指摘している。　彼は、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイの最初の妻アナスタシア・ロマノヴナとの間の娘の代父であった。彼は以前、彼女に対し、ツァーリとの結婚と子宝に恵まれることを予言していたのである。イオシフォフ＝ヴォロコラムスク修道院の修道士アントニー長老の言葉によると、アレクセイは聖ゲナディィについて、さらに次のような出来事も語っている。　ある日、ゲナディィイがモスクワの教会で礼拝を行っていた際、そこには皇帝の従者やボヤールの妻たちがいたが、そこに貧しくみすぼらしい女性が子供たちを連れて入ってきた。子供たちは、彼女の腕の中で泣いている者もいれば、彼女のそばで泣いている者もいた。彼女を見つめながら、高貴なボヤールの妻たちは、主と至聖なる聖母マリアに嘆息を捧げつつ、心の中でこう考えた。　「主は、子供を養う手段すらないこのような貧しい人々に子供を授けてくださったのに、王室からの俸給で子供を育てることができる私たちには、主は子宝を授けてくださらなかった。それはきっと、私たちの罪のせいでしょう」。聖ゲナディィは彼女たちの考えを察し、こう言った。

「悲しまないでください、奥様方。もしご自身の立場において敬虔に生きられるならば、神の御心により、これからお子様を授かるようになるでしょう。」

聖人の預言通り、これは一人の女性だけでなく、多くの貴族の妻たちに実現した。また、他の都市でも、聖ゲナディィウスは多くの敬虔な女性たちに子宝を予言した。

聖ゲナディィイの聖遺骨の発見は、1644年、敬虔なミハイル・フェオドロヴィチ皇帝の治世下、ヨシフ総主教の時代に成し遂げられた。当時、老朽化した木造の「主の変容」教会が解体され、石造りの教会の建設が始まっていたが、堀を掘る作業中に、聖人の朽ちることのない遺体と聖衣が収められた棺が発見されたのである。

聖マウシマ・シリンの記念日

記念日：1月23日

聖マウシマはシリア人であり、キラの町[1402] の近郊の出身であった。村で質素な教育を受けた聖人は、あらゆる美徳において優れた才能を示した。私生活において名声を博した後、彼は町に近いある集落で教会の指導者となった。　聖職を執り行い、神の羊の群れを牧しながら、彼は神の律法が命じることを語り、実践した。彼は衣服をたった一枚しか持たず、それが古くなって破れると、聖人はその上に次々と新しい継ぎ布を縫い付け、そうして自身の裸身を覆っていた。　聖マウシマは、旅人や乞食の世話にこれほど熱心に励んだため、彼の住まいの扉は、訪れるすべての人に対して常に開かれていた。伝えられるところによると、聖人には二つの器があり、一つにはパンの種、もう一つには油が入っており、聖人はそれらから、困っているすべての人々に分け与えていた。　サレプタの未亡人を祝福された慈悲深い主は、尊者マウシマの器にも同様の祝福をお与えになった。*「主は、御名を呼び求めるすべての人に対して、恵み深く、憐れみ深く、大いなる慈しみをお示しになる」*（詩編85:5）；壺の中の小麦粉と水差しの中の油が尽きることのないよう命じ、それによって未亡人が偉大な預言者を養ったように[1403] 、主は驚くべきマウシマにも、貧しい人々への彼の献身に見合う豊かさをお与えになった。敬虔に、神に喜ばれる生き方をし、高齢まで生きた聖人は、安らかに主のもとへ旅立った[1404] 。

沈黙の聖サラマンの記念日

記念日：1月23日

この尊い父サラマンは、ユーフラテス川の西岸に位置するカペルサナという村の出身であった[1405] 。隠遁生活を愛した彼は、川の対岸に小さな小屋を見つけ、そこに閉じこもり、扉と窓をしっかりと塞いだ。年に一度、壁の下に掘ったトンネルを通って外に出て、食料を蓄えていた。　地元の司教は、この聖人の徳高い生活を知り、彼に聖職を授けたいと願った。その目的で聖人の住居を訪れた

[1402] シリアはパレスチナの北に位置する国である。その北部、小アジアに隣接する地域には、キレステカ州があり、その中心都市はキルであった。

[1403] 神の御命により、シドンのサレプタの門にたどり着いた聖預言者エリヤは、薪を集めていた未亡人に、パンをひと切れ持ってきてくれるよう頼みました。すると彼女は、甕の中に一握りの小麦粉と、水差しに少量の油しか残っていないと答えました。　「行って、これを使って自分と息子のために料理をしましょう。これを食べてから死にましょう」と彼女は言いました。当時、干ばつのため、イスラエルの地には飢饉が起きていました。　聖なる預言者はその未亡人にこう言いました。「イスラエルの神、主はこう言われる。主が地に雨を降らせられるその日まで、甕の中の小麦粉は尽きず、水瓶の中の油も減ることはない。」その女性は神の御使いに食事を振る舞い、飢饉の間中、彼女の小麦粉と油の備蓄は尽きることはありませんでした（列王記下17:8–16）。

[1404] 4世紀末。

[1405] ユーフラテス川はアルメニアの山々を源流とし、下流でティグリス川と合流した後、「シャット・エル・アラブ」という名でペルシャ湾に注ぎ込む。カペルサナ（ペルサまたはペルサナ）は、シリアのコムマゲナ州の主要都市サモサト（現在のサムサト）の近くに位置していた。

司教は、壁の一部を取り壊すよう命じ、その後、その小部屋に入った。　尊者サラマンが司祭に叙階されると、司教は彼に司祭職の恵みについて教えを授けた。しかし、聖堂に滞在している間、聖人はこの沈黙を守る尊者から一言も言葉を聞くことがなく、取り壊された壁の部分を再び塞ぐよう命じてその場を去った。　聖サラマンの出身地であるその村の住民たちは、自分たちの間に神の御使いを置きたいと願い、ある夜、川を浅瀬で渡り、聖人を連れ出した。聖人は反論も抵抗もしなかったが、同意の意も示さず、村人たちは彼を自分たちのいる場所へ連れて行った。　そこで村人たちは、聖人のために以前と同じような小屋を建て、彼をそこに閉じ込めた。聖サラマンは沈黙を守り続け、誰も彼から一言も言葉を聞くことはなかった。　まもなく、かつて聖者が身を隠していた対岸の村の住民たちが、夜になって彼の新しい住まいを訪れ、彼が次のような祈りを捧げているのを耳にした。「主イエス・キリストよ、私と、御名に仕え、私たちの真の神である御方に礼拝を捧げるすべての人々を憐れんでください。」

村人たちは修道院の部屋を解体し、聖人を自分たちのところへ連れて行った。この至福の沈黙の聖人は、今回も少しも抵抗せず、自分を見放すよう要求することもなかった。このようにしてこの世の生活から自らを死んだものと見なした彼は、まさに文字通りの意味で、使徒の言葉*「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。　「今、私が肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を　に捧げてくださった神の御子を信じる信仰によって生きているのです*」（ガラテヤ2:20）。誰よりも高い次元で、自分の中の肉的な人を死に委ねた至福のサラマンは、最後までその偉業を成し遂げ、喜びに満ちて天の住まいへと移り住んだ[1406]。

第6回全地公会議の記念日

記念日：1月23日

第6回全地公会議は、680年にコンスタンティノス・ポゴナテス皇帝の治世下[1407]、コンスタンティノープルにおいて、モノフェリテ派に対抗して開催された。彼らは、モノフィシテ派の教義を正統派と和解させるため、イエス・キリストにおいて正統派と同様に二つの本性を認めていたが、モノフィシテ派と同様に、キリストの中にただ一つの意志 ——すなわち神の意志のみを認めていた[1408]。この教義の広がりは教会に大きな混乱をもたらし、正統派の熱心な擁護者たちを動員した。彼らは、モノフェリテ主義を単なる隠れたモノフィシテ主義に過ぎないと見なし、公然とこれに反対した[1409]。　キリストにおいて一つの意志を明確に認めた一方で、混乱を収束させるために、「唯一の」　や「二つの意志」といった表現を避けるよう命じ[1410]、さらには、この論争の的となっている問題に関するあらゆる議論を無条件に中止するよう最も厳格に命じ、従わない者には民事上の訴追を恐れるよう

[1406] 400年頃。

[1407] ビザンツ帝国のコンスタンティノス4世ポゴナトスは、688年から695年まで在位した。

[1408] モノフィシズムが特に盛んだったアレクサンドリアでは、この非正統的な教義の代表者として、アレクサンドリア総主教キル（在位：630年から640年）がいた。コンスタンティノープル総主教セルギウス （610–638年）とローマ教皇ホノリウス（625–638年）もまた、モノフェリテ派の教義に非正統的な要素を見出さず、その支持者となった。ただし、教会内で新たな混乱を招かないよう、教会によってまだ明確に定められていないこの問題に関しては、断定的な発言を控えることにした。

[1409] 彼らの先頭に立ったのは、聖ソフロニオス、エルサレム総主教（634–644年）と、聖マクシムス・殉教者であり、後者については1月20日の伝記で詳しく述べられている。

[1410] これが、ヘラクレイオス皇帝による「エクフェシス」、すなわち信仰宣言であり、そこでは同時に、キリストには一つの意志があることが絶対的な真理として認められていた。

警告した[1411] 。しかし、これらはさらなる苛立ちを招くだけにとどまらず、正教の勇敢な擁護者たちの中には殉教者さえ生み出してしまった[1412] 。 この事態により、東方と西方の教父たちおよび各教会の代表者たちは対立することとなった。というのも、前者の間には多くのモノフェリテ派がいたのに対し、西方教会は異端に公然と反対を表明し、正統な教義の擁護に立ち上がったからである。 これが最終的に、コンスタンティノス・ポゴナトス皇帝に全地公会議の招集を促すこととなり、ローマとの事前の協議を経て、680年にその公会議が開かれた。 公会議には170人の教父が出席し、その中には2人の東方総主教――ゲオルギオス・コンスタンティノポリス総主教[1413] とマカリオス・アンティオキア総主教[1414] （いずれもモノフェリテ派）――が自ら出席していた。一方、ローマ教皇アガフォンは代理の使節を派遣した。皇帝自身も、約1年間にわたって続いた公会議の審議に立ち会った。 モノフェリテ派の狂信は、ある種の狂乱の域に達しており、フラキアの修道士の一人であるポリクロニオスという人物は、モノフェリテ派の正統性を証明するため、公会議の場で死者を蘇らせることを志願したが、許可された公開の実験において、惨めなまでに恥をかかされた。 多くの激しい議論の末、公会議は、二つの本性に相応する、イエス・キリストにおける神的な意志と人間的な意志の二つを認めることを決定した。コンスタンティノープル総主教ゲオルギオスは、自らの誤りを認め、教会との交わりに受け入れられた。 しかし、アンティオキア総主教マカリオスは、一性論の異端に頑なに固執し続けたため、それ以前の一性論者たち全員とともに破門された。680年11月7日に始まった公会議は、681年9月16日に終了した。

2月6日

1月24日（旧暦）

聖母クセニア（俗名エウセヴィア）の生涯

記念日 1月24日

ローマに、上院議員の階級に属する高貴で尊敬すべき人物が一人住んでいた。彼はキリスト教徒であり、深く敬虔で、唯一の子供である娘エウセビイアを、目の瞳のように大切にしていた。 彼女が少女の年齢に達したとき、同じく上院議員の身分の貴族の一人が、エウセヴィアの両親に、娘を自分の息子に嫁がせてほしいと頼んだ。エウセヴィアの両親は互いに相談し、名誉と富において自分たちと同等の高貴な若者に彼女を婚約させ、すでに合法的な結婚が行われる日が定められていた。しかし、神への愛に満ちたこの乙女は、朽ちることのない花婿、その完全さにおいてすべての人類の子らよりもはるかに美しい、主キリストご自身に永遠の花嫁として仕え、自らの処女性を永遠に守り続けたいと願った。 しかし、彼女は両親にその願いを隠していた。もし両親が彼女の意図を察知すれば、その話を聞くことさえ拒むだろうと知っていたからである。 両親はあらゆる手段で彼女を妨げ、時にはお世辞や甘言で、時には命令で、彼女を結婚へと強要したでしょう。とりわけ、彼女が両

[1411] 言うまでもなく、いわゆる「信仰のティポス」は、イラクリウスの後継者であるコンスタンス皇帝によって公布されたものである。

[1412] その中でも特に注目すべきは、聖マクシムス・コンフェッサーとローマ教皇マルティヌス1世（649年から653年まで在位）である。これについては、1月20日の聖マクシムスの伝記を参照のこと。

[1413] コンスタンティノープル総主教ゲオルギオス1世は、678年から683年までその座に就いていた。

[1414] アンティオキアのマカリオスは、653年から680年まで総主教を務めた。

親の全財産の唯一の相続人であったため、両親は彼女の結婚や子供たちを通じて慰めを得たいと願ったのです。

聖エウセビアには、幼い頃から彼女と共に育ち、全力を尽くして献身的に仕えてきた、彼女に忠実な二人の女中がいた。彼女たちは二人きりになると、こう言った。

「あなたたちに一つの秘密を明かしたいのですが、その前に、主なる神にかけて誓ってほしいのです。私から聞くことを誰にも話さないでください。私の心の奥底にある思いと願いを、あなたたちに打ち明けたいのです。　どうか、この世の誰にも私の秘密が知られないよう気をつけてください。さらに、もしあなたたち自身も私に同意してくださるなら、なお良いでしょう。そうすれば、あなたたちも自分の魂を救うことができ、この不肖の私を助けてくれることになるのです。

女奴隷たちは彼女に答えた。

「女主人よ、あなたが命じられることは何でもおこないます。ましてや、あなたの計画は私たちの魂にとっても益となるのですから。あなたが私たちに明かそうとしていることを誰かに話すくらいなら、むしろあなたのために死ぬ覚悟があります。」

すると、その娘は彼女たちにこう言った。

「ご存知の通り、私の両親は私を嫁がせようとしています。しかし、結婚などという考えは、私の頭には一度も浮かんだことがありません。両親が私に果たせと勧めるこのことは、私にとってあまりにも重荷なのです。私にとって、そのような人生とは何でしょうか？　ただ幻であり、霧であり、夢に過ぎません。　どうか私の話に耳を傾けてください。二人で力を合わせて清らかな生き方を選びましょう。もし主の御心が私の決意を祝福し、あなたがたが私の助言に従い、私が話したことを秘密にしておくのなら――その時に、私たちがどうすべきかをじっくり考えましょう。　信じてください。たとえ私の両親がこのことを知り、無理やり結婚させようとしたとしても、神の助けがあれば、たとえ私を火や剣、あるいは野獣にさらしたとしても、彼らは決して私の決意を変えることはできないでしょう。

これを聞いて、二人の女中たちは言った。

「主の御心がありますように！私たちはあなたの決意に賛同し、あなたと同じ目標を志しています、我が女主人よ。私たちは、あなたなしで王位につくよりは、むしろあなたと共に死ぬことを望みます。」

侍女たちからそのような言葉を聞いた聖エウセビアは、神を賛美した。その後、キリストへの愛を等しく抱く三人の乙女たちは、自分たちの願いが叶うために何をすべきか、絶えず考え続けた。そして、神に良き助言を授けてくださるよう祈った。

主への愛をもって身を捧げ、独身生活を誓ったその日から、エウセビアは両親に内緒で、侍女たちの手を通じて、自分が持っていた金、銀、そしてあらゆる貴重品を、困窮している人々に配り始めた。侍女たちもまた、キリストへの愛のために貧しさを受け入れる覚悟で、自分たちが持っていた財産を配った。　結婚の日が近づき、皆がその準備に忙殺されていた時、聖エウセビアは侍女たちと相談し、彼女たちと共に男装して、　必要最低限の持ち物を手に取り、扉が施錠されていなかったため、彼女たちと共に密かに家を出た。　十字架の印を自らに描いて、彼女たちはキリスト・神に祈りを捧げた。

「神の子よ、私たちと共におられ、私たちが歩むべき道を示してください。あなたへの愛ゆえに、私たちは家とそこにあるすべてのものを捨て、むしろ放浪し、苦難の中で生き、あなたを慕い、あなたを見いだすことを望んでいるのです。」

こうして彼女たちは涙ながらに祈りを捧げ、家を出て、泣きながらも喜びを胸に歩み出した。

旅の途中、聖エウセビアは自分の女中たちにこう語りかけた。

「これからは、私の姉妹であり、主人のように扱ってください。むしろ、私こそが、生涯を通じてあなた方に仕えましょう。ただ、私の主人の皆様、神のためにすべてを捨て、この地上で私たち

の魂の救い以外の何ものも求めないようにしましょう。魂に有害な、あらゆる世俗的な煩わしさを避けましょう。　*『わたしの名のために、家や父や母や土地を捨てた者は、百倍を受け、永遠の命を受け継ぐ』*と命じられた主を信じましょう（マタイ19:29）。そう、私の姉妹たちよ、私たちの魂の救いを大切にしましょう。

聖女が彼女たちとこのように語り合っている間に、彼女たちは海辺にたどり着き、アレクサンドリアへ向かう準備の整った船を見つけると、運賃を支払い、その船に乗り込んだ。追い風が吹いていたため、数日後にはアレクサンドリアに到着した。　船を降りると、彼女たちはコヤという名の島に到着した。その島は、カリアの都市ガリカルナッサ[1415] から一万五千歩離れた場所にあった。彼女たちは、両親に見つからないよう、誰にも知られていない場所を探して、あちこちを転々とした。この島で追跡の心配もなく過ごしていた彼女たちは、再び男装から女装へと姿を変え、人里離れた小さな家を借りてそこに住んだ。そして、神に感謝しつつ、絶えず祈りを捧げた。神が、彼女たちを修道服に身を包ませ、魂の世話をしてくれる聖職者を送ってくださるよう願ったのである。　聖エウセビアは、友人たちに次のように説得した。

– どうかお願いです、私の姉妹たちよ、主のために：私たちの秘密を守り、私たちの故郷のことや、私たちが家を出た理由、そして私の名前についても、誰にも話さないでください。そうすれば、私の名や、私たちが去った故郷によって、私の両親が私を見つけ出すことがないでしょう。　神にかけて誓って、私の生涯が終わるまで、これらすべてを秘密に守り、私たちに起こったことやこれから起こるであろうことについて、誰にも何も話さないでください。もし誰かが私の名前を尋ねてきたら、私はクセニアと呼ばれている、つまり「異邦人」[1416] であると答えてください。ご覧の通り、私は神のために家と両親を捨てて旅をしているのですから。　これからは、あなた方も私をエウセヴィアではなく、クセニアと呼んでください。私はここに定住する場所を持たず、この人生においてあなた方と共に旅を続けながら、未来を求めているからです。

聖エウセヴィアが友人たちに語ったこの言葉に対し、彼女たちはそのすべてを秘密にしておくことを約束しました。そしてそれ以来、キリストの花嫁である聖女は、エウセヴィアではなくクセニアと呼ばれるようになったのです。

ある日、彼女は友人たちと共にひざまずき、泣きながらこう語り始めました。

「神よ、私たちのような旅人であり貧しい者たちにも、あなたがすべての聖人たちになさったように、あなたの偉大な憐れみを施してください。主よ、あなたに喜ばれる人を私たちに送ってください。その人を通して、私たちのような謙虚な者たちも救われることができますように。」

そう祈り終えると、聖クセニアは姉妹たちと共に、彼女たちが住んでいた家から出て行った。すると、埠頭から歩いてくる、白髪の威厳ある老人が見えた。その老人は修道者の装いをしており、その顔はまるで天使のようであった。聖女は彼の元へ近づくと、その足元にひれ伏し、泣きながらこう語りかけた。

「神の御使いよ、異国の地をさまよう者を軽んじないでください。この貧しい乞食を拒絶しないでください。罪人の嘆願を嫌悪しないでください。どうか聖使徒パウロの如く、聖テクラにとってそうであったように、私たちにとって導き手であり師となってください。」　神から義人たちに用意された報いを思い出してください。そして、この二人の姉妹と共に、私をも救ってください。

これを聞いた神の僕（牧師）は憐れみを覚え、彼女たちの涙を見つめながら尋ねました。

「何を望んでいるのか。私があなたたちのために何をしてあげればよいのか？」

彼女は答えた。

[1415] カリア――小アジア半島の南西部。ガリカルナッソス――カリアで最も重要な都市の一つ。

[1416] ギリシャ語で「他者」「異邦人」を意味する言葉に由来する。

「神にあって、私たちの父であり、師となってください。私たちが救われることができる場所へ導いてください。私たちは旅人であり、どこへ行くべきかわかりません。人前に出るのが恥ずかしいのです。」

すると彼は尋ねた。

「どこから来たのですか。どうしてそんなに孤独なのですか？」

聖女は答えた。

「私たちははるか遠い国から参りました、キリストのしもべよ。私たちは共に故郷を離れ、この地へやって来ることに同意しました。私たちは昼夜を問わず神に祈り、私たちを救ってくれる人を送ってくださるよう願っていました。そして今、神は私たちの弱さを受け入れてくださる霊的な父であるあなたを、私たちに示してくださいました。」

聖なる長老はこれに対し、こう言いました。

「信じてください、姉妹たち。私だって、ご覧の通り、ここでの旅人なのです。私は聖地からやって来て、そこで礼拝を捧げた後、故郷へ帰ろうとしているのです。」

キリストのしもべが尋ねた。

「霊的な父よ、あなたはどこの国の方ですか、先生？」

彼は答えた。

「私はカリア地方のミラッサという町から参りました。」

すると、キリストのしもべは再び彼にこう尋ねた。

「どうか、聖なる方よ、お教えください。あなたの位階はどのようなものでしょうか。私は、あなたが司教であると思います。」

それに対し、長老は彼女にこう言った。

「お許しください、姉妹よ！私は罪深い者であり、修道者の位にふさわしくない者です。神の恵みにより、私は聖なる栄光ある使徒アンドレイの修道院にある、小さな兄弟団の長老兼修道院長を務めております。私の名はパウロです。」

これを聞いて、キリストのしもべは神を賛美し、こう言った。

「神よ、あなたに栄光あれ。私のような貧しい者の祈りを聞き入れ、かつて聖テクレに遣わされたように、聖パウロとこの二人の姉妹を私に遣わしてくださったことを感謝します。」

それから彼女は長老にこう訴えました。

「お願いいたします、神のしもべよ、私たち旅人を拒まず、神にあって私たちの父となってください。」

祝福されたパウロは彼らにこう答えた。

「私も旅人であると申し上げました。ここで、私があなた方にどのような善行を施せるか、私には分かりません。もし私の街へ行きたいとお考えなら、主があなた方に御慈悲を注いでくださることを願っています。そして私は、力の及ぶ限り、あなた方の世話をさせていただきます。」

乙女たちは、涙を流しながら長老の前にひれ伏し、こう言った。

「はい、神のしもべよ！私たちを連れて行ってください。あなたが命じられるところへどこへでも行きます。ただ、旅人である私たちに憐れみを示し、永遠の命への導き手となってください。」

神の人は聖なる乙女たちを連れ出し、彼女たちと共にミラスの町へ向かった。そこで彼は、教会の近くにある人里離れた場所に、彼女たちの住まいを見つけた。　聖なる乙女は、実家から持ってきた金でその住居を購入し、その後、聖第一殉教者ステファノの名を冠した小さな教会を建て、間もなく数人の乙女たちを集めてキリストに捧げ、女子修道院を設立した。　修道院長である聖パウロは彼女たちの世話をした。彼は聖クセニアとその二人の女中を修道女として剃髪させた。　この聖なる乙女がどこから来たのか、どのような理由で故郷を離れたのか、そして彼女の本名は何かについては

、彼女が亡くなるまで誰も知ることはなかった。彼女は自らをクセニア、すなわち「旅人」と呼んでいた。一方、聖パウロは、これらの乙女たちについて尋ねる者たちにこう答えた。

「私は彼女たちをコイ島から連れてきて、ここに連れてきたのだ。」

こうして、人々は皆、彼女たちがそこからやって来たのだと考えた。それゆえ、その修道院はコイ島の名にちなんで呼ばれるようになったのである。

しばらくして、その都市の司教キリルが主のもとへ召され、後任としてアンドレイエフスキー修道院の院長である聖パウロが選出された。司教の位に就くと、彼は女子修道院を訪れ、クセニアの意思に反して、彼女をその位にふさわしい者として助祭に叙階した。　というのも、彼女はまだこの世に生きている間から、天使のような生活を送っていたからである。上院議員の娘として、贅沢とあらゆる快適さの中で育てられたにもかかわらず、彼女はこれほど困難で苦行に満ちた生活へと身を投じ、断食による 完全性へと至る、まったく新しく、異例で困難な道を自ら歩み始めたのである。 彼女の節制には、悪魔たちさえも恐れをなした。彼女の断食と苦行に打ち負かされ、彼らは彼女に近づくことさえ恐れ、逃げ去った。彼女は2日か3日に一度しか食事をとらず、何度も一週間丸々何も食べないこともあった。　そして、食事の時間が来ても、彼女は青菜も、豆も、ワインも、オリーブ油も、畑の野菜も、その他の栄養のある食べ物も一切口にせず、ただ自分の涙で濡らしたわずかなパンだけを食べた。彼女は香炉から灰を取り出し、それをパンに振りかけた。　彼女は生涯を通じてこの行いを続け、*「私は灰をパンとして食べ、私の飲み物を涙で溶かす」*（詩篇101:10）という預言の言葉を実践していた。　その一方で、彼女は他の修道女たちからこの禁欲的な生活をあらゆる手段で隠そうと努め、彼女と共に暮らしていた二人の侍女だけが、密かに彼女の行いを観察し、自らも彼女の徳高い生活に倣っていた。それにもかかわらず、彼女は常に並外れた活力を保ち、夕方から早朝の礼拝まで、両手を天に差し伸べて一晩中祈りを捧げていた。　修道女たちは、彼女の生涯を通じて、このようにして密かに彼女を見守っていた。また時には、夕方にひざまずき、朝まで祈りを捧げ、あふれんばかりの涙を流すこともあった。こうして彼女は常に主に仕え、まるで自分こそがすべての人々の中で最も劣っているかのように、深い謙遜をもってそれを行っていた。

しかし、彼女のその他の美徳をすべて列挙できる者がいるだろうか。彼女のすべての偉業を描き出すのに、どのような言葉が十分であろうか！　何よりもまず、彼女の柔和さについて何と言おうか。誰も、彼女が怒る姿を見たことは一度もなかった。いかなる虚栄心や高慢さも、彼女の人生を曇らせることはなかった。　彼女の表情は常に謙虚で、心には一切の驕りがなく、顔には飾り気もなく、体は断食の労苦で衰弱し、心は穏やかで、いかなる疑念にも動じなかった。　彼女には、ありとあらゆる美徳が備わっていた！　彼女には、絶え間ない祈り、並外れた節制、言葉に尽くせない謙虚さ、計り知れない愛が備わっていた。彼女は貧しい人々を助け、苦しむ者たちに同情を示し、罪人たちに慈悲深く接し、誘惑に負けた者たちを悔い改めの道へと導いた。　彼女の服装については言うまでもない。彼女は、非常にぼろぼろのドレスとシャツを着ていたが、それさえも自分にふさわしくないと考えていた。彼女の人生は、心の深い感動と絶え間ない涙の中で過ごされた。灼熱の季節に豊かな泉が干上がることはあっても、彼女の目が涙を流すのをやめることなどあり得なかった。　常に最愛の花婿であるキリストを見つめながら、彼女の目からは涙の川が溢れ出ていた。彼女はキリストと顔を合わせて会いたいと願い、ダビデのように*「いつ、私は神の御前に現れるのか」*と、私の最も愛しい花婿の御顔に向かって語りかけたいと願っていた。　*「私の涙は、昼も夜も私の糧であった」*（詩編41:3–4）。

この永遠に記憶される処女、キリストの汚れなき花嫁にとって、この地上の生涯を去る時が近づいた頃、かつてその町で司教を務めた聖エフレムを記念する祝日が訪れた。至福のパウロ司教は、聖職者一同を率いて、レフキンと呼ばれる村へと向かった。　そこには聖エフレム司教の教会があり、その中には彼の尊い聖遺骨が安置されていた。その日、敬虔なクセニアはすべての姉妹たちを修道院の教会に呼び集め、こう語りかけた。

「私の主たち、そして姉妹たちよ！　あなたがたが私に対してどれほどの愛を示してくださったか、私は知っています――あなたがたが私の弱さを忍耐強く受け止め、この旅人である私を助けてくださったことを。　今、私は皆様にお願いいたします。この私、皆様のしもべに対する愛を、最後まで続けてください。貧しく、罪深く、異郷の身である私を、皆様の祈りの中で覚えてください。そして、神が私を憐れんでくださるよう、私のために祈り、私の罪が私を妨げることなく、皆様の祈りによって、私が妨げられることなく、私のキリストのもとへ移ることができるようにしてください。今や私の最期が近づいております。私の魂は深く苦しみ、嘆き悲しんでおります。なぜなら、私は十分な準備をせずにこの肉体を去らなければならないからです。今、ここには私たちの父であり主であるパウロ司教はいらっしゃいません。　ですから、あなたがたは私の代わりに、彼が来られた時にこう伝えてください。「貧しいクセニアはこう言いました。『神の御名において、敬愛すべき父よ、この旅人である私を覚えてください。あなたは私を正しい道に導き、この信仰生活へと導いてくださいました。どうか私のために祈ってください。主が私の希望を裏切らないように』」と。

これを聞いて、姉妹たちは皆泣き出し、こう言った。

「私たちの女主人であり、魂の導き手である方よ！　あなたは私たちを孤児のようにし、災いにさらそうとしています。一体誰が私たちを真の生き方へと導いてくださるのでしょうか？　誰が私たちに教えを授けてくださるのでしょうか？　私たちが落ち込んでいる時、誰が私たちのために祈ってくださるのでしょうか？　いいえ、女主人よ。今この時、私たちを見捨てないでください。　あなたが自ら私たちをこの囲いの中に集めてくださったことを思い出してください。女主人よ、私たちの魂を顧みて、神に懇願してください。私たちのような哀れな者たちのために、あなたが私たちを救いの道へと導けるよう、神があなたのためにもう少しだけ寿命を延ばしてくださいますように。

彼女の二人の女奴隷もまた、彼女の足元にひれ伏し、苦々しく泣きながらこう言った。

「もう私たちを見捨てて、私たちを置いてここから去ってしまうのですか、女主人よ。あなたなしでは、私たち哀れな者たちはどうすればよいのでしょう？　異国の地で、旅人である私たちは、一体どうすればよいのでしょう？　ああ、私たち哀れな者、貧しい者、そして旅人である私たちにとって、なんと悲しいことでしょう。　私たちは自分のことなど顧みなかったのに、それゆえに、女主人よ、あなたはお一人きりで私たちを残そうとされるのです。」　私たちがあなたと共に悲しんだ苦難を思い出してください。私たちがあなたの旅の伴侶であった、あの共同の旅路を思い出してください。私たちが常に熱心にあなたに仕えてきたことを思い出してください。私たちのことを思い出し、神に私たちのために祈ってください。私たちもあなたと共に連れて行ってください。そうすれば、私たちはあなたと離れることはありません、私たちの女主人よ。

その後、激しい泣き声と騒ぎが起こると、クセニア自身も涙ながらに語り始めました。

「私の姉妹たちよ、聖使徒ペトロが、このずっと以前にこう宣言していたことをご存知でしょう。*『主は、ある人々が遅れていると考えるように、約束の成就を遅らせているのではありません。むしろ、だれも滅びることなく、すべての人が悔い改めに至ることを望んで、私たちに忍耐をもって待っておられるのです。主の日は、夜中に泥棒がやって来るように、突然やって来るのです*」（IIペトロ3:9–10）。このことを知っているので、姉妹たちよ、このわずかな時間の間に怠けてはなりません。目を覚ましていましょう。　私たちの灯をともし、器に油を満たし、花婿を迎える準備をしましょう。主がいつ私たちを召されるか分からないからです。収穫の時が近づき、働き手たちは準備を整えて、ただ主の命令を待っているのです。

聖女がこう語り終えると、皆は泣きながら彼女の足元にひれ伏した。彼女は両手を天に向け、あふれんばかりの涙を流しながら、こう祈り始めた。

「神よ、今日に至るまで私のこの世の旅路を導いてくださった方よ！　貧しく罪深いあなたのしもべである私の声に耳を傾けてください。あなたのしもべである私の姉妹たちに憐れみをお示しください。あなたの聖なる御名の栄光と威光のために、彼女たちを守り、悪魔のあらゆる策略から救い

出してください。　わが神よ、あなたに祈ります。あなたの愛のために、私と共に旅をしてきたこの二人の姉妹をも、どうか覚えてください。この世の生涯において彼女たちが私と離れることがなかったように、あなたの御国においても私たちを離さないでください。そして、私たち全員を共にあなたの御殿に迎え入れてください。

このように祈った後、彼女はすべての修道女たちに、しばらく外に出て、祈りと黙想のために彼女を一人にしてくれるよう頼みました。皆が教会から出て行くと、彼女は一人で中に閉じこもり、二人の侍女は扉の前に残り、隙間から中を覗き見ました。　彼女たちが目にしたのは、彼女が膝を地面につけて祈っている姿であり、その後、祈りの最中に十字架の形をとって地面に伏した姿であった。彼女がそうしてかなり長い間横たわっていると、突然、教会の中に稲妻のような光が輝き、同時に教会から強い芳香が漂い始めた。　姉妹たちは急いで中に入り、彼女を地面から起こそうとしたが、すでに主のもとで息を引き取っていた。それは[1417] 年1月24日、土曜日、午後6時のことだった。この二人の姉妹は泣きながら教会から出てきて、他の人々を呼びかけ、こう言った。

「母たちよ、姉妹たちよ！　さあ、私たち全員が孤児となってしまったことを嘆き悲しもう。さあ、私たちの支えであった方の死を悼んで泣こう。私たちは敬虔な母を失ってしまった。私たちの導き手が去り、私たちは一人きりになってしまった。聖クセニア、私たちの母が、主のもとに召されたのだ。」

教会に入ると、皆は彼女がこの世の生活からあの世へと旅立った姿を目の当たりにした。すると、泣き声と激しい嗚咽が湧き上がった。人愛に満ちた神は、地上の誰からも隠されていた宝がどれほど偉大であったかをすべての人々に示そうと望まれ、天に偉大で至聖なるしるしを現された。　聖女クセニアが聖なる魂を主の御手に委ねたまさにその時刻、午後、全く晴れ渡り澄み切った空の下、女子修道院の上空に、中央に十字架を配した、太陽よりも明るく輝く、非常に明るい星の冠が現れた。このしるしは、すべての人々の目に映った。　ミラス市の市民たちは、司教である聖パウロと共にレフキ村に滞在していたが、空に現れたこのしるしを見て驚き、戸惑いながら互いに尋ね合った。「これは一体何を意味するのだろうか？」聖パウロ司教は、霊によってそのしるしの意味を悟ると、集まった民衆全員に向かってこう言った。

「我らが聖女クセニアが亡くなられた。そのことを告げるしるしとして、冠の御姿が現れたのだ。」

聖体礼儀が終わるやいなや、彼は祝祭に参加していた民衆全員を率いて街に戻り、そこで市民たちは、司教が告げた通り、聖クセニアが息を引き取っているのを発見した。

するとすぐに、天に現れたしるしに惹かれて、多くの男女や子供たちを含む大勢の人々が女子修道院に集まった。彼らは大声でこう叫んだ。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。あなたには、ひそかにあなたに奉仕する多くの聖人たちがいるのですから！」　栄光あれ、神の御子よ。御自身を人として現し、私たち罪人のために御自身の御意志により十字架にかかられた方よ――今に至るまでここに秘められていた御自身の偉大な宝を、すべての人々に明らかにしてくださったことを！栄光あれ、主よ。あなたが、この貧しい町ミラスを、この御自身の宝の住まいであり、宝庫となるようお選びくださったことを。　あなたはこれまで、この地に尊い真珠、かけがえのない珠、すなわちあなたの聖なる花嫁を守り続けてこられました！彼女をあなたの天の宮殿にお迎えになった後、あなたは彼女の清く聖なる御体を、この町に保管するために残してくださったのです。

こうして皆は泣きながら叫び、天に現れた冠と十字架を見つめていました。その時、キリストを愛する民全体、とりわけ嫉妬心に駆られた女性たちは、大きな声で聖パウロ司教にこう呼びかけました。

[1417] 聖クセニアの没は5世紀後半のことである。

「尊き司教よ、わが都の栄光を隠さないでください！　私たちの栄光を黙して語らず、神が私たちに示してくださった真珠を隠さないでください。これまで隠され、ひそかに輝いていたその明るい灯を、すべての人々に示してください。敵たちにもそれを見させ、私たちがどのような主にお仕えしているのかを知らしめてください。　異教徒たちがそれを見て恥じ入るように。ユダヤ人たちもまた、十字架の神秘を見て、彼らが十字架につけた方が神であることを悟るように。キリストの十字架に敵対する者たちすべてがこれを見て、泣き叫ぶように。　死後もなお、天使たちの主が御自分のしもべたちをいかに栄光に包まれるか、彼らに見せてください。人々が全く無名の旅人であり捕虜だと考えていた、キリストの神の花嫁クセニアが、キリストからどのような栄光の冠を授かっているか、彼らに見せてください。私たちのこの貧しい町が、どのような賜物と恵みにあずかったか、すべての人に見せてください！

民衆が熱心に司教にそう呼びかけたとき、司教は長老たちと共に聖クセニアの尊い遺体の元へと歩み寄った。　その遺体をふさわしいように担架に安置し、多くの蝋燭に火を灯し、香を焚いた後、司教は頭を垂れ、長老たちと共に担架を肩に担ぎ上げ、その後、歌を歌いながら町の中心部へと運んでいった。　人々は皆、この栄光に満ちた奇跡に驚嘆した。というのも、聖人の遺体を載せた担架が運ばれていく間、天に現れた十字架の冠が担架の上を漂っていたからである。　そして、寝台が町の中心に安置されると、その上空に現れた冠もまた止まった。その時、周辺の村々からも、天に現れたこの不思議なしるしを目撃した数え切れないほどの人々が集まってきた。町全体は押し寄せる大勢の人々で埋め尽くされ、大混雑となった。　至福のパウロ司教は、民衆と共に、その日曜日の夜通し、聖人のそばに留まり、夜明けまで徹夜して賛美歌を歌い続けた。彼女の聖遺物による癒しも数多くあった。何らかの病に苦しむ者は、聖人の寝台に触れるだけで、即座に癒やされたのである。

日曜日が明けると、尊いクセニア聖女の遺体は清らかな布で覆われ、葬送の歌を歌いながら、町の南側の入り口にある「シキニア（イチジクの木）」と呼ばれる場所へと運ばれた。そこは、聖女が亡くなる前に、自身の遺体を埋葬してほしいと遺言していた場所であった。　民衆は皆、彼女の遺体が寝台に乗せられて運ばれる際、天に輝く星の十字架の冠が寝台の後を追うのを再び目撃した。そして再び、寝台が安置されると、その冠も上空に留まった。埋葬が行われた際、近くで見ていた人々は、聖遺物に掛けられていた覆いを細かく切り分け、様々な病気の治癒を願って信仰をもってそれらを保管した。　司教は、慣例に従って聖クセニアの聖なる遺体に聖油を塗った後、それを新しい棺に納めた。尊い埋葬が執り行われるやいなや、天に輝いていた星の冠と十字架はたちまち見えなくなった。その際、聖なる棺からは、信仰をもってそこを訪れたすべての人々に多くの癒しがもたらされた。

しばらくして、聖クセニアの侍女の一人が亡くなり、その後まもなく、もう一人の侍女も永遠の命へと旅立った。二人はともに、聖なる女主人の足元に埋葬された。もう一人の侍女が息を引き取ろうとした時、すべての修道女たちが彼女の元へ駆けつけ、彼女に懇願して、女主人クセニアのすべての行いについて語ってほしいと頼んだ。　彼女は、すでに死の床にあることを悟り、聖女についてすべてを詳しく語った。聖女がどこから来たのか、両親は誰なのか、どのような理由で二人の侍女を連れて家や故郷から逃げ出したのか――そして、どのようにして自分の名前を隠していたのか。　というのも、彼女の本名はエウセビアであったが、神への愛のために放浪の旅に出ていたため、クセニアと名乗っていたからである。こうして、それまで知られていなかったキリストの花嫁クセニアの生涯について、皆が知ることとなった。

かくして、この聖女は神に喜ばれた。この世においては旅人であり、天においては市民であった。彼女は肉体に宿っていたが、無形の天使たちに匹敵した。彼女は衣服を脱ぐように肉体から解放され、蛇を踏みつけるように悪魔を打ち負かした。　彼女は世のすべてを塵芥と見なしたが、その汚れなき処女性を底知れぬ宝として守り抜いた。彼女は愛によってキリストの花嫁となり、信仰の冠を戴き、望んだものを得て、今や不死の花婿の宮殿で喜びに満ちている。　彼女は祈りによって信者た

ちを大いに助けている。なぜなら、死は彼女の力を滅ぼすことも、彼女の　の善行の範囲を何らかの境界で制限することもなかったからである。彼女がキリストのために多くの美徳を積んだゆえに、キリストもまた、愛する花嫁の聖なる祈りを受け入れ、彼女のために私たちに多くの恵みを示してくださるのだ。

聖クセニアの帰天から数年後、彼女の霊的指導者であった尊者パウロ司教も帰天した。彼もまた、最期まで神に喜ばれる生き方をした。なぜなら、彼の祈りによって悪霊が追い払われ、あらゆる病が癒やされたからである。　彼はかつて修道院長を務めていた聖使徒アンドレイ教会に埋葬され、その聖なる魂は聖人たちの栄光のうちに神の御前に現れた。　神の御前で私たちのために温かく執り成してくださる彼の取り成し、クセニアという名を受けた尊者エウセビアの祈り、そして彼女の二人の聖なる女僕たちの執り成しによって、主が今、また常に、そして世々限りなく、御慈悲を私たちに授けてくださいますように。アーメン。

コンダク、第2調:

クセニアよ、あなたの比類なき記念を祝し、愛をもってあなたを崇める私たちは、あなたに癒しの力をすべて与えてくださるキリストを讃えます。どうか、私たちすべてのために、常にキリストに祈ってください。

聖殉教者バビラ・シチリアスおよびその弟子ティモテオとアガピオスの記念日

記念日：1月24日

聖バビラは東方、栄光ある都市アンティオキア[1418] の出身であり、その両親は高貴で敬虔な人々であった。

彼は故郷の町で教育を受け、主の戒めを教え込まれ、常に神へと導く聖書を早いうちから熱心に学びました。　幼い頃から聖人はキリストを愛し、この世を捨てた。彼は早くに実家を離れ、自分の財産を貧者や孤児、未亡人たちに分け与え、あらゆる世俗の虚栄を拒んで山の頂上に住み着き、そこで沈黙を守り続けた。彼にはアガピオスとティモテオという二人の弟子がいた。　この至福の沈黙の聖人は、長老の位を授かり、自身に与えられた聖職の恵みを敬虔に尊びました。しかし、執拗で血に飢えた異教徒たちが彼を地方総督に引き渡そうと企てたとき、聖人は弟子たちと共にローマを離れ、シチリアへ退きました[1419]、そこで一年間を過ごしました。 そこで彼は、神の恵みにより、多くの人々を啓発し、キリストの真理を理解へと導いた。

「山の上にある町は隠れることができない」（マタイ4:14）とあり、シチリアの総督も至福のバビルの存在を知るようになった。総督は、聖人と二人の弟子を捕らえるよう命じた。　その勇敢な僕がいかに大胆にキリストを告白したかを耳にした総督は、彼を弟子たちと共に鞭打ちやその他の拷問にかけた。血にまみれた聖なる殉教者たちは、シチリアの各都市を連れ回され、あらゆる手段で非人道的に侮辱された。　この拷問官は、市民を威嚇すると同時に、自身の怒りを鎮めようとしたのである。　しかし、聖なる殉教者たちは、永遠の来世の恵みを思い描きながら、その力を強めていった。ついに、処刑人たちは祝福された殉教者たちを剣で斬り殺し、その遺体を火の中に投げ込んだ。し

[1418] アンティオキアはオロンテス川沿いに位置し、かつてはシリアの主要都市であった。
[1419] シチリアは、アペニン半島の南、地中海に浮かぶ島である。

かし、炎は聖なる遺体には及ばず、信者たちの一部がそれらを回収し、同じシチリア島で尊厳ある埋葬を行った[1420]。

聖マケドニア・プスティニク（隠者）の記念日

記念日：1月24日

聖マケドニオスは、その修行の場として山々を選び、どこにも長く留まることなく、訪問者との会話を避けるために、フィニキア、シリア、キリキア[1421]の範囲内で絶えず場所を移し続けていた。聖人は45年間、小屋もテントも持たず、深い洞窟の中で暮らしながら、このように生活した。尊者マケドニオスが年老いたとき、彼を訪ねてきた巡礼者たちに、小さな小部屋を建ててくれるよう頼んだ。彼はその小部屋で二十五年を過ごし、近くに定住していた兄弟たちにも、外部の人々にも会わずに暮らした。聖マケドニオスは計七十年にわたり修業に励んだ。四十年以上にわたり、彼は穀物をすりつぶして水で湿らせたものだけを糧としていたが、その後、体力が衰えたため、少量のパンと水を口にするようになった。主は彼に奇跡を行う賜物を授けられた。尊者マケドニオスは悪霊を追い払い、様々な病を癒やし、その他の奇跡も行った。ある日、過食という病に苦しむ女性が聖マケドニオのもとに連れてこられた。彼女は一日に鶏を三十羽も食べていたのだ。親族たちは涙ながらに、聖人に病人の救いを懇願した。聖人の祈りによって、この女性は癒やされ、その後は一日に鶏の四分の一羽さえ食べられなくなった。地上で天使のような生涯を送り、預言の賜物に恵まれ、司祭職の恩寵に与ったマケドニオス聖人は、主のもとで安らかに息を引き取った[1422]。

2月7日

1月25日（旧暦）

聖父グリゴリオス・テオロゴス、コンスタンティノープル総主教の生涯

記念日1月25日

聖グリゴリオス・テオロゴスの故郷は、第二、すなわち南カッパドキアのナジアンゾスという町[1423]であり、その名にちなんで彼はナジアンゾスとも呼ばれている。彼の両親は高貴で由緒ある人々であった。父もまたグリゴリオスという名で、母はノンナであった。しかし、彼の父はもともと信仰を持たない者であった。というのも、父は異教徒、母はユダヤ人という、信仰を持たない両親の出身であったからである。彼は信仰において両親の両方に従い、異教の迷信とユダヤ教の不信仰の両方

[1420] 3世紀末。

[1421] これらの国々は地中海の北東岸に位置しており、南にはレバノン山脈、北にはアマン（アルマ・ダグ）山脈が海岸線に沿って連なっている。

[1422] 420年頃。

[1423] 第二カッパドキア、あるいは大カッパドキアは、小アジア東部の中央、ユーフラテス川上流の西側に位置する非常に広大な地域である。かつてカッパドキアはアジアの主要な国家の一つであったが、その後独立性を失い、ローマ帝国の属州としてその一部となった（紀元17年または18年）。– ナジアンズは、カッパドキア南西部にある小さな町である。現在、ナジアンズの跡地には、採石場が点在する不毛の地にある廃墟のみが残っている。

を固守していた。 これがいわゆるイプシスタリオス派の偽教義[1424] である。一方、聖グリゴリオスの母である至福のノンナは、キリスト教徒の両親の出身であり、彼女自身も敬虔なキリスト教徒であった。幼少の頃から彼女は敬虔さの中で育てられ、あらゆる知恵の源である神への畏れを最も完全な形で教え込まれた。　しかし、神の御定めに従い、彼女は信仰を持たない夫と結婚させられ、彼をも聖なる信仰へと導くこととなった。*「なぜなら、信仰を持たない夫は*、使徒の言葉によれば、*『信仰を持つ妻』によって聖別されるからである」*（Iコリント7:14）。そして、まさにその通りになった。ノンナは、絶えず神に導かれた言葉をもって夫を説得し、全力を尽くして神に夫のために祈り続けた結果、神の助けにより、夫をキリスト教の信仰へと導いた。　彼女の夫は、神から夢の中で次のような啓示を受けた。彼は、ダビデの詩篇の言葉を歌っているように感じたのだが、それは彼が口にしたことのない言葉であり、ただ、頻繁に祈りを捧げていた妻からかつて聞いたことがあるだけのものであった。彼自身は決して祈ったことがなかった。祈り方さえ知らなかったし、祈る気にもなれなかったのだ。　彼が夢の幻の中で歌っていた言葉は、次の通りであった。*「『主の家に参りましょう』と言われたとき、私は喜びました」*（詩篇121:1）。 この 歌っている間、彼は心に特別な甘美さを感じ、目を覚ますと喜び、その後、このことを妻に話した。妻は、神ご自身が夫を御自身の聖なる教会へと招いておられることを悟り、さらに熱心に彼にキリスト教の信仰を教え始め、彼を救いの道へと導いた。 その頃、ニカイアで招集された第1回全地公会議[1425] へ向かう途中、カッパドキアのケサリアの司教である聖レオティオスが、ナジアンゾスに立ち寄った。至福のノンナは夫をその司教のもとに連れて行き、グリゴリウスは聖人の手によって洗礼を受けた。　聖なる洗礼を受けた後、彼は真の完全なキリスト教徒にふさわしい、義にかなった神に喜ばれる生活を送り始めた。その際、彼は福音の宣教と善行においてこれほどまでに優れた功績を挙げたため、後に同じナジアンゾスで司教の座に選出された（これについては後述する）。

そのような夫と誠実な夫婦生活を送っていた至福のノンナは、男の子の母になりたいと願っていた。彼女は、すべての恵みの与え主である神に、息子を授けてくださるよう熱心に祈りを捧げ、まだ妊娠する前から、かつてアンナがサムエルを神に捧げたように[1426] 、その子を神への奉仕に捧げることを誓っていた。　主は、御自身を畏れる者たちの御心を叶え、その祈りに耳を傾けてくださる方であり、敬虔な妻の心の願いを聞き入れ、夜の夢の幻の中で、御自身の啓示によって、彼女から生まれる少年について予言された。そして、至福のノンナは、息子が生まれる前から、その顔立ちがどのようなものになるかを見、その名前もあらかじめ知っていた。 その後、彼女が男児を産むと[1427] 、夢の幻で予告されていた通り、父の名にちなんで彼をグリゴリウスと名付けた。彼女は神に深い感謝を捧げ、生まれた少年を神の摂理に委ねた。そして、祈りによって神から授かったものを、全き熱意をもって神への捧げ物とした。　しかし、その赤ん坊はすぐには洗礼を受けなかった。当時、多くのキリスト教徒の間には、洗礼を成人する年齢まで、また、私たちの主キリストがヨルダン川でヨハネから洗礼を受けた年――たいていは三十三歳半――まで延期するという自発的な慣習があった[1428] 。 そ

[1424] イプシスタリアン派という名称は、彼らが神を「至高の者」（ギリシャ語で「最高、至高」を意味する言葉に由来）として崇拝していたことに由来する。　彼らは自分たちが天から啓示を受けた者と自認し、キリスト教の思想に異教（ペルシャ）やユダヤ教の偽りの教えを混ぜ合わせていた。　偶像や生け贄を拒絶したイプシスタリア派は、光と火の象徴を通じて神を崇拝した。彼らは第一の日ではなく第七の日を聖別して守り、清い食物と不浄な食物に関するユダヤ教の規則を受け入れた。しかし、この宗派については、一般的にほとんど情報が伝わっていない。

[1425] 325年。

[1426] 列王記上 第1章

[1427] 聖グレゴリオス・テオロゴスは、329年頃、ナジアンゾスの南、その近くにあった両親の領地アリアンゼで生まれた。

[1428] 4世紀には、一般的に洗礼を成人するまで延期するのが慣習であり、時にはコンスタンティヌス大帝の場合のように、洗礼を受ける前に死ぬことへの懸念は、洗礼後に死に至る罪を犯してしまうことへの恐怖よりも小さいと考えられていたため、洗礼を遅らせることもあった。

の後、この慣習は正当な理由により、同じ聖グレゴリオス・テオロゴス、バシレイオス大聖人、グレゴリオス・ニッサス、および他の偉大な教父たちによって廃止された。このように、聖グレゴリオスは出生直後に洗礼を受けたわけではなく、キリスト教徒の間で受け入れられていた古来の慣習に従い、その洗礼はキリストの年齢に達するまで延期されたのである。

少年はキリスト教の慣習に従って育てられた。彼が就学年齢に達すると、直ちに学問の指導が始まった。 年を重ねるにつれ、グリゴリーは知性においても成長していった。その名「[1429]」にふさわしく、彼は分別があり、精神は冴え、学業に熱心で、知性において同年代の者たちを凌駕していた。少年時代であっても、成人して知性を十分に備えた者たちが学ぶ内容を理解する上で、彼にとって何の障害にもならなかった。　幼少の頃から、彼は長老にふさわしい振る舞いを示していた。子供じみた遊びや空虚な娯楽、あらゆる種類の娯楽を嫌悪し、それよりもはるかに優れたことに励み、怠惰に時間を費やすことなく学問に打ち込んでいた。　彼が青年期に達すると、敬虔な母は、多くの母としての教えを通じて、彼に敬虔さを説いた。彼女は、彼が自分の祈りの実であり、熱心な祈りによって神から彼を授かり、受胎する前からすでに彼を神への奉仕に捧げることを決めていたと語った。善良な青年は母の言葉を心に刻み、真の神であるキリストへの信仰、希望、愛において魂を照らされていった。何よりも彼は、魂の貞潔と身体の清らかさを愛し、また、最期を迎えるまで自分の純潔を厳重に守ることを自らの掟とした。　このことについては、一部は母からの度重なる心からの教えによって、また一部は青年時代に見た夢の幻によって、彼は導かれていた。後者について、彼はずっと後になって、次のように語っている。ある時、眠っている間に、白い衣をまとった二人の乙女が自分のそばに立っているように見えた。　二人はどちらも顔立ちが美しく、年齢も同じだった。彼女たちには、外見上の装飾品は一切なかった。金も、銀も、真珠も、宝石も、高価な首飾りもなかった。彼女たちは、柔らかな絹の衣にも、金の帯にも身を飾っていなかった。彼女たちは、顔の美しさにも、豊かな眉にも、　な髪にも、あるいは世俗の乙女たちが若者の心を惹きつけようと努めるような他のいかなる特徴にも、誇りを持っていなかった。　ただ清らかな白い衣を身にまとい、控えめに帯を締めた彼女たちは、頭だけでなく顔までもが薄いベールで覆われていた。その目は下を向いており、頬は少女らしい照れから赤らみ、貞節を物語っていた。唇は鮮やかな赤いバラの花を思わせ、　その沈黙は、この上ない謙虚さを物語っていた。聖グリゴリウスは彼女たちを見つめながら、心に大きな喜びを感じ、これらは地上の存在ではなく、人間の自然を超越した高次の存在であると考えた。彼女たちは、彼が自分たちを見つめることに大いに喜んでいるのを見て、彼を愛おしく思い、まるで自分の子供のように抱きしめた。　そこで彼は彼女たちに尋ねた。「あなたたちは誰で、どこから来たのですか？」最初の者は、自分は「純潔」であると答え、もう一人は「貞潔」と名乗った。その際、彼女たちは、栄光の王キリストの御座の前に立ち、天の乙女たちの美しさに心躍らせていると説明した。彼女たちはこう語った：

「わが子よ、我らと心を一つにしなさい。汝の心を我らの心と結び、汝の顔を我らに似せなさい。そうすれば、我らは、最も輝かしい光に包まれた汝を天へと昇らせ、不滅の三位一体の光のそばに据えよう。」

そう言い終えると、彼らは天へと昇り始め、まるで鳥のように上空へと舞い上がった。少年グリゴリーは、彼らが天の彼方に姿を消すまで、喜びに満ちた眼差しで見送った。　目を覚ますと、彼は言葉に尽くせない喜びを感じ、その心は歓喜で満たされた。この時から、彼は自らの貞潔を厳重に守ることに熱意を燃やすようになった。彼は、あらゆる美味な食事、酩酊、そして過食を避け、完全な禁欲をもってそれを守ろうと努めた。

聖グリゴリオスの誕生後、至福のノンナは、ケサリアという名のもう一人の息子と、ゴルゴニアという名の娘を産んだ。彼女は彼らを敬虔さと学問の中で育て上げた。　一方、至福のグリゴリウ

[1429] グレゴリウス――ギリシャ語の「bozvrou」に由来し、「目覚めている」「活気のある」という意味である。

スは、雄弁術や学問、そしてあらゆる世俗的なギリシャの学問を極めたいと願い、まず当時、学校や学問で名高かったパレスチナのケサリア[1430] へと向かった。そこで彼は、修辞学者のフェスペシオスを師とした。 その後、彼はアレクサンドリア[1431] へと移り、多くの賢者たちから知恵の宝を蓄え、知性を豊かにした。その後、彼はアテネ[1432] へ向かうことを望み、異教徒たちと共にエギナ[1433] 行きの船に乗り込んだ。 サモス島[1434] の近くを航行していたとき、海上で激しい嵐が吹き荒れた。皆は命の救いを絶望し、肉体の死を目前にして泣き叫んだ。一方、グリゴリイは、まだ洗礼を受けておらず、ただ教理の指導を受けていただけであったため、霊的な死を恐れて泣いていた。　彼は、かつて海上で起こった神の奇跡――イスラエル人が紅海を渡ったことや、ヨナが鯨の腹から救い出されたこと――を思い出していた。彼は叫び声を上げながら神に祈り、波に飲み込まれて死ぬことから救い出してくれるよう懇願した。この航海中の彼の苦難は、夢の啓示として両親に知らされていた。　両親は直ちに祈りを捧げ、神の前で　熱き涙を流し、海上で苦難に遭っている息子を助けてくださるよう神に懇願した。多くの者の益となるよう御自分のしもべグリゴリーを守り、彼を教会の柱として備えておられた神は、猛烈な嵐を鎮め、風を静め、海は完全な静寂に包まれた。　船に乗っていた者たちは皆、予想を超えて滅びから救われ、まるで死の縛りから引き抜かれたかのように、キリスト・神を賛美した。彼らは、グリゴリーの祈りの中で全能なる御名が呼び求められたことによってのみ、海が鎮められたことを知っていた。　さらに、聖人の旅の仲間であるある若者は、夜、嵐と荒波の最中に夢の中で、グリゴリイの母である至福のノンナが海の上を急いでやって来て、沈みかけていた船を受け止め、岸へと導くのを見た。　波が静まると、彼はその幻視を皆に語り、皆はグリゴリウスの神を偉大なる助け手として認め、神に感謝し、神を信じるようになった。さらに、ナジアンズで息子のために涙ながらに祈り、その後祈りの後に眠りについたグリゴリウスの父には、別の幻視もあった。　彼は、海上でグリゴリーを滅ぼそうとしていた凶暴な悪魔エリンナを目撃したが、グリゴリーはそれを両手で掴み、打ち負かした。この幻視によって、グリゴリーの父は息子が死の危機から救われたことを知り、妻と共に神に感謝を捧げた。

その後の航海を聖グリゴリウスは無事に終え、アテネに到着した。そこで世俗の学問を修める中、彼は並外れた鋭い知性と清らかな生活態度により、周囲の誰もが驚く存在となった。しばらくし

1430 ケサリア（地中海東岸）は当時、パレスチナで最も重要な都市の一つであり、司教の居所でもあった。そこには、3世紀の著名な教会作家であり学者である　オリゲネスによって設立され、その後、著名な教会史家エウセビオス（ケサリアの司教）や、その学識と聖なる生活で知られ、殉教して生涯を閉じた（記念日は2月16日）長老パンフィルといった傑出したキリスト教神学者たちの指導下にあった。 学校に加え、パムフィルによる尽力により、3万巻に及ぶ膨大な図書館が整備され、そのおかげで多くの教父や教会の教師たちが学識を身につけることができた。――しかし、パレスチナのケサリアで教育を受ける以前、聖グリゴリオス・ナジアンゾスはカッパドキアのケサリアで学問を修めていた。

1431 異教の学問の中心地であるアレクサンドリアには、古くから文学、数学、哲学を扱う有名な博物館があった。 しかし同時に、異教に対抗するものとして、使徒の時代からすでに、キリスト教の、いわゆる「求道者教育」あるいは「カテキズム」の学校も設立されており、そのキリスト教の将来に対する影響は多面的かつ計り知れないものであった。　伝承によれば、この学校の設立は、使徒であり福音書記者であるマルコ自身によるものと敬虔に伝えられている。当初、そこでは洗礼を受けようとする者たちへの初歩的な指導のみが行われていた。これは、アレクサンドリアの学校が「カテキズム学校」と名付けられていたことからも明らかであり、同時に、カテキスタ自身もそこで養成されていた。　しかしその後、アレクサンドリアの「カテキズム学校」は、世界的な教養と学問の中心地という立地を活かし、神学・学術的な教育機関としての性格を帯びるようになった。その輝かしい発展は、主に著名なパンテノスの功績、彼に劣らず傑出した弟子であり後継者であるアレクサンドリアのクレメンス、そしてさらにオリゲネスによる貢献によってもたらされたのである。

1432 ギリシャの古くからの名高い首都であるアテネは、当時、かつての栄光の影に過ぎなかったが、それでもなお、異教のソフィストや修辞家たちの学校が繁栄しており、それらがこの都市に、かつての栄光の面影を多少なりとも与えていた。

1433 エーギナは、ギリシャの東、中部ギリシャと南部ギリシャの間に位置するサロニコス湾の島である。

1434 サモス島は、エーゲ海（群島）の主要な島の一つで、小アジアの西岸近く、ミカレ岬の対岸に位置し、同岬とは狭い海峡を隔てている。

て、聖バシレイオスもまた、世俗の知恵を磨くためにアテネにやって来た。　グリゴリオスとバシレイオスの二人は、心からの友人となり、同居するようになった。彼らには一つの家、一つの食事、一つの精神、一つの知恵、一つの気質があり、まるで同母の兄弟のようであった。二人はアテネで名声と尊敬を集めるようになった。なぜなら、短期間のうちに彼らは師たちを凌駕したからである。　自らも弟子でありながら、師たちの師となったのである。ちょうどその頃、コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスがギリシャ人とローマ人を統治していたが、後に王となり、神から背いたユリアヌスは、アテネで哲学を学んでいた。グリゴリウスは彼についてしばしばこう語った。

「ギリシャとローマの地は、なんと大きな悪を育んでいることか！」

彼はすでに、これから起こるべきことを予見していたのである。

グリゴリウスとヴァシレイオスはアテネで長年にわたり暮らし、あらゆる学問を修め[1435]、それらを極めて熟達したため、やがてアテネの知恵のすべてを凌駕するに至った。　その後、ヴァシレイオスは、その伝記に記されているように、霊的な知恵を学ぶために、神に啓示を受けた人々のもとへエジプトへと旅立った。一方、グリゴリウスは、アテネの人々の懇願に説得され、教師の職に就くことになった。ヴァシレイオスの後、しばらくアテネに留まっていたグリゴリウスは、父がナジアンゾスで司教に任命されたという知らせを耳にした。　彼は直ちに、すでに三十歳になっていたが、故郷に戻って父のもとへ赴き、父の手によって聖なる洗礼を受けた。彼は直ちに世俗を捨てて荒野へ赴こうとしたが、父に引き留められ、父の家に留まることになった。　彼は、決して誓いを立てず、神の御名をむやみに口にしないことを自らの掟とし、生涯を通じてこの掟を守り通した。彼は絶えず聖書を読み耽り、昼夜を問わず神への黙想にふけり、幾度となく幻視の中でキリストを仰ぎ見た。　父は彼の意志に反して彼を長老に任命し、その後、彼を司教に叙任しようとしたが、聖グリゴリウスはそのような聖職や栄誉を避け、また修道者の沈黙を求め、密かに家を出て、ポントスにいる友人である聖バシレイオスのもとへ行った。　聖バシレイオスもすでに司祭であり、ポントスに修道院を設立し、そこには多くの修道士が集まっていた。彼はポントスからグリゴリオスに手紙を書き、執拗に彼を自分のもとへ招いた。こうして、彼らはかつてアテネでそうであったように、再び共に暮らし始め、互いに徳の模範となり、互いに模範として生き合った。　また、二人は共に修道士たちのために、断食生活の規則を著した。こうして聖グリゴリウスは聖バシレイオスと共に、かなり長い間を過ごした。

その間、グリゴリオスの兄ケサリウスが亡くなった。両親は彼の死を深く嘆いた。その際、父はグリゴリオスに手紙を書き、涙ながらに家に帰って老後の世話を助けてほしいと懇願した。　至福のグリゴリウスは、父の言葉を無視することを多少恐れる一方で、当時アリウス派の異端によって大いに混乱していた教会の必要性を認識し、　グリゴリウスの父も神学教育を受けていなかったため、部分的にその異端に惑わされていたが、ポンテからナジアンズへと戻った。　そこで彼は、年老いた父を教会運営や家事に際して助け、アリウス派の異端の害悪を父に説明し、父を正統信仰に確固たるものにした。

コンスタンティヌスの息子であるコンスタンティウス王[1436]の死後、ユリアヌスが王位に就き、その時、グリゴリウスが彼について語った預言が成就した。この不法者は大きな災いをもたらし、公然とキリストを否認し、キリストの教会に対する迫害を開始したのである。　聖グリゴリウスは、数多くの神に導かれた著作を通じて彼と戦い、その誤謬や有害な異教的傾倒、そして虚偽のギリシャ神話を暴いた。この法に背く者は長く統治することはなく、不名誉な最期を遂げた[1437]。彼の後を継

[1435] 彼らは文法、歴史、幾何学、天文学、算術、数学、医学の基礎、哲学、論理学を学んだ。古典（ローマおよびギリシャ）文学の学習には多くの時間が費やされた。多くのキリスト教徒は、偉大な異教の作家たちの著作を読むことを軽んじていたが、聖グリゴリオス・ナジアンゾスとバシレイオス大帝は、そのような偏狭な先入観を超越していた。

[1436] それは361年のことだった。

[1437] 363年。

いで敬虔な皇帝ヨヴィアン[1438]が即位し、キリストの信仰は再び栄えるようになった。ヨヴィアンの後を継いで即位したのはアリウス派のヴァレントであった[1439]。これにより、再びアリウス派の異端が広まり、正信徒たちは至る所で迫害を受けた。その頃、カッパドキアのケサレアにおいても、アリウス派は多くの人々を迷いへと誘い込み、キリストの教会に混乱をもたらした。　聖書に十分な造詣を持たなかったエウセビオス司教[1440]でさえ、揺らぎ始め、真の信仰からの逸脱を許すようになってしまった。このことを知った聖グリゴリオスは、彼に手紙を書き、アブ・バシレイオスに懇願して、迷いを正すためにケサリアに戻るよう勧めた。　また、聖グレゴリウスは聖バシレイオス本人にも手紙を書き、友愛に満ちた助言とともに、かつてエウセビウスに対して抱いていた怒りを忘れ、正信者たちを助けるためにケサレアへ赴き、アリウス派によって揺るがされていた教会を再び確固たるものにしてほしいと懇願した。　このようにして、聖グリゴリウスは自らの書簡によってエウセビオス司教と聖バシレイオスの間の和解を成し遂げ、聖バシレイオスがカッパドキアのケサリアに戻る道を開いた。彼が戻るとすぐに、アリウス派は恥をかかされ、そのうちの何人かは沈黙し、他の人々は逃げ去った。　エウセビオス司教は聖バシレイオスの帰還を喜んだ。彼としばらく親しく過ごした後、エウセビオスは死去し、その座には、彼の意思に反して、正統派によって聖バシレイオス大司教が就いた。異端者たちはこれに憤り、恨みを抱き、ティアン市をケサリアから分離させた。　当時、ティアンには[1441]、アンフィムという司教がいた。彼は表向きは正統派を装っていたが、実のところ異端者であった。彼は志を同じくする司教たちと共にバシレイオスから離反し、ティアンの大司教となった。　こうして彼はカッパドキア地方を二分し、その結果、教区の境界をめぐる長きにわたる論争が生じた。聖バシレイオスは、いくつかの都市や村落が自身の教区から離脱しつつあるのを見て、次のような策を講じることを思いついた。ケサリアとティアナの間には、サシマ[1442]という、取るに足らないあまり知られていない町があった。　聖ヴァシレイは、そこに新たな司教座を設け、敬虔な人物を司教として任命することを考えた。彼はこれにより、争いを収め、多くの人々を信仰の道に留めておけることを望んでいた。　この目的のために適任となる経験豊富な人物を思い浮かべられなかった彼は、友人の聖グリゴリオスに手紙を書き、サシマの司教座への叙階を受けるよう懇願した。なぜなら、彼ほどそこに敬虔さを確立できる人物は他にいなかったからである。聖グリゴリオスは手紙の中で執拗にこれを拒み続けた。　バシレイオスは何度も彼に手紙を送ったが、望む結果が得られなかったため、自らナジアンゾスへと赴き、そこで、ナジアンゾスの司教であり、聖グリゴリオスの父である老グリゴリオスと相談した後、彼と共に、友である聖グリゴリオスに対し、司教の聖職に就くよう説得し始めた。　こうして、グリゴリウスはサシメの司教座に就くことを余儀なくされた。サシメを自らの教区の管轄内に含めていたティアンの大司教アンフィムは、このことを知ると、グリゴリウスが司教座に就くのを阻止する目的で軍隊を率いて現地に向かい、グリゴリウスの移動経路で待ち伏せをした。　聖グリゴリウスは、旅の途中でアンフィムの陰謀と彼が率いる軍隊の存在を知ると、ある修道院に身を隠し、そこで病人の世話をした。その後、彼が望む静寂を求めて荒野に身を寄せた。しばらくして、 両親の懇願により、彼は再びナジアンズに戻った。 両親はすでにかなり高齢となっており、年老いた身ゆえに彼の助けを必要としていた。とりわけ、彼らには彼以外に子供がいなかったからだ。もう一人の息子ケサリウスは、すでに述べたように亡くなっており、娘のゴルゴニアもまた、

[1438] 在位は363年から364年まで。

[1439] ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[1440] ケサリアの司教エウセビオス・パンフィルスは、その博学さで知られ、教会史やパレスチナの殉教者に関する書物を著し、コンスタンティヌス大帝の生涯を記した。　しかし、その博学さにもかかわらず、残念ながら正統信仰から逸脱し、アリウス派に傾倒していた。もっとも、正教会から直接離反したわけではない。

[1441] ティアナは、タウロス山麓、キリキアの峡谷に近い、カッパドキアの古代都市である。

[1442] サシマは、地域の分割に伴い新たに形成された二つの教区の境界に位置し、ティアナから50ヴェルスタ、ナジアンゾスから36ヴェルスタの距離にあった。

すでにこの世を去っていた[1443]。 二人の葬儀において、兄弟であるこの聖グリゴリウスは、弔辞を捧げて彼らを偲んだ。その後、彼は両親のもとで、まるで瞳の如く大切にされ、両親の願いを叶えないわけにはいかなかった。彼は両親の老後を支え、彼らの死後には、慣例に従って葬儀を執り行わなければならなかった。

聖グリゴリウスが荒野からナジアンズに戻ったとき、すでに老衰で衰弱していた父グリゴリウスは、生前に息子をナジアンズの司教座に就かせたいと願っていた。 そのために、父は説得や懇願だけでなく、誓いをもってまで息子を説得した。聖グレゴリオス自身も、教会の繁栄への配慮を放棄するつもりはなく、父の命令に背くつもりもなかったが、司教の座に就くことだけは決して望んでいなかった。

「父よ、あなたがまだ生きていて、永遠の世界へ旅立たない限り、あなたの座を受け継ぐことは私にはできません」と彼は言った。

父は、もはや息子に王位を継ぐよう強く求めず、ただ教会の世話だけを彼に託して、こう言った。

「私が生きている間は、わが子よ、私の老後の支えとなってくれ。そして、私が死んだ後は、お前の望むままにすればよい。」

まもなく、聖グリゴリオスの父である、高齢のナジアンゾス司教は、司教の座に45年間在任した後、[1444] に召天した。彼は計100年を全うした。 彼の葬儀は、葬儀に参列した聖バシレイオス大主教の立ち会いのもと、盛大な式典をもって執り行われた。聖グリゴリオスの母であり、バシレイオスの友人でもあったノンナはまだ存命であったが、彼女もまもなく主のもとへ帰った。彼女もまた、100歳という長寿を全うしたのである[1445]。 聖グリゴリウスは、敬虔な両親を葬り終え、彼らの世話から解放された。しかし、彼はさらに名声からも解放されたいと願っていた。とりわけ、故郷の住民たちが、父の後を継いで司教の座に就くよう彼に強く迫っていたからである。彼は密かにセレウキアへと向かい[1446]、そこで聖第一殉教者フェクラの教会に身を寄せた。 そこから、バシレイオス大帝の友好的な要請を受けて呼び戻され、帰国後は救貧院や病院の運営を引き受けた。 聖バシレイオスは、身を寄せる場所のない人々に宿を提供するため、広大な建物を建設し、そこに貧者や病人、未亡人、孤児、旅人を集め、彼らの日々の食事を手配するとともに、彼らの世話は愛する友に託した。 このようにして、聖グリゴリウスは、貧しい人々の養い手、病人の世話役、旅人の慰め手となった。

この頃、長年にわたり神の教会を混乱させてきたアリウス派の異端から、まるでヒュドラの新たな頭のように[1447]、新たな異端が現れ、多くの人々を惑わした。それは、聖霊を冒涜したマケドニウス派の異端であった。 アリウス派は、父は被造物ではなく、永遠の神であるのに対し、子は被造物であり、しかも父と同質でも、父と同一の本質を持つものでもないと告白していた。 一方、マケドニア派は御子を父と同等であると認めたが、聖霊を冒涜し、ある者は聖霊を「被造物」であり「神」ではないと主張し、またある者は聖霊を「神」でも「被造物」でもないとして認めなかった。 聖グリゴリオスは、彼らが御子を崇めつつも聖霊を軽んじていたことから、彼らを「半アリウス派」と呼んだ。この異端は、特にビザンティウムで広く蔓延していた。 聖バシレイオス大主教の説得と、

[1443] それは368年のことだった。

[1444] ナジアンズの司教であり、聖グレゴリオス・テオロゴスの父であるグレゴリオスは、374年に逝去した。父の追悼の言葉を捧げた後、聖グレゴリオス・テオロゴスは、父との約束に従い、しばらくの間ナジアンズの信徒たちを導いた。

[1445] 聖グレゴリオス・テオロゴスの敬虔な母も、夫と同様に、同じ374年に逝去した。彼女は聖人の列に加えられており、その記念日は8月5日に祝われる。

[1446] セレウキアとは、その多くがセレウコス1世によって築かれた多くの都市の名称である。ここでは、小アジア南東部の山岳地帯にあるイサウリアのセレウキアを指す。

[1447] ヒドラとは、古代ギリシャ神話に登場する、蛇に似た9つの頭を持つ怪物であり、その頭は切り落とされるたびに再び生えてきた。

公会議に集まった他の多くの正教会の司教たちの総意により、深い知恵と雄弁さを兼ね備えた聖グリゴリオスは、異端の詭弁を論破し、聖なる信仰の正しい教義を守るために、ビザンティウムへ赴くことになった。しかし、彼がビザンティウムへ向かう前に、聖バシレイオスは短い闘病の末、[1448] この世を去った。こうして、全世界を照らす信仰の灯は消え去った。　聖グリゴリウスは彼のために深く嘆き、葬送の説教をもって彼を偲んだ後、自らの使命の道へと旅立った。彼が威厳ある都市ビザンティウムに到達すると、敬虔なキリスト教徒たちによって喜びをもって迎えられた。彼は、キリストの教会が極度に衰退しているのを目の当たりにした。　信者の数は容易に数え切れるほどで、都市の大部分が異端の道に迷い込んでいたからである。荘厳で豪華に装飾された神の聖堂はすべて、異端者たちの手に落ちていた。異端者たちに拒絶された、聖アナスタシアの小さくて老朽化した聖堂ただ一つだけが、正教徒に委ねられていた。　聖グリゴリウスは直ちに、かつてペリシテ人に対して投石器で立ち向かったダビデのように、異端者たちに対して神の御言葉という武器を手に取り、論争で彼らを打ち負かし、彼らの教義上の誤りを、まるで蜘蛛の巣のように打ち砕いた。　彼は日々、神に導かれた知恵に満ちた言葉によって、多くの人々を迷いから正統信仰へと立ち返らせ、短期間のうちにキリストの教会の信徒の数を計り知れないほど増やした。　一方、異端者の数は日ごとに減少し、聖書にダビデの家とサウルの家について記されている言葉、*「ダビデの家はますます強くなり、サウルの家はますます弱まった」*（列王記下3:1）が実現した。　アリウス派やマケドニア派によって教会に与えられた害がまだ癒えぬうちに、シリアから新たな異端者アポリナリウスが現れた。彼は主の受肉について誤った解釈をしていた。彼は受肉を虚偽であると主張し、キリストには魂がなく、その代わりに神性があるとした。　雄弁でギリシャの知恵に長けていた彼は、多くの人々を自らの異端に引き込み、その弟子たちは至る所に散らばり、神学の知識に乏しい人々を捕らえて、まるで餌のように彼らを滅びへと誘い込んだ。　そこで再び、敬虔な善き修道士である聖グリゴリウスは、偉大な功業に取り組み、異端者たちと戦いを繰り広げ、正しい信仰から逸脱した者たちを糾弾し、懇願し、戒め、ある者たちを信仰に堅く立たせ、またある者たちを堕落から立ち直らせた。　その頃、アポリナリウスの弟子たちは民衆の間を駆け回り、聖グリゴリウスがキリストを二つの人格に分けているかのように中傷した。彼らはこうした虚偽を至る所で熱心に広め、民衆の聖人に対する怒りと憎悪をかき立てた。何しろ、水滴も頻繁に落ち続ければ石を穿つものだからである。　巧妙に練られた異端の言葉を理解できず、キリストの受肉という秘儀の深遠さを悟ることのできない人々は、異端者たちを真の牧者として崇め、彼らを正統な教師として認めた。一方、福音を説いた真の牧者は、異端者と見なされた。群衆を扇動して、彼らはかつてユダヤ人たちが聖なる最初の殉教者ステファノに投げつけたように、聖人に石を投げつけた。しかし、神がその御心に適う者を守っておられたため、彼らは彼を殺すことはできなかった。　その悪意を満足させることができなかった彼らは、聖人に残忍に襲いかかり、まるで反乱者であり、騒乱や動乱の首謀者であるかのように、彼を市の長に引き渡して裁きにかけた。聖人は、いかなる罪にも無実であり、しかも柔和さと謙遜さを備えていたため、この災難と民衆による理由なき攻撃のさなか、ただ神、すなわち御自身のキリストに祈った。「キリストよ、御名のゆえに、*『たとえ私が死の陰の谷を歩むとしても、悪を恐れない。あなたが私と共におられるから』*」（詩編22:4）。長官は、彼の無実を知り、人々の不当な悪意を目の当たりにして、彼を釈放した。こうして彼は殉教者となったが、傷や拷問を受けることはなく、冠を戴く者となったが、傷跡もなく、ただただキリストのために苦難に遭いたいという願いだけを抱いていた。

このような偉業と異端者たちとの粘り強い闘いによって輝きを放った聖グリゴリウスは、万人に知られるようになった。彼の知恵は至る所で称賛され、その功績により、彼は聖なる正教会全体から新たな名――神学者という名――を授けられた。それは、最初の神学者である聖ヨハネ・ザ・バプティスト、すなわちキリストの愛する弟子に倣ったものである。　この「神学者」という称号は、す

[1448] 聖バシレイオスは379年に死去した。

べての偉大な教師や聖人たちに共通するものではある。なぜなら、彼らは皆、聖三位一体を尊く称えながら神学を論じていたからである。しかし、聖グリゴリウスにはこの称号が特別な形で定着し、彼の別名となった。それは、多くの偉大な異端者たちに対する彼の勝利と栄光を称える印として、教会によって与えられたものである。　この時から、人々は皆、彼を「神学者」と呼ぶようになった。彼は正教徒から深く愛されていた。敬虔な人々の総体は、彼を総主教の座に就かせたいと願っていた。さらに、アタナシウス大主教の後を継いで座についたアレクサンドリア総主教ペトロス[1449] も、聖グリゴリオス「神学者」に書簡を送り、キリストの教会のために多大な労苦を捧げた最もふさわしい人物として、コンスタンティノープル総主教の座を彼に委ねた。しかし、直ちに悪意ある者たちからこれに障害が生じた。

コンスタンティノープルには、キニク派[1450] に属する、マクシムという名のギリシャ人哲学者（エジプト出身）がいた。彼は狡猾さ、欺瞞、偽善、そして悪意に満ちた意図で知られていた。　彼は至聖なる牧者、神学者グレゴリオスの元を訪れ、ギリシャ式の無神論を捨て、洗礼を受けた後、聖なる教会の懐に入った。しかし、彼は世の虚栄に溺れ、敬虔さを羊の衣のように偽って身をかくし、心の中では依然として狼のままであった。その本性は、間もなく露見することとなった。　神の聖人グリゴリオスは、彼の狡猾さに気づくことなく、異教からキリスト教への改宗を偉大な功績と見なし、彼を同居人兼友人として迎え入れ、食卓を共にする仲間とし、やがては教会の聖職者の一員とした。　しかし彼はユダの例に倣い、師であり霊的な父である人物から離反することを企て、彼に対する闘争を始めた。その企てを実行に移すため、彼は、神を恐れず、陰謀に長けたある長老を共犯者として見出した。　彼と結託して、マクシムスはコンスタンティノープルの総主教の座を奪うことを目的として、狡猾かつ秘密裏に動き始めた。しかし、そのような企てを成功させるには、賄賂や贈り物で大多数を味方につけるために多額の資金が必要であったため、彼らはまず何よりも資金の調達に奔走し始めた。　悪魔の助けにより、彼らはまもなく次のようにして望むものを手に入れた。ファゾス島（[1451] ）から、ある司祭がビザンティウムを訪れた。彼は、プロコンニス（[1452] ）から運ばれてくる教会建築用の大理石板を購入するため、多額の金銭を携えていた。彼を様々な実現不可能な約束で惑わせた後、　陰謀者たちは、その邪悪な企てを成し遂げるのに十分な金を奪い取り、アレクサンドリアの総主教ペトロスや、その司教たち、聖職者たちに多くの豪華な贈り物を密かに送り、マクシモスを総主教の座に就かせる司教たちをビザンティウムに派遣するよう、熱心に懇願した。　ペトロスは贈り物に惑わされ、かつて聖グリゴリオスに宛てた手紙のことをまるで忘れたかのように、直ちに彼らの要請を受け入れた。彼はエジプトの司教たちをコンスタンティノープルへ派遣し、彼らは遅滞なくそこに到着した。　司牧者であるグリゴリウスにも、聖職者たちにも、指導者たちにも誰にも顔を見せることなく、彼らはマクシムスを伴って早課が行われている最中の教会に現れ、すでにマクシムスを大司教に叙任しようと叙階式に取りかかっていた。聖グリゴリウス・テオロゴスは病に伏していた。　このことはたちまち皆の知るところとなった。教会には直ちに長老たち、聖職者たち、そして正信者も異端者も問わず大勢の民衆が集まった。皆、この巧妙な策略と違法な叙階に驚き、怒りに燃え上がり、到着した司教たちに向かって叫び立て、この全く違法な行為をあらゆる手段で阻止しようと試みた。　恥辱のうちに教会から追い出された彼らは、あるフルート奏者の家へ向かい、そこで不

[1449] アレクサンドリア総主教ペトロス2世は、373年から380年にかけて教会を統率した。

[1450] アレクサンドリアでは無名だったこの人物は、実のところ、聖職者の中でも最悪の類に属する冒険家であった。彼は、虚栄心強い平信徒、偽善的なキリスト教徒、そして見せかけだけの哲学者という、不愉快な混合体そのものだった。外見上は禁欲主義者を装い、キニク派（地上の富を完全に軽蔑し、肉体的欲求を可能な限り減らすことを目標とした哲学者たち。そのため、極端なまでにぼろぼろの服を着て、あらゆる世俗的な快適さを拒絶したが、それはしばしば偽善的なものであった）の外套を身にまとっていた。

[1451] ファゾス（現在のタソス）は、エーゲ海（群島）に位置する島で、フラキアの海岸からほど近い。

[1452] プロコンニス――プロポンティス（マルマラ海）にある重要な島。大理石の採石場として知られている。

正な叙階を完了させ、その後、聖職者や世俗の人々からなる側近たちの協力のもと、マクシムをコンスタンティノープル総主教として宣言した。　その中には、罪を犯したために教会から破門された者もいれば、金で雇われた者、あるいは贈り物や栄誉の約束に惑わされた者もいた。そうした者たちは皆、マクシムスの支持者であり、彼を擁護していた。　一方、大多数の、しかも最も尊敬される市民たちは怒りに燃え上がり、マクシムスを鋭い非難と責め言葉で糾弾した。彼らは、聖グリゴリオス・テオロゴス自身に対しても、そのような人物を同居人として受け入れ、友情を授けたことに対して不満を表明した。

聖人は彼らにこう答えた。

「諸君、私がこの男の悪意を予見せずに彼に恩恵を与えたからといって、私を責めないでほしい。他人の悪意を予見できないことについて、果たして私たちが罪を犯していると言えるだろうか？人の内面の秘密を知ることは、ただ神のみに属するものです。そもそも、私たちに「父のように、愛をもって、私たちのもとに来るすべての人を温かく迎え入れよ」と命じているのは、まさに律法そのものではないでしょうか。*「わたしのもとに来る者」*――救い主はこう言われます――*「決して追い出さない」*（ヨハネ6:37）。私にとって重要なのは、マクシムがギリシャの迷いから聖なる洗礼へと至り、ヘラクレスへの奉仕[1453] の代わりに、聖三位一体に仕えるようになったという事実そのものでした。さらに、　彼は、たとえ偽善的ではあったにせよ、徳のある人物のように見えました――しかし、彼の偽善と悪意が明らかになったのは、今になってからです。　私たちには、そのような事柄を究明する権限はない。私たちは人間の思いに踏み込むことはできず、未来も知らない。ただ、神がそれを私たちに明らかにしてくださる時だけである。私たちは顔を見るだけだが、心を見られるのは神である。

この言葉によって民衆は安心し、その後、聖グリゴリオス・テオロゴスに対してさらに深い愛を抱くようになった。　一方、マクシムスは、彼を司教に叙任したエジプトの司教団と共に、当時軍を率いてテッサロニキに滞在していた敬虔なテオドシウス大帝[1454] のもとへ赴き、コンスタンティノープルの主教座に対する自身の権利の承認を請願した[1455] 。この追放された男は、教会の規則に基づいて承認を得ることはできなかったため、皇帝の勅令によって教会を統治する権力を得ようとしたが、その目的は聖職者として奉仕することよりも、むしろ人々を苦しめることにあった。敬虔な皇帝は激しく怒り、脅しをかけてマクシムスと彼と共にやってきた司教たちを追い払った。　そこで彼らは全員アレクサンドリアへと向かい、そこでマクシムスは同様の陰謀を企て始めた。アレクサンドリア教会の聖職者たちに多額の金で買収した後、マクシムスは大胆かつ厚かましくも総主教ペトロにこう言い放った。「コンスタンティノープルの教皇座を私に手配するか、さもなければ私はお前の座から退かない」。　彼は狡猾な手段を用いて総主教を陥れようとしていたが、もし市の長がすぐにこのことを知らなければ、その悪意に満ちた企てを確実に実行していただろう。民衆の間に動揺が広がることを恐れた市の長は、マクシムを恥辱のうちにアレクサンドリアから追放した。

一方、聖グリゴリオス・テオロゴスは、コンスタンティノープルで肉体の病にひどく苛まれ、コンスタンティノープル教会の運営から手を引かざるを得なくなり、故郷のナジアンゾスへ戻りたいと願っていた。彼は民衆に最後の言葉を告げることを決意し、その中で信仰を熱心に守り、善行を積むよう説いた。　民衆は、彼がコンスタンティノープルを去ろうとしていることを悟った。教会には叫び声と激しい泣き声が響き渡った。皆が口を揃えてこう言い始めた。

[1453] ヘラクレス――古代ギリシャの伝説に登場する英雄。古代ギリシャ人の信仰によれば、超自然的な力を持ち、人間の肉体的な力を体現する存在であり、後に彼らから最も愛された神の一人として崇められていた。

[1454] 在位は379年から395年まで。

[1455] テッサロニキ、別名ソロウンは、マケドニアの極めて重要な古代都市であり、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフラキア湾の奥深くに位置していた。

「父よ！　私たちのもとを去ることは、聖三位一体の教えまでも連れ去ることになります。あなたがいなければ、この街には聖三位一体の正しい信仰も残らないでしょう。あなたと共に、正教と敬虔さもこの街から去ってしまうのです。」

こうした叫び声と民衆の泣き声を耳にした聖グリゴリウスは、その決意を撤回し、次の公会議が招集されるまで彼らと共に留まることを約束した。当時、間もなく司教たちが集まり、総主教の座にふさわしい人物が選出されるものと期待されていた。　聖グリゴリウスもまた、まさにそれを待っていた。すなわち、総主教の座にふさわしい牧者が就くのを見て初めて、彼は故郷に戻るつもりだった。その間、敬虔なテオドシウス皇帝は蛮族と戦いを繰り広げ、彼らに勝利した後、凱旋してコンスタンティノープルに戻った。　アリウス派は相変わらず総主教座教会を掌握しており、アリウス派のデモフィルを総主教として擁していた。一方、正教徒の手元には、聖アナスタシアの小さくて老朽化した教会が残るのみであった。皇帝はデモフィルを呼び出し、正教の信仰を受け入れるか、さもなければその座を他者に譲るかのいずれかを選ぶよう説得した。　デモフィルは心が頑なであったため、自らの誤った教えを捨てるよりは、むしろ座を退くことを選んだ。そこで王は、聖グリゴリオス・テオロゴスと正教徒の全共同体に、アリウス派が40年間支配していた大聖堂をはじめ、他のすべての教会を譲り渡した。　しかし、神の司教グリゴリウスが聖職者たちや民衆と共に教会に入ろうとしたとき、アリア派の群衆はまるで戦いに備えるかのように武装し、教会の周囲を取り囲んで正教徒の入り口を塞ぎ、聖人に死を脅かした。　アリア派は、勇敢で大胆な若者を一人雇い、彼に気づかれないようにグリゴリイに近づき、その腹に剣を突き刺すよう命じた。しかし、神は御自身の忠実な僕を救われた。　すると、アリウス派の間で叫び声や騒ぎ、ざわめきが巻き起こった。もし皇帝自らが現れ、聖なる司教を教会内に導き入れなければ、彼らは間違いなく正教徒たちに暴行と悪行を加えていたであろう。　一方、正教徒たちは大きな喜びと歓喜のうちに叫び、神を賛美し、感激の涙を流し、両手を天に掲げた。実に、長年の時を経て、彼らは再びその聖なる場所を取り戻したのだ！　その際、彼らは満場一致で皇帝に呼びかけ、グリゴリイ・ボゴスロフを総主教の座に就けるよう懇願した。聖グリゴリイは、絶え間ない肉体の病により著しく衰弱しており、民衆に向けて演説する力さえなかったが、一斉に上がる叫び声を前に、自身の聖職者の一人を通じて次のように宣言した。

「子らよ！今こそ、三位一体の唯一の神に感謝と賛美を捧げる時である。神は、我々に再びその聖なる教会を受け入れることを許してくださったのだ。それゆえ、今は神の偉大なる慈しみを賛美し、総主教の座については、別の機会に改めて考えよう。」

民衆は、聖人のこの答えを聞くと、叫ぶのをやめた。その後、聖体礼儀が執り行われると、皆は神を賛美しながら散っていった。一方、アリウス派の人々は、恥じ入って沈黙した。

敬虔なテオドシウス王は、聖グリゴリオス・テオロゴスをまるで自分の父のように深く尊敬していたが、彼は王のもとへ頻繁には訪れなかった。ソロモンの言葉、*「友の家に頻繁に訪れてはならない。さもないと、彼はあなたにうんざりし、あなたを憎むようになる」*（箴言25:17）を心に留めていたからである。　聖人は、常に民を教え導き、病人を訪ねて治療し、不当な扱いを受けた者を助け、弱者を守り、自らの羊の群れを異端の迷いから清めることに、大きな熱意を注いでいた。彼は時折、静寂を愛し、休息によって頻繁な病気を癒やし、それによって自らの体をさらなる労苦に耐えられるようにしようと努め、村へと身を引くこともあった。　多大な教会の財産を所有していたにもかかわらず、彼は銀貨を一枚たりとも私物化せず、また教会の建設担当者に対し、どれだけの資金が集められ、どれだけの支出があったかを問いただすこともなかった。後者については、司教の務めではなく、世俗の統治者の務めであると考えていた。彼はすべての人に対し、清い良心を保つよう戒めた。　絶え間ない労苦と高齢により体力が尽き果てたある日、彼は病に倒れ、床に伏した。これを知った民衆が彼を見舞いに訪れた。彼はベッドに腰を下ろし、こう尋ねた。

「何をお望みですか、子供たちよ？　なぜ私のところへ来たのですか？」

訪れた人々は彼に頭を下げ、彼のすべての労苦に感謝した。異端から街を清めたこと、長年にわたりアリウス派の手にあった聖なる教会を正教徒に返還したこと、そして教えと牧会的配慮によってすべての人々に多くの恩恵をもたらしたことに対してである。

「さて、父よ」と彼らは言った。「もしあなたが神のもとへ旅立たれるのなら、あなたの羊の群れと、敬虔な王、そして教会全体のために祈ってください。」

聖人は、自分の病は死に至るものではないと告げ、その後、いつものように彼らに教えを説いて、帰らせた。彼らが散り散りになり始めたとき、一人の若者が残って、聖人の足にすがりつき、涙とすすり泣きながら、自分の罪を赦してほしいと懇願した。 聖人はその罪が何であるかを尋ねたが、若者は何も答えず、ただ泣きじゃくりながら許しを請うばかりだった。そこにいた者の一人が聖人に言った。

「この男こそ、あなたを殺そうとした者です、神父様！異端者たちの煽動により、彼はあなたの腹に剣を突き刺そうとしましたが、キリストがあなたを守ってくださいました。今、彼は悔い改めて、許しを請っているのです。」

聖人は若者にこう言った。

「我らの主イエス・キリストが、愛する子よ、あなたに憐れみを示し、あなたの罪を赦してくださいますように。ただ、これからは私たちの仲間となりなさい。異端を捨て、キリストなる神に立ち返り、忠実に彼に仕えなさい。」

こうして聖人は青年を赦し、彼を解放した。このことを知った街中の人々は、聖人の寛大さに感嘆し、彼への愛をさらに深めた。 その直後、ビザンティウムに司教たちが集まり始めた。その目的は、一部には帝都における総主教の就任式のためであり、また一部には、第二回全地公会議において異端を破門するためであった[1456] 。正教会の司教百五十名が集まると、聖メレティオス・アンティオキアが公会議の議長に選出された。 その時、聖グリゴリオス・テオロゴスは、自らの意思に反し、病に伏せながらも悲しみを抱きつつ、皇帝と民衆全体の懇願を受け入れ、総主教の座に就いた。

数日後、アンティオキアの総主教である聖メレティオスは病に倒れ、主のもとへ召された。その後、エジプトとマケドニアからの司教たちが現れ、グリゴリオスが総主教に任命されたこと、とりわけ彼らが不在の間に選出されたことについて不満を表明し始めた。 彼らは、この任命は不適切であると主張した。なぜなら、グリゴリウスはアレクサンドリアの総主教ではなく、アンティオキアの総主教によって任命されたからである。一方、アレクサンドリアの総主教座はローマに次ぐ第一位の地位であり、コンスタンティノープルの総主教の任命はそこから発せられるべきものだったからである。

司教たちの間には大きな意見の相違、混乱、そして争いが生じた。ある者はグリゴリオスの任命は正当であると主張し、別の者はこれに異議を唱え、司教たちは互いに争い合った。聖グリゴリオス・テオロゴスは、自身のせいで司教たちの間に生じた争いや不和を見て、公会議の場で彼ら全員に向けて次のように語った。

「聖なる、そして尊敬すべき牧者たちよ」と彼は語った。「私はコンスタンティノープル教会に対する権力を求めるつもりはなかった。もし私の後継者と労苦によって、その権威が高まり、確固たるものとなったのであれば、神に喜ばれること、そして神から報いを受けることを期待するだけで、私には十分である。 ただ、私の霊的な羊たちの愛と、聖職者たちの総意によって、私はやむを得ずその座を受け入れたのである。しかし今、多くの人々が私に対して敵意を抱いているのを見る。どうか知っておいてほしい。私は富も、高い地位も、栄誉も求めてはいない。コンスタンティノープル総主教という称号を名乗ることを望まず、悔いもなく司教職を去る。諸君は互いに協議し、望むま

[1456] 第2回全地公会議は381年に始まり、3年間続いた。

まに行動すればよい。私はかねてより荒野を好んでおり、私たちから座を奪う者たちは、神を奪うことはできないのだ。

そう言うと、彼は立ち去り、総主教の邸宅を後にした。彼は教会から遠く離れた小さな家に身を寄せ、訪ねてくる人々との会話や論争を避けていた。　しかし、民衆の多くは彼の元を訪れ、これほど多くの労苦と心血を注いで育て上げ、増大させた羊の群れを、見捨てずに憐れみをもって接してほしいと懇願した。

「父よ、あなたがこれほど多くの労力を費やして育てた子供たちへの愛情を示してください。残りの生涯を彼らに捧げてください。そうすれば、あなたの教えによって啓発された私たちが、あなたの死後、あなたの遺体を受け継ぐことができるのです」と彼らは言った。

聖グリゴリウスは、子を愛する父のように心を和らげ、どうすべきか迷いながら、神に人生の道を示してくださるよう祈った。

集まった司教たちの数が増え、彼らの間の争いや不和が依然として続いていたとき、至福のグリゴリウスは公会議の真ん中に立ち、彼らに向かってこう語りかけた。

「聖なるキリストの群れを牧する、私の兄弟たち、そして共同の牧者たちよ！　他者に平和を守るよう説きながら、互いに争いを起こすとは、恥ずべきことではないか！　自分たち自身で合意できないのに、どうして他者を和解と一致へと説得できるというのか？　しかし、私は、同質にして至聖なる三位一体の御前で、あなたがたに平和を築き、互いに愛を示し合うよう懇願する。そうしてこそ、完全な一致のもとで教会の務めを遂行できるのだ。　もし私が、あなたがたの間での意見の相違や分裂の原因であるならば、私は預言者ヨナに少しも劣らない者です。私を船から海に投げ捨ててください――そうすれば、あなたがたにとっての荒波は収まるでしょう。私はこの嵐の責任を負うべきではありませんが、もしあなたがたがそう望むのなら、私が苦しむことを選びます。　どうか互いに和解し、心を一つにしてください。私を王座から引きずり下ろし、町から追放しても構いません。ただ、預言者ゼカリヤ（ゼカリヤ書8:19）が語ったように、真理と平和を愛してください。聖なる牧者たちよ、ご健勝をお祈りします！私の労苦も忘れないでください！

彼がこの演説を述べると、すべての敵対者たちは恥じ入り、その言葉に心を打たれた。聖人は公会議を後にし、故郷へ戻ることを決意して、王のもとへ赴き、故郷へ帰すよう懇願した。

彼は王にこう言った。

「王よ！　教会に対して示されたあなたのすべての善行に対し、裁きの日にキリストがあなたに報いてくださいますように。しかし、威厳ある君主よ、今私がお願いしようとするこの慈悲だけは、どうか拒まないでください。私は財産も親族も求めてはいません。祭壇のための高価な覆いも求めてはいません。ただ、私の労苦を和らげていただきたいのです。　これにより、多くの人々の嫉妬が収まりますように。あなたの尽力によって、司教たちが和解に至りますように！　野蛮人の横暴を退けたあなたがたよ、聖職者たちの不和もまた取り除いてください。司教たちが互いに平和と調和を成し遂げること、それだけで、あなたの勝利に満ちた権威を飾ってください。あなたが私を故郷へ帰してくださるなら、それは実現するでしょう。この慈悲をあなたにお願いします。私にこの最後の恩恵を授けてください。

王は聖人の言葉に深く感動し、涙を流した。そこにいた高官たちも涙を流した。皆、聖人に対して強い愛情を抱き、彼を帰したくなかった。　しかし聖人は、自らの老いと絶え間ない病を理由に挙げたり、自分のせいで生じている司教たちの不和を指摘したりしながら、王に懇願し続け、ついに王を説得した。すなわち、自分を留め置かず、望む場所へ去らせてほしいと。残りの日々を平穏に過ごし、これまでの多くの労苦から休息を得たいと願ったのである。　王に解放された彼は、皆に別れを告げ、霊的な羊たちに対して平安の祈りを捧げた。彼が街を去る際、民衆全員が彼を見送り、苦々しい涙を流した。　直ちに、聖グリゴリウスを愛し、その死を悼んでいた一部の司教たちも街を去り、公会議を後にして、それぞれが奉仕の地へと戻っていった。　その中には、バシレイオス大帝の弟

であるグリゴリオス・ニッサス、アンフィロキオス・イコニオス、エウロギオス・エデス、エラディオス　、ケサリオス、オトリオス・メリティノス、その他多くの者がいた。一方、公会議に残った司教たちは、元老院議員ネクタリオス[1457]を総主教に選出した。

聖グリゴリオス・テオロゴスはカッパドキア地方へ退き、故郷のアリアンツ村に定住した。そこで彼は、非常に衰弱した体で療養に専念した。しかし、神の栄光のための働きを怠ることはなかった。彼は故郷のナジアンズがアポリナリウス派の異端に染まっていることを知り、個人的な説得や書簡を通じて、その町を浄化しようと努めた。　市民たちが彼に教会の座を引き継ぐよう懇願した際、彼はこれを辞退し、代わりにエウラリアという名の、信仰に熱心で敬虔なある長老を司教に任命した。　彼自身は、アリアンゼという集落で完全な隠遁生活を送り続けた。そこでしばらく暮らして、多くの教訓に富んだ著作[1458]を残した後、彼は高齢に達し、1月25日[1459]に、朽ちることのない命へと旅立った。彼はナジアンズの町で、栄誉をもって埋葬された。　それから長い年月が経ち、敬虔な皇帝コンスタンティノス・ポプリオノルギオスは、ナジアンゾスからコンスタンティノープルへと彼の尊い遺骸を移し、聖使徒教会に安置した。これは、都市の助けと守りとなり、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神の栄光のためである。アーメン。

[1457] 聖ネクタリオスは381年から397年まで総主教を務めた。

[1458] 聖グリゴリオス・テオロゴスの著作は、キリストの教会において最も高い尊敬を集めていた。それらは最も綿密な研究の対象となり、数多くの解釈がなされてきた。聖グリゴリオスの著作は、説教、書簡、詩から成っている。　『神学に関する五つの説教』は、グリゴリウスがどのような神学者であったかを最もよく示している。ペンテコステの説教において、聖グリゴリウスは聖霊の働きを描き出し、その働きを通して真の神を明らかにしている。他の著作では、グリゴリウスは聖三位一体の教義を解説し、一部では他の信仰の主題についても論じている。　概して、グリゴリウスの説教は多くの点で比類のないものである。形式においても、口調においても、グリゴリウスの説教は単なる会話ではなく、真の意味での演説である。彼の45の説教のうち、5つは賛美の説教、9つは祝日の説教であり、残りは弁明や非難を目的としたものである。　聖グリゴリオスの祝祭日の説教のうち、現在知られているものには、キリストの降誕、洗礼（光の祝日）、復活祭、聖霊降臨祭、反復活祭、聖ママンタ、マカベオ書、諸聖人の週における聖殉教者たちに関する説教がある。　彼の説教の一部は、聖ヨハネス・ダマスコスの復活祭カノンに組み込まれ、それらから、現在教会で唱えられている復活祭のステイヒルの一つや、カノンのトロパリオがいくつか構成されている。　また、彼の説教の一部は、キリストの降誕、聖霊降臨祭、および反復活祭の教会礼拝にも組み込まれている。聖グリゴリオス・テオロゴスの擁護的・非難的な言葉の中でも、いわゆるユリアヌスへの「記念碑」として知られる二篇の説教は、ユリアヌスの不敬虔さを後世に向けて鮮明に描き出している。　グリゴリオスの書簡は、文学の最高傑作に数えられる。それらは概して簡潔であるが、グリゴリオスはそこに書簡の価値を見出していた。聖グリゴリオスの聖歌は、教義的、道徳的、歴史的の三つのカテゴリーに分類される。後者の大部分において、彼は自分自身、自身の弱さや苦悩について歌っている。　また、彼の祈りの聖歌、例えば朝と夕の祈り、人生や美徳、人生の虚しさについての詩も傑出しており、それらはすべて、彼の最高傑作の中でも第一の地位を占めるべきものである。――教会は、使徒や福音書記者の中でも特に高名なヨハネに与えたのと同じ名をもって、聖グリゴリウスを称えた。　この称号が彼に与えられたのは、第一の神学者（アタナシウス）に次いで、聖グリゴリウスが、啓示の光のもとで人間が理解しうる限り、極めて高尚かつ正確な思索をもって神性の深遠さを究めたからである。とりわけ、彼のすべての思索は、第一の神学者と同様に、永遠の御言葉に向けられていた。　神の本質の（人間が到達しうる範囲における）内なる聖所へと昇りつめる思索の高み――これこそが聖グリゴリオスの特質であり、彼と同等の水準でこれを備えていた者は誰もいなかった。

[1459] 聖グリゴリオス・テオロゴスは389年に逝去した。5世紀前半、テオドシオス2世の治世下、コンスタンティノープルにパトリキオスという人物によって彼に捧げられた教会が建てられた。　960年、コンスタンティノス6世ポルフィロゲネトス帝の治世下でコンスタンティノープルに移された聖グリゴリオスの聖遺骨は、分割され、その一部は使徒教会に、もう一部は聖アナスタシア教会に安置された。現在、ローマの聖ペトロ大聖堂にも彼の聖遺骨が安置されている。

トロパリオ、第1声：

牧者の笛よ、あなたの神学は修辞家たちのラッパに打ち勝った。なぜなら、あなたは御霊の深みを究め、説教の優しさを身につけたからである。しかし、父グリゴリオよ、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第3調：

あなたの神学の言葉をもって、修辞学の絡み合いを輝かしく打ち砕き、天から授けられた正教の衣をもって、教会を飾り立てた。今やその衣を身にまとい、私たちと共にあなたの子供たちを呼び集める。喜びなさい、父よ、神学の知恵の極みよ。

聖殉教者フェリサタとその七人の息子たちの記念日。

記念日：1月25日

聖グリゴリウス、ローマ教皇[1460] は、福音書の解説の中で、この聖なる殉教者フェリサタについて、次のように説いています[1461] 。「ユダヤ人たちが主に、*『見よ、あなたの母と兄弟たちが外に立っており、あなたと話したいと願っています』*と言ったとき」（マタイ12:47）と告げたとき、主は、肉親としての絆ではなく、霊の一致によって、御名を信じ、天の父の御心を行う者たちを、ご自身の兄弟姉妹および母と呼ばれた。　この聖フェリシタは、裕福な家庭に生まれたローマ人であり、七人の息子をもうけていた。キリストを愛するようになった彼女は、すべての財産を貧しい人々に分け与え、異教の王や裁判官たちの前で、自分がキリスト教徒であることを告白した[1462] 。迫害の重荷に耐えつつ、彼女は子供たちの心を天の故郷への愛で強めた。　彼女は信仰によってキリストのしもべであり、その息子たちは、信仰の一致と勇敢な忍耐によって、キリストの兄弟たちと呼ばれた」。「私たちは――聖なる父は続ける――女性の胸の中に男らしい勇気を目にした。彼女は恐れを知らずに死に臨み、それによって真の神の認識を教えたのである。　このように、私もこの妻を単なる殉教者と呼ぶだけでなく、殉教者以上の存在と呼んだ。なぜなら、彼女は七人の息子たちの苦しみを見つめ、自らも拷問にさらされながらも、ただ子供たちが自分より先に天の御国に入り、そこへの道から逸れないことを願っていたからである。　聖なる母であり殉教者である彼女は、生きている子供たちを案じ、死にゆく子供たちを喜び、七人の息子が彼女より先に天の御国に入ったことで栄光を得た。そして彼女自身も、子供たちと共に、我らの主イエス・キリストの御名のために殉教の死を遂げ、八人目として彼らに続いて天の御国へと入ったのである」[1463] 。

[1460] 聖グリゴリオス・デュオロゴス；記念日は3月12日

[1461] ここでいうのは、もちろん、聖フェリシタが殉教した日に、聖フェリシタ教会で民衆に向けて語られた第三の説教のことである。

[1462] 祭司たちは、聖フェリサタがキリスト教を広めることで神々を冒涜していると皇帝に告発した。皇帝は聖母とその子供たちをプレフェクトのプブリウスに引き渡した。

[1463] 聖フェリツァータの息子たちの名は、ヤンヌアリウス、フェリクス、フィリッポス、シルヴァヌス、アレクサンドロス、ヴィタリウス、マルツィアルであった。これらの聖殉教者たちの受難は、138年から161年まで在位したアントニヌス帝の時代にさかのぼる。　聖フェリシタスの長男は残酷に鞭打たれて牢獄に投げ込まれ、次男は鉛の棒で打ち殺され、三男と四男は棒で殴り殺され、五男は高い場所から突き落とされ、六男と七男は剣で斬り殺され、その後、彼らの母も斬首された。

尊者ポプリウスの記念日。

記念日：1月25日

聖ポプリウスは元老院議員の身分に属し[1464] 、ユーフラテス川沿いのゼウグマ[1465] という町出身であった。町から30ヴェルスタ離れた高い山の上の場所を選び、聖ポプリウスは小さな小屋を建て、その後、両親から受け継いだ全財産を貧しい人々に施した； 自身は徳高く禁欲的な生活を送り、その評判は広く知れ渡った。聖人の功績を分かち合いたいと願う人々が大勢集まり始めた。聖人は彼らに狭い修道室を用意するよう命じ、そこへ頻繁に訪れて弟子たちを厳しく見守り、修道室には必要最低限のもの以外は何も置かないようにした； 修道士たちが所持していたパンを、尊者ポプリウスは天秤で量り、定められた量以上のパンを持っている者がいれば、その者を「腹を満たすことばかりに執着し、自分の肉体を過度に気遣う者」と呼び、調理済みの食事を用意している者については、「不浄なものを口にする者」と呼んだ。 夜になると、聖なる父は安息を求めることなく、弟子たちの独房を巡り、それぞれの扉の外で立ち止まった。聖ポプリウスは、独房の住人が祈りを捧げているのを見つけると、黙って立ち去った。しかし、もしその者が眠っているのを見つけた場合、聖ポプリウスは手で扉を叩き、怠惰な修道士を厳しく叱責した。 尊者による弟子たちとの絶え間ない交流のおかげで、彼らの多くは修行において聖人に倣うようになった。そのうちの二人、テオテクンとアヴフォニウスは、尊者ポプリウスの帰天後、聖なる修行者が設立した修道院において、兄弟たちへの な配慮と修道院の運営を担った。 そして、至福のポプリオスは、その偉大な功業を安らかに成し遂げ、主のもとへ旅立った[1466] 。

尊者マラ・ペヴツの記念日。

記念日：1月25日

尊者マルは若き頃、端正な容姿と美しい歌声に恵まれており、聖殉教者たちを称える祝祭の際には、聖歌隊長としての務めを完璧に果たした。 彼は何よりも神を愛し、その戒めを聖なるものとして守り抜いた。多くの誘惑に囲まれながらも、聖マルは肉体を処女の無垢なままに保ち、魂を汚れなき清らかさの中に保った。 世俗の誘惑から魂を遠ざけた若者は、オミルの村（[1467] ）へと身を隠し、そこで小さな小屋を構えて三十七年を過ごした。この小屋で、尊者マルは健康を害する湿気にひどく苦しめられたが、小屋を離れることを拒み、生涯の終わりまでそこで暮らした。 聖マルは素朴さを特徴とし、偽りを許さず、貧しさを最大の幸福と見なしていた。90年を生き抜いた彼は、山羊の毛で作られた衣服で満足し、体力を補うために少量のパンと塩を摂っていた。 聖人は長い間、心の中で神聖な典礼に参列したいという切なる願いを抱き続けていた。やがて司祭が彼の元でこの偉大かつ救いをもたらす秘儀を執り行ったとき、聖マルは、自分の魂が言い表せないほどの甘美さに満たされたと語り、深い感極まりの中で、天を見上げることもできず、長い間思索にふけっていた。 長く続く救いの業を成し遂げた聖人は、安らかに神に息を引き取り、今や永遠の住処で至福のうちに暮らしている。

[1464] 元老院議員――ローマ帝国における最高国家機関の構成員。

[1465] シリア、ローマ帝国のエウフラテシア属州にて。

[1466] 380年頃。

[1467] シリアのキレステカ属州にあるキラの町の近く。

2月8日

1月26日（旧暦）

聖クセノフォンタス、聖マリア、およびその息子たちヨハネスとアルカディオスの生涯。

記念日 1月26日

聖クセノフォントは、コンスタンティノープルで最も高名な高官の一人であった。　彼は世俗の富に恵まれていましたが、それ以上に、信仰、敬虔さ、そして神のすべての戒めを熱心に守るという内なる宝に富んでいました。その地位と高貴な家柄によって名高い人物でしたが、その敬虔さと徳高い生活によって、さらに際立った存在でした。　その栄誉がどれほど高かったとしても、彼はそれと同じくらい謙虚で賢明な心を持っていた。彼は心の中で人々を見下すこともなく、一時的な世俗の栄光に驕ることもなかった。彼は天国に宝を蓄え、その富を貧しい人々の手を通じて天国へと送っていた。　彼にはマリアという名の妻がおり、彼女はあらゆる善行において彼に倣い、性格のすべてにおいて彼と全く同じであった。クセノフォントは彼女と徳ある生活を送り、すべての戒めを非の打ち所なく果たし、神の真理を守ることによって、神に喜ばれた。　二人の息子、ヨハネスとアルカディウスが生まれたとき、彼らは良き教えをもって彼らを育て、書物から得られる知恵だけでなく、あらゆる知恵の源である神への畏れをも教え、あらゆる美徳を説いた。　彼らは子供たちを、単に自分たちの豊かな財産の相続人としてだけでなく、何よりもまず、自分たちの　神に喜ばれる生き方の模範となる者たちとして育てたいと願っていた。そこで、当時その学校で名高かったフェニキアの都市ベリト[1468]　へ、ギリシャの学問を学ぶために彼らを送り出した。彼らが学問のためにしばらくそこに滞在していた頃、クセノフォントは重病に陥り、すでに死を目前にしていた。　マリアは夫の回復を望めないと悟り、ベリトにいる息子たちに、父の重い病気について書き送り、父が永遠の眠りにつく前に、一刻も早く家に帰ってくるよう懇願した。彼女は、子供たちが父から最後の祝福を受け、その葬儀に立ち会うことを望んでいた。息子たちは急いで家路についた。　父は彼らを見て喜び、その喜びのあまり病状が和らいだ。彼は子供たちに自分の枕元に座るよう命じ、次のように教え始めた。

――わが子たちよ、どうやら私は人生の終わりに近づいているようだ。もしあなたがたが、私、すなわち父を愛しているのなら、私が遺す言葉をどうか守ってほしい。第一に、神を畏れ、その聖なる戒めに従って人生を歩んでほしい。　次に、これから私が語ることは、虚栄心からではなく、あなたがたを徳の道へと導くために語るのだ。もしあなたがたが私の生涯を手本とするならば、他の師は必要ないだろう。なぜなら、言葉と行いによって示される家庭での教えは、他のいかなる教えよりもはるかに有益だからである。　どうか知っておいてほしい。私はこれまで、絶え間ない敬虔さと心の純真さを保ちながら生きてきたのだ。　私が皆から尊敬され、愛されたのは、高い地位のためではなく、その柔和さと善良な人柄のためでした。私は誰に対しても、何に対しても害を与えることはなく、決して誰かを責めたり、中傷したり、嫉妬したり、むやみに怒ったり、誰とも敵対したりしませんでした。　私はすべての人を愛し、すべての人と平和に暮らした。朝も夜も、神の教会への礼拝を怠ることはなかった。乞食も、旅人も、悲しみに暮れる者も軽んじることなく、一人ひとりを言葉と行いで慰めた。しばしば牢獄に囚われた人々を訪ね、多くの捕虜を身代金で買い戻し、自由の身へと解放した。　悪しきことや悪意のあることを口にしないよう、自分の口に柵を設けたのと同じように

[1468] ベリト――現在のベイルート――は、地中海沿岸にあるフェニキアの古代都市である。5世紀には繁栄し、修辞学、詩学、法学の優れた学校で名声を博した。現在は、アジア・トルコ系シリアの主要な行政都市であり、シリア沿岸部で最も重要な貿易拠点となっている。

、私は自分の目にも戒めを設け、他人の美しさを見たり、それに対して情欲を抱いたりしないようにした。　神は私を守ってくださったので、私はあなた方の母以外の妻を知りませんでした。しかし、彼女とも、あなた方が生まれるまでは肉的な関係にありました。その後、私たちは肉において互いに疎遠であり続けることに合意し、主の御前で肉体の清さを今に至るまで保ってきました。　さあ、子供たちよ、両親の生き方に従い、私たちの信仰、忍耐、そして柔和さを模範とし、神に喜ばれるように生きなさい。そうすれば、神はあなたたちに長寿を授けてくださるでしょう。　貧しい人々に施しをし、未亡人や孤児を守り、病人と獄中にいる人々を訪ね、不当に迫害されたり不当に有罪判決を受けた人々を災いから救い出し、すべての人と平和を保ちなさい。　友には誠実であり、敵には善を行い、悪に対して悪で報いることなく、すべての人に対して親切で、柔和で、愛想が良く、謙虚でありなさい。心と体の清さを汚れなく保ちなさい。もし神が結婚という祝福を与えてくださるなら、あなたの寝床が汚されないようにしなさい。　神の教会や修道院に施しをしなさい。司祭や修道士を敬いなさい。彼らを通して、神は全世界に憐れみを示しておられるからです。とりわけ、神のために荒野や山々、洞窟や地の深淵をさまよう者たちを忘れず、彼らに生活に必要なものを与えなさい。　貧しい人々に十分な食事を与えれば、あなたがたは貧しくなることはない。あなたがたも知っている通り、貧しい人々に頻繁に食事を提供しているにもかかわらず、私の家は決して乏しくなったことはない。頻繁に祈り、聖なる人々の教えに耳を傾けなさい。　母には相応の敬意を払い、主を畏れる心をもってその言葉に耳を傾け、常に母の意志を全うし、決してその命令から逸脱してはならない。使用人たちに慈愛を注ぎ、彼らを家族の一員や自分の子供のように愛しなさい。年老いた者たちを解放し、彼らが息を引き取るその日まで、食事や必要なものをすべて与えなさい。　要するに、繰り返しますが、あなたがたは私が実践しているのを見たことを、自らも同様に実行しなさい。そうすれば、聖人たちの栄光と誉れに与かることになるでしょう。また、この世はまもなく過ぎ去り、その栄光も消え去ることを常に心に留めておきなさい。子供たちよ、主の戒めと私の教えを守りなさい。そして、平和の神があなたがたと共にありますように！

この言葉を聞いて、ヨハネとアルカディウスは涙を流し、こう言った。

「父よ、私たちを置き去りにしないでください。どうか神に懇願して、あなたが私たちと共に過ごす時間をもう少し与えてくださるよう願ってください。あなたが望めば、神に懇願できると私たちは信じています。神はあなたの言葉に耳を傾けてくださるでしょう。私たち若者にとって、あなたがここにいてくださることは極めて重要です。そうしてこそ、あなたは最善の方法で私たちを善行へと導き、私たちの人生をあるべき姿に整えてくださるのですから。」

父は深くため息をつき、涙を浮かべて言った。

「神がこの病を私に与え、私が病床に伏して以来、私は何度も、そして今もなお、神に祈り続けています。あなた方の若さのために、私があなた方があらゆる点で完全になるのを見届けるまで、この地上でもう少しの間生きられるよう、神に時間を与えてくださるよう願っているのです。」

その翌夜、聖クセノフォントは夢の中で啓示を受け、神が彼にこの世に留まるよう命じていることを知った。彼はそのことを妻と子供たちに告げると、皆が喜び、神を賛美した。病人は徐々に病から回復し始めた。彼は息子たちにこう言った。

「子供たちよ、旅立って学業を修了し、終わったらすぐに戻ってきなさい。私があなたたちの正式な結婚の手配をするから。」

それから彼は息子たちを船に乗せ、必要なものをすべて用意して、再びベリトへと送り出した。

彼らが海路に出発したとき、最初は追い風が吹いていたため、航海は順調だった。しかしその後、突然向かい風が吹き始め、海には予期せぬ嵐と激しい波が押し寄せた。　船員たちはすぐに舵を放り出し、船は嵐に翻弄されてどこへともなく流され、ますます波に飲み込まれていった。　船に乗

っていた者たちは皆、命の救いを絶望し、災難と死の恐怖に駆られて、痛切に泣いた。ヨハネとアルカディィイの二人の兄弟もまた泣きながら、神に祈りを捧げた。

「至仁慈なる主よ、あらゆる被造物を御手配くださる方よ！」と彼らは祈った。「御自身の被造物を軽んじないでください。私たちの両親の善行を覚えて、彼らのために私たちを見捨てないでください。私たちの若く花咲く青春の時期に、時より早く死なせないでください。　水の嵐が私たちを憐れみ、海の深淵が私たちを飲み込まぬようにしてください。御慈悲と御寛大さを思い起こし、聖なる栄光の高みから私たちを見下ろし、私たちの苦難に目を向けてください。私たちの嘆きと叫びをお聞きください！　砕かれた心と謙虚な霊をもって、私たちはあなたに祈ります。あなたの全能の右の手を私たちに向けて伸ばし、死の滅びから私たちを救い出してください。あなたの御名のゆえに、私たちを死に委ねないでください。むしろ、あなたの慈しみと、あなたの豊かな憐れみによって、私たちを扱ってください。　御自身の栄光のために、私たちを沈没から救い出してください。死者はあなたを賛美せず、陰府に下る者たちもあなたを賛美しないからです（詩編113:25参照）。しかし、私たち生きている者は、あなたの威厳ある御名を賛美いたします」。

船乗りたちは、激しい波が収まるどころかさらに激しさを増し、もはや船が沈没を免れることが不可能であるのを見て、　――まるで遭難した船を助けたいかのように、上部が覆われて沈没の危険がない、特別に造られた小さな舟に乗り移り、波に流されるまま、急いで船から離れようとした。彼らは、波にどこかの岸に打ち上げられることを望んでいた。　若者のヨハネとアルカディウスは、奴隷たちと共に船に残り、船員たちの逃走と、船の避けられない破滅を目の当たりにした。船はすでに砕け散り、水で満たされながら波間に沈みつつあったからである。　彼らは命の救いなど全く絶望し、すぐに沈んで深淵で命を落とさないよう、泳ぎやすくするために衣服を脱ぎ捨てた。永遠の別れと死を待ちながら、彼らは泣きながら、心を打たれた声で、遠く離れた家に残された両親に呼びかけ、まるで両親がここにいるかのように想像していた。

「どうかお元気でいてください」と彼らは言った。「最愛の父よ！　最愛の母よ、あなたもどうかお元気で！　もう二度と私たちはあなた方に会うことはなく、あなた方も私たちに会うことはありません。もう二度と、家の中であなた方と共にこの世の恵みを享受することはないでしょう。」

それから、彼らは互いにこう語り合った。

「ああ、悲しいことだ、愛する兄弟よ！　悲しいことだ、わが目の光よ！　ああ、別れはなんと辛いことか！　今や両親の祈りはどこへ行ったのか？　貧しい人々への彼らの善行はどこへ行ったのか？　修道士たちに施された施しや、彼らへの敬意はどこへ行ったのか？」　まさか、私たちのために捧げられた彼らの祈りの一つたりとも神に届かなかったのか。あるいは、届いたとしても、私たちが生きるに値しないほど積み重ねた多くの罪によって、その祈りは無力となってしまったのだろうか。ああ、悲しいことだ。つい先日まで父の死を待ちわびて泣いていた私たちが、今や両親の慰めようのない嘆きと果てしない泣き声の原因となろうとしているとは！　ああ、父よ！　私たちの教育と生活の向上に熱心に心を砕いてくださったあなたが、私たちが死んだ姿さえ見ることができないとは。ああ、母よ、息子たちの結婚を見届けることを願い、時期尚早ながら美しい部屋を準備してくださったあなたが！　あなたは、自分の子供たちの棺さえ見ることもできないのです。確かに、親にとって、死にゆく子供たちを見送り、葬り送るのは辛いことです。しかし、愛する私たちの両親よ、子供たちの死をこの目で見ることなく、その予期せぬ悲痛な最期についての知らせさえ受け取ることができないという状況で、子供たちを失う苦しみは、どれほどさらに辛いものでしょうか！　あなた方は、私たちがあなた方を白髪の老齢に達した時に葬り送ることを望んでおられたのに、今や私たちでさえ、あなた方の手で葬られるという栄誉に浴することさえできないのです。

そして二人は抱き合い、別れを告げながら互いにこう語り合った。

「さようなら、兄弟よ。そして、私を許してくれ！」

そう言いながら、彼らは再び神に叫んだ。

「おお、万物の王であり主よ！　あなたは私たちに、なんと恐ろしい死をお許しになったことか！　もしあなたの言い表せない御意志によって、私たちがこの死を免れることができないのなら、せめて、死にゆく私たちを引き離さないでください。一つの波が私たちを覆い、一つの海の獣の腹が私たちの棺となりますように！」

彼らは自分の奴隷たちにもこう訴えた：

「助かってくれ、親愛なる兄弟たち、友人たちよ。そして、私たちを許してくれ。」

船が完全に砕け散ると、彼らはそれぞれ手近な板にしがみつき、そのようにして波にさらわれて互いに離ればなれになった。　しかし、神の恵みにより、全員が溺死や破滅から救われ、ただ各地へと流されただけだった。奴隷たちは波にさらわれてティルスの陸地に打ち上げられた[1469]、ヨハネはある「マルメフェタン」と呼ばれる場所に打ち上げられ[1470]、アルカディウスはテトラピルギアに打ち上げられた[1471]。彼ら一人ひとりは、兄弟が死を免れたことを何も知らず、自分の命が助かったことを喜ぶというよりは、むしろ兄弟の死を嘆いていた。

陸に上がったヨハネは、心の中でこう考えた。「さて、これからどこへ行こうか。裸のまま人々の前に現れるのは恥ずかしい。　むしろ、敬虔な修道士たちが暮らす修道院へ行き、そこで、私を死から救ってくださった神に、この世の富よりも、貧しさと謙遜をもって仕えるほうがよい。　神が船上で祈りを捧げた私たちに耳を傾けてくださらなかったのは、両親が私たちを結婚させ、富や莫大な財産を残そうとしていたからだと私は思う。そうであれば、私たちは海上で死ぬよりも早く、この世の虚栄の中で滅びていただろう。　全知の神は、私たちのためにより良い人生を築くべく、このような災難を許されたのであり、神の御心通りに物事は起こったのです。慈愛に満ちた神は、私たちにとって有益なことをすべてご存知ですが、私たちには、自分に何が起こるか全く分かりません。神はすべてをご存知であり、御心のままに働き、一人ひとりの魂の救いを備えておられるのです」。

その後、神に向かって両手を挙げ、彼はこう祈った。「わが主よ、主よ、海の波と死の危機から私を救ってくださった方よ！　あなたのしもべ、私の兄弟アルカディウスをも救ってください。あなたの憐れみによって私を救ってくださったように、彼をも苦痛に満ちた死から救い出してください。そして、もしあなたが彼を生かし、陸へと導いてくださったのなら、彼の心を啓発し、修道生活について深く考え、それを志すように導き、あなたに喜ばれる者とならせてください。　また、私たちと共にいた僕たちをも救い、その誰一人として海で命を落とすことがないようにしてください。そして、彼ら全員の救いによって、あなたの至聖なる御名が賛美されますように！」

岸辺を歩きながら、彼は祈り続けました。「主イエス・キリスト、神の独り子よ！　あなたのしもべの祈りに耳を傾け、私の歩みをあなたの戒めの成就へと導き、あなたの聖なる御心に従って私を導いてください。主よ、この時、あなた以外に私を助ける者はいないことを、あなたはご存知だからです。」

かなりの距離を歩いた後、彼は修道院を見つけ、門を叩いた。門番が鍵を開けると、彼が裸であることに気づいた。門番は自分の上着を脱いで彼に着せ、自分の部屋へ案内して、パンとソチヴォを振る舞った。食事が終わると、修道服を着た門番が尋ねた。

「兄弟よ、どこから来たのか？」

彼は答えた。

「私は旅人です、ご主人様。そして、海での難破からかろうじて生き延びた貧しい身です。船が難破して沈んでいった時、私は板にしがみつき、波に流されました。神は、あなた方の祈りによって私を生かしてくださり、こうして私はこの国に打ち上げられたのです。」

[1469] ティル――フェニキアの古都――は、地中海の東岸、パレスチナの北に位置していた。

[1470] マルメフェタン――メソポタミアにある地域。

[1471] テトラピルギアは、メソポタミアのユーフラテス川近くにある都市である。

これを聞いた黒衣の門番は、心を打たれ、神を賛美した。神は、神に希望を置く者を救ってくださるからだ。そして、ヨハネに尋ねた。

「兄弟よ、どこへ行こうとしているのか？」

ヨハネは彼にこう答えた。

「神が指し示される場所へ。もし慈悲深い主が、私の罪を赦し、その善き軛を負うことを許してくださるなら、私は修道士になりたいのです。」

修道士は彼に言った。

「まことに、わが子よ、あなたは善き行いを望んでいる。全力を尽くして神に仕えれば、あなたは幸いとなるだろう。」

そこでヨハネは彼に次のように願い出た。

「お願いです、父よ、教えてください。私はここで、あなた方と一緒にいられるでしょうか？」

修道士は答えた。

「少し待ってくれ。私はあなたのことについて、私たちのイグメヌスに報告するつもりだ。神から彼に、あなたに関する啓示があるかもしれない。その後、彼があなたに命じることを行えば、あなたは救われるだろう。」

門番は修道院長のもとへ行き、その若者のことを詳しく話した。修道院長は彼を自分のところへ連れてくるよう命じ、彼を見るやいなや、その運命の中に神の召しを見出した。彼の善良な生き様を見抜くと、こう言った。

「あなたの父と母の神を賛美せよ。神はあなたを海での死から救い、この地へと導いてくださったのだ！」

その後、救いをもたらす修道生活について詳細な教えを授け、十字の印を施して、修道院に留まるよう命じた。　ほどなくして、彼はヨハネを修道者の「天使の階級」に叙階した。こうして、至福のヨハネは、祈りと断食、そしてあらゆる修道院の務めに励み、従順を尽くした。しかし、彼は兄のアルカディウスが海の波に飲み込まれて亡くなったと思い込み、絶えず彼を案じていた。

アルカディウスもまた、神の御心により生き延び、テトラピルギアで海から陸に上がると、ひれ伏して神にこう祈った。「主よ、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わが父の神よ！　波乱と嵐から私を救い出し、もはや期待していなかった命へと導き、私の足を陸地に立たせてくださったことに感謝いたします。しかし、あなたが、その深い憐れみをもって私を溺死から救ってくださったように、あなたのしもべである私の兄弟ヨハネをも救ってください。　主よ、私の主よ、私はあなたに祈ります――あなたの憐れみによって彼をお守りください。波や嵐に飲み込まれず、深淵に飲み込まれないように。主よ、あなたの慈しみは偉大ですから、私の祈りを聞いてください。そして、私が兄弟に会えるようにしてください。　わが父の行いを思い起こし、ヨハネを海の底の深淵へと導かないでください。この若き少年を、時期尚早で予期せぬ死に委ねないでください。どうか、私がまず彼に会ってから、それから死なせてください」。

そう祈りながら、彼は激しく泣き、泣き疲れて力尽きてしまった。その後、立ち上がって近くの村へ向かうと、そこで出会ったあるキリストを愛する人が、彼に古びた服をくれた。彼はそれを着て、少しのパンを乞い、疲れ果てた体を癒した。　その後、彼はその場所にある教会へ向かい、再び涙ながらに兄弟のために祈りを捧げた後、教会のそばに立っていた柱にもたれかかり、眠りについた。するとすぐに、夢の中で彼は兄弟のヨハネの姿を見、彼がこう語りかけてくるのを聞いた。

「兄弟アルカディウスよ！　なぜ私のことをこれほどまでに悲しんで泣き、心を痛めているのか。私はキリストの恵みによって生き残ったのだ。だから、私のことを悲しむな。」

アルカディウスは目を覚ますと、この夢が真実であると確信し、大きな喜びに満たされて神に感謝した。その一方で、彼は心の中でこう考えを巡らせていた。自分はこれからどうすればよいのか？

「両親のもとへ帰ろうか――」と彼は考えた。「彼らは、私のそばに兄がいないのを見て、私の帰還を悲しむだろう。もし私が再び学校へ行き、哲学の学業を終えてから両親のもとへ戻ったとしても、彼らを喜ばせることはできないだろう。私一人を見ただけで、彼らは悲しみに暮れて泣き出すだろう。　どうすればいいのか、私にはわからない。父が、沈黙を伴い、神に近づく修道生活について、いつも称賛していたことを思い出す。それなら、修道院へ行き、修道士になろう」。

このように心の中で考えを巡らせたアルカディウスは、祈りを捧げ、エルサレムへと向かった。そこで、主が世に救いをもたらされた聖地を参拝した後、彼は街を出て、道中で出会うどの修道院へでも向かおうとした。　歩き続けると、彼は白髪に彩られた高名な修道士、聖なる生活を送る人であり、先見の明を持つ人物に出会った。その修道士に近づくと、若者は彼の足元にひれ伏し、その足を口づけしてこう言った。

「聖なる父よ、私のために主にお祈りください。私は深い落胆に陥り、苦しんでいるのです。」

老僧は彼にこう言った。

「悲しむな、わが子よ！　あなたが悲しんでいるあなたの兄弟は、あなたと同じように生きている。船に乗っていた他の者たちは皆、神の御加護により、破滅から救われ、修道生活を送るために修道院へと向かった。あなたの兄弟ヨハネは、すでに最初の修道誓願を立てている。　やがて、君は自分の目でその兄弟に会える時が来るだろう。なぜなら、君の祈りは聞き届けられたからだ。

アルカディは、この偉大な長老の言葉を聞いて、驚きのあまり立ち尽くし、聖人の先見の明に感嘆した。そして再びその足元にひれ伏し、こう語りかけた。

「神は私に起こったことをあなたから何も隠さなかったのですから、どうか私を拒まないでください――お願いいたします。どのような方法であっても構いませんので、私の哀れな魂を救い、私を修道生活へと導いてください。」

長老は彼にこう言った。

「神に祝福あれ！　私の後について来なさい、わが子よ。」

長老は彼を聖ハリトンの修道院――シリア語で「スキイスカ」[1472] と呼ばれる場所――へと導いた。そこで彼はその若者を修道士として剃髪させ、かつて偉大な教父の一人が五十年もの間修行に励んでいた独房を与えた。　この先見の明のある長老は、アルカディウスと共に一年を過ごし、修道生活の規則を教え、目に見えない敵と戦い、立ち向かう方法を彼に指導した。　一年が過ぎると、長老は荒野へと去り、アルカディウス一人を独房に残し、三年後に再会することを約束した。アルカディウスは長老からの教えを受け、それを熱心に実践し、昼夜を問わず神のために働いた。

船が難破してから2年後、クセノフォントは、海上で子供たちに何が起きたのかを知らず、自分の奴隷の一人をベリトへ送り、ヨハネとアルカディウスを探し出し、彼らが元気かどうか、まもなく修行を終える予定かどうかなど、彼らの詳細をすべて調べるよう命じた。　父と母は、これほど長い間、子供たちが一度も安否を知らせず、両親に一通の手紙さえ送ってこなかったことに、大いに不思議に思っていた。奴隷はベリトに到着し、主人のクセノフォントの子供たちがこの街に来ていないことを知ると、こう考えた。「彼らは当初の計画を変え、アテネへ向かったのではないか？」　そこで、彼は子供たちを探しにアテネへ向かった。しかし、アテネでも彼らを見つけられず、どこを探しても彼らの消息を掴むことができなかったため、困惑しながらビザンティウムへと引き返した。道中の宿で休んでいると、ある放浪の修道士が同じ宿に立ち寄り、休息をとっていた。　会話の中で、そ

[1472] 聖ハリトンの記念日は9月28日である。彼が設立したスキイ修道院は、パレスチナのベツレヘムの南に位置していた。

の修道士は聖地を参拝するためにエルサレムへ向かっていると話した。クセノフォントの奴隷は、その修道士を注意深く見つめているうちに、徐々に彼がかつての友人、つまり主人が子供たちと共にベリトへ送り出した奴隷の一人であることを見抜いた。奴隷は修道士に尋ねた。

「お名前はそうではありませんか？」と尋ね、その名前を挙げると、こう言った。

「君は、ヨハネとアルカディオと共にベリトへ送られた、我らが主人クセノフォントの奴隷だ。」

修道士は答えた。

「確かに私だ。君は私の仲間だ。私たちは同じ主人の奴隷だからな。」

すると、その奴隷は尋ねた。

「お前はどうしたんだ？　なぜ修道士の姿をとった？　それに、我らの主人であるヨハネスとアルカディウスはどこにいる？　どうか教えてくれ――私は彼らを探して多くの苦労をしたが、どこにも見つからなかったのだ。」

修道士は深くため息をつき、涙でいっぱいの目で、彼に詳しく語り始めた。

「友よ、知っておいてほしい。我らの主人は海で亡くなり、彼らと共にいた者たちも皆、同じ運命をたどったのだ。　私の知る限り、この災難から生き残ったのは私ただ一人です。私は、家に帰って主や奥様、そして家中の者たちにあの恐ろしい知らせを伝えるよりは、修道士として身を隠すほうがましだと決めました。こうして私は修道士となり、礼拝のためにエルサレムへ向かっているのです。

その言葉を聞いた召使いは、大声で叫び、激しく泣き出した。彼は哀れみのあまり声を張り上げ、胸を叩きながらこう言った。

「ああ、悲しや、主よ！　あなた方に何が起きたのですか？　あなた方のことを聞いて、私はどう思えばよいのでしょう！　なんとひどい目に遭われたことでしょう！　なんと苦い最期があなた方を待ち受けていたことでしょう！　誰が父と母に、あなた方の恐ろしい死を告げ知らせるのでしょうか？ 誰の目が、父の涙や母の悲しみを直視できるというのでしょうか！ 彼らの泣き声、すすり泣き、そして叫びを、身震いせずに聞くことなどできるでしょうか！　ああ、哀れな私よ、私の善良な主たちよ！　あなたは亡くなられました、私たちの希望よ！私たちは、あなたがご両親の後を継いで相続人となり、私たち下僕たちに幸福をもたらし、困窮する者たちに恵みを注ぎ、旅人を慰め、乞食を助け、神の聖堂を美しく飾り、修道院に必要なものを提供してくださることを期待していました――しかし今、なんと悲しいことでしょうか！　私たちの希望はすべて裏切られてしまいました。どうすればよいのか、私にはわかりません。もし私が主人のもとへ帰ったとしても、これほど悲痛な知らせを彼に伝える勇気などありません。実際、息子たちが海で亡くなったことを、父や母にどう伝えればよいのでしょうか？　これを聞けば、彼らは激しい心の悲しみに打ちひしがれ、その場で息絶えてしまうのではないか？　それゆえ、私は家には帰らない。　私が持ち帰るこの悲報のせいで、主人が早すぎる死を遂げ、私がその死の原因となることがないように。

この奴隷がそう語り、主人のクセノフォンツのもとへ戻ることを拒んで泣きじゃくっていると、そこに居合わせた旅人や村人たちは、彼に泣き止むよう説得し、主人の元へ帰ってすべてを報告し、主人に呪われないようにと助言した。

「もしあなたが主人にその悲報を伝えず、自分自身が突然姿を消してしまったら、あなたには救いはないだろう」と彼らは言った。

その奴隷は彼らの助言に従い、コンスタンティノープルに戻った。主人の家に入ると、彼はうつむき、やつれた顔で座り込み、戸惑いながら黙り込んでいた。

主人の妻マリアは、子供たちの元へ遣わされた奴隷が戻ってきたと聞き、すぐに彼を呼び寄せ、こう尋ねた。

「子供たちは元気ですか？」

「大丈夫です、元気です」と奴隷は答えた。
女主人はさらに尋ね続けた。
「手紙はどこにあるの？」
「道中で失くしてしまいました」と、奴隷は答えた。
すると、彼女の心は動揺し始め、彼女は奴隷にこう言った。
「神にかけて誓って、真実を話して。私の心はひどく動揺し、力が抜けてしまった。」
すると彼は大声で叫び、苦々しく泣きながら、真実を語り始めた。
「ああ、お嬢様、私は悲しみに暮れています！」と彼は言った。「お嬢様の二つの光は海で消えてしまいました。船が難破し、全員が溺死してしまったのです。」
この知らせを聞いた女主人は、予想をはるかに超えるほど気丈であった！　神を深く信じ、疲れと悲しみで地面に倒れ込み、絶望して泣き叫ぶ代わりに、彼女は驚きからしばらく沈黙した後、こう言った。
「このすべてを導かれた神を賛美します！主の御心に従い、主はそうなされました。今より永遠に、主の御名が賛美されますように！」
そして、彼女にその知らせを伝えた召使いに、彼女はこう言った。
「黙って、このことを誰にも話すな。主が与え、主が取り去られたのだ。何が私たちにとって益となるか、主ご自身がご存知である。」
三時間ほどが過ぎ、日が暮れかかった頃、クセノフォントが王宮から家に戻ってきた。彼は多くの従者を先導し、護衛に囲まれて、威厳を帯びて帰ってきた。　家に入ると、同行していた人々を帰らせ、彼は食事をとった。彼は一日に一度だけ、それも夕方に食事をとっていた。彼が食卓に着くと、妻のマリアが彼にこう尋ねた。
「ご主人様、私たちの奴隷がベリトから戻ってきたことをご存知ですか？」
クセノフォントはこれにこう答えた。
「神に感謝します！ 戻ってきた奴隷はどこにいるのですか？」
夫人は彼に言った。
「彼は病気で、休んでいます。」
するとクセノフォントは尋ねた。
「子供たちからの手紙は持ってきてくれたか？」
それに対し、彼女は言った。
「今日はその話は後回しにしてください、ご主人様！　まずは食事を済ませましょう。明日、手紙をご覧いただけます。奴隷が、そのことについて口頭でたくさん話してくれるでしょう。」
しかし、クセノフォントはこう主張した。
「今日、すぐにでも手紙を持ってこさせなさい。私がそれを読んで、子供たちが元気かどうか確かめたい。彼が口頭で話すべきことは、すべて明日話させればいい。」
するとマリアは、心の悲しみを抑えきれず、涙に暮れてしまい、すすり泣きで何も答えられなくなった。クセノフォンテスは、彼女がそれほど激しく泣いているのを見て驚き、尋ねた。
「どうしたのですか、マリア様？　なぜそんなに泣いているのですか？　まさか、子供たちが病気なのでしょうか？」
彼女はかろうじてこう言い出した。
「子供たちが病気だった方がましだったわ。でも、私たちの愛しい子供たちは海で亡くなってしまったの。」
クセノフォントは声を上げて嘆き、涙を浮かべて言った。
「父と子と聖霊の御名が、永遠に祝福されますように、アーメン！　悲しまないでください、私の妻よ。私は、神が私たちの子供たちを完全に滅ぼすことを許さないと信じています。そして、私

が神の慈愛を冒涜することなど決してしなかったように、神の慈悲深い御計画が、この白髪の私に悲しみをもたらすことはないだろうと願っています。　さあ、この夜通し、神の偉大なる慈悲に祈りを捧げましょう。そして、神が私たちの子供たちについて――彼らが生きているのか、それとも死んでいるのか――を明らかにしてくださることを願いましょう。

その後、二人はすぐに立ち上がり、祈りの部屋に閉じこもり、その夜一晩中、あふれんばかりの涙と揺るぎない信仰をもって神に祈りを捧げ続けた。夜が明け始めると、二人はそれぞれ別々に、粗末な羊毛の着物を敷いて横になり、休息をとった。　そして、二人は同じ夢を見ました。彼らは、二人の息子が偉大な栄光のうちに主キリストの御前に立っているのを見ているように感じました。ヨハネには、彼のために用意された玉座、笏、そして貴重な真珠や高価な宝石で飾られた王冠がありました。　一方、アルカディウスには星でできた冠があり、右手に十字架を持ち、休息のために用意された明るい寝台があった。二人が眠りから覚め、互いにその幻について語り合ったとき、彼らは息子たちが生きており、主の恵みによって守られていることを悟った。二人は大いに喜び、クセノフォントは妻にこう言った。

「マリア、私たちの子供たちはエルサレムにいると思う。そこへ行って、聖地を参拝しよう。もしかしたら、そこで何とかして子供たちを見つけられるかもしれない。」

このように話し合った後、クセノフォントとマリアは旅の準備を整え、家や財産に関するすべてのことを管理人に指示し、多くの施しを施し、施しや聖地への献金に必要なだけの金を携えて、エルサレムへと向かった。　そこに到着すると、彼らはすべての聖地を巡り、祈りを捧げながら施しを配った。その後、彼らはエルサレム近郊にあるすべての修道院を巡り、子供たちを探したが、どこにも見つからなかった。　道中のある場所で、彼らは、かつて子供たちと共に船に乗っていた自分の奴隷の一人に偶然出会った。その男はすでに修道士になっていた。彼らは彼を抱きしめ、口づけをし、地面にひれ伏して礼をした。修道士もまた、彼らに地面にひれ伏して礼をし、こう言った。

「主の御名においてお願いいたします。私に頭を下げないでください。私の主であるあなたがたが、私のようなしもべにこのように頭を下げるのはふさわしくありません。」

クセノフォントは彼にこう言った。

「我々は聖なる修道者の姿を尊んでいるからこそ、お辞儀をするのだ。お前はそれを悲しむな。むしろ、頼むから教えてくれ――我らの息子たちはどこにいるのか？主の御名にかけて、教えてくれ！」

修道士は涙を浮かべて言った。

「海上で船が難破した時、私たちはそれぞれ手当たり次第に板を掴み、嵐に流されながら別々に漂流しました。それ以上のことは何も知りません。誰かが難を逃れたのか、それとも皆亡くなったのかさえ分かりません。ただ、私だけがティルスの国の海岸に打ち上げられたのです。」

これを聞いたクセノフォンとマリアは、修道士を旅立たせ、彼らと子供たちのために祈ってくれるよう、惜しみなく施しを贈った。二人はヨルダン地方へと向かい、そこで祈りを捧げ、残りの金を配ることにした。　彼らが予定した道を進んでいると、神の摂理により、かつて彼らの息子アルカディオスを修道者の姿へと導いた、先見の明を持つあの聖なる長老と出会った。彼らは聖なる父の足元にひれ伏し、自分たちのために神に祈ってほしいと懇願した。聖なる長老には、神から彼らのことすべてが明らかにされていた。祈りを捧げた後、彼は彼らにこう言った。

「誰がクセノフォンとマリアをエルサレムに連れてきたのですか？」

「誰もいない――子供たちへの愛以外には。」

しかし、悲しむことはありません。あなた方の子供たちは生きており、神は夢の中で、天国で彼らに用意された栄光をあなた方に示されました。さあ、主のぶどう畑を耕す者たちよ、今向かっているその場所へ行きなさい。そこで祈りを終え、聖なる都に戻れば、あなた方は子供たちに会えるでしょう。

このように語り合った後、彼らは別れた。クセノフォントとマリアはヨルダン川へと向かい、先見の明のある老修道士は聖都へと向かい、キリストの復活教会に立ち寄った後、聖なるゴルゴタの近くで地面に座り、休息をとった。　聖なる長老がそこに座っていると、マルメフェタンの修道院から礼拝のためにエルサレムに来ていた、クセノフォントの息子である若き修道士ヨハネが、聖なる長老を見かけ、地面にひれ伏して礼をした。長老は愛情を込めて彼を迎え、祝福を与えた後、こう尋ねた。

「これまでどこにいたのか、わが主ヨハネよ。見よ、お前の父と母がお前を探しているというのに、お前は兄弟を探し求めてここに来たのだな。」

ヨハネは、この偉大な長老がすべてを知っていることに驚いた。彼が透視能力者であることを悟ると、聖人の足元にひれ伏して言った。

「お願いです、父よ。主の御名にかけて、私の兄弟がどこにいるのか教えてください。彼に会いたいという願いで、私の魂はひどく疲れ果てています。私は、兄弟が生きているのか、それとも死んでいるのか、神が私に明らかにしてくださるよう、熱心に祈り続けてきました。しかし、主はこれまで私にそのことを明らかにしてくださることをお許しになりませんでした——今、あなたを通してこそ、聖なる父よ！」

長老は彼に言った。

「私のそばに座りなさい。そうすれば、すぐにあなたの兄弟に会えるでしょう。」

しばらく座っていると、別の修道士、若きアルカディウスが近づいてきた。彼の体は衰弱し、顔はやつれていた。過度な断食と禁欲のせいで、目は深くくぼんでいた。聖なる場所に頭を下げると、彼はすぐに座っている長老を見つけ、駆け寄ってその足元にひれ伏し、こう言った。

「師よ、あなたは自分の畑を放置し、もう三年もそこを訪れていません。あなたがいない間に多くの茨や雑草が生い茂り、それをきれいに取り除くまでには、多くの労力が必要になるでしょう。」

老人は彼にこう言った。

「わが子よ、知っておきなさい。私は毎日自分の畑を訪れていたのだ。そして主を信じて、そこに生えたのは茨でも雑草でもなく、万王の王の食卓にふさわしい、実った小麦であると信じている。私のそばに座りなさい。」

アルカディは腰を下ろした。長老はしばらく沈黙した後、ヨハネにこう尋ねた。

「兄弟ヨハネよ、あなたはどこから来たのか？」

ヨハネは答えた：

「父よ、私は貧しい者であり、旅人です。ただ一つ、私の心の願いが叶うよう、主の慈悲と、あなたの聖なる祈りを願います。」

長老は彼にこう言った：

「そうだな。だが、お前の出自や、生まれ故郷の町、そしてこれまでの生涯について話してくれ——そうすれば、主の御名が称えられるだろう。」

ヨハネは順を追って語り始めた——彼はコンスタンティノープル出身で、ある高官の息子であり、アルカディウスという兄弟がいて、彼と共にベリトへ学びに送られたこと——海上で激しい荒波に遭い、船が難破し、自分以外の全員が溺死したこと。

その話を聞いていたアルカディウスは、修道士をじっと見つめ、ついに彼を自分の兄だと見抜いた。兄弟愛の情に駆られ、彼はもはや修道士の話に耳を傾けることができず、こう叫んだ。

「まことに、神父様、この方は私の兄ヨハネです！」

それに対し、長老はこう言った。

「私も知っていたが、お二人が互いに気づくまで黙っていたのだ。」

二人は急いで互いの首に飛びつき、喜びと涙に包まれながら抱き合い、頬に口づけを交わした。そして立ち上がり、聖なる修道者の姿で、神に捧げられたこのような徳高い生活を送りながら、生きたまま再会させてくださった神を賛美した。

二日後、ヨルダン川からクセノフォントとマリアがやって来た。　ゴルゴタで祈りを捧げ、我らの主の命を与える聖なる御墓に拝礼した後、彼らはこの聖なる地で、神の栄光のために多くの金を施した。そこで聖なる先見の明を持つ長老を見かけ、彼だと気づくと、その足元にひれ伏して祈りを求めた。祈りが終わると、彼らは長老にこう言った。

「主のために、父よ、お約束を果たし、私たちの子供たちを見せてください。」

二人の息子、ヨハネとアルカディウスは長老のそばに立っていたが、長老は彼らに一言も話さず、目を上げることも許さず、正体がバレないよう下を向くよう命じた。　子供たちは両親を認識し、心から喜んだが、両親は子供たちを認識することができなかった。その理由の一つは、彼らが修道服を着ていたからであり、もう一つは、長期間の禁欲生活によって彼らの顔の美しさが色あせていたからであった。そこで、聖なる長老は聖クセノフォンと聖マリアにこう言った。

「自分の宿屋へ行って、私たちのために食事を用意しなさい。私は弟子たちを連れて行き、あなた方と共に食事をとった後、子供たちがどこにいるかを教えてあげよう。」

聖なる父が子供たちを見せてくれると約束してくれたので、両親は大いに喜び、宿に戻るとすぐに、たっぷりの食事を用意した。聖なる長老は弟子たちに言った。

「君たちの両親が泊まっているところへ行こう。だが、私が言うまでは何も話さないように心がけてくれ。」

二人の兄弟は彼にこう答えました。

「師よ、おっしゃる通りにいたします。」

すると、長老はこう続けました。

「彼らと食事を共にし、語り合いましょう。それはあなた方の救いに害を及ぼすことはありません。信じてください。徳のためにどんな苦労をしても、あなた方は父や母の至高の境地には達することはできないのです。」

その後、彼らはクセノフォンが身を寄せている宿屋を訪れ、差し出された食事の席に着いた。彼らは共に食事をし、教訓となるような事柄について語り合った。その後、聖なるクセノフォンとマリアは長老にこう尋ねた。

「聖なる父よ、私たちの子供たちはどうお過ごしでしょうか？」

聖人は答えた。

「彼らは自らの救いのために勇敢に努力しています。」

両親はこれに対し、こう言った。

「すべての人々の救いを整えてくださる神が、彼らをキリストのぶどう畑の真の実りある働き手とならせてくださいますように！」

その後、クセノフォントは再び長老にこう語りかけた。

「ああ、父よ、あなたの弟子たちはなんと素晴らしいことでしょう！　ああ、もし私たちの子供たちもそうであったなら！　私たちの魂は、この若い修道士たちを深く愛しています。彼らを見ただけで、まるで自分の子供たちを見たかのように、私たちの心は喜びに満ちました。」

すると、長老はアルカディウスにこう言いました。

「子よ、どこで生まれ、どのように育てられ、どうやってここへ来たのか、話してくれ。」

アルカディウスはこう語り始めました：

「師よ、私とこの兄弟はビザンティウムの出身で、王宮で最も高位の重臣の一人の息子たちです。私たちは敬虔な心で育てられました。両親は、ギリシャの知恵を学ぶために私たちをベリトへ送り出しました。　航海中、荒波と嵐によって船が難破し、私たちはそれぞれ、難破した船の板にしが

みつき、波に流されるまま漂流しました。神の慈悲により、私たちは一命を取り留め、海に打ち上げられて陸地にたどり着きました。

彼がまだ話しているうちに、両親はそれが自分たちの子供たちだと気づき、すぐにこう叫びました。

「ほら、私たちの子供たちだ！　私たちの胎から生まれた子たちだ！　私たちの目の光だ！」

子供たちの首に飛びつき、愛を込めて彼らに口づけをし、喜びの涙を流した。長老もまた涙を浮かべた。その後、皆は立ち上がり、神に栄光と感謝を捧げ、神の偉大で驚くべき御摂理を称えながら喜び祝った。

その後、クセノフォントは友人と共に、聖なる長老に彼らも修道者の位に叙任してほしいと願い出た。先見の明のある父の手によって、クセノフォントとマリアは修道者の位に叙任され、彼から修道規則を教え込まれた。長老は彼らに、一緒に暮らすのではなく、それぞれ別々に暮らすよう命じた。しばらくして、彼らは皆、別々の道を歩み始めた。　マリアは女子修道院へ入ったが、ヨハネスとアルカディオスは両親に別れを告げ、長老と共に荒野へと向かった。　一方、クセノフォントはビザンティウムに使者を送り、自分の家とすべての財産を売却するよう命じ、そのすべてを貧しい人々に施し、奴隷たちを解放し、自らも荒野に小部屋を見つけ、沈黙の生活を送った。

彼らは皆、最期まで神に仕え、神から偉大な賜物を受けました。ヨハネスとアルカディウスは、砂漠の修道者たちの間で星のように輝き、長きにわたり生き、自らの死を予知して主のもとへ旅立ちました。　聖女マリアは多くの奇跡を行い、盲人を癒やし、悪霊を追い出し、至福の死の後、この世から天へと旅立った。　聖クセノフォントもまた、神から奇跡を行う力と先見の明という賜物を受けました。彼は未来を予言し、偉大な神秘を洞察する者でしたが、やがて人間の目には見えないものを観照し、神の御顔を仰ぐ喜びに浸るためにこの世を去りました。このように、聖クセノフォント、聖マリア、そして彼らの聖なる子供たち、　ヨハネとアルカディオスという、神を熱心に愛した聖なる子供たちは、 義にかなった、神に喜ばれる生活[1473] をもって主に献身的に仕え、至聖なる主、私たちの救い主キリストによって聖人の列に加えられました。父と聖霊と共に、キリストに栄光と誉れと礼拝が、永遠にありますように。アーメン。

コンダク、第4調:

この世の海を逃れ、義人クセノフォントは、高潔な妻と共に天において子らと共に喜び、キリストを賛美している。

尊者シメオン・ヴェホイの記念日。

記念日：1月26日

「老」と呼ばれる聖シメオン[1474] は、若き頃からシリアの小さな洞窟に身を寄せ、完全な孤独の中で隠遁生活を送った。彼の生涯は、厳格な断食、絶え間ない祈り、そして神への黙想の中で過ごされた。　彼の糧は、洞窟の周囲に生えている草だけでした。こうして彼は長年にわたり修行を続けました。しかし、彼に会いたいと願う人々が集まり始め、それによって彼の沈黙が乱されるようになると、彼は洞窟を離れ、アマン山[1475] へと移り住みました。しかし、ここでも彼のもとに集まってく

[1473] 聖クセノフォントと聖マリア、そして彼らの息子であるヨハネとアルカディオスは、5世紀に生活し、修業に励んだ。

[1474] 「ヴェトヒム」、すなわち「古代の」という呼称は、彼に続いてシリアで修業した聖シメオン・ストルプニクと比較して付けられたものである。

[1475] アマンは、パレスチナ北部、地中海の東に位置するアンティリヴァン山の頂上である。

る多くの人々から安らぎを見出すことはできませんでした。 そこで彼はシナイ山へ退いた[1476] 。しかし、神は尊者シメオンがシナイに留まることをお許しにならなかった。なぜなら、彼はかつて修行に励んだその場所で、他者の救いのために奉仕すべきであったからである。　そこでシメオンはアマンに戻った。彼の指導の下、間もなくここに二つの修道院が設立された。一つは山の頂上に、もう一つは麓にあった。修道院を統括する中、聖シメオンは自身の指導下に置かれた修行者たちを見守り、敬虔な修行において彼らを励まし、強め、私たちの救いの敵による攻撃や策略について警告し、それとの戦いにおいて導き、内省を促し、隣人への柔和さと寛容さ、敵への寛大さを彼らに植え付けた。そのたゆまぬ功績により、尊者は神から、猛獣さえも従わせる恵みを受けた。神に喜ばれる生涯を送った尊者は、深き老齢に達して、安らかに主のもとで息を引き取った[1477] 。

聖殉教者アナニア長老、ペトロ獄吏、および彼らと共に殉教した七人の戦士たちの記念日

記念日：1月26日

聖アナニアは幼少の頃から敬虔さにおいて際立っていた。学問に打ち込み、少年時代には聖書の読解に熱心に取り組んだ。そのため、成長すると、本人の意思に反して民衆によって助祭に任命され、その後、若年であるにもかかわらず長老にも任命された。　ディオクレティアヌスの迫害の際、アナニアはキリスト教徒として裁判にかけられた。説得や脅迫にもかかわらず、彼は揺るぎない姿勢を貫き、人々の前でキリストを公に告白し、神殿で異教の神々を嘲笑し、一息で偶像を倒し、神殿そのものを破壊した。 その後、アナニアは牢獄に投獄されたが、そこで7日目にキリストの御姿を拝し、12日目に鳩の姿をした聖霊の御姿を拝した。　これらの幻を見た後、ペトロという名の牢番がキリストを信じるようになり、二人は新しい　統治者の前に引き出された。統治者は、アナニアを熱した鉄板の上に置き、その後、その体を削って塩を振りかけるよう命じ、ペトロを熱い炭の上に置くよう命じた。 その後、彼らは激しく蒸し暑い浴場に閉じ込められたが、3日後に無傷で発見された。この奇跡を目撃した7人の兵士がキリストに改宗したが、そのために鞭で激しく打ちのめされた。その後、9人全員が火の中に投げ込まれたが、鳩の姿をした聖霊が現れた後、彼らは無傷のままだった。 アナニアは猛獣に投げ込まれたが、無傷のままであった。ついに、彼らは全員、海に投げ込まれた。その道中、アナニアは改宗した7人の戦士に洗礼を授けた。聖なる殉教者たちの遺体は波によって岸に打ち上げられ、キリスト教徒たちによって尊厳をもって埋葬されたが、その遺体からは様々な癒しの力が湧き出ていた[1478] 。

聖ヨセフ・ソロンスキの記念日

記念日：1月26日

[1476] シナイ山は、実際には花崗岩の岩山からなる山群であり、険しい谷が切り込み、周囲を取り囲んでいる。アラブ人からは現在、トゥール山、あるいはジェベル・トゥール・シナと呼ばれている。この山は、シナイ半島を形成する紅海の有名な海峡のほぼ中央に位置している。3つの山脈から構成されている。 イスラエルの民が神と契約を結んだ、いわゆるシナイ山は、中央の山脈の最も高い頂上である。

[1477] 聖シメオン・ザ・エルダーは、390年頃に帰天した。

[1478] 聖殉教者アナニア、ペトロ、および彼らと共にいた7人の戦士たちの殉教は、フェニキアで起こった。彼らの死は4世紀初頭に訪れた。

聖ヨセフ、テッサロニキの大司教は、聖テオドロス・ストゥディトスの兄弟であり、幼い頃から彼と共に、サクディオンに修道院を設立した叔父である聖プラトン師の指導の下で修行に励んだ[1479]。聖ヨセフは兄と共に、コンスタンティヌス皇帝の不法な結婚を糾弾した[1480]。コンスタンティノープルに連行された彼は、飢えに苦しめられ、ついには不毛の島へ流刑に処され、そこで牢獄に投じられた。ミカエル・クロパラトス皇帝[1481]は、ヨセフが流刑地から戻ることを許可した。レオン・アルメニアヌス帝の治世下[1482]、聖ヨセフはイコン崇拝をめぐって迫害を受けた。レフは、彼の兄弟テオドロス・ストゥディトスと共に彼を拷問にかけ、その後、牢獄に閉じ込めた。しばらくして、皇帝は彼らに、聖像破壊主義の信仰告白書に署名するよう要求した。ヨセフはこれを拒否し、別の悪臭漂う牢獄に投げ込まれた。その後、ミハイル・コスノヤズニー（[1483]）は、聖像崇拝のために迫害を受けた他の修道士たちと共に、ヨセフも解放した。聖ヨセフは、晩年を過ごしたストゥディオス修道院で安らかに息を引き取った[1484]。

2月9日

1月27日（旧暦）

聖ヨハネ・クラマトリオス（金口）の聖遺骨の移送

記念日：1月27日

偉大なる全地教師、聖ヨハネス・クラマティス（[1485]）がコマナ（[1486]）で逝去してから30年、いやそれ以上の歳月が経過した後、　――かつてその弟子であり、後に後継者となったプロクルス

[1479] サクディオンは、後に小アジア北西部のビフィニア地方で名声を博した修道院である。

[1480] コンスタンティノス6世ポルフィロゲネトス皇帝は、780年から797年まで在位した。情欲と淫行にふけっていた彼は、妻のマリアを強制的に修道女とし、その代わりに、父の親族であったテオドティアを新たな妻として迎えた。

[1481] ミカエル1世・クロパラトス、あるいはランガヴは、811年から813年まで在位した。

[1482] レオン5世アルメニア人（偶像破壊派）は、813年から820年まで在位した。

[1483] ミカイル2世「口ごもる王」は、820年から829年まで在位した。

[1484] 聖ヨセフ、テッサロニキ大司教は、830年に死去した。彼の遺した説教のうち、特に注目すべきは「主の尊き十字架の挙揚」に関する説教である。しかし、ヨセフはむしろ聖歌作家としてよく知られている。　11世紀のトリオディの写本によれば、ヨセフの名は、受難週のトリペスンツを除き、四旬節のトリオディに含まれる2つの日中のトリペスンツのうち、最初の位置を占めるものの上に記されている。また、これらの日に唱えられるいくつかのスティヒラも彼によるものである。　聖ヨセフの三歌集とスティヒラは、一部が天使たち、洗礼者ヨハネ、聖母マリア、使徒たち、そして聖ニコライへの心温まる祈りを含み、また一部が断食の精神と、人の心を見通す裁き主への悔い改めの祈りを表現している。　ヨセフの聖歌、とりわけ「放蕩息子の週」のカノンは、罪に対する深い悔恨に満ちており、断食の日々によくふさわしいものである。

[1485] 聖ヨハネ・クロマトス（金口）は407年に、60歳前後でこの世を去りました。彼は6年半の間コンスタンティノープル大司教を務め、3年3ヶ月を幽閉状態で過ごしました。　（主の十字架の挙揚の祝日に際し、教会は聖ヨハネ・クロソストモスの記念を、聖人が帰天した9月14日だけでなく、11月13日にも執り行います。このほか、金口聖ヨハネの記念日は、1月30日に聖バシレイオス大聖人および聖グレゴリオス神学者と共に祝われる（これについては、今月の30日の項を参照のこと）。

[1486] コマナは、小アジア北東部のポントス州にあった都市であり、現在ではその跡地には廃墟しか残っていない。

聖下[1487] は、夏にコンスタンティノープル大聖堂で聖ヨハネを偲ぶ礼拝を執り行った際、民衆に向けて説教を行い、この神の御使いを数多くの賛辞をもって称えました。

「聖ヨハネをその真価にふさわしく称賛できる者は誰もいない――」と彼は語った。「ただ、今、もう一人のヨハネが現れたなら別だが。水で溢れかえる川のように、彼の数え切れないほどの労苦、偉業、そして教えの記憶から成るその追憶は、信徒たちの魂を潤す。　彼の中には神の恵みの光が輝いており、ある者には神性の太陽が鮮明に現れ、ある者には正教が異端から清められる姿が示され、ある者には偶像の滅びが示され、ある者には迷いの虚偽が暴かれ、ある者には信仰の確立と道徳の是正が見え、ある者には天の冠が輝いている。　おお、司教よ、その記憶は香りに満ちた空気のごとく！おお、行いにふさわしいヨハネの名よ！おお、「金口」という異名よ、それは彼が神の言葉を説く際にいかにであったかを如実に示している！　おお、天の至高の舌よ！　おお、福音の雷鳴を広める教師よ！　これこそ、悔い改めを説いた主の先駆者ヨハネに似たヨハネである。あの方は説教者であり、この方は神の声を伝えるラッパである。あの方は揺るぎなく、この方は無敵である。　あの方は処女であり、この方は純潔の守護者である。あの方は荒野で洗礼を授け、この方は都で心の網を張り巡らせた。あの方は姦淫者を糾弾し、この方は略奪者たちを厳しく糾弾した。あの方は牢獄に投げ込まれ、この方は流刑の地で幽閉されている。あの方は剣によって斬り殺され、この方は真理のために同じ死を望んだ。　彼は地上で多くの偉業を成し遂げた。天には多くの冠が彼のために用意されている。ヨハネは今、聖使徒パウロと共にこう叫んでいる。「私はキリストの芳香である」（IIコリント2:15）。なぜなら、私はあらゆる場所を、あたかも悪臭であるかのように、迷いから清めたからである。　エフェソスではミダの欺瞞を排除し、フリギアでは偽りの神々の母を無子とし、カイサリアでは民衆の淫行の場を破壊し、シリアでは神に背く集まりを廃止し、ペルシャでは敬虔の種を蒔いた。　至る所に正統信仰の根を植え付け、私の教えによって全世界を神の知識で照らした。著書を著すことで、至る所に救いの網を広げた。神学者ヨハネと共に、父なる神の御言葉について神学論を交わした。漁師たちと共に、正統信仰の網を世界に投げかけた。――おお、ヨハネよ！　あなたの生涯はまことに苦難に満ちていたが、あなたの死は尊く、あなたの墓は栄光に満ち、あなたの報いは偉大である！」

聖プロクルスが教会でこのように説教している間、聖ヨハネ・クラマトルスへの愛に燃える民衆は、説教が終わるのを待ちきれず、皆が一口で言うかのように、大きな声で聖プロクルスに呼びかけ、コマンからコンスタンティノープルへの聖ヨハネの聖遺骨の帰還を早めるよう懇願した。　教会には大きな叫び声が長く響き渡り、総主教は説教を終えることができなかった。礼拝が終わるやいなや、聖プロクルスは、アルカディウスの息子であり、テオドシウス大帝の孫であるテオドシウス皇帝[1488] のもとへ赴き、ヨハネス・クロソストモスの尊い遺骨の移送を懇願して、次のように述べた。

「皇帝よ、聖なる洗礼によってあなたを福音的に生み出し、かつて長老シメオンが主を教会に運び入れたように、聖職者の手によってあなたを教会に導き入れた方を、お返しください。教会はあなたにこう叫んでいます。『私の美しさは色あせ、口は閉ざされ、輝きは曇ってしまった』と。」野生のイノシシが、金口聖ヨハネの羊たちの牧者たちを引き裂き、血に飢えた獣たちが、わが口の果実を滅ぼしてしまった。

嫉妬が、私の奉仕者の聖所を汚した。まるで森の樫林で斧によって切り倒されたかのように、彼は私から切り離され、沈黙の棺に閉じ込められた。　異端者たちの仲間たちは互いにこう語り合った。「私たちに反対する多くの言葉を語っていたその口を封じよう。彼の言葉を恥じさせよう。もはや誰もあのように教えることはできず、誰も私たちに異議を唱えることはできなくなるからだ。」王よ、いつまで敵は金口のために私を貶め続けるのでしょうか。私の花婿であるキリストに似たその人

[1487] 437年から445年まで――その記念日は教会によって11月20日に祝われる。
[1488] テオドシウス2世（若き）皇帝は、408年から450年まで在位した。

を、私のもとに戻してください。　あなたの霊的な父を、私、あなたの母に授けてください。あなたの肉なる母が彼を私から遠ざけたとはいえ、あなたは彼女の無慈悲な心や悪意に従うのではなく、聖霊の聖なるもの、　、それなしには誰も主を見ることはできない、その聖なるものを嫉妬してください。エウドクシアの栄光[1489]は過ぎ去りましたが、教会は永遠に存続します。 私は、永遠にあなたの母である。ザラトウストの帰還による喜びを至る所に広める機会を私に与えてくれ。そうすれば、あなたは私を、神の御前であなたのために取り成す者とするだろう。ザラトウストの魂を、あなたのために祈る者として得なさい。父の祈りによって確固たるものとなる、真理の息子でありなさい！

こうして、教会の立場から多くのことを語った後、彼は王を説得して同意を得た。銀の聖遺物箱を携えた最も高貴な人々がコマニへ派遣され、ヨハネス・クラマティオスの聖遺体を大いなる敬意をもって移送することとなった。　彼らがそこに到着し、王の書簡をコマニの司教と民衆全員に見せたとき、人々の間には、このような偉大な宝を失うことへの深い悲しみと嘆き、そして泣き声が広がった。　民衆は聖遺物を手放そうとはしなかった。この件について多くの議論が交わされたが、王の命令に逆らうことはできなかった。ところが、王の使者が棺から聖遺物を取り出そうとしたとき、それらはたちまち石や他のいかなる重りよりも重くなり、どんなに力を尽くしてもその場から動かすことは不可能であった。　使者たちは懸命に努力したが、何の成果も得られなかった。このことから、聖人がその遺骸をそこから持ち去られることを許さないのだと悟り、彼らは直ちにそのことを書面で王に報告した。　王は、至聖なる総主教や他の聖なる人々と相談した末、自らの過ちに気づいた。すなわち、コマンから聖ヨハネの遺骸を取り出すよう、祈りではなく命令として使者を派遣してしまったことである。　そこで王は、あたかも聖人が生きているかのように手紙を書き、自らの無礼を詫びるとともに、聖人が御座に戻り、信徒たちを慰めてくださるよう懇願することを思いついた。王は自らの手で次のように記した。

「全教会の師であり、私の霊的な父である聖ヨハネ・クラマトリオスへ、テオドシウス皇帝より：尊き父よ、あなたの尊い御遺体を、他の死者の遺体と同様に、いわば魂のないものと見なして、直ちに我々の元へ移送するよう命じましたが、私の不徳のゆえに、望んだ結果は得られませんでした。　今、私はあなたを生きているかのように扱い、この私自身の筆による嘆願を送り、信仰をもって私とあなたの民への赦しを請う。私の大胆な試みを、あなたの深い知恵で覆い隠し、赦してください。すべての人に悔い改めを教えたあなたよ、悔い改める者を赦してください。　父を愛する子供たちのように、私たちに父を返してくださり、あなたを愛する者たちをあなたの到来で喜ばせてください。この切実な必要に加え、私はあなたに命じるのではなく、心から懇願して、私たちのもとに来てくださるようお願いします。最も誠実な父よ、二度と私を恥じ入らせないでください！あなたに会いたいと願う者たちに、あなたご自身を授けてください。平安のうちに御自身のもとへお帰りください。そうすれば、あなたの民は愛をもってあなたをお迎えするでしょう」。

この書簡を書き終えると、王はそれを急使たちに託し、聖人の棺を開けてその書簡を聖人の胸の上に置き、その後、徹夜祈祷を行うよう命じた。　王がコマニへ送った書簡が聖ヨハネの胸の上に置かれ、その後、徹夜祈祷が終わった後、王の家臣たちが尊い遺骨に触れると、聖人はたちまち彼らの手に委ねられた。聖人の遺骨は、かつてそうであったように、ごく自然に軽くなったのである。
使者たちは喜び、棺から聖遺物を取り出して、王の聖遺物箱に納めた。そこには、蛇に噛まれて足が不自由になり、教会で施しを乞いながら暮らしていた一人の貧しい男がいた。彼は聖人の棺にかかっていた小さな布を取り、それで自分の足を拭いた。　するとたちまち、その足はもう一方の足と同じように丈夫になり、彼は神を賛美しながら歩き始めた。民衆は皆、聖人の尊い遺骸を礼拝するために

[1489] エウドクシアは、アルカディウス帝の妻であり、特にヨハネス・クラウディオス（金口ヨハネス）と激しく対立し、彼の告発的な説教を憎んでいた。彼女の尽力と陰謀により、聖ヨハネスは大司教の座を追われ、コマニに流刑に処された。

ろうそくを手に集まり、移送の際には涙と嗚咽を流しながら見送った。王の随行団は旅立ち、何の支障もなく長い距離を進み、ハルキドンの埠頭[1490]に到着した。 聖遺物を出迎えるために、皇帝と全シンクリト、総主教と聖職者たち、そして船に乗り込んだ数え切れないほどの人々が現れた。ヨハネの尊い聖遺物を受け入れるために特別な皇帝の船が用意され、そこに聖遺物が入った聖遺物箱が安置された。　コンスタンティノープルへ戻る途中、神の御許しにより、突然海上で嵐が吹き荒れた。すべての船が四方八方に散らばったが、聖人の遺骨を納めた棺を載せた船だけは、舵を失いながらも、人の手ではなく神の力によって目に見えない形で導かれるかのように、独りよがりに漂っていた。　その船は、聖ヨハネス・クラマティオスが数多くの苦難と、さらには追放さえも味わった、あの未亡人のブドウ畑がある場所に漂着した。こうして彼は、死後もなお真理への熱意を示し、不当に与えられた侮辱を糾弾したのである。　たちまち海は静まり、船たちは無傷のまま一か所に集まり、誰も荒波による被害を受けることはなかった。

聖遺骨を納めた聖櫃が船から岸へと運ばれると、街中の人々が立ち上がり、ろうそくや香炉を手に、賛美歌を歌いながら外へ繰り出した。聖職者たちは聖櫃を受け取り、まず聖使徒トマスの教会へ、次いでイリーナ教会――別名「キリストの平和の教会」――へと運び込んだ。　そこで、皇帝と総主教は聖遺物箱を開け、聖ヨハネの遺体が、美しさと朽ちることのない姿で咲き誇る葡萄の木のように、素晴らしい香りを放っているのを見つけた。皇帝は自身の紫のローブを脱ぎ、それを聖遺物の上に広げ、その後、聖人の胸に顔を伏せて、涙ながらにこう語った。

「父よ、嫉妬によってあなたに犯した罪をお赦しください。私を母の罪の共犯者と見なさないでください。また、父の節制のなさに起因する苦しみから、私を救ってください。私はあなたの迫害者の息子ではありますが、あなたに降りかかった災いについては無実です。　彼女の罪をお赦しください。そうすれば、私も彼女に重くのしかかっている非難から解放されます。私は自分の位をあなたの足元にひれ伏し、私の持つすべての権威をあなたの祈りに委ねます。　無分別な暴行をもってあなたを侮辱した彼女を赦してください。彼女はあなたに対して犯した行いを悔い改め、私の口を通して謙虚にあなたにこう訴え、赦しを求めています。「父よ、悪を記憶に留めないというあなたの教えを思い起こし、私の悪意そのものを忘れてください。」　私は倒れた状態から立ち上がりたいのですが、私に手を差し伸べてください。あなたはこうおっしゃいました。「もし誰かが一度倒れたなら、立ち上がれ。そうすれば救われる。」　私は、あなたが私に対して抱く不興に耐えられません。私の棺さえも震え、私の骨を砕き散らしています。私は、永遠の罰を恐れると同時に、キリストの最後の審判において、御右の座に立つことから排除されてしまうことを恐れています。あなたは多くの者をあなたの教えによって救われました。どうか、私だけがその救いから取り残されることのないようにしてください。　あなたを追い求めて呼びかける私を見捨てないでください。そして、私の敵である悪魔に復讐してください。かつてエバに神に対して罪を犯すよう教えたように、悪魔は私にあなたを侮辱するよう教えたのですから。怒りのない方よ、私を怒らないでください。朽ちるべきこの世の生活において恨みを抱かなかったあなたが、朽ちることのない世においても恨みを抱かないでください。もし私が、この一時的な生においてあなたに害を及ぼしたのなら、永遠の命に生きるあなたは、どうか私の魂を救ってください。私の栄光は過ぎ去り、何も私を助けてはくれませんでした。ですから、父よ、あなたが神から授かった栄光をもって、私を助けてください。そして、私がキリストの恐るべき審判で裁かれる前に、この不義な私を赦してください。

母に代わってこれらの言葉を語りながら、王は泣き止むことなく、聖人の遺体に涙を注ぎ、畏敬の念を抱きつつその遺体に口づけをした。また、至聖なるプロクルスも、愛を込めて聖人の遺体に口づけをしながら、こう叫んだ。

[1490] ハルキドンはコンスタンティノープルの対岸、ボスポラス海峡のアジア側に位置していた。

「喜びなさい、キリストを愛する父よ、最も愛すべき師よ！私はあなたの霊的な乳で育てられたあなたの子供です。　かつてあなたが私の羊飼いであったように、今もあなたは羊飼いである。私の羊はあなたのもの。あなたの牧草地で、今なおあなたの群れは養われ、あなたに惹かれて、他の羊飼いに従おうとはしない。どうか私たちにあなたの御顔をお示しになり、再びあなたの御声を聞かせてください。

民衆は皆、聖人の尊い聖遺箱にせめて触れることさえ望み、昼夜を問わずその場から離れようとしなかった。翌朝、聖人の聖遺物は王の馬車に載せられ、大いなる栄光と誉れをもって、聖使徒たちの大聖堂へと運ばれた。　聖遺物箱が教会内に運び込まれ、総主教の玉座に安置されると、民衆はまるで口を揃えたかのように一斉に叫んだ。

「父よ、御座にお就きください！」

その時、プロクルス総主教と、彼と共にいた多くの高潔な人々は、聖ヨハネが、まるで生きているかのように死後の口を開き、大司教としての祝福の言葉を口にしたのを見た。

「すべての人に平安あれ！」

聖なる典礼が行われている間、聖ザラトウストの聖遺物から病める者たちへ多くの奇跡的な癒しがもたらされ、また、エウドクシア皇后の棺も、長きにわたって続いていた揺れが止まった。　司祭たちは、喜びと歓喜のうちに、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を讃えながら、ヨハネの聖遺体を祭壇の下の供物台に安置した。アーメン。

トロパリオ、第2調：

あなたの口から、火の輝きのごとく恵みが放たれ、全宇宙を照らし出しました。この世の富を貪ることなく、私たちに謙遜の高みをお示しくださいました。しかし、あなたの言葉をもって戒めを説かれた、ヨハネ・ザラトウストよ、キリスト・神の御言葉に祈り、私たちの魂が救われますように。

コンダク、第1調：

神秘に満ちた尊い教会よ、あなたの尊い遺骨の帰還を喜びなさい。そして、それを貴重な黄金のように秘めつつ、あなたを讃える者たちに、あなたの祈りによって尽きることのない癒しの恵みを授けてくださる、ヨハネ・クロソストモスよ。

2月10日

1月28日（旧暦）

同日、トテムの聖テオドシオスの記念日

私たちの尊い父エフレム・シリンの伝記[1491]

1月28日の記念日

[1491] 聖エフレムは「シリン」、すなわち「シリア人」と呼ばれている。これは、彼が生まれたメソポタミアが、古代にはシリアに属していたためである。

聖エフレムは、メソポタミアのニジビアという町[1492] の出身であった。彼はコンスタンティヌス大帝の治世中に、キリスト教徒の両親[1493] のもとで生まれ、テオドシウス大帝の治世[1494] まで生きた。まだ若き頃、聖エフレムはこの世を捨てて荒野へ赴き、そこで修道士となった[1495] 。 彼は神から知恵の賜物を受け、その口からは恵みが溢れ出し、まるで甘い川のように、彼の教えに耳を傾けるすべての人の魂を感動で満たした。これは彼がまだ幼い頃に予兆として示されていたことだった。　彼がまだ幼かった頃、両親は彼について次のような夢を見ました。少年の舌の上にブドウの蔓が生え、成長して、その枝や房で天の下すべてを満たしたのです。空の鳥たちが集まってブドウの実を食べましたが、彼らが食べれば食べるほど、ブドウの量はそれだけ増えていきました。　その後、聖エフレムが人里離れた山で修行に励み、深い感銘と心からの悔い改めに満たされていたとき、ある神に愛された教父が、天使のように明るく輝いている一人の男を夢の中で見た。その男は手に書き記された巻物を持ち、こう尋ねた。

「この巻物を受け取り、守ることができるのは誰か？」

天からの声が彼に答えた。

「わが愛する者、エフレム以外に、この巻物を受け取り、守り抜ける者はいない。」

現れた男の前にエフレムが立っていた。彼が口を開くと、その男は巻物を彼の口の中に差し入れた。　聖エフレムはその巻物を飲み込み、その後まもなく、それを読み、耳を傾ける者すべてを感動させる教訓的な言葉を語り、書き記し始めた。それらは、彼の神に霊感を受けた書物から明らかなように、誰の心にも主への畏れを呼び起こし、悔い改めの道へと導くものであった。　同様に、もう一人の偉大で聖なる長老も、聖エフレムに関する同様の幻を夢の中で見た。彼は、神の御命により天から降りてきた、　の天使たちの群れを目撃した。彼らは、内側も外側も文字で埋め尽くされた巻物を手にしていた。彼らは互いにこう語り合っていた。

「この巻物を受け取れる者は誰か？」

それに対し、ある者はある名前を挙げ、別の者は別の名前を挙げ、またある者はこう言った。

「確かに、挙げられた人々は聖く義なる者たちだが、その誰一人としてこの巻物を受け取ることはできず、心穏やかで謙虚なエフレムだけが受け取ることができる。」

その後、長老はエフレムにその巻物が手渡されるのを見た。翌朝目を覚ますと、彼は至福のエフレムが兄弟たちに教訓に満ちた訓示を説いているのを耳にした。　まるで泉が口から湧き出ているかのようだった！　その口からは、大いなる益に満ちた言葉が流れ出ていた。彼は、聖エフレムの口

1492 ニジビア（あるいはニジビダ）は、メソポタミアのマグドニア州にある、ローマ帝国とペルシア王国の国境に位置する、大きく人口の多い都市である。

1493 聖エフレムは自身の両親について次のように記している。「私を肉において生み出した両親は、私に主への畏れを植え付けてくれた。私の先祖たちは裁判官の前でキリストを告白し、私は殉教者たちの親族である。生前に繁栄を享受した私の祖父たちは農民であり、両親もまた同じ仕事に従事していた。」

1494 テオドシウス大帝は379年から395年まで在位した

1495 エフレムにとって、青春時代はいくつかの躓きなくして過ぎ去ったわけではなかった。生まれつき情熱的な彼は、彼自身の言葉によれば、短気であり、「些細なことで口論になり、軽率な行動を取り、悪しき企みや不品行な考えにふけっていた…… 私の若さは、人生で私たちに起こることはすべて偶然に過ぎないと、私を信じ込ませそうになった。 しかし、神の摂理が、その熱血な若さを正してくれたのだ」。エフレムは羊の盗難という冤罪を着せられ、牢獄に投じられた。彼の後に、エフレムと同様に無実の他の二人も投獄された。「七日間を過ごした後、八日目に私は夢の中で見たのだ、——後に聖エフレムはこう語った——誰かが私にこう言うのを見ました。『敬虔であれ、そうすれば神の摂理を理解できるだろう。自分が何を考え、何をしたかを思い返してみよ。そうすれば、これらの人々が不当に苦しんでいるわけではないが、有罪者たちもまた罰を免れることはない、と自ら悟るだろう』と。」　——エフレムはこれらすべてを目撃した。彼は自身の著作の一つで、その詳細を詳しく語っている。——これらの出来事はエフレムに多大な衝撃を与え、彼はまもなく世俗を離れ、山中の隠者たちの元へ身を寄せ、そこで聖ヤコブ、ニジビの聖人（記念日は1月13日）の弟子となった。

から発せられるすべての言葉が聖霊によって啓示されたものであると確信し、そのように御自分のしもべたちに恵みを与えてくださる神を賛美した。

363年、ニジビアはペルシャの支配下に入り、多くのキリスト教徒がニジビアを去った。その時、尊者エフレムもまた、ここからエデッサの町へ行くことを決意した[1496] 。彼は神に向かって次のような祈りを捧げた。

「主イエス・キリストよ！　どうか私にあなたの都を見る恵みをお与えください。そして、私がその都に入るとき、聖書について語り合い、私に益となるような人を、私を迎えに来てくださるようお導きください。」

そう祈った後、彼が町に近づき、門をくぐろうとしたとき、一人の女性が彼を出迎えた。彼女を見て、神のしもべは悲しみに打ちひしがれ、心の中で神にこう訴えた：

「主よ、あなたはあなたのしもべの祈りを軽んじられました。どうして彼女に、聖書の知恵について語り合うことができるというのでしょうか？」

その女性は立ち止まり、彼を見つめていた。聖エフレムは彼女にこう尋ねた：

「ねえ、女よ、なぜそこに立って私を見つめているんだ？」

女は答えた。

「私があなたを見つめているのは、女は夫から与えられたものだからです。でも、あなたは私を見るのではなく、あなたがそこから生まれた大地を見つめてください。」

これを聞いて、エフレムはその答えに驚き、その女性にそのような知恵を与えた神を賛美した。彼は、主が自分の祈りを軽んじなかったことを悟った。町に入ると、彼はそこで長い間暮らした[1497] 。

偶然にも、聖人が住んでいた家の近くには、かつて彼の隣人だった別の女性、すなわち娼婦が住んでいた。悪魔の狡猾さに煽られて、彼女は長老を侮辱しようとした。聖人の住まいが見える小さな窓を開けると、エフレムが立って食事を調理しているのが見えた。　女性は彼に向かって大声で呼びかけた。

「ご加護を、ご主人様！」

聖人はその小さな窓の方を見やり、彼女が覗いていることに気づくと、こう言った。

「主があなたを祝福されますように。」

すると、その女性は続けた。

「食事に何が足りないのですか？」

聖人は答えた。

「あなたがここからこちらを覗いているその小さな窓を塞ぐには、石が三つと、少しの砂が必要です。」

[1496] エデッサはメソポタミアにある都市で、岩だらけの砂漠と肥沃な土地――南メソポタミア――との境界に位置している。　この都市は――聖エフレムが語るように――「救い主の弟子ファデオを通じて、救い主ご自身の口によって祝福された」場所であり、ここには人の手によらず現れた救い主の御姿と、使徒ファデオの聖遺物が安置されていた。

[1497] エデッサで生計を立てるため、聖エフレムは浴場の経営者のもとで働き、余暇を利用して異教徒たちに神の言葉を説いた。その後、聖長老ユリアヌスの助言に従い、修行のために人里離れたエデッサの山へと退いた。　まもなく、エフレムは幻視を通じて、同時代の同胞の中でただ一人、人々を啓発するための書物を託された人物であることを知らされた。エフレムは『モーセ五書』の注釈を書き始めた。このシリア語による最初の注釈の試みは、多くのエデッサの人々をエフレムのもとに引き寄せたため、エフレムは人々から逃げ出そうとした。「エフレムよ！　どこへ逃げようとしているのか？」――現れた天使が尋ねた。「静寂の中で生きたいのです。世間の噂や、この世の誘惑から逃れようとしているのです」――とエフレムは答えた。天使は言った。「聖書の言葉があなたに成就しないよう、用心しなさい。『エフレムは、くびきから首を解き放とうとする若い雄牛のようだ』（ホセア書10:11）。その後、エフレムは自分が召された奉仕の場へと戻った。この時から、彼は口頭および書面によって信仰と敬虔について教え始めた。その敬虔な事業を成功させるため、彼はエデッサに学校を開校し、そこから後にシリア教会の著名な教師たちが輩出された。

すると、その女は恥知らずにもこう言った。
「私が先に話しかけたのに、あなたは答えてくれた。私はあなたと寝たいのに、あなたは最初の言葉から断るなんて。
神のしもべは彼女にこう答えた。
「もし私と寝たいのなら、私が指し示す場所へ行きなさい。」
娼婦は言った：
「その場所を教えてくれれば、行くわ。」
すると、聖人は言った。
「もしあなたが私を選んだのなら、街の中心部以外では、私と寝ることはできません。」
娼婦は驚いて言った。
「人々に恥をかくことにはならないでしょうか？」
聖人は答えた。
「もし人々の目を気にするのなら、人間のあらゆる秘密を知っておられる神を、どれほどもっと恥じ、そして恐れるべきでしょうか！　神は全世界を裁き、それぞれの行いに応じて報いを与えられるのですから。」
これを聞いて、娼婦は聖エフレムの言葉に心を打たれた。彼女は近づき、彼の足元にひれ伏して、泣きながらこう言った。
「神のしもべよ！　私が多くの悪行から解放されるよう、救いの道へと導いてください。」
聖エフレムは、聖書から多くの教えを授けた後、彼女の悔い改めを確かなものとし、彼女を女子修道院に送り、その魂を不法と罪から救った。
その後、別の娼婦が、どこかに向かって歩いていた聖エフレムに近づき、彼を罪へと誘惑した。それは、少なくとも彼を怒らせようとしたからである。というのも、彼が怒る姿を誰も、かつて一度も見たことがなかったからである。
聖人は彼女にこう言った。
「私について来なさい。」
女は彼の後をついていった。人混みの多い場所に差し掛かったとき、聖人は彼女に言った。
「ここで横になって、罪を犯そう。」
しかし、彼女は人混みを見て、彼にこう言った。
「周りにこんなに大勢の人がいるのに、どうしてここで立ち止まれるの？　恥ずかしくないの？」
聖人は彼女にこう答えた。
「もしあなたが人々を恥じるのなら、心の奥底の秘密までご存知の神を、私たちはどれほど恥じなければならないでしょうか？」
こうして、その女は恥じ入って彼から離れ去った。聖人を罪へと誘うことも、彼に怒りを抱かせることもできなかったのだ。なぜなら、彼は真に悪意がなく、柔和で、怒ることを全く知らない人だったからである。
彼の慈愛深さについては、次のような話が伝えられている。彼が荒野で断食をしていた時、弟子がいつもの時間に食事を運んできた。ある日、弟子が食事を運んでいる途中、偶然、食事が入っていた器を道端で割ってしまった。彼は長老の怒りを恐れたが、長老は戸惑う弟子を見て、こう言った。
「悲しむな、兄弟よ。もし食事が私たちのもとに来ようとしなかったのなら、私たちが食事のもとへ行こう。」

そう言って、彼は割れた器のもとへ歩み寄り、その周りに散らばった食べ物を拾い集めて食べ始めた。これほどまでに寛容な人だったのだ！彼については、修道士となって以来、誰に対しても一度も怒ったことがなかったと伝えられている。

ある時、聖エフレムは聖バシレイオス大聖人に関する啓示を受けた。彼は眠りの中で、天にまで届く炎の柱を幻視し、次のような声を聞いた。

「エフレムよ、エフレムよ！　お前がこの火の柱をどのように見ているか、それこそがバシレイオスそのものである。」

そこでエフレムは、聖バシレイオスに会いたいと願った。通訳を連れて――彼はギリシャ語を話せなかったから――聖エフレムはカッパドキアのケサリア[1498] へ向かった。彼は教会で人々に説教をしている聖バシレイオスを見つけ、大声で彼を称えながらこう言った。

「まことに、バシレイオスは偉大なり！　まことに、彼は燃える柱なり！　まことに、聖霊が彼の口を通して語っておられる！」

すると、群衆の中から何人かがこう言い出した。

「この旅人は、一体誰なのか。なぜ大司教をこれほど称賛するのか。彼から何かを得ようとして、お世辞を言っているのではないのか？」

礼拝が終わり、聖エフレムが聖ヴァシリーと親しく語り合っていたとき、聖ヴァシリーは彼に尋ねた。

「なぜ、あなたは私をそれほど称賛したのですか？」

聖エフレムは答えた。

「あなたの右の肩に白い鳩が止まり、あなたが人々に説いていることをあなたの耳元で囁いているのを見たからです。さらに、炎のような舌があなたの口から語っていたのです。」

これに対し、聖ヴァシレイは彼にこう言った。

「まことに、今、私はあなたについて聞いていたことを目の当たりにしている。荒野に住み、沈黙を愛する者よ！預言者ダビデの書にもこう記されている。*『エフレムはわが頭の砦である』*（詩編59:9）。まことに、これらの預言の言葉はあなたに当てはまる。あなたは多くの人々を徳の道へと導き、その道を堅くさせたからだ。そして、あなたの柔和さと心の悪意のなさは、すべての人にとって光のように輝いている。

その後、バシレイオス大聖人はこう言いました。

「なぜ、敬愛すべき父よ、あなたは長老の聖職にふさわしいにもかかわらず、その叙階を受け入れないのですか？」

「私は罪深い者だからです、大主教様！」とエフレムは通訳を通じて答えた。

「ああ、もし私にもあなたのような罪があれば！」とバシレイオスは言い、さらにこう付け加えた。「共に地面にひれ伏しましょう。」

二人が地にひれ伏すと、聖バシレイオスは敬虔なエフレムの頭に手を置き、助祭の叙階の際に定められた祈りを唱えた。　その後、聖エフレムは聖ヴァシリーと共に三日間、霊的な喜びのうちに過ごした。ヴァシリーは彼を助祭に叙階し、通訳を長老に叙階した後、二人を平穏のうちに送り出した。

聖エフレムは、10月29日に記念される隠遁者聖アブラミウスを深く愛していた。二人は頻繁に互いを訪ね合い、互いに啓発し合う友愛に満ちた会話に心を和ませていた。　また、アブラミイの姪である至福のマリアが敵の誘惑にさらされた際、聖エフレムは自らの祈りによって、彼女の救いに大いに貢献した。彼は罪を犯す者たちのために心を痛め、彼らの改心を深く気遣っていた。

[1498] カッパドキアは、ローマ帝国の属州であり、小アジアの東部に位置していた。ケサリアは、カッパドキアの主要都市である。

聖エフレムは、ある時は荒野[1499] に留まり、沈黙の中で神に仕え、そこで多くの弟子たちを集め、またある時は神の御心によりエデッサの街に住み、多くの人々を悔い改めへと導き、その教えによって神のために失われた魂を救い出した。　彼は魂に益となる言葉をこれほどまでに豊かに語り、神の恵みに満ちあふれていたため、声の張りすぎで喉が痛んだり、言葉を紡ぐことで舌が疲れたりすることが何度もあった。しかし、彼の言葉は決して短くなることはなかった。とりわけ、彼の心は深い知恵と理性で満たされていたからである[1500]。さらに、彼は深い謙遜に満ちており、、人々の称賛や一時的な栄光をあらゆる手段で避けていた。　ある時、民衆は彼を捕らえて、無理やり司教に任命しようとした。エフレムはこれを知ると、狂人のふりをし、狂人のように衣服を引きずりながら広場を走り回り、売られていたパンや野菜を掴んで食べた。　これを見た人々は彼を狂人だと見なし、彼

[1499] この聖人は、とりわけエジプトの砂漠にも滞在しており、ニトリウス山でしばらくの間を過ごした。シリアの伝記作家によれば、エフレムはここで、神に選ばれた修道士パイシオス――「シリアの修道士たちの中でも偉大な父」――と面会したという。　「ここには、シリア出身の神の人、長老たちの中でも偉大な人物であり、知性と心において啓発された人物がいた」と、ヨハネ・コロフは述べている。

[1500] 聖エフレムは、非常に多くの著作を残しました。ある著作では、彼は聖書の注釈者であり（聖グリゴリオスの言葉によれば、聖エフレムは世界の創造から最後の聖書に至るまでの注釈を著したといいます）；　またある著作では異端を糾弾する者であり、教会の賛美者であり、さらに別の著作ではキリスト教生活の教師、とりわけ心の砕きを説く説教者である。この種の著作は、いわば聖エフレムの魂の証しであり、同時に彼の永遠の栄光でもある。　聖グリゴリオス・ニッサスは、「エフレムにとって泣くことは、他の人々にとって空気を吸うことと同じであった――昼も夜も彼の目からは涙が溢れ出ていた。しかし、エフレムの顔は喜びに満ちて輝いていた。その一方で、彼の目からは涙の川が流れ出ていたのだ。　しかし、エフレムが悔い改めについて語る場面でさえ、彼は思いを神の慈愛へと向け、至高者への感謝と賛美を注ぎ出している」。　彼の道徳的な教えはすべて、心からの感動に満ちている。エフレムは、多くの教えを次のように始めている。「わが魂よ、悔い改めよ。神から授かりながら、自ら台無しにしてしまった恵みについて悔い改めよ。自分が犯した悪行について悔い改めよ。神があなたに対して示された忍耐のすべてについて悔い改めよ。　さあ、兄弟たちよ、キリストの僕たちよ、来なさい。心を砕き、昼も夜も主の御前で泣き叫ぼう。さあ、あの恐ろしくも威厳ある裁きと、それに続く我々の断罪について考えよう」。　この悔い改めの心情において、聖エフレムがしばしば取り上げた話題――悔い改め、死と審判への思い、神への畏れ、自己への省察、謙遜、高慢への対抗など――がある。その高邁な教えゆえに、聖エフレムは同胞たちから「シリアの預言者」と呼ばれた。至福のヒエロニムスは次のように記している。　「エデッサの助祭エフレムは、ある教会では聖書の後に彼の著作が公に朗読されるほど、その名声を高めた。」「私が称賛すべきは――」とグリゴリオス・ニッサスは言う――「すべてのキリスト教徒の口に上るエフレム・シリン、すなわち、その生涯と教えが全世界に輝いているあのエフレムである。」　――聖エフレムは、多くの教義に関する著作も遺した。それらはすべて、当時の誤謬に対抗して書かれたものである。具体的には、a) 傲慢な異端者たち、すなわちエティアン派やエウノミアン派に対する80の論説；b)　異端に対する56の教訓――ヴァルデサニ派（異端者ヴァルデサンの追随者）、マルキオニ派、メッサリアン派に対する非難と諭しを含む；c)『真珠』、すなわちイエス・キリストの一つの御身に二つの本性が結合していることについて――マルキオンとマネスに対する反論；　d) 信仰に関する三つの説教およびユダヤ人に対する論駁；e) 自由に関する説教（盲目の運命を主張する者たちに対する）；悔い改めに関する説教（ノバティアヌス派に対し、教会が罪を赦す権威について論じ、千年王国説を反駁したもの）；司祭職に関する説教；楽園と審判に関する説教。– 信仰と敬虔さの厳格な擁護者である聖エフレムは、エデッサやメソポタミアでバルデサンやアリウスの異端派が引き起こした混乱に対して、無関心でいることはできなかった。　自らの誤りを詩の形で説き、詩の韻律の美しさに惹かれた経験の浅い人々を巧みに誘い込み、異端的な内容を容易かつ長期にわたって根付かせていた異端者たちに対抗して、聖エフレム自身も、聖書に基づき、神と私たちとの関係に関する真の教えを、　同じ詩的な形式で説き始めた。民衆は聖なる隠者の賛美歌に熱心に耳を傾け、異端の歌を忘れていった。異端者たちは聖エフレムの成功に激怒し、ある時、石や武器を持って彼を襲い、殺しかけたが、それによって彼の信仰への熱意が弱まることは全くなかった。　これらの著作はすべて、聖エフレムによって敬虔な黙想の形で記されたものである。それらは民衆が用いるため、また一部は教会での賛美のために意図され、詩の形式で書かれている。聖エフレムはまた、多くの心を打つ祈りと祈りの賛美歌も残した。　キリストの降誕を祝う彼の聖歌は、とりわけ荘厳な趣を帯びている。また、埋葬の際に歌われる深く心を打つスティヒールも彼によるものである。彼が作成した祈りの中でも、特に大斎期間中に読まれる、心を揺さぶる感動的な祈りがよく知られている。「主よ、わがいのちの主よ！　怠惰、傲慢、空虚な言葉の霊が私を支配することのないようお守りください。その代わりに、貞潔、謙遜、忍耐、そして愛の霊を、あなたのしもべである私に授けてください。おお主よ、主よ、私に自分の罪を見極める力を与え、私の兄弟を裁かないようにしてください。世々限りなく祝福あれ。アーメン」。

は町から逃げ出し、自分たちが彼を就かせようとしていたその地位に別の司教が任命されるまで、身を隠していた。　聖人は昼夜を問わず、絶えず祈りにふけっていた。心を打たれ、涙を流す賜物を持っていた彼は、審判の日を思い起こして常に泣いていた。彼はその審判の日について、多くのことを書き、語っていた。　彼はほとんど眠らず、食事もほとんど口にしなかった――ただ、力尽きたり、飢えや睡眠不足で死んだりしないためだけだった。彼は全く物欲がなく、富よりも貧しさを愛していた。それは、彼が自身の遺言でこう述べている通りである。

「エフレムは、地上の何ものも所有してはならないと命じられた（マタイ6:25以下参照）善き師キリストの御心に従い、金も銀も、いかなる蓄えも決して持たなかった。」

当時、主の受肉について誤った説を唱える異端者アポリナリウスがいた。彼は言葉巧みで、ギリシャの学問に精通していたため、神の教会を大いに混乱させ、多くの人々を自らの異端へと引き込んだ。　この異端者は、若き日から老齢に至るまで、そのすべての労力と努力を、正信者たちを堕落させ、自らの迷妄へと引きずり込むことに注ぎ込んだ。　彼は正教徒を攻撃する多くの書物を著したが、その中でも特に注目すべきは二冊であり、そこには彼の魂を蝕む教えが最も完全に表現されているからである。彼はこれらを武器として用い、言葉による論争を通じて正教徒と戦った。これらの書物は、彼の同棲相手であるある女性に預けられていた。　聖エフレムは、これらの書物の存在を知ると、異端の狡猾さに対抗して、それ以上に驚くべき策略を考案した。彼は密かにその女性の元を訪れ、自らをアポリナリオスの弟子だと名乗りながら、アポリナリスを大いに称賛した。　まるで自分には未知の知恵を学びたいかのように、彼はその女性に、彼女が保管していたアポリナリウスの書物を少しの間貸してほしいと頼み、そこから最も注目すべき箇所を要約して書き写したいと申し出た。その女性は、彼が本当に友人の弟子であると確信し、できるだけ早く返却し、誰にもそのことを話さないという条件付きで、両方の書物を彼に渡した。　聖エフレムは書物を受け取ると、自分の修道院へ持ち帰り、糊を用意して、中のページを1枚ずつめくりながら貼り合わせていった。ついに、書物がまるで一枚の木片や石のようになったほどにすべてを貼り合わせ、どのページも互いに切り離せなくなった。その後、彼はその書物を女性に返した。　彼女はそれを受け取ると、中身を見もせずに元の場所に置いた。その後、正統派と、すでに老齢となっていた異端者アポリナリウスとの間で論争が起こった。彼はもはやかつてのような論争における機転を利かせることができず、老齢のため記憶力も衰えていたため、それらの書物を利用して正統派に勝利を収めようとした。　しかし、それらを手に取っても開くことができなかった。　ページがしっかりと貼り合わされ、石のように固まっていたからである。彼は大きな恥に打ちひしがれ、敗北し、恥辱を被って公会議を去った。そしてまもなく、悲しみと大きな恥のあまり、この世を去り、その呪われた魂を恥辱のうちに吐き出したのである。

私たちの尊い父エフレムは、神に喜ばれる長い生涯を送り、多くの人々を救いに導いた後、自らの死をあらかじめ予見し、弟子たちのために教訓に満ちた遺言を残した。　少しの間病に伏した後、彼は深き老齢のうちに主のもとへ旅立った[1501]　。その尊い遺体は、シリアのエデッサ地方にある荒野の修道院に埋葬され、その聖なる魂は今や主の御座の前に立ち、　私たちのために執り成し、主イエス・キリストの祈りと恵みと憐れみによって、私たちの罪が赦されるよう願ってくださっています。主イエス・キリストに、永遠の栄光がありますように。アーメン。

[1501] 聖エフレムは373年、エデッサの町で安らかに息を引き取った。

トロパリオ、第8調：

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深淵からの嘆きによって百の労苦を実りあるものとし、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、エフレム、わが父よ。キリスト・神に、わが魂の救いを祈り求めてください。

コンダク、第2調：

裁きの時を常に予見し、エフレムよ、あなたは苦々しく泣き悲しんだ。言葉は少なかったが、行いにおいては勤勉な師であった、尊き方よ。それゆえ、全世界の父よ、あなたは怠惰な者たちを悔い改めへと導かれる。

ペチェールスクの聖エフレム、ペレヤスラフの司教の伝記。

記念日：1月28日

ボヤールの息子である至福のヴァルラアムに続き、至福のエフレム・エヴヌフは、　高貴な家系と気高い出自を持つ人物であり、イジアスラフ公に深く愛され[1502]　、公の全家政を統括していた彼は、公爵の屋敷から私たちの尊い父アントニーのもとへやって来て、公に仕える代わりに、天の王の僕たちに加わらせ、修道者の位である聖なる天使の姿を授けてほしいと懇願した。　尊者アントニオスは、彼に魂の救いについて教えを説いた後、至福のニコンに彼の剃髪を行うよう命じた。この命令に従い、ニコンは至福のエフレムに剃髪を行い、修道服を着せた。　しかし、善を憎む敵である悪魔は、この至福のエフレムの剃髪、また至福のバルラアムの剃髪に対しても、聖人たちに大きな苦難をもたらした。このことは、聖アントニウスと聖ニコンの伝記に記されている。　実のところ、闇の君主は、暗い洞窟に集う聖なる集団に打ち負かされつつあることを目の当たりにし、この時からこの場所が称賛されるようになることを悟ると、自らの滅亡を嘆いた。　彼は敵意に満ちた策略を用いて、イジアスラフ公の心を聖者たちに対して煽り立て、聖なる集団を追い散らすようそそのかした。しかし、彼はその目的を達成できず、むしろ聖者たちの祈りによって自ら追い払われてしまった。彼は、自ら仕掛けた罠に落ちてしまったのである。　確かに、至福のエフレムに修道服を授けた聖ニコンも公爵の前に引き出され、厳しく非難された。また、修道院の院長である聖アントニーも、兄弟たちと共に、公爵の怒りによって洞窟から追放された。しかしその後まもなく、公爵夫人がイジアスラフ公爵に請願したおかげで、　いや、むしろ――天の女王、至聖なる神の母マリアが、栄光の王、キリスト・神の御前に捧げた祈りによって――修道士たちは、敵である悪魔に打ち勝った勇敢な戦士たちが戦場から帰還するように、自らの洞窟へと戻った。その後、彼らは常に洞窟にとどまり、神を賛美し、祝福し続けた。

一連の出来事のあと、私たちの尊い父エフレムは、敵が聖なる者たちの集団全体にどれほどの悲しみをもたらしたかを目の当たりにし、洞窟での神に喜ばれる生活、絶え間ない祈り、断食、そして徹夜の祈りによって、敵に対して力強く立ち向かった。 父であり師である聖 アントニオの助言にすべて従い、彼はそのすべての美徳を模倣することに多大な熱意を示した。　それゆえ、ロシアから聖アトス山へと旅をした聖アントニオの模範に倣い、この私たちの尊い父エフレムもまた、聖地へと向かうことに心を燃やしていた。彼は、アトス山の聖なる父たちの天使に等しい生き様をこの目で確かめ、彼らの徳ある行いへの愛に感化されたいと願っていた。　そこで彼は、聖アントニウスに、ギ

[1502] イジャスラフ・ヤロスラヴィチ――キエフ大公。1054年から1068年まで在位した。

リシャへの旅への祝福を与えてくれるよう懇願した。聖アントニウスは、彼の巡礼の報いを奪いたくなかったため、かつてノアがオリーブ枝を持ち帰るよう箱舟から鳩を放ったように、祝福と祈りを込めて彼を見送った。　そこで、私たちの尊い父エフレムは、その祝福と祈りをまるで二羽の鳩の翼のように受け止め、目の前の道へと突き進み、コンスタンティノープルにたどり着いた。　道中至る所で、彼は聖人たちの生活を見守り、この世の天使である隠者たちの住まいを訪れ、霊的な糧や、魂を救う聖なる父たちの対話や教えを豊かに享受した。そのせいで、彼の旅は少々遅れてしまった。　やがて故郷への愛に駆られて帰路につく際、彼は、何のオリーブ枝も持たずに心の箱舟である修道院へ戻ることを避けるため、聖ストゥディオス修道院の規則を書き写し[1503]、それをペチェール修道院へ持ち帰った。この件に関して、彼がギリシャに滞在していた際、　至福のイグメン・テオドシウスが、尊者アントニオスの名において彼に手紙を送った。聖地からの帰還後、彼はペチェール修道院に長くは留まらなかったが、その間、修道士たちの霊的益となる多くの美徳の模範となり、皆が彼のために神に感謝した。　その頃、ペレヤスラフの至福のペトロ司教が天に召された。神の御許しにより、万人の助言と、大公ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチ[1504]の意向に従い、我らの尊い父エフレムは、キエフのヨアン大主教によってペレヤスラフの司教に任命された。

聖職という崇高な位を受けると、彼は自らの司教区における教会の整備に多大な熱意を注ぎ始めた。彼は、至聖なる神の御名をさらに賛美することを念頭に置き、これを自分にとって最も名誉ある、そして最も大切な務めと考えていた。　神はこの事業において彼を助けてくださった。わずか数年後、彼は聖大天使ミカエルのための大きく荘厳な石造りの教会を建設し、これをペレヤスラフ司教区の大聖堂とした。　続いて、その門の脇に聖テオドロス教会を建立し、最後に、石造教会の門の前に聖アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイ教会を建てた。　また、彼はペレヤスラヴの街を、それまで存在しなかった様々な石造りの教会堂で飾った[1505]。これらすべては、ほどなくして、神の御許しにより、我々の罪に対する懲罰として、邪悪なタタール人の君主バトゥイがロシアの地に侵攻した際、破壊されてしまった[1506]。その時、栄光あるペレヤスラヴの街もまた、その運命をたどることとなった。

聖エフレムは、司教在任中、私たちの聖なる父テオドシウス・ペチェルスキーの尊い遺骸の移送にも立ち会った。　徳高く、神に喜ばれる生涯を送った後、彼はこの世の生涯を終え、その魂は人の手によらず造られた主の御座へと昇った[1507]。そして、その尊い遺体は、彼が自ら建立した教会に栄光をもって安置され、そこで彼はペレヤスラヴリ司教区の座を定めた。　私たちもまた、尊い父エフレムの祈りの声によって集められた羊たちのように、主、天の王の御座の前に立つにふさわしい者とされ、彼と共に、牧者の長であるイエスを、またイエスにおいて、そしてイエスと共に、父なる神と聖霊を、永遠に賛美することができますように。アーメン。

[1503]『ストゥディオス規律』は、9世紀初頭にコンスタンティノープルに修道院を設立した聖テオドロス・ストゥディトスによって編纂された。　11世紀末、この規則はルーシ教会の指導原則として導入され、14世紀半ばまで維持されたが、その後エルサレム式規則に取って代わられ始めた。しかし、地域によってははるかに長く効力を保ち、一部のルーシの修道院ではごく最近まで適用されていた。

[1504] ヴェセヴォロド・アンドレイ・ヤロスラヴィチは、ペレヤスラフ公（ペレヤスラヴリ・ユジヌイ；ペレヤスラフ公国はキエフ公国と国境を接していた）であり、後にキエフ大公（1078年～1093年）となった。

[1505] さらに、遠方にあるもののペレヤスラフ公の管轄下にあったスーズダリにおいても、聖エフレムは2つの教会を建立した。

[1506] タタール人のハン、バトゥイ――チンギス・ハンの孫。バトゥイの侵攻は1237年に始まり、1240年にキエフの陥落とロシア領の征服をもって終結した。

[1507] 聖エフレム・ペレヤスラフスキーは1096年に逝去した。その聖遺骨は、聖アントニオの洞窟に安置されている。

聖エフレム・ノヴォトルジスキーの記念日。

記念日：1月28日

敬虔なる大公であり、ロシアの聖殉教者ボリスとグレブが活躍した時代、ロシアには3人の同母兄弟がいた。1月28日に記念されるエフレム、ゲオルギー、そしてモーセである。彼らは皆、ウゴル地方[1508]の出身であり、ボヤールの地位にあり、大公ボリスとグレブに仕えていた。聖ボリスがアルテ川で殺害された際[1509]、ボヤールであるエフレムは、たまたまボリス大公と共にその場にいなかった。そのため、彼は殺害を免れたが、弟のゲオルギーは聖ボリスと共に殺害された。彼は主君のそばで倒れ、殺害者たちは、聖ボリスが彼に授けた金の装飾品を手に入れるために、彼の首を切り落としたのである。三番目の兄弟モーセ[1510]は、殺害の際、公爵のそばにいたが、逃亡して死を免れた。その後、彼はその貞潔ゆえに、あるポーランド人女性から、かつてヨセフがペンテフリアから受けたものよりも大きな苦難を味わった。ついに彼は、その伝記に記されている通り、キエフのペチェールシク修道院で聖なる修道士となった。– この至福のエフレムは、敬虔なボリス公の暗殺後、その不法な殺害が行われた現場に駆けつけ、泣き叫びながら兄弟の遺体を探したが、見つかったのは頭部だけであり、彼はそれを自身の死に至るまで大切に保管していた。ボヤールの位と家を捨てて、彼はトルジョクという町へやって来た[1511]。そして、町の近く、トヴェルツァ川のほとりにある非常に美しい場所を見つけ、そこで自らの君主である大公、聖殉教者ボリスとグレブの名を冠した教会を建て、多くの修道士を集めて修道院を設立し、自身はアルヒマンドリトとなった[1512]。断食と祈りに勇敢に励み、神に喜ばれ、1053年にこの世を去った。彼の死後、その棺の前では[1513]多くの奇跡が起こり、病める者たちに癒しがもたらされた。それらは今もなお、信仰をもって訪れる者たちに与えられており、私たちの神キリストの栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美される。アーメン。

聖パラディオス・プスティニクスの記念日。

記念日：1月28日

聖パラディオは、隠遁生活によって神に喜ばれました。ある山の上に小さな小屋を建て、そこに閉じこもって、絶え間ない徹夜、祈り、そして断食に励みました。その功績により、神は彼に奇跡を行う賜物を授け、彼を栄光に輝かせました。ある日、多額の金を携えていたある商人が殺害され、その殺害者の遺体が夜中に聖人の小屋の扉の前に投げ捨てられた。夜が明け、その犯罪が発覚すると、人々はこぞって聖人を商人の殺害犯だと非難した。群衆に囲まれた聖人は祈りを捧げ、その祈りによって死者を蘇らせた。蘇った商人は、自分の殺害者を名指しし、聖人が殺人に関与していないことを証明した。そして、聖人は他にも多くの奇跡を起こした。徳を積み重ねた聖パラディウスは、神の教会に魂に有益な著作を残し、安らかに神のもとへ旅立った[1514]。

[1508] ウゴル地方、すなわちハンガリーは、カルパティア山脈沿いのドナウ川中流域に広がる広大な国であり、現在はオーストリア＝ハンガリー帝国の一部となっている。

[1509] 聖なる信仰深いボリス公の暗殺は1015年のことである。

[1510] 聖モーセ・ウグリン、ペチェールスクの奇跡行者。その記念日は7月26日。

[1511] トルジョク――現在はトヴェリ州の県都。

[1512] ボリソグレブスキー・ノヴォトルジスキー修道院は、1038年に同聖人によって創建された。

[1513] 聖エフレムの聖遺骨は現在、ノヴォトルジのボリソグレブ修道院にある豪華な銀製の聖遺物箱に安置されており、その傍らには、彼の遺言に従って、彼の棺に納められた弟ゲオルギイの頭部が置かれている。

[1514] 聖パラディオスという隠者は、4世紀末にシリアのアンティオキアで修行に励んだ。

2月11日

1月29日（旧暦）

聖殉教者イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の聖遺骨の移送。

1月29日の記念日

聖イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）が、トラヤヌス帝の命により、キリストのためにローマで獣に引き裂かれた後（[1515] ）、その伝記に記されている通り、彼の遺骨のうち、いくつかの大きな骨が残された。　当時ローマにいた信者たちはそれらを集め、同市の尊い場所に敬虔に安置し、その後、同じトラヤヌス帝の治世中に、それらをアンティオキアへ移した――都市の守護のため、　病人の癒やし、彼の霊的な羊の群れ全体への慰め、そしてキリスト・神の栄光のために――彼はその御名のために熱心に苦難を受けたのである[1516] 。これに関するより詳細な情報は、12月20日の彼の伝記に記されている。

ペチェルスクの隠者、私たちの尊い父ラウレンティウスの伝記

記念日：1月29日

ペチェルスクの聖なる隠遁者イサアクとニキタが受けた試練の後、同じ聖ペチェルスク修道院で修業に励んでいた至福のラウレンティウスが名声を博した。彼はまた、キリストの良き戦士として、　自らの力だけで、魂を滅ぼす敵である悪魔、すなわち修道者たちの敵との戦いに挑んだ。彼は、厳格な隠遁生活の中で祈りに身を捧げたいと願い、主が次の言葉で語っておられるのはまさにこの隠遁生活のことであると確信していた。　*「あなたが祈るときは、自分の部屋に入り、戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところを見通しておられるあなたの父が、公に報いてくださる」*（マタイ6:6）。　しかし、尊い父たちは、聖ペチェルスク修道院でそうすることを断固として勧めなかった。そこは、悪魔が救いを求める父たちに対して最も罠を仕掛けていた場所だったからだ。彼らは、ここで敵が、隠遁所で一対一で悪魔と戦っていたイサアクとニキータを打ち負かし、　二人は、数多くの祈りを捧げた後、ようやく正気に戻された。そこでラヴレンティイは、兄弟たちと別れを告げ、イジアスラフ公によって建設された聖大殉教者ディミトリイ修道院[1517] へと移り、そこで隠遁生活を送った。 彼は極めて厳格な生活を送り始め、自らの救いに対して並外れた熱意を示し、日々ますます過酷な苦行に励み、禁欲と飢えによってあらゆる情欲を死滅させ、霊的な剣、すなわち祈りの力によってそれらを根絶し、燃え盛る敵の矢を自らの涙の水で消し去った。　こうして、神の恵みにより、彼は自ら悪魔の矢を免れただけでなく、寛大なる主から、人々の様々な傷や病を奇跡的に癒やし、また悪魔を追い出すという賜物も授かった。

[1515] 107年12月20日

[1516] 聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）の聖遺骨の最初の移送は108年に行われ、2度目は438年に郊外からアンティオキア市内へと移された。その後（7世紀）、その聖遺骨はローマに移され、現在は聖クレメンテ教会に安置されている。

[1517] 聖大殉教者ディミトリオス・ソロン修道院は、ペチェールスク修道院の近くに位置していた。1128年、同修道院はペチェールスク修道院の管轄下に入った。

ある時、キエフから、多くの者たちの中に混じって、癒やしを求めて一人の悪霊に取り憑かれた男が、尊者ラヴレンチイのもとに連れてこられた。その悪霊は極めて獰猛で強力であり、十人がやっと持ち上げられるような木を、彼一人で軽々と持ち上げ、遠くへ投げ飛ばすほどであった。　この祝福された隠遁者は、自身の霊的故郷である聖ペチェルスク修道院に神の恵みによる栄光を称えたいと願い、その男をそこへ連れて行くよう命じた。すると、悪霊に取り憑かれた男は叫び始めた。

「お前は私を誰のところへ送るつもりだ？　私は洞窟に近づくことさえ恐れている。そこには多くの聖人が眠っているからだ。修道院そのものには、私が恐れる三十人の聖なる修道士たちがいる――他の者たちとは戦っているのだが。」

その悪霊に取り憑かれた者が、聖ペチェルスク修道院に宿る神の恵みについてこう語ったとき、至福の者は、彼の語ったことのすべてをより確実に確かめるために、再び彼を無理やりそこへ連れて行くよう命じた。悪霊に取り憑かれた者を連れて行った者たちは、彼がペチェルスク修道院に行ったことがなく、そこでは誰も知らないことを知っていたため、彼に尋ねた。

「お前が恐れているあの修行者たちは、一体誰だ？」

当時、ペチェールスク修道院の修道士は全員で百十八人いた。

憑かれた男は、そのうちの30人の名前を挙げ、こう言った。

「彼らは皆、一言で私を追い出すことができる。」

すると、彼を連れてきた者たちは再びこう言った。

「我々はあなたを洞窟に閉じ込めたいのです。」

彼はそれに対し、こう答えた。

「死者と戦うことに、私にとって何の益があるというのか？　彼らは、自分たちの修道士たちや、彼らを訪れるすべての人々のために、神に祈ることに、はるかに大きな大胆さを持っているからだ。もしあなたがたが、私の戦う能力を見たいというのなら、私を修道院へ連れて行け。先ほどの三十人の男たちを除けば、私は残りの全員と戦うことができる。」

その後、彼はヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語、つまり、これまで一度も耳にしたことのないあらゆる言語で演説を行い、その能力を披露し始めた。　彼を見送っていた者たちは恐れをなすとともに、彼の話し方の変化や、様々な言語を話す能力に深く驚嘆した。その後、彼らが修道院に入る前に、悪霊は憑かれていた男から離れた。癒やされた男は理路整然と語り始め、彼と共にいた者たちは喜びに包まれた。　その後、彼らは皆で聖なる奇跡のペチェールスカヤ教会に入り、神に賛美を捧げた。このことを知った修道院長は、修道者全員を率いて教会へとやって来た。癒やされた男は、修道院長も、また、憑依されていた間に名前を挙げていた三十人の男たちの誰一人として、誰であるか分からなかった。そこで、彼らは彼に尋ねた。

「誰があなたを癒したのですか？」

彼は、奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンを見つめながら、こう答えた。

「彼女と共に、三十人の聖なる人々が私たちを迎えてくれ、私は癒やされたのです。」

彼は彼らの名前をすべて覚えていたが、顔は誰一人として知らなかった。

そこで、彼らは皆で神と、その聖母マリア、そして神に愛された聖人たちに賛美を捧げた。

こうして、ペチェール修道院の聖地は、神の御計画により、至福の隠者ラヴレンティイによって告げられた通り、その名声を高めた。ラヴレンティイは、しばらくしてペチェール修道院を去り、トゥロフの主教座に就いた[1518]。聖ラヴレンティイの至福の死後[1519]、その遺体はキエフ・ペチェルスカ修道院に移され、洞窟内に尊く安置された。そこでは今なお、その奇跡を起こす聖遺骨が朽ちる

[1518] トゥロフは、現在のミンスク県にある都市である。聖ラウレンティウスは1182年からトゥロフの司教を務めた。
[1519] 12世紀末に死去した。

ことなく留まっている。これは、密かに見守りつつも隠遁者たちに公に報い、三位一体の神において賛美される御方への栄光であり、その御名に永遠の栄光あれ。 アーメン。

聖殉教者シルヴァノ司教、ルカ助祭、モキア朗読者への追悼

1月29日の記念日

ローマ皇帝ヌメリアヌスの治世[1520] 、キリスト教徒に対する大迫害が起こった。当時、エメザの都市の統治者[1521] のもとへ、地元の司教である聖シルヴァヌスに対する密告が寄せられた。聖シルヴァヌスは、助祭ルカおよび朗読者モキアと共に縛られ、裁判官の前に引き出された。 彼らが真の神であるキリストを告白し、偶像を崇拝せず、むしろ冒涜していることを確信した総督は激怒した。キリストの殉教者たちを甘い言葉で偶像崇拝へと誘導することができなかったため、裁判官は彼らに鞭打ちの刑を科し、その後、牢獄に投獄した。 聖人たちは、統治者が再び彼らを呼び出すまで、長い間そこで苦しめられた。統治者は、殉教者たちを飢えと渇きで苦しめるよう命じ、その後、彼らを野獣に引き裂かせるよう宣告した。 聖なる殉教者たちが処刑場へ連行され、様々な獣が放たれたとき、キリストの戦士たちは、この地で主が彼らに死を授けてくださるよう祈った。 彼らの祈りは 聞き入れられ、主は彼らの聖なる魂を受け入れられた。獣たちは彼らの尊い遺骸に近づいたが、触れることはなかった。一方、キリスト教徒たちは夜陰に乗じて密かに聖殉教者たちの聖遺骨を回収し、神に感謝を捧げながら埋葬した。

聖殉教者ロマン、ヤコブ、フィロフェイ、イペリキオス、アビバ、ユリアヌス、パリゴリアスの記念日

記念日：1月29日

これらすべての聖殉教者たちは、キリストのために戦いつつ、異教の迷いを公に糾弾したため、残酷な拷問にさらされた。彼らの肩と膝は砕かれ、その後、容赦なく体を削られ、首には重い鉄の足枷を嵌められ、牢獄に投げ込まれた。 その後、再び牢獄から引き出され、再び体を削られ、吊るされ、頭部を十字架に釘付けにされた。このような拷問の中で、彼らは魂を神に委ねた[1522] 。

2月12日

1月30日（旧暦）

三人の偉大な全地教師、バシレイオス大聖人、グリゴリオス神学者、ヨハネス・クラマトルスの記念日。

1月30日の記念日

[1520] ヌメリアンとカルニクは、283年と284年に在位した。

[1521] エメザ——現在のゲムスまたはゴムス——は、フィニキア、オロンテス川のほとり、現在のシリア（アジア側のトルコ）の沿岸部に位置していた。

[1522] 297年、ディオクレティアヌス帝の治世下、サモサタ（シリア、ユーフラテス川沿い）で殉教した。

敬虔でキリストを愛するアレクセイ・コムネノス皇帝の治世中[1523] 、彼はニキフォロス・ボタニアトス[1524] の後を継いで帝位についたが、コンスタンティノープルでは、雄弁に長けた知恵の教師たちの間で、この三人の聖人について大いなる論争が繰り広げられた。 ある者たちは、他の聖人よりもバシレイオス大聖人を高く評価し、彼を「最も高貴な雄弁家」と呼んだ。なぜなら、彼は言葉と行いの両面で誰よりも優れており、天使にほとんど引けを取らない人物であり、気性が堅く、罪を容易に許さず、この世のあらゆるものから疎遠であったからである。 その下に位置づけられたのは、神聖なるヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥストス（金口）であり、彼は前述の聖人とは異なる資質を備えていた。すなわち、彼は罪人への慈悲に満ちており、彼らを速やかに悔い改めへと導いた。それとは対照的に、他の人々は、神聖なる金口ヨハネを、人間性を深く愛し、人間の弱さを理解する人物として、また、その蜜のように甘い言葉の数々で皆を悔い改めへと導いた雄弁な説教者として称賛した。それゆえ、彼らは彼をバシレイオス大帝や神学者グレゴリオスよりも高く尊んだ。 さらに別の者たちは、聖グリゴリオス・テオロゴスを支持し、彼が説得力ある言葉、聖書の巧みな解釈、そして雄弁な構成の美しさによって、かつて生きた者も同時代の人々も問わず、ギリシャの知恵を代表する最も著名な人物たちすべてを凌駕したと主張した。 このように、ある者たちは聖グリゴリオスの栄光を称え、またある者たちはその重要性を軽んじた。このことから多くの人々の間に不和が生じ、ある者たちはヨハネ派、ある者たちはバシレイオス派、またある者たちはグリゴリオス派と名乗った。これらの名称をめぐって、雄弁と知恵に最も長けた者たちが論争を繰り広げた。

こうした論争が生じてからしばらくして、これらの偉大な聖人たちが現れた。最初はそれぞれ別々に、その後三人が揃って——しかも夢の中ではなく、現実の世界で—— ——エウカイテスの司教ヨハネスは、学識豊かな人物であり、ギリシャの知恵に極めて精通していた（彼の著作もこれを証明している）だけでなく、その徳高い生活でも名声を博していた[1525] 。彼らは口を揃えて彼にこう言った。

– あなたが見ている通り、私たちは神の前で対等です。私たちの間には分裂も、互いへの対立も一切ありません。私たち一人ひとりは、それぞれ適切な時期に、神の御霊に導かれて、人々の救いのために相応の教えを記しました。私たちが秘かに学んだことを、人々に公に伝えました。 私たちの間には、第一の者も第二の者もいない。もしあなたが一人のことを挙げたとしても、他の二人もその点については同意している。それゆえ、私たちをめぐって論争している者たちに、議論を止めるよう命じてほしい。なぜなら、生前も死後も、私たちは宇宙の果てに至るまで平和と一致をもたらすことを心掛けているからだ。 このことを踏まえ、私たちへの追悼を同じ日にまとめ、あなたにふさわしい形で私たちのための祝祭の礼拝を執り行い、他の人々には、私たちが神の前で等しい尊厳を持っていることを伝えてください。私たちもまた、私たちを偲ぶ人々にとって、救いへの助け手となるでしょう。なぜなら、私たちは神の前である程度の功績があることを望んでいるからです。

[1523] ビザンツ皇帝アレクセイ1世コムネノスは、1081年から1108年まで在位した。

[1524] ニキフォロス3世ボタニアトスは、1078年から1081年まで在位した。

[1525] エウカイテスの大主教ヨハネスは、11世紀の東方教会における傑出した教会作家および聖歌作家のひとりである（11世紀末に没）。彼は非常に多くの著作を残した。 その著作のうち、以下のものが知られている：1) 賛辞（15編に及ぶ）のうち、特に注目すべきは、ロシアの公スヴィャトスラフに対する勝利を記念する日に捧げられた2編、聖大殉教者テオドロス・ティロンの記念日に捧げられた3編、および三聖師への賛辞； 2) 詩および教会聖歌：後者の中には、三聖師への完全な礼拝式、守護天使へのカノン、聖テオドロス・ティロンのための2つのカノンがあり、これらは現在も教会の礼拝式に用いられている。 また、礼拝には以下のものが収められている：救い主への27のカノンの中から、「最も甘美なるイエス」への1つのカノン；聖母マリアへの67のカノンの中から6つ；洗礼者ヨハネへの11のカノンの中から2つ。とりわけ、彼の「最も甘美なるイエス」と「守護天使」へのカノンは傑出している。

司教にこう告げると、彼らは言い表せない光を放ちながら、互いに名前を呼び合い、天へと昇っていった。祝福された司教ヨハネは、徳において偉大で、知恵に富んだ人物であったため、直ちに自らの尽力によって、敵対していた者たちの間の平和を回復させた。　彼は、聖人たちが命じた通り、三聖人の祝日を定め、教会に対し、それにふさわしい祝典をもってこれを祝うよう遺言した[1526]。このことには、この偉大な人物の知恵がはっきりと表れていた。というのも、彼は1月の間に三聖人全員の記念日が祝われること、すなわち、1日には聖バシレイオス大主教、25日には神聖なる聖グリゴリオス、27日には聖クロイソストモスの記念日が執り行われることを見抜いたのです。そこで彼は、これらを同月の30日に統合し、その記念の祝典を、ふさわしい形でカノン、トロパリ、賛美歌をもって飾り立てました。

彼らについて、さらに次のことを付け加える必要がある。聖バシレイオス大聖人は、学問的な知恵において、同時代の師たちだけでなく、最も古くからの師たちをも凌駕していた。彼は修辞学の全領域を隅々まで習得しただけでなく、哲学も深く学び、さらに真のキリスト教的実践を教える学問をも体得していた。　その後、無欲と貞潔に満ちた徳高い生活を送り、精神を神の御顔を見る境地へと高め、生後40歳で司教の座に就き、8年余りの間、教会の指導者として務めた。

聖グリゴリオス・テオロゴスは、これほどまでに偉大であったため、もしすべての美徳を部分ごとに組み合わせて人間の像や柱を作り出すことができたとすれば、それは偉大なるグリゴリオスに似ていたであろう。　その聖なる生涯によって輝きを放ち、神学の分野において極めて高い境地に達した彼は、言葉による論争においても、信仰の教義の解釈においても、その知恵をもってすべての人を凌駕した。それゆえ、彼は「神学者」と呼ばれたのである。彼はコンスタンティノープルで12年間、正教を擁護する聖職者として務めた。　その後（その生涯記に記されているように）、総主教の座に短期間在任した後、高齢を理由にその座を離れ、60歳の時に山中の修道院へと退いた。

「神の金口」について、彼は知性、説得力、そして雄弁さにおいて、すべてのギリシャの賢者を凌駕していたと、正当に言えるでしょう。　聖書を比類なきほどに明快に解説し、解釈した。同様に、徳高い生活と神への洞察においても、彼は誰よりもはるかに優れていた。彼は慈悲と愛の泉であり、教導への熱意に満ちていた。　彼は計六十年間を生き、キリストの教会の牧者として六年間務めた。この三人の聖人たちの祈りによって、私たちの神キリストが異端の争いを打ち砕き、私たちを平和と一致のうちに守り、御自身の天の御国へと導いてくださいますように。まことに、主は永遠に祝福されます。アーメン。

トロパリオ、第4調：

使徒らと等しく、全宇宙の教師たるあなたがたよ、万物の主なる神に祈り、全宇宙に平和を授け、私たちの魂に大いなる憐れみをお与えくださいますように。

コンダク、第2調：

聖なる、神に啓示された説教者たち、教師たちの頂点である彼らを、主よ、御自身の善き者たちの喜びと安息の中に迎え入れられました。彼らの労苦と死を、あらゆる実りよりも尊く受け入れてくださった、唯一なる御方よ、御自身の聖なる者たちを賛美します。

[1526] 三人の全地教師および聖人、すなわちバシレイオス大聖人、グリゴリオス神学者、ヨハネス・クラウディオス（金口）を称える祝日

聖殉教者テオフィロス・ノヴォイの記念日

記念日：1月30日

聖テオフィロスは、コンスタンティノス・ポルフィロロドス皇帝と、その母である聖イリナの治世下、コンスタンティノープルで生まれ、育ちました[1527] 。アラブ人の侵攻の際[1528] 、彼はギリシャ軍の総司令官に任命されました。 その個人的な勇敢さと軍事の才により、多くの敵艦を沈め、アラブ軍に幾度となく敗北を喫させた。神の御許しにより、ある時、彼の艦隊は数で勝る敵艦に包囲され、聖テオフィロスは捕虜となった。 彼がアラブの君主に引き出されると、その君主は聖テオフィロスの美しさと勇気に感銘を受け、キリスト教の信仰を捨てさせるよう説得し始めた。しかし、あらゆる栄誉の約束も、勝利者たちの脅しも、この勇敢なキリスト教の軍司令官には何の影響も及ぼさなかった。 彼は、自分の兵士たちが皆殺しにされたのを見ると、野蛮人たちの残虐さを非難し、彼らの不敬虔な信仰を糾弾した。彼らの国へ連行された聖テオフィロスは、そこで牢獄に閉じ込められた。 4年後、アラブ人たちが何らかの宗教的祝祭を執り行う際、この聖なる殉教者は牢獄から引き出され、祝祭への参加を強要された。しかし、聖テオフィロスが従うことを拒むと、首を刎ねられ、こうしてキリストの戦士は殉教の冠を授かった[1529] 。

聖殉教者イポリトス、ケンソリヌス、サヴィヌス、処女クリシア、およびその他の二十人の殉教者たちの記念日

記念日：1月30日

殉教者イポリトス、ケンソリン、サヴィン、クリシアは、クラウディウス帝の治世[1530] 、ウルピア・ロマーヌスがイゲモン（総督）として在任していた時代に生きていた。 ケンソリンは元老院の首席顧問であり、マギストルの位にあった[1531] 。密告に基づき尋問を受けた彼は、キリストを告白したため、牢獄に投じられた。そこで彼はキリストの力によって多くの奇跡を行い、死者にさえ問いかけさえした。 その場に居合わせた兵士たちは、奇跡を目撃してキリストを信じるようになり、そのために二十人もの兵士が斬首された。また、キリスト教徒として、至福の乙女クリシアも尋問を受けた。 兵士たちは彼女を吊るし上げ、牛の腱で打ち、火で肋骨を焼いた後、牢獄に投獄した。数日後、再び彼女を牢獄から引き出し、石で顎を砕き、鉛の槌で肩を打ち、その後、首に石を縛り付けて海の深みに投げ込んだ。 こうして、聖なる乙女はキリストのためにその苦難を終えた。至福のサヴィンもまた、重い槌で体を打ちつけられ、木に吊るされて蝋燭の火で焼かれた。 そのような苦痛に耐えつつ、神に感謝して、彼は神に息を引き取った。この一連の出来事を知った、ローマ教会の聖人である偉大なるヒッポリュトスは、イゲモンの元へ赴き、彼を「血に飢えた者」と呼んで、その残虐さと非人道性を糾弾した。その際、彼は大胆にも、世界の創造主であるキリスト・神を公に告白した。 そのために、彼は イゲモンの家来たちによって目を殴打された。不信心者たちは彼に他の拷問も

[1527] 彼らは780年から797年にかけて共に統治した。

[1528] 当時、アラブ人は強力な国家を築いており、その領土にはアラビア全土、シリア、エジプト、そして北アフリカが含まれていました。

[1529] 784年、キプロス島（小アジア近海）にて。

[1530] クラウディウス2世――ローマ皇帝、在位は268年から270年まで。

[1531] 「マギストル」とは、本来「教師」を意味する。しかし、ビザンツ帝国の宮廷において「マギストル」という称号は、最高位の宮廷職の一つを指していた。

加え、ついに手足を縛って海に投げ込んだ。これらの苦難に耐え抜いた聖ヒッポリトスは、神の御国の相続人となった[1532]。

尊者ジノンの記念日

記念日：1月30日

この祝福された私たちの父ジノンは、ポントス地方の出身であった[1533]。彼はそこに莫大な富を残し、カッパドキアを潤した聖バシレイオス大主教の教えの泉[1534]に深く浸り、その教えにふさわしい実を結んだ。彼は皇帝ヴァレンティヌスの宮廷[1535]で、帝国の勅書が送られる際に同行する兵士の一人として仕えていた。この君主の死後、聖ジノンは富と名誉ある地位を拒み、アンティオキア近郊の山にある一つの墓所[1536]に身を寄せ、そこで隠遁生活を送りながら魂を清めた。この聖なる隠者には、身に着けていたぼろぼろの服以外、何の財産もなかった。聖ジノンは、知人の一人から2日分の小さなパンを1つ届けてもらい、水は自ら遠くから運んでいた。最も深い謙遜の模範であった尊者ジノンは、修道者の行いを実践することで高い完成度に達した。彼は40年間を断食の生活の中で過ごし、毎週日曜日には聖なる教会を訪れ、そこで神の御言葉を聞き、説教者たちの教えに耳を傾け、キリストの聖なる秘跡に与った。その後、聖人は自らの隠れ家へと戻った。そこには鍵も番人もいなかったが、悪人たちが近づくことのできない場所であり、完全に安全だったからである。世を離れてしばらく経った後、聖人は知人の一人を故郷へ送り、両親の遺した財産を売却し、兄弟に彼に帰属する分を渡すよう命じた。これを遂行した使者は、聖人にその分け前を届けました。聖ジノンはその中から貧しい人々に施しを始めました。そして、死が近づいているのを感じると、アンティオキアの司教アレクサンドロス[1537]を招き、こう告げました。

「私はこの世を去る時が来たので、あなたに遺言を述べる。できる限りのことは、私が最善と思われる方法で自ら配分した。残りの分については配りきることができなかったので、神を証人として、あなたをその管理者に任命する。」

その後、聖人を口づけして、この福者はその魂を神に委ねた。

[1532] 聖殉教者イポリトス、ケンソリン、サヴィン、クリシアは269年に殉教した。聖殉教者イポリトスは、ローマ近郊のオスティアの港の司教であり、そこで溺死させられた。彼の聖遺骨は現在、ローマの聖ラウレンティウスおよび教皇ダマス教会に安置されている。– ヒッポリトスは、キリスト教神学者の中でも最も博学であり、多作で多才な著述家であった。彼の著作の大部分は、ノエティアン派、フェオドティアン派、アロゴイ派、モンタニスト派、マルキオニスト派などの古代の異端者たちに対する論争に捧げられている。彼の著作のうち、現在知られているものには、『復活祭の規範』、『ユダヤ人に対する論駁』、『プラトンに対する論駁』、『異端に対する論駁』、『ヴェローナとヘリコに対する論駁』、そして『キリストと反キリストに関する論考』がある。ヒッポリュトスの著作のもう一つのグループは、聖書に対する数多くの注解から成っているが、その大部分は断片しか残っていない。彼は『創世記』、『出エジプト記』、『箴言』、『伝道の書』、『雅歌』、マタイ・ルカ・ヨハネの各福音書、預言者イザヤ、エゼキエル、ダニエル、ゼカリヤ、そして『詩篇』と『黙示録』について解説を著した。また、古代教会の教導の模範として、彼の説教も注目に値する。そのうち、完全な形で現存しているのは、主の顕現に関する説教と、預言者ダニエルに関する説教のみである。

[1533] ポントスは、小アジア北東部に位置する州で、東はアルメニア、南はカッパドキアと国境を接していた。

[1534] 彼の記念日は1月1日である。

[1535] ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[1536] 古代、南部の墓は山に彫り込まれ、洞窟のような外観を呈していた。敵の侵攻の際には略奪に遭い、墓に隠された財宝を探し求める盗賊たちによっても、埋葬された人々の安息は乱された。聖ジノンは、そうした荒廃した墓の一つに身を寄せた。

[1537] 413年から420年まで、アンティオキアで司教を務めた。

2月13日

1月31日（旧暦）

2月

聖なる奇跡行者であり無償の奉仕者であるキルとヨハネ、ならびに聖殉教者アファナシアとその三人の娘たち、テオクティスタ、テオドティア、エウドクシアの殉教

記念日1月31日

神に愛された聖人キルスは、エジプトの地、アレクサンドロス大王によって築かれたアレクサンドリアの町で生まれ、育ちました。彼はその学識により著名な医師であり、肉体の病を完全に無償で癒やし、また神に啓発された言葉と徳高い生活の模範によって、人々の心の病を癒やしました。病人の元を訪れる際、彼はガレノスやヒポクラテスの助言[1538] ではなく、聖なる使徒や預言者たちの教え――すなわち、肉体の病気の原因となる罪の病から身を守る方法――を説きました。心の病は、あらゆる肉体の病に比べてはるかに重い病なのです。　魂が罪によって深く苦しむとき、しばしば肉体もまた、罪に対する罰として神によって許された重い病に襲われることがある。　このように病人に教えを説き、また神の教えを説く中で、聖キルスは多くの異教徒を真の神への認識へと導き、彼らをキリスト教徒とし、その卓越した技量によって彼らの魂と体を癒やした。

当時、不信心なディオクレティアヌス王が統治しており、彼はキリスト教徒への迫害を開始していた。アレクサンドリアの著名な医師である聖キルスは、市長の面前で、自身がキリスト教徒であり、多くの人々にキリスト教の信仰を説いているという罪で告発され、市長は直ちに彼を捕らえるよう命じた。　聖キルスはこれを知ると、街から、そしてエジプトの国から逃れ、アラビアへと向かった。彼がそうした理由は、キリストのために苦しみや死を恐れたからではなく、一部には「*ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい*」（マタイ10:23）という御言葉に従ったためであり、また隣人への助けを続けたいという願い、そして修道者として主のために受ける苦難に備えたいという願いからでもあった。このため、彼はアラビアに到着するとすぐに、天使のような修道者の姿をとった。彼がアラビアに赴いたこと自体が、神の特別な摂理によるものであった。それは、彼がそこで多くの人々をキリストへと導き、偶像への罪深い礼拝から救い出し、救いの道へと導くためであった。　彼はそこで医師としての技も捨てた。神から奇跡を行う賜物を受けたため、もはや治療や薬草ではなく、祈りと御言葉によってあらゆる病を癒やすようになったからである。彼のこうした奇跡を通して、キリストの御名が賛美され、数え切れないほどの偶像崇拝者たちが、自らの迷いを捨てて、真の神であるキリストへと立ち返った。

その頃、エデッサには、名誉ある軍人としての地位にあった敬虔なキリスト教徒、聖ヨハネ（[1539] ）が住んでいた。ディオクレティアヌスによるキリスト教徒への迫害が始まると、彼は軍人としての地位やこの世の栄光、故郷、　家や親族、富――これらすべてを虚しいものと見なし、エルサレムへと向かった。そこでしばらく時が経つと、聖キルスと、その名声が至る所に広まっていた彼が成し遂げる奇跡について耳にした。　彼は聖キルに会いたい、そしてそのような偉大な神の御使いと共

[1538] ガレノスは、西暦131年に生まれ、3世紀初頭に亡くなった著名なギリシャ人医師であり、同時代のローマ皇帝たちの宮廷医師を務めた。ガレノスは世界中の医師たちに多大な影響を与え、16世紀に至るまで、医師たちの目には彼の権威は揺るぎないものとして映っていた。– ヒポクラテスは、ガレノスよりはるか以前に生きた（紀元前460年から356年）もう一人の著名なギリシャの医師である。彼による数多くの著作が残されており、ガレノスもそれらに学び育った。

[1539] エデス――小アジア南東部のキリキア地方にある都市。

に暮らしたいという強い願望を抱いた。そのために、ヨハネはまずアレクサンドリアへ向かい、キルを探したが、そこで彼を見つけられなかったため、彼がどこにいるのかを熱心に尋ね回った。　その後、聖キルがアラビアに住んでいることを知ると、ヨハネは急いでそこへ向かい、彼を見つけると、全身全霊で彼に寄り添い、その奇跡をこの目で目撃するだけでなく、その徳高い生き方を熱心に模範とした。

ちょうどその頃、キリストの名のために拷問を受けるべく、アファナシアという名の敬虔な女性と、その三人の娘たち――テオクティスタ、テオドティア、エウドクシア――が捕らえられ、カノプス[1540] という町へ連行された。その町には異教の司祭カッシアンが住んでおり、町長にはシリア人が就いていた。　このことを聞いた聖キルと聖ヨハネは、若い乙女たちが、拷問の脅威への恐怖や、お世辞めいた約束による誘惑のせいで、キリストから離れてしまわないかと懸念した。とりわけ、彼女たちは まだ非常に幼かったからだ。 長女のテオクティステは十五歳、次女のテオドティアは十三歳、末娘のエウドクシアは十一歳であった。　聖キルスは、彼女たちの母アファナシアの信仰の堅固さについても疑念を抱いていた。娘たちのために――彼女たちを過酷な拷問にさらしたり、容赦なく流される血を目撃したりすることのないよう――彼女が異教の不敬虔に傾いてしまうのではないかと恐れていたのである。なぜなら、母親が自然な感情に従って、自分の子供たちを心から案じることは周知の事実だからである。　そこで彼は、その町へと赴き、少女たちとその母をキリストへの信仰の告白に堅く立たせ、恐れを知らず勇敢に拷問に耐えられるよう準備を整えることにした。聖キルに続いて聖ヨハネも同行し、二人は共にカノプの町へと向かった。　投獄されていた娘たちと共にアファナシオスの元を訪れ、彼らは雄弁で霊感に満ちた説教をもって、彼女たちを主イエス・キリストへの愛に堅く立たせ、熱心に主のために自らの魂を捧げるよう説得した。このことは直ちに、都市総督シリアヌスに報告された。ある異教徒が彼の元へやって来て、こう言った。

「この町に、誰にも知られていない見知らぬ者たちが現れました。一人は修道士の装い、もう一人は軍人の装いです。彼らは、今捕らえられた乙女たちに、我々の神々を崇拝せず、自分たちの不敬虔な信仰に留まり、さらには王の命令にも従わないよう説得しています。　彼らは、死を恐れず、ただあるイエスという者を崇め、彼に神としての敬意を払うよう説得しているのです。

これを聞いたシリアヌスは激怒し、直ちにその二人の男を捕らえて自分の元へ連れてくるよう命じた。聖キルと聖ヨハネは直ちに捕らえられ、不敬虔な裁判官シリアヌスの前に引き出されて尋問を受けた。シリアヌスは彼らを見て、こう尋ねた。

「お前たち、我らの神々の忌まわしき敵よ、果たして乙女たちを惑わし、あらゆる策略を用いてキリスト教徒の数を増やし、我らの王を辱めようとしているのか？　もしこれまで狂っていたとしても、せめて今こそ、あらゆる魔術に満ちた偽りの信仰を捨て、祈りと生贄をもって神々をなだめ、あなたたちに用意された苦痛から逃れるだけでなく、我々からの栄誉に浴するよう努めよ。　もしそうしないならば、シリアヌスやディオクレティアヌスだけでなく、あなたがたが冒涜している神々自身の猛烈な怒りと容赦なき憤りを味わうことになるだろう――たとえ神々が、自らの不敬に対する最も慈悲深い懲罰者であったとしても、その怒りを味わうことになるのだ。

これに対し、聖キルと聖ヨハネは次のように答えた。

「我々は多くを語る習慣はない。確かなこととして知れ。我々は、あなたがたの空虚な敬意など決して望まず、たとえキリストのために苦難を強いられることになっても、キリストを拒むことは決してないのだ。」

すると、シリアンはさらに激しい怒りに燃え上がり、歯ぎしりをしてこう言った。

「不敬虔な者たちよ、お前たちは裁判官の人道的な慈悲に感謝すべきだ。もしお前たちに少しでも分別があるなら、恐ろしい罰を免れるために、その迷いを捨てよ。しかし、お前たちには傲慢と

[1540] カノプスは、下エジプト（北部）にある都市である。

反抗心、そして虚栄に満ちた高慢さ以外、何一つ見当たらないのだから、余計な言葉を費やす必要はない。さっさと実行に移すしかない。」　そうすれば、お前たちは望む報酬を得られるだけでなく、たとえ不本意であっても、王の命令に従うことになるだろう。

そう言うと、彼は娘たちと母親を連れてくるよう命じ、彼女たちの目の前で聖なる殉教者キュロスとヨハネを様々な方法で拷問し始めた。　鞭で打ち、太い棒で骨を砕き、ろうそくで火傷を負わせ、火傷した部位には酢をかけ、塩を振りかけ、その後、鋭い傷跡のついた毛皮の衣でこすりつけ、足には沸騰した樹脂を注いだ。　怒りに駆られて思いつく限りの拷問手段を彼らに浴びせ、そのいずれをも手加減しなかった。その一因は、彼らの大胆さへの報復と気概をくじくためであり、もう一因は、凄惨な拷問を見守っていた若い乙女たちとその母を恐怖に陥れるためであった。　しかし、神に忌み嫌われるこの拷問者は、何一つ成功しなかった。聖なる殉教者たちの勇気を揺るがすこともできず、乙女たちやその母親を恐怖に陥れることもできなかった。そこで彼は聖人たちを解き放つよう命じ、聖アファナシアとその娘たちへの拷問を始めた。　長い拷問の末、彼は大きな恥を味わった。というのも、弱々しいとされる女性たちが、苦難を勇敢に耐え抜く姿勢において、不屈の精神を持つ聖なる男性たち――キルとヨハネ――と何ら変わらなかったからである。　彼女たちはキリストに対する同じ信仰と愛を持ち、キリストのために同じ苦難を耐え抜き、神の助けにより、同じ勇気を示した。　彼女たちは、まるで他人の体で苦しんでいるかのように、苦痛に全く気を留めることなく耐え抜いた。彼女たちは、愛する花婿であるキリスト・神へと視線を向けていた。キリスト・神は、御自身の栄光の高みから、御自身の花嫁たちの苦しみを注視し、彼女たちに御自身の助けを授けておられた。　拷問官は、聖なる殉教者たちを拷問器具から解き放つよう命じ、剣による斬首を宣告した。彼女たちは、まるで　、婚礼に向かうかのように喜びをもって死へと向かった。祝福された母アファナシアと、その三人の祝福された娘たち――テオクティステ、テオドティア、エウドクシア――全員の尊い首は、剣によって切り落とされた。

聖なる殉教者たちの処刑後、聖キルと聖ヨハネは再び尋問を受けた。　拷問官は、あたかも彼らの健康を気遣っているかのように長々と語りかけ、贈り物を示し、新たな拷問を約束し、ついには死刑をちらつかせた。自分の労力が無駄だったと悟ると、彼は次のような最終的な判決を下した。

「ガリラヤの師の信奉者であるキルと、その同信者であるヨハネよ、王の命令を軽んじ、偉大なる神々への生贄を捧げることを拒んだお前たちに対し、王の法に従い、首を刎ねることを命じる」。

兵士たちは殉教者たちを連行し、聖なる乙女たちとその母が主のために命を捧げたまさにその場所で、[1541] 年1月31日、彼らの首を刎ねた。 隠れキリスト教徒たちは、彼女たちの聖なる遺体を受け取り、聖使徒兼福音記者マルコの教会で、別々の棺に納めて敬意を込めて埋葬した。一つの棺には聖殉教者キュロスとヨハネが、もう一つの棺には聖アファナシアとその娘たちが納められた。　それから長い年月が経ち、敬虔なテオドシウス2世の治世下[1542] において、聖キリル、 アレクサンドリア総主教は、神の御命により天使を通じて、聖殉教者キュロスとヨハネの聖遺骨を、マヌフィンと呼ばれる村[1543] へと移し、そこから多くの悪霊を追い払い、私たちの神キリストの栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美される御名を称えました。アーメン。

[1541] 聖キュロスと聖ヨハネの殉教は311年に起こった。

[1542] テオドシウス2世（若帝）は408年から450年まで在位した。

[1543] マヌフィン、あるいはマヌフはカノプスの近くに位置していた。– その後、聖キュロスと聖ヨハネの聖遺骨はローマに移され、そこからミュンヘンへと運ばれた。

トロパリオ、第5調:

御自身の聖なる殉教者たちの奇跡により、私たちに破れぬ防壁を授けてくださったキリスト神よ。彼らの祈りによって、異邦人の陰謀を打ち砕き、王国の笏を強め給え。唯一の善き方、人を愛する方よ。

コンダク、第3調:

神の恵みより奇跡の賜物を受けられた聖人たちは、キレ・神智者および栄光あるヨハネと共に、目に見えぬ御業をもって私たちのあらゆる情欲を断ち切り、絶えず奇跡を行っておられます。まことに、あなたがたは神の御医者なのです。

ノヴゴロドの主教、聖ニキータの生涯。

記念日：1月31日

他の誰よりも敬意に値するのは、敵との戦いを集団の陣形ではなく、単独で敵に突進することを常とする勇敢な戦士たちである。　主は、彼らが驕らないよう、一時的に何度も倒れることを許されるが、決して最後まで恵み深い助けを絶やすことはなく、彼らを立ち直らせ、無敵のものにしてくださる。　そのようなキリストの勇敢な戦士の一人、すなわち至福のニキータは、隠遁者イサアク聖人の後に、特別な名声を博した。彼について、称賛に値するポリカルプは、聖シモンの言葉に基づき、次のように伝えている。

尊者ニコンの修道院長在任中、ペチェールスク修道院のある兄弟、ニキタという名の者が、修道院長に、独りで修行し、隠遁生活を送ることを許してほしいと懇願し始めた。

「わが子よ！　お前はまだ若いうちに、ただ怠けて過ごすのは何の益もない。兄弟たちと共に留まり、共に働きながら、自分の報いを失わないほうが、はるかに良いのだ。　お前自身も、我らの兄弟である　イサアク・ペチェルスキーが、閉鎖区で悪魔に誘惑され、もし我らの尊い父たちであるアントニウスとテオドシウスの祈りによる神の偉大な恵みに救われなければ、滅びてしまっていたことを目撃したはずだ。

ニキータはこれにこう答えました。

「父よ、私はいかなる誘惑にも決して惑わされることはありません。私は悪魔の誘惑に断固として立ち向かうつもりであり、人愛の神に、かつて隠遁者イサアクに与えられたように、私にも奇跡を行う賜物を授けてくださるよう祈り続けます。彼は今もなお、多くの奇跡を起こしています。」

すると、修道院長はより強く彼に言った。

「お前の願望は、お前の力以上のものだ。わが子よ、高慢のゆえに堕ちることのないよう気をつけなさい。私は、兄弟たちにより良く仕えるよう命じる。その従順さによって、神から報いを受けるだろう。」

しかし、ニキータはイグメンの忠告に従おうとはしなかった。彼は、隠遁生活に対する強い憧れを自分の中で抑えきれなかったのだ。そのため、彼が望んだことをそのまま実行に移した。彼は洞窟に閉じこもり、入り口をしっかりと塞ぎ、どこにも出ることなく、ただ一人で祈りに専念した。それにもかかわらず、わずか数日後、彼は悪魔の罠を免れることはできなかった。祈りの歌を歌っている最中、彼と共に祈る声を聞き、言葉に尽くせないほどの芳香を感じたのである。　これに惑わされた彼は、心の中でこう考えた。「もしこれが天使でなければ、私と共に祈ることもなく、ここには聖霊の芳香も漂っていないはずだ。」

彼はさらに熱心に祈り始め、こう言った。

「主よ！　私があなたを見ることができるよう、どうかご自身を私の前に現してください。」

すると、声が聞こえてきた。

「私はあなたに姿を現さない。あなたはまだ若すぎるからだ。そうでなければ、あなたは高慢になり、堕ちてしまうかもしれない。」

隠遁者は涙ながらにこう懇願し続けた。

「主よ、私は決して誘惑に負けることはありません。修道院長から、悪魔の誘惑に耳を貸さないよう教えられました――しかし、あなたが命じられることはすべて果たします。」

すると、魂を滅ぼす蛇は、彼に対する権威を得て、こう言った。

「肉体をまとった人間には、私を見ることはできない。だから、私は私の天使を遣わし、彼がお前と共にいるようにする。お前は彼の意志に従いなさい。」

するとすぐに、天使の姿をした悪魔が彼の前に現れた。ニキータは地面にひれ伏し、天使であるかのように彼に礼拝した。悪魔は彼に言った。

「これからはもう祈るのではなく、書物を読みなさい。そうすれば、あなたは神と語り合い、あなたを訪ねてくる人々に有益な教えを与えることができるだろう。そして私は、常に万物の創造主に対し、あなたの救いを祈り続ける。」

隠遁者はその言葉を信じ、惑わされてからはもはや祈ることをやめ、熱心に書物を読み始めた。　その間、彼は悪魔が絶えず自分のために祈っているのを見て、それが天使が自分のために祈りを捧げているのだと思い、喜んでいた。また、彼を訪ねてくる人々とは、聖書に基づいて魂の益について多く語り合い、さらには預言さえし始めた。彼についての評判は至る所に広まり、誰もが彼の予言が的中することに驚嘆した。 ある日、彼はイジアスラフ公のもとへ[1544] を遣わし、次のように伝えた。「本日、グレブ・スヴィャトスラヴィチ公[1545]　が殺害された。直ちに息子のスヴィャトポルク[1546] をノヴゴロドの公位へ送りなさい」。彼が言った通りになった。実際、数日後、グレブ公が殺害されたという知らせが届いた。　この時から、隠遁者について「彼は預言者だ」という噂がさらに広まり、公爵たちもボヤールたちも彼を完全に信じるようになった。実際には、悪霊はもちろん未来を知ることはできないが、彼自身が何をしたか――例えば、悪人たちに殺害や窃盗を教えた場合――については、それを告げ知らせるのである。　同様に、慰めの言葉を求め隠遁者の元を訪れる人々がいたとき、彼らから天使と崇められていた悪魔は、彼らに起こったすべての出来事を彼に伝えていた。ニキータは預言を行い、彼が予言したことはすべて現実のものとなった。

その一方で、旧約聖書の知識においてニキータに匹敵する者は誰もいなかった。彼は『創世記』、『出エジプト記』、『レビ記』、『民数記』、『士師記』、『列王記』、そしてすべての預言書を順にすべて暗記していた。 そもそも、彼は旧約聖書のすべての書物 を非常に熟知していたが、神の恵みによって私たちの救いと善への確固たる歩みのために与えられた聖なる福音書や使徒書簡については、見ることも聞くことも、ましてや読むことさえ決して望まなかった。彼は誰とも新約聖書について語り合うことを望まなかった。　ここから、彼が悪魔に惑わされていることが誰の目にも明らかになった。これに心を痛めた聖なる父たちが、誘惑された彼の元を訪れた。イグメン・ニコン、彼の後を継いでイグメンとなったヨハネ、断食者ピメン、後にロストフの司教となったイザヤ、透視者マタイ、　隠遁者のイサアク、医師のアガピト、奇跡行者のグリゴリー、かつてトゥムタラカン司教

[1544] イジャスラフ・ヤロスラヴィチ――1054年から1068年までキエフ大公を務めた。

[1545] グレブ・スヴィャトスラヴィチ――ノヴゴロド公、キエフ大公スヴィャトスラフの長男で、1078年にフィンランド人に殺害された。

[1546] スヴィャトポルク2世（ミハイル）・イジアスラヴィチは、キエフ大公イジアスラフの息子であり、1078年からノヴゴロド公、1093年から1114年までキエフ公を務めた。

を務めたニコライ、年代記作家のネストル、カノンの編纂者グリゴリー、かつてチェルニゴフ司教を務めたテオクティスト、透視能力者オニシフォロス[1547]。 彼らは皆、その美徳によって称えられていたが、やって来て、ニキータのために神に祈りを捧げ、彼から悪魔を追い払ったため、ニキータはもはや悪魔を見ることはなかった。　その後、彼らは彼を洞窟から連れ出し、旧約聖書から何かを語ってほしいと頼んだ。しかし彼は、つい最近まで暗記していたはずのそれらの書物を、一度も読んだことさえないと誓い立てた。さらに、今ではそれらの書物から一言も覚えていなかった。　今では、かろうじて読み書きを教えるのがやっとの状態だった。聖なる父たちの祈りによって徐々に正気を取り戻すと、彼は自分の罪を告白し、それを深く悔い改めた。その後、彼は自らに特別な禁欲と苦行を課し、厳格で謙虚な生活を送り始め、徳において他の誰よりも優れていた。　人を愛する主は、至福のニキータのそのような行いをご覧になり、彼が若き日から実践してきた以前の美徳も否定することなく、彼の真の悔い改めを受け入れられた。かつて、三度主を否んだ聖ペトロの悔い改めを受け入れられた際、彼にこう言われたのと同様に：「わたしの羊を牧しなさい」[1548]、と。同様に、この至福のニキータに対しても、悔い改めを受け入れたというしるしを与えられた。戒めを守ることに表れた彼の計り知れない愛ゆえに、主は彼を御言葉の群れの牧者とし、ノヴゴロドの司教座に就かせられた[1549]。 そこで主は、信徒たちを確信させ、聖人が経験した誘惑が赦されたことを彼らに完全に納得させるため、奇跡を行う賜物をもって彼の徳高い生涯を栄光に輝かせた。ある時、干ばつの最中に聖人は神に祈りを捧げ、天から雨を降らせた。また別の時には、彼の祈りによって町の火災を鎮めた。他にも多くの奇跡を成し遂げた。信徒たちを善く導いた後、彼は1108年1月30日、主のもとへ永遠の命へと旅立った。司教としての在任期間は13年であった。彼は、聖なる神の父母ヨアキムとアンナの偉大なる教会の付属礼拝堂に、栄誉をもって埋葬された。 祝福されたニキータの遺体は450年もの間、棺の中に秘められていましたが、その後1558年、全ロシアの独裁者である敬虔な君主イオアン・ヴァシリエヴィチの治世下、マカリー大主教およびノヴゴロド大司教フェオドシイの立会いのもと、聖ニキタの聖遺骨は、完全な状態で、全く傷一つないまま発見された[1550]。今日に至るまで、それらは信仰をもって訪れる人々に多くの癒やしをもたらしている。我らの神に栄光あれ、今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

トロパリオ、第4調：

神に賢き者よ、禁欲を喜び、肉体の欲望を制し、聖職の座に着かれた。そして、輝きに満ちた星のごとく、御奇跡の曙光をもって信徒の心を照らす、我らの父、聖ニキタよ。今、キリスト神に祈り、我らの魂を救い給わんことを。

[1547] 聖ニコン・ペチェルスキーの記念日：3月23日；聖ヨハネ（通称「ヴェホペシェルニク」）の記念日：4月19日；聖ピメン・ポストニクの記念日：8月27日；ロストフの主教イザヤの記念日：5月15日； 聖マタイ（透視者）の記念日は10月5日、聖アガピトの記念日は6月1日、聖グリゴリーの記念日は8月8日；チェルニゴフの主教テオクティストの記念日は8月6日；聖オニシフォロス（透視者）の記念日は11月9日。

[1548] ヨハネ21:16–17。

[1549] 聖ニキータは1096年にノヴゴロドの主教に叙任された。

[1550] ノヴゴロドの主教聖ニキタの聖遺骨が発見されるずっと前から、彼は聖人として崇敬されており、13世紀前半にはすでにその記念日が祝われていた。現在、彼の朽ちることのない聖遺骨は、ノヴゴロドのソフィア大聖堂に安置されている。

コンダク、第6調：

司教の位を尊び、至清き御前に仕え、人々のために熱心に祈りを捧げ、祈りによって雨を降らせ、また雹の炎を鎮められた。　今なお、聖ニキトよ、キリスト神に、祈りを捧げるあなたの民を救ってくださるよう取り成し、私たち皆があなたにこう叫ぶことができますように。「喜びなさい、驚くべき聖なる父よ。」

聖殉教者ヴィクトリヌス、ヴィクトル、ニキフォロス、クラウディウス、ディオドロス、セラピオン、パピウスの記念日。

記念日：1月31日

これらすべての聖殉教者たちは、デキウス帝の治世において、キリストへの信仰のために殉教した。ヴィクトリン、ヴィクトル、ニキフォロスは石臼に入れられ、石の杵で砕かれた。クラウディウスは手足を切断されて息を引き取った。ディオドロスは火あぶりにされた。セラピオンは首を刎ねられた。パピウスは海に投げ込まれた[1551]。

聖殉教者トリフェナの記念日。

記念日：1月31日

聖殉教者トリフェナはキジカの町出身であった[1552]；彼女は、キリスト教徒である父アナスタシオス・シンクリティコス[1553]と母ソクラティアの娘であった。聖女は自ら進んで苦難に身を委ねた。　偶像崇拝の誤りや、偶像を神として狂信的に崇める者たちを公然と糾弾し、彼女は人々に、虚しい崇拝を捨てて真の神に立ち返るよう説得した。　このため、ケサリイの都市統治者は彼女を燃え盛る炉に投げ込むよう命じたが、聖なる殉教者は無傷でそこから出てきた。その後、彼女は高い木に吊るされ、高所から鋭い釘の上に投げ落とされ、さらに野獣に食わせられたが、野獣たちは彼女には手を出さなかった。　ついに、彼女は激昂した雄牛の角によって引き裂かれた。彼女の血が流れた場所から泉が湧き出し、そこから多くの人々が助けと癒やしを得たという伝承が残っている。

2月14日

2月1日（旧暦）

同日は、429年頃に逝去した私たちの尊い父、ガラティアのペトロスの記念日である。彼はまた、2月22日と11月25日には、「柱のペトロス」および「沈黙のペトロス」の名で記念される。

聖殉教者トリフォンの受難

記念日：2月1日

[1551] 聖殉教者ヴィクトリン、ヴィクトル、ニキフォール、クラウディウス、ディオドール、セラピオン、パピウスは、251年にコリントで殉教した。

[1552] キジク――フリギア地方の都市で、小アジアの西岸、マルマラ海の半島の一つに位置する。

[1553] シンクリティック――最高位の宮廷高官であり、国務会議の地位にあたる。

聖トリフォンは、フリギア地方のアパメア市の近くにあるカンプサドという村で生まれた[1554]。幼い頃から神の恵みが彼に注がれ、主は彼に奇跡を行う力を授けた[1555]。それは、この幼子の口から だけでなく、その奇跡的な行いを通しても、御自身への賛美が捧げられるためであった。『大ミネイア・チェティイ』[1556]には、聖なる少年トリフォンによって成し遂げられたあらゆる病気の治癒や、彼に助けを求めた人々から悪霊を追い出したことについて、多くが記されている。 ここではまず、彼に注がれた神の偉大な恵みを証しする数ある奇跡の一つについて語り、その後、キリストへの信仰のために彼が受けた苦難について述べることにしよう。

238年、ローマ皇帝の座にゴルディアヌス帝[1557]が即位した。彼は偶像崇拝者ではあったが、キリスト教徒を迫害することはなかった。 この皇帝には、ゴルディアナという名の成人した娘がいた。彼女は知性と美貌に恵まれており、多くの偉大で名高い諸侯が、自分の息子たちの妻として彼女を娶らせたいと願っていた。 しかし、この乙女、そして彼女と共にその一族全員に、大きな不幸が降りかかった。神の御許しにより、悪魔が彼女に取りつき、火や水の中に投げ込むなどして、彼女を残酷に苦しめたのである。その病める乙女のもとへ呼び寄せられた、その知恵で知られる医師たちも、彼女を助けることはできなかった。 しかし、その娘の中に宿っていた不浄な霊が、神の御心により、自らこう告げた。

「トリフォンという少年以外、誰も私をここから追い出すことはできない。」

王は直ちに、至る所でトリフォンを探し出すよう命じた。同じ名を持つ人々が大勢王のもとに連れてこられたが、その誰一人として王女から悪霊を追い出すことはできなかった。 ついに、フリギアのカンプサデという村で、ある湖のほとりでガチョウの世話をしていた聖なる少年トリフォンが王のもとに連れてこられた。当時、その少年は十七歳であった。聖人がローマに近づくと、悪魔は彼の到来を知り、少女をさらに激しく苦しめ始め、大声で叫んだ。

「もうここにはいられない。トリフォンが近づいてきて、三日目にここに来るからだ。もう我慢できない。」

そう叫ぶと、邪悪な霊は乙女から出て行った。

三日目に聖トリフォンが都に到着すると、直ちに王宮へ案内され、王から非常に温かく迎えられた。王は、少女から出て行く際に悪魔が言及していたトリフォンこそが、この人物であると見抜いていたからである。 しかし、まさにトリフォンが自分の娘を癒やしたということをさらに確信するため、王は、肉眼で悪魔を見ることができるように、その姿を目の前で示してほしいと彼に懇願した。聖人は王の願いを受け入れ、六日間断食と祈りに専念し、その後、天から不浄な霊たちに対するさらに大きく、より強力な権能を授かった。 七日目の日の出時、王は悪魔をこの目で見たいと願い、全廷臣を率いて聖人のもとへやって来た。その時、聖霊に満たされたトリフォンは、霊の目をもって目に見えない悪の霊を見つめ、こう言った。

[1554] フリギア――小アジアの主要な地域の一つ。アパメア――フリギアで最も重要な都市であり、活気ある交易が行われていた。

[1555] ギリシャの礼拝書によれば、かつて聖トリフォンの祈りによって、カンプサダの住民たちは飢饉から救われた。そこでは有害な爬虫類や昆虫が現れ、穀物や木の葉、あらゆる草木を食い荒らしていたのである。 聖トリフォンはこの災難を憐れみ、主に向かって両手を差し伸べて祈りを捧げ、有害な昆虫を退治するために御使を送ってくださるよう懇願した。その際、聖殉教者自身も、それらを誓いによって縛り、彼らが住むために定められた、人の手の届かない場所へ退去するよう命じた。

[1556] *『大ミネイ・チェチイ』は*、16世紀にモスクワ都主教マカリーによって編纂された。ここには聖人の伝記に加え、聖書の全書、数多くの教訓、そして霊的な内容を含む様々な記事が収められている。マカリーの『ミネイ』を基に、聖ディミトリ・ロストフスキーの『ミネイ・チェチイ』が編纂された。

[1557] *ゴルディアン*は238年から244年まで在位した。

「不浄な霊よ、わが主イエス・キリストの御名によって、ここに集う者たちの目の前で姿を現し、その忌まわしく恥知らずな姿を彼らに見せ、汝の無力さを示せ。」

するとたちまち、悪魔は黒い犬の姿となって皆の前に現れ、その目は炎のように燃え、頭を地面に引きずっていた。

聖人は悪魔に向かってこう問いかけた。

「悪魔よ、誰があなたをここに遣わし、この乙女に憑依させたのか。あなたはこれほど醜く、無力で、あらゆる忌まわしさに満ちているくせに、どうして神の御姿に似せて造られた者に、あえて憑依しようとしたのか。」

悪魔はこう答えた：

「私は父、すなわちサタン――あらゆる悪の支配者であり、地獄に居を構える者――から遣わされた。彼から、この乙女を苦しめるよう命じられたのだ。」

すると、聖人は再び彼に尋ねた。

「一体誰が、あなたに神の被造物に手を出す権限を与えたのか？」

悪魔は、本意ではなかったものの、目に見えない神の力に迫られ、真実を語らざるを得なかった。

「我々には、神を知り、その独り子であるキリスト――ペトロとパウロがこの地でそのために命を捧げた方――を信じる者たちに対する権威はない」と彼は言った。「我々はそうした人々から恐れおののいて逃げ去り、 、許された時のみ、 彼らにほんのわずかな誘惑を与えるだけである。しかし、神と神の御子を信じず、自らの欲望に従って、我々に都合の良い行いをする者たちに対しては、我々は彼らを苦しめるための完全な権威を持つ。 私たちに喜ばれる行いとは、偶像崇拝、冒涜、姦淫、魔術、嫉妬、殺人、高慢などである。こうした行いやそれに類する行いによって、人々はあたかも網にかかったかのように絡め取られ、創造主である神から疎外され、自ら進んで私たちの友となり、私たちと共に永遠の苦しみを受けることになる。

これを聞いた王と周囲の人々は、大きな恐怖に襲われ、戦慄した。そして多くの者が不義を捨ててキリストを信じるようになり、信者たちは自らの信仰をさらに確固たるものとし、神を賛美した。

王は聖人に惜しみなく贈り物を与え、平穏に故郷へ帰らせたが、聖人は王から受け取ったものをすべて、帰路の途中で貧しい人々に施した。そして自身は故郷に戻ると、いつものように病人を癒やし、聖く汚れのない生活を送って神に喜ばれることに専念した。

ゴルディアヌスの後、ローマ帝位の座に就いたのはフィリッポス[1558] であったが、彼は長く統治することはなく、自らの兵士たちに殺害された。その後、残忍なデキウス[1559] が即位し、キリスト教徒に対して激しい迫害を開始した。 この迫害の期間中、数え切れないほどのキリスト教徒が殺害され、臆病な者たちの多くは、恐ろしい拷問を恐れてキリストから背を向け、偶像崇拝に傾いた。この皇帝は、各地の総督や地方長官に対し、キリスト教徒を至る所で追跡し、容赦なく殺害するよう命令を下した。 当時、東方ではアキリンという人物がエパルホスを務めていた。彼のもとに、トリフォンがキリストの信仰を告白し、各地を巡りながら、極めて有能な医師として病人を癒やし、同時にすべての人にキリストを信じるよう教え、それによって多くの人々を魅了しているという報告が届いた。しかし、トリフォンは王の命令に従わず、すべての神々を嘲笑していた。 直ちに兵士たちがトリフォンを捜索するために派遣され、まもなく彼を見つけ出した。神への熱意に燃え、信仰と善行によって輝いている灯火が、隠れることなどできなかったからである。 しかし、聖人自身も、自分が捜されていることを知ると、荒野へ逃げたり、山や地の深淵に身を隠したりはせず、祈りと十字架の

[1558] *フィリッポス*（アラビア人）は244年から249年まで在位した。

[1559] *デキウス*は249年から251年まで在位した。

印を武器として、勇敢に自分を捜し求める者たちの元へ出て行き、彼らの手に身を委ねて、喜びをもって、当時ニカイアに滞在していたエパルフ・アキリヌスのもとへ向かった[1560]。 アキリンが、従者や高官、使用人、そして大勢の人々に囲まれて裁判の席に着くと、高位のスクリーナリオス[1561] であるポンピニアンが彼にこう言った。

「ここに、アパメアから陛下のもとへ遣わされた若者がおり、陛下の権威による公正な裁きを受けることになっています。」

アキリンは言った。

「その者は、我らに自らの名と出身地、そして運命を告げよ[1562]。」

聖人は答えた。

「私の名はトリフォン、出身地はアパメイア近郊のカンプサダという村です。しかし、私たちは運命を認めません。なぜなら、すべてのことは神の摂理と、その言い表せない知恵によって成されるものであり、運命によるものではなく、あなたがたが信じているような星の動きや偶然に左右されるものではないと信じているからです。 私はこの人生において、ただキリストのみに仕え、自らの自由な意志に従って生きています。キリストこそが私の信仰であり、キリストこそが私の誉れであり、私の栄光の冠なのです。

これに対し、司教は聖人にこう言った。

「おそらく、あなたは今日まで、自らをキリスト教徒と称し、神々を崇拝しない者はすべて、惨めな死を遂げなければならないという王の勅令について、まったく耳にしたことがなかったのでしょう。それゆえ、正気を取り戻し、そのお世辞めいた信仰を捨てなさい。そうしなければ、火の中に投げ込まれることになるでしょう。」

しかし、トリフォンは叫んだ。

「ああ、もし私が火の中を通ってあらゆる苦しみを受け、私の主であり神であるイエス・キリストの名のために死を迎えることが許されるなら！」

エパルクは続けた。

「トリフォンよ、神々に犠牲を捧げることを勧める。お前は肉体こそ若いが、完全な知性を備えているのがわかる。私はお前が悲惨な死を遂げることを望まないのだ！」

「私が完全な知恵を持つのは、」聖人は答えた。「私の神に完全な告白を捧げ、尊い宝物のように、神への敬虔な信仰を揺るぎなく守り抜き、私のためにご自身を犠牲にされた御方に、私自身も犠牲として捧げるときです。」

すると、地方総督は聖人を威嚇し、怒りを込めて叫んだ。

「お前の肉体は火に投げ込み、魂は最も残酷な拷問で屈服させてやる。」

「お前は、やがて消えゆく火で私を脅している」とトリフォンは答えた。「その火の後は灰しか残らない。しかし私は、不信仰者であるお前たちに、永遠に消えることのない火で脅す。お前の虚しい信仰を捨て、真の神を知れ。そうすれば、後に永遠の火に落ちたとき、後悔することはないだろう。」

しかし、アキリンは激しい怒りに燃え上がり、聖人を木に吊るして拷問するよう命じた。この命令を聞くと、トリフォンは自ら直ちに衣服を脱ぎ捨て、喜びをもって自らの体を処刑人たちに委ね、拷問を受け入れた。 処刑人たちは、彼を両手を後ろで縛ったまま木に吊るし、三時間にわたって

[1560] ニカイア――古代には豊かで繁栄した都市――はビフィニア（小アジア）に位置し、現在は極めて貧しく、人口も少ない。この都市で第1回および第7回全地公会議が開催された。

[1561] *スキニアリウス*――宮廷の財務官であり、エパルヒ（地方総督）の下で大きな権力を有していたため、皇帝から特別な信頼を寄せられ、様々な重要な職務を任されていた。

[1562] フォルトゥナ――ローマ人の運命と幸福の女神。

残酷に拷問を加えた。しかし聖人は勇敢に苦痛に耐え、殴打されている間、一度も叫び声を上げず、うめき声一つ漏らさなかった。拷問が終わると、アキリンは再び彼に説得の言葉をかけました。

「考え直せ、トリフォンよ。その狂気を捨て、神々に拝むと誓え。王の命令に従おうとしない者は、誰一人として恐ろしい死を免れることはできないのだ。」

聖人は大胆にこう答えた。

「私もあなたに言おう。天の王キリストを拒む者は、永遠の命を受け継ぐことはできず、決して消えることのない永遠の火の中に投げ込まれるのだ。」

これに対し、エパルヒは言った。

「ゼウス、すなわちサトゥルヌスの子[1563] 以外に、天の王はいない。彼は神々も人間もすべてを統べる父であり、もし彼に拝礼しない者がいれば、その者は生き延びることはできない。もしこの人生の甘美さを享受したいのなら、お前も彼に拝礼せよ。」

そこで聖人は、異教徒を真理の光で啓蒙し、異教の忌まわしさをすべて暴こうと、アキリヌスにこう言った。

「ゼウスというお前の神を崇拝し、彼に希望を寄せる者たちは皆、その神に似ていよう。　彼については、最初の無法な魔術師であり、破滅をもたらす呪術師、あらゆる不義と不敬虔の父であったと伝えられている。彼の死後、その邪悪な行いに従おうとした者たちは、彼を神と呼び、金や銀の偶像を造り上げた；　彼らは、自らの不潔さと不法を正当化し、恥ずべき行いについて誰からも非難されないようにするためにそうしたのである。なぜなら、彼らの神もまた同様であったからである。同様に、他の卑劣で悪意に満ちた人々も、彼らを模倣する者たちによって神の地位にまで持ち上げられた[1564]；　しかし、あなたがたは、これらの古くからの不敬虔な伝承や偽りの神話を信じ、魂も声もない偶像を崇拝し、天を堅く立て、水を基に地を築き、空気を注ぎ出した生ける神を忘れてしまっている。　あらゆる被造物を創造し、それらに目に見える形を与えられた神は、後に創造された人間を万物の支配者として立てられました。しかし、人間は悪魔の嫉妬に駆られ、狡猾な蛇（創世記3章）に惑わされて、数え切れないほどの災いに陥りました；　そこで、神――御言葉――は、人間に憐れみを示し、御自身の御心により、自ら受肉することをお選びになり、人の姿をとって現れ、十字架上で死に、葬られ、三日目に復活し、天に昇り、すべての被造物が神を知るようになるまで、父なる神の右の座に着いておられます；　その時、御方は再び大いなる力と栄光をもって来られ、各人にその行いに応じて報いを与えられる。御方は神々の神、王たちの王、生ける者と死せる者の裁き主である。しかし、あなたがたが崇める神々は、それらを崇拝する者たちと共に、永遠の火の燃料となるであろう。

その後、アキリン総督は狩りに出かける際、聖トリフォンをも捕らえるよう命じ、彼を馬に縛り付けて自分の後ろに引きずらせるよう指示した。聖人は大きな苦痛に耐えなければならなかった。恐ろしい寒さの中、彼は裸足であったため、馬が踏みつけ、その　な足で足を押しつぶした結果、足の指が引きちぎられ、足の裏はひび割れてしまった。しかし、殉教者は霊的な視線を神に向け、神への愛に燃え上がり、これらの苦難を何とも思わず、ダビデの言葉を歌った。　*「あなたの道に私の歩みを堅く立て、私の足が揺らぐことのないように」*（詩編16:5）、また、*「あなたの御言葉に私の足を堅く立て、いかなる不法も私を支配させないでください」*（詩編118:133）。

同時に、聖なる第一殉教者である大助祭ステファノの言葉を繰り返して、

「主よ、この罪を彼らに帰さないでください」[1565]　（使徒言行録7:60）。狩りから戻った地方総督は、殉教者を呼び寄せ、こう言った。

1563　*ゼウス*（またはユピテル）――ギリシャ・ローマ神話の神で、異教徒からは天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。

1564 概して、ギリシャ人やローマ人の信仰によれば、彼らの神々は人間と同じような情欲や犯罪的な傾向を持っていた。

1565 ユダヤ人によって石打ちに遭った聖第一殉教者、大助祭ステファノの記念日は、教会において12月27日に祝われる。

「さて、この不幸な者よ、今こそ分別を持って神々に犠牲を捧げることを思い立ったのか、それとも相変わらずの狂気に固執しているのか？」

聖人はこう答えた：

「お前こそ、悪魔に惑わされ、狂気と無知に満ちている。なぜなら、万物の創造主を知り、その御前にひれ伏すことさえできないからだ。しかし、私は、私を救う真理から決して逸れることなく、賢明であり続ける。」

エパルヒは聖人を牢獄へ連行するよう命じ、自身は国の最辺境へと向かい、そこでしばらくの間留まった。

ニカイアに戻った司教は、法廷に現れると、再びトリフォンを呼び出し、彼にこう言った。

「長い間、鎖につながれて過ごしたことで、王の命令に従い、神々に帰依するよう学んだのではないか？」

「わが神であり主であるイエス・キリスト――」と聖人は答えた。「私が清らかな心をもって仕え、教えを説いているその方が、私を導き、強めてくださった。それは、私が主への信仰を揺るぎなく、不動のものとして保つことができるようにするためである。　それゆえ、唯一の真の王であり神である御方にのみ、私は従い、御方に頼る。あなたや王の傲慢さは軽蔑し、あなたがたが崇める神々からは背を向ける。」

エパルフは激しく怒り、家来たちに叫んだ。

「その足の裏に鋭い釘を打ち込み、町中を引き回して、殴りつけよ。」

家来たちは直ちに拷問者の命令を実行した。聖人は町中を引き回され――いや、むしろ引きずり回され――拷問にさらされ、足に打ち込まれた釘による苦痛だけでなく、厳しい冬ゆえの酷寒からも、恐ろしい苦しみを受け続けた。　しかし、この偉大な殉教者は、心の眼にキリストを映し出し、将来の報いを仰ぎ見ながら、すべてを大きな忍耐と喜びをもって耐え抜いた。そして再び総督のもとへ連行されたとき、拷問官は聖人のそのような忍耐に驚き、大きな苛立ちを込めて彼に言った。

「トリフォンよ、いつまで苦痛に無感覚でいるつもりだ？　いつになったら、この拷問の恐ろしい痛みをすべて感じるようになるのだ？」

聖人はこう答えた。

「お前もまた、私の中に宿るキリストの力を知る時、そしてお前という呪われた者が、聖霊を試みることをやめる時だ。」

すると、激しい怒りに燃えた拷問官は、再び彼を木に吊るし、容赦なく鉄の棒で打ち、燃える蝋燭で脇腹を焼くよう命じた。　家来たちはこれらすべてを熱心に実行したが、突然、天の光が聖人を照らし、その頭上に天から美しい冠が降りてきた。この光景に打ちのめされた拷問者たちは、恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。一方、聖トリフォンは、天から与えられた助けを身に感じ、喜びと歓喜に満たされ、祈りながらこう言った。

「主よ、感謝いたします。あなたは私を敵の手の中で助けなしに放置されることなく、戦いの日に私を守り、救いを与えてくださいました。そして、あなたの御手が私を支えてくださいました。そして今、主よ、私を見捨てず、私を強め、守ってください。また、この偉業を妨げられることなく成し遂げさせてください。そうして、あなたの聖なる御名を愛するすべての人々と共に、義の冠を受けるにふさわしい者とならせてください。なぜなら、あなただけが永遠に賛美される方だからです。アーメン。

その後、拷問官は、縛られていた聖人を解き放つよう命じ、彼を呼び寄せると、優しく諭し始め、こう言った。

「トリフォンよ、偉大なるゼウスに犠牲を捧げ、王の像に拝礼せよ。そうすれば、私はお前を釈放してやる。」

しかし、トリフォンは微笑みながら、こう答えた。

「もし私が王そのものを軽蔑し、その不敬虔な命令を無視したのなら、まさかその魂のない像に拝礼するなどあり得ようか？　そんなことは決してない。」　ゼウスやその他の偽りの神々については、お前の国の賢者たちに尋ねてみよ。彼らは、これらの神々の卑劣な行いを隠すために、どのような作り話が編み出されているかを教えてくれるだろう。彼らは、他の物事に神々の名を当てはめ、空をゼウス、空気をヘラ、大地をケレーラ、　海をポセイドン、太陽をアポロン、月をディアナと呼んでいるのだ[1566]　。これらの作り話屋たちは、あなた方の神々の名を用いて、様々な悪しき習俗や人間の情欲にも名前を付け、怒りと戦争の神マルスをでっち上げ、淫らな情欲をヴィーナスと呼んだのだ[1567]。そして今、あなた方は万物の創造主である神を見捨て、狂おしいほどに全宇宙を偶像で埋め尽くし、被造物を創造主に優先させてしまった。　そして、あなた方自身は、健全な理性を失い、真の道から逸れて、魂を滅ぼす深淵へと真っ逆さまに落ちているだけでなく、私たちをもそこに引きずり込み、あなた方の破滅の共犯者にしようとしている。しかし、お世辞を並べる者たちよ、あなた方には決して成功などない！　なぜなら、真の生ける神に希望を置く者たちを、真の道から迷わせ、あなたがたの偶像へと引き寄せることなど、あなたがたには決してできないからだ。

この言葉を聞いたアキリンは、聖人のその大胆不敵さに驚き、激怒して、一切の慈悲もなく彼を拷問するよう命じた。兵士たちは聖人を捕らえ、何時間もかけて最も残酷な方法で彼を拷問した。

ついに、拷問官は、揺るぎない信仰の柱を動揺させ、キリストから引き離すことができないと悟ると、彼に対して次のような最終的な判決を下した。

「アパメイアのトリフォンよ、王の命令に背き、あらゆる拷問を経てもなお神々への生贄を捧げることを拒んだ者は、斬首によって処刑されなければならない。」

すると直ちに、兵士たちは殉教者を連行し、彼を街の外の斬首の場へと連れ出した。聖トリフォンは東を向いて、神に向かって次のような祈りを捧げた。

「主なる神よ、諸王の王、すべての聖人の中でも最も聖なる方よ！　私がこの偉業を躓くことなく成し遂げることができたことを、あなたに感謝いたします。　そして今、あなたに祈ります。目に見えぬ邪悪な敵の捕らえようとする手が私に及ぶことのないよう、彼が私を滅びの深淵へと引きずり込まないようお守りください。むしろ、あなたの聖なる天使たちと共に、私を愛する御国へと導き入れ、私をあなたの切望される御国の相続人としてください。　私の魂を平安のうちに迎え入れてください。また、あなたのしもべの名を覚え、私の記念としてあなたに聖なる供え物を捧げるすべての人々の声を、あなたの聖なる御座の高みから聞いてください；　また、御自身の聖なる住まいから彼らに目を留め、豊かで朽ちることのない賜物を授けてください。まことに、あなたこそが、世々限りなく、唯一の善き、寛大な賜物の与え主であられるからです。

聖人はこのように祈りました。そして、兵士たちがまだ彼の首を切り落とす間もなく、主は彼の魂をお取りになりました。トリフォンの尊い御体は、死体として地上に残されました。ニカイアにいたキリスト教徒たちは、彼を清らかな死装束で包み、香油を塗って、自分たちの街を守るために、

1566　*ヘラ*（ユノー）は、古代ギリシャ人やローマ人によってゼウスの姉妹であり妻として崇められ、女神の中で最も尊ばれていました。彼女は大地の女神であり、結婚と出産の守護神とされていました。*ケレーラ*（またはデメテル）は、ローマおよびギリシャの大地と豊穣の女神です。　*ポセイドン*（ネプチューン）は、ゼウスの兄弟であり、海、川、あらゆる水源および貯水池の絶対的な支配者として崇められていた。*アポロン*（フェブス）は、古代ギリシャ人やローマ人に最も崇敬された異教の神の一人で、太陽と知性の神、また法の守護神と見なされていた。　*ディアナ*（アルテミス）は、ギリシャ人やローマ人に広く知られ、彼らから特別な崇拝を受けていた異教の女神である。ディアナは月の女神とされ、美しく、明るい狩猟の乙女として描かれていた。

1567　*マルス*（またはアレス）――ギリシャ・ローマ神話の戦争の神。ヴィーナス――ギリシャ・ローマ神話の美と愛の女神。彼女を称える祭りは、極度の放縦と淫乱を伴うものであった。

自分たちの地で彼を葬ろうと考えました。　しかし、聖人は彼らに幻として現れ、その遺骸を故郷であるカンプサドゥの村へ移すよう命じた――そしてその命令は実行された[1568]。

こうして、若き日から神に献身し、多くの人々をキリストへと導き、その多くを病から癒した聖トリフォンは、真理のために受けた大いなる苦難の末、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神から朽ちることのない冠を授かり、その神に永遠の栄光がありますように。アーメン[1569]。

トロパリオ、第4調：

主よ、あなたの殉教者トリフォンは、その苦難の末に、私たちの神であるあなたから朽ちることのない栄冠を授かりました。彼はあなたの力をもって、迫害者たちを打ち倒し、悪魔たちの無力な挑発を打ち砕いたからです。その祈りによって、私たちの魂を救ってください。

コンダク、第8調：

至聖なる御方よ、あなたは三位一体の堅固さをもって多神教を根絶やしにし、キリストにおいて尊ばれ、救い主キリストにおいて迫害者たちに打ち勝ち、殉教の冠と神の癒しの賜物を受け、無敵の者となられました。

[1568] 聖トリフォンの聖遺物の一部は、モスクワのナプルドナヤにある同名の教会に保管されている。この教会の歴史と密接な関係を持つ伝承がある。　ある日、イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイ（恐怖のイオアン）の狩りの最中、鷹匠であるボヤリンのトリフォン・パトリキーエフの何らかの不注意により、愛用のハヤブサが飛び去ってしまった。皇帝はこの鷹匠に対し、何が何でも3日以内にそのハヤブサを見つけ出すよう命じ、さもなければ死刑に処すと脅した。　鷹匠は森中をくまなく探し回ったが、捜索は実を結ばなかった。疲れ果てた彼は、3日目にマリイナの森（ナプルドナヤ・スロボーダ）の近くで立ち止まり、激しい疲労から木の下で深い眠りに落ちた。　その直前に、パトリケエフは聖殉教者トリフォンに助けを求め、熱心に祈りを捧げていた。彼は、その名からも、トリフォンを守護聖人であり、最も頼りになる導き手だと考えていたのだ。すると、鷹匠は不思議な夢を見た。白馬に乗った威厳ある若者が彼の前に現れ、その手には王室のハヤブサが乗っていた。　「これを受け取れ」と若者は言った。「失われたお前の鳥だ。神の御加護を祈りつつ王のもとへ行き、悲しむな」。鷹匠が目を覚ますと、確かに自分の手の上に王のハヤブサがとまっているのが見えた。彼はそのハヤブサをグロズヌイ王のもとへ運び、同時に自分の見た幻についても王に語った。　以前の君主の怒りと、鷹匠を脅かしていた恐ろしい災難は、王の恩寵に取って代わられた。そして、敬虔なボヤリンであるトリフォン・パトリキーエフは、自分の命を救ってくれたことに対し、神と神の御使いである聖殉教者トリフォンへの感謝の印として、直ちに、まず自分のハヤブサを見つけた場所に礼拝堂を建て、　その後、伝えられるところによれば、皇帝ご自身の協力さえ得て、この礼拝堂の近くに、聖殉教者トリフォンの名を冠した石造りの教会を、まさに上述の聖殉教者の御出現があったその場所に建立した。

[1569] 『大典礼書』（第60章）には、「畑、あるいはブドウ畑、果樹園において、爬虫類やその他の生物によって被害が生じた場合に執り行われる儀式」が記載されている。　この「儀式」は、「畑、ブドウ畑、果樹園、および菜園に害と損失をもたらす」「多種多様な獣、ミミズ、イモムシ、コガネムシ、イナゴ、ネズミ、ハツカネズミ、ハタネズミ、および各種のハエやハエ類」などが現れた場合に執り行われる。　上記の「儀式」には次のように記されている。　「聖トリフォン、あるいは聖エウスタフィオス、あるいは聖ユリアヌス・リヴィウス、あるいはその両者のための聖体礼儀を行い、聖灯を灯すべきである」とあり、聖体礼儀の後、「聖灯の聖油と聖なるエピファニーの水を取り、祈りを唱えながら、畑やブドウ畑、果樹園に十字架の形を描いて振りかける」ことになっている。　同『儀式書』には、この聖なる御好者である聖トリフォンの立場から綴られた「聖殉教者トリフォンの呪文」も収められている。　聖トリフォンは、生前「ただその到来だけで悪霊を追い払い」、自らの祈りによって社会の災いを防いだと信じられており、その至福の永眠後も、彼に助けを求める者たちを見捨てないため、前述の　「呪文」は、植物界に害を及ぼす昆虫や爬虫類を対象としており、神の御前に大いなる栄光を持ち、主の御名によって「神の僕たちの場所やその周辺から立ち去れ」と大胆に命じることができる、神の御心に適う聖人である聖トリフォンの口調で唱えられます。

ビフィニアの隠者、聖ヴェンディミアンの記念日

記念日：2月1日

聖ヴェンディミアンは、ミジア出身[1570]　であり、若き日に、ハルキドン近郊のオクシア山[1571]に、聖アウクセンティウスが設立した修道院を訪れました。アウクセンティウスは彼を受け入れた後、長くは生きられませんでした。　アウクセンティウスの死後、ヴェンディミアンは彼の修道室より少し低い場所に自分の修道室を設けたが、5年ほど過ごした後、その地の過酷さゆえに去ろうとした。すると主イエス・キリストが彼に現れて心を強め、彼はその後さらに37年間この地で暮らし、生前に数々の奇跡を行った。聖ヴェンディミアンは512年頃に亡くなった。

聖殉教者ペルペトゥアと、彼女と共に殉教した聖少年たちサティル、レヴォカト、サトルニル、セクンダ、および聖フィリシタタ（妻）の記念日

記念日：2月1日

聖ペルペトゥアは名門の家系に生まれ、カルタゴの街に住んでいた[1572]　。彼女は異教徒である父に内緒で聖なる洗礼を受け、父の涙ながらの懇願や説得にもかかわらず、真の信仰において揺るぎない姿勢を貫いた。　二十二歳の時、ペルペトゥアは未亡人となり、自ら乳を飲ませていた乳児を抱えていた。彼女の兄サティル、女中フィリシタタ、そして若者たち――使用人のレヴォカト、サトルニル、セクンド（貴族出身）――もまた、聖なる洗礼を受ける準備をしていた。　彼らは皆、ペルペトゥアと共に異教の裁判官たちに捕らえられ、狭い牢獄に閉じ込められた。そこに現れた聖ペルペトゥアの父は、殉教者の胸に乳飲み子への愛を呼び起こすことで、彼女の信仰の堅固さを揺るがそうとしたが、聖ペルペトゥアにとってキリストへの愛は、この世のあらゆる愛着よりも尊かった。

聖ペルペトゥアは、苦難に遭う前に、次のような幻視を授かった[1573]　。彼女は獄中にいる間に、その幻視を自ら記述している。

「私は――と聖ペルペトゥアは語る――、地上から天まで届く、極めて高い黄金の梯子を見ました。それは非常に狭く、一人ずつしか登ることができませんでした。　その階段の両側には、鋭い剣、ナイフ、槍、短剣、釘、鉤、その他同様の鋭利な物がびっしりと突き刺さっていました。階段の下端には恐ろしい大蛇が潜んでおり、登ろうとする者たちに襲いかかる準備をしていました。　その大蛇を意に介さず、サティールは恐れを知らずに真っ先に階段へと足を踏み入れた。無事に最上段までたどり着くと、彼は私に向かってこう言った。「ペルペトゥアよ！　私はお前を待っている。だが、大蛇に飲み込まれないよう気をつけろ」と。

「私は彼を恐れてはいない」とペルペトゥアは彼に答えた。

1570 ミジア――小アジア北西部の地域。

1571 ハルキドンは、小アジアにある都市で、コンスタンティノープル海峡の岸辺に位置する（その対岸にはコンスタンティノープルがある）。ハルキドンは、第4回全地公会議が開催された場所として、教会史において知られている。

1572 カルタゴ――北アフリカにある最も古く有名なフェニキア人の植民地であり、古代に絶大な勢力を誇ったが、紀元前146年に滅ぼされた。 古代カルタゴの廃墟の上に、初期のローマ皇帝の時代に新たなカルタゴが興り、それは非常に長い期間にわたり輝かしい繁栄を誇った。カルタゴでは、あらゆる迷信を伴う異教的なギリシャ・ローマ式の信仰が極めて盛んに発展していた。

1573 苦難の記録は、牢獄の中で聖なる殉教者たち――ペルペトゥアとサティロス――自身によって記された。 残りの部分は、目撃者によって、また目撃者のために補足された。なぜなら、「私たちも、耳で聞き、この目で確かに見たことを、兄弟姉妹の皆さんにお伝えします。そうすれば、この場に立ち会った皆さんも、神の栄光のために、再びそのことを思い起こすことができるでしょう」と記されているからである。

そして直ちに、我らの主イエス・キリストの名において、その階段を登ることを決意した。階段に近づくと、彼女はまず、あたかも最初の段であるかのように、蛇の頭を踏んだ。そして階段の頂上に登りつめたとき、彼女は美しい楽園の集落と、そこに住む多くの住民たちを見た。　聖ペルペトゥアがこの幻視について同志たちに語ると、彼らは皆、それを自分たちの殉教の予言であると理解した。この時から、彼らはこの世への執着を完全に断ち切り、すべての思いを永遠に注ぎ込んだ。

牢獄での多くの苦難の末、聖なる殉教者たちはついに死刑を宣告された。若者たちはサーカスで野獣に食いちぎられるために放り出され（[1574]）、聖女ペルペトゥアとフィリシタタには、角で突き刺すよう、凶暴で狂暴な雌牛が放たれた。　しかし、獣たちは聖なる殉教者たちを引き裂くことはなかったため、その後、彼らは全員、剣やナイフで斬り殺された。聖ペルペトゥアが斬首される際、処刑人の手は長い間、彼女の喉元に届かなかった。そこでペルペトゥアは自ら彼の剣を首元に運び、こうしてキリストのために勇敢に息を引き取った[1575]。

2月15日

2月2日（旧暦）

主の奉献の祝日

2月2日の記念日

我らの主イエス・キリストの降誕から40日が過ぎ、律法に定められた清めの期間が満了した後、至聖にして至福の聖母マリアは、婚約者である聖ヨセフと共に、　ベツレヘムからエルサレムの神の神殿へと赴き、モーセの律法を履行するため、生後40日目の幼子キリストを連れて行かれた。　この律法によれば、第一に、出産後、神にふさわしいいけにえを捧げ、祭司の祈りによって清められなければならず、第二に、長子を主の前に差し出し、定められた代価を支払わなければならなかった（レビ記12:7）。これは旧約聖書において主がモーセに命じられたことであり、モーセの律法の書には、母の清めの規定について次のように記されている。*「もし女が身ごもって男の子を産んだなら、彼女は七日間、不浄となる。八日目に、その子の包皮を切り取り、三十三日間、自分の血の清めのために座していなければならない。　清めの期間が満ちるまでは、いかなる聖なるものにも触れてはならず、聖所にも入ってはいけない。清めの期間が満ちたら、一歳の雄の子羊を全焼のいけにえとして、また若い鳩か鳩雛を一羽を罪のいけにえとしてささげなければならない。　もし子羊をささげることができないなら、鳩二羽か若い鳩二羽を取り、一羽を全焼のいけにえとし、もう一羽を罪のいけにえとし、祭司が彼女を清めれば、彼女は清くなる」*（レビ記12:7–8、12:2–4）。

また、男子の初子を神に捧げることについて、律法には次のように記されている。「*すべての初子（男子）のうち、母の胎から最初に生まれる者を、わたしに聖別せよ」*（出エジプト記13:2）[1576]。また別の箇所では、*「あなたの息子たちの初子をわたしに捧げよ」*（出エジプト記22:29）とある。　これは、エジプトにおける神の偉大な御業に対する報いとして求められたものでした。主はエジプトの初子を打ち殺された一方で、イスラエルの初子たちを救われたのです（出エジプト記11:5–7

[1574] 殉教者の一人であるセクンドは、まだ牢獄の中で亡くなりました。

[1575] これらすべての殉教者たちは、203年頃に亡くなった。

[1576] この律法に基づき、ユダヤ人がエジプトを出る前夜に、滅びの天使がエジプトのすべての長子を滅ぼしたことを記念して、ユダヤ人のすべての長子は、神への特別な奉仕、すなわち聖所での奉仕のために奉献されなければならなかった。その後、この務めのためにレビ族のみが選ばれると、長子たちに対しては銀5シケルという贖い金が定められた。

）。　そのため、イスラエル人は、律法で定められた当然の捧げ物として、自分の長子の赤ん坊を神殿に連れて行き、神に捧げていた。　そして、彼らは神からその子たちを、定められた代価で贖い戻した。この代価は「贖いの銀」と呼ばれ、主の神殿に仕えるレビ人たちに支払われた。これはモーセの第四の書（民数記3:49–51）に記されている通りである。　定められた贖いの代価は、教会の重量による五つの聖シケルから成り、それぞれの聖シケルは二十ペネアズに相当した[1577]　。この主の律法を履行して、神の母は今、律法の制定者と共に神殿にやって来た。　清めを必要としていなかったにもかかわらず――彼女は汚れなく、不貞なく、朽ちることなく、至聖なる方であったにもかかわらず――清めを受けるために来られたのである。　なぜなら、夫も情欲もなく身ごもり、病や処女の清らかさを損なうことなく出産された御方は、自然の法則に従って出産する妻たちに特有の汚れを持たなかったからである。清らかさの源を産み出した御方に、どうして不浄が及ぶことができようか。　キリストは、木から実がなるように、彼女から生まれた。そして、木が実を結びながらも傷つくことも汚されることもないのと同様に、聖母もまた、祝福された実であるキリストを産んだ後も、傷つくことなく、汚されることもなかった。　キリストは、太陽の光がガラスや水晶を通り抜けるように、彼女から生まれ出でられた。ガラスや水晶を通り抜ける太陽の光は、それを砕くことも損なうこともなく、かえってさらに明るく照らし出す。真理の太陽であるキリストは、御母の処女性を損なうことはなかった。　また、清らかさに刻印され、処女性によって守られた自然の誕生の門を、女性に通常見られる出血によって穢すことはなく、超自然的な方法で通り抜けることで、その清らかさをさらに高め、ご自身の誕生によってそれを聖別し、神の恵みの光で照らし出したのである。　神の御言葉である神を朽ちることなく産み出した彼女にとって、いかなる清めも全く必要なかった。しかし、律法を破ることなく、むしろそれを成就するために、完全に清く、いかなる欠点も持たない彼女が、清めを受けるために来たのである。　これと共に、謙遜に満ちた御方は、ご自身の朽ちることのない清らかさを誇ることなく、あたかも不浄であるかのように、不浄な女性たちと共に主の神殿の門の前に立ち、不浄で罪深い者たちを忌み嫌うことなく、清めを求めたのである。　また、犠牲も捧げましたが、それは、無垢な一歳の小羊を捧げる富裕層のようにではなく、二羽の鳩か二羽の鳩の雛を捧げる貧しい人々のように行い、あらゆる面で謙遜と貧しさへの愛を示し、富裕層の傲慢さを避けたのです。というのも、東方の三博士がもたらした金（マタイ2:11）のうち、彼女は少しばかりを取り、それを貧しい人々や困窮者に分け与え、エジプトへの旅に必要な最低限のものだけを自分用に留めた。前述の二羽の鳥を購入し、律法に従って犠牲として捧げるとともに、その傍らに御自身の長子である幼子も連れて行った。*「彼をエルサレムに連れて行き、主の前にささげた」*（ルカ2:22）――と福音記者ルカは述べています。すなわち、神の　を神に返すためです。なぜなら、主の律法には、男子の初子で、母の胎を開いた者はすべて、主に奉献されなければならないと記されているからです（出エジプト記13:2）。新生児を腕に抱きながら、聖母マリアは主の前にひざまずき、深い畏敬の念をもって、その幼子を貴重な贈り物として神に捧げ、こう言いました。

「見よ、永遠の父よ、あなたが人類の救いのために、私を通して受肉するよう遣わされた御子です！　あなたは世の初めより、母なしに御子を産み出されましたが、私はあなたの御心により、時が満ちて、夫なしに御子を産みました。これこそが、私の胎から生まれた長子であり、聖霊によって私の内に宿り、あなたがただお一人だけがご存知の、言い表せない方法で私から生まれた御子です。彼は私の長子ですが、何よりもまず御あなたの長子であり、御あなたと同質であり、御あなたと同一の起源を持つ、御あなたお一人にふさわしい長子です。なぜなら、彼は御あなたの神性から離れることなく、御あなたから降りてこられたからです。　あなたが永遠に共におられ（ヘブライ人への手紙1:2）、共に光が輝くよう命じられたその長子をお受け入れください。私から受肉されたあなたの御言葉をお受け入れください。あなたは、その御言葉によって天を堅くし、地を築き、水を一つにまと

[1577] 聖なるシケルは、現在の通貨で約5コペイカに相当する。

められました。　私から、この偉大な犠牲としてあなたに捧げる御子をお受けください。そうして、御子と私について、あなたの御心に適うように定め、私から受け取った御子の肉と血によって、人類を贖ってください。

これらの言葉を語り終えると、彼女は、神の代理である大祭司の手に、その尊い御子を委ねました。それは、あたかも神ご自身に御子を捧げているかのようでした。　その後、御母は律法の定め通り、定められた代価――五つの聖なるシケル――をもって御子を贖われた。その数は、あたかもキリストが十字架上で受けられた五つの聖なる傷を予兆するかのようであり、それによって全世界は律法の誓いと敵の働きから贖われたのである[1578]。

まさにそのとき、神の母が幼子イエスを連れて、律法に定められた儀式を執り行うために神殿にやって来たのと同時に、聖霊に導かれて、シメオンという長老が神殿にやって来た。彼は義にかなった敬虔な人であり、メシアの到来とともに訪れるべき「イスラエルの慰め」を待ち望んでいたのである[1579]。彼は、待ち望まれたメシアがすでに近づいていることを知っていた。なぜなら、王権はユダからヘロデへと移り、先祖であるヤコブ族長が「諸国民の待ち望む者、主キリストが来られるまで、ユダの王は絶えることがない」と予言した言葉が成就しつつあったからである（創世記49:10）。同様に、ダニエルの七十の「七」の期間も終わりを告げ、その後、預言によれば、メシアの到来が予定されていた。同時に、聖シメオン自身にも、聖霊によって、主キリストを見るまでは死を見ないという約束が与えられていた。シメオンは、　聖母マリアと、その御腕に抱かれた幼子を見つめ、母と幼子を包む神の恵みを見出し、聖霊によってこの方が待ち望まれたメシアであることを悟ると、急いで近づき、言い表せない喜びと畏敬の念をもって御子を受け入れ、神に大きな感謝を捧げた。　白髪交じりの彼は、死を目前にした白鳥のように、預言的な歌を歌った。*「今、主よ、御言葉に従い、御使いを安らかに遣わしてください。」*

「私は――まるでそう語っているかのように――心の中に平安を持てなかった。日々あなたを待ち望み、あなたが来られるまで悲しみに沈んでいた。しかし今、あなたを目にしたことで、私は賜物を受け、悲しみから解放され、喜びの知らせを携えてここから去り、私の先祖たちのもとへ向かう。　あなたのこの世への到来を、始祖アダムやアブラハム、モーセやダビデ、イザヤ、そして他の聖なる先祖や預言者たちに告げ知らせる。今なお悲しみの中にいる彼らに、言葉に尽くせぬ喜びをもたらすのだ。　彼らのもとへ私を遣わしてください。そうすれば、彼らは悲しみを捨て、彼らの救い主であるあなたを喜び祝うことができるでしょう。　長年の労苦の末、あなたのしもべである私を、アブラハムの懐で安らぐようにお送りください。私の目はすでに、すべての人々のために備えられたあなたの救いを見ました。私の目は、闇を追い払い、諸国民を照らし、彼らには知られていない　の神聖な秘儀を啓示するために備えられた光を見ました。　――それは、あなたの民イスラエルを栄光に輝かせるために輝いた光であり、あなたは預言者イザヤを通して、*「シオンに救いを与え、イスラエルに私の栄光を与える」*と約束された（イザヤ46:2）。

[1578] 聖ディミトリ・ロストフスキーの伝承によれば、聖なる父たちは次のように付け加えている。すなわち、洗礼者ヨハネの父である聖預言者ザカリアは、清めのために神殿を訪れた聖母マリアと幼子イエスを、清めのために来る女性たちの場所ではなく、未婚の乙女たちの場所に立たせた。その場所は、夫を持つ女性たちが立つことを許されていなかった場所であった。　そして、律法学者やパリサイ人たちがこれを見て憤りを表し始めたとき、ザカリアは彼らの前に立ち、この御母は御子をお産された後もなお清らかな処女であると宣言した。　しかし、彼らがこれを信じなかったとき、ザカリアは、人間の性質も、あらゆる被造物と同様に、その創造主に仕えるべきであり、全能なる御手の内には、御心のままに被造物を整える力がある、すなわち、処女が子を産み、出産後も処女であり続けるように整える力もまたそこにある、と語った。　「それゆえ、私もこの母を、乙女たちのための場所に置いたままにしたのです」と彼は言った。「彼女はすべての乙女たちよりも優れているからです」。

[1579] *70週*に関する預言はダニエル書（ダニエル9章）にある。

ヨセフと聖母マリアは、シメオンが幼子について語ったすべての言葉を聞いて、驚いた。　さらに、シメオンが幼子に、単なる幼子としてではなく、「年老いた者」[1580] として語りかけ、祈りを捧げる際も、人間としてではなく、生と死の権能を持ち、その老人を即座にあの世へ送り出すことも、この世に留めることもできる神として、彼に呼びかけているのを見たのである。　シメオンは彼らに対しても祝福の言葉をかけ、神であり人である御子をこの世に生み出した汚れなき母を称え、また、そのような神秘の奉仕者となる恵みにあずかった聖ヨセフという名目上の父を祝福した。　その後、シメオンはヨセフではなく、御母マリアに向き直り――彼は自らの目で、彼女の中に夫を持たない母を見出していたからである――こう語った。

– これは、イスラエルの多くの人々にとって、つまずきと立ち上がりとなるであろう。すなわち、その御言葉を信じようとしない者たちにとってはつまずきとなり、その聖なる説教を愛をもって受け入れる者たちにとっては立ち上がりとなる――悪意に目がくらんだ律法学者やパリサイ人にとってはつまずきとなり、素朴な漁師や知恵のない人々にとっては立ち上がりとなる。　彼は賢い者を選ばず、この世の賢い者たちを恥じ入らせる――旧約のユダヤ教の集まりにとっては滅びとなり、恵みに満ちた神の教会にとっては立ち上がりとなる。 これは論争の的となるであろう[1581] 。なぜなら、彼によって人々の間に大きな分裂が生じるからである。ある者は彼を善き者と称し、またある者は彼が人々を欺いていると言い、彼を――預言者エレミヤの言葉によれば、*「まるで矢の的のように」*（哀歌 3:12）と、十字架の木に吊るし、矢や釘、槍で傷つけられることになる。　そのとき、夫を失った御母よ――長老は続けた――御子の御姿が十字架に釘付けにされているのをご覧になり、心に深い痛みと嗚咽を抱きながら、病なくこの世に生み出された御方をこの世から送り出すとき、悲しみと心の痛みの剣が御魂を貫くことでしょう。

その聖堂には、アッシラ族のファヌイルの娘である預言者アンナもいました。彼女は未亡人で、すでにかなり高齢――八十四歳――でした。　夫とはわずか七年しか共に暮らさず、未亡人となってからは、神殿を離れることなく、断食と祈りをもって昼夜を問わず神に仕え、神に喜ばれる生活を送っていた。その時、神殿に来たアンナは、主の神殿に連れて来られた幼子について、エルサレムで救いを待ち望んでいたすべての人々に、多くの預言を語った[1582] 。

これらすべてを耳にし、目にした律法学者やパリサイ人たちは、心の中で激昂し、その幼子についての証言をしたシメオンとアンナを激しく非難した。　彼らは黙ってはいなかった。神殿で起こったこと、語られたことすべてを、ヘロデ王に報告したのである[1583] 。王は直ちに兵士たちを遣わし、神聖な幼子キリスト・主を探し出して殺すよう命じた。しかし、兵士たちはもはやその幼子を見つけることはできなかった。ヨセフが夢の中で受けた指示に従い、幼子はエジプトに避難していたからである。　聖ヨセフと聖母マリアは、神殿で律法に定められたすべての儀式を済ませた後、ベツレヘ

[1580] 預言者ダニエルは、「*古き者*」、すなわち深遠な長老の姿として、神を見た（ダニエル書7:9–13）。聖書において、老いは時に神の永遠性の象徴として用いられる。

[1581] 論争の対象、すなわち争いの的となる旗――この比喩は、戦いの最中に一方の陣営が奪い取ろうとし、もう一方の陣営が守ろうとする軍旗に由来する。　主は、ある者たち――すなわち不信者たち――が主を滅ぼそうと努めた（彼らは神の御子を十字架につけることでそれを成し遂げたと自負していた）のに対し、他の者たち――すなわち信者たち――がこの旗の下に立ち、今もなおその旗の下に立ち、それを擁護しているという点で、まさに「論争の的」となったのである。

[1582] このことから、当時のエルサレムには、約束されたメシアの近いうちの出現を待ち望んでいた人々がかなり多くいたことがわかります。彼らは真のイスラエル人であり、自分たちの期待と祈りが叶ったと聞いて、疑いなく大きな喜びに沸いたことでしょう。

[1583] 歴史上「*大*」と呼ばれるヘロデは、ユダヤ人の王アンティパトロスの息子であり、当初はガリラヤの統治者であったが、ローマ初代皇帝オクタヴィウス・アウグストゥスの治世下、紀元前40年にユダヤ王の称号を授かり、当時ローマ帝国に属していたユダヤ全土を統治した。

ムには戻らず、ガリラヤの故郷ナザレ[1584] へと向かい、そこから急いでエジプトへと逃れた（マタイ2:13–14）。 その少年は成長し、霊的に強められ、知恵に満ち、神の恵みが彼の上に留まっていた（ルカ2:40）。

主の奉献の祝日は、ユスティニアヌス帝の治世に制定された。それ以前にも、主の奉献は教会で記念されていた[1585] が、厳粛に祝われることはなかった。敬虔なユスティニアヌス帝は、他の 偉大な祝日と同様に、この祝日を主と聖母マリアの祝日として祝うことを定めた。 この祝日の制定のきっかけとなったのは、特別な事情であった。ユスティニアヌス帝の治世中、ビザンティウムとその周辺地域では、10月の終わり頃から3ヶ月にわたり猛烈な疫病が流行し、当初は1日あたり5,000人、その後1日あたり10,000人が死亡するに至った。 富裕層や高官の遺体でさえ埋葬されないまま放置されていた。というのも、使用人や奴隷が皆死んでしまい、主人たちを埋葬する者が誰もいなくなってしまったからである。 また、アンティオキア[1586] では、人々の罪によるペストに加え、神のもう一つの懲罰――恐ろしい地震――が襲い、それによって大きな家屋や高層の建物、神殿が次々と倒壊し、その壁の下で多くの人々が命を落とした。 犠牲者の中には、アンティオキアの司教エウフラシウス[1587] もおり、神殿の倒壊に巻き込まれて押しつぶされて死亡した。この恐ろしく破滅的な時期に、ある敬虔な人物に啓示が与えられ、主の受胎告知の祝日についても、他の主や聖母マリアの偉大な祝日と同様に、厳粛な祝典が設けられることになった。 そして、主の奉献の日である2月2日が訪れ、徹夜祈祷と十字架の行列[1588] による祝賀が始まると、神の慈悲と聖母マリアの祈りにより、致命的な疫病、飢饉、そして地震はたちまち収まった。 彼女と、彼女から生まれたキリストなる神に、永遠に栄光と誉れと礼拝と感謝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

喜びなさい、恵みに満ちた聖母マリアよ。あなたから、闇の中にいる者たちを照らす、正義の太陽である私たちの神、キリストが輝き出られたからです。義なる長老よ、あなたも喜びなさい。私たちの魂の解放者であり、私たちに復活を授けてくださる方を、その腕に抱きしめるのです。

コンダク、第1調：

御自身の御降誕によって聖母の胎を聖別し、シメオンの両手をふさわしいようにあらかじめ祝福されたキリスト、神よ、今や私たちを救ってくださいました。しかし、戦乱のさなかにあるこの地を和解させ、あなたが愛しておられる皇帝を強めてください、唯一の人を愛する方よ[1589] 。

[1584] ルカ2:39。ベツレヘムは、エルサレムから南へほど近い小さな町であり、ガリラヤの町ナザレからは、3日ほど、あるいはそれより少し長い道のりにある。

[1585] この祝祭については、3世紀、4世紀、5世紀の教父たちの著作に言及が見られる。

[1586] ここでいうのはもちろんアンティオキアのことである。シリアで最も古く、豊かな都市の一つであり、同国の首都でもある。オロンテ川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れている。 キリスト教教会にとって、アンティオキアはエルサレムに次ぐキリスト教の第二の中心地として、また異教徒から生まれたキリスト教諸教会の母として、特別な重要性を持ちます。現在、アンティオキアは人口1万人足らずの、小さく貧しい町となっています。

[1587] エウフラシウスは523年から527年までアンティオキア司教を務めた。

[1588] コンスタンティノープルで発生した疫病の終息と、アンティオキアで起きた恐ろしい地震を記念して、一部の地域では、教会において、聖体礼儀の前に修道院の外へリティア（聖体行列）を行い、その行列の途中で慣例に従って祝日のスティヒラとカノンを詠唱し、教会に戻ってから聖体礼儀を執り行うことが慣例となっている。

[1589] 主の奉献のコンダクにおいて、教会は東方教会を襲った災難からの救済を記念し、神の御慈悲によりユスティニアヌス帝の治世下でそれらが終息したことを称えている。

2月16日

2月3日（旧暦）

同日、デキウス帝の治世下で殉教した聖殉教者ヤドルの記念日[1590]。

聖シメオン・ボゴプリイムツの記念日。

2月3日の記念日

神の福音書の証言によれば、長老シメオンは義にかなった敬虔な人物であり、イスラエルの慰めを待ち望んでおり、聖霊が彼の上に留まっていた。神から、　真のメシアがこの世にまもなく到来することについて告げられた（ルカ2:2）。　古代の歴史家たちは、シメオンがこの啓示を受けたことについて次のように伝えている。エジプト王プトレマイオスの命により、モーセの律法と預言者の書がヘブライ語からギリシャ語へと翻訳される事業が着手された。この事業のために、ユダヤ民族全体から最も学識豊かな七十人の男たちが選ばれた[1591]。 その中には、賢明で聖書に精通した人物として、シメオンも名を連ねていた。預言者イザヤの書を翻訳していたシメオンは、*「見よ、処女が身ごもって、男の子を産む」*（イザヤ7:14）という言葉に差し掛かった。 これを読み、彼は「夫のいない女が子を産むなどあり得ない」と疑念を抱いた。シメオンはすでにナイフを手に取り、巻物からこの言葉を削り取り、「処女」という言葉を「妻」に変えようとしていた。　しかしその時、主の天使が現れ、彼の手を掴んでこう言った。「書かれた言葉を信じなさい。そうすれば、その成就をこの目で見るだろう。なぜなら、清い処女から生まれる主キリストを見るまでは、あなたは死を見ないからだ」。

天使と預言者の言葉を信じたシメオンは、キリストがこの世に来られるのを心待ちにしていた。彼は、あらゆる悪を避け、絶えず神の神殿に留まりながら、義にかなった清らかな生活を送っていた。そこでシメオンは、神が御自身の世界を憐れみ、人々をあらゆる悪を働く悪魔から救い出してくださるよう、神に祈った。

主イエス・キリストが、ご降誕から四十日が過ぎた後、律法の定め（出エジプト記13:2）に従い、聖母マリアの手によって神殿に連れて来られたとき、ちょうどその頃、神の御霊に導かれた義人

[1590] *デキウスは*249年から251年まで在位した。

[1591] プトレマイオス2世フィラデルフォスは、プトレマイオス・ラガ（紀元前285～247年）の息子であり後継者であり、エジプトの最も偉大な君主の一人であった。彼は特に、学問に対する啓蒙的な愛好心で知られている。彼の尽力により、アレクサンドリア図書館が設立された。　シリアを自らの領土に編入したいと考えた彼は、シリアへの道筋にあるユダヤもまた、その支配下に置いた。　エルサレムを占領した後、エルサレムとその周辺、さらにはサマリアからも数千人のユダヤ人が捕虜としてエジプトへ連行された。しかし、王はユダヤ人に対して寛大に接し、アレクサンドリアではマケドニア人と同等の権利さえ与えたため、多くのユダヤ人が自発的にこの地へ移住した。　ユダヤの律法が神に由来し、至高の英知と最も神聖な戒めを含んでいると聞いた王は、そのギリシャ語訳を入手したいと願った。　この翻訳によって、彼はアレクサンドリアにある自身の豊富な図書館を充実させたいと考えていたほか、おそらくは、アレクサンドリアに長期滞在したために母国語を忘れかけていた多くのユダヤ人たちに恩恵を与えたいとも思っていたのだろう。　エルサレムには、神殿への豊かな献品を携えた使節団が派遣された。大祭司への書簡の中で、王は、自国の律法に精通した長老たちを派遣し、彼らが聖書を正確にギリシャ語に翻訳できるようにしてほしいと記した。　当時、大祭司はアドヤの孫であるエレアザルであった。彼はイスラエルの12部族からそれぞれ6人の長老を選び出し、最も精緻な聖書の写本――極めて薄い羊皮紙に金文字で記されたもの――を彼らに託して、アレクサンドリアへ送り出した。　そこで彼らは非常に好意的に迎えられた。ファロス島に家を提供され、そこで彼らは毎日午前9時まで、あるいは午後3時まで翻訳作業に励んだ。翻訳は70日で完了し、アレクサンドリアのユダヤ人たちの面前で朗読され、彼らによって承認された。　この聖書の翻訳こそが、「七十人（より正確には72人）の解釈者」、すなわち翻訳者たちによる翻訳と呼ばれており、現在でも東方正教会で使用されており、私たちの「スラブ語旧約聖書翻訳」はこの翻訳を基に作成されたものである。

シメオンもまた、同じ場所にやって来た。　永遠の御子と、その御子を産んだ無原罪の聖母をご覧になり、彼は、この方が約束されたメシアであり、この方がイザヤの預言が成就すべきであり、また成就した聖母であることを悟りました。　天の光に包まれ、神聖な光線を放つ彼女を見て、シメオンは畏敬と喜びの念を抱きながら彼女の元へ歩み寄り、神の御子[1592]を腕に抱き上げ、こう述べた。　*「主よ、今、あなたの御言葉どおり、あなたのしもべを平安のうちに去らせてください。私の目は、あなたがすべての民の目の前で備えてくださったあなたの救い、異邦人を照らす光、そしてあなたの民イスラエルの栄光を見たからです」*（ルカ2:29–32）[1593]。

その後、彼はキリストの受難と十字架の死、そして聖母マリアについて預言し、彼女が十字架に架けられた御子を見る時、その魂は悲しみと嘆きの剣に貫かれるだろうと語った（ルカ2:34–35）。

深き老齢に達したシメオンは、主のもとへ召された[1594]。彼については、わずか三百六十年生きたと記されている。それは、神が聖なる長老の命を延ばし、彼が、処女から生まれた「年老いない御子」――その御子に永遠の栄光あれ、アーメン――が誕生するという、世々待ち望まれた年を迎えることができるようにされたからである[1595]。

コンダク、第4声調：

今日、長老はこの儚き生という束縛から解き放たれ、創造主であり主であるキリストをその腕に抱きしめた。

預言者聖アンナの記念日

福音書に記されている聖預言者アンナは、聖シメオン・神受容者と共に神殿で主イエスに出会い、主こそが待ち望まれたメシア、すなわちキリストであることを宣べ伝えました[1596]。

[1592] そのため、聖シメオンは「神を受け入れる者」と呼ばれている。

[1593] 聖シメオン・神受容者の臨終の祈り「今、主よ、あなたのしもべを解き放たれ」は、毎日、教会での夕方の礼拝で唱えられています。これは、毎日の夕べが、すべての信者にとって、すなわち、やがて訪れる死を意味する、自らの人生の夕べを思い起こさせるためです。　聖なる長老シメオンは、肉の束縛から解き放たれ、世界の救い主である神の御子を抱きしめたとき、喜びをもってあの世へと旅立った。　このように、あらゆる信者は、臨終の瞬間に、キリストの御体と御血である聖なる賜物を心から聖体拝領した後、喜びをもってこの波乱に満ちた虚しい世を去っていくのである。

[1594] 聖シメオン・ボゴプリイムツの聖遺骨は、ユスティヌス2世（565～578年）の治世中にコンスタンティノープルへ移され、同皇帝によって建設されたハルコプラティオス教会の付属礼拝堂、主の兄弟である聖ヤコブの礼拝堂に安置された。12世紀のロシアの巡礼者であるノヴゴロドの大司教アントニーも、この地で聖シメオン・神受容者の聖棺を目撃している。

[1595] 神殿に運ばれてきた幼子イエスを腕に抱き、聖母マリアとヨセフを祝福した聖シメオンについて、多くの人は、かつて神殿に連れてこられた幼子イエスの母となるマリアを迎え入れたザカリアと同様に、彼がエルサレムの神殿の司祭であったと考えている。　このことについて、聖アタナシオス大聖人は『父と子の共通の本性』という書物の中で、聖キリロス・エルサレムスは「主の奉献」に関する説教の中で、聖エピファニオスは旧約聖書の父たちに関する教義の中で、その他多くの聖人たちが言及している。　福音書には、義人シメオンがどのような職位にあったかは記されていないが、聖教会の聖歌では、彼は「司祭」、「聖職者」、「聖職者」、「律法に則った犠牲を捧げた者」、「血の犠牲によってイスラエルの民を清めた者」と呼ばれている。　主の奉献の際（ルカ2:23–37）における聖シメオンの行動そのものも、彼が祭司であったことを示している。

[1596] ルカ2:36–38。――預言者聖アンナについての詳細は、『主の奉献の物語』を参照のこと

聖殉教者ブラシアの記念日[1597]

記念日：2月3日

聖ヴラシイは羊飼いで、カッパドキアのケサレア[1598] の出身であった。迫害が始まり、キリスト教徒が捜索されるようになると、ヴラシイもまたキリスト教徒として、周辺の至る所で追われた。このことを知った聖ヴラシイは、自ら進んで迫害者たちの手に身を委ね、彼らは彼を引き伸ばし、牛の腱で鞭打った。　しかし、神は彼の病を癒やし、傷を治してくださった。これを知った総督は、この奇跡を魔術だと決めつけ、あの拷問の後に聖人を沸騰した湯の入った大釜に投げ込むよう命じた。立ち会った者全員を恐怖に陥れたことに、殉教者は無傷のままであり、沸騰する湯の中でも周囲の人々と会話を交わしていた。それは、神の天使たちが現れ、殉教者を無傷のまま守ってくれたからである。　その後、統治者の命令により、殉教者を大釜から引きずり出すために兵士たちがやって来た。しかし、聖人が天使たちと共に歌っているのを見て、兵士たちは自らもキリスト教徒であることを告白した。このことを知った統治者は別の兵士たちを派遣したが、彼らもまた到着すると、自らをキリスト教徒だと名乗った。　その後、統治者自身がその場を訪れ、沸騰する湯の中にいる聖人を見た。湯が冷めたと思い込んだ統治者は、その湯で顔を洗ったが、たちまち顔を火傷し、そのせいで死んでしまった。数々の奇跡によって多くの人々をキリストへと導いた聖ブラジウスは、神に祈りを捧げ、その聖なる魂を神に委ねた。　その最期に立ち会った者たちは、聖人の遺体の上を鳩が飛んでいるのを見ました。また、ヴラシイの羊飼いの杖は、地面に突き立てられると、巨大な木へと成長し、その枝が、聖人の遺骨の上に建てられた教会の祭壇を覆いました[1599] 。

聖殉教者アドリアンとエヴヴルの記念日

記念日：2月3日

聖殉教者アドリアンとエヴヴルは、ヴァンニアの町[1600] の出身であった。キリストの証人たちに深い愛を抱いていた彼らは、ケサリアの町[1601] へと向かい、そこで彼らの言葉と清らかな生活ぶりから、彼らがキリスト教徒であることが知れ渡った。そのため、彼らは捕らえられ、地方長官フィルミリアヌスの裁判にかけられた。　同総督の命令により、彼らは肩や肋骨を殴打され、キリストを否定するよう強要するために、さらに残酷な拷問にさらされた。　しかし、彼らが信仰を揺るがせなかったため、フィルミリアヌスとその側近たちは激怒し、聖人たちを野獣の餌食にすることに決めた。まず、福者アドリアンが放り込まれた。ライオンに捕らえられた彼は、勇敢に戦いを挑んだが、その後、剣で首を刎ねられた。　一方、聖エヴヴルに対しては、さまざまな説得や誘惑をもって信仰の放棄を迫ろうとしたが、彼は断固として屈しなかったため、彼もまた野獣に投げ込まれた。彼もまた獅子と戦い、聖アドリアンと同様に剣で首を斬られて息を引き取った。

[1597] また、彼はギリシャ語の「βουκυλος（牧者）」に由来する「ヴコル」とも呼ばれている。
[1598] カッパドキアは小アジアの東部に位置し、ケサリアはカッパドキアの主要都市であった。
[1599] 聖殉教者ブラジスは3世紀に生き、その世を去った。
[1600] ヴァンニア、あるいはヴァンという都市は、現在同じ名称を持つ湖の東岸、アルメニアに位置していた。
[1601] ケサリアの町はパレスチナにあり、地中海の沿岸に位置していた。そこは、パレスチナ地方のローマ総督の居城であった。

聖なる信仰深いウグリチ公ロマン、奇跡行者の生涯[1602]

記念日：2月3日

聖なる信仰深いウグリチ公ロマンは、タタール族がロシアの地に侵攻した苦難の時代に生きた。彼は、第2代ウグリチ分領公ウラジーミル・コンスタンティノヴィチの次男であり、コンスタンチン・ヴェセヴォロドヴィチの孫であった。コンスタンチン・ヴェセヴォロドヴィチは、当初はロストフ、ヤロスラヴリ、ウグリチの分領公であり、後にウラジーミル大公となった[1603]。 ウラジーミル・コンスタンティノヴィチは、幼少期にウグリチェの領地、すなわちウグリチという町を分領として与えられた[1604]。フォティニア公女と結婚し、アンドレイとロマンの2人の息子をもうけた[1605]。

ウグリチでウラジーミルが統治していた頃、ロシアの地、そしてウグリチにも恐ろしい嵐が吹き荒れた。バトゥイは、モスクワとウラジーミルを荒廃させ、そこで大公の一族を虐殺した後、ヴォルガ川を越えて進軍した。そこへ、大公ユーリー・ヴセヴォロドヴィチは軍勢を集めて退避していた。 その道中、タタール人は遭遇したすべての都市を支配下に置き、服従を拒んだ都市は荒廃させ、住民を虐殺した。明白かつ避けがたい危険に直面し、ウグリチの公ウラジーミルは、無益な抵抗をするのではなく、タタール人への服従を示すことで都市と住民を救うことを決意した。 とはいえ、彼自身は家族と共に恥を被ることを望まず、北方のノヴゴロドの領内へ退去して救いを求めた。 シティ川での不運な戦いの後、大公ユーリーが戦死したことで、ロシアの諸公は タタールの支配を認め、彼らに貢ぎ物を納めなければならなくなった。ウグリチ公もこの運命に従わざるを得ず、バトゥが南へ去った後、他の諸公と同様に、危険が去るとウグリチに戻り、もはやハンの配下として統治を行うようになった。 ウラジーミル公が、要求されていた通り、またすべての実権を持つ公たちがそうすべきであったように、ハーンへの服従を表明してオルドへ赴いたかどうかは定かではない。 詳細な伝記に記録された伝承によれば、ウラジーミルはオルドへは行かなかったが、責任を免れるためウグリチにも留まらず、他の都市を転々とし、1249年12月27日にウラジーミルで死去した。 その遺体は直ちに妻と子供たちによってウグリチへ移送され、プレオブラジェンスキー大聖堂に埋葬された。

[1602] 1605年、2月3日から、聖公爵ロマン・ウグリチスキーの聖遺物から奇跡が起こり始めた。パトリアルヒ・ヨブは直ちに、カザン都主教ヘルモゲン（後のパトリアルヒ）に、ウグリチで聖公爵の聖遺物を検分し、奇跡に関する情報を確認するよう命じた。 総主教ヨブの祝福のもと、ヴォエヴォダ・セミョン・ロマノヴィチ・オルフェリエフと、ペレヤスラフのダニロフ修道院の修道士セルギイが、聖公ローマンの『聖人伝』、『礼拝式』、および（1605年2月3日以降の）奇跡の記述を編纂した。 1609年にリトアニア軍によってウグリチ市が荒廃した後、この新たに執筆された伝記や、1605年2月3日から3月2日までの奇跡に関する記述は見つからなかった。3月2日以降の礼拝式と奇跡に関する記述のみが書き写された。 ウグリチ・プレオブラジェンスキー大聖堂に所蔵されている写本に基づき、聖ロマノ公の奇跡に関する記述は、『ヤロスラヴリ教区報』1873年号第46～48号および単行本として刊行された： 『聖なる信仰深い公爵ロマン、ウグリチの大奇跡行者に関する奇跡の物語』。ヤロスラヴリ。1874年。 礼拝式文および奇跡の伝承は、他にもいくつかの写本を通じて知られている。1605年に執筆された伝記が失われた後、18世紀にウグリチ・プレオブラジェンスキー大聖堂において、「最も古い年代記作者および信頼できる地理・歴史記述者」に基づいて、新たな詳細な伝記が編纂された。 18世紀の目録に基づき、この伝記は『ヤロスラヴリ教区報』1889年号第48～49号および単行本『聖なる信仰深い公爵ロマン・ウラジーミロヴィチ、ウグリチの奇跡行者の伝記』として刊行された。ヤロスラヴリ、1890年。 本稿において言及された『物語』および『伝記』の記述は、年代記やその他の資料による照合を経て検証されている。

[1603] コンスタンティンは、1185年に生まれた大公ヴセヴォロド3世・ユーリエヴィチ（通称「大巣」）の息子であった。1207年からロストフ、ヤロスラヴリ、ウグリチの分領公となり、1216年からはウラジーミル大公となり、1219年に死去した。

[1604] 彼は1214年頃に生まれた。

[1605] ウラジーミル公は1232年に結婚した。アンドレイ公は1233年に、ロマン公は1235年10月1日に生まれた。

敬虔なロマーン公の幼少期は、兄のアンドレイと同様、恐ろしい動乱と災難の中で過ごされ、ウグリチで両親と平穏に暮らすよりも、むしろ追放や放浪の生活の方が長かった。

ウラジーミルの死後、ウグリチ公位を継いだのは、わずか16歳だった長男のアンドレイであった。しかし、彼の傍には母親がおり、彼女が子供たちを導いていた。アンドレイは1261年に子供を残さずに死去し、ウグリチ公位は当時26歳だった弟のロマンに引き継がれた。

ウグリチ公ウラジーミル・コンスタンティノヴィチの敬虔な家庭で、恐ろしい動乱や試練の中で育ち、放浪の生活も長く送った公ロマンは、敬虔さを際立たせ、賑やかな生活や享楽にはあまり関心を示さなかった。　十分な教養を備えていた彼は、読書に励み、神の聖堂や聖職者、そして教会の礼拝を愛した。彼の統治下では、ウグリチおよびウグリチ公国全域に多くの教会が建設されたとされ、タタール支配という困難な時代において、可能な限り平和が保たれていた。　ロマノフ公の支配は、ウグリチ以外にも、カシン、ヴェジェツキー・ヴェルフ、ウスチュジュナ、ドミトロフ、ズヴェニゴロドといった他の都市にも及んでいた。また、ボリソグレブスカヤの集落の対岸、ヴォルガ川の左岸の高台に、新しい都市「ロマノヴォ」を建設したのも彼である。

ロマーン公は慈善活動に熱心で、施し所や旅人宿の整備に尽力した。

1265年、ロマーン公はアレクサンドラ王女と結婚したが、子には恵まれなかった。ウグリチには、敬虔な母であるフォティニア公妃が彼と共に暮らしていたが、彼女は晩年にエウドキアという名で修道女となり、1278年に死去し、ウグリチで夫の傍らに埋葬された。　1281年、ロマーン公は妻のアレクサンドラも亡くし、残りの生涯を孤独に過ごし、敬虔な行いと功績に専念した。1285年2月3日、彼を愛し敬っていた臣民や親族の諸公たちの深い悲しみの中、彼は安らかにこの世を去った。　ロマーン公の遺体は、主の変容大聖堂に、父、母、兄弟、そして妻の墓の隣に安置された。

ロマーン公の死去からちょうど200年後、すなわち1485年、ウグリチ公アンドレイ・ヴァシリエヴィチ[1606]は、ウグリチ市の要塞内に、新たな石造りの主の変容大聖堂の建設に着手した。 新しい聖堂の基礎となる堀を掘っていた際、神はアンドレイ公に、ロマノ公の朽ちることのない聖遺骨を発見する恵みを与えられた。それらはその後、新しく建てられた聖堂に安置され、120年以上にわたり無傷のままそこに安置されていた。この朽ちることのない聖遺骨からは、様々な病気に対する数多くの奇跡的な治癒がもたらされた。　ウグリチおよび周辺地域の住民たちは、聖公の聖遺物を敬虔に崇敬していたが、教会当局からの公式な認定はなかった。

16世紀末から17世紀初頭にかけて、ウグリチでツァレヴィチ・ドミトリーが殺害された後、聖公ローマンの聖遺物に集まる病人の奇跡的な治癒が特に頻繁に起こるようになった。　これらの奇跡の評判は至る所に広まり、総主教ヨブはカザン都主教ゲルモゲンに、現地で聖遺物と奇跡に関する伝承を調査するよう命じた。　この調査の後、至聖なるイオヴ総主教は、聖ロマンの『聖人伝』、ステヒラ、カノン、ならびに1605年2月3日以降の奇跡の記述を編纂することを祝福した[1607]。

1609年、ウグリチ市は、当時のルーシ全土と同様に、リトアニアによる荒廃という大惨事に襲われた。ウグリチ市は陥落し、多くの住民が殺害され、家屋、要塞、そして神殿は略奪され、焼き払われた。　敵はプレオブラジェンスキー大聖堂にも乱入し、略奪を行い、多くのものを焼き払ったが、特にそこに安置されていた聖公ロマンの聖遺骨を標的にした。　聖ロマンを敬う敬虔な信者たちは、その聖遺物である頭、肋骨、手、足といった焼け焦げた骨を集め、新しい聖遺物箱に納め、再びプ

[1606] アンドレイ・ヴァシリエヴィチは、大公ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・テムヌイの息子であり、大公イオアンヌ・ヴァシリエヴィチ3世の兄弟で、1462年からウグリチで統治した。1422年にイオアンヌ3世によってペレヤスラヴリに幽閉され、そこで1494年に死去した。

[1607] 聖ロマンの伝記と彼の最初の奇跡に関する記述は、リトアニアによる略奪の際に失われた。聖ロマンへの礼拝式とともに現存しているのは、同年1605年3月2日以降の、彼の聖遺物による奇跡の記述のみである。

レオブラジェンスキー大聖堂に安置した。そこでは現在に至るまで、それらの聖遺物が安置されている。

聖預言者アザリヤの記念日。

記念日：2月3日

聖アザリヤはオデドの子であり、ユダ王アサの時代に預言を行った[1608] 。アサがエチオピア王ザライに輝かしい勝利を収めた際、アザリヤは神の御霊に満たされ、王と民に対し、偶像崇拝を捨てて真の神に忠実に仕えるよう説得した。　アザリヤの預言に心を動かされた王と民は、ユダとベニヤミンの全土から偶像を排除した。　そのとき、多くのイスラエル人もまた真の神に立ち返り、エルサレムに集まって神と契約を結び、決して神から離れないという誓いを立てた。そして神は、彼らに長きにわたる平和を授けられた[1609] 。

聖殉教者パピウス、ディオドロス、クラウディアヌスの殉教

記念日：2月3日

聖殉教者パピウス、ディオドール、クラウディアンは、デキウス帝の治世中[1610] 、パンフィリアの都市アッタリア[1611] で殉教した。彼らは故郷で家畜の群れを放牧しながら、キリスト教徒として異教徒の間でキリストへの信仰を広めていた。　その結果、彼らに対する告発がなされ、地方長官パヴリヌスの命令により、彼らは捕らえられ、裁判のために彼の元へ連行された。尋問の際、彼らは恐れを知らずにキリストを真の神であると告白し、キリストを堅く信じ、キリストこそが天と地、そしてそこに存在するすべてのものの創造主であり、キリスト以外に神はいないと述べた。　これを聞いた地方総督は激怒し、聖人たちに様々な拷問を加えるよう命じた。しかし、それによって彼らをキリストへの信仰を放棄させることはできなかったため、剣で首を刎ねるよう命じた。こうして、聖なる殉教者たちはキリストのために命を落とし、キリストから殉教の冠を授かった。　キリスト教徒たちは、私たちの神であるキリストの栄光のために、彼らの遺体を尊厳をもって葬った。

2月17日

2月4日（旧暦）

同日は、聖なる信仰の偉大なる大公ゲオルギー・ヴェセヴォロドヴィチ（[1612] ）の記念日である。

[1608] キリスト降誕前の10世紀。

[1609] 預言者アザリヤに関する記述は、歴代誌第二15章1節～19節にある。

[1610] デキウス皇帝は、ローマ帝国におけるキリスト教の完全な根絶を目的とした、最も残虐なキリスト教迫害者の一人であった。彼は249年から251年までの2年間在位した。

[1611] パンフィリアは小アジアの南部、地中海沿岸に位置していた。北はピシディア、西はリキア、東はキリキアと接していた。アッタリア（現在のアダリア）は、この地方の港湾都市であり、地方総督の居城でもあった。

[1612] 1238年3月4日、シティ川でのタタール人との戦いで戦死した。その聖遺骨はウラジーミル大聖堂に安置されている。

尊い父イシドール・ピルシオツキーの記念日

2月4日の記念日

尊者イシドールはアレクサンドリアの出身であった[1613] 。彼は高貴で敬虔な両親の息子であり、アレクサンドリアの大司教テオフィロスおよびテオフィロスの後継者である聖キリルの親族であった。世俗の学問を立派に修め、神の知恵に熟達した後、イシドールは神への奉仕に身を捧げたいと願った。 若くして、彼はこの世の栄光と富を捨て、自身の高貴な生い立ちを軽んじ、すべてをあたかも塵のように見なして、ピルシオトス山[1614] へと向かった。そこで修道者となり、厳格な修道生活を送った[1615] 。イシドールの霊的な知恵と厳格な生活は、多くの敬虔な人々を彼のもとに集め、彼らは彼を修道院長および司祭に選出した[1616] 。厳格な修行と高い教養により、尊者イシドールは多大な尊敬を集め、司教や貴族だけでなく、皇帝自身やアレクサンドリアの総主教たちまでもが彼に助言や指導を求め、彼はすべての人から深く敬愛されていた。

教会史家エヴァグリオス[1617] は、イシドールについて次のように回想している。「テオドシウス帝の治世[1618] 、ピルシオスのイシドールは多大な敬意を払われていた。彼は徳高く教訓に富む人物として、その名声は広く遠くまで知れ渡り、その名は万人の口によって称えられていた。 彼は修行によって肉体を極限まで消耗させたため、その生涯は、すべての人にとって地上の天使のようなものに見えた。彼は修道生活と神への思索の生きた模範となり、他者を導くために極めて有益な多くの著作を残した」。

歴史家ニキフォロス（[1619] ）は、イシドールの徳高い生涯について証言し、次のように述べている。「神聖なるイシドールは、若き日から修道生活の労苦に多大な汗を流し、神秘的で高尚な教えによって魂を温めつつ、自らの肉体を厳しく律したため、すべての人々の目には、福音的な生活様式を完全な完璧さをもって実践しているように映った。 彼は、修道規則と神聖な啓示の、生きた、魂を宿した支柱であり、いわば、最も熱烈に模範とすべき最高の手本であり、霊的な教えそのものであった。イシドールは、多種多様で有益な教訓を数多く著した。 彼の死後、神の恵みと人間の知恵に満ちた、様々な人物への一万通にも及ぶ書簡が残され、その中で彼は聖書全体を解説し、人々の道徳を正している」。

[1613] *アレクサンドリア*は、エジプト北部、ナイル川の河口に位置する都市であり、紀元前331年にアレクサンドロス大王によって建設された。かつては異教の学問の中心地であり、世界初の商業都市であった。 4世紀初頭には、キリスト教教育の中心地となり、総主教の居城となった。現在、アレクサンドリアは地中海沿岸で最も要塞化された港の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられている。

[1614] *ピルシオトス山*は、下エジプトのナイル川近くにあった。*ピルシア*、あるいは*ペルザ*は、エジプト北部の都市の一つである。

[1615] ここで深い隠遁生活を送りながら、イシドールは熱心に修道生活の修行に打ち込んだ。彼は粗い毛皮の服を身にまとい、根菜や草のみを糧としていた。ここから、聖イシドールは聖ヨハネス・クロソストモスに会い、その説教を聞くためにコンスタンティノープルへと旅立った。 イシドールが金口聖ヨハネのもとで目にしたもの、耳にしたもの、そしてその著作は、その後の人生においても、彼にとって注意深く研究し、驚嘆すべき対象であり続けた。その結果、金口聖ヨハネの明晰な知性、素朴さ、そして熱意はイシドール自身のものとなり、彼のあらゆる行動に刻み込まれたのである。 ピルシオトスの修道院に戻った後も、彼は修道者としての生活を続け、偽善者や悪行者を非難することを躊躇しなかった。自らが属する司教に対しては、聖職の地位に価格を付けたことを、また世俗の権力者たちに対しては、偏見を抱いていることを非難した。

[1616] 質素な服装、沈黙の保持、質素な食事、貧しい人々への慈善――これこそが、聖イシドールが修道兄弟たちに説き、自らの生き様によって体現した規則であった。

[1617] *エヴァグリオス*は、6世紀の教会史家である。

[1618] *テオドシウス2世*（若きテオドシウス）は、テオドシウス大帝の孫であり、408年から450年までビザンツ帝国の皇帝であった。

[1619] 14世紀に生きたニキフォロス・カリストスは、『教会史』を著した。

これらの証言から、尊者イシドールがいかに偉大な神の御心にかなう者であったかがはっきりと見て取れる。彼の生涯を詳細に記した伝記は現存していないが、歴史家たちの簡潔な記述だけでも、彼の聖性と英知を窺い知るには十分である。なぜなら、彼はすべての人にとって徳ある生活の模範であり、その神に導かれた著作によって全世界を満たしたからである。　彼は、不当に司教の座を剥奪された聖ヨハネス・クロイスストモスの偉大な擁護者となり、アレクサンドリアの大司教テオフィロスや皇帝アルカディウス[1620]に対し、その悪行を止めるよう諭す多くの書簡を送った。成功には至らなかったものの、彼らの悪意と不正を暴き出したのである。　また、金口ヨハネの死後、彼は書簡を通じて、テオフィロスの後継者であるアレクサンドリアの聖キリロス（　）を説得し、真理のために悪人たちに多大な苦難を強いられた偉大な殉教者として、ヨハネの名を教会のディプティク（[1621]）に記すよう促した。

また、テオドシウス皇帝にも書簡を送り、教会の平和を重んじるよう諭した。　そして、邪悪な異端者たちに対抗するため、エフェソスで第三回全地公会議を招集するよう彼を促した[1622]。というのも、彼自身、敬虔さの偉大な擁護者であり、異端者に対する強力な敵対者であり、正統な信仰のために苦しみ、死ぬ覚悟があったからである。これは彼の言葉からも明らかである。ある中傷者フェラシウスへの書簡の中で、彼は次のように述べている。

「私たちを嘲笑し、私たちに対してこれほど機知に富み、厳格な裁判官であるかのように振る舞うあなたに問いたい。　もし王が、都市の城壁の上にあなたを配置し、都市を見張り、守るよう命じたとして、敵が都市に侵入しやすくするために城壁を掘り崩し、破壊しているのを目撃したなら――あなたはあらゆる兵器や武器を用いて抵抗し、城壁の破壊を阻止し、敵の侵入を許さなかったのではないか。　もちろん、あなたはそうするだろう。それは、敵から都市と自分自身を守り、王への忠誠と熱心な服従を示すためである。　神が御自身の教会において教師として立てられた私たちもまた、キリストの群れに対して戦いを挑んだだけでなく、多くの人々を滅ぼしてしまったアリウス[1623]に、断固として立ち向かうべきではないでしょうか。この大義のためにあらゆる苦難に耐えることは、私にとっては何でもないことだと考えています。そして、真の信仰のためにあらゆる苦難を耐え抜くことほど、私が切に願うものはありません」。

この聖人の言葉からは、敬虔さに対する彼の熱意がはっきりと見て取れる。しかし、彼の書簡からは、その他の美徳についても知ることができる。

イシドール自身が厳格に守っていた貞操を、彼は他の美徳よりも特に称賛し、それを「誰もが敬うべき女王」と呼んでいるが、誠実な結婚生活を軽んじているわけではない。　スコラ学者のアントニウスへの書簡の中で、彼は次のように述べている。「貞潔を守る者は太陽に、清らかに未亡人として生きる者は月に、そして誠実に夫婦生活を送る者は星に喩えるべきである。これは、聖使徒パウ

[1620] *アルカディウスは*、テオドシウス大帝の息子であり後継者であり、395年から408年まで在位した。

[1621] *ディプティク*（ギリシャ語の「二度」と「折りたたむ」に由来）とは、2枚の板のことで、一方には生者の名前が、もう一方には故人の名前が記されていた。　ロシアでは「シノディク」あるいは単に「追悼名簿」や「追悼記録」と呼ばれている。初期の教会において、キリスト教徒は教会のディプティクに名を記されることを名誉とみなしていたが、逆に、その名がディプティクに記載されていない、あるいは削除された人々にとっては、それは不名誉なことだった。

[1622] *第3回全地公会議は*、431年にネストリウスの異端をめぐって招集された。 コンスタンティノープル総主教ネストリウスは、イエス・キリストの御人格に関する誤った教えによって教会を混乱させ、受肉そのものにおいて神性が人性と結合していないと主張し、それゆえにキリストを「神を宿す者」とは呼んでも「神人」とは呼ばず、また聖母マリアを「キリストの母」とは呼んでも「神の母」とは呼ばなかった。　ネストリウスとその教えを異端として断罪し、第三回全地公会議の教父たちは、私たちの主イエス・キリストにおいて一つの位格と二つの本性を告白すべきであり、またその清き母を、唯一の永遠の処女であり真の神の母として称えるべきであるという正統な教義を厳粛に確認した。

[1623] *アリウス*（4世紀初頭に活躍）は、その不敬虔な教義によって神の御子を貶め、御子を「神が全世界を創造された最高位の被造物」と呼んだ。この異端は第1回全地公会議で断罪された。

ロが次のように述べているのと同様である。 *『太陽の栄光は太陽のそれであり、月の栄光は月のそれであり、星の栄光は星のそれである。また、星と星とでは栄光が異なる』*（Iコリント15:41）。世俗の学問に熱中する人々に対しては、雄弁さよりも徳のある生活を学ぶよう諭している。 あるパトリドゥという修道士への手紙の中で、彼は次のように述べています。「あなたについては、優れた知性と天賦の才を持ち、雄弁になるために熱心に修辞学を学んでいると聞いている。しかし、霊的生活の道を無事に歩むことができるのは、雄弁さによってではなく、善行を行うことによってのみである。 それゆえ、もしあなたが不滅の報いを得たいと望むなら、雄弁さを気にするのではなく、善行を熱心に実践することに努めなさい」と述べている。

これと同様に、イシドールはアポロニウス司教に次のように書いている。 「自由意志を持って創造され、自らの意思を示さず、抵抗する人々を、強制によって敬虔へと導くことは不適切であり、またすべきことではない。それゆえ、あなたは、闇の中にいる人々を、善き教え、善き生活、そして善き品行によって啓発することに心を配らなければならない」。

この聖人はまた、徳ある人は自分の善行を誇ってはならず、謙虚に自分自身を捉えるべきであると説いている。 「一つの美徳を持つ者は、明るい冠を戴く。しかし、多くの美徳を成し遂げながらも、自分はまだわずかな善しか行っていないと考える者は、そのような謙虚な自己認識によって、より輝かしい冠を戴くことになる。 徳行において、自分の中で『成し遂げたことはわずかだ』と考えることそのものが、実際に成し遂げた徳行そのものと同じくらい称賛に値する。しかし、真実を言えば： 謙虚な思いを抱き続ける者には、その美徳もより輝かしいものとなる。しかし、その思いを持たない者には、その輝かしい美徳も曇り、偉大な も色あせてしまう。それゆえ、自らの美徳を偉大なものにしたいと願う者は、それを偉大だとは思わないようにすべきである。そうすれば、それらは実際に偉大なものとなるだろう」。

このように他者を教えつつ、聖イシドールは誰よりも先に、自らその教えを実践していた。この点において、彼はまず自ら実践し、その後に教えた主を模範としていた。 イシドールは自らの善行を誇ることなく、謙虚に振る舞った。そして、その謙虚さには貞潔も結びついており、それはまるで、キリストの善き軛を引く、共に働く二頭の牛のようであった。

聖イシドールの貞潔さは、エレノポリスの司教パラディオスへの書簡[1624] に見て取れる。その中で彼は、女性との会話を厳格に避けるよう繰り返し説いている。「『もし、ある会話が、 ――聖書にはこう記されている――『善き品性を損なう』（Iコリント15:33）とすれば、それはまさに女性との会話のことである。たとえそれが節度あるものであったとしても、それは邪悪な思いを通じて内なる人を密かに蝕む可能性があるからだ。たとえ肉体が清らかであり続けたとしても、魂は汚されてしまうのである。 それゆえ、尊者イシドールは、口頭での対話を通じて女性たちに有益な教えを授けることを常としていた――そして、自分の中にいかなる欲望も感じないと自負していた――この司教に助言を寄せている。 「善良な人よ、できる限り女性との対話を避けるがよい」と彼は記している。「なぜなら、聖職の位にある者は、山や荒野に住む者たちよりも、より聖く、より清らかでなければならないからだ。 前者は自分自身と民の両方を顧みるが、後者はただ自分自身のことだけを考える。さらに、前者はそのような名誉の高みに置かれているため、誰もが彼らの生活を詮索し、吟味するが、後者は洞窟に住み、傷を癒やしたり、自分の欠点を省みたり、あるいは自ら冠を編んだりし

1624 *パラディオス・ヘレノポリス*（368–430年）は、聖ドロフェイの弟子であり、ガリア出身であった。388年にアレクサンドリアに到着し、その後、聖ドロフェイも修行していた近隣の荒野へと退き、やがてベツレヘムに移住した。 399年、小アジアのビフィニアにあるエレノポリスの司教に選出された。その後、皇帝アルカディウスは、彼を聖ヨハネス・クラウディオス（金口）の支持者であるとしてアンティノイへ追放したが、412年にエレノポリスの司教座へ復帰した。 カッパドキアの総督ラウスの要請により、420年に彼は聖人伝と彼らに関する伝承をまとめた書物を編纂し、ラウスの名にちなんでこれを『ラウサイコス』と名付けた。この書物の教訓的かつ啓発的な価値を考慮し、教会の規定により、四旬節の早課においてその朗読が定められている。

て過ごしている。　もしやむを得ず女性たちと顔を合わせることになれば、目を伏せ、そして訪れた相手には、慎み深い視線を保つよう教えなさい。　そして、彼女たちの魂を確固たるものにし、啓発するのに十分な短い会話の後、すぐに素早く立ち去りなさい。長時間の面会によって、あなたの力が緩んだり乱されたりしないように。また、威厳ある雄大な獅子であるあなたを支配し、獅子を真の獅子たらしめ、その王者の威厳を守るたてがみを刈り取られないようにするためである。　もし女性たちから尊敬されたいと望むなら（そしてこれについては、特に霊的な夫が気を配るべきである）、彼女たちと親密な関係を結んではならない。そうすれば、あなたは彼女たちから敬われるだろう。なぜなら、それを最も求めない時にこそ、それが最も可能になるからである。　人は通常、自分に仕える者を軽んじ、お世辞を言わない者を畏敬するものだ。そして、この欠点に最も陥りやすいのが、女性の性質である。女性は、お世辞を言われると耐え難いほど嫌がるが、自分に対して気さくかつ威厳を持って振る舞う者に対しては、何よりも畏敬の念を抱き、驚嘆するのだ。　しかし、あなたは女性たちと長時間の会話を交わしても、何の害も受けていないと言う。そうかもしれない。だが、水は石を穿ち、絶え間なく降り注ぐ雨粒が石を貫くことは、誰にでも知られている。水と水滴のどちらがより柔らかいのか、考えてみてほしい。　しかし、その絶え間ない作用は、自然の摂理さえも打ち破る。もし、ほとんど打ち破ることのできない物質さえも打ち破られ、それと比較すれば取るに足らないようなものによってさえ、苦しめられ、弱められてしまうのであれば、容易に揺らぐ人間の意志が、長期間にわたる影響によって打ち負かされ、堕落しないはずがあるだろうか？」

このようにパラディオ司教を諭すことで、聖イシドールは私たちすべてに対しても、貞潔な生活を送るよう教え、単に肉体を肉欲の堕落から守るだけでなく、魂をも罪深い思いから清く保つよう促している。

聖イシドールは、その著作の中にあらゆる美徳に関する多くの教えを残し、口頭での説教を通じてすべての人々にこれらの美徳を教え、長寿を全うし、神に喜ばれ、安らかにこの世を去りました[1625]。

コンダク、第4声：

教会は、あなたの言葉の稲妻に照らされ、もう一つの輝かしい夜明けを見出し、あなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、至福の神の知恵あるイシドールよ。」

我らの尊き父、ニコラオス・イスポヴェドニク、ストゥディオス修道院のイグメノスの生涯

記念日：2月4日

[1625] 聖イシドールは436年頃に逝去した。聖イシドールは、その著作から見て、教会の偉大な教父の一人であった。彼の著作は書簡から成っている。 その数は、伝えられるところによれば1万通にも及んだが、現在では2090通を超えない。同時代の人々は、聖イシドールを聖書の*熟練した解釈者と見なし*、聖書の様々な箇所について彼に解説を求めた。　イシドールは、手紙を通じて同時代の人々の願いに応えていた。そのような内容の手紙は3,000通にも及んだ。現在知られている聖イシドールの手紙の大部分は、聖書の解説を含んでおり、そこでは聖イシドールが聖ヨハネス・クロソストモスの最良の弟子としての姿を見せている。　聖イシドールの教義に関する書簡はそれほど多くない。しかし、聖ヨハネス・クロソストモスと同様に、彼は実践的な指導者であった。*「実践的哲学は、彼の言葉によれば、建物の基礎であり建物そのものであり、論理学は装飾であり、観想は冠である」。「徳とは、魂の調和である」。*

私たちの尊い父ニコライは、[1626] 、クレタ島[1627] のキドニアと呼ばれる村で生まれた。そこは、クレタ島で十人の殉教者の一人として殉教した聖殉教者ヴァシリドの出身地でもあった。祝福されたニコライの両親はキリスト教徒であった。　幼少の頃、彼は神の御言葉を学ぶために預けられました。少年が10歳になり、聖書の読解に十分な習熟を見せた頃、両親は彼をコンスタンティノープルにいる叔父、すなわちストゥディオス修道院[1628] の修道士であった至福のテオファンのもとへ送り出しました。　テオファンは甥を温かく迎え入れ、彼をスタディオス修道院のイグメン、尊者テオドロスの元へ連れて行った。　聖テオドロスは、この少年が神に選ばれた器となることを予見し、彼に祝福を与え、当面の間、修道院の外にある、少年たちのための学校が置かれた特別な建物に留まるよう命じた。　やがてニコライが成人すると、修道院長は彼の分別ある態度、そして穏やかで謙虚な人柄を見て、彼を修道院の内部に移し、修道士としての戒律を授けた。修道院で数年間、徳のある生活を送った後、修道院長はニコライに司祭職も受けるよう促した。　そこへ、スタウディオス修道院に、ニコライの実の弟であるティトもやって来た。彼は、サラセン人によるクレタ島への襲撃（[1629] ）の後、島から逃れてきて、両親が捕虜として連れ去られたという悲しい知らせを兄に伝えた。　ティトスは深い悲しみと涙を流しながら、この知らせを兄に伝えた。ニコライはこれほど悲痛な知らせを受け、両親のことを思うと胸が痛んだものの、兄を慰めようと努め、悲しむなと諭した。

「それは神の御心だったのだ」と彼は兄に言った。「神の御心なしには、頭の一本の髪さえも落ちないのだから（マタイ10:30、　ルカ12:7）。神は、人の益となることをご存知だ。だから、私たちの悲しみと両親への思いやりを神に委ねよう。私たち自身は、　肉の欲望やこの世の誘惑に囚われないよう、また、目に見えない敵の手によって、闇と絶え間ない暗闇の地へと連れ去られないよう、自ら気を配らなければならない。

ティトスは兄弟のこの言葉に心を打たれ、慰められ、彼の勧めに応じて修道衣をまとい、自らも善良な修道士となった。

当時、善良な牧者たちによって導かれていたキリストの教会は、平和と静寂の中にあったが、その平穏は、異端の偶像破壊者たちによって引き起こされた騒動の嵐によって突然乱された。その先

[1626] 793年

[1627] *クレタ島（別名カンディア）は*、地中海の東部に位置している。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「諸島の女王」と呼ばれていた。　この地におけるキリスト教は、使徒たちの時代にはすでに始まっていた。その最初の礎は、聖霊が使徒たちの上に降臨した出来事の目撃者たちによって築かれたものであり、その場にクレタ人も同席していたからである（使徒行伝2:11）。　その後、使徒パウロによってこの地でキリスト教は確立され、広められました。これは、パウロがクレタでティトを司教に任命したことに言及している『テトスへの手紙』（テトス1:5）からも明らかです。17世紀、クレタ島はトルコ人の支配下に入りました。

[1628] *ストゥディオス修道院は*、コンスタンティノープルで最も古く、最も著名な修道院の一つである。この修道院は（聖ヨハネ・バプティスタの名を冠して）、コンスタンティヌス大帝の治世下でローマからコンスタンティノープルに移住した貴族ストゥディオスによって建立された。彼の名にちなんで、この修道院は「ストゥディオス」という名称を得た。この修道院では、コプロニモス帝の治世に至るまで、修道士たちが「不眠者」の規則を守りながら暮らしていた。（これらの修道士たちは、三つのグループに分かれて教会で絶え間ない礼拝を続けていたことから、「不眠者」と呼ばれていた）。　しかし、不義なコプロニムは、偶像破壊運動によって神の教会を騒乱に陥れ、ビザンティウムからすべての修道士を追放したため、ストゥディオス修道院は荒廃してしまった。コプロニムの後、修道士たちは再びストゥディオス教会のそばで暮らすようになったが、その数はわずかであった。　スタディオス修道院は、コンスタンティノープル陥落までの存続期間を通じて、その休むことなく勇敢な修道士たちが国家と教会に尽くした功績、とりわけ聖像破壊運動の時代にスタディオスの修道士たちがキリストの勇敢な戦士としての姿を示したことから、並外れた名声と特権を享受していた。何世紀にもわたって名声を博してきたストゥディオス修道院は、現在では廃墟と化している。修道院自体はイスラム教の隠遁所となり、教会はイスラム教のモスクへと変貌してしまった。

[1629] *サラセン人*とは、アラビアの住民のことである。当初、この名称は遊牧する盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの名称を、アラブ人およびイスラム教徒全般に広げて用いるようになった。

頭に立ったのは、不敬虔な王レフ・アルメニア人であった[1630]。レフ・アルメニア人は、敬虔な王ミハイル（ランガヴと呼ばれた）[1631]の治世下で、パトリキウス[1632]であったが、狡猾な手段を用いてミハイルを王位から追放し、自らその座に就いた。この目的のために、彼はギリシャ人とブルガリア人の間の戦争を利用した。　王は出陣に際し、東部部隊の指揮官としてレフを任命したが、彼が欺瞞によって王位を奪おうとしているとは微塵も疑っていなかった。戦いが始まると、ギリシャ軍は優勢となり、ブルガリア軍は敗走しようとしていた。　しかし、レフは、自ら賄賂を贈って買収した将校たちと事前に取り決めをしておき、誰も追撃していないにもかかわらず、突然、自軍を撤退させた。ブルガリア軍は、理由もなく撤退するギリシャ軍を見て、最初は彼らの策略を疑ったが、その後、ギリシャ軍が逃げ続けるのを見て勇気づけられ、彼らに襲いかかって長く追撃し、多数のギリシャ兵を殲滅したため、ミハイル王は完全な敗北を喫した。　レウスは目的を達成した。というのも、軍勢も民衆も、王を臆病で気弱であり、戦いを指揮する術を知らない者と見なしたからである。彼は、王に対する民衆と軍勢のこうした気運を、急いで利用した。ミカイルは敗北後、コンスタンティノープルへ戻った。一方、レウスは国境防衛のため、軍を率いてビフィニアに留まり（[1633]）、直ちに王に対するかねてから企てていた悪意ある計画の実行に着手した。彼は、ギリシャ軍が敗北したのは、王の臆病さと軍事面での完全な未熟さだけが原因であるという噂を流した。　これにより、彼は全軍をミハイルに対して扇動し、軍はミハイルを王として認めることを拒否し、レフ自身を王として擁立した。　レフのこうした行動に関する噂がミハイルの耳に入ったとき、皇帝は周囲の助言にもかかわらず、彼に対抗することを拒んだ。そして、「自分のために、内戦においてキリスト教徒の血がたった一滴でも流されることを望まない」と述べた。　彼は他の人々に内緒で、レフに王冠と紫の法衣を送り、こう告げた。「私は王位を君に譲る。恐れることなくコンスタンティノープルに来て、統治せよ」。

しかし、レウスは、これほど謙虚に王位を譲ったミハイルに対して、極めて残酷な仕打ちをした。大々的な盛況のうちにコンスタンティノープルに入城すると、彼は直ちにミハイルとその妻をある島に幽閉し、二人の息子テオフィラクトとイグナティオスには去勢を命じた。

即位からしばらくして、不敬虔なレウスは、キリスト神ご自身と、その聖なる教会に対しても反旗を翻した。彼は聖像崇拝に反対する不敬虔な公会議を招集し、神の聖堂から聖なる聖像を投げ捨てるよう命じた。　至聖なるニキフォロス総主教は、敬虔な司教や大修道院長、そして神に導かれたすべての長老たちと共に、王のこのような不敬虔な行いに立ち向かい、キリストの教会を異端によって傷つけたり混乱させたりしないよう、彼を諭した。　しかし、不敬虔な王は、敬虔な集会が行われていた宮殿から彼ら全員を不名誉な形で追い出し、各地へ流刑に処した。

聖テオドロス・ストゥディオスとその弟子である至福のニコライは、邪悪な皇帝レオの手によってとりわけ多くの苦難を強いられた。というのも、彼らは皇帝の邪悪な行いに特に強く、かつ勇敢に抵抗したからである。当初、二人は共に皇帝によってアポロニアドス湖近くのメトポ要塞（[1634]）へ流刑に処された。　そこで丸一年、牢獄に閉じ込められていたにもかかわらず、彼らは聖像崇敬に関する真の教えを説き続け、多くの人々を異端から遠ざけることに成功した。これを耳にした王は、

1630 *レウ5世*（*アルメニア人*）――ビザンツ皇帝――は、偶像破壊派であり、813年から820年まで在位した。

1631 *ミハイル1世*・ランガヴ――ビザンツ皇帝――は、811年から813年まで在位した。

1632 ローマ帝国および東ローマ（ビザンツ）帝国において、*「パトリキウス」*とは、我々の貴族階級に相当する最高階級の者を指す呼称であった。

1633 *ビフィニア*は、小アジア北西部の州で、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に位置している。14世紀、ビフィニアはトルコ人の支配下に入り、現在もその支配下にある。

1634 この湖は、イリュリアの古代都市*アポロニア*の近くに位置している。*メソパ*または*メトパ*は、アポロニアの要塞である。

彼らを東方の国々、ヴォニタという町[1635]へと追放した。そこで彼らは再びの牢獄に投獄され、王の命令により最も厳重な監視下に置かれたため、誰も彼らに面会することはできず、誰とも会話することもできなかった。しかし、殉教者たちは、口頭で人々に敬虔さを教えることができない代わりに、書面を通じて自らの教えを説いた。　彼らは牢獄から信者たちへ書簡を送り、それによって、あたかも轟くラッパのように、異端の教えをエリコの城壁のように打ち砕き、異端者たちによって破壊されつつあった敬虔の教義を正し、回復させた。　このことを知った王は、彼らを懲罰するため、アナスタシウスという名の残忍な戦士を派遣した。アナスタシウスは現場に到着すると、殉教者たちに残酷な拷問を加え、殴打によって恐ろしい傷を負わせ、その傷によって彼らの体は引き裂かれてしまった。　帰路につく際、拷問者は再び聖人たちを牢獄に閉じ込め、入り口を完全に封鎖して、彼らを飢え死にさせるよう命じた。　聖なる囚人たちは、恐ろしい傷に加え、飢えと渇きからも凄まじい苦痛を味わわなければならなかった。というのも、看守はごくわずかな量のパンと水しか与えず――それも3、4日おき、時には7日おきに――しかも、罵声や嘲笑を浴びせながら窓から食べ物を投げ込んでいたからである。 囚人たちはこの監禁状態で3年間を過ごした。しかし、囚人たちの体の傷がまだ十分に癒える間もなく、彼らは皇帝から派遣された新たな拷問者によって、さらに恐ろしい苦痛を味わわなければならなかった。この使者は、傍受されて皇帝のもとに届けられた手紙について調査するためにやって来たのである。　その手紙は、テオドールに代わって、聖ニコライの手によって正教徒たちに向けて書かれたものであった。この書簡には、王の悪政と、魂を滅ぼす偶像破壊の異端に対する最も厳しい非難が込められており、同時に、敬虔さに関する素晴らしく教訓的な訓示も含まれていた。大使は牢獄から囚人たちを呼び出し、その手紙を見せ、「これが自分たちのものだと認めるか」と尋ねた。それに対し、殉教者たちは公然と、「尊者テオドロスが口述し、至福のニコライが自らの手で書いたものである」と答えた。すると、激怒した大使は囚人たちの拷問を始めた。まず、彼は至福のニコライに手をかけた。　拷問者の命令により、ニコライの衣服は引き剥がされ、裸にされた彼は地面に横たえられ、長い間殴打された。半死半生の状態になったニコライを放置すると、拷問者はテオドールへの拷問を始めた。テオドールは全身を殴打され、骨が砕けそうになるほどだった。　半死半生のテオドロスを放置すると、拷問者は再びニコライに目を向け、甘い言葉で彼を説得し、王との意見の一致を図ろうとした。しかし、聖ニコライは彼の言葉に耳を貸さず、その甘言にも屈することなく、敬虔な信仰を揺るぎなく貫いた。　激しい怒りに駆られた拷問官は、ニコライを最も残酷な方法で拷問するよう命じた。彼は長い間、全身を殴打され、数多くの傷を負わされた後、一晩中、裸のまま地面に横たわされたまま放置された。当時は冬で寒く、2月のことだった。 しかし、聖人は主を賛美しつつ、あらゆる苦痛に耐え抜いた。その後、拷問官は再び二人の殉教者を牢獄に閉じ込め、入り口を封鎖して王のもとへ戻った。　一方、尊い父たちは、数多くの傷によって恐ろしい苦痛に苛まれていた。彼らの体の傷は骨にまで達しており、皮膚はひどく引き裂かれて、ぼろ布のようにぶら下がっていたからである。　傷だらけの殉教者たちの姿はあまりにも凄惨で、彼らを見張っていた粗野な心を持つ兵士たちの心さえも、憐れみを呼び起こした。　憐れみから、兵士たちは彼らに温かい水と油を差し出した。苦しみを受ける者たちは、水に浸した布で傷口を洗い、油を塗ったため、傷は少しずつ塞がり始めた。一方、体に癒着せず垂れ下がっていた皮膚は、小さなナイフで切り取った。

しかし、聖徒たちが牢獄で苦しんでから九十日が過ぎ、彼らの体にはまだ恐ろしい傷跡が残っていた頃、不義な王は彼らをスミルナの領内へ呼び出し[1636]、そこで再び容赦なく拷問を加えた後、足に足枷をはめて牢獄に閉じ込めるよう命じた。　そこで聖人たちは、悲しみと迫害に苛まれながら二十ヶ月間、苦しみ続けた。そして神は、昼夜を問わず御自身に叫び求めた御自分のしもべたちの声を聞き入れ、囚人たちのことを顧みて、不義な王が滅びるよう御心をお示しになった。レフは神殿で

[1635] *ヴォニタ*、あるいはボニトは、アナトリア、すなわち小アジアにある。

[1636] それは819年のことだった。*スミルナは*、小アジアの西岸に位置する古くからの有名な商業都市であり、現在では人口12万人以上を擁する、小アジアで最も繁栄している都市の一つとなっている。

自らの兵士たちによって殺害されたのである。　レウスの死後、ギリシャ王国の王位を継いだのは、バルボスと呼ばれたミハイルであった[1637]。この王は、自身は偶像破壊派に傾いていたものの、聖なるイコンを崇敬する信者たちを迫害することはなく、誰もが望むままに信仰することを許した。彼はさらに、イコン崇敬を理由に牢獄に閉じ込められていた者たち全員を釈放するよう命じた。　この頃、牢獄から解放された至福のニコライと偉大なるテオドロスは、ハルキドン[1638]に赴き、ここで幽閉されていたニキフォロス総主教のもとを訪れた。至福のニキフォロスは彼らの到来に大いに慰められ、彼らの体に刻まれた苦難の傷跡を見て、彼らを聖なる殉教者たちと同等に尊んだ。　ハルキドンにしばらく滞在した後、彼らはニキフォロス総主教と共にコンスタンティノープルへと向かい、皇帝自らに偶像排斥を止めさせ、敬虔な道へと導くことを目指した。　しかし、敬虔な聖なる殉教者たちは、その善き行いにおいて成功を収めることはできなかった。というのも、皇帝は深い無知ゆえに、彼らの諭しに耳を傾けず、聖なるイコンを崇敬することには応じなかったからである。もっとも、他の人々がそれらを崇拝することについては、以前と同様に禁じてはいなかった。　とはいえ、近郊や城下町での聖なるイコンの設置を禁じなかった一方で、皇帝は都内での設置を厳しく禁じた。　このため、聖なる父テオドールとニコライは、総主教に別れを告げ、聖なるイコンを崇敬しつつ、自らの敬虔さを自由に保つことができるよう、コンスタンティノープルを去った。彼らは、聖殉教者トリフォンの教会に近いアクリテ[1639]に定住した。ここで聖テオドロスは、しばらくしてこの世の旅路を終え、平安のうちに神のもとへ帰った[1640]。一方、至福のニコライは、霊的父の墓のそばに残り、修道者の修行に励みながら生涯を送った。

ミハイルの死後、その息子テオフィロスが即位した[1641]。この王は熱心な聖像破壊者であり、聖像を崇敬する信者たちに対して、あらゆる残虐さを尽くして迫害を始めた。再び信者たちは、聖像破壊者たちによる迫害と苦難に耐えることになった。　この頃、血のつながりだけでなく精神においても兄弟であった、聖テオドールと聖テオファン・ナチェルタンヌイの両聖父は、多大な苦難に遭った。そこで、至福のニコライは、霊的父であるテオドールの墓のそばにいた居場所を離れ、聖像破壊派の皇帝テオフィロスが亡くなるまで、あちこちを転々として放浪の生活を送った。

テオフィロスの死後、王権は彼の妻である敬虔な皇后テオドラに移り、彼女は息子のミハイルと共に国を治めた[1642]。コンスタンティノープルで聖メフォディオス総主教によって統率されていたキリストの教会には、再び平穏が訪れ、敬虔さが輝きを取り戻した。　その時、至福のニコライはストゥディオス修道院へと赴いた。ここでは、殉教者ナヴクラティオスの死後[1643]、聖メフォディオスの後を継いだ聖イグナティオス総主教のもとで、彼は修道院長に任命された。　三年後、至福のニコライは、その修道院長職を徳の高い人物である至福のソフロニオスに譲り、自ら隠遁生活に入り、そこで沈黙を守って過ごした。しかし、4年が経過し、ソフロニオスが主のもとへ召された直後[1644]、

[1637] *ミハイル2世トラウリウス（バルバ、すなわち「口下手」の意）は*、820年から829年まで在位した。

[1638] *ハルキドンは*、小アジアの北西岸、コンスタンティノープル海峡の南端、コンスタンティノープルの対岸に位置するビフィニアの主要都市である。ハルキドンは、第4回全地公会議（451年）が開催されたことで、教会史において知られている。

[1639] *アクリト*――ビフィニアの岬で、ニコメディアの近く、コンスタンティノープルの対岸に位置する。

[1640] 聖テオドロス・ストゥディトスは、826年11月11日、67歳で逝去した。

[1641] *テオフィロス皇帝*は829年から842年まで在位した。

[1642] *ミカエル3世皇帝*（在位：842年～867年）は4歳で即位したため、865年まではその母である聖テオドラ皇后が国政を執った。

[1643] 殉教者*ナヴクラティオス*・ストゥディトスは、848年4月18日に死去した。ギリシャ正教会では、6月8日に彼を記念している。

[1644] *ソフロニオスは*、851年から854年までストゥディオス修道院の院長を務めた。

兄弟たちは尊者ニコライのもとを訪れ、幾度もの懇願の末、彼を説得して再び修道院長職を引き受けさせた。その後、至福のニコライは数年間、修道院長を務めた。

その間、ミハイル王は成人するにつれ、その品行は極めて堕落していった。　母の兄弟であるヴァルディという名の叔父の助言に従い、彼は母である至福のテオドラを王宮から追放し、ある女子修道院で修道女となるよう強要した。そして自身は、叔父のヴァルディを共同統治者として招き入れた。王の母に対するこのような行為は、民衆の間に激しい動揺を引き起こした。　さらに事態を悪化させたのは、王の共同統治者であるヴァルダが、妻を捨ててその代わりに息子の妻を娶るという、恐るべき不法行為に及んだことだった。至聖なるイグナティオス総主教は、王たちのこのような堕落を正し、ヴァルダの不法行為を止めさせようと、絶えず彼らを諭したが、全く成果は得られなかった。ある日、ヴァルダ王は祝日に聖体拝領を受けるつもりで現れたが、総主教は彼に聖体拝領を許さなかったばかりか、民衆全員の前でその不法を糾弾し、教会から破門した。　ヴァルダは総主教に対して激しい憤りを燃やし、ミハイルをも扇動した。両王は合意の上、総主教をその座から追放し、流刑に処した。そして、その代わりにフォティオス・アシンクリトス[1645]を総主教に任命した。

教会におけるこのような混乱を目の当たりにし、至福のニコライは自身の修道院を去り、弟を連れてプリコニッセ島にあるある修道院の集落[1646]へと向かい、そこで王たちの不法行為について一切耳を貸すことなく、沈黙の中で生活を送った。しかし、彼はここで長くは暮らさず、　ここから追放された。ある日、二人の王が船で、聖人が滞在していた場所のそばを通りかかった。ニコライが徳の高い人物として人々に大いに称えられていることを知っていた彼らは、彼のもとへ船を寄せ、お世辞を並べて彼を自分たちと同じ考えに引き入れようとした。すなわち、総主教の追放が正当であることを彼の口から認めさせ、さらにヴァルダの不法な結婚も承認させようとしたのである。　しかし、聖人は彼らの悪行を是認しなかったばかりか、もし悪行を悔い改めなければ、突然の悲惨な死を遂げると予言した。そして、その予言は後に現実のものとなった。　聖人からこの言葉を聞いた王たちは彼に激怒し、彼をその地から追放した。そして、彼らの命令により、ストゥディオス修道院のイグメノには別の者が任命された。こうして、至福のニコライは、老齢にもかかわらず、再びあちこちを放浪せざるを得なくなった[1647]。しかし、その後も、不法な王たちは彼を放っておかなかった。彼らの命令により、彼は再び捕らえられ、足枷を嵌められて修道院へ連行され、そこで2年間にわたり牢獄で苦しめられた[1648]。やがて、二人の王は実際に不慮の死を遂げた。ヴァルダは、クレタ島でサラセン人に対する遠征中に王同士の争いが起きた際、ミハイルの家臣たちに殺害され、ミハイルは自身の宮殿で家臣たちに殺害されたのである。

ミハイルの死後、敬虔なヴァシリーが王位を継いだ[1649]。彼は直ちにイグナティオスを総主教の座に復帰させ、至福のニコライも牢獄から解放された。王は彼を呼び寄せ、再び修道院の運営を引き受けるよう説得した。　ニコライは高齢であったため、これを強く望んではいなかったが、皇帝の執拗な懇願により、ようやく修道院の運営を引き受けることに同意した。皇帝はしばしば聖人を呼び寄せ、彼と対話し、その教えから徳のある生き方を学び、聖人に多大な敬意を払った。

神は御自身の御心に適う者に、人々の病を癒す力を授けられた。　皇帝の妃エウドキアは重い病に倒れ、医師からの助けも得られず、治癒を完全に絶望して、間近に迫った死を待っていた。しかしある日、眠りに落ちた彼女は、栄光の光に包まれた修道服をまとった老僧を夢に見た。老僧は彼女に近づき、こう言った。

1645 *聖フォティオスは*857年から867年まで総主教を務めた。（*アシンクリトス*とは、皇帝に近侍する宮廷の位階である）。

1646 この島は、小アジア北西部、マルマラ海南岸に位置するキジクという都市の近くにある。

1647 当時、彼はミティリーネ（レスボス島）やヘルソネソス半島にも滞在していた。

1648 スタウディオス修道院の修道院長サヴヴァの時代である。

1649 *バシレイオス1世マケドニア王は*、867年から886年まで在位した。

「神を信頼しなさい。あなたは今日死ぬことはなく、癒やされて元気を取り戻すでしょう。」

目を覚ますと、彼女はすぐに夢で見たことを夫に話し、徳の高い生活で知られるすべての修道院から長老たちを招いてくれるよう懇願した。女王の寝室に招かれた他の長老たちと共に、至福のニコライも現れた。その顔はモーセのように光を放っていた。　皇后は、その人物が夢で見た長老であることを見分け、立ち上がって彼に頭を下げると、たちまち完全に健康を取り戻した。

同様に、パトリキウス・マヌイルの妻であるエレナという名の別の女性も重病に倒れた。　彼女は死の淵にあり、親族たちはすでに彼女の葬儀用の衣を用意していた。しかし、聖ニコライが急いで彼女の家を訪れ、自らの手で彼女の頭と全身に十字を切ると、死の床にあった彼女は病床から立ち上がり、重い病から完全に癒やされた。彼女の夫マヌイル自身も重病に倒れた。　医師たちも何の助けにもならなかったため、回復を諦めたマヌイルは、死の訪れを待っていた。死を前にして、彼は修道者の位を受けることを望み、剃髪を求める願いを聖ニコライに申し出た。　しかし、ニコライはこの時、彼の願いを叶えることを拒み、神が彼を癒やし、宮廷で高い地位に就き、その務めを適切に果たした後、修道者の戒律を受け、善行を積んであの世へ旅立つだろうと予言した。　その予言は的中した。マヌイルはまもなく回復し、宮廷で最高位の地位に就き、その後、人生の終わりに差し掛かって重病を患った際、聖ニコライによって出家し、修道者として神のもとへ旅立った。

もう一人の貴族、テオフィロス・メリッセンという名の男とその妻は、大きな悲しみに暮れていた。というのも、彼らの子供たちは皆、生まれた直後に突然亡くなってしまっていたからである。ある日、彼らに娘が生まれたとき、二人は新生児を聖人のもとへ連れて行き、聖人の祈りが娘を死から救うと信じて、洗礼の代父になってくれるよう懇願した。聖人は代父になることを断ったが、赤ん坊に手を置き、神に祈りを捧げた後、パトリキウスにこう言った。

「聖霊がこう言われています。『あなたの娘は生き続け、あなたは彼女の孫たちを見るでしょう。』」

そして、その予言通りすべてが実現した。娘は健やかに成長し、美しい娘となって間もなく嫁ぎ、善良な子供たちに恵まれた。

生涯の終わりに近づき、福者ニコライは病に倒れた。

すべての兄弟たちが彼の病床を取り囲むと、聖人は修道士たちにこう尋ねた。

「兄弟たちよ、今、あなた方には何が欠けているのか、教えてほしい。」

修道士たちは、そのような問いに驚きながら、こう答えました。

「小麦がありません。」

それに対し、福者様はこう言われました。

「荒野でイスラエルを養われた神は、あなた方を見捨てられることはない。私がこの世を去ってから三日目に、神はあなた方に小麦を豊かに与えてくださるだろう。」

かつて会計係を務めていたクレメントを修道院長に任命した後、聖ニコライは2月の4日、75年の生涯を全うして安らかに息を引き取り、栄誉をもって埋葬された[1650]。

そして、聖人が予言した通り、3日目に、バシレイオス王から送られた小麦を積んだ船が修道院に到着した。クリメントは喜びをもって王の贈り物を受け取り、修道士たちにこう言った。

「さあ、父たち、兄弟たちよ、私たちの尊い父ニコライは、小麦を豊かに送ってくださることで、その約束を果たしてくださいました。」

その修道院には、アントニーという名の修道士がおり、長年にわたり出血の病に苦しんでいた。　医師への希望を失い、彼は死の淵に立っていた。修道院長は彼に、聖ニコライの住んでいた小屋に住み、そこで死ぬまで過ごすよう命じた。そして、アントニーがその小屋に入り、横になって眠りについたとき、聖ニコライが現れて尋ねた。

[1650] 聖ニコライは868年2月4日に逝去した。

「わが子アントニーよ、何の病に苦しんでいるのか？」

彼は自分の病を告げた。聖人は言った。

「恐れるな。これからは、お前は健康になるだろう。」

アントニオスはすぐに目を覚まし、夢の中ではなく現実の中で、聖ニコライが小屋から出ていくのを見ました。小屋には強い芳香が残っていました。彼は即座に癒やされたのを感じ、健康な状態で立ち上がりました。その後、アントニオスは十四年間生き、聖ニコライの祈りによって、いかなる病気にも罹ることなく過ごしました。　その取り成しによって、私たちもまた、心身のあらゆる病から解放されますように。主イエス・キリスト、私たちの主よ、御名に永遠の栄光がありますように。アーメン。

聖キリル、ノヴォエゼルスクの奇跡行者の記念日

記念日：2月4日

聖キリルは、ガリチ[1651] の敬虔で裕福な両親の間に生まれた。まだ少年であった頃、キリルは修道士になりたいという抑えきれない願望を抱いた。密かに実家を後にしたキリルは、ガリチからオブノル川[1652] へと向かい、両親から聞いていた聖コルニリウスの修道院[1653] へと向かった。[1654] その道中、キリルは白髪交じりの長老を見かけた。長老から「どこへ行くのか」と尋ねられると、キリルは「聖コルニリイの修道院へ向かうところだ」と答えた。長老はその志を称え、自分と一緒にそこへ行くよう彼に命じた。　翌日、二人は共に聖コルニリイの修道院へと向かった。修道院まであと少しというところで、老僧は若者に教えを授けると、長い間彼のために祈りを捧げ、その後、手で修道院を指し示しながらこう言った。

「行け、わが子よ、至福のコルニリウスのもとへ。私は至福のコルニリウスに、お前を修道士として受け入れてくれるよう頼んでおく。」

その後、長老は少年を祝福し、姿を消した。周囲を見回しても長老の姿が見当たらないのを見て、キリルはそれが神の御訪れであったと悟り、神に感謝を捧げた。その後、修道院に到着した少年は、涙ながらに聖コルニリウスに、自分の修道院に修道士として受け入れてくれるよう懇願した。彼の中に聖霊の選ばれた器を見出したコルニリウスは、愛をもって彼を受け入れ、修道士としての戒律を授けた[1655] 。若い修道士は全身全霊を神に捧げ、熱烈な愛をもって修道生活の業を成し遂げ始めた。

キリルの両親は長い間、あちこちで彼を探し回ったが、どこにも見つからず、息子を失ったことを嘆き悲しんだ。数年後、両親はキリルがコルニリイの修道院に滞在していることを知った。　キリルがそこに滞在して12年目、彼の父がそこを訪れ、ヴァルソノフィイという名で出家した。そしてしばらくして、キリルの母についても知らせが届いた。彼女もまた、徳高く敬虔に生き、エレナという名で修道生活を送りながらこの世を去ったという。　キリルの父は、修道院で3年間、断食と祈りに専念した後、主のもとへ帰った。

[1651] 現在は、コストロマ県の県都であり、ガリチ湖の南東岸の低地に位置している。

[1652] *オブロナ川は*ヴォロゴダ県とヤロスラヴリ県を流れ、コストロマ川に注ぐ。

[1653] *聖コルニリイは*、ヴォロゴダ地方のコメルスキー森林、グリアゾフツ市から5ヴェルスタの場所に修道院を建立した。この修道院は「コルニリエフ・コメルスキー・ヴヴェデンスキー修道院」として知られている。聖コルニリイは1537年5月19日に逝去し、その聖遺骨も同地に安置されている。彼の記念日は5月19日である。

[1654] この修道院は、ガリチ市から80ヴェルスタの場所にあった。

[1655] 当時のキリルは20歳前後であった。

両親の死後、尊者キリルはさらに熱心に修行に励み、労苦に労苦を重ね、厨房やパン屋での仕事にも従事し、修道院のあらゆる奉仕をこなした。

至高の完成を目指して、聖キリルは森の奥深くで隠遁生活を送ることを決意した。聖コルニリウスの祝福を受けて、彼は北の荒野へと向かった。彼の糧は、時には様々な草や根、時には松の樹皮であった。人よりも動物に遭遇する方が多かった。　そこから時折、ノヴゴロドやプスコフの領内を訪れ、聖地を参拝し、主が恒久的な居住地を示してくださるよう祈った。

天の導きにより、至福のキリルはそこからベロオゼロ湖[1656] へと向かい、その後、至聖なる聖母マリアの名を冠するティフヴィン修道院[1657] へと赴き、そこで三日間、神と御母マリアに祈りを捧げた。夢の中で聖母マリアが現れ、ノヴォエ湖へ向かうよう命じた。　コビリナ山から、尊者キリルは湖の真ん中に森に覆われた「赤い島」を見出した。この島で、キリルは現在修道院が建っている場所に炎の柱を目撃し、そこからその場所が神と聖母マリアによって示されたものであると悟った。

その島に到着すると、聖人は高いトウヒの木の下に定住し、その枝で自分用の小屋を築いた。そこで、主の天使が夢の中に現れ、この場所は主によって彼のために用意されたものだと告げた。眠りから覚めると、聖人は島を歩き回り、自分の小屋の近くに人の足跡を見つけた。　その足跡をたどってシドネムという集落にたどり着くと、彼はその村の農民たちに、その島に定住することを許可してほしいと頼みました。願いが叶うと、彼はそこで自分のための小部屋を建てました。翌年、彼はここに二つの小さな教会を建てました。一つはキリストの復活に、もう一つは聖母マリア・オディギトリアに捧げられたものでした。

島での滞在中、尊者キリルは断食と祈りに熱心に励み、悪魔や悪人からの多くの試練や苦難に耐え抜いた。時が経つにつれ、キリルの周囲には多くの修道士が集まり、クラースヌイ島には「ノヴォエゼルスカヤ」[1658] として知られる修道院が設立された。

深き老齢に達した聖キリルは、主から先見の明と奇跡の賜物を授かった。臨終に際し、聖人はロシアの地に迫りつつある災難について予言した。

「わが地には、人々の間の反乱と大きな災いが起こり、神の激しい怒りが降り注ぎ、多くの者が剣に倒れ、他の者たちは捕虜として連れ去られるだろう」と、彼は語った。

すると、弟子ディオニシオスが彼の元へ近づき、尊者に向かって「父よ、教えてください。その後はどうなるのでしょうか」と尋ねると、尊者はこう答えた。「その直後、私は玉座に座しておられる王と、その御前に王冠を頭にかぶった二人の若者がいるのを見ました。　そして主は、敵に対する武器を彼らの手に与えられた――こうして、地上のすべての王国は玉座に座しておられる方にひれ伏し、我らの王国も和解され、　神によって整えられるであろう。さて、父たちよ、兄弟たちよ――と尊者は付け加えた――ロシア王国の繁栄のために、涙を流して神と御母マリアに祈りなさい。

聖体拝領を行い、十字の印で身を守った後、聖キリルは1532年2月4日、主のもとへ息を引き取り、自身が設立した修道院に[1659] に埋葬された。

[1656] *ベロ湖はノヴゴロド州にあり、キリロフスキー郡とベロゼルスキー郡の境界に位置している。*

[1657] ティフヴィンの聖母被昇天修道院は、ノヴゴロド州のティフヴィン市にある。「ティフヴィン」の名で知られる聖母のイコンが現れた場所に建立された。

[1658] *キリロフ＝ノヴォエゼルスキー修道院は*、ノヴゴロド州ベロゼルスク市から30ヴェルスタ離れた、ノヴォエゼル湖の「赤い島」に位置している。修道院の聖具室には祭壇用十字架があり、伝承によれば、これは聖キリルの棺の板を使って描かれたものである。

[1659] *聖キリルの聖遺骨は*、災難から救われたボヤリン・モロゾフの誓願により建設された新しい聖堂の礎石を据える際、1649年に朽ちることなく発見された。　公会議の決定により、それらはヴォロゴダ大司教マルケルによって鑑定され、1662年8月22日に聖遺物箱に収められて新しい教会へ移され、現在もそこで眠り、奇跡を起こし続けている。聖キリルの聖遺物の発見は11月7日に記念される。

聖殉教者アヴラミイ、アルヴィル司教の記念日。

聖アヴラミイ、アルヴィル司教の聖殉教者の記念日[1660]

記念日：2月4日

聖アヴラミイは、ペルシャにおけるキリスト教徒への迫害が始まって5年目、魔術師たちの長（[1661]）の命令により捕らえられた[1662]。魔術師たちの長は、聖人にキリストを否定し、太陽を崇拝するよう強要したが[1663]、しかし、至福のアヴラミイは彼にこう言った。

「哀れな不信心者よ！　なぜ、私にそのような不敬な行いを命じて、自らを苦しめるのか？　創造主を捨てて被造物に拝むなど、なんと狂気なことであろうか！　愚か者め！　太陽こそが、わが神の被造物ではないのか？」

この言葉は不信心な拷問者を激しい怒りに駆り立て、彼は直ちに聖人を裸にし、地面に寝かせ、節のある棒で全身を打ち据えるよう命じた。聖アヴラミイは勇敢に苦痛に耐え、拷問者たちのために祈りながらこう言った。

「主よ、彼らにこの罪を問わないでください。彼らは、自分が何をしているのか分かっていないのですから。」

これを見た魔術師たちの首領は、聖人の首を剣で切り落とすよう命じた。聖殉教者アヴラミイは、フェルマンと呼ばれる集落で殉教の死を迎えた。

ある敬虔な隠者についての追憶

記念日：2月4日

この日、エジプトの都市アンティノイ[1664]の境界内にある人里離れた山に住んでいた、ある神を畏れ敬う敬虔な隠者について記念される。彼を訪ねてきた多くの人々は、彼の語りや善行から教訓を得た。　人類の敵は、この隠者の徳高い生活に嫉妬し、彼の神を畏れる心を巧みに利用して、次のような考えを植え付けた。「他人があなたのために働いたり仕えたりするのはふさわしくない。なぜなら、あなたは誰かに仕えられるに値しないだけでなく、あなた自身も誰かに仕えるに値しないからだ。それゆえ、自分のためだけに働け。　さあ、町へ行って、君が作った籠を売り、自分に必要なものをすべて買い揃え、他人の足手まといにならないよう、ここから立ち去りなさい」。　悪魔が隠者にこの考えを植え付けたのは、彼の沈黙と功績を妬んでいたからである。それらの功績によって他の人々も大きな霊的恩恵を受けていたのだ。なぜなら、人類の敵は、すべての人を自らの罠にかけようと努めているからである。　こうして、その徳高い生活ゆえに皆から尊敬され称賛されていた　という隠者は、この邪悪な助言をあたかも善きものかのように受け止め、悪魔の狡猾な策略に気づかぬまま、自分の小部屋を出て行った。　しばらくして、その隠者は一人の女性に出会い、彼女と長い会話を交わした後、心の不注意から情欲に駆られてしまった。その後、悪魔の唆しにより、川沿いの人里離

[1660] アルヴィルまたはアルベラという都市は、古代アッシリア王国の領土内、ティブラ川の*東側*、その上流に位置していた。

[1661] ペルシャ人にとって、ヴォルフ（魔術師）は司祭であり、宗教儀式の守護者でもあった。

[1662] この迫害は、ペルシアとローマの間で戦争が始まった後、343年頃、サポル2世王によって開始された。迫害の理由は、サポルがキリスト教徒をローマの秘密の同盟者と見なしていたことにある。迫害の5年目は、348年から352年頃の時期にあたる。

[1663] ペルシア人は火と太陽を崇拝していた。後者は「ムネラ」という名で、彼らにとって至高の神であった。

[1664] *アンティノイアは*、古代において中エジプトでかなり重要な都市であった。

れた場所へ赴いた彼は、ついに、自分の敵である悪魔を喜ばせるような罪を犯してしまったことに気づいた。　聖霊や天使たち、そして多くの聖なる先人たち――その多くは都会に暮らしながらも悪魔に打ち勝っていた――を悲しませてしまったという絶望から、隠遁者は川の急流に身を投じようとした。しかし、主は常に、主を信頼し、自らの罪から癒やされたいと願うすべての人を助けようとしておられることを忘れていたのだ。　そのような霊的な苦悩により、隠遁者は肉体が衰弱し、悪魔は大いに喜んだ。　もし全き慈悲の神が彼を助けに来られなかったならば、彼は悔い改めることなく死んでしまい、悪魔たちを喜ばせていたことでしょう。その後、正気を取り戻した修道士は、悔い改めとキリスト教的な忍耐という、どれほど困難な業を自らに課し、涙と心の砕け散るような悔恨をもって神をなだめるべきか、考え始めました。　そして彼は再び自分の独房に戻り、入り口を塞いで、神に祈りを捧げ、自分の罪を嘆き悲しんだ。まるで死者の上に流すかのように、自分自身に涙を流し、同時に断食し、悲しみに沈み、肉体を極限まで疲れさせた。しかし、これらすべてを行っても、彼は自分の重い罪を償えるとは期待していなかった。

　　すると、兄弟たちがいつものように心の安らぎを求めて彼のところへやって来て、扉を叩くと、彼はこう答えた。

　　「あなた方をお迎えすることはできません。私は一年間、このように悔い改めるという誓いを立てたからです。あなた方は、不適格な私のために祈ってくださっているのです。」

　　隠遁者は、彼らに何を言えばよいか分からず、また自分の罪を告白すれば彼らを惑わしてしまうのではないかと恐れて、このように答えた。というのも、彼は厳格で熟練した修道士として皆に知られていたからである。こうして彼は一年間、厳格に断食し、自分の罪を悔い改めながら過ごした。

　　やがて復活祭が近づくと、その隠者は、キリストの復活の前夜、新しい燭台を取り出し、そこに聖油を注ぎ、新しい器に収めて蓋をした。そして夕方から祈りを捧げ始め、こう言った。

　　「寛大で慈悲深い主よ、異教徒をも救い、彼らを真理の知恵へと導こうとされる方よ！　私たちの魂の救い主であるあなたに、私は身を寄せます。あなたを深く怒らせ、敵を喜ばせる多くの行いをした私を、どうか憐れんでください。今や、敵の言うことを聞いて、私はまるで死人のようになってしまいました。　しかし、主よ、あなたは不義な者や不慈悲な者をも憐れみ、隣人を愛するよう教え給う方です。どうか私のこの惨めな状態を憐れみ、赦してください。何しろ、全き憐れみ深きあなたには、すべてが可能なのですから。　私に憐れみをお示しください。あなたは善であり、御自身の被造物に対して慈しみ深く、復活の日に、朽ち果てた肉体をさえもよみがえらせようと望んでおられるからです。　主よ、私の声に耳を傾けてください。私の霊は打ちひしがれ、この堕落した魂は衰え果て、私が汚したこの肉体も力尽きてしまいました。私は生きるに値しない者ですので、もはや生きることもできません。今、悔い改めの心をもってあなたにすがり、私の罪の赦しを懇願します。　私は深く罪を犯し、倒れ、絶望しました。しかし、砕かれた私を生き返らせ、この灯火があなたの火によって灯されるよう導いてください。そうして、あなたが、その寛大さにおいて偉大なる方であり、私の罪を赦してくださることを、ここから悟らせてください。　主よ、あなたが私に与えてくださる残りの生涯の間、私はあなたの畏れの中に留まり、あなたの戒めを守り続けます。

　　こうして、キリストの復活の夜、多くの涙を流しながら祈っていた隠者は、灯が灯ったかどうか確かめようと立ち上がり、器を開けてみると、灯は灯っていなかった。そこで彼は再び顔を地面につけて伏し、主に向かってこう祈った。

　　「主よ、私は善き行いによって栄冠を戴くべきであったことを存じておりますが、肉欲に惑わされ、あなたの戒めに従いませんでした。そのために、不義な者たちと共に苦しみを受けるべきです。　しかし、主よ、あなたに罪を犯し、すべての天使と義人たちの前でその罪を告白する私を、どうか憐れんでください。もし人々が惑わされなければ、私は全世界の前で自分の罪を告白していたでしょう。主よ、自分の堕落を悔い改める私を憐れみ、私を生き返らせてください。そうすれば、他の人々をも導くことができるでしょう。

このように三度祈ると、その祈りは聞き入れられた。祈りを終えて立ち上がったとき、隠者は灯が明るく燃えているのを見て、それを大いに喜び、神への堅い希望に心を強められた。　彼は、これほど偉大な神の恵みと主の人愛に驚き、神が自分の罪を赦し、その謙虚な祈りを聞き入れてくださったことに心を躍らせ、こう言った。

「主よ、この世の生涯において、不適格な私を憐れみ、この偉大かつ新たなしるしによって、あなたへの大胆さを与えてくださったことを感謝いたします。あなたは、ご自身が創造された魂たちを憐れみをもって赦してくださるからです。」

彼が神にこの感謝を捧げていると、日が昇り、隠遁者は主を喜び、その喜びのあまり、その日は肉体の糧さえも忘れてしまった。そして彼は、その灯火の火が消えないよう、残りの生涯を通じて油を注ぎ足し続け、その灯火を守り続けた。　そして再び神の御霊が彼と共にあり、人々は再び彼について知り、彼から教訓を受けた。彼が死期を迎えようとした時、亡くなる数日前、自らの死の時刻を知り、魂を神の御手に委ねて安らかに息を引き取った。

- 同日は、聖なる信仰深い大公ゲオルギー・ヴェセヴォロドヴィチの記念日である。

2月18日

2月5日（旧暦）

聖殉教者アガフィアの殉教日

記念日：2月5日

邪悪なデキウス帝の治世[1665]　、彼がシチリアの統治者[1666]　に任命したキンティアンが権力を握っていた頃、すべてのキリスト教徒を処刑せよという不敬虔な勅令が各地に発せられた。　その頃、パノルメの町[1667]　には、アガフィアという名の乙女が住んでいた。彼女は高貴で裕福な両親の娘であり、キリスト教の敬虔さの中で育てられていた。キリスト教徒を虐殺するという迫害者たちの不敬な命令を耳にしたアガフィアは、自らの処女の清らかさを捧げて婚約した主キリストへの熱意に燃え上がった。　彼女は祖国への愛を捨て、高貴な家柄の威信を無に等しいものと見なし、両親から受け継いだ富やこの世のあらゆる栄光を軽んじ、キリストのために苦難に耐える準備を始めた。　総督キンティアンは、この聖なる乙女の美しさ、高貴さ、そして富を耳にし、彼女に対して不純な情欲を抱き、彼女に会って自分の罪深い欲望に屈服させ、同時に彼女の財産も手に入れようと企んだ。　彼女がキリストを信仰していることを知ると、彼は直ちにカタナ[1668]　の兵士たちをパノルムへ派遣し、彼女をキリスト教徒として裁判にかけるよう命じた。派遣された者たちは聖アガフィアの元へやって来て、彼女を連行しようとした。そして、もし彼女が彼らの神々に拝むと約束すれば、名誉をもって指揮官のもとへ送り届けると約束した。　アガフィアは彼らに少し待ってほしいと頼むと、家の中の部屋に入り、そこに閉じこもって天に向かって両手を挙げ、次のように祈り始めた。

[1665] デキウスは249年から251年まで在位した。

[1666] シチリアは、アペニン半島に近い地中海の大島の一つである。

[1667]　パノルム（現在のパレルモ）は、シチリア島の北岸、同名の湾に面して位置している。これはフェニキア人によって築かれた、非常に古く、重要な都市である。

[1668]　カターニアは、シチリア島の東岸にある古代都市であり、現在では人口10万人以上を擁し、教育と商業が盛んな活気あふれる都市となっている。

「主イエス・キリストよ！あなたは私の心と魂の在り方、あなたへの愛と信仰をご存知です！私の神であるあなたのために、私がすでに踏みつけ、滅ぼした敵に対して、私の導き手であり助け手となってください。　そして今、主よ、私はあなたに懇願します。あらゆる点で不浄で悪意に満ちた人間、悪魔の僕に、私がこれまで清く誠実に生きてきたこの体を汚させることのないようお許しください。急いで、悪魔とその僕キンティアンを打ち負かしてください。そうすれば、彼がこう言うことを防げます。　「彼女の神はどこにいるのか？」（詩編78:10参照）と口にすることのないよう、私の涙を、芳しい香りの捧げ物としてお受けください。あなたは唯一の神であり、永遠に栄光があなたに帰します。アーメン。

このように祈った後、彼女は兵士たちと共に、数人の市民や隣人、知人に見送られながら町を出た。彼女は、打ち砕くことのできない城壁のように、主のために勇敢に立ち向かう覚悟を固めて歩み、心の中でこう思っていた。　「私はまず、悪魔との戦いを経験した。処女の清さを守り、肉欲の情欲に打ち勝とうと努めたのだ。そして、私のキリストの恵みによってそれらを打ち勝ち、情欲や欲望を通じて人々に敵対する敵を踏み砕いた。今、私は第二の戦いへと向かう。その戦いにおいて、、私はキリストのために自分の魂を捧げなければならないのだ。　しかし、悪魔よ、あなたは私を通して喜ぶことはなく、むしろあなた自身がさらに恥をかくことになるでしょう。なぜなら、私は私の神であるキリストに希望を置いているからです。主は高きところから、多くの聖なる御使いたちと共に私の奮闘を見守り、この弱き私を助けてくださるでしょう」。

そう心の中で思い巡らせながら、彼女は熱い涙で顔を濡らした。　彼女が歩みを続けると、サンダルの紐がほどけてしまった。それを結び直すために、彼女は足を石の上に置き、周囲を見回したが、見送りに来ていた隣人たちの姿はもはやどこにも見当たらなかった。皆、彼女を置き去りにして引き返してしまったのだ。それゆえ、彼女はさらに涙を流し、神に祈りを捧げてこう言った。

「全能の主よ、私があなたの聖なる御名のゆえに苦難を受けようとしていることを信じなかった私の同胞たちのために、この場所で何らかの奇跡をお示しください！」

すると、たちまち、パノルマの市民たちの荒れた心を象徴するかのような、野生の不毛なオリーブの木が生え出した。

聖アガフィアがカターニアの街に到着すると、軍司令官は彼女をアフロディシアという名の裕福な女性の家に収容するよう命じた。彼女には五人の若い娘たちがおり、司令官は娘たちに、甘い言葉や様々な快楽を用いて、アガフィアの心を肉欲へと誘い、神々への生贄を捧げるよう説得するよう命じた。　娘たちは、時には彼女を称賛し、持ち上げ、多くの約束を口にし、時には脅しを用いて、アガフィアをキンティアヌスの意志に従わせようと努めたが、全く成功しなかった。言葉でも行動でも、彼女を神への愛から世俗の愛へとそらすことはできなかったのだ。　彼らは彼女を高価な衣服で飾り立て、贈り物や様々な高価な料理やご馳走を差し出し、仮面劇や舞踊を催し、音楽家の演奏を伴い、彼女の目の前であらゆる放蕩や滑稽な行いを繰り広げた。しかし、彼女はこれらすべてを見ることも拒み、こう言った。

「知っておいてほしい。私の心と思いは岩のように堅く定まっており、キリストの愛からそらされることはない。　あなた方の諂う言葉は風のようなものであり、世俗の喜びの提供は、雨に過ぎない。そしてあなた方の脅しは川のようなものだが、たとえ私の神殿に押し寄せようとも、それを動かしはしない。なぜなら、それは堅固な土台、すなわち生ける神の御子キリストという岩の上に立っているからである。」

そう語りながら、彼女は涙の奔流で胸を濡らした。なぜなら、鹿が水の泉を求めるように（詩篇41:2参照）、彼女もまた、主のために苦難を受けることを切望していたからである。

アフロディシアは、アガフィアの心の堅固さと揺るぎなさを目の当たりにし、軍司令官キンティアンのもとへ行き、彼にこう言った。

「この乙女を説得してキリストから遠ざけることなど、石を砕き、鉄を鉛に変えることよりも難しい。私自身も娘たちも、昼夜を問わず、彼女を私たちと同じ考えに導こうと努めてきた――時には優しく懇願し、時には脅しをかけて。　珍しい首飾りやブレスレット、高価な衣装、金や宝石を彼女の目の前に並べ、奴隷や自分の家来たちを贈り物として与えたが、彼女はこれらすべてを、足で踏みつけられる塵のように軽蔑しているのです。

すると、激怒した軍司令官キンティアンは、アガフィアを自分の秘密の部屋へ連れてくるよう命じた。そこで、自分の席に座り、不純な思惑に満ちた彼は、その乙女に、どの家系の出身なのかと尋ねた。聖アガフィアはこう答えた。

「私は高貴な家柄であり、名門で裕福な親族がいます。」

キンティアンは彼女に言った。

「もし貴族の家柄なら、なぜ奴隷のような粗末な服を着ているのか？」

「私はキリストのしもべです」と聖女は答えました。「だからこそ、奴隷の姿をしているのです。」

するとキンティアンは言った。

「貴族の両親の娘として自由な身であるのに、どうして自分を『しもべ』と呼ぶのか？」

「私たちの高貴さと自由とは、キリストのために働くことにあるのです」と聖女は答えた。

軍司令官は尋ねた。

「私たちのように、あなたのキリストに仕えず、キリストを否定している者は、果たして自由ではないというのか？」

アガフィアは答えた。

「あなた方は、罪の奴隷となっただけでなく、忌まわしく無感覚な偶像を崇拝し、木や石を神として崇めるほど、深い束縛と奴隷状態に陥っているのです。」

「もしそのような冒涜的な言葉を口にするなら」とキンティアンは彼女に言った。「多くの拷問にさらされることになるだろう。だが、なぜ我々の神々を否定するのか、教えてくれ。」

「私が彼らを否定するのは」とアガフィアは答えた。「彼らは神ではなく、悪魔だからです。あなたがたは銅や大理石でその像を作り、その顔を金で覆っているのです。」

キンティアンは言った。

「善き助言に耳を傾けなさい、お嬢さん。そして、様々な苦痛を味わうことなく、またあなたの高貴な家柄に不名誉や侮辱をもたらすことのないよう、生贄を捧げなさい。そうすれば、たとえ本意でなくとも、あなたは宇宙の支配者である神々にひれ伏さざるを得なくなるでしょう。」

聖アガフィアはこう答えた。

「あなたの妻は、あなたの女神アフロディーテ[1669] に似ていよう。そしてあなた自身は、あなたの神ゼウス[1670] に似ていよう。」

聖女がそう言い終えると、キンティアンは彼女の顔を殴るよう命じ、こう言った。

「軍司令官を侮辱するな。」聖アガフィアは答えた。

「将軍よ、あなたの分別はどこにあるのか？私はあなたがあなたの神に似ることを願っているのに、あなたは神に似ることを望まず、むしろ自分の神々を恥じている。だから、私と共に彼らを否定しなさい。」

将軍は言った。

[1669] アフロディーテは、ギリシャの愛と美の女神である。彼女を称える祭りは、極めて放埒で淫らな行いを伴うものであった。

[1670] ゼウスはギリシャ人にとって主神であり、すべての神々と人間の父として崇められていた。ギリシャ神話では、ゼウスに様々な肉欲的な悪徳、不純な情欲、そして犯罪が帰せられている。

「お前は多くの苦痛に値する。命令に従わなければ、直ちにお前をその苦痛にさらしてやる。」

「私は何も恐れない」と乙女は答えた。　「もし私を野獣の餌食にしようとしても、野獣たちは私を見てキリストの御名を聞けば、おとなしくなるでしょう。もし私を火の中に投げ込んでも、天の天使たちが露で私を冷やしてくれるでしょう。もし私に傷や苦痛を与えようとしても、私には真理の御霊が助けとしておられ、その御霊が私をあなたの手から救い出してくださるのです。」

その後、軍司令官はアガフィアを薄暗く悪臭のする牢獄へ連行するよう命じた。しかし聖女は、まるで祝宴や宴会に向かうかのようにそこへ歩み入り、自らを主の御手に委ねた。翌朝、キンティアンは再び聖アガフィアを裁判に呼び出し、自分の身の安全について十分に考えたかと尋ねた。聖アガフィアはこう答えた。

「私の健康とは、キリストです。」

しかし、長官は言った。

「若いうちに滅びないためにも、キリストを否定せよ。」

「あなたこそ、あなたの神々――それらは石や木に他ならない――を捨てなさい。そして、あなたを創造された真の神に帰依しなさい。そうすれば、永遠の苦しみを受けることはないでしょう」と聖女は答えた。

すると、激怒した拷問官は、アガフィアを裸のまま木に吊るし、鞭打つよう命じた。聖女が鞭打たれているとき、拷問官は彼女に言った。

「考えを改め、神々にひれ伏せ。そうすれば、お前は生き延びられる。」

しかし、彼女はこう答えた。

――こうした苦しみによって、私は至福を得て、まるで偉大な宝を手に入れた者が喜ぶのと同じように、その苦しみの中で喜びを感じている。これらの一時的な苦しみは、私にとって有益なものだ。麦を穀倉に収める際、まず雑草を取り除かなければならないように、私の魂が楽園に入るには、まず肉体が苦しみによって引き裂かれなければならないのだ。

軍司令官は家来たちにアガフィアをより激しく拷問するよう命じ、その後、鉄の鉗子で彼女の乳首を引きちぎり、切り落とすよう命じた。それが実行されると、殉教者は軍司令官にこう言った。

「不敬虔で非人道的な拷問者よ！　あなた自身が母から乳を飲んだその乳房を、女性から切り落とすことを恥じないのか。しかし、私には魂の中に別の乳房があり、あなたはそれに触れることはできない。なぜなら、それらは幼い頃から神に捧げられているからだ。」

その後、聖女は牢獄に投げ込まれた。真夜中、聖使徒ペトロが、威厳ある老人の姿で彼女の前に現れ、その手には彼女のための多くの薬を持っていた。彼の前を、燃えるろうそくを持った美しい若者が先導していた。聖女は、それが何らかの医師が来たのだと思った。使徒は彼女にこう言った。

「不敬虔な拷問者は、あなたを傷だらけにしたが、何の成果も得られなかった。それどころか、あなたは自らの勇気をもって彼に打ち勝った。彼はあなたの乳房を傷つけるだけでなく、切り落とすよう命じた。そのために、彼の魂は永遠に苦しむことになるだろう。」　あなたが苦しみを受けていた時、私はそこに立ってそれを見ていた。そして、あなたの乳房を癒す方法があるのではないかと考え、そのためにここへ来たのだ。

聖殉教者アガフィアはこう答えた。

「私はこれまで、自分の体のためにいかなる治療も受けたことがありません。若き日から身につけてきたこの良き習慣を、今も破るべきではないと思います。」

「私もキリスト教徒なのです」と老人は言った。「あなたを癒やせることを願ってここに来たのです。ですから、私を恥じる必要はありません。」

すると聖女はこう答えた。

「あなたは男性であり、私は処女です。どうして恥じることなく、あなたの前で自分の体をさらけ出せるでしょうか。男性の目の前で体をさらすよりは、傷の痛みを耐え忍ぶほうがましです。」「私の傷を癒やすつもりでここに来てくださった誠実な父よ、感謝します。しかし、人の手による治療が私の体に及ぶことは決してないことを知っておいてください。」

老人は彼女に言った。

「なぜ、私があなたを治療することを望まないのですか？」

聖女は答えた。

「私には、主イエス・キリストがおられます。主は、ひと振りですべてを癒やし、ひとことでお倒れになった方を立ち直らせてくださいます。主が望まれるなら、この不肖のしもべである私をも癒やしてくださるでしょう。」

使徒は、この聖なる殉教者の偉大な信仰に喜び、微笑みながら彼女に言った。

「主は私をあなたのところへ遣わされました。私は主の使徒なのです。見てください、あなたは癒やされました。」

そう言うと、彼は姿を消した。その時、聖殉教者アガフィアは、自分に現れたのが誰であるかを知り、神に感謝してこう言った。

「わが主イエス・キリストよ、私を覚えてくださり、私を癒やすために御自身の使徒を遣わしてくださったことを感謝いたします。」

自分の体を見下ろすと、乳房は元通りになり、傷も癒えていた。そして一晩中、異様な光が牢屋を満たし、その中を照らし出した。これに怯えた兵士たちは逃げ散り、牢屋の扉を閉めずに置いていった。そこにいた他の囚人たちは、それを見て聖女にこう言った。

「ほら、扉が開いていて、誰も見張っていない。出て行って逃げなさい。」

「私は殉教の冠を失いたくありません」とアガフィアは答えた。「そして、看守たちに災いを招きたくもありません。私を癒してくださった、生ける神の御子、私の主イエス・キリストを助け手として、私は最後までここに留まり、主を告白し続けます。」

四日が過ぎ、五日目に、拷問官は再び裁判の席に着き、聖アガフィアを呼び寄せ、こう言った。

「いつまで王の命令に逆らうつもりだ？　神々に犠牲を捧げよ。さもなくば、最も残酷な死に処されることになる。」

聖女はこう答えた。

「あなたの言葉は空虚であり、あなたの王の命令は不公正で、空気そのものを穢すものだ。教えてくれ、呪われた狂人よ、誰が木や無感覚な石に助けを求めるというのか？私は、私の乳首を癒やし、私の体を治してくださった方へ、賛美の捧げ物を捧げるのだ。」

拷問官は彼女の乳首を露出させるよう命じ、それらが以前と変わらず無傷であることを確認すると、こう尋ねた。

「誰があなたを癒したのか？」

殉教者は答えた。

「生ける神の御子、イエス・キリストです。」

キンティアンは叫んだ。

「またキリストの名を口にするのか！　私はその名など聞くのも嫌だ！」

そして、火で焼かれた鋭い瓦を地面に敷き詰め、その上に熱い炭をまき散らし、その上に聖女を裸のまま投げ込み、焼き尽くして苦しめるよう命じた。それが実行されると、突然、その場所だけでなく街全体で地震が起こり、　大地が裂けて、キンティアヌスの友人であるヴルテイと、その親友テオフィラスを飲み込んだ。キンティアヌスは彼らの助言に従って、このような拷問を行っていたの

である。地震に怯えた市民たちは皆、プレトリアに駆けつけ、キンティアヌスに向かって、地震の原因となった無実の乙女への拷問をやめるよう叫んだ。　キンティアンは、地震と民衆の怒りを恐れて、聖女を牢獄へ連行するよう命じた。殉教者は牢獄に着くと、両手を天に向けてこう言った。

「主よ、御名のために苦難に遭うことを私に許してくださり、また、この世の生活への欲望を私の中から取り除き、忍耐を与えてくださったことを感謝いたします。主よ、この時、私の祈りを聞き入れ、私がこの世を去り、あなたの豊かで偉大な憐れみのもとへ移れるよう、お許しください。」

このように祈り終えると、彼女は神の御手に息を引き取った[1671]。このことを知った市民たちは急いで駆けつけ、彼女の聖なる遺体を受け取り、埋葬のために敬意を込めて運んだ。　すると突然、聖なる殉教者の遺体のそばに、町では誰も見覚えのない美しい若者が近づいてきた。彼には百人の美しい少年たちが付き従っていた。聖なる殉教者の遺体を埋葬の地まで見送った後、彼は棺の中に、次のような文字が刻まれた石板を納めた。

「汚れなき心、神への自発的な犠牲、そして祖国への救い。」

その刻まれた石板を聖なる殉教者の頭元に置くと、その若者はたちまち姿を消した。そして、皆はそれが神の天使であったことを悟った。

その後、キンティアン総督は兵士たちを率いてパノルム市へ向かい、聖殉教者アガフィアの富を奪い、彼女の全財産を横取りしようとした。道中、彼は深い川を一つ渡らなければならなかった。彼は馬たちと共に渡し船に乗り込み、川を渡り始めた。　すると馬たちが突然彼に襲いかかり、一頭は歯で彼の顔を噛みちぎり、顔をぐしゃぐしゃにし、もう一頭は蹴りを浴びせ続け、ついに彼を川に突き落とした。彼は川で溺死し、その邪悪な生涯を邪悪な死で終えた。長い間、彼の遺体を捜したが、見つからなかった。それは魂と共に滅びてしまったのである。　この後、王家の統治者たちは誰も、聖アガフィアの親族に危害を加えることを敢えてしなくなった。彼女の名声は至る所に広まり、その聖遺骨の上には教会が建てられた。聖女が身に着けていた服は、彼女の謙虚さを偲ぶため、棺の上に安置された[1672]。

聖殉教者アガフィアの死から一年後、カターニアの町近くのエトナ山[1673]が、火の溶岩を噴出し始めた。溶岩は山上の裂け目から巨大な川のように流れ出し、激しい轟音を立てながら、溶けた石を蝋のように上から降り注いだ。カターニアの住民たちは、自分たちの町が滅びるのではないかと恐れ、大きな恐怖に襲われた。　その時、キリスト教徒だけでなく、異教徒までもが、聖殉教者アガフィアの教会に集まり、彼女の衣を手に取り、街へと押し寄せる火に立ち向かい、その衣をまるで盾のようにして、破滅的で恐ろしい炎から身を守った。　火は、あたかも聖殉教者の衣を恥じたかのように、引き返し、消え去った。この奇跡を目撃した住民たちは大いに喜び、神を賛美し、聖殉教者アガフィアを称えた。この奇跡は2月5日に起こった。その日、聖殉教者は、永遠の栄光ある主キリストのために殉教した。アーメン。

コンダク、第4声：

今日、教会は、殉教者アガフィアの清らかな血に染まった栄光の紫の衣で飾られよう。喜びよ、叫び声を上げるカターノの誉れよ。

[1671] 聖アガフィアは251年に亡くなった。

[1672] 聖アガフィアの聖遺骨は1040年にコンスタンティノープルへ移されたが、1126年にカターニアへ返還された。

[1673] エトナ山は、シチリア島のカターニア市の近くにある、火を噴く山である。

聖殉教者テオドゥリアの殉教

記念日：2月5日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌス、ローマ皇帝[1674] の治世下、アナザルヴェ[1675] の統治者であったペラギウスは、キリスト教徒を激しく迫害する者であった。彼は家来たちに命じて、その管轄区域全域をくまなく捜索し、キリスト教徒を捕らえて裁判にかけるよう命じた。そこで彼らは、皇帝の命令を聞いた後、神々に拝礼しなければならなかった。　命令を遂行するために出向いた家来たちは、テオドゥリアという名のキリスト教徒の女性を捕らえた。彼女は、拷問そのものよりも、異教徒によって穢されることを恐れて、彼らに多額の金を差し出し、自分を解放してくれるよう懇願した。　しかし、彼らは金を受け取ることなく、テオドゥリアを自分の指揮官のもとへ連行し、彼女が金で身代金を払おうとしたことを報告した。　統治者は、金を受け取らず彼女を解放しなかった家来たちを称え、その功績に対して贈り物を授けた。そして自ら裁判の席に着き、この祝福された女性を目の前に立たせ、彼女の名前を尋ねた。彼女はこう答えた。

「私はキリスト教徒です。」

すると、ペラギウス総督は言った：

「お前を苦しめる前に、名前を言え。」

聖女はこう答えた。

「私はすでに、自分の名を『キリスト教徒』だと告げましたし、それは嘘ではありません。それが私の尊い、永遠の名です。人々は私をテオドゥリアと呼んでいますが、私はキリスト教徒の両親の間に生まれ、キリスト教の教えに従って良き教育を受けました。」

統治者は言った。

「お前は正気を失って答えているようだ。」

「あなたこそ正気ではありません」と聖女テオドゥリアは答えた。「なぜなら、神を見捨てて石を崇拝しているからです。」

統治者は続けた：

「私は姉妹としてあなたを諭すのだ――神々に生贄を捧げよ。そうすれば、私の領地で享楽にふけり、あなたは大いなる栄誉に浴することになるだろう。」

テオドゥリアはこう答えた。

「あなた自身、あなたの父であるサタンと共に、自分の領地で楽しみなさい。そうすれば、お二人は共に永遠の苦しみを受け継ぐことになるでしょう。」

これに対し、統治者は言った。

「私は知っている。あなた方女性は短気で怒りやすく、権力者に反抗するものだ。しかし、私はそう簡単に怒る者ではない。穏やかにあなたを諭しているのだ。私に服従し、神々に捧げ物をし、自らの魂を滅ぼさないようにと。」

聖女はこう答えた。

「神への信仰を貫くことで、私は自分の魂を滅ぼすのではなく、救っているのです。そして私の体は土に還るでしょう。ですから、私は狂ったようにあなたに言っているわけではありません。もし望むなら、私の体を苦しめてください。」　神は、私の忍耐と、御自身のために苦難を受けるという私の完全な覚悟をご覧になり、私に御助けを与えてくださるでしょう。なぜなら、神ご自身も、御自分の民の救いを成し遂げるために、私たちのために十字架上で苦難を受けられたからです。

ペラギウスはこれに対し、彼女にこう言った。

[1674] ディオクレティアヌス（東方）とマクシミアヌス（西方）は、284年から305年まで統治した。

[1675] *アナザルヴ*――小アジア南東部のキリキアにある*都市*。

「お前は、その言葉で私の怒りを煽り、一刻も早くお前を滅ぼそうとしているのだろう。しかし、知っておけ。私はお前を滅ぼすまで、お前の体の部位を一つずつ切り落とし、長く苦しめ続けるつもりだ。」

「狡猾で貪欲な狼よ」と聖女は答えた。「すべての創造主であるキリストを羊飼いとする羊を、どうして滅ぼすことができるというのか。主の手から、果たして誰が私を奪い去ることができるというのか？」

すると、拷問官は激怒し、聖女を裸にし、髪を掴んでキパリス（ヒノキ）の木に吊るし、赤熱した鉄のフックで乳首を焼いて苦しめるよう命じた。聖女は苦しみの中、こう言った。

「ご覧なさい、総督よ、私は苦痛を感じていません。それなのに、あなたの方が、私の目には、私よりもさらに苦しんでおり、私に打ち負かされているように見えます。」

統治者はこれに対し、次のように答えた。

「我らの神々は慈悲深く、あなたが彼らに帰依することを知っておられる。それゆえ、あなたを憐れみ、苦痛を感じさせぬよう、痛みを取り除いてくださったのだ。」

すると、聖女はこう言った。

「私を憐れんでくださるというあなたの神々はどこにおられるのですか。彼らに敬意を表せるよう、私に見せてください。」

この言葉を聞いて、統治者は大いに喜び、すぐに彼女を解き放ち、アドリアヌスの神殿へ連れて行くよう命じた。彼らはアドリアヌスを、あたかも生ける力強い神であるかのように崇めていたのである[1676]。その神殿に入ると、聖女はアドリアヌスの偶像を見出し、真の神に祈りを捧げた後、その偶像に息を吹きかけた。すると、偶像はまるで雷に打たれたかのように即座に倒れ、三つに砕け散った。外へ出て、聖女は総督に言った。

「中に入って、あなたの神を助けてあげなさい。神は倒れて粉々になってしまったのだから。」

中に入ると、総督は地面に横たわり、三つに砕けた偶像を見て、そのことを深く嘆き、激しく泣き崩れた。アドリアヌスの偶像が破壊されたという噂は王たちの耳にも届き、彼らはその噂の真偽を確認するため、使者をアナザルヴの町へ派遣した。もしそれが事実であれば、その町の総督を野獣の餌食にするつもりだった。　これを知った統治者は、泣きながら聖テオドゥリアにすがりつき、彼らの神を再び完全な姿に戻してくれるよう懇願し、もしその神が当初あったのと同じ場所に立っているのを見ることができれば、キリスト教徒になると約束した。

聖女は全能の神に熱心に祈りを捧げた後、偶像にその場所に無傷で立ち上がるよう命じた。すると、その偶像はたちまち無傷で立ち上がり、歩いて行き、以前立っていた場所に立った。　王たちから遣わされた使者は、やって来て偶像が無傷であることを確認すると、統治者に何の害も与えることなく王たちの元へ戻った。その後、王たちからペラギウスに対し、テオドゥリアを様々な拷問にかけ、死刑に処すよう命じる指令が下された。　しかし、ペラギウスはキリスト教徒になるという約束を果たさなかったばかりか、聖テオドゥリアの恩恵さえも忘れてしまい、そのため再び彼女を拷問に

[1676] ここには、当然ながら、ローマ皇帝ハドリアヌス（*在位117～138年*）の偶像または像が祀られた神殿があった。周知の通り、ローマ人は亡くなった皇帝たちを神々の列に加え（*いわゆる「カエサル崇拝」*）、彼らに神としての敬意を払い、生贄を捧げるなどの儀式を行っていた。この皇帝崇拝はアウグストゥスから始まり、異教のローマ帝国が存在する間ずっと続いた。　死んだカエサル（すなわち皇帝）だけでなく、生きている者までもが神格化されるようになった。この崇拝はすべての人に対して強制的なものであった。在位中の皇帝の肖像を、自宅のペナテス（家の守護神）の間に安置することさえ義務とされていた。　ローマ帝国では、カエサル崇拝の遵守が厳しく監視されており、不注意や不敬から皇帝への敬意を表そうとしなかった者は、最も重大な犯罪者として扱われた。ローマの統治者たちは、キリスト教徒に対しても、このような皇帝への宗教的崇拝を要求した。

かけ、赤熱した鉄の棒で彼女の足を穿つよう命じた。その処刑が行われている最中、[1677] エラディウスという解説者がペラギウスの元へ近づき、こう言った。

「閣下、どうかこの乙女を私の支配下に委ねてください。そうすれば、私は彼女を説得して神々に拝ませます。もし私がこれを果たせなければ、閣下は私の首を切り落としてください。」

統治者は聖女を彼の支配下に委ねた。彼は五本の長い釘を取り、一本を彼女の左耳に突き刺して右耳まで貫通し、もう一本を右耳に突き刺して左耳まで貫通させた。三本目の釘を彼女の額に打ち込み、残りの二本で胸の乳首を貫いた。　聖女は天を仰ぎ、神に忍耐を授けてくださるよう祈った。すると直ちに神の助けと癒やしを受け、釘は抜け落ち、彼女は無傷となった。　エラディウスは聖女を自分の家に連れ帰り、彼女を甘言で誘惑し、自分と共に神々に拝むよう説得し始めた。「そうすれば、私も」と彼は言った、「都の統治者から栄誉を受け、あなたも王たち自身から大きな栄光に浴することができるだろう」。

しかし、聖女は彼にこう答えた。

「むしろあなた自身が確信を持ち、キリスト教徒になってください。そうすれば、一時的なものではなく、生ける者と死せる者を裁き、各人の行いに応じて報いを与えられる、私たちの主イエス・キリストの御国において、永遠の栄誉に浴することができるでしょう。」

そこでエラディウスは彼女に言った。

「キリストのしもべよ、真実をすべて語れ。あなたの言葉によって、私の心は燃え上がったのだから。」

すると、テオドゥリアは彼に語りかけ始めた。

「この世とそのすべての富、そしてすべての栄光ははかないものですが、来たるべき世は果てしなく続きます。この世で善を行う者は、来たるべき世で善の報いを受けますが、この世で悪を行う者は、そこで永遠に苦しめられるでしょう。また、あなた方のように偶像を拝む者は、とりわけ永遠の苦しみへと追いやられるのです。」

このような教えによって、聖テオドゥリアはエラディウスを真理へと導き、彼は心を打たれて彼女にこう言った。

「お願いです、テオドゥリア様。私があなたに与えた悪事は忘れてください。そして、私もキリスト教徒になれるよう、あなたの神に祈ってください。」

朝になると、エラディオスはテオドゥリアと共に総督のもとへ赴き、こう言った。

「私は、真の神のしもべを、正しく至福の道から迷わせることができませんでした。それどころか、彼女こそが私を正しい道へと導き、無知という闇から救い出し、真の神であるキリストのもとへと導いてくれたのです。私は疑いなくキリストを信じ、その聖なる御名を告白し、熱心に礼拝しております。」

この言葉を聞いた総督は、直ちに剣で彼の首を切り落とし、その遺体を海に投げ込むよう命じた。こうして、1月の24日、彼の殉教は成し遂げられた。 一方、聖テオドゥリアは激しく燃え盛る炉に投げ込まれたが、無傷のままであった。その後、拷問官は聖テオドゥリアのために鉄板を熱く焼くよう命じ、彼女をその鉄板の上に横たえ、沸騰した樹脂、蜜蝋、油を彼女に浴びせた。　しかし、火で熱せられていた鉄板は粉々に砕け散り、その火花と炎が周囲の民の多くを焼いた。一方、総督自身はその炎に包まれて恐ろしい死を遂げたが、聖テオドゥリアは再び無傷のままであった。

この奇跡を目撃して、多くの人々がキリストを信じるようになった。その中には、マカリウスとエヴァグリオスという名誉ある市民もいた。

その後、不信仰者たちは再び炉に火を点け、聖テオドゥリアと、彼女と共にマカリオスとエヴァグリオス、さらにはキリストを信じる多くの人々をその中に投げ込んだ。　そして、彼らは皆、そ

[1677] *コメンタリシウス*――囚人を監視し、その記録を管理する役人。

こで祈りを捧げた後、この世を去り、永遠の命へと移り、そこでは勝利の冠を戴き、すべての聖人たちと共に喜び祝うとともに、父と子と聖霊を永遠に賛美している。アーメン。

私たちの聖なる父、チェルニヒウの大司教テオドシオスの生涯

記念日：2月5日

チェルニヒウの大司教である聖テオドシウスは、その出自において、ザドネプロヴィエ地方の貴族一族であるウグリツキー家[1678] に属していた。テオドシウスの父はニキタという名で、マロロシアの司祭であり、母はマリーヤと呼ばれていた。　両親は息子を神への畏敬とキリスト教の敬虔さの中で育て上げた。彼らの教えの影響を受け、彼は幼い頃から、その後の生涯を彩ることとなる敬虔さの素質を身につけていた。　生来、温厚で従順、そして感受性の豊かなテオドシイは、幼い頃から神への燃えるような愛と、神の宮への熱意に燃えていた。家庭で初等教育を受け、読み書きを学んだ後、テオドシイはさらなる教育を受けるため、父によってキエフ・ブラツカヤのエピファニー学校[1679] に送られた。　そこで、敬虔な指導者たちの影響と導きのもと、聖書や教父たちの著作を熱心に学び、聖人はそれらに従って自らの生活を築こうと努めました。ここで彼は成長し、正教の信仰の真理の認識と敬虔な行いにおいて、精神を強めていきました。　さらにここにおいて、学校に通っていた頃、若きテオドシオスには、力及ぶ限り、聖アントニオや聖テオドシオス、そしてその他のペチェールスクの修道士たち――これらの偉大な祈りの人であり、古来より聖座を置くキエフの天の守護者たち――の、天使に等しい生活に倣おうとする志が芽生えた。　その恵み深い加護の下で彼は暮らし、育てられ、その朽ちることのない、栄光に満ちた聖遺物を常に目の前に見ていた。授業のない時間、テオドシウスが好んで行っていたのは、祈り、神への黙想、そして神の言葉の朗読であった。　また、ここで聖テオドシウスは、ラザール・バラノヴィチ大主教が設立した聖歌学校において、教会の聖歌を深く学びました。　そもそも、ポーランド・カトリックの聖職者やイエズス会による攻撃から正教の信仰を維持・防衛するために設立されたキエフ・ブラツカ・ボゴヤヴェンスカ学校（[1680] ）は、すべての教育を厳格な正教のキリスト教精神に基づいて行い、その精神は生徒たちの若い魂にも深く浸透していた。　その指導者たちの中には、正教の精神的啓蒙における真の指導者たちがいた。聖テオドシウスもまた、そこで当時としては最高かつ最良の教育を受け、それが彼の魂に豊かに備わっていたあらゆる才能の完全な開花に寄与したことは疑いようがない。

キエフ・ブラツカのエピファニー学校での教育を終えるやいなや、テオドシウスは修道生活に入った。これは、学校在学中からすでに、霊的な功徳を熱烈に渇望していた彼の魂が切望していたことでもあった。　こうして、若き日に、この真のキリストの修道士は、この世のあらゆる恵みを無に

[1678] 伝承によれば、この姓は、ウグリチ市から敵を撃退した際の功績により、聖テオドシウスの先祖の一人に授けられたものである。

[1679] これはロシア最古の名門校であり、その創設は16世紀末に遡る。現在は、キエフのポドル地区にあるブラツキー修道院に所在するキエフ神学アカデミーである。

[1680] キエフ・ブラツキー・ボゴヤヴェンスカヤ学校は、南ロシア正教会全域における教育の主要な拠点としての役割を果たす一方で、　同時に、絶え間ない敵の攻撃にさらされていた南ロシア正教会において、正教の信仰を守るために戦った数多くの著名な闘士たちをその校門から送り出した。敵とは、カトリック教徒や、彼らと志を同じくするユニエートたち――彼らは正教の信仰を軽蔑し、教皇の優位性を認めた者たち――、そしてさらに狡猾なイエズス会の　カトリック修道会の修道士たち――彼らは、いかなる手段を用いてもカトリックと教皇の優位を至る所で確立することを自らの目的としていた――といった敵からの絶え間ない攻撃にさらされていた南ロシア教会において、正教の信仰を守るために戦う数多くの著名な闘士たちを、その壁の外へと送り出したのである。

等しいものと見なし、波乱に満ちた虚しい世を離れ、キエフ・ペチェルスカ修道院で「テオドシイ」という名を受け、修道服を身にまといました。　これは、キエフ・ペチェルスクの偉大な修行者であり、ロシアにおける共同修道生活の創始者である聖テオドシウスに敬意を表してのことでした。彼はキエフで学んでいた頃から、この聖人を深く崇敬し、その祈りの取り成しを頻繁に求めていたのです。　この時から、テオドシイの厳格な修道生活が始まり、まもなくして、修道界だけでなく一般信徒の間でもその名が知られるようになった。

この若き修道者の謙虚さと模範的な生活は、当時キエフの都主教であったディオニシオス[1681]（ヴァラバン）の注目を集め、彼はフェオドシオスをキエフ・ソフィア大聖堂の首席助祭に任命した。フェオドシオスは、ディオニシオス都主教がキエフを去るまで同大聖堂で敬意を込めて奉仕し、その後、彼は大主教座大聖堂の代理に任命された。しかし、世俗の喧騒に乱されるキエフでの生活は、沈黙を求めるこの謙虚な修道士の内なる衝動や、神との絶え間ない祈りの交わりに留まりたいという彼の願いを満たすことはできなかった。　そのため、聖テオドシウスは、敬虔な行いと修道者の沈黙への愛に駆られ、まもなくキエフを離れ、古くから厳格な修道生活で知られていた、人里離れた小さなクルピツキー・バトゥリン修道院（[1682] ）に身を寄せ、そこで司祭修道士の聖職に叙階された。しかし、教養があり、敬虔で、活動的なこの修道士がどれほど世の中から身を隠そうとも、最高位の教会当局の目に留まらないわけにはいかなかった。　聖テオドシウスはクルピツキー修道院で長く修業を続けたわけではありませんでした。彼は、その霊的な知恵と、厳格で修道的な徳の高い生活によって、他の修道士たちの中で際立って目立っていたため、ほどなくしてキエフ教区のコルスン修道院のイグメンに任命されました。　聖テオドシオスにとって、この新たな任命は彼の内なる志に合致するものであった。ロシ川の島に位置し、世俗の住居から遠く離れた風光明媚な地にあるコルスン修道院[1683] は、世俗の喧騒から離れて隠遁生活を送り、敬虔な行いに励みたいという聖人の願いに完全に合致していた。　そして彼自身も、その敬虔で真に苦行に徹した生活によって、ここで修道者たちの模範となり、修道院を統率する賢明な手腕を発揮した。そのため、まもなく彼は、有名なキエフのヴィドゥビツキー修道院[1684] の院長に任命された。この由緒ある修道院は、その直前にユニエート派やポーランド系カトリック教徒の手に渡り、彼らによって荒廃させられていた。修道士の大半は散り散りになってしまっていた。荒廃した修道院で生活しようとする者は誰もいなかったからだ。修道院の建物は荒廃しており、一部の修道院所有地は不当に奪われていた。　概して、この修道院は内部および　外部の整備を必要としており、かつての姿を取り戻すには多大な労力と手腕が求められた。しかし、フェオドシイは気落ちすることなく、神の御加護のもと、その使命を成功裏に果たし、この名高い古刹をかつての輝きと整然とした姿へと蘇らせた。　彼は、リトル・ロシアのヘトマンに対し、各地の土地の強化を懇願し、また皇帝からは、5年ごとに修道士たちをモスクワへ派遣して施しを集め、皇帝の慈悲を請うことを許可された。修道士たちは、その慈悲を惜しみなく受け取っていた。　同時に、彼は修道院の建物や礼拝堂を修復し、修道院の外観全般を整えた。特に、修道院における礼拝の規律と荘厳さに心を配り、　教会音楽に精通していた聖テオドシウスは、自身の修道院に非常に優れた聖歌隊を編成し、その名声はキエフや小ロシア全土にとどまらず、モスクワでも知られるように

[1681] ディオニシイ都主教は、キエフ都主教区を統治したのは、せいぜい半年にも満たなかった。彼は1658年2月に都主教に任命されたが、1658年7月にキエフを去った。もっとも、名目上は引き続きキエフ都主教として在任していた。

[1682] バトゥリーナという小さな町の近く、現在はチェルニヒウ県にあり、コノトプ市から30ヴェルスタの距離にある。16世紀に創設された。

[1683] キエフ州コネフ郡に位置する。――聖テオドシウスは、1661年頃にコルスン修道院のイグメンに任命された。

[1684] それは1664年のことだった。キエフ・ヴィドゥビツキー修道院は、キエフ教区で最も古く、最も重要な修道院の一つであった。11世紀末に創建され、17世紀初頭、ポーランド支配下においてユニオンが導入されたが、その後再びキエフ都主教の管轄下に戻された。 現在は二等男子修道院となっている。

なった。そのため、モスクワからの要請に応じて、テオドシウスは聖歌隊の指導者として歌い手を派遣した。　しかし、この真のキリストの修道者の、修道規律の回復とヴィドゥビツキー修道院の内部生活の整備に向けた功績は、さらに注目に値する。修道者としての義務を熱心に果たし、彼は修道士たちにとって厳格な修道生活の模範となり、救いを求める多くの人々を自らの修道院に引き寄せた。同時に、ヴィドゥビツキー修道院の修道士たちに真の修道精神をさらに深く浸透させたいと願った聖人は、修道院の所有地であるモジール郡の[1685]に、完全な隠遁生活と厳しい禁欲的修行を求める兄弟たちのために、小さなスキート（小修道院）を設立した。

その後、救い主の「*世には苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはこの世に打ち勝った*」（ヨハネ16:33）という御言葉に従ったものの、キリストのぶどう園の忠実な働き手である聖テオドシウスは、人々の誹謗中傷や嫉妬により、多くの不当な苦悩と悲しみを味わった[1686]――しかし、彼の修道生活と修道士たちに対する賢明な指導は、キエフ市民全員からの尊敬を勝ち取った。とりわけ、当時のキエフ都主教区の代理主教であり、チェルニヒウ大司教ラザール・バラノヴィチ[1687]は、かつてキエフ・ボゴヤヴレンスカヤ兄弟学校の教師兼校長としてテオドシウスを指導していた人物であり、聖テオドシウスに対して特別な好意と配慮を示していた。　この時期に書かれた手紙の一つの中で、ラザール大主教は、「彼（テオドシオス）の名が天に記される」ことを願うという、予言的な言葉を述べている。　キエフ都主教区の代理として、聖ラザールは、当時まだヴィドゥビツキーのアルヒマンドリトであったフェオドシイを、都主教区の代理として任命した[1688]。その後、小ロシアによってルツク主教ゲデオンがキエフ都主教に選出された際[1689]、ラザール・バラノヴィチは、その選出の承認を求める使者として、もう一人の高名な修道院長と共に、小ロシアの教会に多大な貢献をしてきた人物としてフェオドシイを派遣した[1690]。これにより、聖ラザールやその他の小ロシ

[1685] ミンスク県に属していた。そこにはキエフ・ヴィドゥビツキー修道院に属する「ミハイロフシチナ」という島があり、1680年に聖テオドシオスによって小さなスキトが設立・整備された。その代理修道院長には、ヴィドゥビツキー修道院の厳格な修行者の一人である修道士イオヴ・オパリンスキーが任命された。

[1686] 聖テオドシウスは、キエフ都主教の座を主張し、自らの目的のために、聖人を他のキエフの修道院の院長たちと共に、政治的陰謀やモスクワ政府への反逆に関与していると誹謗中傷した、ムスティスラフおよびオルシャの司教メフォディウスの陰謀により、とりわけ大きな苦難を強いられた。　しかし、真実は直ちに明らかとなり、テオドシウスの無実もその時点で明白に証明された。

[1687] ラザール・バラノヴィチ――キエフ・ボゴヤヴレンスカヤ兄弟学校の校長であり、1657年からはチェルニヒウ大司教を務めた。南ロシアの著名な政治家・文学者であり、カトリック教徒やユニエート派に対する説教者かつ論客であった。同時代の人々から非常に尊敬されていた。聖ディミトリ・ロストフスキーは彼を「教会の偉大な柱」と呼んでいる。

[1688] 当時、キエフ都主教座は政治的混乱のためかなり長い間空席のままであった。その結果、その管理は一時的に、南ロシアで最も尊敬されていた大司教、すなわちラザール・バラノヴィッチに委ねられたのである。

[1689] ゲデオン（スヴィャトポルク＝チェトヴェルティンスキー）――ルツク司教、1686年からキエフ都主教を務め、1690年に死去した。様々な聖職者への書簡や使節文で知られている。

[1690] 聖テオドシイは、最も名誉ある聖職者の一人として、1685年に大主教を選出した公会議が、新任の大主教に対し、選出の通知とキエフ大主教座への就任の招待を伝えるために派遣した使節団の代表を務めた。同年、「尊厳なる」　かつ「小ロシアの教会において功績ある」修道院長テオドシイは、ペリャスラフの修道院長イエロニム・ドゥビナと共に、ツァーリのイオアンとペトル・アレクセーエヴィチ、および総主教イオアキムのもとへ派遣され、小ロシアによって選出された大主教の承認を要請した。　ここで留意すべきは、当時、小ロシアからモスクワへ選ばれた人々が派遣されたのは、単に何らかの請願書を届け、必要に応じてその請願の仲介役を務めるためだけでなく、彼らをツァーリや総主教の前に、有能で高位の役職にふさわしい人物として紹介するという目的もあったということである。　モスクワ側もこれを同様に捉えており、使節団の代表であるヴィドゥビツキーとペレヤスラフスキーの両イグメンは、「小ロシア教会に功績のある人物」として迎えられた。この使節団の成果として、南ロシア教会がモスクワ総主教庁に編入されるという偉大な事業が実現した。

アの聖職者および世俗の　要人たちは、フェオドシイを最高位の職に特にふさわしく有能な人物として、明確に推し立てようとしたのである。その頃、モスクワでは、聖フェオドシイが、ヴィドゥビツキー修道院が施しを集めるためにモスクワへ使者を派遣することを許可する皇帝の勅書の発行を働きかけていた。　この時から、あらゆる好機が訪れるたびに、フェオドシイ・ウグリツキーは最高位の座に就くにふさわしい人物として注目されるようになった。こうして、キエフ都主教ゲデオンの死後、フェオドシイはキエフ都主教座の候補者の一人となった。　それより以前にも、キエフからチェルニヒフに戻り、自身の教区の務めに専念していたラザリ・バラノヴィチ大主教の意向と希望により、彼はチェルニヒフに招かれ、同地のエレツ修道院（[1691] ）のアルヒマンドリトに任命された。これは、同修道院の修道院長であり、著名なイオアンニキイ・ゴリャトフスキー（[1692] ）が死去した後の後任としての任命であった。

当時のイェレツ修道院は極めて貧しく、物資も乏しかった。領地や修道院の経済的資産は少なく、修道士たちは生活面で大きな困窮に直面していた。新任の修道院長は、任された修道院の立て直しに精力的に取り掛かった。 就任直後、彼は小ロシアのヘトマン、マゼパ[1693] を訪ね、「イェレツ修道院は穀物の備蓄、とりわけ薪が乏しく、修道士たちと共に暮らすのが困難である。しかし、アルヒマンドリヤの領地には被支配者が少ないため、支援する手段がない」と訴えた。　――と訴えた。すると、通常は聖職者や修道院に対して寛大さを示すことのないマゼパでさえ、聖テオドシウスへの特別な敬意からその願いを聞き入れ、モシュチョンカ村を修道院の所有地として与えた。また、他の富裕層も、テオドシウスへの敬意から、イェレツ修道院への慈善活動に励んだ。

このようにして、聖テオドシオスの在任中、2〜3年の間に、イェレツ修道院はその存続を十分に保障できるほどの繁栄を遂げた。　修道院の外部的な整備に心を配る一方で、聖テオドシオスは、その内部の繁栄、すなわち真の修道生活の確立と維持にも同様に心を砕いた。この点において、彼自身の極めて個人的な功績こそが、エレツの修道者たちにとって、修道生活を送る上での極めて教訓的な模範となったのである。

こうした修道院の諸業務に加え、フェオドシイは同時に、ラザリウス大司教の布教活動において精力的な補佐役を務め、大司教の意向により、その司教邸の経済事務および一部の教区事務も統括していた。　時が経つにつれ、ラザリウス大主教は、アルヒマンドリト・フェオドシイ・ウグリツキーが、任された職務を分別と英知をもって遂行していることを認め、　彼がチェルニヒフ教区の運営において、自分にとって最良の補佐役となり得ると確信した。そこで、小ロシアのヘトマンの同意を得て、彼にモスクワへ赴き、アドリアン総主教[1694] に対し、自分を補佐役に任命するよう要請するよう提案した。これは1691年のことである。　モスクワでは、すでにかねてよりテオドシイの徳高い生活と霊的な英知が知られていたため、総主教は、万人に尊敬されるチェルニヒウの老聖人の願いを快く聞き入れ、さらに小ロシアのヘトマンに対し、聖テオドシイを称賛する言葉を記した聖職者書簡をもってその旨を通知した。

[1691] チェルニゴフにあるエレツキー・ウスペンスキー第一級修道院は、1060年にチェルニゴフ大公スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチによって設立された。

[1692] イオアンニキ・ゴリャトフスキーは、17世紀の南ロシアの著名な説教者であり、論争的な著述家であり、当初はキエフ・モヒラ学院の学長を務め、その後チェルニゴフのエレツキー修道院のアルヒマンドリトとなった。

[1693] イワン・マゼパは、1687年から1709年まで小ロシアのヘトマンを務めたが、1709年にピョートル大帝とロシアに背き、スウェーデン王カール12世の側についた。同年、彼は死去した。

[1694] アドリアン – 最後の（通算10代目）全ロシア総主教であり、1690年から1700年まで教会を統率した。

しかし、この支援は、その生涯の終わりを迎えつつあった長老聖人にとっては不十分であった。信徒の指導に熱心に取り組んだテオドシウスへの感謝の念に満ちたラザール大主教は、自身の存命中にテオドシウスを聖職者の位に就かせ、自分にふさわしい後継者を育て上げたいと願った。

1692年、彼はヘトマンと共に、イオアンとペトル・アレクセーエヴィチ両ツァーリおよびアドリアン総主教に対し、イェレツのアルヒマンドリト、テオドシイ・ウグリツキーを大司教の位に叙任するよう求める書面による請願をモスクワに提出した[1695]，その際、両者は自らの名において、「『』の尊称を持つアルヒマンドリトは、若き頃から送ってきた修道生活における美徳に彩られた善良な人物であり、　修道院の運営に熟達し、神への畏敬と霊的な知恵に満ち、教養があり、教会の栄光に極めて熱心であり、主教座およびチェルニヒフ教区を統治する能力を備えている」と証言した。　尊敬すべき長老聖人の請願は受け入れられ、同年、テオドシウスは叙階式を受けるためモスクワへ向かった。そこで9月11日に司教への指名式が執り行われ、同月18日には大司教として叙階された。 新しく叙階された大主教は、モスクワに約2ヶ月間滞在した。これは、聖人テオドシイを敬愛していた総主教の意向によるものであり、総主教は、彼をモスクワに留めて対話を交わし、共に礼拝を執り行う好機を捉えたのである。

チェルニゴフの老大司教ラザール・バラノヴィチは、愛する補佐が聖職者の位についた姿を見たとき、この上ない喜びに包まれた。　聖テオドシオスを敬虔に愛し、尊敬していた信徒たちも、これに深く喜びを覚えた。こうして、チェルニヒフ教会は、正教の柱である二人の著名な聖職者による指導に恵まれ、彼らは全世界の平和と、神に救われた信徒たちの幸福を願って、神の慈悲を懇願していたのである。　一方、テオドシオスは聖職者としての地位にあっても、ラザリウス大主教を補佐し、しばしばその役割を完全に代行しながらも、彼に対して限りない愛と息子のような忠誠を保ち続け、恩人に対して完全な服従を示し、　チェルニヒウの大主教の同意なしには何事も行わず、信徒の統治にあたっては、その指示と御心に従うよう努めていた。

しかし、主は、正教会のこの二人の偉大で著名な支柱が、チェルニヒウの信徒たちを守るために共に立つことを、長くは許されなかった。1693年9月3日、偉大なる長老であり大司教であった彼は、静かに、安らかにこの世を去った。彼は36年間にわたりチェルニヒウ教区を統括していた。　聖テオドシオスは、チェルニヒフの全聖職者および他地域から駆けつけた聖職者たちと共に、チェルニヒフのボリソグレブ大聖堂の左側聖歌隊席の後ろで、彼を厳かに埋葬した。

聖ラザロ大主教の逝去を皇帝と総主教に報告する前に、聖テオドシウスは小ロシアのヘトマンのもとへ赴き、この悲報を伝えた。　彼と共に、修道司祭パホミイやその他数名をモスクワへ派遣し、ラザリウス大主教の逝去と埋葬についてツァーリと総主教に報告させた。その際、ヘトマンは、ラザリウスの逝去を嘆き悲しんでいたが、彼の死後、　至急、その主教の座をフェオドシイ・ウグリツキー大主教が引き継ぎ、その徳によって教会を輝かせ、巧みな判断力で教会の統治を円滑に進めることができるだろう。

これに対し、皇帝は、テオドシウスに対し、故ラザール大主教が享受していたのと同様の皇帝の恩寵を授けるつもりであると返書した。　一方、総主教はヘトマンに対し、ラザリウス大司教の存命中にテオドシウス大司教が叙任されたことを、チェルニヒウの信徒たちに恵みをもたらす神の特別な摂理であると見なし、教会の息子であるヘトマンに対し、聖なる教会への配慮においてテオドシウス大司教を支援するよう要請した。　同時に、総主教は、聖テオドシオスをチェルニヒウの主教座に独立した大牧者として最終的に承認するための「祭壇前」の勅書を送り、その中で、とりわけ彼を、

[1695] フェオドシイが直ちに*大司教の位*に叙任されたことについては、1667年のモスクワ大公会議において、チェルニゴフにまさに*大司教区*が設置され、チェルニゴフの大司教座が当時、ロシア正教会の他の大司教区の中で第一位に位置づけられたことによるものである。

若き頃から修道生活において徳を磨き、誠実な修道院の運営に長け、　神への畏敬と霊的な知恵に満ち、知恵を愛し、教会の栄光のために最も熱心に尽力する人物であり、チェルニヒウの教区と教会の管理を任されるにふさわしい人物であると述べている。

チェルニヒウの唯一の首席司牧者となった聖テオドシウスは、父のような熱意をもって羊の群れの福祉に心を配り、以前以上に、すべての人の目の前で、聖なる生活、苦行への真摯な愛、　キリスト教的な慈悲、そして彼に助けを求めるすべての人々への愛を、誰の目にも明らかになるほど示した。その善行とキリスト教的な美徳によって、彼はチェルニヒウの信徒たちだけでなく、そのはるか彼方まで光を放っていた。

モスクワにおいても、彼の名はかねてより特別な敬意を込めて語られていた。それは、彼がその霊的な知恵と道徳的資質によって、当時のすべてのロシアの聖職者たちの中でも際立っていたからである。　チェルニヒフ教区の教会運営を整えつつ、聖テオドシウスは、自らその信徒たちにとって、神の摂理への深い信仰、祈りと教会礼拝への熱心さ、　隣人の弱さに対する柔和な寛容さと、彼らの必要への思いやりを体現し、それゆえに信徒たちから満場一致の、偽りのない愛と尊敬を勝ち得た。生涯の最後の瞬間まで、彼は真の戦士であり、　なキリストの修道士として、聖なる正教の信仰の栄光と隣人の益のために奮闘した。　使徒の言葉によれば、彼は*「霊に燃えて、主に仕えた」*（ローマ12:11）のであり、周囲のすべての人々にとって*「燃えて輝いている灯」*であった（ヨハネ6:35）。

チェルニヒウの信徒たちは、彼らの大牧者である聖テオドシウスが、真の神の僕であり、神の家における忠実な建設者であり、教会の警戒心ある守護者であり、たゆまぬ働き手であり、主の御前ですべての人々のために祈り、取り成す信頼できる者であることを認識していた。　特に聖人は、公正かつ慈悲深い裁きによってすべての人の心を惹きつけ、無力な者や孤児たちに深い憐れみを示し、彼らのために正義が求めるものを丹念に探し求めるとともに、福音の精神に則った寛大な慈善とキリスト教的な慈愛をもって接した。

概して、彼はキリストの御国にのみ存在する類の社会活動家の一人であり、この世の偉大で力ある者たちよりもはるかに多くのことを、公共の利益のために成し遂げた。*「互いに心を一つにしなさい。高ぶらず、へりくだった人々に倣いなさい。自分を過大評価してはならない」*（ローマ12:16）。

聖テオドシオスは、幼い頃から深く愛し、自らその高き模範を示していた修道生活への愛を、自身の信徒たちの中に強めることに、極めて細心の熱意をもって尽力した。　この目的のために、彼は自らの教区に以前から存在していた修道院を維持するだけでなく、新たな修道院を設立することにも熱心に努めました。こうして、彼はいわゆるペチェニク修道院（[1696]）という女子修道院を設立した。聖テオドシオスが修道院の整備に注いだ父のような配慮を最もよく示す記念碑は、ペチェニク修道院の修道女たちに与えられた、聖人による祝福状である。　父としての愛をもって新しく建立された修道院を祝福しつつ、聖人は修道女たちに、修道院長に対する「謙遜と完全な服従という美徳」を命じました。それは平和の源であり、聖人自身および神の祝福の保証であるからです。

その後、聖人の祝福により、リュベチャの町から2ヴェルスタ離れた場所に、もう一つの修道院が設立された[1697]。同時に、チェルニヒウ教区における修道生活の振興や修道院の整備に尽力する傍ら、聖テオドシウスは神殿の建設と美化にも熱心に取り組みました[1698]。教区の道徳的繁栄を念頭

[1696] この修道院は、スタロドゥベの連隊長であった故人の未亡人マリーヤ・スリモワによって、亡き夫と共に購入した「ペチェニキ」と呼ばれる土地に建設された。修道院の名称はこの地名に由来するが、現在は存在しない。

[1697] リュベチは、現在、チェルニヒフ州ゴロドニャン郡にある商業の盛んな小さな町で、チェルニヒフから52ヴェルスタの距離にある。

[1698] こうして、彼はイリインスキー修道院の近くにある聖三位一体に捧げられた荘厳な教会と、ドムニツキー男子修道院（チェルニゴフから35ヴェルスタ）にある聖母マリアの降誕に捧げられた教会を奉献した。

に置き、彼は主に聖職者に注目し、聖職の地位にはふさわしく有能な人物を選抜するよう努めるとともに、あらゆる手段を講じて教区聖職者による牧会・啓蒙活動を強化した。

また、聖テオドシオスは、チェルニヒウ教区を統括していた期間中、マロロシアにおける正教の事業、同地における有害なポーランドのユニエート・カトリックの影響への対抗、そして同地におけるロシア民族性の強化のためにも多大な尽力をした。　また、彼はその道徳的影響力、雄弁さ、そしてキリスト教的な平和愛好の精神により、熱血で気性の激しいウクライナ人たちの激情を常に鎮め、それによって国家を有害かつ危険な動乱から守ることで、ロシア国家に少なからぬ利益をもたらした。

しかし、聖テオドシウスがチェルニヒフの主教座で輝いた期間は長くはなかった。彼がチェルニヒフで過ごしたのはわずか8年ほどであった。そのうち5年近くはイェレツのアルヒマンドリトとして、3年4ヶ月は大司教として務め、特にラザール・バラノヴィチ大司教の死去後は、約2年間にわたり独自に信徒たちを統率した。　自身の死が近いことを予感した聖人は、チェルニヒフにブリャンスク・スヴェンスキー修道院の代理である 修道司祭イオアン・マクシモヴィチ[1699] をチェルニヒフに呼び寄せ、1695年半ばに彼をイェレツ修道院のアルヒマンドリトに叙任した。聖人はそれまで自らその修道院の運営を絶えず続けていたが、新たなアルヒマンドリトを自身の後継者として育成していたのである。　その直後、ロシア教会の偉大なる灯は消えた。聖テオドシウスの逝去は1696年2月5日に訪れた。遺された信徒たちによって深く悼まれ、　聖テオドシウスは、チェルニヒウの大聖堂であるボリソグレブ修道院の右側聖歌隊席の後ろに埋葬された。

この世での奉仕の旅路を終え、　聖テオドシオスは、その朽ちることのない御身を大聖堂に安置し、信徒たちを見捨てることなく、逝去した当初から、彼の助けを求めるすべての人々を祝福し続け、神の御前で彼の祈りの執り成しを求める者たちに、豊かな奇跡的な癒やしという神の恵みを注ぎ続けた。　聖テオドシウスの祈りの執り成しによって現れた、神の恵みの数々の奇跡的な現れは、彼の至福の死後まもなく、チェルニヒウ教区の後任であるヨアン・マクシモヴィチ大司教が、重い病気から恵み深い癒やしを受けたことで明らかになった。　ヨアン大主教は高熱を伴う重篤な病に倒れ、病状は急速に悪化し、錯乱状態に至った。すると突然、病状が最も深刻な最中に、大主教は侍者を呼び寄せ、直ちに自身の居室で晩課を行い、彼のために礼拝の儀式を執り行うよう命じ、翌朝には教会での礼拝に必要な準備をすべて整えるよう指示した。　病床の首席司教を取り囲んでいた者たちは、彼が錯乱しているのだと考えたが、彼の強い要求に屈し、その願いを叶えざるを得なかった。　翌日、皆の驚きにも、大主教は完全に健康を取り戻し、神聖な聖体礼儀を執り行った。その後、彼は周囲の人々に、前夜に聖テオドシウスが現れ、「明日、礼拝を執り行えば、あなたは健康になるだろう」と告げたことを明かした。　重病からの瞬時の奇跡的な治癒への感謝として、大主教ヨアン・マクシモヴィチは直ちに、神の御心に適う者を称えるため、当時の慣習に従って詩で綴られた「賛歌」[1700]。その中で、彼は聖テオドシオスを「地上の天使であり、セラフィムの群れに属する聖人」と呼んでいる。彼の指示により、聖テオドシオスの棺の上、ボリソグレブ大聖堂の基礎部分に、螺旋階段で入る石造りの洞窟が設けられた。

ヨアン・マクシモヴィチ大主教の驚くべき癒しの奇跡は、聖テオドシウスを恵み深い奇跡行者であり、神の御心に適う者として崇敬するきっかけとなった。時が経つにつれ、聖テオドシウスの癒

[1699] イオアン・マクシモヴィチは、後にトボリスクおよびシベリア全土の大主教となり、異民族の間でキリスト教を広めることに多大な尽力をした。1716年に死去した。彼の記憶は、神の御心に適う者として、地元で敬虔に崇められている。

[1700] この「賛辞」は、チェルニゴフのボリソグレブ大聖堂にある聖テオドシウスの絵画の下、聖人の遺骨が安置されていた石造りの小部屋の入り口の上に記されている。

しの聖遺物から新たな神の恵みが豊かに現れた結果、この崇敬はチェルニヒウ州の境界をはるかに超えて広まっていった。　これらの奇跡は、聖テオドシオスが夢の中で病人に現れ、癒やしを約束しつつ、祈り、断食、祈祷会の執り行いなどを命じるという現象がしばしば伴っていたため、なおさら明白かつ顕著なものとなりました。　また時には、彼に助けを求めてきた者たちの中で、何らかの罪を犯した者たちに対して、教訓を与え、諭し、父のように叱責することもありました。例えば、ある口がきけない人の前に、聖人は夢の中で現れ、「大聖堂へ行き、祈祷会を執り行いなさい。そうすれば、あなたは健康になるだろう」と言いました。　翌日、その口がきけない男は、驚いたことに話し始めることができ、その後、大聖堂で聖人の肖像画を見て、夢の中に現れたのが、まさにその神に愛された聖人であることを悟った。　「祝福し、赦す」と、聖人は、夢の中で自分の罪を告白し、息子の癒やしを祈っていた司祭に語りかけ、その赤ん坊を癒やすと約束した。すると翌日、その赤ん坊は回復した。　四旬節の期間中、激しい苦しみの中で聖人に助けを求め、泣きながら祈りを捧げていた女性に対し、聖人は優しく戒めつつ諭してこう言った。「あなたは断食をしなかった。それは良くない。あなたは復活祭の聖餐を受けるに値しない。聖土曜日には聖体拝領ができるよう努めなさい」。　また、涙ながらに神に祈り、夫の回復を聖人に祈ってほしいと懇願した別の女性に対し、奇跡を行う聖人は、彼女を慰め、希望を持たせるように優しくこう言った。「泣かないで。私が神に懇願するから、あなたの夫は元気になるだろう」。　そしてその直後、約1年間も苦痛を伴う病に苦しんでいた彼女の夫は、完全に回復した。聖人は、自分を呼び求めていたある病人の元を訪れ、ただ一言「落ち着きなさい」と告げただけで、彼女の精神的な苦しみは完全に消え去った。　聖テオドシオスの祈りの取り次ぎによって成し遂げられた驚くべき癒やしの数々をすべて挙げきるのは難しい。ただ、ロシアの各地から、彼の墓に数多くの巡礼者が集まるようになったと述べるだけで十分だろう。

聖テオドシオスの遺体は、1772年2月14日の彼の至福の帰天から76年後、地元のテオフィロス司教の祝福のもと、新しい木製の棺に移された際、初めて朽ちていないことが確認された。　なお、この神の御使いの最初のキパリス製の棺は、その一部が巡礼者たちに分配された。　前世紀の初めから、ウグリツクの聖テオドシウス（　）を恵み深い奇跡行者として崇敬する動きが、特に強まっている。彼に関する噂や、その聖遺物から生じる奇跡の物語は、この時期にはすでにチェルニヒウ州の境界をはるかに超えて、様々な身分や境遇の正教徒たちの間に広まっていた。　1824年、聖テオドシオスの棺の前で、チェルニヒウの商人であり分裂派であったゴルブノフが重い病から癒やされた。彼はその後、正教会に改宗し、この奇跡的な癒やしを記念して、自らの資金で聖人の朽ちない聖遺骨のための新しい棺を建立した。　時が経つにつれ、大聖堂では、聖テオドシオスの聖遺物によって起こった治癒について、十分に検証され、立証されたものを、多かれ少なかれ正確かつ継続的に記録するようになった。　1850年以降、チェルニヒフ大聖堂では、聖テオドシウスへの祈りによる奇跡について、すでに恒常的かつ詳細な年代記が記されており、他のいくつかの場所でも同様の記録がなされている。

一方、聖テオドシオスの聖遺骨が安置された棺には絶えず大勢の巡礼者が押し寄せていたが、その入り口が狭く不便であったため、1856年にはボリソグレブ大聖堂の玄関部分南側に、便利な階段を備えた半円形の小礼拝堂を増築し、洞窟自体も拡張して明るくする工事が行われた。

前世紀の終わり頃には、聖テオドシウスの名は、偉大な神の御心にかなう者、災いや災難からの守護者、あらゆる悪しき状況からの救い主、そして神の前で熱心に祈りを捧げる者として、ロシア全土に知れ渡っていた。聖人の棺の前では追悼の儀式しか執り行われていなかったにもかかわらず、民衆の間では、あたかもすでに列聖された聖人のかのように、彼への崇敬が捧げられていた。民衆による聖テオドシオスへの聖人としての崇敬、そして彼の朽ちることのない聖遺物による数多くの奇跡的な治癒の事例は、行政当局の注目も集め、それは1889年のチェルニヒウ州知事による「最も忠誠を尽くした報告書」に表れ、　この報告書は、さらに天に召されたアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ皇帝の注目を引くこととなった。　このことを踏まえ、聖シノドは、故聖人の遺体が腐敗してい

ないこと、およびその棺の周囲で起こる奇跡的な現象について、検証に着手する時期が到来したと判断した[1701]　。聖人の遺体は、乾燥していない洞窟に200年近く安置されていたにもかかわらず、腐敗していないことが判明した。　同時に、聖テオドシオスへの祈りによる奇跡的な治癒の多くの事例が適切に調査され、治癒を受けた本人、その親族、および目撃者らによって宣誓の下で証言された[1702]。このことを踏まえ、聖シノドは次のように決定した――「安らかに眠るテオドシオス、　チェルニヒウ大司教を聖人の列に加え、神の恵みによって栄光に包まれ、朽ちることのないその遺体を聖遺骨として認定する」と決定し、その厳粛な開棺式を執り行うこととした。これに対し、皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチは直ちに同意を示した。

聖テオドシオスの聖遺物の厳粛な公開は、1896年9月9日に行われた。これは、キエフ都主教イオアンニキイ大主教によって執り行われ、6人の主教、多数のアルヒマンドリトやイグメン、その他の聖職者たちが共祭した。　この際、神の御愛する者の聖遺骨はボリス・グレブ大聖堂からスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂へ移され、新しいキパリス材の棺と、新しい貴重な銀製の聖遺骨箱に納められた。そこでは、無数のランプの灯りに照らされ、大聖堂の右側に安置され、現在もそこに眠っている。　新たに現れた神の御愛する者の栄光を称える祝典の間、15万人に及ぶ膨大な群衆が街を埋め尽くし、聖テオドシウスに熱烈な祈りを捧げ、神への祈りを願い求め、その聖なる朽ちることのない聖遺物に手を触れるために急いで集まった。　この列聖式は数多くの驚くべき癒やしによって彩られ、正教徒だけでなく、分裂派の人々にも深い感銘を与えた。御自身の聖人において驚くべき御業をなされる神に栄光あれ！

トロパリオ、第4声：

司教たちの中で最も称賛された聖テオドシオよ、あなたは御自身の群れにとっての光であり、今や永遠の住まいへと旅立たれました。栄光の王の御座の前で、私たちに降りかかっている悪から救い出し、私たちの魂が救われるよう、聖なる方よ、あなたの祈りによって懇願してください。

コンダク、第4調：

聖テオドシオよ、あなたは牧者たちの長であるキリストに仕え、霊的な牧草地で御言葉によってあなたの羊たちを養い、また、救い主キリストから、あなたの聖遺物に信仰をもって訪れるあらゆる者の肉体的・精神的な病を癒やす癒しの賜物を受けられました。　聖なる方よ、あなたの御名を呼び求める者たちの魂が、敵の誹謗から救われるよう、お祈りください。

2月19日

2月6日（旧暦）

聖女ファウスタと、彼女と共に殉教したエヴィラシアおよびマクシマの殉教

記念日：2月6日

[1701] 調査は、キエフ都主教ヨアンニキ大主教が、地元のアントニー司教、チェルニヒフ神学校の学長、キエフ神職評議会のメンバーである大司祭、および地元の主教座聖堂聖職団に所属する2人の大司祭と共に実施した。

[1702] このような事例は49件調査された。

不義の王マクシミアヌスの治世下、キジケの町[1703] に、ファウスタという名の若い乙女が住んでいました。彼女は裕福なキリスト教徒の娘であり、両親は彼女をキリスト教の教えに従って育てましたが、13歳の時に両親を亡くしました。　両親の死後、ファウスタという名の少女は、常に断食と祈り、そして聖書の読誦に時間を費やしていた。

貞潔を厳格に守り、富や贅沢、あらゆる肉欲といったこの世のあらゆる誘惑を軽蔑し、厳しくも悲痛な人生の道を歩んだ。そのため、彼女はすぐに広く知られ、皆から称賛されるようになった。なぜなら、主の御言葉にあるように、これほど高潔な生活は人々の目から隠れることはできなかったからである。　*「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）。ファウスタの噂は、マクシミアヌス王の耳にまで届いた。マクシミアヌスは直ちに、キジクへ首席司祭エヴィラシオスを遣わし、キリストの花嫁を見つけ出して捕らえるよう命じた。その際、王は彼にこう言った。

「もし彼女が神々に犠牲を捧げることに同意するなら、彼女に祝福あれ。もし同意しないなら、彼女を水の深みに投げ込め。」

エヴィラシウスはキジクに到着すると、ファウスタが若くして、信仰と知性において完全に成熟しているのを見つけた。彼は裁きの座に上ると、彼女に偽りの神々への生贄を捧げるよう強要し始めた。しかし、聖女はこれにこう答えた。

「私は、耳も目も聞こえず、ただ人の手によって造られたに過ぎないような神々には、いけにえを捧げません。私には天に父と花婿であるイエス・キリストがおられ、主のもとで私が受け継ぐべき遺産を捨てて、主を離れることはできません。」

すると、エヴィラシウスは彼女にこう言った。

「ファウスタよ、神々に犠牲を捧げなさい。そうしなければ、あなたは残酷で苦痛に満ちた死を遂げることになるだろう。」

聖女はこれに対し、こう答えた。

「私を愚かな女だと思わないでください。私はまだ若くても、心は勇敢で、完全なのです。」

そこで、エヴィラシウスは怒りに駆られ、聖女の頭髪を刈り取り、彼女を辱め、冒涜するよう命じ、木に吊るして容赦なく打ちのめさせた。 一方、残酷に苦しめられていたファウスタは、 と天を仰ぎ、神に祈りを捧げ始めた。彼女が祈っていると、突然、あまりにも恐ろしい稲妻が走り、多くの人々がそれに打たれて命を落とした。これを見たエヴィラシウスはひどく恐れをなして、聖女を呼び寄せ、こう言った。

「お嬢さん、教えてくれ。あなたは一体誰なのか？　あなたが魔法のような業を行っているのが見えるからだ。」

聖女はこう答えた。

「聞いてください、エヴィラシウス。画家に私の肖像を描かせ、また私が耐えているこれらすべての苦難も描かせてください。」

その願いが叶えられると、ファウスタは彼にこう言った。

「知っておいてほしい。この肖像が、ここに描かれているような苦しみや拷問を受けていないのと同じように、私の肉体も、あなたが私に与えている苦しみを感じていないのだ。私の魂は、私の主において完全に強められている。あなたが私にまだ何をしようとも、さっさと実行しなさい。」

そこでエヴィラシウスは、聖ファウスタを木箱に入れ、木釘で打ち閉じた後、のこぎりで切り裂くよう命じた。使用人たちは熱心に命じられたことを実行し始めたが、箱の中の聖女は主を賛美して歌い続けた。　使用人たちは長い間その箱を鋸で切ろうとしたが、どうにも切り裂くことができなかった。鋸は、まるで堅固なダイヤモンドのように、殉教者に触れることさえできなかったのだ。つ

[1703] キジク――プロポンティス（大理石の海）の半島の一つにある都市。

いに、疲労のあまり、使用人たちはまるで死んだかのようになった。そこで、彼らはエヴィラシウスのところへ行き、こう言った。

「主よ、あなたが私たちに拷問のために引き渡したその女を、私たちは箱に閉じ込めたまま、第一時から第六時まで鋸で切り続けましたが、何もできませんでした。鋸を六本も交換しましたが、彼女には全く触れさえしませんでした。　彼女を箱の中で焼き殺そうと火をつけたが、火は彼女に対して無力だっただけでなく、箱さえも焦がすことさえできなかった。　その間、彼女は絶えずこう歌っていた。*「あなたが水の中を歩むとき、わたしはあなたと共にある。川を渡るとき、あなたは溺れることはない。火の中を歩むとき、あなたは焼けず、炎もあなたを焦がすことはない」*（イザヤ書43:2）。

これを聞いて、エヴィラシウスは大いに戸惑い、聖女を呼び寄せてこう言った。

「お前は、このような奇跡を起こして、私を大いに驚かせている！私はもう八十歳になるが、これほどのことは一度も見たことがない。お前が信じる神の名にかけて、真実をすべて話してくれ。」

聖女ファウスタは彼にこう答えた。

「お願いです、ご主人様。私がこれからお話しすることを、どうか真剣に聞いてください。あなたご自身もご覧になった通り、この苦しみの中で私を支えているのは神の力なのです。もし今、あなたが私の話に注意深く耳を傾けてくださるなら、やがてあなた自身も私の信仰に帰依することになるでしょう。」

それに対し、エヴィラシウスは彼女に言った。

「さあ、早く真実を話せ。私は聞くつもりだ。」

すると、聖女は彼にこう言った。

「神は不死であり、永遠であり、そのすべての御業は真実であり、その裁きは聖く、義にかなっています。神は、義にかなった聖なる生活を送り、高潔な功績を成し遂げている御自分のしもべたちを、どこにいても守っておられます。　自らの生涯をもって悪魔を恥じさせ、あなたがたが神と崇める偶像を拒絶し軽蔑し、この世の悪に打ち勝った者たちすべてを守ってくださる。至高の神は、地上のすべてを軽蔑して天上のものを求め、敬虔に生き、神の戒めを非の打ち所なく守る者たちを、あらゆる悪から守ってくださる。　それは、そのような人々が、御方を唯一の神として知り、天から地へ降りて来られ、至聖にして至清き処女の胎内に宿り、彼女から言葉に尽くせぬほどに御自身を誕生させることをお許しになった方以外に、他の神はいないと確信したからである。　そして、成長してからは、多くの栄光に満ちた奇跡的な御業を成し遂げ、人々に真理を教え、自ら進んで十字架に上り、私たちを救うために私たちのために苦難に遭われました；　葬られた後、三日目に復活し、栄光のうちに天に昇られ、世の終わりに再び現れて、生ける者と死せる者を裁き、各人にその行いに応じて報いを与えられるためである。　それゆえ、私たちはキリストに従い、天の御国のために自らを傷や苦しみへと捧げ、永遠に滅びることのないようにしているのです。私たちはここ、地上で死にますが、あちらでは終わりのない命を生きていくのです。

これを聞いたエヴィラシウスは、生ける神の偉大な力を悟った。心を打たれ、彼は改心した。聖なる殉教者ファウスタの束縛を解き、彼女に完全な自由を与えた。

すると、エヴィラシウスの家来の一人が、マクシミアヌス王のもとへ現れて、こう言った。

「陛下、エヴィラシウスは陛下の信頼を裏切り、今やキリスト教徒になろうとしています。ですから、彼がまだキリスト教を受け入れていないうちに、どうか彼をその迷いから引き留めてください。」

王はこれを聞いて、深く悲しんだ。直ちに、並外れた残虐さと非人道性で知られていた自身のエパルヒアであるマクシムを呼び寄せ、神々への誓いを立てさせた後、彼をキジクにいるエヴィラシウスのもとへ遣わした。

キジクに到着すると、マクシムスは激しい怒りを露わにし、聖エヴィラシオスに次のように問い詰めた。

「答えよ、邪悪な者よ。どうして我らの偉大なる神々を見捨て、彼らを軽んじて、狂信的なキリスト教徒たちを信じ、彼らと交わりを結ぶなどという大胆なことをしたのか？」

これに対し、エヴィラシオスはこう答えた。

「私の首にかけて誓う。もしあなたがファウスタという乙女の話を聞いてくれるなら、やがてあなたも真の神を知り、至福を感じるようになるだろう。」

すると、エパルヒのマクシムスは激しく怒り、エヴィラシウスを木に吊るし、[1704] で残酷に打ち据えるよう命じた。そして、聖なる殉教者は長い間、そこで苦しめられたが、彼はその苦しみの中にあっても、キリスト・神にこう祈った：

「主よ、全能の神よ、御使いファウスタが耐え忍んだあらゆる苦しみにおいて彼女を助け、私の目に御奇跡を示してくださった方よ。この凶暴で残酷なエパルクから、この謙虚な私を救い出してください。主よ、私はあなたの数多くの偉大な奇跡ゆえに、あなたを愛したのです。」

すると、総督は聖なる殉教者の脇腹を燃えるろうそくで焼くよう命じた。そうして焼かれる中、聖なる殉教者は、その場に立ち、彼の苦しみを見守っていたファウスタに、主のために彼のために祈ってほしいと頼んだ。

聖女は彼に憐れみを抱き、次のように祈り始めた。

「主よ、わが神よ、御恵みを現し、御自分のしもべである私のお祈りに耳を傾けてください。エヴィラシウスを御言葉の群れの囲いの中に迎え入れ、御自分の義人の列に加え給え。まことに、あなたは永遠に祝福されます。アーメン。」

そこで、総督は、エヴィラシアをキリスト教徒になるよう説得したとして、聖ファウスタを自らの不義な裁判にかけるよう命じた。

「不敬虔な女よ」とマクシムスは彼女に言った。「どうしてあなたは、我らが栄光ある司祭エヴィラシウスを偉大なる神々から引き離し、あなたの神へと改宗させるなどという大胆なことをしたのか？」

聖ファウスタはこう答えた。

「私は、エヴィラシウスを『光の子』となるよう招かれた、私の慈愛に満ちた、憐れみ深い神を信頼しています。神はあなたをも、ご自身を崇拝し、知るよう招いてくださるでしょう。」

「ファウスタよ」と、エパルヒは反論した。「私を、お前の言うことを聞いたエヴィラシウスと同じくらい狂った者だとは思わないでほしい。」

そして直ちに、彼女を縛り上げ、その足に鉄の釘を打ち込むよう命じた。

使用人たちが懸命にこの命令を遂行していたが、聖女は全く痛みを感じていなかった。エパルヒ・マクシムスは、聖女ファウスタがこれらの傷に全く気にも留めていないのを見て、兵士たちを呼び寄せ、もしできる者がいれば、彼女のためにさらに過酷で残酷な拷問を考案するよう命じた。

すると、クラウディウスという名の兵士の一人がこう言った。

「閣下、もし閣下が彼女を早急に殺したいとお考えなら、彼女を野獣の餌食にすべきです。」

総督は直ちにその命令を下し、聖女は裸のまま、普段キリスト教徒が獣に食わせるために連れて行かれる場所へと連行された。

そこで雌ライオンが彼女に向かって放たれたが、雌ライオンは静かに近づくと、聖女の前で頭を垂れた。その後、ファウスタ聖女に対して他にも多くの獣が放たれたが、それらはすべて彼女の足元にひれ伏し、彼女に頭を垂れた。

[1704] 当時、エヴィラシウスの年齢は約80歳であった。

これを目撃した地方総督は、大いに驚き、彼女の足を縛り、縄で縛って地面を引きずり回すよう命じた。聖女が裸のままそうして引きずられているとき、彼女は主に向かって叫んだ。

「主イエス・キリストよ、御自身の被造物を覆い隠してください。そうすれば、恥知らずで不敬虔な者たちの目が、御自身の花嫁の裸体を目にすることはありませんように。」

するとたちまち、天から降りてきた雲が、まるで美しい衣のように聖女を覆った。

その後、エウセビオスという名の兵士の一人が、マクシムス司教にこう言った。

「もし閣下の許しをいただければ、彼女を私の管轄下に委ねてください。」

これに対し、エパルフは答えた。

「彼女を連れて行き、お前のできる限り、望むままに苦しめ。」

兵士は聖なる殉教者を捕らえ、鍛冶屋のところへ連れて行き、彼に多くの長い鉄の釘を作らせるよう命じ、それを彼女の頭、額、目、胸、すね、そして全身に打ち込むよう命じた。

その間、聖女は次のように祈っていた。

– 主イエス・キリストよ、あなたに感謝いたします。あなたは、人の心を知り尽くす方であり、義人の栄光であり、冠であられるからです！　この謙虚で不適格なあなたのしもべである私に、あなたの御許にある安らぎの住まいに至る道を歩むことをお許しください。また、エパルヒのマクシムを聖なる信仰とあなたの愛へと導き、あなたの畏れの中に彼を堅く立たせ、あなたを告白する者たちと共に、　すべての人々が、あなたが唯一の神であり、あなたに神聖な栄光と誉れが世々限りなくふさわしいことを悟ることができますように。アーメン。

エウセビオスは、釘で全身を貫かれ、　全身が釘で傷つけられ、血を流しているにもかかわらず、苦しみもせず、まるで痛みさえ感じていないかのように見えるのを見て、大きな釜を持ち込み、それを樹脂と硫黄で満たし、火をつけて、聖ファウスタと聖エヴィラシウスを共にその中に投げ込み、釜の下に大きな火を燃え上がらせた。

聖なる殉教者たちは、その大釜の中に、あたかも美しく涼しい場所にいるかのように立ち、神を賛美し、栄光を称えた。するとたちまち火は消え、大釜は冷めた。

その時、マクシムス司教は、聖人たちの信仰と忍耐を見て、こう言った。

「永遠なる神よ、エヴィラシウスが、御あなたのしもべファウスタと共に、御あなたのために苦難を分かち合う者となるよう助けてくださった方よ！この堕落し罪深い私をも受け入れ、この二人との交わりに加えてください。そうすれば、彼らの中で最も劣り、最も小さい私であっても、至聖なる三位一体の模倣として、三という数を満たすことができるでしょう。」　主なる全能の神よ！この不適格な御僕である私に、御慈悲を現し、速やかに私を憐れんでください。そうして、私を通して、御名がさらに栄光を受けるように！

彼がそう言い終えるや否や、天が開き、天には神の御子と、聖なる天使たちや大天使たち、そして光のように輝くすべての聖人たちの集いが見えました。この恐ろしくも壮大な光景を目の当たりにして、マクシムは神に向かって大声で叫びました。

「主よ、あなたのしもべエヴィラシオを受け入れてくださったように、私をも受け入れてください。私の不義や不正を顧みることなく、罪深く、ふさわしくないあなたのしもべを赦し、かつての強盗を赦したように、私をも赦してください。」

そう言うと、彼はすぐに聖ファウスタスとエヴィラシウスが収められていた大釜へと駆け寄り、天を仰ぎ見て十字を切ってこう言った。

「父と子と聖霊の御名によって――私もあなた方と共にあります！」

その後、彼は衣服を脱ぎ捨て、再び全身に十字の印を刻んで、大釜へと飛び込んだ。

その時、聖なる祝福されたファウスタは、主が彼女の祈りを聞き入れ、マクシムを聖なる信仰へと導いてくださったことに大きな喜びと歓喜に満たされ、こう叫んだ。

– キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。あなたは誰一人として滅びることを望まず、すべての人を救い、真理を知るに至らせたいと願っておられるのです！　見よ、私はあなたの二人のしもべの間にいます。ぶどうの枝が房を実らせるように、また*「三つに撚られた」*縄（伝道の書4:12）のように、彼らと切り離されることはありません。あなたがこう言われたからです。*「二人または三人が、わたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」*（マタイ18:20）。　聖女がこう語り終えるや否や、天から声が聞こえた。*「わたしの名のために労苦し、苦しみに押しつぶされそうな者たちよ、みなわたしのもとに来なさい。そうすれば、わたしがあなたがたを休ませてあげよう」*（マタイ11:28）と、わたしの天の御国において。

聖人たちはこの声を聞いて、言い表せないほどの喜びに満たされ、主に感謝を捧げた後、安らかに魂を主に委ねました。それは2月の6日、[1705] のことでした。

主よ、彼女たちの祈りによって、私たちの罪をお赦しください。そして、御慈悲を授けてくださり、私たちを永遠の命の共同者とならせてください。まことに、あなたは父と聖霊とともに祝福され、永遠に賛美されます。アーメン。

聖殉教者ドロテアと、彼女と共に殉教したクリスティーナ、カリスタ、テオフィラの殉教

記念日：2月6日

カッパドキアの地、ケサリアの町[1706] に、ドロテアという名の敬虔な処女が住んでいました。彼女は常に、謙遜と柔和さをもって、清らかさ、霊的な節制、そして貞潔のうちに、神への奉仕に身を捧げていた。それだけでなく、彼女は極めて賢明な乙女であり、学者たちでさえ彼女に及ばなかった。　そして、彼女を知る者たちは皆、このような乙女をそのしもべとしておられる我らの主イエス・キリストの御名を賛美した。彼女の眼差しは畏敬の念に満ち、その生涯は聖く、その知恵は比類なく、その貞潔は汚れなかった。また、キリストへの愛において、彼女は極めて完全であり、天の宮殿にふさわしい者であった。　しかし、彼女は主のために、その功績をさらに高めた。自らの肉と悪魔に打ち勝ち、聖ドロテアは二重の冠――貞潔の冠と殉教の冠――を自ら編み上げ、喜びながら、その花婿であるキリストのもとへと旅立った。そして、彼女が主のためにどのように苦難を受けたかについては、後の物語が伝えることとなる。

聖ドロテアの誉れが人々の間に広まると、その噂はキリスト教徒迫害者であるイゲモン・サプリキオスの耳にも届いた。彼は直ちにケサリアの町へと向かい、聖なる乙女を捕らえると、彼女を自身の不正な裁判にかけるよう命じた。

聖ドロテアは、不義な裁判官の前に引き出されると、心の中で主に祈りを捧げ、神であり救い主である御方を助けとして呼び求めた。

サプリキウスは彼女に尋ねた。

「教えてくれ、お前の名は何か？」

聖女は答えた。

「私の名はドロテアです。」

「私がお前を呼び出したのは」とサプリキウスは続けた、「我らが栄光ある王たちの命により、偉大なる神々に犠牲を捧げるためだ。」

[1705] 305年から311年の間に死去した。

[1706] カッパドキア――小アジア東部、キリキアのタウロス山脈、ユーフラテス川、黒海、ガディス川の間に位置する地域の古代の名称。ケサリア――カッパドキアの主要都市。

聖女ドロフェアは答えた。

「神――天の王――は、私に対し、神のみに仕えるよう命じられました。聖書にもこう記されています。『*そこで、イエスは彼に言われた。「サタンよ、去れ。聖書にこう書いてある。『あなたの神、主を拝み、神のみに仕えよ』」*（マタイ4:10）。』」『*彼らにこう言いなさい。「天と地を造らなかった神々は、地から、また天の下から消え去る」*』（エレミヤ10:11）。したがって、よく考えなければならない。私たちは、どの王の命令により従うべきなのか――地上の王か、それとも天の王か？　そして、誰の言うことを聞くべきか――神か、それとも人間か？　王とは何者か――単なる死すべき人間に過ぎない。あなたがたが崇拝する偶像である神々も、それと同じである。

「もし生き続け、健康で、汚れのないままでありたいのなら」とサプリキウスは反論した。「キリスト教を捨てて、神々に犠牲を捧げなさい。さもなければ、法律に従って、あなたは残酷に拷問され、他の人々にとって恐ろしい見せしめとなるだろう。」

聖女はこう答えた。

「私はすべての信者にとって、神への畏れを示す手本となるでしょう。彼らが神を畏れ、残酷な人間たちを恐れないように。彼らはまるで邪悪な犬のような行いをしているのです。無意味で無自覚に、罪のない人々を苦しめ、狂乱し、激昂し、吠え立て、通りすがりの人々を捕らえてその歯で噛み砕くのです。」

「どうやら」とサプリキウスはこれに対し言った。「あなたは、この不敬虔な信仰を揺るぎなく貫き、他の者たちと同様に、これほど苦痛に満ちた死を遂げようとしているようだ。私の言うことを聞きなさい。神々に生贄を捧げれば、激しい苦しみから解放されるだろう。」

聖女はこう答えた。

「あなたの苦しみは一時的なものですが、ゲヘナの苦しみは永遠です。ですから、永遠の苦しみを避けるために、一時的な苦しみを恐れることはありません！」　私は主の御言葉を覚えている。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきである」*（マタイ10:28）。

すると、サプリキウスは言った。

「だからこそ、あなたは神々を恐れるべきだ。そうすれば、彼らがあなたに怒りを向けることはない。もしあなたが彼らに犠牲を捧げなければ、彼らはあなたの魂も体も滅ぼしてしまうだろう。」

「サプリキウス、私はすでに言ったでしょう」と聖ドロフェアは答えた。「あなたがどんなに説得しようとも、私は、虚しい偶像に住む悪魔たちに犠牲を捧げることは決してありません。」

これを聞いて、サプリキウスは激しく怒り、すでに処刑の準備を整えていた家来たちに向き直って言った。

「彼女を処刑場に連れて行け。そうすれば、苦痛を恐れて、我らの神々の奉仕者になることに同意するだろう。」

すると、神のしもべドロテアは、処刑場に立ち、勇敢かつ恐れを知らずに裁判官にこう言った。

「なぜ苦痛を与えるのをためらうのか？　やりたいようにすればよい――そうすれば、私は一刻も早く、その方にお目にかかれるのだから。その方への愛ゆえに、私は苦しみも死も恐れないのだ。」

「だが、お前がそれほど切望している『あの方』とは、いったい誰のことだ？」とサプリキウスは尋ねた。

聖ドロテアはこう答えた。

「キリスト――神の御子です。」

「そのキリストは一体どこにいるのだ？」とイゲモンは尋ねた。

聖女はこう答えた。

– 神の全能性により、神は至る所に存在されますが、私たちは人間として、神が天に存在し、御父の右に座しておられることを告白します。神は、御父なる神および聖霊と共に、唯一の神です。まさにその神が、私たちを永遠の喜びの楽園へと招いておられます。そこでは、園が絶えず実を結び、　そこではユリやバラ、その他の美しい花が常に咲き誇り、その楽園の野原や山々、丘は永遠に緑に覆われ、泉の水は甘美であり、キリストにある聖徒たちの魂はそこで絶えず喜びに満ちている。サプリキウスよ、もしあなたが私の言葉を信じたならば、滅びを免れ、神と共にこの言い表せない至福の楽園に入ることができたはずだ。

すると、サプリキウスは彼女にこう言った。

「あなたはその迷いを捨て、神々に犠牲を捧げるべきだ。そして結婚して、人生を楽しめ。そうすれば、あなたの父たちがその狂気のために滅びたのと同じように、あなたも滅びることはないだろう。」

聖ドロテアはこう答えた。

「私はキリスト教徒ですから、悪魔たちに犠牲を捧げることはしません。また、私はすでにキリストの花嫁ですから、結婚することもありません。これこそが私の信仰であり、この信仰が私を楽園と、私の花婿の宮殿へと導いてくれるのです。」

そして、聖女はそこで残酷に拷問を受けた。

拷問の後、サプリキウスは聖ドロテアを、クリスティーナとカリステという名の、互いに実の姉妹である二人の妻のもとへ連れて行くよう命じた。　彼女たちは当初キリスト教徒だったが、後に拷問を恐れてキリストを捨て、絶望のあまり不義な生活を送り、贅沢と世俗の虚栄にふけるようになった。キリストからの背きに対し、彼女たちは偶像崇拝者たちから富を与えられていた。　サプリキウスは、この二人の女性のもとへ聖女ドロテアを遣わした。その際、彼女に次のように伝えるよう命じた。

「あなたがたは、キリスト教の迷信や魔術を捨て、無敵の神々に犠牲を捧げ、我々から贈り物を受け取った。それと同じように、この狂った女をキリスト教の狂気から遠ざけ、我々の神々へと導きなさい。もしそれができれば、我々はさらに多くの贈り物であなたたちを豊かにしてやる。」

その女性たちは、聖なる乙女を自分の家へ連れ帰ると、次のように説得し始めた。

「裁判官に従い、その助言に耳を傾けなさい。私たちのように、苦しみから身を守りなさい。何よりも大切なのは、この儚くも美しい人生を苦しみの中で台無しにせず、時より早く死なないよう気をつけることなのですから。」

聖ドロテアはこう答えた。

「ああ、もしあなたがたが私の助言に耳を傾け、自分たちが捧げた偶像への生け贄を悔い改め、再びキリストに立ち返ってくれたら！　そうすれば、ゲヘナの苦しみから自らを救うことができたでしょう。なぜなら、私たちの主は慈愛に満ち、寛大で、心を尽くして主に向き合うすべての人々に憐れみ深い方だからです。」

すると、クリスティーナとカリスタは彼女にこう言った。

「私たちがキリストから離れて滅びてしまった以上、どうして再びキリストのもとへ立ち返ることができるでしょうか？」

聖女はこれに対し、こう答えました。

「神の憐れみを絶望して諦めることは、偶像を崇拝することよりもはるかに大きな罪です。ですから、絶望したり、私たちの憐れみ深く、巧みな医者を疑ったりしないでください。主は、あなた方のすべての傷を癒やすことができます。主が癒やそうと望まない傷などありません。　だからこそ、主はすべての人を救われるゆえに「救い主」と呼ばれ、すべての人を贖われるゆえに「贖い主」と

呼ばれ、すべての人に自由を授けられるゆえに「解放者」と呼ばれるのです。あなたがたも、心から悔い改めて主のもとへ立ち返るだけで、間違いなく赦しを授かるでしょう。

すると、クリスティーナとカリスタという二人の姉妹は、聖女の足元にひれ伏して泣きながら、慈悲深い神に彼女たちのために祈り、神が彼女たちの悔い改めを受け入れ、赦しを与えてくださるよう懇願し始めました。

その後、聖女は涙を浮かべながら、主に向かってこう呼びかけました。

「*『わたしは罪人の死を望まず、罪人がその道から立ち返り、生きることを望む。立ち返れ、あなたがたの悪しき道から立ち返れ。なぜ死ぬ必要があるのか』*（エゼキエル33:11）と仰せになった神よ？」[1707] 主イエス・キリストよ、あなたは私たちに、*「天では、悔い改める罪人一人について、悔い改める必要のない九十九人の義人についてよりも、もっと大きな喜びがある」*（ルカ15:7）と告げられました。 悪魔があなたから奪い去り、あなたから引き離そうとしたこれらのあなたの羊たちに、あなたの慈しみを示し、彼らをあなたの囲い、あなたの群れへと戻してください。そして、良き羊飼いよ、彼らの模範によって、あなたから離反した者たちが皆、立ち返ることができますように！

しばらくして、イゲモン・サプリキウスは、聖ドロテアと共にクリスティーナとカリスタを呼び出すよう命じ、彼女たちが来ると、二人の姉妹を二人きりにして尋ねた。

「ドロテアを我らの神々を崇めるように説得できたか？」

すると、クリスティーナとカリスタは大きな声でイゲモンに答えた。

「私たちは罪を犯し、この世の苦しみをおそれ、偶像に犠牲を捧げてしまったという点で、実に不適切な行いをしてしまいました。そのため、聖ドローフェイアに懇願したところ、彼女は私たちに悔い改めるよう説き伏せてくださいました。そうしてこそ、私たちの主キリストから罪の赦しを得ることができるのです。」

サプリキウスは自分の衣を引き裂き、激しい怒りに満ちた。彼は二人の姉妹を背中合わせに縛り合わせ、タールを塗った大釜に投げ込み、その下に薪を積んで焼き殺すよう命じた。

その時、聖なる姉妹たちはこう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ！私たちの悔い改めを受け入れ、赦しをお与えください。」

これらの乙女たちがこのように焼かれるのを見て、聖ドロテアは喜び、こう叫んだ。

「姉妹たちよ、私より先に行ってください。そして、あなたがたの罪が赦されたことを確信し、当初失った殉教の冠を、今や疑いなく再び手に入れたことを悟ってください。さあ、今こそ、あなたがたの慈悲深い父が、放蕩息子の帰還を喜ぶかのように、あなたがたを迎えに出てこられます。主はあなた方を抱きしめ、誠実な娘たちとして称え、御自身の天使たちの前で栄光を与え、聖なる殉教者たちの列に加えられるでしょう。

こうして、聖女クリスティーナとカリスタという実の姉妹は、悔い改めのうちに苦難の末に息を引き取り、キリストから赦しとともに勝利の冠を授かった。

その後、サプリキウスは再び聖ドロテアを捕らえて拷問にかけるよう命じ、彼女を吊るし、以前と同様に苦しめた。

しかし、聖女はこれほど大きな苦しみの中にあっても、あたかもすでに最愛の花婿であるキリストの宮殿に入っているかのような喜びに包まれていた。

その時、サプリキウスは彼女にこう言った。

「どういうことだ。お前の顔には喜びが表れているようだが、苦しみを受けているにもかかわらず、どうやら非常に幸せそうに見えるのはなぜだ？」

[1707] 聖バシレイオス大主教による聖体拝領の祈り。エゼキエル書33章11節を参照。

聖ドロテアはこう答えた。

「私の人生において、今ほど喜んだことは一度もありません。とりわけ、かつて悪魔があなたを通して神から引き離した魂たちが、今や再びキリストに迎え入れられたことを、私は心から喜んでいるのです。」　今、天には大いなる喜びがあります。なぜなら、天使たちは彼らの魂を喜び、大天使たちは歓喜し、そして彼らと共に、すべての聖なる使徒たち、殉教者たち、預言者たちも祝賀しているからです。 さあ、サプリキウスよ、あなたが企てたことを一刻も早く実行に移しなさい。　そうすれば、私も一刻も早く聖なる乙女たちの至福へと移り、地上で共に泣いた者たちと共に天国で喜びを分かち合うことができるでしょう。

すると、サプリキウスは燃え盛るろうそくで聖なる殉教者を焼くよう命じた。彼女はさらに喜びを深め、明るく喜びに満ちた顔で、裁判官に向かってこう叫んだ。

「お前は、お前の偶像たちと共に――取るに足らない者だ！」

この言葉を聞いた後、拷問官は聖ドロテアを木から降ろし、手打ちにするよう命じた。

「私を罵るその顔を、打ちのめしてやれ」と彼は言った。

聖女が殴打されている間も、彼女は喜びを絶やすことはなく、彼女を殴っていた者たちは疲れ果ててしまった。

そこで、イゲモンは次のような死刑判決を下した。

「不滅の神々に犠牲を捧げて生き延びることを拒み、むしろ『キリスト』と呼ばれる、いかなる人間のためか分からないが、そのために死ぬことを選んだ、高潔な乙女ドロテアを、剣で斬首せよ。」

聖処女ドロテアはこれを聞くと、大声で叫んだ。

「魂を愛するキリストよ、あなたが私をあなたの楽園へと招き、あなたの至聖なる宮殿へと導いてくださることを感謝します。」

そして、聖なる殉教者が処刑へと連行され、プレトリアから出ていくとき、テオフィロスという名の、ある学者であり総督の顧問が、嘲るように彼女に言った。

「ねえ、キリストの花嫁よ、天国からあなたの花婿に、リンゴとバラの花を送ってくれ。」

聖ドロテアはこれにこう答えた。

「確かにそうしましょう。」

そして、彼らが処刑場に着くと、殉教者は処刑人に、主に向かって少しの間祈らせてほしいと懇願した。彼女が祈りを終えると、主の天使が極めて美しい少年の姿で彼女の前に現れた。天使は清らかな布の上に、三つの美しいリンゴと三つのバラの花を載せていた。

すると、聖なる殉教者は彼にこう言った。

– お願いです、これをすべてテオフィロスに届けて、彼にこう伝えてください。「ほら、今、あなたが求めていたものがここにあります」と。

そう言うと、彼女は聖なる頭を剣の下に差し出し、首を刎ねられた後、喜びに満ちて、主キリスト、すなわち若き日から愛し続けてきた花婿のもとへと旅立った。そして今、天の宮殿において、主の御手から勝利の冠を受け取ったのである。

一方、テオフィロスは、聖処女ドロテアの約束を嘲笑して、友人たちにこう言った。

「今日、自らをキリストの花嫁と名乗り、キリストの楽園に入ると自慢していた聖女ドロテアが死刑に処される際、私は彼女にこう言った。『聞いてくれ、キリストの花嫁よ。君が花婿の楽園に入ったなら、そこからバラの花とリンゴをいくつか送ってくれ。』

すると彼女はこう答えた。

「まことに、あなたに送ってあげましょう。」

そう言うと、テオフィロスとその友人たちは笑った。すると突然、天使が三つの美しいリンゴと三つの花を持って彼の前に現れ、こう言った。

「聖なる処女ドロフェアは、約束通り、彼女の花婿の楽園からこれらすべてをあなたに送りました。」

すると、テオフィロスはリンゴと花を見て、それらを手に取ると、大声で叫んだ。

「キリストこそ真の神であり、その御身に偽りは微塵もない！」

友人や仲間たちはこれに対し、彼にこう言った。

「テオフィロスよ、お前は正気を失ったのか、それともふざけているのか？」

彼は彼らにこう答えた。

「私は正気を失ってもいないし、からかっているわけでもない。ただ、健全な理性が、私を真の神であるイエス・キリストを信じるように導いているのだ。」

– だが、この突然の君の変化は一体どういうことなのか？――と彼らは尋ねた。

「今、何月か教えてくれ」と、テオフィロスは友人たちに尋ねた。

「2月だ」と彼らは答えた。

「この冬の時期には」と、そこでテオフィロスは言った。「カッパドキア全土が霜と氷に覆われ、葉を茂らせている木や植物は一つもありません。それなのに、皆さんはどう思いますか。これらの花や、枝や葉がついたリンゴは、一体どこから来たのでしょうか？」

そう言うと、彼はリンゴとバラの花を彼らに見せた。テオフィロスの友人たちは、これらの果実を見て、その素晴らしい香りを嗅ぎながら、こう言った。

「果物や花が咲く季節であっても、これほどのものは見たことがありません。」

それに対し、テオフィロスはこう答えた。

「聖女ドロテアが処刑へと連行された時、私は彼女を狂人だと思っていた。彼女はキリストを自分の花婿と呼び、いつも彼の楽園について語っていたからだ。その時、私は彼女を嘲るように、狂人に対して言うようにこう言った。『あなたの花婿のいる楽園に行ったら、そこからリンゴと花を送ってくれ』と。すると彼女は私にこう答えた。　『私は確かにそうするわ』と。その時は私は彼女の言葉を笑い飛ばしたが、今や、彼女が斬首された直後、突然、私の前に小さな少年が現れた――年齢はせいぜい四歳ほどで、言葉に尽くせないほどの美しさだった。私は彼が話すことさえできるとは思っていなかったが、その少年は私を軽く押すと、まるで成熟した大人のようにこう語り始めた。

「聖なる処女ドロフェアよ」と彼は私に言った。「約束通り、あなたは天国からあなたの花婿からの贈り物をあなたに送ってくれました。」

そう言うと、彼は送られてきたものをすべて私の手に渡し、姿を消した。これを語り終えると、テオフィロスはこう叫んだ。

「キリストを信じ、その聖なる御名のために苦難に耐える者たちは幸いである。なぜなら、キリストこそ真の神であり、キリストを信じる者は皆、まことに英知に満ちているからだ！」

テオフィロスのこうした、あるいはそれに類する呼びかけの後、何人かがイゲモンのもとへやって来て、彼にこう言った。

「あなたの顧問であるテオフィロスは、これまでキリスト教徒を憎み、彼らを凄惨な死で滅ぼそうとしてきたが、今や公然と、あるイエス・キリストという御名を賛美し、祝福している。そして、その言葉を聞いた者の多くが、この御方に信仰を置いた。」

イゲモンは直ちにテオフィロスを呼び寄せ、こう尋ねた。

「今、人々の前で何を語っていたのか？」

テオフィロスは答えた。

「私は、かつて今日に至るまで冒涜していたキリストを賛美しました。」

これに対し、総督は彼に言った。

「賢明な君が、これまでその信奉者たちを迫害してきた方の御名を、今になって称賛するとは、実に驚きだ。」

「だからこそ、私はキリストを真の神として信じるようになったのです」とテオフィロスは答えた。「キリストが突然、私を迷いから真理の道へと導き、私が真の神であるキリストを知ることをお許しくださったからです。」

すると、イゲモンは言った。

「知恵を重んじる者は皆、ますますその知恵を深めていくものだが、お前は賢者であったにもかかわらず、突然狂人となってしまった。ユダヤ人たちが十字架につけた方を神と呼んでいるのだ。それは、お前自身がキリスト教徒たちから聞いた通りだろう。」

これに対し、テオフィロスは答えた。

「私は、キリストが十字架にかけられたと聞いていましたが、彼を神とは見なさず、日々冒涜していたため、誤っていました。しかし今、私はかつての誤りと冒涜を悔い改め、彼を真の神として告白します。」

「では、いつ、どこでキリスト教徒になったのか」とイゲモンは尋ねた。「今日に至るまで、神々に犠牲を捧げていたというのに？」

「まさにその瞬間です」とテオフィロスは答えた。「キリストを信じ、彼を告白したその時、私はキリスト教徒となりました。　そして今、私は心から不死のキリスト、神の御子を信じ、その真の名、聖なる名、汚れなき名を宣べ伝えています――その名には、偽善も、偶像に支配されているような迷いも一切見出されません。

すると、イゲモンは言った。

「では、つまり、我々の神々は迷いということか？」

「人間の手にによって木から作られ、銅や鉄から鍛えられ、錫から彫り出された――そこにフクロウが巣を作り、クモが巣を張り、内部はネズミで満ちている――そのような偶像に、どうして偽りがないと言えるだろうか」とテオフィロスは答えた。　もし私が今、嘘をついているのなら、私は嘘つきである。だが、私が真実を語っているかどうかは、あなた自身で確かめてみてほしい。そして、私が嘘をついていないのなら、あなたもすぐに真理に同意し、嘘から背を向けることになるだろう。なぜなら、他人の嘘を裁く裁判官であるあなたは、自らも嘘から真理――すなわち、神であるキリスト――へと立ち返らなければならないからだ。

すると、イゲモンは言った。

「では、我らの神々は生き物ではないのか？」

「偶像には人間の姿が見えますが」とテオフィロスは答えた。「それらは無感覚なものです。しかし、神は目に見えない、生ける存在であり、あらゆる命の与え主なのです。」　偶像は、高価な素材で作られている場合、通常、泥棒に盗まれないよう厳重に守られているが、天の神は誰にも守られてはいない。しかし、神ご自身がすべてのものを守り、ご自身の被造物を守り抜いておられるのだ。

すると、イゲモンは叫んだ。

「ああ、呪われたテオフィロスよ！　お前は残酷な死を望んでいるようだ。」

「私は善き人生を得たいと願っているのです」と、至福のテオフィロスは答えた。

その後、イゲモンは言った。

「知っておけ。もしその狂気を貫くなら、私はお前を激しい拷問にかけ、その後、残酷な死を遂げさせるよう命じるだろう。」

「今、私が望むのは、キリスト・神のために死ぬことだけです」とテオフィロスは答えた。

「お前の家、妻、子供たち、そして親族のことを思い出せ」と、そこでイゲモンは言った。「そして、無謀にも自らを凄惨な死にさらしてはならない。なぜなら、それはまさに狂気だからだ――悪党たちが通常受けるような苦痛や処刑に、自ら進んで身を委ねるなどという行為は。」

これに対し、聖なる殉教者はこう答えた。

「これは狂気ではなく、偉大な英知である。言い表せない永遠の恵みと永遠の命のために、この短く一時的な苦しみなど意に介さず、早すぎる死を受け入れた者こそが、真の英知を持つのだ。」

すると、イゲモンは言った。

「では、お前は安らぎよりも苦痛を選び、生よりも死を望むのか？」

「私も苦しみは恐れています」とテオフィロスは答えた。「死も戦慄しています。しかし、それは終わりのない苦しみであり、永遠の刑罰を伴う死を恐れているのです。」　あなたが私に与えることのできる苦しみには、すぐに終わりが来るが、偶像崇拝者たちに用意された刑罰は、決して終わらないのだ！

そこで、イゲモンは聖テオフィロスを裸のまま木に吊るし、残酷に打ち据えるよう命じた。聖人が打ち据えられ始めたとき、彼はこう言った。

「今、私は真のキリスト教徒である。なぜなら、木に吊るされているが、それは十字架に似ているからだ。それゆえ、キリストなる神よ、あなたが私に、あなたのしるしに吊るされることを授けてくださったことを感謝します。」

「この忌まわしき者よ」とイゲモンは言った。「お前の体を惜しめ！」

「この忌まわしき者よ、自分の魂を憐れめ！」とテオフィロスは答えた。「私はこの一時的な命を惜しまない。その代わりに、私の魂は永遠に救われるのだ。」

すると、拷問官はさらに激怒し、鉄の爪で殉教者を削り、ろうそくの火で焼くよう命じた。しかし聖人は、まるで苦痛を感じていないかのように、その苦しみの中で喜び、ただこう言い続けた。

「キリストよ、神の子よ、私はあなたを告白します。どうか私をあなたの聖徒たちの列に加え給え！」

その際、聖人の顔には喜びが浮かんでいた。

拷問者の手下たちがその労働に疲れ果てた後、イゲモン・サプリキウスは聖人に対して次のような死刑判決を下した。

「テオフィラスは、これまで不死の神々に犠牲を捧げてこなかったが、今や堕落し、我らの神々から背を向けてキリスト教徒の群れに加わった。ゆえに、剣をもってその首を刎ねることを命じる。」

聖テオフィロスはこれを聞いて、こう叫んだ。

「感謝します、キリスト、わが神よ！」

そして、喜びながら、その聖なる首を剣の下に差し出した。　首を刎ねられた彼は、殉教の冠を戴き、生涯の十一時目に主のもとへ至り、最初の者たちと同等の報い（マタイ20:1–16）を受けた。――私たちの神、キリストの御国において、父と聖霊と共に、御名に永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖殉教者ユリアンの記念日。

記念日：2月6日

聖殉教者ユリアヌスは、エメサの町[1708] の出身であった。若き日に医術を深く学んだ彼は、人々の肉体だけでなく、その魂をも癒やした。すなわち、病を治す傍ら、キリストを信じるよう教え、多くの異教徒をキリスト・神へと導いたのである。

1月29日に記念される聖殉教者シルアヌス司教、ルカ助祭、および朗読者モキイが捕らえられ、牢獄から引き出されて野獣の餌にされようとしたとき、ユリアヌスはこれらの殉教者たちに寄り添い、彼らに口づけをし、主のために死を恐れないよう懇願した。

その後、彼は異教徒たちに捕らえられ、ある洞窟に閉じ込められた。そこで、長い釘を頭に打ち込まれ、さらに手足も釘で貫かれた。その後、彼は神に息を引き取った。

スミルナの司教、聖ヴコルスの記念日

記念日：2月6日

神の御心に適う者ヴコル聖人は、幼少の頃から悪意がなく貞潔であり、聖霊に満たされていた。

称賛に値し、愛されたキリストの弟子であり、その側近であった神学者ヨハネは、彼が霊的生活において経験豊富でふさわしい人物であることを見て、彼をスミルナ教会の司教に任命した[1709] ；スミルナのキリスト教徒たちにとって、この任命はまさに時宜を得たものであり、キリストの聖人ヴコルはそのために多くの有益な働きをした。　聖霊に照らされた彼は、燭台の上の灯火のように輝いていた（マタイ5:15）。迷いと偶像崇拝の誘惑という闇の中にいた人々を、彼は天の光で照らし、聖なる洗礼を通して彼らを光の子たちとした（ヨハネ12:36）。　また、数え切れないほど多く、目には見えないが、獰猛で抑えがたい獣たち――それらはまるで誰かを飲み込もうと待ち構えているかのように（Iペトロ5:8）――から、すべての人を守った。

聖ヴコル[1710] は、この世を去る前に、その霊的な羊の群れを至福のポリカルプに託し、この世の生活から永遠の生活へと旅立った。聖人の遺体が埋葬された後、神の御心により、その棺のそばにミルシナ[1711] が生え、それは病人を癒す力があることで知られていた。

聖殉教者マルファとマリア、および彼らの兄弟である聖殉教者リカリオン少年の記念日。

記念日：2月6日

これらの殉教者たちは、キリストの教会が不義な偶像崇拝者である王や君主たちによる迫害にさらされていた当時、アジア地方[1712] に暮らしていました。

[1708] エメサ――シリアのオロンテス川の東に位置する都市。同川はシリア北西部で地中海に注いでいる。

[1709] スミルナ――エーゲ海（群島）の東岸に位置するイオニアの有名な商業都市で、エフェソスから66ヴェルスタの距離にあり、メレス川の河口に位置する。小アジアで最も古い都市の一つであり、スミルナには聖使徒ヨハネ・テオロゴスによって教会が設立された。　現在のスミルナはトルコ領となっているが、今なおキリスト教の信仰が保たれ、繁栄している。この都市は今もなお、帝国で最も繁栄している都市の一つである。

[1710] 約100年に死去した。

[1711] ミルシナとは、ミルトの木のことである。この木はアジア、アメリカ、アフリカ（エジプト）、そして南ヨーロッパの地中海沿岸に自生している。　祝祭の際には、この木の枝で住居が飾られ、祝宴、特に婚礼の際には、頭にミルトの冠が戴かれた。ミルトは古代の人々にとって、一般的に愛と穏やかな幸福の象徴であり、現在の喜びに満ちた状況や未来への明るい希望を表すものと崇められていた。

[1712] アシア――小アジア半島の西部に位置するローマ帝国の属州で、主要都市はエフェソスである。

マルファとマリアは処女の身でありながら、ただ主を喜ばせることのみを志し、主のために死を迎えることを切に願っていた。

ある日、ある不信心な軍司令官が彼女たちの家の前を通りかかった。ちょうどその時、マルタは家の扉を開け、妹と共に軍司令官に向かってこう叫んだ。

「私たちはキリスト教徒です！」

総督とその家来たちは、この言葉を聞いたものの、彼らに注意を払うことなく通り過ぎていった。すると、姉妹たちは総督の後を追って再び叫んだ。

「私たちはキリスト教徒です！」

これに対し、総督は彼女たちにこう言った。

「お前たちの若さを憐れんで許してやる。お前たちを殺すのは気が進まないのだ。」

すると、聖マルタはこう叫んだ。

「おお、総督よ、殉教の死は死ではなく、生なのです！」

これを聞いて、総督は激しく怒り、聖なる乙女を連行するよう命じた。

すると、マリアも家から出てきて、総督にこう言った。

「私の姉が言ったこと、私も同じことを言います。」

その後、殉教者たちの弟であるリカリオンという名の少年も家から出てきて、こう叫んだ。

「マルファとマリアが言ったこと、私も同じことを言います。私はキリスト教徒だからです。」

そこで総督は、三人全員を十字架に磔にするよう命じた。その場に、彼女たちの母も立っており、彼らにこう言った。

「愛する子供たちよ、救われなさい。そしてキリストから冠を受けなさい。」

すると、十字架に架けられたマリアは言った。

「母よ、あなたも、あなたの胎内の子も救われますように。あなたは私たちをキリストのもとへ導いてくださったのですから。」

その後、マルタとマリアは十字架上で刺し貫かれ、リカリオンは兵士に剣で斬り殺された。

2月20日

2月7日（旧暦）

我らの聖なる父、ランプサキオスの司教パルテニオスの生涯。

記念日2月7日

同名の聖女[1713] にちなんで名付けられた聖パルテニオスは、メリトポリ[1714] で生まれた。彼の父クリストフォロスは、この町の教会のひとつで助祭を務めていた。パルテニオスは幼少期に読み書きを教わらなかったが、教会で聖書を聴くうちに、その内容を熟知し、熟練した書記官にも引けを取らないほどになった。　青年時代、彼はよく近くの湖へ出向き、そこで魚を捕って売り、その収益を貧しい人々に施していた。幼い頃から彼は神の恵みに満ちており、18歳になると、至聖なるキリストの御名を呼び求めることで、人々から悪霊を追い出し、多くの奇跡を行うようになった。

[1713] ギリシャ語の「パルフェノス（parthenos）」に由来し、「乙女」、「処女」を意味する。

[1714] メリトポリ――小アジア北西部のミジア地方にある都市の一つ。

聖パルフェニイの評判が人々の間に広まると、メリトポリの司教フィリッポスは彼を自分のもとへ呼び寄せた。　聖なる若者のことについて耳にしたことをすべて調べ、そのすべてを確かめた後、彼はその徳と、彼の中に宿る神の恵みに感嘆し、彼に学問を教えるよう命じた。その後まもなく、フィリッポス司教は、聖パルテニオスの本意に反して彼を長老に任命し、ある教会の管理を任せた。司祭の位についた聖パルテニオスは、さらに一層徳を磨いた。主から聖性と奇跡を行うための特別な恵みを受けた彼は、あらゆる病を癒やし、我らの主イエス・キリストの御名によって多くの驚くべき奇跡を行った。そうした奇跡的なしるしの中には、とりわけ次のようなものがあった。

ある日、道中で、ある若者に目をえぐられた男が、この奇跡を行う聖人に遭遇した。患った目は頬にぶら下がっており、その男は苦しみながら泣き、手でそれを支えていた。聖パルテニオスは、えぐられた目を手に取り、元の場所に戻して水で洗い流した。三日後、その男は完全に癒やされた。

またある時、体に激しい不治の病を患っていたある女性が、聖パルフェニオのもとを訪れ、癒やしを懇願した。聖人が彼女の額に十字を切ると、彼女は即座に癒やされた。

ある時、聖パルフェニオスは病人を訪ねるために出かけた。ある貴族の家の近くを歩いていると、大きな犬が鎖から飛び出し、聖人のほうへ突進してきた。その犬は前足で聖人の肩に飛びかかり、顔を噛みつこうとした。　しかし、聖人はその犬に向かって息を吹きかけ、十字を切ると、その瞬間、犬は息絶えた。その後、聖パルテニオスは犬を肩から振り落とした。

こうした奇跡の話を耳にしたキジスの大司教アキリウスは、聖パルテニオスを呼び寄せ、彼をランプサコスの司教に任命した[1715]。任じられた司教区に到着すると、パルテニオスは、その地の住民全員が不敬虔なギリシャの偶像崇拝に没頭しているのを見つけた。当時、その地にはキリスト教徒はごく少数しかいなかった。　キリストの良き羊飼いは、この事態を深く嘆いた。彼はまず、自分の羊たちを諭し、戒め、懇願し始めた。彼らに真理の道を示し、キリストの御名によって奇跡を行い、病人を癒やすことで、多くの人々を真の神への認識へと導いた。　ついに、その町の住民たちが信仰において成長し、偶像崇拝が拒絶されるようになったのを見て、聖パルフェニオスは、そこにあった不浄な神殿を破壊し、その代わりに壮麗な神の聖なる教会を建設することを決意した。そのために、聖パルフェニオスは偉大なる皇帝コンスタンティヌスを訪ね、その権限を請うた。　敬虔でキリストを愛する皇帝に、栄誉をもって、また非常に親切に迎えられたキリストの聖人は、彼から望んでいたものを得た。聖コンスタンティヌス大帝は、偶像崇拝の神殿を破壊するための皇帝勅書を与え、さらに、神の聖なる教会を建設するために多くの金を聖人に授け、彼を平穏のうちに送り出した。

ランプサックに戻ると、神の聖人パルフェニオスは直ちにすべての神殿を根こそぎ破壊し、まもなく町の中心に広大で美しい神の聖堂を建立した。彼は自らその建設に参加し、自分の手で建設者たちを手伝った。

この聖堂が建設されている最中、聖パルテニオのもとに、不浄な霊に取りつかれたある男がやって来た。悪魔はとっくに彼に取りついていたが、本人はそれに気づいていなかった。そして、この悪魔に取りつかれた男は、聖パルテニオに近づき、愛想の良い言葉で挨拶をし始めた。　しかし、キリストの聖人は、その男の中に不浄な霊が宿っていることに気づき、挨拶を控えた。

すると、その男を通じて恥をかかされた悪霊は、聖人にこう言った。

「私はあなたに会いたかったから、挨拶をしたのだ。なぜ私の挨拶に返事をしなかったのか？」

「お前は私を見たのだ。では、何が望みか？」と、聖パルテニオスは答えた。

「私はお前を見て、見分けがついた」と悪霊は言った。

「もしお前が、私を見て本当に私だと見分けられたのなら」と聖パルテニオスは答えた。「お前は、この神の被造物から出ていたはずだ。」

[1715] ランプサコス――フェオケイ人によって建設された、小アジア北西部のミジア地方にある重要な都市。

それに対し、悪魔は言った。

「お願いだ、私がこれほど長く住み着いているこの住処から、私を追い出さないでくれ。」

「この人間の中に、どれほど前からいるのか？」と聖人は尋ねた。

「彼が幼い頃からだ」と悪魔は答えた。「これまで誰も私に気づかなかった。君だけが気づいたのだ。そして今、君は私を追い出そうとしているようだ。だが、もしそうなら、一体どこへ行くように命じるつもりなのか？」

「君が住む場所を用意してやる」と聖パルフェニオスは答えた。

「きっと、豚の群れの中に入るよう命じるのだろう」と悪魔は言った。

「いいえ、私は君が宿るべき人間を指し示すつもりだ。ただ、そこから出て行ってくれ」と聖パルテニオスは答えた。

「だが、本当にそうするつもりなのか、それとも口先だけなのか？　そのことを教えてくれ」と、悪魔は聖パルテニウスに尋ねた。

「私は真実を言っているのだ」と聖人は言った。「もし望むなら、君が宿ることができる人間を知っている。ただ、まずはここから早く出て行け。」

その後、聖人の言葉に納得した悪魔は、そのような人間を教えてほしいと懇願し始めた。

そこで聖パルテニオスは口を開き、悪魔にこう言った。

「ほら、この人だ。入ってきて、私の中に宿れ。」

悪魔は、まるで火に焼かれたかのように、こう叫んだ。

「ああ、哀れな私よ！　これほど長い時を経て、見知らぬ人間から私を追い出すというのに、もし私があなたの中に宿ったら、一体どんな悪事を働くことになるというのか？　そして、どうして私が神の家に立ち入ることができるというのか？」

そう言うと、悪魔は人里離れた、立ち入ることのできない場所に姿を消した。一方、その男は神の恵みにより健康を取り戻し、主を賛美した。

教会の建物そのものがすでに完成した後、聖パルフェニオスは、その祭壇に聖座を築き、そこで神聖な聖体礼儀を執り行うことに心を配り始めた。

その頃、彼は荒廃した偶像崇拝の神殿の一つで大きな石を見つけた。その石は、聖なる祭壇を築くのに非常に適した様子であったため、キリストの聖人は石工たちに、その石を丁寧に加工し、その上で聖なる食卓を執り行う準備をするよう命じた。

職人たちは、この石を適切に整えて準備すると、それを荷車にしっかりと載せ、教会へ運ぶために力強い牛を繋いだ。

悪魔は、神殿から持ち出された石に激怒し、軛に繋いだ牛たちを恐怖に陥れた。すると牛たちは突然猛スピードで駆け出し、誰もそれを止めることはできなかった。　その傍らを歩きながら牛車を操っていたエウティキアンという名の御者は、悪魔の仕業により車輪の下へ仰向けに転落し、石の重みで重くなった牛車は、倒れた御者を轢き、その骨を砕き、押しつぶした。御者は即座に息を引き取った。

このことを知った神の聖人パルフェニオスは言った。

「悪魔の悪意がこれを引き起こした。しかし、おお悪魔よ、神の御業を妨げるな！」

彼は直ちに立ち上がり、共にいた敬虔な人々を連れて、この不幸な事故が起きた場所へと急いで向かった。死体の姿を見ると、彼は聖なる膝を折り、涙を流しながら、熱心に主に向かってこう祈り始めた。

「全能の神よ、生と死を司る御方よ、悪意に満ちた敵が、その陰謀によって御自身の被造物に死をもたらした理由を、あなたはご存知です。　しかし、おお、至福なる御方よ、かつてそうであったように、今この時も、その邪悪な企みを無に帰し、御使いエウティキアヌスに命を取り戻させてく

ださい。それによって、信じる者たちに御身の無敵の力を示してください。――御身こそ唯一の神であり、御身に永遠の栄光がありますように。アーメン。

聖パルテニオスがまだこの祈りを唱えている最中、人々の目の前で死んでいた者が生き返り、こう叫びました。

「キリストなる神よ、あなたが死者をもよみがえらせてくださることを、あなたに栄光あれ！」

そしてたちまち、以前と同じように健康を取り戻した彼は、牛を駆り立て、その背に石を載せて教会まで運び届けた。

すると、この奇跡と死者の突然の復活を目撃した者たちは皆、至聖なる神に栄光と賛美を捧げ、四方八方から病める者や悪霊に苦しむ者たちを連れて来るようになった。そして彼らは皆、聖パルテニオスの祈りによって、神の恵みと力により癒やされ、　この頃には、もはやほとんど誰も医術に頼ることはなかった。人々はそれを全く不要だと考えていたからである。民は医師のもとを訪れることをやめ、あらゆる病が、我らの主イエス・キリストの御名によって、キリストの聖人によって無償で癒やされていたのである。

他の患者たちの中でも、聖パルテニオスは、王族であるあるディオニシオスの娘で、ダフヌという名の、悪霊に取りつかれた少女を三日間で癒した。

またある時には、スミルナのママリア公の娘アガルマティアを癒やした。彼女もまた悪霊に取り憑かれており、しばしば地面に転げ回っていた。口からは泡が溢れ出ており、時にはまるで死んでいるかのように見えた。

聖パルフェニオスはまた、ゾイレーという名の貴族の女性をも助けた。彼女は以前、不信仰の霊に取り憑かれており、そのことが彼女を深く苦しめていた。

ある日、長老の息子であるニコンという名の若者が、この神に愛された聖人のもとへ連れてこられた。彼もまた、激しく苦しめる悪霊に取りつかれていた。両親は息子を聖パルフェニオスの足元にひれ伏させ、彼に憐れみを持って、その不浄な悪霊から息子を救い出してくれるよう懇願した。

すると、キリストの聖人は彼らにこう言われた。

「あなた方の息子は癒やされるに値せず、その悪霊は彼への懲罰として与えられたものである。彼は父殺しだからだ。あなた方自身も、彼から度重なる侮辱や傷つけを受け、心の悲しみの中で、主が彼を罰してくださるよう祈っていたではないか。それゆえ、彼をこの病のままにしておきなさい。この懲罰は彼にとって必要なものなのだ。」

しかし、彼らは子を愛する親として、息子を思うあまり心を痛め、涙を浮かべて聖人にこう訴えた。

「神の聖者よ、彼のために神に祈ってください。そうすれば、彼は凶暴な悪魔から救われるでしょう！」

すると、至福のパルフェニオスは両親の涙を見て、彼らを憐れんだ。彼は熱心に主に祈ると、悪霊はたちまちその若者の体から出て行った。両親は息子が元気になったのを見て、神を賛美し、祝福しながら自宅へと戻っていった。

また、アリスヴァの町に住むアレクサンドラという名の女性が、神の聖者パルフェニオスの元へ連れてこられた。この女性は、悪魔の力によって、まるで蛇の霊に取り憑かれたかのようであった。彼女は時折、その爬虫類のようにヒス音を立て、そのたびに多くの人々を死に至らしめていた。キリストの聖人は、彼女から悪霊を追い出し、彼女を癒やして、健康な状態で家族のもとへ送り戻した。

またある時、聖パルテニオスは、両親に連れられて来たアヴィデニアの市民シノディオスの娘である一人の少女を、手を置いて祈ることで癒やした。彼女もまた悪霊に取り憑かれており、山々をさまよっていたのである。

神に愛されたこの聖人は、その同じ時期に、アクサンという名の兵士に対しても奇跡を起こした。この男の全身は麻痺していたが、キリストの聖人は彼を水で洗い、祈りを捧げた後、健康な姿で彼を帰した。

アランという名の、シリア出身のある男が、体内に宿っていた悪霊の影響を受けて、聖パルテニオスが建立した教会で首を吊り、求道者の待合室に死体となってぶら下がっていた。このことを知った聖人はその死体の元へ赴き、祈りによって彼から悪魔を追い出し、死から蘇らせた。

ランプサコスとキジクの中間に位置するパレイアの住民エウトロピオスは、悪霊に取り憑かれた妻を聖パルテニオスの元へ連れて行った。キリストの聖人は、苦しむ女性の顔に息を吹きかけ、その頭上で祈りを捧げると、たちまち彼女を癒した。

また、この神の御使いは、フェレイの村から連れてこられたアカキアという名の別の悪霊に取りつかれた女性も癒やした。

その頃、聖パルテニオスは、高官アガピトスの妻であるエウケリアという女性をも癒やした。彼女のために祈りを捧げ、聖油を飲ませると、彼は即座に彼女を癒やした。それ以前、彼女は毒を盛られ、致命的な毒によってひどく苦しみ、もがいていたのである。

ヴィザの町出身のマクシムという名の若者が、ランプサコに滞在中に、ある助祭に仕えていた。ある日、胃の病にかかり、治ることもなく亡くなってしまった。　両親は息子の死を知ると、彼を埋葬するためにヴィザからランプサコスへとやって来た。そこで寝台からマクシムの遺体を受け取ると、泣きながら教会へと運び、道中、神の聖人パルフェニオスが通るはずだったまさにその場所に遺体を安置した。　その場所にたどり着き、横たわる死体と泣き崩れる両親の姿を見た神の御使いは、涙を流し、ひざまずいて神に彼のために祈った。すると、たちまちマクシムは生き返り、起き上がって座り、話し始めた。聖パルテニオスは彼に両手を差し伸べ、彼を持ち上げ、健康な姿で両親のもとへ返した。 この町の住民たちは皆、この極めて輝かしい奇跡に深く驚き、主を賛美した。

また、アセルミアの村から、神の聖人であるこの聖者に、ディアコニッサのテオフィラと、彼女と共に同じ村出身の少女ルフィナが連れてこられた。彼女たちは二人とも、悪魔の力によって麻痺していた。パルテニオスは、彼女たちに聖水を振りかけ、彼女たちのために祈りを捧げた後、二人を癒した。

また、このキリストの聖人は、その祈りによって、長老イラリウスの一人息子であるフェラシオという者を癒した。この病人は、サタンの仕業により、精神が麻痺していたのである。

またある時、彼はカリオプという名の貧しい老婆と、その娘のキリアキアを癒やした。彼女たちは二人とも不浄な霊に苦しめられていたが、彼は彼女たちに生活費として金を与え、健康な状態で帰した。

これらや、聖人の数え切れないほどの他の奇跡に加え、とりわけ次のような出来事もあった。

王の紫の衣や王室の高官たちの衣装が仕立てられていた家には、悪魔が潜み、そこで働く者たちに多大な害を及ぼしていた。悪魔は彼らの仕事を台無しにし、幽霊を見せて恐怖を与えていた。このため、皆は深い悲しみに沈んでいたが、彼らを監督する役人たちは、これほど多くの物資を無駄にしたことに対する王の怒り、さらには処刑さえも恐れていた。　神の聖人パルフェニオスはこのことを知ると、監督官たちの要請に応じて直ちにその場所へ駆けつけ、恐るべき聖なるキリストの御名によって悪魔を呪い出した。 追い出される悪魔は、 の耳に届くように叫び、ある神聖な炎が自分を火のゲヘナへと追いやっていると語った。それ以来、この家では悪魔のあらゆる悪巧みが止んだ。

またある時、不浄な霊が漁師たちの邪魔をし始めた。彼らが網を水中に下ろすと、悪魔の惑わしによって、いつも網にたくさんの魚がかかったように見えたが、苦労して網を岸に引き上げても、中には一匹の魚も入っていなかった。こうして漁師たちは長い間、無駄な労力を費やし続けた。　このような現象はランプサコだけでなく、その国の周辺のすべての町や地域でも起きていた。　そこで、各地から漁師たちが聖パルフェニオのもとに集まり、彼らの労苦が無駄にならないよう、神に祈っ

てほしいと懇願した。神の御心にかなう者が涙ながらに主に向かって彼らのために祈ると、神から、漁師たちが悪魔によるこの悪戯に苦しめられていることが啓示された。　すると聖人は直ちに立ち上がり、すべての岸辺や埠頭を巡り歩き、祈りを捧げながら、水中に潜む悪魔を至る所から追い払った。その後、彼は漁師たちに、自分の目の前で網を水に投げるよう命じた。　彼らが喜んでその指示に従うと、聖人の祈りによって、彼らの漁獲量は非常に多くなり、魚があまりにも多くて網を陸に引き上げるのがやっとというほどでした。それ以来、以前と同様に、彼らの漁獲量は常に豊かでした。

ある日、漁の最中、聖パルフェニオスがカタプテリイの埠頭に座っていたとき、漁師たちの網に「フィノス」（マグロ）と呼ばれる大きな魚が一匹かかった。その魚は網から飛び出し、聖人の足元に落ちた。　聖人はその魚に十字を切って祝福し、それを切り分けて、神の栄光のために兄弟たちに食べさせるよう命じた。

その後、キリストの聖人はカリスタという名の足の不自由な人を癒やし、その人はそれ以来、正常に歩けるようになった。

またこの時、聖人はレズヴィアという名の別の男も癒やした。彼は頭から足先までかさぶたに覆われており、まるでハンセン病患者と見分けがつかないほどであった。聖油を塗って三日間彼のために祈りを捧げた後、聖人は彼を健康な姿で解放した。

ある日、神の聖人パルフェニオスは、教会の用事でフラキアへと向かった。イラクリオの町[1716]に到着すると、彼は当時重病を患っていたイパティアヌス大司教を訪ね、彼と語り合いながら、その病気の原因について尋ねた。　その夜、主は御自身の聖人パルフェニウスに、イパティアヌス大司教が、その金銭への執着と吝嗇のゆえに重い病に苦しんでいることを啓示された。というのも、彼は乞食や貧しい人々の物や財産さえも横取りしていたからである。

朝、聖パルテニオスは再び大司教のもとを訪れ、こう言った。

「立ち上がってください、偉大なる大司教よ。あなたは肉体的な病に冒されているのではなく、心の弱さゆえに罰を受けているのです。その弱さを振り払えば、あなたは健康を取り戻すでしょう。」

これに対し、病人はこう答えた。

「私自身も自分が罪人であることを自覚しています。だからこそ主は私を罰しておられるのです。しかし、どうか私のために祈ってください。そうすれば、私は自分の罪から清められるでしょう。」

すると、聖パルテニオスは彼にこう言った。

「もし誰かが隣人に対して罪を犯したなら、その祈りは聞き入れられるだろう。しかし、あなたは神に対して罪を犯したのだ。それゆえ、貧しい者たちに属するものを神に返せば、あなたは心も体も癒されるだろう。」

この言葉に心を打たれた大司教は言った。

「父よ、私は私の主の御前で罪を犯しました。主こそが義なる裁き主であられるのです！」

そして直ちに、会計係を呼び寄せ、貧しい人々の財産から集めた銀を持ってくるよう命じた。その量が膨大であることを見ると、彼は聖パルフェニウスに、これらすべてを貧しい人々に渡してくれるよう懇願した。しかし、神の御心に適う者は、貧しい人々に属するものを彼自身が配るよう助言した。

そこで、病に伏していた大司教は、自らを馬車に乗せ、聖殉教者グリケリアの教会へと運ぶよう命じた。そこで、貧しい人々や困窮者を集め、自分の銀をすべて彼らに配った。　しかし、未亡人の二レプタや娼婦の涙をも軽んじず、徴税人の悔い改めを受け入れた、慈愛に満ちた神は、この大司

[1716] イラクリアは、バルカン半島北東部に位置するビザンツ帝国の地域、フラキアにある都市の一つである。

教の悔い改めも受け入れ、三日後に彼を完全に癒やされた。一方、聖パルテニオスは、毎日イラクリアの教会を巡り、そこでいつもの祈りを捧げていた。

ある日、彼はある教会に入った。そこで、彼はすっかり衰弱しきった一人の病人が横たわっているのを見た。 彼に憐れみを抱いた神の聖人は、ひざまずき、涙を流しながら 、至聖なる神に彼のために祈った。その後、祈りを終えて立ち上がると、病人に聖油を塗ったところ、たちまち彼を癒やし、立ち上がらせて、歩くよう命じた。 そして、癒やされた男は主を賛美しながら、完全に健康な状態で自宅へと帰っていった。

この並外れた奇跡を知ると、ヘラクレイアの市民たちは、どのような病や不調に悩まされていようとも、神の御使いのもとへ押し寄せ、皆、主イエス・キリストの力と聖人の祈りによって、健康を取り戻して帰っていった。

聖パルテニオスがキリストの恵みと力によってこれらの奇跡を行い、様々な病を癒やしていた当時、彼のそばにはイラクリオス教会の大助祭がいた。その名は、大司教と同じくイパティアノスであった。

この大助祭は、パルテニオスが行う奇跡を目の当たりにし、ある日、神の御使いの足元にひれ伏し、涙を流しながら、干ばつのために自分の村では蒔いた種やあらゆる植物、畑、果樹園、ブドウ畑が枯れてしまったと告げた。

「敬愛する父よ」と彼は懇願した。「どうかそこへ行って、枯れ果てた様子をご覧になり、神に祈ってください。神が地に雨を降らせてくださり、この地域全体が飢饉から救われますように。」

聖パルフェニオスは急いで畑や果樹園、ブドウ畑へと向かい、蒔かれた作物がすべて枯れ果て、果樹園もすべて枯れ果てているのを見て、涙を流し、ひざまずいて、目に涙を浮かべながら、人愛の神に長く祈りを捧げ、神が地に雨を降らせ、あらゆる植物が生き返るよう願った。

神は、御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださる方であり、聖人の祈りの最中に、すでに空を雨雲で覆い、激しい雨が降り注ぎ、大地を豊かに潤した。

その村で大助祭と共に一晩を過ごした聖パルフェニオスは、その間ずっと祈りに専念し、朝になると大助祭にこう言った。

「兄弟よ、身を引き締めておきなさい。あなたの大司教が、金銭への執着ゆえに神から重い病という罰を受けたことは、あなたも知っているでしょう。 今夜、主は私に、数日後に彼がこの世を去り、あなたが彼の後を継いでイラクリオスの大司教となることを啓示された。それゆえ、常に貧しい者たちの世話をしなければならないことを知っておきなさい。それこそが、何よりも神を和らげるものだからである。

その後、聖パルフェニオスは、大助祭の畑や果樹園、ブドウ畑を祝福し、自らの祈りと祝福によってそれらを実り豊かなものにした後、街に戻り、まず大司教のもとへ赴いて挨拶を交わし、それから船に乗って旅立つことにした。 大司教は、神の御使いを温かく迎え、彼に口づけをした。二人が席に着き、互いに語り合い始めたとき、聖パルテニオスは彼にこう言った。

「聖なる方よ、お知らせいたします。数日後、あなたは肉体を離れ、主のもとへ旅立たれるでしょう。なぜなら、私たちの真の神であるキリストがあなたを召しておられるからです。そして、あなたが神のもとへ旅立たれる際、主が私に啓示されたように、あなたの後継者として、善良なイパティアヌス、すなわちあなたの大助祭を残されることになるでしょう。」

これに対し、大司教はこう答えた。

「主の御心が成りますように！」

そして、互いに聖なる口づけを交わした後、二人は別れた。 聖パルフェニオスはヘラクレイアを出発し、数日後に故郷のランプサコスに到着した。一方、ヘラクレイアの大司教は、しばらくして再び病に倒れ、主のもとで安らかに息を引き取った。その後、彼の後任として、かつての首席助祭であったイパティアノスが任命され、こうして聖人の預言は成就したのである。

収穫の時期となり、あらゆる果実を摘み取る時が来ると、イパティア大司教は、かつて干ばつで枯れ果てていた自身の領地、畑やブドウ畑へと向かった。そこで彼は、これまでのどの年よりも豊かな実りの光景を目の当たりにした。それは、聖パルフェニオスの祈りと祝福によるものだった。

大司教は、大きな船に小麦やワイン、そしてあらゆる果実を満載し、その祝福への感謝を捧げるため、ランプサクの奇跡を行う聖人のもとへ向かった。

聖パルフェニオスは大司教を温かく迎えましたが、持ち込まれた贈り物を受け取ることを拒み、こう言いました。

「すべてのことについて神に感謝しなさい。そして、これらは兄弟たちに分け与えなさい。」

聖人とのかなり長く和やかな対話を終えた後、イパティア大司教は自宅に戻り、聖人の命に従って、兄弟たちに大量の小麦、ワイン、そしてあらゆる　果物を配り、その最期を迎えるまで、主がそのしもべパルフェニウスを通してなされた神の偉大な奇跡を、人々の前で証し続けた。

このように、神の御心に適う者であり偉大な奇跡行者である聖パルフェニオスは、天使に等しい生涯を輝かせながら、多くの人々を偶像崇拝から真の神へと導き、様々な病に苦しむ多くの人々を癒やした。　ついに彼自身も病に倒れ、主の召しを受けて、2月の7日に、高齢の尊厳を保ったまま安らかに息を引き取った。周辺の町や村で聖人の尊い帰天が知れ渡ると、至る所から、イラクリオス、キジスの、メリトポリの、パリオスの司教をはじめ、多くの司教や司祭たちが集まった。彼らはまるで事前に取り決めたかのように、ランプサクの町に到着し、聖人に栄光ある葬儀を執り行った。詩篇やその他の聖歌を歌いながら、彼らは聖人の尊い遺体を大聖堂の近く、聖人が自ら建立した礼拝堂に安置した[1717]。

そして、聖パルフェニオスの棺の前では、病める者たちへの多くの癒しが起こった。生前のみならず、この無償の奇跡を行う医師は、この世を去った後も、ハンセン病患者を清め、人々から悪霊を追い出した。　そして今なお、彼はその祈りによって、また我らの主イエス・キリストの恵みによって、我らの魂と体を癒やし、救ってくださいます。父と聖霊と共に、彼に永遠の栄光がありますように、アーメン。

コンダク、第3調:

神の恵みによる奇跡を受けられた、神に賢き聖なるパルテニオよ、神を宿す奇跡行者よ、すべての信者の情欲を清め、悪意の霊を追い払う父よ。このゆえに、我らはあなたを、神の恵みの偉大なる秘儀の守り手として讃える。

私たちの尊き父、エフェソスのルカの伝記

私たちの尊き父ルカ・エラドスの生涯

記念日：2月7日

聖ルカはエラダで生まれた[1718]；その両親は異国の地からの移住者であり、エーゲ海に面したエギナ島と呼ばれる島からここにやって来た[1719]。絶え間ないアラブ人の侵攻に耐えかねて、彼らは

[1717] 聖パルフェニオスは318年に死去した。
[1718] 古代において、ギリシャの中部地域は「エラダ」と呼ばれていた。
[1719] エーギナ – アーキペラゴ諸島の一つ。エーゲ海 – 別名テッサロニキ湾。アーキペラゴ諸島の北西に位置する。

故郷を離れ、ギリシャの地に移住して放浪の末、ついにカストリアと呼ばれる地域に定住した[1720] 。ここで、至福のルカが生まれた。両親の名前はステファンとエウフロシニアであった。

幼い頃から、至福のルカは子供たちの間にいても、少年らしい様子を微塵も見せず、子供たちの遊びや娯楽を進んで避けていた。すでに少年時代には、彼は完璧な大人のように見えた。静寂と孤独を愛し、謙虚さを際立たせていた。

そして何よりも驚くべきことは、彼がその年齢ですでに偉大な断食者であり、禁欲者であったということである。 彼は肉を口にしなかっただけでなく、牛乳、チーズ、卵も控えていた。幼い少年たちにとって特に甘く美味しいリンゴやその他の果物にも手をつけず、パン、水、そして菜園の野菜だけで身を養っていた。水曜日と金曜日には、日没まで何も口にしなかった。

しかし、さらに驚くべきことは、このような断食と節制を実践する中で、ルカには指導者も師もいなかったということである。彼は、自分の中に働く神の恵みの力によって、日ごとにますます偉大な功業へと登りつめていった。 ――彼は過食や甘い食べ物を避け、――労働と結びついた断食、あらゆるもの、さらには必需品に至るまでの質素さ、そして概して肉体を死に至らしめるあらゆるものを愛した。――これらの な修行にのみ、彼は身を捧げていた。 そして、他の人々にとってこれほど甘美で、喜びに満ち、心地よいと思われたすべてのものは、至福のルカにとっては重荷であり、憎むべきものであり、不快なものであった。また、ほとんどすべての人にとって人生において重苦しく、不快で、耐え難いと思われたものは、彼にとっては心地よく、切望されるものだった。

聖ルカの両親は、若者としては異例な彼の生き方に気づき、大いに驚いたが、とりわけ彼の断食と禁欲には驚かされた。 これは何らかの徳高い心構えからではなく、単なる子供の軽率さによるものだと考えた両親は、次のようにして彼を試すことにした。一つの鍋で肉と魚を一緒に煮込み、食事の席で彼にその料理を差し出した。父親は魚を取り、それを聖ルカに与えた。 聖ルカは、その魚が肉と一緒に煮られていたことを知らず、食べ始めたが、味でその調理法に気づくと、深く悲しみ、すぐに食べたものを吐き出した。 まるで自らある種の大きな罪を犯してしまったかのように、泣きじゃくり、嘆きながら、パンさえ口にすることを拒み、そのように泣き続け、断食して三日間を過ごした。 そこで両親は、それが子供の軽率さによるものではなく、神の恵みによって彼に備わった敬虔への志であることを悟り、以後、彼の善意のままに生きさせることにした。

一方、福者ルカはあらゆる点で両親に従い、彼らが命じることは何でも熱心に果たした。彼は羊の世話をし、成長すると農作業に従事し、時には家事をこなし、若き肉体を律し、情欲を抑え込んだ。 彼は貧しい人々に対して非常に慈悲深く、彼らのためにしばしば自ら必要なものをすべて犠牲にした。何か用事で家を出るときは、持参した食べ物をすべて貧しい人々に配り、自分は空腹のままにしていた。 同様に、彼は大きな喜びと愛をもって自分の衣服も彼らに分け与え、裸のまま家に帰ることが珍しくなかった。そのため、両親は彼を叱責し、 罵り、さらには罰を与え、時には彼を裸のままにしておき、長い間衣服を一切与えなかったこともあった。両親は、彼が自分の裸を恥じて、貧しい人々に衣服を配るのをやめるだろうと考えていたのだ。 しかし、この徳高い若者は、慈善の行いをやめることはなかった。彼は裸であることを恥じず、罰を恐れることもなかった。貧しい人々のために裸になることは、彼にとって王の紫の衣のようなものであり、彼らのために受ける罰や殴打を、彼は自分にとっての栄誉であり称賛であると考え、それ以来、さらに熱心に貧しい人々に施しをした。

ある日、聖ルカは小麦を蒔くために畑へ向かう途中、道で貧しい人々に遭遇した。そこで彼は小麦を彼らに分け与え、自分には蒔くためにほんの少ししか残さなかった。 しかし、貧しい人々への施しに対して百倍の報いを与えてくださる主は、このわずかな種まきを祝福された。その夏、彼の

[1720] カストリアは、エラダ（ギリシャ中部）の南東部にあるアッティカ地方の村である。

麦畑では例年以上に豊作となり、収穫の時期になると、かつてないほど多くの小麦が収穫されたのである。

聖ルカの父ステファノが病に倒れて亡くなると、この神の人は農作業を辞め、学問に専念した。　特に神への黙想と祈りの研鑽に励んだこの神聖な若者は、その修養が極めて深まり、心を神へと向けるにつれ、時には肉体までもが地面から浮き上がるほどであった。ある時、その様子を彼の母エフロシニアがはっきりと目撃した。　ある日、息子が長い間自分の部屋から出てこないことに気づいた彼女は、彼が何をしているのか知りたくて、こっそりと覗き穴から覗いてみると、彼が祈っているのを見ました。彼の心は神に向けられており、全身が宙に浮いていて、地面には全く触れておらず、まるで一肘ほど地面から離れているかのようでした。　エフロシニアはこれを一度だけでなく、二度、三度と目撃し、大いに驚嘆した。その後、彼女は誓いを立ててそのことを他の人々に伝えた。

この至福に満ちた若者は、かねてより、波乱に満ちた世を離れ、修道者の沈黙と修行に身を捧げたいと願っていた。　ある日、そのことを考えながら、修道生活を送りたいという強い願いに駆られ、誰にも内緒で家を出て、ギリシャを離れようとした。道中、彼は兵士や警備員に出くわした。彼らは、主人のもとから逃げ出した奴隷を捕まえ、牢屋に閉じ込めていた。

彼らは、粗末な服を着た若者を目にして、逃げ出した奴隷の一人だと思い込み、彼を捕らえた。そして、誰の奴隷なのか、どこから来て、どこへ逃げているのかと尋ねた。若者はそれに対し、自分はキリストの奴隷であり、聖なる父たちへの祈りのために向かっているのだと答えた。　しかし、兵士たちは彼の言葉を信じなかった。彼が自分の奴隷であることや逃亡の事実を隠そうとしていると思い込み、罪のない若者を容赦なく殴りつけた。その後、彼らは彼を牢獄に閉じ込め、誰の奴隷であり、どのようにして主人から逃げ出したのかを白状するまで解放しなかった。　これらすべてを、至福のルカは、自分の善意を妨げようとする嫉妬深い敵による試練として受け止めた。しかし、しばらくして、聖人は何人かの人々に身元を認められた。彼らの証言により、至福のルカは束縛から解放された。

キリストのしもべが自宅に戻ると、家族からは叱責や非難だけでなく、さらには殴打さえも受けなければならなかった。聖人は昼夜を問わず神に祈り、修道生活を送ることをお許しくださるよう願い求めた。そしてまもなく、次のような形でその願いが叶った。

その地へ、古代ローマから二人の修道士がやって来た。彼らを見たルカは、すぐに自分の決意を思い出し、その心は神への愛によってさらに燃え上がった。　彼らと話を交わす中で、彼はどこへ向かっているのかと尋ねた。彼らはエルサレムへ向かうと答えた。そこで、至福のルカは、自分をも旅に連れて行き、そのようにして修道生活の一員にしてくれるよう、彼らに懇願し始めた。　しかし、彼らは彼を連れて行くことを拒んだ。その理由は、彼がまだ若く、十七歳になったばかりであり、長期間の放浪に慣れていないこと、また、彼の両親がすべてを知って彼らを追いかけてきて捕まえた場合、何か悪い目に遭わされるのではないかと恐れていることだった。　しかし、至福のルカは、自分は孤児であり旅人であり、自分を追いかける者は誰もいないと彼らに告げ、その修道士たちに自分を受け入れてくれるよう懇願した。それでも、彼らは彼を連れてその地域から密かに立ち去り、アテネに到着すると、そこにある美しい聖母マリア教会で祈りを捧げ、修道院で一夜を明かした。　そしてエルサレムへの旅に出る際、修道士たちは聖ルカをその修道院に残していった。

「若者よ、こここそが、お前の志を成し遂げるのにふさわしい場所だ。ここで望みを叶え、やがて修道者の尊い仲間入りができるだろう」と彼らは彼に言った。

彼を修道院長に託すと、彼らは旅立った。

修道院長は、彼がどこから来たのか、どのような身の上なのかを何度か尋ねたが、何も知ることができなかった。神のしもべは、自分の故郷や家を隠し、誰にも自分の正体を明かすことを望まなかったからである。しかし、彼が品行方正で、穏やかで、柔和で、謙虚で、従順な若者であることを見て、修道院長は彼を初級修道士として剃髪させた。

一方、聖ルカの母は、彼のことを深く嘆いていた。彼女は、愛する息子との別れに耐えられなかった。その息子を、未亡人としての唯一の慰めであり、悲しみの中の喜びとして見ていたからである。そして、神に祈りを捧げながら、彼のために苦々しく泣いた。

– ああ、主よ！私の未亡人としての境遇と孤児としての境遇の証人よ――まずあなたは、私と夫婦の絆で結ばれた友を死によって私から奪い、私を悲しませました。その後、私を未亡人としての苦難にさらしました。それは私にとって死そのものよりも恐ろしいものでした。–そして今、あなたは、この大きな苦難の中で私にとって慰めであったその人を私の目の前から取り去り、今や私は、私の苦難に満ちた人生における唯一の希望の光である彼に、どこで会えるのかさえ分からないのです。今、私はダビデと共にこう叫ばねばなりません。*「私の心は震え、私の力は私を離れ、私の目の光も――それも私にはありません」*（詩編37:11）。なぜ、その若者は私たちからこれほど遠くへ去ってしまったのでしょうか？　まさか私たちが、彼が絶えず私たちの主であるあなたに仕えることを禁じたというのでしょうか？　それとも、彼に家事をさせるよう命じ、それによって彼がいつもの祈りを怠るよう強いたというのでしょうか？　まさか私が、霊的なものより肉的なものを、天上のものより地上のものを、永遠のものより一時的なものを愛するよう彼に教えたというのでしょうか？　私は両親から、肉親としてだけでなく、精神においても母となることを学び、息子が徳において完璧である姿を見たいと願っていました。私は彼に、私の世話をする時間よりも、祈りのための時間を多く与えていました。私にとって、愛する我が子が、常にではないにせよ、少なくともしばらくの間は、　近所の人々から彼の善良な人柄を称賛する声を聞くだけで、私は満足し、それによって悲しみに満ちた魂を慰めていたのです。それゆえ、主なる王よ、私の流す涙を軽んじることなく、その声に耳を傾け、私の大きな悲しみを和らげてくださるようお願いたします；　あなたが再びこの母の目に、愛する我が子を見させてくださる時、あなたは私の悲しみを癒してくださるのです。その時、私は息子を見つけ出し、皆を集めてあなたの威光を高らかに讃え、生涯を通じてあなたを賛美し続けるでしょう。

こうして悲しみの中で祈りを捧げた未亡人の母は、慈愛に満ちた神の御慈悲に身を委ね、求めた通りの恵みを受けた。

主は、御自身の御業によって万事を成し遂げられる方であり、至福のルカが修道生活の初期に修行に励んでいたその修道院の修道院長に、幻を見せるようお導きになりました。彼は夢の中で、泣きながらこう彼に訴えかける母親を見ました。

「なぜ、私という未亡人を傷つけたのですか？　なぜ私の苦しみに、さらにこの悲しみを重ねたのか？　なぜ私の未亡人としての唯一の慰めを、これほど容赦なく私から奪ったのか？　なぜ私の老後の支えである息子を連れ去ったのか？　この悲しみに耐えつつ、私は神であり万物の王である方へと祈りを捧げ続け、あなたを激しく非難し続けるだろう。

そのような夢の幻と語られた言葉に恐怖を覚えた修道院長は、最初は単なる悪魔の惑わしだと思った。しかし、翌夜、そして三夜目にも夢の中で同じ妻を見、彼女から　同じ怒りの言葉を聞いたとき、彼はこれが悪魔の惑わしではなく、神から送られた啓示であることを悟った。

朝、修道院長は、自分のもとで修業中の若者ルーカを呼び寄せ、怒りを込めてこう言った。

「なぜ、私が何度も『お前は誰で、どこから来たのか』と尋ねたにもかかわらず、自分のことをすべて隠そうとしたのか？　なぜ、両親も親族もいないと言ったのか？　そして、その事柄そのものが証明しているように、お前は虚飾と嘘に満ち溢れているのに、どうしてこの聖なる修道生活に入り、私たちと共に暮らすことを敢えてしたのか？　もし当初、あなたが真実を語っていたなら、今こうして、あなたの望みとは裏腹に、あなたについて暴露されることもなかっただろう。さあ、私たち、そしてすべての修道者たちから離れ、あなたを産んだ母のもとへ戻りなさい。彼女は大いに嘆き悲しんでおり、私は三晩もひどく苦しんでいるのだ。

修道院長がそう語っている間、至福のルカはひどく怯え、まるで呆然としたように立っていた。彼は下を向き、その目からは涙がこぼれていた。それほどまでに、彼は聖なる兄弟たちと別れたくなかったのだ。修道院長は彼の涙と謙虚な姿を見て心を動かされ、優しくこう語りかけた。

「子よ、今は母のもとへ戻らなければならない。しかし、その後、修道院での生活も禁じられることはない。そうするのだ、そう勧める。なぜなら、彼女の祈りは神を動かし、お前の祈りよりもはるかに力強いことは明らかだからだ。」

これを聞いた聖ルカは、修道院長の言葉に何の異議も唱えなかった。彼に頭を下げ、ただ祈りと祝福を請うただけだった。こうして、彼は修道院を出ることさえ望んでいなかったが、母のもとへ、カストリアの村へと旅立つことを余儀なくされた。

家に入ると、彼は嘆き悲しんでいる母を見つけたが、母は彼を見るや否や、喜びと感動に満たされた。しかし、すぐに息子のもとへ駆け寄って抱きしめることはしなかった。　気高くて敬虔な女性であった彼女は、まず神に目を向け、両手を天に掲げて、神の御加護により、かつて失った最愛の息子を再び迎え入れることができたことへの感謝を捧げたのである。

「主を賛美します」と彼女は言った。「私の祈りを聞き入れ、御慈悲を私から奪わない主を。」

こうしてルカは、神の御心により、母のもとへ戻された。彼は息子として母に仕え、四ヶ月間、母のそばに留まった。その後、神への熱意と、神に捧げる静寂な生活への渇望に燃える聖ルカは、再び母のもとを去ろうと考えた。　今度は、母はもはや彼の善意を妨げず、その道を阻むこともなかった。なぜなら、自分の息子も、他の誰と同様に、両親よりも神を尊ぶべきであることを知っていたからである。

こうして、聖ルカは、良き導き手である母の祈りに導かれ、やがて「ヨハネの山」と呼ばれる海辺の山にたどり着いた。そこには、聖コスマスとダミアノ――無報酬の医師たち――に捧げられた教会があった。そこで彼は小さな修道室を設け、神に従って生活し始めた。　彼がここで、悪霊と戦い、肉体を律するためにどのような労苦を積み重ねたか――その詳細をすべて語ることはできないが、すべてを黙して通り過ぎるわけにもいかない。そこで、多くの出来事の中からほんのいくつかだけを紹介し、この神に愛された聖人がどのような生涯を送ったかを知ってもらいたい。

この尊者には、師に対して疑念を抱く弟子が一人いた。彼は、聖人が偽善的に絶えず祈っているのだと考えていた。　彼が聖書を読むことも、教父たちの著作を学ぶこともせず、何にも取り組んでいないのを見て、この弟子は、師が教養がなく聖書を知らない人間であるため、夜を徹して祈りを捧げているのではなく、眠りや怠惰に費やしているのだと考えた。　そしてある夜遅く、長老がすでに自分の小部屋の扉を閉めた後、その弟子は外から扉のそばに座り、頭を扉に寄せ、長老が夜間に何をしているのか――休んでいるのか、それとも祈っているのか――を耳を澄ませて聞き耳を立てた。そうして盗み聞きを続け、彼は朝まで一晩中、扉のそばに留まっていた。　そこで彼が耳にしたことについて、彼は後に自らこう語った。「私は、聖人がひざまずき、頭を地面に打ちつけ、お辞儀をするたびに敬虔に『主よ、憐れみたまえ！』と唱えているのを聞いた」　その後、神への熱意がさらに燃え上がり、彼はより頻繁に頭を下げるようになり、さらに熱心に「主よ、憐れみたまえ！」と叫んだ。　こうして彼は、体が疲れ果てるまで祈り続けた。しかし、地面にひれ伏しても、その精神は衰えることはなかった。横たわったままでも、彼は祈りの中で神に呼びかけ続けたのである。　そして、立ち上がると、彼は膝を屈めて同じことを繰り返し、そのような祈りの中で夜通し、夜明けまで過ごした。その後、この弟子は、師の偉業を確信し、　かつての疑いを悔い改め、聖人が亡くなった後、誓いを立ててこれらすべてを人々の前で告白した。

しかし、この尊者は、夜間のひざまずきだけでなく、日中の労働によっても自らの肉体を鍛え上げた。　彼は小さな庭を作り、そこに様々な木を植え、ありとあらゆる種を蒔き始めた。しかし、それは自分の必要のためでも、販売のためでもなく、肉体を消耗させるためであった。なぜなら、彼

は毎日、額に汗を流すほど自分の庭で働き、もし木や種から実がなることがあれば、　彼はそれを訪ねてくる人々に配り、時には大きな籠いっぱいに詰めて、近隣の他人の畑へ運び、そこに置いていった。こうして聖ルカは自らの労苦によって他者を養い、自身は常に断食を貫いていた。

ある時、彼の庭に鹿たちがやって来るようになった。あるものは果実を食べ、あるものは足で踏み荒らし、庭をひどく荒らした。　聖人は彼らを追い払ったが、自分の小部屋に戻ると、彼らはまたそこへやって来た。そして、それが何度か繰り返された。そこで聖人は苛立ちを覚え、鹿たちのところへ出て行き、他の鹿たちよりも大きな一頭に対し、まるで知性があり言葉を話す生き物であるかのようにこう言った。

「なぜ、私があなたたちを傷つけたことなど一度もないのに、私に不快な思いをさせ、私の労苦を台無しにするのか？　私たちは唯一の主のしもべであり、唯一の神の被造物ではないか。さらに、私は神の御姿に似せて造られ、すべての被造物に対する権威を持っている。創造主はすべてを人間に服従させたのだから。」　それゆえ、主の御命により、今立っているその場から動いてはならない。そして、相応しい罰を受けよ。

聖人がそう言い終えるや否や、その鹿はまるで何らかの矢に射られたかのように地面に倒れ、動かなくなった。一方、残りの鹿たちは逃げ去った。砂漠を歩いていた猟師たちは、この一連の出来事を目撃した。彼らは急いで鹿のところに駆け寄り、喜びながら、この予期せぬ獲物を屠殺するために引きずり去った。しかし、聖人は鹿を憐れみ、彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、あなたがたにはこの鹿を捕らえる権利はない。あなたがたはこれを狩ったわけでも、捕らえたわけでもない。ただ、すでに捕らえられたものに近づき、今やそれを刺し殺そうとしているだけだ。あなたがたは、この鹿を憐れむべきだった。なぜなら、この鹿は衰弱して倒れ、今や逃げようともせず横たわっているのだから。」

これを聞いて、狩人たちは聖人の慈悲に驚きつつ、鹿をその場に置き去りにした。聖人はその鹿を無傷のまま、砂漠へと放した。

その生活においてこれほどまでに完璧な修道士であったにもかかわらず、私たちの尊い父ルカは、まだ完全な修道服を身にまとってはいなかった。しかし、彼はそれを強く望み、神に熱心に祈り、この聖なる天使のような姿にふさわしい者とならせてくださるよう願った。そして、その祈りは聞き入れられ、彼は望みを叶えられた。

ある日、どこからともなく、敬虔な白髪と聖なる面持ちを備えた二人の年老いた修道士が彼の元を訪れた。彼らは古代ローマへ向かう途中だと語った。この二人の修道士は祈りを捧げた後、尊者ルカに完全な修道服を授けた。彼に教えを授けた後、彼らは旅立ちの準備を始めた。　聖ルカは、肉体的にも精神的にも貧しく、必要な食糧さえ持っていなかったため、彼らに手土産を贈るものがなかったが、道中、彼らとの霊的に有益な会話に支えられながら、彼らを見送った。　ある海岸に着くと、旅人たちは少し休むために腰を下ろし、その場所で至福のルカと別れを告げ、主の御名において彼に口づけをしようとしていた。　しかし、彼らがまだ座っているうちに、突然、海から大きな魚が飛び出し、彼らの足元の岸辺に落ちた。続いてもう一匹も飛び出し、二匹とも地面でもがき、まるで自ら彼らの手に身を委ねるかのように見えた。　これは聖ルカの祈りによるものであった。というのも、彼は恩人たちに旅の糧を振る舞うための十分な食糧を持っていなかったため、心からの秘かな祈りをもって、万物の摂理者である主に対し、旅の途中に食糧を送ってくださるよう懇願したのである。かつてカラスを通してエリヤにパンと肉を送られた御方が、この敬虔な父たちにも海の深みから糧を送られたのである。そして彼らは、二匹の魚を受け取ると、御手を広げ、あらゆる生き物を満たしてくださる神に感謝を捧げた。

一方、私たちの尊い父ルカは、完全なる天使の位を授かると、さらに完全な生活を送るようになった。彼は以前の修行にさらに過酷な労苦を加え、涙と徹夜の祈りによってその敬虔さを深めていった。　彼の糧は大麦のパンであり、時には生の野菜と水だけでした。睡眠にはめったに身を委ねま

せんでした――そのために、彼は自分の小部屋に棺のような溝を掘らせていました。これは、常に死を心に留めておくためでした。　そして、夜に眠らなければならないときは、まるで死んで葬られるかのように、この棺の中に横たわった。そして、少し休むと、すぐにまた祈りのために起き上がり、預言者ダビデの言葉を唱えた。*「あなたは御手を広げ、御心に従ってすべての生き物を満たしてくださる」*（詩編144:16）。　*「私は夜明けに先立って叫び、あなたの御言葉に望みを置く。　わが目は、あなたの御言葉を深く味わうために、朝の番に先立って目を覚ます」*（詩編118:147–148）。聖ルカ（　）がこのような生活を送り始めると、まもなく彼の徳の評判は周辺の住民の間に広まり、至る所から人々が彼のもとに集まるようになった。

ある日、二人の実の兄弟が聖人に訪ねて来て、こう打ち明けた。「私たちの父は、亡くなる前に、どこかは分からないが、自分の持っている金、銀、そして全財産を地中に埋め、死ぬ間際になっても、その宝を埋めた場所を私たちに教えてくれなかったのです。」　「ですから、父よ、お願いです」と彼らは言った。「神に祈り、その隠された場所を神が示してくださるようにしてください。そうすれば、私たちの間で毎日のように起きている争いも収まるでしょう。なぜなら、私たちは兄弟でありながら、互いに、どちらかが父の遺産を盗んで隠しているのではないかと疑い合っているからです。」　どうか、あなたの祈りによって、私たちの間にある敵意が和らぎ、その宝が見つかることで私たちの貧困が解消されるようにしてください。

しかし、聖人はそれを拒み、兄弟たちを追い返し、「自分の祈りでは主をそのように懇願することはできない」と言いました。しかし、兄弟たちは頻繁に訪れ、懇願し続けて聖人を煩わせ、ついに彼の慈悲を引き出しました。

聖人は、全知の神に彼らのために祈り、啓示によってこの二人の兄弟の父が宝を隠した場所を知ると、彼らにその場所を教えた。そこで彼らはその場所へ向かい、その場所で地面を掘り始めると、すぐに父の金と銀を見つけ出し、この奇跡を周辺のすべての村々で称え広めた。　しかし、善を憎む悪魔は、この勇敢なキリストの戦士に常に打ち負かされていたにもかかわらず、再び彼に対して戦いを仕掛けようと企んだ。彼に侮辱と害を与えようと、悪魔は自らの策略によって次のような仕掛けを仕組んだ。

悪魔の唆しにより、近隣の村から三人の女性が聖人のもとを訪れた。泣き叫びながら彼の足元にひれ伏し、自らの重い罪を告白し、彼の良き助言と祈りによって魂を癒やしてほしいと懇願した。聖ルカは、彼女たちの煩わしさをあらゆる手段で避け、彼女たちから距離を置こうと、自らにはその位階がなく、単なる未叙階の修道士に過ぎなかったため、彼女たちを司祭たちのもとへ送り返した。しかし、これらの女性たちは聖人の言葉に従わず、そこで彼は彼女たちから、女性にとって最も恐ろしい罪の告白を聞くことになった。

これらの罪深い女たちが去ると、心の正しい者たちを撃つ（詩編10:2）人の敵は、再び邪悪な思いで聖人に襲いかかり、彼の死んだはずの肉体に罪の戦いを煽り立てた。そこで聖ルカは、悪魔の狡猾さを悟り、祈りという武器をもって悪魔に立ち向かった。　三日間、一か所に立ち続け、絶えず神に祈り続けた彼は、悪魔のこの策略に打ち勝ち、涙の雨でこの恐ろしい情欲の炎を消し止め、こうして神の助けにより、地獄の蛇の頭を打ち砕いた。

三日間の祈りの後、聖人の肉体はすでに完全に疲れ果てていたため、彼は少し眠りについた。その時、幻の中で、美しい若者の姿をした天使が彼の前に現れた。　その手には釣り竿を持っており、それを聖人の口や喉の奥へと突き刺し始めた。そして、至福のルカはそれを丸ごと飲み込み、それが内臓の奥深くまで達したかのように見えた。その後、現れた若者は釣り竿を引き抜き、それに付着していた肉付きの良い血まみれの体の一部を取り出し、それを投げ捨ててこう言った。

「恐れず、大胆にせよ。」

聖人はたちまち眠りから覚め、主が彼を肉欲の罪から救い出されたことを悟り、救い主であり解放者である主に感謝を捧げた。

聖ルカは、清らかな生活を送る傍ら、透視の賜物も持ち、未来を予言した。例えば、彼はブルガリア軍がギリシャの地に侵攻することをあらかじめ告げていたが、それはやがて現実のものとなった。これについては後述する。

この聖なる修道士は、人間の心の奥底にある秘密までも見通していた。尊者にはガリという名の妹がいた。彼女は肉親としてだけでなく、精神においても彼の妹であった。あらゆる点で兄に倣い、彼女は処女性と貞潔、そして修道者の行いを貫いて生涯を送った。　時折、彼女は修道見習いたちと共に、自分の修道院から兄のもとを訪れ、必要があれば彼に仕え、また時には彼の庭を耕し、木を植えたり手入れをしたりした。

ある時、尊師は彼女と、彼女と一緒にいた人々にこう言いました。

「大きな重荷を肩に担いで、ひどく身動きが取れないほどに重荷に押しつぶされそうな人が、こちらへやって来ている。」

そう言うと、彼は訪ねてきた女性たちをその場に置き去りにして、自ら山へと向かった。彼女たちは、その言葉を理解できず、不思議に思いながら、尊者が言った言葉の意味――誰が重荷を負っているのか、何に重荷を感じているのか――について考えを巡らせていた。　すると、しばらくして、ある男がここへやって来た。彼は　、何の重荷も背負っていなかったばかりか、何も持っていなかった。そして、聖人について尋ね始めた。「ある用事で彼に会わなければならない」と彼は言った。聖人の姉妹はその男にこう答えた。

「彼はここにいません。しばらくの間、荒野へ出かけています。もし彼に会いたいなら、彼が戻ってくるまで待ってください。」

やって来た男は言った。

「彼に会うまではここを離れません」と言い、聖人を待ちながら、その庵の近くで七日間座り続けた。七日が過ぎると、聖人は荒野から戻ってきた。そして、その男に気づくと、いつもの穏やかさとは裏腹に、むしろ怒りを含んだ眼差しで彼を見つめ、威圧的な声でこう言った。

「なぜこの荒野に来たのか？　なぜ町を捨てて山に逃げ込んだのか？　なぜ牧師や教会の司祭たちを軽んじ、私たちのような学のない素朴な者たちのところに来たのか？　そして、計り知れない罪を犯しておきながら、神の報復を恐れることなく、どうして私たちの目の前に現れることを敢えてしたのか？」

聖人のその言葉に怯えたその男は泣き出し、恐怖のあまり一言も発することができなかった。すると、聖ルカは再び彼に語りかけた。

「なぜ黙っているのか？」と彼は尋ねた。「なぜ自分の行いを告白せず、犯した殺人について語らないのか。すべての不義を悔い改め、少しでも神をなだめるために。」

すると、その男は、泣きじゃくって声を絞り出すのがやっとという状態で、聖人にこう言った。

「おお、神の人よ！　私にこれ以上何を語れと望まれるのですか？　あなたの中に宿る神の恵みに照らされ、あなたは私の告白に先立って、私の重い罪について自ら語られました。私が密かに行ったことすべてを、あなたはご存知のようです。しかし、もしお命じになるなら、私は皆の前で自分の罪を語ります。」

そしてその男は、道中で友人をどのように、どこで、どのような理由で殺したかを、皆の前で詳しく語り始め、泣きながら謙虚にその罪を告白した。その後、聖ルカの足元にひれ伏し、悪魔の罠に囚われたままにしないでほしいと聖人に懇願した。　聖人は、その男に多くの教えを与え、救いの道へと導いた後、彼を司祭たちの元へ送り出した。

これらすべてが語られているのは、聖ルカがいかに洞察力に富み、人間の隠された罪さえも見抜いていたかを示すためである。

ここで、もう一つの類似した事例についても述べておきたい。

ディミトリという名の船乗りは、聖人の庵の近くにある埠頭に自分の船で頻繁にやって来て、聖人と親しくなり、彼を訪ねるたびに、聖人の聖なる祈りの恩恵を受け、その会話に喜びを見出していた。

ある日、岸に着き、聖人のもとへ向かおうとしたとき、彼は手ぶらで行くのではなく、自分の釣った魚を何か持っていこうと考えた。彼はその埠頭でよく魚を釣っていたが、この時は船員たちと一緒に海に釣り竿を投げ入れたものの、何も釣れず、一日中無駄に労力を費やしてしまった。 しかし、夜も更けてから、彼は聖ルカのことを思い出し、聖人の御名によって釣り糸を投げ入れたところ、水から引き上げるのがやっとというほど大きな魚が釣れた。その後、再び聖人の御名によって釣り糸を投げ入れると、最初の魚に似た、ただ少し小さいだけの別の魚を釣った。 聖人のもとへ向かう際、彼は小さい方の魚を持って行き、大きい方は手元に残した。聖ルカは透視の力を持っていたため、起こったことすべてを知っていたが、それでも客と彼が持ってきた贈り物を快く受け入れた。 しかし、彼と語り合う中で、聖人はさりげなく、アナニアが村で得た代金を隠して神に対して罪を犯したこと、そして聖使徒ペトロがそれをどのように知ったか（使徒行伝5:1–5）を彼に思い起こさせた。 これを聞いたディミトリイは、大きな魚を隠していた自分にも、聖人のこの言葉が当てはまることを悟った。聖なる父の透視能力に恐怖を覚え、自分の罪を暴かれたことに恥じ入り、彼は聖人の足元にひれ伏し、自分の罪を告白して悔い改め、許しを請うた。 聖ルカは彼を優しく諭して許し、持ち込まれた魚については、自分自身が魚を食べなかったため、弟子に調理させて、訪ねてきた兄弟たちに配るよう命じた。 また、聖ルカは、まもなく兄弟たちが訪ねてくることを予見して、何度も弟子にそのことを告げ、彼らのために食事とパンを用意するよう命じていた。

聖ルカがその山に滞在してから7年後、ギリシャの地にブルガリア軍による侵攻が始まったが、このことについても、聖人は以前から予告していたのである。 住民たちは、ある者は都市や 要塞へ、ある者はエウベイア島やペロポネソス半島[1721] へと逃げた。その時、聖ルカもまた、自分の山を後にし、船に乗ってコリント[1722] へと向かった。 そこで、パトラで修行に励むある柱上修行者の話を耳にすると[1723] 、彼はその人のもとへ向かい、10年間その人と共に過ごし、まるで息子が父親に仕えるかのように、完全な服従と熱意をもって彼に仕えた。ある長老がこの柱上修行者について悪口を言い始め、聞き手を惑わして、その義人を中傷し、誹謗した。 聖ルカは、自分の師を誹謗するその言葉を耳にすると、普段の柔和さを捨て、その長老に反して、その修行者を称賛し始め、その長老の虚偽の言葉を暴き、師の無実を断固として擁護した。 しかし、その長老は残酷な男であり、聖ルカの頬を平手打ちした。すると、即座に神の懲罰が彼に下った。彼は狂乱して地面に倒れ込み、その状態のまま最期を迎えるまで動けなくなった。それは、肉体が消耗するようにサタンに引き渡され、霊が救われるためであった（Iコリント5:5）。

10年が経過した後、聖ルカは再び故郷であるエラダに戻り、ヨハネ山で最初に滞在した場所に定住した。

ある日、コリントの司教が聖人の山を通りかかった。彼はコンスタンティノープルへ向かう途中であり、聖人の庵のすぐそばで休息をとっていた。聖ルカはそれを知ると、彼に敬意を表しに赴き、自らの労作である果実や野菜、そして青菜を贈り物として持参した。 司教は彼を温かく迎え入れ、その庵を見学した。そして、彼の荒野での静寂に満ちた生活、庭、そして労作を目の当たりにして、驚き、そこから大きな教訓を得た。 司教は、その隠者に施しを贈ろうと考え、同行者たち一人ひ

[1721] エウベイア島は、中部ギリシャのベオティア地方とアッティカ地方の海岸沿いに、北西から南東へと伸びる細長い島である。ペロポネソス半島は、ギリシャ南部にあたる。

[1722] コリント——古代ギリシャで最も古く、有名で豊かな都市。ペロポネソス半島とギリシャ本土を結ぶコリント地峡に位置し、イオニア海とエーゲ海の間に広がるコリント湾の南東岸にある、美しく肥沃な平野に位置していた。 現在、古代コリントの遺跡は、クルントと呼ばれる現在のコリントの近くにあり、その人口はわずか5,000人ほどである。

[1723] パトラは、ペロポネソス半島の北岸に位置する古代都市である。

とりに数枚の硬貨を捧げるよう命じ、自身も金貨を添えた。こうして集められた多額の金を彼に手渡そうとしたが、聖ルカはそれを受け取ろうとしなかった。

「聖なる司教様」と彼は言った。「私が求めているのは金ではなく、あなたの聖なる祈りと教えです。貧しさとこの質素な生活を選んだ私に、金など何の役にも立ちません。ですから、私が求め、願っているものをください。この愚かな者に、どうすれば救われるかを教えてください。」

悲しみに暮れた司教は、聖ルカが施しそのものを拒んでいるのではなく、自分自身のことを拒絶し、軽蔑しているのだと思い、聖人にこう言った。

「なぜあなたは私たちの施しを、ひいては私たち自身をも拒むのですか？　私も、罪人ではあるが、忠実なキリスト教徒であり、不適格ではあるが、司教である。なぜ、あなたはあらゆる点でキリストに倣いながら、この点だけは彼に倣わないのか。キリストもまた、敬虔な人々から捧げられた施しを受け取られたではないか。それゆえ、もしあなたが金を必要としていないのなら、それでもそれを受け取り、困窮している人々に分け与えてほしい。　もしあなたが施しを不要なものだと考えるなら、それは貧しい人々から彼らに必要なものを奪うことになり、施しをする人々の救いを認めないことになります。なぜなら、貧しい人が施しを受け取らなければ、彼にとって必要なものをどこから手に入れられるでしょうか。また、私たちが施しをしなければ、どうやって救われるというのでしょうか？

司教のこの言葉に納得した聖人は、施しを受け入れたが、金すべてではなく、たった一枚の硬貨だけを受け取った。そして司教は、彼に祝福を与えると、旅立った。

聖ルカには、花祭りの週の早朝、山の頂上へ登り、手に十字架を掲げて「主よ、憐れみたまえ」と詠唱する習慣があった。　ある日、彼がいつものように山に登っていると、穴からエヒドナが這い出し、悪魔の唆しによって彼の足の親指を噛みつき、そこにぶら下がった。聖人は身をかがめてエヒドナを掴み、足から振り払うと、こう言った。

「お前は私に害を及ぼすな、私もお前を害さない。さあ、それぞれ自分の道を行こう。我々は唯一の創造主によって造られた存在であり、創造主の御心と御命令なしには何もできないのだから。」

そして、エヒドナは自分の洞窟へと這っていき、聖人は山へと自分の道を進んでいった。エヒドナの攻撃から全く無傷のままだった。

ある時、王の財宝を管理していた宮廷の一人が、王の命によりアフリカの国へ派遣された。彼がコリントに滞在し、大量の王の金を携えていた際、　盗難に遭い、王の金はすべて失われてしまった。　盗まれた金を探し出す過程で、多くの者が拷問を受け処刑されたが、金は見つからず、王の重臣は深い悲しみに沈んだ。　貴族たちが訪れて彼を慰めようとしたが、慰めることはできなかった。金を発見する望みを絶たれた彼は、王の怒りを恐れて、生き続けることさえ考えられなくなっていた。その時、そこにいた者の一人が真ん中に立ち、こう言った。

「盗まれたものがどこにあるかを知っているのは、神が多くの奇跡を行われる修道士ルカ以外には誰もいない。」

これを聞いた他の者たちは、「まことにその通りだ」と言い、皆、彼について語り始め、その徳高い生き様と、彼の中に宿る神の恵みを称賛した。一方、王の重臣はこれを聞くと、聖人に向けて次のような願いを伝えた。

「人類の救いのために天から降りることを拒まなかった御方に倣い、どうかしばらくの間、私たちの街へお越しになり、深い悲しみに苛まれている人々を慰めてください。」

聖ルカは当初、虚栄や人々の称賛を避けて行くことを拒んだが、盗まれた金のために苦しむ多くの人々のために、やがて行くことにした。町では、王の高官や市民たちによって王室並みの栄誉をもって迎えられ、彼はまず食事の準備を命じた。

「まずは腹を満たそう」と彼は高官に言った。「そして、神の栄光のために喜び祝おう。私たちに悔い改めのぶどう酒を飲ませてくださった方は、慈愛をもって喜びの杯を私たちに注いでくださる方である。」

彼らが席に着いて食事をしていたとき――しかし、彼らは食物で肉体を満たすよりも、むしろ聖人の良き教えによって魂を満たしていた――、聖ルカは、傍らにいて彼らに仕えていた一人の男に目を留め、その名を呼んで自分のところへ呼び寄せ、こう言った。

「なぜ、王の金を盗むという大胆な行いをして、自らを死の淵に追いやり、主人にこれほど大きな災いをもたらそうとしたのか。もし慈悲と赦しを得たいのなら、急いで、地中に隠した金をここに持って来なさい。」

これを聞いて、その使用人はひどく恐れおののき、全身を震わせながら黙って立っていた。良心そのものに責められていた彼は、もはや一言も発することができなかった。やがて地面にひれ伏し、聖人の足にすがりつき、涙ながらに許しを請いながら真実をすべて打ち明けた。そして、許しを得たのである。　聖人は、彼の罪という傷を暴くだけでなく、それを癒やすことも望んでいた。するとすぐに、その泥棒は外へ出て、間もなく盗んだ金をすべて無傷のまま持ち帰り、皆の目の前でそれを置いた。王の重臣も、彼と共にいた者たちも皆、大いに喜び、金を心配していた者たちは皆、安心した。　そして、この盗みを唆した悪魔は、盗人が赦されたことに恥じ入り、すべての人の口は主イエスを賛美した。聖人は、周囲の人々からの称賛を微塵も自分のものとはせず、この奇跡のすべての栄光を唯一の神に帰して、家路についた。

しばらくして、聖ルカはフィヴァス[1724] にあるある修道院を訪れ、そこで修道院長アントニオに会った。彼には、神に導かれた人々のもとを訪れ、彼らと魂の救いに関する対話を交わすという習慣があったのである。　彼が修道院長アントニオのもとにいる間、ある高貴な市民の息子が死の淵に瀕する病に倒れた。　その市民は、聖ルカが彼らの修道院を訪れたと聞くやいなや、直ちにそこへ駆けつけ、足元にひれ伏して泣きながら、自分の家に来て、病に伏し、今や死の淵にある少年を見舞ってほしいと懇願した。彼は、神の御使いが訪れてくれれば、息子が元気になるだろうと信じていたのだ。 聖人は謙虚にこう言い、断ろうとした。

「私など、何者というのでしょうか。私に一体どのような偉大さを見出し、そのような評価をなさるのですか。魂と肉体の唯一の医師、すなわち私たちを死から救うことのできるお方は、私たちを創造された神お一人です。罪深く、死すべき人間には、そのようなことは到底できません。」

そして、その市民は悲しみに暮れ、泣きじゃくりながら、息子の命に絶望して去っていった。夕方、修道院長は、その聖人と二人きりで語り合い、こう言った。

「敬虔な父よ、あなたは病人を訪ねず、悲しみに暮れる父親を慰めなかったのは、良くなかったと思います。そうすれば、私たちもキリストの*『病んでいる者や牢屋にいる者を訪ねてくれなかった』*（マタイ25:43）という言葉を聞かされることになるでしょう。」

これに対し、聖ルカはこう答えた。

「病人を癒やすことは神の力の働きですが、悲しむ者を慰めることは、口に言葉と知恵を持つ者にふさわしいことです。　しかし、私は前者からは程遠く、後者も全く欠いている。私は素朴で学のない者だからだ。だが、もしあなたが同意し、それが神の御心にかなうと考えるなら、あなたが先頭に立ち、私の導き手となってほしい。私はあなたの後についていく。」

そして直ちに、すでに夜も更けた頃、二人は街へと向かった。その市民の家に着くと、少年は半死半生の状態で、もはや言葉を話せず、家族全員が彼の死を待っていた。　病人の父親は、家の中にいた全員と共に、聖人の足元にひれ伏し、涙ながらに、死の淵にある息子のために祈り、死の門から彼を救い出してくれるよう懇願した。　病人の父親の懇願と、アントニー修道院長による説得を受

[1724] テベスは、古代ギリシャの中部地域であるベオティアの主要都市である。

け、聖人は両手を挙げて病の少年のために祈りを捧げ、祈りが終わるとすぐに修道院へ戻った。そして、夜明けの曙が差し始めたや否や、急いで自分の山へと去っていった。これほどまでに、彼は世間の名声を避けていたのだ。　朝になると、修道院長アントニオスは、病める少年がどうなっているか――敬虔なルカの祈りが功を奏したかどうか――を知るために、使用人を町へ遣わした。すると、その使用人はほぼ直ちに帰ってきて、修道院長に奇妙で奇跡的な出来事を語った。

「昨夜、死の淵にいたその少年を」と使用人は言った。「馬に乗ったまま、風呂場へ向かって洗いにいくところに出くわしました。」

これを聞いた修道院長は驚き、神を賛美した。

多くの人々がそれぞれの用事で聖ルカのもとを訪れ、彼が大切にしていた静寂を乱して煩わせたため、彼はより人里離れた場所へ去ることを考え始めた。　しかし、彼はすぐにその決意を実行に移すことはせず、まず弟子であるゲルマンをコリントへ、ある経験豊富で神に導かれた人物、テオフィラクトのもとへ遣わし、彼に良き助言を求めた。すなわち、ヨハネの山という一箇所に留まり、訪れる者たちからの煩わしさに耐えるべきか、それとも、誰にも知られていない別の場所へ移るべきか、ということである。　テオフィラクトは、かつて天から聖アルセニオス大聖人に与えられた答えを彼に送った。

「人々から逃げよ。そうすれば救われる。」

聖ルカはこの助言を喜んで受け入れ、弟子と共にヨハネの山を去り、海辺の「カラヴィエ」と呼ばれるある人里離れた場所に定住した。ここで彼は、自らの労働によって食料を賄っていた。聖人は土を掘り、小麦を蒔き、石臼で挽いてパンを焼いていた。

ある日、船乗りたちが彼のそばを通りかかり、聖人の庵からそう遠くない海岸に上陸した。庵の中に入ると、聖ルカは弟子と共にどこかへ出かけていたため、そこには誰もいなかった。彼らは立派な石臼の石を見つけると、それを持ち去って船に積み込んだ。　まもなく聖ルカが庵に戻り、石がないことに気づくと、船乗りたちのところへ行き、石を返してくれるよう頼んだ。しかし、彼らは言い争い、自分たちはそれを持ち去っていないと主張し始めた。そこで聖ルカは彼らにこう言った。

「もしあなたがたがそれを持ち去っていないのなら、海へ漕ぎ出せ。もしあなたがたが持っているのなら、主が御心のままに報いてくださるだろう。」

そう言うと、聖人はその場を去ったが、その直後、石を盗んだ男が死んでしまった。その後、船員たちは皆、大きな恐怖に襲われ、聖人のもとへやって来て許しを請い、石を返した。一方、神の御心に適う聖人は、船員の予期せぬ死に深く悲しみ、何日も彼のために泣いた。

尊者がこの地に滞在してから3年後、ギリシャ地方にアラブ人の侵攻が起こり、聖人はアンピルと呼ばれる、水源のない人里離れた島へと移り住んだ。そこで彼はかなり長い間、飢えと渇きに耐え、その後、ソティリエと呼ばれる肥沃な土地へと移り住んだ。　幽霊で彼を脅かそうとした悪魔をこの地から追い払った後、聖人は至福の死を迎えるまでここに留まった。兄弟たちがここに集まり、小さな修道院が設立された。その地のプレトルであるクリネトは、聖人に深い敬愛を抱いており、修道院内に聖大殉教者バルバラに捧げる教会を建立した。　聖人はこの修道院で断食と祈りに専念し、絶えず神に奉仕し、人々の救いのために尽くした。なぜなら、彼は教えと生き様によって兄弟たちの魂に霊的な益をもたらし、また祈りによって肉体の病を癒やしたからである。常に胃の痛みに悩まされていた修道士グリゴリウスを、彼は一言で癒やした。　また、テーベに住んでいたある貴族の女性も癒やした。彼女は激しく長引く病に冒されており、すでに医師の助けを絶望していた。聖人は弟子であるパンクラティオスを彼女の元へ遣わし、パンクラティオスが到着すると、聖油を塗ったところ、その女性はたちまち癒やされた。 概して、 、この聖人はあらゆる病から速やかな癒やしをもたらし、多くの人々には未来さえ予言した。その地で七年間を過ごした後、聖ルカは死期を迎えようとしていた。

その最期を前に、次のような出来事があった。聖人の弟子の中には、テオドシウスという名の者がおり、彼にはフィリッポスという名の実の兄弟がいた。ある日、彼は聖人の修道院を訪れることを思い立った。その目的は、兄弟に会いにいくこと、そして聖ルカに会いたいという気持ちもあった。聖ルカについては、多くの称賛の話を耳にしていたからである。　聖人は彼の来訪を予見して、テオドシウスにこう言った。

「兄弟よ、美味しい食事に必要なものをすべて用意しておきなさい。今夜、君の兄弟が夕食にやって来るのだ。」

テオドシウスは驚きと喜びに包まれ、丹念に食事を用意し、たびたび門の外に出て道を見渡し、兄の到着を心待ちにしていた。　夕方、フィリッポスがやって来て、食事に必要なものをたくさん持ってきた。彼は聖人に温かく迎えられ、夜になると皆で一緒に夕食をとり、神の栄光のために用意されたすべてのものを味わった。この食事の席で、聖人は普段よりも多く飲み、食べた――それはフィリッポスのもてなしに報いるためであった。　夕食と就寝前の定例の祈りを終えた後、フィリッポスは休むために寝床についた。しかし、寝床の上で、彼は神の聖なる御使いルカに対して邪な思いを抱いてしまった。「この老人は偽善者だ。彼はたくさん飲み、たくさん食べ、ただ断食と聖さを装っているだけだ」と考えたのである。　その後、眠りについたフィリッポは、夢の中で二人のまばゆいばかりの若者を目にした。彼らは怒りの眼差しで彼を見つめており、その顔は激昂しており、残酷な言葉を口にしていた。

「なぜ、あなたは尊者に対してそれほど不敬な考えを抱くのか？　なぜ、罪のない聖なる人を非難するのか？　地上のことしか見ないその目を上げ、あなたの目には偽善者であり欺き手に見えるその人が、どれほど偉大な栄光に浴しているかを見てみよ。」

フィリッポスは目を向けると、ある栄光に満ちた場所が見えた。そこはすべてポルフィラで敷き詰められており、その場所に聖ルカが立っていた。彼は太陽のように、神聖な栄光に輝いていた。眠りから覚めたフィリッポスは恐怖に襲われ、この出来事のすべてを弟のテオドシオスや他の修道士たちに語った。そして、悔い改めの心をもって、聖ルカ自身にも自分の罪を告白し、彼に許しを請うと、大きな霊的恵みを得てその場を去った。

まもなく神のもとへ旅立つことを予感した聖ルカは、その荒野にいたすべての修道父たちを訪ね、一人ひとりに最後の口づけを交わした。

「兄弟たちよ、私のために祈ってください」と彼は彼らに言った。「主キリストに祈ってください。私たちがその後、再会できるかどうかは分かりませんから。」

こうして皆を巡り終えると、彼は自分の小部屋に閉じこもり、三ヶ月にわたり死を迎える準備をした。ついに、死の八日前に、聖ルカは病に倒れた。彼がすでに重篤な状態となり、地面に横たわっていたとき、司祭グリゴリウスは彼に尋ねた。

「埋葬についてはどのような遺言をなさいますか？　また、ご遺体をどこに安置するようお命じになりますか？」

それに対し、聖人はこう答えました。

「私の足を鎖で縛り、森の奥深くに放り込んでください。そうすれば、もはや誰の役にも立たない私は、せめて獣たちの餌となるだけでも役に立つでしょう。」

すると、長老は聖人に、遺体の扱いを別の方法にするよう、また埋葬場所を指定するよう懇願した。しばらくして、聖人はこう言った。

「私が横たわっているその場所に、私を葬ってください。主は、御自身の聖なる御名の栄光のために、その場所を称えようとしておられるのです。」

そう言うと、聖人は、すでに日が沈みかけている中、目を天に向け、こう言った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます！」

そして、一時的な死の眠りについた。それは二月の七日であった。その聖なる魂は、不死の命を求めて神のもとへと旅立った。

朝になると、近隣の各地からすべての修道士や一般の人々がこの聖なる修道院に集まり、大いなる人だかりができた。皆、世にとってこれほど偉大な光を失ったことを嘆き悲しんだ。神の御心にかなうこの人は、彼が命じたその場所——すなわち、彼が修行に励んだ独房——に、栄誉をもって埋葬された。

それから六ヶ月後、パフロゴニア地方[1725] からイタリアへ向かっていたある修道士、宦官のコスマに、神からの啓示があった。その啓示の中で、彼は聖ルカが眠るその場所へ行き、その墓のそばから決して離れないようにと命じられた。　その場所にたどり着き、そこに定住した修道士コスマは、聖人の朽ちることのない聖遺骨を納めた聖櫃を地中から掘り出し、それを墓の上部に安置すると、この聖なる聖櫃を板と格子で囲み、自身の修道室そのものを教会へと改築した。　そして、この聖なる遺骸からは偉大な奇跡が起こった。そこから芳しい香油が流れ出し、それに塗られた者たちは癒やされた。　足の不自由な者は癒やされ、盲人は目が見えるようになり、ハンセン病患者は清められ、人々から悪霊が追い出された。これは聖ルカの祈りと、我らの主イエス・キリストの力によるものであり、父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

ニコメディアで殉教した千三人の聖殉教者たちの記念日。

記念日：2月7日

不義で残忍な王ディオクレティアヌスの治世において、キリストの教会に対して激しい迫害がもたらされた。この時、キリストの名ゆえに、至る所でキリスト教徒が牢獄に投じられ、殺害された。その中には、キリストの僕たちであるテオペンプト司教と、かつての魔術師であったテオナ、そして四人の王の重臣たち——　ヴァス、エウセビオス、エウティキオス、ヴァシリドの四人であり、彼らの監視は、ディオクレティアヌスの侍従であった聖殉教者ペトロに委ねられていた。また、聖なる信仰を受け入れ、キリストへの告白において揺るぎなく立ち、主のために自らの魂を捧げた、それらの高官たちの妻たちもいた。　これらの殉教者たちの死後、その家族、すなわちすべての使用人、奴隷、自由民たちは、互いに話し合った末、満場一致でこう言った。

「見よ、この世で私たちを支配していた主人たちは、キリストへの聖なる信仰のために、この一時的な生を軽んじ、天の御国を得て、地上のものを軽んじたゆえに、今や天の恵みを享受している。それならば、私たちも主人たちに倣うべきではないか。　ディオクレティアヌス帝のもとへ赴き、こう告げよう。「我らはキリスト教徒であり、この世で我らを支配していた主たちと共に、来世において朽ちることのない冠を授かりたいと願っている。」

このように互いに決意を固め、全員が喜んでそれに同意すると、彼らは妻や子供たちを含めた総数を数え、千三人に達したことが分かった。

一同は出立し、不義な迫害者ディオクレティアヌスの法廷の前に立ち、心を一つにしてこう叫び始めた。

「我々もまたキリスト教徒であり、キリストのために自らの血を流した先人たちや主たちに従う。しかし、悪魔には従わず、目も耳も口も魂もない偶像には拝まない！」

王は、彼らがこれほど大勢いるのを見て、激しい怒りに満ちた。しかし、最初は柔和なふりをし、優しい言葉で彼らを誘惑し始めた。彼は彼らにこう言った。

[1725] パフラゴニアは、小アジア北部の険しい山岳地帯である。

「なぜ、これほど無分別な行いをし、自ら進んでこのような破滅を招くのか。むしろ、あなた方の幸福だけを願う父として、私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げるべきだ。そうすれば、エウセビオスとその仲間たちが惑わされ、その結果、あの凄惨な死を遂げたような狂気を避けることができるだろう。　あなたがたも、もし私の言うことを聞き、不死の神々に犠牲を捧げれば、私から大きな名誉と贈り物を授かり、私たちの慈悲によって大いに富むことになるだろう。

聖人たちは拷問者にこう答えた。

「我々は、あなたの贈り物を求めることもなければ、あなたの脅しを恐れることもない。ただ、生けるまことの神に賛美の捧げ物を捧げようと努めているだけである。あなたはお望みのままに、我々に早急に処置を下せ。我々にとって、キリスト以上に尊いものなど何もないのだ。」

ディオクレティアヌスは、聖なる殉教者たちのこのような言葉を聞いて、彼らが民衆の中に何らかの騒動を引き起こすのではないかと恐れた。なぜなら、彼らがキリストへの信仰をいかに大胆に守り抜いているかを目の当たりにしていたからである。　彼は手を振るだけで、兵士たちに武器を構えてこの　キリスト教徒の集まりを包囲するよう命じた。その中には、母親に抱かれた幼い子供たちも大勢いた。その中には生後1年の子もいれば、2ヶ月や3ヶ月の子もいた。

武装した軍勢がキリスト教徒たちを四方から取り囲むと、王は彼らにこう言った。

「さあ、今こそ私の助言に従い、神々に犠牲を捧げ、彼らを崇拝することに同意すると宣言せよ。そうすれば、無傷で無事に家路につくことができる。私があなたたちを憐れむように、あなた自身とあなたの乳児たちを憐れんでほしい。そうすれば、あなたも子供たちも、この狂気のために滅びることはないだろう。　もしあなたがたが私の言うことを聞かなければ、あなたがたのキリストでさえ、何一つ助けてはくれないだろう。

これに対し、聖徒たちは彼にこう答えた。

「私たちは、天にいます唯一の生ける神と、その独り子であり、万物の源である御言葉、私たちの主イエス・キリスト、そして聖霊を礼拝することを学びました。ですから、あなたの虚しい慈悲によるいかなる約束でも、私たちを惑わそうとしてはなりません。　あなたは、あなたの恩恵をもって私たちを説得することも、脅しをもって私たちを恐れさせ、私たちの主キリストへの信仰から離れ、あなたが崇める魂なき偶像を礼拝させることもできない。私たちにとって、世々限りなく生きておられるキリスト以上に尊く、望ましいものは何もないのだ。

すると、ディオクレティアヌスは激怒し、兵士たちに再び命令を下して、直ちに彼ら全員を斬り殺すよう命じた。　そして兵士たちは、まるで凶暴な獣のように四方八方からキリスト教徒に襲いかかり、キリストの聖なる殉教者たちを斬り殺した。彼らは、母の乳を吸っている赤ん坊でさえも容赦せず、千三人のうち、生き残った者は一人もいなかった[1726]。

こうして、キリストの聖なる殉教者たちは、キリストへの真の信仰告白において、その苦難の偉業を成し遂げた。それは、エジプト人が「メヒル」と呼ぶ月の13日、すなわち私たちの暦では2月7日、ディオクレティアヌス帝の治世下、ビフィニア地方のニコミディア大主教区[1727]においてであった。　――当時、私たちの上に君臨しておられたのは、今も、そして永遠に君臨し、これからも君臨し続けるイエス・キリスト、まことの神であり、私たちの救い主であられる方です。その方に、父なる神と、聖なる、善き、命を与える御霊とともに、世々限りなく栄光と賛美がありますように。アーメン。

[1726] 303年に死去した。

[1727] ビフィニア――小アジア北西部の地域。ニコメディア――ビフィニアの主要都市であり、ディオクレティアヌス帝が好んで滞在した居城。

2月21日

2月8日（旧暦）

聖大殉教者テオドロス・ストラティラトスの殉教。

2月8日の記念日

不敬虔な皇帝リキニウス[1728] は、不敬虔なマクシミアヌスの後を継いで王位につき、あらゆる点で彼に倣って、直ちに敬虔さを際立たせる者たちに対して大迫害を開始した。彼はこの不敬虔な命令に関する布告を、すべての都市や国々に送り出した。　この時、多くの勇敢なキリストの戦士たちが殺害された。リキニウスはセバスティアの四十人の殉教者たち、また自身の宮廷に属する名高い戦士や貴族たちをも殺害し、ついにはマケドニア出身の三百人の男たちをも殺した。

しかし、不敬虔なリキニウスは、ほとんどすべてのキリスト教徒が　彼の命令を無視し、聖なる信仰のために死を甘受していることに気づくと、彼は彼らの中から最も著名で高貴な者たち、すなわち、自分の軍隊に所属している者や都市に住んでいる者だけを捜し出し、彼らだけを（多くの庶民には目もくれずに）偶像崇拝に強制するよう命じた。　彼は恐怖によって、自分の支配下にあるすべての人々を偶像崇拝に忠実であり続けるよう説得できると期待していた。

各地でキリスト教徒の中でも最も著名な者たちを丹念に探し求める中、当時ニコメディアにいたリキニウスは、黒海に近いヘラクレイア[1729] に、テオドール・ストラティラトという名の聖なる人物が住んでおり、彼がキリスト教徒であり、多くの人々をキリストへと導いていることを知った。

聖テオドロスは、ヘラクレイアの町からほど近いエウカイテス[1730] の出身であった。彼は勇敢で気概に満ちた人物であり、外見も非常に美しかった。さらに、その知恵と卓越した雄弁さでも際立っていたため、「ヴリオリトール」、すなわち最も巧みな弁士[1731] と呼ばれていた。 王の命により、彼はストラティラート、すなわち軍司令官に任命され、ヘラクレイアの街はその指揮下に置かれた。これは、彼がエウカイタイで蛇を退治したことでその勇敢さが広く知られるようになったことに対する報奨であった。

エウカイテスの町の北、その近くには人里離れた野原があり、そこには大きな裂け目があり、その中に巨大な大蛇が住んでいた。大蛇がこの裂け目から現れると、その場所の地面が揺れ動いた。そして現れると、大蛇は目につくものすべて、人間であれ獣であれ、貪り食った。

この話を聞いた、当時まだ軍勢の中にいたキリストの勇敢な戦士、聖テオドールは、自分の意図を誰にも告げることなく、たった一人でその凶暴な大蛇に立ち向かった。

彼はいつもの武器だけを携え、胸には貴重な十字架を掲げていた。彼は心の中でこう言った。

「行こう。キリストの力によって、この凶暴な大蛇から我が祖国を救い出そう。」

その野原に着くと、背の高い草が生い茂っているのを見て、馬から降りて休むことにした。その国には、エウセビアという名の敬虔な女性が住んでいた。　彼女はすでに高齢の女性であった。数年前、彼女はマクシミアヌスとマクシミヌスの治世下で殉教した聖テオドール・ティロンの聖遺体を懇願して手に入れ、エウカイタイにある自宅に香を添えて埋葬し、毎年その記念日を祝っていた。

[1728] リキニウス――帝国の東部を統治したローマ皇帝で、307年から324年まで在位した。

[1729] ヘラクレイア――小アジア北部のポンテ地方にある都市。

[1730] エウカイテスは、小アジア北部のヘラクレイアからほど近い都市で、現在のマルシヴァンにあたる。

[1731] ギリシャ語の「リトール」（演説家、雄弁家）と、「ヴリ」（それに続く単語の意味を強める不可分な音節）に由来する。

この女性は、この野原で眠っている、ストラティラートと呼ばれるキリストの戦士、もう一人のテオドールを見て、大きな恐れを抱きながら彼のそばに近づき、彼の手を取って起こし、こう言った。

「立ちなさい、兄弟よ。そして、一刻も早くこの場所から離れなさい。この場所で多くの者が凄惨な死を遂げたことを、あなたは知らないのですから。さあ、早く立ち上がって、自分の道へ進みなさい。」

すると、キリストの忠実な殉教者テオドールは起き上がり、彼女にこう言った。

「母よ、一体どんな恐怖や恐怖のことをおっしゃっているのですか？」

神のしもべエウセビアは彼にこう答えた。

– わが子よ、この場所には巨大な大蛇が棲みついており、それゆえ誰もここへ来ることは許されません。毎日、その大蛇は巣穴から出てきて、人間であれ獣であれ誰かを見つけると、即座に殺して食い尽くしてしまうのです。

キリストの勇敢な戦士テオドールは、これに対しこう言った。

「ここから離れて、少し離れた場所に立ってください。そうすれば、私のキリストの力を目にするでしょう。」

その女性は、その場所から離れ、地面にひれ伏して泣きながらこう叫んだ。

「キリスト教徒の神よ、この時、彼をお助けください！」

すると、聖殉教者テオドールは十字を切って胸を打ち、天を見上げながら、こう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、御父の御本質から輝き出で、戦いの際に私を助け、敵に対する勝利を与えてくださった方――あなたは今も変わらず同じお方です、主キリスト、神よ。どうか、あなたの聖なる高みから私に力を授けてください。そうして、この敵――蛇を打ち負かすことができますように。」

その後、まるで人間と話すかのように自分の馬に語りかけ、こう言った。

「私たちは、神の御力と権威が、すべての人、家畜、そしてあらゆるものに宿っていることを知っています。ですから、キリストの御力によって、私を助けてください。そうすれば、私はこの敵を打ち負かすことができます。」

馬は主人の言葉を聞き終えると、蛇が現れるのを待ちながら立ち止まった。その時、キリストの殉教者は断崖に近づき、雷のような声で蛇に向かって叫んだ。

「人類のために自ら十字架にかかられた我らの主イエス・キリストの名によって、汝に告げ、命じる。その巣穴から出て、この私のもとへ這い寄れ。」

蛇は聖人の声を聞くと身動きをし、その瞬間、その場所の地面が揺れ動いた。聖テオドールは十字の印を切ってから馬にまたがり、馬は現れた蛇を蹴りつけ、踏みつけ、四本の蹄すべてでその上に立ち上がった。

そこで、キリストの戦士テオドールは剣で蛇を打ち倒し、それを殺すと、こう宣言した。

「主イエス・キリストよ、この時に私の祈りを聞き入れ、蛇に対する勝利を授けてくださったことを感謝します！」

その後、彼は喜びながら神を賛美し、無事に自分の部隊のもとへ戻った。エフハイトの市民や周辺の住民たちは、この話を聞きつけ、その野原へと駆けつけ、聖テオドールによって殺された蛇を見て驚き、こう叫んだ。

「テオドロスの神は偉大なり！」

そこで、民衆の多く、とりわけ兵士たちがキリストを信じるようになり、彼らは皆、洗礼を受けてキリストのひとつの群れとなり、父と子と聖霊を賛美した。

その後、聖テオドロスはヘラクレイアに留まり、真の神であるキリストを宣教し、多くの異教徒がキリストへと回心した。市民たちは毎日洗礼を受けるために集まり、やがてヘラクレイアのほぼ全住民が聖なる信仰を受け入れた。

この一連の出来事を耳にした不敬虔な皇帝リキニウスは大いに憤り、当時自身が滞在していたニコメディアから、高官たちと自身の護衛をヘラクレイアへ派遣し、テオドロス・ストラティラトスを捕らえて、栄誉をもって自分の元へ連行するよう命じた。

彼らがヘラクレイアに到着すると、聖テオドロスは彼らを丁重にもてなした。彼は彼らに食事を振る舞い、王の臣下として一人ひとりに贈り物を授けた。その後、彼らは聖人をリキニウスの元へ呼び寄せようとした。

「さあ、ニコミディアへ行きなさい。あなたを深く愛している王のもとへ。王はあなたの勇敢さ、美しさ、そして英知を聞き及んで、あなたに会いたいと強く望んでおられます。王はあなたの武勇を、ふさわしい栄誉と贈り物をもって称えようとお考えなのです。」

聖テオドールは彼らにこう答えた。

「王の御心と、あなた方の望み通りになりますように。今日はただ楽しみ、喜びなさい。そして明日、我々はなすべきことを果たしましょう。」

すでに三日が過ぎたが、その間、使者たちは聖テオドロスに王のもとへ同行するよう説得したにもかかわらず、彼は自分の街にとどまっていた。　その後、聖テオドロスは王から派遣された使節のうち数名を自分の元に残し、残りの者たちを王のもとへ手紙を添えて送り戻した。その手紙の中で、彼は、民衆の間にこれほど大きな動揺が生じているこの時期に、自分の街を離れることはできないと述べていた。　「多くの者が――と彼は記した――祖先の神々を捨ててキリストを崇拝しており、街のほぼ全員が神々から背を向け、キリストを賛美している。そのため、ヘラクレイアがあなたの王国から離反してしまう危険性がある」と。　「それゆえ――と彼は続けた――王よ、どうかご苦労を惜しまず、より栄光ある神々の像を携えて、ご自身でここへお越しください。これには二つの理由があります：

1) 反乱を起こした民を鎮めるため、そして

2)　古来の敬虔さを回復するためである。なぜなら、あなたが自ら我々と共に、すべての民の前で彼らに犠牲を捧げれば、民は我々が偉大なる神々に礼拝する姿を見て、我々に倣い、祖先の信仰に確固たるものとなるだろう」。

聖テオドールは、リキニウス皇帝にこのような書簡を送り、彼をヘラクレイアへ招こうとした。聖人は、自らの街で殉教し、キリストのために流した自らの血によってその街を聖別し、自らの苦難に満ちた勇敢な行いによって、他の人々を聖なる信仰に堅く立たせたいと願っていたのである。

リキニウス王はこのストラティラトからの手紙を受け取り、それを読んで大いに喜んだ。

彼は少しも躊躇することなく、約八千人の兵士とニコメディアの市民の中でも最も高貴な者たちを従え、喜び勇んで諸侯や高官たちと共にヘラクレイアへと向かった。また、民衆から最も崇められていた神々の偶像――金や銀でできたものも――を携えていった。

その夜、聖テオドロスがいつものように祈りを捧げていると、ある幻を見ました。彼は、まるで神殿の中にいるかのように感じ、その神殿の屋根が裂け、そこからまるで巨大な天体から放たれるかのような天の光が輝き、彼の頭を照らしているようでした。すると、ある声が聞こえてきました。

「勇気を出せ、テオドールよ。私はあなたと共にいる！」

その後、幻視は終わった。

その時、聖テオドールは、キリストのために苦難を受ける時が来たことを悟り、魂が燃え上がるほど喜びに満たされた。皇帝が都に近づいていると聞くや、彼は自分の祈りの部屋に入り、涙ながらにこう祈った。

「主よ、全能の神よ、御慈悲を仰ぐ者たちを見捨てず、彼らを守り給う方よ、私にも憐れみをお示しください。そして、御加護をもって、敵の惑わしから私をお守りください。――私が敵の前に倒れることのないよう、また、私の敵が私を嘲笑うことのないように。　わが救い主よ、私があなたの聖なる御名のために果たしたいと切に願う、これから待ち受ける試練の時に、私の前に立ち会ってください。私を強め、確固たるものとし、血を流すことになっても勇敢にあなたのために立ち、あなたへの愛のために私の魂を捧げることができる力を与えてください。あなたが私たちを愛し、私たちのために十字架上で御自身の魂を捧げられたように。

こうして涙ながらに祈りを捧げた後、聖テオドロスは顔を洗った。それから、白い衣を身にまとい、かつてエウカイタイで蛇を退治したあの馬にまたがり、軍勢や市民たちと共に王を迎えに出た。そして、ふさわしい礼儀をもって王に頭を下げ、敬意を込めて挨拶し、こう述べた。

「喜びなさい、至高なる王よ、最も強大な独裁者よ！」

王もまた、聖テオドロスを非常に親しみを込めて迎え、彼に口づけをしてこう言った。

「あなたもまた、最も美しい若き者よ、勇敢な戦士よ、輝かしい将軍よ、太陽のように清らかな者よ――父の法律を守る最も賢明な守護者であり、王冠にふさわしい者よ！　あなたは私の後に王となるにふさわしい。」

このように親しみを込めて楽しげに語り合いながら、彼らはティンパニとトランペットの音色に導かれて街に入り、その日は二人とも喜びのうちに休息をとった。

朝、街の中心にある広場の高い壇上に王座が設えられると、リキニウス王は随員全員とフェオドール・ストラティラトを伴ってやって来て、王座に着くと、この街とその市民、そして聖ストラティラトを称え、こう語った。

「まことに、この場所は神の玉座と称されるにふさわしい。ここは人々にとって第二の天と崇められるべきである。この都市は広大であり、住民も多く、しかも彼らは皆敬虔で、自らの神々に忠実である。まことに、他のいかなる場所でも、ここほど我らの偉大なる神々が崇められているところはない。　また、偉大なる神々に仕えるのに、これほどふさわしく、適した場所はない。だからこそ、偉大なる神ディオスと女神アルクメネの息子である、この素晴らしく、最も勇敢な我らの神ヘラクレス[1732]も、この地を愛し、自らの名にちなんでヘラクレイアという都市と名付けたのである。まことに、　テオドールよ、この地はあなたの領地となるにふさわしい。あなたこそがこの素晴らしい都市を所有すべきであり、あなただけがこのような民を統治するにふさわしいのだ。何しろあなたは我らの神々を崇め、あなたの愛はすべて神々に向けられている。昼も夜も、あなたは古代ギリシャの神々に喜ばれること以外には何もしていないのだ。　それゆえ、今こそ彼らへの愛を示し、敬意を込めて犠牲を捧げよ。そうすれば、民全体が、神々に対するあなたの熱意を目の当たりにし、あなたが偉大なる神々の誠実な友であり、王に認められていることを知るだろう。

リキニウスはこのように語り、聖人を誘惑し、甘言でなだめた。聖テオドロスはこれに対し、王に次のように答えた。

「王よ、長寿でありますように。　あなたの御心通りになさってください。ただ、今日、あなたが持参された偉大なるギリシャの神々の像、金や銀の像を私に家へ持ち帰らせてください。そうすれば、今夜と翌夜、まず私の家で、供え物や香、香料をもって彼らを崇め奉ります。その後、もしお命じになれば、民衆の目の前で公然と彼らに供え物を捧げましょう。」

[1732] ヘラクレス（またはヘルクレス）――古代ギリシャの伝説に登場する英雄で、人間の肉体的強さを体現し、後に古代ギリシャ人によって最も愛された神々のひとりとして崇められていた。ディオス（またはゼウス）は、古代ギリシャ人によって神々と人間の父として崇められ、天と地を支配し、雷と稲妻を地上に送り込む存在とされていた。　ギリシャ神話によれば、アルクメネは、ゼウスとの間にヘラクレスを身ごもり、産んだ人間の女性である。

王はこれを聞いて、大いに喜んだ。彼は直ちに、金や銀の偶像を持ってくるよう命じた。聖テオドロスはそれらを受け取ると、家路につき、そこで夜、それらを粉々に砕いて小さな破片にし、その破片を貧しい人々に配った。

二日後、王は聖人に使者を送り、約束を果たし、その日のうちに民衆全員の前で神々に生け贄を捧げるよう命じた。 テオドールは、これらすべてを履行すると約束し、急いで 王のもとへ向かった。王は彼と共に、街の中心にある広場へと向かい、そこで玉座に着くと、聖テオドールにこう言った。

「至賢なるテオドールよ、立派な将軍よ、かつての王たちからも敬愛された者よ！　ついに犠牲と祝祭の日が訪れた。さあ、民衆の面前で神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、すべての住民が、神々に対するお前の敬虔さを見届け、それによって自らの犠牲の捧げ物において、さらに勤勉かつ熱心になるであろう。」

王がそう語っている最中、そこに立っていた百人隊長の一人、マクセンティウスという者が、王にこう言った。

「偉大なる神々に誓って申し上げます、王よ。あなたは今、この不敬なテオドールに欺かれています。というのも、私は昨日、女神アルテミスの黄金の頭部[1733] を、ある物乞いの手に握りしめ、喜びながら歩いているのを見かけたからです。私は『どこでそれを見つけたのか』と尋ねました。すると彼は、『テオドール・ストラティラトがくれたのだ』と答えました。」

これを聞いて、リキニウス王は身震いし、戸惑いながら長い間黙り込んでいた。

すると、聖テオドロスは彼にこう言った。

「私にとってキリストの力とは、まさにこれです。マクセンティウス百人隊長があなたに語ったこと、皇帝よ――そのすべてが真実であり、私はあなたの偶像を打ち砕いたのは正しい行いでした。なぜなら、それらが打ち砕かれる際に自らを救うことさえできなかったのなら、どうしてあなたを助けることができるというのでしょうか？」

リキニウスは、聖テオドロスのそのような答えを聞き、まるで口がきけない、あるいは正気を失った人のように、しばらくの間、声も出せずにいた。深い悲しみに沈み、右手に頭を預けて嘆き悲しみ、嘆きながら、彼はついにこう口にした。

「ああ、哀れな私よ、哀れな私よ！　なんと私は辱められたことか！　今、何を言い、どうすべきか――私にはわからない。最も強大な王として、これほど多くの兵士を集めて、この不幸な男のもとへやって来たというのに、今やすべての敵から嘲笑されている。とりわけ、この忌まわしい男が、私の勝利の神々を打ち砕き、それらを貧しい人々に配ってしまったことゆえに。

それから、聖人に向かってこう言った。

「テオドールよ、これが神々から授かった恩恵に対するお前の報いなのか？　私がこれほど大きな栄誉を授けたとき、こんな結末を予想していたと思うか？　そして、私がニコミディアを離れ、今こうしてお前の元へ来たのは、そのためのことだったのか？　ああ、邪悪で堕落した男よ！　まことに、お前は狡猾さの子であり、欺瞞の巣窟だ。お前の諂いによって、私はここに来させられたのだ。しかし、私の偉大なる神々の力にかけて誓うが、私はこれを許さない。お前の狡猾さは、お前にとって良い結末をもたらすことはないだろう。

聖人はリキニウスにこう答えた。

「狂気の王よ、なぜそれほど激怒するのだ？　自ら見て、汝の神々の力を悟れ。もし彼らが真の神々であるならば、なぜ自らを助けなかったのか？　なぜ私が彼らを打ち砕いた時、彼らは私に怒りを向けず、私を焼き尽くすために天から火を降らせなかったのか？　しかし、彼らは魂も力もない存在に過ぎず、金や銀と同じように、人間の手で簡単に切り裂かれてしまうのだ。王よ、あなたは怒

[1733] アルテミス、あるいはダイアナは、古代ギリシャ人の信仰によれば、月と狩猟の女神であった。

り、憤っているが、私にはあなたの狂気が滑稽に映る。　あなたは怒り狂っているが、私は勇気を奮い起こし、あなたの激怒など意に介さない。あなたは悲しんでいるが、私はあなたの神々の滅びを喜んでいる。あなたは主に反抗しているが、私は主を賛美する。あなたは真の神を冒涜しているが、私は賛美の歌で主を讃える。　お前は死んだ神々に拝むが、私は生ける神を拝む。お前は邪悪なセラピス[1734] に仕えるが、私は最も清く、最も高潔な私の主キリストに仕える。キリストは最も清きセラフィムの上に座しておられる。お前は忌まわしいアポロ[1735] を崇めるが、私は永遠に生きる神を崇める。汝はフラキアの炭[1736] であり、私はローマの王子である。汝はリキニウス――「風を吹かせる者」であり、私はテオドール――「神の賜物」である[1737] 。それゆえ、王よ、怒ったり激昂したりしてはならない。そうすることは、ただ汝の内なる苦悩を露呈するに過ぎず、ロバやラバのようになるだけである。

すると、リキニウス王はさらに激怒し、聖人を裸のまま十字架の形に縛り付け、生々しい牛の腱で激しく打ち据えるよう命じた。

そして兵士たちは聖なる殉教者を容赦なく打ち続け、互いに交代しながら、時には三人、時には四人の兵士が同時に彼を殴打した。その間、聖テオドロスは背中に六百回、腹部に五百回の打撃を受けた。

一方、リキニウス王は彼を嘲り、こう言った。

「テオドールよ、もう少し耐えなさい。やがてあなたの神であるキリストがあなたのもとに来られ、拷問者の手からあなたを解放してくださるだろう。」

聖人はこう答えた。

「私に対して、お望みのままに振る舞ってください。遠慮なく続けてください。なぜなら、苦しみも、窮屈さも、傷も、剣も、いかなる他の苦痛も、私をキリストの愛から引き離すことはできないからです。」

すると、王はさらに激しい怒りに燃え上がり、こう言った。

「お前は今なおキリストを告白するのか？」

そして、再び容赦なく聖なる殉教者の背中を錫の棒で打ち、その後、鉄の爪でその体を削り、燃える蝋燭で焼くよう命じ、その傷口を鋭い陶器の破片でこすりつけるよう命じた。

聖人はこれらすべてを勇敢に耐え忍び、「わが神よ、あなたに栄光あれ！」とだけ繰り返した。これらすべての拷問の後、王は聖テオドロスを牢獄に閉じ込め、その足を足枷で縛り、五日間食事を与えないよう命じた。五日が過ぎると、王は十字架を用意させ、聖人をその上に磔にするよう命じた。

かくして、かつて私たちの主キリストがピラトによって十字架にかけられたように、今や聖テオドロスもリキニウスによって十字架にかけられ、その手と足は釘で打ち付けられた。

しかし、残酷な拷問者たちは、聖人の苦しみと苦痛をさらに増大させようと試みた。彼らは鋭く長い釘を聖人の体に打ち込み、かみそりでその肉体を切り刻んだ。また、若者や少年たちは弓を引き絞り、聖人の顔に向けて矢を放ったため、その瞳孔は矢によって貫かれてしまった。

1734 セラピスは、死者の魂を司るエジプトの神であり、病気や死からの救い主として崇められていた。その後、その崇拝はギリシャやローマにも伝わり、そこで非常に広く普及した。

1735 アポロン――ギリシャ・ローマ神話における太陽と知性の神。

1736 リキニウスというあだ名は、フラキア出身という彼の卑しい生い立ちをほのめかしている。

1737 リキニウスはラテン語から訳すと「扇ぐ者」を意味し、テオドールはギリシャ語で「神の賜物」を意味する。

「私――」と、その苦難を記録した記述者、公証人[1738] ・ウアルは語る――「これらすべての恐ろしい苦痛を目の当たりにし、まるで彼の内から漏れる苦悶のうめき声を耳にしたかのように、私はこれらすべてを書き留めていた本を投げ捨て、泣きながら彼の足元にひれ伏し、こう言った。

『主よ、私を祝福してください、私を祝福してください！　あなたの僕である私に、最期の言葉を告げてください！』

すると、私の主であるキリストの戦士テオドールは、静かな声で私にこう言った。

「ウアルよ、お前の務めを放棄してはならない。そして、私の苦しみから目を背けてはならない。それを書き記せ。私の最期も書き記し、その日を記しておけ。」

それから、主に向かって叫びながら、聖人はこう言った。

「主よ、あなたは以前、私に『わたしはあなたと共にある』とおっしゃいました。それなのに、なぜ今、私を見捨てられたのですか。主よ、ご覧ください。野獣たちが、あなたのために私を徹底的に引き裂きました。私の瞳は貫かれ、体は傷で砕け、顔は傷だらけになり、歯は砕かれています。十字架にはむき出しの骨だけがぶら下がっている。主よ、あなたのために十字架の苦しみを耐え忍んでいる私を覚えてください。あなたのために、私は鉄も、火も、釘も耐え抜きました。今、私の霊をお受けください。私はすでにこの世を去ろうとしています。

確かに、テオドロスの全身は引き裂かれていた。

リキニウスは、殉教者が息を引き取ったと思い、彼を十字架に吊るしたままにしておいた。しかし、夜の最初の番の間に、主の御使いが聖なる殉教者を十字架から降ろし、以前と変わらず無傷で健やかな姿に戻した。御使いは彼に挨拶し、こう言った。

「喜びなさい。そして、我らの主イエス・キリストの恵みによって力を得なさい。見よ、主はあなたと共におられる。なぜ、主があなたを見捨てたと言ったのか。さあ、あなたの業を最後まで成し遂げなさい。そうすれば、あなたは主のもとへ行き、あなたのために用意された不死の冠を受け取るだろう。」

聖なる殉教者にこう告げると、天使は姿を消した。その後、聖なる殉教者テオドールは、神に感謝しつつ、次のように讃美し始めた。*「わが神、わが王よ、私はあなたを賛美し、あなたの御名を世々限りなく祝福します」*（詩編144:1）。

一方、不信心なリキニウスは、夜明け前に、自分の百人隊長であるアンティオコスとパトリキオスの二人を遣わし、次のように命じた。

「行って、苦しみの中で亡くなったテオドールの遺体を持ち帰れ。私はそれを錫の箱に入れ、海の深みに投げ込む。そうすれば、あの狂信的なキリスト教徒たちに奪われることはないだろう。」

二人が出かけて、テオドールが磔にされた場所に近づくと、十字架はあったが、そこに磔にされていた殉教者の姿はなかった。そこでアンティオコスはパトリキウスに言った。

「ガリラヤ人たちが言う通りだ[1739] 、彼らのキリストは死からよみがえったのだ。おそらく、その方が御自分のしもべテオドールをもよみがえらせたのだろう。」

その時、パトリキウスは十字架に近づくと、聖テオドールが地面に座り、主を賛美しているのを見た。するとパトリキウスは声を高らかに叫んだ。

「キリスト教の神は偉大であり、神以外に神はいない！」

その後、二人の百人隊長は聖人のところへ近づき、こう言った。

「お願いだ、キリストの殉教者よ、私たちを受け入れてくれ。今この時から、私たちもキリスト教徒となったのだから。」

[1738] ノタリオスは速記者を指す。西暦初期には、通常、文書に署名・捺印を行う皇帝の秘書官をこう呼んでいた。

[1739] 異教徒たちは、キリストがガリラヤ出身であると見なしていたため、キリスト教徒をこのように軽蔑して呼んでいた。ガリラヤは、ユダヤ人の間でも悪名高い土地であった。

そしてその日、この二人の百人隊長と、彼らと共にいた七十人の兵士たちは、キリストを信じた。

リキニウスはこのことを知ると、自分の代理であるシクストと、彼に従う三百人の兵士を遣わし、キリストを信じた者たちを皆殺しにするよう命じた。

しかし、その兵士たちが到着し、聖テオドールがキリストの力によってどのような奇跡を行なっているかを目の当たりにすると、たちまち私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。そして、数え切れないほどの人々がその場所に集まり、皆がこう叫んだ。

「神はただひとり、キリスト教の神であり、この方以外に神はいない！」

さらにこう叫んだ。

「リキニウスという拷問官とは何者だ？　石で打ち殺そう！　私たちにとって唯一の神であり王は、テオドールが宣べ伝えるキリストだけだ！」

すると、群衆の間で騒ぎと暴動が起こり、流血さえ始まった。

レアンドルという名の兵士が、剣を抜き放ってその場に駆けつけ、テオドロスに襲いかかり、剣で斬りつけようとした。しかし、王の代官シクストは彼を制止し、その手から剣を奪い取り、彼を切り裂いた。 また、ミルポスという名の、ウグリン族出身の別の戦士[1740] が、王の代理官シクストに飛びかかり、彼を殺害した。

聖テオドロスは、民衆の暴動を鎮めようと、大声でこう言った。

「やめてください、愛する者たちよ！　私の主イエス・キリストは、十字架にかけられた際、天使たちが人類に報復を加えないよう、彼らを制止されたのです。」

殉教者テオドールがこのように民に語りかけ、懇願し、諭した後、騒ぎと民衆の動揺は収まった。

その時、聖なる殉教者は牢獄の前を通り過ぎ、民衆と兵士たちが皆、彼の後をついていった。一方、牢獄に囚われていた者たちは、聖人に向かって大声で叫んだ。

「至高の神のしもべよ、私たちを憐れんでください！」

聖人はその言葉によって彼らを束縛から解き放ち、牢屋の扉を開けて、こう言った。

「平安のうちに去りなさい、諸君。そして、私のことを思い出してください。」

すると、町中の人々が集まり、皆が偶像崇拝を捨て、唯一の神であるキリストを賛美した。

その頃、病人は癒やされ、人々から悪霊が追い出された。聖人がその手で触れた者、あるいはその衣に触れた者さえも、その者は即座に癒やされた。

すると、リキニウスの側近の一人が、その様子を見て、彼のところへ行き、こう言った。

「街中の人々が、神々を捨て、テオドールの教えと魔術に従って、キリストを信じるようになりました。」

王は激怒し、直ちに兵士を遣わして聖テオドールの首を刎ねさせた。しかし、民衆はその兵士を見るや、再び騒ぎ立て、反乱を起こした。彼らはリキニウスに反旗を翻し、その家来を殺そうとしたのである。そこで聖人は、民衆にその企てを諦めるよう諭し始めた。彼はこう言った。

「兄弟たち、父たちよ！　リキニウスに対して反乱を起こしてはならない。彼はその父である悪魔の僕に過ぎない。そして、私は今、私の主イエス・キリストのもとへ旅立つべき時が来たのだ。」

そう言うと、彼は神に祈りを捧げ始め、かなり長い祈りの後、民を祝福した。

その後、十字架の印を自らに刻み、彼は自分の僕ワールにこう言った。

[1740] ウグリムとは、ウゴル地方、あるいはチェルヴォンナ・ルース（現在のウクライナ西部）に由来するスラブ人を指す。

「わが子よ、ウアルよ、私の死の日を記録するように心がけ、私の遺体はエウカイタイにある私の両親の領地に埋葬せよ。そして、あなたも死に臨む時には、私の左側に埋葬されるよう遺言を残せ。」

その後、キリストの殉教者は再び祈りを捧げ、ついに「アーメン」と告げると、その尊く聖なる頭を剣の下に傾け、斬り落とされた。

これは、2月の8日、土曜日、午後3時に起こった[1741]。

斬首の後、民衆全体が殉教者に多大な敬意を表した。キリスト教徒たちは蝋燭と香炉を手に取り、その遺体を特別な場所に安置した。その後、6月8日、その遺体は盛大な祝典のうちにエウカイティスへ移送され、そこでキリスト・神の栄光のために数え切れないほどの奇跡が起こった。 ——御父と聖霊と共に、御方に永遠の栄光と礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調:

真の戦いの言葉をもって、殉教者よ、天の王の最も善良な将軍であった、テオドロスよ。あなたは信仰の武器をもって賢明に武装し、悪魔の軍勢を打ち破り、勝利を収めた殉教者として現れた。それゆえ、私たちは信仰をもって、常にあなたを称える。

コンダク、第2調:

魂の勇気で信仰に身を包み、神の御言葉をまるで槍のように手に取り、敵を打ち破った、偉大なる殉教者テオドールよ。彼らと共に、キリスト神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

聖預言者ザカリア・セルポヴィツの記念日。

2月8日の記念日

バビロン捕囚にあったユダヤ人にとって、ペルシャ王キュロスの解放の勅令[1742]は、なんと喜びに満ちた福音であったことか。そして、異国の地で「*死の陰と闇の中にあり、悲しみに縛られていた*」（詩篇106:10）と、異国の地で囚われの身として苦しんでいた者たちは、先祖の地へと急いで向かった。 エルサレムの破壊の際にネブカドネツァルによって奪われた聖なる器々を携え（エズラ記上1:7–8）、ダビデ王家の出身であるゾロバベルの指導の下、移住者たちは（エズラ記上1:8, 2:2; 歴代誌上3:19, 9–17）の率いる下、故郷へと帰還した。帰還後7ヶ月目、彼らは瓦礫の山から祭壇を再建し（エズラ記上3:1–6）、その後、破壊された神殿の修復に着手した。 第二年の第二月に、ダビデの定めに従って新しい神殿の礎石が据えられ、「*民は皆、大声で叫び、主の家の礎が据えられたことを主を賛美した*」（エズラ記第一3:11）； かつての神殿を目撃していた多くの長老たちは、帰還した者たちの貧しさゆえに、第二神殿が以前ほど壮麗なものには到底なり得ないことを知り、涙を禁じ得なかった。彼らは喜びの叫びにすすり泣きを交えながら、大声で泣いた（1エズラ3:12–13）。 しかし、神殿の建設そのものは、当初は献金が惜しみなく寄せられたにもかかわらず、極めて遅々として進まなかった。国は不安定で、至る所で強盗がはびこり、適切な種まきや収穫を行うことは不可能であった

[1741] 聖テオドールは319年に剣で斬り殺された。

[1742] 彼は紀元前559年から530年まで統治した。キュロスがユダヤ人に対して示した慈悲は、預言者ダニエルを通じてイザヤの預言（イザヤ44:28、45:1）が示されたことに起因すると説明されている。そこでは、150年以上も前に、キュロスによってユダヤ人が捕囚から解放されることが予言されていたのである。

；　ペルシャの　官吏による重苦しい支配（ネヘミヤ記9:36–37）、頻繁な干ばつ、飢饉（ハガイ書1:6, 10–11）が民を疲弊させた。これに、サマリア人との敵対関係が加わった[1743]。ガリジム山に自らの聖所を持ち、パレスチナをすでに自分たちの領地と見なしていた彼らは、ユダヤ人に対して極めて敵対的であった。特に、ユダヤ人が神殿建設への参加という彼らの提案を拒否してからはなおさらであった。サマリア人は、ペルシャ政府に対して様々な讒言を行うことで、工事をほぼ15年間も停止させることに成功した[1744]。

こうした妨害により、民族の聖所を再建しようとするユダヤ人たちの敬虔な熱意は弱まってしまった。選民としての宗教的意識を高めるためには、特に精神的に強靭な人物が必要であった。主は、御自身の預言者ハガイと、これから取り上げるザカリヤという人物を、そのような人物として立てられたのである。

聖なる預言者ザカリヤ[1745]、幻を見る者[1746]は、レビ族の出身であった。彼はバラキヤの息子であり、アダ（あるいはイド）の孫であった[1747]。後者はゾロバベルと共にバビロン捕囚から帰還し、ネヘミヤ記においては祭司一族の長として言及されている[1748]。聖書には、預言者ザカリヤの生涯に関する詳細かつ明確な記録は残されていない。聖書は、神の預言者の生涯について断片的な情報を伝えるために、時折そのベールを少しだけめくるに留まっている。　例えば、預言者ザカリヤの出生の時期や場所については言及せず、彼の生涯の記述は、彼が預言者としての務めに就いた時期から始まっている。　彼は若き頃（ゼカリヤ2:4）、ダリウス・ヒスタスパ王の治世2年2月（ゼカリヤ1:1）――預言者ハガイ（ハガイ1:1）よりわずか2ヶ月遅れて――に、神から預言者としての召命を受けた。　聖なるアゲオとザカリヤの共同による預言活動により、ユダヤ人たちは自らの必要にばかり気を取られることをやめ、熱心に神殿の建設に取り掛かるようになった。　*「預言者ハガイと、アダの子である預言者ゼカリヤは――エズラが証言しているように――ユダヤとエルサレムにいるユダヤ人たちに、イスラエルの神の名において預言の言葉を語った。　そこで、サラフィエルの子ゾロバベルとヨセデクの子イエシュアが立ち上がり、エルサレムで神の宮の建設を始め、彼らと共に、彼らを支えた神の預言者たちも加わった」*（1エズラ5:1–2）。*「ユダヤの長老たちは、預言者ハガイとアッダの子ザカリヤの預言に従って、神殿の建設を進め、成功を収めた」（1エズラ6:14）。*

預言者ザカリヤの奉仕は、おそらく神殿の建設後も続いた。彼の書物の第9章から終わりまでの内容を構成する最後の言葉には、神殿建設を怠ることなく完了するよう促す勧告はもはや見られず、これらの言葉が語られた時点では、神殿はすでに完成していたと考えられる[1749]。伝承によれば、聖なる預言者ザカリヤは長寿を全うし、エルサレムの近く、預言者ハガイの隣に埋葬されたという。

[1743] サマリア人は、アッシリア人によるイスラエルの十部族王国の破壊後にその地域に入植した移住者たちと、捕囚に連れて行かれたイスラエルの民の残党とが混ざり合って形成された混血の民族である。　異国の地で、移住者たちは以前の神々を崇め続けていたが、主がそのためにライオンの群れを送り込まれたとき、サマリア人は災いを退けるために、偶像崇拝を捨てずに、真の神への崇拝を定めた（列王記下17:27–34）

[1744] （エズラ記上　4:1–3）ユダヤ人たちは、サマリア人を異教徒として拒絶した。

[1745] ヘブライ語から：主の記憶。

[1746] 預言者ゼカリヤは、ある啓示――彼が空を飛ぶ巻物（おそらく鎌のように湾曲していたもの）を見たという啓示――に基づき、一部の教父たちによってこのように呼ばれている（ゼカリヤ書5:1–2）。

[1747] ゼカリヤ書1:1。聖書の書物において、預言者ゼカリヤはアッダの息子と呼ばれている。これは、系図においてより著名な先祖の名前を記載するというユダヤ人の慣習によるものか、あるいは父の死後、預言者ゼカリヤが祖父のもとで育てられたためである。後者の見解は、聖キリロス・アレクサンドリアスによるものである

[1748] ネヘミヤ記12:16。大祭司イエスの息子である大祭司ヨアキム（*ゼカリヤ書 第3章*）の時代、預言者ゼカリヤ自身はすでに祭司であり、おそらく父の早世により一族の長となっていた。（ネヘミヤ記12:12–16）。

[1749] 神殿の建設は、ダリウス・ヒスタスパスの治世第6年に完了した（第1エズラ書6:15）。ダリウスは紀元前521年から486年まで在位した。したがって、神殿の建設年はキリスト降誕前の515年に当たる。

預言者ザカリアの死後、彼の預言的な幻視や言葉を収めた書物という貴重な遺産が残された。預言者ザカリアの書の内容の特徴は、メシアに関する預言が数多く含まれている点にある。私たちの救い主の生涯の最後の日々について、これほど多くの詳細が記されている預言者は、ザカリア以外にはいない。　預言者ザカリヤの書は、その内容によって二つの部分に分けられます。第一部（ザカリヤ書1:1–21から6:1–15まで）には幻が、第二部（ザカリヤ書7:1–14から終わりまで）には説教が記されています。　幻は全部で八つあり、その大部分は神の御使いによって預言者に説明されている。その目的は、ユダヤの民に神の庇護を確信させることにある。　最初の幻では、全地を巡り、それが平穏であることを確認した騎手たちを通じて、神は、繁栄している諸国民――すなわちユダヤ人を虐げている者たち――が、　神の怒りによって打ち倒され、エルサレムは再建され、ユダの町々は栄えることを明らかにされる（ゼカリヤ書 1:7–17）。　異邦人の運命については、第二の幻、すなわち、ユダヤ人を散らし、エルサレムを破壊した諸国民の象徴である「角」を打ち砕きにやって来る四人の鍛冶屋の幻が明らかにしている（ゼカリヤ書 1:18–21）。 都市と神殿の建設を妨げていたユダヤ人の抑圧者たちが打ち砕かれた後、エルサレムには再び人々が住み着くことになる。　これは、主の御使いが測量用の縄を持ってエルサレムを測りに来るという*第三*の幻によって明らかにされる。エルサレムは多くの人々によって満たされ、主ご自身がその火の壁となられるからである（ゼカリヤ書 2:1–13）。　民の罪はもはや、シオンにおける主の御臨在を妨げることはなくなる。なぜなら、*第四*の幻が示すように、それらの罪は赦されるからである。預言者は、罪による不浄の象徴である汚れついた衣をまとった大祭司イエスを見る。サタンは彼を非難したが、　しかし、神は彼を義と認められ、民の代表である大祭司から汚れのついた衣が脱がされ、清い衣に替えられた。これは、将来、メシアである「若枝」によって、たった一日で全地の罪が消し去られるという、神の偉大な恵みの御業を予示するものであった（ゼカリヤ書 3:1–10）。　第五の幻において、預言者には七つの灯火を持つ金の燭台（教会の象徴――黙示録 1:13, 20）が示され、その両側に立つ二本のオリーブの木から油が注がれていた；　これは、神ご自身が神殿と民を見守っておられ、二つのオリーブの木――ゾロバベルとイエス――が神の摂理の道具であることを意味していた（ゼカリヤ書4:1–14）。しかし、ユダヤの民は、前の五つの幻が語る神の恵みを長く享受することはできない。彼らは再び堕落し、再び懲罰を受けることになる。この考えは、第六の幻である、盗人や誓いを破る者たちに対する呪いが記された巻物（ゼカリヤ書 5:1–4）に明らかにされており、　また、*第七*の幻である「エファ（液体の量単位）」の中に座る女性――不義の象徴――が、他の二人の手によってセナアル、すなわちバビロンへと連れ去られる場面（ゼカリヤ書5:5–10）にも示されている。

預言者が見据えた時代において、第五および第六の幻が示すように、選民の堕落は頂点に達する。その時、呪いはユダ全土に降りかかり、民の不義の杯がいっぱいになり、最終的な懲罰が下るまで、不義な者たちを打ち続けるだろう。　不義の女とはユダヤの民を指し、エファとは、呪いを招いた不義の量である。　異教徒たちもまた、罰を免れることはない。これは、色とりどりの馬が引く四台の戦車を伴う最後の*第七*の幻が示している通りである。これらは主の天使たちの象徴であり、彼らは神の敵たちを裁くために全地を巡る。　異教の世界が滅ぼされた後、メシアの王国が到来する。預言者はこれを次の象徴的な行為によって表している。すなわち、大祭司イエスの頭に金と銀の二つの冠を戴かせるのである。これは、来るべきメシアの大祭司としての尊厳と王としての威厳の象徴であり、　――さらに、「枝（メシア）」が来て神殿を建て、大祭司となるという予言も添えられている。これが実現すれば、遠く離れた国々の人々も、イスラエルの神の神殿を建てるためにやって来るだろう（ゼカリヤ書 6:1–15）。

第2部（ゼカリヤ書7章1節～14節から終わりまで）には、預言者ゼカリヤの説教が記されている。　最初の説教で、預言者は、同時代の人々から「捕囚という悲惨な出来事を記念して定められた断食を守るべきか」という問いかけに対し、断食には正義の行いと隣人への愛を併せ持たなければならないと教えます。そうすれば、断食は祝いの日へと変わり、イスラエルには神の祝福と、異邦人を

も包み込む救いの喜びがもたらされるのです （ゼカリヤ書 7:1–14、 8:1–23）。 第二の説教において、預言者はイスラエルに敵対する諸国民の滅亡を予言し、エルサレムは神の特別な庇護の下に置かれ、もはやいかなる抑圧者もそこへ近づくことはないと告げている。その後、預言者はユダヤの民に喜びなさいと呼びかける。なぜなら、義に満ち、柔和な王が彼らのところに来られるからである。 彼は地上に正義を確立し、御自分の民を救い、人々の高慢と傲慢を滅ぼす。彼は、平和の象徴である柔和な動物、ロバと子ロバに乗って首都に入り、御自分の王国を開く[1750] 。メシアの王国――平和の王国――は、ユダヤから全地へと広がっていく。 王は、力によってではなく、すべての人々のために神との和解をもたらすために捧げる血の犠牲によって、人々をその王国へと招き入れる。神の民の敵であるギリシア人には敗北が予言され、ユダヤ人には豊穣と子宝の祝福が約束されている。 近い将来、イスラエルを待ち受ける明るい運命を描いた後、預言者は、その後間もなくユダヤの民に降りかかる拒絶の描写へと移る。預言者はレバノンに対し、ユダヤ全土を荒廃させる敵に門を開くよう求める。 このような災いの原因について、預言者ゼカリヤは、天の羊飼いの二本の杖に関する象徴的な物語を用いて説明している。そのうちの1本には「*恵み*」と刻まれており、 もう1本には「*束縛*」と刻まれていた。 羊たちが、牧者が彼らを世話したにもかかわらず改心しなかったため、牧者は「*恵み*」と刻まれた杖を折った。これは、神とその民との間の契約の終わりを意味していた。その後、牧者は牧者としての労苦に対する報酬を要求したが、ユダヤ人たちはその働きを30シェケルと評価した; この銀貨を、羊飼いは陶工のために主の宮に投げ入れた（[1751] ）。これに続いて、羊飼いはもう一つの杖――「*束縛*」――を折った。これは、ユダとイスラエルの間の兄弟関係が解消されたことを示すしるしであった。 善き羊飼いが拒絶されたとき、群れは傭兵たちの手に落ちた（ゼカリヤ書 9:1–17、 10:1–12、 11:1–17）。

最後の説教で、預言者は、世界のすべての国々がエルサレムに攻め上ると告げているが、 しかし主ご自身がエルサレムを守り、襲撃者たちを滅ぼし、ユダヤの民には恵みと悔い改めの霊を注ぎ、ユダヤ人たちは、自分たちが刺し貫いた方を見つめ、その方を一人子のように嘆き悲しむことになる[1752] 。 その時、ダビデの家に、彼らの罪を洗い流す泉が開かれ、偶像や偽預言者に関するあらゆる記憶は消し去られる。牧者は打たれ、羊たちは散らされる[1753] 。主は恵みに満ちた王国を築かれる。その数は少なく、地上の住民のわずか三分の一に過ぎないが、その代わりに試練を経た聖なる民である。 最後に、異教の諸国が再びエルサレムを取り囲むが、主はその防衛と撃破のために立ち上がり、その時、主のみが知っておられる唯一の日が訪れる。光は消え、天体は遠ざかり、昼も夜もなくなる。ただ夕暮れになって初めて光が現れる[1754] 。 エルサレムからは生ける水が流れ出し、そこは新しい王国の中心地となり、そこには義人だけが住むことになる――もはやそこには不浄なものは何一つない。（ゼカリヤ書 12:1–14、 13:1–19、 14:1–21）[1755] 。

[1750] 聖なる福音書記者たちは、主のエルサレムへの荘厳な入城について語る際、預言者ゼカリヤの書にあるこの箇所を引用し、それを救い主キリストに関連付けている（マタイ 21:4–6；ヨハネ 12:14–16）

[1751] 聖マタイ福音書は、 ユダが投げ捨てた銀貨で、陶工から異邦人の埋葬用の土地を購入するというサンヘドリンの決定を伝える際、これにザカリヤの預言の成就を見出していますが、おそらく、聖福音書作者が手元に置いていた預言書の巻物が預言者エレミヤの名で題されていたため、これをエレミヤの預言と呼んでいるのでしょう

[1752] 聖福音記者ヨハネは、この預言がキリスト・イエスにおいて成就したことを伝えるにあたり、その預言そのものを文字通り引用している（ヨハネ19:34–37）。

[1753] 主ご自身も、最後の晩餐の後、ゲツセマネへ向かう道中で、使徒たちがまもなく自分を見捨てるだろうと予言された際、この預言を御自身に当てはめておられます（マタイ26:31、マルコ14:27）。

[1754] ここには、キリストの磔刑の際に起こった日食に関する預言が見て取れる（ルカ23:44–45）。

[1755] 預言者ゼカリヤの書の一節は、晩課の際にパリミアとして朗読される。例えば、ゼカリヤ書9:9–14はヴァイイの週に、ゼカリヤ書11:10–13は聖金曜日に、 ゼカリヤ書8:7–17、19–23は「チーズの金曜日」に、ゼカリヤ書14:4、8–11（オリーブ山における主の御出現について述べられている箇所）は、この山で起こった主の昇天の日に朗読される。

2月22日

2月9日（旧暦）

聖殉教者ニキフォロスの受難

記念日：2月9日

偉大なるシリアのアンティオキアには、サプリキウスという名の長老と、素朴な市民ニキフォロスという人物が住んでいた。彼らは互いに深い愛情を抱き、非常に親しくしていたため、ある人々は彼らを実の兄弟だとさえ考えていた。

長年にわたるそのような友情を、あらゆる善を憎む悪魔が妬み、彼らの間に敵意という雑草をまき散らしたため、二人は道で互いにすれ違うことさえ嫌うほどになり、互いに憎み合うようになった。　かつて二人の間に愛と友情が満ち溢れていたのと同じくらい、その後、サタンの仕業によって、互いへの憎しみと敵意が沸き起こったのである。

互いに憎しみと敵意を抱いてかなり長い間過ごした後、ニキフォールは我に返り、この敵意を撒き散らしているのは悪魔であると悟ると、友人や隣人たちに、サプリキウス長老のもとへ行き、悔い改めた自分を許し、かつてのような愛で受け入れてくれるよう懇願してほしいと頼んだ。　しかし、長老は彼に対する敵意を捨てようとはしなかった。

そこでニキフォロスは再び他の友人たちを同じ願いを携えて遣わしたが、長老は彼らの話に耳を貸そうともしなかった。彼は三度目に遣わされた者たちをも拒絶し、彼らの懇願に耳を傾けず、こうして、謙虚に許しを求める兄弟を赦すという慈悲に心を動かそうとはしなかった。　それどころか、心を硬くして容赦のない態度を貫き、私たちの主イエス・キリストが「*赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される*」（ルカ6:37）と仰せられた言葉を忘れ、さらにこうも仰せられたことを忘れていた。　「*それゆえ、もしあなたが供え物を祭壇に捧げようとして、そこで兄弟があなたに対して何か恨みを持っていることを思い出したなら、供え物を祭壇の前に置いたまま、まず行って兄弟と和解し、それから戻って供え物を捧げなさい…… あなたがたが人々の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださるからである*」（マタイ5:23–24、マタイ6:14）。

そこで、ニキフォルは、サプリキウス長老が自分に関する嘆願を受け入れようとしないのを見て、自ら彼のところへ行き、その足元にひれ伏して、こう言った。

「父よ、どうかお赦しください。主の御名のために、お赦しください。」

しかし、サプリキウスは彼を一瞥さえしなかった。彼は慈悲のない人間であり、主への愛も畏れも持っていなかった。キリスト者であり長老である以上、彼は求められずとも兄弟を赦すべきであった。赦しを得られなかったニキフォロスは、恥をかかされ、拒絶されたままその場を去った。

その頃――ヴァレリアヌスとガリアヌスの治世中[1756] ――サプリキウスもまたキリスト教徒として捕らえられ、拷問を受けるためにイゲモンに引き渡された。

イゲモンは尋ねた。

「お名前は？」

「私はサプリキウスと申します」と彼は答えた。

「どの家系に属しているのか？」とイゲモンは尋ねた。

「私はキリスト教徒です」とサプリキウスは答えた。

[1756] ヴァレリアヌスは253年から259年まで在位し、その息子ガリエヌスは260年から268年まで在位した。彼は父の存命中に、父によってカエサルおよび共同統治者に任命されていた。

「あなたは聖職者か？」とイゲモンは再び尋ねた。

「私は長老です」とサプリキウスは答えた。すると、イゲモンは言った。

「我らの皇帝、この国およびローマ帝国の全領土の支配者であるヴァレリアヌスとガリエヌスは、自らをキリスト教徒と称する者たちが、不死の神々に犠牲を捧げるよう命じた。　もし、これを軽んじて王の命令を拒む者がいれば、あらゆる拷問を受けた後、残酷な死に処せられることを知れ。

この言葉を述べた後、サプリキウスはイゲモンの前に進み出て、こう言った。

「おお、イゲモンよ！　私たちキリスト教徒には、キリストなる神という王がおられます。なぜなら、御方こそが唯一の真の神であり、天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものの創造主だからです。それに対し、異教の神々はすべて悪魔に過ぎず、地上のあらゆる場所から滅び去るべきものです。それらは人間の作り出したものに過ぎず、誰の助けにもなり得ないのです。」

すると、激怒したイゲモンは、彼を車輪に縛り付け、容赦なく拷問するよう命じた。こうした拷問の最中、サプリキウスはイゲモンにこう言った。

「あなたは私の肉体に対して権威を持っていますが、私の魂に対しては一切の権威を持っていません。魂に対して権威を持つのは、それを創造されたイエス・キリストただお一人だけです。」

その後、サプリキウスは、自分に加えられたあらゆる苦痛を勇敢に耐え抜いた。

彼の不屈の姿勢を見て、残酷な裁判官は彼に対して次のような死刑判決を下した。

「王の命令を軽んじ、不死の神々への生け贄を捧げることを拒み、キリスト教の迷信を捨てようとしなかった長老サプリキウスを、剣で斬首せよ。」

サプリキウスが、天の殉教の冠を得ることを望みながら処刑場へ向かう途中、このことを聞いた至福のニキフォロスは、急いで彼を迎えに行き、その足元にひれ伏してこう言った。

「キリストの殉教者よ、私を赦してください。私はあなたの前で罪を犯しました！」

しかし、サプリキウスはこれに対し何も答えなかった。彼の心は相変わらず悪魔的な憎悪に支配されていたからである。

処刑場へ向かう道のりの中で、聖ニキフォルは再びサプリキウスの足元にひれ伏し、こう言った。

「キリストの殉教者よ、私を赦してください。人間として、私はあなたの前でどのような罪を犯したのでしょうか。あなたはキリストを拒まず、多くの人の前でその聖なる御名を告白しました。それゆえ、天からキリストによる冠があなたに与えられます。」

一方、憎しみに目がくらみ、許すことなど到底できないほど冷酷なサプリキウスは、容赦なく、彼を許す気配を微塵も示さなかった。彼は懇願する同胞に対して一言も発さなかったため、拷問者たちでさえサプリキウスの冷酷さに驚き、ニキフォロスにこう言った。

「お前ほど狂った人間は、我々は見たことがない。今や彼は死に向かっているというのに、お前はなおも熱心に彼に懇願している。死んだ後、彼が一体お前に何の害を及ぼせるというのか？　そして、今まさに死にゆく者と、なぜ和解する必要があるのだ？」

これに対し、聖ニキフォロスは彼らにこう答えた。

「私がキリストの殉教者に何を求めているのか、あなた方には分からないだろうが、神はご存知だ。」

彼らがサプリキアが剣で斬首される予定の場所に到着すると、聖ニキフォロス再び彼に語りかけた。

「お願いだ、キリストの殉教者よ」と彼は言った。「もし私が人間として、あなたの前で何か罪を犯したなら、どうか私を赦してください。*『求めよ、そうすれば与えられる』*（マタイ7:7）と書かれている。だから、私はあなたに懇願する。どうか私に赦しを与えてください。」

しかし、冷酷な彼の友人サプリキウスは、そのような懇願に心を動かされなかった。彼は主の言葉を思い出さなかった。*「イエスは彼に言われた。『心を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい*

……あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい』（マタイ22:37, 39）」； むしろ、心と体の耳を塞ぎ、まるで耳の聞こえない毒蛇のように、彼に懇願する者の嘆願を拒み続けた。かくして、サプリキウスは、隣人を赦す者は自らも赦されるとの福音書の教えに耳を傾けず、また主の「*あなたがたが人に対して用いる尺度で、あなたがたに対しても用いられる*」（マタイ7:2）という主の御言葉にも耳を傾けなかった。それゆえ、義なる裁き主である主は、その公正な裁きにより、サプリキウスから御恵みを奪い去られた。すると、彼は即座に主から離れ、自ら編み上げた殉教の冠を失ってしまった。

拷問者たちがサプリキウスに「ひざまずけ。そうすればお前の首を切り落とす」と言ったとき、彼はこう答えた。

「なぜ私を斬り落とそうとするのか？」

兵士たちはこれに答えて言った。

「お前が神々への生贄を捧げることを拒み、キリストと呼ばれるある人物のために王の命令に背いたからだ。」

これを聞いた忌まわしきサプリキウスは、彼らにこう言った。

「私を殺さないでくれ。私は王たちの命じることを果たすつもりだ。神々にひれ伏し、彼らに犠牲を捧げる。」

かくして、憎しみはサプリキウスの心を盲目にさせたのだ！　それは彼を神の恵みから引き離し、かつては苦しみながらもキリストを拒まなかった彼が、今や、すでに殉教の栄光の冠を受けるべき時であるにもかかわらず、永遠の命を捨て、背教者となってしまったのである。

サプリキウスのこの狂気じみた言葉を聞いたニキフォロスは、涙を浮かべて彼に懇願した。

「愛する兄弟よ、そんなことをしてはならない！　私たちの主イエス・キリストを拒んではならない！　苦しみの中で自ら編み上げたその天の冠を、台無しにしてはならない！　見よ、主キリストが戸口に立っておられる。主は再びあなたの前に現れ、あなたがこの地で受け入れるために来たこの一時的な死に対して、永遠の命を授けてくださるのだ。」

しかし、サプリキウスはその懇願に耳を貸さなかった。彼は永遠の死へと急ぎ、同時に、一振りの剣によって受け取ることになっていたあの無限の命をも失ってしまったのである。

一方、聖ニキフォロスは、サプリキウスが聖なる信仰から完全に背き、真の神であるキリストから離反したのを見て、拷問者たちに向かって大声でこう叫び始めた。

「私はキリスト教徒であり、サプリキウスが拒んだ我らの主イエス・キリストを信じている。それゆえ、サプリキウスの代わりに私を斬り殺せ。」

兵士たちは、イゲモンの命令なしに彼を殺すことを敢えてできず、彼が自らの意思で死を志し、全く躊躇なくこう叫んでいることに大いに驚いた。

「私はキリスト教徒であり、あなた方の神々に犠牲を捧げるつもりはない！」

すると、拷問官の一人が総督のもとへ現れ、サプリキウスが神々に犠牲を捧げることを約束したと報告した。しかし、ある者が、いわゆるキリストのために死を望んでおり、そのため大声でこう叫んでいると付け加えた。

「私はキリスト教徒だ。お前たちの神々に生贄を捧げるつもりはないし、王の命令にも従わない！」

これを聞いたイゲモンは、サプリキウスを釈放し、代わりにニキフォロスを剣で斬首するよう命じた。 こうして、聖なる殉教者はキリストのために、2月の9日[1757] に殉教し、喜びながら主キリストのもとへ旅立ち、その右の手から勝利の冠を受け取り、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美

[1757] 聖殉教者ニキフォロスは、257年頃に殉教し、この世を去った。

する聖なる殉教者たちの列に加わり、　御方にこそ、永遠に栄光と礼拝、誉れと権威がありますように。アーメン。

コンダク、第1声調：

愛の絆によって結ばれたニキフォロスよ、汝は憎悪の悪を打ち砕き、汝の頭上に剣が振り下ろされ、神が人となられた救い主の神聖な殉教者となった。我らのために、汝の栄光ある記念を謳う我らを、彼に祈り求めてください。

別のコンダク、第3声：

栄光ある者よ、主の愛に目を向け、その栄光ある十字架を肩に担ぎ、悪魔の策略を打ち砕き、死に至るまで苦難に耐え、真理の勝利者、神の恵みの戦士であり、その秘儀の守り手として現れた。

聖なる殉教者、シチリアの司教マルケッルス、キプロスの司教フィラグリウスの記念日

記念日：2月9日

聖なる殉教者マルケルとフィラグリウスは、聖使徒ペトロの弟子たちでした。キリストの地上での生涯の間、聖マルケルはアンティオキアの街に住んでいました。主の奇跡を耳にした彼は、主にお目にかかろうとアンティオキアからエルサレムへ赴き、そこで使徒ペトロと知り合いました。　キリストの復活後、聖マルケルは使徒によってシチリアの司教に任命され、多くの異教徒をキリストへと改宗させた後、そこで殉教しました。一方、聖フィラグリウスはキプロス島の司教であり、キリストへの信仰を熱心に宣教し、そのために多くの苦難に耐えた後、主のもとへ帰りました。

2月23日

2月10日（旧暦）

マグネシアの司教である聖殉教者ハラランピオス、および彼と共に殉教したポルフィリオスとヴァプトス、ならびに三人の女性殉教者たちの殉教記念日。

記念日2月10日

不義なローマ皇帝セウェルス[1758]　の治世下、我らの主イエス・キリストの教会が広まるにつれ、悪魔への奉仕は衰退し、偶像崇拝そのものも絶えつつあった。この頃、マグネシア[1759]　の町には、聖なる主教ハラランピオスが住んでいた。彼は人々を救いの道へと導き、　神の御言葉をもって彼らを教え諭した。彼はこう語った。　「わが王イエス・キリストは、聖霊によって使徒たちと預言者た

[1758] ローマ皇帝セプティミウス・セウェルスは193年から211年まで在位した。

[1759] マグネシアは、古代ギリシャの北東部、テッサリア地方にある都市である。

ちを遣わされました。それは、人々が彼らの聖なる説教によって悟りを開き、揺るぎなく真理の道を歩むためです。しかし、あなたがたの王セヴェルは、激しい苦痛をもって人々を無機質な偶像への生贄の捧げ物に強制し、それによって彼らの魂を永遠の死に追いやっています。　わが王イエス・キリストは、預言者たちと使徒たちを通して、私たちに天のいのちの言葉を授けてくださった。この説教によって、私たちの敵は追い払われ、蛇は踏みつけられ、不信仰は信仰へと変えられ、悪魔の教えは滅び、敵のすべての力は激しい破滅へと陥る。　それゆえ、永遠のいのちの道へと導く言葉を信じる方が、永遠の破滅をもたらす行いに固執するよりも、はるかに良いのである」。

このような言葉を述べた後、聖なる司教は異教徒たちに捕らえられ、イゲモン・ルキアヌスと軍司令官ルキウスの元へ引き渡され、拷問と裁判にかけられた。

聖殉教者ハラランピオスが彼らの前で同じ言葉を繰り返すと、イゲモンは彼にこう言った。

「お前は心の余りから、善と悪を見分けもせずに無分別な言葉を口にしている。　しかし、敬虔な長老よ、この言葉のせいで拷問を受けないなどと考えてはならない。それゆえ、我々の助言に従い、長老にふさわしい振る舞いをし、よく熟考した上で、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前が想像もできないような苦痛を、我々が与えることを避けられるのだ。」

聖ハラランピオスはこう答えた。

「私はすでに老いており、この一時的な生を終えようとしている。いかなることがあっても、私の前にある天の恵みを軽んじることはない。」

すると、裁判官たちは激怒し、凄惨な拷問の準備を始めながら、彼にこう言った。

「神々に生贄を捧げよ、邪悪な者よ！」聖ハラランピオスはこう答えた。

「私は悪魔たちに犠牲を捧げるつもりはない。あなたがたも見ての通り、あなたがたが崇めている悪魔たちは、キリストの十字架の印を前にして震え上がり、身震いしているではないか。」

その後、裁判官たちはハラランピオスから聖職者の衣を剥ぎ取るよう命じ、この天使のような男を裸のまま拷問し始めた。聖殉教者を吊るし上げると、二人の役人が鉄の爪でその肉体を引き裂き始め、頭から足先まで皮膚をすべて剥ぎ取るまで、その行為を続けた。

一方、全身を引き裂かれた聖ハラランピオスは、彼を拷問していた者たちにこう語った。「兄弟たちよ、私の朽ちゆく肉体を削り取り、新しい永遠の命へと移ろうとする私の霊を新たにしてくれたことに感謝します」。

聖人のこの言葉を聞いた後、彼を拷問していた二人の兵士は恐怖に襲われ、裁判官たちにこう言った。「あなたがたがこの人に加えている不名誉は、彼にとっては名誉となり、苦しみは喜びとなっている。 彼こそがキリストそのものではないか? 老人の姿をとって、アジアのすべての住民を自分の方へと改宗させるために、ここに来たのではないのか?　鉄の爪で引き裂かれる彼の肉体は、鉄よりも硬くなり、爪が彼に食い込むものの、彼自身は無傷のままである」。

兵士たちがそう言うと、イゲモンは歯ぎしりしながら叫んだ。「おお、邪悪な奴隷どもよ、命令の遂行において最も怠惰な者たちよ！　命じられたことを行わないばかりか、拷問に処せられた者を擁護するとは！」

一方、聖ハラランピオスを拷問していた兵士たちは、ついに完全に力尽き、苦しむ者をこれほどまでに強めていたキリストの力を公然と告白し、賛美するようになった。そのため、二人は主の御名のために即座に斬首された。彼らの名はポルフィリオスとバプトスであった。

また、ここで殉教者の苦しみを見守っていた三人の女性もキリストを信じるようになった。彼女たちは、キリストの至聖にして全能なる御名を賛美し始め、そのために拷問の末に殉教した。

その後、軍司令官ルキウスは席から立ち上がり、処刑人の道具を手に取り、自ら聖ハラランピオスを拷問し、その全身を激しく苛んだ。するとたちまち、彼の両腕は肘から離れ、まるで剣で切り落とされたかのように、殉教者の体に張り付いたままぶら下がった。

両手を失ったルキウスは地面に倒れ込み、「この男は魔術師だ！　助けてくれ、イゲモン！」と叫び始めた。

イゲモンは近づき、殉教者の体にぶら下がっている自分の将軍の両手を見て、聖ハラランピオスの顔に唾を吐きかけた。その瞬間、イゲモンの頭は後ろを向き、その顔はすでに後ろを向いていた。

すると、マグネシアの人々は大きな恐怖に襲われ、聖なる殉教者にこう懇願し始めた。「怒りを収め、神の報復を退けてください！　あなたには、『悪に悪で報いてはならない』と命じられているではありませんか」。

聖ハラランピオスはこれに対し、こう言った。「主なる神に誓って、私の心には悪意はなく、口には諂いもない！　あなたがた自身、キリストなる神がこれらの不法な指導者たちをどのように懲らしめられたかを見ている。神は私たちに永遠の命を与え、不義な者たちを滅ぼされるのだ」。

すると、皆が主に向かって叫んだ。「主よ、あなたに罪を犯した私たちを滅ぼさないでください！　神よ、あなたは今、私たちを光へと導き、永遠の命にふさわしい者とするために、私たちの君主たちを懲らしめられました」。

こうして、この場所で大勢の民がキリストを信じた。

その後、ルキウスは言った。「神の人よ、主の御使いよ、激しく苦しむ私を憐れんでください。私の両手があなたの体にぶら下がって、あなたに重荷をかけています。それらを元の場所に戻してください。そうすれば、あなたも重荷から解放され、私も病から癒やされます。もしあなたがそうしてくださるなら、私はあなたの神を信じます。」

そこで聖人は、主の御前に祈りを捧げながら、こう叫んだ。　「ヴァルフ、マヌイド、マロン・アファ、ラヴーニ、すなわち『祝福された方』よ、我らと共にいる神、我らの主よ、我らの肉体を身にまとわれた方、わが師よ、鎖に縛られた者たちの謙虚さに目を留め、この裁き人たちの懲罰の束縛を解き放ち、全身に傷を負ったあなたの告白者である私を癒してください！」

すると、天から声が聞こえてきて、こう告げた。　「ハラランピオよ――地上の灯火であり、天をも照らす者、天使たちの僕、預言者たちの仲間、使徒たちの友、殉教者たちの戦友、そしてわが対話にふさわしい者よ。わたしはあなたの祈りを聞き、あなたの口から発せられた言葉を受け入れた。このあなたの祈りが、これらの病める者たちの癒やしとなるように。」

するとたちまち、ルキウスとイゲモン・ルキアヌスはそれぞれの病から癒やされた。

そこでルキオスは、聖殉教者の足元にひれ伏し、洗礼を請い求めた。まもなく彼は洗礼を授かり、イゲモンはキリスト教徒への迫害をやめた。「ひとまず――と彼は言った――このことすべてを王に報告するまでは」。

その後、多くの人々が聖人のもとを訪れ、罪を告白して洗礼を受け、様々な病に苦しむ者たちは癒やされた。

一方、イゲモン・ルキアヌスは、当時ピシディアのアンティオキアに滞在していたセウェルス皇帝のもとへ赴き[1760]、マグネシアで起こったすべての出来事を報告した。「我々のところに」と彼は語った。「あるガリラヤ人の集団に属する男が現れた。彼は人々を神々から遠ざけ始め、病人には癒やしを与え始めた。　軍司令官ルキウスは癒やされた後、キリストを信じるようになり、マグネシアのほぼ全土がその信仰を受け入れた。私もまた癒やされたので、これらすべてを陛下にお伝えするためにここへ参りました」。

これを聞いたセヴェルは、怒りに満ちて叫んだ。「おお、不敬虔な者たちによって辱めを受けた永遠の神々よ！　なぜ、この偽り者たちの教えが、この地上にこれほど広まってしまったのか！」

[1760] ピシディアのアンティオキアは、小アジアの西部、フリギアとの国境に位置する。

そして直ちに、彼は三百人の非人道で凶暴な兵士たちを遣わし、聖ハラランピオスを捕らえさせた。彼は彼らに、まず聖人を拷問にかけ、その後マグネシアからアンティオキアへ連行するよう命じた。

兵士たちは王のもとへ戻る際、キリストの殉教者も連行した。彼らは聖人の体に鋭い鉄の釘を打ち込み、かなり長い顎鬚には縄を編み込み、それを首に巻きつけて、王のもとへ向かう道中、聖人を引きずっていった。

そして、彼らがマグネシアから十五スタディオンほど離れたとき[1761] 、右側を歩いていた馬が兵士たちの方を向き、人間の声ではっきりとこう言った。「おお、三百人の兵士たちよ、お前たちは三度も邪悪な悪魔の僕たちだ！　この人と共にいるキリスト、神、そして聖霊がおられるのが見えないのか？　なぜ彼にこのようなことをするのだ？　ああ、冷酷な者たちよ！　縛ることのできない者を解き放て。そうすれば、あなたたち自身も束縛から解放されるだろう」。

兵士たちは、馬が人間のような言葉でこう語ったことに大いに恐れをなしたが、王の命令に従い、聖なる殉教者をアンティオキアへと引きずり続けた。

その時、悪魔は老人の姿に変身して、セヴェル王の前に現れ、こう言った。「ああ、王よ、私は悲しむべき者です！　私はスキタイの支配者であるが、ハラランピウスという名の男――偉大な魔術師――が私の国にやって来て、私の全軍を私から離反させ、民衆は皆、私の軍団に加わってしまった。こうして私は、すべての人に見捨てられ、あなたにも同様のことが起こらないよう警告しに参ったのだ」。

悪魔がそう言い終えるやいなや、兵士たちに引きずられて聖ハラランピオスが王のもとに連れてこられた。　王は彼を見るやいなや、即座に三本の鋭い杭をその胸に突き刺し、その後、薪を持ってくるよう命じて火をつけさせ、殉教者を少しずつ火で焼かせた。それは、彼がすぐに死ぬことなく、より長く苦痛に耐えるようにするためであった。

聖ハラランピオスがこのように長い間拷問を受けていると、その時そこに立っていたある女性が、王に気に入られたいという欲求から、熱い炭を手に取り、殉教者の頭、顔、ひげにそれを振りかけながら言った。「死ね、老いぼれ、死ね。お前の甘言に満ちた教えで我々を惑わすよりは、死んだほうがましだ」。

この女性は王の側室であった。すると、彼女の姉が彼女に言った。「この忌まわしい女よ、あなたは神を恐れないのか。王の意志に従うことで、あなたは神を怒らせている。もしキリストがあなたに怒りを向けたなら、セヴェルもあなたを助けることはできないだろう」。

そして、殉教者に向き直ってこう言った。「神の人よ、あなたの老いは尊い。あなたと共に神がおられる。私もその神を信じ、自分の罪から解放されたいと願っている」。

その後、火がすでに消え、聖人を拷問していた家来たちは力尽きていたが、殉教者自身は無傷で全く健やかなままであったため、王はこう言った。「この男への拷問をやめよ。彼に私の問いに答えさせよ」。

そして、聖なる殉教者が王のそばに連れて来られると、セヴェルは彼にこう言った。

「ハラランピオよ、今朝早くスキタイの王と語り合っていた際、私は怒りに任せてお前を侮辱してしまった。しかし、今こうしてこの拷問に耐え抜いた以上、私が尋ねることに答えてくれるなら、お前は我々の間で尊敬される存在であり続けるだろう。お前はいくつだ？」

聖ハラランピオスは答えた。

「私はこの虚しい人生で長い時間を過ごした。百十三年を生きてきた。」

「それほどの歳月を生きながら、」とセヴェルは言った、「なぜ今に至るまで不死の神々を知らなかったのか？」聖なる殉教者は答えた：

[1761] 現在の単位で換算すると、およそ2 2/3ヴェルスタに相当する。

「長生きしたおかげで、王よ、私は偉大な知識も得ました。唯一の真の神であるキリストを知り、彼を信じるようになったのです。」

その後、王は彼に、妻がいるかどうか尋ねた。

聖人は答えた。

「私は天の乙女、すなわち私のキリストの御国を自分のものとした。地上では妻はいなかった。」すると王は彼に尋ねた。

「死者をよみがえらせることはできるか？」

「それは人間の力ではできません」と聖人は答え、「キリストの力によるものです。」

そこで王は、長い間悪霊に取り憑かれていた男を連れてくるよう命じた。悪魔はこの男を三十五年もの間苦しめてきた。彼を滅ぼそうと、悪霊は時としてこの不幸な男を荒野や山々へと追い立て、また時には藪や沼地、あるいは地割れの中に突き落としていた。

その男が聖人のすぐそばに連れて来られると、聖人から漂う芳香を嗅ぎつけ、たちまちこう叫んだ。「お願いだ、神のしもべよ、時期尚早に私を苦しめないでくれ！　だが、言葉一つで私を追い出してくれ。そうすれば、もし望むなら、私がどうやってこの男に取り憑いたのか、話してやろう。」

聖人は承諾し、悪魔は次のように語った。　「この男は隣人を盗もうとしていたが、彼は心の中でこう言った。『もし最初にその相続人を殺さなければ、彼の富を奪うことはできない』と。そして隣人を殺した後、すでにその遺産を奪おうとしていた。私が彼がそのような状態にあるのを見て、彼の中に乗り移り、もう三十五年も彼の中に住み着いているのだ。」

すると、聖ハラランピオスは悪魔にこう言った。「この人から出て行け。もう二度と彼に害を及ぼしてはならない。」

すると、たちまち悪魔は彼から離れ、悪霊に取りつかれていた男は元気を取り戻した。

その後、王はこう叫んだ。

「まことに、キリスト教の神は偉大だ！」

三日後、ある若者が亡くなった。王は死体を自分の元へ運ばせるよう命じ、聖ハラランピオスにこう言った。

「あなたの神に祈り、この死者をよみがえらせてください。」

聖人は祈りを捧げると、死者をよみがえらせた。それを見て、多くの民がキリストを信じるようになった。王自身も、そのような奇跡を目の当たりにして驚嘆した。

その頃、王の側にはクリスプという名の地方総督がいた。彼はセヴェルとの評議の席で、こう言った。「この男をこの世から消し去れ。彼は魔術師であり、その奇跡は呪術によって行われているのだ。」

王はクリスプの言葉を信じ、殉教者に対して抱いていた以前の好意を翻し、彼にこう言った。

「ハラランピイよ、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、殺し屋の手から逃れられるだろう。」

聖人はこう答えた。

「苦しみは私にとって大きな益となる。私の体が傷で覆われるほど、私の魂は喜びに満ちるのだ。」

すると王は激怒し、聖人の口の中に石を投げ込むよう命じた。彼を殴打する者たちは、「罪もなく死ぬことのないよう、王に従え」と罵った。

ついに王は兵士たちに言った。「燃え盛る松明を持ってきて、彼の髭に火をつけ、顔を焦がせ。」

すると、兵士たちが聖人の髭に松明を近づけたとき、そこから大きな炎が噴き出し、周囲に立っていた人々へと向けられ、七十人もの不信心者を焼き尽くした。

これを見たセヴェルは、怒りに満ちて言った。「スキタイの王が私に言った通り、ハラランピオスは魔術師であり、彼は私からも私の軍勢を遠ざけようとしているのだ」。

そして、自分の重臣たちに向き直り、こう尋ねた。

「ハラランピオスが信仰しているキリストとは、いったい誰なのか、教えてくれないか？」

「キリストとはマリアの息子です」とクリスプは答えた。「彼はマリアが姦通の末に産んだ子です。」

すると、アリスタルコスという名の男がクリスプに言った。

「愚かなことを言うな。その秘密をどこで聞いたのか、そしてマリアとキリストがどのような人物だったのか、なぜ知っているのだ？」

それに対し、クリスプは怒りを込めて言った。

「お前が私より賢いというのか？」

「ああ、私はお前より多くのことを知っている」とアリスタルコスは答えた。すると、セウェルス王は叫んだ。

「おお、邪悪な男め！　まさか私に反論しようというのか？」

これに対し、アリスタルコスは答えた。

「いいえ、王よ、私はあなたにも、他の誰にも反論しようとは思いません。ただキリストを守っているだけです。」

その後、王は怒りに燃え、弓を手に取り、弦を引き、矢を空へと放ちながら言った。「キリストよ、もしお前が天に生きているのなら、我々のところへ降りてきて、この地上に御自身の天幕を張れ。　今、私はあなたに対する戦いの準備を整え、あなたに立ち向かうための多くの軍勢を擁している。さあ、地上に降りてきて、私と対峙せよ。もしあなたが降りてこなければ、私は天を打ち倒し、太陽を消し去り、この手であなたを捕らえてやる。」

王がこのように大胆不敵かつ恥知らずにも、主キリストに対してこのような冒涜的な言葉を吐いていると、大地が揺れ動き、皆に大きな恐怖が襲いかかった。怒り狂った主は、葉っぱのように大地を揺さぶられた。上空からは恐ろしい雷鳴が轟き、稲妻が走ったため、そこに立っていた者たちは皆、恐怖のあまりまるで死んだかのように固まってしまった。　王と、彼と共にいたクリスプ総督は、何らかの見えない絆で結ばれたかのように、地面から浮き上がり、まるで空中に宙吊りになっているかのようだった。

その時、王は殉教者にこう呼びかけた。「ハラランピイよ、これらすべては私の罪のゆえに起こったことであり、私は当然この苦しみを受けている。しかし、どうかあなたの神に祈り、この苦しみから私を救い出してください。そうすれば、私はこの街の至る所で、神の御名とあなたの名を称えましょう。私はあなたのキリストによって、大きな恐怖に襲われているのですから。」

その時、ガリーナという名の王女が彼らのところへ近づき、セヴェルにこう言った。「父上、神に逆らえる者など誰もいません。なぜなら、キリスト教徒にとって神は希望であり、不信心者にとっては滅びをもたらす方だからです。　主を信じなさい。そうすれば、主はあなたを守り、今あなたが主によって縛られているその目に見えない束縛から解放してくださいます。あなたを縛っているのは、永遠にして全能の神なのです」。

聖なる殉教者の前にひざまずき、至福のガリーナは言った。「お願いです、神のしもべよ、主キリストに祈り、その祈りによって私の父をこの目に見えない束縛から解き放ってください」。

聖ハラランピオスが祈りを捧げるやいなや、この恐ろしい神の懲罰は止み、総督と共に処刑から解放された王は地面に立ち上がり、こう言った。「天の主、地の創造主よ、私を憐れんでください！天にまします方よ、この地を慈しみの眼差しで見守ってください！」

その後、王は司教やすべての重臣たちと共に宮殿へ戻り、そこから三日間一歩も外に出ることなく、神の怒りと、つい先ほど下された主の恐ろしい懲罰について、ひたすら思索にふけっていた。

その頃、王の娘であるガリーナに幻が見られ、彼女はそれを聖ハラランピオスにこう伝えた。「私には、まるで水に恵まれた土地に立っているかのように思えました」と彼女は語った。「すると突然、柵で囲まれた大きな庭が見え、そこにはあらゆる種類の香りのよい木々が植えられていました。　その真ん中には美しいブドウ畑が広がっており、そのブドウ畑の中には背の高い杉が立っていて、その根元からは泉が湧き出ていました。その場所の近くには、誰にもこの庭園に入ることを許さない威厳ある守護者が立っていました。　近くには、私の父とクリスパ司教の姿が見えたが、この庭園を見張る者は、その炎の剣で二人をその場所から追い払っていた。その時、私は大きな恐怖に襲われ、ただこの番人が私にそこに留まることを許してくれるよう祈るばかりだった。すると彼は私にこう言った。「ここへ来なさい。そうすれば、私はあなたを肩に　（*肩に――編者注*）乗せて、この庭に尊厳をもって連れて行ってあげよう」と私に言いました。そして、私がその庭の杉の木の下、泉のそばにいたとき、誰かが「あなたやあなたのような者たちに、この場所が与えられている」と言うのを耳にしました。これが私の見た幻でした。どうか、その意味を教えてください」と、ガリーナは話を締めくくった。

すると、聖ハラランピオスは彼女にこう言った。「あなたの夢は次のように解釈されます。水が豊かに湧き出ているのは聖霊の賜物であり、囲いのある庭は楽園を表しています。ぶどう畑は義人たちの楽園における安息を、香りのよい木々は聖なる天使たちの姿を意味しています。　高い杉はキリストの十字架の栄光を象徴し、泉は十字架によって人類に授けられた永遠の命を意味する。　そして、あなたをその肩に担いだ番人は、主キリストである。主は、山に九十九匹の羊を残して、迷い出た一匹の羊を探し求め、見つけると、その肩に担がれた（ルカ15:4–5）。しかし、あなたの父は、司教と共に神の楽園から追放されるでしょう。なぜなら、彼らは――今は神に感謝しているものの――まもなく再び神に背き、悪魔の罠に陥るからです」。

実際、神の恐ろしい懲罰の直後、セヴェル王は再び迷いに陥り、つい先ほどその強大な力を知ることになった神を見捨て、再び偶像に立ち返った。彼は殉教者を呼び寄せ、こう言った。

「ハラランピイよ、私の助言に従い、神々にひれ伏せ。そうすれば、我々はあなたを尊ぶだろう。」

聖人はこう答えた。

「神のしもべが拷問者の言葉に惑わされるなどあり得ない。まことに、王よ、あなたの言葉は無分別で、荒唐無稽である。」

すると、セヴェルは怒って言った。

「おお、狂人よ、お前は私の言葉を無分別だと言うのか！」

そして、聖人の唇に釣り針を引っ掛け、その状態で街中を引き回すよう命じた。

一方、王の娘は父のもとに歩み寄り、こう言った。「父上、何をおなさっているのですか？　なぜこの義人を苦しめるのですか？　なぜ悪魔の罠に絡まり、善を捨てて悪を選ぶのですか？　なぜ、生を拒んで死を好むのですか？　なぜ、拷問者のような激しさで、このキリストの僕に立ち向かうのですか？父よ、私の言うことを聞いてください。かつて悪に傾いていたように、今はすべての善に熱心になってください。悪を蒔く者は悪を刈り取り、祝福をもって蒔く者は善を刈り取るからです。かつてあなたに下った神の懲罰を思い出してください。あなたは目に見えない鎖で縛られ、空中に吊るされたまま、真の神を告白しました。しかし今、その鎖から解放されたあなたは、神を否定しています。このように、多くの支配者たちは、主の懲罰を受けている間は主の力を悟るものの、懲罰から解放されると、再び主を忘れてしまうのです」。

これを聞いたセヴェル王は、少しも改心するどころか、さらに激怒して言った。

「ガリーナよ、神々に生贄を捧げよ！」

「お父様、お望みのことは何でもいたします」と、彼女はそれに答えた。

すると王は喜び、こう宣言した。

「わが娘が神々に生贄を捧げることに同意したのだから、ハラランピオスを釈放せよ。」

聖なる殉教者が王のもとに連れて来られると、セヴェル王は彼にこう言った。「ほら、わが娘のガリーナは、お前の信仰から離れて我々の信仰に改宗し、今や神々に生贄を捧げようとしている。ハラランピイよ、お前も彼女と共に我々の神々の神殿に入り、我々が望むことを成し遂げよ。」

ハラランピオスはこれに対して何も答えなかったため、王は彼が承諾したのだと考えた。

一方、ガリーナはディヤとアポロンの神殿へ向かい、そこで祭司たちにこう言った。「私は悔い改めの心で、キリストを信じたことで怒らせてしまった神々に、懇願しに来たのです。」

すると、祭司たちはこう叫んだ。

「偉大なるディイよ！ 全能のアポロンよ！ 天の創造主であり、すべての支配者の王よ、ガリーナに御目を向け、北の王のために彼女を憐れんでください！」

至福のガリーナは、偶像の神殿に入ると、祭司たちを呼び寄せ、こう尋ねた。

「まず最初に、どの偶像を倒すべきか——ディイの偶像か、それともヘラクレスとアポロンの偶像か？」

「いいえ、ガリーナよ」と祭司たちは答えた。「そのような悪事を企んではなりません。私たちの救い主たちを侮辱してはなりません。さもないと、彼らは怒り、天を打ち倒し、全地を粉砕してしまうでしょう。」

そこでガリーナは、ディエの偶像を手に取り、こう言った。

「もしあなたが神なら、なぜ私があなたを打ち砕きに来たことに、今まで気づかなかったのですか？」

そう言うと、ガリーナは偶像を地面に激しく叩きつけ、それは三つに砕け散った。それから彼女はアポロンの偶像も掴み、こう言い放ちながら、それをも砕き散らした。

「さあ、お前も地に堕ちよ、サタンよ、猫背の老いぼれよ。お前はただの塵に過ぎないのだ！」

こうして彼女はすべての偶像を打ち砕いた。すると、祭司たちはセヴェル王のもとへ駆けつけ、こう告げた。

「王よ、我らの希望は失われました。今や太陽も消え、世界も滅びるでしょう。我らの神々は死んでしまったのですから。」王は驚き、こう尋ねた。

「その言葉は、どういう意味か？」

「あなたの娘、ガリーナが、我らの神々を打ち砕いたのです」と彼らは答えた。

すると、セヴェルは言った。

「今夜、五十人の鍛冶屋を呼び寄せ、偶像を修復して再び神殿に安置し、彼らが復活したと告げよ。まるでガリラヤの人々が、彼らのキリストが死者の中からよみがえったと語るように。」

祭司たちはこれらすべてを細心の注意を払って実行した。朝、王女のもとへ現れた彼らは、彼女にこう言った。

「神殿へ行って、復活した私たちの神々を見てきてください。」

「神々が復活したのですか？」とガリーナは尋ねた。「それなら、行って彼らを見てきます！」祭司たちは言った。

「まことに偉大な奇跡だ。昨日まで辱められ、冒涜されていた彼らが、今やさらに大きな栄光と誉れに輝いている。」

翌朝、至福のガリーナはこう言った。

「新しい偶像は、古いものより壊しやすいわ。」

そして、ディヤの偶像に向かってこう付け加えた。

「死から蘇ったユピテルよ、お前に命じる。再び死者の元へ戻れ！」

そう言うと、ガリーナは再びすべての偶像を打ち砕いた。

すると、祭司たちは怒りに満ち、再び王に自分たちの神々が滅びたことを報告した。
セヴェルは娘を呼び寄せ、こう言った。
「なぜ我らの神々を打ち砕いたのだ？」
ガリーナはこう答えた。
「あなたがたが彼らを『自分たちの神々』と呼ぶのは、偽りの教えに惑わされているからに過ぎません。彼らはただの無機質な物に過ぎないのです。」
これに対し、王は叫んだ。
「神々に生贄を捧げよ、不敬の種よ。私の血筋などではない！」
すると、聖女ガリーナは、まるで父親を嘲笑うかのように、こう言った。
「私はすでに、できる限りの犠牲を捧げました。でも、もしお望みなら、あなたの他の神々に対しても同じことをして差し上げましょう。」
すると、激怒した王は娘を放っておき、再び聖殉教者ハラランピオスの拷問に戻った。王は彼を、ある未亡人の侮辱にさらすために引き渡したのである。
ハラランピオスがその未亡人の家に入ったとき、彼はそこに立っていた柱の一つに身を寄せると、たちまちその柱は大きな木へと変わり、その枝で女性の家全体を覆い尽くした。
この奇跡を目撃した未亡人は恐れおののき、こう言った。「私から離れてください、ハラランピオ。私はこのような方を迎え入れるに値しません。あなたは、キリストか、天使か、預言者か、使徒かのいずれかのように思えます。どうかお願いです、私から離れてください。私はあなたを我が家の屋根の下に迎え入れるに値しません。」
これに対し、聖なる殉教者は彼女にこう答えた。「勇気を出しなさい、娘よ。あなたは主の恵みを得たのだから。ただ、『主は*偉大であり*、憐れみ深く、*すべての称賛に値する方である*』（詩編47:2、95:4）と信じなさい。」
翌日、朝になると、隣人たちは、未亡人の家をその枝葉で覆っている、背が高く葉の茂った木を見て、互いにこう語り合った。
「これは一体どんな奇跡だろうか？」
それに対し、ある人々はこう答えた。
「あそこに聖ハラランピオスがいるからだ。だからこそ、あの柱が背の高い木になったのだ。」
家の中に入ると、近所の人たちは聖人が座って未亡人に教えを説いているのを見つけた。聖人は彼女にこう言った。
「キリストを信じたあなたは幸いである。幸いである。あなたの罪は赦された。主は悔い改める者を受け入れてくださるからだ。」
すると、集まってきた人々は彼に言った：
「なぜ、あなたが本当にキリストであるかどうか、私たちに教えてくれないのですか？」
聖ハラランピオスはこう答えました。
「どうかお許しください、子らよ。私はあなたがたのしもべであり、キリストの僕であり、これらすべてを御名によって行っているのです。」
すると、その未亡人は、大胆に、力強い声で、こう叫んだ。
「喜びなさい、ハラランピオよ、常に消えることのない光で輝き続ける者よ[1762]、喜びなさい、ハラランピオよ、恵みをもって導く者よ、喜びなさい、ハラランピオよ、全世界を照らす灯よ。」
彼女がそう語り終えるやいなや、そこに集まっていた隣人たちは、心からキリストを信じ、聖ハラランピオスの膝元にひれ伏し、公然とキリストを告白し、皆、救いの洗礼を受けた。

[1762] ハラランピオスとは、ギリシャ語から訳すと「喜びに輝く」という意味である。

翌日、王は聖人を法廷へ連行するよう命じた。しかし、キリストを信じた者たちは、王より先に王のもとへ赴き、柱が芽吹き、大きな木になったという奇跡について王に報告した。

セヴェルは大変驚いたが、クリスプ司教は彼にこう言った。「王よ、もしこの魔術師を剣で殺すよう命じなければ、まもなく皆が彼の奇跡に惑わされ、我らの神々や我々を見捨てて、彼の後を追うことになるでしょう」。

そこで王は、聖人を剣で斬首するよう命じた。これを聞いた殉教者ハラランピオスは、喜びながらダビデのこの詩篇を歌った。*「主よ、私はあなたに慈しみと裁きを歌います。　私は歌い、清き道を歩みながら悟る。『いつ、あなたは私のところに来られるのか』」*（詩編100:1–2および詩編の終わりまで）。

この世での戦いを終えるべきその場所に喜びをもって到着した聖ハラランピオスは、こう言った。　「主なる神よ、あなたが私にこれほど慈しみ深く、寛大であられることを感謝します。敵を打ち倒し、地獄を打ち負かし、死に至る病を癒やされたイエスよ、主なる私の神よ、あなたの御国において私を覚えてください」。

彼がそう祈っていると、天が開け、多くの聖なる天使たちと共に主ご自身が殉教者の元へ降りてこられ、美しいエメラルドの玉座が設けられた。そして、栄光の王はその玉座に着座して、聖ハラランピオにこう言われた。

「来なさい、ハラランピオよ。わたしのためにこれほど多くの苦難を耐え忍んだ者よ。望むものを何でも求めなさい。そうすれば、わたしはそれを与えよう。」聖なる殉教者はこれに対し、こう答えました。

「主よ、あなたが私にあなたの恐るべき栄光を見ることを許してくださったこと自体が、私にとってはすでに大きな恵みです。　しかし、主よ、もし御心に適うならば、御名の栄光を現してください。私の遺骨が眠り、私の記憶が崇められるその地において、飢饉も疫病も、実を滅ぼす有害な風も決して起こらず、その地に平和と繁栄、小麦とワインの豊穣が満ち溢れますように。　主よ、どうかその人々の魂を救ってください。人々が肉と血であることは、あなたご自身がご存知です。ですから、彼らの罪を赦し、地の実りを豊かに与えてください。そうすれば、彼らは労苦のさなかで満ち足り、喜びを味わいながら、すべての恵みの与え主であるあなた、彼らの神を賛美するでしょう。　また、天から降り注ぐ露が、彼らにとって癒やしとなりますように。主よ、わが神よ！ すべての人々に御恵みを注ぎ給え！

聖人がこの祈りを唱えた後、主はこう仰せになりました：

「汝の願いどおりにならんことを、わが勇敢なる戦士よ！」

その後、主は御自身の天使たちに囲まれて天に昇られ、聖ハラランピオスの魂もまた、主の後を追って天に昇った。

そこで、兵士たちは旅立ち、殉教者が授かった栄光、主が彼に現れた様子、剣による傷一つなく息を引き取ったこと、そして彼らがその魂が天へと昇っていくのを目撃したことを、王に報告した。　セヴェルはこれらすべてに深く驚き、大きな恐怖に襲われた。王の娘である聖女ガリーナは、王に殉教者の遺体を求め、それを受け取ると、清らかな死装束で包み、香油と高価な没薬で塗布し、主を賛美しながら、それを金の聖櫃に納めた。　王は娘を裁き、罰することを恐れた。彼女と共に主がおられるのを見て、王は彼女の望み通り、キリスト教の敬虔な生活を送ることを許した。

この無敵で、誰にも打ち勝つことのできない偉大な殉教者ハラランピオスは、今や全世界のために執り成しをしており、2月の10日[1763] に殉教した。 神の御座の右に立ち、絶えず私たちの主イエス・キリストに私たちのために祈ってくださっている。主イエス・キリストに、今、そして常に、世々限りなく、栄光と御国がありますように。アーメン。

[1763] 聖殉教者ハラランピオスは202年に逝去した。

コンダク、第8調:

聖職の恵みに倣い、栄光に満ちた者よ、あなたは神の受難によって教会を輝かしく飾り立てた。キリストのために、喜びをもって勇敢にそれを受け入れた、ハラランピエよ、全世界の尊き灯台よ、無敵の者として地の果てを照らし出せ。

ペチェルスクの奇跡行者、聖プロホールの生涯。

記念日：2月10日

寛大で慈悲深い主は、しばしば人々に災いを送られます。それは、そのような懲らしめを通じて、人々を真理へと導き、善行へと誘うためです。たとえ主が人々が苦しみ、苦しむことを許されたとしても、彼らを憐れみ、その傷を癒やすことを遅らせることはありません。それは、この聖プロホールの生涯からも見て取れる通りです。

スヴィャトポルク・イジャスラヴィチ[1764] の統治時代、キエフの人々は、この公から多くの暴虐にさらされた。彼は国内において、罪のない貴族たちさえも殺害し、その財産を奪い取ったのである。それゆえ、主は当時、ルーシの敵たちがこれほどの力を得ることを許されたのである。スヴィャトポルクに対して、ポロヴェツ人の大軍[1765] が反乱を起こし、 さらに、諸公爵の間でも内紛が勃発し、ルシの地には大飢饉と貧困が訪れた。この頃、至福のプロホールはスモレンスクからペチェールシク修道院を訪れ、イオアンヌ修道院長のもとへ赴き（[1766] ）、彼から修道士の位を受けた。 修道院では、彼は徳を積むことに熱心に励み、極めて厳しい禁欲生活を送ったため、普通のパンさえ口にすることを拒んだ。彼はヒユという草を摘み、それを自分の手でこすり、そこからパンを作り、それを糧としていた。　夏の間、彼は一年分のそのようなパンを蓄え、再び夏が訪れると翌年の分も同様に作っていたため、パンを全く必要とせず、それゆえ「レベドニク」というあだ名がついた。　プロスフォラ（聖体用パン）以外は何も口にせず、野菜さえも決して食べず、レベダだけを食べ、水以外の飲み物も一切飲まなかった。　主は、この聖人がこれほどまでに厳しい禁欲を耐え忍んでいるのをご覧になり、ヒユから作られたパンの苦味を彼にとって心地よい甘美なものに変えてくださった。こうして、神の御心に適うこの聖人は、生涯を悲しみや貧しさの中でではなく、喜びの中で過ごした。祝福されたプロホールは決して嘆くことなく、常に喜びをもって主に仕えた。　彼は敵の襲撃を恐れることは決してなかった。なぜなら、アオウキ以外の何物も持たず、鳥のように生きていたからである。彼は福音書に登場する金持ちのように、*「魂よ！　『お前のところには、何年分もの財産が蓄えられている。安心して、食べて、飲んで、楽しめ』*（ルカ12:19）」と自慢することもできなかった。しかし、一年分の草を蓄えたことさえ、彼は自らを戒め、「プロホールよ、*『今夜、お前の魂はお前から取り去られる。それでは、お前が蓄えたものは、誰のものになるのか？』*」　（ルカ12:20）。聖人は、実際にこの主の御言葉を成就した。*「空の鳥たちを見よ。彼らは種を蒔かず、刈り取らず、倉に集めもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養ってくださる」*（マタイ6:26）。鳥たちのように、福者プロホールは、ヒユが生えている場所へ軽やかに歩み寄り、そこからまるで翼に乗るかのように、肩にヒユを載せて修道院へ持ち帰った。　こうして彼は、種を蒔かれていない、耕され

[1764] 1093年から1113年まで統治した。

[1765] ポロヴェツ族は、テュルク系部族に属する野蛮な遊牧民であり、11世紀後半からカスピ海沿岸の草原を越えて南ロシアの草原地帯に侵入し、南ロシアの諸公国に対して頻繁かつ壊滅的な襲撃を繰り返した。

[1766] 1089年から1108年にかけて、ヨハンはペチェールスク修道院のイグメンを務めていた。

ていない大地から、まるで空の鳥のように糧を得て生きていた。この頃、ルーシでは絶え間ない戦乱により大飢饉が襲い、人々は死の脅威にさらされていた。

しかし、主は御自身の聖人を称え、人々を死から救おうと望まれ、その年、ヒユの収穫を祝福されたため、例年以上に豊作となった。そこで、至福のプロホールは、さらに　に労苦を重ねるようになった。　絶え間なくこの草を摘み取り、その種を両手ですりつぶし、その粉でパンを作り、貧しい人々や飢えで死にそうな人々に配った。

ある人々は、聖プロホールがレベダを摘んでいるのを見て、飢饉の際に生き延びるために自分もそれを蓄え始めたが、その苦味のため、そのようなパンを食べることができなかった。そこで、困窮している人々は皆、至福の者プロホールに頼るようになった。聖人は、レベダから作ったパンを誰に対しても拒むことはなかった。　そして、そのパンは、まるで蜂蜜が混ぜられているかのように、誰にとっても美味しく感じられた。こうして、至福のプロホールの手でヒユから焼かれたパンは、小麦から焼かれたパンよりも、人々に喜んで受け入れられるようになった。　そして、これらすべての中で特に不思議に思われたのは、このパンが、至福のプロホールが祝福を込めて与えた場合にのみ、清らかで甘く感じられたのに対し、聖人の祝福なしに誰かがそれを手に取ると、土のように黒く、よもぎのように苦く感じられたということである。　そこで、ある修道士が、聖人の祝福を受けずにこっそりとそのパンを取り、食べ始めた。しかし、そのパンは彼の手に取ると土のように見え、あまりにも苦くて、食べることはできなかった。そして、そのようなことが何度か繰り返された。　しかし、この修道士は、聖人に自分の罪を打ち明け、祝福されたパンを請うことを恥じていた。とはいえ、すでに長い間激しい飢えに耐えてきた彼は、もはやそれを耐えきれなくなり、目前に差し迫った死を目の当たりにして、イグメン・ヨハネのもとへ行き、起こったことをすべて話して、彼に許しを請うた。　修道院長はこれを信じず、別の修道士に命じて、聖プロホロスから密かにパンを持ち帰らせ、それが事実かどうか確かめさせた。パンが持ち帰られると、最初の修道士が言っていたことが裏付けられた。そのパンは苦すぎて、誰も口にすることができなかったのだ。　そのパンを自分のところに置いておいた修道院長は、再び聖人のところへ使いを送り、彼の祝福のもとでパンを請うよう命じた。「そして、聖人の元を離れる際には――と彼は言った――こっそりと別のパンも持ち帰れ」。　これらのパンが持ち帰られると、密かに持ち出されたパンは彼らの目の前で変化し、最初のパンと同様に、土のように黒く、よもぎのように苦くなった。一方、聖プロホールの祝福を受けて持ち帰られたパンは、純粋で蜂蜜のように甘かった。　この奇跡により、至福のプロホルは至る所で名声を博し、多くの人々を養うことで、彼らに大きな恩恵をもたらした。この頃、キエフ公スヴィャトポルク・イジャスラヴィチは、ウラジーミール＝ヴォルィン公ダヴィド・イゴレヴィチと内紛に突入した。　彼は、トレボヴリでヴァシルコ・ロスティスラヴィチ公が失明させられた件をめぐり、ダヴィド・イゴレヴィチとの争いに加わった。ヴァシルコ公は、ダヴィド・イゴレヴィチの唆しにより、スヴィャトポルク公の命令で失明させられたのである。　同時に、スヴィャトポルク・イジャスラヴィチは、ヴァシルコの弟でありペレミシュリ公であるウラジーミル・ロスティスラヴィチ、さらにはヴァシルコ自身とも、ロスティスラヴィチ家が占領していた父イジャスラフの領地をめぐって内紛を始めた[1767]。

スヴィャトポルク公はダヴィドをポーランド人（リャヒ）の地へ追放し、彼の都市ウラジーミルに息子のムスティスラフを据えた後、自らキエフへの遠征から戻った。しかし彼はウラジーミルを制圧することができず、ヴァシルコはウグラ族を率いるもう一人の息子ヤロスラフを彼らに対して送り込んだ。　この大規模な社会混乱と無法な略奪が横行する中、ガリチやペレミシュリからの商人の

[1767] これらすべては1099年に起こった。

キエフへの通行が禁止された。その結果、南ルーシのほぼ全域で塩が尽き、民衆は大きな苦難に見舞われた。

この災難を目の当たりにした至福のプロホールは、すべての修道室から大量の灰を自分の修道室に集め、主への祈りを捧げた後、塩を必要とするすべての人々にそれを配り始めた。聖人の祈りによって、その灰は純粋な塩へと変わった。　そして、彼がそれを配れば配るほど、塩は増え続けた。その塩は修道院だけでなく、大勢の信徒たちが至福のプロホールのもとを訪れて自分たちのために持ち帰るほど、豊富に供給された。　そして、これらすべてに対して、至福のプロホルは何も受け取らなかった。彼は自分の塩を、求める人すべてに、その人が望むだけ無償で配ったため、市場は空っぽなのに、聖人の修道院は塩を受け取りにやって来た人々で溢れかえっている光景が、しばしば見られた。

この頃、悪魔は、市場で塩を売っていた者たち――彼らは今や期待していた利益を得られなくなっていた――の心に、プロホールに対する激しい憎悪を煽り立てた。彼らは当時、塩で莫大な富を得られると考えていたが、大いに誤っていた。というのも、当初は高値で売っていた塩を、やがては誰一人として、たとえタダ同然の値段でも買い求めようとしなくなったからである。　塩を売買していた者たちは皆、集まってスヴィャトポルク公のもとへ赴き、聖人を誹謗し、こう言った。　「ペチェールスク修道院の修道士プロホールは、私たちから莫大な富を奪い取った。彼は皆を塩の購入に誘い込んだが、あなたに貢ぎ物を納めている私たちは、自分たちの塩を売ることができず、そのせいで破産してしまったのだ。」

公は彼らの話を聞き、商人たちの不満を鎮めると同時に、自らも富を手に入れようと画策した。彼は側近たちと相談し、塩の価格を引き上げ、プロホールから塩を奪い取り、自分の家来たちを通じて自ら販売することに決めた。公は、この扇動的な家来たちにこう言った。「お前たちのために、私もこの修道士から奪い取るつもりだ」。

あたかも商人たちを喜ばせたいかのように見せかけつつ、彼は心の中では富を得ることにしか関心がなかった。しかし、嫉妬心から、彼らに害を及ぼすことしか望んでいなかった。嫉妬とは、他者にとって有益なことを決して容認できないものだからである。

そこで、スヴィャトポルクはプロホールから塩をすべて没収するよう命じた。そして塩が運ばれてくると、彼は、その聖人を誹謗中傷していた反逆者たちと共に、自らそれを確認しに行った。すると、そこにいた者たちは皆、目の前のものが塵であることに気づいた。そこで公は数人にその塩を味見するよう命じたが、味もまた塵そのものだった。彼らは皆、この変化に驚き、首をかしげた。

その後、公爵はこの奇跡が最終的にどうなるかを確かめようと、その塵を三日間保管しておくよう命じた。その間、聖プロホルの元には塩を受け取ろうと大勢の人々が訪れていたが、塩が略奪されたことを知ると、それを成し遂げた者を呪いながら、何も持たずに引き返していった。

そこで、至福のプロホールは彼らにこう言った。「この塩が公爵によって捨てられたら、その時に来て、それを集めなさい」。

案の定、公爵はこの塩を三日間手元に置いておいたが、そこには塵以外何も見当たらなかったため、それを捨てさせるよう命じた。しかし、それを撒き散らした後、それは再び塩へと変わった。市民たちはこのことを知ると、その場所に集まり始め、喜びながら塩を拾い集めた。この驚くべき奇跡が起こると、聖人にそのような侮辱を加えた公爵は恐怖に襲われた。この奇跡は町中の人々の目の前で起こったため、隠すことはできず、彼はこれが何を意味するのか調べ始めた。　そこで、彼は至福のプロホールが行ったすべてのことを聞かされた――塵から変えられた塩のことだけでなく、彼が大勢の人々に与えたヒユのパンについても、そして、そのパンが至福の者の手から祝福を受けて受け取ると甘くなり、逆に、誰かがこっそりと手に取ると、苦く感じられたことについても語られた。

これらすべてを耳にしたスヴィャトポルク公は、自らの行いを恥じ、ペチェールスク修道院へ向かい、イオアンヌ修道院長と和解した。　それ以前、彼は、飽くことのない貪欲さや民衆への弾圧

を糾弾されたことを理由に、イオアンヌ修道院長と敵対していた。そのために、彼はイオアンヌをトゥロヴェに幽閉[1768] さえしたが、キリストを愛するヴラディミール・モノマフ公の擁護を恐れ、すぐに彼をペチェール修道院へ名誉ある形で戻した。

この奇跡の後、スヴィャトポルクは聖母マリアと、ペチェルスクの聖アントニウスおよび聖テオドシウスに対して深い敬意を抱くようになった。　また、至福のプロホールを、真の神の僕であると見なし、深く敬い、厚遇した。彼はプロホールに対し、今後誰に対しても暴力を振るわないと誓い、さらに次の約束でその誓いを確約した。　「もし、神の御心により、私があなたより先に死ぬこととなれば、あなたは私に対する悪意のなさを示すために、自らの手で私を棺に納めてほしい。もしあなたが私より先にこの世を去ることとなれば、私はあなたの棺を肩に担ぎ、自らあなたを洞窟へと運び入れ、あなたに対して犯した私の重い罪について、主から赦しを得たい」。

この約束の後、聖プロホルは、神に喜ばれる清らかで苦難に満ちた生涯を送り、長きにわたり生き続けたが、やがて病に倒れた。その頃、公爵はポロヴェツ族に対する遠征に出発していた。そこで聖プロホルは、自分の死の刻が近づいていることを公爵に知らせた。

「もし約束を果たし、神から罪の赦しを受けたいのなら、私のところへ来なさい。そうすれば、互いに赦し合い、あなたは自分の手で私を棺に納めることになるでしょう。　それゆえ、私はあなたの到来を待っている。もしあなたが遅れて、私があなたなしで息を引き取ることになれば、それは私の責任ではない。そして、あなたの戦いは、もしあなたが私のところに来ていたならば、あなたにとってそうは終わらなかっただろう。」

これを聞いたスヴィャトポルクは、軍を置き去りにして、直ちに病床のプロホールのもとへ向かった。聖人は、施し、来世の審判、永遠の命、そして果てしない苦しみについて、公爵に多くの教えを授け、彼に罪の赦しと祝福を与え、公爵を取り囲むすべての人々と別れを告げた。　そして、天に向かって両手を挙げ、その魂を神の御手に委ねた。スヴィャトポルク公は、修道士たちと共に尊者（プレポボドニー）の遺体を運び出し、洞窟へと移し、自らの手で棺に納めた。

その後、彼は遠征に出発し、ポロヴェツ人に対して完全な勝利を収めた。彼はポロヴェツ地方の住民のほぼ全員を捕虜とし、彼らを自らの領土へ連行した。この勝利は、神がロシアの地に授けたものであり、その地のために祈りを捧げていた聖人プロホールの預言によって成し遂げられたのである。　それ以来、スヴィャトポルク公は、敵との戦いや狩りに出かける際、常に祝福を受けるためにペチェルスク修道院に立ち寄り、そこで、　神によって築かれた教会で、深い熱意と感謝の念をもって、奇跡を起こす聖母マリアのイコンや、聖テオドシウスと聖プロホールの墓前に礼拝を捧げ、それから初めて出陣した。

それ以来、多くの過酷な試練を経て、至福のプロホールの祈りによって神の祝福を受けたスヴィャトポルクの統治は、幸いに続いた。キリストを愛するスヴィャトポルク・イジャスラヴィチ公自身も、証人として、この神に愛された聖人の奇跡と徴を、万人の前で公然と証しした。

ペチェルスクの奇跡行者、尊者プロホールの聖なる祈りによって、主キリストが今なお私たちすべてをあらゆる災いと悪しき状況から救い出されますように。なぜなら、彼には、その始まりなき父と、至聖なる、善き、命を与える御霊とともに、今、常に、そして世々限りなく、あらゆる栄光がふさわしいからです。

聖エンナファ、聖ヴァレンティーナ、聖パヴラの記念日。

2月10日の記念日

[1768] それはおよそ1107年のことだった。聖プロホールの聖遺骨は現在、アントニーの洞窟に安置されている。

聖殉教者エンナファ、ヴァレンティーナ、パウラは、パレスチナ地方の統治者フィルミリアヌスによって殉教の死を遂げました。聖エンナファはガザ出身[1769] 、聖ヴァレンティーナはケサリア近郊出身[1770] でした。二人はともに処女でした。 最初に、聖エンナファがフィルミリアヌスの裁判所に連行された。尋問の際、彼女は勇敢にも自らをキリスト教徒であると宣言した。そのため、統治者の命令により、彼女はまず残酷な拷問を受け、その後、柱に縛り付けられ、体を削り取られる刑に処された。 その後、聖ヴァレンティナがフィルミリアヌスの前に引き出された。彼女は異教の神々を崇拝しなかったとして告発され、総督は彼女に偶像への生贄を捧げるよう命じた。その目的で、彼女は裁判所の近くにある異教の神殿へと連行された。 しかし、聖女が神殿に連れて行かれると、偶像に生贄を捧げるどころか、彼女は勇敢にも祭壇に石を投げつけ、その上で燃え盛る火に背を向けた。すると、フィルミリアヌスは激怒し、彼女の脇腹を容赦なく殴打するよう命じ、その後、彼女と聖エンナフを共に剣で斬首する判決を下した。最後に、聖パウラが拷問の場へ連行された。 総督の命令により、彼女は様々な拷問にさらされたが、キリストの恵みの助けにより、彼女は大きな勇気をもってその苦しみに耐え抜き、拷問官は彼女を剣で斬首するよう命じた。 処刑の前に、彼女は神に感謝を捧げ、処刑に立ち会っていたキリスト教徒たちに頭を下げ、剣の下に頭を差し出し、こうして神に息を引き取った[1771] 。

2月24日

2月11日（旧暦）

聖司祭殉教者ブラシアス（セバスティアの司教）および彼と共に殉教した者たちの生涯と受難

記念日 2月11日

あの古代、不信心な者たちが偶像を崇め、多くの人々が自らの手で造った物や行いを崇拝していた時代、多くの聖人たちの信仰が輝きを放ち、その中でも聖なる栄光ある殉教者ヴラシイの敬虔さが際立っていた。 この聖人は、あらゆる悪事から遠ざかり、生涯を柔和かつ義にかなった、神に喜ばれる、非の打ち所のない生活を送りました。彼の同胞――カッパドキアにあったセバスティアの住民たち[1772] ――は敬虔な人々であり、ヴラシオを彼らの司教に任命してほしいと願い、その願いは叶えられました。 この新しい牧者は、キリストの教会に対して頻繁に迫害が加えられ、多くの人々が苦難に耐え、殉教の冠を授かっていた時代に、熱心にキリストの羊の群れを牧した。 当時、ディオクレティアヌス帝の治世下[1773] において、五人の殉教者の一人である聖大殉教者エウストラティオスは、仲間たち[1774] と共に、善き功績を成し遂げていた。彼はキリストの信仰のために血を流すまで立

[1769] ガザは地中海の沿岸に位置しており、古代にはフィリスティム人の5大都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の最南端の拠点となっていた。 4世紀にはすでにガザはキリスト教の都市となっていたが、7世紀にイスラム教徒に征服された。現在、かつての有名なガザには廃墟しか残っておらず、その周辺には同じ名称を持つ新しい都市が築かれている。この都市は、パレスチナでもかなり繁栄している都市の一つである。

[1770] ケサリアは、地中海に面したパレスチナの大きな都市であり、かつてはローマ皇帝の権力を代表するローマの総督たちが駐留していた。現在、ケサリアの跡地には、雑草に覆われた遺跡だけが残っている。

[1771] 308年、マクシミアヌス2世ガレリウスによって破壊された。

[1772] カッパドキアは、小アジアの東半分に位置する広大な地域である。セバスティアは、カッパドキアの北東部、小アルメニアとの国境にある都市である。

[1773] 284年から305年まで在位した。

[1774] 教会では12月3日に彼らの記念日が祝われる。

ち向かい、そのために牢獄に投じられた。そこで、聖ヴラシイは夜、多量の金で看守を買収して彼を訪ねた。　ブラジウスは、これほど勇敢に苦難に耐えていたキリストの殉教者を慰めた。エウストラティウスは、死を前にして作成した遺言書をブラジウスに託し、その中で自身の遺体や財産についての処分を定めていた。このことは、彼の伝記に記されている。　聖ブラジウスは、当時の他の多くの聖人たちと同様に、神の特別な御許しがない限り自ら拷問に身をさらすことなく、迫害者たちの手から身を隠していた。当時、この街に住んでいたキリスト教徒はごくわずかであり、それもまたキリストを密かに崇める者たちであった。大多数は、拷問への恐怖から、荒野や山々、洞窟へと逃れていた。　また、拷問に耐えきれなかった者の中には、一時的に偶像を崇拝した者もいた。聖ブラジウスもまた、ディオクレティアヌス帝の治世だけでなく、リキニウス帝の治世[1775]（この皇帝の治世下で彼は殉教した）においても、アルゲオス[1776]と呼ばれるある人里離れた山で、激しい迫害から身を隠していた；　そこで彼は洞窟に住み、沈黙と断食に励み、絶え間なく神に祈りを捧げていた。野獣たちが彼の元を訪れたが、聖人が沈黙のうちに神と語り合っているのを見つけると、まるで知性ある生き物であるかのように、彼の神への瞑想を妨げることなく、　むしろ洞窟の前に立ち、聖人が祈りを終えて彼らのところへ出てくるのを待ち、聖人が外に出て彼らに手を置いて祝福するまでは立ち去らなかった。また、もし動物の誰かが病気を感じたならば、聖人のところへやって来て、聖なる手の置かれによって癒やしを受けた。

この頃、イゲモン・アグリコライは、あらゆる手段を尽くしてできるだけ多くのキリスト教徒を滅ぼそうとし、彼らを様々な恐ろしい拷問にさらした。ある者は剣で斬り殺し、ある者は火あぶりにし、またある者は川に沈め、さらに他の者たちは獣の餌食にさせた。　特に後者の目的のために、彼は狩猟係たちに、できるだけ多くの猛獣を捕らえるよう命じた。　この命令に従い、猟師たちは狩りに出かけ、山や砂漠を巡り、聖ブラジウス司教が身を隠していたアルゲオス山にもたどり着いた。聖人の洞窟に近づき、その前で多くの獣たちがはしゃいでいるのを見て、彼らは互いに言った。「行ってみよう、そこで何が起きているのか見てみよう」。

近づいてみると、聖ブラジウスがまるで宮殿のように整えられた洞窟の中に座り、神に熱心に祈りを捧げているのが見えた。聖なる司教には何も告げずに、彼らは家に戻り、見たことをすべてイゲモン・アグリコラに報告した。　彼は多数の兵士に、猟師たちと共にそこへ赴き、そこに潜んでいるキリスト教徒を捕らえて自分のところへ連れてくるよう命じた。その山に到着し、洞窟に入ると、派遣された兵士たちは、そこでただ一人、聖ヴラシイだけが神に祈りを捧げ、その聖なる御名を賛美しているのを見つけた。

「ここから出て来い」と彼らはブラシアに言った。「そして、我々と共に町へ来い。イゲモンが君を呼んでいる。」

これを聞いて、聖人は喜び、こう言いました。

「よし、わが子らよ、一緒に行こう。主は私を覚えておられた。今夜、主は三度も私に現れ、『立ち上がって、司教としてのあなたの立場にふさわしい捧げ物を私に捧げなさい』とおっしゃったのだ。」　さあ、わが子らよ、あなたがたは今日、まさに時宜を得てここへやって来た。わが主イエス・キリストが、あなたがたと共にありますように。」

道中、異教徒たちは聖人の柔和さを見て、その教えに耳を傾け、またその奇跡に感銘を受け、真の神へと立ち返った。　というのも、彼の祈りによって、多くの病人に主から癒しが与えられ、それは人だけでなく動物にも及んだからである。病人が彼のもとに運ばれたり連れて来られたりすると、彼はその人たちに手を置き、彼らのために祈りを捧げ、完全に健康な状態で帰した。ある女性には

[1775] 307年から324年まで在位した。

[1776] アルゲオス（別名アルゲイ）は、頂上は永久雪に覆われ、麓は美しい森に囲まれた、小アジアの大きな山であり、アンティタヴロス山脈の一部で、カッパドキア北西部に位置する。

一人息子がいたが、　食事の最中に魚の骨が喉に詰まり、一言も発することができず、すでに死の淵にありました。母親は半死半生の息子を抱き上げ、聖人のもとへ運び、その足元に寝かせ、悲しみに暮れて泣き叫びながらこう訴えました。「わが子を憐れんでください。私たちの救い主イエス・キリストのしもべよ、彼は私にとってたった一人の息子なのです。」

その際、彼女はヴラシイに、自分の息子に何が起きたのかを話した。神の聖人は、その少年の喉に手を当て、天を仰ぎ見て、主に向かってこう祈り始めた。「わが救い主よ！　あなたは、信仰をもってあなたを呼び求めるすべての人を助けてくださいます。どうか私の祈りを聞き入れ、この少年の喉に詰まった骨を、あなたの目に見えない力によって取り除き、彼を癒してください。　また、今後、人間や動物に何かが起こり、人々が『神よ、あなたのしもべヴラシイの祈りによって助けてください』と言って私の名を呼び求めるならば、助けに速やかにお出でになる主よ、彼らを助け、あなたの聖なる御名の栄光と誉れのために癒やしをお与えください」。

このように祈ると、彼は少年を癒やし、その母のもとへ返した。母は大きな喜びのうちに、絶え間なく神に賛美を捧げた。このような奇跡の結果、ヴラシイの名はセバスティアだけでなく、ニコポリス[1777] でも広く知れ渡った。聖人がまだ道中、セバスティアからそう遠くない場所にいたとき、次のような出来事が起こった。

ある貧しい未亡人は、子豚一頭しか持っていなかったが、狼が忍び寄り、それを捕らえてしまった。　その貧しい女性は悲しみのあまり激しく泣き出した。聖人が近づいてくるのを見ると、彼女は聖人の元へ駆け寄り、涙ながらに自分の悲しみを打ち明けた。聖人は微笑んで、彼女にこう言った。「悲しみに暮れてはいけません、女性よ。泣かないでください。あなたの子豚は、生きて無傷のままあなたのもとに戻ってくるでしょう。」

そう言うと、聖人はその道を歩み続けた。一方、その貧しい未亡人のところへ、歯に彼女の子豚をくわえたあの狼が駆け寄ってきた。狼は子豚を無傷のまま彼女の前に放すと、砂漠へと逃げ去った。未亡人は子豚を抱き上げ、喜びながら神を賛美した。

聖ブラジウスがセバスティアに到着すると、イゲモン（地方長官）のアグリコライはそれを知ると、直ちに彼を牢獄に投獄するよう命じた。　翌日、法廷の席に着いたアグリコライは、神の聖人を自分の前に連れてくるよう命じた。聖人を見ると、イゲモンはまず、次のようなお世辞を並べて彼に語りかけた。「喜びなさい、ヴラシイよ。わが神々、そして我らが愛する友よ！」

これに対し、聖人はこう答えた。「あなたも喜びなさい、権威あるイゲモンよ。しかし、彼らを崇拝する者たちと共に永遠の火に投げ込まれる悪魔たちを、神々と呼んではならない。」

怒りに駆られたイゲモンは、聖人を容赦なく殴打するよう命じた。長い拷問の末、聖人は再びイゲモンにこう言った。「人間の魂を惑わす狂人よ、果たしてあなたは、その拷問によって私を真の神から遠ざけられるとでも思っているのか？　いいえ、それは不可能です。私は、私を強めてくださるイエス・キリストに信頼を置いているからです。とはいえ、お望みのままになさってください。」

聖人の揺るぎない信仰を見て、イゲモンは彼を再び牢獄へ連れ戻すよう命じた。

すると、その貧しい未亡人は、聖ブラジウスがキリストのために耐えた勇敢な苦難と、聖なる信仰における彼の揺るぎない不屈の精神に深く感銘を受け、狼の牙から無傷で救い出した子豚を屠り、頭と足を茹でて皿に盛り、　さらに、彼女の貧しさの許す限り、種や畑の収穫物、野菜も添えた。これらすべてを籠に隠し、蝋燭に火を灯すと、彼女はこの小さな籠を聖人のいる牢獄へ運んだ。殉教者の足元にひれ伏し、彼女は聖人にこの食事を取って口にしてくれるよう懇願した。　神を賛美した後、聖人は持ち込まれた食べ物を口にした。そして、未亡人を祝福して、こう言った。　「女よ、毎年このように私の記念を執り行いなさい。そうすれば、あなたの家には必要なものが何一つ欠けるこ

[1777] ニコポリスは、小アルメニアにある都市で、リクス川にほぼ隣接する国境に位置し、現在はエンデレスと呼ばれる。

とはないだろう。もし他の誰かがあなたに倣って私の記念を執り行うならば、その人は神の賜物を豊かに受け、主の祝福が彼の一生を通じて彼の上にとどまるであろう。」

敬虔な未亡人は、聖人からそのような教えを受け、神を賛美しながら自分の家へ戻った。彼女には、福音書の次の言葉が当てはまる。*「全世界で、彼女の記念と、彼女がしたことが語られるであろう」*（マタイ26:13）。

一方、不敬虔な拷問官は、再び裁判の席に着くと、聖ブラジウスを拷問のために連れてくるよう命じた。

「ブラジウスよ」と彼は殉教者に言った。「神々に犠牲を捧げるか？　そうすれば、命は助かる。それとも、苦痛に満ちた死を望むのか？」

これに対し、聖人はこう答えた。

「『天と地を造らなかった神々は、地から、また天の下から消え去る』（エレミヤ書10:11）。そして、お前が脅かすその死こそが、私に永遠の命を与えてくれるのだ。」

聖人の信仰の揺るぎなさを目の当たりにしたイゲモンは、彼を裸にして木に吊るし、鉄の道具で激しく削るよう命じた。長い拷問の末、聖なる殉教者はイゲモンにこう言った。

「不義で汚れに満ちた者よ、イエス・キリストが私を助けてくださるのに、果たして傷で私を脅かすつもりなのか。私はあなたの目に見える苦痛を恐れない。なぜなら、神を愛する者たちに約束された、目に見えない将来の祝福を見つめているからだ。」

その後、拷問官は彼を木から降ろし、再び牢獄へ連行するよう命じた。聖ブラシアスが監禁場所へ連行される際、七人の敬虔で神を畏れる女性たちが彼の後を追い、聖人の体から地面に滴り落ちる血を集めて、その血を自らの体に塗っていた。聖人を護送していた役人たちはこれを見て、彼女たちを捕らえてイゲモンのもとに連れて行き、こう言った。

「この女性たちもまた、キリストの信奉者です。」すると、イゲモンは女性たちに向き直り、こう言った。

「考え直せ。神々に生け贄を捧げれば、私から大きな栄誉を与えよう。」

誠実で聖なる女性たちは、彼にこう答えた。

「イゲモンよ、もしあなたが私たちにあなたの神々を拝み、犠牲を捧げることを望まれるのなら、まず私たちは身を清めなければなりません。それでは、最も近い湖へ行き、慣習に従ってそこで顔と全身を洗いましょう。あなたの神々もそこに連れてくるよう命じてください。身を清めた後、私たちはその湖のほとりで神々を拝みます。」

喜んだイゲモンは、自分の偶像を運ばせるよう命じた。それらを袋に入れ、錫で封印すると、イゲモンはそれを女性たちに手渡した。そして、兵士たちに、偶像を携えた女性たちを湖の岸まで護衛し、そこから再び敬意を込めて連れ戻すよう命じた。　女性たちは偶像の入った袋を肩に担ぎ、湖の岸へと運んだ。湖が非常に深い場所に着くと、彼女たちはまるで兵士たちの前で服を脱ぐのを恥ずかしがるかのように、兵士たちに少し離れて待つよう頼み、清めの儀式を終えるまで待ってもらった。　戦士たちが離れると、女性たちはそれぞれが運んでいた偶像を湖に投げ込み、邪悪な偶像たちは鉛のように素早く水底へと沈んでいった。これを見た戦士たちは怒りに駆られて彼女たちを捕らえ、イゲモンのもとへ連行し、偶像が水に沈められたことを報告した。　イゲモンは怒りで顔色を変え、まるで獅子のように兵士たちに唸りつけた。「この悪辣な家来どもめ、なぜ神々を留めておかなかったのか。なぜ女たちが神々を湖の深みに投げ込むのを阻止しなかったのか？」

これに対し、兵士たちはこう答えた。「尊きイゲモンよ、これらの女たちはあなたを欺き、悪意を持ってあなたの神々を奪い去ったのです。我々は彼女たちの狡猾さに気づかず、神々を留めておくことができませんでした」。

すると、聖なる妻たちもイゲモンにこう言った。　「真の神は人間の諂いなど知りません。しかし、無機質な石や木、金や銀で造られたあなたの神々は、私たちの諂いによって奪われ、湖の底に

沈められました。彼らは私たちの手から逃れることも、溺れることから身を守ることもできませんでした。それなのに、どうして他人を救い、災いから守ることができるというのでしょうか？」

激怒したイゲモンは、炉に火を点け、錫を溶かし、鉄の櫛と三叉の矛、そして衣服を模して作られた真っ赤に焼かれた七枚の銅板を持ってくるよう命じた。これらすべてを片側に置くよう命じ、もう片側には柔らかな衣や様々な女性の装飾品を並べ、それらの聖なる女性たちにこう言った。 「二択から一つを選びなさい。神々にひれ伏し、彼らに生贄を捧げれば、命は助かり、あの明るい衣と貴重な装飾品を身にまとうことができる。もしそれに従わなければ、あなたたちのために用意されたこれらすべての苦痛に耐えなければならない。」

二人の息子――少年たち――を持つ女性の一人は、明るい色の衣を掴んで炉に投げ込み、そこでそれは燃え尽きてしまった。すると少年たちは母にこう懇願した。「愛する母よ、私たちを この地で滅びるままにしないでください。あなたがこの地で甘い母乳で私たちを育ててくださったように、私たちが天の御国にたどり着けるよう助けてください」。

その後、総督は彼らを裸のまま吊るし、鉄の櫛で体を削るよう命じた。すると兵士たちは、彼らの傷口から血の代わりに乳が流れ出し、その体が雪のように白くなっているのを見た。天から降りてきた神の天使たちは、苦しみの中にある聖なる女性たちを力づけ、次のように慰めた。 「恐れるな。善き農夫のように、その業を続けなさい。農夫は収穫を始めれば、それを終える。仕事を成し遂げれば、主から感謝と報いを受け、喜びをもって家路につく。あなた方も同様に、私たちの救い主イエス・キリストから永遠の至福の命を得るために、その業に励みなさい」。

その後、イゲモンは彼らをその木から降ろし、火の炉に投げ込むよう命じた。彼らがそこに投げ込まれると、火はたちまち消え、彼らは何の傷も負わずに炉から出てきた。すると、イゲモンは彼らにこう言った。

「その魔術を捨て、我らの神々に犠牲を捧げよ。」

聖なる女性たちは口を揃えてこう答えた。

「悪魔の子よ、お前に幸いなどない。私たちは主イエス・キリストを見捨てることはしない。石や木、偶像、つまりお前のような耳も耳も聞こえず、感覚もないものにひれ伏すこともない。私たちは天の御国へと招かれているのだから。」

これを聞いたイゲモンは、剣で彼女たちの首を刎ねるよう命じた。彼女たちが処刑の場へ連行されると、兵士たちにこう懇願した。

「少し待ってください。私たちが神に祈る間だけ。」

彼らはひざまずき、こう祈り始めた。「偉大で栄光に満ちた私たちの神よ、あなたに栄光あれ。永遠に君臨し、私たちを救いの道へと招いてくださったキリストよ、あなたに栄光あれ。なぜなら、私たちに闇を捨て、あなたの真の光へと歩み出すよう促してくださったあなたほど偉大な方はいないからです！ 主よ、どうか私たちを、あなたの最初の殉教者テクレの仲間に加えてください。また、私たちを真の道へと導いてくださった、私たちの最も聖なる父であり牧者であるヴラシイによる、私たちのための祈りをお受けください。」

このように祈り終えて地から立ち上がると、彼らは天に向かって両手を広げ、目を上げ、清らかな心をもって心を一つにして神に叫びました： 「栄光はあなたにあります、私たちの神キリストよ。あなたの聖なる御名のゆえに、私たちをこの場所に、まるで屠られる羊のように立たせてくださったことを感謝します。私たちはあなたへのいけにえとなることを願います。どうか私たちの魂を、あなたの天の祭壇にお受け取りください」。

前述の二人の少年は、母のもとへ歩み寄り、こう言った。

「母よ、天の主からの冠はあなたのために用意されています。私たちを、善き殉教者である至聖なるヴァラシウス司教にお任せください。」

すると、処刑人が近づき、七人の聖なる妻たちの尊い首を切り落とした。これが彼女たちの最期であった。

その後、イゲモンは聖ブラジウスを牢獄から連れてくるよう命じ、彼に尋ねた。

「今、神々に犠牲を捧げるか、それとも捧げないか？」

「呪われた盲人よ」と聖人は答えた。「あなたは真の光を見ていない。生ける神を知った者の中で、誰が犠牲を捧げたり、魂のない偶像にひれ伏したりするだろうか？　知れ、曇らされた不敬虔な者よ、お前は生ける神を見捨て、無感覚な石を崇拝しているのだ。私はお前の脅しなど恐れない。好きに私を苦しめよ――見よ、私はキリストのためにこの身をあなたに捧げる。ただ神のみが、私の魂を支配する権威をお持ちである。

すると、総督は聖人にこう言った。

「もし私がお前を湖に投げ込むよう命じたら、お前が崇拝するそのキリストは、その時、お前を助けることができるというのか？」

「盲目で愚かな者よ」と聖人は答えた。「お前は偶像を崇拝して、自分は救われたと思っている。しかし、私はキリストを崇拝しているのだから、水の上で私の神の力を、お前に示してやらないとでも言うのか？」

そこで、総督は彼を湖まで連行し、湖の深みに投げ込むよう命じた。　しかし、聖人は湖岸に着くと、水に十字を切って祝福し、まるで乾いた地を歩くかのように水の上を歩き、湖の真ん中に達すると、まるで地面の上に座るかのように水の上に腰を下ろし、岸に立っていた兵士たちや迫害者の家来たちに向かって、次のように語りかけた。

「もしあなたがたに神々がいるのなら、その力を示してみよ。さあ、あなたがたも水の上を歩いてみよ。」

すると、六十八人の男たちが、それぞれの神々の名を呼びながら、水の上を歩こうとして湖に入ったが、皆、まるで鉛のように突然水の中に沈み、死んでしまった。　一方、主の天使は天から聖人のもとへ降りてきて、　、彼にこう言った。「神の恵みに満ちた司教よ、水から上がり、神があなたのために用意された冠を受け取りなさい」。

地上に降り立った聖人は、輝く雪のように輝く顔で、イゲモンの元へ行き、彼を叱責した。すると、イゲモンはヴラシイに対して次のような死刑宣告を下した。「ヴラシイは私に服従せず、王を軽んじ、我らの神々を冒涜し、その魔術によって水中で六十八人の男たちを滅ぼした。これらすべての罪により、彼は二人の少年たちと共に剣で斬り殺されなければならない」。

ヴラシイは少年たちと共にイゲモンの元から連れ出された。処刑場に着くと、彼は自身の罪、全世界、とりわけ彼の記念を執り行う者たちのために祈った。そして、そうした者たちについては、いかなる病にも見舞われず、彼らの家があらゆる恵みに満ち、彼らの祈りが聞き届けられるよう祈った。　その時、天から明るい雲が彼の上に降りてきて彼を覆い、その雲の中からキリストの声が聞こえた。「わが愛する修道士よ、お前の願いはすべて叶えてやろう。」

そこで、処刑人は彼の尊い首を切り落とし、続いて前述の二人の少年たちも、セバスティアの城壁の外にある一つの岩山で処刑された。これは、[1778] 年の2月の11日に起こったことである。

エリッサという名の敬虔な女性が、殉教者たちの聖なる遺体を運び出し、その場所で尊く埋葬した。聖人の墓からは、病める者たちに癒しがもたらされた。

キリストの聖人ブラシアスの苦難に満ちた最期を知った前述の女性は、一頭の子豚を飼っていたが、近所の人々や知人を集めて聖人の記憶を称え、神はその家をあらゆる豊かさで祝福された。彼女に倣って、他の敬虔な人々もまた、毎年聖ヴラシウスの記念を執り行うようになった。彼らは教

[1778] 聖殉教者ブラジウスは、316年頃に殉教した。その聖遺骨は十字軍遠征の際に西欧へ移され、その一部はヨーロッパの多くの国々に保管されている。

会に蝋燭と香を捧げ、同じ信仰を持つ人々の家に集まり、貧しい者や困窮している人々に施しを与えた。それ以来、今日に至るまで一部の人々が今も守り続けている、あの敬虔な慣習が始まったのである。すなわち、　聖殉教者ヴラシウスの記念を、最初にそのような記念を行ったあの未亡人の模範に従って執り行うことである。この記念は、父と聖霊と共に、永遠に賛美され、崇められし我らの主イエス・キリストの栄光のために行われる。アーメン。

トロパリオ、第2調:

神聖なる若木、枯れることなき花、キリストのぶどうの木に生える多難な枝よ、神を宿すヴラシイよ、信仰をもってあなたの記念を尊ぶ者たちを、あなたの喜びで満たし、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

別のコンダク、第8調:

聖油による聖別と、血による殉教によって飾られた、栄光あるヴラシエよ、あなたは天上で喜び歌い、私たちを見守りながら至る所で輝いておられます。あなたの聖堂を訪れ、そこで絶えずあなたを呼び求める私たちすべてを、どうか守ってください。

聖テオドラ王妃の記念日。

記念日：2月11日

聖テオドラは、聖像破壊者テオフィロス王の妃であった[1779]　が、夫の聖像破壊の異端には同調しなかった。聖像破壊者である王は、コンスタンティノープル総主教メフォディオスを首都から追放し、その代わりにアンニオスを任命し、聖なるイコンを焼き払った。　一方、情熱的なテオドラ皇后は、公然と聖像を崇拝することは明らかに敢えてしなかったものの、密かに寝室に聖像を安置し、夜通し祈りを捧げ、神が正教徒に御慈悲を授けてくださるよう懇願した。彼女にはミハイルという名の息子がおり、彼を正教の信仰のもとで育て上げた。　夫の死後、福者テオドラは再び聖メフォディオスをコンスタンティノープル総主教の座に復帰させ、聖公会を招集した。その公会において、聖像破壊派は 呪われ、アニーは総主教の座から追放され、聖なるイコンは神の教会に[1780] 持ち込まれた。 聖公会の全教父たちとの協議を経て、テオドラは夫のために神に祈りを捧げ、彼が永遠の苦しみから救われ、言葉に尽くせぬ命を得られるよう願った。　その後、至福の女王テオドラは敬虔に精進し、やがて間もなく、自らの魂を、彼女が慕い求めていた神に委ね、王位を息子のミハイルに譲った[1781] 。

聖ディミトリ・プリルツキー、ヴォロゴダの奇跡行者の記念日

記念日：2月11日

[1779] 聖像破壊派のテオフィロス皇帝は、829年から842年まで在位した。

[1780] こうして、842年のコンスタンティノープル公会議において、聖像崇敬の復活が実現した。これを記念して、当時、教会において特別な「正教の儀式」が制定され、現在も聖四旬節の最初の日曜日に執り行われている。

[1781] ミハイル3世皇帝は855年から867年まで在位した。

尊者にして神に愛された我らの父ディミトリイは、ペレヤスラヴリの町[1782] の敬虔な両親の元に生まれました。幼い頃から彼は学問に励み、聖書の読解に熟達しました。多くの同世代の者たちよりも知性に優れ、常に心の中に秘めていた謙虚さと知恵によって、彼らの間で際立っていました。この福者は、来たるべき世、神の裁き、各人の行いに応じた報い、天の御国、義人の喜び、そして楽園の至福について、しばしば思索にふけることを好んだ。 旧約聖書と新約聖書を深く学んだ聖人は、この世の命がいかに儚いものであるかを悟りました。それゆえ、彼はまもなくこの虚しい世を離れ、心を和ませ、神への畏敬の念を抱き、そのペレヤスラヴリにあるナゴルヌイ・ボリソグレブ修道院で修道者となりました。 そこで、徳ある生活に熱心に励み、霊的な節制と祈りに努め、清らかさ、極度の謙遜、そしてすべての人への霊的な愛によって際立っていた。 このように、勤勉でたゆまぬ神に奉仕する修行者は、昼夜を問わず主の律法を学び、救いの実を結び、貞潔と清らかな心をもって神を求め、天使に等しい生活を送った。修道士たちや庶民は、その偉大な徳ゆえに聖人を愛した。しばらく時が経つと、神は尊者ディミトリウスに司祭の聖職を受ける恵みを与えられた。当時、ラドネジの奇跡行者である尊者セルギイは、ラドネジの近くに聖三位一体の名を冠した修道院を建立し、神の御心により、そこに修道共同体を設立した。 聖ディミトリは、修道共同体をいかにしてより良く運営し、選ばれた人々を神のもとへ導くかについて、霊的な対話を交わすために、しばしば聖セルギイを訪ねた。 その後、聖ディミトリは聖ニコライ・チュドトヴォレツに捧げる教会を建設し、その傍らにペレヤスラフ湖のほとりに修道院を設立した（[1783] ）。そして、彼はその修道院のイグメン（院長）となった。 霊的な益を求めて、その修道院で生活したいと願う多くの修道士や信徒が尊者のもとに集まってきた。そして、尊者は彼らを受け入れ、謙虚に教えを説き、信徒たちを聖なる修道者の位に叙階した。こうして、彼はキリストの「言葉の羊」たちからなる大きな神の群れを自らのもとに集めたのである。 その後まもなく、尊者は自身の修道院に共同生活施設を設け、厳格な規則を定めた。兄弟たちは、神の天使であり真の導き手、とりわけ天国の仲介者として、あらゆる面で愛と従順をもって聖人に従った。 その後、世間の栄誉を避けて[1784] 、至福のディミトリイはここからヴォログダへと去った。そこで、町のほど近く、ヴォログダ川の曲がり角[1785] にある人里離れた場所を好んで、ここに「全き慈悲の救い主」の名を冠した教会を建立し、共同生活を行う修道院[1786] を設立した。 尊者がプリルキに定住したとの噂が広まると（ ）、多くの弟子がペレヤスラヴリから、愛する師のもとであるプリルキへと移り住んだ。また、修道生活を求める多くの人々が、他の様々な地域からも尊者のもとを訪れた。 こうして、共同生活の場であるプリルキの修道院が形成された。そして

[1782] ペレヤスラヴリ・ザレスキー（北）は、現在、ウラジーミル州の県都である。

[1783] 現在、いわゆる「ニコラエフスキー・ナ・ボロテ」は、ペレヤスラヴリ・ザレスキーにある非公認の修道院である。

[1784] 尊者ディミトリの崇高な生き方に関する噂は、モスクワ大公ディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーの耳にも届き、彼は尊者を招いて、自分の子供たちの代父になってもらうよう依頼した。 尊者は大公の願いを叶え、修道院のために彼から惜しみない寄進を受けた。その後、彼はペレヤスラヴリの修道院を離れ、人里離れた場所へ退隠することを決意した。

[1785] 「ルカ」とは、曲がり、湾曲、川に囲まれた湾曲した岸、岬を意味する。

[1786] それは1371年のことだった。スパソ＝プリルツキー（二級）修道院は、ヴォログダから15ヴェルスタの場所に位置している。修道院の設立に際し、その土地の所有者たちは、敬愛の念を込めてその土地を尊者へ譲り渡した。 ヴォログダの市民たちにも熱心な献身が見られた。誰もが、聖堂の建設のために、できる限りのものを尊者へ寄付しようと急いだ。大公ディミトリ・ドンスキーは、ディミトリ尊者による新しいスパソ＝プリルツキー修道院の設立を知ると、自らその修道院へ寄付を送った。

、聖ディミトリイはここに数多くの修道士たちを集めた[1787] 。彼の指導に委ねられた「言葉の羊」であるキリストの群れを立派に牧した聖人は、1392年2月11日に主のもとへ召された[1788] 。

トロパリオ、第1声：

神より、尊者よ、あなたは霊的な恵みを受け、彼によってのみ、あなたは知られた、幸いな者よ。それゆえ、あなたもまた霊によって、来たるべき世における神の最上の住まいを知り、自らの修道院において断食によって試練に耐えた。　今や天使たちと共に喜び歌いながら、聖ディミトリよ、私たちのために救い主へ祈ってください。そうすれば、私たちは皆、こう叫ぶでしょう。「あなたに力を与えた方に栄光あれ、あなたを冠した方に栄光あれ、あなたを通してすべての人を癒やす方に栄光あれ。」

コンダク、第8調：

若き日から、尊き者よ、あなたは御自身の十字架を背負い、キリストに従い、祈りと断食、そして徹夜祷と苦難によって、御自身の肉体を疲れさせました。　それゆえ、すべてを見通す御目は、あなたの労苦をご覧になり、その奇跡をもってあなたを称え、すべての人々にあなたを称えるよう導かれます。「喜びなさい、尊き父ディミトリよ、断食者たちの励ましよ。」

聖なる信仰深い公爵ヴェセヴォロドの記念日。彼は聖なる洗礼においてガブリエルと名付けられた。

記念日：2月11日

聖なる信仰深い公ヴセヴォロド（洗礼名ガブリエル）は、大公ムスティスラフの息子であり、ムスティスラフは著名なウラジーミル・モノマフの息子であった[1789] 。1117年、高齢となったウラジーミル・モノマフは、自身の補佐役とするため、息子ムスティスラフをキエフのベルゴロド[1790] に据え、その代わりに、ムスティスラフの息子であり自身の孫である至福の公ヴセヴォロドを、ノヴゴロドの公に任命した。　至福の公ヴセヴォロドは、正教の公にふさわしいように、神に奉仕する生活を送り、任された公国を公正に統治した。彼はあらゆる善行と善良な人柄で際立っており、神を畏れ、

[1787] 尊師は、その功績と徳行によって、修道院に集まった修道士たちにとって高潔な模範となり、同時に絶えず彼らを教え導いた。彼は貧しい人々への愛と慈善の心で際立っていた。　自身は常にプロスフォラと温かい水だけで満足しつつ、修道院の農地を巡回し、修道士たちの食事に必要なものがすべて時間通りに届けられるよう配慮していた。　彼の服装は冬も夏も同じで、羊皮の古びたコート一着だけだった。その下では、夏は暑さで汗だくになり、冬は寒さに震えていた。しかし、修道士たちのためには、彼らと共に作業に出かけていた。　他の人々に涙を流して祈る姿を見られないよう、彼はしばしば、教会の左側にそのために建てられた木造の別棟がある人里離れた場所へ、祈りのために身を引いた。その崇高な自己犠牲と自己否定の行いによって、尊者ディミトリイは高い霊的完成に達し、洞察の賜物を受けるに至った。

[1788] 聖ディミトリイの遺体は、彼が建立したスパースカヤ教会に埋葬された。その棺のそばでは、また彼の祈りの取り次ぎによって、奇跡や様々な癒しが起こった。そして現在も、聖ディミトリ・プリルツキーの聖遺骨は、大公イオアン3世がカザン遠征の際に携行していたこの聖人の奇跡を起こす聖像が安置されているのと同じ教会に眠っている。

[1789] ヤロスラフ・ムドリーの孫であるウラジーミル・モノマフは、古ロシアの公の理想像であり、特に敵対する諸公の間で和平を仲介した人物として知られている。1114年から1125年まで、キエフ大公を務めた。

[1790] ベルゴロドは、キエフ公国の小さな町であるが、ウラジーミル大公の継承者たちが統治していた時代には司教座を置き、一時期、分領の拠点となっていた。　現在は、キエフ州および同郡に属するイルペン川沿いの村であり、キエフ都主教の所有地である。1900デシャチン以上の土地と*1万1200人を超える住民を擁し、教区教会がある。*

誠実で、穏やかで柔和であり、すべての人に対して偽りのない愛を抱いていた。 ヴセヴォロド公は神の聖堂を建立することを愛し、教会や修道院の秩序を重んじ、彼らに惜しみない施しを与え、神の兄弟として敬った。 彼の教会建設への熱意の証として、 のノヴゴロドの交易広場、ペトリアティンの広場に、彼が建設した聖ヨハネ・洗礼者名に因む壮麗な教会が挙げられる。この教会には付属礼拝堂があり、高価なイコン、極めて貴重な福音書、そしてあらゆる礼拝用書物が備えられていた。 彼は特別な勅書により、すべての交易品にかかる関税の一部を、聖堂と聖職者たちの維持費に充てることを定めた。その関税の相当部分は、ソフィア大聖堂の維持費にも充てられていた。敬虔なこの公は、未亡人や孤児の擁護者であり、貧しい者たちに慈悲深く接し、病弱な者たちを慰め、豊かな食糧を配った。 1132年、至福の公ヴセヴォロドの父であるムスティスラフ[1791] がキエフで死去し、キエフの大公位にはムスティスラフの弟ヤロポルクが就いた。ヤロポルクは、キエフに次ぐ重要都市とされていた南部のペレヤスラヴリをヴセヴォロドに与えた[1792] 。 ノヴゴロドの人々は不満を抱きつつも、ヴセヴォロドを見送った。一方、ヴセヴォロドの叔父であるモノマフの末息子たちは、大公が甥をキエフ王位の継承者にしようとしていると推測し、ペレヤスラヴルをめぐって大公に反旗を翻した。 その公爵の一人、ユーリー・ウラジーミロヴィチ[1793] は、ヴェセヴォロドに対して武力を行使し、ペレヤスラヴリを占領しようとした。聖人はこのことを聞き、内乱を避けるため、流血を伴わずにペレヤスラヴリからノヴゴロドへと去り、ペレヤスラヴリをユーリー公に委ねた。

この間、自由気ままなノヴゴロドの人々は、ヴェセヴォロドの恩恵に満ちた統治をすでに忘れてしまい、当初は彼を受け入れる気はなかったが、すぐに考えを改め、彼らにこれほど多くの慈善を行ってくれた公を招き入れた。その直後、至福の公ヴェセヴォロドは、ノヴゴロドの人々の要求により、彼らと共にスーズダリとロストフへの遠征に出ることを余儀なくされた[1794] 。 血なまぐさい戦いが繰り広げられたが、スーズダリ人とロストヴィチ人が勝利を収めた。もっとも、彼らの犠牲者はノヴゴロド人よりも多かった。同年、聖なる公爵は敬虔な大司教ニフォントと共に、聖クリメントに捧げる壮麗な石造りの教会を建立したが、その完成には至らなかった。 1136年5月、ノヴゴロドで反乱が勃発した。高慢でわがままなノヴゴロドの人々は、スーズダリ人に対する勝利を誇示できなかったことへの怒りから、聖公ヴェセヴォロドに対して反旗を翻し、彼を廃位したと宣言した。 「お前から助けは得られない」と彼らは聖人に告げ、彼をノヴゴロドから追放した。

そこで、至福の公ヴセヴォロドは、キエフへ赴き、叔父である大公ヤロポルク――ウラジーミル・モノマフの息子――のもとを訪れた。ヤロポルクはヴセヴォロドにヴィシュゴロドの統治を任せた[1795] が、至福の公はそこに長く留まることはなかった。 プスコフの人々は、ヴェセヴォロドの善行

[1791] 聖なる福者ヴェセヴォロド公の父であるムスティスラフ・ヴラディミロヴィチは、1125年から1132年までキエフ大公であった。彼の後を継いだのは弟のヤロポルクで、1132年から1138年までキエフで統治した。

[1792] ペレヤスラフ公国は、キエフ大公国に次ぐ第一の公国と見なされていた。南ペレヤスラフは、現在、ポルタヴァ県の県都であり、アリイ川とトルベジェ川のほとりに位置している。

[1793] ユーリー（ゲオルギー） ウラジーミロヴィチ・ドルゴルーキーは、ウラジーミル・モノマフの末子であり、スーズダリ公、その後1148年から1150年にかけてキエフ大公を務めた。その後、イジャスラフ・ムスティスラヴィチによって追放されたが、しばらくして再びキエフ大公国を掌握した（ただし、その期間は短かった）。

[1794] その経緯は以下の通りである。イジャスラフ・ムスティスラヴィチは、権力欲の強いユーリー・ドルゴルーキー公の好意により、ムスティスラヴィチ家を公然と侮辱していたユーリーに対抗するため、トゥーロフからノヴゴロドに助けを求めてやってきた。ノヴゴロドの人々は騒然となり、ユーリーに対してイジャスラフを守ることを志願した。 至福の公ヴセヴォロドは叔父と関わりたくなかったが、聖ミハイルは冬の遠征の危険性を指摘し、ノヴゴロドの人々に遠征を思いとどまらせようとした。しかし、結局のところ、ヴセヴォロドはノヴゴロドの人々の意向に従わざるを得ず、スーズダリやロストフの軍勢に対する遠征に出ることにした。

[1795] ヴィシュゴロド――キエフ近郊の小さな町。

と優れた資質を高く評価し、彼に自分たちの元へ来て公として治めてほしいという切実な願いを込めて、代表者をヴィシュゴロドへ派遣した。当時、プスコフには公がいなかったからである。聖ヴェセヴォロドはこれに応じ、プスコフへ赴いて統治を始めた。 道中、ポロツク[1796] の近くを通った際、ポロツクの公ヴァシルコは聖人の到来を聞きつけ、急いで出迎えた。そして、キリストの名において兄弟としての口づけと挨拶を聖人に捧げ、多くの贈り物を贈り、盛大な祝賀のうちに彼を見送った。
一方、プスコフの住民たちは、聖職者たちを先頭に、尊い十字架を掲げて、至福の公爵ヴセヴォロドを出迎え、こうして彼を街に迎え入れた。聖人の到来により、プスコフには大きな喜びが満ち溢れた。　同様に、聖人も、まるで天のエルサレムであるかのようにプスコフに到着したことを喜び、その聖遺骨がそこに安置されることを霊によって予見していた。そして直ちに公としての統治を開始し、亡くなるその日までプスコフの人々を公正に治めた。　敬虔な公は直ちに聖三位一体の名を冠した石造りの教会を着工し、翌年には完成させた。ラテン教徒の諸民族　は皆、聖人の名そのものを恐れ、プスコフを攻撃する勇気さえ持てなかった。聖公ヴセヴォロドはプスコフで1年余り統治した。 その後、神の御心により、彼は重い肉体の病に倒れた。魂の旅立ちに際し、キリストの聖なる御体と御血を拝領し、家族およびプスコフのすべての市民に平安を授けた後、主のもとへ旅立ち、すべての聖人が安らぐ場所において、先立つ聖人たちの傍らに加わった。　至福の公ヴェセヴォロド＝ガブリエルの帰天は、1138年2月11日、チーズ週間の木曜日にあった。聖人の遺体は、プスコフの全市民、修道院長、そして多くの聖職者たちによって栄誉をもって送られ、聖大殉教者ディミトリウス・ソロンスキー教会に安置された。　また、至福の公ヴェセヴォロドの剣と盾は、プスコフ市の栄光と確固たる地位を称えるため、その棺の上に安置され、現在もトロイツキー大聖堂に保管されている。聖なる信仰深い公ヴェセヴォロド＝ガブリエルの至福の帰天から52年後、その聖遺骨は朽ちることなく発見された。　1192年、聖公は敬虔な一人の人物に幻として現れ、こう告げました。「当局に告げよ。聖三位一体大聖堂へ遺骸を移すようにと。私はそこに眠りたいのだ。主イエス・キリストは、私がプスコフの街を守り抜くよう、この街を私に託されたのだ」。
そこで、聖なる遺骸は敬虔にトロイツキー大聖堂へ移された[1797] 。それ以来、至福の公ヴェセヴォロドの棺の前では、キリスト・イエス、我らの主の栄光のために、その聖なる遺骸に信仰をもって訪れる者たちに対し、多種多様な癒しが起こり始めた。主には、今、常に、そして世々限りなく、栄光がある。

トロパリオ、第4声：

幼き頃から、神に賢明なガブリエル公よ、あなたは神の器として現れ、神に選ばれ、敬虔に育てられ、汚れなき信仰を守り、多くの聖なる教会を築き上げ、同胞から追放され、また、貞潔を重んじたあなたの先祖たちが兄弟の手によって殺害されたように、あなたもまた同様の苦難に遭いました。　彼らと共に聖三位一体の御前に立ち、ロシアの権威が守られ、私たちすべてが救われるよう、お祈りください。

コンダク、第8調：

知恵に満ちてプスコフの都に移り住まれた、祝福されたガブリエル公よ、あなたはこの世において神に喜ばれる実であり、美徳によって常に咲き誇り、ダビデのように悪意を持たなかった。それ

[1796] ポロツクは、現在ヴィテブスク州の県都であり、ポロタ川が西ドヴィナ川に合流する地点に位置する。ポロツク公国は、ヴィテブスク州の大部分と、モギレフ州、ミンスク州、ヴィレン州の一部を占めていた。
[1797] これは1192年のことだった。

ゆえ、あなたは天において永遠の命を得、常に聖三位一体を仰ぎ見ている。　あらゆる災いから私たちを救い出してください。そうすれば、私たちはあなたにこう呼びかけましょう。「喜びなさい、わが都の守りよ。」

2月25日

2月12日（旧暦）

私たちの聖なる父、アンティオキアの大司教メレティオスの生涯。

記念日2月12日

聖メレティオスは、当初アルメニアのセバスティアの司教であった[1798]　が、その後、次のようにしてアンティオキアの大司教の座に就いた。 アンティオキアの大司教エウドクシオス[1799] は、アリウス派の誤謬の信奉者であり、コンスタンティノープルの司教座の富に魅了されて、そこへ移りたいと望んだ。というのも、以前コンスタンティノープルで首席司教の座に就いていた不義の　、異端者マケドニオス[1800] が追放され、 また、コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウス[1801] の治世下では、コンスタンティノープル教会は多くの財宝に恵まれ、アンティオキア教会や他の教会よりもはるかに裕福であった。そのため、エウドクシウスはアンティオキアの主教座を軽んじ、コンスタンティノープルの主教座を狙い始めた。　自教区の大司教の陰謀を知ったアンティオキアの住民たちは、エウドクシウスに対して強い憤りを抱き、彼が自らの教会を軽んじていることに憤慨し、彼を追放した。 コンスタンティノープルへ向かったエウドクシオスは、そこで主教座に就いた[1802]；一方、アンティオキアの住民たちは公会議を招集し、エウドクシオスの後任として誰を選ぶべきか、皆で協議した。　この公会議の出席者の大部分は、当時大きな勢力を誇っていたアリウス派で占められていた。一方、正統派の数は少なかった。さらに、彼らは軽蔑され、「エウスタフィアン」と呼ばれていた。これは、アンティオキアの大司教在任中に正統信仰のために追放された聖エウスタフィオスの名に由来するものである。　その公会議に出席した者たちの口には、聖メレティオスの名が上っていた。誰もが彼を自教区の大司教として迎えたいと願っていたが、とりわけそれを望んでいたのはアリウス派であった。彼らは彼を自分たちと同じ思想の持ち主と見なし、彼もまたエウスタフィウス派を自分たちの教義に引き寄せ、アンティオキア全体をアリウス派の誤った教えに導いてくれることを期待していたからである。　こうして、公会議において満場一致でメレティオスが大司教の座に選出された。公会議の決議は全員の署名によって確認され、その文書は、その公会議に出席していた正統派の聖エウセビオス、サモサタスの司教に保管を委ねられた。　その後、王の勅書と共に聖メレティオスへの要請を送り、大勢の民衆が集まる中、大いなる栄誉をもって彼をアンティオキアへ迎えた。この聖なる人物の都市への到着について、テオドリトス司教[1803] は次のように記述している。 「王に召され

[1798] アルメニアのセバスティア――小アジアの北東部に位置する。

[1799] エウドクシオスは357年から358年にかけて、アンティオキアの総主教座に就いていた。

[1800] コンスタンティノープル総主教マケドニオス1世は、341年に総主教の座に就いたが、その後異端者として罷免されたものの、360年まで数回にわたり総主教の権力を掌握した。 マケドニオスは、聖霊について、聖霊は父と子の神性および栄光に参与しない、単なる奉仕的な被造物に過ぎないという不敬虔な教えを説いた。

[1801] コンスタンティウス皇帝は337年から361年まで在位した。

[1802] エウドクシオスは360年から370年までコンスタンティノープルで総主教を務めた。

[1803] キプロスの司教テオドリトスは、5世紀の最も傑出した教父の一人であり、著名な教会史家である。前述の出来事は、彼の『教会史』に記述されている。

た偉大なるメレティオスがアンティオキアに近づくと、司祭の位にある者、教会奉仕者、そしてすべての市民が彼を出迎えた。そこにはユダヤ人や異教徒もいたが、皆がただ一つ、最も栄光あるメレティオスに会いたいと願っていたのである」。

テオドリトスはこの出来事をこのように記述している。かくして、聖メレティオスはアンティオキアの大司教の座に就いた。彼はその地位にふさわしい人物であり、極めて賢明で、聖性に満ちていたからである。同時代に生きた聖エピファニオスもまた、彼について証言している。彼を称賛の言葉を惜しみなく浴びせながら、聖エピファニオスは次のように記している: 「私たちの間で、その人物（聖メレティオス）は深く尊敬されており、至る所で彼の誉れが広まっている。彼は生涯を通じて一貫しており、誠実で、その行いは称賛に値する。民衆は彼の清らかな生き方を愛しており、誰もが彼に深く感嘆している。」

このように、聖エピファニオスはメレティオスについて語っている。民衆がどれほど彼を愛していたかは、彼の叙階の際、誰もが聖人の到来が祝福をもたらすことを願い、彼を自分の家に招こうと競い合ったことからも明らかである。

アンティオキアの主教座に就いた聖メレティオスは、人々に徳ある生活と善良な品性を熱心に教え、彼らの心の中に真の正統信仰への道を整え始めた。 というのも、聖人は、まず人々の悪しき習性を正し、心の畑から茨やアザミを取り除いてしまえば、自らの羊の群れの魂に正統信仰の種をより大きな成果をもって蒔くことができると考えていたからである。そこでメレティオスは、アンティオキアからエルサレムへやって来た偉大なバシレイオスを助祭に任命した。 当時のもう一人の著名な人物、聖ヨハネス・クラマティオスは、その頃まだ幼い少年であった。彼は聖メレティオスから洗礼を受け、メレティオスを迎えた群衆の一人であり、また、バシレイオスがアンティオキアに滞在している間、書物による教育を受けていた。 その後、聖メレティオスを称える説教の中で、彼は、異端者たちによって聖人が教会から30日間破門された出来事を記述した。その経緯は次の通りである。民衆は皆、自分たちの新しい大司教がどのような信仰を掲げているのかを正確に知りたがっていた。メレティオスにそのことを尋ねられた際、彼は教会で民衆に向けて神の言葉を説き、ニカイアで開催された第1回全地公会議で確立された正統信仰を称賛した。また、神の御子は同質であり、 同一の本質を持ち、父なる神と等しいこと、また、御子は被造物ではなく、すべての被造物の創造主であることを告白した。 こうして聖人は大声で民衆を教え導いた。これを聞いたアンティオキア教会の大助祭は、アリウスの不敬虔な教義に与していたため、大司教のもとへ歩み寄り、聖人が 真の信仰を告白することも、正教を説くこともできないよう、大胆にも自らの手で聖人の口を塞いだ。 大助祭の手がメレティオスの言葉を妨げていたにもかかわらず、彼は民衆に向かって手を伸ばし、言葉よりもさらに明確に指で聖三位一体を告白した。まず三本の指を立てて、神の三つの位格を表し、そのうち二本を折り曲げて一本だけを残し、三つの位格の中に唯一の神がおられることを示した。 それを見た大助祭は、聖人の口から手を離すと、三位一体をこれほど明確に表していたその手を掴んだ。 その手から解放されると、聖人は言葉で唯一の三位一体を告白し、賛美し始め、彼の言葉に耳を傾けていた民衆に対し、ニカイア公会議で確立された信仰告白を堅く、揺るぎなく守り続けるよう強く勧めた。「ニカイア公会議の教義を拒む者は誰でも、真理から遠く離れている」と彼は語った。 そして、この状況は長い間続いた。前述の助祭は、聖人の口を塞いで語らせないようにしたり、その手を押さえつけて指で三位一体を表すのを妨げたりしたが、聖人は口や指を用いて、民衆に正教の信仰を明確に説き続けた。 その時、異端者「エウスタフィアン派」と呼ばれていた正信者たちは、使徒の座にこれほど敬虔な司教が就いているのを見て大いに喜び、歓喜のうちに叫び声を上げ、彼らの牧者の真の信仰告白を支持した。一方、かつてのアリア派信者たちは深く悲しんだ。 彼らは神の司教を教会から追放し、至る所で彼を中傷し、彼が異端者であり、サヴェリウスの教えの信奉者であると主張

した[1804] 。また、彼らはコンスタンティウス帝に働きかけ、メレティオスを非難させ、故郷のアルメニアへ流刑に処させた。　夜、聖人はアンティオキアから連れ出され、アルメニアへと送られた。そして、彼の後任として、アリウスの信奉者であるエウゾイという人物が選出された。彼は、メレティオスが選出された当時、まだ助祭であった。

サモサタのエウセビオス司教は、アンティオキア教会において、無実の司教である聖メレティオスを追放した異端者たちによってこのような騒動が起きているのを見て、これを深く嘆いた。　彼は立ち上がり、誰にも告げることなくアンティオキアを去り、自身の都市へと向かった。エウセビオスの去ったことを知ったアリア派の人々は、全公会議によって作成・署名された聖メレティオスの大司教任命状が彼の手に預けられていることを思い出した。　彼らは、聖エウセビオスがいつか公会議の場で、自分たちが満場一致で大司教を選出したにもかかわらず、その後自分たちの手で彼を追放してしまったことを告発するのではないかと恐れた。そのため、当時アンティオキアに滞在していた王に懇願し、エウセビオスを呼び戻してその文書を取り上げるよう命じるよう求めた。

王は直ちにエウセビオスを追う騎手を遣わし、できるだけ早く司教に追いつくよう命じた。使者がエウセビオスに追いつき、王の命令を伝えると、聖なる司教はこう答えた。「今、その文書を渡すことはできない。私にそれを託した者たちが再び一堂に会した時にのみ、それを渡すつもりだ」。

こうして使者は、何も成し遂げられずに王のもとへ戻った。すると王は激しく怒り、書簡を書き、それを聖エウセビオスへ送った。その書簡には、もしエウセビオスが勅書を引き渡さなければ、彼の右手を切り落とす、と記されていた。　王がこのように書いたのは、聖人を脅かすためだけであり、その脅しを実行に移すことは使者に禁じていた。　王の使者が再び聖なる司教のもとを訪れ、威嚇的な書簡を手渡すと、エウセビオスはそれを読み終えると、両手を差し伸べてこう言った。「右の手だけでなく、左の手さえも切り落とすことはできるでしょう。しかし、私はその文書を渡しません。なぜなら、それはアリウス派の悪意と不法を明らかに暴いているからです。」

使者はまたしても、何も得られずに引き返さざるを得なかった。聖人のこのような返答を聞いた王は、エウセビオスの不屈の勇気と揺るぎない堅固さに大いに驚き、その後、多くの人々の前で彼を大いに称賛した。

聖メレティオスが大司教の座から追放された後、正統派はアリウス派から分離した。彼らは、パレアと呼ばれる場所にある城壁の外に建つ一つの教会を占拠し、その教会で長老パヴリンが正統派教会の典礼に従って礼拝を執り行った。　数年後、コンスタンティウス帝が死去し、その地位をユリアヌス・アポステート（[1805] ）が継いだ。即位当初、ユリアヌスは偽善的に敬虔な振りをし、追放されていたすべての司教を解放し、彼らにそれぞれの座に戻るよう命じた。　そこで、皇帝の勅令により、聖メレティオスもまた、アンティオキアでの幽閉先から戻った。　彼は、この都市の正教会が二つの　派に分裂していることを知った。一方は、聖メレティオス自身が大司教の座に復帰することを待ち望んでいたが、他方は彼を待たずに、前述の長老パヴリヌスを司教に選出した。　後者は当時「パヴリニアン派」、前者は「メレティアン派」と呼ばれていた。分裂の原因の一つは、パヴリニアン派が、聖メレティオスの教えを通じて正統派に戻ったアリウス派の信奉者たちを、自分たちの交わりに受け入れなかったことにもあった。彼らがそうした人々を受け入れなかった理由は二つあった。第一に、これらの人々がアリウス派から洗礼を受けていたこと、第二に、聖メレティウス自身もアンティオキアの大司教に選出された際、公会議において正統派よりも多数を占めていたアリウス派によって選出されたからである。両派とも同様に正統派の教義を堅持していたが、分裂のきっかけとなったのは、上述した状況のみであった。　帰国後、聖人は分裂したキリストの群れを再び一つに結びつ

[1804] サヴェリウスは、至聖三位一体の神秘について誤った教えを説き、神は一つの位格であると主張した。すなわち、父として天に、子として地上に、聖霊として被造物の中に存在するというのである。

[1805] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

けることに熱心に尽力した。　柔和で謙虚な心を持つ大司教は、パヴリヌスの司教職を否定せず、むしろそれを認めていた。そして自身は、アリウス派から正統派へと回心した者たち――当時、パヴリヌス派が交わりを拒んでいた人々――という新たな群れを牧会した。　やがて、不義のユリアヌスが王位に就くと、公然とキリストを拒絶し、偶像を崇拝するようになったため、聖メレティオスは再びアンティオキアから追放された。ユリアヌスの広大な王国全土でキリスト教徒に対する迫害が繰り広げられ、特にアンティオキアではその迫害が激しかった。　不義の王は、全軍を率いてペルシアへの遠征に出発する際、アンティオキアに立ち寄った。そこで彼は、ダフナと呼ばれる場所に立つアポロンの偶像に多くの生贄を捧げた。この場所はアンティオキアの郊外にあり、　そこには、聖殉教者バビラと三人の幼児の聖遺骨も安置されていた。ある日、王はかつて人々に答えを与えていた自分の偽りの神アポロに、ペルシア人を打ち負かすことができるかと尋ねた。　しかし、偶像は何も答えなかった。というのも、聖バビラの遺骸がその場所に移されて以来、悪霊がそこから逃げ去っていたからである。それ以来、かつては多くの予言をしていた偶像も答えを返すことをやめてしまった。というのも、この悪霊こそが偶像を通じて予言を行っていたからである。　王は、偶像がもはや予言をしなくなることに悲しんだ。現地の祭司たちから、バビラの聖遺物がアポロンの偶像の沈黙の原因であると知ると、彼はガリラヤ人――彼はキリスト教徒をそう呼んでいた――に、その聖遺物をそこから持ち去るよう命じた。　聖遺物が持ち去られるやいなや、アポロンの神殿に天から火が降り注ぎ、神殿も偶像も共に焼き尽くされた。この出来事は不敬虔な祭司たちを深く悲しませ、恥をかかせたため、彼らはキリスト教徒に復讐することを決意した。そのために、彼らは王の前で、「ガリラヤ人たちが憎しみから、夜中にアポロンの神殿に火を放った」と告げ口した。　すると王はキリスト教徒に対して激しい怒りに満ち、彼らを迫害し追放するよう命じた。その際、聖大司教メレティオスもまた都市から追放され、他のキリスト教徒たちは自発的にアンティオキアから逃れ、秘密の隠れ家に身を潜めた。　その際、アンティオキアの二人の聖なる長老、エウゲニオスとマカリオス、そして聖アルテミオスもまた拷問にさらされた。　この神を憎む皇帝ユリアヌスが恐ろしい死を遂げると、敬虔でキリストを愛するヨヴィアン[1806]　が王位に就いた。そこで、聖メレティオスは再びアンティオキアにおいて正教の牧者兼教師となり、皇帝ヨヴィアンはこの聖人を敬い、深く愛した。　そのため、アリウス派も聖人を恐れるようになった。彼らの司教の中には、皇帝やアンティオキアの大司教メレティオスに気に入られようと、偽善的に正統派の信仰を擁護し始めた者さえいた。

その頃、聖メレティオスとエウセビオス・サモサタスによって招集された地方公会議がアンティオキアで開催された。その会議において、アリウス派は、御子が御父と同一の本質であることを告白し、第1ニカイア公会議で確立された正統な信仰を認めた。 しかし、彼らのこの告白は不誠実かつ虚偽のものであった。というのも、その直後にイオビアン王が死去し、ヴァレント[1807]　が王位に就くと、異端者たちは自分たちがその邪説から離れていないことをはっきりと証明したからである。彼らは、王の妻ドムニキアを通じて、王さえも自らの誤った教えへと引きずり込んだのである。　そこで再び正教会の迫害が始まり、その牧者たちは再び追放されることとなった。この不敬虔な皇帝ヴァレントは、アンティオキアに長期間滞在し、そこでアリウス派の異端を主張し、広めた。　異端者たちにそそのかされ、彼は至聖なる大司教メレティオスをも追放した。そして、聖人はヴァレンティウスが死ぬまで追放されたままだった。

ヴァレンタスの後、敬虔なグラティアヌス王が即位した[1808]　。その時、王の勅令により、正教会の司教たちが再び流刑先から解放され、何事もなくそれぞれの座に就いた。　その頃、聖メレティオスもすでに3度目となるアンティオキアへの帰還を果たし、自らの司教座に就いたが、パヴリノス

[1806] ヨヴィアンは363年から364年まで在位した。
[1807] ヴァレントは364年から378年まで在位した。
[1808] グラティアヌスは383年から392年まで在位した。

とメレティオスという二人の司教をめぐる信徒間の対立は依然として続いていた。ある者たちは　を一方の司教と見なし、またある者たちは他方の司教と見なしており、双方は互いに疎遠になっていた。聖人は、両者を和解させるために全力を尽くした。　その時、敬虔でキリストを愛するグラティアヌス王は、全領土に対して、アリウス派からすべての教会を没収し、正教徒に返還すべきであるという勅令を発した。この王の勅令を携えて、サポルという名の某公爵がアンティオキアにやって来た。王の使者の前で、聖メレティオスはパウリヌス司教に次のように語りかけた。「主は私にもこの群れの世話をするようお任せになったが、あなたは彼らの一部を私から引き受けてご自身の指導下に置かれた。しかし、羊たち自身は信仰において互いに何ら違いがないのだから、兄弟よ、この群れを一つにまとめ、首位をめぐるあらゆる論争を止め、共に神の羊たちを牧し、協力して彼らの世話をしていこう。　もし大牧者の座を巡る争いが私たちの間に生じているのなら、私はそれを根絶するよう努めます。　この座に神の福音を据え、次のようにしよう。私たち二人は福音書の両側に座り、もし私が先にこの世の旅を終えるならば、あなた一人で群れを牧する。もしあなたが先に魂を神に委ねるならば、私は力の及ぶ限り、群れの世話をしよう」。　このように提案したのは、並外れた柔和さを備えていた聖メレティオスであったが、パヴリンはその提案に同意しなかった。　そこでサポル公は、そのことを王に報告し、王からの返書を受け取ると、アリウス派から大聖堂をはじめとする他の教会を没収し、それを聖メレティオスに譲り渡した。一方、パヴリンは、かつてメレティオスから引き継いだ羊の群れを、引き続き牧し続けた。　こうして、聖なる大司教は、公会議の決議によって満場一致で選出されたその座に就いた。彼は熱心に、かつ賢明に、平和と静寂の中で自らの羊の群れを導き続け、至福の死を迎えるまでその務めを果たした。　アリウス派はもはや勢力を伸ばすことも、キリストの教会とその善良な牧者たちに迫害を加えることもできなくなった。とりわけ、彼らはもはや、太陽のように輝き、教会を照らし、異端の闇を追い払っていた聖メレティオスを迫害することはできなかった。　彼の教えに従い、多くのアンティオキアの人々は徳と正統な信仰において成長し、彼と同様に教会の完全な光となった。　その代表例が、メレティオスの後を継いでその座に就いたフラウィアヌス[1809]、後にベリイの司教となったアカキオス、タルソスのディオドロス、そしてメレティオスの家臣であり、後にラオディキアの司教座に就いたエルピディオスである。　とりわけ著名なのは、後に「金口」と称されるようになった聖ヨハネであり、彼は聖メレティオスによって助祭に叙階された。また、ヨハネの友人であるバシレイオスも知られている。彼はケサリアのバシレイオスではなく、同名の別の人物であり、後者より若く、アンティオキア出身で、聖ヨハネと共に育った。　彼らやその他多くの人々は、燭台に灯されたろうそくのように、それぞれが自分の場所で、後にキリストの教会を飾り、啓発していった。　当時、アンティオキアも属していたシリア地方では、聖シメオン[1810]もその功業を始めました。彼は後に柱の上に登りましたが、当初は高い丘の上で自らを鉄の鎖で縛り付けていました。そのことは彼の伝記にも記されています。　その話を聞いた至福のメレティオスは彼の元を訪れ、束縛された姿を見てこう言った。「人は、足枷や鉄の鎖がなくても、自らの意志と理性によって、一つの場所に自分を縛り付けることができるのだ。」

この言葉を聞いた聖シメオンは、その助言を受け入れ、束縛を解き、自らの自由意志によって自らを縛り、イエス・キリストの自発的な囚人となることを選んだ。

聖メレティオスが安らかにこの世を去る少し前、敬虔なテオドシウス[1811]が即位した。彼は当初、グラティアヌス帝のもとで名高い将軍であり、その勇敢さゆえに大きな尊敬を集めていた。というのも、彼はしばしば蛮族の軍勢を輝かしい勝利で打ち破っていたからである。　このテオドシウスは、王位に就く前から、ある時夢の中でアンティオキアの大司教である聖メレティオスを見た。それ

[1809] フラヴィアヌスは381年から404年まで総主教を務めた。
[1810] もちろん、聖シメオン、最初の柱頭者であり、その記念日は9月1日に教会で祝われる。
[1811] テオドシウス大帝は379年に即位し、395年まで在位した。

まで彼は現実の世界で彼を見たことは一度もなく、ただその名だけを耳にしていたに過ぎなかった。夢の中で、テオドシウスは、メレティオスが自分のそばに立ち、皇帝のハミッドと王冠を彼に授けるのを見た。目を覚ますと、テオドシウスはその幻視について家臣の一人に語り、それが何を意味するのかと驚いていた。その直後、その幻視は現実のものとなった。　グラティアヌス帝は、帝国の広大さゆえに自分一人では東と西を統治することは不可能であると確信し、また四方から蛮族の脅威が迫っているのを見て、高潔で勇敢、かつ正教徒であるテオドシウスを、国政を共にする補佐役として選んだ。　彼は、当初ヴァレント皇帝が支配していた帝国の東半分をテオドシウスに委ね、自身は西半分を統治することにした。　東半部を引き受け、フラキアに侵攻してきたゴート族を撃破したテオドシウス（　）は、コンスタンティノープルに到着し、聖メレティオスに謁見することを望んだ。彼は夢の幻視の中で、聖メレティオスが自身の戴冠式を執り行っているのを見たからである。　その頃、聖なる大教父たちや正教会の司教たちの合意、そして敬虔な皇帝グラティアヌスとテオドシウスの御意により、コンスタンティノープルで第2回全地公会議[1812]　の開催が開始された。全地から司教たちが皇帝の書簡によってこの公会議に招集された。　その時、アンティオキアの至聖なる大司教メレティオスもコンスタンティノープルに到着した。　テオドシウス王は、ボヤールや側近たちに、誰も聖メレティオスを指し示さないよう命じた。王は、夢の中で見た顔と照らし合わせて自ら彼を見極め、幻視の中で自分を王位に戴冠させたのが、他の司教ではなく、確かにメレティオスであることを最終的に確信したかったからである。　司教たちの大集会が王の御座所に入ってきたとき、王は彼らを見渡すと、たちまち聖メレティオスを見分け、彼だと認めた。他の者たちを置き去りにして近づくと、王はメレティオスの足元にひれ伏し、聖人の手、胸、目、口、頭を次々と口づけした。それはまるで、敬虔な息子が、長い間会いたがっていた父と再会するかのような様子であった。　王は皆の前で、この聖人が幻視の中でどのように現れ、自分に王冠と紫の衣を授け、他のすべての司教たちよりも自分を特別に扱ってくれたかを語った。その公会議で、聖メレティオスは次の奇跡的なしるしによって皆を驚かせた。　アリウス派が聖三位一体について正統から外れた理屈を振りかざし、その邪悪な教えによって敬虔な信仰を貶めていた時、この神聖な人物は立ち上がり、教えを求めていた人々に、聖三位一体の三つの位格を示すために三本の指を差し示した。その後、二本の指を合わせ、一本を曲げて、人々を祝福した。　その時、稲妻のような炎が彼を包み込み、聖人は大声でこう叫んだ。「我らは三つの位格を理解し、一つの実体について語っているのだ」。

　　こうして聖メレティオスは皆を驚かせ、異端者たちを恥じ入らせ、正教徒たちの信仰を強固なものにした。また、彼は聖グリゴリオス・テオロゴスをコンスタンティノープル総主教の座に就かせることも成し遂げた。　その直後、公会議はまだ開かれておらず、すべての司教がコンスタンティノープルに集まってはいなかったが、聖メレティオスは少し病に倒れ、安らかに主のもとへ魂を委ねた[1813]。これにより、皇帝、司教たち、そして正教徒の民全体が深い悲しみに包まれた。皆はこの栄光ある大司教を尊厳をもって埋葬し、アンティオキアへ移送した。そこで、その尊い遺体は、聖殉教者バビラの近く、私たちの神キリストの栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美される方の御名のもとに、都市を守るために安置された。アーメン。

[1812] 381年、この公会議においてマケドニア派の異端が非難され、ニカイア信条は新たな5つの条項が追加・補完されて完成した。

[1813] アンティオキア総主教聖メレティオスは、第2回全地公会議の最中である381年に逝去した。聖グリゴリオス・ニッサスは公会議の席上で、聖メレティオスの記憶を称える賛辞を捧げ、聖金口もまた、司祭の聖職に就いた際に同様のことを行った。　聖メレティオスについては、主に神の御子と父なる神との同質性について論じた説教と、聖三位一体への信仰告白を示す皇帝ヨヴィアヌスへの書簡が伝われている。聖メレティオスの聖遺骨は、コンスタンティノープルからアンティオキアへ移された。

コンダク、第6調：

あなたの霊的な勇気に恐れをなして、背教者はマケドニアへと逃げ去る。祈りの奉仕を捧げるあなたの僕たちは、愛をもって駆け寄る。天使の友よ、メレティオよ、我らの神キリストの燃えるような剣よ、すべての不信心者を打ち倒せ。すべてを照らし出した灯として、あなたを讃える。

私たちの聖なる父、モスクワおよび全ロシアのミトロポリス、奇跡行者アレクシオスの生涯

記念日：2月12日

聖なる奇跡行者アレクシオス、ロシアのミトロポリトは、ボヤール（貴族）の家系に生まれました。その両親であるフェオドールとマリアは、チェルニゴフ公国のボヤールでした。　聖アレクシイは、モスクワの[1814]で、モスクワ公ダニイル・アレクサンドロヴィチ[1815]の治世下、その息子であり後継者であるイオアン・ダニイロヴィチ公[1816]（当時はまだ少年であった）が、聖なる洗礼においてアレクシイの代父となり、その赤ん坊にはエレフフェリイという名が与えられた。彼が成長すると、書物の学びのために教師のもとへ預けられた。　ある日、エレフフェリイが12歳の時、彼は野原で鳥を捕まえるための網を張っていた。その時、少年はうっかり眠り込んでしまい、ある声を聞いた。「アレクシイよ、なぜ無駄な労力を費やしているのか？　私がお前を『人の捕り手』にしてやろう」。

眠りから覚めた少年は、周囲に誰の姿も見当たらず、聞いた声に深く驚いた。それ以来、彼はその声が何を意味するのか、深く考え、思索にふけるようになった。　幼い頃から神を愛していた彼は、両親のもとを離れ、結婚を断り、唯一の主キリストに仕えたいと願い、モスクワのボゴヤヴェンスキー修道院を訪れ、そこで修道士となった。その際、修道誓願の際に、彼が夢の幻で聞いた名前――アレクシー[1817]――が与えられた。当時、ボゴヤヴェンスキー修道院のイグメン（院長）は、偉大な奇跡行者セルギイ・ラドネジスキーの兄弟であるステファンであった。彼自身が、当時生後20年目を迎えていた聖アレクシイの修道衣を着せたのである。

それ以来、40歳になるまで、聖アレクシイはたゆまず勤勉に励み、断食をし、毎晩祈りを捧げ、その他の修道者の修行に励んだため、多くの人々が彼の熱心さに感嘆した。　その神に喜ばれる生き方ゆえに、誰もが聖アレクシオスを敬い、尊敬した。モスクワ大公シメオン・イオアンノヴィチ

[1814] 聖アレクシオス大主教の父であるボヤリンのテオドール・ビャコントは、バティイによって荒廃したチェルニゴフ地方が、略奪的な襲撃に絶えず見舞われていたため、モスクワへ移住した。　しかし、強固で敬虔なダニイル・アレクサンドロヴィチ公の庇護の下、彼は平和で安らかな生活を送ることができた。聖アレクシイは1300年に生まれた。

[1815] ダニーイル・アレクサンドロヴィチ公は、聖アレクサンドル・ネフスキーの次男であり、独立したモスクワ公国の創設者であり、モスクワ公家の始祖である（1261年～1303年）。　――その後、彼はロシア正教会によって聖人の列に加えられ、1652年に朽ちることなく発見されたその聖遺骨は、今日に至るまで、彼がモスクワ川のほとりに建立したダニロフ修道院の教会に公開され、安置されている。

[1816] その後、モスクワ大公イオアン・ダニイロヴィチ・カリタは、1328年から1340年にかけて

[1817] それは1320年のことだった。モスクワのエピファニー（第1級）修道院は、1296年にモスクワ大公ダニーロ・アレクサンドロヴィチのもとで設立された。

[1818] や、ミトロポリト・テオグノスト[1819] でさえ、彼を深く愛していた。数多くの美徳により、彼はウラジーミル市の司教に任命された[1820] 。

テオグノスト大主教が逝去すると、兄であるシメオン大公の後を継いで統治の任に就いたモスクワ大公イオアン・イオアンノヴィチ[1821] は、公会議の決定に基づき、聖アレクシオスを大主教に選出し、彼をコンスタンティノープルへ派遣して、至聖なるフィロフェイ総主教[1822] による叙任を受けさせた。 フィロフェイは聖アレクシオスをキエフおよび全ロシアの総主教に任命した。ツァールグラードから帰国後、聖アレクシオスはロシア教会の統治を引き受け[1823] 、さらに一層精進し、次々と偉業を成し遂げ、言葉、行い、生き方、信仰、清らかさ、精神、そして愛をもって模範を示すことで、すべての人々の灯火となった。

聖アレクシオスの名声は、キリスト教徒の間だけでなく、キリストを知らない異教徒であるムスリムたちの間にも広まった。タタール人のハン、ジャニベクの妻タイドゥラは、3年前に視力を失っていた。 神が聖アレクシオスの祈りによって多くの奇跡を起こしていると聞き、ジャニベクはモスクワ大公ディミトリ・イオアンノヴィチに[1824] を送り、この神の御使いを自分のもとへ送ってほしいと懇願した。そうすれば、彼が王妃のために神に祈り、彼女の視力を回復させてくれるはずだった。その際、ジャニベクは次のように付け加えた。

「もし女王がその人の祈りによって癒やされるならば、お前は私と平和を保つことになるだろう。しかし、もし彼を私のところへ送らないならば、私は火と剣でお前の国を荒廃させるだろう」。

このジャニベクの要請がモスクワに届くと、聖アレクシイは、これを自分の力では成し得ないことだと考え、嘆いた。しかし、大公ディミトリの懇願により、彼は結局、ハーン・ジャニベクのもとへ向かった。 モスクワを旅立つ前に、彼は聖職者たちと共に、聖母マリアの被昇天を称える大聖堂で祈りの賛美を捧げた。この祈りの最中、聖奇跡者ペトロの棺のそばにある蝋燭が自然に灯り、皆がこの奇跡を目撃した。 聖アレクシオスは、この出来事から、主が彼の旅が無事に終わることを告げようとしておられるのだと悟った。そのろうそくの蝋を少し取り、それを使って小さなろうそくを作ると、聖人は司祭団と共に、神の慈悲を固く信頼しつつ旅の準備を始めた。

聖アレクシオスがモンゴルの首都に到着する前から、女王は夢の中で、司祭たちに付き添われた、司教の装いをした神の聖人アレクシオスの姿を目撃していた。目を覚ますと、彼女は直ちに、夢の中で見た通りの見本に従って、司教と司祭たちのための貴重な祭服を製作するよう命じた。 聖アレクシオスがタタールの都に近づくと、ジャニベクは彼を大いなる敬意をもって出迎え、自らの宮殿へと案内した。聖人は祈りの歌を歌い始め、持参していた小さな蝋燭に火を灯すよう命じた。 長い

[1818] モスクワ大公シメオン・イオアンノヴィチ・ゴルディイは、1340年から1353年まで統治した。

[1819] 聖テオグノストは1328年から1353年までロシア正教会を統率した。彼は、ロシアの総主教の居所をウラジーミルからモスクワへ移すことを最終的に確定させた。

[1820] クラーズマ川沿いのウラジーミルは、聖ペトロと聖テオグノスト以前、大主教座の所在地であった。聖アレクシイは1352年末にウラジーミル司教に叙任された。 その12年前、テオグノスト大主教はアレクシウスに対し、自身の聖職者邸に住み、教会の司法事務を司るよう命じていた。これにより、聖アレクシウスはギリシャ人の聖職者と絶えず直接交流する中で、ギリシャ語を深く習得するための機会と手段を得ることとなった。

[1821] モスクワ大公イオアン2世イオアンノヴィチは、1353年から1359年まで統治した。

[1822] フィロフェイ総主教は、1354年から1355年まで、そしてその後1362年から1376年まで、コンスタンティノープル教会を統率した。

[1823] 聖アレクシイ、モスクワ都主教は、1354年から1378年までロシア教会を統率した。

[1824] ドンスキー大公ディミトリ・イオアンノヴィチは、1350年10月12日に生まれた。1362年から大公の地位に就き、モスクワに石造りのクレムリンを建設した。27年間大公を務め、40年間生きた。 彼は1380年9月8日、ドン川でハーン・ママイを破り、1389年5月19日に死去した。

祈りの後、彼は聖水で女王に聖水を振りかけると、女王はたちまち視力を取り戻した。ハンとその重臣たち、そしてそこにいた者たちは皆、この驚くべき輝かしい奇跡に深く感嘆し、神に賛美を捧げた。アレクシオス[1825] と彼に同行していた者たちを敬意をもって迎え、惜しみなく報いた後、ジャニベクは彼らを平穏のうちに送り出した。

オルダから戻った聖アレクシオスは、しばらくして再びオルダへ向かうことを余儀なくされた。ハン・ジャニベクが亡くなり、その王位には、残忍で血に飢えた息子ベルディベクが就いた。彼は12人の兄弟を殺害し、自らの軍を率いてロシアの地へ進軍しようとしていた。 そこで、大公イオアンの要請により、聖アレクシイはオルダへ赴き、ベルディベクのもとを訪れ、穏やかで賢明な言葉によって、残忍なハンの怒りを鎮めた。 恐ろしい支配者の前でキリスト教徒のための平和を懇願した聖アレクシイは、モスクワへと戻った。というのも、頻繁な戦争や野蛮な民族による侵略の結果、キエフ都主教聖ペトロによって、キエフ都主教座がここに移されていたからである。

大公イオアンが崩御すると、未成年のモスクワ公ディミトリ・イオアンノヴィチの後見役は、聖人の肩に委ねられた。 スーズダリ公ディミトリ・コンスタンティノヴィチは、オルドから大公の権力を認めさせるよう懇願した[1826] 。聖人はスーズダリ公の大公就任を祝福すべきであったが、若き公ディミトリ・イオアンノヴィチの良き保護者であり続けるため、大公の「ウラジーミルに住む」という要請を断固として拒否した。 一方、オルダでは動乱が続いていた。毎年、数人のハンが現れては互いに殺し合い、1362年には2人の対立するハンが現れた。若きディミトリは、そのうちの1人からロシア大公の称号を懇願し、ディミトリ・コンスタンティノヴィチをウラジーミールから退去させた。 聖アレクシイは、奇跡を起こすウラジーミルの聖母イコンを用いて、喜びをもって自身の教え子を大公の地位に祝福した。彼はディミトリイ公の助言と行動の中心的存在であり、聖アレクシイの尽力によって、モスクワ大公の権力は拡大し、強固なものとなっていった。

その間、聖アレクシイは修道院の建設に尽力した。こうして、彼はヤウザ川のほとりに、我らの主イエス・キリストの名を冠し、その「手造りなき御像」を称える教会を建立し、その教会の傍らに修道院を設け、そこに共同生活の規則を導入した[1827]。新しい修道院の長老職を、彼は 、聖奇跡行者セルギイの弟子であるアンドロニク[1828] に委ねた。この修道院のほかにも、聖アレクシイはモスクワやその他のロシアの都市に、さらに他の教会や修道院を建設した。 例えば、彼はモスクワに、ホネフ[1829] で起こったその輝かしい奇跡を称えて、聖大天使ミカエルの名に因む石造りの教会を建立し

[1825] 感謝の意を表したハンは、聖人に敬意の印として指輪を贈ったが、それは現在もなお総主教の宝物庫に保管されている。

[1826] ディミトリ・コンスタンティノヴィチは、1359年から1363年まで大公を務めた。

[1827] この修道院は誓願の修道院であった。 聖アレクシイがキエフおよび全ロシアの総主教に叙任されるためコンスタンティノープルへ向かった際、帰路の途中で災難に見舞われ、その命さえも危険にさらされた。海上で恐ろしい嵐が吹き荒れ、船はいつ波間に飲み込まれてもおかしくない状況だった。 大主教と共にいた者たちは皆、救われることを絶望していた。一方、聖人は神に熱心に祈りを捧げ、水夫たちが岸に上陸する日に祝われる聖人の名に因んで教会を建立するという誓願を立てた。 主は聖人の祈りを聞き入れられた。静けさが訪れ、船は8月16日に岸に着いた。この誓願を果たすため、聖アレクシオス大主教は1360年頃、前述の修道院を「全き慈悲の救い主、その御姿は人の手によらずして造られた」に捧げて建立した。 修道院の建設にあたり、聖人であるアレクシオス大主教は、聖セルギイの弟子である聖アンドロニクスの多大な助力を受けた。そのため、この修道院は「スパソ＝アンドロニコフ（アンドロニエフ）修道院」と呼ばれるようになった。現在は二級修道院である。 修道院には現在も、聖アレクシオスがコンスタンティノープルから持ち帰った、豪華な聖衣で飾られた「御手造りなき救世主の聖像」が安置されている。

[1828] 聖アンドロニクスの記念日は6月13日である。彼の聖遺骨は、聖アレクシオスと共に創設したスパソ・アンドロニコフ修道院に安置されている。

[1829] ホネフで起こった奇跡の記念日は、9月6日に祝われる。

、現在も「チュドヴォイ」[1830] と呼ばれる修道院を設立した。その際、聖アレクシオスは、自らの遺体をここに埋葬するよう遺言した。　聖アレクシオスは、神の栄光のために、記憶に値する多くの輝かしく驚くべき行いを成し遂げ、その最期を迎えるまで、言葉による羊の群れを立派に牧した。

主のもとへ旅立つことを予感した聖人は、神聖な礼拝を執り行い、聖体拝領を受けた。すべての人々が平安のうちに過ごせるよう願い、皆に最後の口づけを捧げ、1378年2月12日[1831]　、安らかに主のもとへ魂を委ねた。　この偉大な奉仕者は24年間聖座に就き、その生涯は85年に及んだ。彼の遺体は、彼自身が建立した大天使ミカエルの名に捧げられた教会内の「聖母マリアの受胎告知」小聖堂に、相応しい栄誉をもって埋葬された。

長い年月が経った後、彼の聖なる、そして多くの病を癒す聖遺骨が、全く朽ちることなく発見された[1832] 。故人となった聖人の祭服でさえ、まるで前日に着たばかりであるかのように、完全に無傷であった。その後、これらの聖遺骨は、この神の御心に適う者の名にちなんで建てられた教会に移された。

それらからは今もなお、まるで尽きることのない泉のように、多くの癒しが湧き出ており、私たちの主イエス・キリストの言い表せない憐れみによって、信仰をもってそれらにすがりつくすべての人々に、聖人の祈りを通じて助けが与えられています。主イエス・キリストに、永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

使徒と並んで座し、至高の医師、恵み深い奉仕者である聖アレクシオス・神智者、奇跡行者よ、　集い、愛をもってあなたの記念を輝かしく祝う。歌と賛美に喜び、あなたに癒しの恵みと、あなたの町への偉大な確固たる守りを授けてくださったキリストを賛美する。

別のトロパリオ、第4調:

使徒の教義の堅固な守護者、ロシア教会の牧者であり教師である、至福の聖アレクシオスを記念して、私たちに御自分の御愛する者を、癒やしを注ぐ豊かな泉として、またモスクワの都に誉れと確固たる基盤を授けてくださった、私たちの神キリストを、ふさわしい賛美の歌をもって賛美します。

コンダク、第8調:

神聖にして尊きキリストの聖人、新たな奇跡行者アレクシオスを、人々は皆、誠実に賛美し、偉大なる牧者、奉仕者、そしてロシアの地の至賢なる教師として、愛をもって彼を称えよう。　今日、その記念の日を迎え、神を宿す方への賛歌を喜びをもって唱えよう。神への大胆さをもって、我らを様々な苦境から救い出されたゆえに、我らはあなたにこう呼びかけよう。「喜びなさい、わが都の確固たる支えよ。」

[1830] チュドフ修道院（大聖堂）は、タタール王妃タイドゥラの奇跡的な治癒を記念して、1365年に設立された。

[1831] 霊的文献において、聖アレクシイ大主教は書簡、教訓、翻訳を残した。モスクワのチュドヴォ修道院には、彼がギリシャ語から翻訳し、自筆で記した福音書が保管されている。

[1832] それは1431年5月20日のことでした。

マリーナという名で男性の装いをして修業に励んだ聖女マリアと、その父である聖エウゲニオスの生涯

記念日：2月12日

ビフィニアの[1833] に、エウゲニオスという名の敬虔な人が住んでいた。彼の妻もまた神を畏れ、心に神への畏敬の念を抱いていた。彼らにはマリアという一人娘がいた。母が亡くなると、エウゲニオスは娘を主の戒めに従って育てた。少女が成長すると、父は彼女にこう言った。

「愛しい娘よ、私は今、私の全財産を君に譲り渡す。そして私は、自分の魂を救うために修道院へ行くつもりだ。」

すると、娘は父にこう反論した。

「父よ、あなたはご自身の救いを求めておられますが、私の救いも顧みないおつもりですか。主が福音書で『*良い羊飼いは、羊のために命を捨てる*』（ヨハネ10:11）とおっしゃったことを、あなたはご存知でしょう。なぜなら、誰かの魂を救う者は、あたかもその魂を創造するかのようなものだからです。」

これを聞いて、エフゲニーは娘がこれほど敬虔であることに大いに喜んだ。一方、若いマリアは父と語り合いながら、涙を流していた。

「愛しい娘よ」とエフゲニーは言った。「君をどう扱えばよいのか分からない。君は女性なのに、私は男子修道院に入るのだ。どうして君が私と一緒にそこにいられるだろうか。悪魔が君の姿を見て、誰かを罪に誘うかもしれない。」

それを聞いて、少女は言った。

「父上、私は妻の姿のまま男子修道院に入るつもりはありません。髪を刈り、男の服を着て、父上と一緒に修道院に入ります。そうすれば、私が妻だとは誰にも気づかれません。」

これを聞いて、聖エウゲニオスはさらに大いに喜び、貧者や困窮者、孤児や未亡人たちに全財産を施した後、娘の髪を剃り、男装をさせ、マリアの代わりにマリンと名付けた。

「わが娘よ」と彼は彼女に言った。「あなたは身を引き締め、自分の性別を隠さなければならない。妻が修道院に入ることはできないと知っているだろう。あなたは男たちの真ん中にいることになるが、それはまるで火の中にいるようなものだ。処女性を守りなさい。もし私たちがこの誓いを果たせば、天国の御国を受け継ぐ者となるだろう。」

神に祈りを捧げた後、エウゲニウスは、男装した娘と共に修道院に入った。二人は他の修道士たちの中で修行に励むようになった。娘は日ごとに徳のある生活においてますます成長していった。彼女は従順さと謙虚さで際立っており、常に偉大な功績を成し遂げようと努めていた。　数年が過ぎた。その修道院の修道士たちは、彼女に口ひげも顎ひげもなく、声も高かったため、彼女を宦官だと思っていた。一方、他の人々は、マリーナのそのような声は、彼女の偉大な修行と断食によるものだと考えていた。というのも、マリーナはごくわずかな食事しか摂らず、それも毎日ではなく、一日おきだったからである。

しばらくして、聖エウゲニオスは修道者の身として神のもとへ召され、その結果、娘のマリア、あるいはマリンという名の少女は孤児となってしまった。この時から、彼女はさらに精進を深め、多くの労苦と節制によって肉体を鍛え上げた。　神の恵みにより、彼女は徳において極めて優れた境地に達し、悪霊に対する権威さえも授かった。不浄な霊に苦しむ人々が頻繁に彼女の元へ連れてこられたが、聖女は彼らに手を置き、祈りによって悪霊を追い出し、病人は完全に癒やされた。

この修道院には、あらゆる美徳と霊的な知恵に恵まれた修道士が計40人いた。毎月、修道士の中から4人が、修道院の必要を満たすために菜園へ派遣されていた。というのも、その修道院は、修

[1833] 小アジア北西部。

道院からかなりの距離離れた場所に農地を所有していたからである。　修道院と菜園を結ぶ道の途中には宿屋があり、仕事へ向かう、あるいは仕事から戻る修道者たちは、そこで休息をとっていた。その宿屋の主人自身も修道者たちを親しみを込めて迎え、彼らに特別な部屋を用意し、世話を焼いていた。　人間の敵は、若い少女が男性の装いをして送るこのほど高潔な生活、神への愛、労働や修道生活における熱心さ、そして揺るぎない忍耐を許せず、彼女に立ち向かった。彼は彼女の修道生活を妨げ、彼女の名誉を傷つけようとした。彼は狡猾な策略を用いて、次のような仕掛けを仕組んだ。　ある日、その修道院のイグメンは修道士マリンを呼び寄せ、　彼にこう言った。「兄弟マリンよ、私はお前の徳高い生活を知っている。お前が従順に精進していることも知っている。断らずに、修道院の作業に行け。　というのも、一部の修道士たちは、あなたが修道院に閉じこもったまま、私たちの修道院に必要な畑仕事に出向くことがないことを快く思っていないからだ。　そこへ行け、わが子よ。そうすれば、至聖なる神から最も豊かな報いを受けるだろう。何しろ、神ご自身も、ご自身の弟子たちに仕えることを嫌がられなかったのだから」。これを聞いて、マリンはイグメンの前にひれ伏し、こう言った。「尊い父よ、私を祝福してください。私は、あなたが命じられるところへ参ります」。

他の三人の修道士たちと共に、マリンは修道院の作業に向かった。道中、彼は前述の宿に一泊した。その宿の主人の娘は、すでにすっかり大人になっていた。ある兵士がその宿に泊まった際、彼女を堕落させ、彼女は身ごもってしまった。　その兵士は、娘に両親に対して、自分の過ちの責任はマリンにあると告げるよう教えた。両親が娘に「誰があなたを誘惑したのか」と尋ねると、彼女はマリンを指差した。父親は深く悲しんだ。彼は修道院へ向かい、怒りを込めて叫んだ。

「ここにいる、修道士を装ったこの悪辣で偽りのキリスト教徒はどこにいるのだ！」

すると、修道院の執事が彼のもとへ出てきて、こう言った。

「ちょうど良い時に来られたが、なぜそんなに悲しんでいるのか、なぜそんなに怒りを込めて叫んでいるのか？どうか落ち着いてほしい。」

それに対し、旅人はこう答えた。

「この修道院と知り合ったあの瞬間こそ、呪われるべきだ。ああ、私は不幸だ！　いったい私に何が起きたというのか。どうすればいいのか、わからない。」

修道院長はこれを聞くと、その宿泊客を呼び寄せ、何が起きたのか、なぜそれほど悲しんでいるのか、何を望んでいるのかと尋ねた。

「私が何を望んでいるか？」「と宿泊客は言った。「私は、いつどこであっても、修道士を一人たりとも見たり、話したりしたくないのです。」

修道院長が、なぜそう言うのかと尋ねると、宿泊客はこう答えた。

「私には一人娘がいました。老後の慰めになってくれると思っていたのですが――あなたがたが善良で品行方正なキリスト教徒だと見なしているマリンが、彼女にこんなことをしたのです。彼は私の娘の名誉を汚し、彼女は彼の子を身ごもってしまったのです。」

これを聞いて、修道院長は大変驚き、宿屋の主人にこう答えた。

「どうすればよいのか。今、マリンは修道院にいない。まだ修道院の作業から戻ってきていないからだ。彼が戻ってきたら、直ちに修道院から追放するつもりだ。」

その間、マリンは他の三人の修道士たちと共に修道院に戻ってきた。修道院長は直ちに彼を呼び出し、こう言った。

「兄弟よ、これがお前の生き方か、これがお前の行いか。宿に泊まっている間に、その宿の主人の娘を堕落させ、今や彼女は身穢れしてしまった。彼女の父親がここに来て、お前のせいで我々をあらゆる手段で罵倒したのだ。」

これを聞いたマリンは、修道院長の前でひれ伏し、こう言った。

「父上、罪深い私をお赦しください。主の御名においてお赦しください。私は人間として罪を犯してしまいました。」

すると、修道院長はこれに激しく怒り、マリンを不名誉な形で修道院から追放した。

修道院から追放された無実のマリンは、修道院の門の前に留まっていた。そこで衣服も着ずに座り、暑さも寒さも辛抱強く耐え忍んでいた。修道院に出入りする人々は彼に尋ねた。

「アッバよ、なぜあなたは裸のままここに座り、このような苦難に耐えているのですか？」

「私は罪を犯しました」とマリンは答えた。「それゆえ、修道院から追放されたのです。」

その間、宿屋の娘が男の子を産んだ。彼女の父親はその赤ん坊を抱いて修道院へやって来て、門の前に座っているマリンを見つけると、彼の前に赤ん坊を投げ捨てて去っていった。マリンは赤ん坊を受け取り、泣きながらこう言った。「ああ、呪われ、見捨てられた私よ。　まことに、この卑しい私は、自分の行いにふさわしい報いを受けているが、この哀れな赤ん坊が、なぜ私の元で苦しみ、死ななければならないのか？」

マリンは羊飼いたちに乳を乞い、まるで実の父親のようにその赤ん坊に飲ませた。マリンは絶え間ない暑さと飢え、嘲笑、そしてあらゆる面での貧しさに耐えていただけでなく、赤ん坊の世話さえも彼に多くの労苦と心配をもたらした。 赤ん坊はしばしば彼の服を汚したが、聖なるマリンは3年間にわたり、すべてを不平一つ言わずに耐え忍び、神に感謝し続けた。 3年が過ぎると、修道院の兄弟たちはマリンを気の毒に思うようになった。修道士たちは集まってイグメヌのもとへ行き、こう言った。「敬虔なる父よ、マリンの悔い改め　は十分です。どうか今、彼を修道院に受け入れてください。彼は悔い改め、皆の前で自分の過ちを打ち明けたのですから」。

しかし、イグメンは彼らの願いを聞き入れず、マリーナを再び受け入れることを拒んだ。そこで修道士たちは再び彼に懇願し、こう言った。

「もしあなたがマリナ兄弟を修道院に受け入れないなら、私たちも全員去ります。私たち自身が、すでに三年間も修道院の門の前で庇護もなく苦しんでいる兄弟の罪を赦さないでいるのに、どうして主に対して私たちの罪を赦してくださるよう祈ることができるでしょうか。」

これを聞いて、修道院長は修道士たちにこう答えた。

「確かに、マリンが犯した罪のゆえに、彼はここに入るに値しない。しかし、あなた方の愛と懇願ゆえに、私は彼を受け入れる。」

マリンを呼び寄せると、修道院長はすべての修道士たちの面前で彼にこう言った。

「兄弟よ、お前が犯した罪ゆえに、お前はかつて兄弟たちの間で占めていた第一の地位に就くに値しない。しかし、お前のために私に懇願してくれた兄弟たちの愛ゆえに、私は修道院内で最下位の地位を与える――お前は修道士たちの中で最後尾にならなければならない。」

マリナは涙ながらにイグメンにこう言った。

「尊き父よ、修道院に入らせていただき、そこで兄弟たち全員に仕えることができることだけでも、私にとってはすでに十分な恵みです。」

マリンを受け入れたイグメンは、彼に修道院で最も困難で末端の仕事をこなすよう命じた。聖マリンは、心を痛め、完全な謙遜のうちに、それらを細心の注意を払って遂行した。彼と共にいた少年は、常にマリンの後をついて回り、彼を父と呼び、食事を求めていた。　聖マリヌスはその少年の教育に心を配った。少年が成長すると、その「父」の祈りによって、謙遜と祈りにおいて目覚ましい進歩を遂げた。その徳ゆえに皆から愛され、修道者の位を受けた。しかし、それはすでに聖マリヌスがこの世を去った後のことであり、彼の至福の死は次のようにして訪れた。

キリストは、御自身の御名のために男装して労苦し、これほど大きな試練と苦難に耐え抜いた御自身の花嫁の信仰と忍耐をご覧になった。そして主は、彼女の悲しみを慰め、多くの労苦から安らぎを与え、彼女を楽園の住処へと導こうと望まれた。　神の御心により、彼女は自分の独房で息を引き取った――そして、そのことを知る者は誰もいなかった。　修道院長は、マリンがすでに三日間も教会や修道院の作業に現れないのを見て、修道士たちに尋ねた。「マリンの姿を見てから、もう三日

が経った。彼はいつも礼拝の始まりに真っ先に来ていたのに、今はいない。彼の独房に行って、何か病気にかかっていないか確かめてきてくれ。」

修道士たちは駆けつけると、マリンが主のもとへ魂を委ねていたのを見つけた。その傍らには、泣き崩れている少年が座っていた。修道士たちは直ちに、マリンが亡くなったことをイグメンに報告した。これを聞いたイグメンは驚き、こう言った。

「彼の魂は肉体を離れた。彼は自分の罪について、主に対してどのような答えを返すというのか？」

その後、彼は慣例に従い、マリンの遺体を埋葬の準備をするよう命じた。その時、修道士たちは、マリン兄弟が女性であったことに気づいた。彼らは恐怖に駆られ、一斉に「主よ、憐れみたまえ！」と叫び始めた。

修道院長は彼らの叫び声を聞いて驚き、こう言った。

「これは一体どういうことか？」と尋ねると、彼らは答えた。

「私たちの兄弟マリンは、本来、女性なのです。」

修道院長は、その聖女に近づき、この驚くべき予期せぬ光景を目の当たりにすると、地面にひれ伏し、聖女の足に触れながら叫んだ。「主イエス・キリストよ、どうか私をお赦しください。私の無知ゆえに罪を犯し、あなたの聖なる清らかな花嫁をこれほどまでに悲しませてしまいました。」

そして再び、聖女の足元にひれ伏して叫んだ。「私はここで、あなたの尊い足元で死ぬか、あるいは、あなたを侮辱した私の罪が赦されるまで、赦しを請い続けるでしょう」。

そうして彼は長い間、泣きじゃくっていた。すると突然、天から声が響いた。「もしあなたがこれを故意に犯したのなら、この罪は赦されなかっただろう。しかし、あなたは無知のうちに罪を犯したのだから、今、あなたの罪は赦される」。

そこで修道院長は、尊い聖遺物の前からは立ち上がり、宿屋の主人に使いを送って言った。「すぐにここへ来なさい。あなたに話したいことがある」。

宿屋の主人が修道院に来ると、修道院長は彼にこう言った。

「マリン兄弟が亡くなった。」

すると、彼はこう答えた。

「神よ、彼の罪をお赦しください！」しかし、修道院長は彼の言葉を遮って言った。

「悔い改めよ、兄弟よ。あなたは主の前で罪を犯し、その言葉で私を惑わせ、私はあなたのせいで罪を犯してしまったのだ。マリン――妻だ！」

これを聞いて、旅人は恐怖に襲われ、まるで口がきけないかのように黙り込んでしまった。一方、修道院長は彼の手を取り、至福のマリアの聖なる遺体が安置されている場所へと導き、娘を堕落させたとしてマリンを非難したのは無駄だったと告げた。この驚くべき奇跡を目の当たりにした宿屋の主人は泣き出し、かつて聖女に対して抱いていた憎しみを悔い改めた。　その間、修道院長は修道士たちと共に、葬送の賛美歌を歌いながら、キリストの汚れなき花嫁である聖マリアの清らかな処女の遺体を、修道院内の特別に用意された場所に丁重に安置した。そこへ、邪悪な霊に苦しめられていた宿屋の主人の娘もやって来た。彼女は皆の前で、すべての真実を率直に語った。　彼女が聖マリアの棺の前に連れて行かれると、不浄な霊は即座に彼女から出て行き、彼女はその時から完全に健康を取り戻した。この奇跡を目撃した者たちは皆、限りなく慈悲深い神と、死に至るまで誰にも知られずにその秘密を守り、天の御国のために多くの苦難に耐えた聖なる御使いマリアを賛美した[1834]。

兄弟たちよ、私たちもまた、彼女の殉教、不屈の精神、そして忍耐に倣いましょう。そうすれば、私たちも来世において、偉大なる神であり、私たちの救い主であるイエス・キリストから恵みを

[1834] マリアという名からマリンと改名した聖女マリアとその父エウゲニウスは、6世紀初頭に亡くなった。

受けるでしょう。御父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と権威が御名にありますように。アーメン。

コンスタンティノープル総主教聖アントニオスの記念日

記念日：2月12日

聖アントニオの出身地はアジアでしたが、幼少期から至福の死に至るまで、その生涯のすべてはギリシャ帝国の首都コンスタンティノープルで過ごされました[1835]。この都市で、聖人は育てられ、幼少期と青年期を過ごし、教育を受け、ついには司教となりました。 聖アントニオが司教として教会に崇高な奉仕を行うことについては、数多くの前兆が見られました。とりわけ、まだ乳児であった頃から、彼は聖体拝領の儀式をどのように執り行うか、香炉をどのように持つか、そして教会で神聖な典礼をどのように執り行うかについて、注意深く観察していました。 このように、神の恵みは、彼がまだ幼少の頃から、聖なる礼拝を執り行うために彼を準備していたのである。成人すると、聖アントニオスはコンスタンティノープルのある修道院で修道者となり、修道生活における苦行を勇敢に歩み始めた。 その厳格な修行により、彼はすぐに注目を集め、本人の望みとは裏腹に、まず司祭の位に叙階され、その後、総主教の命により修道院長にも任命された。この頃、聖人の父もまた修道者の道に入った。 修道院長としての新たな務めを担いながらも、聖アントニオスはそれ以上に、絶え間ない徹夜、断食、そして絶え間ない祈りに身を置き、いつもの修行を変わらず続けていた。このように日々を過ごす傍ら、彼は自らの手で貧しい人々に施しを配ることも行っていた。 そして、この偉大な修行者が、苦難に満ちた修道生活を送りながら慈善の行いを続けていたある時、ある日、誰かが彼に金の袋を持ってきて、それを差し出しながらこう言った。「これを貧しい人々に配るために受け取ってくれ」。

その言葉を聞いたとき、尊者には金の袋を握る手だけが現れ、それを差し出した人物自身は見えなかった。それ以来、尊者は、施しに値するすべての人々に、惜しみなく施しを与えるようになった。

やがて、コンスタンティノープルの総主教座が空席となる時が訪れ、聖アントニオスは、司教会議と皇帝による満場一致の選出により、コンスタンティノープル総主教の座に就いた[1836]。 この時、彼はすでに高齢であったが、老齢による体力の衰えにもかかわらず、聖霊の力に支えられ、祈りの力によって、その年齢で可能な限り、一時的な病を克服 しながら、自身の総主教区内のすべての教会を巡回した。 物質的な手段の不足により苦境に立たされている聖職者たちの様子を見て、尊者様は多額の金銭的援助をもって彼らを窮地から救い出しました。教会に入ると、常に何千人もの物乞いが彼を出迎えていましたが、彼はその全員に施しを与えました。 概して、多くの人々にとって、彼は多くの点で奉仕者であった。数多くの奇跡を成し遂げた聖アントニオスは、深き老齢に達して主のもとへ帰った。

2月26日

2月13日（旧暦）

[1835] 聖アントニオスは829年頃に生まれた。

[1836] 聖アントニオ2世（通称カヴレイ）は893年にコンスタンティノープル総主教の座に就き、895年に死去するまで総主教を務めた。

私たちの尊い父マルティニアヌスの生涯、および聖女ゾエとフォティニアの記念日。

記念日：2月13日

パレスチナのケサレア[1837] の近くには、「聖櫃の場所」と呼ばれる山がある。多くの隠者がそこで修行に励んでいたが、その中には、神の恵みに満ちた、祝福され称賛に値する修道士、聖マルティニアンがいた。彼は幼い頃から神を愛し、修道生活を送るようになった。　美貌のマルティニアンは、18歳の時に街と親族を離れ、世俗の虚栄を捨て、静寂と荒野の生活を求めてこの山へとやって来ました。無形の天使たちのように生活を送り、彼はここで25年間を過ごしました。　その徳高い生涯により、彼は神から病や不調を癒す賜物を受けました。多くの人々が、彼の聖なる祈りによって様々な病から癒やされ、悪霊に取りつかれた多くの人々も、山の上の彼のもとを訪れることで、悪しき者の策略から解放されました。　神は、御自身の御心に適う者の祈りによって、他にも多くの奇跡を行われた。日ごとにマルティニアヌスはその修行においてますます目覚ましい成果を挙げ、彼の徳高い生活に関する評判は、その国の境界をはるかに超えて広まった。彼のことを耳にした人々は皆、魂の救いを求めて彼の元を訪れた。　しかし、人類の敵である悪魔は、霊的な功績によってこれほどまでに自らを飾り立てた若き修行者の、そのような徳高い生活を我慢できなかった。　まず、悪魔は至福のマルティニアンをあらゆる手段で誘惑し、様々な方法で彼を脅かそうとした。その後、人類の古くからの嫉妬深い敵は、かつてアダムを楽園から追放したあの武器を用い、この修行者をもその静寂な荒野から追い出し、永遠の至福を奪おうとした。

ある日、至福のマルティニアンがダビデの詩篇を詠んでいたとき、悪魔は巨大な蛇の姿をとり、聖人の修道室の壁に近づくと、激しく地面を掘り始めた。彼は地面を掘り崩し、修道室を至福のマルティニアンの上に崩れ落とそうとしたのである。　しかし、マルティニアヌスは恐れも動揺もせず、歌い終えると、修道室の小さな窓から顔を出し、その大蛇にこう言った。

「まことに、お前は地を這うにふさわしい。なぜ無駄な労苦をするのか。お前の策略など、私を脅かすことはできない。私の主イエス・キリストが私を助けてくださるからだ。主は、お前の策略を打ち破り、お前の力を恥じ入らせるであろう。」

これを聞いた悪魔は、暗い旋風へと姿を変え、恥じ入った様子で走り去りながら言った。

「待て、待て。お前を打ち負かす方法は知っている。お前を私の奴隷にしてやる。お前の希望をすべて打ち砕いてやる。お前には耐えられないような誘惑を仕掛けてやる。お前の修道室から引きずり出し、風になびく葉のように放り投げてやる。そうすれば、誰がお前を助けてくれるか見てやる。」

そう言い残して、悪魔は姿を消した。一方、マルティニアヌスは信仰が極めて堅固であったため、まるで幽霊など見ていないかのように、何の恐れも不安も抱くことなくその場に留まっていた。彼はただ主を賛美し、神への黙想に励み、聖書の読解と理解に没頭していた。

その後、次のような出来事があった。ある時、ケサリアの住民数人が、マルティニアヌスの徳高い生き方について話し合っていた。彼らは彼の勇気と忍耐力に深く感嘆していた。ある娼婦が、たまたまその会話を耳にした。悪魔の唆しにより、彼女はそれらの男たちに近づき、こう言った。

「なぜあなたたちは、この修道者の生き方にそれほど感心しているのですか？　彼は果たしてそれほど徳に堅固なのでしょうか？　私が望めば、風が木々の葉を揺らすように、彼を揺さぶることができるのです。一体、彼にどんな称賛に値する点を見つけたというのですか？　もしかすると、彼が野獣のように荒野へ逃げ込んだのは、都会で肉欲や世俗の誘惑と戦うことができなかったからではないか？　そして、一度も女性を見たことがないのだから、彼が情欲に動じないのも不思議ではない

[1837] *ケサリアは*、地中海に面したパレスチナの大都市であり、そこにはローマの総督たちが居を構えていた。

。　火がなければ干し草は燃えないということは、あなた自身もよくご存じでしょう。しかし、火のそばに置かれた干し草が燃え上がらないとしたら、それは極めて驚くべきことでしょう。この男についても、同様に考えるべきです。　もし私が彼のところへ行き、彼が依然として同じように無欲であり続け、私の美しさに惑わされないのなら、彼は人々のみならず、神とその天使たちの前でも偉大な存在となるでしょう。

そう言い終えると、彼女はあの男たちと賭けをして、自分の家へと戻った。そこで彼女は豪華な衣装を脱ぎ捨て、薄っぺらでボロボロの服に着替え、頭にはぼろ布を巻き、腰には縄を巻いた。そして、自分の豪華な衣装、指輪やイヤリング、金の指輪、ネックレス、そして若者の心や目を魅了するあらゆるものを袋に詰め、それを持ち出した。夕方、彼女はケサリアを出て、夜になって、聖人が住んでいた砂漠のあの山へとたどり着いた。　その夜は雨風が激しく吹き荒れていた。マルティニアヌスの庵に近づくと、その妻はうめき声を装って聖人にこう懇願し始めた。

「神のしもべよ、私を憐れんでください！　この罪深い私を、野獣の餌食にしないでください。私は砂漠で道に迷い、どこへ行けばよいのか分かりません。憐れみをお示しください。このような苦境にある私を憐れんでください。そして、罪深い私を嫌悪しないでください。私もまた、神の被造物なのですから。お願いです、聖なる父よ、私を助けなしに放置しないでください。

彼女は泣き叫びながら、このような言葉やそれに類する多くのことを語った。福者マルティニアヌスは窓を開けて外を眺めると、ひどい雨の中、粗末な服姿で立っている彼女を見て、心の中でこう考えた。

「ああ、哀れな私、この呪われた罪人よ。今、私に試練が迫っている。憐れみ深くなれと命じる神の戒めを果たすべきか、それとも修道者の誓いを破るべきか。もし、これほど悲惨な状況にあるこの女性を私の独房に受け入れなければ、彼女は野獣に食われたり、酷寒で死んでしまうだろう。そうなれば、私は自分の魂を汚し、殺人者と同じになってしまうだろう。しかし、もし彼女を私の独房に迎え入れれば、誘惑に襲われるのではないかと恐れている。そうなれば、私は肉体も魂も汚し、主の御前で不浄な淫行者となってしまうだろう。どうすればよいのか、私にはわからない。

そして、天に向かって両手を挙げ、至福のマルティニアンはこう叫んだ。

「『*主よ、私はあなたに私の魂を捧げます*』（詩編24:1）、どうか私が誘惑に陥り、諂う悪魔の奴隷となることを許さないでください。しかし、この時、私を守り、敵の誹謗から私を覆ってください。あなたは永遠に祝福される方だからです。」

祈りを終えると、彼は扉を開け、その女性を修道室に招き入れ、火を焚いて暖まるよう勧め、それから自分の修道室の近くにある木から摘んだナツメヤシの実を持ってきて、彼女に渡し、こう言った。

「女よ。これを食べて、ここで火のそばで暖まりなさい。そして朝には、平穏に私の庵を去りなさい。」

その後、彼は彼女をケリアの外側の部屋に置き去りにし、自身は内側の部屋へ入り、扉に鍵をかけた。夜中の三時、彼はいつもの習慣通り、詩篇と祈りを唱え始めた。その後、彼は地面に横たわり、眠りについた。しかし、その夜、サタンは肉欲によって彼を惑わせた。　真夜中、妻は起き上がり、袋から自分の装飾品をすべて取り出し、聖人を誘惑するために身につけた。粗末な衣を袋にしまい、彼女はマルティニアンが自分のところに出てくるのを待った。　朝、聖人はその女性を自分の修道室から送り出そうと、自分の部屋から出てきた。豪華な衣装を身にまとい、装飾を施された彼女を見て、彼は彼女だと気づかなかった。恐怖に駆られて立ち止まり、長い間黙り込んでいた。ついに彼は彼女にこう言った。

「お前は誰だ？　どこから来たのか？　そして、なぜそんな悪魔のような衣装を身にまとっているのだ？」

彼女は、自分がまさに彼自身が自分の独房に招き入れたあの女性その人だと答えた。

「なぜ服を変えたのだ？」とマルティニアンは尋ねた。「夕方にはみすぼらしいぼろ服を着ていたのに、今は豪華な衣装を身にまとっているではないか。」

すると彼女はこう言った。

「私はパレスチナのケサレアから来ました。あなたの美貌について多くを耳にし、私の心はあなたへの愛に燃え上がりました。あなたのために、私はこの遠い道のりを旅してきたのです。　あなたの禁欲は何のためなのか、なぜそれほど厳しい断食で自分の体を苦しめるのか。飲まず、食わず、結婚もしないという教えは、どの書物に書かれているというのか。使徒パウロはこう言わなかったか。「*すべての人の結婚は尊くされ、寝床は汚れのないものであれ*」（ヘブライ人への手紙13:4）。

預言者たちのうち、妻を持っていたというだけの理由で天の御国を失った者が誰がいるというのか？偉大で驚くべきエノクでさえ、結婚していなかっただろうか？彼は天に上げられ、今日に至るまで死を味わうことはなかった（創世記5:24；ヘブライ人への手紙11:5）。先祖であるアブラハムは三人の妻を持ち、神の友とさえ呼ばれました。それだけでなく、彼は三位の神ご自身を自分の天幕に迎え入れる栄誉に浴したのです（創世記18章）。キリストの型であるイサクも結婚していました（創世記24:67）。　ヤコブには二人の妻と二人の側室がいたが、彼は天使と格闘し、神の栄光を仰ぐ栄誉に浴した（創世記22章）。偉大なるモーセ、至高の預言者であり神の僕である彼は、果たして結婚していなかったというのか（出エジプト記2章）？　それなのに、彼は神と対話し、ユダヤの民を異邦人による過酷な奴隷制から解放し、天の御国に入るにふさわしい者とされた。また、ダビデや他の預言者たち、聖なる人々も、正妻や子供たちを持っていたが、彼ら全員が天の御国に迎え入れられているのだ」。

そう言いながら、その罪深い女は聖人を当惑させ、動揺させようと努めた。彼女は聖人の両手を掴み、聖人を破滅へと引きずり込もうとした。

「しかし、もし私があなたを妻に迎えるとしたら」とマルティニアンは言った。「私はあなたとどうすればよいのか？私には何もないのに、どうやってあなたを養えばよいのか？私の生活を見ればわかるだろう。若き日から、私はこの世の儚い富を一切手に入れようとはしなかったのだ。」

これに対し、その女はこう答えた。

「ご主人様、ただ私と一緒にいて、あなたの美しさを味わわせてくださるだけで結構です。それ以外のことはお気になさらないでください。私には家も、多くの財産もあります。金も銀も、男奴隷も女奴隷も。これらすべてを、あなたが支配されることになるのです。」

この妻――いや、むしろ彼女の口を通じて語る、古来より人を殺す悪魔そのもの――の言葉を聞いて、マルティニアヌスは罪を犯そうかと迷い始めた。ついに、彼は妻にこう言った。

「少し待ってくれ。普段、祝福を求めて何人かが私のところへやってくる。誰かいないか確認して、私たちが見られないようにしよう。神から私たちの罪を隠すことはできないが、少なくとも人々からは隠そう。そうすれば、私たちを中傷したり、罵ったりされることはないだろう。」

そう言うと、彼は小部屋を出て、そこにあった石の上に立ち、道を注意深く見渡した。しかし、人を愛する神は、誰の滅びも望んでおられない。　神は、聖マルティニアヌスが若き日から積み重ねてきた労苦をも軽んじず、彼の祈りを思い起こし、彼に御加護を与え、その邪悪な考えを善きものへと変えられた。岩から降りたマルティニアヌスは、乾いた小枝を見つけ、それを拾って自分の小部屋へ持ち帰った。　それを小部屋の中央に置き、火をつけた。火が激しく燃え上がったとき、聖人はサンダルを脱ぎ、炎の中へと足を踏み入れ、火が全身を焼き始めるまでそこに立ち続けた。その後、彼は炎の中から出てきて、まるで自分自身を責めるかのようにこう言った。

「どうだ、マルティニアンよ、この一時的な火は心地よいか？　この苦しみは快いものか？　もしこれを耐え忍ぶことができるなら、その妻のもとへ行きなさい。彼女、あるいは彼女を通じて悪魔が、お前のために永遠の火を用意しているのだ。」　いや、罪を犯したのは彼女ではなく、彼女にこの考えを吹き込んだ悪魔だ――悪魔は、お前を破滅の深淵へと引きずり込もうとしているのだ。考え

よ、不肖のマルティニアンよ、お前に待ち受ける苦しみについて、永遠の炎を思い起こせ。この一時的な炎は水で消すことができる。そこには光さえある。　しかし、地獄の火には何の光もなく、天の下に存在するすべての海や川を合わせても、それを消すことはできない。もしお前がこの消えぬ火に耐えられるのなら、妻のもとへ行き、欲望を満たせ。

彼はそう独り言をつぶやいた。やがて痛みが少し和らいだとき、彼は再び火の中に入り、それが可能な限り長い間、そこに立ち続けた。火の中から出てくると、彼は地面に倒れ込み、心を痛め、ため息をつき、泣きながら、主に向かってこう叫んだ。

「主よ、わが神よ、罪深い私に憐れみをお示しください。私の心の曇りと、罪へと向かう私の誘惑をお赦しください。」　心と内なる思いを試される御方よ、あなたは私の心も知っておられます。私が幼い頃からあなたを愛し、あなたのためにこの身を火で焼いたことを、あなたはご存知です。私の主よ、私をお赦しください。あなたは唯一、善く、憐れみ深い方であり、永遠に祝福される方だからです。

聖人は、顔を地面につけてこのように祈りました。激しい火傷のため、立つことができなかったのです。その後、彼は次のように歌い始めました。「*神はイスラエルに、清い心を持つ者たちに、なんと恵み深いことか。しかし、私は、足がよろめきそうになり、足元が滑りそうになった*」[1838]（詩編72:1–2）。

これを見た妻は、聖人が自らの救いのために自ら炎の中に身を投じたことに驚いた。　そして彼女自身も、自分の罪を思い出し、まるで眠りから覚めたかのように気力を取り戻した。彼女は　、自分の衣服や装飾品をすべて引き裂き、それらを火の中に投げ込み、再び粗末なぼろ服を身にまとって、聖マルティニアヌスの足元にひれ伏し、涙ながらに彼にこう語りかけた。

「神のしもべよ、この呪われた罪深い私をお赦しください。主よ、あなたは悪魔の策略と誘惑がいかに強く、多岐にわたるかを御存知でしょう。悪魔は私にも、あなたを誘惑しようという考えを吹き込んだのです。　聖なる父よ、私のために祈ってください。あなたの祈りによって、この大罪人である私も救いを得ることができますように。父よ、どうか知っておいてください。私はもう二度と街には戻らず、自分の家にも入らず、親族や知人の顔を見ることもありません。　いいえ、私は自分の悪行を断ち切ることを固く決意しました。これからは、この呪われた私の魂の救いだけを考えるつもりです。そして、主よ、もう一つ知っておいてください。私たちの主イエス・キリストの御名において、私は悪魔と戦います。それは、彼が私にあなたに反旗を翻すよう唆したのと同じ方法で。　そして、彼を恥じ入らせることができると願っている。この古くからの諜報者は、私をあなたに立ち向かわせることで、実は自分自身に立ち向かわせたのだ。彼は私を通じてあなたを打ち負かそうとしたが、娼婦たちさえも悔い改めに招かれる私たちの主の助けにより、彼自身が私によって打ち負かされるだろう。

彼女はそう言いながら、涙を流した。すると、聖人は彼女にこう答えた。

「わが主、神よ、妻よ、あなたの罪をお赦しください。平安のうちに去り、あなたが言ったように、自分の魂の救いを務めなさい。悔い改めを自らに課して情欲と戦い、そうすればあなたは悪しき者を恥じ入らせることができるでしょう。」

これに対し、彼女は聖人にこう言った。

「お願いです、父よ、どうか私を救いの道へと導いてください。どうすれば救いを得られるのか、教えてください。」

すると、彼はこう答えました：

[1838] すなわち、健全で私を支えてくれる思いから離れ、最大の誘惑にさらされる危険にさらされていたのである。——預言者が「足」と呼ぶものは——聖テオドリトスが説明するように——思いのことである。

「ベツレヘムへ行き、そこでパヴル[1839] という名の聖なる乙女を探しなさい。彼女はそこに聖なる教会を建てた。彼女のところへ行き、起こったことをすべて話し、彼女のもとで救いを求めなさい。」

妻は立ち上がり、彼に頭を下げて言った。

「父よ、この罪深い私のために祈ってください！」

激しい痛みに苛まれた聖人は、やっとのことで地面から立ち上がることができた。彼はその女性に旅の糧として少量のナツメヤシを与え、小部屋から送り出し、エルサレムへの道を示してこう言った。

「平安のうちに去り、あなたの魂を救い、悔い改めに励みなさい。　見よ、決して引き返してはならない。*「鋤に手をかけ、後ろを振り返る者は、神の御国にふさわしくない」*（ルカ9:62）。敵に再び辱められないよう自重し、絶えず悔い改めの道を歩みなさい。神は悔い改める者を受け入れてくださるからである。

これを聞いて、その妻はさらに激しく泣きながら言った。

「私も、諸国民が信頼して恥をかかなかったその方に信頼を置いています。これからは、悪魔が私をその手先として利用することは決してない、と固く信じ、希望しています。」

福者マルティニアヌスは、彼女に十字の印を授けて、こう言った。

「わが主なる神が、あなたの魂を守り、最後まであなたを見守ってくださいますように。」

その女性は聖人に頭を下げて去り、聖人は独房に戻ると、涙を流しながら主に祈りを捧げた。一方、その女性は、神が彼女を救いの道へと導いてくださるよう、涙ながらに祈りながら歩み続けた。すでに夜が更けていたが、彼女は依然として荒野を歩いていた。そこで彼女は一晩を過ごすために立ち止まった。　朝になると、彼女は再び祈りを捧げ、涙を流しながら旅を続けた。翌日の夜遅くになってようやく、彼女はベツレヘムに到着した。聖パウラが建立した修道院に入ると、彼女は聖パウラに頭を下げ、これまでの出来事をすべて語った。　その話を聞いた聖パウラは、人を愛する神を賛美し、喜びをもって彼女を修道院に迎え入れ、毎日彼女を教え導き、救いの道へと導いた。この女性は、これほどまでに精進し断食に励んだため、聖パウラは何度も彼女にこう言った。

「子よ、肉体が衰えないよう、少しは休ませてあげなさい。断食の修行を最後まで続けられるよう、努めてください。」

しかし、彼女は修行の勢いを緩めることはなかった。臨終間際、至福のゾイア――その女性はそう名乗っていた――は、主に対し、自分の悔い改めが受け入れられたかどうかを明らかにしてくださるよう願い求めた。　その慈しみを示すため、人を愛する神は彼女に癒しの賜物を与えられた。ある女性が、目にひどい痛みを抱え、癒やしを願ってその修道院を訪れた。至福のパヴラは、ゾイアの悔い改めの状態を知りたがり、彼女にこう言った。

「子よ、この女性のために祈ってくれ。もしかすると、お前の祈りによって、主が彼女に癒やしを与えてくださるかもしれない。」

しばらくして、ゾイアが病める女性の為に祈っていると、その女性は癒やされた。癒やされたことへの感謝の印として、その女性はその修道院で修道女となり、熱心に修道生活を送るようになった。

十二年間、聖女ゾイアは断食の修行に励み、安らかに主のもとへ魂を捧げた。　悔い改めの期間中、彼女はワインも、油も、野菜も口にせず、わずかなパンと水だけを摂っていた。食事は一日に一度、夕方だけ、時には二日に一度しかとらず、寝床は裸の地面であった。これが聖人の修道生活であり、これが彼女の最期であった。

さて、再び至福のマルティニアヌスの物語に戻ろう。

[1839] *聖パウロ*の未亡人は、384年から20年間ベツレヘムで修道生活を送り、404年1月26日に亡くなった。

尊者マルティニアヌスは、やけどが治るまでに七ヶ月を要した。その後、彼は次のように考え始めた。

「もし私がここからどこか別の場所へ去らなければ、邪悪な敵は私を見放さず、安らぎを与えてはくれないだろう。そして、私は女性が全く立ち入れないような場所で暮らすべきだ。」

そう考えた彼は立ち上がり、神にこう祈りました。

「天と地の主、海の創造主よ！　私に益となることを成し遂げてください。私を見捨てず、最後まで滅びることを許さず、私の助け手であり守護者となってください。力ある主よ！　私に救いの道を示してください。」

十字を切って祈りを捧げた後、聖人は自分の修道室を出て、海へと向かった。修行者がこの場所を去ったのを見て、悪魔は叫んだ。

「わが名は栄光あれ。私はお前、マルティニアンを修道室から追い出し、お前の肉体を焼き、逃亡者とし、わが捕虜としたのだ。」　「さて、マルティニアンよ、お前はここから逃げ出すのか？だが知っておけ、どこへ行こうとも、私はどこへでもお前を追いかける。この場所からお前を追い出したように、お前がどこに定住しようとも、あらゆる場所からお前を追い出す。お前を完全に打ち負かし、私の奴隷にするまでは、決して見放さない。」すると、聖人はこう答えた。

「無力な、呪われた者よ！　お前自身、何の力も持たないくせに、私をこの小部屋から追い出したとでも思っているのか。あるいは、私が絶望してここを去ったとでも思っているのか？　いいえ、私がここを出たのは、お前とよりよく戦い、お前を打ち負かすためだ。　もし、お前が私に仕掛けたあの二つの誘惑だけでは物足りないというのなら、さらに私を誘惑しようと努めよ。私の神の助けにより、私はお前の狡猾な策略を打ち砕き、お前のためではなく、私の主なる神の御名のために苦難に耐えたのだ。　何しろ、あなたが私を誘惑するようそそのかしたあの妻でさえ、今やあなたの無価値さを知り、あなたを煙に例えている。彼女はあなたの不義で邪悪な策略を踏み潰したため、あなたは彼女の影にさえ近づくことを敢えてできないのだ。

聖人のこの言葉を聞いて、悪魔は姿を消した。そして、聖人は詩篇を歌い始めた。*「神よ、立ち上がってください。その敵は散らされ、神を憎む者たちは神の御前から逃げ去りますように」*（詩篇67:2）。この詩篇を歌いながら、彼は海へと向かった。ある埠頭にたどり着くと、そこで敬虔な船主を見つけ、彼にこう言った。

「兄弟よ！　海に、小さくて無人の島をどこか知らないか？」

船主は彼にこう答えた。

「なぜそんなことを聞くのですか？　何のために必要なのですか？」

「私はこの虚しい世から離れ、沈黙の修行に身を捧げたいのです」とマルティニアンは答えた。「しかし、そのための適した場所が分からないのです。」

その男は言った。

「そのような場所は一つあるが、恐ろしい場所だ。海の真ん中に高い岩山があり、そこから陸地さえ見えなくなる。」

「そんな場所は私にとって都合が良い」と、その聖人は答えた。「私はそこに住みたい。なぜなら、そこには妻たちが近づくことはできないからだ。」

「だが、誰が君に食料を届けてくれるというのか？」と船主は尋ねた。

マルティニアヌスは言った。

「その件について、あなたにお願いしたいのです。あなたが私に食料を届けてくれれば、私はあなたのために祈ります。もしあなたがヤシの枝を持ってきてくれるなら、私はそれを編むことに専念します。あなたが訪ねてきた際には、私の手仕事を持ち帰り、それを売ってください。そのお金で私にパンを買ってください。また、器に入った水も持ってきてください。」　パンと水を持って私のところへ来てほしいのは、年に二、三回だけでよい。

これを聞いて、船乗りは、自分の前に聖なる人が立っていることを悟り、その聖人が求めることはすべて果たすと約束した。船に乗り込むと、彼らはその人里離れた場所へと出航した。　追い風が吹く中、彼らは夕方までにその岩山にたどり着いた。それを見て、聖人は心から喜び、神を賛美した。　船頭に祝福を与えると、彼は岩山に登り、こう詠み上げた。*「私は主を堅く信頼した。主は私に耳を傾け、私の叫びを聞いてくださった。主は私を恐ろしい穴から、泥沼から引き上げ、私の足を岩の上に置き、私の歩みを確かなものにしてくださった」*（詩編39:2）。（聖アファナシオの解説によれば、情欲の穴とは、悪徳と無知のことである。また、泥沼の迷いからも救われた。なぜなら、罪はまるで泥沼のように、それに捕らえられた者を深くはまり込ませるからである）。

詩篇を読み終えると、彼は祈りを捧げ、船頭にこう言った。

「平安あれ、兄弟よ。そして、私がかごを作れるように、パンと水、そして枝を持ってきてくれ。」

「もしお望みなら」と船頭は答えた。「木も持ってきますよ。ここに、あなたのために小さな小屋を建てましょう。」

しかし、聖人はそれを望まなかった。彼はこの岩の上で、空の下に暮らし続け、昼の暑さも夜の寒さも辛抱強く耐え抜いた。毎年二、三回、船頭は聖人の願い通り、パンと水を届けてくれた。岩の上で暮らす中、聖マルティニアンは世俗の喧騒から逃れられたことを大いに喜んでいた。彼は昼夜を問わず神を賛美し、絶えず神への思索にふけっていた。しかし、狡猾な悪魔はここでも聖人を放っておかず、あらゆる手段で彼を悩ませようとした。　ある夜、悪魔は海に激しい嵐を巻き起こし、至福の者の頭上に巨大な波を立てた。その波は岩の上を十五キュビトも覆い尽くした。その時、悪魔は叫んだ。

「さあ、今こそお前を溺れさせてやる、マルティニアン！」

しかし、聖人は動じることなくこう答えた。

「弱く、呪われた者よ、お前の労苦は無駄だ。お前の策略は私を恐れさせず、お前の罠は私を動揺させない。私は主イエス・キリストを信頼し、その御名によってお前を恥じ入らせる。」

そう言うと、聖人は次のように歌い始めた。*「神よ、私を救ってください。水は私の魂にまで達しています。私は深い泥沼に沈み、立つ場所もありません。水の深みに入り、その激しい流れに引きずり込まれようとしています」*（詩編68:2）。

この詩篇を歌い終えると、マルティニアヌスは祈り始めた。

「主イエス・キリストよ」と彼は叫んだ。「見えない御父の独り子よ、あなたは私たちの救いのためにこの地上に降りてこられ、海をも支配し、風をも御命令になる方です。　万物は畏れおののきながら、あなたに耳を傾けています。主よ、この時に私の声を聞き入れ、この嵐を鎮め、私を滅ぼそうとする悪魔を打ち負かしてください。主よ、あなたにはすべてが可能であり、すべてはあなたの御手の内にあるのです。この聖人の言葉に、悪魔は姿を消した。嵐は、聖人に何の害も及ぼすことなく収まった。　その後、聖人はその岩の上でさらに六年間を過ごし、救いのために雨や寒さ、暑さに耐え抜いた。しかし、悪魔はその悪巧みを止めようとはしなかった。悪魔は聖人を、さらに過酷な試練へと陥れ、より大きな災難にさらした。

ある日、悪魔は海を航行する船に男女が乗っているのを見かけた。彼は嵐を巻き起こし、強風で船を岩に打ち付け、船を難破させた。　乗っていた者たちは皆溺死したが、ただ一人の少女だけが板にしがみつき、その板に乗ってマルティニアヌスが住んでいた岩礁までたどり着いた。岩にしがみつくと、少女は叫び始めた。

「神のしもべよ、私を憐れんでください。手を差し伸べて、私を救い、滅びに任せないでください。」

その少女を自分以外に救える者はいないと悟ると、聖人はこう言った。

「これもまた悪魔の策略だが、今や、悪魔よ、お前は私を打ち負かすことはできない。」

これを思い巡らしながら、聖人はこう語った。

「ああ、罪深い私よ。またしても試練が待ち受けている。どうすべきか。もしこの少女に手を差し伸べず、水から救い出さなければ、彼女は溺れて死ぬだろう。そうなれば、私の魂には重い罪がのしかかる。なぜなら、私は彼女を殺した者となるからだ。　しかし、もし彼女を引き上げれば、私は彼女と一緒にここにいるわけにはいかない。そうなれば、私にとっては最初の試練よりも大きな災いが訪れるだろう。かつて私は地上にいた時、逃げることができたが、今や――どこへ逃げればよいのか？　ここには小さな岩が一つあるだけで、その周囲は四方八方海に囲まれているのだから。

そうして、天に向かって両手を差し伸べ、聖人は祈り始めた。

「主よ、私を滅びさせないでください。どうか、私の魂のためにすべてを導いてください。」

そう言うと、彼は少女に手を差し伸べ、彼女を海から岩の上へと引き上げた。彼女が極めて美しいことに気づくと、マルティニアンは言った。

「まことに、干し草と火が共存することはできない。君と私がここで共に暮らすことは不可能だ。ここに留まり、何も恐れることはない。ここにはパンと水がある。ある船頭がそれらを運んでくるのだ。あと二ヶ月で彼がここに来る。彼に起こったことをすべて話せば、彼は君を海を越えて連れて行ってくれるだろう。」

その後、聖人は海に向かって十字を切ってこう言った。

「主イエス・キリストよ！　あなたに畏敬の念をもって従う風たちを制されたあなたよ、私を見守り、憐れんでください。私を滅びさせないでください。あなたの御名によって、私は海に身を投じます。なぜなら、女への肉欲に燃え上がるよりは、波の中で死ぬほうがましだからです。」

そして、マルティニアンは少女に向き直って言った：

「逃げなさい、お嬢さん。神が、あらゆる敵の誹謗中傷からあなたの魂を守り、最後まであなたを見守ってくださるでしょう！」

そう言うと、彼は海に飛び込み、泳ぎ去った。　神の御心により、二頭のイルカが彼を背に乗せ、運び去った。それを見た乙女は、彼が視界から消えるまで彼を見つめ続けた。イルカたちはその聖人を陸地に運び出した。陸に上がると、マルティニアンは主に感謝を捧げた。

「主なるわが神よ、あなたを賛美します。あなたは、罪深く、ふさわしくないあなたのしもべである私に、驚くべき御慈悲を示してくださいました。どうか、最後まで私を見捨てないでください。」

その後、彼はこう考え始めた。

「どうすればよいのか分からない。敵は山でも砂漠でも、私を放っておいてくれない。海の上でも、私を見捨てなかったのだ。　しかし、私は常に福音書の言葉を心に留めておかなければならない。*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい。まことに、あなたがたに告げる。イスラエルの町々を巡り終える前に、人の子が来るからだ」*（マタイ10:23）。

こう言った後、福者（聖人）は、ある場所から別の場所へ、ある町から別の町へと移動し始め、こう語った。

「逃げなさい、マルティニアンよ。そうすれば、災いがあなたを襲うことはない。」

こうして、絶えず放浪しながら、彼は生涯を過ごした。その際、彼は杖も、袋も、パンも、二着の服も、お金も――要するに、私たちの生活に必要なものは何も持ち歩かなかった。彼が町や村に入ると、住民の中で誰が敬虔さで際立っているかを尋ね、その人の家に泊まり、食事をいただいた。彼は、夜が訪れる場所――砂漠であれ野原であれ――で夜を明かし、その際、休息のために横になるのはごく短い時間だけだった。　このように巡礼を続け、彼は2年間で164の都市を訪れ、ついにアテ

ネに到着した[1840] 。神はその都市の司教に、聖マルティニアヌスに関するすべてを明らかにしてくださった。ここで、死が近づいていることを感じ取った聖人は、すでに病に伏していたが、教会に入り、地面に横たわって周囲の人々にこう言った。

「早く司教をここに呼んでくれ！」

周囲の人々は、彼が正気を失ったのだと思った。しかし、マルティニアンが再び彼らに懇願すると、彼らは彼の言うことを聞き入れ、司教のもとへ行き、こう告げた。

「ある男が教会に横たわっています。彼が正気を失っているのか、それとも何か他の理由があるのか、私たちにはわかりません。彼はあなたを呼んでほしいと頼みました。」

すると、司教は彼らにこう答えた。

「あなたがたは、この人を狂人と呼ぶのは間違いだ。彼は私よりもはるかに優れており、高潔な人物なのだ！」

司教は立ち上がり、教会へ向かった。福者は司教の姿を見ると、身を起こすことができなかった。彼に向かって両手を差し伸べ、それによって神の司教に相応しい敬意を表そうとした。司教もまた彼に敬意を表そうとし、こう言った。

「かつて神は、御自分のしもべを私に示すと約束されました。今、その約束が果たされました。あなたが天の御国に召される時、私のことも覚えていてください。」

聖人はこう答えた。

「父よ、私を祝福してください。そして、私が裁かれることなく、主の義なる裁きの座の前に立つことができるよう、主のために私のために祈ってください。」

そう言うと、聖人は天を仰ぎ見て、こう言った。

「主イエス・キリストよ！　私の霊を御手に委ねます！」

そして十字を切って、司教に言った。

「父よ、主の御名のために、私を葬ってください！」

その時、聖人の顔には微笑みが浮かび、こうして彼は主のもとへ魂を委ねた[1841] 。こうして聖マルティニアヌスは、栄光のうちにこの世の旅路を終え、信仰を守り抜き、天の御国で彼のために用意された冠を受けるにふさわしい者とされた。　司教は、その教会において、彼の聖なる遺体を大いなる栄誉をもって埋葬した。

この修道者に驚かず、その記憶を称えずにいられる者がいるだろうか！彼は生涯の終わりまで、自らの魂を救うために奮闘した。さらには自ら進んで苦難に身をさらした。当時、キリスト教徒に対する迫害はまだ始まっていなかったが、聖人は自ら殉教の道を切り開いた。彼は悪魔に打ち勝ち、そのすべての策略を打ち砕いた。　彼は自らを迫害者とし、進んで自らに苦しみを与えた。まことに、彼は殉教者であり、善良な苦行者と呼ぶにふさわしい。一時的な火によって、彼は永遠の火を克服した。悪魔は彼に妻を送り込んだが、この至福の者は彼女を正しく善良な道へと導いた。

さて、マルティニアンによって岩の上に置き去りにされたあの乙女に話を戻すと、この福者の祈りが彼女に大いに役立ったことがわかる。

岩山に取り残されたフォティニア――それがこの乙女の名前であった――は、聖人が指示した通り、パンと水だけで生き延びていた。慣例通り、二ヶ月後、船頭が聖人のためにパンと水を運んで岩山へ向かった。岩山に近づくと、彼は修道士ではなく乙女の姿を見て、それが幽霊だと思った。恐怖に駆られて、彼は岩から船を遠ざけようとした。するとフォティニアは彼に向かって叫んだ。

「何も恐れることはありません。私は確かに女性であり、キリスト教徒です。私から離れて行かないで、ここに来て、私の話を聞いてください。」

[1840] ギリシャの都市。現在はギリシャ王国の首都である。古代、この都市はその学問の盛んなことで知られていた。

[1841] 聖マルティニアヌスは、4世紀末か5世紀初頭に逝去した。

しかし、船頭は彼女を信じなかった。そこで彼女は、彼を説得しようとこう言い始めた。

「キリストにかけて誓うわ、私はキリスト教徒よ。恐れることなくここに来て、私の話を聞いて。」

すると、船頭は岩に近づき、彼女にこう尋ねた。

「さっきここにいた修道士はどこにいる？　どうやって、どこへ逃げたんだ？　誰が君を連れてきて、この岩の上に置き去りにしたんだ？」

フォティニアは十字を切って、自分に起こったすべての出来事を語り始めた。その話を聞いた男は大変驚き、彼女にこう言った。

「さあ、ここから陸へ連れて行ってやる。そうすれば、君は自分の町へ帰れるだろう。」

「いいえ、兄弟よ」と彼女は答えた。「お願いです、私をここから連れ出さないでください。その代わりに、私に慈悲を示してください。村へ行って、山羊の毛の服を男用にもたらしてください。そして、あの祝福された男性のためにあなたがしていたように、パンと水を持ってきてください。そうすれば、あなたが彼に約束された神の祝福を受けるでしょう。」　なぜなら、使徒が言ったように、男性と女性の間には違いがないからです。*「もはやユダヤ人も異邦人もなく、奴隷も自由人もなく、男性も女性もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つなのです」*（ガラテヤ3:28）。罪人である私を軽蔑しないでください。私も救いを得たいのです。もしかすると、神は私を救いたいと願われ、その英知に満ちた御計画によって、私をこの岩の上に住まわせられたのかもしれません。私が女性であるという理由だけで、私を見捨てないでください。神がアダムとエバを創造されたこと、そして御自身が至聖なる聖母マリアから生まれられたことを思い出してください。　あの義人に仕えたように、私にも仕えてください。そして、私がお願いしたすべてのものを届けてください。また、私が手仕事をできるよう、羊毛も持ってきてください。あなたの妻も一緒にここへ連れてきてください。彼女が私に男装をさせてくれるでしょう。そうすれば、私は彼女の指示通りに仕事をします。　主であり、私の神が、あなたの生涯を通じてあなたと共にいてくださり、この世でも来世でも、恵みと憐れみ、そして罪の赦しをあなたに与えてくださいますように。

船主は彼女にこう答えました。

「君が私に求めていることはすべて叶えてやる。ただ、気力を失わず、勇気を出しなさい。そうすれば、神が君の願いを叶えてくださるだろう。」

そう言って、彼は故郷へと船出しました。二日後、彼は妻を連れて再びここへ戻り、乙女が求めたものをすべて持参しました。船から降りると、彼の妻は岩山を登り、聖女フォティニアのもとへやって来ました。彼女は聖女に口づけをし、地面にひれ伏して礼をしました。それから、船から持ってきた衣服とパンを聖女に差し出しました。　船頭に少し離れて待つよう頼むと、聖なるフォティニアは女性の服を脱ぎ捨て、それとともに女性の　な弱さも捨て去り、男性の装いを身にまとい、知恵と男らしい力によって身を固めた。その際、彼女はこう叫びながら祈った。

「主なる神よ！　あなたは古来より、すべての聖徒たちの祈りに耳を傾けてこられました。罪深い私にも耳を傾けてください。この場所で、男性の装いをして、静かに、敬虔に生きられるよう助けてください。私の魂を守り、私の心を堅くし、私の体を強め、私を救いの道へと導いてください。また、私に仕えてくれるこの人々にふさわしい報いを与えてください。まことに、あなたは永遠に祝福され、賛美されます。アーメン。

その後、彼女は妻にこう言いました。

「奥様、お願いです。パンと水とともに羊毛も私にお届けください。そうすれば、私はあなた方のパンを無償で食べることはありません。そして、この私の服は、私の謙遜の記念としてお受け取りください。」

その後、彼女は彼らを平穏のうちに送り出した。三ヶ月後、船頭とその妻は再びフォティニアのもとを訪れ、パンを携えてきた。

島に滞在する間、この祝福された乙女は、自らの生涯を主を賛美して過ごした。彼女は毎日12回の祈りを神に捧げ、毎晩はその敬虔な行いをさらに深め、24回も主に祈りを捧げた。 1ポンドのパンは、彼女にとって2日分の糧となった。こうして、神の御加護により、彼女は生涯の終わりを迎えた。彼女がこの岩山に定住したのは25歳の時であり、岩山で6年間修業に励んだ。それゆえ、彼女は清く聖なる魂を安らかに主の御許に委ねたのである。 彼女の死からわずか2ヶ月後、定められた期日に船頭とその妻が到着すると、彼らは至福のフォティニアが息を引き取っているのを見つけた。彼女の手は十字架の形に組まれ、顔は明るく輝いており、まるで眠っているかのようであった。 彼らは彼女の聖なる遺体に礼拝を捧げ、それを運び出して船に安置し、パレスチナのケサリアの町へと出航した。そこで船主はケサリアの司教のもとへ赴き、聖フォティニアの徳高い生涯についてすべてを語った。 司教は聖職者一同と共に、神に霊感を受けた詩篇を歌いながら、彼女の遺体を尊厳をもって埋葬し、父と子と聖霊に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と賛美を捧げた。アーメン。

トロパリオ、第8調:

試練の炎を涙の流れで消し去り、祝福された方よ、海の荒れ狂いを鎮め、獣の暴れを制し、こう叫ばれた。「全能なる方よ、火と嵐から私を救い給うた方よ、あなたはまことに賛美される。」

コンダク、第2調:

敬虔な修行者として熟達し、自発的な苦行者として高潔であり、荒野の住人にして全き者である、永遠に尊ばれるマルティニアヌスを、歌をもってふさわしく賛美しよう。彼はあの蛇を踏み砕いたからである。

セルビア王、聖シメオン・ミロトチヴィの記念日[1842]

記念日：2月13日

聖シメオンはセルビアの統治者であったが、地上の王権を放棄し、生涯を天の朽ちることなき王国を得ることに捧げた。 彼は自国に数多くの修道院を設立し、ストゥデニツァ川のほとりに、聖母マリアの名を冠した壮麗な教会を建立し、その内部を基礎から天井まで大理石で覆い、金で装飾するよう命じました。 常に貧しい人々に必要なものをすべて与え続けていた聖シメオンは、ついにその計り知れない富のすべてを貧しい人々に施し、 その後、かつて自身の支配下にあったすべての土地を息子ステファノに自発的に委ね、 、直ちに世俗を離れ、その息子である聖サヴヴァの後を追った。聖サヴヴァは、その少し前にアトス山の修道院の一つで修道生活に入っていたのである。 聖山に到着すると、聖人は息子の協力を得て、ヒランダールと呼ばれる、荒廃していた修道院と教会を再建し、そこで修行に励んだ。 神への畏れを学び、祈りと断食に関する修道生活の規則を揺るぎなく守り続けた聖シメオンは、無情の境地に達し、罪深い心を謙虚にし、神の恵みの助けにより、偉大な修行者となった。禁欲と断食において、彼は天使に匹敵するほどの高みに達した。

[1842] 聖シメオンは、修道者となる前、セルビアの偉大なジュパン（公）であり、*ステファン・ネマニャ*と呼ばれていた。彼はセルビア領土の大部分を統一し、そこに政治的独立をもたらした。 在位中、彼はラテン主義、アリウス派、その他の異端の影響から自国民を守るために多大な努力を払った。ステファン・ネマニヤの妻である敬虔なアンナは、夫の模範に倣い、修道生活に入り、ある女子修道院に身を寄せた。

そのため、彼がまだ存命のうちに、神を賛美するために各地から多くの修道士が彼の修道院に集まり、その多くにとって、彼は救いへの道における導き手であり、指導者となった。　そこで敬虔な生涯を送った後、シメオン聖人は、深い老齢に達し、喜びと永遠の至福への明るい希望を抱きながら、生前に深く愛した主のもとへ旅立った[1843]。

尊者シメオンの帰天後、主は彼の偉大な徳を称え、奇跡を行う賜物を授けられました。　その遺体は聖油を滲み出し、神の力によって、それを通じて多くの奇跡が起こり始めました。その後、聖人の息子である聖サヴァは、父の遺体をセルビアへ移し、聖シメオン自身が自らの資金を投じて深い愛情を込めて建設した、ストゥデニツァ川沿いの「至聖なる神の母」に捧げられた教会に、敬意を込めて安置しました。　そして現在に至るまで、敬虔なキリスト教徒たちは、尊者シメオンの聖遺骨が安置されている聖櫃から聖油を取り出し、様々な病に罹った際にそれを塗ることで癒やしを得ている。

アレクサンドリアの大司教、聖エウロギオスの記念日

記念日：2月13日

聖エウロギオスは、当初、アンティオキアにある聖母ユスティニアノフ修道院の修道院長でした。ティベリウス皇帝[1844]は、彼をアレクサンドリアの主教座に任命しました。そこで聖エウロギオスは、たゆまぬ熱意をもって異端者たちに対抗し[1845]、エウティキウス派の教えに深く染まっていたエジプトの修道院々に、次々と自身の著作を送り届けました。また、当時、モーセが語った預言者であると称するあるドシフェイという人物を崇拝していたサマリア人とも戦わなければなりませんでした。　聖人はこの件に関して公会議を招集した。エウロギオスは608年頃、2月18日に、極めて高齢でこの世を去った[1846]。

2月27日

2月14日（旧暦）

同日は、スロベニアの教師である使徒同等の聖キリルの記念日である

聖アウクセンティウスの行伝

記念日：2月14日

[1843] 聖シメオンは1200年2月13日、86歳でこの世を去った。

[1844] ティベリウス2世皇帝は578年から582年まで在位した。

[1845] 聖グリゴリオス・ドゥオスロヴォスが聖エウロギオスに宛てた書簡には、アレクサンドリアの大司教による実り多い活動に関する貴重な証言が記されている。聖グリゴリオスによれば、聖エウロギオスの教えは「教会の敵の数を著しく減らし、主の羊の群れを増やした」という。

[1846] 彼の著作は、現在ではほぼパトリアルヒ・フォティオスの抜粋によってのみ知られている。そのほとんどすべてが、同時代の論争を契機として書かれたものである：1）キリスト・イエスにおける二つの本性の結合に関するもの；2）ノヴァティアヌスに対する六巻の書；3）サマリア人に対する三巻の書、その他。 聖エウロギオスの数多くの説教のうち、完全な形で現存しているのは、「ヴァイの週」に関する説教ただ一つである。

テオドシウス2世の治世[1847]　、コンスタンティノープルの王宮において、ペルシャ人アッダの息子であるアウクセンティウスという名の敬虔な男が重要な役職に就いていた。彼は、聖書のみならず世俗の学問にも精通した　な高官として、また善行で知られる人物として、すべての人から尊敬されていた。　このアウクセンティウスは、後に大聖堂の会計係となった聖マルキアノスと親交があり、また、コンスタンティノープルの郊外、「エウドマ」として知られていた地区にある聖ヨハネ・洗礼者教会に居住していた徳の高い修道士ヨハネとも面識があり、　他の敬虔な人々とも親交を深めていた。彼らの生き方に倣いたいと願ったアウクセンティウスは、この世の虚栄や名声、騒動を捨て、修道服を身にまとい、天の王キリストの戦士となった。　当初、彼は助祭として主に仕え、その後、司祭として奉仕し、悪霊に対する権能を授かり、人々から悪霊を追い払うことができたため、コンスタンティノープルのすべての人々から称賛された。　しかし、聖アウクセンティウスが求めていたのは人間の栄光ではなかった。それは彼にとって重荷であった。静寂な生活を求めて、彼は人混みの多い都を離れ、ビフィニアへと向かい、ハルキドンから十スタディオン離れた「オクシア」と呼ばれる人里離れた山にたどり着いた。　彼はその場所を気に入り、小高い丘に登って聖なる両手を天に掲げ、そこで神を賛美し、「*主よ、あなただけが私に安らぎを与えてくださるからです*」（詩編4:9）と語った。

聖人はその山に定住し、その後、その山は彼の名にちなんで「アウクセンティオス山」と呼ばれるようになった。この名称は、後にこの山で暮らした、偶像破壊派によって迫害を受けた聖ステファノスの伝記の中でも言及されている。

この山に住んでいた聖アウクセンティウスは、羊飼いたちによって発見された。彼らは迷子になった羊を探していたが、聖人の祈りによってその羊たちを見つけ出すことができたのである。　それ以来、この聖人に関する評判が広まり、多くの人々が彼のもとを訪れるようになった。ある者は肉体の癒やしを求めて訪れた。聖人の祈りによってあらゆる病から回復したからである。また、ある者は魂の救いを求めて訪れた。　その後、近隣の村々から敬虔な人々が集まり、山の頂上に聖人のための小部屋を建てた。　その小部屋に閉じこもって、聖人は小さな窓越しに訪ねてくる人々と語り合い、徳を説き、病人を癒やした。彼はまるで神の恵みに満ちた癒しの泉のようであったため、人々はさまざまな町から、無償の医師として彼のもとを訪れたのである。　ある日、ニコメディアから、あるコミタ[1848]の妻が、視力を失った状態でアウクセンティオスのもとを訪れ、彼にこう懇願した。

「至高の神のしもべよ、どうか私を憐れんでください！」

これに対し、聖人はそこにいた全員に向かってこう答えた。

「私は罪深い人間です。皆さんと同じように、私も情欲にさらされています。もし、生まれつき盲目だった者を癒やされた方が、この女性をも見捨てないと信じるのであれば、私たち皆で熱心に主のために彼女のために祈りましょう。」

皆が祈っている間、聖人は彼女の目に触れ、こう言った。

「真の光であるイエス・キリストが、あなたを癒やします。」

その瞬間、その女性は目が見えるようになり、皆が神を賛美し始めた。癒やされたことへの感謝の印として、彼女は、その山のふもとで聖人に訪れる人々に施しを求めていた貧しい人々に、惜しみない施しをした。また、聖人自身も彼らを気遣い、弟子たちを通じて、自分に捧げられたパンを彼らに配っていた。　癒しの賜物に加え、その聖人にはもう一つの賜物――透視の賜物――があった。ある時、二人の男が彼のもとを訪れた。一人は正教徒、もう一人は異端者の信奉者であった。聖人は

[1847] *テオドシウス2世*は408年から450年まで在位した。

[1848] *コミタス*とは、当初は地方の最高官吏の随行者を指したが、後には皇帝の側近として最も近い随行団を構成する者たちを指すようになった。コンスタンティヌス大帝の時代からは、たとえ皇帝の側近に属していなくても、すべての宮廷人および国家高官の称号となった。

正教徒を温かく迎え入れ、心の益について長く語り合ったが、異端者に対しては、その不信仰を見抜いていたため、一言も言葉を交わさなかった。　彼らが聖人の元を離れた後、その異端者は尊者を見下し、偽善者だと非難し始めた。彼らがまだ自宅にたどり着く前に、道中で一人の使用人が異端者に会い、彼の娘に悪霊が取り憑き、今や彼女をひどく苦しめていると告げた。　この知らせに異端者は深く悲しみ、自らの罪を悔い改めた。そして、悪霊に取り憑かれた娘を尊者アウクセンティオスの元へ連れて行き、謙虚に聖人に娘を癒やしてくださるよう懇願した。その結果、娘は悪霊の苦しみの手から解放され、父親もまた、自身の迷信から解放されたのである。

またある時、二人のハンセン病患者がアウクセンティオスのもとを訪れ、癒やしてほしいと懇願した。聖人は彼らに尋ねた。

「神からこのような罰が下されたのは、あなたがたにどのような罪があるのでしょうか？」

すると彼らは聖人に頭を下げて、こう懇願した。

「キリストのしもべよ、私たちを憐れんでください。そして、私たちの癒やしのために祈ってください。」

これに対し、聖人は彼らにこう答えました。

「兄弟たちよ、あなたがたにこの病が降りかかったのは、頻繁に誓いを立て、神の名を口にすることに慣れてしまい、それによって神の怒りを招いたからである。」

聖人のこの言葉を聞いて、彼らは聖人が自分たちの罪を知っていることに大いに驚いた。そして、聖人の前にひれ伏し、自分の罪を悔い改めた。アウクセンティウスは彼らを憐れみ、頭から足先まで聖油を塗って、こう言った。

「イエス・キリストがあなた方を癒やしてくださいます。私自身が罪深い人間なのです。」

するとたちまち、ハンセン病患者たちはその病から癒やされた。

ある日、寝台に横たわった麻痺者が馬車で聖人のもとへ運ばれてきた。その男の両親は、聖人の足元にひれ伏し、泣きながらこう言った。

「私たちの多くの罪のゆえに、息子に中風が降りかかってしまいました。」

すると、アウクセンティウスは彼らに尋ねました：

「神が、罪人である私を通して、あなたの息子を癒やしてくださることを信じますか？」

すると、彼らはこう答えました。

「まことに、あなたは私たちの救いのために遣わされた天使です。私たちは、神にはすべてが可能であると信じています。」

これに対し、聖人はこう答えられた。

– あなたがたの信仰のとおりになれ。

そして聖油を取り、彼はその麻痺した者の全身に塗った。すると、その者はたちまち完全に健康な状態で立ち上がった。この奇跡を目撃した者たちは皆、主なる神を賛美した。　聖人が悪霊を追い払ったすべての事例を語り尽くすことは不可能である。聖人の祈りによって、非常に多くの人々が不浄な霊から解放されたため、遠方を含む様々な国々から、常に大勢の悪霊に取り憑かれた人々が聖人のもとを訪れ、中には力ずくで連れてこられた者もいたが、彼らは皆、聖人の聖なる祈りによって不浄な霊から解放されたのである。　この至福の修道士は、神から悪魔に対するこのような偉大な力と権威を授かったのである。

聖アウクセンティウスはまた、ハルキドンで開催された第4回全地聖父公会議[1849]　にも招集された。そこで彼は、エウティケスの異端やネストリウスの異端説に立ち向かい、多大な労力を費やしたため、異端者たちから多くの迫害を受けた。　しかし、敬虔なマルキアヌス帝は彼を深く敬い、すべての聖なる父たちも彼を大いに愛した。実際、彼はその知恵と奇跡、そして正しい信仰によって際

[1849] 第4回全地公会議は451年に開催された。

立つ、公会議の著名な一員であった。彼は聖書全体を熟知していたため、彼に論破されることは不可能であった。　一言で言えば、彼には*「神とすべての民の前で、行いと言葉において力強い預言者であった」*（ルカ24:19）という記述が当てはまる。

この公会議において、他の聖なる父たちと共に真の正教の信仰を確立した後、聖アウクセンティウスは再び、人里離れた山にある自身の隠遁の修道院へと戻った。　ハルキドンへの道中、行きも帰りも、彼は多くのかけがえのない奇跡を行い、人々から悪霊を追い出し、あらゆる病気や不調を癒した。　自身の小部屋にいるときでさえ、彼は徳ある生き方の模範を示すとともに、霊的な教えを通じて、世界中に大きな恩恵をもたらした。さまざまな国から彼を訪ねてくる人々は皆、その教えに感銘を受け、彼が成し遂げる奇跡に驚嘆した。　聖アウクセンティウスは、その透視の眼によって、遠くにあるものもあたかも目の前にあるかのように鮮明に見ることができ、また、無形の至福の霊や義人の魂までも見ることができた。　ある夜、彼は自分の小部屋に閉じこもって、いつものように神への祈りを捧げていた。その間、弟子たちや聖人を訪ねてきた人々は小部屋の外にいて、まだ眠りにつくには早かった。すると突然、聖人は普段の習慣とは異なり、窓を開けて大きな声でこう叫んだ。

「主なる神は祝福されよ！　主なる神は祝福されよ！　主なる神は祝福されよ！」

そう言うと、彼は深くため息をつき、頭を地面に伏せた。皆が立ち尽くし、彼に尋ねることもできずにいると、彼は言った。

「子らよ！ 東の光、我らの父シメオンが、主のもとへ旅立ったのだ」

そう言い終えると、彼は激しく泣き出した。それからしばらくして、彼は再びこう言った。

「我らの聖なる父、真理の柱であり支えであるシメオン・ストルプニクが息を引き取った。その汚れなき清らかな魂は、通り過ぎる際、罪深く卑しい私にあっても、私を歓迎することを厭わなかったのだ。」

この言葉を聞いて、皆は驚き、彼の先見の明の力に感嘆し、聖人がこの知らせを伝えた時刻を心に刻んだ。その後、聖シメオン・ストルプニクの死の知らせは、マルキアヌスの後に王位についたレウ王のもとに伝えられ、この噂は至る所に広まった。　その時、アウクセンティオスの弟子たちは、尊者（シメオン）の死を知り、彼らの聖なる師の言葉の真実性を改めて確信することができた。すなわち、彼の死の時刻は、まさに聖人が予言した時刻と一致していたのである。

至福のシメオン・ストルプニクの帰天から間もなく、すでに高齢に達していた聖アウクセンティウスの至福の死も近づいた。　その時、この神に愛された者もまた、安らかに主のもとへ旅立った。彼は敬虔で神に喜ばれる生涯を送り、その祝福によって各地に多くの修道院を設立し、ビフィニア地方全体の霊的指導者となり、多くの人々を救いの道へと導いた[1850]。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちに天使、そして奇跡を行う者として現れた、神を宿す我らの父アウクセンティエよ。断食、徹夜祈祷、祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに力を授けられた方に栄光あれ、あなたを冠された方に栄光あれ、あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

ペチェルスクの隠者、聖イサアクの生涯

記念日：2月14日

[1850] 聖アウクセンティウスは、レウス大帝の治世中の470年頃に死去した。

人は誘惑を避けることはできません。もし誘惑者が荒野で主ご自身にさえ近づこうとした（マタイ4:3）のであれば、なおさら主のしもべを誘惑しようとするでしょう。 しかし、火によって精錬された金が人々の前で太陽のように輝くように、敵の災難に試みられ、永遠の火に委ねられた人もまた、その善行によって神の前で、まばゆい昼の光のように輝き出すのである。この真理は、ペチェルスクの隠遁者である我らの尊い父イサアクに、はっきりと現れていた。 この尊い父は、世俗ではトロペツの裕福な商人であった[1851] ；修道士になることを決意し、彼は全財産を貧しい人々や修道院に施し、洞窟に住む尊いアントニオのもとを訪れ、修道士の一員として受け入れてくれるよう懇願した。 聖アントニオは、この男が天使のように徳を修め、自らも天使のようになることを予見し、その願いを叶えた。修道士となった聖イサアクは、厳しい生活を愛した。彼は毛皮の衣を身にまとうだけでなく、山羊を買い、その皮を剥ぐよう命じた。 そのまだ生々しく濡れた皮で衣を作り、毛皮の衣の上から着たため、その皮は彼の体の上で乾いていった。その後、イサアクは、大きさがわずか約4キュビト[1852] ほどの狭い洞窟に閉じこもり、そこで涙を流しながら神に祈りを捧げた。 彼の糧はただ一つのプロスフォラのみであったが、それも一日おきにしか口にしなかった。喉の渇きは水で癒やしたが、それもごく少量であった。食事と飲み物は、聖アントニオが運んできて、片手しか通らないほど狭い窓から差し入れてくれた； さらに、聖イサアクは決して寝台に横たわることはなく、座ったまま短い仮眠をとって体力を回復させていた。こうして、数々の偉大な苦行の中で、彼は狭い独房から一歩も外に出ることなく、七年間を過ごした。

ある日の夕方、彼はいつもの習慣通り、ひざまずいて詩篇を歌いながら真夜中まで祈りを捧げ始めた。疲れ果てると、ろうそくの火を消し、その場に腰を下ろした。 突然、洞窟を太陽のようにまばゆい大いなる光が照らし出し、二人の悪魔が美しい若者の姿で聖人の元へ近づいてきた。彼らの顔は太陽のように輝いており、聖人にこう言った。

「イサアクよ！我らは天使である。見よ、キリストが天の軍勢を率いて、あなたのもとへ来ようとしている。」

立ち上がったイサアクは、数多くの悪魔たちを見た。彼らの顔は太陽のように輝いていた。その中の一人が誰よりも輝いており、その顔からは光線が放たれていた。その時、悪魔たちはイサアクに言った。

「イサアクよ！ ほら、キリストだ。その御前にひれ伏し、礼拝せよ。」

悪魔たちの狡猾さに気づかず、十字を切ることを忘れてしまった聖人は、あたかもキリストであるかのように、その悪魔にひれ伏してしまった。

するとすぐに、悪魔たちは大声を上げて叫んだ。

「イサアクよ、お前は今や我々のものだ！」

彼を座らせると、悪魔たちも彼の周りに座り込んだ。その修道室全体と、その修道室の近くの洞窟の通りは、悪魔たちで埋め尽くされた。すると、悪魔の一人、すなわち偽りのキリストが言った。

「ソペリ、グスリ、ティンパニを持ってきて演奏しなさい。そしてイサアクは我々の前で踊らせなさい。」

たちまち悪魔たちはソペリ、ティンパニ、グスルを打ち鳴らし始め、イサアクを掴んで、彼と共に跳ね回り、長い間踊り続けた。聖人を疲れさせ、かろうじて息のある状態で置き去りにし、こうして彼を辱めた後、悪魔たちは姿を消した。

翌日、イサアクが普段食事をとる時間になると、聖アントニオはいつものように窓辺に近づき、こう言った。

[1851] *トロペツは*、プスコフ県の県都である。

[1852] 「ロコート」または「ラコート」は、10.5ヴェルシュクに相当する長さの単位である。

「祝福を、イサアク神父。」

これに対し何の返答もなかった。驚いたアントニオスは、聖イサアクがすでにこの世を去ってしまったのではないかと考えた。そこで彼は修道院へ使者を送り、聖テオドシオスと他の兄弟たちを呼び寄せた。　到着した兄弟たちは、イサアクが亡くなったと思い込み、洞窟を掘り起こして彼を運び出し、洞窟の前に横たえた。しかし、そこで彼らはイサアクがまだ生きていることに気づいた。すると、修道院長である聖テオドシウスは言った。

「まことに、彼に起きたことは悪魔の仕業である。」

その後、イサアクは寝台に寝かされ、聖アントニウス自らが彼の看病にあたった。その頃、偶然にもキエフの公イジアスラフがポーランドからキエフへ帰途についていた。イジアスラフ公は、聖アントニウスの存命中に一時キエフの王位を占めていたポロツクの公ヴェススラフの件で、聖アントニウスに対して怒りを抱き始めていた。　そこで、チェルニヒフ公スヴィャトスラフは夜中にチェルニヒフから聖アントニウスを呼び寄せた。聖アントニウスはチェルニヒフに到着すると、「ボルディンスカヤ山」と呼ばれる場所を気に入り、洞窟を掘り、現在修道院が建っている場所に定住した。聖アントニオがチェルニヒフへ去ったことを知ると、敬虔な修道院長フェオドシイはイサアクを連れて自分の独房へ移し、彼を世話した。　――イサアクは心身ともに衰弱しており、座ることも立つことも、さらには体を反対側に向けることさえできず、ただ片側だけを下にして横たわっていたため、その下にはしばしば蛆が湧いていた。　聖フェオドシオス自身、自らの手でイサアクを洗い、身支度を整え、イサアクが横たわっている間、丸二年間もこのように彼に仕えた。驚くべきことに、この二年間、イサアクはパンも水も野菜も、その他のいかなる食物も口にしなかったが、それでもなお、寝台に横たわったまま、声も聞こえもせず、生き続けていた。 聖テオドシオスは、3年目にイサアクが言葉を話し始めるまで、昼夜を問わず彼のために祈りを捧げ続けた。するとイサアクは、立ち上がらせてほしいと願い、まるで子供のように歩き始めた。しかし、彼は教会へ行くことを望まなかったため、最初は無理やり連れて行かれたが、やがて自ら教会に通うようになった。　その後、彼は食事の席にも参加するようになったが、そこで彼は兄弟たちとは別に座らされた。彼の前にパンが置かれたが、彼はそれに触れようとはしなかった。兄弟たちが彼の手にパンを握らせようとしたが、聖テオドシウスはこう言った。

「彼の前にパンを置いておきなさい。ただし、彼の手には持たせないで、自分で食べるようにしなさい。」

こうして一週間もの間、彼は兄弟たちがイサアクの手にパンを握らせることを許さなかった。イサアクは他の者たちを見て、自らパンを口にし始め、そのようにして食べることを学んだ。こうして、聖テオドシウスは彼を悪魔の策略と誘惑から救い出したのである。

尊者テオドシウスが世を去り、祝福されたステファノスが後任の修道院長となったとき、イサアクは再び厳しい生活を送り始め、誘惑者にこう言った。

「悪魔よ、私が洞窟で隠遁生活を送っていた時、お前は私を惑わした。しかし、もう二度と隠遁することはない。神の助けを借りて、修道院で勤勉に働き、お前を打ち負かすよう努めるつもりだ。」

そこでイサアクは再び毛皮の衣を身にまとい、その上に厚い上着[1853] を羽織り、料理人たちの手伝いを始め、修道者たちのために働き、誰よりも早く早課のために教会に入り、教会内の定位置で動かないまま立ち続けた。　冬が訪れると、彼は激しい寒さにもかかわらず、ひどく破れた靴を履いたまま教会に立ち続け、そのせいで足はしばしば石に凍りついてしまったが、礼拝が終わるまでは決して足を動かそうとはしなかった。　早課の後、彼は誰よりも先に厨房へ向かい、火を起こし、薪と水を用意した。その後に初めて、この奉仕を任されていた他の修道士たちがやって来た。

[1853] *スヴィタ*または*スヴィトカ*――上着として着用される、質素で粗い衣服。

ある日、同じくイサアクという名の修道士の一人が、嘲るように聖人にこう言った。

「イサアク！ そこにカラスが座っている。行って捕まえてこい。」

地にひれ伏して礼をした後、謙虚な修道士は近づいてカラスをつかみ、それを調理場にいる修道士たちのところへ持って行った。皆はその出来事に驚き、それをイグメヌスと兄弟たちに伝えた。それ以来、兄弟たちは彼を尊敬するようになった。　しかし、人々からの称賛を望まなかった聖人は、狂人ぶりを装い、修道院長や兄弟たち、あるいは信徒たちを侮辱するようになったため、多くの者から殴打さえ受けるようになった。狂人となった彼は、以前住んでいた場所――すでにこの世を去っていた聖アントニオの洞窟――に再び住み着いた。　彼は子供たちを集め、彼らに修道者の衣を着せた。このため、当時のイグメーンであった至福のニコノスから懲罰を受け、時にはその子供たちの両親から殴打を受けることもあった。しかし、彼は殴打も、裸であることも、寒さも耐え忍び、それらすべてを喜びをもって受け入れた。

ある夜、至福のイサアクは洞窟の炉に火を入れた。その炉は粗末なもので、火が勢いを増すと、炎がひび割れから上へと立ち上り始めた。その隙間を塞ぐものがなかったため、イサアクは素足で炎の上に立ち、炉が燃え尽きるまでその場に立ち続けた。　その後、彼は何の傷も負わずに降りてきた。イサアクは他にも多くの驚くべき業を成し遂げた。彼はついに悪霊たちに対して絶大な権威を握り、彼らを恐れず、その脅しや誘惑にも動じなかった。しかし、悪霊たちはしばしば彼を悩ませ、こう言った。

「イサアクよ、お前は我々のものだ。我らの君主に拝礼したのだから。」

すると彼はこう答えた。

「お前たちの悪魔の首領はベエルゼブルだ。私は彼を、ハエの偶像（その名はそう解釈される）[1854] のように恐れている。 あなた方、その僕たちを恐れることはない。以前、私があなた方の策略や狡猾さを知らなかったために惑わされたとしても、今や私の主イエス・キリストの力と、聖なる父アントニオスとテオドシオスの祈りによって、私はあなた方に勝利を収めるだろう。

そう言いながら、彼は十字の印を切って、彼らを追い払った。時折、悪霊たちは、夜になって鍬[1855] や鋤を手にした大勢の群れとなって彼の元へやって来て、次のように言い放つことで、聖人に恐怖を植え付けようとした。

「お前の洞窟を掘り起こして、瓦礫の下に埋めてやる。」

また、他の者たちは彼にこう言った。

「出て来い、イサアク。お前を洞窟に埋めようとしているぞ。」

これに対し、聖人は彼らにこう答えた。

「もしあなたがたが人間であれば、昼間を歩くだろう。しかし、あなたがたは闇の子たちだから、闇の中を歩いているのだ。」

そう言いながら、彼はいつものように十字を切った。すると、悪霊たちはたちまち姿を消した。時折、彼を脅かそうとして、彼らは熊や獅子、その他の猛獣の姿で現れたり、蛇やヒキガエル、ネズミ、その他の爬虫類の姿で這い寄ってきたりしたが、何もできないまま、ついにこう言った。

「イサアクよ、お前は我々を打ち負かした！」

すると彼はこう答えた。

「かつて、あなたがたはイエス・キリストや天使の姿を装って――その姿にふさわしくないにもかかわらず――私を打ち負かしたことがあった。しかし今、あなたがたは本来の姿、すなわち獣や

[1854] ベエルゼブル――パレスチナのアッカロンの偶像で、穀物倉や食糧の備蓄を司り、ハエやその他の害虫を追い払う存在であった。（マタイ12:24およびルカ11:15）では、彼は「悪霊の君」と呼ばれている。

[1855] *鍬*――鋤、鍬、鉄製のシャベル。

家畜、蛇や爬虫類の姿で現れている。なぜなら、あなたがた自身、まさにそのような存在だからだ。」

それ以来、悪魔たちは聖人に何の害も及ぼすことができなくなった。彼自身の証言によれば、彼が再び洞窟に身を寄せた時から、三年間、彼らと戦いを続けたという。その後、彼はさらに厳しい生活を送り始め、より一層の節制を貫き、断食をさらに厳格にし、 に精進した。 そのような修行の最中、彼の最期の時が訪れた。彼は洞窟の中で重病に陥った。兄弟たちは病床の彼を修道院へ運び、そこで彼は八日間病床に伏した後、良き告白のうちに主のもとへ旅立った[1856]。 イグメン・ヨハネスとすべての修道者たちは、尊者のお体を整え、他の聖なる父たちが眠る洞窟に、尊厳をもって埋葬した。こうして、このキリストの善き戦士は、最初は敵に打ち負かされたが、その後自ら悪魔に打ち勝ち、天の御国を受けるにふさわしい者とされた。 その聖なる祈りによって、私たちもまた、魂の敵に打ち勝ち、地獄の征服者であり、栄光の王であるイエスと共に統治するにふさわしい者とされますように。イエスには、その始まりなき御父と、至聖にして善き、命を与える聖霊と共に、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしいのです。今、そして常に、そして永遠に、 アーメン。

聖マロンの記念日

記念日：2月14日

聖マロンは、世を捨てた生活という修行の道を自ら選びました。その目的のために、彼はかつて一部の異教徒によって崇められていたある山の頂上に登り、そこにすでに放棄されていた異教の神殿を見つけ、それを神に奉献して、そこで暮らすようになりました[1857]。 その後、彼は自分用に小さな小屋を建てたが、ほとんど利用しなかった。もともと病弱だった彼は、その小屋を、大勢訪ねてくる他の病人に譲っていた。 そして、神は御自身の恵みをもってこの聖なる修道士を支え、彼の祈りによって、癒やしを求めて訪れる人々を癒やされた。まもなく、この尊者は、祈りだけで熱病や発熱、その他多くの病気を癒やし、また悪霊を追い出すことで知られるようになった。 生涯を通じて、彼は数多くの修道院を設立し、多くの修道士たちを断食の修行によって神に喜ばれる者へと導いた。このように、徳行に熱心に励みながら、聖マロンは人々の肉体と魂の両方を癒やしていた。様々な病に苦しんだ後、尊者は短期間の病を経てこの世を去り、安らかに主のもとへ旅立った[1858]。

カリアの主教、聖アブラハムの記念日

記念日：2月14日

聖アブラハムは、テオドシウス大帝の治世に生きた[1859]。彼の生まれ故郷であり、育った場所はキプロス島であった[1860]。成人すると、彼は自身の財産を修道院に施し、そのうちのひとりで修道生活に入り、修道者の修行に専念した。 不眠、祈りのための立ち続け、そして断食によって、彼は自らの体を極限まで消耗させ、長い間動く能力を失い、歩くことさえ全くできなくなった。 レバノ

1856 聖イサアクは12世紀に帰天した。その聖遺骨は聖アントニオの洞窟に公開され、その一部は1711年にキエフからトロペツへ、修道院のイグメン・クディンによって移された。

1857 この山は、シリアのキルラ市の近くにあり、アンティオキアから2日ほどの道のりにあるユーフラテス教区に位置していた。

1858 4世紀に没した。――マロンの弟子には、ヤコブ・隠者、リムニウス（2月22日）、ドムニナ（3月1日）がいた。

1859 テオドシウス1世「大帝」は379年から395年まで在位した。彼はローマ帝国の東部を統治した。

1860 キプロス島は地中海の東部に位置し、山岳地帯が多く、古代には非常に肥沃な島であった。使徒パウロの伝道旅行の際（使徒行伝13:4–12）。16世紀以降、この島はトルコ人の支配下にある。

ン山脈の[1861] に、隠遁生活に適した場所があることを知った聖アブラハムは、修道院を離れ、そこへ向かった。彼は小さな小部屋を建て、隠遁生活を送るようになった。　彼は厳格な沈黙を守りながら三日間その小部屋で過ごし、四日目にようやく、やはり無言のままそこから出てきた。聖人はこの場所で多くの苦難に耐えた。異教徒たちは彼の存在を知ると、最初は砂を投げつけ、その後、彼をこの場所から遠くへ追い出すために、他の暴行も加え始めた。　さらに、近隣の村の貧しい農民たちも、頻繁に訪れて施しを乞うことで、彼をひどく悩ませた。しかし、聖人はすべてを忍耐強く耐え忍び、苦痛を伴う嫌がらせから逃れるために、敬虔な訪問者たちから与えられた物すべてを、施しを求める人々に与えた。　聖人のこのような博愛の精神は、村人たちに深い感銘を与え、彼らは教会を建て、、そしてキリスト教徒であった彼らは、聖人に司祭の聖職を受け入れ、彼らの牧者となるよう執拗に懇願するようになった。　聖アブラハムは彼らの願いを聞き入れ、信徒たちを敬虔な生活に導いた後、後任として別の司祭を残し、自身は再び修道院に戻った。まもなく彼は偉大な功績で名声を博し、高い敬虔さを備えた人物として、カラ市の司教に任命された[1862] 。 その厳格な修行の模範と、神に啓示された教えによって、彼は短期間のうちに信徒たちを神に喜ばれる生活へと導いた。聖職に就いていた間、聖アブラハムは決してパンも、火で調理された料理も、水で茹でたり漬けた野菜も口にしなかった。　彼の食料は、生の野菜や野生のベリー、その他それに類するものだけだった。聖アブラハムに関する噂がテオドシウス2世皇帝の耳に届くと[1863] 、皇帝は彼を宮廷に招いた。　聖人はコンスタンティノープルへ向かい、そこで短期間過ごした後、主のもとへ旅立った。その遺体は、敬虔な皇帝の命により、コンスタンティノープルからカルの町へと厳かに移送され、そこで埋葬された。

聖なる忠実なチェルニゴフ公ミハイル・ヴセヴォロドヴィチとその家臣フェオドールの聖遺骨の移送

記念日：2月14日

これらの殉教者たちは、1244年9月20日にバトゥの手に殉教した。彼らの聖遺骨は、1578年2月14日にチェルニゴフからモスクワへ運ばれ、クレムリン内のタイニツキー門近く、彼らの名に因んで建立された教会に安置された。 1770年8月25日、宮殿の「セニャ」にあるスレテンスキー大聖堂へ移され、1774年11月21日、アルハンゲリスク大聖堂に安置され、現在もそこに眠っている。

2月28日

2月15日（旧暦）

同日、聖パフヌティウスとその娘エウフロシニアの記念日

七十人の使徒の一人である聖使徒オニシモスの生涯と殉教

2月15日の記念日

[1861] レバノンの山脈は、パレスチナの北端から地中海沿岸を北へと延びている。

[1862] カルという都市は、メソポタミアのユーフラテス川上流、その支流の一つ（ホヴァレ川）のほとり、エデッサの少し南に位置していた。

[1863] テオドシウス2世（若き）は408年から450年まで在位した。

使徒の時代、フリギアの都市コロッサス[1864] には、フィリモンという名の貴族出身のキリスト教徒が住んでいた。彼は後に司教の位に就き、七十人の使徒の一人に数えられた。フィリモンには、使徒となる前からオニシモスという名の奴隷がいた。　主人に過ちを犯し、罰を恐れたオニシモスは主人のもとから逃げ出し、ローマ[1865] にたどり着いた。そこで彼は、聖使徒パウロが投獄されているのを見つけた。彼から聖なる説教を聞き、私たちの主イエス・キリストへの信仰を学んだ後、使徒によって洗礼を受け、聖ティキコスと共に熱心に彼に仕えた。 聖使徒 パウロは、コロサイ人への手紙を携えて聖ティキコを派遣する際、彼に聖オニシモを同行者として与えました。これは、パウロ自身が手紙の最後に次のように記している通りです：　*「私のことについては、ティキコがすべてあなたがたに伝えてくれるでしょう。彼は、愛すべき兄弟であり、主における忠実な奉仕者であり、協力者です。私は、あなたがたの状況を把握し、あなたがたの心を慰めるために、彼をあなたがたのところへ遣わしました。彼と共に、あなたがたの中から出た、忠実で愛すべき兄弟オニシモも同行しています。彼らは、ここでのすべてのことをあなたがたに伝えてくれるでしょう」*（コロサイ4:7–9）。

使徒はコロサイの信徒たちにはティキコを通じて手紙を書き、オニシモを通じては、彼の主人であるフィリモンに特別な手紙を送りました。その手紙の中で、使徒はフィリモンに、オニシモの過ちを赦し、彼を奴隷としてではなく、使徒パウロ自身として受け入れてくれるよう懇願しました。使徒パウロはその手紙の中で、オニシモを自分の子と呼んでいる。*「私の息子オニシモについてお願いしたい。彼は私が牢獄の中で生み出した者である。かつてはあなたにとって役に立たない者だったが、今はあなたにとっても私にとっても有益な者となっている。私は彼をあなたのもとへ送り返す。どうか、私の心そのものとして彼を受け入れてほしい」*（フィレモン1:10–12）。　フィリモンは喜びをもって、使徒の助言に従った。彼はオニシモを愛をもって受け入れただけでなく、彼に自由を与え、再びローマの聖使徒パウロのもとへ送り戻した。それは、オニシモがそこで使徒に仕えるためであり、聖パウロがそう望んでいたからである。　「私は彼を自分のそばに留めておき、あなたの代わりに、福音宣教のために私が囚われの身となっている間、私に奉仕させたいと思った。しかし、あなたの同意なしには何もしたくなかった。あなたの善行が、強制されたものではなく、自発的なものであるようにするためである」（フィレモン1:13–14）。

こうして、聖使徒オニシモスはローマに留まり、使徒たちが亡くなるまで彼らに仕えました。そして、御言葉を宣べ伝えるために、使徒たちによって司教に任命されました。　聖なる使徒たちの死後、彼はローマを離れ、多くの都市や国々を巡り、スペイン[1866] 、コリント、コロサイ、パトラ[1867] でキリストを宣教し、その後、聖ティモテオと聖ヨハネ・テオロゴスの後を継いでエフェソ[1868] の司教座に就いた。　エフェソでの司教職については、スミルナからエフェソの信徒たちへの手紙の中で

1864 コロッソスは、小アジアのフリギア地方南西部、リコス川沿い、ラオディキアとイェラポリスの近くに位置する都市である。ネロの治世10年目（西暦64年）　コロッソスは地震によって破壊された。その後、再建されたが、かつての栄光を取り戻すことは二度となかった。その後、*この都市はホニと呼ばれた*。現在では、ホナス山の斜面にある小さな村となっており、その周辺には古代都市の遺跡が今も残されている。聖使徒パウロの手紙の一つは、この都市の住民に向けて書かれたものである。

1865 ローマ帝国の首都。イタリア中部、ティブレ川が海に注ぐ河口の両岸に位置している。

1866 古代のスペインは、現在のスペインとポルトガルを合わせて指していた。北はピレネー山脈でフランスと隔てられ、東は地中海に面し、南は地中海とジブラルタル海峡に面し、西は大西洋に面している。

1867 パトラは、ペロポネソス半島の北岸に位置する古代都市であり、アカイア地方の12の自治都市の一つであった。 アウグストゥス帝によってローマの植民市とされた。1205年から1408年にかけては、フランク人のアケイア公国の首都であった。1463年にトルコ軍の手に落ちた。現在はギリシャ王国の都市であり、レパント（コリント）湾の入り口近くに位置している。

1868 エフェソスは、エーゲ海に面した小アジアの重要な商業都市である。海辺の立地、良好な気候、素晴らしい港、そして有名なディアーナ神殿により、小アジアで最も豊かで名高い都市の一つとなっていた。聖使徒パウロはここで福音を説いた。

、聖イグナティオス・テオフォートスが明確に証言している。彼がアンティオキアからローマへ、野獣の餌として連行される途中、スミルナで聖オニシモスがエフェソの住民数名と共に彼を出迎えたのである。　聖イグナティオスは、エフェソの信徒たちへの手紙の中で、このことについて次のように記している。

「私は、神の御名において、オニシモス――言葉に尽くせぬ愛を持つ、あなたがたの肉における司教――という人物を通じて、あなたがたの多くの共同体を歓迎した。　どうか彼を愛してください。イエス・キリストの名において懇願します。そして、皆、彼に倣ってください。なぜなら、あなたがたにこのような司教を持つにふさわしい者となる恵みを与えてくださった方は、祝福されるからです。また、アンティオキアの人々への手紙の中で、彼は再び次のように記しています：

「エフェソスの牧者オニシモスが、あなたがたに口づけを送ります。」

ここから、聖オニシモスが多くの国や都市を巡り、すでに高齢となってエフェソスに到着したことがわかります。そこで彼はしばらくの間、神の教会を牧会しましたが、その後、不信仰者たちに捕らえられ、その都市からローマへと連行されました。これはトラヤヌス帝の治世[1869] に起こった出来事です。ローマでは、彼はエパルフ・テルティルスに引き渡され、拷問を受けました。　エパルフは聖人に尋ねた。

「お前は誰だ？」

オニシモスは答えた。

「私はキリスト教徒です。」

すると、エパルフは再び尋ねた。

「あなたはどの身分に属しているのか？」

それに対し、聖人はこう言った。

「かつて私はある男の奴隷でしたが、今は、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストという慈愛に満ちた主の忠実な僕です。」

エパルヒはオニシモに問い続けました：

「なぜ、別の主人のもとへ移ったのか？」

オニシモは答えた：

「私は真理を知り、偶像崇拝を憎むようになったからです。」

すると、エパルヒは尋ねた。

「新しい主人に、いくらで売られたのだ？」

オニシモスは答えた。

「神の御子イエス・キリストが、その尊い御血によって私を滅びから贖い出し、朽ちることのない命へと移してくださったのです。それは私たちの聖書にこう記されている通りです。　*『あなたがたは、先祖から受け継いだむなしい生活から、朽ちる銀や金によって贖われたのではなく、傷もなく汚れのない小羊であるキリストの尊い血によって贖われたのです』*（ペトロの手紙一 1:18–19）。

司教は尋ねた：

「教えてほしい。あなた方の聖書では、どのような生活を『むなしい生活』と呼んでいるのか？」

――「むなしい生活とは、不法な姦淫のことです。それは、わずかな肉欲の快楽のために、情欲に溺れる罪を愛する者たちに永遠の火を用意するものです。また、それは金銭への執着にもあり、そのために隣人を傷つけます。さらに、悪魔と交わる魔術にもあります。この最後の悪こそが、あらゆる誹謗中傷や罠の根源です。　それは、自らの高慢さによって他者より優越感を抱く高慢であり、

[1869] 98年から117年にかけて

カインやその他多くの人々に兄弟殺しを教えた嫉妬であり、悪口や抑制のきかない言葉であり、それはまるで雲のようにすべての人々に嘲笑を広めるものである；　それは偽善と嘘であり、真理の敵、悪魔の共犯者であり、この悪を通じて、あらゆる悪意に満ちた敵はエバをも惑わした。それは怒りであり、呪いを促し、争いや父殺しを煽るものである。――節制を欠き、好色を生み出し、卑猥な言葉を吐かせる酩酊。　そこには善意などなく、ただ醜悪さがあるのみである。これらすべての悪徳こそが、虚しい人生そのものである。　このような生き方の源であり、すべての母たるものは、あなたがたが行っている偶像崇拝である。それは淫行の基盤であり、神を知らないことの教師であり、精神を盲目にし、肉欲を煽るものである。そこには名誉はなく、万物の主に対して戦いを挑み、真の神への崇拝を破壊しようと努めている。　この崇拝は、死の首領であり、蛇の僕であり、悪者たちの糧であり、美徳の敵であり、朽ちることのないものを追い求める。それは、あなたがたの破滅的な律法の説教者であり、闇と暗黒の熱烈な支持者であり、流血の友であり、憎悪の君主である。　それは、神を知らず、明るい恵みから遠ざかった素朴な人々を捕らえ、その奉仕者たちを不名誉な行いの絆で縛り、虚栄心を教え込む。それは白髪の長老たちを不名誉で満たし、彼らに祭司のラッパの音に合わせて踊るよう唆す。　それは乙女の貞節を滅ぼす。それは剣と鉄、動物の血の流血とそれらの不浄によって、自らの祭りを溶かし尽くす。それは自らの恥知らずな不浄さを露わにする。それは男たちに街中で肉体をさらすよう強要し、裸の姿をその妻たちに見せつける。それは自らの秘儀を殺人と姦淫で彩る。　それは、まるで舟のように、様々な偶像崇拝の像で人間の心を荒ぶらせる。ある時は、その祭司たちに毒蛇を食らうよう命じ、ある時は、他神を食べるよう説得し、ある時は雄牛を刺し殺すよう、ある時は雄牛を犠牲として捧げるよう、羊を犠牲として羊を捧げるよう、　同じものを神と家畜[1870]として崇めさせたり、石や木で造られた人間への生贄として人を殺させたりする。こうして、善行の代わりに殺戮を行い、魂のないものに魂を持つ者を生贄として捧げているのだ。しかし、これ以上多くを語る必要はあるだろうか？　あなた方の迷信は、ニンニクにさえ神聖な栄誉を授け、大きな盲目と無知の中で人々を地獄へと陥れようとしている。あなた方が偶像崇拝の奉仕において固執している、このような虚しく、不敬で、卑しい生き方――聖書によって暴かれたその生き方を考察したとき、私は荒れ狂う海から逃れるようにそこから逃げ出し、善き安息の地――唯一にして真の神への聖なる信仰、そして隣人への信仰と愛に根ざした、義にかなった敬虔な生活――へとたどり着いた。　そして、テルティルよ、あなたにも勧めます。隣人を自分自身のように愛せよと命じる愛の律法を全うしてください。そうすれば、あなたも私と同じように真理を知り、一時的な虚しさや、この世で夢や影のように過ぎ去るすべてのものを捨て去るでしょう。そうして、あなたは万物の創造主である神のもとへ歩み寄り、真の知恵に目覚めて救われるのです。　神は、御自身を怒らせる者たちの死を喜ばれるのではなく、彼らの回心と悔い改めを喜び、彼らの過去の罪を赦してくださるのだ。

　　すると、テルティル司教はこう答えた。

「つまり、お前は苦痛を恐れず自ら神々にひれ伏そうとしないだけでなく、私たちまでも自分の誤った道に引きずり込もうとしているのだな。

「あなたの拷問など、私を脅かすことはできません」と聖オニシモスは答えた。「それがどれほど激しいものであろうとも、私は、将来の祝福への期待に慰められ、私のキリストの力に支えられているゆえに、あなたが私に課す苦しみも容易に耐え抜くでしょう。」

　　そこで、総督はオニシモスを牢獄に投獄するよう命じた。聖人はそこで18日間を過ごしたが、彼にとってその牢獄は恐ろしい監禁の場ではなく、主を喜び祝う、霊的な喜びに満ちた明るい楽園であった。　信者たちは彼の元を訪れ、聖人の苦難を称え、自らの言葉で彼の信仰の業を励ました。聖人は、キリスト教徒たちと共にここを訪れた異教徒たちに神の御言葉を説き、彼らをキリストの真の

[1870] 聖オニシモスはここで、場所や時代を問わず、異教の宗教に存在していた明白な矛盾の一つを指摘している。ある地域では動物を神として崇拝していたが、別の地域ではそれを他の四足動物と区別することなく、ある神への生贄として捧げていたのである。

信仰へと導いた。　その後、地方総督は民衆の前で慈悲深い姿を見せたいと願い、聖人を死刑には処さず、プティオラ[1871]　への流刑に処した。聖使徒はそこでも熱心にキリストの教えを説き、多くの人々を真の道へと導いた。　テルティルスはこれを知ると、再び聖人を捕らえ、手錠をかけたまま自分の元へ連行し、裁きにかけるよう命じた。彼は聖人を尋問し、聖人が以前と同様に揺るぎなくキリストの信仰を告白していることを知った。そこで総督は、聖人を地面に伏せさせ、四本の棍棒で容赦なく打ち据えるよう命じた。　拷問者たちは、聖なる殉教者に長く容赦なく打撃を加え、その脛やその他の骨を砕き、ついに剣で首を斬り落とした。こうして、[1872]　聖オニシモスは息を引き取った。ある王家の女性がその聖なる遺体を受け取り、銀の棺に納め、殉教者の記念を執り行った。　こうして彼女は、聖使徒オニシモスの祈りによって、天の御国において主から記憶を授かった。主イエス・キリストが、私たちにもその恵みを授けてくださいますように。主には永遠の栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調：

光の如く、汝は全宇宙を照らし、太陽の暁のように輝き、至福なる、全き光のパウロよ、世界を照らした者よ。それゆえ、我らは汝を崇める、栄光あるオニシモよ。

聖エウセビオス・隠者の記念日

記念日：2月15日

この聖人の出生地や両親については、いかなる記録も残されていない。知られているのは、当初彼がある修道院に入ったが、その後そこを去り、アシハ[1873]　という名の集落の近くにある山の頂上に登り、そこで乾いた石を積み上げて柵を作り、自らの肉体を酷使し始めたということだけである。生涯を通じて、彼は革の衣服以外は何も身にまといませんでしたし、食事は発酵させたエンドウ豆とソラマメだけでした。　肉体の衰えを顧みず、尊者は最深の老齢に至るまでその生活を送り続けた。その頃にはすでにすべての歯が抜け落ち、食物を噛み砕くことさえできなくなっていたが、あらゆる悪天候を勇敢に耐え抜き、決して家の中で暮らすことはなかった。　その顔はしわだらけで、体のあらゆる部位が極度に衰弱していたため、腰帯さえも身に着けることができなかった。それほどまでに、彼の足と腰は痩せ細っていたのである。聖人のもとには多くの人々が訪れるようになったため、彼は名声を恐れて近くの修道院へ移り、その壁際に小さな囲いを設けて、いつもの修行を続けた。　尊者の断食は極めて厳格で、大斎の七週間の間、食事として食べるのはイチジク15個だけだった。このような厳格な断食生活を送りながら、尊者エウセビオスは90年以上を生き、重い病を患った後、主のもとへ召された[1874]。

- 同日は、聖パフヌティウスとその娘エウフロシニアの記念日である。彼らの行伝は9月25日である。

[1871] プティオラは、イタリア中部のカンパニア地方にある海辺の都市である。
[1872] 紀元109年頃。
[1873] シリアにて。
[1874] 聖エウセビオスは400年頃に没した。

3月

3月1日

2月16日（旧暦）

十二人の殉教者、長老パンフィロスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教

記念日：2月16日

預言者および使徒の賜物に恵まれ、その数において12使徒に等しいこの12人の聖殉教者たちは、ディオクレティアヌス帝の治世下、パレスチナのケサレア[1875]でキリストのために殉教した。 その中、位階において最年長であり、殉教の時期においても最初であったのは、ケサリアの長老である聖パンフィルであった。彼はベリト[1876] の出身であり、若き頃からすでに異教の学問を学んでいた。それと同時に、パンフィルは霊的な知恵[1877] に満ち溢れ、その徳高い生活によって輝いていた。 その後、彼はキリストの御名を勇敢に告白したことで名声を博した。殉教者たちの第二の者は、エリの教会の助祭ヴァレントであり、すでに高齢の男性であった。彼もまた博識な人物であり、とりわけ聖書に対する卓越した知識で際立っていた。　三番目はパウロであり、キリストへの信仰に燃え、敬虔さへの熱意に満ちていた。彼はイアムニアの町[1878] の出身で、以前にもキリストのために火刑に処されていた。この三人の殉教者は、プレフェクト・ウルバンによってキリストの名のために様々な拷問を受けた後、牢獄に投じられた。 彼らはそこで丸2年間も苦しんでいたが、その頃、ウルバンの後任としてフィルミリアンが総督に就任した。この総督の治世下、エジプトでは130人のキリストの信仰告白者たちが追放の判決を受け、キリキア[1879] へ送られ、金鉱の採掘を強いられた。 その頃、肉親であるだけでなく、精神においても兄弟である数人の若者たちが、エジプトからキリキアへと向かう殉教者たちを見送った後、再び故郷のエジプトへ戻る途中、道中ケサリアの近くまで来ていた。彼らの数は五人であった。　彼らが城門をくぐろうとしたとき、警備兵たちは彼らに「誰で、どこから来たのか」と尋ねた。殉教者たちは真実を隠すことなく、自分たちはキリスト教徒であり、天のエルサレムを故郷としていると答えた。すると、彼らは悪党として捕らえられ、牢獄に投げ込まれた。　翌日、すなわち2月16日、これらの若者たちは、前述のキリストの殉教者たちであるパンフィル、ヴァレント、パウロと共に牢獄から連れ出され、彼らと共に不敬虔な拷問者であるイゲモン・フィルミリアヌスの法廷に引き出された。　イゲモンはまず、様々な拷問で彼らを脅し、エジプトの若者たちを堕落させようと試みた。その中の一人――最年長の者を真ん中に立たせ、「お前は誰だ？」と尋ねた。聖な

[1875] ケサリア――パレスチナにある、地中海に面した大都市。

[1876] ベリト（現在のベイルート）は、シリアのアジア・トルコ地方の主要都市であり、サイードとタラブール・ヤリポリスの間にあるシリア沿岸部で最も重要な交易拠点であった。

[1877] 聖パンフィロスの主な活動の一つは、当時、写本者たちによって著しく損なわれていた聖書の写本を照合し、訂正することでした。彼の尽力と労苦により、ケサリアには広範な図書館が築かれました。　至福のヒエロニムスは殉教者パンフィロスを深く尊敬しており、彼の写本の一部を発見した際には、自らをクレースよりも裕福だと考えていた。

[1878] エクロンと海の間にあるペリシテの都市ヤヴネアのギリシャ語名。現在はイェヴナという名の大きな村となっている。

[1879] キリキア――小アジア南東部の沿岸地方。

る殉教者は恐れを知らず、「私と仲間たちは皆、キリスト教徒である」と答えた。　イゲモンが彼らの名前を尋ねると、この青年は自分をイリア、もう一人はエレミヤ、三番目はイザヤ、四番目はサムエル、五番目はダニエルと名乗った。　というのも、これらの聖なる若者たちは、キリストを信じない　両親から与えられた異教的な名前を捨て、その代わりに預言者たちの名を名乗ったからである。これにより、彼らは自らの行いだけでなく、名前においても、イスラエルの神の僕であることをはっきりと示そうとしたのである。　そのような名前を知らなかったイゲモン・フィルミリアンは、彼らに故郷について尋ね始めた。

その時、エリヤは使徒パウロの「天のエルサレムは自由であり、それは私たちすべての母である」（ガラテヤ4:26）という言葉や、他の次の言葉を思い起こした。*「しかし、あなたがたはシオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、数えきれないほどの御使いたち、喜びに満ちた集会、そして初穂の民の教会に近づいたのです」*（ヘブライ人への手紙12:22）を思い起こし、自らを「天のエルサレム」の市民であると名乗った。彼はこの都市を、地上の故郷ではなく、霊的な故郷として理解していたのである。　一方、イゲモン・フィルミリアヌスは、そのエルサレムという都市がどのようなもので、どこにあるのかを知らなかった。というのも、当時、その聖なる都はエルサレムとは呼ばれておらず、エリアと呼ばれていたからである。この名称は、不敬虔なローマ皇帝ハドリアヌスによって付けられたものだった。　彼は、ティトゥスによって破壊されたかつてのエルサレムの跡地に新しい都市を建設し、そこに自身の名前を冠した。というのも、彼は「エリイ・ハドリアヌス」と呼ばれていたからである。さらに、エルサレムを「エリヤ」と改名したハドリアヌスは、その中のすべての聖地を冒涜し、主の御墓を砂や石で埋め立て、至る所に忌まわしい偶像を安置した。　その後、彼はこの都市を「エリヤ」以外の名で呼んではならないと命じた。　彼がこれらすべてを行ったのは、この地上からイエス・キリストの名に関する記憶さえも根絶やしにしたかったからである。その後二百年にわたり、不敬虔な偶像崇拝者たちはこの都市をエルサレムとは呼ばず、軽んじていた。こうした状況は、敬虔な皇帝コンスタンティヌスとその母ヘレナが現れるまで続いた。　それゆえ、ディオクレティアヌス帝の治世にパレスチナに住んでいたイゲモン・フィルミリアヌスは、聖なる若者が彼に語った「エルサレム」と呼ばれる都市がどこにあるのかを知らなかった。　彼は、自らをイリアと名乗ったその祝福された若者に、両手を後ろ手に縛り、裸のまま拷問場に吊るし、このエルサレムという都市が何者であり、どの国にあるのかを白状させるまで、残酷に殴打するよう命じた。

敬虔な若者は、エルサレムはキリスト教徒だけの故郷であり、異教徒は誰もそこに入ることはできず、この都は太陽が地上に最初の光を注ぎ始める東方に築かれていると答えた。　こうして聖人は、まるで肉体を持ち合わせていないかのように拷問を意に介さず、イゲモンに天上の、霊的なエルサレムについて語った。　一方、イゲモンは、聖人が霊的なエルサレムについて語っていることを理解できず、キリスト教徒たちがどこかに自分たちの都市を築き、ローマ人たちに抵抗しようとしているのだと考えた。そこで彼は、そのキリスト教の都市についてより詳しく語り、その場所を明かすよう、聖なる若者にさらに過酷な拷問を加えるよう命じた。　しかし、イゲモンはキリストの御名を告白すること以外、彼から何も聞き出すことができなかったため、聖なる若者の首を剣で斬り落とすよう命じた。その後、彼は他の若者たち――エレミヤ、イザヤ、サムエル、ダニエル――をも拷問にかけた。　しかし、彼らからも最初の若者と同じ言葉を聞いたため、彼らもまた剣で首を刎ねるよう命じた。また、調査の結果、聖なる長老パンフィル、助祭ヴァレント、そしてパウロが、彼の前任者であるイゲモン・ウルバンによって、すでに2年前に長期にわたり牢獄に閉じ込められていたことを知ると、フィルミリアンは彼らをこれ以上拷問することを望まなかった。　彼はただ、彼らが王の命令に従うかどうかを尋ねるよう命じたが、彼らが依然として屈服しないことを知ると、彼らをも死刑に処した。

パンフィル神父の召使いの一人、ポルフィリウスという名の十八歳の若者は、その貞潔さと分別ゆえに、主である聖なる長老パンフィル神父から深く愛されていたが、聖なる殉教者たちへの死刑判決を耳にすると、群衆の中から大声で叫んだ。

「お願いです、聖人たちの遺体を私にください。そうすれば、彼らを埋葬することができますから。」

そう言い残して、彼は群衆の中から抜け出し、イゲモンの前に立った。ポルフィリウスもまたキリスト教徒であることを知ったイゲモンは、五人の聖なる若者たちを拷問したのと同じ場所で、彼を裸のまま絞首刑に処すよう命じ、さらに彼を激しく殴打するよう命じた。　不敬虔な拷問者たちは、彼の全身が傷だらけになり、肉片が地面に落ち、骨や内臓さえ見えるほどになるまで、彼を打ち続けた。　しかし、聖ポルフィリウスはこれらの拷問を忍耐強く耐え抜いた。まるで何も感じていないかのようだった。彼はうめき声も叫び声も上げず、まるで拷問者たちが彼ではなく、何らかの柱や壁に傷を負わせているかのように、黙り込んでいた。　この様子は、イゲモンの怒りをさらに煽った。フィルミリアヌスは、とげだらけの硬い毛皮の衣で聖人の傷口をこすりつけるよう命じ、その後、彼を火刑に処した。拷問者たちは柱を立て、聖なる殉教者をそれに縛り付け、周囲に薪を積み上げて火をつけた。　火がすでに四方から彼を包み込んだとき、殉教者は大声で叫び、神の御子イエス・キリストに助けを求めた。その後、彼は沈黙し、その聖く清らかな魂を主に委ねた。　こうして彼は、主人の死後に主のために殉教したが、彼より先に　は殉教の冠を受ける栄誉に浴した。というのも、聖ポルフィリウスが火刑台で魂を捧げて主のもとへ旅立ったその時点で、聖パンフィルは他の殉教者たちと共に、まだ剣によって斬り殺されていなかったからである。

聖ポルフィリウスが火刑に処されていたその時、群衆の中にセレウコスという名の敬虔な男が一人いた。彼はかつて兵士であった。ポルフィリウスがすでに主のもとへ魂を委ねた後、彼は聖なる殉教者たちの後を追って、彼らが苦難の場へと連行されるのを見届けた。　聖人たちは、拷問者たちに祈りのための少しの時間を与えてくれるよう懇願していたため、彼は彼らがまだ生きているのを見つけた。セレウコスは聖パンフィルに近づき、聖ポルフィリウスの殉教の経緯をすべて語り聞かせた。するとパンフィルは喜び、神に感謝を捧げ始めた。　そこでセレウコスは、すでに剣による斬首に頭を垂れる覚悟ができていた殉教者たちに、最後の一吻を捧げた。そこにいた兵士たちは、この光景を目撃し、セレウコスがキリスト教徒であることを知ると、彼を捕らえてイゲモンのもとへ連行した。　フィルミリアヌスは、直ちにセレウコスも剣で処刑するよう命じた。この聖人はカッパドキア出身で、ローマ軍において勇敢で名高い戦士であった。キリスト教徒への迫害が始まった当初、キリストを告白したために激しく殴打され、軍人としての地位と名誉を剥奪され、連隊から追放された。しかし、彼は街頭に横たわる病人の世話をし、貧者や孤児を慈しみ、やがて聖なる殉教者や信仰告白者たちに加わり、喜びのうちに、その主であるキリストのもとへと旅立った。

その頃、聖セレウキオスに続いて、聖テオドゥルスもまた殉教者の列に加わった。彼はイゲモン・フィルミリアヌスの家来の一人であった。この老人は、すでに曽孫がいるほどの高齢であったため、皆から尊敬されていた。　秘密のキリスト教徒であった彼は、拷問へと連行される聖なる殉教者の一人に近づき、その頬に口づけをして、キリストの聖なる殉教者が自分と共に主なる神に祈ってくださるよう懇願した。　総督の家来たちの一部は、この様子を見て、テオドゥルスについて主人に密告し、彼もまたキリスト教徒であると告げた。フィルミリアヌスが聖テオドゥルスに問い詰め、この老人が確かにキリスト教徒であることを知ると、彼は激しく怒り、聖テオドゥルスを十字架に磔にするよう命じた。

十二使徒の列に加わり、最後に殉教者の数に加わったのが聖ユリアヌスであった。彼もまたカッパドキア出身で、誠実で徳の高い人物であった。彼は用事のため、パレスティナのケサレアへ赴く必要があった。　街に近づくと、ユリアヌスは、街の周辺で聖なる殉教者たちの遺体が犬や鳥の餌と

して捨てられているのを見つけた。彼は心から喜び、遺体にひれ伏して、キリストの殉教者たちの遺体に口づけをし、彼らが殉教の死を経てキリストと共に永遠の命に与るに至ったことを称えた。　しかし、遠くには、秘密のキリスト教徒が遺体を盗み出さないよう見張るために兵士たちが配置されていた。ある男が聖人の遺体にひれ伏して口づけをしているのを見て、兵士たちは彼もまたキリスト教徒であると悟った。そこで兵士たちは彼を捕らえ、イゲモン（地方長官）のもとへ連行した。　尋問の末、フィルミリアヌスはこの聖なる人を火刑に処した。こうして、聖ユリアヌスは聖ポルフィリウスとまったく同じ方法で、キリストのために殉教したのである。

こうして、使徒たちの数に等しいこの十二人の殉教者たちは、彼らと共に、天の御国において神の御座の前に立つ栄誉に浴し、勝利の冠を戴いた[1880]。彼らの聖なる遺体は、町の外で四日間、塵の中に放置されていた。　不信心者たちは、犬も獣も鳥もそれらの遺体に近づかないのを見て、望む者は誰でも遺体を持ち帰り、埋葬してもよいと宣言した。そこでキリスト教徒たちは、これらの聖なる遺体を受け取り、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しつつ、敬虔にそれらを埋葬した。アーメン。

コンダク、第4声：

恐るべき拷問に直面しながらも、主の殉教者たちは、恐れを知らぬ喜びに満ちた思索にふけり、肉体を顧みることなく語り合った。それゆえ、彼らは永遠の栄光を相続し、今なお、彼らの偉業を称える私たちのために絶えず祈り続けている。

聖マルフ司教およびマルティロポリで殉教した聖殉教者たちの記念日。

記念日：2月16日

聖マルフは、メソポタミア・ソフォセス地方の主要都市であるタグリト[1881]の司教であった。この地域は、ギリシャ帝国と異教のペルシアの国境に位置していた。　そこで敬虔な司教は、灯火のように、神への知恵の光を放ちました。彼は説教によって異教徒であるペルシア人をキリスト教へと改宗させ、ペルシアの王たちの前でキリスト教徒のために執り成し、至る所で平和と安らぎをもたらそうと努めました。　こうして、テオドシウス2世の治世下、マルーフは二度にわたり、両帝国間の和平を締結するためイズデゲルド[1882]のもとへ使者として派遣され、その敬虔さと知恵によってイズデゲルドから絶大な尊敬を勝ち取った。ペルシアの魔術師たちは、王が聖マルーフに対して抱くこの好意を大いに快く思わず、敬虔な司教を滅ぼすことを決意した。　マルーフが、魔術師たちでも治せなかった危険な頭痛からイズデゲルドを癒した後、彼に対して措置を講じることが決定された。ある日、王がいつものように火を崇拝するために神殿に入ったとき、ある声を耳にした。

「あそこに王がいる。キリスト教の司祭に対する彼の愛は不敬だ！」

その後、驚愕したイズデゲルドはマルーフを遠ざけようとしたが、その欺瞞はすぐに発覚し、魔術師たちは処刑された。その後、火礼拝者たちの間でキリスト教の信仰が広まり始めた。

414年、マルーフは再びイズデゲルドの宮廷で使節の職務を務めた。魔術師たちは再び聖なる司教に対して反乱を起こしたが、彼らの企てはまたしても失敗に終わり、マルーフはペルシャ王からの信頼をさらに深めた。　この頃、聖マルーフはアヴダ司教と共に、信仰の祈りによってイズデゲル

[1880] それは309年のことだった。

[1881] *タグリット*、あるいはギリシャ語で*マルティロポリスと呼ばれる*この地は、ユスティニアヌス帝の時代まではギリシャ帝国に属し、ペルシア帝国との国境の都市であった。

[1882] ペルシア王イゼゲルド1世は399年から420年まで在位した。

ドの悪霊に取り憑かれた息子を癒やした。その後、イズデゲルドは洗礼を受けることさえ意図し、ペルシア国内でのキリスト教信仰の自由な実践を許可した。

このようなペルシャ王の好意に恵まれ、聖マルーフは至る所でキリストの教えを広め、サポーレの迫害の際に破壊された教会を再建し、公会議を招集した。

また同時期に、彼はサポル王の治世下で殉教した聖人たちの遺骨を集め、自ら築いた都市タグリットへ移し、そこで422年頃にこの世を去った[1883]。

3月2日

2月17日（旧暦）

聖大殉教者テオドロス・ティロンの殉教

記念日2月17日

不敬虔な王マクシミアンとマクシミン[1884]は、自らの王国全土に勅令を発し、キリストの教えを受け入れた者たちは、偶像への生贄を口にさえすれば処刑を免れるが、これを拒む者は裁判にかけるよう命じた。当時、聖テオドロス・ティロン[1885]は、その直前に兵士に選抜され、ブリンカという名のプレポジト[1886]の指揮下にあったマルマリス連隊に配属されていた。この連隊は当時、ポンティウス地方の都市アマシア[1887]に駐屯していた。聖テオドロスがその連隊に連れて行かれると、不信仰者たちは彼に偶像への生け贄を捧げるよう強要し始めた。しかし、真のキリストの戦士であり、神に忠実で、聖霊に満たされていたテオドロスは、皆が聞こえるようにこう言った。

「私はキリスト教徒であり、忌まわしい異教の神々に犠牲を捧げてはならないと命じられている。なぜなら、私は真の神であり天の王であるイエス・キリストを崇拝しているからだ。」

すると、プレポジット・ヴリンカは聖人にこう説得し始めた。

「聞いてくれ、テオドールよ。武器をすべて持ち、戦士としてここに来て、神々に犠牲を捧げなさい。」

聖テオドールは彼にこう答えた。

「私は私の王であるキリストの戦士であり、他のいかなる王の戦士にもなれない。」

これに対し、プレポジット・ヴリンカは言った。

[1883] マルーフはシリア語でかなりの数の著作を残したが、それらは現在に至るまですべてが刊行されているわけではない。特に注目に値するのは、1）未刊行の『*福音書注解*』、2）『*ペルシアの殉教者たちの歴史*』、3）『マルーフの*レヴニ*』、4) 彼が著した『*典礼*』、および5) ニカイア公会議の73*の規則*と、同公会議の議事録。聖マルーフの聖遺骨はその後、エジプトに移され、聖母マリアのスキトス修道院に安置された。

[1884] ここでいう「マクシミアン」とは、ディオクレティアヌス皇帝（284–306）の娘婿であり、東方の共同統治者、そして後に後継者（305–311）となったマクシミアン・ガレリウスを指す。マクシムス・ダカは、マクシミアヌス・ガレリウスの共同統治者であり、彼とは甥と叔父の関係にあった。彼は叔父からシリアとエジプトの領有権と「カエサル」の称号を授かった。ガレリウスとほぼ同時期に統治した（305–313）。

[1885] *ティロンは*ラテン語で、「*新兵*」「*新しい戦士*」を意味する。

[1886] *プレポジット*はラテン語で、「長」を意味する。

[1887] アマシア――ポンテ地方にある、イリス川の両岸にまたがる堅固に要塞化された都市で、かつてはポンテ王たちの首都であった。ポンテ――小アジア北東部の地域で、黒海、すなわち古代に「ポンテ・エウクシノス」と呼ばれていた海の沿岸に広がっていた。このようにして、ポンテ地方はその海にちなんでその名を得たのである。

「ほら、ここにいる戦士たちは皆キリスト教徒だが、それでも彼らはローマ王の戦士なのだ。」

「誰もが、誰に仕えているかを知っている」と聖テオドロスは答えた。「私は、私の天の王であり主である神、そしてその独り子イエス・キリストに仕えているのだ。」

すると、そこに立っていた百人隊長ポシドニオスが尋ねた。

「テオドールよ、お前の神には、まさか御子もおられるというのか？」

聖テオドロスはこう答えた。

「神にはまことに御子がおられます。それは『真理の御言葉』[1888] であり、神は御言葉によって万物を創造されたのです。」

修道院長は彼に尋ねた：

「私たちは神を知ることができるのでしょうか？」

これに対し、聖人は次のように答えられた。

– 神があなた方にも、神を知ることができるような知恵をお与えくださることを願っています。

すると、ポシドニオスは彼に尋ねた。

– もし私たちが神を知ることができれば、私たちの王たちを捨てて、神のもとへ近づくことはできるのでしょうか？

– 何も妨げるものはありません――と聖テオドールは答えた――闇と、この世の一時的な王たちを捨てて、生ける神、永遠の王であり主である御方に近づき、私のように御方の戦士となるのです。

すると、プレポジトのヴリンカは百人隊長に言った。

「彼（テオドール）を数日間放っておこう。よく考えさせ、自分自身の行く末を決めさせよう。」

テオドールに熟考の時間が与えられていた間、彼は絶えず祈りを捧げ、主を賛美していた。一方、不信心者たちは、キリストを信じる他の市民数名に対して激しい怒りを抱き、彼らを捕らえて牢獄へ連行した。彼らが連行される際、聖テオドロスはその後を追いながら、信仰と忍耐について教え、天の王であるキリストを拒絶してはならないと説得した。　彼らが牢獄に閉じ込められた後、聖テオドロスは好機を見計らい、夜間に女神ヘレネ（[1889] ）の神殿に火を放った。一部の市民は、聖人が神殿に火をつけるのを目撃し、当局に通報した。　そこで、都市長クロニドスは、テオドロスの件で責任を問われることを恐れ、彼を捕らえてイゲモン・プブリウスの元へ連れて行き、こう言った。

「閣下、この男は、最近兵士に選ばれたばかりですが、有害な人物です。悪意を持って我が街にやって来て、我らが神々の母の神殿を焼き払い、神々を冒涜しました。　彼を捕らえた私は、宇宙の支配者たちの神聖な御意志――すなわち王たちの命令に従い、その厚かましさに対してふさわしい処刑を受けるよう、貴殿の　陛下の御前に連れて参りました。イゲモンは、プレポジトのヴリンクを呼び寄せ、彼に尋ねた。

「テオドロスという兵士に、我らの神々の母の神殿を焼き払うことを許したのは、お前か？」

彼はこう答えた。

[1888] 聖三位一体の第二位格の名称「*御言葉*」*は*、福音書記者ヨハネ（神学者）に由来する。 福音書記者ヨハネは、その福音書の冒頭で、神である「言葉」について、霊感に満ちた一節を記している。その「言葉」は、太古の昔から父なる神と共にあったものであり、*「万物は彼によって造られた。彼なしには、造られたものの中で、一つとして造られたものはない」*（ヨハネ1:1–3）とされている。

[1889] ここで言及されているのは、当然ながら、天（ウラノス）と地（ゲイア）の娘である異教の女神キュベレのことである。ギリシャ神話では、彼女はゼウスを筆頭とするオリンポスの神々の母とみなされていたため、神々の偉大なる母として崇められていた。

「私はたびたび彼を諭しましたが、ついには期限を設け、よく考えた上で神々に犠牲を捧げるよう命じました。もし彼がそのような行動をとったのなら、それはすなわち、彼が我らの神々から完全に背を向け、王の命令を軽んじたことを意味します。ですから、あなたは裁判官として、王たちが命じたことを実行してください。」

そこで、イゲモンは裁判の席に着くと、至福のテオドロスを呼び寄せ、こう尋ねた。

「なぜ、女神に供物と香炉を捧げるべきだったのに、あなたは彼女に火を捧げたのか？」

聖テオドロスはこう答えた。

「私がなぜそうしたのか、隠すつもりはありません。私は薪に火をつけ、その火で石を焦がそうとしたのです。まさか、あなた方の女神は、火が触れても焦げることさえできないほど無力なのでしょうか？」

この言葉に激怒したイゲモンは、彼を殴打するよう命じ、こう言った。

「私の寛大さが、お前を傲慢にさせている。だが、余計なことは言うな。もし自発的に王の命令に従わないなら、我々は残酷な拷問で従わせるつもりだ。」

これに対し、聖人はこう答えた。

「私は、お前も、お前の拷問も、どれほど残酷であろうと恐れない。好きにしろ。私は主を信頼し、天国で主から報いを受けることを確信しており、主のために苦難に耐える覚悟がある。」

「神々に犠牲を捧げよ、テオドール」と裁判官は言った。「そうすれば、お前に待ち受ける苦痛から解放される。さもなければ、恐ろしい死が待っている。」

しかし、聖テオドールは勇敢にこう反論した。

「お前の苦しみなど、私には恐ろしくない。なぜなら、私の前には、私の主であり王であるイエス・キリストがおられるからだ。主は私をお前の苦しみから救い出してくださる。だが、お前は主を見ることはできない。霊的な目で見ることができないからだ。」

裁判官は、まるで野獣のように怒りに満ち、聖人を牢獄に投げ込み、扉を封印して、そこで餓死させるよう命じた。しかし、聖霊は御自身の恵みをもって聖人を支えてくださった。さらに、ある夜、主イエス・キリストが彼に現れてこう言われた。

「勇気を持ちなさい、テオドールよ。わたしはあなたと共にいる。この世の食べ物や飲み物を口にしてはならない。あなたには、天においてわたしと共に過ごす永遠の命が用意されているからだ。」

その後、主は聖人の目の前から姿を隠された。その御出現に慰められた聖テオドールは、詩篇を詠み始め、魂を喜びで満たした。大勢の聖なる天使たちが、彼の歌声に耳を傾けていた。　牢屋の看守たちは、この甘美な歌声を耳にすると、牢屋の扉へと近づいた。扉が施錠され、封印も破られていないのを見て、彼らは窓から中を覗き込み、白い衣をまとった多くの男たちが聖テオドールと共に賛美歌を歌っているのを見た。　彼らは恐怖に駆られ、このことをイゲモン・プブリウスに報告した。彼は直ちに急いで牢屋へと向かい、現場に到着すると、扉が施錠され、封印も無傷であることを確認した。そして、イゲモンは聖テオドールと共に内部で歌っている人々の声を耳にしたため、武装した兵士たちに牢屋を四方から包囲するよう命じた。　彼は、テオドールと共に、何人かのキリスト教徒が牢屋にいるのだと考えていた。しかし、牢屋に入ると、そこには縛られていた神の忠実な僕である聖テオドール以外、誰もいなかった。恐怖と戦慄が、イゲモンと彼と共にいた者全員を襲った。彼らは牢屋から出て、再び扉を閉めて立ち去った。　裁判官は、聖人に毎日、わずかなパンと少量の水を与えるよう命じた。しかし、*「義人はその信仰によって生きる」*（ハバクク2:4、ローマ1:17）という聖書の言葉を裏付けるかのように、聖テオドールはパンと水を受け取ることを拒み、こう言った。

「私の主であり王であるイエス・キリストが、私を養ってくださる。」

朝、裁判官は聖人を法廷に連行するよう命じ、彼にこう言った。

「私の助言に従え。そうすれば、お前を拷問し苦しめるよう命じる必要もなくなる。偉大なる神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、私は宇宙の支配者である我らの王たちに、お前のことを報告する。王たちは、お前を神々の大祭司に任命し、お前は私と同等の栄誉を受けることになるだろう。」

聖テオドールは天を仰ぎ、十字の印を胸に刻みながら、拷問者にこう答えた。

「私の体を火で焼き、あらゆる苦痛にさらし、剣で切り刻み、野獣の餌として差し出してもよい。しかし、私は生涯の終わりまで、私のキリストを否定することはない。」

拷問官は修道院長と相談した後、聖人を木に吊るし、鉄の鋸歯でその肉を削るよう命じた。聖人は骨が見えるようになるまで、このように拷問された。その間、聖人は拷問官に何も語らず、ただ次のように詠んだ。

「神の義は、信仰から信仰へと現される。すなわち、『義人は信仰によって生きる』と書かれているとおりである」（ローマ 1:17）。 *「わたしは常に主を賛美し、わたしの口には絶えず主への賛美がある」*（詩篇 33:2）。「*知恵を得ることは金を得るよりもはるかに良く、分別を得ることは選りすぐりの銀を得るよりも望ましい」*（箴言 16:16）。

拷問官は、聖テオドロスのそのような勇気と忍耐に驚き、彼にこう言った。

「お前、すべての人のうちで最も卑しい者よ、キリストと呼ばれる、ご自身も不名誉な死を遂げられたその方に頼ることを恥じないのか？　まさか、その方のために、これほど無謀にも自らを拷問にさらしているというのか？」

キリストの殉教者は、これに対しこう答えた。

「主イエス・キリストの御名を呼び求める私と、すべての人々に、同じ不名誉が降りかかればよい！」

すると、民衆は叫び声を上げ、聖テオドールへの処刑を早急に行うよう要求し始めた。民衆の叫び声を聞いた裁判官は、伝令を通じてテオドールに尋ねた。

「神々に生贄を捧げるか、それともさらに大きな苦しみを受けるつもりか？」

これに対し、キリストの殉教者は勇敢にこう答えた。

「不敬虔な者よ、あらゆる不浄と諂い（お世辞）に満ちた、悪魔の僕よ。あなたにそのような権威と力を与えた神を、あなたは恐れないのか。なぜなら、*『王たちは神によって治められ、支配者たちは神によって正義を確立する』*からである（箴言8:15）。どうしてあなたは、私を生ける神を捨て、魂のない石を拝むよう強要できるのか？

しばらく考えた後、裁判官はテオドロスに言った。

「お前は何を望むのか。我々と共にいるか、それともお前のキリストと共にいるか？」

聖人は大いなる喜びをもってこう答えた。

「私は、私のキリストと共にあったし、今もそうであり、これからもそうである。お前は好きにすればよい。」

裁判官は、テオドロスの揺るぎない信念を何物も打ち砕くことができないと悟ると、死刑判決を下した。

「テオドールよ」と彼は言った。「偉大なる王たちの権威に従わず、偉大なる神々を認めず、ユダヤ人たちが言うところのポンティウス・ピラトの治世下で十字架につけられたイエス・キリストを信じるこの者を、私は火刑に処すことを命じる。」

拷問官のこの命令は即座に実行された。彼の家来たちは、近隣の家や浴場から大量の薪を集め、巨大な焚き火を築き上げ、聖テオドールをその焚き火の前に連れてきた。四方から火が放たれた焚き火は、激しい炎を上げて燃え上がった。　火刑台に足を踏み入れた聖テオドロスは十字を切ると、

突然、聖霊が降りてきて、炎の只中でこの聖なる殉教者に涼しさを与えた。聖人は、神を賛美し、その栄光を称えながら、安らかに御霊を神に委ねた。

「そして私たちは、」と、この大殉教者の至福の死を目撃したある人物は記している。「彼の清く聖なる魂が、稲妻のように天へと昇っていくのを見た。」

エウセビアという名の敬虔で徳高い女性が、栄光ある大殉教者テオドロスの遺体を求めた。彼女に聖人の尊い遺骨が渡されると、彼女はそれを香りのよい聖油で塗布し、清らかな布で包んで、アマシア都主教区のエウカイタイ[1890] にある自宅に埋葬し、毎年、殉教者の聖なる記念式を執り行った。　キリストの聖大殉教者テオドロスは、306年頃2月17日、マクシミアヌス帝の治世中にこの世を去った。

聖大殉教者テオドール・ティロンの奇跡について。

コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスに続き、ユリアヌス・アポステート[1891] が帝位に就いた。彼はキリストを否定し、偶像を崇拝するようになり、キリスト教徒に対して大規模な迫害を開始した。　ユリアヌスは、公然というよりはむしろ密かにキリスト教徒を迫害した。というのも、彼は、拷問を受けるキリスト教徒たちの勇敢な忍耐を目撃した多くの異教徒が、　自らキリストに改宗してしまうことを恐れて、すべてのキリスト教徒を公然と残酷で非人道的な拷問にさらすことを躊躇していたからである。　そこで、この不敬虔な皇帝は、密かにキリスト教徒を穢すことを企てた。彼は、四旬節の最初の週に、キリスト教徒たちが特別な清さを守り、自らの罪を悔い改めていることを知っていた。　そこで彼はコンスタンティノープルの都市長官を呼びつけ、四旬節の最初の週の間、毎日、市場で売られている食料品を、キリスト教徒が常に避けるべきである偶像への生け贄の血で汚すよう命じた（参照：使徒行伝15:29）。　皇帝の命令は実行され、すべての市場には、異教徒によって汚された食糧が並べられた。しかし、全知の主は、異教徒を恥じ入らせ、御自身の真の僕たちを顧みて、この秘密の陰謀を打ち砕かれた。　主は、コンスタンティノープル大司教エウドクシオス[1892] のもとへ、御自身の聖殉教者テオドロスを遣わされた。彼は、その何年も前にキリストのために苦難を受け、天の御国で栄光のうちに留まっていた者であった。聖テオドロスは、エウドクシオスに夢の中でではなく、現実の世界に現れ、彼にこう告げた。

「直ちにキリストの羊の群れを集め、すべての正教徒に、市場で食料品を買ってはならないと命じなさい。それらは、不敬虔な王の命令により、偶像への生贄の血で穢されているからだ。」

司教は困惑して、家にある食糧が不足している貧しい人々に、市場で買う食糧の代わりに何を用意すればよいのかと尋ねた。

聖人はこう答えました：

「彼らにコリヴォを与えれば、その苦境から救われるだろう！」

しかし、司教は「コリヴォ」とは何かを知らなかったため、依然として困惑した様子を見せた。そこで聖テオドロスは言った。

「コリヴォとは、蜂蜜で煮込んだ小麦のことだ[1893] 。エウカイタイでは、この料理をそう呼んでいる。」すると、司教は聖人に尋ねた。

「あなたはどなたですか。なぜ正教徒たちをこれほど気遣ってくださるのですか？」

これに対し、聖人はこう答えました。

[1890] エウカイテスは、ポンテウス地方のアマシア近郊にあった、さほど重要ではない都市である。

[1891] ユリアヌスは361年に即位し、363年まで在位した。キリスト教の信仰の中で育てられた彼は、皇帝になるとすぐにキリスト教を放棄し、異教の側に転向した。このため、彼は「背教者」と呼ばれている。

[1892] 聖エウドクシオスは、340年から341年にかけてコンスタンティノープル総主教の座に就いていた。

[1893] コリヴォ、別名クティア、あるいはソチヴォとは、質素な料理のことである。これは乾燥した小麦、レンズ豆、大麦の粒から成り、水でふやかして蜂蜜と共に食べる。

「私はキリストの殉教者テオドールです。神の御命により、あなた方を助けるために遣わされたのです。」

そう言うと、聖人は姿を消した。司教は直ちにすべてのキリスト教徒を集め、自分が見聞きしたことを伝えた。コリヴォを用意することで、彼は自分の羊の群れを敵の陰謀から守った。不敬虔な王は、自分の策略が破られたのを見て深く恥じ入り、市場には汚れのない料理を届けるよう命じた。そしてキリスト教徒たちは、主の言い表せないほどの慈悲に感謝し、キリストの大殉教者聖テオドロスを称え、大斎の第一週の土曜日に聖大殉教者の祝祭を行い、彼を称え、その記憶を偲んで、信徒たちが食べるためのコリヴォを祝福した。　それ以来、今日に至るまで、教会は大斎の最初の日曜日に、エウドクシオス大司教の時代に起きた奇跡を記念してコリヴォの聖別を行い、キリストの受難の殉教者テオドロスを称え、信徒たちに、神のしもべたちに対する神の慈悲深い摂理　――そして、聖大殉教者テオドロスがキリスト教徒に与えた助けについて、絶えず思い起こさせるためである[1894]。

トロパリオ、第2調:

信仰の回心の源、炎の泉、安らぎの水の如く、聖殉教者テオドロスは喜びに満ちていた。火によって焼き尽くされ、三位一体への甘き供え物として捧げられたからである。その祈りによって、キリストなる神よ、我らの魂を救いたまえ。

コンダク、第8調:

キリストへの信仰を盾として心に受け入れたあなたは、敵対する勢力を打ち破り、多くの苦難に耐えた者よ。そして、テオドールよ、無敵の者として、永遠に天の冠を戴いた。

聖マリアムナの記念日。

記念日：2月17日

聖マリアムナは、聖使徒フィリッポスの姉妹であった。貞潔の誓いを立てた彼女は、聖フィリッポスが小アジアの各地で福音を宣教し、リディアとミシアにやって来た際、使徒バルトロマイと共に兄のもとへ加わった[1895]。この時から、聖マリアムナは聖使徒フィリッポスとバルトロマイの使徒的働きを助け、彼らと共に使徒職に伴うあらゆる苦難と悲しみを耐え抜いた。神の言葉を宣べ伝えながら、彼らはフリギアのイェラポリスにたどり着いた[1896]。教会史家ニキフォロス・カリストは、古代の伝承に基づき、彼らがここに到着するやいなや、偶像への崇拝は直ちに止み、イェラポールの住民たちが神として崇めていたエヒドナは聖域から追い出され、それを崇めていた者たちは恥と悔しさに覆われたと伝えている。　彼らの説教の成功を阻止するため、都市の統治者はフィリポ、バルトロマイ、マリアムナを捕らえ、牢獄に投獄するよう命じた。その後、使徒フィリポは十字架に吊るされて処刑された。　一方、マリアムナとバルトロマイは、神の怒りが市長とエヒドナの祭司たちに対し

1894　エウドクシオス大司教に現れた大殉教者テオドロスの奇跡を記念する祝典は、土曜日の前夜――金曜日の聖体礼儀における説教壇後の祈りの後に始まる。　この時、聖ヨハネス・ダマスキノスによって作曲された大殉教者への祈願カノンの詠唱とともに、コリヴァの祝福が行われる。土曜日には、教会は聖テオドロスへの賛辞を読み上げ、エウカイテス都主教ヨハネスのカノンを歌うことを定めている。

1895 リディアとミジアは、小アジアの北西部に位置する地域である。

1896　フリギアのイェラポルは、フリギア南部（小アジア中部）に位置し、古代には大理石の採石や温泉で名高い、かなり重要な都市でした。現在では廃墟と化しており、この場所はハンセン病患者の避難所となっています。

て奇跡的に現れ（彼らは大地に飲み込まれた）、解放された。　聖マリアムナは、殉教して亡くなった兄弟の遺体を十字架から降ろし、愛を込めてその遺体に口づけをした後、主を賛美し、福音宣教のためにリカオニアへと向かった[1897]　。そこで、宣教活動が実を結ぶ中、彼女は労苦から解放され、安らかに息を引き取った。

聖殉教者ミーナ・カリケラドの聖遺骨発見

記念日：2月17日

アテネ出身の聖ミナは、優れた教育を受け、雄弁さで知られていたため、「カリケラダ（雄弁な者）」という名で呼ばれた。 マクシミヌス帝の治世下[1898]、彼は313年頃[1899]に殉教した。彼の聖遺骨の発見は、ビザンツ帝国のバシレイオス・マケドニアヌス帝の治世下[1900]に行われた。

3月3日

2月18日（旧暦）

聖父レオ、ローマ教皇の記念日

2月18日の記念日

偉大なる聖人であり、神の教会の牧者であるローマ教皇レオは、イタリアの出身であり、その父の名はクインティアンであった。幼い頃から聖レオはあらゆる学問の知恵を教え込まれ、　外的な哲学[1901]に触れ、キリスト教の美徳について指導を受けた。 世俗の生活よりも霊的な生活を愛した彼は、当初、教皇シクスト3世[1902]の下で大助祭[1903]を務めた。その高い貞潔さと清らかさにより、シクストの死後、満場一致でローマ教会の首席司教に選出された。　良き羊飼いとして、聖レオンはキリストの「言葉の羊」たちを熱心に導き、彼らのために自らの魂を捧げた。

当時、「神の鞭」と呼ばれた、フン族の首領アッティラ[1904]という残忍な暴君は、多くの国を征服した後、イタリアにも進軍し、そこもまた火と剣で荒廃させようと企んでいた。　この恐るべき

[1897] リカオニアは、小アジアの中央部にある地域の一つで、フリギアと国境を接している。

[1898] 言うまでもなく、305年から313年にかけてシリアとエジプトを統治したマクシミヌス・ダザのことである。

[1899] これについては、『聖人伝』の12月10日の項に詳しい記述がある。

[1900] ビザンツ帝国の皇帝ヴァシレイオス1世マケドニア人は、867年から869年まで在位した。

[1901] *「外的な哲学」*とは、プラトン、アリストテレス、ピタゴラスなどの異教の哲学者、すなわち信仰上、キリストの教会の外にいると見なされていた著述家たちの著作を指した。

[1902] 教皇シクスト3世は、432年から440年までローマ教皇の座に就いていた。

[1903] 大助祭とは、最上級または第一の助祭のことです。各司教座には、それぞれ1人の大助祭がいました。古代教会において、大助祭の職は極めて尊ばれており、大助祭は司教に最も近い人物の一人でした。　しばしば、大助祭が司教に選出された。聖アタナシウス大聖人、ローマ教皇レオ、その他多くの例がこれを裏付けている。　現在、大助祭とは、上位の司祭助祭、すなわち、大規模な修道院（特にスタウロピギア修道院）や大聖堂で修道生活を送る助祭のことを指します。この称号は名誉上の優位性を与えるだけであり、権威を与えるものではない。なぜなら、大助祭は助祭たちの長ではなく、奉仕や集会の場において彼らの中で第一の地位にある者に過ぎないからである。

[1904] フン族はアジアの民族であり、4世紀末にヨーロッパに侵攻し、都市や王国全体を破壊して、同地に甚大な荒廃をもたらした。ヨーロッパにおいて、フン族はドナウ川の支流であるティッサ川流域、現在のハンガリー北部に拠点を確立した。　アッティラの治世（433年～454年）は、フン族の勢力が最も輝いていた時期である。アッティラはビザンツ皇帝を絶

征服者に抗う者など誰もいないと悟ると、教皇レヴィウスは神に熱心に祈りを捧げ、自ら断食を課し、聖なる首席使徒ペトロとパウロの助けを求め、涙ながらに主に対し、その僕たちを凶暴な敵から守ってくださるよう懇願した。　祈りから勇気と不屈の精神を汲み取った聖レヴェは、その迫害者の怒りを鎮め、その猛威を収めるために、必要とあれば自らの命を犠牲にしてでも羊たちを守る覚悟で、彼のもとへ向かうことを決意した。　彼は、賢明で甘美な言葉、そして神に霊感を受けた言葉でアッティラと語り合い、彼を獰猛な狼から柔和な羊へと変えた。　恐ろしく、手ごわい戦士は、神の御使いの言葉に謙虚かつ穏やかに耳を傾け、その司教としての威厳に驚き、その清らかな顔の聖性に畏敬の念を抱いた。聖レオの望み通りにすべてを遂げた後、恐ろしいアッティラはイタリアの国境を離れ、自らの領地へと戻っていった。

アッティラの将軍たちは、レオンが、あれほど獰猛な君主であったアッティラを、これほど短期間で、しかもこれほど異例な方法で、これほど柔和な人物に変えることができたことに大いに驚いた。彼らはアッティラに尋ねた。

「なぜ、武器も持たずにやってきたたった一人のローマ人を恐れたのか？　なぜ彼に従ったのか？　なぜ、まるで敗北したかのように、イタリアにこれほど多くの富を残して逃げ出したのか？」

「君たちは、私が見たものを見ていない」とアッティラは答えた。「私は、教皇の両側に立っていた二人の天使のような男たちを見たのだ（彼らは聖なる首席使徒ペトロとパウロであった）。彼らは手に鞘から抜かれた剣を握り、もし私が神の司教に従わなければ、死を宣告すると脅していたのだ。

これこそが、目に見えない敵だけでなく、目に見える敵さえも畏怖させた、神の偉大な御用達者レフであった。彼は羊たちから熱烈に愛されていた。なぜなら、彼らのために、恐ろしい征服者の元へ行くことを恐れず、必要とあれば彼から苦難を受ける覚悟さえしていたからである。

彼の聖職在任中、異端者ネストリウス[1905] に続き、コンスタンティノープルの大修道院長エウティキオスとアレクサンドリアの総主教ディオスコーロス[1906] が現れた。彼らは恥知らずな冒涜者であり、我らの主キリストにおける神性と人性という二つの本性を一つに融合させようとした。彼らの異端は、神の教会 を大いに混乱させた。 エフェソスで[1907] 彼らの不義な公会議[1908] を開き、彼らは正教の擁護者であるコンスタンティノープル総主教聖フラヴィアヌスを不当に非難し、拷問にかけて殺害し、正教徒たちに多くの害をもたらした。　そこで、聖教皇レオンは、異端者たちによって動揺させられていた教会を強め、和解させるために全力を尽くした。彼は、まずテオドシウス[1909] 、次にマ

えず恐怖に陥れ、巨額の貢納を支払わせ、ドナウ川以南のすべての土地をフン族に譲り渡させた。 440年、アッティラは50万の軍勢を率いて西へと進軍した。あらゆるものを火と剣で焼き尽くしながら、彼はドイツ全土を横断してライン川に至り、その後この川を渡って数多くの都市を破壊した。しかし、フランス南部で撃退され、ドイツへ引き返すことを余儀なくされた。 452年、彼は新たな遠征を敢行した――今回はイタリアへの侵攻であった。ローマおよびイタリア全土は敵の犠牲となる危険にさらされたが、アッティラは勝利の行進を止め、教皇レオ大帝との交渉を経て、引き返した。この遠征の直後、アッティラは死去した。

[1905] 428年から431年までコンスタンティノープル総主教の座にあったネストリウスは、イエス・キリストは真の神ではなく、　人間であり、ヨセフとマリアの子であり、その聖なる生涯ゆえに神の特別な恵みを授かり、贖いの死によってではなく、教えと生涯の模範によって私たちを救うものであるという異端の教義を説いた。この異端のため、ネストリウスは第3回全地公会議で教会から破門され、436年に流刑の地で死去した。

[1906] 444年から451年までアレクサンドリア総主教の座に就いていた。

[1907] エフェソスは小アジアの西岸に位置する都市で、当初は小アジアのギリシャ人植民地の中心地であり、皇帝の時代には小アジアの主要都市の一つとなった。聖使徒ヨハネ・テオロゴスはエフェソスで余生を過ごし、そこで逝去したほか、第3回全地公会議も同地で開催された。

[1908] それは449年のことだった。

[1909] 在位は408年から450年まで。

ルキアヌス[1910]の各皇帝に書簡を送り、全地公会議を招集するよう求めた。ついに、マルキアヌスとプルケリアの治世下、キリスト・主において単一の本性、単一の働き、単一の意志を説くエウティキオスとディオスコロスに対抗して、ハルキドンで第4回となる全地公会議[1911]が招集され、そこには630人の聖なる教父たち[1912]が出席した。この公会議には、聖なる教皇レオが出席することはできなかった。それは、旅路が長かったことや高齢であったこと、また当時頻繁に発生していた敵の侵攻により、イタリアを離れることが不可能であったためである。そこで、教皇は自身の代理として、パスカジウスとルケンティウスの両司教、およびボニファティウスとバシレイオスの両司祭を派遣した。その公会議において異端者たちとの論争が行われている最中、多くの人々に強い疑念が湧き上がった。そこで、聖なる父たちの命により、異端者たちの反論を受けて、ローマ教皇聖レオが、以前コンスタンティノープル総主教であった聖フラヴィアヌスに宛てて書いた書簡が朗読された。同総主教は、エウティキオスに対抗してコンスタンティノープルで地方公会議を招集した人物である。この書簡については、聖なる最高使徒ペトロ自身が、その使徒の手をもってこれを訂正したと伝えられている。このことに関する証言は、聖ソフロニオス・エルサレムスの『リモナール』に見られる。

「アッバ・ミナ――アレクサンドリア近郊にあった『サラマノヴァ』と呼ばれるキノヴィアの修道院長――が、アレクサンドリアの総主教アッバ・エウロギオスから次のような話を聞いたと、私たちに語ってくれた」と、聖ソフロニオスは記している。『私が（エウロギオスはこう語った）コンスタンティノープルに来たとき、ローマ教会の大助祭であるグリゴリオス氏と同居していた。彼は実に傑出しており、徳の高い人物であり、私は彼と頻繁に語り合った。彼こそが、至福にして至聖なるローマ教皇レヴェについて私に語ってくれたのである。ローマ教会では、まさに彼について次のように記録されている。聖レヴェンティウスが、不敬虔なエウティキオスとネストリウスに反対して、コンスタンティノープル司教聖フラヴィアヌスに書簡を送った際、彼はその書簡を首席使徒ペトロの墓の上に置き、自ら祈りと断食をもってこの使徒にこう懇願したのだ。

「もし私が、人間として何らかの過ちを犯したり、何かを十分に説明し損ねたりしたならば、主なる神であり、私たちの救い主イエス・キリストから教会とこの座を委ねられたあなたよ、それを正してください。」

40日後、祈りの最中に使徒が現れ、こう言った。

「読み、訂正した。」レオンは、至福のペトロの墓からその書簡を取り出し、開いてみると、使徒の手によって訂正されているのを見つけた。これを伝えているのは聖ソフロニオスである。

この聖教皇レオの書簡が第4回全地公会議で朗読されたとき、すべての聖なる父たちはこう叫んだ。

「聖使徒ペトロがレオの口を通して語っておられる。」

このように、公会議の教父たちはその裁定において聖レオの書簡を根拠とし、この書簡によって異端者たちを恥じ入らせた。当時だけでなく、その後も、正教を擁護し異端者たちの口を封じるこの書簡は、聖なる父たち、とりわけ前述のアレクサンドリア総主教エウロギオスによって深く尊ばれた。このエウロギオスは、異端者たちがレオの書簡を激しく非難し、そこに書かれた内容に異議を唱えていた一方で、それを力強く擁護したため、当時すでにこの世を去り、聖人たちと共に神の御前に立っていた聖レオに好意を持たれたのである。

[1910] 在位は460年から467年まで。
[1911] ハルキドンはコンスタンティノープルの郊外であり、その対岸、ボスポラス海峡のアジア側に位置していた。
[1912] 公会議は451年10月8日に開会した。

これについて、同じ聖ソフロニオスは次のように語っている。「リビアのダルナ市の司教である聖テオドロス[1913] は、私たちに次のように語った。私がアレクサンドリアの聖エウロギオス総主教のクーヴィクラリウス[1914] であったとき、私は 夢の中で、神聖で輝かしい姿の男性を見、その人は私に『私についてエウロギオス総主教に伝えなさい』と言った。」

私は尋ねました：

「あなたはどなたですか、大主教様。そして、あなたについてどのように伝えればよいのでしょうか？」

すると彼は私にこう答えました：

「私はローマ教皇レフである。」

私はエウロギオス総主教のもとへ赴き、こう申し上げました。

「至聖にして至福なる教皇レフ、ローマの首席司教が、あなたにお会いしたいと願っておられます。」

これを聞いたエウロギオス総主教は、素早く立ち上がり、彼を迎えに出た。祈りを捧げた後、二人は口づけを交わし、席に着いた。その時、至福のレウスは聖エウロギオス総主教にこう言った。

「私がなぜあなたのところへ来たのか、ご存知ですか？」

すると、彼は答えた。

「いいえ。」

レウスは彼に言った。

「私は、あなたが私の書簡を立派かつ力強く擁護し、私の意図を明確に説明し、それによって異端者たちの口を封じ、そして、ネストリウスとエウティキオスの不敬虔な異端を糾弾するために、私の兄弟であるコンスタンティノープル総主教フラヴィアヌスに宛てて書いたこの書簡を、このように解説してくださったことに対し、感謝を申し上げるために参りました。　兄弟よ、知っておいてほしい。この書簡に尽力し、労を惜しまなかったのは私だけではなく、聖なる首席使徒ペトロもまたこれを読み、修正し、そして何よりも、私たちによって宣べ伝えられる真理そのものである、私たちの神キリストご自身が、この書簡を聖別してくださったのだ。

このような幻視（テオドール司教は語る）を、私は一度だけでなく、二度、三度と見た。祝福された父たち――レウとエウロギオスが、私の霊的な目の前で三度集まり、互いに語り合ったのである。この三度繰り返された幻視について、私は聖エウロギオスに告げた。　これを聞いた聖エウロギオスは涙を流し、天に向かって両手を広げ、神に感謝を捧げ、こう言った。

「主キリスト、わが神よ、あなたの偉大で言い表せない慈しみに感謝いたします。私のような不適格な者に、あなたの真理を宣べ伝える者となる恵みを授けてくださり、また、あなたのしもべであるペトロとレオの祈りによって、未亡人の二枚の銅貨のような私のささやかな大胆さを、快く受け入れてくださったことを[1915] 。」

以上がソフロニオスの伝承である。ここに記された幻視は、聖レオの帰天から何年も後に起こったものである。というのも、聖エウロギオスははるかに後の時代、すなわち皇帝マウリキウスとフォキスの治世[1916] に生きていたのに対し、ローマ教皇聖レオはそれより前に、同名の皇帝レオ大帝の治世[1917] に亡くなっていたからである。

聖教皇レオの最期の日々について知られていることは以下の通りである。

[1913] リビア――北アフリカの州で、エジプトと隣接し、その西側に地中海沿岸からアフリカ内陸部へと広がっている。

[1914] クヴィクラリウス――寝具係、寝具担当者。

[1915] 参照：*「イエスは献金箱の向かいに座り、人々が献金箱にお金を入れるのを見ていた。多くの金持ちはたくさん入れていた」*（マルコ12:41–44）。

[1916] マウリキウス皇帝は582年から602年まで在位した。フォカス皇帝は602年から610年まで在位した。

[1917] ビザンツ帝国の聖レウ1世は、457年から474年まで在位した。

高齢に達し、この世での生涯の終わりが近づいた聖レヴェは、神から自身の人間としての弱さが赦されることを告げられた。　その経緯は次の通りである。教皇レオは、聖使徒ペトロの墓の前で40日間、祈りと断食に専念し、聖使徒に対し、全知全能の神が自身の罪を赦してくださるよう主にお願いしてくださるよう懇願した。40日が経過すると、聖使徒ペトロが現れ、こう言った。

「私はあなたのために祈った。そして、あなたが他者を聖職に叙階する際に犯した罪を除き、あなたのすべての罪は赦された。ただ、あなたが誰かを合法的に叙階したかどうかについてのみ、あなたは説明責任を負わなければならない」。

この告げを受けた後、聖レウスは祈りをさらに深め、断食を厳格にし、施しを増やし、心が砕けるほどに叫び続け、完全な赦しという慰めを得るまでその状態を続けた。　その後、死を迎えるにふさわしい準備を整え、聖なる魂を神の御手に委ね、先に眠る聖人たち、偉大な聖職者たち、そして教師たちの列に加わった[1918]。今や彼は、彼らと共に、父と聖霊と共に永遠に賛美され、崇められている、私たちの神キリストの御座の前に立っている。アーメン。

コンダク、第3声：

栄光に満ちた祭司の座に就き、言葉の獅子の口を封じ、神の霊感を受けた聖なる三位一体の教義を、神の知恵の光をもってあなたの群れに照らし出しました。このゆえに、あなたは神の恵みの神聖な秘儀の守り手として称えられました。

我らの聖なる父、殉教者フラヴィアヌス、コンスタンティノープル総主教の記念日

記念日：2月18日

著作

• コンスタンティノープル大司教フラヴィアヌスによる、古きローマの教皇レヴォへの、不敬虔なエウティキオスの誤謬に関する書簡

• コンスタンティノープル司教フラヴィアヌスによる信仰告白（要約）のリスト。彼自身の筆によって記され、皇帝の要請に応じて皇帝に提出されたもの

• コンスタンティノープル大司教フラヴィアヌスから、聖ローマ教会の大司教レヴォへの書簡

我らの至聖なる父フラヴィアヌスは、当初、聖なる偉大なるコンスタンティノープル教会において、聖器保管者および長老を務めていた[1919]。その後、至聖なるプロクルス総主教の帰天に際し、

[1918] ローマ教皇聖レオの死は461年に訪れた。その遺骸は、バチカンの聖ペトロ大聖堂内の、彼の名に因んだ聖堂に安置されている。教皇レオの遺した著作には、教義的・道徳的な内容を含む100編ほどの文章と140通ほどの書簡がある。　これらの著作はすべて、厳格に貫かれた正統な教義の精神に特徴づけられている。例えば、第4回全地公会議におけるコンスタンティノープル総主教フラヴィアヌスへの有名な書簡の中で、聖レウスは神の受肉について次のように述べている。「神性は、どちらの性質も損なうことなく、私たちの弱さを受け入れた。　真の神は、真の人間の真かつ完全な本性の中に現れ、神に固有のものをすべて備えつつ、また私たちに固有のものをすべて備えている。人間は、神性の偉大さによって滅ぼされることはない。双方の本性は、互いに交わりながら、それぞれに固有の方法で作用している」。　教皇レオの道徳的教義もまた、特に注目に値する。聖レオはしばしば、信徒たちに慈愛の行いを実践するよう説いた。慈愛の義務は、と彼は語った、施しの量によってではなく、心の在り方によって決まるのである。富める者は自ら貧しい者を探し出し、彼を助けるべきである。　神が富を与えるのは、それが貧しい者へと流れ込むためである。祈りについて語る際、聖レウスは聖人たちの執り成しに助けを求めるよう説き、聖遺物を尊ぶよう命じた。

[1919] ここでいうのは、もちろん、神の知恵である聖ソフィア教会――首都の大聖堂であり、コンスタンティノープル総主教座が置かれた場所である。

その清廉かつ神に喜ばれる生涯により、総主教の座に就いた。 これは、テオドシウス2世とその妹プルケリアの治世のことでした。 皇帝には、クリサフィオスという名の宦官がおり、彼は狡猾さと悪意に満ちていた。異端的な考えを抱き、フラヴィアヌスが敬虔で正統な信仰を堅く守っていることを知っていたクリサフィオスは、彼を嫌っており、聖人が総主教に就任することにあらゆる手段で反対した。 しかし、彼の妨害にもかかわらず、聖フラヴィアンが総主教に任命されると、クリサフィオスは総主教に害を及ぼすための口実を探し始めた。彼は、王の寵愛を受け、絶大な権力を握っていたため、その狡猾な手口に極めて長けていた。

王に対する自身の影響力を利用して、クリサフィオスはすぐに、王の聖なる総主教に対する不興を煽る口実を見つけた。教会史家ニキフォロス[1920] の証言によれば、彼は王に、総主教に対し、新たに就任した総主教として、王の地位にふさわしい贈り物を用意するよう伝えるよう仕向けた。 そこで、至聖なるフラヴィアヌスは、上質な小麦粉でパンを焼き、王の手にふさわしい、まさに王に相応しいこの贈り物を、祝福を求めて王に送った。しかし、クリサフィオスは、総主教が王に贈るべきはパンではなく金であるとして、これらのパンを拒絶した。 至聖なる総主教は使者を通じて、そのような贈り物は持っていないと答えた。

「私には金はない」と彼は言った。「私はこの世のあらゆる財宝を軽んじてきたからだ。ましてや教会の財宝から何かを差し出すことなどあり得ようか。しかし、教会の銀や金は神に属するものであり、乞食以外には誰にも与えてはならない——これはクリサフィオ自身もよく知っているはずのことだ。」

しかし、その後、歴史家エヴァグリオス[1921] が付け加えているように、クリサフィオスが貴重な贈り物の送付を執拗に要求し始めたとき、総主教は祭壇からいくつかの金の器を取り出して彼に送った。この贈り物によって、総主教はクリサフィオスを恥じ入らせ、彼の金に対する飽くなき欲望を暴こうとしたのである。

クリサフィオスは激怒し、新任の総主教が皇帝の権威を侮辱していると告げ、皇帝を扇動して総主教に敵対させようとした。 しかし、この狡猾な宮廷人は、総主教に大きな害を及ぼすことはできなかった。というのも、当時ギリシャ全土を統治していた、皇帝テオドシウスの妹である敬虔な皇后プルケリアが、総主教を庇護し、この無実で聖なる人物を守っていたからである。 そこでクリサフィオスは、敬虔なプルケリアに対しても陰謀を企て始め、聖プルケリアの伝記に詳述されているように、狡猾な手段で皇后エウドキアを彼女に敵対させるように仕向けた。クリサフィオスの策略は、皇帝の妹が宮殿から追放され、権力を失うという事態にまで至った。 その経緯は次の通りである。テオドシウス皇帝は、妻エウドキアとクリサフィオスの助言に従い、総主教に妹を説得して修道誓願を立てさせ、それによって彼女を王権から排除したいと考えた。そこで皇帝は密かに評議会を招集し、至聖なる総主教も招かれた。 評議会の席上、総主教は皇帝の望みを叶えるふりをしたが、心の中ではこれを是認していなかった。というのも、彼は、卓越した英知、分別、貞潔、そして聖性を備え、幼少期に両親を亡くした皇帝の母の代わりとなり、 さらに、彼女は敬虔さの守護者であり、賢明な国家統治者でもあった。プルケリアを尊敬し崇敬していた聖フラヴィアヌスは、皇帝の秘密会議で起こっていたことすべてを、密かに彼女に知らせた。 そこで、敬虔な王女プルケリアは、王妃とクリサフィオスの敵意を悟り、兄の意図を見抜くと、自ら王国の統治を離れ、王宮や都をも去り、静寂な隠遁生活へと身を委ねた。 その後、狡猾なクリサフィオスは好機を待ち、再び至聖なるフラヴィアヌス総主教に対して陰謀を企て始めた。彼は王自身を総主教に敵対させ、「総主教は王の秘密を守

[1920] また、ここにはコンスタンティノープルの聖ソフィア修道院の修道士——1350年頃に没した*ニキフォロス・カリスト*——も含まれており、彼の『教会史』はビザンツ皇帝フォキオス（611年）の死までを扱っている。

[1921] *エヴァグリオス・スコラスティコスは*、431年から594年までの期間を網羅する教会史の著者であり、その執筆は537年から594年の間に行われた。

らず、王ではなくプルケリアの味方をしている」と告発したのである。というのも、総主教が王の意図をプルケリアに伝えたことは、まもなく皆に知れ渡っていたからである。　こうしてクリサフィオスは、皇帝がフラヴィアヌス総主教に対して激しい怒りを抱くように仕向けることに成功した。

当時、コンスタンティノープルには、エウティキオスという大修道院長が住んでいた。彼は、我らの主イエス・キリストにおける神性と人性という二つの本性を一つの本性に融合させるという、神を冒涜する教えによって悪名高くなっていた。　このエウティキオスは、聖なる洗礼の際にクリサフィイスの代父を務めていたため、彼の霊的指導者でもあった。コンスタンティノープルで地方公会議[1922]　を招集した至聖なるフラヴィアヌス総主教は、エウティキオスをその場に招き、すべての人の前で自らの信仰告白を公に表明するよう求めた。　しかし、エウティキオスは公会議に出席することを拒み、その不参加を正当化するために様々な口実をでっち上げた。ある時は、修道院から出ることは棺から出るようなものだと主張し、そのように誓いを立てているから出られないと言い、またある時は、年老いて重病であると述べた。しかし、至聖なる総主教は再びアルヒマンドリトや　長老や助祭を彼のもとへ派遣し、愛をもって公会議への参加を招き、あらゆる手段を尽くして彼の悔い改めを促し、彼が皆の前で異端的な思索を捨て、聖なる正教会に加わるよう努めた。他の者たちも彼の例に倣って、誤った教えを捨て、真の信仰に立ち返ることを期待してのことだった。　幾度も繰り返された呼びかけの末、エウティキオスはようやく、それも不本意ながら、公会議に出席することに同意した。公会議へ向かう際、彼はまず王宮に立ち寄り、王から保護と援助を得ようと試みた。クリサフィオスを通じて、彼は王に、選りすぐりの聖職者たちと数名の兵士を、自分と共に公会議へ派遣するよう懇願した。　王はエウティキオスに、パトリキウス・フロレンティアや他の高官たち、そして兵士たちを同行させた。こうしてエウティキオスは、まるで何らかの戦いに赴くかのように、兵士や王の高官たちに囲まれて公会議へと向かった。王の高官たちは公会議の司祭たちに次のように伝言を送った。

「あなたがたが、会議終了後に彼を自由の身として帰すことをあらかじめ約束しない限り、我々自身は会議に出席しないし、エウティキウスの出席も許さない。」

公会議に集まった司祭たちはその約束をした。エウティキオスが公会議の前に現れると、まず、彼が様々な修道院に送り、多くの人々を自らの破滅的な誤りに誘い込んだ、異端の教義に満ちた彼の著書が読み上げられた。　その後、エウティキウスが長い間言い逃れを続けた末、公会議の司祭たちは彼に口頭で信仰告白をさせるよう強いた。エウティキウスはこう述べた。

「私は、我らの主イエス・キリストが受肉の前には二つの本性を有しておられたが、受肉後は彼の中に一つの本性となったことを告白する[1923]。」

そこで、公会議に出席していた聖父たちは、彼にその異端的な思索を呪い、正統な教義を受け入れるよう要求したが、彼は、32人の司教、23人のアルヒマンドリト、そして多数の司祭や助祭が出席していた公会議の全出席者の面前で、これを拒否した。　そこで、至聖なるフラヴィアンおよび公会議に出席していたすべての聖なる司教たちは、エウティキオスを聖職から追放し、次のような書簡を記した。　「かつて長老および大修道院長であったエウティキオスは、過去の著作および今回の口頭による告白において、ヴァレンティヌスとアポリナリウスの異端を支持していることを示した[1924]

[1922] それは448年のことだった。

[1923]　エウティキオスの言葉の意味は、明らかに、*受胎の瞬間*において、神性と人性という二つの本性がそれぞれ独立した意義を持ち、区別されていたということである。しかし、それはほんの一瞬のことだった。神の受肉に伴い、神性が人性と結合したとき、後者は前者に吸収され、キリストにおいて一つの本性となったのである。

[1924] *ヴァレンティヌスは*、2世紀前半に生きた異端者である。彼は救い主の中に肉体の性質が存在することを認めず、したがって、キリストを完全かつ完璧な人間とは見なさなかった。　アポリナリウスは4世紀に生きた。ヴァレンティヌスとは対照的に、彼はキリストには肉体があると教えたが、キリストにおける神性と人間性の結合については、アポリナリウス

；　これらの異端者たちの誤りに断固として従い、彼は我々の諭しに従わず、真の教えを受け入れず、正しい教義に従うことを拒んだ。　それゆえ、我々は彼の究極の破滅を嘆き悲しみつつ、彼が冒涜する我らの主イエス・キリストの名において、彼を司祭の位、修道院の統率権、そして我らとの交わりから破門することを決定した。　今後、彼と会話を交わしたり、彼を訪ねたりするすべての人々に、このことを知らしめよ。そうした人々は、彼の誤った教えから離脱しなかったため、自らに罰を招き、破門に処されることになることを知らなければならない。」

この書簡には、新ローマの司教フラヴィアン（[1925] ）をはじめ、他のすべての司教および大修道院長らが署名した。

追放されたエウティキオスは、影響力のあるクリサフィオスがあらゆる面で彼を大いに助けていたため、王宮で支援を求めようとした。　この狡猾な宦官は、至聖なるフラヴィアヌスに対して激しい憤りと怒りを抱いていた。彼はあらゆる手段を尽くして、この聖なる大司教を王座から引きずり下ろそうとした。それは、エウティキウスの仇を討つとともに、とりわけ聖フラヴィアヌスを敬愛していたプルケリアに不快な思いをさせようとしたからである。　王に対する自身の影響力は極めて大きく、思いのままに何でも行うことができたため、クリサフィオスはアレクサンドリア総主教ディオスコロス[1926] ――あらゆる悪を犯す能力を持ち、狡猾さに長け、不敬虔さで際立つ人物――に書簡を送った。　その書簡の中で、クリサフィオスはディオスコロスをフラヴィアヌスに対して敵対させるよう仕向け、エウティキオスを彼の庇護下に置くよう依頼するとともに、王からの大きな恩寵を約束した。　その書簡は王の名義で書かれたものであり、クリサフィオスは王の名において、アレクサンドリア総主教に対し、自身の管轄下にある同調する司教たちを、望むだけ集めて、速やかにエフェソスへ赴き、そこで信仰の教義に関する全地公会議を招集するよう命じた。　というのも、フラヴィアヌスは教会にいくつかの異端的な思索を持ち込み、信者たちを惑わせているからである。　「それゆえ、」とクリサフィオスは記した、「ディオスコーロスには、公会議においてこの件をすべて審理し、フラヴィアヌスを破門させ、エウティキオスについては、もし彼が無実であると判明したならば、公会議の誓約から解放し、その聖職に復帰させるようにせよ」。　そのクリサフィオス自身は、エウティキオスの側に皇后エウドキアを引き入れ、彼女もまたフラヴィアヌスに対抗して異端者を支援することとなった。一方、ディオスコーロス（　）は、自分と志を同じくする十人以上の司教と、ヴァルスマという名のアルヒマンドリトを伴い、1000人の修道士に護衛されてエフェソスに到着した。ここで、皇帝の命により、ディオスコーロスを議長とする公会議[1927] が招集され、各地から集まった128人の司教が出席した。この公会議には、裁きを受けるために召喚された至聖なるフラヴィアヌスも到着した。一方、皇帝、あるいはより正確には　クリサフィオスは皇帝の名において、コミトス[1928] のエルピディオスおよび軍を率いて現地に駐留していた他のコミトスたちに対し、コンスタンティノ

は非常に独特な考えを持っていた。　完全な人間と完全な神性が一つの人格に結合することは不可能であると考え、アポリナリウスは、キリストには人間の存在として肉体と魂という二つの部分しかなく、第三の部分である霊は、神聖なロゴス（言葉）が代わって担っていると教えた。このように、彼もまたキリストを完全な人間とは見なさなかった。　エウティキオスには、ヴァレンティヌスともアポリナリウスとも共通する点がある。　彼の教えによれば、人間性はキリストにおいて神性によって吸収されるため、キリストは神のみであり、神人ではない。したがって、キリストの人間性はもはや実在するものではなく、想像上のものに過ぎない。これは、キリストの人間的な肉体は実在するものではなく、単なる幻影に過ぎないと説いたヴァレンティヌスの見解にかなり近いものである。　他方、人類が神性によって吸収されるという教義は、キリストにおいて人間の存在の最高部分である「霊」が神のロゴスに置き換えられたとするアポリナリウスの教義を強く彷彿とさせる。

[1925] 「新ローマ」とはコンスタンティノープルのことである。

[1926] アレクサンドリア総主教ディオスコーロスは、444年から451年まで総主教の座に就いていた。

[1927] 公会議は449年8月8日に開会した。会場は、18年前に第3回全地公会議が開かれたのと同じエフェソスの教会であった。

[1928] コミタスとは、地方における高官の随行者（側近）を指し、後には皇帝の随行者もそう呼ばれるようになった。

ープルで開催された地方公会議においてフラヴィアヌスと共にエウティキオスを非難し、彼の破門に関する文書に署名した司教たちを、この公会議に参加させないよう命じる書簡を送った。

ディオスコーレスが議長を務めたその悪意に満ちた公会議が開かれると、エウティキオスは立ち上がり、自ら執筆した信仰告白書を提出した。そこには、曖昧な表現で巧みに隠された彼の異端的な教義が記されていた。　エウティキオスが信仰告白の朗読を終えるやいなや、公会議の参加者たちの間には意見の相違と騒ぎが巻き起こった。ある者たちはエウティキオスを擁護し、彼が聖なる信仰を正しく告白している以上、罪はないと主張した。一方、他の者たちはフラヴィアヌスを支持した。しかし、後者の数は少なかった。なぜなら、皆が光よりも闇を、真理よりも偽りを愛し、天の王ではなく、地上の王に気に入られようとしていたからである。テオドシウス王は敬虔ではあったが、人間として無知ゆえに罪を犯し、エウティキオス、ディオスコロス、クリサフィオスの狡猾さを理解できなかったからである。　そして、クリサフィオスは絶えず王の前で狡猾に諂い、王の魂を自らの狡猾な罠に捕らえようと努めていた。無知ゆえに、王は異端者たちを正統派と見なし、無邪気に嘘に耳を傾け、それを真理として受け入れてしまった。というのも、もはや彼の傍らには、賢明な姉である至福のプルケリアがいなかったからである。　こうして、長い意見の相違と論争の末、エフェソスで開催された不敬虔な公会議において、真の正統信仰に反対する勢力が優勢となった。　この不法な公会議は、キリストには二つの本性ではなく一つの本性があるという教義を宣言し、実際には異端者であったエウティキオスを無罪かつ正統な信者であると認定した。一方、正統かつ敬虔な総主教フラヴィアノスは、公会議によって不当にも異端者として非難された。　彼には、自らを弁護するために一言も発言することさえ許されなかった。公会議の議長を務めたアレクサンドリアの総主教ディオスコーロスにより、彼は聖職から追放され、聖職の権能、司祭職、およびあらゆる霊的権威を剥奪されたと宣告され、これについて書面による決議が作成された。　さらに、この不法な公会議では、聖なる総主教を流刑に処することが決定された。その時、イコニウムの司教オニシフォロス[1929]が立ち上がり、フラヴィアヌスの無実を確信する他の司教たちと共に、ディオスコロスの膝に手を置いて、彼にこう懇願した。

「尊き父よ、そのお考えを実行に移さないでください。フラヴィアヌスは、罷免に値するようなことを断じて何も行っていません。もし彼を罰する必要があるのなら、罰は下しても結構ですが、罷免だけはしないでください。」

ディオスコロスは玉座から立ち上がり、玉座の前にある高台に立って、こう言った。

「たとえ私の舌を切り落とすと脅されたとしても、私はこの判決を変えるつもりはない。」

すると、ディオスコーロスの側近であるアルヒマンドリトのヴァルスマが、大声で叫んだ。

「キリストには二つの本性があると告白する者は、真っ二つに切り裂かれよ。」

司教たちがディオスコロスにフラヴィアヌスに手を出さないよう懇願し始めたとき、議長は尋ねた。

「コミテたちはどこにいるのか？」

すると直ちに、エルピディオスを先頭に多数の兵士を率いたコミティたちが教会に入り、聖フラヴィアヌスのために用意された大きな鉄の鎖を持ち込んだ。兵士たちと共に、ヴァルスマの修道士たちも入ってきた。そこで司教たちは大声でこう宣言した。

「ヴァルスマは強盗だ。シリア全土を荒廃させ、その修道士たちを我々のもとへ連れてきた。ヴァルスマは強盗だ。ヴァルスマに破門を！」

一方、ヴァルスマは叫んだ。

「異端者フラヴィアヌスを殺せ、殺せ！」

[1929] イコニアは、小アジア内陸部の高台にある肥沃な平野に位置する都市であり、かつては小アジア中部にあるリカオニア州の州都であった。

狂気じみた大胆さをもって、不信心者たちは聖人に襲いかかり、拳で殴る者もいれば、棒で殴る者もいて、彼を殴打し始めた。ディオスコーロス自身でさえ、フラヴィアヌスに飛びかかり、彼を地面に倒して足で踏みつけた。彼らはしばらくの間彼を殴り続け、その後、かろうじて息のある彼に鎖を嵌めた。　ディオスコーロスは、司教たちに対し、フラヴィアヌスの追放に関する文書に全員署名するよう強要した。　ディオスコルスの支持者たちは直ちにそれに署名したが、目の前で繰り広げられる不正と暴行を目の当たりにした司教たちは、この文書への署名に同意しなかった。しかし、教会を取り囲んでいた武装した兵士たちは、彼らを教会から出そうとはしなかった。一方、ヴァルスマの修道士たちは激しく叫び、彼らを罵倒した。　そして、それらの司教たちは夜になるまで教会に閉じ込められ、ついに脅迫に怯え、自らの意志に反してこの文書に署名せざるを得なくなった。こうして、歴史上「強盗公会議」として知られるこの不敬虔な集会は幕を閉じた。

一方、キリストの聖なる殉教者フラヴィアヌスは、残酷な拷問を受けた3日後に、アベルのように無実の罪で苦しみを受けた主の御手に、その聖なる魂を委ね、こうして追放される代わりに天国へと旅立った。彼の後任として、コンスタンティノープルの総主教にはアナトリアスが選出された[1930]。

しばらくして、クリサフィオスの悪行と陰謀が暴かれ、彼は不名誉な形で王宮から追放され、不名誉な死を遂げた。一方、彼の共犯者であったエウドキア皇后は、テオドシウスの怒りを恐れて、エルサレムへと向かった。　その後、皇帝自らが、妹である聖プルケリアに対し、宮殿に戻り、以前と同様に国政の務めを助けてくれるよう、説得力を持って長く懇願した。聖女は兄の願いを叶えるため、隠遁生活から戻ってきた。　彼女が統治の舵取りを引き継いで間もなく、聖プルケリアは正統な教義の回復、そして正統信仰の擁護者たちの名誉の回復に尽力した。　彼女は、キリストの聖殉教者フラヴィアヌスの聖遺骨を、大いなる栄誉をもってコンスタンティノープルへ移送した[1931]。一方、ハルキドンで開催された第4回全地公会議[1932]で破門の宣告を受けたディオスコーロスとエウティキオスは、永遠の滅びを招いた。　そして、地獄の門にも打ち勝たれることのなかったキリストの教会は、二つの本性を持ち、混ざることなく、また分かれることなく知られ、父と聖霊と共に永遠に賛美され、称えられ、崇められているキリストを賛美しつつ、繁栄した。アーメン。

聖アガピトス・殉教者、シナドの司教の記念日

記念日：2月18日

尊者アガピトは、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の治世中、カッパドキアで生まれた（[1933]、[1934]）。彼の両親はキリスト教徒であった。若くして修道生活を選び、故郷にある千人以上の修道士が修行に励んでいた修道院の一つに入った。　彼らから修道生活に必要な技を学んだ聖人は、まもなく主の戒めを巧みに実践する者となった。彼は断食、不眠、祈りに熱心に励み、皆を驚かせ、その厳格な修行によって修道院内で万人の愛を集めた。　彼は樹皮の衣を身にまとい、しばしば80日間もパンの代わりに灰を糧とし、睡眠を拒み、修道院のすべての修道士を「主」として敬い、

[1930] 聖アナトリアスは、449年から458年にかけてコンスタンティノープルの総主教の座に就いていた。

[1931] それは451年のことだった。

[1932] 公会議は451年10月8日に開会した。この頃、テオドシウスはすでに死去しており、ビザンティウムの皇帝の座にはマルキアヌス（在位450〜457年）が就いていた。彼は皇帝に即位すると、プルケリアと結婚した。

[1933] カッパドキアは、ローマ帝国の小アジア東部地域であり、東はアルメニア、北はポントス、南はキリキアと国境を接していた。

[1934] ディオクレティアヌス皇帝（284–305年）は、広大なローマ帝国をより円滑に統治するため、在位初期に共同統治者を選出した。その中には、285年からマクシミアヌス・ヘルクルスが名を連ねていた。

様々な修道院の務めを通じて彼らに役立つよう努めた。こうした修行に対し、主は尊者にご奇跡を行う恵みをお与えになった。　ある時、彼は祈りによって蛇を退治し、その後、重い病に苦しんでいた一人の乙女を癒した。

皇帝リキニウス[1935]は、尊者アガピトスが並外れた肉体的強さを備えていることを知ると、彼を修道院から連れ出すよう命じ、本人の意思に反して自らの軍人として配属した。　兵役の務めを果たしつつも、聖人は修道者としての行いを怠ることはなく、その姿が現れるだけで、苦痛を伴う発作性の病気を癒やすという神の恵みにあずかった。さらに、彼は人間だけでなく、馬や牛、その他の動物の様々な病気をも奇跡的に癒やした。　当時、リキニウスはキリスト教徒に対する迫害を開始し、栄光ある殉教者たち――ヴィクトル、ドロフェイ、テオドゥル、アグリッパ[1936]、そしてその他多くの人々が、彼の命令により、キリストへの信仰ゆえに残酷な拷問にさらされたとき、聖アガピトスもまた、彼らの一員となることを望んだ。　彼らがキリストのために殉教した後、聖アガピトは槍で傷つけられたが、主は彼が後に多くの人々を救うことができるよう、その命を保たれた。

まもなくリキニウスは亡くなり、神の御心により、ローマ帝国全土の権力をコンスタンティヌス大帝が引き継いだ。　皇帝の側近の中には、皇帝に寵愛されていた一人の従者がいたが、彼は悪霊に取りつかれていた。聖アガピトの噂を耳にした皇帝は、彼を呼び寄せ、病に伏している従者を連れて行き、癒やしてほしいと頼んだ。聖アガピトは祈りを捧げると、従者は即座に癒やされた。　皇帝は聖人に報奨を与えようとしたが、聖人は他のいかなる報奨も求めず、ただ軍務を離れて、愛してやまない修道生活に戻ることを許されることだけを願った。皇帝はこれを快く承諾し、聖人は軍人としての地位を捨て、以前修業していた同じ修道院へと戻った。

そのしばらく後、シナダ市の司教[1937]は、聖アガピトを自身の元へ呼び寄せ、彼の意思に反して司祭に叙階したが、その後まもなく世を去った。

そこで、神の御心により、また聖職者や民衆の選出を経て、聖アガピトはシナダ司教に任命された。司教の位に就くと、聖人は主から預言的な洞察力の賜物を授かった。この賜物は、次のような出来事を通じて明らかになった。　ある女性が、新しく任命された司教の話を聞き、ある日、彼から祝福を受けるために訪ねてきた。彼女が聖人の前に現れると、聖人は彼女の幼少期から現在に至るまでの人生で起こったすべてのことを語り、その際に彼女に教訓を与えた。彼女は、敬虔に生きるという固い決意を胸に、聖人の元を後にした。 その後、聖アガピトスは、イラクリオス[1938]の助祭の召使いが、祝福を求めて訪ねてきた際、その召使いが乙女を堕落させたことを糾弾した。預言的な洞察の賜物を持つ聖アガピトスは、奇跡も行った。 ある時、シランデイの司教[1939]が彼のもとを訪れ、町の近くを流れる川が冬の間、水位が著しく上昇し、農地や野原を浸水させ、作物を台無しにしていることを報告した。そこで聖人は神に祈りを捧げると、川の流れは別の方向へと変わった。　聖アガピトスは、他にも数多くの（彼に関する記録によれば100件以上）奇跡を行い、癲癇に冒された人々を、ただ一言の言葉や、手の触れ、あるいはその身体から落ちる影によって癒やした。　敬虔で神に喜ばれる生涯を終え、尊者様は高齢の末に、我らの救い主イエス・キリストの御許に召されました[1940]。

[1935] 311年からガレリウス帝の後継者となったリキニウス帝は、ローマ帝国の東部を統治し、コンスタンティヌス大帝の共同統治者であった。

[1936] 彼らの記念日は、聖アガピトの記念日と同様に祝われる。

[1937] シナダという都市はフリギアに位置していた。

[1938] イラクリオス、あるいはヘラクレイアの都市は、ビフィニアのエウクシノス海（現在の黒海）の岸辺に位置していた。

[1939] シランデア、あるいはセレナという都市は、エーゲ海に注ぐメアンドロス川の源流付近、フリギア地方に位置していた。

[1940] 聖アガピトスの没年は4世紀とされる。

3月4日

2月19日（旧暦）

尊者ドシフェイの生涯。彼は尊者ドロフェイの弟子である。

記念日2月19日

私たちの祝福された父ドロフェイは、神に喜ばれる生活を熱心に求め、修道生活を愛して、アバ・セリダのキノヴィア[1941] へと向かった。そこでは、沈黙の中で精進する多くの偉大な断食者たちに出会った。 その中でも特に際立っていたのが、二人の偉大な長老、聖バルソノフィオスと、その弟子であり同修であるアバ・ヨハネでした。ヨハネは、主から先見の明という賜物を受けたため、「預言者」という称号を授かっていました。 聖ドロフェイは、これらの断食者たちの指導に身を委ね、全力を尽くして彼らに倣うようになった。聖父セリドと共に、尊者ドロフェイはしばしば偉大な長老バルソノフィオのもとを訪れて彼と語り合い、また、予知の賜物で際立っていた父ヨハネには、仕える栄誉に浴した。 こうして、至福のドロフェイはアッバ・セリドのキノヴィアに留まり、従順の修行に励んだ。その時、前述の聖なる父たちは、ドロフェイ神父に病院を設立し、自らその管理を任せるよう定めた。というのも、兄弟たちは病に倒れた際、彼らを世話したり看病したりする者がおらず、ひどく苦しんでいたからである。 神の御加護により、尊者ドロフェイは、肉親の兄弟の協力を得て病院を建設した。その兄弟は敬虔で修道士たちを愛しており、聖ドロフェイに建設に必要な資金を提供していたのである。 それ以来、アッバ・ドロフェイは、他の敬虔な修道士たち数名と共に、病者や旅人たちに奉仕した。彼はこれを、修道院の父たちから課せられた従順の務めと見なしていた[1942] 。ある日、イグメン・セリドが尊者ドロフェイを呼び出した。 修道院長のもとへ赴くと、ドロテオスは、軍服を身にまとった、非常に若く、容姿端麗な青年がそこにいるのを目にした。その青年は、アッバ・セリドの寵愛を受け、頻繁に彼を訪れていた公爵の家来数名と共に修道院に来ていたのだ。ドロテオス神父が到着すると、アッバ・セリドは彼だけを呼び寄せ、こう言った。

「この若者たちを連れてきたのは、この人々だ。彼らは、彼が当修道院に入りたいと言っている。しかし私は、彼が何らかの貴族の息子であり、もしかすると何かを盗んだり、悪事を働いたりして、今、身を隠そうとしているのではないかと懸念している。もし我々が彼を受け入れたら、我々に直接的な危険が及ぶことになるだろう。」 そう思うのは、彼の服装も風貌も、修行を志す者のようには見えないからだ。

しかし、その若者は実際に、ある総督の親族であった。これまで富に囲まれて暮らし、贅沢な生活に慣れきっていた彼は、これまで一度も神の御言葉を聞いたことがなかった。 しかし、その総督の家来たちの中には、時折彼の面前で聖都エルサレムについて語る者もいたため、その若者は聖地

[1941] *聖セリド*は6世紀に生き、ガザの町の近くにあるパレスチナの修道院の創設者であった。彼の記念日は「チーズの土曜日」である。 彼が設立した修道院は、共同生活を行う修道院の一種であり、修道士たちは生活するだけでなく、修道院長の方針に従い、衣服などを修道院から支給され、その見返りとして、自らの労働とその成果のすべてを必ず修道院の共同の必要のために捧げるものであった。 このような修道院は「キノヴィア」（ギリシャ語の「共同生活」に由来）と呼ばれていた。

[1942] 尊者ドロフェイがどれほどの愛をもってこの奉仕を果たしていたかは、彼自身の言葉が物語っている。「当時、私は重い病気から回復したばかりだった。 すると夕方、旅人たちがやって来て、私は彼らと夜を過ごした――その中にはラクダの御者たちもいた――そして彼らに必要なものを用意した。何度も、寝ようとした時に別の用事が生じて起こされ、その後、徹夜祈祷の時間が近づいてきたのである」。

をこの目で見たいと願い、総督に聖都を見に行くことを許可してほしいと懇願した。　彼を断って悲しませたくはなかった総督は、聖地を訪れるつもりだった親しい人物に声をかけ、こう頼んだ。

「どうかご好意を示して、この若者を連れて行ってやり、聖地を見させてやってほしい。」

旅立つ男は青年を連れて行き、あらゆる敬意を払い、彼の快適さを細やかに気遣った。

旅人たちが聖都に到着し、そこで聖地を参拝した後、彼らはゲッセマネ[1943]にも足を運びました。そこには神の最後の審判を描いた絵があり、地獄の様々な苦しみが見て取れました。その絵を目にした若者は、じっと見つめながら驚嘆しました。　そのすぐそばで、彼は深紅の衣をまとった敬虔な女性を見かけた。彼女は、裁きを受けた者たち一人ひとりの苦しみについて彼に説明し始め、彼を教えながら、自分なりの言葉をいくつか付け加えた。　彼女の話を聞きながら、若者は黙って驚いていた。というのも、前述の通り、彼はこれまで神の言葉を聞いたことがなく、最後の審判についても何も知らなかったからである。やがて、彼はその女性に語りかけ、こう言った。

「奥様、この苦しみから逃れるためには、人はそれぞれ何をすべきなのでしょうか？」

それに対し、彼女は彼にこう言った。

「断食をし、肉を食べず、できればもっと頻繁に祈りなさい。そうすれば、この苦しみから解放されるでしょう。」

このように三つの戒めを彼に与えると、深紅の衣をまとったその妻は姿を消した。

若者は彼女に再会しようと、その一帯をくまなく探し回った。彼は、彼女がただの普通の女性だと思っていたが、どこを探しても彼女を見つけることはできなかった。というのも、彼女はまさに至聖なる聖母マリアその人だったからである。

その神秘的な女性の教えは若者に強い感銘を与えた。心を打たれた彼は、ゲッセマネで出会ったその女性が与えた三つの戒めを厳格に守るようになった。　帰路、総督の友人は、その若者が断食をし、肉を口にしないのを見て、総督を恐れて憂い始めた。彼は、総督がその若者を深く愛していることを知っていたからである。彼らに同行していた兵士たちは、若者のそのような節制ぶりを見て、彼にこう言い始めた。

「若き主よ、あなたは世俗に生きる人々がしないようなことをなさっています。そのような行いは修道院でしか行われません。そこへ行けば、そこであなたの魂を救うことができるでしょう。」

神について何も知らず、修道院がどのような場所かも想像もつかなかった若者は、こう答えた。

「私を連れて行って、どこかの修道院へ連れて行ってください。自分ではどこへ行けばいいのか分かりません。」

その若者を護衛していた兵士たちの中には、アヴヴァ・セリダを特に尊敬している者たちがいた。そのため、彼らはその若者を連れて、彼の修道院を訪れたのである。

修道院長は、その若者と話し、彼が誰なのかを確かめるよう、聖ドローフェイを遣わした。聖ドローフェイのあらゆる質問に対し、若者はただ一つの答えを返した。

「私は救われたいのです。」

そこでドロフェイは修道院長のもとへ行き、こう言った。

「もし彼を受け入れたいとお考えなら、何の恐れもなく受け入れてください。彼から悪意が生まれることは決してありません。」

[1943] ゲッセマネ――ケドロン川を越えた先、オリーブ山の麓にある村、あるいは場所。そこには園があり、主は弟子たちと共にしばしばそこへ退き、またそこでユダに裏切られた（マタイ26:36;　ヨハネ18:1–3）。ゲッセマネとは、ロシア語で「オリーブの場所」、あるいは「オリーブの実から果汁を搾り出すための搾り機」を意味する。　ゲッセマネの園は、現在もなお、オリーブ山の麓――その南側――に指し示されている。園内には、ゴルゴタの受難に先立って主がゲッセマネの祈りを捧げられた場所が示されているほか、聖母マリアの埋葬用の洞窟――現在、彼女の棺が安置されている場所――も示されている。

修道院長はこう答えた。
「父よ、彼に慈悲を示し、彼を受け入れてください。そうすれば、あなたが導く中で、彼は救いを得ることができるでしょう。」
しかし、謙虚な修道士はそれを拒み、こう言った。
「私は彼を受け入れることはできません。それは私の力以上のことであり、彼を救いの道へと導くことはできないからです。」
これに対し、修道院長は彼にこう反論した。
「私はあなたの救いも、あなた方全員の救いも気にかけている。それなのに、あなたはたった一人の若者の救いを気にかけようとしないのか。」
「もし父上がお望みなら」とドロフェイは言った。「偉大なる長老バルソノフィオに助言を求めましょう。」
「よし」とイグメンは答えた。「彼に伝えておこう。」
ヴァルソノフィイのもとへ向かったイグメンは、起こったことすべてを彼に伝えた。すると、聖ヴァルソノフィイはドロフェイにこう言った。
「この少年を受け入れなさい。主はあなたを通して、彼を救おうと御心をお示しになったのだから。」
この言葉を聞いた後、至福のドロフェイは大きな喜びをもってその若者を迎え入れ、自分と同じ病棟に収容した。その若者の名はドシフェイであった。昼食の時間になると、アバ・ドロフェイはドシフェイに言った。
「行って、腹を満たしなさい。ただ、どれだけの食事をとったか、私に伝えてくれ。」
戻ってきたドシフェイは言った。
「パンを一つと半個食べました。それぞれのパンは四ポンドずつありました。」
ドロフェイは彼に尋ねた。
「それで十分か？」
青年はこう答えた。
「はい、ご主人様、これで私には十分です。」
「お腹は空いていないのか？」とドロフェイが尋ねた。
「いいえ」とドシフェイは答えた。
「では、次は」とアッバ・ドロフェイは言った。「パンを四分の一食べ、残りの四分の一を二つに分け、そのうちの片方も食べなさい。」
ドシフェイは次の機会にその通りにした。
「お腹は空いているか？」とドロフェイは彼に尋ねた。
「はい、少しお腹が空いています」とドシフェイは答えた。数日後、聖ドロフェイは再び彼に尋ねた。
「子よ、お腹は空いているか？」
青年は答えた。
「いいえ、師よ。あなたの祈りのおかげで、私はとても元気です。」
「これからは、パンと、その半分の量だけを食べなさい。」
ドシフェイはその通りにした。数日後、尊者ドロフェイは再び彼に尋ねた。
–今、お腹が空いてはいないか、わが子よ？
「いいえ、十分に満腹です。」
「分けなさい」と聖ドロフェイは言った。「残りの四分の一を二つに分け、その一つを食べ、もう一つは取っておきなさい。」

ドシフェイは師の言葉を忠実に実行した。次第に、神の助けにより、ドシフェイは6ポンドの代わりにわずか8ロットしか食べなくなった。何事においてもそうであるように、食事においても習慣が重要だからだ。人は、慣れ親しんだ量しか食べられないのである。

至福のドシフェイは、あらゆることを静かに、穏やかにこなした。彼は病院で病人の世話をし、すべての人からその世話に対して感謝された。なぜなら、彼はすべてを清潔に保つよう努めていたからである。　しかし、疲れからか、たまたまある患者に怒りを込めて何かを言ってしまったときは、すぐに病院を出て、食糧庫に入り、そこで泣いた。　他の病院の奉仕者たちは、そのような時に彼を慰めようと努めたが、その努力は実を結ばなかった。ドシフェイは自分自身に対して容赦がなかったのだ。そこで彼らはドロフェイ神父のもとへ行き、こう言った。

「父よ、どうか憐れみをお示しください。ドシフェイ兄弟が何のために泣いているのか、私たちには分かりません。彼を慰めることもできません。」

尊者ドロフェイは部屋に入ると、弟子が地面に座り込んで泣いているのを見つけた。彼は彼に尋ねた。

「どうしたのだ、ドシフェイよ。何のために泣いているのか？」

すると、ドシフェイはこう答えた。

「お許しください、師よ。私は怒りに任せて、兄弟にひどい言葉を吐いてしまいました。」

すると、アッバ・ドロフェイは彼にこう言った。

「なぜ怒るのだ、ドシフェイよ。なぜ兄弟に怒りを込めて言葉を浴びせるのか。彼を侮辱することは、すなわちキリストを侮辱することになるのだと、知らないのか？」

ドシフェイはうつむいたまま、何も答えなかった。すると、ドロフェイは彼にこう言った。

「神はあなたを赦してくださる。立ちなさい。今日からあなたの改心を始め、善を行うことへの熱意をさらに高めよう。そうすれば、神は私たちを助けてくださる。」

するとドシフェイは立ち上がり、まるで神から赦しを受けたかのように、喜びをもって自分の務めに取りかかった。病院にいた人々はすぐにドシフェイのその習慣に気づき、彼が泣いているのを見ると、こう言った。

「ドシフェイに何かあったに違いない。何か罪を犯したのだ。」

そして、彼らは至福のドロフェイにこう尋ねた。

「師よ、ケラールニツァへ行ってください。あそこにあなたへの用事があります。」

ドロフェイが中に入って、泣いている弟子を見ると、またドシフェイが誰かに悪口を言ったのだと察し、彼にこう言った。

「どうしたのだ、ドシフェイ？　まさかまた神を侮辱したのか？　まさかまた怒りの感情に負けてしまったのか？　改心するという決意を忘れてしまったのか？」

尊者ドロフェイは、弟子がすでにかなりの涙を流しているのを見ると、こう言った。

「立ちなさい、ドシフェイ。神があなたを赦してくださいますように。あなたもまた、改心の第一歩を踏み出すよう努めなさい。」

この言葉に慰められたドシフェイは、悲しみを振り払い、病人のために柔らかい寝床を敷きに行く。彼はすでに柔和な心持ちでその作業に取り組んでいた。自分のすべての行いや思いについて、常に師に懺悔していた至福のドシフェイは、病人のために柔らかい寝床を敷きながら、通りかかるドロフェイにしばしばこう言った。

「父よ、私の良心は、私がうまく寝床を整えていると告げています。」

これに対し、アッバ・ドロフェイは彼にこう答えた。

「驚くべきことだ、ドシフェイよ。君は立派な召使いであり、優れた寝床を整える者にはなっているが、君からは立派な修道士は生まれそうにない。」

尊者ドロフェイは、ドシフェイが何事に対しても執着を持つことを決して許さず、弟子は師の教えをすべて忠実に守った。　ドシフェイに衣服が必要になったとき、アッバ・ドロフェイは弟子に自分で服を縫うよう命じ、布を与えた。至福のドシフェイは退き、この依頼を細心の注意を払って遂行した。彼が仕事を終えると、アッバ・ドロフェイは彼を呼び寄せ、こう言った。

「ドシフェイよ、仕事は終わったか？」

「はい、父よ、服をきちんと縫いました」とドシフェイは答えた。

「行って、それをあの兄弟（彼はその名前を挙げた）か、あるいは病人に渡せ。」

ドシフェイは喜びながら師のこの指示に従い、至福のドロフェイは彼に別の服を縫わせた。彼がその作業を終えると、師は彼にこう言った。

「それをあの兄弟に渡しなさい！」

そしてドシフェイはそれを渡した。彼はその際、決して不平を言ったり、「私の服を取って他の人に渡す」などと言ったりすることはなく、熱意と愛をもって、師が命じることをすべて実行した。

ある日、修道院の建築担当である[1944]が、鍛冶屋から良質で鋭いナイフを持ってきました。ドシフェイはそれを受け取り、アッバ・ドロフェイのもとへ持って行き、こう言いました。

「父上、建築担当の兄弟がこのナイフを持ってきました。もしよろしければ、病棟で使うために私が受け取らせていただきたいのですが。」

しかし、至福のドロフェイは、病棟には常に質が劣るものを置いていたため、ドシフェイにこう答えた。

「それを見せてくれ。良いものかどうか見てみよう。」ドシフェイは師にナイフを差し出した。聖ドローフェイは、そのナイフが優れていることは分かっていたが、弟子が物事に執着することを望まなかったため、こう言った。

「ドシフェイよ、お前は本当にこのナイフの奴隷になりたいのか。このナイフが、神ではなく、お前を支配してしまうことを恐れないのか？」

この言葉を聞いて、ドシフェイは黙り込んだ。十分に彼を恥じ入らせた後、尊者ドロフェイは弟子にこう言った。

「さあ、行って、このナイフをどこかに置いておきなさい。そして、それに触れてはならない。」

至福のドシフェイはこの命令を神聖に守った。他の奉仕者たちがそのナイフを手に取っていたにもかかわらず、彼は決して誰かにそのナイフを渡そうとはしなかった。彼だけがそれに触れなかったのだ。彼は一度たりともこう考えることさえなかった。

「なぜ私一人だけがそれを手に取ってはならないと命じられているのか。私は他の人たちと等しくないのか？」

尊者ドシフェイは決してそのようなことを考えることはなく、師が命じることはすべて、常に喜びをもって実行した。

アッバ・ドロフェイが彼を戒める際、比喩を用いて何かを語ったときでさえ、聖ドシフェイはそのような場合でも、師の意図を察し、その願いを叶えようと努めた。そうして、彼の生涯には次のような出来事があった。　当初、ドシフェイは声をとても大きくして話す癖があった。至福のドロフェイは、彼がそれほど大声で話さないようにと願い、こう言った。

「ドシフェイよ、薄めていないワインの杯を持ってくるがよい。行って、器を取ってこい！」

[1944] 「ストロイテル」とは、すなわち家政管理者、家督、財務管理者、執事、あるいは鍵番を意味します。修道院の運営を統括していた修道士たちは、このように呼ばれていました！

彼はすぐに立ち去り、ワインで満たされた杯とパンを持って戻ってきた。これを師に差し出し、いつものように祝福を受けようとした。ドロフェイはそれを見て驚き、彼に尋ねた。

「ドシフェイ、何をしようとしているのか？」

– 師よ、――その弟子は答えた――あなたは私に、水で薄めていないワインの入った器を持ってくるよう命じられました。ですから、祝福をください。

「愚かな者よ」とアッバ・ドロフェイは答えた。「お前は、まるでゴート族が[1945]、ワインに酔っ払った時のように、とても大声で話している。だからこそ、私はお前にも言ったのだ。『ワインの杯を取れ』と。お前はゴート族と同じくらい大声で叫んでいるのだから。」

聖ドシフェイは、一礼すると、持ってきたものを元の場所に戻し、それ以来、静かに話すようになった。

ある日、彼は尊者ドロフェイのもとを訪れ、聖書の箇所の一つについて解説を求めた。というのも、彼は自らの精神を啓発することに熱心であり、聖書のいくつかの箇所について思索を巡らせ始めていたからである。

しかし、彼の師は、ドシフェイが聖書の研究に励むことを望まなかった。もしそうすれば、彼は自分自身のことを過大評価し、心の貧しさに対する謙虚な自覚を失ってしまうのではないかと恐れたからである。そのため、弟子の質問に対して、尊者ドロフェイはこう答えた。

「わからない。」

別の時、ドシフェイが再び師のもとを訪れ、聖書の別の箇所について尋ねると、次のような答えが返ってきた。

「イグメヌスのところへ行って、彼に尋ねなさい。私には説明できない。」

師の命に従い、至福のドシフェイはイグメノのもとへ向かった。しかし、アバ・ドロフェイはイグメノにこう警告していた。

「もしドシフェイがあなたのところに来て、聖書の様々な箇所について尋ね始めたら、彼を殴ってやれ。」

ドシフェイがイグメヌスのところへやって来て、聖書の理解できない箇所について説明を求めたとき、イグメヌスは彼に殴りかかりながらこう言った。

「何も理解できないのなら、なぜ黙っていないのか？　なぜそんなことを尋ねる度胸があるのか？　聖書の解釈に没頭するよりも、自分の清らかさをより大切にするべきではないか。」

その後、さらに頬を二度殴ると、イグメンは彼を帰した。ドロフェイ神父のもとに戻ると、聖人は殴られて赤くなった頬を見せながらこう言った。

「修道院長は私の背中にも打撃を与えました」――それ以上は何も付け加えなかった。彼は師を責めたり、「なぜ私を諭さなかったのか、なぜ私を修道院長のもとへ送ったのか」などとは言わなかった。　いいえ、至福のドシフェイはそんなことは一言も言わなかった。彼は師が命じることはすべて信仰をもって受け入れ、何の議論もせずに直ちにその命令を実行した。　アバ・ドロフェイが弟子にその思いについて尋ねると、ドシフェイは師にそれを語り、師からのすべての教えを従順に聞き入れた。その際、彼は師の命令を極めて正確に守ろうとしたため、聖ドロフェイが教えを繰り返す必要は一度もなかった。　彼は修道院での短い滞在期間中、常にそのように振る舞った。彼がそこに滞在したのは、わずか5年ほどであった。こうして彼は、師であり父である人物への服従を貫き、自らの意志を完全に捨て去り、いかなる物事に対しても執着を持たないまま、その生涯を閉じた。

[1945] ゴート族は、ゲルマン系に由来する半野蛮な民族であり、当初はバルト海の南東部に居住していた。 大民族大移動の時代（5世紀）に、ゴート族は南へと拡大し、一時期ビザンツ帝国を脅かした。この当時、そしてその後も、ゴート族からはギリシャ皇帝の軍隊に仕える傭兵が数多く現れたため、この民族はパレスチナでも知られていた。

尊者ドシフェイは、自身の健康さえも全く気にかけなかった。彼が重病に陥り、喉から血を吐くほどになったとき、半熟の卵が病気に効くという話を耳にした。　弟子を病から癒やすために全力を尽くしていた聖ドロフェイも、この治療法については聞いていたが、その時はそれを忘れてしまっていた。そこで、聖ドシフェイはある日、師にこう言った。

「師よ、一つお伝えしたいことがあります。私の病気に対する一つの治療法を知っていますが、それを用いないようお命じいただきたいのです。そうでなければ、回復したいという虚しい思いが私の心を乱してしまうのではないかと恐れているからです。」

「教えてくれ、わが子よ、それはどのような治療法なのか？」と、尊者ドロフェイは尋ねた。

「あらかじめ、それを私に与えないと約束してください」と、至福のドシフェイは再びドロフェイ師に懇願した。

「わかった」と師は答えた。「お前の願いを叶えてやろう。」

すると、病人は彼にこう言った。

「私のような病人には、半熟の卵が効くという話を何人かから聞きましたが、どうか私にそれを食べるよう命じないでください。そうすれば、回復への虚しい思いが私の心を乱すこともないでしょう。」

「わかった、わが子よ。お前自身がそう頼んだのだから、無理強いはしない。ただ、悲しんだり、気落ちしたりしてはならない。」

そして実際、半熟卵の代わりに、尊者ドロフェイは弟子に、病の回復に役立つ他の手段を与えた。こうして聖ドシフェイは、重病に罹ったときでさえ、自らの意志を捨てようと努めたのである。

尊者様は常に心と口に神への思いを留めておられました。　彼の霊的指導者は、常に「主イエス・キリスト、わが神よ、私を憐れんでください」と「神の子よ、私を助けてください」と唱えるよう彼に助言した。聖ドシフェイは、常にこれらの祈りを口にしていた。病状が悪化したとき、ドロフェイ師は彼にこう言った。

「ドシフェイよ、祈りを忘れず、その祈りを倍増させなさい！」

「父よ、私のために神に祈ってください」と、病に苦しむ彼は答えた。病状がさらに悪化したとき、ドロフェイは尋ねた。

「どうだ、ドシフェイ、以前と同じように祈りを捧げているか？」

「はい、父上。あなたの祈りのおかげで、私はこの行いをやめてはいません。」病状がさらに悪化し、ドシフェイ自身がもう起き上がれなくなり、布に包まれて運ばれなければならないほどになったとき、尊者ドロフェイは彼に尋ねた。

「ドシフェイよ、まだ祈り続けているか？」

「お許しください、師よ」と病人は答えた。「もう祈ることはできません。」

「それなら、祈りはやめておきなさい」とドロフェイは答えた。「ただ神の御名を心に留め、常に神を目の前に置いておきなさい。」

聖ドシフェイの苦しみはますます激しくなり、ある日、彼は長老バルソノフィイに次のような願いを告げた。

「父よ、私を解放してください。もうこれ以上生きられません。」

聖バルソノフィオは彼にこう伝えさせた。

「耐えなさい、わが子よ。神の御慈悲は、もうすぐそこにあるのだから。」

聖ドシフェイの病状が深刻であることを見て、尊者ドロフェイは深く悲しんだ。数日後、病床の聖ドシフェイは再び聖バルソノフィオにこう伝えた。

「師よ、もうこれ以上生きられません。」

これに対し、偉大なるバルソノフィオスはこう答えた。

「安らかに旅立ちなさい。至聖なる三位一体の御前に進み出て、全能者の御座の前で私たちのために祈ってください。」

偉大なるバルソノフィオスのこの言葉を聞いて、修道士たちは憤りを感じ、互いにこう語り合った。

「ドシフェイは一体、どんな偉大なことをしたのか？　彼の功績とは何だったのか？　なぜ彼はあの偉大な長老から、そのような答えを得たのか？」

彼らは確かに、尊者ドシフェイの特別な功績を目にしてはいなかった。そこにいた修道士たちの一部がそうしていたように、彼が一日おきにしか食事をとらない様子も見ていなかった。ドシフェイが誰よりも早く教会に現れる様子も、彼が特別な節制を貫いている様子も、彼らは見ていなかった。　彼らは皆、ドシフェイが、たとえ少量であっても食事をとっているのを見ていた。彼らは、聖ドシフェイが時折、病人に配った後の残りのジュースや、魚の頭、あるいはその他同様の食べ物を口にしていたことを知っていた。　そして、この修道院には、長い間熱心に禁欲の修行に励み、一日おきにしか食事をとらず、絶えず祈りを捧げていた修道士たちが大勢いた。 彼らは、修道院に5年も滞在していない病人に与えられた、偉大なるバルソノフィオスの「　」という答えを耳にして、戸惑った。というのも、彼らは聖ドシフェイの不平を言わず、完全な服従を示す姿を知らず、その偉大な修行を理解できなかったからである。それゆえ、聖バルソノフィオスが彼に向けて発した言葉を耳にしたとき、彼らは不平を言い始めたのである。

しかし、主は、ドシフェイの偉大な従順に対して用意された栄光を現し、それと同時に、尊者ドロフェイがどれほど賢明かつ迅速にその弟子を救いの道へと導いたかを、皆の前で明らかにすることを御心に留められた。ドシフェイの帰天後まもなく、[1946] 、ある聖なる長老、経験豊かな修行者が修道院を訪れ、敬意をもって迎えられた。　この長老は、先にこの世を去った修道院の聖なる父たちを見たいと願い、主が彼らについて何かを明らかにしてくださるよう祈った。その祈りは聞き入れられ、彼は明るい場所に立っている修道院のすべての父たちを目にする栄誉に浴した。その中には、明るい表情をした若者が一人いた。　この幻視の後、長老は、聖なる父たちの間にいたその若者が誰なのかを尋ね始めた。彼がその外見を説明すると、皆、それが至福のドシフェイであることを理解した。そこで皆は神を賛美し、その言い表せない慈しみに驚嘆した。

こうして、尊者ドシフェイは、短期間のうちに天の御国において偉大な栄光に達した。それは、彼が従順に励み、自らの意志を捨て、まるで神ご自身に対してであるかのように、その意志を師の意志に従わせたからである。　そのゆえに、彼は今や、天にいますすべての聖なる父たちと共に、生ける神、すなわち謙遜で従順な者たちを見守られる神の御前に立っている。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

聖使徒アルキッポス、フィリモン、アプフィアの記念日

記念日：2月19日

至福のアムブロシウスの証言によれば、七十人の一人である聖使徒アルキッポスは、フリギアのコロサイ[1947] において、聖エパフラスの後を継いで司教を務めた。聖使徒パウロはフィリモンへの手紙の中で、聖アルキッポスを自身の同志と呼んでいる（フィリモン1:2）。　聖フィリモンはコロサイの著名な市民であり、聖アピフィアは、ヨハネス・クロイソストモスの証言によれば、フィリモン

[1946] 7世紀に没した。

[1947] コロッソスは、フリギア（小アジア地方）南西部、リコス川沿い、ラオディキアとイェラポリスの近くに位置する都市である。古代には、人口が多く、豊かな大都市であった。現在では、ホカス山の斜面にある小さな村となっており、その周辺には古代都市コロッソスの遺跡が今も残されている。

の妻であった。　フィリモンはキリストを信じるようになると、自宅を教会として用いるようになった。こうして、コロサイのすべての信者たちがフィリモンの家に集まり、そこではまるで教会のように神聖な礼拝が行われていた[1948]　。その後、聖フィリモンは、使徒たちが福音を広めるのを助けるために、司教に任命された。

聖使徒たちの時代、司教の中には定住して特定の教区に留まる者もいれば、定住地を持たずに様々な都市や村々を巡回する者もいた。後者は、使徒的な宣教のために派遣されていたことから、「使徒的司教」と呼ばれていた。　聖フィリモンもそのような司教の一人であり、一部の地方司教と同様に、七十人の聖使徒の一人に数えられる栄誉に浴した。彼はフリギアの諸都市やその他のいくつかの地域を巡り、至る所で熱心に神の御言葉を宣べ伝えた。彼がガザでも司教を務めていたという記録が、現在まで伝わっている[1949]。

聖アプフィアは、コロサイにある自身の家に教会を設け、昼夜を問わず熱心に主に仕え、祈りと断食に励んだ。彼女は、キリストの教えを宣べ伝えるために労苦する者たちを喜んで迎え入れ、宿を提供した　。　彼女は貧者、困窮者、旅人たちに食事を提供したため、彼女の家は教会であるだけでなく、宿屋、病院、そして休息や安らぎの場を持たないすべての人々のための避難所でもあった。

ある日、コロサイでは異教の女神アルテミスを称える、神に忌み嫌われる祭りが行われていた[1950]　。その時、この街に滞在していた聖使徒アルキッポスとフィリモンは、フィリモンとアプフィアの家にすべての信者を集め、主へのいつもの祈りを捧げ、神聖な礼拝を行っていた。　一方、信者たちに対して強い憎悪を抱いていた偶像崇拝者たちは、すべてのキリスト教徒がフィリモンの家に集まっていることを知った。この機会に乗じて、異教徒たちは信者たちに不意を突いて襲いかかり、キリストの群れをすべて追い散らし、ある者は殴打し、ある者は殺害した。　その後、聖使徒アルキッポスとフィリモン、そして聖アプフィアを捕らえ、エフェソスの総督アルトクリスの元へ連行し、総督の命令により聖人たちを拷問にかけた。まず拷問者たちは彼らを地面に押し倒し、容赦なく殴打しながら引きずり回した；　その後、一人ずつを腰まで土に埋め、石で打ち始めた。聖フィリモンと聖アプフィアは石で完全に打ち殺され、聖アルキッポスはかろうじて息のある状態で、子供たちの嘲笑の的として残された。そこには多くの少年たちが集まり、聖人をナイフで切り刻み始めた。　こうして、この三人の聖人は、天において、至聖なる、命を与える、神聖なる、そして不可分なる三位一体の御座の前に現れた[1951]。

[1948] 使徒たちの時代、キリスト教徒には祈りの集まりを行うための特別な場所がなかった。通常、その役割を果たしていたのは、たいていの場合、裕福な信者の家にある最も立派な上階の部屋であり、そこへ町のすべてのキリスト教徒が集まり、聖体拝領の秘跡や共同の祈りを捧げていた。　このように、質素な上階の部屋は、いわば教会堂のような役割を果たしていた。このような「上階の部屋」という教会堂の原型として、有名なシオンの上階の部屋が挙げられる。伝承によれば、主イエス・キリストはご自身の受難に先立ち、そこで最後の晩餐を執り行われ、また主の昇天後、使徒たちはそこに集まり、五旬節の日に、 復活後、彼らに降りてきた聖霊の賜物を受け取った。

[1949] ガザは、ペリシテ人の最も古い都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の境界線として機能していました。その後、この繁栄した都市はすべての重要性を失い、今では砂丘とみすぼらしい廃墟だけが、かつてここに重要な都市が存在したことを物語っています。　ここからそう遠くない場所に、同じ名前を持つ、より後世に築かれた新しい都市がある。

[1950] アルテミス、別名ダイアナは、ギリシャ人やローマ人に知られた異教の女神であり、月を象徴し、森と狩猟の守護神とされていた。この女神への奉仕は、非常に華やかで壮麗に行われ、特にエフェソスでは深く崇められていた。

[1951] 使徒アルキッポスとフィリモン、そして聖女アプフィアは、ローマ皇帝ネロの治世（54～68年）に亡くなりました。彼らの記念日は、教会においても11月22日に祝われます。

使徒アルキッポスのコンダク、第4調：

「大いなる星よ、教会は、アルキッポよ、汝の奇跡の光に照らされ、汝にこう呼びかける：信仰をもって汝の記念を崇める者たちを救いたまえ。」

聖ラヴラの記念日。

記念日：2月19日

聖ラヴラはサモサタという町で生まれた[1952] 。彼は、シリア語に精通した著名な学者ヴァリプサヴァの指導の下で教育を受けた。幼い頃から徳のある生活を送っていたこの聖人は、成人すると修道生活に入り、並外れた修行を選んだ。

聖預言者エリヤのように、彼は一人で山や洞窟に住み、その生活様式において聖ヨハネ・バプティストに倣った。

しばらくして、この聖人は別の修道士と共にフィニキア[1953] へと向かい、そこで修行に励む中で、その高潔な徳によって人々の注目を集め、やがて本人の望みとは裏腹に、広く知られる存在となった。 ゼノン皇帝[1954] から金銭的援助を受け、ベリトス[1955] のヨハネ司教の協力のもと、山間のとある場所に広大な修道院を建立し、そこに修道士たちを住まわせた。修道院の周辺には、根っからの異教徒たちが数多く住んでいた。　聖ラヴラと、修道院で彼と共に修業に励んだ修道士たちは、聖使徒パウロやバルナバ、またペトロやヨハネに倣い、時には彼らの誤りを糾弾し、しばしば彼らと論争を交わし、また時には 信仰について教えを説き、やがて彼ら全員を真の神への認識へと導いた。 これが、この尊者による最初の輝かしい功績であった。

ゼノン皇帝の死後、帝国の統治はアナスタシウス皇帝[1956] が引き継いだ。尊者ラヴラはコンスタンティノープルへ赴き、尽力した結果、皇帝から新たな金銭的援助を得ることができ、それを第二の修道院の建設に充てた。　その後、彼は各地にさらに多くの修道院を建立した。聖ラヴラは、あらゆる善行において常に勤勉で、柔和、慈悲深く、人を愛し、決して怒りに任せることはなく、常に祈りに専念し、すべての人に対して好意を持って接していた。　そして、悪魔が彼の内に情欲をかき立て、彼と戦いを挑んできたとき、彼は旧約聖書と新約聖書を完全に知り、理解していたため、神の言葉と敬虔な行いを悪魔に突きつけ、それによって敵を追い払った。　この聖人は、コンスタンティノープルに有名な聖ソフィア大聖堂を建設したユスティニアヌス大帝[1957] の治世の頃まで生き、[1958] 。80歳になったある日、彼は天から「*疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わた*

[1952] サモサタの町はシリアにあり、ユーフラテス川の右岸、すなわち西岸の上流部に位置していた。

[1953] フェニキアはパレスチナの北に位置し、地中海とレバノン山脈の間に広がっていた。

[1954] ゼノンは、わずかな中断を挟みつつ、474年から491年まで統治した。彼の治世には、正統派と異端の単性論者との闘争が繰り広げられ、彼はこの闘争に積極的に関与し、教会の正統派の教えを代表する者たちに優位と勝利をもたらそうと努めた。

[1955] ベリト（現在のベイルート）は、フェニキアの沿岸都市であり、マゴラ川の河口近くに位置していた。

[1956] アナスタシウス皇帝は491年から518年まで帝国を統治した。

[1957] ユスティニアヌスは527年にユスティヌスの後を継いで即位し、565年まで在位した。

[1958] コンスタンティノープルの主たる大聖堂は、神の知恵を意味する「ソフィア」に捧げられたもので、当初はコンスタンティヌス大帝によって建立された。ユスティニアヌス帝の治世下、537年に壮麗に修復・拡張された。 1453年、トルコ軍によるコンスタンティノープル陥落の際、この教会はモスクへと改築された。ユスティニアヌス帝時代の聖ソフィア大聖堂は、今日に至るまで、ビザンチン様式におけるキリスト教建築の最も傑出した、最も荘厳な記念碑であり、その発展が最も隆盛を極めた時代の象徴である。

しがあなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11:28）と告げる声を聞いた。その後、少し病に伏した後、主のもとへ召された[1959]。

聖エウゲニオスとマカリオス両殉教者の記念日。

2月19日の記念日

ローマ帝国でユリアヌスが統治していた頃、皇帝の命令により至る所で異教の神々への生贄が捧げられ、　異教徒たちは主君に気に入られようと、自らを汚し、神の裁きや永遠の罰を恐れもせず、信仰に堅固なキリストの殉教者たちを力ずくでこれらの生贄の儀式に参加させようとした。この時、アンティオキア教会の二人の長老、エウゲニオスとマカリオスが捕らえられ、ユリアヌスの裁判にかけられた。　法廷で彼らは、キリストを真の神であり、生ける者と死せる者の審判者であると告白し、背教した皇帝を、不信心者であり殺人者、神の戒めを破る者、異教徒であり偶像の奉仕者であると非難し、さらに彼にこう言った。

「ああ、哀れな者よ、不信心者よ、永遠に尽きることのない火の相続人よ！　お前の虚しさよ！　どうして光の代わりに闇を自ら招こうと決心したのか？」

この言葉を聞いてユリアヌスは激怒し、まず聖人たちを細い革紐で縛り、逆さ吊りにして毒々しく悪臭を放つ糞で煙を浴びせ、その後、鉄板を激しく焼き熱し、彼らの衣服を剥ぎ取ってその上に横たえるよう命じた。　このような拷問にさらされながらも、聖エウゲニオスと聖マカリオスは天を仰ぎ、神の力に守られて無傷のままであり、その顔は喜びに輝き、それによって拷問者の悪意を暴いていた。その後、ユリアヌスは彼らを足枷で縛り、アラビアのオアシムへ追放するよう命じた[1960]。流刑地へ向かう途中、聖人たちはキリストのために追放されることを喜び、こう歌った。*「主の律法に従って歩む、道に汚れなき者は幸いである」*（詩編118:1）。

喜びに満ちた心で彼らはオアシムに到着し、ある山に登り、そこで独り暮らしを始めた。その国の支配者たちは彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、この場所から立ち去りなさい。ここからそう遠くないところに、近づいた者をすべて食い尽くす凶暴な大蛇が棲んでいるからだ。」

これに対し、聖人たちはこう答えました。

「その蛇が棲んでいる洞窟を見せてください。」

彼らは蛇の棲みかへと案内され、遠くからその蛇がいる洞窟を指さされた。すると聖人たちはひざまずいて神に祈りを捧げると、突然、天から雷鳴が轟き、その雷が蛇を直撃した。　倒された蛇は炎に包まれ、たちまち焼き尽くされた。それとともに、洞窟の中にあった砂も燃え尽き、洞窟の上空には、激しい悪臭を放つ旋風となって塵が舞い上がった。この奇跡を目撃した、かつて異教徒であった国の指導者たちは、キリストを信じるようになった。

一方、聖エウゲニオスと聖マカリオスは、蛇が棲んでいた洞窟に入り、食べ物も飲み物も持たずに三十日間、祈りに専念した。ついに彼らは、次のように告げる声を聞いた。

「真の神であり、我らの救い主イエス・キリストのしもべたちよ、あなたの近くにある岩に近づきなさい。」

聖人たちはその命令に従い、石に近づくと、まずその中から光が見え、続いて石が二つに割れ、そこから水が豊かに流れ出した。彼らはその水を汲み、心ゆくまで飲み干して、飢えと渇きを癒した。　洞窟の中にいた聖人たちは、主が彼らを同時に死なせ、共にキリストのもとへ導いてくださる

[1959] 聖ラヴラは530年頃に亡くなった。

[1960] アラビアは、アジア南西部に位置する岩だらけの半島である。オアシスは、アラビア砂漠にあるオアシスのひとつであった。

よう祈り、主はその祈りをお聞き入れになった。二人は共に主のもとへ旅立ち、主を賛美し、栄光を帰した[1961]。

- 同日、アドリアノープルで皇帝マクシミアヌス・ガレリウスのもとで殉教した聖殉教者マクシムス、テオドトス、イシキオス、および聖殉教者アスクリピオドタの記念日である[1962]。

3月5日

2月20日（旧暦）

カターニアの司教、聖レウスの生涯

記念日：2月20日

神の御心にかなう者レヴォは、高貴かつ敬虔な両親の息子として、ラヴェンナ地方[1963]に生まれました。その清らかな生活と知恵により、彼は聖職の各段階を順に経て昇進し、カターニアの司教である至福のサヴィノが天に召された後、神の御選びにより司教の座に就きました。　カターニアの街はシチリア島にあり、今もなお火の溶岩を噴き上げているエトナ山の近くにある。司教の座に就くと、聖レウスはその新しい聖職にふさわしいあらゆる務めも引き受けた。　彼は孤児、貧者、未亡人、病人、旅人たちの世話をし、教会の財産を充てて彼らに食事と衣服を与え、自らの祈りによって彼らの病を癒やした。彼は信徒たちにとっては慈愛に満ちた父であり、羊の群れにとっては忠実な牧者であったが、悪魔やその手先たちにとっては、狼にとっての獅子のように恐ろしい存在であった。彼の時代、カターナにはイリオドールという名の魔術師がいた。彼はキリストを信じる敬虔な両親の息子であり、自身も聖なる洗礼を受けていたが、後に密かにキリストを拒絶し、あるユダヤ人から魔術を学んだことで、悪魔に仕えるようになった。　このように、彼はキリスト教徒と見なされていたが、実際には異教徒であり、悪魔の僕であり、偉大な魔術師であった。その点は、聖なる使徒ペトロとパウロが祈りによって死に追いやった、あの古代の魔術師シモンと何ら変わるところがなかった。イリオドールもまた、あらゆる点で彼に似ていた。驚くべき魔術の奇跡を行い、彼はその暗示によって、人々に、まるで乾いた大地の上や道、あるいは干し草の山の上を川が流れているかのように見せかけた。その結果、男女を問わず市民たちは裸になり、街中で、自分たちが川を渡っているかのように思い込んでいた；　彼は石を金に変えたが、それはほんの短い間だけだった。市場では、その魔術によって商人たちに多大な損害を与えた；　高貴な乙女たち、すなわち誠実で高位の市民の娘たちを、彼はその魔術によって肉欲の罪へと駆り立て、彼女たちは羞恥心を忘れ、家や両親を捨てて、淫行のためにあちこちを駆け回った。　やがて、イゲモン・ルキウスが、彼について皇帝レオとその息子コンスタンティノス・ポプリオロドス[1964]に報告すると、皇帝たちは彼を捕らえるよう命令を下した。しかし、イリオドールは自ら、彼を探していた者たちの手に身を委ねた。　彼はカターニアで彼らと共に船に乗り込み、その日のうちにコンスタンティノープルに到着した。西から――シチリアから東へ――フラキアに至る距離を、わずか一時間で航海したのである。　王たちの前に現れた彼は、彼らによって死刑を宣告されたが、直ちに王たちの目の前で姿を消し、再びカターニアに現れた。　再

[1961] 聖人たちの没年は363年とされる。
[1962] そのうちの3人、マクシムス、テオドトス、アスクレピオドトス（別名アスクリアデス）の記念日は、9月15日にも祝われる。
[1963] ラヴェンナは、現在アドリア海に面したイタリアの州である。
[1964] レウ4世「賢王」（717年～741年）；その息子コンスタンティヌスは741年から775年まで在位した。

びコンスタンティノープルに召喚され、剣による斬首を宣告された際、魔術師は、兵士が彼の頭上に剣を掲げて力強く振り下ろしたまさにその瞬間に再び姿を消し、剣は空を切るだけとなった。そして、この魔術師は再びカターニアに現れた。

キリストの聖人レフは、しばしば彼にそのような邪悪な行いをやめ、悔い改めて神に立ち返るよう説得したが、イリオドールを説得することは、エチオピア人を白くしたり、硬い石を柔らかい蝋に変えたりすることと同じくらい不可能であった。　この不信心者は改心するどころか、さらに大きな悪事を企んだ。彼は、神の司教そのものに魔術を仕掛け、その魔術によって彼を嘲笑おうとしたのである。ある日、ある祝祭日の厳粛な日、聖人は民衆全員の面前で、聖職者一同と共に教会で神聖な礼拝を執り行っていた。　そこへ、偽善的なキリスト教徒を装った魔術師イリオドールが教会に入り、密かに魔術を繰り広げ始めた。その魔術によって、民衆の一部は教会の中でまるで馬のように足を踏み鳴らし、獣のように唸り声を上げ、またある者は抑えきれないほど大笑いし、さらに別の者は怒りに満ちた。　魔術師はさらに、司教自身もすべての長老や聖職者たちと共に、礼拝を中断して、まるで音楽やオルガンの音に合わせてかのように、その場で跳ね回り、踊り出すだろうと自慢した。神の聖人は、イリオドールの企みを看破し、　神の御座の前でひざまずき、熱心に祈りを捧げた後、立ち上がって祭壇から出て、自らのオモフォロンで魔術師の首を掴んで縛り上げ、その後、彼を教会から町の中心へと連れ出し、民衆に直ちに大量の薪を持ってきて、激しい火を燃やすよう命じた。　その命令が実行されると、聖人はイリオドールに、彼のあらゆる魔術や呪術について問い詰め、その後、彼をオモフォロで縛ったまま、彼と共に火の中に入り、炎の中に立ちながら彼を抱きしめ、その不敬虔な魔術師が完全に焼き尽くされるまでその場を離れなかった。　その後、神の司教レフは教会に戻り、神聖な礼拝を執り行った。　この輝かしい奇跡は、すべての人々を恐怖に陥れた。というのも、魔術師を炎の中に抱きしめていた聖職者自身は、火傷を負わなかったばかりか、その聖職者の法衣さえも火に焼かれることはなかったからである。聖霊の露が炎の中で彼を取り囲み、火傷から守っていたのだ。この噂は地の果てまで広まり、　王たちはこの奇跡を知ると、聖人を大いなる栄誉をもってコンスタンティノープルへ招き、その尊い足元にひれ伏して、自分たちのために祈ってくださるよう懇願した。そして王の御殿に入る際、この祝福された方は衣服の上に燃える炭を載せていたが、その衣服は焼けなかった。　この偉大な神の御使いは、他にも多くの奇跡を起こした。彼は盲人に視力を与え、病人に癒やしを与え、人々から悪霊を追い出し、その祈りによって偶像崇拝の神殿を打ち砕き、その言葉によって偶像を倒した。そしてついに、老齢の末に主のもとへ帰った。　ちょうどその頃、シラクーサ地方[1965] 出身の、上院議員の家系に属するある出血の病を患う女性が、カターニアの街に聖人のもとを訪れた。彼女は長い間、出血の病に苦しんでおり、もはや医師たちも治療を断っていた。　聖レウ司教が祈りによって人々の病を癒していると聞き、彼女は聖人に自分のために祈ってほしいと頼みに来た。彼女が城門をくぐろうとした時、死者を悼む鐘の音が聞こえた。誰が亡くなったのかと尋ねると、聖レウ司教が天に召されたと告げられた。　深い哀れみに満たされた彼女は、亡くなられた聖人の元へ行き、その寝台に触れた途端、出血が止まり、完全に癒やされた。聖レウ司教の聖遺体は聖殉教者ルキアの教会に安置され、そこでは私たちの神キリストの栄光のために、様々な病が癒やされていた。

[1965] *シラクーサは*、シチリア島の東海岸に位置する最初のギリシャ植民地の一つであり、伝承によれば、紀元前735年頃にコリント人によって設立された。現在はイタリアの州である。

コンダク、第8調：

まことに、教会は偉大なる灯火を擁している。至福なる者よ、あなたは太陽よりもなお輝いている。ゆえに、至福なる者よ、あなたの祈りによって、教会をあらゆる異端から打ち負かされず、揺るがず、また汚れのないものとして守り給え。あなたは永遠に記憶される者である。

聖サドク、ペルシャの司教および彼と共に殉教した128人の殉教者たちの殉教

聖サドク、ペルシャの司教、および彼と共に殉教した128人の殉教者たちの殉教

記念日：2月20日

聖サドクは、ペルシャの都市サリケとクティシフォンにおいて、聖シメオン（ペルシャの司教）が殉教した後、司教の座に就いた。　ある日、聖サドクは恐ろしい夢を見ました。目を覚ますと、彼は聖職者、長老、助祭たち――当時、彼らは皆、王を恐れて身を隠していた――を呼び寄せ、こう語りかけました。

「今夜、私は夢の中で、その頂が天に届く梯子を見ました。その梯子の上には、聖シメオン司教が偉大な栄光に包まれて立っておられ、私は地上に立っていました。聖シメオンは私に大声でこう言われました。『サドクよ、私のところへ上ってきなさい。恐れることはない。私は昨日上った。あなたは今日上るのだ』と。」　このような幻視と聖人の言葉を踏まえ、私はキリストのために殉教することになると信じている。聖シメオンの「私は昨日登った。お前は今日登れ」という言葉は、彼が昨年苦難を耐え抜いたのに対し、私は今年、殉教と死を遂げることになるという意味である。

その後、聖サドクは聖職者たちに次のように説き始めた。

「愛する兄弟たち、そして父たちよ、心を尽くして神を愛し、すべての思いをもって我らの主イエス・キリストを愛しましょう。信仰という鎧を身にまとい、いかなる悪にも恐れず、たとえ拷問や死が私たちを襲おうとも、おののくことはありません。私たち一人ひとりが、イエス・キリストの立派な戦士でありましょう。　もし私たちが死ぬべきならば、完全な者らしく死にましょう。もし生きる運命にあるならば、義人のように生きましょう。たとえ死んだとしても、それは私たちの救い主のために死ぬのです。剣によって永遠の命が開かれるのであれば、剣を恐れることはありません。まだ日が[1966]　であるうちに、私たちは自分の魂の救いのために熱心に努め、朽ちることのない恵みに富み、天の御国において果てしない栄光と誉れに与かり、私たちの名がキリスト教徒の記憶の中で栄光あるものとして残るようにしましょう。　兄弟たちよ、私たちの神に祈りましょう。私が幻の中で見たことが、速やかに成就されるよう。なぜなら、御霊に導かれる者は、喜びと大きな愛をもって、キリストのために苦難と死を耐え忍ぶことを志し、恐れることはないからです。その者は常にそのような偉業に備えているからです。　しかし、肉に属する者にとって、死の時は恐ろしく、ぞっとするものです。徳ある人々は、それを通じて永遠の命を相続するために、自ら慎重かつ寛大にそのような死を求めますが、怠惰で無頓着な者たちは、死を目前にして身を隠そうとします。　なぜなら、神を愛する者は神のもとへ昇り、世を愛する者はこの世にとどまるからである。前者は喜びと歓喜のために肉体を捨てるが、後者はこの世に残り、苦難と嘆きに苛まれるのである。

[1966] キリストの次の言葉への言及：*「一日は十二時間ではないか。昼に歩く者は、この世の光を見ているからつまずくことはない。しかし、夜に歩く者は、光が彼と共にはないからつまずくのである」*（ヨハネ11:9–10）。

迫害の二年目、ペルシャ王サポルが前述の都市サリックとクティジフォンに到着した。この時、聖なる司教サドクが彼の前で誹謗中傷された。その名は「 「王の友」を意味する聖なる司教サドクが、彼の前で誹謗中傷された。実際、彼は心の底から、全力を尽くして天の王キリストを愛していた。彼は並外れた節制を特徴とし、正義と信仰に満ちていた。彼は聖シメオンに倣い、その後を継いで聖座に就いたのである。 そこでサポル王は兵士たちを派遣し、司教とその聖職者たちを捕らえさせた。彼らと共に、多くの他のキリスト教徒や修道士たち、計128名が捕らえられた。彼らは皆、鉄の鎖で縛られ、暗く、悪臭が漂い、恐ろしい場所にある牢獄に閉じ込められた。 そこで彼らは5ヶ月にわたり、耐え難い苦しみの中で苦しめられた。というのも、不敬虔な王の邪悪な家来たちは、各殉教者の全身を細い鞭で縛り、木を使って体を曲げ、苦しむ者たちの骨が軋み、皮膚が裂けるほどに——聖人たちはこれほど激しい苦痛に耐えなければならなかったからである。

その際、拷問者たちはこう言った。

「太陽と火にひれ伏し、王の意志に従えば、命は助かるぞ。」

すると、聖サドクは皆を代表してこう答えた。

「我らはキリスト教徒であり、天と地の創造主である唯一の神を崇拝する。我らは全霊と全力を尽くして神に仕える。しかし、太陽や火には崇拝も敬意も払わない。それらは人々のために造られたものだからだ。」 我らは王の命令には従わず、我らの神から離れることもなく、この一時的で虚しい人生から永遠の御国へと導く死をも恐れない。それゆえ、躊躇することなく、我々を殺せ。すでに幾度となく汝らの目の前で流されてきた我らの血を、惜しむな。

その後、王の命令が再び聖徒たちに下された。

「もしあなたがたが私の命令に従わず、私の意志を遂行しなければ、まもなく恐ろしい破滅があなたがたを襲うだろう。」

聖徒たちは口を揃えてこう答えた。

「我らは我らの神のもとで滅びることはなく、キリストにおいて死ぬこともない。なぜなら、キリストは我らを至福の永遠の命をもって生かし、不死の御国を嗣業として、また安息を与えてくださるからである。 あなたもまた、私たちの死を先延ばしにしないでください。私たちは熱意をもって、私たちの神のために苦難を受ける用意ができています。私たちは太陽や火を崇拝することはありませんし、死と破滅に満ちた不義な王の命令に従うこともありません。

王は、彼らの信仰における揺るぎない不屈の姿勢を見て、彼ら全員を剣で斬り殺すよう勅令を下した。聖人たちは、王の命令を聞くと、皆、喜びをもって死の準備を始めた。彼らは城の外へと連行された。その道中、彼らは喜びながら次のように歌った：

– 神よ、私たちを裁き、私たちの争いを解決してください。不義な民、不正直で諂う者たち（詩編42:1参照）、血を流す者たちから私たちを救い出してください。主よ、あなたは私たちの希望です。

そして、処刑の場に着くと、彼らは皆、心を一つにしてこう叫び始めた。

– 主なる私たちの神よ、この恵みを私たちに授けてくださったことを感謝します。あなたは私たちの祈りを軽んじることなく、この最も尊い冠——殉教——を私たちに与えてくださいました。主よ、あなたがたがどれほどそれを望んでいたか、あなたはご存知です。父よ、私たちを救い、永遠の命へと招いてくださった、あなたの独り子である私たちの神を賛美します。 主よ、私たちをこの世で苦しみ続けるままにしないでください。あなたの慈しみのゆえに、私たちをあなたの御前に永遠に堅く立たせてください。私たちの血をもって、私たちの罪を洗い清めてください。あなたは唯一の栄光に満ちた神であり、あなたの独り子、そしてあなたの至聖なる御霊は、永遠に賛美されます。アーメン。

聖徒たちが主に対してこのような祈りを捧げていたその時、不信心者たちは彼らを斬りつけたが、殉教者たちは、最後の者が殺されるまで、神を賛美し続けた。 そして、高潔で栄光に満ちた殉

教者サドクは、拷問者たちによって足枷を嵌められたまま、ビフラパトと呼ばれる別の町へ連行され、そこでその高潔で聖なる首を切り落とされた。　こうして、これらすべての聖なる栄光ある殉教者たちは、私たちの主イエス・キリストを賛美し、栄光を称えながら、この世を去りました。主イエス・キリストには、父と聖霊とともに、今、そして常に、世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしいのです。アーメン。

ローマ教皇聖アガフォンの記念日。

記念日：2月20日

この尊者は、キリストを信じ、敬虔な生活を送っていた裕福な両親のもと、イタリアで生まれた。両親は息子を深く愛し、あらゆる有益で神に導かれた書物を彼に教えた。　聖書に関する知識において、この聖人は非常に優れた成果を収めたため、両親の死後、彼らが残した財産（約1633リットル[1967]）を集め、貧者、孤児、未亡人を呼び集め、たった一日でそれらすべてを彼らに分け与えました。

その後、ある修道院で修道士となり、修道生活に身を捧げ、昼夜を問わず怠ることなく神に喜ばれるよう働き、全世界のために祈りを捧げた。彼は徳行にこれほど熱心に励んだため、主から偉大な奇跡の賜物を授かった。　聖アガフォンの徳高い生涯 は人々の目に隠れることはできず、彼はローマの大司教に任命された。信徒たちを徳の道に導き、奇跡によって名声を博した後、この尊者（聖人）は司教の位にあるまま、主のもとへ帰った[1968]。

3月6日

2月21日（旧暦）

シムヴォリの隠者、私たちの尊い父ティモフェイの記念日

記念日 2月21日

オリンポス山の近く[1969]には、「シンヴォリ」と呼ばれる一つの荒野があり、そこに修道院が建っていた。その修道院の修道院長であったのは、高潔な人物である聖テオクティストであり、聖殉教者プラトンは彼のもとで修道生活について学んだ。　至福のアルヒマンドリト・テオクティストの弟子たちの中には、尊者ティモフェイもいた。彼は幼い頃から修道生活への献身に身を捧げ、断食と禁欲に励み、夜通し祈りに明け暮れた。　ついに自らの肉体を完全に死に至らしめ、情欲とは無縁となり、霊的な完全さを際立たせ、最期を迎えるまで心と体の貞潔を守り通した。それは、幼い頃から決して女性の顔を見ないという誓いを立てていたからである。　それゆえ、彼は聖霊の宮となるにふさわしい者とされ、癒しの賜物と悪霊に対する力を受けました。彼の祈りによって多くの奇跡が起こり、聖人はあらゆる病を癒やし、人々から不浄な霊を追い出しました。　彼は長年にわたり山や荒野を放浪し、主のみに依り頼んで独り暮らしをし、絶え間ない祈りの中で豊かな涙を流し、それを露の

[1967] リトラ――重量単位の名称。ユダヤのリトラは72ゾルトニクに相当した。参照：列王記下10:17。
[1968] アガフォンはローマ教皇であり、679年から682年までローマ教会を統率した。1月10日に埋葬された。
[1969] 小アジア、フリギアとビフィニアの国境付近。

ように自らの魂に注ぎました。そのような生活を送る中で、彼は深き老齢に達し、主のもとへ帰りました。

コンダク、第4声調:

東より輝きを放つまばゆい星のごとく、信者たちの心にあなたの奇跡の美徳を照らし出された、奇跡行者にして至福のティモフェイよ。

アマストリドの主教、聖ゲオルギオスの記念日。

記念日：2月21日

この聖人の両親、テオドールとミゲフサは敬虔な人々であり、名門の家系に生まれ、徳高い生活を送っていた[1970]。子供に恵まれなかった彼らは、神に子供を授かるよう熱心に祈り続け、ようやく深き老齢になって初めて、主は彼らの祈りを聞き届けてくださった。 天からの声が、彼らに息子の誕生を告げ、その名を与え、生まれた子は司教の恩寵に浴するだろうと予言した。そして息子が生まれた。それが聖ゲオルギオスであった。 彼が青年期に達すると、彼について予言されたことが次々と実現し始めました。というのも、彼は世俗の学問と神学の両方で目覚ましい成果を収め、両親はそれを見て神を賛美したからです。成人し、教育を終えた聖ゲオルギオスは、故郷を離れ、シリキオス山脈へと赴きました。 そこで彼はある敬虔な長老と出会い、彼から修道者の剃髪を受け、その指導の下で修道生活を送るようになった。長老の死後、聖ゲオルギオスはヴォニッサへ赴き、そこで厳しい断食の修行に身を捧げた。 聖ゲオルギオスの敬虔な生活はすぐに広く知られるようになり、アマストリダ市の司教[1971]が逝去した際、神の御心により、聖職者たちと民衆によって司教に選出された。叙階のためにツァールグラードに到着すると、彼はコンスタンティノス6世皇帝とその母イリーナの好意を得て、総主教タラシオスによって叙階された。 こうして、かつて主が彼の両親に彼について予言されたことが、ついにすべて実現した。すなわち、この聖人は、器の下に隠されることなく、燭台の上に置かれる灯火のように（マタイ5:15）、アマストリドの司教座に就いたのである。 彼が首都から自身の主教座のある都市に到着すると、信徒たちを神の教えに堅く立たせ、教会の器や聖堂の装飾品を増やし、祭壇に関する教会規則を定めた。その一方で、彼は常に未亡人や孤児の擁護者であり、貧しい人々を養い、借金の問題を解決し、すべての人にとって真に神に喜ばれる生活の模範となった。 聖人は多くの奇跡を行った。例えば、自身の祈りによって、周辺地域を荒らしていたサラセン人を町から追い払い、トラペズンドで捕らえられ、不当に死刑判決を受けたアマストリスの商人たちを奇跡的に救った。 このように敬虔に地上の生涯を送った後、聖ゲオルギオスはこの世を去り、安らかにその霊を主の御許に委ねました。主よ、今、常に、そして世々限りなく、栄光がありますように。[1972]。

私たちの聖なる父、アンティオキアの司教エウスタフィオスの生涯

記念日：2月21日

[1970] 彼らは、黒海沿岸のパフロゴニアにあるクロムネという町に住んでいた。

[1971] アマストリダという都市は、ローマ帝国の小アジア北部属州の一つであるパフロゴニアにあり、ビフィニアとポントスの間に位置し、エウクシノス海（現在の黒海）の沿岸に面していた。

[1972] 聖ゲオルギオスは、ニキフォロス・ロゴフェトス帝の治世（802年～811年）の3月3日に逝去した。その棺の周りでは多くの奇跡が起こった。

キリストの教会の偉大な聖人たちの列に、小アジア東部およびギリシャ・ローマ帝国の古都アンティオキアの司教である聖エウスタフィオス[1973] は、最も栄光あるキリスト教の殉教者の一人であり、神への真の信仰を守る闘士である。

聖エウスタフィオス[1974]
は、3世紀末から4世紀半ばにかけて生きた。彼はパンフィリアのシデ[1975] で生まれ、当初はシリアのベリア[1976] で司教職を務めたが、その徳と教会への功績により、民衆の願いを受け、第1回全地公会議の司教たちによってアンティオキアへ転任された。

聖エウスタフィオスの主教としての活動時代は、キリストの教会の歴史において、極めて特異かつ唯一無二の時代であった。それは、教会の光である教父たち、すなわち普遍的な教師たちの数と偉大さにおいて、とりわけ輝かしい時代であった。その後の時代も信仰の教師たちによって栄光に満ちていたが、彼らはすでに第四世紀の神に賢明な教父たちの模倣者や弟子に過ぎなかった。 キリスト教と異教との戦いは、キリストの十字架の旗印の下、最初の三世紀にわたって繰り広げられたが、第四世紀の初頭に異教に対する完全な勝利をもって終結し、世界的なギリシャ・ローマ帝国において、もはや異教に対してキリスト教の信仰を守る必要はなく、キリスト教が異教よりも優れていることを証明する必要もなくなった。 当時、キリストの教会に訪れた外的な平穏は、教会の内政を普遍的かつ統一的に整えること、そして牧者たちが信徒たちと妨げられることなく教訓的な対話を交わすこ

[1973] アンティオキアという都市は、キリスト教教会にとって、エルサレムに次ぐキリスト教の第二の聖地として、また異教徒から最初のキリスト教会が生まれた地であるという点で、特に重要な意味を持っています。 アンティオキアは、キリスト降誕の300年前に、シリアの王セレウコス・ニカトルによって設立された。彼は、父アンティオコスの名を不朽のものにしたいという願いから、アンティオキアという名の都市をさらに10以上も設立した。 そして、この首都アンティオキアは、他の都市と区別するために「アンティオキア・エピダフナ」、すなわちダフナの神殿と森の近くという意味で呼ばれていました。また、地中海に注ぐ河口から10ヴェルスタほど離れた、オロンテ川のほとりに位置していたことから、「オロンテ川のアンティオキア」という名称でも知られていました。 シリアの王たちやローマ皇帝たちは、このアンティオキアの美化に多大な関心を寄せ、 そのため、その建築物の壮麗さと豪華な輝きは人々を圧倒していた。東から西へ15ヴェルストにわたって、2列の列柱で飾られた並木道が伸びており、それは両側に屋根付きの通路を備えた、舗装された開放的な道路を形成していた……住民は多様な民族で構成されており、ユダヤ人もいた。 生活は陽気で活気に満ちており、詩人、雄弁家、哲学者、学者、占い師たちがそこで惜しみなく知的な成果を披露していた。概して異教の文化は繁栄していたが、それは歪んだものであった……キリスト教は、その出現のまさに初期に、その教えの神聖な光でアンティオキアを照らし出した。 そこでは、大執事ステファノの殺害後、彼と同じ運命を避けるためにエルサレムから逃れざるを得なかった最初のキリスト教徒たちが避難所を見出し、彼らがアンティオキアで始めた宣教は極めて必要と認められたため、エルサレム教会は使徒バルナバとパウロに、そこで信仰を確立するよう命じた； 彼らは「多くの人々を教え、アンティオキアの弟子たちはそこで初めて『キリスト者』と呼ばれるようになった」（使徒行伝 11:20–26）。また、アンティオキアでは最初のキリスト教宣教団が誕生した； 使徒パウロはそこから宣教の旅に出た。また、使徒ペトロもそこで教会を統率していた。そして、エルサレムの陥落後、アンティオキアはアジアの教会において第一の地位を占め、その重要性はローマ、コンスタンティノープル、アレクサンドリアに匹敵するようになった。 アンティオキアには有名な神学学校が栄え、異教、ユダヤ教、異端者たちに対してキリスト教を擁護した多くの傑出した教会の教師たちを輩出した。また、異端の争いが激しかった時代には、そこで教会の牧者たちによる多くの公会議が開かれた…… 13世紀、アンティオキアはエジプトのスルタンによって完全に破壊され、現在その跡地には、みすぼらしく汚れたトルコの小さな町アンタキヤがあるのみである。この歪められた名称だけが、オロンテス川沿いに長く名声を轟かせたアンティオキアの、16世紀にわたる輝かしい往時を偲ばせる…… しかし、現在でもアンティオキアのキリスト教総主教は、東方教会の総主教たちの中で重要な第三位の地位を占め、「全東方の総主教」という称号を冠している。

[1974] エウスタフィオスという名はギリシャ語で、「不変の」、揺るぎないという意味である。

[1975] シドは、小アジア南部のタウルス山脈の麓、シリアの沿岸部を構成していたパンフィリア地方にある重要な港湾都市であった。

[1976] ベリアは、地中海東側の小アジア地方にあるシリアの都市でした。

とを可能にした。しかし、まさにその時に、教会の内部の敵、すなわち異端者たちとの、さらに困難な戦いに対する、より大きな必要性が生じたのである[1977]。

当時、教会を混乱させた異端者たちの筆頭は、エジプトのアレクサンドリア[1978]教会の学識ある長老、アリウス[1979]であった。アリウスは、その限られた思索に驕り、神性以外の存在に神性が及ぶという異教の教えを復活させ、神を冒涜するかの如く、次のように主張した。

1) 父なる神は永遠ではあるが、かつては父ではなく、御子も持たなかった時期があった;

2) 御子は被造物であり、何よりも先に父によって創造され、御子を通じて世界が創造された;

3) 御子は永遠ではないが、すべての被造物の中で最も高き存在である。御子は父に似ている——名においては神であるが、本質においては神ではない;

4) 父なる神は慈愛により、御子に知恵を授けたが、御子は父なる神を完全に知っているわけではない;

5) 聖霊もまた、神の御姿ではなく、御子によって創造されたものである[1980]。

このような神を冒涜する偽りの教えに憤慨したアレクサンドリアの司教アレクサンドロス[1981]は、アリウスに対し、そのような異端を放棄するよう説得した。しかし、アリウスが司教の穏やかな諭しに従わなかったため、エジプトとリビアの100人の司教からなる地方公会議が招集された。 このアレクサンドリア教会の地方公会議は、アリウスとその考えを同じくする数名の長老や助祭たちを、神を冒涜する異端者として破門したが、彼らは近隣の教会の牧師たちだけでなく、民衆の間でも支持を得ようと積極的に働きかけた。 そのために、彼らは同調者たちや、 に記された狡猾に練り上げられた偽りの教義を記した書簡を、東方全土の教会に送りつけ、アリウスの偽りの教義の精神に基づいて、民謡のメロディーに乗せて歌われる賛美歌を作曲した。 当時、東方における神学的な議論や論争への情熱は極めて強く、宗教的な問題は家庭内だけでなく、広場や交差点でも取り上げられていた。異教徒たちは、自らの劇場でこうした論争を嘲笑し、キリスト教徒間の意見の相違を、すでに拒絶されていた異教の利益に利用さえしていた。

[1977] 聖バシレイオス大主教の教令によれば、古代の教父たちは、「完全に背き、信仰そのものから疎外された者たち」を異端者と呼んでいた。

[1978] アレクサンドリアは、エジプトの有名な都市であり、キリスト降誕の300年前にアレクサンドロス大王によって地中海の沿岸に建設された。アレクサンドリアは学問と商業で知られ、4世紀初頭からはキリスト教教会および神学教育の重要な中心地となった。 名高いアレクサンドリア神学学校は、キリスト教徒だけでなく、異教徒からも聴講生を集めていた。

[1979] 当時、アレクサンドリアの教会の助祭であったアリウスは、アレクサンドリアの司教聖ペトロによって破門されたが、聖ペトロの後継者である高齢の司教アキロスによって赦され、助祭の地位に復帰し、さらには長老に叙階された。 アリウスはその後、アレクサンドリアで重要な地位を占めるようになった。彼は信徒の多いヴォカリス教区の責任者として、キリスト教の教義を説いていた。アリウスは学識豊かで、生活上の道徳においても非の打ち所がなく、厳格な風貌で背が高く、威厳のある歩き方をしており、その外見のすべてが多くの者を魅了するのに一役買っていた。 彼の服装は修道士のそれに似ており、常に袖のないチュニックと非常に細身のマントを身にまとい、その穏やかな話し方、偽りの礼儀正しさ、そして必要に応じて惜しみなく振る舞うお世辞が、聴衆を彼に引きつけた。 アリウスが公会議によって破門された後、336年に彼の同調者たちの陰謀により、再び彼を教会の懐に迎え入れることが決定された際、アリウスは教会にたどり着く前に突如として病に倒れ、内臓が飛び出し、広場で息を引き取った。

[1980] フィラレート、チェルニヒフ大司教著『正教の教義神学』、1865年刊、第1部、164頁。および『教父学』、1859年刊、第2巻、13頁。

[1981] 聖アレクサンドルは、正教の熱心な擁護者であり、313年から328年までアレクサンドリアの司教を務め、信仰の堅固さで名高い人物である。 325年の第1回ニカイア公会議において、彼は聖エウスタティオス・アンティオキアスや、後にアレクサンドリアの後継者に指名した聖アタナシウスと共に、正統信仰の有力な擁護者であった。聖アレクサンドルは、正統信仰の著名な擁護者である聖エウスタティオスに対し、アリウス派に関する書簡を送っている。

[1982]このように狡猾な異端者であるアリウス派に惑わされ、シリアの教会も、聖エウスタフィオスが大司教を務めていた地域も動揺し、神学上の問題や疑問の解決をめぐって論争が繰り広げられていた……　一方、深い神学的知識と世俗的な学識に秀でていた聖エウスタフィオスは、ベリアにおける最後の異教徒によるキリスト教徒迫害の時も、そして今、　アリウス主義によって教会が混乱に陥った際にも、最初の聖人たちのひとりとして、アリウスおよびアリウス派の神を冒涜する偽りの教えに対し、口頭および書面によって熱心に立ち向かった。

アレクサンドリアやシリア、その他の教会において、正統派とアリウス派の間の調和と平和を回復しようと試みたが、使徒同等の皇帝コンスタンティヌス大帝でさえもそれを成し遂げることはできなかった。そのため、争いを終わらせるために、皇帝はキリスト教全教会の司教団に助けを求めることを決意し、ニカイアで[1983] 第1回全教会公会議を招集した。

当時の歴史家エウセビオスの言葉によれば、コンスタンティヌス皇帝はこの公会議を招集するにあたり、救い主キリストに「世界の団結によって編まれ、結ばれた、美しい花々からなる司祭の冠」を捧げたいと願っていた。そして皇帝の呼びかけに応じて、アジア、アフリカ、ヨーロッパから、司教だけで300名もの人々がニカイアに集まった。 ギリシャ・ローマ帝国の支配下にない国々、例えばペルシアやスキティアからの司教たちもいた[1984] 。彼らに随行した長老、助祭、その他の聖職者の数は、司教の数よりもさらに多かった。信徒のうち、高位聖職者以外にも、多くの哲学者[1985] や学者たちがニカイアに集まった。　こうして、この公会議において、聖エウスタフィオスは、その偉大な敬虔さと、神学的および世俗的な深い知識、そして正統な信仰教義の純潔性を守るための揺るぎない熱意が相まって、教会の聖職者たちから特に際立った重要な役割を任されることとなった。　聖エウスタフィオスには、[1986] における大公会議の初代議長職が委ねられた。彼は第一司教の座につき、皇帝の右側に着席し、全公会議を代表して、使徒同等の皇帝コンスタンティヌスに演説をもって歓迎の意を表するという栄誉を与えられた。ここに、聖エウスタフィオスによる、雄弁かつ信仰と精神に満ちたその演説を記す：

「敬虔なる君主よ！

あなたを地上の王として選び、あなたの手によって偶像崇拝を根絶し、あなたを通じて信者たちの心に平和をもたらされた神に、賛美あれ。すでに悪意の霊たちの権勢は踏みにじられ、多神教の祭壇は打ち倒され、不義の闇は散り去り、神の教えの光が全宇宙を照らし出しています。　父は賛美され、子は崇められ、聖霊は宣べ伝えられる――同一の本質を持つ三位一体。三つの位格、すなわちイポスタシスにおける唯一の神性が、至る所で説かれている。この教えによって、陛下、あなたの敬虔さの偉大さが確固たるものとなっている。　どうか、この教えを私たちのために完全かつ揺るぎないものとして守り抜いてください。そうすれば、異端者たちが教会に侵入して、三位一体の神の一致

[1982] キリスト教教会において「殉教者」とは、信仰による迫害のさなかに公然とキリスト教を告白し、そのために拷問に耐えながらも生き残った人々を指す。彼らはキリスト教徒の間で特別な尊敬を集め、堕落したり信仰を放棄したりした者たちを教会に再び迎え入れる任務を主に任されていた。

[1983] ニカイアは、キリスト降誕の75年前にローマ人によって征服された小アジア北西部の州、ビフィニアの主要都市であった。古代、ニカイアは豊かで繁栄した都市だったが、現在その跡地には貧しい小さな町イシクがある。

[1984] 聖アタナシウス大司教、 アレクサンドリアの司教は、第1回全地公会議が「全」宇宙を代表していたと主張している。なぜなら、コンスタンティヌス皇帝によるこの公会議への招請は、ローマ帝国の境界外にいる司教たちにも伝えられていたからであり、それによって、ローマ帝国に属していなかったペルシアやスキティアの司教たちがこの公会議に出席したことが説明されるのである。 ローマ帝国の領土に含まれていなかった国々

[1985] 哲学者とは、すなわち「知恵を愛する者」を意味する。哲学者とは、神、世界と人間の起源および法則、存在の究極の目的など、存在に関する至高の問いを研究することに身を捧げた人々を指す。

[1986] 第1回全地公会議では、最も著名な教区の司教たちが交代で議長を務め、その最初の議長は聖エウスタティオス・アンティオキア司教であった。（これに関する詳細は、D. B. ヴラディミール・ゲッテ著『教会史』（1875年刊、第3巻、6～7頁および10頁）を参照のこと）。

を破壊したり、私たちの信仰を冒涜したりすることはないでしょう！　さて、今回の集会および我々の議論の理由は、狂信的なアリウスにあります。彼は、アレクサンドリア教会の　で長老の職に就きながら、至福の預言者たちや使徒たちの教えとはかけ離れた立場をとっているのです。　なぜなら、彼は御父の独り子であり御言葉である方を、御父と同質かつ同等であると認めず、被造物を崇拝する者として、創造主を被造物と同列に置こうとしているからである。　陛下、彼に対し、その迷いを捨てて使徒の教えに背くことのないよう命じ、もし彼がその不敬虔な見解に固執し続けるならば、正教会から追放してください――そうして、彼がその不敬虔な見解によって、弱い魂たちの信仰をこれ以上揺るがすことのないように[1987]」。聖エウスタフィオスはこのように語った。

この第1回全地公会議に際し、多くの異教の哲学者たちがニカイアに集まった。ある者はキリスト教の教えをより深く理解するためであり、またある者はその教えに対する憎悪から、巧妙に練られた論証を用いて司教たちの議論を混乱させ、キリスト教の教えを反駁しようと企んでいた。　教会の著述家たちは、不敬虔なアリウスとその冒涜的な教義を擁護していた、フェドンという名の、これらの哲学者の中でも最も虚栄心の強い人物に対し、高い哲学的知識を有していた聖エウスタフィオス・アンティオキアスが、[1988]、全公会議を代表して最初の反論を行ったと記している。そして、この哲学者は聖公会との論争の末、聖人たちの答えに深く感銘を受け、大声でこう叫んだ。「神よ、あなたに栄光あれ。あなたは、あなたの聖徒たちに、あらゆる知性を超える、清く、計り知れず、被造物ではない神性の奥義を啓示してくださった。」　キリストよ、全き善なる父の全き善なる御子よ、これまでアリウスの不敬虔な見解に惑わされ、あなたに対して犯したすべての罪を、どうかお赦しください……　これからは、アリウスとその不敬虔な見解、そして彼と同様に、父と子と聖霊に対して知恵を振りかざし、神を冒涜する者たちすべてを、永遠に呪いとする……」。[1989]

しかし、アリウス自身は数人の同調者と共に、自らの見解を曲げようとはしなかった。そこで、聖エウスタティオスが極めて名誉ある地位を占めていた公会議の父たちは、厳粛かつ満場一致で、神の御子を父なる神と同質であると告白し、　一方、アリウスの教義は、神の言葉および教父たちの伝承に反するものであるとして、アリウスの偽りの教えを含むすべての者を、正統な信仰を持つ教会からの破門および絶交に処した。　そして、その後のすべての時代において正しい信仰告白を正確に確立するため、公会議の父たちは、この告白を、神から与えられたものとして『使徒信条』に定めた[1990]。アリウスと、彼と同調した二人の司教、テオンとセコンダ[1991]は、教会から破門された後、皇帝によって流刑に処された。

全地公会議で承認されたキリスト教信仰の告白には、アリアスの多くの支持者たちも署名したが、ニコミディアの司教エウセビオスとニカイアのテオグニオスは、この公会議の『信仰告白』には署名したものの、アリアスに対する非難決議への署名には応じなかった。　このため、皇帝は彼らをアリウス派の異端の擁護者として、教職を剥奪し、流刑に処したが、彼らは流刑地から自らの誤りを悔い改める書簡を送り、それゆえ赦され、それぞれの教区に戻った。

[1987] 『公会議の議事録』、カザン神学アカデミーによりロシア語訳として刊行、1859年刊、第1巻、86–87頁。

[1988] 『全地公会議の議事録』、1859年刊、第1巻、104–106頁。

[1989] 『全地公会議の議事録』、1859年刊、145頁。

[1990] 『全地公会議の議事録』、1859年刊、157、22、29ページなど。 ニカイア公会議、すなわち第1回全地公会議は、教会史家によれば、「パヴリヌスとユリアヌスの執政官在任中、5月20日、マケドニア王アレクサンドロスから数えて636年」に行われた。これはコンスタンティヌス大帝の治世20年目、西暦325年にあたる。

[1991] マルマリクの司教フェオンとプトレマイスの司教セコンドは、公会議全体によって承認された信仰告白への署名を拒否した。

当時の教会史家である、キルスの司教、福者テオドリトス（[1992] ）は、第1回全地公会議について記述する中で、とりわけ、アリウス派に対して書かれた聖エウスタティオス・アンティオキアスの著作から、以下の抜粋を引用している。 「信仰に関する事柄を審議するためにニカイアに偉大な公会議が召集され、そこにはおよそ270人の司教が集まった （『およそ』と言うのは、集まった者の数が多すぎて正確な数を特定できず、また特に注意深く調査もしていないためである）が、そして（信仰の）信条を定めていこうとしたとき――（公会議の）場の中央に、神を冒涜する教えに満ちたエウセビオス（ニコミディオス）の著作が現れた。 それが全員の前で声に出して読み上げられると、その醜悪さゆえに聴衆は即座に言い表せないほどの悲しみに襲われ、著者自身は耐え難いほどの 恥辱に覆われた。こうしてエウセビオスの著作[1993] が暴露され、その不敬な文書（エウセビオスの信条）は皆の目の前で引き裂かれた..... この偉大なる公会議の判決によって教会から追放されることを恐れて、アリウス派の支持者たち[1994] もまた（公会議の場で）立ち上がり、公会議によって非難された教義（アリウス派）を破門した..... このように、彼らは数々の策略を通じて、教会における地位（すなわち、自らの司教の座）を維持したが、本来なら悔い改めの身であるべきであった。（そして、全地公会議の後）、彼らは時として密かに、時として公然と、公会議によって退けられた見解を庇護し、さらにはそれを支持するに至った。 さらに、雑草のような教えを根付かせようと、彼らは（聖書に）精通した人々との出会いを避け、監督の目を逃れ、そのようにして、いわば敬虔を説く者たちを踏みつけにしたのである。 しかし、私たちは、不敬虔な者たちが神聖なものを打ち負かすことはできないと信じている。「たとえ彼らが再び力を振るおうとも、再び打ち負かされるであろう.....」[1995]

ニカイアで開催された全地公会議からアンティオキアに戻った聖エウスタフィオスは、自身のアンティオキア都主教区に属する多くの教区の司教や長老たちを招集して公会議を開き[1996] 、 彼らにニカイア公会議のすべての決議内容を伝え、これらの決議、とりわけキリスト教全教会の代表者による公会議で承認された信条に示された正しい信仰告白を、揺るぎなく守るよう説得した[1997] 。

[1992] 著名な教会史家であるテオドリトス（キルスの司教）は、390年にオロンテス川沿いのアンティオキアで生まれ、423年にアンティオキア総主教区のキルスの司教に任命され、457年に死去した。 彼は5世紀の東方教会において、最も教養豊かな大牧者の一人であった。

[1993] ニコミディオスのエウセビオス司教は、エフェソスのメノフォント司教、 スキフォポリスのパトロフィル、ニカイアのテオグニス、ネロニアスのナルシス、マルマリクのテオナ、プトレマイスのセクンドといった司教たちと共に、アリウス派の誤謬に基づいて作成された信仰告白案を提出した。彼らは曖昧な表現を用いてその誤謬を隠そうとしたが、 しかし、この策略は正統な信仰の擁護者たちによって即座に見抜かれ、ニコミディアのエウセビオスによる信条は、迷信的であるとして躊躇なく退けられた。もう一人のエウセビオス、すなわちパレスチナのケサリアのエウセビオスによって提出された第二の信条案は、そこに「 「同質」という語が盛り込まれることを条件として承認された。そして、皇帝から特に寵愛されていたカルドゥブスの司教オシエウスが提出した信仰告白の草案が公会議で採択され、ニカイア信条と名付けられた。

[1994] その人物たちは以下の通りである：ニコミディウスのエウセビオス、ニカイアのテオグニス、マルマリクのテオナ、プトレマイオスのセコンド、ラオディキアのテオドトス、タルスのパヴリン、アナザルブのアルファニオス、リドスのアエティオス、ベイルートのグリゴリオス、エフェソスのメノファントス、スキフォポリスのパトロフィル、ハルキドンのマリス、ネロニアスのナルシスであった。

[1995] キルスの主教、至福のテオドリトスの『教会史』。ロシア語版、サンクトペテルブルク、1852年、第VIII章、46–47頁。

[1996] 聖使徒たちの模範に従い、また聖使徒たちの規則第31条に基づき、正教会においては古来より、主要都市の首席司教たちによって、「地方」公会議が招集されてきた。 地方の主教および長老たちによって構成され、教会の規則と伝承に基づき、その地域内で生じる信仰教義および統治に関する問題や事案を解決するために招集されてきた。このような公会議の決定は、その地方公会議の構成員を輩出した国または地域においてのみ、拘束力を持つ。

[1997] これが、聖シノダによる翻訳に基づき、『聖使徒の規則、聖公会議、および聖教父たちの書』に記された信仰告白のシンボルである。「我らは、唯一の神、全能の父、目に見えるものも見えないものもすべてを創造された方を信じる。また、唯一の主イエス・キリスト、神の御子、独り子、父から生まれた方、すなわち父の本質から、神から神、光から光

その翌年の326年、聖エウスタフィオスは、キリスト教への改宗を望むグルジア（古代イベリア）[1998] の住民たちに洗礼を授け、同地に正教会を設立するよう命じられた。 古代イベリア（ゲオルギア）、すなわちグルジアに居住していた部族は、偶像崇拝者や火崇拝者であり、彼らはギリシャ・ローマ帝国に一定程度従属していたものの、独自の王と独自の政治体制を持っていた。　地元の伝承によれば、聖使徒アンドレイがシモン・カナニトと共に、グルジアのいくつかの沿岸部族に初めて救い主キリストを説いたとされる。そして、4世紀前半にシリアからやってきた聖女ニーナによって、住民の大部分と王族がキリスト教に改宗した。

聖ニナの、奇跡に彩られた説教によって、最も熱心な偶像崇拝者であったグルジアの女王ナナと王ミリアンがキリストを信じるようになると、彼らはコンスタンティヌス　大帝のもとへ使節団を派遣し、自分たちと民を洗礼するために聖職者をグルジアへ派遣してほしいと要請した。　皇帝は、イベリア人のキリスト教への改宗を、王国全体が自身の帝国に編入されること以上に喜ばしいことだと述べ、直ちに聖エウスタフィオス・アンティオキアス[1999] を、数名の司祭、助祭、その他の聖職者たちと共にグルジアへ派遣するよう命じた。　彼らはまた、教会礼拝用の器具一式をすべて携えてグルジアへと向かった。　聖エウスタフィオスがグルジアの首都ムツヘトに到着すると、ミリアン王は各地方の統治者、軍司令官、宮廷の重臣たちに、全員首都へ集まるよう命じた。彼らが集まると、ミリアン王は全員の面前でエウスタフィオス司教から聖なる洗礼を受け、続いて王妃と子供たちも洗礼を受けた。　かつて異教の祭司たちの神殿があったクレ川にかかる橋のそばには、洗礼堂が設けられ、そこで聖エウスタフィオスはグルジアの地方統治者、軍司令官、宮廷の重臣たちに洗礼を授けた。そのため、この場所は「ムタヴァルタ・サナトラヴィ」、すなわち「高官たちの洗礼盤」と呼ばれるようになった。　この洗礼槽の少し下流では、聖エウスタフィオスと共にやってきた司祭たちが、聖ニナの説教に促されて洗礼を受けに駆けつけた民衆に洗礼を授けた。水と聖霊による再生を受け入れない者は、永遠の命と光を見ることはできないからである……　その後、司祭たちはイベリアの他の住民たちに洗礼を授け、教えを広めるために、町や村を巡った。こうして、神の御加護により、国中のほぼすべての人が洗礼を受け、聖ニナと聖エウスタフィオス・アンティオキアスのこの事業への尽力によって、福音の福音がイベリアに定着した。　ムツヘテにおいて、聖エウスタフィオスは、彼の到着直前に王の庭園に建てられた十二使徒に捧げられた教会を奉献し、新しく設立されたグルジア教会に、正教会のギリシャ教会の礼拝式と教義を授けた。　グルジア教会の初代主教には、長老ヨハネが任命され、彼はアンティオキア都主教区の管轄下に置かれた。このため、今日に至るまで、アンテ

、真の神から真の神として生まれ、造られたのではなく、父と同一の本質を持ち、天と地にあるすべてのものは彼によって造られた方、　私たちのために人となり、私たちの救いのために降臨し、受肉し、人となり、苦しみを受け、三日目に復活し、天に昇り、父の右に座し、再び来られて生ける者と死んだ者を裁かれる方。また、聖霊を信じます。　また、神の御子について、かつて存在しなかった時期があったとか、生まれる前は存在しなかったとか、存在しないものから生まれたとか、他の位格や本質から存在したとか、あるいは神の御子が変容しうる、あるいは変化しうるものであると語る者たちを、カトリックかつ使徒的な教会は破門する」。 – 現在用いられている「信仰告白」の本文は、381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議で制定された。

[1998] グルジア、すなわち古代のイベリアは、ザカフカズ地方にある国であり、東と西をカスピ海と黒海に面し、北はコーカサス山脈に囲まれ、南はアラクス川とアララト山に接する四角形の地域を形成している。　グルジアには、カヘティ、グリア、イメレティ、カルタリニア、ミングレリア、アブハジア、スヴァネティ、オセチア、ダゲスタンが含まれていた。

[1999] アンティオキアのエウスタフィオス司教がイベリア・グルジアに到来したことについては、ギリシャの著述家たちによって特に言及されていないものの、　しかし、それはグルジアにおける普遍的な伝承だけでなく、コンスタンティノープルの皇帝やグルジアの王たちによってアトス山のイヴェル修道院に下賜された文書によっても疑いなく立証されており、それらの文書は現在も同修道院に保存されている。（『グルジア教会の簡史』。編：P. イオセリアン。 第2版、サンクトペテルブルク、1843年、13頁。『使徒に等しい聖ニナの生涯』、アフォン修道院刊、1900年）。

ィオキア総主教の称号には「イヴェル（グルジア）の」という語が付けられている[2000]。このように、現在のグルジア正教会とロシア正教会の統合に際し、聖エウスタフィオスは、現在の全ロシア正教会の最も古くからの正教エクザルハト全体の初代主教である。

当時、新しく設立されたばかりのグルジア正教会の整備が完了すると、聖エウスタフィオスは、この若きキリストの教会に平和を祈り、アンティオキアへと戻った。

アンティオキアでは、熱心な聖エウスタフィオスを、さらなる過酷な労苦と厳しい試練が待ち受けていた。全地公会議の後、教会全体に平和と完全な一致がもたらされるという確信は、虚しいものとなった。　実は、前述のアリウス派に傾倒していた司教たちは、個人的な思惑や計算に基づき、心からの同意ではなく、表向きだけ公会議の過半数のメンバーに賛同していたことが判明した。ニカイア公会議の後、コンスタンティヌス皇帝が帝国の西部へ向かった際、アリウス派は再び頭をもたげた。　彼らはまず、皇帝に近しい長老を通じて、アリウスおよび彼を公然と支持していた司教たちの流刑からの帰還を働きかけ、彼らが誤った見解の犠牲者となったこと、そして流刑者たちがニカイア公会議の決議を受け入れる旨の書面による声明を皇帝に提出することを説得し、彼らの帰還を実現させた。　教会に平和をもたらすことを何よりも望んでいた皇帝は、流刑から戻った者たちに対しても好意を示したが、　しかし、彼らはこれを悪用してアリウス派の誤りを広め、様々なもっともらしい口実の下で、正統信仰の主要な擁護者である聖アレクサンドロス司教、続いて聖アタナシオス・アレクサンドリア司教、そして聖エウスタティオス・アンティオキア司教を迫害し始めた。

アリウスの同調者たちは、ニカイア公会議の後、コンスタンティヌス皇帝が例外なくすべての人々に対して教会内の完全な和解を強く求めた結果、もはや誰もアリウス派の誤りの拡散に立ち向かう者はいないだろうと期待していた。　しかし、聖エウスタフィオスは、全地公会議によるアリウス主義の非難を根拠として、これまで以上に熱心にアリウス主義の拡散に抵抗し、それをさらに強く糾弾し続けた。　また、パレスチナのケサリアの司教エウセビオスが、アンティオキアの司教に部分的に従属していたものの、全地公会議以前からもアリウス派の観点を堅持しており、その信条の草案にも同様の傾向が見られたことを知っていた聖エウスタフィオスは、エウセビオスに対しても、アリウス派の誤謬に対する諭しと非難の手紙を送った。　エウセビオスはこれに激しく憤り、公会議で承認された聖エウスタフィオスの教義を非難し、それらをサベリウス派[2001]と呼んだ。そして、アリウス派の教義に固執し続け、流刑から戻った友人であるニコミディオスのエウセビオスに、聖エウスタフィオスについて不満を訴えた。　そして、このニコミディウスのエウセビオスは、最も狡猾で陰険なアリウス派の司教であった。　皇帝コンスタンティヌスでさえ、神ご自身によって証しされた通り、ニコミディアの人々に、エウセビオスがキリスト教徒を激しく迫害し拷問したリキニウスの同盟者であり手先であったこと、エウセビオスが至る所で反駁されたアリウス派の虚偽を恥知らずにも擁護し

[2000] 『聖使徒同等のニナ（グルジア）の生涯』第5版、1900年、23–25頁、『グルジア教会の簡史』、イオセリアン編。第2版、サンクトペテルブルク、1843年、12–14頁および20頁。数年が経過した後、ミリアン王はコンスタンティヌス皇帝に第二の使節団を派遣し、さらに多くの司祭と熟練した教会建築家をグルジアに送ってほしいと要請した。　この要請に応え、コンスタンティヌス大帝は、大量の金や銀、そしてキリストの十字架の台座の一部（主イエス・キリストが十字架に釘付けにされた際の釘の一つが埋め込まれたもの）を送った。　さらに、救い主キリストと至聖なる聖母マリアのイコン、そして聖堂の礎として用いられる聖殉教者たちの聖遺物も、グルジア人に数多く贈られた。　その際、ローマで人質となっていたミリアンの息子であり王国の後継者も、父のもとへ解放された。彼は熱心なキリスト教の布教者であり、至る所に教会を建立し、信仰を確固たるものにした。

[2001] サヴェリウスは異端者であった。彼の生涯に関する情報は極めて乏しい。彼は3世紀前半頃に生きた人物で、リヴィアのプトレマイダ出身であった。サヴェリウスは、神は名目上のみ三位一体であると説いた。すなわち、父、子、聖霊は、ただ一つの神の御人格における三つの名と三つの働きに過ぎないというのである。　旧約聖書において、神は人々に律法を与える父として現れ、新約聖書においては、人々を救う子として現れ、今もなお、人々を聖化する御霊として現れ続けている。3世紀後半、アレクサンドリアとローマで開催された教父たちの公会議において、サヴェリウスの教義は異端として非難された。

、 彼、コンスタンティヌス皇帝さえも卑劣に欺いたと記している[2002] ... そして、この狡猾なニコミディアのエウセビオスは、友人であるニカイアのテオグニスやケサリアのエウセビオスと共に[2003] 、彼らの誤りを倦むことなく熱心に糾弾する聖エウスタフィオスを、アリウス派から排除することを決意した。

コンスタンティヌス帝は、コンスタンティノープルが建設されるまでは、ニコミディアに頻繁に滞在していた。彼に媚びを売り、聖エウスタフィオスを排除するという自らの計画を実行するため、狡猾なニコミディアのエウセビオスは、コンスタンティヌス帝に対し、当時コンスタンティヌス帝が主の御墓のそばに建設したばかりの壮麗な教会堂をぜひ見てみたいという熱烈な願望を表明した。その願いに心を動かされた皇帝は、エウセビウスに自身の帝王の馬車を貸し与え、それによってエウセビウスの旅は格別な栄誉を帯びることとなった。エルサレムの聖地を参拝するというもっともらしい口実の下、彼の邪悪な企みの忠実な共犯者であるテオグニス・ニカイアも彼に加わった。 敬虔さを装ってアンティオキアに到着した彼らは、聖エウスタフィオスによって心温かく迎えられ、司教にふさわしい敬意をもってもてなされた。そして彼らがエルサレムに到達すると、古代の歴史家[2004] は次のように記している。そこで彼らは、 （アリウス派の）エウセビオス・ケサリアス、パトロフィルス・スキフォポリス、アエティウス・リデス、テオドトス・ラオディキアスら、アリウスの教義に染まっていた者たちと面会すると、聖エウスタフィオスを排除するという彼らの秘密の企てを明かした。 エウセビオス・ニコミディウスに敬意を表するという口実の下、これらの同志たちは彼をアンティオキアまで付き添い、そこで聖エウスタフィオスに対しても多大な敬意を示した。これは、彼が仕掛けられた狡猾な罠に気づかないようにするためであった。 当時、アンティオキアには正統派の司教たちも数名滞在していたため、アリウス派の者たちは、教会のいくつかの共通の課題や事柄について議論するための兄弟愛に満ちた公会議を開くことを提案し、聖エウスタフィオスや他の司教たちはこれに同意した。

そして、ちょうど司教たちが集まったその時、突然、赤ん坊を抱いた女性が現れ、叫び声を上げて、その赤ん坊の父親はエウスタフィオスだと宣言した。 聖 アンティオキアは、少しも動じることなく、その女性に、彼女の主張を知っている証人を提示し、その証拠を提示するよう求めた。しかし、彼女は証人はいないと答えた。これに対し、アリウス派の司教たちは、その女性が宣誓によって告発を裏付ければ十分だと主張した。 一方、正統派の司教たちはこれに同意せず、古代の規則および使徒の指示（テモテへの手紙第一5:19）によれば、司祭に対する告発を認めるには少なくとも2人または3人の証人が必要であることを指摘し、そのため、アリウス派がアンティオキアの聖エウスタティオス[2005] を非難するために下そうとした決定に反対した。

2002 エウセビオスとテオグニスに対するコンスタンティヌス帝のニコメディア人への書簡――『世界公会議の議事録』1859年版、第1巻、199–203頁。

2003 エウセビオス・ニコミディウスは、ルキアノスのアンティオキア学派に所属していたアリウスの友人であり同志であったが、不信仰を理由に教会から破門された。一方、エウセビオス・ケサリウスは両者の友人であり、公会議においてのみならず、それ以前も以後もあらゆる場面で彼らの立場を支持したため、穏健派アリウス派の指導者と見なされている。パレスチナのケサリアは、地中海東岸にあるパレスチナの主要都市であった。この都市名は、皇帝（オクタヴィウス）アウグストゥスに敬意を表して、皇帝にちなんで都市を建設していたユダヤ王ヘロデによって名付けられた。 ケサリアにおけるキリスト教の始まりは、使徒ペトロが百人隊長コルニリウスとその家族全員を改宗させたことに遡る（使徒行伝10章）。 エルサレムの破壊後、ケサレアは司教の居所となり、451年までエルサレム教会は同司教の管轄下にあった。現在、かつての壮麗なケサレアには、廃墟の山だけが残されている。

2004 テオドリトス、キルスクの司教。『教会史』、1852年刊、第21章、84–86頁。

2005 『教会史』、原典に基づく刊行。D. B. ヴラド・ゲッテ著。サンクトペテルブルク、1875年刊、同巻、64–65頁。

一方、アンティオキアの正教徒たちは、外来の司教たちの陰謀によって、彼らが愛する大牧者エウスタフィオスが侮辱されたと聞き、激昂し、アリウス派の支持者たちに対して武器を取る覚悟さえしていた。　そこで、ニコミディウスのエウセビオスとニカイアのテオグニスは、聖エウスタフィオスに対する自らの企てが教会内で失敗に終わったことを悟ると、　急いで皇帝のもとへ赴き、アンティオキアで民衆の騒動が起こっていることを報告した。その騒動は、あたかもアンティオキアのエウスタフィオス司教が自身の宗教的見解を擁護するために引き起こしたものであり、それによって教会が切望していた平和が乱されていると主張した。　彼らはこれにさらに新たな誹謗を付け加え、エウスタフィオス司教がコンスタンティヌス皇帝の母を侮辱的に言及していたと[2006]　。彼らには、聖エウスタフィオスに対して皇帝をより断固として敵対させるために、このような憤慨すべき誹謗に訴える必要があった。というのも、　アンティオキアで聖エウスタフィオスを誹謗した女性は、その誹謗の後、重い病に倒れ、多くの司祭や正教徒の市民を呼び寄せ、皆の前で、アリウス派から賄賂を受け取り、エウスタフィオス司教を誹謗するよう仕向けられたことを告白した；　さらに彼女は、司教たちの前で述べた宣誓が完全に虚偽ではなかったと説明した。というのも、その子の父親である地元の大工も、エウスタフィオという名だったからである。　この女性がアリア派から買収されていたことを認めたことで、聖エウスタフィオスの敵たちは、自らの共犯者によって恥をかかされ、女性の告発を利用してエウスタフィオス司教を罷免しようとする企ては失敗に終わった。そのため、彼らは、アンティオキアの聖人が皇后を侮辱したという、憤慨すべき誹謗中傷に訴えることになったのである。

あらゆる手段を尽くしてキリスト教徒間の平和を維持しようとしていた皇帝は、この誹謗に騙され激怒し、何よりもまずアンティオキアにおける民衆の動揺を鎮めるため、聖エウスタフィオスをコンスタンティノープルへ召喚した（[2007]）。

一方、聖エウスタフィオスは、アンティオキアからの追放を予見し、その前にますます頻繁に正教徒の市民を集め、心からの雄弁さと深い知識のすべてを尽くして、自身の不在中に異端の偽りの思索に惑わされることなく、揺るぎなく正教に忠実であり続けるよう彼らを説得した[2008]。

聖ヨハネス・クラマトルスは、このことについて次のように証言している[2009]：「聖エウスタフィオスは、目を覚まして見守り、遠くから起こるべきことすべて（アリウス派による正教への攻撃）を予見し、賢明な医師のように、病が街に侵入する前に、この地にとどまり、薬を調合し、アンティオキアの羊の群れという聖なる船を大いなる先見の明をもって導き、　あらゆる場所を訪れ、すべての人を鼓舞し、　、まるで海賊が襲来し、信仰という宝を奪おうとしているかのように、注意と警

2006　『教父に関する歴史的教義』、フィラレート・チェルニゴフ大司教、1859年刊、第II巻、25頁。同様の証言として、N. バルソフ教授によるものもある。

2007 歴史的研究、「聖徒行伝における発見」（オランダ学者による刊行）第IV巻。 また、英語・ドイツ語・フランス語版『聖なる教父および殉教者の行伝』（バトラー、レス、ワイスによる翻訳・編集）、第9部、ドイツ語版、1824年刊。

2008　「東西を包み込んだ、分裂前の教会時代に定められた原則を保存し、損傷から守るという志向こそが、東方教会において『正教』と呼ばれるものである」。　「正教会とは、古代の普遍教会の教義を正しく、かつ不変に保持し、その創設者であるイエス・キリストとその使徒たちによって定められた原則に、あらゆる点において忠実であり続ける教会である」。（『正教会法入門』。D. B. M. A. オストロウモヴァ著。第1巻、1893年刊、27–28頁および670頁）。

2009 聖ヨハネ・クラマティオスの著作全集。1896年刊、第2巻、第2冊、646–647頁および649頁。 聖エウスタフィオス、大アンティオキア大司教への賛辞――聖ヨハネス・クラマトルス（金口ヨハネス）、コンスタンティノープル大司教は、4世紀後半から5世紀初頭にかけての普遍教会の著名な教父であり、特にその説教と聖書の解釈によって名声を博した。 その並外れて卓越した雄弁さから、「金口」と呼ばれた。347年にアンティオキアで生まれ、23歳の時に洗礼を受けた。 生涯の大半を大アンティオキアで司祭として奉仕し、4世紀末にコンスタンティノープル司教に任命された。司牧生活のこの最後の時期には、皇帝アルカディウスの妻である皇后エウドクシアの影響により、多くの迫害に遭い、　アルカディウス皇帝の皇后エウドクシアの影響により、数多くの迫害に遭い、407年にアルメニアへの流刑先で殉教した。正教会において一年の大半に行われる典礼の式次第は、彼によるものである。彼の記念日は1月30日と11月13日に祝われる。

戒を促した……　そして、すべての人を呼び集め、（真の信仰から）離れないこと、狼たちに屈服せず、彼らに群れを売り渡さないこと、むしろその中に留まり、彼らの口を封じ、彼らを糾弾し、兄弟たちの中でも最も単純な者たちを励ますよう諭した……　そして彼は至る所に人々を派遣し、教え、説得し、助言し、敵の侵入を阻むようにした……」

そして、聖エウスタフィオスの代わりにアリウス派寄りの司教がアンティオキアに任命されたにもかかわらず、アンティオキアの信徒の大多数は正統派に忠実であり続けた。というのも、民衆はそうした司教たちを敬遠し、多くの正統派の司祭たちと共に、アリウス派とは別の集会を形成したからである。そのため、アリウス派は彼らを「エウスタフィアン派」[2010]と呼んだ。それは、彼らが全地的な使徒的正統信仰に忠実であったからである。

しかし、アンティオキア市民の大多数が聖エウスタフィオスの正統的な教えに忠実であったことから生じたこの民衆の分裂は、皇帝の聖人に対する敵意をさらに煽り、331年に、裁判もなしに、また司教職を剥奪されることもなく、聖エウスタフィオスをフラキアへ追放するという皇帝勅令の発布につながった[2011]。しかし、キリストの殉教者は、その地においても異端者を糾弾しつつ、真の正統信仰を説き続けた。「彼は――金口ヨハネの証言によれば――聖霊の恵みによって、教会の指導者は、聖霊によって委ねられたその一つの教会だけでなく、全宇宙にわたる教会全体をも顧みなければならないことを深く教えられていた。　このことを彼は聖なる祈りから学んだ。「もし、宇宙の果てから果てまで、全宇宙の教会のために祈りを捧げるべきであるならば、なおさら、その教会全体に対して配慮を示し、すべての（教会）を等しく気遣い、すべてを慈しむべきである……」と聖エウスタフィオスは語った。　エウスタフィオスは追放されたが、その声は沈黙しなかった。人は追放されたが、教えの言葉は追放されなかった」[2012]。

一方、アリウス派の異端者たちは、コンスタンティヌス帝の後継者たちの治世下ですでに完全な影響力を獲得しており、聖エウスタフィオスをさらに締め上げ、その活動を監視するため、彼をフラキアからマケドニアの都市フィリッポスへ移住させるという新たな皇帝勅令の発布を強く求めた[2013]。　そこで、345年頃、生涯を通じて異端の迷いを絶えず退け、真の神への正しい信仰を説き続けた聖エウスタフィオス・アンティオキアは、この世を去った[2014]。

[2010] テオドリトス、キルスの司教、『教会史』。1852年刊、第22章、87頁。ヴラジーミル・ゲッテ編『教会史』、1875年刊、第3巻、65頁。 その後、アリウス派は正統派のアンティオキア派を「カンペンシ」とも呼ぶようになった（「campus（野原）」に由来）。これは、アリウス派が世俗当局の支援を受けて正統派の教会を接収・占拠したため、正統派が礼拝のために野原などで集まるようになったことに起因する。　聖ヒエロニムス・ストリドンスキーの著作を参照。第2版、1893年、第1部、55–56頁（『生涯』）。

[2011] 聖ヒエロニムスは、これが正教の「信仰」ゆえの流刑であったと記している。（『ヒエロニムスの年代記』、332年）。　古代において、トラキアとは、マケドニア、エーゲ海、マルマラ海の北側にあるバルカン半島全域を指し、現在のハンガリーの一部、トランシルヴァニア、ベッサラビア、ルーマニア、ブルガリア、セルビア、およびルメリア東部を含む地域であった。　トラキアは、金属資源の豊富さ、歌、そして音楽で知られていた。ローマ人はキリスト降誕の20年ほど前にこの地を征服した。

[2012] 聖ヨハネ・クラマティスによる、私たちの聖なる父エウスタティオス・アンティオキアスへの賛辞、1896年、第2巻、第2冊、647ページ。

[2013] フィリッピは、マケドニアのマリツァ川沿いにある都市で、かつては古代ギリシャの植民地であったが、マケドニア王フィリッポスによって占領され、フィリッピと名付けられた。現在はフィリッポポリス、ブルガリア語ではプラヴディノグラードと呼ばれる。使徒パウロは、この都市のキリスト教徒であるフィリッピの人々に向けて、有名な書簡を書いた。

[2014] 聖エウスタフィオスの没年について、古代の文献には完全な正確な記録は残されていない。チェルニゴフ大主教フィラレートとN・バルソフ教授は、その没年を345年としている。

381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議の直後、 コンスタンティノープルで開催され、第1回ニカイア公会議の信仰告白を再確認するとともに、アリウス派、半アリウス派、および正統なキリスト教の教えに反して生じたあらゆる異端に対する破門宣告を繰り返し確認した――その後、真の信仰のために殉教した聖エウスタティオス・アンティオキアスを称える好機が訪れた。 そして382年、[2015] 、その聖遺骨[2016] は、彼を熱烈に崇敬していたアンティオキアの人々を慰めるべく、盛大な儀式をもってアンティオキアへ移送された。

民衆に愛され、すべての正教会の教父たちから深く尊敬され、教会の著述家たちによって称賛された聖エウスタフィオスは、教会への功績と貢献において、輝かしい第四世紀の最も著名な司教の一人である。 第7回全地公会議の聖なる教父たち[2017] は、聖エウスタフィオス・アンティオキアスを「正統信仰の堅固な擁護者であり、アリウス派の不敬虔を打ち砕いた者」[2018] と称した。 古代西方教会の教父たちの中でも最も著名な聖ヒエロニムス[2019] は、聖エウスタティオスがアリウスに反対して最初に著述した人物であったと証言し、聖人の学識に驚嘆しつつ、彼が神学および世俗の学問、とりわけ哲学において極めて教養が高く、信仰に関する無数の書簡を著したと述べている。 聖アタナシウス・アレクサンドリアス、ヨハネス・クロイスストモス、バシレイオス大帝[2020] 、エピファニオス

[2015] 『東方教会暦大全』。セルギイ大主教。 1876年刊、第II巻、第2部、58頁。2月21日の記述。この聖遺物の移送について記しているのは、6世紀の著名な歴史家フェオドール・シュテツである。彼は『教会史』を4巻著しており、最初の2巻は先行する歴史家たちの記述に基づいており、最後の2巻は独自に執筆したものである。

[2016] 聖教会において、「聖遺物」という名称は、広い意味で、亡くなったすべてのキリスト教徒の遺体を指す。したがって、故人の埋葬の儀式では、「故人の聖遺物を受け取り、（それを携えて）教会へと向かう」と述べられている。 しかし、本来「聖遺骨」とは、神に愛された聖人たちの尊い遺骸を指す。とはいえ、ここでも「聖遺骨」という言葉には様々な意味がある。聖遺骨とは、まず第一に、聖人たちの「骨」を指す。こうして、古代のキリスト教徒たちは、聖殉教者イグナティオス・テオフォロスとポリカルポス・スミルナスの骨を崇敬していた。 教会史家エウセビオスは、4世紀における聖使徒ルカとティモテオの聖遺骨の移送について語る際、総主教がそれらを小さな「聖遺物箱や箱」に入れて自分の膝の上に置いていたと付け加えている。 明らかに、これらの聖遺物箱には聖使徒たちの遺骨しか収まらなかった。私たちの先祖にとっても、「聖遺物」という言葉は主に「遺骨」を意味していた。 一方、聖人の遺骸の中には、故人の全身が保存されているものもあり、その保存状態は極めて良好で、四肢の柔らかさや柔軟性さえも保たれている。例えば、コルフ島にある聖スピリドン・トリミフントスの遺骸は、1,500年以上もの間、湿気と暑さの厳しい気候にさらされながらも、四肢の柔軟性を保っている。（『ミッション。信仰の盾』。編：I. スモリン。サンクトペテルブルク、1904年刊、64ページほか）。

[2017] 第7回全地公会議は、787年、イリナ女帝とその息子コンスタンティノスの治世下、第1回全地公会議と同じ場所であるビフィニアのニカイア市で開催され、そこで偶像崇拝反対派に対抗して、聖像崇拝に関する教義が確立された。 この公会議の原本議事録は完全に保存されており、1891年にカザン神学アカデミーによりロシア語で刊行された。

[2018] 『全地公会議の議事録』は、1891年にカザン神学アカデミーによりロシア語訳として刊行された（第VII巻、233頁）。

[2019] 聖ヒエロニムス・ストリドンスキーは、330年にダルマチアとパノニアにまたがる小さな町ストリドンで生まれた。彼の父は敬虔な貴族であり、ヒエロニムスは420年に90歳でこの世を去った。 その広範かつ多面的な学識、たゆまぬ活動、そしてキリスト教の学問とキリストの教会のために残した偉大な著作、さらに真に修道者らしい模範的な生涯により、至福のヒエロニムスは、古代西方教会の最も著名な教父・教師の一人に数えられている。彼は生涯の大部分を東方で過ごした。 至福のヒエロニムスの著作集（キエフ神学アカデミー刊、第2版1894年、第2巻、266頁）。『福音への手紙』第68書簡（長老宛て）および251–252頁の第65書簡。

[2020] 聖バシレイオス大主教（カッパドキアのケサリアの司教）は、330年頃、カッパドキアの主要都市ケサリアで、由緒ある高学歴の家庭に生まれた。 18歳の頃、コンスタンティノープルとアテネへ赴き、そこで学業を輝かしく修了し、ケサリアに戻った後、25歳の時に洗礼を受け、「朗読者」に任命された。 364年に司祭に叙階され、370年には司教に叙階された。379年に死去した。彼はアリウス派から正統な信仰の教義を熱心に擁護したが、アリウス派だけでなく、彼がアリウス派に対してあまりにも融和的な態度をとっていると見なした正統信仰の熱心な擁護者たちからも敵意を向けられた。彼は、アリア派の異端を熱烈に支持していた当時の皇帝ヴァレンティヌスの、ケサリア教会をアリア派に引き込もうとす

・キプロス[2021] 、アナスタシオス・シナイ[2022] らもまた、聖エウスタフィオスの高い教養と宗教的熱意を裏付けている。　また、当時の著名な歴史家であるキルスクの司教テオドリトスは、聖エウスタフィオスを、聖アタナシオス・アレクサンドリアスや、当時の正教の最も重要な擁護者たちと同様、教会と敬虔さの最大の支柱であると称している[2023] 。　また、5世紀半ばの歴史家ソゾメンは、「聖エウスタフィオスの説教の技量と雄弁さには、同時代の人々が極めて驚嘆していた。この（技量）は、に掲載されている、現在も完全な形で残されているエウスタフィオスの著作に見ることができる」と述べている――とソゾメンは主張している[2024] 。「残念ながら」とチェルニヒウの大司教フィラレートは指摘している（[2025] ）、「現在、エウスタフィオスの著作が完全な形で残っているとは言えない。しかし、現存する部分からも、古代の人々がエウスタフィオスの著作を称賛したすべての資質がうかがえる」。 完全に保存されているのは、前述の『第1回全地公会議におけるコンスタンティヌス皇帝への演説』と『アエンドールの魔女』のみである。聖エウスタフィオスの他の多くの著作については、古代の著述家たちによって作成された抜粋のみが現代に伝わっている[2026] 。

アリウス派を批判する著作の現存する抜粋から、聖エウスタフィオスがそれらを8冊執筆したことがわかる。　これらの抜粋は、真理の擁護者がまず第一に、キリスト・イエスの人間性について語る聖書の箇所と、彼を神の子および神として描く箇所とを区別することに重点を置いていたことを示しており、聖エウスタフィオスは、それぞれの箇所の意味を正確に解明することで、これを特に見

る企てに断固として反対した。　聖バシレイオス大主教は、数多くの素晴らしい著作や典礼式文を通じて、教父文学に極めて豊かな貢献を残し、その功績によりキリスト教信仰の「全教会の教師」という称号を授けられた。記念日は1月1日と30日である。

[2021] 聖エピファニオスは、キプロスの司教、より正確にはキプロス島のサラミナ市の司教であり、ユダヤ人出身で、16歳で洗礼を受け、60歳の時に司教に叙階された。　厳格な修道者でありながら、子供のような純真さ、優しさ、そして慈善の心で知られていた。パレスチナに修道院を設立し、約30年間にわたりその院長を務めた。奇跡を行う賜物に恵まれ、多くの言語に通じ、正教の熱烈な擁護者であった。403年、高齢の老者としてこの世を去った。 彼の主な著作は「異端について」であり、『アリウス派とドゥホボルツ派に対する錨』および『80の異端に対する薬箱』――古代の異端および彼の同時代の異端に対するものである。記念日は5月12日。

[2022] アナスタシオス・シナイテス、あるいはキノヴィトスと呼ばれる人物は、6世紀後半のシナイ山の修道士の一人であり、アンティオキア総主教を務めた。彼は（宮廷の）異端者たちに対して正教を熱心に擁護したため、ユスティニアヌス帝の怒りを買い、その聖なる生涯にもかかわらず、　追放され、20年以上をそこで過ごした。この幽閉生活中、彼は多くの神学著作を著し、特にイエス・キリストにおける二つの本性および二つの位格に関する問題について論じた。　聖アナスタシオス・シナイテスは、聖エウスタフィオス・アンティオキアスを「神聖なる者」と呼び、彼を、神の道において完全な人、賢明な説教者、聖なる殉教者、教師、自身の父であり守護者、そして神に霊感を受けた人として見なしていると記している。

[2023] 『キルスのテオドリト司教の教会史』。ロシア語版、サンクトペテルブルク、1852年、第1巻、第VIII章、第XXV章など。また、『教会史学』D. B. A. P. レベデフ著、1898年版にも収録。

[2024] エルミオス・ソゾメノス（サラミスの、その家系の姓による）は、ギリシャの教会史家であり、パレスチナ出身の法学者である。彼の『教会史』は323年から439年までの時代を網羅している。彼は5世紀半ば、修道士たちの影響下で教育を受けた。キリスト教の最初の3世紀に関する彼の歴史書は現存していない。　一方、4世紀の『教会史』はロシア語訳として1851年に出版された。そこでは、エウスタティオス・アンティオキアスについて、22、121、123ページなどに言及されている。 しかし、ソゾメンが（404ページで）「イオビアンによって復職させられ、エヴァルギオスを司教に叙任した」と記しているそのエウスタフィオスは、聖人ではなく別の人物であった。（『教父史』、25–26ページ）。

[2025] 『教父史』。フィラレート、チェルニヒフ大主教著。1859年刊、第2巻、26頁。

[2026] これらの抜粋およびアエンドルの魔女に関する全著作（コンスタンティヌス皇帝への演説を含む）は、『ゴランド図書館』第4巻および『パトロロギア・マイナ』第18巻に収録されている。 また、ファブリツィオのギリシャ語図書館（第9巻、p. 133、fol. 68、170）にも収録されている。『教会父たちに関する歴史的・学術的研究』。フィラレート、チェルニヒフ大主教。1859年、第II巻、26頁。

事に成し遂げている[2027]。 これにより、彼は、キリスト・イエスの卑しい状態に関する箇所を意図的に探し出し、他の種類の箇所を自らの注意から、とりわけ他者の注意から遠ざけていたアリウス派に対して、最も決定的な打撃を与えたのである。 また、アリウス派に対しては、ソロモンの箴言（8:22）およびダビデの詩篇（15～56篇および92篇）に関する注釈が記されている。アリウス派は、前者の箇所も、また示された詩篇の中のいくつかの言葉も、自分たちの教義の真実性を証明するものとして用おうとしていた。 聖エウスタフィオスはここでも、彼らに対して同じ手段を用いている――すなわち、救い主の人間性と神性に関する聖書の言葉をつなぎ合わせ、解説しているのである。 このように聖書を解説することで、聖エウスタフィオスはアリウス派に対し、キリストにおいて神性と人間性が、それぞれの性質を変えることなく結合されていたこと、また、神の御子が律法の下にあったのは、罪と裁きの奴隷たちを救うためだけであったことを示した。 「不敬虔な者たちが考えるように、御言葉が律法に従わなければならなかったわけではない」と聖エウスタフィオスは記している。「御言葉そのものが律法である。また、神は清めの犠牲を必要とされなかった。 御方は一挙にすべてを清め、聖別される。しかし、御方は聖母から授かった人間の器を身にまとっておられたため、律法の下におられたのである――律法の奴隷状態から、呪いの宣告を受けた者たちを解放するために……」

聖エウスタフィオスの著作がこのような方向性を帯びていることは、聖書に関する「注解集」の中に、アンティオキアの聖エウスタフィオスの解釈が極めて頻繁に見られる理由を十分に説明している[2028]。

『魂について』という著作は、主イエス・キリストの魂に関する聖エウスタフィオスの哲学的・神学的な考察であり、アリアニズムの誤謬に対抗するものでもある。

最後に、聖エウスタフィオスの『アエンドルの腹の魔術師について』という著作は、高尚な思想の展開、文体の美しさ、そして比喩の美しさの点で模範的な作品であり、この著作を手にしたすべての著述家や教父たちが聖エウスタフィオスの著作に対して寄せた称賛にふさわしいものである。この著作の中で、聖エウスタフィオスは、とりわけ、オリゲネス[2029]に対し、聖書 の解釈において、言葉の直截な意味や文字通りの意味ではなく、過度に寓意的解釈を好んだことについて、厳格ながらも公正な指摘を行っている。すなわち、オリゲネスは「言葉の文字通りの意味とは異なった寓意的解釈を行い、 ――聖エウスタフィオスはこう記している――アブラハムが掘った井戸や、それに関連する事柄について、長い説教の中で、そのすべてに別の意味を与えている。それに対し、それらの井

[2027] 『教父史』フィラレート（チェルニゴフ大主教）。1859年、第II巻、27頁。

[2028] 例えば、『創世記』の注解集（Fabrit. Bibl. graec. 8, p. 641, 643–645）、『列王記』および『ソロモンの箴言』の注解集（Bibliot. Coislian p. 43–45, p. 60, 247）など。

[2029] オリゲネスは、3世紀半ば（254年に没）のアレクサンドリア教会の著名なキリスト教教師であり、アレクサンドリアの調和学派の傑出した教理指導者であり、その後、パレスチナのケサリアで長老の職に就いた。 オリゲネスは2世紀末にアレクサンドリアで生まれ、キリスト教を公言したために処刑された父に続き、17歳の若さで孤児となった。デキウス帝の迫害の際、投獄され、そのことで健康を損ない、70歳前後で死去した。 そのたゆまぬ勤勉さから、「アダマントス（ダイヤモンド）」と呼ばれた。多くの教会の聖なる教父たちは、オリゲネスに初期の教えや異教からキリスト教への改宗を負っていた。例えば、聖グリゴリオス・ネオケサリウスなどが挙げられる。 彼の数多くの著作は、異端者やキリスト教の敵に対するキリスト教の擁護を目的としており、特に聖書に関する著作は傑出している。そこでは、信仰と知識および哲学との調和を図ろうとしたが、オリゲネスはしばしば恣意的で、教会全体に共有されていない解釈や考えを表明していた。例えば、 聖三位一体の位格や魂の創造について、自身の個人的な推測として述べたものの、その支持者たちはそれらを極端なまでに発展させ、異端へと至らせてしまった。 6世紀には、オリゲネスは10の異端で告発され、543年のコンスタンティノープル地方公会議において、異端者として有罪判決を受け、破門され、その著作は異端として破棄すべきものと宣言された。

戸は、今なおその地で肉眼で見ることができるのである」…… また、エン・ドルの魔女[2030]（サムエル記上28章）について、聖エウスタフィオスはオリゲネスに反して、彼女が預言者サムエルの魂を呼び出すことはできず、また呼び出さなかった[2031] と論じ、彼女の魔術によって現れたのは、サムエルを装った幻影に過ぎず、それはサウルを欺き、破滅に導くためであった[2032] と主張している。 ここで聖エウスタフィオスは、旧約聖書において義人の魂はアブラハムの懐に安らぎ[2033] していたが、イエス・キリストがご自身の復活によって天の御国の門を開かれるまでは、天に昇ることはできなかったと教えている。 新約聖書の義人たちは、それらの義人たちよりも幸福である――彼らは肉体から離れるやいなや、すでに天の栄光に達し、すでに主イエス・キリストとのある種の交わりを得ているからである[2034] ...

聖エウスタフィオス・アンティオキアスの生涯と活動は、教会の牧者たちだけでなく、あらゆる立場にある正教会のキリスト教徒にとっても、非常に教訓に富んでいる。 これについて、上記に加え、キリスト教信仰の普遍的な教師である「金口」ヨハネスが、私たちの聖なる父エウスタフィオス・アンティオキアスへの長大な「賛辞」の中で、すべての正教徒に向けて示しているいくつかの一般的な指針を以下に挙げる[2035] 。

「聖エウスタフィオス・アンティオキアスへの賛辞の言葉を始め、私がこの聖人を殉教者と呼んだことに驚かないでください。彼は死によってその生涯を終えたのですから、どうして殉教者と言えるのでしょうか。私はたびたび皆様に、殉教者となるのは死そのものだけではなく、心の在り方によっても決まると申し上げてきました。 殉教の冠は、行いの結末だけでなく、その意図によっても編まれることがよくあるのです…… 聖エウスタフィオスは、キリストのために、自国ではなく異国の地で死を遂げました。これは敵の仕業です。彼らは彼を辱めるために祖国から追放しましたが、異国への追放によって、彼はさらに栄光と名声を得ることとなりました。その結末がそれを証明しています…… 聖エウスタフィオスは、使徒パウロと同様に、数え切れないほどの死に備えており、それらすべてを穏やかな心と熱意をもって耐え抜き、彼を襲った多くの危険も、自らの経験を通じて乗り越えた。 そして、彼は祖国から追放され、当時、この祝福された方に対して多くのことが仕掛けられた。しかし、彼らには告発する正当な理由は何一つなく、ただ、使徒パウロの言葉によれば、彼の敵たちが「*神の真理を偽りに取り替え、創造主の代わりに被造物を礼拝し、仕えた*」（ローマ1:25）

2030 アエンドル、あるいはエンドル（「住まいの泉」の意）は、パレスチナのキッソネ川沿いにあった小さな町であった。（サムエル記上28章）に言及されている魔女がアエンドルの近くに住んでおり、ユダヤの王サウルは夜、彼女の元を訪れ、亡くなったサムエルを呼び出してくれるよう頼んだ。 今でも、ナザレの近くには、その魔女が住んでいたとされる洞窟が旅行者に案内されている。現在、アエンドルの跡地には、エンドゥルと呼ばれる貧しい小さな村がある。

2031 サムエルは、キリスト降誕の11世紀前に活躍したイスラエルの士師たちの中で、最後にして最も著名な人物であった。彼は、民衆の愛国心と啓蒙を喚起するための宗教的・道徳的団体として、預言者の集い、すなわち学校を設立した。彼は民を賢明に統治し、88歳で世を去る際、初代王サウルを即位させた。サムエルの生涯は、『列王記上』の最初の数章に記されている。

2032 キシュの子サウルは、ユダヤ民族の初代王であり、サムエルによって王として油注がれた。彼は40年間統治したが、当初は徳高く治めたものの、後にサムエルの助言に従わなくなったため、権力欲に駆られ、残虐な統治を行った。彼の生涯は『列王記上』9章31節に記されている。

2033 「アブラハムの懐」あるいは「アブラハムの胸」とは、旧約聖書の義人たちが死後にいる場所を意味する聖書的な表現である（ルカ16:22–23）。この表現は、ユダヤ人の夕食の席での横たわり方から取られたものであり、胸の上、すなわち膝の上に横たわることは、そうして横たわる者たちの特別な親密さのしるしであった。

2034 『教父たちに関する歴史的教義』。フィラレート、チェルニゴフ大司教著。1869年刊、第II巻、28頁。

2035 コンスタンティノープル大司教、聖ヨハネ・クラマティオス（金口）の著作、ロシア語訳。サンクトペテルブルク神学アカデミー刊、1896年、第2巻、第2冊、642–650頁。

と述べられている通り、彼の敵は「神の真理を偽りに取り替え、創造主の代わりに被造物を崇め、仕えた」のである。しかし、彼は不義から離れ、不法を恐れた。これは非難されるべきことではなく、むしろ冠に値する行いである。」

「聖エウスタフィオスはなぜ追放されたのか、なぜ神は彼に対する迫害者たちを許されたのか。なぜなのか。これらの言葉が、この一つの疑問だけを解き明かすものだと考えてはならない。いや、もしあなたがたが異教徒や異端者たちとこのようなことについて話すことになれば、ここで語られることは、あらゆる疑問を解き明かすのに十分である。　神は、ご自身の真の使徒的信仰が多くの攻撃にさらされることを許し、一方で異端や異教には平穏を享受することを許しておられる。それはなぜだろうか？　それは、　、彼らが何の妨げも受けずに自ら崩壊していく様子を見て、その弱さを知り、また、攻撃に耐え、敵自身を通じてさらに強められる信仰の力を確信するためである……　ほら、神がサタンの天使たちに、神の僕たちを襲い、彼らに数え切れないほどの災いをもたらすことを許されるのは、神の力が現れるためなのだ。　まことに、異教徒であろうと、哀れなユダヤ人であろうと、私たちが議論するにせよ、神の力の証明として私たちにとって十分なことは、キリストの信仰が数え切れないほどの戦いにさらされながらも勝利を収めたという事実であり、全宇宙が敵対し、すべての人々が熱狂的にあの十二人、すなわち使徒たちを迫害していたにもかかわらず、彼ら、　鞭打たれ、迫害され、数え切れないほどの災難に耐えながらも、短期間のうちに、彼らにこれをもたらした者たちを完全に打ち負かすことができたのである。それゆえ、神は、アンティオキアの聖エウスタフィオスも異国の地へ送られることを許された。それは、真理の力と異端者たちの無力さを、私たちにさらに明らかにするためであった」。

「聖エウスタフィオスの祈りによって、主なる神が御自身の教会をあらゆる偽りの知識と分裂から救い、柔和とキリスト教の愛の精神において教会の団結と平和を守り、そして私たち信者すべてを憐れみ、救ってくださいますように」。

「そして、すべてのことについて神に感謝を捧げ、聖人たちの美徳に倣い、主イエス・キリストの恵みと人愛によって、彼らと共に栄冠に与る者となりましょう。主イエス・キリストを通して、また主イエス・キリストと共に、父と聖霊に、世々限りなく栄光と誉れと権威がありますように。アーメン」。

3月7日

2月22日（旧暦）

聖殉教者マウリキオスとその子フォティノス、および彼らと共にいた70人の戦士たちの殉教。

記念日 2月22日

不法で不敬虔な王マクシミアヌス[2036] は、偽りの神々に仕えることで、自らに助けがもたらされ、王国が栄えると考えていた。そのため、彼はすべての臣民に対し、不敬虔な偶像に犠牲を捧げるよう命じた。　彼自身も、悪魔への熱心かつ勤勉な奉仕の模範を示そうと努め、他の人々にも不浄な生贄を捧げるよう強要した。かつての王たちと同様に、各地方の長官に偶像崇拝を徹底するよう勅令を送るだけでは物足りず、　彼は自ら、いささかの怠慢もなく領内を巡回し、悪魔の祭壇の前で儀式

[2036] マクシミアヌス・ガレリウス、ローマ皇帝――在位：306年から311年

を執り行った。この不敬虔な王は、自身の訪問によって、異教の迷いから離れ、キリストの真理を知るに至った者たちが、再びかつての邪教へと立ち返ることを期待していた。　そのような意図を抱いて、彼はローマを離れ、東方の諸地域へと向かった。その途中、シリアのアパミアという都市に到着した。そこで、偶像崇拝の祭司たちが彼に近づき、キリスト教徒を中傷し始めた。彼らはこう言った。

「至高の王よ、神々が我々にあなたと自由に語る機会を授けてくださったので、我々はあなたに告げます。我々一人ひとりは、畏敬の念と熱意をもって、先祖伝来の偉大なる神々、とりわけゼウス[2037]と、驚くべきアポロン[2038]を崇拝しております。彼らは我々の最も重要な神々であり、あなたの王権の守護者であり、庇護者なのです。」　しかし、マウリキウスと、彼と共にいるあなたの兵士七十名は、栄誉に酔いしれ、あなたの偉大な賜物によって富を得たにもかかわらず、我々の神々を軽んじ、あなたの偉大で無敵の権威に反抗している――彼らはキリスト教の迷信に惑わされているのだ。

これを聞いたマクシミアヌス王は激しく怒り、その怒りは炉の中で燃え盛る炎よりも激しく彼を包み込んだ。彼は、自らの軍団の中にそのような戦士たちがいたことに特に憤慨した。ある祝祭の日、彼はアマキシカと呼ばれる、北の城門の間に位置する見世物の場で裁判の場を設けるよう命じた。マクシミアヌスがこの場所を選んだのは、民衆全員が裁判を見られるようにするためであり、彼は聖なる殉教者たちをここに連行するよう命じた。　定められた日、大勢の民衆が指定された場所に集まり、乙女たちさえも家に留まらなかった中、マクシミアヌス王は高い裁判台の座に就いた。その時、七十人のキリストの聖なる戦士たちが、その指導者である聖マウリキウスと共に、従者たちによってここに連行されてきた。彼らを一瞥すると、王はマウリキウスにこう言った。

「我々は期待していたのだ、　マウリキウスよ、お前たちは、わが王の恩寵に見捨てられず、わが給与を賜り、わがより高い栄誉を授かった者として、わが敬虔な模範に従い、その勇敢な行いと賢明な教えによって、神々に喜ばれるわが法を拒む者たちを正し、迷える者たちの考えを正し、　是正を必要とするものをより良い方向へと導き、不和を煽る者たちを鎮める――要するに、我々の命令に背き、我々に敵対し、我々の望みに反して行われるあらゆることを、あなたがたが是正してくれると確信していたのである。　しかし、あなたがたはまったく逆の行動をとっていると耳にしています――私たちの法に反旗を翻す者たちを鎮めるどころか、むしろあなたがた自身が私たちの全能の神々の敵となっているのです。あなたがたは神々を軽んじ、敬意を払わず、犠牲や供物を捧げていません。　そればかりか、もし私たちに伝えられたあなたがたに関する話が真実であるならば、あなたがたは他の人々にとっても指導者となり、彼らを破滅の淵へと引きずり込んでいるのです。

これに対し、聖マウリキウスは次のように答えた。

「王よ、私たちがあなたの無感覚な神々に与えるその侮辱こそが、私たちの真の神のもとで、私たちに栄光に満ちた勝利の冠をもたらすのです。　我々は、あなたがその狂気の中で考えているように、我々を創造された神を辱めたり軽蔑したりするのではなく、唯一の真の神、すなわち天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された方を賛美しているのです。　また、人々を破滅へと導く邪悪で不浄な悪魔や、耳も目も感じることのできない彼らの偶像を、神と呼ぶことはふさわしくない。

すると、王は言った。

「モーリキウスよ、お前は、お前に栄誉を与え、軍勢の中で第一の地位を授けてくださった神々に、そのように感謝を捧げているのか？」

[2037] ゼウス、あるいはユピテル――ギリシャ・ローマ神話の神であり、天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。

[2038] アポロンは、太陽と知性の啓蒙、さらには社会の繁栄と秩序の神として崇められ、法の守護者であり、未来を予言する神でもあった。

すると、聖マウリキウスはこう答えた。

「私は、あなたがたの神々からいかなる栄誉も受けたことは一度もなく、彼らを崇めるつもりもありません。　なぜなら、神を知っている人間の中で、理性を持ち合わせず、無知な家畜に等しい者たち（詩篇48:13）以外の、無感覚な物体に敬意を払おうとする者がいるだろうか。そのような者たちだけが、石や木に理性を備えていると思い込み、それらを神として崇めるのである。

すると、王は言った。

「お前は、我々に仕える者たちの間で第一の地位を得た。だからこそ、お前はこれほど大胆に、何の恐れもなく我々に語りかけるのだ。」

そう言うと、王は聖マウリキウスを七十人の戦士たちから引き離すよう命じ、彼らに向かって優しい口調でこう語りかけた。

「兄弟たちよ、一体誰があなた方を惑わせ、救い主である我らの神々から背き、十字架にかけられた人間――ある種の悪党――を崇める人々の迷いを共有するよう仕向けたのか？」

すると、至福のテオドリトスはフィリッポスと共に、すべての聖なる殉教者たちを代表してこう答えた。

「不敬虔な拷問者よ、我々は自ら迷っているばかりか、あなたをも、その迷いから解放したいと願っている。我々はすでにその迷いから解き放たれ、　唯一の真の神――全能の父と、その独り子である我らの主イエス・キリスト――真の神、そして神の英知であり、聖霊である御方への礼拝によって、我々はすでにその迷いから解放されたのである。聖霊は、我らが同質なる三位一体を告白できるよう、我々に知識と理解を吹き込んでくださった。　我らは汝の不敬虔な信仰を忌み嫌い、一時的な戦士の地位を捨て、力ある王である神の戦士となるにふさわしい者とされることを願う。

すると、マクシミアンは言った。

「フィリッポよ、お前はすでに尊い老齢に達しているようだが、その知恵は若者たちに遠く及ばない。むしろ、我らの神々に帰依し、そうすることで他の同僚たちにも良い手本を示し、彼らも同じようにするよう導くがよい。そうすれば、お前は我々から大きな栄誉と賜物を受けることになるだろう。」

すると、聖フィリッポスはこう答えた。

「王よ、知っておいてほしい。私は、自発的に神への畏れを悟った者たちに、悪を勧めるようなことはしない。なぜなら、*『つまずきの原因となる者には、災いがある』*（マタイ18:7）と書かれているからだ。」

これに対し、マクシミアヌスは言った。

「フィリッポよ、お前は我々の寛容と柔和さゆえに、図々しいことを言っている。我々の怒りと激怒を招かないよう、その不敬な信仰を捨てたほうがよい。もし、お前たちが神の一人と見なしているその方を告白する勇気があるなら、激しい拷問にさらされることになるだろう。」

すると、七十人の聖なる殉教者たちは、拷問者にこう答えた。

「神に忌み嫌われる王よ、お前の虚しく無意味な脅しは、むしろ我々に力と強さを与えてくれる。我々はどんな苦しみも恐れない。主を愛する者の心には、恐れなどないからだ。」

マクシミアヌスはこの答えに激怒し、彼らから軍用ベルトと軍服を脱がせるよう命じ、こう言った。

「見よ、お前たちはどれほどの栄光と名誉を失い、その不従順のせいでどれほどの不名誉を自ら招いたか。」

聖人たちはこう答えた。

「お前は、我々の衣服と帯を取り去ることで、我々の軍人としての地位を奪った。しかし、天には我々が崇める神がおられる。神は、朽ちることのない衣服と帯を我々に着せてくださり、御自身

の永遠の栄光に与らせてくださる。その栄光を、お前には見る資格など全くない。なぜなら、お前の内には、お前の父であるサタンが語り、働いているからだ。」

すると王は、さらに激怒して、聖人たちにこう言った。

「呪われし者たちよ、我らの神々の賜物に値しない者たちよ、お前たちは自ら不名誉を招いたのだ。我々はあなた方に大いなる名誉を与えたが、お前たちは偉大なる神々を辱め、我らの慈悲を軽んじた。さあ、今こそお前たちの行いに応じて報いを受けよ。」

聖人たちはこれに対し、次のように答えた。

「王よ、あなたのもとで戦士となることは、虚しく儚いことに過ぎません。そして、あなたの名誉は不名誉に他なりません。なぜなら、あなたは王の権威を授けてくださった神を忘れ、その狂気の中で、虚しく魂のない偶像を神として崇めているからです。それらはあなたに何の益ももたらさず、誰かがそれらを崇めているのか、あるいは冒涜しているのかさえ理解できないのです。」

すると、王は言った。

「わが王の慈悲により、汝らの命を救いたいと願うゆえ、さらに猶予を与える。」

その後、王は彼らを三日間牢獄に閉じ込めるよう命じた。それは、彼らが熟考した上で、望む道を選べるようにするためであった。一方、牢獄に閉じ込められ、鎖で縛られた聖人たちは、こう語った。

「愛する兄弟たちよ、私たちの魂を祈りに向け、慈愛に満ちた私たちの神に熱心に祈りましょう。神が御聖霊を通して、私たちに英知と分別を授けてくださるよう。また、王にどう答えるべきかを私たちの口に授けてくださるよう願い求めましょう。そうすれば、私たちを苦しめる者が、私たちの信仰の真実さに驚かされるでしょう。」

その後、彼らは祈りを捧げ、心を一つにしてこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、全能の神よ、その御力は永遠に続き、御国は果てしなく続く方よ、御聖霊を私たちに授けてください。――御聖霊が私たちを導き、喜びと楽しみで満たしてくださいますように。　御霊が私たちに邪悪な迷いに対する勝利を与え、御霊によって信仰を強められますように。御霊は、御身の真実で偽りのない約束（マタイ10:19–20）に従って、私たちの中に語りかけてくださいますように。　この世の栄誉を私たちから取り去られた代わりに、御自身の天の都における戦士となり、古より御心に適ったすべての聖徒たちと共に、天の市民として留まることをお与えください。あなたは唯一の神であり、あなたに永遠の栄光と力が帰しますように。アーメン。

三日後、マクシミアヌス王は再びアマクシキオスの門にある同じ法廷の座に着き、聖なる殉教者たちを連れてくるよう命じました。そこへ、裁判を見物するために、その町の住民たちも皆集まってきました。拷問官は怒りを抑え、聖徒たちに優しく語りかけました。

「諸君、自分たちにとって有益な道を選びなさい。神々の元へ進み出て、犠牲を捧げれば、命を得て、苦痛に満ちた死を免れることができる。」

すると、聖人たちはこう答えた。

「王よ、我らはすべてを十分に熟考しました。どうか我らの言葉をよく聞いてください。もはやあなたの神々への生け贄を捧げるよう強要しないでください。なぜなら、我らは固く決意したからです。この世の一時的な命を憎み、キリストへの愛ゆえに目前に迫る死を選ぶことを。我らはキリストから永遠の命を受けると信じているからです。」　それゆえ、私たちを好きに扱ってください。私たちは神から離れることはなく、決してあなたの悪魔たちを崇拝することはありません。この世の死に処せられることで、私たちは永遠の裁きから解放されるのです。

これが聖人たちの答えであった。一方、拷問官は彼らのなかに一人の若者がいるのに気づき、彼に尋ねた。

「若者よ、お前の名前と出身地を教えてくれ。」

若者は答えた。

「私の名はフォティンです。この名は『真の光』から授かったものです。私は、あなたの父である悪魔を打ち負かした、私のキリストの戦士です。　私はローマ人であり、肉のみならず魂においても、最も輝かしいマウリキウスの息子である。なぜなら、私は彼から生まれ、神についての知識を授かったからだ。彼は私を、主キリストへの聖なる信仰の中で育て上げた。しかし、王よ、あなたはキリストを拒絶し、無知な獣のようになってしまったのだ。

これに対し、拷問官はこう答えた。

「お前は愚かだ、若者よ。その言葉は、お前の若さを露呈している。だが、今こそお前にとって何が有益かを知るべき時だ。さあ、進み出て偉大なるゼウスに犠牲を捧げよ。お前の若さを憐れむのだ。」

すると、若者は言った。

「私があなたの意に従わず、偶像を崇拝しないというだけの理由で、私を愚か者と呼ぶのか。いや、私はあなたたち全員よりも賢い。なぜなら、私は私の主イエス・キリストを信じているからだ。あなたたちはその方を信じず、知ることも望んでいないではないか。」

すると、拷問官は再び聖徒たちに言った。

「いつまで我々は、お前たちの狂気を我慢しなければならないのだ、この忌まわしき者たちよ？　いつまで我々は、過度な憐れみに負けて、お前たちの苦しみを引き延ばし続けなければならないのか？　神々に犠牲を捧げよ。我々の正義の裁きを招くことのないよう、我々を無慈悲と残虐へと駆り立てることのないようにせよ。」

聖人たちは答えた。

「邪悪で不敬虔な悪魔の僕よ、もしお前にも少しばかり分別があるなら、すでにフォティノスから我々の信仰と力について聞いているはずだ。彼は若くはあれど、その正しい信仰とキリストへの告白によって、お前の不敬虔さを恥じ入らせた。　それゆえ、我々はなおさら、苦痛に耐え、お前の父である悪魔を恥じさせ、我らの神キリストに喜ばれることを切望しているのだ。

すると、拷問官は怒りに満ち、聖人たちを裸にし、牛の腱で打つよう命じた。下僕たちは命じられたことを実行し始めた。彼らはキリストの戦士たち一人ひとりを広げ、一切の慈悲もなく全身を打ちのめした。　こうして聖人たちは、その聖なる肉体が粉々に砕け、流された大量の血がその場所全体を赤く染めるまで、拷問され続けた。一方、聖人たちは苦しみの中、主キリストに呼びかけ、助けを求めた。　主は、目に見えない御力によって彼らを見捨てず、その苦しみを和らげ、忍耐と神の愛において彼らの心を強めてくださった。僕たちがすっかり力尽きたとき、王は聖人たちにこう言った。

「お前たち、厚かましい愚か者どもよ、我々がどれほど容易にお前たちの命を奪えるか、分かったか？　それならば、さらに厳しい罰を招かないよう、神々に生贄を捧げよ！」

すると、聖人たちはこう答えた。

「知れ、不敬虔で、我らの神を知らぬ王よ。あなたが悪魔の迷いの闇に覆われ、キリストの愛と真の光から遠く離れているのと同様に、我々もまた、あなたが我らに与える苦痛を感じない。なぜなら、我らの心は、我らの神であるキリストの信仰と愛によって照らされているからだ。」　さあ、拷問者であり悪魔の僕よ、どのような新しく、最も過酷な苦痛で我々を苦しめるか考え出せ。我らの魂は渇望しており、我らの中に宿るキリストの愛は、苦しみを通じて肉体から解き放たれ、永遠に君臨する生ける神を仰ぎ見たいと願っているのだ。

これを聞いて、拷問者はさらに激しい怒りに燃え上がり、聖なる殉教者たちを投げ込むために大きな火を燃やすよう命じた。

そこで大きな火が焚かれたが、聖人たちは拷問者の家来たちが自分たちを火の中に投げ込むのを待つことなく、まるで水の中に入るかのように自ら火に近づき、炎の真ん中に入って、火の中でも無傷のまま歩き回り、拷問者を責め、その神々を恥じ入らせた。　その場にいた者たちは皆、この輝

かしい奇跡に驚嘆した。しかし、拷問者は滅びの器として、聖人たちが神の力に助けられ、それによって火の力を打ち勝っていることを認めようとはせず、かえってさらに激しい怒りを露わにして、聖人たちを滅ぼそうと試みた。　彼は、激しい炎にも何の害も受けなかった聖なる殉教者たちを火の中から引きずり出し、通常は犯罪者を拷問するために使われる木々に縛り付け、鉄の　爪で聖徒たちの体を容赦なく削り取るよう命じた。　しかし聖人たちは、肉体の苦痛を恐れず、この凄惨な拷問をも勇敢に耐え抜いた。民衆でさえ、王の激怒と狂気に驚嘆した。そこで聖マウリキウスは王に向き直り、こう言った。

「不敬虔で邪悪な拷問者よ、お前は自分の弱さを見ないのか、自分の無力さを自覚していないのか。フォティンという幼い少年でさえ、これほど激しい拷問に耐え抜いたのだ。それによって、彼はお前の不法な王国の力を打ち砕き、屈服させたのだ。　お前自身が、若き少年によって打ち負かされ、恥をかかされたというのに、どうして我々全員を打ち負かすことができるというのか？」

マクシミアンは聖人を激しく睨みつけ、歯ぎしりしながら、聖なる少年フォティンを、その父の目の前で直ちに剣で斬り殺すよう命じた。　これにより、彼はマウリキウスに復讐しようとしたのである。彼は、息子の死によってその父――聖マウリキウス――を深く悲しませることができると考えていた。しかし、聖なる男は、息子の殉教的な最期と、キリスト・神のために捧げられたその死を見つめながら、喜びと歓喜に満たされた。

聖フォティンが剣で斬り殺され、主のもとへ魂を委ねたとき、マウリキウスはマクシミアンにこう言った。

「お前は、フォティンをキリスト・神のもとへ先立たせることで、我々の願いを叶えてくれた、不法な拷問者よ。今や、我々も天国へ旅立つ日は間違いなく近い。キリストの戦士フォティンに倣わない者が、我々のうち誰がいようか。彼はすでに楽園の住処に身を置き、お前の父であるサタンを恥じ入らせたのだ。」　さあ、さらに大規模で最も残酷な拷問を考案し、我々のキリストへの信仰がどれほど強固であるかを、あらゆる手段で試してみよ。

マクシミアヌスは、聖なる殉教者たちが信仰から一歩も退くことなく、すべての拷問を不平も言わず勇敢に耐え抜いているのを見ると、自分の邪悪で不敬虔な顧問たち全員を呼び集め、どこに住んでいようともすべてのキリスト教徒を威嚇するために、どのような最も残酷な死をもって殉教者たちを滅ぼすべきか、彼らと共に考え始めた。　ある者はあることを、またある者は別のことを彼に助言した。ついに、その中の一人――最も凶暴で不敬虔、極めて非人道的かつ悪意に満ちた男――がマクシミアンにこう言った。

「陛下、今は夏、七月の月です。この都の西側、二つの川と湖の間に、湿地帯で草が生い茂った場所があります。そこには今、蚊やウシバエ、スズメバチ、マルハナバチが大量に生息しており、その場所を人が通り抜けることさえ困難で、一時間でも留まることは全く不可能です。　そこで、男たちをここに連れて来させ、服を脱がせて木に縛り付けるよう命じなさい。さらに、彼らを蜂蜜で塗りたくりなさい。そうすれば、蚊やスズメバチ、あらゆるハエが彼らを激しく苦しめるだろう。これは、考えられるあらゆる拷問の中で最も強烈で恐ろしいものだ。そうすれば、彼らは我々の無敵で永遠の神々を冒涜してはならないことを理解するだろう。

この助言は、不敬虔な王と彼の邪悪な顧問たち全員に大いに気に入られ、キリストの聖なる殉教者たちはこの拷問に処されることになった。　そこで兵士たちは彼らを捕らえ、縛り上げ、前述の場所へと連行した。そこで彼らは、泉の上や沼のほとりに生えている木々に聖人たちをしっかりと縛り付け、彼らの裸体を頭から足先まで蜂蜜で塗りたくり、さらに、祝福されたフォティノスの遺体を、その父の目の前で地面に投げ捨てた。その後、彼らはその場を去った。　あらゆる種類のハエ、蚊、ウシバエ、スズメバチ、マルハナバチが聖人たちに群がり、まるで濃い雲のように殉教者たちを取

り囲み、容赦なく彼らを苛んだ。聖人たちは、この耐え難い苦痛を十日間、十晩にわたって耐え抜いた。彼らは天を仰ぎ、次のように祈った。

「主よ、私たちの神よ、あなたは私たちを御自身の姿と似姿に従って創造し、御自身の真理を知るにふさわしい者とされ、御自身の神性、御独り子、そして至聖にして命を与える御霊を私たちに啓示してくださった。　私たちは、私たちの魂をあなたに委ね、あなたに懇願します。古よりあなたに喜ばれたすべての聖人たちと共に、私たちをも数えてください。私たちはあなたを愛し、全魂をもってあなたに近づこうと努めてきました。あなたのために、私たちはこの苦難に身を委ねているのです。あなたは唯一の、善き、慈悲深い神であり、あなたに永遠の栄光がありますように。アーメン。

その後、彼らは聖なる魂を主に委ね、永遠の栄光の冠を授かった。一方、不義な迫害者マクシミアヌスは、聖人たちがすでに不死の命に浴していた死後さえも、彼らに対して激しい怒りを燃やし続けた（神の御前で、この世を去った者たちは、たとえこの世を去ったとしても、神の御前で生きているからである）。　聖人たちがすでに亡くなったと聞いたマクシミアンは、彼らの尊い首を切り落とし、埋葬せずに放置するよう命じた。そこで、聖人たちの遺体と首は、そこにあった草原や樫の森に散らばされ、鳥や獣の餌食となった。　信者たちの中には、夜になって、恐れと畏敬の念を抱きながら、散らばった聖なる殉教者たちの遺骸を集め、その場所に埋葬した者もいた。彼らは、父と聖霊とともに永遠に賛美される我らの主イエス・キリストを賛美した。アーメン。

シリアの隠者、聖ファラシオスの記念日。

記念日：2月22日

尊者ファラシオスは、まだ若くしてある山に自ら住居を築き、そこに定住した。生まれつき純真さと謙遜さを備えていた彼は、やがて修道生活への志を抱くようになった。　彼はタルガラの集落の近くにある山の頂上へと退き、そこで38年間にわたり修行に励んだ。その間、彼は住居を一切持たなかった。小部屋も、テントも、ましてや何らかの屋根さえもなかったが、石で小さな囲いだけを築き、空を唯一の屋根として、常にその場所で過ごした。　そのような功績により、主はこの聖なる修道士に奇跡を行う恵みを授けられた。尊者ファラシオスは悪霊を追い払い、様々な病を癒やし、その奇跡的な賜物の力によって聖使徒たちに倣った。ある時、彼に蛇が襲いかかり、彼を食い尽くそうとしたが、彼は祈りを捧げ、その祈りによって死から身を守った。　またある時は、激しい苦痛をもたらす胃の病に襲われたが、彼は神の御名を呼び求め、それによってその苦痛を伴う病から癒やされた。聖人の偉業を目撃しようと、常に大勢の人々が聖人のもとへ集まり、訪れた人々の多くは、彼の弟子として受け入れてくれるよう懇願した。　聖人はそのような願いを拒むことはなかった。彼と共に修行を志す者たちのために小部屋を建て、そこに住むことを許し、さらに各地から崇敬者たちが彼のために持ち寄った食物を彼らに分け与えた。このような修行の生涯を送った後、聖ファラシオスは安らかに息を引き取った。

シリアの隠者、聖ヴァラダトの記念日。

記念日：2月22日

尊者ヴァラダットは、アンティオキア[2039]の出身であった。瞑想にふける隠遁生活という修行の道を選んだ彼は、最初は一つの小屋に身を閉じこもり、その後しばらくして高い山へと退き、自ら

[2039] ここでいうのは、もちろんシリアのアンティオキアのことである。かつては広大で豊かなシリア王国の首都であったが、現在はトルコ・アジア側のささいな町となっている。

築いた小部屋で、外に出ることなく暮らすようになった。　この小部屋は、聖人が意図的に自身の身長よりも小さく造ったため、彼はその中で常に背中を丸めて立ち、体を折り曲げて横たわっていた。小部屋には窓がなく、扉が一つあるだけであり、　その扉さえも、聖人は外部からの訪問者を遮るために常に閉ざしていた。また、日差しを室内に取り入れるために、窓の代わりに壁に穴を開けていたが、その穴は広すぎて、彼は住居の中で雨や炎熱から身を守ることは決してできなかった。　聖バラダットは、このような狭く不自由な場所で長年にわたり暮らした。　その後、アンティオキア司教テオドリトスの説得を受け入れ、彼は住居から出たが、その時から、足元から頭まで全身を覆う、縫い合わせた皮の衣を着るようになった。その衣には、自由に呼吸できるよう、口と鼻の周辺にのみ小さな切れ目が設けられていた。　そのような服装では歩くことができなかったため、尊者は常に天に向かって両手を掲げたまま立ち続け、神を賛美していた。　このようにして、聖バラダトは常に隠遁生活を送っていた。彼がこのような苦行を行ったのは、肉体を快楽に浸らせるためではなく、肉体の苦痛に耐えるよう自らを強制し、それによって肉体を謙遜させるためであった。というのも、彼は強い情欲に囚われており、燃え盛る、抑えきれない情欲に常に駆り立てられていたからである。　尊者アファナシイは、修道士たちに約束された永遠の報いを得るために、自らの肉体を極限まで消耗させた後、主のもとへ旅立ち、主から永遠の安息を授かった。

聖アファナシオス・殉教者の記念日。

記念日：2月22日

聖アファナシオスは、コンスタンティノープルで、神に奉仕する生活を送り、非常に裕福であった敬虔な両親の間に生まれた。彼は幼少の頃から敬虔な心持ちを備えており、青年時代の切なる夢は、修道者として生涯を過ごすことだった。　そのため、成人すると、彼はニコミディアの修道院の一つ[2040]　に籠もり、そこで修道誓願を立てた。修道生活におけるその功績は極めて高く、その敬虔さは皇帝自身の耳にも届くほどであった。 レオン・イコノボルテス帝の治世中[2041] 、聖アファナシウスは聖なるイコンを崇拝しているという告発を受け、そのために様々な拷問にさらされ、過酷な追放に遭い、多くの苦難を耐え抜きました。しかし、これらすべてにもかかわらず、聖アファナシウスは揺るぎない信仰を貫きました。 生涯を通じて正教の信仰を守り抜き、主のもとへ旅立った[2042] 。

3月8日

2月23日（旧暦）

聖司祭殉教者ポリカルプ、スミルナ司教の生涯と殉教

記念日 2月23日

[2040] ニコメディアという都市は、小アジアのプロポンティス湾（現在のマルマラ海）の岸辺に位置し、ディオクレティアヌス帝のお気に入りの居城であったと同時に、その治世中に多くの聖なる殉教者たちが苦難に遭い、息を引き取った場所でもあった。　この聖人が修道生活を送った修道院は、聖使徒ペトロとパウロに捧げられていたことから、「パヴロペトリア」という名で知られていた。

[2041] 聖像崇拝者に対する迫害は約100年間続いた。この時代の「レオン」という名を持つ3人の皇帝のうち、ここで「聖像破壊者」と呼ばれるのは、813年から820年まで在位したレオン・アルメニア人である。

[2042] 聖アファナシオスは821年に逝去した。

小アジアのイオニア地方にあるスミルナという町では、聖使徒たちの時代、聖ヴコルが司教を務めていた。この司教の在任中、この地には敬虔で神を畏れる未亡人カリスタが住んでいた。　ある夜、彼女の夢に主の天使が現れ、孤児である少年ポリカルプを引き取るよう命じた。カリスタには子供がいなかったため、彼女は喜んでその少年を引き取り、実の息子のように敬虔に育て上げた。彼が成長し、分別がつくと、未亡人は家にあるすべてのものを彼に任せた。　ある時、彼女は自分の領地に関する用事で家から遠くへ出かける必要があり、かなり長い間戻ってこなかった。彼女の不在中、貧しい人々に対して極めて慈悲深い聖ポリカルプは、貧者や孤児、未亡人たちに惜しみなく施しを始めた。　彼は、求める者すべてにパン、ワイン、オリーブ油、そしてあらゆる食料を配ったため、養母の貯蔵庫は空っぽになってしまった。カリスタが帰宅すると、使用人の一人が出迎えて、ポリカルプが全財産を無分別にも浪費してしまったと訴え、今や家の中は極度の貧困状態にあると誹謗した。カリスタはこれを聞いて深く悲しんだ。家に着くと、彼女はすぐに貯蔵室へ向かい、そこであらゆる種類の宝物を数多く見つけた。というのも、祝福されたポリカルプは、カリスタが到着する前に、主に向かって次のような祈りを捧げていたからである。　「わが神、主よ。あなたは預言者エリヤの時代に、サレプタの未亡人の壺を満たしてくださいました（列王記下17:10–16）。今この時、私の祈りを聞き入れ、キリストの御名によって、この家のすべての貯蔵庫が満たされるようお導きください」。

すると主は直ちにその祈りを聞き入れ、彼の恩人の家をあらゆる恵みで満たされた。　家には以前よりもはるかに多くの必需品があるのを見て、カリスタは、聖ポリカルプによって物資が不足したと不満を漏らした使用人に怒りを覚えた。彼女は、その使用人が自分を嘲笑しているか、あるいは憎しみからポリカルプを誹謗中傷したのだと考えたのである。怒った彼女は、彼を罰しようとした。しかし、聖ポリカルプは彼を擁護し、育ての母にこう言った。「お願いです、奥様。私の代わりに他人を罰しないでください。むしろ、私を罰してください。この使用人は罰を受けるべきではなく、あなたへの忠誠と献身に対して称賛に値するのです。　彼はあなたに真実をすべて話しました。確かに、私たちの富はすべて尽き、貯蔵庫はすべて空になりました。というのも、私は飢えている兄弟たち、貧しい人々、困窮している人々を見て、　、彼らにすべてを分け与え、すべての備蓄を使い果たしてしまったからです；　彼らこそが神に懇願し、神は御自身の天使を遣わされました。その天使があなたの全財産を補充してくださったのです。そうして、あなたもいつものように、貧しい人々に惜しみない施しを施せるようにするためです」。

これらすべてを耳にし、目にしたカリスタは深く驚き、それ以来、善き信仰のもとで善行に一層熱心に取り組み、豊かな施しを行うようになった。また、聖ポリカルプの徳に感嘆し、彼を自分の息子のように、さらに深く愛するようになった。　ついに、神に喜ばれる生涯を終えると、彼女は自分の魂を主の御手に委ね、全財産の相続人として、名付け子の聖ポリカルプを遺した。　祝福された彼はそのすべてを貧しい人々に分け与え、自らも熱心に聖書を読み、神への黙想と祈りに専心した。彼は厳格な節制と清らかな貞潔のうちに生活し、昼夜を問わず主のためにたゆまず働き、病者、弱者、そして高齢者に愛をもって奉仕した。　そのような生き方ゆえに、スミルナの司教である聖ヴコルクは彼を深く愛した。まず司教はポリカルプを聖職者に任命し、その後、助祭とした。聖ピオニオスの証言によれば――彼は至福のポリカルプの伝記を著した人物である――　聖ヴコルスは、ポリカルプが助祭であった当時、彼に神の言葉を説く務めも課した。というのも、聖ポリカルプはその賢明さと雄弁さで際立っていたため、この聖なる修道者は教会内だけでなく、他の場所でも人々に教えを説く義務を負っていたからである。　聖ヴコルだけでなく、聖使徒パウロや聖ヨハネ・テオロゴスをはじめとするキリストの弟子たちも、聖ポリカルプを深く愛していた。聖ポリカルプは聖使徒たちと共に旅に参加し、彼らの弟子となり、その労苦を分かち合い、その生き方を模範としていた。　使徒たちは再び彼をスミルナにいる聖ヴコルのもとへ遣わし、聖ヴコルは彼を長老に叙階した。また、聖ポリカルプはキリストの教会にとって有益な多くの言葉や書簡を著したが、迫害のさなかにその著作の

大部分が失われ、現存するのはごく一部のみである。　聖なる司教ヴコルは、自身の死後、スミルナ教会の司教の座には、他の誰でもない、長老ポリカルプが就くべきであるとあらかじめ告げられていた。　それゆえ、聖ヴコルは臨終の際、ポリカルプの右手を握り、それを自身の胸に当てて、彼に「御言葉の群れ」を牧会するよう託し、「主よ、あなたに栄光あれ」という言葉と共に、安らかに永遠の命へと旅立った。　聖ヴコルクの葬儀に集まった使徒的司教たちは、聖ポリカルプを叙階した。その際、彼らの多くは恐ろしい幻視を目撃した。司教叙階式が始まると、神聖な光が教会にいたすべての人々を照らし出した。　選ばれた者の中には、稲妻のように輝きながら聖ポリカルポの頭上を飛び回る白い鳩を見た者もいた。また、ある者には、聖なる修道士がまるで戦士のように装っている姿が見えた。彼は戦士の帯を締め、戦いに臨むかのように武装していた。さらに、王の紫の衣をまとった[2043]、顔を輝かせている姿を見た者もいた。 ある乙女には、彼は実際よりもはるかに背が高く見え、しかも右肩の衣は赤色であった。そして、聖ポリカルプが叙階を受けるためにひざまずいたとき、彼は目の前に、その叙階の場に目に見えない形で臨在しておられた主キリストご自身の御足を見た。
こうして、キリストご自身と聖霊によって按手を受けたポリカルプは、聖使徒たちの定めに従って神の教会を統率した。彼は人々の魂を救うために多くの苦労を耐え忍び、司教在任中に数多くの驚くべき奇跡を行った。

ある時、聖ポリカルプは、同じイオニア地方のテオセという町を訪れた。その町は、レヴェディアと呼ばれる温泉の近くに位置していた。彼は、その町のダフンという名の司教の家に滞在した。このダフン司教については、聖イグナティオス・テオフォロスも、スミルナの住民たちへの書簡の中で言及している。　聖ポリカルプは、その司教の家の貧しさと不足を目の当たりにし、主がその家を祝福してくださるよう神に祈った。それ以来、ダフン司教はもはや不足に悩まされることはなかった。それまで不毛だった彼の畑やブドウ畑は、並外れた収穫をもたらし、非常に実り豊かなものとなった。　わずかな量しかなかったワインも、聖人の祈りによって豊かに増えた。ある日、スミルナへ戻る途中、ポリカープは同行していた助祭と共に道から外れ、道沿いにある宿屋に立ち寄った。すでに夕方であり、疲れ果てた旅人たちは休息を望んでいた。　少し食事をとった後、ポリカープと彼の同行者は眠りについた。しかし、彼らの眠りは長くは続かなかった。真夜中、主の天使がポリカープの脇腹を軽く突いて、こう言った。

「ポリカルプよ！」

すると、聖人は尋ねた。

「どうしましたか、主よ？」

「起きなさい」と天使は言った。「そして直ちにその宿から出て行きなさい。まもなくその宿は崩れ落ちるからだ。その宿に住む者たちは、キリストなる神を信じず、多くの不義を行っていたのだ。」

そこで聖人は起き上がり、自分の助祭を起こそうとして、起きるよう命じた。しかし、それまでぐっすり眠っていた助祭は起きる気がせず、聖人をなだめてこう言った。

「まだ最初の眠りも明けていないのに、聖なる父よ、どこへ行こうというのですか。あなたは常に神の聖書について思索にふけり、ご自身も眠らず、他の人にも眠らせないのです。」

この言葉を聞いて、聖ポリカルプは黙ったが、天使が再び彼の前に現れて外へ出るよう命じた。そこで聖人は再び、この建物は崩れ落ちるはずだと語りながら、助祭を説得し始めた。しかし、助祭はこう答えた。

「私は神を信じています。父であるあなたがこの建物におられる限り、この建物は崩れることはないと思います。」するとポリカルプは言った。

「私も神を信じていますが、この石造りの建物には頼りません。」

[2043] ポルフィラとは、長めのマントの形をした高価な紫色の衣装のことで、君主が祝典の際に着用するものである。

その間、天使が三度目に現れ、同じ命令を繰り返した。その時になって初めて、司教は同行者を説得して宿屋から出るようにした。彼らが外に出た途端、建物は基礎まで崩れ落ち、中にいた者たちは一人残らず命を落とした。そして聖ポリカルプは、立ち止まって天を見上げながら、次のように祈った。 「主よ、全能の神よ、御子イエス・キリストの父よ。あなたは預言者ヨナを通してニネベの人々に彼らの都の滅亡を予告されましたが、憐れみ深く彼らを赦してくださいました。 まことに、私はあなたを賛美します。あなたは御使いを通して、私たちをこの建物から導き出し、ソドムからロトを導き出したように、私たちを突然の死から救ってくださいました。あなたは常に御自分のしもべたちをあらゆる悪から守り、永遠に慈しみ深く、憐れみ深いお方です。」

彼らがスミルナに到着した後、キリストを信じなかったその町の領主のもとで、ある夜、突然、汚れた霊が一人の使用人に取り憑いた。その使用人は激しく叫び、大騒ぎをしたため、家全体が恐怖に包まれ、住人たちは皆、恐れと戦慄に襲われた。 日が明けると、悪霊を追い出そうと、大勢のユダヤ人が領主の屋敷にやって来た。しかし、悪霊に取り憑かれた使用人は彼らに襲いかかり、彼らが大勢であるのに対し自分は一人であったにもかかわらず、全員を激しく打ちのめした。 誰も彼を制圧できず、誰も彼の手から逃れることができず、彼らはかろうじて一命を取り留め、血まみれになってその場を逃げ出した。着ていた服はすべて、その悪霊に取り憑かれた者が引き裂き、さらに自分の歯で彼らの体を噛みついた。 その家には一人のキリスト教徒がおり、彼は公爵にこう言った。「ご命令があれば、殿、私はある人物を呼び寄せます。その人は、何の苦労もなく、あなたのしもべを癒やすでしょう」。

公爵がその提案に同意すると、その使用人は聖ポリカルプ司教のもとへ赴き、公爵の屋敷へ招いた。まだ聖人が公爵の屋敷に入ってもいないうちに、悪霊は叫び始めた。「ああ、悲しや、ポリカルプがここへやってくる。私は意に反して、ここから逃げ出さざるを得なくなるだろう」。

聖人が入るとすぐに、悪霊は震えながら王子の家来の体から飛び出し、逃げ去った。王子はこの光景を見て、大いに驚いた。その奇跡の後、夜になってスミルナで火災が発生した。皆が眠っていたため、火は急速に広がり、街の大部分を炎に包んだ。 その際、いつものように激しい騒ぎや叫び声が上がり、皆が恐怖に包まれた。民衆は一斉に消火に取りかかったが、どうすることもできなかった。火勢はますます強まるばかりだった。ユダヤ人たちも集まり、火を鎮めようと呪文を唱えたが、彼らの試みはすべて無駄に終わった。 その時、公爵は聖ポリカルプのことを思い出し、部下や顧問たちにこう言った。「この火事を止められるのは、つい先日、私の奴隷から悪霊を追い出したキリスト教の師、ポリカルプ以外にはいない」。

彼を呼び寄せ、この不幸に見舞われた街を助けてほしいと懇願した。聖人は清らかな両手を天に掲げ、彼らの前で即座に祈りを捧げると、火はまるで大量の水を浴びたかのように消え、火災は収まった。 この奇跡を目の当たりにした人々は、聖人が神の一人ではないかと考えるようになった。しかし、ポリカルプは皆の前で、天にまじりない唯一の真の神、すなわち彼自身がそのしもべにすぎない神について説教した。その結果、多くの人々が信仰を持ち、キリストの聖なる教会に加わった。またある時、長期間にわたって雨が降らず、干ばつが続き、その後に飢饉が訪れた。そこで、人々は皆、公爵とその顧問たちと共に、聖人が彼らを憐れみ、その神に地への雨を祈ってくださるよう懇願した。 聖人が祈ると、たちまち激しい土砂降りが降り注ぎ、大地は潤い、その年の収穫は以前よりもはるかに豊かになった。このような奇跡や、 他にも数多くの聖人の奇跡、また、その手をおくことによって様々な病から癒やされた人々を通じて、多くの人々が主イエス・キリストに立ち返った。日ごとにキリストの教会は拡大し、スミルナにおける偶像崇拝は衰退していきました。聖ポリカルプは、使徒たちの命じるところに従って、そこで御言葉の奉仕を引き受けたのです。聖イリネイが証言しているように、ポリカルプは単に使徒の弟子であり、多くの人々の友人や対話者であっただけでなく、 キリストをこの目で見届けた者であっただけでなく、使徒たちによってアジアへ遣わされ、そ

こでスミルナにおいて（聖ヴコルの後を継いで）司教の座に就いたこと；　聖イレネオスはさらに次のように付け加えています。「私たちも若き日に、彼がすでに非常に高齢の老人となっていた頃、彼に会いました。そして、彼自身が使徒たちから学んだことを、他の人々にも教え、教会には真実であり偽りのないものだけを伝えました。」　聖ポリカルプについては、彼の後にアジアの教会で司教を務めた者たちも皆、彼が確かに揺るぎない真実の擁護者であり、キリストの教会にこれほど有害な誤りを持ち込んだヴァレンティヌスやマルキオン、そしてあらゆる異端の首謀者たちとは異なる人物であったと証言している。　この祝福されたポリカルプは、アニキタが教皇であった頃にローマを訪れ、マルキオニ派の異端から多くの人々を遠ざけ、彼らを真の教会と信仰へと導いた。彼は、使徒たちから受け継いだ真理を公然と宣べ伝えたのである[2044]。ところで、彼は次のような話も語っていた。主の弟子ヨハネは、エフェソに滞在中、ある時、浴場を訪れた。そこで、彼は洗っている異端者ヘリントを見かけた。　使徒は直ちに風呂場から出て、一緒にいた者たちに自分についてくるよう説得し、さらにこう付け加えた。「神の真理の敵であるヘリントが体を洗っているこの風呂場が、まるで突然崩れ落ちるかのように、崩れてしまわないように」と。ある時、その同じポリカープが異端者マルキオンと出会った。マルキオンは厚かましくも彼にこう言った。

「我々を見分けよ。」

これに対し、ポリカープはこう答えた。

「お前は悪魔の長子であることを私は知っている。使徒たち自身も、またその弟子たちも、異端者たちからはこれほど徹底して身を守り、狡猾な空論で真理を覆い隠そうとする者たちとは、会話することさえ拒んだ。聖パウロもこう命じている。　『異端者については、一度、二度戒めた後、彼から離れなさい。そのような者は、自らを罪に定め、堕落し、罪を犯していることを知れ』（テトス3:10–11）。

また、ポリカルプによるフィリピ人への手紙[2045]も現存しており、その内容は極めて深遠なもので、自らの救いを切に願い、彼の信仰と説教を称賛する人々なら、その深遠さに気づかざるを得ない。

[2044] 教会の益を案じる聖ポリカルプは、教皇アニキタ（157～168年）の時代に、グノーシス派のヴァレンティヌスとマルキオンの誤った教えと戦うため、ローマへの旅に出た。　小アジアの教会と西方の教会における復活祭の理解と祝賀の相違について、スミルナの司教とローマの司教は、それぞれが地元の慣習から譲歩することに同意しなかった。　すなわち、聖ポリカープは、東方キリスト教徒がユダヤ暦ニサン月の14日に復活祭を祝い、それを主が弟子たちと共にした最後の晩餐と、そこで定められた聖体秘跡の記念として捧げることを正しいと認めていたのに対し、　一方、アニキタは、それとは逆に、キリストの復活を祝う年間の祭日として、春分の満月の後の最初の日曜日に祝うという、西方で定着した復活祭の理解を正しいものと認めていた。　しかし、この意見の相違は司教たちの間の平和を損なうことはなく、その証として、アニキタは聖ポリカルプにローマの教会で聖体礼儀を執り行うことを許可した。

[2045] 聖イリネイの言葉を借りれば、教会や個人に向けて書かれた聖ポリカルプの多くの書簡のうち、今日まで伝わっているのはこの一通のみである。　聖ポリカルプのフィリピの信徒への書簡について、聖イリネイは、「そこから、自らの救いを願い、それに熱心な者たちは、（ポリカルプの）信仰の性質と、彼が説く真理を知ることができる」と述べている。教会史の父であるエウセビオス（263–340年）は、この書簡からいくつかの箇所を引用し、それが当時もなおキリスト教徒の間で広まっていたことに言及している。至福のヒエロニムスは、自身の時代には、聖ポリカルプのフィリピの信徒への書簡が小アジアの教会で礼拝の際に朗読されていたと伝えている。　この書簡は、神を宿すイグナティオス（107年）の死後まもなく執筆されたものであり、フィリッポスの町のキリスト教徒たちから、イグナティオスがポリカルプや他のキリスト教徒たちに宛てた書簡（彼が所持していたもの）を送ってほしいという要請を受けて書かれたものである。　その願いに応えて、聖ポリカルプは特別な書簡の中でフィリッピの信徒たちに一連のキリスト教的訓戒を説き、　――異端者に対する警告を行い、長老や助祭、若者や処女、夫婦や未亡人の義務を指摘し、貪欲を避け、祈りと断食に励むよう説き、敵に対する忍耐と愛を説いている。　この書簡の翻訳は、プレオブラジェンスキー大司祭の著書『使徒たちの書簡』で読むことができる。サンクトペテルブルク、1895年。

これが、聖イリネイによるポリカルプに関する評である。アントニヌスの22年にわたる治世の後、その息子マルクス・アウレリウス[2046]が王位に就き、弟のルキウスと共に権力を分有した。この頃、アジアでキリスト教徒に対する激しい迫害が巻き起こり、その時、聖ポリカルプもまた自らの血をもって信仰の証しを刻み込んだ。この義人の受難と最期については、聖ポリカルプが司教の座に就いていたスミルナ教会への書簡[2047]に記録されており、その内容は以下の通りである。

「フィロメリアのスミルナ教会および、さまざまな民族の間に存在する他のすべての聖なるカトリック教会へ――父なる神と、私たちの主イエス・キリストの憐れみ、平和、そして愛が、あなたがたと共にありますように。　兄弟たちよ、私たちは、自らの血を流すことによって迫害の炎を消し去った聖ポリカルプや、その他の殉教者たちについて、あなたがたに書き送りました。多くの聖なる殉教者たちは、当時、不屈の勇気を示しました。　ある者たちは、あまりにも長い間殴打され続け、すべての関節や腱が砕かれ、内臓が露わになるほどでした。またある者たちは、石や鋭い瓦の上を引きずり回され、拷問者たちが考えうる限り最も残酷な苦痛を、驚くべき平静さをもって耐え抜きました。さらに別の者たちは、野獣の餌として差し出されました。　不信心者たちは、聖人たちのこのような勇敢な苦難を目の当たりにして、深く驚嘆し、大いに驚いた。他の殉教者たちの中でも、神の助けにより、ゲルマニクスという名の若者が際立った勇気を示した。彼は恐れを知らぬ心を持ち、心を揺るがすことなく、本来なら誰にとっても恐ろしい死へと勇敢に歩み出た。　裁判官は、ゲルマニクに対し、若さを惜しみ、この甘美な人生をこれほど苦い死で台無しにしないよう、長く諭した。しかし、彼は自分に向かって放たれた獣たちを見るや否や、自らその獣たちに飛びかかり、自分を引き裂くよう挑発した。フリギア出身のクイントという名の男は、獣たちと恐ろしい拷問を目撃すると、たちまち恐れをなして、自らの救いの機会を逃してしまった。このことから、彼が軽率に、そして純粋な心からではなく、まるで突風に乗せられるかのように、不義の者たちの裁きの場にやって来て、あえて自らを拷問に委ねたことが明らかになった。　彼は、自らを拷問に委ねるようなこのほど大きな行いには、慎重さを欠いて臨んではならないという教訓を、すべての人々に示したのである。　ポリカルプは、これらの拷問の話を聞き、キリストを信じないギリシャ人たちが、他の殉教者たちの苦しみを見て、裁判官に向かって「ポリカルプを探せ、この不信心者どもを根絶やしにせよ」と公然と叫んでいたことを知った。

これを聞いたポリカルプは、捕らえられるまでは街に残りたいと願っていたものの、キリスト教徒たちの懇願に譲り、街を出てある村に身を隠し、そこで昼夜を問わず、いつものように教会の平安を祈り続けた。不信心者たちに捕らえられる3日前に、彼は夢の中で、自分の頭部が突然の炎に包まれて燃え尽きるのを見た。眠りから覚めると、聖人は共にいた者たちにこう言った。「私は主イエス・キリストのために火あぶりにされるだろう」。

その3日後、ポリカルプを探し出すために、イゲモンから遣わされた者たちがその村にやって来た。　彼らは二人の少年を捕らえ、ポリカルプの居場所を白状させるために蔦の鞭で打ち始めた。少年たちは、二階のある部屋にいると指し示した。ポリカルプはそこから逃げ出すこともできたが、そうせず、「わが主なる神の御心でありますように」と語った。

従者たちが自分の後を追ってくるのを耳にすると、彼は自ら階段を下りて出迎え、喜びに満ちた表情で親しみを込めて彼らに挨拶した。　以前彼を見たことのなかった使用人たちは、彼の白髪と老齢ぶり、そしてその端正な顔立ちに漂う柔和さと穏やかな喜びを見て驚き、「この老人を探し出すために、これほど苦労し、努力する必要があったのだろうか」と語り合った。

[2046] 161年から180年にかけて

[2047] 聖ポリカルポが主任司祭を務め、その教会で殉教した教会から発せられた殉教に関する回勅は、キリスト教古代の最も古い文献の一つである。エウセビオスは、この書簡のほぼすべてを自身の『教会史』（第4巻、第14章）に収録している。ロシアの『チェチイ・ミネイ』における聖ディミトリ・ロストフスキーの翻訳

ポリカープは直ちに、彼らのために食事を用意するよう命じ、彼らに食べたり飲んだりするように勧め、自分には祈りのために一時間を与えてほしいと頼んだ。　そして、神に熱心に祈りを捧げ、若き日から現在に至るまで、大小を問わず、自分に対して示された神の御配慮すべてに感謝を捧げ、全世界に散らばっている聖なる教会を神に委ねた。　長い祈りが終わると、使者たちは長老を連れ出し、ロバに乗せてスミルナへと連れて行った。その日は聖土曜日であった。　道中、二人の高潔な元老院議員、ヘロデとニキタが彼に出会い、自分たちの戦車に乗せると、裁判の場でただ言葉で信仰を放棄するよう勧めた。「『皇帝陛下、私は犠牲を捧げます』と言うのが、それほど難しいことでしょうか？　そうすれば、あなたは死を免れるのですから」。

ポリカルプは彼らの言葉に黙り込んでいたが、彼らが執拗に迫ると、こう答えた。「あなたがたが勧めるようなことは、決してしない」。

彼らは怒り、彼を責め立て、戦車から突き落とした。転落の際、老人はすねを傷つけたが、それを気にも留めなかった。 彼が裁判所に連行されると、不信心な民衆は、 ポリカルプが捕らえられたことを喜び、歓声を上げた。その時、彼は天から主の御声が、「勇気を出せ、ポリカルプよ。寛大に奮闘せよ！」と語りかけるのを聞いた。

この声を、私たちの仲間たちも聞いた（スミルナの書簡によると）。

裁判官は彼に尋ねた。

「お前がポリカルプか？」

「そうだ」と彼は答えた。

「老身を憐れんでくれ」と裁判官は言った。「キリストを否定し、皇帝の幸運に誓え。」裁判官は、このようなことを語りながら、こう言った。

「正気を取り戻せ、ポリカルプよ。そして『不信心者どもを滅ぼせ』と言え。」

するとポリカルプは、天を仰ぎ、不敬虔な民に向かって両手を差し伸べ、神に向かってこう言った。

「不信心者たちを滅ぼせ！」裁判官は言った。

「キリストを否定し、彼を侮辱せよ。そうすれば、お前を自由の身にしてやる。」

「私は八十六年間、キリストに仕えてきましたが、主は私に何の害も与えられませんでした。それなのに、今なお私を守ってくださる私の王を、どうして不名誉な言葉で誹謗することができるでしょうか？」

裁判官は言った。

「お前に凶暴な獣を放ってやる。」

「放て」とポリカープは答えた。「しかし、私は自分の最善を、最悪と取り替えるつもりはない。」

「お前を火あぶりにする」と裁判官は言った。彼は答えた。

「あなたは私に消えゆく火で脅しているが、不信心者や不信仰者が永遠に焼かれる、消えることのない火については何も知らないのだ。これ以上遅らせるな。私に対して企てていることを、さっさと実行せよ。」

そこで裁判官は、ポリカルプがキリスト教徒であることを民衆に告げるよう、布告者に命じた。これを聞いたギリシア人とユダヤ人たちは、大声で叫んだ。「彼は全アジアを惑わす者だ。彼はキリスト教徒の父だ。彼は我らの神々を滅ぼしている。生きたまま焼き殺せ。」

そして、民衆とユダヤ人たちは、ポリカルプを焼き殺すよう強く要求した。　大量の薪や小枝が準備されると、ポリカルプは帯を解き、衣服を脱ぎ始め、足から長靴も脱ぎ捨てた。一方、拷問者たちは、ポリカルプが火から逃れることができないよう、彼を釘付けにするために鉄製の道具や釘を用意していた。　しかし、聖人は彼らにこう言った。「私を釘付けにするのはふさわしくない。なぜ

なら、炎の中で私に忍耐を与えてくださる方は、私がその場から動いたり、どの方向にも向きを変えたりしないよう、勇気も与えてくださるからだ。」

そこで、拷問者たちは彼を釘付けにはせず、ただ縛り上げただけで、この白髪交じりの老人を、まるで群れの中で最も優れた雄羊が、神への香ばしい供え物として縛られて捧げられるかのように、火の中に投げ込んだ。　聖ポリカルプは祈りを捧げ、こう言った。「主なる神よ、あなたが私をあなたの殉教者たちや信仰の証人たちの仲間に加えてくださったことを感謝します。私はあなたのキリストの苦難の杯を飲み干し、その受難に与ることで、復活の日に永遠の命において彼と共にいられるのです。　どうか、私を、御自身の御目に喜ばれる豊かで芳しい供え物としてお受け入れください。これは御自身があらかじめ定め、備えられ、今や成し遂げられたものです。私は、あなたと、あなたの御子であり、永遠の大祭司であるイエス・キリストを賛美し、称えます。　御子と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、あらゆる栄光と誉れと礼拝があなたにふさわしいのです。アーメン」。

そして「アーメン」と唱えると、使用人たちは直ちに火を点けた。　薪が周囲で燃え上がり、炎が高く立ち上ると、皆を驚嘆させる奇跡が起こった。聖人を囲み、その頭上へと立ち上る炎は、聖人に触れることも近づくこともなく、まるで風で膨らんだ船の帆のように、聖人から離れて広がり、上空で一つに合わさっていた。　聖ポリカルプは、まるでるつぼで精錬された金のように炎の中に立ち、その体は火に焼かれることもなかった。スミルナの信徒たちは手紙の中で、火の中から漂う、あらゆる香りを比類なく凌駕する芳香を嗅いだと述べている。　一方、不信心者たちはそれを見て、検察官に向かって叫び、火の中を突き抜けて聖人のところへ近づき、武器で彼を刺し殺すよう命じた。近づいた拷問官は、長い武器で聖人を貫き、その傷口からは並外れた量の血が流れ出した。まるで泉から湧き出る流れのように、その血は炎を完全に消し去った。集まった大勢の人々は、信者と不信者の間の違いがいかに大きいかを目の当たりにして、その光景に驚嘆した。　ポリカルプは、当時の傑出した人物であり、スミルナのカトリック教会の司教、使徒たちに連なる教師、そして聖なる預言者であった。彼が口にしたことはすべて実現した。

そこでユダヤ人たちは裁判官に、ポリカルプの遺体をキリスト教徒たちに引き渡さないよう懇願し始めた。「彼らは――とユダヤ人たちは言った――彼を、十字架にかけられた方と同じように、自分たちの神だとみなすだろう」。

不信心者たちは、全世界の救いのために十字架上で死なれた主キリストから、キリスト教徒が背を向け、他の誰かを神とみなすなどということはあり得ないことを知らなかった。　私たちは、真の神の子である彼に神聖な栄光を捧げ、殉教者たちを、キリストへの愛ゆえに彼のために苦難を受けたキリストの弟子であり、模範としてふさわしく尊びます。私たちは愛をもって彼らを抱きしめ、敬虔さにおいて彼らに倣いたいと願い、永遠の栄光において彼らと共にあることを望みます。　一方、百人隊長は、ユダヤ人たちに懇願された裁判官の命令に従い、ギリシャの慣習に従ってポリカルポスの遺体を炎に投げ込んだ。この聖人の存命中は、その遺体は火の害を受けなかったが、死後は炎の力に屈した。私たち（スミルナの人々は言う）は、その灰の中から彼の骨を拾い集め、　それは純金のように清く、高価な宝石よりもはるかに尊いものであり、それらをふさわしい場所に保管しました。そこでは、キリストのためにこのような偉業を成し遂げて苦難に遭った方を偲ぶとともに、同じ死をもってキリスト、すなわち私たちの真の神を告白し、賛美することを決意する者たちを励ますため、喜びをもって彼の受難の日を祝うのです。　これを私たちは兄弟マルコを通じてあなた方に送りました。これを読み終えたら、この手紙を他の各地に散らばっている兄弟たちにも送ってください。そうすれば、彼らもまた、　主は、御自身のしもべたちのうちからこれほど偉大な選ばれた者を私たちに示してくださり、御独り子イエス・キリストを通して、私たちすべてを御恵みで満たし、御自身の永遠の御国へと導いてくださる方です。御独り子に、永遠の栄光と誉れと礼拝がありますように。　ア

ーメン。すべての聖徒たちに口づけを。また、私たちと共にいる者たちも、あなたがたに口づけを送ります。この手紙を書いたエヴァレストも、その家族全員と共に、あなたがたに挨拶を送ります。ポリカルプは、5月のカレンダ（月の初め）の7日目、すなわち4月25日の「大土曜日」、トラリアヌスの総督在任中、大司教フィリッポスの立会いのもと、昼の8時に、イエス・キリストの永遠の御国へと召されました。　イエス・キリストの御言葉を宣べ伝える兄弟たちの健やかなることを祈ります。選ばれた聖徒たちの救いについて、神に栄光がありますように――聖ポリカルプが苦難を全うしたように、私たちもまた、キリストの御国において彼の相続人となれますように。　この書簡は、聖イリネイの弟子であり、祝福されたポリカルプの弟子であるガイによって書き写され、さらにソクラテス・コリントスがそれをもとに書き写した。そして私、長老ピオニオスは、これらの人々からすべてを受け取り、幻の中で私に現れた聖ポリカルプから授かった啓示と照らし合わせた。　そして、時の経過によって薄れてしまった部分をすべて改訂してこれを書き記した。それは、私をも、主イエス・キリストが御自身の選ばれた者たちと共に、御自身の天の御国にお迎えくださるためである。御父と聖霊と共に、御名に栄光がありますように、世々限りなく。アーメン」。

コンダク、第1声調:

主への言葉の実を捧げ、賢きポリカルプよ、美徳のいけにえを捧げたゆえに、神からふさわしい司祭として称えられし者よ。このゆえに、今日、あなたの言葉によって啓発され、主を賛美しつつ、あなたの称賛に値する記念を歌い上げる。

聖ヨハネ、アンティオキオス、アントニノス、モーセの記念日

記念日：2月23日

これらの聖人たちのうち、聖ヨハネは、タルガラの村の周辺に住み、修行に励んでいた聖リムネウス[2048] を知っており、彼の弟子となり、その修行生活の模範に倣った。 川岸にある、四方から風が吹き抜け、草木が一切生えていない一つの小高い丘を見つけると、彼は住居を持たないまま、そこで25年間にわたり苦行に励んだ。　この間ずっと、彼はパンと塩だけを糧とし、羊毛の服を身にまとい、全身を重い鉄の鎖で縛られていた。その鎖の重さに耐え、常に灼熱の太陽の光に晒されながらも、彼は決して日陰に入らず、涼を求めることもなかった。　ある日、聖人の常連の訪問者の一人が、彼の居場所へと続く小道の脇にアーモンドの木を植えた。しかし、木が成長し、　彼に影を落とすようになると、彼はどこにも涼む場所がないようにと、その木を切り倒すよう命じた。こうした苦行の末、聖人は主のもとへ召された。

聖モーセは、聖ヨハネの修道生活への愛に燃え、ラマと呼ばれる集落の上に聳えるある山の頂上で、彼と同様に修行に励んだ。

聖アンティオキオスは、すでに高齢であったが、ある人里離れた場所に囲いを築き、その中で無覆いの生活という苦行に励んだ。その近くでは、同じく長老である聖アントニンも苦行に励み、あらゆる点で彼に倣っていた。食事においても、衣服においても、不眠の修行においても、また日中の祈りと徹夜の祈りにおいても同様であった。高齢も、老いも、その年齢に伴う自然な衰えも、修道士たちが修道生活におけるあらゆる苦難を忍耐強く耐え抜くことを妨げることはできなかった。　彼らは、あたかも自分の中に若者のような力を感じているかのように、神に喜ばれるために熱心に修業

[2048] 尊者リムネイの記念日は2月22日に祝われる。

に励んだ。そのような修業の最中、彼らは安らかに自らの魂を主の御許に委ねた。肉体の断食という修業においては、彼らは尊者ヨハネと同様に尽力した[2049]。

聖ゼヴィン、ポリクロニオス、モーセ、ダミアンの記念日

記念日：2月23日

聖ゼヴィンはある山で修行に励んでいた。その山に居を構えると、彼は生涯を通じて、高齢になるまで同じ場所で修道者の修行に専念した。近隣の住民たちは常に聖人に助けを求め、彼の絶え間ない祈りから大きな恩恵を受けていた。　高齢に達すると、老衰のためもはや立つこともできなくなったが、杖に寄りかかりながら、祈りの修行を絶えることなく続けた。神に喜ばれる素晴らしい修行に生涯を捧げた後、聖ゼヴィンは息を引き取った。

聖ポリクロニオスは聖ゼヴィンの弟子であり、触れた指の跡をその表面に残す蝋のように、その生涯において師の美徳を完全に体現していた。彼は、熱心な徹夜、忍耐、そして祈りの行いにおいても、師に倣っていた。　しかし、尊者ポリクロニオスは、師の生涯にその例が見当たらなかったため、誰かを誘惑することになるのを恐れ、自らに鎖を巻くことを望まなかった。その代わりに、彼は地面から引き抜いた大きな樫の木の根を肩に担いでいた。その根は極めて重く、両手では動かすことさえできず、　それによって自らの肉体を重くしていた。このような功績により、聖ポリクロニオスには神から奇跡を行う恵みが与えられた。ある時、干ばつの最中に、彼は祈りによって地に雨を降らせ、また別の時には、空の石の器を聖油で満たした。他にも数多くの奇跡を成し遂げた後、彼は主のもとへ帰った。

聖モイセイとダミアンは、聖ポリクロニオスの弟子たちであった。聖モイセイは師と共に修行に励み、師の美徳を学び取り、あらゆる点で師に倣って生きた。　一方、聖ダミアンはイェラという名の修道院に身を寄せ、そこで空の独房を見つけると、師の生き方に倣ってそこで暮らすようになった。　彼の住処には、わずかなレンズ豆が入った小さな箱以外には何もなく、彼はそれを糧としていた。これらの聖人たちは、聖ポリクロニオスとの共同生活からこれほど大きな恩恵を受け、敬虔のうちにその生涯を閉じた[2050]。

- 同日は、修道院「不眠者たち」の初代院長である聖アレクサンドル修道士の記念日である[2051]。

3月9日

2月24日（旧暦）

主の先駆者にして洗礼者ヨハネの尊い頭部の第一および第二の発見。

2月24日の記念日

聖ヨハネ・洗礼者（マタイ14:11）の尊い首が切り落とされたとき、ヘロディアの娘はそれを皿に載せて、母親のもとに持ち帰った。　この不義の妻は、自身の不法を糾弾した聖人の舌を針で刺し、尊い首を冒涜した上で、聖人の遺体と共に埋葬することを許さなかった。ヘロディアは、もしヨ

[2049] これらの聖なる父たちは皆、5世紀にシリアで暮らしていた。
[2050] 聖ゼヴィン、ポリクロニオス、モーセ、ダミアノスの生きた時代は5世紀、その功績の地はシリアである。
[2051] その生涯については7月3日を参照のこと

ハネの遺体を首と共に埋葬すれば、彼が復活して再び自分を糾弾するのではないかと恐れたのである。　聖ヨハネ・バプティスタの弟子たちは密かにその遺体を運び出し、夜間に（マタイ14:12、マルコ6:29）、サマリアの町セバスティア[2052]　に埋葬した。一方、聖先駆者の首については、ヘロディアが自身の宮殿内の、人目につかない不名誉な場所に深く埋め込んだ。　聖ルカによる福音書（ルカ8:3）に言及されている、ヘロデの家臣フザの妻ヨハナだけが、その場所を知っていた。　彼女は、偉大なる聖預言者ヨハネの殺害と、その尊い首への冒涜に心を痛め、夜陰に乗じて密かにその首を取り出し、陶器の壺[2053] に入れ、ヘロデの所有地の一つであるオリーブ山[2054] に埋葬した。 その間、イエス・キリストに関する噂がヘロデの耳に入った。彼は妻のヘロディアと共に、もしかするとこれは死からよみがえったヨハネではないかと考え始めた。二人はヨハネの首を探したが、見つからず、困惑した。　ヘロデは、イエスについて家来たちにこうさえ言った。「これは、私が首を切るように命じたヨハネだ。今や彼は死からよみがえり、それゆえに彼によって奇跡が行われているのだ」（マタイ14:2、マルコ6:16）。

それから長い時が経ち、インノケンティという名の非常に高貴な貴族が、イエス・キリストを信じるようになった。　世俗を捨ててエルサレムへ赴き、かつてヘロデが所有していたオリーブ山の一角を購入し、そこに自分の修道室を建てて修道士となり、キリストの戒めを守って生活した。彼は自分用の小さな石造りの教会を建てたいと願い、基礎のための溝を掘り始めた。　すると、神の御導きにより、彼は地中に隠されていた、キリストの先駆者ヨハネの首が収められた壺を発見した。数々の恵み深いしるしや奇跡、そして神からの啓示によって、彼はその首が聖ヨハネのものであることを悟り、深い畏敬の念をもってそれを自身の元で大切に保管した。　彼が亡くなる前、その国全体に不信仰が広まっていた。王たちは真の神の代わりに偶像を崇め、エルサレムの至る所にその像を立て、それらに不敬な生け贄を捧げていた。　この様子を見て、自らの死を予感したこの修道士は、再び洗礼者ヨハネの聖なる頭部を地中に隠した。彼は、自分の死後、誰かがそれを不敬に扱うことを恐れたのである。　彼は、かつて自分の修道室と教会があったまさにその場所に、聖なる頭部を安置した。彼の死後、その教会は老朽化し、崩壊し、さらには地面と同じ高さまで平らになってしまい、長い間、洗礼者ヨハネの尊い頭部がどこにあるのか、誰も知らなかった。

偉大なる皇帝コンスタンティヌスが即位し、聖なる洗礼によってその国土を照らしたとき、彼の母である聖ヘレナは、エルサレムのすべての聖地を修復し、清めることに着手した[2055]　。彼女こそが、聖なる山を再び栄えさせることに成功したのだ。　その頃、東方で修行に励んでいた二人の修道士が、ヘレナ女王によって発見された尊い十字架と主の聖墓に礼拝を捧げ、その地のすべての聖地を巡るために、共にエルサレムへ向かうことに合意した。エルサレムに到着すると、彼らは聖地を巡り

2052　セバスティアはサマリアの主要都市であり、アウグストゥスからヘロデ大王に贈られた。ヘロデ大王はこれを完全に再建し、美しく装飾し、アウグストゥスへの感謝の意を込めて、セバスティア（セバスティ）と名付けた。これは「アウグストゥスの都市」を意味する。　伝承によれば、聖福音記者ルカは、セバスティアでキリストを宣教する際、住民から洗礼者ヨハネの右手を譲り受け、それをアンティオキアへ移した。　10世紀に洗礼者ヨハネの右手はコンスタンティノープルに移され、1798年にはヨハネ騎士団によって皇帝パヴェル1世に献上され、現在も冬宮殿の教会に保管されている。（これについては10月12日に詳しく語られる。）

2053　「スクデルヌイ」は「粘土の」という意味で、「スクデルニク」は陶器職人、陶芸家を指す。

2054　エレオン山、あるいはオリーブ山は、エルサレムの東に位置するユダヤの山の一つであり、その名はその地に数多く生えていたオリーブの木に由来する。

2055　コンスタンティヌス大帝――聖人であり使徒に等しい者――は、306年に皇帝として即位した。312年には、ローマ帝国においてキリスト教を国教と宣言し、325年には第1回全地公会議を招集した。337年に死去した。 コンスタンティヌス大帝の母である聖ヘレナは、キリストの信仰の普及と神の聖堂の美化に熱心に取り組んだことで知られている。326年、彼女はエルサレムへ旅し、そこで主の十字架を発見し、救い主の地上での生涯において栄光を受けたパレスチナの聖地を聖堂で飾り立てた。 327年に逝去した。使徒に等しい聖コンスタンティヌスと聖ヘレナの記念日は5月21日に祝われる。

歩き、 それらに礼拝を捧げ、主に祈りを捧げた。 そこで、彼らのうちの一人に、眠りの中で聖ヨハネ・洗礼者が現れ、その尊い頭部が埋葬されている場所を明かし、地中からそれを掘り出すよう命じた。目を覚ました修道士は、その幻視について仲間に話したが、その仲間はこれを単なる夢だと考え、自分でも信じず、相手にも同じように思わせた。 翌夜、聖ヨハネは再び現れたが、今度は各修道士に、しかも個別に現れ、こう言った。「立ち上がれ。不信仰と怠惰を捨て、告げられたことを成し遂げよ。」

目を覚ますと、二人は互いに見た幻について語り合い、その後、夢の幻で示された場所へ向かった。そこで土を掘り始めると、計り知れない価値のある宝物――キリストの洗礼者ヨハネの聖なる頭部――を発見した。彼らはそれをラクダの毛で作られた袋に入れ、宿舎へと戻った。

その頃、エメサの町[2056] に住むある貧しい陶工が、貧困のため故郷と妻を離れ、他国へ旅立たざるを得なくなっていた。道中、彼は洗礼者ヨハネの首を携えて歩いていた二人の修道士と出会い、彼らに加わって共に旅を続けた。 修道士たちは同行者を見つけたため、彼に洗礼者ヨハネの首が収められた麻袋[2057] を運ばせた。しかし彼は、自分が何を運んでいるのか知らず、平然と旅を続けていた。すると突然、聖ヨハネ・洗礼者が彼の前に現れ、こう言った。「仲間たちを捨て、手に持っているその麻袋を持って彼らから逃げなさい」。

聖人がそう命じたのは、当初は彼の出現を信じず、その後も自らその尊い首を運ぶことを望まず、自分たちには見知らぬ一介の者にそれを託してしまった修道士たちの怠惰と無関心を目の当たりにしたからであった。 同時に、聖人はこの貧しい人に恩恵を与え、善き、神に喜ばれる生き方へと導こうとしたのである。 この男は聖人の命に従い、修道士たちから身を隠して逃げ出し、まるでこの世のあらゆる宝物の中で最も尊いものかのように、洗礼者ヨハネの尊い首を敬虔に担いで、妻の待つ家へと戻った。そして主は、洗礼者ヨハネの首ゆえに、彼の家をあらゆる豊かさで祝福された。その陶工は、かつての不幸を忘れ、豊かさのなかで暮らすようになった。しかし、彼は驕ることはなかった。彼はその富から、貧しい者や困窮している者たちに惜しみなく施しをした。 これらすべてを、キリストの先駆者に対する敬虔な心ゆえに授かったのだと固く心に留め、彼は常にその聖なる頭部を崇め、毎日その前で香を焚き、灯を灯し、祈りを捧げ、生涯を誠実に過ごし、キリストの戒めに従って行動するよう努めた。 死期が近づくと、彼はキリストの洗礼者ご自身の命じられた通りに、聖なる頭部を水入れに入れ、その水入れを聖櫃に収め、封印して、この宝物を妹に託した。その際、彼はこの尊い頭部のおかげで、極度の貧困から抜け出し、裕福な人となった経緯を、妹に詳しく語った。 彼は妹に対し、この聖なる頭部を常に敬虔かつ誠実に保管し、聖ヨハネ自身がそれを許すまでは決して聖櫃を開けてはならないと遺言した。彼女は死ぬ前に、この宝物を、神を畏れ、徳の高い男性に引き継がなければならないとされた。

こうして、キリストの先駆者である聖ヨハネの聖なる頭部は、長い間、人から人へと受け継がれ、敬虔なキリスト教徒たちの間で代々大切に保管されてきた。ついに、それはエメサの近くにある洞窟に住んでいたある修道士エウスタフィオスに引き渡された。 彼はアリウス派の異端に染まっており、神への畏れを持っていなかった。彼のもとを訪れた病人は、彼が密かに保管していた洗礼者ヨハネの頭部から発せられる奇跡的な恵みによって癒やされた。 しかし、エウスタフィオスはまるで泥棒のように、この恵みを自分自身と自身の異端の功績であるかのように偽り、それらの奇跡的な癒やしの真の原因を人々から隠そうとし、それによって多くの人々を自身の異端へと誘い込んだ。しかし、エメサの住民たちはついに彼の邪悪な行いを知った。 エメサの公爵は司教と相談した上で、彼を洞窟から、そしてその地域の境界の外へ追放するよう命じた。エウスタフィオスは使者たちに、その日は洞窟に留めておくよう懇願し、翌朝には立ち去ると約束した。 使者たちがこれに同意すると

[2056] エメサは、シリア北西部で地中海に注ぐオロンテス川の東に位置するシリアの都市である。

[2057] ヴェレティシェ――粗布や麻布で作られた袋、ぼろ服、毛皮の衣。

、彼は夜陰に乗じて、聖なる頭部が収められた器をその洞窟の地下深くに隠した。というのも、彼はしばらく経ってから戻ってきて、この宝物を持ち出し、洗礼者ヨハネの聖なる頭部の力によって奇跡を起こし、再び自らの異端を広め、確立することを望んでいたからである。　しかし、異端者の望みは叶わなかった。彼が洞窟を去ると、そこには敬虔で徳の高い修道士たちが住み着いたため、彼は洞窟に入り、そこに残した宝物を取り出すことができなかった。

しばらくして、その場所に修道者たちが集まり、修道院が設立された。しかし、この洞窟に洗礼者ヨハネの尊い頭部が安置されていることを知る者は誰もいなかった。長い時が経ってからようやく、エメスのこの修道院のアルヒマンドリトであるマルケル――徳に満ちた人物――がそれを発見した。彼はそのことを次のように自ら語っている。

「神イエス・キリストに栄光あれ！主は、そのしもべマルケルである私に、夜の眠りの中で幻を見る恵みをお与えになった。それは、聖なる偉大なる四旬節の「中旬の七日間」[2058]　の2月18日のことだった。私は、私たちの修道院のすべての門が開かれているのを見た。　私は恐怖に襲われ、門を閉めようと外に出ようとした。しかしその時、修道院の門から川が流れ込んでいるのを見た。　私は驚き、これほど激しい水流がどこから来ているのかと考えた。そう思っていると、突然、東の方から水の上を轟音を立てて私たちに向かって進んできていた大勢の行列の声が聞こえてきた。彼らは皆、それぞれ独自の言語で、「これこそが、キリストの洗礼者、聖ヨハネである」と叫んでいた。

そのような叫び声を上げながら、彼らは修道院へと入っていった。一方、私は恐怖に襲われ、水のことなどすっかり忘れてしまっていた。門を後にし、私は階段の上へと上がった。そこに立っていると、修道院には二つの中庭があるように見えた。一つは西側に、もう一つは南側にあり、その真ん中には壮大な教会が建っていた。　各修道士は西側の中庭に入ると、教会へと向かい、そこで礼拝を捧げた後、南側の扉から出ていった。修道士たちの行列が止むと、私は再び、「見よ、偉大なる聖ヨハネ・バプティスト」と叫ぶ人々の声を耳にした。

見やると、教会の中に彼がいた。彼の両脇には二人の男が立っていた。その時、修道者たちは聖ヨハネのもとへ近づき、彼から祝福を受け始めた。そこで私も、洗礼者のもとへ進み出て、彼から祝福を受けようと考えた。　恐れと畏敬の念を抱きながら、私は最後尾から特別な扉をくぐり、洗礼者に向かって地面にひれ伏し、その足に触れた。すると彼は、立ち上がるよう命じると、愛を込めて私を抱きしめ、私の顔に触れ、蜂蜜で満たされた器を取り、私に手渡しながらこう言った。「この祝福を受けなさい！」

そう言うと、彼は立ち去った。私が彼の後を追おうとしたとき、聖人の前を先導する火の柱に気づいた。その光景に恐怖を覚え、私は目を覚ました。次の夕方が訪れると、私は兄弟たちに、通常の規則に定められた詩篇の節を歌うよう命じた。　その賛美歌を歌っている最中、イサアクという名の兄弟が上を見上げると、窓越しに、聖ヨハネの尊い頭蓋骨が秘められていた洞窟の教会で火が燃えているのが見えた。それを見て、彼は叫んだ。「父よ！　見てください、聖なる洞窟で火が燃えています」と叫んだ。「恐れるな、兄弟よ」と私は彼に言った。「しかし、十字を切ってから、このことは口外しないようにしなさい」。

それから五日が過ぎた。六日目の夜、私が眠りにつくと、ある手が私の右脇腹を三度突き、声が響いた。「見よ、私はあなたに与えられた。起き上がり、あなたの前を導く星に従い、その星があなたを導く場所を掘り起こせば、私を見つけるだろう」。

戦慄と恐怖に駆られ、私は眠りから覚め、寝台に座ると――見よ、私の小部屋の扉の前で星が輝いている。　私は恐怖に襲われたが、十字を切って外へ出た。星は私の前を導いており、それに従って洞窟に入った。洗礼者ヨハネの尊い頭部が安置されている場所にたどり着くと、星は突然見えな

[2058] 四旬節の中間週――教会規則において、大斎の中間（第4）週を指す名称。この週は「十字架礼拝の週」とも呼ばれる。

くなった。私は地面にひれ伏し、主を賛美した。　長い祈りの後、私はろうそくに火を灯し、乳香を焚き、主の御名を呼びながら掘り始めた。掘っていると、大きな音と轟きが聞こえ、地面はまるで銅のように固かった。私は長い間苦労したが、ついに煉瓦を見つけた。それらを取り除くと、石の板が見えた。　大変な苦労の末、ようやくそれを穴から取り出すことができた――そして、その中に、洗礼者ヨハネの尊い頭部が安置されていた聖なる器を見つけた。喜びと恐怖が入り混じりながら、私はろうそくと香を取り、勇気を振り絞ってその器を手に取り、礼拝を捧げた後、再び蓋をして洞窟から出た。　入り口では、私たちの修道院を訪ねてきたアルヒマンドリト・ゲンナディが私を出迎えてくれた。彼は私を洞窟の中に案内し、祈りを捧げた後、自分の幻視について語り始めた。

「私は見たのです」――彼はそう語り始めた――「まるで私たち二人が、今まさに立っているこの場所に立っているかのようでした。そこには、太陽よりも清らかで明るい大麦のパンが山ほどありました。　洞窟には大勢の人々が押し寄せ、私たちの手からそのパンを受け取っていました。しかし、その量は減るどころか、かえって増え続けていたのです。」

これはゲンナディが私に語ったことである。その時、私はこの幻視が神から彼に与えられたものであり、それがキリストの洗礼者による尽きることのない恵みを意味し、その　場所ですべての人に豊かに与えられることを悟った。　そこで私も彼に自分の幻について語り、私が得た計り知れない宝を見せた。それを見た彼は大いに喜び、私たちは今後どうすべきか相談し始めた。　私は、まずこのことを誰にも、教会の最高司牧者であるエメスのウラティウス司教にさえも話さず、何よりも先に、ダロミオス修道院に滞在し、断食の修行に励んでいた聖なる長老ステファノスに知らせるよう勧めた。　彼なら、親交の深い司教にもこのことを伝えてくれるはずだった。しかし、ダロミイ修道院に着いてみると、ステファノは他の自分の修道院を視察に出かけており、そこにいなかった。そこで、私たちはその町の主教座聖堂で首席を務めていた助祭キリアコスを呼び寄せた。　キリアコスは私たちのところに来て、キリストの御名において私たちを歓迎し、自分の見た幻について語ってくれた。それは、ゲンナディウスが目撃したものと全く同じであった。そこで私たちは彼に私たちの秘密を打ち明けた。ゲンナディウスとキリアコスの二人は、このことを司教に伝えるべきだと口々に言ったが、私はステファノスの帰還を待ち続けた。すでに5日が経過していた。　6日目――それは土曜日だった――私たちは皆で集まって座り、語り合っていた。突然、私は膝をついて倒れてしまった。何らかの病が突如として私を襲ったのだ。私は立ち上がることも、身動きをすることもできなかった。　同行者たちは、この出来事に驚き、私のために主に祈り始めた。祈りを終えると、彼らは私にこう言った。「その秘密を司教に話すべきだったと、私たちはあなたに言わなかったか？」

その時、私は、神の栄光のために語るべきだったそのような秘密を司教に伝えなかったことが、間違っていたと自覚した。しかし、その間も私の病気は治まらなかった。夕方、いつもの祈りの賛美を終えた後、ゲナディウスとキリアクが私のところに来て、こう言った。

「私たちは誓い合ったんだ。日の出前の早課の時に、あなたの秘密を司教に話すと。」

私は彼らにこう答えました。

「君たちの決断は正しい。君たちが言った通りにしよう。」

私が彼らに同意したまさにその瞬間、私は完全に健康になったのを感じた。私の病気は治っていたのだ。翌朝、私たちは皆で街へ向かい、早課の後、教会から出てきたばかりの司教を見つけ、キリストの洗礼者ヨハネの聖なる頭部が発見されたことについてすべてを彼に語った。　司教はその知らせを聞いて大いに喜びました。しかし、彼は当面の間、このことを他人に話すことを禁じ、私たちに修道院に戻るよう命じました。　翌朝、司教は自ら長老たちや助祭たちを連れてその場所を訪れた。共同の聖体礼儀を執り行った後、司教は尊い頭部が収められた器が置かれている場所へと向かった。助祭が「ひざまずき、主にお祈りしましょう」と告げると、皆が地面にひれ伏した。　その間、ウラニウス司教は祈りを捧げていた。祈りを終えると、彼は尊い頭部が入った器を取り上げ、地中から

持ち出した。司教と共にいた長老の一人、マルクという者はこれを信じず、「洗礼者ヨハネの頭部が、どうしてここに現れることがあり得るのか」と言った。

そう言いながら、彼は大胆にもその器に手を伸ばし、洗礼者ヨハネの尊い首の髪に触れた。すると突然、その不信仰のゆえに、彼の手は萎え、器に張り付いてしまった。これを見た者たちは皆、大いに恐怖に襲われた。司教は参列者全員と共に、熱心に神への祈りを捧げた。その時、マルクは大変な苦労の末、ようやく器から手を離すことができたが、彼自身は病に伏すこととなった。　ウラニウスは教会の聖職者一同と共に、その中に秘宝が収められた聖なる器を取り上げ、聖なる教会へと運び、祭壇の助祭席（[2059] ）に安置した。この聖遺物は、エメサにキリストの先駆者を称えるために、華麗に装飾された特別な教会が建設されるまで、ここに保管されていた[2060] 。聖なる頭部がこの教会に移される少し前、洗礼者ヨハネは、信仰を持たなかった長老マルクに幻として現れ、頭部を移す際に、その聖なる器に手で触れるよう命じた。長老はその通りにしたところ、癒やしを受けた」。これで、至福のマルケルの物語は終わる。

別の著述家である聖シメオン・メタフラスト[2061] は、尊者マトローナの伝記の中で、洗礼者ヨハネの尊い頭部の発見について、さらに次のように語っている。「当時、ある男が自分の畑を耕していたところ、かつて洞窟と修道院があったまさにその場所で、地面から火が噴き出しているのに気づいた。　彼はこれを一度だけでなく、何日も続けて地面から絶え間なく炎が噴き出しているのを目撃した。日曜日、すなわちマルケルがゲナディウスとキリアコスと共に司教のもとへ到着したまさにその日、この男もまたエメサの町を訪れ、ウラニウス司教にその不思議な炎について語った。　司教は聖職者たちと共にその場所へ向かった――そこはかつて異端者エウスタフィオスが住んでいた洞窟であった。祈りを捧げた後、司教はその場所で掘るよう命じた。その命令が実行されると、その場所から一つの器が見つかった。　その中には金も銀も入っていなかったが、この世のあらゆる宝物よりもはるかに貴重な宝――主の洗礼者ヨハネの聖なる頭部――が納められていた。この噂は至る所に広まり、エメスの住民だけでなく、周辺のすべての町や村の人々もここに集まり始めた。　聖なる頭部を拝むために、修道院から聖女マトローナもすべての修道女たちと共にここへやって来た。キリストの洗礼者ヨハネの聖なる頭部からは芳香を放つ聖油が滲み出ており、司祭たちはそれを使って集まった人々の頭に十字架の形を描いて塗った。　聖女マトローナは、その聖油の一部を小さな聖櫃に収め、祝福のために自分の修道院へ持ち帰ろうとした。しかし、大勢の人々が彼女の周りに押し寄せ、皆、司祭たちから祝福を受け、聖油を塗ってもらいたいと願っていた。　ある人々は、聖女マトローナが聖櫃に聖油を納めていることに気づくと、自分たちはどうしても司祭たちのところまでたどり着けないため、聖油を塗ってほしいと彼女に懇願し、彼女は彼らの願いを聞き入れた。　群衆の中には、生まれつき日の光を見たことのない盲人が一人いた。彼は聖女マトローナに、聖なる聖油で彼に印を付けてくれるよう頼んだ。彼女が彼の目に聖油を塗ると、彼はたちまち目が見えるようになった。聖シメオン・メタフラストは、洗礼者ヨハネの首の発見についてこのように伝えている。

しばらくして、聖ヨハネ・バプティスタの聖頭はエメサからコンスタンティノープルへと移された。ここで、エウドムと呼ばれる場所に、皇帝の命により美しい教会が建てられ、その中に尊い聖

[2059] ディアコニク――祭壇の南側に設けられた区画で、助祭の管理下にある聖具（祭服、聖器、祭壇上の福音書や十字架、聖体箱など）を保管する場所である。

[2060] 聖ヨハネ・洗礼者（前駆者）の頭蓋骨が二度目に発見されたのは452年のことである。アルヒマンドリト・マルケルの証言によれば、聖なる頭蓋骨は2月18日に彼に現れ、2月24日にウラニウス司教によって教会のディアコニクへ運ばれ、同年452年10月26日に、彼の名にちなんで建立された教会へ移された。

[2061] シメオン・メタフラストは、10世紀の著名な教会作家（†940年）であり、聖人の伝記を編纂・収集した人物である。この分野における彼の著作は、後に聖ディミトリ・ロストフスキーの『チェチイ・メナイ』の主要な出典となった。

頭が安置された。偶像破壊派の異端がはびこり、多くの聖なるイコンが焼かれた時代、　他の聖像は海や川に投げ込まれ、足で踏みつけられ、様々な形で冒涜された。その時、敬虔なキリスト教徒たちは、異端者で溢れかえったコンスタンティノープルから逃れる際、密かに洗礼者ヨハネの聖首を携え、かつて聖ヨハネス・クラマトルスが帰天したコマニ[2062]へと運びました。 そこで彼らは、それを銀の器に納め、再び地中に隠した。この尊い聖遺物は、テオフィロスの息子であるミカエル皇帝と、正教を再び確立したその母テオドラ皇后の時代まで、人知れずここに保管されていた[2063]。 ミハイルの治世において、この聖遺物は神の御心により再び発見され[2064]、私たちの神キリストの栄光と誉れのために、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリストの栄光と誉れのために、総主教イグナティオスによってコンスタンティノープルへ移送された。アーメン。

トロパリオ、第4調:

地より輝きを放つ、洗礼者ヨハネの頭は、朽ちることなき光を放ち、信者たちに癒やしを与え、天からは多くの天使を集め、地上の者たちを招き集め、キリスト神への賛美を心を一つにして捧げさせる。

コンダク、第2調:

神の預言者、恵みの先駆者よ、あなたの頭は、地から現れた最も聖なる茨の如く、常に癒やしをもたらす。あなたは、かつてこの世でそうであったように、今また悔い改めを説き続けているからである。

ペチェルスクの聖エラスムスの記念日

記念日：2月24日

*「知恵ある者の冠は、その富である」*とソロモンは言っている（箴言14:24）。しかし、とりわけ、自らの富をキリストの教会を飾るために用いることはふさわしいことである。なぜなら、それによって天の御国を得ることができるからである。神の聖堂をこのように美しく飾ったのが、私たちの尊い父エラスムス、ペチェルスクの修道士であった。　その功績により、彼は天の御国の冠を受けるにふさわしい者とされた。多大な富を持っていた彼は、修道士が地上の財宝を所有することはふさわしくないと判断した。教会の荘厳さを愛した彼は、全財産を教会の装飾に費やし、ペチェールスクの教会にある多くのイコンを金や銀で装飾した。　それらの前で祈りを捧げ、信仰をもってそれらを見つめながら、彼は自らの魂――生ける神のこの神殿――を、物質的な銀や金ではなく、清らかさ、

2062 コマナ――小アジア北東部のポンテ州にある都市。

2063 テオドラ――ビザンツ皇帝テオフィロス（偶像破壊者）の妃。同皇帝の死後、彼女は息子のミカエルと共に国政を執った。ミカエル3世皇帝は842年から867年まで在位したが、 即位時は4歳であったため、855年までは母であるテオドラ皇后が国政を執った。842年のコンスタンティノープル公会議において、テオドラ皇后の治世下で聖像崇敬が復活し、四旬節の最初の週に行われる正教の祝典が制定された。

2064 洗礼者ヨハネの頭部の3度目の発見は850年頃であり、教会では5月25日に祝われる。 再びコンスタンティノープル（ツァールグラード）に移された洗礼者ヨハネの尊い頭部は、当初は王宮に安置されていたが、その後その一部はストゥディオスの洗礼者ヨハネ修道院に移された。この修道院で、1200年に巡礼者アントニオスが頭部の頂部を目撃した。　頭部の別の部分はペトロスのプロドロム修道院にあり、十字軍によってフランスのアミアンへ移され、その一部はローマへ移され、教皇シルヴェストルの教会に安置されている。その他の部分は、アトス山のディオニシオス修道院およびカルイのウグロヴラヒ修道院にある。

愛、そして修道士にふさわしいその他の美徳をもって飾り立てた。　預言者と共に、彼は自らの栄光についてこう叫ぶことができた。*「あなたの口の律法は、私にとって、千の金や銀よりも尊い」*（詩編118:72）。

尊者エラスムスには、ある試練が訪れた。彼が財産を使い果たして貧乏人になると、誰もが彼にほとんど注意を払わなくなった。すると、悪意ある悪魔が彼の心に、教会の装飾に全財産を費やしたにもかかわらず、それに対する見返りや報いも何も得られなかったという邪悪な考えを吹き込み始めた。　「すべての財産を貧しい人々に配ったほうがよかった」と、悪魔は彼に囁いた。これらの考えが悪魔によって吹き込まれていることに気づかずに、エラズムは絶望に陥り、無気力な生活を送るようになり、自分の魂の救いについて気にかけることをやめてしまった。　しかし、寛大で義なる主は、エラズムの過去の美徳を覚えておられ、彼を救われた。主は彼に激しい病を降らせた。エラズムはすでに間近に迫った死を予感し、病床に横たわり、七日間、目を閉じたまま一言も発しなかった。彼がまだ生きていることは、息遣いからしか判別できなかった。　八日目に、すべての修道士たちが彼の元へ集まった。彼を見て恐怖に駆られ、こう言った。「ああ、この兄弟の魂は悲惨だ。彼は罪と怠惰の中に生きてきた。今、彼の魂はある幻視を目の当たりにし、苦悩している。肉体から抜け出すことができないのだ。」

すると突然、至福のエラズムは、まるで病気だったことなどなかったかのように起き上がり、座ると、修道士たちにこう言った。「父たち、兄弟たちよ！　あなたがたの言葉は真実である。私は罪深く、悔い改めていなかった。しかし今、尊い父たちであるアントニウスとテオドシウスが私の前に現れ、こう言ったのだ。　『我らは主のためにあなたのために祈り、主はあなたに悔い改めるための時間を与えてくださった』と。その後、私は聖母マリア様――イコンに描かれている通りの姿で――を仰ぎ見ました。その尊い御手には永遠の御子がおられ、御傍には多くの聖人たちがいました。そして、御母は私にこうおっしゃいました。「エラスムスよ！　あなたが私の教会を飾り、イコンで豊かにしたように、私もあなたを飾り、私の御子の御国であなたを高めよう。貧しい人々はどこにでもあなた方と共にいるが、私の教会はあなた方のどこにでもあるわけではない。　立ち上がり、悔い改め、偉大な天使の姿を受け入れなさい。そして三日目に、あなたが悔い改めた後、あなたが私の家の美しさをこれほどまでに愛したことを称えて、私はあなたを私のもとへ迎え入れる」と。

こう言い終えると、エラスムスは兄弟たちの前で、何も隠さず、恥じることもなく、自分の罪を告白し始めた。その後、立ち上がって教会へ向かい、スキマ（修道服）を授かり、三日目に、聖母ご自身が予言された通り、喜びをもってその魂を主と聖母マリアに委ねた。

このことから、教会をイコンで飾ることがいかに神の御心にかなうことか、また主がそのような人々を御自身の聖人の列に加えられることが明らかである。

聖エラスムスの祈りによって、主が聖なる教会を飾るすべての人々を助け、来たるべき世において、私たちの主イエス・キリストと共に永遠の至福を得ることができますように。主には、父なる神と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン[2065]。

3月10日

2月25日（旧暦）

[2065] 聖エラスムスの入寂は1160年頃であった。その聖遺骨はアントニオスの洞窟に安置されている。

私たちの聖なる父、コンスタンティノープル大司教タラシオスの生涯

記念日2月25日

聖タラシオはコンスタンティノープルで生まれた。父ゲオルギオスと母エウクラティアは高貴な人々であり、パトリキウス階級に属していた[2066]。 成人し、優れた教育を受けたタラシウスは、王宮で様々な役職を務めた。その賢明さと善良な人柄ゆえに、宮中では誰もが彼を愛し尊敬し、彼は王の顧問の一人に任命された。 当時、王位にはコンスタンティン・ポルフィロロドス[2067]が就いていた。彼はレフ・ホザール[2068]の息子であり、コプロニムス[2069]の孫であった。彼は即位当時わずか10歳であったため、単独で統治するのではなく、母のイリーナ[2070]と共に統治していた。 当時、パトリアルヒを務めていたのはパヴェル・キプリアニン[2071]であり、彼は高潔で敬虔な人物であったが、あまりにも意志が弱く臆病であった。彼は、前述のコプロニモフの息子であるレフ・ホザル[2072]の治世中にパトリアルヒに就任したが、その時代、レフ・イサヴリアニン　に端を発した聖像破壊派の異端が、ますます勢いを増していた。　多くの者が聖なるイコンを崇拝したために、不義な皇帝から甚大な苦難を強いられているのを見て、総主教は恐れをなして自らの敬虔さを隠すようになり、さらには異端者たちとも交わるようになった。　レフ・ホザルの死後、総主教は聖なるイコンを崇拝するという敬虔な慣習を復活させたいと願ったが、それを成し遂げることはできなかった。彼には協力者がいなかったからである。その一方で、イコン破壊派の異端は、首都だけでなく国家の他の地域においてもますます勢いを増していた。このことは総主教を深く悲しませた。　正教の勝利のために何もできないと悟ったパウロは、わずか4年しか在任しなかった総主教の座を去ることを決意した。病に倒れた彼は、密かに総主教宮殿を離れ、聖フローラ修道院へと赴き、そこで聖なる修道服を身にまとった。総主教が修道者となったという噂はすぐに至る所に広まり、人々は皆、この事態に深く驚いた。そして、イリーナ皇后は、総主教が事前にその意向を告げることなく座を去ったため、深く悲しんだ。そこで彼女は、息子のコンスタンティノス皇帝を連れて総主教のもとへ赴き、こう尋ねた。

「父上、一体私たちに何をしたのですか？ なぜこれほど突然に聖座を去られたのですか？」

パウロはこう答えた。

「私の病と死が近いという予感、そしてとりわけ我らが教会内の風潮が、私を総主教の座を離れ、聖なる修道服を身にまとうよう促したのだ。」　教会は偶像破壊者たちから多大な苦難を受けており、偶像破壊の異端が長くはびこった結果、癒えぬ傷を負ってしまった。他の多くの人々と同様、この罪深い私もまた、異端者たちの罠を免れることができず、その中に陥ってしまった。今となってはそれを痛切に悔いている。というのも、私は三度も自らの手で異端的な決議に署名してしまったからだ。　しかし、とりわけ私を悲しませ、心を重くさせるのは、あなたがたの支配下にあるすべての地域が、信仰の規則を堅く守り、正統な教えに従うことで、私たちの教会を遠ざけ、自らをキリストの群れと見なし、あたかも私たちが同じ群れの羊ではないかのように、私たちを自分たちから追い払

[2066] パトリキウスとは、ローマ帝国、そして後にビザンツ帝国における最高階級を指す呼称であり、現代の由緒ある貴族階級に相当する。

[2067] コンスタンティノス6世ポルフィロゲネトスは、780年から797年まで在位した。

[2068] レオン4世・ホザルは775年から780年まで在位した。

[2069] コンスタンティノス5世コプロニモスは、741年から775年まで帝位にあった。

[2070] コンスタンティノス皇帝の母は、レウ・ホザールの妻であった。息子の即位後、彼女は10年間にわたり、790年まで彼に代わって国政を執った。その後、コンスタンティノスが廃位されると、彼女は802年まで統治を続けた。

[2071] それは、686年から693年まで総主教の座にあったパウロ4世であった。

[2072] レフ3世・イサヴリア人は716年から741年まで在位した。

っているのを見ることです。　それゆえ、私は異端の集団において牧者となることを拒み、四つの使徒座の首席司教たちから破門されるよりは、むしろ死を選ぶことを選びます。　神は、地上で生きるキリスト教徒の群れを顧みるために、王の権威をあなた方の手に授けられました。さあ、あなた方の母である教会の悲しみに目を向け、彼女が慰めようのない悲嘆の中に留まることを許さず、かつての輝きを取り戻せるよう配慮してください。　神に忌み嫌われる異端が、野原に放たれた豚のように、あなたの治世の間にキリストのぶどう園を荒らし尽くし、滅ぼし、その不敬虔な思惑によってそれを汚すことのないよう、決して許してはなりません。 あなたには、 という熟練した働き手がおり、彼はあなたの善き事業を助けてくれるでしょう。彼は真の信仰の房を育て上げ、それを神の教会の研ぎ石に当てて、知恵の杯を満たし、信者たちのために真の正教の信仰という飲み物を用意することができるのです。

総主教のこの言葉に、イリーナ皇后は彼に尋ねました。

「父上、誰のことをおっしゃっているのですか？」

「私はここで、貴殿の王の評議会で第一の地位を占めるタラシウスのことを指しています」と総主教は答えた。「彼は、その知性の杖をもって異端者たちの偽りの教えを退け、キリストの御言葉の群れにとって良き牧者となり、その群れを一つにまとめることができるため、教会を統率するのに十分にふさわしい人物であると私は知っています。」

パヴロス総主教のこの言葉を聞いた敬虔なイリナ皇后とその息子コンスタンティノス皇帝は、悲しみに暮れながらパヴロスの元を去った。一方、パヴロスは、そばに残っていた数人の上院議員たちにこう言った。

「ああ、もし私が、コンスタンティノープル教会が迫害者たちによって混乱に陥り、ローマ、アレクサンドリア、アンティオキア、エルサレムの四人の全地総主教からの呪いを招いていたあの時に、総主教の座に就いていなかったなら。 もし第7回全地公会議が招集されず、偶像破壊派の異端が非難されなければ、我々が救われることは不可能だ。

すると、上院議員たちは彼に尋ねた。

「なぜ、あなたが総主教に叙任された際、偶像破壊派の文書に署名したのですか？」

パウロはこう答えた。

「それゆえ、今、私は当時署名したことを悔い改めております。また、恐れから沈黙し、異端に反対しなかったため、主が私を罰されるのではないかと恐れています。しかし今、私は悔い改め、あなたがたが異端にとどまる限り、救われることは不可能であると断言します。」

その直後、パヴェル総主教は安らかに主のもとへ旅立った。当時、コンスタンティノープルの住民たちは、いかなる恐れや不安も抱くことなく、聖なるイコンをめぐって異端者たちと議論を交わし、論争するようになった。それまでは、レオン・イサウリアヌスの時代以来、誰も聖なるイコンを擁護して口を開くことを敢えてしなかったのである[2073]。

敬虔なイリーナ皇后は、帝国の全評議会と共に、教会の混乱を収束させることができる、十分にふさわしく賢明な人物をパヴェルの後任として探し始めたが、タラシイ以外にふさわしい人物は見つからなかった。　当時、タラシイは平信徒であった。しかし、パウロも彼を選出するよう勧めていたことを思い出したため、皆の選択は彼に落ち着いた。　しかし、タラシイは強く辞退した。そこでイリーナ女王は、あらゆる階層の人々――世俗の者も聖職者も――そして民衆全員を、「マグナヴラ」と呼ばれる宮殿――それはエドム地区の郊外に位置していた――に集め、聖公会の全議員の前で次のように述べた。　「ご存知の通り、パヴェル総主教は私たちのもとを去りました。今、私たちは彼の後任として、教会のもう一人の良き牧者であり教師を選ばなければなりません。」

[2073] これは、イリナが当時、普遍的な良心の自由を宣言する勅令を発布したことに起因する。女帝の命令により、イコンは再び元の場所に戻され、歓喜に沸く民衆の間では、過去の苦難や奇跡に関する多くの話が語り継がれた。

すると、皆が一斉に大声で叫んだ。

「タラシイ以外の誰でもないに違いない。」

一方、至福のタラシイは中央に立ち、こう言った。

「私は、神の教会が分裂し、分断されているのを見る。東方のキリスト教徒も西方のキリスト教徒も、私たちを呪っている。この分裂は重く、神の御国からの破門は恐ろしいものである。　全教会公会議を招集し、そこで我々は信仰において一つにならなければならない。我々が一つの洗礼によって照らされたように、我々の信仰も一つでなければならない。何しろ、すべての人々が信仰と愛の一致の中に留まることほど、神の御目にかなうものはないからだ。これこそが、不適格で経験の浅い私であっても、教会の指導を引き受けるにあたり、要求するものである。　もし全教会公会議が招集されず、もし偶像排斥の異端が相応の非難を受けず、もし正統な東方教会と西方教会との間に信仰の一致がなければ、私は呪いや非難を招くことのないよう、総主教職を受け入れることに同意しません。　なぜなら、その時には、この世のどの王も、私を神の裁きと永遠の刑罰から救い出すことはできないからです。

これを聞いた者たちは皆、第7回全地公会議を招集することを決定し、聖タラシウスに対し、彼らの牧者となることを拒まないよう懇願した。彼らは、　羊が牧者の声に耳を傾けるように、あらゆる点で彼に従うことを約束した。なぜなら、彼らは聖タラシウスが言葉の群れを真の道へと導くことができると固く確信していたからである。　こうして、彼らはタラシウスを説得し、総主教の位を受け入れ、コンスタンティノープル教会の統治を引き受けるよう促した。すべての聖職位を順次叙階された聖人は、[2074]、主が彼を助けて偶像破壊派の異端を根絶してくれるという確固たる希望を抱きつつ、総主教の座に就いた。

地位の変化に伴い、聖タラシオスは生活様式も変えたが、以前、俗世にいた頃から、彼はすでに精神的には修道士であった。　しかし今や、聖職者の座に就いた彼は、さらに熱心に霊的な修行に励み、肉体の天使となった。霊に燃え、主の前で熱心に働き、肉体を霊に従わせ、それを死に至らせることで、天使たちがまとう汚れなき清らかさを達成したのである。　彼の節制は驚くべきものであり、その苦行は偉大で、その活気は尽きることがなかった。彼は睡眠に費やす時間をわずか数時間に留め、夜通し祈りと神への思索に没頭し、柔らかい寝床を持たず、柔らかい衣服も避けた。　総主教の従者たちのうち、タラシウスがわずかな時間、睡眠で体力を回復しようとする際に、帯や衣服を脱ぐのを見た者は誰もいなかった。この聖なる人は、救い主の「*人の子は仕えられるためではなく、仕えるために来たのである*」（マタイ20:28）という救い主の言葉を心に留め、常に自らを仕える者として、他者に謙遜の模範を示していた。　彼は貧者や困窮者に対して極めて慈悲深く、飢えた者たちに食事を与え、乞食たちに衣服を与え、病院を設立し、毎日、自身の総主教の宮殿から食糧を配給した。また、キリストの復活の日やその他の祝日には、貧しい人々のために宴席を設け、その席では自ら貧しい人々に給仕した。　さらに、聖タラシウスは旅人宿を設け、両親から受け継いだ財産を用いて、フラキアのボスポラス海峡沿いに修道院を建立した（[2075]）。そこには徳の高い修道士たちが集められ、　その多くは極めて高い境地に達し、司教の座に召され、カトリック信仰の揺るぎない支柱となった。　特に聖タラシオスは、聖なるイコンへの崇敬を回復し、神を冒涜するイコン破壊の異端を打ち倒すことに尽力した。そのため、彼は常に皇帝たちに、全地公会議を招集するよう促していた。

こうして、コンスタンティヌス皇帝と、息子の幼少を理由に当時王国全体を統治していた母のイリーナ皇后は、至聖なるタラシウスと共に、すべての総主教および司教たちへ書簡を送り、公会議への参加を呼びかけた。　各地の司教たちはコンスタンティノープルに集まったが、総主教たちは代

[2074] 聖タラシオスは784年から806年まで総主教の座に就いていた。

[2075] これは、黒海とマルマラ海を結ぶ海峡の名称である。ボスポラス海峡の岸辺にはコンスタンティノープルが位置している。

理人を派遣した。ローマ教皇ハドリアヌス[2076] は、遠方の旅の困難さゆえに自ら公会議に出席することはなかった。　一方、アレクサンドリア、アンティオキア、エルサレムの各総主教は、当時すでにアガリア人の支配下にあったため、公会議に自ら出席することができなかった。そこで、彼らは代理として、敬虔さと英知に優れた聖職者たちを派遣した。

公会議の会場として選ばれたのは、コンスタンティヌス大帝によって建立され、ユスティニアヌス帝によって見事に装飾された大聖堂「[2077] 」[2078] であった。この聖堂に、至聖なるタラシウスと共に、他の各総主教の代理である司教たちが集まった。また、若き皇帝コンスタンティヌスも母イリナと共に同席していた。　すると突然、数多くの武装した兵士たち――彼らは皇帝の祖父コンスタンティノス・コプロニモスに巻き込まれ、今日に至るまでその教えに固執していた偶像破壊派の異端の信奉者たち――が教会に乱入してきた。　同じ異端に染まった一部の司教や貴族たちに密かに煽動されたこれらの、偶像排斥の迷信に深く染まった兵士たちは、武装して教会にやって来ると、大声を上げてその内部へと押し入った。　「我々は許さない――」と彼らは叫んだ。「あなたがたが皇帝コンスタンティノスの教義を拒むことを[2079] ；彼が自身の公会議で承認し、法として定めたことは、確固たるものであり、揺るぎないものでなければならない；　我々は、神の聖堂に偶像（彼らは聖なるイコンをそう呼んでいた　）を持ち込まれることを許さない。もし誰かが、コンスタンティノス・コプロニモスの公会議の決定[2080] に従うことを敢えて拒み、その決議を否定して偶像を持ち込もうとするならば、この地は司教たちの血で染まるだろう」。

このような動揺と憤りを目の当たりにし、女王と皇帝は司教たちに席を立つよう合図を送った。すると、公会議に出席していた者たちは皆、散り散りになった。　しかし、数日後、兵士たちとその指導者たちは、敬虔なイリーナ女王によって相応の罰を受け、軍階を剥奪され、農地を耕すために村々に追放された。その後、公会議の開催地として、ビフィニアの都市ニカイア[2081] が用意された。ここではすでに、邪悪なアリウスの異端を非難するために招集された第1回全地公会議[2082]　が開催されており、今回もここでの開催が決定された。こうして、コンスタンティノープル総主教タラシウス聖下と、彼に随行する総主教代理たち――アドリアンから派遣された者、　ローマ教皇からは、ローマの首席司祭ペトロと、もう一人のペトロ（修道士）、アレクサンドリア総主教ポリキアノス[2083] からは修道司祭トマス、アンティオキアのテオドリトス[2084] およびエルサレムのイリアス[2085] からは修道司祭ヨハネスが派遣された。　このほか、聖タラシオスは王室の顧問の一人であるニキフォロスという男性も同行させた。彼は聖タラシオスの死後、その徳高い生涯が評価され、総主教の座に就いた。 この公会議には、計367人の聖なる父たちが参集した。ニカイアで彼らと合流したタラシウス総主教は、同市最大の教会[2086] にて公会議の開会を宣言した。

[2076] 教皇ハドリアヌス1世は、772年から795年までローマ教皇の座に就いていた。

[2077] 言うまでもなく、コンスタンティノープルの主大聖堂である聖ソフィア大聖堂のことである。

[2078] ユスティニアヌス1世皇帝は、527年から565年まで在位した。

[2079] ここで言うのは、もちろんコンスタンティノス・コプロニモス、すなわちコンスタンティノス・ポルフィロゲネトスの祖父のことである。

[2080] この公会議は754年、ボスポラス海峡のアジア側、コンスタンティノープル近郊の皇宮で開かれた。公会議は、イコン崇拝は偶像崇拝と同義であると宣言し、教会からすべてのイコンを撤去することを決定した。

[2081] ビフィニアは、小アジア北西部の州で、マルマラ海、ボスポラス海峡、黒海の沿岸に位置していた。ニカイア（現在のイスピック）は、古代においてビフィニアの豊かで繁栄した都市であった。

[2082] これは325年のことだった。

[2083] アレクサンドリア総主教ポリキアンは、801年に死去した。

[2084] アンティオキア総主教テオドリトスは、777年から794年まで総主教の座に就いていた。

[2085] エルサレム総主教イリア3世は、797年に死去した。

[2086] それは787年のことだった。

第7回全地公会議の最初の会議は、9月24日、聖第一殉教者フェクラの記念日に開催された。会議は聖タラシオの開会の辞で幕を開け、その中で彼は公会議招集の理由を述べた後、司教たちに対し、公正に論じ、最近教会に持ち込まれた非正統的な教義を根絶するよう懇願した。　また、公会議宛ての皇帝の書簡も朗読された。そこには、パヴェル総主教が臨終の際、偶像破壊派の異端を根絶するために公会議を招集するよう助言したことが記されていた。　聖なる父たちは、正教の信仰に対する皇帝とその母の多大な配慮に対し、祝福を授けた。その後、異端に陥った司教たちによる悔い改めの表明の聴取が始まり、彼らはかつての誤りを破門し、正教の信仰告白を述べた。　その一人であるヴァシリー・アンキルスキイ（[2087] ）は、この巻物を手に持ちながら、次のように読み上げた。「聖なるイコンを崇敬しない者には破門を宣告する。聖なるイコンを偶像と呼ぶ者には破門を宣告する。聖なるイコンへの崇拝に反対するために聖書の言葉を引き合いに出す者には破門を宣告する。　聖なる父たちの伝承を、アリウス、ネストリウス、エウティキオス、ディオスコーロスらが拒んだように拒む者――破門；聖なる父たちから聖像崇拝が由来するのではないと主張する者――破門；カトリック教会が偶像を受け入れていると主張する者――破門」。

他の多くの司教たちも同様に振る舞い、悔い改めたすべての司教には、公会議において他の正統派の司教たちの中に席が与えられた。　一方、迷いを抱いていた者たちに対する裁きは、しばらくの間延期された。その際、聖タラシウスは次のように述べた。「長年の病は治りにくく、悪しき習性は根絶しがたい。しかし、霊的に病んでいる人々が真に悔い改めるならば、聖公会議は彼らを受け入れ、聖職の地位を剥奪することはない」。

聖公会議は30日間続いた[2088] ；この間、公会議の参加者たちは集まり、聖書および教会の聖なる教父や教師たちの教えの中から、聖なるイコンの崇敬に関する教義に関連する箇所を検討し、聖書と教会の伝承に基づいて、異端者たちの邪悪な思惑を打ち砕いた。　その際、彼らは、主キリストがご自身の聖なる御顔を刻み、エデッサのアウガルスに送られた聖なる布に関する確かな物語を引用した[2089] 。アウガルスは、単に その像の前にひれ伏しただけで、直ちに病から癒やされた[2090] ；　また、聖シルヴェストル（ローマ教皇）がコンスタンティヌス帝に示した、聖使徒ペトロとパウロのイコンに関する伝承も想起された；　また、ベリテでユダヤ人たちが冒涜し、そのために罰せられたキリストのイコンについても語られ、聖アタナシウスがこれをどのように証言しているかが回想された。このイコンに関する物語が朗読されると、すべての聖なる父たちは涙を流した。　最後に、彼らは偶像破壊派の異端を呪い、聖なるイコンの崇敬を承認した。この出来事に際し、聖なる教会には大きな喜びが満ち、人々は心から歓喜してイコン崇敬の承認を受け入れ、民衆全体が祝賀に沸き立ち、王や牧者たちへの祝福の言葉を唱えた。　かくして、至聖なるタラシウス総主教の多大な配慮と、敬虔なイリーナ女王の尽力により、聖像破壊派の異端は退けられ、踏みにじられ、キリストの教会には平和がもたらされたのである。

聖タラシイは、神の教会を賢明に統率し、不当な扱いを受けた者たちの擁護者であり、苦難にある者たちの助け手であった。 ある時、王室のプロトスパファリウスである[2091] ヨハネは、ある罪により投獄され、極めて残酷な拷問を受けた。夜になって手錠を解き放たれた彼は、教会へと駆け込み、教会の食堂に身を隠して、慈悲と死からの救いを懇願した。　その時、神の聖人タラシウスは彼を

[2087] アンキラは、小アジアの中央地方にあるフリギア地方の都市である。

[2088] 公会議の最終会議は10月23日に行われた。

[2089] エデッサは、メソポタミア北西部、ユーフラテス川を越えた場所にある都市である。アヴガルはエデッサの公または支配者であった。

[2090] この逸話を伝えているのは、パレスチナ・ケサリアの司教エウセビオス（†383）である。彼は古代キリスト教会の著名な歴史家であり、エデサ市の公文書に保存されていた古代の記録からこの話を引用した。

[2091] プロトスパファリオンとは、スパファリオン（スパフィ＝武器、剣に由来）と呼ばれた王室の近衛兵、あるいは従者の長のことである。

守り、イリーナ皇后の命を受けた兵士たちが彼を捜しに来た際、彼を引き渡さなかった。兵士たちは、彼が教会から出てくるのを待ち構え、昼夜を問わずその教会の入り口で彼を見張っていた。彼らは、いずれにせよ彼は最終的に教会から出ることを余儀なくされるだろうと考えていたからである。しかし、神の聖人は、自らの食事から彼に食べ物を送ることで、彼が教会の祭壇から出る必要がないようにした。また、彼が教会から出なければならない時には、自ら彼を見送り、自分のマントの下に隠して外へ連れ出し、その後、同様の注意を払って再び教会へ連れ戻した。　彼は長い間そのように行動し、その男に奴隷のように仕え、そのようなことを厭わなかった。　そして、この善良な羊飼いは、その羊を死から守り続けた。ついに、聖タラシウスは司教としての権威をもって、自らの庇護下にある男を殺害しようとした者たちの執拗な追及に果敢に歯止めをかけた。彼は、もし彼らが囚人の迫害を続けるならば、彼らを教会から破門すると宣言したのである。　こうして、プロトスパファリウスは、良き羊飼いである聖タラシウスの取り成しのおかげで、裁判から解放され、処刑を免れた。

一方、コンスタンティン王は二十歳に達すると、邪悪な顧問たちの讒言により、国全体を賢明に統治していた敬虔な母、イリーナ女王を権力の座から追放し、独裁的な統治を始めた。こうして母の監督から解放されると、彼は放蕩にふけり、不品行な生活を送るようになった。　彼は何の理由もなく、正妻であるマリア皇后を憎むようになり[2092]、テオドティアという名の別の女性への不義の情に燃え上がった。彼女と密かに同棲するようになり、彼女を妻兼皇后に据え、正妻を幽閉しようと企んだ。　マリアを陥れようと、彼は彼女が毒を使って自分を殺そうとしたという虚偽の中傷をでっち上げた。王はこの嘘をすべての人々に真実であるかのように装い、あちこちで語り広めた。人々は王の言葉を信じ、王妃が王を毒殺しようとしているという噂が民衆の間に広まった。　この知らせは、至聖なるタラシウス総主教の耳にも届いた。総主教は、王の狡猾さを悟り、深く悲しんだ。なぜなら、彼はマリア王妃の無実を固く信じていたからである。そこで、彼はコンスタンティヌスを諭し、その罪深さと虚偽を明らかにする方法を考え始めた。　その時、皇帝のお気に入りの高官の一人が聖なる総主教のもとを訪れ、皇后が嘘を真実であるかのように装って、皇帝のために毒を仕込んだという知らせを伝えた。話の最後に、彼はこう付け加えた。「今こそ、聖なる父よ、皇帝が最も忠実な妻との再婚を祝福すべき時です」。

この言葉に聖タラシウスは深く悲しみ、涙を浮かべながらこう語り始めた。「もし王が本当にあなたの言うことを企てているのなら、もし彼が、神の律法によって結ばれ、彼と一つの肉となっているマリアを、実際に自分から引き離そうとしているのなら、彼がすべての人々からの恥と非難を、いったいどのように耐え忍ぶことができるというのか？　また、その後、彼がどのようにして臣民たちにとって貞潔の模範となり得るのか、どのようにして皆に節制を促すことができるのか、私には理解に苦しむ。まさか、彼自身がそのような不法な欲望に曇らされているのに、姦通の罪を裁き、処刑することなどできるのだろうか？　仮に、あなたの言うことがすべて真実だとしても、主の御声に耳を傾けるべきではありませんか。「　*『姦淫の罪以外で妻と離婚する者は、彼女に姦淫の口実を与えることになる』*」（マタイ5:32）。それに、女王が王のために致命的な毒を用意したという話は本当なのでしょうか？　もしそうだとすれば、美しさと若々しさに溢れる我が君主よりも、さらに勇敢で美しい別の夫が彼女にいたなどということがあるでしょうか。　いいえ、私ははっきりと見て取れます。このすべての嘘は、誠実な結婚を汚し、清らかな寝床を穢し、姦淫を是認させることだけを目的としているのです。これが私の答えであり、私個人のみならず、私と同じような立場にあるすべての牧師や神父たちの答えでもあります。　あなたを遣わした者たちにこう伝えなさい。我々はあなたの言葉を信じない。我々は、そのような不法な行いに祝福を与えるくらいなら、むしろ死や激しい苦痛に耐える覚悟がある。王には、彼の不義な企てに我々の同意はないことを知らしめよ」。

[2092] この敬虔な女王は、聖フィラレート・ミロスティヴィの孫娘であり、12月1日に当たる。

これを聞いて、高官は悲しみに満ちて総主教のもとを去り、聖タラシウスから聞いたことをすべて王に報告した。王はそこで思案にふけり、総主教のそのような確固たる姿勢と不屈の熱意に驚嘆した。　聖タラシウスが自分の意図の達成を妨げないか、とさえ少し恐れるようになった。そこで彼は、その聖なる人物を宮殿に招き、丁重にもてなすことに決めた。自らの言葉で総主教の心を和らげ、味方につけようとしたのである。

聖タラシウス総主教は、第七回全地公会議においてアンティオキアおよびエルサレムの総主教たちの代理を務めた高潔な長老ヨハネと共に、皇帝のもとを訪れた。コンスタンティヌスと、慣例に従って彼のもとに来た者たちが席に着くと、皇帝は総主教に向かって次のように語りかけた。　「使者を通じて、尊き父よ、我々に起こった出来事についてはすでにあなたにお伝えしました。私はあなたを父として敬い、尊重しておりますので、あなたに何も隠すつもりはありません。しかし、私の妻が仕掛けているあの敵意と陰謀について、私自身が直接あなたに伝える必要があると感じています。彼女は神から私に与えられた妻ではない。本来なら私の助け手となるべきであったのに、彼女は私の助け手ではなく、最も邪悪な敵となってしまったのだ。法そのものが私に彼女と別れるよう命じており、この私の決意を阻む者は誰一人としていない。　何しろ、彼女の罪、その邪悪な企みは、誰の目にも明らかだからだ。それゆえ、彼女は裁判所の判決により、死刑に処されるか、あるいは修道女として出家させられるべきである。彼女に慈悲を示したいと願う私は、彼女を修道院に送ることに留める用意がある。そうすれば、彼女は死ぬまで自らの罪を悔い改め、嘆き悲しむことになるだろう。何しろ彼女は、ただの一般人ではなく、誰かの他人でもなく、敵にとって恐るべき存在である自らの夫、すなわち王を毒殺しようとしたのだ。もし彼女の卑劣な企みが成功していたなら、王国全体が少なからぬ混乱に陥り、彼女の悪行の噂は全土に広まっていただろう。」

最後の言葉を言い終えると、王は家来たちに合図を送った。家来たちは直ちに、ある種の濁った液体が入ったガラス製の容器を持って来た。王はそれを至聖なる総主教に見せながら、これは王妃が密かに王の命を奪おうとした致命的な毒であると語った。

その際、王はこう付け加えた。「彼女の悪意の道具をこの手に握っている以上、王妃の有罪を証明する証拠がまだ必要だろうか？彼女がどのような報いを受けるべきかは明らかではないか？今さら、彼女に対する裁きを先延ばしにする必要があるだろうか？いや、父上よ、もし彼女を生きて見たいのなら、一刻も早く彼女に修道生活を受け入れるよう勧めてほしい。　私はもはや彼女と夫婦として暮らすことも、彼女を見ることも、彼女を我慢することもできません。なぜなら、彼女が私のために用意したこの致命的な飲み物が、常に私の目の前にあるからです」。

王が不純な情欲に苛まれているのを見て、また、王が自らの欲望を満たすために、罪のない貞淑な王妃を不当に非難していることを悟った聖タラシウスは、恐れることなく王にこう言った。

「王よ、神ご自身が定められた律法に逆らってはなりません。狡猾な捏造を隠れ蓑にして、神の戒めを踏み躙り、破壊しながら、秘密裏に陰険な手段で真理に立ち向かってはなりません。　王は、すべてを公然と、自由な心で、清い良心をもって行うべきである。王冠を授けてくださった神に対して、神の命令に背き、秘密裏に、かつ陰険に何かを行うべきではない。　女王が、王を殺害しようとしたという告発について、全く無実であることは誰の目にも明らかである。なぜなら、美しさにおいてあなたに匹敵する者が誰がいるというのか。彼女があなた以上に愛せる者が誰がいるというのか。ましてや、あなたを毒殺するという邪悪な考えを抱くことなどあり得るだろうか。　あなた以上に権力を持ち、尊敬を集める者などいるだろうか。高貴さと富において、王権と名誉に包まれ、莫大な富を所有するあなたより優れた者がいるだろうか――王妃が誰をあなたより選ぶというのか？　あなたの権勢は偉大であり、あなたは気高さで誰よりも優れている。あなたの父、祖父、そして曽祖父は王位に就いていたからだ。あなたは地の果てまでその名を知られ、あなたの財宝は数えきれないほどである。　果たして、あなたの王妃にとって、あなた以上にふさわしい者がいるでしょうか？　いいえ、王よ、あなたが言うようなことはあり得ません。それは、あなたの王権を揺るがし、諸国民の嘲笑

の的とし、あなたを世間の笑いものにするためにでっち上げられた嘘に他なりません。　我々は、神の裁きを恐れるゆえに、あなたの正当な婚姻関係を破壊するなどとは決して思いもよらず、王妃を誹謗中傷しようとする噂を信じることもできません。いいえ、たとえ我々が苦しみや苦難に耐えねばならぬとしても、そのようなことは決していたしません。　我々は、あなたがとある女性に対して罪深い情欲を抱き、さらには彼女と不法な結婚を結びたいとさえ望んでいることを知っている。あなたが神の戒めを明らかに破っているのを見て、どうして我々があなたを敬うことができようか、王よ？　それなのに、どうしてあなたは聖所に入り、神の御座の前に進み出て、私たちと共にキリストの至聖なる聖体拝領を行うことができるというのか。神ご自身を証人として、たとえあなたが王であっても、神聖な聖体拝領のために聖所へ入ることを許すことはできない。なぜなら、古の祭司たちにもこう告げられていたからだ。「わたしの祭壇を踏みにじらせてはならない」。

そう言い終えると、至聖なる総主教は黙り込んだ。その後、前述の長老ヨハネが王に繰り返し諭した。しかし、王は彼らの言葉に耳を貸そうともせず、激しい怒りと憤りに駆られた。　王を取り巻くすべての高官や支配者たちも不満を抱いていた。そのうちのひとり、貴族出身の男は、ヨハネ長老が王の意志に反する言葉を口にしたことを理由に、自らの手でその腹に剣を突き刺してやるとまで豪語した。　怒りに満ちた王は、聖なるタラシウス総主教と高潔なヨハネ長老の両名を、不名誉な形で王宮から追放するよう命じた。　こうして、真理のために追放されたこの二人の男は、かつてヘロデの不法な結婚を糾弾した聖ヨハネ・バプティストに倣い、王のもとを去った[2093]　。去り際、彼らは足のほこりを払い落とし、「我々は汝らの不法に対して責任を負わない」と述べた。

一方、王は正妻を宮殿から追い出し、女子修道院へ送ってそこで無理やり修道女にさせ、自身は父方の遠縁にあたる側室テオドティアとの結婚を祝った。　この不法な結婚は、総主教の知らぬ間に、教会のイコノムである長老ヨセフによって執り行われたが、彼はその厚かましい行為のせいで、後に教会から破門された。　至聖なる総主教は、この姦淫的な結婚を解消しようとあらゆる手段を尽くしたが、叶わなかった。というのも、皇帝は、もしこの結婚を禁じられれば、再び偶像破壊派の異端を煽り立てるだろうと豪語していたからである。　それゆえ、聖タラシオスは、キリストの教会にさらに大きな災いが降りかからないよう、皇帝がその不法な行いに留まることを許した。というのも、聖なる総主教は、この皇帝の父、祖父、そして曽祖父が、聖なるイコンを崇敬した多くのキリスト教徒を虐殺した異端のイコン破壊者であったことを常に心に留めていたからである。　王は総主教に怒りを抱き、あらゆる手段で彼を迫害したが、聖人はこれらすべてを忍耐強く耐え忍び、神に感謝しつつ、大牧者としての高貴な地位にふさわしい振る舞いを続けた。しかし、しばらくして、王には神の懲罰が下った。　その母である敬虔なイリーナ女王は、かねてより息子の邪悪で不法な生き様を看過していなかった。彼女は、息子が神の律法を踏みにじり、再び聖像破壊運動を煽ろうとしているのを目の当たりにしていた。　自らの息子よりも神とその真理を愛していた彼女は、主要な高官たちと相談した上で、息子に反旗を翻し、彼を拘束して、彼が生まれた、いわゆる「ポルフィリイの宮殿」として知られる宮殿に閉じ込めた。 その後、彼女は、5年前に息子が父の三人の兄弟――ニキータ、アンフィム、エウドクシア――の目を潰したのと同様に、息子の目を潰すよう命じた。こうして、王は自らの行いに応じた罰を受け、病により亡くなった。そしてイリーナは再び王の笏を手にし、息子の治世中に乱れたすべてを正した。

それ以来、神の聖なる御使いタラシイは、平和と静寂の中に身を置き、熱心に言葉の群れを牧し、異端者から清められた教会を統率した。叙階のその日から、彼は毎日自ら神聖な典礼を執り行い、病気のときを除いて、この慣習を決して怠らなかった。　聖人が高齢に達すると、彼は肉体の病に倒れた。死の訪れを感じながらも、至聖なるタラシイ総主教は、病床から起き上がれなくなるほど衰

[2093] ここで言及されているのは、当然ながらヘロデ・アグリッパのことである。彼はヘロデ大王の息子であり、ガリラヤおよびヨルダン川東岸地域の支配者で、生前の兄フィリッポスの妻であるヘロディアと結婚した。

弱するまで、その習慣を絶やすことはなかった。そのときになって初めて、彼は自ら神聖な聖体礼儀を執り行うことをやめた。

臨終の際、聖タラシウスは邪悪な霊たちと戦い、勝利を収めて彼らを打ち負かした。　それらが、彼の若き日から人生を精査し、多くの不義な行いを彼に虚偽でなすりつけようとしたとき、彼はこう答えた。「あなたがたが言っていることについて、私は無実である。あなたがたは私に対して虚偽の中傷をしている。あなたがたには、私に対して何の権威もない。」

その際、当時まだ助祭であったニカイアの司教イグナティオスが、彼の伝記を記していた。病床に横たわる聖人のそばに身を乗り出したイグナティオスは、聖人のこの言葉を耳にした。聖タラシオスがもはや言葉を話すことができなくなった後も、彼は手で悪霊を追い払い、それらに打ち勝っていた。　一日の終わりに、慣例に従ってダビデの詩篇が詠まれ、*「主よ、あなたの耳を傾けて、私の声を聞いてください」*（詩篇85:1）という詩篇が歌われ始めたとき、聖タラシウスは安らかにその聖なる魂を主に委ね、その顔は輝きに満ちた。　この聖人は22年間にわたり神の教会を牧会し、イリーナの後を継いで即位した皇帝ニキフォロス[2094]の治世中に世を去った。皇帝、民衆全体、貴族、聖職者、信徒、とりわけ貧者や困窮者、孤児や未亡人たちは、彼の死を深く悼んだ。なぜなら、彼はすべての人に対して慈愛深く、善き羊飼い、慈愛に満ちた父、そして経験豊かな導き手として接し、誰もが直面する苦難や不幸において一人ひとりを助けていたからである。

聖タラシウスの聖遺体は、彼自身がボスポラス海峡沿いに建立した修道院に埋葬され、多くの人々がその棺から癒やしを受けた。

例えば、長年にわたり出血に苦しんでいたある女性がいた。その修道院には女性の立ち入りが禁じられていたため、彼女は男装をして修道院に入った。　彼女は信仰をもって聖タラシウスの墓に触れ、墓の前に吊るされていたランプから聖油を取り、その直後に病から癒やされた。　他の女性たちも同様にし、皆、それぞれの病から癒やされた。片目しか見えなかったある男性は、聖人の墓の前で、見えない方の目にランプの聖油を塗ったところ、癒やされた。片腕が不自由なある人は、信仰を持って訪れ、その手に聖油を塗って癒やされた。　他にも多くの病人が聖タラシオの祈りによって癒やされ、悪霊に取りつかれた者たちもまた、その病から癒やされた。

この正教の偉大な擁護者は、生前のみならず、死後もなお、異端の偶像破壊者たちに対して立ち向かった。ギリシャ王レフ・アルメニアン（[2095]）の治世下、王自身が偶像破壊の異端を庇護した結果、その異端は再び勢力を振るうようになった。　聖タラシウスは夢の幻としてレウスの前に現れ、激しい怒りを込めて、ある戦士ミハイルに、この不信心な王を剣で斬るよう命じた。ミハイルは剣を振るい、王を貫いた。レウスはそのような夢から恐怖と戦慄に襲われて目覚め、深く困惑した。聖タラシイの修道院に、自分の命を狙うミハイルという人物がいるのではないかと考え、彼はそのミハイルについて調べるために使者をそこへ送った。彼は、そのミハイルが自分の側近にいることを知らなかった――それはヴァルボス、あるいはトラウリウス[2096]というあだ名の軍司令官であり、後にキリストの降誕の日に王を剣で打ち倒したのである。　こうして、至聖なる三位一体への信仰を確固たるものとした聖タラシウスの祈りに打ち負かされ、この不義な王は滅びた。アーメン。

[2094] ニキフォロス1世皇帝は802年から811年まで在位した。

[2095] 皇帝レウ5世アルメニア人は、803年から820年までビザンツ帝国の帝位にあった。

[2096] 名称：ヴァルボス（バルバ）はギリシャ語、トラウリウスはラテン語である。ロシア語では、どちらも「口ごもる者」を意味する。このミハイルは後に皇帝となり、820年から829年まで在位した。

コンダク、第3声：

正教の教義を教会に明らかにし、キリストの尊き聖像を崇め礼拝するようすべての人々に教え導き、聖像破壊者たちの不敬虔な命令を糾弾した。このゆえに、我らは汝に叫ぶ：おお父よ、喜びたまえ、賢きタラシエよ。

3月11日

2月26日（旧暦）

我らの聖なる父、ガズの司教ポルフィリオスの生涯

記念日2月26日

ガザはパレスチナの都市であり[2097]、エジプトの国に隣接している。この地は、当初はイスラエルの子ら、ユダ族に属していたが、後にペリシテ人によって征服された[2098]——かつてサムソンが閉ざされた門を肩に担いだあの場所である（士師記16:3）。この町は偶像崇拝による不義に満ちていた。　私たちの神キリストの受肉後、この町は聖なる使徒たちや、その後を継いだ司教たちによって宣べ伝えられた聖なる信仰によって、ある程度啓蒙された。しかし、それでも住民の大部分は長い間、偶像崇拝の闇の中をさまよい続け、「マルナス」[2099]、またヴィーナス[2100]、その他不敬虔なギリシャの神々を崇拝していた。その間、この地では、とりわけ神に忌み嫌われるユリアヌス背教王[2101]の治世において、度重なるキリスト教徒の流血が繰り返された。当時、不信仰者たちはすべての司祭、修道士、そして神に奉献された処女たちを容赦なく虐殺したのである。　このような不敬虔な状態はガザの街で長い間続いており、ガザの司教に聖ポルフィリウスが選出されるまでは、誰もその地を偶像崇拝から清め、聖なる信仰によって完全に啓蒙することができなかった。彼については、後ほど詳しく述べる。　彼はガザを完全に聖化させ、すべての偶像を打ち砕き、街の中心に教会を建立し、これから語られる物語が示すように、多大な苦労の末に街全体を神に捧げたのである。　聖人は裕福な両親の息子であり、テッサロニキ出身であった[2102]。父の家、兄弟たち、そして富を捨て、二十五歳の時、まずエジプトへ、その後スキテへ赴いた[2103]。そこで、禁欲的な生活を送る決意をもって修

2097 ガザの街は地中海の東岸に位置し、かつてはカナンの人々の南の境界となっていた。ローマ帝国の全盛期、ガザはパレスチナにおける重要な商業都市であった。その後、この繁栄した都市はすべての重要性を失い、今では砂丘とみすぼらしい廃墟だけが、かつてここに偉大な都市が存在したことを物語っている。

2098 ペリシテ人は、エジプトから出て、アジアのエジプトとの国境沿い、地中海沿岸に定住した民族である。彼らが占めていた土地はパレスチナの南西部にあり、まさにエジプトと、ユダヤ人によって征服されたカナンの地の間に位置していた。　ペリシテ人はユダヤ人と頻繁に戦争を繰り広げ、度々彼らを隷属させ、貢ぎ物を納めさせ、都市を奪い取った。その一方で、ユダヤ人もペリシテ人に勝利を収めることが少なくなかった。

2099 マルナスという偶像への崇拝は、ガザにのみ見られるものであった。この都市の住民たちは、彼をあらゆる病気の偉大な治癒者であると同時に、雨の神であり支配者であると信じていた。干ばつの際には、彼をなだめるために厳粛な宗教的行列が行われた。

2100 ヴィーナス——ギリシャ・ローマ神話における愛、美、快楽、そして不純な欲望の女神。

2101 361年から363年まで在位した。

2102 テッサロニキ（別名ソロン）は、エーゲ海（アルキペラゴス）に面したソロン湾、あるいはフェルメイ湾の奥深くに位置する、マケドニアの極めて重要な古代都市である。現在、この都市はテッサロニキという名で知られ、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコ地域で第一の商業都市であり、非常に多くの人口を擁している。

2103 ここでいう「修道院」とは、もちろん、孤独な隠者たちが暮らす個別の小部屋のようなものを指すのではなく、エジプト北西部に位置し、ニトリア山から一日の行程（25～30ヴェルスト）の距離にある地域のことである。　そこは水のな

道服を身にまとい、修道生活に入った。 スキテで聖なる父たちと共に5年間過ごした後、彼はエルサレムへ赴き、命を与える十字架とキリストの聖墳墓に礼拝を捧げ、すべての聖地を巡礼した後、ヨルダン地方へと向かった[2104] 。そこで、ある洞窟に身を寄せ、聖ポルフィリウスは絶え間ない断食と祈りに専心して生活した。 5年が過ぎた頃、彼は病に倒れ、知人の一人に、エルサレムまで連れて行ってくれるよう懇願した。病のため、他人の助けなしには歩くことができなかったからである。 しかし、エルサレムでは、病をものともせず、毎日聖地を巡り、主を礼拝した。病のせいで歩けない時は、膝で這って進んだが、聖なる復活教会や聖十字架教会を訪れることを一日たりとも欠かすことはなかった。 彼がこのように病をものともせず日々精進する姿を見て、マルコという名の若い修道士（後に彼の伝記を著した人物）が、神のために彼に仕えるようになった。 このマルクは、聖ポルフィリウスからテッサロニキへ手紙を携えて遣わされた。その目的は、両親の死後に残された財産を年下の兄弟たちで分配し、ポルフィリウスに帰属する分を彼のもとに持ち帰り、彼がそれを貧しい人々に配れるようにするためであった。 マルクは旅立ち、すべてを適切に分配したが、ポルフィリウスに帰属する部分は三千ズラトニツで売却した。さらに、両親の金財のうち、ポルフィリウスには千四百ズラトニツに加え、衣服や銀器も割り当てられた。マルクはこれらすべてをエルサレムの聖ポルフィリウスのもとへ届け、彼はそこで聖ポルフィリウスが完全に健康であることを確認した。 一方、ポルフィリウスは、 持ち込まれた品々を受け取ると、直ちにそれを貧しい人々や困窮している修道院に配り、自身は乞食となった。その後、聖人は、自分がどのようにして病から癒やされたかを語った。

「私が大聖堂で週の徹夜祈祷に参加していたとき」と彼は語った。「突然、発作が起きた。もはや耐えられなくなった私は、聖ゴルゴタの足元へ行き、横たわった。そして、激しい病のせいで、まるで恍惚状態にあったかのようだった。 すると、私は十字架に釘付けにされた私たちの救い主と、もう一つの十字架に掛けられた一人の強盗を見ました。そして、『主よ、あなたが御国に来られる時、私を思い出してください』と叫び始めました。 すると、救い主はあの強盗にこう言われた。「十字架から降りて、この人の肉体の病を癒やしなさい。私があなたの魂の病を癒やしたように。」その強盗は、自分の十字架から私のところへ降りてきて、私を抱きしめ、口づけをし、私を地面から引き上げながら言った。「救い主のもとへ来なさい。」 主のもとへ近づくと、私は主が十字架から降りておられるのを見、主は私にこう言われた。「この木を受け取り、大切に守りなさい」。そこで私はキリストの十字架を受け取り、それを担ぎ始めたところ、たちまち正気を取り戻し、まるで一度も病気になったことがなかったかのように、全身が健康になったのである」。

その直後、祝福されたポルフィリウスはエルサレム総主教によって司祭に叙階され、命を与える聖なる十字架が、特別な金製の密閉された聖櫃に納められ、彼に保管を託された。その十字架のもう一つの部分は、聖なる皇后ヘレナによってコンスタンティノープルへ運ばれた。 こうして、ポルフィリウスが主から御自身の十字架を預かるよう命じられるのを見た幻視が成就したのである。

尊者ポルフィリウスが司祭に叙階されてから3年が経過した。その頃、ガザの町でエネイと呼ばれる司教が世を去った。 ガザの信徒たちは聖職者たちと共に、ガザを管轄下に置くパレスチナのケサリア[2105] の総主教、至福のヨハネのもとを訪れ、ガザに非常に多くいた偶像崇拝者たちに言葉と

い岩だらけの砂漠であり、エジプトの隠者たちが好んで住んだ場所であり、そこで救いを求めた修道士たちの禁欲的な偉業によって名声を博した。 後に、この地域にちなんで、最も熱心な修道士たちが、最も厳格な隠遁生活と揺るぎない沈黙を求めて住み着いた修道院群は、「スキタ」と呼ばれるようになった。

[2104] 言うまでもなく、ヨルダン川沿いに位置するヨルダン砂漠も、修道士たちが定住し、数多くの修道院が存在した場所である。

[2105] カッパドキアのケサリア（小アジア）と区別して「パレスチナのケサリア」と呼ばれるこの都市は、――地中海東岸に位置する大都市であり、ユダヤ王ヘロデによって古代都市ストロトンの跡地に建設され、長きにわたりパレスチナの政治的首都として機能し、パレスチナの総督たちがこの地に居を構えていた。 この都市は幾度となく破壊に遭い、現在その跡地には、雑草に覆われた廃墟が残るのみである。

行いで立ち向かえる司教を任命してくれるよう懇願した。　ヨハネ大主教は、すべての人に断食を命じ、その任務にふさわしく有能な人物を神が示してくださるよう祈った。すると、彼は幻の中で、エルサレムの司祭であり、命を与える木の守護者である聖ポルフィリウスの姿を啓示された。　直ちに大主教は、エルサレムの至聖なる総主教宛てに書簡を書き、その中でポルフィリイ神父を派遣してほしいと請うたが、その要請の理由については言及しなかった。総主教はポルフィリイを呼び出し、大主教の手紙を見せると、彼にケサレアへ行くよう命じた。　当初、尊者ポルフィリウスは躊躇したが、やがてこう言った。

「主の御心なれ！」

その後、総主教のもとを後にした彼は、弟子にこう言った。

「マルコ兄弟よ、行こう。聖地と尊き命を与える十字架を拝もう。私たちは、そう簡単にはそれを見ることができないのだから。」

弟子が言った。

「なぜそうおっしゃるのですか、師よ。師はケサリアに一週間以上は留まられないのではないでしょうか？」

聖人は答えた：

「昨夜、私は救い主を拝見し、こう言われるのを聞いた。『わたしがあなたのところに置いた宝（十字架の木）を、わたしに返せ。わたしはあなたを、確かに貧しく、人々から見捨てられたが、品行方正な花嫁と結びつけたいのだ。　お前は彼女を受け入れ、飾り立て、かつての貧しさを忘れさせてやれ。彼女は貧しいが、私にとって見知らぬ者ではなく、私の誠実な姉妹だからだ。彼女を受け入れ、家を築くにあたっては、不正や窃盗、あるいは不法な手段で何かを手に入れないよう気をつけよ。そうすれば、私を怒らせ、彼女をも傷つけることになるからだ。　希望を持ち、臆病になってはならない。そうすれば、あなたが予想もしないところから、すべてが与えられるだろう」。これが、主が夜の幻の中で私に告げられたことである。私は、自分自身の罪が山ほどあるのに、他人の罪という重荷まで背負わされるのではないかと恐れている。

弟子にそう告げると、聖ポルフィリウスは立ち去り、すべての聖地、そして尊き十字架の命を与える木に礼拝を捧げた。そしてそれを聖櫃に納め、鍵を最も聖なる総主教に手渡した。　総主教から祝福を受けた後、彼は弟子マルコと、もう一人の若者バルクを伴って、パレスチナのケサリアへと旅立った。バルクとは、少し前に、病に伏し、　かさぶたに覆われた彼をゴミ捨て場で見つけ、自らの祈りによって癒やした人物であった。　尊者ポルフィリウスがケサリアに到着すると、そこで大いなる喜びをもって迎えられた。　一方、尊厳なるヨアン大主教は、彼にガザの司教としての叙階を受けるよう説得し始めた。聖ポルフィリウスは、自分はそのような聖職に値しないと語り、苦々しく、慰めようのないほどに泣き崩れたが、やがて神の御心に従うことを決意し、聖職者たちやガザの人々と共にガザへと送り出された。　しかし、ガザ近郊のある村の不信心な住民たちは、彼の到着を待ち構え、キリスト教の司教である聖ポルフィリウスが通るべき道全体を茨で敷き詰め、その上に堀を掘り、大量の悪臭を放つ糞尿を運び込み、巨大で悪臭を放つ煙を立ち上らせ、その道を通行不能な状態にした。　これは、キリスト教徒への憎悪と、聖ポルフィリウスに対する悪魔的な敵意からなされたことである。こうして、聖人は同行者たちと共に道中で多くの困難に直面し、堀や茨、煙に耐え、一日中苦労を重ねた末、ようやく夜になって街に到着した。　その町にはキリスト教の教会がただ一つしかなく、それも小さなものでした。というのも、その町にはキリスト教徒がそれほど多くなかったからです。　それに対し、町には偶像崇拝の神殿が数多くあり、偶像は通り沿いにも立っていた。町の中心部には、彼らの最も古い神であるマルナスの神殿があり、それは古代に建てられた壮大で美しいもので、その威厳と高さ、そして見事な造りによって町全体を彩っていた。　そして、尊者ポルフィリウスは、その座に就くと、そこにいたキリストの小さな群れを牧し始めた。

キリストの聖人ポルフィリウスがガザに来たその年、雨不足と大干ばつ、そして飢饉に見舞われた。そして、不信心な市民たちは皆、ポルフィリウスが街に来たために神々が怒り、天を閉ざしたのだと語り合った。　また、祭司たちは、マルナス神が「ポルフィリウスがすべての災いの元凶である」と告げたかのように、民衆に噂を流した。そこで、すべての偶像崇拝者たちはマルナスの神殿に集まり、多くの生け贄を捧げ、マルナスに雨を降らせてくれるよう祈り、叫び求めた。彼らは、マルナスが雨の神であると主張していたからである。　彼らは七日間、聖歌を歌い、荘厳な行列を組んで城外へ出ながら祈り続けたが、それでも雨は降らなかった。その後、すべてのキリスト教徒が妻や子供たちと共に集まった。その数は二百八十人であった。当時、ガザにはキリストを信じる者がそれだけの数しかいなかったからである。　そして彼らは、自分たちの司教である聖ポルフィリウスに、共同の祈りを捧げ、十字架を携えて城外へ出て、神に雨を乞うよう懇願した。というのも、すでに皆にとって飢餓は耐え難いものとなっていた上、さらに不信心者たちから、雨不足の責任をキリスト教の司教に押し付けられ、侮辱や嫌がらせに耐えていたからである。　聖ポルフィリウスは断食を命じ、夕刻にすべての信徒が教会に集まるよう命じた。そして徹夜祈祷を執り行った後、翌朝、尊き十字架を掲げて礼拝を執り行った。　こうして、キリスト教徒たちは十字架の行列を組んで、かつて正教の信仰のために多大な苦難を耐え抜いた、キリストの殉教者である至福の司教アスクレピオスが築いた、西側にあった古びた教会へと街の外へ出ました。　そこから賛美歌を歌いながら、聖ティモフェイの殉教地へと向かい、そこには他の聖人たちの聖遺骨も安置されていた。　こうして祈りを捧げた後、彼らは十字架行列を率いて昼の第九時に町へ戻ったが、町の門は閉ざされていた。というのも、不信心な偶像崇拝者たちは、キリスト教徒たちが司教と共に町の外へ出ていくのを見て、信者たちを中に入れたくないがために門を閉ざしていたからである。　キリスト教徒たちは門の前で二時間立ち尽くしたが、誰も門を開けてはくれなかった。すると、神は御自分のしもべたちの忍耐と涙の嘆願をご覧になり、御自分の御心に適う者ポルフィリウスの祈りに耳を傾けられ、かつて預言者エリヤの時代（列王記下18:17–45）のように、南から風を吹き起こし、空を雨雲で覆い、稲妻と雷が鳴り響き、日没とともに大雨が降り注いだ。すると、異教徒たちの中には、この奇跡を見て城門を開き、キリスト教徒たちに加わって、こう叫びながら歩み出した者もいた。

「キリストこそが唯一の真の神である！」

そして皆、大いなる喜びをもって教会に入り、信仰を抱いた異教徒たちは司教から聖なる祝福と洗礼の説教を受け、神に感謝を捧げてそれぞれの家へと帰っていった。信仰を抱いた者たちの数は、男性百七人、女性三十五人、子供十四人であった。　その夜一晩中、そして二日目、三日目も激しい雨が降り続き、大地を十分に潤した。これを見て、三日目にはさらに127人がキリストの群れに加わり、その後、その年のうちにさらに105人が加わった。そして、聖なる洗礼を受けた彼らは皆、聖なる信仰に熱心であった。　一方、他の偶像崇拝者たちは、聖ポルフィリウスへの敵意を絶やさず、キリスト教徒を苦しめ続けた。というのも、イゲモンが町を訪れると、彼らは彼に多額の金を贈り、キリスト教徒を拷問するようそそのかし、さらに、かつてエジプト人がイスラエル人を苦しめたように、信者たちを町の労働で苦しめたからである。　聖ポルフィリウスは、信者たちに加えられる不当な扱いを見て深く嘆き、昼夜を問わず絶えず涙を流しながら、神に、迷える者たちを真理を知る道へと導いてくださるよう祈り続けた。

その後、前述の聖人の弟子バルークは、教会の土地に住むある偶像崇拝者から、キリスト教会のための年賦の支払いを徴収するため、近隣の村へ遣わされた。支払いを先延ばしにしたかったその男は、バルークと口論を始め、二人の間で論争が起きた。　口論の最中、他の偶像崇拝者たちが駆けつけ、聖なるバルークを杭で殴り殺そうとした。その後、彼がすでに死んだと思い込み、村の外へ引きずり出し、人里離れた場所で遺体を捨てた。　そして翌日、助祭コルネリウスと、彼と共にいた他の二人のキリスト教徒がその場所を通りかかったところ、ヴァルフが死人のように横たわっているのを見つけた。彼は何も話すことも、聞くことも、目で見ることも、手足を動かすこともできず、ただ

魂だけが彼の中に残っていたからである。彼らはヴァルフを背負い、町へと運んだ。　一方、ある偶像崇拝者たちは、担がれているバルークを見て、死体を町へ運んでいるのだと思い込んだ。そこで彼らは担ぎ手たちに向かって突進し、殴りつけながらこう言った。

「なぜ、死体を町に運び込むなどという忌まわしいことをするのだ？」

というのも、ガザの人々には、死者を埋葬するために町の外へ運び出す習慣があったからである。不信心者たちはバルークを奪い取り、その足を引っかけて、再び町の外へと引きずり出した。一方、助祭コルネリウスは駆けつけて、そのことを聖なる司教ポルフィリウスに報告した。そこで司教は急いで出向き、他の兄弟たちも彼に同行した。そして、引きずっている者たちに追いつくと、謙虚に、そのような無慈悲な行為をやめるよう懇願したが、彼らは司教に対しても嫌がらせを始めた。大勢の群衆が集まり、司教の忍耐と謙遜――彼を責める者たちに対して何の反論も返さない様子――を見て、バルークを引きずっていた者たちと口論を始めた。そして彼らの間で争いと喧嘩が勃発し、互いに手を上げ、殴り合いを始めた。そこには大きな混乱と騒ぎが巻き起こった。　その間、聖なる司教は信者たちと共に、至福のヴァルフを連れて、すでに夜も更けた頃、教会へと運んだ。そして、彼の息がまだ絶えていないのを見ると、信者たちは皆、彼の回復に尽力し始めた。聖なる司教は、その夜中ずっと、涙を流しながら神に彼のために祈り続けた。　すると、病人は目を開き、水を飲ませてほしいと口を開いた。水を飲ませると、彼は話し始め、自分に起こったすべてのことを語った。朝になると、町の長老たちが大勢の民衆を連れて教会にやって来て、叫び声を上げ、こう訴え始めた。

「なぜ、古来の先祖代々の掟に背いて、死者を町に運び込んだのか？」

すると、聖なるポルフィリウス司教は、共にいた者たち全員を連れて彼らのところへ出た。司教の姿を見るや、彼らは悪口を言い、彼を侮辱し始め、その後、司教と共にいたキリスト教徒たちへと襲いかかり、彼らを殴り始めた。　すると突然、至福のバルークは神から並外れた力を授かり、まるで病気だったことなどなかったかのように素早く立ち上がり、杖を掴んで、騒ぎ立てる不敬虔な群衆を打ち払い、追い払った。　異教徒たちは、彼が生きているのを見て、大きな恐怖に襲われた。彼らは、彼が死から蘇ったのだと思ったからである。恐怖と激しい殴打に駆り立てられ、互いに踏みつけ合いながら逃げ去った。そしてバルークは、かつてのサムソンがペリシテ人を追い払ったように、彼らを教会から、彼らの忌まわしいマルナソスの神殿のすぐそばまで追い払った。　それ以来、すべての不信心者はバルークを恐れ、道で彼と出会うことさえ恐れるようになった。そして聖ポルフィリウスは、バルークの突然の癒やしについて神に感謝を捧げ、彼を助祭に任命した。また、もう一人の弟子マルコも、同じ位階に昇格させた。

また、不信仰者による信者への絶え間ない迫害を目の当たりにした神の聖人ポルフィリウスは、自身の助祭であるマルコをコンスタンティノープルへ、敬虔な皇帝アルカディオス[2106] のもとへ遣わし、ガザにある偶像崇拝の神殿を破壊するよう命じるよう懇願させた。　また、彼はコンスタンティノープルの至聖なる総主教ヨハネス・クラマティオス（金口）にも書簡を送り、皇帝への援助と執り成しを懇願した。　そこで皇帝は、ガザにある偶像崇拝の神殿を閉鎖し、施錠して、そこで不浄な生贄の儀式が二度と行われないように命じたが、異教徒たちを過度に悲しませないよう、それらを破壊するようには命じなかった。　この皇帝の命令を執行するため、イラリウスという名の宮廷高官がガザにやって来た。彼はアゾットとアスカロンから多くの手下や兵士を率いて[2107] 、ガザの人々に皇帝の勅書を見せ、異教の神殿を閉鎖し、施錠した。　しかし、不信心者たちは大量の金を集め、それを王の重臣イラリウスに差し出し、街の中心に立つ彼らの大きな神殿の一つであるマルナソスの神殿

[2106] ビザンツ帝国の皇帝アルカディウスは、396年から408年まで在位した。

[2107] *アゾト*は、フィリスティム人によって築かれた古代都市で、地中海の東岸、ガザからほど近い場所に位置する。現在、ここにはエズドゥドという小さな集落がある。アスカロンもまた、フィリスティム人の歴史において有名な都市であり、地中海の海岸沿い、ガザとアゾトの間に位置している。　現在、アスカロンには人が住んでおらず、神殿や修道院の遺跡を見学するためだけに訪れる場所となっている。

だけは閉鎖しないよう懇願した。　そこでイラリウスは、キリストなる神よりも金を愛したため、彼らにとって最も重要なマルナソスの神殿への立ち入りを許し、それより小さな神殿は閉鎖して、その中の偶像を打ち砕いた。　こうして、この金に目がくらんだ男は、あたかも王の命令を果たしたかのようにその場を去った。なぜなら、彼は外見上は確かにキリスト教徒であったが（　）、内面は不信仰に満ちており、密かにあらゆる手段を尽くして異教徒たちを助けようとしていたからである。　一方、不信心者たちは、偉大なマルナソスの神殿に自由に出入りできるようになったため、他の閉ざされた神殿については気にも留めず、キリスト教徒への嫌がらせを絶やすことはなかった。

その頃、聖ポルフィリウスによって一つの奇跡が起こり、それによって多くの人々が聖なる信仰へと導かれた。　ある高貴な女性――最も高位の市民の一人の娘であり、エリヤという名の貴族の妻で、妊娠していた――の出産の時が訪れた。しかし、彼女は産み出すことができず、日ごとに病状は悪化していった。二日目にはさらに悪化し、三日目にはさらに悪化したからである。　彼女のもとに連れてこられた多くの助産婦や魔女、呪術師たちも、彼女を助けることはできなかった。こうして彼女は七日間も苦しんだ。彼女の夫、そして両親やすべての親族たちは、この間ずっと絶え間なく生け贄を捧げ、マルナスの神殿で彼女のために熱心に祈り、涙ながらに自分たちの神に助けを求めていた。　しかし、助けは訪れず、それどころか、出産できない彼女には、さらなる衰弱と、最も激しい痛みの増大がもたらされた。そして、彼女のそのような苦しみを見て、皆はこの女性の命を絶望し、自らも心を痛め、彼女のために泣き、嗚咽し、彼女の死を待っていた。　その中に、キリスト教を信仰する一人の老婆がいた。彼女は教会へと駆けつけ、その苦しむ女性のために、涙を流しながらキリスト神に祈りを捧げた。この老婆が泣きながらひざまずいて祈っているのを見た聖ポルフィリウス司教は、なぜそんなに泣いているのかと尋ねた。　聖人の足元にひれ伏した彼女は、起きていることすべてを聖人に語り、激しく苦しんでいるその女性のために、慈愛に満ちた神に祈ってくださるよう懇願した。聖人は、どう行動し、何を話すべきかを教えた上で、彼女を病人のもとへ送り戻した。そこで、その家へ戻った老婦人は、病人の両親、夫、そしてすべての親族を集め、こう言った。

「ここに、親切で腕の良い医師が一人います。その方が私をあなた方のところへ遣わし、『もし病人を治したら、何を与えてくれるか』と尋ねてきました。」

これを聞いた両親は言った。

「もし望まれるなら、私たちの全財産を差し上げましょう。ただ、愛する娘が生き生きと元気な姿を見せてくれるなら、それで十分です。」

夫もまた、妻の命と健康のためならすべてを差し出す覚悟で、同じことを言った。すると、老婆は彼らにこう言った。

「両手を天に向けて挙げ、その言葉を誓いとして固めなさい。そうすれば、あなたがたがその医師を軽んじないという約束が真実となるでしょう。」

二人は熱意と涙を込めて両手を天に掲げ、こう言った。

「私たちの生涯を通じて、彼のしもべとなります。ただ、私たちの唯一の娘を癒やしてくださるなら。彼女なしでは、私たちは生きていくことさえできません。彼女がいなければ、私たちにどんな人生や喜びがあるというのでしょうか？」

これを聞いて、老婆は病人のそばで声を張り上げて叫んだ。

「神の偉大なる司祭ポルフィリウスが、あなたにこう告げている。生ける神の御子イエス・キリストが、あなたを癒やしてくださる。彼を信じなさい。そうすれば、あなたは生き返るだろう。」

すると、その女性はうめき声を上げて子を産み、その病は癒えた。そこにいた者たちは皆、驚きながら叫んだ。

「キリストの神は偉大なり、その司祭ポルフィリウスもまた偉大なり。」

翌朝、その女性の両親、夫、そしてすべての親族が聖ポルフィリオスの元を訪れ、彼の足元にひれ伏して、キリスト教の洗礼を懇願した。　聖人は彼らに説教を授けた後、断食をし、聖なる教会

に通うよう命じた。そしてしばらく時が経つと、聖人は彼らと、出産した女性、そして生まれた赤ん坊に洗礼を授けた。その赤ん坊は男の子であったため、聖人は自分の名であるポルフィリウスと名付けた。こうして、六十四人がキリストの教会に加わった。

キリストの群れが増え続けるにつれて、偶像崇拝者たちの敵意も増大し、彼らは日ごとに信者たちをますます激しく迫害し、絶え間ない都市の労働を課し、奴隷のように殴打してあらゆる労働を強いた。　さらに、彼らは畑やブドウ畑で信者たちを苦しめたため、信者たちは極度の貧困に陥り、通常の民衆の賦役や王への貢ぎ物を支払うことができなくなった。この様子を見て、不信仰者たちが信者たちに加えるこのような迫害に耐えかねた　神の聖人ポルフィリウスは、ケサリアへ赴き、自身の大主教である至福のヨハネのもとを訪れ、彼に、自分から司教職を解くか、あるいは自分と共にコンスタンティノープルへ行き、皇帝に偶像の神殿を完全に破壊し、異教徒の驕りを打ち砕くよう命じるよう懇願するよう懇願した。　大主教ヨハネは、至福のポルフィリウスを司教職から解任するよりも、たとえ冬の間であっても、旅の労苦 を背負うことを選んだ。 こうして、彼らは船に乗り込み、旅立った。順風満帆の航海を経て、十日後にロードスと呼ばれる島[2108] に到達した。そこで、プロコピオスという名の、荒野で隠遁生活を送るある修道士――聖なる人物であり、先見の明を持つ者――の存在を耳にし、彼らは彼を訪ねるために向かった。　その修道士は、彼らの到来を予見し、彼らが聖職者であることを知ると、そのような大司教たちを敬うにふさわしい方法で出迎え、敬意を表した。そして、旅の目的を知ると、彼らが望むものを手に入れるためにコンスタンティノープルで何をすべきかを教えた。

「まずは、首都の至聖なる総主教ヨハネス・クラウディオス（金口）のもとへ駆け寄ってください」と彼は言った。　確かに、彼自身は現在、皇后エウドクシアが彼に怒りを抱いているため、王宮には足を運んでいませんが、その代わり、皇后の侍従長である[2109] 、宦官[2110] のアマンティウスが彼に忠実であり、彼は敬虔で高潔な人物ですので、彼にあなた方を託すつもりです。　この宦官の取り成しによって、あなたはすべてを得ることになるでしょう。彼はあなたを皇后のもとへ案内し、あなた自身が皇后に自分の願いを伝えることになるからです。その際、彼女に「あなたは王となる息子を産むだろう」と予言してください。彼女はあなたからそれを聞けば大いに喜ぶでしょう。というのも、彼女はすでに9ヶ月もの間、身ごもっていないからです。 それゆえ、あなたの預言を聞けば、彼女はあなたの望むままにすべてを叶えてくれるでしょう。

聖なる司教ヨハネとポルフィリウスは、このような指示と確約を受けて、喜びながら旅を続け、さらに十日間かけてビザンティウムにたどり着いた。尊者プロコピオスの助言に従い、彼らはまず、至聖なる総主教ヨハネ・クラマトルスのもとへ向かった。　パトリアルヒは彼らを丁重にもてなし、来訪の理由を知ると、協力を約束した。翌日、皇后の侍従長である宦官アマンティアを呼び寄せ、パレスチナから来た司教たちを紹介し、彼らを世話するとともに、王の前で彼らのために取り成すよう命じた。　一方、宦官は、聖なる司教たちから、ガザで信者たちが異教徒たちから受けているあらゆる苦難について詳細な話を聞くと、涙を流し、神への熱意に満たされてこう言った。

「聖なる父たちよ、悲しまないでください。主イエス・キリストご自身が、ご自身の忠実な僕たちを守り、迫害者たちから救い出してくださるからです。　ですから、あなたがたは主に祈ってください。私は女王に申し上げましょう。そして、万物の神が、彼女の心を憐れみに傾けてくださることを信じます。明日の朝、私があなたがたを女王のもとに案内しますので、あなたがた自身の口で全てを語ってください。」

[2108] ロードス島は、小アジアの海岸からほど近い地中海の島である。

[2109] クヴィクラーリウスとは、王宮の寝殿係、寝具係のことで、かなり重要な宮廷の官職であった。

[2110] エウヌコスとは、去勢された男性を意味する。後に、たとえ去勢されていなくても、王宮の廷臣全般がこの名称で呼ばれるようになった。

司教たちにそう告げると、宦官は去っていった。翌朝、彼は神の聖者ヨハネとポルフィリウスを王宮に呼び寄せ、女王のもとへ案内した。女王は聖者たちを見ると、真っ先にこう言った。

「神の祝福がありますように、父上たち。」

聖職者たちは彼女に頭を下げた。聖なる司教たちを迎え入れる際、女王は金の玉座に座っていたため、彼らにこう言った。

「神の司教たちよ、お許しください。私は胎内に重荷を抱えているため、皆様にふさわしい敬意を払うことができません。本来なら、玄関で皆様の聖なる御姿を拝迎えるべきでした。どうか主にお祈りください。主の恵みにより、私が胎内にいる赤ん坊を無事に産むことができますように。」

聖なる父たちは、彼女の謙虚さに感銘を受け、こう言った。

「サリナ、リベカ、エリザベスの胎を祝福された方が、あなたの胎も祝福し、その中に宿る子を生き生きとさせてくださいますように！」

すると、女王は彼らに座るよう命じ、こう語り始めました。

「あなたがたがなぜこれほど困難な旅路を敢行したのか、私は知っていました。アマントイがすべてを私に話してくれたからです。とはいえ、もしよろしければ、ご自身でお話しください。そうすれば、あなたがたが何を求めているのか、私がよりよく理解できるでしょう。」

そこで司教たちは、偶像崇拝者たちからキリスト教徒たちが受けているあらゆる迫害について、女王に詳しく語り、迫害されている者たちを助けてくれるよう懇願した。女王は彼らの話を聞き終えると、こう言った。

「聖なる父たちよ、悲しまないでください。私は、神の御子である主イエス・キリストに信頼を置いています。王に、あなた方の願いを叶えてくださるよう懇願いたします。さあ、今は行って、旅の疲れを癒してください。あなた方が疲れているのがわかりますから。そして、私のために神に祈ってください。神が、あなた方のために私が申し立てる願いを聞き入れてくださいますように。」

聖なる司教たちにそう告げると、女王は彼らを見送った。やがて王が女王のもとへ来ると、彼女はパレスチナから訪れた司教たちのこと、そして彼らが訪れた理由について王に語り、ガザにある偶像の神殿を破壊するよう王に懇願した。そのような願いを聞いた王は、こう言った。

「この街では偶像への崇拝が熱心に行われていることは承知しているが、そこから徴収される貢ぎ物のおかげで、我々は少なからぬ富を得ているのだ。」　さて、もし我々が直ちにガザの神々の神殿を破壊し、それによってその異教徒の住民たちを激怒させれば、彼らは恐怖に駆られて逃げ散り、街は荒廃してしまうだろう。そうなれば、我々はこれほどの貢ぎ物を失うことになる。　それゆえ、少しずつ彼らを服従させていくほうがよいのではないか。まず、彼らの手から都市の支配権を奪い取り、次に彼らの神殿を閉鎖し、偶像への生贄を禁じるのはどうだろうか。自分たちが服従させられているのを見れば、彼らは真理を悟り、信者たちに加わるだろう。

皇帝のこうした言葉に、皇后は深く心を痛め、涙ながらにこう言った。

「もし私たちが彼らを助けようとしないのなら、キリストなる神ご自身が、ご自身のしもべであるキリスト教徒たちを助けてくださるでしょう。」

王の会話を耳にした宮廷顧問のアマンティウスは、それを聖なる司教たちに伝えた。翌日、皇后は再び聖なる司教たちを呼び寄せ、こう言った。

「私は王に、あなた方について、あなた方の窮状と願いについて話しましたが、王はガザの偶像崇拝者たちを怒らせるのは好ましくないと考え、私の言うことを聞こうとしません。しかし、悲しむことはありません。王があなた方の願いを叶えるまで、私は王に懇願し続けるつもりです。」

これを聞いて、司教たちは彼女に頭を下げた。すると、聖ポルフィリウスは、聖プロコピオスの預言的な言葉を思い出し、彼女にこう言った。

「女王よ、キリストのために、私たちのために尽力してください。そうすれば、キリストはあなたの労苦の報いとして、あなたに息子を授けてくださいます。その子は、あなたの存命中に王位につき、長きにわたり王としてのあらゆる幸福に満ちた生活を送ることでしょう。」

これを聞いて、女王は喜びに満ち、その顔は喜びで輝いた。そして彼女は言った。

「聖なる父たちよ、私が息子を産めるようお祈りください。もしそうなれば、あなたがたが望むことは何でも叶えることをお約束します。そればかりか、キリストの助けを借りて、あなたがたが求めていることだけでなく、求めていないことまでも行います。なぜなら、私はガザの町の真ん中に聖なる教会を建てるつもりだからです。」　それでは、平安のうちに去り、人愛の神に私のために祈りながら待っていてください。

その後、女王の出産の時が訪れ、聖なる父たちが予言した通り、彼女は男児を産んだ。その子には祖父の名であるテオドシウスと名付けられた。というのも、アルカディウス王の父は、グラティアヌス[2111] と共に統治したテオドシウス[2112] であったからである。 この第二のテオドシウスは、まるでポルフィリス（紫の衣）のような「シャツ」を身にまとって生まれたが、これは彼の治世の前兆であった。そして、アルカディウス王と王都全体に大きな喜びがもたらされた。一方、王妃エウドクシアは、自身の侍従長アマントイアを聖なる父たちヨハネスとポルフィリオスのもとへ遣わし、次のように伝えた。

「キリスト・神に感謝いたします。主は、あなた方の聖なる祈りによって、私に息子を授けてくださいました。聖なる父たちよ、主にお祈りください。生まれた子には命と長寿を、そして私、この謙虚な者には健康を授けてくださいますように。そうすれば、私はあなた方への誓いを果たすことができます。」

七日後、女王は再び神の聖者ヨハネとポルフィリウスを呼び寄せ、生まれたばかりの赤ん坊を腕に抱いて寝室の入り口で彼らを出迎えた。彼らの前で頭を垂れて、彼女はこう言った。

「聖父たちよ、私と、聖父たちの聖なる祈りによって神が私に授けてくださったこの息子を、祝福してください。」

聖ヨハネと聖ポルフィリウスは、彼女とその子に十字の印を授け、席に着いて、多くの有益なことを彼女と語り合った。その最中、女王はこう言った。

「神父様方、私が皆様のお願いについてどうしようと決めたか、ご存知ですか？」

聖ポルフィリウスは答えた。

「陛下、あなたが思いつかれたことはすべて、神から与えられたものです。というのも、今夜、私に次のような幻が明らかに示されたからです。私はガザにあるマルナソスの偶像の神殿に立っている夢を見ました。そこにも立っていたあなたが、私に聖なる福音書を手渡し、『これを受け取って読みなさい』とおっしゃったのです。」　あなたの手から福音書を受け取ると、私はそれを開いて、主が使徒ペトロにこう語っておられる箇所を見つけました。「わたしはあなたに言う。あなたはペトロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を築く。そして、地獄の門もそれを打ち破ることはできない」（マタイ16:18）。

すると、奥様、あなたはこれに応えて、私にこうおっしゃいました。「平安あれ。勇気を出し、強くあれ」。私は勇気づけられ、ここから、神の御子が私たちについて、あなたの心に善き助言を授けてくださったと確信しました。さて、奥様、私たちについてどのような善きお考えをお持ちなのでしょうか?

女王はこう答えました：

[2111] グラティアヌスはテオドシウスと同時代の西ローマ皇帝であり、375年から383年まで在位した。

[2112] 言うまでもなく、379年から395年まで在位したテオドシウス大帝のことである。

– もしキリストの御心ならば、しばらく経ってから、その赤ん坊は聖なる洗礼を受けることになるでしょう。　それまでの間、あなた方は行って巻物を用意し、そこに望むことをすべて書き記してください。そして、その子が聖なる洗礼を受ける準備が整った時、その巻物を、新生児を抱いて運ぶ者に手渡してください。私はその者に、どうすべきかを教えます。そして、神の御子がすべてを善き方向へと導いてくださることを信じています。

彼らは外に出て巻物を用意し、そこに偶像の破壊や神殿の廃墟化を求めるだけでなく、信者たちの労働や貢納の軽減、そして彼らに都市の統治権を与えることについても願いを記した。　また、彼らは、極めて貧しく粗末な状態にあった聖なるキリスト教の教会に対し、王の領地から何らかの土地が与えられ、その奉仕者たちに食糧が供給されるよう求めた。迫害され、貧困に陥ったキリスト教徒たちにとって喜ばしい多くの事項を、彼らは請願書に記し、その後、王子の洗礼が行われるその日を待ちわびた。　洗礼に先立ち、彼が王となることはすでに告げられていた。というのも、彼はポルフィラを身にまとって生まれ、最初はおむつではなくポルフィラを着せられていたからである。その後、将来の王は洗礼を受けるために厳かに教会へと運ばれた。その間、街全体は華やかに飾り立てられ、民衆は最も高価で華やかな衣装を身にまとっていた。　王家の深紅の衣に包まれた将来の王を運んだのは、高価な衣装を身にまとい、ひときわ輝いている、特別に選ばれた人物であった。多くの公爵やボヤールたちがその前後に続き、周囲には、金で輝く鎧と武器を身に着けた軍勢が歩いていた。そこには王の栄光と美しさ、そして威厳が余すところなく見られ、聖ポルフィリウスはこう語った。

「もし、この世の、一時的な王の栄光がこれほどであるならば、天の、永遠の王の栄光は、いったいどれほどのことだろうか！」

そして、皇子が教会に運ばれると、二人の聖なる司教は教会の扉のそばに立ち、用意された巻物を手にした。聖なる洗礼の儀式が執り行われ、皆が新しく洗礼を受けた皇子と共に教会から出てくるとき、聖なる司教たちはこう叫んだ。

「お願いいたします、新しく生まれた王よ、私たちの願いをお聞き入れください。そして、御治世の初めから、慈悲深いお方であることを示してください。」

そう言いながら、聖なる父たちは巻物を赤ん坊の上に置いた。　皇太子を運んでいた男は立ち止まり、その巻物を受け取って広げ、皆に聞こえるように読み上げた。それは皇后からそう教わっていたからである。そして巻物の一部を読み終えると、再びそれを巻き直し、右手を赤ん坊の頭の下に差し入れて、まるで承諾を示すかのようにその頭を少し持ち上げ、こう叫んだ。

「陛下は、ここに記されたすべてが必ず実行されるよう命じられます。これは陛下の御命令であり、決して変更されることはありません。」

これを見て聞いた者たちは皆驚き、新生王を祝福し、慈悲の行いで統治を始めた彼に長寿を祈った。また、アルカディウス皇帝を称え、神に祝福され、共同統治者となる息子を授かり、すでにこのような善行に関する命令を下していることを語った。　これらすべてのことが皇后に伝えられた。皇后は喜びに満ち、神にひれ伏して感謝を捧げた。　そして、洗礼を受けたばかりの幼子が王宮の御殿に運ばれてくると、母は迎えに出て、その子を腕に抱き上げ、母として額に口づけをした。その後、夫であるアルカディウス皇帝のもとへ連れて行き、次のように言って祝福した。

「わが主よ、あなたは幸いですね。あなたがこの世にいる間に、あなたの身から生まれた王を、この目で見ることができるのですから。」

アルカディウス王はこれを聞いて、大いに喜んだ。そして王妃は、夫が明るく楽しげな様子であるのを見て、こう言った。

「もしお望みなら、わが主よ、この巻物に何が書かれているか確かめましょう。これはわが王子の元へ届けられたもので、ここに記されたすべてのことについて、彼の最初の命令が速やかに実行されるようにするためです。」

王は巻物を読み上げるよう命じ、読み終えるとこう言った。

「この願いを叶えるのは難しいが、断るのも気が引ける。そうすれば、わが息子の最初の命令を撤回することになり、それは不都合であり、不適切だからだ。」

王妃はこう答えた。

「息子の最初の勅令を撤回することは不適切であるだけでなく、私に息子の誕生を予言してくれた聖なる人々の祈りを軽んじることも罪深いことです。」

すると直ちに、アルカディウス王は、パレスチナの司教たちが巻物に記したすべての内容を、王の勅書によって承認するよう命じた。　そして、アルカディウス王とテオドシウス王の両名の名義で書かれた勅書が準備されると、皇后は神の司教であるヨハネスとポルフィリウスを呼び寄せ、彼らにその勅書を見せながら、それが彼らにとって妥当なものかどうか尋ねた。　二人は頭を下げて、彼女の慈悲深く賢明な配慮に感謝し、王の命令を遂行するために、以前派遣されたような人物ではなく、敬虔で誠実かつ忠実な人物をガザへ派遣するよう懇願した。　そこで、キネギウスという名の、信仰深く神を畏れる人物が見つかり、王たちからガザへ赴き、命令に従って最善の方法で物事を整えるよう命じられた。　また、女王は聖ポルフィリウスに、ガザの街の中心に石造りの教会を建設するため、そして宿泊施設を整えるために多額の金を授け、さらに教会の建設に必要な分はいくらでも与えると約束した。　さらに、彼女は二人の司教に対し、ケサレアとガザの教会のために金や銀製の贈り物や教会用器物を授け、旅費として金も与えた。　また、王も聖なる司教たちを敬い、贈り物や金銭を惜しみなく与えた上で、彼らを平穏に送り出した。彼らは、至聖なるヨハネス・クラマトルス総主教に挨拶を捧げた後、それぞれの教区へと船出した。そして彼らの後を追って、王の命令を受けた王室の高官キネギウスも旅立った。

旅人たちがロードス島に近づいたとき、聖なる父ヨハネスとポルフィリウスは、隠遁者プロコピオスに挨拶ができるよう、舵手に岸に接岸するよう懇願した。しかし、舵手は風向きが悪いと述べてこれを拒み、キリストの聖人たちの願いに全く耳を貸さなかった。　というのも、彼は密かにアリウス派であり、正統派の司教たちを憎んでいたからである。しかし、彼らがその島を過ぎ去ると、たちまち海は嵐と高波に見舞われ、皆は船が沈没するのではないかと恐れて、大きな恐怖に襲われた。この荒波は丸一日と一晩中続いた。やがて夜明けが近づくと、聖ポルフィリウスは少し眠りにつき、夢の中で聖プロコピオス修道士が現れ、こう告げるのを聞いた。「舵取りに、アリアヌス派の異端[2113]を放棄し、それを呪うよう説得し、彼を聖なる洗礼に備えさせなさい。そうすれば、すぐにこの恐ろしい荒波は収まるだろう」。　眠りから覚めた聖ポルフィリウスは、このことを至福のヨハネ都主教や、彼と共にいた他の者たちに語った。その後、舵手を呼び寄せ、聖人たちは彼にこう言った。

「もし、お前の船と我々全員が沈没から救われ、とりわけお前の魂が永遠の滅びから免れたいと望むなら、お前の迷信、すなわちアリウス派の異端を捨て、カトリック教会に加われ。」

舵取りは、聖なる司教たちが誰も知らなかった秘密を見抜いたことに驚き、彼らにこう言った。

「神があなたがたに私の心の秘密を明らかにされたのですから、私はアリウスの教えを捨て、あなたがたが信じているように信じます。どうか、私を聖なる信仰に堅く立たせてください。」

彼がそう言うと、たちまち嵐は収まり、海は静まり返った。そして聖人たちは、神の御言葉によって彼を教え導き、正統信仰に確固たるものとした後、彼を公に宣言し、洗礼を授けた。　その後の旅は無事に終わり、聖なる司教たちはマイユム[2114]の岸に上陸した。そこはガザから二十スタディ

[2113] アリウス派の異端は、不敬虔なアリウス（4世紀初頭）にその起源を遡る。彼は、神の御子は父なる神と同質である神ではなく、父なる神が世界創造の媒介とした最高の被造物であると説いた。　この異端は、第1回全地公会議（326年）において非難され、同公会議では、信仰告白の最初の7条において、神の御子に関する真の教義が明文化された。

[2114] マイユマはパレスチナの港湾都市であり、海岸線から少し離れた場所に位置していたガザの港としての役割を果たしていた。

オン[2115] 離れており、そこから陸路でガザの町へ向かった。 彼らの到来を知った信者たちは、詩篇と賛美歌を歌いながら聖なる十字架を掲げて出迎え、大いなる喜びと祝賀のうちに神の司教たちを街へと迎え入れた。　一方、偶像崇拝者たちはこれを見て、歯ぎしりしながら激しく憤ったが、彼らに何らかの害を加えることは敢えてしなかった。というのも、キリスト教の司教たちが王から敬意をもって迎えられたこと、そして彼らの後に、異教徒たちの暴虐を鎮め、彼らの神々の神殿を破壊せよという王の勅令が送られてくることを、すでに聞いていたからである。　一方、キリスト教徒たちは、聖なる十字架と司教たちを先頭に、ヴィーナスの偶像へと近づいていった。　この偶像に対し、ガザの住民、とりわけ女性たちは、ろうそくを灯し、香炉で香を焚いて、多大な敬意を払っていた。というのも、その偶像に宿る悪霊が、夢の中の幻影によって多くの人々を惑わせ、処女や女性たちをあらゆる肉欲の罪へと誘っていたからである。　そこで、キリスト教徒たちが通り沿いの高台に立っていたその偶像に近づくと、悪霊は即座に逃げ去り、偶像を地面に倒した。　その偶像は地面に倒れると、大理石製であったため粉々に砕け散り、そこに　立ち、キリスト教の礼拝を嘲笑していた異教徒のうち二人を殺してしまった。　この奇跡を目撃した多くの異教徒がキリストを信じ、キリスト教徒に加わって聖なる教会へと向かい、聖なる洗礼を請い求めた。信仰を抱いた者は、男性三十二名、女性七名であった。そして、信徒たちにとっては、牧者たちの無事な到着と、人々の魂の救いについて、格別の喜びがあった。　その後、至福のヨハネ大主教はガザに二日間滞在し、その後ケサリアへと向かい、キリスト教徒たちは彼を見送った。それから数日後、前述のキネギウスという王室の高官が、多くの高官や軍司令官、そして軍勢を率いてガザに到着した。　異教徒たちは大いに恐れおののき、そのうちの何人かは街から逃げ出した。　朝、キネギウスは町の長老たちと民衆全員を集め、ガザの偶像の神殿を破壊し、偶像を打ち砕くよう命じた王の勅令を示した。この勅令が公に読み上げられると、不信心な者たちの群衆は悲鳴を上げ、泣き叫び始めた。　キネギウスはその叫び声を我慢できず、兵士たちに合図を送った。兵士たちは異教徒たちへと突進し、彼らを打ち始めた。こうして不信心者たちの集まりは散らされ、キリスト教徒たちは大きな喜びに沸き立ち、王たちに感謝を捧げ、多くの賛辞をもって彼らを喜ばせた。　その後、彼らは兵士たちと共に偶像の神殿へと駆けつけ、大騒ぎしながらそれらを破壊し始めた。街には、特に重要な偶像の神殿が八つあった。すなわち、太陽神の神殿[2116] 、ヴィーナスの神殿、アポロンの神殿[2117] 、プロセルピナの神殿[2118] 、ヘカテの神殿[2119] 、フォルトゥナの神殿[2120] 、そしてマルナスの神殿である。 最後の神殿は最も大きく、不敬虔な異教徒たちが最も頻繁に訪れていた。市場や通り、様々な建物や城壁の上、そして町の周辺の道や果樹園、畑のあちこちにも、数え切れないほどの偶像が立っていた：　そしてキリスト教徒たちは十日間で、それらの偶像をすべて打ち砕き、不浄な偶像の神殿を破壊した。ただし、巨大で最も美しいマルナソスの神殿だけは例外であった。多くの人々は、この神殿を破壊すべきではなく、偶像の汚れを取り除いてから、神の教会として聖別すべきだと語っていた。　多くの人々がマルナソスの神殿を保存したいと願っていたことを受け、聖ポルフィリウスは神に祈りを捧げ、御指示を請うた。すると、彼が聖なる教会で神聖な礼拝を執り行っていた時、群衆の中から子供の声が響いた：

[2115] スタディオンは長さの単位で、約88サジェーンに相当する。20スタディオンは、3ヴェルストを少し超える距離である。

[2116] ギリシャの*太陽神*ヘリオスは、多くの場所で崇められていた。芸術作品では、アポロンに似た姿で描かれていたが、顔立ちはよりふっくらとしていた。

[2117] *アポロン*——光の神として、また知性の啓蒙、詩、音楽の神として崇められていた。

[2118] *プロセルピナ*は、冥界の支配者であり、また大地の奥底から生える穀物の女神としても崇められていた。

[2119] ヘカテ——恐ろしい冥界の神であり、邪悪で有害な悪魔たちを支配し、冥界から死者の魂を呼び出し、幽霊で人々を恐怖に陥れることができる。

[2120] *フォルトゥナ*——偶然の女神、とりわけ幸福と繁栄の女神として崇められていた。

「マルナスの神殿は、悪魔への生贄として捧げられた人々の血によって穢されているのだから、焼き払われ、破壊されよ。その基礎は地面から掘り起こされ、散らされよ。そしてその場所に、神の栄光のために新しい神殿が建てられよ。」

その子は七歳だったので、聖職者たちは、母親に教えられてそう言ったのだと考えた。彼らはその子を捕まえ、まるで殴ろうとするかのように脅し、誰がそう言うように教えたのか白状させようとした。　すると、その子はギリシャ語で話し始め、同じことを繰り返した――「マルナスの神殿は焼き払われ、破壊されよ」と。その時、皆は彼が聖霊によって語っていることを悟った。というのも、7歳でありながらギリシャ語を習ったこともないその子が、今や流暢にギリシャ語を話していたからである。　こうして、人々は子供の言葉を信じ、美しいマルナスの神殿を基礎まで焼き払い、破壊した。そして、地面から掘り出した神殿の破片を通りや道に撒き散らし、誰もがそれを踏みつけるようにした。　その後、兵士たちは異教徒のあらゆる建物や住居を巡り、至る所で隠されていた偶像を集め、膨大な数を集めると、それらをひとまとめにして焼き払った。こうして、ガザにおける偶像崇拝は根絶されたのである。　キネギウスは、不敬虔な指導者たちを十分に屈服させ、キリスト教徒への迫害に対して彼らを罰した後、王たちの元へ戻った。一方、聖人の願いにより、軍の一部を街に残し、偶像崇拝者たちが再びキリスト教徒に対して威勢を振るうことのないようにした。　その後、キリストの聖人は、かつてマルナスの神殿があった場所に十字架形の教会を建立した。その図面は、エウドクシア女王が羊皮紙に描いて送ってきたものであった。　この教会のために、彼女はまた三十本の大理石の柱を送り、そのうちの二本はエメラルドのように輝いていた。こうして、皇后の支援により、五年で教会が建設され、かつてのマルナスの神殿よりも比類なきほど美しいものとなった。　この教会を奉献した後、神の司教は神聖な礼拝を執り行い、かつて偽りの神々への忌まわしい血の犠牲が捧げられていたその場所で、今や真の神への血なき至聖なる犠牲が捧げられるようになったことに対し、主キリストに深い感謝を捧げた。 その後、聖ポルフィリウスは、 の敬虔な女王から寄贈された金を用いて、旅人宿を建設し、そこで旅人を安らかに迎え入れ、貧しい人々を養った。　神の助けにより、彼は神の言葉をもってキリストの群れを賢明に牧し、その結果、信者の数はますます増えていった。というのも、多くの異教徒が偶像崇拝の不義を捨てて、キリストなる神に立ち返ったからである。　一方、他の異教徒たちは、見事に繁栄し、増え続けるキリスト教の教会と、それとは対照的に衰退し、勢力を失っていく異教の姿を見て、怒りと嫉妬に苛まれた。そして彼らは再び、聖なる牧者とその群れに対して反旗を翻そうとしたのである。　ある日、教会の執事と、サムプシキオという名の有力な市民であるある偶像崇拝者との間で、教会の所有地にあるある物品をめぐって争いが生じた。騒ぎを聞きつけて、信者も非信者も駆けつけ、それぞれが味方を助けた――信者は執事を、非信者はサムプシキオを。　しかし、異教徒の方が人数が多かったため、彼らは信者たちを圧倒し、棍棒や武器を手に取って戦いを仕掛けた。信者の中から七人を殺害し、多くの人々に重傷を負わせた異教徒たちは、乱暴な叫び声を上げながら、聖ポルフィリオスを殺害しようと司教の庭へと駆け込んだ。これを知った聖ポルフィリオスは、助祭マルコにこう言った。

「兄弟よ、逃げよう。主の怒りが過ぎ去るまで、しばらく身を隠そう。」

そして、壁を乗り越えて、彼らは反乱軍とは反対の方向へ走り、サラフィという名の、信仰上は異教徒であったある乙女の家に身を隠した。　両親を亡くして孤児となった彼女は、病気の祖母と暮らしており、祖母に仕え、自らの労働で生計を立てていた。この娘は、聖なる司教とその助祭を自宅に匿い、彼らに食べ物と飲み物を与えた。そして、聖ポルフィリウスはその日と夜、さらに翌日の一日中、彼女の家に留まった。　その翌夜、騒ぎと反乱が収まると、聖人はマルコと共に自宅へ戻ったが、家の中のすべての物が略奪されており、至福のバルクは殴打され、傷だらけで横たわっており、かろうじて息をしている状態だった。キリスト教徒たちは、これらすべての出来事を、ケサリアに

住んでいたアンフィパト[2121]に報告した。 アンフィパトは兵士たちを派遣し、この反乱を扇動し殺人を犯した者たちをすべて捕らえ、ある者たちは死刑に処し、他の者たちは残酷に拷問した後、生かして解放した。この時から、不信心者たちは静まり返った。そして、キリストの聖人ポルフィリウスは、残りの生涯を平和と穏やかな静寂の中で過ごした。　聖人は、殺意に満ちた者たちから身を隠していた前述の乙女サラファに感謝し、聖なる洗礼によって彼女を救い、また、病に伏していた彼女の老母を癒やし、同様に洗礼を授け、教会の財産から彼女たちに生計の糧を与えた。　聖人はその乙女を正当な夫と結婚させようとしたが、彼女はキリストに身を捧げたいと望み、聖人はそのことに心から大いに喜んだ。彼女をキリストの奉仕に捧げた聖人は、彼女を清らかな乙女たちの列に加え、　彼女もまた、生涯を通じて神に奉仕し、断食と祈りの中でその清らかな処女性を守り続けた。それは、神に愛される祈りの人である神の御使いポルフィリオスの助けによるものであった。彼は、昼夜を問わず、自らの羊の群れのために絶え間なく神に祈りを捧げていた。

キリストの聖人は、偉大な奇跡行者として名声を博した。こうして彼は、祈りによって、深い井戸に落ちた三人の少年たちを無傷で救い出し、　また、マニ教の異端に属し、悪魔の狡猾さと異端的な虚言に満ち、正教を激しく冒涜し、多くの人々を自らの邪悪な道へと誘惑していたある女性を、祈りによって死に至らしめました。彼女は突然倒れ、息を引き取ったのです。　そして、聖ポルフィリウスは神の栄光のために、他にも多くの奇跡を行った。キリストの教会を二十四年、十一ヶ月、八日間牧会した後、聖人は、大牧者であり、神の御子であり、大司祭であるイエス・キリストのもとへ旅立った。父と聖霊と共に、その御方に永遠の栄光と誉れがあるように[2122]。アーメン。

- 同日、ネロ皇帝の治世下で剣によって斬り殺された聖殉教者セバスティアンの記念日である[2123]。

コンダク、第2調:

あなたの至聖なる品行に私たちは飾られ、聖職の衣に輝かされた、至福の神智者ポルフィリオよ。あなたは癒やしを恵み、絶えず私たちすべてのために祈り続けておられます。

3月12日

2月27日（旧暦）

私たちの尊い父、殉教者プロコピオス・デカポリトスの記念日

2月27日の記念日

デカポリス地方は、その地に位置する十の都市にちなんでその名を得ており、ガリラヤ湖のほとりにあります。この地方については、聖福音記者マルコが次のように言及しています。「イエスは

[2121] アンフィパト――その地域の最高責任者。

[2122] 聖ポルフィリオスの没年は420年とされる。

[2123] この聖なる殉教者は、3月20日に記念される聖フォティナの仲間の一人であった。ローマ皇帝ネロは54年から68年まで在位した。

再び、デカポリスの境界を越えてガリラヤ湖へお出かけになった」[2124]（マルコ7:31）。 この地方は、敬虔なプロコピオス・イスポヴェドニク（殉教者）の出身地である。修道生活における苦行に熟達し、厳格な禁欲によって鍛えられ、清らかな魂に恵まれた彼は、修道者たちの間で名高く、著名な人物であった。 当時、聖像破壊の異端による苦難の時代が訪れていた。その最初の扇動者は、ギリシャの無法な王レウ・イサウリア人[2125] であり、彼は聖なるイコンを不当に偶像と呼び、それらを崇拝する者たちを偶像崇拝者と呼んだ。 彼は慈悲もなく多くの罪なき正教徒を殺害し、聖なるイコンを崇敬していたという理由で、彼以前のすべての正統な王、聖人、そしてキリスト教徒を呪いにかけ、それによってすべての人々から呪いを浴びることとなった。 その時、正教の偉大で揺るぎない支柱であり、正しい信仰の堅固な守護者である聖プロコピオスは、不敬な行いによって神の御言葉の受肉を冒涜し、聖なるイコンを不名誉にも否定した多くの異端者たちに、勇敢に立ち向かった。 彼は異端者たちを恥じ入らせ、彼らの狂気じみた思索を暴き、神に霊感を受けた無敵の言葉でそれを打ち破った。まるで蜘蛛の巣を断ち切るかのように、聖プロコピオスは彼らの狡猾な言葉の網を粉砕したのである。

これにより、彼は不敬虔な王の怒りを招いた。その王は、まるで砂漠から現れた野生の獅子のように、獲物を求めて咆哮していた。王の命令により、聖人は捕らえられ、残酷に殴打された。拷問者たちは鉄の道具で彼の体を削り取り、その後、彼を暗く悪臭漂う牢獄に投げ込んだ。 しかし、聖人はすべての苦難を堅く耐え抜いた。彼と共に苦しんだのは、かつてプロコピオスと共に断食と徳行に励んでいた聖ヴァシリーであった。二人は今や、聖なるイコンのために共に多くの拷問に耐えた。二人は共に牢獄に閉じ込められ、不信心な拷問者の死に至るまでそこに留まっていた。 やがてレウスが、現世の命だけでなく、来世の永遠の命までも失って亡くなると、聖プロコピオスは友のヴァシリーや他の聖人たちと共に牢獄から解放された。残りの生涯を、彼は断食の修行に捧げ、多くの人々に徳を説き、救いへと導いた。 尊厳ある老齢に達したとき、彼はキリスト・神のもとへ旅立ち、もはやイコンの像ではなく、直接その御顔を仰ぎ見るため、また、キリストの聖なるイコンのために血を流すほどに奮闘した断食者かつ殉教者として、その労苦にふさわしい報いを受けるためであった。

トロパリオ、第8調：

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深淵からの嘆きによって百の労苦を実り豊かなものとし、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、我らの父プロコピオよ。キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第4調：

今日、教会は暁の星を擁し、あらゆる悪評の闇を追い払い、天の秘儀を司る者、栄光に満ちたプロコピオスを崇める。

[2124] デカポリス――ヨルダン川の対岸に位置する十都市連合、地域、あるいは管区であり、北はダマスカス、南はフィラデルフィア、西はスキフォポリス、東はカナファまで広がっていた。ここには主に異教徒が住む10の都市があり、その中には多くのユダヤ人も含まれていた。

[2125] 717年から741年まで在位した。

尊者ファラレイの記念日。

記念日：2月27日

聖ファラレイは、キリキア[2126] 地方の出身であった。世俗の虚しさを軽んじ、彼はまず、尊者サヴァ・オスヴェシュチェンヌイの修道院を訪れた。修道生活における断食の修行を愛し、天使のような姿となり、その徳高い生涯により、司祭の位を授かった。　数年後、彼はラオディキア都主教区に属するシリアの都市の一つ、ガヴァラへと赴いた。その都市から二十スタディオン離れた場所に、大きな墓地があった。そこには、すでに老朽化していた異教の神殿が立ち、周囲は古代の墓に囲まれており、そこには多くの邪悪な霊が棲みついていた。　通りかかる者は皆、この場所を恐れていた。なぜなら、不浄な霊たちは旅人たちに幽霊を見せて脅かすだけでなく、しばしば彼らに襲いかかり、人や動物に多くの害を及ぼしていたからである。　この話を聞いた聖ファラレイは、その地へ向かい、そこに定住した。彼は小さな天幕を建て、その中で生活し、断食に励み、苦行によって肉体を律し、昼夜を問わず絶えず祈りを捧げていた。　不浄な霊たちは、このような隣人を耐え忍ぶことができなかった。大群となって集まった彼らは、激しい怒りを込めて聖なる人に襲いかかり、荒々しい声で彼を脅かし、威嚇し、あらゆる策略を用いて、古くから自分たちのものだと考えていたその場所を聖人が去るよう迫った。　しかし、神への揺るぎない信仰を持つ聖ファラレイは、祈りと十字架の印で身を守りながら、勇敢で無敵の戦士のように毅然と立ちはだかり、邪悪な霊たちの微弱な力を踏み砕いた。

こうして長い間、毎日、とりわけ夜になると、聖人は不浄な霊たちと勇敢に戦い、ついに神の助けにより彼らを打ち負かした。彼らは、無敵のキリストの戦士に打ち勝つことができず、恥じ入って逃げ去った。

悪霊を追い払った後、神の聖人は、自分の体格にはまったく合わない、高さがわずか2肘、幅が1肘という、狭く窮屈な小部屋を建てた。 その中では、立つどころか、普通に座ることさえできなかった。尊者ファラレイは背が高かったため、小部屋で座っているときは常に頭を膝に近づけざるを得なかった。彼はこのような窮屈な環境で約10年間を過ごした。　その頃、キレネのテオドリトス司教が彼を訪ね、聖ファラレイが福音書を読んでいるところに出くわした。司教が、なぜそのような生き方を選んだのかと尋ねると、聖人はこう答えた。

「私は大いなる罪人です。来世において大いなる苦しみを受けるに違いないと信じているため、自ら進んでこれほど狭い住処を設けたのです。このささやかな制約によって、永遠の苦しみから逃れられることを願って。」

彼との対話を通じて、司教は大きな恵みを受けた。

神は尊者ファラレイに奇跡を行う賜物も授けられた。尊者は自らの祈りによって、あらゆる病に苦しむ人々を癒やすことができ、人だけでなく家畜までも癒やした。　そのため、多くの人々が彼を癒しの泉として訪れ、彼のもとで肉体的な健康だけでなく、精神的な健康も取り戻した。その結果、周辺のギリシャ人の多くがキリスト・神へと回心した。　ガヴァラ市の域内に住むキリスト教徒の中には、多くの異教徒がいた。彼らは皆、聖ファラレイの奇跡によって真理を知らされ、聖なる信仰に導かれたのである。　これらの新しく改宗したキリスト教徒たちの助けを借りて、聖人は異教の神殿を破壊し、墓を撤去した。この場所を悪魔の汚れから清めた後、彼はここにすべての聖なる殉教者たちの名に因んで神の教会を建て、神の栄光のためにそこで毎日の礼拝を始めた。　残りの生涯を、

[2126] キリキアは、小アジア南東部の州であり、かつてはローマ帝国の繁栄した地域の一つであった。東はシリア、北はカッパドキアとリカオニア、西はピシディアとパンフィリア、　南は地中海と湾に面している。現在、この地域はトルコに属している。

以前と変わらぬ修業に捧げ、神に喜ばれた後、　、高齢のうちにこの世を去った。聖ソフロニオス・エルサレム人は、『リモナール』[2127]において、この聖人について次のように記している：

「アッバ・ペトロス、聖サヴァ修道院の長老は、アッバ・ファラレー・キリキア人について、この至福の父は60年間修道士として過ごし、決して涙を絶やすことなく、次のように語っていたと私たちに伝えた。　『兄弟たちよ、神はこの時間を私たちに悔い改めのために与えてくださった。もし私たちがこれを無駄にしてしまえば、そのことについて厳しく裁かれることになるだろう』」

尊者ファラレイは、60年間修道生活を送った後、460年頃に世を去った。

ペチェルスクの長老ティトの伝記

記念日：2月27日

「神の怒りが天からあらゆる不義に対して現れる」（ローマ1:18）こと、また、人の理解を超える「神の平安」（フィリピ4:7）が降り注ぎ、それを求める人の肉体と魂を守ること――これらすべてが、至福のティトの生涯に見られる。 彼はペチェールスク修道院[2128]の修道士であり、長老の位に就いていた。永遠の至福にふさわしい功績を成し遂げた尊者ティトは、次のような境遇によって導かれた。彼には、血のつながりではなく、霊的な兄弟がいた。それは、同じ修道院に所属するエヴァグリオという名の修道士で、位は助祭であった。　偉大で偽りのない愛が二人の修道士を結びつけていたため、誰もが彼らの心の一致と互いへの愛に驚嘆していた。しかし、あらゆる善を憎む悪魔は、小麦の中に毒麦を蒔くことを常としていた（マタイ5:22）が、彼らの間にも敵意を蒔いた。 悪魔は怒りと憎しみをもって彼らの心を深く曇らせたため、二人は互いの顔を見ることもできず、あらゆる手段を講じて互いを避けようとした。一人が香炉を持って教会へ入ると、もう一人は香を焚かれるのを避けて逃げ出した。もし一人がその場を離れなければ、もう一人は香を焚かずにその横を通り過ぎた。　彼らは長い間、そのような罪深い闇の中に留まり、悪魔の唆しによって、互いに和解もせず、互いに許しを請うこともないまま、神聖な供え物を捧げ、聖体拝領さえも敢えて行うに至った。　兄弟たちは何度も彼らに和解するよう懇願したが、彼らは聞く耳さえ持たなかった。ある日、神の御心により、尊者ティトゥスが重病に陥り、もはや生き延びることを望めなくなった。その時、彼は自らの罪を深く悔い、涙を流して、助祭エヴァグリオスに次のように伝えるよう謙虚に命じた。

「兄弟よ、主の御名において、私の怒りであなたを傷つけたことを許してください。」

しかし、エヴァグリオスはティトを許すどころか、さらに彼を罵り、呪いさえ浴びせた。ところが、兄弟たちはティトがすでに死の淵にあるのを見て、エヴァグリオスを力ずくで彼の元へ連れて行き、兄弟と和解させようとした。病床のティトはエヴァグリオスを見ると、体を起こして彼の足元にひれ伏し、涙ながらにこう言った。

「父よ、私を赦し、祝福してください！」

しかし、冷酷で非情なエヴァグリオスは兄から背を向け、皆の前で憎しみに満ちた言葉を吐いた。

[2127] 『リモナール』（ギリシャ語で「牧草地」の意）は、ギリシャの修道士ヨハネス・モスクス（622年）による、非常に広く知られた著作である。　パレスチナ、シリア、エジプト、キプロス、コンスタンティノープル、そしてローマの修道院で、モスクスはキリスト教の修道士たちの生涯に関する数多くの物語や、彼らの格言、教訓を集め、これらすべてを『リモナール』にまとめ上げた。この著作は、後世の聖人伝の主要な一次資料の一つとなった。　『リモナール』は、モスクスの弟子であり、エルサレム総主教であった修道士ソフロニオスが同行したローマで、モスクスによって完成された。『リモナール』を完成させた後、モスクスはそれをソフロニオスの管理下に委ねた。

[2128] 言うまでもなく、キエフ・ペチェール修道院は、1073年に聖アントニオスと聖テオドシオスによって設立されたものである。

「私は決して彼と和解するつもりはない。この世でも、来世でも！」

そう言い放つと、彼は兄弟たちの手から抜け出し、倒れ込んだ。修道士たちは彼を助け起こそうとしたが、すでに息絶えていた。彼らは彼の両手を組むことも、口を閉じることも、目を閉じることもできなかった――まるで彼がずっと前に亡くなっていたかのようだった。その頃、至福のティトは、まるで一度も病気になったことがなかったかのように、完全に健康な状態で立ち上がった。　一人が突然この世を去り、もう一人が瞬く間に癒やされたのを見て、皆は恐怖に襲われた。彼らは、至福の司祭ティトに、これが何を意味するのかと尋ね始めた。至福のティトは、このことについて天から啓示されたことを彼らに語った。

「病気の間――」と、至福のティトは語り始めた。「私はまだ怒りに囚われていたが、天使たちが私から離れていくのを見た。彼らは私の魂の滅びを嘆き、悪魔たちは私が兄弟に対して怒りを抱いていることを喜んでいた。だからこそ、私はあなた方に、行って私の兄弟に私のために許しを請うよう頼み始めたのだ。　あなたがたが彼を私のところへ連れてきて、私が彼に頭を下げたとき、彼は私から顔を背けました。すると、私は一人の　、容赦のない天使が、炎の槍を手にしているのを見ました。その天使は、私を許さなかった彼をその槍で突き刺し、彼はその場で息絶えました。その同じ天使が私に手を差し伸べ、私を立ち上がらせてくれたのです。そうして、私は回復しました。

その話に恐怖を覚えた修道士たちは、亡くなったエヴァグリオスのために大いに泣いた。彼らは彼を埋葬したが、両手を組ませたり、目や口を閉じさせたりすることはできなかった。そして彼ら自身も、特に怒りを慎むようになり、互いに傷つけるような言葉をすべて赦し合い、主の御言葉「*兄弟に対してむやみに怒る者は、裁きを受けることになる*」（マタイ5:22）という主の言葉を心に留め、互いに傷つける言葉をすべて赦し合うようになった。また、聖エフレム・シリンもこう言った。「もし誰かが敵意を抱いたまま死ぬことがあれば、その者には容赦ない裁きが待っている」。そして、その時に、悟りを得た兄弟たちについてこう言うことができた。*「あなたの律法を愛する者たちには、大きな平安がある」*（詩篇118:165）。

しかし、とりわけ長老ティト自身は、兄弟との和解によって神との和解を得、肉体的な死だけでなく魂の死からも救われたのを見て、それ以来、誰に対しても怒ることを考えさえせず、怒りを捨て去り、兄弟たちへの絶え間ない愛を身につけた。その愛は、平和の根源として、　完全さの結びつきであり、*「清い心と良心と偽りのない信仰」*（Iテモテ1:5）から生じ、また*「寛容であり、慈愛に満ち、愛は嫉妬しない」*　（Iコリント13:4）であり、あらゆる美徳、とりわけ断食、貞潔、絶え間ない祈りをその中に含んでいる。この時から、祝福された方は常に、聖書の言葉*「分別を働かせ、祈りの中で目を覚ましていなさい。　何よりも互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです」*（Iペトロ4:7–8）。

血を流さない犠牲を捧げることで、長老ティトスは次の福音の言葉も実践していた。*「隣人を自分自身のように愛することは、あらゆる全焼のいけにえや犠牲よりも尊い」*　（マルコ12:33）。彼は、これほどまでに動じることのない平安を自らに築き上げたため、完全な愛の情熱に燃えながらも、悲しみに暮れてこう言うことはできなかった。*「あなたの怒りのゆえに、私の肉には安らぎの場所がなく、私の罪のゆえに、私の骨には平安がない」*（詩篇37:4）。この断食者の魂の完全な平安は、使徒の言葉*「神の国は、飲食ではなく、義と平安と聖霊による喜びである」*（ローマ14:17）が、彼において真に成就したほどのものであった。

それゆえ、天においても、至福のティトは安息を授かるにふさわしい者とされた。彼はその安息を求めて、多くの労苦と功績を経て、主のもとへ旅立ったのである。彼の聖なる遺体は、まるで地上の天のように聖人たちに満ちたペチェルスクの洞窟の一つに眠っており、その霊は、彼のもとに現れた天使たちの手によって天へと上げられ、今や天に在している。　かつては罪人であったが、後に真摯に悔い改めたこの義人について、天使たちは聖パウロが使徒ティトについて述べた言葉、「へりくだった者を慰める神は、ティトの到来によって私たちを慰めてくださった」（IIコリント7:6）とし

か言いようがなかった。私たちもまた喜びながら、同じ聖書の一節を用いて、天の住人たちにこう答えることができる。　私たちは、あなたがたの慰めを見て慰められ、とりわけ、あなたがたの中に安息を得たティトの喜びに大いに喜んだ。尊きティトの聖なる祈りによって、私たちもあらゆる怒りを捨て去り、罪の赦しを受け、私たちの主キリスト・イエスから、一時的かつ永遠の安息を授かるにふさわしい者とされますように。主は*「愛と平和の神」*であられる　（IIコリント13:11）です。御父と聖霊とともに、彼に永遠の栄光がありますように[2129]。アーメン。

3月13日

2月28日（旧暦）

聖アレクサンドリア総主教、聖司祭殉教者プロテリオスの生涯と受難。

記念日2月28日

聖キリルの死後、アレクサンドリアの総主教座[2130]に、異端者ディオスコーロス[2131]が就いた。この不法者は、その異端をエジプト全土に広めた。当時、その地にはプロテリウスという名の、真の信仰に堅固な敬虔な長老が一人住んでいた。　彼はその聖なる生活で知られ、神に霊感を受けた知性と英知に満ちていた。プロテリウスは、キリストにおいて「単一の本性」であると偽って主張する総主教の異端に多くの者が傾いているのを見て、異端者たちに対して強く立ち向かった。　総主教ディオスコーロスは彼に対して激しく怒りを抱いていた。この正教の擁護者までもを自らの考えに同調させようと、彼は狡猾にプロテリウスを甘やかし、さらにはプロト長老の位まで授けたが、その努力は実を結ばなかった。アレクサンドリアの聖キリル総主教によって信仰を確固たるものとしていた聖プロテリウスは、揺るぎなかった。　マルキアヌス帝の治世下、ハルキドンで開催された第4回全地公会議において[2132]、ディオスコーロスは異端であると告発され、総主教の位を剥奪され、教会から破門され、パフラゴニア地方[2133]のガングルという町へ追放され、そこでしばらくして亡くなった。追放されたディオスコーロスの後任として、アレクサンドリアでは、正統派の司教、聖職者、そして敬虔なキリスト教徒たちによって、この地位に真にふさわしい聖プロテリウスが総主教の座に選出された。

しかし、ディオスコーロスの異端の毒に染まり、さらに一部の異端の聖職者たちによって扇動されていたアレクサンドリアの民の大多数は、プロテリウスを総主教とする決定に反対した。　そし

[2129] 聖ティトは12世紀に生きた。

[2130] アレクサンドリア――紀元前333年頃、アレクサンドロス大王によって、地中海南岸に突き出た岬（現在の同名の都市より若干南）に築かれた有名な都市である。 かつては学問の中心地であり、世界一の商業都市であった。4世紀初頭にはキリスト教の中心地となり、総主教の居所となった。

[2131] ディオスコルスは、コンスタンティノープルのアルヒマンドリト・エウティキオスによる異端の主要な支持者であった。エウティキオスは、*キリストは二つの本性から生まれたものの、二つの本性の中に存在しているわけではない*と主張した。なぜなら、神の御言葉の受肉において、キリストが取り込んだ人間の本性は、あらゆる固有の実在性を失い、神性によって吸収されたからである。　教会史において、エウティキオスの異端は「*単性論（モノフィシズム）*」として知られている（単性論者＝単一の本性を主張する者たち）。

[2132] カルケドン公会議（451年）は、キリストにおける二つの本性の結合に関する正統的な真理を表明するものとして、キリストを完全なる神であり完全なる人であると告白する決定を下した。　神性においては父と同質であり、人性においては私たちと同質であり、受肉後も*二つの本性を混ざり合うことなく、また分離されることなく保ち*、それによって、キリストという一つの御人格において両本性が結合しつつも、それぞれの本性の特質が保持されている。

[2133] パフラゴニアは、小アジア北部に位置する、険しい山岳地帯である。

て、正統派の総主教として任命された聖プロテリウスが職務に就き、ハルキドン公会議において聖なる教父たちによって確立された正統な信仰を宣教し始めると、民衆の間で反乱が起こり、争いが勃発した。　長老ティモフェオス（通称エルール）と助祭ペトロス・モンゴを筆頭とする一部の聖職者――彼らはディオスコロスの側近であり、その異端の支持者であった――は、他の者たちと共に正統派から離反し、聖プロテリウスとの交わりを拒み、民衆の間で分裂を煽った。　そのため、アレクサンドリア教会では大きな不和が生じた。ある者たちは新たに任命された総主教を認め、正統派の立場を守ったが、他方ではディオスコロスの復帰を要求し、ハルキドン公会議で定められた教義を呪った。双方は互いに激しい争いを繰り広げた。　ディオスコーロスの支持者たちは聖プロテリウスに反旗を翻し、彼を「姦通者」と呼んだ。というのも、彼はディオスコーロスの存命中に、その「花嫁」であるアレクサンドリア教会を受け入れたからである。彼らはプロテリウスを、総主教の地位にふさわしくない異端者と呼んだ。聖プロテリウスは異端者たちから多くの苦難を被った。　異端者たちに殺されることを恐れて、彼は軍隊による護衛を要求した。彼は常に恐怖に苛まれ、民衆の騒動を待ちわびていた。というのも、ディオスコーロスの支持者たちはすでに、市の長官たちや市内に駐留していた軍隊に対して反乱を起こしていたからである。その頃、騒動を鎮圧するために、フィヴァイダからコンスルがアレクサンドリアに到着した。　反乱者たちは、執政官と共に到着した兵士たちに石を投げつけた。兵士たちは民衆の反乱を目の当たりにすると、セラピス神殿へと向かい、そこに立てこもった。反乱者たちは神殿を取り囲み、占拠して、そこにいた兵士たちを全員焼き殺した。この知らせが敬虔なマルキアヌス帝の耳に入ると、　彼は激しく怒り、大軍を派遣して騒動を鎮圧するとともに、エジプトの諸都市から船でアレクサンドリアに運ばれていたパンや穀物を、これ以降はアレクサンドリアではなくピルシアへ、そしてそこからコンスタンティノープルへ送るよう命じた。　さらに、マルキアヌスはアレクサンドリア市民から公衆浴場やその他の資産を没収し、住民の自由を制限し、彼らが開催していた民衆の催しを禁止した。　市民たちはこれを嘆き、とりわけパン不足を痛感していたが、やむなく聖プロテリウス総主教に対し、皇帝のもとへ赴き、彼らのために請願するよう懇願した。聖プロテリウスは皇帝のもとへ赴き、自らの都市のために請願したところ、皇帝は憐れみ深く、この聖人のすべての願いを聞き入れた。 市民たちはかつての 自由を取り戻し、パンはアレクサンドリアへ直接運ばれるようになった。その後、総主教はしばらくの間、平和に信徒たちを統率し、悔い改めることを拒んだティモフェイ・エルーラを破門した。

敬虔なマルキアヌスの死後、異端者たちは再び頭をもたげ、庶民を扇動し始めたが、目的を達成して初めてその行為をやめた。　狡猾で悪賢いティモフェイ・エルールは、魔術にも手を染めており、修道院に住む、あるいは砂漠で修行に励むエジプトの修道士たちを、次のようにして巧妙に惑わせた。

月のない漆黒の夜、ティモフェイは黒い服を身にまとい、修道士たちの独房を回り始め、一人ひとりを名前で呼びかけた。修道士たちが「あなたは誰ですか？　何の用ですか？」と尋ねると、彼はこう答えた。

「私は、あなたがたがプロテリウスと交わりを持ち、カルキドン公会議の決定を受け入れないようにと、神から遣わされた天使の一人である。アレクサンドリアの司教には、ティモフェイ・エルールを任命しなければならない。」

こうして、狡猾な詐い者は、悪魔の助けを借りて彼らを惑わした。一方、修道士たちは敵の策略に気づかず、嘘を真実だと信じ込み、互いに天使の幻視について語り合い、同意して全員で集まった。　相談を重ねた後、彼らはまるで戦いに赴くかのようにアレクサンドリアへと向かった。全員が聖なる司教プロテリウスに対する怒りに目がくらみ、彼を教会から追放しようとしていた。その頃、アレクサンドリアのティモテイオスは多くの反逆者たちを周囲に集めていた。ある者たちを誘惑し、

またある者たちには密かに金銭を配っていた。　コンスル・ディオニシオスが上エジプトに滞在し、街にいないという好機を待って、ティモテイオスは多くの同調者たち、自ら雇った武装した軍隊、そして駆けつけた修道士たちを率いて、教会へと向かった。　反乱者の中には、追放された二人の司教と、同じく破門された数人の聖職者がいた。彼らはティモフェイを司教に叙任し、アレクサンドリア総主教と称した。彼は、あらゆる教会の規則に背き、帝国のあらゆる法律を軽んじ、ただ反乱を起こした民衆と惑わされた修道士たちだけを頼りにして、この行為を行ったのである。

至聖なるプロテリウス総主教は、このような反乱を目の当たりにし、執政官不在のため誰からも助けを得られない状況下で、逃亡を決意した。彼は夜陰に乗じて密かに街を抜け出した。ある隠れ場所で眠りにつくと、眠りの中の幻視の中で預言者イザヤが現れ、こう告げた。

「都に戻れ。そこで私はお前を待っている！」

その幻視について熟考したプロテリウスは、自分が殉教の死を遂げることになることを悟った。彼は戻り、教会の洗礼堂に入った。一方、反乱者たちは聖プロテリウスを殺害しようと、至る所で彼を探し回っていた。彼が洗礼堂にいることを知ると、彼らは彼をそこに閉じ込めた。　その後、そのうちの数人が中に入り、彼と彼と共にいた6人を殺害した。その際、拷問者たちが携えていた鋭い先端の鉄の杖で、聖人の全身を激しく引き裂いた。彼らは、私たちのために「私たちの過越の羊」であるキリストが犠牲にされたまさにその時刻に、無実の血を流した。この殺害は聖土曜日に行われた。　しかし、殺人者たちは血に飽き足らず、さらにその残虐さをエスカレートさせた。キリストの殉教者の足に縄を結びつけ、彼らはその聖なる遺体を町の中心へと引きずり回しながら、様々な道具で殴打し、遺体をバラバラに引き裂いた。　中には、まるで犬や野獣のように激しい怒りに駆られ、その歯をキリストの殉教者の体に食い込ませた者さえいた。彼らは大きな焚き火を焚き、キリストの殉教者の遺体を焼き払い、その遺灰を空中に散らした[2134]。さらに彼らは、偽りの総主教ティモテイオスの命令により、聖プロテリウスが座していた司教座までも、あたかもその聖なる人物によって穢されたかのように焼き払った。かくして、邪悪で不敬虔な者たちは、神の御心にかなう者を不敬虔な者と断じたのである。

聖プロテリウスの非人道的な殺害の後、ティモテイオスはエジプトのすべての都市に自らの兵士たちを派遣し、正統派の司教たちを追放し、その代わりに自らが任命した者たちを据えさせた。そこで、迫害を受けていた正統派の司教や聖職者、そしてすべての正信者たちは、マルキアヌスの後に即位した敬虔な皇帝レウに嘆願書を送った。正統派は、コンスタンティノープル総主教である聖アナトリアスに対しても同様の嘆願書を送った。　嘆願書の中で、彼らは起こったすべての出来事を詳述し、アレクサンドリア教会をこのような災難から救ってくださるよう涙ながらに懇願した。皇帝と総主教は、罪のない神の聖なる司教プロテリウスが非人道的に殺害されたことを深く嘆いた。　皇帝は直ちに高官たちを軍を率いてアレクサンドリアへ派遣し、多くの反乱者が処刑された。ある者は両手を切断され、ある者は舌を切り取られ、ある者は牢獄に投じられ、またある者は鞭打たれ、　追放された。一方、偽の総主教ティモフェイ・エルール自身は裁判にかけられた。　正統派の司教たちによって有罪判決を受けた彼は、その行いに相応しい報いを受けた。彼らは彼から司教の地位を剥奪しただけでなく、キリストの教会から破門し、かつて彼の師であるディオスコーロスも流刑に処されたことのあるガングラという町へ流刑に送った。　彼の代わりに、アレクサンドリアの総主教座には、サロファキオルという通称を持つ別のティモテイが就任した。彼は揺るぎない信仰、知恵、そして徳高い生活で知られ、そのためにすべての人から尊敬を集めていた。　こうしてアレクサンドリア教会には平和が訪れ、それ以来、同教会はすべての正信者と共に、父と子と聖霊、すなわち三位一体の唯一の神を賛美するようになった。アーメン。

[2134] 聖プロテリウスは、467年、レウス大帝の治世中に殉教した。

私たちの尊い父、バシレイオス・イスポヴェドニクスの記念日

記念日：2月28日

聖ヴァシレイは、イコノボレ（聖像破壊者）であるレウ・イサウリアヌスの治世に生きた。世の誘惑を捨てて修道院に入り、徳に満ちた修道生活を送った。　聖なるイコンの崇敬に対する迫害があった際、聖ヴァシレイは勇敢にイコン破壊派に抵抗した。そのために彼は捕らえられ、多くの拷問にさらされたが、それにもかかわらず、ヴァシレイはイコン破壊派の異端的な教えを拒絶し、聖プロコピオスと共に、血を流すまで真理のために立ち続けた。　尊者プロコピオスと同様に、彼は全身を鞭打たれ、その後、牢獄に閉じ込められ、不義の王が死ぬまで長い間、そこで苦しんだ。　迫害者の死後、聖ヴァシリーは聖プロコピオスや他の殉教者たちと共に釈放され、以前と同様に禁欲的な生活を送り、多くの人々を正教の信仰へと導き、徳ある生き方を説いた。　数年にわたる神に喜ばれる生活の後、彼は至福の死を遂げ、祈りと感謝、そして言葉に尽くせぬ喜びをもって、幼い頃から愛し続けてきた主[2135]のもとへと旅立った。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちに現れた天使、奇跡を行う者、神を宿す者、わが父ヴァシリーよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに強さを与えられた方に栄光あれ、あなたを冠された方に栄光あれ、あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第8調：

高みより神聖な啓示を受け、賢き者よ、あなたは世の喧騒を離れ、敬虔に修道生活を送り、奇跡の御業を行い、恵みをもって病を癒やされた、至福の聖なるバシレイオスよ。

聖殉教者ネストル、マギディウス司教の記念日

記念日：2月28日

聖ネストルは、祈りの最中に自宅から連行されました。その際、彼は幻視によって羊の姿を通じて自らの殉教を予知していました。マギディス（小アジアのパンフィリア地方）の都市長イリナルコスによって、彼はペルギアへ直接連行されました[2136]。道中、聖ネストルは地震と天からの声によって力を与えられました。　ペルギアでは、恐ろしい拷問の末、250年、デキオスの迫害のさなかに十字架上で生涯を閉じた。

聖女マリーナとキラの記念日

2月28日の記念日

[2135] 聖バシレイオスは750年頃に亡くなった。

[2136] 小アジアの都市。

聖女マリーナとキラは、ベリア[2137] の町出身で、町でも名門かつ著名な両親の娘でした。しかし、彼女たちはその高貴な出自を顧みず、成人すると町の外へと身を隠し、　自ら小さな土地を囲い込み、隠れ家の入り口を石や粘土で塞ぎ、必要な食料の受け取りや訪問者との会話のための小さな開口部だけを残して、囲まれた屋外の場所で修行に励みました。　心の中で神を賛美しつつ、聖人たちは常に沈黙を守り、50日ごとにたった1日だけその沈黙を破った。聖人たちは、ゆったりとした修道服の下に非常に重い鉄の鎖を身に着け、並外れた忍耐力で飢えと、それによる苦しみを受け入れた。3年連続で、彼らは40日に一度だけ食事をとった。ある時、命の源である主の聖棺を礼拝するために旅立った際、彼らは礼拝を終えるまで一切の食物を口にしなかった。そして帰路では、20スタディオンに及ぶ道のりを、何も口にせずに歩き通した。　彼女たちは、聖殉教者フェクラの聖堂への巡礼の際にも、同様の偉業を成し遂げた。このような苦行の生活によって名声を博したこれらの聖なる女性たちは、ついに、切に望んでいた永遠の命へと旅立った[2138] 。

3月14日

2月29日（旧暦）

3月

尊き父カッシアン・ローマ人の記念日

記念日 2月29日

尊者カッシアンはローマ出身で、高貴かつ名門の家庭に生まれました。　若き頃から、彼は学問と聖書への愛を示していました。勤勉さと明晰な知性を兼ね備えていた彼は、まず哲学と天文学を学び、その後、敬虔な心で聖書の研究に取り組み、見事にそれを習得したため、その知識の深さにおいて、当時の傑出した人物の一人となりました。　さらに、彼は貞潔を守り、心の清らかさ、高潔な品行、その他の美徳に優れていた。故郷を後にし、コンスタンティノープルへ赴き、聖ヨハネス・クラマトルス（金口ヨハネス）のもとを訪れた。　彼からさらに新たな知識を授かり、徳ある生き方を学んだ後、彼はスキートへと退隠した。そこにあった修道院の一つで、聖カッシアンは修道者としての生活を始め、従順とあらゆる修道院の務めに全身全霊を捧げ、断食やその他の苦行を要する過酷な修道生活に身を慣らしていった。　これらの修行は、彼の中に新たな、より高次の修行への渇望を呼び起こし、彼は人里離れた場所へ赴き、そこで沈黙の生活を送った。聖カッシアンは、誘惑を見抜くことを学び、過酷な労苦によって自らを鍛え上げながら、長い間そのように修行に励んだ。　他の聖なる父たちからより大きな恩恵を得たいと願った彼は、完全な沈黙を守っていたその場所を離れ、エジプト、フィヴァイデ、ニトリオス山、アジア、ポントス、カッパドキアにあるすべての修道院を訪ねた。　この旅を通じて多くの偉大な教父たちの伝記に触れ、様々な修道生活の模範を学んだ聖カッシアンは、マッシリアに男子修道院と女子修道院の二つの修道院を設立した。　さらに、彼は、知恵と益に満ちた教訓的な戒めが込められた数冊の教訓書を著した。それゆえ、それらを注意深く熱心に読む者は誰でも、自らの魂のために少なからぬ益を得るとともに、　これらの魂に有益な書物の著者である聖人の生涯と思想がどのようなものであったかを知ることができる[2139] 。 尊者カッシアンは、

[2137] ベリアという都市は、シリアの古代シリア王国の首都アンティオキアの東に位置していた。

[2138] 450年頃に亡くなった。

[2139] カッシアン聖人は、修道生活における導師である。『キノイの規定』全12巻のうち第1巻では、修道士の外見、すなわち衣について述べている。　第2巻では、夜の詩篇と祈りの儀式について；第3巻では、昼の祈りと詩篇の儀式について；

さらにネストリウスに対して、至聖なる聖母マリアから神の御言葉が受肉したことについて論じました[2140] ；正統的に聖母を賛美することで、聖人は彼女から生まれた神に喜ばれました。このような労苦と功績に満ちた長い生涯を送り、その著作によって修道士たちに多大な恩恵をもたらした後、聖カッシアンは永遠の住処へと旅立ちました[2141] 。

聖ヨハネ（別名バルサノフィオス）の記念日

記念日：2月29日

尊者ヨハネはパレスチナ出身であった。18歳の時に洗礼を受け、修道者の生活を送り始め、特に断食に励んだ。 その徳高い生涯により、彼はダマスカスの大司教に任命された[2142] 。しかし、大司教の座に就いて間もなく、彼はその高位に伴う職務が修道者の修行と両立しがたいことに気づき、そのためヨハネは司教職を辞し、密かにダマスカスを離れた。 アレクサンドリアに到着すると[2143] 、誰にも正体を見破られず、自身の本当の身分が露見しないよう、自らをバルソノフィオと改名した。アレクサンドリアから、彼は貧しい巡礼者としてニトリウス山[2144] へと向かった。そこにあった修道院のイグメンに敬意を表した後、聖ヨハネは兄弟たちの奉仕に加わることを許してほしいと懇願した。イグメンは彼を受け入れ、修道服を与えた。　聖人は熱心に修道士たちの世話をし、昼はこの務めに従事し、夜は眠らずに祈りに専念した。早朝、彼はすべての独房からカボチャや器を集め、川へと向かった。水を汲み、それを持ち帰り、各独房の前に水の入った器を置いた。

ある修道士――知力の乏しい男――は、聖人をひどく苛立たせ、時には非難めいたあだ名をつけ、時には汚物を浴びせかけた。　悪魔にそそのかされたその不届きな修道士は、尊者ヨハネが住んでいた小部屋の壁に穴を開け、その穴を通して聖人の寝床に「排泄物」を流し込み、寝床から悪臭が漂うようにした。

第4巻では、世俗からの離脱の儀式について論じている。『24の対談』には、様々な霊的テーマに関する荒野の父たちの対話が収められている。第13の対談では、恵みについて論じている。

2140 ネストリウスは、ユーフラテス川沿いのシリアの都市、ゲルマニキアのケサリア出身の異端の首領である。その出自も生年も不明である。彼の最大の敵対者である聖キリロス・アレクサンドリアの証言によれば、「彼は泥の中から現れ、その出自は恥ずべきものであった」という。　コンスタンティノープル総主教に就任した当初、彼は熱心な異端迫害者として名乗りを上げたが、その後、意外にも自ら異端者となってしまった。　彼は教会において、聖母マリアを「神の母」と呼ぶべきではないと主張し始めた。なぜなら、彼女が産んだのは神ではなく、単に人間であるイエスであり、イエスは神性の宿り場であり、私たちの救いの道具に過ぎなかったからである。　この人は聖霊の啓示によってキリスト、すなわち油注がれた者となり、神の御言葉は彼と、道徳的な結びつきのみという特別な関係において共におられた。 第3回全地公会議（431年）において、ネストリウスの異端は非難され、彼自身はまずエヴィレニオス修道院（アンティオキア近郊）へ、その後、エジプトの辺境にあるオアシス、イビスへ追放され、そこで数年後に亡くなった。

2141 聖カッシアンは435年7月23日に逝去した。聖カッシアンの記念日は2月29日であるが、これは閏年のみである。2月が28日しかない年には、聖カッシアンの礼拝は晩課で唱えられる。

2142 ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市であり、世界でも最も古い都市の一つである。パレスチナの北東、市内を流れるバラデ川のほとり、アンチ・レバノン山脈の東麓にある美しく肥沃な平野に位置している。　現在、オスマン帝国に属するダマスカスは、アジアで最も豊かな都市の一つであり、人口は15万人に達する。

2143 アレクサンドリアは、紀元前331年にアレクサンドロス大王によって、地中海沿岸、下エジプト（北部エジプト）のナイル川河口に築かれた有名な都市である。　アレクサンドリアはかつて世界一の都市であり、貿易、産業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教の初期にはキリスト教教育の温床となった。　伝承によれば、キリスト教は福音書記者マルコ（トルコ語およびアラビア語では「イスカンデル」）によってここに伝えられた。アレクサンドリアは、地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられ、人口は23万人を超える。

2144 ニトリア山は、エジプト北西部に位置するニトリア砂漠から、1日の行程（25～30ヴェルスト）の距離にあります。この水のない岩だらけの砂漠は、禁欲的な修行で名高いエジプトの隠者たちのお気に入りの場所でした。　ここで修道士たちは、唯一の神との交わりを深めるために、最も厳格な隠遁生活と、決して破られることのない沈黙を求めて定住した。

このことを知った修道院長は、その兄弟を呼び出して罰しようとした。しかし、バルソノフィオスは修道院長の足元にひれ伏し、泣きながら、この件の責任は自分にあると語った。

「私自身が」と聖人は言った。「その兄弟を苛立たせ、彼の怒りを煽っているのです。主の御名において、彼をお赦しください。」

こうして彼はその兄弟を罰から救った。しかし、しばらくして、ヨハネは聖テオドール・ニトリウスに正体を見破られ、山を去ってエジプトへ逃れた。　そこで彼は、人々の思いさえも読み取るほどの透視の賜物を発揮した。彼は教会を異端者から解放し、多くの魂に益となる書物を著し、キリスト・イエスにおいて安らかに天に召された[2145]　。父と聖霊と共に、彼に永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖殉教者テオクティリスト、ペリキトス修道院長の記念日

記念日：2月29日

8世紀、コンスタンティノス・コプロニモス[2146]　の治世下、聖像崇敬のために殉教した。彼は鼻と手を樹脂で焼かれた。聖テオクティリストは、聖ステファノス・ノヴォスの殉教に同行した。

3月14日

3月1日（旧暦）

同日は、キリストのために火刑に処された聖マルケルスと聖アントニオの両殉教者の記念日である。

聖なる敬虔な殉教者エウドキアの生涯と殉教

記念日：3月1日

トラヤヌス帝の治世[2147]、ケレシリア[2148]に属するフィニキア・レバノン[2149]の地域、すなわちユダヤの地に隣接するイリオポリス[2150]という町に、エウドキアという名の乙女が住んでいた。 出身

2145　聖ヨハネは5世紀後半に死去した。457年、皇帝レウスは、他の司教たちと共に、アレクサンドリア総主教プロテリウス（2月28日参照）の殉教の死を彼に伝えた。

2146　コンスタンティノス・コプロニモス（在位741～775年）の治世は、ギリシャ教会において偶像排斥の異端が最も盛んになった時期であった。当時、偶像崇拝の最も勇敢な擁護者となったのは修道士たちであったが、そのために皇帝は彼らに残酷な処刑を加えた。　歴史家ニキフォロスによれば、修道士たちは、自分たちが守ろうとしていたまさにそのイコンの上で頭を打ち砕かれたという。概して、コプロニモス帝による正教徒への迫害は、キリスト教徒を激しく迫害した異教徒の皇帝ディオクレティアヌスの時代を彷彿とさせるものであった。

2147 ローマ皇帝トラヤヌスは、P. X.暦98年から117年まで在位した。

2148 ケレシリア――「奥地シリア」――パレスチナ北部のレバノン山脈にある低地の地帯。

2149　レバノン・フェニキア――レバノン山脈に隣接するフェニキアの東部。フェニキア自体は、地中海に面したパレスチナの北西部を占めている。その主要都市であるティルス、シドン、サレプタは、福音書にも言及されている。

2150 イリオポリス（イリオポリス）――太陽の都市。

も信仰も、彼女はサマリア人であった[2151] 。その並外れた美しさで人々を魅了し、多くの人々を容赦なく破滅へと誘い込み、肉欲的な不潔さという、この容易な手段を通じて、それらの国の富から恥ずべき 財産を蓄えていた。彼女の顔は、画家ですらその美しさを描き表すのに苦労するほど美しかった。 彼女に関する噂は至る所に広まり、多くの高貴な若者たち、さらには他国や他都市の権力者たちまでもが、あたかも別の用事があるかのようにイリオポリスに集まってきたが、実際には、罪深い行いによって王室の財宝に匹敵するほどの富を蓄えたエウドキアの美しさを目にし、それを堪能するためだけであった。 そして、この長きにわたる財宝の蓄積によって、エウドキアは不純な生活の中で魂が死んでしまい、心の硬化に固まってしまったため、神の力以外には、この絶望的な罪人の治りようのない心の病を癒やすことはできなかった。 しかし、迷い羊を探す慈愛に満ちた善き羊飼いの、滅びから救い出す御手が、彼女のもとへも急いで差し伸べられた時が訪れた。創造主は、悪魔の悪意によって堕落した御自身の被造物をご覧になり、それを新たにしようとお考えになったのである。真の家主は、敵による略奪にさらされていたご自身のぶどう園の実を顧みられた。天の宝の主は、地面の泥の中に転がり、滅びかけていたドラクマを、永遠の宝庫に迎え入れるために急がれた。 義人たちが待ち望む恵みの守り主は、この絶望的なサマリアの女を御自身の完全な希望へと招き入れ、悪魔を恥じ入らせた。主は、かつて泥沼の中で家畜のように転がっていた者が、子羊のように汚れのない者となるよう導かれた。かつて不浄の器であったものは清らかさで満たされ、 糞尿の溝は清らかで静かな泉となり、汚れた流れは芳しい湖へと変貌し、腐敗して悪臭を放つ井戸の臭気は、高価な香油のアルヴァストラであることが判明した。多くの人々にとって霊的な死であったものが、まさにその多くの人々にとって救いの源となったのである。 こうして、この偉大な罪人の神への回心は始まったのである。

ヘルマンという名の修道士が、旅から自分の修道院へ戻る途中、イリオポリを経由して帰路についていた。彼は夕方に街に到着し、城門の近くに住む知人のキリスト教徒の家に泊まった。その部屋の壁は、ここで語られているあの乙女の家の壁と隣接していた。 修道士は少し眠った後、夜になるといつものように詩篇を歌うために起き上がり、定められた祈りを終えると、腰を下ろし、胸元に隠していた本を取り出して、長い間その読書に没頭した。 その本には、神の最後の審判について、また、義人は天国で太陽のように輝き、罪人は消えることのない火の中へ送られ、そこで永遠に激しい苦しみを受けることが書かれていた。まさにその夜、エウドキアは神の御心により、一人きりだった。 彼女が閉じこもっていた寝室は、修道士が祈りと読経に励んでいた壁に隣接していた。 修道士が詩篇の詠唱を始めると、エウドキアはすぐに目を覚まし、ベッドに横たわったまま、朗読が終わるまでずっと耳を傾けていた。修道士が読む言葉はすべて彼女の耳に届いた。二人を隔てていたのは、厚みもさほどない壁一枚だけだった上、修道士は大きな声で読んでいたからである。 その朗読を聞きながら、罪深い彼女は深い感銘を受け、夜明けまで眠ることなく、心震えながら自らの数多くの罪や、最後の審判、そして罪人たちが受ける耐え難い苦しみについて思いを巡らせた。 日が明けるとすぐに、彼女は（悔い改めへと駆り立てる神の恵みの働きによって）、夜に本を読んでいた者を呼び寄せるよう命じ、その者が来ると、こう尋ねた。

[2151] サマリア――パレスチナの中央部に位置し、北はガリラヤおよびフェニキアと、南はユダと国境を接し、地中海に面している。 その住民は、ユダ族とベニヤミン族を除くイスラエルの十部族で構成されていた。サマリアの信仰は、サマリア派と呼ばれる分派である。当初、サマリアの住民はユダヤ人と何ら変わるところがなく、同じモーセの律法に従っていた。その後、異教徒や異民族との交流の結果、 彼らはユダヤ教の純粋性を失い、徐々にユダヤ人とは袂を分かつようになった。その結果、キリスト降誕の約335年には、ガリラヤ山にユダヤ人とは別の神殿を建設し、エルサレム神殿の礼拝と共通点を持つ独自の礼拝をそこで確立した。 この時から、ユダヤ人とサマリア人を分かつ教義上の主要な論点は、真の礼拝が行われる場所に関する教えとなった（ヨハネ4:19–20）。さらに、旧約聖書のすべての書物の中で、彼らが神聖であると認めたのはモーセ五書のみであり、しかもその内容は所々で原本とは異なっていた。 旧約聖書の他のすべての書物は拒絶していたが、彼らには「イエスの書」と呼ばれる独自の年代記――ヨシュア記を改変したものである――が存在していた。

「あなたは一体どんな人ですか？　どこから来たのですか？　どのように暮らしているのですか？　どのような信仰をお持ちですか？　どうか、真実をすべて教えてください。」　あなたが夜に本を読んでいたと聞いて、私は戸惑い、魂が苛まれています。なぜなら、これまで知らなかった恐ろしくも驚くべきことを耳にしたからです。もし罪人が火に投げ込まれると本当なら、一体誰が救われるというのでしょうか？

聖ヘルマンは彼女にこう言いました。

「お嬢様！　もしあなたが神の最後の審判について一度も聞いたことがなく、私が読んだ言葉の意味も理解していないのなら、いったいどのような信仰をお持ちなのですか？」

「出身地と信仰から言えば」とエウドキアは言った。「私はサマリア人です。私の富は計り知れないほどですが、あなたが読んでいるその書物が、金持ちに対して脅かすあの悲しみと、あの永遠に消えることのない炎こそが、私をとりわけ当惑させ、恐怖に駆り立てているのです。」　私たちの信仰の書物では、そのような言葉に一度も出会ったことがありません。ですから、新しく予期せぬことを耳にして、少なからず動揺してしまったのです。

至福のヘルマンは尋ねた。

「奥様、ご主人はいらっしゃいますか？　そして、あなたが言うところの計り知れない富は、どこから得たものなのですか？」

「正式な夫はいません」と彼女は答えた。「私の富は、多くの男たちから集めたものです。もし金持ちたちが死後に、これほど過酷で永遠の苦しみを受けることになるのなら、私の富に何の益があるというのでしょうか？」

ヘルマンは彼女に言った。

「真実を語ってください（私が仕えるキリストもまた、偽りなく真実な方ですから）。あなたは富を捨てて救われ、喜びと楽しみの中で、果てしない永遠の歳月を安らかに過ごしたいのですか？それとも、その富と共に永遠の炎の中で残酷に苦しみたいのですか？」

「富を持たずに永遠の命を得る方が、富を持って一度きりで永遠に滅びるよりも、はるかにましです」とエウドキアは答えた。「しかし、なぜ金持ちは死後にそのような刑に処されるのか、不思議でなりません。まさか、あなたの神は金持ちに対して、それほど残酷で容赦のない憎しみを抱いているというのですか？」

「いいえ、　――とヘルマンは言った――神は金持ちを嫌悪されるわけでも、彼らが金持ちであることを禁じられるわけでもありません。しかし、神は不正な手段で富を蓄えることや、その富を快楽や罪深い欲望にふける生活のために使うことを憎んでおられます。ですから、もし誰かが正当な手段で富を築き、それを善行に費やすなら、その人は神の前で罪なく、義とされます。　しかし、窃盗や略奪、不正、あるいはいかなる罪深い行いによって富を蓄え、その富を宝庫にしまい込み、貧しい者たちに憐れみを示さず、求める者に施しをせず、裸の者に衣を与えず、飢えた者を満たさない者――その者には、慈悲のない苦しみがあるだろう。

エウドキアは尋ねた。

「私の富は、あなたには不義に思えないのですか？」

ヘルマンは答えた。

「まことに、それは不義であり、あらゆる罪の中でも神に最も逆らうものです。」

すると彼女は言った。

「どうしてそう言えるの？　だって私は、多くの裸の人々に服を着せ、多くの飢えた人々を満腹になるまで食べさせ、何人かには少しばかりの金で助けてあげたわ。どうして富を悪だと言えるの？」

– お嬢様、――とヘルマンは言った――よく聞いてください。風呂に入って体を洗う時、誰も不潔で、濁っていて、不快で、悪臭を放つ水に体を浸そうとはしません。清らかな水がある場所で体

を洗うのです。　それなのに、どうしてあなたは、自発的にその中に転げ回り、同時に神の慈悲という清らかな水を軽蔑しているというのに、ほんのわずかな慈善行為だけで、悪臭を放ち、忌まわしい罪の汚れから身を清めることができるというのですか？　いずれにせよ、この罪の汚れの沼は、大洪水のように、あなたを、神の怒りの永遠の炎が燃え盛る、硫黄とタールの深淵へと、大いなる力で突き落とすだろう。　なぜなら、あなたがこれほど多く持つ富は、偉大なる主であり永遠の審判者である神に忌み嫌われ、すでに最後の審判の前に、惑わしと淫行によって得られたものとして裁かれているからだ。　そして、この巨大だが不浄で罪深い富の中から、時折わずかな部分を少数の貧しい人々に分け与えていたとしても、それはあなたにとって何の助けにもならない――なぜなら、このささやかな美徳に対する報いは、計り知れないほどの悪行によって打ち消されてしまうからである。それは、ほのかな香りを強烈な悪臭が覆い隠してしまうのと同じである。　いいえ、あなたが自発的に不浄の中に留まっている限り、決していかなる恵みも受けることはない。そして、あなたが自らの計り知れない罪の悪臭を捨て去り、悔い改めの涙で身を洗い清め、義の行いで身を飾って初めて、神の憐れみにあずかることができるのだ。　まるで茨の上を裸足で歩く者が多くの鋭い棘を刺されるように、たとえいくつかを抜き取っても、なお多くの棘が体に残り、苦痛を与え続けるのと同じだ。　それと同様に、かつてあなたが貧しい人に対して施したわずかな施しは、たとえそれが何らかの小さな罪を消し去る助けとなったとしても、最も大きな罪という茨はあなたの良心に残り、あなたを最も過酷な苦しみへと導くことになる。　恐ろしくも公正な報い主である神は、あなたに怒りを抱き、悔い改めない罪人のために用意された永遠の耐え難い苦しみをもって、あなたを脅かしておられる。しかし、もしあなたが私の言葉に耳を傾けるなら、あなたを待ち受ける苦しみから救われ、永遠の喜びを得ることができるだろう。

エウドキアは言った。

「生ける神のしもべよ、どうかお願いです。もう少し私のそばにいてください。神の恵みにあずかることができる行いについて詳しく教えてください。そうすれば、私もその模範に従って、救いを得ることができるでしょう。私は自分の富を善行に費やす用意があります。」　あなたは、神は富の公正かつ徳ある分配を好まれると仰いました。私にとっては、たとえ家財を多少減らすことになっても、あなたの言葉によれば、審判の日に神に憎まれる者たちが受けることになるというあの苦しみから、自分自身を救うことに何の支障もありません。　ほら、誠実な神父様、私にはかなりの数の奴隷がいます。あなたの導きのもと、私は彼らに金や銀、そして貴重な品々を背負わせて、あなたの神のもとへ連れて行きます。ただ、神があなたの取り成しによって、私の捧げ物を受け入れてくださり、私に救いを授けてくださるならば、ですが。

「神について、人間の道徳観で判断してはならない」とヘルマンは彼女に言った。「人にとって貴重な、あの取るに足らない品々が神に必要なのだなどと考えてはならない。なぜなら、神は地上のあらゆる王よりも比べものにならないほど豊かでありながら、ご自身の御心によって私たちのために貧しくなり、その悲痛な貧しさによって私たちに永遠の救いを買い取ってくださったのだから。」わが娘よ、あなたの富を病人と貧しい人々に分け与えなさい。彼らは神に愛されているのだから。誰かが彼らに与えたものは、神はご自身に与えられたものとみなされ、貧しい人々に分け与えられた一時的な財産に対して、決して尽きることのない天の宝で報いてくださるのだ。　そうして、聖なる救いの洗礼の泉に身を委ねなさい。そうすれば、すべての罪の汚れを洗い流され、清く汚れのない者となり、聖霊の恵みによって新たに生まれ変わり、悲しみも病気も悪行もない、朽ちることのない永遠の光に満ちた至福の境地を授かるでしょう。　あなたは、私たちの救い主イエス・キリストによって、天の牧草地で飼われる聖なる子羊となるでしょう。一言で言えば、もしあなたが救われたいと願うなら、わが娘よ、私が助言する通りにしなさい。そうすれば、あなたは永遠に至福を得るでしょう。

エウドキアはこう答えました：

「昨夜、あなたが読み上げた言葉を、私がはっきりと耳にし、それが私の心に深く刻まれていなければ、あなたをここに呼ぶこともなかったでしょう。　さあ、父よ、金ならいくらでもお取りください。そして、ここ数日間、私をキリスト教の信仰について教え、徳を説いてください。そうすれば、私は自分の富や財産を配り、すべてを適切に整えた後、あなたがどこへ行こうとも、あなたに従うことができるでしょう。

これに対し、聖ヘルマンはこう言った。

「私には金は要らない。あなたの救いへの希望があればそれで十分だ。そして、迷い出た羊を見つけ出し、それをキリストの囲いへと導くことができれば、それが私にとって、ここに数日間留まるに足る正当な理由となる。それゆえ、私は自分の修道院へ急いでいたものの、あなたが神に立ち返るために、ここを数日間離れないことにする。　君は私の言うことをすべて実行しなさい――この町に住むキリスト教の長老の一人を呼び、彼に教えを受け、教会の儀式に従って洗礼を受けなさい。それこそが救いの始まりであり基盤だからだ。そうすれば、他のすべての神に喜ばれる行いは、自然と順序立てて進んでいくであろう。

この聖なる長老の言葉に耳を傾けたエウドキアは、家の使用人の一人を呼び寄せ、直ちにキリスト教の教会へ行き、長老に、自分を求めている者のもとへ直ちにやって来るよう頼むよう命じた。その際、誰が、なぜ求めているのかについては口外しないよう禁じた。　長老はすぐにやって来た。彼を見ると、エウドキアは地面にひれ伏して礼をし、その足に口づけをしてこう言った。

「お願いいたします、先生。あなたの信仰について教えてください。私もキリスト教徒になりたいのです。」

その言葉に驚いた長老は、エウドキアに尋ねた。

「あなたはどのような信仰をお持ちで、キリスト教の正しい信仰に改宗したいとお考えなのですか？」

彼女は答えた。

「私はサマリア人です。出自も信仰もそうであり、かつては『全世界』の妻でした。あなたに、一言で真実のすべてを告白いたします。　私は多くの悪の海のような存在でしたが、罪人が悔い改めずキリスト教徒にならなければ、死後、永遠の炎の中で苦しむと聞いたとき、心の中でキリスト教徒になることを決心しました。

これに対し、長老はこう言った。

「もしあなたが罪の海であったなら、今は救いの港となりなさい。　かつて多くの風に翻弄されていたのなら、今こそ静かな港へと入りなさい。激しい波にさらされていたのなら、今こそ天から降り注ぐ朝露を求めなさい。長い洪水に飲み込まれていたのなら、これからは善良な船頭を探し、彼があなたを安全に、あらゆる真理の宝が眠る静かな港へと導いてくれるようにしなさい。　そこに存在する恵みの相続人となるよう、努めなさい。この世の富を貧しい人々に分け与え、罪の悲しみから、そして悔い改めなければあなたを待ち受ける闇と消えぬ炎からも、自らを解き放ちなさい。

エウドキアはこれを聞いて涙を流し、胸を叩きながら言った。

「あなたの神は、罪人に対して慈悲を持たないというのは本当ですか？」

長老は答えた。

「悔い改める罪人が、信仰のしるし、すなわち聖なる洗礼を受け入れたならば、主は、不信仰の生活であった過去のすべての罪を赦してくださいます。しかし、罪の中に留まり、悔い改めを思わない者には赦しはなく、そのような者たちは憐れみなく苦しめられることになるでしょう。」

「教えてください、長老」とエウドキアは尋ねた。「天には、この地上にあるものよりも、もっと偉大で素晴らしいものが存在するとお考えですか？」　だって、私たちには本当にたくさんの金や銀、宝石といった宝物があり、あらゆる種類の楽しみや快楽があるし、それに魚や鳥も豊富で、あ

らゆる食べ物や飲み物も計り知れないほどあるのです。それよりも、天国には一体何があるというのですか?

「もしあなたがこの世の魅惑から心を離さず、一時的な快楽を軽蔑する心を持たないなら、永遠の命に目を向け、そこに存在する言葉では言い表せない喜びや計り知れない富を知ることはできないでしょう」と、長老は彼女に言った。　しかし、もしそれらを得たいのなら、この人生の誇りや喜びを忘れ、この世の甘美さを思い起こしてはならない。

エウドキアはこう答えた。

「主よ、私が不滅で至福に満ちた命よりも、一時的でやがて滅びるものを愛することなど決してありません。しかし、父よ、私が確かめたいのは、キリスト教の信仰を受け入れたことで、あなたが語られるその不滅の命にたどり着けるという、確固たる疑いのない希望を持てるのかということです。　そして、あなたの言葉の真実性を私が確信できるよう、どのような証拠を提示してくださるのですか?　結局のところ、私の数多くの罪があなたの神によって赦されたことを、私はどのようにして知ることができるのでしょうか?　というのも、もし私が持っている富――それは私の人生の長きにわたり、あらゆる快楽や享楽を余すところなく満たすのに十分なほどある――を、あなたの助言通り貧しい人々に分け与えたにもかかわらず、その後、あなたが約束したものを得られなかったとしたら、それ以上に悲惨で、この絶望的な状況からもはや抜け出す術のない状態ほど、つらいものがあるでしょうか?　何しろ、私が冷淡な態度で傷つけてしまった人々は、もし私が不幸のさなかに彼らに助けを求めようものなら、軽蔑の眼差しで私を拒絶するだろう。だからこそ、私は将来に対する確信が十分に持てないことに、悲しみと戸惑いを覚えているのだ。　あなたが、悔い改める者の罪を容易に赦してくださる、あなたの神の慈悲に言及して、これほど寛大に約束してくださるそのことについて、もっと深い理解と確信を持ちたいと願っています。　もし私がこれを完全に確信できれば、安心して全財産を分け与え、あなたが私を招く場所へ赴き、生涯を通じて唯一の神に仕えるでしょう。かつて私が多くの人々にとって不義の模範であったように、今や私は悔い改めの最良の模範となるでしょう。　父よ、私の疑いを不思議に思わないでください。私はこれらすべてを初めて耳にしました。それは新しく、予期せぬことであり、私が育ったサマリアの信仰や書物の中には、そのような教えを聞いたことはもちろん、その痕跡さえ見つけることができませんでした。

長老は彼女にこう言った。

「戸惑うな、心を揺るがすな、エウドキアよ!　心を散らしてはならない。あなたを惑わせているのは、悪の支配者であり、あなたの救いを妬む者、すなわち悪魔の策略なのだ。この悪意に満ちた霊は、あなたがキリストに仕えるために目覚めつつあるのを見るやいなや、その善意を打ち砕くために、即座にあなたの心にそのような疑念を植え付けたのだ。　彼は恐怖を通じて、あなたを正しい道から遠ざけ、再び以前の罪深い生活に縛り付けようとしている。そうして、世俗の快楽や欲望への執着という恥辱であなたを縛り、完全に自分の奴隷とし、死と滅びへと引きずり込もうとしているのだ。　なぜなら、彼の狡猾な企み、彼の唯一かつ熱心な努力とは、人々を善き道からそらし、堕落へと導き、それによって彼らを、消えることのない火の中での彼の永遠の苦しみへの共犯者にすることだからである。　一方、私たちの主なる神は、その慈愛と、言い尽くせぬ憐れみと、人への愛――あなたが確信したいと願っているその御性質――によって、あなたがすでに遠くから聞いているように、悔い改める者たちを父のように、両手を広げて迎え入れ、罪を赦し、彼らに永遠の命を与える用意がある。　あなたが心を地上の事から天へと向け、一時的な心配事を捨てて永遠の命について思索にふけるならば、このことを確信するでしょう。しかし、そのためには、集中した謙虚な祈りが必要です。なぜなら、そうして初めて神は魂と和解し、魂の中にすべての真理を明らかにする神の光が宿り、　人は、この儚い世の無価値さ、来たるべき世とは何か、この世の快楽がいかに有害であるか、そして主がいかに慈愛に満ち、その憐れみが計り知れないものであるかを、はっきりと見出すのである。　それゆえ、もし救われたいと願うなら、私の言葉に耳を傾けなさい。高価な衣服を脱ぎ捨て、粗

末な服を身にまとい、家の静かな部屋に閉じこもり、七日間そこに留まり、自分の罪を思い返し、創造主である神の御前で涙を流してそれらを告白しなさい。　断食し、私たちの主イエス・キリストに、あなたを啓発し、主に喜ばれるために何をすべきかを示してくださるよう祈りなさい。　私を信じてください。私があなたに勧めることをすべて行えば、決して無駄にはなりません。私たちの主は慈悲深く、限りなく慈愛に満ちておられ、御自身に立ち返ろうとする者たちを、遠くからでも御恵みをもって迎え入れてくださいます。なぜなら、主は常に罪人の悔い改めを喜ばれるからです。

エウドキアが彼の助言に同意しているのを見て、長老は立ち上がり、去り際に、まるで預言者のように、次のような慰めの言葉を彼女に語りかけました。

「徴税人を義と認め、御足元で泣いていた罪人を憐れんでくださったキリスト・神が、あなたをも義と認め、憐れんでくださり、あなたの名を全地において栄光に満ちたものにしてくださいますように。アーメン。」

長老が去るやいなや、聖なるエウドキアはすぐに女中を呼び寄せ、こう言った。

「もし誰かが私に会いたいと願い、私のもとへ入ろうとしてここに来たら、私が家にいることを彼に悟られないように気をつけてください。いかなる場合でも、誰も彼に私のことを話してはいけません。私はある用事で遠くの村へ行き、しばらくの間そこに滞在していると伝えてください。　門番にも、誰一人ここへ入れないようにと厳命しなさい；　私の家での日常の作業や活動はすべて中止し、毎日私の昼食を用意している者たちには、これからはここへ食事を持ってこないようにさせなさい。また、私が再び開けるよう命じるまで、家の大きな門も閉めておき、とにかく私が家にいないかのようにすべてを整えておきなさい。

侍女にそのような指示を出した後、彼女は聖ヘルマンにこう言った。

「お願いです、父上。私が尋ねたいことを教えてください。なぜあなた方修道士たちは、社会生活の楽しみを避けて、人里離れた場所で暮らしているのですか？　まさか、荒野にそれ以上の喜びを見出しているというのですか？」

「いいえ、わが子よ」と、至福のヘルマンは答えた。「あなたが快楽だと思っているようなものは、私たちには砂漠には何一つ見当たらない。　私たちが都市や世俗の快楽を捨て、荒野へと身を引くのは、ただ虚しい高慢を避け、飢えや渇き、労苦、ぼろぼろの衣、そして必要なものの欠乏によって肉欲を死滅させるため、つまり、罪を犯しやすくなるあらゆる場所から遠ざかるためである。都会に住む者は、自然の弱さに打ち負かされたり、悪魔に惑わされたり、あるいは美しい顔立ちに魅了されたり、淫らな言葉を耳にしたりして、非常に容易に罪の堕落に陥ってしまう。そこから不浄な思いが生まれ、魂を汚してしまうのである。　そして、穢れた魂にとっては、悔い改めによって清められるまでは、天国の門は閉ざされている。なぜなら、天には永遠の光、真の喜び、そして偽りのない至福のみが存在する御座があり、そこにはいかなる闇も、悲しみも、苦しみも、悪行も存在しないからである。　ほら、これが私たちが荒野へ赴く理由です。私たちは、これからの人生において罪から身を守り、荒野での厳しい生活によって過去の過ちを清め、そうして示された至福への道を容易にしたいと願っているのです。　私たちのあらゆる努力と配慮は、私たちの体を汚れのないままに保ち、心を邪悪な思いから無傷に保ち、あらゆる悪意、狡猾さ、偽善、不平、中傷、嫉妬、激怒、そして怒りから遠ざけることに向けられています。　そうしてこそ、私たちは、キリストが福音書において御自身の聖なる口によって私たちに告げられたように、天使たちのようになるのです。富は、人がどれほどそれに執着し、どれほど貪欲に蓄えようとも、天の御国を得るのに少しも役立ちません。それは、棺の中に横たわる死人のように、何の助けにもならないのです。　それゆえ、もし私たちが自分の罪の赦しを得たいと願うなら、残りの生涯において、主の戒めの道、正義と真理の道を歩むよう努め、罪に対する悔い改めの心で、まるで衣服を裂くかのように自分の心を引き裂き、絶えず神に叫び求めよう。そうしてこそ、ダビデが語った罪の汚れを清めることができるのである。　*「私の狂気ゆ*

えに、私の傷は悪臭を放ち、膿んでいる」（詩編37:6）。そして、私たちが常に祈りの中で主の御言葉を謳い上げるようにと、同じダビデはこう回想している。「*あなたの言葉は、私の喉にとってなんと甘美なことか！　私の口には蜜よりも甘い*」（詩篇118:103）。主の御言葉はそれほど甘美であり、最も甘いご馳走や最も高価な飲み物のあらゆる甘さを凌駕し、食物が肉体を強めるよりもはるかに魂を強める。それゆえ、聖書は次のように述べている。　「*ぶどう酒は人の心を喜ばせ、パンは人の心を強める*」（詩篇103:15）と記しており、そのぶどう酒とパンとは、私たちの主イエス・キリストの戒めを指している。　それらはまことに、いわば人間の魂のためのパンとぶどう酒のようなものである。なぜなら、もし人がそれらを熱心に、たゆまず学べば、それらは心に力と喜びを与え、罪人をあらゆる悪行から解放し、主の御前で義と認めてくださるからである。　それゆえ、美しい衣を脱ぎ捨て、最も質素な衣を身にまとい、すべての思いを善行による悔い改めへと向けよ。この地上で豊かな涙を流すことで、天において喜びと永遠の歓びを刈り取ることができるのだ。涙をもってあなたの罪の炎を消し去れば、主からの慰めを授かり、義人の喜びの中に入ることができるであろう。　悪魔があなたの心に甘美なものとして植え付けたあなたの不義を嘆きなさい。そうすれば、あなたの涙のゆえに、救いの執り成しをする天使があなたに近づいてくれるでしょう。　あなたが長い間転げ回っていた、悪臭を放つ腐敗の泥――あらゆる悪の創造主の支配下にあなたを引き込み、そこに留まらせていたその泥――を乾かし、これからは天国の　の喜びの仲間となれるようにしなさい。また、欲望であなたを誘惑し、罪の重荷を負わせた者を、落胆をもって報い、苦しめなさい。　神のために熱心に努め、朽ちることのない光の相続人となり、ミツバチのように勤勉な働き手となり、多くの聖なる行いから真理を集め、絶えず神に喜ばれるよう心掛けなさい。

このヘルマンの言葉は、彼が以前に彼女に語ったことで既に整えられていたエウドキアの心に深く刻まれた。罪を嘆き、感極まって、彼女は彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「お願いいたします、神の人よ。私のために始められたその業を、ふさわしい栄光をもって完結させ、私を清らかな者としてあなたの神に捧げてください。そうすれば、私を惑わそうとする者たちの嘲笑の的になることなく、始められた業を成し遂げ、あなたの救いの教えによって至福に与かることができますように。」　私の中にキリストを完全に描き終えるまでは、その熟練した手を、用意された板から離さないでください。

ヘルマンは彼女にこう答えました。

「わが子よ、主を畏れ、自分の部屋に閉じこもり、主があなたのすべての罪を根絶し清め、御自身の慈しみに対する揺るぎない確信を与えてくださるまで、涙を流して絶えず主に祈り続けなさい。　私たちの主イエス・キリストは慈愛に満ち、まもなくあなたに御慈悲を示し、御恵みをもってあなたを慰めてくださるでしょう。

そう言うと、福者ヘルマンは神に祈りを捧げ、エウドキアに十字の印を授け、彼女を寝室に閉じ込め、彼女のために七日間イリオポリスに留まることを約束した。

エウドキアが七日間、断食と祈りに専念した後、聖ヘルマンは彼女の元を訪れ、扉を開けて寝室から出るよう命じた。　彼女の顔が青ざめ、体が痩せ細り、謙虚な眼差しを湛え、全体として以前とは大きく異なる様子になっているのを見て、彼は彼女の手を取り、座るように促した。それから、神に祈りを捧げた後、自らも彼女の隣に座り、こう尋ね始めた。

「教えてくれ、わが子よ。この七日間、君は何を思索していたのか。何を知り、何を見て、何が明らかにされたのか？」

彼女は言った。

「すべてお話しします、聖なる父よ。あなたが教えてくださった通り、この七日間、私は熱心に祈り続けました。昨夜、私がいつものように地面に十字架の形になって伏し、自分の罪を悔いながら祈り、泣いていたとき、太陽の光さえも凌ぐ偉大な光が私を照らしました。　私は太陽が昇ったの

だと思い、地面から立ち上がると、突然、雪よりも白い衣をまとった、明るくも恐ろしい若者の姿が見えました。彼は私の右手を握り、空中に持ち上げ、雲の上に立たせてから、天へと導いてくれました。　そこには偉大で驚くべき光があり、私は数え切れないほどの白い衣をまとった人々が見えました。彼らは互いに喜び、微笑み合い、言葉に尽くせないほど楽しそうにしていたのです。彼らは私が自分たちの方へ向かっているのを見ると、歓喜して迎え、姉妹のように喜んで私を歓迎してくれました。　そして、彼らに囲まれ、導かれながら、太陽の光さえも比類なく凌駕するこの明るい領域に入ろうとしたその時、突然、空中に一人の人物が現れた。その姿は恐ろしく、すすや石炭、樹脂のように真っ黒だった。それは、あらゆる黒さと闇を凌駕する恐ろしい化け物であった。

私に向かって最も恐ろしく、最も激しい眼差しを向け、歯をぎしぎしと鳴らし、恥知らずにも襲いかかってきて、彼は私を付き添いの者の手から引き剥がそうとした。その際、彼は激しく叫び、その声は空中に響き渡った。

「まさか、あなた方は――」と彼は叫んだ。「彼女を天国へ導こうというのか？　私が地上で人々の捕獲に熱心に取り組んでいるのに、一体何のために無駄な労力を費やしているというのか？　例えばこの女は、淫行によって全地を穢し、その姦淫の忌まわしさで全ての人々を堕落させたのだ。」　私が持っていた狡猾さと力のすべてを、彼女一人に費やしたのだ。私は彼女のために、最も高貴で裕福な人々の中から、しかも数え切れないほどの愛人を手配した。そして、彼女の愛のために浪費された富から、彼女は王室の宝庫にもほとんど見られないほどの大量の金銀を集めたのだ。　私は誇り高く、彼女を自分の手中に収めているのだと考えていた。まるで勝利の旗や無敵の武器のように、それを通じて、神から背き、私の罠にかかる人々を打ち負かすことができるのだと。　それなのに今、神の軍勢の総司令官よ、あなたは私に対してこれほどまでに激しい怒りを抱き、私をこの淫婦の足元に打ち倒そうとしているのか？　日ごとにますます容赦なく私に復讐を重ねていることで、私に対するお前の怒りはまだ収まっていないというのか？ まさか、私がこれほど高価な代償を払って手に入れた、この真の奴隷さえも、私から奪い取ろうというのか？ どうやら、この地上にはもはや、真に、そして不可侵な私のものは何一つ残っていないようだ！　あなたは、今なお生きているすべての罪人たちをも、私の手から引き離し、天国の御国を相続するにふさわしい者として神の御前に差し出すのではないかと、私は恐れている！私の心配は無駄だった！　私の労苦は無駄だ！　なぜあなたはこれほど獰猛に　私を襲うのか？　怒りを収め、私を縛る縄を少し緩めてくれれば、私が瞬く間に地上から人類を根絶やしにし、その子孫さえも残さないことを、あなたは目にするだろう。　私はたった一つの不従順のせいで天から追放されたのに、あなたは、神を嘲笑うことを敢えてし、長年にわたり神を激しく怒らせてきた最も邪悪な罪人たちを、天の御国へと導き入れているではないか！　もしそれがそれほどお気に召すのなら、人間らしい生活ではなく、家畜や獣のような生活を送っている人々を、地球の隅々から一時間以内に集め、彼ら全員を神のもとへ連れて行けばよい。そうすれば、私は闇の中に身を隠し、私のために用意された永遠の苦しみという深淵に完全に沈んでいく。

彼が怒りと激しい憤りを込めて、このような言葉やそれに類する言葉を口にしている間、私を導く者は彼を威圧的な眼差しで見つめ、一方で私の方を向いては、励ますように微笑んでいた。すると、その光の中から声が聞こえてきて、こう言った。

「人間の子らに慈悲深い神の御心は、罪人が悔い改めさえすれば、アブラハムの懐に受け入れられることにあるのだ。」

そして再び、私を導く者に向かって声が響いた。

「マイケルよ、わが契約の守護者よ、この女を、あなたが彼女を連れ出した場所へ連れ戻せ。彼女にその使命を果たさせよ。なぜなら、わたし自身が、彼女の生涯のすべての日に、彼女と共にいるからである。」

すると彼は直ちに私を寝室に連れて行き、こう言った。

「平安あれ、神のしもべエウドキアよ！　勇気を出し、強くあれ。神の恵みは今、あなたと共にあり、いついかなる場所においても、常にあなたと共にあり続けるだろう。」

この言葉に勇気づけられ、私は尋ねた。

「主よ、あなたはどなたですか？　教えてください。そうすれば、真の神をどのように信じ、どうすれば真の命を得られるかを知ることができます。」

「私は」と彼は答えた。「神の天使たちの長であり、悔い改める罪人たちを世話し、彼らを受け入れ、至福で果てしない命へと導く責務を負っているのだ。　そして、ある罪人が悔い改めの清らかな光へと立ち返るたびに、天の天使たちの間には大きな喜びが満ちる。なぜなら、万物の父である神は、古より御自身の至聖なる御手によって御自身の御姿に似せて創造された人間の魂が滅びることを望んでおられないからである。　それゆえ、天使たちは皆、真理に飾られ、永遠の父を礼拝する人間の魂を見るたびに共に喜び、皆がそれを自分の姉妹のように歓迎する。なぜなら、その魂は罪の闇を拒み捨て、生ける神、すなわちすべての光の子らの共通の父へと立ち返り、取り返しのつかないほどに御身に結ばれるからである。

そう言うと、彼は私に十字の印を切った。私は地面にひれ伏して彼に礼を捧げ、私が頭を下げている間に、彼は天へと去っていった。

至福のヘルマンは彼女にこう言った。

「わが娘よ、これからは確信を持ち、もはや疑ってはならない。天には、罪を悔い改める者たちを受け入れ、御自身の永遠の光の中へと導いてくださる真の神がおられるのだ。そこでは、神は御自身の王国の奉仕者たち――聖なる天使たちに囲まれて、御支配をなさっている。」　あなたは、あの天の光の中で、私たちの主イエス・キリストの王としての不滅の栄光を仰ぎ見、主がどれほど慈悲深く、罪の赦しに寛大であるか、また、主と和解を望む者たちにどれほど速やかに御恵みを与えられるかを確信した。　あなたは主の神聖な栄光を悟り、主がお住まいの、言葉に尽くせない美しさに満ちた天の宮殿を目撃しました。そして、この世の光が天の輝きに比べれば、いかに小さく、取るに足らないものであるかを理解したのです。さて、あなたは今、何を考え、何を思索しているのですか、教えてください！

至福のエウドキアは、唯一の神、栄光の王に心を尽くして仕えるという揺るぎない決意を抱き、こう答えた。

「私は信じていましたし、今も信じています。罪深い人々を救う神は、私がその天の門――言い表せない光に輝いているその門――を目にした、あの御方以外にはいないと。」

ヘルマンは言った。

「わが娘よ、神への熱心な奉仕に備えよ。悔い改めの実が天秤にかけられたとき、それがかつての生活の罪を上回るよう、細心の注意を払え。そして、あなた自身を、不死で永遠なる神への喜ばれる捧げ物として捧げよ。　泣き、嗚咽しなさい。そうして、涙であなたのすべての汚れを完全に洗い流し、それによってキリストの清らかな花嫁となるにふさわしい者となれるように。かつてのあなたの高慢や、若き日の有害で激しい欲望を忘れなさい。そうすれば、キリストもまたあなたの罪を忘れてくださるでしょう；　罪を通して悪魔があなたに課した、恥ずべき労働という重い軛から首を解き放ち、命を与える悔い改めの善き軽やかな重荷を背負い、これからは罪から解放され、　のすべての義人と聖なる天使たちに知られる者となりなさい。　さあ、真の信仰と貞潔のために自らを堅くし、これからは清い良心を持って、悪魔の顔に向かって大胆にこう言いなさい：　「今や、私とあなたとの間には何の共通点もなく、あなたと私との間にも何もない。なぜなら、私は真の主を見出し、御自身に永遠の所有として身を捧げたからだ。私はもはや、かつて私を堕落させていた肉欲を完全に捨て去り、朽ちることのない、輝かしい義の衣を身にまとった。　この衣を身にまとうことで、私は永遠に私を救う神の恵みを得るだろう。もはや私には、この世への執着も、世俗の快楽への誘惑もない。それらの無価値さと儚さは、すでに悟ったのだ。今、私は天の恵みを得ることを願い、熱心に努力

している。　それゆえ、悪魔よ、お前の持つものを支配せよ。そして、私からは、見知らぬ誘惑者、盗人、そして永遠の闇の奴隷よ、立ち去れ。」

エウドキアは、この言葉によってさらに心を強められ、修道士にこう言った。

「敬虔な父よ、今、私に何をなさるようお命じになりますか？」

「まず第一に、信仰のしるしである聖なる洗礼を受け入れてほしい」と彼は答えた。「それは、あなたの一生の間、あなたを無傷で守ってくれるだろう。そして私は、神の助けを借りて、自分の修道院へ行き、主の御心があれば、またあなたのところへ戻ってくるつもりだ。」

彼女は涙ながらに彼に懇願した。

「私を置いて行かないでください、主よ。私が完全に神に立ち返り、待ち望んでいた神の恵みを受けることができるようになるまでは、どうか私を置いて行かないでください。そうしなければ、あの古くからの誘惑者が、私が見捨てられ無力な姿を見かねて、また何らかの方法で私を好きなところへ引き離し、かつての放蕩な生活へと戻してしまうかもしれませんから。」

すると、至福のヘルマンは彼女にこう言った。

「これこそ、神ご自身があなたの中に目覚めさせた、より良い人生への切実な願いであり、あなたの善き希望こそが、あなたが恐れている敵の罠からあなたを守ってくれるでしょう。　どうか、もう少しの間、神への謙虚な祈りと自分の罪の告白に専念し、聖なる洗礼を受けるよう心掛けてください。私は、聖霊の助けを借りて、あなたの人生に有益なものを探し、すぐにあなたのところへ戻ってきます。

彼女を神に委ねて、至福のヘルマンは自分の道へと去っていった。　ヘルマンが去った後、至福のエウドキアはさらに数日間、断食を続け、食事にはパン、油、水以外は何も口にしなかった。昼も夜も、彼女は祈り、涙を流した。その後、その町の司教のもとへ赴き、聖なる同質なる三位一体の御名によって、彼から洗礼を受けた。　洗礼を受けてから数日後、彼女は同じ司教に祈りの手紙を書いた。その中で、自身の財産について詳細に列挙して伝え、司教にそれをキリストに捧げてくれるよう懇願した。司教は送られてきた手紙を読み、至福のエウドキアを自分の元へ呼び寄せ、こう尋ねた。

「わが娘よ、この手紙を、罪深い私宛に書いたのか？」

「はい、書きました」とエウドキアは答えた。「そして今、再びあなたの聖なる御身に懇願いたします。教会の会計係に私の献金を受け取るよう命じ、それを貧者や困窮者、孤児や未亡人たちに配ってください。ご存じの通り、私のこの富は不法な手段で得られたものであり、不義なものであると確信したからです。」

すると、テオドトスという名の司教は、彼女の善意と、神への信仰と愛を見抜き、彼女を見つめて、霊によって彼女の将来の生き様を見通すと、こう言った。

「私のために祈ってください、主にある私の姉妹よ。キリストの花嫁と呼ばれるにふさわしいあなた。不純な肉欲を憎み、清さを愛し、放蕩な生活を拒んだあなた。　あなたは、処女の貞潔に倣い、取るに足らないこの世を売り払い、ただ一つの天の真珠を手に入れた者。あなたは、罪の誘惑の中にわずかな時を過ごしながらも、悔い改めによって天の命の果てしない永遠を勝ち取り、すでに死を目前にしながらも不死を得た者。　かつては多くの人を滅びへと導いたが、今やキリストを通して多くの人を生き返らせるであろうあなた！　暗黒の闇から信仰の光に身を包んだあなたは、キリストの小羊と呼ばれるにふさわしい。　まことに、エウドキアよ、あなたは「神の御心」そのものである。主は、肉欲に溺れる人々を軽蔑し、天使の御姿を愛したあなたに、御心を傾けてくださったのだ。神のしもべであり友であるあなたに、改めて懇願する。私のために祈り、天の御国で私を覚えていてほしい。

彼女と涙ながらに多くのことを語り合った後、司教は自分の助祭にこう言った。

「教会の宿舎の責任者を、一刻も早く私のところへ呼んでくれ。」

その者が現れると、司教は彼にこう語りかけた。

「私はあなたを、多くの魂を慈しむ、敬虔で神を畏れる人として知っています。それゆえ、より良いものを求めるこの神のしもべをあなたに託します。彼女の救いを顧みてくださり、彼女が捧げるものはすべて、貧しい人々の手を通じて神に届けてください。」

この男は長老の位にあった。若き日から清らかな貞潔を守り、両親から受け継いだ全財産を神の聖なる教会に捧げ、自らも主への奉仕に身を捧げていた。　エウドキアを連れて、彼は彼女の家へ向かった。二人がその家に入ると、エウドキアは家政係たちを呼び寄せ、こう言った。

「あなた方一人ひとりが、自分に任されているものをすべて私のもとに持ってきなさい。」

彼らは直ちに、金二ティマ（すなわち二万）、あらゆる種類の良質な食器を数え切れないほど、数え切れないほどの宝石や王家の真珠、絹の衣服が入った箱二百七十五個、白い亜麻の衣服が入った箱四百十個、金糸で織り込まれた衣服が入った　60個の箱、高価な宝石や金糸の刺繍で飾られたその他の衣服が152個の箱、鋳造金貨が25テム、すなわち25万枚、芳香のある香料が20箱、本物のインド産香油が33の箱、 様々な器に入った銀八千リットル[2152] 、金糸で刺繍された絹織物百三十二リットル、純絹の織物七十リットル、その他、それほど高価ではない衣服や品々は数え切れないほどあった。　これらの動産に加え、エウドキアには不動産もあった。土地、村、そして一帯の地域であり、そこから毎年最大八百二千[2153] が徴収されていた。 これらすべての富を、教会の宿舎を管理していた長老の足元に置くと、聖女エウドキアはすべての奴隷たちを呼び寄せ、宝箱から取り出した二千枚の硬貨に加え、器、カーテン、高価な寝具、金箔を施した家具、　そして、家の中にあり、宝箱に入っていなかった美しい品々すべてを、彼らに贈り、分け与えた。最後に、彼女は最後の別れの言葉を述べた。

「私はあなた方を、この一時的な労働から解放します」とエウドキアは言った。「あなた方も、もし望むなら、悪魔の働きからさらに速やかに解放されるようにしてください。　私の言葉に従い、真の神であるキリストのもとへ歩み出せば、あなたがたは解放されるでしょう。そうすれば、キリストは神の子らが持つ永遠の自由をあなたがたに授け、ご自身の軍勢にあなたがたを加えられるでしょう。

それから、エウドキアは長老に向き直って言った。

「さあ、主よ、今こそあなたは、私に提示されたすべてのことを心に留め、お望みのままに処置なさってください。私は、私を求められている主を、ひたすら探し求めているのですから。」

[2152] リトラとは、72ゾルトニクに相当する重量単位である。銀では最大42ルーブル、金では最大506ルーブルの価値があった。

[2153] 『ミネイア・チェチイ』にはこう記されているが、 ——『ミネイア・チェチイ』にはこう記されている——、罪深い妻が淫行によって語られているような莫大な富を得たという事実が、驚くべきことや信じがたいこととは思われないように。なぜなら、真の神を知らず、偶像を崇拝していたギリシャ人たちは、娼婦を軽蔑するどころか、むしろ非常に尊んでいたからである。例えば、　アフロディーテのように、彼女たちを自分たちの虚栄の神々の一人としてさえ数えていた。古代の歴史家たちの記述からは、ギリシャの娼婦たちの富について次のようなことがわかる。　アテネの娼婦フリナは、アレクサンドロス大王によって有名なギリシャの都市フェベ（またはテーベ）の石の城壁が破壊された際、自費でこれらの城壁を再建し、以前よりも優れた都市を築き上げると申し出た。ただし、その城壁には「アレクサンドロスが破壊し、娼婦フリナが再建した」と刻まれることを条件とした。　コリントの娼婦ライサは、非常に裕福で名高かったため、ある説によれば、一時はギリシャ全土が彼女の門前にひれ伏していたほどであった。　アテネの別の娼婦ファイスは、あまりにも美しく、名高く、裕福であったため、アレクサンドロス大王に次ぐエジプトの王プトレマイオスでさえ、彼女を正妻に迎えることを恥じなかった。　フラキア出身のエジプトの娼婦ラドネは、これほどの富を誇り、エジプトの王たちの栄光に倣って、自らの名声を高めるために、王家のピラミッドに決して引けを取らないピラミッドを自ら築き上げた。　エウドキアもまた、その生活や富において彼女たちに似ていたが、それらを捨て、心身ともに貧しくなり、悔い改めによって神に喜ばれるようになると、聖なる乙女たちのようになり、天使たちと交わり、目に見ることのできない永遠の富の相続人となった。

長老は、彼女に起こったこの急速かつ予期せぬ変化、悔い改め、そして神へのこれほど大きな愛に驚き、彼女にこう言った。

「エウドキアよ、あなたは幸いである。キリストの宮殿の乙女たちの数に加えられるにふさわしい者となったのだから。花婿の到来の時はあなたにとって知らぬことではなく、婚礼の庭へ入るべき道についても、あなたは無知ではないのだ。　まことに、あなたは宮殿の外に取り残されないよう、細心の注意を払った。あなたは灯台に油を満たし、闇に打ち負かされることはないだろう。この徳の力においてさらに成長しなさい。そうすれば、神はあなたを助けてくださる。そして、罪深い私のために祈ってほしい。あなたは聖人の列に加わるにふさわしいのだから。」

その時、聖霊の恵みに照らされた高潔なヘルマンもやって来て、エウドキアが自分の財産を神に捧げ、奴隷たちを解放し、キリストのために霊的にも物質的にも貧しい者となったのを見て、　彼女を連れ出し、自分の国にある男子修道院からほど近い女子修道院へ連れて行き、そこで彼女を修道女として剃髪させた。そして彼女は、昼夜を問わず神に仕えながら、修道生活の労苦と修行に励み続けた。

祝福されたヘルマンは、自身のキノヴィア（[2154] ）に七十人の修道士を、また荒野にある女子修道院には三十人の修道女を擁しており、その中には聖エウドキアも含まれていた。十ヶ月が経過した頃、聖なる生涯を送っていたこの修道院のイグメーニャ、ハリティーナが亡くなった。　彼女の指導の下、エウドキアは修行において著しい進歩を遂げ、詩篇を暗唱できるようになり、聖霊の導きを受けて、聖書全体を一度注意深く読み通しただけで、その内容を深く理解した。彼女は断食の修行において他のすべての修道女たちを凌駕していたため、全員の満場一致で修道院長に選出された。　そして神は、彼女の徳を証し、その選出を奇跡によって確証することを遅らせなかった。

かつて彼女を愛していた若者の一人、フィロストラトという名の裕福な男が、エウドキアへの昔の愛を思い出し、悪魔の唆しによって情欲に駆られ、彼女をかつての淫行へと引き戻す方法を考え始めた。　このことについて長く考え、日ごとに彼女への愛をますます燃え上がらせた末、ついに彼は次のような策略を思いついた。修道士の衣を身にまとい、持ち運べる限りの金を手に、自分の企てを成し遂げられるという確固たる希望を抱いて、エウドキアの修道院へと徒歩で向かった。

彼が修道院の門をノックすると、門番の女が窓から顔をのぞかせて尋ねた。

「何しに来たんだ、男よ？」

彼は答えた。

「私は罪人ですが、私のために祈り、祝福していただきたいと参りました。」

門番の女は言った。

「兄弟よ、この場所には男性は入れません。でも、ここからそう遠くないところにヘルマン様の修道院があります。そこなら祈りと祝福を受けられます。ここでは、ノックして私たちを煩わせないでください。どうせ中に入れませんから。」

そう言うと、その娘は窓を閉めた。恥と後悔に満ち、エウドキアへの愛に燃えるフィロストラトは、ゲルマンの修道院へと向かい、適切な時間にそこに到着した。　修道院の門のそばに座って本を読んでいた至福のヘルマンと対面すると、彼は地面に頭をついて礼をした。聖なる長老は修道院の慣習に従って祈りを捧げ、フィロストラトは彼から祝福を受けた。尊者ヘルマンは言った。

「座りなさい、兄弟よ。あなたはどこの国から、どの修道院から来たのですか？」

彼は答えた。

「私は、最近亡くなった両親のひとり息子です。結婚を望みませんでしたが、修道者として神に仕えたいと願い、すぐに修道者のしるし――この衣――を身にまといました。そして、修道生活に

[2154] キノヴィア――共同生活規則に基づく修道院であり、そこで皆が共に暮らし、修道院から共通の生活費を支給されている。

ついて教えてくださる師と、その場所を見つけたいと思っています。」　尊い父よ、あなたの聖なる御名をお聞きし、私は長い道のりを歩いてここへ参りました。あなたの足元にひれ伏し、過去の罪を悔い改めようとする私を、あなたの修道院に受け入れてくださるよう懇願したいと願って。

この言葉を語る間、至福のヘルマンは彼をじっと見つめ、その好色な気質に気づくと、こう言った。

「お前は大変な試練に挑もうとしているのだ、わが子よ。それがお前の力に及ぶかどうかは分からない。我々長老たちでさえ、不潔へと誘う悪魔の誘惑に立ち向かうのがやっとなのだ。ましてや、燃えるような情熱の年頃にある、若々しい青年であるお前には、一体どうなるというのか？」

フィロストラトスは反論した。

「父上！　私のような若者でも、誘惑を勇敢に克服し、徳ある生活を送った例はないのでしょうか？　私がよく耳にしている、あなたの娘エウドキアは――彼女の徳高い生活の評判は至る所に広まっているのですから――彼女もまた若く、贅沢な生活を送っていたのではないでしょうか？」　しかし彼女はあなたの教えに従い、今や肉欲に打ち勝ち、絶えず揺るぎなく修道生活を送っています。隠すつもりはありません、父上。私は特に彼女の模範に心を動かされ、彼女に倣いたいと願っているのです。 私は彼女のことを思い返します。かつてどれほど に美しく、どれほど裕福で、どのような快楽の中で時を過ごしていたか。そして、その後、一瞬にして変わり、狭く苦難に満ちた道を通じてキリストに仕えるようになったのです。　もし彼女がキリストへの愛のために、これらすべてを軽んじ、自らの欲望を打ち消すことができたのなら、なぜ、父よ、あなたは、女性よりも強い男性である私を信頼してくださらないのですか？　もし私が一度でも彼女に会えたなら、彼女の語りや教えから、神への熱烈な献身と偉業を成し遂げるための力を大いに汲み取ることができ、それだけで、生涯を通じてあらゆる悪魔の誘惑に打ち勝ち、退けるのに十分だったでしょう。

神の僕ヘルマンは、そのような言葉を聞いて、偽りを真実と受け止め、自分が真に神に仕えようとしていると思い込み、彼にこう言いました。

「子よ、エウドキアに会い、彼女から有益な教えを聞くことを妨げるつもりはない。あなたは彼女の模範に従って、徳の道を歩もうとしているのだから。」

その後、イグメン・ヘルマンは、女子修道院へ香を運び、必要な用事を済ませるために頻繁にそこへ遣わされていた、由緒ある年配の修道士を呼び寄せた。ヘルマンは彼にこう言った。

「女子修道院へ行くときは、この兄弟を連れて行きなさい。彼にエウドキアに会わせてやりなさい。彼は彼女から心の糧を得て、彼女の神に喜ばれる生き方に倣いたいと願っているのだから。」

しばらくして、その修道士は女子修道院へ行く用事が生じ、修道院長からの指示に従い、若い兄弟を連れて行った。　修道服を身にまとったフィロストラトは、まるで羊の皮を被った狼のように女子修道院に入り、キリストの花嫁である聖エウドキアを目にしたとき、彼女の謙虚な姿、貧しさ、そして衰弱した体に驚嘆した。　彼女の顔は青白く、目はうつむき、口には沈黙が宿り、着ている服は薄っぺらで、寝床は地面に敷かれた藁マット、その上にはとげのある毛皮の衣が置かれていた。好機をうかがって、彼は（他の修道女たちは遠くに立っていた）静かな声で彼女に語りかけた。

「これはどういうことなのか、エウドキアよ？　宮殿のような広間に住み、富とあらゆる贅沢に恵まれ、常に歓びと喜びに満ちていたあなたを、いったい誰が惑わし、この哀れな場所へと連れてきたのか？　誰が、あなたが最も美しい衣装を身にまとい、誰もがあなたを敬い、その美しさに驚き、あらゆる賛辞をもって称えたあの大都市から、あなたを奪ったのか？　いったいどの誘惑者が、そのような至福からあなたを極度の貧困とみすぼらしさ、この貧しく卑しい生活へと導いたのか？　今や、イリオポリス全体があなたを探し求め、誰もがあなたに会いたがっている。あなたの美しい宮殿の壁さえも、あなたを嘆き悲しんでいる。私は民衆の願いを代弁し、皆を代表してあなたのもとへ遣わされ、街へ戻り、あなたの帰還によって民衆の悲しみを終わらせてほしいと懇願する。　私の言葉に耳を傾けてください、お嬢様。私についてきてください。このみすぼらしい修道院を離れ、飢えや

悪臭を放つ衣服、硬い毛皮の寝床から逃れ、再びあなたの宮殿へ、かつての歓びと、かつてあなたが豊かに享受していた快楽のもとへ戻ってください。　たとえあなたが富を浪費し、見知らぬ人々に無駄に配ってしまったとしても、皆が再びあなたを豊かにしてくれる用意があるのです。　なぜ躊躇し、迷っているのか？　皆があなたを愛し、あなたの幸せを願っているというのに、なぜあなたは自らを敵とし、苦しめる者となるのか？　その美しい顔を、修道生活の闇の中に隠すのは、無駄なことではないか、恥ずべきことではないか？　太陽の光のようなその瞳を、不必要な泣き声や涙で台無しにするのは、無駄なことではないか？　この美しい若き体を、飢えや渇き、その他の苦しみで衰えさせることに、いったい何の益があるというのか？かつて街の空気を満たし、皆の目に女神のように映っていたあなたの香りは、今どこにあるのか？[2155] そして今、あなたはこの香りを自ら捨て、乞食のような卑しい生活の悪臭を選んだのだ！誰があなたをこの迷いへと誘ったのか？　どのような虚しい希望が、さらに増え得たであろうあの莫大な富から、あなたを遠ざけているのか？　富める者の中で、あなたのように自らの富を拒んだり、無駄に配り散らしたりする者がいるだろうか？　しかし、私たちはあなたが捨てた富がどこにあるかを知っており、容易にそれをあなたに返して差し上げることができる――ただ、私たちの街に戻ってきてください、エウドキア様！　旅費として十分な量の金を持ちましたし、あなたが浪費してしまった残りの金も、イリオポリに到着すれば取り戻せるでしょう。

彼がこうした狂気じみた言葉を口にしている間、エウドキアは怒りの眼差しで彼を見つめ、もはや彼の狡猾でお世辞めいた言葉を聞くに耐えられず、怒りを込めてこう言い放った。

「復讐の神が、あなたを禁じ給わんことを！　私たちの主イエス・キリスト、義なる裁き主は――私はそのしもべではありますが、不適格な者ではありますが――悪意を持ってここに来たあなたを、御許へ戻すことは許されません。なぜなら、あなたは悪魔の子だからです。」

そう言うと、彼女は彼の顔に息を吹きかけた。すると、その偽りの修道士であり、忌まわしい誘惑者は、たちまち地面に倒れ、息絶えた。　彼女たちが会話しているのを見ていたが、その内容は聞こえなかった修道女たちは、エウドキアの相手が彼女の息を吹きかけられて地面に倒れ、彼女の足元に死体となって横たわっているのを見て、ひどく恐怖に襲われた。当初、彼女たちはこのような超自然的な出来事に驚き、そこに神の御業を見出したが、　しかしその後、世俗の人々や裁判官がこの出来事を知り、殺人事件として捜査を行い、修道院を焼き払うのではないかと恐れるようになった。というのも、偶像崇拝者であるギリシャ人たちは、キリスト教徒や修道院を憎んでいたからである。エウドキアに尋ねる勇気もなく、彼女たちは互いにこの出来事について話し合った。そして、そのうちのひとりが言った。

「ひとまず待とう。もう夜が更けてきた。夜に祈りを捧げよう。そうすれば、主がこの修道士の死の原因を私たちに明らかにし、どうすべきかを示してくださるかもしれない。」

真夜中になった。いつもの深夜の賛美が始まる前に、主はエウドキアの夢に現れてこう言われた。

「起きなさい、エウドキアよ、あなたの神を賛美しなさい。悪魔である誘惑者があなたに送り込んだ死体のそばで、ひざまずいて祈りなさい。そうすれば、私は彼に起き上がるよう命じる。彼は起き上がり、あなたが信じている私が誰であるかを知るだろう。そして、私の恵みがあなたに豊かに注がれるであろう。」

[2155] 異教徒たちは、自分たちの神々や女神たちに、あらゆる人間的な資質、さらには欠点までも、ただそれが極度に誇張された形で与えていた。　それゆえ、彼らは人間の人生において最も貴重で最良とされるもの――精緻な料理、高価な飲み物、芳香のある物質など――を神々への捧げ物として捧げていた。このことから、贅沢に溺れ、美しく、常に豪華な衣装を身にまとい、香りを漂わせていたエウドキアは、確かに同時代の人々には、ある種の女神のように映ったかもしれない。

目を覚ますと、エウドキアは主に向かって祈りを捧げ、死者をよみがえらせた。フィロストラトは、まるで眠りから覚めるかのように死から蘇り、自分を憐れんでくださった真の神を悟ると、聖女の足元にひれ伏してこう言った。

「お願いです、聖なるエウドキアよ、真の神の真のしもべよ、悔い改める私を受け入れてください。悪意に満ちた不浄な言葉であなたを傷つけた私を赦してください。今、私はあなたがどれほど偉大で慈悲深い主にお仕えしているかを理解しました。」

すると、聖エウドキアは彼にこう言った。

「平安をもって帰れ。あなたに示された神の恵みを忘れず、あなたが受け入れると誓った聖なる信仰の真の道を、決して踏み外してはならない。」

当時、その国を統治していたのはアヴリリアヌス王（ローマ皇帝ではなく、ローマ皇帝の支配下にあった同名の別の人物）であり、エウドキアは彼の前で誹謗中傷された。　かつて彼女を崇拝していた者たちが集まり、互いに相談した上で、エウドキアが王室の財宝に匹敵するほどの大量の金を砂漠へ持ち去ったと告発する手紙を王に送った。　彼らは王に、兵士の部隊を派遣するよう懇願した。逃亡した彼女を見つけ出し、街へ連れ戻し、その金を王室の財宝に加えるためである。というのも、彼女はガリラヤのキリストという人物を信じる信仰を受け入れ、王たちさえも崇拝する神々を拒絶したからである。　莫大な量の金の話を聞いたアヴリリアヌスは、彼らの要求を容易に承諾し、あるコミット[2156]を呼び寄せ、兵士を率いてエウドキアを金と共に捕らえ、自分の元へ連行するよう命じた。三百人の兵士を率いて、そのコミットはエウドキアが住んでいた砂漠の女子修道院へと向かった。一行が向かっている途中、ある夜、主がエウドキアの前に現れてこう言われた。

「王はあなたに怒りを抱いているが、恐れることはない。わたしは常にあなたと共にいる。」

伯爵は兵士たちを率いて修道院の壁を目にしたとき、日が暮れかけていたため、暗くなるのを待って立ち止まり、夜になって修道院を四方から襲撃できるよう、部隊をいくつかのグループに分けた。　そして、彼らが攻撃を仕掛けようとしたその時、目に見えない神の御手の全能の力が彼らを阻み、一晩中、修道院に一歩も近づくことができなかった。　日が明けた。彼らは修道院の壁を目にしていたが、近づくことはできず、三日三晩にわたる試みも実を結ばず、これからどうすべきか途方に暮れていた。

すると突然、恐ろしく巨大な大蛇が彼らに襲いかかり、彼らは武器を投げ捨て、恐怖のあまり逃げ出した。　しかし、彼らは大蛇の牙からは逃れたものの、その毒からは逃れられなかった。大蛇の致命的な息吹に襲われ、仲間の中には突然死んで倒れる者もいれば、かろうじて息のあるまま道端に倒れ伏している者もおり、コミットはたった三人の戦士だけを連れて王のもとへ戻った。激怒した王は重臣たちにこう言った。

「これほど多くの戦士を呪術で死に至らしめたこの魔女を、どう処罰すべきか？　どう助言する？　このような悪行を罰せずに放っておくわけにはいかない。」

協議の後、王の息子はこう言った。

「私が大軍を率いて行き、この娼婦たちの巣窟を地面に平らにし、エウドキアをここに連れてくる。」

王も皆もこれに同意し、翌日、王子は兵士たちを率いて、人里離れた修道院を襲撃し、エウドキアを捕らえに出発した。道中、彼は父の所有する村に近づき、夜が迫っていたため、休息に適したこの場所で一晩泊まることにした。　若さゆえの勢いで、彼は馬から素早く飛び降りたが、石にぶつかって足をひどく打ちつけ、兵士たちに抱えられて寝床へと運ばれた。夜になると病状は悪化し、彼は息を引き取った。兵士たちは、亡くなった王子を連れて王のもとへ戻った。　突然亡くなった息子

[2156] 「コミート」とは、王への貢納金の徴収を管轄する特別な役人のことである。また、この名称は一般的に都市の長官を指す言葉としても用いられていた。

を目の当たりにした王は、その場で気を失った。街中の人々が集まり、民衆は王の息子と、悲しみのあまり死に瀕している王自身を悼んで泣き悲しんだ。その民衆の中に、フィロストラトもいた。　彼は王の側近たちに近づき、エウドキアは神のしもべであり、天の力が彼女を守っているため、誰も彼女に害を及ぼすことはできないと語った。しかし、もし王が息子を生きて見たいと望むなら、彼女に丁重な願いを送り、死者を蘇らせるよう神に懇願してもらうべきだと述べた。

「私自身が」とフィロストラトは言った。「彼女の祈りの力と神の慈悲を身をもって体験したのだ。」

これを聞いて、王は少し我に返り、フィロストラトから自分に起こった出来事を詳しく聞き、彼の言葉を信じ、直ちにトリブーンの[2157] バビルをエウドキアのもとへ、敬意と謙虚さ、そして懇願に満ちた手紙を携えて遣わした。　彼が修道院に到着すると、聖エウドキアは謙虚に頭を下げて王の手紙を受け取り、こう言った。

「なぜ王は、私のような貧しく、不適格な罪人である私に、手紙を送られるのでしょうか？」

聖女が王の手紙を読むのを待つ間、トリブーンは修道院の部屋の一つに入り、そこで開かれた本を見つけると、身を屈めて読み上げた。*「主の御言葉を保ち、心を尽くして主を求める者は幸いである」*（詩編118:2）と。そして、詩編の最後まで読み終えると、うとうとし始め、本を枕にして眠り込んでしまった。夢の中で、ある明るい若者が現れ、手に持っていた杖で彼の脇腹を突いて、こう言った。

「バヴィラ、起きなさい！ 死者があなたを待っている。」

目を覚ましたヴァビラは、天使の出現に恐怖を覚え、このことを聖女エウドキアに話し、一刻も早く自分を解放してほしいと懇願した。彼女はすべての修道女たちを呼び集め、こう言った。

「王が私の取るに足らない身に向け、書簡で述べている件について、皆さんは私にどうすべきだと助言されますか？」

修道女たちは口を揃えて答えた：

「聖霊の恵みがあなたを導いておられます。神の御心にかなうことを王に書き送ってください。」

満足のいく祈りを捧げた後、聖女は席に着き、王に次のように書き送った。「私のような取るに足らない女には、陛下がどのようなご用件で私に書簡をお送りくださったのか、見当もつきません。　私は、不適格で罪に満ち、良心によって多くの恐ろしい不法を責められている女であり、私の神であるキリストに、あなたを憐れみ、息子を生き返らせてくださるよう懇願する度胸はありません。しかし、私の主の知られた慈愛と力に希望を置いています。もしあなたが、死者をよみがえらせる真の神を心から信じ、主を頼るならば、主はあなたとあなたの息子に、その偉大な憐れみを示してくださるでしょう。　あらかじめ全き魂をもって主を信じなければ、その聖なる、畏れ多い御名を呼び求め、何事かを祈願することはできない。それゆえ、もしあなたが全き魂をもって信じるならば、不死の神の偉大な栄光を目撃し、その憐れみにあずかり、その恵みを享受することになるであろう」。

手紙を書き終えると、三度十字を切って封印し、使者に手渡して送り出した。王のもとへ戻ったトリブーンは、聖エウドキアの書簡を王に渡すことはせず、死者の胸の上に置き、大声でキリストの御名を呼び求めた。　すると、死者はたちまち生き返り、目を開き、言葉を話し、まるで眠りから覚めたかのように、生き生きと元気な姿で立ち上がった。皆、この尋常ならざる光景に驚き、戦慄した。そして王は大声で叫んだ。

「キリスト教徒エウドキアの神は偉大なり！　真の、そして正義の神――それはキリスト教の神である！　多くの人々があなたに救いを求め、あなた、主キリストを信じる者たちは敬虔に振る舞

[2157] トリブヌスは軍事権力の代表者であり、小規模な部隊の指揮官で、現代の陸軍大佐のような存在である。

うのは当然のことだ！　、あなたのもとへ来る私をも受け入れてください。私はあなたの聖なる御名を信じ、唯一の真の神、聖なる、永遠に祝福されたお方であることを認めます！

キリスト・神を信じた王は、妻と、死からよみがえった息子、そして娘のゲラシアと共に、都市の司教によって洗礼を受けた。その後、貧者や困窮者に惜しみない施しをした後、聖エウドキアに聖堂の建設のために多額の金を送った。　さらに、彼はエウドキアが住んでいた場所に都市を建設するよう命じ、しばしば彼女に手紙を書き、聖なる祈りを求めた。やがて、王は聖なる信仰と善行に励んだ末、主のもとで安らかに息を引き取り、その後、妻も亡くなった。　息子は助祭に任命され、その後、司教が亡くなると、司教に叙階された。また、彼の妹ゲラシアは、世の虚しさを軽蔑し、結婚生活を避けつつも、主に仕えたいと願い、密かに聖エウドキアの修道院に身を寄せ、そこで死ぬまで暮らし、熱心に主に仕え、主に喜ばれるように努めた。

当時、異教の不義がはびこっており、密かに主に仕えていた多くの人々が、神を憎む者たちによって暴露され、同じ破滅へと追い込まれていた。その頃、イリオポリスには、邪悪な神々の熱心な擁護者であり、その最も熱心な奉仕者であり、偶像崇拝を拒む者たちを迫害するディオゲネスが総督として治めていた。　彼は、前述の王女ゲラシアを妻に迎えたいと望んでいた。彼女がまだ不信仰であった頃、その父アウリリアヌスもこれに同意していた。しかし、彼が聖なる洗礼によって啓蒙されると、娘を不信仰な夫に嫁がせることを拒み、その夫がキリスト教の信仰を受け入れない限り、娘を渡すつもりはなかった。　まもなくアヴリリアヌスは亡くなり、ゲラシアはディオゲネスに無理やり連れ去られることを恐れて、伝えられるところによれば聖エウドキアの修道院へ逃げ込んだが、彼女がどこに身を隠したのか、正確には誰も知らなかった。ただ、エウドキアの近くどこかに隠れているという噂だけが広まっていた。　総督ディオゲネスは、調査のため、キリスト教徒であるエウドキアを連行するよう、五十人の兵士を派遣した。兵士たちが彼女を追っていたとき、主は夜、エウドキアの前に現れてこう言われた。

「エウドキアよ！目を覚まし、信仰において勇敢に立ち続けなさい。今こそ、あなたがわたしの名を告白し、わたしの栄光を称える時が来た。あなたが成し遂げるべき偉業が近づいている。　今まさに、獣のように恐ろしい者たちがあなたに襲いかかるだろう。しかし、あなたは動揺したり恐れたりしてはならない。なぜなら、私はあなたのすべての偉業と労苦において、身近な伴侶であり、力強い助け手としてあなたと共にいるからだ。

幻が終わると、夜中に兵士たちが修道院の塀を乗り越えてきた。聖女は霊によってそのことを知ると、彼らのもとへ出て行き、尋ねた。

「ここで何を求めているのか？　誰を探しているのか？」

兵士たちは彼女を捕らえ、エウドキアのことを尋ねた。彼女は、もし彼らがほんの少しの間だけ自分を解放してくれるなら、エウドキアを引き渡すと約束した。　そして教会へ行き、聖なる祭壇に上がり、キリストの聖なる命を与える秘跡が納められた聖櫃を開け、この偉大な聖物のほんの一部を取り、自分の胸に隠した。その後、彼女は外に出て兵士たちに言った。

「私はエウドキアです。私を捕らえて、あなた方を遣わした者のもとへ連れて行ってください。」

兵士たちは彼女を捕らえ、連れ去った。月はなく、暗い夜だったが、そこに明るく美しい若者が現れ、彼女の前に蝋燭を掲げて道を照らした。それは主の天使であり、エウドキアにしか見えなかったが、兵士たちは彼も光も見ていなかった。兵士たちはエウドキアをロバに乗せようとしたが、彼女はそれを拒み、こう言った。

「*『ある者は戦車、ある者は馬』*（詩篇19:8）ですが、私はキリストを信頼して、徒歩でたどり着きます。」

街に到着すると、総督はエウドキアを二日間牢獄に閉じ込めるよう命じ、三日目に牢番を呼びつけてこう尋ねた。

「あの魔女に、誰かが食べ物や飲み物を与えてはいないか？」

看守は答えた。

「ご高貴なご主人様、私はあなたの御慈悲にかけて誓います。誰も彼女に食べ物も飲み物も与えてはいません。何度彼女を見回しても、いつも地面にひれ伏して、（おそらく）自分の神に祈っている姿しか見ませんでした。」

総督は言った。

「明日、彼女について調査と裁判を行うつもりだが、今は他の用事で忙しい。」

四日目のこと、総督ディオゲネスは法廷に着席し、エウドキアを連れてくるよう命じた。謙虚な様子で、粗末な服を着て、うつむいた彼女を見て、彼は家来たちに彼女の顔を覆っているものを外すよう命じた。すると、その顔はたちまち稲妻のように輝き出した。　ディオゲネスは驚愕し、神聖な恵みに満ちて輝く彼女の顔に宿る、言葉に尽くせない高貴さと美しさに感嘆して、長い間黙り込んでいた。彼女の美しさを長く見つめているうちに、彼は心を乱され、裁判官たちに向き直って言った。

「私の神である太陽に誓って！　太陽のようなこの美しさを死に追いやることはできない。どうすればよいのか分からない！」

裁判官の一人が言った。

「陛下、そのような美しさが自然なものであるとお考えでしょうか！　いいえ、これは魔法の幻影に他なりません。魔術師たちがどのような力を有しているか、ご存じないのですか！　魔法の呪縛が解かれれば、すぐに彼女の本来の醜さが現れるでしょう。」

総督は彼女にこう尋ねた。

「まず第一に、あなたの名前、出自、そして生い立ちを話してください。」

聖女は十字を切って身を守ると、こう言った。

「私の名はエウドキアです。私の出自や生い立ちについては尋ねる必要はありません。ですから、総督よ、無駄話に時間を費やすのではなく、あなたがたが普段キリスト教徒に対して行っていることを、私にも行ってください。」　私を裁き、苦しめ、お望みのままに処刑してください。私は、私の真の神であるキリストが、私を見捨てず、見放さないことを信じています。

総督は言った。

「短い質問にこれほど長く答えるとは、拷問を始めたら一体どれほど多くを語るつもりなのか？　教えてくれ。なぜ、街を離れ、神々を拒絶し、民の財産を持ち去り、狡猾な手段で市の金庫を空にして、荒野へ逃げたのか？」

聖女は答えた。

「なぜ私が街を去ったのか――一言で言えば、私は自由だったからであり、やりたいことをやっただけだ。　自由な人間が、行きたい場所へ行くことを禁じる法律などあるだろうか？　そして、金を盗んだという告発については、その誹謗中傷者が私の前に現れることを望む。そうすれば、その誹謗は暴かれ、嘘は真実の前で消え去るだろう。まさか私が、他人の物を盗んで逃げたというのか？」

長い論争の末、聖女は言葉において屈せず、信仰においても揺るがなかった。そこで総督は、彼女を木に吊るし、四人の兵士に容赦なく鞭打つよう命じた。　兵士たちは彼女を捕らえ、腰まで裸にして木に吊るした。服を脱がせている最中、彼女が修道院を出る際に持ち出した、主の至聖にして命を与える御体の断片が、彼女の胸から滑り落ちた。使用人たちはそれが何であるかを知らず、それを拾い上げて総督のもとに持っていった。　総督は手を伸ばしてそれを取ろうとしたが、その瞬間、主の至聖なる御体の一部が炎へと変わり、激しい炎が拷問者の使用人たちを焼き、総督自身の左肩にも傷を負わせた。彼は痛みに耐えかねて地面に倒れ込み、神として崇めていた太陽に向かって叫んだ。

「太陽の主よ！　私を癒してください。そうすれば、私は直ちにこの魔女を火あぶりにします。私がこれまで彼女を滅ぼさなかったことを、あなたが罰しておられるのだと知っています！」

その言葉を言い終えるや否や、稲妻のような炎が彼に降り注ぎ、その体を炭のように焦がして彼を死に至らしめた。恐怖と戦慄が皆を襲った。　しかし、ある戦士は、神の輝く天使が聖女のそばに立ち、彼女の耳元で語りかけ、雪よりも白い布でその体を覆いながら慰めているのを見た。それを見た戦士は、聖女に近づき、こう言った。

「私もあなたの神を信じます。悔い改めた者、生ける神のしもべである私を受け入れてください。」

聖女は彼にこう答えた。

「心からの回心の恵みが、あなたの上にありますように、わが子よ。あなたが、まるで新たに生まれ変わったかのように、新しい人生を歩み始めているのがわかります。もし救われたいのなら、かつての不信仰を避けなさい。」

戦士は言った。

「お願いだ、主のしもべよ、この総督に憐れみを示し、あなたの神に彼の復活を願い出てください。そうすれば、多くの人々が真の神を知り、彼を信じるようになるでしょう。」

そう言うと、彼は木に近づき、聖なる殉教者を解き放った。彼女はひざまずき、長い間祈りを捧げた。それから立ち上がり、大声で叫んだ。

– 人の秘め事を知っておられ、御言葉によって天を確立し、万物を英知をもって創造された主イエス・キリストよ！　お命じください。御身の全能にして全知なる御意志により、御身から遣わされた火によって焼かれた者たちが皆生き返り、多くの信者が聖なる信仰に堅く立ち、不信仰な者たちが永遠の神である御身へと立ち返り、それによって御身の至聖なる御名が世々限りなく栄光を受けるように！

その後、彼女は死者たちのところへ歩み寄り、一人ひとりの手を握りながら、こう唱えた。

「復活された主イエス・キリストの御名によって、立ち上がり、かつてのように健やかになりなさい。」

こうして、彼女は一人ずつ蘇らせ、まるで眠りから覚ますかのように、彼らを立ち上がらせ、意識を取り戻させた。　皆が驚きと恐怖の眼差しで、目の前で起きている驚くべき奇跡を見つめていると、突然、悲鳴と泣き声が聞こえてきた。そこに兵士たちと共にいたディオドロス・コミトゥスのもとに、妻フィルミナが浴場で熱病により急死したという知らせが届いたのだ。　予期せぬ知らせに打ちのめされたディオドロスは、衣服を引き裂き、悲しみに打ちひしがれ、涙を流しながら妻が亡くなった場所へと駆け出した。彼の後を多くの民衆が追いかけたほか、死者の中から蘇った総督ディオゲネスもまた、そこへ向かった。　コミタの妻が確かに亡くなったことを確認すると、彼は聖エウドキアの元へ戻り、彼女にこう言った。

「まことに、あなたの神は私たちの神々よりも計り知れないほど高貴で力強いと信じています。しかし、もしあなたが、私のまだ芽生えたばかりで弱い信仰を強め、確固たるものにしてくださるなら、どうか私と一緒に、亡くなったフィルミーナの元へ行かせてください。　もしあなたが彼女を蘇らせることができれば、私はためらうことなく、疑うことなく、あなたの神を完全に信じるでしょう。

聖エウドキアは彼にこう言いました。

「神は、あなたのためだけでなく、神の御国に入りたいと願うすべての人々のためにも、計り知れない慈悲をもって御心を示してくださるでしょう。さあ、神の御加護のもと、あなたが私を招くその場所へ行きましょう。」

彼らが人々と共に歩いていると、死体を運ぶ一行と出くわした。聖女は担架を止めるよう命じ、涙を流し、しばらく祈りを捧げた後、亡くなった人の手を握り、大きな声でこう言った。

「偉大にして永遠なる神よ、主イエス・キリストよ、御父の御言葉であり、死者をよみがえらせる方よ！　私たちはあなたに祈ります。ここに集う者たちを確信させるため、偉大な奇跡を行ってください。フィルミナを生き返らせ、彼女に悔い改めの霊を授けてください。そうして、常に生きておられ、永遠なる神であるあなたに立ち返らせてください。」

この祈りの後、フィルミナはたちまち担架から立ち上がり、民衆全員が声を揃えて大声で叫んだ。

「エウドキアの神は偉大なり、キリスト教の神は真実にして義なる方なり！　生ける神のしもべよ、我らを救いたまえ。我らもまた、あなたの神を信じる者だからである。」

一方、ディオドロスは妻が生きているのを見て、この上なく喜び、聖女の足元にひれ伏してこう言った。

「お願いだ、キリストのしもべよ、私をもキリスト教徒にしてほしい。今、私はあなたが仕える全能の神が誰であるかを真に知ったからだ。」

こうしてディオドロスは妻と家族全員と共に、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けた。また、多くの民衆や、総督ディオゲネスとその家族も洗礼を受け、死ぬまで聖なる信仰を守り通した。

その後、聖エウドキアはディオドロスの願いに応じて彼の家に住み、新たにキリスト教に改宗した人々に神の御言葉を教え続けた。　ある少年ジノンは、近くの果樹園で働いていたところ、蛇の致命的な息吹によって命を落とした。その母である未亡人は、息子を嘆き悲しんで泣き続けた。このことを知ったキリストの羊エウドキアは、ディオドロスにこう言った。

「泣いている未亡人を慰めに行きましょう。そうすれば、私たちの神の驚くべき慈悲を目にするでしょう。」

その場に着くと、彼らは少年が蛇の毒によって体が腫れ上がり、膨れ上がり、黒ずんでいるのを見た。聖女はディオドロスに言った。

「今こそ、あなたが神に対してどれほど偉大な信仰を持っているかを示す時です。さあ、心の目を天に向け、祈りを捧げ、死者をよみがえらせてください。」

ディオドロスは言った。

「私の主よ、キリストのしもべよ！私はまだ信仰を告白して間もない者であり、神への思索によって心の目を神に定めておくことはできません。」

聖女は彼にこう言った。

「神は悔い改める罪人の祈りに耳を傾け、その願いを速やかに叶えてくださることを、私は疑いなく信じています。さあ、心を尽くして全能の主を呼び求めなさい。そうすれば、主は私たちに御慈悲を示してくださるでしょう。」

するとディオドロスは、頭を垂れ、胸を叩きながら、涙を流して声に出して祈り始めた。

「主なる神よ、私のような不適格な罪人であり、不信仰な者を聖なる信仰へと招いてくださり、私たちの魂の救いのためにこの高潔なしもべを遣わしてくださった方よ！　私の変わることのない揺るぎない信仰をご存知の主よ、この罪深く不適格な私の祈りを聞き入れ、蛇に殺された少年を、御名の栄光のために生き返らせてください。そうして彼も、またあらゆる魂も、永遠に御名の至聖なる御名を賛美することができますように。

祈りが終わると、ディオドロスは死者にこう言った。

「ジノンよ！ポンティウス・ピラトの時代に十字架につけられたイエス・キリストの御名によって、起き上がれ！」

すると、たちまち死者は起き上がり、黒ずみを拭い去ると、その体は以前のように健やかになり、人々は皆、天と地の創造主である神を信じ、賛美した。人々が散り散りになり始めたとき、キリストの祝福された羊であるエウドキアは言った。

「兄弟たちよ！　少しお待ちください。私たちの救い主キリストが、もう一度栄光をお示しになります。」

人々は立ち止まった。聖女が祈ると、少年を殺した蛇が、不思議な炎に追われ、恐ろしい唸り声を上げて這い寄り、皆の目の前で暴れ回り、身もだえし、やがて裂けて息絶えた。　そこで、この光景を目撃した者たちは皆、妻や子供たちと共にイリオポリスの司教のもとへ向かい、聖なる洗礼を受けた。一方、聖女エウドキアは自らの修道院に戻り、修道女としての日常の務めに従事して生活を送った。時折、彼女は町を訪れ、信者たちを励まし、未信者たちをキリスト・神への信仰へと導いた。　洗礼を受けてから、彼女は五十六年間生き、次のように殉教の死を遂げた。キリスト教の信仰のうちに亡くなった総督ディオゲンの死後、その職には、残酷でキリスト教徒の敵であるヴィンチェンツィオが就いた。彼は聖エウドキアのことを耳にすると、兵士たちを遣わして、彼女の尊い首を切り落とさせた。

かくして、聖なる敬虔な殉教者エウドキアは、3月の初日に、我らの主キリスト・イエスのために剣によって殉教した。主と父と聖霊に、今、そして常に、世々限りなく栄光があるように。アーメン。

トロパリオ、第8調：

知恵ある義によって、あなたの魂をキリストの愛に結びつけ、朽ちゆくもの、美しいもの、そして一時的なものを忘れ去り、御言葉の弟子として先立って歩まれた。まず禁欲によって情欲を打ち砕き、次に苦難をもって敵を恥じ入らせた。　それゆえ、キリストはあなたに二重の冠を授けられました、栄光あるエウドキエよ、尊き受難の殉教者よ。キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第4調：

汝の苦難において立派に奮闘し、死後も奇跡の注ぎによって、我らを聖別してくださる、万人に称えられる方よ。信仰をもって汝の神聖な教会に駆け寄る者たちよ。そして、祝賀のうちに、尊き殉教者エウドキエよ、我らが心の病から解放され、奇跡の恵みを授かるよう、汝に祈り求める。

聖殉教者ネストルとトリヴィミウスの殉教。

記念日：3月1日

聖ネストルとトリヴィミウスは、不敬虔なデキウス帝の治世下[2158]に生き、ペルギア[2159]の出身であった。キリスト教徒として、彼らは恐れを知らずにキリストを宣教したが、そのために異教徒たちは彼らを地方総督に告発した。　総督は直ちに大規模な兵士部隊を派遣し、二人を縛って裁判のために自分の元へ連行するよう命じました。聖なる殉教者たちが裁判にかけられた際、総督は彼らを威嚇するために、目の前にあらゆる拷問器具を並べさせましたが、二人はこの脅威を目の当たりにし

[2158] ローマ皇帝デキウスは249年から251年まで在位し、キリスト教徒を激しく迫害した。
[2159] ペルギアという都市は、小アジア南部の地中海沿岸に位置するパンフィリア地方にあった。

ても、力強い声でキリストを宣教し続けました。　そこで総督は、彼らを裸にし、容赦なく牛の腱で打ち据えるよう命じた。その後、彼らを木に吊るし、内臓が露わになるまで体を削り続けた。　ついに、聖人たちが私たちの神であるキリストへの信仰において揺るぎないことを確信した総督は、処刑人に命じて彼らを木から降ろし、刃物で首を切り落とすよう命じた。主の御恵みにより、聖なる殉教者たちはこうして息を引き取り、キリストなる神は彼らを御自身の御国に迎え入れた。

聖殉教者アントニナの受難

記念日：3月1日

キリストの聖殉教者アントニナは、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、ニカイア市で殉教した（[2160] 、[2161] ）。彼女がキリストを信仰していたため、マクシミアヌスに「彼女はキリスト教徒である」と密告された。ニカイアに連行され、皇帝の前に引き出された彼女は、恐れを知らずに自らの信仰を告白した。　彼女にキリストを否定させ、偶像に犠牲を捧げさせるため、彼女は残酷な拷問にさらされたが、拷問者たちの要求には屈せず、牢獄に投獄された。その直後、マクシミアヌスは彼女を牢獄から連れ出すよう命じ、再びキリストを否定するよう強要したが、今回も彼女は皇帝の命令に従わなかった。　そこでマクシミアヌスは、彼女を絞首刑にし、肋骨を削るよう命じた。拷問の最中も、聖アントニナは絶えず皇帝の誤りを糾弾し、キリストについて説き続けた。これを見たマクシミアヌスは、処刑人たちに彼女の衣服を脱がせ、裸の体を殴打するよう命じた。　しかし、処刑人たちが皇帝の命令を実行しようとしたとき、天使たちが現れ、聖なる殉教者を守りつつ、拷問者たち自身を苦しめた。その後、聖女は灼熱の鉄の床に置かれたが、彼女は無傷のままであった。そこで、彼女は袋に入れられ、ニカイアの湖に投げ込まれた。

尊者ドムニナの記念日

記念日：3月1日

聖女ドムニナはシリアで修業に励んだ。　母の家の庭に自ら設営した天幕に住み、絶えず涙を流し、水で湿らせたレンズ豆だけを糧とし、毎朝と夕方には、誰にも顔を見られないよう頭から膝までベールで覆い隠して、祈りのために神の聖堂へ通った。　彼女は450年から460年の間に安らかに息を引き取った。

3月15日

3月2日（旧暦）

同日は、5世紀に没したエジプトの隠者、聖アガフォンの記念日である。

[2160] ニカイアは、小アジアの北部、マルマラ海と黒海の沿岸に位置するビフィニア地方にあった。この都市は、第1回および第7回全地公会議が開催されたことで歴史上知られている。

[2161] 284年、ローマ帝国は、ディオクレティアヌスが統治する東ローマ帝国と、285年からアウグストゥス・マクシミアヌス・ヘルクレスが支配する西ローマ帝国に分裂した。　ただし、ここでいうのはマクシミアヌス・ヘルクレスではなく、東方でディオクレティアヌスの共同統治者であり、その娘婿で後に後継者となった（306～311年）マクシミアヌス・ガレリウスのことである。 キリスト教徒に対する公然とした迫害は303年から始まったが、その数年前からガレリウスは私的にキリスト教徒を迫害していた。

同日、デキウス帝の治世下、ネオケサリアの町で殉教した青年、殉教者トロアディオスの記念日。

聖テオドトス（キリニオスの司教）の聖殉教の日。

3月2日の記念日

聖なる司祭殉教者テオドトスは、ガラティア出身[2162] であり、キプロス島のキリニア市の司教であった[2163] 。キリスト教徒の両親の息子として、彼は読み書きを学び、幼い頃から知恵と徳において秀でていた 。 彼は神の御言葉を宣べ伝えるためにキプロス島を訪れ、異教徒たちに、誤った教えや偶像崇拝を捨て、キリストを信じるよう教えた。その説教によって、彼は多くの人々を異教の不義から遠ざけ、救いの道へと導いたため、キプロスのキリニア市の司教に任命された。　当時、不義なリキニウス[2164] が統治しており、キプロス島の総督はサヴィンであった。その頃、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われていた。聖テオドトスは、キリストのために苦難を受けることを望み、異教徒たちと勇敢に論争を交わし、彼らの迷いを糾弾するとともに、公然とキリストを宣べ伝えた。　これを耳にした総督サヴィンは、聖人を拷問にかけるよう命じた。しかし、神の僕である聖人は、そのことを知ると、使者が来るのを待たずに自ら直ちに総督のもとへ現れ、こう言った。

「私が、あなたが探している者です。私はあなたから身を隠したわけでも、力ずくで連れてこられたわけでもありません。私の神であるキリスト、隠してはならない真理を宣べ伝え、あなたの不敬虔の無価値さと無力さを暴くために、自ら進んでここに来たのです。」　あなたがたの無力さについては多くを語る必要はない。事態そのものが、あなたがたがヒキガエルよりも臆病であることをはっきりと示している。たった一人のキリスト教徒のために、街全体と軍隊が動揺したのは、悪霊たちがキリストのただ一人のしもべを恐れおののき、彼を滅ぼそうとしているからだ。彼らは、彼が苦しみから逃れ、彼らに頼らないしもべたちを打ち負かして、自分たちの無力さを恥じさせることを恐れているのである。

総督はこのような糾弾に耐えられず、聖人を容赦なく堅い鞭で打つよう命じたが、聖人は長い拷問の最中、ダビデの言葉を叫んだ。

「*『私の背中で、罪人たちは悪事を働き、その不法を続けました』*」（詩編128:3）[2165] 。

使用人たちが殉教者への鞭打ちをやめると、総督は言った。

「ほら、お前のその生意気な言葉が、お前にどんな利益をもたらしたか、わかるか？」

聖人は答えた。

「もしあなたの心の目が開かれていれば、あなたが『傲慢』と呼ぶ私の勇気がいかに私にとって益となったかを、あなたに示してやっただろう。しかし、あなたは盲目であり、私を待ち受ける至福を見ることはできないのだ。　せめてこれだけは心に留めておいてほしい。私は、キリストのために殉教する者たちに用意された天の報いを魂で仰ぎ見ているゆえに、苦しみの中でも揺るがず、苦痛も感じていない。なぜなら、私の魂の喜びが、肉体のあらゆる苦しみを凌駕しているからだ。

サヴィンは言った。

[2162] ガラティア、別名ガロ・ギリシアは、紀元前3世紀にアジアへ移住した、現在のフランスに居住していたガリア人にちなんでその名がついた小アジアの地域である。ガラティアへのキリスト教の伝道は、使徒パウロが第1回および第2回の伝道旅行中に成し遂げたものである。

[2163] キプロス島は、地中海の北東部、キリキアとシリアの海岸の間に位置している。ここで、聖使徒パウロは福音を宣べ伝えた。

[2164] リキニウスは311年から324年まで在位した。

[2165] ロシア語訳：*「私の背中で耕す者たちが耕し、長い畝を引いた」*。福者テオドリトスは次のように説明している。「この預言の言葉は、不義な者たちが勝利を収めた殉教者たちに課した鞭打ちや傷を指している」。

「テオドトよ、お前の誇りは無駄であり、聴衆を惑わしているに過ぎない。お前の言葉で私を惑わすことはできない。お前が我らの神々の支配を認めるまで、私はお前を苦しめ続ける。」

聖人は答えた。

「好きに私を苦しめよ、あらゆる手口を使ってみよ――そして、キリストの戦士の力を知ることになるだろう。誰が勝利するのか、殉教者か、それとも苦しめる者たちか、その目で見ることになるだろう！」

総督は言った：

「私が王の命令により、お前の体を粉々に砕き、完全に滅ぼすことができることを、知らないのか？」

聖人は答えた：

「私が仕える神は、私を王たちよりも力強く、諸侯たちよりも強靭にしてくださった。それゆえ、私はお前を奴隷のように扱い、捕虜よりも取るに足らない者と見なしている。人生のあらゆる恵みを、わらや籾殻、糞のように軽んじることを教えてくださった私の神の助けにより、私はあらゆる拷問を意に介さない。　お前の傲慢な脅しで私を怯えさせようなどと思うな。お前は私の身体に対する権力を持っていると自慢しているが、砂漠の盗賊たちも、旅人を襲って苦しめる時、同じ権力を持っているのだ。　お前は、自分の剣――それは不法な剣である――を頼りに、自らを強大だと自負している。なぜなら、お前は正当な権威を暴政に置き換えてしまったからだ。姦通者や夫殺しを処罰から免れさせ、その一方で無実で敬虔な人々を処罰にさらしている。

激しく怒った総督は、裸の殉教者を木に吊るし、鋭利な道具でその脇腹を削るよう命じた。この凄まじい苦痛に耐えながら、キリストの殉教者はこう祈った。

「主イエス・キリストよ、　目に見えるもの、見えないものすべての創造主よ、死を打ち負かし、地獄を打ち砕き、十字架の上で冥界の支配と権威を滅ぼし、この世の支配者を裁き、天より御使徒たちに力を授け、彼らを誘惑から守り、かつて少年ダビデに巨人ゴリアテへの勝利を授け、　バビロンの炉の炎を鎮め、露をもって火を冷やし、聖なる少年たちの肉体を傷つけさせなかった方よ、この苦しみの中にある私をも強めてください。あなたは人間の弱さを知っておられ、私たちの強さが塵よりも無価値であり、私たちの力が花よりも早くしぼんでしまうことを知っておられます。　主よ、御名の栄光を現し、私の無力さに力を与えてください。御自身の聖なる羊の群れに反逆する者たちの要塞を打ち砕き、全宇宙が、あなたこそが、あなたに望みを置く者たちに強さと力を与える唯一の至高の神であることを悟らせてください！

祈りの最中、処刑人たちは聖人の体を激しく引き裂き、その骨がむき出しになるほどであったため、総督は彼を牢獄へ連行するよう命じた。

牢獄へ向かう道中、聖人は大声でこう叫びました。

「わが苦しみを見る者たちよ、私が希望なくして苦しんでいるのではないことを悟れ。　キリストのもとには、殉教の功績に対する報いがあり、私はそのキリストに希望を置いている。もし、この世の一時的な王でさえ、血を流す勇敢な戦士たちを称え、報い、戦死者を書物で讃え、その像を作り、彼らの記憶を保存しようと努めるのであれば、なおさら、私たちの功績の源である　永遠の天の王であるキリストは、ご自身の戦士たちや献身者たちに、現世において栄光を与え、復活の際には御自身の御国への参加を授けてくださるのです。　その証人となるのが、かつて奮闘した聖なる殉教者たちの尊い遺骨である。これらの遺骨は、すべてのキリスト教徒によって畏敬の念をもって崇められ、この世のあらゆる宝物や富よりも尊いものとされている。この崇敬によって、神とその天使たちから殉教者たちの魂に授けられる天の栄光が、はっきりと表されているのである。

殉教者は他にも多くのことを語り、民衆全員に付き添われて牢獄へと向かい、そこで五日間を過ごした後、再び総督の裁判へと連行された。

総督は殉教者にこう言った。

「もはや、お前を懲らしめる必要はないと思う。最初の拷問の辛さを味わって正気に戻り、苦しみを繰り返したくないと願って、我々の神々を崇めるだろう。しかし、もし従わないなら、私はお前をさらに激しく苦しめざるを得なくなる。だから、私の言うことを聞き、これから待ち受けている苦しみから身を守れ。」

聖テオドトスは答えた。

「お前は理解できないのか、不信心者よ。私の体は拷問で打ち砕かれ、脇腹は引き裂かれているが、それでも私は今なお勇気を持ってここに来たのだ。私の信仰の業を全うし、私の主イエス・キリストから用意された冠を受けるまで、あらゆる苦しみを受け入れる覚悟があるのだ。」

「ここで『十字架にかけられた方』の名を口にしてはならない。その名によって裁きの場を穢すことになるからだ」と、総督が彼の言葉を遮った。

「狂人め、あらゆる不浄に満ちた者め！」とテオドトスは言った。　「お前の考えでは、お前の卑劣で不敬な神々の名を口にしてもこの場所を穢すことにはならないが、私が、私のキリスト、万物の王であり主である至聖なる御方の御名を口にすると、お前は憤り、神を冒涜し、まるでキリストの御名によって法廷が穢されたかのように嘆き悲しむのか？　私がキリストの至聖なる御名を口にする時、お前の心はそうやって苦しんでいるのだ。そう、あなたがたが崇める悪霊たちも、キリストを目の当たりにする苦痛に耐えられず、こう叫んだのだ。

「*『イエスよ、神の子よ、私たちに何の関係があるのですか。あなたは時期尚早にここに来て、私たちを苦しめるのですか』*」（マタイ8:29）。あなたもキリストの御名を聞くことができないのは驚くに値しない。あなたは悪霊に似ており、先祖たちと同様に彼らを模倣し、仕えているからだ。

サヴィンは言った。

「以前の拷問の後、あなたはもっと従順になり、救いを差し伸べる私の言葉に耳を傾けるだろうと思っていた。しかし、あなたはさらに悪くなり、キリストのために耐えているという希望に惑わされ、私たちと議論ばかり続けている。それゆえ、私はあなたを新たな拷問にさらし、キリストへのあなたの希望が虚しいものであることを示してやる。」　そのお世辞屋は、君を救うことはできない。君はその希望を頼りに苦しみへと向かっているのだ。

すると、聖なる殉教者はこう答えた。

「もし私が人のために苦難に耐えているのなら、あなた方のような不信心者たちよりも不幸であり、来世への希望など何一つ持てなかったでしょう。もし私が、キリストが功績以上に報いてくださる天の御国を見据えていなければ、最後まで苦難に耐えることもできず、このような拷問に耐えることなどできなかったでしょう。　それゆえ、キリストの助けがあれば、約束された永遠の至福のために、私は大きな苦痛に耐えられないはずがないではないか。さあ、　に、キリストの助けが私にあるのを見て、私がキリストに希望を置いていることを確信せよ。御手の保護の下にある私は、お前の拷問を恐れることもなく、苦しむことさえもない。朽ちる肉体は苦しむかもしれないが、神に確固たる決意は揺るがない。

そこで、サヴィン総督は、殉教者を鉄の床に寝かせ、その下に小枝や藁に火をつけるよう命じた。この拷問さえも耐え抜いたのを見て、総督は驚き、こう言った。

「キリスト教徒のあなた方、一体どこからそのような無慈悲さが生まれるのか？　自分自身に対してこれほど無慈悲であるあなたがたが、誰を憐れむことができるというのか。自分自身に優しくもないあなたがたが、誰に優しくできるというのか？」

聖テオドトスは答えた。

「あなたは真の人愛を知らず、慈悲について語っている。もしあなたが私を死刑に処し、この世の命から解き放ち、天の御国へ送り出してくれるなら、私はあなたに感謝するだろう。あなたは私を高めようとしているのだ。なぜなら、私を苦しめれば苦しめるほど、私のために用意される報いは大きくなるからだ。」　もし本当に私に慈悲を示したいのなら、苦しみによってこの世の生活から私

を解き放ってほしい。　この世での私の苦しみを倍増させてください。それらは、あの世で私の義の冠に加わるでしょう。私を死に至るまで苦しめてください。そうすれば、私は完全な修道者として、私の模範であるキリストのもとへ旅立ち、すべての天使たちが喜びと歓喜をもって私を迎えてくれるでしょう。

総督は言った。

「最も苛烈な苦しみを生み出し、あなたを完全な修道者にしよう。」

すると、キリストの殉教者は答えた。

「ああ、もしあなたが、私が希望を寄せる私の神の慈悲を知っていたなら、この束の間の苦しみによって、私は神のもとで永遠の命に与かるにふさわしい者とされるのだと！」　あなた自身も、私が苦しんでいるように苦しみたいと願うはずだが、あなたがたが崇める悪魔たちがあなたがたの心を頑なにしてしまったため、死後の希望などないのだ。それゆえ、あなたがたは世俗の虚栄に溺れ、永遠のものよりも一時的で儚いものを好んでいるのだ。

この言葉を聞いて、総督は驚きながら言った。

「君については、素朴な人だと聞いていたが、君が偉大な賢者であることがわかった！」

聖テオドトスは答えた。

「もし私の中でキリストが語っておられるのなら、どのような雄弁家も私に敵うはずがありません。私が素朴な人間であるというのは真実ですが、私を助けてくださる私のキリストの恵みが、私に語ることを教え、苦しみの中でも私を強め、私の苦しみを和らげてくださるのです。」

「テオドトよ、お前を容赦はしない」と総督は言った。

「好きにしろ、私は覚悟はできている」と聖人は答えた。

すると、サヴィンは兵士たちに、彼の足に釘を打ち込み、歩かせるよう命じた。そして、釘を打ち込まれている間、彼は両手を天に向けてこう言った。

「わが主イエス・キリストよ、感謝いたします。私のような不適格な者に、御自身の受難に与ることを許してくださったことを。この見捨てられた私に、どうしてこれほど大きな恵みが与えられるのでしょうか――まるで、私はすでに天にいるかのようです！　わが救い主よ、感謝いたします。あなたは私の魂を迫害者たちから救い出してくださったからです。　主キリストよ、私のこの肉体に御名が栄えありますように！神の子よ！あなたは私の命であり、あなたのために死ぬことは、私にとって得るべきものなのです！御名のために苦しむ者たちをあなたに委ねます。どうか彼らの助け手となってください。この嵐を鎮め、あなたの聖なる教会に立ち向かう者たちを散らしてください。そうして、人々が永遠に平和のうちにあなたを賛美することができますように！

また、彼を取り囲むキリスト教徒たちに向かってこう言った。

「兄弟たちよ！　私の闘いは終わりを迎え、イエス・キリストが私に授けてくださる、私の義の証である冠が近づいている。主は私のために十字架にかかられ、私は主のためにこの身を苦しみへと捧げた。主は私を朽ち果てるものから救うために私のために死なれ、私は主の御国にふさわしくなるために主のために死ぬ。ああ、キリストの偉大なる恵みよ！　主のために受けたこの短き苦しみに対し、主は功績を超えて、永遠にして言い表せない至福をもって報いてくださる。*「今、私たちが受けている一時的な苦しみは、私たちの中に現される栄光に比べれば、何でもないのです」*（ローマ8:18）。

そう語りながら、彼は兵士たちに引きずられ、釘を打たれた足を引きずって歩いた。彼の忍耐ぶりを見、蜜のように甘い言葉を耳にした多くの異教徒たちは、キリストを信じ、卑しい偶像を嘲り、迫害者を非難し、キリストの御名を賛美した。　このことを知ったサヴィンは、民衆が（彼が言うところの）魔術的な教えに惑わされないよう、聖人を再び牢獄に投獄するよう命じ、その後、顧問たちと相談して、どのような死に方でこの聖なる殉教者を滅ぼすべきか考え始めた。　しばらくすると

、殉教者の傷は化膿し始め、訪ねてくる敬虔なキリスト教徒たちは、清らかな布でそのかさぶたを拭き取った。

やがて、コンスタンティヌス大帝がすべてのキリスト教徒に信仰の自由を認めた際、迫害を中止し、キリストのために投獄されていた者たちをすべて釈放せよという勅令が下された。　聖テオドトスは、自分が解放されるという話を聞き、大いに悲しんだ。彼はキリストのために苦しみの中で死にたいと願っていたからである。解放後、彼は故郷のキリニアへと向かい、二年間司教の座に就いた後、主のもとで安らかに息を引き取り、キリスト・主から聖職と殉教の二重の冠を授かった。　御自身の献身者たちを永遠の栄光で冠してくださる方から、聖なる司祭殉教者テオドトスの祈りと、我らの主イエス・キリストの恵みによって、私たちもその栄光に与ることができますように。主には、父と聖霊と共に、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第3調：

あなたは迷信の海を糾弾し、正統信仰によって偶像崇拝の不敬虔な諂いを打ち砕き、神聖な全焼の犠牲となり、奇跡によって地の果てまで恵みを注いでおられます。聖なる父テオドトよ、キリスト・神に、私たちに偉大な憐れみをお与えくださるよう祈ってください。

聖殉教者エウファリアの記念日

記念日：3月2日

聖エウファリアは3世紀に生き、シチリアの出身でした。彼女の母は異教徒であり、出血の病に苦しんでいました。ある夜、聖殉教者アルフィウス、フィラデルフ、キプリン（彼らの記念日は5月10日）が夢に現れ、キリストを信じるならば癒やされると告げました。　彼女は洗礼を受け、癒やされました。その後、娘にも洗礼を授けました。このことを知った息子のセルミリアンは、母を殺そうとし、妹のエウファリアを激しく殴打し、召使いに手渡して辱めさせました。聖女エウファリアは祈りによってその召使いの目を失明させましたが、自身は兄の剣によって斬り殺されました。

我らの聖なる父アルセニウス、トヴェリ司教の生涯[2166]

記念日：3月2日

聖アルセニイは、トヴェリの町で、敬虔で高貴かつ裕福な両親の間に生まれた。彼の生年も両親の名前も不明である。神に息子を授かるよう祈り求めた両親は、何よりもまず、その心に神への畏れを植え付けることに心を砕いた。しばらくして、彼らは少年を文字を学ぶために学校へ通わせた。神の御加護により、彼はすぐに目覚ましい進歩を見せ、同年代の誰よりも優れた成績を収めました。アルセニイは若かったものの、この世のあらゆる恵みがはかないものであり、つかの間であることをよく理解していました。彼はただ、神に喜ばれ、自らの魂を救うことだけを思い、それに心を砕いていました。　しばらくして、聖人の両親は他界した。彼らは臨終の際、息子に聖く、神に喜ばれるように生き、主の戒めを堅く守り、キリスト教の信仰を貫くよう遺言し、全財産を彼に遺した。両親の葬儀を執り行った後、聖人は自らの魂の救いについて、これまで以上に深く考えるようになった。彼はこう考えた。

2166　聖アルセニオスの古伝は、15世紀末に修道士テオドシオスによって記された。聖人の奇跡については、16世紀後半および17世紀に記述されている。

「私はこの地上において、ただの一過客であり、旅人であることを知っている。　この世での人生は短く儚いものだが、来世は永遠である。両親は私に多大な財産を残してくれたが、私の魂はそれを喜んではいない。なぜなら、聖書にはこう記されているからだ。*「人が全世界を獲ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか。また、人は自分の魂と引き換えに、どんな代価を払うことができようか。」*（マタイ16:26）

このように考えを巡らせた彼は、自分の財産を貧しい人々に分け与え始めた。裸の人々に衣服を与え、病人を訪ね、未亡人や孤児を助け、不当な扱いを受けた人々のために立ち上がった。　しかし、人類の嫉妬深い者は、聖アルセニオスの敬虔な生活を見て、彼に対して攻撃を仕掛けた。彼は、ある親族たちに、　という若者が、両親の財産を惜しみなく配るのは良くないことだという考えを植え付けた。聖人の親族たちは、彼に結婚するよう勧めたり、あるいは彼を罵倒し、非難したりして、こう言った。

「ほら、この聖人ぶった奴が、実家を丸ごと破産させ、何もしないで人生を浪費しているではないか。」

しかし、そのような言葉も敬虔な若者を動揺させることはなかった。主は彼に、かつて聖アントニオスと聖テオドシオスが修行に励み、その徳によって輝きを放ったペチェール修道院へ向かうよう、思いを抱かせたのである。　すべての奴隷を解放し、自分の財産を貧しい人々に施した後、この若き修行者は密かに故郷の町を離れ、夢の中で聞いた声が彼を招くキエフ・ペチェルスカ修道院へと向かった。修道院に到着すると、聖人は修道院長の前でひざまずき、こう懇願した。

「父よ、私を憐れんでください。この罪人を憐れんでください。この聖なる修道院から私を追い出さないでください。キリストでさえ、悔い改める罪人を拒まないことを思い出してください。」

聖人はペチェルスクの修道院長にそう熱心に懇願した。修道院長は驚き、彼に尋ねた。

「なぜ、わが子よ、あなたは自分の罪をそれほど深く悔いているのですか。あなたはまだ若いではありませんか？」

「私は大いなる罪人です」と聖アルセニイは答えた。「たとえたった一日しか生きていなくても、罪を犯さない人間などいないからです。父よ、私を憐れんでください。そして、この聖なる修道院から追い出さないでください。」　私もいつか、キリストの恐るべき審判の座に立たなければならないことを知っています――その時、偏見のない審判者に対して、私はどのような答えを差し出せばよいのでしょうか？

修道院長は若者の答えに驚いた。彼は霊的な目で、その若者に特別な神の恵みが宿っていることを見抜いた。しかし、アルセニイがまだ若いことを見て、ペチェルスクの修道院長は彼にこう言った。

「修道生活は厳しいもので、多くの苦難と悲しみがある。これほど若い年齢で、修道者のあらゆる試練に耐えるのは容易ではないだろう。しかし、主は人々の救いのために多くの道を示しておられる。もっと容易な別の道を選びなさい。」

「私は修道生活の労苦を恐れません」と聖人は答えた。「それらは私にとって甘美で、喜びに満ちたものです。ただ一つお願いがあります。私をこの聖なる修道院の最下級の僕にしてください。そうすれば、私は感謝の心を込めてすべてを全ういたします。　神が私の守護者となり、あなたの聖なる祈りが私を助けてくださいますように。私は聖書の言葉をしっかりと覚えています。*『鋤に手をかけ、後ろを振り返る者は、神の御国にふさわしくない』*（ルカ9:62）。どうか私を受け入れてください、父上。

その若者の敬虔さに感銘を受けた修道院長は、アルセニイを修道院に受け入れ、修道服を授けた。新入りの修道士は、霊的な修行に熟達した徳高い長老の指導下に置かれた。

多くの修行者たちが、まるで輝く星のように、キエフ・ペチェールシク修道院にのみ輝いていた。　彼らは敬虔な若者に良き手本を示した。ある者は揺るぎない信仰で際立ち、ある者は唯一の主にあらゆる希望を託し、ある者は沈黙と従順に励み、またある者は自らの肉欲と勝利の戦いを繰り広げ、それを霊に服従させた。　聖アルセニイは、こうした敬虔な行いを目の当たりにし、その一つ一つを模範として、いかなる善き手本も取り残さないよう努めた。　彼は最も深い謙遜をもって、修道院長や他の修道士たちのあらゆる命令に従い、絶え間なく働き、神への礼拝を一度も欠かさず、ごく質素な食事で満足し、ほんのわずかな時間だけ眠りに身を委ねた。

ペチェールスク修道院では、すべての修道士が、最も低い段階からより高い段階へと、従順のすべての段階を経ることが慣例となっていた。他の者たちと同様に、聖アルセニイもまたすべての従順の務めを遂行し、それらを並々ならぬ熱意をもってこなしていった。　昼夜を問わず働き、一時間たりとも手を休めることはなかった。兄弟たちのための食事を用意し、薪を割り、水を運んだ。彼から不平や怠惰な言葉を聞いた者は誰もいなかった。彼は美徳をこれほどまでに身につけていたため、修道院のどの修道士よりも高みにあった。兄弟たちは、彼の熱心な働きと悪意のなさに驚嘆した。

当時、キエフには聖キプリアン――後のモスクワの聖主教――が住んでいた[2167]。アルセニイが鋭い知性を持ち、徳において秀でているのを見て、彼はこの若い修道士を身近に引き寄せ、愛し、頻繁に彼と語り合い、神の戒めについて教え導いた。　そして、聖人がモスクワ都主教座に就いた際も、聖アルセニイと別れることを望まなかった。聖都主教は彼をモスクワへ連れ出し、　彼を大助祭に任命し、文書管理を任せた[2168]。当初、聖アルセニイは自分に重荷を課さないでほしいと願い、静寂の中で祈り、徳を磨きたいと語った。しかしその後、聖師に説得され、承諾した――ただ、聖職のより高い位には就かせないでほしいとだけ頼んだ。

その間、至福のアルセニイの故郷であるトヴェリでは、混乱が生じていた。トヴェリの司教エウフィミイ[2169]は、自身の信徒たちに少なからぬ動揺をもたらした。頑なな性格で知られ、世俗の事柄に首を突っ込み、キリスト教徒としての謙虚さを欠き、大きな高慢と虚栄心にあふれた傲慢さを際立たせていた。　その振る舞いにより、司教は公爵やボヤールだけでなく、聖職者、修道士、そして一般の信徒までもを敵に回してしまった。トヴェリ公ミハイル・アレクサンドロヴィチ[2170]は、不和が深まるのを見て、モスクワに使節団を派遣し、この件を裁くようキプリアン都主教を招いた。　聖キプリアン都主教は、ギリシャ人のミハイルとニカンドルの両都主教、ペルミの聖ステファノ司教、スモレンスクのミハイル司教を伴い、聖アルセニイや多くのアルヒマンドリト、イグメノンを率いてトヴェリへと向かった。　聖なる使節団がトヴェリに近づくと、ミハイル公自らが大勢の民衆を率いて出迎え、到着した一行を丁重にもてなした。　キプリアンと他の司祭たちが街に到着するやいなや、直ちに「尊き栄光ある変容」の名を冠する教会へと向かい、そこでまず祈祷会を執り行い、続いて神聖な聖体礼儀を捧げ、全員に祝福を与えた。

四日後、大主教は聖公会全体と共に、トヴェリ司教の件を審理した。エウフィミイは当初、弁明を試みた。しかし、聖公会の司祭たちは彼の不正な行いを糾弾し、彼を聖職から追放して、モスクワのチュドフ修道院へ幽閉した。

トヴェリでは、聖アルセニイの徳高い生活について、かねてより知られていた。そこで、ミハイル公はミトロポリットに対し、彼を自身の都市の司教に任命するよう懇願した。

[2167] 聖キプリアンは、1375年12月2日にキエフおよび全ルーシの総主教に任命された。彼は翌1376年にキエフに到着し、1381年5月にモスクワの主教座に就任するまで、ここで暮らした。

[2168] 言い換えれば、キプリアン大主教

[2169] エウフィミイ（通称ヴィスレン）は、1374年3月9日にトヴェリの司教に任命された。

[2170] ミハイル・アレクサンドロヴィチは、1339年から1399年までトヴェリ大公であった。死を前に、彼はマタイという名で修道者となった。

「アルセニイなら、わが街に平和と静けさをもたらしてくれると思います」と、公は都主教に語った。「これほど徳高く、ふさわしい人物は他に知りません。それに、彼はこの地で生まれました。私だけでなく、多くの市民も彼と、その敬虔な両親のことを知っています。」

キプリアン大主教は公爵の意向を承認し、アルセニウスを呼び寄せた。聖人が公爵の願いを耳にしたとき、彼は断固として拒んだ。

「お許しください、諸君。私は罪深い者であり、そのような聖職にふさわしくありません。主を証人として誓いますが、私はかつて、そして今も、孤独の中で自らの罪を嘆き悲しむこと以外に、他の望みを持ったことはありません。それゆえ、以前にも司祭の聖職を辞退したのです。ましてや司教職など、考えることさえ罪深いことです。」

聖人は長い間拒み続けましたが、ついに公爵と大司教は彼にこう言いました：

「もし我々の意志に従うことを拒むならば、我々聖公会には、あなたに禁制を課す権限がある。」

聖アルセニイはこれ以上抵抗することをやめ、同意した。こうして彼は司教に選出された（1390年7月24日）が、統治という重荷を恐れ、エウフィミイ司教の追放後もトゥーリで収まっていなかった不和や反乱を恐れ、心の底から一人きりで修業に励みたいと願っていた。 そのため、しばらくして、聖アルセニイは再びキプリアン都主教に対し、この重すぎる負担を取り除いてほしいと懇願した。 しかし、大主教は彼を励まし、再び説得した。これに神の摂理を見出したアルセニイは、大主教の意志に従い、1390年8月15日、トヴェリの司教として叙階された。

大牧者の座に就いた聖アルセニイは、何よりもまず、自身の霊的群れの中に平和と調和を確立し、反乱を根絶することに尽力した。 彼は熱心に神の御言葉を説き、聖アルセニイは、彼のもとを訪れるすべての人を、子を愛する父のように教え導き、神の聖堂では、思いやりのある羊飼いのように、自分の羊の群れを戒めた。 彼は常に預言者エゼキエルの言葉を心に留めていた。*「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとして立てた。あなたはわたしの口から語られる言葉を聞き、わたしに代わって彼らに告げ知らせるのだ」*（エゼキエル33:7）。こうして聖人はすべての人を教え導き、その言葉によってすべての人を惹きつけた。 トヴェリの市民たちは、この教訓に富んだ牧師の言葉を聞くことに、大きな熱意を注いでいた。聖アルセニイは、自らの生活そのもので皆に良き手本を示していた。主教の座に就くと、彼はさらに厳格で質素な生活を送るようになり、肉体を霊に完全に従わせた。誰もが、彼の清らかな生活と絶え間ない祈りに驚嘆した。 自分自身には厳しかったが、他人には穏やかに接し、貧しい人々には慈悲深かった。迫害されている人々を守り、貧しい人々に衣服や食料を配り、奴隷や捕虜を買い戻した。彼の徳高い生活の名声は遠くまで広まり、多くの人々が遠くから訪れ、彼の祈りと祝福を求めた。

その善き生涯により、聖人は主から奇跡を行う賜物を受けました。多くの人々が彼のもとに集まり、何らかの病に苦しむ者は皆、聖人に助けを求め、神の御慈悲により、彼は様々な癒やしをもたらしました。 ある病人には手を置き、ある人には祈りを捧げ、またある人には祝福を与え、聖水をかけてあげたり、聖油を塗ったりしました——彼は主への熱心な祈りによって、すべての人を癒やしたのです。

トヴェリに滞在していた聖アルセニイは、自身が修道生活を開始したペチェールスクの修道院を忘れず、その尊者である創設者たち——アントニイとフェオドシイ——の生涯を常に心に留めていた。 聖人は、ペチェルスク修道院を彷彿とさせる自らの修道院を設立することを考え、そこに自身の遺体が安置されることを望んだ。聖アルセニイは、その意図をトヴェリ公に伝えた。 公爵は聖人の善意を称え、修道院の建設期間中は自ら支援し、その維持に必要な土地を提供することを約束した。そこで聖人は、トヴェリ市から4ヴェルスタ離れたティマク川沿いに、自分が大変気に入った一箇所を選んだ。その場所はジェルトキヴォと呼ばれていた。 神の祝福を祈り、聖人はここで、自身の偉大な師であるペチェルスクの聖アントニウスと聖テオドシウスに捧げる木造の教会を建てるよう命

じた。修道室を整えると、聖人は修道士たちを集め、修道院長を任命した。これは1394年のことである。　10年後、聖人はジェルトキヴォ修道院に石造りの教会堂の礎を据え、ペチェルスク修道院のウスペンスキー教会を念頭に置きつつ、無原罪の聖母マリアとその尊厳かつ栄光ある御眠りの御名に捧げて、その教会堂を奉献した。 教会は1405年8月30日に奉献され、見事に装飾され、壁画で彩られた。トヴェリ大公は約束を果たし、修道院にいくつかの領地を寄進した。聖人は頻繁に自身の修道院を訪れ、修道士たちの労働に参加し、皆に修道生活の模範を示した。　彼は修道士たちの間で名誉や栄光を求めず、自ら築き上げた修道院において、ただ一人の謙虚な修道士でありたいと願った。その高潔な徳をもって、彼はすべての修道士たちを導き、啓発した。月が星々の間で輝くように、聖アルセニイもまた、修道院の修道士たちの間でその敬虔さによって輝いていた。　聖人は、ジェルトコフ修道院を自らの安息の地としたいと願った。彼は自らの手で、この地の白い石から自身の墓を彫り出し、別の石からその蓋を造った。　新しい修道院の修道士たちが、常にペチェールスの聖父たちの功績に感化されることを願って、聖アルセニイは、キエフ・ペチェールスの聖なる修行者たちの功績と偉大な労苦が記された古文書『ペチェールスのパテリク』を書き写すよう命じました[2171]。このことから、聖師が行動と言葉、そして教訓的な著作を通じて、自らの信徒たちを啓発し、教え導こうと努めていたことがうかがえる。彼は絶えず、聖書の言葉「*主のしもべは、誰とも争ってはならず、すべての人に対して親切で、教えることに長け、怒りを抱いてはならない*」（テモテへの手紙第二 2:24）を心に留めていた。　聖アルセニイはまさにそのような牧者であった。彼は市内およびその周辺に数多くの神の教会を建設し、さらにトヴェリにある主要な主の変容大聖堂も修復した。

トヴェリのミハイル公は、この立派な牧師を心から尊敬していた。彼は聖アルセニウスと頻繁に語り合い、その対話から少なからぬ心の恵みを受けていた。聖人の穏やかな言葉は、公の心に深く刻み込まれた。　聖人の導きのもと、大公は神の教会を建設し、慈善の行いを実践し、自身の公国における貧しい人々を助け、コンスタンティノープルへも施しを送った。死が近づいていることを感じ取った公は、修道者の道に入ることを望んだ。　聖アルセニオスは彼の善意ある決意を認め、大公に修道衣を授け、修道名としてマタイと名付けた。その直後、聖人の最後の助言を受け、修道士となった大公はこの世の生涯を閉じた。平和を愛する聖アルセニオスは、常に　で争う者たちを和解させようと努めた。　当時、諸公爵の間で争いが頻繁に起きていたが、聖人は常に公爵たちの争いに終止符を打つよう努めた。神の御加護により、彼は1403年に、トヴェリ公ヨハン・ミハイロヴィチと、彼が侮辱した弟であるカシン公ヴァシリー・ミハイロヴィチとの和解に成功した。　しかし、しばらくして、兄弟である公爵たちの間の敵意が再び燃え上がった。そこで聖人は、恐ろしい神の怒りと永遠の裁きを警告し、1406年の「命を与える聖三位一体」の祝日に、この敵意に終止符を打った。

敵対する者たちを和解させるにあたり、聖人はすべての人に対して穏やかで柔和に接するよう努めた。誰に対しても侮辱を許さず、彼の元を訪れる者は皆、保護と避難所を見出した。　聖人は孤児や未亡人の守護者であり、貧者や困窮者に愛情を込めて接し、衰弱した者を励まし、すべての人に良き助言や金銭、あるいは父のような教えをもって助けを与えた。

天の羊飼いであるキリストに倣い、彼は常に自分の群れの中で道に迷った羊たちの世話をし、彼らを悔い改めの囲いへと導いた。

[2171] 「パテリク」という言葉は「聖父録」、すなわち聖父たちに関する書物を意味する。『パテリク』は、修道者たちに関する短い物語や彼らの格言を集めたものである。　聖アルセニイの命により編纂された『ペチェールスク・パテリク』には、聖ネストルによって書かれた聖テオドシオス・ペチェールスクの『聖人伝』、ペチェールスク修道院の創設に関する年代記の記述、　ウラジーミル司教シモンとペチェルスクの修道士ポリカルプによる、ペチェルスクの修道士たちに関する伝承集。

聖キプリアンは、聖アルセニウスをモスクワに呼び寄せ、公会議の協議に参加させたことが度々あった。

聖アルセニオスの安らかな死は、1409年の大斎の後に訪れた。総会が行われる日曜日、トヴェリ教区の聖職者たちは、恒例の年次総会[2172]のためにトヴェリに集まった。 日曜日、彼らは司教を歓迎した。火曜日、聖アルセニイは牧師たちに向けて説教を行い、牧会活動について指導し、諸事を裁定した。同日、彼は集まった牧師たちを祝福し、彼らに別れを告げて総会を閉会した。 第2週の木曜日、聖人は重病に陥り、言葉を失った。金曜日（3月1日）の朝、大公イオアン・ミハイロヴィチ[2173]が修道士やボヤールたちを伴って聖人の元を訪れた。彼はアルヒマンドリト、イグメノ、司祭たちを召集し、病床の聖人に対して終油の秘蹟を執り行うよう命じた。 病床の傍らには、司教からの最後の言葉を聞きたいと願う十人の修道士たちが座っていた。しかし、聖人は沈黙を守っていた。その翌夜、聖アルセニイは息を引き取った。19年7ヶ月にわたり、彼は神から託された言葉の群れを、並々ならぬ熱意をもって牧会し続けたのである。 義人である聖人の死を聞き、イオアン・ミハイロヴィチ公は多くの民衆を率いてその聖遺物の元を訪れた。皆が悲しみに暮れ、涙を流しながら言った。「我らの太陽は沈み、我らは良き羊飼いであり父である方を失ってしまった」。

翌日、聖アルセニイの聖遺体は司教邸から大聖堂へと運ばれ、そこでトヴェリの市民たちは自らの牧者に別れを告げ、その後、ジェルティコヴォ修道院の、聖母被昇天教会（「手造りなき聖像」に捧げられた）の右側小聖堂の玄関に、まさに聖人が自らの手で造ったあの石の墓に埋葬された。

彼の埋葬の際には、多くの病人が集まった。彼らは聖人に癒やしを願い、その病の苦しみから解放された。これが聖アルセニイの生涯であり、その至福の最期であった。今や彼は天使たちと共に主の御座の前に立ち、至聖なる三位一体――父、子、聖霊――を賛美している。

聖アルセニイの死後も、市民たちは彼の記憶を称え続けることをやめなかった。彼の棺から起こる奇跡を目の当たりにし、敬虔なトヴェリの住民たちは祈りの中で聖アルセニイを呼び求め、苦難の中で助けと執り成しを受けた。 彼の帰天から74年が経過した1483年、トヴェリのヴァッシアン司教[2174]は、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチの命により、その聖遺骨を掘り起こそうと決意した。 大勢の民衆を集めて大聖堂を執り行った後、彼はジェルトコフ修道院へと向かった。神の御心にかなった聖人の遺骨が安置されていた棺は、地中から掘り出され、大聖堂へと運び込まれた。蓋が開けられると、教会全体が芳香に包まれた。 聖アルセニイの聖遺体は腐敗の兆しすら見せず、聖衣さえも完全に無傷のままだった。そこで司教は棺に再び蓋をするよう命じ、聖人の肖像画（それは現在も無傷で残っている）を描かせ、参拝者たちが拝むことができるよう棺のそばに安置した。棺の上には、奇跡を行う聖人の姿が描かれた覆いがかけられた。 ヴァッシアン司教の祝福により、聖アルセニウスのための礼拝式も制定された。こうして、ジェルティコヴォ修道院において、彼を称える地元の祝祭日が定められた。それ以来、彼の棺の前では、さらに な奇跡が起こるようになった。トヴェリにおける聖アルセニウスの地元の祝祭日は、1547年のモスクワ公会議によって定められた。

聖アルセニウスの奇跡の中でも、最も注目すべき顕著な出来事は1566年に起こった。当時、トヴェリにはテレンティイという名の漁師が住んでいた。彼は当初、聖アルセニウスに対して深い信仰を抱いていたが、後に不信仰に陥り、精神を乱すようになった。 両親は、息子がここで癒やされることを願って、彼をジェルトイコフの修道院に連れて行った。しかし、彼は亡くなってしまった。二

[2172] 「集会の主日」（あるいは略して「集会」、「誠実な集会」）とは、古代において、大斎の最初の七週間の後の主日、すなわち正教の週を指すものであった。これは、この日に毎年司教のもとへ司祭たちが集まり、教区公会議を開いていたためである。

[2173] イオアン・ミハイロヴィチは、1499年から1525年までトヴェリ大公であった。死を前に、イオヴァという名で修道士としての剃髪を受けた。

[2174] ヴァッシアン司教（俗名はストリギン＝オボレンスキー公）は、1477年から1508年までトヴェリ教区を統治した。

日後、彼の遺体は聖なる遺骨が安置されていた聖母マリア大聖堂に運ばれた。両親は深く嘆き、聖人に対してさえこう不平を漏らした。

「私たちはあなたから慈悲を授かることを望んでいたのに、息子は死んでしまった。あなたへの熱意は消えつつあり、私たちの信仰も薄れつつある。」

主は、御自身の御心に適う者に対するそのような非難の言葉を決して許されなかった。福音書の朗読の最中、死者は突然起き上がり、自らの罪を嘆き悲しんで激しく泣き出した。テレントイの両親もまた、聖人に対する不平を口にしたことを悔い改めた。

当時、トヴェリの司教であったアカキー（[2175] ）は、義にかなった敬虔な人物であり、自ら復活した者を見届け、その出来事の真実性を確認した。

1606年、ロシアの地がポーランド人とリトアニア人の侵攻に苦しんでいた頃、敵は武力によってロシア国家の多くの地域を荒廃させ、その中にはトヴェリの修道院も含まれていた。 敵はジェルティコヴァ修道院も容赦しなかった。彼らは多くの財宝が見つかるだろうと期待して、修道院に押し入った。しかし、修道士たちは事前に修道院の財宝を隠し、自らもトヴェリへと避難していた。聖人の遺骸の上には、聖人の姿が描かれた金糸で刺繍された覆いだけが残されていた。 修道院で何も見つけられなかった敵たちは、期待を大きく裏切られた。敵の一人は、不運を悔やみながら、聖人の遺骨から覆いを取り上げ、自分の馬の上に載せた。 しかし、彼が馬にまたがった途端、突如として未知の力によって馬と騎手は空中に持ち上げられ、その後地面に叩きつけられた。激しい衝撃で二人は死亡したが、覆いは不思議なことにウスペンスキー大聖堂の屋根へと舞い上がった。この覆いは現在も修道院に保存されている。

1637年、修道院では新しい石造りの大聖堂が建設されていた。そのため、聖人の遺骨は一時的に、ペチェルスクの聖アントニウスと聖テオドシウスの木造教会に移されていた。修道士の一人、ヘルモゲンという名の者が、夕べの礼拝の後、酔っ払った状態で教会に入り、聖人の遺骨のすぐそばで眠り込んでしまった。 夜中に目を覚ますと、彼は驚くべき幻影に打ちのめされた。教会は明るく照らされており、聖アルセニイは身を起こして、自身の石造りの墓の上に座っていた。恐怖に襲われたゲルモゲンは逃げ出そうとした。しかし、聖アルセニイは彼を一瞥すると、威圧的な口調でこう言った。

「なぜ、この厚かましい者よ、酔っ払ったまま神の聖堂に入ったのか？」

ヘルモゲンは死んだように倒れ込んだ。彼は長い間その場に横たわっていたが、やがて我に返り、内側から施錠されていた北側の扉から、大変な苦労の末に教会を出た。 その後、彼は長い間病に伏していた。しかし、聖人はただこの愚かな者を諭し、悪癖から救い出そうとしていたのだ。ヘルモゲネスが皆の前で心から自分の罪を告白し、聖人に許しを請うと、聖アルセニオスの聖遺物の前で、彼は病から癒やされた。

神に愛されたこの聖人は、苦しむ人々にしばしば驚くべき助けを示し、その祈りによって病人は癒やされた。数ある奇跡の中から、次の出来事を挙げておこう。

トヴェリには、司祭ヴァシリーの息子である少年ゲラシムが住んでいた。ゲラシムの結婚祝いの宴で、彼は毒草が混ざったワインを飲まされた。彼は重病に陥り、すでに死を覚悟していた。 苦しみの中、ゲラシムは無償の癒し手である聖アルセニウスに助けを求め、その記念日（3月2日）に聖遺物の前に参拝し、熱心に祈りを捧げたところ、神の御使いは驚くべき方法で病める少年を癒やした。

それから何年も経ち、ゲラシムは聖職者となり、モスクワに移り住んだ。彼の家には、長い間目の病に苦しんでいた姪のダリアが暮らしていた。時が経つにつれて病状はますます悪化し、ダリアは夜も眠れず、絶えずうめき声を上げていた。 彼女は光を見ることもできませんでした。ついに、

[2175] アカキイ司教は、1522年から1567年までトヴェリ教区を統括した。

聖アルセニウスの記念日に、その名に捧げられた教会の司祭が聖水を携えてゲラシムの家を訪れ、ダリヤの目をその聖水で洗いました。すると彼女はたちまち癒やされたのです。

ゲラシムは、姪が元気な姿でいるのを見て、大いに驚いた。以前から彼は、天の守護者に感謝の念を抱いていた。そして、この新たな御加護を目の当たりにして、ゲラシムは自宅にその聖人の礼拝式と伝記を置きたいと願った。しかし、モスクワには聖アルセニイの伝記が見つからなかった。ゲラシムの依頼に応じて、ジェルティコヴァ修道院のアルヒマンドリットは、聖人の伝記とカノンを彼に送り、読み終えたら修道院に返送するよう頼んだ。ゲラシムは急いで伝記の書き写しを始めた。しかし、彼には不幸な出来事が起こった。作業を始める前に祈りを捧げていたとき、地面に頭を下げた際、床から突き出していた釘に右目をぶつけてしまったのだ。彼はかろうじて立ち上がると、大声で叫んだ。

「おお、主よ、この罪深い私に憐れみをお与えください！」

当時、ゲラシムの家には、ジェルトコヴァ修道院の修道士イオナとテオフィロが滞在しており、彼らは聖アルセニウスの伝記を持参していた。ゲラシムの苦しみを見て、彼らは傷口から流れ出る血を拭き取りながら、ゲラシムにアルセニウスに祈るよう勧めた。　ゲラシムが聖人に癒やしを願い始めた途端、血はたちまち止まった。　その時、皆はゲラシムがまぶたと眉を傷つけていたが、神の御慈悲により目そのものは無傷のままであったことに気づいた。まもなく傷は完全に癒え、ゲラシムは感謝の念と感動に満ちた心で、その祈りによってこれほど早く癒やしを得た聖人の伝記を書き上げた。

アルヒマンドリト・サヴァティアの時代（[2176] ）に、次のような驚くべき奇跡が起こった。聖アルセニイの修道院の近くに住んでいたある農民が、自分の財宝を大切に保管しようと、森の中にそれを埋めた。しばらくして、この男は金を隠しておいた場所へ再びやって来て探し始めたが、見つけることができなかった。　農民は深い悲しみに沈み、嘆き泣き出した。彼は首を吊ろうとさえ思い、すでに木に縄を巻きつけていた。すると突然、彼の前に端正な風貌の男が現れ、こう言った。

「なぜ、子よ、お前の心の中に悪意を抱いたのか？　なぜ自分の魂を滅ぼし、永遠の苦しみへと自らを追い込もうとするのか？」

農夫は戦慄に襲われ、泣き出した。その不思議な男から、なぜそんなに悲しげに泣いているのかと問われると、農夫は、お金を隠しておいたが、見つからないのだと答えた。

その立派な男は杖で地面を叩き、こう言った。

「この場所で、お前は探しているものを見つけるだろう。」

農夫は地面を掘り返すと、自分の宝物を見つけた。これに驚いた彼は、現れた男に感謝を述べ、こう尋ねた。

「敬虔な父よ、あなたはどこから来られたのですか。お名前は？　私の救いと宝の発見に対して、お礼を申し上げたいのです！」

「私はアルセニイと申します。自らの労苦で建てた修道院に住んでいます。そこへ行き、神にふさわしい感謝を捧げなさい。」

農夫は長老の前にひざまずこうとしたが、彼は姿を消してしまった。その時、農夫は、その端正な風貌の男こそが聖アルセニイその人であったと悟った。ジェルティコヴァの修道院に着くと、彼は神とその御使いに感謝を捧げ、自分に起こったすべての出来事を語った。

1657年、聖アルセニイの聖遺骸の安置所において、新たな奇跡が起こった。当時、ジェルトコヴォ修道院にはディアクン・イオアンが住んでいた。悪魔にそそのかされた彼は、聖人の聖遺骸が安置されている教会から、銀や金の祭具を盗むことを企てた。　ある日の正午、彼は教会係に教会の鍵

[2176] サヴァティイという名のアルヒマンドリトは2人知られている。1人目は1566年に着任し、2人目は1650年に言及されている。ここでは当然、2人目のことを指す。

を借り、教会に入り、聖人の聖遺骸の棺の近くに置かれていた銀製および金製の祭具をすべて持ち去った。　貪欲に駆られた彼は、聖人の遺骨のそばから、聖人が生前に身につけていた銀製のパナギアまでも持ち去ろうとした。すると突然、未知の力によって泥棒は聖人の遺骨から遠くへ吹き飛ばされ、教会の壇に激突して意識を失ってしまった。　しばらくして、教会に入った修道士たちは、ヨハネがまるで死んだかのように教会の真ん中に横たわっているのを見つけた。何が起きたかを悟ると、彼らは彼を教会から運び出し、トヴェリの大司教イオアサフのもとへ送り[2177]、目撃したすべてを報告した。　一方、ヨハネ自身は何も話すことができなかった。言葉を失い、全身が脱力していたのである。司教の命により、脱力した助祭は再び修道院へ運ばれ、その後、教会へ連れ戻された。徐々に彼は意識を取り戻し始め、ついに悔い改め、完全に回復した。

この栄光ある聖人であり、キリストの羊の群れの牧者である方の聖遺物からは、私たちの主イエス・キリストの恵みにより、他にも多くの奇跡が起こった。[2178]。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

トロパリオ、第8調:

聖職者として敬虔に生き、その教えによって人々を啓蒙し、至聖なる御母の聖堂のために大いに尽力し、修道士たちを愛したゆえに、キリストよりあなたの羊の群れへの冠を授かった。　それゆえ、使徒の座の代理者であり、偉大なる聖人としてあなたを崇め、祈ります。あなたの子供たちよ、至福なる方よ、あなたの祈りによって、私たちをあらゆる苦難から救い、キリストのもとへ導いてください。キリストの聖人アルセニオスよ、私たちの父よ。

コンダク、第8調:

あなたの尊い聖遺骨を喜びをもって受け入れた、至清き教会よ。そこへ、多くの聖職者や敬虔な君主たちによって、尊く運ばれ、貴重な宝物として受け入れられた。　それゆえ、今、あなたの言葉の囲いの中にいる羊である私たちも、あなたの聖遺物の周囲に立ち、心からあなたに叫びます。「父よ、あなたが知恵をもって集め、愛してくださったあなたの子供たちを忘れないでください。そうして、私たちはあなたにこう呼びかけます。『喜びなさい、聖者アルセニオよ、私たちの牧者であり、教師である方よ。』」

3月16日

3月3日（旧暦）

同日、この世で安らかに息を引き取った聖ジノンと聖ゾイラを記念する。

同日、エジプトの地に生き、透視の賜物を持っていた聖女ピアマの記念日。337年に逝去。

[2177] イオアサフ大司教は、1657年から1676年までトヴェリ教区を統括した。

[2178] 聖アルセニイの聖遺骨は、彼自身の手で彫り出された白い石の墓に安置されていたが、1655年にニコーン総主教の時代に、聖フィリッポの聖遺骨箱に移され、この祝日に合わせて礼拝式が制定された。　1734年、トヴェリの市民であるイワンとマクシム・ヤンコフスキー、そしてヴァシリー・ヴォルチャニノフは、この奇跡を行う聖人の聖遺物のために銀製の聖遺物箱を製作し、聖遺物は現在に至るまでそこに安置されている。

聖殉教者エウトロピオス、クレオニコス、ヴァシリスコスの殉教。

3月3日の記念日

聖大殉教者テオドロス・ティロンの殉教の後、牢獄には、キリストのために投獄された彼の同志であり親しい友人であるエウトロピオス、クレオニコス、そしてその甥のヴァシリスクが残された。聖テオドロスを拷問した都市の統治者プブリウスは、すでに神の怒りに打たれて死んでいた。　その後任として、フリギア出身の、残酷で不敬虔な人物、アスクレピオドトという者が任命された。彼はキリスト教徒たちに多くの悪行を加えた。というのも、皇帝マクシミアヌスから[2179]、キリスト教徒に偶像への生贄を強要し、従わない者を残酷な拷問で滅ぼす権限を与えられていたからである。

ある日、彼は顧問たちと共に法廷で審理を行っていた際、書記官エウラシオスを呼び寄せ、過去の裁判記録を読み上げるよう命じた。エウラシオスがテオドロス・ティロンの苦難について読み上げると、皆はその聖なる殉教者の忍耐力に感嘆したが、総督はこう尋ねた。

「書物に記されているテオドロスの友人たちは、どこにいるのか？」

エウラシウスは答えた。

「彼らは他の囚人たちと共に牢獄に収容されています。」

ティロンによって焼き払われた、彼らの邪悪な女神ユノー――「神々の母」と呼ばれる――の神殿を目の当たりにした統治者は、獅子のように咆哮し、直ちに兵士たちを牢獄へ送り込み、聖なる殉教者エウトロピオス、クレオニコス、ヴァシリスコスを自分の元へ連行するよう命じた。

エウトロピウスとクレオニクスは実の兄弟で、カッパドキア出身であった。一方、ヴァシリスクは聖テオドロスの甥であり、アマシアで生まれたが、三人は互いに深い愛情を抱いていたため、互いを兄弟と呼び合っていた。

牢獄に着くと、兵士たちは看守にこう言った。

「テオドロスの友人たちを我々に引き渡せ。」

すると、看守は聖人たちのところへ入り、こう言った。

「立ち上がれ！　あなたがたが昼夜を問わず待ち焦がれていた時が来た。総督が呼び出している。だが、お願いだ。祈りの際に、私をも覚えておいてほしい。」

看守がそう言ったのは、彼らが昼夜を問わず祈りを捧げている姿や、彼らに起こった奇跡――彼らの間に異様な光が輝き、牢獄の扉が何度も自ずと開いた――を目撃していたからである。それゆえ、彼は主が彼らと共にいると信じるようになったのである。　総督の呼びかけに、聖人たちは喜びをもって応じたが、残された囚人たちは、聖なる殉教者たちとの親しい交わりを失うことを嘆いた。その時、聖エウトロピオスは彼らにこう言った。

「泣かないでください、友よ。私たちはまた会えるのですから。ただ、私たちの主イエス・キリストに祈ってください。主が私たちに、主のために苦しみと死を授けてくださり、悪魔的な異教が終焉を迎え、全宇宙が神の恵みで満たされるようにと。」

このような言葉で囚人たちを慰めた後、聖人たちは兵士たちと共に外へ出た。聖エウトロピオスはこう歌った。*「兄弟たちが共に暮らすことは、なんと良く、なんと楽しいことか！」*（詩編132:1）

すると、天から声が響いた。

「あなたがた全員がテオドロスのもとへ行き、神の光の中に生きる総主教たちの懐で安らぐまでは、あなたを兄弟たちから引き離すことはない。」

エウトロピオスは非常に美貌で、極めて賢明であった。聖人たちが連行され、統治者の前に立たされると、彼は彼らに尋ねた。

[2179] 285年から310年にかけてのローマ皇帝であり、ディオクレティアヌス帝の共同統治者であった。

「なぜ、長い間牢獄に閉じ込められていたにもかかわらず、あなた方の顔は陰鬱ではなく、まるで絶え間ない喜びに満ちているかのように輝いているのか？」

至福のエウトロピオスはこう答えました：

「まことに、統治者よ、私たちのキリストは、その恵みをもって私たちを訪れてくださり、常に喜びを与えてくださいます。そして、*『喜びに満ちた心は、顔を明るくする』*（箴言15:13）という聖書の言葉が、私たちに実現しているのです」

統治者は尋ねました：

– お名前は？

– 私の最初の名は――と聖人は答えた――クリスチャンですが、両親は私をエウトロピオスと名付けました。

すると、統治者は優しくこう言いました。

「君は美貌だけでなく、品行も立派なようだ。きっと、とっくの昔からこのような賢者になっていたのでしょう。」

聖人は答えた。

「霊的な知恵は、私の主イエス・キリストから学びました。主が、あなたの質問に賢明に答えられるよう助けてくださることを、私は主への希望を託しています。」

統治者は言った。

「よく聞け、エウトロピウスよ。そして、お前の兄弟たちに、王の命令に従い、神々に犠牲を捧げるよう説得せよ。そうすれば、私は王たちに君のことを報告し、王たちは君をこの国の総督に任命し、君を公爵として敬い、莫大な富を授けるだろう。　そうすれば、王たちの言葉に耳を傾け、その命令に従うことがいかに良いことか、身をもって知るだろう。もし私の言葉を信じないなら、お前の体をバラバラに切り刻み、犬や野獣の餌として投げ捨てる。お前の骨が残ったとしても、すべて火で焼き尽くし、その灰を川に投げ捨てる。　キリスト教徒たちがあなたの遺骨を集め、聖遺物として聖油を塗ってくれるなどとは、期待するな。　さあ、服従し、神々に犠牲を捧げよ。あるいは、人々の前で、服従し、犠牲を捧げたいと口にするだけでもよい。皆が君を見つめ、君の決断を待っているのだ。恥辱に満ちた残酷な拷問にさらされ、自らの名を汚すことのないよう、神々に犠牲を捧げようとする者たちを、神々から遠ざけてはならない。

これに対し、エウトロピウスは統治者にこう答えた。

「無駄口を叩くのはやめろ、悪魔の子よ、ゲヘナの相続人よ！　神の僕たちを惑わすのはやめろ、神の敵よ、朽ちることのない恵みと楽園の至福から追放され、冥界の地獄に永遠に囚われている者よ！　不適切な言葉を並べるのはやめろ、善行への道を塞ぐ者よ、不義の師であり首謀者よ！」この狡猾な誘惑者よ、もはや何と言ったらよいのか分からない！　お前は私に、この地上に残される一時的な名誉と富を約束する。しかし、それが心の病となる情欲を呼び起こし、自慢、淫行、略奪、殺人、その他の犯罪へと導くものだとすれば、私に何の益があるというのか？　かつて聖テオドロスを苦しめたプブリウス公は、その一時的な栄光と富から何の益を得たというのか？今や彼は土に埋もれ、虫に食われ、地獄の消えぬ炎の中で苦しんでいる。神の怒りは遅かれ早かれ君にも降りかかり、君もまた、不義で不敬虔な者よ、滅びるだろう。　あなたは私に、残酷な拷問や剣、火、野獣などで脅しているが、そのような脅しや苦痛で私を怯えさせ、不信仰へと追い込むなどとは期待するな。私の神であるキリストのために苦難を受けること――それが私の最大の願いである。なぜなら、キリストこそが私たちの富であり、名誉であり、力であり、栄光だからだ。　いいえ、私にも、私の兄弟たちにも、主から離れることはありません。むしろ、私たちの救い主のために苦難に遭うでしょう。私たちの命は主の御手の中にあり、主は、御名を呼び求める者を災いから救い出す、無敵の将軍です。主は、私たちをもあなたの手から救い出してくださるでしょう。

これを聞いて、総督は怒りに満ち、聖人の顔を打つよう命じ、こう言った。

「この無礼者め！　お前は神々に犠牲を捧げるためにここに呼び出されたのであって、我々を非難するためではない！」

しかし、聖人を激しく打ち始めたとき、殴る者たちの手が乾いてしまった。

総督の命令により、法廷で行われたこと、語られたことはすべて詳細に記録されていた。そして、書記たちが拷問者たちの手が乾いてしまったのを見ると、恐怖のあまり筆を置いた。しかし、群衆の中に立っていた一人のキリスト教徒が、その出来事を書き留めた。総督は殉教者にこう言い放った。

「ついに、命を救うために神々にひれ伏すのか、それとも、私がお前を死に追いやることを望むのか？」

「いいえ」と聖エウトロピオスは答えた。「私は無感覚な神々には拝みません。あなたがそのようなことをするのなら、あなた自身も無感覚なのです。しかし、私は私の神に拝し、神に賛美の歌を捧げます。」　至福のダビデはこう語り、キリストご自身が彼の口を通してこう言われている。*「彼らの偶像は、銀や金、人の手による造り物である。口はあるが語らず、目はあるが見ない」*（詩編113:12–13）。　そして、これにこう付け加えておられる。*「それらを作る者たち、そしてそれらに望みを置く者たちは、それらと同じようになれ」*（詩編113:16）。あなたは耳が聞こえず、目も見えず、私をも同じようにしようとしているのではないのか。しかし、私は私の主イエス・キリストから離れることはない。

そこで、総督は聖クレオニコスと聖ヴァシリスクスに向かって言った。

「では、あなたたちはどうするつもりか。命を救うために神々に犠牲を捧げるのか、それともエウトロピオスのように頑なに抵抗し、同じ苦しみを受けるのか？」

聖クレオニクスと聖ヴァシリスクはこう答えた。

「私たちの兄弟であり主であるエウトロピオスがイエス・キリストを信じているように、私たちも父なる神、御子、聖霊を信じています。エウトロピオスがキリストのために苦しんでいるように、私たちも苦しみたいと願っています。キリストへの聖なる信仰と互いの愛によって結ばれた私たちを、悪魔は引き離すことはできません。　三度編まれた縄が切れないように、私たち三人も強固であり、至聖なる三位一体が不可分であるように、私たちも信仰と愛によって結ばれている。さあ、さらに残酷に私たちを苦しめよ。私たちは、あなたが敵である私たちの主イエス・キリストの栄光のために、この苦しみを受け入れる。

彼らがそう言うと、総督は四人の兵士に、一人ずつ引き伸ばして、容赦なく太い縄で打ち据えるよう命じた。　聖人たちは激しく打ちのめされ、血に染まった肉片が地面に落ちた。しかし、彼らは勇敢に耐え忍び、神に祈りを捧げた。拷問は残酷だったが、神の助けにより、殉教者たちはまるで苦しみを感じていないかのようであった。聖エウトロピオスは次のように祈った。

「全能の神よ、慈愛に満ち、憐れみ深い御方よ！　主よ、私たちを見捨てないでください。あなたは義人を救い、不義な者を戒め、反抗的な者を正し、賢者を守り、愚かな者を導かれる方です。あなたは悪魔を縛り、人間を解放されました。　あなたは、束縛された者たちの助け手であり、苦しめられる者たちの守り手であり、慈愛の源であり、私たちの魂の救い主です。あなたは苦難を送り、その苦しみに耐える勇気を与えてくださいます。私たちにも、殉教の冠を得るために苦難に耐える力を与えてください。あなたのしもべテオドロスを助けたように、私たちをも助けてください。　人々に悪魔の悪意と、あなたの慈愛を示し、あなたの全能の助けによって、私たちがあなただけを私たちの王イエス・キリストとして崇め、父と聖霊と共に、永遠にあなたを賛美していることを、すべての人々に明らかにしてください。

聖クレオニクとバシリスクはこう唱えました：

「アーメン。」

すると突然、恐ろしい地震が起こり、法廷全体が揺れ動いた。疲れ果て、恐怖に駆られた処刑人たちは退き、目に見えない力によって解放された聖人たちは無傷のまま残った。そして、主が天使たちと聖テオドロスと共に彼らの前に現れた。聖エウトロピオスは主にこう語りかけた：

「わが主キリストよ、これほど早く私の祈りを聞き届けてくださったことを賛美します。私は何者なのでしょうか。どうして私の主ご自身が私のところに来られたのでしょうか？」

そして、聖クレオニコスとヴァシリスコスに対し、聖エウトロピオスはこう言った。

「ご覧なさい、ほら、私たちの王イエス・キリストが、テオドールと共に、その栄光のうちに立っておられるではありませんか？」

「はい、見えます」と彼らは答えた。

主と共にお現れになった聖テオドールは言った。

「兄弟エウトロピオよ！　あなたの祈りは聞き届けられ、救い主が永遠の至福の知らせを携えて、あなた方を助けにやって来られたのだ。」

主ご自身が彼らにこう言われた。

– あなたがたが苦しめられていた時、私はあなたがたの前に立ち、その忍耐を見守っていた。あなたがたは最初の苦難を勇敢に耐え抜いたのだから、あなたがたの功業が完了し、あなたがたの名が命の書に記されるまで、私はあなたがたの助け手となる。

この言葉を終えると、主は聖テオドロスと共に姿を消された。

一方、聖人たちを拷問していた兵士たちは、統治者にこう懇願し始めました。

「お願いです、閣下。この任務から私たちを解放してください。私たちは、この人々を拷問することなどできません。」

統治者は聖人たちを指さして言った。

「この魔術師たちは呪文を唱え、それによって兵士たちを脅かしているのだ。」

神の御姿を目撃した民衆の多くは、こう叫んだ。

「いいえ、呪文でも魔術でもありません。キリスト教の神が御自分のしもべたちを助けておられるのです。今、私たちは彼らの王であるキリストを目撃し、天使の声を聞いたのです。」

「私は何も見ていない」と統治者は言った。「声も聞こえなかった。」

聖エウトロピウスは彼にこう語りかけた。

「神の御現れを見ず、天の声を聞かなかったというのは正しい。あなたは心の目で見ることができない。それは悪魔に目をくらまされているからだ。そして、あなたにはイザヤの預言が成就している。*『彼らは耳で聞くことも難しく、目を閉ざしている』*（イザヤ6:10）。」

これを聞き、民衆が騒ぎ立てているのを見た統治者は、聖人たちを縛り上げ、牢獄へ連行するよう命じた。聖人たちがそこに入ると、囚人たちは大いに喜び、キリストの殉教者たちは次のような賛美歌を歌った。*「私たちの助けは、天と地を造られた主の名にある」*（詩編123:8）。

その日、遅くになって顧問たちと食事をしていた総督は、彼らにこう語った。

「この人たちをどうしたらいいか分からない。街中が彼らのことで騒がしい。どう思いますか？」

ある顧問が言った。

「どうか、一刻も早く彼らを処刑してください。もし処刑を遅らせれば、街全体が神々から背を向け、あの連中の後についてしまうでしょう。とりわけ、口達者なエウトロピオスにあれほど長く語らせるようなことは絶対に許してはいけません。」

「私は彼に神々を崇拝するよう、懇願も脅しも交えて説得したが、彼は神々も王も冒涜し、その非難の言葉で私をも苛立たせた。しかし、彼だけを呼び出し、懇願して説得してみよう。もし彼が私たちの言うことを聞けば、慈悲深い神々の栄光となるだろう。もし聞かなければ、彼らを死に追いやるつもりだ。」

そう言うと、彼は兵士たちを遣わして、牢獄からエウトロピウスを呼び寄せさせた。エウトロピウスが入ると、食事の席に着いていた統治者は彼にこう語りかけた。

「私が自ら、名誉をもってあなたを我らの神々の神殿へ案内し、あなたが神々に生け贄を捧げるのはどうだろうか？」

聖エウトロピウスは答えた。

「わが主なる神よ、生きておられますように！揺るぎない岩の上に築かれたキリストの信仰から背くなど、私の心には微塵もありません。」

統治者は殉教者に、彼らと共に食卓に着くよう勧めたが、彼は断った。そして、他の席に着いていた者たちも彼を説得した。

「エウトロピウスよ、私たちと一緒に座り、食べ、飲み、長官に従いなさい！」

聖人はこう答えた。

「いいえ、私はキリストのしもべとして、不義な者たちとは共に座りません。祝福された預言者ダビデがこう言っている通りです。*『不義な者の助言に従わず、悪を行う者の集まりに座らない人は、幸いである』*（詩編1:1）。 また別の箇所では、*「私は偽り者たちとは共に座らず、悪巧みをする者たちとは歩まない」*（詩編25:4）とあります。別の預言者はこう告げています。*「『彼らの間から出て、彼らから離れよ、と主は言われる。彼らの不浄な物には触れてはならない。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れる』*（イザヤ52:11）。」

統治者は言った：

「かつては善良だったはずだ、エウトロピウスよ。だが今は悪辣に見える。」

「私は悪意があるわけではありません」と聖人は答えた。「ただ、神の戒めを守っているだけです。あなたが地上の王たちの命令を果たそうと努めているのなら、私は、私が仕える天の、不死の王の命令を果たすために、さらに一層努めているのです。」

統治者は聖人を説得し続けた。

「明日、兄弟たちを伴わずに、お前一人だけで神々に生け贄を捧げよ。そうすれば、民はそれを見て、神々から離れることなく、生け贄を捧げて神々を崇めるべきだと確信するだろう。」

聖エウトロピウスはこれを拒んだ。

「不信心者よ！ 私をキリストの羊の群れを惑わす者になろうとしているのか？ いや、そんなことはあり得ない。私の主はこう言われているからだ。*『わたしを信じるこれらの小さな者たちのうち、ただ一人でも惑わす者は、その首に水車の石を懸けられ、海の深みに沈められるほうが、まだましである』*（マタイ18:6）。また別の箇所ではこう言われている。*「あなたがたは、神とマモンとに仕えることはできない」*（マタイ6:24）、*「光と闇に何の共通点があるか。神の宮と偶像に何の相容れるところがあるか」*（2コリント6:14, 16）。

これを聞いた総督は、金や様々な高価な衣服、そして150リットル[2180] の銀を持ってくるよう命じ、こう言った。

「これらすべてを、さらにはそれ以上も与えよう。ただ、明日、民に『総督に従った』と告げ、その後は好きなだけ自分の神に祈ればよい。」

「邪悪な誘惑者め！」と聖エウトロピオスは叫んだ。「いや、お前は神のしもべを誘惑することはできない！」 私は聖書の言葉をしっかりと覚えている。*「人が全世界を獲ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか。あるいは、人は自分の魂と引き換えに、どんな代価を払うだろうか。」*（マタイ16:26）。銀を愛したあなたの兄弟ユダが自分の魂を滅ぼしたように、あなたも彼と

[2180] *1リットル*（ギリシャ語：λιτρα、ラテン語：*libra*）は、ロシアの1ポンドの2/3に相当する。 したがって、150リットルの銀は100ポンドの銀に相当し、現在の銀の価格では約2200ルーブルとなる。（150リットル＝49kg117.5g――『アズブカ・ヴェラ』編集部）

共に滅びるだろう。　しかし、なぜ私たちを殺すのをためらうのか？　何ものも、私たちをキリストへの愛から引き離すことはできないと知れ。総督は彼と長く論争したが、殉教者は彼に従うどころか、ますます彼を責め立て、神々を冒涜した。すでに真夜中になり、就寝の時間となったので、総督は家来たちに言った。

「エウトロピウスを牢獄へ連行し、そこで彼とその仲間たちを縛り上げよ。どうやら、この悪人は決して改心することはなく、彼から善を期待することはできないようだ。」

立ち去る際、聖人は統治者にこう言った。

「お前は、偽りの園であり、真理の実を結ばない。まもなく滅び、火の中に投げ込まれるだろう。お前は、小麦ではなく雑草を生やす不毛の地だ！お前の魂はサタンに支配され、悪の種を蒔かれてしまったのだ。」

そう言うと、彼はその場を去った。牢獄に戻ると、聖クレオニカスと聖ヴァシリスカが熱心に祈っているのを見つけた。彼らは一晩中、彼のために祈り続けていたのだ。

翌朝、総督は国民総出で神々に犠牲を捧げたいと望み、街頭で布告役たちに叫ばせ、皆が供物を携えてアルテミスの神殿に集まるよう命じた。そこに民衆が集まり、総督が到着すると、彼の命令により、聖殉教者エウトロピオス、クレオニクス、ヴァシリスクも連行されてきた。　皆が偶像を拝み、ある者は乳香を、ある者は動物を捧げていた。

「エウトロピオスよ」と統治者は言った。「お前も仲間たちと共に神々に生け贄を捧げよ。さもないと、惨めな死を遂げることになるぞ。」

聖エウトロピオスとその仲間たちは、こう語り始めた。

「主よ、全能の神よ、永遠にして汚れなき、至聖にして不変なる、天に御住まわれ、地上で賛美される方よ！あなたは天を確立し、地をその基の上に据え、山々を造り、　の無数の星々を数え、それらすべてに名を与え、驚くべき御光を私たちの上に注いでくださいます。　かつて、あなたは三人の聖なる少年たちをバビロンの炉から救い出し、聖ダニエルを獅子の口から救い、あなたのしもべスザンナを死から解放し、聖テクラを火と野獣から守り、聖テオドールの苦難の時には彼と共にいてくださいました。　どうか私たちとも共におられ、この場所に臨んで、御力を示し、あらゆる異教の狂気を滅ぼしてください。この場所で、キリスト者たちが、真の神であるあなたに、血を流さないいけにえを捧げることができますように。あなたは、私たちの主イエス・キリストの父であられるからです。今、そして常に、そして世々限りなく、御子と聖霊に栄光がありますように。アーメン。

聖人たちがこれらの言葉を口にしたとき、雷が轟き、大地が揺れ動いたため、神殿が激しく揺さぶられ、統治者は、命を落とすことを恐れて、同席していた者たち全員と共に神殿から駆け出した。アルテミスの偶像は倒れ、粉々に砕け散った。地震の騒音の中、上空から声が響いた。

「あなたがたの祈りは聞き届けられた。この場所に、キリスト教徒の祈りの家ができるであろう。」

聖徒たちは主を喜び祝った。

地震が収まり、皆が少しずつ恐怖から立ち直ると、統治者は裁判の席に着き、聖人たちへの怒りで歯ぎしりしながら、硫黄と樹脂を持ってくるよう命じ、それらを三つの大釜で溶かし、聖人たちの体に浴びせかけるよう命じた。　総督はまた、地面に頑丈な杭を打ち込み、その間に聖人たちを裸のまま立たせ、両手を別々の杭に縛り付けて十字架にかけるよう命じた。それが実行され、釜の中の樹脂が激しく沸騰し始めたとき、聖クレオニクスは聖エウトロピウスにこう語りかけた。

「兄弟よ、主にお祈りしましょう。私たちには大きな苦難が待ち受けています。」

聖人たちは祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、私たちを助け、御力を示してください。私たちは弱き者です。この苦しみ耐え抜く力を与えてください。」

使用人たちは、硫黄と樹脂が沸騰している大釜を、鉄のトングで持ち運んできた。福者エウトロピウスは使用人たちに言った。

「主が、あなたがたの行いを、あなたがた自身に返してくださいますように。」

すると突然、神の力によって殉教者たちは杭から両手を解き放ち、自ら沸騰する大釜を手に取り、互いの背中に樹脂を注ぎかけた。彼らの体から流れ落ちた樹脂は、まるで水のように大理石の床を流れ下り、使用人たちに襲いかかり、骨の髄まで焼き尽くした。　これを見た総督は恐怖に震えたが、これをキリスト教徒の魔術の仕業だと決めつけた。彼は他の家来たちに、鉄の爪で聖人たちの肉を剥ぎ取り、傷口にマスタードと酢で溶かした塩を注ぐよう命じた。聖人たちはこれらすべてを勇敢に耐え抜いた。拷問の最中、聖エウトロピオスは総督にこう言った。

「不信心者よ、神の栄光を憎む者よ！　さらなる苦痛を考案せよ。そうすれば、我々はより大きな苦しみを通じて、より大きな栄光をもって殉教の冠を受け取ることができるのだ。」

この言葉に激怒した拷問官は、家来たちに聖人たちをさらに激しく苦しめるよう命じたが、聖人たちはこう言った。

「この極悪非道な者よ、さっさと我々を始末しなさい。我々は、お前から解放されて、我らの主イエス・キリストの御顔を見ることを切望しているのだ。」

聖人たちは長い間拷問を受け続け、日が沈む頃になってようやく、総督は彼らを再び牢獄に投げ込み、足枷をはめるよう命じた。聖人たちは牢獄の中でこう祈った。

「主なる神よ！　私たちがすべての苦しみを耐え抜き、この拷問者から解放されて、病気も、悲しみも、嘆きも、ため息もない安らかな安息の地に至るまで、私たちを見捨てないでください。」

彼らがそのように祈っていると、真夜中に主が現れて、こう言われた。

「まことに、あなたがたに告げる。あなたがたはわたしのために死を覚悟しているのだから、聖徒たちとともに、わたしから永遠の命を受けることになる。」

主の御訪れに慰められ、殉教者たちはさらに信仰を強めた。

朝になると、総督は再び裁判の席に着き、聖人たちを呼び寄せて言った。

「さて、どうするつもりだ？　神々にひれ伏して犠牲を捧げるつもりか、それとも惨めな死を遂げるつもりか？」

聖エウトロピウスはこう答えた。

「お前という、闇に覆われ、目がくらみ、感覚を失った破滅者よ、我々が、耳も口も利かない悪魔であるお前の神々に拝礼せず、彼らに犠牲を捧げないとは、我々から聞いていなかったのか！？」

これを聞いた統治者は、聖エウトロピオスとクレオニコスを磔刑に処す判決を下し、次のような布告を出した。

「魔術師たちの師であるエウトロピウスと、もう一人の魔術師クレオニクスは、永遠の王たちの命令に従わず、キリスト教の信仰を公言したため、至高の裁判所の判決により、磔刑に処せられることとする。バシリスクについては、他の囚人たちと共に牢獄に投獄されることとする。」

これを聞いた聖ヴァシリスクは、統治者に向かって叫んだ。

「私をも死刑に処してください。私は友人たちから取り残されることを望まず、彼らと共に、私たちの神であるキリストの御前に立つことを切望しています。」

「いや」と統治者は言った。「神々は私にこう告げた。お前たちは互いに離れぬと誓いを立てた。だが、その誓いが破られ、お前たちの願いが叶わぬことのないよう、私はお前たちを全員まとめて滅ぼすことはしない。」

「まことに、」とエウトロピオスは叫んだ。「お前はあらゆる獣よりも獰猛であり、すべての動物の中で最も凶暴だ！　お前は、信仰と愛によって不可分である仲間たちを引き離そうとしている

。しかし、まもなく神がお前に報復を下し、神の恵みの花が咲き誇り、神の教会に実を結ぶだろう。」

この言葉を終えると、聖エウトロピオスは聖クレオニコスと共に、十字架が立てられていた城の外へと連れ出された。町中の人々が彼らの後を追った。キリスト教徒だけでなく、異教徒までもがそうであった。自分たちの十字架を目にすると、聖なる殉教者たちはこう言った。

「主なる私たちの神、イエス・キリストよ！　御自身の自発的な受難に倣い、私たちを十字架の死にふさわしい者としてくださったことを、私たちはあなたを賛美し、感謝いたします。私たちに義の冠を授けてください。そうして、あなたと共に苦しみながら、あなたの御国において栄光を受けることができますように。聖なる教会のためにあなたにお願いいたします。あなたのしもべたちに立ち向かう者たちを謙虚にさせ、キリスト教徒の民に平和をお与えください。

この祈りの最中、兵士たちは殉教者たちを十字架に釘付けにした。すると、天から声が聞こえ、聖人たちを永遠の安息へと招いた。聖エウトロピオスとクレオニコスは、「主よ、私たちの魂をあなたの御手に委ねます」という祈りと共に、その魂を主に委ねた。

こうして彼らは3月3日に息を引き取った。　アマシアの市民である二人の敬虔な男、コイントとヴェロニクは、統治者に殉教者たちの遺体を引き取ることを許可するよう懇願した。統治者はその願いを拒まなかった。そこでヴェロニクは聖エウトロピオスの遺体を受け取り、聖油を塗って、町から18スタディオン[2181] 離れた自分の村に、尊厳をもって埋葬した。 クレオニコの遺体はコイントが引き取り、同様に敬意を込めてキメの村に安置した。これらの場所では、殉教者たちの墓のそばで、神の栄光のために数多くの癒やしが起こった。

牢獄に残された聖ヴァシリスクは、その後も長い間、鎖につながれたままだった。総督アスクレピオドトスは亡くなり、後任のアグリッパの治世下で、聖ヴァシリスクは5月の22日に斬首された。この日、私たちの神であるキリストの栄光のために、彼の記念が称えられている。キリストは、父と聖霊と共に、永遠に賛美される。 アーメン。

- 同日、この世を去った聖ジノンと聖ゾイラを記念する。
- 同日、エジプトの地に生き、透視の賜物を持っていた聖女ピアマの記念日。彼女は337年に逝去した。

3月17日

3月4日（旧暦）

同日、キプロス島のコンスタンティアの司教であり、この世で安らかに息を引き取った聖グリゴリオスの記念日。

同日、モスクワの聖なる信仰深い公ダニイル・アレクサンドロヴィチの帰天（1303年）。

同日、1238年、タタール人によってロストフの祝福された公ヴァシリー（ヴァシルカ）・コンスタンティノヴィチが殺害された。

[2181] *スタディオン*（στάδιον）は、ギリシャの長さの単位で、およそ74サジェンに相当する。したがって、18スタディオンは2.5ヴェルストを少し超える距離となる。（アッティカ式スタディオンは177.6　　m、オリンピック式スタディオンは192.27 m。――*『アズブカ・ヴェラ』編集部*）

ヨルダン川で生活した、我らの尊き父ゲラシモスの生涯。

3月4日の記念日

偉大な断食者である尊者ゲラシムは、リキア出身であった[2182] 。若き頃から神を畏れる心をもって自らを鍛え、修道者の位を受けると、エジプトのフィヴァイダ地方の奥深くにある荒野へと退いた。そこでしばらくの間、敬虔な行いに励んだ後、彼は再び故郷のリキアへと戻った。 その後、テオドシウス2世の治世の終わり頃[2183] 、彼はパレスチナへ渡り、ヨルダン川沿いの荒野に定住し、そこで明るい星のようにその徳高い生涯を輝かせた。そこで彼はヨルダン川のほとりに修道院を建立した。 彼がパレスチナに滞在していた頃、マルキアヌスとプルケリアの治世下、ハルキドンにおいて、不敬虔なアレクサンドリア総主教ディオスコーロスと、キリストには神性というただ一つの本性しかないと説いたアルヒマンドリトのエウティキオスに対して、聖なる教父たちによる第四回全地公会議が開かれ、聖なる教父たちは彼らを非難した。 その後、公会議を誹謗し、そこで真の信仰の教義が拒絶され、ネストリウスの教義が復活させられたと主張する異端者たちが現れた[2184] 。エウティキオスの不敬虔な教えに染まった修道士テオドシウスもその一人であった。 エルサレムにやって来た彼は、パレスチナ全土を混乱に陥れ、一般の人々だけでなく、多くの聖人や、当時エルサレムに住んでいたテオドシウス2世の未亡人であるエウドキア皇后までもを惑わした。 彼女や、彼に惑わされた多くのパレスチナの修道士たちの助けを借りて、彼はエルサレム総主教である至福のユヴェナリウスを座から追放し、自らその座に就いた。正統信仰に忠実であり続けた者たちは、偽総主教テオドシウスから多くの苦難を強いられ、砂漠の奥深くへと逃れていった。 最初に去ったのは聖エウフィミオス大聖人であり、その後、他の聖なる父たちも彼に続いた。この頃、神の御許しにより、聖ゲラシモスもまた誘惑されたが、すぐに悔い改めたと、キリロス・イェルサレムスは『聖ゲラシモスの生涯』（[2185] ）の中で記している。 当時、ヨルダン砂漠には、リキアから最近やって来たゲラシムという名の隠者が一人いた、と彼は述べている。 彼は修道生活のすべての規律を遵守し、不浄な霊と勇敢に戦った。しかし、目に見えない悪霊を打ち負かし追い払う一方で、目に見える悪霊――すなわち異端者たち――に惑わされ、エウティキオスの異端に陥ってしまった。その頃、エウフィミオスの徳高い生活の評判は至る所に広まっていた。 そこで、敬虔なゲラシムはルヴァと呼ばれる荒野へと向かい、そこに長く住み着いた。聖人の教えと諭しの甘美さに満たされた彼は、異端者たちの偽りの教えを拒絶し、正統な信仰へと立ち返り、自らの迷いを深く悔い改めた。 キリルはこのように語っている。ついに至聖なるユヴェナリウスが再び総主教の座に就いた。敬虔なマルキアヌス王は、偽総主教テオドシウスを捕らえ、その行いを裁くために裁判にかけるよう命じた。しかし、テオドシウスはこれを知ると、シナイ山へ逃亡し、行方不明となった。 こうして、エルサレムおよびパレスチナ全土において、正統な信仰が再び輝きを取り戻し、異端に惑わされていた多くの人々が、再び敬虔な信仰へと立ち返った。また、エウドキア皇后も自らの過ちに気づき、正教会へと復帰した。

[2182] リキア――小アジアの南部に位置していた地域。

[2183] テオドシウス2世は、その伝記において「最年少」と称され、テオドシウス大帝の孫であった。400年に生まれ、408年に父アルカディウスの後を継いで東ローマ帝国を統治した。 厳格な敬虔さの中で育てられたテオドシウスは、帝国内に残る異教の痕跡を根絶しようと努めた。450年に死去した。

[2184] コンスタンティノープル司教ネストリウスは、イエス・キリストは真の神ではなく、単にヨセフとマリアの息子である普通の人間であり、その聖なる生涯によって神の特別な恵みを授かったに過ぎないと説いた。 ネストリウスの教えによれば、イエス・キリストは自らの贖いの功績によってではなく、善き生活の模範によって私たちを救うという。ネストリウスの教えは、431年に開催された第3回全地公会議で非難された。

[2185] 315年から386年までエルサレム司教を務めた人物、すなわち聖ゲラシモスの活動より以前の時代の人物である。伝記において、著者の記載は誤っているようである。おそらく、異端者たちに対して多くの著作を残したアレクサンドリアのキリル（412～444年の大司教）を指しているのだろう。

聖ゲラシム修道院は、聖都エルサレムから35スタディオン、ヨルダン川からは1スタディオンの距離に位置していた。彼はここで新入りの修道士を受け入れ、修行を修了した者には荒野の隠遁者用の小部屋を与えた。　彼の元には計70人以上の隠遁者がおり、聖ゲラシムは彼らのために次のような規則を定めた。 週の5日間、各人は自分の隔離された小部屋で沈黙を守り、何らかの仕事に励み、修道院から運ばれてきた少量の乾パン、 の水、そして根菜類を口にした。この5日間は、煮込んだものを一切食べることは許されず、料理をすることさえ考えないように、火を焚くことさえ禁じられていた。　土曜日と日曜日には、皆が修道院に集まり、教会で神聖な聖体礼儀に参加して、清く命を与えるキリストの聖体と聖血を拝領した。その後、食事の席で、神の栄光を称えて煮込んだ料理と少量のワインを味わい、5日間にわたって成し遂げた仕事を修道院長に報告した。 日曜日の午後になると、皆は再び、少量のパン、根菜、水を入れた器、そして籠を編むためのナツメヤシの枝を携えて、荒野にあるそれぞれの隠遁の独房へと戻っていった。　彼らの無所有と貧しさは、古びた衣服一枚、寝るための藁マット、そして小さな水瓶以外、誰も何も持たないほどであった。修道院長は、彼らが独房を出る際、誰であれ自由に入ってきて、これらの貧しい品々の中から望むものを自由に持ち帰れるよう、扉を閉めることさえ禁じていた。　こうして彼らは、「心を一つにし、魂を一つにする」という使徒の掟に従って暮らし、誰も何かを自分のものとは呼ばず、すべてが共有されていた。　伝えられるところによると、一部の隠遁者たちは、聖ゲラシムに、夜間に読書のためにろうそくを灯したり、必要に応じてお湯を温めるために火を焚いたりすることを時々許可してほしいと頼んだという。しかし、聖ゲラシムはそれに対してこう言った。

「もし荒野で火を使いたいのなら、新入りの修道士たちと一緒に修道院に来て暮らせ。私が生きている限り、荒野の修道士たちが火を使うことを決して許さない！」

エリコ市の住民たちは、聖ゲラシモの指導の下で行われているこのような厳格な修行について耳にすると、毎週土曜日と日曜日には必ず聖人の修道院を訪れ、食料やワイン、そして修道院に必要なあらゆるものを豊富に持ち込むことを習慣とした。

聖ゲラシムは断食を極めて厳格に守り、聖なる大四旬節の間は復活祭当日まで一切の食物を口にせず、神の秘跡による聖体拝領のみによって、肉体的・精神的な力を養っていた。この敬虔な師のもとで、至福のキリアコスも修行に励んでいた。そのことは、彼の伝記に次のように記されている。「彼のもとを訪れたキリアコスを友愛をもって迎え入れ、彼の中に神の栄光を見出した聖エウフィミオスは、自ら彼に修道服を着せ、ヨルダン川の聖ゲラシモスのもとへ送り出した。聖ゲラシモスは、キリアコスの若さを見て、彼に修道院で暮らし、従順の務めを果たすよう命じた。　あらゆる仕事を喜んで引き受けるキリアコスは、一日中修道院の労働に明け暮れ、夜通し祈りを捧げ、時折ほんの少しの間だけ眠りに就くだけだった。彼は自ら断食を課し、二日に一度だけパンと水を口にした。　キリアクの若さにもかかわらず、そのような節制ぶりを見て、聖ゲラシムは驚き、彼を深く愛するようになった。聖ゲラシムには、四旬節の間、かつて聖エウフィミオスが住んでいた「ルヴァ」と呼ばれる砂漠の最も人里離れた場所へ赴く習慣があった。　聖ゲラシムは、その偉大な禁欲を称えて、キリアクを連れて行き、そこでキリアクは毎週、聖ゲラシムの手から聖体拝領を受け、棕櫚の主日まで沈黙を守り、大きな霊的恩恵を得て修道院に戻った。

しばらくして、私たちの尊者エウフィミオスが世を去った。その死を、聖ゲラシモスは自身の独房にいながら知った。彼は、神の天使たちが尊者エウフィミオスの魂を喜びをもって天へと昇らせていくのを目撃したのである。キリアコスを連れてエウフィミオスの修道院へ向かった彼は、すでに彼が亡くなっているのを見つけた。　その尊い遺体を丁重に埋葬した後、彼は最愛の弟子キリアコスと共に自身の独房へと戻った。

『リモナレ』[2186] に、至福の父エヴィラトとソフロニオス・ソフィストが記しているように、神の偉大な御用達者ゲラシモスには、言葉を持たない獣でさえ、知性ある人間のように仕えていた。「我らは、ヨルダン川から一ポプリシュの距離にあるゲラシム父の修道院を訪れた。そこで暮らしていた修道士たちは、ゲラシム父について語ってくれた。ある時、彼はヨルダンの荒野を歩いていたところ、一頭のライオンに出くわした。そのライオンは、とげが刺さって腫れ上がり、膿で満たされた足を彼に見せていた。　ライオンは長老を穏やかに見つめ、言葉で願いを伝える術を知らなかったため、その謙虚な様子で癒やしを懇願した。長老は、そのような苦境にあるライオンを見て、腰を下ろし、その足を掴んで棘を引き抜いた。膿が流れ出ると、傷口をきれいに洗浄し、手ぬぐいで包帯を巻いた。　治癒したライオンはそれ以来、老修道士から離れず、弟子のように彼の後をついて回ったため、聖ゲラシムはその獣の知性と温厚さに驚嘆した。老修道士は、パンやその他の食べ物を与えてライオンを養った。　修道士たちは、聖ヨルダン川から兄弟たちのために水を運ぶためにロバを飼っていた。老修道士は、ライオンにロバに付き添い、ヨルダン川の岸辺で草を食む間、　それを守るよう命じた。ある日、ライオンは草を食むロバからかなり離れた場所で、日向で眠り込んでしまった。その時、アラビアから来た一人の男がラクダを連れて通りかかり、ロバが一人で草を食んでいるのを見て、それを捕まえて連れ去ってしまった。目を覚ましたライオンはロバを探し回ったが、見つからず、落ち込んだ悲しげな様子で、ゲラシム神父の修道院へと向かった。長老は、ライオンがロバを食べてしまったのだと思い、尋ねた。

「ロバはどこだ？」

ライオンは人間のように目を伏せ、黙って立っていた。すると長老は言った。

「お前がロバを食べてしまったのか！　しかし、主は祝福してくださった。お前はここから去ることはなく、修道院のために、ロバがしていたすべての仕事をこなすことになるだろう。」

長老の命により、それ以来、かつてロバに荷を積んでいたのと同じように、ライオンに4メハ[2187]分の樽を背負わせ、修道院のための水を汲みにヨルダン川へ送り出すようになった。

ある日、ある戦士が長老のもとへ祈りを捧げにやって来たが、水を運ぶライオンを見て、その姿を憐れんだ。新しいロバを購入し、ライオンを労働から解放するために、彼は修道士たちに金貨三枚を贈った。修道院の務めのためにロバが購入され、ライオンは労働から解放された。

しばらくして、そのロバを連れ去ったアラビアの商人が、小麦を売るためにラクダを連れてエルサレムへ向かった。彼にはそのロバも一緒だった。ヨルダン川付近で、キャラバンと偶然ライオンが出くわした。ライオンはロバだと気づくと、唸り声を上げてロバに飛びかかった。　商人とその一行は恐怖のあまり逃げ去ったが、ライオンは以前と同じように歯で手綱を噛みしめ、小麦を積んだ三頭のラクダを連ねて、ロバを連れて行った。失われたロバを見つけた喜びを咆哮で表現しながら、ライオンはロバを長老のもとへ連れて行った。 敬虔な老人は静かに微笑み、兄弟たちにこう言った。

「我々は、ライオンが我々のロバを食べてしまったと思い込み、むやみに彼を叱りつけてしまった。

そのライオンには「ヨルダン」という名が与えられた。それ以来、彼はしばしば長老のもとを訪れ、長老から食事をいただき、五年以上も修道院を離れることはなかった。　敬虔なゲラシム神父が主のもとへ旅立ち[2188] 、兄弟たちによって埋葬されたとき、神の御心により、その時はライオンは修道院にいなかったが、しばらくして戻ってきて、自分の長老を探し始めた。サヴァティイ神父とゲラシム神父の弟子の一人は、ライオンを見てこう言った。

[2186] 『リモナール』（『霊的な牧場』）は、ギリシャの修道士ヨハネス・モスカによる著作である。7世紀初頭に執筆され、聖人たちの生涯と功績に関する簡潔な伝記が収められている。

[2187] メフ――液体の容量を測るために用いられた皮製の袋。

[2188] 475年。

「ヨルダンよ！　私たちの師は私たちを孤児にしてしまった。主のもとへ旅立たれたのだ！」

彼らはライオンに食べ物を与えようとしたが、ライオンはそれを受け取らず、四方八方を見回して敬虔なゲラシム長老を探し求め、悲しげに唸り声を上げた。サヴァティイ長老や他の長老たちは、ライオンの背中を撫でながら繰り返し言った。

「長老は主のもとへ旅立ち、私たちを残していったのだ！」

しかし、その言葉では、ライオンの悲痛な叫びや唸りを抑えることはできなかった。彼らが言葉で慰めようとすればするほど、ライオンはより悲しげに唸り、声も顔も目も、長老の姿が見えないことへの悲しみを表していた。そこでサヴァティイ神父は言った。

「もし私たちを信じないのなら、私たちと一緒に来なさい。長老が眠る場所を見せてあげよう。」

そして彼らは、敬虔なゲラシムが埋葬された墓所へと彼を連れて行った。その墓所は教会のすぐそばにあった。墓所の前に立つと、サヴァティイ神父はライオンに言った。

「ここに、私たちの長老が埋葬されているのだ。」

そして、ひざまずいて泣き出した。それを聞き、サヴァティイが泣いているのを見たライオンは、頭を地面に打ちつけ、恐ろしいほどに咆哮した。　激しく咆哮すると、その獅子は長老の墓の上で息を引き取った。獅子は言葉で何も表現することはできなかったが、それでも神の御心により、生前も死後も長老を称え、アダムの堕落と楽園からの追放以前、獣たちがどれほどアダムに従順であったかを私たちに示してくれたのである」。

このように、ヨハネとソフロニオスは伝えている。この物語から、敬虔なゲラシムが、若き日から老齢に至るまで神の栄光のために働き、いかに神に喜ばれたかがわかる。彼は主のもとへ永遠の命へと旅立ち、そこで聖人たちと共に、父と子と聖霊を永遠に賛美している。アーメン。

コンダク、第4調：

天の教えに燃え上がり、ヨルダン川の荒野の過酷さを、この世のあらゆる甘美なものよりも選び給うた。それゆえ、獣でさえ死に至るまであなたに従い、父よ、従順かつ慈悲深くあなたの棺の上で息を引き取り、このように神にあなたを賛美し、御前に祈り、私たちのためにも、父ゲラシムよ、覚えてください。

聖殉教者パウロとその妹ユリアニア、および彼らと共に殉教した者たちの受難

記念日3月4日

ローマ皇帝アウレリアヌス[2189]は、帝国全土に対し、すべてのキリスト教徒が神々に犠牲を捧げるよう勅令を出した。この勅令に抵抗する者は、残酷な拷問の末に処刑されるよう命じられた。皇帝自身は、イサウリアを通過し、フィニキアの都市プトレマイオス[2190]に到着し、そこですべてのキリスト教徒に偶像への生贄を捧げるよう強要しようとした。　王が都市に入城する際、至福のパウロと妹のユリアニアがそこにいた。パウロは入城してくる王を見て、十字の印を胸に刻み、ユリアニアにこう言った。

[2189] 270年から275年まで在位した。

[2190] プトレマイダ――フェニキアにある都市で、ティルスの南、カリュスラ山の北に位置する。ここで使徒パウロは、エルサレムへの最後の旅の途中で立ち寄り、一日中キリスト教徒たちと共に過ごした（使徒行伝21:7）。

「勇気を出しなさい、私の姉よ。恐れてはなりません。キリスト教徒たちに大きな災いが降りかかろうとしているのですから。」

アウレリアヌスは、パウロが十字を切ったのを見て、彼を捕らえ、朝まで足枷をはめて拘束するよう命じた。朝になると、王は目立つ場所に玉座を設けるよう命じ、民衆全員の面前で座ると、聖パウロを拷問の場に連れてくるよう命じた。彼が連れて来られると、王は言った。

「厚かましい男め、わが王が都に入城する最中に、よくもまあ、その顔にキリスト教の印を刻むなどという無礼を働いたものだ。キリスト教徒に対して発布されたわが王の勅令を、お前は聞いていないのか？」

聖パウロは王にこう答えた。

「私はあなたの勅令を耳にしました。しかし、私たちキリスト教徒を、恐怖によって真の神を否定し、神の御子キリストへの信仰を告白することをやめるほどに脅かすことなど、誰にも決してできません。」　あなたが私たちに与える苦しみは一時的なものですが、神の公正な裁きによって定められた苦しみは永遠であり、同様に、神がキリスト教徒に与えてくださる栄光もまた永遠なのです。果たして、私たちのうち、誰がそれほど愚かであり、生ける神を見捨てて、耳も口も利かない偶像を拝むというのか。私たちの救い主イエス・キリストご自身が、福音書の中でこう言われている。*「人々の前でわたしを否む者は、わたしも天の父の前でその者を否む」*（マタイ10:33）。

アウレリアヌスはパウロにこう言った。

「お前の生意気な言葉をこれ以上我慢できない。さあ、神々に犠牲を捧げよ。そうしなければ、お前を残酷な死に追いやるぞ。」

福者パウロは再びこう言った。

「私は、幼い頃から清い心で仕えてきた、私たちの主イエス・キリスト以外の神を知りません。」

すると、アウレリアヌス王は兵士たちに言った。

「彼を吊るし、そのキリストが来て、お前たちの手から彼を解放するまで、残酷に苦しめよ。」

兵士たちは直ちに皇帝の命令を実行に移した。彼らは聖パウロを裸のまま木に吊るし、拷問を加えた。そして聖人は、力強い声で神に祈った。

– 主イエス・キリストよ、まことの神である父のまことの子よ。その御降誕は、天使も、大天使も、位も、主権も、支配も、権威も、力も、ケルビムも、セラフィムも[2191]、誰も理解することができず、ただ唯一の神である父のみが理解できるのです。　――この謙虚で、あなたに見捨てられたしもべを助け、アウレリアヌスの手から私を救い出してください。

彼の祈りによって、主イエス・キリストは彼の残酷な拷問を和らげられたため、聖人は自分に与えられた傷の痛みを感じなかった。その時、キリストの聖なる花嫁ユリアニアは、兄が拷問にさらされているのを見て、裁判の場へ駆けつけ、拷問官に向かって大声で言った。

「拷問官アウレリアヌスよ、なぜあなたは私の罪のない兄弟をこれほど残酷に苦しめるのですか？」

彼女の言葉に激怒したアウレリアヌスは、家来たちにこう命じた。

[2191] 聖書は、天使たちの中に様々な位階や段階を区別しており、その数は九つとされている（創世記3:24；イザヤ書6:2；コロサイ人への手紙1:16；　エフェソ1:20–21；ローマ8:38；1テサロニケ4:16；ユダ1:6）。聖ディオニシオス・アレオパギテスの『天上の階層』において、天使の位階の中で第一の地位を占めるのはセラフィムである。

「この女の頭巾を取り除き、顔を殴りつけよ。そうすれば、彼女は我々にこれほど生意気なことを言えなくなるだろう。そして、その不敬虔な男にはさらに過酷な拷問を加えよ。そうすれば、キリストが彼を守り、助けてくれるかどうか見てみよう。」

福者ユリアニアは、皇帝の言葉を嘲笑して、こう言った。

「王よ、あなたがこれほどまでに狂気じみており、信仰をもってキリストを呼び求める者たちの苦しみを和らげてくださるキリストの力を理解していないことに、私は驚かされる。」

アウレリアヌスは、周囲に立っている者たちに向き直って言った。

「この女に穏やかに語りかけている私の態度が、彼女を狂わせているのだ。

そして聖女を睨みつけ、こう言った。

「神々の元へ近づき、彼らにひれ伏せ。お前は私の手から逃れることはできないのだから。」

しかし、聖ユリアニアは断固としてこう答えた。

「私はあなたの拷問を恐れないし、あなたの脅しにも耳を貸さない。天には、私たちをあなたの不義の手から救い出していただける神がおられるからだ。私をあらゆる苦しみの中に投げ込んでも、その中で私の主イエス・キリストが私に与えてくださる助けを、あなたは目にするだろう。」

すると、アウレリアヌスは狡猾に聖女にこう語りかけた。

「お前の美しさを見ている。その美しさゆえに、お前を赦してやりたい。どうか私の説得に従い、神々に犠牲を捧げてほしい。そうすれば、お前を私の正妻とし、我々の生涯を通じて、私と共に統治させる。お前の兄弟には、その苦難に対する大きな報いを与え、彼を最高の地位に就かせる。」

その狡猾な言葉に対し、聖ユリアニアは天を仰ぎ、顔に十字を切ってから、笑い出した。

「その笑い声は」とアウレリアヌスは言った。「私からの君へのこの偉大な寛大さを侮辱しているのだ。」

しかし、聖女はこう答えた。

「いいえ、私はあなたを侮辱しているわけではありません。今、霊的な目で、聖なる玉座に就き、すべての人々の救いを願っておられる私の天の花婿の神聖な美しさを仰ぎ見ているからこそ、喜びの笑みを浮かべたのです。　主は私に、自発的に苦難の業を成し遂げ、あなた――狡猾で空虚な言葉を並べる者――を軽蔑せよと仰せになりました。なぜなら、あなたは王と名乗っていながら、木や石を崇拝しているからです。

殉教者のこの答えにアウレリアヌスは激しい怒りに駆られ、兵士たちにこう命じた。

「この女を吊るし、残酷に拷問せよ。そうすれば、彼女が王の裁きを受けていることを悟るだろう。」

兵士たちが聖女を拷問し始めたとき、彼女の兄弟である聖パウロは彼女を見つめ、こう言った。

「姉よ、拷問者が与える苦しみや、その脅しを恐れてはならない。ここで少しの苦しみを耐えれば、我々は我らの神キリストのもとで永遠の報いを受けるのだから。」

その間、アウレリアヌスは聖女を拷問していた兵士たちにこう命じた。

「彼女をさらに厳しく拷問し、その高慢と狂気を捨てさせるよう説得せよ。」

容赦なく拷問を受けていた聖ユリアニアは、皇帝の言葉を聞くと、再び笑いながらこう言った。

「アウレリアヌスよ、拷問者よ！　あなたは私を苦しめていると思っているが、私のキリストの助けにより、私は苦痛を感じていない。」

それに対し、アウレリアヌスは彼女にこう言った。

「たとえお前が苦痛を感じていないと嘘をついていようとも、私はお前の頑なさを打ち砕き、これからもお前を苦しめ続けるつもりだ。」

聖女は言った。

「私の主イエス・キリストは私を見捨てず、あなたが私に打ち勝つことを許さないでしょう。なぜなら、主は今この時も、そしていつまでも私の助け手であり、最後まで私を助けてくださるからです。そうして、あなたが主の力と私のキリスト教徒としての忍耐を知るようになるためです。」しかし、私の神は、あなたを永遠に消えることのない火で苦しめるよう命じ、あなたがその狡猾な誘惑によって滅ぼした人々の魂を、あなたから取り立てられるでしょう。

聖人のその言葉は、アウレリアヌスを激しい怒りに駆り立てた。彼は樹脂の入った大釜を持ち込ませ、その下に激しい火を燃やすよう命じた。大釜の中の樹脂が沸騰し、近づくことさえできなくなったとき、拷問官は聖なる殉教者パウロとユリアニアを大釜に投げ込むよう命じた。　そこに投げ込まれた二人は、天を仰ぎながら、まるで口を揃えて祈るかのようにこう唱えた。

「主なる神、私たちの父、アブラハム、イサク、ヤコブの神よ。バビロンの燃える炉に下りて、シェドラク、ミシャク、アベデナゴの身を守り、火による傷を負わせなかった方（ダニエル書3章）。主イエス・キリストよ、測り知れない光、　父なる神の神秘と栄光、至高の神の暁、私たちの罪のために受肉し、人々と共に生き、私たちの敵である悪魔が厚かましく惑わし、散らし、冥界へと落とし込んだ魂を救おうと願っておられる方、今まさにその弟子がアウレリアヌスによって行われているのと同様のことを、――主よ、私たちをもこの激しい苦しみから救い出してください。

この祈りの最中、苦しむ者たちの周囲で煮えたぎっていた樹脂が冷たい水へと変わり、そこに立ち会っていた者たちは皆、神の御力に驚き、神を賛美した。　一方、怒りに我を忘れたアウレリアヌスは、神を賛美することはなく、これを魔術だと思い込み、聖人たちを大釜から引き上げるよう命じた。大釜の中には樹脂の匂いすら残っておらず、冷たい水だけがあった。殉教者たちが引き上げられると、アウレリアヌスは彼らにこう言った。

「ここにいて、起こったすべてを目撃した人々が、お前たちに惑わされて、神がお前たちを思い起こされたと信じると思うか？　それとも、お前たちが魔術の力で釜を冷やしたのではないのか？」　私の神々にかけて誓う。私は、あなたがたの魔術が役に立たないようにしてやる。そして、あなたがたは、多くの長きにわたる苦しみ――火に焼かれ、傷つき、力尽きた状態で、自らの意志に反して、神々に生贄を捧げることになるのだ。

聖パウロは、この傲慢な言葉に対してこう答えた。

「我々は、天と地を創造し、闇から我々を解放し、お前の手から救い出してくださった生ける神を決して見捨てることはない。拷問者アウレリアヌスよ、お前がどんなに説得しようとも、我々に、声もなく、魂もなく、感覚もないお前の偶像を拝ませることは決してできない。　私たちを、お前の知るままの拷問にかけよ。そうすれば、その拷問の中で、私たちの神の力を知ることになるだろう。

そこでアウレリアヌスは、二つの鉄製の床を運び込ませ、公衆浴場から大量の炭を取り寄せ、それを使って床を赤熱させ、その後、聖なる殉教者たちを裸のまま赤熱した床の上に寝かせ、その上に溶かした豚の脂を注ぎかけるよう命じた。この拷問の最中、アウレリアヌスは殉教者たちにこう言った。

「今や私はお前たちの魔力を打ち破った。お前たちはアウレリアヌスとは何者かを知るだろう。さあ、お前たちのキリストが来て、お前たちを助けてくれるがいい。」

「私たちのキリストは」と、聖ユリアニアは拷問者に答えた。「すでにここに私たちと共にいて、私たちを助け、火が私たちを傷つけることを許さない。あなたは彼を見ることができない。なぜなら、あなたはそれに値しないからだ。この狂気を捨て、キリストに立ち返ることを勧める。」　もしあなたが彼を信じることを望むなら、彼は悔い改めたあなたを受け入れてくださるでしょう。なぜなら、彼は人を愛し、慈悲深く、人々の罪を赦してくださるからです。しかし、もしあなたが彼に立ち返らないなら、あなたは永遠の火に投げ込まれることになるでしょう。

その時、二人の兵士は、火の台の上で焼かれている聖人たちが火の被害を受けていないのを見て、大声で叫んだ。

「天の神以外に神はいない。その神こそが、パウロとユリアニアを助けているのだ。」

王はこれに激怒し、二人の兵士を直ちに剣で斬るよう命じた。王は、彼らが賄賂を受け取り、聖人たちを残酷に拷問しないよう、キリスト教徒から多額の金を受け取ったのだと考えたのである。これらの兵士が処刑場へ連行されると、聖パウロは彼らに次のように説いた。

「恐れるな」と彼は言った。「あなたがたは決して死ぬことはなく、聖人たちと共に天の御国の相続人となるのだ。」

その言葉を聞いた兵士たちは立ち止まり、こう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ！　パウロとユリアニアが宣べ伝えるまことの神よ、どうか私たちとも共におられください。私たちは、いかなる悪行も犯さずに死んでいくのですから。」

この言葉を言い終えると、彼らは剣で斬り殺された。彼らの名はクワドラトとアカキオスである。これらの戦士たちが亡くなると、赤熱した火床に横たわる聖人たちを焼くために、別の者たちが差し向けられた。彼らは火をさらに激しく燃え上がらせるために塩をまいたが、聖人たちは苦痛を感じることなく、拷問者を叱責し続けた。　殉教者たちに対して無力であることを恥じたアウレリアヌスは、彼らを牢獄に閉じ込め、首には重い木製の足枷を、足には足枷を、手には鉄の輪をはめるよう命じた。　牢獄の中で、拷問官は床に鋭い釘を、野原の棘のあるイバラやオオアザミのようにばらまかせ、その上に殉教者たちの　を寝かせた。そうすることで、彼らが苦しみから少しでも安らぎを得ることを許さず、むしろ釘が肉体を引き裂くことで、さらに激しい苦痛を味わわせるためであった。その際、拷問官は、キリスト教徒の誰も彼らのところへ来て、食べ物や飲み物を差し出さないよう、厳重に監視するよう命じた。真夜中、聖人たちが鋭い釘の上に横たわり祈っていると、突然、牢獄に光が輝き、主の天使が現れて殉教者たちにこう言った。

「パウロとユリアニアよ、至高の主のしもべたちよ、立ち上がって、神を賛美せよ！」

そう言うと、天使は近づいて殉教者たちの鎖や足枷に触れた。するとたちまち、束縛は砕け散り、彼らの体から外れ、傷は癒え、彼らは再び健康を取り戻した。　すると、彼らは、清らかな布で覆われた二つの食卓と、その前に用意された、あらゆるご馳走で満たされた食卓を目にした。天使は聖徒たちに言った。

「イエス・キリストがあなたがたに送ってくださったこの食事を召し上がってください。」

聖なる殉教者パウロとユリアニアは食卓に着き、パンを手に取り、天を仰いで神に感謝を捧げた。その後、彼らは主から送られたものを食べ、飲み、力を取り戻した。

牢獄にいた囚人たちは、光が輝き、聖人たちが鎖から解き放たれて、彼らのために用意された席に着き、食事をし、喜び合っているのを見た。彼らは驚きながら聖人たちのところへ近づき、目に見えない御手によって用意されたこの食事に加わる恵みを受けた。　このように御自分のしもべたちにこのような憐れみを示してくださった神を賛美し、神を信じた彼らは、皆キリスト教徒となった。

三日目に、アウレリアヌス皇帝は再び法廷の席に着き、聖なる殉教者パウロとユリアニアを自分の前に連れてくるよう命じ、彼らにこう言った。

「拷問があなたたちに効を奏し、その狂気を捨てて、今や神々に帰依し、彼らに犠牲を捧げることを願っている。」

聖パウロは彼にこう答えた。

「この狂気とは、キリストを否定しないことである。それが私と、神を愛するすべての人々のうちに永遠に留まるように。*『神の愚かさは、人の知恵よりも賢く、神の弱さは、人の力よりも強いからである』*（Iコリント1:25）。　*「この世の知恵は、神の御前では愚かである。聖書に書かれてい*

るとおり、『知恵ある者たちを、その狡猾さによって捕らえる』からである」（Iコリント3:19）。もし私が真の神から背き、あなた方の悪魔を拝んだなら、私は確かに狂ってしまうだろう。

アウレリアヌスは再び激怒し、二人の殉教者を裸のまま木に吊るし、鉄の爪で彼らの肋骨を削るよう命じた。しかし、彼らは拷問にさらされながらも、神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ、生ける神の御子よ、キリスト教の光よ、揺るぎない信仰よ、御自身の聖なる御名のゆえに、私たちに現れて助けを与え、私たちを見捨てないでください。」

彼らの祈りに応えて、救い主は目に見えない形で彼らのそばに臨在し、その苦しみを和らげられたため、聖人たちは苦痛を感じなかった。聖ユリアニアの左側に立たされ、彼女の肋骨を削るよう命じられていたストラトニクという名の兵士の一人は、彼女の美しさに心を動かされ、削ることをためらった。 聖女は彼の思いを見抜き、左足で彼を蹴り、こう言った。

「ストラトニクよ、拷問官の命令に従い、私を容赦してはならない。なぜなら、私の王であり主であるイエス・キリスト、永遠の神ご自身が私を助けてくださり、私の魂を守り、肉体の苦痛を和らげてくださるからだ。」

ストラトニクは、手にしていた道具を投げ捨て、王の裁判所へと駆け寄り、叫んだ。

「アウレリアヌスよ、不敬虔な拷問者よ！　なぜこれほど不当にキリスト教徒を拷問にさらすのか？　真の神を崇めるこの人々は、いったいどのような悪を行ったというのか？　なぜ彼らはこれほど激しく苦しめられなければならないのか？　まさか、ただすべての主であるキリストを崇めているというだけの理由でなのか？」

その言葉を聞いた王は激しい怒りに駆られ、一時間もの間、言葉を失った。やがて、こう言い放った。

「お前もまた、ストラトニクよ、その狂気に加担してしまったのか！　何がお前を惑わせたのだ？　ユリアニアの美しさか、それとも彼女の女らしい言葉に心を奪われたのか？」

ストラトニクスは天を仰ぎ見ると、拷問台に吊るされた聖なる殉教者たちの顔が、神の天使たちの顔のように輝いているのを見た。直ちに十字の印で身を守ると、彼はそこに設けられた不敬な偶像の祭壇へと駆け寄り、それを倒して足で踏みつけながら叫んだ。

「私もキリスト教徒だ！　拷問者よ、私を好きに扱え。」アウレリアヌスは激しく怒り、彼の首を刎ねるよう命じた。

ストラトニクスが処刑場へ連行されたとき、彼は神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ、その御名を宣べ伝えるパウロとユリアニアは、御あなたの神性によって守られ、打ち負かされることなく、迫害者を恥じ入らせています。　お願いいたします――私の魂も御自身の天の御国にお迎えください。拷問官アウレリアヌスの前で、ほんの短い間しか御聖なる御名を告白できなかった私を、どうか見捨てないでください。

この祈りの後、彼は剣で斬り殺され、キリスト教徒たちはその遺体を運び出し、隠した。一方、聖パウロと聖ユリアニアは、その日一日中拷問を受けたが、苦しみによって少しも衰えることはなかった。アウレリアヌスはユリアニアに向き直り、こう言った。

「卑劣で不敬虔な女め！　どうして拷問の最中に、この戦士を惑わすことができたのか？　彼の死の責任は君にある。」

聖女はこう答えた。

「私は彼を誘惑したわけではなく、彼の死についても無実です。私を御自身の花嫁として選ばれたキリストが、この戦士をふさわしい者として御自身のもとに召されたのです。もし彼がふさわしくなければ、決して殉教の冠を受けることはできなかったでしょう。あなた自身はゲヘナの炎の中で苦しむことになるでしょうが、彼を天の御国で見ることになるでしょう。」　その時、あなたはかつての部下であり、取るに足らない者であり、あなたによって見捨てられた者が、あなたよりも高い地

位に置かれ、キリストから天の御国の栄光を授けられているのを見て、不義な胸を打ち叩くことになるだろう。その時、あなたは深い悲しみに満ち、慈悲を乞うて叫ぶだろうが、決してそれを得ることはない。

その後、アウレリアヌスは聖人たちの拷問を中止し、再び彼らを牢獄に閉じ込めるよう命じた。その日の夕方、アウレリアヌスは彼らを牢獄から公衆浴場へ移送するよう命じた。　その後、魔術師や呪術師、そして毒蛇使いを呼び寄せ、彼らが持つ最も邪悪な毒蛇――エキドナ、アスピド、そして大蛇――をすべて持ち寄り、殉教者たちが閉じ込められていた浴場に放つよう命じた。魔術師たちは王の命令に従い、数多くの毒蛇を集めて、聖人たちのいる浴場に放った。　しかし、毒蛇たちは聖なる殉教者たちの足元を這い回っただけで、彼らに害を及ぼすことはなく、聖人たちは恐れを知らずに賛美を歌い、神を賛美し続けた。聖人たちは、毒蛇たちと共に浴場に閉じ込められたまま、三日三晩を過ごした。四日目の夜、アウレリアヌスは、パウロとユリアニアが毒蛇に食い殺されたかどうかを探るために使者を送った。　使者たちが浴場の扉に近づくと、聖人たちが詩篇を歌い、神を賛美している声が聞こえてきた。内部で何が起きているのかをより詳しく知りたかった使者たちは、浴場の屋根に登り、上から窓を覗き込んだ。すると、彼らはまばゆい光と、妹である聖ユリアニアと共に座っている聖パウロの姿を目にした。　彼らのそばには神の天使が立っており、毒蛇たちが聖人たちに触れることを許していなかった。これを見た使者たちは、アウレリアヌス帝のもとへ行き、見たことを報告した。帝は翌朝、再び法廷に座り、魔術師や呪術師たちに、浴場から毒蛇を捕まえ、殉教者たちを裁判のために自分の元へ連れてくるよう命じた。　魔術師たちは浴場の扉に近づき、呪文を用いて爬虫類を呼び寄せようとしたが、爬虫類たちは彼らの言うことを聞かなかった。ところが、浴場の扉が開かれるやいなや、すべての爬虫類が一斉に、呪文を唱えた者たちや、彼らと共に来た他の人々へと襲いかかり、致命的な毒を注入すると、姿を消した。　毒蛇たちが逃げ去った後、拷問官が遣わした者たちがやって来て、聖なる殉教者たちを捕らえ、彼のもとへ裁きのために連行した。拷問官は彼らを見つめ、微笑んでこう言った。

「再びあなた方と語り合えることを嬉しく思う。あなた方から偉大なことを聞けることを期待しているからだ。神々に誓って、もし真実を語ってくれれば、私から多くの偉大な贈り物を授け、私の王国で高貴な地位に就くことになるだろう。」　教えてほしい――あなたがたの浴場を窓から覗いていた者たちから聞いた話だが、我らの主アポロンがあなたがたの元を訪れ、毒蛇から守って助けてくれたという話は本当か。そして、あなたがたは自分の目でその顔を見たというのか。

聖パウロは王にこう答えました。

「我々はアポロンを知らず、一度も見たこともありません。なぜなら、我々は、御自分のしもべたちに救いを備えてくださった真の神に仕えているからです。しかし、あなたの魂は死に至るほど滅びてしまいました。あなたは真理を知ろうともせず、悔い改めようともしないからです。　あなたがでっち上げた拷問による激しい狂気は、あなたを、私たちの主イエス・キリストが毒蛇たちの口を封じるために私たちのもとに遣わされた、無形の神の僕である聖なる天使を冒涜するほどに駆り立て、さらに大胆にも彼をアポロンと呼んでいるのです。

殉教者の言葉はアウレリアヌスを激怒させ、彼は聖パウロの顔を錫の棒で打つよう命じ、その際にこう言わせた。

「よくもまあ、これほど高慢かつ厚かましく答えるとは。お前は今、王の御前に立っているのだと知れ。」

この拷問の後、アウレリアヌスは聖パウロを連れ去らせ、聖ユリアニアを自分のそばに呼び寄せた。拷問官は彼女にこう言った。

「わが心の女王、ユリアニアよ！　お願いだ、お前の兄の狂気に従ってはならない。お前は分別があり、聡明な乙女だとわかっている。だから私の助言に耳を傾けてくれ。そうすれば、私と共に女王となれる。私はお前を妻とし、帝国のすべての都市にお前の黄金の像を建立してやる。」

しかし、聖女は王にこう答えた：

「不敬虔な迫害者よ、どんなものでも私を惑わすことはできない。あなたの狡猾さで、至高の神のしもべを捕らえることも、永遠の死に服従させることもできない。たとえあなたが望んだとしても、キリストの栄光と天の御国を私から奪うことはできないのだ。」

そこでアウレリアヌスは、聖女を裁判の場から連れ去るよう命じ、再び聖パウロを自分の前に呼び寄せ、こう語りかけた。

「ほら、パウロよ、お前の妹ユリアニアは、神々に犠牲を捧げることを我々に約束した。それゆえ、私は彼女を妻に迎えたいと思う。彼女は私の王国のすべてを統べる女王となるだろう。お前も心を改め、神々に犠牲を捧げるという私の命令に従え。そうすれば、お前は私の友となり、報いとして高い地位を与えられるだろう。」

しかし、聖パウロはこれらの悪意に満ちた言葉にこう答えた。

「まことに、お前は嘘をついた。私の妹が、その清く不死の婚約者であるキリストから背き、お前という卑劣で朽ちゆく者や、お前の悪魔たちの仲間になったなどとは。しかし、お前が嘘をついたのも不思議ではない。お前の父は悪魔であり、悪魔こそが嘘の父だからだ（ヨハネ8:44）。彼から嘘をつくことを学んだお前は、彼と同じことをしており、嘘以外で誰をも惑わすことはできない。だが、お前の努力は無駄だ。たとえ全世界の王国を約束したとしても、お前の嘘と狡猾さでは、我々を惑わすことはできないのだから。

殉教者のこの答えに激怒したアウレリアヌスは、彼にこう言った。

「いつまで我々に対してこれほど生意気なことを言い続けるつもりだ、愚かな男よ？　神々に誓って、あらゆる拷問でお前たちを苦しめてやる。そして、誰も私の手からお前たちを救い出すことはできないだろう。」

そう言うと、王は大きな焚き火を焚かせ、十四本の鉄の棒を持ってきて火で赤熱させるよう命じた。そして、聖パウロの手足を縛り、赤熱した棒を手と足の間に差し込み、彼を地面に埋め込み、二人の兵士に交代でその赤熱した棒で彼を打ち据えるよう命じた。その命令は実行された。　一方、ユリアニアについては、拷問官は彼女を娼館へ連行し、そこで穢れにさらすよう命じた。その命令を耳にした民衆の多くは、彼女の美しさに馬のように興奮し、互いに競い合うようにして、彼女のもとへ真っ先に駆けつけようとした。聖女が娼館に連れて行かれると、主の天使が現れて彼女にこう言った。

「恐れるな、ユリアニアよ。あなたが仕える主イエス・キリストが、主を畏れる者たちの間でその聖なる御名が賛美されるよう、あなたを守るためにわたしを遣わされたのだ。」

そして天使は、聖女に触れようとした放蕩者たちを盲目にして、キリストの花嫁の足元から塵のように振り払い、彼らが聖女に近づくことができず、手探りで歩き、壁にぶつかるようにした。この奇跡を目撃した民衆は、まるで口を揃えてかのように、声を張り上げて叫んだ。

「パウロとユリアニアの神は偉大なり。神を畏れる者たちを至る所で救い、守ってくださる！」

一方、目をくらまされた放蕩者たちは、ひざまずいて聖女にこう叫んだ。

「ユリアニアよ、至高の神のしもべよ、私たちはあなたを汚そうとして、あなたの前で罪を犯しました。しかし、あなたは善き神の奉仕者として、私たちを赦し、あなたのキリストに私たちのために祈り、私たちに視力を授けてくださるよう願ってください。」

聖女は彼らに憐れみを示し、少しの水を手に取り、天に目を向けて、神にこう祈り始めた。

– イエス・キリストよ、まことの神、すべての人々の救い主よ、あなたのしもべである私の声を聞き入れ、今、あなたが人々に示されるしるしと奇跡を現し、彼らに視力を授けてください。そうして、彼らがあなたの聖なる御名を賛美できるように。

祈りを終えると、聖女は失明した者たち全員にその水を振りかけ、彼らはたちまち目が見えるようになった。癒やされた者たちは地にひれ伏して神に感謝し、キリスト教の教会へ赴いて自らの罪を悔い改め、聖なる洗礼を受けるにふさわしい者とされた。　その間、兵士たちは王の命令に従い、聖パウロへの拷問を続け、火で熱した鉄の棒で容赦なく彼を打ちつけ、その際、手下や棒も頻繁に入れ替えられていた。こうした苦しみの中、聖人は王に向かって叫んだ。

「アウレリアヌスよ、不敬虔な拷問者よ、私がいったいどのような悪事を働いたというのか。なぜこれほど残酷かつ不敬虔に私を苦しめるのか。しかし、まことに、私の主イエス・キリストは私の苦しみを和らげてくださる。一方、あなたを待っているのは、あなたと、私たちに敵対するようあなたをそそのかす悪魔のために用意された永遠の火である。」

アウレリアヌスは、聖人を悲しませようと、こう言った。

「パウロよ、お前の妹ユリアニアはどこにいる？　お前は彼女が処女だと思っているだろうが、彼女は今日、売春宿に引き渡され、辱めを受けているのだ。」

聖パウロはこの冒涜に対してこう答えた。

「私の苦しみをやわらげ、お前の悪意ある企みから私を救い出してくださる私の神が、私の妹をも守り、あらゆる汚れから彼女を清く保ち、天から天使を遣わして彼女を見守ってくださることを信じている。」

しばらくして、パウロは再びこう言った。

「見よ、私の妹が、清らかなまま、処女性を守り抜いて戻ってきた。彼女は私の苦しみと傷を見るためにやって来るのだ。」

聖人がそう語ったのは、透視の眼で聖ユリアニアに起こったすべてを見通していたからである。拷問官は聖人を連れ戻すよう命じた。聖ユリアニアが再び法廷に連行され、聖パウロが彼女を目にしたとき、彼は大きな喜びに満たされ、明るい微笑みを浮かべて妹を迎えた。　アウレリアヌスは聖女に尋ねた。

「ユリアニアよ、あの淫らな者たちは、お前の美しさを存分に楽しんだか？」

聖女はこう答えました。

「私の喜び、美しさ、そしてすべての装いは、御自身の天使を遣わし、御自身の謙虚なしもべである私を守ってくださったキリストです。私はキリストに希望を置き、その至聖なる御名を賛美します。なぜなら、キリストこそは奇跡を行われる真の神であり、キリスト以外に神はいないからです。」

聖パウロへの拷問を止めるよう命じた王は、深さ三サジェンの穴を掘り、そこに薪を詰め込んで火をつけるよう命じた。薪が完全に燃え尽き、穴の中に多くの赤く燃え盛る炭が残ると、拷問官は聖なる殉教者たち、パウロとユリアニアをそこに投げ込むよう命じた。　しかし、彼らは自ら火の穴へと歩み寄り、神を賛美し、救い主キリスト、すなわち彼らの助け主を呼び求めた。穴にたどり着くと、殉教者たちは十字の印を切って、火の中へと飛び込んだ。　炎の中にありながら、彼らは主を賛美し、栄光を帰した。というのも、主の御使いが天から降りてきて、炎の勢いを弱め、炭を散らし、殉教者たちを無傷のまま守ってくださったからである。聖人たちは穴の中に立ち、次のように歌った。

「永遠の王なる神よ、私たちの謙遜を顧み、御自身の偉大な慈しみによって私たちの罪を赦し、炎を鎮めてくださったことを、ほめたたえます。あなたは、私たちのような不適格な者たちを、迫害者アウレリアヌスの猛威から、無傷で守ってくださいました。」

民衆全員が聖人たちの歌声を聞き、多くの異教徒たちは神の栄光を目の当たりにして心を打たれ、偶像を捨ててキリストを信じるようになった。　王は、穴の中にいる聖人たちに石を投げつけるよう命じました。しかし、突然稲妻が走り、激しい雷鳴が響き、火の雲が現れ、そこから火が地上に降り注ぎ、天から声が聞こえました。

「アウレリアヌスよ、お前は、お前と、お前の父である悪魔のために用意された火のゲヘナへ行くことになる。」

アウレリアヌスと民衆は皆恐怖に襲われ、拷問官は聖人たちを穴から引き出し、牢獄に投獄するよう命じた。聖人たちは、神が彼らのために成し遂げてくださったすべての奇跡を称え続けた。七日後、アウレリアヌスは再び裁判の座に着き、祭司たちに、彼らが所有するすべての偶像――金や銀でできたもの、高価な宝石で飾られたもの――を持ち出すよう命じ、彼らの足元に自分の王室の紫の絨毯を敷かせた。それから、聖なる殉教者パウロとユリアニアを呼び寄せ、激しい怒りを込めて彼らに言った。

「さあ、今すぐ神々にひれ伏せ。お前たちは私の手から逃れることはできないのだ。」

聖パウロは、その言葉を嘲笑して、こう答えた。

「決して、迫害者よ、我々は天と地を創造された神を見捨てることはない。いつの日か我々を偶像崇拝へと屈服させられるなど、期待するな。」

すると、アウレリアヌスは殉教者に言った。

「残酷な死に値する者よ、お前はこれらを偶像だと思っているのか。それらに宿る力を理解していないのか？」

聖パウロはこう答えた。

「あなたが神と呼ぶゼウスは、情欲に満ちた魔術師であり、最も節制のない淫乱者であった。彼は美しい女性や乙女たちを見ると、様々な方法で魔術を用いて彼女たちを惑わせた。時には雄牛に、時には鳥、鷲や白鳥に、時には金に姿を変え、そのようにして　を惑わせ、多くの人々を汚した。それゆえ、彼らは彼を神と呼び、崇めているのだ。　しかし、彼のすべての淫らで、恥知らずで、不法な行いを順を追って列挙することはしない。なぜなら、あなたが私の言葉を聞いて怒っているのがわかるからだ――とはいえ、私はあなたの怒りを恐れてはいないが、これを聞く者たちを誘惑しないために、残りのことについては黙っておく。あなた方のもう一人の神はアポロンである。　彼は、ラトナという名の女性が二本の木の間に彼を産んだという、不倫の末に生まれたのではないのか？このアポロンもまた、父ゼウスに倣って多くの不品行を働いた。同様に、あなた方の有名な神ディオニュソスも、カドモスの娘セメレとの不倫から生まれたのではないのか？[2192]

「嘘をつくな、この厚かましい者め！」とアウレリアヌスは叫んだ。「ディオニソスは、神々の母ユノネから生まれたのだ。」

聖パウロは笑いながら言った。

[2192] *ゼウス、あるいはユピテルは*、ギリシャ・ローマ神話の神であり、異教徒たちから天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。　異教の著述家たちの伝承によれば、ゼウスは女性を誘惑するために次のような変身を行っていた。例えば、ダノスには黄金の雨の姿で降り立ち、レダには白鳥の姿をとって魅了し、エウロパをさらう際には白い雄牛に変身した。

アポロン――古代ギリシャおよびローマ人の神であり、光、とりわけ太陽の光の神として、また知性の啓蒙、詩、音楽の神、予言の神、病を癒す者、あらゆる市民秩序の守護神として崇められていた。

ラトナ――神話によれば、ヘラ以前のゼウスの妻であり、彼との間にアポロンと*アルテミス*（ローマ神話*ではディアーナ*――出産、狩猟、月の女神）をもうけた。　彼女はゼウスの愛人であり、ゼウスがヘラと結婚していた当時も、嫉妬深いヘラに全土で追われ続け、最終的にキンファ山の麓にあるデリスでアポロンを出産するまでその関係が続いた。

*ディオニソス、あるいは*バッカス――ブドウとワイン醸造の神。その母はカドモスの娘セメラ、父はゼウスである。聖書はディオニソスの誕生を姦通と呼んでいる。なぜなら、神話の伝承によれば、ゼウスは妻であるヘラを娶っていたにもかかわらず、セメラとの間に彼をもうけたからである。

*ユノー――ギリシャのヘラに相当するローマ神話の*名称――はゼウスの妻である。ゼウスに関するこのような異教の伝承は、異教の宗教思想がいかに真の神認識の道から逸脱し、自らの神々の行いを神格化するに至ったかを示しており、それは人間においてさえ、健全で自然な道徳的感覚によって非難されるものである。

「神が女から生まれるなどあり得るのか？　もともと神でなかった者が、神になることなどできるのか？　神に妻などいるのか、そして妻から子をもうけることなどできるのか？」

アウレリアヌスは、その答えに激怒して、聖人にこう言った。

「不敬で厚かましい男め！　いつまでその狡猾な言葉で我らの神々を非難し、冒涜し続けるつもりだ？　お前たちが『天の神』と呼ぶキリストでさえ、妻から生まれたのではないのか？」

聖パウロは、その冒涜者にこう答えた：

――あなたは神の啓示の秘密を知るに値しないが、あなたの周りにいる者たちがあなたの言葉に惑わされないように、あなたが尋ねていることについて、少なくとも簡潔に説明しておく必要がある。　神は初めに、天と地、そしてそこに存在するすべてのもの、海とそこに満ちるすべてのものを創造された。また、御自身の姿と似姿に従って、罪を一切持たず、清く、義にかなった、敬虔な人間を創造し、あらゆる恵みに満ちた楽園に彼を住まわせ、その肋骨から彼にふさわしい助け手を造られた。　しかし、あなたがたの父である悪魔は、人々のそのような至福を妬み、エバを誘惑し、彼女を通じてアダムをも神の戒めに対する罪へと導いた。　アダムとエバは楽園から追放され、息子や娘を産み、彼らによって全世界が人々で満たされた。そして、世に侵入した罪によって、全人類は死に定められ、その結果、私たちのすべての先祖や義人たちも、罪人たちと同様に地獄へと落とされたのである。　*「死は、アダムからモーセに至るまで、また、罪を犯さなかった人々の上にも、アダムのように支配した。アダムは、来るべき者の型である」*（ローマ5:14）と、キリストの使徒パウロは述べている。　このため、天の父、全能の神は、人類に憐れみを示し、彼らを助けたいと願われ、御子を遣わして人間の肉体をまとい、アダムと、彼と共に地獄の鎖に縛られていた者たちを救われた。　この神の御子は、すべての世の初めから父から生まれた父の御言葉であり、父の知恵と力と右の手であり、その受肉について、大天使ガブリエルが、預言者と王家の血筋に連なる至聖なるおとめマリアに告げ知らせました。　その清く聖別された胎内に、神ご自身、すなわち父なる神の御言葉が、肉体をまとって目に見えぬ形で宿られました。その時、天使は彼女にこう告げました。*「喜びなさい、恵まれた方よ！　主はあなたと共におられます。あなたは女のうちで祝福されています。聖霊があなたの上に臨み、至高者の力があなたを覆います。それゆえ、生まれる聖なる御子は、神の子と呼ばれるのです」*（ルカ1:28, 35）。　こうして、人の救いのために、まるで衣をまとうかのように肉体をまとわれた、父なる神の御子、神の御言葉が、汚れなき処女から生まれたのである。　真の神を見ることは誰にもできない。神はすべてを焼き尽くす火のような方だからである。地上で生きる人間が、神の御顔を見て生き残ることはできない。それゆえ、私たちの神は受肉して生まれ、神性においては完全でありながら、赤ん坊として乳を飲んで育った。　御方は少年、青年となり、肉体において完全な人間へと成長し、三十三年もの間、人々と共に暮らされ、　、町や国、村々を巡り、すべての人に恵みを施し、悪魔に打ち負かされ、捕らえられていた私たちを救い出してくださいました。　その後、悪魔の狡猾さによって滅びつつあった世界に救いを授けるため、御自身進んで十字架に架けられ、肉において死なれ、聖なる御魂と共に陰府へ下り、青銅の門を打ち砕き、鉄の錠前を打ち砕き、聖なる魂たちを闇と悪魔の罠から救い出し、天の国へと導かれた。　三日目に、主は御自身の肉体と共に死からよみがえり、弟子たち、すなわち御自身の使徒たち、そして主を真に信じた多くの者たちの前に現れ、四十日間使徒たちと共に食べ、飲み、その後、天に昇り、御自身の肉体と共に御父なる神の右の座に着かれた。　今や悪魔は苦しみの中で打ちひしがれている。なぜなら、キリストなる神は、キリスト教徒たちの足元に悪魔を打ち倒し、天の御国に入る者たちがそれを踏みつけるようにされたからである。あなたはその御国とは無縁であり、あなたの父である悪魔の嗣業である永遠のゲヘナの炎の中にいることになるだろう。

これをすべて聞き終えると、アウレリアヌスの顔は怒りで歪み、歯ぎしりをして叫んだ。

「厚かましい、卑劣な男め！　我らを侮辱し、神々を冒涜するお前の狡猾な言葉を、私は辛抱強く聞いてきた。最後にもう一度言う。もし神々に生贄を捧げなければ、お前たちを惨たらしい死に追いやるぞ。」

聖パウロとユリアニアは声を高らかに叫んだ。

「我らはキリスト者であり、キリストに希望を置いている。お前の神々には拝礼せず、お前の悪魔たちにも仕えない。お前のいかなる拷問も恐れない。たとえどれほど多くの拷問を我らに考案しようとも。」　なぜなら、私たちは神を信じ、悪魔がキリストに打ち負かされたように、あなたも私たちに打ち負かされることを望んでいるからだ。キリストは私たちを強め、あなたの悪意に満ちた企みを打ち砕いてくださる。

そこでアウレリアヌスは、聖パウロを木に縛り付け、火でその顔を焼くよう命じ、また、告示者に次のように叫ばせた。

「王に生意気な言葉を口にするな。神々を非難するな。」

兄弟の拷問を目の当たりにした聖ユリアニアは、叫んだ。

「不敬虔な拷問者よ！　私の兄弟は一体どんな悪事を働いたというのか。なぜ彼をこれほど残酷な拷問にさらすのか？」

アウレリアヌスは聖ユリアニアも同様に木に縛り付け、火で顔を焼いて拷問するよう命じた。その際、彼はユリアニアにこう言った。

「不貞な女よ、女としてふさわしいように、従順になれ。」

聖女は彼にこう答えた。

「アウレリアヌスよ、女性として従順であれと命じるあなたには従うが、私の目の前で存在される生ける神、キリストを畏れている。私は主を見捨てることはできず、悪魔たちにはひれ伏さない。」

アウレリアヌスは、聖なる殉教者たちに恥をかかされたのを見て激しく怒り、再び殉教者たちの体を焼くよう命じた。聖人たちのそのような苦しみを見た民衆は皆、叫んだ。

「アウレリアヌス王よ、あなたは彼らが神々に犠牲を捧げることを拒んだというだけで、不当に裁き、苦しめている。死後、あなたは彼らのことについて責任を問われることになるだろう。」

アウレリアヌスは、民衆の間に何らかの動揺が生じるのを恐れ、聖なる殉教者たちの首を切り落とし、その遺体を犬や獣、鳥に食わせよと命じた。　そして、聖人たちは処刑へと連行された。彼らは喜び、楽しみ、こう歌った。*「しかし、あなたは私たちを敵から救い出し、私たちを憎む者たちを恥じ入らせてくださる」*（詩編43:8）。

彼らが城の外、斬首の場へと連れて行かれると、聖パウロは兵士に、まず聖ユリアニアの首を斬るよう頼んだ。それは、自分が首を斬られるのを見て、彼女が恐怖に駆られることを恐れたからである。聖ユリアニアは、十字の印を胸に刻み、喜びながら首を差し出し、剣によって斬首された。聖パウロは、姉が殉教の死を遂げたのを見て、天を仰ぎ、神に感謝を捧げた。そして、自らも十字架の印を描いて身を守り、首を差し出し、剣で斬り落とされた。　殉教者たちの聖なる遺体は、王の命令により、キリスト教徒が遺体を持ち去らないよう、兵士たちが監視のために近くに配置されていたため、町の外に埋葬されずに残された。処刑現場には犬たちが駆けつけたが、殉教者たちの遺体には触れようとしなかった。　また、狼たちも駆け寄ってきたが、やはり遺体には触れず、むしろ遺体のそばを離れずに守り続けた。猛禽類も飛来したが、尊い遺体には降り立つことなく、その上空を飛び回り、遺体を守り、ハエさえも止まらせなかった。　こうして七日七晩が過ぎ、その後、兵士たちはこのことをアウレリアヌスに報告した。彼は彼らの話を聞き終えると、こう言った。

「キリスト教徒の魔術とはなんと強力なことか！我々は、彼らが死んでさえも、彼らに打ち勝つことはできなかったのだ。」

そしてアウレリアヌスは、キリスト教徒たちに嘲笑されないよう、昼ではなく夜に兵士たちに警備を解くよう命じた。

日が明けると、キリスト教徒たちは見張りがいないのを見て、聖なる殉教者パウロとユリアニアの苦難に満ちた遺体を運び出し、尊厳をもって埋葬した。父と聖霊と共に君臨される我らの主イエス・キリストに、栄光と誉れが、今、そして世々限りなくありますように。アーメン。

私たちの尊い父ヤコブ・断食者の生涯

記念日：3月4日

フェニキアの地[2193]、ポルフィリオン[2194]の町の近くには、ヤコブという名の隠者が住んでいた。彼は、この世の虚しい生活から離れ、修道者の生活を送り、十五年もの間、洞窟に身を置いていた。　ヤコブは断食の修行において極めて優れた成果を挙げ、徳において極めて偉大となり、神に喜ばれる者となったため、神から悪霊を制する力を授かり、我らの救い主イエス・キリストの名によって多くの癒やしを成し遂げた。　人々は皆、彼のそのような徳高い生活に感嘆し、信者だけでなく、非信者までもが彼のもとに集まってきた。神に霊感を受けたこの男は、誰が自分と語り合っているかを透視して見抜き、聖書から彼らを教え導き、真のキリスト教の信仰へと導いた。　しかし、人類の古くからの敵である悪魔は、とりわけキリストの熱心な僕たちに対して敵意を抱いており、この聖なる人の多くの徳と完全な生活によって自らを恥じさせられているのを見て、彼をその地から追い出そうと、策略を巡らせて反旗を翻した。　その目的のために、悪魔はかつてユダに憑いたように、ポルフィリオンという町に住むある不信仰なサマリア人の体に乗り移り、ヤコブを追放するよう働きかけるよう彼に唆した。このサマリア人は、多くの同調者、親族、友人、知人、隣人、そして奴隷たちを集め、彼らと共にその不敬虔な祭司の家へと向かった。　そこで彼らは、自分たちの信仰から多くの人々をキリストへと回心させているヤコブを、いかにして国境の外へ追放するかについて協議を行った。長い協議の末、彼らは狡猾な策を思いついた。ある娼婦を呼び寄せ、彼女に二十枚の金貨を与え、もし彼女が隠遁者ヤコブを誘惑して罪に誘うことができれば、さらに同額の金貨を与えると約束した。　そうすれば、彼らは彼を告発し、淫行者としての汚名を着せて国から追放できると考えていた。雇われた女はヤコブの元へ向かい、扉を叩きながら、開けて中に入れてほしいと懇願した。しかし、聖人が扉を開けなかったため、彼女はさらに激しく扉を叩き、執拗な懇願で彼を苛立たせた。　ついに聖人は扉を開け、そこに立っている女性を見て、それが幽霊だと思い込んだ。そこで、十字を切って身を守ると、すぐに扉をしっかりと閉め、独房に戻ると、東を向いて、悪魔の誘惑を自分から遠ざけてくださるよう、熱心に神に祈った。　その間にも真夜中になったが、女性は叩くのをやめなかった。ついに、彼女は聖人に大声で叫んだ。

「生ける神の真のしもべよ、私を憐れんでください！　私があなたの小部屋の前にいる間に獣に食われないよう、扉を開けてください。」

聖ヤコブは、すでに真夜中であり、周囲には多くの獣がいることを考え、しぶしぶながら彼女に扉を開け、こう言った。

「どこから来たのか、ここで何を求めているのか？」

女性は答えた。

[2193] *フェニキア*——地中海沿岸に位置していた国。その主要都市はティルスとシドンであった。

[2194] *ポルフィリオンは*、カルミルの近くにあるフェニキアの都市である。厳密には、それは小都市、あるいは大きな村であった。

「私は修道院から来ており、修道院長から用事で町へ遣わされたのですが、帰り道、深い闇に包まれ、道に迷ってここにたどり着いてしまいました。　どうか、神の御使いよ、私を憐れんでください。あなたの戸口で獣たちに食い殺されることのないよう、どうか今夜、日が明けるまでここに泊めてください。そうすれば、私は自分の道へ戻ります。

聖ヤコブは彼女を憐れみ、自分のところへ招き入れ、パンと水を差し出した後、自ら内側の独房に閉じこもり、彼女を外側の独房に残した。彼女はパンを口にすると、少し眠りについた。　その後、病気のふりをして、激しく泣き叫び、うめき声を上げ始め、内側のケリアの扉に身を寄せ、聖人に助けを請うた　。聖人は窓から覗き込み、彼女が病気になったのを見て、何を言えばいいのか、どうすべきか途方に暮れた。すると、その女性は彼にこう懇願した。

「お願いです、父上」と彼女は言った。「私の弱さに憐れみをおかけください。そして、十字架の印で私を守ってください。私の心臓がひどく痛むのですから。」

聖人は彼女の懇願を聞き入れ、彼女のところへ出て行き、すぐに火を灯し、持っていた聖油を持ってきて、彼女のそばに座った。　聖人は左手を火にかざし、右手を聖油に浸して、女性の体に触れた。時には十字を切ったり、時には聖油を塗ったり、また彼女の心臓を温めたりした。というのも、彼女は心臓の激しい痛みを訴えていたからである。　不純な欲望に駆られたその女性は、聖職者に対しても情欲を掻き立て、罪へと誘おうと企み、彼にこう言った。

「お願いです、神父様、もう一度聖油を塗って、その手で私の心臓を温めてください。そうすれば、私の苦しみが完全に止まるでしょう。」

心純真で悪意のない聖ヤコブは、その女性の言葉を信じ、彼女の願いを叶えてあげた。　しかし、肉体に戦いを挑む悪魔の誘惑を知り、また、女性に対する過度な慈悲や同情によって自らの魂を永遠の破滅へと導いてしまうことを恐れたため、二、三時間にわたり左手を火の上に置き、指の関節が脱落するまで、痛みに耐え抜いた。　こうして聖人は、耐え難い痛みから不純な考えが心に浮かばぬよう、悪魔の誘惑と戦った。聖人の行いを見た女性は、恐怖に襲われた。彼女は心を打たれ、すぐに立ち上がって涙ながらに聖人の足元にひれ伏し、胸を叩きながらこう叫んだ。

「ああ、罪深く、目がくらんだ私よ！ 悪魔の住処となってしまった私を嘆かわしい！」

聖人は、彼女が泣いているのを見て、その言葉を聞いて、大いに驚き、彼女にこう言った。

「立ちなさい、女よ！」

急いで彼女を地面から起こし、神に熱心に祈りを捧げた後、こう尋ねた。

「教えてくれ、これはどういうことか？　なぜ私のところへ来たのか？」

女は、ようやく我に返ると、聖人にすべてを詳しく語った。不敬虔なサマリア人たちが、聖人を誘惑するよう彼女に教えたこと、そして、肉体を捨てた者たちの生き方に倣うこの義人を、肉欲の罪に陥れるために、悪魔自身がこの誘惑を仕組んだのだと語った。　女性の話を聞き終えると、聖人はため息をつき、多くの涙を流して神に感謝を捧げた。その後、女性を戒め、祝福して、アレクサンドル司教のもとへ送り出した。女性は教会に着くと、司教の前で自分の罪をすべて告白した。　聖人は彼女を十分に戒め、彼女が真に悔い改めたことを確認すると、聖なる洗礼によって彼女を清め、女子修道院へと送り出した。こうして、その娼婦はキリストの花嫁となった。

その後、すべてのキリスト教徒と自身の聖職者を集め、司教は街からすべてのサマリア人を追放した。これ以降、司教は至福のヤコブのもとを訪れ、父のような教えをもって、彼の至福の生活をさらに強固なものにした。そして、かつて罪人であったその女性は、その生き方によって神に喜ばれ、悪霊を制する力を授かるに至った。

しばらくして、ある高貴で裕福な人の娘が、汚れた霊に苦しめられ、聖ヤコブの名前を呼び求めた。　彼女の両親は娘を聖人のもとへ連れて行き、この若い娘を憐れんで、彼女から不浄な霊を追い出してくれるよう懇願した。聖人は彼女のために神に祈りを捧げ、彼女に手を置くと、直ちに神の力によって彼女から悪霊を追い出し、娘は健康を取り戻した。　この奇跡を目撃した少女の両親は神

に感謝し、その恩恵を人を通じて神に捧げたいと願い、聖人に三百枚の金貨を差し出した。しかし、その義人は金貨を受け取ることを拒んだだけでなく、それを見ることさえせず、こう言った。

「神の賜物を売買することはふさわしくない。聖書にもこう記されている。*『病人を癒やし、らい病人を清め、死者をよみがえらせ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えよ』*（マタイ10:8）。金は貧しい人々に配るべきである。なぜなら、私は荒野で暮らしているため、それを必要としないからだ。

そう言うと、聖人は金を携えてきた人々を帰した。その同じ国に、悪魔の仕業で両足が麻痺した若者が一人いた。両親はこの若者を聖ヤコブのもとに連れて行き、彼のために神に祈ってほしいと頼んだ。　聖人は三日間断食し、祈りを捧げた後、その麻痺した青年を癒やした。そして、彼に祝福を与え、自分の足で家へ帰るよう命じた。他にも、様々な病に苦しむ多くの人々がこの奇跡を行う聖人のもとを訪れたが、皆、彼の祈りによって癒やされ、健康な体で帰っていった。　神の御心に適うこの聖人は、皆から崇められているのを見て、虚栄心に陥ることを恐れ、そのため洞窟を離れ、世間の名声から逃れるようにして逃げ去った。町から四十　ポプリシュの距離を離れたところで、彼は川沿いの岩壁に大きな洞窟を見つけ、そこに住み着いた。　そこで彼は三十年間を過ごし、昼も夜も祈りと涙に明け暮れた。長い間、川辺に生える水草を糧としていたが、やがて小さな菜園を作り、一日の一部をそこで働き、自ら蒔き育てた作物を食べていた。　聖ヤコブの修道生活はその名声を高めたため、魂の救いを求めて、二十から三十もの修道院から修道士や聖職者たちが彼のもとを訪れるようになった。　そして、聖職者だけでなく、多くの世俗の人々も彼のもとを訪れるようになり、徳ある生活についての教えを受け、彼の祝福と祈りを授かって、自らの魂に大きな益を得て帰っていった。

このように、神の恵みにあずかった偉大な人物であったが、彼はやがて重大な罪を犯してしまった。これはおそらく、彼が自身の聖性や神に喜ばれる生き方を過度に意識し、自らを偉大な修行者だと見なすようになったためであろう。　彼の堕落の始まりは、次のようなものでした。人類の古くからの敵である悪魔は、神に喜ばれる生活を送る者たちを妬み、絶えず彼らのために滅びの落とし穴を掘っているのですが、ある金持ちの娘である若い娘に取り憑き、彼女を苦しめ始めました。悪魔は彼女の口を通してヤコブの名前を呼び、こう言いました。

「あなたがたが私を隠遁者ヤコブのところへ連れて行かない限り、私は彼女から出て行かない。」

少女の両親は彼女を連れて、聖ヤコブを探し求め、長い間、修道院や荒野を巡り歩いた。ついに彼を見つけると、彼らは彼の足元にひれ伏し、こう懇願した。

「どうか私たちの娘を憐れんでください。彼女は邪悪な霊にひどく苦しめられています。もう二十日も、彼女は食べ物も飲み物も口にせず、悲鳴を上げて自らを傷つけながら、あなたの御名を呼び求めているのです。」

聖人は祈りを捧げ、彼女のために神にこれほど熱心に祈ったため、彼が立っていた場所さえも揺れ動いた。祈りが終わると、ヤコブは少女に息を吹きかけ、汚れた霊にこう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、お前に命じる。この乙女から出て行け。」

するとたちまち、悪魔はまるで火に焼かれたかのように、その娘から出て行った。娘は地面に倒れ込み、長い間声を出せなかった。しかし、聖ヤコブは再び神に祈り、彼女の手を取り、地面から起こして両親に返した。両親はこのような奇跡を目の当たりにして、神を賛美した。　しかし、不浄な霊が再び彼女に戻ってくるのではないかと恐れた両親は、娘が完全に回復するまでの三日間、聖人のもとにとどまることを許してほしいと懇願した。こうして少女は長老のもとに残り、両親は家路についた。

乙女が聖ヤコブの元に残ると、悪魔は、聖人が人里離れた荒野で乙女と二人きりになっているのを見て、自分の悪巧みを行うのに最も好都合な時が来たと悟り、その修行者に不浄な思念と卑しい肉欲の嵐を巻き起こし、その情欲を煽り立てた。　その結果、かつてサマリア人から遣わされた娼婦

の誘惑にも惑わされなかったあの聖なる男、貞潔と清らかさを守るために自らの手を火で焼いたあの男、　数多くの奇跡を行い、悪霊を追い払ったあの聖なる人物――その者が淫らな情欲に激しく燃え上がり、神への畏れや長年にわたる断食の功徳、そして神から授かった恵みと癒しの力を忘れ、すでに白髪の老齢に達していたにもかかわらず、悪魔に打ち負かされ、堕ちてしまった。　彼は乙女を強姦し、彼女と自身の純潔を汚し、肉体と魂を穢すことで、これまでの断食の功徳をすべて台無しにしてしまった。一つの罪を犯すだけでは満足できず、彼はさらに重い罪を重ねた。　山から滑り落ちた者が、岩から岩へと転がり落ちて砕け散るように、聖ヤコブにも同じことが起こった。一つの大きな罪を犯した後、彼はさらに大きく、より凶悪な別の罪に陥り、不義に不義を重ねてしまったのである。　敵は彼の中に恐怖を煽り立て、彼はこう考え始めた。「この娘は今、両親に私が彼女を強姦したと告げるだろう。そうすれば私は恥と非難を浴び、彼女のせいで大きな苦境に陥ることになる」。悪魔の唆しに屈した彼は、人々から自分の罪を隠し、恥を免れようとして、罪のない娘を殺害した。しかし、彼はそれだけでは留まらず、さらに罪に身を委ねた。というのも、彼が穢し、容赦なく自らの手で殺したその乙女の遺体を、通常の土葬に付すことなく、川に投げ捨てたからである。　これこそが傲慢な自惚れの結末である。もしこの修道士が、自分を聖人であり、徳において偉大であると考えていなければ、これほど凶悪な罪に陥ることはなく、かつて若き日に悪魔の策略に打ち勝った者の老いを、敵が嘲笑することもなかっただろう。

その後、悪魔はヤコブを、縛られた捕虜のように、破滅への最後の深淵へと、あらゆる罪の中で最も重い罪、カインとユダの絶望へと引きずり下ろし始めた。老修道士は、独房に座りながら、自分に何が残されているのか分からなかった。　良心に激しく責められ、ため息をつき、絶望に身を任せる中で、彼はもはや祈りのために口を開くことも、心を神に向けることもできなくなっていた。彼は、どこか遠く離れた国へ逃げ出し、修道生活を捨てて世俗に身を置き、老後を世と悪魔に仕えて過ごすことを考え始めた。　洞窟を出ると、彼は絶望に駆られ、激しい海の嵐のように心を乱されながら、急いで旅立った。

しかし、全世界の罪さえも打ち勝つことのできない、キリストの偉大で計り知れず、人を愛する恵みは、すべての人々が救われ、一人も滅びることのないことを望んでおられ、この滅びかけた長老をも見捨てず、悪魔たちが彼の滅びを最後まで喜ぶことを許さず、　しかし、その言い表し難い御計画により、彼に堕落からの立ち直りと再生の道を用意された。というのも、彼が旅に出たとき、道中で修道院を目にし、そこに入ると、修道院長と修道士たちに挨拶を交わしたからである。彼らは彼にパンを口にするよう勧めたが、彼はそれを聞くことさえ拒み、ただ頻繁に、そして深くため息をついていた。修道士たちが食事で体力を回復するよう懇願すると、彼はこう言った。

「ああ、この罪深い私よ！　どうして私が天に向かって目を上げることができるだろうか？　どうして私が、侮辱してしまったキリストの御名を呼び求めることができるだろうか？　そして、姦淫者であり殺人者である私が、どうして御恵みに触れることができるだろうか？」

その後、彼は皆の前で、自分に起こったことを順を追ってすべて告白した。修道院長と兄弟たちは、その告白を聞いて動揺し、彼に同情して、絶望に陥らないよう慰め、悔い改めた上で、自分の罪に対する苦行を受け入れるよう促した。　彼らは長い間、ヤコブに自分たちのところに残るよう懇願したが、彼は彼らの言葉に耳を貸さず、世へと去っていった。彼は長い間、荒野をさまよった。ついに、神の御心により、ある神に導かれた男と出会い、その老人は道を外れて彼の修道室に入るよう頼まれた。　ヤコブを説得すると、彼は彼を自分のところへ連れて行き、彼の足を洗い、手持ちの食事を差し出して、それを味わうよう勧めた。しかし、良心に責められ苦しめられていたヤコブは、心の底から度々ため息をつき、胸を叩き、食事にさえ触れることを拒んだ。　すると、その男はヤコブの足元にひれ伏し、彼を慰めながら、長老が差し出された食事を口にすることに同意するまでは決して立ち上がらないと誓った。ヤコブが承諾すると、修道士は地面から立ち上がり、二人は砂漠で可能

な限りの食事を共に口にした。　食事を終えると、二人は立ち上がり、神に感謝を捧げてから、再び腰を下ろした。すると、その隠者はヤコブにこう言った。

「父よ、私の魂の益となる教えをください。キリストについて、あなたの息子として私を導き、私の心を強めてください。なぜなら、私はしばしば、さまざまな思いに激しく悩まされているからです。」

ヤコブは激しく泣き出し、抑えきれない涙を流しながら胸を叩き、こう言った。

――兄弟よ、私を放っておいてほしい。神を怒らせた私の重い罪について、涙を流させてほしい。私はまるで、悪魔に惑わされた弱き少年のように、この虚しく不名誉な老齢の身で破滅へと陥り、今や完全に滅びてしまったのだ。　老いて、かつて若き日に打ち負かしたはずの情欲に、今や打ち負かされてしまった。私は不浄な淫行に陥り、さらに重い罪を犯すことさえ敢えてしてしまったのだ。

ヤコブの話を聞き終えると、隠者は深い悲しみと嘆きに満たされ、長老に、悪魔による誘惑のすべてを詳しく語ってほしいと懇願した。　彼がそう求めたのには二つの理由があった。第一に、長老が自らの罪を告白することで悔い改めに導かれるためであり、第二に、彼自身が長老の堕落の物語を聞くことで慎重さを学び、同じような誘惑に陥らないためであった。そこでヤコブは語り始めた。

「私は」と彼は言った。「五十年以上にわたり、断食と荒野での生活を通じて主に仕え、情欲に頑なに抵抗してきました。その証しは私の体にも残っています。なぜなら、貞潔を守るために、私は自分の手を火で焼いたからです。　そして、不適格な私ですが、慈愛に満ちた神から偉大な恵みを受けるに値する者とされました。なぜなら、罪人である私を通して、神は多くの奇跡を行われたからです。ついには、サタンがある少女に取り憑きました。その両親は、私の中に宿るキリストの恵みについて聞き及ぶと、娘を私のところに連れてきて、彼女のために祈ってほしいと頼みました。　神の御力により、私は彼女から悪霊を追い出した。両親は、娘が完全に回復するまでの三日間、私のところに留めておくよう頼み、彼女を私に預けて去っていった。　しかし、私は肉欲に燃え、その欲望が私の心を曇らせ、その時は神のことを忘れ、地獄を恐れず、長年の労苦も顧みず、その少女を強姦し、彼女の処女を奪ってしまった。　そして、一つの罪を犯すだけでは満足できず、悪魔の唆しにより、最初の罪よりもさらに重い別の罪を犯すことを敢行してしまった。すなわち、私はその少女を殺害し、その遺体を川に投げ捨てたのである。　救いを絶望し、私はその場所から逃げ出し、今やこの世へと向かっている。なぜなら、どうして私が天の高みへと目を上げられようか。もし私がキリストの御名を呼ぶことを敢えてすれば、天の火が私を焼き尽くすだろう。

ヤコブが、あふれんばかりの涙を流し、苦々しく泣きじゃくりながら告白を終えると、隠者は心を動かされ、長老の首に抱きつき、その額に口づけをしてこう言った。

「お願いです、父よ、心をくじかれないでください。ご自身の救いを絶望しないでください。神は悔い改めに耳を傾けてくださるという信仰をもって、あなたの罪を神に告白してください。主は極めて慈悲深く、私たちに対するその憐れみは言い表せないほど深いのですから。」　もし神が悔い改めを受け入れなかったなら、預言の賜物を受けながら、姦淫と殺人の罪を犯してしまったダビデが、どうしてそのような罪の赦しを得ることができたでしょうか？　また、聖ペトロ―― ――すなわち、主から天の御国の鍵を託された首席使徒であり、主が自発的に苦難を受けられた際に三度も主を否認した彼が、悔い改めの苦い涙によって、罪の赦しを得ただけでなく、キリストの「言葉の羊」たちの牧者となるという偉大な栄誉に与ることができたのは、どうしてでしょうか。　さあ、まだそのための時間があるうちに、悔い改めましょう。

これらの言葉でヤコブの魂を励まし、隠者は彼に、自分と一緒に住み続けてくれるよう懇願した。しかし、ヤコブは承諾しなかった。　そこで隠者は、長老の足元にひれ伏してその足に口づけをし、彼から離れないようさらに強く懇願した。なぜなら、長老が絶望に陥り、自らの魂を完全に滅ぼしてしまうのではないかと恐れていたからである。ヤコブを説得することができなかった隠者は、深

く嘆き、涙を流した。　ついに、神に彼のために熱心に祈りを捧げた後、旅に必要な食料を与え、彼を見送った。そして十五スタディオンほど同行し、その間ずっと悔い改めるよう説得し続けた。　その後、ヤコブを抱きしめ、涙ながらに彼に口づけをして、隠者は自分の小部屋へと戻った。ヤコブは、世俗への道をかなりの距離進んだ後、少し道を外れて古びた埋葬用の洞窟を見つけた。そこには、時を経てすでに塵と化していた無数の骨があった。　その洞窟に入ると、ヤコブはすべての骨を集め、その一隅に置き、洞窟に身を寄せた[2195]。膝を折り、ヤコブは激しく泣き叫び、胸を叩きながら、神に熱烈に祈りを捧げ、こう叫んだ。

「神よ、私がどうしてあなたに語りかけることができるでしょうか？　私の救いの第一歩をどこから踏み出せばよいのでしょうか？　この不浄な舌と汚れた口で、どうして祈りを捧げることができるでしょうか？　まずどの罪の赦しを請えばよいのでしょうか？　姦淫か、それとも殺人か？」至聖なる主よ、私の重い罪をお赦しください。不適格な私に憐れみをお示しください、あまねく慈悲深い主よ。私の不義な行いとともに私を滅ぼさないでください。私の不法は甚大だからです。　私は姦淫に陥り、殺人者となり、罪なき者の血を流し、その遺体を水や獣、鳥に食わせました。今、主よ、私は全知なるあなたにすべての罪を告白し、赦しを請います。　主よ、私を軽んじないでください。あなたの計り知れない人間愛によって、この不義で汚れた私を憐れみ、あなたの偉大なる慈しみを示し、私のすべての不義を清めてください。そうして、すでに罪の深淵に沈んでいる私を、敵が溺れさせず、冥界の蛇が私を食い尽くさないようにしてください。

このように自らの罪を告白し、悔い改め続ける中で、至福のヤコブは十年にわたり、その墓穴の中で暮らし続けました。そして彼は、死者の間に住み、生者の間には決して姿を現さない、まるで生ける屍のような存在となりました。　たとえ誰かがその場所を訪れることがあっても、ヤコブは誰とも会話を交わさず、何か尋ねられても一言も答えず、神への祈りと自らの罪の悔い改めの時だけ口を開いた。　彼の糧は、その荒野に生える草類だったが、それも飢え死なない程度に、ごく稀に、ほんの少しだけ口にしていた。　こうしてヤコブは、絶え間ない涙と嘆息と祈りの中で、昼も夜も泣きながら神に呼びかけ、自分の罪を告白し、容赦なく胸を叩きながら、実に十年間を過ごした。

罪人の滅びを望まず、その回心を待ち望まれる、寛大で慈悲深き主は、至福のヤコブのこれほど長い悔い改めを見捨てられませんでした。主は彼の叫びと罪の告白を聞き入れ、その罪を赦し、再び奇跡を行う恵みを授けられました。

その国では、雨が降らず、激しい干ばつに見舞われた。人々は皆、断食を行い、神に雨を降らせてくださるよう祈った。すると、その町の、徳高く聖なる司教に啓示が与えられた。その啓示の中で、彼には次のように告げられた。

「もし、墓の洞窟に住む聖なる長老が、あなた方のために神に祈ってくださるなら、あなた方のすべての災いは収まり、実り豊かな雨が降るだろう。」

翌日、司教は聖職者たちと民衆全員を集め、自分に与えられた啓示を語った。十字架の行列と祈りの歌を捧げながら、皆はその洞窟へと向かった。　洞窟に着くと、司教と民衆は皆、閉ざされた扉を叩き、神の御心に適う者に懇願した。すなわち、その聖人が彼らの国に憐れみを示し、神に祈って、神の義なる怒りと懲罰を彼らから退け、干ばつを終わらせ、地に雨を降らせてくださるよう願ったのである。　しかし、聖人は洞窟の中から彼らに何も答えず、天に目を向けることさえ恐れ、ただ胸を叩きながら心の中でこう祈っていた。

「キリストよ、私の数多き重き罪を憐れんでください！」

一方、司教は長い間、熱心に扉を叩き、ヤコブに懇願し続けた。しかし、彼から何の返答も得られなかったため、同行者たちと共に、嘆き悲しみながら引き返した。教会に入ると、皆は再び涙を流しながら祈りの歌を捧げた。　その間にも、嵐はさらに激しさを増し、それに伴い深刻な干ばつと

[2195] この洞窟は、パレスチナのカルメル山の近くに位置していた。

飢饉も襲った。そのため、人々は断食と祈りをさらに厳しくし、神に一層熱心に祈るようになった。その時、司教は再び啓示を受け、その最中に次のように語る声をはっきりと聞いた。

「わがしもべヤコブのもとへ行きなさい。私は以前、彼についてあなたに告げておいた。もし彼があなたたちのために私に祈ってくれれば、あなたたちの国を襲った災いはたちまち取り除かれるだろう。」

この啓示の後、司教は再び聖職者全員と民衆を率いて洞窟へと向かい、神のしもべに熱心に懇願し、彼に煩わしいほどに、自分たちのために祈りを捧げてくれるよう頼み込んだ。そして、無理やり扉を開けて、そこから聖人を連れ出した。　至福のヤコブは、本心では望んでいなかったものの、天を仰ぎ、両手を天へと掲げ、長い間、この人々のために祈りを捧げた。そして、その祈りがまだ彼の口に留まっているうちに、突然、大地に激しい雨が降り注ぎ、嵐は収まった。　主は、御自身を畏れる者の願いを叶え、その祈りを聞き入れられたのである。それは、預言に記されている*「そのとき、あなたは呼び求めれば、主は聞いてくださる。叫べば、主は『ここにいる』と答えてくださる」*（イザヤ書58:9）*という言葉を*、まさにその御業によって示されたのである。

司教と民衆は皆、この輝かしい奇跡に驚きつつも喜び、喜びと祝賀のうちに神に感謝の歌を捧げ、聖ヤコブを深く崇敬した。　そして、聖ヤコブの祈りによって災いから救われ、主の恵みを受けたその日を、彼らは毎年祝うことに定めた。

その後、聖ヤコブは、神が彼の悔い改めを受け入れ、罪を赦されたという啓示を受けた。それゆえ、彼はキリストの恵みにより、再び多くの奇跡を行うようになった。というのも、その国中から連れて来られ、連れて行かれた、あらゆる病に苦しむ者や何らかの病魔に取り憑かれた者たちは、たちまち癒やされ、悪霊たちは聖人の言葉によって追い払われたからである。　しばらくして、ヤコブは罪を犯す前よりもさらに大きな奇跡を起こした。

彼が神に雨を祈願したその同じ年、ヤコブにはその死が告げられた。　聖人は司教を呼び寄せ、死後、自分の遺体を、かつて住んでいたあの洞窟に埋葬するよう遺言した。その後、数日を経て、至福のヤコブは主のもとで安らかに息を引き取り、その聖なる魂は、悔い改めによって神に喜ばれた聖人たちと共に、主の御国に迎え入れられた。　ヤコブは生誕から七十五年を全うした。聖人の死はたちまち国中に知れ渡り、その埋葬には、ろうそくや香炉、香、芳香を携えた大勢の人々が四方八方から集まった。　司教も聖職者一同を率いて参列し、相応しい聖歌を歌いながら、ヤコブの聖なる遺体に高価な香油を塗った後、聖ヤコブ自身が臨終の前に司教に遺言した通り、その洞窟に尊厳をもって彼を埋葬した。　しばらくして、司教はこの聖ヤコブの御名に因んで、彼が住んでいた洞窟の近くに教会を建立し、洞窟からその尊い遺骸を取り出して教会に移し、神に愛された敬虔な神の僕、私たちの尊き父ヤコブの聖なる記念を毎年祝うことを定め、　キリスト・神の栄光のために、父と聖霊と共に、永遠に賛美される方。アーメン。

- 同日、キプロス島のコンスタンティアの司教であり、安らかにこの世を去った聖グリゴリオスの記念日である。
- 同日、1303年に帰天した、モスクワの聖なる信仰深い公ダニイル・アレクサンドロヴィチの記念日。
- 同日、1238年、タタール人によって殺害されたロストフの祝福された公ヴァシリー（ヴァシルカ）・コンスタンティノヴィチ。

3月18日

3月5日（旧暦）

聖殉教者オニシオスの記念日。彼は、殉教者コノン・イサヴリウスと同時期に生き、殉教した。

聖殉教者エウランピオスの記念日。彼は剣によって斬首された。

聖殉教者イライダの記念日。没年および没地は不明。

聖なる信仰深い公爵テオドロス・スモレンスキーおよびヤロスラヴスキー、ならびにその子らダヴィドとコンスタンティンの聖遺骨が、スパソ＝ヤロスラヴスキー修道院の大聖堂へ移された日。聖人たちの記念日は9月19日。聖遺骨は1463年に発見された。

聖殉教者コノン・イサヴリアの生涯と受難

記念日：3月5日

異邦人の使徒である聖パウロ（[2196]）は、ある伝道旅行の途中（[2197]）に、イサヴリア（[2198]）の住民たちに、我らの主イエス・キリストへの真の信仰の光を照らした。ちょうどその頃、イサヴリアから18スタディオン（[2199]）離れたベタニヤという村に、ネストルという名の男が妻ナダと共に暮らしていた。　彼らにはコノンという息子が生まれた。少年が成長すると、両親は彼を結婚させようと決め、美しい娘アンナと婚約させた。しかし、それよりも前に、聖なる大天使ミカエルが、輝く姿の男としてコノンの前に現れた。　コノンに真の信仰を教えた後、大天使ミカエルは彼を川へと導き、至聖なる三位一体の名において彼に洗礼を授け、神の聖餐を授けた。そして、彼に十字の印を施すと、姿を消した。それ以来、その若者は聖霊に満たされ、大天使ミカエルは目に見えない形で常に彼と共にいた。　婚礼の日、新郎新婦は皆の歓喜に包まれながら、婚礼の殿堂へと案内された。そこでコノンは、灯ったろうそくを器で覆い、花嫁にこう尋ねた。

「闇と光、どちらがよいですか？」

乙女はこう答えた。

「もちろん、光の方が闇より良いわ。」

[2196] 聖使徒パウロは、その偉大な伝道活動により「異邦人の使徒」という称号を授けられた。その活動の中で、彼はアジアの奥地からローマへ、さらには伝承によればスペインやブリタニアに至るまで、福音を広めたのである。

[2197] キリスト教徒の迫害者から献身的なキリストの信徒へと回心した後、聖使徒パウロは生涯を宣教活動に捧げた。 使徒は、アンティオキアから最初の福音宣教の旅を始めました。そこでは、バルナバと共に、聖霊によって福音を宣べ伝えるという偉大な使命に召されたのです（使徒行伝 13:1–3）。ヨハネ・マルコを伴い、　使徒たちはキプロスを訪れた後、小アジアへと向かい、そこでピシディアのアンティオキア、イコニウム、そしてリカオニア地方のリストラやデルベといった町々で、ユダヤ人たちからの絶え間ない迫害にさらされながらも、多くの人々にキリストの教えを広めました（使徒行伝 13:4–14:28）。 聖使徒パウロは、エルサレムでの使徒会議（51年）（使徒行伝15章）の後、シロと共に第二の旅に出た。以前に設立された教会を訪れた後、使徒　パウロはマケドニアとギリシャで成功裏に宣教を行い、フィリッポ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリントに著名な教会を設立した。コリントでは1年半滞在した。（使徒行伝 15:36–18:28）。 使徒は三度目の旅も再びアンティオキアから始めた。自ら設立した教会を再訪した後、使徒はエフェソに到着し、そこで2年以上説教を行った。その後、再びマケドニアとギリシャを巡り、エルサレムに戻った。　そこで捕らえられ、カイサリアで2年間拘束された後、ローマへ送られ、そこで2年間滞在し、妨げられることなく神の御国を宣べ伝えた（使徒行伝 18:1–22:30）。 伝承によれば、使徒はカエサルの法廷で無罪を勝ち取った後、再び福音宣教のための第四の旅に出発し、西方の境界まで到達した（エウセビオスおよびローマのクレメンス）。そして、ローマで再び投獄された後、ネロの治世中に殉教した。

[2198] イサウリア――古代小アジアの山間にひっそりと佇む小さな地域で、東はリカオニア、北はフリギアの一部、西はピシディア、南は山岳地帯のキリキアと国境を接していた。

[2199] *スタディオン*――古代の距離単位で、約80サジェナ、あるいはそれよりわずかに長い。

すると、聖コノンは神の恵みに満ちた口を開き、花嫁に対し、処女性と清らかな生き方を守り、真の神であるキリストを信じるよう説き始めた。

「これこそが」と彼は言った。「揺らぐことのない光であり、肉欲的な生活や異教の不敬虔な信仰こそが闇なのだ。」

その乙女は心根が優しかったため、神の言葉の種は肥沃な土壌に落ち、花嫁はすぐに婚約者の言うことすべてに同意した。彼女はキリストを信じ、永遠に処女性を守ることを誓った。　こうして、この聖なる夫婦は、兄妹のように、いや、むしろ二人の神の天使のように、神への愛に燃え、唯一の神にのみ仕えながら、貞潔のうちに暮らした。さらに少し時が経つと、至福のコノンは、自分の両親をも説得し、偶像崇拝を捨ててキリストに帰依させることに成功した。　コノンは父、母、そして婚約者を洗礼に導き、彼らは皆、聖コノンの指導と教えのもと、神に喜ばれる生き方をした。コノンの父である至福のネストルは、　で偶像崇拝者たちによって、彼らの誤りを糾弾したために殺害され、殉教の冠を授かった。　しばらくして、聖人の母である至福のナダも安らかに主のもとへ旅立ち、その後、コノンの婚約者であった聖処女アンナも、朽ちることのない天の花婿キリストの宮殿へと移り住んだ。聖コノンは彼ら全員を、一つの場所に丁重に埋葬した。

独り残されたコノンは、神のために生き続け、神への黙想に励み、断食や労苦、徹夜の祈りによって肉体を鍛え上げた。その功績により、彼は聖霊の恵みにあずかることとなった。その恵みは、ある種の宝物のように長い間彼の中に秘められていたが、聖コノンの老齢の頃にようやく現れたのである。その経緯はこうであった。

その国、人里離れた場所、人跡未踏の山々の中に、恐ろしく暗い洞窟があった。洞窟の中には偶像崇拝の神殿があり、そこには不敬な神アポロンの巨大な石像[2200] が立っていた。アポロンはイサウリア地方で特に崇められていた。　イサウリアの人々には、毎年アポロンの祭日にそこに集まり、生贄を捧げ、神に忌み嫌われる祭りを執り行う習慣があった。その祭りの日が訪れ、町の住民全員が洞窟にある神殿へ向かうために集まったとき、聖コノンは神の御霊に導かれて町へとやって来た。馬に乗った者や徒歩の者など、まるで戦いに備えているかのような武装した大勢の人々を見て、彼は大きな声で彼らに叫んだ。

「エサウの民よ、少し待ってください。あなた方に一言申し上げたいのです。なぜ武装しているのですか？ まさか、敵軍が突然あなたの国を襲い、戦いを挑んできたというのですか？」

民衆はコノンに答えた。

「いいえ、私たちはアポロン神に生贄を捧げ、祭りを執り行うために向かっているのです。」

聖コノンは再び彼らに尋ねた。

「このアポロンとは一体誰なのか、またその力はどのようなものなのか、あなた方から聞きたいのです。」

人々は答えた：

「彼は私たちの守護神であり、あらゆる恵みを授けてくださる方です。私たちの先祖たちも彼に支えられてきました。私たちが彼を祝う習慣を受け継いだのも、その先祖たちからです。」

すると聖人は、彼らを嘲るように笑いながら、こう問いかけました。

「あなたがたの神の声を、あるいは何らかの言葉などを、かつて聞いたことはあるか？」

彼らは答えた：

「いいえ！ しかし、私たちの先祖は、その神を信じるよう私たちに命じていました。」

聖コノンはこれに対し、彼らにこう言った。

2200 *アポロン*は、古代ギリシャおよびローマの人々が崇拝した神であり、光、とりわけ太陽の光、ならびに知性の啓蒙、詩、音楽の神として、また予言者、病を癒す者、そして社会秩序の守護神として崇められていた。

「あなた方の先祖たちは、言葉を持たない獣のように、真の神を知らずに惑わされていたのです。もし彼らが神を知っていたなら、耳も口も利かず、醜い偶像をこれほど崇めることはなかったでしょう。」　あなたがたの神に対する権限を私に与えてくれ。そうすれば、あなたがたが誰を崇めているのか、その神が一体何者なのかを、私が示してやろう。もし私がその像に絵の具を塗ったとしても、果たしてそれを洗い流すことができるだろうか？もし私が鉄の槌でそれを打ち砕いたとしても、果たして再び元の姿に戻ることができるだろうか？もし私がその像に食べ物を与えたとしても、果たしてその像は手を伸ばして食べ物を受け取り、食べ始めるだろうか？！　いつまで狂い続けるつもりか。私の言うことを聞きなさい。私はあなた方の街の出身だが、あなた方の行いとは無縁だ。偶像崇拝を捨てなさい。そうすれば、真の神をどのように崇め、高き所に座しておられる方にどのように礼拝すべきかを、私が教えてあげよう。　この方は、目には見えないがすべてを見通す神であり、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものの創造主であり、強大で全能の王であり、御自分のしもべたちを救い、御自分の敵、すなわち偶像を崇拝し、悪魔たちに犠牲を捧げる者たちを滅ぼされる方である。　この神は血を流す生け贄を求めず、むしろ御自身のもとに来る者たちが、悪意や偽りなく御自身を知り、御自身が真の神であり、御自身の独り子、私たちの主イエス・キリストの父であり、父から離れることのない方、すなわち御子を通して永遠を創造された方であることを信じることを望んでおられる。　また、御父から出られる永遠の聖霊も、御父と御子と共に御国を治めておられる。この三つの位格は、本質において唯一の神であり、御自身を憎む偶像崇拝者たちを火で焼き尽くすが、御自身を愛する者たちを愛しておられる。御慈悲には限りがない。なぜなら、御自身に希望を置き、信仰をもって御名を呼び求めるすべての人々に、御慈悲を注がれるからである。

民は聖人のこの言葉に動揺し、その間には大きな騒ぎが起こった。ある者たちは聖人を殺そうと彼に襲いかかったが、他の者たちは、　彼からさらに何かを聞きたいと願っていたため、彼に手を上げさせないように彼らを引き止めた。民の動揺が幾分収まると、民の中から数人が聖人に尋ねた。

「我々が他のどの神よりも崇めている我らの神アポロンの上に、神がおられるということを、どうして我々に納得させることができるのか。我々がその神を信じるように、あなたの神からの何らかのしるしを見せてほしい。」

聖コノンは、しるしを求めていると聞いて、神に信頼を置き、民にこう言った。

「ほら、あなた方の多くは馬に乗っており、徒歩の人々も少なくなく、若くて力強い若者たちもいる。　さあ、皆でアポロンの洞窟、すなわちあなたがたの集会の場所へ行きましょう。あなたがたは先頭に立ち、私は老いぼれですから、あなたがたの後からついていきます。そして、どちらが先に着くか、互いに約束を交わしましょう。先に着いた方の神こそが偉大で真実な神であり、その神を信じるのがふさわしいのです。　もし、馬に乗っている者や、若くて力強い者たちが、私のような年老いて体の弱い者を追い抜き、私より先にアポロンの神殿にたどり着くならば、あなた方の神こそが真の神である。しかし、もし私という老人が、徒歩であなた方より早くそこに着くならば、私の神はあなた方の神よりも偉大であり、あなた方はその神を信じなければならない。

皆は彼の言葉に賛同し、彼が提示した条件にも同意して、互いにこう語り合った。

「この老人は四日間かけてもそこへたどり着けないだろう。道は遠く、険しい。高い山々や深い谷間を縫うように続いており、その辺りは茂った低木に覆われているからだ。」

その後、皆は洞窟へと急いだ。ある者は馬を頼りに、ある者は自分の足で――そして聖コノンは、苦労しながら彼らの後を追った。　道中、彼は神に熱心に祈りを捧げると、たちまち聖なる大天使ミカエルが彼の前に現れ、彼を抱き上げ、一瞬にして皆が目指していたその場所へと運び去った。一方、馬や徒歩で急いでいた人々を、大天使は目に見えない力で混乱に陥らせ、彼らは山や荒野をさまよった。人々と馬は山の高みから転落して砕け散り、一日中、一晩中、アポロンの洞窟にたどり着くことができず、自分たちが正しい道を進んでいるのかさえ確信が持てなかった。　朝、彼らにとっ

て予期せぬことに、聖コノンが迎えに出てきた。彼を見た人々は、大きな驚きに包まれた。聖人は彼らを笑いながら、こう尋ねた。

「なぜもっと早く来られなかったのか？　私は長い間あなたたちを待っていたが、ついに迎えに行くことにしたのだ。」

ひどく疲れ果てた人々は、聖人に自分たちに起こったことをすべて話し、アポロンの神殿への道を示してくれるよう懇願した。すると、聖コノンは彼らの先頭に立ち、洞窟へと導いてから、こう言った。

「ほら、私は約束を果たし、あなたたちより先にここへ来た。今こそ、私の神が偉大であることを認め、その神を信じなさい。そして、あなたたちの神を私の手に委ねなさい。そうすれば、これまであなたたちを惑わせてきたその神に、私が報いを与えてやる。」

しかし、彼らは聖人に叫んだ。

「いいえ、私たちの神に罪をなすりつけたり、復讐したりしないでください。遅れてしまったのは私たち自身の責任です。道に迷ってしまったため、約束を果たせなかったのです。」

その答えに聖人は激しく怒り、彼らにこう言った。

「もしあなたがたが今なお私の神を信じず、自分たちの偶像を信じ続けるのなら、その偶像が自ら告げることを果たせるだろうか？」

彼らは皆、こう答えた。

「もし本当に我らの神の声を聞くことができれば、直ちにその言葉に従います。なぜなら、我らは疑いなくその神を信じているからです。」

そして再び聖人と約束を交わし、以前よりもさらに固く、自分たちの神が語ることはすべて信じると誓った。そこで聖人は、アポロンの神殿があった洞窟の前に立ち、大きな声で偶像に向かって叫んだ。

「偶像よ！　お前に告げる。わが主イエス・キリストがこう命じられる。神殿から出て、ここへ私のところに来なさい。」

するとたちまち、魂のないその偶像は、まるで生きているかのように揺れ動き、その場所から転げ落ち、地面を転がりながら聖人の元へやって来て、地面から立ち上がると、聖人の前に立った。大勢の群衆は激しい恐怖に襲われ、大声で叫びながら逃げ出そうとした。聖コノンは彼らに手を振り、恐れるなと言いなだめ、かろうじて彼らを止めさせた。彼らを落ち着かせると、彼は再び偶像に向き直り、皆はこれから何が起こるのかと注意深く見守った。そして聖人は偶像に尋ねた。

「答えよ、魂なき像よ。真の神とは、お前なのか、それとも私が宣べ伝えている私の主イエス・キリストなのか？」

すると、石の偶像は震えながら両手を天へと伸ばし、人間の声で大声でこう言った。

「唯一の真の神は、あなたが説くキリストである。」

そう言い終えると、偶像は倒れ、粉々になった。この奇跡を目撃した民衆は皆、声をあげて叫んだ。

「唯一の真の神、コノンの神よ。主は勝利された。」

そして、大勢の民がキリストを信じ、偶像を打ち砕いて聖なる洗礼を受けた。一方、頑なな者たちは以前の不信仰のままであり、アポロンの偶像が滅びたことを深く嘆いた。しかしその後、聖コノンによって行われる様々な奇跡を目撃し、その地の残りの異教徒たちもキリストを信じるようになった。

その同じイサウリア地方の、同じく人里離れた場所にある別の洞窟には、恐ろしい悪霊が棲み着いていた。その悪霊は、まるで戦士や山賊のように、通りかかる人や動物に襲いかかり、殺害していた。　イサウリアの人々は、自分たちに害を与えたり殺したりしないよう懇願して、彼に多くの生

贄を捧げたが、その嘆願は役に立たず、かえってさらなる破滅を招く結果となった。そこで、信者や異教徒を含む大勢の人々が集まり、皆で聖コノンのもとへ赴き、その国から悪魔を追い払ってくれるよう熱心に祈願した。　信者たちは、聖コノンに働きかけるキリストの力を少しも疑うことなく祈った。一方、異教徒たちは狡猾に聖コノンを試そうとした。彼らは、聖コノンが凶暴な悪魔を追い出すことはできず、むしろ悪魔に殺されてしまうだろうと考えていたからである。　イサウリア人たちの懇願に応じ、聖コノンは大勢の民に付き添われてその場へ向かった。彼は悪魔が棲む洞窟のすぐそばまで近づき、民は畏れおののきながら少し離れた場所に立ち止まった。聖人は洞窟の方を向き、民全員の目の前で、キリストの名によって不浄な霊に洞窟から出るよう命じた。　洞窟の中から悪霊が聖人に呼びかけ、人々にその忌まわしい姿を見られないよう、目に見えない形で出ることを許してほしいと懇願した。しかし聖人は、脅すように悪霊に皆の前で姿を現すよう命じた。すると悪霊は、民衆全員の目の前で、恐ろしく震える女性の姿となって洞窟から出てきた。　聖人は、悪魔に誰にも害を及ぼすことを禁じ、彼をゲヘナへ追放した[2201]。するとすぐに悪魔は姿を消し、民衆は一斉に叫んだ。

「コノンの神は偉大なり！」

多くの異教徒がキリストを信じるようになった。そして聖コノンは、民に真の神への信仰を十分に説き終えると、町へと戻った。民は喜びの歌声を上げながら彼を見送った。聖人自身が歌い始めると、民もそれに合わせて歌い、真の神であるキリストを賛美した。　帰還後、聖コノンは故郷の村、父の家に住み着き、奇跡を行い、信仰を持って彼のもとを訪れる人々のあらゆる病を癒やし、神から与えられた権能によって悪霊を追い払った。

イサウリアの最も高貴な住民の一人が、盗賊に襲われ、大量の金を奪われてしまった。この盗難事件で多くの人々が誣告され、拷問にさらされた。無実の人々は足枷をはめられ、牢獄に閉じ込められたが、金は見つからなかった。　そこで、盗難被害に遭った本人や、無実の罪を着せられ投獄されて苦しんでいた人々の親族たちが聖コノンのもとを訪れ、聖人の足元にひれ伏して、盗まれた金を発見できるよう神に祈ってほしいと懇願した。聖人は、無実の罪を着せられ苦しんでいる人々を憐れみ、市民たちの願いを聞き入れることに同意した。　彼は町へと向かった。そこで広場に立ち、天に向かって両手を挙げ、神が盗まれた金の隠し場所を明らかにしてくださるまで、熱心に神に祈り続けた。多くの民を連れて、聖コノンは彼らと共に町の外へ出ると、砂漠をかなり長い距離進んだ後、ある岩のそばにたどり着いた。　その岩の下には、盗賊たちが隠しておいた金が発見された。聖コノンは同行者たちに金を回収し、町へ持ち帰るよう命じた。イサウリアの民は皆、深く驚き、神を賛美した。すると、金を盗まれた人物が、盗賊たちが誰なのか知りたがり、コノンに尋ねたところ、聖人はこう答えた。

「あなたの金を持ち帰り、無傷で返ってきたことを喜びなさい。そして、投獄されている者たちを解放しなさい。」

その男はそのままその通りにした。この奇跡の噂は国中に広まり、多くの人々が神に立ち返り、キリストの教会は日ごとに成長し、増え続けていった。

しばらくして、聖コノンは自宅で沈黙を守っていたところ、自分に向かって襲いかかってくる大勢の悪魔を目にした。島に住み、人々や偶像崇拝の神殿から追い出されたすべての悪魔が、聖人に対して武装していたのである。　悪魔たちを見た聖人は、イエスの御名によって彼らを縛り上げ、動

[2201] *ゲヘナ*——これは、ヘブライ語の言葉をギリシャ語で再現したもので、「*エノムの谷*」または「エノムの息子たち」を意味する。この谷とは、ユダヤ人がかつてモロクへの生贄として子供たちを捧げていた、深く狭い峡谷を指す（列王記下24:10；　エレミヤ書7:11）。後世には、あらゆる種類の不浄物の投棄場として用いられ、それらを焼却するためにここでは常に火が燃やされていた。そのため、エンノムの谷は永遠の苦しみを受ける場所の象徴となった。　まさにこの意味、*すなわち地獄*という意味で、新約聖書において「ゲヘナ」という言葉が使われている（マタイ5:24–40、10:28、18:9、23:15；ルカ9:43、45；ルカ12:5；ヤコブ3:6）。

けなくした。すると悪魔たちはコノンに懇願し、深淵へ追放するのではなく、自分の望むことをさせるよう命じてほしいと頼んだ。聖人は、人々に害を及ぼすことを禁じた上で、彼らに様々な仕事を命じた。　ある者には菜園の土を掘り起こし、雑草やイバラ、イラクサを引き抜くよう命じ、別の者には畑を耕して種を蒔くよう、またある者には果実を守るよう、ある者には家畜の群れを放牧し獣から守るよう、ある者には薪を割ったり水を運んだり、あらゆる家事をこなすよう命じた。　悪魔たちは、奴隷や捕虜のように、聖コノンが望む限り彼に仕え、彼が命じるあらゆる仕事を熱心に遂行した。なぜなら、彼らは神の打ち破ることのできない力に縛られ、神の御心に適う者に隷属させられていたからである。

ある夜、聖人の家に強盗たちが押し寄せた。彼はその地方全体で名高かったため、彼らは彼から豊富な戦利品を得られると期待していたのである。

聖人を縛り上げた強盗たちは、拷問によって、彼が金を隠している場所を白状させようとした。　彼らがすでに拷問を始めようとしたその時、神の御命令により、聖人に仕える悪霊たちが現れ、強盗たちを捕らえて容赦なく打ちのめした。その後、炉に火を焚いて彼らの体を焼き始め、聖人を縛りから解き放った。　聖人は強盗たちに憐れみを示し、悪霊たちに命じて拷問を止めさせた。悪霊たちは、かろうじて息のある強盗たちへの拷問を中止した。聖人の祈りによって強盗たちは正気を取り戻し、聖人は彼らを平和のうちに解放し、強盗を止めるよう戒めた。　悪霊たちは聖コノンを強盗たちから解放しただけでなく、神の御心により、彼の名前の名誉さえも守った。というのも、もし不信仰なイサウリア人の誰かがコノンを冒涜しようとすれば、直ちに目に見えない悪霊たちがその者に襲いかかり、打ちのめしたため、コノンの名はすべての人にとって崇敬と畏怖の対象となったからである。 ある日、二人の偶像崇拝者がコノンのことを思い出し、悪口で彼を誹謗し始めた。 すると直ちに悪霊たちが彼らに襲いかかり、殴りつけ、髪を掴んで道を引きずり回し、聖人の足元に冒涜者たちを投げ伏せた。それ以来、すべての不信仰者たちのコノンに対する恐怖は極めて強くなり、彼らは聖コノンについて悪いことを考えることさえ敢えてしなくなった。　ある日、ある男がリンゴを盗むつもりでコノンの果樹園に忍び込んだ。しかし、目に見えない守護者たちが彼を捕らえ、殴りつけ、ロバと果物でいっぱいの袋と共に聖人の元へ連れて行った。聖人は彼に諭しを与え、二度と盗みを働かないよう戒めた上で、平穏に帰した。

ある貧しい未亡人が、収穫の時期に畑に来て、刈り取り人たちの後を歩きながら、残された穂を拾っていた。彼女の腕には、幼い一人息子が抱かれていた。突然、森から狼が飛び出し、母親の手から子供を奪い取り、荒野へと連れ去ってしまった。　人々は狼を追いかけたが、追いつくことも、狼の口から子供を救い出すこともできなかった。悲嘆に暮れた女性は、奇跡を行う聖人コノンのもとを訪れ、泣きながら彼の足元にひれ伏し、自分の悲しみを打ち明けた。　聖人は直ちに目に見えない僕たちに命じると、彼らは瞬く間に子供を口にくわえた狼を捕らえ、聖人の前に連れてきた。聖人は母親に、生き生きと無傷の息子を返すと、狼には自分の居場所へ戻るよう命じた。

しかし、すべての悪魔が聖人の言葉によって縛られていたわけではなかった。そこで、そのうちの何人かが、その国の住民に様々な病気、とりわけ天然痘を蔓延させ始めた。聖人は悪魔たちの策略を見抜き、神に祈りを捧げると、たちまちこれらの悪魔たちに対する権威も得た。　聖人は悪魔たちをすべて集め、彼らを戒めた。ある者は荒野へ追い払い、ある者は深淵へ送り、またある者は縛って錫を流し込んだ三十の土鍋に閉じ込め、十字の印で封印した後、自分の家の地下に埋めました。

その頃、キリスト教徒への迫害が始まり、イサウリアには皇帝の勅令を携えたマグドンという名の総督が到着した。総督はまず、ウソロヴェの村で聖オニシオスを拷問の末に死に至らしめた。その後、聖コノンも捕らえられた。彼は偶像への生贄を捧げるよう強要され、数多くの残酷な拷問にさらされた。　イサヴリアの人々は、総督が聖コノンを拷問にかけたと聞きつけ、大勢で武器を携えてウソロフの村へと向かい、総督を殺害しようとしました。　彼らの意図を知った総督は、家来たちと共に馬に乗り、その国の領外へと逃げ去った。イサヴリア人は彼を追ったが、追いつくことはできな

かった。聖殉教者コノンが縛られ、全身に傷を負い、血まみれになっているのを見つけると、彼らは彼を解き放ち、彼のために泣いた。　彼らは聖人の血を拭い取り、その血を自らの体に塗り、聖人の血による聖化を得ようと願い、キリストのために受けた傷跡に感動して口づけをした。　聖なる殉教者は、自分のキリストのために苦しみの中で死にたいと願っていたにもかかわらず、最後まで苦しむことを許されなかったことに、深く嘆き、魂を痛めた。　その後、信者たちは聖人を彼の実家であるベタニヤの村へ連れ帰り、その傷を癒やすためにあらゆる手当てを施した。苦難から2年後、聖コノンは神のもとへ召された。　イサウリア地方全土の住民が集まり、聖人の死を悼んで泣いた。彼は、祝福された両親と、生涯を通じて清らかな処女性を守り抜いた聖なる婚約者と共に埋葬された。聖コノンの埋葬後、イサウリアの人々は殉教者の家を教会に改築することを計画した。　基礎工事のために地面を掘り始めたところ、聖コノンが悪魔たちを閉じ込めていた三十個の土器が地中から発見された。その土器の中に何が入っているか知らなかったが、金や銀が隠されているのではないかと推測した発見者たちは喜び、一つの土器を割った。　するとたちまち、濃い悪臭を放つ煙の姿をした悪魔たちがそこから飛び出し、空気を濁らせながら恐ろしい旋風を巻き起こした。人々は皆恐怖に襲われ、ある者は恐怖のあまり倒れ込み、ある者はその場から逃げ出した。一方、悪魔たちは空を飛び回り、大きな騒音を立てながら互いの名前を呼び合っていた。　その村の者たちは皆、激しい恐怖に襲われ、日没後は誰も家から出ることを敢えてしなかった。というのも、夜になると多くの悪魔の化け物が現れて、人々や動物を脅かしたからである。これは、壺の中に財宝があると思い込んでいた金に目がくらんだ人々への罰として、神が一時的に許されたことだったのである。　聖コノンの祈りによって、悪魔の亡霊たちは追い払われた。　悪魔を封じ込めていた残りの二十九の器は、聖コノンの教会の下に埋められた。彼の聖なる祈りによって、私たちも常に悪魔から守られ、父と子と聖霊――三位一体の唯一の神――を永遠に賛美することができますように。アーメン。

コンダク、第3調:

地上で天使の如き清らかさをもって生き、それゆえに天使と語り合う者にふさわしい者とされ、両親をキリストへの知恵へと導き、三位一体の唯一の神を告白して、血を流すまで苦難に耐え抜いた、殉教者コノンよ、私たちすべてのために絶えず神に祈り求めてください。

聖殉教者コノン（通称「菜園師」）の記念日。

記念日：3月5日

聖コノンはデキア帝の治世に生き、ガリラヤのナザレの出身であった。　そこから彼はパンフィリアのマンドン（あるいはマギド）という町に移り住み、そこでカルメナと呼ばれる場所に菜園を造り、その実りを糧として暮らした。彼は善良で、悪意がなく、純朴な人であった。読み書きはできなかったが、神に喜ばれる生活を送っていた。　キリスト教徒を迫害するためにこの町を訪れていたイゲモン・プブリウスが彼のことを耳にすると、直ちに兵士たちを遣わして彼を捕らえさせた。遣わされた者たちはコノンの元へやって来て、嘲笑を込めて、親しげな言葉で彼に挨拶した。コノンは喜びをもってその挨拶に応じ、親切にも彼らを迎え入れた。すると兵士たちは彼にこう言った。

「イゲモン・プブリウスがあなたを呼んでいる。」

聖人はこう答えた。

「私に何の用があるというのか？　私はキリスト教徒なのだ。むしろ、彼には同じ考えを持つ者たちを呼ぶべきだ。」

兵士たちは聖コノンを縛り上げ、イゲモンのもとへ連行した。偶像への生贄を捧げるよう強要されたとき、彼は心の奥底で、不信仰者たちの盲目さと迷いを嘆き、イゲモンの不敬虔を非難しつつも、キリストへの信仰を告白する姿勢を揺るがすことはなかった。　そこで、彼の足に鉄の釘を打ち込まれ、イゲモンの戦車の前を走らされた。やがて、この聖なる殉教者は疲労のあまり膝をつき、口に祈りを捧げながら、その魂を主の御許に委ねた。

聖イシキオス・ポストニクスの記念日

記念日：3月5日

神の偉大なる御使いイシキオスは、幼い頃から徳を教えられ、育てられた。あらゆる地上の富への執着を捨て去り、彼は絶えず天のシオンの永遠の恵みについて思いを巡らせていた。そのために、彼は故郷の町アドラップを離れ、アドラニア近郊の荒野へと退いた[2202]。

孤独の中で修行に励むため、聖人はマヨニスと呼ばれる山に住むことを望んだ。しかし、そこに棲んでいた悪魔たちは、聖人によって山から追い出されることを予見し、聖人をこの山に入らせることを拒もうと、ヨハネとイラリオンという二人の人間に取り憑き、神の御心にかなう者に遭遇すると、こう尋ねた。

「どこへ行くのか？」

聖人の意図を知ると、彼らはこう言った。

「この場所が非常に危険だということを知らないのか？　ここには多くの肉食獣が生息しているから、お前は確実に死を招くことになる。さらに、ここには強盗たちも住んでいるので、お前は一日たりともここには生き延びられないだろう。」

聖人は、それが人間の言葉ではなく悪魔の言葉であることを霊で悟り、こう言った。

「私の数多くの罪ゆえに、私はとっくに死に値している。だからこそ、獣に食われるにせよ、強盗に殺されるにせよ、死ぬためにそこへ向かうのだ。」

そう言うと、聖人は祈りを捧げ、十字架の力で不浄な悪霊たちを追い払い、その道を歩み続けた。山に登った聖人は、自分なりの場所を選び、小部屋を建て、断食の修行に励み始めた。また、聖人はここに菜園も作り、それを耕し、種を蒔いて、自らの労働の成果で生計を立てていた。

ある時、聖人の菜園に多くの鳥が押し寄せ、穀物や種を食べ尽くし、聖人の労苦の成果を台無しにしてしまった。そこで聖人は神に祈りを捧げると、たちまち、聖人の労苦の成果を口にした鳥たちは地面に落ち、飛ぶこともできずに翼を広げたまま地面に横たわった。　種に触れた鳥たちは皆、もはや空に舞い上がることができず、まるで何らかの毒に侵されたかのように、地面に転がり続けていた。そして、その場所は地面に横たわる無数の鳥たちで埋め尽くされた。

しばらくして、聖人は鳥たちを憐れみ、修道室から出てきて、彼らにこう言った。

「ここから立ち去り、もはや修道士たちの労作を食べてはならない。」

聖人がこの言葉を口にするやいなや、地面にいた鳥たちは一斉に空へと飛び立ち、それ以来、二度と聖人の庭に近づくことはなかった。

ある谷で泉を見つけた聖人は、そこに聖使徒アンドレイの名を冠した小さな教会を建て、そこで弟子たちと共に神を想う生活を送った。

ある日、悪霊に取り憑かれた少女が聖人のもとへ連れてこられた。その両親は聖人の足元にひれ伏し、娘から不浄な霊を追い出してくれるよう懇願した。聖人は神に祈りを捧げると、直ちに少女から悪霊を追い出し、両親にこう言った。

2202　*アドラパ*（またはアントラパ）は、ガラティアのアンキラとアマフィアから等距離にある都市であり、別名クラウディオポリスとも呼ばれる。*アドラニア*は、ビフィニアにある海辺の都市（トルコ語でエドレノス）である。

「聖霊はこう言われる。私の死後、この場所に断食を行う聖なる女性たちの修道院が建てられ、彼女たちの祈りによって、この地からすべての悪魔の軍勢が追い払われるであろう。」

この聖人の預言は、やがて現実のものとなった。

ある日、修道院の部屋から出てきた聖人は、重く荷を積んだ荷車を引くある男を見かけた。荷車は牛に引かれていたが、そのうちの1頭が躓いて地面に倒れ、立ち上がることができなかった。 その男は牛を助け起こそうと努めたが、どうにもならなかった。倒れた牛は大きな石のように微動だにせず、労苦に疲れ果てた男は泣き出した。

それを見た聖人は彼を憐れみ、牛のそばに近づいて首を撫でながら、言葉を発することのない牛に、まるで言葉を理解しているかのようにこう言った。

「起きなさい、怠け者よ。敵の悪意の道具とならないよう、旅を続けなさい。」

そう言うと、聖人は牛に十字の印を切った。するとすぐに、牛は立ち上がり、重い荷車を静かに引き始めた。その男は起こったことに大いに驚き、聖人に頭を下げて感謝を述べ、喜びながら旅を続けた。

聖人は日ごとに偉大な功績を目指し、より完全な美徳へと高まっていったため、やがて天使たちと語り合うにふさわしい者となった。神の天使から、彼は死の三十日前に自らの死について知らされた。最期を迎える準備をする中、聖人は大きな喜びに満たされた。

臨終に際し、聖人は共に暮らしていた弟子たちを呼び寄せ、多くの教えを授けた。真夜中、突然、天から光が降り注ぎ、聖人の独房だけでなく、その場所全体を照らし出した。聖人は喜びをもって「わが霊を御手に委ねます」と告げ、天の住まいに旅立った[2203]。

その聖なる尊い遺体は、前述の聖使徒アンドレイに捧げられた教会内の、聖なる門の前にある石造りの棺に埋葬された。

その後、聖人の尊い遺骸は、アマシアの司教テオフィラクトによってアマシアの街へ移され[2204]、792年、コンスタンティノスとイリーナの治世において、祭壇の右側に安置された[2205]。 そして、その聖人が修行に励んだ荒野の地には、聖人が予言していた通り、女子修道院が建てられた。

聖マルコ・ポストニクの記念日

記念日：3月5日

この聖なる修行者は、その断食の生活によってすべての修道士を凌駕した。同時に聖書の研究に没頭し、彼が著した教訓書[2206] が証言するように、徳において完全さを達成し、多くの奇跡を成し遂げた。 この聖人の心の清らかさは極めて高潔であったため、修道院の長老は、自ら誓いを立てて証言したように、決して自らの手で彼に神の秘跡を授けることはなかった。むしろ、彼が聖体拝領に臨むたびに、聖杯を手にした天使から聖なる賜物を受け取り、その天使自らが彼に聖体を授けていた。 尊者に仕えた者は、彼が地面に唾を吐くのを見たことが一度もなかったと語っており、それほど

[2203] 聖人の死は790年頃であった。

[2204] *アマシアは*小アジアの北部、黒海沿岸に位置する。

[2205] ビザンツ帝国のコンスタンティノス6世ポルフィロゲネトスは780年から797年まで、イリナは797年から803年まで在位した。

[2206] 聖マルコは神の御言葉を極めて深く学び、聖書全体を暗唱できるほどであり、聖ヨハネ・クロソストモスの教えを直接受けた弟子であり、多くの教訓的な言葉を著した。これらの言葉は1858年にロシア語訳として出版された。

彼の柔和さは際立っていた。尊者は四十年間修道生活を送り、六十年にわたり断食の修行を続けた[2207]。百歳の時に、彼は主のもとへ旅立った[2208]。

聖殉教者エウロギオスの記念日

記念日：3月5日

聖殉教者エウロギオスはパレスチナ出身であった。彼の両親は不信仰者であった。両親の死後、聖人は相続した財産を貧しい人々に分け与え、自らもキリストのために貧しさを選び、巡礼者としてパレスチナ全土を巡り歩き、不信仰者たちを教え導き、彼らをキリストへと回心させた。　その国の統治者の前で誹謗中傷を受けた聖人は、偶像への生け贄を捧げることを拒んだため、多くの拷問に耐えなければならなかった。ついに、聖人の首は斬り落とされた。

- 聖殉教者オニシオスの記念日。彼は、殉教者コノン・イサウリアスと同時期に生き、殉教した。
- 聖殉教者エウランピオスの記念日。彼は剣によって首を切られた。
- 聖殉教者イライダの記念日。没年および没地は不明。
- 聖なる信仰深い公爵テオドロス・スモレンスキーおよびヤロスラヴスキーとその子ら、ダヴィドおよびコンスタンティンの聖遺骨が、スパソ＝ヤロスラヴスキー修道院の大聖堂へ移送された日。聖人たちの記念日は9月19日。聖遺骨は1463年に発見された。

3月19日

3月6日（旧暦）

聖殉教者コノンとその息子コノンの受難――イコニアにて殉教した者たち

記念日：3月6日

不敬虔なアウレリアヌス帝の治世[2209]、イコニアの町[2210]に、コノンという名の男が住んでいた。彼は容姿端麗で、神を畏れる人であった。　コノンの妻もまた、主への揺るぎない信仰を持っていた。夫婦二人とも天の故郷への愛に燃え、地上の栄誉や名声よりも、天の栄誉と栄光を求め続けていた。長い間、彼らは神に祈り続け、息子を授けてくださるよう願った。　主は彼らの祈りを聞き入れ、息子を授けてくださった。彼らはその子を同じくコノンと名付けた。母は、赤ん坊の誕生当日、使徒の言葉*「しかし、子を生むことによって救われる」*（Iテモテ2:15）に従い、救いへの確固たる希望を抱いて主のもとへ旅立った。

聖コノン自身は、昼夜を問わず祈りに明け暮れた。息子が七歳になった時、コノンは所有するすべての財産を貧しい人々に分け与え、少年を連れて修道院に入り、そこで修道生活を送った。　主は彼に恵みを与え、彼は盲人の目を開き、ハンセン病患者を清め、悪霊を追い出し、様々な病を癒やし、多くの輝かしい奇跡を行なった。

[2207] 聖マルコは40歳の時に修道生活に入り、60年間にわたり修道生活を送ったとされている。彼の修行の地は、下エジプトのアレクサンドリアから南へ70ヴェルスタ、ナイル川の西側、リビア砂漠の近くにあるニトリア山であった。

[2208] 同聖人は5世紀半ば頃に逝去した。

[2209] ローマ皇帝アウレリアヌスは、270年から275年まで在位した。

[2210] *イコニア*は小アジアの都市で、現在のコンヤにあたる。

イコニアを流れる川は、春になると水量が非常に増し、氾濫してその地の住民に多くの災いをもたらし、彼らの畑や果樹園、家屋を水浸しにしていました。ある洪水では、川は普段よりもはるかに多くの集落を水没させてしまいました。　イコニアの住民たちは、神の僕コノンのもとへやって来て、彼の足元にひれ伏し、こう懇願した。

「神のしもべよ、どうか私たちを助けてください。今回の洪水は例年以上に激しく、私たちや私たちのすべての財産を水没させてしまいました。多くの人々が川の対岸に取り残され、ここへ来ることができません。」

「兄弟たちよ」と、至福のコノンは彼らに答えた。「私は罪深く、ふさわしくない者です。私に何ができるというのでしょうか？」

しかし、民衆全員が声を揃えて彼に叫び始めた。

「聖なるコノンよ、神のしもべよ、私たちを助けてください！」

そこで聖コノンは川の岸へと向かい、天を仰いで祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、かつてあなたが紅海のほとりで、あなたのしもべモーセの声を聞き、イスラエルの子らを乾いた地の上を導かれたように、今、　主よ、この民のために、私の声にも耳を傾けてください。そうして彼らがあなたの奇跡を目撃し、あなたの祝福された御名を永遠に賛美することができますように。

民全体が答えて言った：

「アーメン。」

するとたちまち、川は二つに分かれた。一方の水は突然逆流し、もう一方は元の道を流れた。そこにいた男女は皆、声を揃えて叫び、神を賛美した。神は、神に望みを置くすべての人を救われる方である。人々と家畜は、水によって追い出された自分たちの村へと戻った。　しかし、逆流した水は川の上流にある集落を浸水させ、谷や森を満たしただけでなく、高台までも覆い尽くしてしまった。そこで、民全体が再び神の御使いのもとへやって来て、起こったことを告げた。聖コノンは川に近づき、十字の印を切ってこう言った。

「全能の神の命令に聞き従え。すべての水を川床に集め、堤防を越えてはならず、人々の集落を水浸しにしてはならない。」

するとたちまち、川は主人に従順なしもべのように、その水路に沿って流れ、岸を越えることはなかった。それまでは、川の水は山のように立ちはだかっていたにもかかわらずである。

こうして、主の御言葉が成就した。*「もしあなたがたに、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって『ここからあそこへ移れ』と言えば、山は移るであろう」*（マタイ17:20）。

聖コノンは、人々の魂の救いを案じ、多くの偶像崇拝の神殿を破壊し、不信仰者たちをキリストへと導いた。　これはイコニアだけでなく、周辺の地域でも同様であった。ある時、聖コノンの評判がドミティアヌス帝の耳に入った。この不敬虔で無法な支配者はイコニアにやって来て、この街にこれほどの恐怖と混乱をもたらしたため、誰も公然と自分がキリスト教徒であることを認めることを敢えてしなかった。　多くの人々は、恐怖のあまりキリスト教の信仰を放棄することを拒み、山や荒野へと身を隠し、そこで獣たちと共に暮らした。総督ドミティアヌスは、悪魔の唆しにより、神の僕コノン捕らえて自分の元へ連行するよう命じた。

聖人が拷問の場へ連行されると、ドミティアヌスは親しげな微笑みを浮かべて彼を見つめ、こう言った。

「こんにちは、高貴な長老よ。」

「あなたもこんにちは」と聖人は答えた。

「なるほど」とドミティアヌスは続けた。「君について聞いていた話は真実のようだ。君の風貌は清らかで威厳があり、その目は星のように輝き、老齢であることも非難の余地はない。」　我々は、あなたがキリスト教という致命的な毒に侵され、ご自身だけでなく、多くの者を同じ迷いへと誘

っているという知らせを受けた。とはいえ、我々はそれを信じなかった。あなたが気高い人物であり、我々の信仰に忠実であることを知っていたからだ。

ドミティアヌスの言葉に対し、聖コノンは次のように答えた。

「有益な助言に従うべきであり、有害な助言に従ってはならないと書かれている。それなのに、なぜあなたは、捕らえられ、死刑を宣告され、十字架上で死に、墓に葬られた私たちの主を拒んだのか。なぜ、聖母マリアから生まれたことに驚かなかったのか。彼女は産んだにもかかわらず、処女のままであったではないか。　なぜ、天使たちが喜び歌いながら*「天には神に栄光、地には平和、人々に神の御心」*と告げ知らせたその誕生に、驚かなかったのか（ルカ2:14）。なぜ、五つのパンと二匹の魚で五千人を満腹させた方の力に、驚かないのか？　生まれつき目の見えない者の目を開き、墓に四日間も横たわっていた死者のラザロに命を与え、そして最後に、ご自身の御心によって全世界の救いのために苦難を受け、その死によって岩が砕け、墓が開かれ、多くの聖なる死者がよみがえった方以外、誰がそのような奇跡を成し遂げることができようか?

「しかし、もしお前の話が真実であるならば」と、聖ドミティアヌスに反論して言った、「全世界がお前のキリストを信じるようになり、ゼウスの力は滅びてしまうだろう。」

聖コノンは言った。

「その通りになるでしょう。このゼウスも、あなたがたのすべての神々も、私たちの主イエス・キリストの無敵の力によって滅ぼされるのです。主は私に真理を宣べ伝えるよう命じられました。私は最後までその真理に忠実であり続けます。なぜなら、キリストの律法にはこう記されているからです。*『わたしは道であり、真理であり、いのちである』*（ヨハネ14:2）。私たち信者には、多くの試練を経て神の御国に入るべきであり、この世の恵みの中で贅沢に暮らすこの世の子らは、追い出され、泣き叫び、歯ぎしりする暗黒の闇へと向かうことになる。

この殉教者の言葉にドミティアヌスは激怒し、聖コノンを鞭打たせ、様々な拷問にかけるよう命じた。聖人は恐れずにこう言った。

「私はあなたの拷問など恐れてはいない。さっさと企てたことを実行せよ。どうか私を最も過酷な拷問にさらし、私のキリストからより大きな報いを受けるにふさわしい者とならせてほしい。」

ドミティアヌスは言った。

「お前に有益な助言をしてやろう。我々の言うことを聞けば、我々と共に喜びを分かち合うにふさわしい者になれるのだ。」

しかし、聖コノンはこう答えた。

「私は肉体ではなく、自分の魂を救いたい。また、肉体的喜びではなく、霊的な喜びを味わいたいのだ。だが、お前という不信心者は、父である悪魔と共に地獄で拷問にさらされ、その苦しみには終わりが来ないだろう。」

その後、ドミティアヌスは聖人に尋ねた。

「お前は、その信仰においてどのような位階にあるのか、不信心な老いぼれよ？　司祭なのか？」

「いいえ」と殉教者は答えた。「私はただの凡人であり、この聖なる位階に値する者ではありません。その位階にふさわしい者たちは、キリストと御使いたちと共に、霊的な喜びを分かち合っているのです。とはいえ、私も主イエス・キリストのために生き、主を礼拝し、主の御名に喜びを見出しています。」

「妻はいたのか？」とドミティアヌスは問い続けた。

「いました」と聖人は答えた。「しかし、彼女とは長くは一緒に暮らせませんでした。彼女は私たちの神、キリストのもとへ旅立ったからです。」

「子供はいるか？」とドミティアヌスは再び尋ねた。

「息子が一人います」と聖人は答えた。「彼は私の家に残っていますが、私も彼があなたの前に現れることを願っています。」

「まさか、彼もまた我らの神々を崇拝しないというのか？」とドミティアヌスは尋ねた。

「木がどのようなものであれ、その枝もまた同様です」と聖人は答えた。「どうか、私の息子をここに連れてくるよう命じてください。そうすれば、私たちは共に殉教の冠を受けることができます。」

直ちに、ドミティアヌスの命令により、兵士たちが若きコノンを探しに出された。彼が連れて来られ、拷問者の前に立たされると、ドミティアヌスは年長のコノンに尋ねた。

「お前の息子は何歳だ？」

コノンは答えた：

——私は彼を7歳の時に修道院に預けて教育を受けさせ、そこで彼は読み書きを習得しました。12歳になった時、彼は教会の朗読者となりました。そして今、彼は17歳となり、キリストの恵みにより、助祭の位を授かり、神の聖職者の一人となっています。　私は幼い頃から彼に貞潔な生き方を教え込み、彼は殉教の冠にふさわしい者です。お願いです。長く躊躇することなく、私たちを拷問にかけるよう命じてください。そうすれば、私たちは共に、私たちの神であるキリストから冠を授かることができるでしょう。私たちはキリスト者であり、キリストのために死ぬことを望んでいるのです。

「お前の息子の名は？」とドミティアヌスは尋ねた。殉教者は答えた。

「彼は父と同じ名前です。」

ドミティアヌスは若きコノンに向き直り、こう語りかけた。

「若き者よ、聞いただろう。お前の父は長生きし、結婚し、息子をもうけ、かなり長い間人生を謳歌してきたが、今や老いぼれだ。だから彼が死を望むのも不思議ではない。だが、お前はまだ若く、人生の喜びをようやく知り始めたばかりではないか。まさか、父の言うことを聞くつもりなのか？」

拷問者の狡猾な言葉に対し、若者はこう答えた。

「父は私に、唯一の真の神、　目に見えるものも見えないものもすべてを創造された方、聖く敬虔に生きることを教えてくれました。父は私に救いの道を示し、この世の生活は生ではなく死であり、一時的な生活を愛する者は皆、永遠の命から切り離されて死ぬのだと告げました。しかし、私たちの主イエス・キリストには、御自身を愛する者たちに与えられる終わりのない命があるのです。さらに、私は父から、不義な偶像崇拝者たちには、決して消えることのないゲヘナの火による永遠の苦しみ用意されており、一方、キリストの義なる僕たちには、天の栄光の中、私たちの神であるキリストの終わりのない御国において、朽ちることのない冠が用意されていると教えられました。私たちは、その御国のためにこの世を捨て、この世もまた私たちを捨てたのです。　父からこのように教えられた私は、父と同じ考えを持ち、父が進むのと同じ道を歩んで神のもとへ行きたいと願い、父が自らを委ねたのと同じ苦難に身を委ねます。　なぜなら、わが主キリストはこう言われたからである。*「わたしの父は今なお働いておられ、わたしも働いている」*、*「子は、父が働かれるのを見ない限り、自分からは何事も行うことができない。父がなさることを、子もまた行うのである」*（ヨハネ5:17, 19）。

「もし私が、お前の父を凄惨な苦しみの中で滅ぼすとしたら、お前も同様に死ぬことを望むか？」とドミティアヌスは尋ねた。

「はい、そう願います」と、祝福された若者コノンは答えた。「私は父と共に死に、そして私たちの主の御国で共に生き返ることを願います。なぜなら、キリストのために死ぬことは死ではなく、永遠の命を得ることに他ならないからです。」

するとドミティアヌスは、長老コノンに向き直って言った。

「まことに、この若者はお前よりも賢い。ただ一つだけ彼に欠けているものがある。それは、真理を知った上で、我らの神々にひれ伏すことだ。」

長老コノンは拷問官にこう答えた。

「その若者は真理をよく知っています。なぜなら、彼は私と共に、*『わたしは真理である』*（ヨハネ14:6）と言われた方に礼拝しているからです。しかし、悪魔の偶像である、あなた方の偽りの神々には、彼も私も、永遠に礼拝することはありません。」

「これが最後だ。私の言うことを聞き、神々に拝め」とドミティアヌスは言った。「そうすれば、残酷な拷問や死から逃れ、我々から豊かな贈り物を受け取ることができるのだ。」

それに対し、長老コノンはこう答えた。

「神に見捨てられた不法者よ、人間の血に飽くことのない拷問者よ、そしてすべての人の中で最も不敬虔な者よ。私は最初から、自分がキリスト教徒であり、息子と共にキリストのために死を望んでいると告げたではないか。それなのに、あなたは悪意に酔いしれ、狂ったかのように、私の言葉を覚えていないのか？」

そこでドミティアヌスは、鉄の床を運ばせ、それを激しく焼き熱くしてから、聖なる殉教者たちを裸のままその上に横たえ、焼くよう命じた。拷問者の命令に従い、ある使用人は燃え盛る炭に火をくべ、別の使用人は聖なる殉教者たちに沸騰した油を注いだが、聖者たちは無傷のままであった。その際、長老コノンは拷問者にこう言った。

「ドミティアヌスよ、私があなたに、私を酷い拷問にかけてほしいと頼んだことを覚えていないのか？　しかし、あなたはそのことさえも真剣に試みようとしなかった。なぜなら、この拷問は私たちにとって取るに足らないものであり、私たちは焼かれる感覚すら感じていないからだ。」

殉教者たちに何の害も及んでいないのを見て、拷問官は銅の釜を用意するよう命じ、そこに錫、硫黄、樹脂を詰め、火をつけて聖なる殉教者たちをその釜に投げ込んだ。その際、彼はこう言った。

「もし灼熱の火床の上で彼らが涼しいと言うなら、私は沸騰する大釜で彼らを温めてやる。そして、彼らの神が炎の中から彼らを救い出せるかどうか見てやる。」

大釜に投げ込まれた聖人たちは、天を仰ぎ見てこう祈った。

「万物の創造主である主よ！　あなたに祈る私たちの声を聞き入れてください。かつて三人の若者のためにバビロンの燃え盛る炉を冷やしたように、この激しく熱せられた大釜を冷やすために、あなたの聖なる天使を私たちのもとへ遣わしてください。　主よ、私たちの祈りを聞き入れ、速やかに助けに来てください。そうすれば、あなたがこの世に来られた生ける神の御子であることを、すべての人が悟るでしょう。

彼らの祈りに応じて、主は直ちに御自身の天使を遣わされました。その天使は天の露で釜を冷やし、彼らにこう言いました。

「平安あれ、善良な戦士たちよ、忠実な修道者たちよ！恐れてはならない。キリストがあなたがたと共におられるからだ。主はあなたがたを勝利者とし、永遠の喜びの分かち合い者にしてくださる。」

その後、ドミティアヌスは聖なる殉教者たちを逆さ吊りにし、悪臭を放つ煙を吹きかけるよう命じた。聖コノン長老は、その命令に微笑みながらこう言った。

「狂人め！　火さえ私たちを傷つけなかったのに、まさか煙を恐れるというのか？」

聖人たちが悪臭を放つ煙で苦しめられ続ける中、彼らは拷問者を嘲り、こう言った。

「恥を知れ、この呪われた者よ。キリストの二人の戦士が、お前たちの傲慢な力をすべて打ち破り、お前たちの父である悪魔を恥じ入らせ、その悪意に満ちた策略をすべて打ち砕き、打ち負かしたのだぞ。」

ドミティアヌスは激しい怒りに満ち、恥をかかされ、他に何をすべきか分からず、この拷問を中止し、木製の鋸で殉教者たちを真っ二つに切り裂くよう命じた。使用人たちが彼らを縛り付け、鋸をかけようとしたとき、聖人たちは使用人たちに祈りの時間を与えてくれるよう願い、こうして神に祈った：

「主よ、全能の神よ、天と地の創造主よ、王たちの王、主たちの主よ。御名のゆえに私たちに殉教の栄誉を授け、苦しみの中で私たちを強め、御敵に私たちを侮辱させることを許さず、私たちを悪魔に打ち勝つ者となさったことを感謝いたします。　私たちは、全能にして至善なる、人を愛する神キリストを賛美し、こう祈ります：　全宇宙に存在する御聖なる教会に平安をお与えください。彼女を迫害する者たちを恥じさせ、打ち負かしてください。速やかに忌まわしい偶像の神殿を打ち倒し、滅ぼしてください。御力を現し、御聖なる御名の栄光を広めてください。生涯の終わりまで正しく御方を賛美するキリスト教徒の民を守り、増やしてください。　さらに、主よ、私たちの魂を平安のうちに受け入れてください。迫害者の命令が成就することなく、私たちが鋸で切り裂かれることのないようにしてください。そうすれば、私たちを滅ぼしたと自慢しようとする敵に、喜びを与えることにはなりません。　御慈悲が常に私たちと共にあり、私たちを御許へ迎え入れてくださいますように。また、ドミティアヌスが、私たちが御あなたのしもべであることを知り、御あなたが望まれたことを私たちに成し遂げられたことを悟り、この出来事を聞く者が皆、御あなたの至聖なる御名を永遠に賛美しますように。

聖人たちが「アーメン」と唱えると、天から彼らを天の住まいに招く声が聞こえてきた。聖なる殉教者たちは、十字架の印で身を守り、その聖なる魂を神の御手に委ねた。　その直後、激しい地震が起こり、偶像の神殿は崩れ落ち、町にあったすべての偶像は粉々に砕け散り、ドミティアヌスは逃げ出して自分の家に身を隠した。

修道院にいた兄弟たちは、聖なる殉教者たちに何が起きたかを聞きつけ、駆けつけて彼らの尊い遺体を運び出し、修道院へ持ち帰ると、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しつつ、すべての被造物から永遠に賛美される神を讃え、彼らを尊く葬り送った。 アーメン。

42人の聖殉教者たちの受難

記念日：3月6日

ギリシャ皇帝テオフィロス（[2211] ）は、皇帝ミカエルの息子であり、通称バルボス、あるいはトラヴォスと呼ばれ、アモレア（[2212] ）の出身であった。彼はアラブ人と頻繁に戦争を繰り広げ、時には彼らに勝利し、時には彼らに敗れることもあった。

ある時、テオフィロスは大軍を率いてアガリア人に対して遠征に出ると、ソゾペトラと呼ばれる都市――サラセン人の首長アミール・ムムナの故郷――を包囲し、この都市を攻略しようと試みた。

一方、アガリア人の首長アミール・ムムナ（別名アヴィサック）はこの時、別の場所にいた。彼はテオフィロス王に使者を送り、ソゾペトラからの撤退と、彼が愛する故郷の町を荒らさないよう切に懇願した。　しかし、テオフィロスはその願いを聞き入れず、都市を攻略して完全に荒廃させ、多大な戦利品を携えて帰還した。

[2211] テオフィロス、ビザンツ皇帝。829年から842年まで在位した。

[2212] *アモレア*――小アジアのフリギア地方にある都市。

アミルムナは、故郷の都市が荒廃したことを深く嘆き、激しく怒り、バビロン、フェニキア、パレスチナ、ケレシア、そして遠く離れたアフリカに至るまで、至る所で多額の金銭を支払って兵士を雇い始めた。

しばらくして、彼は全軍をタルススに集結させ[2213]、フリギアにある美しい都市アモレイアへの進軍を企てた。この都市は、皇帝テオフィロスの父であるミカエル・トラヴォロス王の故郷であり、テオフィロスによって破壊された自身の故郷ソゾペトルへの復讐を果たすためであった。

これを聞いたギリシャ王テオフィロスもまた、東方、西方、そしてペルシアから大軍を集め、敵との戦いに赴き、アモレイの町から三日間の道のりにあるフリギアの町ドリーレイに到着した。王の側近の多くは、サラセン軍の兵力がギリシャ軍をはるかに上回っていることを確かな情報として知ると、アガリアの君主の軍との戦いを避け、アモレイの住民を避難させて他の要塞都市に移住させるよう王に助言した。 しかし、テオフィロスは、戦いを避け、美しい都市アモレイを空っぽのままにしておくのは恥ずべきことだと述べた。

彼は軍を戦いに備えさせ、その一部をアモレイの防衛に派遣した。軍には以下の指揮官たちが同行していた：コンスタンティン（通称ドルンガリイ[2214]）、パトリキウス（貴族）の位を持つ者[2215]、アエティウス（同じくパトリキウス）、テオフィロス（同じくパトリキウス）、テオドール（通称クラティル[2216]）、プロトスパファリアの位を持つ者[2217]、ミリッセンとカリスト（通称トゥルマルク[2218]）、ヴァソイ、その他多くの将軍や名士たちであった。

しばらくして、テオフィロスとアミルムナの軍勢が激突し、大いなる戦いが繰り広げられ、双方とも多くの者が倒れた。 当初、ギリシャ軍はアガリア人を圧倒していたが、その後、神の御許しにより戦況は一変した。というのも、主キリストが、テオフィロスの偶像破壊政策に怒りを覚え、ギリシャ軍から勇気を奪い去ったからである。アガリア人は立ち直り、ギリシャ軍を圧倒し始めた。

すると突然、ギリシャ軍全体が逃げ出し、金で雇ったたった一つのペルシャ軍にのみ守られていた王を置き去りにした。

間違いなく、夜が訪れなければ、テオフィロス王はここで殺されていたに違いない。しかし、*「怒りを最後まで保たず、永遠に憤り続けることはない」*（詩篇102:9）は、キリスト教徒に憐れみを示し、突然、アガリア人の部隊に激しい雨を降らせた。その結果、彼らの弓は弱まり、逃走するテオフィロス王や敗北したギリシャ兵たちの追撃を断念した。

この激しい戦いの後、アガリア人の首長アミルムナは直ちにアモレア城に近づき、その周囲に深い堀を掘って包囲した。彼は城を陥落させることを企て、長い間、四方から包囲を続けた。

一方、ギリシャのテオフィロス王は恥を忍んでドリレイへ逃れた。そこから彼は、多くの高価な贈り物を携えた使者をアミールムムナ公のもとへ送り、アモレイの町からの撤退を懇願した。しかし、自身の町ソゾペトルが荒らされたことに激怒していたアミールムムナ公は、断固として聞き入れなかった。 王の懇願と贈り物を嘲笑し、彼を臆病者かつ逃亡者と呼んだ公は、事態の決着がつくまで王の使節たちを鎖で縛り留めるよう命じ、その後何日にもわたり、都市への激しい攻撃を続けるよう命じた。

一方、城内にいた者たちは激しく抵抗し、城壁からはアガリア軍の兵士や名だたる将軍たちが数多く討ち取られた。 城の攻略に疑念を抱いたアミルムナ公は、すでに城を放棄して故国へ帰ろう

[2213] *タルス*——小アジアのキリキア地方の主要都市。

[2214] 「*ドルンガリア*」*とは*、本来、軍艦の指揮官を指す呼称であった。

[2215] すなわち、上院議員のこと。

[2216] *クラティル*（フラティス）——強大で力強い。

[2217] *プロトスパファリオス*——剣士たちの筆頭。ビザンツ皇帝の宮廷における名誉ある称号。

[2218] *トゥルマルヒ*も、ドルンガリアと同様の地位である。

としていた。もし、アモレイ人の将軍の一人であるヴァディツィサという者が陰険な裏切りを働かなかったならば、それは間違いなく実現していただろう。このヴァディツィサは、司令官と不和になり、城を敵の手に渡すことを企てた。

彼は、すでに城壁から離れようとしていたアガリア人たちに、紙を結びつけた矢を放った。その紙には次のように書かれていた。

「なぜ、これほど長い時間を費やし、これほどの労力を注いだにもかかわらず、勝利も得ずにここから立ち去ろうとするのか？　勇気を出し、勇敢になり、城壁のあの側へ攻め込め。そこには、大理石の獅子の像が掲げられた柱があり、その柱の上部には石で造られたナツメヤシの像がある。私はここにいて、この側を守っている。私が助ければ、城壁がないため、容易に城を陥落させることができるだろう。私のこの功績に対して、どのような栄誉を与えるかは、あなた自身で決めてほしい。

矢に結びつけられたこの手紙が見つかり、アガリア人の首長アミルムムネのもとに届けられると、彼はそれを読み、大いに喜んだ。直ちに全軍に指示して指定された城壁へと進軍させ、狡猾なヴァディツィスの助力のもと、　アガリアの全軍が城内へ侵入した。そこで大虐殺が起こり、キリスト教徒の血が街の通りを川のように流れ、街は剣だけでなく火によっても破壊された。というのも、街は直ちに四方から放火され、これは当時ギリシャ人の間で増え続けていた異端に対する主の懲罰であったからである。　この都市の住民のうち、当時アガリア人の剣や火から生き残った者はほとんどいなかった。また、その時に無傷で残った者たちも、後に殺害を免れることはなく、中には捕虜となった者もいた。

住民の虐殺が終わると、王によって都市の防衛のために派遣された前述の軍司令官たち――コンスタンティン、アエティウス、テオフィロス、テオドロス、ミリッセン、カリスト、ヴァソイ、およびその他の高位の軍司令官たち、計42名――が捕虜となった。　生き残った男性、女性、若者、少女たちは捕虜とされ、アガリアの公は男性を女性、若者、少女たちから分離するよう命じた。その結果、男性は約7万人に上り、女性、少女、若者の数は数え切れないほどであった。 公は、前述の軍司令官や将校たちのみを生かして、残りの男性全員を剣で斬り殺すよう命じ、女性や子供たちは自分の兵士たちに分配した。　こうして、この美しい都市アモレアは、教会からイコンを奪い、イコン崇拝を理由に多くの聖なる殉教者を残酷に拷問した不敬虔な王テオフィロスの罪のゆえに、たった一日のうちに剣と火によって滅びたのである。

その後、拷問官アミルムナは、テオフィロスによって派遣され、都市の荒廃のすべてを目撃した者たちを鎖から解き放つよう命じ、彼らを王のもとへ送り、目撃したすべてを報告させた。

この知らせを受け、王は深い悲しみに沈んだ。その後、彼はアミール・ムムナに使者を送り、200ケンテナリウス[2219] で自身の地方総督や軍司令官たちを身代金で買い戻そうとした。 しかし、アミール・ムムナは、　、そのような金額で捕虜を返すことを拒み、軍を召集するのに千ケンテナリウスを費やしたと述べた。王の書簡と使節たちを嘲笑し、その公爵は彼らを不名誉な形で追い返した。

そこでテオフィロスは深い悲しみのあまり病に倒れ、ほどなくしてその病により亡くなった。一方、捕虜たちはシリアへと連行された。都市を敵に売り渡した軍司令官ヴァディツィスはキリストから背き、背教者となってアガリアの信仰を受け入れた。その功績により、彼は公爵から多大な栄誉と贈り物を受けた。

アミルムナ公は、捕らえられたギリシャの軍司令官たちとその従者たち、計42名を自国へ連行すると、彼らを鎖で縛り、薄暗い地下牢に閉じ込めるよう命じた。そこでは、彼らの足に足枷がはめられ、飢えと渇きに苦しめられた。　こうして聖人たちは厳しい抑圧の下に置かれ、アガリア人によ

[2219] *ケンテナリオン*――高価値の金貨の一種。

るものというよりは、前述の背教者ヴァディツィスが彼らに対して激しく悪意をむき出しにしたことによる苦難に耐え続けた。

しばらくして、不信心なアガリア人たちは、彼らの領主の唆しにより、聖なる囚人たちを自分たちのアガリアの信仰へと誘惑し始めた。というのも、この不信心な領主は、肉体を捕らえた者たちの魂までも捕らえることを、自らの功績と考えていたからである。

ある日、ある者たちが聖人たちのいる牢屋に入ってきて、あたかも彼らを憐れむかのように、わずかな施しを渡し、聖人たちに「身を守り、この過酷な監禁から解放されるように」と助言した。そして、その解放は、彼らがイスラム教に改宗した時に実現すると告げた。　しかし、聖人たちはこの狡猾な言葉に耳を貸そうとはしなかった。彼らは、キリストを否定して不敬虔なイスラム教に改宗するよりは、生涯を通じて厳しい困窮と牢獄の監禁に耐え、さらには最も残酷な死さえも受け入れることを望んだのである。　このような誘惑をもって、これらの狡猾な誘惑者たちは、聖人たちの元へ一度だけでなく、何度も訪れてきた。しかし、彼らは、自らの君主の名において、聖人たちに自由だけでなく、栄誉や多大な贈り物までも約束したにもかかわらず、何の結果も得られなかった。

ある日、最も高貴な貴族たちの一部が訪れ、囚人たちに施しを渡し、彼らのそばに座ると、偽って涙を浮かべ、まるで長い間投獄され続けている彼らを憐れむかのように泣き出し、互いにこう語り合った。

「偉大なる預言者ムハンマドを信じないことが、なんと多くの苦しみをもたらすことか！　ほら、今、私たちが重い足枷を嵌められているのを見ている者たちは、かつて王のもとで敬われ、戦場では勇敢で、民の間で称賛されていた高貴な男たちではないか。　彼らはかつて、七万を超える兵士と、堅固に要塞化された都市アモレイを指揮下に置いていたではないか。しかし今や、彼らは我らのプロトシモヴォル、[2220]（彼らは自らの君主をそう呼んでいた）の手に渡ってしまった。一体誰が、彼らからその力と不屈の精神を奪ったというのか？　果たして、彼らを無力にしたのは、偉大なる預言者ムハンマドを拒絶したことだけなのでしょうか。そのしもべである信者たちは、彼を信じてこれほど輝かしい勝利を収めたというのに。しかし、彼らがまだ彼を信じていないのは不思議なことではありません。なぜなら、誰からも教えられていなかったため、まだ彼を知らないからです。知らず知らずのうちに罪を犯している者たちは、容易に赦しを得ることができるのです。

その後、聖者たちに向き直り、宮廷の者たちはこう言った。

「今、我々が語り、憐れんでいるあなた方よ、善き助言をする我々の言葉に耳を傾けてほしい。マリアの御子があなた方に歩むよう命じるその狭い道から離れ、今この世でも来世でも広く開かれ、偉大なる預言者が我々に示すその道を歩みなさい。　神が、御自分に従う者たちを、この世ではあらゆる恵みをもって報い、来世では楽園の相続人とする権能をお持ちであると、我らの預言者が教えるのは、果たして信じがたいことだろうか。神に金が足りないというのか、あるいは何かが不足しているというのか。　無知な人々の不信仰から離れなさい。この世でもあの世でも与えられる神の賜物を嫌悪することは、常識に反するからです。それとも、あなたがたは、神が送られる時ではなく、自分たちが望む時にのみそれを受け取ることで、神の賜物の分配者になろうというのですか？　あなたがたがそうするのは、強い高慢からであり、神の恵みを軽んじ、神の慈しみを怒りに変えているのだ。なぜなら、もしあなたがた自身が、自分のしもべたちに何かを与えたとしても、　もし彼らがあなたの賜物を拒み、あなたから背を向けたなら、彼らに怒りを覚え、深く傷つけられたとして、賜物の代わりに罰を下さないでしょうか。もし死すべき人間がそうするのなら、ましてや不死の神があなたに対してそうしないはずがありません。　わが預言者の教えを受け入れなさい。そうすれば、あなたは現在の苦難から解放され、まだ生きている間に与えられる、そして死後も約束されている神の賜物を享受することができるでしょう。なぜなら、極めて慈悲深い神は、生においてイエスの厳しい律法

[2220] *プロトシムヴォロス*――首席顧問。

を履行しようとする人間が、　疲れ果てているのをご覧になり、人々をこの労苦やあらゆる不便から解放するために、預言者ムハンマドを遣わされた。そして、現世のあらゆる喜びに加え、来世における至福を約束し、その教えに従う者は善行を積むことなく、信仰のみによって救われることができると説かれたのである。

アガリア人たちのこの不敬な言葉を聞き終えると、賢明な人々は互いに顔を見合わせ、穏やかに微笑んだ。そして、詩篇の朗読者と共にこう言った。

「高慢な者たちは、あなたの律法に背いて、私のために落とし穴を掘った。あなたのすべての戒めは真実である」（詩篇 118:85–86）。

アガリアンたちを見据えると、彼らはこう答えた。

「果たして、これがあなた方の預言者の教えなのでしょうか？　そして、肉体があらゆる欲望や不浄で情欲的な欲求に打ち負かされ、私たちの理性が情欲にこれほどまでに屈服し、禁欲によって卑しい肉欲の行いから立ち直ろうなどという考えさえ決して浮かばない状態が、果たして本当に義であり、神に喜ばれることだと、あなたがたは信じているのですか？　そのような生き方をする人間と、無知な動物との間に、いったいどのような違いがあるというのか。いや、諸君、いやだ！　私たちはそのような者になることを望まず、徳高く清らかなキリスト教の律法から離れることもありません。なぜなら、私たちは神にこう叫んだ人々の弟子だからです。「私たちはあなたから離れません。なぜなら、*『あなたのために、私たちは毎日殺され、屠られる羊のように扱われている』からです」*（ローマ8:36）。*「死も、生も、御使いたちも、支配者たちも、力ある者たちも、現在も、未来も、高きものも、深きものも、その他のいかなる被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」*（ローマ8:38–39）。　聖人たちのこのような答えを聞いたアガリア人は、彼らを自分たちの信仰に改宗させることもできず、その場を去った。

しばらくして、以前と同様に、公爵から遣わされた「ギムノソフィスト」[2221] と呼ばれる誘惑者たちが、再び聖人たちのいる牢獄を訪れた。彼らもまた、囚人たちに施しを与え、一人ひとりに口づけをした後、座って聖人たちに尋ねた。

「神にとって不可能なことなどあるか？」

「何もない」と聖人たちは答えた。「神にとってはすべてが可能である。なぜなら、それが神の本質にふさわしいからである。」

「もし神にとってすべてが可能であるならば」と、ギムノソフィストたちは続けた。「それでは、神がその全能をもって、現在、誰に慈悲を注いでいるのか見てみよう。ギリシャ人か、それともイスマイル人か？」　神は、この地上で最も肥沃で美しい国々を、誰に与えられたのか――あなたたちか、それとも私たちか？　神は誰の軍勢を増強しているのか？　そして、誰の部隊を干し草のように滅ぼしているのか？　まさか神は不公正なのだろうか？もし神が、私たちが神の戒めを守っているのを見ていなかったなら、これほど大きな恩恵を私たちに与えはしなかっただろう。逆に、もし神が、あなたがたが神から遣わされた預言者ムハンマドを信じていないことを知らなかったなら、あなたがたを私たちに服従させたり、捕虜にしたりはしなかっただろう。

聖者たちは、ギムノソフィストたちの演説を聞き終えると、こう答えた。

「もしあなたがたが預言者の証言を信じていたなら、あなたがたの理屈が虚偽であることに気づいたはずだ。なぜなら、あなたがたが語っていることは、神の聖典によって裏付けられるだろうか？決してあり得ない。そして、証言のないものはすべて虚偽である。」　次の私たちの問いに答えてください。もし二人の人間が、ある一区画の土地の所有権をめぐって争い、そのうちの一人が証人を伴わずに『この土地は私のものだ』と叫んだとします。一方、もう一人は争いや口論をすることなく、誠実で信頼に足る多くの証人を立て、その証人たちが『この土地は彼（後者）のものであり、あの

[2221] ギムノソフィスト――あらゆる生活の恵みを拒み、裸で歩いた哲学者たち。

人（前者）のものではない』と証言したとします。 ――あなた方サラセン人は、誰にその畑を認めると思いますか？彼らはこう答えました：

「まことに、その畑は証人を持つ者に属する。」

– あなたがたは正しく裁いた、――聖人たちは言った。――私たちもまた、あなたがたの師であるムハンマドと、神の独り子、私たちの主イエス・キリストについて、まったく同じように論じているのだ。 私たちの主イエス・キリストは、この世に来られ、人となられ、聖母マリアから生まれられました。これは、私たちが聞いたのと同様に、あなた方もしばしば語っていたことですが、主の到来を予告したすべての古の聖なる預言者たちから、ご自身について証しを受けておられました。そして、あなたがたが「神から遣わされた者」と呼ぶ、あなたがたの偉大な預言者であり法典制定者であるムハンマドもやって来ました。さて、どうでしょうか。彼が本当に神から遣わされた者であることを明らかにするためには、二人の預言者、あるいはせめて一人の預言者からの証しがあるべきではなかったでしょうか。

聖人たちのこの言葉は、その言葉を聞いて敗北を悟ったギムノソフィストたちを恥じ入らせた。

すると、聖ヴァソイが微笑みながら口を開いた。

「サラセン人の立法者にも――」と彼は言った、「彼について預言した、栄光に満ちた真の預言者、聖イザヤがいる。もし私がこれらの賢明な人々（すなわちギムノソフィストたち）を悲しませることを避けていたなら、彼らにこの預言を伝えていたであろう。」

「私たちは決して悲しむことはありません」と彼らは言った。「なぜなら、たとえ私たちの預言者について不適切なことを言ったとしても、無知ゆえに罪を犯した者を許すことができるからです。」

「預言者ムハンマドこそが預言者たちの最後の一人であると、おっしゃっているのはあなた方ではありませんか？」と聖人は続けた。

「はい、その通りです」と彼らは答えた。

すると、聖ヴァソイはこう言った。

「あなたがたも神の預言者として信奉しているイザヤは、ある預言の中でこう言っている。*『主はイスラエルの頭と尾を切り落とす』*（イザヤ書9:14）。さらにイザヤ自身はその言葉を次のように説明しており、『頭』とは人々の顔を見て、すなわち不正な裁きを行う者たちを指し、『尾』とは預言者を指している――*「偽りの預言者こそが『尾』である」*（イザヤ書9:15）。怒らないでください、諸君――あなた方の預言者は、（あなた方自身の言葉によれば）預言者たちの中で最も末っ子である「尾」ではないのでしょうか？そして、あなた方に不法な行いを教えているのではないのでしょうか？ なぜなら、あなたがたの預言者があなたがたのために定めた律法、例えば、ある男が妻を憎んで彼女を捨てた場合、彼女が他の男に娶られるまでは、再び彼女を妻として迎えることができない、といった規定こそ、まさに不法ではないのか。ムハンマドの律法にある他の不法な規定についてはここでは触れないが、 これだけで、イザヤの預言が誰か他の者ではなく、まさにあなた方の預言者ムハンマドについて語られたものであることが十分に理解できる。*「この民の指導者たちは彼らを迷わせ、彼らに導かれる者たちは滅びる」*（イザヤ書9:16）。

「我々も哲学を論じることはできる」とギムノソフィストたちは言ったが、「神の御心である以上、我々に神の御心に逆らう資格などあるだろうか？ また、ムハンマドは人間の証言を必要としない。彼は神によって立てられた者であり、その神からそのような律法を受け取ったのだから。」

「まさか、神から、多くの妻を持ち、あなたがたの断食の期間中、夜通し、日の出まで、彼女たちと飲食や肉体的快楽にふけるというような律法をもたらしたと言うのか？」と聖ヴァソイは尋ねた。

彼らは答えた。

「はい、その通りです。」

すると、他の聖人たちは言った。

「あなた方の最初の問いにも答える必要がある。それは、戦争においてより大きな勇気を示し、勝利を収める者たちこそが、より優れた信仰を持っているかという問いだ。　もしあなたがたが信仰を軍事的力に由来するものとするなら、多くの国々を征服し、ほぼ全世界を支配下に置いた古代ペルシャ人の力を思い出してください。その後、アレクサンドロス大王がペルシャ人を打ち破り、ギリシャ人の支配時代が訪れました。そしてローマが全世界を征服しました。　さて、どうでしょうか。果たして彼ら全員が、戦争で強かったからといって、真の信仰を持っていたと言えるでしょうか。決してそうではありません。彼らは皆、万物の創造主である真の神を知ることなく、偶像崇拝に深く染まっていたのです。それなのに、どうしてあなたは、（私たちの罪に対する神の許しによって）最近、自軍の力で私たちに勝利したからといって、自分の信仰が真実だと言えるのでしょうか。　何しろ、神を真に告白する私たちキリスト教徒でさえ、神の助けによって敵に打ち勝ち、勝利を収めることはしばしばあるのです。しかし、私たちが主キリストを怒らせ、悔い改めを捧げないとき、主は不義な人々を私たちに送り込み、私たちの罪に対する報復として私たちを懲らしめられるのです。　それにもかかわらず、私たちは、たとえ罰を受けていても、私たちの主を否定することはなく、むしろ主の憐れみを求めて、主が私たちを赦してくださることを信じ、希望を抱いている。一方、預言者たちからの証しを持たず、むしろ聖なる預言者たちに反するあなたの師については、私たちは少しも尊ぶことなく、完全に拒絶する。

この会話の後、恥をかかされ、怒りに燃えたギムノソフィストたちは、自分たちの君主のもとへ戻っていった。

その間、聖人たちは、あの狭く薄暗い牢獄に鎖でつながれて苦しみ続けてから、すでに七年が経過していた。彼らは昼夜を問わず祈りに専念し、絶えずダビデの詩篇を詠み、彼らに対する神のすべての御摂理に感謝していた。　なぜなら、神はこの牢獄での監禁と苦難によって、快楽と安楽の中で過ごした彼らの人生の過去を清め、かつては想像すらできなかったほど長い忍耐を彼らに与えてくださったからである。

彼らがこのように苦しんでいる中、前述の背教者ヴァディツィス――野蛮人たちにアモレイの街を売り渡し、キリストから背を向けた者――は、3月の5日、日が沈みかけた頃、　そして、穴越しに、かつて主君であるコンスタンティヌス・パトリキウスに仕え、[2222] として公証人を務め、コンスタンティヌスとも呼ばれていた囚人の一人を呼び寄せ、密かにこう言った。

「賢明なる人よ、私が長年にわたり、そして今もなお、あなたの主君であるコンスタンティヌス・パトリキウスに対して抱いている愛の深さを、どうか理解してほしい。今、私は確かな情報を得た。もしあなたがたが彼の信仰を受け入れなければ、公爵は明日、あなたがた全員を殺害しようと企んでいるのだ。私はそのことを知らせるためにここに来たのだ。　あなたの主君には、サラセン人の信仰を受け入れるふりをして死を免れるよう助言し、あなた自身も同様に振る舞ってください――ただし、心の中では決してキリスト教の信仰から離れることなく、この災難に直面したため、表向きは公爵に迎合するふりをすればよいのです。そうしても、あなたがたのキリストはこれを咎めたりはしません。

しかし、この神を愛する男は、右手で十字の印を結びながら、背教者にこう答えた。

「私たちから離れよ、不法を行う者よ」――すると、ヴァディツィスは彼から離れていった。

一方、コンスタンティン・パトリキウスは、公証人コンスタンティンに尋ねた。

[2222] すなわち、秘書。

「誰が、なぜ、お前を牢屋の窓辺に呼び出したのか？」

彼は、仲間全員の前でこのことを話すことを望まず――誰かが死を恐れて悲しんだり、迷ったりすることのないように――コンスタンティン氏と共に脇へ退き、ヴァディツィスが告げたことを彼に伝えた。コンスタンティン・パトリキウスは神に感謝し、こう述べた。

「主の御心なれ。」

それから、自分の仲間たちに向き直り、こう言った。

「兄弟たちよ、今宵一晩中、祈りに専念しよう。」

皆は立ち上がり、夜明けまでダビデの詩篇を歌いながら祈りを捧げた。

翌日、早朝、公爵から派遣された残忍な総督が武装した兵士たちを率いて牢獄にやって来た。彼は内側の牢獄から42人の聖なる殉教者たちを連れ出し、外側の柵の扉を閉めるよう命じた後、彼らに尋問を始めた。

「この監禁生活は、もう何年になるのか？」と彼は尋ねた。

「なぜ、あなたが知っていることを尋ねるのですか？」と聖人たちは答えた。「私たちがここに閉じ込められてから、もう7年目が終わろうとしています。」

「まさか、これほど長い間――」と総督は言った。「我らが最も公正な公爵が、あなた方にどれほどの慈愛を注いでいるか、気づかなかったというのか？　彼は、とっくにあなた方を死刑に処すこともできたはずなのに、これほど長い間、あなた方を容赦してきたのだ。　あなた方は、このように示されている慈悲に対して、彼に感謝し、彼のために祈り、心を尽くして彼を愛すべきだったのだ。

聖人たちは答えた。

「私たちの律法は、敵や、私たちを迫害し、傷つける者たちのために祈るよう命じています。だからこそ、あなたの公爵のためにも、私たちは神に祈っているのです。　しかし、心を尽くして彼を愛することはできません。聖なる預言者ダビデが、神にこう叫んで禁じているからです。*「主よ、あなたを憎む者を私が憎まず、あなたに反抗する者を私が嫌わずにはいられましょうか」*（詩篇138:21）。

これに対し、総督は言った。

「憎んでいる者のために、どうして祈ることができるというのか。あなたがたは、憎んでいる公爵のために祈っているなどと言うのは、まさに嘘をついているのだ。」

聖人たちはこう答えた。

「私たちは真実を語っているのです。神に彼のために祈り、神が不信仰によって曇らされた彼の心の目を照らし、彼が真理の道を悟り、今持っている偽りの信仰――彼が真実だと信じているもの――の代わりに、真の信仰（キリスト教）を受け入れ、敬虔に神を崇めるようになることを願っているのです。　もしあなた方の公爵が真の信仰を知り、それを受け入れたならば、私たちは心を尽くして彼を愛するだけでなく、預言者ダビデの言葉にあるように、「神よ、あなたの友は私にとって大いに尊いものでした」と、彼にふさわしい敬意を払うことでしょう。

すると、総督はこう言った。

「ギリシャやローマの君主たちは、これほど自由で、勇敢かつ強靭なわが民が、神の摂理なしに一つにまとめられるなどと考えているのなら、正気ではないのではないか？もし我々が　神に憎まれ、神が我々に対して何の摂理も持たれていなかったならば、これほどまでに増えもせず、今あなたがた自身も目にするような姿にはなっていなかっただろう。」

聖人たちは答えた：

「私たちが言いたいのは、あなたがたが神の摂理なしに生きているということではありません。なぜなら、神の摂理から切り離されている者は誰もいないからです。たとえ神を知らない者がいたとしても、不敬虔な行いで神を冒涜する者がいたとしても、それでもなお、その者はこの地上に生き

、神の摂理なしに動いているわけではないのです。　私たちが言いたいのは、あなたがたが真の神を誤って信じているということだけです。なぜなら、神を目に見えるもの、目に見えないものすべての創造主であると告白しながら、神を嘲笑し、神が善も悪も、真実も嘘も、　正義と不正義、謙遜と高慢、柔和と怒り、貞潔と放蕩、そしてその他の美徳とそれに反する悪徳――これらをここで詳細に列挙する必要はない――のすべてについて、神が創造主であり原因であると主張しているのだ。もしあなたがたが神について語っていることが真実であるならば、私たちはあなたがたが神について正しい理解を持っていると言うだろう。　しかし、闇が光と異なるように、あなたの信仰告白も真理とはかけ離れていることを鑑みれば――私たちは、あなたが神についての真の認識を持っているかのように装っていることを、非難せざるを得ない。実際、あなたにはそのような認識はないのだから。たとえあなたが神の摂理によって守られているとしても、神があなたに怒りを向けるとしても、それは少しも驚くべきことではないだろう。

総督は彼らに言った。

「では、どういうことか？　それとも、あなたがたは、あらゆる悪とあらゆる罪の創造主である、別の神がいると主張しているのか？　善なる神と悪なる神という、二つの神が同時に存在しうるものか？　二つの神が互いに敵対しているのに、どうして世界が成り立つというのか？」

聖人たちは総督にこう答えた。

「私たちは、すべての善の創造主である神とは異なる、悪の創造主である別の神がいるなどとは言っていません。いいえ、そんなことはありません。しかし、天使の一人が、自らの自由意志によって、善に反する有害なものを選び、それを愛するようになったため、まず創造主である神を憎み、やがて人間をも憎むようになったと申し上げているのです。」　その後、彼には私たちの善意を試すことが許された――それが神に向かうのか、それとも彼の誘惑的な唆しに従うのか。あなた方は彼によって惑わされており、それゆえ、その狡猾さを、全く罪なく不変の神に誤って帰しているのだ。

「とはいえ」と総督は反論した。「我らの預言者ムハンマドは、全能の神こそが、人間のあらゆる悪行と同様に、善行の源でもあると教えている。」

これに対し、聖人たちはこう答えた。

「どうやら、彼はかつてギリシャ人がアガフォデーモン（[2223]）をでっち上げたのと同様に、別の神を虚偽に作り上げ、かつて存在したこともなく、今後存在することもないような神を、あなた方に崇拝させようとしているようだ。　しかし、私たちは真の神を知っており、旧約聖書では聖なる預言者たちによって、新約聖書ではキリストの聖なる使徒たちによって宣べ伝えられた、あらゆる善の創造主であるその方を告白する。それ以外の神など、私たちは一切知らない。

すると、総督は彼らにこう言った。

「今日、最も公正な公爵、プロトシンボルと共に、私たちの信仰の慣習に従って神への祈りを捧げてはいかがか。私はまさにこのために、あなたがたのもとへ遣わされたのだ。あなたがたの中には、これに同意する者もいることを私は知っている。同意しない者たちも、贈り物を受け取った者たちを見れば、自らの無分別な頑なさを悔いるだろう。」

これに対し、聖者たちは皆、口を揃えてこう答えた。

「私たちは、唯一の真の神に祈ります。プロトシンボルである貴殿の公爵だけでなく、サラセン人全体が、不敬虔なムハンマドの迷いから立ち返り、預言者たちやキリストの使徒たちが宣べ伝えた唯一の神に、ふさわしい敬意と礼拝を捧げることができますように。　私たちは光を見捨てて、自ら進んで闇へと移ることはできません。

「後で後悔することのないよう、言葉には気をつけなさい」と、総督は言った。「なぜなら、あなたがたの抵抗に対しては、厳しい処罰を免れることはできないからだ。」

[2223] すなわち、善も悪も生み出す神のこと。

しかし、聖人たちはこう答えた。

「我らは、不死にして義なる神に我らの魂を委ね、最後の息を引き取るその瞬間まで神に信頼を置く。そして、我らが抱く神への信仰からは、決して背くことはない。」

すると、総督は再び聖人たちを説得しようと、こう言った。

「最後の審判の日には、あなたがたの子供たちの孤児となった姿と、妻たちの未亡人となった姿が、あなたがたに対する証言となるだろう。なぜなら、あなたがたは今、公爵の望みを叶えず、その信仰を拒んだために、彼らを失ってしまったからだ。もしそうではなかったなら、我らが大公は、現在のあなたがたの王である若き少年に対し、妻や子供たちをここへ送り戻すよう命じることができたはずだ。」　しかし、今この時点で、もしあなたがたが我々の言葉に従い、預言者ムハンマドを信仰することを受け入れるならば、先ほど申し上げた通り、まもなく家族全員と再会でき、彼らに会った時には大いに喜ぶことになるだろう。あなたがたのギリシャの国では今、テオドロスの妻が幼い息子ミハイルと共に統治しているが、彼女は我らが偉大なるプロトシンボル（最高指導者）の命令に逆らうことはできない。　富や財産については心配する必要はありません。エジプトからの貢ぎ物は、私たちの慈悲深い公爵が、友人であるあなた方に一年間その使用を許可してくださるでしょう。それによってあなた方は大いに富み、その莫大な財産は十代先の子孫にまで受け継がれることになるでしょう。

この総督の言葉に、聖者たちはまるで口を揃えたかのように叫んだ。

「ムハンマドと、彼を預言者と信じる者たちは皆、呪われよ。」

聖人たちが神についてこれほどの大胆さと挑発的な態度で言葉を口にした途端、激怒した総督は武装した兵士たちに命じ、聖人たち一人ひとりを捕らえて両手を後ろ手に縛り、羊のように処刑場へ連行させた。　この光景を目撃しようと、数え切れないほどのサラセン人と、サラセン人の間に暮らすキリスト教徒たちが集まり始め、聖なる殉教者たちの処刑を見届けようとした。

殉教者たちがすでにユーフラテス川に近づいたとき、総督は、行進する殉教者の一人である聖テオドール――通称「クラティル」、すなわち「強い者」あるいは「勇敢な者」――を呼び寄せ、彼にこう言った。

「お前は以前、聖職者だった（我々が聞いたところによれば）が、聖職を捨てて槍を手にし、戦士の鎧を身にまとい、戦いで人々の血を流している。それなのに今、お前は偽善的にキリスト教徒を名乗り、とっくに捨て去ったキリスト教の信仰について良心に責められているではないか。　神の預言者であり使徒であるムハンマドの教えに帰依し、彼から助けと死からの救いを得るほうが、お前にとってはより良いのではないか。何しろ、お前はかつて自ら進んで背を向けたキリストに対して、もはや何の希望も勇気を持つことはできないのだから。

しかし、キリストの勇敢な殉教者テオドールは、軍司令官に断固としてこう答えた。

「総督よ、私がキリスト・神を拒んだなどというあなたの言葉は真実ではない。私はただ、自分の不適格さゆえに聖職の地位を離れたに過ぎない。それゆえ、今こそ私はキリストの信仰のために自らの血を流し、キリストへの愛のために死ぬべきである。そうしてこそ、慈悲深き私の主が、かつて私が主の前で犯した罪を今、赦してくださるのだ。」　もしあなたのしもべが、あなたから逃げ出した後、再びあなたの元に戻り、あなたのために自らの命さえも惜しまなかったとしたら、その後示した忠誠心ゆえに、かつての逃亡についてあなたから許しを得られるのではないだろうか?

「お前の望むままにせよ」と総督は言った。「私はただ、お前が死を免れるための手段を提案しただけだ。」

さて、サラセン人の処刑人たちが剣を抜き、聖なる殉教者たちを捕らえて、一人ずつ別々に斬首の場へと連れ去ろうとしたとき、聖テオドロス・クラティルスはたまたまコンスタンティノス・パ

トリキオスの隣に立っていた。　テオドールは、コンスタンティヌスが自分の処刑を目撃して、迷ったり死を恐れたりしないか心配になり、そこで彼を諭してこう言った。

「聞いてください、　主よ、あなたは位階の高さにおいても徳においても私たち全員を凌駕しておられます。ですから、私たちの中で真っ先に殉教者となり、私たち全員に先立って、主のために御自身の首を剣の下に差し出し、天の王イエス・キリストから最初に冠を受け取るのがふさわしいのです。それは、あなたが地上の王から特に栄誉を授けられていたのと同じように。」

しかし、聖コンスタンティヌスは彼にこう答えた。

「これほど勇敢なあなたには、この行いを成し遂げ、キリストのために真っ先に命を捧げることが、はるかにふさわしい。そうすれば、私や他の友人たちが、あなたの後を追うことになるだろう。」

そこで聖テオドロスは祈りを捧げ、自らの魂を神に委ねると、処刑人の元へ歩み寄り、喜びをもって剣による栄光ある殉教の死を受け入れた。

彼の後、他の聖人たちも、かつての位階に従って、まるで王の饗宴に招かれたかのように、次々と剣の下へと歩み進み、死に対するいかなる恐れも、臆病さや気弱さも微塵も見せなかった。そのため、総督は、殉教者たちがこれほど喜びをもって死へと向かうのを見て、深く驚嘆した。

こうして、42人の聖なる殉教者たちは、3月の6日、主のために勇敢な死をもってその生涯を閉じた。

聖なる殉教者たちが殺害された後、サラセン人の王子は、前述の背教者ヴァディツィスをも剣で殺すよう命じ、こう言った。

「もし彼が真のキリスト教徒であったなら、自らの信仰を捨ててはならなかったはずだ。そして、もし彼が自分のキリストへの信仰を守れなかったのなら、どうして我らのマホメットへの信仰を守れるというのか？　もし彼がキリスト教徒たちの敵となり、彼らを我らの手に引き渡したのなら、万が一我らに災難が降りかかった時、彼は我らの裏切り者にもなり得るだろう。　かつて自分の同胞を裏切った者が、他人のために忠実であるだろうか？ 決してあり得ない。

そして、この忌まわしい裏切り者の首は剣で斬り落とされ、こうして彼は、栄光に満ちた美しいキリスト教の都市アモレアをサラセン人の手に引き渡したその行為に対し、彼らから相応の報いを受けたのである。

翌日、公爵の命により、四十二人の聖なる殉教者たちの遺体がエフラト川に投げ込まれた。そこへ、殺された背教者の遺体も投げ込まれた。　しばらくして、聖なる殉教者たちの遺体は川の対岸の岸辺で無傷の状態で発見された。各人の頭部はそれぞれの遺体にしっかりと付着しており、すべての遺体は威厳を帯びて並んで横たわっていた。一方、背教者の遺体は聖者たちから遠く離れた場所で発見され、その頭部は遺体からかなり離れた場所にあった。　聖人たちの尊い遺体は信者たちによって回収され、尊厳をもって埋葬されたが、不敬虔な裏切り者の遺体と頭部は引き裂かれ、ワニに食い尽くされた。これらすべての事柄について、父と聖霊と共に永遠に礼拝される、私たちの神キリストに栄光あれ。アーメン。

コンダク、第4調：

地上でキリストのために苦難に耐え、現れ出でた敬虔な冠の受領者たちよ、天において喜びのうちに生きることを許された。あなたがたは、病と傷からの流血によって敵のあらゆる策略を打ち砕き、天から称賛される者たちに、常に罪の赦しを授けている。

コンダク、第2調：

新たに現れた信仰の星たちよ、キリストのために熱心に苦難に耐え、称賛に値する冠を皆がふさわしく戴く者たちよ。キリストに私たちのために祈り、キリスト教の指導者の柱であり、守り手であるあなた方よ。

聖アルカディオス（および殉教者ユリアヌスとエヴヴロス）の記念日

記念日：3月6日

聖アルカディオスは、コンスタンティヌス大帝の治世下、キプロス島に暮らしていた。若き頃から修道生活に従事し、ユリアヌス背教王の時代[2224] に至るまでその道を歩み続け、その治世中にこの世を去った。　彼は、医師である聖ユリアヌスと聖エヴヴルの師であり、師の死の直前に、二人はユリアヌスによって迫害を受けた[2225] 。弟子たちの殉教の死を悼み、聖アルカディウスは彼らの尊い遺体を埋葬し、その後、神に感謝しつつ、自らもこの世を去った。

3月20日

3月7日（旧暦）

聖エフレム、ヴァシリー、エウゲニー、エルピディウス、アガフォドール、エフェリウス、カピトンの各聖司祭殉教者たちの殉教。彼らはそれぞれ異なる時代にヘルソンの司教を務めた。

記念日3月7日

ディオクレティアヌス帝の治世16年目[2226] 、エルサレムの至聖なる総主教エルモンは、使徒たちの模範に倣い、神の御言葉を宣べ伝え、キリストを説くために、多くの司教を様々な国や民族のもとへ派遣した。

その司教たちのうち、エフレムとバシレイオスの二人はタウロス地方にやって来て、ここヘルソンの町で、しばらくの間、真の神を知らない民に神を宣べ伝え、ギリシャの偶像崇拝という闇に覆われた人々を啓蒙するために尽力した。　その後、聖エフレムは、ヘルソンの住民を聖バシレイオスに託し、ドナウ川沿いに住むスキタイ人のもとへ向かった。そこで説教によって多くの人々をキリストへと導き、キリストの福音を宣べ伝える中で多くの苦難と労苦に耐えた後、3月7日に斬首された。

一方、聖ヴァシレイは、ヘルソンにおいて不信仰な人々の迷いを糾し、彼らに正しい救いの道を示したため、民衆の怒りを買ってしまった。不信心者たちは彼を捕らえ、容赦なく殴打し、街から追放した。 ある山へと退いた彼は、洞窟に身を寄せた。その山はヘルソンから百スタディオン[2227] 離れており、*パルテノン*と呼ばれていた。これは「乙女の」という意味で、その山には神殿があり、ギリシャの女神――乙女――の偶像が祀られていたからである。　その山に滞在する間、聖ヴァシリー

[2224] コンスタンティヌス大帝：306年から337年、ユリアヌス・アポステート：361年から363年。

[2225] 聖ユリアヌスと聖エヴヴルは361年頃に殉教した。彼らの記念日は、聖アルカディオスと共に祝われる。

[2226] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは285年から305年まで在位した。在位18年間、彼はキリスト教徒による公然とした信仰告白を容認していたが、303年からは彼らを迫害し始め、しかも特に残酷な手段を用いた。

[2227] スタディオンは、ギリシャの距離単位であり、時代によってその長さは異なっていた。西暦3世紀において、スタディオンの長さは184.97メートル、あるいは87サージであった。

は、キリストのために傷を負い、追放されるという栄誉に浴したことを心から喜び、悪魔に惑わされた人々の魂の滅びを嘆き、彼らの回心を神に涙ながらに祈った。

そうしてしばらく時が過ぎた。ヘルソンのある高官の唯一の息子が亡くなり、城の外に埋葬された。両親は深い悲しみに暮れ、棺のそばに座り、嘆き泣き続けていた。夜が更けても、彼らは息子の棺から離れようとはしなかった。すると、夢の中で亡くなった息子が現れ、こう言った。

「なぜ私の死を嘆いているのですか？　私をここから生きたまま連れ出すことはできません。なぜなら、私たちの神々――悪魔が人々の誘惑と破滅のために作り出した、魂のない偶像――は、私をよみがえらせることはできないからです。　もし私を生き返らせたいのなら、殴られて追い出されたあの旅人に、私のために彼の神に祈ってくれるよう頼んでください。そして、あなたたち自身も、彼が説くその神を信じなさい。なぜなら、その神こそが真の神であり、生ける者にも死んだ者にも権威を持ち、あなたたちが侮辱したその男の生きた祈りによって、私を死からよみがえらせる力をお持ちだからです。

二人はたちまち目を覚まし、互いにその幻について語り合い、それが二人とも同じ内容であったことに大いに驚いた。　彼らは喜び勇んで町へ駆けつけ、その幻について友人たちに語った。日が明けるとすぐに、彼らは至る所で神の御使いを探し求め、前述の洞窟で彼を見つけた。町の長はその家族を連れて彼の元へ行き、その聖なる足元にひれ伏して、息子をよみがえらせてくれるよう懇願した。

「罪深い人間である私が、どうしてそんなことができるでしょうか」と聖人は答えた。「しかし、私が説く神を信じれば、あなたがたは願うものを得るでしょう。死者を墓からよみがえらせる力をお持ちなのは、その神だけなのですから。」

「もし息子が生き返るなら」と、亡くなった若者の両親は言った。「あなたが望むこと、命じることは何でも、心を込めて行います。」

神の聖人ヴァシリーは立ち上がり、彼らと共に墓へと向かった。墓の石が取り除かれると、彼は中に入り、亡くなった者に十字の印を結び、長い間神に祈りを捧げた。その後、水を取り、それを聖別し、聖なる洗礼に倣って、至聖なる三位一体の名を呼びながら、その水をかけた。　すると、死者はたちまち生き返り、神を賛美し始めた。そこにいた者たちは皆、恐怖と戦慄に襲われたが、両親には言葉に尽くせない喜びが満ちた。　人々は皆、聖人の足元にひれ伏し、彼を偉大であると称え、彼が説く神こそが真実で全能であると認めた。人々は神の司教である聖ヴァシリーを、大いなる栄誉をもって街へと送り出した。　その家長は家族全員と共にキリストを信じ、洗礼を受けた。また、この奇跡を目撃した民衆の多くも、　、信徒の仲間に加わった。こうして、ヘルソンにおけるキリストの教会は成長し始め、ギリシャ人の不浄な神殿は次第に廃れていった。

自らの神殿が荒廃していくのを見て、悪魔は当時ヘルソンに住んでいたユダヤ人たちの心に囁きかけ、彼らはギリシャ人たちに、キリスト教徒、とりわけ彼らの指導者である聖ヴァシリーに対して反乱を起こし、彼を殺害するようそそのかした。

「もしキリスト教の指導者が殺されれば、キリスト教も容易に滅びるだろう」と彼らは言った。

数え切れないほどの武装した不信心者たちが集結し、騒ぎ立て、叫び声を上げながら神の司教に不意を突いて襲いかかった。彼らは彼を聖堂から引きずり出し、足を縛り、取り囲んで街の通りを引きずり回し、棍棒や石で殴打し、足で踏みつけた。　彼らは彼を、キリスト教徒たちが十字架を頂に掲げた柱を立てた場所まで引きずり込んだ。そこで、キリストの聖人は、聖エフレムがスキフィアで剣によって斬り殺されたのと同じ3月7日、苦しみの中で息を引き取り、その聖なる魂を神に委ねた。

聖ヴァシレイの遺体は城門の外へ引きずり出され、犬や鳥の餌として投げ捨てられた。遺体は長きにわたり埋葬されることなく放置されていたが、神の御加護により無傷のままであった。　夜に

なると、この苦難に満ちた遺体の上にまばゆい星が現れ、その傍らに座っていた狼が犬たちから遺体を守り、昼間は鷲が遺体の上を旋回し、肉食の鳥たちが近づくのを許さなかった。やがて、キリスト教徒たちが夜陰に乗じて密かに遺体を運び出し、尊厳をもって埋葬した。

聖バシレイオス司教が殺害された後、その弟子の一人が海路でヘレスポントス地方へ向かい、そこでキリストの福音を宣べ伝えるために尽力していたエウゲニオス、エルピディオス、アガフォドロスの三人の司教に出会った。　彼らを宣教に派遣したのは、エルサレム総主教である聖エルモンであり、聖エフレムと聖ヴァシレイオスも同行していた。そこで彼らを見つけた弟子は、聖ヴァシレイオスの死を伝え、彼らは、御自分の御使いに苦難の冠を授けられた神を賛美した。　互いに相談した後、司教たちは船に乗り込み、聖バシレイオスに倣おうとしてヘルソン市へと向かった。彼らはヘルソンでキリスト・神を宣教し、信徒の数は日ごとに増えていった。　しかし、聖ヴァシレイに対してそうであったように、悪魔はユダヤ人やギリシャ人を彼らに対しても煽り立てた。大群衆が集まり、聖なる司教たちを捕らえて縛り上げ、街中を引きずり回し、木や石で打ちのめした。やがて、聖なる殉教者たちは、その清らかな魂を主の御手に委ねたのである。　彼らの遺体は、通常、死者を埋葬するために運び出される門から街の外へ引きずり出され、埋葬されることなく野犬や鳥に食い荒らされるままに放置された。しかし、キリスト教徒たちは密かに遺体を回収し、尊厳ある埋葬を執り行った。　聖エウゲニオス、エルピディオス、アガフォドロスの三人の司教は、聖ヴァシレイオスが殺害されてから一年後の3月7日に殉教した。

数年後、コンスタンティヌス大帝の時代、彼がすでにキリスト教に傾き始めていた頃、エルサレム総主教から派遣されたエフェリウス司教がヘルソンにやって来た。　異教徒の民が、その残忍さと激怒によってヘルソンでのキリスト教の普及を許さない様子を見て、エフェリウスはビザンティウムのコンスタンティヌス皇帝のもとへ赴き、キリスト教徒を迫害する不敬虔なヘルソンの民について訴え出た。　皇帝はキリスト教徒に対し、ヘルソンに自由かつ妨げられることなく居住し、神の栄光のために公然と、また妨げられることなく礼拝を行うことを許可し、キリスト教徒を妨害する者すべてを都市から追放するよう命じた。　このような皇帝の御意志を受けて、聖エフェリウスはヘルソンに戻り、キリストの羊の群れを大いに喜ばせたが、異教徒たちは悲しみ、動揺した。街にキリスト教の教会を建立し、すべてを適切に整えた後、司教は再び皇帝のもとへ向かい、この善行に対する感謝の意を表した。　帰路の途中、彼は病に倒れ、アアサ島にたどり着いたところで、この世の生涯を終え、永遠の命へと旅立った。　信者たちは彼を埋葬し、墓の上に柱を立てた。そこに生い茂った背の高い木々は、遠くからでも聖人の墓を示していた。聖エフェリウスの死は3月7日に訪れ、この日はかつての司教たちも殉教して亡くなった日であった。

キリスト教徒たちは、亡き聖人を長く悼んだ。その後、彼らはコンスタンティヌス帝に自教区の司教の死を報告し、後任の任命を求めた。　エフェリウスの後任として、ヘルソン教会の司教である至福のカピトンが派遣され、信者たちは喜びをもって彼を迎えた。また、異教徒たちも大勢集まり、新しく到着した司教に近づき、彼らの信仰の正しさを証明する奇跡的なしるしを求め、自分たちも確信を持てるようにと願った。

「奇跡とは、」と彼らは言った、「こうあるべきだ。巨大な火の炉に火を灯し、その中にキリスト教の司教が入り、もし燃え尽きずに生き残れば、我々は皆、洗礼を受ける。」

聖カピトンは神を信頼し、彼らの願いを受け入れ、巨大な炉を用意するよう命じた。　炉が激しく燃え上がったとき、聖なる司教は、民衆の注視の中、自らのオモフォール[2228] を身にまとい、神

[2228] *オモフォール*とは、4つの十字架が描かれた細長い布で、肩にかけられ、前後に垂れ下がるものである。オモフォールなしでは、司教は聖なる儀式を行うことができない。　象徴的な意味としては、迷い出た羊（人類）が、羊の主（主）によって滅びから救われたことを表す。ルカ15:5。

に心を込めて祈りを捧げた。かつてバビロンの炉[2229] で、不信仰な民を確信させるために神が御自身の神聖な力を現されたように、今回もその力を示してくださるよう願ったのである。　長い祈りの後、助祭が「ヴォンメム」と皆に聞こえるように叫ぶと、聖人は炉に入り、約一時間、天に向かって両手を広げたまま祈り続け、激しい炎によるいかなる害も受けなかった。その後、自分のフェロン[2230] に熱い炭を掬い入れ、無傷のまま民衆のもとへ出てきた。　この輝かしい奇跡を目の当たりにして、人々は皆、大きな驚きと畏怖に包まれた。なぜなら、聖人の衣服さえも火に焼かれておらず、燃える炭で満たされたそのフェロンも焦げていないのを目撃したからである。

「唯一の神よ」と、民は大きな声で、まるで口を揃えて叫んだ。「キリスト教の神よ、偉大で力強い神よ、御自分のしもべを炉の中で焼けずに守ってくださった神よ！」

そこで、ヘルソン全土とその国は、この輝かしい奇跡によってキリスト教の真理を確信し、キリスト教の信仰を受け入れた。この奇跡は、偉大なるコンスタンティヌス帝に報告され、ニカイア[2231] で開催された第1回全地公会議において聖なる教父たちに伝えられた。そして皆、神を賛美しつつ、聖カピトンの偉大な信仰と神への熱意に驚嘆した。

数年後、聖カピトンはケルソンからコンスタンティノープルへ船で向かった。嵐が吹き荒れ、船は波に翻弄されてドニエプル川の河口に打ち上げられた。そこで、異教徒や不信心者たちが船を略奪し、乗船していた者全員を捕らえ、神の司教であるカピトン自身を水中に沈めて殺害した。

彼は12月21日に殉教してこの世を去ったが、その記念日は、3月7日に殉教したかつてのヘルソンの聖主教たちに加えられている。　その聖なる魂は天において彼らと結ばれ、七人の神の司教、すなわちヘルソンの主教たちは、七人の主要な天使たち[2232] のように、共に至聖なる三位一体、すなわち父と子と聖霊、唯一の神の御前に立ち、すべての聖人たちと共に永遠に神を賛美している。アーメン。

コンダク、第2調：

ヘルソンで輝かしく司教職を全うした牧者たちの、光に満ちた日が訪れました。キリストの羊たちのために苦難を受けた彼らの祝祭を、私たちは讃えます。聖なる殉教者たちよ、牧者の長であるキリストに祈り、私たちを羊の群れに加わらせてください。そうすれば、私たちはあなた方にこう叫ぶでしょう。「喜びなさい、聖なる父たちよ。キリストのために自らの血を流した者たちよ。」

聖エミリアンの記念日

記念日：3月7日

ローマにヴィクトリンという名の男が住んでいた。彼は若い頃から多くの罪を犯していたが、その後、老境に至って心を改め、自らの罪を振り返り、神の裁きを恐れて震えていた。　ある聖なる修道院を訪れ、修道院長に受け入れを懇願すると、彼はこの世のあらゆる執着を捨てて修道士となり、自らを完全に服従と従順に捧げ、命じられた戒律を守り、昼夜を問わず肉体を酷使した。　修道者としての姿において、彼にはエミリアンという名が与えられた。絶えず死の記憶を心に留め、神の恐るべき審判と、試練の日に自らの罪について問われることに常に備えていたエミリアンは、常に永遠

[2229] アナニア、アザリヤ、ミサエルが火の中から奇跡的に救われたことについて――ダニエル書3章。

[2230] *フェロン*――司教および司祭が着用する、丸く、袖のない衣。

[2231] 第1回全地公会議は325年に開催され、318人の司教が出席した。同公会議は、神の御子が父なる神と等しくないとしたアリウス派の異端を非難した。また、この公会議において、聖なる復活祭の祝日の時期が明確に定められた。

[2232] 彼らの名は、ミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエル、サラフィエル、イェグディエル、イェレミエルである。

の地獄の苦しみへの恐怖に苛まれていた。　この恐怖によって、彼は自らの肉体をこれほどまでに消耗させ、枯渇させたため、神への愛をもって修道院で生活していた　の兄弟たちは、その並外れた肉体の死、謙遜、そして労苦に驚嘆した。　そして皆、彼の生活に倣い、従順における彼の偉業に匹敵しようと努め、そのような多大な苦行による悔い改めによって自らの罪を清めようとした。彼らは、彼が毎日飢えと渇きに耐え、地にひれ伏し、ほとんど眠らず、自らの肉体を苦しめ、打ち砕く様子を見て――そこから大きな恩恵を受けたのである。

エミリアンが修行に励んでいた修道院は、高い山の上に建てられており、その斜面の一つに洞窟があった。そして、至福のエミリアンには、夜遅く、誰にも知られずに修道院を抜け出し、その洞窟へ行き、そこで夜明けの礼拝まで一晩中、涙を流しながら祈る習慣があった。

長い時が過ぎた。ある夜遅く、修道院長が修道院から出ていくエミリアンに出くわした。　この修道士がどのような用事で修道院を出たのか知らなかった修道院長は、自分の部屋を出て密かに彼の後を追い、彼が洞窟に入ったのを見て、その近くに立ち、彼が洞窟に入る理由を尋ねるために、彼が戻ってくるのを待つことにした。　しばらくすると、太陽の光よりも明るい天の光が突然その山を照らし出し、修道院長は、洞窟の中に立ち、両手を天に差し伸べて神に祈りを捧げている聖エミリアヌスを見ました。そして、天の光は聖人の頭上に降り注いでいました。　この光景を目にした修道院長は、恐怖と戦慄に襲われた。修道院へ戻る道中、彼は震えながら走り、あまりの恐怖のあまり、ほとんど足を踏み出すことさえできなかった。修道院の門にたどり着いたとき、彼は天からこう告げる声を聞いた。

「エミリアンよ、汝の罪は赦された。」

修道院長はさらに恐怖に駆られ、自分の部屋に入り、黙って夜明けを待った。兄弟たちがこの出来事から教訓を得られるようにと願い、修道院長は早課の後、皆の前でエミリアンにこう尋ねた。

「昨夜、どこにいたのか、兄弟よ？」

聖人は修道院長に頭を下げて、こう答えた。

「修道院で、兄弟たちと共に、一晩中休んでいました。」

しかし、修道院長は彼を諭し、真に悔い改める罪人たちに示される神の慈悲を隠さないよう促した。エミリアンは、慈悲の御座から天より光と声が降り注いだという秘密を、すべての兄弟たちに打ち明けることを余儀なくされた。そこで、修道院長は兄弟たちにこう語りかけた。

「よく聞きなさい、私の愛する兄弟たちよ。　全能の神は、沈黙のうちにこの兄弟の罪を赦すこともできたが、私たちのために、私たちの心を悔い改めへと駆り立てるべく、光という形をとって御自身の慈悲と御声を彼に送られたのだ。それは、私たちもまた、真に悔い改める者に寄り添う私たちの創造主の慈悲と人間愛を知り、それを賛美するためである。

このようにして自分の罪が赦されたことを知らされた聖エミリアンは、残りの生涯を心の喜びのうちに過ごし、近づきがたい光のもとへと旅立ち、天の都で永遠に歓喜する義人たちの喜びと歓喜の声を聴くようになった。

聖パウロ殉教者の記念日

記念日：3月7日

聖パウロは、教会に偶像破壊派の異端が生じた当時、プルシアダ[2233] の司教であった。 聖なるイコンの敵対者たちが、いかにキリストの信仰に対して猛威を振るい、聖なる使徒たちの定めをいかに歪め、尊いイコンにいかに軽蔑の態度を示し、それらに対してどのような冒涜の言葉を吐いている

[2233] プルシアダ（7世紀まではプルシアス）という都市は、ハンニバルによって建設され、小アジア北西部に位置するローマ属州ビフィニアにありました。

かを目の当たりにし、尊者パウロは、勝利を収める神の戦士として彼らに立ち向かい、神の聖書の言葉という矢で彼らを打ち倒しました。　そのために、彼は生涯にわたり迫害や追放、あらゆる苦難に耐え抜いた。そのような勇猛な功績のさなか、彼は安らかに主のもとへ魂を委ね、彼がこれほどまでに愛した天上の御国へと移り住んだ。[2234]。

神が、施しを受ける人々の運命を明らかにされた隠遁者の物語

記念日：3月7日

ある隠遁者は、若き日から聖なる生活を送っていたため、その修道院で非常に名声を博していた。　世俗のあらゆる快楽を捨て、彼は狭い独房に身を閉じこもり、断食と徹夜の祈りによって肉体を鍛え、主に対して自分自身と全世界のために祈り、心をもって神を想うことに専念して神に仕えていた。　決まった時間に、彼は修道院の奉仕者から少量の食事を授かったが、神が修道院の兄弟たちを通じて送ってくださった金、銀、食物、ワインといったものからは、決して何も自分用に受け取らなかった。

ある時、彼は施しを受ける人々に関する次のような幻を見た。ある日、市の長がその修道院を訪れ、施しを行うために、皆に銀貨一枚ずつを配った[2235]。 彼は金貨の入った袋[2236]を手に持ち、隠遁者のところへ近づき、それを受け取るよう懇願した。この高潔な男に恥じ入った老修道士は、金貨の入った袋を受け取り、自分のポケットにしまった。

夕方、いつもの修行を終えた老修道士は、少し眠ろうとして藁の敷物の上に横になった[2237]。すると、彼はその修道院の他の修道士たちと共に広大な野原にいるような気がした。その野原はすべて茨で覆われており、ある若者（それは主の天使であった）が、その修道院の修道士たちにこう言った。

「茨を刈り取れ。」

その若者は彼（隠遁者）のところに近づき、こう言った。

「帯を締め、茨を刈り取れ。」

しかし、隠遁者が拒もうとすると、天使は言った。

「あなたには言い訳の余地はない。なぜなら、あなたは昨日、あのキリストを愛する人から銀貨一枚を受け取った他の修道士たちと共に雇われたからだ。あなたは金貨一枚を受け取ったのだから、より多くの報酬を受け取った者として、他の者たちよりも多く働き、茨を刈り取らなければならない。」　そして、君が見ているその茨は、昨日君たちが施しを受けたあの人の行いそのものだ。さあ、他の者たちと共に刈り取りを始めなさい。

目を覚ましてその夢について考えを巡らせた隠者は、深く悲しみに打ちひしがれ、直ちに施しをしてくれた男を呼び寄せ、金貨を受け取ってほしいと懇願した。しかし、そのキリストを愛する人はそれを返してもらうことを拒み、隠者にこう言った。

「それを手元に置いておきなさい、父よ。あるいは、お好きな人に差し上げてもよい。」

すると、長老は彼にこう言った。

「私は、自分の罪の茨さえ取り除く力がないのに、他人の罪の茨を背負うつもりはない。」

そう言って、彼はその金貨を自分の小部屋から投げ捨て、窓を閉めた。

[2234] 聖パウロは860年頃に亡くなった。

[2235] *スレブレニク*とは、時代によって価値が異なっていた銀貨のことである。救世主の時代のスレブレニクは、およそ80コペイカに相当した。

[2236] *ズラトニツァ*――一般に、価値が定まっていない金貨のこと。

[2237] 古代の隠者や修道士たちの寝床としては、通常、葦で編まれたマットが用いられていた。

その男は、老修道士が自分の施しを受け入れなかった理由を知ると、自らの生活を改めることに努め、聖書にあるように「施しと信仰によって罪は清められる」[2238] ことを心に留め、貧しい者や困窮している者たちに多くの施しを行うようになった。

3月21日

3月8日（旧暦）

聖テオドリトス、アンティオキアの司祭、聖殉教者の受難

3月8日の記念日

偉大なる皇帝コンスタンティヌスとその息子コンスタンティウスによって、シリアのアンティオキアに大聖堂が建立され、豪華に装飾された。民衆の間では、この教会は「*黄金の教会*」と呼ばれるようになった。それは、芸術的に金で彩られ、金に輝くモザイクで飾られていたからである。その天井も全面が金箔で覆われており、　数え切れないほどの教会用器物は、すべて金と純銀でできていた。皇帝たちは、多数の聖職者を養うために多くの領地を寄進した。この偉大な大聖堂の聖職者団には、聖テオドリトスが司祭として在籍しており、彼には器物や祭具、そして教会のすべての富の保管が任されていた。　彼は若き日から徳ある生活を送り、心の中に正しい信仰を保ち、*「心で信じて義と認められ、口で告白して救われる」*（ローマ10:10）という聖書の御言葉を果たしていた。

断食、祈り、施し、人々の魂の救いへの配慮、そして汚れなき聖職の務めによって、彼は神に喜ばれた。

コンスタンティヌスの息子コンスタンティウスが亡くなると、ユリアヌス「背教者」が後を継いだ。　王位を継承した当初、彼は敬虔なキリスト教徒を装い、コンスタンティウス王によって敬虔さを理由に流刑に処されていた司教たちを釈放した。しかし、王位を確固たるものにした後、彼は公然と、すでに密かに長い間拒絶していたキリストを皆の前で否定し、悪魔や魔術に身を委ねた。　そして彼はキリストの教会を迫害し始め、　キリスト教徒の民を根絶やしにはしなかったとしても、少なくとも指導者たち、聖職者、そして信徒の指導者たちを捕らえ、拷問し、殺害した。キリスト教徒から神の教会を奪い取り、それを自らの偶像の礼拝所へと変え、教会のあらゆる財産を略奪し、この呪われた者はこう言った。

「キリスト教徒が富を持つことはふさわしくない。なぜなら、キリストは彼らに『金も銀も蓄えてはならない』と命じ、貧しい者となるよう命じられたからだ。」

この苛烈な時代、その美しさから「*黄金の教会*」と呼ばれていたアンティオキアの総主教座教会も荒廃した。その高価な装飾品はすべて王の宝物庫に収められ、教会の財産は略奪され、聖職者たちは追放され、聖テオドリトスは拷問の末に殉教した。

事の経緯はこうである。ユリアヌス王には、母の実の兄弟であり、自身と同じ名を持つユリアヌスという叔父がいた。王は彼を東方の諸国の統治者兼拷問官に任命した。　そのユリアヌス、すなわち皇帝の叔父は、以前はキリスト教徒であったが、背教者である甥のユリアヌス皇帝に気に入られたいと願い、キリストを捨てて偶像を崇拝した。　彼は、皇帝が到着するより先に、王室の財宝を管理していたフィリクスという名の別の高官と共に、アンティオキアへと向かった。　大聖堂に多くの財宝があることを知っていたユリアヌスは、教会の聖器保管係である福者テオドリト司祭を捕らえようとした（他の聖職者たちは皆、恐怖のあまり逃げ出し、それぞれできる限り隠れていた）。彼は、

[2238] ルカ 11:41；トビ 12:9；シラ 3:30。

テオドリトが手に教会の聖衣室の鍵を持っていたため、彼を捕らえようとしたのである。　彼から鍵を奪い取り、彼自身をしっかりと縛って牢獄に閉じ込めた後、ユリアヌスは王室の宝物管理官フィリクスと共に、大規模な武装軍勢を率いて神の教会に侵入し、その装飾品や金銀、あらゆる高価な品々を奪い取り、王室の宝物庫に加えることを企てた。　神の聖所に入り、まるで泥棒や強盗のように、彼はどれほどの大胆不敵さと恥知らずさで教会の栄華を略奪し、主の聖所を冒涜し、それを穢したことであろうか！　この忌まわしき者は、神の御座のすぐ前で、あえて小便をした。そして、祭壇から教会の器が運び出され、すべてが地面に置かれると、彼はそれらを侮辱するためにその上に座り込み、その不浄な口から、我らの主イエス・キリストに対する冒涜と悪口を吐き散らした。　そこにいた者の一人、ヴゾイという名の男が、主の聖所に対してあのような恥知らずな冒涜を行わず、キリストを冒涜しないよう彼を諭した。しかし、彼はその男の頭を強く殴りつけ、こう言った。

「キリスト教徒には神の摂理などなく、彼らはその御加護を完全に失っているのだ。」

神の教会を略奪し、汚した後、不敬虔な統治者は、神の僕である聖テオドリトへの拷問へと移った。縛られた彼が不敬虔な法廷に引き出されると、ユリアヌスは彼にこう言った。

「テオドリトよ！　なぜ君はコンスタンティヌス帝の治世に、古代の神々の神殿を破壊し、死者の墓を飾り立て、その上に教会を建てるよう命じたのか？」

聖人はこう答えた。

「神聖な教会や聖人の墓は、私たちの先祖の先祖の時代からすでに築かれ、飾られてきたものです。神は、聖人たちがそれにふさわしいと認め、彼らを栄光に輝かせられたからです。しかし、君主よ、私は君がキリスト教徒から偶像崇拝者になってしまったことに驚かされる。」

統治者は聖人の顔を打つよう命じた。

「あなたは罪を犯している、ユリアヌスよ」と聖人は彼に言った。「石や木でできた偶像を神と呼んでいるではないか。」

すると、拷問官は聖人を裸にし、木に吊るし、鉄の爪で全身を削るよう命じた。三時間ほど削り続けられ、血が噴き出したが、聖人の顔は喜びに輝いており、まるで何の痛みも感じていないかのようだった。そして拷問官は彼に言った。

「この忌まわしき者よ、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前が教会財産を荒廃させたことで負っている債務から、お前を解放してやる。もし生贄を捧げなければ、暴力的死によって魂をこの世から追い出すことになるだろう。」

聖人はこう答えた。

「呪われた者とは、お前と、お前の王、すなわち不法者たちのことだ。お前たちはキリストを見捨て、反キリストにすがりついたのだから、永遠の火で焼かれるべきである。しかし、私は、私の主イエス・キリスト以外に誰に対しても負うところはない。主の前において、私の義務は、最後の息を引き取るまで真の信仰を守り抜くことである。」

拷問官は再び彼に語りかけた。

「テオドリトよ！　お前が『神の子』と呼ぶあの十字架にかけられた魔術師を捨てさえすれば、私はお前を大いに称え、金も与えてやる。」

聖なる殉教者はこう答えた。

「お前の金は、お前と共に滅びへと向かうがよい[2239]　。私は、朽ちるべき恵みの代わりに朽ちない恵みを、地上のものの代わりに天上のものを、そのしもべたちに与えてくださる私の主に信頼している。」

そして、拷問官は二本のろうそくで殉教者の肋骨を焼くよう命じた。彼が焼かれ始めたとき、彼は天を仰ぎ見て祈り始めた――すると、たちまち、彼を焼いていた二人の使用人が地面に倒れ、息

[2239] 使徒行伝8:2。聖霊の賜物を金で買おうとした魔術師シモンに対する使徒ペトロの言葉。

絶えてしまった。ユリアヌスと周囲の人々は、使用人たちを地面から丁寧に起こすよう命じ、彼らにこう言った。

「なぜ、不敬虔なキリスト教徒を焼くのを放置し、居眠りや怠慢にふけっていたのか？」

使用人たちは正気を取り戻すと、拷問者にこう答えた。

「もしあなたが、神の天使たちが神のしもべを守っているのを見ないのなら、あなたは不敬虔であり、魂が盲目になっているのです。ほら、四人の天使が彼と語り合っており、私たちには彼の尊い身体に触れることを厳しく禁じています。冒涜者よ！　空虚な言葉を並べるのではなく、キリスト教の神は偉大であり、我々は今やその神を信じていることを知れ。」

恥に打ちひしがれた拷問官は、これらの僕たちを海の深みに投げ込むよう命じた。彼らが溺死させられるために連行されると、キリストの聖なる殉教者は彼らに向かってこう呼びかけた。

「わが子らよ、平安のうちにこの至福の道へと進んで行きなさい。そうすれば、私も後に続き、天の御国であなた方と共に永遠の喜びを分かち合うでしょう。」

こうして、僕たちは溺死により息を引き取り、彼らが信仰を捧げたキリスト・神から殉教の冠を授かるにふさわしい者とされた。聖なる殉教者テオドリトに近づき続けながら、不敬虔な統治者は叫んだ。

「神々に生贄を捧げよ。」

預言の霊に満たされた聖人は、彼にこう言った。

「お前、すべての人の中で最も邪悪で、最も呪われた者よ、お前は自らの内臓を噛み砕くことになるだろう。そして、間もなく、お前は自らの邪悪な魂を無理やり吐き出し、それを永遠の火に委ねることになる。同様に、お前の最も不法な王も、お前の死後間もなく、ペルシャの地で滅びるだろう。　目に見えぬ御手によって打ち倒され、火のゲヘナに投げ込まれるだろう。あなたがたの企ては成功しないことを確信せよ。あなたがたの終わりは近く、滅びは眠っていないからだ。

聖人のそのような言葉を耐えかねた邪悪な拷問官は、直ちに彼を斬首するよう命じた。聖人は喜びに満ちて死へと向かい、自分自身と全世界のために神に祈りを捧げ、斧で首を斬られて息を引き取った。

その尊い遺体を葬り終えると、信者たちは、拷問の最中に拷問官に向けて語られた預言的な言葉を心に刻み、その成就を待ち望んだ。そして、叔父と甥の二人のユリアヌスが、まもなく　、騒動の末に命を落としたという予言は的中した。　皇帝の叔父であり、東方諸国の統治者であり、聖テオドリトスを殺害したユリアヌスは、自らの尿で神の玉座を穢し、聖なる器を踏みにじり、聖なるものを罵り、キリストを冒涜して以来、病に倒れた。直ちに、彼の秘所から蛆が湧き出し始め、　それらは彼の下腹部を食い荒らし、日ごとに病状は悪化していった。最も腕の立つ医師たちが彼を治そうと懸命に尽力したが、何の成果も得られず、彼の状態は刻一刻と悪化した。なぜなら、虫たちは激しく繁殖し、神の正義の手が触れた彼の肉体を食い尽くしていったからである。　そして、拷問者に語られた聖人の言葉、「あなたは自分の内臓を噛み砕くことになる」が成就した。というのも、彼の内臓の通路が詰まると、神を冒涜するその口が不浄な出口となってしまったからである。こうして、虫に食い荒らされながら、彼はその呪われた魂を吐き出した。　また、王の財宝を管理していた彼の友人フェリクスも、神の速やかな裁きを免れることはできなかった。神の報いにより、彼の内臓は損なわれ、神を冒涜するその口からは、昼も夜も泉のように血が流れ出し、やがて彼は永遠の死を迎え、その呪われた魂をゲヘナに委ねたのである。　不義の王ユリアヌスがアンティオキアに来てこのことを知ると、ダフネ・アポロノヴァに安置されていた聖殉教者バビラの聖遺物に冒涜を加えることは敢えてせず、代わりにキリスト教徒たちにそこから聖遺物を運び出すよう命じた――この聖人の伝記の9月4日の項に記されている通りである。 その後、背教者ユリアヌスはペルシア人に対する遠征に出た

が、キリストの聖殉教者テオドリトス[2240] が予言した通り、そこで命を落とした。その預言が成就したのを見て、信徒たちは、父と子と共に永遠に賛美される真の神、キリストを賛美した。アーメン。

ニコミディアの司教、殉教者テオフィラクトの記念日

記念日：3月8日

当時、教会が偶像排斥の異端[2241] に悩まされていた頃、東方の国々から敬虔な人物テオフィラクトがコンスタンティノープルにやって来て、教会の光である聖タラシオ――当時はまだ平信徒であり、元老院議員、宮廷における秘密事務の最高責任者――と親しくなった。 聖像破壊派の皇帝コンスタンティノス・コプロニモス[2242] の死後、その息子レウ[2243] が母イリナと共に即位した。「慈悲深い」と称されたパヴェル総主教は、自らの意思で座を退き、その代わりに聖タラシウスが総主教に就任した。彼は第7回全地公会議を招集し、偶像排斥の異端を断罪した[2244] 。 その時、至福のテオフィラクトと、彼と共にミハイル・シナドスキーはこの世を去り、修道生活に入り、至聖なるタラシウスによって黒海の岸辺に建てられた修道院へ遣わされた。そこで、修道者の務めに励み、徳を磨き、祈りを通じて神への大胆さを得た。

ちょうど収穫の時期であり、猛暑が続き、人々は激しい渇きに苦しんでいた。聖人たちは神に祈りを捧げると、空だった銅の器から、人々の必要を満たすのに十分な量の水が湧き出した。このように、主は御自身を畏れる者たちの願いを叶え、彼らの祈りに耳を傾けてくださるのだ！ この奇跡は、かつて荒野で、神が渇きに苦しむイスラエルの民のために岩から水を湧き出させた（出エジプト記17:6）あの古の奇跡に似ており、また、渇きで死に瀕していたサムソンのために、ロバの顎骨の乾いた骨が生き水の泉となった（士師記15:19）あの奇跡にも似ていた。 聖なる父テオフィラクトとミカエルが、その徳高い生活によって星のように輝きを放つようになると、至聖なるタラシウス総主教は、彼らを高い司教の位にふさわしいと認め、二人を叙階した後、ミカエルをシナイへ派遣し、至福

2240 ユリアヌスは、あるペルシャ人によって放たれた矢に撃たれた。死が近づいているのを感じ、彼は傷に手を当て、血を少し取り、それを空中に投げ捨て、まるで自分が迫害していたキリストを目の前に見ているかのように、「お前は勝った、ガリラヤ人よ！」と言った。（363年）

2241 ギリシャ帝国における偶像破壊運動は、レオン3世・イサウリア人（717–741）の治世に始まり、テオドラ皇后（842）の治世に終焉を迎えた。 この期間、以下の君主が即位した：コンスタンティノス5世（775年まで）、レウ4世（780年まで）、コンスタンティノス6世とイリナ（802年まで）、ニキフォロス1世（811年まで）、スタヴリキオスとミカエル1世（813年まで）、 レウ5世（アルメニア人、820年まで）、ミカイル2世（821年まで）、テオフィロス（840年まで）、テオドラとミカイル3世（867年まで）。これらの皇帝の治世において、コンスタンティノープル総主教の座には、アナスタシオス（聖像破壊派、753年）、 コンスタンティノス2世（聖像破壊派、766年）、ニキタ（聖像破壊派、780年）、聖パウロ（記念日：8月1日、784年）、聖タラシオス（記念日：2月25日、在位中に787年の第7回全地公会議が開催された （806年）、聖ニキフォロス（815年）、テオドロス・イコノボレツ（821年）、アントニオス・イコノボレツ（832年）、ヨハネス7世・イコノボレツ（842年）、そして聖メフォディオス（846年）である。

2242 「コプロニム」というあだ名は、ギリシャ語の「コプロス」（糞）に由来する。

2243 在位は775年から780年まで。――レオン4世（ホザール）は、イコン反対派の支持者ではあったものの、その反対派に対してはより融和的な態度をとった。彼は、父の治世中に逃亡した、イコン崇拝の擁護者である修道士たちの帰還を許可し、さらには彼らが司教の座に就くことさえ認めた。 こうして、密かに聖像崇拝を支持していたパウロス・キプロスが総主教の座に就いた。聖像は、夫に内緒で聖像崇拝者たちを支援していた皇后イリナの宮殿の部屋にも置かれていた。これが発覚すると、レウスはイリナを宮殿から追放したが、まもなく死去した。

2244 この公会議は787年に開催された。公会議は聖像破壊派を破門し、聖像崇敬を次のように定めた。すなわち、聖像に対して神のみにふさわしい礼拝を行ってはならないが、聖なる命を与える十字架（その崇敬は聖像破壊派も否定していなかった）と同様に、聖像を敬うべきである、と。

のテオフィラクトをニコメディアの司教に任命した。　聖テオフィラクトがニコミディアにおいて、キリストの羊の群れに対してどのような配慮を示し、貧者、孤児、未亡人に対してどのような慈愛を注いだか――それについては、彼が建立した神聖な教会、病院、旅人宿、そして彼が日々行っていた数え切れないほどの施しが証しとなっている。　彼自身、病人、盲人、足の不自由な者、体の弱い者たちの世話をした。温かい水を入れた器を持って救貧院や町の広場を巡り、出会ったハンセン病患者たちを自らの手で洗い清め、彼らに仕えるにあたり、何一つ嫌がることなく献身した。

聖タラシウスがこの世を去ると、賢明なるニキフォロスが彼の後を継いでコンスタンティノープル教会の座に就いた。その時、不敬虔な皇帝レオン・アルメニア人によって煽られた、偶像排斥の異端の嵐が再び吹き荒れた。　至聖なるニキフォロス総主教は、選り抜かれた司教たち――エミリアノス・キジクス、エウフィミオス・サルディス、ヨセフ・テッサロニキ、エウドクシオス・アモリウス、ミハイル・シナドス、そしてニコミディオスの司教である至福のテオフィラクト――を召集し、彼らと共にその不義な皇帝のもとへ向かった。　聖なる父たちは、神聖な書物に基づいて王に多くの教えを説き、第七回全地公会議によって呪われたその異端によって、キリストの教会に混乱をもたらさないよう諭した。しかし、彼らは、蛇の毒に満ち、彼らに対して猛烈な怒りと憤りを吐き出していた狂気の王を説得することはできなかった。　聖なる父たちが黙り込むと、至福のテオフィラクトは王にこう言った。

「私は知っている。あなたは神の寛容を侮り、自らの救いを軽んじて、聖なる父たちの古来の伝承に背き、教会を混乱させている。しかし、嵐のように、激しい破滅と予期せぬ災いが突然あなたを襲い、あなたは自分を救う者を見つけることはできないだろう。」

これを聞いて、王はさらに激怒し、司教たちを不名誉な形で追い払い、彼らを各地へ流刑に処した。 至聖なるニキフォロス総主教をプロコンニス島へ[2245]、聖ミカエル・シナドス司教をエウドキアデスへ、他の者たちを各地へ、そして聖テオフィラクト・ニコミディオスをキヴェレオトスにある海辺の町ストロヴルへ[2246]。 そこで、キリストの殉教者であり、敬虔さの偉大な擁護者である彼は、多くの迫害と苦難の中で残りの生涯、およそ30年間を過ごし、主のもとへ帰った。

アルメニア人のレウ王は、聖人が予言した通り、邪悪かつ予期せぬ死を遂げた。彼はキリストの降誕の日、教会での早課の最中に、自らの兵士たちの剣によって斬り殺されたのである（820年）。 彼の後を継いで、ミカイル（「口が不自由な者」と呼ばれた）（829年）と、ミカイルの息子テオフィロス（842年）という、偶像破壊派の王たちが治め、その生涯を終えた。 その後、テオドラ皇后（842–855年）が息子のミカイル（855–867年）（ミカイルという名の3代目皇帝）と共に王位を継承すると、聖メフォディオスは総主教に就任し（842年）、不法な異端は滅ぼされ、 正教が輝きを取り戻した。その時、私たちの尊い父テオフィラクトの聖遺体は、追放の地からニコミディアへ移され、彼が建立した教会に安置された。それはニコミディアの街を守るためであり、また私たちの神キリストへの栄光と力のためである。

コンダク、第2調：

聖テオフィラクトよ、あなたは地の果てに至るまで輝く灯として現れ、父と聖霊と同一の本質を持つ御言葉を宣べ伝え、神聖な教父たちの公会議を明らかにし、三位一体に喜ばれる者となった。その御前に立ち、私たちすべてのために絶えず祈り給え。

[2245] プロコニス――キジキの北西に位置するプロコニデス（現在のマルマラ海）の島。大理石の採石場として知られていた。

[2246] *キヴェレオティ*、あるいはカリア――小アジア南西部の地域。

3月22日

3月9日（旧暦）

アルメニアのセバスティアにおける四十人の殉教者たちの殉教

記念日3月9日

不義な皇帝リキニウスの治世下、キリスト教徒に対する激しい迫害が繰り広げられた[2247]、そしてすべての信徒は偶像への生贄を捧げることを強要された。アルメニアの都市セバスティア[2248]では、当時、アグリコラという、気性が荒く、偶像崇拝の熱心な擁護者である軍司令官が統治していた。当時、皇帝の軍団の隊列の中にもすでに多くのキリスト教徒がいたため、彼らにも悪魔への生贄を捧げるよう命じる勅令が出された。アグリコライ司令官の連隊には、カッパドキア地方[2249]出身の兵士40名が所属しており、彼らは特に名誉ある部隊を構成していた。彼らはキリスト・神を敬虔に信じ、揺るぎない勇気を持ち、戦場では常に無敵であった。その中には、キリオン、カンディド、ドムンといった、聖書にも精通した者たちがいた。この部隊の兵士たちがキリスト教徒であることを知ったアグリコラ総督は、彼らに偶像崇拝を強いることを決意した。総督は彼らを呼び寄せ、次のように語りかけた。

「敵との戦いにおいて、あなたがたは常に互いに調和し、心を一つにして勇敢さを示してきた。今こそ、その同じ一致した心で、皇帝の勅令に心を一つにして従うことを示せ。自発的に神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、あなたがたは拷問にさらされることはないだろう。」

これに対し、聖者たちは大胆にこう答えた。

「もし我々が、この世の王のために勇敢に戦い、常に勝利を収めてきたのであれば――お前という忌まわしき者自身が証言している通り――それならばなおさら、不死の王のために奮闘する我々は、お前の悪意を打ち破り、お前の狡猾さに打ち勝つだろう。」

アグリコライは言った。

「あなたたちには二つの選択肢がある。神々に犠牲を捧げて大きな栄誉に浴するか、あるいは従わない場合は軍人としての地位を失い、不名誉にさらされるかだ。よく考えて、自分たちにとってどちらが有益か選べ。」

「我らにとって何が有益か――それは主が顧みてくださる」と兵士たちは言った。

「余計なことは言うな」と軍司令官は言い放った。「その偽りの言葉を捨て、明日の朝には神々に生贄を捧げる準備をしておけ。」

そう言い終えると、アグリコライは彼らを牢獄に閉じ込めるよう命じた。そこに連行された聖なる戦士たちは、祈りを込めてひざまずき、神にこう叫んだ。

「主よ、私たちを誘惑や、不法な者たちの惑わしから守ってください。」

そして夕方になると、彼らは詩篇を歌い始めた。

[2247] リキニウスは、ローマ帝国西半分の皇帝コンスタンティヌス大帝の娘婿であり、307年から323年まで東半分の皇帝を務めた。313年、両皇帝は勅令を発布し、キリスト教を国教と宣言し、古代の異教と同等に扱った。しかし、異教徒であったリキニウスは、キリスト教の断固たる庇護者となったコンスタンティヌスと敵対し、彼との戦争に備える中で、勝利を約束した神託に惑わされ、自らの帝国内におけるキリスト教を根絶やしにしようと決意した。とりわけ、軍内部での反逆を恐れたためである。

[2248] アルメニアとセバスティアの都市――小アジアの北東部――は、東ローマ帝国の領土に含まれていた。

[2249] カッパドキア地方は小アジアの東部に位置し、その主要都市ケサリアは教育の盛んな地として知られていた。

「*至高者の御庇の下に住む者は、全能者の御陰に安らぐ*」（詩篇90:1–16）。

詩篇を最後まで歌い終えると、聖なる戦士たちは主に向かって祈りを捧げた。祈りが終わると、彼らは再び詩篇の詠唱に取り組み、そのようにして真夜中まで眠らずに過ごした。　賛美の指揮を執ったのは聖キリオンであった。彼が詩句を唱えると、聖カンディドと聖ドムヌス、そして他の者たちがそれに続いて唱和した。真夜中になると、聖なる戦士たちは、彼らの前に現れた主の声を聞いた。

「あなたがたの救いの始まりは良いものであるが、最後まで耐え忍ぶ者が救われる（マタイ10:22）。」

彼らは皆、この主の声を聞き、恐怖に襲われたが、その恐怖は地上のものとは異なる喜びによって消え去っていった。そして、彼らは朝まで眠らなかった。

翌朝、アグリコライは友人や顧問たちを呼び集め、牢獄から聖なる四十人の戦士たちを連れてくるよう命じ、彼らに向かって次のような狡猾な言葉を投げかけた。

「私が今、あなた方に語ることは、お世辞でも嘘でもなく、真実そのものだ。我らの王には多くの戦士がいるが、彼らは皆、知恵においても、勇気においても、美しさにおいても、あなた方に及ばない。そして、彼らはあなた方ほど私の寵愛を受けているわけではない。だから、私のあなた方への愛が憎しみに変わるようなことをしてはならない。　私のあなたへの愛を維持するか、あるいは私の憎しみを招くかは、あなたの手にかかっており、あなた次第なのです。

聖カンディドはこれにこう答えた。

「お前は残酷なお世辞屋だ、アグリコライ！　お前の名前『[2250]』は、お前の気質にぴったりだ。」

総督は繰り返した：

「私が言ったではないか、あなた方の手に委ねられているのだと――私の愛を保つか、それとも私からの憎しみを招くか、と。」

聖カンディドは言った：

「あなたの私たちへの愛も憎しみも、あなた自身が言うように私たち次第であるならば、私たちは憎しみを選ぶ。なぜなら、私たちもあなたを憎んでおり、ただ私たちの神の慈悲のみを求めるからだ。　あなたのような、凶暴で残酷な人間であり、我らの神の敵である者は、不法で嫉妬深いゆえに、我々を愛してはならない――迷いの闇に包まれ、獣のような性情で、その凶悪な名にふさわしい行いをしているのだから。

聖人のこの大胆不敵な返答に激怒した総督は、獅子のように歯ぎしりしながら、聖なる戦士たちに手錠をかけ、牢獄に閉じ込めるよう命じた。しかし、聖キリオンは彼にこう言った。

「お前には、王から我々を拷問する権限はない。できるのは、ただ尋問することだけだ[2251]。」

聖なる戦士によるこの諭しに怯えたアグリコライは、粗暴な暴力を振るうことなく彼らを連行し、牢獄に収容するよう命じ、手錠をかけることは禁じた。ただ、牢獄の看守には彼らを厳重に監視するよう命じただけだった。その頃、総督は、大きな権限を持つ公爵リシウスの到着を待っていた。

牢獄に囚われていた聖なる戦士たちは、昼も夜も祈りと詩篇の詠唱、そして聖キリオンによる教えに耳を傾けて過ごした。

「神の御計画により」と、彼はその合間にこう語った。「兄弟たちよ、私たちは一時的で虚しい兵役の中で絆を深めたが、永遠に離れることのないよう努めよう。　これまで私たちが心を一つに

[2250] 「アグリオス」とは、野性的で獰猛な者を指し、「コラクス」とは、諂い者を指す。

[2251] 同様に、聖使徒パウロも、キリストのために苦難に遭いながら、裁判官たちに対し、悪意を露わにするあまり、人間や国家の法律を踏みにじることなく、ローマ市民である自分を恣意的に拷問にさらさないよう求めた。（使徒行伝16:37；使徒行伝22:26–30）。

し、志を同じくして生きてきたように、殉教の偉業も分かたれることなく成し遂げよう。私たちが死すべき王に愛されたように、不死の王、キリスト・神にも愛されるよう努めよう。」

聖なる戦士たちが牢獄に閉じ込められていた七日が過ぎた後、リシウス公爵がその国に到着し、セバスティアに着くとすぐに、その勇敢な戦士たちに目を留めた。　その翌日、軍司令官アグリコラと共に法廷に現れると、彼は聖なる四十人の戦士たちを拷問にかけるよう命じた。この不正な法廷へ向かう途中、至福のキリオンは仲間たちを次のように励ました。

「恐れるな、兄弟たちよ！　私たちが神を呼び求め、敵を打ち負かした戦いの際、神は私たちを助けてくださったではないか。思い出してほしい。かつて私たちが壮絶な戦いに巻き込まれた時、連隊の仲間たちは皆逃げ出し、敵の中に残されたのは私たち四十人だけだった。　その時、私たちは神に涙の祈りを捧げ、神の助けによって、ある者は打ち倒し、他の者――負傷者――は追い払った。敵の大群と戦いの激しさにもかかわらず、私たちのうち誰一人として傷つくことはなかった。　今や、三人の敵――サタン、リシイ、そしてアグリコライ総督――が私たちに牙をむいている。いや、むしろ、ただ一人の敵――目に見えない敵――が私たちに戦いを仕掛けているのだ。果たして、その敵が私たちの四十人の仲間を打ち負かすことができるだろうか？　そんなことがあってはならない！……　私たちには、今もこれまで通りに行動すべきだ。すなわち、心からの祈りを神に捧げよう！――そうすれば神は私たちを助けてくださる――そして、束縛も苦しみも、私たちに害を及ぼすことはないだろう。戦いに臨む際、詩篇を歌うことは、私たちにとって常に鉄則であった。

「神よ！　御名によってわたしを救い、御力によってわたしを裁いてください、神よ！　わたしの祈りを聞き入れ、わたしの口の言葉に耳を傾けてください」（詩篇53:3）。さあ、戦友の兄弟たちよ、今この時も同様に唱えよう――そうすれば、神は私たちの声を聞き、助けてくださるだろう。

そして、聖なる戦士たちは、牢獄から裁判の場に至るまでの道のり全体を通して、この詩篇を歌い続けた。その光景に、街中の民衆が集まってきた。

四十人の戦士たちは、リシウスとアグリコラの面前で裁判に臨んだ。リシウス公は、聖なる戦士たちを一瞥して、こう言った。

「この者たちは、より高い位階を望んでおり、またそれに値する者たちだと私は思う。」

そして、彼らに向かって次のように語りかけた。

「名誉も贈り物も、他の誰よりも多く、私が与える。ただ、王の命令に従い、神々に犠牲を捧げよ。二つの選択肢から自由に選んでよい。神々にひれ伏し、大きな報奨と名誉を得るか、あるいは、それを拒むならば、直ちに軍人としての地位を剥奪され、拷問にさらされることになる。」

これに対し、聖カンディドはこう答えた：

「我々の軍人としての地位だけでなく、この肉体そのものさえも奪い取ってください。なぜなら、我々にとって、我らの神キリスト以上に尊く、栄誉あるものは何もないからです。」

すると、傲慢な王子は聖人たちの口を石で打つよう命じた。それに対し、聖カンディドはこう言い放った。

「闇の君主よ、不法の手先よ！　お前自身がそれを始めよ。そうすれば、報いを見るだろう。」

怒りに燃え、歯ぎしりしながら、総督は言った。

「邪悪な家来どもめ！　なぜ領主の命令をこれほど遅々として実行しないのだ。」

家来たちは石を手に取ったが、投げようとしたとき、その石は聖人たちではなく、互いに自分たち自身を打ち、互いに傷つけ合った。これを見た聖なる殉教者たちは、主に対する大胆な信仰をさらに強めた。　苛立ったリシウス公は自ら石を拾い上げ、聖人の一人に投げつけたが、その石はアグリコラの顔に当たり、彼の口を打ち砕いた。すると、聖キリオンは言った。

「我々と戦う敵たちは力尽き、恥をかいた。まことに*『彼らの剣は彼らの心に突き刺さり、彼らの弓は砕かれる』*（詩編36:15）のである。」

一方、ヴォエヴォダは打ちひしがれた口調でこう言った。

「神々に誓って――彼らには何らかの魔法の力が働いているのだ！」

聖ドムンはこれに対し、こう答えた。

「しかし私はキリストの名において断言する。それは魔法などではなく、神が我らを助けておられるのだ。そして神の御力が、御子に対して偽りを叫んだあなた方の恥知らずな顔を、恥辱で覆ったのだ。恥を知らないのか、この狂人よ。真理から遠く離れ、悪魔の冥界の闇に満ち溢れ、誘惑の種をまく者よ！」　「お前、アグリコライよ、お前は悪魔の憎悪の頭であり、お前に付き従う公爵は、その怒りの尾である。お前たちは二人とも、サタンの僕だ。しかし、もしお前たちが、我々に課した最初の拷問を通じて、我々に宿る神の力をまだ確信していないのなら、別の拷問を始めよ。」

使用人の中には、恥をかかされた主君たちを擁護しようとする者もいた。

「我らの神々に対する狂った敵め」と、彼らは聖なる殉教者たちに言った。「なぜ、神々に犠牲を捧げようとしないのか？」

聖キリオンは彼らにこう答えた。

「我らは唯一の神と、その御子イエス・キリスト、そして聖霊を崇め、あなた方の諂いを打ち破り、不死の命の冠を受けるために、大胆に我らの業を成し遂げようと努めているのだ。」

そして、リシウス公は、聖なる戦士たちを再び牢獄へ連行し、彼らをどう扱うか考えるよう命じた。

牢獄に閉じ込められた聖なる戦士たちは、詩篇を詠み始めた。

「主よ、天におられる方よ、私はあなたに目を向けます」と彼らは歌った。「見よ、しもべの目が主人の手に注がれるように、女奴隷の目が女主人の手に注がれるように、私たちの目も、主、私たちの神に向けられています。主が私たちを憐れんでくださるまで」（詩編122:1–2）。

そして祈りの後、彼らは再び天からの励ましを授かった。夜六時、現れた主の声を聞いたのである。

「*わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる*」（ヨハネ11:25）。勇気を出し、一時的な苦しみをおそれないでください。まもなくそれは過ぎ去ります。少しの間耐え忍び、正当な苦難に耐えれば、冠を受けるでしょう。

キリスト・神からのこのような慰めによって力づけられた聖なる戦士たちは、その夜、心を喜びで満たして過ごした。

翌日、聖なる戦士たちは再び不義な裁判官たちの前に引き出され、ためらうことなくこう宣言した。

「私たちに何をしようとも構わない。私たちはキリスト教徒であり、偶像を拝むことには同意しない。」

その時、アグリコラのそばに、右手に剣、左手に蛇を持った人間の姿をした悪魔が現れ、軍司令官にこう囁いた。

「お前は私のものだ、奮闘せよ！」

拷問官たちは、四十人の聖なる戦士たちを縛り上げ、セバスティアの町の近くにある水量の豊富な湖へと引きずり出すよう命じた。当時は冬で、厳しい寒さの中、強い風が吹いていた。時刻はすでに夕方へと傾いていた。　聖なる戦士たちは裸にされ、一晩中湖の真ん中に立たされ、彼らを見張るために、牢獄の長を先頭にした見張りが配置された。　聖なる戦士たちを惑わすため、湖の近くには温かい風呂が設けられていた。それは、酷寒に耐えることを強いられた死刑囚たちを誘い込み、四十人の仲間の中で、寒さに耐えきれず偶像崇拝に傾き、水から飛び出して暖まりたいと願う者には、速やかに助けを与えると約束するものだった。　夜中の第一時、寒さが極限に達し、聖人たちの体が凍りつくほどになったとき、四十人のうちの一人が試練に耐えきれず、聖人たちの集団から離れ、風

呂へと駆け込んだ。しかし、彼が風呂の敷居を跨いだ途端、暖かさを感じたその瞬間、溶けてしまい、死んで倒れた。　このような恥ずべき逃走を目の当たりにして、聖なる戦士たちは心を一つにして神に叫んだ。*「主よ、あなたの怒りは川に向けられたのですか。あなたの憤りは川に向けられ、あなたの激怒は海に向けられたのですか」*（アバク3:8）。 ――「私たちから離れていった者は、水のように流れ落ち、その骨は散らされた」（詩編21:15）。しかし、私たちはあなたから離れることはありません。私たちを生き返らせてください。そうすれば、私たちはあなたの御名を呼び求めます（詩編79:19）。

– すべての被造物があなたを賛美し、大きな魚やすべての深淵、火や雹、雪や霧、激しい風があなたを賛美する方（詩篇148:7–8）、 海の上を陸地のように歩まれた方（マタイ14:25）、そして手のしぐさで荒れ狂う波を鎮められた方（ルカ8:24）！ 主よ、あなたは今も変わらず同じお方です。あなたは、兄エサウの脅威から逃れたヤコブの嘆願に耳を傾け（創世記27:1–46、28:1–22）、 ヨセフを助け、その苦難から救い出された方（創世記39:1–23）； モーセの祈りに耳を傾け、エジプトにおいてファラオとその側近たちの前でしるしと奇跡を行う力を彼に授けられた方（出エジプト記7:1–25, 11:1–10）； 海を分け、御自分の民を荒野へと導き出された方（出エジプト記 14:1–31）； 御自分の聖なる使徒たちの祈りに応じて御手を伸ばし、御子イエスの御名によって癒やしと、しるしと奇跡を行われた方（使徒行伝 4:24–31, 16:25–26）――主よ、どうか私たちにも耳を傾けてください。水の深淵が私たちを滅ぼさず、深みが私たちを飲み込まないように。私たちは極めて貧しくなってしまいました。　私たちの救い主なる神よ、私たちを助けてください。今、私たちは水の中に立ち、私たちの足は私たちの血で染まっています。私たちの重荷を軽くし、空の荒れ狂う風を鎮めてください、主なる私たちの神よ！ 私たちはあなたに望みを置きます。私たちが恥をかくことのないように、そして、私たちがあなたに呼び求めて救われたことを、すべての人が悟ることができますように。

夜中の第三時、聖なる殉教者たちを、まるで収穫期の夏の太陽のような光が包み込み、その光は寒さを追い払い、氷を溶かし、水を温めた。その間、聖徒たちの監視を任されていた兵士たちは皆、眠りに落ちていたが、ただ一人の牢番だけが眠っていなかった。　彼は、殉教者たちが神に祈っているのを耳にし、こう考えた。「浴場に駆け込んだ者が、まるで蝋のように熱でたちまち溶けてしまったのに、他の者たちはこれほど激しい寒さの中でも生きて無傷でいられるとは、一体どういうことなのか？」　そして、聖なる殉教者たちを照らす光に心を打たれ、この不思議な光がどこから発せられているのか確かめようと、彼は上を見上げると、聖人たちの頭上に降り注ぐ三十九のまばゆい光の冠を見た。　そして、苦難に身を捧げた四十人の数に合わせ、なぜ四十番目の冠がないのかと考えを巡らせたとき、彼は、浴場へ逃げ込んだ者が聖人の列から追放されたため、四十番目の冠が欠けているのだと悟った。　彼は直ちに眠っていた戦士たちを起こし、衣服を脱ぎ捨て、皆の目の前で裸のまま湖へと駆け込み、「私もキリスト教徒だ」と叫んだ。そして、聖なる殉教者たちの群れに加わると、神に向かってこう叫んだ。

「主なる神よ！　私は、これらの人々も信じるあなたを信じます。私を彼らの仲間に加え、これらのあなたのしもべたちと共に苦難に遭うことをお許しください。そうして私も、試練の業を乗り越え、あなたにふさわしい者となれますように！」 ――こうして 、聖なる殉教者たちの数は再び完

全な数――四十人[2252] ――となった。離反した者の代わりに、牢屋の看守がその地位に就き、第四の十人組[2253]を聖なる者で満たした。彼の名はアグライであった。

このように、四十人の聖殉教者たちの列が驚くべき形で満たされたのを見て、悪魔は自ら敗北し、恥をかかされたことを悟り、人間の姿をとって泣き叫び、皆が聞こえるようにこう叫んだ。

「ああ、哀れな私よ！　私はこれらの男たちに打ち負かされた。今や私は誰からも嘲笑と侮辱の対象となってしまった！　私の勝利を守り抜くために、心を一つにしてくれる友も、家臣も一人もいなかった！　さて、私に一体何が残されているというのか？　もはや、私に忠誠を誓う公爵や軍司令官たちの心を動かし、聖人たちの遺体を焼き払い、その遺灰を川に投げ捨て、彼らの後に何一つ、いかなる遺骸も残らないようにさせることしかないのだ。

その間、聖キリオンはこう叫んだ。

「*『[私たちの]神ほど偉大な神は誰か！　あなたは奇跡を行われる神である』*（詩編76:14–15）。主よ、あなたは、かつて私たちに敵対していた者たちを、私たちと共に、私たちのために戦わせるよう導かれました。あなたは第四の十人組の欠員を埋め、サタンを恥じ入らせられました！」

そして、すべての殉教者たちは詩篇を歌い始めた。*「主よ、[私を]救ってください。義人はいなくなったからです」*（詩編11:2）。

朝が明け、不義な拷問者たちが湖にやって来て、水の中に立ち、生きており、冬の寒さにも苦しんでいない聖なる殉教者たちを見て驚いたが、この不思議な現象を、殉教者たちの魔法のような策略によるものと説明した。　彼らの驚きは、殉教者たちの間に牢番が立っているのを見たとき、さらに大きくなった。彼らは、監視のために配置されていた兵士たちに、なぜ、そしてどのようにしてこのようなことが起きたのかと尋ねた。兵士たちはこれに対し、次のように答えた。

「我々は夜、ぐっすり眠ってしまいましたが、彼――牢の看守――は一晩中眠らず、突然我々を起こしました。　目が覚めると、水の中に立っている者たちを照らす大きな光が見え、**その男は**素早く服を脱ぎ捨て、それを投げ捨てて勢いよく水の中に入り、そこに立っている者たちに加わり、『**私もキリスト教徒だ**』と大声で宣言したのです。」

その時、拷問者たちの心は怒りに燃え上がった。縛られた聖人たちを岸に引き上げ、そこから街の拷問場へ連行するよう命じた裁判官たちは、聖なる殉教者たちに新たな拷問――ハンマーで脛骨を砕く――を加える判決を下した。

この非人道的な聖人への拷問が行われている間、彼らの中で最も若いメリトンの敬虔な母は、拷問の場に近づき、苦しむ者たちのそばに立ち、勇敢に試練を乗り越えるよう言葉で励ました。　とりわけ、幼い息子が恐怖に屈したり、苦しみの中で力尽きたりしないかと心配し、愛情を込めて彼を見つめ、手を差し伸べながら、次のように言って彼を励まし、慰めた。

「わが愛しき子よ！　もう少し耐えれば、あなたは完全なものとなるでしょう。恐れることはありません、わが子よ。キリストご自身がここに立ち、あなたを助けておられます！」

[2252] 40という数字は、常に象徴的で神聖なものとして尊ばれてきた。ノアの時代には40日40夜雨が降り続き、大地は洪水以前の人間の肉欲から清められた――創世記7:12；ユダヤ人は40年間荒野を放浪し、その後にようやく約束の地に入った――ヨシュア記5:6；　モーセはシナイ山で40日40夜を過ごし、十戒の石板を受け取った――出エジプト記34:28；生後40日目に、ユダヤ人の長子は神に奉献された――レビ記12:2–4；預言者エリヤは40日40夜かけてホリブ山へと歩み、そよ風のなかに主の御姿を仰ぐ栄誉に浴した――列王記上19:8；主イエス・キリストご自身が荒野で40日間断食された――マタイ4:2；　復活後、40日間地上に留まり、弟子たちに現れて神の御国について語られた――使徒1:3。

[2253] ここでは、使徒たちに起こったのと同じことが実現した。*「ユダは去り、その代わりにマティアが加えられた」*――使徒行伝 1:25–26；――かつてはキリストの弟子たちに対して怒りと迫害を吹き荒らしていたが、今や福音を宣べ伝えている、新たなパウロが現れた。　そしてこの人も、あの人と同様に、人からも人によっても与えられた称号を持たなかった――ガラテヤ人への手紙1章――主イエス・キリストを信じ、他の誰かによってではなく、自らの信仰によって、水ではなく、自らの血によって、キリストにバプテスマを受けたのである。」（バシレイオス大主教『聖40殉教者への説教』）

聖なる殉教者たちは、卑しい悪党のように、脛を砕かれるという恐ろしい苦痛（ヨハネ19:31）に耐えながらも、熱意を衰えさせることなく、死の直前、霊的な喜びをもってこう叫んだ。

「*わが魂は、鳥のように、捕らえる者の網から逃れた。網は引き裂かれ、われらは解放された。われらの助けは、天と地を造られた主の御名にある*」（詩編123:7–8）。

そして、「アーメン」と唱えると、彼らは皆、その魂を神に委ねた。ただ一人、母に慰められていたメリトンだけが、かろうじて息をしていながら生き残った。その後、拷問者たちは使用人たちに、亡くなった聖人たちの遺体を戦車に乗せ、火刑の場へ運ぶよう命じた。そして、若きメリトンだけは、彼が生き延びることを期待して、その場に残した。　しかし、敬虔な母は、拷問の場に一人残された息子を見て、　に備わる女性としての弱さを振り払い、勇気を奮い立たせて、息子を肩に担ぎ上げ、熟した小麦の束のように聖なる殉教者たちの遺体が運ばれる戦車の後を、恐れを知らずに追いかけた。　そして、母に抱かれていた殉教者が、主を喜びながら息を引き取ると、その遺体は、彼女自身の母なる手によって、仲間の聖人たちの遺体がある戦車へと運ばれた[2254]。聖なる殉教者たちの遺体が川のほとりの火刑場に運ばれると、兵士たちは不義な裁判官たちの命令に従い、大量の薪や小枝を集めて非常に大きな火を焚き、その上に聖者たちの遺体を載せて火をつけた。火は燃え尽き、残ったのは殉教者たちの骨だけだった。しかし、迫害者たちの悪意は収まらなかった！

「もしこの骨をこのままにしておけば」と彼らは互いに話し合った。「キリスト教徒たちがそれを持ち去り、砕いて記念として保存し、全世界に広めてしまうだろう。それゆえ、その遺灰さえ残らないよう、川に投げ捨てよう。」

こうして、聖なる遺骸は川に投げ込まれ、勇敢な殉教者たちの記憶は永遠に消え去るはずだった。しかし、「御自分の聖徒たちのすべての骨を守られる」（詩編33:21）主は、その一片たりとも水の中で滅びることを許さず、すべてが無傷のまま保たれた。　三日が過ぎた後、聖なる殉教者たちはセバスティアの司教である至福のペトロの前に現れ、彼にこう言った。

「夜になって、私たちを川から運び出してください。」

至福の司教は、自身の聖職者の中から敬虔な人々を招き、暗い夜に彼らと共に川の岸へと向かった。すると、彼らの目に驚くべき光景が飛び込んできた。聖人たちの遺骨は水中で星のように輝き、川底の、そのごくわずかな断片さえも横たわっている場所までもが明るく照らされていたのである

[2254] 聖エフレム・シリン（『40人の殉教者への賛辞』）は、この際、殉教者の祝福された母の口に、次のような感動的な言葉を託している。「落ち着きなさい、わが子よ。戦車の上での時間は長くはない。あなたの血を、尊い者たちの血と混ぜ合わせなさい。　彼らと共に天の住まいへと至るため、ひととき彼らと共に横たわれ。彼らと共に感覚の炎の中へ進み、彼らと共に真の光に身を包まれよ。彼らと共に炉の中へ入り、彼らと共に精錬された金となって出てこい。あなたがたがどのような嵐から救われ、どのような港を目指しているか、私は知っている。　あなたがたが天の父のもとへ向かっていること……、病や悲しみ、嘆きから逃れてきたあの国へ急いで向かっていること、そこには悲しみも、朽ち果てることも、心を蝕む嫉妬も、邪悪な敵も存在しないことを、私は知っている。　なぜ、私、わが子よ、あなた方と共に死ななかったのでしょうか？　なぜ、私もこのあなた方の輝かしい祝宴に加わることができず、それを楽しむことができないのでしょうか？——まさか、私が罪深く、涙と極度の後悔に値する者だからというのでしょうか！……　いいえ、私があなた方と共に行かないのはその理由からではなく、あなた方が補填を求めないからです——あなた方は神にとって一つの四十人となり、十人ずつ、十組に分かれて福音の宴に招かれたのです（マタイ25:1–13）……　それゆえ、わが子よ、あなたがそのような栄光に浴するにふさわしい者である以上、救い主キリストがあなたがたに「*さあ、私があなたがたのために用意した私の御国を受け継ぎなさい*」（マタイ25:34）とおっしゃる時、私のために祈ってください。　あなたと同等の栄誉ある者たちと共に私のことを思い出し、光の父なる神に私のための報いを請い願ってください。そうすれば、あなたの肉体が私の上で息を引き取ったように、キリストの恵みが私の上に注がれ、あなたの血が私のぼろ服を染めたように、　主の憐れみが私を潤し、あなたと共にこの一つの戦いを戦い抜いたように、あなたと共に聖徒たちの住まいへと至り、私もあなた方と共に歌い、こう告げることができるように。「*主ほど聖なる方はおられません。あなた以外に他におられる方はおらず、私たちの神ほど堅固な砦はおられません*」（サムエル記上2:2）。　主は御自身の忠実なしもべたちの角を高め、敵を恥じ入らせられた。主には、永遠の栄光がある」。

。　聖人たちの骨を一つ残らず集め、司教はそれらを尊い場所に安置した。こうして、キリストのために苦難を受け、キリストから栄冠を授かった彼らは、この世で星のように輝いている[2255]。

彼らは神を信じ、キリストを告白し、聖霊に逆らうことなく、聖なる命を与える三位一体によって栄光を受け、父と子と聖霊を信じるすべての信徒の救いのための教訓として、自らの偉業の記憶を残した。四十人の殉教者たちの名は以下の通りである：　キリオン（キリイ）、カンディド、ドムン、イシキイ、イラクリイ、スマラグド、エヴノイク（エヴニク）、ヴァレント（ウアル）、ヴィヴィアン、クラウディウス、プリスクス、テオドゥルス、エウティキイ、ヨハネス、クサンフィイ、イリアン、シシニイ、アギイ、アフティイ、　フラウィウス、アカキウス、エクディキウス（エクディト）、リシマコス、アレクサンドロス、イリウス、ゴルゴニウス、テオフィロス、ドミティアヌス、ガイウス、レオントス、アファナシオス、キリル、サケルドン、ニコライ、ワレリウス、フィロクティモン、セウェリアヌス、フディオン、メリトン、アグライ。

聖なる四十人の殉教者たちは、2月26日にキリストのために苦難を受けることとなり、3月9日にその魂を主にお委ねした。[2256] 当時は、異教徒のリキニウスがまだ帝国を支配していたが、むしろ、すでに私たちの主イエス・キリストが統治しておられたと言うべきである。　主には、父と聖霊とともに、永遠に栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

尊き受難の殉教者たちよ、キリストの四十人の戦士たちよ、堅固な戦士たちよ。あなたがたは火と水の中を通り抜け、天使たちと共に住む者となった。彼らと共に、信仰をもってあなたがたを称える者たちのために、キリストに祈り求めてください。　あなたがたに強さをお与えになった方に栄光あれ、あなたがたを冠された方に栄光あれ、あなたがたを通してすべての人に癒やしをお与えになる方に栄光あれ。

聖殉教者ウルパシアヌスの受難

記念日：3月9日

ローマ帝国で不敬虔なマクシミアヌス[2257] が統治するようになると、彼は異教の神々を崇拝しない者たちに対して容赦ない弾圧を行い、ニコメディア[2258] 周辺に住むキリスト教徒たちを拷問にか

2255　聖40殉教者の記念日は、東方および西方のあらゆる最古の月暦において、最も崇敬される聖人の祝日および記念日の輪に数えられていた（参照：セルギイ大主教著『東方完全月暦』第1巻、17–19頁；　第2巻、第2部、75ページ参照）；典礼規則によれば、彼らへの礼拝には二つのカノンが含まれており、その記念日には断食の厳格さが緩和され――ワインやオリーブ油の摂取が許され、また、必ずかつ例外なく、洗礼者ヨハネの礼拝の順序に従い、あらかじめ聖別された供え物を用いた聖体礼儀を行うことが定められている。

2256　聖殉教者たちは320年に殉教し、323年にはコンスタンティヌス皇帝がローマ帝国全土において単独統治者となった。40人の殉教者の記念日は3月9日に祝われるが、教会規則により他の日に延期されることもある。具体的には、もしその日が四旬節の最初の*週*のいずれかの日に当たる場合は、殉教者への礼拝は土曜日に執り行われる。　十字架礼拝の週の水曜日に当たる場合は、その週の火曜日に礼拝が行われ、同様に大カノンの木曜日に当たる場合は、その第5週の火曜日に礼拝が行われる。また、アカフィストの土曜日に当たる場合は、四旬節の第5週の日曜日に延期される。

2257　ここで言及されているのは、もちろんマクシミアヌス・ガレリウスであり、ローマ帝国東部のディオクレティアヌスの娘婿であり共同統治者である。彼の強い要請により、303年にディオクレティアヌスはキリスト教徒に対する一般法を公布したが、この法律が公布される前から、ガレリウスは私的にキリスト教徒を迫害していた。すなわち、彼らを宮廷から追放し、軍務から除名するなどしていた。

2258　ニコメディアは、東ローマ帝国の首都であり、ディオクレティアヌス帝の居城であった。小アジア北西部のビフィニア地方、プロポンティス（大理石の海）のほとりに位置する壮麗な都市である。

け、帝国の他のあらゆる地域に住む者たちに対しても、大いなる炎のように激しい怒りを燃やした。ある日、彼は志を同じくする者たち、いわば同志たち、そして彼の支配下にあったすべての高官たちを集め、大声でこう言った。

「もしあなたがたのうち、不敬虔な信仰に身を委ね、キリスト教の神に仕え、我らが称賛すべき神々に相応しい熱意をもって仕えることを望まず、それらを崇拝し、祈りを捧げることを望まない者がいるならば、 その者は直ちに皆の前で腰帯を解き[2259] 、我らの宮廷およびこの都市から去るがよい。なぜなら、この都市の住民は先祖の時代から、唯一の十字架にかけられた神ではなく、諸神に仕えることに慣れているからである。

この言葉から、この不法な王がキリスト教の信仰をいかに軽蔑していたかがはっきりと見て取れた。 そのため、キリストを信じる者たちは皆、恐怖と戦慄に襲われ、そのうちの何人かは心から王に神々に仕えることを誓ったが、他の者たちはただ拷問を免れるためだけにそうし、神への真の愛を持つ者たちは、自らの肉体を顧みず、拷問者の言葉に対して、帯を解いてその場を去ることで応えた。 その時、王の重臣の一人であり、英知に富み、精神の強いウルパシアンは、神への熱意に燃え上がり、不義の王のもとへ歩み寄り、皆の目の前で王の面前で自分のマントと帯を脱ぎ捨てて、こう言った。

「王よ、今日より私は、天の、不死の王、主イエス・キリスト、私の神の戦士となりました。ですから、あなたが私に与えてくださった名誉と栄光の印を取り戻してください。この名誉と栄光は一時的なものであり、私はもはやそれらを必要としません。」

ウルパシアヌスのこの言葉は、マクシミアヌスにとってあまりにも予想外であったため、それを聞いた彼は顔色を変え、長い間一言も発することができなかった。その後、顔をこすり、聖なる殉教者を怒りに満ちた眼差しで見据えると、野獣のように唸り声を上げながら言った。

「今すぐこの卑しい者を吊るし、牛の腱でその体を打ちのめせ。」

王の命令は直ちに実行され、聖なる殉教者が長く容赦ない拷問にさらされている間、彼は天を仰ぎ見て祈りを捧げ、何の痛みも感じていなかった。その後、拷問担当者は聖人を木から降ろすよう命じ、立ち会っていた者たちにこう言った。

「私が彼をどのような死に追いやるか思いつくまで、この裏切り者を薄暗い牢獄に閉じ込めよ。」

牢獄の中で、聖なる殉教者は喜び、楽しみながら、主に向かって祈りを捧げていた。その間、マクシミアヌスは、 鉄の檻のような、ある拷問器具を持ち込み、準備するよう命じ、聖人を牢獄から連れ出し、その檻に入れ、檻の頂点に吊るさせた。 王のこの命令が実行され、聖ウルパシアンがすでに吊り下げられていたとき、残酷な拷問官は松明に火をつけ、四方からその体を焼きつけるよう命じた。そして、それが行われている間、 檻の中に吊るされたキリストの聖殉教者は祈りに没頭していたが、拷問者たちは、彼の全身が滴り落ちて地面に落ち、蝋のように溶けて大地の塵と混ざり合い、その骨が灰となって脱穀場の塵のようになるまで、松明で彼を焼き続けた。 祈りに没頭していた聖なる殉教者がこのように焼かれていく間、空気は平和の香りに満ち、ついに、彼の聖なる魂は、一部の信者たちが目撃したように、輝く星の姿となって、神のもとへ昇っていった[2260] 。 その時、凶暴で冷酷な王は、聖なる殉教者に対する怒りをなおも燃やし続け、その遺体が滴り落ち、骨の灰が散らばっていた土を丹念に集め、自らの目の前で海に投げ捨てるよう命じた。これらの一連の出来事は、ニコメディアの街で起こった。

[2259] ローマ帝国において、帯は軍指揮官を識別するための特別な印として用いられていた。

[2260] 聖殉教者ウルパシアンは、295年頃に亡くなった。

聖ケサリウスの記念日

記念日：3月9日

聖ケサリウスは、聖グリゴリオス・テオロゴスの兄弟であり、コンスタンティウス皇帝の友人であり、コンスタンティノープル宮廷の首席医師であった。368年、ニカイアで地震が起きた際、彼は瓦礫の下から奇跡的に救出された。　この出来事に深く衝撃を受けた聖ケサリウスは、聖グリゴリオスの説得により、世俗を離れ、神への奉仕に身を捧げた。しかし、洗礼を受けた直後に病に倒れ、この世を去った。

3月23日

3月10日（旧暦）

聖殉教者コドラトスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教

3月10日の記念日

聖殉教者コドラトは、次のような境遇の中で生まれ、育った。不信心な王や君主たちによるキリスト教徒への激しい迫害のさなか、キリストの証人たちは恐ろしい拷問と非業の死を強いられていた。そのため、多くの信者たちは耐え難い苦痛を恐れ、都市や住居、財産を捨てて　逃亡する彼らは、キリストへの聖なる信仰を傷つけられることなく守るために、山や荒野に身を隠し、不敬虔な偶像崇拝者たちと共に生きるよりは、むしろ獣たちと共に生きることを選んだのである。

この困難な時代、ルフィナという名の敬虔な女性が、拷問への恐怖からコリント[2261]　を脱出し、荒野へと逃げ込み、そこにある人跡未踏の地に身を隠していた。街からの逃亡中、ルフィナは身ごもっており、産期を迎えると荒野で男児を出産したが、その後わずか数日しか生きられず、息を引き取った。　あらゆる肉に糧を与え、御手を広げ、すべての生き物を満たしてくださる神（詩篇103:27–28）は、孤児となったその赤ん坊を見捨てず、彼にとっての父であり母であり、養育者であり養い手となられた。　至高の神の御命により、雲が高みから降りてきて、大地に広がり、赤ん坊の口元に甘い露を注ぎました。こうして雲は、まるで乳や蜜のように赤ん坊を養い続け、やがて成長して、自ら砂漠の穀物を食べるようになるまで、その養いを与え続けたのです。　聖ヨハネ・バプティストと同様に、その幼子は神に守られ、聖霊によって神の知識へと導かれ、教えを授けられながら（ルカ1:80）、荒野で暮らしていた。　すでに青年期になると、彼は信仰深い人々によって発見され、彼らは彼を町へ連れて行き、そこで彼は書物の読み方を学び、医術を習得した。しかし、彼は知識によって病気を治すというよりは、天から与えられた恵みによって病を癒やしていたのである。　幼少の頃から荒野の静寂に慣れ親しんでいた彼は、特に人々の喧騒から遠ざかるよう努めた。孤独を愛し、生涯の大部分を山や荒野で過ごし、神への黙想に没頭した。　しかし、生活必需品を調達するために町を訪れると、彼はすべての人々に計り知れない恵みを示し、肉体の病を癒やし、神の言葉によって魂の病を治した。だが、彼は町に長く留まることはなく、すぐに彼にとって心地よい荒野の孤独へと急いで戻り、そこで老境を迎えた。　ここ、荒野には、キリストにあって彼を愛し、その聖なる御顔を拝む喜びを味わい、神に霊感を受けた彼の語りかけから教えを受けたいと願う者たちが訪ねてきた。キプリアン、ディオニシウス、アネクタス、パウロ、クリスケントといった者たちであり、彼らは彼と共にキリストのために殉教した。

[2261] コリントは、使徒パウロによって福音が伝えられたアカイアの主要都市である。

彼らの殉教は次のようにして起こった。不敬虔なローマ皇帝デキウス[2262] の命令により、キリスト教徒を拷問し殺害するため、イゲモン・イアソンがコリントにやって来た。　彼はキリスト教徒を捕らえ、牢獄に投獄した。その際、聖コドラトも、彼の祝福された友人たちであるキプリアン、ディオニシウス、アネクタス、パウロ、クリスケントと共に捕らえられ、すでにそこに鎖でつながれて囚われていた多くのキリスト教徒たちと同じ牢獄に投じられた。　しばらくして、イアソンは不義の法廷に腰を下ろし、キリスト教徒を牢獄から連れ出し、尋問のために自分の前に連れてくるよう命じた。　その中では、聖コドラトが最年長であった。彼はまるで軍司令官のように、キリストの選り抜かれた軍勢の先頭に立ち、皆を代表して拷問者に恐れることなく答えることを望んでいた。拷問者は聖人にこう語りかけた。

「コドラトよ！　一体何があなたをこれほど狂わせ、自ら進んで激しい拷問に身を委ねようとするのか？　そして、何を期待して、故郷や友人を捨て、恐れもせず、束縛と牢獄を選ぶのか？　なぜ王の法律に従わず、神々にひれ伏して、我々と共にこの世の喜びを享受しようとしないのか？」

「健全な理性を持ちながら、この世の生活を捨てようとする者は、誰一人としていない」と聖コドラトは答えた。　しかし、この人生は神から授かったものである以上、与えられたものよりも、それを授けてくださった方をより深く愛し、偉大なる恩人への感謝を捧げ、神を賛美し、徳ある生活を送り、私たちの苦しみを通じて至る所で神の栄光を広めることが必要です。　この儚い人生を、それを失うことを恐れて、唯一の神にふさわしい栄光を偶像に捧げるほどに愛してはならない！　なぜなら、初めから御自身の愛という永遠の賜物で私たちを豊かにしてくださった方以外に、真に完全な神として誰を崇めることができるだろうか？　そして、これらの偉大な賜物の中で、キリスト・救い主ご自身以外、誰をそのお方として知ることができるだろうか？　また、私たちのために苦しみと死を耐え忍ばれたイエス以外、誰を真に「救い主」と呼ぶことができるでしょうか。そして、徳ある者でありたいと願う私たちには、何よりもまず、真の信仰と敬虔さのために苦難に耐え、決してそれらから離れることなく、堅く立ち続けるべきです。　神の秘跡を真に熱心に守る者たちを惑わし、堕落させようとする者たちの意図は悪であり、彼らの祈りは罪深いものです。誰もが最善のものを選ぶ必要があります。単に徳の装いだけをしている人々に安易に追随しないよう注意すべきであり、　むしろ、彼らの行いそのものに深く目を向けるべきである――それらが邪悪ではないか、あるいは滅びへの大きな恐怖をもたらすものではないか。我々は先祖の戒めを履行し、より良いものへと向かっていることを知れ。それゆえ、我々に敵対する行為によって、我々が自らの道から逸れ、キリストを見捨てるよう説得しようと努めるな。　私たちにとって最良の助言者は神の真理であり、敬虔の法則には大きな説得力がある。それらは互いに調和し、私たちを神と結びつける。さらに、自然の普遍的な法則によれば、すべての者は死ななければならないという事実にも留意すべきである。この法則から逃れることは誰にもできない。　死の刻が訪れると、人間のすべての不義な行いや思いは滅び、つかの間の栄光は塵と化します。それに対し、善き生活から生まれる行いは、それを実践する人々に、死を超えて続く永遠の栄光をもたらします。　それゆえ、私たちも、キリストのために勇敢に苦難に耐えるという決意を固く守り、私たちに完全に倣おうとする者たちのために模範を残そう。なぜなら、正しく考える者や信仰を持つ者たちは、より良い生き方の聖なる模範を得て、それに倣い、それによって完全さへと至ることばかりを願っているからである。

この言葉を聞いて、イアソンは聖人にこう言った。

「コドラトよ！　もしあなたが、幼い頃からその恵みを享受してきたあの神を崇めているのなら、感謝を示すことは正しい行いだ。しかし、人間であるキリストについて説教するにあたり、神の性質を貶めることのないよう気をつけなさい。」

[2262] デキウス皇帝は249年から251年にかけてローマ帝国を統治した。彼はキリスト教徒に対する最も残酷な迫害者の一人であった。

聖コドラトはイゲモンにこう答えた。

「もしあなたが、怒りを抑え、激しさを柔和さに変えて、私の話を聞いてくださるなら、これほど偉大な事柄について語ることは容易ではなく、私自身もあまり得意ではありませんが、それでも何かをお伝えしましょう。」

「それでは、キリストに関するあなたの教えを、できるだけ分かりやすく説明してください」とイゲモンは提案した。

聖コドラトはこれに対し、次のように答えた。

「神は御自身の御意志によって世界の始まりを定め、御言葉によって世界を創造し、聖霊の力によってそれを確立されました。　世界の存在を御心として定められたのは父であり、それを創造されたのは御言葉である御子であり、それを確固たるものとしたのは聖霊である。創造主が特定の目的のために定めたこの美しい世界が創造されたとき、創造主は、誰かが御自身が創造された恵みを享受し、感謝の念をもって御名を賛美することを望まれた。　それゆえ、神は人間という種族を創造し、目に見えるすべてのものを彼らに委ねられた。最初の人間に命の息を吹き込み、神は彼を、言葉では言い表せないほどの至福に満ちた場所である楽園へと導かれた。人間は、自分のために造られた助け手と共に、この極めて美しい世界の多様さを目の当たりにして喜び、神から楽園の園を享受する権能を授かった。　私たちの先祖たちは、神によってどれほど偉大な使命を帯びて楽園に置かれたかを深く考え、創造主であり恩人である神にふさわしく感謝すべきだと決意し、神が彼らに定めた「ある一本の木の実を食べてはならない」という戒めを守りながら、徳のある生活を送り始めた。　しかし、狡猾な誘惑者である悪魔は、怒りに駆られ、口にはお世辞を、心には悪意を秘め、先祖たちにその悪意の毒をすべて注ぎ込み、彼らを楽園の生活から引き離そうとした。彼らの名誉を傷つけ、神の戒めを破りたいという激しい欲望を植え付け、しかも彼らの自発的な意思によって、悪魔の狡猾な助言に従わせたのである。　その結果、神と共に楽園に暮らしていた彼らは、神の恵みから離れ、楽園を追放され、その恵みを失うこととなった。この時から、かつては神の栄光に与っていた者たちは、あたかも罪の絆に縛られたかのように、空しい欲望に囚われて苦難の道を歩み始めた。　しかし、神はご自身の被造物に憐れみを示し、人間の弱さを慈しみの眼差しで見守られた。神は、ご自身が取り込まれた肉によって神性を隠し、私たちのような罪深く滅びゆく者たちのところへ来られ、敵の束縛から私たちを解放し、死の支配下に置かれた者たちを自由へと導き出し、滅びから救い出そうと御心になさった。　それゆえ、神は、*世の終わりの時*（ガラテヤ4:4）に、聖母マリア――処女――の清き胎内に御言葉を宿らせ、受肉によって完全な人間となられることをお選びになった。そして、聖霊によって身ごもった清き処女は、肉なる神を産み出した。　こうして、私たちがキリストと呼ぶ神は、まさに人間の目には肉体の姿として見えるようになった。そして、神は、真の神として、まことに処女から完全な人間として現れ、敵の力に立ち向かい、御自身の天の御国の境界を広げられた。　御方は死の法則を打ち砕き、神聖な力によってその束縛を断ち切り、地獄を荒廃させ、そこから先祖たちと、彼らから生まれた多くの人々を救い出し、すべての民族と国々を滅びから救い出した最初の方として、「救い主」と称された。御自身の慈悲の宝を明らかにし、御方はそれをすべての人々の共有のものとすることを望まれた。　すべての人を苦しみをもたらす誘惑から解放し、御自身の嗣業を、自由であり、滅びから無傷のまま守っておられます。御方にとって秘密となるものは何一つありません。私たちの誕生の始まりも、人生の期間も、死による終わりも、その他いかなる未知のこともなく、父の定めによって定められたすべてのことは、御父の御心を実行される御子にとって知られ、明らかです。　その方が、まさに私たちが宣べ伝えるキリストである。その方は、人類の救いを心に留められた方である。常に、そして至る所に存在されるその方は、私たちに尽きることのない御慈愛の富を授け、御自身に仕える者たちのそばを離れることなく、彼らを助けてくださる。

イゲモンは、聖コドラトの言葉に驚嘆しつつも、明らかにされた真理を信じようとはせず、こう言った。

「コドラトよ、君は高尚な事柄について嘘を語っているように思える。なぜなら、君は神に純粋に人間的な性質を持たせ、処女の胎内に神が収まることができたと主張しているからだ。その処女は、キリストを胎内に宿し、産み落としたのだ。」　つまり、あなたは、ある神が人間の体をまとって地上に現れていた一方で、もう一人の真の神は別の場所にいたと主張しているわけだ。

聖コドラトは次のように答えた。

「不敬虔な者たちは、敬虔の奥義を探求すべきではない。なぜなら、その偉大な知識を得ることは誰にでも容易に与えられるものではなく、また我々は、不信仰者たちがその奥義に踏み込むことを許していないからである。　神の御子は、自ら進んで身を低くし、しもべの姿をとられ、神でありながら、私たちを悪魔の奴隷状態から 救い出すために、人となられることをお許しになった。 あなたは、不信仰と不敬虔に満ちた人間として、これを理解することはできない。しかし、知っておきなさい。あなたは、狡猾な策略によっても、激しい脅しによっても、私たちをキリストから引き離すことはできないのだ。

そこで、イゲモンは、キリストの忠実なしもべを裸にし、容赦なく棒で打つよう命じた。そして、無慈悲な処刑人たちは、それを残酷に実行した。しかし、聖なる殉教者は勇敢に殴打に耐え、その最中に拷問者にこう言った。

「総督よ、力によって強要されることはすべて自由の敵であり、人を説得するには適さないことを、あなたは知らないのですか？　そのような方法で説得する者は暴力を振るう者であることを自ら示しているが、助言し諭す者は柔和で人愛に満ちている。それゆえ、あなたもまた、拷問によって私たちを偶像崇拝へと導こうとしているが、暴力によって私たちをあなたの不敬虔へと引き寄せ、恐怖のゆえに私たちが敬虔さを捨て去ることを期待してはならない。　キリストへの愛に満たされた私たちは、あなたが考案しうるお世辞めいた甘言にも、苦痛にも目を向けません。あらゆる苦しみや病を、キリストは報いの希望をもって和らげ、敵に従わないよう私たちを強め、苦難の試練において私たちを無敵で不屈のものにしてくださいます。

これらの言葉にさらに激怒した拷問官は、聖人を逆さ吊りにし、鉄の爪でその体を削り、足元に火を焚いて殉教者を焼くよう命じた。しかし、聖人はすべてを勇敢に耐え抜き、揺るぎない姿勢を貫いた。

その後、イゲモンは聖キプリアンに諂うような言葉をかけ、自分と意見が一致するよう説得しようと試みた。しかし、聖キプリアンは、まだ若かったにもかかわらず、恐れを知らずに拷問に備えていた。一方、聖コドラトは、彼や、共に拷問に備え、すでに衣服を脱ぎ始めていた他の者たちにこう語った。

――わが友よ、同志たちよ！主があなたがたにどれほど多くの恵みを備えておられるか、よく考えてみてください。敬虔さには名誉が、殉教には栄光が与えられます。とりわけ、まもなく天から助けを授けてくださるイエス・キリストの恵みにふさわしい者となることを、決して忘れてはなりません。　さあ、今こそ私たちは、キリストなる神への揺るぎない信仰を示さねばなりません。今こそ、偉業を成し遂げる時が来ました。ですから、ためらうことなく愛の掟を果たしなさい――あなたがたが愛する方のために、自らの魂を捧げるのです。　あなたがたは、キリストのために苦難の業に与ることを望むすべての人々の模範となるべきです。あなたがたの揺るぎない忍耐をもって、あなた方を見つめるすべての人々を驚かせなさい。今こそ、善人と悪人の真の違いが明らかになるのです。今こそ、信仰における不和が生じないよう、敬虔さを守ることに特に心を配らなければならない。一つの信仰と一つの告白に固く立ちなさい。まもなく、あなたがたは最後の審判において神の御前に立つことになるからだ。その生涯を終え、まもなくキリストのもとへ移る者として、徳の道から逸れてはならない。　善き神を善き心で告白しなさい。まもなく老いることのない命へと移ることを志して、若さの輝きを惜しむな。終わりが目前に迫っていること（マタイ24:33）を心に留め、若いうちは

体が丈夫であるゆえに、キリスト・神のために苦難に耐えることがより容易であることを考えなさい。　それゆえ、勇敢に拷問に身を委ね、気高く耐え忍びなさい。敵に打ち勝てば、主から栄光を受け、天において聖なる殉教者たちの列に加えられるであろう。

聖コドラトが仲間たちに向けて語ったこの言葉は、拷問官を激怒させた。彼は直ちに、聖キプリアヌスを、コドラトと同様に裸にされ、吊るされた状態で、鞭打ち、削り、火あぶりにするよう命じた。　続いて、彼はディオニシオス、アネクタス、パウロ、そして最後にクリスケントにも同じ拷問を加えた。彼らに恥をかかされ、打ち負かされた拷問官は、まず彼らを野獣に引き裂かせる刑に処した。　しかし、獣たちが聖なる殉教者たちに手を出さなかったため、彼は彼らを剣で斬首する刑に処し、まず足を引きずられて街中を引き回すよう命じた。それが行われている間、数え切れないほどの群衆――とりわけ子供たちが、聖人たちに棒や石を投げつけ、彼らが処刑場として定められた場所まで街の外へ引きずり出されるまで、その攻撃を続けた。　そこで聖人たちは、わずかな時間を乞い、主に向かって熱心に祈りを捧げた後、その清らかな頭を剣の下に差し出し、3月の10日に斬首された。　聖なる殉教者たちの尊い血で大地が染まったその場所に、コリントの人々に聖人たちの苦難を思い起こさせるため、清らかな泉が現れた。コドラトス、キプリアン、ディオニシオス、アネクタス、パウロス、クリスケントスの6人の殉教者が殺害された後、捕らえられた他のキリスト教徒たちも、それぞれ異なる方法で拷問を受け、殺害された。　別のディオニシオスはナイフで刺し殺され、ヴィクトリン、ヴィクトル、ニキフォロス（この時点で、イアソンの後任としてテルティオスがイゲモンに就任していた）は石臼に入れられ、その中で粉砕された。クラウディウスは手足を切断された後に息を引き取った。　ディオドロスは自ら、彼のために用意された火刑台に飛び込み、そこをまるで明るい宮殿のようにして、安らかに　眠りについた。セラピオンは首を刎ねられ、パピウスは海に投げ込まれた。また、テルティウスの後任となったイゲモン・ヴェヌストから恐ろしく数多くの拷問を受けたレオニドも、海に沈められた。

キリストのために苦難に身を投じることを決意したのは、聖コドラトに倣い、その教えを心に留めていた聖なる女性たち――ハリッサ、ヌネヒア、ヴァシリッサ、ニカ、ガリ、ガリーナ、テオドラ、そして他にも多くの女性たち、さらには男性たちも同様であった。　その中には、剣で斬られて主のもとへ旅立った者もいれば、水に沈められ、あるいは他の拷問によって殺された者もいた。彼らは皆、指導者であり師である聖コドラトと共に殉教者の列に加えられ、父と聖霊と共に永遠に栄光あるキリスト・神の右の手から勝利の冠を受け取った。 アーメン。

ニコミディアの聖殉教者コドラト、および彼と共に殉教した聖殉教者サトリン、ルフィン、その他諸聖人の殉教

記念日：3月10日

不敬虔なローマ皇帝デキウス[2263]　とその後継者ヴァレリアヌス[2264]　の時代（聖コドラト・コリントスもその随行者たちと共に殉教した時期）、各地の都市や村々からキリスト教徒たちが捕らえられ、ビフィニア[2265] の都市ニコミディアへ連行され、そこで牢獄に閉じ込められた。 当時、ニコミデ

[2263] デキウス皇帝は249年から251年までローマ帝国を統治した。彼はキリスト教徒に対する最も残酷な迫害者の一人であった。

[2264] ヴァレリアヌスは253年から259年まで統治した。

[2265] ビフィニアは小アジア北西部の属州である。黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に位置する。この地は古くから知られており、その名はフラキアから移住してきたビフィニ族に由来する。ビフィニアは風光明媚で肥沃であり、家畜も豊富であった。　ビフィニアは二つの州に分かれていた。一方の州の主要都市はブルッサ（古代には

ィア市内に住むキリスト教徒の間には大きな恐怖が広がっていた。特に、すでにケサレア[2266] に滞在していたデキウス皇帝自身が、その地域に近づいていたことがその原因であった。　そのため、多くのキリスト教徒は迫害者たちの手から身を隠して山や荒野へ逃げたが、他の人々は勇敢にも自宅にとどまり、何らかの殉教によって主を賛美できる時を待ち望んでいた。

そうした人々の一人が、今回私たちが語る聖コドラトであった。彼は美貌に恵まれ、高貴な家柄の出身で、裕福かつ敬虔であり、雄弁な才能を持っていた。牢屋の看守や兵士たちに金銭を配ることで、彼は牢屋へ自由に出入りすることができた。　そこで聖コドラトは、鎖につながれた同信の兄弟たちに奉仕し、一人ひとりに必要なものを届けていた。彼は懇願しながら、彼らに勇気を持ち、キリスト・神への愛ゆえに課せられる苦しみには目を向けず、天の御国で彼らに永遠の報いを備えておられる神に信頼するよう諭した。

裁きの日が訪れた。王の命によりニコミディアにやって来たプロコンスル、[2267] ペレニウスは、民衆の面前で裁判の席に着き、すべての囚人を尋問のために連れてくるよう命じた。囚人たちが連れて来られると、刑務所長（コメンタリシス）はプロコンスルにこう言った。

「閣下！　あなたの権威による命令により、今日まで牢獄に収容されていた無法なキリスト教徒の群れが、今や裁判の場にあなたの御前に立っています！」すると、プロコンスルは神の僕たちに言った。

「お前たちは一人ひとり、自分の名前、身分、家系、出身地を述べよ。」

キリスト教徒たちの尋問の光景を見に、至福のコドラトもやって来た。彼は、キリスト教徒たちの一部が気力を失い、恐怖のあまり青ざめているのを見て、拷問という考えそのものに耐えられず、誰かがキリストを否認してしまうのではないかと恐れた。そこで、聖コドラトは皆の後ろに立ち、大きな声でこう言った。

「我らはキリスト者と呼ばれる。身分と立場において、我らは目に見えぬ神、主イエス・キリストの僕であり、我らの都と祖国は、神が御自身を信頼する者たちを住まわせられる天である。これを聞いているか、プロコンスルよ？」

プロコンスルは、聖コドラトの大胆さにほとんど恐怖を覚えるほど驚き、家来たちに言った。

プルシアダ）、もう一方の州はニコメディアであった。紀元前6世紀半ばまで、ビフィニア人は自由で自立しており、熟練した船乗りとして知られていた。546年に彼らはペルシアの支配下に入ったが、それは長くは続かず、327年からは　ビフィニアは再び独立国家となった。紀元前75年、ニコミド3世王は臨終の際、自国をローマ人に遺贈し、ローマ人はこれを独自のプロコンスルによって統治される独立した属州として、自らの帝国に編入した。　ビフィニアにおけるキリスト教は、使徒の時代（ペトロの手紙一　1:1）にすでに現れており、ビフィニアを統治した小プリニウスやトラヤヌス皇帝（紀元98–117年）の時代には、都市だけでなく村や集落にも非常に多くのキリスト教徒がいた。　ディオクレティアヌス帝（284–305年）の治世下、ビフィニアではキリスト教徒に対する凄惨な迫害が行われた。4世紀から5世紀にかけて、ビフィニアは教会的な観点から特に注目すべき地域であった。そこでは、様々な異端をめぐって多くの教会公会議が開かれた。　セルジューク朝の支配下、次いでサラセン人の支配下と相次いでいたビフィニアは、1332年にトルコ人の支配下に入り、現在もその支配下にある。 同地域はカダヴェンキアフトとカスタムニの2つの州（ヴィラエト）に属し、人口は70万人に上る。教会行政のトップにはニコミディアの大司教が立ち、その下にはコンスタンティノープル公会議によって任命された12人の司教が配下にある。

[2266] ケサリア――地中海の沿岸に位置していた。使徒パウロは旅の途中でこの町を何度か訪れ（使徒行伝 9:29–30；使徒行伝 18:28；使徒行伝 21:8）、ここで2年間囚人として過ごした（使徒行伝 23:33；　使徒行伝 24:27；使徒行伝 26:4以下）。この町には百人隊長コルネリウスが住んでおり、使徒ペテロによってキリストへと導かれた（使徒行伝 10:1；使徒行伝 10以下）。また、使徒フィリポもこの地に住んでいた（使徒行伝 21:8）。　また、この地でヘロデ・アグリッパは、天使に打たれ、虫に食われて亡くなった。当初、ケサレアはストロトンの町、あるいはストロトンの塔と呼ばれていた。　この都市はヘロデ大王によって再建され、皇帝（ラテン語の「カエサル」は「切り刻まれた、切り裂かれた」の意）アウグストゥスに敬意を表して「ケサリア」と名付けられた。

[2267] アンフィパトはギリシャ語で「プロコンスル」を意味する。これはローマの公職（州、すなわち地域の統治者）の名称である。

「この愚か者を捕らえ、私のそばまで連れて来い。」

プロコンスルの言葉を聞いた聖コドラトは、群衆をかき分けて自ら急いで近づき、皆の視線が彼に注がれる中、プロコンスルの目の前に立った。十字の印を切ると、聖コドラトはプロコンスルにこう言った。

「私は、強制されたのではなく、自らの意志であなたのところへやって来ました。兄弟たちのために約束を守り、悪魔に立ち向かうためです。さあ、お望みのことを速やかに実行し、私たちの勇気を試して、私たちがキリストの無敵の戦士であることを確かめてください！」

「狂人め！」とプロコンスルは言った。「まず、お前の名前と身元を告げよ。」

「すでに申し上げた通り」と聖人は答えた。「私はキリスト者であり、私の兄弟たちはキリストの僕である。私たちの名と高貴さは、キリストの僕と呼ばれること、そしてキリストの僕であることにこそあるのだ。」

「よく聞いてくれ、友よ」と総督は続けた。「私は皇帝に君のことを報告する。そうすれば、君が我々の神々に犠牲を捧げるなら、皇帝は君を軍司令官に任命してくれるだろう。」

「プロコンスルよ」と聖人は答えた。「多くの神々がいると主張して、誤った考えを抱いてはならない。*『しかし、私たちには、すべてのものの源である唯一の神、父がおられる』*（Iコリント8:6）。

「神々は数多く存在する」とプロコンスルは続けた。「しかし、ともあれ、王は現在、十二の神々（[2268] ）にのみ犠牲を捧げるよう命じておられる。君もまた、それらに礼拝を捧げなければならないのだ。」

「多くの支配者があってはならない」と、聖コドラトは力強い声で叫んだ。「唯一の主、唯一の王であり神、私たちの主イエス・キリストがおられるのだ！」

「お前は聞いたことがないのか」と、プロコンスルは続けた。「ホメロス[2269] がポセイドン[2270]（ネプチューン）についてこう語っていることを：『神々の父は雲を呼び寄せ、風を巻き起こし、空を覆い、恐ろしい轟音を響かせた。それは、ポセイドンが地を奪い去ろうと立ち上がったからである』などといったことだ。」 さて、ポセイドンの威力を聞いただろうか?

「ホメロスや彼に似た詩人たちが、あなた方の神々について語っていることは、真実なのでしょうか、それともそうではないのでしょうか？」と、至福のコドラトは尋ねた。

「彼らは真実を語っている」と、プロコンスルは答えた。

[2268] 古代ギリシャ人やローマ人の考えによれば、最高神あるいは主要な神々は、大地と空の間の大気圏に宿り、その住まいはギリシャのオリンポス山の頂上にある壮麗な宮殿にあった。 そのため、この12柱の神々は「オリンポスの神々」とも呼ばれています。その神々は、ゼウス（ユピテル）、ヘラ（ユノーナ）、ポセイドン（ネプチューン）、デメテル（ケレラ）、アポロン。 （アポロ）、アルテミス（ディアナ）、ヘファイストス（ヴルカン）、パッラダ・アテナ（ミネルヴァ）、アレス（マルス）、アフロディテ（ヴィーナス）、ヘルメス（メルクリウス）、そしてヴェスティア（ヴェスタ）である。

[2269] 紀元前10世紀末または9世紀初頭に生きた、古代の著名な詩人。古代の人々はホメロスを盲目の老人として描いていた。そのため、ホメロスという名前そのものを、「目が見えない」という言葉に由来すると考える者もいた。 彼には叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』が帰せられている。前者はトロイア戦争の第10年（紀元前1184年）に51日間にわたって起こった出来事、「アキレスの怒り」 （戦争の英雄）とその余波が描かれている。一方、後者の『オデュッセイア』は、トロイアの陥落以前に、戦争の英雄の一人であり、イータカ島（地中海）の王であるオデュッセウスの放浪の旅における様々なエピソードを描いており、40日間という短い期間を扱っている。

[2270] ポセイドンはクロノスとレーアの息子であり、ゼウスの兄弟で、ゼウスとはくじ引きによって支配権を分け合った。ポセイドンには海が割り当てられ、これと不可分であった風に対する主権、そして地震を引き起こす力も与えられたため、ポセイドンは「大地を揺るがす者」と呼ばれた。ポセイドンは、大きな髭を生やし、手に三叉の矛を持った不機嫌そうな老人の姿で描かれた。

「もし彼らが真実を語っているのなら」と聖人は続けた。「彼らは、あなた方の神々が姦淫を犯し、飽くことのない恥知らずな好色者であり、自然の理に反する忌まわしい行いを犯していたと語っているのではないのか？」　あなたがたがそのような神々を崇拝していること、そしてその神々の悪行を理由に、その罪を暴かれた人々を裁いていることについて、私はまことに恥ずかしく思います！　つまり、あなたがたは恥ずべき行いを犯した者を裁きながら、同時に、それよりもはるかに甚だしい不法行為を犯している者たちを神として崇めているのです。　むしろ、あなたがたは、これほど数多く、これほど甚大な暴挙を犯した神々を非難し、罰すべきではなかったのか？　あなたがたは、法を犯す人間を容赦しない一方で、不法な行いをした神々を崇め、称賛している。そのようなあなたがたの神々は、正義に照らせば神などではなく、狂った死者の放蕩者たちである！

この聖人の言葉に対し、プロコンスルはこう言った。

「お前が神々を非難し始めた以上、私は王の怒りを買うのではないかと恐れている。私が長きにわたり忍耐し、お前の口から神々を冒涜する言葉を許してきたからだ。それゆえ、今すぐ考えを改めよ。さもないと、直ちに拷問者たちの手に捕らえられてしまうだろう！」

「私の決意は」と聖コドラトは続けた。「私から奪うことのできる者は誰もいない。お前も、お前の王も、さらにはあなた方の父であるサタンでさえもだ。」

激怒したプロコンスルは、聖人の衣服を脱がせ、裸のまま地面に寝かせ、「お前の名を言え」と言いながら、皮の鞭で打つよう命じた。　しかし、聖人は黙り込み、一言も答えなかった。そこで総督は、周囲の人々にその聖なる殉教者について尋ね始めた。彼は一体誰なのか、名前は何かと。聖人のことを知る者たちは総督に、その殉教者は名門の出身であり、名はコドラトであると答えた。すると総督は処刑人たちに言った。

「彼を赦し、解放せよ！」

こうして聖人が苦しみから解放され、服を着せられると、拷問官は彼を自分のそばに呼び寄せ、こう尋ねた。

「お前は、自分の高貴な家柄を我々に告げずに、自分にも我々にも何をしたのだ？　我々は、お前の高貴な出自を知らなかったがゆえに、お前に不名誉をもたらしてしまった。そしてお前自身も、自分自身と自分の家系に非難を招いてしまった。なぜ、自分の高貴な家柄を何とも思わずに、無謀なキリスト教の信仰に身を投じたのだ？」

「*不義の天幕に住むよりは、神の家の敷居に立つほうがましだ*」（詩編83:11）と、聖人は答えた。

「私に服従せよ」と、拷問を行うプロコンスルは続けた。「そして神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、悪人として死ぬことは免れるだろう！」　王とすべての顧問たちが、この地上に一人のキリスト教徒も生き残らせないよう決定し、多くの善良で立派な人々をキリスト教の迷いから解放したという命令を、お前は聞いたことがないのか？

「*不義の者の助言に従わず、罪人の道に立ち止まらず、悪を行う者の集いに座しない人は、幸いである*」（詩編1:1）、この虚しい世の誘惑に惑わされることなく。しかし、誘惑に負け、あなた方に従った者たちは、風によって地の上から吹き飛ばされる塵のように滅びる（詩編1:4）――そして、すでに滅びてしまったのだ！

聖コドラトを誘惑する際、総督は涙と嘆息を交えながら、彼を惑わすような言葉をかけ、最後にこう言った。

「コドラトよ、自ら死を選ぼうとするなら、この人間にとってかけがえのない光を失ってはならない。この甘美な人生を手放してはならない。」

そう言いながら、誘惑者はハンカチで顔を拭っていた。

「貪欲な犬め！」と、聖なる殉教者はプロコンスルに答えた。「蛇のような狡猾さと偽りの涙で、私を惑わそうなどと思うな！　神の僕である私を、決して捕らえることはできない！」

ペレンニウス総督の傍らには、将軍マクシミアンがいた。彼は聖人にこう言った。

「不親切な男め！　私の最も誠実な主君であるプロコンスルは、お前を憐れんでいるというのに、お前は彼を侮辱している。」

聖人はこう答えた。

「もし彼が滅びるために生まれたのなら、自分自身と生まれた時を嘆けばよい。だが、お前はなぜ我々を責めるのか？　もしプロコンスルが裁きを行うのなら、彼の前で法廷で発言するお前とは一体何者なのか？　我々には一人の裁判官で十分だ。もしお前も我々を裁こうとするなら、我らの主イエス・キリストがお前を滅ぼしてくださるように！」

その後、刑務所長はプロコンスルにこう言った。

「閣下！　あなたの威光にかけて誓います。もし彼に生意気な言葉を許せば、彼はその後、独裁者たち自身に対しても侮辱や冒涜を口にすることになり、我々も少なからぬ危険にさらされるでしょう！」

「まことに、」と聖人は答えた。「聖書にはこう記されている。『なぜ、諸国民は騒ぎ立ち、諸部族はむなしいことを企むのか。　地の王たちは立ち上がり、君主たちは共に相談して、主とその油注がれた者（キリスト）に敵対する」（詩篇2:1–2）。今まさに、キリストは愚かな者たちによって非難され、キリストの忠実な僕たちである御自身の肢体によって苦しみを受けているのだ。

「この悪党の服を脱がせよ」と、プロコンスルは使用人たちに命じて言った。「最初よりも激しく打ち、彼が王の法律に従い、神々にひれ伏すようになるまで打ち続けよ！」

二度目の鞭打ちの最中、聖コドラトはこう語った。

「主イエス・キリストよ、あなたに栄光あれ。あなたは、あなたの聖なる御名のゆえに、罪深く、ふさわしくないあなたの僕である私に、苦しみを味わわせてくださり、あなたの愛する僕たちの仲間に加えさせてくださいました。」　あなたに感謝し、お願いいたします。あなたの聖霊で私を満たし、悟りを与え、変わらぬ信仰を守る力を授けてください。あなたの英知で私を照らし、不法な者たちに打ち負かされないようにしてください。私の主よ、私の助け手となってください！今こそあなたの助けが必要な時、今こそあなたの取り成しの時です！　あなたのしもべを通して、あなたの聖なる御名が栄光を受けるよう、私を強めてください！私をあなたの天の父のもとへ導き、御前に私を差し出し、「この者もあなたのしもべです」と言ってください。ああ、主イエス・キリストよ！私がこの試練を無事に成し遂げられるよう、助けてください！

聖人はこのように祈っていたが、その間、拷問を加えていた執行人たちは疲労のため五回も交代した――それほど長い間、聖人は拷問にさらされていたのである！　残酷な拷問により、この祝福された殉教者の背中は一肘分も腫れ上がり[2271]、血は川のように流れ、肉は骨から剥がれ落ちていた。

「さて、今となっては――」とプロコンスルが尋ねた。「コドラトよ、我らの神々を信じるか？」

– *「地の王たちは立ち上がり、君主たちは共に集まって、主とその油注がれた者に対して謀る」*（詩編2:2）。

「*彼らの偶像は銀や金、人の手による造り物だ*」と聖人は答えた。「*それらは口はあるが、語らない……それらを作った者たちや、それらに頼る者たちは、それらと同じようになるであろう*」（詩編113:12–13）。

「私たちに意味不明な言葉を投げかけて、お前は――」とプロコンスルは言った。「神々への冒涜を隠そうとしているのか？」

[2271] 肘から中指の先までの長さを「肘」と呼ぶ。聖書の「肘」は10～*12ヴェルシュカである。*

「目が見えなくなった狂人よ」と聖人は答えた。「あなたには、明るい真理が暗く映り、この世の惑わしの闇こそが、あなたにとっては光となっているのだ！」　さあ、聖なる先人たちの言葉をもって語る私の言葉に耳を傾けよ。私がお前の神々に犠牲を捧げることも、王やその顧問たちの命令に従うこともないことを、よく知っておけ。それゆえ、もし私を拷問したいというのなら、お前の意志を実行に移し、それによって一日も早く私を天の王の御前に送り出せ！

「神々にかけて誓う――」と拷問官は言った。「私はお前を容赦せず、驚くべき拷問と残酷な死によって、この呪われた者を滅ぼしてやる！」

日が沈む頃には、聖人は拷問から解放され、他のキリスト教徒たちと共に牢獄へと連行された。その際、プロコンスルは、殉教者の背中に小さな釘を敷き詰め、胸には巨大な石を載せ、足を足枷に嵌め[2272]、全身を重い鉄の鎖で縛るよう命じた。このような状態のまま、聖人は何日も放置された。彼は、人間が耐え抜いて生き延びることなど不可能なほど過酷な拷問を勇敢に耐え抜いた――それは、キリストの全能の御手が、御自身の神聖な威力を称えるために、この苦難に耐える者を強めていたからである。

長い時間が経過した後、プロコンスル・ペレンニウスはニカイアへ向かうことを決意し[2273]、聖コドラトスと共に、投獄されていたキリスト教徒たちを連れて行くよう命じた。　ニカイアで、プロコンスルは異教の神殿にて悪魔たちに生贄を捧げ、キリスト教徒たちもそこに連れてくるよう命じ、彼らにも同じことを強要しようとした。キリストの僕たちが悪魔の神殿に連行されると、聖コドラトは兵士たちに、まず自分だけを神殿の中へプロコンスルの元へ連れて行くよう懇願した。　キリストの力により、聖コドラトは激しい拷問を受けた後も健やかで無傷であり、キリスト教徒の行列の先頭に立って歩み、その顔は輝き、肉体的な力と強靭さとともに、精神的な勇気も示していた。聖コドラトが他の者より先に神殿に連れて行かれると、拷問者は驚愕した。　聖人が身体は健やかで、顔には喜びの表情を浮かべているのを見たプロコンスルは、恐怖に襲われた。

「神々に生贄を捧げよ！」とプロコンスルは命じた。

「私はイエス・キリストの僕です」と聖人は答えた。「私は自分自身をキリストに捧げます。天も地も創造しなかったあなたの神々は、滅びてしまえ！」

「キリストの律法ではなく、王の律法に従え」と、プロコンスルは続けた。

「私は天の王の法に従う」と聖人は答えた。「神を知らない者たちの狂った命令には従わない。とはいえ、聖書は、彼らが改心し、真理を理解できるよう、彼らのために祈るよう私たちに命じている。」

プロコンスルはこう答えた。

「もしあなたが王のために祈るのなら、その命令も果たさなければならない。なぜなら、あなた方の聖書にも『*カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい*』（マタイ22:21）と書かれているからだ。」

[2272] この名称は、犯罪者の逃走を防ぐために用いられた器具を指していた。その構造は以下の通りである。通常、太い丸太を用意し、くさびで真っ二つに割り、両方の半分に足を収めるための小さな窪みを二つ切り出した。　犯罪者の足をそのくぼみに差し込み、木を合わせ、両端に穴を開けてくさびでしっかりと打ち込み、改良型では両端を錠で施錠し、時には単に両端を縄で縛り上げることもあった。

[2273] ニカイアはアンティオキアの主要都市であり、そこで第1回および第7回全地公会議が開催された。第1回は325年、コンスタンティヌス大帝の治世下、アンティオキア大司教エウスタティオスの議長のもとで行われた；　この公会議はアリウス派を非難し、第8条までの「信仰告白」を制定し、復活祭の日程を定め、ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアの各司教の優位性を確立し、20の教会規則を公布した；　第7回全地公会議は787年、イリナ女帝の治世下、コンスタンティノープル総主教タラシオスの主宰により開催され、イコン反対派を非難し、22の規則によって教会の秩序を確立した。

「あなたの言う通りだ」と聖人は言った。「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返すべきである。私は、自分の財産について王の前に身代金を支払った際、王にふさわしいものをすでに捧げた。しかし、神に対しては、神にふさわしい信仰を最後まで全うする義務がまだ残っているのだ。」　この世の王は、キリスト教徒に対し、偶像に犠牲を捧げるか、さもなくば死ぬか、と命じた。そして我々は、我らの神であるキリストのために、ただ一度だけでなく、何度でも死ぬ覚悟があるのだ！

「知っているか」とプロコンスルは尋ねた。「どれほど多くのキリスト教徒が我々の神々に犠牲を捧げたか。果たして、お前は彼らよりはるかに優れているとでも思っているのか？」

聖コドラトはこう答えた。

「偶像の前にひざまずかなかった者として、私は、創造主である神から背いた者たち全員よりも、まことに遥かに優れている。さて、あなた方の神々に犠牲を捧げた者たちはどこにいるのか？　私には見当たらない！」

総督は、そうした者たちを召喚するよう命じた。その間、聖人は、それまで縛られていたため、縛りを解いてほしいと懇願し始めた。総督は、聖人が神々に礼拝しようとしているのだと思い込み、縛りを解くよう命じた。　しかし、聖人は素早く近づき、巨大な偶像の足をつかんで地面に倒し、粉々に砕いた。そして他の偶像にも襲いかかろうとしたが、兵士や祭司たちに制止された。そこでプロコンスルは激怒し、聖人を神殿の外壁に吊るし、鋭い鉄の刃で全身を削り取るよう命じた。　その間、キリスト教の信仰から背いた者たちが近づいてきたが、聖コドラトは拷問に耐えながら、彼らにこう語りかけた。

「呪われた者たちよ！　これほどの苦難に遭いながら、なぜこれほど急いで、主であるキリストを拒み、自ら進んで悪魔に身を委ねたのか？　死者の復活、神の裁き、そして地獄の深淵があることを信じていなかったのか？　消えることのない火と、眠ることのない虫について聞いたことがなかったのか？　生ける者と死せる者を裁かれる、我らの救い主イエス・キリストの再臨という、栄光に満ちた偉大な日に、あなたがたはどのような答えを返すつもりなのか。心の目を開いて、あなたがたが何から背を向けたのかを見よ。 一時的で取るに足らない人生のために、 、あなたは永遠の天の御国を捨ててしまいました。最も甘美で慈悲深い主を軽んじ、あなたは悪魔という不適格な奴隷の支配下に身を委ねてしまいました。悪魔は、誰かを支配下に置くと、その者を打ちのめし、殺してしまうのです。　私たちの主が来られる時、主は悪魔を破れない鎖で縛り、彼に身を委ねた者たちと共に、火の深淵に投げ込まれます。どうか、あなたがたが何をしたのかを理解してください！　束の間の苦しみをおそれたがゆえに、あなたがたは永遠の苦しみへと身を委ねてしまったのです。　あなたがたは、イエス・キリストの公正な裁きの座に立たされたとき、その未来を自らの目で目撃することになるでしょう。主は、一人ひとりの行いに応じて報いを与えられるのです。　聖なる福音書に記された主の御言葉を、あなたがたは聞いたことがないのか。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナ（火の穴）で滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきである」*（マタイ10:28）。[2274]

聖人がこの言葉を口にしたとき、堕落した者たちは涙ながらに叫び、大きな声でこう言った。

「神のしもべよ、私たちは苦しみをおそれ、言葉を持たない家畜のように誘惑に負けてしまいました。迷い出た羊のように、私たちは狼の餌食となり、引き裂かれてしまいました。私たちの罪に

[2274] ゲヘナとは、永遠の苦しみを受ける場所である。この名称は、エルサレム近郊のエンノムの谷を意味するヘブライ語に由来する。そこでは、モロクを崇めるために子供たちが生贄として焼かれていた（列王記下11:17；列王記下16:3–4）。 ヨシヤがこの恐ろしい生贄の儀式を廃止した後（列王記下23:10）、エンノムの谷には処刑された悪党の死体や腐肉、あらゆる不浄物が投げ捨てられ、そこでこれらすべてが焼却された。

囚われ、ここで少しの間だけ生きたいと願った結果、来たるべき永遠の命のために死んでしまいました。私たち、この呪われた者たちは、どうすればよいのか、分かりません！」

彼らの涙に気づいた聖コドラトは喜びに満たされ、こう言った。

「兄弟たちよ！　勇気を出し、絶望してはならない！　主キリストは慈悲深き方である。悔い改めと涙をもって御前にひれ伏し、公然とキリストの側に立ちなさい。そうすれば、あなたがた一人ひとりが、自らの血によって罪を清められる機会を得られるだろう。」

すると、長い間キリストから背を向けていた者たちは、地面にひれ伏し、頭に灰をまき散らし、石で胸を打ちながら、苦々しく泣き叫んだ。彼らの泣き声とすすり泣きは、あまりにも大きな叫びとなり、ニカイアの街中の住民たちが駆けつけ、信仰からの背きに対する彼らのこれほどまでに心からの悔い改めに驚嘆した。

その叫び声を聞いて偶像の神殿から出てきたプロコンスルは、目の前の光景を目にして、聖なる殉教者をさらに激しく鞭打ち、熱した蝋燭で鞭打たれた肋骨を焼くよう命じた。一方、聖人は悔い改める者たちの回心が受け入れられるよう、長く熱心に神に祈りを捧げた。　そして、祈りを終える際、彼が「ああ、主よ、主イエス・キリストよ、私の魂を彼らの魂の代わりにしてください――どうか彼らを憐れんでください」と唱えると、その瞬間、拷問を行っていた処刑人たちは力尽き、まるで死人のように地面に倒れ込んだ。　その間、聖コドラトと、そこに縛られて立っていたすべての悔い改めたキリスト教徒たちの上に、明るい雲が降り注いだ。一方、プロコンスルとその顧問たち、そしてすべての異教徒たちは闇に包まれた。彼らには恐怖が襲いかかり、今にも街が崩れ落ちると信じて、恐怖のあまり震え上がった。

長い沈黙の後、信者たちは高みから、神を賛美し称える聖なる天使たちの歌声を聞いた。二時間が過ぎると、闇は薄れ始め、異教徒たちは聖人たちに視線を向けると、天の光に気づき始めた。プロコンスルは、正気に戻るやいなや、殉教者の説得の言葉に影響され、悔い改めて再びキリストに立ち返った者たち全員を直ちに捕らえるよう命じた。彼らを、法廷にいた他のキリスト教徒たちと一緒に縛り上げ、牢獄へ連行するよう命じた。　また直ちに、聖コドラトを木から解き放ち、再び以前の束縛に閉じ込めた。

翌朝、プロコンスル・ペレンニウスは再び裁判を開き、聖コドラトを除く、牢獄にいたすべてのキリスト教徒を連れ出すよう命じた。その日一日中、彼は彼らに対して尋問を行い、甘言や拷問を用いて忌まわしい生贄を捧げるよう強要した。　キリスト教徒たちが信仰の告白において揺るぎなく、断固として屈しないことを悟ると、ペレンニウスは度重なる拷問の末、一人ひとりをそれぞれの故郷の町へ連行し、そこで火あぶりにするよう命じた。　そして、すべての聖なる殉教者たちは、神を賛美しながら、大きな喜びをもってその場へ向かった。こうして、彼ら一人ひとりは、それぞれの故郷で焼かれて息を引き取り、天の故郷へと移り住んだ。

その後、プロコンスルは聖コドラトを従えて、ニカイアからアパミア[2275]　へと向かった。彼はここにもやって来て、キリスト教徒を捕らえ、偶像への生贄を強要しようとしたのである。デキウス皇帝から、都市や地方を巡回し、神々への礼拝を拒む　キリスト教徒を拷問と死に追いやるよう命じられていたのだ。　アパミアに到着すると、プロコンスル・ペレンニウスは神殿に入り、偶像を崇拝した。聖殉教者コドラトをここに連れてくると、彼はこう尋ねた。

「邪悪な魔術師よ、神々に生贄を捧げるのか、それとも捧げないのか？」

気高き魂を持つ聖コドラトはこう答えた。

「お前の父であるサタンを『邪悪な魔術師』と呼べ。彼はまさにその通りだからだ。しかし、私はキリスト教徒であり、魔術も悪巧みも知らず、悪魔たちに犠牲を捧げるつもりはない！」

[2275] アパミア――小アジアのフリギアとピシディアの境界にある都市。

すると、プロコンスルは仲間たちに言った。

「この忌まわしいキリスト教徒に、どのような拷問を加えればよいのか、私にはわからない！」

彼らは黙り込んでいた。殉教者の肉体はすでに失われ、ただ骨だけが残り、全身が引き裂かれ、削り取られていたのを見ていたからだ。拷問官は、聖人を粗末な袋に入れ、そこにあらゆる種類の毒蛇を放ち、その後、深く湿った堀に投げ込むよう命じ、その通りに行われた。　翌朝、拷問官は聖人がすでに死んだと思い込み、堀から引き上げるよう命じたが、皆の驚きにも、聖人は無傷であった。殉教者は天を仰ぎ見て、こう言った。

「主イエス・キリストよ、感謝いたします。幼子たちの矢（知恵）は、彼ら自身にとって傷となり、彼らの強さは弱まりました。しかし、あなたは私を強め、あなたの聖なる御名を賛美するために、彼らを恥じ入らせる力を私に与えてくださいました。」

その後、聖人はプロコンスルにこう言った。

「愚か者よ！　お前の策略が全く成功していないことに気づかないのか？　私に対してさらにひどいことをするのなら、時間を無駄にせず、さっさと実行せよ。」

「忌まわしい者よ」と、プロコンスルは激怒して答えた。「たとえお前が自分の魔術を頼りにしているとしても、この道のり全体を通して、お前を苦しめてやる。」

その後、ペレンニウスは聖なる殉教者を連れてケサリアへと向かった。そこで、慣例に従って神殿で生贄を捧げながら、彼は聖人を呼び寄せ、こう言った。

「お前にとって、あらゆる拷問はもう十分だ。さあ、そろそろ近づいて、神々に生贄を捧げなさい！」

「お前は私を拷問で弄んでいたが、私に対してそれを行うことに、お前がすでに気力を失っていることに、私は実に驚いていた。しかし、私は拷問を受けても気力を失うことはなく、私の神のために、これと同じ、いやそれ以上に苛烈な苦しみをも耐え抜きたいと願っているのだ。」

すると、プロコンスルは怒りに駆られ、聖人を拷問用の丸太に縛り付け、その裸の体を容赦なく皮紐で打つよう再び命じた。しかし、打たれたのは裸の骨だけであり、そこにはもはや肉体はなかった。殴打の間、聖人はこう歌った。*「若き日から、多くの者が私を苦しめたが、私を打ち負かすことはできなかった。　私の背中で耕す者たちは耕し、長い畝を引いた」*（詩編128:2–3）。その間、プロコンスルは処刑人たちに叫んだ。

「もっと強く打て。彼は苦痛を感じていないのだから。」

聖人は拷問者にこう言った。

「打て、打て、わが謙遜な皮袋よ。なぜなら、この肉体が最後に苦しめられる時、わが魂は強くなるのだから！」

「忌まわしい者よ」と総督は叫んだ。「お前は邪悪な悪魔に取り憑かれているに違いない！」

「私は悪魔に取り憑かれているどころか」と聖人は答えた。「それどころか、私はあなたがたの父であるサタンそのものを支配している。彼一人だけでなく、そのすべての僕たちをも支配している。そして、私のキリストの恵みによって、私は彼の全軍に命じるのだ。　地獄のすべての勢力は、私の身に現れた恐るべき、そして打ち勝つことのできないイエス・キリストのしるしと、私と共に宿る御恵みを見て、私を恐れ、震えおののいているのだ。

それから、少し間を置いて、聖人はこう叫んだ：

「父と子と聖霊に栄光あれ。今、常に、そして世々限りなく。」

その場に居合わせたケサリアの民は「アーメン！」と叫んだ。というのも、民衆の中には多くのキリスト教徒がいたからである。　すると、狂おしいほどの怒りに駆られたプロコンスルは、群衆の中から、近くに立っていてその気高さが際立っていた二人の男を捕らえ、服を脱がせて、直ちに拷

問の場で絞首刑に処し、殴打し、その体を削り取るよう命じた。　処刑人たちは聖コドラトを放置し、サトリンとルフィンという名の二人のキリスト教徒を拷問し始めた。彼らは、内臓が地面に飛び出しそうになるまで苦しめられた。拷問の間、サトリンとルフィンは聖コドラトとそこにいたすべての兄弟たちに、主のために彼らのために祈ってほしいと懇願した。　聖コドラトは神に呼びかけ、こう述べた。

「主イエス・キリストよ、目に見えぬ御父の御子よ！　御自分のしもべたちに助けをお与えください。謙遜な者たちに慈愛の眼差しを向け、彼らを憐れんでください！　御自分の苦しむ者たちに忍耐と打ち破ることのできない強さをお与えください。そうして彼らが最後まで耐え抜き、彼らに立ち向かう敵に打ち勝ち、恥をかかせてください！」

長い時間が過ぎた――聖なる殉教者たちは、激しい苦痛のあまり話すことさえできず、沈黙を守っていた。ついに拷問官は、彼らを縛りから解き放ち、首を刎ねるよう命じた。こうして、聖なる殉教者二人、サトリンとルフィンは、彼らがそのために苦難を耐え抜いた、二つの本性を備えた主キリストのもとへ、天に昇っていった。

その後、プロコンスル・ペレンニウスはケサリアを離れ、アポロニア[2276] へと向かった。彼は至る所で聖コドラトを連れ回し、他のキリスト教徒たちも拷問のために連行していった。アポロンの神殿に入ると、ペレンニウスは殉教者にこう言った。

「神々を崇めよ。そうすれば健康を取り戻せる。私は医師たちに、お前の世話をさせるよう命じる。さあ、アスクレピオス神[2277] のところへ行け。そうすれば、彼はお前を癒やしてくれるだろう。神々の威光を畏れよ。偉大なるアポロン[2278]、ヘラクレス[2279]、すべての神々の王ゼウス[2280]、栄光あるアレス[2281]、そして恐ろしいポセイドンを。 あなたは船に乗って海を渡ったことが一度もなく、神の恐るべき力を目にしたことがないというのか！天から地上へと輝きを放つ太陽にも、ひれ伏せ。果たして太陽は死んでしまい、もはや天には存在しないというのか？

聖コドラトはこう答えた。

「私は、真の神である父と、その独り子、そして聖霊に礼拝を捧げ、その威光、威厳、そして近づきがたい栄光の前に畏敬の念を抱く。　私は常に、神の言い表せない力と全能を称え、賛美している。しかし、死んだ偶像にはひれ伏さず、人の手による造り物をも崇めることはない。私は悪魔も、一時的な権力を握っているお前も恐れない。　あと数日が過ぎれば、私は私の神のもとへ去るが、お前は永遠に苦々しく嘆き続けるだろう。なぜなら、お前には真の命を与えた神を知ることを拒んだからである。　サタンの子、悪魔の兄弟、不義な悪霊たちの共犯者、その無言さにおいて豚さえも凌

2276 アポロニアは、イリュリアにある海に近い都市で、ローマ支配下において学問の繁栄で知られていた。

2277 アスクレピオス、あるいはエスクラプス――医療の神――は、アポロンとテッソピアの王コローニッサの娘との間に生まれた。彼は、威厳があり、髭を生やした男性として描かれ、威厳がありながらも慈愛に満ちた表情を浮かべ、白い衣をまとい、杖の周りに蛇が巻き付いている姿で表現されていた。　時には、蛇に加えて、この神に捧げられていた雄鶏がエスクラプスと共に描かれることもあった。

2278 アポロン――ゼウスとラトナの息子であり、アルテミスの兄弟――は光の神である。古代人の信仰によれば、アポロンには永遠かつ不変の若さと力が与えられており、これは光と熱の永遠に若々しい力を象徴している。　彼は、弓や湾曲した羊飼いの杖を手に持ち、背中には矢筒を背負った、美しく力強い若者の姿で描かれた。時には手にリラ（楽器）を持っていることもある。足は裸足か、あるいは装飾的なサンダルを履き、頭には月桂樹の冠を戴いている。

2279 ヘラクレス、あるいはヘルクレスは、ゼウスとアルクメネ（アンフィトリオン王の妻）の子である、ギリシャで最も有名な英雄である。　彼は通常、並外れて筋肉質でたくましい男性として、人生の最盛期にある姿で描かれ、裸か、あるいはライオンの皮をまとい、縮れ毛の頭髪を持ち、手に重い棍棒を握っている。

2280 ゼウス――天空の神。彼には多くの異名があった。クロノスの息子であり、諸神の中で最年長である。彼は、エーギダを手にし、玉座に座っている姿で描かれた。

2281 アレスはゼウスとヘラの息子であり、海の動揺と波乱の神、恐ろしい戦争・戦闘・乱戦の神であり、殺戮に魂を慰め、血に酔いしれる神である。彼は、盾と槍を手にした若者の姿で描かれた。

駕する者、狂犬、血を吸う者、蛇、神殿で忌まわしい肉を獣よりも貪り食う者よ。お前たちは、自らの狂気を恥じず、自らの盲目さを悟らないのか？　あなたがたは家畜や鳥を神々への生贄として屠るが、魂を持たないあなたがたの神々が、果たして飢えを感じるというのか？偶像の口元に食べ物を差し出してみよ、果たしてそれが味わえるというのか？　もしあなたがたの神々が犠牲を要求するのなら、尋ねてみよ。石であれ木であれ、あなたがたの神々のいずれかに答えさせよ。その神は、山羊か、牛か、それとも鶏か、何を刺し殺してほしいと望んでいるのか？　ああ、破滅への道を歩む者たちよ！ あなたがた自身は破滅の穴に落ちながら、私たちをもそこに突き落とそうとしているのだ。

プロコンスルは、この言葉を聞いて猛烈な怒りに駆られ、聖人の傷に塩を混ぜた酢を注ぎ、毛の縄でこすり、肋骨に赤熱した鉄を当てるよう命じた。そして、日がすでに暮れかけていたため、拷問担当者は、苦しむ者を牢獄に放り込むよう命じた。　翌朝、プロコンスルはアポロニアを出発し、ゲレスポント[2282] へ向かい、捕らえられたキリスト教徒たちを縛って連行した。彼らと共に、聖殉教者コドラトも運ばれた。彼は激しい拷問のせいで、足を動かすことさえできなかったからである。プロコンスルはルントクと呼ばれる川を越えると、その地域の軍司令官に出迎えられた。　周辺の村々からも、あたかもプロコンスル・ペレンニウスを出迎えるかのように大勢のキリスト教徒が集まったが、実　は、アジア全土、ひいては全世界にその名声が広まっていた聖大殉教者コドラトに会って敬意を表したいと願っていたからである。　プロコンスルは、地方長官と共に道中で出会った村に入り、そこで一晩を過ごした。日が明けると、彼は悪魔への生贄を捧げたいと望んだ。その村には多くの偶像があったからである。もちろん、同時に彼はキリスト教徒たちにも生贄を捧げるよう強要しようとしていた。　まず、プロコンスルは聖コドラトを自分の前に連れてくるよう命じた。彼は徒歩で歩く力を持っていなかったため、戦車に乗せられて神殿へと運ばれた。　しかし、聖コドラトは体は弱っていたものの、その様子は明るく、救い主である神について微笑み、喜びを滲ませていた。そこには、キリストの殉教者の苦しみを見たいと願う、集まった民衆が全員立っていた。プロコンスルはコドラトに尋ねた。

「コドラトよ！　神々を崇めることを思い立ったのか、それとも相変わらずその狂気に囚われているのか？」

聖人は力強くこう答えた。

「私は幼少の頃から、真の神であるキリストを知るよう教えられてきました。私は母の胎内からキリスト教徒であり、幼い頃から信じているその方以外の神は知りません！」

すると、プロコンスルは巨大な焚き火を燃やし、その上に鉄の床を置き、それが白熱したら殉教者をその上に載せるよう命じた。

「その必要はありません」と聖人は言った。「誰かに連れて行かれ、この床に置かれる必要などありません。私自身が自らその上へ入ります！」

そして、キリストの力に支えられて、彼は自ら火の中へと歩み入り、十字架の印を自らに描いてから、白熱した床に横たわり、まるで柔らかい寝床の上にいるかのように安らかに横たわり、火による害を全く感じなかった。　火はその本来の力を失い、神のしもべに仕え、聖なる殉教者の、多くの苦難と病に苛まれた体を安らげるのに必要なだけの暖かさをもたらした。　その間、悪魔の手下たちは寝台の下に樹脂や油、綿を敷き詰めていたが、聖人はこう詠んだ。「*神よ、急いで私を救い出してください。主よ、急いで私を助けてください。私の命をねらう者たちが恥じ、辱めを受けますように*」（詩編69:2）。拷問者を嘲りながら、こう言った。

「お前の火は冷たい。この寝台の鉄は、お前の冷酷な心よりもはるかに柔らかい。旅の疲れを癒やすために、この柔らかい寝台で休むよう命じてくれたのは、お前の善意だ！」

[2282] マルマラ海とエーゲ海を結ぶ海峡。

そう言いながら、聖人はまるでベッドの上にいるかのように、寝台の上で体を転がした。長い時間が経過しても、聖なる殉教者は火の中にあっても生き続け、健やかで無傷のままであった。そこで拷問官は怒りに燃え、聖人を寝台から引きずり下ろし、集落の外で首を刎ねるよう命じた。　火の中からしっかりと足を踏みしめて出てきた聖人は、もはや戦車や介助者を必要とせず、自らの力で処刑場へと向かい、その道中、次のように歌い上げた。

「*『主は祝福される。主は私たちを彼らの牙の餌食にされなかった』*（詩編123:6）。」

彼と共に、後を追う兄弟たちの中にも歌を口ずさむ者がいた。そして、神に感謝を捧げた後、彼はその尊い頭を剣の下に差し出した。

こうして、キリストの聖大殉教者コドラトは、3月の10日、剣によって首を刎ねられ、その月、彼の仲間たちや、彼と同じ名を持つ友人である　コドラト・コリントスと共に殉教の栄冠を戴いた。これは、ギリシャ人とローマ人に対してはヴァレリアヌスの治世において、キリスト教徒に対しては、私たちの主イエス・キリストの終わりのない御治世においてであった。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と権威があるように。アーメン。

私たちの尊い母アナスタシア（後に去勢者アナスタシウスと改名された）の記念日

記念日：3月10日

ユスティニアヌス大帝の治世[2283]、コンスタンティノープルには、ある敬虔で神を畏れる未亡人が住んでいた。彼女は裕福で高貴な両親の娘であり、王宮　で第一位のパトリキアであった。その名はアナスタシア[2284]であった。彼女は心に神への畏れを保ち、神の戒めを揺るぎなく、注意深く守っていた。　アナスタシアは、際立った肉体の美しさを備えていたが、それ以上に心の美しさで際立っていた。彼女は非常に柔和で品行方正であったため、その生涯を知る者たちは皆、彼女を模範として仰ぎ、多くの人が彼女の美徳に倣おうとした。　皇帝自身もアナスタシアを深く敬っていた。しかし、雑草を蒔き、徳ある者を妬み、絶えず人類と戦いを繰り広げ、人々の間に不和をまき散らす悪魔は、至福のアナスタシアに対しても憎悪に満ちた敵意を煽り立てた。　悪魔は、テオドラ皇后の中に聖女に対する憎悪をかき立てた[2285]、そして皇后は、何の罪もない神のしもべに対して怒りを抱くようになった。彼女に好意を抱くある人物からそのことを聞き、神聖な知恵に満たされていたアナスタシアは、心を落ち着かせて、こう自問自答した。

「アナスタシアよ！この試練を好機として活用し、必ずや自らの魂を救わなければならない。皇后をも不当な憎悪という罪から解き放ち、そして自分自身のためにも、天の御国を懇願せよ！」

このように心の中で熟考した後、アナスタシアは密かに船を手配し、所有していた金のうちの一部を持ち出し――残りはすべて残したまま――誰にも気づかれることなく、アレクサンドリアへと

2283 聖アナスタシアは567年に亡くなった。ユスティニアヌス帝は527年から565年まで在位し、その治世下で553年、モノフィシテ派の運動を鎮圧する目的で、コンスタンティノープルにて第5回全地公会議が招集された。

2284 パトリシアとは、パトリキウスの妻を指す。ローマでは、貴族出身の人々をこのように呼んだ。この称号は非常に栄誉あるものであり、ヴィリザリウスの妻アントニナのように著名な夫を持つ女性や、特別な功績を上げた者に授けられた。

2285 ユスティニアヌスの妻テオドラ――彼女の影響力により、ユスティニアヌスの廃位を招きかねなかったニカの反乱が鎮圧された。

船出した[2286] 。 そこで、街から五ポプリシュの距離[2287] にある一箇所に小さな修道院を建立し、彼女はそこで暮らしながら、神のために働き、唯一の神に喜ばれるよう努めた。アナスタシアは常に、その性にふさわしい手仕事を手にし、口には絶え間なく詩篇を詠み、神を賛美していた。　彼女が創設した修道院は、創設者であるパトリキアンのアナスタシアの名にちなんで「パトリキアン修道院」と呼ばれ、その後、イスラム支配の時代[2288] が訪れる前に、あらゆる豊かさに満ちた、大きく栄えあるものとなった。しかし、アナスタシアに関する当初の話に戻ろう。

聖アナスタシアがコンスタンティノープルから追放されてから数年が経った頃、彼女に怒りを抱いていたテオドラ皇后が亡くなった。皇帝はパトリキア人のアナスタシアのことを思い出し、使者を至る所に派遣して、懸命に彼女を探し求めた。　そのことをすぐに知ると、神の羊である彼女は夜中に修道院を離れ、アッバ・ダニエルのスキートへと身を寄せ、[2289] 、この至福の老僧に、自分に起こったすべてのことを打ち明けた。　そこで、長老ダニエルは彼女に男性の修道服を着せ、アナスタシアという名に代わって「アナスタシイ」という名の宦官と名付け、ラヴラから遠く離れたある洞窟へと連れて行き、彼女をそこに閉じ込めた。　アナスタシアに生活規則と規律を授けた後、彼女自身は決して洞窟から出てはならず、また誰にも会わせてはならないと命じた。

ダニイルは、彼に仕えていた修道士の一人に、洞窟の近くの場所を指定し、週に一度、小さなパンと水の瓶を持ってきて、洞窟の前にあるその場所にそれらを置き、その後、隠遁者から祈りの祝福を受けたら、直ちにその場を離れるよう命じた。　そこで、揺るぎない気概と勇気を備えたアナスタシアは、誰にも見られることなく、逃げ場のない状態で二十八年間を過ごし、長老が定めた規則を厳格に守り続けた。アナスタシアのもとを訪れる者は誰もおらず、パンと水を持ってくる兄弟以外、彼女の存在を知る者はいなかった。　しかし、その兄弟でさえ、彼女が本来女性であることを知らず、去勢された男性だと考えていた。果たして、誰がその知性で理解し、言葉で語り、あるいは文章で伝えることができるだろうか。聖アナスタシアが、28年もの間、洞窟の中で孤独のうちに神に捧げた労苦と偉業を。　涙、嘆き、すすり泣き、徹夜、賛美歌、祈り、聖書の朗読、立ち続け、ひざまずき、断食、生活必需品の欠乏、そして何よりも、世に残してきた肉の快楽やあらゆる世俗の享楽を絶えず思い起こさせる悪魔の襲撃と、それとの戦いなど、一体どれほどであったことか？！　かつてボヤリーナ（貴婦人）として、また第一級のパトリキア（貴族）の地位にあり、長年にわたり王宮で暮らし、時には多くの男女と共に世俗の食卓を囲み、　な快楽にふけっていた彼女が、いったいどのようにしてこれらすべてに立ち向かい、打ち勝ち、しかもその年月を通じて一日たりとも退くことなく耐え抜いたのだろうか？　聖アナスタシアがこれらすべてを軽んじ、その記憶を自らの心から完全に消し去ったと考えると、思わず戦慄を覚える！　彼女は、いかにしてこれほどの謙遜、断食、節制、そして苦難に満ちた道の厳しさを成し遂げたのだろうか。これほど勇敢に奮闘した聖女は、聖霊の器となり、最後まで神に喜ばれる生き方を貫き、至福の最期を迎えたのである。

神のもとへ旅立つことをあらかじめ予見していたアナスタシアは、長老ダニエルに瓦片に次のように書き残した。

「聖なる父よ！　私にパンと水を持ってきてくれる弟子を急いで連れてきてください。また、埋葬に必要な道具も持参し、あなたの子供――宦官アナスタシア――を葬るために来てください。」

これを書き終えると、アナスタシアは瓦を洞窟の外、入り口の前に置いた。ちょうどその時、長老もまた、その夜神から受けた啓示によってこのことを知り、弟子にこう言った。

[2286] アレクサンドリア――アレクサンドロス大王によって建設されたエジプトの主要都市。ここにあるファロス島で、72日間かけて旧約聖書のギリシャ語訳が作成された。

[2287] ポプリシュチェ――距離の単位。およそ690サジェンに相当した。

[2288] アレクサンドリアにおけるイスラム教徒の支配は、7世紀末から始まった。

[2289] ここで言及されている修道士ダニエルとは、生後22日の乳児に言葉を話させたあのダニエルその人である。

「子よ！　私たちの兄弟である宦官アナスタシウスが住む洞窟へ急ぎ、洞窟の周辺をよく見て回れ。そこには文字が書かれた瓦片があるはずだ。それを持ち帰ったら、一刻も早く私たちのところへ戻って来い。」

その言葉に従って洞窟へ向かい、長老の言った通り文字が書かれた陶片を見つけた兄弟は、それを長老のもとに持ち帰った。　陶片に書かれた文字を読み終えると、長老ダニエルは涙を流し、埋葬に必要なものをすべて用意して、その兄弟と共に洞窟へと向かった。洞窟の扉を開けると、彼らは高熱にうなされている宦官を見つけた。アッバ・ダニエルは宦官の胸に顔を埋めて泣きながら、こう言った。

「兄弟アナスタシオよ、あなたは幸いである。死の日と時を絶えず心に留め、この世の王国を軽んじたからだ！」

「あなたもまた幸いである」と、アナスタシアはこれに応えて言った。「新たなアブラハムよ！」

「それでは」と長老は続けた。「私たちのために主にお祈りください。」

「敬虔な長老よ」とアナスタシアは答えた。「今この時、私の方があなたの祈りをより必要としているのです。」

「もし私があなたより先に人生の最後の日を迎えたなら、その時こそ私もあなたのために祈ったでしょう」と、長老は続けた。

するとアナスタシアは、藁の敷物の上に座り、長老の頭に口づけをし、彼のために祈りながら祝福の言葉を述べた。長老は弟子を連れてきて、聖人の足元に近づけながら言った。

「この私の弟子、すなわちあなたの子供を祝福してください。」

「今この時、私をこの肉体から解き放つために私の前に立っておられる、私の先祖たちの神よ、　――とアナスタシアは言った――この洞窟での私の歩みと、御名のために耐えてきた人生の苦難を知り、私のこの肉体の病を見守っておられる神よ、エリヤの霊がエリシャの上に宿ったように、彼の父の霊をこの者の上に安らかに宿らせてください！

その後、宦官は長老に向き直って言った。

「父よ、主の御名のために、私が身に着けているこの衣を脱がせないでください。そうすれば、私の性別について誰も気づくことはありません。」

その後、キリストの至聖なる聖体拝領を受けたアナスタシアは、こう言った。

「父よ、私にキリストの印を刻み、私のために祈ってください。」

その後、アナスタシアは東の方角を見つめ、その顔は火のように輝いた。そして、自ら十字を切ってから、アナスタシアはこう言った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます」――そう言い残して、息を引き取った。

その後、アッバ・ダニエルは弟子と共に洞窟の前に墓を掘り、それから長老は身に着けていた修道服を脱ぎ、弟子にこう言った。

「子よ！　兄弟に服を着せてやりなさい。」

弟子は聖女に衣を着せている際、偶然にも枯れ葉のように乾いた彼女の乳房に気づきましたが、長老にはそのことを告げず、黙っていました。彼らはアナスタシアの聖なる遺体を、慣例通りの墓前の賛美歌を歌いながら埋葬しました。

その後、彼らが家路につく際、弟子は長老にこう言った。

「師よ、宦官のアナスタシイが女性だったことを、あなたは知らなかったのですか？」

「ああ、わが子よ、私は知っていた」と長老は答えた。「だからこそ、私は彼女に男性の服を着せ、アナスタシイ――宦官――と名付けたのだ。疑いを招かず、誰も彼女のことを知らず、あちこ

ちに噂が広まらないようにするためだ。彼女に関しては、王によって各地、とりわけこの一帯で多くの捜索が行われていたのだ。」しかし、神の恵みにより、彼女は我々の元で隠されていたのだ。

その後、長老は弟子に聖人の生涯を詳細に語り聞かせた。その生涯は後に全世界に知れ渡り、キリスト・神の栄光のために、聖人たちに永遠に賛美されるキリスト・神の栄光のために、読む者と聞く者の益となるよう記されたのである。[2290]。アーメン。

3月24日

3月11日（旧暦）

聖人たる我らの父、ソフロニオス・プレムードロス、エルサレム総主教の記念日

3月11日の記念

聖ソフロニオスは、その名自体が「貞潔」を意味する[2291]であり、ダマスカス[2292]で、敬虔かつ貞潔な両親のもとで生まれた。両親は名士であり、その名はプリンフォスとミラであった。若き頃から、至福のソフロニオスはその名にふさわしい生き方をし、霊的および世俗的な知恵を愛し、母の胎内から処女の清らかさを保ち続けた。　これら二つの美徳、すなわち霊的な知恵と処女の清らかさは、共に「貞潔」と呼ばれている。聖ヨハネ・クライストス（[2293]）の言葉を借りれば、貞潔とはあらゆる美徳の総称であり、貞潔なソフロニオスはそれらすべてを熱心に身につけていった。　まず第一に、彼は外的な[2294]哲学を学び、そのために「ソフィスト」、すなわち「賢者」と呼ばれた。当時、「ソフィスト」という称号は非常に名誉あるものであり、聖バシレイオス大主教の知人であったリヴァイオス・ソフィストのような傑出した哲学者たちがこの称号を授かっていた。　外的な哲学の後に霊的な英知を身につけたいと願った至福のソフロニオスは、修道院や隠者の住む荒野を巡り、神に奉仕する修道士たちから自らの魂のために益を得た。　彼は聖都エルサレムにも赴き、近隣の修道院を巡った後、偉大なるテオドシオスのキノヴィアに入った。そこで、モスクやエヴィラトと呼ばれ、長老の位にある修道士ヨハネに出会った。彼は徳の高い人物であり、かつ外的な知恵と内的な知恵の両方に極めて精通していた。　ソフロニオスは、まるで息子が父に、弟子が師にそうするように、心

[2290] 聖アナスタシアの聖遺骨はコンスタンティノープルに移され、1200年には聖ソフィア大聖堂の近くに安置されていた。

[2291] ギリシャ語より。

[2292] ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市であり、世界でも最も古い都市の一つである。パレスチナの北東、アンチ・レバノン山脈の東麓に位置する美しく肥沃な平野にあり、市内を流れるバラデ川沿いに広がっている。　現在、オスマン帝国の一部となっているダマスカスは、アジアで最も豊かな都市の一つであり、人口は15万人に達する。キリスト教会の歴史において、ダマスカスは、使徒パウロがキリスト教に改宗した後、最初の説教を行った場所として特筆すべき存在である（使徒言行録9:1–43）。

[2293] 聖ヨハネ・クライマコスは20年間修道生活を送り、生涯の最後の4年間はシナイ修道院の院長を務め、606年頃、80歳の長老としてこの世を去った。彼の記念日は3月30日に祝われる。彼は主に、修道生活に関する有名な手引書『『天国の梯子』――Klimax tou paradeisou――であり、ここから彼は「梯子上り」という名を得た。この書において、修道生活は、霊的自己完成への梯子を絶え間なく、かつ困難に登りつめる道として描かれている。この登攀は、自身の情欲や悪徳との闘いを通じて成し遂げられるものであり、修道士は死を絶えず念頭に置くことに最大の助けを見出す。

[2294] すなわち、世俗の学問のことである。

を尽くして彼に親しみ、その死に至るまでどこへでも彼に従い、共に修道院や荒野を巡り、聖なる父たちを訪ね、自らの益となるよう彼らの行伝を書き留めた。このことは、二人が共同で著した『 『リモナール』、あるいは『花園』と題され、第7回全地公会議で承認された[2295] 。この書物の中で、聖ソフロニオスの師は、哲学的教養において自分と同等であるとして、しばしば彼を「ソフィスト」と呼んでいる。しかし、尊者ヨハネは、至福のソフロニオスを単なるソフィストや主君としてだけでなく、さらには「父」と呼んでいる。 彼はソフロニオスを単なる弟子としてではなく、友人、同志、協力者として、また傑出した生涯を送る人物として見なしており、さらに、ソフロニオスが偉大な牧者となり、キリストの教会の揺るぎない支柱となることを霊的に予見していたのである。 この尊者ヨハネと共に、聖ソフロニオスは、 修道入りを果たす前から、まずパレスチナ、偉大なるテオドシオスの修道院、ヨルダン川沿いの荒野、そして聖サヴヴァによって建立されたいわゆる「新修道院」で、かなり長い間共に暮らした。その後、二人は、 ヨハネスとソフロニオスは、ペルシャ軍の侵攻を恐れてパレスチナを離れ、大アンティオキア地方へと向かった。この頃、ペルシャ王ホズロ2世は、次のような理由からギリシャの地へ遠征した。 拷問者フォカス（ギリシャの歴史家ニキフォロスがいかに詳述しているか）は、ギリシャの皇帝マウリキウスを殺害し、王位を奪った。 しかし、マウリキオス王はかつて、ペルシアのホズロイに多大な恩恵を施していた。ホズロイがペルシア王国から追放され、ギリシャへ逃れた際、マウリキオスは彼にとって父のような存在となり、自らの富と軍事力をもって、彼がペルシアの王位を取り戻すのを助けたのである。こうして、ギリシャ人とペルシア人の間には堅固な平和が築かれた。 ところが、ホズロイは、恩人であるギリシャの皇帝マウリキウスが殺害されたことを知ると、彼を深く悼み、ギリシャ人との和平条約を破棄して、マウリキウスの殺害に対する復讐に乗り出した。ペルシア軍は、主にシリア、フェニキア、パレスチナといった多くのギリシャ領に侵攻し、それらを征服した。 そこで、それらの地域で禁食の生活を送っていた聖なる父たちは、修道院や荒野の住処を後にし、それぞれできる限り遠くへ逃げ去った。まさにその頃、聖ヨハネと聖ソフロニオスもパレスチナを去った。 彼らの去った後、聖都エルサレムはペルシャ軍に占領され、キリストの命を与える聖十字架は、至聖なるザカリア総主教と共に捕虜として連れ去られた。それは、すべてのキリスト教徒にとって大きな悲しみと嘆きとなる中、十四年間ペルシャで捕虜として留め置かれた。 エルサレムが陥落する以前、聖ヨハネと聖ソフロニオスは、前述の通り、アンティオキア地方を訪れ、彼らの常として、花から花へと飛び回り蜜を集める蜂のように、徳高い修道士たちの噂を耳にする場所をすべて巡り、霊的な蜜を集め、 蜂蜜よりも甘いものを集め、彼らの生涯を前述の書物『リモナール』に記した。やがてペルシャ軍がそこにも迫ってくると、彼らはエジプトのアレクサンドリアへ船出した[2296] 、そこで同じことを続けた。 彼らは、自らの目で見て、自らの耳で聞いた多くの聖なる教父たちの行いと教えを記述することで、後のすべてのキリスト教徒に多大な恩恵をもたらした。 聖ソフロニオスは、アレクサンドリアに到着した時点では、まだ修道士としての剃髪を受けていなかった。これは、彼らの『リモノアリ』の第69章から明らかであり、そこではソフロニオスの師であるヨハネス・エヴィラトが次のように述べている。

[2295] 787年、イコンの崇拝を拒絶したイコン破壊派の異端に対して。

[2296] アレクサンドリアは、紀元前333年にアレクサンドロス大王によって、地中海沿岸、下（北）エジプトのナイル川河口に築かれた有名な都市である。 アレクサンドリアはローマに次いで最初の港湾都市であり、貿易、産業、そしてとりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教初期の時代にはキリスト教啓蒙の温床となった。伝承によれば、キリスト教は聖マルコによって紀元59～60年頃にここに伝えられたとされる。 現在、アレクサンドリア（トルコ語およびアラビア語では「イスカンダリヤ」）は、地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つとして数えられ、人口は23万人以上を数える。

「私と、私の兄弟であるキル・[2297] ソフロニオス（彼が修道服をまとう前）は、アレクサンドリアに到着し、高潔な人物であり神の僕であるアッベ・[2298] パラディオスのもとへ向かった。」

また、第110章でも、彼は次のように述べている：

– 私は主であるソフロニオスと共に、アレクサンドリアから十八ポプリシュ[2299] 離れたラヴラへ、ある非常に徳の高い、エジプト出身の長老のもとへ行き、彼にこう言った：

「師よ、父よ、私たちが互いにどのように生きるべきか、お教えください。キル・ソフィスト（ソフロニオス）は、世俗を離れて修道士になりたいと願っています。」

すると、その長老は私たちにこう言いました。

「子供たちよ、魂の救いのために世を捨てるのは正しい行いだ。小部屋で静寂を守り、自分の思いに気をつけ、神への希望を持って絶えず祈りなさい。そうすれば、神はあなたがたに御自身の知恵を与え、あなたがたの心を照らしてくださるだろう。」

ここから、聖ソフロニオスの驚くべき徳がうかがえる。　彼は、まだ平信徒であったにもかかわらず、様々な時期に修道院や荒野を訪れて多大な労力を費やし、救いの道に立つためにいかにして魂の益を得られるかを熱心に求めたため、修道士として剃髪を受ける前から、すでに修道士そのもののように、徳高い修道生活を送っていた。　その後、彼は病に倒れた際、師によって修道士として剃髪された。その病により、彼は死を覚悟していたが、ある幻視を受けた。これについて、彼の師は『』の第102章で次のように記している。「私の兄弟であるソフロニオス・プレムードリーが死の床にあった時、私たちはアッバ・ヨハネス・スコラスティコスと共に彼のそばに立っていた。するとソフロニオスは私たちにこう言った。　『私はある道を歩いているような気がして、少女たちの合唱団が『ソフロニオスが来た、ソフロニオスが結婚した！』と楽しそうに話しているのを見ました。少女たちが彼の前で歓喜したのは、彼の名前そのものが貞潔を意味していたからです』

これが、彼の師が彼について記した言葉である。病から回復し、すでに修道士となっていた彼は、さらに一層精進し、自身の救いと他者の救いのために尽力した。

当時、エジプトではセヴィロスの異端[2300] が広まっており、彼と師は共に異端者たちと激しく戦った。聖書に精通し、博識であった彼らは、異端者たちと論争を繰り広げ、彼らを打ち負かした。この功績により、アレクサンドリアの至聖なる総主教ヨハネス・ミロスティヴィウス（[2301] ）は、二人を深く愛し、異端者たちに対する戦いで彼を助け、悲しみの際に慰めてくれた誠実な友人として敬った。　ナポリの司教レオティオスによって書かれた彼の伝記によると、聖ヨハネス・ミロスティヴィオスは、水曜日と金曜日に教会の入り口に座り、望む者は誰でも自由に自分のところに来られるようにし、あらゆる人の悩みを聞き、助け、争いや論争を仲裁するのが習慣であった。　こうして彼は

[2297] ご主人、父。

[2298] 同上。

[2299] ポプリシェ――およそ690サジェンに相当した。

[2300] 北、 アンティオキア総主教は、キリストは二つの本性から生まれたものの、二つの本性に留まっているわけではないと主張した単性論の異端の主要な擁護者の一人であった。なぜなら、神である「御言葉」の受肉に際し、キリストが受け入れた人間の本性はあらゆる固有の実在性を失い、神性とは概念上のみ区別されるからである。

[2301] ヨハネス・ミロスティヴィ（†617年）――アレクサンドリア総主教。キプロス島の貴族の息子であった。家族を失った後、彼は禁欲的な生活と貧しい人々への奉仕に身を捧げた。彼は修道士でも聖職者でもなかったが、民衆の要望により総主教に選出された。　総主教に就任すると、彼はまずアレクサンドリアのすべての乞食を数え上げ、全財産を彼らに配ったほか、主の聖墓へ惜しみない施しを送り、困窮者に自身の邸宅で宿を提供し、捕虜を身代金で買い戻した。　アレクサンドリアの住民がペルシア軍の侵攻を恐れ、散り散りになり始めたとき、ヨハネスは都市を守るための軍隊を要請するため、コンスタンティノープルへと向かった。しかし、その途上で死去した（617年）。彼の記念日は11月12日に祝われる。

人々の間に平和をもたらした。しかし、彼がそうして座っている時に誰も訪ねて来ず、誰も彼に何も求めなかった場合、彼は悲しげに立ち上がり、涙を流しながら自宅へと帰り、こう言ったという。

「今日、謙虚なヨハネは何も見つけられなかった。自分の罪のために、神に捧げるものが何一つなかった。」

そこで、彼の友人である（ここで言及されている）至福のソフロニオスは、彼を慰めながらこう言った。

「本当に、父よ、あなたは今日こそ喜ぶべきです。なぜなら、あなたの羊たちは、神の天使たちのように、争いや不和もなく平和に暮らしているからです。」

このことから、この至聖なる総主教が、聖ソフロニオスとその師をいかに尊敬し、愛していたかがうかがえる。

この二人の聖人は、自分にとって有益なことを見たり聞いたりするたびに、毎日何か新しいことを学ぼうと努めていた。そして、ヨハネスが語るように、彼らには次のような出来事が起こった。

私は、私の主である賢明なソフロニオスと共に、ステファノス・フィロソフォスの家へ向かった。その家は、大テトラフィロスの東に、総主教エウロギオスによって建てられた至聖なる聖母マリア教会への道沿いにあった。時は夕方だった。私たちが哲学者宅に到着し、門を叩くと、門番はこう言った。

「ご主人様はまだお休み中です。少しお待ちください。」そこで私は、私の師ソフロニオスにこう言いました。

「テトラフィルへ行こう。そこでしばらく過ごそう。」

この場所はアレクサンドリアの住民から敬われている。伝えられるところによると、アレクサンドロス大王がエジプトから聖預言者エレミヤの聖遺物を持ち帰り、自身の名を冠してこの都市を築いた際に、そこに安置したというのだ。そこへ着くと、三人の盲人以外には誰もいなかったので、私たちは黙って彼らのそばに本を広げて座った。彼らが互いに話しているうちに、一人の盲人がもう一人にこう言った。

「友よ、どうして目が見えなくなったんだ？」

すると、もう一人がこう答えた。

「私は若い頃、船乗りでした。アフリカから航海していた時、海をずっと見続けていたせいで、目に白内障ができ、失明してしまったのです。」

続いて、もう一人の盲人が、どうやって目が見えなくなったのかという問いにこう答えた。

「僕はガラス工場で働いていたんだ。ある日、不注意でガラスを扱っていた時に火傷をしてしまい、その火のせいで視力を失ってしまったんだ。」

自分の失明の原因を語った後、二人の盲人は三人目に、どうやって失明したのかと尋ねた。

すると、その人はこう答えた。

– 若い頃、私は働くのが嫌いで、怠けるのが好きだった。しかし、権力欲が強く、食べるものにも事欠いていたため、盗みを働き、多くの悪事を働くようになった。ある日、高価な服を着た死体を葬るために運んでいるのを見かけた。私は、その死体をどこに埋葬するのか見ようと、棺を担ぐ人々の後をついていった。　その死者は聖ヨハネ教会のそばに埋葬された。夜になると、私は納骨堂の扉を開け、中に入り、死者の身からすべてを剥ぎ取り、シャツ一枚だけを残した。納骨堂から出てくると、心の中で邪悪な考えが囁いた。「戻って、そのシャツも持って行け。あれはとても良いものだ」。　そこで私は、この忌まわしい身ながら、シャツも脱がせて死者を裸にしようと引き返した。すると、死者が起き上がり、私の前に座り、両手を上げ、その指で私の顔を引っかきむしり、両目をえぐり出した。その時、私は、この忌まわしい身ながら、そのような災難と痛みに耐えかねて、かろうじて納骨堂から這い出した。こうして私は失明したのだ！

これを聞いて、私の主であるソフロニオス様が私を手招きし、私たちは盲人たちの元を離れた。そしてソフロニオスは私にこう言った。

「確かに、ヨハネ神父、今日はこれ以上学ぶべきことはありません。誰も悪を行って神から逃れることはできない、という十分に有益なことを学びました。」

ここから、ヨハネとソフロニオスというこの二人の聖人が、いかに日々の益を重んじていたかが明らかである。「今日、これ以上学ぶべきことはない。今日、私たちは十分に有益なことを学んだ」という言葉から、彼らが毎日、何らかの益を得ようと努めていたことがうかがえる。

アレクサンドリアに滞在していた際、　アレクサンドリアで、至福のソフロニオスは、自身の目の治癒への感謝として、聖殉教者キュロスとヨハネの奇跡を記述した。というのも、彼の目が病に倒れた際、祈りと信仰をもって、無償で治療を行う聖なる医師たちである彼らに助けを求めたところ、アレクサンドリアにある彼らの教会で、願っていた治癒を受けたからである。　それゆえ、彼は彼らを熱心に崇敬した。数年後、アレクサンドリアのあるエジプトにもペルシャ軍の侵攻の脅威が迫り、至福の父ヨハネとソフロニオスもそこから逃れることを余儀なくされた。また、至聖なる総主教ヨハネ・ミロスティヴィイも、野蛮人への恐怖から逃亡を余儀なくされた。　彼らは彼と共にコンスタンティノープルへ向かい、自分たちと離れることを望まなかったその方と共にいたいと願い、船に乗り込んだ。道中、至聖なる総主教は病に倒れ、故郷のアルサフンテで息を引き取った。その素晴らしい生涯と数え切れないほどの慈愛に対し、至賢なるソフロニオスは称賛に満ちた追悼の言葉を捧げた。　総主教の埋葬後、彼は師であるヨハネスと、彼らの周りに集まった十二人ほどの兄弟たちと共に、古代ローマへと向かった。ローマで数年を過ごした後、ソフロニオスの師である尊者ヨハネスは、すでに高齢となっていたが、主のもとへ帰った。　臨終の際、彼は最愛の弟子であり霊の子であるソフロニオス至福者に、自身の遺体をローマに埋葬せず、木製の棺に納めてシナイ山へ運ぶよう遺言した。　もし野蛮人の襲撃を恐れてシナイ山へ到達できない場合は、聖テオドシオス大聖人のキノヴィア（修道院）[2302] にその遺骨を埋葬するよう命じた。そこは、聖ヨハネが当初修道士として過ごした場所であった。ソフロニオスはその通りにした。　旧約聖書のヨセフが、ヤコブの遺体をエジプトから先祖の埋葬地へと運び出したように（創世記50:12–13）、彼はローマ[2303] から、自身の霊的父である聖ヨハネの遺体を運び出し、兄弟たちと共にギリシャの地へと船出した。 そしてアスカロン[2304] に到着し、野蛮人の支配下にあるためシナイ山[2305] まで徒歩で到達することが不可能であることを知ると、ペルシャ軍に占領されていたエルサレムへ向かい、テオドシウスの修道院に自身の霊的父の遺体を埋葬し、自身も兄弟たちと共にエルサレムに留まって暮らすことにした。　当時、その地の総主教座には、尊い十字架と共にペルシャに捕虜となっていたザカリア総主教に代わって、モデストが就いていた。 聖ソフロニオスがローマからパレスチナに到着して間もなく、神は捕囚から聖なる 十字架とザカリア総主教をエルサレムへ帰還させることをお許しになった。その経緯は次の通りである。

2302　テオドシウス大帝——379年から395年までローマ皇帝を務めた。彼の治世において、キリスト教はローマ帝国で完全に確立された。

2303　ローマ——ローマ国家（現在のイタリア王国）の首都は、イタリア中部、ティブレ川が海に注ぐ河口の両岸に位置している。

2304　アスカロン——ペリシテ人の五つの主要都市の一つ（士師記1:18）。ヘロデ大王は、自身の故郷としてこの街を華やかに装飾した。中世においても軍事港として機能していたが、十字軍遠征（1191年）の際に破壊された。

2305　シナイ山は、実際には花崗岩の岩盤からなる山群であり、険しく荒々しい谷に切り裂かれ、それらに囲まれている。現在、アラブ人からはトゥール山、あるいはジェベル・トゥール・シナと呼ばれており、シナイ半島を形成する黒海の有名な湾のほぼ中央に位置している。 この半島は3つの山脈から構成されている。イスラエルの民が神と契約を結び、神から律法の戒めを受けたシナイ山そのものは、中央の山脈の南東端にある最も高い山頂であり、一方、北西端にある最も低い山頂はホリブ山である。

総督ヘラクレイオスは、迫害者であったフォカス王を殺害し[2306]　、自らギリシャの王位に就くと[2307]、ペルシアとの戦争を開始し、ホズロイの軍勢に対して数々の勝利を収め、7年間にわたりその都市を支配した。　その後、ホズロイの息子シロエスが父を殺害して自らペルシア王となり、ギリシャ王イラクリウスとの和解を図った。しかし、イラクリウス王は和平の第一条件として、ペルシア王がエルサレムをギリシャ人に譲渡し、聖十字架の尊い木と、それに伴うザカリア総主教を返還することを求めた。　この要求は履行された。14年間の捕囚を経て、聖なる十字架の木は大きな栄誉をもってペルシアから返還され、ヘラクレイオス王自らがその十字架を肩に担いで聖都へと運んだ（そのことは9月14日の記述にある通りである）。至聖なるザカリア総主教は再びその座に就いた。 数年後、主の命を与える聖十字架の尊い木は、同じヘラクレイオス帝によってエルサレムからコンスタンティノープルへ移された。これは、このほどほどに偉大なキリスト教の至宝が、再び敵によって奪われることのないようにするためであった。実際、その後、エルサレムは再び敵に占領されたが、それについては後述する。　一方、総主教ザカリアは、捕囚からの帰還後、長くその座に留まることはなく、主のもとへ帰った。後任として再びモデストが総主教の座に就いたが、在任期間はわずか2年であった。モデストの死後、エルサレムの総主教には聖ソフロニオスが選出された。　この頃、モノフェリテ派、すなわち「単一意志説」という異端が現れた。彼らは、キリストの二つの本性、すなわち神性および人性において、一つの意志と一つの作用のみを認めるものであり、あたかも各本性が、それ自体に固有の作用や意志を持たないかのように主張する。　このような教義を信奉する者たちは、キリストを両性質において不完全であると見なすことで、キリストを冒涜している。この異端については、1月21日のマクシムス・コンフェッサーの伝記に詳しく記されている。　特にこの異端を支持し広めたのはアレクサンドリア総主教であり、彼は地方公会議を招集して、そのように信じるよう命じた。彼に続いたのはコンスタンティノープル総主教セルギオスであり、その後にピロスや他の者たちが続いた。当時、この異端を受け入れなかった多くの人々が迫害を受けた。　エルサレムの至聖なる総主教聖ソフロニオスは、この異端に強く反対し、自ら地方公会議を招集して、この「一意論者」たちの異端を破門し、その公会議の決議文を各地に送付した。それらは後に第6回全地公会議で朗読され、聖なる教父たちによって承認され、正統な教義として受け入れられた。　また、聖ソフロニオスは、キリストの教会にとって有益な多くの言葉、教訓、賛美歌、そして聖エジプトのマリアなど、いくつかの聖人の伝記も著した。彼女は、天使たちのように荒野で、通常の人間の寿命よりも長く生きたのである[2308]。 彼は神の教会を立派に牧し、異端者たちの口を封じ、彼らを狼のように、御言葉の群れから遠く追い払った。

[2306] ビザンツ帝国のフォカス皇帝は、602年から610年まで在位した。

[2307] ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

[2308] 聖ソフロニオスには多数の著作が残されており、彼は一流の神学者・教義学者の一人として認められている。 三位一体や神の御言葉の受肉に関する教義を説き、かつ（ネストリウス派に反して）位格の一致と（エウティキウス派に反して）二つの本性の区別を立証した公会議書簡に加え、彼の次の言葉も注目に値する： 1) 救い主の洗礼に関する説教――イエス・キリストにおける二つの本性の擁護、およびこれに伴う二つの働きと意志に関する教義；2) 十字架に関する二つの説教；そのうちの二つ目では、四旬節中の断食と十字架礼拝の祝日に関する教義が述べられている； 3) バシレイオス大帝による「θυσις」と「ουσια」の解釈に関する弁明；4) 聖堂奉献祭に関する説教；5) 洗礼者ヨハネに関する説教；6) 聖マリア・エジプトの賛美の説教。この原典からは、第7回全地公会議の議事録に引用されている箇所が引用されている；7) 殉教者キュロスとヨハネの生涯に関する物語；8) 「聖体礼儀の解説」、神学的に極めて優れた著作の一つ；9) 「三歌集」：大斎の初日から始まり、昇天祭で終わる；10) トロパリ、あるいはキリスト降誕祭の聖務日課における自唱式スティヒラ、完全な聖務日課の式次第付き；11) 聖金曜日（大金曜日）の聖務日課とスティヒラ（現在の形式とは完全に一致しない）； 12) 主顕節の日の聖水祝福のためのスティヒラ；13) いくつかの詩作；14) 最後に、聖ソフロニオスは修道司祭として、「聖サヴァ修道院の規則」を再検討し、修正を行った。

その後、再び神の御許しにより、シリアとパレスチナへの蛮族の侵攻が起こったが、今回はペルシャ人ではなく、ムスリムであった。[2309] 彼らはまずダマスカスを占領し、その後、神の都エルサレムを包囲し、2年後にこれを占領した。 シリアのギリシャ軍が彼らに打ち破られ、軍司令官セルギウスが殺害されると、至聖なるソフロニオス総主教はパレスチナのキリスト教徒たちと共に聖都に籠城した。 包囲中のキリスト降誕の日に民に向けて語られた彼の言葉が今に伝わっている。その中で、彼はまるで新たなエレミヤのように、人々の罪ゆえに神が許された聖地の荒廃と廃墟化を嘆いている。 とりわけ、彼は、ベツレヘムがすでにアガリア人の手に落ちていたため、キリストの降誕の日を慣例通りにベツレヘムで祝うことができなかったことを深く嘆いている。包囲の2年目の終わり、極限状態に追い込まれたキリスト教徒たちは、敵に降伏し、城門を開くことを余儀なくされた。 しかしその前に、至聖なるソフロニオス総主教は、 のアガリア人の首長オマールに対し、和平条件を送った。その第一条は、キリスト教の信仰と神の聖なる教会に対して、いかなる暴力や侮辱も加えないことだった。オマールは、この条件およびその他の条件を履行することを約束した。条約が締結されると、キリスト教徒たちはアガリア人の首長に城門を開いた。 しかし、彼は偽善的で狡猾な男であり、外見は羊のように柔和で謙虚を装いながら、内面は貪欲な狼であった。ラクダの毛でできたボロボロの服を身にまとい、徒歩で城内に入り、そこで神を冒涜する祈りを捧げようと、ソロモンの教会がどこにあるかと尋ねた。 至聖なるソフロニオスは彼を迎えに出て、その偽善的な姿を見て、こう言った。

「見よ、預言者ダビデが予言した、聖なる地における荒廃の忌まわしさが、今まさに起こるのだ！」

そして、聖人はすべてのキリスト教徒と共に激しく泣き、その公爵に対し、ぼろ服を脱ぎ、公爵にふさわしい衣装を身にまとうよう説得した。こうして聖なる都はアガリア人によって占領され、キリスト教は過酷な奴隷制の下で弾圧されることとなった。 しかし、この不敬虔なアガリア人の公は、至聖なるソフロニオス総主教に約束した和平の条件を守らず、エルサレムのキリスト教徒たちに多くの災いをもたらし始めた。 この光景を目の当たりにした聖ソフロニオスは絶えず泣き崩れ、キリスト教徒たちの不幸や、聖地を穢す荒廃の忌まわしさをこれ以上見ずに済むよう、神に自らの魂をこの世から召し取られるよう祈り求めた――そしてその祈りは聞き入れられ、 まもなくその悲痛な生涯を終え、[2310] 、この地上の涙のエルサレムから、天の喜びに満ちたエルサレムへと移り、私たちの主イエス・キリストを喜び祝う者たちの住まいに至った。主なるキリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

聖なる殉教者ピオニオス、スミルナの司祭、および彼と共に殉教した者たちの

記念日3月11日

使徒は聖人たちの記念を尊ぶよう命じています。*「あなたがたの導き手たち、すなわち、あなたがたに神の御言葉を宣べ伝えた人々を、覚えていなさい」*（ヘブライ人への手紙13:7）。これは、彼らの信仰、生涯、そして徳ある最期を思い起こすことで、私たちが彼らに倣おうとするためです。同様に、聖殉教者ピオニオスの記念も、私たちが敬うべきものです。なぜなら、彼は世にいた頃、多くの人々を悪魔の誘惑から神のもとへと導いたからです。彼は使徒のような人物であり、殉教の冠を

[2309] アラブ人。

[2310] スミルナ――古代に名高いイオニアの商業都市で、エーゲ海（あるいはエーゲ諸島）の東岸に位置する。スミルナの教会は、聖使徒ヨハネ・神学者によって設立された。スミルナは現在トルコに属しているが、今なおそこではキリスト教の信仰が保たれ、繁栄している。

受けて主のもとへ召されたとき、私たちに徳の模範を残し、今日に至るまで彼の教えを記憶にとどめるようにしてくれたのです。 さて、彼の苦難の物語は次のように始まった。

第六の月の二十三日（すなわち、九月から数えて六番目の月である二月）、スミルナの聖司教ポリカルプ聖殉教者の記念日が祝われるその日、多くのユダヤ人が住んでいたスミルナ[2311] の町で、不敬虔なギリシア人らによって、長老ピオニオス、 サヴィナ（敬虔の擁護者）、アスクレピアド、マケドニア、そして大聖堂教会の長老リンが、不敬虔なギリシャ人たちに捕らえられた。当時、デキウス帝の治世下でキリスト教徒への迫害が行われていた[2312] 。ピオニオスは、その日よりも前に、彼らが聖ポリカルポの祝日に捕らえられることを知っていた。 そこで、サヴィナとアスクレピアドと共に断食を行い、三本の編み込まれた鎖を取り、それを自身とサヴィナ、そしてアスクレピアドに掛け、家に留まって、彼らが捕らえに来るのを待っていた。

聖ポリカルプの記念日の当日、彼らが祈りの後に少しのパンと水を口にしたとき、偶像への生贄を執り行う者であるポレモンが兵士たちを連れてやって来た。彼はキリスト教徒を探し出し、忌まわしい偶像への生贄を捧げさせるために、ピオニウスにこう言った。

「王の勅令をご存じか？ あなたがたは神々に犠牲を捧げるよう命じられていることを知っているか？」ピオニオスは答えた。

「我々は、唯一の神のみに礼拝せよと命じられている、我らの神の戒めを知っています。」

「集会へ行きなさい」とポレモンは言った。「そこでは、たとえ意に反しても、従わざるを得なくなるだろう」。サヴィナとアスクレピアドはこう答えた。

「我らは生ける神に従う。」

そしてポレモンは彼らを強制することなく連れて行った。民衆は、彼らが自発的に足枷を背負っているのを見て、まるで前代未聞の奇跡を目撃したかのように、互いに押し合いへし合いしながら彼らの後を追った。

聖人たちが都市の長たちのもとへ集まりにやって来ると、数え切れないほどのギリシャ人の群衆、そしてそれ以上に多くのユダヤ人が、入り口や上階の部屋を埋め尽くしていた。聖人たちを中央に立たせると、ポレモンは言った。

「ピオニオスよ！ 他の者たちが従ったように、王の命令に従い、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、あなたがたは残酷な拷問を受けることはないだろう。」

ピオニオスは手を差し伸べ、明るい表情で民衆に語りかけた。

「スミルナの住民たちよ、この街の美しさや、ここにホメロスが住んでいたことを誇りに思っているあなた方[2313] 、そしてここにいらっしゃるユダヤ人の皆さん、私がこれから述べるわずかな言葉に耳を傾けてください。 聞くところによると、あなたがたは、私たちの一部がここに来たことを笑い、喜んでいるそうだ。あなたがたは、自らの意志ではなく、強制されて偶像に犠牲を捧げることという罪を、笑いごとや遊びと見なしている。しかし、あなたがたギリシャ人は、人間の破滅を喜ぶのは良くない、と説く師であるホメロスの言葉に耳を傾けるべきだ。 また、ユダヤ人の皆さん、モーセはこう命じています。*「もし敵のロバが荷物の重みで倒れているのを見かけたら、それを放置してはならない。一緒に荷を下ろしなさい」*（出エジプト記23:5）。

また、あなたがたはソロモンの言葉にも耳を傾けるべきである。*「敵が倒れたとき、喜んではならない。敵がつまずいたとき、あなたの心は喜びに沸いてはならない」*（箴言24:17）。 そして私も、師の教えに従い、その言葉を破るよりは死を選ぶことを選び、かつて自ら学び、その後他の人々にも教えたその戒めから決して逸脱しないよう、全力を尽くしている。ユダヤ人たちよ、なぜ私たち

[2311] デキウス、ローマ皇帝、在位は249年から251年まで。

[2312] 641年または644年

[2313] ホメロス――ギリシャの詩人。伝承によれば、『イリアス』と『オデュッセイア』を著した。出生地は不明であるが、スミルナをはじめとする多くの都市が、彼の生誕地であるという栄誉を自都市のものとして主張していた。

を嘲笑うのか。　たとえ私たちが、あなたがたが言うように敵だとしても、私たちは人間です。あなたがたは、私たちが真実を語ることであなたがたを傷つけていると言いますが、教えてください。私たちが誰を傷つけ、誰を迫害し、誰に偶像への礼拝を強要したのでしょうか？ あなたがたは、今、人を恐れて神の戒めに背き、偶像に礼拝している者たちの罪と、自分たちの罪とを同列に考えてはいないでしょうか？ しかし、誰があなた方を強いて、ベエルフェゴルに仕えさせたり[2314]、死者の供え物を食べさせたり[2315]、異邦人の娘たちを嘲笑させたり、息子や娘を悪魔に生贄として捧げさせたり、神に不平を言わせたり、モーセを中傷させたり、再びエジプトへ戻ろうと企てさせたりしたのでしょうか？　他の行いについては言うまでもないが、それにもかかわらず、あなたがたは「誰も私たちを惑わすことはできない」とさえ言っている。あなたがたは、自分たちの書物――『出エジプト記』、『士師記』、『列王記』など――を読んだことがないのか。そこには、あなたがた自身の罪が明らかに記されているではないか。　あなたがたは、強制ではなく自らの意志で偶像に帰依した私たちのうちの何人かを指摘し、そのごく少数の者たちのせいで、すべてのキリスト教徒を非難し、断罪している。しかし、ユダヤ人たちよ、この現世について考えてみてほしい。それは、地面に大きな山が積まれた脱穀場のようなものだ――それは何だろうか？ もみ殻か、それとも小麦か？ 働き人が鍬でふるい分けに来ると、軽い雑草は風で簡単に吹き飛ばされ、小麦は地面に残ります。海に投げ込まれた網を見てください。網にかかり引き上げられたものが、すべて良いものなのでしょうか？ いいえ。この世の生活も同様です。では、あなたがたは私たちに、有罪者として苦しむことを望むのでしょうか、それとも無実の者として苦しむことを望むのでしょうか？　もし有罪者としてなら、あなた自身の行いがあなたの不正を暴くとき、あなたも同様に苦しむことになるでしょう。もし無実者としてなら、義人が苦しむ中で、不義なあなた方に救いの希望などあるでしょうか。*「義人でさえかろうじて救われるなら、不義で罪深い者はどこに現れるというのか？」*（ペトロの手紙一 4:18）。世の裁きが近づいており、その前兆は明らかである。私はユダヤ人の国々をすべて巡り、ヨルダン川を渡り、今なお、そこに住み、旅人に対して殺人や多くの悪行を犯す人々の罪ゆえに、神の怒りのしるしを背負い続けている地を見た。　私はそこから立ち上る煙、火に焦げ、実を全く結ばず、水分を奪われた野原や畑を見た。また、死海（すなわち、樹脂を生成するアスファルトの湖）や、神の怒りによってその性質を失った水も見た。　その水は動物に飲み物を与えることも、人間の体をその中に留めることもできず、そこに投げ込まれたものはすべて、即座に外に吐き出されてしまう。しかし、なぜ私はこれほど遠い場所のことを思い出すのだろうか！ リディアのデカポリス[2316]が、火によって焼き尽くされ、今なお不義な者たちへの懲罰として焼け焦げたまま横たわっているのをご覧になるでしょう……エトナ山の噴火やシチリア島の沈没[2317]を思い出してください。もしそれがあなたにとって遠い話に思えるなら、　から地中から湧き出る温かい水について考えてみてください。なぜそれらは温まり、熱くなるのでしょうか？　それは、地の中で罪人のために用意された火によるものではないでしょうか。ここから、私たちはこの世に裁きが下され、神の御言葉である私たちの主イエス・キリストの受肉を通じて、罪人に対して神から火による懲罰が下されることを知ります。それゆえ、私たちはギリシャの神々を崇拝せず、金の偶像を拝むことも望みません。

聖ピオニオスはさらに語り続け、ポレモンや都市の指導者たち、そして民衆全員が深い沈黙の中でその言葉に耳を傾けていた。その後、一部の市民たちがポレモンと共にピオニオスに懇願し始めた。

[2314] ヴェエルフェゴル、あるいはヴァールフェゴル――シロ・フェニキア（モアブ）の神であり、その崇拝は不道徳なものであった。

[2315] ここでは、当然ながら、死体を用いた魔術や呪術を指している。

[2316] リディア――小アジアの州。

[2317] シチリア――地中海に浮かぶ大きな島の一つで、現在はイタリア王国の一部である。

「聞いてくれ、ピオニオスよ。私たちはあなたの善良な人柄と柔和さを愛しているのだから、あなたが生き続けてほしいのだ。だって、生きて太陽の光を見るのは、本当に素晴らしく、心地よいことではないか！」

聖人はこう答えた。

「私としても、この現世の生活は心地よいものですが、私たちキリスト教徒が望むあの生活には比べものになりません。この光は明るく心地よい、それは認めますが、私たちが目にすると願っている真の光は、さらに喜びに満ち、心地よいものです。」　肉眼で見えるこれらすべては素晴らしいものです。私たちは神の創造物を非難したり憎んだりすることはありません。しかし、目に見えない別のものがあり、それは真にさらに美しく、私たちはそれを目に見えるすべてのものよりも高く評価しているのです。

アレクサンドルという名の、狡猾な不敬者がある時、こう言った。

「ピオニオスよ、私の話を聞きなさい！」聖人は彼にこう答えた。

「むしろ、お前が私の話を聞くべきだ。なぜなら、お前が知っていることはすべて私も知っているが、私が知っていることをお前は知らないからだ。」するとアレクサンドルは、聖人を罵りながらこう言った。

「その鎖は、一体何のためにつけているんだ？」

「それは」と聖人は答えた。「あなたがたが、私たちがあなたがたの偶像を礼拝しに行くのだと誤解しないようにするためであり、私たちが神のために牢獄へと向かい、死を迎えるのだということを、あなたがたに正しく知ってもらうためである。」

アレクサンドロスはその後も長い間、さまざまな誘惑をもってピオニオスを説得しようとしたが、何の成果も得られず、ついにこう言った。

「彼らが生き延びるつもりがないのなら、これ以上言葉を費やす必要はない。」

民衆は、ピオニオスを皆の耳に届くような目立つ場所に立たせ、その言葉を聞かせたいと望んでいた。しかし、ポレモンは、民衆の間に騒動や様々な憶測が生じるのを恐れ、それを許さなかった。彼はピオニオスに言った。

「もし神々に犠牲を捧げる気がないのなら、せめて神殿には入りなさい。」聖人はこう答えた。

「私が偶像のもとへ行ったところで、彼らに何の益があるというのか？」

「ピオニウスよ、承諾してくれ」とポレモンは繰り返した。

「ああ、もし私が、あなた方全員をキリスト教徒になるよう説得できたらいいのですが！」とピオニオスは反論した。すると彼らは笑いながら言った。

「いや、お願いだから、私たちを生きているうちに火の中で焼かれるようなことにはしないでくれ。」すると聖人は彼らに言った。

「死後に、消えることのない炎の中で永遠に焼かれることの方が、さらにひどいことだ。」

至福のサヴィナは微笑み、ポレモンたちは彼女に言った。

「なぜ笑っているのか？」と。彼女はこう答えた。

「私はキリスト教徒であることを喜んでいるのです。なぜなら、キリストの信仰に堅固な者は、永遠に喜びを得るからです。」不信心者たちは彼女に言った。

「望まないことを強いられたら、その時は笑えなくなるだろう。神々に拝礼しない女たちは、淫乱の館へ連れ去られるのだ。」

すると彼女はこう答えた。

「聖なる、まことの神が、私をお守りくださるでしょう。」

その後、聖人たちの名前と、彼らがキリストを告白し、偶像を拒絶した際の言葉が記録され始めた。サヴィナの名前を書き留めようとしたとき、聖ピオニオスは彼女に、本名を明かさず、テオド

ティエという名で名乗るよう静かに告げた。これは、彼女の行動が女主人に知られないようにするためであった。　実は、聖サヴィナは、ある有名なギリシャ人女性の奴隷であった。その女性は、数年前、ゴルディアヌス帝の治世下[2318]において、自分の である奴隷、祝福されたサヴィナをキリストから引き離すことができなかったため、彼女を縛ったまま荒野の山々へ追放し、そこで信者たちが密かに彼女に食料を届けていた。　その後、聖ピオニオスの多大な尽力により、彼女は束縛と女主人の奴隷状態から解放された。聖ピオニオスは、女主人が何らかの形で彼女の名前を知り、再び彼女を呼び戻そうとするのではないかと恐れた。そのため、彼は聖サヴィナに「テオドティア」と名乗るよう命じた。ポレモンが彼女の名前を尋ねると、彼女はこう答えた。

「私の名前はテオドティアです。」

「あなたはキリスト教徒ですか？」とポレモンは尋ねた。

すると聖女はこう答えた。

「はい、キリスト教徒です。」

彼女の答えは、ピオニオスやアスクレピアドスの答えと同様に記録された。ポレモンはさらに尋ねた。

「あなたはどの神を崇拝しているのですか？」聖女はこう答えた：

– 天と地、そして私たちすべてを創造された全能の神。その御言葉によって、清き無垢の聖母マリアから受肉された、私たちの主イエス・キリストを通して、私たちに知らされた神。

聖人たちの名前を書き留めると、彼らを牢獄へと連行し、その後に民衆全員が従った。

ある人々は聖ピオニオスについてこう語った。

「見てください。彼はいつも青白かったのに、今日はなんて血色がよいことでしょう！」

また、他の人々は叫んだ。

「神々に犠牲を捧げる気がないのなら、こいつらを苦しめるべきだ。」

聖ピオニオスはこう答えた。

「妨げる者たちを苦しめなさい！私たちには護衛もいないし、兵士も守ってくれない。私たちはあなたたちの手に委ねられているのだから、私たちを苦しめてください！」

誰かが聖アスクレピアドを指さして言った。

「こいつは神々に生贄を捧げようとしている。」

「嘘だ」と聖ピオニオスは答えた。「我々の中に、そんなことをする者は一人もいない。」

一方、他の人々はキリストから背いた者たちのことを思い出し、彼らの名前を挙げてこう言った。

「あの者やあの者は生贄を捧げたのに、あなたたちはそうしないのか？」

聖ピオニオスはこう答えた。

「人それぞれに意志がある。他人のことなど、私に何の関係がある？　私はピオニオだ。」

民衆は聖ピオニオスとその仲間たちに憤りを露わにした。彼らが牢獄にたどり着くや否や、民衆は彼らを打ちのめそうとした。

牢獄に入ると、そこにはキリストのために鎖で縛られていた大聖堂の司祭リナと、カリーナ村出身のマケドニアという名の女性がいた。多くの信者たちが彼らを訪ね、必要な物を持ってきていたが、彼らはそれを受け取ろうとはせず、牢番たちに配っていた。　ギリシャ人の中にも聖徒たちを訪ね、彼らを自分たちの不敬虔な信仰へと改宗させようと試みる者たちがいたが、彼らから断固とした答えを聞くと、驚きながら立ち去っていった。　また、かつてはキリスト教徒であったが、意に反して信仰を捨てざるを得なかった者たちも、キリストの囚人たちの元を訪れた。拷問への恐怖が彼らを偶像への生贄を捧げるように追い込んだのである。彼らは牢獄の中で聖人たちの前で、何時間も、何

[2318] ゴルディアヌスは、238年に在位した（在位期間はわずか36日間）ローマ皇帝である。

日も、苦々しく泣き続けた。　聖ピオニオスもまた、彼らのために、とりわけ善良で誠実な生活を送っていたにもかかわらず、苦痛を恐れて偶像に犠牲を捧げてしまった者たちのために、痛切に泣いた。彼は泣きながらこう語った。

「私は心の中で新たな苦しみを受けている。豚たちが教会の真珠を踏みにじっているのを見る時、私の魂は引き裂かれるようだ[2319]、天の星々が蛇の尾によって地上に引きずり落とされるのを見る時（黙示録12:4）、また、神の右の手によって植えられたぶどうが、野生のイノシシに食い荒らされ、通りすがりの者たちに奪い取られるのを見るたびに。わが子らよ、キリストが再びあなたがたの中に宿るまで、私はあなたがたを憐れむ。天のパンで育てられた愛しい教え子たちよ、なぜあなたがたは罪の道に迷い込んだのか。　今や、不法な長老たちが貞潔なスザンナ、すなわちキリストの教会を汚した。今やアマンは勝利を誇り、エステルはその一族すべてと共に恥じ入っている。今や飢饉が訪れている。それはパンや水の不足ではなく、神の言葉の不足である。今や、福音の乙女たちは皆、うたた寝をして眠り込んでいる。　主の御言葉が成就した。「人の子が来るとき、地上に信仰を見いだせるだろうか」（ルカ18:8）。また、主の別の御言葉もある。「兄弟が兄弟を死に渡す」（ルカ21:16）。今、誰もが隣人を裏切っているのを、、私は耳にしている。まことに、サタンは私たちを小麦のようにふるいにかけることを求めたが、神の言葉という火の鍬が、その脱穀場を清めるであろう。塩はその力を失い、外に掃き出され、人々に踏みつけられている。　しかし、子供たちよ、主が力尽きたなどとは誰も思ってはならない。力尽きたのは主ではなく、私たちの方である。なぜなら、主はこう言われるからだ。「わたしの救う手は、果たして力尽きたというのか。あるいは、あなたがたの声に耳を傾けるわたしの耳は、果たして重くなったというのか。」しかし、あなたがたの罪が、あなたがたをあなたがたの神から遠ざけてしまったのである。　兄弟たちよ、私たちは罪を犯し、主の戒めに背き、不法を行い、神を怒らせ、隣人を悲しませました。私たちは互いに非難し合い、嘘をつき、互いに中傷し合い、互いに食い荒らしました。それなのに、私たちの正義はパリサイ人や律法学者たちの正義よりも高くなければならなかったのです。　また、ユダヤ人たちがあなたがたのうちの何人かを自分たちの集会に招いていると聞いています。さらに悪い罠に陥ったり、赦されない罪、すなわち聖霊への冒涜に陥ったりしないよう、用心してください。ユダヤ人たちと共に、その手が血に染まったソドムの君主やゴモラの民のようにならないでください。　私たちは預言者を殺したこともなければ、キリストを裏切ったことも、十字架につけたこともありません。これ以上多くを語る必要はありません！以前、私が何度も話したことを思い出してください。ユダヤ人たちが、キリストは単なる人間であり、死すべき者として殺されたと主張していることは、あなたがたもよくご存知でしょう。　しかし、彼らにこう言わせてほしい。もし彼が単なる死すべき人間であったなら、どうして全世界が彼の弟子たちで満たされたのか。どうしてこれほど多くの人々が彼の御名のために残酷に苦しんでいるのか。どうして単なる死すべき人間の御名によって、彼の死後これほど長い年月が経った今も、悪霊が追い出され、これからも世の終わりまで追い出され続けるのか。　また、信者の教会では、その全能の御名によって、他にも多くの奇跡が行われている。あの忌まわしいユダヤ人たちは、キリスト、すなわち私たちの主が、ご自身の御心によって苦難を受け、私たちのために死に、三日目に栄光のうちに復活されたことを理解していない。　しかし、不法な者たちは、あたかもキリストが魔術師であり、魔術の力によって死者の中から復活したかのように語っている。それならば、彼らに、キリストについてそう述べている彼らの聖書、あるいは私たちの聖書の箇所を、あるいはいつかの義人がそう言ったことがあるのか、示させてみよ。それが嘘であり、そのような嘘を語る者たちが最も卑劣な不法者たちであることは、周知の事実ではないのか？　なぜ、そのような者たちが、義人よりも信じられるのでしょうか。私は幼い頃から、彼らのこうした偽りの言葉を耳にしてきました。聖書には、サウルが魔女のもとを訪れ、預言者サムエルを死者の世界から呼び出すよう求めたことが

[2319] すなわち、キリストの教え（マタイ7:6）

記されている。その女は魔術を行い、サウルは長い衣をまとった老人が地から現れるのを見て、それがサムエルであると悟り、彼に何を望んでいるのか尋ねた。　さて、この魔女は果たして本当にサムエルをよみがえらせることができたのだろうか、それともできなかったのだろうか。もしユダヤ人たちが「できた」と言うならば、彼らは「偽りが真実より強く、魔術が聖さより強い」と認めることになる。なぜなら、聖なる預言者が魔女の命令に逆らうことはできなかったからだ。そう言う者たちは忌まわしく、呪われている。　もし、あの魔女が実際には自分の魔術によって預言者サムエルをよみがえらせることはできなかったと言うならば、彼らは私たちの主キリストについても、彼が魔術の力によって墓からよみがえったとは言い得ない。聖書のこの物語は、次のように説明される。　魔女の中に宿る悪魔が、アブラハムの懐に眠る聖なる預言者の魂を、どうしてこの世に呼び戻すことができたというのか。　何しろ、小さいものは大きいものに対して権威を持たず、悪魔は聖人に命令を下すことはできない。しかし、神から離反した天使たちは、神を見捨てた者たちの言うことを聞き、彼らに仕え、魔術によって彼らを呼び出す。そして、魔術師たちが彼らに求めることは何でも、悪魔たちはそれを果たすのである。魔女が自分に従う悪魔に願い出ると、悪魔は預言者の姿をとったのである。　そして、使徒の言葉（IIコリント11:14）にあるように、サタン自身が光り輝く天使に変装するのであれば、これは驚くべきことではない。それゆえ、その僕たちも神の僕たちの姿をとることができ、同様に反キリストもキリストの姿をとるだろう。　つまり、魔女はサムエルをよみがえらせたのではなく、神から背いたサウルに、サムエルの姿をした悪魔を見せたのである。これについては聖書そのものが証言している。実際、サムエルの姿で現れた者はサウルにこう言っている。「明日、あなたも私と共にいるだろう」。　神の敵であるサウルが、どうして聖なる預言者サムエルと共にいられるだろうか。神から背き、悪魔に従った彼にとって、悪魔と共にいるほうがよほどふさわしいのではないか。偽りのユダヤ人たちは、いかなる魔術によっても、実際に死者をよみがえらせることはできないことを知れ。　また、彼女が魔術によってサムエルをよみがえらせなかったのと同様に、キリストも魔術によってよみがえったのではなく、御自身の神聖な力によって死の力を打ち砕かれたのである。そして、御自身の御心によって苦しみ、死なれたのと同様に、御自身の御心によって、神として、ご自身の権威をもってよみがえられたのである。　もし彼らがこれさえも信じないならば、こう言いなさい。「たとえ私たちが偶像に犠牲を捧げたとしても、それでもなお、あなたたちよりははるかにましです。あなたたちは自らの意志で悪魔に犠牲を捧げましたが、私たちは力によってそうせざるを得なかったのです。」そして、聖ピオニオスは背教者たちを諭して、こう言いました。　「兄弟たちよ、絶望してはなりません。たとえあなたがたが重い罪を犯し、偶像に犠牲を捧げたとしても、心から悔い改め、全心を込めて再びキリスト、すなわちあなたがたの神に立ち返りなさい。神は慈悲深く、悔い改めて御自身のもとに来るすべての人を受け入れる用意があり、あなたがたをも御自身の子供として喜んで迎え入れてくださるでしょう。」

そして彼らは激しく泣きながら自らの罪を悔い改め、再びキリストなる神に立ち返った。

その後、偶像礼拝の主催者であるポレモンと、[2320] の行政官テオフィロスが、軍勢と民衆を率いて牢獄にやって来た。彼らは聖人たちを連れ出し、こう言った。

「ほら、あなた方の司教エウクティモンは、我らの神々にひれ伏し、彼らに犠牲を捧げた。あなた方も彼に従い、同じことをしなさい。もしそうしなければ、神々の神殿で、祭司レピドンとエウクティモンによって裁かれることになるだろう。」

聖ピオニオスはこう答えた：

「もしエウクティモン司教が偶像に犠牲を捧げたとしても、それは彼の意志の問題であり、私たちには何の関係もない！私たちは犠牲を捧げるつもりはない。私たちを裁くべきはアンティパトス

[2320] マグストラート――ローマにおける重要な国家高官で、軍事権と司法権を掌握していた。

[2321] であり、レピドンでも、エウクティモンでも、ましてやあなた方でもない。それなのに、なぜあなた方はアンティパトスの到着を待たずに、その権限を勝手に奪おうとするのか？」

訪れた者たちは、聖徒たちに怒りをぶつけた後、その場を去った。その後、彼らは軍隊と民衆の群れを率いて再び戻り、虚偽の宣言をした。

「アンティパトスが、あなた方をエフェソス[2322] の裁判に連行せよとの命令を下した。」ピオニオスは答えた。

「使者が来れば、私たちを連れて行けばよい。」するとテオフィロスが言った。

「なぜ私を信じないのか？　私は公爵だ。私を信じてよいのだ。」

そして、聖ピオニオスの首に縄をかけ、兵士たちに全員を偶像の神殿へ連行するよう命じた。聖人たちは偶像のもとへ行くことを拒み、大声で叫んだため、兵士たちは全員を無理やり連れ去った。

「我らはキリスト教徒だ。なぜ偶像のもとへ行かなければならないのか。」

しかし、兵士たちは力ずくで聖人たちを引きずり、ピオニオスは首に巻かれた縄で引きずられ、窒息しそうになった。

彼らが広場の真ん中に連れて行かれ、神殿の近くまで来たとき、聖ピオニオスは地面に倒れ込み、「自分はキリスト教徒であり、偶像のいる場所には入りたくない」と述べた。　すると、六人の下僕たちが彼に襲いかかり、手や足、ひざで肋骨を殴りつけた。しかし、彼は彼らの言うことを聞かなかった。そこで彼らは彼を抱え上げ、偶像崇拝の殿堂へと運び込み、忌まわしい祭壇の前に放り投げた。そこには、忌まわしき司教エウクティモンがまだ立ち、偶像への生贄を捧げていた。その後、レピドンは言った。

「なぜ、ピオニオスよ、神々に犠牲を捧げようとしないのか？」

聖人は答えた。

「我々はキリスト教徒だからです。」

「あなたがたはどの神を崇めているのか？」とレピドンは尋ねた。

「あの方です」とピオニオスは答えた。「天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された方です。」レピドンは尋ねた。

「では、誰が十字架にかけられたのですか？」聖人は答えた：

「父なる神が世を救うために遣わされた方が、十字架にかけられたのです。」

諸侯たちは大声で笑い、レピドンは至福のピオニオスを罵倒し、非難し始めた。その後、聖なる殉教者たちに、不信心者たちが通常、生贄の儀式を行う際に用いる冠を無理やり被せ、生贄の肉を食べるよう強要した。　しかし、聖人たちはその冠を砕き、地面に投げ捨て、足で踏みつけ、生贄の肉には唾を吐きかけた。不信心な偶像崇拝者たちは騒ぎ立て、聖人たちを罵倒し、殴打しながら再び牢獄へと連れ戻した。

聖ピオニオスが牢屋の扉をくぐろうとしたとき、ある兵士が何かで彼の頭を激しく殴り、傷を負わせた。すると直ちに、殴った兵士は手に痛みを感じ、全身が病に襲われ、体はかさぶたに覆われて腫れ上がり、息をするのもやっとの状態になった。

その後、アンティパトス・クインティリアヌスがスミルナに到着し、法廷に着席すると、聖ピオニオスを一人呼び出して尋問した。彼を尋問し、従わないことを確認すると、彼は聖ピオニオスを裸のまま吊るし、鉄のフックでその体を削るよう命じた。聖人はこのように拷問されながら、こう言われた。

「なぜ死を急ぐのか？」聖人はこう答えた。

[2321] アンティパトス、すなわちプロコンスル、この地域の統治者。

[2322] エフェソスは、エーゲ海沿岸に位置する小アジアの都市である。古代にはその富と貿易で名高かった。

「私が急いでいるのは死ではなく、永遠の命へと向かうことなのです。」

この拷問の後、聖人は死刑を宣告され、ローマの慣習に従い、次のような死刑判決が読み上げられた。

「自らキリスト教徒であると認めたピオニウスを、我々は十字架にかけ、生きたまま焼き殺すことを命じた。」

磔刑と火刑の場へ連行されると、彼は自ら衣服を脱ぎ、自分の身体を見つめてその清らかさに大いに喜び、それから天を仰ぎ、最後まで汚れのない清らかさを保たせてくださった神に感謝を捧げた。

地面には、彼が磔にされるはずの十字架のような木が横たわっていた。彼は自らその木の上に横たわり、両手を広げ、兵士たちに釘を打たせるままにした。彼がすでに釘付けにされたとき、人々は彼にこう言った。

「聞け、ピオニオスよ、王の命令に従え。我々が釘を抜いてやれば、医師たちが君を治し、君は元気になるだろう。」

しかし、聖人はしばらく沈黙した後、こう言った。

「私は眠りたい。そうすれば、万人の復活の日に、より良い姿で目覚めることができるからだ。」

ピオニオスを釘で打ち付けた後、木を持ち上げてまっすぐに立て、下端を地面にしっかりと埋め込み、周囲に薪を積み上げて火をつけた。　激しい炎が聖人の四方を取り囲んだが、彼は目を閉じて心の中で神に祈り続け、燃え尽きることはなかった。目を閉じた彼を見て、皆は彼がすでに死んだと思った。しかし、しばらくして炎が少しずつ収まり始めた頃、彼は心の奥底で祈りを捧げ終えると、目を開けた。

人々は、あのような炎の中で彼がまだ生きていることに大いに驚いた。その後、彼は明るい表情で祈りの最後に「アーメン」と唱え、「主よ、私の霊をお受けください」と付け加えると、息を引き取った。

火は消え、彼の遺体は全く無傷であり、頭髪の毛一本さえも焼け落ちていなかった。その顔は明るく、神の恵みに満ちて輝いていた。それは、天の喜びに入り、キリストの右の手から冠を受け取った彼の聖なる魂の喜びのしるしであった。

これは、デキウス帝の治世[2323] 、スミルナ市において、アンティパトス・クインティリアヌスの治世下、ローマ暦では3月のイドゥスの5日目、東方暦では第7ヶ月（すなわち9月から数えて7ヶ月目である3月）の11日、土曜日、午前10時に起こったことである。 メタフラスト[2324] は、聖ピオニオスについてこのように記している。

一方、聖ピオニオスと共に捕らえられ、牢獄に収容されていた他の聖殉教者たちについては、どのような拷問の末にその生涯を終えたかについては記されていない。しかし、彼らがキリストのために苦難を受け、聖ピオニオスと共に天の命に至ったことは疑いようがない。

この聖なる長老ピオニオスは、スミルナの司教である聖殉教者ポリカルポスの生涯と受難を記し、その後、彼と共に、父と聖霊と共に永遠に君臨される我らの主イエス・キリストの御国に召されたのである。アーメン。

[2323] デキウス、ローマ皇帝。249年から251年まで在位した。聖ピオニオスの殉教は250年に起こった。

[2324] シメオン・メタフラスト――11世紀の傑出したビザンツの社会活動家であり、教会文学者。彼の著作の中でも特に『聖人伝』は傑出している。シメオンはこの著作を編纂するにあたり、単に古代の伝承を収集するにとどまらず、それらを語り直し、口語に書き直した。 ここから、彼の異名「メタフラスト」（metaprxxein＝語り直すに由来）が生まれた。

聖なる父エウフィミオス、ノヴゴロド大司教の記念日

記念日：3月11日

至福のエウフィミオスの両親は、ヴェリキー・ノヴゴロドに住んでいた[2325] 。父は聖テオドロス教会の司祭であり、ミヘイという名を持ち、母の名はアンナであった。二人は合法的な結婚を結び、誠実な夫婦生活を送っていたが、子供に恵まれず、そのことを深く嘆いていた。 その悲しみの中、二人は不妊が解消されるよう、神と聖母マリアに熱心に祈りを捧げた。そして、主はその祈りを聞き入れられた。アンナは身ごもり、息子を産んだ。その子が、この至福のエウフィミオスであった。生後まもなく、その赤ん坊は洗礼を受け、聖なる洗礼の際、ヨハネという名が与えられた。彼はまだおむつを巻かれたばかりの頃、 、両親は彼を、子供を授かるよう祈りを捧げていたあの教会へ連れて行き、神の母の聖像の前に彼を寝かせ、こう言った。

「女王にして主よ！ ここに、あなたが私たちに授けてくださったこの子を、あなたのもとに連れて参りました。心の苦しみの中で、女王にして主なるあなたに口にした言葉通り、私たちはこの子をあなたに委ねます。どうか、あなたご自身の御心に従って、この子の生涯を導いてください。さて、私たちは今、この子を私たちの家へ連れ帰ります。赤ん坊は母なしでは生きられないからです。

神の恵みの助けにより、その幼子は健やかに成長し、時が来ると、両親は彼を聖書の学びに預けました。聖三位一体において賛美される神は、すべての人々の救いを望んでおられ、少年ヨハネに鋭い知性を授けられました。そして彼は、聖書を立派に学び上げました。 学業に励む間、彼は神聖な事柄について思索を深めること以外のいかなる活動にも没頭することはなく、十五歳に達すると、神への愛に燃え上がり、世俗を捨てて修道者の道に入ることを望んだ。 神の御心は測り知れないため、この修道生活がどこへ導くのか彼は知らなかったが、自らの善き願いを必ずや果たそうと努めた。そして、神は高みから、将来彼に起こるべきすべてのことを見通しておられ――本物語からも明らかなように、やがてそれは実現したのである――まもなく、実際に彼の願いを叶えてくださったのである。

エウフロシンという名の修道士一人と、イグナティウス、ガラクティオンの二人の修道士は、神への奉仕に身を捧げ、人里離れた場所で修行に励むことを思い立ち、そのための適した場所を探すことにした。ほどなくして、そのような場所が見つかった。その場所はヴェジシェ[2326] と呼ばれており、森と沼地以外には何もない場所だった。 修道士たちがこの場所にたどり着くと、空気中に何らかの芳香を感じ取り、これを単なる現象ではなく、神の摂理による特別な示しであると受け止めた。彼らはここに聖ニコラオスに捧げる礼拝堂を建て、その後、自分たちのための修道室も築いた。 まもなく、ピメンという名の司祭が彼らの元を訪れ、彼らと共に暮らし、修行をしたいと願った。そこで、全員の合意のもと、彼らは同じ聖ニコラオスに捧げる木造の教会を建て[2327] 、断食の生活を送るようになった。 彼らはその地の住民、とりわけある貴族から多くの迫害を受けた。その貴族は悪魔の唆しにより、自分の近くに住む修道士たちを快く思っていなかったが、奇跡行者ニコライは、 その名に捧げられた修道院が信仰をもって祈りを捧げれば、決して困窮させることなく、常にこれらの修道士たちにも糧を届けてくださった。やがて、修道院の近くに住んでいたその貴族の足に悪性の腫れ物ができ、彼はそのためにひどく苦しんだ。 病のさなかに彼は我に返り、聖ニコライに助けを祈り求めた。その後、修道院を訪れ、そこで祈りを捧げたところ、癒やされたのである。 この癒やしに感謝した彼は、修道院に土地を寄進した。その土地は現在も修道院の近くに残っており、それ以来、彼は敬虔な信仰をもって聖ニコライ修道院を崇敬するようになった。 その後、神の恵みと聖ニコ

2325 この名称は、古代において現在のノヴゴロドという都市の旧称であった。同市は、古代ルーシにおいて最も古く、最も有名な都市の一つであった。

2326 ヴェジシェ、あるいはヴァジシェは、ノヴゴロドから西へ12ヴェルスタの場所にあった地域である。

2327 それは1411年のことだった。

ライ・奇跡行者の祈りにより、修道院の修道士数は増え続け、前述のピメン――同修道院の初代司祭修道士――が、その修道院長となった[2328]。

神の摂理により、まさにそのピメンのもとへ、至福の少年ヨハネが訪れ、彼に修道者の剃髪式を執り行ってほしいと懇願した。 ピメンは少年を見て、彼を神ご自身が遣わした使者として受け入れ、修道誓願を授け、その際にエウフィミオスという名を授けた。神の御心によって成し遂げられたこの出来事は、神の摂理によって、エウフィミオスを通じて修道院の誉れがさらに高められるよう導かれたものであり、やがてその通りとなった。 修道院で生活する中、聖エウフィミオスは、修道院長や兄弟たちに対してあらゆる面で極めて厳格な服従を示し、そのことは周囲の驚嘆を招くとともに、これほど若くして長年の修道者のような知恵を備えていることに対して称賛も集めた。 そのため、司牧職に就く前から、誰もが彼を将来の牧者であると見なしており、成人する前から、彼は修道生活において皆の指導者となっていた。聖エウフィミオスが修道院内でそのような名声を博すると、シメオン大司教も彼のことを知った[2329]。 彼を呼び寄せ、善意に満ち、言葉に長けているのを見て、大司教は彼を深く愛するようになった。彼が 自分の修道院を離れたくなかったにもかかわらず、大司教は彼に教会の財産の管理を任せた[2330]。 新たな職務を引き受けた聖エウフィミオスは、修道者としての修行を続け、修道生活の規則の履行において何一つ妥協することはなかった。

数年後、シメオン大主教は教会を立派に統率した後、主のもとへ旅立ち、永遠の至福の生活へと移り、その後、エウフィミオス[2331]がノヴゴロドの大主教の座に就いた。 その後、尊者エウフィミイは、フティニャと呼ばれる聖救世主修道院[2332]へ退き、そこに定住した。 しかし、しばらくして、リシヤ山にある聖母マリア修道院[2333] の長老たちの要請により、彼は同修道院のイグメンに任命された。そこで、修道士たちを統率する中で、すべての人に対して慈愛深く、かつ敬意を持って接したため、彼らに模範を示し、教訓を与えた。

その直後、ヴェリキー・ノヴゴロドの国民総会は、彼をノヴゴロド大司教の座に就かせるべく選出することを望み[2334] 、他の候補者たちと共に彼を候補者名簿に加えた[2335] 。しかし、彼らは、彼が若き頃からすでに司教の務めに召されていたことを知らなかった。預言者の言葉にあるように、「*あなたの目は、私の胎内の姿を見た*」（詩編138:16）[2336] 。また、使徒が「あらゆる権威は神から与えられる」（ローマ13:1）と述べているように、もしそれが上から与えられなければ、人はどうしてそれを得ることができるだろうか（ヨハネ19:11）？この言葉は、尊者エウフィミオスにおいても成

[2328] ピメンは修道名としてパホミイという名を持っていた。

[2329] ノヴゴロドの大司教シメオン（サンプソン）は、一介の修道士出身でありながら、大司教イオアンの死後、1416年から1421年にかけてノヴゴロド教区を統括した。

[2330] ノヴゴロドの大主教たちの慣例において、教会の財産の管理が修道士に委ねられたのはこれが初めてのことであり、それまではノヴゴロドの大主教邸の会計係は平信徒の中から選出されていた。

[2331] ここで言うのは、もちろん、エウフィミイ1世（エメリアン）・ブラダティイであり、彼は、選出されたものの叙階されなかったテオドシイの短期間の在任（1421年から1423年）の後、ノヴゴロドの大司教座に就いた。 エウフィミイ1世は1423年から1429年までノヴゴロド大司教を務めた。

[2332] フティン修道院（フティン）は、1192年にノヴゴロドの貴族アレクシー（修道名ヴァルラアム）によって創建され、ヴォルホヴァ川の右岸、ノヴゴロドから川を下って10ヴェルスタの地点に位置している。

[2333] 聖母マリアの降誕を祝うリシツキー（リシヤ山にある）修道院は、ノヴゴロドの商業地区から7ヴェルスタの場所に位置していた。1392年にその名が記録されている。

[2334] ノヴゴロドの司教たちは、1165年から大司教の称号を冠していた。

[2335] 1156年以降、ノヴゴロドの主教の選出は、大主教や司教会議によるものではなく、もっぱらノヴゴロド市民自身、すなわち彼らのヴェーチャによって行われた。通常、3人の候補者が選出され、そのくじは聖ソフィア大聖堂の祭壇に置かれた。 典礼の終了後、2つのくじがプロトポプによって次々と取り出され、民衆全員に告げられた。最後に、祭壇に残ったくじが、神に選ばれた者を示した。こうして、聖エウフィミオスも選ばれたのである。

[2336] すなわち、母の胎内に私が宿った時から、あなたは私を見守り、私の人生の運命を定めてくださったのです。

就したのである。　選ばれた者たちのくじを封印した後、ヴェリキー・ノヴゴロドの民衆集会と聖職者たちは、それらを聖ソフィア大聖堂[2337]へ運び、祭壇の上に置いた。 くじ引き自体は人間の行いでしたが、選ばれた者たちのうち誰が神のこの高き玉座に就くべきかは、その後起こった出来事によって示されました。すなわち、神の御心と裁きにより、エウフィミオスにこの玉座を継がせるべく、くじは彼に当たったのです。　その後、ノヴゴロドの人々は喜びをもって尊者のもとへ向かい、聖ヨハネ・クラマトリオスの記念日に、彼を栄誉をもって聖ソフィア大聖堂[2338]へと導き入れた。 その際、尊者エウフィミオスは長い間、特に自らをそのような高位にふさわしくないと考えていたことを理由に、大司教職を受け入れることを拒み続けた。しかし、神の裁きに逆らうことはできなかったため、ついに彼を選出した人々の意志に従った。　これはノヴゴロドのすべての住民に大きな喜びをもたらした。なぜなら、誰もが彼を大司教の位にふさわしい人物だと考えていたからである。しかし、選出後も聖エウフィミオスは修道者の身分にとどまっていた。当時、ルーシには大主教がいなかったため、彼の叙階が困難となっていたからである[2339]。 4年以上も叙階されないまま過ごした後[2340]、彼はスモレンスクへと向かった。そこでは、キエフおよび全ルーシのミトロポリト・ゲラシム[2341]が滞在しており、彼から 大司教の位への叙階を受けた。 そこで、尊者エフフィミーは、その知性と分別によって皆を驚かせ、大主教自身でさえも驚きを表明し、彼の知性を称賛したほどであった。叙階後、エフフィミー大主教は多大な栄誉を伴って、自身の主教座都市であるヴェリキー・ノヴゴロドに戻り、信徒たちの統治を全面的に引き受けた。　自ら引き受けた聖職の偉大さを深く自覚し、彼は「多く与えられた者には、多くが求められる」（ルカ12:48）という聖書の言葉を心に留め、叙階前よりもさらに熱心に奉仕の業に打ち込んだ。　それゆえ、彼は自らの労苦によって、福音の教えに従い、三十倍や六十倍ではなく、百倍の実を結ぶよう努めた[2342]。 かつて、彼がまだ高位の大司教の位に就いていなかった頃は、ただ自分の魂のことだけを気にかけていたが、今や司教となった今、主なる御方に「*見よ、私と、主が私に与えてくださった子供たちです*」（イザヤ8:18）と大胆に言えるよう、多くの魂の世話をする必要が生じたのである。　このこと、そしてその他多くのことを、その思慮深い心の中で思い巡らしながら、聖エウフィミオスは心に大きな動揺を感じましたが、すべてを神に委ねました。そして、主は彼の希望を裏切られることはありませんでした。主には、今、常に、そして永遠に栄光がありますように[2343]。

[2337] ノヴゴロドの主教たちの大聖堂は、今日まで現存している。

[2338] それは1429年のことだった。

[2339] 1431年7月1日にミトロポリト・フォティオスが死去した後、イシドールの短期間の統治を除けば、モスクワのミトロポリトの座は1448年まで空席のままであった。

[2340] 聖エウフィミオスは、1429年から1434年まで、司教の聖職に就いていないにもかかわらず、ノヴゴロド教区を統治していた。　ノヴゴロドでは、司教に叙階されるまで教区を統治することが慣例となっていた。例えば、ヨハネは司教に叙階されずに8ヶ月間統治し、テオクティストとモーセはそれぞれ1年間、クリメントは2年間統治し、フェオドシイ大主教は司教に叙階されることなくこの世を去った。

[2341] リトアニアの公スヴィドリガイロは、1433年に大主教フォティオスが死去した後、スモレンスクの司教ゲラシムをコンスタンティノープルへ派遣し、リトアニアの大主教に叙任させようとしたが、総主教は彼を全ルーシの大主教に任命した。　ゲラシムが反逆を企てていると疑ったスヴィドリガイロは、スモレンスク近郊で彼を捕らえ、ヴィテブスクで火あぶりにした。これは1435年7月のことである。

[2342] この表現は、救い主の「種を蒔く人のたとえ」（マタイ13:8）に由来する。

[2343] 聖エウフィミオスは1458年3月10日に逝去した。

トロパリオ、第4調：

若き日から神に選ばれ、聖エウフィミオよ、そのゆえに司教の位に就き、神よりあなたに託された人々を牧した。それゆえ、この世を去った後も、主から授かった奇跡の賜物により、様々な病を癒やすことを許された。　あなたの尊い記念を祝う私たちのために、その御力をお祈りください。そうすれば、私たちは皆、絶えずあなたを賛美することができるでしょう。

コンダク、第8調：

聖エウフィミオスよ、あなたは司教として同席する者であり、聖人として立派な擁護者であった。どうか、あなたの祖国と、あなたを信仰をもって尊び、あなたの尊い遺骨に礼拝を捧げる都市と人々を守り続けてください。そうすれば、私たちは皆、声を高らかにあなたに叫ぶでしょう。「喜びなさい、神に賢き聖人よ。」

3月25日

3月12日（旧暦）

聖なる父テオファン・殉教者の生涯

記念日3月12日

尊者テオファンは、コンスタンティノープルにて、イサクとテオドティアという高貴な両親の間に生まれた。イサクは、皇帝レウ・イサウリアヌスとその息子コプロニム[2344]と親族関係にあったため、同じ王族であり、イサウリア地方の出身であったことから、「イサウリア人」と呼ばれていた。彼は王宮で名誉ある役職に就き、コプロニムスの治世には軍司令官を務めた。

この頃、偶像排斥の異端が勃発し、敬虔な人々に対する激しい迫害が始まった。

敬虔なイサクとその妻テオドティアは、正教の教えを厳格に守り、やがてキリストの教会において夜明けの光のように輝きを放つことになる息子を授かる栄誉に浴した。　彼らは彼をテオファンと名付けた。これは「神によって現された者」を意味する[2345]。彼がそう名付けられたのは、第一に、主の顕現の祝日に生まれたからであり、この祝日はギリシャ語でテオファニアと呼ばれていた[2346]；　しかし、主に彼がその名で呼ばれたのは、神の御計画によるものであった――かつて預言者エレミヤがそうであったように、主が彼を母の胎内から選び出し、御自身の教会の偉大な灯火となるよう聖別されたことを告げるためであった（エレミヤ1:5）。　書物保管係アナスタシオスの証言によれば、彼は時折、父方の名前であるイサクとも呼ばれていたが、それは彼が修道士となる前のことであり

[2344] 皇帝レウ・イサウリア人（717–741年）は、教会から聖なるイコンを投げ捨て、それらを破壊するよう命じた最初のイコン破壊者であった。　コンスタンティノス・コプロニモス皇帝（741–775年）は、偶像排斥の異端を強く支持した。彼はコンスタンティノープルに、自ら「全地公会議」と名付けた公会議を招集し、そこで聖像崇拝は否定された。　イサウリア――皇帝レウス・イサウリアヌスも、テオファノスの父イサクも出身地であるこの地は、小アジアにあるあまり知られていない小さな国で、リカオニアおよびキリキアと国境を接していた。現在、ウルブナール近郊には遺跡のみが残っている。

[2345] テオファン――ギリシャ語のΘεοθανοσ――「神によって現された者」、あるいは「神を現す者」。

[2346] Θεοθανεια（Θεος＝神、θαινω＝現すに由来）は、神現祭を意味する。

、彼は若き頃からその道を熱烈に志していた。これについては、彼の伝記の中で後述されることとなる。

祝福され、神に現されたテオファンが生まれた後、その父イサクはさらに3年を生き、永遠の命へと旅立った。臨終の際、彼は遺言を書き残し、その中で3歳の息子を母と共に、親族であるコンスタンティノス・コプロニモス皇帝自身の世話と保護に委ねた。

聖書を学び、徳のある生活を送る中で、少年は年を重ねるにつれて並外れた知性を発揮するようになった。テオファンが十二歳になったとき、ある上院議員が、十歳の娘を彼と婚約させたいと望んだ。若きテオファンは美貌に恵まれ、非常に聡明で、裕福であり、かつ皇帝の親族であったからである。　この婚約には、テオファンの母テオドティアも快く同意した。しかし、こうしたことは王の意志なしには実現し得なかったため、その上院議員は王自身に熱心に願い出を行い、娘を王の甥と結婚させることで王家と縁を結びたいと訴えた。　皇帝がこれに同意すると、結婚適齢期に達していない子供たちの婚約が成立したが、実際の結婚は婚約者たちが成人するまで延期された。

その頃、コプロニム皇帝が死去し、その後を継いでその息子レウ4世が即位した。彼は母の名にちなんで「ハザール」[2347] と呼ばれていた。というのも、彼の母はハザール・ハンの娘であり、偶像崇拝の時代には「ハザール」と呼ばれていたが、聖なる洗礼を受けてイリーナと名付けられていたからである。

数年後、テオファノスの母テオドティアも世を去った。彼女は息子の結婚より先に亡くなり、彼に計り知れない富を残した。

当時、テオファンの家には、ある敬虔で貞潔な奴隷が住んでいた。テオファンは、その徳高い生き方を深く愛し、この奴隷を自身の最良の助言者と見なしていた。彼との頻繁な魂を救う対話を糧とし、とりわけ全能の聖霊の導きを受けて、　テオファンは貞潔を愛するようになり、ただ一つのこと――いかにして自らの処女の清らかさを朽ちることなく保つか――のみを心に留め、修道生活と修道者の生き方を熱烈に望み、すべての富を貧者や困窮者に配り始めた。

このことを知ったテオファンの義父は、花婿の意向に反して、一刻も早く結婚を成立させようと努めた。とりわけ、花婿と花嫁の両方が成人年齢に達していたからである。

結婚式の日が訪れ、慣例に従って婚礼の宴がすでに始まっていたとき、神に選ばれた青年テオファンは、心の中で神に思いを馳せ、主がその恵みによって彼を清らかな処女の身として守ってくださるよう、心の奥底で祈っていた。

そして、若きテオファンが花嫁と共に婚礼の殿堂に身を置いた時、彼は寝台に座り、心から深いため息をつくと、胸に秘めていた思いを明かし、花嫁にこう語った。

「愛しき人よ、私たちの人生の時間は短いけれど、死の時は誰にも分からず、快楽や富に溺れて生き、しばしば主を怒らせる者たちには、容赦のない裁きが待っていることを、あなたはご存じでしょうか。　結婚は、神ご自身によって定められたものであるとはいえ、結婚生活に不可欠な世俗的な心配事は、人間の心を主から遠ざけ、人々の敬虔な思いを虚しいものとし、来世を魂の澄んだ眼差しで見つめることを妨げてしまうのだ。　私たちは、ラザロが一時的な苦しみを受けた後、天使たちによってアブラハムの懐へと運ばれたのに対し、豊かさを享受して生涯を過ごした金持ちは地獄に投げ込まれ、舌を冷やすための水の一滴さえ得ることができなかったことを知っている（ルカ16:24）。　また、天に備えられた福音の八福（マタイ5章）についても耳にします。それらは誰に約束されているのでしょうか。この世の喜びやあらゆる繁栄の中で生きる富める者たちではなく、貧しい者、泣く者、飢える者、渇く者、キリストのために迫害や　な侮辱に耐える者たちです。　端的に言えば、狭くきつい道は永遠の命へと導き、広い門と広い道はゲヘナへと導く（マタイ7:13–14）；　また、私た

[2347] 皇帝レウ4世（通称ハザール）は、775年から780年まで在位した。彼は、先代たちほどではないにせよ、イコノクラシズムを支持していた。

ちはこの世で贅沢に、虚しい快楽の中に生きる者は、来たるべき世において苦しみや悲しみを味わうことになることも知っている――そうでないはずがないのだ。それゆえ、私の愛する花嫁よ、もし望むなら、肉的な夫婦の交わりを控え、心を一つにして清い処女の身であり続けよう；　今は、あなたの厳しい父のため、あたかも肉的な結婚生活を送るかのようにしばらく共に暮らしましょう。しかし、夫婦という形を装いながらも、兄弟姉妹のように過ごしましょう。そして、主が私たちにふさわしい時を授けてくださったなら、修道院へ行きましょう。私は男子修道院へ、あなたは女子修道院へ。こうして、私たちは生涯を主に捧げ、来世において主の聖なる御使いの一員となるにふさわしい者となろう。

聖なる花嫁テオファノヴァは、肥沃な大地のようにこの良き種を受け入れ、心からの喜びをもって至福のテオファンにこう答えました。

「愛する主よ、私は、福音書の中で私たちの救い主が語られた御言葉を知っています。『*もしだれでも、自分の父や母、妻や子供、兄弟や姉妹を憎まず、また自分の十字架を負ってわたしに従わないなら、わたしにふさわしくない*』（ルカ14:26、マタイ10:38）。 さあ、私たちは主のふさわしい弟子となり、もしあなたが望むなら、すべての虚しいものを捨てましょう。あなたが同意するなら、私も同意します。あなたがそう望むなら、私も望みます。そして、あなたが貞潔を保ちたいと願うなら、私もそれを望みます。私たちの魂だけでなく、肉体も清く保ち、天の花婿に汚れのない姿で身を捧げましょう。　もし私たちが、この儚く短い人生を虚しさの中で過ごし、永遠の恵みを失ってしまったら、いったい何の益があるというのでしょうか。また、もし私たちに子供たちがいたなら、彼らの生計や運命を昼夜を問わず気にかけ、それによってこの世の様々な罠に陥り、さらに大きな悲しみに満ちてしまうでしょう。　私たちには未知の死が訪れたとき、私たちはどこへ行くのか――天国か、それとも地獄か――それは今もまだ分かりません。それゆえ、主が私たちを修道生活へと導いてくださるまで、清らかに生き、密かに処女性を守り続けましょう。

祝福された若者は、貞潔な婚約者のこの言葉を聞いて、彼女の賢明さに感嘆し、地面にひれ伏して、聖霊によってこの娘を、彼の意図と完全に一致する決断へと導いてくださった神に感謝を捧げた。　そして、二人はその夜を徹して祈りを捧げ、自分たちが始めたこの生活が完璧に送れるよう、天からの助けを願った。

そして朝が明けると、二人は少しの間眠りにつき、同じ夢を見た。その幻の中で、明るい顔をしたある若者が現れ、微笑みながら優しくこう語りかけた。

「主はあなた方の決意を受け入れ、あなた方が同意したその生活に対して、あなた方を祝福するために私を遣わされました。それは、あなた方が聖く、汚れのない者として主の前に立つためです。」

そう言うと、彼は二人の全身に十字の印を刻み、姿を消した。眠りから覚めると、二人は互いに、同じ夢を見たことを語り合った。その時、彼らは天使の存在から漂う言葉に尽くせない芳香を感じ、驚いた。　そして直ちに、主の御前に地面にひれ伏し、熱心に主を賛美した。その天上の芳香は、長い間、彼らの宮殿だけでなく、家中の至る所で多くの人々に嗅がれた。　そして、この聖なる夫婦は、肉体のうちにあって天使のように生き、神の前で神聖な愛の炎に燃え、まるで二人の司祭、あるいは寛大さの油を注ぎ出す二本のオリーブの木のように、毎日数えきれないほどの施しを行い、貧しい人々に全財産を惜しみなく分け与えていた。

しばらくして、テオファンの義父は、婿と娘が貞潔を守り、全財産を貧しい人々に施していることを知り、深く嘆いた。彼は王のもとへ赴き、このことを報告するとともに、婿を非難してこう訴えた。

「ああ、哀れな私よ！」と彼は叫んだ。「この不届きな婿のせいで、私の老後が台無しだ！彼は財産を無意味に浪費し、私の若き娘を無駄に破滅させている。彼女と夫婦として暮らそうともしないのだから、孫たちに慰めを見出す希望など私には微塵もないのだ。」　一体なぜ彼は彼女を娶った

のか？　なぜ結婚の前に婚約の誓いを破り、彼女を断らなかったのか。そうすれば、あれほど若い彼女をこのような不幸に陥らせることもなく、私の老後をさらに大きな悲しみにさらすこともなかったはずだ。　私には二重の悲しみがある。一つは、結婚しているにもかかわらず夫がおらず、母親にもなれない娘を思う悲しみであり、もう一つは、無駄に浪費されている富に対する悲しみである。というのも、テオファンは自分の財産だけでなく、私が娘の持参金として与えた財産のかなりの部分までも浪費してしまったからだ。

そこで彼は、王に、義理の息子を懲らしめ、夫婦の掟に従って生活し、財産を無駄遣いしないよう説得してほしいと懇願した。

王は怒りに満ち、聖なるテオファンを呼びつけ、彼を睨みつけながら、生活態度を改めるよう命じ、従わなければ目をえぐり出し、流刑に処すと脅した。

しかし、神に愛された若者は王の脅しを意に介さず、かくも素晴らしく始めた清らかで純潔な生活を捨てようとはしなかった。彼は、地上の王よりも、天の王の御恵みをより多く得ようと努めたのである。

その直後、テオファンは、民のいくつかの必要に応えるため、王の命によりキジカ地方へ赴くよう命じられた[2348]。この旅は、義父が意図的に仕組んだものであった。その目的は、一方では、王から委ねられた務めに追われる中で、テオファンが日頃の祈りの修行や断食、禁欲を中断し、忘れてしまうようにするためであり、他方では、彼が自身の財産を配ることをやめるようにするためであった。その財産の管理者となったのは、今や彼の義父であったからである。

テオファンが王の命令に従ってキジクへ向かう際、王と義父は彼の妻にも同行するよう命じた。というのも、父親は、たとえ短期間であっても、娘が夫と離れることを耐えられなかったからである。

彼らが川を渡ることになった。その川は、かつてはリンダコスと呼ばれていたが、後に民衆によって「大河」と呼ばれるようになった。川の一方の岸にはオリンピア地方が、もう一方の岸にはシグリア地方が広がっていた[2349]。

至福のテオファンは、陸路で行くこともできたにもかかわらず、この川を渡って行きたいと思った。しかし、当時彼を襲っていた身体の衰えを考慮し、より楽な川路を選んだのである。これらすべては、神の御心によって成されたのである。　友人や奴隷たちを馬や戦車に乗せて陸路で先に行かせた後、彼は自ら、愛する妻と数人の使用人と共に舟に乗り込んだ。川を下りながら、テオファンはシグリアの美しい山々、丘陵、そして荒野を眺め、そこで静寂に満ちた生活を送りたいという想いに胸を燃やした。　そして、山々の間に広がる広大な谷を見出した。そこには鬱蒼とした森が生い茂っており、彼はその場所を大変気に入った。一晩を過ごすために岸に船を寄せ、残りの者全員に船に残るよう命じた後、テオファンはその谷へと向かい、その人里離れた場所を歩き回って、心を深く動かされた。　そして、鬱蒼とした森の中のある場所に立ち止まると、彼は神に熱心に祈りを捧げ始めた。天に向かって両手を上げ、目に涙を浮かべて何度も地にひれ伏しながら、彼はこう唱えた。

–*「私が歩むべき道を、どうか示してください！」*（詩編142:8）。

修道生活への強い憧れに駆られ、直ちにすべてを捨ててその荒野に身を隠したテオファン。祈りに疲れ、休息のために腰を下ろすと、かつて彼と彼の花嫁が婚礼の殿堂にいた時に現れた、あの光に満ちた天使の姿を目にした。　その天の住人は、指で荒野を指し示しながら、テオファンにこう言った。

[2348] キジカ地方（首都はキジク）は、小アジアの北西部、マルマラ海の南岸に位置する。

[2349] シグリア地方は、プロポンティス（マルマラ海）から、リンドス川（古代にはリコス、現在はリュナド、下流はミカリツァ）と、ミシアとトロアを隔てていたエゼプス川との間に広がる小アジアの一部である。

「あなたはここに定住すべきである。しかし、この道を阻む生者たちがこの地から連れ去られるまで、少し待て。彼らはまもなくここから去るだろう。そうすれば、あなたは妨げられることなく、望む場所へ行くことができる。」

この幻視に、聖テオファンは大変喜んだ。喜びに満ちて舟へと戻ると、彼は旅を続けた。　シグリア山脈にある荒涼とした修道院や隠者の小屋に目を留めると、彼は貞節な妻と共にそれらを巡り、訪ね歩いた。その地で、彼はポリクロニオンと呼ばれる地域に住む、グリゴリウスという名の、ストラティギアというあだ名を持つ、先見の明のある老僧に出会った。　至福のテオファンはこの長老に自分の意図と願いを打ち明け、そこから、以前現れた天使が彼に告げたことと同じ言葉を聞いた。この長老は、天使のような生き方によって神から予知の賜物を授かっていたが、テオファンにこう言った。

「少し待て、善良な若者よ。まもなく、王も、お前の義父も、この地上から滅び去るだろう。そうすれば、お前は自由の身となり、その善き志を成し遂げることができるだろう。」

また、徳高いテオファノスの花嫁に対しては、聖なる老人は耳元で静かに、彼女の最愛の兄テオファンがやがて殉教者の冠を受けることになると告げた。

その後、聖テオファンはキジクへと向かい、民の統治に関して王から命じられたことを遂行した。そこで彼はしばしば家来たちを連れて、近くのシグリア山脈へと赴き、そこで聖なる父たちを訪ねた。　彼らの祝福と祈りを請い求めると同時に、テオファンは神に霊感を受けた語りかけによって、彼らの魂を啓発した。

特に、彼は予知能力を持つグリゴリオス・ストラティギオスや、「マロイ・セロ」――その修道院はそう呼ばれていた――の修道院長クリストフォロスのもとへ頻繁に足を運んだ。　ある時、テオファンが隠者たちを訪ねるためにシグリア山脈を通りかかった際、ある場所で立ち止まらざるを得なくなった。当時は収穫の時期で猛暑が続いていたため、テオファンと同行者たちは皆、ひどく喉が渇いていた。

しかし、その場所は人里離れた水のない場所だった。日が暮れかけた頃、彼らはそこで横になり、夜を明かすことになった。その時、彼ら自身も家畜も、渇きでまさに力尽きかけていた。至福のテオファンは祈りを捧げた後、少しでも眠り、眠りによって渇きを和らげようと、ある小山のふもとに腰を下ろした。　すると、彼がうとうとし始めたその瞬間、突然、彼の頭上から生ける水の泉が流れ出し、彼を濡らした。かくして、かつて恩知らずなユダヤの民のために岩から水を湧き出させた主は、御自分のしもべを見捨てなかった。ましてや、このような窮地にある感謝の心を持つしもべのために、主は喜んでこの奇跡を起こしてくださったのである。　聖人は、予期せぬ水の飛沫の音で目を覚ますと、すぐにその場から立ち上がり、共にいた者たち全員を呼び集めた。そして、皆が集まると、その予期せぬ突然の奇跡に驚き、神を賛美した。そして、皆は自らの渇きを癒しただけでなく、家畜にも水を飲ませた。

翌日、彼らが目を覚ますと、泉はすでに消えていた。その場所は乾ききっており、水の痕跡すら残っていなかった。

彼らは特に、渇きに苦しむ時、水が全くない土地で主が泉を湧き出させ、水が必要でなくなった時には、　主は水を枯らされた。これは、主があらゆる場所で、何よりもまず神の御国とその義を求める者には、必要なものをすべて与えてくださることを、はっきりと示しておられるのである（マタイ6:33）。

その後、テオファンはキジクでしばらく過ごし、そこで王から命じられたことをすべて適切に果たした後、ツァーグラードに戻った。

この時、神の御使いの予言と聖グリゴリオスの預言が成就した。コプロニモスの息子であり、レウ・イサウリアノスの孫であるハザールの王レウが亡くなり、テオファノスの義父も亡くなった。

こうして彼も、彼の聖なる花嫁と同様に、自由の身となった。　二人は直ちに、望み通り、すべての富と所有地を人々に分け与えた。その後、テオファンはビフィニアにある女子修道院の一つで[2350]、婚約者に修道衣を授け、彼女の生活費としてその修道院に多くの土地を寄進した。修道衣を授けられた際、彼女はイリーナと名付けられた。　修道生活において、イリーナは神に喜ばれ、多くの奇跡を行い、神から病を癒やし、悪霊を追い出す賜物を受けた。これらの奇跡については、後にコンスタンティノープルのメフォディオス総主教が語っている。

その至福の婚約者である乙女イリーナの修道入りを機に、聖テオファンはコンスタンティノープルの貧しい人々に自身の財産の残りを施し、わずかな金銭だけを残して、前述の予知能力者グリゴリー・ストラティギオスのもとへ向かった。　テオファンは、まさにその人物によって修道者の姿へと剃髪された。そこで、残りの金を使って聖テオファンはこの長老のために修道院を建立し、かなり長い間その修道院で暮らし、修道者の修行に励んだ。

その後、その長老の助言に従い、聖テオファンはカロニモスと呼ばれる島へ赴いた[2351]。この島には、テオファンが両親から受け継いだ小さな農地があり、彼はまだそれを貧しい人々に配り終えていなかった。そこで彼は修道院を設立し、モノケラリアと呼ばれるテオドロフスカヤ修道院の修道士たち全員をそこへ移し、　また、敬虔で経験豊かな人物を招き、修道院長に任命した。一方、テオファン自身は自分の独房に籠もり、書物の写本に専念した。彼は熟練した筆写者であったからである。彼はこれらの本を売り、その収益で自分だけでなく、他の者たちの生活費も賄っていた。

数年が経つと、その修道院のイグメンが亡くなり、修道士たちは尊者テオファンに対し、自ら彼らのイグメンになるよう執拗に懇願した。　しかし、聖人は承諾せず、再びシグリアン山へと向かった。そして、キジクへ向かう途中、　で天使の御出現を授かったあの荒野を思い出し、テオファンはそこへ向かい、神に奉仕しながらその荒野で暮らすようになった。　まもなく、聖テオファンはその荒野に神に奉仕する隠者たちを招き入れました。多くの人々が彼のもとにやって来て、その周辺に定住するようになったため、やがて修道院を設立する必要が生じたのです。

この荒野には、ある農夫が所有する場所があり、そこは「ヴェリコエ・セロ」と呼ばれていた。　聖テオファンは、知人たちに使いを送り、彼らから金を借りてこの土地を購入し、私たちに必要なすべてのものを御自身の神聖な摂理によって与えてくださる主の助けを借りて、ここに修道院を築いた。まもなく、聖人は借りた金を返済し、自分の修道院では、彼のもとに集まった兄弟たちの生計に必要なものをすべて豊かに備えることができた。

聖テオファンは、この修道院において修道院長としての地位を受け入れざるを得なかった。なぜなら、すべての隠遁者たちが彼にそうするよう懇願したからであり、また、そうすることが必然であったからである。

修道院長となったテオファンは、福音書においてキリストが命じられた通りの指導者であった。*「あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、あなたがたのしもべとなりなさい。あなたがたのうちで第一になりたいと思う者は、あなたがたの僕となりなさい」*（マタイ20:26–27）。尊いイグメン・テオファンは、自らの手で働き、すべての人々に仕えた。主は当時、彼に並外れた肉体的強さをお与えになったからである。彼は修道院のあらゆる仕事において誰よりも積極的に参加し、すべての人にとって、徳高く、かつ勤勉な生活の模範となっていた。

この頃、すなわち、レウスの息子でありコプロニモスの孫であるコンスタンティヌスの治世下、その敬虔な母イリナと、コンスタンティノープル総主教タラシオスの在位中に、ニカイアにて、聖

[2350] ビフィニアは、小アジアの北西に位置する州である。

[2351] カロニム島、あるいはカロニモス島（現在はカロミオス、古代にはベスピコン）は、リンドアク川の河口対岸、マルマラ海に位置している。

像破壊派に対抗する第7回全地公会議が招集された[2352] 。 この公会議において、聖なる教会は偶像排斥の異端を断罪し、聖なるイコンへの敬虔な崇敬が再び回復された。この公会議には、シグリアンのヴェリキー・セルの修道院長である聖テオファンも招かれた[2353] 。 この公会議において真の正統信仰を確固たるものとしたテオファンは、聖なる教父たちの間で輝く星のように輝いた。公会議における彼の存在は、多くの人々にとって大いに有益であった。多くの者が美しい衣装や戦車、馬で威張っていた中、彼は粗末なロバに乗り、古びた服と繕い直したぼろ服を身にまとってそこに現れたのである。 かつて彼が裕福で、高貴な身分の持ち主であり、皇帝に近く、シンクリトの一員であった頃の生活を知っていた者たちは皆、彼がこれほどまでに謙遜と貧しさの中にいる姿を見て心を打たれ、主のためにこれほどまでに身を低くし、貧しくなり、この世のすべてを無と見なすことができるということを学んだのである。

聖公会議の終了後、聖人は自らの修道院へと戻り、この全地公会議で承認された聖なる信仰の敬虔な教義を、修道院の最高の装飾として持ち帰った。 そこでテオファンは、いつものように修行に励み続け、その徳高い生活の模範によって、自らの修道院だけでなく、周辺の地域全体をも啓発した。彼に関する評判は至る所に広まり、人々は皆、彼のために天の父を賛美した。 その敬虔な生涯ゆえに、神から奇跡を行う恵みも与えられた。彼は病を癒やし、人々から悪霊を追い出した。ある時、聖人が眠りについた際、悪霊が彼を襲おうと企んだ。野生のイノシシの姿に変身した悪霊は、聖人の親指を噛みつき始め、聖人は激しい痛みを覚えた。 直ちに眠りから覚めたテオファンは、自分の指に、指を完全に噛み千切ろうとした敵の歯跡があることに気づきました。その傷は聖人に激しい痛みをもたらしましたが、彼は手元にあった「命を与える十字架の木」の聖油を取り、痛む指に塗ると、たちまち癒やされました。 それ以来、悪霊に対する権威を得たテオファンは、その言葉によって、彼のもとに連れてこられた苦しむ人々から悪霊を追い出すようになった。

この尊い父は、ある時船に乗っていた際、嵐を鎮めた。 彼の修道院を訪れる旅人や貧しい人々には、パンやその他の食料を豊かに配りましたが、その際、パンは減ることはありませんでした。それは、預言者エリヤが、自分が住んでいた未亡人の小麦粉の壺で行ったこと（列王記下7:16）と同様でした。

ある日、修道院の司務長が、聖人が貧しい人々にパンを配っている一方で、修道院に住む者たちの分が足りなくなっているとして、聖人に不満を漏らした。 そこで、聖テオファンは彼に、貯蔵庫にあるすべてのものを数え、量るよう命じた。 すると、何も減っていないことが判明した。修道院の兄弟たちは皆、この出来事を神に賛美し、不平を言っていた貯蔵係はひざまずき、聖人に許しを請うた。

すでに五十歳になっていた聖テオファンは、結石の病にかかり、ひどく苦しんだ。それ以来、彼は残りの生涯を寝床で過ごした。かつて祈りによって他者の病を癒やしていた彼は、自らの病の治癒を主にお願いすることはなく、感謝を込めてそれを耐え忍んだ。 この病のさなかに、彼にとって殉教的な最期を迎える時が訪れた。それは、先見の明を持つ長老グリゴリーの預言によるものであった。彼は、聖なる乙女である彼の婚約者の耳元で、やがて彼女の婚約者もまた殉教の冠を受けると静かに告げていたのだ。

長い年月が経ち、その聖人がすでに老齢に達し、数人のギリシャ皇帝が交代した後（というのも、前述のコンスタンティノス皇帝――彼は母イリナと共に統治していた――の後、ニキフォロス皇

[2352] 聖イリナ皇后は、ハザール人のレフの妻であり、夫の死後、幼い息子であるコンスタンティノス・ポルフィロゲネトス皇帝（780–792年）に代わって、当初は皇帝の名義で、その後自身の名義で（797–802年）帝国を統治した。– 聖タラシウス総主教は784年から806年まで在任した（その記念日は2月25日である）。イコン崇敬を承認した第7回全地公会議は787年に招集された。

[2353] シグリアンスカ修道院は、キジクおよび海から22,000歩の場所に位置していた。– メガグリト（Μέγας Αγρός）は同じ地域にあり、もう一つの修道院である「小さな村」には、クリストフォロスが院長を務めていた。

帝が息子のスタヴリキオスと共に帝位に就き、その後にミハイル・クロパラトスが統治したからである）、

――まさにこれらの皇帝たちの後、ギリシャ王国の王笏をレウ・アルメニア人が受け継いだ[2354] 。この皇帝は偶像破壊の異端を唱えた。彼は聖ニキフォロス総主教とその弟子たちを王座から追放し[2355]、キリストの教会に大きな混乱をもたらした。また、他の多くのキリスト教徒に対しても、聖像を崇拝したことを理由に、公然と拷問し、殺害した。

教会史家ゲオルギー・ケドリン[2356] は、聖テオファンについて次のように記している。コンスタンティノープル総主教ニキフォロスが海路で流刑地へ向かう途中、船で聖テオファンの修道院があった地域を通りかかったとき、聖テオファンは自身の透視する霊的な目によってそのことを察知した。 彼は弟子に香炉に燃える炭を持ってくるよう命じ、その上に乳香を載せ、蝋燭に火を灯すよう指示すると、まるで通りすがりの誰かと話しているかのように、地面にひれ伏して礼をした。すると、弟子はテオファンに尋ねた。

「師よ、何をしているのですか。誰に頭を下げて、話しているのですか！」

聖人は答えた：

「正統信仰のために追放され、流刑の地へ向かう聖なるニキフォロス総主教が、今まさに船に乗って我々の国を通り過ぎているのだ。彼のために、私はろうそくと乳香を灯した。総主教に相応しい敬意を捧げるためである。」

これを船に乗っていた聖なるニキフォロス総主教も目撃した。彼は突然ひざまずき、聖なる長老にもお辞儀で応え、両手を挙げて彼を祝福した。聖なる総主教に同行していたある修道士が、彼に尋ねた。

「聖なる父よ、誰に祝福を授けておられるのですか。また、誰の前でひざまずかれたのですか？」

これに対し、ニキフォロス総主教はこう答えました。

「今まさに、大セラの修道院長である殉教者テオファンが、灯された蝋燭と香で私たちを迎えてくれた。私も彼に互いに礼を捧げた。というのも、彼も私たちと同様に、まもなく苦難に遭うことになるからだ。」

これらすべてはまもなく現実のものとなった。

しばらくして、邪悪なアルメニア人のレウ王は、聖テオファン師を誘惑して自分と意見の一致を図らせようと、使者を派遣し、彼をコンスタンティノープルへ栄誉をもって招いた。その際、彼は狡猾にも次のように書き送った。 「まもなく私は不信心者たちとの戦いに臨むことになるが、彼らに立ち向かう前に、あなたの祈りによって武装する必要がある。それゆえ、敬虔なる父よ、我々の元へ来ることを断らないでほしい」。

聖テオファンは、皇帝の狡猾さを見抜いていた上、当時重い病に冒されていたにもかかわらず、真の信仰のために苦難を受けるべく、旅立つことを決意した。 船に乗り込んだ聖人はまもなくコンスタンティノープルに到着したが、そこで皇帝に謁見することは許されなかった。皇帝はテオファ

[2354] 皇帝レウ・アルメニア人は813年から820年まで在位した。

[2355] 聖ニキフォロス総主教は、806年から815年までコンスタンティノープル教会を統率した。828年に幽閉中に死去し、その記念日は3月13日と6月2日に祝われる。テオドロス・ストゥディテスは、有名なストゥディオス修道院の院長であり、その記念日は11月11日に祝われる。

[2356] ゲオルギオス・ケドリンは、11世紀末または12世紀初頭のビザンツの著述家で、いわゆる『synopis istorion』の著者である。彼の著作は世界の創造から始まり、イサアク・コムネノス（1057年）の即位までのユダヤ、ローマ、ビザンツの歴史を網羅している。

ノスの非難を恥じ、恐れていたからである。しかし、彼は　の聖テオファノスのもとへ、自身の高官たちを遣わし、お世辞めいた約束で彼を自分の異端へと誘い込もうとした。

「もし――」と皇帝は彼らを通じて聖人に語った。「あなたが我々と志を同じくするなら、私はあなたの修道院を高い石造りの建物で整備し、あらゆる面で豊かにしてやる。そして、あなたは私のもとで誰よりも高い名誉を与えられ、またあなたの近親者たち全員を高い地位に就かせてやる。」

しかし、王はこれらの約束に加え、脅しをも付け加えた。

「もしお前が――」と彼は続けた、「我々に逆らうならば、お前自身、大きな不名誉を被ることになるだろう。」

これに対し、聖テオファンは使者を通じて王にこう答えた。

「私はこの世の富など何も望まない。若き日に、キリストへの愛ゆえに、持っていたすべての金、銀、そして全財産を捨てた私が、老いてからそれらを望むことなどあり得ようか。決してそんなことはない。修道院や私の兄弟たちについては、地上のどの王や君主よりも、主ご自身が顧みてくださるのだ。」　それなのに、王よ、なぜあなたは、まるで小さな少年を鞭で打つかのように、その脅しで私を怖がらせるのですか！　私への拷問を用意し、火を燃やしてください。私は、あなたが見ている通り、病気のせいで歩くことはできませんが、正統な信仰のために、その火の中に飛び込みます。

聖人がこの大いなる大胆さをもって語った言葉を聞き終えると、使者たちは王のもとへ戻り、そのすべてを王に伝えた。王は、このような前代未聞の勇気に驚き、あるソフィストであるヨハネ――狡猾な魔術師であり異端者――を聖人のもとへ遣わし、彼と対話しさせた。　しかし、彼は聖なる父の神に導かれた言葉の前に、まるで口を閉ざされたかのように無力となり、彼に打ち負かされて、恥じ入ったまま、自分を遣わした王のもとへ戻っていった。

そこで王は怒りに満ち、聖テオファンをいわゆるエレフフェリイの宮殿にある暗く狭い部屋に閉じ込め、看守を付けさせるよう命じた。この陰鬱な監禁の中で、すでに老いて病弱となっていた聖人は二年間を過ごした。　そこでは毎日、優しさや脅しを用いて彼を偶像破壊運動に引き込もうとし、わざと送り込まれた不敬虔な異端者たちが彼を嘲笑し、悪口を言い散らした。ある日、王が聖人に使者を親しげに遣わし、偶像廃絶の勅令に署名するよう求めたとき、聖テオファンはこう答えた。

「王よ、あなたに王位を授けた方、すなわち、王たちが王として君臨し、迫害者たちが地上で権力を振るう根拠となられるお方を、知ってください。　知ってください――私はあなたに言います――主は、言葉では言い表せないお方でありながら、自ら見える姿をとられることをお選びになり、私たちの本性を受け入れ、罪を除いては、あらゆる点で私たちと同じようになられました。そして、御自身の中で神性化されたこの本性によって、主は死者をよみがえらせ、盲人の目を開き、ハンセン病患者を清め、その他多くの奇跡を行われました。　この御自身の人間性をもって、主はユダヤ人たちから自発的に死を受け入れ、三日目に復活し、栄光のうちに天に昇られ、もはや決して父から離れることはありません。　福音書は、キリストにおけるこの人間性について私たちに教えている。それゆえ、私たちはこの福音書を畏敬の念をもって受け入れ、そこに記されているすべてのこと、キリストのすべての奇跡を信じている――つまり、福音書において、あたかもキリストご自身を崇めているかのようである。　もし、言葉によって記述されたキリストの御業を信じることで私たちが非難されることがないのなら、同じ福音書の物語を、ただイコンに描かれたものとして受け入れ、崇敬するからといって、一体何のために非難されるというのでしょうか。イコンのおかげで私たちの信仰に改宗した異教徒たちでさえ、キリストが地上において人々と共に過ごされた生涯のすべてと、そのすべての奇跡的な御業を容易に知ることができます。　また、読み書きができない多くの人々が、イコンに描かれたキリストの奇跡や、御自身の自発的な死を見つめ、私たちのために苦難に遭われた主を賛美してきたではないか。しかし、あなたはイコンを拒絶することで、彼らの救いを羨ましく思ったに違いない。いったいどの公会議が、聖なるイコンを崇敬することを罪や神聖冒涜と見なしたことがある

というのか。　キリストご自身が、エデスの王アヴガルに癒やしをもたらすため、人の手によらず造られた御自身の御顔の像を送られたのではないだろうか[2357]？　また、聖使徒ルカは、色とりどりの絵の具で描かれた至聖なる聖母マリアのイコンを私たちに残してくれたのではないだろうか[2358]？　ここには、聖なる教父たちの伝承や教えに反するものは何一つありません。言い表せない秘儀を究めた聖バシレイオス大主教は、イコンに捧げられる敬意は、そこに描かれた対象へと遡ると述べました。　また、ヨハネもその黄金の口をもって、「私は蝋で造られた像さえも愛する」と語りました[2359]。そして、聖キリル[2360]—この聖霊の竪琴—は、次のように述べました。「キリストの受難を描いたイコンの像を頻繁に目にするたび、私は涙なしにこのイコンの前を通り過ぎることができません」。　さて、第七公会議以前に開かれた最初の六つの全地公会議が、聖なるイコンを崇敬し、そこに描かれた人物や出来事に敬意を払うことを禁じなかったのであれば、果たしてあなたが彼らよりも賢明だと言えるだろうか！　王よ、異民族に対して戦争を繰り広げることはあなたの役目ですが、教会の教義や律法を究明するのは、聖なる教父たちの役目であり、王たちの役目ではありません。

この尊い父の書簡を読み終えると、皇帝は言いようのない怒りに満ちた。彼は直ちに、シグリア地方へ残忍な高官を一人派遣し、「大村」と呼ばれるテオファノスの修道院を荒らし、完全に焼き払うよう命じた。また、その弟子たちを容赦なく打ちのめし、追い散らすよう命じた。　また、王は別の、同様に凶暴な使者を、すでに2年間エレフフェリエフ城の薄暗い地下牢に閉じ込められていた聖テオファンのもとへ遣わした[2361]。

この使者は、断食と長引く病気で既に衰弱しきっていた聖なる長老から衣服を剥ぎ取り、背骨や腹部を牛の腱で容赦なく打ち据え、三百回の打撃を加えた後、再び地下牢に閉じ込めてその場を去った。

翌朝、王の命により、この拷問担当者は再び聖者にやって来た。彼を牢獄から引きずり出し、残酷に殴打した。その後、聖テオファンはサモフラキア島[2362]への流刑に処された。尊者である父は、その透徹した眼差しでこれをあらかじめ見通し、数日前には彼に仕えていた弟子に、彼らがこの島へ送られるだろうと告げていた。　この地でわずか二十三日間を過ごした後、この聖なる殉教者は、この世からの追放という試練を経て、信仰の殉教の冠を戴き、天の故郷へと旅立った[2363]。そして、その尊い遺体は、そこで木製の棺に納められた。　神は、この聖なる御使いを、生前だけでなく、死後も栄光に輝かせられた。神は彼の聖遺骨に癒しの力を授けられ、多くの病人がその棺に触れるだけで癒やされたのである。

[2357] 主イエス・キリストがこの世におられた頃、メソポタミアのエデッサという町に、ハンセン病を患っていたアヴガルという王子がいました。イエス・キリストがあらゆる病を癒やされるという話を耳にしたアヴガルは、画家のアナニアを伴ってキリストのもとへ手紙を送り、エデッサに来て自分を癒やしてほしいと懇願しました。　主は、ご自身は彼のところへ行くことはできないが、地上の御業を成し遂げた後、弟子の一人を彼のもとへ遣わし、その者が彼を癒やすだろうと答えられた。その後、主はご自身の顔を洗い、タオルで拭かれた。　その時、その布に主の御顔が映し出された。アヴガルはそれを受け取り、口づけすると、病の苦しみから大いに安らぎを感じた。主が天に昇られた後、七十人の使徒の一人である聖ファデウスがアヴガルの元を訪れ、彼のハンセン病を完全に癒した。　エデスの住民たちは王子と共に、使徒から洗礼を受け、聖なる布は町の正門の上の壁に掲げられ、944年にエデスからコンスタンティノープルへ移されるまでそこに留まっていた。この移送は8月16日に祝われる。

[2358] 聖使徒であり福音記者であるルカは、伝承によれば画家でもあり、聖母マリアの御許しを得て、彼女のイコンをいくつか描いた（彼の伝記、10月18日参照）。

[2359] その記念日は11月13日と1月30日である。

[2360] 聖キリルの記念日は1月18日である。

[2361] エレウフェリオン城（あるいは宮殿）は、現在のコンスタンティノープルにおいて、現在セルアイ（トルコのスルタンの宮殿）がある一帯に位置しています。

[2362] サモフラキアは、エーゲ海に浮かぶ島で、トラキアの海岸から5.5マイルの距離にある。

[2363] 聖テオファンは818年頃に亡くなりました。

邪悪なアルメニアの王レウが殺害された後、追放されていた聖テオファンの弟子たちは再びシグリアンの山に戻り、焼失した修道院を再建した。　彼らはサモフラキア島から、師である聖テオファンの聖遺骨をこの地へ運び、敬虔な心をもって教会に安置した。すると、そこから数多くの奇跡が起こった――私たちの神キリストの栄光のために、父と聖霊と共に、永遠に賛美される御方のために。アーメン[2364]。

コンダク、第2調：

天より神の啓示を受け、世の喧騒の中から慎重に身を退き、孤独のうちに、尊き父よ、あなたは奇跡の業と預言の尊厳を受け、富と妻を捨て去った。

聖人伝：我らの父、グリゴリオス・ドエスロヴォス、ローマ教皇

記念日：3月12日

聖グレゴリウス、ローマ教皇[2365]は、その雄弁な語り口から「二語者」あるいは「語り手」[2366]と呼ばれ、ローマ市で生まれた。父のゴルディアンと母の福者シルヴィアは、ともに元老院議員の家系に属する高貴で裕福な家柄であった。

しかし、この聖グリゴリウスの家系が貴族であったのは、その元老院議員としての出自というよりも、むしろグリゴリウスと血縁関係にあった敬虔で聖なる人々によるものであった。例えば、ローマ教皇である福者フェリックス[2367]は、グリゴリウス・デュオヴォルブの祖父であった。臨終の際に御自身のもとへ来られる主イエス・キリストを目撃した聖タルシラ、そしてタルシラと共に永遠の天の命に与る栄誉を得た福者エミリアナは、グリゴリウスの叔母たちであった。また、聖人の母シルヴィアも、ローマ教会によって聖人の列に加えられている。

しかし、この聖なる一族の聖性を何よりも輝かせたのは、若き日から徳を磨き、神に喜ばれる生活を送った至福のグリゴリウスであった。幼い頃から読書を愛した彼は、後に著名な学者兼雄弁家となった。彼は知性と善意に満ちた人物であり、それゆえに[2368]　のプレトールに選出されたのである。　しかし、グリゴリウスの思いと願いは、世俗的なものというよりはむしろ霊的なものに向けられていた。彼は修道士になりたいと願っていたのである。だが、両親が存命の間、この将来の聖人は、より好都合な時期が来るまで出家を見送っていた。とはいえ、世俗に生きながらも、清らかな貞潔を保ち、いわば修道士のような生活を送っていた。

やがてグリゴリウスの父が亡くなると、彼は遺された広大な財産を、施しや聖なる修道院、病院、旅人宿の建設に費やし始めた。　こうして、シチリア島[2369]　では6つの修道院を設立し、必要なものをすべて備えさせ、ローマでは聖使徒アンドレイに捧げる修道院を設立した。この修道院は、聖殉

[2364] 聖テオファンは『クロノグラフィア』を遺しており、その中で285年から813年までの教会の出来事を記述している。

[2365] 「パパ」（ギリシャ語のpappas＝父）という称号は、5世紀末まではすべての司教に対する敬称として用いられていたが、5世紀末からは主にローマの大司教を指すようになり、1075年以降はもっぱらローマの大司教のみを指すようになった。

[2366] 聖グレゴリウス大教皇は、その著作『イタリアの教父たちの生涯と奇跡に関する対話』により、「対話者（対話者、語り手）」と呼ばれている。

[2367] 聖フェリックス3世教皇は、483年から492年まで教会を統治した。

[2368] プレトル（ラテン語：praetor）とは、ローマ人において最高司法権を委ねられた高官の呼称であった。

[2369] シチリアは、地中海に浮かぶ大きな島の一つであり、イタリア王国の領土の一部である。本土とはメッシーナ海峡によって隔てられている。

教者ヨハネとパウロの教会の近く、「スクワラ」と呼ばれる丘のそば[2370] にあった彼自身の家から始まったのである。　ここで修道誓願を立てたグリゴリウスは、経験豊富な長老イラリオンとマクシミアンの指導のもと、金糸で織られた世俗の衣服を脱ぎ捨て、修道服の羊毛の衣を身にまといました。そしてしばらくして、彼はその修道院の院長となりました[2371] 。

一方、聖グリゴリイの母である祝福されたシルヴィアは、当時、使徒パウロの門の近くに住んでいた。主に仕えながら、彼女は断食と祈りに時間を費やし、昼夜を問わず「主の家で奉仕に励んでいた」[2372] 。彼女の食事は生の野菜であり、それを毎日、息子である祝福されたグリゴリイにも送っていた。　また、彼女は貧者や困窮者に対して非常に慈悲深く、自分の全財産を彼らに分け与えたほどであった。

また、彼女の息子である至福のグリゴリウスも、貧しい人々を深く愛し、最後の一物さえ惜しまず、求めてくる者には即座にすべてを分け与えていた。

ある日、彼が自分の小部屋に座り、いつものように書を写していたところ、一人の乞食（それは乞食の姿をした主の天使であった）が彼のもとに来て、こう言った。

「憐れんでください、至高の神のしもべよ！私は船乗りでしたが、海で自分の持ち物だけでなく、他人のものまでも失ってしまいました。」

貧者を愛し、真のキリストの僕である聖グリゴリウスは、彼を憐れみ、仕えていた兄弟を呼び寄せ、その男に六枚の金貨[2373] を与えるよう命じた。すると、その乞食は与えられたものを受け取って去っていった。

その同じ日の数時間後、同じ乞食が再び聖人のもとを訪れ、こう言った。

「神のしもべよ、私を憐れんでください。私はこれほど多くのものを失ったのに、あなたは私にほんの少ししか与えてくれませんでした。」

聖グリゴリウスは再び、仕えていた兄弟を呼び寄せ、こう言った。

「兄弟よ、行って、その物乞いにさらに六枚の金貨を渡してやりなさい。」

その兄弟は命に従い、その日、その乞食は聖グリゴリウスから十二枚の金貨を受け取り、その場を去った。

しばらくして、その乞食は三度目にして至福のグリゴリウスのもとを訪れ、彼にこう訴えた。

「父よ、私を憐れんでください。あなたの寛大さから、さらに施しをください。私は海で他人の財産を大いに浪費してしまったのです。」

すると、聖グリゴリウスは再び、彼に仕える者にこう言った。

「行け、兄弟よ。この求めている者に、さらに六枚の金貨を与えなさい。」これに対し、その兄弟は答えた。

「正直な父よ、信じてください。私たちにはもう一枚の金貨も残っていません。」

しかし、聖グリゴリウスは彼にこう言った。

「他に何か、例えば衣服や器類など、何か渡せるものはないか？」

「私にあるのは器が一つだけだ」と兄弟は答えた。「それは、あなたの母があなたに送ってくれた、ソチヴォの漬物が入っていたあの銀の皿だ。」

[2370] セリウス丘の近くにある。

[2371] この頃、教皇パスカリス2世は、グリゴリウスの本意に反して、577年に彼を助祭に叙階した。 翌年、教皇は彼を自身の使節としてコンスタンティノープルへ派遣した。その目的は、新教皇ペラギウスの件に関する交渉と、ロンゴバルド族に対するローマの支援を要請することの両方であった。　コンスタンティノープル滞在中、グリゴリウスは、使徒たちの時代以来、多くの信仰の篤い人々が栄えた東方教会の典礼について、正確な情報を得ようと努めた。またこの時期、彼はその著名な著作『ヨブ記の注解、あるいは道徳に関する三十五巻』の執筆を始めた。 585年、グリゴリウスはローマに戻り、自身が設立した修道院の院長に選出された。

[2372] この表現は詩篇83:11に由来する。「プリメタツィア」とは、戸口に横たわる、どこかに身を寄せることを意味する。

[2373] 「ズラティツァ」とは、金貨、チェルヴォネツのことである。

「行け、兄弟よ」と、神の御使いグリゴリウスは言った。「その皿を乞食に与えなさい。彼は自分の苦難の中で慰めを求めているのだから、悲しんで私たちのもとを去ることのないように。」

その貧しい男は、その銀の皿を受け取ると、喜びながら聖人のもとを去った。そして、もはや明らかに物乞いとしてグリゴリーに施しを乞いに来ることはなかったが、目に見えない形で常に彼のそばに留まり、彼を守り、あらゆる面で彼を助けていた。　というのも、主の天使が、奇跡的な恵みの力とともに聖人のもとに遣わされていたからであり、その力によって聖グリゴリウスは後に、自身の修道院で偉大な奇跡を成し遂げ、名声を博したのである。

ローマ教皇ペラギウスの死後、[2374] 、皆が満場一致で、アンドレイ修道院の修道院長である聖グリゴリウスを教皇の座に選出した。しかし彼は、そのあまりにも高貴な地位と栄誉を避け、都から逃げ出し、人里離れた場所に身を隠した。　自らの牧者であるグリゴリウスを探し求めても見つからなかったため、ローマの民は深い悲しみに沈み、皆、神に熱心に祈りを捧げ、神のしもべを現してくださるよう願った。　すると、誰もが目にできる炎の柱が現れ、ある荒涼とした山に身を隠していた聖グリゴリウスのいる場所へと降りてきた。その時、人々は皆、その天の柱が聖グリゴリウスのために現れたのだと悟った。直ちに皆はその場所へと向かい、そこでグリゴリウスを見つけ、彼がそれを望まなかったにもかかわらず、言い表せないほどの喜びをもって彼を連れ帰った。

マウリキウス帝の治世中[2375] 、聖グリゴリウスは古代ローマの教皇に任命された[2376] ：そこで彼は、貧者や困窮者、孤児や未亡人に対する言葉に尽くせないほどの慈悲によって、とりわけ名声を博した。彼はローマだけでなく、他の都市でも、貧しい人々のための宿屋や保護施設を建設した。聖グリゴリウスは、エルサレムにアッバ・プロヴァを多額の資金を携えてわざわざ派遣し、そこでの宿屋を設立させた。シナイ山[2377] には、毎年、修道士たちの生活費として多額の施しを送っていた。 またローマでは、聖人は毎日、特別な帳簿[2378] に名前を記したすべての乞食や病人に食事を提供していた。旅人や貧しい人々をしばしば自身の食卓に招き、その際は常に自ら彼らに給仕した。　ある時、聖教皇は自身のサケラリウス（[2379] ）に、十二人の旅人を食事に招き、共に昼食をとるよう命じました。しかし、全員が食卓に着いたとき、聖教皇は十三人の旅人が座っているのを見ました。そこで、サケラリウスを呼び寄せ、静かにこう言いました。

「私は十二人の旅人を招くよう命じたではないか。なぜ私の言うことを聞かずに、十三人目を招いたのだ！」

[2374] 教皇ペラギウス2世は、578年から590年までローマ教会を統治した。

[2375] マウリキウス皇帝は582年から603年まで在位した。

[2376] 聖グレゴリウスは590年に教皇に選出された。これは謙虚なグレゴリウスの意思に反して行われたものであった。彼は、至福のアウグスティヌスに倣って、自らを「神の僕たちの僕」と尊び、そう称していたが、　権力を重荷と感じ、それを避けるために自分の力の及ぶ限りの手段を尽くしたが、その地位に就くと、常に病に苛まれながらも、熱心に牧会の務めに専念した。教皇グレゴリウスの最大の関心事は、神の御言葉の普及と解説であった。彼は多くの異端者を正統信仰へと導き、 遠く離れたブリタニア（イングランド）においても信仰の確立に寄与し、597年にベネディクト会修道士アウグスティヌスを団長とする宣教師団を派遣した。アウグスティヌスはエセルベルト王自身に聖なる洗礼を受けるよう説得し、これがキリスト教信仰の全国的な普及に決定的な役割を果たした。

[2377] シナイ山はシナイ半島の中央に位置している。これは実際には花崗岩の岩で構成された山群であり、険しく起伏に富んだ谷に切り裂かれ、囲まれている。　旧約聖書において、シナイ山でイスラエルの民は神と契約を結び、神から律法の戒めを受け取った（出エジプト記20章）。キリスト降誕後4世紀から5世紀にかけて、シナイ山は、その峡谷や洞窟に住むキリスト教の隠者たちの住処として名高い場所であった。

[2378] 貧しい人が路上で死んでいるのが見つかったとき、聖グリゴリウスは、あたかも自分がその死の原因であるかのように考え、しばらくの間、聖体礼儀を執り行うことを控えた。

[2379] サケラリウス（ギリシャ語の saxella、saxellion――袋、金銭入りの箱、金庫――に由来）とは、一般に財務担当者を意味する。コンスタンティノープル教会において、サケラリウスには、金銭やその他の貴重品から成る教会の財宝を管理する責務が課されていた。　ロシア正教会では、後世になって、サンクトペテルブルクやモスクワにあるいくつかの著名な大聖堂の鍵番に「サケラリウス」という名称が与えられるようになった。

おびえたサケラリウスは、これに対しこう答えた。

「どうかお信じください、尊き教皇様。ここに十三人目はいません。」

確かに、彼も他の誰も十三人目を見たことはなかった。彼を見たのは、聖なる教皇ただ一人だけだった。食事の間、聖グレゴリウスは食卓の端に座っていたこの十三人目の旅人をじっと見つめていたが、その顔つきが頻繁に変わるのを見た。ある時は白髪の老人のように見え、またある時は若々しい青年のようにも見えた。　皆が食卓から立ち上がった時、聖教皇グレゴリウスは全員を帰らせたが、その姿がこれほどまでに不思議な十三人目の旅人だけは引き留め、彼の手を取って自分の寝室へと案内し、そこでこう言った。

「全能の神の偉大な力によって、お前に命じる。教えてくれ、お前は誰で、その名は何か！」すると、その不思議な旅人はこう答えた。

「なぜ私の名を尋ねるのか？　それは不思議な名なのだ。　ただ一つ覚えておいてほしい。私は、かつて聖アンドレイの修道院に訪れた際、あなたが自分の独房で座って執筆していた時に、あなたから十二枚の金貨と、あなたの祝福された母シルヴィアがソチヴァと共に送ってくれたあの銀の皿を受け取った、あの物乞いの船頭その人なのだ。　知っておいてほしい。あなたが心からの愛をもってそれを私に与えてくださったその日から、主はあなたを、御自身の血を注がれたこの聖なる教会の院長として、また、あなたがその徳高い生き様において模範としている聖なる最高使徒ペトロの後継者として任命されたのだ。

これに対し、福者グリゴリウスは彼にこう言った。

「主があの時からすでに、私を教皇に定められていたことを、どうしてあなたが知っているのですか？」

「私は全能の主の天使です」と彼は答えた。「だからこそ知っているのです。主はあの時、あなたが虚栄心のためではなく、真に人を愛する心から施しを行っているのかどうかを確かめるために、私を遣わされたのです。」

これを聞いて、福者グリゴリウスは大きな恐怖に襲われた。それまで彼は神の天使をはっきりと見たことがなかったが、今やまるで普通の人間と話すかのように彼と対話を交わしていたのである。すると、現れた天使は聖人にこう言った。

「恐れるな。主は、私を遣わして、生涯あなたと共にあり、あなたの祈りを神に届けるためである。それゆえ、あなたが希望を持って主に求めるものはすべて、与えられるであろう。」

すると、聖なる教皇は顔を地面につけて主を礼拝し、こう言った。

「もし、これほどささやかな施しのために、主が私にこれほど多くの恵みを与え、私を御自身の聖なる教会の教皇とし、私を守るために御自身の聖なる天使を私のそばに置いてくださったのなら、主の律法を守り、正義を行う者たちには、主は一体どのような報いを与えてくださるのでしょうか？」

その後、天使は姿を消し、聖人は主に対して深い感謝を捧げると、人々への善行と神への奉仕に、さらに熱心に取り組むようになった。

またある時、聖グリゴリウスは旅人たちに昼食を振る舞っていた際、その謙虚さゆえに、そのうちのひとりに水を手に渡そうとした。しかし、器を取りに振り返ると、その男　はすでにいなくなっていた。あちこち探してもどこにも見つからず、グリゴリウスは大いに驚いた。　その翌夜、聖なる教皇が眠っているとき、主が現れてこう言われた。

「あの日、あなたはわたしの兄弟たち、すなわち貧しい人々をもてなした。昨日、あなたはわたし自身を受け入れたのだ。」

聖グリゴリオスの偉大な謙遜については、エルサレム総主教ソフロニオス聖下の『リモナール』[2380]にも記されている。そこには彼について次のように書かれている。

「ある時、私たちはアッバ・ヨハネ・ペルシャ人のもとを訪ねた。彼は私たちに、偉大で至福の聖グリゴリウス、すなわちローマ教皇について語ってくれた。　『ある時、私は』と彼は語った。『聖なる首席使徒ペトロとパウロの聖遺物に礼拝を捧げたいと思い、そのためにローマへ向かった。ある日、街の中心に立っていると、群衆の中から教皇が通り過ぎるという話を耳にした。そこで私は、彼に会えるのを待ち続けた。　彼が私のそばを通りかかったとき、私は彼に礼をしようと思った。しかし、兄弟たちよ、神を証人として言おう――彼は私に一語も発することなく、地面にひれ伏し、私に礼を捧げ、私が彼より先に立ち上がるのを見るまで、地面から立ち上がらなかった。　その後、深い愛を込めて私に口づけをし、ご自身の手で三枚の金貨を授け、生活に必要なものはすべて与えられるよう命じられました。私は、聖グリゴリウスにこれほど偉大な謙遜と、すべての人への愛、そして慈悲を授けてくださった神を賛美しました。

また、この偉大な神の司教の祈りによって、キリストの至聖なる秘跡の上でなされた恐るべき奇跡についても、黙してはいられない。ローマで非常に有名なある女性が、神の祭壇にプロスフォラを捧げに来た。その時、神聖な典礼を執り行っていたのは、聖なる教皇グリゴリウスご自身であった。　そして、教皇が人々に聖体拝領を授けていたとき、その女性も聖なる秘跡を拝領しようと近づいた。しかし、彼女がグリゴリウスの「我らの主イエス・キリストの命を与える御体を授けます」という言葉を耳にしたとき、彼女は笑ってしまった。すると、教皇グリゴリウスは手を止め、彼女に尋ねた。

「なぜ笑うのですか？」

「不思議です、大司教様」と彼女は答えた。「私が自分の手で小麦粉から焼いたパンを、あなたがキリストの御体と呼ぶなんて。」

聖人は彼女の不信仰を見て、神に祈りを捧げると、たちまちそのパンは、見た目上、実在する人間の肉体へと変容した。　そして、この血に染まった人間の肉体を、その女性だけでなく、教会に居合わせた人々も目撃した。この奇跡を目撃した者たちは皆、キリストなる神を賛美し、聖体拝領において、パンの姿をしたキリストの真の御体、そしてワインの姿をしたキリストの真の御血が授けられていることを、少しも疑うことなく、信仰をさらに強めた。　その後、聖なる教皇は再び祈りを捧げると、人間の体の姿は再びパンへと変容した。そこで、その女性は大きな畏敬の念と揺るぎない信仰をもって聖体拝領を行い、パンをキリストの体として、ワインをキリストの血として受け入れた。

この世の偉大な灯火である至聖なる教皇グレゴリウスは、天使に等しいその生涯と驚くべき奇跡によってのみならず、正教の信仰に多大な貢献をもたらした数多くの著作によっても、キリストの教会を輝かせた。　そして彼がそれらを執筆する際、聖霊は鳩の姿となって彼の頭上に舞い降りていました。この光景を、極めて徳の高い人物であるグリゴリオスの大助祭ペトロも、しばしば目撃する栄誉に浴しました。聖グリゴリオスとこの大助祭との対話は、大きな霊的益に満ちた四冊の特別な書物に収められており、　そこには、イタリアの地で神に喜ばれる生き方をした聖人たちの伝記の要約

[2380] 「リモナール」または「ジモナール」（ギリシャ語の「λειμών」＝牧草地、草地より）。この名称は、エルサレム総主教ソフロニオス（7世紀）の著書に付けられており、聖なる生活で輝いたいくつかの隠者たちの行いを集めた物語を収録している。

と、魂を救う教え[2381] が収められている。聖グリゴリウスは、キリストの教会 を13年6ヶ月10日間牧会し、ギリシャ皇帝フォケスの治世[2382] に主のもとへ召された。

この偉大なるローマ教皇グリゴリウスのその他のすべての業、奇跡、および教会運営について、またその驚くべき聖なる生涯について、ローマ大教会の助祭ヨハネスが四巻の書物を著した[2383] 。これらの書物には約二百六十の章が含まれている。 これらの書物の中からごく一部を抜き出し、信徒の魂の益となるに十分な記述を選び出して、私たちは、御自身の聖徒たちを称える私たちの神キリストを賛美します。キリストは、父と聖霊と共に、世々限りなく賛美されます。アーメン。

トロパリオ、第4調:

神より天より神聖な恵みを受けられた、栄光あるグリゴリイよ、その力によって強められ、福音の道を歩むことをお選びになりました。それゆえ、キリストより労苦の報いを受けられた、至福なる方よ、彼に祈り、私たちの魂を救ってくださいますように。

コンダク、第3調:

あなたは、キリストという大牧者の模範となる牧者として現れ、修道者の群れを天の囲いへと導き、そこからキリストの羊の群れに御命令を教えられました、父グリゴリーよ。今やあなたは彼らと共に、天の御国で喜び、歓喜しておられます。

2381 この著作は『イタリアの修道者たちの生涯と奇跡に関する対話』と呼ばれている。聖グリゴリオ・デュオヴォルボの他の著作としては、a) 牧師への訓示を含む『牧会規則』、および b) 多くの道徳的訓示を含む、計848通に及ぶ聖グリゴリオの手紙が知られている。

聖グリゴリウス・デュオスロヴォスの名で記されている「聖別された供え物」の典礼については、彼がこの典礼の式次第を定めたとしても、それはもっぱら西方教会のためであった（そもそも彼は、この教会そのものの礼拝の整備に尽力していた）ことを念頭に置く必要がある。 東方教会のためではなかった。東方教会では、この儀式は極めて古くから実践されており、聖グリゴリウスはそれを「サクラメンタリウム」に収録し、西方教会のために借用したのである。 一方、事前聖別された典礼の式次第の編纂を聖グレゴリウスに帰する伝承は、主に、正教会の東方世界がこの聖なる人物の名に対して抱いていた深い敬意に根ざして生まれたものである。 東から帰国し、ローマの司教となった聖グレゴリウス・デュオロゴスが、ローマ教会において、そこで忘れ去られていたが、東方ではその原初的な純粋さを保ったまま残されていたいくつかの古代の儀式を復活させ始めたという事実は、疑いようのないものである。 同時に、彼は東方で行われていた使徒的典礼である「聖別された供え物の典礼」を尊び、それを西方で確固として定着させ、広めることに尽力した。 彼はこの典礼をラテン語で刊行し、西方の教会でその使用を導入した。それによって、彼はいわば、世界教会の他の教父たちよりも優先される権利、すなわち、彼の名前がこの典礼と永遠に結びつけられる権利を勝ち得たのである。 東方教会は、聖グリゴリウスが「聖体礼儀」に関して示した配慮を忘れてはいなかった。11世紀以降、ギリシャの聖人暦には、聖グリゴリウスがローマ人に対して断食期間中に完全な聖体礼儀を執り行うよう定めたという記述が掲載されており、 その後、この記述は、彼がローマ帝国のキリスト教徒（当時、ギリシャ・ビザンツ帝国はそのように見なされていた）の間で、あらかじめ聖別された聖体礼儀の執行を定めた、という形で解釈・翻訳されるようになった。 西方教会では、この典礼は現在、年に一度、すなわち受難週の聖金曜日に執り行われている。（「あらかじめ聖別された供え物の典礼」に関する解説を参照：スミルノヴァ、『正教会議録』1892年、6–7頁）。

2382 聖グリゴリオス・デュオロゴス（歴史上「大」の称号でも知られる）は、604年3月12日に逝去した。その遺体は、バチカンの聖使徒ペトロ大聖堂内にある、この聖グリゴリオスに捧げられた付属礼拝堂に安置されている。

2383 9世紀半ばに生きた助祭ヨハネは、古代の信頼できる証言に基づいて聖グリゴリウスの詳細な伝記を著し、また後世の奇跡については目撃者の証言に基づいて記述を残した。

義人フィネアスの記念日。

記念日：3月12日

聖なる義人ピネハスは、ユダヤ人の大祭司エレアザルの息子であり、大祭司アロンの孫であり、当初はユダヤ人の祭司であった。

聖フィネアスは、イスラエルの神にふさわしい奉仕者でした。生涯を通じて、彼は真の神への崇拝を熱心に擁護し、守り抜きました。　神の僕としての彼の活動は、一方ではイスラエルの神、エホバの栄光ある御名を称えることに、他方では、ユダヤ人の間で時折見られたあらゆる悪徳や神の律法からの逸脱を根絶することに向けられていた。

ある時、イスラエル人の隣に住み、その不敬虔さで知られていたモアブ人[2384] が、イスラエル人を、彼らの神バアル＝ペゴル[2385] への不敬虔で忌まわしい礼拝に引きずり込んだ。 この甚だしい不法に激怒した主は、不義な背教者たちを厳しく罰された。直ちに疫病が彼らを襲い、それによって何千人ものイスラエル人が死んだ。さらに、神はモーセに、不義にふけっていた民の指導者たちを（絞首刑によって）処刑するよう命じられた。　多くのイスラエル人は、神の怒りを目の当たりにして、不法な行いをやめ、悔い改め、幕屋の入り口に集まり、主に対して民全体としての悔い改めの捧げ物を捧げた。

その頃、シメオン族の長であるザムブリという者が、モーセと全会衆の目の前で、ミディアン人の女をユダヤ人の陣営に連れ込み、自分の天幕へと連れて行った。　そこでピネハスは、民を誘惑したこの族長に対する怒りと憤りに満ち、ザムブリの天幕に入り、彼とそのミディアン人の女を槍で刺し殺した。

神に対する彼の熱烈な嫉妬がこれほど明らかに表れた、この勇敢なピネハスの行いは、イスラエルの民から神の怒りを退けた。すると直ちに、民を襲っていた疫病[2386] が収まった。

その後、神はモーセにこう言われた。

「大祭司エレアザルの子ピネハスは、わたしの名のために嫉妬し、イスラエルの子らからわたしの怒りを退けた。それゆえ、彼にこう告げよ。『見よ、わたしは彼に、わたしの平和の契約を与える。また、彼とその子孫に、永遠の祭司の契約を与える。』」

しばらくして、神の命により、イスラエル人はモアブ人の不義を罰するために軍勢を集め始めた。集められたイスラエル人は計一万二千人（各部族から千人ずつ）であった。軍隊の指揮官にはピネハスが選ばれ、彼も今回もまた、神の命令を忠実に実行する者であることを示した。

さらに、聖ピネハスは、民の間に何らかの不和が生じた際にも、賢明な指導者としての資質を示した。彼は互いに敵対する者たちを和解させ、巧みに相互の争いや不和を鎮め、解消した。

これらすべての功績により、聖ピネハスは父の死後、満場一致で大祭司に選出された。神の約束（民数記25:13）に従い、ピネハスの大祭司職は彼の子孫に受け継がれ、イファマルの家系に移ったのは一時的なものに過ぎなかった。

聖フィネアスは、非常に高齢になって[2387] に亡くなり、エフライム族の領地にある山に埋葬された（ヨシュア記24:33）。

[2384] モアブ人は、イスラエル人と血縁関係にある異教の部族で、死海の東岸沿いに住んでいた。彼らの始祖は、ロトの長女の息子であるモアブであった（創世記19:37）。　モアブ人は、死海の近隣に住んでいた他の多くの民族と同様、その歴史の初めから道徳的な堕落を特徴としていた。

[2385] バアル・ペゴルは、モアブ人や他の異教の民から深く崇められていた神であり、その崇拝はとりわけ不敬虔で放蕩なものであった。　この神の本来の名称はバアル（ヘブライ語で「主」の意）であり、「ペゴル」という言葉は、死海の北東海岸にあったある山の名称である。おそらく、この山にはバアルの偶像が立っていたのだろう。

[2386] 疫病により、24,000人のイスラエル人が死んだ（民数記25:9）。

[2387] 聖フィネアスは紀元前1500年頃に亡くなった。

3月26日

3月13日（旧暦）

同日は、4世紀にペルシアで殉教した聖女クリスティーナの記念日である。

ツァレグラード総主教ニキフォロスの聖遺骨の移送

記念日：3月13日

神の偉大なる司教、聖ニキフォロス、ツァレグラード総主教は、聖なるイコンを敬虔に崇敬したため、邪悪な皇帝レオン・アルメニア人によってその座から追放され、プロコンニス島（ ）[2388] へと追放された。　そこで彼は13年間、監禁と侮辱に耐え、主のもとへ召された後、自ら建立した修道院（[2389] ）内の聖殉教者テオドロス教会に埋葬された。

数年後、不義の王たち――レウ・アルメニア人、ミハイル・ヴァルボス、そしてその息子テオフィロス――の死後、ギリシャ王国の王権は敬虔なテオドラ女王の手に渡り、彼女は当時まだ非常に若かった息子ミハイルと共に王国を統治した[2390] 。

この頃、コンスタンティノープルの偽パトリアルヒたち――テオドトス・カシテル、テオドロス・スパサロカンディラト、続いてアントニオス・ファシマト、そして最後に「アニー」の異名を持つヨハネス――も相次いで死去した[2391] ; 彼はその狡猾さゆえに魔術師のように見えたが、不法に就任した者として、敬虔な人々によって座から追放された。　彼の後を継いでコンスタンティノープル総主教座に就いたのは聖メフォディオスであり、彼は聖なる教会に聖像崇敬を復活させた[2392] 。まさにこの時期、プロコンニス島から、キリストの殉教者である聖ニキフォロスの尊い遺骨がツァールグラードへ還された。

至聖なるメフォディオス総主教は、敬虔なテオドラ皇后に次のように助言した。

「不適切です」と彼は彼女に語った。「正教のために座から追放され、さらには亡くなられた、歴代の総主教の中で最も優れた聖ニキフォロスでさえ、今なお追放されたままであることは。その聖なる遺体は、その座へと戻されるべきです。　何しろ、その聖遺を幽閉したままにしておけば、私

2388 *プロコニスは*、マーブル海の島の一つであり、現在では「マルマラ」と呼ばれている。この島は、偶像破壊運動の混乱期に、多くの殉教者たちの流刑地となった。

2389 *聖ニキフォロス（ニキフォロス）は*、当初、イリナ女帝の宮廷で高官を務め、世俗の身分でありながら、第7回全地公会議においてイコン崇敬を立派に擁護した。　806年、ニキフォロス皇帝の治世下で総主教の座に就き、9年間教会を統率したが、その任期満了後、プロコニス島へ追放された。828年6月2日に逝去するまで、最期まで自らの著作を通じて、聖像破壊派に対する真理を証し続けた。 その記念日は6月2日である。

2390 レウ・アルメニア人皇帝は813年から820年まで在位し、ミカイル・ヴァルボス *（口ごもる者）* は820年から829年まで在位した。　テオフィロスは829年から842年まで在位した。ミカエル3世皇帝（842年から867年）は4歳で即位したため、855年まではその母である聖テオドラ皇后が国政を執った。

2391 これらの総主教たちは、815年から842年にかけて教会を統率した。

2392 聖メフォディオスは、ミカエル・ヴァルボス帝の治世下で、聖像崇敬への熱意ゆえに牢獄に投じられた。ミカエルの後継者であるテオフィロスは、彼の頬を殴打するよう命じた。その結果、顎骨が砕かれ、殉教の証として醜い傷跡が一生涯、彼の顔に残ることとなった。　それを隠すため、メフォディオスは総主教となった後、修道帽の端を切り取り、それで顎を縛った。この殉教者への敬意から、それ以来、すべての修道士は切り込みの入った修道帽を着用するようになった。その後、テオフィロスは彼を島へ追放し、息苦しい地下の洞窟に二人の強盗と共に閉じ込めた。　テオドラ皇后は彼を総主教の座に就かせ、彼の助力によりイコン崇敬を復活させた。この聖人は4年と3ヶ月余りにわたり神の教会を牧会し、847年6月14日に逝去した。

たちは罪を免れることはできません。それはあたかも、私たちが彼の追放を是認し、その座からの追放が正当であったことに同意しているかのように見えるからです。　ヨセフの族は、四百年を経て父の遺骨をエジプトからカナンの地へ移したことで祝福を受けたことを、我々は知っている。それならば、敬虔の息子である我々は、神の教えによって正統信仰に育てられた我々の父の聖遺骨が、これ以上長く不在のままであることを許すだろうか。　この王都そのものが、天下でも有数の都市として、その聖なる指導者であり牧者である方の尊い遺骸を切望しており、畏敬の念をもってこれを自国に安置する用意がある。　花嫁である教会が、その花婿を再び喜び迎えることができますように。彼が存命の頃、教会は王の不当な措置によって彼を失いました。今こそ、牧者を愛する女王の命により、主のもとで安らぐその御遺体を受け入れてください。　敬虔なる女王よ、あなたは、あなたによって正信仰へと導かれた民が、亡き牧者でさえも霊によってその声を聞きたいと切望している様子を、ご存じでしょう。もし彼らが、たとえその影であっても、自分たちの元へ運ばれてくるのを見れば、あたかも生きているかのように思い、生きている者として受け入れ、その遺骸を、何よりも尊い宝物として守り続けることでしょう。

この聖なるメフォディオス総主教の言葉に、キリストを愛するテオドラ女王は即座に同意し、こう述べました。

「これは私たちの魂にとっても有益であり、また、後世において私たちの名前も名誉をもって守られることでしょう。」

そこで、至聖なる総主教は遅れることなく、司祭や修道士たちを伴い、大勢の民衆に囲まれてプロコンニス島へと向かった。

聖殉教者テオドロスの修道院に到着すると、総主教は聖ニキフォロスの棺を開け、埋葬から十九年が経過していたにもかかわらず、聖遺体が完全に保存されているのを皆が目の当たりにした。腐敗の痕跡すらなく、むしろ芳香を放っていた。

徹夜祈祷と神聖な典礼を執り行った後、聖メフォディオスは墓室に上がり、聖ニキフォロスの尊い遺骨を抱きしめ、まるで生きているかのように彼にこう語りかけた。

「ああ、至福なる人よ、あらゆる点で聖ヨハネス・クラマトルスに倣った者よ！　あなたは彼と同じ労苦を耐え、同じ苦難を乗り越えてこられました。聖ヨハネのように、あなたは果敢な言葉で不法を糾弾し、不当な追放に耐え、そしてすでに三十年以上――最初は生者として、その後は死者として――幽閉の状態に置かれています。　さあ、今こそ、私たち、あなたの愛する息子たちに身を委ね、ここを去って、あなたの国へ戻ってください。あなたを愛する民は、以前と同様に、喜びをもってあなたを迎え入れるでしょう。あなたを教会から不法に追放した不敬虔な王は、その行いにふさわしい罰を受け、王位も命も失いました。　今や、敬虔な王たちは、あたかもあなたが生きているかのように、あなたの教会を返還しています。彼らは私と共に、キリストを愛する息子たちとして、教会から異端の汚れを清め、あなたの労苦の末に以前あったのと同じくらい見事に整えました。　目を向けて、集まったあなたの子供たちを見てください。彼らは皆、近隣の町々からやって来ました。　さらに遠くに住む残りの者たちは、あなたを心待ちにしています。彼らを、まるで親を失った子供のように悲しませたり、彼らから遠ざかったりしないでください。そうすれば、あなたの都は、あなたの聖遺物を貴重な贈り物として受け継ぐことができます。それによって、都は王冠よりもさらに高貴に輝き、美しくなるでしょう。

こう語り終えると、至聖なるメフォディオス総主教は聖人の遺骸を掲げ、新しい聖骸箱に納めた。その後、聖職者会議の者たちと共に、それを肩に担ぎ、詩篇を唱えながら聖なる遺骸を船へと運び込んだ。帆を揚げると、彼らはまもなくコンスタンティノープルに到着した。

敬虔なテオドラ皇后は、息子のミカイルや全シンクリト、聖職者たち、そして大勢の民衆と共に、ろうそくや香炉を手に、歌声を上げながら、言い表せないほどの喜びと歓喜に満ちて、埠頭へと

出て、彼らの聖なる総主教ニキフォロスの尊い遺骸を出迎えた。　聖遺を受け取ると、彼らはまずそれを、聖ニキフォロスが追放された聖ソフィア大聖堂へと運んだ。

この聖遺物の移送は、3月13日[2393]　に行われた。まさにその日、聖ニキフォロスは不信心な王によって王都から追放されたのである。

日が暮れかかる頃、聖ソフィア大聖堂において尊い聖遺骨の上で徹夜祈祷が執り行われ、翌朝、聖ソフィア大聖堂から聖使徒教会へと移され、そこで敬虔に安置された。　この時から、私たちの神キリストの栄光のために、父と子と聖霊と共に賛美されるキリストの殉教者ニキフォルの記念を称えることが定められた。アーメン。

- 同日は、4世紀にペルシアで殉教した聖女クリスティーナの記念日である。

聖殉教者アレクサンドルの記念日

記念日：3月13日

聖アレクサンドルは、異教徒によるキリスト教徒への迫害[2394]　のさなかに、輝かしい殉教者となった。異教の不義の闇の中で、彼は輝く星のように、その敬虔さをもって輝いていた。　ピドネ[2395]の町で、偶像崇拝者たちの狂気を糾弾し、キリスト教の信仰を説く中で、彼は多くの異教徒に洗礼を授け、キリストへと改宗させ、その行動によって偶像崇拝者たちの怒りを買いました。　彼らは彼の勇敢さを目の当たりにすることも、神に霊感を受けた彼の言葉の力を耐え忍ぶこともできず、それゆえ、彼に襲いかかって捕らえ、縛り上げ、その後、残酷で容赦のない拷問にさらした。　彼らはこうした拷問によって、彼に偶像への生贄を捧げさせようとしたが、彼をその気にさせることができなかったため、ついに剣による斬首を宣告した。神への感謝の祈りを捧げながら、聖なる殉教者は剣の一撃に頭をさらし、こうしてその聖なる魂を主の御手に委ねた。

3月27日

3月14日（旧暦）

同日、キエフおよび全ロシアの総主教、聖テオグノストの帰天。

私たちの尊い父ヴェネディクトの生涯

記念日3月14日

[2396]　という名を持つ聖ベネディクトは、神の恵みによっても祝福された者であった。知性において、ベネディクトは幼少の頃からすでにまるで長老のようであり、その道徳的な生活においては、若き頃からすでに完全さに満ちた人物のようであった。　彼は自分の魂を肉欲や世俗的な欲望に屈服させることはなく、世界のあらゆる魅力を自由に享受できた青春の盛りの頃でさえ、それらすべてを、花と共に枯れ果てた草に過ぎないと見なした。

[2393] 846年。

[2394]　これは、ディオクレティアヌス帝の娘婿であり、305年から311年まで後継者となったマクシミアヌス・ガレリウスによって引き起こされた迫害であった。迫害は303年、ディオクレティアヌス帝の治世に始まった。

[2395] 現在は存在しない都市ピドナ、あるいはピンドは、マケドニアのテルミアクス湾に面した属州に位置していた。

[2396] ベネディクト（あるいはローマ式発音ではベネディクト – Benedictus）は、直訳すると「祝福された者」を意味する。

聖ベネディクトはヌルシア[2397]の出身であり、当時の世俗の学問をローマで学び始めた。しかし、これらの異教の学校で、多くの堕落した者たち――彼らが情欲に駆られて生きている様子――を目の当たりにし、わずかな書物による学びのせいで、自らの魂の偉大な知性を損なったり、堕落した人々と交わって罪の深淵に落ちたりすることを恐れて、そこから身を引いた。こうして、　彼は、学識を身につけた賢者でもなければ、知性ある無学者のまま学校を去り、内面の貞潔を保つために、外見上の学識を軽んじた。もっとも、この時、彼は異教の学校だけでなく、すでに他界していた両親の莫大な財産も捨て去り、修道生活と隠遁生活のみを志した。　彼に続いて、ある高潔な老女が荒野へとやって来た。彼女はかつて彼を育てた乳母であり、その徳高い生き方を深く愛していた女性であった。彼らがエフィディと呼ばれる場所にたどり着くと、ベネディクトは知人たちに引き留められ、聖ペテロ教会で暮らすことになった。　この地方の敬虔な人々は、この祝福された若者を愛し、彼に対して深い敬意を払っていた。彼と共に暮らしていた老女は、ある日、隣人から小麦をふるい分けるためのふるい（[2398]　）を借り、それを自分の食卓に置いてどこかへ出かけていった。偶然、そのふるいが食卓から落ちて二つに割れてしまった。　戻ってきた老女は、それが割れているのを見て、他人の物だったため、深く悲しみ、涙を流した。その若き聖人が、老女が割れた桶を嘆いているのを見ると、割れた二つの破片を手に取り、人目を避けて神の前で地にひれ伏した。　彼は一時間もの間祈りを捧げ、祈りを終えて立ち上がると、その壺が元通りになっているのを見つけた――以前割れていたことさえ全く分からないほどだった。彼はそれを手に取り、同行の女性に手渡した。　この奇跡の知らせは、すぐにその地の住民全員の間に広まった。人々は、その水瓶を取り、教会への入り口の壁に吊るし、教会に入る人々がそれを見られるようにした――それは神の栄光のためであり、また、これほど偉大な神の恵みに満たされた、神に喜ばれる若者ヴェネディクトを称えるためであった。　しかし、聖人は人間からの称賛や栄光を好まず、誰にも知られぬようその場を離れ、養母を残して荒野へと去っていった。彼が、ローマから四十ポプリシュ離れた「ドル・[2399]」と呼ばれる場所にたどり着くと、神の御摂理により、そこでロマンという名の修道士と出会った。彼は、テオドト修道院長が統率する近隣の修道院からやって来ていた。この修道士と共に座り、二人は魂の救いについて語り合った。　そこで、至福のベネディクトは彼に自分の考えと心の願いを打ち明け、自分の意図に賛同してくれる仲間を見つけた。ロマンは荒野で至福のベネディクトに修道服を着せ、ある深い藪の中、極めて人里離れた場所に洞窟を見つけると、彼をそこに住まわせ、食事は修道院から彼自身が運んでいった。　修道士ロマンは三年間、聖ベネディクトのことを誰にも話さなかったが、食事の時間にこっそりと少量のパンを取り分け、決められた日にそれを洞窟へ運んでいた。　しかし、この洞窟への山からの入り口は不便で、そこへたどり着くには山を遠く回り込む必要があったため、彼はその高い山から長いロープを垂らし、それを使って至福の ベネディクトにパンを下ろした。 ロープの先端には小さな鈴が結ばれており、聖ベネディクトがパンが降ろされてくる音を聞き取れるようになっていた。しかし、神の僕たちを憎む悪魔は、ローマンの善行を妨害し、聖ベネディクトを飢えで苦しめて、彼を気弱にさせようと企んだ。　ある日、ローマがいつものように山から洞窟へパンを下ろしていたとき、悪魔は鈴に石を投げつけてそれを割ったが、それによって何も達成することはできなかった。　なぜなら、高潔な修道士ロマンは、主が彼をこの神に喜ばれる労苦から安息へと導き、また、隠れて光り続けていたこの「隠れた灯」である至福のベネディクトを、多くの人々の霊的益のために世に現わそうと望まれるその時まで、聖ベネディクトに仕えることを決してやめなかったからである。

[2397] ヌルシアは、ウンブリア（イタリア）にある小さな町である。

[2398] ノシュヴィ、あるいはノチヴィ（ノシュヴィツァとも）とは、トウモロコシの選別やその他の農業用途に使用される、トレイまたはトレイに似た容器のことである。

[2399] ドル（すなわち湖畔の地）；この人里離れた地域（現在のスビアコ近郊）には、かつてクラウディウス帝とネロ帝の別荘があった。

それから三年後、この山から遠く離れた場所に住んでいたある長老が、復活祭の祝いに豊かな食事を用意していた時、幻の中で主が現れてこう言われた。

「見よ、お前は自分用に多くの糧を準備しているが、わたしのしもべベネディクトは、ある洞窟の中で――主はその場所の名も挙げられた――わたしへの愛ゆえに、飢えに苦しんでいる。」

そこで、その司祭は直ちに身支度を整え、食料を携えて、神の人の元へと探しに出かけた。険しい山道や谷間の小川、深淵を越えて、ついに彼に示された洞窟にたどり着き、そこで至福のベネディクトを見つけた。主の名において互いに口づけを交わすと、二人は腰を下ろし、魂を救う語り合いによって互いの魂を養い始めた。その後、長老は聖人にこう言った。

「父よ、神に感謝して食事をとりましょう。今日は復活祭ですから。」

すると、神の人はこう答えた。

「はい、今日こそ私にとっての復活祭です。あなたにお会いできたのですから。」

聖人は、復活祭が訪れたことを知らなかった。彼は人々から遠く離れた場所で暮らしており、修道士ロマン以外には誰も彼を知らなかったからである。

「まことに、父よ」と、長老はこれに応えて言った。「今日は主の復活の祝日であり、あなたが断食をするのはふさわしくありません。私は、今、私たち二人が主の賜物によって満ち足りるよう、主によってあなたのもとへ遣わされたのですから。」

こうして、神に感謝して、二人は共に食事を口にした。そして、長老は霊的な喜びに満たされ、神のしもべに会う恵みにあずかったことを神に賛美しつつ、自分の修道院へと戻っていった。その後まもなく、羊飼いたちが聖人の洞窟を発見し、それによって多くの人々が彼の存在を知るようになった。　人々はそれぞれの苦境を訴えて彼のもとに集まり始め、聖なる父は霊的な糧をもって彼らを慰めた。

ベネディクトのそのような聖なる生活を見て、憎しみに燃える悪魔は、尊者様の救いを妨げようと企んだ。 ある日、悪魔は「コス」[2400] と呼ばれる赤い鳥に変身し、聖ベネディクトの目の前で平然と飛び回った。もし聖ベネディクトが望めば、その鳥を手に取ることもできたほどだったが、彼はそれに注意を払わなかった。　これが敵の狡猾な策略であると悟ると、聖ベネディクトは十字を切って身を守り、その鳥は姿を消した。鳥が消えた直後、同じ悪魔の仕業により、聖ベネディクトはこれまで経験したことのないような肉欲の激しさに襲われた。　淫らな悪魔は、かつて聖人が若き日に一度だけ目にしたある女性の姿に変身し、彼の目の前に現れ、死んだも同然の彼の肉体に激しい情欲を燃え上がらせ、彼は絶望の淵に落ちそうになった。　彼の心には、悪意ある者によって植え付けられた「世俗に戻ろう」という考えが浮かんだが、神の恵みが彼を強め、情欲に打ち勝つ者とした。　落ち着きを取り戻すと、彼は自分のすぐ近くに生い茂るイラクサや茨の茂みを見つけた。ベネディクトは衣服を脱ぎ捨て、裸のまま茨の茂みへと飛び込み、数時間にわたりその中で転げ回り、全身に激しい火傷を負いながらも、全身が血に染まるのを見るまでその行為を続けた。　こうして邪な思いや淫らな言葉から解放された彼は、熱烈に主を賛美した。それ以来、神の恵みに支えられて、聖ベネディクトは極めて清らかな生活を送り、淫らな悪霊は彼の生涯を通じて二度と彼を誘惑しようとはしなかった。これは、後に彼が弟子たちを戒めるために自ら語ったことである。

この尊者についての評判がすでに至る所に広まっていた頃、その国のとある修道院で修道院長が亡くなった。そこで、その修道院の修道士たちは聖ベネディクトのもとへ赴き、熱心に彼に、自分たちの指導者であり牧者となってくれるよう懇願した。　しかし、彼は自らを罪深く、その任にふさわしくないと考え、彼らを率いることを拒んだ。その際、ベネディクトは彼らにこう言った。

「私の生活様式は、あなた方のそれとは相容れないだろう。」

[2400] コス（ラテン語：merula）――ツグミ。

しかし、彼らの懇願に心を動かされ、やがて承諾し、本意ではなかったものの、その修道院の修道院長となった。　聖ベネディクトは熱心に修道院を統率した。禁欲的な生活の規則を厳格に遵守し、誰にも自分の意のままに生きることを許さなかったため、修道士たちは、自分たちの堕落した気質には全く合わないような修道院長を選んでしまったことを後悔するようになった。修道士たちの中でも最も悪質な者たちは、次のような計画を練った。　彼らは毒をワインに混ぜ、それをすべて杯に注ぎ込み、昼食の席でこの致命的な飲み物を尊い父に差し出すという大胆な行為に及んだ。しかし、聖ベネディクトは清らかな手で杯の上に十字の印を切ったところ、聖十字架の力によって、その器はまるで石で打たれたかのように即座に粉々に砕け散った。　その時、神の人は、その杯が死をもたらすものであったことを悟った。なぜなら、それは命を与える十字架に耐えられなかったからである。彼は直ちに兄弟たちを呼び寄せ、いささかの悪意もなく、むしろ顔に微笑みを浮かべて、彼らにこう言った。

「おお、子らよ！ 慈悲深い主があなたがたを憐れんでくださいますように。なぜ、私にこのようなことをしようとしたのですか? 私の生き方はあなたがたには合わないと、以前にも言ったではありませんか。さあ、別の父を探してください。私はあなたがたと共にいることはできません。」

そして彼らに平安を告げると、彼は以前住んでいた洞窟へと引き上げ、全知の神の御目の前で一人きりで過ごした。しかし、万事を最善へと導かれる主は、聖ベネディクトが救いの道を独りで歩むことを望まなかった。彼には、他の人々をも救いへと導くことがふさわしかったのである。　かくして、主は彼に、わずかな言葉の群れに代わってより大きな群れを与え、たった一つの残された修道院に代わって十二の修道院を託された。　というのも、ベネディクトの天使に等しい生活について噂が広まると、至る所から信者たちが彼のもとに集まり始めたからである。ある者は彼の祈りと祝福に与りたいと願い、ある者は神の霊に導かれた彼の語りかけで魂を養いたいと望み、またある者は彼のそばに住み着きたいと願った。　そしてこの頃、多くの人々が世俗とすべての世俗的なものを捨て、彼の洞窟の近くに小さな修道室を建て、自らの労働で糧を得ながら生活するようになった。数年後、聖ベネディクトの修道者たちの数はこれほどまでに増え、あの荒涼とした荒野ではもはや全員を収容できなくなってしまった。　そこで聖人はすべての修道士を十二のグループに分け、各グループが別々の修道院で生活するようになった。その際、聖人は各修道院に、経験豊富な弟子の中から一人ずつ修道院長を任命し、初心者の兄弟たちは、霊的啓発のため、自身の元に残した。

尊者ベネディクトのもとには、名高いローマ市民たちも訪れ、息子たちを神への奉仕に捧げ、霊的な教育と啓発のために彼らを尊者に託した。その一人に、名門の出身であるエウティキオスがいた。彼は聖人に息子の少年マウルを連れてきて、神への奉仕のために尊者に託した。　また、パトリキウスのテルトゥリウスも、幼い息子プラキダを神に捧げ、ベネディクトの父のような手元に預けた。マウルは聖人に仕え、その労苦を助け、一方、少年プラキダは、肉体の糧よりもむしろ霊的な糧を楽しみながら育てられた。

聖ヴェネディクトの修道院の一つには、ある怠惰な修道士がいた。彼は教会での聖歌の最中に教会から出ていくのが常であり、修道院長がそれに対してしばしば懲戒を下したにもかかわらず、改める気配はなかった。　このことを知った聖ベネディクトは、その修道士を呼び寄せ、魂に有益な説教で戒めた後、家に帰したが、それでも彼は改めようとしなかった。　そこで、聖なる父ご自身がその修道院を訪れ、礼拝の最中に教会に立ち、その怠惰な兄弟を見やると、彼のそばに、ある黒い少年の姿をした悪魔がいるのを見た。その悪魔は、その修道士の衣の裾をつかんで、彼を教会から引きずり出そうとしていた。聖なる父は周囲の人々にこう言った。

「ほら、あの兄弟を教会から引きずり出しているのが誰か、見えるか！」すると、彼らはこう答えた。

「いいえ、師よ。」

その後、聖ベネディクトは主に対し、彼らの心の目を開いてくださるよう祈った。すると翌日、彼らの中には、その修道士を教会から引きずり出している小さなエチオピア人の少年を見た者もおり、彼らは聖人にその光景を伝えた。　礼拝の終了後、その兄弟を救うために、尊い父は穏やかな性格を厳しいものに変え、もはや言葉だけではなく杖でもその怠惰な兄弟を懲らしめた。それによって、まるで自ら鞭打ちを受けたかのように、その兄弟から悪魔を追い払った。悪魔は二度とその修道士のもとに戻ることはなく、彼はそれ以来、完全に改心した。

高い山の上に建つある修道院には、周辺に水源がなく、水を汲むためには深い渓谷まで行かなければならなかった。そのため、山の上にある修道院へ水を運ぶのは大変な苦労を伴っていた。　ある日、その修道院の修道士たちが尊い父のもとを訪れ、苦労せずに水を手に入れられる別の場所へ修道院を移してほしいと懇願した。 聖ベネディクトは、彼らに少し 待つよう命じると、夜、少年プラキダを連れて自らその山へ向かい、ひざまずいて神に祈りを捧げた後、かつてモーセが荒野で渇きに苦しむイスラエルの民に与えたように（出エジプト記17:1–7）、山から泉を湧き出させた。この泉は修道院の需要を満たすのに十分だっただけでなく、山からかなりの勢いで流れ落ちるようになった。

彼の別の修道院では、次のような出来事があった。ある兄弟が川のほとりの庭で鍬で土を掘っていた時[2401] 、柄の鉄部分が水の中に落ちてしまい、その兄弟は深く嘆いた。川は深く、流れも速かったため、鍬の鉄部分を水から取り出すことは到底不可能だったからである。　その時、聖ベネディクトがたまたまその庭にやって来て、悲しんでいる修道士を見ると、預言者エリシャの奇跡（列王記下6:6）に似た奇跡を起こした。　すなわち、彼は鍬の木製の柄を取り、鉄が落ちた場所の川の上に置くと、たちまち鉄が川底から浮き上がり、柄にしっかりとくっついた。そして聖人は、鍬を完全な状態でその兄弟に返し、こう言った。

「勤勉に働き、悲しむな。」

ある日、聖人は自分の独房に座っていた。すると、少年プラキダが水瓶を持って川へ水を汲みに行ったが、岸辺で水を汲もうとした際、水瓶ごと川に落ちてしまい、流れが最も速い場所に巻き込まれ、水流に遠くまで流されてしまった。聖人は霊的な目でこの事態を見抜き、仕えていた弟子マヴルに叫んだ。

「急げ、急げ。プラキダが川に落ちて、すでに激しい流れに遠くまで流されてしまった。」

するとマウルは川へと向かい、岸から遠く離れたところで溺れているプラキダを見かけると、まるで乾いた場所を歩くかのように川の上を走り出した。彼は水の上を走っていることさえ気づかず、陸の上を歩いていると思い込んでいた。　恐怖に駆られながら、彼はプラキダを連れて戻り、そのすべてを尊い師に報告した。聖ベネディクトはこの奇跡を、自身の祈りによるものではなく、マヴルの無条件の服従の力によるものと見なした。一方、マヴルは、この奇跡が師の祈りによって成し遂げられたのだと考えていた。

しかし、プラキダはこう言った。

「私は自分の頭上に師のマントが見え、まるで師ご自身が私の髪をつかんで陸へと引き上げてくださったかのように思えました。そして岸辺で、私はマウルを見ました。」

ちょうどその頃、主が聖ベネディクトをこれほど偉大な奇跡の力によって栄光に輝かせ、四方八方から人々が彼のもとに集まり始めたとき、その地方に住んでいたフロレンティウスという名の長老が、　悪魔の唆しにより、聖なる父を憎み、恥辱的な言葉で彼を中傷し、人々の前で非難し始め、皆が抱いていた敬虔な思いを取り去ろうとした。しかし、彼は何も成し遂げられなかった。誰もその恥辱的な中傷を信じず、長老の言うことを聞く者はいなかった。　そこで、この不信心者は聖人を毒殺しようと決心した。致死性の毒を仕込んだ聖餅を用意し、それを聖ベネディクトへの贈り物として送った。先見の明のある聖人は、その聖餅に毒が仕込まれていることを見抜いていたにもかかわらず

[2401] モティカ – 鍬、シャベル。

、感謝の念をもってそれを受け取った。　聖人が普段昼食をとる時刻になると、近くの森からカラスが彼の修道室に飛来し、彼のためにわざわざ用意された餌を食べていた。聖ベネディクトは、フロレンティウス司祭から送られてきた毒入りのプロスフォラを取り、それをカラス前に置き、こう言った。

「生ける神の御子、イエス・キリストの御名において、このパンを受け取り、人間も鳥も誰も見つけることのできないような荒野へと運び去りなさい。」

カラスはくちばしを開き、カアカアと鳴きながら、そのパンの周りを飛び回り始めた。これは、聖人の命令に従いたいが、プロスフォラに含まれる有害な悪魔の毒のせいでそれができないことをはっきりと示していた。そこで、神の人は再び鳥に言った。

「持って行け、持って行け、恐れるな――このパンで毒に当たることはない。さあ、それを人の通れない荒野へ運べ。」

そしてカラスは、命じられた通りに、大きな恐怖を抱きつつ、その致命的なプロスフォラをくちばしでくわえて飛び去った。三時間後に戻ってくると、彼は聖人の手から、いつもの餌を食べ始めた。　一方、悪意のないベネディクトは、フロレンティウスが自分に対して抱く憎悪と敵意を見て、自分自身よりも彼のために祈った――主がこれを彼の罪とみなさず、彼を改心させてくださるようにと。しかし、悪意に満ちた司祭は微塵も改心せず、さらに悪質な計画を企てた。

聖ベネディクトの肉体を殺す術がなかった彼は、悪魔的な狡猾さをもって、その弟子たちの魂を殺そうと企んだ。　尊者ベネディクトの弟子たちは毎日、彼の庭で働いていた。そこでフロレンティウスは　、七人の美しい若い娘たちを買収し、彼女たちをその庭へ送り込んだ。彼女たちは歌や踊りで、あの若い修道士たちの前で乱れ、そのようにして彼らの若い心に邪悪な欲望を掻き立てようとしたのである。　これを見た聖ベネディクトは、若い弟子たちの魂が滅びてしまうことを恐れ、彼らを連れてその地を去ることを決心した。つまり、一方ではフロレンティウスの悪意からその地を離れ、他方では若者たちを誘惑から遠ざけたのである。　兄弟たちや各修道院の院長たちを呼び集め、彼らの上に経験豊富な長老を立て、全員を神の御心に委ねた。そして自身は、人間の憎しみや敵意を謙虚に避けつつ、最も若い弟子たちと共にその地を去った。　一方、長老フロレンティウスは、尊者ベネディクトがその地を去ったことを知ると、大いに喜んだ。　しかし、復讐の神、主は御自分のしもべのために報復し、その悪辣な司祭を予期せぬ死で滅ぼされた。ある日、彼が自宅で座って楽しんでいたところ、彼がいた上階が崩れ落ち、その憎むべき者は壁に押しつぶされてしまった。一方、彼の家族には誰も被害を受けず、彼一人だけがそのようにして亡くなった。

このことは直ちにベネディクトの修道院に知れ渡り、修道院に残されていた聖人の最愛の弟子、至福のマウルスは、少しも躊躇することなく、尊者ベネディクトを呼び寄せた。彼はこう書き送った。「父よ、お帰りください。あなたに対して不当に怒りを抱いていた長老が、悲惨な死を遂げました」。

尊者ベネディクトは、フロレンティウスのそのような死を聞き、深い悲しみに打ちひしがれ、長い間彼のために泣いた。一方、弟子であるマウルがフロレンティウスの死を喜んだことに怒り、彼に悔い改めを課した。しかし、尊者自身はかつての修行の地に戻ることを望まず、別の場所へ移り住んだ。　しかし、住処を変えたとはいえ、聖人はかつての敵と決別したわけではなかった。あらゆる悪の考案者である悪魔が、彼に対してさらに激しい戦いを仕掛けてきたからである。だが、悪魔がどれほど激しく戦おうとも、神の御心に適う者は、神の助けにより、打ち負かされることはなかった。

尊者ベネディクトは、最初の功績を成し遂げた地を後にし、カンパニア地方の、カシンと呼ばれる町へと向かった[2402]　。そこで、ある高い山の上で、彼はアポロ神を祀る偶像の神殿を見つけ、そ

[2402]　カシン（Casinum）の町は、リリス川の左岸、カッシーノ山の麓に位置している（古代カンパニアでは、ナポリ市の北東に位置していた）。

の神殿の周囲には森が広がっていた。　聖ベネディクトはその偶像を即座に打ち砕き、神殿を破壊し、森を伐採して焼き払った。しばらくして、彼はその場所に聖ヨハネ・バプティスタに捧げる教会を建立し、修道院を設け、さらに多くの修道士たちを集めた[2403]。その地域には多くの異教徒がいたが、聖ベネディクトは行いと言葉に力があり、奇跡をもって聖なる説教を裏付けることで、多くの人々をキリストへと導いた。　悪魔たちは、ベネディクトがその地域にやって来たことを我慢できず、自分たちの神殿が破壊されるのを許さず、公然と彼を襲い始めた。まるで怒りの炎を吐き出すかのように、彼らはローマ式に彼に向かって叫んだ。

「ベネディクト、ベネディクト！」

しかし、聖人がこれに対して何も答えなかったため、彼らは叫んだ。

「お前はベネディクトなんかじゃない、マレディクトだ、マレディクトだ！」

「お前は呪われている、呪われている、祝福されているわけではない！　我々などどうでもいいではないか！　なぜ我々を追い払おうとするのだ？」

しかし、祝福されたベネディクトは、祈りと十字架の印によって、彼らを風が塵を吹き飛ばすように、自分から追い払った。修道院が建設され、建物の建設に従事する修道士たちが鐘楼を建てていた頃、ある時、聖人は人里離れた自分の独房で祈っていると、歩み寄ってくる悪魔を見かけた。

「どこへ行くのだ、敵よ？」と、尊者ベネディクトは尋ねた。

「働いている修道士たちのところへ行くのだ」

聖人は直ちに修道院の兄弟たちに知らせを送り、今まさに悪魔が彼らのもとへ向かっているのだから、予期せぬ敵の襲撃に万全の警戒を怠らないよう命じた。　使者がまだ兄弟たちに話している最中、突然、建設中の壁が崩れ落ち、一人の若い修道士を押し殺してしまった。すべての修道士たちは深く悲しんだ。彼らが嘆いたのは、壁が崩れたことではなく、兄弟が亡くなったことだった。　聖人のもとへやって来た彼らは、涙ながらにこの出来事を報告した。聖人は、亡くなった若者を自分のところへ運ぶよう命じたが、石の壁が彼の体だけでなく骨までも粉々に砕いてしまっていたため、手で運ぶことはできなかった。修道士たちは彼を藁の敷物の上に寝かせ、彼らの尊い父の独房へと運んだ。　聖ベネディクトは、自分が普段祈りを捧げるのに使っていた藁の敷物の上にその若者を寝かせるよう命じ、皆に小部屋から退出させた後、一人残って熱心な祈りを神に捧げ、死んだ若者を蘇らせた。そしてその日、まるで眠りから覚めたかのように完全に健康な状態で、彼を修道士たちの元の仕事へと送り出した。　ベネディクトの修道院では、修道院長自らが、仕事に出される兄弟たちは修道院に戻るまで、食べ物も飲み物も口にしてはならないと定めており、この規則は厳格に守られていた

[2403] 現在、ここには有名なモンテ・カッシーノ修道院がある。同修道院は長きにわたり、学術および神学教育の中心地であり、西キリスト教世界全体の巡礼地として機能していた。　修道院はロンゴバルド族によって破壊され、修道士たちの大部分はローマへ避難し、そこでクイリナーレの近くに新しい修道院を設立した。720年、教皇グレゴリウス2世がモンテ・カッシーノを再建し、その後を継いだ教皇たちは同修道院に多くの特権を与えた。 884年、サラセン人によって再び破壊されたが、後に再建された。1340年、修道院は地震によって再び破壊されたが、教皇ユリウス2世によって再建され、同教皇はこれを聖ユスティナ会に編入した。　修道院には広大な図書館や素晴らしい絵画が収められている。ここには、聖ベネディクトとその妹スコラスティカの聖遺骨が安置されている。聖ベネディクトはこの修道院のために規則を制定し、それは後に西欧の多くの修道院で採用された。　修道生活の規則を策定するにあたり、彼はカッシアン・ローマ人（その記念日は2月29日）による東方修道院のための規定を指針としたが、西洋における修道生活の発展が未熟であったことを考慮し、その厳格さを和らげた。　それにもかかわらず、ベネディクトの規則は、所有権の放棄、無条件の服従、そして絶え間ない労働を定めていた。　さらに、年長の修道士たちには、子供たちの教育と写本の写し書きが命じられた。この最後の規定は、後に極めて有益なものとなった。なぜなら、それは無知の時代に、数多くの古代の記念物が破壊から守られる一助となったからである。　そしてその後、ベネディクト会（聖ベネディクト、あるいはローマ式にベネディクトの規則を受け入れたすべての修道士に与えられた名称）は、キリスト教初期の著作に対する研究活動を通じて、教会にとって多くの有益な貢献を果たした。

。　ある日、仕事に出された兄弟たちのうち数人が、道のりが非常に遠かったため、少し遅れてしまった。空腹だった彼らは、道中で敬虔で徳の高い一人の乙女の家に立ち寄り、そこで食事と飲み物で腹を満たした。彼らは、祝福を受けるために修道院長のもとへ、すでに遅い時間に到着した。修道院長は彼らに尋ねた。

「どこで食事をしたのか？」

「どこでも食べてはいません、父上！」と彼らは答えました。すると聖人は彼らに言いました。

「なぜ嘘をつくのか？　あの信心深い乙女の家で食事をとらなかったのか？　あれこれと食べたのではないか？　そして、あれだけの杯を飲んだのではないか？」

これを聞いて、兄弟たちは恐怖に襲われた。彼らのすべてを見通す父が、自分たちから遠く離れた場所で起こったことまで知っているのだと悟ったからである。彼らは父の足元にひれ伏し、真実をすべて打ち明けて、許しを請うた。また、旅の途中でこっそりと食事をしていたもう一人の兄弟も、聖ベネディクトに見抜かれた。　彼はその透視の眼で、密かに行われていた他の多くのことも見抜いていたため、誰もがどこであれ不適切な言動をすることを恐れていた。皆、師の霊がどこにでも共にあり、自分の言葉や行いをすべて聞き、見ており、罪を犯す者を暴くことを知っていたからである。

当時カンパニア地方を支配していたゴート王トテッラは、聖ベネディクトの透視能力を知ると、彼を訪ねようと企てた。しかし、彼は最初は自ら行くのではなく、自分になりすましたある高官、リガという者を遣わした。　これにより、彼は聖人の透視能力を試そうとしたのである。つまり、王自身が訪れたのではないことを、聖人が見抜くかどうかを確かめようとしたのである。そして、リガがあたかも本物の王であるかのように、貴族や兵士たちに囲まれて聖ベネディクトに近づいてきた途端、聖人は遠くから彼を見て、こう呼びかけた。

「わが子よ、その身に着けている王の衣を脱ぎなさい。それはあなたのものではなく、あなたを私のところへ遣わした者のものだからだ。」

リガは、この非難に恐れをなして聖人に頭を下げ、すぐに引き返した。その後、トテラ王自らが謙虚な態度で、神の預言者に何度も頭を下げながらやって来た。聖ベネディクトは王の残虐さと悪行を非難し、戒め、預言的な言葉を告げた。聖人は王にこう言った。

「神の御許しにより、あなたはローマを征服し、海を渡るだろう。しかし、在位10年目にあなたは死ぬだろう。」

そして、この聖なる父の預言は、やがて現実のものとなった。　預言の賜物に加え、聖ベネディクトは神から与えられた悪霊に対する権威も持っていた。アクイナスの教会に所属するある聖職者[2404]は、悪霊に苦しめられていたが、司教コンスタンティウスの助言に従い、聖地や殉教者の聖遺物を訪ねた。しかし、聖なる殉教者たちは、彼を不適格者と見なし、癒やしを与えなかった。　そこで彼は、神の御心に適う者ベネディクトのもとへ連れて行かれ、その祈りによって即座に癒やされた。聖人はその聖職者から悪霊を追い出した後、彼に次のような戒めを与えた。

「肉を食べてはならない。また、司祭の位に就こうなどとは決して考えてはならない。なぜなら、もしあなたが司祭の位を受ける決心をしたその日、あなたは再び悪魔による容赦ない拷問にさらされることになるからだ。」

癒やされた聖職見習いは、家に帰ると、聖なる父のこの二つの戒めを長く守り続けた。彼は肉を食べず、司祭の聖職に就くことも敢えてしなかった。　しかし、何年も経った後、この聖職見習いは、亡くなった長老たちの後任として、自分よりはるかに若い者たちがその地位に就くのを見て、こ

[2404] アクイノ（ラテン語でAquinum）は、イタリアのカゼルタ県ソル地区にある小さな町である。この地区では、最も著名なスコラ神学者の一人であるトマス・アクィナスが生まれた。

れを自分にとって不名誉なことだと考え、司祭の聖職を求めるようになった。　そして彼が司祭に叙階されたその日、神の御許しにより、凶暴な悪魔が彼に襲いかかり、この聖職者を容赦なく苦しめた末、彼を死に至らしめた。こうして、聖ベネディクトの預言の言葉が成就したのである。

テオプロフという名の、カシーナ市の市民全員から尊敬されていたある高貴な紳士は、聖ベネディクトの神に導かれた教えによって、偶像崇拝から真の信仰へと改宗し、その徳高い生活のおかげで、自分の霊的父であり師である聖ベネディクトから大きな好意と愛を寄せられていた。　ある日、テオプロフは聖ベネディクトの独房に入ると、自分の霊的父が苦々しく泣きじゃくり、すすり泣いているのを見つけた。　長い間、その抑えきれない涙を見つめながら、彼は戸惑いを覚えた。というのも、彼が泣いているのを目にしたのは祈りの最中ではなかったからである（その時間帯には、尊者ベネディクトはいつも泣いていたのだが）。しかしその瞬間、ベネディクトはただ涙を流しているだけでなく、深い悲しみに満ちて、嗚咽や嘆きの声を上げていた。

驚いたテオプロスは、彼が泣いている理由を尋ねた。すると聖人は、涙と嗚咽を必死にこらえながら、こう言った。

「ご覧なさい、私が神の御加護によって築き上げたこの修道院と、ここで兄弟たちのために整えたすべてのものを。これらすべては、全能の主の裁きにより、異教徒たちの手に渡され、荒廃させられることになるでしょう。そして私はただ、この修道院に住む私の兄弟たちの命を守ってくださるよう、神に懇願したばかりなのです。」

この聖ベネディクトの預言は、彼の死後に実現した。ある夜、すべての修道士たちが眠りについていた時、ロンゴバルド族[2405] が突然修道院を襲撃した。しかし、彼らは修道士たちを一人も捕らえることはできなかった。聖なる父の祈りに守られ、すべての修道士たちは無傷で逃げ延びたのである。　一方、ロンゴバルド族は修道院を荒らし、甚大な被害を与えた。しかし、聖ベネディクトの存命中は、主の御加護を受けたこの修道院は、満ち足りた生活を送っていた。　ある敬虔な人が、聖ベネディクトのもとへワインの入った二つの器を送った。遣わされた召使いは、そのうちのひとつの器を自分用に隠し、道中のどこかに隠しておき、もうひとつを聖なる父のもとに届けた。しかし、先見の明のある聖ベネディクトは、その召使いを見送る際、彼にこう言った。

「見よ、わが子よ。道中で隠したその壺からは決して飲んではならない。それを注ぎ出してみよ。そうすれば、その中に何が入っているか分かるだろう。」

聖人の指摘に恥じ入ったその召使いは、尊師に頭を下げて立ち去った。そして隠しておいた壺のそばに近づくと、聖人の言葉が真実かどうか確かめようと、壺を傾けてワインを注ごうとしたところ、ワインとともに蛇たちが這い出てきたのである。　これを大いに恐れたその僕は、自分が犯した罪を悔い改めた。

尊者のお住まいの近くにはある村があった。その住民たちは以前は偶像崇拝にふけっていたが、聖ベネディクトがこの地を訪れると、彼の尽力により、皆キリスト教に改宗した。　この村には女子修道院が設けられていた。聖ベネディクトは、修道女たちに神の御言葉を説くために、熟練した経験豊富な修道士たちをここに派遣するのが常であった。ある日、そのような教化のために、修道士の一人が修道女たちの元へ派遣された。　任務を遂行し、すでに自分の修道院へ戻ろうとしていたとき、道中で数人の修道女たちが、タオルを数枚持っていってほしいと彼に頼んだ。その修道士はタオル

[2405] ロンゴバルド族――ゲルマン系部族に属する好戦的な民族。当初、ロンゴバルド族はエルベ川沿いに居住していたが、その後ドナウ川流域に移住し、そこで団結して6世紀初頭にはすでに国家を形成していた。568年、アルボニス王の率いる下、彼らはイタリアに渡り、ここに定住した。　野蛮なロンゴバルド族（彼らには、同様に野蛮なサクソン族やスエヴィ族などが同行していた）によるイタリア征服は、大規模な略奪、住民の虐殺、都市の破壊、そして土地の強制的な奪取を伴った。774年、カール大帝がロンゴバルド王国に終止符を打った。 当初、ロンゴバルド人はアリウス派であったが、7世紀にはカトリック教会に改宗した。

を受け取ると、それを胸元に隠した。戻ってくると、彼は聖ベネディクトのもとへ行った。聖人は彼を厳しい眼差しで見つめ、それから怒りを込めて言った。

「兄弟よ、なぜ不義が汝の心に宿ったのか？」

修道士は恐怖に震え、胸元に隠していたタオルを恐れのあまり忘れてしまい、尊師が何を言っているのか理解できなかった。

しかし、聖人は再びこう言った。

「お前が修道女たちからタオルを受け取り、それを胸元に隠した時、私はそこに一緒にいたではないか？」

これを聞いて、修道士は聖人の足元にひれ伏し、自分の罪を悔い改め、許しを請うた。

ある日のこと、聖師がいつもの習慣通り夕方に夕食をとっていた。すでにかなり遅い時間だったが、食卓の前には一人の若い修道士が立っており、手にしたろうそくで聖師の道を照らしていた。この修道士は、ある裕福な領主の息子であった。そして、彼は心の中で誇り高く、こう独り言を呟き始めた。

「一体、この人は誰なのか。なぜ私は今、彼の前に立ち、ろうそくを手に持ち、まるで奴隷のように仕えているのか？　なぜ私は、この名もなき老人のために働かなければならないのか？」

若い修道士が心の中でそう考えを巡らせていると、その高慢な思いは洞察力に富んだ師の目に隠れることはなかった。師は直ちに父のように彼を諭し、穏やかにこう言った。

「子よ、心に十字を切って、なぜそれほど高慢な思いが君の中に巣くっているのか。自分自身に注意を払いなさい。」

その後、別の修練生を呼び寄せ、その修練生に、彼の手に持っていたろうそくを取り上げるよう命じた。　罪を犯した修道士は、涙を浮かべて独房から出て行った。そして、兄弟たちがその修道士に、なぜ尊師に追い出されたのかと尋ねると、彼は自分の高慢な思いについて告白した。皆は、聖ベネディクトの洞察力に驚嘆した。彼の前では、心の奥底の思いさえも隠し通すことはできないのだ。

ある日、カンパニア地方[2406]で飢饉が起こり、聖人の修道院には五個のパンしか残っていなかった。そのため、この修道院の多くの修道士たちにとって、一回の食事分さえも足りなくなる状況だった。修道院のすべての修道士たちが嘆き、飢饉の期間中にどうやって食料となるパンを手に入れればよいのかと途方に暮れていたとき、聖人は彼らにこう言った。

「なぜ、信仰の薄い者たちよ、パンが足りないというだけで、それほど悲しんでいるのか。神に忠実に仕える者を誰一人として見捨てない神を、あなたがたは信頼していないのか。そして、私たちの救い主の福音の言葉も覚えていないのか。　*『まず神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな、あなたがたに与えられる。あなたがたの天の父は、あなたがたが求める前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからである』*（マタイ6:8,33）。さあ、落胆してはならない。今日は不足しているが、明日には必要なものがすべて豊かに与えられるだろう。

そして翌朝、神の御手配により、修道院の門の前で袋に入った小麦粉二百メルが見つかりましたが、誰も、これほど大量のパンがどこから、誰が運んできたのか説明できませんでした。そこで皆は、これは彼らの尊い父の祈りに応えて、主ご自身が目に見えない形でこの小麦粉を送ってくださったのだと確信しました。

ある敬虔な男が、この敬虔な男の住む村に修道院を建てることを許可してほしいと、尊師に懇願しました。その村は、テラキニイの町からそう遠くない場所にありました[2407]。 聖人は、その村に

[2406] カンパニアは、ナポリ湾周辺に位置するイタリア南部の地域で、主要都市はナポリである。

[2407] テラキニオの町は、いわゆる「教会地域」にあり、海からほど近い場所にある。

、かなり熟練した建築家である弟子たち数人を遣わし、彼らに敷地を整備し、修道院建設に必要なすべての準備を整えるよう命じた。

「私は――」と聖人は彼らに言った。「ある日に（そしてその日を指定して）あなたたちのところへ行き、各建物をどの場所に建てるべきかを示してあげる」。

建築者たちはその場を離れ、すべての準備を整えると、彼らの父である聖人の到来を待ち始めた。　約束の日が訪れると、早朝、建設者たちがまだ眠っている間に、聖ベネディクトが彼らの夢に現れ、教会、食堂、病院、独房、そしてその他のすべての修道院の建物を建設すべき場所を指示した。　目を覚ますと、彼らは互いにその夢について語り合い、夢の中で同じものを見たことに驚きつつ、聖ベネディクトを待ち続けた。しかし、聖人はその日も翌日も現れず、建設者たちは悲しげな面持ちで聖人のもとへ赴き、こう言った。

「尊い父よ！　約束通り、修道院の建物の場所を私たちに示してくださるよう、あなたの来訪を待っていたのですが、なぜお越しにならなかったのですか？」

ベネディクトはこれに対し、こう答えた。

「何をおっしゃるのですか、兄弟たちよ。私があなた方のところへ来なかったというのですか？」

しかし、建設者たちはそれを否定し、こう言った。

「いいえ、父上、来られませんでした。」すると、尊師はこう言いました。

「あなたがたがまだ眠っている間に私が訪れ、各建物を建てるべき場所をすべて手で指し示したことを、忘れてしまったのですか？　さあ、行って、私が夢の幻の中で命じた場所に建物を建てなさい。」

そして彼らは聖人に頭を下げて去り、命じられたことをすべて実行した。

その同じ国には、名門の家系の二人の乙女が住んでいた。彼女たちは貞操を守る誓いを立て、断食に時間を費やして暮らしていた。しかし、清らかな生活を送りながらも、彼女たちは口が軽くて、しばしば他人を非難し、悪口を言い、責め立てていた。このことを知った聖ベネディクトは、彼女たちにこう伝えるよう命じた。

「その言葉を改めなさい。さもなければ、私はあなた方を神の聖体拝領から締め出す。」

しかし、彼女たちはその狂気を改めることはなく、尊師の父のような諭しに対しても何の返答もしなかった。数日後、この二人の乙女は清らかな処女のまま亡くなり、教会に共に埋葬された。そして、神聖な聖体礼儀が執り行われ、助祭が、聖体拝領できない求道者たちに教会から退出するよう告げたとき、ある人々は、この二人の乙女が棺から出て、教会を[2408]と去っていくのを目撃した。彼女たちは聖体礼儀の間、そこに留まることができなかったからである。そして、この現象は毎回の神聖な聖体礼儀のたびに起こっていた。　聖ベネディクトがこのことを知ると、彼女たちに憐れみを覚え、プロスフォラを取り、それを教会へ運び、それらの乙女たちの魂のために聖なる供え物として捧げるよう命じた。　そして、この聖なる捧げ物が捧げられた後、彼女たちが教会から出ていくのを誰も目撃することはなく、皆、この聖なる秘跡と聖人の祈りによって、彼女たちが主から赦しを得たと信じるようになった。

聖ベネディクト修道院のある若い修道士は、両親への過度な愛情で知られており、しばしば、聖人の祝福を得ずに両親の家を訪れていた。　ある日、彼はいつものようにこっそりと修道院を抜け出し、両親の家に足を踏み入れた途端、その場で息絶えてしまった。このことを知った修道士たちは彼の遺体を運び出し、通常の埋葬を行った。しかし翌朝、彼の遺体が棺から飛び出しているのを発見した。そこで再び埋葬したが、翌朝にはやはり土の中から飛び出しているのが見つかった。　その後

[2408] これは、典礼の第2部である「信徒の典礼」の冒頭で行われる。この時、助祭は次のように宣言する。「洗礼の準備をしている者たちよ、出て行きなさい……信徒たちよ」など。洗礼の準備をしている者たちとは、すなわち聖なる洗礼を受ける準備をしている者たちのことである。

、亡くなった修道士の両親は、泣きながら聖ベネディクトの足元にひれ伏し、彼の中に宿る神の恵みによって、そのような罪を犯して亡くなった息子を憐れみ、その遺体を地中に留めておくよう命じてほしいと懇願した。　聖人は、彼らの悲しみに満ちた心を見て、至聖なる聖体からごくわずかな一片を取り、それを敬虔に故人の胸の上に置くよう命じ、それから埋葬させた。その後、遺体は棺の中に留まり、二度と地面から押し出されることはなかった。

聖人はすべての人に対して極めて慈愛深く、慈悲深く、貧しい者を愛し、寛大であった。神が彼の修道院に送ってくださったものはすべて、貧しい者や困窮している人々に配り、彼自身も兄弟たちも貧しさの中で暮らしていた。　ある日、ある男が、本当に極貧の状態に陥り、12ズラティの借金を抱えていたため、貸主から追われていた[2409] 。そこで彼は聖ベネディクトのもとを訪れ、貸主が脅しながら返済を要求していたため、借金を返済するために20ズラティを貸してほしいと、涙ながらに懇願した。聖人は、そのとき一ペニャズも持っていなかった[2410] ため、その男にこう言った。

「兄弟よ、どうか許してくれ。今、君が求めているものは私にはないが、二日後にまた来てくれ。」

聖ベネディクトはこの二日間、いつものように祈りを捧げ、神に、その借金から債務者を解放してくださるよう懇願した。三日目に、その貧しくなった男が再び訪れ、神の御使いに頭を下げて、約束された身代金を求めた。　その頃、修道院にはソチヴで満たされた器があった。すると突然、聖人の祈りによって、ソチヴの表面[2411] に十三枚の金貨が現れた。それらを受け取ると、慈悲深い父はすべてを困窮している男に渡し、こう言った。

「行け、わが子よ。そのうちの十二枚を貸主へ返し、残りの一枚は自分の必要のために受け取れ。」

ある日、神の人は兄弟たちと共に村へ行き、果樹園で働くことになった。道中、ある農夫と出会った。その農夫は、亡くなった幼い息子を腕に抱えていた。涙に暮れながら、彼は修道院へやって来て、そこで尊者ベネディクト神父を探し求めた。すると、聖人は兄弟たちと共に村で働いており、しばらく戻らないだろうと言われた。　そこでその男は、亡くなった息子を修道院の 門の前に置き、自ら尊者のもとへ向かい、ちょうど修道院へ戻ってこようとしていた彼に出くわした。その時、彼はこう叫び続けた。

「父よ、私の息子を返してください、息子を返してください！」神の人は驚き、彼にこう言った。

「私があなたの息子を連れ去ったというのですか？」

悲しみに暮れる父親は言った。

「わが子は死んでしまった。だが、どうか行って彼をよみがえらせてくれ。」これを聞いた聖なる父は深く悲しみ、兄弟たちにこう言った。

「走ろう、兄弟たちよ、走ろう。死者をよみがえらせることは、私たちの仕事ではなく、聖なる使徒たちの仕事だからだ。」

一方、その男は言葉に尽くせないほどの心の悲しみに打ちひしがれ、聖人に、息子がよみがえるまで決して彼を離れないと誓った。そこで聖人は、兄弟たちと共に亡くなった少年の遺体のそばへ歩み寄り、ひざまずいて神に祈りを捧げた：

「主よ！罪深い私ではなく、息子の復活をあなたに祈るこの人の信仰に目を留め、この体に魂をお与えください。」

聖人が祈りを終えるやいなや、亡くなった少年の遺体に命の兆しが現れ始め、手探りで物に触れ、全身を動かし始めた。聖人は少年の手を取り、生き生きと元気な姿で立ち上がらせ、その父のも

[2409] ズラティツァ――金貨、チェルヴォネツ。

[2410] ペニャズ――小銭。

[2411] ソチヴォ――エンドウ豆、インゲン豆、野菜を煮込んだ料理。

とへ引き渡した。そして、この極めて栄光に満ちた奇跡を目撃した者たちは皆、神を賛美した。　尊者ベネディクトは他にも多くの奇跡を行ったが、それについてはローマ教皇聖グリゴリウス・デュオスロヴォス（二語者）が、その著作『[2412]　』の第2巻に詳しく記している。しかし、私たちの教訓としては、同書から引用したこの簡潔な物語で十分である。さて、ここからは尊者ベネディクトの伝記における次の物語に移ろう。

聖ベネディクトには、スコラスティカという名の実の妹がいた。幼少の頃から両親によって神に捧げられ、彼女は貞潔と禁食の生活を送り、それによって主の御心に適っていた。彼女は年に一度、この神の御心に適う者である兄のもとを訪れる習慣があった。　ベネディクトは彼女を修道院そのものではなく、修道院からほど近い別の建物で迎えていた。そこへ彼女のもとへ出向くと、聖人はそこで彼女と魂に益となる会話を交わしていた。　至福のスコラスティカの最期の年、彼女がいつものように聖なる兄のもとを訪れたとき、ベネディクトは数人の弟子たちを伴って彼女のもとへ赴き、その日一日を彼女と共に、聖なる対話と神に導かれた教えに費やした。　夕方、すでに夜の闇が訪れていた頃、食事が用意されたが、彼らは食事を口にしながらも、神に導かれた対話を絶やすことなく、そのようにして夜のかなりの時間を過ごした。聖なる乙女は尊者に向かってこう言った。

「お願いです、私の兄弟よ、今夜はずっと私のそばにいてください。そうすれば、朝まで天の喜びと永遠の命について語り合うことができますから。」

それに対し、聖人はこう答えました。

「何をおっしゃるのですか？　私が一晩中、修道室の外にいるなどということがあるでしょうか？」

その時、空気は極めて澄み渡っており、雨雲の痕跡すら微塵も見当たらなかった。聖女は、兄弟が自分の願いを聞き入れようとしないのを見て、両手を組み、その上に頭を乗せ、心の奥底で涙を流しながら、全能の神に祈りを捧げた。　そして、祈りを終えて頭を上げたその瞬間、突然、恐ろしい雷鳴が轟き、稲光が走り、激しい雨が降り注いだ。その雨は、聖ベネディクトも、彼と共に来た兄弟たちも、家に帰るどころか、扉を少し開けることさえできないほどだった。（それほど、聖処女の祈りは神の前で力を持っていたのである）。　スコラスティカが祈りによってこのような突然の雨を降らせたのを目撃した聖人は、彼女にこう言った。

「姉妹よ、私に何をしたのだ？」

「兄弟よ、あなたに留まってほしいとお願いしたのです」と彼女は答えた。「でも、あなたは私の言うことを聞こうとしませんでした。そこで私は主にお祈りしたところ、主はすぐに私の祈りを聞き入れてくださいました。さあ、もし望むなら、私を置いて修道院へ行ってください。」

こうして、聖ベネディクトは、本意ではなかったものの、一晩中眠らずに彼女のそばに留まり、永遠の命について姉と語り合った。　朝になると、二人は別れを告げて別れた。それから三日後、聖人は祈りを捧げていると、天を仰ぎ見たところ、聖なる姉の魂が、まばゆい光に包まれて天へと昇り、栄光のうちに天の都へと迎え入れられるのを目撃した。　この幻視によって姉の死を知ったベネディクトは、彼女の魂がそのような栄光に浴したことを喜び、大きな喜びに満たされ、　主を賛美した後、兄弟たちにその死を伝えた。　彼は、その遺体を貴重な宝物のように敬虔に自身の修道院へ移すよう命じ、自らのために用意していた棺に納めた。

まもなく、ディアクン・セルヴァンドが尊者のもとを訪ねてきた。天の恵みに満ちたこの男は、パトリキウス・リヴェリウスによって建設されたカンパニアのある修道院のイグメノであった。二人は、天の御国の至甘き糧について、魂を救う対話を交わして時を過ごした。彼らは地上でその糧

[2412] ここでは、当然ながら聖グリゴリオス・ドゥオエスロヴォスの著作『イタリアの教父たちの生涯と奇跡に関する対話』を指す。

をまだ完全には味わうことはできなかったが、神へと向かう心によって、すでにその一部を味わっていた。肉体の糧を摂る時が来ると、彼らは朽ちることのない糧を思い起こしながら、ため息をつきつつそれを口にした。　夜の休息の時間になると、尊い父は自分の独房へ戻り、客である聖なる助祭セルヴァンドは、尊い父の独房に隣接する部屋へと案内された。　聖ベネディクトは、夕方から少し休んだ後、真夜中頃に祈りのために起き上がり、窓辺で祈っていると、突然、天から放たれる大いなる光を見ました。その光によって、夜そのものが昼よりも明るくなったほどでした。　しかし、何よりも不思議だったのは、聖ベネディクトが――後に彼自身が語ったように――まるで全宇宙がたった一本の太陽の光の下にあるかのように、そのすべてを見ているかのように感じたことだった。　その光をじっと見つめていると、聖ベネディクトは、カプア司教である聖ヘルマンの魂が、炎の輪に包まれて天へと昇っていくのを見た。そこで聖ベネディクトは、客人のセルヴァンドにこの恐ろしい幻視を目撃させたいと思い、大きな声で彼の名前を二、三回呼んだ。　セルヴァンドは、聖人がこんな異例の時間に自分を呼ぶことに驚き、恐れをなして急いでベネディクトの独房に入ると、その天の光を見たが、すでに全体ではなく、ほんの一部しか見えていなかった。残りのすべてについては、聖なる父自身が彼に語った。　そこで聖ベネディクトは直ちに、カシン市にいる最愛の弟子である市民テオプロスのもとへ使者を送り、カプアへ[2413] を早急に派遣し、聖ヘルマン司教の安否を確かめるよう依頼した。　そして、そこから、彼がこの世を去ったという知らせが届いた。ベネディクトが聖ヘルマン司教の正確な没時を知ると、彼が亡くなったのは、まさにベネディクトが、天使たちに火の輪の中に包まれて天へと昇っていく彼の魂を見たその時刻であったことが判明した。

その後まもなく、尊者ベネディクトもまた、肉体を離れ、主のもとへ旅立つ時が訪れた。自身の死の時刻を六日前に知った彼は、自ら用意しておいた棺を開けるよう命じ、病に倒れて寝台に横たわった。しかし、その時でさえも彼は兄弟たちへの教えを絶やすことはなく、彼らのために修道規則さえ書き残した。　最期のその日、彼は自分を洗礼者ヨハネ教会へ運ぶよう命じた。前述の通り、この教会は、荒廃したアポロンの神殿の跡地に彼が建立したものであった。　そこで聖体拝領を行った後、聖ベネディクトは両手を神に向けて上げ、口に祈りを捧げながら肉体を離れ、地上ですでに目にする栄誉に浴していた、輝かしい天の住まいに主のもとへと旅立った。

聖ベネディクトが肉体の束縛から解き放たれたその時、二人の修道士――一人はある務めのために道中へ送り出されていた者、もう一人は自修道院の自室で祈りを捧げていた者――が、まったく同じ幻視を授かった。彼らは、地から天へと続く道を見た。　その道はすべて最も貴重な衣で敷き詰められており、道の両側には無数のまばゆいばかりのろうそくが灯されていた。そして、その道の上方には、言葉では言い表せないほどの美しさを持つ、光を放つある人物の姿が見え、彼らはその方の声を聞いた。「この道は、神に愛されたベネディクトのために用意されたものであり、今この時、彼はこの道を通って天へと昇らなければならない」と。　この幻視は、二人の兄弟が互いに遠く離れていながらも、その瞬間、自分たちが並んで立っているのを見ていたという状況下で、二人とも授かったものであった。　聖なる父の葬儀に参列した二人は、集まった修道者全員にこのことを語った。すると、聖ベネディクトのすべての修道院から修道士たちがここに集まり、皆、涙を流しながら彼の尊い葬儀を執り行った。

尊者ベネディクトの聖なる遺体は、彼が建立した洗礼者ヨハネ教会に安置された。そこでは、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神が、すべての被造物によって永遠に賛美されている。アーメン[2414] 。

[2413] カプア（サルア）――イタリア南部のヴォルトゥルノ川左岸にある都市および要塞。古代にはカンパニア地方の最初の都市であった。

[2414] 聖ベネディクトは543年に逝去した。

コンダク、第6調：

あなたは神の恵みによって豊かにされ、その行いによって召命を明らかにし、キリスト・神の御心に適う者、ベネディクトよ、祈りと断食によって聖霊の賜物に満たされ、病人の癒し手となり、敵を追い払い、私たちの魂の迅速な守護者となられた。

聖エウスキモス・殉教者の記念日

記念日：3月14日

私たちの聖なる父エウスキモン、ランプサキオスの司教[2415] は、キリスト教の教師であり、キリストの殉教者であり、若き頃から徳ある生活を送り、神の友となり、完全な人として、自らを聖霊の宮としました。　修道生活を選び、心を尽くして正教の信仰に身を捧げた彼は、司教の位にまで昇り、神の恵みに満ち溢れました。彼は神聖な熱意に燃え上がり、偶像破壊派の異端を打ち砕きました。その際、彼は偉大な奇跡も成し遂げました。　例えば、泣きながら母親が連れてきた亡くなった乳児を、祈りによって蘇らせた。さらに、野獣たちが家畜に危害を加えようとした際には、一言で追い払い、それらに畏怖の念を抱かせた。　聖像破壊派を庇護していたテオフィロス皇帝は、まず彼を聖像崇拝者、説教者、そしてキリストの信仰の守護者として牢獄に投獄するよう命じ、その後、追放を宣告した。彼は追放先で息を引き取った[2416] 。

3月28日

3月15日（旧暦）

聖殉教者アガピオス、ププリオス、ティモラオス、ロミロス、アレクサンドロス、アレクサンドロス、ディオニシオス、ディオニシオスの記念日

3月15日の記念日

聖殉教者たちはディオクレティアヌス帝の治世に生きた[2417] 。アガピオスはガザの出身[2418] 、ティモライはエウクシノス海沿岸のポンタス出身[2419] 、二人のディオニシオスはフェニキアのトリポリ出身、ププリウスと二人のアレクサンドロスはエジプト出身であり、ロミルはディオスポリスの[2420] 教会の副助祭であった。 彼らは皆、パレスチナのケサレアにおいて、当時始まったキリスト教徒迫害の2年目に、イゲモーン・ウルヴァヌスによって迫害を受けた[2421] 。

[2415] ランプサクの町は、小アジア北西部のフリギア地方、ゲレスポント（現在のダーダネルス海峡）の岸辺に位置していた。

[2416] 聖エウスキモンは9世紀に没した。

[2417] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは284年から305年まで在位し、ローマ帝国の東部を統治した。一方、西部は彼の盟友マクシミアヌスが統治していた。

[2418] ガザは、小アジアにある重要な沿岸都市であり、かつてはペリシテ人の支配下にあった。

[2419] エウクシノス海、すなわち黒海。「エウクシノス海」とは、本来「もてなしの海」を意味する。この名称は、黒海の近くに定住したローマ人移住者たちによって、黒海に付けられたものである。

[2420] ディオスポルは、パレスチナのエルサレムの北西に位置していた。

[2421] すなわち、303年のことである。

当時、すべての国や都市に対して、キリスト教徒に偶像への礼拝と生贄の捧げ物を強いるという勅令が発布されていた。ちょうどその頃、異教の祭りが行われていたこともあり、ケサリアでは四方から集まった民衆のために見世物が準備されていた。すなわち、そこに拘束されていたキリスト教徒たちが拷問にかけられるよう仕向けられていたのである。　この見世物を見るために、そこにいたすべてのギリシャ人が集まった。

まず、数々の拷問を受けた後、聖殉教者ティモフェイ（記念日は8月19日）が火刑に処された。 その後、聖殉教者アガピオスと聖殉教者フェクラ（ ）が野獣に食わせられた（現在記念されているアガピオスではなく、同じ名を持つ別の者であり、以前に聖フェクラと共に殉教し、8月に聖殉教者ティモテイオスと共に記念されている人物である）。

この血なまぐさい光景が繰り広げられていた時、6人の勇敢なキリスト教徒の若者たち、 プブリウス、ティモライ、ロミル、二人のアレクサンドロス、そしてディオニシウス――彼らの記念日は今日祝われている――は、キリストへの熱意に燃え上がり、自ら両手を縛り、キリストのために苦難を受け入れ、キリストへの愛ゆえに火の中へ、あるいは獣に食われることさえも厭わないという意思を示した。　彼らは素早く見世物の中心へと歩み寄り、イゲモン・ウルヴァンの前に立ち止まると、大声で叫びました：

「我らはキリスト者である！」

イゲモンは、彼らがまだ若く、命を奪いたくないと考え、偶像に拝礼し、この若き盛りの時期に自ら命を絶たないよう、優しく諭し始めた。しかし、その説得が功を奏さなかったため、彼らを牢獄に送るよう命じた。

数日後、キリストの囚人たちの仲間入りをしたのが聖アガピオスであった。彼はキリスト教徒の間で誠実かつ高潔な人物として知られており、以前から大いなる勇気をもってイエス・キリストの御名を告白し、そのためにすでに様々な苦難に耐えてきたのである。　この時、アガピオスは、エジプト人の使用人ディオニシオスと共に捕らえられ、前述の六人の聖なる人々と共に牢獄に閉じ込められたため、その数は計八人となった。

これらの聖なる殉教者たちは長い間牢獄に閉じ込められ、何度も様々な方法で拷問を受けたが、キリストから背くことはなかった。

ついに、彼らは斬首の刑に処され、皆、同じ日に、教会の頭であるイエス・キリストのために尊い首を捧げた。彼らはキリストに自らの魂を委ね、天において勝利を祝う教会において、キリストから勝利の冠を授けられたのである。

聖殉教者ニカンドロスの記念日

記念日：3月15日

聖ニカンドロスは、ディオクレティアヌス帝の治世の頃、エジプトに暮らしていた。この敬虔な人物は、職業として医師であった。彼は、キリストのために苦難に耐えていた聖なる殉教者たちが投獄されている牢獄を絶えず訪れ、彼らの傷を治療し、必要な食物を与え、その遺体を埋葬した。

ある時、彼は野獣の餌として野原に捨てられた殉教者たちの遺体を目にしたが、日中は拷問者たちに自ら捕らえられるのではないかと恐れ、近づくことを敢えてしなかった。彼は体力が弱く、神の恵みによって強められるまでは、激しい拷問を恐れていたからである。

夜になると、彼は聖なる殉教者たちの遺体のもとへ向かい、一つずつ肩に担いで、清らかな死装束で包み、ある人目につかない場所に埋葬した。

ある異教徒が、彼がその作業をしているのを見かけ、それを支配者に密告した。

その後、聖ニカンドロスは拷問者たちに捕らえられ、凄まじい拷問にさらされたが、キリストを否定することはなく、かつて恐れていたすべての苦痛を、勇敢かつ喜びをもって耐え抜いた。

拷問官は、彼がまるで揺るぎない柱や不動の山のように、信仰告白においてこれほど揺るぎない姿であるのを見て、生きたまま皮を剥ぎ、首を刎ねるよう命じた。こうして聖なる殉教者は、古びた地上の身を脱ぎ捨て、新しい天の身をまといました。　その尊い首が切り落とされると、彼は尊い肢体として、最も尊い頭である主キリストのもとへ加わり、他の聖なる殉教者たちと共に、至聖なる三位一体を賛美しつつ、主と共に永遠に共治している。

聖司祭殉教者アレクサンドルの記念日

記念日：3月15日

アウレリアヌス帝の治世[2422]　に、キリスト教徒に対する迫害が激化した際、パンフィリア[2423]にはアントニヌスというイゲモンがいた。彼はパンフィリアの都市シドゥに到着すると、その町の司祭アレクサンドロスを裁判にかけるよう命じた。

イゲモンは、このキリストの僕を数々の拷問と苦痛にさらした。しかし、まず彼は彼にこう尋ねた。

「お前は誰だ？」

聖人はこう答えた。

「私はキリスト教徒であり、聖職者、キリストの御言葉の群れの牧者です。」

イゲモンは彼に尋ねた。

「そのキリストの群れはどこにいるのか？」

聖人は答えた。

「全宇宙に生きる人々を、キリストなる神が創造されました。キリストを信じる者こそが、その羊の群れなのです。しかし、創造主から背き、被造物や人の手による作品――あなた方のような魂なき偶像――に仕える者たちは、キリストの聖なる羊の群れに属することはできません。　最後の審判の日、彼らは山羊たちと共に左側に置かれることになるでしょう。

イゲモンは彼にこう言った。

「今、私がお前を拷問するのは二つの理由がある。第一に、キリストを信じる者たちを私に引き渡させるためであり、第二に、我々の神々に生贄を捧げさせるためだ。」

その後、アントニヌス総督は再び聖アレクサンドロスに尋ねた。

「キリストとは誰だったのか？」

聖人はこう答えた。

「キリストは、世界を救う方であり、キリストを信じる者たちにとっての命であり、光である。」

イゲモンは言った：

「十字架の上で死んだその人が、どうして救い主になり得るというのか？」

アレクサンドルは答えた：

「確かに、驚くべきこと、そして感嘆に値するのは、御自身が十字架と肉体の死を自ら引き受け、御自身の御意志と神性によって、地獄の力を打ち砕き、地獄に縛られ囚われていた者たちを解き放ち、死を滅ぼし、墓から復活されたということです。　しかも、御自身だけが死者の中から復活されただけでなく、多くの死者をも御自身と共に復活させられた。*「墓が開き、多くの聖なる死者の体*

[2422] ローマ皇帝アウレリアヌスは、270年から276年まで在位した。

[2423] パンフィリアは小アジアの地域である。

がよみがえり、キリストの復活に際して墓から出て、聖なる都に入った」（マタイ27:52–53）エルサレム。 キリストは、ご自身と共に全人類をもよみがえらせた。

イゲモンは彼に言った。

「お前は正気を失っている。ユダヤ人たちに苦しめられていたにもかかわらず、自分自身を救うことさえできなかった方が、どうして他者を助けることができただろうか？」

聖人は答えた。

「狂っているのは私ではなく、あなたの方だ。あなたは魂が盲目になっているため、主キリストによって成し遂げられた私たちの救いの神秘を理解できないのだ。」

そこで、イゲモンは聖アレクサンドロスを拷問するよう命じた。彼は皮紐で打ち据えられ、車輪で引き裂かれ、沸騰する樹脂と油の入った容器に投げ込まれ、燃え盛る炉で焼かれた。しかし、これらすべての苦しみの中でも、聖人は主イエスの恵みにより、無傷のままであった。　やがて、彼が激しく燃え盛る炉に投げ込まれたとき、不信心な拷問者たちは、炎の中に、見事な容姿をした二人の若者が、聖なる殉教者と共に神を賛美しているのを見た。彼らは聖なる天使たちであり、聖人のために炉の炎を和らげていたのだ。人々は、一人の人間が炉に投げ込まれたはずなのに、そこには三人がいたことを知り、驚嘆した。

しかし、イゲモンとその側近たちは、キリスト・神の全能の力を信じていなかったため、これらすべての栄光に満ちた奇跡を魔術の仕業だと見なした。

しかし、イゲモンの家来の一人がキリストを信じ、地にひれ伏して聖人に礼拝し、キリストと共にいられるよう懇願した。イゲモンは直ちにこの家来を剣で斬り殺した。

聖アレクサンドルが無傷で炉から出てきたとき、イゲモンは彼を絞首刑にし、鋭い鉄で拷問するよう命じた。そして、聖人の体が一面にただれだらけになるまで、拷問は続いた。

聖人を拷問していた者たちは、その不屈の精神に驚き、こう言った。

「この男は、どうしてこれほどの拷問に耐えられるのか？！　もう骨がむき出しになっているではないか。」

その後、聖人は再び火による拷問を受けたが、それによって何の害も受けなかった。

続いて、鉄の針で聖人の体を突き刺し、内臓をすべて引きずり出した。その後、聖人は野獣の餌として放たれたが、野獣たちは彼に手を出さなかった。

このキリストの殉教者は、他にも多くの凄惨な拷問にさらされたが、あらゆる苦しみの中で彼は揺るぎなく勇敢であり続けたため、その苦しみを見た者たちは皆、人間の理解を超える彼の忍耐の強さに驚嘆した。

ついに、聖殉教者アレクサンドルは剣で斬り殺された。

一方、その間、裁判官の席に座っていたイゲモン・アントニンは、神によって悪霊に取り憑かれるという罰を受けた。彼に仕えていた悪魔たちが、彼を苦しめ始めたのである。使用人たちは彼を家へと運び、道中、悲しみに暮れて泣き叫んでいたが、家にたどり着く前に、彼はその呪われた魂をこの世から放った。

聖アレクサンドルは、主キリストと聖なる御使いたちと共に、天の都に迎え入れられた。一方、イゲモンはサタンとその手下たちと共に、永遠の苦しみへと投げ込まれた。

聖アレクサンドルの殉教後、あるエウスタフィオスという高潔なキリスト教徒が、聖殉教者の苦難に満ちた遺体を受け取り、キリスト神を賛美し称えながら、それを尊厳をもって埋葬した。

3月29日

3月16日（旧暦）

1243

同日、3世紀、マクシミアヌス帝の治世下、アンティオキアで殉教した聖ユリアヌス・アナザヴルスの記念日。

同日、聖司祭殉教者アレクサンドロス、ローマ教皇の記念日。彼は119年5月3日、ハドリアヌス帝の命により炉で焼かれた。

同日、ノヴゴロドの大司教聖セラピオンの帰天。1516年に逝去した。

聖使徒アリストヴロスの記念日

記念日：3月16日

聖アリストヴロスは七十人の使徒の一人で、キプロス出身であった[2424] 。彼は、同じく七十人の使徒の一人である聖使徒バルナバの兄弟であった。

主の昇天後、彼は「全宇宙の教師」である使徒パウロと共に、さまざまな国々を巡りながら宣教を行った。　使徒パウロは『ローマ人への手紙』の中で彼に言及しており、*「リストゥルスの家の信徒たちに挨拶を伝えてください」*（ローマ16:10）と記しています。これは、リストゥルスとバルナバの親族の一部が当時ローマに住んでいたため、リストゥルスの家、すなわち一族を指しているのです。　パウロが『ローマ人への手紙』を執筆していた当時、アリストゥルロスはパウロと共にいた。そのため、パウロは手紙の中で、自身とアリストゥルロス本人を代表して、アリストゥルロスの親族たちに挨拶を記したのである。

聖パウロが多くの司教を任命し、彼らをあらゆる都市や国々へ真理の言葉を宣べ伝えるために遣わした際、彼はアリストヴロも司教に任命し、ブリタニア[2425] へ、不信仰で残酷な人々[2426] のもとへ宣教のために彼を遣わした。

そこでアリストゥルスは、キリストの福音を宣べ伝えるために多大な労力を費やし、これらの残忍な人々から多くの苦難を受けた。時には容赦なく殴打され、時には侮辱されながら街中を引きずり回された。要するに、彼はこれらの人々から多くの侮辱と拷問を受けたが、やがてキリストの恵みによって彼らを啓発し、キリストへの信仰を教え込んだのである。　その後、聖人は彼らに洗礼を授け、彼らのために教会を建て、長老や助祭を按手し、そこで息を引き取った[2427] 。

聖殉教者サヴィンの記念日

記念日：3月16日

エジプトのヘルモポリスという町は、聖殉教者サヴィンの故郷であり、彼はその国全体で名高い人物であり、また自身の町の長でもあった。

ディオクレティアヌス帝の治世にキリスト教徒に対する迫害が激化し、多くのキリスト教徒が拷問を受け、殺害されたことを受け、聖サヴィンは自宅、権力、富、そしてすべての親族を捨て、密かにヘルモポリス市を離れ、他のキリスト教徒たちと共に人里離れたある村に身を隠した。

小さな家に身を寄せ、彼は昼も夜も断食と祈りに明け暮れた。

[2424] キプロスは、地中海北東部に位置する島である。

[2425] 「ブリタニア」とは、シチリア諸島とコーンウォールを指す。

[2426] ブリタニアの住民はケルト人であり、彼らは荒々しく、好戦的な人々であった。

[2427] ある人々は、この聖アリストウルスが聖使徒ヤコブとヨハネの父であり、「ゼベダイ」というあだ名を持っていたと考えているが、これはおそらく正しくない。　最も可能性が高いのは、この聖アリストウルスがキプロス出身で、バルナバを兄弟に持ち、ヤコブとヨハネの父――ゼベダイと呼ばれた人物（これはあだ名ではなく本名であった）――とは別人であったということである。

一方、偶像崇拝者たちは、ヘルモポリスの領主サヴィンを拷問にかけるべく、執拗に彼を探し回ったが、どこを探しても見つからず、深く嘆き悲しんだ。

ある物乞いが、聖サヴィンに施しを求めに来て、彼の手から食べ物や必要なものをすべて受け取っていたが、裏切り者ユダに倣って、異教徒たちのところへ行き、こう言った。

「あなたがたが探しているサヴィンという人物を私が指し示してあげる代わりに、何をくれるのか？」

彼らは彼に二枚の金貨[2428]を渡した。その後、彼について行き、聖人が住んでいた家に着くと、家を囲み、扉を叩いた。

その時、聖サヴィンと共に六人のキリスト教徒がいた。彼らは、兄弟たちの誰かが来たのだと思い、家の扉を開けた。

すると異教徒たちは素早く家の中に押し入り、全員を捕らえて縛り上げた。聖サヴィンだけは特に厳重に――二本の重い鎖で――縛られ、その後、その国の総督であるアリアヌスの元へ裁判のために連行された。

聖サヴィンは、長い間裁判で尋問され、何度も偶像への生贄を捧げるよう強要された。しかし、彼はキリストを否定しなかった。その結果、彼はさらに残酷な拷問を受け、鋭い鉄や灼熱の火で苦しめられた。

ついに聖人は川に沈められました[2429]。

こうして聖人は[2430]でその殉教の業を全うし、殉教の模範であるキリストのもとへ旅立ち、キリストから勝利の冠を受け取った。

彼と共に連行された他の六人のキリスト教徒たちもまた拷問を受け、彼らは天において主から、サヴィンと同等の栄光をもって報いられた。

聖殉教者トロフィモスとファラの受難

記念日：3月16日

ラオディキアという町（シリアにあるものではなく、カリアにある[2431]）で、小アジアのリコス川とメアンドロス川の間に、トロフィムとファルという二人の司祭――実の兄弟――がいた。

彼らはカリアのストラトニカという町出身であった。二人とも信仰に堅固な人物であり、神の御言葉を宣べ伝える者であった。迷い出た人々の魂を救いの道へと導こうと願い、彼らはギリシア人らと論争を交わし、彼らの不敬虔さを絶えず非難した。

ある日、不敬虔な偶像崇拝者たちは、聖人たちの非難に耐えかねて、二人を捕らえ、鎖で縛り上げた。

当時、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、カリアにイゲモン・アスクレピオドトスが到着し、ラオディキアの近くにあるヴォフォルという町に定住した。

ラオディキアの軍警備隊長は、拘束された二人のキリスト教司祭についてイゲモンに知らせを送り、彼らをどう扱うべきか尋ねた。返答として、二人を石で打ち殺すよう命じられた。

聖なる殉教者トロフィムとファルが処刑のために連れ出されると、キリスト教徒たちが彼らを取り囲み、石から守ったため、彼らに向けて投げられた石は一つとして彼らを傷つけることはなかっ

[2428] 「*ズラトニツァ*」とは、一般的に価値が定まっていない金貨のことである。

[2429] もちろん、ナイル川です。

[2430] 聖人の死は287年に訪れた。

[2431] *カリア*は小アジアの属州で、北はリディア、東はフリギアと国境を接している。

た。それどころか、石を投げた者たちは、自らの意思に反して、その石で自らを傷つけてしまった。長い間無駄な努力を重ね、疲れ果てた拷問者たちは、石を投げるのをやめた。

このことを知った軍警の長は、二人の聖人を釈放した。彼らはその後も、恐れを知らずにすべての人々にキリストの信仰を教え続け、ギリシャ人たちの不信仰を糾弾し続けた。

しばらくして、地方の役人たちは再び彼らを拘束し、ヴォフォルの町にいるイゲモンのもとへ送り届け、その際こう告げた。「我々はあなたの命令に従い、この者たちに石を投げつけたが、石は彼らに触れることもなかった。それゆえ、彼らをあなたの元へ送り返す」。

イゲモンは聖人たちを絞首刑に処し、鋭い鉄の道具で容赦なく彼らの肉体を拷問するよう命じた。

拷問を受けている間、彼らは大きな声で叫んだ。

「我らはキリスト者だ！偶像には拝まず、この世の王たちの不義な命令には従わない！」

これらすべての拷問の末、イゲモンは彼らを磔刑に処すと宣告し、こう言った。

「彼らを、彼らが信じるあの惑わし主と同じように、十字架につけよ。」

その後、聖人たちは街から連れ出され、十字架が用意された場所へと向かった。彼らは喜びながら歩み、神が彼らにこのような死を遂げさせてくださることを感謝し、賛美した。そして、それによって彼らの苦しみは、主イエスの聖なる受難と磔刑に似せられるのだと。

彼らの後には、その最期を見届けようとする大勢の人々――男女――が後をついていった。

彼らが十字架の場所に連れて行かれると、クリスチャンの何人かが彼らに少量の食べ物を差し出し、それを口にするよう懇願した。

頼んできた人々を悲しませたくないという思いから、彼らは持参されたものを少しだけ口にしたが、残りは周囲の人々に配った。

その後、彼らは鉄の釘で十字架に打ち付けられ、主イエスと同様に磔にされた。

十字架に吊るされたまま、彼らは民衆に多くの言葉を語りかけ、神を知る道と聖なる信仰を教えた。

その後、民衆の間から泣き声と叫び声が上がった。ある者たちは、何の罪もない男たちをこれほど残酷な死に追いやったとして、総督の冷酷さを非難した。また、他の者たちはこう叫んだ。

「神よ、あなたに栄光あれ。イエスの力が、私たちの時代にも現れたからです！」

あるユダヤ人の女性が、十字架にかけられた聖人たちにひれ伏し、こう叫んだ。

「この人々を産んだ母たちは、なんと幸いなことか！」

そこには、二人の息子の苦しみを見据えながら、勇敢に立ち尽くしている彼らの母もいた。

参列者の多くは、聖人たちから滴り落ちる尊い血を集め、ある者はその血でハンカチを濡らし、またある者は、心身の病を癒やすために指輪をその血に浸した。

キリストの殉教者たち、トロフィムとファルは、神に祈りを捧げた後、3月16日にその聖なる魂を神に委ねた。彼らの埋葬のために、信者たちは清らかな死装束と芳香を放つ香を準備した。

そこへ牢屋の看守も殉教の現場にやって来て、キリストの殉教者たちに頭を下げ、すべての民の前で、二人の聖なる殉教者が天に昇っていくのを見、三人の天使が彼らに付き添い、語り合っていたことを告白した。

その後、民衆はイゲモンのもとへ赴き、殉教者たちの聖なる遺体を十字架から降ろし、埋葬を許可するよう懇願した。

イゲモンはこの願いを聞き、最初は激怒して、兵士たちにやって来た者たちを殴打するよう命じた。しかし、しばらくして落ち着きを取り戻し、望む者は誰でも死者の遺体を受け取ってもよいと述べた。

その後、聖人たちは十字架から降ろされ、新しい棺に納められた。その際、キリスト教徒の間で、これらの聖なる遺体をどこに尊厳をもって埋葬すべきかについて論争が生じた。ある者はこの場所を望み、別の者はあちらの場所を望んだのである。

夕暮れが訪れた。民衆は聖なる殉教者たちの遺体から離れようとはせず、一晩中、灯された蝋燭を手に、詩篇を唱えながらその傍らに留まった。

朝になると、イゲモンの妻が香と香料を持ってきて、聖なる殉教者たちの遺体に注ぎかけた。それから彼女は棺に貴重な覆いをかけ、皆に聞こえるようにこう言った。

「今夜、私は夢の中で、これらの殉教者たちを無実の罪で殺害した私の夫を罰するために、神が天使たちと共に遣わした彼らを見ました。」

彼女は他にも多くのことを語り、夫の残酷さと無慈悲さを責めた。

一方、聖殉教者たちの母と、聖殉教者たちの同郷人である二人の高潔な男、ゾシマとアルテミオスは、聖なる遺体が納められた尊い棺を受け取り、それをストラトニクという町へ運び、そこで聖人たちを栄誉をもって埋葬した。

その間、不敬虔な偶像崇拝者たちがディオクレティアヌスの誕生日を祝う日が近づいていた。

イゲモンはラオディキアに到着すると、そこで不敬虔な王を称える盛大な祝宴を催した。

しかし、聖なる殉教者たちの無実の血が流されたことに対する神の懲罰が、彼に突然降りかかった。彼は突然地面に倒れ込み、全身を震わせながら、まるで悪霊に取り憑かれたかのように暴れ回った。

そこにいた者たち、そしてこの光景を目撃した者たちは皆、大きな恐怖に襲われた。

一方、イゲモンは叫んだ。

「ゼウス神はどこだ？[2432]

「神ヘラクレスはどこだ！[2433]

「神ヘルメスはどこだ？[2434]

「他の神々や女神たちはどこにいるのか？　彼らも来て、私を助けてくれ！」

その後、イゲモンはこう言った。

– 私は彼らを崇拝したのは無駄だった！今や私は、天にまします神と、その僕であるトロフィモスとファロスから送られる永遠の炎に身を委ねるのだ。

そう言いながら、彼は大声で叫び、その悲鳴は至る所に響き渡った。激しい苦痛に耐えかねて、彼は自分の体を歯で引き裂き、舌を噛みしめ、そのように苦しんだ末、その呪われた魂を吐き出した。

拷問者は苦々しい泣き声を上げながら、自分の不敬虔な神々の元へ去り、地獄で苦しむこととなった。一方、聖なる殉教者トロフィムとファルは喜びをもって、主であり神である御方の元へ去り、天において永遠に君臨し、父と子と聖霊の輝かしい御座の前に立つこととなった。神に永遠の栄光あれ。アーメン[2435]。

[2432] *ゼウス*（あるいはユピテル）は、ギリシャ人やローマ人にとって主神として崇められていた――神々と人間の父であり、天と地、雷と稲妻、風と雨の支配者である。

[2433] *イラクリオス*（あるいはヘラクレス、ヘルクレス）は、異教徒の考えによれば、並外れた肉体的強さを持ち、ギリシャ神話に語られるように、キフェロンの獅子への勝利など、多種多様な偉業を成し遂げた神である。

[2434] *ヘルメス*（あるいはメルクリウス）――ギリシャ神話の伝承によれば、ゼウスとアトラントスの娘マイアの息子であり、アルカディアのキレネ山で生まれた異教の神である。ギリシャ神話における彼の特徴的な点は、その狡猾さと機転の良さである。

[2435] 聖殉教者トロフィムとファルは、300年頃に亡くなった。

聖殉教者パパの記念日。

記念日：3月16日

聖なる教皇は、リカオン地方の都市ララン ダの出身であり、マクシミアヌス帝の治世に生きた。 キリストの信仰を告白したため、彼は故郷の町で、次いでディオケサリアの で、そして最後にイサウリアのセレウキアで拷問を受けた。彼は鞭打ちを受け、鉄の爪で引き裂かれ、鉄の釘が打ち込まれたブーツを履かされて長い道のりを歩かされ、木に縛り付けられたまま生涯を閉じた。

3月30日

3月17日（旧暦）

神の僕、聖アレクシオスの生涯

記念日 3月17日

ローマ[2436] 、アルカディウスとゴノリウスの治世に、エウフィミアンという名の敬虔な人物が暮らしていた。彼は極めて高貴で裕福な貴族であり、その使用人の数は三千人に達し、彼らでさえ絹

[2436] ローマは、ローマ帝国の首都であり、イタリア中部、ティブレ川の河口付近の両岸に位置している。 古代の伝承によれば、この都市は紀元前753年にロムルス（紀元前707年没）によってパラティーノの丘に築かれ、その後、隣接する6つの丘へと広がったため、「七つの丘の都市」と呼ばれるようになった。 ローマのこれら7つの丘については、『ヨハネの黙示録』（黙示録17:9）にも言及されている。 その歴史の初期、ローマは粘土で造られ葦で覆われた小屋群に過ぎなかったが、その後、サビニ人、ヴォルスキ人、ラティン人、ガリア人、エトルリア人といった近隣の諸民族との戦いに勝利したことで富を蓄積し、紀元前273年にはこれらすべての民族がローマの支配下に統合された。 その後、ローマ人はイタリア国外に住む諸民族を征服し始め、まもなくカルタゴ、マケドニア、ギリシャ、イリュリア、そして紀元前132年にペルガムの王アッタロス3世の遺言により平和的にローマの支配下に入ったアジアが、ローマの属州となった。 紀元前63年、ローマの将軍ポンペイウスは3か月にわたる戦いの末、ユダヤに侵攻し、エルサレムを占領した。この時から、ユダヤ人はローマの属民となり、自由と独立を永久に失った。 ローマ初代皇帝アウグストゥスの治世30年目に主イエス・キリストが誕生したが、その時代にはエジプトもローマの支配下にあった。このように、救い主キリストの到来以前、ローマは当時知られていたほぼすべての民族をその帝国に組み込み、強大さと栄光の頂点に達していた。 世界中の富がローマに流れ込み、あらゆる民族の事柄はローマ元老院で決定されていた。しかし、ローマの全盛期こそが、その没落の始まりであった。絶え間ない戦争は、ローマ市民の富裕層を荒廃させ、その数を減らしていった。一方、富裕層や名門家系は、破産した家族から土地を安値で買い漁り、さらに富を蓄積していった。 そのため、ローマの人口は富裕層と貧困層という二つの階級に分かれた。前者の贅沢は信じがたいほど極限に達していた一方で、後者は貧困と抑圧の中に置かれていた。一回の食事に莫大な財産が費やされる一方で、貧しい人々はパン一片すら手に入れられなかった。 ギリシャ征服以来、ローマでは民衆の宗教を揺るがす哲学的教義が広まり始め、不信仰が大きな波となって、まず上流階級、そして下流階級へと広がっていった。演劇の舞台では、宗教的信仰の対象が公然と嘲笑されるようになった。 不信仰とともに、道徳の崩壊も広まっていった。自然の理に反する悪行（ローマ人への手紙 1:26–27）にまで至った放蕩が、かつての清らかで厳格な道徳に取って代わった。そして、キリスト教の再生の力だけが、ローマを完全な破滅から救ったのである。 キリスト教は極めて早い時期にローマに浸透した。伝承によれば、ティベリウス皇帝（14–37年）の時代にはすでにキリストに関する説教が聞かれていた。その後継者であるクラウディウス皇帝（41–54年）の治世には、ローマにおいてユダヤ人出身のキリスト教徒とユダヤ人との間で激しい対立が生じた。 ネロ帝（54～68年）の治世には、使徒パウロによる2年間にわたる説教（使徒行伝28:30）のおかげで、キリスト教徒の数は増大した。 2代目の皇帝の治世には、ローマの大火の放火犯として不当に告発されたキリスト教徒に対する最初の迫害が行われた。この迫害の最中、聖使徒ペトロとパウロは殉教した。 しかし、迫害はキリスト教を滅ぼすことはなかった。ドミティアヌス帝（81–91年）の治世には、キリスト教は皇帝の一族にまで浸透した。ドミティアヌスの弟フラウィウス・クリメントは、キリスト教徒であったという理由で処刑された。 この皇帝の治世中、聖ヨハネ・テオロゴスはパトモス島へ追放され、そこで世界と教会の将来の運命に関する啓示を受けた（黙示録 1:9）。ネロとドミティアヌスの時代から、キリスト教徒への迫害は313年まで続いた。 特に激しい

の服を着ていたほどであった。しかし、それにもかかわらず、彼は完全には幸せではなかった。なぜなら、 妻の不妊のため、子供がいなかったからである。 エウフィミアンは神の戒めを厳格に守り、慈愛に満ちた人物であった。彼は毎日、自宅で未亡人、孤児、乞食、旅人、病人のために三度の食事を用意していた。自身は第九時[2437] が過ぎてから初めて食事をとり、それを巡礼中の修道士たちと分かち合い、それまでの間は常に断食を続けていた。　もしある日に物乞いが少なかったため、普段より少ない施ししか配ることができなかった場合、エウフィミアンは悲しみのあまり地面にひれ伏し、こう言った。

「私は、わが神の地上に生きるに値しない。」

彼の妻アグライダは、神を畏れ、夫を愛し、施しに寛大な女性であった。不妊を嘆き、彼女はしばしば神に次のような祈りを捧げた。

「主よ、あなたの不適格なしもべである私を覚えてください。そして、私が母となれるよう、この不妊から私を救い出してください。私たちに、人生の喜びであり、老後の支えとなる息子をお与えください。」

主はその憐れみによって彼女の祈りを聞き入れられた。夫の大きな喜びとなるように、彼女は息子を産み、聖なる洗礼の際にアレクシイと名付けられた。

六歳の頃から聖アレクシオスは学びを始め、当時の一般的な世俗の学問をすぐに習得すると、特に聖書と教会の書物を深く学びました。　少年は聡明で敬虔な青年へと成長した。はかない世俗の幸福の空しさを悟ると、彼は永遠の幸福を得るためにそれらを捨て去ることを決意した。そのため、彼は肉体を律するために、粗い毛皮の衣を身にまとうことさえ始めた。そして、アレクシオスが成人すると、エウフィミアンは妻にこう言った。

「息子を結婚させよう。」

この言葉を聞いてアグライダは大いに喜び、夫の足元にひれ伏してこう言った。

「神があなたのそのお考えを祝福してくださいますように。そうすれば、私は息子の結婚と、その子供たちの姿を見ることができます。この大きな喜びが、私を貧しい人々や困窮している人々に対して、さらに寛大に振る舞うよう促してくれるでしょう。」

その後、彼らはアレクシオスを王家の娘と婚約させ、続いて聖ヴォニファティウス教会で二人の結婚式が執り行われ、その日は夜になるまで喜びと歓喜に包まれて過ごされた。　祝宴の終わりに、聖アレクシオスは父の祝福を得て花嫁の部屋に入ると、彼女が椅子に座っているのを見つけた。彼

迫害が行われたのは、ローマ帝国の分割の端緒を開いたディオクレティアヌス帝（285–306年）の治世であった。彼はマクシミアヌスを共同統治者に選び、国家を彼と自身の間で分割した。その後、各共同統治者がそれぞれ補佐役を選んだため、帝国は四つに分割された。　ディオクレティアヌスとマクシミアヌスが政務から退いた後、統治権はコンスタンティウス・クロルスとガレリウスに移り、前者の後を継いだのはその息子コンスタンティヌス（306年）であった。彼は313年に、希望する者なら誰でもキリスト教に改宗することを認める勅令を発布した。 単独統治者となった（324年）、彼は居城を東方のビザンティウム（後にコンスタンティノープルと改称）に移した。そこで彼はキリスト教徒を側近に据え、彼らを国家の要職に任命した。また、日曜日の祝日を法律で定め、多くの教会を建設し、 彼の後押しにより、第1回全地公会議（325年）が招集された。392年の勅令で異教の礼拝を禁止したテオドシウス大帝の治世下、ローマ帝国は最終的に東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂した（395年）。　前者は1453年、メフメト2世の治世下でトルコ軍の攻撃により陥落し、後者（イタリア、アフリカ、ブリタニア、スペインを含む）は476年に陥落した。　476年、最後のローマ皇帝ロムルス・アウグストゥスが退位した後、ゲルル族の首長オドアクルがイタリアの王位に就いた。

[2437] ローマ人にとって、昼も夜と同様に、第一、第三、第六、第九の四つの時間帯に分けられていた。 第一の時間は、私たちの午前7時、8時、9時に相当し、第三の時間は午前10時、11時、12時に、第六の時間は午後1時、2時、3時に、第九の時間は午後4時、5時、6時にそれぞれ相当した。

は自分の金の指輪を取り出し、それを貴重な帯と共にポルフィルの布[2438] に包み、花嫁に手渡しながらこう言った。

「これを大切に保管しなさい。そして、主が私たちの上に臨まれ、その恵みによって、私たちの中に新しく、真にキリスト教的な生活が芽生えるよう導いてくださいますように。」

そう言うと、彼は自分の部屋へ退いた。そこで聖アレクシオスは、豪華な衣装を粗末な服に着替え、自分の財産の中から少量の金と宝石を携えて、家と街を密かに抜け出した。 海辺に着くと、彼はラオディキア[2439] へ向かう船を見つけ、あらかじめ定められた運賃を支払ってその船に乗り込んだ。航海の途中、聖アレクシオスは神にこう祈った。

「神よ」と彼は言った。「私の生まれたその日から私を救ってくださった方よ、今この時も、虚しい世俗の生活から私を救い、あなたの最後の審判の日に、あなたに喜ばれたすべての人々と共に、あなたの右の側に立つことを私に許してください。」

船が目的地に到着すると、聖アレクシオスは岸に上がり、そこでメソポタミアへ向かう旅人たち[2440] に出会い、 彼らに加わり、共にエデッサへと向かった[2441] 。そこには、主イエス・キリストが地上での生涯の間に、エデッサの君主アヴガルに送られた、人の手によらずして造られた御像[2442] が

[2438] ポルフィリスの織物が他の織物と異なっていた点は、その赤い色であり、その染料は特殊な種類の海藻から採取されていた。

[2439] ラオディキアは、リカ川とガリファ川の合流点に位置する小アジアのフリギア地方の古代都市であり、アンティオコス2世（紀元前261〜246年）が、妻ラオディケにちなんで建設した。 キリストの時代には、東と西を結ぶ交易路沿いに位置していたため、小アジアでほぼ第一の都市であった。この地におけるキリスト教の始まりは、おそらく使徒パウロ自身（コロサイ2:1）ではなく、コロサイ教会の教師エパフラス（コロサイ1:7）によってもたらされたものと考えられる。 使徒パウロはラオディキアの教会に特別な手紙を書き送っており、同教会は『ヨハネの黙示録』においても、小アジアで最も注目すべき教会の一つとして言及されている（黙示録3:14–22）。 360年、ラオディキアで地方公会議が開かれ、その規則（60条）のうち、礼拝の順序や聖職者および信徒の行動に関するものは、教会の規範として採用された。 1255年、この都市はトルコ人に占領され、1402年にはティムールによって破壊された。現在では、荒廃したエスキ・ギッサールの集落近くの低い丘にある遺跡だけが、かつてここに存在した古代都市を物語っている。

[2440] メソポタミア、すなわち「二つの川の間の地」、古代のシェナアル（創世記10:10）は、アブラハムがハランの地へ旅立つまでの出生地および居住地であった（創世記11:28； 使徒行伝7:2）は、ティグリス川とユーフラテス川の間に位置し、南はペルシャ湾、北はアルメニアの山脈に囲まれた地域を指す。 より狭義には、メソポタミアとはこの地域の北部、いわゆるエル・ジェジールを指し、一方、南部の地域はバビロニアとして知られており、現在のイラク・アラビ、すなわち古代のバビロニアにあたる。 ローマ時代、この地域は二つの部分に分けられていた。西側のオズロエナは紀元217年にローマの支配下に入り、首都はエデッサであった。東側のミグドニアは、ローマ皇帝トラヤヌスによって紀元115年に征服され、首都はニジビダであった。 メソポタミアにおけるキリスト教の始まりは、使徒エルマの同伴者であるユダ、あるいはファデオ（伝承によれば、主イエス・キリストの七十人の弟子の一人）によってもたらされた。ユダはエデッサに教会を設立した。ニジビダの近郊では、聖エフレム・シリン（3〜4世紀）が生まれた。 ニジビダの司教トマス・バルスーマは、父から永遠に生まれた神の御言葉が、人間イエスの中にただ宿り、彼と特別な道徳的結合を保っていたと説いたネストリウス派の異端の熱心な擁護者であった。 11世紀、セルジューク朝やトルコ人の侵攻により、メソポタミアは衰退の一途をたどり、現在はトルコに属している。住民はトルコ人、クルド人、アラブ人、アルメニア人、シリア人である。メソポタミアは、アッシリアおよびバビロニアの支配下において、極めて重要な歴史的意義を持っていた。

[2441] エデッサ（現在のウルファ）は、メソポタミア北部のユーフラテス川沿いに位置する都市であり、紀元前137年からは、新たに成立したオズロエ王国（あるいはエデッサ王国）の首都となった。紀元217年には、ローマ人によって東方の植民地へと改編された。 エデッサでは早くからキリスト教が広まった。4世紀には聖エフレム・シリアスによって神学校が設立され、5世紀にはネストリウス派に傾倒するようになった。このネストリウス派を支持して特に尽力したのは、エデッサ神学校の教師である長老イヴァであった。641年、エデッサはアラブのカリフたちに征服された。 1098年にはバルドゥイン伯爵がこれを占領し、エデッサ公国の首都とした。1144年にはトルコ人に征服され、それ以降、支配者が次々と変わり、1637年にようやくトルコの支配下に入った。

[2442] イエス・キリストの「無造作の聖像」、すなわち、救い主の御顔が焼き付いた布で、これは救い主が眼の病の治癒のためにエデッサの君主アヴガルに送ったものである。 この「手造りではない聖像」は994年までエデッサに保管されてい

安置されていた。　キリストの聖像を目の当たりにした聖アレクシオスは大いに喜び、家から持ち出したすべての宝飾品を売り払い、その代金を貧しい人々に施し、自身はぼろ服を身にまとい、施しを受けて暮らすようになった。　聖人の居場所は聖母マリア教会の玄関前であり、その生活は厳格な修道生活そのものでした。彼は絶えず断食し、パンをほんの少しだけ口にするだけでした。　水さえも極めて控えめに飲み、毎週日曜日には聖アレクシオスはキリストの聖体拝領を行い、施しは常に年老いた貧しい人々に配っていた。　彼は常に頭を下げて歩き、心は神へと向けられ、絶えず神について思索にふけっていた。そのような過酷な生活のため、聖人の全身は痩せ細り、顔の美しさは失われ、目はくぼみ、視力も衰えてしまった。

夜明け頃、聖アレクシオスがすでに家を出た後、両親が花嫁の部屋を訪れると、驚いたことに、彼女は悲しげな顔で一人、嘆きながら座っていた。両親はあちこちで息子を探し回ったが、どこにも見つからず、苦々しく泣き崩れた。こうして、彼らの喜びは悲しみに変わった。　聖人の母は自分の部屋に入ると、窓を閉め、藁の寝床を敷き、その上に灰をまき散らして、泣きじゃくりながらその上に倒れ込み、祈りを捧げながらこう言った。

「私のたった一人の息子に何が起きたのか、なぜ、どこへ行ってしまったのかが分かるまでは、私は立ち上がらず、この隠れ家から一歩も外へ出ない。」

その傍らに立っていた花嫁も、涙ながらにこう言った。

「私もあなたから離れません。しかし、荒野を愛し、忠実な鳩のように、悲しげな歌声を響かせながら山や谷で失われた夫を探すように、私は夫の消息――彼がどこにいて、どのような生き方を選んだのか――を辛抱強く待ち続けます。」

父もまた深く悲しんでおり、息子を探すために使用人たちをあちこちに派遣した。そのうちの何人かはエデッサにもやって来た。彼らは聖アレクシウスを見かけたが、彼だと気づかず、物乞いだと勘違いして施しを与えた。　しかし、聖アレクシオスは彼らを認識し、自分の使用人たちから施しを受ける機会を与えてくださった神に感謝した。使用人たちは戻ると、至る所を探したものの、息子を見つけられなかったと主人に報告した。

聖アレクシオスはエデッサの至聖なる聖母マリア教会で十七年間を過ごし、その生き様によって神の愛を勝ち得た。その頃、至聖なる聖母マリア教会の聖堂係に彼に関する啓示があった。彼は聖母の聖像が現れ、こう語りかけるのを見た。

「天の御国にふさわしい神の御人を、わたしの教会に迎え入れなさい。その人の祈りは、香りのよい香炉のように神のもとへ昇り、聖霊は王の頭に戴く冠のように、その人の上に宿っている。」

その幻視の後、聖職補助者はこれほど義にかなった生活を送る人物を探したが、見つからなかったため、与えられた命令を果たすための助けを求めて、至聖なる聖母マリアに祈りを捧げた。すると再び幻視の中で、至聖なる聖母マリアのイコンから声が聞こえ、神の御使いとは、教会の玄関の門のそばに座っているあの物乞いであると告げられた。　助祭は聖アレクシオスを見つけると、彼を教会に招き入れ、滞在させた。多くの人々は、この神の人の義なる生き方を知り、彼を崇敬するようになった。しかし彼は、世間の名声を避け、密かに町を去った。港に着くと、キリキアへ向かう船に乗り込み[2443]、心の中でこう考えた。「誰も私のことを知らないキリキアへ行き、聖使徒パウロの教会

たが、その年にコンスタンティノス・ポルフィロゲネトス皇帝によって購入され、8月16日にコンスタンティノープルへ移送された。その後、ヴェネツィア人によって奪われ、マルマラ海で沈没した。祝日は8月16日。

[2443] キリキアは、小アジアの南東部に位置する地域で、当初はマケドニアの支配下にあったが、その後パルティア王国およびアルメニア王国の領土となった。紀元前68年、その最も肥沃な東部地域がローマの属州となり、　ウェスパシアヌス帝の治世（69～79年）に最終的に征服された。使徒パウロはキリキアの主要都市タルソス出身であり（使徒行伝 9:11）、回心後にこの地へ退避し（使徒行伝 9:30）、当然ながらここで福音を宣べ伝えた。　第二の伝道旅行の際、使徒はキリキアを通過し、信者たちを励ました（使徒行伝 15:41）。現在、キリキアはトルコに属している。

で暮らそう」。航海中、神の御許しにより、突然海上で嵐が吹き荒れ、船は数日間波に翻弄された末、予期せずローマに到着した。船を降りた聖アレクシオスは、心の中でこう言った。

「わが主なる神よ、生きておられますように！　誰の足手まといにもならず、よそ者として父の家へ向かおう。」

父の家へ向かう途中、彼は多くの使用人に付き添われて宮殿から帰宅する父と出会った。聖アレクシオスは地面にひれ伏して父に礼を捧げ、こう言った。

「神のしもべよ、この貧しくみすぼらしい私を憐れんでください。あなたの庭の片隅に住まわせ、あなたの食卓から落ちるパンくずで腹を満たさせてください。　そうすれば、主はあなたの日々を祝福し、天の御国を授けてくださいます。また、もしあなたの親族の中に、どこかで放浪している者がいるなら、主はその者を健やかなままあなたのもとへ連れ戻してくださいます。

乞食が「旅先」という言葉を発すると、エウフィミアンはすぐに最愛の息子アレクシウスを思い出し、涙を流し、慈悲深くその願いを聞き入れ、自分の家の庭に住むことを許した。彼は家来たちにこう言った。

「お前たちのうち、この乞食に仕えたい者はいるか? もし彼が私の気に入れば、誓って言うが、完全な自由と私からの報奨を与える。家の入り口近くに彼のための小さな部屋を用意し、私がより頻繁に彼に会えるようにしてくれ。食事は私の食卓から彼に供し、お前たちの誰も彼を侮辱してはならない。」

その後、聖アレクシオスは父の家の玄関先で暮らすようになった。エウフィミアンは毎日、自分の食卓から彼に食事を送っていたが、彼はそれを貧しい人々に配り、自身はパンだけを食べ、水だけを飲み、それも飢えや渇きで死なない程度の量にとどめていた。　彼は毎晩、祈りを捧げながら徹夜し、毎週日曜日には教会で聖体の秘跡に与っていた。この神の人の忍耐力は実に驚くべきものだった！　特に夜遅くになると、彼は父の奴隷たちから多くの苦難や屈辱を味わわなければならなかった。奴隷の中には、彼の髪を引っ張る者もいれば、耳を引っ張る者もいれば、頭に汚物をぶちまける者もおり、総じて最も残酷な方法で彼を虐待した。　しかし彼は、彼らが悪魔の唆しによってそうしていることを知り、すべてを黙って耐え忍び、祈りをもって悪魔の策略に立ち向かい、忍耐をもってそれらに打ち勝った。彼に大きな忍耐を促したもう一つの事情があった。彼の住居の向かいには、婚約者の部屋の窓があったのだ。 彼女は、ルツのように[2444]、実家へ帰ることを拒み、義母と共に悲しみに暮れて座っていた。聖人は、母と婚約者の嗚咽や嘆きを頻繁に耳にしていた。一人は息子を失ったこと、もう一人は夫を失ったことについてだった。　彼女たちの涙は彼の心を憐れみで満たしたが、神への愛によって、彼は婚約者や両親への肉親の愛に打ち勝った。神のために耐えるこの耐え難いほどの悲しみは、むしろ彼を慰めるものでさえあった。　こうして聖アレクシオスは、実家で十七年間を過ごしたが、誰も彼を本人と見破ることはなく、皆は彼を、住む場所のない物乞いだと見なしていた。家の主人であり、息子であり、後継者である彼に対して、使用人たちは、よそ者や異邦人であるかのように嘲笑した。　やがて主は、彼がこれほど多くの貧困と苦難を経験したこの一時的な生活から、永遠の命へと彼を召し出そうと なさったとき、彼の死の日と時刻を彼に明らかにされた。 聖アレクシオスは、その時、彼に仕える奴隷にインク、紙、そして杖を求め、自らの生涯のすべてを記した。また、両親に自分が確かに彼らの息子であることを納得させるため、両親だけが知っている人生のいくつかの事情に言及し、家を出た夜に婚約者に語ったこと、彼女に指輪と帯を託したことについても記した。 彼はその手紙を、次のような言葉で締めくくった。

[2444] ルフはモアブ人出身であり、ダビデの系図にその祖母として名を連ねる栄誉に浴し（ルツ記4:17）、それゆえにイエス・キリストご自身の系図にも名を連ねている（マタイによる福音書1:5）。彼女の物語は、彼女の名を冠した聖書に記されている。

「どうか、愛する両親よ、そして誠実な婚約者よ、私があなた方を置いて去り、これほど大きな悲しみをもたらしてしまったことを、私を恨まないでください。私自身も、あなた方の悲しみを心に痛めていました。主があなた方に忍耐を授け、天の御国へと導いてくださるよう、何度も主にお祈りしました。　主の御慈悲により、私の祈りが聞き届けられることを願っております。なぜなら、私は主への愛ゆえに、この極めて困難な生き方を選んだのであり、皆様の涙のためにそれを変えることはなかったからです。すべてのキリスト教徒にとって、両親に従うことよりも、自らの創造主である神に従うことの方が、より望ましいことだからです。　私があなた方にどれほど大きな悲しみをもたらしたか、それと同じくらい大きな喜びを、あなた方は天の御国で受けることになるだろうと信じています。

これを書き終えると、彼は最期を迎えるまで祈り続けた。

ある日、教皇[2445] が聖使徒大聖堂で神聖な典礼を執り行っていた際、その終了時に祭壇から、誰の耳にも届くように、驚くべき声が響き渡りました。

「疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11:28）。教会にいた人々は大きな恐怖に襲われ、地面にひれ伏してこう叫びました。

「主よ、憐れみたまえ！」

すると、再び声が聞こえてきた。

「神の御使いを探し出せ。彼はすでにあの世へと旅立とうとしている。彼にこの街のために祈らせよ。彼の祈りは、あなた方にとって大いに恵みとなるだろう。」

ローマ中をくまなく探し回ったが、その人物が見つからず、どうすればよいか分からなかった。そこで、木曜日の夜から金曜日にかけて、再び教皇と王と共に大聖堂に集まり、徹夜祈祷を行い、キリストに御自身の聖人を示してくださるよう祈った。　そして金曜日の朝、聖アレクシオスは主のもとへ召された。その間、教会では、前回と同様に、礼拝の最中に祭壇から再び声が響いた。

「エウフィミアヌスの家で、神の御使いを探しなさい。」

その後、[2446] 王は、エウフィミアンに語りかけてこう言った。

[2445] それは教皇イノケンティウス1世（402–417年）であった。 彼はドナティスト派の分裂と戦い、ホノリウス皇帝を説得して彼らに対する厳格な法律を制定させ、救いには恵みが必要であることを否定したペラギウス派の異端者たちに対する公会議の決定（416年）を再確認した。また、教皇が使徒ペトロの後継者であることを根拠に、教皇の首位権に関する教義を確立した最初の人物となった。

[2446] ここでいうのは、もちろん東ローマ皇帝アルカディウスである。彼はテオドシウス大帝の息子であり、父の死（395年）後、いわゆる東ローマ帝国を継承したのに対し、弟のゴノリウスは西ローマ帝国を継承した。377年に生まれ、408年に没した。　彼の治世を通じて、気弱な皇帝を自らの影響下に置く術を知った者たちが国家を統治していた。例えば、治世の初期にはルフィンが国家を統治し、もともと莫大な税負担をさらに増大させ、金銭的罰金の数を倍増させ、それによって帝国に恐怖をもたらした。　ルフィンの死後、その地位を継いだのは宦官エウトロピウスであった。彼は私腹を肥やす目的で、皇帝を説得して厳格な法律（397年）を公布させた。この法律は、皇帝だけでなく高官に対するあらゆる悪意ある企てに対し、死刑および財産没収を科すものであった。 ついに、皇后エウドキアはエウトロピウスの処刑（399年）を勝ち取り、アルカディウスは、当時コンスタンティノープル総主教であった聖ヨハネス・クラマトルスに対する敵対的な態度で知られていた妻に全面的に従った。　彼女の強い要望により、皇帝はヨハネス・クラマティオスを罷免するという「樫の木の下での公会議」（403年）の決定を承認し、彼を流刑に処したが、その後、民衆の反発を恐れて彼を呼び戻した。 404年、皇帝は再び彼を流刑に処するよう命じた。これも前回と同様、宮廷の贅沢で不道徳な生活を糾弾するヨハネス・クラマティオスの説教に憤慨したエウドキアの影響によるものであった。　アルカディウス帝の治世下では、彼から授与された勅書を持った宣教師たちが、まだキリストに改宗していなかった異教徒たちに対し、各州でキリスト教を説いた。

ゴノリウスは、西ローマ皇帝であり、アルカディウス皇帝の兄弟である。彼の治世の初め、政務のトップには、聡明な政治家であり、西ゴート族、ヴァンダル族、スエビ族、ブルグンド族による帝国への攻撃を幾度も撃退した名将スティリコが立っていた。彼の失脚と処刑後、帝国の情勢は悪化の一途をたどった。 408年、西ゴート族の首領アラリックはローマ

「なぜ、お前の家にそのような宝があるのに、我々に知らせなかったのか？」

エウフィミアンは答えた。

「主が証人です。私は何も知りません。」

そして、主任の召使いを呼び寄せ、彼に尋ねた。

「お前の仲間の中に、徳高く、神に喜ばれる人物はいないか？」

「存じ上げません」と彼は言った。「徳のある者は一人もいません。皆、神に喜ばれない生き方をしています。」

王と教皇は、自らエウフィミアンの家へ赴き、神の御使いを探すことに決めた。エウフィミアンは先回りして、教皇と王、そして貴族たちを迎える準備を整え、彼らに盛大な出迎えを執り行った。　嘆き悲しむエウフィミアノスの妻は、自分の部屋から庭や家の中の騒ぎやざわめきを耳にし、尋ねた。

「これは一体どういうことなのか？」

そして、王と教皇の来訪、そしてその訪問の理由を知って、大いに驚いた。花嫁もまた、自分の部屋から大勢の民衆を従えてやってくる王と教皇の姿を見て戸惑い、この光景を自分なりに理解しようと努めた。

教皇、王、そして貴族たちが席に着き、静寂が訪れたとき、聖アレクシオに仕えていた召使いがエウフィミアンに言った。

「ご主人様、あなたが私に預けてくださったあの物乞いは、もしかすると神の人ではないでしょうか？　私は彼の偉大で驚くべき行いの証人です。彼は絶えず断食し、一日の終わりにわずかなパンと水だけを取り、夜通し祈りに明け暮れ、毎週の日曜日には聖なるキリストの聖体拝領を受けています。また、一部の奴隷たちから受ける殴打や侮辱も、柔和に、そして喜びをもって耐え忍んでいます。

これを聞いたエウフィミアンは、直ちにその乞食の住居へと急ぎ、窓越しに三度呼びかけたが、返事はありませんでした。そこで彼は住居の中に入ると、神の人が頭を覆われ、右手に折りたたまれた紙を握ったまま、死んでいるのを見つけました。　エウフィミアンは彼の顔布を取り除くと、その顔が天使のように輝いているのを見た。そして、その紙片を取り上げて読もうとしたが、手がそれを離さなかったため、読むことはできなかった。彼は急いで王と教皇のもとへ戻り、こう言った。

「探していたその人物が、すでに亡くなっているのを発見しました。彼は手に紙片を握りしめており、私たちに渡そうとしません。」

王と総主教は、貴重な寝台を用意し、豪華な布で覆うよう命じ、神の人の尊い遺体を運び出し、敬虔にその寝台に安置した。そして膝を屈め、聖なる遺骸に口づけをしながら、まるで生きているかのように彼に語りかけた。

「お願いです、キリストのしもべよ、この文書を私たちにください。そこに記されている内容によって、あなたがどなたであるかを知ることができるように。」

その後、教皇と皇帝は聖人の手からその文書を何事もなく受け取り、大聖堂の書記官である[2447]、アエティウスに読み上げるよう手渡した。周囲が深い静寂に包まれる中、彼はその文書を読み始めた。　そして、両親や花嫁、そして彼女に手渡された指輪や帯について書かれた箇所に差し掛か

を包囲し、多額の貢納を強要した。そして410年、彼は都市を制圧し、軍勢に略奪を許した。アラリックの死後、その義弟アタウルフはゴノリウスと和平を結び、その後、西ゴート族はアルプスを越えて撤退した。　ゴノリウス帝の治世下、411年には、ドナティスト派という分派に対する公会議が開かれた。彼らは、迫害の最中に悔い改めた背教者を受け入れたことを理由に教会から離脱していた。彼らの見解によれば、教会員の中に罪人がいる限り、教会は聖なる存在でなくなるからである。　ゴノリウスの命令により、残っていた異教の神殿はすべて破壊され、異教徒たちは公職から追放された。

[2447] ハルトゥラリイとは、総主教直属の官庁を統括する者たちのことを指した。

ったとき、エウフィミアンは、そこに記されていたのが亡き息子アレクシオスであることを悟った。彼はアレクシオスの胸に倒れ込み、抱きしめて口づけをしながら、泣きながらこう言った。

「ああ、なんと悲しいことか、わが愛する息子よ！　お前は私たちに何をしたのだ？　なぜこれほどの悲しみを私たちに与えたのか？　ああ、哀れな私よ、わが息子よ！　これほど長い間、私たちと共に過ごし、両親の泣き声を聞いていながら、お前は正体を明かさず、私たちを慰めてもくれなかった。私たちが老いていようとも、お前によって引き起こされたこの大きな悲しみの中で。ああ、なんと悲しいことか！　わが子よ、わが愛よ、わが魂の慰めよ、私は今、どうすればよいのか分からない。お前の死を悼むべきか、それともお前の再会を喜ぶべきか。

こうしてエウフィミアンは、白髪を掻きむしりながら、慰めようのないほど激しく泣きじゃくった。

アグライダは、夫の泣き声を聞き、亡くなった物乞いが自分の息子であることを知ると、修道院の扉を開けた。服を引き裂き、涙に満ちた目を天に向け、解き放たれた髪を掻きむしりながら、彼女は押し寄せる人々の群れの中を歩き、こう言った。

「道をあけてください。私の希望である、最愛の息子を抱きしめたいのです。」

棺に近づくと、彼女は息子の遺体に身を屈め、彼を抱きしめて口づけをしながらこう言った。

「ああ、私の主よ！　愛しい我が子よ、あなたは一体何をしたのですか？　なぜ私たちにこれほど大きな悲しみをもたらしたのですか？　ああ、私の目の光よ！　私たちと長年暮らしてきたのに、なぜ正体を明かさなかったのですか？　私たちについて嘆く苦い泣き声を絶えず聞いていながら、なぜ私たちを憐れんでくれなかったのですか？」

花婿を亡くして三十四年、悲しみの印として黒い服を着続けていた花嫁もまた、その清らかな遺体に倒れ込み、涙の川で遺体を濡らし、愛を込めてその額に口づけをした。彼女は苦々しく、慰めようのないほどに泣きじゃくりながら、こう言った。

「ああ、私よ、なんて悲しいことか！」

彼女の嗚咽と悲痛な嘆きは、そこにいた人々の涙を誘い、皆が花嫁と母と共に泣いた。

王と教皇は、神の人の尊い遺体を載せた寝台を運び出し、街の中心に安置して、誰もがそれを見たり触れたりできるようにするよう命じた。それが実行されると、彼らは民衆にこう告げた。

「見よ、あなたがたの信仰が求めていたその方を見つけたのだ。」

そして、ローマ中の民が集まり、皆が聖人に触れ、その額に口づけをした。病める者たちは皆癒やされた。盲人は目が見えるようになり、ハンセン病患者は清められ、悪霊に憑かれた者からは悪霊が去っていった。要するに、どんな病気であっても、誰もが神の御使いの聖遺物によって完全な癒やしを受けたのである。　このような奇跡を目の当たりにした王と総主教は、聖人の遺体に触れることで恵みを受けたいと願い、自ら棺を教会へと運ぼうとしました。　両親と花嫁は泣きながら彼らを見送った。一方、聖なる遺体に触れようと押し寄せる民衆は、あまりにも大勢集まったため、混雑のせいで寝台を運ぶことさえ不可能になった。民衆を後退させて教会への道を開くため、王は群衆の中に銀や金を投げ込むよう命じたが、誰もそれに注意を払わなかった。　皆がただひたすらに、神の御使いをこの目で見、彼に触れたいと切望していた。そこで教皇は民衆に懇願し、後退するよう求めるとともに、全員が聖遺体に口づけをし、それに触れることによって恵みを受けるまでは、聖遺体を埋葬しないことを約束した。　ようやく説得された民衆は少し後退し、聖なる遺体を大聖堂へ運ぶことを可能にした。そこでは一週間もの間、遺体が安置され、望む者は誰でも礼拝することができた。その一週間の間、聖アレクシオスの遺体の傍らには、泣き崩れる両親と花嫁が付き添っていた。　王は大理石の墓を造らせ、金とエメラルドで飾るよう命じ、そこに神の御使いを安置した。すると直ちに

、聖なる遺体から芳香を放つ聖油が流れ出し、棺を満たした。人々はあらゆる病の治癒を求めてその聖油を身に塗られ、神を賛美しつつ、聖アレクシオスの尊い遺骸を[2448]、栄光をもって埋葬した。

聖アレクシオスは、3月の17日、世界の創造から5919年目、神の御言葉の受肉から411年目に、ローマでは教皇インノケンティウス在位中にゴノリウスが統治し、　コンスタンティノープルではテオドシウス・ザ・ヤングが統治し、彼らすべての上に、父と聖霊と共に常に支配しておられる我らの主イエス・キリストが君臨しておられました。彼に永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調:

徳を高め、心を清め、切望する究極の境地に達した。無情を帯びて生涯を飾り、清らかな良心をもって適切な断食を受け入れ、祈りの中で、まるで無形の存在であるかのように、この世において太陽のように輝いた、至福のアレクシオよ。

コンダク、第2調:

あなたは、ご両親の家を異国の家のようにし、そこに貧者のように住み、この世を去った後、栄光の冠を受け、地上で驚くべき存在として現れました。アレクシオよ、神の人よ、天使と人々の喜びよ。

聖殉教者マリーナの受難

記念日：3月17日

キリストの聖殉教者マリンは、キリスト教徒として、異教徒たちが偶像に、声なき動物や鳥だけでなく、人間までもを犠牲として捧げているのを見て、神聖な熱意に燃え上がり、無魂の偶像を称える祭りが行われている最中に、犠牲が捧げられている場所へと向かい、　祭壇を破壊し、その上に置かれていた生贄を足で踏みつけました。その際、彼は不敬虔な祭司たちを非難し、自らをキリスト教徒であると告白して、こう言いました。

「私は、天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された、神の独り子キリストを信じます。」

これに対し、異教徒たちは彼を捕らえ、まず棒で殴りつけ、その後、口元に石を投げつけて歯を打ち砕き、髪を掴んで地面を引きずり回した。これらの一連の行為の後、聖なる殉教者は縛られて地方総督のもとに連行され、総督の命令により、様々な拷問を受けた末、剣で首を刎ねられた。

私たちの尊い父マカリー・コリャジンスキーの生涯[2449]

記念日：3月17日

[2448] 彼の遺体は1216年に殉教者ヴォニファティウスの教会に埋葬され、その上に壮麗な教会が建てられた。

[2449] 1546年から1547年にかけて、修道院の回想録や、聖マカリアの生涯を目撃した者たちの証言、さらにはいくつかの記録に基づいて編纂された聖マカリア・コリャジンスキーの『行伝』は、16世紀以降、多くの写本に見られるが、原本の全文は未だに刊行されていない。 ここでは、シノド・ビブリオテカ LZ 555のテキストを記述の基礎としている。写本『スヴォド』 ビブル第927号には、いわゆるヴォロコラム『パテリク』が含まれており、そこにはヴォロツキーの聖ヨセフの言葉を基にした、ドシフェイ・トポルコフによるマカリー・コリャジンスキーに関する記述がある。この記述は、ヨセフ

尊者マカリイ・コリャジンスキー（[2450] ）は、トヴェリのボヤールであるコジノ家の貴族の家系に生まれました。彼はカシナの町から8ヴェルスタ離れたグリブコヴェ村（[2451] ）で生まれました。現在、この村はコジノと呼ばれています。 両親は、大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムヌイ[2452] の下で軍事的功績を称えられた父ヴァシーリー・コジナと、敬虔さを際立たせ、子供たちを善良な品性で育て上げた母イリーナであった。 修道に入る前、マカリイはマタイという名を持っていた。7歳の時、両親は彼を読み書きの教育に預けた。幼いマタイはすぐにそれを習得し、すぐに読書に夢中になった。聖書を読みながら、その内容を深く理解し、読んだことを心に刻んでいた。両親はそれを見て喜んだ。マタイは子供らしい遊びから遠ざかり、より成熟した年齢になるにつれ、世俗の生活の虚しさについて考え始め、そこから離れることを思い巡らすようになった。 彼は常に救い主の言葉を心に留めていた。*「もし完全になりたいなら、行って、あなたの財産を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つことになる。そして、私のもとに来て、私に従いなさい」*（マタイ19:21）。彼はこの言葉に従いたいと願っていた。 しかし、両親は、彼の願いが誠実であることを理解していたにもかかわらず、彼が修道生活に入ることを望んでいなかった。 両親は、世俗にいても救われることは可能だと彼に語り、聖ヨハネ・クロソストモスの『結婚を禁じる者たちへの説教』の言葉を引用し、聖書に登場する例や、世俗に留まりながら結婚生活を送り、救われた新約聖書の聖人たちの例を挙げた。 マタイは、いかに熱心に世俗からの離脱を望んでいたとしても、やはり両親の主張の重みを理解しており、従順な息子として彼らを悲しませたくはなかった。彼はこう言った。「主の御心に従います。私はお二人の望みに逆らいません」。

両親は息子のこの決断を喜び、貴族のヤホントフ家出身の娘エレナと彼を結婚させた。しかし、結婚した後も、マタイは時が来れば 世俗から離れることを考え続けていた。 夫婦として敬虔で清らかな生活を送りながら、彼は妻と、どちらかが先に亡くなった場合、生き残った方は世俗に残らず、再婚もせず、修道生活に入るという約束を交わした。

マタイが結婚してから一年後、彼の両親が亡くなり、さらに二年後、神の御心により、妻のエレナもこの世を去った。

今やマタイは、古くからの決意――世俗を離れ、修道者の戒律を受けること――を遂げる以外、何も望まなかった。もはや彼の願いを叶えるのを妨げるものは何一つなかった。 彼は直ちに、キリストの戒めに従い、自分の財産を貧しい人々に分け与え、カシナの町の近くにあるクロブコフスキー修道院[2453] へと向かい、マカリアという名で修道士となった。

彼は熱意をもって修道院の務めをこなし、修道院長だけでなく、兄弟たちの中でも最も年下の者に対しても、あらゆる謙遜と柔和さをもって従った。 絶えず神の教会に通い、修道院の様々な仕事にたゆまず励む一方で、残りの時間は祈りと徹夜祷に捧げ、聖人の伝記やその他の神聖な書物を熱

・ヴォロツキーの『ロシアの修道士たち』という物語の中に、マカリーの修道院に関する言及と同様に、ここで考慮に入れられている。– 尊者マカリーとその修道院に関する多くの資料は、同修道院に所蔵されている原本文書に含まれている。以下の書籍を参照のこと：『第一級トロイツキー・コリャジン修道院のアーカイブに所蔵される古代文書およびその他の文書の目録。トヴェリ 1891年』； 『コリャジン修道院の会計帳簿』*I. A. イワノフ著。*トヴェリ、1892年；『トヴェリ教区第一級トロイツキー・コリャジン男子修道院の記述』、*アレクセイ・レベデフ*編。ヤロスラヴリ、1867年。

[2450] 「マカリー・*コリャジンスキー*」という名称は、後述するように、修道院自体の名称に由来する。

[2451] カシンは、トヴェリ州の郡庁所在地であり、ヴォルガ川の左岸、同川から12ヴェルスタ離れたカシンカ川沿いに位置し、同じくトヴェリ州の郡庁所在地であるコリャジンからは19ヴェルスタ離れている。

[2452] ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・テムヌイは、1425年から1462年まで公爵を務めた。

[2453] カシン市の近くにあるクロブコフスキー・ニコラエフスキー修道院は、1764年以降、非現役の修道院となっている。そこには現在も、聖マカリーの独居室が保存されている。

心に読み、かつての修道士たちの模範に倣おうと努め、読んだ本から得た教訓を心に留めていた。この若い修道士の行いは、修道院の兄弟たち全員を驚嘆させた。

ニコライエフスキー・クロブコフスキー修道院で長年にわたり生活した後、マカリイは隠遁生活について考え始めた。その思いが固まると、彼は修道院長にその意向を打ち明け、祝福を求めた。修道院長は、マカリイの願いの誠実さを見て、父のような助言を与え、修道生活という新たな道への祝福を与えた。

マカリイは、カシンからそう遠くない、18ヴェルスタ離れた場所、ヴォルガ川のほとり、二つの小さな湖の間に広がる鬱蒼とした森の中で、自身の願いにふさわしい場所を見つけた。そこで彼は小部屋を構え、断食、祈り、徹夜祷に励むようになった。　誰も彼の孤独な修行を妨げる者はいなかった。野獣たちは彼を襲うどころか、親しげに寄り添い、彼はわずかな食料を彼らと分け合った。

しかし、マカリイが完全な孤独の中で修行を続けたのは長くは続かなかった。間もなく他の修行者たちが彼のもとに集まり始め、とりわけクロブコフスキー修道院から七人の長老たちがやって来た。他の地域からも多くの修道士が集まった。マカリイの小修道院の周囲には新たな小修道院が建てられ、隠遁者の兄弟団が形成された。

この新しい修道共同体は、共同の祈りと聖なる秘跡を受けるための神殿を必要としていた。尊者マカリイは、仲間たちと共に、トヴェリの大司教の祝福を得て、命の源である聖三位一体に捧げる小さな木造の教会を建てた。

隠遁修道会の兄弟たちは絶えず増え続け、独自の司祭であり、同時にイグメーン（修道院長）を置くことが不可欠となった。マカリオス自身は謙遜のゆえにこの地位を受け入れることを望まず、他の者にその役職を勧めたが、新しい修道院の修道生活全体を自ら指導していた。　彼は厳格な規則に基づく修道院共同生活の秩序を確立した。修道院内に酒類を置かないこと、個室で飲食せず、共同の食事の場でのみ食事をすることといった規則を定めた。

彼自身、厳格な生活、勤勉さ、そして謙虚さの模範を示した。誰に対しても気さくで親しみやすい態度で接した。修道院の兄弟たち一人ひとりに会う際、年齢を問わず、「善良な老いぼれ」と呼びかけ、名前で呼びかけた。

マカリー聖人が定めた修道院生活の規則は極めて厳格であったため、修道院の創設者が望む通りにそれを遵守できる者は皆無ではなかった。この規則に違反したとして、2人のイグメーンが相次いで解任された。

修道者たちはついにマカリオスに懇願し、彼自身が司祭の聖職と修道院長としての権威を引き受けるよう求めた。　長い間断り続けていたマカリイは、ついに承諾し、数人の修道士に付き添われてトヴェリへ向かい、そこでモイセイ司教によってイグメーンに叙任された[2454]　。尊者マカリイがイグメーンの位を帯びて修道院に戻ってくることを知った修道者たちは、言葉に尽くせないほどの喜びに包まれ、彼のために盛大で喜びに満ちた出迎えを催した。

イグメンの位を受けたにもかかわらず、マカリイは相変わらず最も質素な生活を送り、粗末な服を着て、修道院のあらゆる労働において模範を示していた。

マカリイによる新しい修道院の設立は、人里離れた荒野の深い森の中という場所ではあったものの、すべての人にとって喜ばしいことではなかった。　周辺の土地の所有者であるイワン・コリャガという男は、マカリイが定住した当初から彼を快く思っていなかった。そして教会が建てられ、修道院の共同体が拡大し、マカリイが修道院長になると、その嫌悪感は憎悪へと変わり、公然たる敵意へと発展した。　コリャガは、修道院の設立に伴い、何らかの形で自分の土地が修道院に奪われることを恐れ、たとえ殺人にまで及ぶことになっても、マカリイを排除しようと決意した。しかし、神の御心により、そのような邪悪な企ては実現しなかったばかりか、かえって修道院の利益となり、尊者

[2454] モイセイ司教は、1453年から1459年までトヴェリ教区を統括した。

マカリイの栄光をもたらすこととなった。　まずコリャーガの家族が次々と亡くなり、その後、彼自身も重い病に倒れた。この不幸の中で、彼はついに、この重い罪、すなわちマカリーに対する邪悪な企みに対する神の懲罰であると悟り、悔い改め、自分を聖者に連れて行くよう命じた。　マカリーの足元で、彼は涙ながらに自分の企みを打ち明け、許しと祈りを求めた。マカリーは敵の心からの悔い改めを見て、「神はあなたを赦してくださる」と言い、この世の財宝の儚さや世俗の虚しさについて語りながら、長く彼を諭した。　マカリオスの穏やかな教えはコリャグに深く響き、彼は自ら世俗を捨て、尊者マカリオスのもとで修道衣をまとい、所有していたすべての土地を修道院に寄付した。それ以来、マカリオス自身は謙遜の意を込めて、その修道院を「コリャジーノ」と呼ぶようになった。

マカリーが定めた共同生活修道院の厳格な規則を受け入れた新しい修道院での、彼の厳格な修道生活に関する噂は、近隣だけでなく遠く離れた場所にも広まっていった。救いを渇望する様々な人々――近隣や遠方から集まる平信徒や修道士たち――が、マカリーのもとに集まり始めた。

ある日、彼が以前から知っていたボヤール家の若者二人が彼の元を訪れた。彼は彼らを普通の旅人として自分の独房に迎え入れ、どこへ、なぜ向かっているのかと尋ねた。旅人たちは、世俗を捨ててどこかの荒野に身を寄せたいという願いを抱いたと答えた。

「幼い頃からあなたを知っており、かつてのあなたの慈愛や聖書からの教えを覚えています。そして今、あなたの厳格な修道生活について耳にしたため、私たちを弟子として受け入れてくださるようお願いしに来ました」と彼らは言った。

聖人は彼らを試そうとして、こう言った。

「私は罪深い人間であり、だからこそ自分の罪の赦しを神に祈るために荒野に身を置いているのだ。君たちは、両親を悲しませないよう、両親のもとへ戻りなさい。」

しかし、若者たちは、栄光に満ちながらも謙虚な修行者の指導の下、修道院に留まるという固い決意を持ってやって来ていた。彼らは涙ながらに、自分たちを共同体に受け入れてくれるよう懇願し始めた。

若者たちに、修道生活に身を捧げようとする誠実で偽りのない願いを見出したマカリオスは、彼らを自分の修道院に受け入れ、十分な試練を経た後、修道服を授ける栄誉を与えた。

増え続ける修道共同体を賢明に統率しながら、マカリオスは断食、祈り、労働、そして徹夜祈祷に時間を費やした。彼は熱心に聖福音書やその他の神聖な書物を読み、兄弟たちだけでなく、訪れるすべての人々に救いの道を絶えず説いた。

マカリイの修道生活と、その修道院の共同生活規則の厳格さを目の当たりにし、証人となったのは、当時の修道界で著名な修行者、聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーであった。　厳格な共同生活規則に基づく新しい修道院を設立しようと決意した彼は、パフヌティエフ・ボロフスキー修道院から、ロシア北部の修道院を巡る旅に出た。その目的は、修道者の生活を見学し、修道院の秩序や規則を学ぶことだった。　この旅の途中、彼はマカリエフ・コリャジン修道院にも立ち寄り、尊者マカリイに会い、彼と対談し、自身の『聖なる父たちに関する物語』に次のような記述を残した。

「私は」と尊者ヨセフは語る。「コリャジン修道院の創設者であり、修道院長である至福の長老マカリーにも会った。彼は私に次のように語った。　『私がこの地に来たとき』と彼は言った。『私と共に、クロブコフスキー修道院から七人の長老たちがやって来た。彼らは徳と断食、そして修道生活において極めて完成されていたため、修道院の兄弟たちは皆、彼らのもとへ教えと益を求めてやって来た。そして彼らは、すべての人を啓発し、有益なことを教えた。　徳をもって生活する者たちを励まし、放蕩に走ろうとする者たちには、それを禁じ、戒め、自分の意のままに行動することを許さなかった」。

マカリオの言葉によれば（尊者ヨセフは続ける）、当時の修道院にはそのような敬虔さと規律があった。すべては教父たちの教えや共同生活の伝統に従って行われていたため、偉大な長老ミトロ

ファン・ビヴァルツェフも感嘆した。彼は当時、聖山アフォンで9年間過ごした後、そこを訪れていた。 彼は兄弟たちにこう語った。

「私は無駄に労力を費やし、コリャジンスキー修道院を通り過ぎて聖山まで、これほど遠い道のりを成し遂げたが、それは無駄だった。なぜなら、この修道院に住む者たちも救われることができるからだ。ここでは、聖山にいるキノヴィイたちと同様に、すべてが行われている。」

そのような敬虔な生活で知られていたコリャジンスキー修道院からは、尊者マカリーの存命中に、すでにいくつかの新しい修道院の創設者たちが輩出されていた。その一人が、カシン出身で、ノヴゴロド地方のイルメン湖畔に修道院を設立した尊者エフレム・ペレコムスキー[2455] である。彼はマカリーの荒野で修業を始めた。 聖パイシイ・ウグリチスキーは、聖マカリーの血縁上の甥であり、実の妹クセニアの息子であった。クセニアは、ウグリチ分領公アンドレイ・ヴァシリエヴィチ・ボリショイ[2456] の家臣貴族であるイワン・ガヴレネフと結婚しており、アンドレイは、大公イオアン・ヴァシリエヴィチ[2457] の兄弟であった。 彼は叔父である尊者マカリーのコリャジンスキー修道院で修行に励んでいたが、そこからウグリチ公アンドレイ・ヴァシリエヴィチに招かれ、その希望によりポクロフスキー修道院[2458] を設立した。 ウグリチから3ヴェルスタの場所に、少なからぬ修道士たちを集め、厳格な共同生活を確立し、労働、断食、祈り、徹夜祷において修道士たちに模範を示した。

マカリーの敬虔な生活は人々の間で称賛され、神の御心にかなうものであった。彼の祈りは奇跡的な力を持っていた。この祈りの力によって、神は多くの人々に悲しみの中での慰めと、病や疾患からの癒やしを授けた。

カシンスキー郡には、かつて、そして現在も「ケソヴォ」、あるいは「ケソヴァ・ゴラ」という村がある。そこにザカリーという男が住んでいたが、彼は長い間病気で、半身不随の状態にあった。 彼は、神の前におけるマカリイの祈りの力について多く耳にしていたため、親しい人々に、自分をコリャジンスクの尊者イグメンのもとへ連れて行ってくれるよう頼んだ。彼が連れて来られると、イグメンの前で激しく泣きながら、こう懇願した。

「尊きマカリー神父よ！ この半身不随の身である私を助けてください。」

尊師はこう答えた。

「兄弟よ、お前は私の弱さを試すために連れてこられたのだ。どうして、改心のためにほんのわずかな功徳しか積んでいない罪人に助けを求めるのか！」

しかし、麻痺した男は叫び続けた。

[2455] カシナ市の出身である聖エフレム・ペレコムスキーは、マカリーのカリアジンスキー修道院で修行を始め、聖サヴァ・ヴィシェルスキーの修道院で出家した。イルメン湖の西岸にある人里離れた場所へ退隠し、ノヴゴロドから25ヴェルスタの地点に修道院を設立した。 現在は閉鎖されたペレコムスキー・ニコラエフスキー修道院である。聖エフレムの記念日は5月10日に祝われる。

[2456] アンドレイ・ヴァシリエヴィチ・ボロイ公は、モスクワ大公ヴァシーリー・ヴァシリエヴィチ・テムノイの四男であり、モスクワ大公イオアン・ヴァシリエヴィチ3世の実の兄弟であった。彼は、1462年に死去した父の遺言により、ウグリチを領地として受け継いだ。 1492年、アンドレイ公はペレヤスラヴリ＝ザレスキーに幽閉され、1494年に死去した。

[2457] ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムノイの息子である大公イオアン・ヴァシーリエヴィチ3世は、1462年から1505年までロシアを統治した。

[2458] 聖パイスイによって創建されたポクロフスキー修道院は、ウグリチ（ヤロスラヴリ県）の町から3ヴェルスタ離れたヴォルガ川の左岸に位置し、現在は三等修道院となっている。 パイシイは、ウグリチ公アンドレイ・ヴァシリエヴィチの依頼によりこの修道院を設立した。同公は、イオアンとディミトリの子供たちの名付け親であった。聖パイシイは1606年6月6日、高齢で死去し、同日が彼の記念日として祝われている。

「分かっています、神のしもべよ。私のような罪深く、呪われた者のために、あなたが神に捧げる祈りが無駄にはならないことを、私は知っています！」

病人の誠実で深い信仰を見て、マカリオスは言った。

「わが子よ！至善なる神は、罪人の死を望まれるのではなく、命と救いへの回心を望んでおられる。そして、神はご自身の御心によって、悔い改めを通じてその者を救いへと導かれるのだ。あなたには神の御訪れが降りかかった。もし悔い改め、以前の習わしを捨て去るなら、神はあなたに癒やしをお与えになるだろう。もしそうしなければ、これ以上に苦しむことになるだろう。」

すると病人は涙ながらに、若き日から犯してきた罪をマカリイの前で告白した。聖人は祈りを捧げた後、彼に祝福を与え、それと同時に病人の健康を回復させた。その後、彼は自分の村で司祭となり、生涯を通じて聖マカリイの教えを忘れなかった。

しばらくして、ボヤール家の若きヴァシリー・リャシンという、悪霊に取りつかれて苦しんでいる青年が、聖人のもとへ連れてこられた。聖人は、病人の苦しみと、彼を連れてきた人々の悲しみを目の当たりにし、心を動かされて、彼の健康を祈る礼拝を執り行った。　祈りが終わると、聖人は病人に十字の印を授けたところ、彼は即座に癒やされた。神の慈悲に喜びを覚えた彼は、もはや実家に戻ることを望まず、修道院に残ることを決意し、マカリーから修道士の剃髪を受けた。

ある日、盗賊たちが、修道院の兄弟たちが畑仕事に用いていた牛を奪い去った。しかし、盗賊たちが獲物を連れ去ろうとしたその瞬間、突然失明し、修道院の周辺を長い間さまよった。結局、彼らは盗んだ牛を連れて再び修道院の前に戻ってきてしまった。　聖マカリオスは修道院の敷地を見回していたところ、盗賊たちを見つけ、まるで事情を知らないかのように、なぜここにいるのか、どうして牛がここにあるのかと尋ねた。犯罪者たちは悪意を認め、彼の足元にひれ伏して許しを請うた。聖人は彼らの罪を赦し、祈りによって彼らの盲目から解き放ち、今後このような悪事を行うことを禁じた。

厳格な修道院の共同生活を確立し、その聖なる生き様とたゆまぬ労苦によって多くの修道士たちを惹きつけた聖マカリオスは、生前にすでに修道士たちの物質的な生活を保障する基盤を築き上げていた。彼は、新しく設立された修道院に、自身の家督地を寄進した。　前述の近隣の地主イワン・コリャガのほかにも、マカリオスの弟子たちは、自身の土地を修道院に譲渡したり、物品や金銭を寄進したりした。　マカリイの功績の評判は、各地から修道院への寄進を呼び寄せた。これは、現在まで伝わる文書によって裏付けられている。トヴェリ公ボリス・アレクサンドロヴィチは、1461年頃、ジャズネにあるニコラエフスキー修道院とその領地をコリャジン修道院に編入した。　イワン・ボリソヴィチ公の娘であるフェオドシア・イヴァノヴナ公妃は、ヴァシリエフスコエ村と、その傘下のセリシュチェ村およびスピロフ村を寄進し、アレクサンドル・ロマノヴィチ公はコンスタンティノフスコエ村と7つの集落を寄進した。他にも、未開地や居住地など、多くの寄進があった。

しかし、マカリイ尊者は、修道院の物質的な富よりも、むしろ自身の魂の救いと、模範や教えの言葉によって他者に救いの道を指し示すことを重んじた。彼は福音書の言葉、*「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、他のものはすべて与えられる」*（マタイ6:33）という福音書の言葉に従って行動した。そのような生活の中で、聖人は高齢に達した。肉体の力が衰えていたにもかかわらず、彼は徹夜祈りと祈りに身を捧げ続け、その足は堅固な柱のように、昼夜を問わず祈りの場に立っていた。 1483年3月、彼は重い病に倒れた。死が近づいていることを感じ取り、沈黙を守り始めた。その後、兄弟たちを呼び寄せ、こう語った。

「愛する父たち、そして子らよ！　私も、この世に生まれたすべての者と同様に、先祖たちの道へと旅立つ。そして、あなたがたを、あなたがたを導き、永遠の御国を授けてくださる全能の主なる神に委ねる。あらゆる手段を尽くして自らの救いを求め、常に労苦、断食、徹夜祈祷、そして絶え

間ない祈りに励みなさい。　心と体の清さを保ちなさい。悪に対して悪を、侮辱に対して侮辱で報いてはならない。兄弟たちよ、よく理解しておいてほしい。もし私が神に対して大胆に語るなら、私の去った後、この修道院は衰退することなく、むしろ広がっていくであろう。」

兄弟たちに祝福を与え、口づけをした後、尊者マカリーは聖体拝領に与り、「すべてのことについて神に栄光あれ、アーメン」と告げ、主のもとへ息を引き取った。

尊者マカリオスの逝去は、1483年3月17日、享年81歳の時であった。

兄弟たちに悼まれ、聖マカリーは自ら建立した木造の教会の近くに埋葬された。その墓の上には木造の礼拝堂が建てられ、聖なるイコンで飾られた。

生前の聖人の功績により、彼が設立した修道院には、その死後も崇敬者が絶えなかった。寄付は絶え間なく寄せられた。　こうして、1486年、トヴェリ公ミハイル・ボリソヴィチは、ボルシュチナにあるアンドレーエフスコエ村を修道院に下賜した。その後、1511年には、ドミトロフ公ユーリー・イヴァノヴィチが、カリアジン修道院にいくつかの村や集落を帰属させた。その他にも、身分の低い人々からの寄付が数多く寄せられた。

尊者マカリイによって建てられた聖三位一体の木造教会は、次第に老朽化していった。この修道院とその創設者を敬う人々は、この窮状に遅れることなく助けに駆けつけた。

1521年、ドミトロフの商人ミハイル・ボロンコフは、古い木造の教会の跡地に石造りの教会を建設することを望んだ。ボロンコフは幼少期に尊者マカリウスに会い、両親から彼の苦行に満ちた敬虔な生活について多くを聞き、生涯を通じてこの修道院に対して畏敬の念を抱き続けていた。　コリャジン修道院は、モスクワ大公ヴァシーリー・イヴァノヴィチの実弟であるドミトロフ公ユーリー・イヴァノヴィチの領地内にあった。　この公爵もまた、聖マカリアとその修道院を熱心に崇敬していた人物であり、その許可と、トヴェリおよびカシンのニラ司教の祝福[2459] を得て、ボロンコフはコリャジンスキー修道院のイオアサフ修道院長のもとで、自身の計画の実行に着手した。

湖からの水害を受けないよう、新しい石造りの教会を建設する場所を綿密に調査した。その結果、古い木造の教会から10サジェンの距離にある、より高台で地盤の堅い場所が選ばれた。　水の聖別祈祷の後、イオアサフ修道院長は祭壇となる場所に十字架を立て、教会の基礎のための溝を掘ることを祝福した。そして、掘削が始まった。　その場所は適しており、水も湧き出なかった。掘削中に、かつて埋葬されていた兄弟たちの骨が見つかった。しかし、修道院の創設者である尊者（プレポボド）が埋葬されていた場所では、腐敗していない棺がそのままの状態で発見され、そこから芳しい香りが漂っていた。　それを触れることを恐れ、作業員たちは直ちにイオアサフ修道院長に報告した。修道院長は感動と涙を流しながら掘り出された棺に口づけをし、この貴重な発見がマカリアの棺であることを一瞬たりとも疑わなかった。彼の指示により鐘が鳴らされると、修道士たちや近隣の多くの人々が集まった。　直ちに古い教会のそばに天幕が設けられ、棺を敬虔に土から掘り起こしてそこへ運び、その上で追悼の礼拝が執り行われた。　その後、棺を開けると、そこからさらに強い芳香が漂い出し、38年間地中に横たわっていた聖人の遺体は腐敗しておらず、聖衣さえも傷んでおらず、老人の白髪もなお輝いていた。 この出来事は1521年5月26日に起こった。民衆は、御自身の選ばれた者たちを驚くべき方法で栄光に輝かせてくださる主を、感極まって賛美した。多くの病者や体の不自由な人々が、信仰をもって新たに発見された聖遺物の元へ駆けつけ、癒やしを受けた。

このような恵みに喜びを覚えた修道院長と修道士たちは、急いでドミトロフ公ユーリー・イヴァノヴィチにこのことを知らせた。派遣された修道士が、公に口頭でそのすべてを報告した。喜んだ公は、聖遺物によって成し遂げられた奇跡的な癒やしについて、修道院長からの書面による報告を待つことにした。　イオアサフ修道院長は、聖遺物による最も重要な奇跡と、癒やしを受けた人々の名

[2459] ギリシャ人のニル司教は、1509年から1521年にかけてトヴェリ教区を統括した。

前を記録するよう手配し、その記録を公爵のもとへ送った。　ユーリー・イヴァノヴィチは直ちにモスクワへ向かい、コリャジンで起こったすべての出来事について、弟である大公ヴァシーリー・イヴァノヴィチと、ダニイル大主教に報告した[2460]。

大公と大主教は、ユーリー・イヴァノヴィチ公に対し、聖人の聖遺物によって癒やされた人々の中から、せめて数名でも自らモスクワに連れてくるよう命じた。　多くの人々が連れてこられ、その真実を証言した。そこで大公と大主教は、発見された聖遺物に関するすべての事柄について現地調査を行うため、モスクワのチュドフ修道院のアルヒマンドリト・イオナをコリャジン修道院へ派遣した。　アルヒマンドリト・イオナはコリャジン修道院を訪れ、マカリーの聖遺体が腐敗しておらず、奇跡的な力を持っていることを確認し、モスクワで大公と大主教の前でこれを証言した。

そこで大公と大主教は、モスクワにて司教、アルヒマンドリト、イグメン、その他の聖職者たちによる公会議を招集した。　公会議では、尊者マカリーの聖遺物が現れた経緯のすべてが報告され、生前の聖なる生涯と、死後も聖遺物を通じて行われた奇跡について検討された。公会議は、コリャジンスキーの尊者マカリーを聖人の列に加えることを決定し、彼の没日である3月17日と、聖遺物が発見された5月26日を、彼を記念する地元の祝日と定めた。

尊者マカリーの朽ちることのない聖遺体は、まもなく仮設のテントから古い木造の教会へ移され、その後、新しい樫の聖遺物箱に納められ、商人ボロンコフによって建設された新しい石造りの教会の右側に、厳かに公開された。

コリャジンスキー修道院では、聖遺物の発見を記念して、フェオドシイ・トヴェリチャニンが作曲した礼拝が唱えられるようになった。　マカリーの質素な生活は、生前も一部の人々を戸惑わせ、聖遺物が発見された後もなお、彼の聖性を疑わせる原因となっていた。実際、マカリーの聖遺物が発見されてからわずか10年後、高位の修道士である長老ヴァシアン・パトリキーエフは、マカリーの質素な生活を非難して「田舎の農民」と呼んだ。　しかし、ダニイル都主教は教会会議において、ヴァシアンに対し、もし聖人を裁こうとするならば、預言者、使徒、司教、義人、敬虔な人々など、多くの人々を非難することになるだろうと指摘した。神にとって聖性において重要なのは、肉体的・外見的な高貴さではなく、霊的・内面的な[2461]である。1647年のモスクワ教会公会議では、他の聖人らと共に、コリャジンスキーのマカリー尊者についても「至る所で賛美し、祝う」ことが定められ、彼は「偉大な奇跡行者」の一人に数えられた[2462]。

尊者マカリーの聖遺骨が開かれた際、コリャジンスキー修道院の修道士たちによって14の奇跡が記録された。そのうちのいくつかを挙げてみよう。

修道院の宿舎、すなわち救貧院には、ヨハネという名の貧しい男が住んでいた。彼の足は木のように乾ききって、曲がってしまっていた。彼は丸12年間、小さな杖に両手を預けて這うことしかできなかった。　ある日、尊者のお棺の前で司祭たちが祈りを捧げているのを見て、彼は苦労して這っ

[2460] ダニイル大主教は、ヨシフ・ヴォロコラムスキーの弟子であり、1522年にヨシフ修道院の修道院長の中から按手礼を受けて大主教に叙任されたが、1539年にその座を退いた。

[2461] 修道士であるヴァッシアン・パトリキーエフ公は、1531年の公会議で裁かれ、そこでミトロポリト・ダニイルとの論争の中で、新しいロシアの奇跡行者たちに関する自身の見解を述べた。　この「論争」については、『読本。モスクワ大学付属ロシア歴史・古代学会』1847年号を参照のこと。その概要は、マカリー大主教著『ロシア教会史』第6巻、200ページに収録されている。

[2462] 1521年の聖遺物の発見後、聖マカリイの地方的な祝日が制定され、1547年の公会議では全教会的な祝日とされ、彼は「大奇跡者」と称された。　E.E.ゴルビンスキー著『ロシア教会における聖人列聖の歴史』、83ページおよび100ページを参照。

て近づき、主とその御使いに自分のために祈ってほしいと懇願した。　司祭たちは彼に聖水を振りかけ、聖遺物箱を開けて、彼が聖遺物に接吻できるようその身を少し持ち上げようとしたが、まさにその瞬間、彼の足はまっすぐに伸び、彼は自力で立ち上がり、聖遺物に接吻することができた。その光景に、皆は驚きと恐怖に包まれた。それ以来、彼は完全に健康を取り戻した。

コリャジンスキー修道院の助祭アンドレイは、長い間激しい骨の痛みに苦しんでいたが、尊者の聖遺物の前に連れて行かれ、信仰をもってそれに触れたところ、即座に癒やされた。

他にも、様々な病気から癒やされた人々がいた。修道院に勤める二人の農民は精神錯乱から、また、右手の三本の指が曲がって手のひらに癒着していたある旅人は、祈りを捧げながら奇跡を起こす聖人の棺に触れたとき、曲がっていた手がまっすぐに伸びた。　ある女性は腫瘍と全身のむくみに苦しみ、別の女性は長年の難聴に悩まされていたが、二人とも神の御心にかなう者に熱心に祈りを捧げた後、癒やされた。グリゴリーという名の若者は、10年間も麻痺で身動きが取れない状態で横たわっていたが、寝台に乗せられて聖人の棺のそばに置かれた。　彼は感動の念を抱きながら聖遺骸を見つめ、涙を流し、癒やしを祈った。次第に、手足が動き始めているのを感じ始めた。力を振り絞って寝台から立ち上がり、聖遺骸にひれ伏した。病人を連れてきた者たちと、癒やされた本人は共に、神とその聖人を賛美した。

ある日、ラヴレンティイという名の男が修道院を訪れ、二年間足の病に苦しんでいたが、コリャージン修道院で出家することを誓ったところ、癒やされたと語った。彼が修道院へ向かう途中、強盗に襲われ、傷を負ったため、モスクワへと引き返した。　そこで彼は失明してしまった。困惑と絶望の中、彼はマカリー修道院で出家するという誓いを思い出し――視力を取り戻した。そして今、その誓いを果たすために修道院を訪れたのである。

あるボヤール家の貴族、イオアンという名の男がコリャジン修道院を訪れ、修道院長から相応の敬意をもって迎えられた。帰路につく際、修道院長は巡礼者に聖マカリアのイコンで祝福を与えた。ボヤールは家に帰ると、聖人の奇跡について多くを語った。　その家来の中には、フェオドールという名の麻痺者がおり、彼は6年間もベッドに横たわったまま身動きが取れなかった。敬虔な主人は、聖マカリアのイコンを彼の元へ持ち込み、聖水による祈祷を行うよう命じた。病人に聖水が振りかけられると、彼は周囲の者たちの驚きと安堵の中、健康な姿でベッドから立ち上がった。

あるオヌフレイという悪霊に取り憑かれた男は、ノヴゴロドから苦労して連れてこられたものの、奇跡を起こす聖人の聖遺物箱にどうしても近づこうとせず、冒涜的な言葉を吐き続けたため、親族たちは彼を連れ戻そうとし、中には聖人が病人を癒せないことを非難する者さえ現れた。　しかし、　、彼らはついに彼を力ずくで奇跡の聖遺物箱のそばまで連れて行くことに決めた。その悪霊に取り憑かれた男が聖遺物箱に触れた途端、悲鳴を上げて口から泡を吹きながら地面に倒れ込んだ。立ち会っていた人々は、彼がもう死にかけていると思い、聖水を彼に振りかけた。　しかし、その苦しみを受ける者は突然意識を取り戻し、自分がどこにいるのかをはっきりとした意識で尋ね始めた。答えを聞くと、彼は敬虔に聖人の遺骨に口づけをし、熱烈な感謝の祈りを捧げ、修道院に施しを贈った後、健康な体で故郷へと帰った。

特に、マカリーの誉れが生前も死後も広まっていた近隣の町々の病人は、多くの癒やしを受けた。例えば、カシンの住民たちも癒やされた。ディミトリエフスキー修道院[2463]の元アルヒマンドリトであった修道士ヴァルソノフィーは、その後、生涯をコリャジン修道院で過ごした。　カシンの尼僧マリア（長らく足の病に苦しんでいた）；マカリー修道院の助祭ティモフェイ（ドミトロフ市で麻痺を患った）；そして最後に、ヴォルガ川で突如として重病に倒れたシメオンという名の別の修道士である。

[2463] カシンカ川のほとり、カシン市にあるディミトリエフスキー（またはドミトロフスキー）修道院は15世紀に創建され、1764年から現在に至るまで休眠状態にある。

聖マカリーの臨終の言葉は的中した。彼が遺した修道院は衰退するどころか、さらに発展を遂げた。モスクワのツァーリたちが修道院を訪れ、多額の寄付を行ったのである。例えば、1553年にはツァーリ・イヴァン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイが修道院を訪れ、ゴロディシュチェ村とその周辺の未開地、および28の村を寄進した。　1599年には、ボリス・フェドロヴィチ・ゴドゥノフ皇帝が妻と子供たちを連れてコリャジンスキー修道院を訪れ、皇女クセニアとデンマークのイオアン王子との婚約について、神の御使いに祈りを捧げ、祝福を請うた。　一行は尊者マカリイに豪華な銀製の聖遺物箱を献上し、彼らの立ち会いのもと、その中に聖人の聖遺物が移された。

偽王やヴァシーリー・イヴァノヴィチ・シュイスキー公が台頭した混乱の時代、コリャジン修道院は重要な出来事の中心地となり、大きな災難に見舞われた。　1609年、この修道院には、ロシア軍の名将ミハイル・ヴァシリエヴィチ・スコピン＝シュイスキー公の司令部が置かれていた。同公は8月14日、この地でヤヌ・サペガをはじめとするポーランドの将領たちや、ロシアの盗賊、あるいは反逆者たちに対して痛烈な打撃を与えた。　しかし1610年、修道院は深刻な災難に見舞われた。スコピン＝シュイスキー公はすでにその場を離れていたが、軍の一部はまだ残っていた。ポーランドの将校の一人である、勇敢かつ貪欲な略奪者リソフスキーは、四方を包囲された状況下で、スーズダリからポーランド国境へ武力で突破することを決意した。　ヴォルガ川を渡った彼は、予期せずコリャジン修道院を襲撃した。そこにいたヴォエヴォダ・ジェレブツォフは必死に防衛し、修道院から出撃を繰り返したが、敵は修道院の木造の壁に火を放つことに成功し、他の建物も燃え広がった。ジェレブツォフは降伏を余儀なくされた。　敵は、修道士や修道院内にいた人々を皆殺しにし、ヴォエヴォダ・ジェレブツォフも例外ではなかった。修道院は略奪され、聖マカリーの聖遺骨は聖遺物箱から引きずり出され、ゴドゥノフからの寄進品である聖遺物箱そのものは三つに切り裂かれて敵によって持ち去られた。

このような恐ろしい壊滅の後、修道院が立ち直るのは容易ではなかった。　しかし、スコピナ＝シュイスキーの時代に修道院が果たした重要な功績や、修道院が被った不幸な災難への悲しみによって高まった信者たちの熱意、そして修道院長たちの尽力により、短期間のうちにすべてを整理し、損なわれたものを修復し、さらには新しい教会やその他の建物の建設に着手することさえ可能となった。

1619年、ツァーリ・ミハイル・フェドロヴィチはコリャジンスキー修道院を訪れ、温かい祈りと畏敬の念を込めて、聖マカリーの奇跡を起こす聖遺物に手を合わせた。　その際、ツァーリは修道院に鐘を寄進し、その後1635年には、同ツァーリが自身の父であるフィラレート・ニキティチ総主教にちなんで、もう一つの大きな鐘を寄進した。1648年には、修道院全体を取り囲む石の壁が築かれた。　1654年、モスクワでペストが猛威を振るっていた際、アレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝の妃マリア・イリニチナは、子供たちや宮廷の者たち全員を連れてコリャジン修道院に避難した。彼女と共に、パトリアルヒ・ニコンもそこにいた。　皇后と宮廷の人々は、1641年に建設された修道士用の建物（それ以来「ツァーリの館」と呼ばれるようになった）に滞在し、パトリアルヒ・ニコンは修道院長用の建物（それ以来「パトリアルヒの館」と呼ばれるようになった）に滞在した。　マリア皇后は翌1655年、コリャジン修道院での滞在を記念して、同修道院にアルヒマンドリ（大修道院長）の位を授けるよう働きかけた。

17世紀においても、その後においても、修道院内では新しい礼拝堂が建設され、既存の礼拝堂は改築され、その他の建物も改築や修復が繰り返されてきた。 今も変わらず、 修道院には、特にトヴェリ州やヤロスラヴリ州の近隣地区をはじめ、ウラジーミル州やモスクワ州からも、多くの巡礼者

が訪れている。　特に3月17日と5月26日――尊者マカリーの聖遺骨が発見された日――には、多くの巡礼者が集まります。この日、尊者マカリーの聖遺骨を納めた聖櫃は、修道院の主教会堂である「至聖三位一体教会」の周囲を巡行されます。聖遺骨は常時、同教会堂内の「御手造りなき救世主の御像」の側室[2464]にあるアーチの中に安置されています。

1764年、修道院の組織が整備された際、コリャジン修道院の所有地目録によれば、同修道院には2803戸の農家と12,000人の男性住民が属していた。この修道院は第一級に分類されている。

トロパリオ、第8声：

マカリエ師よ、あなたは禁欲と徹夜祈祷によって、肉欲の思惑を打ち砕きました。あなたが汗を流したその地は、まるでラッパのように神に向かって叫び、あなたの行いを告げ知らせています。そして死後、あなたの尊い聖遺物は癒やしを注ぎ出しています。　それゆえ、我らはあなたに叫びます。キリスト・神に、我らの魂を救ってくださるよう、祈り求めてください。

コンダク、第2調：

天上のものを求め、節制と労苦と汗を喜びとし、肉体の欲望を抑制し、キリスト・神から奇跡の賜物を受け、あなたはまばゆいばかりの灯火となられました。それゆえ、キリストの教会は歌をもってあなたを賛美します、尊きマカリエよ、わが父よ。

3月31日

3月18日（旧暦）

聖人である我らの父、エルサレムの大司教キリルの記念日

3月18日の記念日

聖キリロス・エルサレム大主教は、敬虔な両親のもとで生まれ、厳格な正教の教育を受けました。コンスタンティヌス大帝の治世に修道生活に入り、その息子コンスタンティオス[2465]の治世において、大主教マクシムスの死後、エルサレムの大主教座に選出されました。　キリスト教の教えを純

[2464] 聖マカリーの聖遺骨は、1700年に製作された金メッキを施した銀製の聖遺物箱に公開され、1700年9月18日にトヴェリ大司教セルギイと4人の大修道院長によってそこに移された。

[2465] コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスは、父の死後、東方、アジア、エジプトを継承した。361年、兄コンスタンスの暗殺者マグネティウスを打ち破り、ローマ帝国全土を自らの支配下に統一した。　彼は異教の神殿を破壊するか、あるいはキリスト教徒に譲り渡し、教会へと改築させた。また、異教の礼拝を死刑を科して禁止する法律を数回にわたり公布した。　しかし、アリウス派の異端に同情を示したコンスタンティウスは、当時の宗教的対立を著しく激化させた。彼は、アリウス派の誤りを認めない正統派の司教たちを迫害し、彼らを司教座から追放し、さらには投獄さえした。彼の治世下では、アリウス派が国家の要職を占めていた。　コンスタンティウスは361年、ガリアで軍によって皇帝と宣言された従兄弟のユリアヌスに対する遠征の最中に死去した。ユリアヌスは、コンスタンティウス自身がガリアの総司令官に任命した人物であった。ナジアンゾスのグレゴリウスは、コンスタンティウスが死の直前に、正統派に対する迫害を悔い改めたと伝えている。

粋なままに保つこと に熱心であった聖キリルは、大司教として、アリウス派[2466] およびマケドニウス派[2467] の異端と、精力的に、またたゆまず戦った。

これにより、彼はアリウス派の異端に陥った司教たちから強い敵意を招くこととなった。その中には、後に聖キリロスの最初の追放の主たる原因となった、パレスチナ・ケサリアの[2468] アカキオス都主教も含まれていた。

ある日、[2469] 聖霊降臨祭の祝日、午後3時頃、エルサレムで次のような奇跡的な徴が現れた。空に尊き十字架の印が現れ、まばゆい光を放っていた。 ゴルゴタから始まり[2470] 、それはエレオン山まで広がっていた[2471] 。コンスタンティウス皇帝はアリウス派の異端を支持し、正教徒を迫害し、異端者たちをあらゆる手段で支援していたため、聖キリルは彼にこの奇跡的な徴を伝え、迷いの道を捨てて正教に改宗するよう諭した。

一方、アカキオス都主教は、親しかった皇帝の支援を利用して、聖キリルが自分を異端であると糾弾し、従わなかったことを理由に、聖キリルに反旗を翻した。当時、エルサレムはケサリア都主

[2466] アリウス派異端の始祖は、アレクサンドリアの長老アリウスであった。彼は、神の御子が父と同質であることを否定し、イエス・キリストを被造物として崇め、全能、全知などの神聖な完全性を彼に認めなかった。 アリウスの異端は、第1回（326年）および第2回（381年）の全地公会議において断固として非難され、神の御子と父との平等が確立された。これは、第1回全地公会議の教父たちによって制定された「使徒信条」の第2条において、すべてのキリスト教徒が告白しているものである。 5世紀には、アリウス派はローマ帝国から姿を消したが、ドイツのゴート族、ブルグンド族、ヴァンダル族、ロンゴバルド族の間で再興した。

[2467] マケドニオスはコンスタンティウスの治世にコンスタンティノープル司教を務め、アリウス派の異端を支持していた。 後に、アリア派に対する残虐さえも理由に罷免された彼は、新たな教義の指導者となることを望み、アリアの思想に沿って聖霊に関する教義を展開した。マケドニウスは、聖霊を本質において聖三位一体の最初の二つの位格とは異なるものと見なし、父と子の神性および栄光には参与していないと考えた。 マケドニウスの異端は第2回全地公会議（381年）で非難され、使徒信条の第8条において、聖霊に関する教会の真の教義が永遠に確立された。 マケドニアの異端に対しては、特に聖バシレイオス大主教、聖グリゴリオス・ニッサス、聖グリゴリオス・テオロゴスといった教父たちが精力的に闘った。

[2468] ケサリアは、地中海の東岸、ヤッファ（古代のヨッピ）の北に位置する都市であった。この都市は、ヘロデ王によって、古代カナン人の都市ストラトンの廃墟の上に、カエサル・アウグストゥスに敬意を表して建設された。ウェスパシアヌス帝（69–79年）の治世下で、ローマの植民都市となった。 エルサレムが破壊される以前から、ケサリアはローマの総督の居所となっていた（使徒行伝 23:23–24）。使徒たちの時代、この都市は、使徒ペテロによって最初の異邦人である百人隊長コルネリウスがキリスト教に改宗した場所として注目された（使徒行伝 10:1–48）； また、最初の執事の一人である使徒フィリポがここに住んでいた（使徒行伝 8:40；使徒行伝 21:8）。さらに、使徒パウロもここを訪れ、2年間投獄されていた（使徒行伝 9:30； 使徒行伝 18:22；使徒行伝 21:8；使徒行伝 23:23；使徒行伝 24:1–27；使徒行伝 25:1–27；使徒行伝 26:1–32）。エルサレムの破壊後、カイサリアはパレスチナの主要都市となり、司教の居所となった。 638年、イスラム教の広がりとともに、ケサリアはトルコ人の支配下に入ったが、1102年の十字軍遠征の際、バルドゥインによって解放された。しかし、1265年に再びトルコ人に征服され、完全に破壊されたため、街には廃墟だけが残った。

[2469] それは351年のことだった。

[2470] ゴルゴタ、すなわち主イエス・キリストが十字架につけられた山は、かつてエルサレムの外（マタイ 27:32–33、ヨハネ 19:17–41、ヘブライ 13:12）にあり、北西側に位置している。 ゴルゴタという名称は、ヘブライ語で「頭蓋骨」を意味する「ロブノエ・メスト」（ルカ 23:33）に由来し、おそらくその形状が頭蓋骨に似ていたことから名付けられたものと考えられる。伝承によれば、ここにはアダムが埋葬されていたという。

[2471] エレオン山、あるいはオリーブ山は、ユダヤの山の一つであり、エルサレムの東に位置している（エゼキエル 11:23）。その名称「オリーブ山」は、山に数多く生えていたオリーブの木に由来する。 主イエス・キリストは、この世におられた間、弟子たちと共にしばしばこの山を訪れました（ヨハネ 8:1、18:2）。 オリーブ山の西側の斜面にはゲッセマネの園があり、主は受難の前夜にそこで祈りを捧げ、またそこでユダに裏切られた（マタイ 26:30–60；マルコ 14:26–46；ルカ 22:39）。 山の南東斜面にはベタニヤという村があり、主はそこからエルサレムへ威風堂々と入城された（マタイ 21:21；ルカ 19:29）。伝承によれば、主はオリーブ山から天に昇られた（使徒 1:12）。 4世紀、コンスタンティヌス大帝の母によってオリーブ山にキリスト教の教会が建立されたが、後にトルコ人によってモスクへと改築された。

教の管轄下にあったが、　これは、ローマ人による破壊後、エルサレムが衰退したことに起因していた[2472] 。一方、聖キリルは、異端者 である大主教――しかもサルディキ地方公会議[2473] によって罷免されていた――に従うことを拒んだだけでなく、教会規則に則って彼に属さない権力を濫用したとして非難した。　こうした理由から、彼はアカキオス都主教に従うことは自分には不可能であると考えていた。さらに、聖キリルは、むしろケサリア・パレスティナがエルサレムに従属すべきであると主張した。なぜなら、エルサレム教会はすべての教会の母であるからである[2474] ；　ましてや、アカキオスを罷免したサルディカ公会議は、彼に属していた権威を、聖キリルの前任者であるエルサレム大司教マクシモスに委ねたのである。

聖キリルに対する敵意に満ちていたアカキオスは、次の出来事によって彼を告発する口実を見つけた。　エルサレムで深刻な飢饉が起きた。民衆は生計を立てる手段を見出せず、大司教に助けを求めた。聖キリルは慈悲深い心で、信徒たちの嘆願を深く心に留め、自らの全財産を彼らのために費やした。　しかし、飢饉は収まる気配がなく、もはや援助する手段も尽きてしまったため、聖キリルは教会の財産――金、銀、そして貴重な祭壇の幕――を売り払い、その売却代金で飢えた人々のために小麦を購入し始めた。その頃、街で、聖職者の装束を身にまとったある女性が路上で踊っているのが目撃されたという噂が広まった。　その女性が、聖職者の衣装をどこで手に入れたのかと問われると、ある商人から購入したと言い、その商人の名前まで挙げた。一方、尋問を受けた商人は、その衣装を販売用に大司教本人から渡されたと述べた。　これが実際にあったことかどうかは定かではないが、その噂がアカキオス都主教の耳に入り、彼はそれを聖キリロスを告発するのに十分な根拠とみなした。彼が招集した公会議において、彼は聖キリロスを、聖なる品を売却してその尊厳を汚したとして破門するよう提案し、公会議はこれに同意した。　このようにして、異端を唱える司教たちの協力のもと、罷免された異端者の大主教は、エルサレムの正教大司教をその座から追放し、力ずくでエルサレムの境界外へ退去させた。 聖キリルは当初、タルス[2475] へ退去し、そこでシルヴァン司教のもとで過ごした。シルヴァン司教が信仰のいくつかの教義を正しく理解していないことを見抜くと、聖キリルは彼にその誤りを指摘し、正教の教えに立ち返らせた。　このことを耳にしたアカキオスはシルヴァノスに手紙を書き、聖キリルの罷免を伝え、聖キリルとの交わりを断つか、少なくとも自身の管

2472　この破壊は、救い主キリストの死から数十年後に起こった。キリストは、エルサレムが待ち受ける悲惨な運命についてしばしば予言していた（マタイ24:1–51；マルコ13:1–37；ルカ19:41–44）。　ネロの治世（54–68年）に、ユダヤ人たちはローマ人に対して反乱を起こした。　ネロは反乱軍に対して、ウェスパシアヌスを指揮官とする軍隊を派遣した。ウェスパシアヌスはまもなくガリラヤを制圧し、すでにエルサレムの包囲の準備を進めていたが、亡くなったネロの後を継いで皇帝に選出されたため、戦争の終結は息子のティトゥスに委ねられた。1年にわたる包囲の末、ティトゥスはエルサレムを陥落させた。　都市は甚大な破壊を受け、残ったのはわずかな塔や建物だけとなった。包囲戦中の飢餓により、最大1,100,000（110万）人のユダヤ人が死亡し、約97,000人が捕虜となった。 その後、ハドリアヌス帝（117–138）の治世下で、この都市は完全に破壊された。しかし、コンスタンティヌス大帝の時代以降、キリスト教が異教に勝利し、エルサレムは発展し、美しくなっていった。

2473　*サルディスは*、小アジアのリディア地方にある古くから繁栄した都市であり、リディア王国の首都であった。紀元前545年にペルガムの支配下に入り、その後ギリシャ人、マケドニアのアレクサンドロス、そして最終的にローマ人の手に渡った。 ティベリウス皇帝（14–36年）の治世中、この都市は地震の被害を受けたが、ティベリウスはそれを再建した。使徒たちの時代、サルディスは依然として重要な都市であった。キリスト教はここで非常に早くから広まり、『ヨハネの黙示録』にはすでにサルディスの教会についての言及がある（黙示録3:1–5）。 アルカディウス帝（395–408）の治世中、この都市はゴート族によって破壊され、10世紀にはティムールによって完全に廃墟とされた。現在、かつて豊かで栄華を極めたこの都市の跡地には、オアートという小さな村がある。

2474　エルサレム教会が「すべての教会の母」と呼ばれるのは、主の御命により使徒たちがここから宣教に出発し、キリストの教えを*地の果てまで*広めたからである（使徒行伝 18:1–28）

2475　小アジアのキリキア地方にあるタルソスは、聖使徒パウロがここで生まれたことで知られている（使徒行伝 22:3）；使徒パウロはタルスでキリストの福音を宣べ伝える準備を整え、そこからバルナバによって福音宣教のために招かれた（使徒行伝 9:11–30；使徒行伝 11:25）。そのため、タルスでは早くからキリスト教が広まった（使徒行伝 15:23–41）。

轄下にある教区での聖務の執行を禁じるよう助言した。　しかし、シルヴァンはアカキウスの言葉に従わなかった。彼は聖キリルを、その教えによって多くの正信者を支え、導いてきた敬虔な人物として尊敬していたからである。また、追放そのものについても、シルヴァンはそれが聖キリルの何らかの過失によるものではなく、もっぱらアカキウスの嫉妬と憎悪によるものであることを知っていた。

その後、セレウキアで[2476]　、地方公会議が開かれ、150人もの司教が参集した。その中には聖キリルもいた。公会議の審議が始まる前に、アカキウスは、自身が破門した聖キリルを会場から退去させるよう強く主張し始めた。　多くの司教たちは、そのような行為に同意しなかった。そこでアカキイは公会議を去り、コンスタンティノープルへ向かった。　そこで、皇帝と、同じくアリウス派であったエウドクシオス総主教の前で、彼は自ら去った公会議を中傷し、それを「教会の益のためではなく、害をもたらすために集まった悪人たちの集まり」と呼んだ。アカキオスは、特に皇帝の聖キリロスに対する強い憤りを煽ることに成功した。　彼は皇帝に、聖キリルが、コンスタンティヌス大帝からエルサレムの大司教マカリオスに贈られた貴重な聖衣――　の洗礼の秘跡を執り行う際に身に着けるためのもの――を売り払い、その後、その聖衣が民衆の娯楽の集まりの場で踊っていた一人の男に着用されているのを目撃されたと告げた。 皇帝はこれに激怒し、聖キリルを幽閉した。

コンスタンティウスの死後、ユリアヌス・アポステート[2477] が王位に就いた。在位初期、彼は敬虔さを装い、正教徒を迫害する目的でコンスタンティウスが定めたすべての法令を撤廃した。ユリアヌスの命令により、以前にコンスタンティウスによって追放されていたすべての正教会の司教たちが、監禁から解放された。　この頃、聖キリルもまた、自身の司教座に復帰した。王位を固めると、ユリアヌスは公然とキリストを否認した。キリスト教の敵であるユダヤ人に対しては、大きな自由を与えた。とりわけ、ローマ人によって破壊された場所[2478] に神殿を建設することを許可しただけでなく、その建設費として国税の一部を充てた。 この意図そのものが神を冒涜する事業[2479] がまだ始まったばかりの頃、聖キリルは側近たちに、神殿の石一つ残らず破壊されるというキリストの御言葉――「*やがて、あなたがたがここで見ているものの中から、石が石の上に残ることはなく、すべてが取り壊される日が来る*」（ルカ21:6）――が間違いなく成就すると予言した。 聖キリルは、主キリストに対し、すでに始まったこの事業が成し遂げられることを許さず、建設者たちの計画とともにそれを打ち砕いてくださるよう祈った。主は御自分のしもべの祈りを聞き入れ、御自身の言葉が必ず成就するという御自身の予言を実現された。　ある夜、激しい地震が起こり、ユダヤ人たちがまだ積み上げた

[2476] セレウキアは、地中海沿岸にあるシリアの都市である。おそらく紀元前300年頃、シリア王セレウコス・ニカトルによって建設されたものと思われる。ここで使徒パウロは、最初の伝道旅行の際、説教のために滞在し、ここからキプロスへと船出した（使徒行伝13:4）。 6世紀にこの都市は破壊された。

[2477] ユリアヌス・アポステート（背教者）は、コンスタンティヌス大帝の甥であり、その弟ユリウス・コンスタンティウスの息子で、331年に生まれた。345年、兄のガッルスと共にコンスタンティウスによってカッパドキアへ追放され、そこで厳重な監視の下で6年間を過ごした。　351年、彼は流刑地を離れ、ニコメディアで数年間を過ごし、そこで哲学の研究に没頭した。355年、コンスタンティウスによってガリアの軍司令官に任命された。そこで彼は軍隊の支持を巧みに獲得し、361年、軍は彼を皇帝として擁立した。 異教徒の師の指導の下での哲学の研鑽、アリウス派の動乱に起因するキリスト教徒間の不和、そしてコンスタンティウスへの憎悪が、ユリアヌスに、彼を迫害した宗教であるキリスト教への憎悪をも抱かせるようになった。彼は異教を復活させ、キリスト教を根絶することを目標とした。しかし、彼の試みはすべて完全な失敗に終わった。 ユリアヌスは363年、ペルシア遠征中に死去した。

[2478] 当初、神殿はユダヤ人がエジプトから脱出してから488年後に、ソロモンによってモリヤの山に建設された（列王記下6:37–38；歴代誌下6–7章）。689年には、バビロンの王ネブカドネツァルによって破壊された。　70年にわたる捕囚の後、紀元前531年にキュロスからエルサレムへの帰還と神殿再建の許可を得たユダヤ人たちは、パレスチナに戻ると2年目に神殿の礎を据え、紀元前616年に建設を完了した。捕囚後の神殿の装飾には、特にヘロデ大王が尽力した。 ティトゥスによるエルサレム攻略の際、ある兵士が燃え盛る火のついた炭を窓から投げ込み、神殿は炎に包まれた。

[2479] ユリアヌスは、救い主キリストが神殿の破壊について語った預言（ルカ21:6）を嘲笑するかのように、ユダヤ人による神殿の建設を許可した。

ばかりの石は言うまでもなく、古代のソロモンの神殿の残っていた基礎さえもその場所からずれてしまった。そして、これらすべて――古代の神殿の残骸も新しい建造物も――目に見えない神の力によって、塵のように吹き飛ばされたのである。　夜が明けると、皆はこの奇跡に驚嘆した。ユダヤ人たちが再び作業に取り掛かろうとしたとき、たちまち天から火が降り注ぎ、作業道具を焼き尽くした。彼らは大きな恐怖に襲われた。その翌夜、ユダヤ人たちの衣服に十字架の印が現れ、彼らはそれをどうやっても消すことができなかった。

その後、キリストの御言葉の成就に関する予言がこれほど荘厳に的中した聖キリルは、再び追放の身となった。　彼の後任は、おそらく聖キリアコスであったと考えられる。彼はユダヤ人であり、ユダという名を持っていた。ヘレナ皇后が主の聖なる十字架を探し求めていた際、その隠された場所が彼に示された。その後、彼は洗礼を受け、キリアコスという名を与えられた。

しかし、聖キリルが追放された後、聖キリアクがその地位に就いたのは長くは続かなかった。彼はまもなく、キリストへの信仰を告白したためにユリアヌスによって殉教の死を遂げたのである。

ユリアヌスの没後、聖キリルは再びエルサレムの主教座に就いたが、ヴァレンティヌスの治世においてアリウス派が勢力を強めたため、その敬虔さと異端者たちに対する断固たる闘いのゆえに、三度目の追放を余儀なくされた。 ついに、テオドシウス大帝の治世下[2480]、聖キリルは栄誉をもってエルサレムへ帰還した。その後8年間にわたり、彼は真に牧者らしい熱意をもって教会を統率し、主のもとで安らかに息を引き取った。そして、多くの有益な著作[2481]を後世に遺した。

コンダク、第1声：

賢者よ、汝の舌をもって、神聖なる霊感により、汝の民に、本質において不可分でありながら、位格において区別される唯一の栄光ある三位一体を啓蒙した。それゆえ、我らは喜びをもって、汝の至聖なる記念を祝う。汝を神への祈りの仲介者として捧げる者たちよ。

私たちの尊き父、奇跡行者アニンの生涯

記念日：3月18日

尊者アニンはハルキドン[2482]の出身であった。その両親はキリスト教徒であった。福音書に登場するザケオ[2483]のように、彼は小柄であったが、その代わりに精神は偉大であった。幼い頃から、彼は柔和で悪意のない気質を備えており、常に善行を積むことを志していた。

尊者が十五歳になったとき、両親は亡くなりました。その直後、聖人は世俗の虚しい生活を捨てようと決意し、ある修道院に入居して、そこで修道士の戒律を受けました。

[2480] テオドシウス大帝は異教に決定的な打撃を与えた。392年に単独統治者となった彼は、神々への奉仕を大不敬罪と同等の犯罪とみなす法律を公布した。

[2481] 彼が残した著作のうち、特に注目すべきは23の洗礼準備説教であり、そのうち18は洗礼を受ける準備をしている者や新しく洗礼を受けた者に向けたものである。これらには、信仰告白の各条項について、明確かつ平易な解説が記されている。　また、「麻痺した人に関する対話」や、「カナでの水をワインに変えた奇跡に関する対話」の断片も現存している。

[2482] ハルキドンは、プロポンティス（マルマラ海）の南岸に位置する小アジアの都市である。古代、ハルキドンはローマ帝国のビフィニア属州の主要都市であった。 教会史において、この都市は第4回全地公会議の開催地として注目される（451年に開催され、イエス・キリストには神性という一つの本性のみがあり、それが人間性を飲み込んだかのように説いたモノフィシテ派の異端を論じた）。

[2483] *ザケイ*は、エリコ市の徴税人の長であり、主の地上での宣教活動が行われていた時代に生きていた人物で、主の説教に熱心に耳を傾けたことから、主から特別な配慮を授かった。　背が低いことで知られていたザケイは、ある時、主を取り囲む大勢の群衆の向こうから主を見るために、イチジクの木に登った（ルカ19:1–10）。

静寂に満ちた修道生活に熱心だった聖アニンは、まもなく修道院を離れ、ユーフラテス川[2484]が流れる場所の近くにある、遠く離れた荒野へと向かった。この川は、シリア[2485]とペルシャ[2486]を隔てている。そこでアニンは、マイウマという名の、洞窟で修行に励んでいた一人の隠者に出会った。　聖人はその修道者のもとに身を寄せ、断食と祈りの修行において彼に倣った。二人は極めて厳しい断食を守り、四旬節の間は一切何も口にしなかったが、それにもかかわらず、まるで王の饗宴に招かれているかのように、常に喜びに満ちた表情を浮かべていた。　聖アニンはその修行において非常に優れた成果を挙げ、師である長老さえも凌駕するほどであった。彼は多くの日を全く食事を摂らずに過ごし、昼夜を問わず祈りを捧げていたため、長老でさえもその修行ぶりに驚嘆した。

聖アニンが隠者と共に修行していたその場所には水がなく、ユーフラテス川は彼らの洞窟から五スタディオン[2487]の距離にあった。聖アニンは、できるだけ多くの労苦を背負うため、あえて大きな器を使わず、小さな器でこの川から水を運んでいた。

ある時、聖アニンは水を汲みに川へ向かったが、洞窟からまだ一スタディオンも離れていないうちに、突然現れた天使によって彼の器が水で満たされた。アニンが異常に早く戻ってきたことに気づいた長老は、神が彼に御恵みを授け、奇跡を起こされたのだと悟った。　その後、長老は彼に師となり導き手となってくれるよう懇願したが、彼を説得することができなかったため、自らも仕えたいと願い、また仕える義務があると考えている者を、無理に自分のために働かせることのないよう、彼を放っておくことに決めた。　ユーフラテス川の近くにあるある修道院を訪れた老修道士は、兄弟たちに聖アニンについて語った。それ以来、聖アニンに関する評判はますます広まり、修道生活を求める多くの人々がアニンのもとを訪れるようになった。

長老マイウムが洞窟を去った後、聖アニンは心の中でこう言った。「私はここで修行を始めたのだから、ここに残り、生涯を終えるまでここにとどまる」――そして洞窟に残った。　とはいえ、聖アニンは度々洞窟を出て砂漠の奥深くへと向かった。そこで二十日か三十日ほど過ごした後、彼は再び自分の洞窟の修道室へと戻ってきた。絶え間ない修行によって、聖人は自らの内にあるあらゆる肉欲を死滅させ、肉体を完全に霊に服従させるに至った。

主は聖人に御自身の恵みを注がれ、さらには砂漠に生息する野獣たちさえも彼に従わせた。聖人がどこへ行こうとも、二頭のライオンが彼に従った。そのうちの一頭の足の潰瘍を、聖人は癒やした。

聖アニンは、動物だけでなく人間に対しても無償で治療を行っていた。それは、神が彼に、人々のあらゆる病や不調を癒やす権能と力を与えられたからである。　聖人の名声はその国中に広まった。多くの病人が彼のもとに連れてこられ、彼は神の恵みによってそのすべてを癒した。その結果、聖人はもはや砂漠へは行かず、彼を訪ねてくる人々のために常に自分の修道室にとどまるようになった。　神がその聖人をその国に遣わされたのは、彼のもとを訪れる人々が、あたかも癒やしの泉を訪れるかのように、慰められずに立ち去ることなく、一人ひとりがそれぞれの病気に応じて彼から癒やしを受けられるようにするためであった。ある者は肉体の病を癒やされ、またある者は彼の訓示や教えに耳を傾けることで、心の病を癒やされたのである。

[2484] ユーフラテス川は、アジアで最も大きな川の一つである。

[2485] *シリア*は小アジアの地域であり、東はユーフラテス川、南はアラビア、西はパレスチナ、フェニキア、地中海、北はキリキアおよびカッパドキアと国境を接していた。　シリアの北部は南部よりも肥沃で植生に富んでおり、南部は所々で砂漠へと変わっている。

[2486] ペルシア――アジア南部に位置し、カスピ海とペルシア湾の間に広がっていた地域。

[2487] スタディオン――元来、ギリシャ人が走りの競技を行うために用いた細長い広場を指す。この名称は常に一定の長さ（通常600フィート）の広場を意味していたため、スタディオンは長さの単位として採用された。その長さは、およそ88ロシア・サジェン、あるいは190メートルに相当した。

聖人が住んでいた場所は水がなく、聖人のもとを訪れる人々の数が多いため水の需要も大きかったことから、聖人は雨水を溜めるための小さな井戸を掘った。

ある時、数人の人々が聖人のもとを訪れ、喉の渇きを癒やすための水を求めた。聖人は弟子の一人（彼にはすでに六人の弟子がいた）に、井戸から水を汲むよう命じた。しかし、その弟子は、井戸の水はすでにすべて枯れてしまい、一滴も残っていないと聖人に告げた。すると、聖人は彼にこう言った。

「私は神の驚くべき力を信じている。行けば、君も水を見つけられるだろう。その水で、訪れた人々の渇きは癒されるはずだ。」

弟子は出かけて行き、驚いたことに、水が縁まで満たされた井戸を見つけた。神を賛美した後、彼は井戸から水を汲み、師のもとへ持って行き、神の力によって成し遂げられた奇跡について語った。その水は、何日も持ち続けた。　これらすべては、聖人の修道生活17年目に起こったことである。やがて水がすべて尽き、それでもなお雨が降らなかったとき、聖人は再び神に奇跡を願うことを望まず、謙虚な心で、夜ごとに自らユーフラテス川から水を運ぶようになった。　聖人は夜通し朝まで働き続け、絶えず神を賛美し、主が聖なる福音書の中で語られた御言葉を心に留めていた。*「また、これらの小さな者たちのうちの一人に、ただ冷たい水一杯でも飲ませてやる者は、弟子という名において、まことに、あなたがたに告げる。その人は、その報いを失うことはない」*（マタイ10:42）。

ある時、近隣の修道院から数人の兄弟たちが、長い道のりでひどく喉を渇かせて聖人のもとを訪れた。ところが、井戸には水が全く残っていなかった。そこで聖人はこっそりと水瓶を手に取り、自ら川へ水を汲みに出かけた。ほどなくして、彼はすでに帰路についていた。　尊者があまりにも早く戻ってくるのに気づいた兄弟たちは、聖人がひどく疲れてしまい、川にたどり着く前に引き返したのだと考えた。兄弟たちは、自分たちで水を汲みに行こうと、聖人を出迎えに向かった。しかし、兄弟たちが聖人の肩から水瓶を下ろそうとしたとき、水瓶が水でいっぱいに満たされていることに気づいた。　修道士たちは、この出来事に大いに驚いた。というのも、以前マイウムの長老のときと同様に、主の天使が水瓶に水を満たしてくれたからである。そこで修道士たちは叫んだ。

「主を賛美します！　私たちの聖なる父の功徳により、水瓶が水で満たされました！」

しかし、聖人は常に謙虚さを保ちながら、兄弟たちにこう言った。

「兄弟たちよ、どうかお許しください。私は罪深い者です。この水は、私のためではなく、あなたがたの激しい渇きゆえに、神があなたがたに与えてくださったものです。私が川から戻るのを待つ間に、あなたがたが完全に力尽きてしまわないようにするためです。」

ネオケサリアの司教[2488]、パトリキウスという名の司教は、神が聖人の功績ゆえに成し遂げられた奇跡を深く敬い、たびたび聖人を訪ね、本人の意思に反して彼を長老に任命した。

聖人が自らユーフラテス川から水を運んで、訪ねてくる人々の渇きを癒していることを知った司教は、川から水を運ぶことができるロバを聖人への贈り物として送った。

数日後、ある貧しい男が聖人のもとを訪れた。彼は貸主への借金を返済する手段を持っていなかった。その男は聖人に、借金を返済できるよう助けてほしいと頼んだ。しかし、聖人は心は貧しく、差し出すことのできる物も何一つ持っていなかったため、その男にこう言った。

「兄弟よ、このロバを受け取りなさい。それを売って、その代金で借金を返済しなさい。」

その男はロバを受け取って聖人のもとを去り、聖人は再び自ら川から水を運ぶようになった。

司教がこのことを知ると、聖人に別のロバを送り、こう伝えるよう命じた。

「このロバを君に譲るわけではないが、水を運ぶために使ってよい。ただ、私が必要になった時には、取り戻すつもりだ。」

[2488] *ネオケサリア*は、小アジア地方のカッパドキアにある主要都市の一つである。316年、ここでは教会の改革に関する問題を取り扱う地方公会議が開催された。古代のネオケサリアがあった場所には、現在ニクサルという町が存在する。

しばらくして、ある貧しい男が聖人のもとを訪れ、施しを求めた。ロバ以外に与えるものを持っていなかった聖人は、そのロバを乞い求めた男に譲った。

その後、聖人の元へ司教が訪れたが、ロバが見当たらないのを見て、大きな井戸を掘らせ、多くの動物を使って川から水を汲み入れ、それを満たすよう命じた。（通常、水のない乾燥した場所では井戸が掘られ、雨や雪解け水、あるいは川から運ばれた水で満たされていた）。井戸を縁まで満たすと、司教は自分の家畜を連れ帰った。そして、井戸の水が枯渇すると、司教は再びロバを送り込み、水を井戸まで運ばせ、その後、それらを連れ帰った。

アパメア[2489] には、ピオニオスという名の柱上修行者がおり、厳格な修道生活を送っていた。近隣の住民の中に潜んでいた強盗たちが、ここに莫大な富があると思い込み、夜になって彼の修道院に押し入った。　壁を掘り崩して修道院に侵入した強盗たちは、中をくまなく探したが、どこにも何も見つからず、手ぶらで引き返そうとした。その際、強盗の一人が石を拾い上げ、聖なる柱上修道士に向かって投げつけた。石は聖人の頭に命中し、重傷を負わせた。

悪党たちがその場を去ると、柱の聖人はすでに柱から降り、裁判官のもとへ行って強盗たちを訴えようとしていた。

聖アニンはこれを知ると、自分に仕えていたライオンを呼び寄せ、その前に食べ物を置き、こう言った。

「お腹がいっぱいになるまで食べなさい。君には長い道のりが待っているのだから。」

それから、紙を取り、聖人はそこにこう書き記した。

「聖なる父よ！　あなたが悪党たちに苦しめられ、敵に復讐するために柱から降りようとしていることを私は知っている。あなたの労苦に対する天の御国での永遠の報いを失わないよう、その考えを捨てなさい。」

聖人はその紙を獅子の首に結びつけ、まるで人間に話しかけるかのように獅子に語りかけ、道中で誰にも手を出さずに、先述の柱上修道士のもとへ向かうよう命じた。

獅子は素早く走り出し、まもなく柱修道士が住む修道院にたどり着いた。修道院の門の前で立ち止まると、獅子は前足で門を叩き始めた。門番は小さな窓から外を覗き、獅子を見かけると、急いで柱修道士のところへ行き、修道院の門の前に大きな獣が立っていると告げた。

柱の修道士は神に祈りを捧げると、門番に恐れることなく修道院の門を開けるよう命じた。その後、ライオンは修道院に入り、柱のそばまで近づくと、その前に紙を置いた。

その手紙を読んだ柱上修道士は、遠く離れた場所にいながら自分の考えを見抜いた聖アニンの先見の明に驚嘆した。また、神が獣たちに御自身の聖徒に仕えるよう命じられることにも驚いた。その後、柱上修道士は当初の決意を捨て、すべての希望を主においた。

ある敬虔な女性が病気になり、聖アニンから癒やしを得られることを願って彼のもとへ向かった。道中、彼女は槍を手にした強盗に出くわし、強盗は彼女の持ち物をすべて奪おうとしたが、実際には旅に必要な少量のパン以外、彼女には何も持っていなかった。　欲望に駆られた強盗は、彼女に暴行を加えようとしました。槍を地面に突き立て、彼は彼女を罪へと強要し始めました。しかし、その女性は彼の腕から逃れようと努めながら、聖人を助けを呼び、こう叫びました。

「聖アニンよ、私を助けてください！」

その瞬間、強盗は萎縮し、恐怖に襲われて逃げ出そうとした。しかし、槍に手を伸ばしても、槍が地面に深く根を張っていたため、引き抜くことができなかった。　山賊はさらに大きな恐怖に襲われた。一方、女は彼の魔の手から逃れ、聖人のもとへ向かった。聖人のもとに着くと、彼女は起こったことすべてを語り、病の癒やしを受けた後、住んでいた場所へと戻っていった。

[2489] アパメアは、シリア南西部、オロンテス川のほとりに位置する地域である。

やがて、自らのすべての悪行を悔い改めた強盗も、その聖人のもとを訪れた。その後、聖アニンは彼を癒やし、キリスト教の聖なる信仰を教え、聖なる洗礼を授けた。そして後に、彼を修道士として剃髪させた。一方、地面に残されていたその槍は、神の御心により、巨大な樫の木へと成長した。

この偉大な神の御使いは、他にも多くの奇跡を行った。中風の人々を癒やし、人々から悪霊を追い出し、多くの病人を治療し、人間だけでなく動物までも癒やす癒し手であった。

ある日、多くの民が聖人のもとを訪れた。その日は酷暑で、皆が喉の渇きに苦しんでいたが、水はすっかり尽きてしまっていた。しかし、聖人が祈ると、突然雲が現れ、大地に豊かな雨が降り注いだ。

聖人は、将来起こるであろう多くのことを予言した。例えば、蛮族の侵攻[2490]や、多くの兄弟たちの死を予言し、さらに、間もなく死ぬ運命にある兄弟を呼び寄せ、二人きりでこう語った。

「わが子よ！　あなたの時は近いのだから、自分の魂の救いを考えなさい！」

やがて聖人自身も、生誕からわずか百十年の生涯を終え、臨終の日が近づいた。自らの死の日を知っていた聖人は、教え子たち（彼はかなりの数の兄弟たちを擁していた）を呼び寄せ、長い間彼らを導き、教えを説いた。その後、聖人はヴェロニキアナという名の、極めて徳の高い長老を指差し、こう言った。

「この人が、私の代わりにあなたがたの修道院長となるだろう。」その後、聖人は七日間病に伏し、すでに人生の最期が近づいていた。まさに臨終の瞬間、聖人は恐れに満たされ、病床から起き上がろうとしたが、頭を垂れてこう言った。

「平安あれ、わが師たちよ！」少し間を置いて、再びこう言った。

「あなたがたは、私の師たちとは誰なのか？」少し間を置いて、さらにこう言った。

「わが主の御心なれば、私は主の御命により、あなた方と共に参ります。」

彼を取り囲んでいた者たちは皆、恐れに満たされ、ひれ伏した。神を畏れる長老ヴェロニキアン――彼は修道院長に任命されていた――は、その尊者に向かって言った。

「主よ！　どのような希望のために、あなたはこの生涯の日々を労苦に費やしてきたのですか？　私たちに、あなたが見たものを教えてください。」

聖人は答えた。

「私は、天のエルサレムが開かれているのを見ました。そこから明るい雲が立ち上り、その雲の上に三人の光を放つ人々がいました。彼らは私のところまで来て、こう言いました。『アニンよ！主があなたを呼んでおられます。立ち上がって、私たちと共に来なさい』と。」　私は彼らに尋ねた。「あなた方は、私の導き手たち、いったい誰ですか？」すると彼らは答えた。「我らはモーセ、アロン、そしてオルである。」

これを聞いて、兄弟たちはさらに大きな恐れと戦慄に包まれた。すると、聖人は彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、私のために祈ってください。そうすれば、私が恐ろしい審判者の御前に引き出されたとき、恐れおののくことがないように。」

その後、聖人はこう言った。

「主よ、私の霊をお受けください」――そしてまもなく（3月の18日）、息を引き取った。

兄弟たちは、父と子と聖霊、すなわち万人が永遠に賛美する唯一の神を称え、讃美しつつ、彼を栄光のうちに葬った。アーメン。

[2490] バルバルとは、一般的に異民族や外国人を指す。

聖殉教者トロフィモスとエウカルピオスの記念日

記念日：3月18日

ニコメディアでキリスト教徒に対する迫害が勃発したとき、キリストを告白する者たちは皆、捕らえられて牢獄に閉じ込められ、その後、裁判にかけられた。その際、彼らは数多くの拷問や様々な苦痛にさらされ、私たちの神であるキリストへの告白を揺るがすことなく貫いた者たちは、死刑に処された。　当時、聖殉教者トロフィムとエウカルピオスは、軍隊の中で最も勇敢で気高い戦士として知られており、それゆえにキリストの最も手強い敵ともなった。　彼らはキリスト教徒を捕らえ、牢獄に閉じ込め、彼らに対する完全な権力を得ると、自らの裁量で、ある者たちを拷問にかけ、他の者たちを牢獄で苦しませ続けた。ある日、彼らが数人のキリスト教徒を捕らえようと向かっていたところ、空から降りてくる大きな火の雲を目撃し、それが彼らに近づくにつれて次第に濃くなっていった。 その雲の中から声が響き渡り、こう言った。

「なぜ、わたしのしもべたちを脅かして、そこまで熱心に振る舞うのか。惑わされてはならない。わたしを信じる者たちを、だれも自分の支配下に置くことはできない。むしろ、あなたたち自身が彼らに加わったほうがよい。そうすれば、天の御国を得ることができるだろう。」

この幻を目にし、そのような言葉を耳にしたトロフィムとエウカルピオス――キリストの僕たちをこれほどまでに激しく残酷に迫害していた者たち――は、幻を見ることも、雲から響く雷のような声を耐え忍ぶこともできず、地面に倒れ込み、地面に横たわったまま、互いにこう言い合った。

「まことに、今、我らに現れた神は偉大である。もし我らが神のしもべとなれば、幸いである。」

そして、彼らが恐れおののきながらその言葉を口にしているその時、雲が裂けて彼らの左右に分かれ――そこから再び声が響き、彼らにこう告げた。

「立ち上がり、悔い改めよ。そうすれば、あなたがたの罪は赦されるであろう。」彼らが立ち上がると、雲の中に、非常に美しい、白い姿の男が座っており、その前には大勢の者が侍っているのが見えた。その並外れた姿に圧倒されたトロフィムとエウカルピオスは、声を揃えて彼に言った。

「私たちをお受け入れください。私たちの罪は深く、言葉では言い表せないほどです。あなた以外に神はいません。あなたは創造主であり、唯一の真の神です。私たちはまだあなたのしもべたちに加わっていません！」

彼らがそう言い終えると、雲はたちまち収まり、天へと昇っていった。その後、トロフィムとエウカルピオスは長い間その場に留まり、涙を流していたが、やがて神に祈りを捧げた後、引き返し、投獄されていた者たち全員を畏敬の念をもって牢獄から解放した。　彼らを兄弟のように抱きしめ、頭を下げて敬意を表し、足枷を外して、全員を見送った。こうして、すべての囚人たちはそれぞれの家へと帰っていった。ニコメディアの総督はこれを知ると、トロフィムとエウカルピウスに激しく怒り、彼らを呼び出して尋問し、なぜ彼らがこれほどまでに変わったのかその理由を知りたがった。彼らは幻視の中で見たすべてのことを、詳細に彼に語った。すると、彼は彼らを木に吊るし、肋骨を削り、さらに傷口を毛の縄でこすりつけるよう命じた。聖なる殉教者たちは、その苦痛を勇敢に耐え忍び、喜びながら神に感謝し、祈りを捧げた。　この様子に、都市の統治者はさらに激怒し、大きな焚き火を焚いて彼らをその中に投げ込むよう命じた。焚き火が燃え上がったとき、聖人たちは自ら火の中へと歩み入り、神を賛美しつつ、その義なる魂を神の御手に委ねた。このようにして、聖殉教者トロフィムとエウカルピオスは殉教の死を遂げた[2491]。

[2491] 聖トロフィムと聖エウカルピオスは、300年頃に亡くなった。

4月

4月1日

3月19日（旧暦）

聖殉教者クリサンフォスとダリアの殉教

記念日3月19日

あるポレミオスという高貴な家系の男が、息子のクリサンフォスと共に、アレクサンドリア[2492]からローマ[2493]へ移り住んだ。そこで彼は栄誉をもって迎えられ、皇帝から元老院議員の地位を授けられた。クリサンフォスに教育を受けさせたいと願ったポレミオスは、彼を哲学学校へ通わせた。　好奇心旺盛で非常に聡明な青年クリサンフォスは、熱心に様々な学問を学んでいるうちに、偶然『新約聖書』の書物を見つけた。それらを注意深く読み、その意味を深く掘り下げていくうちに、クリサンフォスは次のように考えた。

「クリサンフよ、真の光を知るまでは、闇に満ちた異教の書物を学ぶのがふさわしかった。今やその唯一の光を知ったのだから、それだけに固執せよ。なぜなら、光から闇へと戻るのは賢明ではないからだ。もしその努力の成果を拒めば、学びの労苦を台無しにしてしまうだろう。その成果は、それを求める者たちに神から与えられるのだ。　なぜなら、神ご自身がそう命じておられるからだ。君も新約聖書の書物で読んだ通り、*「求めよ、そうすれば与えられる。捜せ、そうすれば見つかる。叩け、そうすれば開かれる」*（ルカ11:9）と。もし、求めて見出したものを捨てようとするなら、君は愚かで正気のない人々のようになるだろう。　それゆえ、苦労して手に入れたこの恵みを自ら手放すことのないよう、全知全能をもってしっかりとそれを守り続けなさい。あなたは金や銀を見つけ、宝石を見つけたのです。　あなたは見つけ出すために探し、得たものを活用するために見つけたのだから、あなたが手に入れた宝が奪われないよう、よく気をつけなさい。

このように考えを巡らせながら、クリサンフスは、誰が自分に神の御言葉を教えてくれるかを探していた。　かつては修辞学や哲学の知恵を学ぶ聴講生であり、最も賢明な師たちの弟子であったが、今や、かつてキリストの使徒たちのように、学問に縁のない者たち――すなわち、学問とは無縁の漁師でありながら、全世界をキリストの教えへと導いた者たち――のような師を見つけたいと願っていた。　*「ペトロとヨハネの大胆さを見て、彼らが学のない素朴な人々であることに気づき、人々は驚いた。しかし、彼らがイエスと共にいた者たちであることを知った」*（使徒行伝4:13）；そのような教師たちを、賢明な青年クリサンフは熱心に探し求めていた。彼は使徒の言葉をこう読んでいたからである。*「賢者はどこにいるのか？　書物に通じた者はどこにいるのか。この世の論客はどこにいるのか。神は、この世の知恵を愚かさに変えられたのではないか。なぜなら、この世はその知恵をもって、神の深遠な知恵を悟ることができなかったからである。それゆえ、神は、福音を宣べ伝える*

[2492] アレクサンドリア――キリスト降誕前の4世紀、アレクサンドロス大王によって地中海沿岸、ナイル川の河口に築かれた有名な都市。アレクサンドリアはローマに次ぐ世界第一の都市であり、商業、工業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教初期にはキリスト教教育の温床となった。　伝承によれば、キリスト教は西暦60年頃、聖マルコ福音記者によってこの地に伝えられた。

[2493] ローマ――ローマ帝国の首都――は、イタリアの中央部、ティベリス川の両岸、同川が海に注ぐ地点に位置している。ローマでは、ネロ帝の治世下で、聖使徒ペトロとパウロが殉教した。

という愚かさによって、信じる者たちを救うことを喜ばれたのである」（Iコリント1:20–21；イザヤ33:18参照）。

このように自問自答しながらキリスト教の教師を探していたクリサンフォスは、カルポフォールという名のキリスト教徒が、聖書に非常に精通していることを知った。このカルポフォールは、迫害を逃れて――ある洞窟に、誰にも知られていない場所で暮らしていた、というより隠れていた。このキリスト教徒の話を聞いた敬虔な若者は大いに喜び、そのことを教えてくれた人に、その神の人が住んでいる場所を案内してくれるよう熱心に懇願した。

その居場所を知ったクリサンフォスは、長老であるカルポフォルの元を訪れ、彼から聖書とキリスト教の信仰を教えられた。頻繁に彼のもとを訪れ、救いの道について指導を受けた。 長老カルポフォロスの指導のもと、クリサンフォスは数ヶ月で聖書の奥義を悟り、その後、彼から聖なる洗礼を受けた。そしてクリサンフォスはキリスト教の信仰とキリストへの愛に深く根ざし、洗礼を受けてから七日が過ぎると、公然と 、民衆に向かって神の子キリストを宣教し始めた。 これを耳にしたクリサンフォスの身内の貴族たちは、彼の父にこう言った。

「見よ、お前の息子がこのようなことを敢えて行っていることについて、罪はあなたにあり、あなたに責任が問われることになる。彼は神々を冒涜し、あるキリストを真の神と認めているからだ。 もしこの噂が王の耳に入れば、そのせいであなたも、私たち――彼の親族も――許されることはなく、私たちは皆、王の恩寵を失うことになるだろう。なぜなら、神々に対してそのような冒涜的な言葉を口にする者は、それによって王の法律に背く者となるからだ。

クリサンフォスに激怒したポレミオスは、息子を薄暗く悪臭のする牢獄に閉じ込め、飢えさせ、夕方にだけわずかな量の食事を与えた。 しかし、祝福されたクリサンフォスは、その牢獄と飢えを罰とは見なさず、断食、沈黙、そしてキリスト教徒としての謙虚な生き方を学ぶ訓練であると捉え、広々とした明るい宮殿よりも、暗く狭いその住まいを喜びとしていた。

このことを知った家臣や親族たちは、ポレミオスに次のような助言を与えた。

「もし息子をキリスト教の信仰から遠ざけたいのなら、彼を自由の身にして、快楽を享受させなさい。 美しく聡明な娘を見つけ、彼と結婚させれば、彼はキリスト教のことは忘れてしまうだろう。一方、クリサンフォスを苦しめている牢獄や束縛、飢えといったものは、キリスト教徒にとっては苦しみというより、むしろ栄光と名誉と見なされているのだ。

これを聞いたポレミオスは、豪華な広間を用意させ、その壁を高価な壁紙で飾り、貴重な寝台を置き、そこで楽しみと快楽のためのあらゆるものを整えるよう命じた。そして、息子を暗い牢屋から連れ出し、高価な服を着せると、ポレミオスは彼をその広間へと連れて行った。 さらに、自分の奴隷の中から最も美しい乙女たちを選び出し、豪華な衣装を身にまとわせた後、ポレミオスは彼女たちを息子と共にその広間に閉じ込め、その際、乙女たちに対し、あらゆる手段を尽くしてクリサンフォスを肉欲的な快楽へと誘惑し、キリストから彼を遠ざけるよう厳しく命じた。 そして、その部屋にはあらゆる料理と最高級のワインがふんだんに供され、少女たちは聖クリサンフォスの前で淫らな歌を歌い、彼の前で踊り、恥知らずな言葉を口にし、あらゆる手段を尽くして、その至福の若者の魂を淫行と肉欲の快楽へと引き込もうとした。

しかし、若きクリサンフォスは、若者のようではなく、熟練した男のように、それらの乙女たちの戯れや誘惑に立ち向かい、罠の中にありながらも、決して捕らえられることはなかった。 この闘いにおいて、彼は美味な食事や甘い飲み物を完全に断ち、キリストの無敵の戦士としての姿を示した。また、あの乙女たちを毒蛇のように見なし、蛇に触れるのを避けるかのように彼女たちとの接触を避け、常に祈りに身を捧げていた。 そして、睡眠で体力を回復する必要があるときは、寝床もなく地面に横たわり、乙女たちの誘惑的で恥知らずな言葉をあたかも矢のように見なし、信仰という盾でそれらを自分から弾き返し、神にこう叫んだ：

「盾と鎧を身にまとい、わたしを助けに立ち上がってください。剣を抜き、わたしを追う者たちの行く手を阻んでください。わたしの魂に、『わたしはあなたの救いである』と言ってください」（詩編34:2–3）。 悪魔が私に仕掛けたこの戦いを、あなたの右の手が打ち負かし、勝利を収めない限り、誰が打ち勝つことができようか。肉の情欲を打ち負かし、貞潔を守ろうと自らの力に頼る者は、あなたの憐れみの雨が肉の炎を消し去らない限り、惑わされるのである。　御自身が魂をそこへ導いてくださらない限り、魂は御国の住まいに到達することはできません。なぜなら、肉欲は、まるで人間の魂を滅ぼすために、この世の虚栄という荒野に潜む狡猾な獣のようなものであり、もし誰かがその牙から逃れることができたなら、その人は心の底から、救い主である神に感謝を捧げなければならないからです。　なぜなら、あなたを通してこそ、私たちはそのような破滅から救われるからです。そうして、貞潔なヨセフもまた、あなたの助けによって、姦婦の手――まるで手なずけられない獣の牙のようなもの――から逃れました。そのヨセフこそ、嘆きの父が*「凶暴な獣がわが子を食い尽くした」*（創世記37:33）と語った者なのです。　まことに、ペンテフルの妻は、まるで凶暴な獣のように彼に襲いかかり、ある種の雌ライオンのように、無邪気な子羊であるヨセフを爪で引き裂き、彼を不義へと誘い込んだのです（創世記39:12）。そして、悪魔と女ほど凶暴な獣が他にあるでしょうか。自然な肉欲が若きヨセフを刺激したが、その女はさらに、眼差しの誘惑、高価な衣服、美しい顔立ち、富、権力、そしてお世辞めいた言葉で、貞潔な若者を破滅と死へと誘い込んだ。彼が、その狡猾な獣の罠を逃れたことは、実に驚くべきことである！　彼の父が*「わが子が生きているなら、私は幸いである」*（創世記45:28）と言ったのは、決して無駄ではなかった。なぜなら、彼は兄弟たちが彼を殺そうとした時よりもさらに残酷な、偉大で避けがたい死を免れたからである。全能の神よ、彼はあなたの全能の助けによって、この死を免れたのだ！　そのとき、あなたは彼と共におられたからです。主よ、今、私は謙虚にあなたに懇願します。父が私を同じ場所に閉じ込めたこれらの獣や蛇たちから、私を助けてください。　そして、呪われた蛇たちが眠るように、私の祈りの間、これらの不敬虔な乙女たちも眠りにつかせ、　私の若き肉体に肉欲を掻き立てることができないようにしてください。私の救い主よ、私を助けてください。私は、あなただけを、あなたを信じる者を救い、彼らにあなたの無敵の助けを与えてくださる真の神として知っているからです」。

この祈りの後、クリサンフォスと共に閉じ込められていた乙女たちは、その部屋から運び出されるまで、自ら目を覚ますことも、誰かに起こされることもできないほど深い眠りに落ちた。しかし、そこから運び出されると、たちまち目を覚ました。　その後、食事をとると、彼女たちは再び聖クリサンフォスのいる部屋に入り、また同じ深い眠りに落ちた。そして、その状態は毎日続いた。このことをクリサンフォスの父ポレミオスに伝えると、彼はまるで息子が死んだかのように泣き崩れた。すると、友人たちの何人かがポレミオスにこう言った。

「あなたの息子はキリスト教徒から魔術を学び、あの娘たちを簡単に眠らせたのです。しかし、彼と婚約させ、教養があり聡明な娘と結婚させてください。そうすれば、たとえ彼が結婚を望まなくても、彼女と常に一緒に暮らすうちに、彼女との肉体的関係へと導かれ、キリスト教から遠ざかるでしょう。」

ポレミオスはこれに対し、こう言った。

「では、あの頑ななクリサンフォスの心を和らげ、説得して我々の教えへと立ち返らせることができるほど、賢い娘をどこで見つけられようか？」

それに対し、親族たちは彼にこう言った。

「アテナ女神の神殿で奉仕している乙女たちの中に[2494] 、ダリアという名の少女が一人いる。彼女はとても美人で、聡明であり、あらゆる書物と修辞学の知恵を習得している。すでに結婚適齢期にある。さあ、他の誰かに先を越される前に、急いで彼女を息子と婚約させなさい。」

この助言に従い、ポレミオスは親族たちに、その乙女のもとへ行き、クリサンフォスという若者のこと、そして彼がキリスト教に改宗したことを伝え、彼女にクリサンフォスを誘惑して結婚へと導き、キリスト教から遠ざけるよう懇願するよう頼んだ。　その娘はクリサンフォスとの結婚に同意し、魅惑的な言葉で婚約者を肉欲的な愛へと誘い込み、ローマの神々への崇拝へと導く準備を整えた。

その後、その乙女は栄誉をもってポレミオスの邸宅に連れて行かれ、生まれ持った美しさに加え、貴重な衣装や装飾品で身を飾り立てられ、聖人の寝室へと案内された。そこで彼と二人きりになると、彼女はあらゆる愛嬌ある言葉や様々な誘惑を用いて、貞潔な若者を淫行へと誘い込もうとした。しかし、キリストの戦士クリサンフは、ダイヤモンドのように堅固であり[2495] 、柱のように揺るぎなく、山のように不動であり、神への愛をもって肉欲の愛に打ち勝ち、十字架のしるしによって、彼に向けられた悪魔の矢を退けた。　心の底から神に向かって深くため息をつき、聖霊の助けを呼び求めた後、クリサンフォスはその乙女にこう言った。

「美しい乙女よ！もしあなたが、私――この死すべき人間――とのつかの間の交わりだけのために、このように身なりを整え、飾り立て、これほど甘美な言葉を口にし、私が自発的に選んだ生き方から私を遠ざけ、私の魂を堕落させ、他の愛に囚われた私のあらゆる思いをそらそうとしているのなら、　別の愛に囚われてしまうよう仕向けるためであるならば、不死の王である神の御子から愛を勝ち取れるよう、なおさら心を尽くすべきではないか。そして、あなたが自らそれを望むならば、それはあなたにとって容易に成し遂げられることである。　もしあなたが、魂と肉体を共に清らかさに保ち、今、あなたが貴重な装いで肉体を飾ったように、善い品性で心を飾るならば、天使たちはあなたの友となり、使徒たちは親しい仲間となり、殉教者たちは隣人となるでしょう。　彼らの取り成しによって、キリストご自身があなたの花婿となり、天に、この世のものとは比べものにならないほど美しく、明るい朽ちることのない宮殿をあなたのために用意し、楽園の永遠の喜びを与え、あなたの若さを不死のものとし、永遠の命の書にあなたの持参人を記してくださるでしょう。

聖なる若者のそのような言葉を聞いて、ダリアは心を打たれ、こう言った。

「私をこの豪華な衣装を身にまとってあなたの元へ連れてきたのは、決して肉欲などではありません。あなたへの愛と、あなたの父が『私を連れてきて、私たちの神々に仕えさせてほしい』と涙ながらに懇願したからです。」

聖クリサンフはこれに対し、こう答えた。

「もし、あなたがこれについて何らかの論拠や明確な指針をお持ちで、それによってあなたがたが行う神々への奉仕の真実性を証明できるのであれば、私はあなたの言うことを聞き、考えを改めます。私たちの共通の利益のために、このことについて話し合いましょう。」

[2494] *アテナ*（別名：パッラダ、あるいはミネルヴァ）は、ギリシャの女神であり、最高神ゼウスの娘で、母を介さずゼウスの頭から生まれた。ギリシャ人にとってアテナは、ゼウスの知恵そのものを体現する存在であり、知恵と力がこの女神の主な特徴である。　都市の守護神であるアテナは、市民の福祉、農業、工芸を促進するあらゆるものを奨励する。彼女の知恵は多くの有用なものを生み出し、あらゆる女性の工芸に従事し、それを教える。彼女はあらゆる芸術と工芸、あらゆる知恵と科学の女神である。　彼女は法と正義の執行、裁判や民会を見守っている。同時に彼女は戦争の女神でもあり、時には戦装束を身にまとった姿で描かれることもある。

[2495] *アダマント*（ダイヤモンド）――他の石を削り、切り裂くほどの強さを持ちながら、それによって自らに害を受けることのない石である。この名称は、教会文学において、信仰と気質の堅固さで名高い多くの聖人（特に教会の教父や教師たち）に与えられている。

「人々にとって、神々を崇め、神々を怒らせないよう注意深く見守る以上に有益で必要なことはありません」とダリアは言った。「しかし、神々が私たちの守護者となってくださるよう、犠牲を捧げて神々を喜ばせるべきです。」

「おお、賢明な乙女よ！」と聖人は答えた。　「自らを守りを必要とし、夜には泥棒に盗まれないよう、鎖でつながれた犬たちに守られているような神々が、どうして私たちの守護者になり得るというのか？　それゆえ、彼らは鉄の釘で打ち付けられ、錫で溶接されているのだ。誰かに倒されても、地面に落ちて粉々にならないようにするためである。」

「もし無知な民が、彫像のない神々を崇めることができたのなら」とダリアは言った。「それらを彫り、設置する必要などなかったはずだ。それらは金、銀、銅で鋳造され、大理石や木で作られているのは、人々が目でそれを見て、心の中で誰を思い描き、誰を崇め、誰を恐れるべきかを知るためなのだ。」

「よく検討して判断しよう」と聖クリサンフは答えた。「造られた偶像は誰を表現しているのか、そして、その偶像が安置されている者たちは、神聖な栄誉に値する者たちなのかどうかを。完全な聖性と義、そして神聖な栄光を持たない者は、神とは呼べないのだ。」　では、あなた方の三日月を掲げる神クロノスは、どのような聖性と義、そして神聖な栄光を持っているというのか。彼は自らの子供たちを食い尽くしたのだ。そのことについては、彼を崇拝する者たち自身もこう記しているではないか[2496]　。あるいは、ゼウス自身に[2497]　、称賛に値する点など何があるというのか。彼は生きてきた日数と同じだけ、不法行為、姦淫、殺人を犯してきたのだ。　父を迫害し、子供たちを滅ぼし、他人の妻と姦通を犯し、実の姉の夫となり、王国を苦しめ、魔術を編み出し、死の仲介者となり、聞くことさえできないほどの多くの不法行為や穢れを犯した――それほどまでに、彼の行いは恥知らずで不浄なものだったのだ。　まさか、あなたがたは、そのような不義な人間が神になり得ると信じているのか？　そして、彼がまさにそのような人物であったことは、あなたがたの作家たち自身が証言している。彼らは、不義な人々が、かつて戦いで勇敢に戦い、亡くなった王たちを神と呼んでいたと記しているのだ。　教えてほしい。死の直前まであらゆる清らかさと誠実さの敵であった、あなた方の神ゼウスに、いったいどのような美徳があったというのか。彼は、少年ガニメデを誘拐したことで[2498]大気を穢し、さらに自らの姉妹を強姦して大地をも穢したのだ。　また、あなたのエルメス[2499]には、何が神聖な点があるというのか。その頭は、ある種の翼のある怪物に似ているではないか。彼は魔術によって地中に隠された金を見つけ出し、呪術と魔法の杖によって蛇の毒を無力化した。しかし、彼は悪魔の助けを借りてこれを行い、毎日、イノシシや雄鶏を彼らに生贄として捧げていたのだ。では、ヘラクレス[2500]には、いったいどのような神聖さがあったというのか。彼は隣人たちを殺し尽くして疲れ果て、神の御心により、自ら火の中に身を投じ、持っていた杖や皮衣とともに、呪われた

2496 *クロンまたはクロノス*（あるいはクロノス――時間）――時間の神であり、ウラノス（天）の息子。彼は自分の子供たちを食い尽くしたが、妻の*レアは*ゼウスを救い出し、デロス島の葦の中に隠した。そこでゼウスは山羊に育てられた。

2497 *ゼウス*（またはユピテル）――ギリシャ・ローマ神話の神で、異教徒からは天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。

2498 *ガニメデス*（またはガニメド）――トロイアの王の息子で、人間の中で最も美しいとされた。神々によって天界へ連れ去られ、そこで永遠に暮らし、ゼウスの杯に酒を注ぐ役目を果たした。（神話によれば、ゼウスは鷲を使って、あるいは自ら鷲の姿となって彼を連れ去ったとされる）。　その後、ガニメデスは神々、とりわけゼウスの酒注ぎ役となり、ゼウスの寵愛を受けるようになった。

2499 *エルミウス*（ヘルメス）*あるいはメルクリウスは*、神々の使者であり、商業と演説家の守護神とされ、最も人気のある異教の神々の一人であった。　（リストラとリカオニアの都市に住む無知な民衆は、使徒パウロとバルナバの奇跡に深く感銘を受け、バルナバをゼウスと呼び、パウロをエルミウスと呼んだ。*それは、彼が言葉において主導的役割を果たしていたからである*。――使徒行伝14:12）。

2500 *ヘラクレス*（ヘラクレスまたはイラクリオス）は、王妃アルクメネと神ゼウスの息子であった。彼はギリシャの英雄的な力の最高の理想を体現し、ギリシャ人の国民的英雄であった。

者として焼死したのだ。 アポロン[2501] 、 や、バッカス[2502] の秘密の生贄、酩酊や放蕩の中に、いったい何の善を見いだせるというのか？　また、ゼウスの姉であり妻である女神イラ、狂気のパッラダ[2503] 、恥知らずなヴィーナス[2504] も思い起こそう。彼女たちは互いに争い、互いに嫉妬し、互いに怒りをぶつけ合い、それぞれの美しさを競い合い、羊飼いの裁きを求め合っている。　神性も、神聖さも、正義も持たないこれらすべてを、いったい誰が神としての栄誉にふさわしいと見なすだろうか。その他の下位の神々については語るまでもない。なぜなら、主神たちは頭のようなものであり、他の神々はそれに従うべきだからである。　不敬な人々が神々のうちで最も偉大だと見なしているクロノス、ゼウス、ヴィーナスでさえ、実際には神ではないというのに、彼らの中で誰が神あるいは女神として崇められるべきだろうか。それゆえ、もしあなたがたの神々が軽蔑すべき虚しい存在であるならば、なおさら、それらを神として崇める者たちは軽蔑に値するのだ。

ダリアはクリサンフォスの言葉を注意深く聞き、こう言った。

「もし我々の詩人たちの物語が無分別であるならば、あらゆる悪徳を捨て、美徳を守るよう説く哲学者たちに頼ろうではありませんか。彼らは、自らの著作の中で世界の創造について語り、神々の名を次のように説明しています。　彼らは、クロノスを、すべてを食い尽くし、無へと変える「時間」と解釈し、ゼウスを「灼熱」、イラを「空気」、アフロディーテを「火」、ポセイドンを「海」、ケレラを「大地」、そして他の神々の名を、残りの自然元素と解釈しているのです。

これに対し、クリサンフはこう言った。

「通常、人々は、常に存在するとは限らず、やがて消え去ってしまうものの像を作るものだ。しかし、大地は常に存在し、海や火もまた常に存在し、すべての人々の目に映っている。空気も同様である。　では、なぜこれらの自然の要素を、人間の姿をした、人の手によって造られた偶像の中で神として崇めることが正当化されているのか――私には分からず、理解もできない。なぜ、自然の要素を象徴するものを、人間のような彫像の中で崇めるのであり、その自然の要素そのものを崇めないのか。なぜ、大地や空気、海そのものに礼拝を捧げないのか。　自らを軽蔑し、誰かが作った自分の像を崇拝せよと命じるような公爵や王など、果たして存在するだろうか？　そのような王や公爵は存在しないのだから、真実を言えば、あなたがたはその像の下に、自然の要素でも神々でもなく、ただの人間を描いているのだと言わざるを得ない。

ダリアは言った：

「クリサンフよ、あなたの論証は私の考えを裏付けている。彫像の偶像を崇めるのは、無知な庶民であり、私たちこそが、その像が置かれているものそのものを崇めているのだ。」

「もしあなたが私たちの論証を用いて自らの教えを立証したいのなら、　――とクリサンフはこれに応えて言った――ならば、自然の要素を崇めるすべての人々を例に挙げよう。もし彼らが大地を崇めるのなら、それを自らの女神としてふさわしく崇めるべきであり、不敬な行為を加えてはならない。耕したり、掘り返したり、その他のいかなる方法でもそれを加工してはならない。　大地は耕作や加工から解放されるべきだ。　一方、大地を女神として崇めない者は――もし農民であるならば――鋤や鍬で耕してもよいが、彼女に神聖な敬意を払ってはならない。さて、どちらの畑や果樹園の方が実り多いだろうか？　大地を耕さず、掘り返さず、女神として崇める者は誰だろうか？　それとも、何の敬意も払わずに耕し、手入れをする者か？もし大地が、あなたがたが言うように、真に女神で

[2501] *アポロン（またはフェボス）*は、ゼウスとラトナの息子であり、最も崇敬されたギリシャ・ローマの異教の神々のひとりである。太陽と知性の啓蒙の神として、また社会の繁栄と秩序の神、法の守護者、未来を予言する神として崇められていた。

[2502] バッカス（ディオニソス）――ゼウスとセメラの息子であり、ブドウとワイン造りの神である。ワインという贈り物によって人々の心を喜ばせ、悲しみや悩みを払いのける。バッカスを称える祝祭は、激しい放蕩を伴った。

[2503] *パラス*については、上記の「*アテナ*」の項を参照のこと。

[2504] ヴィーナス――ギリシャ・ローマ神話の愛、美、快楽、そして不純な欲望の女神。

あるならば、彼女は崇拝者であるあなたがたに、耕されず、手入れされず、種を蒔かれなくても、労力を要することなくあらゆる実りを与えてくれるはずだ。　また、もし海が神であるなら、櫂を使わずにその上を泳ぎ、海があなたを望む場所へ運んでくれるはずだ。同様に、もし魚を手に入れたいのなら、釣ったり苦労したりせず、海を神として崇め、祈りによって海から魚を請い求めよ。　そして、他の自然の要素についても、それらは崇拝者を知らないことを理解すべきである。なぜなら、それらは魂も理性も持たず、ただ神の御命令によって人間の必要のために役立っているからである。また、大地は、その創造主の御命令により、水を注がれ、太陽の光で温められることで、種を育み、作物を成長させ、時が来れば実を結ぶのである。　それゆえ、これらすべてを創造し、整え、私たちの生活のために与えてくださった唯一の神、創造主を崇めるべきであり、神によって創造されたそれらの自然の要素を崇めるべきではない。　何しろ、学校に通う子供たちでさえ、本や板、紙を称えるのではなく、自分の教師を称えるのです。　同様に、病人が治癒して健康を取り戻したとき、その癒やしに対して感謝を捧げるのは薬ではなく、自分を健康にしてくれた医師なのです。

クリサンフォスがこれらをはじめとする多くのことを語った後、ダリアは唯一の真の神、私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。そして二人は、クリサンフォスと共に、夫婦を装いながらも独身生活を営み、清らかに処女性を守り、主を畏れ敬う生活を送ることに同意した。　この時から、クリサンフォスの父ポレミオスは、息子の見せかけの結婚のために彼に完全な自由を与えた。新婚夫婦の間に秘められた真実を知らなかったため、彼は息子の結婚を大いに喜んでいたからである。同様に、彼は唯一の相続人である息子に、自身の全財産を譲り渡した。　ほどなくしてポレミオスは亡くなった。それは、神が、貞潔のうちに結婚生活を送る聖なる二人――クリサンフとダリア――が、より自由に神に仕えることができるよう、そう定められたからである。

こうしてクリサンフが生活において完全に自由になったとき、彼は妻である処女ダリアに洗礼を授けた。彼女はまもなく聖書とキリスト教の書物をすべて学び、その生活において聖なる者となり、キリストの完全なしもべであり花嫁となった。　クリサンフとダリアは、自分たちの救いだけでなく、他者の救いにも心を配った。彼は多くの男性をキリストへと導き、若者たちに貞潔な生活を送るよう勧め、彼女は多くの妻や処女たちをキリストの花嫁として捧げたのである。　そして、二人はそれぞれ修道院のように特別に整えられた家で暮らし、それぞれ独自の貞潔な者たちの集まりを持っていた。クリサンフは、この世のあらゆる快楽を軽蔑し、神に清らかな生活を送ることを誓った若者たちを、ダリアは、キリストに身を捧げた乙女たちを率いていた。

数年が経ち、ローマにおけるクリサンフォスとダリアの集まりが著しく拡大した頃、突然、街で反乱と騒動が巻き起こった。民衆は、エパルフの[2505] ケレリンのもとへ押し寄せ、聖クリサンフォスと聖ダリアを誹謗中傷した。夫たちは叫んだ。

「我々は妻たちを失った！」

若者たちは叫んだ。

「ダリアのせいで、婚約していた花嫁たちを失ってしまった！」

また、妻たちも叫んだ。

「私たちは夫を失ってしまった！」

一方、乙女たちは叫んだ。

「クリサンフォスのせいで、私たちに婚約していた花婿たちを失ってしまった！」

そして民全体が声をあげて言った。

「結婚が拒絶されるなら、どうして子供が生まれるというのか？　クリサンフォスとダリヤの教えや、彼らの魔術的な策略に従って、男性が女性から離れていけば、人類の血筋は絶えてしまうだろう。」

[2505] *エパルヒ*――都市または地域の統治者。

そこで、総督はクリサンファスとダリヤを捕らえ、神々に生贄を捧げないならば、様々な拷問にかけるよう命じた。クリサンファスを、クラウディウスという名の[2506] のトリブーンに引き渡すと、そのトリブーンは彼を自分の兵士たちに引き渡し、こう命じた。

「彼を城の外にあるゼウスの神殿へ連れて行け。もしそこで、無敵のヘラクレスに拝礼することを拒むなら、彼が屈服して犠牲を捧げるまで、様々な方法で苦しめよ。」

兵士たちはクリサンファスを捕らえると、容赦なく丈夫な牛の腱で彼を縛り上げ、その腱を殉教者の骨に当たるほど強く締め上げた。しかし、その縄は瞬く間に、目で見分けることさえできないほど突然に切れてしまった。そのすべては、一言を発するよりも早く起こったのである。　兵士たちはクリサンフォスを縛るのに長い間苦労したが、何の結果も得られず、激怒して彼を暗く悪臭のする洞窟に閉じ込めた。彼に足枷をはめ、鉄の鎖で縛り上げると、彼らは彼を罵倒し、様々な非難を浴びせた。しかし、その足枷は塵のように崩れ散った。　さらに、彼らは彼に様々な汚物を浴びせかけながら、こう言った。

「お前の魔法や呪術など、ここでは何の役にも立たないぞ！」

しかし、突然、それらの不浄物の悪臭が香りに変わった。続いて、兵士たちは子牛を刺し殺し、その皮を剥ぎ取り、そのまだ生々しい皮で殉教者の裸体を包み、炎天下にさらした。しかし、この拷問においても、聖人は何の苦痛も感じなかった。 その後、彼は再び 鉄の鎖で縛られ、牢獄に投げ込まれたが、その鎖も突然壊れ、牢獄の中はまるで多くのろうそくが灯っているかのように光り輝いた。起こったすべてのことを、兵士たちは彼らのトリブヌスであるクラウディウスに報告した。　クラウディウスは牢獄にやって来て、そこに光があるのを見ると、聖殉教者クリサンファスを自分の前に連れてくるよう命じ、彼にこう言った。

「どのような魔法の力によって、お前はこのような奇跡を起こしているのか？　私は多くの魔術師や呪術師を屈服させてきたが、彼らの中にそのような力は見出せなかった。　そして、お前は立派で賢明な人物であると見受けられるから、お前にはただ一つだけ求める。すなわち、ローマの人々に混乱と動揺をもたらしている、その大胆不敵なキリスト教の教えを捨てることだ。さあ、お前の身分にふさわしい振る舞いをし、全能の神々に相応しい生け贄を捧げよ。」

聖クリサンフスは彼にこう答えた。

「もしあなたの中にほんのわずかな知恵の火花でもあれば、私を助け、強めてくれているのは魔法のような策略ではなく、神の力であることを容易に悟ったはずだ。　しかし、お前は私を、まるで自分の神々を見るのと同じように――無知によって曇らされた目で――見ている。もしお前の目が正しく見ていたなら、お前の神々が見ていないことをお前は気づいただろう。　もしあなたの耳が真理を聞き取っていたなら、あなたの神々が彼らに呼びかける声を聞いていないことを知っていたはずだ。そして、もしあなたが健全な理性を備えていたなら、あなたの神々がその内側に、塵と土と鉛以外の何ものも持っていないことを悟っていたはずだ。

そこで、クラウディウス・トリブヌスは、殉教者を木に縛り付け、節の多い棒で打つよう命じた。しかし、殉教者を打つ者たちの手には、その棒は硬く重く感じられたが、聖人の体には、まるで葦のように柔らかく感じられた。　これを見て、トリブヌスはクリサンフォへの殴打を中止するよう命じ、木から解き放って彼の衣服を着せ、兵士たちに向かってこう言った。

「まことに、ここで行われているのは、いかなる人間の魔法や策略でもなく、神聖なる力そのものである。なぜなら、牛の腱で作られた強固な縄さえも自らほどけ、足枷も砕け散り、彼の足に縛られていた木は塵のようになったのだ。　また、彼にまとわせてあった生皮は、一日中太陽の下にあっても乾かず、重い足枷は目に見えない力によって解け、砕け散り、暗い牢獄は偉大な光に照らされ、重い杖は彼の体に触れると、小枝のように柔らかくなった。　それゆえ、彼の中に明らかに働く神

[2506] *トリヴン（トリブーン）*――大佐や中隊長のような地位。

の力を目の当たりにして、私たちは皆、この神の人の足元にひれ伏し、私たちが彼に与えたあらゆる悪意と苦しみについて赦しを請い求めよう。　そして、彼に懇願しよう。彼が、私たちを、その全能の神と和解させてくださるよう。その神は、このような奇跡をなされ、あらゆる災いにおいて御自分のしもべたちをこれほど強く、無敵にされる方である――私たち自身が目の当たりにしているように：　この苦難に耐える御使いは、私たちを打ち負かしたように、私たちの諸侯や王たちをも打ち負かし、彼の中に宿る天の神の打ち破ることのできない力によって、彼らを恥じ入らせるであろう。

そう言い終えると、クラウディウスはすべての兵士たちと共に聖クリサンフォスの足元にひれ伏し、こう言った。

「まことに、私たちはあなたの神こそが真の神であることを悟りました。それゆえ、私たちをその御元へと導き、御使いにしてくださるよう、あなたに懇願します。」

すると、聖人は彼らにこう答えた。

「もしあなたがたが私の神のもとに来たいと望むなら、足でなく、心をもって神のもとに来なさい。神は、心と信仰をもって神を求める者に近くおられるからです。」

その後、聖クリサンフは長い間、彼らと真の神について語り合った。この対話の末、トリブヌスのクラウディウスとその妻イラリア、そして二人の息子――イアソンとマウル――は神を信じるようになった。　また、すべての親族、友人、そして彼らの家来たちも皆、信仰を抱いた。兵士たちもその家族全員とともに信仰を抱き、皆で共に聖なる洗礼を受けた。そして彼らは皆、クリサンフォスから絶えず教えを受け、主イエス・キリストについての彼の言葉を熱心に聞き、皆、主のために苦難を受けることを望んだ。

当時、ローマではヌメリアヌス帝が統治していた[2507]。トリブヌスのクラウディウスがキリストに改宗し、家族全員と兵士たちと共に洗礼を受けたという噂が彼の耳に入ると、彼はクラウディウスの首に石を縛り付けて海に沈めるよう命じ、兵士全員とクラウディウスの二人の息子については、剣で斬り殺すよう命じた。　キリストの聖なる殉教者たちが亡くなった場所には、かつて死者を埋葬していた廃墟となった洞窟があった。キリスト教徒たちはこの洞窟を清め、夜陰に乗じて聖なる殉教者たちの遺体を運び出し、その洞窟に安置した。　この洞窟、すなわち聖殉教者たちの遺骨が安置されている場所には、クラウディウスの妻イラリアが頻繁に訪れ、　息子たちが斬首されたその場所で祈りを捧げていた。ある日、彼女がその場所で祈っていると、異教徒たちに捕らえられ、彼女もまた拷問の場へと引きずり出された。彼女は彼らにこう懇願した。

「私の祈りを終えるまで待ってください。その後、お好きな場所へ連れて行ってください。」

その後、兵士たちがイラリアを少し解放すると、彼女は地面にひざまずき、両手を天に掲げ[2508]、目を天に向け、こう言った。

「主よ、主イエス・キリストよ、私は心を尽くしてあなたを告白いたします！　あなたが御自身の御名のために苦難の業へと召された私の息子たちと共に、私をお迎えください。彼らは、主であるあなたのために、自らの魂を捧げました。」

そう祈り終えると、彼女は神に息を引き取った。　イラリアを捕らえた兵士たちは、彼女が亡くなったのを見て心を動かされ、彼女と共にいた二人の女奴隷をその場に置き去りにして立ち去った。女奴隷たちは、主人の遺体を抱き上げ、聖なる殉教者たちが葬られたあの古びた洞窟のそばに、尊厳をもって埋葬した。

一方、聖クリサンフォスとダリウスの二人に対し、ヌメリアヌス王は様々な拷問を加えるよう命じた。こうして、クリサンフォスは足枷をはめられ、街のあらゆる汚物が流れ込む深く悪臭漂う穴に投げ込まれ、ダリウスは売春宿へと連行された。　しかし、神は二人の殉教者を助け、彼らの中に

[2507] *ヌメリアヌス帝*は283年から284年まで在位した。

[2508] 「*ゴレ*」とは、上、すなわち空の方を指す。

御自身の全能の力を現された。すなわち、聖クリサンフォスの暗く悪臭漂う牢獄には天の光が輝き、悪臭の代わりに素晴らしい香りが漂った。　また、聖ダリアのもとには一頭のライオンが遣わされた。そのライオンは檻から飛び出し、聖女が地面にひれ伏して[2509] 祈りを捧げていた部屋へとやって来て、彼女を守り始めた。しかし、このことを知らなかった市民たちは、ある恥知らずな若者をダリアのもとへ送り込み、彼女を汚させようとした。　ところが、その若者が聖女の部屋に入ると、すぐに獅子に捕らえられ、倒されて足で踏みつけられた。そして、獅子はまるで知性ある奴隷であるかのように聖女ダリアを見つめ、その恥知らずな若者をどうすべきか――殺すべきか、それとも生かして放すべきか――という主人の命令を待っていた。聖ダリアはこれを悟り、獅子にこう言った。

「神の御子に誓って、この若者を放してやりなさい。そうすれば、彼は私から神の御言葉を聞くことができるでしょう。」

ライオンは若者を放すと、部屋を出て行き、聖ダリアの部屋の入り口に横たわり、誰もその部屋に入れないようにした。そしてダリアはその若者に言った。

「ほら、キリストという御名一つで、獅子の猛威は鎮まった。この獣は、まるで分別ある人のように、真の神を知り、神を畏れ、崇めているのだ。　しかし、お前という不信心者は、理性を備えた人間でありながら、そのような悪意や不潔さに浸り、神を恐れていない。恥じるべきこと、悔い改めるべきことを、お前はむしろ自慢しているのだ。

若者はダリアの前でひれ伏し、叫びながらこう言った。

「キリストの僕よ、私に無傷でここから立ち去ることをお許しください。そうすれば、あなたが仕えるキリストこそが真の神であり、神はキリスト以外にいないことを、すべての人に告げ知らせるでしょう。」

そこでダリアは、獅子に命じて、その若者が自分の部屋から自由に出て行けるようにさせた。そして若者は街中を歩き回り、大声で叫んだ。

「ローマ人よ、皆、知れ。ダリアこそが女神である！」

すると、サーカスの力士たち[2510] がダリアの家に駆けつけ、彼ら特有の度胸で、ダリアの部屋から獅子を連れ出そうとした。　しかし、神に守られていたライオンは、彼ら一人ひとりを捕らえて地面に叩きつけ、聖ダリアの周りに全員を寝かせると、彼女の足元で彼らを見張った。彼らを殺すことも、何の害も与えることもなく、ただダリアの命令を待っていた。すると、聖ダリアはあの男たちにこう言った。

「もしあなたがたがキリストを信じるなら、何の害も受けずにここから立ち去ることができます。もし信じないなら、あなたがたの神々が死から救ってくださるでしょう。」

すると、彼らは皆、声を揃えて叫んだ。

「キリストこそが真の神であると信じない者は、ここから生きて出てはならない！」

彼らがそう叫ぶと、ダリヤは獅子に、その男たちを何の害も与えずに放つよう命じた。そして彼らはそこから出て、大きな声で叫んだ。

「ローマの人々よ、ダリアが宣べ伝えるキリスト以外に神はいないと信じなさい！」

このことを知ったケレリンの地方総督は、ダリアと獅子がいる家の入り口で激しい火を燃やし、二人を焼き殺すよう命じた。それを見た獅子は恐怖のあまり、激しい咆哮を上げた。すると聖女は彼にこう言った。

「恐れることはない。あなたは焼かれることも、誰かに捕らえられることも、殺されることもなく、定められた時に自らの死を遂げるだろう。だから、何の恐れもなくここから出て、荒野へ行きなさい。あなたが私の中に敬った方が、あなたを守ってくださる。」

[2509] *うつ伏せ*――顔を下に向け、自分の顔に*伏せること*。

[2510] ローマのサーカスで戦う*これらの闘士たちは*、*グラディエーター*として知られている。

すると、ライオンは頭を下げて外へ出て、街中を通り抜けながらも誰にも手を出さず、荒野へと逃げ去った。こうしてライオンから逃れた者たちは皆、聖なる洗礼を受けた。

この一連の出来事がヌメリアヌス王に報告されると、王はクリサンファとダリヤを激しい拷問にかけるよう命じた。クリサンファは木に吊るされ、その体を焼くために火のついたろうそくが持ち込まれたが、たちまち木が折れ、縄が切れて、ろうそくの火も消えてしまった。　また、聖ダリヤに触れようとした者たちは、その瞬間、手が痙攣し、全身が激しく痙攣し、激しい痛みに耐えかねて大声で叫んだ。これを見た地方総督は恐怖に駆られ、急いでこの一連の出来事を王に報告した。　王は、これらの奇跡を神の力ではなく、魔術的な策略によるものと見なし、二人の殉教者――クリサンフォスとダリヤ――を城外へ連れ出し、「サラリエ」[2511] と呼ばれる道で、深い堀を掘り、そこに投げ込み、生きたまま石や土で埋め尽くすよう命じた。　そこで、聖なる殉教者クリサンフとダリアは連行され、歌と祈りを捧げながら堀へと降り、迫害者の命令により土と石で埋められる中で、共に殉教の死を迎えた。　こうして、生前に霊的な夫婦として共に歩んだように、二人は共に息を引き取り、生きた、神に喜ばれるいけにえとして神に受け入れられ、不滅の報いである冠を授かった[2512]。

聖殉教者クリサンフォスとダリアスの殉教の地では、多くの奇跡と癒しが起こった後、多くのキリスト教徒――男性、女性、子供たち――が近くの洞窟に集まり、彼らの殉教記念日を喜びをもって祝い、神の秘跡に与った。　このことを知った迫害者は、多くのキリスト教徒が殉教して息を引き取ったその洞窟の入り口を土で塞ぐよう命じた。その中には、長老ディオドロス、助祭マリアン、そして多くの聖職者が含まれていたが、そこで亡くなった者たちの名前をすべて列挙することは不可能である。その数は極めて多かったからである。

これらすべてのことを、私、　ワリンとアルメニイ――兄弟は、ローマ教皇ステファノの聖なる御命によりこれを書き記し、すべての都市へ送った。それは、聖クリサンフとダリアが天の御国において、我らの主イエス・キリストから殉教の冠を授かったことを、すべての人々が知るためである。主イエス・キリストに、今、そして常に、そして永遠に、栄光と権威があるように。アーメン。

聖殉教者パンハリアの記念日

記念日：3月19日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[2513] の治世下、後者は古代ローマに居住していたが、ローマ帝国では様々な神々の崇拝が広まっており、キリストの信仰を告白する者たちは財産を没収されるだけでなく、様々な拷問にもさらされていた。この頃、ローマにはパンハリアスという名の男が住んでいた。 彼はウズ地方[2514] のヴィラパタという町出身で、キリスト教徒の家系に生まれ、長身で美貌に恵まれていた。ローマに来て、彼はマクシミアヌスに近づき、やがて側近の中でも筆頭となる地位に上り詰め、皇帝から特別な寵愛を受けるようになった。この寵愛を維持するため、彼はキリストへの信仰を捨てた。　彼への愛情から、マクシミアヌスはパンハリオに、献上物として持ち込まれる饗宴やあらゆる贈り物――あるものは慣例に従って、またあるものは権力を利用して――を受け取り、それによって財産を築き、目を楽しませ、 将来の生活の快適さを確保するよう命じた。 パンハ

[2511] この場所には、かつて古代の水道があり、キリスト教徒たちによって故人を埋葬する場所として利用されていた。

[2512] 聖殉教者クリサンフォスとダリウスの殉教は283年に起こった。（一方、聖殉教者たちの殉教を256年、すなわちヴァレリアヌス帝の治世の頃と見なす説もある）。

[2513] 284年、ローマ帝国は東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂した。前者はディオクレティアヌスが統治し、ニコメディアに居住し、後者はマクシミアヌスが統治し、ローマを居城としていた。両者は284年から305年まで在位した。

[2514] ウジ族、あるいはウジペティ族は、西ゲルマニアのライン川右岸、その支流の北側と南側に居住していた。ヴィラパトという都市は地図には記載されていないが、ヴィッラという名称であったと考えられている。

リオスはその通りにし、あらゆる点で皇帝の意見に同調した。一方、彼の母と姉は、この一連の出来事を知ると、彼に手紙を送り、まず何よりも神への畏れを心に留めるよう説得し、　その後に、キリストによる恐るべき最後の審判についても思い起こすべきだと説いた。というのも、その審判について耳にした多くの人々が、王や支配者たちの前で、福音書の記述から知ったその約束を相続したいという願望を大胆に表明していたからである。　さらに、彼らは、キリストの神性への信仰を否定する者が、その審判においてどのような恐ろしい裁きを受けることになるかについても考えるよう彼に助言した（マタイ10:33；　マルコ8:38；ルカ9:26）と、この裁きにおいてどのような恐ろしい裁きにさらされるかについても考えるよう助言し、最後に、もし人が全世界を手に入れたとしても、自分の魂を損なってしまったら、それによって何の得になるのか、というキリストの言葉を彼に思い起こさせた。なぜなら、もし誰かが自分の魂を損なったら、それを何をもって贖うことができるだろうか（マルコ8:36–37）からである。　そのような手紙を受け取り、それを読んだパンハリオスは、我に返ると、苦々しく泣き崩れ、地にひれ伏して、心の底からの悲しみをもってこう叫び始めた。

「全能の主よ！　私を憐れみ、御裁きの場で天使や人々の前で、御自分のしもべを恥じ入らせないでください。どうか、御自身の偉大な憐れみによって、私を赦してください。」

宮廷の者たちのうち数人が、パンハリオスが泣きながらそのような言葉を口にしているのを見て、それをマクシミアヌスに報告した。そして、パンハリオスが彼の元へ来ると、マクシミアヌスは彼に尋ねた。

「親愛なるパンハリオよ、教えてほしい。まさか、お前もナザレ人なのか[2515]？」

「はい、王よ」とパンハリオスは答えた。「私はナザレ人です。あなたの同志となる前から、すでにそうでした。」

「その告白を撤回せよ」と、マクシミアヌスは彼に言った。「私が君に抱く愛情のために、そうするのだ。さもなければ、私は君を容赦しない――そのことを肝に銘じておけ――すぐに君を死に追いやるわけではないが、私は君を多種多様な拷問で疲れ果てさせてから、ようやく死なせてやるのだ。」

これに対し、パンハリオスはこう答えた。

「おお、王よ！　自分の過去を思い出すと恐怖に襲われます。これまであなたの同志であったというだけで、天から降りてきた火に焼かれてしまうのではないかと恐れています。　しかし、この瞬間から、私はもはや決して、私の主イエス・キリストを否定することはありません。今この時も、また、あなたが私に告げたように、私の肉体を多種多様な拷問にさらすという、その長い期間の間も、決して否定することはありません。

パンハリオスからのそのような返答を聞いたマクシミリアンは、彼を裸にさせ、集まった者たちや傍らに立つ王室の高官たちの目の前で、牛革の鞭でその裸の体を打ち据えるよう命じた。その後、傍らに立つ者たちに向き直り、こう言った。

「今や、あなたがたは、わが宮廷のサケラリウス[2516]であり、わが親しい友であるパンハリウスが、ガリラヤの[2517]信仰に堕ちたことを知った。さあ、彼をどう処置すべきか、言ってみよ。」

これに対し、王の重臣たちは皇帝にこう答えた。

[2515] ここで「ナザレ人」という言葉は、キリスト教徒、すなわちキリストの信奉者を意味して用いられている。ユダヤ人たちは、キリストが地上の生涯の大部分をナザレで過ごしたことから、彼をこの名で呼んでいたのである。

[2516] サケラリウスとは、ローマ皇帝の宮廷における首席執事のことである。

[2517] すなわち、キリスト教の。キリスト教徒は嘲笑の意味で「ガリラヤ人」と呼ばれていた。

「王よ！　彼を民衆の観覧場[2518]へ連行し、そこで服を脱がせて公開の鞭打ちに処した後、ニコメディアの総督のもとへ送ってください。彼が拷問に処されるようにすれば、我々は彼の死の責任を負わずに済みます。何しろ彼は、陛下から多大な寵愛を受けているのですから。」

この助言はマクシミアヌスの意にかなった。彼は確かにパンハリアを深く愛しており、彼を死に追いやる気力など持ち合わせていなかったからである。　そこで彼は、パンハリアを闘技場へ連行し、民衆の目の前で残酷な殴打にさらすよう命じた。その後、彼をニコミディアへ移送させるために兵士たちに引き渡し、彼らと共にニコミディアの総督へ手紙を送った。その手紙の中で、多くの拷問の末にパンハリアを処刑するよう命じていた。　聖なる殉教者がニコミディアに到着し、尋問のために都市の統治者の前に引き出されると、彼はこう言った。

「皇帝が私に関してあなたに命じたことはすべて、忠実に実行してください。」

すると、都市の統治者は彼に尋ねた。

「お名前は？」

「私の名は」と聖殉教者は答えた。「パンハリアスです。先祖代々、私はキリスト教徒でしたが、自らの邪悪な意志により、皇帝の不敬虔な信仰に傾き、あらゆる点で彼と意を同じくしていました。　しかし、神、そして私の母と姉が私を真の道へと導いてくださり、私は私のキリストへの信仰へと立ち返りました。そして今、私は、あの罪深い背教の代償として、死をもって償うべく、キリストのために死ぬことを切に願っております。

これに対し、市の統治者はパンハリアにこう言った。

「軽率に口にしたその言葉を撤回せよ。そうしなければ、恐ろしい災難に身をさらすことになる。むしろ皇帝の意志に従い、これほど傑出しており、美しい容姿を持つ君が、この世における自らの輝かしい名声を台無しにしないようにすべきだ。」

「あなたが言う『栄光』とは」と聖人は答えた。「それは一時的なものに過ぎませんが、キリストのためにそれを捨て去る者にとっては、永遠の命を得るための手段なのです。」

その後、市の統治者は聖人の揺るぎない決意を見て、皇帝が求めた判決を下した。キリストの聖殉教者パンハリオスは祈りを捧げた後、斬首され、殉教の死を遂げた。これは3月19日、ニコメディアの街で起こったことである[2519]。

4月2日

3月20日（旧暦）

私たちの尊い父たち、ヨハネ、セルギウス、パトリキウスの殉教、記念日。

3月20日の記念日

聖なるエルサレムのイリア総主教の時代、彼は聖都エルサレムにおいて同名の第二代総主教であったが、当時すでにその地はアガリア人の支配下にあった（一方、コンスタンティノープルではコンスタンティノスとイリナが統治していた）。その頃、アガリア人の間で内乱が発生し、国を激しく荒廃させた。　野蛮人たちは互いに戦いを繰り広げ、村々だけでなく、エレウフェロポリス、アスカロン、ガザ、スカリフィアなどの都市までも荒廃させた。　不意を突いて襲撃する際、彼らはたとえ

[2518] ローマにおける大衆娯楽の場はサーカスであった。ここでは、戦士同士や戦士と野獣との闘いが繰り広げられた。また、迫害の時代には、ここでキリスト教徒が野獣に引き裂かれる運命にさらされた。

[2519] 聖パンハリアスの殉教は、302年頃に起こった。

人々を全員殺害はしなかったとしても、すべての財産を略奪し、抵抗する者を殺害した。また、道に待ち伏せを仕掛け、通行人を捕らえて殴打し、傷つけ、最後のシャツ一枚に至るまですべてを奪い取った。　服を剥ぎ取られ、殴打され、傷だらけになった旅人を、生きて放免してくれるだけでもまだましだった。当時、聖都エルサレムも大きな恐怖に包まれていた。周辺の町や村の住民たちがそこへ集まり、城壁を守り、野蛮人たちの略奪襲撃を撃退する準備をしていた。

その頃、聖ハリトンの栄えある修道院も甚だしく荒廃し、その後回復することはできず、ついに完全に廃墟と化した。また、聖サヴァの修道院も多くの苦難に見舞われた。そこには各地から聖なる父たちが集まり、修道院長ヴァシリー聖人の指導の下、断食の生活をもって神に奉仕していた。

アガリア人の内乱や強盗団の襲撃の間、彼らは修道院の外へ一歩も出ようとはしなかった。彼らは修道院を離れてエルサレムへ逃げれば、野蛮人からの難を逃れることもできたが、当初キリストの軛を背負ったあの聖なる場所を離れたくなかった。すでにこの世に対して死んだ者たちとして、彼らは死を恐れず、キリストに身を委ねてこう語った。

「わが主よ、もしお望みならば、野蛮人の手から私たちを救ってくださるでしょう。しかし、もし御義なる御心により、私たちを野蛮人に引き渡して殺させるのがお望みであるならば、主よ、どうか速やかに、魂にとって有益な苦難を私たちにお与えください。」　「受けよう」と彼らは互いに語り合った。「私たちの主の手から与えられる有益なものを受け入れよう。恐れから、静寂な荒野を離れて世俗の喧騒へと戻ってはならない。そうしなければ、皆から臆病者だと非難され、『　』と語られる私たちの主の命令を守らない者だと見なされてしまうからだ。主はこう言われている。*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。　むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れなさい*」（マタイ10:28）。世から離れて荒野へ行き、キリストの足跡をたどる人々を見るのは喜ばしいことだが、彼らが荒野で少し暮らしただけで、人々への恐れからそこを逃げ出し、世に戻ってしまうのを見るのは、なんと悲しいことか。　すべての者の共通の敵である悪魔が、野蛮人への恐れを口実に、私たちを静寂の荒野から町へと追い出し、私たちを嘲笑うことのないように。彼は、私たちの王であるキリストの助けによって、何度も私たちに打ち負かされ、犬のように、恥辱にまみれて私たちから逃げ去ったのだ。　私たちには、身を守るための石の壁など必要ありません。破ることのできない壁の代わりに、私たちの守り手であるキリストがおられます。私たちは聖ダビデから、キリストに向かってこう歌うことを学びました。*「私の岩、私の避難所となって、私を救ってください」*（詩編30:3）。

私たちには鎧も兜もなく、敵の矢を弾き返す盾もありませんが、私たちには愛という霊的な武器、希望という鎧、*「信仰の盾と救いの兜」*（エフェソ6:16）があり、それらを身に着けるのです。私たちには、敵から私たちを守る軍隊はありませんが、*「主の御使いは、主を畏れる者たちの周囲に陣を張り、彼らを救い出す」*（詩篇33:8）のです。*「……私たちにとって、『生きることはキリストであり、死ぬことは益である』*（ピリピ1:21）*からです。*何しろ、私たちをこの荒野へと導いたのは、この世の生活への愛や執着などではなかったのです！　なぜ私たちはこの荒涼とした場所に身を置いたのでしょうか？　それはキリストへの愛からに他なりません。もしここで殺されるとしても、それは私たちがここで生きているそのキリストのために殺されるのです。

彼らはこうした言葉で互いに慰め、励まし合い、自らの体と魂を神に委ねて、修道院にとどまり続けた。　さらに、彼らを留まらせたもう一つの極めて重大な理由があった。周辺に住む隣人たちは、その聖地に対して敵意を抱いており、聖サヴァの修道院が荒廃し、その場所が空っぽで、修道士が住まない状態になることほど望んでいたことはなかったのだ。　もし修道士たちがしばらくの間修道院を離れたならば、敵は直ちに押し寄せ、教会や独房を焼き払い、修道院全体を地面に平らにしてしまうだろう。そのような事態を防ぐため、聖なる父たちは修道院に残ったのである。　彼らは、風になびく葦のようではなく、岩の上に築かれた柱のようであり、風や嵐、そして襲いかかる誘惑にも揺るがなかった。彼らは単に修道院の壁を守るためだけでなく、かつてその地で栄光を受け、彼らの

時代にもなおその地で栄光を受けている主キリストの栄光のために、修道院を離れようとはしなかった。

こうして、それらの聖なる父たちは修道院で暮らし続け、至高の守護者は、私たちの尊い父サヴァの祈りによって、神の聖なる御心の時が来るまで、彼らを野蛮人たちから無傷で守り抜かれた。実のところ、アラビアやその他の場所からその荒野を通り過ぎて自らの陣営へ向かう野蛮人の大群は、何度も修道院の方へ方向を変えたが、何の害も及ぼさず、ただ食料を要求しただけだった。　彼らは歯ぎしりしながら修道士たちを睨みつけたが、神の御心には逆らえず、神の僕たちに害を加えることはできなかった。そして、修道院にある限りの食料を奪い取ると、自分たちの居場所へと去っていった。しかし、感謝の気持ちなど微塵もなく、いつかこの修道院を破壊し、この一帯を荒廃させると豪語していた。

ある日、ある野蛮人の大群が、企てていた悪事を遂行しようと、修道院を略奪し荒廃させるために向かっていた。しかし、偶然にも聖ベツレヘムの近くで、野蛮人の侵入に備えてそこに配置されていた軍隊と遭遇した。　戦いが起こり、蛮族は打ち破られて敗走し、後に判明したように、生き残った者はほとんどいなかった。　また別の機会には、同じ悪意を抱いた別の群衆が、自分たちの陣営から修道院へと向かった。しかし、修道院からそう遠くないある村に着くと、野蛮人たちは枯れ枝の下に隠された大量のワインを見つけた。　彼らは酔っ払い、互いに争いを始め、多くの者が互いに殺し合って死んでしまった。こうして彼らの計画は頓挫し、軍勢は散り散りになった。

その後、神はかつて義人ヨブにそうされたように、御自身のしもべたちに試練をお与えになった。それは、彼らが炉で精錬された金のように、神にふさわしい者となるためであった。そして神は、殉教の冠をあらかじめ用意しておられた御自身の聖徒たちに、野蛮人の手が及ぶことを許された。

聖者たちは、修道院を襲おうとした二つの軍勢のうち、一方はエルサレムの軍隊によって打ち破られ、もう一方は自ずと解散してしまったことを聞くと、恐れずに各自の独房に留まり、いつもの断食と労働をもって聖なる四旬節を過ごした。

その頃、悪魔の唆しにより、弓や矢、剣を携えたエチオピアの野蛮人たちが六十人ほど集結した。彼らは、修道士たちの豊かな財産を手に入れられると期待し、修道院に強盗のように襲いかかることを企てた。　四旬節の終わり、棕櫚の主日の前の週である3月13日、午後2時、野蛮人たちはその人里離れた場所を襲撃した。 修道士たちは急いで荒野の独房から の修道院と教会へと逃げ込み、一方、野蛮人たちは剣を抜き、弓を引き絞って、まるで戦いのようにはしゃぎながら、叫び声を上げて修道院へと突進した。修道士たちの中には、彼らの怒りを鎮めようと、外に出て穏やかに優しい言葉で諭し始めた者もいた。

「なぜ、私たちのような非武装で平和な者たちのところへ、まるであなたたちに害をなした敵と戦うかのようにやって来たのですか？私たちはすべての人々と平和に暮らしており、あなたたちにも、他の誰に対しても、決して害を加えたことはありません。　だからこそ、私たちは世俗のすべてを捨ててこの荒野に住んでいるのです。敵意や争い、戦いの遠ざかる場所で、静かに自らの罪を悔い改め、神に奉仕できるようにするためです。そして、私たちはあなた方の誰に対しても決して悪を行わなかっただけでなく、できる限りあなた方に恩恵を与えようと努めています：　ここを訪れたあなた方の多くの人々に、私たちは食事を提供し、休息の場を与え、旅路の糧も与えてきました。善意に対して悪意で報いるようなことはしないでください。むしろ、あなた方に施した恩恵に対して感謝すべきです。そして今、私たちはあなた方に食事を提供し、旅人としてあなた方を宿に迎え入れる用意があります。

しかし、野蛮人たちは激怒して叫んだ。

「我々は食べ物を求めて来たのではない。銀と金を求めて来たのだ。二者択一だ。金と銀を（何リットルと指定して）渡せば命は助かる。もし渡す気がないなら、我々の手によって死ぬことになる。」

「信じてほしい」と修道士たちは答えた。「我々は貧しく、物乞い同然であり、パンや衣服さえも足りないほど貧しい。あなたがたが必要とする金や銀など、夢にも見たことがない。我々は生きるために必要なものだけを使っているのだ。」

野蛮人たちは聖人たちのこの言葉に激怒し、雨あられのように修道士たちへ矢を放ち、矢筒が空になるまで射撃を止めなかった。こうして彼らはたちまち十三人の尊い修道士たちを射殺し、他の者たちにも軽傷を負わせた。　彼らは修道室へと駆け寄り、大きな石で扉を打ち破り、貧しい修道士たちの持ち物の中から手に入るものをすべて奪い出した。その後、彼らは修道室に火を放ち、教会に対しても同じことをしようとしたが、神の御心により、薪を運び込んで火を点ける間もなく、遠くから何者かが近づいてくるのを見た。　これが修道士たちを救うためにやってくるエルサレムの軍隊だと考えた野蛮人たちは、直ちに逃げ出し、略奪した修道士たちの財産を持ち去った。一方、熟練した医師であったトマス神父は、負傷した兄弟たちから矢を引き抜き、傷口を洗い、一人ひとりに必要な手当てを施し始めた。　傷は凄惨なものだった。胸に負った者、肩に負った者、顔や額に負った者、さらには石で頭を打ち砕かれた者もおり、皆が血にまみれていた。他の者たちにとって、その姿を見るのは恐ろしく、また痛ましいことだった。

ヴァイの祭りが近づき、徹夜祷が行われている最中、ある者が尊い父たちに、野蛮人たちが修道院を再び襲撃するために、さらに大規模な盗賊団を集めていると知らせた。聖なる父たちは大きな恐怖と戦慄に襲われたが、逃げ出すことはせず、死を覚悟して神に身を委ね、最期を待った。　主の受難の日が近づくにつれ、彼らにとっても苦難の日が訪れた。3月20日、聖木曜日、エチオピア人たちは再び、さらに大勢で修道院を襲撃し、聖なる父たちを非人道的に様々な方法で虐殺した。　ある者は矢で射られ、ある者は剣で首を刎ねられ、ある者は真っ二つに切り裂かれ、ある者は手足を切り落とされ、またある者は石で打ち殺された。　生き残った者たちは教会に集められ、教会の宝物や修道院の財産を明かすよう拷問を受けさせられようとした。彼らは修道院を取り囲み、山や丘を見渡して、修道士たちが彼らの手から逃げ出さないように監視した。多くの者が逃げ出そうとしたが、野蛮人たちの手に落ち、彼らから逃れられた者はほとんどいなかった。　彼らは、逃亡した巡礼者の長であるまだ若き聖ヨハネを捕らえ、山の上で容赦なく拷問した。手足の腱を切り、足を引きずられて山頂から教会まで岩の上を這わされ、その結果、背中の皮膚は鋭い岩によってすべて剥がれ落ちてしまった。　一方、教会の聖器を保管していた聖セルギイは、父たちがどのような苦痛に耐えているかを見て、もし苦痛に耐えきれず、聖器を隠した場所を明かしてしまうのではないかと恐れ、密かに修道院から逃げ出した。　すでに遠くまで逃げていたところを、野蛮な見張り番に捕らえられ、無理やり修道院へ引きずり戻された。そして、彼が抵抗し始めたため、聖なる首を切り落とされた。　他の数人の修道士たちは、修道院の外にあった洞窟に身を隠したが、丘の上に立っていた野蛮人の見張りが彼らを見つけ、手を指さしながら、修道士たちが洞窟に逃げ込んだと仲間たちに叫んだ。　するとすぐに、恐ろしいエチオピア人が剣を抜き放ち、洞窟の入り口に立ち、隠れている者たちに外へ出るよう大声で叫び始めた。修道士たちは恐怖で震えていたが、その中にいた聖パトリキウスは、兄弟たちにささやきかけた。

「恐れるな。私が一人、あなた方の代わりに外に出て死ぬ。あなた方は座ったまま黙っていなさい！」

彼は、仲間のために自らの命を捧げる覚悟で、エチオピア人の元へと歩み出た。エチオピア人が「他に修道士はいるか」と厳しく問いただすと、尊者パトリキウスは「ここには自分一人しかいない」と答えた。するとエチオピア人は彼を教会へと連行した。野蛮人たちはあちこちから聖なる父たちを教会に集め、こう告げた。

「四千ズラトニツで自分たちと教会を身代金として買い戻せ。もしそうしなければ、我々は直ちに皆を剣で殺し、教会を焼き払う。」

聖なる父たちは穏やかにこう答えた。

「神の御名にかけて、どうかお赦しください。罪のない我らの血をむやみに流さないでください。我らには、あなたがたが要求するほどの金はなく、かつて一度も持ったことはありません。今、この修道院全体に、たった一つの金貨さえありません。もし望まれるなら、我らが身に着けている服を、目に見えるものすべてを、見つけたものは何でも持って行ってください。我らを裸のままにしておいてください。ただ、我らの命だけは助けてください。」

一方、怒りに満ちた野蛮人たちは、さらに大きな叫び声を上げながら、まるで今すぐ首を切り落とそうとするかのように、聖人たちの首筋に剣を突きつけ、こう言った。

「教会の金や銀の器をよこせ。そして、修道院の他の宝物の場所も教えよ。」

聖なる父たちは、自分たちには何の財宝もないと答えた。すると野蛮人たちは言った。

「お前たちの指導者、つまり修道院長やその他の建設責任者を指し示せ。」

聖者たちはこう答えた。

「私たちのイグメンは修道院にいません。彼は共同の用事で聖都へ出かけており、私たちは皆、対等なのです。」

修道院には、私たちの尊い父サヴァの洞窟があった。異教徒たちは聖なる父たち全員を連れ出し、その洞窟へと連れて行った。そして洞窟の入り口で火を焚き、そこに小枝や糞を積み上げた。煙と悪臭が立ち込め、その煙で洞窟内の聖者たちを窒息させ、教会の財宝の場所を明かし、指導者たちを引き渡させようとした。その後、彼らを拷問の場へ連行し、凄惨な死を脅しにかけて財宝を明かすよう強要したが、彼らからは神への祈り以外、何も聞き出すことはできなかった。ある一人がこう叫んだ：

「主よ、私の霊をお受けください！」

また、ある者はこう言った。

「主よ、あなたが御国に来られる時、私を覚えてください！」

その後、野蛮人たちは全員を同じ洞窟に集め、再び激しい煙で彼らを苦しめ始めた。こうして、煙によって十八人の聖なる父たちが亡くなった。その中には、前述のヨハネと、至福のパトリキウスも含まれていた。　また、煙や剣、あるいは拷問によって亡くなった他の者たちの名は、命の書にそれらを記された神のみが知っておられる。この煙による拷問から生き残った者たちに対し、残酷で非人道的な蛮族たちは、彼らを地面に投げつけ、足で踏みつけながら、重傷を負わせ、激しく殴打した。　何も成し遂げられず、ただ自分たちが拷問に疲れ果てただけだった彼らは、見つけられる限りの教会や修道院の品々をすべて奪い取り、それらを修道院のラクダに積み込んで立ち去った。

そこで、かろうじて生き残った修道士たちや、山の裂け目や洞窟に身を隠していた者たちは、遅くになって修道院に集まり、　様々な方法で殺害されたり、煙で窒息させられたりした敬虔な父たちの遺体を、（神によって焼失から救われた）教会に集め、救いの受難の夜[2520]　を、慰めようのない嗚咽の中で過ごし、その後、遺体を尊厳をもって埋葬した。　また、半死半生の状態で傷を負って発見された者たちについては、修道院の兄弟たちは、前述の医師トモスと共に治療に努めた。トモスは生き残り、後にいわゆる「旧ラヴラ」のイグメンとなったのである。

こうして、聖サヴァの修道院の尊い父たちは苦しみの中で息を引き取った。一方、あの野蛮人たちは、修道院を去った直後に神によって突然の死を招かれ、剣も持たぬまま荒野や野原で死体となり、犬や野獣、鳥たちに食い荒らされた。　彼らの呪われた魂は地獄へと落ち、そこでは火が消えることなく、虫も眠ることなく、一方、殺された尊い父たちの魂は神の御手の中にあり、キリスト、私たちの神であり救い主から殉教の栄光に与ることを許された。父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光と誉れあれ。アーメン。

[2520] それは聖金曜日の前夜のことでした。

聖殉教者フォティナの受難[2521]

記念日：3月20日

ローマ皇帝ネロの治世[2522]、キリスト教徒に対する激しい迫害が繰り広げられ、聖なる首席使徒ペトロとパウロの殉教の後、彼らからキリストへの信仰を教えられた者たちが捜し出された。　この頃、アフリカの都市カルタゴ[2523]に住んでいた聖フォティナは、息子のヨシエと共に、恐れを知らずにキリストの福音を宣べ伝えていた。　一方、フォティナの長男ヴィクトルは、当時野蛮人とローマ人との間で繰り広げられていた戦争において勇敢に戦い、戦後、皇帝の命によりアッタリア[2524]の軍司令官に任命され、そこにいたキリスト教徒たちを拷問にかけることとなった。　このことを知った都市の統治者セバスティアンは、ヴィクトルにこう言った。

「総督よ、私はあなたがキリスト教徒であり、あなたの母と弟のヨシエがペトロの信奉者であることを確信している。それゆえ、皇帝があなたに命じたことさえも、あなたは自分の魂を滅ぼすことを恐れて実行しないだろう。」

「私は、天の、不死の王、キリスト、私たちの神の御心を行うことを切に願っている」とヴィクトルは答えた。「そして、キリスト教徒を拷問にかけるというネロの命令については、私は無視する。」

その時、セバスティアンはヴィクトルにこう言った。

「誠実な友人として、君に忠告する。皇帝の意志に従うがよい。もし君が、皇帝の命令を真摯に実行し、見つけ出したキリスト教徒たちを裁判にかけ、拷問にかけるならば、それは皇帝の意にかなうこととなるだけでなく、　さらに、彼らの所有する財産を自分のものにすることもできる。そして、母と兄には、あなた自身から手紙を送り、あからさまに行動したり、それによって異教徒たちに先祖代々の信仰を捨てさせるよう説得したりせず、もし望むなら、密かにキリスト、すなわちあなた方の神への信仰を告白するように伝えなさい。そうすれば、あなたも彼らのせいで、彼らと同じような拷問を受けることにはならないだろう。

「私は決してそんなことはしない」　――とヴィクトルは答えた――「しないばかりか、キリスト教徒を拷問にかけたり、彼らから無理やり何かを奪ったり、母や兄に『キリストこそが真の神である』と説教しないよう助言することなど、考えることさえしたくない。むしろ私自身、全身全霊でキリストの宣教者になりたいと願っており、彼らと同じようにそうあり続けるつもりだ。」

それに対し、セバスティアンは彼にこう言った。

「おお、ヴィクトルよ！　あなたや、あなたの母、そして兄弟を待ち受ける災難がどのようなものか、我々は皆よく知っているのだ。」

この言葉を言い終えると、セバスティアヌスの顔は突然紅潮し、目に鋭く激しい痛みが走って地面に倒れ込み、完全に話す能力を失ってしまった。その場に居合わせた使用人たちは彼を抱き起こ

[2521] 聖フォティナは、井戸のほとりで主が語り合ったあのサマリア人の女性その人である。救い主とサマリア人の女性との対話の記述は、福音書（ヨハネ4:5）以降に見られる。

[2522] ネロ皇帝は64年から68年までローマで統治した。彼の治世下で行われたキリスト教徒への迫害は65年に始まり、68年にこの皇帝が自殺して流血に終止符を打つまで続いた。この迫害により、ローマでは聖使徒ペトロとパウロが殉教した。

[2523] カルタゴは、北アフリカに位置する古代の港湾都市であり、フェニキア人によって建設され、古代において彼らの有名な植民地として知られていた。 紀元前146年に破壊されたが、初期のローマ皇帝の時代に再建され、高度な繁栄を遂げた。また、キリスト教の初期には、異教的なギリシャ・ローマ式の信仰が盛んに発展したことで知られ、そのため長い間、迷信や魔術、いわゆる「魔法の術」が根強く残っていた。 現在、その跡地にはチュニスという都市が建っている。

[2524] *アッタリアは*、小アジアの南沿岸部に位置するパンフィリア州の都市である。この都市は紀元前1.5世紀にアッタロス2世フィラデルフォスによって建設され、彼はこの都市に自身の名を冠した。

して寝台に寝かせたが、彼は三日間、一言も発することなく横たわっていた。しかし三日が過ぎると、彼は大きな声で叫び、こう言った。

「唯一のキリスト教の神こそが真の神であり、唯一のキリスト教の信仰こそが真の信仰であり、唯一の洗礼、すなわち父と子と聖霊の御名による洗礼がある。キリスト教の信仰以外に、真の信仰など存在しない。」

セバスティアヌスの元へ入ったヴィクトルは、彼に尋ねた。

「なぜ、これほど突然、あなたにそのような変化が起きたのですか？」

「親愛なるヴィクトルよ」とセバスティアンは答えた。「あなたのキリストが、私を御自身のもとに招いておられるのです。」

ヴィクトルは直ちに彼に信仰を教え、彼は聖なる洗礼を受けた。洗礼槽から上がると、彼は突然目が見えるようになり、神を賛美した。その場に居合わせた使用人たちは、この驚くべき奇跡を目撃し、自分たちもセバスティアヌスのように不信仰のせいで同じ病に襲われるのではないかと恐れ、彼らもまた洗礼を受けた。

その直後、アッタリアの軍司令官であり、同市の統治者であるヴィクトルが、 セバスティアンが、ペトロとパウロの信仰を公言し、すべての人を自分たちの元へ引き寄せ、彼らの説教に従うよう説得しているという噂がネロの耳に入った。また、使徒たちによってカルタゴに派遣されたヴィクトルの母フォティナとその息子ヨシヤも、同様のことを行っているという噂も伝わった。 これを知った皇帝は激怒し、アッタリアに兵士たちを派遣して、その街にいるキリスト教徒の男女をすべて自分の元へ連行し、裁きにかけるよう命じた。 その時、アッタリアのキリスト教徒たちの前にキリストが現れ、こう言われた。*「疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう」*（マタイ11:28）。「わたしはあなたがたと共にいる。ネロは打ち負かされ、彼に従う者たちもまた打ち負かされるだろう」。

また、ヴィクトルに対してはこう言われた。

「今日から、あなたの名はフォティン[2525] となる。なぜなら、あなたによって啓発された多くの人々が、わたしのもとに来るからである。」キリストは、これから訪れる苦難に直面するセバスティアンを、次のような言葉で励まされた。

「[2526]、その業を最後まで成し遂げる者は幸いである。」主はこう告げると、天に昇られた。

聖フォティナもまた、キリストから彼女を待ち受ける苦難について告げられ、直ちに多くのキリスト教徒に付き添われてカルタゴからローマへと向かった。彼女がローマに入ると、街全体が騒然となり、人々は皆「彼女は誰なのか」と口々に言った。しかし彼女は恐れを知らず、キリストの福音を宣べ伝えた。 その間、かつてヴィクトルという名を持っていた彼女の息子フォティンも、セバスティアンや彼らと共に連行された兵士たちと共にローマへ連れてこられたが、聖フォティナは、息子ヨシヤやカルタゴから彼女と共にやってきたキリスト教徒たちを連れてネロの前に現れる前に、ヴィクトルにそのことを知らせていた。ネロは聖女に尋ねた。

「なぜ我々のところへ来たのか？」

「それは」とフォティナは答えた。「あなたにキリストを敬うことを教えるためです。」

その時、皇帝の側近たちが彼にこう告げた。

「神々を信じないセバスティアンの市長とヴィクトル総督が、アッタリアからやって来ました。」

「彼らを私のところへ連れて来い」とネロは命じた。そして彼らが連れて来られると、彼は彼らに尋ねた。

[2525] 「フォティン」という名は「光を放つ」という意味で、光、特に昼間の太陽の光を意味するギリシャ語の「フォス」「フォトス」に由来する。

[2526] この表現は、福音書の「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（マタイ24:13）という言葉から借用されたものである。

「お前たちについて聞いた話は本当か？」

「陛下、私たちについてお聞きになったことはすべて、真実です」と彼らは答えた。

するとネロは、聖なる女性たちの方を向き、こう尋ねた。

「あなたがたは、キリストを否定することに同意するか、それともキリストのために死ぬことを望むか？」

「おお、皇帝よ！」聖なる女性たちは天を仰ぎながら答えた。「私たちがキリストへの信仰と、キリストへの愛を捨てることなど、決してありえません。」

「では、お名前は？」と皇帝は尋ねた。

「私は」と聖フォティナは答えた。「私の神であるキリストからフォティナという名を受けました。私の姉妹たちは、　私より後に生まれた最初の者はアナスタシア、二番目はフォト、三番目はフォティダ、四番目はパラスケヴァ、そして五番目はキリアキアです。また、私の息子たちの名前はこうです。主によってフォティンと呼ばれた長男はヴィクトル、次男はヨシヤです。

「さて、あなた方は皆――」とネロはこれに対し言った。「ナゾレイのキリストのために拷問を受け、死ぬことに同意するのか？」

「私たち全員」と聖フォティナは答えた。「喜びと歓びをもって、主のために死ぬ用意があり、皆、それを望んでおります。」

そこでネロは、鉄のハンマーで彼らの手のひらを砕くよう命じた。金床が運ばれてくると、不敬虔な拷問者たちは、その上に聖人たちの手を載せ、打ち始めた。　彼らは第三時から第六時まで[2527]、殴り続けたが、その間、殴る者は三度交代したにもかかわらず、聖人たちは何の痛みも感じなかった。ネロは　このことを知ると、当惑し、彼らの両手を完全に切り落とすよう命じた。拷問者たちは激昂して聖なる殉教者たちを捕らえ、両手を縛り、再び金床の上に載せた。　真っ先に拷問にさらされたのは聖フォティナであったが、斧で彼女の手を切り落とそうとした拷問者たちは何度も交代したものの、全く成果を上げられず、疲れ果てて死人のように倒れ込んだ。一方、キリストの恵みによって無傷のままであった聖女は、祈りを捧げながらこう語った。　*「主が私と共におられるなら、私は恐れない。人が私に何ができるというのか？」*（詩編117:6）。

その後、ネロは聖人たちをさらにどのような拷問にかけるべきか考えあぐね、ついにセバスティアンに、　フォティナとヨシヤの目を潰し、牢獄の奥の部屋に閉じ込めるよう命じ、聖フォティナとその五人の姉妹を、自身の黄金のクヴクリオン[2528]へ連行させ、娘のドムニナに常に彼女たちのそばに付き添うよう命じた。皇帝のクヴクリイに滞在中、聖フォティナはドムニナとその100人の女奴隷たちにキリストの信仰を教え、彼女たちは皆、聖なる洗礼を受けた。また、ある魔術師をキリストへと改宗させたが、その魔術師はかつて、彼女と彼女の姉妹たちに毒草のチンキを飲み物として持ってきたことがあり、その後、彼女は数多くの拷問に耐えなければならなかった。

それから3年が過ぎたある日、ネロはかつて自分の側近の一人であった使用人を釈放するよう命じた。その使用人はネロの命令により牢獄に投獄されていたのだが、釈放のために派遣された者たちは、牢獄の中で聖殉教者セバスティアン、フォティナ、ヨシヤが健在であるのを見て、　皇帝に次のように報告した。「盲目にされたはずのガリラヤ人たちは目が見え、完全に健康です。牢獄そのものが明るく、豊かな香りに満ちており、監禁の場から神を賛美する場所、聖なる家へと変わっています。聖人たちは牢獄の中で莫大な富を所有しており、人々が彼らのもとに集まり、彼らの神を信じて、彼らから洗礼を受けています。」　これを聞いたネロは恐怖に駆られ、聖なる殉教者たちを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼らにこう言った。

[2527] ローマ人にとって、私たちの暦でいう一日の始まりは午前6時からとされていた。したがって、午後3時は私たちの午前9時に相当し、午後6時から12時までを指す。

[2528] ここで「クヴクリウス」とは、皇帝の宮殿を意味する。ネロの「黄金の宮殿」は、その並外れた規模、高さ、そして装飾の豪華さで知られている。この宮殿の一部の部屋や玄関は、金や宝石で飾られていた。

「私は王の勅令をもって、ローマ市内でキリストを宣教することを禁じたではないか。それなのに、お前たちは牢獄にいながら、よくもそんなことをしたものだ。この罪により、私はお前たちを数多くの恐ろしい拷問にかけるつもりだ。」

「我々に何をしようとも構わない」と聖なる殉教者たちは答えた。「しかし、我々は、真の神であり万物の創造主であるキリストについて宣教することを決してやめない。」

この言葉を聞いて、ネロは激しい怒りに駆られ、聖人たちを逆さ磔にするよう命じた。そして、三日間、裸の体を鞭で打ち続け、その肢体がバラバラになるまで続けるよう命じた。その命令は実行された。その後、彼は見張りを配置し、彼らが三日間吊るされたままであることを確認するよう命じた。　四日目に、聖なる殉教者たちがまだ生きているかを確認するために、ネロから遣わされた家来たちがやって来た。彼らが聖人たちが吊るされたままままだ生きているのを見ると、たちまち盲目になってしまった。その時、神の天使が天から降りてきて、聖人たちの縄を解き、彼らに口づけをして、完全に健康な状態に戻した。　そこで聖人たちは、目を失った王の家来たちを憐れみ、祈りを捧げると、彼らはたちまち視力を取り戻した。彼らは信仰を抱き、私たちの神であるキリストの御名によって洗礼を受け、聖人たちの信奉者となった。不義なネロはこれを知ると激しく怒り、聖フォティナの皮を剥ぐよう命じた。　そして、拷問者たちがこの王の命令を執行している間、聖なる殉教者はこう歌った。*「主よ！　あなたはわたしを試み、知っておられます。私が座る時も立つ時も、あなたは知っておられます。あなたは遠くから私の思いを理解しておられます」*（詩篇 138:1, 2）。

聖フォティナの皮を剥ぎ取った後、彼女を井戸に投げ込んだ。その後、セバスティアン、フォティナ、ヨシヤを捕らえ、彼らの膝下の骨を切り落とし、膝ごと犬に食わせた。さらに彼らの皮を剥ぎ取り、皇帝の命により、老朽化した石造りの建物に投げ込んだ。　その後、フォティナの五人の姉妹を自分の元へ連れてくるよう命じたネロは、彼女たちの乳首を切り落とすよう命じ、さらに彼女たちからも皮を剥いだ。　拷問執行人たちが聖フォティダのもとへやって来たとき、彼女は他の聖女たちのように誰かにこの拷問を施されることを望まず、拷問台に立ち、自ら勇敢に皮膚を剥ぎ取り、それをネロの顔に投げつけた。その勇気と忍耐力に、ネロ自身も驚嘆した。　そこで拷問担当者は、聖フォティデのために、極めて残酷で致命的な新たな拷問を考案した。彼の命令により、彼の庭園で二本の木を互いに傾けさせ、その頂点にフォティデの両足を縛り付けた。その後、木を放すと、聖なる殉教者は木々に引き裂かれてしまった。　こうして彼女は、その義に満ちた、　な至福の魂を神に委ねた。その後、不敬虔なネロは、他のすべての聖なる殉教者たちに剣で首を刎ねるよう命じ、聖フォティダについては井戸から引き上げ、牢獄に閉じ込め、そこで彼女は二十日間を過ごした。　その後、ネロは彼女を自分の元へ連れてくるよう命じ、今なら自分に服従し、頑なさを悔い改めて偶像に犠牲を捧げるつもりはないかと尋ねた。すると聖フォティナは彼の顔に唾を吐きかけ、その狂気と愚かな知性を嘲笑して、こう言った。

「おお、最も不敬虔な盲人よ、迷い、狂った者よ！　まさか、私が主キリストを否定し、あなたのような盲目の偶像に犠牲を捧げるほど、愚かだとでも思っているのか！？」

そのような言葉を聞いたネロは、聖フォティナを再び井戸に投げ込むよう命じた。そしてそれが実行されると、聖なる殉教者はその魂を神に委ね、殉教者の冠を戴き、彼女と共に苦難を耐え抜いた者たちと共に、天の御国で永遠に喜びを分かち合っている[2529]。

聖女アレクサンドラとクラウディアの殉教

記念日：3月20日

[2529] 聖フォティナの死は66年頃であった。彼女の教会と遺骨は、コンスタンティノープルのヴラヘルン門の外にあった。

これらの聖なる殉教者たちは、不義なマクシミアヌスの治世下で殉教した[2530]。彼はキリスト教徒に対して極めて残酷な迫害を繰り広げ、キリストを信じる者たちは、年齢を問わず、様々な拷問にさらされた。これらの聖なる乙女たちが住んでいたアミス[2531]の統治者も同様に振る舞ったため、彼女たちは捕らえられ、彼の元へ連行された。　尋問の際、彼女たちは自らをキリスト教徒であると宣言し、統治者自身を残酷で非人道的だと非難した。　そのため、総督の命令により、彼女たちはまず服を脱がされ、棒で殴打された後、乳首を切り落とされた。その後、吊るされた状態で、内臓が露わになるまで体を削り取られ、ついに灼熱の炉に投げ込まれ、そこで彼女たちは主の御手に魂を委ねた[2532]。

聖ニキータ・殉教者の記念日。

3月20日の記念日

聖ニキタはアポロニアダの大司教であった。彼は敬虔さ、慈悲深さ、そして聖書に対する深い知識で知られていた。　偶像破壊派による迫害の際、聖なるイコンを崇敬しないよう彼を強要しようとしたが、その試みは徒労に終わった。彼は流刑に処され、そこでレウ・アルメニアヌスの治世中にその生涯を閉じた。

4月3日

3月21日（旧暦）

尊き父ヤコブ、司教にして殉教者の記念日

記念日3月21日

聖ヤコブ・殉教者について私たちが持っている情報は、非常に簡潔で不完全である。

私たちが知っているのは、彼が幼い頃から修道生活を目指し、修道士の位を受け、絶え間ない断食と祈りによって肉体を鍛え上げたということだけです。

聖ヤコブは聖書の読誦を深く愛し、読む前には祈りによって心を清めていた。その後、彼は司教の位に叙任された。

偶像破壊派の皇帝コンスタンティノス・コプロニモス[2533]の治世下、聖ヤコブは偶像崇拝の放棄を強要された。　しかし、彼は不敬虔な者たちに従うことを拒んだため、多くの拷問にさらされた――追放され、投獄され、飢えと渇きに苦しめられ――さらに、拷問者たちが考案したその他多くの様々な苦痛にも耐え抜いた。　そうした苦難のさなか、彼は自らの聖なる魂を、そのために献身してきた神に委ねた。そして神から天の御国を受け継ぎ、天において永遠の喜びに満ちている。

2530 ここで言及されているのは、もちろん、ディオクレティアヌスの退位後、305年から311年まで帝国の東部を単独で統治したマクシミアヌス・ガレリウスである。

2531 アミス（現在のサムスン）は、小アジアのローマ属州ポンテにあり、エウクシノス海（黒海）の同名の湾のほとりに位置していた。

2532 聖なる殉教者たちは310年に殉教した。

2533 コンスタンティノス・コプロニモス（ビザンツ皇帝）は、741年から776年まで在位した。彼は最も熱心な偶像破壊論者であった。彼の治世は、偶像破壊運動が最も盛んになった時期であった。

カターノの主教キリル、我らの父の聖人記念日

記念日：3月21日

聖キリルはアンティオキア出身であり、使徒ペトロの弟子であった。ペトロによってシチリアのカターニアの司教に任命された。彼は羊の群れを善く、また神に喜ばれるように牧し、異教徒をキリストの信仰へと導き、多くの奇跡を行った。その中から一つを挙げておこう。　その地方には苦い水が湧く泉があったが、神の聖人キリルは神に祈りを捧げ、その泉の苦味を甘味に変えた。　これを見たギリシャ人の首長、すなわち偶像崇拝者は、キリストを信じるようになり、彼と共に多くの者たちも信仰を抱くようになった。高齢に達した聖キリルは、聖なる眠りにつき、その島（シチリア）で栄誉をもって埋葬され、信仰をもって彼に助けを求める者たちに癒やしを与え続けている。

コンスタンティノープル総主教、私たちの父トマス聖人の記念日

記念日：3月21日

聖なる父トマスは、その多くの美徳、知恵、そして敬虔さにより、尊者ヨハネ・ポストニクによってコンスタンティノープル大聖堂の助祭に任命され、マウリキオス帝の治世[2534]　には、サケラリオスに任命された[2535]　。
その後、至聖なるヨハネと、その後を継いだ祝福されたキリアコス総主教[2536]　が亡くなり、殉教者フォキス帝の治世[2537]　において、聖トマスが総主教に任命され[2538]　、その座を立派に統治し、キリストの羊の群れを慈愛をもって導いた。 彼の総主教在任中、ガラティア地方[2539] で次のような奇跡が起こった。そこではいくつかの都市で、十字架行列や礼拝の行進の際に大きな十字架が運ばれていたが、それらの十字架は、不思議な、抑えきれない力によって自ら揺れ動き、互いにぶつかり合って粉々になった。　この奇跡の噂が至る所に広まると、コンスタンティノープルのトマス総主教は、その地から聖テオドロス・シケオト――先見の明を持つ奇跡行者――を呼び寄せ、この奇跡について、またそれが何を予兆しているのかについて尋ねた。　聖テオドロスは、奇跡が確かにあったことは認めたが、その意味については、「この不可解な神秘は知らない」と言って語ることを拒んだ。そこで、至聖なるトマス総主教は彼の足元にひれ伏して懇願し、その謙虚な態度によって長老を説得し、未来を予言させた。　その後、長老は、十字架が自ら揺れ動き、打ち砕かれ、折れたのは、神の教会とギリシャ王国に対する多くの災いと荒廃の前兆であり、それは外部からも内部からも　の敵によるものであると語った。　外部からは野蛮人による激しい侵攻があり、国内ではキリスト教徒の間で信仰上の分裂が生じ、互いに迫害し、滅ぼし合うようになり、これらすべてがまもなく起こるだろう。　これを聞いた総主教は恐怖に駆られ、聖なる方に対し、神に自分について祈ってほしいと懇願した。すなわち、予言された破滅が起こる前に、神が自分の魂を肉体から引き離してくださり、教会に降りかかるそのような災難を目にすることなく済むようにと。　しばらくして、聖テオドールがまだコンスタンティノープルの聖ステファノ教会に滞在していた頃、総主教は病に倒れ、修道院の独房に籠もって断食に励んでいた聖人に、自身の病状を伝え、神に早急な死を願ってくださるよう懇願した。　聖人は

[2534] ビザンツ帝国の皇帝マウリキウスは、582年から602年まで在位した。
[2535] *サケラリウス*――大聖堂の聖具保管係、聖具室長。
[2536] *キリアコスは*595年から606年まで総主教を務めた。
[2537] *フォカス皇帝*は602年から610年まで在位した。
[2538] 聖*トマスは*607年から610年まで総主教を務めた。
[2539] ガラティア――小アジアの地域。

これを拒み、応じようとしなかったが、至福のトマス総主教は、教会に災いが降りかかる前にこの世を去りたいと願い、再び熱心な懇願を携えて彼のもとへ使者を送った。　そこで、聖テオドロスは本意に反して、至聖なるトマス総主教の意志に従い、自身の死を神に祈り、次のように伝えた。

「私をあなたの元へ来させるおつもりですか、それとも、私たちはそこで神の御前で再会するのでしょうか？」

聖トマスは使者を通じて彼にこう答えた。「父よ、あなたの沈黙を破らないでください。『そこで神の御前で会おう』とおっしゃっただけで、私には十分です。」

そしてその日、聖なるトマス総主教は夕方前に喜びをもって肉体を離れ、フォキス帝の治世のさなかに主のもとへ旅立った。　聖トマスの死後、その偉大なる教会の助祭であったセルギウスが総主教の座に就いたが、当初は正統であったものの、後に堕落し、モノフェリテ派、すなわち「単一意志説」の異端の指導者となった。この異端は、主キリストにおいて一つの意志のみを認めるという不当な教義を掲げていた[2540]；　そこで教会には災いが降りかかった。分裂、荒廃、苦難、そして異端者たちによる正信者への迫害である。同時に、異端の増大に対する神の許しにより、ペルシャとの激しい戦争が始まり、ギリシャの諸地域は捕囚に遭い、火と剣によって荒廃させられた；　エルサレムはペルシャ人に陥落し、聖十字架の尊い木は捕らえられてペルシャへと連れ去られた。かくして、前述の十字架の奇跡によって予兆され、聖テオドロス・シケオトスの預言によって予告されていたすべての災難が現実のものとなった。　これらの災難を自らの目で目撃することを避けるため、至聖なるトマス総主教は生き続けるよりも死を選ぶことを選び、自らの願いにより、この恐ろしい時が訪れる前に安らかな最期を迎えた。　彼は三年の二ヶ月にわたりキリストの教会を牧会し、正統な教義を守り、私たちの神であるキリストを真に崇めつつ、異端者たちと激しく戦った。キリストに、父と聖霊とともに、永遠の栄光あれ。アーメン。

4月4日

3月22日（旧暦）

聖司祭殉教者ヴァシリー、アンキルスの長老の受難。

記念日：3月22日

聖ヴァシレイは、ガラティアの都市アンキラの教会の長老として、人々にキリスト教の真理を教え、悪魔の道やそのあらゆる悪行から人々を遠ざけることに熱心に努めた。　彼は絶えず、恐ろしい時が訪れ、地獄の軍勢の君主たちが現れたと説教した。なぜなら、サタンには羊の衣をまとった僕たちがおり、その内側は貪欲な狼だからである。彼らはこの儚い人生の道で人々の前に現れ、その魂を滅びへと誘い込もうとしており、その狡猾な策略は今まさに現れている。

それゆえ――聖人はこう語った――私はすべての人に、キリストなる神による救いへと至る道を指し示し、不義な者たちの迷いを糾弾する。もし誰かが、生ける、永遠に存続する神を捨てて、盲目で、耳が聞こえず、口がきけない偶像に目を向けるならば、その者は、その神々から発する消えることのない炎を受け継ぐことになる。　それゆえ、私たちキリストを愛し、信仰の導き手として熱心に崇める者たちは皆、　汚れなき心の宝庫に、奪い去ることのできない宝を保ち続けたいと願い、悪

[2540] *モノフェリテ*派――イエス・キリストには神の意志のみが存在すると主張した。この異端は、680年にコンスタンティノープルで開催された第6回全地公会議で非難された。

魔の誘惑や偶像の陽気な祭りを足で踏みつけ、　永遠の報いを与えてくださる私たちの助け手であるキリストに支えられ、忌まわしい敵を避けよう。

聖人は常にそうして、街中を巡り歩き、一人ひとりに真の信仰を守り、将来の永遠の苦しみから逃れるよう説き続けた。　聖ヴァシレイ司祭は、コンスタンティノープル総主教エウドクシオス（アリウス派）の治世下に生きており、コンスタンティノープルでのアリウス派公会議の際、その敬虔さゆえに司祭職の執行を禁じられた。しかしその後、パレスチナで開催された二百三十人の司教による公会議において、聖なる秘跡を執り行うよう命じられた。　正しい信仰を告白し、神に喜ばれる生活を送りながら、彼は信仰の真理を解き明かし、多くの人々を迷いから遠ざけた。そのため、敬虔なキリスト教徒が皆迫害を受けていた当時、彼はコンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス帝の前で、民衆を惑わしているかのように誹謗中傷された。　真理のために拷問を受けた際、彼は多くの人々に正しい信仰を教えた。なぜなら、彼自身が信仰と教父たちの伝承において揺るぎなく堅固であり、敬虔な信仰告白から微塵も逸脱しなかったからである。 背教者ユリアヌス[2541] が王位に就き、邪悪な偶像への生贄に関する狂気の法律を公布して人々の魂を滅ぼし始めたとき、ガラティア地方でも彼の命令により、人々は丸一年と三ヶ月もの間、偶像にひれ伏さなければならなかった。しかし、聖バシレイオスは、人々の魂が滅びゆくのを見て、自分の住む都市アンキラのために神に祈り、こう言った。

「世の救い主よ、キリストよ、消えることのない光よ、永遠の宝庫の至宝よ、御父の御心によって闇を追い払い、御霊によって万物を造り出される方よ！　御自身の聖なる、畏れ多い御目で御覧になり、御自身の聖なる御意志に逆らう者たちの邪悪な魔術を打ち砕いてください。彼らの弱々しい企てが散り散りとなり、永遠に御自身――神――の中に留まる魂の妨げとならないようにしてください！

一方、偶像崇拝者たちは、聖ヴァシレイがこのように声に出して祈っているのを聞き、彼に対して激しく怒り、そのうちのマカリイという者が駆け寄って彼を捕らえ、こう言った。

「なぜお前は街中を歩き回り、民を惑わせ、王が定めた神を崇めるための法を無効にしているのか？」

聖人は彼にこう答えた。

「神よ、この悪魔の捕虜の口を砕き給え！　あなたがたの法を廃止しているのは私ではなく、天におられる御方である。その御方は、目に見えぬ力によってその法を打ち砕き、滅ぼし、あなたがた全員を滅ぼし尽くすだろう。あなたがたが完全に力尽き、用意された永遠の死を受け継ぐまで。」

怒りに満ちた不信心な者たちは、彼をサトゥルニヌス総督のもとへ連行し、こう言った。

「この男は我らの都を混乱させ、多くの人々を惑わし、誤った道へと導いている。そして今や、祭壇を破壊せよと命じるほどの大胆不敵さを示し、王を冒涜することさえ躊躇しない。」

サトゥルニヌス総督は聖人に尋ねた。

「お前は一体何者だ。よくもそんなことをする度胸があるな？」

聖ヴァシレイは答えた。

「私はキリスト教徒です。この名こそ、私にとって最も尊いものです。」

サトゥルニヌスは言った。

「なぜ、キリスト教徒としてなすべきことをしないのか？」

聖人は答えた。

「イゲモン、あなたの助言は正しい。確かに、聖なる福音書が教えているように、キリスト教徒の善行はすべての人々に明らかであるべきだ。*『あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。そう*

[2541] ユリアヌス・アポステートは、361年から363年まで在位した。

すれば、人々はあなたがたの善行を見て、天におられるあなたがたの父を賛美するようになる』（マタイ5:16）。」

サトゥルニヌスは言った：

「それならば、なぜあなたは私たちの街を混乱させ、まるで王が善良な法律に背いたかのように、至る所で王を中傷するのですか？」

聖人は答えた：

「私はあなたがたの王を誹謗しているわけではありません。しかし、私は至高の王を知っています。その方は天におられる神であり、その方にふさわしい奉仕者たち――すなわち私たちの先祖たち――は、至る所で清い心をもってその方に礼拝を捧げています。その方は、あなたがたが定めたこの無分別で不敬虔な制度を、瞬く間に打ち砕くことができるのです。」

サトゥルニヌスは言った：

「わが王が定めた法律を、お前は正当なものとは考えないのか？」

聖人は答えた。

「祭壇のそばで肉を貪り、その前で吠え立てる狂犬のように、人間の体を祭壇に載せ、血を流し、赤ん坊を悪魔への生贄として刺し殺すことを命じる法律が、どうして公正であり得ようか？　そのような法律を、どうして公正と呼べるだろうか？」

サトゥルニヌスは言った。

「嘘をつくのはやめろ、傲慢者よ。王に従え！」

聖ヴァシリーはこう答えた。

「私はこれまで天の王に従ってきたし、今も従っている。そして、主への聖なる信仰から決して背くことはない。」

「お前は一体誰のことを言っているのだ」とサトゥルニヌスは言った。「お前が従っているという天の王とは？」

「私が言っているのは」と聖人は答えた。「天に座し、すべてを見通しておられるお方のことです。あなたが称賛するその王は、この世の王に過ぎず、まもなく人間として倒れ、大いなる王の御手に渡ることになるでしょう。」

これを聞いて、サトゥルニヌスは激怒し、聖人を裸にし、吊るし、鉄の道具でその体を削るよう命じた。聖人は吊るされ、苦痛に耐えながら、神にこう祈った。

「主よ、永遠の神よ、あなたのために苦難に遭い、いのちの道を見いだすことを私に許してくださったことを感謝します。その道を歩むことによって、私はあなたの約束を受け継ぐ者たちを見ることができるのです。」

聖人が削られているとき、イゲモンは言った。

「ヴァシリーよ、今やこれほど恐ろしい苦痛に耐えているのだから、王に従え。」

聖人はこう答えた。

「ああ、正気を失った者よ、キリスト教の希望からかけ離れた者よ！　私はすでに言った通り、真の王である私の神に従い、神を信じている。私は神から背くことはできない。」

聖人を削っていた下僕たちが疲れ果てると、サトゥルニヌスは彼らにやめるよう命じ、再び聖人にこう言った。

「我々に同意し、我らの神々に生贄を捧げよ。」

聖人はこう答えた。

「私は虚しい神々を拝むことはなく、魂を殺すような生贄には加わらない。」

そこで、イゲモンは殉教者を牢獄へ連行するよう命じた。そこへ向かう途中、聖人はフィリクスという名のギリシャ人と出会い、彼は聖人にこう言った。

「バシレイオスよ、どうして自ら破滅へと向かうのだ？　神々の味方となり、王が約束した賜物を受け取るほうが、よほど良いのではないか？　結局、お前は残酷な苦しみを長く味わうことになるだろう。それも自業自得だ。お前自身がそう望んだのだから。」

聖人は彼にこう答えた：

「退け、好色者よ、不信心者よ。お前は、永遠の天の王であるキリストの真の約束を知らず、それを知るに値しない。暗闇の中にあって、どうして真理の光を見出し、自分を取り巻く闇を悟ることができるというのか？」

そう言い残して、聖ヴァシレイは牢獄へと入っていった。

一方、イゲモン・サトゥルニヌスはユリアヌス王に手紙を送り、長老ヴァシレイオスの件を報告した。　王は直ちに、かつてはキリスト教徒であったが後に背教者となった、不信仰の教師であるエルピダスという者をアンキラへ派遣し、彼と共に、同じくかつてはキリスト教徒であったが後に天の宝から背いた、ピガシアという名の別の不信心者も派遣した。　アンキラへ向かう途中、ニコメディアで、彼らは偶像崇拝の祭司アスクレピオスを見つけ、彼を連れ出した。こうして三人は、まるで悪魔の軍勢の三人の指揮官であるかのように、アンキラの街へと向かった。一方、聖バシレイオスは牢獄に囚われながらも、昼夜を問わず神を賛美し、栄光を称え続けた。　翌日、ピガシウスが聖バシレイオスの牢屋を訪れ、彼に挨拶してこう言った。

「喜びなさい、ヴァシリーよ。」

聖人は彼にこう答えた。

「お前には何の喜びもない、罪人であり欺瞞者よ。かつてキリストの泉から飲んだ救いも、お前にはもうない。今やお前は腐った沼となり、犠牲の肉を貪り食っている。　かつては神聖な秘跡に与っていたが、今や悪魔の食卓で最上席に座っている。かつては真理の教師であったが、今や滅びの指導者だ。かつては聖人たちと共に祝祭を執り行っていたが、今やサタンの僕たちと歓楽にふけっている。かつては迷える者たちを闇から光へと導いていたが、今やあなた自身、　の闇に包まれている。　いかにしてあなたは自らの希望を台無しにし、霊的な宝を失ってしまったのか。死の床に就く時、あなたはどうするつもりなのか。

そう言い終えると、聖ヴァシリーは主に向かって次のような祈りを捧げた。

「神よ、あなたを賛美します。あなたは御自分のしもべたちに御自身を知らしめ、あなた、すなわち御自身の神を見たいと願う者を光へと導き、あなたに希望を置く者を賛美させ、あなたの律法を憎む者を恥に満ちさせ、天の住人たちに称えられ、地上の者たちからも崇められている方です。至高なる神よ、どうか御使いの魂から悪魔の束縛をすべて解き放ち、真理を憎み、私を捕らえて打ち負かすことを自慢する者たちから、私を守ってください！

ピガシオスはこれを聞いて、当惑しながら彼から離れ、友人たちのところへ戻り、バシレイオスの言葉をすべて伝えた。すると、友人たちはピガシオスが当惑しているのを見て激怒し、行ってこのことをイゲモンに告げた。イゲモンは直ちに聖人を拷問にかけるよう命じた。聖なる殉教者は法廷に立ち、イゲモンにこう言った。

「お望みのままにせよ。」

エルピディウスは、ヴァシリーがこれほど勇敢に語っているのを聞いて、裁判官に言った。

「この無法者は正気を失ったのだ！もし今、拷問の後に神々に拝むことに同意すれば、赦されるだろう。もしそうしないなら、彼を拷問のために皇帝ご自身にお渡しすべきだ。」

激怒したイゲモンは、聖人を再び裸にして吊るし、長い間鉄の道具で肋骨を削りつけ、その後、重い鎖で縛って再び牢獄に閉じ込めるよう命じた。

数日後、東方の国々へ向かう途中、ユリアヌス王はアンキラに到着した。そこでは、ゲカタ[2542]と呼ばれる偶像を掲げた悪魔の僕たちが王を出迎えた。王は宮殿に入ると、偶像崇拝の祭司たちを呼び集め、彼らに金貨を授けた。　翌日、見世物が行われている最中、エルピディウスが皇帝にヴァシレイオスのことを思い出させると、皇帝は見世物を中断し、ヴァシレイオスを自分の居室へ連れてくるよう命じた。そして聖ヴァシレイオスがやって来て、明るい表情と驚くべき美しさを湛えて皇帝の前に現れた。するとユリアヌスは彼に言った。

「お前の名は？」

聖人は答えた。

「私が誰であるか、順を追って申し上げましょう。第一に、私はキリスト教徒と呼ばれています。キリストの御名は永遠であり、人間の知恵を超えるものです。次に、人々は私をヴァシリーと呼んでいます。もし、私に与えられたキリストの御名を汚れなく保つことができれば、審判の日にキリストから不死の報いを受けるでしょう。」

ユリアヌス帝は言った：

「バシレイオスよ、勘違いするな。私はあなた方の秘儀をよく知っている。あなたは、ポンティウス・ピラトのもとで恥辱の死を遂げた方を信じているのだ。」

聖人はこう答えた。

「迷っているのは私ではありません。迷っているのはあなたです、王よ。あなたは背教者となり、天の御国を失ってしまったのです。私は、あなたが拒絶した私のキリストを信じています。そのキリストこそが、あなたにこの地上の王国を与えたのです。しかし、それはまもなくあなたから奪い取られるでしょう。そうして、あなたがどのような神を怒らせたのかを知るようになるのです。」

「お前は正気を失っている、狂人め」とユリアヌスは言った。「お前の望むようにはならないぞ！」

聖人は続けた。

「お前は、キリストの僕たちに用意された報いを忘れてしまったのか。八歳の幼子だったお前が殺されそうになり、聖なる場所に隠されていた時、お前を殺害から救った祭壇を恥じなかったのか。お前は、聖職者だった頃、自らの口で頻繁に説いていた律法を、果たさなかったではないか！」それゆえ、偉大なる王キリストは、その永遠の御国においてあなたを顧みられることはないだろう。それどころか、この一時的な王国さえも、まもなくあなたから奪い去られるだろう。あなたが激しい病に倒れ、魂を吐き出すとき、あなたの遺体は埋葬されるに値しないものとなるだろう。　（聖人は、ユリアヌスの早すぎる死をこのように予言した。その遺体は、埋葬された後、大地がその奥底から吐き出したのである）。

すると、ユリアヌスは言った。

「不敬な者め！　私はお前を釈放しようと思っていたが、恥知らずにもその狂った言葉を繰り返し、私の助言を拒み、さらに様々な非難で私を辱めたため、朕は命じる。毎日、お前の皮膚から七本の帯を切り取るがよい。」

彼は盾持ちの隊長フルメンティヌスに、ヴァシレイオスを捕らえ、毎日彼の皮膚の一部を剥ぎ取り、七本の帯を切り取るよう命じた。フルメンティヌスは熱心にその命令を遂行し、聖人はキリストのためにそのような苦痛を勇敢に耐え忍んだ。　数日後、彼の皮膚はすでにすべて剥ぎ取られ、革の帯が肩や前、後ろにぶら下がっていたとき、この殉教者は隊長にこう言った。

「今、王のもとへ行って、彼と話したいのです。」

指揮官は、彼が偶像に拝礼しようとしているのだと思い、その言葉に大いに喜び、王のもとへ行き、次のように報告した。

[2542] ヘカテ――月光の神。

「王様！ヴァシリーは苦痛に耐えきれず、陛下にお従いしたいと願っております。」

王はアスクレピオスの神殿へ向かい、殉教者をそこに連れてくるよう命じた。王の前に進み出た聖ヴァシリーは、王にこう言った。

「普段、あなたと共にいる祭司や預言者たちはどこにいるのか？　彼らが、私がなぜあなたのところに来たのか、あなたに伝えたか？」

ユリアヌスは答えた。

「お前は賢明な人間だと思う。自分の置かれた状況を理解し、我々と手を結ぼうとしているのだ。これからは神々に犠牲を捧げるつもりだろう。」

聖人はこう言った。

「王よ、知っておきなさい。あなたが神と呼ぶ者たちは、何者でもない。それらは耳も目も聞こえない偶像であり、それらを信じる者たちを地獄へと引きずり込むのだ。」

そう言うと、彼は自分の体に巻かれていた帯の一つを引きちぎり、王の顔に投げつけながらこう言った。

「受け取れ、ユリアヌスよ。もしそのような食物を好むのなら、それを食らえ。しかし、私にとっての命はキリストそのものであり、キリストのために死ぬことは私にとって得である。キリストこそが私の助け手であり、私はキリストを信じ、キリストのためにこの苦しみを受けているのだ！」

聖ヴァシレイオスのこの勇敢な行いは、たちまちキリスト教徒の間で広まり、人々は皆、キリストに対するこの輝かしい信仰告白と、拷問者を恥じ入らせたその勇敢な行いを称賛した。

聖殉教者ヴァシレイオスを皇帝のもとに連行した盾兵連隊の長フルメンティンは、ヴァシレイオスが自分の体から帯を引きちぎり、それをユリアヌスの顔に投げつけ、挑発的な言葉を浴びせたのを見て、恥じ入り、皇帝の怒りを恐れた。　彼は、王の顔が怒りで一変するのを見た。王の怒りは殉教者に対してというよりは、むしろ彼自身に向けられていた。なぜなら、彼が囚人を連れてきて、王の面前にこのような不名誉な事態を招いたからである。　彼は直ちに殉教者を捕らえ、王の目を盗んでプレトリアへ連行し、激しい怒りに燃えながら、ここ数日間の拷問以上に彼を苦しめるよう命じた。そして、殉教者の皮膚をすべて剥ぎ取っただけでなく、全身をひどく傷つけ、内臓が露わになるほどにした。一方、聖ヴァシリーは、そのような苦しみの中、神にこう祈った。

「主なる神よ、キリスト教徒の希望であり、倒れた者を起こし、打ち倒された者を立て直し、あなたを信頼する者を朽ち果てから解放し、私たちの苦しみを御存知の、　慈愛に満ち、寛大で、憐れみ深く、忍耐強い御方よ、御栄光の高き御座から私を見守り、私がこの生涯を忠実に全うできるようお与えください。そして、御身の永遠にして不滅の御国に私を導き入れてください！

その後、夕暮れが迫ると、フルメンティヌスは聖人を牢獄に閉じ込めるよう命じ、ユリアヌスは早朝、聖人に面会することさえせず、街を出てアンティオキアへと向かった。　一方、フルメンティヌスは、バシレイオスの件で皇帝が自分に怒りを向けているのを見て、聖バシレイオスに対してさらに激怒し、彼を牢獄から連れ出すと、こう言った。

「さあ、この世で最も狂った男よ！　王の命じたとおり、神々に犠牲を捧げるのか、それとも捧げないのか？ 王の命令に従うか、それとも拷問の末に死ぬか、どちらを選んだのだ？」

聖殉教者ヴァシリーは彼にこう答えた。

「狂人であり、不敬虔な者よ！　お前は、昨日やそれ以前の日々、私の体からどれほどの鞭の跡を刻み込んだかを忘れたのか。皆が私を見つめ、お前が私にどのような苦痛を与えているかを見て、心を痛め、涙を流していたことを！　聖なる父よ！」　そして見よ、私は再び、私のキリストの恵みによって、健やかにあなたの前に立っている。悪魔の僕よ、凶暴で非人道的な者よ！　あなたの拷問者であるユリアヌス王に、キリスト・神が遣された力がどれほど強大であるかを告げよ。彼は悪魔に惑わされ、自らの魂を滅ぼしたのだ。　キリスト・神が、聖なる教会の神聖な祭壇の下で、御自身

の聖なる司祭たちによって彼を守り、死から救われたことなど、もはや思い出すつもりはない。彼はその恩恵を忘れ、自らを否定し、そこから逃げ出したのだ。　しかし、私は私のキリストに希望を置いている。まもなくキリストは彼にその行いに応じた報いを下し、その忌まわしい背教者は苦しみの中で滅びるだろう！

フルメンティンは彼にこう言った。

「お前は正気を失っている、狂人め！無敵のユリアヌス帝は、お前への慈愛と慈悲から、我々と共に祭りを執り行い、生け贄を捧げ、香炉で香を焚くよう命じたのだ。　だが、お前は従おうとせず、それどころか、まず王を辱め、続いて私をも窮地に陥れた。私はお前の行いに応じて、お前がすぐに命を落とすような苦痛で報いてやる。

そう言い放つと、フルメンティンは鉄の棒を熱く焼き、それを使って聖人の肩と腹を突き刺すよう命じた。そのような拷問の中で、聖ヴァシリーは地面に倒れ込み、神に向かって大声で祈り、こう言った。

「わが光よ、キリストよ！　わが希望よ、イエスよ！　波に翻弄される者たちの安らぎの港よ！　わが先祖たちの神、主よ、あなたが私の魂を地獄の底から引き上げ、私の中に御名を汚れなく保ってくださったことを感謝します！　私が勝利者としてこの生涯を終え、大司祭であり、私たちの主であるイエス・キリストが私の先祖たちに与えられた約束に従い、永遠の安息を受け継ぐことができますように！今、この告白を揺るぎなく守り通している私の魂を、安らかに受け入れてください！あなたは慈悲深く、その慈悲は偉大であります。永遠に生き、永遠に存続される方よ、アーメン。

このような祈りを捧げたとき、殉教者の腹はすでに灼熱の棒で完全に刺し貫かれていたが、彼はまるで甘い眠りに落ちたかのように、その魂を神の御手に委ねた。こうして聖ヴァシリーは、1月28日、殉教の信仰告白のうちに息を引き取った。　まもなく、背教者ユリアヌスの殺害と滅亡の後、3月22日、キリスト教徒たちは殉教者の多難に満ちた遺体に公然と敬意を表し、この日を彼の記念日と定めた。彼の勇敢な苦難は、すべてのキリスト教徒を、私たちの主イエス・キリストへの信仰において強め、主の栄光と御国は永遠に尽きることがない。アーメン。

コンダク、第8調：

正しい生涯を送り、信仰を守り通した聖殉教者ヴァシリーよ、そのゆえに殉教の冠を授かり、教会にとって揺るぎない柱となったあなたは、　御子、御父と等しく本質を持つ御子、そして聖霊を告白し、不可分なる三位一体を証しされたあなたよ。あなたを崇める者たちを災いから救ってくださるよう、どうか祈ってください。私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、神に賢きヴァシリーよ。」

聖女ドロシダの記念日。

記念日：3月22日

トラヤヌス皇帝の命により、[2543]　、キリストの殉教者たちは日々処刑され、その遺体は不浄で不適切な場所に投げ捨てられました。　その頃、神の戒めを実践し、謙虚に善行を積んで、節制の生活を送っていたキリスト教の処女たちがおり、彼女たちの指導者たちは、その都度、聖なる殉教者たちの遺体を回収し、香油を塗って清らかな布に包み、自らの住居に埋葬していた。　トラヤヌス帝の

[2543] ローマ皇帝トラヤヌスは98年から117年まで在位した。99年、彼は以前存在していた秘密結社を禁止し、間接的にキリスト教徒にも及んでいた法律を復活させ、104年には彼らに対する積極的な法律を公布した。この年から、迫害は彼の治世の終わりまで続いた。

娘ドロシダは、このことを知ると、ある夜、彼女のそばにいた使用人たちが皆深い眠りに落ちている間に、高価な衣装を身にまとってこれらの処女たちのところへやって来て、自分も聖なる殉教者の尊い遺体を受け取れるように、彼女たちと一緒に連れて行ってほしいと頼んだ。　一方、ドロシダの婚約者であり、皇帝の親しい友人であるあるアンドリアンという人物が、皇帝に次のような助言をした。

「独裁者たる陛下！　死刑に処されたキリスト教徒たちの遺体を守るために兵士を配置し、誰が彼らの遺体を盗み出しているのか突き止めてください。」

トラヤヌスはこの助言を実行するよう命じ、警備に配置された兵士たちは一晩中見張りを続け、前述の五人のキリスト教の指導者たちを捕らえ、彼らと共にトラヤヌスの娘ドロシダも捕らえ、朝になると、全員を皇帝のもとに連行した。　ドロシダを見たトラヤヌスは恐怖に駆られ、彼女が悔い改めて改心するかもしれないと期待して、警備兵たちに彼女を閉ざされた部屋に厳重に監視するよう命じた。　一方、彼女たちを指導していた女たちに対しては、大きな釜を鋳造し、彼女たちをその中に投げ込み、さらに溶融用の大量の銅も一緒に投入するよう命じた。そうすれば、銅が彼女たちの身体と溶け合い、その中で焼かれることになるからだ。　さらに、この銅を用いて犠牲用の三脚台を鋳造し、彼が新たに建設した浴場に設置するよう命じた。その浴場は、アポロン祭（[2544] ）の際に初めて火が灯され、彼と志を同じくする異教の崇拝者たちが病を癒やし、労苦から休息を得るために開放されることになっていた。　皇帝の命令が実行され――キリストの聖なる殉教者たちが火刑に処され、犠牲用の三脚台が鋳造された――後、浴場は暖められ、民衆に向けて至る所で次のように告げられた。

「災いから救い出してくれる神々に愛され、皇帝に忠誠を誓う者よ、その開所を祝うために、この興味深い浴場へ入ってください。」

この呼びかけに、人々は直ちに浴場へと集まり始めたが、最初に到着した者が、浴場の入り口の敷居を跨ごうと駆け寄った途端、地面に倒れ込み、息を引き取った。彼と共に敷居に近づいた者たち全員にも同じことが起こり、その結果、誰も浴場の最初の扉さえくぐることはできなかった。　トラヤヌスはこのことを知ると、異教の神々の祭司たちを呼び寄せ、こう言った。

「一体何が起きたのか？　まさか、これはキリスト教徒の魔術のせいなのか？」

「いいえ、陛下」と祭司たちは答えた。「これは、陛下の命令により溶かされた銅で作られた三脚の台によるものです。その銅の中には、キリスト教徒の処女たちが焼かれたのです。それらを撤去し、別のものを設置するよう命じれば、陛下が企てられたことは何の問題もなく成し遂げられるでしょう。」

この祭司たちの助言が実行されると、アンドリアヌスは皇帝にこう言った。

「陛下、撤去された三脚台を再び溶かし直し、そこから、陛下が処刑されたキリスト教の指導者たちに似た五体の裸の乙女の像を作り、彼女たちを侮辱し冒涜するために、これらの像を陛下の皇帝浴場の入り口の前に設置させてください。」

トラヤヌスは直ちにこれに同意を示し、像は制作された。それらが指定された場所に設置されると、トラヤヌスは夢の中で、楽園で草を食む五匹の清らかな子羊と、それらを牧する恐ろしい羊飼いを見、その羊飼いは彼にこう言った。

「おお、最も不法で不敬虔な王よ！　あなたが侮辱のために展示しようと企てた者たちの像を、善良で慈悲深い羊飼いがあなたから奪い取り、この場所に安置した。やがて、あなたの娘である清らかな子羊ドロシダも、この地へやって来るだろう。」

[2544] ゼウスとラトナの息子であるアポロン、あるいはフェブスは、ギリシャ・ローマの異教の神々の中で最も崇敬された神の一人であった。彼は太陽と知性の啓蒙の神として、また秩序と社会の繁栄の神として崇められていた。

目を覚ますと、不敬で無法なトラヤヌスは激怒した。聖なる殉教の乙女たちが死後もなお彼の企みを恥じ入らせたからである。彼は、町の対極にある二か所に炉を築き、毎日火を焚き続けさせ、その上に、彼の王命を表し、次のような内容を記した碑文を刻ませた。

「ガリラヤの者たちよ、[2545] 、十字架にかけられた方を崇拝する者たちよ、あなたがたは数多の苦しみから、我々は労苦から解放されるため、神々に犠牲を捧げよ。もしそれを望まないならば、あなたがた一人ひとりが、自らの意思で、望む方法により、この炉に身を投じよ。」

皇帝からそのような命令が出され、キリストへの信仰と愛ゆえにキリスト教徒たちが自ら炉に身を投じているという噂が聖ドロシダに届くと、彼女は天を仰ぎ見て、こう言った。

「主よ、イエス・キリストよ、　神の子よ、もし私を救い、不義なる父トラヤヌスの狂信的な神崇拝から逃れさせるのが御心であるならば、どうかあなたご自身が、私を不法なアンドリアヌスとの結婚から解放し、すでに御あなたへの畏れを私に確かなものにしてくれた五人の導き手たちが留まっている天へと昇らせてください。　どうか、私を守っている者たちを深い眠りに誘い、私がここから逃げ出せるようにしてください。

こう言い終えると、聖ドロシダは王としての威厳の象徴を身から外し、誰にも気づかれることなく静かに監禁の場から抜け出しました。炉の一つに身を投じようと歩みながら、彼女は心の中でこう考え、独り言を呟きました。

「結婚の衣装（すなわち、洗礼を受けていないこと）を身にまとわずに、どうして神のもとへ行けるだろうか。私は不浄なのだから。」　しかし、万王の王、主イエス・キリストよ、あなたのために私は王としての地位を捨てました。どうか、あなたの御国において、たとえ門番であってもよいのですから、私をその地位にふさわしい者と認めてください。どうか、あなたご自身が聖霊によって私を洗礼してください。

そう言い終えると、聖ドロシダは、自身の宝物の中から持ち出したミロを取り出し、それですべての体の部位に油を塗った。そして、道沿いに流れていた小川に入り、自らに洗礼を授けながら、次のように宣言した。

「神のしもべドロシダは、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けます。」

その後、厳しい断食に身を捧げ、彼女は七日間身を隠していた。その間、数人のキリスト教徒が彼女を見つけ、彼女の語った話から、前述のすべてを知ることとなった。洗礼を受けてから八日目、聖なる殉教者は祈りを捧げた後、以前から心に決めていたことを実行し、こうして主のもとへ旅立った。

4月5日

3月23日（旧暦）

聖司祭殉教者ニコンの生涯と殉教

記念日3月23日

カンパニア地方のネアポリス[2546] には、並外れた美貌を誇り、高貴で勇敢な戦士、ニコンという名の男が住んでいた。彼の父はギリシャ人の異教徒であり、息子を偶像崇拝の中で育てたが、ニコ

[2545] ガリラヤ人とは、キリスト教徒を嘲笑してそう呼んだものである。

[2546] カンパニアは、イタリア中部の地方である。その代表的な都市の一つであるナポリは、ナポリ湾の北岸に位置している。この地方で初めて鐘が発明され、教会礼拝書ではその発祥の地から「カンパナ」と呼ばれている。

ンの母はキリスト教徒であり、常に彼にキリストを知ることを教えていた。　主の十字架の力を彼に示しながら、彼女はこう語った。

「愛するわが子よ！もし戦場で危険にさらされることがあれば、頻繁に十字を切って身を守りなさい。そうすれば、捕虜になることを免れるだけでなく、あらゆる傷からも守られるでしょう。矢も、槍も、剣もあなたを襲うことはなく、戦いの最も危険な時でさえ、あなたは無傷でいられるでしょう。」

ある日、ローマの兵士たちが戦場へ向かうことになった。ニコンもまた、自分の部隊と共に赴くことになっていた。ある血みどろの激戦の最中、ニコンは極度の危険にさらされ、死の淵に立たされていた。　多くの味方の兵士が倒れるのを見て、彼自身も敵の武器によって死を覚悟していた。しかし、母の言葉と教えを思い出し、ニコンは天を仰ぎ、十字を切って身を守り、心の底から深い溜息をつきながら、こう言った。

「キリストよ、全能の神よ！今、私に御十字架の力を示してください。これからは、私はあなたのしもべとなり、あなたと、あなたを産まれた御母を崇拝いたします。」

この言葉を口にした後、彼は自分の中に並外れた勇気を覚え、右手に槍を握りしめて突進し、たちまち180人もの勇敢な敵兵を討ち取り、残りの者たちを敗走させたため、誰も彼に抵抗することができなかった。かくして、キリストの十字架の力が彼の上に奇跡的に現れたのである！

その時、ニコンは神を賛美してこう言った。

「キリストの神は偉大なり。御自身の十字架のしるしによって敵を打ち破り、追い払われる！」

ローマ軍全体がニコンに驚き、こう言った。

「神の御手の偉大な奇跡だ！　ニコンのように戦場でこれほど勇敢に戦った兵士を、我々は見たこともなければ、聞いたこともない。」

戦争が終わり、全員がそれぞれの家へ帰散したとき、聖ニコーンもまた自宅へ戻った。神を賛美しつつ、彼は母に、戦場で主キリストが御自身の十字架の力によって彼に成し遂げてくださったことを語った。

母は大きな喜びのうちにこう叫びました。

「主よ、あなたの至聖なる御名を賛美します。あなたはすべての人々が救われ、真理を知るようになることを望んでおられるからです！」　今、あなたのしもべの祈りを聞き入れ、私の息子に、罪の赦しのために私たちに与えられた聖なる洗礼を授けてください。そして、彼があなたの御心を行うことを教え、あなたに喜ばれ、約束された永遠の祝福に与かることができるようにしてください。

ニコンは母に、どうすればキリスト教徒になれるのかと尋ね始めました。母は彼にこう答えました。

「あなたは四十日間断食し、キリスト教の司祭からキリスト教の信仰を学ばなければならない。その後、サタンとそのすべての行いを拒絶し、キリストなる神を信じるならば、聖なる洗礼を受けるにふさわしくなり、真のキリスト教徒、そしてキリストのしもべとなるだろう。」

「主よ、御名あがまれ！」とニコンは答えた。「異教徒や偶像崇拝者、戦士であり続けるよりは、むしろ主のしもべとなるほうがましだ。もはや石やその他のいかなる被造物にも拝むつもりはない。ただ、天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものの創造主である唯一の神を拝むつもりだ。」

母に地面まで頭を下げて礼をした後、ニコンは言った。

「母よ！　私、あなたのしもべのために神に祈ってください。神が私に天使、すなわち良き導き手であり、私の魂と体を守る守護者をお与えくださいますように。その導きのもと、私を聖なる洗礼に導き、私たちの真の神であるキリストの御心を行うことを教えてくれる神のしもべを見つけ、私がキリストの羊の群れに加えられますように。」　ああ、尊き母よ！もしあなたの教えが、私を異教

の迷いから引き離し、真の神を知る道へと導いてくださらなかったならば、私はゲヘナを免れることはできず、神を知らない者たちと共に地獄の苦しみを受けることになっていたでしょう。

そして、「母よ、私のために祈ってください！」という言葉とともに、彼は家を出ようとした。　母は息子の手を掴み、聖なる洗礼を受けた後に自分のもとに戻り、自分を葬ってほしいと懇願した。彼女はすでに死が近づいているのを感じていたからだ。それから、彼のために祈りを捧げた後、彼女は彼にお金を渡し、何よりも重要なこととして、母としての祝福を授けて送り出し、キリスト教の司祭を探しに行くように言った。　しかし、キリスト教徒となり聖なる洗礼を受けたいと願う者にとって、当時はキリスト教徒への迫害のため、そのような司祭を見つけることは困難だった。すべての司祭やキリスト教の指導者たちは、砂漠や山中に身を隠していたからである。

家を出たニコンは船着き場へ行き、船に乗り込んでコンスタンティノープルへと向かった。

ニコンが去った後、ネアポリスの街では、兵士や将校たちがこの勇敢な戦士を長い間探し回り、ついに彼の母親の家を訪ねて、「息子はどこにいるのか」と尋ねた。彼女は「どこへ行ったのか、私にはわかりません」と答えた。

一方、神の恵みに導かれたニコンは、ヒオスと呼ばれる島[2547] に到着し、そこで高い山に登り、8日間祈りを捧げながら、神に、彼が長年望んでいた聖なる洗礼を授け、聖なる信仰の秘跡を教えてくれるような主のしもべを、どこで見つけられるかを示してくださるよう懇願した。　すると、眠りの中での幻視の中で、聖人の姿をした神の天使がニコンの前に現れた。天使は、先端に十字架の像が刻まれた杖を彼に手渡し、海辺へ向かうよう命じた。　そこへ向かったところ、翌朝、まるで彼を待っていたかのような船を見つけた。というのも、その同じ神の天使が船乗りたちの前に現れ、十字架の像が刻まれた杖を持って山から降りてくるニコンを待つよう命じていたからである。

追い風のおかげで、ニコンは船乗りたちと共に2日後にガノス[2548]　と呼ばれる山にたどり着いた。そこでは、キジケスの司教テオドシウス[2549] が、多くの修道士たちと共に迫害から身を隠していた。彼は修道士たちにとって修道院長であり、父のような存在であった。　神は彼にニコンのことを啓示され、彼は修道士たちを率いて、埠頭へと彼を迎えに出た。その後、彼を自分の洞窟へと導き、説教を行った後、聖三位一体の名において洗礼を授け、キリストの聖なる秘跡を授けた。

聖なる洗礼を受けた後、至福のニコンはその洞窟の教会で暮らし、聖書を学び、修道者の生活を見習い、その柔和さゆえに修道者の衣を授けられた。

兄弟たちのうち数人は、ニコンの謙遜と柔和さ、断食、節制、そして眠ることなく祈りと詩篇の詠唱に徹する徹夜祷の姿を見て、彼を神の天使に例えた。　というのも、彼は労苦に耐え、愛に満ち、断食においては比類なく、学びと読書に飽くことなく、夜の祈りにおいても疲れを知らず、あらゆる修道者の行いにおいて勤勉かつ熱心であったからである。彼は兄弟たちだけでなく、テオドシオス司教自身をも驚嘆させた。

祝福されたニコンがその山で三年を過ごしたとき、司教は神からの啓示を受けた。すなわち、主の天使が夢の中に現れ、こう告げたのである。

「死を迎える前に、あなたが洗礼を授け、修道者の位に就かせたニコンを、あなたの後継者として司教に任命し、あなたの羊の群れを彼に託しなさい。しかし、間もなくこの地を襲うであろう野蛮人の剣によって修道士たちが滅びることのないよう、彼に、皆と共にシチリア地方の南の地へ移住するよう命じなさい。[2550] 」

[2547] ヒオス島は、エーゲ海、あるいはエーゲ諸島の一つで、小アジアの西岸近くに位置している。

[2548] ガノス、あるいはガンは、マルマラ海の北西岸に位置し、フラキア地方の要塞地の一つである。

[2549] キジク地方とキジク市は、小アジアの北西部、マルマラ海の南岸に位置している。

[2550] シチリア地方、あるいはシチリア島は、地中海に浮かぶ大きな島の一つであり、アペニン半島の南に位置し、メッシーナ海峡を隔てて半島から離れている。この島には、世界最大の火山（火を噴く山）であるエトナ山がある。

この幻視の後、テオドシウス司教は、まず聖ニコンを助祭に、次に長老に叙階し、ついに司教に叙任した。そして、190人の修道士を彼に託して、主のもとで息を引き取った。

司教の葬儀を執り行った後、ニコンはすべての修道士たちと共に船に乗り込み、レスボス島[2551]へと向かった。そこでミティリーネの町[2552]に寄港し、2日間滞在した後、ナクソス島[2553]へと船出した。　そこから、神の御心により、22日後にイタリアに到着した。故郷であるナポリに到着すると、彼はそこで健在の聖なる母と再会した。母は彼を見るやいなや、喜びの涙を流して彼の胸に倒れ込み、彼に口づけをした。そして、主に向かって地面にひれ伏して、こう言った。

「主よ、あなたの至聖なる御名を賛美します。あなたが私を導き、天使のような姿で司教の位にある我が子に会わせてくださったことを。そして今、わが主よ、あなたのしもべである私の声に耳を傾け、私の魂をあなたの御手に受け入れてください。」

この祈りを捧げ終えると、その祝福された妻は直ちに主のもとへ息を引き取った。その場に立ち会っていた者たちは皆、神を賛美し、詩篇を唱えながら彼女を尊厳をもって葬った。

ニコンの到着の知らせは街中に広まり、かつて同じ連隊で友人だった兵士たちの中にもそれを知った者がいました。彼らは彼の元を訪れ、その端正な顔立ちを称賛し、人目を避けてこう尋ねました。

「至高者の御名にかけて、お願いだ。なぜ君は戦場であれほどの力と勇気を発揮できたのか、魔法のせいなのか、それとも他の何かのせいなのか、教えてくれ。私たちにも同じようになれるよう教えてほしい。」

「兄弟たちよ！」と聖人は答えた。「信じてほしい。戦場で私を勇敢にしたのは、魔法でも他の何ものでもなく、ただキリストの尊い十字架の助けだけだったのだ。私がそれを身に着けたとき、誰も私に立ち向かうことはできなかった。十字架の印に働く神の力が、すべての敵を打ち負かしたからだ。」

その言葉を聞いた兵士たちは、聖ニコン司教の足元にひれ伏し、こう言った。

「神の聖なる方よ！　私たちを憐れみ、あなたと共に連れて行ってください。戦いであなたを通して敵から救われたように、今、あなたと共に天の御国の共同相続人とならせてください。」

そして直ちに、妻や子供、兄弟、そして自分の家を後にし、その兵士たちは聖ニコンの後を追った。彼らの数は9人であった。

船に乗り込んだ聖ニコンは、彼らと自身の弟子たちを連れてシチリアへと出航し、そこでタウロメニオスの最高峰[2554]に上陸した。 岸に上陸し、かなりの距離を進んだ後、彼らはアシノス川にたどり着いた。その川辺で、ギギアと呼ばれる人里離れた場所に建つ、古びた大きな石造りの浴場を見つけ、そこで定住した。　その場所は非常に美しく人里離れた場所で、土地も耕作に適していた。ブドウ畑や果樹を植え、彼らは　そこで暮らし始めた。聖ニコンはここで、軍務の仲間であった九人の男たちを洗礼し、修道士として剃髪させた。

長い年月が過ぎたが、キリスト教徒への迫害は続いていた。シチリアのイゲモン、クインティアンは、異教徒たちから次のような密告を受けた。「アシノス川沿いに、天の神を崇め、ニコン司教を師とする男たちが住んでいる。彼らは我々の法律に従わず、我々の神々を崇めることを拒んでいる。」

これを聞いた総督は怒りと憤りに満ち、直ちに兵士の一隊を派遣して、彼ら全員を捕らえ、尋問のために自分の元へ連行させた。

その場所に到着すると、兵士たちはこう尋ねた。

[2551] レスボス島は、小アジアの西岸、ミディアの近くにあるエーゲ海、あるいはエーゲ諸島に属する島である。

[2552] ミティリーニは、レスボス島の東側に位置する、同島最大の要塞都市である。

[2553] ナクソス島――エーゲ海、あるいはエーゲ諸島の南に位置する島で、キクラデス諸島の中で最大の島である。

[2554] タウロメニオス山は、シチリア島の東岸に位置する。

「王の法律に従わず、神々を崇拝しないニコンとその仲間たちはどこにいるのか！」

聖ニコンは彼らにこう答えました。

「わが子らよ！　あなたがたがここへ来てくれたことは、よく、実に素晴らしいことだ。なぜなら、わが主キリストが、私と私の友たちを御自身のもとに招いておられるからだ。」

そこで兄弟たちは祈りを捧げ、神に御恵みをもってこの試練に耐えられるよう強めてくださるよう願ったが、兵士たちに強要され、祈りを中断せざるを得なくなり、彼らに護送されて、まるで屠殺場へ連れて行かれる羊のように、イゲモンのもとへ向かった。

道中、私たちの祝福された父ニコンは、次のような言葉で彼らを励ました。

「勇気を奮い起こせ、兄弟たちよ。拷問者を恐れてはならない。なぜなら、我らの戦いは終わりを迎え、天の門が我らに開かれたのだから。　凶暴な拷問者の前でも、キリストの信仰を堅く守り、私たちの良き羊飼いの言葉を心に留め、彼の前で勇敢に語りましょう。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*（マタイ10:28）。

聖人たちが裁きのためにヘゲモンの前に引き出されると、ヘゲモンは彼らを威圧的な眼差しで見つめ、こう語り始めた。

「お前たちは皆、魔術師ニコンの誘惑に惑わされ、不死の神々を崇めず、その法に従わないほどに、これほど空虚で欺瞞に満ちた希望を抱いているのか？」

聖人たちは口を揃えてこう答えた。

「我らはキリスト教徒であり、決して自らの信仰から離れることはない。我らの希望は、この世の虚栄にあるのではなく、天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された主なる神にある。それに対し、お前の神々は、声もなく、耳も聞こえず、感覚もない偶像、すなわち人間の作り物であり、それらに希望を置く者たちは皆、それらに似通った者となるだろう。」

聖人たちの揺るぎない不変の信仰を見て、イゲモンは言った。

「もし私がすぐに彼らを殺すよう命じなければ、彼らは他の多くの人々をも自らの迷いへと引きずり込むかもしれない。」

そこで彼は、まず聖人たちを裸にして地面に引きずり回し、牛の腱で長く容赦なく打ち据えるよう命じた。その後、聖ニコンを除く全員を、彼らが住んでいた川辺の浴場で剣で斬首するよう命じた。そして、彼らは斬首の場へと連行された。

聖なる殉教者たちは、その清らかな頭を剣の下に差し出し、こう語った。

「主よ！　私たちは魂を御手に委ねます。*『しかし、あなたのために、私たちは日々殺され、屠られる羊のように扱われています』*（詩編43:23）。」

こうして、聖ニコンの敬虔な弟子たち199人が斬首された。拷問官の命令により、彼らの遺体は、彼らが住んでいた激しく燃え盛る浴場に投げ込まれ、焼かれた。

尊者ニコンを鎖で縛り上げた拷問官は、彼にどのような最も残酷な拷問を加えるかを考えを巡らせていた。

その夜、牢獄にいる聖人の夢に神の天使が現れ、こう告げた。

「神にあって勇気を奮い起こせ、ニコーンよ、キリストの戦士よ。そして喜びなさい。わが神キリストは、あなたの199人の弟子たちを、芳しい香りの捧げ物として受け入れてくださったからだ。彼らは、天の花婿が安らぐ御殿に入ったのだ。」

天使のこの言葉の後、聖ニコンは、太陽の光よりも輝かしい乙女を目の前に見た。その衣は金とサファイアでできていた[2555]；彼女は両手に、雪のように白い獅子を抱いていた。 その乙女はプシ

[2555] サファイアは宝石の一種であり、さまざまな色があるが、最もよく見られるのは紺碧、空色、青、ヤグルマギク色である。

ミフ川の東岸に立っており、西岸には並外れた背丈の二人の男が立っていた。　彼らの頭は天に届きそうだった。彼らは手に炎の槍を持ち、現れた乙女と次のような会話を交わした。

「なぜ我々は今、天の王からクインティアンとの戦いに派遣されたにもかかわらず、ここで何もしないで立っているのか？　我々は彼を待っているが、彼は来ない。」

光を放つ乙女は彼らにこう言った。

「昨日、クインティアンはキリストの僕である199人の男たちを殺害しました。さらに、彼は悪魔のあらゆる狡猾さを打ち破った彼らの師、ニコンに対して、最も過酷な拷問を企てています。まもなく、彼はあなたがたが彼と戦うために遣わされた場所へやって来るでしょう。」

そう言うと、彼女は両手から一頭の獅子を彼らの方へ放ち、「これを受け取りなさい。この獅子が、拷問者に対する戦いにおいてあなた方を助けてくれるでしょう」と言った。

幻視から目覚めたニコン司教は、大いに喜び、神に賛美を捧げ、神を讃えながら、その幻視をヘロメンという名の従者に語った。ヘロメンは後に、ニコンの生涯と受難を記した。

その少年に見えを語る中で、聖人はクインティアンがまもなく残酷な死を遂げることを予言した。

翌朝、イゲモン・クインティアンは聖ニコンを裁判のために自分の元へ連行するよう命じ、彼にこう尋ねた。

「お前は誰だ、どこから来たのか、どのような信仰を持つ者なのか。その魔術によってこれほど多くの人々を死に至らしめたのだ。見よ、お前の狂気ゆえに、彼らはもはや太陽の輝きも月の光も見ることはできないのだ。」

聖ニコンは彼にこう答えた。

「不信心者よ！　私が誰であり、どのような信仰を持っているかについては、すでに私があなたに告げただけでなく、他の人々もあなたに語ったはずだ。あなたは昨日、自らの不信心の狂気によって殺害した多くの聖人たちから、そのことを何度も聞いているはずだ。」　さて、今、簡潔に言おう。私はキリスト教徒であり、天と地を創造された神を堅く、揺るぎなく信頼している。その神は、お前の非人道的な拷問と甚大な不敬の罪に対し、耐え難い苦痛を味わわせてくださるだろう。

この言葉を聞いて、拷問官は獅子のように唸り声を上げ、聖人を裸にし、手足を四つの車輪に縛り付け、下から火を放つよう命じた。

聖ニコンは、まるで花の上にいるかのように、赤く燃え盛る炭の上に横たわり、神にこう賛美を捧げた。

「主よ、あなたは私の支え、私の避難所であり、私に怒りを向ける敵から私を救い出してくださる方です（詩編17:3）。」

使用人たちは拷問者に言った。

「殿、イゲモン！我々は疲れ果てました。いくら火を燃やし、いくらニコンを焼いても、彼には何の害も及ばないのです。」

この拷問を中止したイゲモンは、聖人を速足の馬に縛り付け、地面を引きずり回して引き裂くよう命じた。　しかし、馬に縛り付けられた聖人は、右手を馬たちに向けて伸ばし、十字の印を切った。すると馬たちはたちまち羊のように従順になり、使用人たちがいくら鞭で打ったり、手綱や鞍で強要したりしても、その場に釘付けになったかのように微動だにせず立ち尽くした。

これを見た拷問官は激怒し、馬の脚の腱を切るよう命じたが、神の御心により、馬たちはかつてバラムのロバがそうであったように、突然人間の声で語り出した。*「『私たちの神は天におられ、御心のままにすべてを行われる』（詩編113:11）。　聖ニコンのために、私たちも死を受け入れる」*。

そこで、イゲモンは殉教者を鉄の鎖で縛り、高い山から深い渓谷へと突き落とすよう命じた。しかし、それでも殉教者は無傷のままであった。神の御使いが落下中に彼を守り、鎖を解いて渓谷か

ら連れ出したのである。　聖人は、健やかで無傷のまま、再び拷問官の裁きの前に現れた。彼を見た拷問官は恐怖に震え、その後こう言った。

「ニコンよ！　我らの神々が、いかに深くあなたを気遣っていることか！　神々があなたを慈しみ、あなたの肉体を滅ぼそうとはしないことが、お分かりにならないのか？　さあ、神々の慈悲を知りなさい。神々に犠牲を捧げ、神々の友となりなさい。」

聖人はこう答えた。

「お前にも、お前の神々にも、そして彼らに希望を寄せる者すべてに、破門の呪いあれ。」

そこで、イゲモンは聖人の顔を石で打ち、鉗子で舌を引き出し、それを切り落とすよう命じた。その後、聖人を、彼が弟子たちと共に暮らしていたギギアと呼ばれる場所へ連行し、そこで首を刎ねた。 こうして、聖殉教者ニコンは、 アシノス川沿いのペヴゴの木の下[2556] 、デキア王の治世[2557] において、首を刎ねられた。その遺体は埋葬されることなく放置され、獣や鳥の餌食となった。

イゲモン・クインティアンが聖ニコンを斬首刑に処したその日、彼自身はパノルムス[2558] へと向かい、その直前に拷問の末に殉教させた聖アガフィアの財産を奪おうとしていた。そして、彼が前述のプシミフ川を渡っていたとき、渡し船に乗っていた馬たちが突然暴れ出した。　一頭は彼に飛びかかり、その顔を歯で噛みつき、顔を歪ませた。もう一頭は激しく踏みつけ、彼を川に突き落とした。こうして、その忌まわしい男は、聖ニコンの預言通り、苦しみの中でその不敬虔な生涯を終え、溺死した。

殉教者の尊い遺体が斬首された場所に埋葬されずに横たわっていたとき、悪霊に取り憑かれたある羊飼いがその場所を通りかかり、聖人の遺体を見つけると、たちまち顔を地面に伏せた。それは、聖人の力によって追い出された不浄な霊が、彼を地面に倒し、大声で叫びながら彼から飛び出したからである。「ああ、悲しや、悲しや、ニコノフの御前からどこへ逃げればよいのか！」

癒やされた羊飼いは、その地の住民たちにこの奇跡を伝えに行った。メッシーナ市の司教[2559] は、そのことを知ると、聖職者たちと共に、多くの苦難を経た聖殉教者の遺体を探しに出かけ、見つけるとそれを運び出した。　また、彼は浴場の中で、火の被害を受けず無傷のまま残されていた聖なる弟子たちの遺体も発見し、彼らの師であるニコノスと共に、キリスト・私たちの神の栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美されるその有名な場所に、彼ら全員を尊厳をもって埋葬した。アーメン。

ペチェルスク修道院のイグメン、我らの尊き父ニコンの生涯

記念日：3月23日

主がロシアに修道生活の豊かな枝を植えようとお考えになったとき、主は、他の誰よりも先に、洞窟で修行に励んだロシア修道生活の巧みで勤勉な先駆者である聖アントニオのもとへ、敬虔なるニコンを導かれました。彼は、聖アントニオにとって、修行の道において良き協力者でした。　修道徳の段階を熱心に歩み、あらゆる点で師に倣った尊者ニコンは、修道士たちのふさわしい指導者であり、断食の生活という精神的な園へと彼らを導く信頼できる導き手であることを示した。　アンソニーのもとには、天使のような生き方を志す人々が訪れてきたが、彼は自ら彼らに徳について教え、聖ニコーンには彼らの剃髪を行うよう命じた。　この二人の修行者の行いには、ある種のモーセとアロ

[2556] ペヴゴの木、あるいはペヴグは、私たちの松やトウヒに似た針葉樹の一種である。

[2557] デキウス――ローマ皇帝で、キリスト教徒を激しく迫害した人物。249年から251年まで在位した。

[2558] パノルムス――現在のパレルモ市。シチリア島の北西海岸に位置する。

[2559] メッシーナ――シチリア島における極めて重要な都市で、同島とイタリア本土を隔てる海峡に面し、美しい景観に恵まれ、オレンジやレモンの木が豊かに生い茂っている。

ンの類似性を見出すことができた。というのも、聖アントニオは聖アトス山から律法をもたらした[2560] ――まるでモーセがシナイ山からそうであったように――一方、聖ニコーンは、聖職の位に就くアロンのように、アントニオの命に従って行動したからである。　ニコンはすべての務めを謙虚に遂行し、喜びだけでなく、苦難も忍耐強く耐え忍び、すべてについて神に感謝した。彼は、まもなくロシアにおける修道生活の偉大な指導者となることとなった、私たちの聖なる父テオドシウス（　）を剃髪させたとき、大きな霊的な喜びを授かった。　また、著名なボヤリンである至福のヴァルラアムや、公爵の全家政を統括し、公爵の寵愛を受けていた至福のエフレム（宦官）に修道衣を授けた際も、彼は心から喜びを感じた。　しかし、これらの出家者たちのために、彼は少なからぬ苦難も味わった。というのも、彼らの出家を知ったイジアスラフ公[2561] は、聖者たちに激しく怒り、そのうちのひとり、すなわち出家式を執り行った者を直ちに自分の元へ連れてくるよう命じたからである。家来たちは直ちに駆けつけ、至福のニコンを公の元に連れてきた。

聖人を怒りの眼差しで見つめながら、公は尋ねた。

「私の命令もなく、ボヤリンと宦官に剃髪させたのはお前か？」

聖者ニコンは勇気をもって答えた。

「私は、彼らをそのような偉業へと召された天の王イエス・キリストの御命により、神の恵みによって彼らに修道衣を着せたのです。」

公爵はさらに激怒し、こう言った。

「彼らを説得して家に戻らせろ。さもなくば、お前と共にある者たちを流刑に送り、お前たちの洞窟を掘り崩すよう命じるぞ。」

至福のニコンはこう答えた。

「殿！　お望みのままになさってください！　しかし、私が天の王から兵士たちを引き離すなど、あってはならないことです。」

その後、聖アントニオと彼と共にいた者たちは、公爵の怒りと、至福のニコンを非難する言葉ゆえに、別の地域へ移るつもりで洞窟を出た。

しかし、ある少年がこれを公妃に告げた。公妃は、父であるボレスラフ・勇敢王[2562] が、モーセ・ウグリンに修道服を着せた修道士たちを追放したために、彼女の故郷であるリャフの地[2563] に神の怒りが降りかかったことを公に思い起こさせ、こう言った。

[2560] アフォン山（アフォン）、ギリシャ語でアギオス・オロス（聖なる山）は、エーゲ海に突き出た細長い山岳半島であり、ギリシャ正教の東方における修道生活の中心地として知られている。この地での修道生活は古代に始まったが、シリアやパレスチナよりは若干遅れてのことだった。　ロシア正教会にとって、アフォンは17世紀までは大きな意義を持っていた。ロシア修道生活の父である聖アントニオスがここで出家し、聖テオドシオスが自身の（ペチェルスク）修道院のためにここからストゥディオス修道院の規則を取り入れ、その後、年代記作者の言葉によれば、他の修道院にも広まった。また、この地の豊富な修道院図書館では、アフォンに赴いたロシアの修道士たち（例えば、聖ニール・ソルスキー）が、当時としては最も幅広い宗教教育を受けていた。　正教会の東方において最も崇敬される聖地の一つとして、アトス山には毎年、ロシア、バルカン半島、およびトルコのアジア領から、もっぱら男性のみ（女性はこの半島への立ち入りが禁じられている）の何千人もの巡礼者が訪れている。　深い峡谷や岩場を除いて、山のほぼ全域が豊かな植生に覆われている。ここには美しい木々が育ち、その中にはレモン、オレンジ、洋ナシなどの果樹も含まれる。　広大な畑には多種多様な品種のブドウが植えられており、アトス山の修道者たちに十分な量の素晴らしいワインを供給しているほか、ナッツ類、栗、オリーブの木が山全体に豊富に点在している。　現在、アフォンには20の大きな修道院、いくつかのスキート、そして700に及ぶギリシャ、ロシア、モルドバ、ブルガリアなどの修道士たちが暮らす個別の修道室が点在している。

[2561] イジャスラフ・ヤロスラヴィチは、大公ヤロスラフ・ムドリーの息子であり、聖使徒同等の公ウラジーミルの孫で、1054年から1068年までキエフで統治した。

[2562] ボレスワフ1世（勇敢王）、ポーランド王。992年から1025年まで在位した。

[2563] リャホフの地、すなわちポーランド人の地。

「お聞きください、殿。どうかお怒りにならないでください。あなたの国でも、同じような修道士たちが追放され、彼らのために多くの苦難を強いられました。殿、あなたの領地でも同じことが起こらないよう、どうかお気をつけください。」

これを聞いた公爵は、神の怒りを恐れ、聖人を解放して洞窟へ戻るよう命じた。同時に、洞窟を離れた者たちに対しても、洞窟へ戻るよう懇願する使者を送った。　そして、三日が過ぎた後、公爵の願いを受け入れて、彼らは洞窟に戻った。これは、聖アントニオの伝記にも記されている通りである。

このような災難の後、私たちの尊い父ニコンは洞窟で厳しい生活を送った。断食と祈りによって、彼は悪霊に対して多くの勝利を収め、尊い父アントニオスやテオドシオスと肩を並べる存在であることを示した。彼らは闇の中で輝き、悪魔の闇を追い払う三つの光であった。

洞窟の兄弟たちの数が著しく増えた後、至福のニコンは隠遁し、沈黙を守りたいと願った。聖アントニウスと相談し、聖ミーナ修道院出身のブルガリア人修道士、スヴィャトゴールの[2564]とも話し合った後、彼は後者と共に旅立った。海にたどり着くと、二人は別れた。　コンスタンティノープルへ向かう途中、そのブルガリア人は海の真ん中に島を見つけ、そこに定住した。そこで長年にわたり飢えと寒さに耐えながら暮らし、安らかに息を引き取った。その島は今もなお「ボルガロフ」と呼ばれている。一方、偉大なるニコンは、トゥムタラカン島[2565]へと向かい、町の近くに人の住まない場所を見つけると、そこに定住した。彼は沈黙を守り、怠ることなく神に仕え、労苦に労苦を重ね、その並外れた生き様で人々を驚かせた。　彼の名声は至る所に広まり、町や他の場所から多くの人々が尊者のもとに集まってきた。彼らはまだ信仰に確固としておらず、修道生活についても何も聞いたことがなかったため、彼の生き方に驚嘆した。しかしその後、神に導かれ、修道者の高潔な生き方を継承したいと願った彼らは、尊者ニコーンに剃髪させてくれるよう懇願した。　聖人は彼らを教え導き、出家させ、その地に至聖なる神の母の教会を建立した。そして、神の恵みにより、尊者ニコンの祈りによって、その場所は発展し、ペチェルスク修道院に匹敵する栄えある修道院が築かれたのである。

ロスティスラフ・ヴラディミロヴィチ[2566]、トゥムタラカンの公の死後、私たちの尊い父ニコンは、その国の住民たちから懇願され、チェルニヒフの公スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ[2567]の元へ赴き、彼の息子グレブをトゥムタラカンの王位に就かせるよう頼むことになった。　チェルニゴフの街に到着し、託された使命を無事に果たした後、尊師はキエフの街へ向かい、ペチェールシク修道院の至福のイグメン・フェオドシイのもとを訪れた。　再会すると、二人は共に地面にひれ伏して互いに礼を捧げ、その後抱き合い、長い間会っていなかったため、喜びのあまり大いに涙を流した。その後、聖フェオドシイは、祝福されたニコンに対し、二人が生きている限り自分のそばを離れないでほしいと懇願した。

ニコンは彼にこう約束した。

「私は一旦、自分の修道院の管理に戻りますが、その後、神の御心であれば、また戻ってきます。」

彼はまさにその通りにした。

[2564] スヴィャトゴリスキ、すなわちアフォン山のこと。

[2565] この島はケルチェン海峡の東岸に位置する。

[2566] ロスティスラフ・ウラジーミロヴィチは、ウラジーミル・ヤロスラヴィチの息子であり、トゥムタラカン公であった。11世紀後半に統治した。

[2567] スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ（ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチの息子）――チェルニヒフ公；1054年から1076年まで統治した。

王位についたグレビ・スヴィャトスラヴィチ公[2568] と共にトゥムタラカン島に到着すると、尊者ニコーンは約束通り修道院を管理し、テオドシイのもとへ戻った。ペチェールシキ修道院に着くと、彼は全身全霊を尊者テオドシイに捧げ、喜びをもって彼に従った。　一方、聖テオドシイは彼を深く愛し、まるで自分の父のように思っていた。そのため、自身が修道院を離れる際には、兄弟たちを教え導き、守ってくれるよう、最年長の聖ニコーンに兄弟たちの世話を託した。　また、聖フェオドシオスは、自ら兄弟たちに霊的な言葉を説きながら、書物に精通していた至福のニコンにも、同じことを行うよう命じることがよくあった。　至福のニコンが（その技に長けていたため）本を綴じたり作成したりする際、尊者テオドシウス自身が彼のそばに座り、その作業に必要な本を用意してあげることも度々あった。しかし間もなく、沈黙を守る聖者、尊者ニコンは、再び自分の島へ戻りたいと願うようになった。　ロシアの諸公の間では、スヴィャトスラフが兄のイジャスラフをキエフから追放し、その王位を奪ったことをきっかけに不和が生じた。彼は、この出来事によって引き起こされた動乱に耐えられず、そのような状況下では精神の沈黙を守ることは考えられなかった。　一方、聖テオドシウスは以前と同様に、自分が生きている間は彼を離れないでほしいと懇願した。しかし、至福のニコンは（騒乱に耐えられず、また隠遁生活に慣れていたため）、許しを請うと、二人の修道士を伴ってその地を去り、そこで数年間、いつものように修行に励んだ。

聖テオドシウスが世を去り、聖ステファノスが修道院長に就任した後も、聖ニコスは兄弟愛に駆られて再び聖テオドシウスを訪ねてきた。彼は最愛の友がすでにこの世にいないことを嘆き、残りの生涯をその修道院で過ごすことを決意した。　彼はしばしば聖人の墓を訪れ、そこで悲しみと喜びが入り混じった涙を流した。その涙は、愛する兄弟との別れを嘆く気持ちと、ロシアにおいて、彼、ニコンが自らの手で聖なるアンゲリスの修道服を授けたその人物が、天使に等しい生涯によって輝きを放ったことを神に感謝する気持ちの両方から湧き出たものだった。　聖ステファノのイグメン職の後、修道士たちは、尊者テオドシウス自身も彼から修道服を授かったことから、ニコンを全員の中で最年長とみなして、神の御心と全員の合意により、生活においてアントニウスとテオドシウスの両父に等しい人物として、彼をイグメンに選出した。　修道士たちは、彼の中にその二人の姿を見出し、あらゆる事において快く彼に従い、父であり導き手として彼を敬った。　善を憎む敵である悪魔は、この聖なる方に対しても、また至福の修道院長ステファノに対しても、神から託された羊の群れの魂を顧みる働きに幾度となく妨害を仕掛け、兄弟たちを彼に対する憎悪で扇動しようとしたが、決してその企ては成功せず、恥をかかされ、　その闇は、尊者ニコンの善行の光を覆い隠すことはできなかった。

福者ニコン修道院長は、自らの信徒たちにとって徳の模範となり、神に深く愛されたため、その在任中に、神によって創られた聖ペチェールスカヤ教会が聖なるイコンによって奇跡的に飾られたのである。　というのも、この至福の建設者の地上の祈りに、彼の友人である聖アントニオスと聖テオドシオスが天上の祈りを添え、コンスタンティノープルからイコン画家たちを彼のもとに送り、その報酬として金を与えたからである。　尊者イグメン・ニコンは、そのイコン画家たちに、10年前に亡くなった愛する友人である尊者アントニウスとテオドシウスの姿を見せると、彼らは即座に、自分たちの前に現れた者たちこそが、彼らを雇い、彼のもとへ送り込んだ であることを見抜いた。 その際、彼らは他の驚くべき奇跡についても語った。例えば、彼らが帰ろうとしたとき、ペチェルスカヤの聖なる教会と至聖なる聖母マリアのイコンが現れ、そこから「戻ってはならない」という禁じの声を聞いたこと、また、自分たちは流れに乗って下流へ進もうとしていたにもかかわらず、奇跡的に流れに逆らって山の方へと上流へ流されていったことなどである。　このように奇跡的な方法でやってきたイコン画家たちは、聖ニコンの熱意と祈りに支えられ、ペチェールスカヤ聖堂の装飾に熱心に取

[2568] グレブ・スヴィャトスラヴォヴィチは、スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチの長男であり、ノヴゴロド公であった。1067年から1077年まで統治した。

り組み始めた。その際、再び数多くの奇跡が起こった。　というのも、聖所にある至聖なる聖母マリアのイコンそのものが、奇跡的に「ムシエ」として現れたからである[2569]。そして、その口から鳩が飛び出した。これについては、ペチェルスク教会に関する詳細な伝承[2570]に記されている。これらすべては、聖なる父アントニウスとフェオドシイの天上の祈り、そして地上の至福のイグメン・ニコンの祈りによるものであった。　その後、永遠に記憶されるイグメン、我らの尊い父ニコンもまた、その天使に等しい生涯における様々な功績をもってペチェールスク修道院を輝かせ、長きにわたる労苦の末、世界の創造から6596年目、キリストの降誕から1088年目の夏に、　キエフ大公ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチ[2571]の治世下であった。そして、その遺体は同じペチェールスク修道院内、彼にとって故郷とも言える洞窟に安置され、今なおその聖遺物が朽ちることなく、彼の聖性を証し続けている。その聖性は、死後も奇跡的にこの聖なる修道院を飾り立てている。　また、その霊は、言葉に尽くせぬ神の御顔を仰ぐために、同じ志を持つ友である聖アントニオスと聖テオドシオスと共に、天の住まいに移り住みました。もはや像を通してではなく、顔と顔を合わせて（Iコリント13:12）、そしてそこでは、真実の栄光に照らされ、彼らは三つの灯火のように、三位一体の神の御座の前に立ち、父として、私たち、すなわち彼らの子供たちのために祈り、私たちが神のために義にかなった生活を送ることで、彼らの恵みと栄光の相続人となるよう願っている。神に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

聖殉教者フィリトスとリディアの記念日

記念日：3月23日

これらの聖なる殉教者たちは、ハドリアヌス帝の治世中に殉教した[2572]。その中、聖フィリト・シンクリティコス[2573]、その妻リディア、そして息子たちのマケドニオスとテオプレピオスはキリスト教徒であり、常に真の神に仕えていた。そのため、彼らは捕らえられ、ハドリアヌスの前に引き出された。尋問の際、皇帝は聖なる殉教者たちの賢明な答えに対抗できず、彼らをイリュリア[2574]の軍司令官アンフィロキオスのもとへ裁判のために送った。　アンフィロキオスは直ちに、彼ら全員を木に吊るし、ナイフでその体を削るよう命じ、その後、彼らもまたキリストを信じるコメンタリシオス・[2575]・クロニドスと共に牢獄に閉じ込められた。夜、聖なる殉教者たちが祈りを捧げ、聖なる賛美歌を歌っていると、天使が現れ、彼らにこれから待ち受ける試練に立ち向かうよう励ました。翌朝、聖者たちは再び拷問官の前に引き出され、彼は彼らにこう言った。

「お前たちには、数多くの苦しみと拷問が待ち受けているぞ！」

[2569] ムシア（ギリシャ語：μουσιου）とは、モザイクのことである。これは、主に大理石製の色とりどりの小石を模様になるように組み合わせて、望みの図柄を作り出す精巧な工芸品を指す。モザイクは、例えば教会の床を敷き詰めるほか、壁の装飾にも用いられ、イコンさえもこの手法で作られることがある。

[2570] 『ミネイ・チェティイ』8月16日の項を参照。

[2571] ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチは、キエフ大公であり、ヤロスラフ1世の息子である。1030年から1093年まで統治し、1077年から大公の地位にあった。

[2572] ローマ皇帝ハドリアヌスは117年から138年まで在位した。彼はキリスト教徒を迫害したが、彼が発布した勅令により、キリスト教徒は形式的な告発に基づき、かつ裁判を経た後にのみ処罰の対象とされた。

[2573] シンクリティックとは、シンクリト（すなわち王の諮問機関）を構成する重要な王の顧問および高官の一人である。

[2574] イリュリアはアドリア海東岸に位置していた。北西はサヴァ川、南東はドラヴァ川に接していた。現在、この地域にはダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、およびアルバニアのごく一部が含まれている。

[2575] コメンタリシウス――刑務所の長であり、裁判における書記官でもあった。被告、とりわけキリスト教の殉教者たちに対する予備調査を行っていた。

その後、彼は銅の釜で油と硫黄を煮立たせ、そこに聖なる殉教者たちを投げ込むよう命じた。しかし、彼らが投げ込まれると、釜はたちまち冷めてしまった。この奇跡に深く感銘を受けたアンフィロキオスは、自らキリストを信じるようになり、釜に入る決心を固めてこう言った。

「主イエス・キリストよ、私をお助けください。」

すると、ある声が彼にこう告げた。

「お前の祈りは聞き届けられた。ここに入りなさい。」

この一連の出来事を知ったハドリアヌスは、怒りと脅しをむき出しにしてローマからイリュリアへ赴き、油で満たされた大釜を七日間加熱し、その後、すべての聖なる殉教者たちをそこに投げ込むよう命じた。しかし、聖人たちが大釜に投げ込まれたとき、彼らは無傷のままだった。　その後、恥をかかされた皇帝はローマへ戻り、聖なる殉教者たちは神に祈りを捧げ、感謝を捧げ、祈りの最中に主のもとへ魂を委ね、主から殉教の冠を授かった。

4月6日

3月24日（旧暦）

聖なる父アルテモン、セレウキアの司教の記念日

3月24日の記念日

福者アルテモンは、ピシディアの[2576] にあるセレウキアの町出身であり、そこで教育を受けた。彼は、キリストの教えによって世界を啓蒙していた聖使徒たちの時代に、敬虔な生活を送っていた。　聖使徒パウロがこの町を訪れた際、アルテモンはすべての市民の中でも、隠れることのできない灯火のように、善行によって際立っていました。　聖使徒パウロは、キリストの信仰に堅く立ち、神の知恵に満ちあふれていた彼を、人々の牧者かつ教師として任命し、ピシディアのセレウキア初代司教として按手した。　至福のアルテモンは、委ねられた羊の群れを善く、また神に喜ばれるように導き、すべての人にとって救いの拠り所となり、未亡人、孤児、貧しい人々にとっては卓越した保護者であり、魂と肉体の両方を癒やす奇跡を行う者であり、生涯を敬虔に、神に喜ばれるように過ごし、大老齢でこの世を去りました。

私たちの尊い父ヤコブ・殉教者の記念日。

記念日：3月24日

不敬虔なギリシャ王レウ・アルメニア人[2577]　が、第7回全地公会議において聖なる教父たちによって呪われた偶像排斥の異端[2578] を再燃させ、聖なるイコンを敬虔に崇敬した多くの人々を拷問で

[2576] *ピシディア*は小アジア南部の州であり、当初はパンフィリアと一体をなしていたが、コンスタンティヌス大帝（306〜337年）の時代に初めてパンフィリアから分離した。ピシディアは過酷で山岳地帯の多い地域であったが、所々には肥沃な土地もあった。　ピシディアの住民は海賊であり、略奪を働いていた。現在、ピシディアにはカラマノフ族という野蛮で強盗的な部族が住んでいる。ピシディアの都市のうち、教会史において特に注目すべきはアンティオキアであり、そこでは聖使徒パウロが福音を宣べ伝えた（使徒言行録13:14–50）。

[2577] レウ5世（アルメニア人）は、ギリシャ系の皇帝であり、813年から820年まで在位した。

[2578] 偶像破壊の異端、あるいは偶像破壊主義とは、8世紀の異端であり、聖なるイコンを認めず、崇拝せず、迫害することを特徴とする。偶像破壊主義の最も熱心な擁護者は、皇帝レウス・イサウリア人（717–741年）とコンスタンティノス・

苦しめたとき、 ——その時、この尊者ヤコブ・殉教者もまた迫害を受けました。彼に関する情報は、尊者テオドロス・ストゥディトス[2579] から得られています。至福のヤコブは、彼の弟子の一人でした。 聖テオドロスが聖なるイコンのゆえに追放された後、彼の弟子たちの多くが拷問にかけられた。至福のヤコブもまた 捕らえられ、あらゆる種類の拷問にさらされた。 やがて不敬虔なレウ・アルメニア人が殺害されると、聖ヤコブは他のキリストの殉教者たちと同様に監禁から解放され、かろうじて生き延びてコンスタンティノープルにある自身のスタディオン修道院に戻ったが、まもなく息を引き取り、ふさわしい形で埋葬された。 彼の死について、師である聖テオドロスの代わりに修道院長職を代行していた至福のイパティオスは、すでに流刑地から戻り、一時的にクリスケントの修道院に滞在していたテオドロスに手紙で知らせた。

聖テオドロスはそれに答えて、次のように書き送った。「わが子よ、我々は、愛する兄弟であり、キリストの殉教者であるヤコブの死の知らせを、心から悲しみつつも、同時に心の喜びをも感じつつ受け取った。 我々は彼を、まるで我が子のように、しかも、私自身の罪ゆえに、その子と呼ぶに値しないような息子として、深く悼んでいる。我々は、主が彼のために用意された永遠の命に彼が到達したことを喜んでいる。彼を聖なる一員として、卓越した装飾として奉仕する我々が喜ぶだけでなく、全教会もまた彼を喜んでいるのだ。 考えてみてください、あなたは彼をどのような人物だと見なしていたのでしょうか? 懺悔者ではないでしょうか、殉教者ではないでしょうか、聖人ではないでしょうか? 彼は肉欲的な衝動に対して勇敢に戦い、貞潔を保って肉体を情欲から守り、その一方で最も質素な食事を摂ることで、肉体を理性ある魂に従わせました。 聖ヤコブは睡眠をほとんど取らなかったため、彼を見た人々には、彼がどうしてまだ健康でいられるのか不思議に思われたほどである。彼は時間が許す限り、長い間、思いを神へと向けることを愛し、その神への思索の中で、心が陶酔するほど深く没頭していた。そして、正気に戻ったとき、そのすべてが彼の中に神への愛を呼び起こした。 私が聴衆に迎合して嘘をついていると誰かが思わないように——私には証人がいる。それは神と、聖ヤコブの師であるヨハネである。彼は、私自身も時に知らなかったような聖ヤコブのことを私に語ってくれたのだ。 これらすべては、禁欲的な生活に身を慣らすための単純な方法に過ぎなかった。しかし、彼が殉教の行いにどれほどの時間を費やし、その行いがどれほど偉大であったかについては、天使たちにも人々にも明らかであった。なんと堅固で尊い心であろうか! 彼は、神の戦士のように、恐れを知らずにその偉業を成し遂げた。 拷問者たちの手下たちは、彼の全身を傷だらけにし、肩や胸も切り裂き、血を流し、体を打ち砕き、地面に放り出した。彼は不平の声を一つも漏らさず、神の御子キリスト、すなわち私たちの神の名において、神に喜ばれる苦難を最後まで耐え抜いた。 なぜなら、その聖なるイコンのために苦しむことは、キリストご自身のために苦しむことだからである。柔和な者たちはこれを聞いて喜び、殉教者を愛する者たちは歓喜し、悪魔は恥じ入り、偶像破壊者たちの大群は散り散りになるように! なぜなら、この聖ヤコブ以外にも、彼らは多くの他のキリストの告白者たち——我々の同胞である者も、そうでない者も（むしろ我々の同胞の方が多い。なぜなら、我々はすべての頭であるイエス・キリストに対して一つの体であるから）——を拷問し、殺害し、飢え死にさせ、その他同様の苦難を課したからである。

コプロニモス（741–775年）であった。 この異端は、787年にニカイアで開催された第7回全地公会議において、タラシオス総主教とイリナ皇后の臨席の下で非難された。

[2579] 聖テオドロス・ストゥディテスは、コンスタンティノープルにあるストゥディオス修道院の院長であった。聖テオドロスは、聖像崇敬のために多くの苦難に耐えた。聖テオドロスの後世には、多くの著作、書簡、カノン、および教会詩歌が残された。 さらに、聖テオドロスは教会規則に重要な補足を加えました。この規則は、ストゥディオス修道院の名にちなんで「ストゥディオス規則」と呼ばれています（聖サヴヴァ・オスヴィャシェンヌイが編纂した「エルサレム規則」とは区別されます）。

これらの耐え難い傷のため、聖ヤコブは全身が麻痺し、最も重い病に蝕まれたその体は、医師の治療に委ねられた。日々死に備えながら、彼は感謝と謙遜の心をもってその生涯を閉じた。　あなたは、彼が自らの死を予言したと書いているが、それは彼の苦難に満ちた功績によるものであった。さらに、彼の葬儀には多くの人々、とりわけ非常に高貴な家柄の人々も参列したと付け加えているが、これらすべては神の測り知れない御心によるものである。なぜなら、もし主の御心にかなわなければ、名もなき（しかし精神においてはそうではない）人物のもとに、これほど多くの人々が集まることはなかっただろうからである。　聖ヤコブは天に召され、同じ苦難を共にした者たちの仲間に加わった。こうして、殉教者と証人の数は増えた。それゆえ、天は喜び、ヤコブの魂を称えている。その祈りによって、私たち兄弟は救われるのだ。彼は、その労苦にふさわしい賜物を受けたのである。

彼の尊い葬儀に参列した者たちは、幸いであり、真に敬虔である。彼らは真の殉教者愛好者であり、その運命が、彼らが敬意を表したその方の運命と同じものであるように。　彼の尊い聖遺物については、神の御心ならば、私が規則に記した通り手配いたします。互いに聖なる口づけを交わしてください。また、この手紙をすべての兄弟たちに読み聞かせてください。大司教兼総主教ニキフォロス様、プロトプレスビテル、イコノム、およびその他の兄弟たちが、皆様に口づけを贈ります。主が皆様と共におられますように。アーメン」。

これが聖テオドロス・ストゥディトスの手紙であり、そこから、このキリストの尊い殉教者ヤコブの生涯と苦難がうかがえる。主が、その祈りによって、私たちをも永遠に御自身の聖徒たちの仲間に加えてくださいますように。アーメン。

ペチェールスク修道院で起こった奇跡の回想。

記念日：3月24日

キエフの二人の高貴な紳士、ヨハネとセルギイは、互いに深い友情で結ばれていた。ある時、彼らは神によって創られたペチェルスクの教会（[2580] ）を訪れ、奇跡を起こす聖母マリアのイコンが太陽よりも明るく輝いているのを見た。この聖なる御前において、彼らは兄弟の盟約を交わした。長い年月が過ぎた。ヨハネは死の床についた。彼はペチェルスクの修道院長である至福のニコンを呼び寄せ、その立会いのもとで自分の財産を貧しい人々に分け与えた。 5歳の息子ザカリアに残しておいた分――銀1,000グリヴナ[2581] と金100グリヴナ――は、セルギイに預けた。そして、友人であり忠実な兄弟であるセルギイに対し、ヨハネは息子ザカリアの世話を任せるよう頼み、息子が成長した際には銀と金を渡すよう求めた。　こうした手配を整えた後、ヨハネはまもなくこの世を去った。ザカリアが十五歳になったとき、彼はセルギウスから自分の銀と金を受け取りたがった。悪魔に誘惑されたセルギウスは、一攫千金を夢見て、魂と肉体の破滅を企てた。彼はその若者にこう答えた。

「お前の父は全財産を神に捧げたのだ。銀や金を求めるなら、神に願え。神が憐れみをお示しになれば、きっと与えてくださるだろう。しかし、私はお前の父にも、お前にも、一銭たりとも借りはない。これはすべてお前の父の仕業だ。その狂気ゆえに財産を施しとしてばら撒き、お前を貧しくみすぼらしいままに置いてしまったのだ。」

これを聞いて、若者は失った金銭を嘆き悲しんだ。その後、彼はセルギウスにこう頼んだ。

[2580] 言うまでもなく、ペチェールスク修道院（キエフ）の最初の修道士たちによって、至聖なる神の母の被昇天を記念して建てられた教会である。

[2581] 「グリヴナ」という言葉は、通常、サンスクリット語の「シェヤ」に由来するとされる。というのも、グリヴナはもともと、装飾品として首に掛けるために用いられた金または銀の鎖を指していたからである（創世記 41:42；　箴言 1:9；シラ書 6:25）。しかしその後、この名称は、時代によって価値の異なった金貨や銀貨を指すようになった。

「もし私の相続財産の半分を私に与えてくれるなら、残りの半分はあなたのものになるでしょう。」

セルギイは、彼の父と彼自身を厳しく非難した。するとザカリアは、3分の1を求め、次に10分の1を求め、やがて自分がすべてを失ったと悟ると、セルギイにこう言った。

「もし君が何も取っていないのなら、ペチェールスカヤ教会に来て、奇跡を起こす聖母マリアのイコンの前で、私に誓ってくれ。そのイコンの前で、君は私の父と兄弟の盟約を結んだのだ。」

セルギイはこれを拒まず、教会へ向かい、至聖なる聖母マリアのイコンの前に立ち、千グリヴナの銀も百グリヴナの金も受け取っていないと誓った。しかし、イコンに口づけをしようとしたとき、彼はイコンに近づくことができなかった。その後、扉から出ようとしたとき、彼は突然叫んだ。

「尊者アントニウスとテオドシウスよ！この邪悪な天使に私を滅ぼさせないでください。そして、私がその支配下にある多くの悪魔を、聖母マリアが私から追い払ってくださるよう、どうか懇願してください。私の部屋にある、器に封印された銀と金を、彼らに持ち去らせてください！」

皆が恐怖に襲われ、それ以来、もはや誰も至聖なる聖母マリアのイコンの前で誓いを立てることを許されなくなった。遣わされた者たちは封印された器を持ち帰り、その中から銀二千グリヴナと金二百グリヴナを見つけた。かくして、慈悲深い報い主である主は、その金を二倍に増やしてくださったのである。　ザカリアは全財産をイグメン・ヨハネの完全な管理下に委ね、自身は修道士となり、聖ペチェール修道院で生涯を閉じた。

この資金をもって、ペチェールスカヤ大聖堂の近くに、洗礼者ヨハネに捧げられた教会が建てられた。　この教会は、その資金の所有者であった貴族ヨハネとその息子ザカリアを記念し、また、キリスト神と、この地でさらに深く崇められている至聖なる聖母マリアの栄光を称えるために建てられた。この地から、彼女の奇跡的な恵みが決して離れることがないように。アーメン。

4月7日

3月25日（旧暦）

至聖なる聖母マリアの受胎告知の説教

3月25日の記念日

時の満ちる時が訪れ、神の受肉によって人類が救われる時が近づいたとき、無形の神を体内に宿し、私たちの救いの業に奉仕するにふさわしい、かくも清く、汚れなく、聖なる処女が現れる必要があった。　そして、そのような処女が現れました。あらゆる清らかさを超える最も清らかな処女、あらゆる知性ある被造物よりも比類なきほどに無垢な処女、あらゆる聖なるものよりも聖なる処女、至聖にして至福の聖母マリア、聖なる義人であり神の父であるヨアキムとアンナの末裔、両親の祈りと献身の結実、王家および司教家の血筋に生まれた娘。　聖なる場所、ソロモンの教会において、御自身こそが神の生ける教会となるべきお方がおられました。神殿の内部、「至聖所」と呼ばれる聖所において、すべての聖人たちの最も聖なる御言葉を産むこととなられたお方がおられました（『至聖なる神の母へのアカフィスト』より）。　そこで、御自身の御国の栄光の高みから、主は御自分のしもべの謙遜に目を留め、すべての民族の中からあらかじめ選ばれた彼女を、御自身の永遠の御言葉の母として選ばれたのである。

聖人たちの信頼できる証言から、大天使による受胎告知の以前から、彼女を通じて神――御言葉――が受肉されることが、神秘的に予告されていたことがわかります。　約十二年間、神殿で過ごした聖母マリアは、絶え間ない神を想う祈りや日々の手仕事だけでなく、聖書の読解にも励み、昼夜

を問わず主の律法を学んでいました。　聖エピファニオスとアンブロシオスは、彼女が並外れた知性を持ち、学ぶことを愛し、聖書の読解に熱心であったと記している。教会史家ゲオルギー・ケドリン（[2582] ）は、彼女が両親の存命中にすでにユダヤ教の書物を深く学んでいたと述べている。彼女はイザヤ書の預言にある次の言葉を頻繁に読んでいた。　*「見よ、処女が身ごもって、男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」*（イザヤ7:14）――これは「神は我らと共におられる」という意味である[2583] ――この言葉を頻繁に読み、彼女は、到来を待ち望まれるメシアに対する熱い愛だけでなく、彼を身ごもり、産む運命にあるその処女に対しても、燃えるような愛を抱くようになった。　その際、彼女は、神の子であるエマヌエル[2584] の母となることの尊さがどれほど大きいか、また、処女が母となるというこの神秘がいかに言葉に尽くしがたいものであるかについても深く思索にふけっていた。　預言によって、メシアの到来の時が近づき、ユダから王笏がすでに取り去られ、ダニエルの七つの週が終わりつつあることを知っていた彼女は、　彼女は、イザヤによって予告されたあの処女が、すでにこの世に生まれなければならないと考えており、心の底からしばしばため息をつき、神が彼女にその処女を見られるよう、そしてもし可能であれば、たとえ最下級のしもべであってもその処女に仕えることができるよう、心の中で祈っていた。

ある日、いつものように真夜中の祈りを捧げ、神にそのような切なる願いを捧げていたとき、突然、上空から並外れた光が彼女を照らし、包み込んだ。その光の中から声が響き、彼女にこう告げた。

「あなたはわが子を産むのだ！」

至聖なるおとめが満たされたその喜び、そして、御自身の創造主である神に感謝を捧げ、地にひれ伏したその心情を、言葉では表現し尽くすことはできません。　かくして、主は*「御自分のしもべのへりくだりを顧みられた」*（ルカ1:48）。神への愛から、メシアの清き母に仕えたいと願った彼女は、自らもまた、メシアの母となり、すべての被造物の主となるにふさわしい者とされたのである。 この啓示は、彼女が12歳の時、婚約の2年前に与えられたものであり、主の昇天に至るまで、彼女はこの神秘を誰にも明かしませんでした。この啓示の後、彼女は処女の胎内に受胎という神秘が宿ることを知り、その神秘の出来事が成就する時を待ち望んでいました。

聖エヴォドの証言[2585] によれば、至聖なる乙女がソロモンの神殿に滞在して11年が満ち、12年目が訪れたとき、またゲオルギー・ケドリンの証言によれば、　彼女が生後14歳になったとき、大司教や司祭たちは、　の慣習に従い、神殿から家へと移り住み、同年代の他の乙女たちと同様に結婚するよう、彼女に命じ始めた。　しかし、彼女は彼らにこう答えた。「私はまだ幼い頃から両親によって唯一の神に捧げられており、神に永遠に処女性を守ることを誓った。それゆえ、死すべき人間と結ばれることは不可能であり、この世の何ものも私を結婚へと強いることはできない。なぜなら、私は自分の処女性を不死の神に捧げたからである。」

司祭たちは、この誓いの知らせに驚いた。というのも、この世で神に永遠に処女性を守ると誓った乙女はこれまで一人もいなかったからであり、彼女はこの点において世界で初めての人物であったからだ。彼らは、どうすべきか互いに相談し始めた。　彼らは、彼女が神殿で暮らし続けることを

[2582] ゲオルギー・ケドリンは、11世紀末から12世紀初頭にかけて活躍したビザンツの著述家である。彼の著作の中でも特に有名なのは『Synopis istorion』である この著作は、ユダヤ人、ローマ人、そしてビザンツの歴史を網羅しているが、所々で他の歴史書、特にヨハネス・スキリテスやゲオルギオス・シンケロスの年代記を転載しているに過ぎないため、特に大きな価値はない。

[2583] この預言は、聖マタイによる福音書（マタイ 1:23）に記されている。

[2584] エマヌエルとは、預言者イザヤ（イザヤ書7:14）によってイエス・キリストに与えられた名である。ヘブライ語からの翻訳によれば、これは「神は我らと共におられる」という意味である。

[2585] 聖エヴォド――七十人の使徒の一人。

望まず、主の神殿の内陣の幕の向こうへ彼女をこれ以上立ち入らせることさえ望まなかった。しかし同時に、神に身を捧げた乙女を夫に嫁がせることも敢えてできず、神を怒らせずに、彼女の独身で乙女としての生活を、いかにして神に喜ばれるように整えればよいか、途方に暮れていた。　彼らは、神に永遠の処女性を誓った乙女を結婚に追い込むことも、成人した乙女を「至聖所」に留めておくことも、どちらも大いなる罪であると考えていた。聖グリゴリオス・ニッサスは、このことについて次のように述べている。　「彼女がまだ幼かった頃、祭司たちは、神殿のサムエルのように彼女を見守っていた。しかし、彼女が成人すると、彼らは互いに相談し合った。神を怒らせないために、今後彼女をどうすべきか、と。」教会史家ニキフォロス・カリスト[2586] は、これについて次のように記している：

「聖なる処女が成人したとき、司祭たちは、彼女をどのように扱うべきかについて協議を行った。彼らは、一度きりで永遠にただ一人の神にのみ属する彼女を結婚させ、婚姻の法に従わせれば、神聖冒涜の罪を犯してしまうのではないかと恐れ、彼女の聖なる肉体を冒涜することにならないよう配慮した。　同時に、彼らは、そのような年齢に達した乙女が聖域に留まることはふさわしくなく、法律もこれを許さず、また聖所にとって不適切であり、相応しくないとも語った。　そこで、彼らは契約の箱の前に進み出て熱心に祈りを捧げたところ、聖ヒエロニムスの記述によれば、主から、その処女が清らかな貞操を保つために、結婚という形と姿の下で彼女を託すことのできる、ふさわしい夫を探すようという答えを得たのである。　そのような男性をどのように見つけるかについて、主の御言葉はこうであった。ダビデの家系と部族の中から未婚の男性を選び出し、彼らの杖を祭壇に置くこと――その杖が芽吹く者こそ、聖なる処女を託されるべきである。　ちょうどその頃、マカベオ家によって定められた神殿の奉献祭が訪れた。祭りの始まりは11月25日、終わりは12月3日であった。そして、近隣の町々から大勢の人々が神殿に集まった。ダビデの家系に属する者たち、すなわち聖母マリアの親族たちも、この祭りに参列した。　ゲオルギー・ケドリンは、主の先駆者の父である聖ザカリアが、ダビデの氏族から十二人の未婚の男性を集め――その中には、義人でありすでに高齢であった聖ヨセフも含まれていた――彼らの杖を取り、聖なる祭壇に一晩置いておき、こう言ったと伝えている。　「主なる神よ、聖母と婚約するにふさわしい男をお示しください！」翌朝、司祭たちがその十二人の男たちと共に神殿に入ると、ヨセフの杖が花を咲かせているのが見つかり、ヒエロニムスが証言するように、その上には天から舞い降りた鳩がとまっていた。　そこで皆は、聖母がヨセフの保護下に委ねられるという神の御心を知った。　ある人々は、婚約をあらゆる手段で避け、自らの処女性を深く重んじていた至聖なるおとめに対しても、あたかも彼女に何らかの侮辱が加えられることのないよう、特別な啓示があったのだと考えている。それは、彼女が親族であり婚約者であるヨセフのもとへ行くことに疑いを抱かないようにするためであった。　義にかなった、神に喜ばれる聖なる夫のもとへ、肉的な夫婦の結合のためではなく、至高の摂理によって定められた彼女の処女性を守り保つために、迷うことなく向かうよう導く特別な啓示が与えられたのです。　婚約が成立すると、聖ヨセフは、処女の純潔を損なうことのない、清く汚れなき共同生活を送るため、主の神殿で大祭司の手から聖母マリアをお迎えしました。　そして、聖ヨセフは彼女の夫であるかのように見えたに過ぎず、実際には、彼女の処女性を貞潔に守る守護者であり、偉大な聖性に満ちた彼女の処女としての生活に仕える者であった」。

婚約者の家に住みながらも、聖母マリアは至聖所での以前の生活様式を変えることはなかった。彼女は、神を想う祈り、聖書の朗読、そして女性らしい手仕事以外に、何にも従事しなかった。

[2586] ニキフォロス・カリストは、14世紀の教会史家であり、コンスタンティノープルのソフィア修道院の修道士であった。彼の傑作である『教会史』（全18巻）は、ビザンツ皇帝フォキスの死（611年）までを網羅している。カリストは1350年に没した。

ヨセフの家は、彼女にとっていわば　祈りの聖堂のようなものであり、そこからどこへも出ることなく、常にその中にひっそりと留まり、断食と沈黙の中で過ごし、家族、すなわちヨセフの娘たちとだけ会話を交わしていた。

ゲオルギー・ケドリンは彼女について次のように語っている。「マリアは婚約者の家において断食に励み、人前に出ることを避け、ヨセフの二人の娘たちと時間を過ごしていた。彼女たちは、必要に迫られた時のみ、それもごく簡潔に、彼女と会話した。」

聖エヴォドの証言によれば、マリアがヨセフの家に滞在して四ヶ月が過ぎた後、神の御言葉の受肉の時が訪れた。それは、全世界が太古の昔から待ち望んでいた時であり、そこに私たちの救いが始まったのである。　そして神は、御自身の御座の最も近くに侍る天の御霊の一人、大天使ガブリエルを遣わし、太古より秘められ、天使たち自身にも知られていなかった神秘について告げ知らせ、聖母マリアに、あらゆる人間の理解や本性を超えた、神の御子の驚くべき受胎を告げ知らせたのである。　この福音について、聖ルカは福音書の中で次のように記している。*「第六の月に、神から天使ガブリエルが遣わされた」*（ルカ1:26）。それは聖ヨハネ・バプティスタの受胎から六ヶ月後のことであり、ザカリアにヨハネの受胎を告げたのと同じ天使が、キリストの受胎について聖母マリアに告げるために遣わされたのである。　また、第六の月に遣わされたのは、母の胎内で六ヶ月を過ごしていた洗礼者ヨハネが、主の母の到来を感じ取り、喜びで跳ね回るためであった。　*「天使ガブリエルは、ガリラヤのナザレという町に遣わされた」*（ルカ1:26）。当時のガリラヤは異教の地であったが、一部にはイスラエル人も住んでいたため、聖書では「*異教のガリラヤ*」（イザヤ9:1）と記されている。　しかし、イスラエル人にとっては、そこは罪深く不信仰な住民が住んでいたため、最も劣った地域と見なされ、軽蔑されていた。それゆえ、ユダヤ人たちはそれを貶めてこう言った。*「キリストがガリラヤから来るはずがない」*（ヨハネ7:41）；　*「調べてみれば、ガリラヤからは預言者は出ないことが分かるだろう」*（ヨハネ7:52）。それゆえ、ガリラヤの町ナザレも、彼らにとっては最も取るに足らない、最も貧しく、最下位の町と見なされ、彼らは「*ナザレから、何か良いものが出るだろうか*」（ヨハネ1:46）と言っていた。

しかし、神の御心に着目しよう。神は、御自身の聖母をどこにお置きたかったのか。　ユダヤの地でもなく、聖なる偉大な都エルサレムでもなく、罪深いと見なされていたガリラヤの、貧しいナザレに置かれたのです。それは、一方では、神が罪人のためにこの世に来られたことを示すためでした。*「わたしは、義人ではなく、罪人を悔い改めに招くために来た」*（ルカ5:32）、そして不信仰な異邦人の中から御自身に忠実な教会を築き上げるためであった。他方では、主が誇り高き者や高貴な者ではなく、謙遜な者、見捨てられた者、卑しめられた者たちに慈愛の眼差しを向けておられることが明らかになるためでもあった。　なぜなら、神である御言葉が天から罪人たちのところへ降りようとなさったとき、御自身の栄光の高みから、どこに罪人がより多くいるかを見渡され、ユダヤでは、自分たちを義人と見なし、人々の前で自分を正当化していたエルサレムの人々を、またガリラヤでは、すべての人から軽蔑され、他の誰よりも罪深いと見なされていた人々を見られたからである。こうして、　いわゆる「聖なるユダヤ」を素通りし、主は、いわゆる「罪深いガリラヤ」へと降りてこられました。また、この偉大で、尊ばれ、栄光に満ちた都市であるエルサレムをも素通りし、主は貧しく、軽蔑されていた小さな町ナザレへと降りてこられました。この世においてご自身のために最も低い場所を選び、さらにはしもべや罪人の姿にまで身を低くされたのです。

ナザレは取るに足らない場所でしたが、主はなんと偉大な恵みにあずかったことでしょう！天にまでそびえ立つイスラエルの他のすべての大きな都市でさえ、これほどの栄誉に浴することはできませんでした。貧しいナザレにおいて――すべての聖なる天使たちの中でも最も高きお方である聖母マリアが、その胎内に、天よりも広大な、計り知れないキリスト・神を宿されたのです。　ここに大天使ガブリエルが遣わされ、ここに聖霊が降り、ここに神の御言葉が受肉された。なぜなら、謙遜の

あるところに、神の栄光が輝くからである。高慢な都市はキリストに受け入れられなかったが、謙遜な都市は御心に適うのである。　名もなき町ナザレでキリストは受胎され、栄光ある都エルサレムで池は十字架にかけられた。小さなベツレヘムで池は生まれ、偉大なエルサレムで池は死に追いやられた。謙遜な者たちの前に主は現れ、高慢な者たちは池を自分たちから追い払う。

聖アンドレイ・クリテスは、大天使が聖母マリアのもとへ遣わされたことについて、次のように語っている。「神は、ご自身の最も高位の天使の一人に、その秘密を告げ知らせるよう命じ、ご自身の威光をもって、あたかもこう告げられるかのようである。『ガブリエルよ！　ガリラヤの町ナザレへ行きなさい。そこには、ヨセフという名の男と婚約している処女マリアが住んでいる」。「行きなさい」と主は言われる。「ナザレへ」。それはなぜだろうか。それは、至高なる方が、茨の生い茂る地から摘み取られた最も芳しい薔薇のように、処女の最も切望される美しさを受け入れられるからである。　「ナザレへ行きなさい」というのは、*「彼はナザレ人と呼ばれる」*という預言が成就するためである（マタイ2:23）。では、誰がナザレ人と呼ばれるのか。それは、後にナタナエルが『神の子』であり『イスラエルの王』と呼ぶお方である。　ガブリエルが遣わされる。彼は以前にも、預言者ダニエルの書（　）に明確に記されているように、神の神秘を告げ知らせるよう命じられていた。「ガリラヤの町ナザレへ行きなさい」と神はガブリエルに告げ、彼はそこへ赴き、かつてエバが失った喜びを処女に告げた。　彼女を戸惑わせないように気をつけなさい。なぜなら、このあなたの挨拶は、悲しみではなく喜びのしるしであり、戸惑いではなく慰めのしるしだからである。そして、人間の性質が神の性質と結びつき、この「唯一の御顔」における結合によって、神と一つとなること以上に、人類にとってこれ以上の喜びがあるだろうか！　神が、女性の胎内に宿るほどに御自身を低くされた姿を見ることに、これほど驚くべきことがあるだろうか。ああ、なんと驚くべき奇跡であろうか！ 天を御座とし、地を御足の台とする神[2587]、天さえもその御身を収めきれない神、御父と共に永遠の御座を分かち合う神が――処女の胎内に収まるのです！　「神が人間の姿をとられ、同時にその神性とも決して分離することなく、また人間の性質が創造主の性質と結びついているのを見る以上に、驚くべきことがあるだろうか。それによって、神は完全かつ全き人間として現れたのである。」

「ガブリエルは――聖アンドレイ・クリツキーは続ける――神の御言葉を聞き、神の御手振りで裏付けられたものの、自身の力をはるかに超える命令を受け、恐れと喜びの間で揺れ動いていた。自分は神の命令を遂行するにふさわしいとは自覚していなかったが、あえてそれに背くこともできず、神の御声に従って聖母のもとへ飛び立ち、ナザレに到着すると、ヨセフの家の入り口で立ち止まった。　戸惑い、心の中で思案しながら、彼はまるでこう論じているかのようだった。「神の命令をどのように果たせばよいのか！　すぐに急いで入るべきか？　しかし、それでは聖母の安らぎを乱してしまうかもしれない。もっとゆっくりと入るべきか？

しかし、そうすれば聖母は私の存在を感じて、隠れようとしてしまうだろう。扉をノックすべきか？　しかし、それは天使にはふさわしくない。なぜなら、無形の者にとって、鍵がかかっていて立ち入りを阻むものなど何もないからだ。扉を開けるべきか？　しかし、私は閉ざされた扉越しにも入ることができる。聖母を名前で呼ぶべきか？　しかし、そうすれば彼女を驚かせてしまうかもしれない。むしろ静かに入り、私を遣わした方が命じられたように、柔和に彼女に挨拶しよう。しかし、聖母に何から話せばよいのか。まず喜びを告げるべきか、それとも、神ご自身が彼女の中に宿られること、聖霊が彼女の上に降りること、そして至高者の力が彼女を覆うことを伝えるべきか！　まずは喜びを告げ、それからその驚くべき神秘について語ろう。彼女の元へ近づき、喜びに満ちてこう呼びかけるのだ。「喜びなさい！　楽しめ！　慰められよ！」　この言葉こそが、乙女との会話の最もふさわしい始まりとなるだろう。　そうすれば、彼女はもはや恐れることもなく、思いに惑わされることもないだろう。それゆえ、私は福音を次のように伝え始める。まず第一に、喜びと歓喜の知らせを彼

[2587] 参照：マタイによる福音書5:34–35。

女に伝える。女王として、このような言葉で彼女を迎えなければならない。なぜなら、これは喜びの出来事であり、歓喜の時であり、平和の王国であり、救いに関する神の御計画であり、慰めの始まりだからである。」

ご覧の通り、大天使はどれほど畏敬の念をもって神の御子のお母様の御許へ赴き、全世界の御母なる方のもとへ近づくにあたり、どれほど深く畏れ敬う心で身構え、また、御母なる方に語りかけるべき、喜びに満ちた受胎告知の言葉をあらかじめ心に巡らせていることか。　ここで、敬虔な注意を向けるに値するのは、大天使が彼女を、家や自室の外でもなく、人々の群れや世俗的な会話が交わされる街の通りでもなく、また家の中で日常の雑事に追われているわけでもなく、沈黙の中で、　祈りと書物の読解に励んでおられたことにも、畏敬の念を持って注目すべきである。これは、「受胎告知」のイコンが、聖母マリアの目の前に開かれた書物が置かれている姿を描き、彼女が絶えず神の書物を読み、神を想うことに専心していたことを示していることからも明らかである。まさにそのとき、天の使者が聖母の前に現れたが、　彼女は、教会の神智ある教父たちが考えるように、預言者イザヤの*「見よ、処女が身ごもる」*（イザヤ7:14）という言葉を心に留め、処女の性質にとっていかに奇妙で異例な受胎と出産が、いつ、どのようにして起こるのかについて思索にふけっていた。　それより以前、上述したゲオルギー・ケドリンの説によれば、彼女は神の啓示によって、他のいかなる処女でもなく、彼女自身がこの神秘の成就に奉仕し、待ち望まれたメシアを産むことになると告げられていた。　この啓示を受けて、彼女は神、すなわち自らの創造主に対するセラフィムのような愛に燃え、神の慈悲を願い、神が御自身の神聖な約束とイザヤの預言を一日も早く成就してくださるよう祈り、燃えるような願いを胸にこう語りかけた。　「いつになったら、私にとってその切望する時が訪れ、私の創造主が、私から人間の肉を受け入れてくださることをお許しになり、天から降りてきて、私の内に宿ってくださるのでしょうか。いつになったら、私の神の母となるという、その祝福された至福に到達できるのでしょうか！　しかし、その境地に達するまでの間、私の涙は昼も夜も私の糧となるでしょう。これほど切望するものを待ち望む者にとって、たとえ短い時間であっても、あまりにも長く感じられるのです。」

聖母マリアがこのように思いを巡らせ、心の奥底で主への燃えるような熱烈な愛を込めて神への祈りを捧げていたとき、突然、使者の大天使ガブリエルが静かに彼女の前に現れた。聖アンドレイ・クリツキーは、このことについて次のように記している。

「大天使ガブリエルは家に入り、聖母が住まわれる内室へと進み、静かに扉に近づき、中へと入り込むと、穏やかな声で彼女と語りかけ始めた。『喜びなさい』と彼は言った。『恵まれた方よ、主はあなたと共におられます！　あなたより先に存在された方が、今やあなたと共にあり、まもなくあなたから生まれ出でられる。全永遠より先に存在された方が、今や時の中に現れるであろう」。なんと計り知れない人間愛であろうか（聖アンドレイは叫ぶ）！なんと測り知れない慈悲であろうか！大天使は単に喜びを告げ知らせるだけでなく、創造主が聖母の内に宿られるという喜びをも告げている。なぜなら、彼の「主はあなたと共におられます！」という言葉は、王の臨在を明らかに示しているからである。王は彼女から人間の肉を受けられたとはいえ、その栄光から微塵も退くことはなかったのだ！　喜びなさい、喜びに満ちた方よ、主はあなたと共におられます！喜びなさい、至聖なる平和の器よ。世界をかくし呪いに定めた悲痛な宣告が、あなたにおいては喜びへと転じているのです！至福への呼びかけ！喜びなさい、まことに祝福された方よ！喜びなさい、最も優れたおとめよ！喜びなさい、天の栄光の美しい神殿よ！　喜びなさい、王の聖別された宮殿よ！喜びなさい、キリストが人類と婚約し、結ばれた宮殿よ！あなたは女たちの中で祝福された方、イザヤが預言者の目で予見し、「預言者」、「処女」、「封印された書」と呼んだ方よ！　まことに、あなたは祝福されています。エゼキエルによって「暁」と「閉ざされた門」と呼ばれ、その門を通って唯一の神が通り抜かれた方よ！　まことに祝福された方よ、あなたは唯一なる方。願いの男ダニエルが山として見、驚くべき

アバククが「日陰のある山」と呼び、そしてあなたの王家の先祖である　ダビデは、預言的に「神の山」「豊かな山」「油注がれた山」「神が住まわれることを喜ばれた山」として讃えた方よ。　あなたは女たちの中で祝福された方です。神の神秘を仰ぎ見たザカリアは、あなたを、聖霊の七つの賜物を象徴する七つの灯火で飾られた、卓越した黄金の燭台として予見しました。　まことに、あなたは畏敬すべきお方です。まるで楽園やエデンの園をその内に宿しているかのよう――キリストは、その言い表せない全能の御力により、あなたの胎内から、生ける水の泉として現れ、四つの福音の泉で全地を潤されたのです。」

天使のそのような挨拶を耳にした聖母は、その言葉に戸惑い、こう考えた。「これは一体、どのような挨拶なのだろうか？」　彼女は戸惑ったが、恐れることはなかった。なぜなら、そのような訪問は全く新しいものでも、予期せぬものでも、突然のものでもなかったからである。天使の出現が彼女を怖がらせることはなかった。というのも、聖なる聖所におられた頃、聖ヘルマンの証言によれば、彼女は毎日天使の手から食事を受け取っていたほど、天使たちとの親しい交わりが彼女にとっては日常的なことだったからである。　しかし、彼女が驚いて戸惑ったのは、天使がこれほど偉大な天の栄光を帯び、これほど喜びに満ちた表情を浮かべ、これほど喜びに満ちた言葉を携えて、これまで一度も彼女の元を訪れたことがなかったからである。彼女はこれらすべて、とりわけ天使の言葉――「*あなたは女のうちで祝福されている！*」（ルカ1:28）と語り、それによって彼女、処女を、女性の一人として数えていたからである。彼女は貞淑な者として戸惑ったが、勇敢な者として恐れることはなく、分別と知恵の霊に満たされていたため、心の中でこう考えた。「これは一体どのような挨拶なのだろうか？天使はこの挨拶で私に何を伝えようとしているのだろうか？　また主の神殿に私を案内してくれるのだろうか、それとも天から何か新しい食物を持ってきてくれたのだろうか？　あるいは、神からの新たな秘密を告げてくれるのだろうか？　何度も考えを巡らせても理解できない私に、『*処女が身ごもって男の子を産む*』（イザヤ7:14）とはどういうことなのか、教えてくれるのだろうか？　この挨拶から、いったい何が起こるというのでしょうか？」すると、天使は彼女にこう言いました。

「恐れるな、マリアよ！　イザヤが預言した処女について、もはや疑うことはない。あなたこそが、エマヌエルを種なしに宿し、彼自身が知っておられるように、言葉に尽くせない方法で彼を産むという、そのような恵みを得た、まさにその処女である。　あなたは、数多くの美徳、とりわけ三つの最も高貴な美徳によって、神の恵みを得たのです。あなたは、深い謙遜によって恵みを得ました。なぜなら、「*わたしは誰に目を留めるか。それは、謙遜で静かな者である*」（イザヤ66:2）と語られる神は、謙遜な者に御自身の恵みを与えるからです。　あなたは、その処女としての清らかさによって恵みを得ました。なぜなら、その本質において最も清らかな神は、至聖にして朽ちることのない処女から生まれようとなさるからです。　あなたは、神に対する燃えるような愛によって、神の恵みを得ました。主はこう言われました。「*わたしを愛する者を、わたしは愛し、わたしを求める者は恵みを見いだす*」（箴言8:17）。そして、あなたが心を尽くして主を愛し、主を求め続けたからこそ、主の御恵みを得ることができ、単なる人間の子ではなく、神の子、至高者の御子、神から神として、世の初めから父より母なしに生まれ、あなた、処女であり母である者からは父なしに生まれ出る御子を産むことになるのです。　その御名は驚くべき、言い表せないものとなるでしょう。あなたは彼に「　」という名――イエス（[2588]）――を授けることになります。これは「救い主」を意味します。なぜなら、彼は全世界を救い、先祖ダビデやヤコブの家系に属するかつてのすべての王たちとは比べものにならないほど、はるかに栄光に満ちて統治するからです。　しかし、その御国は一時的なもので

[2588] イエス（ギリシャ語 Ἰησους – 癒し手、ιαω – 癒す より）は、ヘブライ語のイェホシュア（Iehochua）に由来し、「エホバの助け」、「救い主」を意味する。

はなく、永遠に続き、果てしない世々限りなく続くものである。「どうしてそのようなことがあり得るのでしょうか」とマリアは天使に尋ねた。「私は夫を知らないのに。」

聖母マリアは天使の言葉を信じていた。なぜなら、彼女を満たしていた神の恵みによって、御告げを受けた御子を産むことを知っていたからである。それは、神殿に滞在中に神ご自身から告げられていたことだった。しかし、彼女にはただ一つ分からないことがあった。それは、どのようにしてそれが実現するのか、夫を知らない処女が、どうして子を産むことができるのか、ということだった。それゆえ、彼女は天使にこう尋ねたのです。「これは、どのようにして起こるのでしょうか？」

このことについて論じ、聖グリゴリオス・ニッサスは、彼女の立場に立って、天使にこう語っています。「おお、天使よ！　その誕生そのものの様子を私に告げなさい。そうすれば、あなたは私の心が神の御心を行う準備ができているのを見出すでしょう。なぜなら、私はそのような実を望んでいるが、処女性を損なうことなく望んでいるからです。」

聖アンブロシウスもまた、このことについて次のように論じている。「彼女は天使に*『これはどのようにして起こるのでしょうか』*とよく尋ねた。（ルカ1:34）。なぜなら、彼女は以前、処女が身ごもるとの記述を読んでいたものの、それがどのようにして実現するのかは知らなかったからである。彼女は確かに*『見よ、処女が身ごもる』*という預言の言葉を目にしてはいたが、どのように身ごもるのか――それについては、今まさに受胎告知の際、天使が彼女に告げているのである。

そして天使は、処女に受胎そのもののあり様をも明らかにした。すなわち、この受胎は人間の自然の摂理や通常の順序によるものではなく、超自然的なものであり、「神が望まれるところでは、自然の秩序は打ち破られる」[2589]、この受胎は聖霊の働きによるものであるということである：*「聖霊があなたの上に臨み、至高者の力があなたを覆う」*（ルカ1:35）。

あなたは御腹に御子を受け入れ、御霊があなたの中に、理解しがたい受胎を成し遂げられる。無生物の土からアダムを創造された方が、ましてや、生ける処女から生ける御子を産み出されることは、なおさら可能ではないだろうか。　もし神がアダムの骨から妻を創造することができたのなら、なおさら、処女の胎内で人を創造することもおできになるのではないでしょうか。全能の聖霊は、最も聖なるお方、最も清らかなお胎内において、あなたの肉から、形のない神の御子にふさわしい肉体が神秘的に形作られるようにしてくださいます。　清らかさに封印され、処女性によって守られた門であるあなたを通して、主は、太陽の光がガラスや水晶を通るように通り抜け、その神聖な栄光をもってあなたを聖別し、照らし出されるでしょう。　それゆえ、あなたは完全なる神であり完全なる人である御子を産んだ真の神の母となり、また、御子の誕生前と同様に、誕生の時も、そして誕生後も、朽ちることのない処女であり続けるのです。このことは、聖霊の導きにより、至高者の力があなたの中で成し遂げるのです。　そして、これが真実であることを証明するものとして、あなたの親族であるエリサベトが、若き日から不妊であり、すでに年老いていたにもかかわらず、子を身ごもったという事実が、あなたにとってしるしとなるでしょう。なぜなら、不可能なことを可能にする神の御心は、まさにそのようにあるからです。　なぜなら、人間の間では、汚れなき処女が夫なしに身ごもって産むことも、不妊で年老いた女性が身ごもって産むことも、不可能に思えるからです。しかし、全能の創造主にとっては、すべてが可能なのです。なぜなら、*「神の言葉は決して無力になることはない」*（ルカ1:37）とあります。御心のままに、不妊の老女も身ごもり、あなた、聖母よ、身ごもられるのです。

天使からこの福音を聞いた聖母は、主の御心に従い、神への愛に満ちた御心から、最も深い謙遜をもってこう答えられました。*「私は主のしもべです。御言葉どおりになりますように」*（ルカ1:38）。そしてその瞬間、聖霊の働きによって、彼女の聖なる胎内で、言葉では言い表せない受胎が成し遂げられた。それは肉的な快楽を伴わないものではあったが、霊的な歓喜に満ちたものであった

[2589] 第7声部の教義書より。

。　その時、彼女の乙女の心は、神聖な渇望によってとりわけ強く溶け出し、彼女の霊はセラフィムの愛の炎で燃え上がり、彼女の全精神は、まるで我を忘れたかのように神の中に没入し、神の慈愛に言い表せないほどの喜びを味わっていた。　このように、御霊が至完全な神への愛に、御心が神の御姿を見ることに満たされたこの至福のうちに、神の御子が宿り、*「御言葉は肉となり、私たちの間に住まわれた」*（ヨハネ1:14）という受肉が成し遂げられたのである。

天使は、神の御命により、その福音を告げ終えると、処女の胎内に受肉される御方と、御自身の中に神を宿す処女を、畏敬の念に満ちた崇敬をもって敬い、彼女のもとを離れて、主　――サバオトの御座へと去り、天のすべての軍勢と共に、神の受肉の神秘を称え、測り知れない喜びのうちに、永遠に。アーメン。

トロパリオ、第4調：

本日は、我らの救いの始まりであり、世の初めから秘められていた神秘の顕現である。神の御子、処女の御子が現れ、大天使ガブリエルが恵みの福音を告げ知らせる。それゆえ、我らも彼と共に聖母マリアにこう叫ぼう。「喜びなさい、恵まれた方よ。主はあなたと共におられます。」

コンダク、第8調：

選ばれた勝利の将として、悪から救い出されたことに感謝し、あなたのしもべたちはあなたに賛美を捧げます、聖母よ。しかし、無敵の権威をお持ちであるゆえに、あらゆる苦難から私たちを解放してください。そうすれば、私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、未婚の花嫁よ。」

4月8日

3月26日（旧暦）

聖大天使ガブリエルの祝日[2590]

記念日3月26日

聖母マリアの受胎告知の翌日、教会は古くから、エルサレムの規則および聖サヴァの大修道院の規則に基づき、この喜びの使者を称え、聖大天使ガブリエルの祝祭を特別な日として、特別な賛美歌をもって祝うことを定めてきました。　まことに、私たちの救いの神秘に奉仕し、無原罪の聖母に、神の御言葉が彼女の清らかな胎内に受肉されたという知らせをもたらした方は、特別な称賛に値するお方です。　もし、ある都市に王の慈悲深い言葉を届けた、地上の王の功績ある使者が、その都市のすべての市民から特別な敬意をもって迎え入れられるのであれば、なおさら、天の王の最も尊き使者、　全人類に、私たちの永遠の救いを告げる、限りなく慈愛に満ちた御言葉をもたらして来られた、天使たちの大公を、特別な祝典をもって崇めるべきである。そして、この使者はなんと偉大なことか。彼はかつて、聖ザカリアに自らの尊厳を自ら明かしたのだ。　*「わたしは、神の御前に立つガブリエルである」*（ルカ1:19）、すなわち、他の天使たちよりも神の御座に近い場所に立っているので

[2590] 大天使ガブリエルを称える祝日は、「公会議」の日と呼ばれている。これは、この日にキリスト教徒たちが集まり、聖なる賛美歌で大天使ガブリエルを讃えるからである。

す。地上の王国において、王に最も近い高官は、王の秘密をより深く知り、王から遠く離れた他の高官たちよりも比類なく高い地位にあるのと同様に、 ――これと同様に、天の御国においても、神の御前により近く立ち、神の奥義をより明瞭に仰ぎ見る聖なる天使たちは、より低い位階の他の天使たちよりも、より大きな栄誉と栄光に輝いているのである。

聖書は、神の近づきがたい栄光の前には、常に七人の最高位の天使、すなわち天使たちの首長たちが侍っていると伝えている。『トビト書』には、若きトビアの同行者が、自分は神の御前に侍る七人の聖なる天使の一人であると明かしたと記されている。 また、聖ヨハネ・テオロゴスは『ヨハネの黙示録』の中で、これらの七人の統率する天使たちについて言及し、次のように述べている。「*今おられ、かつておられ、また来られる方、およびその御座の前にいる七人の御霊から、あなたがたに恵みと平安がありますように*」（黙示録1:4）。 この七人のうちには、数で二番目であり、ミカエルに次いで第一位とされるガブリエルも含まれている。彼らの名前は、ミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエル、セラフィエル、イェグディエル、バラキエルの順である。

もし誰かが、「なぜ神は、御自身の天使たちの中で位階が最も高いミカエルではなく、その次に位置するガブリエルを聖母マリアのもとへ遣わされたのか」と問うならば、この七人の至高の天使たちは皆、その尊厳において等しく、ミカエルが彼らの中で第一であるのは単に順序上のことであると知っておくべきである。彼ら一人ひとりは、それぞれ独自の務めを担っている。 ミカエルは敵を打ち破る者、ガブリエルは神の奥義の伝達者、ラファエルは人間の病を癒す医者、ウリエルは神の炎の輝きとして、 暗闇に包まれた者たちを照らす者、セラフィエルは祈りの者であり、常に人々のために神に祈り、人々を祈りに駆り立てる者、 イェグディイルは神を賛美する者であり、その務めは、神の栄光のために何かに励む人々を力づけ、彼らの功績に対する報いを執り成すことにある。バラキイルは神の祝福を授ける者であり、私たちのために神の恵みを請い求める執り成し手である。

したがって、ミカエルは、その務めが別の性質――常に抜刀した剣を携え、敵に立ち向かい、彼らを追い払うこと――であるため、聖母マリアに福音を伝えるために遣わされたのではない。 一方、ガブリエルが遣わされたのは、神の神秘を告げ知らせることこそが彼の務めにふさわしいからである。彼は聖預言者ダニエルに、神の民がバビロンの捕囚から解放されること、そしてメシアの到来の時について告げた。また、聖ザカリアには、不妊の母から洗礼者ヨハネが生まれることを告げたのである。 また、彼は荒野で『創世記』を執筆していた聖預言者モーセを導き、世界の創造に遡る最初の世代や年代に関する神の啓示を彼に伝えた。 敬虔な伝承によれば、彼は聖なる義人ヨアキムとアンナに、聖母マリアの受胎について福音を告げ、受胎と誕生の瞬間から、無原罪の御子に守護天使として仕え、至聖所へ彼女への糧を運んだ。 それゆえ、彼は聖母に神の御子の受胎についても告げ知らせたのである。さらに、ガブリエルが福音を伝えるために遣わされたのは、その名そのものに福音の主題が込められているからでもある。「ガブリエル」という名は「神の要塞」、また「神なる男」を意味する。 つまり、その名そのものが、神は強きお方であり、聖母の胎内で主が完全な人間（男性）として形作られること、すなわち、完全な神であり完全な人間であることを示している――それは肉体の年齢による完全さではなく、強さと知性による完全さである。 母の胎内で受胎した他の赤ん坊たちは、何も理解しておらず、彼らには何の力もありません。それとは対照的に、 至福の聖母マリアの処女の胎内に宿った幼子は、受胎のその瞬間から、測り知れない知恵と打ち勝てない強さを備えており、それゆえ、小さな体でありながらも完全な人であった。これを予見して、預言者はこう語っている。「*私は預言者の女のもとへ行き、彼女は身ごもって男の子を産んだ。 主は私に言われた。『その子を「マゲル・シェラル・ハシュ・バズ」と名付けよ。この子が「父よ、母よ」と口にする前に、ダマスコの富とサマリアの戦利品を[手中に収める]からである』*」（イザヤ書8:3–4）。これは、まだ話すことのできない幼子が、すでに敵を打ち負かす偉大な力と強さを備えていることを意味する。このことを象徴するのが、ガブリエルという名そのものであり、その意味は「神の男、力

強い神」である。そしてこの神は、受胎告知のまさにその瞬間、聖霊の導きによって、朽ちることのない処女の胎内に宿られたのである。　コンスタンティノープル総主教聖プロクルスは、このことについて次のように論じている。「天使の名そのものが、その意味において驚くべきものである。なぜなら、聖母マリアに受胎告知を行った天使はガブリエルと呼ばれるからである。この名によって、彼はこの世に来られる神人（神であり人である方）を予告し、その到来を象徴したのである。ガブリエルとは、　『力強い者』、あるいは『神なる人』を意味し、これは『ガヴィル』という語に由来する。ガヴィルとは『力強い』あるいは『神』を意味するが、この二つの意味を併せると、この言葉は『神なる人』を意味する。古くから、エレミヤは次のように語ってこれを予告していた。*「主は地上で新しいことをなされる。妻が夫を救う」*　（エレミヤ31:22）。このように、この神の使者は、その名の意味においても、その奉仕の性質においても、そして何よりも、太古の昔から秘められ、天使たちにも知られていなかったあの神秘――神が彼に最初に啓示し、彼が聖母マリアに伝えたもの――において、極めて高貴な存在である。　そして、神の受肉というこの神秘がどれほど荘厳であり、ガブリエルを通じて以前に聖なる預言者たちに啓示された他の神秘よりもどれほど高きものであるかによって、彼はそれ以来、天使たちの群れの中で、神の最も内奥にして知られざる神秘を最も間近に目撃した者として、彼らから崇敬されるという、より大きな栄誉に浴することとなったのである」。

教会の教師たち、とりわけディオニシオス・アレオパゴス[2591] は、七人の至高の天使たちについて、彼らが常に神の御傍に絶えず侍っている、と一致して述べている。他の天使たちは様々な奉仕のために遣わされるが、これら七人は神に最も近い者として、常に神の御座の傍らに留まっている。神の至高の神秘を告げ知らせるため、また神のより大きな力を現すために、彼らもまた遣わされるのである。聖使徒パウロが言うように、*「彼らは皆、奉仕のために遣わされた奉仕の霊ではないのか？」*（ヘブライ人への手紙1:14）。しかし、キリストの受肉という、知ることのできない、理解し難い、言葉に尽くせない神秘以上に、神の力の現れや、より高き神秘が他にあるだろうか。　それゆえ、このような偉大な神秘を告げ知らせるためには、神の御座の偉大で、決して離れることのない侍者であり、神の神秘を最も間近で目撃する者である大天使　が遣わされるのがふさわしかった。聖ガブリエルこそがまさにその者であった。

また、三つの階層からなる九つの天使の位階のうち、聖ガブリエルがどの位階に属するかという点も注目に値する。ある人々は、彼が第三の、すなわち最下位の階層に位置し、支配者たちと天使たちの中間に位置する中位の位階、すなわち大天使の位階の長であり、神の偉大な御業を告げ知らせるために定められた存在であると考えている。　このように考えられる理由の一つは、彼が「大天使」と呼ばれていること、もう一つは、聖ディオニシオスが述べているように、神の御座の近くにいる最高位の天使たちは奉仕に遣わされるのではなく、その任務に割り当てられた下位の天使たちだけが遣わされるからである。　しかし、聖ガブリエルはセラフィムの最も高位の階級に属しており、神の御心のそれほど重要ではない事柄のために遣わされるのではなく、神の受肉の神秘のような、神の最も偉大な神秘のみを告げ知らせるために遣わされるという見解の方がより確かなものである。　また、彼が「大天使」と呼ばれるのは、聖母マリアに伝えたその喜びに満ちた福音を由来とするものであり、それによって彼は聖母のみならず、あらゆる被造物、地上のものだけでなく天上のものまでも喜びで満たした。聖ダマスコスは次のように謳っている：　「ただ一つの祝賀が両者に輝きを放った、

[2591] ディオニシオス・アレオパゴイテスは、アテネの名門出身で、アテネのアレオパゴスの議員であり、聖使徒パウロの説教によってキリスト教に改宗した人物である。　ディオニシオス・アレオパゴスの著作のうち、特に注目すべきものは、『Περι της ουρανιας ιεραρχιας』（『天上の階層について』）と『Περι της εκκλησιατικης ιεραρχιας...』（『教会の階層について』）である。

無形の者があなたに喜びをもたらしたとき」[2592] 。また、聖ガブリエルがセラフィムの位に数えられるべきであることは、聖ディオニシオスの誤りのない証言によれば、セラフィム以外のいかなる位も、神の近づきがたい栄光の御座にこれほど近く昇ることはないという事実から分かる。 神の特別な御定めに従い、あらゆる天使の位階にはそれぞれの場所がある。ある位階は近く、ある位階は遠くにあるが、セラフィムの位階はすべての中で最も神に近い。イザヤが次のように述べている通りである。*「私は、高く、崇高な御座に座しておられる主を見た。その周囲にはセラフィムたちが立っており、彼ら一人ひとりに六つの翼があった」*（イザヤ書6:1–2）。

そして、聖ガブリエルは、神の御前に立つ七人の最も近い天使の一人であるから、彼はセラフィムの位にあり、セラフィムの中で第二位であるに違いない。これに従い、聖アンドレイ・クリツキーは彼を最も高位の天使の一人と呼び、次のように述べている。「神は、最も高位の天使の一人に、神秘を告げ知らせるよう命じられる。 もし彼が最も優れた天使の一人であったならば、当然、常に神の御前に侍る七つの霊のうちの一人であり、七つの霊のうちの一人であるならば、セラフィムの一人である。なぜなら、天使の中でセラフィムより高い者は誰か。誰が彼らよりも神の御座に近いのか。したがって、ガブリエルはセラフィムであり、この位階において最も高い者である」。

このことは、神の偉大な御業には、偉大な天使を遣わすことがふさわしかったという点からも明らかである。 そして、御言葉の受肉は神の御業の中で最も偉大なものであったため、その告知のために天使たちの中で最も高位の聖ガブリエルが遣わされたのである。聖グリゴリオス・ディオスロスは次のように記している[2593] 「この偉大な奉仕を果たすためには、天使たちの中で最も高位の者が現れるべきであった。なぜなら、彼は他のすべてに比べものにならないほど高きものを告げ知らせるからである。 かつてエバを惑わすために闇の主君が現れたのであれば、天の光の至高の君主による福音の告知のために、無原罪の聖母のもとにも現れるべきであった。神へのセラフィムの愛に燃えるマリアのもとには、セラフィムが遣わされるべきであったのである。」

それでは、天使たちの位階において最も高き君主として、神に最も近い七つのセラフィムの一人として、また全世界に救いを告げた世界の大天使として、ガブリエルを熱心に崇めましょう。 畏敬の念を込めて礼拝し、祈りの歌を捧げ、その記念を喜びをもって祝い、かつてから現在に至るまで人類に与えてきた、また今も与え続けているその偉大な恩恵に対して感謝を捧げましょう。彼は、受肉された神に絶えず私たちのために祈ってくださっているのです。聖大天使ガブリエルの祈りによって、私たち全員が罪の赦しを得られますように！

ここで言及された七人の至高の天使たちについて、聖書に記されているのはそのうち四人の名前だけであることに留意すべきです。すなわち、ダニエル書には、聖ミカエルが、当時まだ敬虔に神を崇めていたユダヤ人たちを助けたと記されています（ダニエル10:13）； 使徒ユダの書簡には、彼がモーセの遺体をめぐって悪魔と論争し、*「主があなたを禁じられますように」*と言ったと記されています（ユダ1:9）；また、神学者ヨハネは、その黙示録の中で、自分が蛇（すなわち悪魔）と戦ったと記しています（黙示録12:7）； 聖ガブリエルについては、ダニエル書においても、彼が預言者に将来における神の最も秘められた奥義を明らかにしたことが記されている（ダニエル書8:16）。また、聖ルカによる福音書には、ガブリエルがザカリアに（主の）先駆者 の受胎を告げたこと、 また、聖母マリアには、神の御言葉の受肉について告げた（ルカ1章）。聖ラファエルについては『トビト

[2592] セダレンは第3声。（12月15日の第1カフィスムおよび「麻痺した人の週」に唱えられる。――*『信仰のABC』編集部*）

[2593] 聖グリゴリオス・ディオスロス（二語者）、ローマ教皇は、6世紀に生きた。彼の著作の中で最も注目すべきものは『Regula pastoralis』（『牧者の規則』）であり、牧者がどうあるべきか、またどのようにその職務を遂行すべきかについて論じている。 「デュオスロス」という名称は、まるで二人の人物が語り合っているかのように物語が展開される著作『イタリアの修道院長たちの生活に関する対話』に由来する。

書』に言及があり、そこでは、彼が若きトビトを旅路での予期せぬ災難から守り、乙女サラから悪霊を追い払い、トビトの視力を回復させたと記されている（トビト12:15）。 聖ウリエルについては、『エズラ第三書』に、彼がエズラに「火の重さ」を量るよう提案したと記されている（エズラ第三書4:5）。

残りの三人の天使については、聖書に名前が明記されていないものの、神聖な聖書を深く考察する一部の神学者たちの解釈によれば、サラフィエルとは、アハリが深い悲しみの中で祈っていたときに荒野に現れた天使であると考えられる。 彼は彼女にこう言った。「神は少年の声（創世記21:17）と、あなたの謙虚な祈りを聞き入れられた」。 「イェグディエル」という名は、主がイスラエルの民を約束の地へと導くために荒野に遣わすと約束された天使に帰せられている。それは、神の戒めを守る者たちに、主の栄光のために報いを与えるためであった（出エジプト記23:22–23）。バラキエルについては、マムレの樫の木の下でアブラハムの前に現れ、サラの不妊を癒やし、息子イサクを授けることで彼女を祝福し、聖三位一体――父、子、聖霊――の予型となった三人の天使の一人であったと考えられている（創世記18章）。

これらの聖なる者たち、すなわち七人の最高位の天使たち――その筆頭がミカエル、次がガブリエルである――は、古来より、聖なる教会の敬虔な理解に基づき、イコンに描かれ、彼らの名に因んで建てられた教会によって崇敬されてきた。これについて、教会史は次のように伝えている：

不敬虔な皇帝ディオクレティアヌス[2594] は、キリスト教に対する残酷な迫害者であり、古代ローマに自身のための石造りの浴場[2595] を建設する際、多くのキリスト教徒を連行させ、厳重かつ容赦のない監視の下でその労働に送り込んだ。その監視者たちは聖人たちを苦しめ、虐げた。 そこでは、汗と血にまみれながら働く数千人の聖なる殉教者たちの姿が見られ、その多くはキリストのために剣や様々な処刑によって命を落とした。このようにして、この過酷な労働によって、まるで王宮のような、極めて巨大で美しい建造物が築き上げられたのである。 そして、長い年月が経ち、ギリシャの不敬虔な者たちがその王たちと共に滅び、キリスト教がキリスト教徒の王たちの即位によって全宇宙で勝利を収めたとき――その時、ローマに住む信者たちは、美しいディオクレティアヌスの浴場を見つめ、 この建物がキリスト教徒の手によって建てられたことを思い出し、異教の穢れを清めた上で、七つの主要な天の霊、すなわち大天使および天使軍の総司令官――ミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエル、セラフィエル、イェグディエル、バラキエル――の名に因んで、キリスト教の聖堂へと改めた。

ローマに倣って、他の都市も同様の動きを見せ始めた。例えば、カンパニアのナポリ[2596] やシチリアのパレルモ[2597] では、これら七人の統率する天使たちの名に因んで石造りの教会が建てられた。 彼らの姿は、教会の壁面にイコン画やモザイク細工で描かれており、それぞれが他とは異なる特徴を持っており、目に見えない奉仕を神秘的に表現していた。 そこにある天使たちの描写は以下の通りである。聖ミカエルは、ルシファーを足で踏みつけている姿で描かれており（[2598] ）、左手に緑のナツメヤシの枝を、右手には槍を握っており、その槍の先端には赤い十字架が織り込まれた白い旗

[2594] ディオクレティアヌスはローマ皇帝として284年から305年まで在位し、ローマ帝国の東部を統治した。一方、西部は彼の盟友マクシミアヌスが統治していた。

[2595] テルメとは、ローマで特に豪華に造られた公衆浴場のことであり、浴場には体操を行うための場所も設けられていた。

[2596] カンパニアは、イタリア南部に位置する州である。この州は、教会で使用される鐘が初めて鋳造された場所として知られており、そのため教会の規則では、その鐘を（州の名にちなんで）「カンパナ」と呼んでいる。

[2597] シチリアは、地中海に浮かぶ大きな島の一つである。

[2598] ルシファー（Lucifer）――「光をもたらす者」、明けの明星、明け方の星。比喩的な意味では、この名は最初の堕天使――悪魔――に当てはめられている。

が掲げられていた（[2599]）； 聖ガブリエルは、右手に中にろうそくが灯されたランタンを持ち、左手には緑色のヤスパー製の石鏡（所々に赤い斑点があるもの）を握っている姿で描かれている[2600]。 聖ラファエルは、左手に薬　が入った少し持ち上げられた器を、右手にはティグリス川で捕まえた魚を運ぶ少年トビアを導いている姿で描かれている[2601]。 聖ウリエルは、右手で鞘から抜かれた剣を胸の前に掲げ、左手を下に向けて炎を掲げている姿で描かれている[2602]　。聖セラフィエルは、顔と目を下に向け、両手を胸に当てて、まるで心を込めて祈る人のように描かれている。　聖イェグディィルは、右手に金の冠を、左手に三本の黒い紐でできた三つ先の鞭を握っている姿で描かれている[2603]　。聖バラキイルは、胸元の衣服の上に白いバラを載せている姿で描かれている[2604]。

トロパリオ、第4声：

天の軍勢の総司令官よ、常に不適格な私たちはあなたに祈ります。あなたの祈りによって、あなたの栄光の非物質的な翼の覆いで私たちを守り、熱心にひれ伏し、叫び求める私たちを保ってください。至高の力の指揮官として、私たちを災いから救い出してください。

コンダク、第8調：

至輝き、至尊、全能、計り知れず、畏れ多い三位一体よ、汝は、大天使よ、栄光ある奉仕者であり、祈りの仲介者である。今、絶えず、あらゆる災いと苦しみから我々を救い出してくれるよう祈り、我らは汝にこう呼びかけよう。「喜びなさい、汝の僕たちの守り手よ。」

聖イリネイ、シルミアの司教、聖殉教者の受難

記念日：3月26日

不義なるローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[2605]　の治世下、彼らがキリスト教徒に対して仕掛けた残酷な迫害のさなか、信者たちは様々な功業を成し遂げ、キリストのために迫害者たちから課せられた苦難を、永遠の報いを仰ぎ見つつ熱心に受け入れた。 この頃、パノニア[2606]の都市シルミア[2607]　には、若くして正統な信仰と主の律法に熟達した司教がいた。その名はイリネイであった。キリストへの愛ゆえに数多くの迫害に耐え、キリストを告白したことで、彼は当然の勝利の冠を受けるにふさわしい者とされた。

[2599] 聖大天使ミカエルの槍を飾る白い旗は、その聖性と清らかさを表しており、十字架は、無形の力が十字架とキリストの御名のゆえに、闇と暗黒の王国と戦っていることを示している。

[2600] 鏡は、聖大天使ガブリエルが人類の救いに関する神の御旨の使者であることを示し、 一方、ろうそくの灯るランタンは、神の御計画が成就する時まで隠されており、その成就の瞬間になって初めて、神の言葉と自らの良心の鏡を揺るぎなく見つめ続ける者たちのみがそれを理解できることを示しています。

[2601] 教会の信仰によれば、聖ラファエルは、苦しむすべての人々のために、神に助けと癒やしを請い求めています。

[2602] これは、この大天使が神に対して特に強い熱意を抱いていることを示しています。

[2603] これは、神から敬虔で聖なる人々への報い、そして罪人への懲罰を象徴しています。

[2604] 聖バラキエルは、いわば天の御国における至福と果てしない平和の前触れである。

[2605] 284年、ローマ帝国は東と西に分裂した。東はディオクレティアヌスが、西は彼の友人マクシミアヌスが統治し、284年から305年まで在位した。

[2606] パノニア――ローマ帝国のドナウ川以南の主要な地域の一つ。

[2607] シルミウスは、下パンノニアのサヴァ川沿いにある古代都市である。現在、ミトロヴィツァ近郊にその大規模な遺跡が残っている。

シルミアで兵士たちに捕らえられたイリネイは、パノニアのイゲモンである[2608] プロブのもとへ連行された。プロブは彼にこう言った。

「王の法律に従い、我らの神々に犠牲を捧げよ。」

聖イリネイ司教はこう答えた。

「唯一の真の神ではなく、偽りの神々に犠牲を捧げる者は、その民の中から根絶やしにされるであろう。」

イゲモンは再び言った。

「慈悲深き王たちは、すべての人々に命じられた。神々に犠牲を捧げるか、さもなくば拷問に処されるか、と。」

「私には、真の神を拒んで悪魔たちに犠牲を捧げるよりは、むしろ最も過酷な拷問を受けるよう命じられているのです」と聖人は答えた。

イゲモンはもう一度繰り返した。

「神々に犠牲を捧げるか、さもなければ直ちに汝を拷問するよう命じる。」

「あなたが私にそうしてくださるなら、私は喜びます」と聖人は答えた。「そうすれば、私も主の苦しみにあずかることができるからです。」

すると、イゲモンは直ちに兵士たちに聖人を拷問にかけるよう命じた。残酷な拷問の最中、イゲモンは彼に尋ねた。

「どうだ、イリネイ、今こそ神々に生贄を捧げるか？」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「私は、常に捧げてきた私の神への誠実な信仰によって、犠牲を捧げているのです。」

聖人の両親と家族全員が駆けつけ、彼が容赦なく拷問を受けているのを見て、彼の足にすがりつき、若さを憐れんで王の命令に従うよう懇願した。一方では父と母が泣きじゃくり、他方では近所の人々、友人、親戚たちが皆、彼のために大声で泣き叫び、皆一斉にこう叫んだ。

「イリネイよ、君の若さの咲き誇る美しさを憐れんでくれ。」

しかし、神への至高の渇望に満たされ、霊的な視界に神の戒めを映し出していた聖人は、皆にこう答えた。

– 私の主イエス・キリストの御言葉はこうです。*「もしだれかが人々の前でわたしを否むなら、わたしも天の父の前でその人を否む」*（マタイ10:33）。 それゆえ、愛する者たちよ、あなたがたの懇願によっても、王の脅しによっても、あるいはいかなる方法によっても、あなたがたは私を神とその律法から引き離すことはできないことを知ってください。私は全き思いをもって、天上の[2609] の召しへの希望へと向かっているのです。

プロブスは、再び祝福されたイリネイを呼び寄せ、次のように説得した。

「せめて、あなたを案じる人々の涙に心を動かされ、その狂気を捨て、若さを惜しんで、神々に生贄を捧げなさい。」

これに対し、聖人はこう答えた。

「そのような犠牲を捧げなければ、私は永遠に自分自身を救うことになる。」

そこでイゲモンは、イリネイをどのように扱うかを決めるまで、彼を牢獄に連行するよう命じた。

その間、聖人は長い間牢獄に閉じ込められ、過酷な監禁生活のため、様々な病に襲われていた。しかし、ある日の真夜中、地方総督プロブは再び彼を自分の元へ連れてくるよう命じ、こう言った。

[2608] イゲモン – ἡγεμων：地方総督、長。

[2609] ゴルニイ – 高い、天上の（エゼキエル41:7；コロサイ3:3）。

「お前が長い間耐えてきたこの苦しみも、もう十分だ。さっさと我らの神々に犠牲を捧げよ。」

「もし私をどうするかを決めたのなら」と聖イリネイは答えた。「遅らせることなく、さっさと実行せよ。知っておけ、私はこれまで通りキリストの御名を告白し続ける。今も、そして最後まで、私は揺るぎなく、変わることなくあり続けるのだ。」

すると、イゲモンは怒りに駆られ、長い間、彼を棒で打つよう命じた。彼は苦しみの中、こう叫んだ。

「私には、幼い頃から敬うことを学んだ神がおられる。私はその神を崇め、その神に犠牲を捧げる。しかし、人の手で作られた神々を崇めることはできない。」

「自ら招いたその苦しみだけで満足しなさい」とプロブは彼に言った。「死を望んではならない。」

聖人はこう答えた。

「私は死なない。なぜなら、命は私のものであるからだ。そして、あなたが私の主イエス・キリストの名のために私に与えている苦しみも、私は感じていない。それどころか、さらにこう言おう。それらの苦しみを通して、私は死ではなく、永遠の命を得られると望んでいるのだ。」

「妻はいるか？」とプロブは尋ねた。

聖人は、いないと答えた。するとプロブはさらに尋ねた。

「両親はいるか？」

「いません」と聖人は答えた。プロブは再び尋ねた。

「息子や娘はいますか？」

聖人はそれに対しても、いないと答えた。

「では、」とプロブは尋ねた、「裁判の場で、あなたのために泣き叫んでいた人々は一体誰だったのですか？」

聖イリネイはこう答えた。

「私は、私の主イエス・キリストの戒めを守っています。主はこう言われました。『もしだれでも、自分の両親を捨て、すべての所有物を放棄しなければ、*「わたしの弟子になることはできない」*』（ルカ14:26）、*『また、父や母、息子や娘を、わたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない』*（マタイ10:37）。したがって、真に神を愛し、神のみに望みを置く者は、この世の虚しさを軽んじ、神以外の誰をも自分の父とは認めないのです。

「しかし、私は聞いたのですが」とプロブは言った。「あなたには息子たちがいるそうです。それならば、たとえ彼らへの愛のためであっても、神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、神々があなたの目の前であなたの父を滅ぼすことはないでしょう。」

聖イレネウスはこう答えた。

「私の息子たちの父は神であり、私もまた神を父として崇拝している。神は彼らも私も救うことができるからだ。それゆえ、私たちは神に真に、そして完全に信頼を置き、滅びないために私たちの魂を神に委ねたのだ。さあ、あなたの王たちから命じられたことを行いなさい。」

「自分と両親の命を救え」とプロブは説得した。「神々に犠牲を捧げ、王の命令に従え。さもないと、私は様々な拷問によってお前を死に至らしめる。」

「すでに言った通りだ」とイリネイは言った。「私に対して好きなようにすればよい。私がお前の邪悪な神々に決して犠牲を捧げないことは、お前もよく知っているはずだ。」　さあ、見てくれ。私の主イエス・キリストが、お前の悪魔的な策略に対して、どれほど大きな忍耐を私に与えてくださったか。神の聖徒たちを苦しめるために、主はそうした策略を用意しておられたのだ。

「さあ、もし神々に犠牲を捧げなければ、お前に死刑を宣告する」とプロブは言った。

聖イレネウスはこう答えた。

「それこそが私にとって喜ばしいことです。なぜなら、死刑判決は私を永遠の至福へと導くからです。」

そこでプロブは聖人に次のような死刑宣告を下した。

「王の命令に従わないイリネイを、川に投げ込むよう命じる。」

聖イリネイはこれに対し、こう言った。

「私は、あなたが、キリスト教徒が神への信仰のためにいかに死を軽んじるかを悟らせるべく、多種多様で最も残酷な拷問を私にかけるものと期待していた。しかし、あなたは私にそのような刑を全く科さなかったのだから、たとえこの判決を下したとしても、私は喜んでいる。」

イゲモンは、この祝福された人の大胆不敵な態度に憤り、剣でその首を切り落とし、その後、その遺体を川に投げ込むよう命じた。聖人は、あたかも別の勝利の冠を授かったかのように、この答えを聞いて神に感謝し、こう言った。

「主イエスよ、あなたの聖なる御名を告白するにあたり、私にこのような揺るぎない忍耐を授けてくださったことを感謝します。それによって、私はあなたの永遠の栄光に与る者となるにふさわしい者とされたのです。」

彼がまだそう語っているうちに、彼は「アルテミス」と呼ばれる橋へと連行された。その橋は、彼らの邪悪な女神アルテミスのために建てられたものであった[2610] 。そこから彼は投げ落とされることになっていた。そこで、聖イリネイは衣服を脱ぎ捨て、天に向かって両手を挙げ、感極まってこう祈った。

「主イエス・キリストよ、世の救いのために苦難を受けられた方よ！　御名のゆえに、正統なシルミアの教会から苦難へと引き出された、御身の忠実な僕イリネイの魂を受け入れるために、御天が開かれますように。　私は死を受け入れることを拒みません。しかし、主よ、あなたの言い表せないほどの慈悲に懇願します。どうか、あなたのシルミア教会の民を、あらゆる災いや悪、目に見える敵や目に見えない敵から守り、保ち、そしてあなたの聖なる信仰の中に確固として立たせてくださいますように。

祈りを終えると、聖人は剣で首を斬られ、サヴォイと呼ばれる川に投げ込まれた。　聖イリネイ、シルミアの司教は、パノニア地方総督プロバの統治下、3月26日に殉教しました。これは、私たちの上に君臨される主イエス・キリストの治世のことであり、主には、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

私たちの尊い父マルカの生涯

記念日：3月26日

[2610] アルテミス――別名ダイアナ――は、月を体現し、森と狩猟の守護神とみなされていた女神である。

尊者マルクは、若き頃、シリアのアンティオキア[2611] から三十スタディオン[2612] 離れたマロニオス村の農夫であった。彼は両親の唯一の息子であったため、両親は彼を家系の後継者として、一族の血脈を継がせたいと願い、結婚を強要した。しかし、両親のあらゆる強要に対し、彼はただ一言こう答えた。

「私は、一般信徒であるよりも、修道士になりたい。」

マルカは、父が様々な脅しで、母が優しい説得で、いかに結婚を強要されようとも、両親の言うことを聞き入れず、ついに密かに家を出て、神のために家も両親も結婚も捨てて逃げ出した。　彼はイムマとヴィリアの間に位置する荒野へと向かった。そこで彼は、修道士たちが神に喜ばれる生活を送っている修道院を見つけた。彼らの教えに従い、マルクはそこに留まり、修道生活における修行に励み、労苦と断食によって自らの肉欲を死滅させていった。

それから何年も経ったある日、彼はある考えを抱いた。その頃、母は夫を亡くして未亡人となっていたため、母を慰めるために故郷へ帰ろうというのだ。彼は父が亡くなったと聞き、相続した領地を売り払い、その代金を一部は貧しい人々に、一部は修道院に施し、わずかな分を自分の生活費として残そうと考えていた。

マルハのそのような意図を知った修道院長は、彼を諭し始めた。これは悪魔の誘惑であり、人類の古くからの敵による狡猾な策略であり、あたかも善行であるかのように巧妙に偽装されているのだと説得した。

「これは」と彼は言った、「聖書が*『犬は自分の吐いた物に戻る』*（IIペテロ2:22）と述べていることと同じだ。同様に、多くの修道士たちが惑わされてきた。なぜなら、悪魔は決して誰に対しても公然と戦いを挑むことはないからだ。」

その証拠として、修道院長はマルフに、アダムとイヴが、神のような尊厳を得られるという悪魔の誘惑に惑わされ、その結果、楽園を追放された話から始まり、書物にある様々な物語を引用した。　しかし、修道院長が彼を説得できなくなると、彼の膝元にひれ伏し、自らの魂の仲間を見捨ててはならないと懇願した。そうしなければ、自分自身を滅ぼすことになり、「鋤に手を掛けた者は、後ろを振り返ってはならない」（ルカ9:62）という戒めを破ることになるからだ。しかし、マルクは修道院長の言葉を全く聞き入れず、修道院を去っていった。

マルクに別れを告げながら、修道院長はまるで葬式のように、涙を流して彼を見送った。

「見よ、わが子よ」――これが修道院長がマルクに告げた最後の言葉であった。「お前はサタンの支配下に陥ってしまったようだ。お前が我々から離れることになった理由については、これ以上問うつもりはないし、お前の言い訳も受け入れない。柵の外に出た羊は、たちまち狼の餌食となるのだ[2613] 。

こうして彼らは別れ、マルクは自分の道へと旅立った。

[2611] シリアのアンティオキア――シリアの最も古く、最も豊かな都市の一つであり、同国の首都。オロンテス川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れた、レバノン山脈とタウロス山脈の間に位置する。 紀元前300年にセレウコス・ニカトルによって建設され、その父アンティオコスにちなんで名付けられた。キリスト教教会にとって、アンティオキアはエルサレムに次ぐキリスト教の第二の中心地として、また異教徒から生まれたキリスト教諸教会の母として、特別な重要性を持ちます。　有名なアンティオキア教会は、当初、使徒パウロとバルナバによって設立され、その後、使徒ペトロによっても確固たるものとなった。アンティオキアでは、異端（アリウス派やネストリウス派）の争乱の時代、教会の牧者たちによる数多くの注目すべき公会議が開かれた。　アンティオキア教会は古くから、アレクサンドリア、エルサレム、コンスタンティノープル、ローマの各教会と並び、特別な特権を享受しており、その司教たちは総主教の称号と特権を有していた。 現在、アンティオキアはトルコの支配下にあり、人口1万人ほどの小さく貧しい町となっている。

[2612] スタディオン – 73～88サジェンの間で変動する距離の単位。

[2613] 主の「善き羊飼い」のたとえを参照のこと：ヨハネ10:1–5。

その砂漠からそう遠くない場所に、ヴィリアからエデッサへと続く大きな一般道があった[2614]；その道では、旅人たちがサラセン人に頻繁に襲われていた[2615]。そのため、旅人たちは旅に出る際、サラセン人の襲撃に備えて一団となり、彼らに抵抗し、捕虜になるのを避けることができるようにしていた；　マルクもまた、その旅行者の一団に加わった。その数は70人に達し、その中には数人の女性も含まれていた。彼らがその道を共に歩いていると、突然、彼らの恐怖を誘うように、まるで戦いに備えて武装したかのような、半裸のイスマイル派の者たちが大勢現れた。　旅人を取り囲むと、彼らはマルクを含め一人残らず全員を捕らえ、捕虜として連れ去った。　その時、マルクは自らの以前の企ての虚しさと敵の欺瞞に気づき、修道院長の忠告に耳を貸さず、修道共同体から離れ、世俗の社会に加わったことを悔い改めた。そして他の者たちと共に、異民族の手に捕らえられたのである。しかし、彼の悔い改めはすでに手遅れだった。かつては父の遺産を相続したいと願っていたが、今や彼自身がサラセン人の所有物となってしまったのだ。捕虜たちが野蛮人たちの間で分配された際、修道士マルクはある女性と共に一人のアラブ人の手に渡り、その男は二人をラクダに乗せると、素早く旅路についた。　ラクダは猛スピードで走ったため、マルクとその女性は、落ちないように互いにしっかりと抱き合いながら、その上で旅を続けた。道中の食料は、火が通っていない肉とラクダの乳であった。

アラビアの砂漠を長く旅し、ある大きな川を渡った後、サラセン人たちは自分たちの国へと戻った。　マルクの主人は捕虜たちを妻のもとに連れて行き、サラセン人の慣習に従って、妻と子供たちに頭を下げるよう命じた。マルクは捕虜の女性と共に頭を下げ、妻に礼を捧げなければならなかった。すると妻はマルクに家事を課した。水を運んだり、ゴミを掃き出したり、その他最も過酷な労働をこなすことだった。　こうしてマルクは、父である修道院長に背いた罰として働かされた。修道士としての姿はすっかり変わり、その国の慣習に従って裸で歩き、灼熱の太陽のため、必要最低限の部位だけを衣服で覆っていた。　その後、彼は荒野で羊の放牧を命じられた。そこでマルクは、苦難の中での唯一の慰めと安らぎとして、主や同僚たちにめったに会うことがなく、羊たちと二人きりで過ごす孤独な時間の中で、かつて荒野で羊の群れを飼っていた聖ヤコブ（創世記30:36）やモーセ（出エジプト記3:1）――かつて砂漠で羊の群れを放牧していた二人――を思い起こすことだった。　彼はチーズと牛乳を糧とし、羊を放牧しながら、修道院で学んだ詩篇を歌いながら熱心に祈り、そのことに捕囚の身としての慰めを見出し、故郷で台無しにしてしまったあの修道生活が、今や荒野で再び取り戻せたことを神に感謝した。　しかし、悪魔の狡猾さはあらゆる場所で想像を絶するほど巧妙であり、そのような生活を送っていたにもかかわらず、マルクはそこでさえ、その悪意に満ちた敵に見つかってしまったのである。

サラセン人は、自分の奴隷であるマルクがあらゆる面で熱心に、忠実に仕えており、家畜も増え続けているのを見て、その忠実な奉仕に対してどのような報いを与えるべきか考え、マルクに、彼と同じラクダに乗って連れてこられたあの捕虜の女性を妻として与えることに決めた。　マルクを呼び寄せ、彼はその女性について語り、彼女を妻に迎えるよう促した。しかし、マルクはこれに反対し、自分はキリスト教徒であり、キリスト教の律法によれば、夫が生きている女性と結婚することは許されない、と述べた。というのも、その女性の夫は別のサラセン人に捕虜として連れ去られていたからである。　するとサラセン人は激怒し、剣を抜いてマルクを殺そうとした。もしマルクが同意の印として急いでその女性の首を抱きしめなかったならば、主人はその場で彼の血を流していたに違いない。

夜になると、修道士はその女性を自分の洞窟へと連れ込んだ。そこで二人の間に何が起きたかについて、聖マルク自身は後に次のように語っている。

[2614] エデッサ――メソポタミアの都市で、ユーフラテス川の左岸から10マイルの地点にある。

[2615] サラセン人――アラビアの住民。当初、この名は遊牧する盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの名称をすべてのアラブ人およびイスラム教徒全般に適用するようになった。

「喜びの代わりに悲しみが私を包み込み、慰めの代わりに憂いが押し寄せた。私たちは互いを嫌悪し、互いに一言も口に出す勇気がなかった。その時、私は自分の捕囚生活の重さを痛感し、これほど突然に台無しにされようとしている修道生活について嘆き始めた。『果たして私は、この忌まわしい境地にまで至ってしまったのか！』　――と、私は泣きながら言った。「私の罪は、老いてから処女性を汚し、他人の妻の夫となるほどに、私を追い詰めたのだろうか？　若き日に神のために家も、両親も、結婚もすべて捨てたことが、今、私が当初から軽んじていたことを行ってしまうのなら、いったい何の益があったというのか？　かつて修道院で暮らしていた私が、再び故郷へ戻りたいと願ったがゆえに、今こうしてすべてに耐えているのではないだろうか。さて、我らはどうすべきか、わが魂よ？　滅びるのか、それとも勝利するのか？　神の恵みの御手を待つのか、それとも自らの剣で自らを殺すのか？　魂よ、その剣を自らの内へ引き戻せ！　我々は、肉体の死よりも、お前の死を恐れるべきである。なぜなら、貞潔な処女性にも、それなりの殉教があるからだ。それゆえ、私はむしろ、この荒野で殉教者として、埋葬されることなく死者のように横たわり、自らを拷問者であり殉教者とする方がよいのだ！

そう言いながら、私は地面から立ち上がり、暗闇の中で輝いている剣を鞘から抜き、その鋭い刃先を胸に向け、その女性に言った。

「お前は生きよ、妻よ！　生きている夫であるより、死んだ殉教者であるほうが、お前にとってはましだ。」すると彼女は私の足元に倒れ込み、私にこう叫んだ。

「私たちの主イエス・キリストと、この苦難の時を証人として、あなたに誓い、懇願します。私の命のために、あなたの血を流さないでください。もし死ぬつもりなら、まず私に向けて剣を振り下ろし、私を刺し貫いてください。そして、まず私を殺してから、それからあなた自身を殺してください。そうして、私たち二人が一つになれるように。　というのも、たとえ夫が私の元に戻ってきたとしても、この捕囚の身で学んだ清らかさを、最期まで守り抜くと心の中で決めているからです。私は、それを破るくらいなら、むしろ死を選ぶつもりです。あなたが私と交わらないために死にたいと思っているのではないですか？　しかし、もしあなたがそう望むなら、私も死を望みます。　それゆえ、私があなたにとって貞潔の妻となり、私たちの間に肉体的なものではなく霊的な交わりがあるようにしましょう。そうすれば、私たちの主たちはあなたを私の夫と見なし、キリストはあなたが私にとって霊的な兄弟であることを知っておられるでしょう。そうすれば、私たちの主たちは、私たちの間に愛を見れば、私たちが肉的な夫婦関係にあると思い、私たちを信頼してくださるでしょう。

――私は（聖マルクは語った）この女性のそのような貞潔さに恐れをなすと同時に驚き、彼女を愛するようになり、私たちは貞潔のうちに共に過ごすという約束を交わした。　しかし、私はその間、決して彼女の身体を見たり、手で触れたりすることはなかった。彼女との調和のとれた共同生活の中で、肉欲の側からの激しい戦いが私に襲いかかった当初から守り抜いてきた私の貞操を、台無しにしてしまうことを恐れたからだ（ここまでは聖マルクの言葉である）。

このような霊的な夫婦関係の中で、尊者マルクはその貞潔な女性と共に長い時を過ごした。二人は主人の好意を勝ち得たため、逃亡などという考えは微塵もなかった。時折、マルクは砂漠で主人の群れを忠実に、熱心に世話する羊飼いのように、丸一ヶ月も主人の家に戻らないことがあった。

ある日、捕らわれてからすでに長い時間が経った後、尊者マルクは一人で荒野にいて、空と大地以外には誰も見当たらない中、その孤独の中で、かつて修道院で修道士たち、とりわけ彼に聖書と修道生活について教えを授けてくれた修道院長と共に過ごした日々を思い返した。　そして彼は、修道院を離れないよう諭された師の言葉について思い巡らすようになった。これを思い出し、熟考しているうちに、マルクは目の前に無数の蟻がいることに気づいた。　狭い空間を動き回りながら、彼らは自分たちの体重よりも重い荷物を背負っていた。ある者は種を運び、ある者は蟻塚の中から土を運び出し、雨から身を守るための防護壁を築き、またある者は冬場の食料を確保するために、自分の刺で穀物を砕き、さらに別の者は死んだ仲間の死骸を運び出していた。　そして何よりも驚くべきこと

は、これほど多くのアリがいるにもかかわらず、彼らが外へ這い出たり蟻塚へ這い入ったりする際、互いに邪魔をし合ったり、足を止めたり、押し合ったりすることはなかった。それどころか、もし誰かが重すぎる荷物を運んでいるのを見つけると、他のアリたちはすぐにそのアリを助けたのである。それを見て、マルクはソロモンの言葉を思い出した。*「怠け者よ、蟻のところへ行き、その行いを見よ……蟻は収穫の時期に自分の食糧を集める」*（箴言6:6–8）。　さらに、修道院での自分の生活は、皆が共に働き、誰も自分だけのものを持たず、すべてが共有されている蟻の巣に似ていると思い至り、自分の囚われの身であることを深く嘆き、心からため息をつきながら、自分の修道院を見て、かつての独房で暮らしたいと願った。　彼が主人の領地に戻り、自分の小屋へ向かっていると、妻が出迎えた。妻は、悲しげで戸惑った表情の彼を見て、こう尋ねた。

「どうしてそんなに悲しんでいるの！」

マルクは自分の思いを彼女に打ち明けた。すると彼女は、彼に逃げるよう説得し、その際、自分を置き去りにせず、連れて行って、後でどこかの女子修道院に預けてほしいと頼んだ。　そのことについて長い話し合いをした後、二人は逃げ出す準備を始めた。互いに小声で話し合いながら、希望と恐怖の感情の間で心が揺れ動いていた。

マルクが飼っていた群れには、二頭の大きな雄山羊がいた。彼はそれらを殺し、その皮で二枚の毛皮を作り、旅の糧として干し肉を用意した。そしてある晩、夜も更けた頃、妹と共に神への信頼を胸に、家を出て急ぎ足で歩き出した。　サラセン人の住居から九スタディオン離れた大きな川にたどり着くと、彼らは皮袋に空気を入れ、しっかりと結び、その上に座って、足を櫂のように動かして川を下り、対岸へと渡った。　しかし、旅の途中に持ってきた肉は水に濡れて沈んでしまい、残ったのはごくわずかで、かろうじて3日間持ちこたえる程度だった。 今後の逃走中に喉の渇きに悩まされないよう、川の水で十分に喉を潤した後、彼らは旅立ち、夜よりも昼間の方が速いペースで急いで進んだ。その理由は、一部はサラセン人への恐怖からであり、一部はそこで非常に強く照りつける太陽の灼熱のためであった。　しかし、時には日中でも、灼熱の暑さに焼かれながらも歩き続け、主人が追いかけてこないかと恐れて、頻繁に後ろを振り返った。

三日目のこと、マルクとその妻が道中で振り返ると、遠くに二人のサラセン人が二頭のラクダに乗って彼らを猛スピードで追いかけてくるのが見えた。　彼らはすぐに、砂に残した足跡を辿って主人が追いかけてきているのだと悟り、大きな恐怖に襲われ、サラセン人に殺されるのを待ちながら、身動きもできなくなってしまった。その時、神の御業により、　彼らは右手に深い洞窟があるのに気づき、そこに駆け込んで入り口の左側に立ち止まった。しかし、洞窟の奥までは入らなかった。死を免れたにもかかわらず、再び死に直面することを恐れたからである。というのも、そのような洞窟には通常、野獣や蛇、サソリ、その他の毒を持つ爬虫類が棲息していたからである。　こうして、追ってくる主人からも、洞窟に潜むものからも、両面から死を恐れて、彼らはまるで既に死んだかのように恐怖に震えながら立っていた。しかし、その一方で、彼らはこうも考えていた。　「もし神が私たち貧しい者たちを助けてくださるなら、私たちは死を免れるだろう。しかし、もし神が私たち罪深い者たちに御手を差し伸べてくださらないなら、この洞窟は私たちにとって棺となるだろう」。

その間、サラセン人は奴隷を連れて洞窟にたどり着いた。ラクダ同士を結びつけると、彼は剣を抜き放ったまま洞窟の入り口の前に立ち止まり、奴隷にはマルハとその同行者を洞窟から連れ出すよう命じた。というのも、彼自身が二人を殺そうとしていたからである。　奴隷が洞窟に三、四ラクティ[2616] ほど入ったとき、彼らのそばを通り過ぎていった。太陽の光が差し込む場所から日陰に入った者には、近くにいる者たちの姿が見えなかったため、彼らはその奴隷の背中しか見ることができなかった。奴隷は激しい脅しを込めて大声で叫んだ。

[2616] *肘*――肘から中指の先までの長さを指す単位。聖書における肘の長さは、10.5から13ヴェルシュカの間で変動する。

「出てこい、悪党ども、出てきて殺されろ！　何をためらっている？　出てこい、主人が待っているぞ。」

彼がそう叫んでいる最中、突然、洞窟の奥から雌ライオンが飛び出し、彼の喉元を掴んで殺害すると、自分の巣穴へと引きずり込んだ。おお、至仁至慈なる主よ！　あなたのしもべたちに対する御摂理はなんと偉大であり、極限の苦難におけるあなたの助けはなんと迅速なことか！　マルクとその妻はそれを見て、敵の一人が死んだのを見て恐怖の代わりに大きな喜びに包まれた。というのも、洞窟の入り口で彼らを脅かしていたもう一人の敵の存在を知らなかったからである。　サラセン人は、奴隷が洞窟の中で遅れているのを見て、もはやその声を聞かなくなると、二人組が自分一人に抵抗しているのだと思い込み、怒りのあまりこれ以上待つことができず、その場に立ち尽くしたまま、剣を抜き放ち、獣のように憎しみに満ちて猛々しく唸りながら、洞窟へと突進した。　しかし、雌ライオンはその声を聞きつけ、彼に向かって駆け出し、彼が逃亡者たちの元へたどり着いたとき、彼に飛びかかり、彼を殺し、彼らの横を通り過ぎて自分の巣穴へと引きずっていった。

このような驚くべき、予期せぬ神の助けと庇護を目の当たりにし、聖マルクとその幸いな女性は、神の計り知れない慈悲に感謝を捧げた。　しかし、この喜ばしい出来事の後も、恐怖は彼らを離れなかった。彼らは、雌ライオンが自分たちも殺してしまうのではないかと考えていたからだ。とはいえ、彼らは非人道的な人々の手に落ちるよりは、むしろ獣に殺されることを望んでいた。一方、雌ライオンは子ライオンを口にくわえ、洞窟から出て行った。　マルクとその妻は長い間黙って立ち尽くしていたが、雌ライオンが戻ってこないのを見て、日がすでに沈みかけていた頃、洞窟から出てきた。　洞窟の近くに食料と水を積んだラクダが停まっているのを見つけると、彼らはそれを食べて飲み始めた。そして、腹を満たし体力を回復すると、ラクダに乗り込み、神に感謝しながら喜び勇んで旅立った。　十日が過ぎると、彼らはその砂漠を抜け、ギリシャ・ローマ軍の部隊に近づいた。彼らは部隊長に自分たちの事情をすべて話すと、部隊長は彼らをメソポタミアの総督サヴィヌのもとへ送り出した。総督は彼らからラクダを買い取り、温かく見送った後、彼らの故郷へと送り出した。

故郷に戻ると、マルクはその聖なる女性と自身の霊的姉妹を女子修道院に預け、自身はかつて去った修道院へと戻った。　しかし、修道院長と彼の霊的指導者は、すでにこの世を去っていた。そこで彼は、自分に起こったすべての出来事を兄弟たちに語り、修道院に身を固く定めて住み着き、他の修道士たちに対し、決して修道院長の言葉に背かず、修道院から出てはならないと諭した。　残りの生涯を神に喜ばれるように過ごした後、マルクは主のもとへ召され、後世の人々が「処女の清らかさは、剣によっても、荒野によっても、野獣によっても打ち破られることはない」ということを知るよう、貞潔の模範を残した。　なぜなら、キリストに身を委ねた者は、肉体は死ぬことがあっても、御自身キリストなる神によって強められ、永遠の栄光ある御方に守られているため、霊において打ち負かされることはないからである。アーメン。

ゴート族の26人の殉教者の記念日[2617]

3月26日の記念日

これらの聖なる殉教者たちは、ローマ皇帝ユリアヌス、ヴァレンティニアヌス、グラティアヌスの治世中[2618]、ゴート王ウンゲリヒの治世下で殉教した。 当時、彼らはキリスト教徒として、それぞれの教会で礼拝を行い、神を賛美していたが、ウンゲリヒは家来たちを遣わし、その命令により教

2617　ゴート族の領土は、ヴィスワ川下流から黒海まで広がっていた。ゴート族は主に、現在のルーマニアにあるドナウ川沿いに住んでいた。その後、彼らはヨーロッパのほぼ全域に散らばっていった。

2618　ユリアヌスは361年から363年まで、ヴァレンティニアヌスは364年から375年まで、グラティアヌスは375年から383年まで在位したため、これら3人の皇帝の治世は合わせて約20年間に及ぶ。

会に火を放ち、そこにいた308人全員を焼き殺した。 その後、教会へ供物を運ぶキリスト教徒を見かけると、捕らえて尋問にかけ、もしキリストへの信仰を告白すれば、その場で火の中に投げ込まれた。こうして、供物の代わりにキリスト教徒の遺体がキリストに捧げられることとなった。 これらの聖なる殉教者たちの遺体は、別のゴート王の妻であるアッラ（ゴート族の出身で、正統なキリスト教徒）[2619] によって集められた。彼女は統治権を息子の[2620] に譲り、長老たちを伴って各地を転々とし、やがて娘のドゥクリダと共にシルス地方[2621] に定住した。 その後、彼女は息子を呼び寄せ、彼が到着すると、彼と共にゴティアへ戻った。そして、聖人の遺骨は娘に託した。娘はヴァレンティアンとテオドシウスの治世にキジクへ赴き（[2622] ）、その都市で聖堂の奉献のために遺骨の一部を捧げた。ゴティアに戻った聖アッラは、アガフォンと共に石打ちの刑に処され、こうして殉教の死を遂げた。一方、ドゥクリダは、母の死から数年後に安らかにこの世を去った。

私たちの尊い父ヴァシリー・ノヴォイの生涯

記念日：3月26日

敬虔なギリシャの王たち、レオ・ザ・ワイズ[2623] とその弟アレクサンドロス[2624] （マケドニアの皇帝ヴァシレイオス[2625] の息子たち）の治世10年目、 あるマギストリアンたち[2626] は、王の命により派遣されていたアジアの国[2627] から帰路につき、ある人里離れた山を通りかかった際、その山を歩いている一人の男を見かけた。男はぼろぼろの服を身にまとい、その姿は極めて異様で、 恐ろしいほどであった。というのも、彼は人里離れた荒野で育ったからである。 その奇妙な姿に驚いたマギストリアンの一行は、彼を追いかけて捕らえた。そして、彼をスパイだと思い込み（実際には、ここでその生涯を語る聖ヴァシリーであったのだが）、この不思議な男を縛り上げ、王都コンスタンティノープルへと連行した。

皇帝たちの前に引き出されると、マギストリアンの者たちは、道中で捕らえた男について報告した。すると、皇帝レウスは聖人を見て、彼を取り調べるよう命じ、あるパトリキウスである[2628] サモン（出身はアガリア人[2629] ）に、彼が誰で、どこから来て、名前は何であるかを調査するよう委ねた。

サモンは神の御使いを自分の家へ招き入れた。その後、顧問たちに囲まれ、その地位にふさわしい威厳をもって裁判の席に着くと、彼は至福のバシレイオスを自分の前に連れてくるよう命じた。

[2619] ゴート族の間では、アリウス派の異端が広く普及していた。

[2620] 聖アッラの息子はアリメリアという名を持っていた。

[2621] シルス地方、すなわちシリアは、アジアのパレスチナの北に位置していた。ここでいうシルス地方とは、ローマ帝国領、おそらく現在のルーマニアを指すものと考えられている。

[2622] この名称で知られる都市は、小アジアのミシア北部にあるが、現在のクリミア半島にあり、ゴート族の公国があった地域も同様に呼ばれていた。

[2623] 皇帝レオン6世「賢王」は、886年から911年までビザンツ帝国の帝位にあった。

[2624] アレクサンドロス皇帝はレウス・ザ・ワイズ（賢王）の共同統治者であり、866年から912年まで在位した。

[2625] バシレイオス1世マケドニア人は、867年から886年までビザンツ皇帝であった。

[2626] マギストリアーネとは、王宮において最も重要な役職に就いていた宮廷高官のことである。その地位はパトリキウスよりも上であった。

[2627] 「アジアの国」、あるいは「アシア」とは、現在の小アジア半島を指していた。

[2628] パトリキウスの称号は、当初は「父」を意味するラテン語の「patres」に由来する、上院議員の子息にのみ与えられていた。その後、この称号はローマ貴族の血筋を持つすべての人々に適用されるようになった。 しかし、コンスタンティヌス大帝は、パトリキウスの称号を、高官に授与される個人的な栄誉としたが、これは世襲されるものではなかった。

[2629] 「アガリア人」とは、アラビアを放浪する盗賊の一族であるアラビアのベドウィンのことを指した。この名称は、ユダヤの伝承によれば、彼らがアブラハムの女奴隷ハガルの息子イシュマエルの子孫であったことに由来する。

パトリキウスの前に現れた聖人は、彼に敬意や礼拝を捧げなかった。するとパトリキウスは彼に尋ねた。

「お前は誰か、どこから来たのか、そして名は何か？」

しかし、祝福された者は*「彼に答えなかった」*（ヨハネ19:9）[2630] 、黙って立ち、柔和な眼差しで自分の裁判官を見つめていた。

すると、サモンは再び彼に尋ねた。

「どこから来たのか、教えてくれ。」

これに対し、聖人はこう答えた。

–むしろ、あなた自身が、自分が誰で、どこから来たのか、話したほうがいいのではないか？

すると、サモンは彼に言った。

「我々があなたに尋ねているのだから、あなたは我々に答えるべきだ。私が誰であるかなど、あなたに尋ねるべきことではない。とはいえ、もしあなたがそれほどまでに私のことを知りたいというのなら、教えてやろう。私はサモン、パトリキウスであり、現在君臨する専制君主たちのクヴィクラーリウス[2631] の長老である。さあ、今度はあなたが私に答えてくれ。あなたは誰で、どこから来て、何をしているのか？」

至福の者は答えた：

「私は、この地上に暮らす移住者であり、旅人の一人です。」

「では、君がギリシャの地を視察するためにやってきたスパイだという話は本当なのか？」と聖サモンは尋ねた。

これに対し、聖人は何も答えなかった。そして、尋問に立ち会っていた者たちの多くが、彼に答えを迫って言った。

「お前は誰だ？」

しかし、聖人は彼らに対しても何も答えなかった。

そこでサモンは、鉄の棒や乾燥した牛の腱、その他恐怖を煽るような拷問器具を持ち込むよう命じた。そして、聖人を威嚇するために、これらすべてを彼の前に並べ、苦痛に怯えて自らを明かすことを期待した。　しかし、尊者である聖ヴァシレイオスは、これら恐ろしい拷問器具を目の当たりにしても、一言も口を開かなかった。そこで、パトリキウスは、聖ヴァシレイオスを地面に寝かせ、牛の腱で打ちながら、こう問い詰めた。

「お前は誰だ？」

激しい打撃を受けながらも、聖人は沈黙を破ることなく、すべての苦痛を忍耐強く耐え抜いた。拷問者たちは、彼がもうすぐ死ぬだろうと思えるまで彼を打ち続けた。そこで、彼らは聖人を、動くことのできない丸太のように抱え上げ、彼を運び出し、牢獄に放り込んだ。

翌日、パトリキウス・サモン――この手ごわい野獣は――法廷の席に着くと、再び囚人を自分の元へ連れてくるよう命じた。聖ヴァシリーを探しに行った者たちは、彼が全く元気で無傷であり、牢屋の扉は閉まったままであったにもかかわらず、牢屋の外で彼らを待っていたのを見つけた。驚いた彼らは、聖人にこう尋ねた。

「その扉がしっかりと閉ざされていた牢獄から、どうやって出てきたのか、教えてほしい。」

しかし、聖ヴァシリーは答えずに、黙って彼らについて行き、パトリキウスの前に出頭した。

すると、聖ヴァシレイを捜しに来た者たちのうち数人が先回りして、サモンに起こったすべての出来事を語った。すなわち、牢屋の扉が完全に閉ざされていたにもかかわらず、彼らが聖人の外で

[2630] この表現はヨハネによる福音書（ヨハネ19:9）に由来し、そこでは「どこから来たのか」というピラトの問いに答えなかった主イエスを指している。

[2631] クヴィクラーリウスとは、王宮の寝殿係、すなわち重要な宮廷官職の一つである。

彼を見つけたというのである。　サモンと彼と共にいた者たちは皆、その話を聞いて驚き、彼らの言葉を信じようとしなかった。また、聖人について、彼は魔術師であり、魔術の力でそのような奇跡を起こしたのだと語る者もいた。　その間、聖人はパトリキウス・サモンの前に引き出され、サモンは再び執拗かつ長時間にわたり尋問を始め、あらゆる手段を用いて、彼が誰であり、どこから来たのかを白状させようとした。しかし、聖人は沈黙を守り続け、パトリキウスに答えようとはしなかった。サモンは聖人に激しく怒り、彼が自分自身と出自について語るまで、再び彼を地面に引きずり出し、容赦なく棒で打ち据えるよう命じた。　彼らは聖人を長く打ち続け、六本の杖を折るほどだったが、彼から自白を引き出すことはできなかった。至福のヴァシリーは、一言も口を割ることなく、すべての拷問を勇敢に耐え抜いたため、誰もが彼の言葉に尽くせない忍耐と沈黙に驚嘆した。それに対し、パトリキウス・サモンはこう述べた。

「この密告者は、後になって『沈黙をもって彼らを打ち負かした』と自慢するつもりだろう。だが、私は我らの独裁者たちの命にかけて誓う。彼に自慢させたり、我々を侮辱させたりは決して許さない。」　そう言うと、サモンは再びその聖人を牢獄へ連れ戻すよう命じ、その後の一週間の間、毎日三百回の鞭打ちと三百回の棒打ちを課した。一方、至福のバシレイオスは、自らの勇猛な功績を密かに隠し、修道生活について他人に語ることを望まず、あらゆる苦難を忍耐強く耐え抜いた。　というのも、彼は若き頃から修道士となり、荒野に身を置き、そこで長年にわたり放浪し、厳しい修道生活を送り、穀物や根菜だけを糧とし、常に裸足で歩き、薄汚れたぼろ服を身にまとっていたからである。　聖人は、このような徳高く、功績に満ちた生活について誰にも語ろうとはせず、それゆえ、パトリキウス・サモナが彼の生活様式について尋ねるあらゆる質問に対し、天の主の*「左の手が……右の手の行いを知らないようにせよ」*（マタイ6:3）という御言葉を心に留め、沈黙をもって答えたのである。　なぜなら、人々の前で自分の善行をさらけ出す者は、この世において人々からの称賛という報いを受け取るが、永遠の天の栄光からは遠ざかってしまうからである。　永遠の報いを得ようとする者は、人々の前から自らの美徳を隠さなければならない。もし人々に評価されず、彼らから侮辱や拷問さえ受けることになっても、そのような場合でも、沈黙を守り、忍耐強く人々の悪意に耐えなければならない。そうしてこそ、彼は真に殉教者という名にふさわしいのである。　聖ヴァシレイはこれらすべてを悟っており、人々からではなく神から栄光を得たいと願い、自らの秘密を明かすことを拒みつつ、自分に課せられた残酷な苦しみをも辛抱強く耐え抜いた。　一週間が過ぎ、その間聖人は毎日殴打にさらされていたが、パトリキウス・サモンは、聖人が揺るぎなく、自分の名前や出自を明かさないのを見て、再び裁判の席に着き、聖人を自分の前に連れてくるよう命じた。そして聖人が彼の前に現れると、サモンは怒りを込めて彼を見つめ、こう言った。

「人間の中で最も不敬虔な者よ、いつまで我々から身を隠し続けるつもりだ？　お前は自分が誰で、どこから来たのか、私に告げるのか？」これに対し、聖人はこう答えた。

「不敬虔な者とは、お前のようにも、密かにソドムの行いを行う者たちを指すべきである[2632]。」

このような非難を聖者から浴びせられ、サモンは動揺し、そこにいた全員の前で大きな恥と屈辱を感じた。　その後、聖人に対して抑えきれない激怒と憤りを燃やし、革帯を持ってくるよう命じ、尊者サモンの両手を背中で縛り、縄でその肋骨をしっかりと縛り上げ、聖人の右足をそこに引き寄せ、屋根付きの部屋の一角で、彼を逆さ吊りにした。　そして、その部屋の扉を自らの指輪で施錠・封印し、聖人が自分の名前と出自を明かすまで、そのまま吊るし続けた。　そこにいた者たちは皆、

[2632] ソドムの悪事――様々な自然の理に反する堕落行為。これらは、有名なソドム市（天の火によって焼き尽くされ、滅ぼされた）にちなんで「ソドムの」と呼ばれている。この都市では、こうした堕落行為が特に蔓延していたからである。

心の中で聖ヴァシリーを憐れみ、サモンを「呪われた者」と呼んで非難し、何の罪もない神の僕に苦痛を与えていることを責めた。

聖ヴァシリーは三日三晩、横木に吊るされたままだった。四日目に、不敬虔な拷問者サモンは、殉教者がいる礼拝堂の扉を開け、彼の元へ近づくと、その顔はまるで何の苦しみも感じていないかのように、穏やかで輝いていた。驚いた貴族は、聖人にこう尋ねた。

「なぜ、お前は私に、自分が誰で、どこから来たのか話さないのか？　この苦しみで、まだ悟りを得られなかったのか？」

聖人は今回も彼に何も答えなかった。そこで拷問官は、彼を降ろし、縛られていた革紐や縄を解くよう命じた。すべての束縛から解放されると、聖人はキリストの恵みにより、瞬く間にすべての傷や損傷から癒やされ、完全に健康を取り戻した。　この輝かしい奇跡を目撃した者たちは皆、驚き、戸惑った。一方、不信心なサモンもまた、この出来事に衝撃を受け、憤りの中で叫んだ。

「この男は魔術師であり、呪術師だと言ったではないか？　彼は、我々から当然受けるべきあらゆる拷問を受けたにもかかわらず、健在で無傷のままである。しかし、いずれにせよ、私はまもなく彼の魔力を打ち砕いてやる。獣の番人を私のところへ呼べ。」そして、その番人が来ると、サモンは彼に言った。

「最も獰猛なライオンを選び出し、今日はそのライオンにいつもの餌を与えないで、明日の朝には空腹の状態にしておけ。そうすれば、この魔術師がその獰猛な獣を打ち負かすことができるかどうか、我々は見届けることができるだろう。」

翌朝、大勢の群衆が予定された見世物に集まった。そして、空腹で激しく唸る巨大で獰猛なライオンが放たれ、聖ヴァシリーもそこに連れてこられ、ライオンの餌として放り込まれた。　しかし、その野獣は聖人を見るや震え上がり、やがて彼の元へ近づくと、従順にその足元に横たわり、まるで無害な子羊のようにじっと横たわっていた。それを見た人々は皆驚き、恐怖のあまりこう叫んだ。

「主よ、憐れみ給え！」

一方、聖人は、足元に横たわる獅子に身を屈め、右手でその頭を撫でると、耳をつかんで外へ連れ出し、大声で叫んだ。

「ほら、これがあなたたちの小羊だ、これが小羊だ！」

しかし、不信心な異邦人サモンは、この驚くべき奇跡によっても改心せず、自分が苦しめているこの男が神に愛された聖人であることを認めようとはしなかった。サモンは聖人に対する怒りをなおも募らせ、自白を強要するためにあらゆる手段を尽くした後、夜になって家来たちに命じて、彼を海に沈めるよう命じた。　家来たちはその通りに実行した。夜の第三番の番の頃、彼らは殉教者を小舟に乗せ、岸から離れて海に投げ込み、自分たちは引き返した。しかし、御自身の聖徒たちを守られる神は、その聖人が海の深淵で滅びることを許されなかった。　彼が海に投げ込まれたその瞬間、神の御心により、二頭の海豚[2633]が聖人を背中に乗せ、コンスタンティノープルの郊外にあるエウドムと呼ばれる岸辺へと運び出し、陸地に降ろした。　その際、聖人の手足は縛られていた縄から解き放たれ、彼は何の支障もなく立ち上がり、街へと向かった。しかし、聖人が近づいた街の「黄金の門」[2634]はまだ開かれていなかったため、彼は少し休もうと、そのそばに腰を下ろした。

その時、ヨハネという名の、高熱にうなされている一人の男が黄金の門に近づいてきた。病のせいでうめき声を上げ、体を震わせながら、彼は聖ヴァシリーのそばに座った。聖人は彼を憐れみ、彼に手を置き、主に向かって祈りを捧げた後、彼を癒した。　癒されたことを感じたその男は、聖人の足元にひれ伏し、自分の家へ同行してほしいと懇願し始めた。聖ヴァシリーは、その男がコンスタ

[2633] イルカ――哺乳類の海生動物。通常、群れを成して行動し、しばしば船の後を追う。古代において、イルカは最も愛された動物の一つであり、それに関する多くの詩的な伝説や迷信が生まれ、彫刻にも頻繁に描かれていた。

[2634] 「黄金の門」とは、都市の主要な門のことを指していた。

ンティノープルで最も貧しく、取るに足らない市民の一人であったにもかかわらず、喜んでその願いを聞き入れた。

ヨハネにはエレナという妻がいた。彼は妻と共に、敬虔な聖人を愛情を込めて自宅に迎え入れた。そして昼食の時間になると、彼らは聖人に食事を振る舞い、皆で楽しげに食事をした。　食事の席で、ヨハネは妻に、聖人がキリストの御名を呼び求めて自分を癒やしてくれたことを話した。すると妻は、そのような客人を迎えることができて大いに喜んだ。彼女はキリストを愛し、旅人を慈しむ心を持っており、神を畏れつつ生活していたからである。だからこそ、神の御心に適う者を自分の家に迎え入れることができたことを喜んだのである。

ヨハネスとヘレナは、聖人に、自分が誰でどこから来たのか教えてほしいと懇願し始めた。しかし、聖人はこう答えた。

「私が誰で、どこから来たのかについては、今はまだ語るべきではありません。そのことは後で知ることになるでしょう。今は、私を『自ら現れた』聖母マリアの無造作のイコンが祀られている修道院へ、祈りを捧げさせてください。」

そう言うと、彼は立ち上がり、ヨハネに付き添われて、祈りを捧げるために至聖なる聖母マリアの修道院へと向かった。そして、祈りが終わると、ヨハネの執拗な懇願に折れて、聖人は彼の家に戻った。　そこで、ヨハネとその友人は再び聖人に懇願し始め、執拗に迫って、自分のことを話してほしいと頼んだ。すると、聖ヴァシレイはこう言った。

「私は、パトリキウス・サモンによって海の深淵に投げ込まれた者である。私が若き日から仕えてきた主イエス・キリストが、主のみがご存知の方法で私をその深淵から救い出し、無傷のまま守ってくださったのだ。」

そう言って、この福者は、自分の名がヴァシリーであることを明かし、不義で残酷な拷問者サモンから受けたすべての苦難を順を追って語った。

聖ヴァシリーの話を聞きながら、ヨハネとヘレナは驚きつつも、以前知っていた聖人に関するすべてのことを思い出した。というのも、サモンが尊者をいかに苦しめたか、そして尊者が彼に何の害も与えることができなかったという噂が、街中に広まっていたからである。　その後、二人は尊者に対し、自分たちの家に留まって暮らすよう懇願した――そしてこの願いは、至福のヴァシリーの意にかなった。ヨハネとヘレナは、彼のために祈りのための特別な小部屋を用意し、そこに灯明を置いた。そして聖人はそこで、いつものように神への祈りを捧げるようになった。

誰が、この聖人の祈りの偉業について、また彼が天の主への祈りの中でどれほどの涙を流したかについて、私たちに語ることができるだろうか。誰が、彼のひざまずいた回数をすべて数え上げることができるだろうか。誰が、彼が絶えず眠らずに夜を明かしていたという、彼の徹夜祈祷について私たちに語ってくれるだろうか。誰が、彼の徳に満ち、偉業に彩られた生涯を私たちに描き出してくれるだろうか。　揺るぎない柱のように、この聖人は徳において決して揺らぐことがなく、決して怒ることはなく、モーセやダビデのように柔和であり、ヤコブのように穏やかで謙虚であり[2635]、そしてアブラハム以上に慈悲深かった。　というのも、アブラハムは自身の多くの富から施しを配ったのに対し、至福のバシレイオスは、主なる神のために耐え忍んだ自身の貧しさの中から貧しい人々に施しを行い、キリストを愛する者たちが彼にもたらしたものはすべて、直ちに貧しい人々に配ったからである。

聖ヴァシリーが、前述のキリストを愛するヨハネの元に滞在していた頃、ほどなくして人々が彼のもとに集まり始めた。ある者は心の安らぎを求めて訪れ、またある者は病人を連れてきて、彼に

[2635] ヤコブは、イスラエルの民の族長である。彼の謙虚さは、ラバンに対する態度に特に顕著に表れていた。彼はラバンから度々騙され、あらゆる種類の不当な扱いを受けても耐え忍んだ。また、ラバンから帰途についた際、兄エサウを年長者として敬意を持って迎えたことにも、その謙虚さが一部表れていた。

癒やしを願った。　聖人は、病人に両手を置き、祈りを捧げることで、キリストの恵みによって病人を癒やした。時が経つにつれ、聖人の名は都の至る所で広く知られるようになり、庶民だけでなく、名士や高官たちまでもが彼のもとに訪れるようになった。　奇跡を行う賜物に加え、聖人は透視の賜物も持ち、彼を訪れる者すべての隠された行い――善いものであれ悪いものであれ――を見通していた。罪人たちを密かに戒めることで、彼は多くの人々を悔い改めへと導いた。また、聖人は未来をも予見し、それについて預言的に告げていたが、そのことは後の物語から明らかになるだろう。

911年、ビザンツ帝国の皇帝レウス・ザ・ワイズが崩御し、その直後の912年には、彼の弟であるアレクサンドロス皇帝も亡くなった。彼らの死後、レウスの息子コンスタンティノス（通称「バグリアノロドス」[2636]）が、母ゾエと共に王位を継承した。新皇帝は即位当時まだ幼少であったため、王国の守護と統治は、ツァレグラードのニコラオス総主教[2637]と、キュロパラト[2638]のヨハネス（通称ゴリダ）に委ねられた。彼らは、若き皇帝が成人するまでの間、王国の実質的な統治者となった。

その間、ギリシャの国には蛮族が侵攻してきた。彼らは地域を次々と占領し、すでにコンスタンティノープルに迫り、その周辺の土地を荒廃させていた。しかし、軍を召集し、首都を脅かす蛮族と戦いを交え、その破壊的な 侵攻を食い止めることのできる者は、誰一人としていなかった。 ギリシャ王国全体が大きな混乱に陥り、民衆はニコラオス総主教に対して激しく不満を漏らし始め、彼に託された王国の利益を十分に顧みていないと非難した。　そこで総主教は、すべての貴族たちと協議した上で、東方の軍司令官コンスタンティノス・ドゥカに書簡を送り、コンスタンティノス・バグリアノロドスが幼少であるため王宮で教育を受けている間、コンスタンティノス・ドゥカがコンスタンティノープルに来て若き皇帝と権力を分かち合うよう呼びかけた。　コンスタンティノス・ドゥカが、戦場において強靭かつ勇敢な男として、帝国の敵に立ち向かうことができるようにするためであった。というのも、その男は実に極めて勇敢で無敵の戦士であり、彼と戦ったすべての異民族が恐れる存在だったからである。　彼らの度重なる証言によれば、彼らはドゥカの武器や彼の馬の鼻孔から炎が噴き出すのをしばしば目撃したという。その炎は彼らに向かって噴き出し、焦がし、追い払ったため、神ご自身が味方につけたこの将軍に立ち向かうことは不可能であった。　コンスタンティノス・ドゥカ自身も、自分に授けられた神の恩寵を隠すことはなく、次のように語っていた。

「かつて私が若かった頃」と彼は語った。「私が眠っていると、王の深紅の衣をまとった、あるまばゆいばかりの女性が私の前に現れた。彼女のそばには炎のような馬がおり、その馬の上には同じく炎のような武器が載っていた。そしてその女性は、私にその炎のような武器を手に取り、馬に乗るよう説得した。　私は最初、恐れて彼女の願いを聞き入れようとはしなかったが、やがて従った。そして、彼女が私に促した通りにしたとき、彼女はこう言った。「神の敵たちは皆、あなたの前に恐れと戦慄を抱き、わが子の冒涜者たちは、あなたの御顔の前で蝋のように溶けて消え去るように。」そう言うと、その輝かしい御方は私から離れていった。

このように語ったのは、総主教から王位への就任を呼びかける書簡を送られたあの男性自身であった。彼にこの総主教からの書簡が届くと、彼は自らをそのような高い権威に値しない者だと考え、提案された栄誉をあらゆる手段で拒み続けた。しかし、総主教とシンクリトス（[2639]）から、彼を王位に招く別の書簡が届いた。そこでコンスタンティノス・ドゥカは彼らに次のように返書を送った

[2636] コンスタンティノス7世ポルフィロゲネス（別名：バグリアノゲネス）皇帝は、912年から959年までビザンツ帝国の帝位にあった。

[2637] ニコライ1世総主教は、コンスタンティノープル総主教座に2度就いた。1度目は895年から906年まで、2度目は911年から925年までである。

[2638] クロポラトは、宮廷警備隊の長であった。ビザンツ皇帝の宮廷において、かなり重要な高官であった。

[2639] シンクリトスとは、文官と軍官からなる政府の全構成員を指す呼称であった。

。「私は、たとえ若くとも、私の主であり、神に油注がれた者である王と肩を並べるべきではありません。　また、貴殿らの提案に何か陰謀が潜んでいないか、あるいは私を滅ぼそうとしているのではないかと恐れている。」

彼からのこの手紙を受け取ると、　総主教とすべての貴族たちは彼に三通目の書簡を送り、その中で各人は個別に誓約を記し、主の尊き命を与える聖十字架を証として、いかなる諂いや欺瞞もなく、誠実かつ心から、若き皇帝との共同統治を呼びかけていると誓った。　そこで、彼らの誓いを信じて、コンスタンティノス・ドゥカは家臣全員を連れてコンスタンティノープルへ向かい、貴族たちや街の住民全員から栄光のうちに迎えられた。　総督が都に到着したのは早朝のことだった。太陽が昇り、輝き始めたばかりのその時、突然、コンスタンティノス・ドゥカが暗殺者の手によって死ぬことを予兆する不吉な兆しが現れた。　太陽がまばゆい光を放つ中、小雨が降り始め、地面に落ちる雨粒は血のような色をしていた。

一方、総主教ニコライとその顧問たちは、コンスタンティノープルの民衆全体が名高い総督コンスタンティノス・ドゥカのために用意した盛大な出迎えの式典を知ると、当初の意図を翻し、彼を皇帝とその母のもとへ近づけることを拒み、王宮の門を閉ざした。　そこでコンスタンティノス・ドゥカは、ヒッポドローム前の広場[2640] に自身の天幕を張り、ここには毎日多くの貴族や市民が訪れ、名高い将軍を自分たちの皇帝であり支配者であるかのように崇め奉った。

その一方で、新皇帝に忠誠を誓う貴族の中には、聖ヴァシレイを知り、彼に深い愛情を抱いていた者もおり、彼らは一人ずつ彼の元を訪れてこう尋ねた。

「この事態は、いったいどう終わるのでしょうか？」

聖人は涙ながらに、三ヶ月も経たぬうちに、新たに皇帝に選出されたコンスタンティン・ドゥカと、そのすべての支持者たちが血なまぐさい死を遂げると告げた。このような結末を告げると、至福のヴァシリーは、疲れ果てるまで苦々しく、慰めようのないほどに泣き続けた。　聖人からのそのような答えを聞いた後、彼に尋ねた貴族たちはそれぞれの家に閉じこもり、予言された結末を恐れて、そこから一歩も外に出ることなく過ごした。

一方、聖ヴァシレイオスのもとには、未来を知ろうとして、再び二人の貴族が訪れた。彼らは双子の兄弟であり、二人ともプロトスパファリオス[2641] の位を帯びていた。聖人のもとへやって来ると、彼らはこう尋ねた。

「もし私たちが新しく選ばれた皇帝の支持者となり、彼のもとへヒッポドロームに赴くようになったら、その後、私たちに何が起こるのでしょうか？」

「そこへ行ってはなりません、子らよ！」と聖人は涙ながらに答えた。「もしあなたがたが彼に加われば、一人は剣で斬り殺され、もう一人は鼻と耳を切り落とされ、生涯、見る者すべてから嘲笑の的となるでしょう。」

しかし、兄弟たちは聖人の予言を無視し、ヒッポドロームへ向かい、新たに即位した皇帝に加わった。

二ヶ月が過ぎた頃、コンスタンティノス・ドゥカは、自分が総主教やシンクリト全員に欺かれ、侮辱されたことを悟ると、自分が召された王位をどのようにして手に入れるかについて、支持者たちと協議を始めた。その際、高潔なこの軍司令官は、暴力に訴えることを望まなかった。　全軍と多くの民衆の支持を得ていた勇敢な将軍として、　彼は力ずくですべての城門を打ち破り、王位に就くこともできたし、あるいは軍勢を率いて都市の城壁を包囲し、食料の供給を一切遮断することで、総

[2640] ヒッポドロームとは、馬の競技場であり、競馬や戦車競走が行われた場所である。

[2641] プロトスパファリオス――重要な宮廷の官職。彼はスパファリオス、すなわち宮廷の剣士たちの部隊の長でもあった。

主教とシンクリト全体に意に反して自分を王として認めさせ、王位への道を切り開かせることもできたはずである。　しかし、敬虔で神を畏れる人物であったコンスタンティヌスは、自分のせいで誰かが飢餓の苦難に遭うことを望まず、また血なまぐさい手段で王位を勝ち取ることも望まなかった。そこで、すべての希望を神に託し、なおも総主教や貴族たちの誓いを信じ続けていた彼は、支持者たちに、門を一つだけ破り、武器を一切持たずに平和的に、自分と共に王宮へ向かうよう命じた。敬虔な将軍はその際、次のように語った。

「もし我々が穏やかに迎え入れられるなら、それは我々が正しいことをしており、流血や暴力なしに目的を達成しているということだ。もし我々に襲いかかり、殺すようなことがあれば、彼ら自身が神の前で我々のことを説明することになるだろう。なぜなら、我々が提案された地位を求めていたわけではないにもかかわらず、彼ら自身が執拗な懇願と誓いによって我々を誘惑したのだから。」

そう言い終えると、コンスタンティノス・ドゥカは、自分たちに襲いかかる者たちに対して、誰も剣を鞘から抜いたり、弓に矢を番えたりしないことを、支持者たちに誓わせた。「私のせいで――」と彼は付け加えた。「キリスト教徒の血が一滴たりとも流されないようにするためだ」。　コンスタンティノスの支持者たちは、この誓いをもって指導者の命令に従うことを約束し、王宮の銅製の門を破壊して（それ以外には中庭に侵入する手段がなかったため）、　武器を一切携えず、この敬虔な男コンスタンティノス・ドゥカ（彼もまた無武装であった）の先導のもと、平和的に王宮へと向かった。

彼らが無防備なまま王の居室へと向かっていたその時、総主教が意図的に配置していた弓兵たちが突然彼らに襲いかかり、無数の矢を放って多くの者を負傷させた。　真っ先に被害を受けたのは、先頭を歩いていた勇敢な将軍コンスタンティノス・ドゥカ自身であった。彼は右腕のすぐ下の肋骨に重傷を負った。　傷の痛みに耐えかねて、ドゥカは地面に倒れ込んだ。これを見た、大勢集まっていた宮殿の従者たちは、剣を抜き放ち、平和的に入ってきた一行に襲いかかり、草の茎を刈り取るかのように彼らを切り倒し始めた。こうして彼らはコンスタンティン・ドゥカ、その息子、そしてその他多くの人々を殺害した。　一方、逃げ出した者たちは生け捕りにされ、直ちに様々な方法で処刑された。ある者は真っ二つに切り裂かれ、ある者は城門前の木に吊るされ、またある者は鼻や耳を切り落とされ、動脈を切断された。こうして、コンスタンティノス・ドゥカと共に、何の罪もない三千人もの男たちが命を落とした。　他の者たちと共に、至福のヴァシリーに助言を求めて訪れていたプロトスパファリアの二人の兄弟もまた犠牲となり、しかも修道士が予言した通りの形で、一人は剣で斬り殺され、もう一人は鼻と耳を切り落とされた。

流血の惨劇を終えると、兵士たちは殺害されたドゥカとその息子の首を切り落とし、それらを総主教ニコライとその顧問たちの元へ持ち帰った。　総主教はコンスタンティノスを殺害した者たちに惜しみない報奨を与え、殺害された者の首を槍に刺して街中を練り歩かせ、それを侮辱の対象とさせるとともに、彼と共に犠牲となった他の者たちの遺体はすべて海に投げ捨てるよう命じた。

このような無法な流血事件が、当時コンスタンティノープルで起こった。そして、無実の者たちの流された血によって、この都市は穢された。その血は、アベルの血のように[2642]、大地から神に向かって叫び声を上げたのである。　なぜなら、異民族の敵の剣によってではなく、同じ信仰を持ち、同じ志を共有する同胞、かつての友人であり兄弟であった者たちの手によって、狡猾な策略の犠牲となり、王と称された強き将軍コンスタンティノス・ドゥカ――その勇敢さで名高く、神に愛され、民に愛されたこの戦士――は命を落としたからである。

[2642] アベル――アダムの次男で、カインによって陰険に殺害された。

しかし、この世の権力者たちから侮辱され、嘲笑されたコンスタンティノス・ドゥカは、神によって栄光を与えられた。彼の義なる魂、そして彼と共に苦難を共にしたすべての者の魂は、天使たちによって天の住まいへと運ばれ、アブラハムの懐に迎え入れられたのである。　このことは、次の驚くべきしるしによって明らかに証しされている。コンスタンティンの同志たちの遺体が木に吊るされていた間、夜になると星々が彼らのもとへ降りてきて、日の出まで彼らの頭上で明るく輝いていたのである。　このしるしによって、彼ら全員が不当に苦難を受けたこと、そして殉教の報いとして、彼らの魂が聖人たちの住む場所に迎え入れられたことが明らかにされたのである。

我々は、私たちの尊い父である至福のバシレイオスの預言的な先見の明を示す例として、これらすべてを語り直した。なぜなら、彼が予告したことはすべて実現したからである。この尊い方に特有の先見の明が、他の出来事の発生時に現れたことについても述べておこう。

若き皇帝コンスタンティノス・バグリアノロドスの共同統治者として、パトリキウスであるロマン[2643] が選ばれ、彼は皇帝として戴冠した。皇帝コンスタンティノスが成人すると、ロマンは彼に自分の娘ヘレナを妻として与えた。　コンスタンティン以外にも、ロマンにはもう一人の娘婿がいた。サロニトという名のパトリキで、高慢で権力欲の強い男であり、自身の富と家系の名門ぶりを誇示していた。彼は心の中に、コンスタンティン皇帝を滅ぼし、王権を奪い取るという悪辣な企みを秘めていた。

サロニトの邸宅の近くには、前述のキリストを愛するヨハネの家があり、そこには聖ヴァシリーが住んでいた。聖ヴァシリーは、その鋭い眼差しでサロニトの邪悪な企みを見抜き、まるで独り言を言うかのようにこう言った。

「バシレイオスよ！この忌まわしい不信心者によく注意せよ。彼は心の中で神に背くことを企んでいる。しかし、私は行って彼を糾弾しよう。そうすれば、彼は悔い改め、その狂った企みを断念するかもしれない。」

そしてある日、サロニトがいつものように華やかに馬に乗って家を出て王宮へ向かうと、聖人は道に立ち塞がり、その貴族に向かって大声で叫び始めた。

「なぜ、あなたは心の中で、神の油注がれた者に対する悪事を企てたのか。あなたには王位の分け前などない。だから、無駄な努力はするな。さもないと、主があなたに怒りを向け、あなたが持っている貴族の地位さえも奪い取ってしまうだろう。」

聖人からのこのような非難を耳にしたサロニトは、彼に対して激しい怒りに燃え上がった。彼は聖人に襲いかかり、手に持っていた鞭でその頭を打ちつけながら、あらゆる罵詈雑言を浴びせかけた。その後、聖人に数多くの傷を負わせ、侮辱を加えた後、彼は聖人を置き去りにしてその場を立ち去った。

聖ヴァシリーはすべての罵倒と傷を忍耐強く耐え忍び、翌日、サロニトが宮殿へ向かう途中で再び彼に出くわすと、前回と同じ言葉で彼を非難した。　サロニトは怒りに駆られ、家来たちに聖人を捕らえ、自分の家へ連行し、自分が宮殿から戻るまで拘束しておくよう命じた。その後、戻ってくると、彼はイバラの枝を持ってくるよう命じ、聖ヴァシリーを自分の前に連れてくるよう命じた。

祝福された聖人が彼の前に連れて来られると、サロニトは言った。

「答えよ、狂った老いぼれよ。どの悪魔が、私に生意気に立ち向かい、このような不遜で冒涜的な言葉を吐くよう教えたのだ？　それとも、私が王の娘婿であり、王の重臣たちの中でも筆頭であることを知らないのか？　それとも、私の富が海辺の砂のように数え切れないほどであることも知らないのか？　私は膨大な数の奴隷、領地、村、そして様々な家畜の群れを所有しているだけでなく、数え切れないほどの金や銀も持っている。さらに、私は神と我らの王たちから与えられた偉大な名声と名誉に浴しているのだ。　それなのに、お前は、貧相で貧しい身でありながら、どうして民衆の目

[2643] 言うまでもなく、919年から944年までコンスタンティノス7世と共同統治を行ったローマ1世のことである。

の前で、このような非難や告発を口にして、私の前に現れるという不遜なことをしたのか？私がお前を死に追いやる前に、答えよ。

聖人は、そのような言葉に対して、こう答えた。

「まさか、お前の心に秘めている狡猾で邪悪な企みが、秘密のままであるとでも思っているのか？　いいえ、神ご自身が、お前が王の命を奪い、王権を簒奪しようと企んでいることを私に明かされたのだ。　その不敬虔な企みを捨て、主の油注がれた者に悪意を抱くのをやめなさい。神の名においてあなたに告げる。もしあなたがその邪悪な企みを捨てなければ、主はあなたに激しく怒りを燃やし、まもなくこの地上からあなたの記憶を消し去られるだろう。

この言葉に、狂気のサロニトは激しく怒り、その顔色は一変して青ざめた。怒りに燃え、彼は家来たちに、その高僧を地面に押さえつけ、イバラの枝で容赦なく打ち据えるよう命じた。

「もっと強く打て」と彼は言った。「偽預言の悪霊が彼から出るまで、打ち続けろ。」

そして、彼らは彼を打ち続けた。しかし、聖人はまるで声も感覚もない木のごとく、残酷な打撃を受けても、うめき声一つ上げず、一言も発せず、体さえも動かさなかった。そのため、棒で体を打たれる音以外、何も聞こえなかった。

聖人が拷問を受けている間、サロニトフの家の門は開かれていた。ちょうどその時、門の前を、ヨハネの妻である敬虔なエレナが通りかかった。門の中を覗き込むと、彼女は至福のバシレイオスが拷問を受けているのを見た。彼女は素早く家の中に入り、自分の体で聖人の体を覆い隠し、苦々しい涙を流しながら大声で叫び始めた。

「私のような罪人を打ってください。しかし、この神の灯火であり、私の牧者であり、霊的な父であるこの方を、どうかお赦しください。彼の代わりに私を殺し、彼を解放してください。」

すると、その残忍な気性ゆえに凶暴な獣のようだったサロニトは、家来たちに激しく言い放った。

「彼女も、本人がそう望んでいるのだから殴れ。彼女は、この不信心者の不貞で姦淫にふける同棲相手だろう。」

命令に従い、家来たちは敬虔な妻を殴り始め、彼女が息絶えたと思われるまで殴り続けた。すると、不法なサロニトは家来たちに命じて、彼女の足を掴んで、死んだ犬のように通りに放り出すよう命じた。　また、祝福されたヴァシリーについては、縛り上げて吊るし、牛の腱で五百回の鞭打ちを命じた。残酷な鞭打ちに耐えながらも、祝福されたヴァシリーは神の助けにより、勇敢にそれを耐え抜いた。使用人たちは拷問を終えると、彼を縄で縛り上げた。

夜が更け、サロニトが眠っているとき、彼は夢の中で、この残酷で悪意に満ちた貴族の死が間近であることを予兆する幻を見ました。彼は夢の中で、高く枝ぶりの良い樫の木を見ました。その頂上には、カラスが巣を作っていました。　その猛禽は巣の中に座り、翼で雛たちを覆っていた。すると、斧を持った二人の男が樫の木に近づき、それを切り倒そうとした。その時、一人が木の梢を指さしながら、もう一人にこう言った。

「ここにカラスがいて、その鳴き声のせいで王は安らかに眠れないのだ。」もう一人が答えた。

「それに、あのカラスは、神に愛された聖人、至福のヴァシリーに多くの害を与えたのだ。」

そう言うと、彼らは木を切り倒し始めた。木が地面に倒れると、ぼろぼろの服を着た人々が近づいてきて、木の枝を切り落とし、それを火の中に投げ込み始めた。その中に、サロニトは聖ヴァシリーの姿も見た。彼は切り倒された木のそばに立ち、こう言っていた。

「*良い実を結ばない木は、すべて切り倒されて火に投げ込まれる*」（マタイ3:10）。

それから、サロニトの方を振り向いて、聖人はこう言った。

「私はあなたに、その邪悪な意図を捨てよと言ったではないか。さもなければ、あなたは今いるその高みからも転落してしまうだろう。」

眠りから覚めたサロニトは体調不良を感じた。そして、夢の中で見た幻について考えを巡らせると、大きな恐怖に襲われた。恐怖に駆られて彼は起き上がり、直ちに召使いを遣わして、聖バシレイオスを束縛から解き放ち、自由の身にするよう命じた。　監禁から解放された聖人は、自らの住まいであるヨハネの家へと戻った。聖人を見て、ヨハネは大いに喜んだ。しかし、その敬虔な男は、聖人が残酷な拷問によって負った傷跡を目にすると、涙を流した。　また、至福のヴァシレイオスを慕う者たちも皆、彼の帰還を聞きつけると、ヨハネの家へと集まり、彼の帰還を喜びつつ、その体にできた傷を見て涙を流した。　一方、ヨハネの妻である至福のヘレナは、殴打によって負った傷のため、まもなく息を引き取った。しかし、不義のサロニトもまた、病床から立ち上がることはなかった。数日後、彼は亡くなり、こうして至福のヴァシリーによる予言が彼の上に成就し、サロニト自身が夢見たことも現実のものとなった。

しばらくして、聖ヴァシレイに仕えていた敬虔なヨハネも、この世を去って主のもとへ帰った。こうして、聖ヴァシレイは亡き人の家で一人暮らしをすることになった。　毎日、大勢の様々な人々が彼のもとを訪れ、病人を連れてきたり、連れて行ったりした。至福のバシレイオスは、神への祈りによって彼らを癒した。また、多くの貧しい人々も彼のもとに集まってきた。なぜなら、尊者バシレイオスは、キリストを愛する者たちから持ち寄られたものをすべて彼らに配り、翌日まで自分の手元に残すことは一切なかったからである。

その頃、コンスタンティンという敬虔で神を愛する市民がおり、彼は「バルバル」と呼ばれていた[2644]。彼は尊者に対し、自分のところへ移り住んでほしいと懇願し、彼のために人目につかない小部屋を用意した。そこで彼は、かつてソマリアの女[2645]が預言者エリシャのためにしたように（列王記下4:10）[2646]、聖なる方のために寝床、食卓、腰掛け、そして灯明を用意した。その後、彼は、長年未亡人として神に喜ばれる貞潔な生活を送ってきたある徳高い老女テオドラに、この神の僕に仕えるよう命じた。その祝福された老女は、聖人の小部屋からほど近い部屋に住み、彼を神の御使いのように熱心に世話した。　もし誰かが聖ヴァシリーに会って話をしたいと訪ねてくると、テオドラはそれを尊者にお知らせし、尊者は自分の修道室から彼女の部屋へやって来て、そこで来訪者を迎え入れた。　このようにして、彼はその部屋であらゆる人々を迎え入れ、病人を癒やし、悲しむ者を慰め、困窮者に施しを与え――聖者の日々はこうした活動の中で過ぎていった。夕方になると、彼は自分の庵に戻り、そこでいつものように神への祈りを捧げた。

至福のヴァシリーの神に喜ばれる生活と、その驚くべき行いの評判はますます広まり、彼を崇敬するのは一般信徒だけでなく、多くの聖職者たち――修道士、司祭、聖主教たち――もまた、しばしば聖人を訪ね、彼から魂と肉体の助けを受けていた。　また、公爵や貴族たちは彼を自宅に招き、病人を訪ねて彼らのために祈ってほしいと頼んだ。そして、至福のバシレイオスがどこかの病人のもとを訪れると、すぐに祈りを捧げながらその人たちに手を置き、彼らを癒やした。また、悪霊はたった一言で追い払った。　また、彼は道徳の是正にも心を配り、多くの人々に徳を説き、蜜のように甘い言葉で人々を教えるだけでなく、時には罪人たちを厳しく非難することもあった。なぜなら、全知の神によって、彼にはすべてが明らかにされていたからである。

ある時、王宮に召された聖ヴァシリーは、誰にも知られぬよう王ロマンと二人きりで語り合う中で、王の利己心や、多くの女性との不品行を糾弾した。しかし王は、彼に怒りを示すどころか、その指摘を穏やかに受け入れ、自らの生き方を改めることを約束した。

同様に、この聖人は、ある高貴なパトリキアンの女性アナスタシアを、彼女が密かに行っていたいくつかの罪を指摘して悔い改めの道へと導き、彼女の死を予言した。

2644 「ヴァルバル」とは、異邦人を意味する。

2645 ソナミテの女――イッサカル族の領地にあるソナムという町の住民で、ナザレとファボラの南西に位置する。現在、この町はソラムまたはスレムと呼ばれている。

2646 エリシャ――イスラエル王国の預言者。預言者エリヤの愛弟子であり、その預言の賜物を継承した人物。

また、彼はコンスタンティノス・バグリアノロドス帝の妃であるヘレナ皇后に対し、彼女がまず娘を産み、その後、成長して王位に就く息子を産むだろうと告げた――そしてその予言は的中した。皇后は彼に金を授けるよう命じたが、聖人はそれに触れることさえ拒んだ。　そこで皇后は、聖三位一体の名にかけて、好きなだけ受け取るよう彼に懇願した。彼女の執拗な願いに折れて、聖人は三枚の金貨[2647]を受け取り、そこに同席していた、彼に仕えていた老女テオドラにそれを渡した。

それを見た女王の側近たちの一部が聖人にこう言った。

「父よ、あの老女にもっと多くの金貨をください。」聖人はこれに対し、こう答えました。

「子らよ、我々は茨を大量に持ちたくはない。それは我々の手を刺すからだ。」すると、女王は聖人にこう言った。

「まことに、あなたは心を尽くして唯一の神を愛し、この世の虚しい富とは無縁な方です。しかし、私たちのことを忘れず、神に喜ばれる祈りの中で私たちを覚えてください。」

そう言って、彼女は聖人を平穏のうちに送り出した。

その頃、聖ヴァシリーのもとへ、グリゴリーという名の平信徒が訪れた。彼は聖人の弟子となり、その多くの奇跡を目の当たりにし、後に聖人の詳細な伝記を著した人物である。　このグリゴリーは、初めて聖者に会った際、聖者が持つ驚くべき透視の賜物に深く感銘を受け、戸惑いを覚えた。というのも、聖人はそれまでグリゴリーを見たことがなかったにもかかわらず、彼がやってくるやいなや、その名を呼び、さらに彼が心の中で考えていたことすべてを語り明かしたからである。　そもそもこの聖人は、極めて豊かな透視の賜物を持っており、人々の隠された行いだけでなく、人間の心の最も秘められた思いまでも見通していた。聖人の生涯には、その賜物が人々の前で明らかになった事例が数多くあったが、これらすべてを語り尽くすには時間にも場所にも限りがあるため、ここではいくつかの例に留めることにする。

ある長老が聖人のもとを訪れ、リンゴを贈り物として持参し、そこで昼食を共にすることになった際、リンゴにいくつのメドニツァ[2648]を費やしたかを思い出そうとしていた。しかし、聖人は彼にこう言った。

「兄弟よ、なぜ果物にいくら費やしたかを思い返して、そこまで考え込んでいるのですか？無駄な労力を費やすことなく、私に尋ねなさい。あなたはリンゴに十メドニツを支払ったのです。」

これを聞いて、長老は驚愕し、老聖人の洞察力に感嘆するとともに、人々にこれほど偉大な聖人を遣わしてくださった神を賛美した。

聖人と親交のあったあるワイン商人が、商売がうまくいかなくなった際、尊者のもとを訪れ、自宅に来て共に祈り、その祈りによって神の祝福を自分の家に授けてほしいと頼んだ。聖人が彼のところへ来ると、ワイン商人は多くの乞食たちを昼食に招いた。　食事が終わると、彼は聖人を酒場へと案内し、ワインの入った器を祝福してほしいと頼んだ。器を祝福しながら、聖人はそのうちのひとつ、約十五メルのワインが入る器に近づき、ワイン商人にこう言った。

「さて、この器を除くすべての器をキリストの御名によって祝福しました。この器は割らなければなりません。」

しかし、ワイン商人は聖人にそうしないよう懇願し始めた。

「壊さないでください、神父様」と彼は言った。「この器も祝福してください。もしこれを壊してしまえば、私の在庫は底をつき、私は貧乏人になってしまいます。というのも、私は様々な金貸しから多額の借金を抱えているからです。」

聖人は彼にこう答えた。

[2647] ズラトニツァ――金貨、チェルヴォネツ。

[2648] メドニツァ――小銭の銅貨。

「そのことはすべて承知している。だが、それでもなお、私はこの器を砕くつもりだ。そうして、あなたを大きな災いから救うためである。そのために、私はここへ来たのだ。」すると、ワイン商人は聖人にこう言った。

「この壺を割るよりは、私の頭を割ってくれ。」

しかし、聖人はその場にあった薪を手に取り、壺を打ち砕き始めた。壺が割れると、大量のワインが床にこぼれ落ちた。これを見て、ワイン商人は深く悲しんだが、彼と一緒に立っていた者たちは聖人に対して憤りを覚え、心の中で彼を罵り始めた。

聖人は、彼らの思いや悪口を霊で察知すると、そこにあった杖を取り、底に少しワインが残っていた割れた器に差し込み、そこからワインを飲み干して死んだ、長さ三肘[2649] の蛇を取り出した。そして、そこにいた人々に語りかけて言った。

「なぜ、子供たちよ、心の中で私を誹謗するのですか？　まるで私が何か悪いことをしたかのように！　この蛇を見てください。その毒でどれほどの人々が中毒になり、そのとき主人はどれほどの災難に見舞われたことでしょう。まさか、あなたがたはそれを望んでいるのですか？　私がこの壺を割ったのは、正しいことではなかったでしょうか。」

そう言うと、聖人は蛇を地面に投げ捨てた。すると、ワイン商人は聖人の足元にひれ伏し、許しを請い始めた。聖人は彼を許し、祝福を与えた。そして、聖ヴァシリーの祈りによって、ワイン商人の家は主から祝福され、あらゆる面で豊かになった。

テオドティアという名の妻が、病気の四歳の息子を聖人のもとへ連れて行き、息子の健康のために祈ってくださるよう聖人に懇願し始めた。彼女の子供たちは皆、四歳になるやいなや亡くなっていたため、彼女はすでに病気にかかっていたこの子も死んでしまうのではないかと恐れていた。　彼女がその悲しみを聖人に語っていると、連れてこられた少年は泣き出し、パンをねだり始めた。聖人はパンの切れ端を手に取り、それを少年に与えると、優しく微笑んで言った。

「お名前は？ レフというのかい？」

それから、母親の方を向き直って、こう言った。

「あなたの敬虔さゆえに、とりわけ、聖母マリアのイコン『オディギトリア』[2650] の前で頻繁に祈りを捧げることで示された聖母への愛への報いとして、主はこのあなたの息子を健やかで無傷のまま守ってくださるでしょう。　成長すれば、彼はあなたに多くの喜びをもたらすでしょう。なぜなら、彼は品行方正で、賢く、誠実であり、人々の間でも称賛される存在となるからです。　良き教育を受け、学問の知恵を授けられた彼は、修道士となり、やがて聖職者となるでしょう。そして主は彼を守ってくださいます。しかし、あなたが今後産む他の子供たちは、最初の子供たちと同様に亡くなるでしょう。

すると、その女性は聖人に頭を下げて去っていったが、聖人が彼女に予言したことはすべて実現した。

ある人物が、師に親しく知られていたが、主人の命を受けて東方へ旅立つにあたり、祝福による見送りをお願いしに来た。[2651] 師は、その顔を注意深く見つめ、旅の途中で彼に何が起こるかを予見して、こう言った。

「ヘリドン川は恐ろしく危険だが、それでも、罪深い神の僕ヴァシリーの祈りによって、その川は鎮まるだろう。」

[2649] ロコートまたはラコート――10.5ヴェルシュクに相当する長さの単位。3ロコートはほぼ2アルシンに相当した。

[2650] オディギトリア――「導き手」を意味する。ヴラヘルナ寺院に安置されていた、奇跡を起こす聖母マリアのイコンの名称である。その後（1046年）、このイコンはロシアに移され、スモレンスク市に安置された。これにより、このイコンは「スモレンスクの聖母イコン」と呼ばれるようになった。

[2651] 「東方」あるいは「東方の国々」とは、通常、ヨーロッパの「西方」と対比して、シリア、パレスチナ、アラビア、ペルシアを指した。

この聖人の言葉を、誰も理解できなかった。　その男は旅に出た。そして、東方の国々にいたとき、ある川が彼の行く手を阻んだ。彼はその国々に行ったことがなかったため、その川を知らなかった。その川は幅が約二十サジェーンあったが、その流れは極めて速く、鳥だけがそれと同じ速さで飛べるほどであった。　その男は岸辺に立ち止まり、馬に乗ったまま対岸へ渡れる浅瀬を、目を凝らして探し始めた。　すると突然、波が彼を襲い、馬ごと巻き込んで川の中ほどへと引きずり込んだ。流れは彼らを海へと運んでいき、その男はもはや避けられない死の危機に瀕していた。恐怖に駆られて、彼は主に向かって叫んだ。

「主なる神よ！　私たちの尊い父ヴァシリーの祈りによって、この罪深い私をお助けください。」

彼がそう言い終えるやいなや、聖ヴァシリーの姿が見えた。聖ヴァシリーは荒れ狂う波を鎮め、馬の手綱を握って対岸へと導き、やがて姿を消した。

溺死の危機を免れたその男は、神と神の御心に適う聖ヴァシリーに感謝を捧げた。その後、近くの村にたどり着き、一晩泊まることにして、その川の名前を尋ねた。すると、その川は「ヘリドン」、すなわち「ツバメ」と呼ばれていると教えられた。その流れの速さは、ツバメの飛翔に匹敵するからだ。　この川は非常に危険で、渡り方を知らない多くの人々をすでに死に至らしめてきた。その時、その男は、祝福を求めて聖ヴァシリーのもとを訪れた際に、聖人が彼に語った言葉を思い出し、神に祈りを捧げながらこう叫んだ。

「主よ、あなたに栄光あれ、あなたに栄光あれ！　私の主よ、ただ一つお願いがあります。どうか、再びあなたの聖人に会い、その尊い白髪に頭を下げさせてください。」

旅から戻った彼は、聖人のもとを訪れ、その足元にひれ伏して、相応の感謝を捧げた。その後、彼は聖人に、聖人の聖なる祈りによって、神がどのように彼に御慈悲を示してくださったかを語った。

前述の平信徒グリゴリーは、その徳の高さゆえに聖ヴァシリーに大変好かれていた。彼は貞潔、節制、そして断食の生活を送っていたからである。彼はしばしば尊者のもとを訪れ、その神に導かれた教えに耳を傾け、ついにその弟子と呼ばれるにふさわしい者と認められた。　また、彼は聖第一殉教者ステファノスに対して特別な愛と信仰を抱いており、しばしばその教会を訪れ、あらゆる装飾を施して美しく飾り立てていた。亡くなった両親から、彼はコンスタンティノープルにある家と多くの領地を相続した。その領地の中には、ランディスタの町からほど近いフラキアにあるブドウ畑[2652]も含まれていた。　収穫の時期にそこへ赴こうと決意した彼は、師である尊者のもとを訪れ、祝福を受けた。その後、第一殉教者ステファノの教会に入り、そのイコンの前でひざまずいて祈りを捧げた後、こう言った。

「さて、私には陸と海を跨ぐ遠い旅が待っています。それゆえ、聖なる第一殉教者ステファノよ、お願いいたします――この旅路において、あらゆる悪から私をお守りください。そして、私が力の及ぶ限りあなたの聖なる神殿に仕えたように、あなたもまた、神から与えられた恵みによって、あらゆる困難において私の守護者、助け手、そして導き手となってください。」

こうして初殉教者ステファノに祈りを捧げた後、グリゴリーは旅立った。　ある宿に一晩泊まった際、彼は宿の主人の娘が失くした、二ズラトニツァ相当の価値のある帯を見つけました。宿の主人とその家族が帯を探し始め、宿泊客にその行方を尋ねて回ったとき、グリゴリーは悪魔の唆しにより、帯を隠してこう考えました：

「帯を失ったのは裕福な人々だ。だから、それを売って、その代金を貧しい人々に配ったほうがよいだろう。」

[2652] フラキア――ビザンツ帝国の領土で、バルカン半島の北東部に位置する。現在、フラキアはロマニアまたはルメリアという名称で、ヨーロッパ・トルコの州を構成している。

再び旅に出たグリゴリーは、同じく2ズラトニツァの価値がある帯と、4ズラトニツァとかなりの小銭が入っていた旅袋を失ってしまった[2653] ；その喪失を嘆きながら眠りにつくと、夢の中で聖ヴァシリーが現れ、割れた壺を指さしてこう言った。

「この割れて、もう何の役にも立たない壺が見えるか？」

「はい、見えます、師よ」とグリゴリーは答えた。

「もし誰かがこれさえ盗んだとしても」と聖人は言った。「その者は四倍の罰を受け、盗んだ者からは現世あるいは来世の恵みが奪われるだろう。もし盗んだ者が裕福であれば、その富から盗んだ物の四倍以上のものが奪われ、もし貧しい者であれば、来世において四倍の罰を受けることになる。」

グリゴリーはこれに対し、こう言った。

「父よ、私はこれまで一度も何も盗んだことはありません。」聖人は答えた。

「お前は宿屋の主人の娘の帯を拾ったのに、それを隠しておきながら、何も盗んだことはないと言うのか。」グリゴリーは反論した。

「父上、私はその帯を盗んだのではなく、拾ったのです。」

しかし、聖人はこう言った。

「知っておきなさい、わが子よ。もし誰かが他人が失くした物を見つけ、たとえその人が失くした物を探して尋ねてきたとしても、それを返さなければ、その人は泥棒として裁かれるのだ。だから、お前は失くした物を返すのが当然だった。しかし、お前は他人の物を隠してしまったため、隠した物の四倍以上のものを奪われることになるのだ。」　それだけでなく、お前はさらに大きな災いに遭わないよう、用心しなければならない。

眠りから覚めたグリゴリウスは、深い悲しみに包まれていた。その悲しみは、自身の罪に対する悔恨と、尊師が警告した新たな未知の災難への不安とが混ざり合ったものだった。彼は憂鬱な気分で、フラキアの領地へと戻った。そこで、収穫の最中、彼は旅の途中で経験した最初の誘惑よりもさらに強い誘惑に直面することになった。

グリゴリーのブドウ園で働いていた傭兵の一人、アレクサンドルという男は、ある若い娘メレティニアと正式に結婚していた。彼女は気性が荒く、さらに淫乱で、魔術師でもあった。　彼女は姦淫に対する抑えきれないほどの情熱を抱いており、アレクサンドルとの結婚後まもなく、近隣の村々の男性のほぼ全員を誘惑し、自分との不義の同棲へと誘い込んだ。　それにもかかわらず、誰も彼女の不道徳を告発することはできなかった。というのも、誰かが彼女について悪口を言っているのを耳にすると、彼女は即座に魔術を用いてその者に猛烈な病気を引き起こしたからである。　彼女は、とりわけ自分の夫に対してもそう振る舞った。夫は当初、彼女の不道徳な行いを見るたびに、しばしば彼女を殴っていたが、魔法の力で引き起こされた病によって、彼女は夫をこれほどまでに疲れさせ、無力化してしまったため、夫は自分からハエ一匹さえ追い払うことさえできなくなってしまった。そのため、彼女が彼に腹を立てて棒や縄で殴り、家から追い出そうとしても、彼は抵抗することができなかった。それほどまでに、彼はメレティニアの魔法によって引き起こされた病で衰弱していたのである。　この魔女の母については、彼女の魔術によって鳥の飛翔を妨げ、川の流れを止め、人間には語り尽くせないほど多くの悪事を働いたと伝えられている。　そのような邪悪な魔女の娘こそがメレティニアであり、彼女はあらゆる点で母に似ており、さらにはその不道徳さにおいて母をも凌駕していた。というのも、彼女は度を越した姦淫にふけっていたからである。　彼女は多くの夫たちを誘惑し、自分との罪深い関係に引き込んだ。もし誰かが彼女を非難する言葉をたった一言でも口にすれば、その者は二、三ヶ月の間に体が麻痺してしまった。また、彼女を殴った者は、その後かろうじて二日間生き延びただけで、やがて死んでしまった。

[2653] ペニャズ――銀貨。

若く、美貌に恵まれたグリゴリウスを見たとき、この不道徳な魔女は彼に魅了され、彼を誘惑して自分との不道徳な同棲へと導こうと企んだ。　彼女は毎日、恥じることなく、彼がどこへ行こうとも後をついて回り、彼の前で挑発的な態度をとった。そして、悪魔の力の助けを借りて、彼に自分に対する不純な考えを植え付け、夜には彼に夢を見させ、眠りの中の幻影として恥知らずな姿で彼の前に現れ、彼の中に不純な情欲をかき立てた。　グリゴリーは大きな困惑に陥り、肉欲の動揺に絶えず苛まれていた。というのも、その娼婦が淫らな振る舞いで目に見える形で彼を罪へと誘惑している一方で、悪魔は目に見えない形で彼の中に情欲の炎を煽っていたからである。 もし 、聖なる第一殉教者ステファノスと至福のヴァシレイオスが、その祈りによって彼を助けなかったならば、もう少し時間が経てば、彼は罪の力に屈し、その魂は地獄へと落ちていたであろう。　このように、彼のために祈りを捧げた神の聖なる御使いたちの助けにより、彼は昼夜を問わず自身の淫らな思いと戦い、時にはその戦いに疲れ果てたが、その後再び力を取り戻し、幼い頃から女性を知ることのなかった自身の処女の体を汚すことを拒み、不浄な欲望に断固として抵抗した。　彼は幾度となく、その恥知らずな娼婦を自分から追い払おうと試みたが、彼女が病気を送りつけたり、自分を縛り付けたりする魔法の力の犠牲になることを恐れて、踏みとどまっていた。そして彼はその時、夢の幻の中で聖ヴァシリーが彼に語った言葉を思い出した。

「これ以上、傷つかないよう気をつけなさい。」

この警告は今や完全に的中した。なぜなら、貞潔な男にとって、処女性を失う危険ほど辛いことがあるだろうか？　貞潔を守り抜くことを願い、処女性を失うくらいなら千回死んだ方がましだと決意したグリゴリーは、ついに大胆な行動に出た。彼は怒りに任せてメレティニアに飛びかかり、杖と罵詈雑言をもって、その恥知らずな娼婦を自分から追い払い、こう叫んだ。

「おお、ベエルゼブルの恥知らずな娘よ！[2654]　もしもう一度私に近づこうものなら、お前の忌まわしい体を粉々に切り刻んでやる。」

それ以来、その娼婦はグリゴリウスを去り、彼女と共に、不純な思いも彼を悩ませることはなくなった。しかし、その一方で、彼は別の災難に見舞われた。　不貞な魔女メレティニアは、グリゴリーに恥をかかされたことへの復讐として、彼に激しい病を罹らせた。もし聖第一殉教者ステファノスと聖ヴァシレイオスが彼の元へ現れ、彼を癒やしていなければ、彼は間違いなく死んでいただろう。これについて、グリゴリー自身は次のように語っている。

「前述の出来事の直後のある日曜日、私は（グリゴリウスは語った）ブドウ畑の真ん中にある聖大殉教者ゲオルギオスに捧げられた礼拝堂へ向かった。暑い朝であり、私は祈りを捧げた後、礼拝堂のそばで少し休んでいた。　すると夢の中で、黒く悪臭を放つ雲が迫ってくるのが見えた。その雲は私の上に降りかかり、非常に重く、極めて冷たいと感じられた。雲の中から、「メレティニアがあなたのために用意したものを、受け入れなさい」という声が聞こえた。その後、その雲は私の体の中に入ってきた。　目を覚ますと、私は激しい病に冒されていることに気づき、それが、私が彼女の不浄な欲望に抵抗したために、前述の魔女メレティニアによって私にかけられたものであると悟った。私は辛うじて立ち上がり、うめき声を抑える力もなく家へと向かい、自分の寝床に横になった。　日ごとに私の病は重くなり、もはや死が近づいていた。私の内臓はすべて激しい炎に焼かれており、その炎は乾いた葦を焼き尽くすように、私の体を蝕んでいた。　熱に耐えきれず、私は立ち上がって走り回り、木陰に身を隠して涼を求め、冷たい水流で体内の炎を鎮めようと川へと駆け寄った。何度も溺死しようかと考え、しばしばこう叫んだ。

「ああ、悲しみよ、悲しみよ！ もし地獄の炎がこれほどなら、人は生まれなかったほうがましだ。」

[2654] ベエルゼブル――サタン、あるいは悪魔の君主と同義である（マタイ10:25、 マタイ12:24、マタイ12:27、マルコ3:22、ルカ2:15、18–19を参照）。この名称は、ユダヤ人がフェニキアの神ベエルゼブルから借用したものである。

私は誰の顔も認識できず、誰とも会話することもできず、その夜は四十年よりも長く感じられた。

病で完全に力尽きたとき、私は沼の中に横たわっているように感じた。その中央は極めて深く、東と西の端は隆起していた。沼の西側にいた私は、底知れぬ深淵へと少しずつ降りていった。　恐怖に駆られ、私は第一殉教者ステファノへの祈りを思い出し、深くため息をついてこう言った。

「聖なる第一殉教者よ！私がコンスタンティノープルを出る際、あなたの教会で祈ったとき、あなたは私の声を聞いてくださったのでしょうか？今、私は深淵へと降りていき、あなたはもう私の姿を見ることはないでしょう――そして、私はこれまでのようにあなたに仕えることもできなくなります。なぜなら、私は死の門に近づいているからです。」

そこで私は沼地の東端を見つめると、そこには人間の言葉では言い表せない、まるで別世界のような光景が広がっていた。そこから、緋色のスティハールをまとった聖なる第一殉教者ステファノが私の方へ歩み寄り、優しくこう語りかけた。

「愛する者よ、何が必要なのか。なぜ苦しんでいるのか。あなたは私を嘆いているが、私はここにいなかった。宇宙のあちこちに建てられた、私のために捧げられた聖堂を巡っていたからだ。しかし今、私はここに来て、あなたを助ける。だがこれからは、神の御許しのもと、不義な魔術師たちがいかに人々に害を及ぼし得るかを、よく覚えておきなさい。」

そこで私は聖人に尋ねた：

「私の目の前に広がる深淵と、そのそびえ立つ縁は、何を意味するのですか？」聖人は答えた：

「君が立っている深淵の西端は、死の近さを意味している。そして、君の目の前に見えるこの深淵は、死の領域であり、死にゆく者たちは、東の国にたどり着くまで、この道を大変な苦労を伴いながら通り抜けていく。そこに着くと、彼らはあの世へと続く小道を見つけるのだ。」

それを聞いて、私は再び聖人に尋ねた。

「では、先生、私はもう死にかけているのでしょうか？」

「ここに連れてこられた以上、他に何を期待できるというのか？」と彼は答えた。

そこで、私は心の底からため息をつき、泣きながらこう言った。

「いいえ、師よ、どうかそのようなことが私に起こりませんように。私はまだ死に備えてはいないのですから。」

私のその言葉を聞いて、聖人は私の手を握り、深淵を越えて導き、沼地の東側にある高い場所に私を立たせ、こう言った。

「ほら、あなたは死の深淵から救い出されたのだ。」

するとすぐに、私はある中庭を歩いている自分に気づいた。その中庭は、その美しさにおいて驚くべきものだった。

しかし、重い病気のせいで歩くのが困難だったため、非常に心地よい香りを放つ聖なる第一殉教者は、私に自分の肩を貸してこう言った。

「後ろから両手で私を抱きしめてくれ。私が支えてやるから、一緒に先へ進もう。」

私たちがそうして中庭を横切っていると、私は雪のように白い大きな石の壺を見ました。それらはそれぞれ100、200、300メーアを収容できる大きさで、満杯になって封印されていました。私は聖人に尋ねました：

「この庭は誰のものですか？　これらの器は誰のものですか？　中には何が入っているのですか？」聖人はこう答えました。

「これらはすべて、あなたの霊的指導者である聖ヴァシリーのものです。」　そして、器の中には、神から彼に与えられた聖油が入っている。彼は、自分のもとを訪れる罪人たちにこの聖油を塗

ることで、彼らの汚れを清め、彼らを神の子とする。なぜなら、彼は使徒の務めを引き受け、多くの魂をサタンの支配から救い出したからである。

そして私は再び聖人に尋ねた：

「では、私たちはどこへ向かうのですか、師よ？」

「尊者ヴァシリーのもとへ」と、彼は答えました。

私たちがまだ会話を終えていないうちに、私の尊い父ヴァシリーが、ある素晴らしい宮殿から出てきて、私たちを迎えに来てくれた。聖なる第一殉教者は彼に向かってこう言った。

「バシレイ神父よ、どうしてあなたは、最愛の子であるグリゴリウスを、彼にとって最も辛い時に置き去りにしたのですか？もし私が助けに現れなければ、彼は死んでしまっていたでしょう。」聖人はこう答えました。

「私は、あなたが彼と共にいるのを見ていました、至福の第一殉教者よ。それゆえ、彼のもとへは行きませんでした。さて、もし主の御心ならば、以前彼に示されたものよりも、さらに大きな恵みを彼に授けましょう。」

そう言い終えると、聖人たちは共に歩き出し、私もその後を追った。そうして私たちはある非常に陰鬱な場所にたどり着き、そこで非常に大きく恐ろしい蛇を目にした。すると、聖ヴァシリーは言った。

「この蛇は、わが子グリゴリウスを危うく死なせるところだった。」

そう言うと、彼は大きな石を拾い上げ、それを蛇に投げつけて殺した。その後、私たちはコンスタンティノープルにある聖第一殉教者の教会付近にたどり着き、教会の中から、主を賛美する若者たちの非常に心地よい声が響き渡っているのを耳にした。その時、第一殉教者ステファノスは私にこう言った。

「さあ、あなたはキリストの恵みによって健康を取り戻した。さあ、今こそ教会に入り、あなたに偉大な慈悲を示してくださった万物の主――神に、感謝の歌を歌いなさい。」

私の守護者である聖第一殉教者ステファノスと聖ヴァシレイオスに礼拝を捧げた後、私は教会に入り、次のように歌いながら進んだ。

「*主は私の光、私の救い。私が誰を恐れることがあろうか？*」（詩編26:1）。

そして、その詩篇を最後まで歌い続けた。

すると、あの最も美しい若者たちは、私を見て喜び、私にこう語りかけました。

「さあ、私たちの最愛の人よ、私たちの喜びに加わってください。」

この言葉を聞いた後、幻は消え、私は我に返ると、驚いたことに自分が元気になっていることに気づいた。少し食事をとって、眠りによって体力を回復させ、それから起き上がって歩き始めた。それからしばらくして、完全に回復すると、私は船に乗り込み、ツァーリグラードへと向かった。その道中、聖ステファノスと聖ヴァシレイオスの祈りによって、いかにして死の危機から救われたか、私に起こった出来事を皆に語った。

これで、グリゴリウス自身の物語は終わる。

記述された出来事とほぼ同時期に、尊者ヴァシリーに仕えていた至福のテオドラは、修道者の位を受け、主のもとへ召された。　このことを知った尊者バシレイオスの信者たちは皆、悲しみに暮れた。なぜなら、この至福の婦人は、聖なる長老のもとを訪れるすべての人々のために、彼の前で執り成し役を務めていたからである。彼女はすべての人を愛をもって迎え入れ、その穏やかな言葉で皆を慰め、慈悲深く、キリストを愛し、貞潔であり、また霊的な知恵に満ちていた。　グリゴリーは、テオドラが逝去した後、右側か左側か[2655]、義人たちと共にいるのか罪人たちと共にいるのか、そし

[2655] 右側とは、一般的に名誉ある地位を意味していた。福音書（マタイ25:32–46）では、永遠の裁き主の右側に立つのは義人であり、左側に立つのは罪人であるとされている。したがって、右側または左側に立つということは、義認か、あるいは定罪かを意味する。

て長老への献身的な奉仕に対して、神から恵みや何らかの慰めを受けたのかどうかを知りたいという強い願望を抱いた。　これを思い巡らせながら、彼はしばしば聖ヴァシリーに祈りを捧げ、亡きテオドラの魂について教えてくれるよう懇願した。なぜなら、グリゴリーは、神に愛された聖人である彼には、亡き者に関するすべてが明らかにされていると信じていたからである。　度重なる願いに煩わされながらも、聖なる長老は、断ることで自分の霊の子を悲しませたくはなかったため、主に向かって祈り、テオドラが亡くなった後、その魂がどうなったかを、幻視の中でグリゴリウスに明らかにしてくださるよう願った。

その翌夜、グリゴリーは眠りの中で幻視を授かり、神が尊者ヴァシリーのために用意された明るい修道院に、至福のテオドラがいるのを見ることができた。　この天の栄光に照らされ、言い尽くせぬ恵みに満ちた修道院に、聖なるテオドラは、神の御心に適う者の祈りによって迎え入れられたのである。このように、彼女がこの世で熱心に、勤勉に奉仕した人物のもとで、その聖なる祈りによって、彼女は永遠の命の修道院に留まることを許されたのである。　彼女を見て、グリゴリーは大いに喜び、まるで現実の世界で彼女と語っているかのように、彼女との長い会話を楽しんだ。

グリゴリーはテオドラに、どのようにして肉体から離れ、死の苦しみをどのように耐え抜き、死の瞬間に何を見、そして空中の精霊たちをどのように通り過ぎたのかと尋ねた[2656]。

すると彼女は、次のように語り始めた。「グリゴリーよ！　あなたは恐ろしいことについて私に尋ねているが、それは思い出すだけでもぞっとするようなことだ。私は、以前にもその後にも見たことのない顔を見、それまで聞いたことのない言葉を耳にした。　さて、あなたに何を語ればよいのか？　その時、私の目の前には、かつて忘れていた私の行いの中でも、最も凶悪で罪深いものすべてが浮かび上がった。しかし、私たちの父である聖ヴァシリーの祈りと助けにより、それらはすべて私に罪として数えられず、この修道院に入ることを妨げることもなかった。　そして、わが子よ、肉体の病や、死を目前にした者たちが耐える最も苛烈な苦しみについて、私はあなたに何を語ればよいのでしょうか。まるで誰かが激しい炎の中に投げ込まれ、燃えながら溶けて灰と化すかのように、死に至る病もまた人を破壊してしまうのです。　まことに、私のような罪人にとって死は残酷なものです。なぜなら、真実を告げましょう、私もまた罪深い行いを重ねてきた者であり、義なる行いについては全く記憶にないのですから。

私が人生の終わりに近づき、魂が肉体から離れる時が来たとき、私は多くのエチオピア人[2657]が私の病床の周りに立っているのを見た。彼らの顔は煤や樹脂のように黒く、目は燃える炭のように輝き、その姿はまるで火の地獄のように恐ろしかった。　そして彼らは騒ぎと混乱を引き起こし始めた。ある者は家畜や獣のように咆哮し、ある者は犬のように吠え、またある者は狼のように遠吠えした。その間、彼らは皆、私を睨みつけながら激怒し、私を脅かし、歯をぎしぎしと鳴らして私に襲いかかり、 すぐにでも私を飲み込もうとした。 彼らはまた、まるでそこへやって来るある審判者を待つかのように、文書を準備し[2658] 、私のすべての悪行が記された巻物を広げ[2659] 。そして、私の哀れな魂は、大きな恐怖と戦慄に包まれていた。　その時、私は魂が肉体から引き離されることによる死の苦しみだけでなく、あの恐ろしいエチオピア人たちとその凄まじい怒りを目の当たりにすることで、最も残酷な苦しみも味わっていた。それは私にとって、まるで別の死のようなもので、より重く、より苛烈なものだった。　私は、恐ろしいエチオピア人たちを見たり、彼らの声を聞いたりしないよ

[2656] 言うまでもなく、空中の苦難の場にいる不浄な霊たちのことである。苦難については後述を参照のこと。

[2657] エチオピア人とは、もともとエジプトの南東、現在のアビシニアに相当する地域に住み、黒い肌の色で区別されていた民族を指していた。その後、キリスト教の著述家たちは、教会の芸術作品においてしばしば黒人の姿で描かれた、陰鬱で悪意に満ちた霊たちをエチオピア人と呼ぶようになった。

[2658] 「ハルティア」とは、紙、一枚の紙片のことである。

[2659] 「巻物」とは、通常、両面に文字が書かれた長い羊皮紙の薄い巻物を指した。読む際には徐々に広げられ、読み終えると元の状態に戻して巻き直された。

う、視線をあちこちとそらそうと努めたが、どうしても彼らから逃れることはできなかった。なぜなら、至る所に数え切れないほどの大群がおり、私を助けてくれる者は誰一人としていなかったからである。

そのような苦しみで完全に力尽きかけていた時、私は突然、光に満ちた二人の神の天使を目にした。彼らは、言葉では言い表せないほどの美しさを持つ、見事な若者の姿で私の前に現れた。　彼らの顔は太陽よりも明るく、その目は優しく私を見つめ、頭髪は雪のように白く、頭周りには黄金色の輝きが溢れ、その衣は稲妻のように煌めき、胸元には十字架の形に金色の帯が巻かれていた。　私の寝台に近づくと、彼らは私の右側に立ち、静かに互いに語り合った。彼らの姿を見て、私は喜び、心からの感動を込めて彼らを見つめた。一方、黒人のエチオピア人たちは、彼らを見るや震え上がり、遠くへ後退した。すると、ある光を放つ若者が怒りを込めて彼らにこう言った。

「恥知らずで、呪われ、陰鬱で、悪意に満ちた人類の敵どもよ！　なぜお前たちはいつも、死の床にある者たちの元へ時期尚早に駆けつけ、その恥知らずな騒ぎで、肉体から離れゆくあらゆる魂を恐怖に陥れ、動揺させるのか？　しかし今こそ、その喜びを止めよ。ここでお前たちは何も得られないのだから。　この魂には、あなたがたに与えられるべき部分は何一つない。なぜなら、この魂には神の慈悲が宿っているからだ。

この明るい若者の言葉を聞いて、エチオピア人たちはたちまち動揺し、叫び声を上げながら、私が若き日から犯してきた悪行の記録を見せ始めた。

「どうして我々にその魂の一片もないというのか？　では、これらの罪は誰のものなのか？　これやあれを犯したのは、彼女ではないのか？」

そう言いながら、彼らは死を待ちわびていた。

そして、死が獅子のように咆哮しながらやってきた。その姿は極めて恐ろしく、人間に多少似ていたが、肉体は全くなく、むき出しの人間の骨だけで構成されていた。　彼女は様々な拷問の道具を携えていた。剣、矢、槍、鎌、鎌刀、鉄の角、のこぎり、斧、鑿[2660]、そしてその他、名も知れぬ道具の数々である。これらすべてを目にしたとき、私の謙虚な魂は恐怖に震えた。すると、聖なる天使たちは死にこう言った。

「なぜ躊躇しているのか？この魂を肉体の束縛から解き放て。速やかに、そして静かに解き放て。この魂には、罪の重荷がそれほど多くないのだから。」

すると直ちに、死は私に近づき、斧を手に取り、まず私の足を切り落とし、次に両手を切り落とし、さらに別の道具を用いて私の体の残りの部分をすべて破壊し、各部位をその結合部から切り離した。そして私は手も足も失い、全身が死んだようになった。　死はさらに私の首を切り落としたので、私は首を動かすことができず、その首はまるで他人のもののように感じられた。その後、死は杯に液体を調合し、それを私の口元に差し出して、私に飲ませた。　その液は極めて苦く、私の魂はその苦さを耐え忍ぶ力がなく、身震いして、まるで無理やり引き剥がされるかのように体から抜け出した。聖なる天使たちは直ちにそれを両腕に抱き上げた。振り返ると、私の体は魂を失い、感覚もなく、動かずに横たわっているのが見えた。　まるで衣服を脱がせるかのようにそれを脱がせ、私は計り知れない驚きをもってそれを見つめた[2661]。その時、エチオピア人の姿をした悪魔たちが、私を支えていた天使たちを取り囲み、私の罪の記録を示しながら叫び始めた。

「この魂には数多くの罪がある――それゆえ、我々の前で答えさせよ。」

聖なる天使たちはその時、私の人生における善行を探し始め、主なる神の助けと、その御恵みによって私が善行を成し遂げたおかげで、それらを見出しました。　彼らは、私が善行として行ったことすべてを思い出させてくれました　――貧しい人々に施しをしたとき、飢えた人に食べ物を与え

[2660] テスロ――大工道具の一種で、斧や鉋に似たもの。

[2661] ここに描かれた死の描写は、非常に比喩的かつ感覚的であり、もちろん文字通りの意味で理解されるべきではない。ここでの感覚的かつ粗野な比喩は、私たちの理解力の及ぶ限り、神秘的かつ霊的な意味で捉える必要がある。

たとき、渇いた人に飲み物を与えたとき、裸の人に着るものを与えたとき、旅人を家に招き入れて安らぎを与えたとき、あるいは聖人たちに奉仕したとき――病人を訪ねたり、牢獄に閉じ込められた人を訪ねて助けたりしたとき；　彼らは、私が熱心に教会を訪れ、感動と心の痛みに満ちてそこで祈り、教会の祈りや聖歌の歌声や朗読に注意深く耳を傾け、教会に香や蝋燭、あるいはその他の供物を捧げた時、　あるいは、イコンの前で灯りがともるようランプに木油を注ぎ、最も尊いイコンに畏敬の念を込めて口づけをしたこと――彼らは、私が節制して過ごした日々や、水曜日と金曜日、そしてすべての聖なる断食期間に断食を行い、どれほど多くの礼拝を行い、夜通しの徹夜祷に身を捧げたかを思い出した；　それらは、私が自分の罪を深く悔いて嘆き、時には一晩中その罪のために泣き続けたこと、神に自分の罪を告白し、霊的指導者の前で悔い改め、その悔恨と心からの悔い改めをもって神の真理に応えたことを示していた；　彼らは、私が隣人に対して行った善行のすべてを思い起こした。私を敵視する者たちに対して怒りを抱かなかったこと、あらゆる不快や非難を忍耐強く耐え忍び、悪を覚えず、悪に対して善で報いたこと、人々からの攻撃を受けた際に謙虚に身を低くしたこと、他人の不幸に心を痛め、悲しんだこと、誰かに助けの手を差し伸べたり、善行において誰かを助けたり、あるいはその人を悪から遠ざけたりしたこと；彼らは、私が虚栄から目を背け、誓い、嘘、中傷、そしてあらゆる虚しい言葉から舌を慎んだことを思い起こした；　これらすべて、そして私の行った他のあらゆる些細な善行を、聖なる天使たちは集め、私の悪行と天秤にかける準備をしていた。一方、エチオピア人たちはこれを見て、私を天使たちの手から奪い取り、地獄の最深部へと引きずり下ろそうと、私に向かって歯ぎしりしていた。

その時、予期せずして、私たちの尊い父ヴァシリーが現れ、聖なる天使たちにこう言った。

「わが主たちよ、この魂は私の老後を献身的に支えてくれました。私は神にこの魂を授けてくださるよう祈り、主はこの魂を私に遣わしてくださったのです。」

そう言うと、彼は衣服の下から何かで満たされた袋（中には純金が入っていたのだと思う）を取り出し、それを聖なる天使たちに手渡しながら、こう言った。

「あなたがたが天上の試練[2662] を通る際、邪悪な霊たちがこの魂を苦しめ始めたら、この袋でその罪を贖ってやりなさい。神の恵みにより、私は富み、労苦と汗をもって多くの宝を蓄えてきた――そして今、私に尽くしてくれたこの魂に、この袋を贈るのだ。」

[2662] 「ミタール」とは、天の審判者の御座へと昇っていく死者の魂が、その道中で遭遇する、一種の検問所や税関のようなものである。そこには悪意の精霊たちが立ち、特定の罪を犯したあらゆる魂から、その罪とは正反対の善行を彼らに見せることを条件とした、一種の関税あるいは贖い金を徴収する。　「ミタール」や「ミタール人」という名称は、ユダヤの歴史に由来する。ユダヤ人社会において「ミタール人」とは、ローマ人によって税の徴収に任命された者たちのことを指した。　彼らは通常、これらの関税の徴収を請け負い、最大の利益を得るために、拷問さえも厭わず、あらゆる手段を講じた。徴税人は特別な税関や検問所に立ち、運ばれてくる商品から関税を徴収していた。　これらの検問所は「税関」や「徴税所」と呼ばれていた。キリスト教の著述家たちは、この名称を「空中の拷問の場」にも転用した。そこでは、天の審判者の御座へと昇る魂が、悪霊たちによって足止めされ、あらゆる罪を立証され、それによって地獄へと落とされようとするのである。　「ミタールストヴァ」に関する教義の本質は、通常『慣習詩篇集』に収録されている、聖キリロス・アレクサンドリアス（444年没）による魂の旅路に関する言葉に集約されている。「私たちの魂が肉体から離れるとき」とそこには記されている。「一方には天の軍勢と力が、他方には闇の権勢、空中の税吏長たち、すなわち私たちの行いを告発する者たちが、私たちの前に現れる。　それらを目にした魂は戦慄し、身震いし、混乱と恐怖の中で神の天使たちに保護を求めるだろう。　しかし、天使たちに受け入れられ、彼らの庇護の下で空の空間を通り抜け、高みへと昇っていくにつれ、魂は様々な試練に遭遇する。それらは王国への道を阻み、そこへの魂の志を止め、引き留めるものである。これらの試練のそれぞれにおいて、特定の罪についての説明が求められる……　あらゆる情欲、あらゆる罪には、それぞれ独自の徴税人と拷問者がいる。その場には、神聖な力と不浄な霊の群れも立ち会い、前者が魂の美徳を提示する一方で、悪魔たちはその陰鬱な住処において、目に見えない裁判官の判決を下すのである。　このように、試練とは、まさに、天使たちを介して、目に見えない主ご自身が人間の魂に対して行われる私的な裁きに他ならず、そこには「私たちの兄弟たちを誹謗する者たち」（黙示録12:10）や　――すなわち悪霊たち――をその場に立ち会わせ、魂のすべての行いを思い起こさせ、公平に評価し、その後にその魂の運命が決定される。この裁きは、世の終わりに、人の子が再びその栄光のうち

そう言い終えると、彼は立ち去った。邪悪な悪魔たちはそれを見て困惑し、やがて空中に泣き声を響かせながら姿を消した。

その間、神の御使いヴァシリーが再び現れ、清らかな聖油と高価な没薬の入った多くの器を携えてきた。彼は器を一つずつ開け、私に聖油と没薬を注ぎかけた。それによって私は霊的な香りに満たされ、同時に変容して、光り輝く存在となった。

そこで、聖ヴァシリーは再び聖なる天使たちにこう言った。

「主よ、この魂のために必要なことをすべて終えた後、主が私のために用意してくださった住まいに彼女を導き入れ、そこで留まらせてください。」

そう言い終えると、聖人は姿を消した。そして天使たちは私を抱き上げ、空を東へと運んでいった[2663]。

私たちが地上から天の高みへと昇っていくと、まず第一の試練の場にいる空の精霊たちに出迎えられた。そこでは、言葉の罪――あらゆる無駄な言葉、悪口、無礼な言葉、卑猥な言葉――について裁きが行われる。　そこで私たちは立ち止まり、悪魔たちが巻物を運んできた。そこには、私が若い頃から口にした軽率な言葉のすべて――私が語った無分別で卑猥な言葉のすべて、とりわけ、多くの人がそうであるように、私が若い頃に口にしてしまった冒涜的で滑稽な言葉が書き記されていた。かつて私が歌った世俗的で恥知らずな歌の数々、私の無分別な叫び声、　私の軽率な言葉のすべてが、私の前に現れた。そして悪魔たちは、私がいつ、どこで、誰と、虚しい会話にふけり、自分の言葉で神を怒らせたのか――その時期、場所、人物を具体的に指摘しながら、それらすべてをもって私を非難した。私はそれを罪とは考えず、霊的指導者にも告白していなかったのだ。　これらすべてを目の当たりにして、私は声も出せないかのように黙り込んでいた。なぜなら、悪意ある霊たちに言うべきことが何一つなかったからだ。彼らは完全に正当に私を非難しており、私は彼らが何も忘れていないことに驚いた。というのも、私がこれらすべての罪を犯してから長い年月が経ち、私はとっくにそれらを忘れてしまい、心の中で犯した行いを一度も思い返したことがなかったからだ。　しかし、彼らは私の言葉を、まるで私が今まさに口にしたかのように、すべてを詳細に、そして些細な点に至るまで、実際にあった通りに思い出させてくれた。そして、私が恥じ入って黙り込み、同時に恐怖で震えていると、　聖なる天使たちは、それらの罪と対比させるかのように、私の生涯の最後の数年間に成し遂げた善行を提示した。しかし、それらは私の罪の重さを上回ることはできなかったため、その不足分は、私の敬虔な父ヴァシリーから授かったものによって補われた。こうして彼らは私を贖い、より高いところへと導いてくれた。

そこで私たちは、「偽りの試練」と呼ばれる別の試練の場へと近づいた。そこでは、あらゆる偽りの言葉、とりわけ誓いの破り、神の御名を軽々しく口にすること、偽証、神への誓約の破り、罪の不完全な告白などが裁かれる。　この試練の場の精霊たちは極めて激しく獰猛で、彼らは細部の一つも見逃すことなく、執拗に私を試した。　そして私は彼らによって二つの罪で告発された。すなわち、時折些細な事柄において、それを罪とは考えずに嘘をついてしまったこと、そしてまた、自分の

に地上に来られる際に、すべての人々に対して行われる「普遍的な裁き」とは対照的に、「個別の裁き」と呼ばれる。

聖バシレイオス・ネオスの伝記には、税関での試練におけるこの「個人的な裁き」のすべての詳細が描かれている。　しかし、これらすべての詳細を読むにあたっては、肉体に包まれた私たちにとって、霊的な世界の事柄を描写する際には、多かれ少なかれ感覚的な要素が避けられないのと同様に、特に、肉体を離れた人間の魂が通る「税関」に関する詳細な教えにおいても、そうした要素が必然的に含まれていることを心に留めておく必要がある。　それゆえ、天使がアレクサンドリアの聖マカリオス（†391年）に、煉獄について語り始める際に与えた教えをしっかりと心に留めておく必要がある。「地上の事物を、ここでは天上の事物の最も淡い写しとして受け止めよ」。　試練を、粗野で感覚的な意味ではなく、私たちに可能な限り霊的な意味で捉えるべきであり、試練に関する基本的な考え方は一致しているものの、様々な著述家や教会自身の伝承において異なって描かれている細部に固執してはならない。

[2663] 聖書において、東は光の国、すなわち「天の東」と呼ばれるキリストの御国の象徴として描かれているのに対し、西は闇と暗黒の王国、すなわちサタンの王国の代名詞となっている。

罪を恥じて、何度も霊的指導者に対して不完全な懺悔をしてしまったことである。　誓約違反と偽証については、キリストの恵みにより、私にはそれらの罪は見出されなかった。　それでも、悪魔たちは私の中に発見された嘘の罪を喜々として祝い、すでに私を導いてくれた天使たちの手から私をさらおうとしていた。しかし、天使たちは、私の善行の一部をそれらの罪と相殺し、足りない分を聖ヴァシリーから授かったもので補い、私を贖い出し、何事もなくさらに高い所へと運んでいった。

その後、私たちは「非難と誹謗の試練」と呼ばれる第三の試練の場へと到達した。そこに留め置かれた私は、誰かを誹謗し、名誉を傷つけ、中傷すること、また自分の欠点を忘れ、他人の欠点を嘲笑することが、いかに重い罪であるかを目の当たりにした。　この罪の力に身を委ねる者は皆、悪霊たちによって残酷に苦しめられる。彼らは、人々を裁くために来られるキリストの権威を先取りし、自らを隣人の裁き手とした、ある種の反キリストのような存在であり、それにもかかわらず、彼ら自身こそがより一層の非難に値する者なのである。　しかし、私の中には、キリストの恵みにより、そのような罪はほとんど見出されなかった。なぜなら、私は生涯を通じて厳しく自制し、誰をも非難したり、中傷したり、 誰かを嘲笑したり、誹謗したりしないよう心がけてきたからである。 また、時折誰かが他人を非難するのを耳にすることもあったが、私はその非難する者にほとんど耳を貸さなかった。もしその会話に自分から何かを付け加えることがあったとしても、それは隣人にさらなる傷を与えることのないようなことだけであり、それでもすぐに言葉を止め、そのわずかなことさえも自らを戒めたのである。　しかし、そのような過ちさえも、拷問者たちによって私の罪として数え上げられた。だが、聖なる天使たちは、聖バシレイオスから授かった恵みによって私を贖い、私と共にさらに高いところへと昇り始めた。

そして、私たちは「暴食の試練」と呼ばれる第四の試練の場へとたどり着いた。この試練の場にいる邪悪な霊たちは、まるで何かを手に入れたかのように喜びながら、すぐに私たちに向かって駆け寄ってきた。彼らはその姿が極めて嫌悪感を催すもので、暴食と酩酊のあらゆる忌まわしさを体現していた。　その中の一部は料理が盛られた皿やフライパンを、また他の一部は飲み物が注がれた杯やジョッキを手にしていたが、私はその食べ物や飲み物が、悪臭を放つ腐敗物や不浄な排泄物に似ているのを見た。　一方、それらを手にしていた悪魔たちは、満腹で酔っ払ったような様子をしており、様々な騒音を立てながら跳ね回り、酔っ払いや宴会好きが普段行うようなことをすべて行い、彼らの元へ連れてこられた罪人たちの魂を罵倒していた。　私たちの行く手を阻み、犬のように私たちを取り囲むと、彼らは即座に、私が飲食に耽り、必要もないのに無理に食べたり、豚のように　祈りも十字架の印もせずに朝食に手をつけた時、あるいは断食中に教会の規則で許されるより早く食卓に着いた時などだ。彼らはまた、私が酩酊して酒に溺れていた際に使った杯や器も提示し、飲んだ杯の数まで指し示してこう言った。

「彼女はあの宴で、あの人たちと共にこれだけの杯を飲み干した。また別の時、別の場所では、これだけの杯を飲み干して意識を失うほど酔いしれた。　さらに、彼女は笛やその他の楽器の音色に合わせて、踊りや歌にふけりながらこれだけの回数宴を催し、そうした宴の後は、家まで連れて帰るのも一苦労だった。それほどまでに、彼女は度を越した酩酊で疲れ果てていたのだ。

こうした、あるいはそれに類するあらゆる放蕩を思い描くにつれ、悪魔たちは、あたかもすでに私をその手中に収めたかのように、歓喜し、喜び、私を捕らえて地獄の底へ引きずり下ろそうと準備を進めていた。　私は、彼らに非難されているのを見て、答える言葉もなく震えていた。しかし、聖なる天使たちは、聖ヴァシレイが授けてくれたものを多く受け取り、私の身代金を支払ってくれた。悪魔たちはこれを見て動揺し、叫んだ。

「ああ、我らよ、我らの労苦は無駄になり、我らの希望は失われた。」

そう言いながら、彼らは私の罪が記された紙片を空中に投げ捨て始めた。私はそれを見て喜び、何の妨げもなくその場を立ち去った。私と共に上へ昇りながら、天使たちは互いにこう語り合った。

「まことに、この魂は神の聖人ヴァシリーから大きな助けを受けている。もし彼の労苦と祈りが彼女を助けていなかったなら、彼女は空中の試練を乗り越えるにあたり、大きな苦難に遭っていたことだろう。」

そこで、私は勇気を振り絞って、聖なる天使たちにこう言いました。

「主よ、私は、この地上に生きる者の中で、ここで何が起きているのか、また罪深い魂が死後に何を待ち受けているのかを知っている者は誰もいないと思います。」

聖なる天使たちは私にこう答えました：

――聖なる教会で司祭たちが絶えず朗読している聖書こそ、ここで起きているすべてのことを証ししているのではないだろうか？　しかし、この世の虚栄に溺れた者たちは、これらすべてを軽んじ、日々の饗宴と酩酊に人生のすべての喜びを見出している。彼らは毎日、節度なく食べ、神への畏れを捨てて酔いしれている。そして、神の代わりに腹を神として崇め、来世のことを全く考えず、次のように語る神の言葉を忘れてしまっている。　「今、満ち足りている者たちよ、あなたがたは飢えることになる。*今、笑っている者たちよ、あなたがたは泣き叫び、嘆き悲しむことになる*」（ルカ6:25）。彼らは、神の聖書に記されていることはすべて寓話に過ぎないと不信仰に考え、書かれたことを軽んじ、*「太鼓を鳴らして宴を催し」*[2664]、福音書に登場する金持ちのように、*「毎日、華やかに宴を催していた」*（ルカ16:19）のである。　しかし、貧しい者たちに慈悲深く、乞食や困窮者に施しを行い、助けを求める者を助ける者たちは、その慈悲のゆえに、神から罪の赦しを受け、妨げられることなく試練を乗り越える。なぜなら、聖書は*「施しは死から救う」*（トビト4:10）と述べているからである。　このように、施しを行う者は永遠の命を得る。一方、慈悲をもって 自らの罪を清めようと努めない者たちは、これらの試練を避けることはできず、あなたが目撃したあの陰鬱な税吏たちに連れ去られてしまう。　彼らはこれらの魂を残酷な苦痛にさらし、地獄の最深部へと引きずり下ろし、キリストの最後の審判の日までそこに鎖で縛り付けておくのです。もしあなたが、聖ヴァシレイから授かった贖いを受けていなければ、あなたもまたこの運命を免れることは難しかったでしょう。

そう語り合ううちに、私たちは「怠惰の税関」と呼ばれる第五の税関にたどり着いた。そこでは、怠惰に費やされたすべての日と時間が裁かれ、他人の労働に依存して自らは何もしない寄生虫たち、そして報酬を受け取りながら仕事をきちんと遂行しない雇い人たちが拷問を受けている。　この試練の場では、神を賛美せず、祝日や日曜日に早課や聖体礼儀、その他の神の礼拝に出席することを怠る者たちも、拷問にさらされる。　また、そこでは、気落ちや自らの魂に対する無関心も試され、そのいずれの現れも厳しく問われるため、世俗の人々や聖職者の多くが、この苦難の場から深淵へと突き落とされる。　この試練の場において、私もまた多くの試練にさらされた。もし、私の貧しさが、聖ヴァシリーから授かったもので満たされていなかったならば、その負債から解放されることは不可能だっただろう。しかし、それによって私は贖われ、自由を得ることができたのである。

その後、私たちは窃盗の試練の場へと進みました。そこでも私たちは立ち止まらされましたが、わずかなものを捧げた後、すぐにその場を通り過ぎることができました。というのも、幼い頃の無知による些細な過ちを除けば、私には窃盗という罪は一切なかったからです。

そこから、私たちは金銭欲と吝嗇の試練の場へとたどり着きましたが、そこもすぐに通り過ぎました。なぜなら、主なる神の御加護により、私は多くの財産を蓄えることを望まず、金銭欲に駆られることもなかったからです。主が私に与えてくださるものに満足し、また吝嗇でもなく、持っているものを熱心に困っている人々に施していたからです。

さらに上へと登っていくと、私たちは「高利貸し」の試練の場に出くわした。そこでは、あらゆる種類の強奪者や略奪者、そして自分の銀を高利で貸し付け、不法な手段で富を蓄える者たちが試

[2664] すなわち、ティンパニの音と聖歌隊の歌声の中で。ティンパニとは、棒で叩いて演奏する楽器であり、リタヴァルや手持ちのタンバリンのようなものである。

される。　この税関の悪霊たちは、私についてあらゆることを熱心に調べ上げたが、私が罪を犯した点は何一つ見つけられず、怒りに駆られて私に向かって歯ぎしりした。私たちは、主なる神に感謝しつつ、さらに上へと進んだ。

その後、私たちは「不正の関所」に到達しました。そこでは、賄賂を受け取り、有罪者を無罪とし、無実の者を有罪とするすべての不義な裁判官たちが拷問にさらされています。また、雇い人への賃金の未払い、商人による秤の不正など、あらゆる不正がそこで裁かれ、あらゆる不義が追及されています。　しかし、私たちはキリストの恵みにより、徴税人たちにほとんど何も与えずに、その徴税所を特に支障なく通り抜けた。

また、その後に続く「嫉妬」の試練も無事に通り過ぎ、そこでは何も与えなかった。なぜなら、私は誰に対しても嫉妬しなかったからである。　この関所では、敵意や憎悪の罪も問われたが、私はキリストの恵みにより、これらの罪においても無実であることが証明された。これを見た悪魔たちは激怒し、私に向かって歯ぎしりしたが、私は彼らを恐れず、喜びをもってさらに高いところへと昇っていった。

同様に、私は高慢の試練も通り抜けた。そこでは、傲慢な霊たちが虚栄、自惚れ、誇示といった罪を問う。そこでは、両親や、神から権威を授かった長老たちに対して、不敬や不服従を示したかどうか、またその他の高慢や自惚れの罪についても、入念に問いただされる。　そこで、私たちは聖バシレイオスから授かったもののうちごくわずかを捧げ、私は自由の身となった。

それから私たちは怒りと激怒の試練の場へとたどり着いたが、そこでも、空中の拷問者たちは獰猛ではあったものの、私たちから多くを引き出すことはできず、私たちはさらに先へと進み、聖バシレイオスという私の尊い父の祈りによって、私の罪深い魂を救ってくださる主なる神を喜び称えた。

その後、私たちは「悪意の試練」の場所にたどり着いた。そこでは、隣人に対して悪意を抱き、悪に対して悪で報いる者たちが容赦なく苦しめられ、やがて悪意に満ちた霊たちによってタルタロス（[2665]）へと引きずり下ろされるのである。しかし、神の慈悲はそこでも私を助けてくださった。なぜなら、私は誰に対しても憎しみを抱かず、自分に降りかかった不快な出来事について悪意を抱くこともなく、むしろ私に敵意を抱くすべての人々に対して悪意を持たず、力の及ぶ限り彼らに愛を示し、善をもって悪に打ち勝っていたからである。　このようにして、この試練の場において、私の中に憎しみの罪は一切見出されなかった。そのため、　、私の魂が彼らから自由に離れていくのを見て、悪魔たちは怒りのあまり泣き叫んだ。そして私たちは、主を喜びながら、さらに上へと昇り始めた。

ますます高く昇っていくにつれ、私は私を導いてくれた聖なる天使たちに尋ねた。

「お願いいたします、主よ、教えてください。この世に生きるすべての人々のあらゆる悪行――例えば私の悪行についても――が、恐ろしい空の支配者たちにどうして知られているのでしょうか。しかも、公然と行われたものだけでなく、密かに行われたものまでさえも！」

すると、聖なる天使たちは私にこう言いました：

「すべてのキリスト教徒は、聖なる洗礼によって、神から与えられた守護天使を受けます。その天使は、目に見えない形でその人を守り、　昼も夜も、その人が死ぬその瞬間まで、生涯を通じてあらゆる善行へと導き、生涯にわたって行われたすべての善行を記録する。そうすることで、その人はそれらの報いとして、神から恵みと天の御国における永遠の報いを受けることができるのだ。　同様に、人類を自らの破滅へと引きずり込もうとする闇の君主は、人間に悪霊の一人を付け加える。その悪霊は、絶えず人間に付き従い、若き日から行われるあらゆる悪行を監視し、自らの策略で犯罪行

[2665] タルタル――計り知れない深淵、地獄の底。この言葉はギリシャの著作から借用されたもので、そこではタルタルとは、太陽の光が決して届かず、暖められることもない地下の深淵、寒さが猛威を振るう場所を指す。キリスト教の著述家たちは、この言葉で、罪深い人々の魂が送られる、耐え難い寒さの場所を表している。

為へと誘惑し、人間が犯したすべての悪事を記録する。　その後、この悪霊は「苦役の場」へと向かい、それぞれの罪をそれに対応する苦役の場に記録する。それゆえ、空中の徴税人たちは、人々が犯したすべての罪について熟知しているのである。　そして、ある人の魂が肉体から離れ、天の住処にあるその創造主のもとへと向かい始めると、税関に立つ悪霊たちは、その魂の行く手を阻み、記録されたすべての罪を提示する。もしその魂の中に、罪よりも善行の方が多く見出されれば、悪霊たちはその魂を引き留めることはできない。　しかし、もしその魂の中に善行よりも罪の方が多いと判明したならば、悪霊たちは一時的にその魂を拘束し、いわば牢獄に閉じ込める。そこでは、神の御許しのもと、その魂が教会の祈りと、近隣の人々によってその魂の追悼として行われる施しを通じて、その苦しみからの贖いを受けるまで、悪霊たちはその魂を苦しめるのである。　もし、ある魂が神の前であまりにも罪深く忌まわしく、救いの望みが全くなく、永遠の滅びが待ち受けている場合、悪魔たちはその魂を直ちに深淵へと投げ落とす。その深淵には、悪魔たち自身のためにも永遠の苦しみを受ける場所が用意されており、　その深淵で、主の再臨までその魂を閉じ込め、再臨の後には、肉体と共に火のゲヘナ（[2666]）で永遠に苦しむことになる。

さらに指摘しておくべきことは、この道を通って昇り、そのような苦しみを受けるのは、信仰と聖なる洗礼によって啓発された者たちだけであるということだ。一方、不信仰な異教徒、サラセン人[2667]およびあらゆる異教徒は、この道を通らない。彼らは肉体はまだ生きているものの、魂はすでに死んでおり、地獄に葬られている。それゆえ、彼らが死ぬと、悪魔たちは直ちに、大きな試練を経ることなく、彼らに当然帰属するものとしてその魂を奪い取り、地獄の深淵へと引きずり下ろすのである。

天使たちがこれらすべてを私に告げたとき、私たちは「殺人の試練の場」に入った。そこでは、強盗行為だけでなく、肩や頭など、体のどこかに加えられたあらゆる傷や打撃、また怒りに任せて行われたあらゆる耳を引きずったり突き飛ばしたりする行為までもが試される。　これらすべてが、その煉獄で綿密に試され、天秤にかけられる。しかし、私たちは身代金としてわずかなものを捧げるだけで、無事にそこを通り抜けた。

また、私たちは魔術の関所、呪いの草による毒殺、そして魔術を目的とした悪魔の召喚の関所も通り過ぎた。この関所の精霊たちは、四本足の爬虫類、サソリ[2668]、ヘビ、エキドナ[2669]、そしてヒキガエルに似ており、その姿は極めて恐ろしく、忌まわしいものであった。　しかし、そこではキリストの恵みにより、私には何の罪も見出されず、私たちはすぐにその税関を通り抜け、邪悪な徴税人たちに何も与えなかった。彼らは激怒して私に叫び、こう言った。

「さあ、お前は淫行の関所に来るのだ。どうやってそれを逃れるのか、見てやろう」

私たちがさらに上へと登っていくと、私は私を導いてくれた聖なる天使たちに尋ねた。

「主よ、すべてのキリスト教徒はこれらの関所を通るのでしょうか。また、人はいかなる拷問や恐ろしい苦しみも受けずに、それらを通ることはできないのでしょうか？」

[2666] 火のゲヘナ――永遠の苦しみを受ける場所（マタイ10:28；ヨハネ8:6）。この名称は、エルサレム近郊のエンノムの谷を指すヘブライ語に由来する。そこは、モロクを崇めるために子供たちが生きたまま焼かれていた場所である（列王記下16:3–4）。　ヨシヤがこの恐ろしい生贄の儀式を廃止した後（列王記下23:10）、エンノムの谷には処刑された悪党の死体や腐肉、あらゆる不浄物が投げ捨てられ、それらはすべて火に投げ込まれた。　そのため、「火のゲヘナ」という表現が見られるのである（マタイ5:22, 29, 30; マタイ18:9; マルコ9:47参照）。

[2667] サラセン人とは、もともとアラビアのベドウィン族のうち、遊牧生活を送る強盗の一族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがその名称を、アラブ人およびイスラム教徒全般に広げて用いるようになった。

[2668] サソリは、クモ目（Arachnida）に属する有害で有毒な動物であり、アフリカ、インド、ペルシャなどの暑い国々に生息している。その刺し傷は、恐ろしいほどの苦痛をもたらし、しばしば死に至る。

[2669] エキドナ――有毒なヘビである。これに噛まれると極めて危険であり、ほとんどの場合、迅速かつ避けられない死を招く。聖書やその他の聖典において、ヘビは一般的に、その性質上、害と破滅をもたらすものの象徴として用いられている（伝道の書 10:11；箴言 23:31–33；マタイ 7:10）。

聖なる天使たちは私にこう答えた。

「信仰深い魂にとって、天へと至る別の道などありません。皆がこの道を歩むのですが、あなたが受けたような拷問にさらされるのは、あなたのような罪人だけなのです。彼らは、自分の不法な行いを恥じ、その多くを隠したまま、霊的指導者の前で不完全な罪の告白を行っていた者たちです。」　しかし、もし誰かが、誠実に、真実を語り、何も隠さずに自分の行いをすべて告白し、心から悔い改めて犯したすべての罪を悔い改めるならば、そのような人の罪は、神の慈悲によって目に見えない形で消し去られる。そして、その魂が試練の道を歩むとき、　空中の拷問者たちは、その帳簿を開いても、そこに彼女の罪の記録を一切見つけられず、彼女に何の害も与えることができないため、その魂は妨げられることなく、喜びのうちに恵みの御座へと昇っていくのである。　もしあなたが完全な懺悔を行い、すべての罪を悔い改めていたならば、煉獄でそのような恐ろしい苦しみを受けることはなかったでしょう。　しかし今、あなたを救ったのは、あなたがとっくに死に至る罪を犯すことをやめ、人生の最後の数年を徳高く過ごしてきたこと、とりわけ、あなたが長く熱心に仕えてきた敬虔な父ヴァシリーの祈りが、あなたを大いに助けてくれたことである。

そう語り合いながら、私たちは「淫行の苦役」の場所へとたどり着いた。そこでは、あらゆる淫行、あらゆる淫らな思いや妄想、そして情熱的な触れ合いや情欲に満ちた感触が、容赦なく裁かれていた。　この試練の場の支配者は、血の泡が飛び散った、不潔で悪臭を放つ衣を身にまとい、玉座に鎮座しており、その周囲には数多くの悪魔たちが取り囲んでいた。　私が彼らのところまでやって来たのを見て、彼らは大いに驚いた。そして、私の淫行の記録を取り出して、私が若き日に誰と、いつ、どこで罪を犯したかを指摘し、私を非難した。私には彼らに反論する言葉など何もなく、恐怖で震え、恥に打ちひしがれていた。その時、天使たちは悪魔たちにこう言った。

「しかし、彼女はもう何年も不品行を犯しておらず、断食と清らかさと節制の中で、人生の最後の年月を過ごしてきたではないか。」

悪魔たちはこう答えた。

「彼女が不品行の罪からすでに長い間離れていることは承知している。しかし、彼女は依然として我々のものだ。なぜなら、以前犯した罪について、彼女の霊的指導者の前で完全にも、また心から悔い改めておらず、多くのことを彼に隠していたからだ。それゆえ、彼女を我々に任せるか、あるいは善行をもって彼女を贖い出せ。」

天使たちは、私の善行の多くと、さらに聖ヴァシリーの施しを彼らに差し出し、私はかろうじてその凄まじい災難から逃れ、そこから連れ出された。

その後、私たちは姦淫の試練の場へとたどり着いた。そこでは、夫婦として暮らしながらも配偶者への忠実さを守らず、自らの寝床を汚した者たちの罪が裁かれ、また、処女を堕落させる目的で誘拐するあらゆる行為や、あらゆる種類の淫らな暴行も裁かれている。　ここでは、神に身を捧げ、清らかさと貞操を守り抜くことを誓いながら、後にその誓いを破ってしまった者たちの堕落もまた、懲らしめられている。　この試練の場において、私もまた姦淫の罪人として告発され、自分を弁護する言葉は何も持たなかった。そのため、容赦のない拷問者たち、すなわち邪悪で不浄な霊たちは、すでに私を天使たちの手から奪い取り、地獄の底へと引きずり下ろそうとしていた。　しかし、聖なる天使たちは彼らと論争を交わし、その後の私のあらゆる労苦と功績を提示した。こうして、彼らは私の残りの善行すべて――そこへ最後の一つまですべてを積み上げ、同時に聖ヴァシリーから授かった多くの恵みも併せて――によって、私を贖ってくれたのである。　彼らはこれらすべてを天秤にかけ、私の罪と対比させ、私を連れてさらに先へと進んだ。

そこで、私たちはソドムの罪の試練の場へと近づいた。そこでは、男女の自然の理に反する罪、男色や獣姦、近親相姦、そして思い出すことさえ恥ずかしいその他の秘密の罪が裁かれている。この苦役所の領主は、極めて醜悪で不気味な姿をしていて、全身が悪臭を放つ膿に覆われていた。その家来たちもすべて彼に似ており、その悪臭は耐え難いほどで、姿は忌まわしく恐ろしく、怒りと凶

暴さは常軌を逸していた。　私たちを見ると、彼らは急いで迎えに出てきて私たちを取り囲んだが、神の御慈悲により、私の中に彼らの裁きに引きずり込むべき何ものも見つからなかったため、恥じ入って逃げ去った。私たちは喜びながら、さらに先へと進んだ。

さらに高い場所へ登っていくと、天使たちは私にこう言った。

「さあ、テオドラよ、あなたは淫行の罪による恐ろしく忌まわしい苦難を見た。知っておきなさい。この世は悪の中に横たわっているため[2670]、これらの苦難を妨げられることなく通り抜ける魂はごくわずかである。人々は極めて弱く、若き頃から淫らな罪に傾きやすいのだ。」　肉欲を打ち消す者はごくわずか、実にごくわずかであり、それゆえに、この苦難を自由かつ支障なく通り抜ける者は稀である。　それどころか、この試練の場にたどり着いたものの、そこで滅びてしまう人々は極めて多い。というのも、淫行の罪を裁く者たちは、淫行に傾倒する人々をさらい取り、地獄へと突き落とし、彼らに最も残酷な苦痛を与えるからである。　淫行の試練の支配者たちは、こう言って自慢さえしている。「我々こそが、他のどの空中の試練の支配者たちよりも、地獄の底に投げ込まれる者の数を増やしている。彼らはこうして、いわば我々と同じ運命をたどることで、我々と親族のような関係になるのだ」と。　それゆえ、テオドラよ、あなたの敬虔な父ヴァシリーの祈りによって、これらの苦難を免れ、もはやいかなる悪にも遭わず、恐怖を知ることもないという事実を、神に感謝しなさい。

さて、私たちは異端の試練の場へとたどり着いた。そこでは、信仰に関する誤った思索、正統な信仰告白からの逸脱、不信仰、神から啓示された教義の真理に対する疑念、聖なるものへの冒涜、そしてそれらに類する罪が裁かれている。　私はこの試練の場を何の試練も受けずに通り抜け、すでに天国の門まであと少しのところまで来ていた。

ついに、私たちは「残酷の苦役」と呼ばれる最後の苦役の場にいる悪意に満ちた霊たちに出くわした。この苦役の拷問者たちは極めて残酷で獰猛だが、とりわけ獰猛なのは彼らの首領であり、その姿は極めて陰鬱で悲しげであり、怒りと無慈悲の炎を吐き出している。　その試練の場では、慈悲のない者たちの魂が、いかなる慈悲も与えられずに試される。　たとえ誰かが、多くの功徳を積み、絶えず断食を守り、熱心に祈り、また自らの清らかさを汚されることなく保っていたとしても、それにもかかわらず慈悲に欠け、隣人に対して心を閉ざしてしまうならば、その者はそこから地獄へと投げ落とされ、深淵に閉じ込められ、こうして自らもまた、[2671]の慈悲を奪われたままとなるのである。　しかし、私たちはこの試練の道も、キリストの恵みにより、特に大きな障害もなく乗り越えることができた。それは、聖ヴァシリーの祈りのおかげであり、彼は自らの善行から、私の贖いのために多くのものを授けてくれたからである。

こうしてすべての恐ろしい試練を乗り越え、私たちは大きな喜びをもって天国の門そのものに近づいた。その門は輝く水晶のようで、そこから言葉に尽くせない輝きが放たれていた。　門の前には光に満ちた若者たちが立っており、天使たちに抱かれて運ばれる私を見て、大いに喜び、私が空中の試練から解放されたことを喜んでくれた。そして、愛を込めて私たちを迎え入れ、門をくぐり、天国の内へと導いてくれた。　そして、私がそこで何を見、何を聞いたか、グリゴリーよ――と至福のテオドラは続けた――それについては、詳しく語ることは不可能です！　私は、*「人の目が見たこともなく、人の耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*（Iコリント2:9）ものを見たのです。ついに、私は、セラフィムやケルビム、そして数え切れないほどの天の軍勢に囲まれ、絶え間なく言葉に尽くせぬ賛美の歌で主を賛美している、神の栄光の御座の前に立たされました。　そこで私はひれ伏し、目に見えず、知ることのできない神に礼拝を捧げました。そして、天の軍勢は、いかなる人間の罪も打ち勝つことのできない神の憐れみを賛美し、甘美な歌声を響かせました。　そ

[2670] この表現は、使徒ヨハネの第一の手紙（Iヨハネ5:19）から引用されたものである。

[2671] 使徒ヤコブの言葉*「憐れみを施さなかった者には、憐れみなくして裁きが下される」*（ヤコブ2:13）への言及。

の時、神の栄光の御座から声が響き渡り、私を導いていた聖なる天使たちに、聖人たちの天国の住まいと罪人たちのあらゆる苦しみを見せてから、私を聖ヴァシレイの住まいに住まわせるよう命じられた。　そして、聖なる天使たちは私を至る所へ案内してくれたので、私は栄光と恵みに満ちた数多くの美しい集落と住処――神を愛する者たちのために用意された住処――を目にした。　そこで私は、使徒、預言者、殉教者、聖人たちの住処、そして聖人の各階級に特有のその他の住処を見ました。どの住処も言葉では言い表せないほどの美しさを備えており、その広さと長さは、いわばコンスタンティノープルに匹敵するものでしたが、それ以上に比類なき美しさを放ち、多くの人の手によらずして造られた明るい宮殿を備えていました。　それらの住居の至る所で、霊的な喜びと歓喜の声が響き渡り、喜びに満ちた義人たちの姿が見えました。彼らは私を見て、私の救いを喜び、愛をもって私を迎え入れ、口づけをして、私を敵の罠から救い出してくださった主を賛美しました。　楽園の住処を巡り終えると、私は地の底へ降ろされ[2672]、地獄で罪人たちに用意された恐ろしく耐え難い苦しみを見た。聖なる天使たちはそれらを見せながら、私にこう言った。

「見よ、テオドラよ。主は、御自身の聖なる御従者ヴァシリーの祈りによって、どれほど残酷な苦しみからあなたを救われたことか。」

地獄の深淵を巡りながら、私はそこで、その苦しみの中にいる者たちの泣き声、叫び声、そして苦々しい嗚咽を耳にし、目にした。ある者は「ああ、我らに悲しみあり」と叫び、ある者は「ああ、我らにはなんと辛いことか」と嘆き、またある者は自分の生まれた日を呪っていた。

その後、私を導いてくれた天使たちは、あなたが今見ているこの聖ヴァシリーの修道院へと私を連れて行き、ここに私を住まわせながら、こう言いました。

「今、聖ヴァシリーはあなたを偲んでいる。」

そして私は、肉体を離れた後、40日目にこの安らぎの場所へたどり着いたのだと悟った。[2673]

。

聖女テオドラは、これらすべてをグリゴリウスに夢の幻として語り、自分がいた修道院の美しさや、多くの労苦によって集められたそのすべての霊的な富、そして後に至福の父ヴァシリーについて彼に示した。

ここで幻視は終わった。幻視が終わると、グリゴリイは眠りから飛び起き、聖なるテオドラから見たもの、聞いたものに驚きながら、深く思索にふけった。翌朝、彼はいつものように祝福を受けるため、聖ヴァシリーのもとへ向かった。聖ヴァシリーは彼に尋ねた。

「グリゴリイよ、昨夜はどこへ行ってたのか？」

彼は、まるで何も知らないかのように、こう答えた。

「父上、自分の寝床で眠っていました。」

すると、長老はこう言った。

「肉体は寝台で休んでいたことは知っているが、魂は別の場所にあったのだ。それとも、今夜、眠りの中の幻視を通して神があなたに示されたことを忘れてしまったのか？」　ほら、君がそれほど強く望んでいたことを手に入れたではないか。テオドラに会い、彼女自身から来世への旅立ちを聞き、そしてキリストの恵みにより、私のささやかな労苦の報いとして用意された私の修道院にいたのだ。こうして、君は知りたかったことすべてを目の当たりにしたのだ。

[2672] 「プリエスポドニ」とは、下層の、卑しい、地下のという意味である。地の「プリエスポドニ」とは、天国の住処である楽園とは対照的に、地下にあるとみなされる地獄の深淵を指す。

[2673] 教会の教えによれば、魂が肉体から離れてから40日目に、魂の煉獄での巡礼は終わり、魂に対する暫定的な裁きが下される。その後、魂は喜びの場所か、あるいは苦悩の場所のいずれかに定住し、主の地上への再臨と、人々のための神の御子による最終的な裁きが行われる時まで、そこに留まることになる。

このような言葉を聞いて、グリゴリイは、自分の夢が虚しい空想ではなく、聖人の祈りによって取り成された、神からの真の啓示であったことを悟った。そこで、神に感謝を捧げた後、彼は自分の霊的父に頭を下げ、その後、その場にふさわしい教えを受けた。

その同じグリゴリウスは、別の機会に、神の許しによって信仰に関するある種の疑念に陥った。旧約聖書を熱心に読み進めるうちに、彼は心の中で「ユダヤ人たちの信仰こそが正しい」という思いを抱き、かなり長い間その考えにとらわれていた。 グリゴリーが誘惑に陥っていることを霊的に察知した先見の明のある長老は、彼を戒め、何度も諭した後、再び神からの啓示を彼に求めた。 すると、グリゴリーは再び驚くべき幻視を目にした。その中では、彼の霊的な目の前に、神の恐るべき最後の審判が行われる光景が現れた。彼は、玉座に座する永遠の審判者、審判者の右側に立つ義人たち、そして左側に立ち、その行いに応じて裁かれている罪人たちを見た。 そこにはユダヤ人も異教徒もおり、グリゴリーは、異教徒と共に裁かれ、ゲヘナに投げ込まれるユダヤ人たちをも目撃した。罪人たちの裁きと共に、グリゴリーは義人たちの栄光も目撃し、これらすべてを後に非常に詳細に記述した。 この記述は『大チェティ・メネ』[2674]に見出すことができ、そこには私たちの祝福された父ヴァシリーの生涯と、その弟子グリゴリーのすべての幻視が詳細に描かれている。我々は、要約された形で提示したこの物語をここで締めくくることにしよう。

奇跡と預言に満ちた長い生涯における数々の功績と偉業を経て、私たちの尊い父ヴァシリーは、天に召される時が近づいていました。彼は高齢でこの世を去りました。 というのも、彼はすでにかなりの年齢になってからコンスタンティノープルに連れてこられ、そこで約50年間を過ごしたからである。つまり、彼は計して約100年を生き、その生涯を終えて永遠の命へと移り、あなたの年月は尽きることがない（ヘブライ人への手紙1:12）[2675] 。 聖ヴァシリーは自らの死を予見する恵みにあずかり、それを最愛の弟子グリゴリーに予言した。その経緯は次の通りである。

グリゴリイには、聖なる四旬節の間、自宅に閉じこもり、外に出ることなく、断食と祈りに専念し、数え切れないほどの礼拝を行い、夜通し眠らずに過ごすという習慣があった。 そしてある日、四旬節が近づいたことを受け、グリゴリーは慣例に従い、閉黙生活における今後の断食の修行について、尊者から祝福を受けるために訪ねてきた。尊者は、魂について長い話で彼を教え導き、祝福を与えた後、最後にこう言った。

「行け、わが子よ、平安をもって汝の家へ。この世において、汝はもはやこの肉眼で私を見ることはないだろう。」

そして、聖人はグリゴリーを抱きしめ、愛情を込めて彼の頬に口づけをした。

グリゴリーは聖人の足元にひれ伏し、涙でその足を濡らしながら、聖人との別れを嘆き、泣きじゃくった。その後、彼は自分の住処へ戻り、いつものように断食期間中ずっと隠遁生活を送った。一方、聖ヴァシリーは、四旬節の半ば[2676] 、3月25日、まさに聖母マリアの受胎告知の日に、その聖なる魂を神の御手に委ね[2677] ；そして、その尊い遺体は、聖殉教者フローラとラウラの修道院に埋葬された。

[2674] 言うまでもなく、全ロシアのマカリー大主教（1543–1564年）による『ミネイ・チェティ』のことである。これらが「大」と呼ばれるのは、祝祭日や聖人の記念日に合わせて編纂された、歴史的・教訓的な内容のあらゆる記事を網羅した完全な集成であるからである。 聖ディミトリ・ロストフスキーの『ミネイ・チェティ』は、多くの箇所において、マカリイの『大チェティ・ミネイ』に収録された物語の要約となっている。

[2675] この表現は、使徒パウロの『ヘブライ人への手紙』から借用されたものであるが、そこではこれらの言葉は神を指し、神の永遠性について語られている。

[2676] 「中四旬節」とは、教会規律において大斎の中間（第4）週を指し、この週は「十字架礼拝の週」とも呼ばれる。

[2677] 聖ヴァシリー・ノヴィイは、10世紀半ば頃、コンスタンティノス・ポルフィロゲネトス帝の治世中に帰天した。

その後、コンスタンティノープルに住むある敬虔な男に幻が見られた。彼は、門が金と宝石で飾られ、その上に「至福のヴァシリー・ノヴォイの住処と永遠の安息」と記された、壮大で美しい家を見た。　この碑文を読んだその男は、建物の美しさに驚嘆した。すると、そこから美しい若者が現れ、敬虔なコンスタンティノープルの男にこう言った。

「なぜそんなに驚いているのか！　これから、さらに驚くべきものを見せてあげよう。」

そう言うと、彼は建物の門を開き、驚いた男の目の前に、想像しうるあらゆるものを凌ぐ美しさを持つ、極めて高く麗しい広間が現れた。その広間の一つで、彼は尊者ヴァシリーが、偉大な栄光に包まれて王座に座し、多くの高潔な紳士や若者たちに囲まれているのを見た。　そこには、人間の心を喜ばせ、楽しませるあらゆるもので満たされた、美しい庭園も見えた。その時、内側から次のような声が聞こえてきた。「神を愛し、熱心に神に仕えた者たちは皆、この世を去った後、このような報いを受けるのである」。

その男はこの幻視を多くの人々に語り、それを聞いた者たちは皆、神を賛美し、神の御心に適う者、私たちの尊い父ヴァシリー・ノヴォイの記憶を称えました。

聖ヴァシリーの祈りにより、私たちもまた、神を愛する者たちの運命に与かることができますように。私たちの主イエス・キリストの恵みによって。父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

4月9日

3月27日（旧暦）

エジプトの隠者であり、隠遁者である、私たちの尊き父ヨハネ・プロゾルリーの生涯

記念日：3月27日

エジプトの都市リコポリス（[2678] ）に、ヨハネという名の男が住んでおり、彼は若い頃から大工の仕事に従事していた。ヨハネが二十五歳になったとき、彼は世俗を捨てようと決心した。　その後15年間、彼は様々な修道院で修道者の務めに励んだ。そして、荒野の生活を送るための静かな場所を求めて、リコポリの近くにある「ヴォルチェ」と呼ばれる山へと向かった。　そこで彼は、一つの屋根の下に三つの小部屋を隣り合わせに建て、断食と祈りの修行に専念するためにそこに閉じこもった。一つの部屋では祈りを捧げ、別の部屋では手仕事をし、三つ目の部屋は食事と睡眠のために使っていた。　聖人はこのような隠遁生活の中で、生涯の最期を迎えるまでの50年間を過ごし、決して小部屋から外に出ることはなかったが、小さな窓越しに、訪ねてくる人々から食事を受け取り、会話を交わしていた。

[2678] リコポリスは、中エジプトで最も古い都市の一つである。本来、リコポリスの名称は、古代においても現在と同様に、シウトであった。シウトは古代エジプト人にとって聖なる都市であった。　エジプトの神々であるアヌビスとウェプアト――この都市の守護神――は、ここではジャッカルの頭を持つ姿で描かれていました。この事情から、ギリシャ人はこの都市をリコポリス（ギリシャ語で「狼」「ジャッカル」の意）と呼ぶようになったのです。　古代、シウトは重要な政治・商業の中心地であった（この都市はナイル川の左岸に位置していた）。キリスト教は3世紀にこの地へ伝来した。現在、シウトは人口3万人規模のエジプトで最も活気ある都市の一つである。

聖ヨハネがこの隠遁生活を送って30年が経過したとき、彼は主から預言の賜物を受けるにふさわしい者とされた。　聖人はテオドシウス皇帝に多くのことを予言した。すなわち、彼がキリスト教迫害者マクシムスを打ち破り、ガリアを支配すること[2679]、またキリスト教迫害者エウゲニウスをも打ち破り、その後、生涯を終えて王位を息子たちに譲ることである。　聖人のこのような先見の明のおかげで、彼は聖なる人物として至る所でその名声が広まり、テオドシウス皇帝自身も彼を預言者として崇敬した。

ヨハネが隠遁生活を始めようとした頃、ある軍司令官が彼のもとを訪れ、シエナ[2680]に攻め寄せてきたエチオピア軍に勝利できるかどうかを聖人に尋ねた。聖ヨハネは、恐れることなくエチオピア軍に立ち向かうよう命じ、皇帝から栄誉を授かるだろうと告げた。　すべては聖ヨハネが予言した通りに起こった。この出来事の後、王は聖人のことを知り、敵への遠征に出るたびに、聖人に祈りと遠征の成功に関する予言を求めた。

聖ヨハネは、彼と共に修業に励んだ教父たちが伝えているように（この聖人の伝記を著したパラディオス[2681]が指摘している通り）、予言の偉大な恵みに恵まれていた。これらの教父たちの、美徳に満ちた聖なる生涯は、彼らの言葉の真実性を私たちに確信させてくれる。ここに、聖人の驚くべき先見の明を示すいくつかの例を挙げる。

あるトリブーン[2682]が聖人のもとを訪れ、彼に会いたがっている妻を連れてくる許可を求めた。　しかし、聖ヨハネは、女性と会うことも、女性から見えることも望まなかったため、この願いを聞き入れようとしなかった。というのも、彼は男性とさえ、小さな窓越しにしか会話を交わさなかったからである。しかし、トリブーンが長く執拗に聖人に懇願し続けたとき、聖人はその妻の信仰を見抜き、夢の中で彼女に姿を現すと約束して、トリブーンにこう言った。

「今夜、私は彼女の前に現れる。そうすれば、彼女はもはや、肉眼で私を見るよう懇願することはなくなるだろう。」

トリブーンは妻に聖人の言葉を伝えた。

案の定、その夜、トリブンの妻は夢の中で聖人を見ました。聖人は彼女のそばに近づき、こう言いました。

「*『私とあなたとは何の関係があるのですか、妻よ？』*（ヨハネ2:4）。なぜ私の顔を見たいと思ったのですか？ 私が預言者でしょうか？ 聖人でしょうか？ 私は罪深い人間であり、他のすべての人々と同様です。しかし、私は神に懇願しました。あなたの信仰と、あなたの夫の信仰通りにしてくださるよう。」

そう言うと、聖人はその女性から離れていった。

トリブンの妻が目を覚ますと、夢の中で聖人が彼女に語った言葉を夫に伝え、聖人の顔や服装を夫に説明し、そして夫に、自分に示された慈悲に対して聖人に感謝するよう頼んだ。その女性の夫が聖人の修道院の部屋を訪れると、まだ聖人に一言も口にする間もなく、聖人は彼にこう言った。

「ほら、私はあなたの願いを叶え、あなたの妻の夢の中に現れた。そうすれば、彼女はもうこれ以上、肉眼で私を見るよう懇願することはないだろう。」

[2679] ガリア――現在のフランス――は、地中海、ピレネー山脈、大西洋、ライン川、そしてアルプス山脈に囲まれた国である。

[2680] シエナという都市はリコポリスからそう遠くない場所にあり、ナイル川の東岸に位置していた。この都市は、古代において巨大な花崗岩の鉱床がある場所として知られていた。現在、シエナはアスワンという名で呼ばれ、4,000人の住民が暮らしている。

[2681] ヨハネス・プロゾルヴィイの同時代人であるパラディウスは、その著書『προς Λαυσον Ιστορια』（ラウサイク）の中で、多くの修道者の生涯について記述を残している。

[2682] トリブヌスとは、軍司令官、すなわちトリブス（tribus）――ローマ軍の部隊や分隊――の長を指す。

またある時、妻が妊娠しており、出産が間近に迫っていたある軍司令官が、聖ヨハネのもとを訪れ、自分と妻のために祈ってほしいと頼んだ。ちょうどその軍司令官が聖人のもとを訪れたその時、妻は出産の激痛に苦しみ、すでに死の淵に近づいていた。　そこで、聖ヨハネはその男にこう言った。

「もし、あなたに息子を授けてくださる神の慈しみを知っていたなら、あなたは神を賛美しただろう。しかし、その子の母は死の淵に立っている。私のもとを去れば、あなたは生後七日目の赤ん坊を見つけるだろう[2683]　。その子をヨハネと名付け、七歳になったら、修行のために砂漠の修道士たちのところへ送りなさい。」

聖ヨハネは、遠くから彼を訪ねてくる多くの人々に、このような予言やそれに類する予言を授けていた。　同様に、尊者ヨハネは、将来の出来事についても多くの予言を行い、心の安らぎを求めて絶えず彼を訪ねてきた、リコポリの市民たちにも語りかけました。彼は彼らに、将来起こるべきことだけでなく、誰かが他の人々の知らないところで密かに行ったことまでも明らかにしました。　例えば、聖ヨハネはナイル川の氾濫[2684]　や豊作の年について予言した。同様に、聖人はこれから起こる神の懲罰についても予言し、自らの罪によって国に神の怒りを招いている者たちを糾弾した。

聖ヨハネは自ら直接癒やしを行うことはなかったが、病人に聖別された油を与え、それに塗られることで、彼らは病から癒やされた。例えば、あるローマの上院議員の妻は、視力を失い、目に白内障を患っていたため、夫に、癒やしを求めて聖ヨハネのもとへ連れて行ってくれるよう頼んだ。しかし、夫は彼女に、聖ヨハネのもとにはまだ一人の女性も訪れたことがなく、そもそも女性は聖ヨハネに会うことさえできないと告げた。それでもその女性は、せめて神に自分のために祈ってほしいという願いを聖人に伝えてほしいと、夫に懇願した。　夫は妻の願いを聞き入れた。その後、聖ヨハネはその女性に少量の聖別された聖油を送り、彼女はそれを一日に三回、自分の目に塗った。それから三日後、その女性は視力を取り戻し、神を賛美した。

ニトリアの砂漠（[2685]　）には、7人の隠者がいた。すなわち、私（聖ヨハネの伝記を著したパラディオ）と、エヴァグリオス、アルヴィアノス、アモンらの弟子たちである。彼らは皆、聖ヨハネの徳高い生涯について詳しく知りたいと願った。その中で、エヴァグリオスはこう言った。

「私が先に行って、誰かから聖ヨハネの生涯について聞いてくる。しかし、もし彼について何も知ることができなければ、リコポリス山より先には行かない。」

これを聞いて――とパラディオスは語る――私は一日休んだ後、翌日、誰にも何も告げず、神に身を委ねて、フィヴァイダ[2686]　へ向かった。山と聖ヨハネの隠居所にたどり着くと、彼の弟子たちは私に、日曜日から土曜日までは、尊者（聖ヨハネ）は訪れる者との対話を一切受け付けていないと告げた。　そのため、私は土曜日を待たなければならなかった。そして土曜日、午後2時に私は聖人の庵へ向かい、彼が窓辺に座って、訪ねてきた人々と語り合っているのを見つけた。聖人は私に挨拶を述べた後、弟子の一人を通じて私に尋ねた。

「どこから、何の用で来たのか？　どうやら、あなたはエヴァグリオス修道院から来たようだな。」

私たちが話している最中、その国の軍司令官であるアルピイという人物が聖人のもとを訪れた。ヨハネは私との会話を中断し、私は聖人と軍司令官の会話の邪魔にならないよう、少し距離を置いた。　尊者様が軍司令官とかなり長い間話し込んでいたため、私は憤りを感じ、私を軽んじて軍司令官を敬うその誠実な長老を心の中で非難し始めた。我慢の限界に達し、私はすでに、別れの挨拶もせ

[2683] この軍司令官の居住地から聖ヨハネの修道院までは、明らかに7日間の道のりであった。

[2684]　ナイル川は周期的に氾濫し、エジプトを水浸しにしたが、これは農業に従事するエジプト人にとって極めて重要であった。なぜなら、川の氾濫は、唯一ではないにせよ、主要な灌漑水源となっていたからである。

[2685] この砂漠は下エジプトに位置していた。

[2686] フィヴァイダは中エジプトに位置していた。

ずに尊者様の元を離れようとしていた。　しかし、聖ヨハネは私の考えを見抜き、テオドロという名の弟子を呼び寄せ、こう言った。

「行って、あの兄弟に、怒らないように伝えてくれ。私は今、その軍司令官を見送ってから、彼と話をしようと思うからだ。」

その言葉が私に伝えられたとき、私は聖ヨハネが私の考えを見抜いたことに大いに驚き、彼が聖なる、先見の明のある人物であることを確信した。

軍司令官がヨハネのそばを離れると、聖人は私を呼び寄せ、こう言われました。

「なぜ私に怒ったのか。私に、あなたを侮辱するような点があったというのか。なぜ、私についても、あなたについても、思い浮かべるべきではないようなことを考えたのか。聖書に*『健康な人は医者を必要としない。病んでいる人こそ医者を必要とする』*（マタイ9:12）と書かれているのを、読んだことがないのか。　私が望めばいつでも君を見つけることができるし、君が望めばいつでも私を見つけることができる。たとえ私が君を慰めなかったとしても、他の兄弟たちや父たちが君を慰めてくれただろう。　一方、あの軍司令官は、世俗の心配事に没頭し、悪魔の支配下にあったが、ほんの短い間だけ真理を悟り、残酷な主人から逃れる奴隷のように、悪魔から逃れて私のところへやって来た。それは、私から自分の魂のための恵みを受けようとしたからである。　私の側としては、彼に目を向けずにあなたとの会話を続けるのは不公平なことだ。なぜなら、あなたは常に自らの救いを自ら気にかけているのだから。

これを聞いて、私は（パラディウスはこう語っている）、彼が聖なる人物であることを完全に確信し、私のために祈ってくださるようお願いし始めた。すると彼は、優しく私に語りかけながら、右手で私の左頬を軽く撫で、こう言った。

「君の前には多くの苦難が待ち受けている。そして、荒野を去りたいという自分の欲望と戦い、すでに困難な戦いを乗り越えてきた。悪魔が、父や兄弟の君への愛を思い出させ、荒野を去るためのもっともらしい口実を君に提示したにもかかわらず、君はその欲望に屈しなかったのだ。　私はあなたに喜びの知らせを伝えよう。あなたの父も兄も、二人とも健在であり、この世を捨てている。あなたの父は、あと七年生き続けるだろう。　そしてあなたも、勇気を奮い起こし、荒野で修行を続けなさい。ここから故郷へ戻ろうなどとは決して考えてはなりません。なぜなら、*「鋤に手をかけ、後ろを振り返る者は、神の御国に入る資格がない」*（ルカ9:62）と書かれているからです。

聖人の言葉を聞き、それによって奮起した私は（パラディオは語る）、神がこの聖なる人を通して悪魔の策略を私に明らかにし、それを打ち破るのを助けてくださったことに、神に感謝した。ある時、その尊者様は、私に優しく語りかけながら、こう尋ねられた。

「司教になりたいか？」

すると私はこう答えました：

「いいえ、私はすでに司教ですから。」

すると、聖人は私に尋ねました：

「では、どの町で司教をしているのですか？」

私は彼にこう答えました：

「私は[2687]で、厨房や食事、テント、樽を監督しています。例えば、ワインを試飲し、酸っぱければそれを素通りし、甘ければそれを飲みます。　また、料理の入った大鍋も確認し、塩やその他の調味料が足りないところがあれば、それらを料理に加え、調味料で美味しく仕上がった料理を食べます。他の場合も同様に、どこでも自分にとって最良のものを選び取っています。これが、私の快楽追求が私を導いた司教職なのです。

[2687]「監督する」はギリシャ語の「επισκοπεω」に由来し、ここから「司教（επισκοπος）」という言葉が派生した。すなわち、監視者、守護者である。

聖人は微笑みながら、私にこう言った。

「冗談はやめなさい。あなたは実際に司教となり、多くの労苦と悲しみを耐え忍ばなければならないのだから。もしそれらの労苦や悲しみを避けたいのなら、荒野を去ってはならない。なぜなら、ここ荒野では、誰もあなたを司教に任命することはできないからだ。」

聖人を後にし、私は（パラディウスが語るように）定住地である自分の荒野へと向かい、兄弟たち全員に、高潔で聖なる人物である聖ヨハネについて語った。　しかし、罪深い私はその後、聖ヨハネが私について語った言葉を忘れてしまった。それから三年後、私は胃の病を患い、兄弟たちの助言に従って、アレクサンドリア[2688]の医師たちの元へ向かった。しかし、私の病気は治まるどころかますます悪化していったため、アレクサンドリアの医師たちは、パレスチナは温暖で健康的な気候であるとして、そこへ行くよう勧めてくれた。　パレスチナへ向かい、しばらく滞在して病状が多少回復すると、そこからビフィニア[2689]へと向かった。そしてそこで――それが人間の意志によるものか、神の御心によるものか、今となっては思い出せないが――神のみがご存知の経緯で、私は司教の位に就く栄誉に浴した。　その後、私は悲しみに沈みました。この聖職は私の力では到底務まらないものだったからです。その時、私は聖ヨハネが私について語った預言を思い出しましたが、その頃には聖人はすでに他界されていました。私は、聖人が私に荒野にとどまるよう諭してくれた時の言葉を思い出しました。

「私はこの小部屋で四十年間過ごしてきたが、この間、女性の顔も、いかなる硬貨も、また誰かが食べたり飲んだりする姿も見たことがない。同様に、私自身が食べたり飲んだりする姿を誰にも見られたことはない。」

聖ヨハネとのその会話の後、私が（パラディオの記述によれば）いつもの場所に戻り、兄弟たちや長老たちに聖人のもとで見たことや聞いたことをすべて話すと、私たち七人は、それから二ヶ月後にその尊者のもとへ向かった。

私たちが尊者ヨハネの修道院に着くと、彼は私たちを温かく迎え入れ、一人ひとりに笑顔で挨拶をしてくれた。到着するやいなや、私たちはエジプトの修道士たちの慣習に従い、聖人に私たちのために祈ってくださるよう懇願し始めた。しかし、彼は私たちにこう尋ねた。

「あなた方のなかに聖職者はいないか？」

私たちは皆、こう答えました。

「誰もいません。」

聖人は私たち一人ひとりを注意深く見つめ、その中に身分を隠していた聖職者一人を見抜きました。というのも、私たちの一人が助祭であったのですが、ある一人の兄弟を除いて、彼が助祭であることを誰も知らなかったからです。　しかし、その聖職者は謙遜のゆえに自分の位階を隠しており、その位階を知っていた兄弟に対しても、自分が助祭であることを口外しないよう禁じていた。というのも、その兄弟は聖なる修道士たちに倣おうと努めていたため、キリスト教徒という名さえ名乗るに値しないと自らを思っていたからである。尊者ヨハネは、その兄弟を指さして言った。

「この人が助祭だ。」

しかし、その兄弟が自分が助祭の聖職にあることを否定すると、聖ヨハネは、私たちと会話していた窓から手を伸ばし、その兄弟の右手を握り、その手に口づけをして、こう言った。

「神の恵みを拒んではならない。　兄弟よ、神の賜物を隠して偽ってはならない。なぜなら、偽りはキリスト教徒にとってあってはならないものだからだ。それが大小を問わず、あなたの中にあ

[2688] アレクサンドリア――古代において貿易と教育の面で最も著名なエジプトの都市であり、地中海の沿岸に位置していた。　キリスト教会の歴史において、アレクサンドリアは宗教的論争の舞台であり、多くの異端者の発祥地として知られている。現在、アレクサンドリアはトルコ語で「イスカンデル」と呼ばれ、かなり大規模な商業・行政の中心地となっている。

[2689] ビフィニア――小アジアの地域。

る偽りを称賛することはできない。救い主が言われるように、偽りは悪魔から来るものだからだ。悪魔は偽りそのものであり、偽りの父である（ヨハネ8:44）。

尊者から指摘された助祭は、聖人の教えに注意深く耳を傾けながら、黙っていた。

そして、私たち全員が祈りを終えたとき（パラディオスの話によれば）、熱に苦しんでいた兄弟の一人が、聖ヨハネに自分を癒やしてほしいと懇願した。　聖人はその兄弟に、この病気は彼の魂にとって有益であると告げたが、それでもなお、その兄弟に聖別された油を塗るよう命じた。それは、彼の病気そのものよりも、むしろ彼の信仰の薄さを癒やすことを願ってのことだった。その直後、その兄弟は完全に健康を取り戻した。

（パラディオスの証言によれば）私たちは、聖ヨハネが九十歳になった時にも彼に会う機会に恵まれた。　その体は断食の修行によってこれほどまでに衰弱しており、ひげさえ生えていなかった。彼は　、果実以外は何も口にせず、それも日没後だけだった。若い頃から断食に慣れ親しんでいたため、老後になってもパンも、火で調理された他のいかなる食事も決して口にしなかった。

彼が私たちに座るよう勧めてくれたとき、私たちは、この尊い方にお目にかかり、お話しできる恵みを授けてくださった神に感謝を捧げた。すると彼は、私たちを愛する子供たちとして迎え入れ、笑顔を浮かべてこう言った。

「どこから来たのですか、子供たちよ？　どの国から、罪深く謙虚な私のもとへやって来たのですか？」

私たちは、故郷の地名を挙げ、ニトリアの荒野を常住の地として明かした上で、他の人々から多く耳にしていた聖人を、心の糧とするためにこそ、エルサレムからやって来たのだと述べた。

すると、至福のヨハネは私たちにこう言われました。

「愛する子らよ！　これほど困難な旅路に踏み出したとき、あなたがたは一体どのような奇跡を目にすることを期待していたのか！　罪深く、謙虚で、驚くべき点など何一つない人間を見たところで、あなたがたに何の益があるというのか。教会でその書物が読まれている、驚きと称賛に値する聖なる預言者や使徒たちがいる。　彼らに驚き、彼らに倣うべきであり、私ではない。私は、あなたがたが魂の益を求めて、遠くから、この困難な道のりの危険を顧みず、私たちのもとへやって来たという熱意を見て、大いに驚いた。私たちの方は、怠惰のゆえに、自分の修道室からさえ出ようとしないのだ。　しかし、覚えておいてください。たとえあなた方の行いが称賛や承認に値するものであったとしても、あなた方自身は、何か善きことや称賛に値することを成し遂げた人間だなどと考えてはなりません。力及ぶ限り、先人たちの徳ある生活に倣い、もしすべてを成し遂げたとしても（もっとも、それはめったにないことですが）、自分自身を頼りにしたり、自分を誇ったりしてはなりません。　徳において完成に達し、高慢になったために、高みから深淵へと転落してしまった人々は数多くいる。よく自省せよ。あなたの祈りは熱心か、心の清さは損なわれていないか、祈りの最中に心が雑念に囚われてはいないか。　また、魂のすべてをもってこの世から背を向けているか、他人の美徳を覗き見ながら、同時に自分の美徳を誇示していないか、他の人々に良い手本を示すよう心がけているか、よく観察しなさい。自分を義人だと思い上がったり、自分の善行を誇ったりしないようにしなさい；　祈りの最中に、世俗的な事柄についての考えが頭に浮かばないよう注意しなさい。なぜなら、口では神と語り合いながら、心は神から遠く離れていることほど無分別なことはないからである。これは、世を拒絶するというより、むしろ世に迎合することに気を配っている人々にしばしば起こる。多くのことを考える人は、世俗的かつ儚い事柄への心配に身を委ねてしまう。しかし、世俗的な心配に身を委ねてしまうと、人はもはや霊的な目をもって神を見ることはできなくなる。　常に神について思いを巡らす者には、聖書に記されているとおり、*「立ち止まって、わたしが神であることを知れ」*（詩篇45:11）という言葉に従い、この世のあらゆる事柄や虚しいことへの思いは、無縁でなければならない。　また、神についてある程度の認識に達した人（神を完全に知ることは誰にもできない

）には、神の奥義が明らかにされ、未来を現在のように見通すことができ、聖人たちと同様に奇跡を行い、祈りによって神に求めるものは何でも与えられる。

聖ヨハネは、彼のもとに訪れた兄弟たちに、これらやその他多くのことを語り、まるで父親が子供たちを慰め、導くかのように彼らを励まし、教え導いた。その後、彼は彼らに、高慢になり、自分自身のことを過大評価してしまった人々についてのいくつかの物語を語った。その中には、次のような物語もあった。

「ある修道士が、外なる荒野の[2690]にある洞窟で修行に励んでいた。彼は自らの労働で生計を立て、絶えず神に祈りを捧げ、徳を積んでいた。　自分は清く徳高い生活を送っている人間だと自覚したその修道士は、高慢になり、自分を義人であり聖人であると見なし、もう二度と罪を犯すことはないと自負するようになった。　神の御許しにより、ある晩遅く、その修道士のもとへ、まるで砂漠で道に迷ったかのような美しい女性の姿をとった悪魔が現れた。　その偽りの女は、洞窟の扉が開いているのを見つけると中に入り、修道士の足元にひれ伏して、すでに夜が更けていることを理由に、洞窟に入れてくれるよう懇願した。修道士はその女を不憫に思い、誘惑を恐れることなく、自分の力に強く自信を持っていたため、彼女を自分の洞窟に招き入れた。　修道士は、やって来た女性に、どこから来たのか、そしてどのようにして砂漠で道に迷ったのかと尋ねた。　一方、悪魔は妻の姿を装い、修道士と長く語り合い、彼を罪へと誘った。注意深く耳を傾けていた修道士は、すでに罪へと傾き始めていた。　多くの淫らな会話と互いの笑い声が交わされるにつれ、修道士の心はますます乱れていった。　彼の中で情欲の炎はますます燃え上がり、もはや不義を犯そうとしたその時、突然、その妻は大声で叫び、影のように彼の手から消え去り、見えなくなってしまった。その直後、空中に多くの悪魔たちの声が響き渡り、彼らは修道士を嘲笑し、次のような言葉で非難した。

「自らを高ぶる者は打ち倒される。お前は天にまで高ぶったがゆえに、今や地獄へと打ち倒されたのだ。」

嘲笑されているのを見て、その修道士は絶望に陥り、自分の小部屋と荒野を捨てて世俗の世界へと戻った。それほどまでに、彼の高慢な自尊心は彼を堕落へと追いやったのである。

悔い改めを説き、悪魔たちが私たちを絶望と破滅へと追い込むのと同様に、私たちも彼らに打ち勝つことができ、そうすれば彼らはもはや私たちを打ち負かすことができなくなる、と論じながら、聖ヨハネは次のような話を語った。

「ある町に、数多くの甚だしい罪を犯した若者が住んでいた。しかしその後、この若者は神への畏れに駆られて悔い改めた。かつての罪深い生活を嘆き悲しむため、彼は墓地へと向かい、そこで地面にひれ伏した。自らの罪の多さゆえに、神の名を呼ぶことも、祈ることもできなかったのだ。その後、その若者は棺の中に入り、そこで閉じこもり、自分の罪を嘆き、悔い改めながら泣きじゃくった。若者が棺の中に七日間留まっていたとき、かつて彼を罪へと誘い込んだ悪魔たちが彼の元へやって来て、大声で叫んだ。

「おまえは哀れだ、卑劣で不敬虔な者よ。淫行に溺れきっていたくせに、我々にとって予想外にも、今や徳ある人間となり、我々の敵となってしまったではないか！　我々の不浄に満ち溢れた後、お前は自分にどんな良いことが待っているというのだ？　なぜ棺から立ち上がって、我々と共にいつもの行いへと向かわないのだ？　淫行者や酔っ払いたちが、お前を待ち焦がれているではないか！　なぜ、自分の欲望を満たしに行かないのだ？　今や、お前には救いを望む余地などないのだから。お前はあらゆる罪深い行いを犯してきたのだから、今やお前は我々のものだ。我々から逃れようとしても無駄だ。もはや、お前は我々の手から逃れることはできないのだ！

[2690] エジプトの隠者たちの砂漠は、内側と外側の2つの部分に分けられていた。前者は内陸のより奥深くに位置していたのに対し、後者はナイル川に近い場所にあった。

その若者は悪魔たちに何も答えず、彼らの話に耳を傾けることさえ拒み、ただひたすら自分の罪を嘆き続けていた。　悪魔たちは長い間、このような言葉を若者に浴びせ、彼を罪へと誘い続けた。しかし、彼が彼らを恐れておらず、墓地から逃げ出そうとも思っていないのを見ると、激しく彼を殴り始め、もし神がそれを許していたなら、とことん彼を殺してしまおうとした。　その後、悪魔たちは青年から離れ、彼をかろうじて息のある状態で置き去りにした。彼は死人のように長い間地面に横たわっていたが、意識を取り戻すやいなや、再び自分の罪を嘆き、泣きじゃくり始めた。　あちこちを探し回っていた親族が墓地で彼を見つけたとき、家に帰るよう懇願したが、彼は彼らの言うことを聞く気もなく、「以前の生活に戻るくらいなら、死んだほうがましだ」と語った。

次の夜、悪魔たちは再びその若者に襲いかかり、最初と同じことを言いながら、再び彼を苦しめた。その後、悪魔たちは若者から離れていった。　そして三夜目、悪魔たちは打ち負かすことのできない者を打ち負かそうと試みたが、成功を絶望し、彼の忍耐に追い詰められて彼から逃げ去った。その際、逃げ去る途中で悪魔たちは叫んだ。

「お前は、お前は、お前は我々を打ち負かした！」

このようにして、謙遜と結びついた悔い改め、そして勇気と結びついた忍耐が、悪霊たちを絶望の淵へと追いやり、彼らはもはやその若者に何の害も及ぼすことができなくなった。

その若者は、残りの生涯を徳行に捧げ、自らの救いを絶望していた多くの罪人たちに、真の悔い改めの模範を示した。

また、人を滅びの深淵へと陥れ、神の恵みから切り離す高慢と、人を神へと高める謙遜について論じる際、聖ヨハネは次のような物語を語った。

「ある修道士が、内陸の荒野に住み、長年にわたり徳を積んで過ごしていたが、老境に至って悪魔の狡猾な策略により誘惑にさらされ、その高慢さゆえに、危うく滅びるところだった。　その修道士は、深い沈黙の中で修行に励み、昼夜を問わず祈り、詩篇を詠み、神を想うことにすべての時間を費やしていた。　その徳高い生活により、彼は神の御姿を仰ぐ恵みさえ授かった。そのうちのいくつかは覚醒状態で、また他は夢の中で体験した（もっとも、彼の眠りは極めて短く浅かったため、それを「眠り」と呼ぶことさえ難しいほどであった）。　この修道士は、無形の生活へとこれほど熱心に志向していたため、肉体の糧については全く気にかけず、土地を耕すこともなく、　果樹の手入れもしなかった。神に全幅の信頼を置き、荒野に定住して以来、自分の体をどのように、何で養うかについて、一度も心配したことはなかった。　この世のあらゆる執着を捨て去り、彼は神に近づきたいという熱意に燃え、この朽ちゆく世からの旅立ちを心待ちにしていた。

目に見えない天上の事柄を絶えず心に留めながら、その修道士は長い間徳のある生活を送り、その肉体は苦行の生活によって決して衰えることがなく、その魂もまた、苦行の困難によって決して動揺することはなかった。　彼の生活は、いわば肉的な存在と非肉的な存在の中間という、ある種の快適な位置にありました。その修道士は、完全に非肉的な人間でもなければ、完全に肉的な人間でもなかったのです。

その徳高い生活に対し、その修道士は神から、目に見えない手によってパンがもたらされるという報いを受けた。洞窟に入ると、机の上に二、三日分には十分な量の清らかなパンが置かれていたのだ。　その修道士は、食物で体力を補う必要を感じると、神に祈りを捧げた後、そのパンを口にし、続いて賛美歌を歌って魂を満たし、常に祈りと神への思索にふけり、日ごとに徳を高め、来るべき祝福への希望に全身全霊を捧げていた。　そして彼は、自らの徳ある生活に対する神からの報いと報酬について考え始め、その報いをあたかも自分の手の中にあるかのように思い描いていたが、それこそが彼の堕落の原因となった。

彼の頭には、自分は神の前で他者よりも価値があり、他の誰よりも神からの恵みと天の祝福を受ける権利があるという考えが浮かんだ。同時に、彼は心の中で、いかなる場合でももはや罪に陥ることはなく、これほど高潔な徳のある生活を捨てることは決してないだろうと考えていた。

修道士がこのように自分自身について思い巡らしているうちに、彼の中にはやがて、最初は些細な気落ちが芽生え、次に怠惰が募り始め、やがて気落ちと怠惰が完全に彼の中で根を下ろした。彼は起床して詩篇を歌う時間が日ごとに遅くなり、祈りの時間も日ごとに短くなっていった。　彼の心は「少し休む必要がある」と囁き、彼はその思いに身を任せ、心が乱れた。努力を重ねて怠惰や心の乱れを克服したものの、やがてまた以前の乱れと怠惰に身を委ねてしまった。

いつもの祈りを終え、ある日洞窟に入ると、彼は相変わらず、神から目に見えない形で送られたパンが机の上に置かれているのを見つけたが、それは以前ほど清らかではなかった。　その修道士はパンで体を満たした後、不浄な考えを拒絶せず、それらが自分の魂を傷つけていることに気づかず、この最初の傷を癒やすよう努めもしなかった。罪深い考えを抱き、それに浸る習慣を些細なことだと考えていたからである。

翌日、いつもの祈りと詩篇の詠唱を終えた夕方、食事をとるために自分の洞窟に戻ると、相変わらずパンはあったが、それはすでに汚れて不浄なものになっていた。彼はこれに大いに驚き、深く嘆いた。しかし、そのパンを手に取り、一口かじって、それで力を取り戻した。

三日目の夜になると、一つの悪にさらに別の悪が加わった。不浄な思いがますます彼を悩ませ、彼は淫行への欲望にそれほどまでに惑わされ、自分が女性のそばに横たわっている姿を想像してしまった。

夜が明けると、その修道士は朝、いつもの祈りの儀式を行ったが、すでに不純な思いに深く悩まされていた。夕方、彼はパンを食べようと独房に入ったが、パンは不浄であるだけでなく、まるでネズミや犬にかじられたかのように、床にはパンの残骸が転がっているだけだった。　そこで修道士はため息をつき、涙を流したが、不浄な思いや姦淫の欲望を打ち消すのに必要なほど、心から深く悔い改めることはなかった。床に散らばっていたパンの屑を拾い上げ、その一部を口にしたが、それだけでは満足できず、寝床についた。　するとすぐに、彼の頭は、彼を荒野から世俗の生活へと引きずり込もうとする、数多くの不浄で虚しい思いで満たされた。同時に、彼の中で肉欲が激しく燃え上がり、もはや自分自身と戦うことはできなくなってしまった。

神の御許しにより（一時的にその修道士を驕りから遠ざけるためにそうされたのである）、その修道士は寝床から起き上がり、夜中に荒野へと向かった。どこかで世俗の集落に巡り会えることを期待してのことだった。

日が昇り、太陽の照りつけが耐え難いほどになった頃、その老修道士は、すでに年老いていたため旅の疲れを感じていたが、一方で、彼が目指していた道はまだ遠く、終わりが見えなかった。そこで彼は、休息できる修道院がないか、周囲を見回した。 すると、神の御心により、 彼の道の途中で、ある修道院に出くわした。　長老がそこに入ると、その修道院の修道士たちは、まるで偉大な修行者のように、非常に親切かつ敬意を込めて彼を迎え入れ、彼の顔を洗い、足を洗い、祈りを捧げた後、愛の証として、用意されたものの中から何かを口にするよう勧めた。　長老が少し腹ごしらえをすると、修道者たちは、悪魔の策略からどのように逃れ、不浄な思いに打ち勝つことができるかについて、教えの言葉を語ってほしいと懇願し始めた。

長老は、まるで父親が子供たちを導くかのように彼らを教え導き、キリストの修道院において、そう遠くないうちに彼らの労苦から安らぎを得られるようになるのだから、修行において堅固で勇敢であるよう諭した。長老は修道士たちに他にも多くのことを語り、断食の修行において堅固であるよう教えた。

やがて長老は話を終え、人里離れた場所でしばらく休むために横になると、なぜ自分は他人を教えながら、自分自身のことには全く気を配らないのか、　他者には魂の益となる説教を差し出しながら、自分自身を誘惑し、他者を救いの道へと導きつつ、自分自身が救いからますます遠ざかり、滅びへと引きずり込まれているのか、と。

そう思索するうちに、長老は不浄な思いに打ち負かされたことを自覚し、その後再び荒野へと戻った。もはや静かに歩むのではなく、まるで以前の住処へと駆け戻るかのように、自らの堕落を嘆きながらこう言った。*「もし主が私の助け手となられなければ、まもなく私の魂は地獄に落ちていたであろう」*（詩篇93:17）。そして、その修道士には、賢者が語った次の言葉が実現した。*「兄弟は兄弟を助け合う。それは堅固で高い城壁のようで、築かれた王国のように強固になる」*（箴言18:20）。

それ以来、その修道士は完全に改心し、自らの罪から清められた。彼は自分の洞窟に閉じこもり、地面にひれ伏して頭に土をまき散らし、何日も泣きじゃくった。そして、神が彼の悔い改めを受け入れたことを天使から告げられるまで、その長老は立ち上がらなかった。　しかし、長老の悔い改めが受け入れられたにもかかわらず、彼は以前神から送られていたパンをもはや受け取ることができず、自らの労働で生計を立てなければならなくなった。これほどまでに、高慢は人を謙虚にするのである！

尊者ヨハネがこの話を終えると、彼を訪ねてきた兄弟たちにこう言った。

「子らよ、大きなことにも小さなことにも、常に謙遜でありなさい。なぜなら、それは『*霊的に貧しい者は幸いである。天の御国は彼らのものだからである*』（マタイ5:3）と仰せられた。すなわち、「霊的に貧しい者」であるということは、謙虚であるということだ。罪へと誘う思いや幻影によって、悪魔に惑わされてはならない。　たとえ誰があなたのところに来ようとも、兄弟であれ、友人であれ、女性であれ、夫であれ、教師であれ、母であれ、姉妹であれ、まず第一に、祈りのために両手を上げなさい。もしそれが悪魔による幻であったなら、それはあなたの目の前から消え去るでしょう。　もし誰かが、悪魔であれ人間であれ、あなたを称賛したとしても、その言葉に耳を傾けず、自分の心で高ぶってはなりません。なぜなら、私も夜ごとにしばしば悪魔たちに誘惑され、一晩中、私の目の前に様々な幻影を映し出し、静かに祈ることも眠ることも許されなかったからです。　しかし、朝になると、悪魔たちは罵声を浴びせながら私の前で地面にひれ伏し、こう言ったのです。

「アッバ[2691]よ、一晩中あなたを苦しめてしまったことをお許しください！」

しかし、私は彼らにこう言った。

「私から離れよ、不法を行う者たちよ！ 神のしもべを誘惑してはならない！」

それゆえ、子らよ、沈黙を愛し、常に神を想うことに留まり、罪深い思いから解放された清らかな心を神があなたに授けてくださるよう、常に神に祈りなさい。　もちろん、世に生きながら徳を磨き、旅人を歓待したり、施しをしたり、他者の労苦を助けたり、常に怒りを抱かずに過ごしたりする修行者も、称賛に値する。　そのような人は、徳に留まり、この世の務めを疎かにすることなく、主の戒めを果たしているから、称賛に値する。　しかし、それ以上に、より大きな称賛に値するのは、常に神への思索にふけり、物質的なものから非物質的なものへと昇華し、物質的な事柄は他者の世話や配慮に委ね、自らは天上のものを求め、常に神の御前に立ち、この世のあらゆるものから離れ、もはや地上の事柄への配慮によって再びこの世に執着することのない者である。　そのような人は神に近く、祈りと詩篇の詠唱によって絶えず神を賛美している。私は、荒野で修行に励んだある人物を知っている。彼は十年間、地上の食物を一切口にしなかったが、神の天使が二日に一度、彼に天の食物をもたらし、　それは彼にとって、食べ物でもあり飲み物でもあった（聖ヨハネは、どうやら他の修道士について語っていたようだが、それは実は彼自身のことだった）。　また、私はこうも知っている――と彼は言った――、その人に悪魔たちが　、ある時、幻の中で天使の軍勢、火の戦車、そしてまるである王の従者であるかのような多くの従者を現し、その王が彼にこう言ったのだ。

「おお、人よ！　あなたは義にかなった、徳ある生涯を送った。さあ、私にひれ伏せ。そうすれば、私はあなたをエリヤのように天に上げよう。」

[2691] アッバ――教師、指導者。

しかし、その修道士は心の中でこう言った。

「私は生涯を通じて、私の王であるイエス・キリストにのみ拝んできた。もしこれが主ご自身であれば、私に拝むことを要求されるはずがない。」

それから、その修道士は悪魔にこう言った。

「私には主であり王である神がおられ、私は常にその方に拝しています。あなたは私の王ではありません。」

その直後、悪霊たちは姿を消した。

このような教えや物語を通じて、聖ヨハネはすべての人を導き、自らの生き様をもって、天使に等しい生活の模範を示した。それゆえ、ヨハネは多くの人々の魂の救いに大いに貢献した。

その聖なる生涯をもって神に喜ばれた聖ヨハネは、死期が近づいた。九十歳の時、彼は弟子たちに三日間は自分のところに来ないように命じた。　三日が過ぎ、兄弟たちが尊者のもとを訪れると、彼はひざまずき、あたかも祈りを捧げているかのように立っていたが、その魂はすでに主のもとへ旅立っていた[2692]。それは、他の聖人たちと共に、三位一体において賛美される神、父と子と聖霊の御座の前に立ち、永遠に栄光が帰される御方に仕えるためであった。アーメン。

聖女マトロナ・ソロンスカヤの記念日

記念日：3月27日

聖マトローナは、テッサロニキの[2693]総督の妻であるパヴティラという名のユダヤ人女性の奴隷であった。　彼女は若い頃からキリスト教の信仰を授かっていた。女主人は彼女に信仰を捨て、自分と同じ異教の迷信に改宗するよう強要したが、彼女が従わなかったため、女主人は彼女を激しく苦しめた。聖女は彼女から度々多くの傷を負わされたが、キリストのために熱心にすべてに耐え忍び、女主人に内緒で教会に通っていた。

ある日、パヴティラはマトローナがキリスト教の教会にいたことを知ると、彼女にこう言った。

「なぜ私たちのシナゴーグに行かず、キリスト教の教会へ行ったのか？」

祝福されたマトローナは、大胆にこう答えました。

「キリスト教の教会には神がおられるからです。しかし、ユダヤ人のシナゴーグからは、神は背を向けられました。だからこそ、私はシナゴーグではなく、教会へ行くのです。」

するとパヴティラはさらに激しい怒りに駆られ、容赦なく聖マトローナを殴りつけ、縛り上げて暗い小部屋に閉じ込めた。しかし翌朝、聖女は神の力によって縄から解き放たれ、キリストを賛美しているところが見つかった。　そして再び、女主人は彼女を硬い縄で死にかけるほど激しく打ち、その後、さらに強く縛り上げ、再びあの小部屋に閉じ込め、誰も彼女のもとに入って安らぎを与えることができないよう、扉に封印を施した。

そのような監禁状態の中で、聖女は神に支えられ、食事も水も与えられずに四日間を過ごした。その後、パヴティラは封印を解き、扉を開けると、マトローナが再び束縛から解き放たれ、祈りを捧げている姿を見つけた。　すると、彼女は恐ろしい怒りに駆られ、太い棒でマトロナを容赦なく殴りつけ、聖女がもはや息も絶え絶えになったところで、彼女を同じ部屋に閉じ込めた。そこで聖女は

[2692] 聖ヨハネの死は4世紀末に訪れた。

[2693] ソロウン（別名テッサロニキ）は、マケドニアの諸州の一つである。現在はテッサロニキと呼ばれ、ヨーロッパ側のトルコ、テッサロニキ湾の北岸に位置している。　ソロンでは、聖使徒パウロが福音を宣教した。同地域および同市の住民のために、この聖使徒によって二通の手紙が書かれた。

息を引き取り、神に魂を捧げた。聖女マトロナの遺体は、その冷酷な女によって下へ投げ捨てられたが、彼女の住まいは高所にあった。

キリスト教徒たちは、聖殉教者マトローナの苦難に満ちた遺体を拾い上げ、尊厳をもって埋葬した。その後、テッサロニキの司教アレクサンドルは、聖人の名に因んで教会を建立し、そこに彼女の尊い 遺骨を安置した[2694] 。一方、拷問者パヴティラには、まもなく彼女にふさわしい神の裁きが下った。　彼女が聖マトローナの遺体を高い壁から突き落としたまさにその場所で、彼女自身も後に偶然足を滑らせて転落し、体を打ち砕いて、その呪われた魂を悲惨な形で肉体から吐き出したのである[2695] 。

聖殉教者マヌイルとテオドシオスの記念日

記念日：3月27日

聖殉教者マヌイルとテオドシウスは、東方の国々の出身であった。異教徒たちが日々キリスト教徒を処刑しているのを見て、彼らは互いに相談し合い、天の御国を相続するためにキリストのために死ぬことを決意した。　その決意を固めると、彼らは自国の統治者のもとへ向かい、道中、多くの人々に「なぜキリスト教徒を処刑するのか」と問いかけた。そして統治者の前に出ると、自らをキリスト教徒であると名乗り、勇敢にキリストを告白した。その大胆さと勇気は、統治者の側近たちだけでなく、統治者自身をも驚嘆させた。　統治者は彼らを捕らえて牢獄に閉じ込めるよう命じ、さらに看守には彼らを厳重に監視するよう指示した。　数日後、総督は聖人たちを牢獄から自分の元へ連れてくるよう命じ、キリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう説得し始めたが、彼らは彼の言うことを聞くどころか、逆に、彼自身を偶像崇拝から遠ざけようと努めた。　そこで総督は、まず彼らを木に吊るして肋骨を削るよう命じ、次に木から降ろして研ぎ澄まされた三叉の矛の上に横たえるよう命じ、そして最後に、これらすべての拷問の末、彼らの首を刎ねるよう命じた。こうして聖なる殉教者たちは、その義なる魂を主の御手に委ねて息を引き取った。

4月10日

3月28日（旧暦）

我らの尊き父エウストラティオス・ペチェルスキーの生涯と殉教

記念日 3月28日

聖エウストラティオスは、自らの名と生涯の両方において、十字架の旗印の下で戦った、キリストの勇敢な戦士としての姿を現した。彼は、自らの選ばれた大将であるイエス・キリストそのものを模範とし、同じ人々から、同じ時期に、同じ苦難を受け入れた。それゆえ、彼は真にこう言って誇ることができたであろう。 *「私は、主イエスの傷跡をこの身に負っている」*（ガラテヤ6:17）。

この勇敢なキリストの戦士、エウストラティオスは、キエフの出身であった。彼は *「神の全武装を身に着ける」*（エフェソ6:11）ことを望んだ。これは修道者の生き方にふさわしいものである。

[2694] 聖マトローナの聖遺骨は、6世紀から7世紀にかけて、マウリキオス帝の治世に知られており、そこから奇跡が起こった。

[2695] 聖マトローナは3世紀または4世紀に殉教した。

「いかなる戦士も、軍司令官に気に入られようとして、世俗の事に心を奪われることはない」（IIテモテ2:4）ということを知っていた彼は、自分の財産を貧しい人々に分け与え、その一部を親族に残して、自分の死後に彼らが分配するようにした。こうして、かつての富から一転して貧しくなった彼は、ペチェールスク修道院の修道士となった。　そして彼は、私たちのために屈辱を受け入れられた「軍司令官」――キリスト――の御名のもとに、神に喜ばれる修業を始め、霊的な剣、すなわち祈りの力と厳しい禁食によって、自らの肉体をだけでなく、目に見えない敵をも打ち負かし、その柔和さと従順さをもって彼らを謙遜させ、服従させた。　聖エウストラティオスは、自身の模範であるイエス・キリストご自身が、いかに熱心に祈り、四十日間断食し、従順によってご自身を謙遜にされたかを思い巡らした。それゆえ、彼もまた、それらの美徳をもって自らを武装させたのである。　しかし、何よりもまず、人間が最初の罪によって節制の欠如によって打ち負かされたことを知っていた聖人は、節制と厳格な断食に励み、それゆえ「断食者」と呼ばれた。

やがて、神の御許しにより、邪悪なボニャク[2696] が多数のポロヴェツ族を率いてロシアの地に侵攻し、これを占領したとき、異教徒たちがペチェールスク修道院に侵入し、そこで多くの者が彼らの剣によって斬り殺された際、至福のエウストラティオスもまた、他の者たちと共に捕虜となり、ギリシャの地、コルスン[2697] という町で、あるユダヤ人に、他のキリスト教徒たち――修道院の労働者三十人とキエフの住民二十人――と共に売られた。

神に背くそのユダヤ人は、捕虜たちにキリストを否定するよう強要し始め、それに抵抗する者たちには、足枷をはめたまま飢え死にながら死なせると脅した。しかし、勇敢な修道士エウストラティオスは、祈りを捧げながら皆を励まし、教え、次のような言葉で導いた。

「兄弟たちよ！　あなたがたのうち、洗礼を受け、キリストを信じた者は、洗礼の際に立てた誓いを決して破ってはならない。キリストは水と御霊によって私たちを新たに生まれさせ、御自身の血によって律法の誓いから私たちを贖い、御自身の御国の相続人となさった。　生きるなら、主のために生きよう。死ぬなら、主のうちに死に、この世の死によって永遠の命を得よう。*「私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」*（フィリピ1:21）と語った方に倣おう。

聖人の言葉に励まされた捕虜たちは、永遠のいのちの糧であり飲み物であるキリストを否定するよりは、この世の食物や飲み物の不足によって死ぬことを選んだ。

こうして、しばらくして、飢えと渇きで衰弱した五十人全員が亡くなった。三日で亡くなった者もいれば、四日で亡くなった者、七日で亡くなった者、そしてより体力のある者は十日で亡くなった。生き残ったのはエウストラティオスただ一人であった。　すでに十四日間も飢えに苦しめられていたにもかかわらず、彼はなおも生き延び、無傷であった。それは、若き頃から断食に慣れていたからである。不信心なユダヤ人は、この修道士が、自分の異教へ改宗させようとして身代金を支払った捕虜たちを失った原因であると悟り、彼に復讐しようと企んだ。

その頃、キリストの復活の日が近づいていた。ユダヤ人は自分たちの過越祭を祝い始め、聖エウストラティウスを、かつてその先祖たちが我らの主イエス・キリストご自身を罵ったのと同じように罵倒した。そして、昔ユダヤ人がキリストを十字架につけたように、この義人もまた、その忌まわしいユダヤ人とその仲間たちによって十字架に釘付けにされた。

エウストラティオスは、十字架に架けられながらも、神が彼にすでに十五日間も飲食なしに生きさせてくださったことを感謝した。

ユダヤ人とその仲間たちは、十字架に架けられた彼を罵り、こう言った。

[2696] ボニャクは、11世紀末から12世紀初頭にかけて生きたポロヴェツ人のハン（または公）であり、キエフ・ルーシへの頻繁な襲撃から、我々の年代記では「略奪者」と呼ばれている。ポロヴェツ人は、キエフの南に居住し、略奪や強盗を業としていた略奪的な部族である。

[2697] コルスン――現在のタウリカのヘルソネス。

「狂人め！　今こそ、正当な過越の食事を口にし、生き延びて呪いを免れよ。モーセは神から授かった律法を我々に伝え、その書物の中で*『木に吊るされた者は皆、呪われる』*（申命記21:23）と記しているのだ。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「主は今、私に大きな恵みをお与えになった。主は、御自身の受難に倣って、御名のゆえに十字架上で苦難を受けるという恵みを私に授けてくださったのだ。」　主がかつて強盗に言われたように、私にも*「今日、あなたは私と共に楽園にいるであろう」*（ルカ23:43）とおっしゃってくださることを願っています。私はあなた方の過越祭など必要としませんし、誓いも恐れません。なぜなら、*「私たちの過越の羊であるキリストは、私たちのために屠られた」*（Iコリント5:7）であり、律法の違反によって私たちに課せられた呪いを滅ぼし、すべての者の命である御自身が釘付けにされた十字架の木によって、私たちに永遠の命を授けてくださった。モーセもまた、次のように預言していた。*「あなたの命は、あなたの目の前にぶら下がることになる」*（申命記28:66）。　また、過越の祭についてダビデはこう言っている。*「この日を主は造られた。この日に喜び、楽しみましょう！」*（詩篇117:24）。しかし、私を十字架につけたあなたや、あなたと同じ考えを持つ者たちは皆、泣き叫び、嘆き悲しむことになるだろう。なぜなら、私の血と、あなたがたが買い取った他のキリスト教徒たちの血に対する報復が、あなたがたに降りかかるからだ。主はあなたがたの安息日を憎み、あなたがたの祝祭日を嘆きに変え、あなたがたの不法を率いる者の殺害の時がすでに近づいている。

これを聞いたユダヤ人は怒りに燃え上がり、槍を掴んで、十字架に釘付けにされた[2698]を貫いた。その時、炎の戦車と炎の馬が見え、それらは歓喜する殉教者の魂を天へと運び去り、「見よ、天の都の勇敢な市民だ！」という声が聞こえた。

ユダヤ人たちは聖殉教者の遺体を十字架から降ろし、海に投げ込んだが、その後、その海では多くの奇跡が起こった。信者たちは熱心に聖遺物を探し求めたが、見つけることはできなかった。神の御摂理により、それらは洞窟の中で発見され、今日に至るまで朽ちることなく眠っている。

一方、聖なる殉教者が「私の血は報復される」と予言したことは、彼の殉教直後に成就した。その日、ギリシャの王から、キリスト教徒への迫害の報復として、領内からすべてのユダヤ人を追放し、その財産を没収するとともに、長老たちを処刑せよという命令が下されたからである。　至福のエウストラティオスの預言通り、ユダヤ人を扇動してキリスト教徒に敵対させたエパルヒ[2699]が、最初に殺害された一人であった。その経緯は次の通りである。　ある裕福で名高いユダヤ人が洗礼を受けた。そこで王は彼を特別に遇そうと、数日後に彼をエパルヒに任命した。しかし、彼はこの地位を得ると、密かにキリストとその信仰から背き、ギリシャ王国の全土のユダヤ人に対し、キリスト教徒を買い取り、奴隷にすることを許可した。　この不敬虔なエパルヒが邪悪な策略を暴かれたとき、王は彼を処刑するよう命じ、さらにギリシャの地に暮らすすべてのユダヤ人も同様に処刑させた。　そして、ギリシャの都市コルスニに住むユダヤ人たちが虐殺されていたその時、聖エウストラティオスを殺害したあの不敬虔なユダヤ人は木に吊るされ、こうして*「その悪意は彼自身の頭上に返った」*（詩編7:17）のであり、彼はユダの末路をたどった。

一方、他のユダヤ人たちは、聖人の死後に起こった恐るべき奇跡を目撃し、キリストを信じ、洗礼を受けた。　そして、彼らをキリストに服従させ、自らの死後もキリストの良き戦士であり勝利者である聖エウストラティオスは、不死の天の軍勢と共に勝利の歌を歌い、死を打ち破った勝利者キリストご自身と共に統治する栄誉に与かり、　彼はキリストと共に戦い、キリストを賛美し、始まりなき御父と命を与える聖霊と共に、永遠の世々にわたり感謝を捧げている。アーメン。

[2698] 聖殉教者の死は1097年に訪れた。

[2699] エパルフ――地方の長。

聖殉教者イオナとバラキシオスの記念日

記念日：3月28日

これらの聖なる殉教者たちはペルシアの出身であり、ペルシア王サポル[2700] の治世下、ヤシという名の村に住んでいた。ある日、彼らは住処を離れ、ヴァラヴォフの町へ向かった。そこで、投獄されていた聖なる殉教者たち――ザピファン、ラザロ、マルファン、ナルシン、イリヤ、マリーナ、アビヴァ、シヴェンフィン、サヴヴァといった聖なる殉教者たちを見つけ、彼らは牢獄に閉じ込められていた。そこで彼らは、キリスト教の信仰と告白に堅く立ち、たとえそのために死を遂げることになっても決して信仰を裏切らないよう、彼らを励まし、励ました。　そのため、彼らは捕らえられ、マスドラフ、シロフ、マルミシウスの三人の王子のもとに連行され、太陽、火、水にひれ伏すことを拒んだ[2701] ため、彼らから数多くの苦痛と拷問を受けた。

最初に拷問を受けたのは聖イオナであった。彼は、ペルシャ人の慣習に従った特別な方法で縛られた。　通常、拷問を受ける者は、ペルシャ人によって地面に寝かされ、手足を一本の木に縛り付けられた。そのため、縛られた者は石のように動けなくなり、木にしっかりと縛られていたため打撃を避けることができず、両側から殴打されることとなった。　このように聖イオナを縛り上げた後、拷問者たちは長い間、太い棒で両側から彼を殴り続けた。その後、彼の体にロープを結びつけ、凍った湖の氷の上を引きずり回し、寒さで苦しませた。そして最後に、一晩中、彼を縛ったまま拷問の場に放置した。　その後、手足の指を切り落とし、頭部の皮膚を剥ぎ取り、舌を切り取って、沸騰した樹脂で満たされた大釜に投げ込んだ。しかし、聖なる殉教者は無傷で大釜から出てきたため、万力に挟まれ、その結果、骨が砕け散った。　これらすべての後、彼は真っ二つに切断され、深い穴に投げ込まれ、そこで　息を引き取った。一方、ヴァラキシウスには、諸侯の命令により、両腕に灼熱の足枷がはめられ、続いて溶けた鉛がまぶた、鼻孔、耳、口に注がれ、最後に足に縄を縛られて牢獄で吊るされた。　こうした拷問の後、聖ヴァラヒシウスの衣服を剥ぎ取り、縛り上げて棘のある植物の上を引きずり回し、その後、先を尖らせた棒で刺し貫き、回転する車輪に乗せて全身を引き裂き、ついに　沸騰した樹脂を口に注ぎ込まれ、それによって聖殉教者は神に息を引き取った。聖イオナと聖ヴァラキシウスの遺体は、前述の聖殉教者たちの遺体と共に、アヴディソトという名の敬虔な男によって埋葬された。　聖殉教者イオナとバラキシスは3月28日に、その他の聖殉教者たちは3月27日に息を引き取った。[2702] 。

私たちの尊い父、イラリオン・ノヴォイの記念日[2703]

記念日：3月28日

尊者イラリオンは、若き頃から修道生活の軛を自らに課した。十字架につけられたキリストに従い、彼は自らの十字架を背負い、禁欲によって肉欲を克服した。　隠遁生活に入り、長年にわたり沈黙を守り、無情の境地に達して、その徳高い生活によってすべての修道士を凌駕したため、司祭の位を授かり、後にアジアのゲレスポント近郊にあるペリキットと呼ばれる修道院の院長となった[2704]

[2700] 「大帝」の名で知られるペルシャ王サポル2世は、310年から331年まで在位し、キリスト教徒を激しく迫害した。

[2701] ペルシア人は、太陽を彼らの至高の神ミフラの象徴として崇め、また、すべての生き物に恵みをもたらす清らかな自然の要素として、火と水をも崇拝していた。

[2702] 聖殉教者イオナとバラキシオスの福なる死は、327年から331年の間に起こった。

[2703] 今日記念されるキリストの殉教者イラリオンは、ビザンツ皇帝レオン5世アルメニア人（812–820年）の治世下で殉教した、同じく殉教者であるダルマチアのイラリオンと区別するために「新しい」と呼ばれている。後者のイラリオンの記念日は6月6日に祝われる。

[2704] ヘレスポントは、マーブル海とエーゲ海を結ぶダーダネルス海峡の古称である。

。　聖ヒラリオンは多くの驚くべき奇跡を行った。彼は言葉によって、畑やブドウ畑で植物に害を及ぼす動物を追い払い、祈りによって激しい雹を止め、干ばつの時には雨を降らせた。　預言者エリシャのように川を二分し、片腕のない者を癒やし、盲人の目を開かせ、足の不自由な者の障害を取り除き、悪霊を追い払い、漁が不漁の時には漁師の網を多くの魚で満たした。

聖ヨセフ・ペスノピセツは、この聖人を称えて自身が著したカノンの第8歌のトロパリオにおいて、聖イラリオンが救い主の尊いイコンを崇敬したために迫害者たちから迫害と侮辱を受けたと伝え、それゆえに彼を殉教者と呼んでいる。　ある説によれば、聖ヒラリオンは聖なるイコンを罵倒したレウ・アルメニアヌスの治世に生きていたとされるが、他の説では、レウ・イサウリアヌスとその息子コプロニムス[2705] の治世、すなわちレウ・アルメニアヌスのはるか以前の時代に生きたとされており、後者の説の方がより妥当であると思われる。　聖なるイコンのために彼が殉教したのは、聖木曜日に、コプロニモスの配下のラホンドラコンが兵士たちを率いてペリキトス修道院を不意に襲撃した際のことである。　聖体礼儀の最中、彼は厚かましくも教会に入り込み、さらに聖所へと踏み込み、賛美を止めるよう命じ、キリストの聖なる命を与える秘跡を地面に投げ捨てた。その後、選りすぐられた42人の修道士を捕らえて鉄の鎖で縛り上げ、　残りの修道者たちに対しては、ある者には傷を負わせ、その肉体を傷つけ、ある者には、まず顎鬚や顔に樹脂を塗りつけて火傷を負わせ、またある者には鼻を切り落とした。そして最後に、修道院と教会に火を放った。　そして、選ばれた42人の聖なる修道長たちを、エフェソス地方の辺境へ流刑に送り、そこで古い浴場に閉じ込め、暴行の末に殺害した。この時、前述の修道長たちの中で位階が最も高かったイラリオン尊者もまた、殉教したとされている[2706] 。

私たちの尊い父ステファノス殉教者の記念日。

記念日：3月28日

キリストの殉教者である聖ステファノは、レフ・アルメニア王の治世に生きた[2707] 。 幼少の頃から禁食の生活愛し、徳高い生き方で自らを飾った彼は、後にトリグリー修道院[2708] のイグメンとなり　、修道兄弟たちの熱心な懇願を受けてイグメンの位を受けました。彼はその教えによって、多くの人々に神に喜ばれる清らかな生活を送るよう諭しました。　しかし、不敬虔な王レウ・アルメニア人が、キリスト教徒に対する激しい迫害を開始し、聖なるイコンを破壊した。そこで王は聖ステファノを召喚し、正教の信仰を捨て、聖なるイコンへの礼拝を放棄し、自らの手で正教からの離脱宣言に署名するよう強要し始めた。

しかし、聖ステファノはこれを拒んだだけでなく、王の不敬虔さを厳しく非難した。　正教への揺るぎない信念ゆえに、聖ステファノは多くの苦難と牢獄の束縛に耐え、その後、流刑に処された。そこで、苦しみと病により極度の衰弱に陥った聖ステファノは、キリスト・神のもとへ旅立った[2709] 。彼は、その御名のために多くの苦難に耐え、死を受け入れたのである。

[2705]　レウ3世・イサウリア人は717年から741年まで在位し、その息子コンスタンティノス5世・コプロニモスは741年から775年まで在位した。

[2706] 聖イラリオンは754年頃に逝去した。

[2707] レウ5世・アルメニア人はビザンツ帝国の皇帝であり、813年から820年まで在位した。

[2708] トリグリオス修道院はコンスタンティノープルの近郊に位置していた。

[2709] 聖ステファノスの死は815年以降のことである（その年、彼は流刑に処された）。

タクシオテの戦士に関する物語

記念日：3月28日

カルタゴ[2710] には、タクシオトという名の男が一人住んでいた。彼は戦士であり、大いなる罪の中に人生を過ごしていた。ある日、カルタゴの街に伝染病が蔓延し、多くの人々が命を落とした。タクシオトは恐怖に駆られ、神に立ち返り、自らの罪を悔い改めた。　彼は街を離れ、妻と共にある村へ身を隠し、そこで神を想う日々を過ごした。

しばらくして、悪魔の仕業により、彼は隣に住む農夫の妻と姦通という罪を犯してしまった。しかし、その罪を犯してから数日後、彼は蛇に噛まれて死んでしまった。

その場所から一ポプリシャ[2711] の距離に修道院があった。タクシオタの妻はその修道院へ向かい、修道士たちに亡くなった夫の遺体を運び出し、教会に埋葬してほしいと懇願した。そして、午後3時に彼は埋葬された。ところが、午後9時になると、墓の中から大きな叫び声が聞こえてきた。　「憐れんでください、私を憐れんでください！」　墓に近づき、埋葬された者の叫び声を聞いた修道士たちは、直ちに墓を掘り起こし、タクシオタが生きているのを発見した。彼らは恐怖に駆られ、驚きながら、彼に何が起きたのか、そしてどうやって生き返ったのかを知りたくて尋ねた。　しかし、彼は激しく泣きじゃくって嗚咽し、何も話すことができず、ただタラシウス司教のもとへ連れて行ってほしいと懇願した。そして、彼は司教のもとへ連れて行かれた。

司教は三日間、そこで何を見たのか話してくれるよう彼に懇願したが、埋葬された男が口を開いたのは四日目になってからだった。

彼は大泣きしながら、次のように語った。

「私が死にかけていた時、私の前に立っている数人のエチオピア人を見ました。彼らの姿は極めて恐ろしく、私の魂は動揺しました。その後、私は二人の非常に美しい若者を見ました。　私の魂は彼らへと引き寄せられ、たちまち、まるで地面から飛び立つかのように、私たちは天へと昇り始めました。その道中、[2712] と呼ばれる試練の番人たちに遭遇しました。彼らはあらゆる人の魂を拘束し、それぞれの特別な罪について魂を拷問するのです。一人は嘘について、もう一人は嫉妬について、三番目は高慢について。このように、空にはあらゆる罪ごとに、それを裁く試練の番人がいます。そして、私は天使たちに運ばれる箱の中に、私のすべての善行が収められているのを見た。天使たちはそれを私の悪行と照らし合わせていた。　こうして私たちはこれらの試練の場を通り過ぎた。やがて、私たちが天国の門に近づき、淫行の試練の場にたどり着くと、番人たちは私をそこに引き止め、幼少期から死に至るまで私が犯したすべての淫らな肉欲の行いを示し始めた。そして、私を導いていた天使たちは私にこう言った。　「あなたが町にいた間に犯したすべての肉欲の罪は、あなたがそれらを悔い改めたので、神はあなたを赦してくださった。」　しかし、邪悪な霊たちは私にこう言った。「だが、あなたが町を出た後、野原で農夫の妻と不義を犯したではないか」。これを聞いた天使たちは、その罪に対抗できる善行を見出せず、私を置き去りにして去っていった。すると、邪悪な霊たちは、 私を捕らえて殴り始め、その後、下へと連れ下ろした。 大地が裂け、私は狭い入り口を通って、窮屈で悪臭漂う穴をくぐり抜け、地獄の牢獄の最深部へと降りていった。そこは、罪人の魂が永遠の闇に閉じ込められ、人間に命はなく、ただ永遠の苦しみと、慰めのない泣き声、そして言葉に尽くせない歯ぎしりがある場所だ。そこでは常に、絶望的な叫び声が響き渡っている。　「ああ、我ら

[2710] カルタゴ――古代に名高いフェニキア人の植民地で、北アフリカに位置していた。古代カルタゴは紀元前2世紀に最盛期を迎えたが、古代カルタゴの廃墟の上に、初期のローマ皇帝たちの時代に新たなカルタゴが築かれ、それはかなり長い間存続した。

[2711] ポプリシュチェ――1000歩に相当する長さの単位。

[2712] 試練については、3月26日の聖ヴァシレイオス・ネオスの伝記を参照のこと

に災いあれ！　ああ、哀れな我らよ！」そして、そこでのあらゆる苦しみは語り尽くすことができず、私が目にしたすべての苦痛や病を語り尽くすこともできない。彼らは魂の底から呻き声を上げているが、彼らに憐れみを示す者は誰もおらず、泣いていても慰める者はおらず、懇願しても、彼らの声に耳を傾け、救い出す者はいない。　そして私もまた、あの陰鬱で恐ろしい悲しみに満ちた場所に閉じ込められ、第三時から第九時まで泣き、苦々しく嗚咽した。その後、かすかな光と、そこにやって来た二人の天使を見た。私は熱心に彼らに懇願し、神の前で悔い改めるために、あの悲惨な場所から私を連れ出してくれるよう求めた。

天使たちは私にこう言った。

「無駄に祈っている。万人の復活の時が来るまで、ここから出る者は誰もいないのだ。」

しかし、私が懸命に願い続け、懇願し、罪を悔い改めると約束したため、一人の天使がもう一人の天使にこう言った。

「彼が約束通り、心から悔い改めることを保証してくれるか？」

もう一人が言った。

「保証します！」

それから彼は彼に手を差し伸べた。すると、私はそこから地上へと連れ出され、私の遺体が横たわっている棺へと連れて行かれ、こう言われた。

「お前は、別れたそのものの中に入りなさい。」

すると、私は自分の魂が真珠のように輝いているのを見たが、死体は泥のように黒く、悪臭を放っていた。そのため、私はその中に入りたくなかった。天使たちは私に言った。

「罪を犯したその体なしでは、悔い改めることはできない。」

しかし、私はその体に入らなくて済むよう、彼らに懇願した。

「入りなさい」と天使たちは言った。「さもないと、また、あなたを連れ出した場所へ連れ戻すことになる。」

そこで私はその体に入り、息を吹き返して、「私を憐れんでください！」と叫び始めた。

聖タラシウスはその時、彼にこう言った。

– 食事を口にせよ。

彼はそれを口にしたくなかったが、教会から教会へと歩き回り、ひれ伏して、涙と深いため息とともに自分の罪を告白し、皆にこう言った。

「罪人たちは哀れだ。彼らには永遠の苦しみがつきまとう。悔い改めをなさない者たちは、まだ時間があるうちに哀れだ。自らの体を汚す者たちは哀れだ！」

復活後、タクシオトは四十日間生き、悔い改めによって自らを清めた。三日前に彼は自らの死を予見し、地獄へ降りてすべての人に救いを与える、慈悲深く人を愛する神のもとへ旅立った。その神に、永遠の栄光あれ。アーメン。

4月11日

3月29日（旧暦）

我らの尊き父マルコ、アレフシウス司教の殉教。

記念日：3月29日

アレフシウスの主教マルコ聖人の殉教について[2713] 、聖グリゴリオス・ニッサスは、神を冒涜する背教者ユリアヌスに対する最初の説教[2714] の中で、次のように記している。

「あの素晴らしいアレフシウスのマルコに何が起きたかを知らない者がいるだろうか？　また、彼の記憶に捧げられた物語によって、誰が彼を思い出さないだろうか。彼はコンスタンティヌス大帝の治世に、当時キリスト教徒に与えられていた権利を利用して、ある異教の神殿を破壊し、多くの者を異教の迷いから救いの正しい道へと導いた。それは、教訓に満ちた語りかけと、汚れなき生活の模範によるものであった。　アレフシウスの異教徒たちは古くから彼を憎んでいた。そして、キリスト教の権力が失われ、異教の不敬虔さが増大し、激しさを増し始めたとき、彼はその困難な時代に迫害者たちの手から逃れることはできなかった。　民衆の群衆は、たとえ一時的に怒りや欲望を抑えていたとしても――まるで火が炉の中でくすぶっているように、あるいは川がダムによってせき止められているように――、やがては抑えきれない激怒を露わにするものである。それは、火が燃え上がり、川が勢いよくダムを突破するのと同様に、民衆に固有の性質なのである。

聖マルコは、民衆が自分に反旗を翻し、何か悪意あることを企てているのを見て、恐怖というよりは、迫害者たちに道を譲って町から町へと移り住むよう命じる主の戒めに従うため、直ちに逃げることを決心した。　一方、キリスト教徒は、たとえ勇気があり、忍耐に堅固であっても、自らの救いを気にかけるだけでなく、迫害者たちをも憐れむべきである。そうすることで、彼らが心に満ちている敵意に満ちた悪意によって、自らの破滅をさらに深めることのないようにするためである。　しかし、高潔なマルコは、自分のせいで多くの者が邪悪な迫害者たちに連れ去られ、拷問や様々な苦痛にさらされ、またそれを目撃した他の者たちが心を痛めているのを見て、自分の逃亡や自己保身のために他者が苦しむことを耐えられなくなった。　善き、かつ賢明な決意を固め、逃亡先から戻り、自ら進んで民の手に身を委ね、迫害者たちの猛威に立ち向かった。そこには、ありとあらゆる残虐行為が横行していた！　ありとあらゆる拷問が考案されていた！　拷問者たちはそれぞれ、数多くの様々な拷問に加え、自ら考案した独自の拷問を加えようと努めたが、彼らを何よりも苛立たせたのは、聖人の勇敢な忍耐であった。彼らは特に激怒し、聖人の帰還を、苦しみの中での勇気の表れというよりは、むしろ自分たちに対する軽蔑と不名誉であると見なしていた。

自発的に殉教の業を受け入れた聖なる長老は、街中を引き回された。そこでは、迫害者や拷問者たちを除き、誰もが彼の尊い年齢、そして何よりもその徳高い生涯ゆえに、彼を特別な敬意をもって迎えていた。　彼には、年齢や身分を問わず多くの人々が付き添っていたが、皆が等しく侮辱を浴びせられた。そこには男性も女性も、若者も老人もおり、市の当局者や名士たちもいた。彼ら全員に共通していたのは、互いに激しさと残虐さで競い合おうとする一途な思いであり、　例外なく全員が、全都市に立ち向かう揺るぎない老修道士を、可能な限り激しい拷問にかけて打ち負かすことを、何らかの偉業であるかのように考えていた。

聖人は道を引きずられて沼地に放り込まれた。その際、彼は苦痛に加え、不名誉な侮辱にも耐えなければならなかった。子供たちが順番に彼の髪や体の他の部分を引っ張り回して苦しめたのである。　その後、彼は恥辱の場所に吊るされ、揺れる勇敢な殉教者の体はナイフで切り刻まれ、鋭い葦の棒で突き刺された。そして、この涙を誘う光景を前に、人々は大声で笑い、戯れていた。　ある特殊な器具で彼の脛骨を骨まで締め付け、非常に細く極めて丈夫な亜麻の糸で彼の耳を切り落とした。その後、彼に蜂蜜と脂を塗りつけ、籠に入れ、真昼の酷暑の中、高い場所に吊り上げられ、そこでミツバチやスズメバチに刺された。　そして、聖人の至福に満ちた（情熱的とは呼べない）身体に塗られた脂と蜂蜜が、太陽の熱で溶け出すほど、彼はハチやスズメバチの刺し傷にますます苦しめられた。

[2713] アレフシア、あるいはアレトゥーサ――シリアの都市。

[2714] ユリアヌス・アポステート皇帝は、361年から363年までローマ帝国を統治した。

聖マルコは、高齢でありながら、その苦難の行において全盛期の力を示した。彼は穏やかな表情を崩すことなく、むしろその苦しみからある種の喜びさえ感じ、拷問者たちを非難した。

彼については、さらに次のような記憶に値する逸話が残されている。自分が高みへと引き上げられ、拷問者たちがその下方に立っているのを見たとき、聖マルコはこの時、拷問者たちからあまりにも遠く離れていると感じ、まるで自分ではなく他の誰かが苦しんでいるかのように痛みを意識せず、その苦しみを自分にとっては不名誉ではなく栄光であると見なしていた。　このような光景を目にしたなら、たとえ一滴の慈悲や人間愛さえ持っていた者であれば、心を動かされなかっただろうか?! しかし、それは拷問の脅威と、王の怒りによって不可能であった。王は、、各都市や総督に対し、キリスト教徒への拷問を義務として課していたのである。とはいえ、王の内に潜む悪意や狡猾さを知らない多くの人々は、彼について異なる見方をしていた。

聖マルコが受けたすべての拷問は、異教の神殿を破壊したためであり、彼はその代償として拷問者たちに一ゾルティナも支払わなかった。彼が自身の敬虔さのために苦難に耐えたことは明らかである。　アレフシアの人々が、破壊された神殿の代償として、彼らが定めたかなり高額な金額を全額支払うか、あるいは神殿を再建するよう要求したとき、聖マルコは、異教徒たちの要求を満たす手段がなかったからというよりも、むしろ敬虔さゆえにこれに抵抗した。　忍耐をもって彼らを説得し、彼らが定めた金額を少しずつ減らしていくことで、彼は彼らを、容易に支払えるわずかな金銭を要求するまでに追い込んだ。こうして、双方の間で論争が続いた。迫害者たちは聖人を屈服させようとしたが、彼は断固として譲らなかった。　すなわち、彼らは聖人がやはりいくらかの金を支払うことを望んでいたが、聖人は一ペニャズも彼らに与えようとはしなかった[2715]（とはいえ、多くの人々がおり、その中には慈悲心から、あるいは彼の堅固で不屈の忍耐に心を動かされて、彼のために多額の金を払おうと用意していた者もいた）；　ここから、彼が殉教の業に身を投じたのは金銭欲のためではなく、信仰のためであったことが明らかである。聖マルコは、この皇帝の不道徳で不敬虔な一族が根絶やしにされた際、まだ幼い少年であったユリアヌス帝を匿った者の一人であった。　そして、聖マルコはこの行いの報いとして、これほど残酷な苦難に耐えたのだと考えられている。彼は、たとえ無知によるものではあったにせよ、全宇宙にとってこれほど大きな悪を死から救ったのだから、それ以上の苦難に耐えるに値する人物であったのである。

また、アレフシウスのエパルヒ[2716]は、不敬虔な異教徒であったにもかかわらず、聖マルコの様々な苦しみを見るに耐えられず、王に大胆にこう言ったと伝えられている。

「王よ！　たった一人の老人を打ち負かすことさえできなかったとは、すべてのキリスト教徒の前で、我々は恥じ入るべきではありませんか?　たとえ彼に対する勝利が栄光あるものでも名誉あるものでもなかったとしても、ましてや我々が敗北して彼から退くなど、それはまさに大いなる恥です！」

かくして、キリスト教徒たちの勇気は、虚栄心の強い地方総督や王たちを恥じ入らせた。

そして、アレフシアンたちの拷問は、エヘト[2717]やファラリド[2718]の残虐さとは比べ物にならないほど凄まじいものであった。彼らの悪意は、悪意の生みの親であり、彼らをそそのかす悪魔そのものをさえも凌駕していたのである。」

これが、聖グリゴリオス・ニッサスによる聖マルコに関する記述である。

[2715] ペニャズ――小額の銅貨。

[2716] エパルヒ――地方の長。

[2717] エヘト――古代エピルスの王。並外れた残虐さで知られ、唯一の娘メトポスの両目を潰した。

[2718] ファラリドス――紀元前6世紀に生きたアグリジェント（シチリア島南部に位置したドーリア系植民都市）の専制君主。並外れた残虐性を持ち、配下に対して極めて苛烈な扱いをした。

一方、テオドリトス[2719] は、アレフシア人たちが、驚くべき長老である聖マルコの揺るぎない強靭さを見て、その偉大な忍耐力に感嘆し、柔和な心を持ったと伝えている。彼らは彼を解放した。その後、彼の教えに耳を傾け、聖なる信仰に立ち返り、全員がキリスト教徒となった。

また、聖キリロス・ディアコノスについては、同じテオドリトスが次のように語っている：

――フェニキアで異教徒たちが犯した悪行を、誰が涙なしに思い起こすことができようか。というのも、レバノンに隣接するイリオポリスという町で、あの神に忌み嫌われる偶像崇拝者たちは、コンスタンティヌス帝の治世に、熱意に燃えて町で崇められていた多くの偶像を破壊した助祭キリルを思い出し、彼を殺害しただけでなく、　さらに腹を切り裂き、狂乱のあまりその内臓を歯で噛み砕き始めた。しかし、このことは全知の神の御目から逃れることはできず、彼らはその悪行に見合った罰を受けた。　上述のような行為を敢行した者たちは、まず歯を失った。一人残らず、すべての歯が抜け落ちた。次に、彼らは舌を失った。舌は化膿し、腐り、口から抜け落ちた。最後に、彼らは失明した。こうした懲罰によって、真の敬虔の力が目の前で実証されたのである。

パレスチナの都市アスカロンとガザでは、まず聖職に就いた男性たち、次に神に捧げられた女性や処女たちに対し、拷問者たちは腹を切り裂き、そこに大麦を詰め込み、豚の餌として投げ捨てた。拷問者たちはこれほど非人道的な虐待を加えたのである。　それゆえ、聖なる殉教者たちには、　キリストの御国において勝利の冠が用意されており、拷問者たちには、地獄における永遠の苦しみ――それは、私たちの真の神イエス・キリストによる正義の報いとして彼らを待ち受けている――が待っている。彼に永遠の栄光あれ。アーメン[2720] 。

私たちの尊い父、隠遁者ヨハネの記念日

記念日：3月29日

かつて、ユリアニアという名の、裕福で非常に美しく、神を畏れる女性がいました[2721] 。彼女は若い頃に夫を亡くし、幼い二人の子供、ヨハネとフィミスティエヤを連れて未亡人となりました。キリスト教徒を処刑せよという勅令が下された後[2722] 、彼女はすでに青年期を迎えていたヨハネを連れて、ある空き家に身を隠し、主の教え（エフェソ6:4）に従って彼を育て、絶えず書物の読み方や祈りを教え続けた。　少年は母のもとを離れ、時折近くの修道院を訪れ、そこで人目を避けてひっそりと祈りを捧げた後、再び家路についた。当時、すべてのキリスト教徒は異教徒を恐れて身を隠していたからである。　ある日、いつものように修道院を訪れたとき、ある敬虔な人物が彼を迎え、祈りの修行を行うには、修道院で行うよりもむしろ人里離れた場所へ行くほうがよいと助言した。修道院で修行を続けると、常に迫害者たちの手に落ちる危険にさらされるからだ。この助言を受け入れた少年は、母にこう言った。

「母上、ある敬虔な人が私を彼のところへ招いてくれました。これは何よりも、あなたの祈りのおかげだと思います。」

ユリアニアは、息子がすぐに戻ってくるだろうと思い、彼を行かせた。しかし、ヨハネは母と妹に別れを告げると、エジプトの隠者であるファルムフィウスという人物のもとへ荒野へ向かい、彼から祈りの助言を受けた後、荒野の奥深くへと旅立った。　そこで彼は、ヘビやサソリ、爬虫類で満

[2719] 福者テオドリトス――5世紀に生きた教会の教師。
[2720] 聖マルコと聖キリルの死は、4世紀半ばに起こった。
[2721] ユリアニアはアフリカ、おそらくエジプトに居住していた。
[2722] 聖ヨハネが4世紀に生きたことを考慮すると、この命令は、303年に帝国全土でキリスト教徒への迫害を開始したディオクレティアヌスによって下されたものと考えられる。

たされた空の井戸を見つけ、祈りを捧げた後、その中に飛び込んだ。井戸の深さは二十キュビト[2723]あったが、主の天使がヨハネを支えたため、彼は無傷で済んだ。　井戸の底に立った彼は、両手を十字に広げて、眠りも食事も水も摂らずに四十日間祈りを捧げ続け、するとすべての爬虫類が井戸から出て行った。その後、常にファルムフィウスに食物を運んでいた天使が、ヨハネのためにもパンを持ってきて、聖人にこう言った。

「このパンは、主があなたに送られたものです。これをアッベ・[2724] ヨハネの井戸まで運んでください。」

天使自身は、若きヨハネがそれによって驕り高ぶることのないよう、彼にパンを運ぶことを望まなかった。ファルムフィウスはヨハネのもとへ向かい、彼にパンを渡した。　聖人はパンを受け取り、神に感謝を捧げた後、それを食べ始めた。それ以来、長い間、彼は毎日ファルムフィウスから食糧を受け取り、そのことを主を賛美した。　一方、悪魔は、聖ヨハネの神に喜ばれる行いを耐えられず、ある日、かつての彼の使用人の一人に姿を変え、ファルムフィウスのところへやって来て彼を惑わした。ファルムフィウスは悪魔を、聖ヨハネが修行していた井戸へと連れて行った。　しかし、悪魔がヨハネに不適切な言葉を投げかけたとき、ヨハネはファルムフィウスを迷いから救い出し、悪魔を恥じ入らせて、彼を追い払った。その後、悪魔は多くの悪霊を集め、彼らにヨハネの母や姉、親族や隣人、使用人や女中、知人の姿をとるように命じ、　彼らは皆、井戸のそばに来て、涙ながらにヨハネに姿を現すよう懇願した。まるで彼に会いたいと願っているかのように見えたが、その間、聖人は井戸の底でいつもの祈りを捧げており、彼らに「私から離れよ」と言った。すると、すべての悪霊は見えなくなった。

井戸で十年間を過ごし、あらゆる修道者の苦行を成し遂げ、主を立派に喜ばせた後、聖ヨハネは永遠の住処へと旅立った。彼の埋葬のため、天使の指示に従って、クリシキオという名の、三十年間砂漠で修行を積んできたある修道士がやって来た。　彼は三日間、聖人に井戸から出るよう懇願し、神の力によって、自身の生涯について何も隠さず、　、すべてを時系列通りに語るよう強く求めた。なぜなら、それが神の御心にかなうからである。　そして、聞く者の耳も見る者の目も驚嘆させるような驚くべき奇跡が起こった。井戸の底の地面が、まるで自ずから動くかのように二十キュビトも隆起し、二人の聖人は互いに顔を合わせることとなった。　修道士クリシキオスの懇願により、ヨハネは何も隠さず、クリシキオスに自身のすべてを語り明かした。クリシキオスはこれに感謝し、兄弟としての口づけで彼に報いた。　その後、聖ヨハネは自ら埋葬の準備を整え、再び主のもとへ旅立った。そこでクリシキオスは、その遺体を自身のマントで覆い、その端が井戸の縁に掛かるようにし、慣例通りの詩篇を唱えた後、埋葬の場所にナツメヤシを植えた。　すると、そのナツメヤシはたちまち根を下ろし、大きな樫の木ほどの高さに成長し、花を咲かせ、数多くの実を結びました。これを見た修道士クリシキオスは、心の中でこう言いながら神に感謝を捧げました。

「主よ、あなたに栄光あれ。あなたは御自身で、あなたを愛する者たちを現し、彼らを御国の相続人となさるからです。」

そして、彼が祈り、このことを思い巡らしている最中、天使が直ちに彼を天に迎え入れ、彼が滞在していた場所へと連れ去った。その後、クリシキオスは敬虔な一人の男を呼び寄せ、自分が見聞きしたすべてを書き留めるよう頼んだ[2725]。

[2723] 1ロコートは10.5ヴェルシュクに相当した。（ヴェルシュクは≈4.45cm。ロコートの長さは、伸ばした中指の先端から肘の曲がり目までの距離と定義され、最大46cmまで変動し得た。――*『信仰のABC』編集部*）

[2724] 「アッバ」は「父」を意味する。

[2725] 聖ヨハネは4世紀に生き、修道生活を送った。

ビフィニアの司教、殉教者エウスタフィオス聖父の記念日[2726]

記念日：3月29日

私たちの聖なる父であり殉教者であるエウスタフィオスは、この世の恵みを重荷のように捨て去り、熱心に神の戒めを守りながら、修道生活へと身を捧げた。時が経つにつれ、このキリストの軛を肩に担ぎ、自らの魂の救いを求めて、彼は司祭となった。　この聖職において、彼は多くの霊的な喜びを味わい、そのことに対して絶えず主に感謝を捧げました。神への大いなる信仰と、すべての人に対する偽りのない愛を持ち、彼は謙虚で、柔和で、慈悲深い導き手であり、善行を熱心に実践する者でした。　その後、神の御心によりビフィニアの司教に選ばれ、神の使徒たちの教えと伝承に従って、長年にわたり教会を統率した。すべての神の教会で、聖像破壊の異端をめぐる動揺が生じたとき、彼は聖書に深く立ち返り、その言葉の剣をもって、神の教会を脅かす者たちすべてを打ち倒した。そのため、異端の擁護者たちの一部が、当時統治していた不敬虔な皇帝に彼を告発した。聖なる、そして至尊なるイコンを崇敬し礼拝したために、この尊者様が耐え忍ばれたすべての苦難を、いったいどのように語り尽くせばよいだろうか。　彼は脅迫、唾を吐きかけられること、殴打、投獄、不安、動揺、そして棒による殴打にさらされた。ついには先の尖った棒で刺され、司教の座を剥奪され、追放された。　長年にわたり流刑の地で暮らした聖エウスタフィオスは、侮辱、憎悪、苦難、飢え、渇き、そして裸の身という状況の中、神に感謝しつつ、永遠の住処へと旅立った。

4月12日

3月30日（旧暦）

同日、シラクーサの主教である私たちの尊い父ゾシマを記念する。

同日、3世紀に生き、息子の殉教に先立って（305年以前）この世を去った、聖パンテレイモンの母である聖エヴヴラの記念日。

尊き父ヨハネ・ラダーの生涯[2727]

記念日：3月30日

尊者ヨハネ・ラスティヴィチは、旧約聖書の物語でよく知られるシナイ山で修行に励みました（出エジプト記19:20, 24, 34；レビ記7；民数記10:33；詩篇67:8）でよく知られるシナイ山で修行に励みました。聖なるシナイ山は、3世紀半ばから、迫害から逃れてここに身を隠したキリスト教の修行者たちの避難所となっていました。また、サラセン人によって捕虜としてここに連行された人々もいました。4世紀、キリスト教徒への迫害が終わると、この地での修道生活は完全に定着しました。隠遁者たちをここに惹きつけたのは、この地で現れた旧約聖書の偉大な出来事に関する神聖な記憶と、シナイの荒涼とした環境であった。　旅行者たちは、シナイ半島ほど荒涼とした場所には出会ったことがないと言う。野生の獣でさえ、ここに長く留まることはなく、アラビア砂漠から偶然ここに迷い

2726 ビフィニアは、小アジア北西部に位置するローマ属州である。聖エウスタフィオスは、マーブル海の湾の奥深くに位置するキエ（現在のツォムプレク）という町で司教の座に就いていた。

2727 聖ヨハネ・ラステヴィチクの生涯は、彼の死後まもなく、同時代人であり友人でもあった、ライフ修道院の修道士ダニエルによって記述された。ライフ修道院は、シナイから二日間の道のりにあるスエズ湾の岸辺に位置していた。　ダニエルの記述を補完するのは、名前は不明だが、ヨハネ・レステヴィチニク自身の弟子であり、その霊的指導者の生涯について断片的な情報をいくつか残した別の修道士である。

込んでも、動物たちの気配がある活気ある場所へと急いで立ち去ってしまう。　シナイ山の周辺には、特に人里離れた場所があり、それらは隠遁生活を送るのに極めて適していた。その一つ（フォラ）で、ヨハネ・クライストは長年にわたり修行に励んだ。 ユスティニアヌス1世が即位するまで、シナイの修道士たちは修道院を持っていなかった。彼らには、使徒同等のヘレナによって建てられた、堅固な塔一つと、その近くにある小さな礼拝堂しかなかった。557年、ユスティニアヌス帝の治世下、修道士たちの願いにより、ここに修道院が建立された。

聖ヨハネは、シナイの隠者たちの修道生活の栄光に惹かれて、16歳の時にシナイを訪れた。ヨハネの出身地については、同時代の伝記作家たちでさえ知らなかった[2728] 。修道士ダニエルは率直にこう述べている。「この高潔な修行者が修行の道を歩み始めるまで、どの都市や国が彼を育て、教育したのか、正確かつ確実に言うことはできない」。　そしてさらにこう続けている。「しかし、今やどの都市がこの驚くべき人物を住まわせ、朽ちることのない糧で養っているのか――それについては、私には全く知らぬことではない。なぜなら、彼もまた今、あの*『私たちの住まいは天にある』*と語る、誉れ高き歌い手――聖使徒パウロが言及するその都市に留まっているからである」　（フィリピ3:20）。彼はそこに留まり、尽きることのない恵みの非物質的な感覚に満たされ、その功績に対するふさわしい報いと労苦に対する報酬を受け、すでに正しい道に足を踏み入れている者たちと共に天の御国を相続している（詩篇25:12）。　そして、ヨハネがこの非物質的な至福のために、戦士としての肉体の中でいかに労苦したかについて――ダニエルは続ける――「私はそれを極めて明確に語ろう」。

「この至福のヨハネは、肉体の年齢で16歳を過ぎた時――その知性の完成度においては、すでに千歳の人にも匹敵していた――大祭司である神に、汚れなき自発的な生贄として身を捧げた。彼は自らの肉体をシナイ山へと運び上げ、魂を天の山へと向かわせた。　目に見える形で山に登り、天の高みに近づき、心で見えざる神を仰ぎ見た。世から身を引くと、彼は　最初から、謙遜に彩られた柔和さを、「心の乙女たち」[2729] の指導者として、また美徳の教師として愛した。 彼は放縦と高慢を切り捨て、崇高な謙遜の知恵を身にまとい、修道生活に入ったその瞬間から、注意深く考察を重ねることで、この欺瞞者――自己満足と自己過信――を自らから追い払った。　頭を垂れて、彼は熟練した霊的指導者[2730] に身を委ね、その導きのもとで、情欲という危険な深淵を無事に渡り切りたいと願っ

[2728] ヨハネ・ラスティヴィチはクセノフォンとマリアの息子であったという説がある。二人の記念日は1月26日に聖教会で祝われている。『チェティイ・ミネイ』（1月26日）には、コンスタンティノープルの裕福で高貴な貴族であるクセノフォンとマリアには、ヨハネとアルカディオという二人の息子がいたと記されている。　両親は息子たちに教育を受けさせたいと願った。当時、シリアの都市ヴィリテ（現在のベイルート）にある学校が名高く、彼らは子供たちをそこへ送り出した。　ある日、父が危篤状態になったことをきっかけに、両親は息子たちを呼び戻した。彼らが学校へ戻ろうとしたとき――その航路は地中海を通るものだった――突然、海上で激しい嵐が吹き荒れ、彼らが乗っていた船は難破してしまった。　しかし、二人の兄弟は命を落とさなかった。船の板にしがみついて沈没を免れ、波に運ばれてパレスチナの海岸に打ち上げられたのである。ところが、二人は海岸の異なる場所に漂着したため、互いの安否を知る由もなかった。　この奇跡的な救出の後、二人の兄弟は、自分たちに降りかかった災難の中に、天からの修道生活への召命を見出し、それぞれパレスチナの異なる修道院に入りました。その際、アルカディウスは名前をゲオルギーと改めました。　かなりの時間が経過した後、二人の兄弟は互いに再会し、しかも父と母の面前で再会を果たした。その後、両親も修道生活に入った。クセノフォンとマリアの息子の一人であるヨハネは、ヨハネ・ラスティチニクと同一人物であると見なされている。　この見解を裏付けるものとして、第一に、ある伝記作家の証言によれば、ヨハネス・ラステヴィチニクには実際にゲオルギウスという名の兄弟がいたという事実が挙げられる。　第二に、同尊者の高い教養が、彼の高貴な出自を示唆していること、そして何よりも、ヨハネが『梯子』において、聖書、教父たちの著作、さらには異端の書物に至るまで深い知識を有していることが明らかになっていることである。

[2729] すなわち、イリヤ・クリトスによる解説によれば、「善良な性向」のことである。

[2730] すなわち、アッベ・マルティリウスであり、これは続く、名もなきシナイの修道士による伝承からも明らかである。

た。　世俗の生活を捨てたヨハネは、修道士たちの間では、まるで自分の魂に理性も意志もなく、本来備わっているべき性質を完全に失ったかのように、まだ言葉を話せない幼い少年のように振る舞うようになった。　そして何よりも驚くべきことは、その広範な学識にもかかわらず、ヨハネは天の単純さを愛し、謙虚な修道士であり続け、自らの博学を誇ることなく、神のために自らを低くしていたことである。

聖ヨハネの師であり指導者――『シンクロン』[2731] が述べているように――は、アッバ・マルティリウスであった。彼が20歳の時に、マルティリウスがヨハネを修道士として剃髪した際、アッバ・ストラティギウス[2732] はその日、彼が宇宙の偉大な光となるだろうと予言した。そして、その予言は後に現実のものとなった。

ある日、アッバ・マルティリウスは弟子ヨハネを連れて、偉大なアナスタシオス・シナイトスの元を訪れた。二人を目にしたアナスタシオスは、アッバ・マルティリウスにこう言った。

「マルティリウスよ、教えてほしい。この弟子はどこから来たのか。そして、誰が彼を修道者に叙階したのか？」

「彼はあなたのしもべです、父よ。私が彼に修道服を着せたのです」とマルティリウスは答えた。

するとアナスタシオスは驚きながら言った。

「おお、アッバ・マルティリウスよ！　あなたはシナイ山の修道院長に剃髪を与えたのか。」

またある時、このヨハネを連れて、彼の師であるアッバ・マルティリウスは、当時グッディの荒野に住んでいた偉大な長老ヨハネ・サヴァイトのもとへ向かった。　長老は彼らを見るやいなや立ち上がり、水を注いでヨハネの足を洗い、その手に口づけをした。しかし、アッバ・マルティリウスの足は洗わなかった。すると、サヴァイットの長老の弟子ステファノスが長老に尋ねた。

「なぜそのようなことをなさったのですか、父上？　師ではなく、弟子に足を洗い、その手を口づけされたのですか？」

これに対し、長老はこう答えた。

「信じてほしい、わが子よ。私はこの若い修道士が誰なのか知らなかったのだ。私はシナイの修道院長を迎え入れ、その修道院長の足を洗ったのだ。」

これこそが、聖ヨハネがまだ若き修道士であった頃、シナイの聖なる父たちによってなされた預言であり、それらはやがて時が来て実現したのである。

その後19年間、聖ヨハネは自分の霊的父に従順に従い、救いへの修行を続けたが、やがてその霊的父が他界したため、この救いの道を去らざるを得なくなった。　修道士ダニエルが記しているように、まるで天の王への執事兼代弁者として彼を送り出したかのように、ヨハネは師の祈りを、要塞を打ち破る強力な武器（IIコリント10:4）として携え、沈黙の修業の場へと向かった。　ヨハネは、その隠遁生活のために、教会から8ヴェルスタ離れた「フォラ」と呼ばれる極めて人里離れた場所を選んだ。彼がその隠遁生活を離れるのは、祝祭日に教会へ礼拝に行く時だけだった。　その荒野で、尊者ヨハネは40年間[2733] 、神への愛に燃え、その炎に絶えず駆り立てられながら、労苦に明け暮れた。しかし、尊者ヨハネがそこで密かに成し遂げた偉業を、誰が言葉で伝えたり、詳細に描写したりでき

[2731] シンクロン――シナイ修道院の修道士であり、ヨハネ・ラダーの同時代人。彼は『シナイの聖人たちの物語』を遺した。

[2732] 剃髪式の場に立ち会った。

[2733] 修道生活を開始した当初から。

るだろうか。　とはいえ、小さなことから偉大なことが知られるように、彼の行いのいくつかの端緒から、この聖人の美徳に満ちた生涯を知ることができる。

彼は、修道誓願で禁じられていないものはすべて口にしたが、その量は極めてわずかであった。　そして、あらゆるものを摂ることで、彼は巧みに高慢を打ち砕いた。なぜなら、彼は、断食によって心が高ぶることのないよう、すべてを食べ、また、摂る量の少なさによって、快楽を求める情欲の女王であり母である「過食」を謙遜させ、食事の乏しさそのもので彼女にこう叫んだのである。〝*黙れ、やめよ*〟（マルコ4:39）。また、荒野での生活と人々との交わりを避けることによって、この尊い聖人は肉欲の炎を消し去り、ついには灰に覆われ、 完全に消え去った。 聖使徒パウロが偶像崇拝と呼ぶ金銭への執着（エフェソ5:5）を、この高潔な修行者は勇敢に避け、施しを行い、自分自身には必要最低限のものさえも拒んだ。　魂を弛緩させ、死に至らしめる怠惰と無為に対し、彼はまるで死の記憶という刺のように、活気と労働へと駆り立てた。　あらゆる執着や肉欲の罠や束縛を、彼は悲しみと涙という非物質的な絆で自らを縛ることで解き放ち、また、苛立ちは、従順によってすでに彼の中で死滅させられていた。　めったに誰かを訪ねず、ましてや何かを話すことなどほとんどなかった彼は、それによって、蜘蛛の巣のような「虚栄」というヒルをも死滅させた。さて、彼の傲慢に対する勝利については、何と言えばよいだろうか――と修道士ダニエルは続ける。　この新しいヴェセリエル[2734] が従順によってその礎を築き、天のエルサレムの王である主が御自身の臨在をもって彼を訪れ、完成させた、その偉大な心の清さについて、何と言おうか。なぜなら、主の臨在なしには、悪魔とその軍勢を打ち倒すことはできないからだ。　しかし、この花輪――ダニエルは続ける――を、称賛の言葉で聖ヨハネに捧げるにあたり、彼の涙の源をどこに配置すべきだろうか。それは、多くの人に見られるものではない。　そして今日に至るまで、これらの涙が流れ出た秘められた場所は知られている。それは、ある人里離れた山麓にある極めて狭い洞窟であり、ヨハネの独房や他の独房から、人々に聞こえないようにし、虚栄の道を遮るのに十分な距離に位置していた。　ヨハネが頻繁に訪れていたこの隠れ家は、叫び声や嗚咽、そして神への呼びかけによって、まるで天に近づくかのような場所となっていた。そのような声は、ナイフで切り刻まれたり、赤熱した鉄で焼かれたり、あるいは目を抉り取られたりしている者たちからしか聞こえないようなものだった[2735] 。彼は、過度の不眠によって正気を失わない程度にしか眠らなかった。　就寝前には長く祈りを捧げ、著書を執筆した。例えば、『梯子』と題された書を著し、それゆえに彼自身も後に「梯子の著者」と呼ばれるようになった。著書の執筆は、ヨハネにとって気落ちを追い払う手段であった。　そして、彼の生涯そのものが絶え間ない祈りであり、神への比類なき愛であった。なぜなら、昼も夜も、まるで鏡の中に映るように、清らかさと無垢さの中で神を仰ぎ見ながら、彼はこの観想に飽きることを望まなかった、あるいは、より正確に言えば、飽きることはできなかったからである。

モーセという名の修道士が、聖ヨハネの徳高い生活に感銘を受け、彼から真の知恵を学ぶために、弟子として受け入れてくれるよう懇願した。　その願いを裏付けるため、モーセは自分と数人の高潔な長老たちのために取り成しを頼んだ。そして、彼らは聖ヨハネに、モーセを弟子として受け入れてくれるよう懇願した。ある日、聖ヨハネはモーセに、ある場所から野菜畑の畝を肥やすための土を運ぶよう命じた。　モーセは指定された場所に着くと、命じられたことを熱心にこなした。しかし

[2734] ヴェセリエル――ウリヤの息子、オラの孫、ユダの家系に属する者――は、モーセの時代の芸術家であり、神の霊、知恵、理解力、知識、あらゆる技に満ちていた（出エジプト記31:1–5；出エジプト記30:30–35）。 彼には、ダンの部族出身のアホリアブと共に、神の命により、幕屋とそのすべての備品を造る任務が委ねられた（出エジプト記31:2；出エジプト記35:30）。 このように、旧約聖書のベセリエルが巧みに幕屋を造り上げたように、「この新しいベセリエル」、すなわち聖ヨハネ・クライストスもまた、巧みに自らの魂の幕屋を築き上げたのである。

[2735] これらの聖なる涙は、ヨハネの魂に驚くべき効果をもたらした。それは彼自身の言葉からも明らかであり、『天への梯子』のある箇所で、彼は次のように述べている。「火が小枝を焼き尽くし、滅ぼすように、清らかな涙は、外的な不浄も内的な不浄もすべて洗い流す」。

正午になり、猛暑が襲うと、モーセは疲れ果てて、ある巨大な岩の下で休もうと横になり、眠り込んでしまった。　しかし、御自分のしもべたちが何事においても苦しみを受けることを望まれない主は、その慈しみによってモーセを突然の死から守り、聖ヨハネを悲しみから救われた。　その時、聖ヨハネは自分の修道室にいたが、ふと軽い眠気に襲われた。夢の中で、彼はある威厳ある人物を見かけ、その人物はヨハネを責めるようにこう言った。

「ほら、ヨハネよ、お前はここで安らかに眠っているが、その間もモーセは危険にさらされているのだ。」

聖人はすぐに起き上がり、弟子のために熱心に祈り始めた。その後、夕方になり、弟子が仕事から戻ってくると、ヨハネは彼に尋ねた。

「何か不都合なことや予期せぬことはなかったか？」

すると、彼はこう答えた。

「正午に大きな岩の下で眠っていたところ、その岩が突然崩れ落ちました。もし私がその場から急いで逃げ出していなければ、押しつぶされていたでしょう。ちょうどその瞬間、父よ、あなたが私を呼んでいるような気がしたのです。」

謙虚で賢明なヨハネは、弟子が死から奇跡的に救われたことを神に賛美したが、自分の幻視についてはモーセには何も語らなかった。

尊者ヨハネは、すべての人にとって徳の模範であり、目に見えない病の医者でもあった。　ある日、イサアクという名の兄弟が、淫行の悪霊にひどく苦しめられていた。深い悲しみに沈んでいたその兄弟は、急いでこの偉大なヨハネのもとへ駆けつけ、苦々しい泣き声とすすり泣きを交えながら、自身の苦闘について語った。

ヨハネはこれに対し、イサアクにこう言った。

「友よ、二人で共に祈ろう！」

彼らがまだ祈りを終える前に、苦しむ兄弟は依然として顔を地面に伏せたまま横たわっていたが、神はすでに御自身の聖人の願いを叶えておられた。というのも、聖ヨハネの祈りによって、まるで鞭で追い払われるかのように、放蕩の悪霊がイサアキから逃げ去ったからである。こうして、ダビデの詩篇の言葉が成就したのである。　*「主を畏れる者の願いを主はかなえ、その祈りを聞き入れられる」*（詩編144:19）。そして、病んでいた者は、自分が健康になり、情欲から完全に解放されたのを見て、大いに驚き、その奇跡によって主を賛美する御自分のしもべヨハネを栄光に輝かせた神に感謝した。

ヨハネの敵対者たちの中には、嫉妬に駆られて、ヨハネを空言者や嘘つきと呼ぶ者もいた。しかしヨハネは、彼らを諭し、自らの行いによって、*「すべての人を強めてくださるキリスト（イエス）において、私はすべてができる（言葉だけでなく、沈黙をも用いて）」*（フィリピ4:13）。そして彼は丸一年もの間、彼らに一言も発することなく沈黙を守り続けたため、彼を非難していた者たちは懇願する者へと変わった。彼らは、絶えず流れ出る恵みの泉を塞ぐべきではないと悟り、彼の元へやって来て、神の言葉を語るその口を再び開いてくれるよう懇願したのである。　ヨハネは、反論することを好まなかったため、彼らの願いに従い、再び以前の規律を守り始めた。

その後、皆は、あらゆる面で彼の卓越した功績に驚き、あたかも新たに現れたモーセであるかのように、力を合わせてヨハネを修道院の院長に推戴し、こうしてこの灯火を燭台の頂点に据えたのである。　シナイ山の修道院長職を、自らの望みとは裏腹に受け入れたヨハネは、霊において神の山に近づき、神の不可解さを悟り、精神の高みへと登ることで神に近づき、神によって定められた律法を受け取った。　神の御言葉を受け入れるために口を開き、御霊を招き入れ（詩編118:131）、心の良き宝庫（マタイ12:35）から、救いの良き言葉を注ぎ出した。

こうして、40年にわたる修道生活の功績を経て、ヨハネは生後75歳の時に、シナイ山の修道院長に選ばれた。「そして、この灯台を主燭台の上に据えた良き見識者たちは、決して見誤らなかった

」と、修道士ダニエルは述べている。　主はこの選出を喜ばれ、それは特別な奇跡的な出来事として現れた。名前の知られていないある伝記作家は、ヨハネが修道院長に就任して間もなく、約600人の巡礼者が彼らの修道院を訪れたと語っている。　すべての巡礼者とシナイの修道者たちが食卓に着くと、ユダヤ人のような白いチュニックを身にまとった正体不明の指揮官が現れ、食卓の給仕たちに威厳をもって指示を出していた。しかし、客たちが立ち去り、給仕たちが食事に取りかかると、その不思議な指揮官の姿はすでに消えていた。 首をかしげる修道士たちに対し、聖ヨハネはこう言った。

「探すのはやめなさい。あれは、聖なる預言者であり律法制定者であるモーセが、彼にふさわしいこの場所で奉仕していたのだ。」

ある夏、パレスチナ地方では雨が降らず、大干ばつに見舞われた。近隣の住民たちは聖ヨハネのもとを訪れ、神に雨を降らせてくださるよう祈ってほしいと懇願した。聖ヨハネが祈りを捧げるとすぐに、激しい雨が降り出し、乾ききった大地を潤し、実り豊かな土地へと変えた。

聖ヨハネの臨終の時が近づくと、彼はシナイ修道院のすべての兄弟たち――すなわち、彼の霊的なイスラエルの民たち――を敬虔に導いた。　ただ一点においてのみ、ヨハネはモーセのようにはなりませんでした。なぜなら、尊者ヨハネは魂をもって天のエルサレムに入ったのに対し、モーセは肉体をもって地上のエルサレムに到達しなかったからです[2736]。

さて、この新しいモーセ、最も尊い修道院長ヨハネが主のもとへ旅立つ際、彼の兄弟であるアバ・ゲオルギオス[2737]が彼の前に立ち、涙を流しながらこう言った。

「ほら、あなたは私を残して去って行かれる。私は、あなたが私より先に旅立たれるよう祈っていたのです。なぜなら、あなたがいなければ、私の主よ、あなたの聖なる兄弟たちを牧する力も失われてしまうからです。それなのに、実際には、私があなたより先に旅立つことになってしまいました。」

それに対し、聖アバ・ヨハネはこう言った。

「悲しむな、嘆くな。もし私が主から勇気を授かるならば、あなたが私の後に亡くなるのを一年も待たせないようにしよう。」

この言葉は実現した。なぜなら、至福のヨハネが帰天してから10ヶ月後、その兄弟であるアバ・ゲオルギオスもまた主のもとへ旅立ち、聖なるヨハネと共に聖徒たちの栄光のうちに主の御前に立ち、父と子と聖霊を永遠に賛美するようになったからである。アーメン[2738]。

聖ヨハネはシナイの聖修道院を、4年余りと短い期間しか統率しなかった。しかし、彼のシナイでの短期間の統率には、極めて重要な出来事が刻まれていた。まさにこの時期に、彼が『梯子』と呼ばれる、これほど有名で傑出した著作を著したのである[2739]。この著作により、ヨハネ自身も「梯子の著者」という称号を得たのである。

『梯子』が執筆されたきっかけは次の通りである[2740]。シナイから二日ほどの道のりに、黒海の非常に風光明媚な湾に位置するライフ修道院があった。シナイの修道院を尊者ヨハネ・レステヴィ

[2736] すなわち、モーセは主から「約束の地」に入ることを許されず、死の直前、ネボ山からその地を眺めるにとどまった（申命記34:4–5）。

[2737] モーセは、生前に彼をシナイ修道院の院長に任命し、自身は沈黙の生活を選んだ。

[2738] 聖ヨハネは、生誕から80年を経た、6世紀末か7世紀初頭にこの世を去った。

[2739] 『レステヴィツァ』という言葉は、ロシア語に訳すと「はしご」を意味する。

[2740] 『梯子』が書かれた目的は、救いを得るためには、人間側の努力、自己犠牲、そして不断の修行が必要であることを教えることにある。　『梯子』には、30の段階、すなわち修行が含まれている。第一に、罪による不浄の浄化、古い人間における悪徳や情欲の根絶。第二に、人間における神の御姿の回復である。これらに加え、準備段階あるいは初歩的な修行として、さらにいくつかの段階が設けられている。

チニクが統率していた当時、ライフ修道院のイグメンもまた聖ヨハネであった[2741]。シナイの修道院長が持つ霊的な賜物や、救われるべき魂たちを導くことにおける深い知恵について多くを耳にしていたライフの修道院長は、レステヴニクに書簡[2742]を送り、自身および修道院のすべての修道士を代表して、霊的・道徳的な修道生活のための指針を執筆してほしいと依頼した。「主に対するあなたの、あらゆる点において疑いようのない、あらゆる美徳に彩られた従順さを知り、――聖ヨハネ・ライフスキーはヨハネ・ラドヴィチクにこう記した――私たち、力なき者たちは、あなたをすべての者の共通の父として、また修業と知性の力において誰よりも年長者であり、卓越した師として仰ぎ、この書簡をもって、あなたの高潔な徳に懇願いたします……どうか、私たちの救いのために、主について怠ることなく、修道生活に必要かつふさわしいことを明確に記してくださるよう、お断りにならないでください。天使のような生活を選んだすべての人々の真に偉大な指導者として、私たちの言葉を単なるお世辞や諂いとは見なさず、どうかお聞き入れください。まことに、聖なる真の指導者であるあなたには、諂いが私たちには無縁であり、私たちが繰り返しているのは万人が認めることだけであることがお分かりでしょう。それゆえ、私たちは主において確信しています。すなわち、私たちが待ち望む尊い教えがまもなく石板に記され、それを口づけし、後続する者たちにとって揺るぎない真の指針となるでしょう。それは、あたかも地上に立つ梯子のように（創世記28:12）のように、望む者を無傷のまま天の門へと引き上げ、彼らが悪意の霊たち、闇の支配者たち、そして空中の支配者たちをも妨げられることなく通り過ぎることができるように。なぜなら、もしヤコブが、言葉を持たない羊の牧者として、その天の梯子においてそのような不思議な幻を見た（創世記28:12）のであれば、ましてや、言葉を持つ羊の牧者であるあなたが、すべての人々に、単なる幻だけでなく、実際に、そして真実に、神への誤りのない昇り道を示してくださるのではないだろうか。主よ、最も尊き父よ、どうかお力をお与えください！

聖ヨハネは、自分自身について非常に謙虚な考えを持っていたため、ライフの修道院長からのこの手紙に戸惑ってしまった。聖人は、同様に手紙で彼に返答した[2743]：

「私は――『梯子』の著者はこう記している――徳に乏しく貧しい私に、あなたが送ってくださった尊い書簡、いや、むしろ私の力をはるかに超える指示と命令を受け取りました。そして私はこう言おう。もし、すべての美徳の母である従順という軛を自らから振り払ってしまうという恐れと大きな危険がなければ、私は自分の力を超えるこの無謀な行いに踏み切る勇気はなかっただろう。尊き父よ、あなたこそ、このことについて尋ね、この事柄をよく知る者たちから学ぶべきでした。しかし、私はまだ の生徒の地位に留まっているのです。しかし、神に愛された私たちの父たちや、真の知恵の秘儀に精通する者たちは、私たちの力を超える事柄においては、命じる者に疑いなく従うことを「従順」と定めているため、私は謙虚に、自分を超えたことに踏み切ることを決意し、畏敬の念と熱意をもって、あなたの聖なる命令の遂行に取り掛かります。また、教師たちの指導者であり、その地位の頂点に立つあなたには、この著作を飾り立て、その輪郭を明確にし、霊的な律法の石板を執行する者として、不十分な部分を補っていただくよう委ねます。あなたのためにこの事業に着手するにあたり、すべての読者に懇願します。もし私の著作の中に何か有益なものを見いだした者がいれば、その成果を感謝の念をもって私たちの卓越した指導者に帰し、私に対しては、この労作を成し遂げたことに対する報いを神に求めてください。なぜなら、神は多くの賜物や労苦に対してではなく、多くの熱意に対して報いてくださるからです。

こうした経緯から、尊者ヨハネによる『梯子』と呼ばれる著作が生まれたのである。

[2741] 聖ヨハネ・ライフの修道院長（ヨハネ・ラスティヴィチニクの同時代人）は、チーズの土曜日（大斎前の土曜日）に教会によって記念される。

[2742] これは『梯子』の版に付録として収録されている。

[2743] また、この文章は『梯子』の版にも付録として収録されている。

聖ヨハネの著作が『梯子』と名付けられたのは、聖ヨハネ・ライフスキーが、霊的生活において、まさにそのような指針を得たいと願っていたからである。それは、その著者の考え通り、望む者を無傷のまま天の門へと導く、いわば確信の梯子のようなものであった。 「私に与えられたわずかな知見の範囲内で――と聖ヨハネは記している――私は昇天の梯子を築いた。その後、各自が自分がどの段に立ったかを見極めるように」[2744] 。『梯子』の序文では、この題名の意味が次のように説明されている。「『命の書』に自らの名が記されることを切望する者たちに対し、本書は彼らの歩むべき最善の道を示す。なぜなら、この道を歩むとき、本書が、あたかも手を引くかのように、それに従う者たちを間違いなく導き、地上の世界から聖なる世界へと至る確固たる梯子を疑いなく提示し、その頂上に確固たる神がおられることを示してくれることが分かるからである。……まことに、私たちの昇りを、主の肉における年齢と同数となるように整えてくださった方は、極めて見事に考え抜かれた。なぜなら、主が成人された三十歳という模範に倣い、三十段の階段を象徴的に築き上げられたからである。この階段を登り、主の年齢に達したとき[2745] 、私たちは義とされ、転落から守られることになるのである」。 このように、聖ヨハネの著作が『天梯』と名付けられたのは、それが道徳的完全性への段階的な登攀の道を提示することを目的としており、敬虔さと自らの魂の救いを熱心に求める者たちにとって、霊的生活における確かな、信頼できる指針であるからである。

『梯子』は、本来は修道士のために書かれたものであり、そのため共同生活を送る修道士たちにとって常に手元の書物であり続けてきた。また、修道生活の父たち、とりわけ テオドロス・ストゥディテス、ヨセフ・ヴォロコラムスキーらも、自らの教訓の中で『天梯』を最良の書物として引用していた――それにもかかわらず、世俗に生きるキリスト教徒もまた、この書物の中に救いへの指針を見出すことができるのである。 この『梯子』の最初の段には、地上の執着からの離脱が掲げられており、その頂点には、信仰、希望、愛という三つの美徳の結合が示されています。

ヨハネ・ラダーの教えを知るために、虚栄心に関する彼の教えに耳を傾けてみましょう[2746] 。

――あらゆる美徳において、虚栄心が現れる。例えば、断食をしているときは虚栄にふけり、他人に断食していることを隠して食事を許すときも、今度は「分別」という名目でまた虚栄にふける。明るい色の服を着れば虚栄心に駆られ、地味な服に着替えても、やはり虚栄にふける。 口を開こうか? すると虚栄の支配下に陥る。黙っていようか? そうすればまた虚栄に身を委ねてしまう。この茨をどの方向に回そうとも、棘はすべて上を向くことになる。虚栄に満ちた者は、キリスト教徒でありながら偶像崇拝者である。 一見、神を敬っているように見えるが、実際には神よりも人々に気に入られようと努めている……*「私たちを喜ばせる者は、私たちを惑わす」*と預言者は言う（イザヤ3:12）。高潔な精神を持つ人々は、侮辱を穏やかに、そして快く受け入れる。しかし、称賛を聞いても何の喜びも感じないのは、聖なる者や清らかな者だけである…… 隣人や友人が、陰で、あるいは面と向かってあなたを非難しているのを耳にしたなら、その時にこそ、彼を称賛して愛を示しなさい……自らを非難する者（自分自身に耐えられないとはどういうことか? ）ではなく、他者から侮辱されても、その人への愛を損なわない者こそが、謙遜を示しているのだ…… 生まれつきの才能――鋭い知性、高い教養、読書量、心地よい話し方、その他容易に身につく類似の資質――を誇りとする者は、決して超自然的な恵みに達することはない。なぜなら、小さなことに不忠実な者は、大きなことにおいても不忠実であり、 虚栄に満ちているからである（ルカ16:10）。 しばしば、神ご自身が、予期せぬ不名誉を降り注ぐことで、虚栄心のある者を謙虚にさせることがある……もし祈りによって

[2744] 『梯子』、27、30。

[2745] すなわち、聖ヨハネ・クライストスは、救い主が公の奉仕に就くまでの30年間に対応するように、自己修養の30の段階を定めている。

[2746] 『天梯』22。

虚栄心のある思いが根絶されないなら、この世からの魂の旅立ちを思い起こさせよう。それでも効果がないなら、最後の審判の恥辱をもって彼を脅かそう。　　*「高ぶる者はへりくだる」*（ルカ14:11）――それは、来たるべき世に先立ち、この世においても同様である。称賛者たち、あるいはむしろ、私たちを惑わす者たちが、私たちを称賛し始めたら、直ちに自らの数多くの不義を思い起こし、彼らが私たちについて語ることや、私たちのためにしてくれることに対して、私たちが値しない者であることを悟るだろう[2747]。

概して、聖ヨハネの『天梯』は、聖書に対する深い知識と結びついた、深遠な霊的体験によって特徴づけられている。『天梯』の著者は、聖書への直接的あるいは間接的な言及によってそれを裏付けないまま、珍しい考えを述べることはほとんどない。　ヨハネの著作は、平易でありながら純粋で生き生きとした言葉で書かれており、わずかな言葉で多くのことを表現しているため、力に満ちています[2748]。だからこそ、聖ヨハネの『天梯』は、共同生活を送る修道士たちにとって、常に手元に置いておくべき書物であったのです[2749]。

トロパリオ、第8調：

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深淵からの嘆きによって百の労苦を実り豊かなものとし、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、私たちの父ヨハネよ、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

聖預言者ヨアダの記念日

記念日：3月30日

聖預言者ヨアダはサマリアの出身であった。彼が、イスラエル王国において、自らも犠牲を捧げていた子牛の像を安置したという決定について、エレボアムを非難した[2750]後、彼は獅子に引き裂かれ、それによって亡くなった。その経緯は次の通りである。　主はヨアダに、エレボアムのもとへ行き、彼を非難するよう命じられた。その際、そこでパンを食べたりワインを飲んだりしてはならず、直ちに引き返さなければならないとされた。預言者は、エレボアムが偶像に犠牲を捧げているところを見つけ、彼に向かってこう言った。

2747 『天梯』の描写によれば、キリスト教的な自己完成は、「世」の拒絶と情欲との闘いから始まる。気を散らす快楽や感覚的な享楽から、「霊」は悲しみの中での悔い改めへと向きを変え、絶えず死を念頭に置く。　救いをもたらす悲しみは、涙の力によって修行者の心を和らげ、利己主義から解放し、罪の堆積を取り除きます。このようにして、悔い改めた者は「沈黙」の状態に達し、そこでは祈り、賛美歌、そして「愛」の表現のための言葉のみを見出すようになります。霊と魂は、粗野な感覚の束縛から解放され、洗練されていき、霊的な世界、天上の世界、神聖な世界と交わる真の能力を得る。至福の「謙遜」は、キリストに従う道を導き、天の御国への扉を開く。　「情欲」に打ち勝った者は、最高の「識別」の能力を得る。この能力は、人が自分自身や他者の中に存在する悪しき動きと善き動きに気づき、見分け、前者を抑え込み、後者を育む助けとなる。　神に似た無情と平静という至高の状態において、修行者はすでにこの地上において栄光に満ちた境地に入り、あたかも鏡を見るかのように、楽園の恵みを観想する。

2748 この『梯子』の最後の特徴は、経験に裏打ちされた思索の深さと同様に、8世紀のイリヤ・クリトス大主教やイオアン・ライフスキー修道院長らが、『梯子』について解説を執筆するきっかけとなった。

2749 『天梯』への補遺として、聖ヨハネは『牧者へ』という別の小論を著した。そこでは、修道院長の理想像を描いており、ヨハネの描写によれば、院長は部下にとって牧者、舵取り、医師、教師、そして模範でなければならない。

2750 エレボアムは、ユダヤ王国の分裂後、最初のイスラエル王である。彼は自国に偶像崇拝を導入し、臣民にそれを強要した。

「主はこう言われる。見よ、ユダの家にヨシヤという名の息子が生まれ、彼はこれらの高き所の祭司たちを祭壇の上で殺すであろう。[2751] 。」

エレボアムは預言者を捕らえようと手を伸ばしたが、その手は枯れてしまった。そこで王は預言者に、自分の手を以前のように元通りにしてくれるよう懇願した。　その後、帰路についたヨアッドは、エムウェという名の偽預言者に誘惑され、彼と共に食事をした。このような不従順に対し、主は獅子に彼を殺させることを許された　が、その死体を食らうことは許されなかった。殺されたヨアッドは、彼を誘惑した預言者の住居の近くに葬られた[2752] 。

誰をも非難しなかった修道士の話。

3月30日の記念日

その同じ日、誰をも非難しなかった修道士が主のもとへ帰った。聖アナスタシオス・シナイテスは、彼について次のように語っている。

ある修道士が、修道院で暮らしながら、自らの救いを顧みず、生涯を怠惰にふけって、無頓着に日々を過ごしていた。　高齢に達し、死が近づいていた。やがて重い病に倒れ、最期の息を引き取ろうとしていた時、彼は死を少しも恐れず、神を賛美し、栄光を帰しながら、喜びをもって肉体から離れる準備をしていた。彼を取り囲んでいた兄弟たちや、その修道院のイグメンは彼にこう言った。

「兄弟よ、あなたが怠惰な生活を送っていたことは、私たちも見てきました。それなのに、なぜこの恐ろしい死の瞬間に、あなたはこれほど無頓着で、喜びに満ちているのですか？神の力に支えられて、立ち上がり、その理由を私たちに説明してください。そうすれば、私たちも神を賛美することができますから。」

兄弟は、寝台から少し体を起こして、彼らにこう言った。

「正直な父たちよ、私が無頓着に人生を送ってきたのは事実です。今まさに、神の天使たちが私のところにやって来て、私のすべての悪行が記された手書きの文書を私の前で読み上げました。その文書を読み終えると、天使たちは私に『これを知っているか？』と尋ねました。」　私は『はい、知っています』と答えました。しかし、私は世を捨て、修道者の戒律を受け、誰をも非難したことはなく、誰に対しても怒ったこともありません。ですから、私は神に、キリストの御言葉が私の上に成就するよう祈ります。キリストはこう言われました。　*『裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれない。もしあなたがたが人々の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださる』*（マタイ7:1、6:14）。私がそう言い終えるやいなや、聖なる天使たちは私の罪を記した手書きの文書を即座に破り捨てた。それゆえ、私は喜びと歓びをもって神のもとへ旅立つのである」。

そう言い終えると、その兄弟は安らかに主のもとへ魂を委ねた。

4月13日

3月31日（旧暦）

4月

[2751] 東方の諸民族においては、偶像への生贄を捧げるための祭壇は、通常、高台に設けられていた。

[2752] 預言者ヨアデについては、列王記下13章1節から34節に記されている。

聖イパティオス・奇跡行者、ガングラ司教の記念日

記念日：3月31日

パフラゴニアのガングラ市の司教である、神の偉大なる聖人イパティオス（[2753] ）は、コンスタンティヌス大帝の治世中に召集された第1回全地公会議に参加した318人の聖なる教父の一人であった。　そこで彼は、他の聖なる教父たちと共に、聖霊に満たされ、正教への熱意に燃え、アリウスを異端として糾弾し、破門した。

[2754]聖イパティオスは神から奇跡を行うという偉大な賜物を受けており、様々な病を癒やし、悪霊を追い出しました。ある村では、山から流れ出る苦い泉を甘い泉に変え、また別の場所では、彼の祈りによって、治癒効果のある温かい泉が地中から湧き出ました。　ある暗い夜、彼が川のほとりを歩いていると、水の中から光が現れ、道に迷わないよう　、また川に落ちないよう、彼に道しるべを示した。彼はまた、恐ろしい大蛇を退治した。　コンスタンティヌスの死後、その弟コンスタンティウス[2755] が即位した際、どこからともなく非常に大きな蛇が王宮へと這い寄ってきた。多くの金やその他の財宝が保管されていた王室の宝物庫を取り囲むと、その蛇は部屋の入り口に頭を置き、誰も中に入れないようにした。　コンスタンティウス王はこれに恐怖を覚え、神の聖人イパティオスに、コンスタンティノープルへ来るよう使者を送った。というのも、その聖人の名は、キリストの恵みによって行われた奇跡のおかげで、広く知られていたからである。　王は聖人を丁重にもてなし、地にひれ伏して礼拝し、人間のいかなる力でも追い払うことのできなかった蛇を、王の祈りによって王室の宝物庫から追い払ってほしいと懇願した。というのも、多くの聖職者たちが祈りを武器にその蛇を追い出そうとしたが、全く成功せず、中にはその過程で傷を負った者さえいたからである。　聖人はこれに対し、王にこう言った。

「王よ！たとえ我らの祈りが無力であったとしても、神の前におけるあなたの信仰は無駄にはなりません。」

そう言って、彼は地面にひれ伏し、かなり長い間祈りを捧げた。その後、立ち上がったイパティオスは王にこう言った。

「馬の闘技場『[2756] 』――そこにはあなたの父の像がある――の中に炉を設置させ、私がそこへ行くのを待つ間、できるだけ強く熱く焼いておきなさい。」

直ちに炉が準備され、火が点けられた。すると聖イパティオスは司教の杖を手に取り、王宮へと向かい、宝物庫の門を開けて、長い間その杖で蛇を打ち続けた。　民衆も王も、恐怖と戦慄に包まれながら遠くからその様子を見守っていた。そして、蛇が逃げ去る気配がないのを見て（すでに日は暮れかけていた）、皆、以前いくつかの司祭たちに起きたように、蛇が聖人を殺してしまったのだと思った。　しかし、聖イパティオスは天を仰ぎ、主の助けを求め、次のように言いながら杖を蛇の口の中に差し込んだ。

「わが主イエス・キリストの御名によって、私に従え。」

蛇は杖を歯で噛みしめ、まるで縛られた囚人のように、聖人の後をついていった。そして実際、偉大なる奇跡行者は神の力によってその蛇を縛り上げたのである。

その後、聖イパティオスは王の宝物庫から離れ、蛇を引きながら、馬の闘技場や市場をくまなく巡った。　民衆は、杖の端にしがみつき、聖人に引きずられていく蛇を見て、恐怖と驚きに包まれ

[2753] パフラゴニア――小アジアの地域

[2754] コンスタンティヌス大帝の長男であるコンスタンティヌス2世は、337年から340年まで在位した。

[2755] コンスタンティウス皇帝は337年から361年まで在位した。

[2756] 馬レースの競技会場。

た。その蛇は実に恐ろしい姿で、その長さは六十肘にも及んだ[2757] 。大きな炎が燃え盛る火炉に近づくと、聖人は蛇にこう言った。

「私のような不適格者が宣教するキリストの御名において、お前にその火の中へ入るよう命じる！」

すると、その恐ろしい蛇は身を屈めて、猛然と火の炉へと飛び込み、その真ん中で焼けてしまった。この光景を恐怖の念を抱きながら見守っていた人々は皆、神が彼らの生きている間に、聖イパティオスというこのような光であり奇跡を行う者を世に現してくださったことを称えた。

そこで王は、神と、自らの父として敬っていた神の御使い、聖イパティオスに、大いなる感謝を捧げた。王は板に彼の肖像を描かせ、悪魔を追い払うためにその肖像を王室の宝物庫に安置した。そして聖人には贈り物を授け、親しみを込めて頬に口づけをしてから、彼の家へと帰した。

聖人が司教座へと戻る途中、ノヴァタの教えの信奉者たち[2758] は、神の聖人に対する激しい嫉妬に駆られ、剣や槍で武装して、山間の断崖の縁や沼地の岸辺にある狭い通路で待ち伏せを仕掛けた。 聖人がその場所に近づくとすぐに、彼らは野獣のように突進して突然襲いかかり、聖人をひどく傷つけた上で、高い岸辺から沼地の泥沼へと突き落とした。 聖人はかろうじて一命を取り留め、両手を少し上に向けて、かつての聖なる最初の殉教者ステファノのように天を仰ぎ、「*主よ！ この罪を彼らに負わせないでください*」（使徒言行録7:60）。そして、彼がそう祈っているとき、アリウス派の異端を信奉するある邪悪な女が、重い石を手に取り、それをもって聖人の頭を激しく打ち、彼を殺害した。 聖イパティアの魂は、たちまち肉体から離れ、主のもとへと去っていった[2759] 。殺害者たちは聖人の遺体を持ち去り、その場所の近くにある洞窟に隠して立ち去った。

しかし、無実の血を流した彼らには、神の懲罰が間もなく下った。まず第一に、その女が同じ場所で不浄な霊に襲われ、苦しめられた。彼女は絶えず、その石で自分の胸を打ち続けた。その後、あの迫害者たち全員が取り憑かれ、ひどく苦しんだ。

その後、その洞窟（彼が藁を保管していた場所）の所有者であるある農夫が、行われた不当な殺害について何も知らずに、自分の家畜のために藁を取りに来たところ、天使たちの歌声を聞いて驚き、恐怖に襲われた。 そして、わらを取り出そうとしたとき、傷だらけの死体を見つけた彼は、さらに恐怖に襲われた。その死体が自分の聖なる司教イパティオスであることを知ると、彼は村人たちのところへ駆け出し、村人たちはすぐにこの出来事を町中に広めた。 ガングルの町の人々は直ちに集まり、大泣きしながらその場所へ駆けつけ、聖なる父であり牧者である彼の尊い遺体を受け取り、大いなる栄誉をもって埋葬した。 一方、殺害した女は、埋葬へと運ばれる聖人の遺体を追いかけて行き、道中、神の司教を殺したのと同じ石で自分の体を打ちつけ、皆の前で自分の罪を告白した。

聖人の遺体が埋葬されると、その女性は悪霊に取りつかれていた状態から癒やされた。また、かつて悪霊に取りつかれていた者たち、すなわち聖人の殺害に加担した者たちも、聖人の棺のそばで癒やされた。聖人は、その寛容さゆえに、死後もなお敵たちに恩恵を与え続けたのである。 聖イパティオスの棺に信仰をもって訪れる人々に対して、神への彼の祈りによって、その地では他にも多くの奇跡や癒しが起こった。

[2757] 肘――長さの単位。現在のロシアの「ヴェルシュク」の10～12に相当する。

[2758] ノヴァト――3世紀に生きたカルタゴ教会の長老で、教会分裂の引き金となった人物として知られる。この分裂の経緯は以下の通りである。 248年にカルタゴで聖キプリアンが司教に選出された際、この選出に不満を抱いた5人の長老たち（中でも特にノヴァトゥスが際立っていた）がキプリアンから離反し、ノヴァトゥスは司教の知らぬ間に、またその意思に反して、裕福で影響力のある人物であるフェリシシマを助祭に任命した。 この分裂は、教会史において「ノヴァトとフェリシシマスの分裂」として知られている。教会から離脱した分裂派は、251年のカルタゴ公会議で非難された。

[2759] 聖殉教者の死は326年頃であった。

ルフィナにおける、私たちの尊い父イパティオスの記念日[2760]

記念日：3月31日

この尊者はフリギアで生まれた[2761] 。18歳の時、ある日父親に殴打され、家を出てフラキアへと逃れた[2762] 。かつて修道院だった場所の一つに入り、修道生活の実践に身を捧げ、まもなくその徳によって知られるようになった。 彼は決してワインを口にせず、ある時、肉欲との闘いに身を投じ、50日間、食べ物にも飲み物にも一切触れずに断食を続けた。 このことを修道院の院長が知ると、夕食の席で兄弟たちの面前において、自ら手を差し伸べてイパティオスにワインの杯とパンを差し出した。すると彼は直ちに、自分を苦しめていた情欲から解放され、主と師に感謝を捧げた。 しばらくして、霊的指導者の助言に従い、肉欲の誘惑にさらされていたある人物を助けるためにコンスタンティノープルへ向かった際、彼はそこへやって来た自身の父をも助けた。 その後、父を故郷へ送り出したイパティオスは、二人の修道士を伴ってハルキドンへ向かい、ルフィンの修道院に身を寄せた。当時のその修道院は、奇妙で不気味な様相を呈していた。そこは完全に荒れ果てており、誰をも恐怖に陥れるような場所であった。 このルフィンという人物は、かつて平信徒であった[2763] が、かつては美しい修道院を建立し、そこにエジプトの修道士たちを住まわせ、彼らはそこで神を賛美しながら修行に励んでいた。しかし、ルフィンが亡くなると、その修道院に住んでいた修道士たちはそれぞれ故郷へと散り散りになり、その後、修道院は無人となった。 修道院はとげのある植物に覆われ、それらは通り抜けられないほど密生した低木となり、修道院を醜い姿に変えてしまった。その後、不浄な霊たちが侵入してそこに住み着いたため、修道院は誰もが恐怖を抱く場所となり、誰もその前を通り過ぎようとはしなくなった。 そのような状態の修道院を見つけた聖イパティイは、そこから悪霊を追い出し、修道院を醜くしていた藪を取り除いて、かつての壮麗な姿に戻した後、 彼と共にやってきた二人の修道士と共にそこに住み着いた。 彼自身は毛皮の衣（[2764] ）を作り始め、同行していた修道士のうち一人は種まきに、もう一人は果樹園の整備に取り組みました。それから数年後、イパティオスはフラキアへと向かい、以前修行していた修道院に定住しましたが、ルフィナの修道院の修道士たちがまもなくその修道院を訪れ、彼に彼らのイグメン（修道院長）になってほしいと懇願しました。 聖人はこれを受け入れ、それ以来、偉大な功績を成し遂げるようになった。 多くの修道士たちが彼に倣い、神に喜ばれる生活において高い境地に達した。その功績により、神聖なるイパティオスは神から奇跡を行う賜物を受け、数多くの奇跡的な癒やしを成し遂げた。例えば、彼は悪霊に取り憑かれた者、盲人、やせ細った者、水腫に苦しむ者、そして月経過多の女性たちを癒やした。 また、不妊の女性たちを数多く妊娠できるようにし、母乳が出ず授乳できない女性たちには、母乳を取り戻させてあげた。彼は何度も祈りによって水やパン、その他の食料を増やし、必要な時にそれらを倍増させ、人々や家畜からあらゆる病気を追い払った。 聖人の食事は、茹でた穀物、野菜、そして少量のパンで、この質素な食事も夜遅くになって初めて口にし、老後の体力を維持するために少量のワインを口にしていた。 尊者は八十年を生きたため、頭髪や髭は雪のように白くなったが、その高齢にもかかわらず、外見も行いも以前と変わらず威厳を保っていた。 彼は40年間、修道院長の地位にあり、聖職の威信を高め、まず80人の弟子たちを主のもとへ送り出し、その直後に自らも安らかに息を引き取り、主を賛美した。[2765] 。

[2760] ルフィナの修道院は、小アジアのローマ属州にあり、ボスポラス海峡のほとりに位置するハルキドンの郊外にあった。

[2761] フリギア――小アジアにあるローマ属州。

[2762] フラキア――バルカン半島にある地域で、現在のルメリアにあたる。

[2763] ルフィヌスはコンスタンティヌス大帝の宮廷の重臣の一人であったと考えられている。

[2764] ヴラサニツァ――ある動物の硬い毛で作られた衣服で、東方の修道士たちが肌に直接身につけていた一般的な装い。

[2765] 聖イパティオスは446年頃に没した。

聖アポロニオスの記念日。

記念日：3月31日

私たちの聖なる父アポロニオスは、15歳の時に世俗を捨て、修道生活に入り、内陸の荒野[2766]に定住し、そこで40年間、孤独な山生活を送りました。　幼少の頃から徳ある生活の習慣を身につけていた彼は、偉大な功績を成し遂げ、その功績により、ある時、神の声を聞くという恵みにあずかりました。神は彼にこう告げられました。

「アポロニウスよ、今こそ人里へ行きなさい。あなたは、わたしのために選ばれた人々を育てなければならないからだ。」

その後、彼は直ちに近くの荒野へと向かい、そこで山の麓にある小さな洞窟を見つけ、そこに住み着いた。そこで彼は、ひざまずいて、丸一日中神に祈りを捧げることに専念した。　彼の糧は、神が送ってくださったものであり、荒野に訪ねてくる天使から受け取るものであった。　この荒野は人里の近くに位置しており、聖霊の導きに従ってそれらの場所を訪れるうちに、聖人は約五百人もの修道士たちを周囲に集め、修道生活における様々な修行について彼らを指導した。　こうして、彼は彼らと共に日曜日にのみ食事をとりましたが、それ以外の日は何も口にしませんでした。パンも、ソチヴァ[2767]も、火で調理された他のいかなるものも口にせず、野生の穀物だけで身を養いました。 聖アポロニオスは、自身の修道院に、彼と共に修行する修道士たちが、まずキリストの聖なる秘跡を拝領してからでなければ食事をとってはならないという規則を導入した。通常、これは毎日午前9時に行われ、その後、修道士たちは食卓に着き、その間、毎日説教に耳を傾けた。　一日の残りの時間は、全員が有益な活動に費やし、それによって悪魔の悪意ある囁きを心から追い払っていた。多くの修道士たちをそのような生活へと導き、高齢まで生き抜いた聖アポロニオスは、永遠の命を求めて神のもとへ旅立った。

聖殉教者アヴダとベニヤミンの記念日

記念日：3月31日

聖殉教者アヴダは、テオドシウス2世の治世[2768]に生き、ペルシアの司教であった。 彼は火礼拝者の神殿を破壊し[2769]、そのために捕らえられ、皇帝のもとに連行された[2770]。皇帝は当初、穏やかに彼に破壊された神殿を修復するよう命じたが、彼が「それはできない」と答えると、兵士たちを遣わしてすべてのキリスト教の教会を破壊させた。　その後、迫害者たちはキリスト教徒を追い詰め、年齢を問わず、様々な方法で彼らを死に追いやった。その筆頭として、聖殉教者アヴダは様々な拷問を受けた後、剣で斬り殺され、その30日後には他の聖なる殉教者たちも処刑され、その中には聖助

[2766] 「内陸の砂漠」とは、アフリカの下エジプト、ナイル川の東岸に位置するフィヴァイダ砂漠を指す。

[2767] ソチヴォとは、小麦や米、その他の穀物を茹でたものである。

[2768] テオドシウス2世（若き）は、408年から450年にかけてローマ帝国の東部で統治した。

[2769] ペルシア人は、最高神としてミフル、すなわち太陽を崇拝していた。彼らはまた火を崇拝し、神々のために神殿を建て、そこで火と太陽を崇拝していた。

[2770] ここで言及されている王は、401年から420年まで在位したイズデゲルド1世である。彼が始めた迫害は、後継者のヴァラン5世（420年～438年）の時代に特に激化した。

祭ベニヤミン[2771]も含まれていた。拷問者たちはまず、彼の指や足の爪の下に尖った針を突き刺し、その後、彼を杭に縛り付けた。こうして彼は主の御手にその霊を委ねた[2772]。

聖イオナ、キエフおよび全ロシアの総主教の帰天

記念日：3月31日

聖イオナは、カザン地方の近くにあるガリチという町出身であった[2773]。彼はテオドールという名の敬虔な父のもとで生まれ、12歳の時にガリチ地方のある修道院で修道者の衣をまとい、その後、モスクワ市のシモノフ修道院[2774]へ赴き、そこで長きにわたり修道院の務めに励みました。

当時、モスクワのミトロポリットはフォティイであった[2775]。ある日、フォティイはシモノフ修道院を訪れ、そこで至聖なる聖母マリア教会で祈祷式を執り行い、アルヒマンドリトと修道士たちに祝福を与えた後、修道院の修練生たちにも会って祝福を与えたいと願った。彼はパン焼き場に入ると、そこで激しい労働の後に眠りについていた至福のイオナを見かけた。彼の右手は、あたかもそれで祝福を与えているかのように曲げられていた。フォティオスは彼を起こすことを命じず、眠っている者に祝福を与えた上で、同席していた者たちに、この修道士がロシアの地で聖人となり、多くの人々を救いの道へと導くだろうと予言した。

この神の聖人の預言は、その後実現した。数年後、神の御心により、聖公会の選出と皇帝の意向を経て、至福のイオナはリャザニおよびムロマの司教に任命され、そこで多くの異教徒を神へと導き、洗礼を授けた[2776]。

至福のフォティオス大主教が主のもとへ召されたとき、大公ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ[2777]は、ロシアの地の総主教および司教たち、ならびに聖公会全体を召集し、彼らにロシア大主教区の偉大な座にふさわしい人物を選出するよう命じた。全員の合意と希望により、当時、リャザン司教イオナ[2778]が選出された。彼は、高潔で聖なる人物として皆に知られていたからである。

[2771] ヴァシレイオスの暦によれば、聖殉教者ベニアミンは、聖アヴダの後、3ヶ月後ではなく、3年後に殉教した。

[2772] 聖殉教者アヴダは418年または421年に、聖ベニアミンはその3年後、すなわち421年または424年に、いずれもスーズで殉教した。スーズは、かつてスージアナの首都であり、最初はエラム王、その後ペルシア王の居城であった、最も古いペルシアの都市である。

[2773] 聖イオナは、現在のコストロマ州にあるソリガリチ市の近く、古代のガリチ地方で生まれた。

[2774] モスクワ川の左岸にあるシモノフ修道院は、1370年、大公ドミトリー・ドンスキーの治世下、聖セルギイ・ラドネジスキーの弟子であり甥であるフェオドールによって、アレクシー大主教の祝福のもと設立された。この修道院の名前は、その所有者の名にちなんで「シモノヴォ」と呼ばれていた場所から由来している。

[2775] 1408年から1431年まで大主教を務めた。

[2776] 現在のタンボフ教区およびヴォロネジ教区の一部を包含していた広大な聖イオナ教区の管轄内には、偶像崇拝を続けているドン川流域の部族――モルドヴァ族、メシェラ族、ムロム族――の集落が点在していた。聖イオナは、こうした異教徒たちの中から多くの人々を真の神へと導いた。

[2777] 1425年から1434年にかけて

[2778] 聖イオナは、おそらく1432年末までに選出されたと考えられる。1433年3月11日付の、「ロシアの至聖なる大主教に任命された」イオナによる書簡が1通現存している。

彼は大公からの書簡を携え、コンスタンティノープルへ赴き、イオアンヌ・パレオロゴス皇帝[2779] および至聖なるヨシフ総主教[2780] の元を訪れ、大主教職への就任を承認してもらうこととなった。　しかし、彼がコンスタンティノープルに到着する前から、テッサロニキ出身の悪意に満ちたイシドール[2781] は、すでにロシア都主教の叙任を受けており、コンスタンティノープルからロシアへと送り出されていた。

彼の出発後、聖イオナがコンスタンティノープルに到着し、大公からの書簡を皇帝と総主教に手渡した。それを読んだ二人は、すでにロシアへ送り出されていたイシドールを急いで任命してしまったことを深く後悔し、聖イオナにこう言った。

「今、我々は君に何をしてあげられようか。君が我々の元へやって来たのは遅すぎた。我々はすでにイシドールをロシア都主教に任命しており、これを覆すことはできない。イシドールは今やロシア都主教なのだ。」　自分の司教座に戻り、イシドールについて神がどう定められるかを待ちなさい。彼が亡くなるか、何らかの事情で後任が任命される時、その際、コンスタンティノープル総主教座の祝福のもと、あなたはキエフおよび全ロシアの大主教に任命されることになるだろう。

こうして、彼らは聖イオナを故郷へ帰した。

一方、イシドールはまずキエフに到着し、その後春にモスクワへ向かい、そこで秋の収穫期まで過ごした後、正教の信仰を確固たるものにするためか、西方のフィレンツェ公会議へと向かった。

[2779] ヨハネス6世パレオロゴスは1425年から1448年まで在位した。 即位当初、彼はムラト2世スルタンの臣下であることを認め、黒海沿岸のいくつかの都市をトルコ人に譲り渡したが、それにもかかわらず、1433年にトルコ側がコンスタンティノープルを占領しようとした試みを防ぐことはできず、その試みは結局失敗に終わった。　西方の諸国にトルコからの保護を求めるべく、ヨハネス6世は西側諸国との接近に向けて断固たる一歩を踏み出した。その目的のため、彼はイタリアへの渡航に同意し、そこで教皇エウゲニウス4世は教会合一の問題について公会議を招集することを決定していた。 まずフェラーラで、次いでフィレンツェで、ユニオンの条件が策定された（1439年）。このユニオンは、一部の司教やギリシャ人司教を除き、公会議に出席した者たちによって承認され、ギリシャ人司教たちは、聖霊が「子から」（filioque）発出するというカトリック教会の教義、　教皇の首位権、そして無発酵のパンを用いた聖体の執行についても正当であると認めた。しかし、コンスタンティノープル市民の不満により、イタリアで締結されたこの合同は実を結ばなかった。

[2780] ヨセフ2世――かつてエフェソス都主教であった――は1416年にコンスタンティノープル総主教に選出された。彼は皇帝と共に教会の統一を目指し、フィレンツェ公会議（前注参照）に出席し、1439年にイタリアで死去した。

[2781] イシドールは、ギリシャ系出身の最後のロシア都主教であり、テッサロニキ出身であった。コンスタンティノープル総主教（彼については前述の注を参照）によってキエフ都主教に叙任された後、イシドールは1437年の春にモスクワに到着した。　そこで彼は、ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムヌイ大公に対し、イタリアで開催されるフェラーラ・フィレンツェ公会議（注7参照）への出席を許可するよう説得した。1437年9月8日、イシドールはスーズダリの主教アヴラアミイおよび約100名の聖職者・世俗人の随行のもと、モスクワを出発した。 1438年、イシドールはイタリアのフェラーラに到着した。そこでは公会議が開かれていたが、まもなくフィレンツェに移された。　公会議において、イシドールはユニオンの熱心な支持者であることを表明し、その功績により教皇から枢機卿に任命され、すべての北方諸地域における使徒座使節の称号を授けられた。ロシアへ向かう途中、まだハンガリーに滞在していた頃から、リトアニア、ロシア、リヴォニアの各教区に書簡を送り、教会の合一について通知した。　ヴォリニでは、イシドールはユニオンに同意したダニエル司教を任命し、キエフではアレクサンドル大公が、イシドールを「自分の父である大司教」として、自身の全領地に対する勅書を与えた。ただし、『キエフ年代記』は、イシドールがキエフから追放されたと記している。　1441年の春、イシドールはモスクワに到着し、教皇から大公ヴァシーリーへの友好的な書簡を携えてきた。　ウスペンスキー大聖堂で行われた最初の典礼で、イシドールはコンスタンティノープル総主教の代わりに教皇エウゲニウスを記念し、礼拝の終了後には、助祭が説教壇からフィレンツェ公会議の決議を読み上げた。大公ヴァシーリーは直ちに教会内でイシドールを非難し、　その後、彼をチュドヴォ修道院に監禁し、公会議を招集した。その公会議は、フィレンツェ公会議の決定を古来の正教の教義に反するものとして認定した。同年1441年の秋、イシドールはトヴェリへ逃亡したが、トヴェリ大公によって再び監禁された。　イシドールはトヴェリからリトアニア領ノヴゴロドへ逃れ、そこからローマへと向かった。トルコ軍によるコンスタンティノープル包囲の際、イシドールは城壁内に留まり、ギリシャの聖職者がフィレンツェ公会議の決議を受け入れるならば、教皇の支援をコンスタンティノス皇帝に申し出た。　コンスタンティノープル陥落後、イシドールはトルコ軍に捕らえられたが、捕虜の身から脱出しローマへ逃れた。彼は1462年に、コンスタンティノープル総主教の称号を保持したまま、この地で死去した。

そこで3年間を過ごした後、彼は東方教会からの背教者としてキエフに戻ったが、そこでは受け入れられなかった。そこで彼は、自らの背教的な教義を広めるためにモスクワへ向かった。

一方、大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチは、彼の背教を知ると、この件を検討するために司教たちおよびロシア都主教区の聖職者全員を召集した。　彼らは集まり、聖なる規則を検討した結果、イシドールがフィレンツェ公会議から正教に異質かつ反する教義を持ち帰ったことを認め、彼を自分たちの大主教として受け入れることを望まなかった。そして大公は、彼がこの件をコンスタンティノープルの至聖なる総主教に報告するまで、ある修道院で暮らすよう命じた。

イシドールは、自身の背教が露見したことを悟り、恥じ入り、何の対応も待たずに密かにローマへ逃亡し、そこで教皇に迎え入れられ、寵愛を受けた。

そして、ロシアの総主教座には再び聖イオナが選出された[2782]。コンスタンティノープルの聖なる総主教グリゴリイ・メリッシーナの祝福[2783]により、彼はモスクワの大聖堂で、自国の司教たちによって叙階された。　かくして、彼は使徒的コンスタンティノープル総主教座の祝福のもと、ロシアの主教たちによって叙階された最初の総主教となった。

ロシア都主教区の座に就くと、聖イオナはさらにその功績を強め、労苦に労苦を重ね、何よりも至る所で敬虔さを確立することに尽力した。　この目的を胸に、彼は絶えず信徒たちに教えを説き、書簡を送り続けた。真の牧者として、彼は正教の信仰を確固たるものにしたが、これは特に彼の書簡『[2784]』から明らかである。総じて、彼は神から託された羊の群れを無傷のまま守り抜くことに、多大な配慮を払っていた。

聖イオナは、神から奇跡を行う賜物、すなわち病を癒やし、未来を予言する力を授かった。

こうして、彼は祈りによって、死の淵にあった大公の娘を病床から立ち上がらせた。この奇跡を目撃したある異教徒は、悪魔の唆しにより、聖人に対して、大公女が病から癒やされたのは彼の祈りによるものではなく、病が自然に治ったのだと言い始めた。　そこで、至福のイオナはその男を呼び寄せ、聖霊の恵みを冒涜してはならないと戒め、こう語った。

「わが子よ！　何事も疑ってはならない。なぜなら、*『人にとっては不可能なことも、神にとっては可能である』*（ルカ18:27）からだ。神は、その少女の信仰、そして何よりも、彼女の権威ある両親の希望によって、彼女に命をお与えになったのだ。」

しかし、その男は聖人の言葉を信じず、さらに冒涜的な言葉を口にし始めた。

すると、聖ヨナは彼にこう言った。

「お前の舌が縛られ、冒涜的な口が塞がれよ。死の淵にあったあの乙女の代わりに、お前が死ぬのだ！」

するとたちまち、神を冒涜した男は声も出せずに地面に倒れ込んだ。彼の舌は動かなくなり、ただ目をきょろきょろと動かすだけで、しばらくして、あの偉大な聖人に宿る聖霊の賜物を冒涜する大胆さを示した報いとして、息を引き取った。

聖なる大主教のもとには、ピメンという名の修道士が一人おり、彼は地下室を管理し、訪ねてくる病弱な物乞いに飲み物を与える役目を任されていた。

ある日、貧しい未亡人が彼のところに来て、病気のため、少しの蜂蜜を分けてほしいと頼んだ。しかし、その修道士は悪意を込めて彼女に言った。

[2782] 聖イオナのロシア都主教座への就任は、司教、アルヒマンドリト、イグメノス、および全聖職者からなる大公会議によって決定された。就任式自体は1448年12月15日に行われ、これについて『第2ソフィア年代記』は次のように記している。　「神聖な礼拝が執り行われ、彼（すなわち聖イオナ）の肩に尊いオモフォールが掛けられ、大ミトロポリスの杖が彼の手に渡され、こうして畏敬の念をもって儀式が執り行われ、民衆に祝福が与えられた」。

[2783] 1445年から1450年まで、コンスタンティノープルで総主教の座に就いていた。

[2784] 現在までに、聖イオナの教書として以下のものが知られている：ヴィャトカへのものが2通、ノヴゴロドへのものが2通、プスコフへのものが1通である。

「立ち去れ。今、飲ませる時ではない。」
未亡人は悲しみに暮れて立ち去った。
そのことを知った神の聖人は、ピメンを呼び寄せ、こう言った。
「兄弟よ！　お前がどれほどその未亡人を傷つけたか、分かっているか。彼女は神に愛される者だ。その罪ゆえに、神はお前を死をもって罰される。さあ、自分の罪を悔い改めよ。お前の死ぬ時が来たのだ。」
そして聖イオナは、自分の霊的指導者にピメナをスキマ（修道服）に剃らせるよう命じ、剃髪式が行われたその日、神の聖人の言葉通り、彼は息を引き取った。
またある時、聖人は自分の弟子の一人に、貧しい人々に配るために多額のお金を渡した。しかし、その弟子はお金の一部を配ったものの、残りを自分用に隠しておいた。
ある時、貧しい未亡人が聖人のもとを訪れ、その修道見習いについて訴え、こう言った。
「神の聖者よ！　あなたの弟子は、あなたが遺されたお金の中から、私に何もくれませんでした。」
聖人は見習いを呼び寄せ、こう尋ねた。
「なぜ、この未亡人を侮辱し、何も与えなかったのか？」
彼は答えた。
「私は彼女にたくさん与えたが、彼女は恥知らずにももっと多くをせがんでいるのだ。」
しかし、その未亡人はそれを否定し、彼からは何も受け取っていないと執拗に主張した。
見習い修道士は怒りを込めて叫んだ。
「去れ！　嘘をついているから、お前は死ぬのだ！」
すると、聖人は彼にこう言った。
「そうはならない。この未亡人は真実を語っているが、お前は盗み、嘘をついている。彼女は生き残り、お前は死ぬだろう。」
するとすぐに、その修道見習いは高熱に襲われ、死んでしまった。
ヴァシリーという名で、通称クトゥーズと呼ばれるあるボヤリンは、聖イオナの奇跡の力を信じておらず、彼のもとを訪れることもなく、彼からの祝福を受けることも拒んでいた。　ある日、彼は激しい歯痛に襲われ、その痛みにひどく苦しみ、どうやっても治すことができなかった。歯が痛んでいたそのボヤリンは、聖イオナが神聖な聖体礼儀を執り行っていた大聖堂にたまたま居合わせた。典礼が終わると、聖人はそのボヤリンを呼び寄せ、彼に祝福を与え、プロスフォラを授け、聖書からの教訓を説いた後、突然、自分の手で彼の頬を叩いた。その打撃の音は多くの人々の耳に届いた。
ヴァシリーは激しく叫んだ。
「痛っ、痛いぞ！　お前は俺の最後の歯まで打ち抜いたじゃないか！」
するとたちまち、患者は安堵感を覚え、歯の痛みも消え去った。彼は喜びながら家路につき、神に感謝し、神の御心に適う聖人イオナを称えた。
1451年、先祖たちの罪ゆえに、神の御許しにより、不信心なアガリア人によるロシアの地への侵攻が起こった。あるオルダンの公が多数のタタール人を率いて予期せずモスクワに迫り、その周辺を焼き払い、あらゆる方向から都市そのものを包囲し始めた。　至福のイオナ大主教は、聖職者一同を率いて十字行進を行い、祈りの歌を歌いながら城壁を巡り、多くの涙を流しながら、都と民のために神へ熱烈な祈りを捧げた。
聖イオナは、チュドフ修道院の修道士で、アントニーという名の、徳高い生活で知られ、かつ自身が面識のあった一人の老僧を見かけると、彼に向かって次のように語りかけた。
「わが子、わが兄弟アントニーよ！慈悲深き神と聖母マリアに、この街とすべての正教徒を不信心なアガリアンたちから救い出していただけるよう、祈ってほしい。」
アントニーは彼にこう答えました：

「偉大なる聖人よ！　神と、私たちの力強く迅速な助け手である聖母マリアに感謝します。聖母はあなたの祈りを聞き入れ、御子である私たちの主イエス・キリストに懇願され、あなたのためにこの街とすべての正教徒が救われるようお取り次ぎになりました。　敵であるアガリアンたちは、まもなく目に見えない力によって打ち負かされ、追い払われるでしょう。ただ私一人だけが、主の御心により、敵の手によって殺される運命にあるのです。

長老がそう言い終えるや否や、タタール人が放った矢が彼を貫き、彼はまもなく息を引き取った。その後、彼はイオナ都主教と全聖職者たちによって、栄誉をもって埋葬された。

そして、7月2日の聖母マリアの衣の安置の祝日が訪れると、タタール人の間に大混乱が生じた。突然、彼らに恐怖と戦慄が襲いかかり、目に見えない力に追われるかのように、彼らは街から逃げ出したのである。

聖イオナ大主教は、聖母マリアの祈りによってアガリアンから救われたことを記念し、その日のうちに、自身の庭に聖母マリアの衣の安置を祝う教会をできるだけ早く建立するよう命じた。というのも、その日、彼らは都市への包囲を解いたからである。

その後、長い年月が経ち、聖イオナは深き老齢に達し、尊い最期を迎えるにあたり、神から彼女に関する次のような啓示を授かった。

大聖堂の守衛であるマクシムという名の男が、ある夜、職務の一環として教会の周囲を巡回していたところ、教会の扉が開いているのを見つけ、中にはろうそくが灯り、司祭たちが賛美歌を歌っているのが見えた。彼はひどく驚いて、そのことを鍵番である司祭ヤコブに伝えようと走って行った。

ヤコブは急いで向かったが、教会は以前と変わらず施錠されていたものの、内部からは明かりが漏れていた。彼は扉の鍵を開け、聖堂に入ったが、そこには誰もいなかった。ただ、ろうそくだけが灯っていた。彼は恐怖に襲われたその時、祭壇の方から声が聞こえてきた。

「ヤコブよ！　行って、わがしもべであるミトロポリトのイオネにこう伝えよ。彼は魂の救いのために、肉体の病を私に求めているが、私はその願いを聞き入れた。私は彼の足に、彼が死ぬような腫れ物を送る。　間もなくこの世を去ることになるのだから、大牧者の責務として課せられた務めを、遅滞なく終えるようにせよ。」その声を聞いたヤコブは、恐怖と戦慄に襲われ、戸惑い、その幻視のことを誰にも、聖イオネ自身にさえも話さなかった。

朝、夜明けとともに、聖イオナはヤコブを呼び寄せ、こう尋ねた。

「ヤコブよ、昨夜どこにいたのか。何を見て、何を聞いたのか。なぜ、私について明らかにされたことを私に告げなかったのか。」

ヤコブは恐れおののき、聖人の足元にひれ伏して言った。

「師よ、お許しください！　私はこのことをお話しする勇気がありませんでしたが、聖霊があなたにこのことを啓示されたことがわかります。」

聖人は言った。

「神があなたを赦してくださいますように、わが子よ。しかし、神はあなたからあなたの妻を奪い取られるだろう。さあ、急いで彼女の魂の救いを考えなさい。そうすれば、彼女は悔い改めのうちに息を引き取ることができるだろう。」

それまで、門番の妻は全く健康だった。しかし、彼が家に戻ると、彼女はすでに病に伏しており、三日後に亡くなった。彼女は、悔い改めとキリストの聖なる秘跡の拝領によって、キリスト教徒としての義務をふさわしい形で果たしてこの世を去ったのである。

その後、偉大なる聖イオナ自身も長くは生きられなかった。聖霊の恵みと善行に満ち、*「神を畏れて聖なる務めを果たし」*（IIコリント7:1）、彼は高齢にして至福の死を遂げた。　聖人は足の潰瘍を患い、体は衰えたものの、精神は衰えることなく、病中も神の教会に通い続けた。

聖なる魂を神の御手に委ねる準備を整え、大公とその子孫、そして民全体を祝福し、祈りを口にしながら、1464年3月31日[2785]に主のもとへ旅立った。彼は12年半にわたり神の教会を牧会した。

聖イオナの死から数年後、大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチもこの世を去った。彼の後を継いだのは、息子の大公イオアン・ヴァシーリエヴィチ、すなわちロシアの独裁者であった[2786]。神の御心と、ゲロンティウス大主教閣下[2787]の祝福により、彼は以前の老朽化した教会の代わりに、新しい大聖堂（現在も現存している）を建設することを望んだ。

聖人にして奇跡行者であるペトロ大主教の尊い聖遺骨を運び出し、一時的に別の教会へ移した。

そして、古い教会が解体され[2788]、新しい大教会の基礎を築くための溝を掘り始めたところ、他の大主教たち――テオグノスト[2789]、キプリアン、フォティオス――および聖なる奇跡行者イオナの聖遺骨が発見された。

これらの尊い聖遺物が発見された際、大聖堂で追悼の礼拝が行われていたところへ、シメオンという名の7歳の少年が連れてこられた。彼は生まれてからずっと麻痺を患っていた。彼は、鐘楼にある聖ヨハネ・ラスティヴィチ教会で奉仕していた司祭ペトロの息子であった。　大聖堂の長老アレクシイは、その麻痺した少年を腕に抱き上げ、聖イオアンの聖遺物箱の足元に立たせ、彼を抱きかかえたまま、祈るように命じた。

その司祭に支えられながら、少年は祈りを捧げ、大声で叫んだ。

「雨が降っている！」

その日は晴れ渡り、空には雲ひとつ見当たらなかった。すると、その少年はたちまち元気を取り戻し、誰の助けも借りずに自力で家路についた。

皆はこの奇跡に驚き、神とその聖人イオナを賛美した。

1479年に聖母マリアの被昇天大聖堂の建設が完了すると、それは厳かに奉献され、聖なる大主教たちの尊い遺骨がそこへ移された。まず、聖なる奇跡行者ペトロ、次にテオグノストス、キプリアン、フォティオス、そしてこのキリストの御使い、イオンの遺骨である。　そして、彼の聖遺体は完全な状態で腐敗していなかったため、聖遺物箱に納められ、大聖堂内に公開された。現在もそこに安置されており、祈りを捧げに訪れる多くの信者たちに、求めている恵み[2790]をもたらしている。

ある時、ヨアンという名の、口が利けず何も話すことのできない男が、聖人の聖棺の前にやって来て、その尊い聖遺物に額を寄せ、聖なる御手に口づけをした。　どういうわけか、神の御摂理により、彼には聖人が手を伸ばし、自分の舌をつかんでしっかりと握りしめているように見えた。彼は大声で叫び始めた。その時教会にいた司祭や人々は、その叫び声に駆けつけ、なぜ口がきけない者が叫んでいるのかと首をかしげた。　聖人がその手を離し、舌が解放されたのを見て、ヨハネは叫ぶのをやめ、すぐに明瞭に話し始め、自分の舌がどれほど奇跡的に解かれたかを皆に語り始めた。そこに

[2785] 第1ソフィア年代記は、聖イオナの帰天について次のように記している。「6969年の夏、3月31日、キエフおよび全ルーシのミトロポリスである至聖なるイオナが帰天した。その時、彼の顔は、死者の常とは異なり、まるで眠っているかのように見えた。それは、彼が古の聖なる父たちと同様に、若き日から、偉大かつ輝かしい生涯を送っていたからである。我々は彼についてそう聞いていた。」

[2786] 1462年から1505年まで

[2787] 1473年から1489年まで

[2788] それは1472年のことだった。

[2789] 1328年から1353年にかけて

[2790] 聖遺物が発見された後、大公イヴァン・ヴァシリエヴィチはフィリッポ大司教と共に、著名なカノンおよび聖人伝の作者であるパホミイ・セルビンに、聖遺物発見を記念するカノンの作成を依頼し、大聖堂での地元の祝祭日を定めた。聖イオナの記念日を祝う教会全体の厳粛な祝日は、1547年にマカリー大主教の時代に制定された。

いた者たちは皆、その驚くべき奇跡に畏怖の念を抱き、神の御業を賛美しつつ、偉大なる奇跡行者である聖イオナを称え讃えた。

他にも多くの奇跡が、モスクワの聖イオナ大主教の尊い聖遺物から、信仰をもってそこを訪れるすべての人々のために、キリスト、すなわち私たちの神の栄光のために、父と聖霊と共に今、そして常に、世々限りなく賛美される方のために、今も起こり続けています。アーメン。

聖なる義人ヨセフ・プレクラースキーの伝

記念日：3月31日

魂も肉体も美しい、至福のヨセフ（[2791] ）は、旧約聖書の族長ヤコブの息子、イサクの孫、そしてアブラハムの曽孫であった。彼はヤコブの二番目の妻ラケルの間に生まれたが、ラケルは神が彼女の祈りを聞き入れ、子を産むことができるようにされるまで、不妊であった。　ラケルはまず少年ヨセフを産み、彼はヤコブにとって11番目の息子となった。ラケルの2番目の息子はベニヤミンで、イスラエルの12番目の息子であった。ベニヤミンの誕生後、ラケルは亡くなり、[2792] エフラタ、すなわちベツレヘム[2793] に埋葬された。 ラケルの息子たち、ヨセフとベニヤミンは、ヤコブにとって非常に大切な存在であった。なぜなら、神が彼の人生の晩年に彼らを　与えてくださった上、彼らは、その死を深く悲しんだヤコブにとって、最愛の妻ラケルを思い出させる存在だったからである。ヤコブは彼女を深く愛しており、彼女のために14年間、義父ラバンのもとで働いたほどであった。　さらに、ラケルの二人の息子は皆、品行方正で貞潔であり、愛すべき人物であった。とりわけ、幼い頃から聖霊の恵みに満たされていた祝福されたヨセフはそうであった。ヨセフが十七歳になったとき、彼は

[2791] ヨセフ――ヘブライ語で「増やす」「加える」の意。

[2792] ヤコブはラケルをエフラタ、すなわちベツレヘムへの道沿いに葬り、その棺の上に記念碑を建てた（創世記35:19）。ラケルの墓は、その後何世紀も経った後もよく知られていた（列王記上10:2）。地元のユダヤ人やイスラム教徒は、今なおラケルの墓を深い敬意をもって扱っている。アラブ人たちは、干ばつの際にここへ集まり、厳粛な祈りを捧げる。既婚女性はここから石の破片を持ち帰り、妊娠中に身につけている。　ラケルの記憶そのものは、その後の時代においても彼女の子孫たちの中に受け継がれていった。ベツレヘムの住民や長老たちは、ボアズとルツの結婚を祝福する際、ラケルがイスラエルにもたらしたのと同じような神からの幸福がボアズにもあるよう願った（ルツ記4:11）。預言者エレミヤは、ユダヤ人の捕囚の惨状を描き出す際、ラケルをイスラエル人の始祖として、息子たちを失い、その死を嘆き悲しむ姿として描いている（エレミヤ書31:15）。　マタイによる福音書は、預言者が描いたこの悲痛な出来事の中に、ヘロデによるベツレヘムの幼児虐殺という、これと同様に悲痛な別の出来事への示唆を見出している。ベツレヘムの子供たちはラケルの子孫であり、彼女はその母として、子供たちがいないことを嘆き悲しんでいるのである（マタイ2:18）。

[2793] ベツレヘムはパレスチナの町である。旧約聖書では、ユダヤの偉大な王ダビデの生誕地として知られ、新約聖書ではイエス・キリストの生誕地として知られている。　エルサレムから南へ2時間の場所に位置し、2つの丘の上に広がっている。その斜面にはブドウ畑が豊かに広がり、麓には手入れの行き届いた穀物畑が連なっている。この肥沃さから、おそらく「ベツレヘム」という地名そのものも由来している（ヘブライ語で「パンの家」）。　古代にはエフラファ（ミカ書5:2）（ヘブライ語で「実を結ぶ」の意）と呼ばれていた。　救い主キリストの誕生以来、ベツレヘムはすべてのキリスト教徒にとって聖地となった。オスマン帝国によるパレスチナ占領（15世紀）以前、ベツレヘムは幾度となく完全に破壊され、その頃には完全に荒廃していたが、19世紀初頭になってようやくその荒廃から立ち直った。　現在は、人口6000人ほどの小さな町であり、住民はアラブ人で、その半数が正教会、半数がカトリック教徒であり、「ベイト・ラフム」（「肉の家」の意）という名称で呼ばれている。主イエス・キリストが生まれた馬小屋、あるいは洞窟があった場所には教会が建っており、その祭壇の下に洞窟がある。　その壁と床は大理石で仕上げられている。誕生の地とされているのは、洞窟内の窪みで、5つの銀製のランプで照らされている。床には、ラテン語の碑文「Hic de Virgine Maria Jesus Christus natus est（ここに聖母マリアよりイエス・キリストが生まれた）」が刻まれた銀の星が埋め込まれている。　この場所からわずか3歩のところに、キリストが寝かされた飼い葉桶があったとされる窪地がある。洞窟の北西には、祭壇や礼拝堂、そして聖ヒエロニムス（420年）が埋葬されている洞窟がある狭い地下通路が伸びている。

他の母親から生まれた兄弟たちと共に、父の羊の群れを飼うようになった。　兄弟たちの罪深い行いを見て、ヨセフはそれに加わることを嫌った。それどころか、兄弟たちを愛し、彼らの魂を救いたいと願ったヨセフは、彼らの不義のいくつかを父ヤコブに報告し、父が父として彼らを懲らしめ、それによって神の怒りを家から遠ざけるようにした。　ヤコブは、ヨセフにそのような知恵と、貞潔さと神への畏れが備わっているのを見て、彼をますます愛し、彼のために色とりどりの服を縫ってあげた。一方、兄弟たちはヨセフを激しく憎んだ。ある者は、彼が自分たちの罪深い行いに加わらず、それを父に告げたからであり、　また、ある者は、父が自分たちよりもヨセフを愛していたからである。彼らはヨセフと友好的に話すことができず、彼に対して悪意のある告発をでっち上げ、父に誹謗中傷した。しかし、ヤコブはヨセフの無実をよく知っていたため、彼らの言葉を信じなかった。

その頃、ヨセフの中に宿っていた聖霊は、夢の中で、預言者として彼に、将来の人生に関わるすべてのことを明らかにし始めた。ヨセフは何も隠すことなく、そのことを父と兄弟たちに語った。

「聞いてください」と彼はある日言った。「私が見た夢のことです。夢の中で、野原の真ん中で私たちが束を縛っているところ、私の束はまっすぐに立ち上がり、その周りに立っていたあなたたちの束が、私の束に頭を下げたのです。」

すると、兄弟たちは彼にこう言った。

「まさか、お前が私たちを支配し、私たちを治めるつもりなのか？」

そして、彼らはその夢のせいで、彼をますます憎むようになった。その後、ヨセフは別の夢を見て、それも父と兄弟たちに語った。

「私は夢を見た」と彼は言った。「太陽と月、そして十一の星が私にひれ伏していたのだ。」

これを聞いた父は、ヨセフを叱りつけ、こう言った。

「その夢は一体どういう意味だ？　まさか、私や君の母（継母のリア）、そして兄弟たちが、君の前にひれ伏して地面に頭をつけるというのか？」

父は見せかけのために彼を叱った。それによって、兄弟たちのさらなる怒りから息子を守ろうとしたのだ。しかし実際には、この夢はヤコブの心に深く刻み込まれていた。彼は心の中でこう考えた。「これは一体どういうことだろうか。主はこの徳の高い若者に、ご自身の慈しみをもって皆を驚かせようとしておられるようだ」。

そして心の中で、彼はそれを喜んでいた。一方、兄弟たちはヨセフをますます憎み、彼に害を加えようと企んだ。

ある時、兄弟たちがシケムで羊の世話をしていた時[2794]、ヨセフは父と共にヘブロンの谷にいた。子思いの父は、シケムにいる息子たちのことを案じ、最愛の息子ヨセフにこう言った。

「さあ、子よ、兄弟たちのところへ行って、彼らが元気かどうか、羊の群れが無事かどうかを見てきて、すぐに私のところへ戻ってきなさい。」

その命令に従い、ヨセフは兄弟たちのところへ行き、父からの挨拶を伝えるために出発した。一方、ベニヤミンはまだ幼かったため、父のもとに残った。ヨセフはシェケムの荒野をさまよったが

[2794] シェケムは、約束の地にある古代の都市である。サマリアのエフレムの山に位置し、エルサレムから18時間、ナザレから16時間の距離にあり、アプリコット、桃、ザクロ、プラム、バラ、ミルタの木が豊かに実るガリジムとゲバルの谷間にある。アブラハムが初めてここを訪れたとき、ここにはモレの樫の森しかなかった（創世記12:6）。しかし、ヤコブがメソポタミアから戻ったときには、この場所はすでにシェケムの町と呼ばれていた（創世記33:18–19）。ヤコブはシケムの父エモルから畑の一部を買い取り、そこに天幕を張り、祭壇を築き、主なる神の御名をイスラエルと称した（創世記33:19–20）。これは、約束の地におけるヤコブの唯一の所有地であった。その近くには、おそらく新約聖書（ヨハネ4:5–6）にも言及されているヤコブの井戸があったと思われる。ヤコブはヨセフをこの地へ兄弟たちのところへ遣わし、ヨセフはこの付近で兄弟たちによってイシュマエル人に売られたのである。　シケム近郊の土地は、ヤコブが死の直前にヨセフに贈り、ヨセフはここに埋葬された（ヨシュア記24:32）。現在、シケム、すなわちナブルスはサマリア人の居住地となっている。

、どうしても 兄弟たちを見つけることができなかった。 彼らの安否を案じ始めたその時、ある男に出くわし、その男は彼にこう尋ねた。

「何を捜しているのか、若者よ？」

彼は答えた。

「兄弟たちを探しているのです。もし彼らがどこで羊の群れを放牧しているか知っていたら、教えてくれませんか？」

すると、その男は彼にこう言った。

「彼らはここを去った。彼らが『ドファイムへ行こう』と言っているのを聞いたからだ。」[2795]

そして、その男はヨセフに道案内をした。ヨセフは兄弟たちの後を追って行き、ドファイムで彼らを見つけた。遠くから彼らを見たとき、ヨセフは彼らを深く愛していたので、大いに喜んだ。兄弟たちもまた、遠くから彼を見かけた。彼が彼らに近づく間もなく、彼らはまるで野獣のように彼に激怒し、どうすれば彼を殺せるか相談し始めた。彼らは互いにこう言った。

「ほら、あの夢見屋がやってくる。さあ、今こそ彼を殺して、穴に投げ込もう。その後で、獣に食べられたとでも言おう。そうすれば、彼の夢が果たして実現するかどうか、見てやろう。」

長兄のルベンはこれを耳にし、兄弟たちの殺意からヨセフを救おうと、彼らにこう言った。

「彼を殺してはならない。兄弟の血を流してはならない。むしろ、荒野にあるあの穴に彼を投げ込もう。そこで一人で死なせておけばよい。だが、あなたがたは彼に手を下してはならない！」

ルベンはこうして、無実の若者を死から救おうと考えていた。彼は密かにヨセフを穴から引き上げ、父のもとへ帰そうとしていたのだ。

羊のように柔和なヨセフは、兄弟たちの悪意について何も知らなかった。彼は兄弟たちのところへ歩み寄り、父に代わって挨拶を述べながら、親しげに彼らに口づけをした。 しかし、兄弟たちはまるで獣のように彼に襲いかかり、彼が着ていた色とりどりの服を剥ぎ取った。彼らはまるで彼を生きたまま食い尽くそうとするかのように、彼に向かって歯をぎしぎしと鳴らした。彼らはヨセフを拳で殴り、あらゆる虐待を加えた。その憎悪に満ちた様子の中で、兄弟たちは彼にとって獰猛で容赦のない存在に見えた。 ヨセフは、もはや誰かが自分のために立ち上がってくれるなどとは期待していなかった。そこで彼は声を張り上げ、涙とすすり泣きを交えながら、兄弟たちに慈悲を乞い始めた。

「なぜそんなに怒っているのですか？どうか私を少し解放して、私の願いを聞いてください。兄弟たちよ！父が母の死を毎日嘆いていることは、あなたたちもよく知っているはずです。古い傷がまだ癒えていないのに、まさか父に新たな傷を負わせようというのですか。 お願いです、私を父から引き離さないでください。さもないと、父は悲しみのあまり墓場へ行ってしまいます。 私は、私たちの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブの神（マルコ12:26）――アブラハムに、父の地と家を離れて約束の地に住むよう命じられた神（創世記12:1–3）、――アブラハムの子孫を、天の星のように（創世記15:5）、あるいは海辺の砂のように（創世記28:14）数えきれないほどに増やすと約束された神。 私は、アブラハムが息子イサクを犠牲に捧げようとした際に彼に意志の力を与え、息子の代わりに犠牲として捧げるための子羊を送られた至高の神の名によって、あなたがたに誓わせます（創世記23:1–19）。 私は、私たちの父ヤコブを、その父イサクの口を通して祝福された（創世記27:27–29）、またメソポタミアのハラン（創世記28:10–19）[2796] ――アブラハムが出発した地――に

[2795] ドファイムは、ファヴォル山とエズドリロン谷の近くにある町である。ここにはガリラヤからエジプトへと続く道があり、さまざまな商品を積んだキャラバンがそこを往来していた（創世記37:25）。 現在、この名は、サマリアの北、広大な平野の南東側に位置する、山麓に泉のある一つの緑豊かな丘に受け継がれている。

[2796] メソポタミア――すなわち「二つの川の間の地」、古代のセナアル（創世記10:10）――は、アブラハムがハランの地へ旅立つまでの出生地および居住地であり（創世記11:28、 使徒7:2）であり、ティグリス川とユーフラテス川の間に位置

おいてもヤコブを見捨てなかった聖なる神の名によって、あなた方に誓います。　そこで神はヤコブを災いから救い出されたのです！　これらすべてを挙げて、私はあなたがたに懇願します。死がヤコブをラケルから引き離したように、私をヤコブから引き離さないでください。さもないと、ヤコブはラケルの時と同じように、私のことを嘆き悲しむでしょう　、そして私の帰りを待ちきれずに目を閉じてしまうでしょう。どうか私を憐れみ、父のもとへ帰らせてください！

こうしてヨセフは、父たちの神の名を挙げて兄弟たちに懇願した。しかし、残酷な兄弟たちは彼に少しも憐れみを示さず、神を恐れることもなく、ヨセフを穴に引きずり込んだ。ヨセフは彼らの足にすがりつき、泣きながら言った。

「兄弟たちよ！私を許してください！」

しかし、彼らは彼を穴に投げ込んだ。その穴はかつては深く暗い井戸だったが、後に干上がっていた。その穴の中に座り、ヨセフは苦々しい涙を流し、父を呼び求めた。

「父よ、あなたの息子に何が起きたか見てください！私はまるで死人のように穴に投げ込まれました。あなたは私の帰りを待っているのに、私は今、まるで強盗のように穴の中に横たわっています。父よ、あなた自身が私にこう言いました。『行って、兄弟たちと家畜の様子を見て、早く私のところに戻ってきなさい』と。」　ところが兄弟たちは、私を凶暴な狼のように扱い、怒りに任せて私をあなたから引き離してしまった。優しい父よ！あなたはもう私の姿を見ることも、私の声を聞くこともできません。そして私も、あなたの老後の慰めになることはできません。私はもうあなたの白髪を見ることはないでしょう。なぜなら、私は死んだ者よりもひどい扱いを受けて、穴に埋められてしまったからです。　父よ、あなたの子供のために泣いてください。あなたの子供が、父であるあなたのために泣いているように！　だって、私はこんなにも若いうちにあなたから引き離されてしまったのですから！　誰が私に、人間の言葉を話す鳩を授けてくれるでしょうか。その鳩が飛んで行って、私の悲しみをあなたに伝えてくれるように。私にはもう涙も残っておらず、嘆き声のせいで声さえ失ってしまいました。　私の悲しみを和らげるものは何一つない！おお、大地よ、大地よ。義人アベルが不当に殺されたとき、聖なる神に叫び求めた大地よ。私たちの先祖代々から伝えられているように、大地もまた、義人の血のために叫び求めたのだ（創世記4:10）！どうか今、私のために父ヤコブのもとへ行き、私の兄弟たちが私にしたことをすべて彼に伝えてください！

こうしてヨセフは穴の中で疲れ果てるまで泣き続け、彼を慰める者は誰もいなかった。

一方、残酷な兄弟たちは、ヨセフを穴に投げ込んだ後、喜び勇んで食べたり飲んだりし始めた。彼らは、まるで敵を打ち負かしたり、都市を攻略したりしたかのように、陽気に、そして盛大に宴を繰り広げていた。　その宴の最中、彼らはガリラヤからエジプトへ向かうイシュマエル人の商人[2797]が近づいてくるのに気づいた。商人たちには、乳香や没薬、その他の香料を積んだラクダが従っていた。その時、ヤコブの四男ユダが兄弟たちに言った。

し、南はペルシャ湾、北はアルメニアの山脈に囲まれた地域を指す。　より狭義には、メソポタミアとはこの地域の北部、いわゆるエル・ジェジールを指し、一方、南部はバビロニアとして知られており、現在のイラク・アラビ、すなわち古代のバビロニアにあたる。 ローマ時代、この地域は二つの部分に分けられていた。西側のオズロエナは紀元217年にローマの支配下に入り、首都はエデッサであった。東側のミグドニアは、ローマ皇帝トラヤヌスによって紀元115年に征服され、首都はニジビダであった。　メソポタミアにおけるキリスト教の始まりは、使徒トマスの同伴者であったユダ、あるいはファデオス（伝承によれば、主イエス・キリストの70人の弟子の一人）によってもたらされたとされる。ニジビダの近郊では、聖エフレム・シリン（3〜4世紀）が生まれた。　ニジスの司教トマス・バルスマは、父から永遠に生まれた神の御言葉が、人間イエスの中にただ宿り、彼と特別な道徳的結合を保っていたと説いたネストリウス派の異端の熱心な擁護者であった。　11世紀、セルジューク朝の侵攻により、メソポタミアは衰退の一途をたどり、現在はトルコに属している。住民はアラブ人、クルド人、アルメニア人、シリア人である。

[2797] イスマイル派は、アブラハムとハガルとの間に生まれた息子イスマイルの子孫である（創世記16:2）。

「兄弟を殺してその血を隠したところで、何の得がある？　いっそ、このイスマエル人たちに売り渡して、遠くへ連れて行ってもらったほうがましだ。ヨセフは異国の地で死ぬことになるし、そうすれば我々は実の兄弟を殺した殺人者にはならない。」

残りの兄弟たちはユダに同意した。彼らは行って、ヨセフを穴から引き上げた。通りかかったイシュマエル人たちは、ヨセフに三十枚の金貨を支払った。この売買の際、ルベンはそこにいなかった。彼はどこかへ行ってしまっていたのだ。　戻ると、ルベンは穴へと向かったが、そこにはヨセフの姿はなかった。そこで彼は自分の服を引き裂き、兄弟たちのところへ戻って言った。

「穴には少年がいない！　私はどうすればよいのか？　父が彼を嘆き悲しむのを、私はどう耐えられようか？」

ルビムはヨセフを気の毒に思った。

ヨセフを連れ去った商人たちは、旅の途中でエフラタのラケルの墓がある場所までたどり着いた。そこは、ヤコブがメソポタミアから帰還した際にラケルが亡くなった場所であった。ヨセフは母ラケルの墓を目にするやいなや、すぐに駆け寄り、その墓に身を投げ出した。　そして、大声で、苦々しい涙を流しながら、こう言った。

「ラケルよ、わが母よ！　地から立ち上がり、あなたが愛したヨセフを見てください！　私に何が起きたか見てください。見よ、異邦人たちが私をエジプトへ連れ去ろうとしています。兄弟たちは私を彼らに奴隷として売り渡したのです。しかも、悪人のように裸のまま売られてしまいました。ヤコブは、私が売られたことを知りません。　母よ、あなたの棺を開けて、私を受け入れてください！あなたの棺が、私たち二人にとって一つの死の床となりますように！ああ、ラケルよ！あなたの息子を連れて行ってください。異国の地で、彼がもはや死を待つことのないように。ラケル、私をあなたの元へ連れて行ってください！　ヤコブとの別れは、母よ、あなたとの別れと同じように予期せぬものでした。私の嗚咽と心の苦悩があなたの耳に届くように、どうか私をあなたの棺に迎え入れてください。もう泣くことさえできません。涙は枯れ果て、私の魂は泣き叫ぶことで疲れ果ててしまいました。ああ、ラケル、ラケル！　まさか、あなたは息子ヨセフの願いを聞き入れないというのですか？　あなたの息子は力ずくであなたから引き離されようとしているのに、あなたは彼を引き留めようともしない。私はヤコブを呼び求めたが、彼は　私の声を聞き入れなかった。今、私はあなたを呼び求めているのに、あなたは私の声に耳を傾けようとしない。　たとえここで、あなたの墓の前で死ぬことになっても、悪人のように異国の地へ行くことは決してない！

ヨセフを買ったイシュマエル人たちは、彼が墓にひれ伏しているのを見て、互いにこう言った。

「この若者は魔術を使って、我々から逃げ出そうとしている。何か厄介な目に遭わされないよう、しっかりと縛り上げよう！」

彼に近づくと、彼らは悪意を込めてこう言った。

「立ち上がれ、魔術はもうやめろ。さもないと、この墓の上で殺してやる。お前のために払った金を無駄にしたくないのだ！」

ヨセフが立ち上がると、イスマエル人たちは、彼の顔が苦い涙で腫れ上がっているのを見た。そして、一人ひとりが同情を込めて彼に尋ね始めた。

「なぜこの墓を見て、そんなに悲しげに泣いたんだ？　怖がらずに、君が誰で、何のために売られたのか教えてくれ。君を売った羊飼いたちは、私たちにこう言った。『道中で逃げ出さないよう、彼を見張っておけ。もし逃げたとしても、それは私たちの責任ではない。警告はしたからな』と。」　さあ、真実を話してくれ。君は誰の奴隷なのか？　あの羊飼いたちのものか、それとも他の誰かか？　そして、なぜそんなに愛おしそうにこの墓に寄り添っていたのか、説明してくれ。我々は君を買い取ったのだから、君の主人だ。奴隷として、すべてを話してくれ。もし我々から何かを隠すなら、他に誰にその悲しみを打ち明けるというのか？　お前は我々の奴隷だろう？あの羊飼いたちは、お

前が我々から逃げ出すかもしれないと言っていた――それが我々の心配の種だ。さあ、落ち着いて、率直に、お前が一体何者なのかを話してくれ！お前は我々の目には主人のように映っている。我々は、お前を奴隷としてではなく、愛する兄弟として見たいのだ。　あなたの美しい容姿と知性は、あなたが王の前に進み出て、他の貴族たちと共に敬意を払われるにふさわしいことを私たちに示している。あなたのあらゆる長所は、あなたが大きな権力を手に入れることを物語っている。だから、私たちがあなたを連れて行く先でも、私たちの友でいてほしい。これほど賢く、高潔で、美しい若者を、誰が愛さないというのか？！

ヨセフはため息をつき、彼らにこう答えた。

「私はあなたたちに売られはしましたが、奴隷でも、泥棒でも、魔術師でもなく、そもそも何の罪も犯していません。　私は父の愛する息子であり、母がまだ生きていた頃も、母の愛する息子でした。あの羊飼いたちは私の兄弟たちです。父は彼らの安否を確かめるために彼らのもとへ私を送り出しました。彼らが山からなかなか戻ってこなかったので、子思いの父は心配して、私を彼らの様子を見に行かせたのです。ところが彼らは私を捕らえ、あなたたちに奴隷として売ってしまったのです。　私の兄弟たちは、父が私を愛しているのを見て嫉妬し、それが原因で私を父から引き離したのです。ここに置かれている棺は、私の母の棺です。私の父ヤコブがハランから以前住んでいた場所へ移り住んだ際、母はここで亡くなり、この墓に葬られました。

これを聞いたイスマエル人たちは、同情を込めてこう言った。

「恐れるな、若者よ！　エジプトでは、あなたに大きな栄誉が待っている。その容姿こそが、あなたの高貴さを物語っている。悲しむ必要はない。むしろ、理由もなくあなたを憎んだ嫉妬深い兄弟たちから、今や遠く離れていることを喜べ。」

一方、ヨセフの兄弟たちは、彼を売った後、山羊を連れてきて屠り、その血でヨセフの服を染め上げ、それを父ヤコブに送り、次のように伝えた。

「この服を山中で見つけ、それが私たちの兄弟ヨセフの服であると分かり、私たち皆が悲しみに暮れました。ヨセフ本人を見つけることはできませんでしたが、彼の色とりどりの服をあなたのもとへ送りました。これがあなたの息子のものかどうか、確かめてください。私たち皆、これがヨセフの服であると認めました。」

息子の服だと分かったヤコブは、泣き叫び、苦々しく嗚咽しながら言った。

「これはわが子の服だ。猛獣に食われてしまったのだ！」

そしてヤコブは自分の服を引き裂いた。ぼろ服を身にまとい、嗚咽しながらこう言った。

「なぜ、お前の代わりに私が食べられなかったのか、わが子よ！　なぜ、あの獣は私を捕らえて腹を満たし、お前を無傷のまま残しておかなかったのか？　なぜ、あの獣は私を引き裂かなかったのか？　ああ、なぜ私がその餌食にならなかったのか！　ああ、悲しい、悲しい！　私の心はヨセフを深く悼んでいる！ああ、悲しや、悲しや！わが子が殺された場所はどこなのか。そこへ行って、その美しさを前にして、この白髪を振り乱して嘆き悲しみたいのだ。もうヨセフなしで生きる気はない！わが子よ！お前の死の原因は私にある！兄弟たちや家畜の様子を見に荒野へ送り出したことで、私はお前を殺してしまったのだ！ああ、わが子よ！　私は冥界へ下るその日まで、泣き悲しみ続けるだろう！　あなたの死体の代わりに、私は涙を流しながらあなたの服を目の前に置いている。しかし、それにはもう一つの理由で、私をさらに落胆させる。その服はすべて　無傷であり、私は、あなたの体を食らったのは獣ではなく、人の手によって捕らえられ、殺されたのだと思う。　もし本当に、お前の兄弟たちが言っていたように獣に食べられたのなら、その服は引き裂かれていたはずだ。なぜなら、獣はまず服を剥ぎ取ってから、その後に体を食べるようなことはしないからだ。もし獣がまず服を剥ぎ取り、その後でお前を食べたのなら、服は血で汚れてはいなかったはずだ。　この服には、爪の跡も歯の跡もない――では、なぜ血が付いているのか。もし砂漠に獣しかおらず、強盗がいなかったなら、私はあなたが獣に食べられたことを嘆き、強盗に殺されたなどとは想像もできなかっただろ

う。　私はヨセフのことを思うと悲しみに沈むが、彼の服は私にさらに別の、それ以上に深い悲しみをもたらす。かくして、私には二つの不幸がある。私は涙ながらに、彼の服がどのように脱がされたのか、そして彼の体がどのように殺され、あるいは食べられたのかを考えるだろう。　私は死ぬだろう、ヨセフよ、私の光であり支えである君よ。そして、君の衣も私と共に黄泉へと下って行け。君なしでは、ヨセフよ、私はこの光を見る気はない！

そして、ヤコブは長い間、ヨセフを悼み続けた。ヤコブの息子たちや娘たちは皆、彼を慰めようと集まったが、彼は慰めを受け入れようとはせず、こう言った。

「悲しみを抱いて、私は息子のもとへ陰府へ下るのだ！」

その間、イシュマエル人たちは、ヨセフの美しさを売り物にして、どこかの高官から多額の金を手に入れられると期待し、急いで彼をエジプトへと連れて行った[2798]。彼らがエジプトの街を歩いていると、ファラオの宮廷人[2799] ペンテフレイが彼らに出くわした。彼はヨセフを見て、イシュマエル人たちにこう言った。

「商人たちよ、教えてほしい。この若者はどこから来たのか？　彼はあなたたちとは全く似ていない。あなたたちイスマエル人の間には、これほど美しい若者はいないからだ。」

彼らは彼にこう答えた。

「この若者は非常に聡明で、名門の家柄に属しています。」

ペンテフレイは喜んで彼らからヨセフを買い取り、彼らが望むだけの代金を支払った。宮廷人は彼を自分の家へ招き入れ、あらゆる手段を尽くして彼の過去の生活を知ろうとした。義人アブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるヨセフは、ペンテフレイのもとで徳高く、大いなる柔和さをもって暮らし、主は彼と共におられた。　ヨセフは誠実で清らかな生活を送っていた。その顔つきや言葉からは、彼が貞潔であり、神を畏れていることが見て取れた。彼は、父祖たちの「すべてを見通す神」を決して忘れなかった。その神こそが、彼を穴での死や、憎むべき兄弟たちから救い出してくださったのである。ヨセフが悲しんだのは、ただ父ヤコブのことだけだった。　ペンテフリアのもとで暮らすうちに、ヨセフは彼の好意を勝ち取り、気に入られた。ペンテフリアは、ヨセフと共にいる主が、彼の手に委ねられたすべてのことをうまく整えておられるのを見て、彼を家全体の長に任命し、すべての財産――領地、村々、奴隷、そして家内経済――を彼の手に委ねた。　ペンテフリュス自身は、ヨセフのいる間、自分の食卓で食べる食事以外は何も知らなかった。彼は、ヨセフが誠実であり、彼の手に委ねられた財産がますます増え続けていることをはっきりと見ていた。ヨセフのために、神はエジプト人の家を祝福された。　すべての男奴隷と女奴隷は、ヨセフのもとで生活が豊かで、何不自由なく、あらゆる面で満たされていたため、彼に大変満足していた。

ヨセフは端正な容姿と美しい顔立ちをしていた。ペンテフリアの妻はその美しさに心を奪われ、悪魔的な愛が彼女の心に燃え上がった。彼女はあらゆる手段を尽くして無垢なヨセフを誘惑しようとし、彼と一晩を共に過ごしたいと強く願った。　ヨセフを惑わすため、ペンテフリュスの妻は多くの策略を弄した。一時間ごとに衣装を着替え、顔を洗い化粧をし、首にはネックレスを飾った。さらに、彼女は様々な身振り手振りや下品な笑い声、不貞を誘う言葉で、ヨセフの清らかな魂を惑わせようとした。　しかし、これらすべての策略は、結局は彼女自身を破滅させるだけだった。ヨセフは彼女の装飾品など目にも留めず、彼女と罪を犯そうなどとは微塵も思わなかった。　神への思いと神への畏れが、あらゆる誘惑から彼を守っていた。そこで、ペンテフルの妻は、自分の装飾品がすべて効果をなさないのを見ると、さらに姦淫の炎に燃え上がり、この貞潔な若者にどう働きかければよいか

[2798] エジプトは、地球上で最も古い国家の一つであり、はるか古代のうちに比較的高い文化水準と市民意識に達していた。同国は、ナイル川の両岸に広がるアフリカの狭い沿岸地帯を占めている。　かつてエジプトはアラビア半島の北西端と直接接していたため、アジアとアフリカの住民は互いに極めて活発な交流を持っていた。エジプトとシリア、パレスチナとの地理的な近接性、そしてその卓越した肥沃さが、古代オリエント史におけるエジプトの重要な意義を説明している。

[2799] ファラオとは、古代エジプトの王たちの総称であり、エジプト語から訳すと「王」を意味する。

分からなくなった。　その後、彼女は再び、恥知らずな言葉で彼を罪へと誘い込もうと企んだ。彼女の中に潜む蛇の毒が彼女の口を開かせ、彼女はヨセフにこう言った。

「私と一緒にいて、何も恐れることはないわ。それどころか、もっと大胆になって。そうすれば、私はあなたの美しさを、あなたは私の優しさを味わえるから。」　誰をも恐れる必要はない。すべての使用人は私たちに従っているし、この家全体はあなたの支配下にあるのだから。誰も私たちのところに入ってくることはなく、私たちの会話も、私たちの関係も知る者はいない。もし夫を恐れて私の提案に同意しないのなら、私が彼を毒殺してやる。

しかし、無垢な若者は、依然として悪徳から身を守り続けていた。彼の肉体も魂も、打ち負かすことはできなかった。ヨセフはこの嵐の中で倒れることはなかった。神を畏れ、彼は主人の妻のあらゆる誘いを拒んだ。貞潔を保ちながら、彼は彼女にこう答えた。

「お嬢様、私は神を畏れているため、あなたと罪を犯すことはできません。」　私の主人は、家事も農作業もすべて私に任せておられます。私の権限が及ばないものなど何一つありません。ただ、奥様、あなただけは例外です。主人のそのような愛を拒み、その家でこれほど不適切な行いに及ぶことは、私にとって罪深いことです。そうすれば、人間のあらゆる秘密をご存知である神を怒らせてしまうでしょう。

ヨセフは、このような言葉やそれに類する言葉で、主人の妻を諭した。　しかし、この蛇のような女は、何を聞こうともせず、むしろ情欲にますます燃え上がっていた。ヨセフを罪に誘い込もうと、彼女はただそのための好機と機会を伺っていた。ヨセフは、女主人が自分を誘惑しようとしているのを見て、しばしば先祖の神に祈りを捧げ、こう言った。

「わが先祖、アブラハム、イサク、ヤコブの神よ、この災いから私をお救いください！　主よ、この狂った女が、その悪行によって気づかれないうちに私を滅ぼそうとしているのを、あなたご自身もご覧になっています。主よ、あなたは私を兄弟たちの殺意に満ちた手から救い出してくださいました。今、この貪欲な獣から私を救い出してください。さもないと、主よ、あなたを深く愛した私の先祖たちから、私は疎外されてしまうでしょう。

ヨセフは祈りの中で、ヤコブにもこう呼びかけました。

「わが父ヤコブよ、神に私のために熱心に祈ってください！敵が私を神から引き離そうとしているのですから、私のために祈ってください。女による罪深い死は、兄弟たちの手による死よりもさらに恐ろしいものです。あの死は私の肉体を滅ぼそうとしたが、この女は私の魂を神から引き離そうとしているのです。父よ！　あなたの神への祈りのおかげで、私は穴での死から救われました。今こそ、恥も神への恐れも持たないこの女が私を突き落とそうとしている罪の穴から、私を救ってくださるよう、至高なる御方の御前で祈ってください。私が兄弟たちのところへ行ったとき、彼らは私に野蛮な仕打ちをし、獰猛な狼のように、私をあなたから引き離しました。　そこで、私はさらに獰猛な獣に出くわした。どうか、尊い師よ、あなたの息子ヨセフである私のために祈ってください。私が私たちの神の前で魂を死なせないように。

ヨセフは依然として不屈の姿勢を貫いていたが、その主人は彼を自分に引き寄せる好機を待ち続けていた。ある日、ヨセフが用事で家に入った。家には誰もいなかった。すると突然、主人がヨセフを捕らえ、寝台へと引きずり込んだ。 彼女は服を脱ぎ捨て、彼に姦淫を強要し始めた。 貞潔で聖なる青年は、彼女の厚かましさを見て、その裸から顔を背け、力ずくで振りほどいて外へ駆け出した。彼の上着は女主人の手に残された。こうしてヨセフは悪魔の罠をすべて断ち切った。鷲は狩人を見かけると、さらに高く舞い上がるものだ。

ヨセフもそうしました。彼は、その女の罠に引っかかって罪を犯すことを望まなかったため、その女から逃げ出したのです。　一方、ペンテフリアの妻は、ヨセフが自分の手から逃れたのを見て、ひどく怯え、大きな恐怖に襲われた。さらに、彼女は恥じ入った。彼女は、夫が若者に怒りを抱き

、嫉妬のあまり彼を殺してしまうよう、どうすれば彼をうまく誹謗中傷できるか考え始めた。彼女はこう考えた。

「ヨセフが死んでしまったほうがよい。彼の死は私を楽にしてくれる。私は、あのような美しさを目の当たりにして、それを楽しまずにはいられない。それなのに、彼は私を軽蔑しているだけだ。」

その後、彼女は大声で男奴隷や女奴隷を呼び寄せ、こう言った。

「見てごらんなさい、このユダヤ人の奴隷が私に何をしたか！　夫は彼に家中の権限を委ねたのに、彼は最も恥知らずな方法で私を強姦しようとしたの。　家を取り仕切るだけでは満足できず、私までも夫から奪おうとしたのです。彼は私のところに来て、「私と寝なさい」と言いました。それに対し、皆さんもお聞きになった通り、私は大声で叫びました。ヨセフはその叫び声を聞いて怖がり、自分の服を私に置き去りにして逃げ出しました。

その話を聞いた者たちは皆、この出来事に驚いた。なぜなら、ヨセフがこれほど厚かましいとは誰も予想していなかったからだ。ペンテフレイが王宮から現れると、彼の妻はヨセフの服を取り出し、彼に見せた。そして、貞淑な女性を装い、ヨセフを非難し始めた。彼女はこう言った。

「あなたはこのユダヤ人を、私たちを辱めるために連れてきたのね。まさか、彼に私をこれほど侮辱し、傷つけるよう教えたの？　彼は家の中で私一人を見つけたのに、私を強姦しようとしたのよ。 もし私が叫ばず、 家来たちが私の叫び声に駆けつけなかったなら、彼は強姦を犯していたでしょう。なぜなら、弱い私には、彼のような力強い者の手から逃れることはできなかったからです。私が叫んだこと、そしてその叫び声に家来たちが駆けつけてくるのを聞いたとき、彼は自分の服を私に置き去りにして家から逃げ出しました。

ペンテフレイはすぐにこの偽りの言葉を信じ、ヨセフに対して激しく怒りを燃やした。彼はヨセフを縛り上げ、牢獄へ送るよう命じた。ペンテフレイは、神がヨセフのために与えてくださった家内および農業の繁栄を忘れてしまったのである。　妻の言葉を確かめもせずに、ペンテフレイは無実のヨセフを裁いた。しかし、人々の心を見抜くアブラハム、イサク、ヤコブの神は、ヨセフを見捨てず、御自身の憐れみをもって彼を見守られた。ヨセフは獄吏の好意を得て、まるで自由の身であるかのように暮らした。　主なる神は、御自身を畏れる者を決して見捨てられない。こうしてヨセフは、ペンテフルの下で暮らしていた時と同じように、獄吏のもとで暮らした。ヨセフがあらゆる面で忠実であることを見た獄吏は、彼を刑務所全体の管理者とした。

その後のある日、エジプトのファラオの宮廷人である、食糧担当の最高責任者と酒の担当の最高責任者の二人が、主君に対して過ちを犯した。ファラオは激怒し、彼らをヨセフが収監されていたのと同じ牢獄に投獄した。

彼らが牢獄で過ごすようになってから数日が過ぎた。ヨセフは、彼らが誠実な人々であったため、あらゆる面で彼らを助けていた。ある日、ある同じ夜に、二人とも近い将来を予兆する夢を見た。ヨセフはいつものように朝になって彼らのところへ行き、彼らが困惑し、悲しげな様子であるのを見つけた。彼は彼らに尋ねた。

「なぜ今日は皆、悲しそうな顔をしているのですか？」

彼らは彼にこう答えました。

「昨夜、私たち一人ひとりが夢を見ましたが、その意味を解き明かしてくれる人がいないため、悲しんでいるのです。」

するとヨセフは彼らにこう言った。

「唯一の神は、全知なるお方として、もしお望みになれば、神を畏れる人々に夢の意味を明らかにしてくださる。皆、それぞれの夢を話してください。神が私を通して、その意味をあなた方に明らかにしてくださるでしょう。」

首席の酒飲み係は、彼に次のような夢を語った。

「私は目の前にぶどう畑があり、その中にぶどうの木があるのを見ました。その木には三本の若い枝が生えており、それらは熟した実をつけていました。私の手にはファラオの杯がありました。私はそれを手に取り、ファラオの手に差し出しました。」

すると、ヨセフは彼にこう答えました。

「あなたの夢の意味はこうです。三本の枝は三日間を意味します。三日後、ファラオはあなたのことを思い出し、憐れんで、ここから解放し、再び以前の職に就かせてくれるでしょう。その時、以前と同じように、あなたはファラオに杯を差し出すことになるでしょう。　主よ、あなたが安泰な時、どうか私のことを思い出して、私に恩恵を授けてください。ファラオに私のことを取り上げていただき、ここから解放してくださるようお願いします。私はユダヤの地から誘拐されてきたのです。この国では、私は何の罪も犯していません。私が牢獄に閉じ込められたのは、ただ悪意によるものなのです。

宮廷の食糧担当官は、ヨセフが友人の夢をこれほど見事に解き明かしたのを見て、ヨセフにこう言った。

「私も夢を見ました。夢の中で、私の頭の上に、様々な食べ物が入った三つの籠がありました。鳥たちが飛んできて、私の頭の上の食べ物を啄んでいました。」

ヨセフは彼にこう答えた。

「あなたの夢の意味はこうです。三つの籠は三日間を表しています。三日後、ファラオはあなたの首を切り落とし、木に吊るすでしょう。そして鳥たちがあなたの死体をついばむのです。」

三日目、すなわちファラオの誕生日に、ファラオはすべての重臣と家臣たちのために宴会を開いた。その宴会の席で、彼は首席の酒務官と首席の食糧管理官のことを思い出し、二人を連れてくるよう命じた。　彼らの件を調査したファラオは、首席のパン職人を絞首刑に処し、首席の酒飲み係を以前の栄誉ある地位に復帰させた。しかし、この酒飲み係はヨセフのことをすっかり忘れてしまい、ファラオに彼について一言も言及しなかった。

二年後、ファラオは不思議な夢を見た。彼は川辺に立っている夢を見た。すると、川から七頭の、見た目が良く、体がふっくらとした太った雌牛が現れた。それらの雌牛は川岸で草を食み始めた。その後、川から別の七頭の、見た目が悪く、体がやせ細った雌牛が現れた。それらは最初の雌牛たちのそばで草を食み始めた。　すると突然、その7頭の痩せた雌牛が、他の7頭の肥えた雌牛を食い尽くしてしまった。それにもかかわらず、彼女たちは満腹になることはなく、以前と変わらず痩せたままだった。そこでファラオは目を覚ました。 再び眠りにつくと、彼は別の 夢を見た。一つの茎から、七つの実りの多い立派な穂が伸びた。その後、風で枯れ果てた七つの穂が育った。これらの枯れた穂は、実りの多い七つの穂を食い尽くしてしまった。

この夢は、目を覚ましたファラオをひどく動揺させた。彼はエジプトのすべての魔術師や賢者を呼び寄せ、その夢を語った。　その誰一人として、この夢を解き明かすことはできなかった。悪魔に仕える占星術師たちが、天の神の測り知れない神秘を理解できるはずがないではないか。ファラオはこれに深く悲しんだ。その時、首席の酒務官は、牢獄で自分の夢を解き明かしてくれたヨセフのことを思い出し、ファラオに言った。

「今になって、主よ、私は自分の罪を思い出しました。あなたが私たち、あなたのしもべたちに怒りを燃やし、私と首席のパン配給官を牢屋に閉じ込められた時、私たち一人ひとりが、ある夜、それぞれの将来に関する夢を見たのです。　そこには、ペンテフリティの奴隷である若いユダヤ人も私たちと一緒に収監されていました。私たちは彼に自分の夢の話をすると、彼はそれを解き明かしてくれました。彼の言った通りになりました。王よ、あなたは私を赦し、以前の地位に復帰させてくださいましたが、彼については死刑を命じられました。

これを聞いて、ファラオは喜び、急いでヨセフを牢から連れてくるよう命じました。彼は囚人として髭が伸びきっており、ぼろ服を着ていたため、髪を切り、服を着替えさせられました。ヨセフはファラオとその高官たちの前に出ました。ファラオは彼に言いました。

「お前は極めて賢明で思慮深く、夢を解き明かすことができると聞いた。私はある夢を見たが、誰もその意味を説明してくれない。さあ、お前がその夢を解き明かしてみよ。」

ヨセフは答えた。

「天の神は、お望みになれば、人々に理解しがたい秘密を明らかにすることができます。神なしには、いかなる吉兆も知ることはできません。」

そこでファラオは、すべての貴族たちの面前で、ヨセフに、肥えた牛と痩せた牛、実った穂と枯れた穂、そして痩せたものが肥えたものを食い尽くし、枯れたものが実ったものを食い尽くしたという、すでに前述した夢について語り始めた。　預言の霊に満たされたヨセフは、その夢を解き明かし、未来を予言し始めた。すなわち、七年間、エジプト全土に富と実りの豊かさがもたらされること、それが七頭の肥えた雌牛と七本の満ちた穂によって示されていると語ったのである。

これらの年が過ぎると、激しい飢饉が訪れるだろう。それは、肥えた牛を食い尽くしたやせ細った牛や、実の詰まった穂を食い尽くしてもなお満腹にならなかった七つのやせ細った穂が示している。かつての豊かさは至る所で忘れ去られ、飢饉が全地を荒廃させるだろう。 7年後に訪れる飢饉により、大地の豊穣は跡形もなく消え去り、その飢饉は極めて厳しいものとなるだろう。そして、これが必ず実現することは、神が王であるあなたに、牛と穂という二つの夢を通じて同じことを示されたことからも明らかである。　さあ、この貧しいあなたのしもべの助言をお聞きください。賢明で分別のある人物を選び、その者をエジプト全土の総督に任命してください。　これから訪れる七年間の豊作の期間中、エジプト全土の収穫の五分の一を徴収しなければなりません。小麦やあらゆる穀物は、王の倉庫に蓄えてください。同様に、すべての町でも穀物を集めて保管させ、七年間の飢饉に備えて食糧を蓄えてください。そうしなければ、エジプト全土がその飢饉によって滅びてしまうでしょう。

ファラオとその高官たちは、ヨセフの預言的な言葉と賢明な助言に驚いた。そしてファラオは高官たちに言った。

「神の霊が宿っている、彼のような人物を、我々は見つけられるだろうか。」

それからファラオはヨセフにこう言った。

「神がこれらすべてをあなたに啓示されたのだから、あなたほど分別があり、賢明な者はいない。私の宮殿においても、私の王国全体においても、あなたは私に次ぐ第一の地位に就く。エジプト全土があなたの命令に従うことになる。ただ王位においてのみ、私はあなたより上である。」

ファラオは自分の指から指輪を外し、それをヨセフの指にはめた。それから、ヨセフに緋色の衣を着せ、首には金の鎖を掛けた。その際、彼はこう言った。

「今日、私はあなたを全エジプトの第二の王に任命する。あなたなしには、私は手を上げることなどできない。そして、エジプト全土において、あなたの命令なしに何かを行うことを敢えてする者は誰もいないだろう。」

ファラオはヨセフに、エジプト名「プソンフムファニク」、すなわち「世界の救い主」という名を授けた。　ファラオの命令により、ヨセフは王の戦車の二番目に乗せられ、街中を練り歩かされた。その際、布告役たちは、エジプトに第二の王が立てられたと叫び続けた。王の重臣たちは皆、戦車を囲むように歩いて進み、第二の王にファラオ本人と同じような敬意を払った。

なんと驚くべき変転であろうか。神の御加護により、この義なる若者に一瞬にして訪れたこの変転は、神こそが、彼を王や高官たちと共に座らせるために、いかに高めて栄光を与えるかをご存知だからである！ ああ、神よ、あなたの義なる裁きよ！ 主よ、あなたはこうして、無実のヨセフを誹謗から清められました。こうして、侮辱されたこの義人を慰め、この世においてさえ、その清さと忍

耐に対してこれほど栄光に満ちた報いを与えられたのです！　ましてや、来世においては、あなたの聖なる御使いたちに、なおさら大きな報いを与えられることでしょう！

ヨセフを牢獄に投獄したあの高官ペンテフレイは、ヨセフが偉大な栄光のうちにファラオの戦車に乗ったという驚くべき出来事を知ると、ひどく恐れました。恐怖と戦慄を抱きながら家に帰り、妻にこう言いました。

「ああ、妻よ、エジプトでどれほど信じがたい出来事が起きたか、あなたは知らないだろう！私たちにとっては、それは非常に恐ろしいことだ！　我らの奴隷であったヨセフは、今や我々だけでなく、エジプト全土の主となった。万人に称賛され、今やファラオの戦車に乗っている。恐怖と戦慄のあまり、私は彼の顔を見ることもできず、貴族たちの前からこっそりと立ち去ったのだ。

このことを知ったペンテフリアの妻は、夫にこう言いました。

「何も恐れることはありません。今、私はあなたに自分の罪を告白します。私はヨセフを狂おしいほど愛していました。　彼と一緒に過ごし、その美しさを堪能できるよう、私はいつも身だしなみを整え、彼を魅了しようとしていた。しかし、その願いは叶わなかった。彼が私の誘いに応じてくれなかったため、私は力ずくで彼を私と寝るように強いた。しかし、貞潔なヨセフは私から逃げ出し、その服を残していった。私があなたに見せたのは、その服だ。　私は、彼が私を強姦しようとしたかのように、彼を誣告した。こうして、私のおかげで彼は王の権力とこれほど大きな名声を得たことになる。もし私がヨセフを愛さず、彼が牢獄ではなく私たちの家に住んでいたなら、彼の美徳と知恵は隠されたままで、称賛されることはなかっただろう。　彼は、私が彼のそのような名声と尊敬の源となったことを、喜んでくれるはずです。この義に満ちた高潔なヨセフを恐れる必要はありません。彼は私たちの間に起きたことを誰にも話しておらず、おそらくその寛大な心ゆえに、私たちを許してくれるでしょう。さあ、他の高官たちと共に彼に拝礼に行きましょう。

彼女たちは行って、戸惑いながらもヨセフに拝礼した。ヨセフは彼女たちに少しも怒りを抱かず、二人の間にあったことを誰にも話さなかった。

ファラオはヨセフを、ペンテフリアの娘アセネフと結婚させた。ただし、そのペンテフリアとは、ヨセフが仕えていたあのペンテフリアではなく、別の者であった。前者は宮廷の重臣であったが、後者はヒリオポリス（[2800]）、すなわち「太陽の都」の祭司であった。ヨセフがエジプトで統治を始めた時、彼は三十歳であった。 彼の予言通り、7年間にわたり、その地は確かに豊かな収穫をもたらした。この間、ヨセフはエジプト全土を巡り、小麦やあらゆる農作物を集め、各都市に貯蔵した。彼は海の砂のように膨大な量の小麦を蓄えたため、後にその量を測ることさえできなかった。その量は数え切れないほどだったからである。　七年間の飢饉が始まる前に、ヨセフとアセネフの間には二人の息子が生まれた。長男はマナセ、次男はエフライムと名付けられた。しかし、七年間の豊作が過ぎ去り、七年間の飢饉が訪れた。日ごとに、国中の飢餓は深刻さを増していった。エジプト全土で、王室の食糧備蓄を除いて、どこにもパンは残っていなかった。　エジプト全土が飢餓に苦しんだ。民はファラオにパンを請い求めた。ファラオは彼らをヨセフのもとへ送り出した。ヨセフは王室の穀物倉を開き、すべてのエジプト人にパンを売り始めた。飢餓が全土を覆っていたため、あらゆる国々から人々がエジプトにやって来て、ヨセフからパンを買った。

大飢饉は、ヤコブが住んでいたカナンの地にも及んだ。老いたヤコブとその息子たちは、飢えで衰弱し始めていた。エジプトに多くのパンがあることを知ったヤコブは、息子たちに言った。

「なぜ、何か手を打たないのか。エジプトでは小麦がたくさん売られていると聞いた。そこへ行って、少しばかりのパンを買ってこい。そうすれば、飢え死にすることはないだろう。」

[2800] イリオポリスは、下エジプト南部で最も古く、最も有名な都市の一つである。ここには司祭養成学校が存在し、エジプト人の最も重要な聖典の一つである『死者の書』やその他の聖典がここで誕生した。ここにあった太陽神殿は、すべてのファラオが心を砕いた対象であった。イリオポリスの遺跡は、マタリエ村（カイロの北）の近くにある。

ヨセフの十人の兄弟たちはエジプトへと向かった。末っ子のベニヤミンは父のもとに残った。ヤコブが彼を兄弟たちと一緒に旅立たせなかったからである。ヤコブはこう言った。

「彼にも、兄のヨセフと同じような災いが道中で起こるかもしれない！」

イスラエルの息子たちはエジプトに到着した。彼らと共に、同じ目的――エジプトの地の支配者ヨセフが皆に売っていた小麦を買うこと――を持った多くの他国の人々もやって来ていた。　兄弟たちはヨセフの前に進み出て、地にひれ伏して礼をした。ヨセフは兄弟たちを見るやいなや、すぐに彼らだと気づいた。彼は厳しい口調で、まるで怒っているかのように、彼らに尋ねた。

「どこから来たのか？」

彼らは答えた。

「私たちはカナンの地から来ました[2801]、パンを買うために。」

ヨセフは自分の夢を思い出し、それが実現し始めていることに気づいた。そこで彼は心の中で神を賛美した。それから、まるで怒っているかのように、再び彼らに言った。

「お前たちはスパイだ。この国の様子を探りに来たのか？」

すると彼らは言った。

「いいえ、ご主人様。私たちはあなたのしもべであり、正直な者たちです。食料を買いに来たのです。私たちは皆、一人の男の子供たちであり、決してスパイでも、偵察者でもありません。」

ヨセフは怒りを込めて彼らにこう言った。

「いや、お前たちはこの国の道筋を偵察しに来たのだ。」兄弟たちはひどく恐れ、自分たちの無実を証明しようと、自分の家や父について語り始めた。

「カナン地方には、義にかなった父がいます。以前は十二人の兄弟がいましたが、今は十一人になりました。　ここには十人がいます。兄弟の一人は、野獣に食われて荒野で亡くなりました。父は今でも彼を深く愛していたため、その死を嘆き続けています。もう一人の兄弟、末っ子は、父を慰めるために家に残りました。

ヨセフはこれに対し、彼らにこう言った。

「ほら、私が『あなたたちはスパイであり、密偵だ』と言ったのは正しかった。あなたたち自身がそれを証明しているからだ。ファラオの命にかけて誓うが、あなたたちの末の弟がここに来るまでは、ここから出て行くことは許さない。あなたたちのうちの一人を遣わして弟を連れて来させなさい。あなたたちはここに留め置かれる。そうすれば、あなたたちの言葉が真実か否かが明らかになるだろう。　もしあなたがたが末の弟をここに連れてこなければ、あなたがたは確かにスパイであり、密偵である。

こうしてヨセフは彼らにそう告げ、三日間彼らを監禁した。三日目に、彼は彼らを呼び寄せ、こう言った。

「私が残酷な拷問を行わないのは、ただ神を畏れるからに他ならない。もしあなたがたが本当に正直な人々であり、スパイや密偵ではなく、生き延びたいと望むなら、こうすべきだ。　あなたたちのうちの一人は、ここ牢屋に残りなさい。残りの者は家に帰り、買った小麦を父に届けてきなさい。そして、あなたがたが話している末の弟を、そこから私のところへ連れて来なさい。そうすれば、あなたたちの言葉が真実であることが証明される。もしこれに同意しなければ、あなたたちは殺されることになる。

彼らはこれに同意し、互いにヘブライ語でこう言った。

[2801] 「カナンの地」とは、アジア西部、地中海東岸に広がる広大な土地を指す。具体的には、ヨルダン川の向こう側、すなわちフェニキアやペリシテ人の地であり、これとは区別されるのが「ヨルダン川東岸の地」である。　近世においては、カナンの地とは通常、約束の地全体、すなわちヨルダン川の両岸にイスラエル人が居住するすべての土地を指す。

「この災いは我々が招いたものだ。我々は兄弟に対する罪の報いを受けている。彼が我々に懇願した時、その心の苦しみを無視してしまったからだ。我々は彼の言うことを聞かなかった。だからこそ、この悲劇が我々に降りかかったのだ。」

長兄のルベンが彼らに言った。

「あの時、私は『その少年を傷つけてはならない』と言ったではないか。お前たちは私の言うことを聞かなかった。今、彼の血の責任が私たちに問われているのだ。」

兄弟たちは互いに話し合っていたが、ヨセフが彼らの言葉を理解しているとは知らなかった。ヨセフは彼らから離れ、涙を流した。　その後、彼らに近づくと、ヨセフはシメオンを彼らのうちから連れ出し、彼らの目の前で縛るよう命じた。このシメオンは、誰よりもヨセフを憎み、ヨセフが穴に投げ込まれ、イシュマエル人に売られた際、誰よりも激しい憎悪を示した者であった。縛られたシメオンを、ヨセフは牢屋に入れるよう命じた。　他の兄弟たちについては、彼らの袋にパンを詰め、密かにそれぞれの袋に銀を戻し、旅の糧を与えるよう命じた。

その後、ヨセフは兄弟たちを解放した。兄弟たちはパンをロバに積み、カナンの地へと旅立った。ある時、彼らは休憩のために立ち止まった。兄弟の一人が、自分のロバに餌を与えようと袋を開けると、その口から自分の銀が見えた。彼は兄弟たちに言った。

「銀が返ってきた。私の袋の中にあった。」兄弟たちはこれに戸惑い、互いにこう言い合った。

「神は一体、私たちに何をお与えになったというのか！？」

父のもとへ戻ると、彼らはエジプトで自分たちに起きたすべての出来事を父に話した。それぞれの袋から小麦をこぼし出すと、兄弟たちはその中に自分の銀も入っているのを見つけた。それを見て、彼らはさらに恐怖に駆られた。

息子たちの話を聞き終えると、父は悲しげにこう言った。

「お前たちは私から子供たちを奪ってしまった。ヨセフもいない、シメオンもいない。まさか、私の命までも奪おうというのか。」

ルベンは父に言った。

「もし私が彼を父のもとへ連れ戻さなければ、私の二人の息子を殺してください。彼を私の手に委ねてください。」

ヤコブは答えた。

「わが子はあなたたちと一緒には行かない。弟が死んで、彼だけが私のそばに残っているからだ。もし彼が私の元を離れて旅に出れば、道中で弟のヨセフと同じような不幸に見舞われるのではないかと恐れている。そうなれば、あなたたちは私の老後を悲しみと共に墓へと追いやることになるだろう。」

カナン地方の飢饉は依然として猛威を振るっていた。エジプトで買い入れたパンがすべて食べ尽くされたとき、ヤコブは息子たちに言った。

「またエジプトへ行き、そこで少しパンを買ってこい。そうしなければ、私たちは飢え死にしてしまう。」

すると、ユダは彼にこう言った。

「あの地の主人は、私たちにきっぱりとこう言われました。『あなたがたの末の弟が一緒でなければ、私の前に顔を出してはならない』と。　もしベニヤミンを私たちと一緒に送ってくださるなら、私たちはエジプトへ行き、あなたのためにパンを買ってきます。もし送ってくださらないなら、行きません。その方は私たちにこう言われました。『あなたがたの末の弟があなたたちと一緒に来なければ、私の顔を見ることはできない』と。

ヤコブは言った。

「なぜ、エジプトのその方に『まだ兄弟が一人いる』と言って、私に災いをもたらしたのか。」

息子たちは彼に答えた。

「あの御方は私たちの身の上について尋ねてこられました。『お父様はまだお生きですか？兄弟はいますか？』と。私たちはすべての質問に答えました。まさか『兄弟を連れて来い』と言われるとは、私たちに知る由もありませんでした。」

その後、ユダは再び父にこう言った。

「その少年を私と一緒に送り出してください。彼を私たちと共に行かせてください。そうすれば、あなたも、私たちも、そして私たちの家族全員が死ぬことなく、生き延びることができるでしょう。　私はその少年を自分の責任で引き受けます。あなたが彼を私の手から取り戻すことになるでしょう。もし私が彼をあなたのところへ連れ戻さず、あなたの御前に立たせなければ、私は永遠にあなたに対して罪を犯した者となります。もしベニヤミンのせいで遅れていなければ、エジプトからパンを二度も運んで来ることができたはずです。

ヤコブは息子たちに言った。

「そうであるなら、あなたがたの望むようにしなさい。わが国の産物、すなわち、香油、蜂蜜、乳香、ピスタチオやその他のナッツ類を携えて行き、エジプトの君主への贈り物として差し出しなさい。さらに、あなたがたの袋の中から見つかった銀を返すために、その二倍の銀も持っていきなさい。　ベニヤミンも連れて行き、旅に出なさい。全能の神が、あなたがたがその人の好意を得て、シメオンとベニヤミンも一緒に帰れるようにしてくださいますように。私は、あなたがたが戻ってくるまでは、子供のない者だとみなすつもりだ。

ヤコブの息子たちは、贈り物と二倍の銀、そしてベニヤミンを連れてエジプトへ向かった。彼らはヨセフの前に現れた。ヨセフは彼らと一緒にベニヤミンがいるのを見て、家の管理人に言った。

「この人びとを家の中へ連れて行け。それから家畜を一頭屠って、昼食を用意せよ。正午には、彼らと一緒に食事をとるつもりだ。」

家臣はヨセフの命令に従い、兄弟たちを家の中に案内した。彼らがヨセフの家に入ると、互いにこう言い合った。

「我々がここに連れてこられたのは、袋の中に返された銀のせいであり、我々を誣告して奴隷として捕らえるためだ。」

そして彼らは家の管理人に言った。

「ご主人様、どうか私たちの話を聞いてください。お願いです。　私たちは小麦を買いにここへ来たのです。ところが、宿営地に着いて袋を開けてみると、それぞれの袋の中に銀が入っていました。誰がそこに入れたのか、私たちにはわかりません。そこで、袋の中にあった分として半分を返却し、残りの半分を小麦の代金として支払うために、倍の量の銀を持ってきました。

家の主人は彼らに言った。

「安心しなさい。恐れることはない。この宝物は、あなたがたの神、あなたがたの父の神があなたがたに送ってくださったのだ。」

それから、家長はシメオンを彼らのところへ連れて行き、足を洗うための水を持ってきて、彼らのロバには飼料を与えた。兄弟たちは贈り物を用意し、ヨセフの到着を待っていた。彼らが、ヨセフが彼らのために昼食を用意していると聞いていたからである。　ヨセフが家に入ると、兄弟たちは地にひれ伏して彼に礼をし、故郷から持ってきた贈り物を差し出した。ヨセフは彼らに尋ねた。

「あなたたちは元気か。また、あなたがたが話していた年老いた父は元気か。まだ生きているのか。」

彼らは答えた。

「あなたのしもべである父は元気で、まだ生きております。」

するとヨセフは言った。
「その方は神に祝福された方だ。」
兄弟たちは再び彼にひれ伏した。目を上げると、ヨセフは実の弟ベニヤミンを見つけ、尋ねた。
「あなたがたが私に話していた、あの兄弟のことか？」
彼らは答えた。
「はい、ご主人様。」
ヨセフはベニヤミンに言った。
「わが子よ、神の恵みがあなたの上にありますように！」
そう言いながら、彼は胸を打たれた。涙がこぼれそうになった。そこで彼は奥の部屋へ退き、そこで泣き崩れた。父ヤコブのことを思い起こしながら、ヨセフはこう言った。
「慈愛に満ちた父よ、常にあなたと共に生きる者たちは幸いである！私の王国全体でさえ、神に愛されるあなたにはふさわしくない！私はベニヤミンに、私のことを覚えているか、そして私があなたを愛するように、あなたも私を愛してくれているかと尋ねたかった。それゆえ、私は兄弟たちにベニヤミンも連れてくるよう命じたのだ。　父が健在で、弟も生きているという彼らの言葉を、私は信じられませんでした。嫉妬のあまり、彼らはあなたの最愛の（末の）息子であるベニヤミンまでも殺してしまったのだと思っていました。彼は私の同母の兄弟ですから、兄弟たちは私と同じように彼をも憎んでいたのです。　父よ、あなたが私たちのことを深く悲しんでおられることは分かっています。私はあなたの悲しみをさらに深めてしまいました。その悲しみはよく分かります。私たちのうち、あなたのそばに残っている者は誰もいないのですから。ああ、父よ！　私に関する悲しみだけで、あなたには十分ではなかったでしょうか。今、それにさらに別の悲しみが加わってしまいました。私がベニヤミンをここに連れてくるよう命じたことが、あなたのすべての苦しみの原因です。この私の行いは無情なものです。そうさせたのは、あなたに関する噂でした。私の優しい父よ、あなたが本当に生きているのかどうか、確かめたかったのです。ああ、もし誰かが私に、あなたの天使のような姿を再び見せてくれるなら！
こうしてヨセフは自分の部屋で静かに泣いていた。　それから、泣いた跡が目立たないように顔を洗い、涙をこらえて兄弟たちのところへ出た。彼は、自分とユダヤ人、そしてエジプト人たちに、それぞれ別々に昼食を振る舞うよう命じた。エジプト人はユダヤ人と同じ食卓を囲むことはできなかったからだ。羊飼いは誰であれ、エジプト人にとって嫌悪感を抱かせる存在だった。　食事の直前に、ヨセフは兄弟たちに、年長者から順に座るよう命じた。その際、彼はまるで手にした銀の杯で占いをしているかのように、一人ひとりの名前を呼び始めた。彼は杯を左手に持ち、右手の指で叩いて音を響かせた。一度叩くと、彼は目の前に立つ者たちに大声で言った。
「長兄の名はルベンだ。彼が真っ先に座れ！」
二度目を叩くと、ヨセフは言った。
「その次に生まれたのはシメオンだ。
そして、彼にも座るよう命じた。さらに叩くと、三番目に座るよう命じ、その後も一人ひとりの名を呼びながら、年齢順に座るよう命じた。この奇跡によって、ヨセフは皆に大きな恐怖を与え、皆は「この人は本当にすべてを知っている」と思った。
彼らの恐怖を和らげようと、ヨセフは急いで自分の食卓から食事を彼らに送らせた。その際、ベニヤミンには他の者たちの五倍の量を送った。皆が食べ、飲み、十分に満腹になった。
ヨセフは家政長に、兄弟たちの袋をそれぞれ小麦で無料で満たし、ベニヤミンの袋には、ヨセフが占いに使ったあの杯を密かに忍ばせ、その後に彼らを解放するよう命じた。
朝、兄弟たちは喜びながら町を出た。まだそれほど遠くまで行かないうちに、ヨセフの家の管理人が彼らに追いついた。彼は威嚇するように彼らを叱りつけ、泥棒だと言い、与えられた名誉に値

しない者たちだと罵った。善意に対して悪意で報い、エジプトの主人が飲み、占いに用いる杯を盗んだのだと。兄弟たちは言った。

「もし私たちが袋の中から見つかった銀を再び持ち帰ったのなら、どうしてあなたの主人の杯を盗むことができましょうか。あなたの奴隷のうち、その杯を持っている者がいれば、その者は死に、私たちは私たちの主人の奴隷となります。」

長官は同意した。

「お前たちの言う通りにしよう。袋を地面に置け。私が探してやる。」

彼らは急いでロバから袋を下ろした。長官は年長者から年少者へと順に探していったが、皆の予想に反して、その杯はベニヤミンの袋の中から見つかった。それを見た兄弟たちは、服を引き裂いた。彼らは口々に、ベニヤミンとラケルを脅すように罵った。

「ヨセフは私たちを支配しようとしたが、その報いとして獣に食われた。一方、お前は王の杯を盗むことを企て、それを実行に移した。父の偶像を盗みながら、『私は何も盗んでいない』と白状しなかったラケルの息子たちではないか。」

ベニヤミンは泣き崩れ、涙ながらにこう言った。

「私の父の神ご自身が、御心のままにラケルをこの世から召し上げ、私の兄弟の死の原因を知っておられる。ラケルとその子供たちを悼むヤコブを慰めてくださる神、今、私たち全員を見守り、私たちの心を知っておられる神、　――その神ご自身が、私があなたがたが言うように杯を盗んだのではなく、ましてやそんなことを考えたことさえないことをご存じです。私は、ヤコブの白髪を見ることも、その声を聞くこともないだろうということに誓って、これらすべてを賭けて、私は杯を盗んでいないと誓います！ ああ、私は悲しすぎる！ ああ、ラケルよ、私は悲しすぎる！ あなたの子供たちはどうなってしまったのか！　ヨセフは、人々が言うように野獣に食われてしまったというのに、私は異国の地で泥棒扱いされ、ここで奴隷として置き去りにされることになる。ヨセフは、野獣に食われようとしていた砂漠で助けを得られなかった。それと同じように、母よ、私も兄弟たちに助けを求めても無駄で、誰も私、あなたの息子を信じてくれないのだ！

長官にどう答えればよいか分からず、兄弟たちはベニヤミンを連れて町に戻った。彼らはヨセフのもとへ行き、彼の前にひれ伏した。

ヨセフは怒りを込めて彼らに言った。

「これが、私の恩に対するお礼か？　私があなたたちを重んじたのは、私が占いに使う杯を盗ませるためだったのか？　あなたたちは正直な人間ではなく、スパイであり、密偵であると言った私の言葉は、正しかったのではないか？」

ユダはこれに対し言った。

「我々は、主人に何と答えればよいのか、何を言えばよいのか、どう弁明すればよいのか分かりません。神が我々の罪を暴き、そのために我々に罰を下しておられるのです。ですから、主人よ、我々全員――我々も、その杯を持っていた者も――あなたの奴隷となります。」

ヨセフは答えた。

「いや、私はあなたが言うようなことはしません。私は神を畏れているからです。杯が見つかったその若者は奴隷として残りますが、あなたたちは無事で、父のもとへ帰ってください。」

そこでユダはヨセフに近づき、その足元にひれ伏して、こう懇願した。

「ご主人様、私が申し上げても、どうかお怒りにならないでください。ご主人様、あなたは僕たちに『父や兄弟はいるか』とお尋ねになりました。私たちは『父には二人の息子がおり、父は私たちよりも彼らを愛しておられました』と答えました。　そのうちのひとりは山で野獣に引き裂かれ、父は今もなおその子を悼んで泣いています。もうひとりの息子は、父が常にそばに置いており、その息子は老いた父の慰めとなっています」。ご命令に従い、主よ、私たちは末の弟をあなたのもとへ連れて参りました。ところが今、私たちは予期せずあなたに罪を犯してしまいました。　主よ、どうか

その少年の代わりに私を奴隷として残し、彼だけでも父のもとへ帰らせてください。私は彼を保証人として引き受けたのです。ですから、私は家へ帰ることはできません。末の息子を私たちの間に見ないやいなや、計り知れない悲しみで即座に亡くなってしまうであろう、私たちの父の悲惨な最期を、私は見たくありません。

ヨセフはこれらの哀れな言葉を聞き、皆が当惑と恐怖のうちに自分の前に立っているのを見た。また、ベニヤミンが服を引き裂き、泣きながらそこに立っている兄弟たちの足元にひれ伏し、 彼らに、ヨセフに自分をも彼らと共に帰らせてくれるよう頼んでほしいと懇願している様子も見た。この光景を目の当たりにして、ヨセフは心を動かされ、もはや自分を抑えきれなくなった。彼はすべてのエジプト人に退去するよう命じた。皆が退出し、兄弟たちだけが残ると、ヨセフは涙を流し、ヘブライ語で彼らにこう言った。

「私はヨセフ、あなたがたの兄弟です。父はまだお元気ですか？」

しかし、兄弟たちはヨセフの言葉を返すことができませんでした。彼を恐れていたからです。そこでヨセフは彼らに言いました。

「私はヨセフ、あなたがたがエジプトに売った兄弟です。あなたがたが父に言ったように、私は野獣に食われたのではなく、あなたがたによってイシュマエル人に売られたのです。あの時、私はあなたがた全員の足をつかんで懇願しましたが、誰も私を憐れんでくれませんでした。さあ、兄弟たちよ、悲しんだり、恐れたり、嘆いたりしないでください。 むしろ、私が王となっていることを喜びなさい。かつてあなたがたが父に『ヨセフは山で獣に食われた』と言ったように、今こそ行って、喜びをもって父にこう告げなさい。『あなたの息子ヨセフは生きています。彼は王座に座し、エジプト王国の笏を手にしています』と。」

ヨセフがこう話すと、兄弟たちは恐怖と戦慄に襲われ、まるで死人のように彼の前に立ち尽くし、自分たちが彼にどれほど多くの悪事を働いたかを思い返した。ヨセフは再び彼らに言った。

「今となっては、私を売ったことを恐れる必要はない。神は、あなたがたの命を救い、飢饉の間にあなたがたを養うために、あなたがたより先に私をここに遣わされたのだ。今、地には二番目の飢饉の年が訪れている。あと五年間は、耕すことも、種を蒔くことも、刈り取ることもできないだろう。 私をここに送ったのは、あなたがたではなく、神です。神は私をファラオの父とし、その家のすべてを治める者とし、エジプト全土の統治者となさったのです。さあ、急いで私の父のもとへ行き、私についてすべてを伝えてください。また、私の栄光についても伝え、父と家族全員をすぐにここへ連れてきてください。ここでは、あなたがた全員が満腹になるでしょう。

この言葉を言い終えると、ヨセフはベニヤミンの首に抱きつき、喜びの涙を流した。ベニヤミンもまた、ヨセフの首を抱きしめて泣いた。それからヨセフは兄弟たちのところへ歩み寄り、彼らにも口づけをした。彼は兄弟たちに怒ることはなく、寛大な心で、以前と変わらず彼らを愛していた。ファラオとその側近たちの耳に、ヨセフの兄弟たちがやって来たという噂が届いた。ファラオはヨセフに、一族全員をエジプトに移住させるよう命じ、最高の土地を与えると約束した。 ヨセフは兄弟たちに、金や銀、赤い衣といった豪華な贈り物を与え、家族全員をエジプトへ移住させるために必要な戦車、馬、ロバを与え、さらに旅の糧も用意して彼らを見送った。 さらに、ヨセフは自分の父にも高価な贈り物を送り、兄弟たちを喜んで父のもとへ送り出し、こう言った。

「道中で争うことなく、平和に、急いで父のもとへ行き、こう伝えてください。『あなたの息子ヨセフが、私たちにこう伝えてほしいと頼みました。「神は私をこのエジプトの地の支配者となさった。だから、父よ、喜んでここへ来てください。そうすれば、私はあなたの天使のようなお顔を見ることができます』」

彼らは急いで歩き、カナンの地に着くと、父にヨセフのことを話し、彼の言葉を伝えた。ヨセフの名を聞いたヤコブは、ため息をつき、涙を流し、悲しげに言った。

「なぜ、私の心を乱すのか。それは、私の愛する息子ヨセフの美しさを再び思い起こさせるためではないのか。なぜ、すでに消え去った私の心の悲しみを、再び燃え上がらせようとするのか。」

ヤコブは彼らの言葉を信じようとしなかった。すると、ベニヤミンが彼に近づき、その膝に口づけをして言った。

「これらの言葉は真実そのものです。」

そう言って、ヨセフから送られてきた贈り物と手紙を父に見せた。ヤコブはそれを信じて驚き、心に活気が戻った。彼は言った。

「わが子ヨセフがまだ生きているとは、なんと幸いなことか。死ぬ前に、彼に会いに行こう。」

ヤコブは喜び勇んで、急いでエジプトへ、息子のヨセフのもとへ向かった。ヨセフはヤコブが近づいてくるのを聞くと、王の戦車に馬を繋ぎ、父を迎えに出た。ヤコブはヨセフが乗って来るのを見て、老齢にもかかわらず戦車から降り、徒歩で彼に向かって歩み寄った。　ヨセフもまた戦車から降り、自身はもちろん、すべての重臣たちも共に徒歩で向かった。ヨセフが父に近づくと、まるでそれを持ちたくないかのように、手にしていた王の杖を地面に置いた。　それから、その杖にひれ伏すふりをしながら、父ヤコブにそのように頭を下げ、杖を差し出した。これは、王の紫の衣を身にまとった自分がイスラエルに頭を下げたことで、エジプト人たちが不快に思うことのないようにするためであった。　ヤコブが真っ先にヨセフのもとへ歩み寄り、彼の首を抱きしめて、その胸で長く泣き崩れた。ヨセフもまた、父の白髪を抱きしめ、口づけしながら泣いた。そしてヤコブはヨセフに言った。

「今なら安心して死ねる。わが子よ、お前を見ることができたのだから。」ヨセフはあらゆる栄誉をもってヤコブをエジプトの王都へ案内し、ファラオに紹介した。ヤコブはファラオを祝福した。ファラオは彼に尋ねた。

「おいくつですか？」

ヤコブは答えた。

「私は百三十歳です。この年月は短く、不幸なもので、私の先祖たちが生きた年数には及びません。」

ファラオはヨセフに、父と兄弟たちを最も良い土地に住まわせるよう命じた。エジプトの地で十七年間暮らした後、ヤコブは息を引き取り、先祖たちの元へ帰った。ヨセフは父の顔に顔を寄せ、父を嘆き悲しみながら泣き、その顔を何度も口づけした。

臨終の際、ヤコブはヨセフに、自分をエジプトに葬るのではなく、遺体をカナンの地へ運び、先祖たちの墓に葬るよう遺言した。そこでヨセフはファラオの高官たちに言った。

「もしあなたがたが私を好意的に受け入れてくださるなら、行ってファラオに伝えてください。私の父は、カナン地方に自ら掘った墓に自分を葬るよう、私に強く命じました。今、私は父を葬り、ここに戻ってきたいのです。」

ファラオはこれを許可した。ヨセフは旅立った。彼と共に、ファラオのすべての若き家臣たち、彼の家の長老たち、エジプト全土の長老たち、ヨセフの家族全員、彼の兄弟たち、そして父の家族全員が同行したため、その行列は極めて大勢となった。彼らはヨルダン川の対岸にあるアタドという場所にたどり着いた。　そこで彼らは七日間、ヤコブのために激しく泣き悲しみ、アブラハムが墓所として購入した二重の洞窟に彼を葬った。父を葬り終えると、ヨセフは兄弟たちや、彼と共に旅をした者たち全員を連れて、エジプトへ戻った。

父の埋葬の後、兄弟たちは互いにこう言った。

「もしヨセフが私たちの悪意を思い出し、私たちが彼に与えたすべての悪に対して報復してきたらどうするだろうか？」

彼らはヨセフのもとへ行き、こう言った。

「あなたの父は臨終の際、あなたにこう遺言しました。『兄弟たちの過ちと罪を赦し、彼らがあなたに陰険な仕打ちをしたことを許してやれ』と。今、私たち自身が、あなたに加えた悪事について、どうか私たちを赦してくださるようお願いします。」

ヨセフは、そう言われると涙を流した。兄弟たちは再び彼に言った。

「私たちはあなたのしもべです、主よ。」

ヨセフは彼らにこう答えた。

「恐れることはない、兄弟たちよ。私もまた神を畏れているからだ。あなたがたは私に悪を企てたが、神はそれを善に変えてくださった。だから、恐れることはない。私はあなたがたと、あなたがたの家族を養ってやる。」

ヨセフのこの言葉は、兄弟たちの心を大いに慰め、彼らは安らぎを得た。こうして、ヨセフと彼の兄弟たち、そして父の家族全員がエジプトに定住した。ヨセフは百十歳まで生きた。彼はエフライムだけでなく、マナセの子マヒルの子供たちまでも見届けた。死の直前、ヨセフは兄弟たちにこう言った。

「私は死にます。しかし、神があなたがたを顧み、この地から、私たちの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブに約束された地へと導き出される時、私の骨をここから連れ出してください。」

ヨセフは百十歳で亡くなった。彼はエジプトで棺に納められた。

最後に、私たちはヨセフによって描かれた私たちの主イエス・キリストを賛美します。[2802] 、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく賛美されますように。アーメン。

4月14日

4月1日（旧暦）

同日、聖なるイコンを崇敬したために牢獄に投じられ、拷問に耐え、830年頃、コンスタンティノープル近郊のアフシアで逝去した、私たちの尊い父マカリアス殉教者の記念日。

[2802] 教会の教えや聖なる教父たちによれば、義人ヨセフの生涯におけるいくつかの特徴は、予型的な意義、すなわち、イエス・キリストの生涯における、その屈辱と栄光の両面における特定の瞬間をあらかじめ示唆するものである。 ラケルの長子であり、ヤコブが他のどの息子よりも愛したヨセフ（創世記37:3）と同様に、主イエス・キリストもまた、聖母マリアの長子（マタイ1:25）であり、神の愛する御子である。聖エフレム・シリンが言うように、主は私たちすべてを救うために遣わされたのと同様に、少年ヨセフもまた、父ヤコブの懐から兄弟たちのところへ遣わされたのである。 また、ヨセフの残酷な兄弟たちは、近づいてくるヨセフを見て、彼が父からの平和の使者として来たにもかかわらず、彼に対して悪巧みを企て始めたように、冷酷なユダヤ人たちもまた、救い主を見て、「この人は確かに相続人だ。彼を殺せば、すべてが我々のものになる」（マルコ12:7）と言ったのである。ヨセフは兄弟たちの嫉妬によって異邦人に売られ、キリストもユダによって三十枚の銀貨で売られ（マタイ28:15）、その後、嫉妬ゆえに（マタイ27:18）異邦人に引き渡された（マタイ20:19）。 ヨセフは、妻ペンテフリアの罪深い誘惑に打ち勝った後、牢獄に閉じ込められ、主は世のすべての罪を自ら負い、墓に葬られた。 牢獄の中で、ヨセフは囚人たちに、ある者には赦しを、別の者には裁きを告げ、また、十字架にかけられた主は、共に十字架にかけられた二人の強盗のうちの一人に救いを告げ、その後、霊的に牢獄にいる者たちのところへ降りて説教をされた（Iペテロ3:19）。 牢獄から出た後、ヨセフはエジプト全土の統治者となり、新しい名と大きな栄誉を与えられ、エジプトだけでなく周辺の国々をも飢饉から救い、主イエス・キリストは、墓からよみがえられた後、天と地の一切の権威を授けられました（マタイ28:18） また、その御名によって、天にある者、地にある者、地下にある者のすべてのひざがひれ伏し、すべての舌が、「主イエス・キリストは、父なる神の栄光のために」と告白するのです（フィリピ2:10–11）。 それゆえ、義人ヨセフを「まことにキリストに似た者」（ヴァイの週の礼拝、小説教）として崇め、聖なる教会は、受難週の始まりである「聖なる月曜日」に彼を記念することを定めたのである。

同日、聖殉教者ゲロンティオスとヴァシリドの記念日。彼らは剣によって殉教し、また義人アハズの記念日でもある。

同日は、1299年に殉教した聖殉教者アヴラミオス・ブルガリアスの殉教記念日である。

聖母マリア・エジプトの伝記

記念日：4月1日

「王の秘密をしっかりと守ることは良いが、神の御業を明らかにし、宣べ伝えることは栄光である」（トビト12:7）――大天使ラファエルは、トビトの失明が奇跡的に癒やされた際、このように語った。　確かに、王の秘密を守らないことは恐ろしく破滅的であり、神の栄光に満ちた御業について沈黙することは、魂にとって大きな損失である。　「そして私も――」と、聖マリア・エジプトの伝記を著した聖ソフロニオスは言う――「沈黙によって神の御業を隠してしまうことを恐れ、また、神から与えられた才能を地中に埋めてしまったしもべに降りかかる災い（マタイ25:18, 25）に迫る災いを思い起こし、神から与えられた才能を地中に埋めてしまった僕に降りかかる災いを思い起こし、私に伝えられたこの聖なる物語を語らずにはいられない。そして、この驚くべき出来事に疑念を抱く者がいたとしても――聖ソフロニオスは続ける――私があえて虚偽を記したなどとは、誰も思わないでほしい。聖なる事柄について嘘をつくことは、私にふさわしくないからだ。　もし、この文章を読み、この輝かしい出来事に心を打たれながらも信じようとしない人々がいたとしても、主が彼らに憐れみをお与えになりますように。なぜなら、彼らは人間の弱さを思い巡らし、聖なる人々に起こるそのような奇跡的な出来事を不可能だと考えているからです。　しかし、すでに我々の家系で起こったこの栄光ある出来事について語り始めなければならない。

パレスチナのある修道院に、敬虔な生活と賢明な言葉に恵まれ、若き頃から修道者の務めに勇敢に励んできた長老が住んでいた。その長老の名はゾシマであった。　（たとえ名前が同じであっても、このゾシマが異端者だなどとは誰も思わないでほしい。一人は悪名高く教会から疎外されていたが、もう一人は義人であり、称賛されていたのだ。）ゾシマは断食の修行のすべての段階を踏み、偉大な修道士たちが伝えたすべての規則を守っていた。　これらすべてを実践しつつ、彼は神の御言葉から学ぶことを決してやめなかった。就寝する時も、起床する時も、仕事をしている時も、食事をとる時も（彼がごく少量しか口にしなかったものを「食事」と呼べるならの話だが）、　彼は絶え間なく、たゆまず一つのことを行っていた――神聖な賛美歌を歌い、神聖な書物から教えを求め続けたのである。　彼は幼少の頃から修道院に預けられ、そこで53歳になるまで断食の修行に勇敢に励んだ。しかしその後、彼はすでに完全な境地に達しており、もはやいかなる教えも必要としないのではないかという考えに悩まされるようになった。

「この世に――と彼は考えた――私を導き、私がまだ経験したことのないような断食の模範を示してくれる修道士がいるだろうか？ 荒野に、私を超える人物がいるだろうか？」

長老がそう思索にふけっていると、天使が現れてこう言った。

「ゾシマよ！　あなたは人間の力の及ぶ限り熱心に修行に励み、断食の試練を立派に乗り越えた。しかし、自分が完全な境地に達したと断言できる人間などいない。　、君には知られていない、そして君が歩んできたものよりも困難な修行がある。救いへと通じる他の道がどれほどあるかを知るために、最も栄光ある族長アブラハム（創世記12:1）のように、自分の国を離れ、ヨルダン川のほとりにある修道院へ向かいなさい。」

その教えに従い、ゾシマは幼少の頃から修行に励んできた修道院を出て、ヨルダン川へと向かい、神の声が導いたその修道院にたどり着いた。

修道院の門を手に押して開けると、ゾシマは門番の修道士を見つけ、自分のことを話した。門番は修道院長にそのことを伝え、院長は訪れた長老を自分のところへ呼ぶよう命じた。ゾシマは修道院長の元へ行き、修道士としての慣例に従って深々とお辞儀をし、祈りを捧げた。

「兄弟よ、あなたはどこから来たのか」と修道院長は尋ねた。「そして、なぜ私たちのような貧しい老僧たちのところへ来たのか」

ゾシマはこう答えた。

「私がどこから来たかについては、語る必要はありません。父よ、私は魂の益を求めて参りました。あなた方について、魂を神へと導くことのできる、偉大で称賛に値する多くのことを耳にしたからです。」

「兄弟よ」と、修道院長はこれに対し言った。「心の病を癒やすことができるのは神お一人だけです。神が、あなたにも私たちにも、魂の益となる御自身の道を示してくださいますように。人は、絶えず自分自身を省み、神の助けを借りて弛まぬ努力を続けなければ、他人を正すことはできません。 しかし、キリストの愛があなたを、私たちのような貧しい老僧たちの元へ訪ねさせるように導いたのなら、そのために来たのなら、私たちと一緒にいてください。私たちの救いのために御自身の魂を捧げられた慈愛に満ちた羊飼いが、私たちすべてに聖霊の恵みをお与えくださいますように。

そう言い終えると、ゾシマは修道院長に頭を下げ、祈りと祝福を願い、修道院にとどまった。そこで彼は、善行と敬虔さで輝き、燃えるような心をもって、絶え間ない賛美、徹夜の祈り、たゆまぬ労働によって主に仕える長老たちを見た。 彼らの口からは常に詩篇が歌われ、無駄話は決して聞かれず、一時的な富の獲得や世俗の心配事などについては何も知らなかった。彼らにはただ一つの絶え間ない願いがあった——それは、自らの肉を死なせることである。 彼らの主たる、そして絶え間ない糧は神の言葉であり、肉体には、神への愛が許す限り、パンと水で養っていた。これを見て、ゾシマは教訓を得て、これから待ち受ける試練に備えた。

長い時が流れ、聖なる大斎の日々が訪れた。修道院の門は閉ざされ、修道院の用事で誰かが派遣される場合のみ開かれた。その一帯は人里離れた場所であり、一般の人々は訪れるどころか、この修道院の存在すら知らなかった。

その修道院には、神がゾシマをそこに導かれた理由となる慣習があった。 大斎の最初の週、聖体礼儀の際、皆が主の聖なる御体と御血を拝領し、少量の斎食を口にした。その後、全員が教会に集まり、熱心なひざまずいた祈りの後、長老たちは互いに別れを告げた。そして、一人ひとりが頭を下げて、旅立つ者たちのために、これから待ち受ける試練への祝福を修道院長に求めた。 その後、修道院の門が開かれ、詩篇*「主は私の光、私の救い。誰を恐れるべきか。主は私のいのちの砦。誰を恐れるべきか」*（詩編26:1）を歌いながら、修道士たちは荒野へと出て、ヨルダン川を渡っていった。修道院に残ったのは、たった一人か二人の長老だけだった。それは財産を守るためではなく——そこには盗むようなものは何もない——礼拝が行われないまま教会を放置しないためであった。 各人は、自分の肉体の必要に応じて、できる限り、また望む限り、わずかな食糧を携えていった。ある者は少しのパン、ある者はイチジク、またある者はナツメヤシの実や水に浸した小麦を持っていった。中には、身にまとったぼろ服以外は何一つ持たず、空腹に駆られた時にだけ、荒野に生える草を食べて生き延びる者もいた。

ヨルダン川を渡ると、皆は遠く離れた様々な方向へと散り散りになり、互いに誰がどのように断食し、修行しているのかを知らなかった。もし誰かが、別の者が自分に向かってくるのを見かけたなら、その人は別の方向へと立ち去り、絶え間ない祈りの中で孤独な生活を送り、決まった時間にごくわずかな食事を摂り続けた。 こうして修道士たちは四旬節の全期間を過ごし、キリストの復活の1

週間前に修道院へ戻った。その頃、教会では「ヴァイア」[2803] を掲げて、ヴァイアの祭りを厳かに祝っていた。修道院に戻っても、兄弟たちの誰も、砂漠でどのように過ごし、何に励んでいたかを互いに尋ね合うことはなかった。ただ自らの良心だけが証人であった。　これが、ヨルダン川沿いの修道院の規則であった。

ゾシマも、その修道院の慣習に従い、肉体の衰えに備えてわずかな食料と、普段着ている服だけを持ってヨルダン川を渡った。荒野をさまよいながら、彼は　祈りの修行に励み、可能な限り食事を控えた。　彼はほとんど眠らなかった。夜が訪れる場所では、地面に座って少し眠り、早朝に目を覚ますと、再び修行を続けた。彼はますます砂漠の奥深くへと進み、そこで自分を導いてくれる修行者を見つけたいと願うようになった。

二十日間の旅の末、ある日彼は立ち止まり、東を向いて第六時の祈り「[2804] 」を歌い始め、いつもの祈りを捧げた。修行中、彼は立ち止まるたびに一時間ごとに歌い、祈りを捧げていたのだ。そうして歌っていると、右側にまるで人の体の影のようなものが見えた。　恐怖に駆られ、これが悪魔の幻影だと思い、彼は十字を切った。恐怖が去り、祈りが終わると、彼は南を振り返り、太陽に焼け焦げた裸の男を見かけた。その男の髪は羊毛のように白く、首元までしか伸びていなかった。　ゾシマは大きな喜びをもってその方向へ駆け出した。ここ数日、彼は人間どころか動物さえも目にしていないのだ。その男は、遠くからゾシマが自分に近づいてくるのを見ると、慌てて砂漠の奥へと走り去った。　しかし、ゾシマはまるで自分の老いも、旅の疲れも忘れてしまったかのように、逃げ去ろうとする男を追いかけた。男は急いで遠ざかっていったが、ゾシマはそれよりも速く走り、互いの声が聞こえるほどに追いつくと、涙ながらに叫んだ。

「なぜ、真実の神のしもべよ――その御名のために荒野に住まわれたあなたが、私のような罪深い老人の前から逃げ去ろうとするのですか？　報いを期待するに値せず、力もない私を、どうか待ってください。あなたの偉業に対する報いを期待して！　立ち止まって、私のために祈ってください。そして、誰をも軽んじない主なる神の御名において、私に祝福を与えてください。」

こうしてゾシマは涙ながらに叫んだ。その間にも、二人はまるで干上がった川の川床のような窪地にたどり着いた。逃亡者は対岸へと駆け出したが、疲れ果ててこれ以上走る力のないゾシマは、涙ながらの懇願をさらに強めて立ち止まった。すると、ゾシマから逃げていた男はついに立ち止まり、こう言った。

「アッバ、[2805] ゾシマよ！神の御名において、あなたの前に姿を現すことができないことをお許しください。ご覧の通り、私は女性であり、裸で、その裸身を何も覆っていません。しかし、もしあなたがこの罪深い私に、あなたの祈りと祝福を授けてくださるなら、身を隠すためにあなたの衣服を何か一つ投げてください。そうすれば、私はあなたに祈りを求めます。」

ゾシマは、自分を見たこともなく、自分のことなど何も聞いたことのないその女性の口から自分の名前を聞いたとき、恐怖と戦慄に襲われた。

「もし彼女が先見の明を持っていなかったら――と彼は考えた――私の名前を呼ぶことはなかっただろう」。

彼はすぐに彼女の願いを叶え、古びて破れた服を脱ぎ、背を向けて彼女に投げ渡した。服を受け取ると、彼女は腰に巻きつけ、できる限り自分の裸身を隠した。それから彼女はゾシマにこう語りかけた。

[2803] ヴァイア――ヤシの枝（ヨハネ12:13、マルコ11:8）。ヴァイアの週――別名「花穂の週」または「花の週」――は、棕櫚の日曜日である。

[2804] 「時間（チャス）」とは、3つの詩篇、数節の聖句、そして祈りで構成され、一日の各四半期および救い主の受難の特別な状況に合わせて調整された祈祷文のことです。――第六の時間には、救い主の十字架への行進、十字架への釘付け、そして十字架上の受難が記念されます。

[2805] アッバ――父、師。

「なぜ、アッバ・ゾシマよ、私のような罪深い女に会いたいと望まれたのですか？　何か私から聞きたいことや学びたいことがあるから、わざわざこの困難な道のりを厭わずに来られたのですか？」

しかし、ゾシマは地面にひれ伏し、彼女に祝福を求めた。彼女もまた地面にひれ伏し、二人は互いに祝福を求め合いながらそのように横たわっていた。聞こえてきたのはただ一つの言葉、「祝福してください！」だけだった。長い時間が経ってから、彼女は長老にこう言った。

「アッバ・ゾシマよ！ あなたは祝福を与え、祈りを捧げなければなりません。あなたは司祭の位に就き、長年にわたり聖なる祭壇の前に立ち、神の秘跡を執り行ってきたのですから。」

この言葉は、長老をさらに深い恐怖に陥れた。涙を流しながら、震えで息を切らしながら、彼は彼女にこう言った。

「おお、霊的な母よ！　あなたは肉体の弱さを克服し、神に近づきました。神の賜物は、他の人々よりもあなたに強く現れています。あなたは私を見たこともないのに、私の名前を呼び、私が司祭であることを知っています。ですから、神のために私を祝福し、あなたの聖なる祈りを捧げてください。」

老人の執拗さに心を動かされた彼女は、次のように言って彼を祝福した。

「人の魂の救いを望まれる神に、賛美あれ！」

ゾシマは「アーメン」と答え、二人は地面から立ち上がった。すると彼女は長老に尋ねた。

「神の御使いよ！　なぜあなたは、何の美徳も備えていない、裸同然の私を訪ねようとしたのですか？　しかし、聖霊の恵みがあなたを導き、必要な時に、この世の生活についても私に知らせてくださったのですね。教えてください、父よ。今、キリスト教徒たちは、皇帝や教会の聖人たちは、どのように暮らしているのですか？」

「あなたの聖なる祈りによって」とゾシマは答えた。「神は教会に堅固な平和をお与えになりました[2806]。しかし、不肖の老人の懇願に耳を傾け、全世界と、罪深い私のために主にお祈りください。そうすれば、私の荒野での放浪が無益なものにはなりません。」

「むしろ、アッバ・ゾシマよ」と彼女は言った。「聖職者であるあなたが、私やすべての人々のために祈るのがふさわしいのです。あなたはそれのために召されているのですから。しかし、従順の務めとして、あなたの望み通りにいたします。」

そう言うと、彼女は東の方角に向き直り、目を天に向け、両手を挙げて祈り始めたが、その声は極めて静かで、ゾシマには祈りの言葉が聞こえず、理解することもできなかった。彼は畏敬の念を抱き、黙ってうつむいたまま立っていた。

「神を証人として誓うが」と彼は語った。「しばらくして私が目を上げると、彼女が肘[2807]を地面から浮かせて立っているのが見えた。そうして彼女は宙に浮かんだまま祈っていたのだ」。それを見たゾシマは恐怖に震え、涙を流しながら地面にひれ伏し、ただこう繰り返した。

「主よ、憐れみたまえ！」

しかしその時、彼は「これは霊ではないか、神に祈っているかのような幽霊ではないか」という疑念に苛まれた。だが、聖女は長老を地面から起こし、こう言った。

「ゾシマよ、なぜ幽霊という考えに惑わされるのですか。なぜ私が祈りを捧げている霊だなどと思うのですか？」　お願いです、祝福された父よ、どうか信じてください。私はただ聖なる洗礼によって清められただけの、罪深い妻に過ぎません。いいえ、私は霊ではなく、土であり、塵であり、灰です。私は、霊になろうなどとは微塵も思わない、この肉体なのです。

[2806] それは6世紀初頭のことでした。その頃には迫害はすでに終わり、異端も沈静化し、キリスト教会は平和と安寧を享受していました。

[2807] 「ロコート」または「ラコート」とは、肘から中指の先までの長さを表す単位で、10 1/2ヴェルシュカに相当する。

そう言うと、彼女は額、目、口、胸に十字を切って、こう続けた。

「どうか神が、私たちを悪しき者とその罠から救い出してください。なぜなら、[2808] 、彼による私たちへの戦いは甚大だからです。」

その言葉を聞いて、老人は彼女の足元にひれ伏し、涙ながらに叫んだ。

「私たちの主イエス・キリスト、真の神、処女から生まれた御方の御名によって――あなたはその御方のために、裸のまま自らの肉体をこれほどまでに死なせたのです――私はあなたに懇願します。私から隠さず、あなたの人生についてすべてを語ってください。そうすれば、私は神の偉大さを賛美いたします。」　神のために、自慢するためではなく、罪深く不適格な私への教訓となるよう、すべてを語ってください。　私は、あなたがそのために生きている私の神を信じています。私がこの荒野へと向かったのは、まさに神があなたの行いを称えるためであり、神の御心には逆らうことはできません。もし神が、あなたとあなたの偉業が知られることを望まなかったならば、神は私をあなたに導くことも、この遠い荒野の旅路を歩む私の力を強めることもなさなかったでしょう。

ゾシマは他にもさまざまな言葉で彼女を説得したが、彼女は彼の手を握りしめてこう言った。

「お許しください、聖なる父よ。私は自分の恥ずべき人生について語るのを恥じています。しかし、あなたは私の裸の体をご覧になったのですから、私の魂もさらけ出しましょう。そうすれば、その中にどれほどの恥と不名誉があるか、あなたにもお分かりいただけるでしょう。あなたが言われたように、自慢することなく、あなたに打ち明けます。悪魔に選ばれた器である私に、自慢できることなど何があるというのでしょう！」　しかし、もし私の人生の話を始めれば、あなたは蛇から逃げるように私から逃げ出すでしょう。私の放蕩の物語を、あなたの耳は耐えられないでしょう。それでも、私は何も隠さずに話します。ただお願いです。私の人生を知ったとき、審判の日に私が何らかの慈悲を得られるよう、私のために祈ることを忘れないでください。

老修道士は抑えきれない涙を流しながら、彼女に自分の人生について語るよう懇願し、彼女はこうして語り始めた。

「聖なる父よ、私はエジプトで生まれましたが、両親がまだ健在だった12歳の時、私は両親の愛を拒み、アレクサンドリアへと旅立ちました[2809] 。 私がいかにして処女の純潔を失い、抑えきれず、飽くことなく淫行にふけるようになったか――そのことについて、恥じることなく考えることさえできません。ましてや　、長々と語るなど到底できません。ただ、私の抑えきれない情欲をあなたが知っていただけるよう、簡潔に申し上げます。　17歳、いやそれ以上の間、私は誰とでも淫行に及んでいた。贈り物や報酬のためではなく――私は誰からも何も受け取りたくなかったからだ――ただ、無償であれば、より多くの男が私のところに来て、私の情欲を満たしてくれるだろうと考えたのだ。私が裕福だったから受け取らなかったなどと思わないでほしい――いいえ、私は極貧の生活を送り、しばしば空腹のまま綿の殻を紡いでいたが、それでも常に、さらに淫行の泥沼に深く沈み込みたいという欲望に駆られていた。私は、絶え間ない不名誉の中にこそ人生を見出していたのだ。　ある日、収穫の時期に、私は多くの男性――エジプト人やリビア人[2810] ――が海の方へ向かっているのを見かけた。通りすがりの一人に、この人たちはどこへ急いでいるのかと尋ねた。彼は、間もなく行われる「尊き生ける十字架の挙揚」の祭りのためにエルサレムへ向かっているのだと答えた。　「私も一緒に連れて行ってくれるか」と尋ねると、彼は「お金と食糧さえあれば、誰も邪魔はしないだろう」と言った。私は彼にこう言った。「いいえ、兄弟よ、私にはお金も食糧もないけれど、それでも私は行

[2808] 「ブラニ」とは、攻撃や陰謀のことである。

[2809] アレクサンドリア――アレクサンドロス大王によって地中海沿岸、ナイル川の河口に築かれた名高い都市。アレクサンドリアはローマに次いで世界一の都市であり、商業、工業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教初期にはキリスト教教育の温床となった。　現在、アレクサンドリアは地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられている。

[2810] リビア人は、北アフリカの州であるリビアの住民である。

って、彼らと同じ船に乗り込むつもりだ。彼らは私を養ってくれるだろう。私は報酬として自分の体を彼らに差し出すつもりだ」。　「私が行きたかったのは――お許しください、父上――私の周りに、情欲に駆られた人々がたくさんいるようにしたかったからです。ゾシマ神父、私はあなたに、私の恥を語るように強要しないでほしいと申し上げました。神が証人です、自分の言葉で空気そのものを穢してしまうのではないかと恐れているのです」。

大地に涙を注ぎながら、ゾシマは叫んだ。

「話してください、母よ、話してください！その教訓に満ちた物語を続けてください！」

「出会った若者は」と彼女は続けた。「私の恥知らずな言葉を聞いて、笑いながら立ち去りました。私は、手元にあった紡錘を放り投げ、急いで海へと向かいました。　旅人たちを見回すと、その中に十人かそれ以上が岸辺に立っているのが見えた。彼らは若く、私の欲望にふさわしいようだった。他の者たちはすでに船に乗り込んでいた。

いつものように恥知らずにも、私は立っていた人々のところへ駆け寄り、「私を連れて行ってください。あなたたちを喜ばせてあげます」と言った。彼らはこの言葉やそれに類する言葉に笑ったが、私の恥知らずさを見て、船に連れて行ってくれ、私たちは出航した。神の御使いよ、その後どうなったか、あなたにどう伝えればよいだろうか？　航海の途中、船上で私が犯した恥ずべき行いを、いったいどんな言葉、どんな耳が耐えられようか。私は相手の意思に反してさえも罪へと誘い込み、私が教えた恥ずべき行いには、どんなものもなかった。　信じてください、神父様。私は、これほど多くの者を堕落させた後、なぜ海がそのような淫行を許し、なぜ大地が裂けて私を生きたまま地獄に沈めなかったのか、と戦慄を覚えています！しかし、神は罪人の死を望まず、寛容をもって回心を待ち望んでおられ、私の悔い改めを待っておられたのだと思います。

そのような思いを抱いて私はエルサレムに到着し、祭りの日までずっと、以前と変わらず、いや、それ以上に悪行を重ねていました。　私は、船で一緒だった若者たちだけでは満足せず、さらに地元の住民や旅人たちをも誘惑して淫行に及んでいた。ついに、聖十字架の昇架祭の日が訪れ、私は以前と同様に、若者たちを誘惑しに出かけた。　早朝、皆が次々と教会へ向かうのを見て、私も出かけていき、皆と一緒に玄関ホールに入った。そして、主の聖なる十字架の挙揚の時刻が訪れると、人混みの中に紛れて教会の中に入ろうとした。どんなに押し入ろうとしても、人々は私を押し返した。ついに、この呪われた私が、大変な苦労の末に教会の扉に近づくことができた。しかし、皆は妨げられることなく教会に入っていくのに、私だけは、ある種の神聖な力によって中へ入ることが許されなかった。　私は再び中に入ろうと試みたが、またも押し退けられ、玄関に一人取り残されてしまった。これは私の女性としての弱さゆえだと考え、再び群衆の中に身を投じたが、その努力も無駄に終わった。　私の罪深い足はすでに敷居に触れていたのに、教会は皆を何の妨げもなく受け入れていたが、私一人、この罪深い者だけは許されなかった。まるでわざと配置されたかのように、大勢の軍隊のような警備隊、未知の力が私を引き留め――そして私はまた玄関ホールに追い返されてしまった。そうして三、四回、力を振り絞ってみたが、成功しなかった。　疲れ果てて、私はもはや入ってくる人々の群れに混じることができず、窮屈さと押し合いへし合いで全身が痛んだ。絶望して、私は恥じ入りながら後退し、玄関の隅に立った。我に返ったとき、私は考えた――いったいどのような罪が、私に主の命を与える十字架の木を見ることを許さないのか、と。　救いの知恵の光、すなわち魂の目を照らす神の真理が、私の心に触れ、私の行いの忌まわしさが教会に入ることを妨げていると示した。その時、私は苦々しく泣き出し、嗚咽しながら胸を叩き、心の底からため息をついた。

そうして私は、玄関に立ち尽くして泣いていました。目を上げると、壁に聖母マリアのイコンが見え、肉眼と心の両方の目をそれに向け、こう叫びました：

– ああ、御母よ、神を肉体に宿した聖母よ！私は知っています、深く理解しています。私のような不浄で汚れた者が、肉体も魂も清らかな永遠の処女である御顔を仰ぎ見る時、あなたに栄光も賛美も及ばないことを。　もし御方の処女の清らかさが、この姦婦である私を嫌悪し、憎むのであれば

、それも当然のことです。しかし、御方がお生みになった神は、罪人を悔い改めへと招くために受肉されたと、私は聞いています。どうか、すべての人に見捨てられた私に、助けとしておいでください！　どうか、私が教会に入ることを禁じられないようお命じください。そして、あなたが産み出された方が、罪人たちの救いと私の救いのために聖なる御血を流され、肉において十字架にかけられた「尊き木」を、私に拝むことをお許しください。　御母よ、私のような不適格な者にも、神聖な十字架を礼拝するために教会の扉が開かれるよう、お命じください！　御子様の御前で、私がもはや淫行という不浄によって自分の体を汚すことはなく、十字架の木を見つめ、この世とその誘惑を捨て、私の救いの保証人であるあなたが導いてくださる場所へと向かうことを、私の忠実な保証人となってください。

そう私は言った。信仰に励まされ、聖母の慈悲を確信して、まるで誰かに促されたかのように、私は祈っていたその場所から立ち上がり、教会に入っていく人々の群れに混じった。今や、誰も私を突き放したり、教会の扉までたどり着くのを妨げたりすることはなかった。　恐怖と戦慄が私を襲い、私は全身が震えていた。かつては私にとって閉ざされていた扉にたどり着くと、私は難なく聖なる教会の内に入り、命を与える木を拝む恵みにあずかり、神の神秘を悟り、神は悔い改める者を拒まないことを理解した。　地面にひれ伏し、私は尊い十字架に礼拝を捧げ、畏敬の念を抱きながらそれを口づけした。それから私は教会を出て、私の守護者である聖母マリアの御像のもとへ行き、その聖なるイコンの前にひざまずいて、こう祈った。

「おお、永遠に祝福されたおとめ、主の母なる御母よ、あなたは私の祈りを軽んじることなく、私にあなたの偉大なる人間愛を示してくださいました。私は、主の栄光を見ました。私は放蕩者であり、それを見るに値しない者であるのに！　罪人の悔い改めを受け入れてくださるあなたのために、神に栄光あれ！」　これこそが、罪深い私が考え、言葉で表せるすべてです。今こそ、御母よ、私があなたを保証人として呼び求め、誓ったことを果たす時です。あなたの御心に従って私を導き、悔い改めの道において救いを完成させる方法を教えてください。

この言葉を言い終えると、まるで遠くから聞こえてくるかのように、声が聞こえました：

「もしヨルダン川を渡れば、あなたは完全な安らぎを見出すでしょう。」

この言葉が私に向けられたものだと信じて聞き、私は涙ながらに、聖母マリアの「[2811] 」のイコンを見つめながら叫びました：

「御母よ、聖母マリアよ、私を見捨てないでください！」

そう言いながら、私は教会の玄関を出て、急いで歩き出した。道中で、誰かが私に三枚の硬貨を渡し、こう言った。

「これを受け取って、お母さん」

私はその硬貨を受け取り、パンを三つ買って、売り手にヨルダン川への道順を尋ねた。どの方角の門がその方へ通じているかを知ると、私は涙を流しながら急いで歩き出した。　こうして私は一日中、通りすがりの人々に道を尋ねながら歩き続け、その日の午後3時頃、夕日が沈みかける頃になってようやくキリストの聖なる十字架を拝むことができたとき、ヨルダン川沿いの聖ヨハネ洗礼者教会に到着した。　教会で祈りを捧げた後、私はヨルダン川へと下り、この聖なる川の水で手と顔を洗った。教会に戻ると、キリストの至聖にして命を与える聖体拝領を受けた。それから、パンを半分食べ、ヨルダン川の水を飲み、地面で眠りについた。　早朝、小さな舟を見つけると、私は対岸へ渡り、再び私の導き手である聖母マリアに、どのように私を導いてくださるかを祈り求めた。こうして私は荒野へと去り、今日に至るまでそこで放浪を続け、神が私の心と体の苦しみから救いをもたらしてくださるのを待ち望んでいる」。

ゾシマは尋ねた。

[2811] ロシアの年代記によると、このイコンは後にコンスタンティノープルのアヤソフィア大聖堂に移されたという。

「奥様、この荒野に身を置かれてから、一体何年が経ったのですか？」

「そうね」と彼女は答えた。「聖なる都を離れてから、47年が過ぎたと思います。」

「では、」とゾシマは尋ねた、「食事はどうしているのですか？」

「ヨルダン川を渡った時」と聖女は言った。「私にはパンが二個半ありました。それらは少しずつ乾いて、まるで石になったかのように固まり、私はそれを数年にわたり少しずつ食べてきました。」

「どうしてそんなに長い間無事に生き延びることができたのですか。どんな誘惑にも惑わされなかったのですか？」

「ゾシマ神父、その質問にお答えするのは恐ろしいのです。私を苦しめた思いによって耐え忍んだあの苦難を思い出すと、またそれらに支配されてしまうのではないかと恐れているのです。」

「構いませんよ、奥様」とゾシマは言った。「お話しになる際には、何も省略しないでください。私はあなたの人生の詳細をすべて知りたいがために、そう尋ねたのですから。」

すると彼女はこう言った。

「ゾシマ神父様、信じてください。私はこの荒野で17年間、狂おしい情欲を、まるで凶暴な獣と戦うかのように、必死に抑え続けてきました。食事をとろうとするたび、エジプトで食べていた肉やワインのことを夢見ていました。大好きなワインを飲みたいと切望していたのです。　世俗にいた頃はワインをたくさん飲んでいましたが、ここでは水さえありませんでした。私は渇きに苛まれ、ひどく苦しみました。時には、慣れ親しんだ淫らな歌を歌いたいという、私を深く悩ませる欲望が湧き上がりました。そんな時、私は涙を流し、胸を叩き、荒野へ去る際に立てた誓いを思い起こしたのです。　その時、私は心の中で、私の守護者である聖母マリアのイコンの前に立ち、泣きながら、私の魂を乱す思いを取り除いてくださるよう懇願した。私は長い間、胸を激しく叩きながらそうして泣き続け、ついに、まるで光が私の周りに広がっていくかのように感じ、動揺から落ち着きを取り戻した。　神父様、私を支配していた不貞な欲望について、どうすれば告白すればよいのでしょうか？お許しください、神父様。情欲の炎が私の中で燃え上がり、私を焼き尽くし、淫らな欲望へと駆り立てました。　そのような誘惑に襲われると、私は地面にひれ伏し、涙に暮れました。目の前には私の守護者ご自身が立っておられ、私の罪を非難し、その罪に対する厳しい苦しみで脅かしているのだと想像したのです。地面にひれ伏したまま、私は昼夜を問わず立ち上がらず、あの光が私を照らし、私を悩ませる考えを追い払ってくれるまでそこにいました。　その時、私は自分の守護者である聖母に目を向け、荒野での私の苦しみから救い出してくれるよう熱心に祈った――そして実際、聖母は私に助けを与え、悔い改めの道へと導いてくださった。こうして私は17年間、絶え間ない苦しみの中で過ごした。そしてその後も、今に至るまで、聖母はあらゆる面で私の助け手であり、導き手である。

すると、ゾシマは尋ねた。

「食べ物や衣服に困ることはなかったのか？」

聖女はこう答えました：

「パンが尽きてから17年間、私は植物を糧としていました。　ヨルダン川を渡った時に着ていた服は、古くなってボロボロになり、私は多くの苦しみを味わいました。夏は暑さで衰弱し、冬は寒さで震え上がり、何度も息も絶え絶えになって地面に倒れ込み、長い間横たわりながら、数え切れないほどの肉体的・精神的な苦難に耐え抜きました。　しかし、あの時から今日に至るまで、神の力はあらゆる面で私の罪深い魂と謙虚な肉体を変容させてくださった。今や私はかつての苦難を思い返すだけで、救いへの希望の中に尽きることのない糧を見出している。　私は全能なる神の御言葉によって養われ、覆われている。なぜなら、住む家を持たない者たちは、罪という衣を脱ぎ捨てたゆえに、石を身にまとったからである（参照：ヨブ記24:8、ヘブライ人への手紙11:38）。

聖女がモーセの書、預言者たち、そして詩篇からの聖書の言葉を引用しているのを耳にしたゾシマは、彼女が詩篇や他の書物を学んでいたのかと尋ねた。

「思い込まないでください」と彼女は微笑みながら答えた。「私がヨルダン川を渡って以来、あなた以外の人間を見たことは一度もありません。獣や動物さえ、一匹も見たことがありません。」また、書物から学んだこともなく、誰かの口から読まれたり歌われたりするのを聞いたこともありません。しかし、神の言葉はいつでもどこでも知性を照らし、この世に知られていない私のもとにも届いているのです。ですから、神の言葉の受肉であるあなたに懇願します。この娼婦である私のために祈ってください。」

そう彼女は言った。老修道士は涙を流しながら彼女の足元にひれ伏し、こう叫んだ。

「数えきれないほど偉大で恐ろしく、驚くべき、そして栄光に満ちた御業をなされる神を賛美します！　神を畏れる者たちに、いかに報いてくださるかを私に示してくださった神を賛美します！　まことに、主よ、あなたに近づこうとする者を、あなたは決して見捨てられません！」

聖女は老僧が自分に頭を下げるのを許さず、こう言った。

「聖なる父よ、私たちの救い主であるイエス・キリストの名によって、神が私をこの世から召されるまで、私から聞いたことを誰にも話さないでください。さあ、平安のうちに去ってください。神の恵みが私たちを守ってくださるなら、一年後にはまた私にお会いできるでしょう。」　しかし、神のために、私がお願いすることを行ってください。来年の断食期間中、修道院で普段行っているようにヨルダン川を渡らないでください。

ゾシマは、彼女が修道院の規則についても言及していることに驚き、ただこう言うことしかできなかった。

「神を愛する者たちに報いてくださる神に栄光あれ！」

「ですから、聖なる父よ」と彼女は続けた。「私が言う通りに修道院に残ってください。たとえ行きたくても、あなたにはそこを離れることはできないでしょうから。　聖なる大木曜日、すなわちキリストの最後の晩餐の日に、この儀式にふさわしい聖なる器に命を与える御体と御血を納め、ヨルダン川の対岸にある世俗の集落へ運び、私が命を与える聖なる賜物を受けられるよう、私を待っていてください。　というのも、ヨルダン川を渡る前に洗礼者ヨハネの教会で聖体拝領して以来、今日に至るまで、私は聖なる賜物を口にしていないからだ。　今、私は心を尽くしてこれを切望しております。どうか私の願いを聞き入れ、主が御弟子たちを御自身の神聖な晩餐に招かれたあの時、必ずや私に命を与える神聖な秘跡をもたらしてください。　あなたが住む修道院の修道院長ヨハネには、こう伝えてください。「あなた自身と兄弟たちのことをよく見守ってください。多くの点で改める必要があります」と――しかし、これを今すぐ伝えるのではなく、神があなたにそう導かれる時に伝えてください。

これらの言葉を述べた後、彼女は再び長老に自分のために祈ってほしいと頼み、砂漠の奥へと去っていった。ゾシマは地面にひれ伏して、神の栄光のために彼女の足跡があった場所を口づけし、私たちの神であるキリストを賛美し、祝福しながら帰路についた。

荒野を抜け、彼は、そこに住む兄弟たちが普段帰ってくるその日に修道院に到着した。彼が見たことについては、話す勇気がなく黙っていたが、心の中では、その修道女の愛しい顔をもう一度見られる機会を神に与えてくださるよう祈っていた。　彼は、この一年がどれほど長く続くのかと悲しみに沈みながら、この時間がまるで一日のようにあっという間に過ぎ去ってほしいと願った。

四旬節の最初の週が訪れると、修道院の慣習と規則に従い、すべての修道士たちは祈りを捧げ、賛美歌を歌いながら荒野へと向かった。　ただ、重い病に苦しんでいたゾシマだけは、修道院に残らざるを得なかった。その時、彼は聖人の言葉を思い出した。「たとえ行きたくても、お前には行けないだろう！」　ほどなくして病から回復したゾシマは、修道院に残った。兄弟たちが戻り、最後の晩餐の日が近づくと、長老は指示されたとおりにすべてを行った。　小さな杯に、我らの神キリストの聖なる御体と御血を納め、それからかごに乾燥したイチジクやナツメヤシを数個、そして水に浸した小麦を少し入れ、夜遅くに修道院を出てヨルダン川の岸辺に座り、聖女の到来を待った。　聖女は

なかなか現れなかったが、ゾシマは目を閉じることなく、砂漠の方角を絶えずじっと見つめ、切に願っていたその姿を見られるのを待ち続けた。「もしかすると――と老修道士は考えた――私は彼女が私のところに来るに値しないのかもしれない。あるいは、彼女はすでに以前にも来て、私を見つけられずに引き返してしまったのかもしれない」。　そのような思いに駆られて、彼は涙を流し、ため息をつくと、天を仰いで祈り始めた。「主よ、あなたが私に拝むことを許してくださったその御顔を、再び拝む機会を奪わないでください！私を責める罪の重荷を背負ったまま、安らぎを得られずにここを去ることのないよう、どうかお守りください！」

　　すると、彼の頭に別の考えが浮かんだ。「たとえ彼女がヨルダン川まで来たとしても、船がなければ、どうやって川を渡って、私のような不適格な者のところへやって来られるというのか？ああ、罪深い私よ、悲しいことだ！誰が私に彼女に会うという幸せを奪ったのか？」

　　老僧がそう考えているうちに、聖女はすでに川辺にたどり着いていた。　彼女を見ると、ゾシマは喜びのあまり立ち上がり、神に感謝を捧げた。彼女がヨルダン川を渡れないのではないかとまだ悩んでいたその時、聖女が月の光に照らされながら、川に十字を切って、岸から水の中へ降り立ち、まるで固い大地を歩くかのように水の上を彼に向かって歩いてくるのを見た。　これを見て驚いたゾシマは彼女に頭を下げようとしたが、聖女は水の上を歩きながらそれを拒み、こう叫んだ。「何をしているのですか？ あなたは司祭であり、神の秘跡を携えているではありませんか！」

　　長老は彼女の言葉に従い、聖女は岸に上がると、彼に祝福を求めた。その驚くべき光景に恐怖に襲われた彼は、こう叫んだ。「まことに、神は、救われる者たちを、その力の及ぶ限りご自身に似せるとの約束を果たしておられる！　わが神、キリストよ、御自分のしもべを通して、私がまだ完全さからいかに遠く離れているかを示してくださったことを、あなたに栄光あれ！」

　　その後、聖女は『使徒信条』と『主の祈り』を朗読するよう求めた。祈りが終わると、彼女はキリストの至聖にして命を与える聖体を受け、修道院の慣習に従って長老に口づけをした。そして、ため息をつき、涙を流しながらこう叫んだ。

「今、主よ、御言葉に従い、御使いを安らかに去らせてください。私の目は、あなたの救いを見ましたから（ルカ2:29–30）。」

　　それから、ゾシマに顔を向けて、聖女はこう言った。

「お願いです、父よ、私のもう一つの願いを叶えてください。今はご自身の修道院へお帰りになり、来年、以前私と語り合ったあの小川へお越しください。神のために来てください。そうすれば、また私に会えます。それが神の御心なのですから。」

「もし可能であれば」と聖なる長老は答えた。「私はいつもあなたに従い、あなたの輝くお顔を見続けたいものです。しかし、どうかこの老人の願いを叶えてください。私が持ってきた食べ物を少し味わってください。」

　　そう言って、彼はかごの中身を見せた。聖女は指先で小麦に触れ、三粒を取り、それを口元に運んでこう言った。

「これで十分です。魂を汚れから守る霊的な糧の恵みが、私を満たしてくれるでしょう。もう一度お願いいたします、聖なる父よ、私の罪深さを思い起こし、主のために私のために祈ってください。」

　　長老は彼女に地面まで頭を下げ、教会と王たち、そして彼自身のために祈ってくれるよう懇願した。この涙ぐましい願いの後、彼はこれ以上彼女を引き留めることを敢えてせず、嗚咽を漏らしながら彼女と別れた。たとえ望んだとしても、彼には彼女を止める力などなかったのだ。　聖女は再びヨルダン川に十字を切って祝福し、以前と同じように川を乾いたまま渡った。一方、長老は喜びと恐れが入り混じった心持ちで修道院に戻った。彼は、その聖女の名前を知ることができなかったことを自責したが、来年こそは知ることができるだろうと期待していた。

さらに一年が過ぎた。ゾシマは修道院の慣習に従い、再び荒野へと向かい、あの不思議な幻視を見た場所へと足を向けた。彼は荒野をくまなく歩き、いくつかの特徴から探していた場所を特定すると、豊かな獲物を探す熟練の猟師のように、周囲を注意深く見回した。　しかし、彼に近づいてくる人の姿はどこにも見当たらなかった。　涙を流しながら、彼は天を仰ぎ、こう祈り始めた。「主よ、誰にも奪われることのない、あなたが荒野に隠された御宝を私にお示しください。この世の誰とも比べるに値しない、聖なる義人、この『肉となった天使』を私にお示しください！」

そのような祈りを捧げながら、老修道士は小川が流れる場所にたどり着き、岸辺に立つと、東の方角に、死して横たわっている聖女の姿を見出した。彼女の両手は棺に横たわる者にふさわしく組まれており、顔は東を向いていた。　彼は急いで彼女の元へ近づき、その足元にひれ伏して、畏敬の念を込めてその足を口づけし、自らの涙で濡らした。彼は長い間泣き続けた。その後、埋葬に際して唱えるべき詩篇と祈りを読み終えると、聖女の遺体を埋葬してもよいか、それが彼女の望みであるかどうかを考え始めた。　すると、彼は聖女の頭元に、地面にこう記された文字を見つけた。「アッバ・ゾシマよ、この場所に謙虚なマリアの遺体を葬り、その遺灰を土に還せ。　エジプト暦のファルムフィア月、ローマ暦の4月の初日、キリストの救いの受難の夜、神聖なる秘跡の聖体拝領の後、この世を去った私のために、神に祈ってください。[2812]」。

その碑文を読み終えると、長老はまず、誰がこれを刻んだのかと考えた。聖女は、彼女自身が語っていたように、文字を書くことができなかったからだ。しかし、聖女の名前を知ることができたことに、彼は大いに喜んだ。　さらに、聖女がヨルダン川のほとりで聖体拝領を受けた後、たった一時間で、彼が二十日間の困難な旅を経てたどり着いたその死の地へ到達し、即座に神に魂を委ねたことも知った。

「さて、」とゾシマは考えた、「聖女の命じられたことを果たさなければならない。だが、私のような罪深い者が、手元に道具も何もない状態で、どうやって穴を掘ればよいというのか？」

その時、彼は自分のそばに砂漠に捨てられていた木の枝を見つけ、それを手に取って掘り始めた。しかし、乾いた土は老修道士の努力にも屈せず、彼は汗だくになったが、どうにもならなかった。彼は心の底から苦々しくため息をついた。　ふと目を上げると、聖女の遺体のそばに巨大なライオンが立ち、彼女の足を舐めているのが見えた。老修道士はその獣の姿を見て恐怖に襲われた。ましてや、聖女が「獣など見たことがない」と言っていた言葉を思い出したからだ。彼は、亡き聖女の力が自分を守ってくれると確信し、十字を切った。　ライオンは静かに老僧に近づいてきて、まるで愛情を込めてでもあるかのように、優しく彼を見つめていた。そこでゾシマは獣にこう言った。「偉大なる修行者は、私に彼女の遺体を埋葬するよう命じられた。しかし、私は年老いており、墓穴を掘ることはできない。掘るための道具もなく、修道院は遠く、そこからすぐに道具を持ってくることもできない。 さあ、お前の爪で墓穴を掘ってくれ。そうすれば、私がその聖女の遺体を埋葬しよう」

ライオンはまるでその言葉を理解したかのように、前足で埋葬に十分な穴を掘った。長老は再び聖女の足に涙を流し、全世界のために祈ってほしいと願い、その遺体を土で覆った。　聖女はほぼ裸同然だった——ゾシマが最初の出会いの際に投げ与えた、古くてボロボロの服が、　彼女の体をかろうじて覆っているだけだった。その後、二人はそれぞれの道へと去っていった。子羊のように穏やかなライオンは砂漠の奥深くへ、そしてゾシマは、私たちの神であるキリストを賛美し、栄光を帰しながら、自らの修道院へと向かった。

修道院に戻ると、彼は自分が見聞きしたことを何も隠すことなく、すべての修道士たちに聖女マリアについて語った。皆は神の偉大さに驚き、畏敬の念と信仰、そして愛をもって聖女の記憶を尊び、彼女の帰天の日を祝うことを決めた。

[2812] 聖女マリアは522年に逝去した。

修道院長ヨハネは、聖マリアが修道院長ゾシマに伝えていた通り、修道院にいくつかの不備を見つけ、神の助けを借りてそれらを是正した。 そして聖ゾシマは、ほぼ100年に及ぶ長い生涯の末、この世の生を終え、永遠の命、すなわち神のもとへと旅立った[2813] 。聖マリアに関する彼の語りは、その修道院の修道士たちによって、互いに教え合うために口頭で伝えられていたが、聖人の偉業については文書には記されていなかった。

そして私――と聖ソフロニオスは付け加える――はその話を聞き、それを書き留めた。もしかしたら、私よりも詳しい誰かが、すでにその尊者の伝記を記しているかもしれないが、私も、できる限り、ただ一つの真実を述べるべく、すべてを書き記した。 驚くべき奇跡をなされ、信仰をもって御自身に立ち返る者たちに惜しみなく恵みを与えられる神が、この物語に教訓を求める者たち、それを聞く者、読む者、そして熱心に書き記した者たちを報いてくださり、かつて敬虔な思いと労苦をもって神に喜ばれたすべての人々と共に、彼らに聖マリアの祝福された運命を授けてくださいますように」。

私たちもまた、永遠の王である神に栄光を帰しましょう。そして、あらゆる栄光、誉れ、権威、礼拝にふさわしい、私たちの主イエス・キリストの御名によって、神が審判の日に私たちに御慈悲を授けてくださいますように。父と、至聖にして命を与える聖霊と共に、今、そして常に、そして永遠に。アーメン[2814] 。

トロパリオ、第8調:

母よ、あなたこそ救いであると知られています。キリストの模範に従い、十字架を受け入れ、キリストに従い、肉体を軽んじるよう教え、それは過ぎ去るものだからです。むしろ、不死の魂の事柄に心を留めるよう教えたのです。それゆえ、尊きマリアよ、あなたの霊は天使たちと共に喜びます。

コンダク、第4調:

罪の霧を避け、悔い改めの光であなたの栄えある心を照らし、キリストのもとへ来られ、この全き無垢で聖なる母、慈悲深い祈りの仲介者を捧げられました。それゆえ、あなたは罪の赦しを得、天使たちと共に永遠に喜びを分かち合っておられます。

尊き父エウフィミオス・スーズダリの記念日。

記念日：4月1日

聖エウフィミオスは敬虔な両親の間に生まれた。彼の生まれ故郷であり、育った地はニジニ・ノヴゴロドであった。彼が成長すると、両親は彼を聖書の学びに送り出し、この祝福された少年は同年代の仲間たちと共に、子供らしい遊びを一切避け、熱心に聖書を学んだ。 沈黙を好む性質を持ち、あらゆる面で両親の言うことを聞き従っていた彼は、しばしば神の教会を訪れ、そこで暗い場所に身を隠して立ち続けることを好んだ。それは、この世の儚い事柄についての会話で誰にも気を散らさ

[2813] 聖ゾシマは6世紀前半に帰天した。その記念日は4月4日に祝われる。

[2814] 正教会は、大斎期間中に聖マリア・エジプトの生涯を偲ぶことを定めている。大斎第5週の木曜日、早課において、聖アンドレイ・クリトスの悔悛の大カノンが全文朗読され、このカノンの18のトロパリオは聖マリアに捧げられる（マリアの礼拝）。

れないようにし、教会の聖歌や朗読に全神経を集中させて耳を傾けるためであった。　ある日、彼は聖なる教会を訪れ、福音書の中で「わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従いなさい」という言葉などを耳にした（ルカ9章以降）。 この言葉を聞いた聖エウフィミオスは、この世の恵みを捨て去ることを決意し、ニジニ・ノヴゴロド近郊にある　のペチェルスキー・主の昇天修道院[2815] へと向かった。そこで、ディオニシウスという名の修道院長から修道士の剃髪を受けた。　修道院に入ったエウフィミイは、偉大な修行に打ち込むようになった。ダビデの詩篇を絶えず詠みながら、日中は通常、修道院の様々な仕事を熱心にこなし、夜は洞窟へと退き、そこで涙を流しながら神に徹夜の祈りを捧げた。　この聖なる修道士は、師である尊者ディオニシオスの指示にすべて従いながら、こうした修行に励んだ。その後の人生において、彼は修行の境地を極め、時には一晩中眠らずに祈りを捧げ、頻繁にそのような修行に身を投じた。　その一方で、彼は食事において極めて節制を重んじ、飢えで衰弱しないために必要な量だけを食べ、水以外の飲み物は一切口にせず、それも強い渇きを感じた時だけだった。　その後、彼はパン屋での奉仕という務めを割り当てられた。ここでは、絶えず水を運んだり薪を割ったりしたため、その修行はさらに過酷なものとなった。やがて、彼はパン屋そのもので奉仕するよう命じられた。　そこで働く際、聖人は常に、消えることのない火と蝕む虫による永遠の苦しみについて心に留めていた。しばしば、火を見つめながら、彼は自分自身にこう言い聞かせていた。「耐えよ、エウフィミオスよ。この火を通ることで、永遠の火を免れることができるのだ」。

聖エウフィミイのこうした偉業と忍耐を目の当たりにし、人々は彼を単なる人間としてではなく、彼らの間に生きる神の天使として見なしていた。

当時、スーズダリ公国とニジニ・ノヴゴロド公国を統治していたのは、ボリス・コンスタンティノヴィチ大公であった[2816] 。彼はペチェールスク修道院の院長である聖ディオニシウスに対し、自身が建設を計画していた修道院の建設者としての役割を担わせるため、至福のエウフィミウスをスーズダリへ派遣してほしいと依頼した。　至福のディオニシウスは喜んで大公の願いを叶えることを約束し、しばらくして、尊者エウフィミウスは師から旅立ちの祈りと祝福を受け、旅立った。　彼がゴロホフツの町に到着すると、その近く、約8ヴェルストの場所に、カッパドキアのケサリアの大司教である聖バシレイオスに捧げる教会を建立し、その隣に共同生活の修道院[2817] を設けた後、スーズダルの大公ボリス・コンスタンティノヴィチのもとへ向かった。　大公は尊者（プレポボド）の到着を大いに喜び、彼としばらく語り合った後、共にスーズダリのイオアンヌ司教のもとへ向かった。　司教のもとに着くと、大公は自身の意図を明かし、至福のディオニシウスの生涯について順を追って語った――主が彼に預言の賜物を授けられたこと、そして修道院を設立するよう祝福されたこと、さらに尊者エウフィミイについても語った。　その後、大公は修道院を建てる場所を探すために、司教に

[2815] ペチェルスクの昇天修道院は、1330年頃、ニジニ・ノヴゴロド近郊に、聖セルギイ・ラドネジスキーの友である聖ディオニシウスによって設立されました。　セルギイ・ラドネジスキーの友である聖ディオニシウスによって設立された。彼は、都市から5ヴェルスタ離れたヴォルガ川のほとりに自ら洞窟を掘り、そこで修行に励み、その後、自身の修道院のアルヒマンドリトとなり、やがてスーズダリの大司教となった。1384年、キエフ都主教の位にある間に死去した。　その記念日は6月26日である。

[2816] なぜボリス・コンスタンティノヴィチがここで大公と呼ばれているのかは不明である。 確かに、スーズダリの諸公は1353年のシメオン・ゴルドイの死後、大公の座を狙ったが、これに失敗し、1359年にイオアン2世・クロトキーが死去して初めて、スーズダリの公ディミトリ・コンスタンティノヴィチが大公の地位に就いた。　もっとも、ディミトリイ・コンスタンティノヴィチが大公を務めたのはわずか数年であった。1363年、彼は大公の座を、ヨハン・クロトキーの息子であるディミトリイ・ヨハノヴィチ・ドンスキーに譲らざるを得なかった。

[2817] この修道院は、常にスパソ＝エフフィモフ修道院の付属施設であった。

同行を懇願した。司教は大公と共に旅立ち、敬虔なエウフィミオスも彼らに同行した。　まもなく、彼らは町の近く、カメンニツァと呼ばれる川のほとりの山の上にある場所を見つけ、その川岸にはスーズダリの町も位置しており、その場所を気に入った。そこで彼らは祈りを捧げ、神に感謝を捧げた。

その後、その場所には大勢の人々が集まった。すべての公国を治める統治者たち、ボヤール、諸侯、宮廷の高官たち、聖職者、修道者たち、そして老若男女の一般市民たちであった。　これほど大勢の集まりの前で、イオアン司教は修道院の敷地を祝福し、聖別した。そして特別な祈りを捧げた後、最初の教会の祭壇が置かれるべき場所に十字架を立てた。そこで公は、教会建設に必要な石やあらゆる物資を準備するよう命じた。　そして、公爵の命令が実行されると、公爵自らが真っ先に鍬を手に取り、自らの手で堀を掘り始め、その模範に倣って、国の統治者たちやボヤールたちもそれに続いた。

その後、教会の礎石を据える礼拝が執り行われ、我らの主イエス・キリストの変容を称えて教会の礎が据えられ、続いて建物の壁の建設が始まった。　聖エウフィミイは司教に祝福を請うと、斧を手に取り、聖なる祭壇の近くにある祭壇の北側の扉のそばで、自らの手で三つの石を削り出し、自身の棺を造った。後に、彼の尊い遺体はそこに安置された。

教会堂の建設は1352年[2818]に完了し、同年中に聖別された。ヨハネ司教は、至福のエウフィミオスをアルヒマンドリトの位に叙し、キリストの「言葉の羊」であるキリスト教徒の群れの指導を彼に委ねた。また、公爵は修道院の整備のために、彼に多量の金と銀を授けた。　この時から、尊者エウフィミオスは悔恨の涙を流しながら、偉大な修行に身を捧げるようになった。昼間は修道院の建設に熱心に取り組み、夜は絶え間なく熱心な祈りを神に捧げ、こうして修道院と、将来の修道士たちのための独房を整備した。　すでに存在していた教会に加え、彼は聖ヨハネ・ラダーの父に捧げるもう一つの教会を建立し、その隣に石造りの食堂を増築した。そこでは、修道士たちが冬の日に集まって祈りを捧げ、食事をとることができるようになっていた。 尊者のもとに約300人の修道士が集まり、食堂に全員が収まりきれなくなったとき、彼は聖ニコラオス、　「ミールリキアの奇跡行者」として知られる聖ニコライに捧げられ、「病院教会」と名付けられた。また、その隣には、石造りの食堂に他の修道士たちと一緒に収まることができなかった修道士たちが集まれるよう、大きな木造の食堂を建設させた。その後、必要に応じて、修道院に必要なその他の建物も整備された。

このようにして、聖エウフィミオスの労苦と祈り、そして神の恵みの助けにより、修道院のあらゆる必要を十分に満たす施設が整えられた。そして彼は、自分に託された修道者たちを、堅固かつ神に喜ばれるように導き始めた。　彼は、すべての修道士が不平を言わずに従順を保ち、互いに誠実な愛を持ち、貞潔と無欲を貫き、誰も私物を持ちず、すべてを共有するようにという規則を定めた。もし兄弟のうち誰かが私有財産を持っていることが判明した場合は、その者に懲戒を科した。　彼は、教会内での兄弟たちの会話を禁じ、また食事の時間には常に沈黙を守るよう求めた。食事の後、彼は皆に、互いに会話を交わすことなく黙ってそれぞれの独房へ戻るよう命じ、極度の必要がない限り、他人の独房を訪れることを許さなかった。　さらに、彼は一般的な規則として、修道士たちが決して独断を働かず、誰もがあらゆる服従を喜んで果たすよう定めた。そして修道士たちは、神の天使である彼に、あらゆる点で従順であった。

[2818] この年は、後にスパソ＝エフフィミエフ修道院と呼ばれるようになった修道院の創設年ともされている。この修道院は、スーズダリの修道院の中で初めて共同生活が導入されたという点で注目に値する。

霊的な対話を求めて、聖エウフィミオスは、同時代人であったラドネジの奇跡行者、聖セルギオスの修道院へと旅をした[2819] 。そうした対話のあと、二人は愛を込めて互いに祝福を授け合い、その後、聖エウフィミオスは再び自身の修道院へと戻った。

このように、至福のエウフィミオスは生涯を聖なる行いに捧げた。彼は決して自らの祈りの規則を破ることはなく、断食と施しを結びつけ、旅人を迎え入れ、食糧を持たない者たちに食事を与えることで、これまでの行いに新たな行いを重ねていった。　彼は裸の人々の衣であり、悲しむ者たちの慰めであった。なぜなら、すべての貧しい人々を助け、不幸に見舞われた者たちを苦難から救い出し、祈りによって病人を癒やし、借金のある者の代わりに借金を払い、自らすべての者を赦し、一言で、災難に見舞われた者たちを不義な裁判官たちの暴虐から救い出したからである。　彼は粗末な服装をこれほどまでに愛したため、まるで何も持っていないかのようであった。彼は常に、硬い羊の皮で縫われたたった一着の服しか身に着けず、冬には寒さに苦しみ、夏には服の重さゆえに暑さに苛まれた。

このように、あらゆる苦難と狭き道を歩みながら、聖エウフィミオスはその生涯を送り、すでに深き老齢に達して初めて、肉体の衰えを感じ始めたのである。　死が近づいているのを感じると、彼は修道院のすべての修道士たちを呼び寄せた。彼らが、修道院長が非常に衰弱しており、主のもとへ旅立つ時が近いことを知ると、皆、彼との別れを嘆き、こう言った。

「父よ！　あなたは私たちを孤児にしてしまうのです。あなたがいなくなれば、この修道院は空っぽになってしまいます。」

しかし、尊師は彼らを慰めながら、こう答えられた。

「私との別れを嘆くことはありません。もし私が神への祈りの大胆さを得て、私の行いが神の御心に適うものであれば、私たちの修道院は決して荒れ果てるどころか、私の死後、あなたがたが互いに愛し合うならば、そこに住む修道士たちの数はさらに増えるでしょう。」

尊師は、兄弟たちを慰めるために、他にも多くのことを語られた。その後、主のもとへ旅立つ時が近づくと、すべての修道士たちが彼の元へやって来て、涙ながらに彼に口づけをし、最後の祝福を求めた。　そして、子を愛する父のように、尊師は皆に祝福を与え、皆を赦し、自らも皆に許しを請いました。ついに魂が肉体から離れる時が訪れると、彼は聖体拝領を行い、4月の初日に、52年間にわたり修道院を統率した後、その聖なる魂を主の御手に委ねました[2820] 。 修道士たちは、彼の聖なる遺体を、前述の棺に葬った。この棺は、最初の修道院教会が建設され始めた当初、尊者自身が自らの手で造ったものであった。至福のエウフィミオスは、今日に至るまで多くの奇跡を起こし、信仰をもって彼の尊い棺を訪れる者たちに癒やしを与えている[2821] 。

トロパリオ、第3調:

光り輝く星のごとく、あなたは東から西へと来られ、故郷の　ニジニ・ノヴゴロドを離れ、神に守られた都市スジュダルに至り、そこに修道院を建立し、多くの修道士を集め、神から奇跡の賜物を受け、父エウフィミイよ、キリストにおいて尊者セルギイの対話者であり、同志となられました。

[2819] 教会の聖歌において、聖エウフィミイは聖セルギイの「同伴者であり、対話者」と呼ばれている（1625年4月の『ミネイア』）。

[2820] 聖エウフィミイは1405年4月1日、生後約90歳で逝去した。

[2821] 聖人の没後1世紀を経た1507年6月7日、1491年に焼失したプレオブラジェンスキー教会の跡地に新しい教会を建設するため堀を掘っていた際、彼の聖遺骨が発見され、それは朽ちていなかった。「顔は明るく、衣はまるで昨日着たばかりのように」であった。

彼と共に、キリスト・神の御許で、我らの敬虔なる皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチに健康と救いを、また我らの魂に大いなる憐れみをお与えくださるよう、お祈りください。

コンダク、第2調:

数多の動揺を難なく乗り越え、無形の敵をあなたの涙の奔流に沈めた、神に賢き尊者エウフィミイよ。それゆえにあなたは奇跡の賜物を受け、絶えず私たちすべてのために祈ってください。

4月15日

4月2日（旧暦）

聖殉教者アンフィアノスとエデシオスの殉教。

4月2日の記念日

聖殉教者アンフィアンとエデシウスは実の兄弟であり、ギリシャの異教徒の家庭に生まれました。彼らの故郷はリキアのパタラという都市でした[2822] 。ここから、彼らは両親によって異教の学問を学ぶため、ビリトという都市[2823] へ送り出されました。 そこでアンフィアンとエデシウスは、貞潔に青春の日々を過ごし、その徳高い生き方で同世代のすべての人々を驚かせた。あらゆる軽率な行いを遠ざけていた聖アンフィアンとエデシウスは、聖書にあるように、白髪——すなわち知恵——と、老齢——すなわち汚れなき生活 （箴言4:9参照）を体現しており、そのゆえに神の恵みによって報いられた。なぜなら、彼らの心 は、真理を理解する光に照らされていたからである。偶像崇拝の虚しさを悟った彼らは、私たちの主イエス・キリストの僕となるために、キリスト教の敬虔な道を可能な限り完全に知ろうと願ったのである。

アンフィアンとエデシウスがビリトから故郷の町に戻ったとき、彼らは、父が町の長に任命され、依然としてすべての親族と共に不敬虔な異教徒の生活を送っていることを知った。 不信心者や罪人たちの間に住むことを望まなかった聖アンフィアンとエデシウスは、密かに実家を離れ、神の御霊に導かれて、パレスチナの都市ケサリア（[2824] ）へと向かった。そこで彼らは、パンフィラという名の敬虔なキリスト教の長老に出会い、彼は後にキリストのために殉教の冠を受けた。 この聖なる長老からキリスト教の信仰の奥義を教えられた聖アンフィアンとエデシウスは、その長老によって聖なる洗礼を受け、信仰に導かれた。その後、聖人たちは至福のパンフィロスと共に常に過ごし、神を賛美し、聖書と主の律法の研究に励んだ。

[2822] リキア——小アジアの地域。

[2823] ビリト——古代、啓蒙と教養の温床として名高かったフェニキアの都市。現在、ビリトはベイルートという名で、シリアのアジア・トルコ地方のヴィライェトの主要都市であり、重要な商業の中心地となっている。

[2824] パレスチナのケサリア——パレスチナ、地中海沿岸に位置していた都市。古代、ケサリアはローマの総督の居城であり、同国の社会・政治生活の中心地であった。 キリスト教会の歴史において、パレスチナのケサリアは、使徒ペテロが百人隊長コルニリウスを洗礼したことで（使徒行伝 10:1–48）、異教徒が初めてキリストの教会への門戸を開かれた場所として注目される。 また、この地では使徒パウロに対する最後の裁判が行われ、その後彼はローマへ送られた（使徒行伝 25:1–27:44）。パレスチナには、前述のケサリアとは別に、「フィリッポのケサリア」と呼ばれるもう一つのケサリアがあった。それはヨルダン川の源流付近に位置していた

当時、皇帝はマクシミアヌス[2825] であり、彼は叔父であるマクシミアヌス・ガレリウス[2826] から、ローマ帝国の東半分を統治する権限を引き継いでいた。この皇帝は、異教の不義に満ち、真の神を憎んでいたため、キリスト教徒を残酷に迫害した。　彼は、彼以前のすべての異教徒のローマ皇帝たちよりもさらに残酷であった。マクシミアヌスの治世下、キリスト教徒たちは大きな混乱に陥った。なぜなら、キリストの御名を告白する者すべてを、この不敬虔な迫害者が死に追いやったからである。　彼らの多くは、苦しみや死から逃れようと、家や町を後にし、激しい迫害者たちから逃れて、どこかの隠れ家に身を潜めた。しかし、公然と迫害者たちの手に身を委ね、勇気をもって苦難の試練に耐え抜いたキリスト教徒も少なくなかった。　後者に属していたのが、勇敢なアンフィアンであった。彼は肉体的にはまだ若者（二十歳にも満たなかった）であったが、その知性と勇気においては百歳の老人のようであった。

当時、不敬虔な異教徒の皇帝の命令により、特別に派遣された者たちがケサリアに到着し、市民一人ひとりを異教の神殿へ呼び出し、そこで偶像への生贄を捧げさせようとしていた。そんな中、キリスト教徒たちと同じ隠れ家に身を潜めていた勇敢なアンフィアンは、　誰にも知られぬようその場所を抜け出し、ちょうどその時、イゲモン・ウルヴァンが偶像に犠牲を捧げていた偶像の神殿へと向かった。　恐れることなく彼に近づいた聖アンフィアンは、彼が供え物を握っていた右手を掴み、皆が聞こえるように大胆に、その迷いを捨て、人間の手に造られた悪魔や偶像を崇拝しないよう諭し始めた。　この勇敢なアンフィアノスの大胆な行動は、多くのキリスト教徒の信仰をさらに強固なものにしたが、異教徒たち、とりわけイゲモン自身を大いに激怒させた。　直ちに、聖アンフィアンは、まるで羊が狼に襲われるかのように、イゲモンの兵士たちに捕らえられ、地面に投げつけられて足で踏みつけられながら、口や顔、全身に数え切れないほどの打撃を受けた。その後、聖人は牢獄に連行され、鎖で縛られた。

翌日の朝、聖アンフィアンは総督の面前に引き出され、総督は彼に偶像への生贄を捧げるよう説得した。　しかし、聖アンフィアンはキリストへの信仰を告白する姿勢を揺るがすことはなかった。その後、このキリストの聖殉教者は激しい拷問にさらされた。兵士たちは彼を木に吊るし、鋭い鉄の道具で全身を傷つけ、鉄の棒で顔、首、脇腹を打ちつけた。　聖なる殉教者の顔と全身は、拷問者たちによってこれほどまでに引き裂かれたため、知人ですら彼を認識できなかったほどであり、肋骨はすべて折られていた。しかし、こうした激しい苦しみの中でも、キリストの聖なる殉教者は、あたかも自らの苦痛や苦しみを聞かず、感じないかのように、大声でイエス・キリストを告白し続けた。

その間、拷問者たちは彼の苦しみをさらに増大させた。彼らは聖人の足に油を染み込ませた亜麻布を巻きつけ、その亜麻布に火をつけた。聖人は炎に包まれ、まるで蝋のように溶けていった。しかし、聖なる殉教者はこの苦しみにも怯むことはなかった。　それどころか、ますます大胆さが増すにつれ、彼はさらに大きな声でイエス・キリストを賛美し始め、同時に異教徒たちの不義と不敬虔を糾弾し、非難した。その後、聖なる殉教者は再び牢獄に閉じ込められた。

その後、聖アンフィアノスが牢獄に閉じ込められてから3日目に、拷問者たちは再び新たな拷問によって殉教者の信仰の堅固さを試そうとした。しかし、聖人は今回もキリストへの信仰を告白する姿勢を曲げなかったため、イゲモンは彼を海の深みに投げ込んで死刑に処すよう命じた。　兵士たちは殉教者の体に石を結びつけ、海岸からかなり離れた場所まで連れて行き、海に投げ込んだ。　するとたちまち海は荒れ狂い、大地は揺れ動き、その町は揺らぎ、そこにいた異教徒たちは皆、大きな恐怖と戦慄に襲われた。その後、海の波は聖殉教者の遺体を海の深みから陸へと打ち上げた。

[2825] マクシミアヌス皇帝は、305年から313年まで在位した。

[2826] 皇帝マクシミアヌス・ガレリウスは、306年から311年までローマ帝国を統治した。

こうして、聖殉教者アンフィアンの苦難は、[2827]年の4月の2日目に終焉を迎えた。

その後、他にも多くのキリスト教徒が拷問にかけられ、その中にはアンフィアノの兄弟であるエデシウスも含まれていた。この際、キリスト教徒の中には多種多様な拷問や苦しみを受けた者もいれば、異教徒によってパレスチナの銅鉱山で働かされるために送られた者もいた。聖エデシウスも後者のグループに属していた。

1年後、聖エデシウスはパレスチナからエジプトの都市アレクサンドリアへと移送された。 そこである日、異教の領主イエロクレオスが裁判の席に座り、キリスト教徒に対して過度に激昂しているのを見たとき（彼は貞淑なキリスト教徒の処女や妻たちを異教徒たちに辱めさせるために差し出していた）、聖エデシウスは勇気と大胆さに満ち溢れた。 その領主のもとへ駆け寄り、聖エデシウスは皆の目の前で彼の顔を殴り、その後、地面に倒して殴り続けながら、その不義な裁きを皆に聞こえるように激しく非難した。 直ちに聖エデシウスは、そこにいた兵士たちに捕らえられ、兄である聖アンフィアヌスと同様に拷問にかけられた。 長きにわたる拷問の末、聖エデシウスは兄と同じ死を遂げ、海に沈められて殉教した。こうして聖エデシウスもまた、アンフィアヌスと共に殉教の聖冠を受け、私たちの救い主キリストからその報いを受けた。キリストに、父と聖霊と共に、永遠の栄光がありますように。アーメン。

私たちの尊き父、奇跡行者ティトスの記念日

記念日：4月2日

若き頃からキリストを愛し、この世を憎んだ、私たちの祝福された父ティトは、[2828] の修道院で修業に励みました。修道者の姿をとった彼は、ここで大きな忍耐をもって、修道生活という苦難に満ちた茨の道を歩みました。 謙遜と従順という偉大な徳において、尊者ティトは同修道院のすべての兄弟たちを凌駕していたため、彼は長老の位に叙階され、言葉の羊たちの牧者となりました。

聖ティトは、隣人に対する偉大な愛に満ち溢れていた。幼い頃から心身ともに清らかさを保ち続けた聖ティトは、いわば地上の神の天使のようであった。その徳高い生涯により、聖ティトは神から奇跡を行う賜物を授かった。 修道生活の美徳に輝きつつ、聖ティトスは同時に正教の揺るぎない支柱でもありました。なぜなら、彼は異端の偶像破壊者たちによる聖教会への攻撃から、熱心に教会を守ったからです[2829] 。十分な生涯を送り、 弟子たちに模範となるような禁食生活の生き様を示した後、聖ティトスは安らかに主のもとへ旅立ちました[2830] 。

[2827] 聖殉教者の死は306年に訪れた。

[2828] キノヴィア（「キノヴィオン」は、「キノス」（共同）と「ヴィオス」（生活）に由来する）とは、修道士たちが修道院から完全な生活支援を受ける代わりに、私有財産を持たず、自らの労働とその成果を修道院の共同の必要のために捧げる共同生活修道院を指す。

[2829] 偶像排斥の異端は8世紀に発生し、フリギアのナコイア司教コンスタンティンによって提唱された。偶像崇拝と偶像礼拝を無分別に混同した偶像排斥派は、執拗かつ残酷な迫害によって、正教会における偶像礼拝を根絶しようとした。 イコノボリアの最も熱心な擁護者は、皇帝レウス・イサウリアヌス（717年から741年）とコンスタンティノス・コプロニモス（741年から775年）であった。 この異端は、787年にニカイアで開催された第7回全地公会議で非難された。

[2830] 聖ティトスの死は9世紀に訪れた。

アレクサンドリアで[2831]、マクシミアヌス帝の治世下において殉教した聖ポリカルプの記念日

記念日：4月2日

聖ポリカルプは、アレクサンドリアのイゲモンに対し、罪のないキリスト教徒の血を不当に流したことを非難したため、さまざまな拷問にさらされた。しかし、聖ポリカルプは拷問の最中もキリストの御名を堅く、勇敢に告白し続けたため、イゲモンの命令により、剣で斬り殺された[2832]。

4月16日

4月3日（旧暦）

同日、聖イリリコス・奇跡行者および聖殉教者エルピディフォロス、ディヤ、ヴィソニア、ガリカの記念日。

私たちの尊い父、殉教者ニキタの生涯。

4月3日の記念日

聖ニキタは、ビフィニアのケサレア[2833] 出身で、敬虔な両親の間に生まれた。父フィラレートは、息子ニキタが生まれて8日目に妻を主のもとへ送った後、修道者となった。一方、少年ニキタは、当時まだ存命だった父方の祖母に育てられた。　思春期を迎え、学問を修めた後、聖ニキタは神への奉仕に身を捧げた。当初、彼は教会で聖職補佐の務め[2834] に就き、聖書の朗読に励んだ。その後、ある隠者ステファン――徳の高い人物――のもとへ赴き、　彼から十分な指導を受けた後、聖ニキータは彼の助言に従い、聖ニキフォロスによって設立され、同氏が修道院長を務めていたミディキ修道院へと向かった。聖ニキフォロスは、ニキータの中に神の恵みを見出し、喜んで彼を受け入れ、修道士としての戒律を授けた。　そこで聖ニキタは、断食、謙遜、服従の行い、そして全般にわたるその徳高い生活によって、まもなくすべての修道士たちを凌駕した。彼が修道院に入院してから7年も経たないうちに、修道院長に説得され、彼は司祭の位を受け、コンスタンティノープル総主教タラシオス聖下によって叙階された。　その時、尊者ニキフォルは、自身の老衰を考慮し、尊者ニキタの不本意にもかかわらず、修道院の運営と長老の地位を彼に委ねた。そして尊者ニキタは、父ニキフォルに代わって修道院を善き方向へと導き、言葉の群れを注意深く牧し、自身の徳高い生活の模範によってその数を増やしていった。　多くの人々が、彼の神に喜ばれる生き様を聞き、世俗を捨てて修道院を訪れ、救いの道への　な導きを尊者ニキタに求め、そこに留まった。キリストの恵みにより、わずか数年で兄弟たちの数は百人にまで増えた。

ここには、まことに崇敬に値する、驚くべき人物である至福のアファナシイもいました。彼が世俗を捨てた際に示した徳と、神への偉大な愛を、短い言葉で言い表すことは不可能です。　彼には、天使たちでさえも驚嘆すべき点があった。神のためにこの世とその欲望を軽んじ、至福のアファナ

[2831] アレクサンドリアはエジプトの都市で、古代にはその商業と教養で知られていた。

[2832] 聖殉教者の死は4世紀初頭に訪れた。

[2833] ビフィニアは、小アジア北西部の地域で、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に位置している。 ミディキ修道院は、オリンポス山の近くにあったプルサの町の近くに位置していた。このミディキ修道院は、第7回全地公会議（787年）に修道院長として出席した聖ニキフォロスによって設立された。ビフィニアのケサリアは、リンダコス川とアパメア川の間に位置していた。

[2834] ポノマリ、あるいはパラモナリとは、私たちの教会奉仕者に相当する。

シイは修道生活の修行を始めようと、密かに実家を抜け出し、ある修道院へと向かった。　しかし、そのことを知った父は激怒してその修道院へ駆けつけ、深く愛していた息子を連れ戻し、修道見習いに与えられた修道服を脱がせ、明るく高価な服を着せ、そして無理やり家へ連れ帰った。

「父よ」と少年は言った。「私がこの世のすべてを憎んでいるというのに、果たしてこの高価な服で、私の決意を翻させることができるとお考えなのですか？『*人が全世界を得ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるでしょうか*』（マタイ16:26）。」

父は彼を別の部屋に閉じ込め、あらゆる手段を尽くして彼の心にこの世への愛を植え付けようとした。しかし、彼は神への愛をもって、父への愛や虚しいこの世への執着に打ち勝ち、身にまとっていた世俗の服を脱ぎ捨て、それを細かく引き裂いた。　それを見た父は、彼に別の、さらに高価な服を着せた。というのも、父は裕福で、高貴で、名高い人物だったからである。少年は、新しい服に対しても、最初の服と同じように振る舞った。　この聖アファナシオスの行いは、父を大いに激怒させ、父は裸のアファナシオスを容赦なく殴打した――その結果、無数の傷が彼の体を覆った。肩と背骨は激しい打撃によって化膿し始め、医師たちは彼を治療し、腐った体の部分を切除せざるを得なくなった。しかし、少年はこう言った。

「たとえ父が私を粉々に砕いたとしても、それでも私を神の愛から引き離すことはできず（ローマ8:35参照）、私の決意を揺るがすこともないでしょう。」

すると、父は心を動かされ、長く泣いた後、アファナシイにこう言った。

「行け、わが子よ。お前が選んだこの善き道を歩め。そして、キリストが、あらゆる敵の罠から、お前の助け手となり、救い主となってくださいますように。」

アファナシイは以前の修道院に戻り、完全な修道者の戒律を受け入れ、これほどまでに謙虚になったため、彼の中には世俗的な言葉も、習慣も、いかなる物への執着も微塵も見受けられなかった。　穏やかで謙虚な気質、静かで優しい言葉、体を覆うための最も古びたぼろ服――これらがアファナシウスを特徴づけていた。裕福な両親の息子として、甘やかされた世俗的な教育を受けてきた彼の生涯は、計り知れないほどの厳しさに満ちていた。　長年にわたり修道生活の労苦に身を捧げてきたこのほどほどに徳の高い人物を、ミディキ修道院へと引き寄せたのは、私たちの尊い父ニキタへの愛と、その天使のような生涯の誉れであった。そして、ニキフォロスとニキタの両尊者にとって、至福のアファナシイは、望ましい対話者であり、共同生活者であった。　しばらくして、アファナシイは二人の願いに応じて、修道院の会計係の職を引き受けた。　まるで二つの体に一つの魂と一つの知性が宿っているかのように、至福のアファナシイと尊者ニキタは修道院を統率し、言葉と模範をもって兄弟たちにあらゆる美徳――すなわち、神に完全に喜ばれる生き方――を教え導いた。彼らは兄弟たちの間に愛を植え付け、謙遜を説き、彼らの霊的・肉体的清らかさの警戒すべき守護者となり、　精神的・肉体的な清らかさを守り、弱く気弱な者たちを支え、立っている者を確固たるものとし、倒れた者を様々な教えと諭しによって立ち直らせた。そして、一方が一見厳格な指導者であるように見えるときは、もう一方は最も柔和で慈悲深い諭し手として現れた。　二人は皆から愛され、兄弟たちは彼らの言葉を、あたかも神の口から発せられたものとして受け入れた。

しかし、これほど徳の高い二人の導き手は、最後まで共に暮らすことはなかった。数年が経ち、10月26日、尊者アファナシイは主のもとへ召され、その際、兄弟たちに次のような最後の言葉を残した。

「私の死後、私が神から、たとえわずかであっても、恵みを得たかどうか、あなたがたは十分に確かめることになるでしょう。」

尊者アファナシイが埋葬されたとき、神の御心により、その棺の上、まさにその胸元からキパロスが生え、その葉はあらゆる病を完全に癒やすものであった。　その後、ミディキ修道院の創設者

であり初代イグメンであった聖ニキフォロスも、多くの労苦と肉体の病を経て、5月4日に主のもとへ帰った。

こうして、聖ニキタは、霊的な父である聖ニキフォロスと、愛する友である聖アファナシウスを失い、孤児となってしまった。彼は二人を深く愛していたため、その死を大いに悲しんだ。 の悲しみにおける彼の慰めとなったのは、故人たちが、若き日から善き奉仕をもって喜ばせた主キリストのもとで、恵みと至福の命を得たという確固たる希望であった。

至福の父ニキフォロスが世を去った後、修道院の兄弟たちは皆、尊者ニキタに聖職に就き、イグメン（修道院長）の称号を名乗るよう懇願した。 というのも、尊者ニキフォロスが存命の間、聖ニキタは、すでに長年にわたり老衰で身動きが取れなくなっていた父である聖ニキフォロスの代わりに修道院を完全に統率していたにもかかわらず、イグメンの称号や聖職を受け入れていなかったからである。 修道院の兄弟たちの執拗な懇願、とりわけ他の修道院の多くの長老たちの説得により、彼はこの位を受け入れ、タラシウスの後継者であったコンスタンティノープル総主教ニキフォロス聖下から祝福を受けた。 尊者ニキタは、神の御加護により修道院長として修道院を統率し、彼に託された魂の救済に心を配るようになったとき、これまでの務めに新たな務めを加えた。 神は御自身の聖人を称え、彼に病を癒やし、悪霊を追い出す恵みを与えられた。生来口がきけない少年の一人に十字架の印を刻むと、聖ニキタは彼に言葉を話す能力を取り戻させた。また、正気を失った修道士を聖油の塗油によって癒やし、 新たに受け入れられた者の一人で、悪霊に取りつかれていた者を、祈りによって悪霊の苦しめから救い出し、蛇に変身した悪霊を追い払った； また別の悪霊に取り憑かれた者を、悪霊から解放し——さらに、熱病や高熱、その他様々な病に苦しむ多くの人々を、彼の中に宿るキリストの恵みによって奇跡的に癒した。 こうして彼は神に喜ばれる生活を送り、老齢に達した。そして、生涯の終わりに近づくと、聖なるイコンを崇敬したために苦難に耐え、立派な信仰の証人としての姿を示した。

当時、聖像破壊の異端はまだ収まっていなかった。第七回全地公会議の聖なる教父たちによって非難されたこの異端[2835] は、その発端となった帝国の権力から再び支援を得て、いわば再燃したのである。 ギリシャの偶像排斥派の王たちの第一人者は、同名の王のうち三人目である「イサウリア人」の異名を持つレウスであった[2836] 。彼によって、偶像排斥の異端は勢力を増し、有害な病のように蔓延していった。 彼は最初に、聖像を拒絶するよう勅令を出し、その王権を利用して多くの人々を誤った思索へと駆り立てた。正統派の総主教である聖ゲルマンを追放し、彼と志を同じくする異端者アナスタシオス[2837] を総主教の座に就けた。 この不敬虔な皇帝の死後、その息子コンスタンティノス・コプロニモス[2838] が王位に就いたが、彼は神の教会に対するさらに激しい迫害者であった。彼は聖なるイコンを拒絶しただけでなく、神に愛された聖人たちを「聖人」と呼ぶことを禁じ、彼らの聖遺物を無価値なものとして扱った。

端的に言えば、この皇帝は外見上のみキリスト教徒であり、心の中では完全に不信仰なユダヤ人であった。 あらゆる被造物の中で最も高き、全世界の守りであり避難所である、至聖なる神の母を、この呪われた者は、その至聖なる御名と尊い聖像を拒絶し、冒涜する大胆さを示した。そして、全世界が存在する根拠である神への彼女の執り成しについては、それを思い起こすことさえ禁じた。聖母を侮辱するために、彼は金貨でいっぱいの袋を見せ、参列者たちにこう尋ねた。

[2835] 第7回全地公会議は、787年にニカイアで、レオン4世の未亡人であるイリナ皇后によって招集された。聖タラシオスを議長とし、367人の教父から成るこの公会議は、偶像排斥運動を非難し、聖像崇敬を復活させた。

[2836] レウス3世・イサウロス – *『信仰のABC』編集部*

[2837] レウ3世・イサウリア人 716–741、聖ゲルマン 730、アナスタシオス 753。その後、コンスタンティノープル総主教座において、聖像崇拝が復活するまでに10人の総主教が交代したが、そのうち6人は聖像破壊派であった

[2838] コンスタンティノス5世コプロニモス、741年から775年まで在位。

「この袋は貴重か？」

参列者たちは答えた。

「その中に含まれる金の量だけ、貴重です。」

袋から金をすべて取り出した後、コプロニムは再び尋ねた。

「金のない今、この袋は価値があるか？」

彼らはこう答えた。

「金貨が入っていないのに、何の役に立つというのですか？　空の袋には何の価値もありません。」

すると、コプロニムはこう言った。

「マリアもそれと同じだ。胎内にキリストを宿していた間は崇敬に値したが、彼を産んだ途端にその崇敬を失い、他の女性たちと何ら変わるところがなくなったのだ。」

なんと卑劣な口、なんと不敬な舌のことか！　彼は、天の諸力の中で最も高潔であり、すべての聖人の中で最も聖なる、創造主の母に対して、いかなる冒涜を敢えて口にしたというのか！　王妃が王の子を産んだからといって、もはや王としての栄誉に値しないというのか？　王の母は、王を胎内に宿している間だけ崇められるというのか？　ああ、　、あの忌まわしき冒涜者よ。彼は、神に忌み嫌われるユダヤ人の冒涜者たちと何ら変わるところがなかった！そして、その冒涜者自身がそうであっただけでなく、他の人々をも、お世辞めいた約束や恐ろしい脅しをもって、同じような不敬な冒涜へと駆り立て、彼に服従せず反抗する者たちには、様々な苦痛を与え、　縄で縛り上げたり、長期にわたる飢餓にさらしたり、恐ろしい傷で肉体を苛んだり、剣で斬りつけたり、火で焼き殺したり、海の深みに沈めたり――要するに、あらゆる手段を用いて、キリストの忠実で真の僕たちに耐え難い苦痛と苦い死をもたらした。　その報いとして、彼自身もまた恐ろしい死によってその呪われた魂をこの世から追い出し、息を引き取る際に悲痛な叫びを上げた。

「私は生きたまま、消えることのない炎に投げ込まれた！」

かつては聖母マリアを冒涜していた者でさえ、今や賛美歌をもって彼女を崇めるよう命じたが、神の慈悲から完全に見捨てられた彼は、もはや慰めを見出すことはなかった。

この迫害者が（恥辱のうちに）没すると、その息子レウ（同名の4代目）が王位に就いた。彼もまた父と同様に異端の偶像破壊者であったが、まもなく死去した。彼の後を継いで、妻のイリナ[2839]が幼い息子コンスタンティノスと共に王位を継承した。彼女は、偶像破壊の異端を非難するために第7回全地公会議を招集し、聖なる教会に平和を取り戻した。キリストの教会全体は喜びに満ち溢れ、聖像とともに本来の栄光を取り戻し、正教会の皇帝や司教たちが玉座に就く姿を見た。イリナの後はニキフォロス、続いてミハイルが統治したが、両者とも正教徒であった。　その後、レフ（通称「アルメニア人」[2840]）が王位に就いた。同名の不敬虔なレフ・イサウリアヌスに倣い、彼と同様に正教徒や聖人に対する迫害を開始し、それによってすでに非難されていた偶像排斥の異端を再燃させ、復活させたのである。　彼は、自分と同じ考えを持つ悪行者たちを側近として求め、数人の高官を見つけた。その中でも、偶像破壊の異端に最も熱心だったのは、ヨハネス（通称スペクタ）とエウティキアノスの二人であった。　司祭階級からは、ヨハネス（通称「グラマティカ」）、新たなテルトゥリアヌス[2841]、悪魔に選ばれた器、そしてあるアントニオス・シレイを味方につけた；修道者からは、レオントスとゾシモスを引き入れた。ゾシモスはしばらくして淫行を暴かれ、鼻を切り落とされ

[2839] レウス4世 – 775–785年、イリナ – 797–802年

[2840] ニキフォロス1世 – 802–811年、ミカエル1世 – 811–818年、レウ5世アルメニア人 – 813–820年

[2841] 修辞学の教師テルトゥッルは、ローマの総督フェリクスの前で、ユダヤ人たちが使徒パウロに対して提起した告発を支持し、その演説において、まず第一に、ユダヤ人の苦境を気遣う人物であるかのように装ったフェリクスを称賛することに留意した（使徒行伝24:1–27）。

る刑に処され、不名誉な最期を遂げ、悪名を残した。王は彼らと共に邪信に固執し、彼らは自らの助言によって、王がすでに教会に対して仕掛け始めていた戦いをさらに煽った。

自国の各地からコンスタンティノープルへ司教やその他の聖職者を集め、　レウスは、聖なるニキフォロス総主教と聖公会全体を自身の宮殿に招き入れ、総主教の面前およびすべての貴族たちの立会いのもとで、彼らが前述の王の同調者たち、すなわちまだ公にはなっていない異端者たちと論争を行うことを望んだ。　まず、皇帝自らが正教徒たちと対話を交わした。正教徒を装い、胸に身につけていたキリストの磔刑のイコンを取り出し、偽善的にその前に頭を下げ、聖なる父たちにこう言った。

「私としては、何らあなた方と異なる点はない。ご覧の通り、私も聖なるイコンを崇敬しているからだ。しかし、それとは異なる教えを説き、自分たちの道こそが正しいと主張する者たちが現れた。彼らをここに呼び出し、質疑応答を通じて、イコンに関する正しい教えが明らかになるようにしよう。」　もし彼らが論争においてより正当であり、明白な論拠をもって自らの見解が真理に合致していることを説得できたならば、諸君は善き行いに反対するどころか、むしろそれを助けるべきである。もし彼らが諸君に打ち負かされ、誤りを指摘されたならば、彼らは有害な教えを広めることをやめるべきである。　そうすれば、以前と同様に、聖像に関する従来の教えが維持されることになるでしょう。　そして私は、あなた方の双方の論争の聴衆であり、裁き手となる。なぜなら、もし私が些細な事柄について裁くにふさわしいのであれば、教会の統治についてはなおさら気を配らなければならないのではないか。あなた方の話を聞く以上、相手側の話も聞かなければならない。そして、私の確信においてどちらの側に真実があるかを見極め、その側に従うつもりである。

しかし、至聖なる総主教と、彼に随伴するすべての司教たちは、これに決して同意しませんでした。彼らは、悪意に満ちた異端者たちと論争することだけでなく、彼らに会うことさえ望まず、彼らが自分たちの面前に出現することを許しませんでした。

「この異端は、すでに第七回全地公会議の聖なる父たちによって審議され、呪いをもって断罪されている。これ以上検討する必要はなく、教会において、この異端によって完全に拒絶されたものを復活させるべきではない。」

しかし、皇帝が異端に非常に傾倒しており、異端者たちを支援しているのを見て、聖なる教父たちは彼に大胆に語りかけた。キジケスの司教、聖エミリアン[2842]は、次のように述べた。

「王よ！もしあなたが私たちを招いた件――正しい信仰に関する検討――が教会の問題であるならば、慣例に従い、王宮ではなく聖なる教会で議論するのがふさわしいのです。」

王は反論した。

「しかし、私も教会の息子であり、仲介者かつ調停者として諸君の話を聞くつもりだ。双方の主張を吟味し、真実に至るためである。」

これに対し、シナドの聖ミカエル司教はこう答えた。

「もしあなたが仲介者であり和解者であるならば、なぜ仲介者や和解者にふさわしい行いをしないのですか？　教会の教えに反対する者たちを集め、あなたの宮殿に留め置き、彼らに恐れを知らず、皆を説教して邪悪な教義に従わせようとする大胆さを与えているではありませんか！」　一方、正教徒たちは、あなたの厳しい禁令を恐れ、隅っこでさえも正教を擁護する言葉を口にすることさえできない。これは仲介や和解のしるしではなく、迫害と拷問のしるしである。

「私としては」と皇帝は答えた。「先ほど申し上げた通り、あなた方と同じ考えを持っています。しかし、イコンの崇敬に関して疑念があるという話が私の耳に入った以上、これを黙殺するのではなく、真実を明らかにするよう努めるのが私の務めです。　では、なぜあなたがたは反対者たちと

[2842] キジク――プロポンティス諸島のひとつに位置していた都市で、紀元前5世紀にミレトス人によって建設された

対話しようとしないのか。その理由は明らかだ。あなたがたは無知であり、自らの見解を擁護しうる聖書の根拠を持っていないからである。

すると、ニコミディアの聖テオフィラクト司教はこう言いました。

「今、あなたの目の前にあるキリストのイコンこそが、聖なるイコンへの敬虔な崇敬を裏付ける、私たちの正統信仰の無数の証拠があることを証ししています。しかし、誰も私たちの言葉に耳を傾けてはくれず、私たちに禁止令を課す権力や強大な勢力との闘いにおいて、何らかの成果を上げることは困難なのです。」

その後、ニカイアの聖ペトロ司教が皇帝にこう語りかけた。

「どうして、あなたが支援し、共に私たちを攻撃している者たちと、私たちに論争するよう求めるのですか？ あるいは、たとえあなたがマニ教徒[2843]をここに招き入れ、彼らを支援しようとしたとしても、彼らもあなたの保護の下で容易に私たちに打ち勝つだろうということを、あなたは知らないのですか。」

さらに大胆な演説を行ったのは、サルディスの司教聖エウフィミオスであった。

「聞け、王よ！　私たちの主キリストが地上に降臨されてからすでに八百年以上が経ち、至る所の教会で、その御姿はイコンとして描かれ、その御姿をもって崇められてきた。　一体誰がそれほど傲慢で、これほど長い間教会で守られ、聖なる使徒たち、殉教者たち、そして神に霊感を受けた教父たちを通じて現代にまで伝えられてきた伝統を、あえて変えたり廃止したりしようというのか？ 使徒はこう言っています。*「ですから、兄弟たちよ、堅く立ち、あなたがたが、私たちの言葉や手紙によって教えられた伝統を守り続けなさい」*（テサロニケの信徒への手紙第二 2:15）。また、*「たとえ私たちや、天からの天使でさえ、私たちがあなたがたに宣べ伝えたこととは異なることを宣べ伝えたとしても、その者は呪われよ」*（ガラテヤの信徒への手紙 1:8）。 それゆえ、イリナとコンスタンティヌスの敬虔な治世の時代に、最初の異端者である偶像破壊者たちに対抗して全地公会議が招集され、神の御子ご自身が御指をもってその公会議を承認されたのである。その公会議の決定事項のいかなる部分をも破るか、あるいは破壊しようとする者は、呪われよ。

これらの言葉は皇帝に激しい怒りを呼び起こしたが、それでも彼は、偽善的に柔和なふりをしながら、辛抱強く耳を傾けていた。熱心な教会の教師であり、ストゥディオス修道院の修道院長である聖テオドロスも、恐れを知らずにこう語った。

「王よ！　善のために定められた教会の秩序を破壊してはなりません。聖使徒パウロはこう言っています。*『神は教会において、ある者を使徒とし、ある者を預言者とし、ある者を福音宣教者とし、ある者を牧者および教師として、聖徒たちを完全な者とするために』*（エフェソ4:11–12）と語っておられますが、使徒はここに王を加えてはいません。王よ、あなたには世俗の事柄、国家、そして軍隊を統治する任務が委ねられています。それらに専念し、教会の　な統治については、使徒の教えに従い、牧者や教師たちに任せてください。　もしそうしないのであれば、たとえ天使が天から、私たちの正しい信仰に反する教えをもたらしたとしても、私たちはそれに従わないし、ましてや、はかない人間であるあなたに従うはずがないことを知っておきなさい。

すると、王は激しく怒り、聖なる父たちの言葉を自分に対する冒涜と侮辱とみなして、それまで偽りの柔和さの陰に隠していた内なる激怒を露わにした。　彼は、聖なる公会議の全員を侮辱と冒涜をもって宮殿から追放し、その後、正義の牧者である聖なるニキフォロス総主教を不当に王座から追放した。他の正教会の司教たちに対しても同様に振る舞い、聖テオドロス・ストゥディトスをはじめ、全員を様々な国や場所へ流刑に処した。　彼は、コンスタンティノープルの総主教の座に、自身

[2843] マニ教徒たちは、世界には善と悪という二つの王国が存在し、それらが絶えず互いに争っていること、また人間には善と悪の二つの魂があり、キリストには肉体はなく、ただ見かけ上だけ苦しんだに過ぎないことを説いた。また、魂の転生も認めていた。

の顧問の一人である平信徒テオドトス――通称カッシテロス――を据えた。彼は異端の信仰を持つ者であり、 罪深い生活を送る人物であった。彼はあたかも自身の病（彼は胃の病を患っていると語っていた）を治すためであるかのように装い、実際には罪を犯すために、医療の術を心得たある女奴隷を側に置いていた。 また、正教徒を追放した後、王は他の主教座にも、自らの邪信な偽司教たちを据え、聖なる教会から聖なるイコンを追い出した。こうして、かつてレウ・イサウリアヌスとその息子コプロニムスの時代にあったのと同じような、イコン崇拝をめぐる迫害が、再び正教徒に対して始まったのである。

異端の皇帝レウ・アルメニア人と、彼と志を同じくする偽総主教テオドトスは、コンスタンティノープルで彼らの不法な集会を招集し、自ら誓約の下にありながら、正教徒たち、 神聖かつ祝福された聖なる父たちを呪い、この不義な集会に同意しなかった者たちを様々な拷問と死に追いやった。異端の集会が終わると、皇帝は主要な修道院の修道院長たちを召し出し、その中には、我々が語る神聖なる父ニキタも含まれていた。 王はまず、お世辞めいた言葉で彼らを自らの異端へと誘い込もうとしたが、彼らが自分の意志に従わないのを見ると、彼らを別々の牢獄に閉じ込め、一人ずつ隔離し、「今後、彼らをどう処置すべきか」と考えた。

そして、尊者ニキタは、悪臭漂う牢獄に何日も閉じ込められていた。この悪臭漂う牢獄への投獄そのものが、聖人にとっては少なからぬ苦しみであった。さらに、毎日、行儀も言葉も乱暴で恥知らずな、人間と呼ぶに値しない者たちが彼のもとを訪れてきた。 彼らは冒涜的で恥知らずな言葉で聖なる長老を辱め、非難し、彼に大きな傷を負わせた。これらの人々は、異端者たちによって意図的に送り込まれたものであった。 その中でも最も悪辣だったのは、ニコライという名の男であった。彼は、狂気じみた下品な言葉で聖人を侮辱し、特に聖人を悲しませていたが、ある時、とっくに亡くなっていた彼の父が夢の中に現れ、「神のしもべを放っておきなさい」と言った。それ以来、ニコライは悪口を言うのをやめ、自ら聖人を煩わせないばかりか、他の人にも聖人を煩わせないようにした。 尊者は牢獄での苦難の中、多くの日を過ごした。その後、王は彼を東方の国、マサレオンという町へ流刑に処すよう命じた。その年は厳しい冬であり、尊者は薄着のまま、寒さ、雪、風によって多くの苦難に耐えなければならなかった。 さらに、彼を追放先へ連行した役人は、残酷で、いかなる同情心も欠いた人物であった。彼は旅の途中、長距離を短期間で移動させるため、長老に急がせ、彼を疲れ果てさせた。

王は、他の高潔な修道院長たちに対しても同様に振る舞い、一人ひとりを別々に追放した。その後、あらゆる苦しみを超越した者たちを監禁し続けても、成功は得られないばかりか、かえって彼らに自らの教えをさらに熱心に守らせるだけだと心の中で考え直した王は、気まぐれな性格ゆえに、その決意を翻した。 尊者ニキタがマサレオンで追放者として過ごしたのはわずか五日間だったが、皇帝は彼および他の修道院長たちを直ちにビザンティウムへ連れ戻すよう命じた。 帰路は往路よりもさらに急ぎ足で進められたため、聖人は急な旅路と厳しい寒さのため、かろうじて一命を取り留めた。すべての修道院長がビザンティウムに連行されると、皇帝は、彼らをどのようにして自分と意見の一致を図らせるかを決めるまで、彼らを監視下に置くよう命じた。 冬が過ぎ、聖なる大四旬節と輝かしい聖なる復活祭が過ぎ去ると、皇帝は囚人たちを、まるで悪魔の口から雄弁術を学んだかのような前述のヨハネス・グラマティコスに引き渡し、彼が望むままに彼らを拷問するよう命じた。彼らをそれぞれ別の牢獄に閉じ込め、異教徒が聖人たちを苦しめたのと同じくらい、あるいはそれ以上に彼らを苦しめた。牢獄は狭く、薄暗く、悪臭が漂い、寝床すら与えられない囚人たちに激しい苦痛をもたらした。 小さな窓から、犬のように、不潔で腐ったパンが、飢え死なない程度の1日わずか8ゾルトニク分だけ与えられ、濁って悪臭を放つ水も与えられた。司祭たちをこのような窮状に追い込み、拷問者ヨハネは、彼らを打ち負かすか、自分に同意させるか、あるいは餓死させることを企んでいた。 さらに、聖ニキータの悲しみを深めるように、悪意に満ちたヨハネは、彼の元弟子であり

、　、まだ若き年を迎えたばかりのテオクティストという名の青年を捕らえ、彼もまた過酷な牢獄に閉じ込め、飢えと渇きで苦しめた。　異端者たちは、聖父たちが正統信仰から背くよりはむしろ死を選ぶ覚悟であることを見て、彼らに対して次のような策略を企てた。彼らは言った。

「我々があなた方に求めるのは、ただ一度だけ、教会でフェオドトス総主教と共に聖体拝領を行うことだけです。それ以外は何も求めません。その後は、各自が自分の信仰と教義を保ったまま、自由にそれぞれの修道院へ戻ることができます。」

異端者たちのこの狡猾な策略に惑わされた修道士たちは、ある程度彼らの要求に傾きかけた。しかしその後、それが欺瞞であることを確信すると、彼らは深く悔い改め、正しい道へと立ち返った。　一人ひとりが特別な牢獄や監禁から解放された後、彼らは尊いニキタ神父のもとを訪れ、テオドトスと交わりを結び、牢獄から出ることに同意するよう、彼を説得し、懇願し始めた。　聖ニキタは、キリストのために耐えているこの監禁を離れることに同意せず、父たちの願いを聞き入れる気はまったくなかった。しかし、父たちはこう言って強く迫った。

「私たちがここから出て、あなただけをここに残すことはできません。私たちに求められているのは、ほんの小さなこと――ただテオドトスと共に聖体拝領をすることだけです。私たちの信仰は、私たちの中に残ります。考えてみれば、このような厳しい状況下では、すべてを台無しにするよりも、わずかなことを許容するほうがましです。」

こうして彼らは長くしつこく主張し、ニキタを強要した。聖人は、苦難を避けたいという願望や拷問への恐れからではなく、長老たちの熱心な懇願と彼らの白髪を敬う気持ちから、本意に反して彼らの説得を受け入れ、外へ出た。　彼には生と死の選択が待ち受けていた。正教のために死を選ぶことを生よりも望んでいたとはいえ、その時は、正しい信仰と徳高い生活を送っていることを彼が知っていた誠実な仲間たちの言葉に逆らうことはしなかった。

一同は偽パトリアルヒのもとへ向かった。偽パトリアルヒは、彼らを自分との交わりに引き込むため、わざわざイコンで飾られたある礼拝の場へと案内した。それは、長老たちが聖なるイコンを見て、パトリアルヒの正統性を確信するように仕向けるためであった。　そこでテオドトスは聖体礼儀を執り行った。彼らは彼の手から聖体を受け、彼の口から次のような言葉を聞いた。「キリストのイコンを崇敬しない者は、破門されよ」。総主教がそう言ったのは、自らが救い主のイコンを崇敬していたからではなく、修道士たちの前で、彼との交わりに疑いを抱かせないよう、偽善からであった。　その後、皆がそれぞれの修道院へと散っていったとき、聖ニキタは、偽りの総主教テオドト――その偽善的で欺瞞的な人物――と交わりを持っていたことを心から悔やみ始めた。聖人は、正しい道からのわずかな逸脱を、自らの完全な迷いとして深く自責したのである。　彼は別の国へ身を隠し、そこで自らの罪を悔い改めようと決意した。船に乗り込み、プロコンニスと呼ばれる島（マーブル海、現在のマルマラ海）へと向かった。しかしその後、彼は心の中でこう考えた。「罪を犯した場所こそが、悔い改めを行うべき場所である」と――そしてビザンティウムへと戻った。

街を公然と歩き回りながら、聖ニキタは恐れを知らず、第七回全地公会議の聖なる教父たちによって定められた正しい教義を守るよう人々に説いた。皇帝はこれを知り、聖人を呼びつけてこう尋ねた。

「なぜ他の修道院長たちのように、自分の修道院へ戻らなかったのか？　なぜお前だけ、我々の命令に従わず、勝手にここに残っているのか？　それとも、我々の権威を無に等しいと見なしているのか？　我々の命令に従い、自分の修道院へ戻れ。もし行かなければ、お前を拷問するよう命じる。」

聖人は穏やかに答えた。

「王よ！　私は自分の修道院へは行きません。私の信仰を捨てず、自分の信条を守り続けます。私の父たち、すなわち聖なる正教会の司教たちもその信条を守り、罪もないのにあなたから追放や束縛、多くの苦難に耐えながら、私たちが身を置き、神の栄光への希望に慰められている正教会を守

り抜いているのです。　私について確かなことを知っておいてほしい。私がすべきではなかったことを行ったのは、死を恐れたからでも、この世の生活への愛からでもなく、従順のゆえに長老たちの命令に従い、本意に反してのことだった。ただ彼らの意志に従っただけで、偽パトリアルヒ・テオドトスと交わりを持ったが、今となってはそれを後悔し、悔い改めている。　今後、私があなた方と一切の交わりを持たないことを、どうか確信してください。私は当初から受け継いできた聖なる父たちの伝承に忠実であり続けます。私に対してどうしようとご自由にどうぞ。私からそれ以外の言葉を聞くことは決してないでしょう。

王は、彼の信念の堅固さを見て、彼を「マンガナ」と呼ばれる王宮の長であるザカリアという者に引き渡し、判決が出るまで彼を監禁させた。ザカリアは善良で敬虔な人物であり、長老に何の苦痛も与えなかったばかりか、むしろ彼に多くの敬意を払った。　その後、王は聖ニキタを聖殉教者グリケリアの島へ流刑に処した。この小さな　島が聖殉教者の名で呼ばれていたのは、そこに彼女の聖遺骨が安置され、彼女の名に因んで壮大な教会と修道院が建立されていたからであり、その修道院は異端を信じる当局によって、ある宦官アンフィムに管理を委ねられていた。　この男は決して善良な人物ではなかった――魔術師であり、神を冒涜する者であり、悪事を働く能力を持ち、敵意に満ち、狡猾で、高慢かつ無慈悲な人物であった。現地の住民たちは、その凶暴さと邪悪な気性から、彼をカイアファと呼んでいた。　当時、このような者たちが修道院の管理に任命され、世俗の権力の後ろ盾を得て、すべてを自分の気まままに変えようとしていた。アンフィムは、自分に送られてきた聖人を受け入れ、送り主から与えられた権力を利用して、熱心に彼を苦しめた。　神の御使いを最も狭苦しい牢獄に閉じ込め、牢から顔を出すことさえ許さず、絶え間ない拷問を加えた。鍵は自ら持ち歩き、わずかな食事も極めて狭い隙間から差し入れるよう命じた。　異端者の指導者たちは、もしアンフィムが尊者ニキタを彼らと同じ考えに強制的に従わせれば、多くの報いを与えると約束していた。そのため、この呪われた男は、強制によって彼を異端の思惑へと導こうと期待し、聖人にとりわけ執拗に嫌がらせをした。しかし、尊者は敬虔さゆえに受ける苦難を愛をもって耐え忍んだ。　神は彼の中に御自身の驚くべき恵みを現し、この人が義人であり、聖人であり、苦難にある人々を助ける奇跡を行う者であることを示された。　前述のザカリアは、国政の用事で王からトラキア地方へ派遣された際、野蛮人の手に落ち、捕虜として連行されてしまった。このことを知ったシナドの聖ミカエル司教――彼もまた正教の信仰ゆえに牢獄に囚われていた――は、尊者ニキタに次のように伝言を送った。

「我らの共通の友人ザカリアが縛られ、異教徒の国へ連行された。どうか、あなたならそれができるのだから、彼のために神に祈ってほしい。」

この知らせを受け、聖人は深く悲しみ、その日は一日中食事を口にしなかった。そして夕方、彼に仕える兄弟フィリッポからろうそくを受け取り、火を灯して一晩中祈りを捧げ、捕らえられたザカリアのために慈悲深い神に懇願し、彼を野蛮人の手から解放してくださるよう願った。　すると、神から、まもなくザカリアが自由の身になるという知らせが彼に届いた。朝、フィリッポがやって来て、父の顔が輝き、心が喜びに満ちているのを見て、こう言った。

「父上！　昨日、私はあなたが非常に悲しみ、嘆きに暮れているのを見ましたが、今や喜びに満ちているのを見ます。どうか、この悲しみから喜びへの変化の理由を教えてください。」

聖人はこう答えました。

「まもなく、私たちの友であるザカリアがここに来ることを喜んでいるのだ。」

その通りになった。数日後、ギリシャの王は異民族と和平を結び、双方は捕虜の交換を始めた。王は捕虜を交換のために送り出す際、ザカリアのことを考慮に入れていなかった。なぜなら、彼が第七回全地公会議の教義を堅持し、正教徒を支援していることをすでに知っていたからである。　そのため、彼を野蛮人の手に委ね、そこで死なせることにした。野蛮人が多くのギリシャ人捕虜を解放した際、ザカリアだけが取り残された。野蛮人の首領は彼にこう言った。

「故郷へ帰りたいか？」

「ぜひともそうしたいのですが」とザカリアは答えた。「しかし、我らの王は、私をこの捕囚から救い出すことを望まれなかったのです。」

首領は言った。

「お前を解放してやる。望むままに行け。」

野蛮人の首領がこれほど予期せず自分に慈悲を示しているのを見て、ザカリアは、かつて自分が親切を施した聖なる先人たちの祈りによって、神ご自身がこれを成し遂げられているのだと悟った。勇気を奮い立たせ、彼は首領に言った。

「もし私を自由の身にしてくださるなら、私と同じ名を持ち、同じ故郷の出身で、私と共に鎖につながれていたもう一人の捕虜も、どうか解放してください。」

隊長は答えた。

「彼も連れて行きなさい。二人で平穏に故郷へ帰れ。」

こうしてザカリアは解放された。友と共に島へ戻り、敬虔なニキタ神父のもとを訪れると、彼は神が野蛮な捕囚から彼らを救い出してくださったのは、神父の聖なる祈りのおかげであると感謝を捧げた。　この聖なる父は、さらに別の輝かしい奇跡も成し遂げた。神への熱心な祈りによって、一隻の小舟で海を航行中に真夜中に突然の荒波に見舞われた三人の兄弟を、溺死から救い出し、無傷のまま陸地へと導き出したのである。　このように、彼自身も捕虜として束縛され、苦難に遭いながらも、他の人々を束縛や苦難から奇跡的に救い出したのである。

この聖人は、神に背く王レフ・アルメニア人の滅亡に至るまで、6年間牢獄で苦難に耐えた。王が自らの兵士たちに予期せず殺害され、アモリア出身のミハイル（通称トラウリウス、あるいはバルボス）が王位に就くと、聖なる父たちは束縛と監禁から解放され、自由の身となった。　その時、ミディキ修道院のイグメンである聖ニキタも解放された。彼は流血なき殉教者であり、正教の勇敢な告白者、そしてキリストの無敵の戦士であった。　彼は自分の修道院には戻らず、静かに暮らしたいと願い、ビザンティウムの北、ほど近い人里離れた場所に身を寄せた。そこで彼は、長きにわたる苦難の末、短い間しか生きられなかったが、多大な癒しの恵みの力によって、多くの人々に奇跡的な恩恵をもたらした。　死を目前に、流刑の地で耐えてきた数々の病による苦しみの末、彼は最後となる病に倒れ、土曜日に聖体拝領を行い、日曜日の夜明けに、4月3日[2844]に主のもとへ召された。

彼の聖なる逝去の知らせは、たちまち首都とその周辺に広まった。まもなく、街中から、そして四方八方から、男女を問わず、聖職者も世俗人も問わず、多くの民衆が集まった。ミディキオス修道院やその他の修道院の修道士たちも駆けつけ、エフェソスの聖テオフィロスとテッサロニキの聖ヨセフという二人の司教も参列した。　慣例に従って聖なる父の尊い遺体を整えた後、彼らはそれを聖遺物箱に納め、船へと運び、ミディキオス修道院へと運んだ。プルシアドスの司教である至福のパウロは、多くの修道士や信徒たちと共に岸辺で遺体を出迎え、肩に担いで修道院へと運んだ。　道中、驚くべき奇跡が起こった。病人は癒やされ、悪霊に取りつかれた者は邪悪な霊から解放された。また、長きにわたり出血に苦しんでいたある女性は、尊者聖人の聖遺物にただ触れただけで、即座に癒やされた。　聖歌隊による詩篇や相応しい賛美歌の合唱の中、尊者様は、その修道院の初代修道院長である、先に永眠した聖ニキフォロス神父の墓所、玄関の左側に安置された。　そして埋葬後も、多くの奇跡が起こり、信仰をもって訪れる者たちに癒しが与えられました。これは、私たちの神キリストの栄光のためであり、その聖なる御名によって賛美される方のためです。父と聖霊とともに、今、そして常に、世々限りなく、すべての者から栄光と賛美と礼拝がキリストに捧げられますように。アーメン。

[2844] 824年。

4月17日

4月4日（旧暦）

同日、聖ゲオルギオス・ベズモルヴニクの記念日。

聖なる父ヨセフ、賛美歌作家でありカノンの作者である方の記念日

4月4日の記念日

聖ヨセフの故郷はシチリアであった[2845] 。彼の両親、プロティノスとアガフィアは、敬虔で徳の高い人々であった。彼らの神に喜ばれる生き方ゆえに、主は彼らにこのような息子を授けられた。その息子は、傑出したカノンの作者として、教会の益となる聖なる賛美歌をもって教会を飾り立てたのである。　少年は良質な学問と高潔な品行の中で育てられ、その幼少期の振る舞いからも、成人して徳の完成に至るであろうことがうかがえた。彼は柔和で、穏やかで、謙虚であり、少年らしい遊びを避けていた。　幼い頃から断食と節制を愛し、美味しい料理を求めず、パンと水だけで、それも夕方にしか食事をとらなかった。また、聖書を非常に熱心に学んでいた。　こうしてヨセフは肉体と精神ともに成長していたが、その頃、蛮族がシチリア地方に侵攻し、彼の両親は故郷を離れて他国へ逃れることを余儀なくされた。当初、ヨセフは両親と共にペロポネソス半島へ向かったが、その後、両親を残してマケドニアの首都テッサロニキへと去った；　そこで彼は修道院に入り、修道士の戒律を受け、禁食の修行に励み、あらゆる種類の苦行　修道生活と美徳を熱心に実践し、やがて完全な人物、経験豊かな修道士となった。　皮で覆われた大地が彼の寝床となり、ぼろぼろの着物が彼の衣となった。彼の断食は厳しく、食事は小さなパンの切れ端とわずかな水のみ、徹夜祈祷を欠かさず、ひざまずくことは絶え間なかった。口には常に賛美歌が、手には労働があった。　彼は熱心に聖書を読み、深い知恵と霊的な分別を身につけ、まるで神の天使のように、清く聖なる生活の模範として兄弟たちの間で輝いていた。彼の善行や数多くの偉業について、詳細に語り尽くすことは不可能である。

かくして彼は、他の誰よりも神に喜ばれる働きを成し遂げた。修道院長と兄弟たちの強い勧めにより、彼は聖職の位を受け、テッサロニキ司教によって長老に叙階された。長老となってからは、その功績と労苦をさらに強め、頻繁に神聖な聖体礼儀を執り行い、涙を流しながら自分自身と全世界のために祈りを捧げた。 ある時、聖グリゴリオス・デカポリトス[2846] が修道院を訪れた。彼は聖ヨセフを見て、聖なる人物として深く愛し、彼を友であり共同生活者とした。　しばらくして、グリゴリウスは、異端者たちに動揺させられていた信徒たちを励ますためにビザンティウムへ向かう際、イグメーンと修道院の兄弟たちに、ヨセフを自分の助けとして同行させてほしいと頼んだ。彼はヨセフと別れたくなかったからである。しかし、イグメーンと兄弟たちもまた、このような共同生活者であり、真の神の僕である彼を失いたくなかった。　しかし、偉大なる長老の願いを尊重し、異端の嵐に揺れる教会の必要に耳を傾けた彼らは、聖ヨセフを聖グリゴリウス・デカポリトスと共にビザンティウムへ送り出した。

そこに到着すると、ヨセフとグリゴリウスは聖殉教者セルギウスとバッカスの教会に身を寄せ、互いに競い合うように、過酷で骨の折れる生活を送った。とりわけ、最古参の修道士であり偉大な父であるグリゴリウスに倣った至福のヨセフは、　彼を模範として、心の中で絶えず徳を磨くことを決意した。二人は共に尽力し、敬虔な者たちに、有害な異端から身を守り、正統な信仰の教義に動揺

[2845] シチリアは、地中海の大島の一つであり、アペニン半島の南に位置し、メッシーナ海峡によって半島から隔てられている

[2846] 記念日は11月20日

したり疑いを抱いたりせず、真理の告白において揺るぎない姿勢を保つよう、熱心に教え導いた。

その頃、不敬虔な王レウ・アルメニア人は、すでに[2847]で非難されていた偶像排斥の異端を再燃させ、教会に対して大規模な迫害を開始した。　彼は神の聖堂から聖なるイコンを取り出し、不敬にも足で踏みつけました。また、自分と志を同じくする異端者たちを正教会の司牧者の座に据え、彼らを罷免するとともに、そのうちの何人かを様々な方法で拷問し、滅ぼしました。

そこで聖グリゴリウスは聖ヨセフと共に、信仰の鎧を身にまとい、街の通りや広場、信徒たちの家を巡り歩き、異端の狡猾さに惑わされないよう、助言と諭し、そして懇願を捧げた。　そして、彼らの言葉は、日中の暑さでしおれかけた野の花や草を生き返らせる朝露のようであった。すなわち、異端の教えという暑さによって、気弱になり、疑いを抱き、まるで枯れかけていた人々の心を生き返らせたのである。　その後、多くの修道士たちが聖グリゴリウスに願い出た。すなわち、言葉に長け、肉体の強さゆえに長い道のりの旅路に耐えうる聖ヨセフを、古代ローマへ、　正教会の教皇レオ三世[2848]および現地のすべての正教徒のもとへ派遣し、コンスタンティノープルで聖なる教会に対して行われている迫害について知らせるよう懇願した。彼らは、ローマの正教徒たちが迫害されている者たちを助け、誤った教義を論破し、異端者たちの冒涜的な口を封じてくれることを期待していた。聖グリゴリウスは、至福のヨセフとの対話の中で、彼に次のような助言を与えた。

「わが子よ、今こそ、神に対するあなたの心からの愛と、敬虔さへの熱意を示す時が来た。古都ローマへ行き、現地のキリスト教徒の指導者および西方のすべての正信者たちに、邪悪な王――その名は「獣」――が聖なる東方教会にどのような災いをもたらしたか、キリストのイコンと御母マリアのイコンをいかに侮辱し踏みにじったか、教会からその装飾を奪い取り、罪のない善良な牧者たちを追放し、　その代わりに、偽りの牧者たち――傭兵や貪欲な狼たち――にキリストの群れを委ね、今や羊たちは略奪され、散り散りになっている。　告げよ、権力者によって巻き起こされた激しい嵐が、日ごとにキリストの教会を揺るがし、アルメニアから来た獰猛な獅子が脅しを吐き散らし、その異端的な狡猾さによって多くの人々を飲み込んでいることを。告げ、説得し、懇願せよ。正教徒たちが神の言葉の剣を抜き放ち、私たちを迫害する者たちに立ち向かうように。

聖グリゴリウスは、このように、またこれに類することを語った。若き頃から従順に慣れ親しんでいた至福のヨセフは、少しも異議を唱えなかった。謙虚に頭を下げ、グリゴリウスに父なる祈りと旅の祝福を請い求め、船に乗り込み、ローマへと向かった。

しかし、神の測り知れない御心は、それとは異なるものであった。　神はすべてを益となるよう導かれ、私たちには不利で残酷に見えるような状況を通じてさえ、御自身の聖なる御名を賛美するために、驚くべき、そして栄光に満ちた御業を成し遂げられることがしばしばある。こうして、神の御計画により、ヨセフのローマへの旅にも障害が生じたのである。　アルメニアのレフ王の同志たち、すなわち彼らの迫害の執行者たちは、多くの者が偶像破壊運動によって迫害され、首都から他の国々へ逃れていることを知ると、逃亡者を捕らえて偶像破壊派の手に引き戻すため、水路や陸路に密かに強盗の待ち伏せを仕掛け始めた。　また、聖ヨセフが正教会の修道士たちによって西方のローマへ送り出されていることも、彼らには隠し通せなかった。彼らは海賊にそそのかして彼を襲わせ、聖ヨセフは敵の手に落ちた。　彼らは船を沈め、聖ヨセフの同行者たちも全員捕らえて、クレタ島の偶像破壊派のもとへ連行した。そこで聖ヨセフは、重い足枷を嵌められ、牢獄に投じられた。　そこで聖人は、昼夜を問わず、正しい信仰のために彼と共に多くの苦難を耐え忍んでいた獄中の仲間たちを、神に霊感を受けた言葉で慰め続けた。自らも束縛の中で主を喜びながら、他の人々にこう語った。

「キリストと、その聖なるイコンへの愛ゆえに私たちが負わされているこの束縛ほど、甘美で喜びに満ちたものがあるでしょうか？」　たとえ一時的な投獄が私たちに多少の悲しみをもたらすと

[2847] 第7回全地公会議において
[2848] レオン（レフ）3世 816年

しても、この苦しみに対して私たちは神に感謝すべきであり、イエス・キリストの御名のために鎖につながれて苦しむことを許されたことを言い表せないほど喜び、それをまるで貴重な宝石や金の装飾品のように大切にした聖パウロを、私たちの輝かしい模範とすべきである。　それどころか、私たちは*「そのように召されているのです。なぜなら、キリストも私たちのために苦しみを受け、私たちに模範を残して、私たちがその足跡をたどるようにされたからです。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがありませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅し返さず、ただ義なる裁き主に身を委ねられました」*（Iペテロ2:21–23）と、使徒の長である聖ペテロは語っている。確かに、肉体の苦しみはある程度の悲しみをもたらすが、キリストの軛を担う者とは、キリストの後に従わず、キリストが私たちのために耐え忍ばれた苦しみの、たとえ一部であっても耐え忍ばない者を指すことはできない。　全能の神である御方は、他のいかなる方法でも人間を救うことができたが、労苦と苦しみから、古くから閉ざされていた天の門を開くことのできる徳の力が生まれることを望まれた。そして、御方は労苦と悲しみ以外の救いへの道を、私たちに示されなかった。　それならば、なぜ私たちが、救い主と御母マリアの聖なるイコンのために苦しみ、健康を損なうことを恥じる必要があるでしょうか。王の不敬虔な命令に逆らうことで、私たちは神の恵みと時宜を得た助けを受けるのです。

聖ヨセフは、聖像を崇敬したために彼と共に牢獄に閉じ込められた同志たちを、このような言葉やそれに類する言葉で慰め、励ました。ある正教会の司教もまた、聖像を崇敬したために苦難にさらされ、彼らと同じ牢獄で共に過ごすことになった。　彼は、牢獄での苦難に耐えきれない無力さを感じ、人間として動揺していた。束縛と苦しみから解放されたいという願望から、すでに聖像排斥の異端に傾き始めており、激しい波に揺れる船のように、沈没寸前であった。　尊者ヨセフは、彼の動揺に気づいたとき、どのような懇願をもって彼に語りかけたことか！　キリストのイコンのために、すなわちキリストご自身のために、ためらうことなく死ぬよう懇願し、どれほどの涙を流したことか！　そして、神に霊感を受けた彼の言葉は無駄にはならなかった。司教はこれほどまでに揺るぎない決意に満ち、最も激しい苦痛の中でも自らの敬虔さを捨てず、魂の雄大な気概をもって、最後まですべてに耐え抜いた。　拷問の場へ連れ出され、拷問者や拷問器具を目の当たりにしても、彼は微塵の恐怖も見せず、自ら衣服を脱ぎ捨て、拷問に身を委ねた。もし可能であれば、イコンによって肉体を帯びて描かれたキリスト・神のために、千回でも死にたいと願っていたのである。　拷問の場で裸のまま吊るされ、全身を矢で貫かれ、ついに頭部を大きな石で打ち砕かれて、司教は主のもとへ息を引き取った。　司教の殉教の死を知った至福のヨセフは、その揺るぎない勇気に大いに喜び、選ばれた戦士をそのような偉業へと導かれたキリストに感謝した。その戦士は、当初は多少の弱さを示したものの、その後完全に改心し、敵に打ち勝ったのである。　このようにして、聖ヨセフは他の人々をも霊的な滅びから救い出し、キリストへと導き、絶えずすべての人に救いの道を教え続けた。そして、神ご自身が彼を死から救い、非常に多くの人々の益となるよう、彼の命を守られたのである。

聖ヨセフは牢獄で6年間を過ごした。そして、邪悪な王レフ・アルメニア人は悲惨な最期を遂げた。キリストの降誕祭の前夜、彼は教会で早朝の礼拝中に、自らの兵士たちによって殺害されたのである。　まさにその同じ時刻、クレタ島の牢獄にいた聖ヨセフは、迫害者の死を知らされ、現れた聖ニコラオスによって奇跡的に束縛から解放された。　聖ヨセフはこの一晩中、眠ることなく、絶え間なく祝祭の賛美歌を歌い、祈りを捧げて過ごした。夜明け前、鮮やかな光が牢獄を照らし、聖職者の衣をまとった、神聖で高潔な人物が、白髪に明るい顔立ちで彼の前に現れ、こう言った。

「私はリキアのミルから、神に遣わされてあなたの元へ参りました。直ちにあなたに喜びの知らせをお伝えするためです。教会を混乱させ、キリストの羊たちを散らした敵は、神の裁きに召され、王国も命も失いました。　今こそ、あなたはコンスタンティノープルに戻り、あなたの中に宿る聖霊の恵みによって、多くの人々を堅く立たせなければならない。

その後、聖人は彼に巻物を手渡し、こう言った。

「この巻物を受け取り、それを食べなさい。」

その巻物にはこう書かれていた。「寛大な方よ、急いでください。そして、御心にかなう限り、慈悲深く、私たちの助けとなるよう尽力してください。」ヨセフはこの巻物を受け取り、読み、それを食べると、喜びながら言った。*「あなたの言葉は、私の喉にどれほど甘美なことか。私の口には蜜よりも甘い」*（詩編118:103）。

すると、彼に現れた方は、同じ言葉を歌うよう命じた。聖ヨセフは喜びながらそれを歌い上げると、たちまち彼の鎖と足枷が緩み、首や手、足から外れ落ちた。そして彼は、現れた聖人の言葉を聞いた。

「立ち上がって、私について来なさい。」

彼は立ち上がった。牢屋の扉は自ずと開き、彼は看守に気づかれることなく外へ出た。そして、ある目に見えない力によって空中に運ばれているのを感じた。ほどなくして、彼はコンスタンティノープルの近く、街へと続く大通りにたどり着き、この極めて栄光に満ちた奇跡に対して神を賛美した。

都に入ると、ヨセフは愛する父グリゴリオス・デカポリトスがすでにこの世を去っていたことを知った――彼は主のもとへ旅立っていた――。彼はただその弟子である至福のヨハネを見かけ、グリゴリオスの棺のそばで彼と共に深く嘆き、聖なる父が生きておられる姿を見ることができなかったことを深く悲しんだ。　しばらくして、ヨハネもまた主のもとへ旅立ち、聖グリゴリオスの近くに埋葬された。その後、尊者ヨセフは、町の外れ、聖ヨハネ・クラマトルスの教会からほど近い、人里離れた静寂な場所へと移り住んだ。　ここに定住すると、彼は聖ニコラオスの名に因む教会を建立し、聖グリゴリウスと聖ヨハネの両聖人の聖遺骨をそこに移し、修道院を設立して修道士たちを集めた。ここには、神に霊感を受けた教えを聞くために、多くの聖職者や世俗の人々が絶えず尊者ヨセフのもとに集まってきた。なぜなら、聖霊の恵みが、甘美な言葉となって彼の口から川のように流れ出ていたからである。　ある時、テッサリアにいた尊者ヨセフは、彼が知っていたある徳高い人物から、聖使徒バルトロマイの聖遺物の相当な部分を受け取り、それを自分の修道院に持ち帰り、聖使徒バルトロマイの名を冠した特別な教会を建立し、その中に聖使徒の聖遺物の一部を尊く安置した。　聖使徒に対する深い愛と信仰を抱いていた彼は、しばしば夢の中で聖使徒の姿を見る恵みにあずかった。彼は聖使徒の祝祭日を賛美の聖歌で飾りたいと願っていたが、この行いが聖使徒の御心に適うかどうか疑い、決心がつかなかった。そこで、神と神の使徒に対し、このことを明らかにしてくださり、聖バルトロマイにふさわしい賛美の詩を創作するための天からの英知を授けてくださるよう、熱心に祈った。　尊者ヨセフは断食と涙をもって四十日間祈り続け、使徒の記念日が近づいた祝祭の前夜、祭壇に白い衣をまとった聖バルトロマイが現れ、祭壇の幕を開けて彼を自分の方へ招いているのを見た。　聖ヨセフが近づくと、聖使徒は玉座から聖福音書を取り上げ、それをヨセフの胸に置きながらこう言った。

「全能の神の右の手があなたを祝福し、天の知恵の水があなたの舌に注がれますように。あなたの心が聖霊の宮となり、あなたの賛美歌が全宇宙を喜ばせますように。」

聖使徒バルトロマイはそう告げると姿を消し、尊者ヨセフは自らの内に知恵の恵みを感じ取り、言葉に尽くせぬ喜びと感謝の念に満たされた。　それ以来、彼は教会の賛美歌やカノンを書き始め、それによって聖使徒バルトロメオの祝日だけでなく、多くの聖人の祝日も彩った。とりわけ、彼は多くのカノンをもって、聖母マリアと聖ニコラオスを深く崇敬した。彼は聖なる教会を賛美歌で豊かに飾り、賛美歌作家という名を得た。

テオフィロス[2849] の即位後、再び教会に偶像破壊運動の嵐が吹き荒れ、多くの人々が迫害と拷問にさらされた。その時、私たちの尊い父ヨセフ（聖歌作家）も、異端を恐れず公然と糾弾したため、ヘルソンへ追放され、そこで鎖につながれ、苦しみながらテオフィロスの死まで過ごした。　テオフィラスの死後、統治を引き継ぎ、至聖なるメフォディオス総主教と共に正教を復興させた（[2850] ）テオドラ皇后は、息子ミハイルと共に、ヨセフをコンスタンティノープルへ呼び戻した。　聖メフォディオスの帰天後に教皇の座に就いた聖イグナティオスは、尊者ヨセフを、神の偉大なるコンスタンティノープル教会の守護者に任命した。　その高潔な生涯と、多くの者を救いの道へと導いた、その口から発せられる英知に満ちた、魂を救う言葉により、尊者ヨセフは至聖なる総主教およびすべての聖職者や世俗の者たちから深く愛されていた。　数年が経ち、聖ヨセフは不法を糾弾したため、再び女王の弟であり、王に次ぐ権力者であったヴァルダによって追放された。　神を恐れず、人々を恥じることもしなかったヴァルダは、教会の掟を著しく破り、何の罪もない正妻を追い払い、代わりに自分の親族を妻に迎えた。　聖ヨセフは、かつて聖ヨハネ・洗礼者がヘロデを糾弾したように、公然と彼を糾弾したが、そのためにヴァルダは彼を迫害し、害を加えた。同じ運命をたどったのは、至聖なるイグナティオス総主教でもあり、彼は不法なヴァルダによって追放され、多くの苦難を被った。やがて、ヴァルダが王の家臣たちによって殺害され（騒動の末に命を落とした）、その後、ミハイル王もまた側近たちの手によって命を落とし、ヴァシレイオス・マケドニア人[2851] が王位を継承すると、聖イグナティオスと聖ヨセフはコンスタンティノープルへ戻され、　イグナティオスは再びその座に就き、ヨセフは以前の聖器保管官の職に復帰した。至聖なるイグナティオスだけでなく、その後継者であるフォティオス総主教[2852] もまた、聖ヨセフ・詩人を愛し、敬っていた。フォティオスは尊者ヨセフに教会のすべての管理を委ね、彼を「神の人」、「肉体の天使」、「諸父の父」と呼び、すべての聖職者に対し、尊者ヨセフを霊的な父として仰ぎ、彼に心を打ち明け、罪を告白するよう命じた。　先見の明に恵まれた聖人は、隠された罪を見抜いたが、罪人を非難することはなく、懺悔者が心を動かされて秘められた不義を打ち明けるまで、諭すような言葉で導いた。　というのも、ヨセフは神に霊感を受けた言葉に長けており、罪人を容易に悔い改めへと導くことができたからである。

長きにわたり生き、深き老齢に達したヨセフは、若き日から取り組んできた多くの労苦――断食、真理のための迫害、束縛や牢獄、教会の体制整備、祝祭日や聖人の記念日を賛美歌で彩ること、そして人々の魂の救いに対する多大な配慮――により、肉体の衰えに見舞われた。　この世を去る直前、聖四旬節の終わりに、彼は病に倒れ、夢の中で神からまもなくこの世を去るという知らせを受けた。　キリストの受難を記念する聖なる「大金曜日」に、彼は自分に委ねられていた教会の諸事柄や業務をすべて書き写し、至聖なるフォティオス総主教のもとへ送った。その後、死を迎える準備を整えながら、神にこう祈り始めた。

「わが主、わが神よ、あなたが御翼の陰で、私の生涯のすべての日にわたり私を守ってくださったことを感謝いたします！今、私の霊を最後まで守り、闇の君主や空中の恐怖から無傷で逃れさせてください。また、私の無知によって犯した生涯の過ちが、私の敵の喜びの種とならないようにしてください。　父なる御言葉よ、あなたの羊の群れを守り、世の終わりまで、あなたの右の手によって創造されたすべてのものを守り抜いてください。あなたの教会の愛する息子たちの助け手となってください。聖なる教会、あなたの花嫁に、永遠の平和と揺るぎない静けさをお与えください。　王なる

[2849] 829年から842年まで

[2850] 840年に聖像崇拝が復活した。聖メフォディオス 846年、記念日は6月14日。

[2851] バシレイオス・マケドニアスは867年から886年まで在位した。

[2852] フォティオスは、857年から867年まで初めて教皇の座に就き、877年から886年まで再びその座に就いた。

聖職者たち（[2853] ）を、御恵みをもって照らしてください。高慢な大悪魔（[2854] ）を、正教の信仰を守る者たちの足元に屈服させ、魂に有害なあらゆる異端を教会から遠ざけてください。そして、私の魂には、肉体との平和で穏やかな別れを授けてください。　たとえ私が、聖霊が宿られた御前の聖なる御使いたちの列に加わるに値しない者であっても――私は御前において自らを罪人であると自覚しているからです――、限りなく慈愛に満ちた御方よ、私の罪に目を留めず、私を御子の仲間となるにふさわしい者とさせてください。

祈りを捧げ、神聖な聖餐を受けた後、聖ヨセフは傍らにいたすべての人々を祝福し、天に向かって両手を上げ、明るく喜びに満ちた顔で、その聖なる魂を神に委ねました。

するとたちまち、至る所から多くの修道士や信徒が集まってきた。彼らの多くは涙を流し、故人を「父」とも、「養育者」とも、「恩人」とも、「慰め主」とも、「師」とも、「導き手」とも、「救いへの指導者」とも呼んだ。　賛美のうちに棺へと見送られ、栄誉をもって埋葬された。しかし、不滅の霊たちによって、その聖なる魂が天の住まいに導かれた様は、さらに尊く、栄光に満ちたものであった。この光景をこの目で見ることができたのは、彼に深く愛された一人の友人、すなわち、敬虔で神に喜ばれる人物であり、尊者のお亡くなりになった場所からかなり離れた場所にいた人物だけであった。　神に愛されたヨセフの魂が肉体から離れ、天へと昇っていったその瞬間、前述の男は上空からこう告げる声を聞いた。

「彼は旅立った」と。そして上を見上げると、天の穹蒼が開き、そこから聖人たちの御顔が姿を現した。まず使徒の御顔、次に殉教者の御顔、預言者の御顔、そして聖人の御顔であった。その男は、この不思議な幻に驚き、畏怖の念を抱き、その意味を理解できずにいた。　そして再び、彼は声を聞いた。「見よ、そして耳を傾けよ。そうすれば、あなたが見ているすべてのものの意味がわかるだろう」。するとすぐに、彼は誰よりも輝かしい四人の若者を目にし、その真ん中に、言葉では言い表せないほどの清らかさと栄光に満ちた乙女がいた。それは、至聖にして至福の聖母マリア、私たちの神キリストの母であった。　行進しながら、彼女は聖なる人々の軍勢に対し、彼らの行いと記憶を賛美歌で称え、その生き様に倣ったあの聖なる魂を受け入れるよう命じた。そして皆は、言葉に尽くせない喜びをもって迎え、熱意と愛をもって、天へと昇っていくある尊い御方を迎え入れた。　この光景を目の当たりにした前述の男は、心の中で自問した。

「天の軍勢は、いったい誰にこれほど大きな栄誉を与えているのだろうか？」

そして、聖なる魂を天へと送り上げる天使たちの力強い声を聞いた。「これは聖歌作家ヨセフである。全教会の栄光であり、聖霊の恵みにあずかり、使徒や殉教者たちの生き様に倣い、彼らの行いを記した者である。それゆえ、今、まさにそれらの聖人たちから栄誉と称賛を受けているのだ」。かくして、聖ヨセフ・聖歌作家の魂は、荘厳に天の住まいに迎え入れられた。　この栄光に満ちた幻視は、その光景を目撃した男に大きな喜びをもたらした一方で、祝福された魂が天上の住まいに入り、三位一体の神の最も輝かしい御前に現れて礼拝したその栄光を、その後見ることができなかったことへの深い残念さをも抱かせた。

尊者ヨセフの天への旅立ちについては、別の伝承もある。コンスタンティノープルには、聖殉教者テオドロス・ファネロトの教会があった。「ファネロト」とは「告げ知らせる者（発見者）」を意味する。というのも、彼は祈りを捧げに訪れる人々に、盗まれた物、隠された物、あるいは失われた物の所在を明らかにしていたからである。　ある人物にとって非常に頼りになる奴隷が逃げ出し、その人物は悲しみに暮れて聖テオドロス・ファネロトの教会を訪れ、祈祷会を執り行い、キリストの殉教者に自分の奴隷の行方を示してくれるよう祈った。彼は三日三晩を教会で過ごしたが、啓示を得

[2853] ペトロの手紙一2:9において、キリスト教徒はこのように呼ばれている。

[2854] ヘブライ語で「不敬虔な」という意味であり、悪魔の名称である（IIコリント6:15）。

られず、悲しみに暮れて立ち去ろうとした。　早朝の礼拝中、教会で魂に益となる御言葉が読まれている最中、彼は読経の途中で少しうたた寝をしてしまったところ、聖テオドロスが現れ、こう言った。

「なぜ悲しんでいるのか、人よ？　聖なる賛美歌の作者ヨセフがこの世を去ったが、我々は彼のそばにいた。彼は今夜、この世を去り、我々は皆、彼に捧げるカノンと聖歌をもって、その魂を天へと送り出し、神の御前に導いた。だからこそ、私は君のもとへ来るのが遅れてしまったのだ。　さて、私は今ここにいる。あなたの願いを叶えてあげよう。あの場所――と彼はその場所の名前を挙げた――へ行けば、あなたが探しているあなたのしもべを見つけるだろう。

これら二つの知らせは、尊者ヨセフが自らの労苦によって神からどれほど偉大な栄光を受けたか、また神の聖徒たちからどれほどの敬意と称賛を受けたかを、私たちに確信させてくれます。　今や天の住まいで神の御座の前に立ち、彼は天使の歌を歌い、父と子と聖霊、三位一体の神を、永遠に賛美し、称え続けている。アーメン。

コンダク、第4調：

悔い改めの尽きることなき泉、絶えることなき慰めの与え手、そして深い憐れみの源よ、ヨセフよ。私たちに神聖な悔い改めの涙を授けてください。それによって、ここに泣き悲しむ私たちは、あなたの助けを求めつつ、神から慰めを得ることができますように、聖なる方よ。

聖殉教者フェルヴーファの受難。

記念日：4月4日

ペルシャの司教である聖シメオンが、サポル王の手によって殉教した後[2855]、彼の二人の姉妹が生き残りました。一人はフェルヴファという名の処女、もう一人は未亡人、そしてさらに一人の女奴隷がいました。

聖処女フェルヴーファはまだ非常に若く、並外れた美しさで知られていた。その美しさを耳にしたペルシャの王妃、すなわちサポールの妻は、彼女を自分の元へ連れてくるよう命じた。　こうして、聖シメオン司教が殺害されてから1年が経過した頃、王の家来たちは聖処女フェルヴーファを、その妹と女奴隷と共に王妃のもとへ連れて行った。フェルヴーファの驚くべき美しさをこの目で確かめた王妃は、彼女に向かってこう語りかけた。

「お嬢さん、その美しさならば、多くの人々を統べる女主人となるべきでしょう」

すると、聖女フェルヴフはこう答えた。

「私には花婿がおられます――キリストです。私の兄は、その方のために苦難に耐えました。他の花婿など、考えることさえできません！」

それ以上フェルヴーファに尋ねることもなく、女王は彼女に、姉と侍女と共に、当面は王宮に留まるよう命じた。

[2855] サポル2世は、309年から379年までペルシアの王であった。ペルシアにおけるキリスト教は、それより以前の時期にも存在していた。コンスタンティヌス大帝は、改宗直後、キリスト教徒を擁護する書簡をサポルに送った。　しかし、新しい宗教の成功を、魔術師たちは嫉妬と不安の眼差しで見守っており、サポルとコンスタンティウスの間で戦争が始まると、彼らは改宗者たちがローマの利益に忠実であると王に密告した。その結果、サポルは迫害を開始し、キリスト教徒に特に過酷な税を課した。　その後、彼らの指導者であるセレウキアおよびクテシフォンの司教シメオンも捕らえられ、王のもとに連行された。王は彼に国教への帰依を要求したが、彼がこれを拒否すると、王は彼に投獄を命じ、その後死刑を宣告した。サポル王の治世の晩年、迫害はさらに激化した。

翌日の朝、女王は突然病に倒れた。 彼女を治すために、ペルシャの賢者たち[2856]が宮殿にやって来た。その賢者の一人は、女王の居室で最も美しいフェルヴフを目にして、その美しさに心を奪われた。その後まもなく、女王の元を去ったその賢者は、聖なる乙女のもとへ使いを送り、次のように伝えた。

「もしあなたが私の妻になってくださるなら、私は女王にあなたを解放するよう願い出ます。そうすれば、あなたは莫大な富を手に入れることになるでしょう。」

すると、聖なるフェルヴフは彼にこう答えた。

「私はキリスト教徒である以上、異教徒と結婚することはできません。」

フェルヴーファの美しさに心を奪われていた魔術師は、その答えに深く恥じ入り、激怒した。彼はサポル王のもとへ赴き、こう告げた。

「王妃の病は偶然のものではない。彼女には何らかの毒が盛られたのだ。　王妃の居室には、二人のキリスト教徒の姉妹が滞在している。彼女たちの兄――キリスト教の司教シメオン――は、あなたの命令によって殺害された。間違いなく、宮殿に住むこの殺害された司教の姉妹たちが、あなたへの恨みから、王妃に毒を盛ったのだ。

王は直ちに、姉妹たちを尋問のために連れてくるよう命じた。

聖女フェルヴファ、その妹、そして女奴隷の三人の女性が王の御座所に連れて行かれると、王の命令により、魔術師の長マヴプティスが他の二人の高官と共に、尋問のために彼女たちの元へ現れた。　三人の裁判官が到着してそれぞれの席に着くと、尋問のために前述の三人の女性が彼らの前に立たされた。裁判官たちは聖女フェルヴーファの並外れた美しさに目を留めるやいなや、互いに邪な思惑を隠しつつ、一斉に彼女への情欲に燃え上がった。その後、裁判官たちは連行されてきた女性たちに尋ねた。

「なぜ、宇宙の支配者である女王を毒殺したのか？この行為により、お前たちは死に値する！」

「なぜ、」と聖フェルヴーファは女性たち全員を代表して答えた。「サタンがあなた方の心にそのような不当な考えを植え付けたのですか。そして、一体何のために私たちを不当に貶めようとするのですか？もしあなたがたが私たちの　血を渇望しているのなら、それを飲むことを禁じる者は誰もいません。　もし私たちを殺したいと望むのなら、それを妨げるものは何もない。何しろ、あなた方は毎日、その手で血を流しているのだから。キリスト教徒として、私たちはキリスト――私たちの神――のために死ぬ。キリストを否定することはない。なぜなら、キリストこそが私たちの命だからだ。唯一の神を崇拝し、仕えるよう命じられている以上、私たちはそうするつもりだ。　私たちの書物には、魔術師や呪術師は生きてはならず、同族の手によって死ななければならないとも記されています（出エジプト記22:18；　レビ記20:6）。そのような行為が、私たちの神を否定することと何ら変わらない罪であることを知りながら、どうして私たちが誰かのために毒を調合などできるでしょうか。なぜなら、これら二つの罪はいずれも同様に死刑に処されるべきものだからです。

聖なるフェルヴーファがこう語っている間、裁判官たちは彼女の美しさと知恵に感嘆しつつ、喜んでその言葉に耳を傾け、彼女の言葉に反論する術がないと感じていた。　裁判官たちはそれぞれ心の中でこう考えていた。「王に懇願して、この女性たちを死刑から救い出し、この娘を自分の妻にしよう」。そして、ようやくマウプティスが口を開いてこう言った。

「たとえ法律で魔術を禁じられているとしても、それでもなお、あなたは兄弟の死への復讐としてそれを行うことはできたはずです。」

聖女フェルヴファはこれにこう答えた。

[2856] 古代において「ヴォルフ」とは、知恵に富み、自然の秘力、天体の運行、神聖な文書に関する知識を持ち、夢を解き明かし、未来を予言する者たちを指していた。

「確かに、私たちの兄弟はあなた方によって苦しめられました。しかし、もし私たちが彼の死への報復としてあなた方の死を望んだなら、私たちは神の御前で自らの命を滅ぼすことになってしまいます。たとえあなた方が怒りに燃えて私たちの兄弟を殺したとしても、彼は今なお生きており、天の御国でキリストと共に喜んでいます。　それと比較すれば、あなた方の王国など何ものでもありません！

聖女がこう言い終えると、諸侯たちはすべての女性を牢獄へ連行するよう命じた。

翌日の早朝、魔術師の長マヴプティスは密かに使用人を聖女フェルヴフのいる牢獄へ送り込み、次のように伝えるよう命じた。

「さあ、私が王に懇願して、あなたとあなたと共にいる者たちの命を救う用意がある。ただ、私の妻になることに同意してくれ。」

すると、聖なる乙女は敢然とこう答えた。

「神とあらゆる正義の敵よ！口を閉ざし、二度と私にそのような不敬な言葉を口にするな！もうこれ以上聞くことはできない！お前の望むことは、永遠に叶うことはない！」　私は一度きりで、永遠に、私の主イエス・キリストと結ばれました。その方のために私は処女性を守り、その方のために私は信仰を清く保つよう努めているのです。罪から解き放たれたその方だけが、私をあなた方の不敬虔な手から解放する力をお持ちであり、あなた方が私に仕掛けるあらゆる陰謀から私を救い出すことができるのです。　私は死を恐れず、血も恐れません。あなたがたが私を導こうとするその道は、私の最愛の兄弟である聖シメオン司教のもとへと私を導くでしょう。そこでこそ、私は、彼の死以来とりわけ強く感じている悲しみと苦しみの中に、慰めを見出すのです。

こうして、キリストの聖なる花嫁フェルヴファは、マウプティスから遣わされた男を果敢に追い払い、マウプティス自身をも恥じ入らせた。聖なるフェルヴファは、彼女の美しさに魅了された他の二人の裁判官に対しても、同様の対応をとった。　彼らもまた、それぞれ密かに使者を彼女の牢獄へ送り込み、聖なるフェルヴーファに自分との結婚を誘惑したが、いずれも成功せず、聖女によって恥をかかされた。

三人の裁判官全員が、互いに聖なる乙女への情熱を抱いていることに気づくと、彼女を手に入れようとする試みがすべて失敗に終わっていることを悟り、何としてもこの聖なる乙女、そして彼女と共にいた女性たちをも滅ぼそうと決心した。　その目的のために、彼らは王のもとへ行き、この三人のキリスト教徒の女性たちは魔女であり、妖術師であるため、死に値すると告発した。王は、もし彼女たちが生き残りたいのなら、太陽に拝礼しなければならないと告げた。

再び前述の三人の裁判官の前に引き出された聖なる殉教者たちは、太陽に拝礼せよという王の命令を聞き、次のように答えた。

「私たちは、天と地の創造主である神に礼拝を捧げます。しかし、太陽――すなわち私たちの神の被造物――に対しては、神に捧げるのと同じような敬意を払うことはできません。いかなる脅しをもってしても、私たちを主であり、私たちの神であるイエス・キリストへの愛から引き離すことはできません。」

聖なる女性たちがこう語っている間、マウプティスと彼と共にいた他の二人の裁判官は、大声で叫んだ。

「女王に毒を盛って、彼女に酷い病を患わせたこの三人の女たちを、この地上から滅ぼせ！」

その直後、王から聖なる殉教者たちに対する死刑判決が下され、それによれば、三人のキリスト教徒の女性は、ペルシャの魔術師たちが彼女たちのために考案するいかなる死に方でも死ななければならないこととなった。そして、これらの不敬虔な魔術師たちはこう言った。

「もしこれらの女性たちが真っ二つに切り裂かれず、もし女王が彼女たちの切り裂かれた半身をくぐり抜けなければ、彼女は回復することはできない。」

その後、聖なる殉教者たちが真っ二つに切断されるために連行されると、マウプティスは再び聖処女フェルヴフのもとへ使用人を遣わし、その使用人は彼に代わって彼女にこう告げた。

「もし私の言うことを聞くなら、お前は死なない。また、お前と共にいる女たちも死ぬことはない。」

「なぜ、この不信心者よ」と、聖処女は怒りを込めて大きな声でマウプティスを非難した。「私が聞くことのできないようなことを言うのか。私は、私の神であるキリストのために死ぬことを固く望んでいる。そうして、キリストから永遠の命を受けたいのだ。まさか、永遠の命のために死ぬというのに、一時的な命を愛するだろうか？」

その後、不信心な拷問者たちは聖なる殉教者たちを城の外へ連れ出し、そこで一人につき二本ずつ、地面に打ち込まれた柱を用意した。

その後、聖女フェルヴフは、首をある柱に、足を別の柱に縛り付けられた。他の聖女殉教者たちも、同様の方法で残りの柱に縛り付けられた。　その後、聖なる殉教者たちは大きな大工用ののこぎりで真っ二つに切断された。こうして、聖なる殉教者たち、すなわちキリストの花嫁たちは、その清らかな魂を不死の花婿の御手に委ねたのである。

一方、拷問者たちは、道の両側に三本ずつ、計六本の大きな柱を立て、そこに聖なる殉教者たちの切断された遺体を吊るした。それらの遺体は、まるで木々にぶら下がり、血に染まった最も美しい果実のようであった。　それは恐怖に満ち、涙を誘う光景であった。その後、同じ道を、聖なる殉教者たちの吊るされた遺体の間を、不敬虔なペルシャの女王が通り過ぎ、その後に大勢の民衆が続いた。これらすべての後、聖なる殉教者たちの尊い遺体は堀に投げ込まれた。

こうして、聖殉教者フェルヴファは、姉と女奴隷と共に、4月4日[2857] に、私たちの主イエス・キリストのためにその苦難を終えた。主イエス・キリストに、世々限りなく栄光と誉れと礼拝が捧げられる。アーメン。

聖ゾシマの記念日

記念日：4月4日

私たちの尊い父ゾシマは、幼少の頃から神に仕えたいという願いを抱いていました。まだ若くして修道院に入り、パレスチナ地方のティルス[2858] で修道誓願を立てました。 修道生活において立派に生き、彼は経験豊かな修道士となり、神から多くの啓示を授かりました。祈りに時間を費やしながら、彼は涙を流しつつ絶えず手作業に従事していました。そしてある日、彼は、隠遁者たちの中に、その功績において自分よりも優れた人物がいるかどうか、ふと考えました。すると、ある見知らぬ人物が現れて、こう言いました。

「ゾシマよ、あなたは人間として高い修行の境地に達したが、人間には完全な者はいない。救いの道には実に多くの異なる方法があることを知るために、今あなたが修行している場所を離れ、ヨルダン川の近くにある修道院へ行きなさい。」

ゾシマは命じられた通りにし、指示された修道院へと向かった[2859] 。 この修道院には、四旬節の間、すべての修道士が祈りのために修道院を離れて荒野へ出かけるという慣習があった。　修道院には門番ただ一人を残し、その後、聖木曜日に聖体拝領のために再び修道院に集まるのである。　時

[2857] 聖なる殉教者たちの殉教は、341年から343年頃に行われた。

[2858] ティルスは、古代にペレイまたはヨルダン川東岸の地として知られていた、パレスチナ左岸のガリラヤ山脈の南西斜面、死海の北東岸近くに位置する都市である。

[2859] そこは聖ヨハネ・洗礼者修道院であり、1651年までに荒廃し、723年にはすでに老朽化していた。

が来ると、ゾシマも他の修道士たちと共に荒野へと向かった。そこで彼は聖マリアを見かけ、彼女を追いかけたが、彼女は彼にこう言った。

「ゾシマよ！　もし私を見たいのなら、あなたの服を私にくれなさい。」

ゾシマはマリアの願いを聞き入れ、彼女は服を身にまとうと、若き日から自分がしてきたこと――最初は淫行にふけっていたこと、そしてその後どのようにして荒野に来たのか――を順を追って彼に語った。その後、彼女はゾシマに、翌年、聖なる御体と御血を携えてヨルダン川に来てくれるよう頼んだ。　一年が過ぎると、ゾシマはキリストの御体と御血を携えてやって来た。すると、彼は聖女がヨルダン川をまるで乾いた地を歩くかのように渡ってやって来るのを見て、彼女に聖体拝領を授けた。三年目、彼は再び荒野を訪れたが、聖女マリアはすでに亡くなっていた[2860]　。老いのため彼女を埋葬する力もなく、一頭のライオンを見かけると、彼にこう言った。

「獣よ！　聖女マリアを葬ってくれ。私は年老いており、穴を掘ることができないのだ。」

するとすぐに、ライオンが穴を掘り、ゾシマは聖女マリアの尊い遺体を葬った。　修道院に戻ると、彼はイグメン・ヨハネとすべての修道士たちに、聖女マリアのこと、そして主が彼女をいかに栄光に輝かせたかを語った。その後、私たちの尊い父ゾシマは、祈りと涙、そして様々な功績に励み続け、大老齢でこの世を去った[2861]。修道院の修道士たちは、彼を尊厳をもって埋葬した。

- 同日は、聖ゲオルギオス・ベズモルヴニクの記念日である。

4月18日

4月5日（旧暦）

同日は、聖なる父たちフェオナ、シメオン、フォルヴィンの記念日である。

聖殉教者アガフォポドスとテオドゥルの殉教

4月5日の記念日

不義なローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下[2862]　、テッサロニキ[2863]　には、アガフォポドとテオドゥルスという二人の神に献身する神の教会の奉仕者が住んでいた。アガフォポドは助祭の位にあり、すでに高齢であったが、貞潔な生活を送っていた。一方、テオドゥルスは朗読者であった。　敬虔なキリスト教徒の両親の息子である彼は、若く端正な顔立ちをしており、非の打ち所のない生活を送っていた。テオドゥルスには、カピトン、ミトロドル、フィロストルギオスという三人の実の兄弟がおり、彼らも彼と同様に敬虔な生活を送っていた。

[2860] 聖女は521年4月1日の聖金曜日（聖金曜日）に逝去した。

[2861] 聖ゾシマは523年、生後ほぼ100年でこの世を去った。

[2862] 異教徒によるキリスト教徒への最後の残酷な迫害の象徴とされるディオクレティアヌスは、284年にローマ皇帝の座に就き、305年まで在位した。　285年、広大な帝国を単独で統治することの困難さを認識した彼は、自身の将軍の一人である勇敢なマクシミアヌス（ヘルクレス）を共同統治者に選び、彼に「アウグストゥス」の称号を与え、帝国の西半分を委ねた。　292年、彼はさらに2人の補佐役を「カエサル」の称号で選任した。ブリタニア、ガリア、スペインを担当するコンスタンティウス・クロルスと、イリュリアを担当するガレリウスである。　ディオクレティアヌスは宮廷をローマからニコミディア（この都市はプロポンティス海――マルマラ海――のアジア岸に位置していた）に移したため、古きローマは徐々にその重要性を失っていった。　主にカエサル・ガレリアスの影響により、ディオクレティアヌスはキリスト教徒に対する4つの勅令（エディクト）を発布し、彼らに対する最も苛烈な迫害者の一人となった。

[2863] テッサロニキ、あるいはソロウン――スラブ人の啓蒙者である聖キリルと聖メフォディオスの生誕地――は、エーゲ海に面したマケドニアの都市である。

福者テオドゥルスは、その苦難に満ちた功業に先立ち、神から、後に授けられることになる殉教者の冠の証しを受け取っていた。ある夜、眠りについていたテオドゥルスは、夢の中で、ある高貴な人物からある物を手渡されるのを見た。　眠りから覚めると、テオドゥルスは確かに自分の手に、何でできているのか分からない非常に美しい指輪を見つけました。その指輪には、聖なる十字架の刻印が施されていました。これは、私たちのために十字架上で苦難に遭われた、私たちの神　であるキリストのために、聖テオドゥルスが受ける苦難の前兆でした。　聖なる青年テオドゥルスは、その後、この指輪を用いて人々のあらゆる病を癒やした。彼がこの指輪を身につけて病人に会うたび、その人の病は即座に去り、健康を取り戻した。そのため、多くのギリシャ人さえも、この光景を目にしてキリストに帰依するようになった。

前述の異教の王たちがキリスト教徒への迫害を開始すると、彼らは至る所に命令を下し、すべての人々に、唯一の神、万物の創造主である[2864]　への崇拝ではなく、人の手によって造られた偶像への崇拝を強要した。　このような王の命令はテッサロニキにも届き、そこでは王の命令に従わない者たちのために用意された拷問器具が、すべての人々の目にさらされていた[2865]　。信者たちの多くはここから逃げ出し、できる限りどこかに身を隠そうとした。　また、勇敢に拷問に身を委ねた者もいれば、最後に、臆病で弱気な者たちは、拷問や死を恐れて異教徒の側に寝返り、彼らと共に偶像への生贄を口にし、こうして不滅の命よりも、この世の虚しい生を選んだのである。　しかし、彼らは一時的な苦しみから逃れることで、それによって自らに永遠の死と滅びを招いていたのである。悪魔はそうした者たちを喜んだが、寛大で勇敢なキリストの戦士たちによって、彼は常に打ち負かされ、恥をかかされてきた。例えば、聖アガフォポドスと聖テオドゥロスという二人の聖人のように。　この二人は、激しい迫害が訪れた際、逃げも隠れもしなかった。むしろ、絶えず神の家に留まり、このような災難に見舞われた神の聖なる教会のために昼夜を問わず神に祈り、自らの苦難の始まりを昼夜を問わず待ち続けたのである。　案の定、異教の兵士たちが聖人たちの存在を知ると、直ちに彼らを捕らえ、牢獄に投獄した。当時、テッサロニキの統治者はファウスティンであった。　彼は裁判官の席に着くと、キリストの殉教者たち――アガフォポドスとテオドゥロス――を尋問のために自分の元へ連れてくるよう命じた。まるで祝宴に招かれたかのように、彼らは喜びながら向かい、互いに手を取り合い、勇敢にこう叫んだ。

「我らはキリスト者だ！」

聖人たちが迫害者の法廷の前に現れると、彼はまず若い方を自分の誘惑で陥れようと、全員に退去を命じ、アガフォポドを別の場所へ連れ去らせた。それから、テオドゥロスを近くに呼び寄せ、優しくこう言った。

「屈服せよ、若者よ。懇願する。その新しいキリスト教の偽りの教えを捨て、古来から定められた法律と慣習に従うのだ。もし苦しみの中で生涯を終えたくないのなら。」

すると、聖テオドゥルスは彼にこう答えた。

「私はとっくに迷いと欺瞞を捨て去りました。むしろ、虚栄にこれほど囚われているあなたが、永遠の死に陥ることのないよう、心配しているのです。」

[2864] 304年、ディオクレティアヌスによって第4の勅令が発布され、すべてのキリスト教徒は、キリスト教を放棄し、偶像に犠牲を捧げるよう強要するために、拷問や苦痛に処されることとなった。

[2865] この迫害の同時代人であるケッサリウスのエウセビオス司教は、自身の『教会史』の中で、帝国のさまざまな地域や都市でキリスト教徒への迫害に伴ったあらゆる恐怖について詳細に記している。

裁判官は聖人のこの言葉に腹を立てることはなかったが、再びあらゆる手段を尽くして偶像への生贄を捧げるよう誘惑し、贈り物や栄誉を約束した。その場にいたゼウスの祭司[2866]、名もクセノスは、聖人にこう言った。

「もし栄誉や贈り物で犠牲を捧げるよう説得できないのなら、拷問で王の命令に従うよう説得させてやろう！」

「いかなる拷問の恐怖も、決して私を怯えさせることはできない」と殉教者は祭司に答えた。「そして、決してあなた方の意志に従うようにはならない。」

その後、ファウスティナが「名誉ある人生は苦痛に満ちた死よりもましだ」と語ったことに対し、聖テオドゥルスは次のように答えた。

「確かに、私は生が死より優れていることを自覚している。だからこそ、私は心の中でこの地上的で儚い生を軽んじ、不死の命と永遠の天の恵みに与ることを決意したのだ。」　さあ、傷と火で私を苦しめてみよ。そうすれば、苦しめられている私の肉体は　朽ち果て滅びる運命にあるが、理性を備えた私の魂は朽ちることなく、苦しみが終わるやいなや、直ちに肉体の束縛から解き放たれ、果てしない命の中で喜びを謳歌するだろう。

「お願いだ」と裁判官は続けた。「教えてほしい。一体誰が、あなたにその偉大な恵みを与えるというのか。その方への愛ゆえに、あなたは今、苦しみや死そのものさえも軽んじようと決心したのだ。」

– 神です――聖テオドゥルスは答えた――自然の法則によって万物を定められた方、そしてその御子、キリスト、すなわち父の御言葉（ヨハネによる福音書1章以下参照）です。私は幼少の頃から、その十字架の印を刻まれています。　私は生涯の終わりまでこのしるしを捨てず、むしろ苦しみによって肉体を失うことを受け入れるとしても、このキリストのしるしを否定することは決してない。私は主の忠実な僕であり、お前は火でも鉄でも、私を打ち負かすことはできない！

イゲモン・ファウスティヌスは、聖なる青年テオドゥルのこのような勇気と大胆さに驚嘆し、彼を自分のそばから遠く離れた別の場所に連れて行くよう命じた。その後、聖アガフォポドを呼び寄せ、彼にこう言った。

「我らの神々にひれ伏せ！　ほら、同じく欺かれていたテオドゥルスでさえ、今や彼らにひれ伏し、我らと共に犠牲を捧げることを約束したのだ。」

総督の狡猾さと欺瞞を見抜いた聖アガフォポドは、彼にこう言った。

「私も喜んで、真の神とその御子イエス・キリストに犠牲を捧げよう。というのも、テオドゥルスもまた、他のいかなる神ではなく、御方にのみ、喜ばれる犠牲を捧げることを誓ったのだから。」

するとファウスティヌスは彼に反論した。

「いいえ、テオドゥルスはこの神ではなく、全宇宙を支配する十二の神々[2867]に、自らの犠牲を捧げると誓ったのです。」

すると、聖アガフォポドは微笑みながら彼にこう答えた。

2866 「ゼウス」（クロノスとレアの息子）という名は、古代ギリシャ人にとって天空の神を指すものであった。彼には多くの別名があり、それらは彼に崇敬が捧げられていた様々な地域の名称に由来するものもあれば、この神の多様な性質のいずれかを表現するために用いられたものもあった。

2867 ギリシャ人の考えによれば、十二の最高神、すなわち主要な神々は、大地と天の間の空中に住み、その居所はオリンポス山の頂上にある壮麗な宮殿にあった。そのため、これらの神々はオリンポスの神々とも呼ばれる。　その神々は、ゼウス、ヘラ、ポセイドン、デメテル、アポロン、アルテミス、ヘファイストス、パッラダ・アテナ、アレス、アフロディーテ、ヘルメス、そしてヘスティアであった。

「なぜ、職人が朽ちる素材で作ったものを神と呼ぶのか？　まるで最良かつ最も完全な存在であるかのように、自らの創造物を崇拝する人々の手によって作られたものが、神であり得るだろうか？　倒そうと、打ち砕こうとする者たちに抵抗することもできず、自らを守る術も持たないもの――目で見えず、足で歩かず、いかなる感覚も持たないもの――が、果たして神と言えるだろうか？　ギリシャ人が、生きた魂を持ち、あらゆる種類の最も忌まわしい淫行にふけっていると語る者たちが、果たして神と言えるだろうか。しかも今や、それらの像を作った職人は、それらを銀貨一枚、あるいは小さな銅貨四枚で売り払っているではないか。　これらすべてを踏まえて、全能の神にふさわしい栄光を、ふさわしくもなく忌まわしいあなた方の神々に捧げることができるだろうか。耳の聞こえないあなた方の偶像の前で、賛美や賛歌を歌うことができるだろうか。

聖人がこのような言葉を語ると、周囲にいた異教の役人たちは、アガフォポドや、尋問のために連行されてきた他のすべてのキリスト教徒たちが、その言葉によって信仰を確固たるものにしてしまうのではないかと恐れた。そこで彼らは、アガフォポドとテオドゥロスを直ちに牢獄へ連行するよう命じた。

聖人たちが牢獄へと連行される間、彼らの後には膨大な群衆が後をついてきた。群衆の中には、聖テオドゥルの若さを憐れみ、多くの甘言をもって彼のキリストへの信仰を揺るがそうとする者もいた。また、アガフォポドの威厳ある白髪を見つめながら、彼に向かってこう言う者もいた。

「アガフォポドよ！　まさかあなたまでもが子供のような心で、自分の人生にとって何が有益なのかさえ理解できないというのか！」

しかし、聖人たちは、自分たちに向けられた言葉には何も答えず、ただ歩き続けた。

彼らが牢獄に着くと、そこで謙虚に神に祈りを捧げ、様々な罪でここに収監されていた囚人たちの仲間に加わった。

真夜中、聖人たちは神聖な幻視によって力づけられ、精神は冴え渡り、喜びをもってイエス・キリストを賛美した。その後、水で顔と手をきれいに洗い、膝と頭を地面に伏せ、まるで一つの口で叫ぶかのように、神に向かって次のような一致した祈りを捧げた：

「神よ！万物の創造主であり、摂理者である御方よ。この目に見える世界を創造し、天の光体たちが絶え間なく巡るよう定められたのは、その間に位置する太陽が日中すべてを照らし、地上の実りの成長を促し、また月がその輝きをもって夜の闇を払うためでした。―― 神よ！　あなたは、大地に動物を生み出す力を与え、海の深みに魚を与え、鳥たちに空の居場所を示された方――神よ！　あなたは、海に、あなたが創造された人間にその恵みをもたらすよう命じられました。あなたは、鳥たちにその歌声で空を響かせるよう命じられ、また、人間の必要のために大地に様々な実を豊かに実らせるよう命じられ、それによって人々の口を通して、全世界の主であるあなたに感謝と賛美が捧げられるようにされました。神よ！　あなたは、不義を行い、あなたの戒めから背き、あらゆる罪に身を委ねた私たちの種族が、完全に滅びることを望まれませんでした。あなたは、悪魔が知性ある被造物を完全に盲目にし、永遠の滅びへと引きずり込むことを許されませんでした。むしろ、人々の罪を赦し、　あなたは、ただ御自身の憐れみによってのみ、天から御独り子をお遣わしになりました。御独り子は、人間の性質を身にまとい、御自身の不死性を私たちの死すべき性質と結びつけ、常にあなたと共にありながら、　万物を創造された御言葉が、不義の道に迷い出た者たちを再び真理の道へと導き戻すためです。あなたは御子と聖霊と共に、この宇宙を御自身の栄光に満ちた奇跡をもって導き、かつて不義であった人々を御自身の聖なる信仰へと導かれました。　御父と聖霊と共に御子であるあなたは、自然の法則と死を打ち破り、御言葉によって四日目のラザロをよみがえらせられました（ヨハネ11:1–44）。　あなたは、生まれつき盲人の目に泥を塗って彼を目を開かせ（ヨハネ9:1–38）、また、あなたの衣に触れた出血の病の女性に速やかな癒やしを与えられたように（マタイ9:20–22）、――また、痲痺者を癒やし、彼に自分の寝床を運ぶよう命じられました（マタイ9:2–8）。　それゆえ、今この時も、神よ、私たちに憐れみを示し、天からの御力によって私たちを強めてください。そう

して、私たちが、御助けにより、不義な者たちから課されるあらゆる苦難を勇敢に耐え忍び、天の御国に到達できるようになりますように。

聖人たちがこのように祈っている間、殺人や姦淫の罪でここに投獄され、彼らと共に牢獄に閉じ込められていた仲間たちは、肉体の死への恐怖を克服し、急いで聖人たちの足元にひれ伏し、自らの罪の赦しと、永遠の死からの魂の救いを懇願した。　一方、その頃、牢の外にいた民衆は、牢の扉を打ち破って中に入り、神の僕たちが語る言葉に心を打たれながら耳を傾けていた。　これを目撃したのが、悪魔の熱心な僕であるテッサロニキの首席判事エウプシキオスであった。彼は急いで軍司令官のもとへ駆けつけ、今すぐ牢獄に収容されている二人のキリスト教徒を処刑しなければ、民衆の多くが偶像崇拝を捨ててしまうだろうと告げた。　軍司令官は激怒し、直ちに兵士たちを遣わして、若者と老人を自分の元へ連行させた。こうして、キリストの僕たちは即座に不義な裁判官の前に引き出された。聖テオドゥロスを見据えると、軍司令官は彼にこう尋ねた。

「お前、全宇宙を支配する王たちの命令に従わなければならないことを知らないのか？」

「天と地の主が命じられることは」と聖テオドゥルスは答えた。「まことに公正であり、注意深く耳を傾け、直ちに実行すべきものです。　しかし、あなたがたのこの世の王たちが命じるものについては、その命令のうち、公正であり、天の創造主に反しないもののみを実行すべきであり、不公正な命令は、いかなる場合でも実行してはならない。

その後、軍司令官ファウスティヌスは聖人に尋ねた。

「教えてくれ、天を創造したのは誰か？」

聖テオドゥルスはこう答えました。

「全能の神と、神の御子イエス・キリスト、すなわち父の御言葉が、それを創造されたのです。」

「それは、ユダヤ人たちに十字架にかけられ、最も残酷な苦しみを受けた方ではないか？」とファウスティヌスは尋ねた。

「はい、その方こそ、ユダヤ人たちに十字架にかけられた方です」と殉教者は答えた。「その方は、私たちのために自ら進んで苦しみを受け入れ、その後、ご自身の神性の力によって死からよみがえり、死を打ち破った勝利者として天に昇って行かれる姿が見られました。そして、そこから再び来られ、不信仰者たちを告発し、裁かれるのです。」

「では、なぜあなたは――」とファウスティヌスは再び尋ねた。「私たちの神々に犠牲を捧げようとしないのですか？」

「偶像を作る者たちを創造されたお方に捧げる方が、それらの偶像に捧げるよりも、はるかに良いことではないでしょうか」と聖人は答えた。「まことに、創造主は被造物よりも優れているのです！」

すると、軍司令官ファウスティヌスは、聖なる若者テオドゥラスの衣服を剥ぎ取り、拷問のために彼を裸にするよう命じた。その間、告示役は大声で叫んでいた。

「神々に犠牲を捧げれば、解放されるぞ！」

しかし、殉教者は拷問者にこう言った。

「お前は私の身体から衣服を奪うことはできても、私が神に対して抱く信仰を永遠に奪うことはできない。」

聖人がこれほど大胆に語り、拷問を軽蔑し、拷問者たちを繰り返し非難している間、軍司令官は、もともとキリスト教徒であったが、拷問に屈して偶像を崇拝するようになった者たちに、テオドゥルの目の前で偶像への生贄を捧げさせるよう命じた。　この光景を目の当たりにして、聖テオドゥルスは異教徒に打ち負かされ、真理から背いた者たちを思い、心を痛め、軍司令官にこう言った。

「あなたがたは弱き者を打ち負かしたに過ぎない。しかし、キリストの堅固な戦士たちを、たとえさらに過酷な拷問を考案したとしても、決して打ち負かすことはできない！　軍司令官よ、あな

たが今、我々に用意した拷問など取るに足らず、笑われるに過ぎないことを知れ。もっと残酷なものを考案してみよ。そうすれば、我々の信仰と神への愛がどのようなものか、あなたが知るだろう。」

その後、軍司令官はテオドゥロスに、法廷にキリスト教の書物を持ってくるよう命じた。しかし、聖人はこれに対し次のように答えた。

「もし、あなたが偶像崇拝の虚しさを知り、それを捨てて真の敬虔に立とうと望むなら、私はあなたに預言者や使徒たちの書物を持ってくるだろう。しかし、あなたが悪意を抱いていることがわかる以上、その理由から、神の賜物をあなたの手に渡すことはしない。」

「もし今すぐ私の命令に従わなければ」とファウスティヌスは答えた。「私はお前を容赦せず、お前の体をバラバラに引き裂き、獣の餌として投げ捨てるだろう。」

「さあ、私の体は拷問に委ねられている」と聖人は続けた。「好きに扱え。最も残酷な方法で私を苦しめよ。しかし、それでもなお、私は聖なる書物を不信心者たちの侮辱の的として渡すことは決してない！」

その後、殉教者を威嚇しようと、軍司令官は彼を斬首の場へ連行するよう命じた。死が目前に迫れば、聖人は恐れをなして自分の意志に従うだろうと考えたからである。

そして、聖人が斬首の場に連れて行かれ、自分に向けて掲げられた鞘抜きの剣を目にしたとき、彼は次のような言葉で神に呼びかけた。

「わが主の父なる神よ、私たちのために苦難を受けられることをお選びくださったあなたに、栄光あれ！その御恵みにより、私もあなたのもとへ歩み寄り、あなたのために喜びをもって死を迎えます！」

そう言うと、彼は剣の下に頭を垂れたが、首は斬られなかった。軍司令官は、聖テオドゥルスがまるで剣による斬首を前にして、自らに荘厳な冠を望んでいるかのように振る舞っていることに気づき、彼を無傷のまま戻すよう命じ、その間、自ら聖アガフォポドへの尋問を行った。彼は彼に尋ねた。

「お前の生き方はどのようなものか？」

「テオドゥルスと同じです」と聖人は答えた。

「お前とテオドゥルスには何の共通点があるのか」と軍司令官は尋ねた。「血縁関係で結ばれているのではないか？」

「私たちは血のつながりはありません」と聖アガフォポドは答えた。「しかし、信仰と信念によって結ばれています。血縁関係で異なる分だけ、精神において結ばれているのです。」

すると、軍司令官は言った。

「お二人が同じ苦難へと急いでいることがわかります――あなたの言葉からそれがうかがえます」と、聖人のこの言葉に軍司令官は言った。

聖アガフォポドはこれにこう答えた。

「もし私たちが同じ拷問によってこの現世から解放されるのであれば、私たちの神のもとで同じ報いを受けるにふさわしい者となるでしょう！」

「年老いた身でありながら、若者のように幻想に惑わされ、自ら進んで明らかな破滅へと身を投じるなど、恥ずかしくないのか」とファウスティンは言った。

「私は決して錯覚に陥っているわけではない」と聖アガフォポドは答えた。「そして、私のキリストへの希望によって何の損失も被ることはない。　それどころか、私が年を重ねているからこそ、神への奉仕に一層の熱意を注がねばならない。そして、若き年齢でありながら、唯一の真の神への崇敬をこれほど勇敢に擁護しているテオドゥラスを、私は称賛するのだ。

その瞬間、テオドゥロスに目を向けた軍司令官ファウスティンは、彼に向かってこう言った。

「若者よ！この老人の言葉に惑わされてはならない。無謀にも自ら死を招いてはならない。彼はすでに老人なのだ。だから死を望むのも不思議ではない。だが、お前は若く、まだこれほど若いのに、一体何のためにこの甘美な命を無駄に失おうというのか？」

聖テオドゥルスは彼にこう答えた。

「私がその老人よりも弱く、彼と同じ苦しみには耐えられないなどと思わないでほしい。私は年齢こそ若いが、それでも老人と同様に、万物の創造主である唯一の神を信じ、老人と共に神のために苦難に耐える覚悟があるのだ。」

聖人たちが言葉を終えると、拷問官の命令により、彼らは縛られ、再び牢獄へと連れ戻された。その間も、聖人たちは、悪魔に打ち勝つことができた神を賛美し続けた。

彼らの知人たちは、彼らの元へ集まり、泣きながら彼らを取り囲んだ。

「なぜここに集まったのか」と聖テオドゥルスは彼らに尋ねた。「そして、何のために泣いているのか」

「あなた方の不幸を嘆いているのです」と彼らは答えた。

「なぜ、」と聖人は微笑みながら答えた。「自分たちの災難を嘆く代わりに、私たちを更なる高みへと導くこの災難を嘆いているのですか。」

聖人がそう語っている最中、軍司令官から遣わされた兵士が牢屋に入ってきた。その兵士は、二人の聖人を鉄の鎖で縛り上げ、牢屋の内側の区画に閉じ込め、誰も彼らに近づけないように鍵をかけた。

一方、聖なる殉教者たちは、夜も更ける頃、神に、彼らの業を最後まで強めてくださるよう祈り、眠りについた。　そして、御自身の敬虔な者たちを顧みられる主イエス・キリストは、彼らに（二人が心を一つにし、志を同じくしていたため）夢の中で、彼らに訪れる死について同じ幻を見せた。　その幻は次のようなものであった。聖人たちは、まるで二人が同じ、多くの人々で満たされた船に乗り込み、その船とともに海の真ん中にいるかのように感じた。　船は激しい嵐で海が荒れ狂っていたため、左右に激しく揺れていた。波に打ち砕かれ、砕かれつつあった船はすでに水中に沈みかけており、船に乗っていた人々の中には溺れる者もいれば、泳いでいる者もいれば、岩に近づいて命を落とす者もいた。　一方、聖人たちは夢の中で、舵手の操船によって溺れることから救われ、明るい衣を身にまとい、ある高い山にたどり着き、そこから天へと登っていくのを見た。眠りから覚めると、聖人たちは互いにその幻視を語り合い、二人とも全く同じ夢を見たことに驚いた。　このことから、彼らは二人ともキリストから一つの恵みを授かること、すなわち、多くの者が溺れ死んだ殉教の海を無事に渡り切り、永遠の報いを受けるために天へと昇ることになるのだと悟った。　この幻視の後、聖人たちの希望と信頼はさらに強まり、彼らは、良き舵取りである神への熱い感謝の念を抱き、ひれ伏してこう叫んだ。　「神よ、御子である私たちの主イエス・キリストが人となられた御業のために、あなたが私たちに授けてくださったこのような恵みを、いったい誰がいつ期待できたでしょうか？！　人類に対するあなたの偉大な恵みを目の当たりにしながら、虚しい人生の美徳を好むほど愚かな者が、いったい誰がいるでしょうか？　誰が、御子ほど善行に熱心であろうか。御子は、私たちに注がれる御自身の恵みを幻の中で示し、また私たちが授かる冠を見せてくださり、それによって私たちを、これから待ち受ける試練に向けて強めてくださったのだ！」

彼らがこのように朝まで祈り、神に感謝を捧げていたところ、日が明けると、牢番がやって来て、テオドゥルスとアガフォポダスを軍司令官が呼び出していると告げた。十字の印で身を守りながら、彼らは鎖につながれたまま牢屋を出て、兵士たちの後について行った。　そこに集まっていた多くの知人たちは、彼らがもはや死を目前にしていることを悟り、彼らに向かって泣き叫んだ。しかし、聖テオドゥルスは明るい表情で泣き叫ぶ人々に語りかけ、こう言った。

「もしあなたがたが私たちへの愛ゆえに泣いているのなら、むしろ私たちを喜んでくれるべきです。私たちは真の神を崇めるためにこの苦難に耐えているのですから。もしあなたがたが悪魔の嫉妬から泣いているのなら、私たちよりもむしろ自分自身のために泣くべきです。なぜなら、あなたがたは正しい道から迷い出て、滅びへと突き進んでいるからです。」

その後、聖人たちが三度目に尋問に引き出され、軍司令官ファウスティヌスから再び問いただされたとき、彼らはもはや次の言葉以外には何も答えなかった。

「我らはキリスト者であり、キリストの御名のためにあらゆる苦難に耐える覚悟がある。」

すると、軍司令官は悲しみに打ちひしがれた表情で、彼らに対して次のような死刑判決を下した。

「神々に生贄を捧げることを拒んだテオドゥルスとアガフォポドは、海に沈められよ。」

その後、兵士たちは二人を海へと連行した。両手を後ろ手に縛り、首に重い石を吊るした後、兵士たちは二人を船に乗せた。 その頃、海岸には聖なる殉教者たちの友人、隣人、そして 知人たちが特に大勢集まっていた。その中には、聖人たちに迫る死を前にして泣き崩れる者もいれば、悪魔に打ち勝ち、敬虔さのために喜んで死を迎えるというその勇気を称え、キリストの勇敢な戦士たちを讃える者もいた。

一方、軍司令官は聖人たちを憐れみ、フルウィウスという特使を彼らのもとへ遣わし、「もし神々に香を焚くだけであれば、死を免れる」と伝えた。しかし、聖人たちはキリストを呼び求め続け、異教の虚しい神々を拒み続けた。 ついに、長い説得の末、不信心者たちは、キリストの僕たちが決して偶像崇拝に屈しないことを悟り、聖アガフォポドを海に投げ込む準備を整えた。聖アガフォポドは天を仰ぎ見ながら、力強い声でこう叫んだ。

「見よ！この二度目の洗礼によって、私たちのすべての罪は洗い流され、私たちは清められた者としてキリスト・イエスのもとへ去っていくのだ！」

そう言い終えると、聖人は海に投げ込まれ、その直後に聖テオドゥルスもまた海に投げ込まれた。

こうして聖なる殉教者たちはその苦難に満ちた業を終え、主の手によって勝利の冠を授かった。海は聖者たちの遺体を受け入れたが、その直後に鎖や石を解かれた状態で、彼らを岸辺に打ち上げた。親族や知人たちは聖なる殉教者たちの遺体を引き取り、尊厳をもって彼らを葬った。

しばらくして、聖テオドゥルスが、輝くような顔つきで白い衣をまとって彼らの前に現れ、自分の全財産を貧者、孤児、未亡人たちに配るよう命じた。

聖なる殉教者たちは、4月の5日目に息を引き取り、天において、三位一体として賛美される唯一の神、父と子と聖霊を賛美した。アーメン。

我らの尊き父マルコ・アテネの聖行

記念日：4月5日

ある日、アッバ・[2868] ・セラピオンは次のように語った。

私がエジプトの内陸の荒野に滞在していた頃、[2869] 、ある日、偉大なる長老ヨハネのもとを訪れ、彼から祝福を受けた後、旅の疲れを癒すために座って休んでいた。うとうとと眠りにつくと、夢

[2868] アッバ――父、修道院の院長。

[2869] 内陸の、あるいはスキタイの砂漠は、エジプトのリビアにあるケリイの砂漠から一日分の道のりをさらに進んだ場所にある。そこは荒涼とした砂漠で、時折水のある泉が見られるだけであり、ここへ通じる整備された道もなかった――人々は星の流れを頼りにこの地へと向かった。

の中で幻を見た。二人の隠者が長老のもとを訪れ、彼から祝福を受けている姿が目に浮かんだ。　彼らは互いにこう語り合っていた。

「ほら、アッバ・セラピオンだ。彼から祝福を受けよう。」すると、アッバ・ヨハネは彼らにこう言った。

「彼は今日、砂漠から戻ったばかりで、とても疲れている。少し休ませてあげなさい。」

一方、隠遁者たちは私について長老にこう言った：

– セラピオンはこれほど長い間、砂漠で修行を続けているにもかかわらず、エチオピアにあるフラケイア山で修行を続けるマルコ神父のもとへは行こうとしない[2870] 。このマルコ神父は、すべての隠者や断食修行者の中でも比類のない存在である。　彼は生後百三十歳であり、砂漠で修行を始めてからすでに九十五年が経過している。この間ずっと、彼は誰一人として人を見たことがない。つい先日、永遠の命の光に与る聖人たちが彼の元を訪れ、彼を自分たちのところへ迎え入れると約束していた。

彼らがヨハネ長老にそう語りかけている最中、私はうたた寝から目を覚まし、長老のそばに誰もいないのを見て、自分の見た幻について彼に話した。

「その幻視は」と長老は私に言った。「ある種の神聖なものだ。しかし、フラキアの山はどこにあるのか？」

「私のために祈ってください、父よ！」と私は長老に言った。

祈りを終えると、私は長老に別れを告げ、ここから二十日間の道のりにあるアレクサンドリア[2871] へ向かった。私は昼も夜もほとんど休むことなく、地面の塵さえも焼き尽くすような灼熱の太陽に焼かれながら、五日間でこの道のりを歩み通した。

アレクサンドリアに入ると、私はある商人に尋ねた。「エチオピアにあるフラケスの山までは、まだどれくらいあるのか」。商人はこう答えた。

「はい、父上、その場所まではまだ非常に遠いです。ヘッテ族[2872] であるエチオピア人の領土の境界まで、二十日間歩かなければなりません。そして、あなたが尋ねている山は、ここからさらに遠くにあります。」

私は再び彼に尋ねた。

「その旅路には、おおよそどれくらいの食料と飲み物を用意すればよいでしょうか。というのも、私はそこへ行きたいと思っているからです。」

「もしあなたの旅が――」と商人は答えた。「海路で行くのであれば、旅の期間はそれほど長くはならないでしょう。しかし、陸路で行くのであれば、三十日間は旅を続けることになるでしょう。」

それを聞いて、私はカボチャに水を入れ、少量のナツメヤシの実を携え、神に信頼を置いて旅立ち、この砂漠を二十日間歩き続けた。　旅の途中、私は誰にも出会わなかった。獣も鳥もいなかった。この砂漠には植物がほとんど生えていないからだ。そこには雨も露も決して降らないため、この砂漠には食べられるものが何一つないのだ。　二十日間の旅の末、カボチャに入れていた水も、ナツメヤシも底をついてしまった。私はひどく疲れ果て、これ以上進むことも、引き返すこともできず、疲れ果てて地面に横になった。　すると、偉大なる長老ヨハネのもとで幻として初めて目にしたあの二人の隠者が、私の前に現れた。私の前に立ち、彼らはこう言った。

[2870] フラカ山は、リビアの現在のトゥクラにある。エチオピアは、エジプトの南に位置する国――ヌビアとアビシニアである。

[2871] アレクサンドリア――古代に名高い都市で、エジプトのナイル川河口に位置し、アレクサンドロス大王（紀元前336～323年）によって建設され、かつては世界的な学問と貿易の中心地であった。

[2872] ヘテ人――カナン（ノアの子）の子ヘトの子孫であり、パレスチナ南部の山地（民数記13:30）、ヘブロン近郊（創世記23）、およびベテル近郊（士師記1:26）に住んでいた。

「立ち上がって、私たちと共に来なさい！」

立ち上がると、そのうちのひとりが地面にひれ伏し、私の方を向いてこう尋ねてきた。

「何か食べたいか？」

「お父様のお心遣いに任せます」と私は答えました。

すると彼は、砂漠の植物の根の一つを私に見せながら、こう言いました。

– この根を口に含み、主の力によって旅を続けなさい！

私は少しそれを食べると、すぐに力が湧いてくるのを感じ、心から喜びを感じた。私はとても元気になり、まるで全く疲れていなかったかのように思えた。それから彼らは、聖マルコのもとへ向かうために私が進むべき小道を示し、私の元を去っていった。

道を進むと、天にまで届きそうな高い山に近づいた。その山には、塵と石以外、何一つなかった。山に近づくと、その端から海が見えた。山を登り続け、七日間歩いた。

七日目の夜になると、私は天から聖マルコのもとへ降りてくる神の天使を見かけ、その天使が彼にこう語りかけているのを耳にした。

「ああ、アッバ・マルコよ、あなたは幸いである。あなたには幸いが訪れるだろう！　ここに、あなたの魂が会いたがっていたセラピオン神父を連れてきた。あなたは彼以外の人間には誰一人として会おうとしなかったのだから！」

私の幻視が終わると、私は恐れずに歩き出し、聖マルコが住んでいた洞窟にたどり着くまで歩き続けた。洞窟の入り口に近づくと、聖人がダビデの詩篇を歌い、こう唱えているのが聞こえた。*「あなたの御目には、千年も昨日の一日のようである」*（詩編89:5）と、さらに同じ詩編の言葉を続けて唱えておられた。その後、聖人を包み込んだ霊的な喜びのあまり、聖人は自らこう独り言を口にした。

「マルコよ、あなたの魂は幸いである。神の助けにより、あなたはこの世の汚れに身を染めることなく、あなたの心は邪悪な思いに囚われることもなかったのだから！　あなたの体は幸いである。それは、罪深い欲望や情欲に溺れることがなかったからだ！　あなたの両手は、人間に属するいかなる物にも触れなかったゆえに、幸いである。あなたの両足は、死へと続く道に足を踏み入れず、罪へと向かうこともなかったゆえに、幸いである！あなたの魂は、霊的な命と天使のような喜びで満たされた！

そして再び、彼は自分の魂に向かって語りかけた。*「わが魂よ、主を賛美せよ。わが内なるすべてよ、その聖なる御名を賛美せよ。わが魂よ、主を賛美せよ。そのすべての恵みを忘れるな」*（詩編102:1–2）。なぜ嘆くのか、わが魂よ。恐れるな！　あなたは地獄の牢獄に閉じ込められることはない。悪魔たちは決してあなたを誹謗中傷することはできない。神の恵みにより、あなたには特別な罪の悪癖などないのだ。*「主の御使いは、主を畏れる者たちの周囲に陣を張り、彼らを救い出す」*（詩編33:8）。主よ、『主人の御心を行ったしもべは幸いである』」。

このように語り、さらに聖書から多くの言葉を引用して自らの魂を慰め、神に対する揺るぎない希望を確固たるものにした後、聖マルコは洞窟の入り口へと出て行き、感動のあまり涙を流しながら、私にこう呼びかけた。

「ああ、私の霊の子セラピオンの功績はなんと偉大なことか。彼は私の住まいを訪ねるという労苦を厭わなかったのだ！」

それから、祝福を授けた後、彼は両腕で私を抱きしめ、口づけをしながらこう言った。

「九十五年間、私はこの荒野に留まり、人の姿を見ることはなかった。しかし今、長年にわたり見たいと願っていたあなたの顔を見ることができた。あなたは私のもとへ来るために、このような労苦を厭わなかった。それゆえ、私の主イエス・キリストは、人々の秘められた思いが裁かれるその日に、あなたに報いてくださるだろう。」

そう言うと、聖マルコは私に座るよう命じた。

私は、その尊者に対し、その称賛に値する生涯について尋ね始めた。すると、彼は次のように語ってくれた。

「私が言った通り、私はこの洞窟に九十五年間住んでいる。この間、私は人間はおろか、獣や鳥さえも見たことがなく、人の手で焼かれたパンも口にしなかったし、衣服も身につけなかった。三十年の間、私は飢え、渇き、裸身、そして何よりも悪魔の誘惑によって、恐ろしい苦難と悲しみを味わった。飢えに苛まれ、私は土の塵を口にし、渇きに苦しめられ、海水を飲んだ。　悪魔たちは、私を海に沈めてやると互いに千回も誓い合い、私を捕らえて殴打しながら、この山の低地へと引きずり下ろした。しかし、私は再び山の頂上へと登りつめた。すると彼らはまた、私の皮膚が体から剥がれ落ちるまで、ここから私を引きずり下ろし続けた。私を引きずり、殴りながら、彼らは狂ったように叫んだ。

「我らの地から去れ！　世界の始まり以来、人間は誰もここに来たことがない――お前はよくもまあ、ここに来るなどという度胸があったな？」

三十年にも及ぶそのような苦しみ、飢え、渇き、裸同然の状態、そして悪魔たちによる迫害の末、神の恵みと御慈悲が私の上に注がれた。神の御摂理により、私の肉体は変容し、体には毛が生え、適切な時に食糧が運ばれ、主の天使たちが私を訪ねてくるようになった。　私は、いわば天の御国と、聖なる者たちの魂に約束され、善を行う人々のために用意された至福の住まいのようなものを目にした。　私は、神の楽園と、私たちの先祖たちがその実を口にした知識の木のようなものを見ました。また、楽園に現れたエリヤとエノクも目にしました。私が主に求めたことのうち、主が私に示さなかったものは何一つありませんでした。

「私は彼に尋ねた」とセラピオンは語る。「父よ、あなたがどのようにして、またなぜここに来られたのか、教えてください。」

すると、聖人は次のような言葉で語り始めた。

「私はアテネで生まれた[2873]、そこで哲学を学んだ。両親が亡くなった後、私は心の中でこう言った。『私の両親が死んだように、私もまた死ぬだろう。　それならば、この世に魅了されてしまう前に、自ら進んでこの世を捨てたほうがよい」と。そして直ちに衣服を脱ぎ捨て、板の上に立ち、その板に乗って海を泳ぎ出した。波に運ばれ、神の御摂理により、私はこの山にたどり着いた。

私たちがこのように語り合っていたとき――セラピオンは続ける――日が昇り、私は、まるで獣のように体中が毛に覆われた聖マルコを見かけ、恐怖に襲われた。なぜなら、彼の声と口から発せられる言葉以外には、彼を人間だと見分ける手がかりが何一つなかったからである。　私の戸惑いに気づいた聖マルコは、私にこう言った。

「私の姿を見て恐れるな。朽ちる大地から取られた肉体は、朽ちるものだからだ。」

それから彼は私に尋ねた。

「キリストの律法のもとで、世界は相変わらず平穏を保っているか？」

「今や」と私は彼に答えた。「キリストの恵みにより、かつての時代よりもさらに良くなっています。」

「今でも、」と彼は再び尋ねた、「偶像崇拝やキリスト教徒への迫害は続いているのか？」

「あなたの聖なる祈りの助けにより」と私は答えた。「迫害は止み、偶像崇拝もありません。」

これを聞いて、長老は大きな喜びに満たされた。それから彼は再び私に尋ねた。

[2873] アテネ――古代ギリシャ国家の首都であり、古代においてその教養と商業で名高かった。ここには有名な哲学学校があり、教会の教父や教師たちの何人かがそこで教育を受けた。

「今、この世には、主が御自身の福音書で言われたように、奇跡を行う聖人がいますか。『*もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この山に向かって、「ここからあそこへ移れ」と言えば、山は移るでしょう。あなたがたには、不可能なことは何一つないのです*』（マタイ17:20）。」

聖人がそう言い終えるやいなや、山はその場所からおよそ五千キュビト[2874] ほど移動し、海に近づいた。聖マルコは身を起こし、山が動いていることに気づくと、山に向かってこう言った。

「私はあなたにその場から動くよう命じたわけではない。ただ兄弟と話をしていただけだ。だから、元の場所に戻りなさい！」

彼がそう言い終えるやいなや、山は確かに元の場所に戻った。それを見た私は、恐怖のあまりひれ伏してしまった。一方、聖人は私の手を取り、立ち上がらせてから、こう言った。

「お前はこれまでの人生で、このような奇跡を見たことがないのか？」

「いいえ、父上」と私は答えた。

すると聖人はため息をつき、苦々しく泣きながらこう言った。

「この地よ、悲しむべきだ。なぜなら、この地に住むキリスト教徒たちは、名ばかりキリスト教徒であり、実際にはそうではないからだ！」

そして再びこう言われました。

– 私をこの聖なる場所に導いてくださった神に感謝します。そうしてこそ、私は故郷で死ぬこともなく、多くの罪によって穢された地に埋葬されることもなかったのです！

「その日一日を」とセラピオンは語る。「私たちは詩篇を歌い、霊的な対話を交わして過ごした。そして夕暮れが近づくと、尊者様は私にこう言われた。

「セラピオン兄弟よ！　祈りの後、感謝の気持ちを込めて食事をとる時ではないか？」

この言葉に対し、私は何も答えなかった。その後、彼は天に向かって両手を挙げ、次の詩篇を唱え始めた。*「主は私の牧者。私は何一つ欠けることがない」*（詩篇22:1）。

この詩篇の詠唱を終えると、彼は洞窟の方を向いてこう言った。

「兄弟よ、食事を用意してくれ。」

それから彼は再び私に言った。

「さあ、神が私たちに送ってくださった食事を味わおう。」

私は心の中で驚いていた――聖マルコが誰に食事を用意するよう命じたのか、理解できなかったからだ。その日一日、私は彼の洞窟で誰一人として人の姿を見ていなかったからである。

私たちが洞窟に入ると、そこには二つの食卓が置かれており、その上には雪のように輝く、ふっくらとした白いパンが二つ載っていた。　そこには、目にも美しい野菜や、焼き魚が二匹、種を取り除かれたオリーブの実、ナツメヤシの実、塩、そして蜂蜜よりも甘い水が満たされた杯もあった。私たちが席に着くと、聖マルコは私にこう言った。

「セラピオンの子よ、祝福を！」

「お許しください、父上」と私は答えた。

すると、聖人はこう言われました。

「主よ、祝福を！」

すると、私は食卓のそばで、天から差し伸べられた手が、供えられた料理に十字を切っているのを見た。食事が終わると、マルコは言った。

– 兄弟よ、これをここから取りなさい！

[2874] 肘――古代に用いられた長さの単位で、肘から中指の先までの距離（約10ヴェルシュク）に相当した。（ヴェルショクは≈4.45cmに相当した。肘の長さは、伸ばした中指の先端から肘の曲がり目までの距離として定義され、最大46cmまで変動することがあった。――*『信仰のABC』編集部*）。

するとたちまち、食事は目に見えない手によって持ち去られた。　私は、起こったことすべてに驚嘆した。目に見えない召使い――神の御命令により、肉体をまとった天使である聖マルコに仕えていたのは、無形の主の天使であった――にも、そして、私の人生において、あの食事ほど美味しいものを口にしたことも、あれほど甘い水を飲んだことも一度もなかったという事実にも。　私の戸惑いを見て、聖人は私にこう言った。

「セラピオン兄弟よ！　神が御自分のしもべたちにどれほどの恵みをお与えになっているか、お気づきになったか！　これまで毎日、神からパン一塊と魚一匹が与えられてきたが、今、あなたのために神は食事を倍増させ、パン二塊と魚二匹を私たちに送ってくださったのだ。主なる神は、私が最初に苦難に遭った時からずっと、このような食事で私を養ってくださっているのだ。　話の冒頭で言った通り、この場所に三十年間留まっているが、私は食べることができる植物の根を一つも見つけられなかった。飢えと渇きに苛まれ、やむを得ず、私は塵を口にし、苦い海水を飲み、裸足で歩き回った。　寒さと恐ろしい暑さのために、私の足の指は落ちてしまった。太陽は私の肉体を焼き尽くし、私は死人のように地面にうつ伏せに横たわっていた。その間、悪魔たちは、神に見捨てられた者として、私に対して戦いを仕掛けてきた。しかし私は、神の助けにより、主への愛ゆえにこれらすべてに耐え抜いた。　そして、三十年にわたる私の苦難が終わると、神の御心により、私の体には毛が生え始め、やがて衣服のように私を完全に覆うようになった。それ以来、現在に至るまで、悪霊たちは私に近づくことができない。飢えも渇きも私を支配せず、酷暑も極寒も私を悩ませない。　それにもかかわらず、私はこれまで一度も病気になったことがない。しかし今、私の命の限りが近づいている。神は、あなたがその聖なる手で私の謙虚な遺体を葬るために、あなたをここに遣わされたのだ。

それからしばらくして、聖人は再び私にこう言いました。

「セラピオン兄弟よ！　私の死が間近に迫っているこの夜、一晩中、徹夜して過ごしてください。」

その後、私たちは二人で祈りを捧げ、ダビデの詩篇を詠み上げた。その際、聖人は私にこう言った。

「セラピオン兄弟よ！　私がこの世を去った後、私の遺体をこの洞窟に安置し、洞窟の入り口を石で塞ぎ、この洞窟から立ち去りなさい。」

そこで私はその尊者にお辞儀をし、涙ながらに許しを請い、こう申し上げました。

「父よ、どうか神に懇願してください。私をもあなたと共に連れ去り、あなたが向かうその場所へ、私も行けるようにしてください。」

私のこの言葉に答えて、聖人は私にこう言われました。

「私の喜びの日に泣くのではなく、むしろさらに喜びなさい。あなたは自分の場所へ戻らなければならないのです。　あなたをここに導かれた主が、あなたの労苦と神への奉仕に対して、あなたに救いを授けてくださいますように。そして、ここから帰る道は、ここへ来た道とは異なる、別の――尋常ではない道を通ることになることを知っておきなさい。

少し間を置いて、聖マルコはこう言った。

「セラピオン兄弟よ！　今日という日は私にとって重要な日だ。私の人生のどの日よりも重要である。今日、私の魂は肉体の苦しみから解放され、天の住処へと安らぎを求める。今日、私の肉体は多くの労苦と病から休息を得る。今日、神は私を御許に迎え入れてくださるのだ。」

聖人がこれらの言葉を口にしている間、彼の洞窟は太陽の光よりも明るい光に満たされ、その山は芳しい香りに包まれた。

そこで、聖マルコは私の手を握り――セラピオンはこう続ける――、私にこう語りかけ始めた。

『私が生前、神のために労苦し、この肉体をもって住んでいたこの洞窟は、万人の復活の日まで残され、病気や労苦、苦難の住処となっていた私の死体がここに留まるように。主よ、どうか私の

魂をこの肉体から解き放ってください！　あなたのために、私は飢え、渇き、裸、寒さ、暑さ、そしてあらゆる他の災難に耐えてきました。主よ！あなたの再臨の恐るべき日に、あなたご自身が私に栄光の衣をまとわせてください！ついに、私の夜の祈りの間、一度もまどろむことのなかった私の目が、安らかに眠りにつきますように！　徹夜の祈りの間、労苦を強いられたわが足よ、安らぎを得よ！私はこの世の生活から去るが、地に残るすべての人々が救われることを願う。主のために　山や洞窟をさまよう断食者たちよ、救われよ！天の御国に至るためにあらゆる苦難に耐える修道者たちよ、救われよ！　救われよ、キリストの囚人たちよ。真理のために投獄され、追放され、唯一の神以外に何の慰めも持たない者たちよ！救われよ、修道院たちよ。昼夜を問わず神のために労苦する者たちよ！救われよ、聖なる教会たちよ。罪人の清めのために奉仕する者たちよ！　救われよ、主の司祭たちよ、人と神との間の仲介者たちよ！　救われよ、キリストの御国の子らよ、聖なる洗礼によってキリストの子とされた者たちよ！　救われよ、キリストを愛する者たちよ、旅人をキリストご自身として迎え入れる者たちよ！　救われよ、憐れみに値する者たち、慈愛に満ちた者たちよ！　救われよ、主のために富を蓄え、神に喜ばれる行いに生涯を捧げる富める者たちよ！　救われよ、主のために貧者となった者たちよ！　救われよ、正義と慈愛をもって裁きを行う、信仰深い王たち、諸侯たちよ！　救われよ、謙虚に知恵を尽くす断食者たちよ、勤勉な修道者たちよ！救われよ、キリストのために互いに愛し合うすべての人々よ！全地と、その上に住み、キリストの愛と平和のうちに生きるすべての人々が救われますように！」

その後――セラピオンはこう語る――この言葉を述べた後、尊者マルコは私の方を向き、私に口づけをしてこう言った。「兄弟セラピオンよ、あなたも救われよ！　わが主イエス・キリスト、神の御子によって、あなたに誓わせる。私のこの謙虚な肉体から、一本の髪の毛でさえも、何も取ってはならない。いかなる衣もそれに触れてはならない。埋葬の際には、神が私に与えてくださった髪の毛だけが、私の肉体と共にありなさい。また、あなたもここに残ってはならない。」

聖人がこれらの言葉を語り、私が泣きじゃくっている間、天から声が聞こえてきた。「砂漠から、わが選ばれた器をわたしのもとに連れて来よ。正義を実践する者、最も完全なキリスト者、そして忠実なしもべを、わたしのもとに連れて来よ！来なさい、マルコ、来なさい！喜びと霊的な命の光の中で安らぎを得よ！」

その後、聖マルコは私にこう言いました：

「兄弟よ、ひざまずこう！」そして、私たちはひざまずいた。

その後、私は天使の声が聖人に語りかけるのを聞いた。

「両手を広げよ！」

この声を聞いて――セラピオンはこう語る――私は直ちに立ち上がり、見上げると、聖人の魂がすでに肉の束縛から解き放たれているのを見た。その魂は、天使たちの手によって白く輝く衣で覆われ、彼らに導かれて天へと昇っていった[2875]。私は天へと続く空の道と、開かれた天を凝視した。その際、その道に立ちはだかる悪魔の大群を目にし、悪魔たちに向けられた天使の声を聞いた。

「闇の子らよ、逃げよ。真理の光の御前から身を隠せ！」

聖マルコの魂は、空中で約一時間留まっていた。その後、天から天使たちに向けた声が聞こえてきた：

「悪魔たちを恥じ入らせた者を連れて、ここに連れて来なさい。」

尊者の魂が、何の害も受けずに悪魔の大群を通り抜け、すでに開かれた天に近づいたとき、私はまるで天から差し伸べられた右手が、汚れなき魂を受け入れているかのような姿を目にした。その後、その幻影は私の目から消え去った――とセラピオンは語る――そして、それ以上私は何も見なかった。

[2875] 聖マルコの死は400年頃であった。

時刻は夜六時頃であった。聖人の尊い遺体を埋葬の準備を整えると、私は一晩中祈りを捧げた。そして夜が明けると、私は喜びの涙を流しながら、遺体の上で慣例通りの賛美歌を歌い、遺体に口づけをして洞窟に安置し、洞窟の入り口を石で塞いだ。　その後、長い祈りを捧げた後、私は山を下り、神を賛美しつつ、この通行不能で恐ろしい荒野からの帰路において、聖人が私を導いてくださるよう祈った。そして、日没後、一息つくために座っていると、以前私に現れたあの二人の隠者が突然私の前に現れ、こう言った。

「兄弟セラピオンよ、あなたは、この世の誰にもふさわしくない、祝福された修行者の遺体を葬った。さあ、立ち上がって、夜通し旅を続けなさい。日中は酷暑のため、旅をするのは困難だからだ。」

そこで私は立ち上がり、現れた二人の後を追って、夜明けまで彼らについて歩いた。日が昇り始めた頃、彼らは私にこう言った。

「平安のうちに、セラピオン兄弟よ、あなたの場所へ帰り、主なる神に感謝を捧げなさい。」

私が彼らから少し離れたとき、すでに偉大なる長老ヨハネの修道院にある教会の扉に近づいていることに気づいた。　これに大いに驚いた私は、声高らかに神を賛美し、尊者マルコが私に語った言葉を思い出した。すなわち、私が彼のもとから帰る道は、私が彼のもとへ来た道とは異なるだろう、というものである。そして私は、聖人の祈りによって、目に見えない形で運ばれたのだと信じた。私は、忠実なしもべである私たちの尊い父マルコ修道士の祈りと願いによって、不適格な私にとってすべてを善きものとして整えてくださった、至聖なる私たちの神に感謝を捧げた。

私の声を聞いて、アッバ・ヨハネスが修道院から急いで出てきて、私を迎え入れ、こう言いました。

「神の御慈悲により、アッバ・セラピオンが無事に私たちの元へ戻ってきました。」

その後、私たちは教会へ向かい、私は長老とその弟子たちに、私に起こったすべての出来事を語り、私たちは皆、神を賛美した。その後、長老は私にこう言った。

「まことに、兄弟よ、聖マルコこそ、最も完全なキリスト者であった。我々はただ名目上だけキリスト者と呼んでいるが、実際には真のキリスト教から遠く離れている。しかし、人を愛し、憐れみ深い我らの神は、聖なる御従者マルコを御自身の天の御国の永遠の住まいにお迎えになり、　――私たちと、御自身の聖なる共議的かつ使徒的な教会全体を、悪魔のあらゆる策略から守り、常に私たち、御自身の謙遜なしもべたちと共にいてくださり、御自身の神聖な御意志を全うするよう導いてくださいますように。そうして私たちが、御自身の偉大な聖人、すなわち私たちの尊い先達たちの足跡をたどり、–恐るべき審判の日に、私たちの父マルコと共に、私たちの聖なる御母マリアと、私たちの主イエス・キリストに喜ばれたすべての聖人たちの祈りによって、私たちもまた恵みを受けられますように。主イエス・キリストには、父と、至聖なる、善き、命を与える聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、栄光と誉れと礼拝が帰されますように。 アーメン。

尊者ププリウスの記念日

記念日：4月5日

尊者ププリウスは、修道者の身としてエジプトで修行に励みました[2876] 。これは、背教者ユリアヌス皇帝の治世下でのことでした[2877] 。 この不敬虔な皇帝がペルシャへの遠征の準備を整えた際、

[2876] エジプトは多くの修道士たちが住む一般的な場所であった。修道院は下エジプトにも中エジプトにもあった。エジプトでは特に、下エジプトにあり、ナイル川を越えて内陸深くに位置するニトリア砂漠が有名であった。

[2877] ローマ皇帝ユリアヌス・アポステートは、361年から363年まで在位した。

東の方角へ悪魔を、いわば偵察兵として送り出し、ユリアヌスの軍が進むべき道筋を偵察するよう命じた。　出発した悪魔は、尊者プブリウスが修行に励んでいた場所までたどり着いたが、そこで立ち止まり、その場から一歩も動けずに十日間を過ごした。　その理由は、聖プブリウスが、悪魔がその地へやって来たことを霊によって知ると、祈りを捧げ始め、両手を天に向けて、昼夜を問わず休むことなく、悪魔がその国から立ち去るまで祈り続けたからであった[2878]。　こうして、悪魔は何も知らずにユリアヌスのもとへ戻った。ユリアヌスは彼に尋ねた。

「なぜ、旅にこれほど長くかかったのか？」

悪魔は彼にこう答えた。

「確かに長い旅路でしたが、何も探り出せず、何も知らずにあなたの元へ戻ってきました。私は十日間、修道士ププリウスが祈りを終えるのを待ち、その修道士が滞在していた場所を通れるようにと願っていましたが、何も得られずに戻ってきたのです。」

すると、不敬虔な皇帝ユリアヌスは怒りを露わにし、悪魔にこう言った。

「戦から戻ったら、あの修道士に復讐してやる。」

しかし、ユリアヌスはその不法な企てを実行に移すことはできなかった。なぜなら、この言葉を口にした直後、神の見えざる力によって命を落としたからである。

その後、ユリアヌスの将軍の一人が、自分の全財産を売り払い、その代金を貧しい人々に施した後、尊者プブリウスのもとを訪れ、修道衣を授かって、彼と共に修行に励むようになった。この修道士は、厳格な修道生活を送り、徳において大いに優れた成果を上げた。

一方、尊者ププリウスはその後もかなり長い間修行を続け、ついにその徳高い生涯によって神に喜ばれ、この世を去って永遠の天の住まいに旅立った[2879]。

私たちの尊い父、殉教者プラトン聖人の記念日

記念日：4月5日

尊者プラトンは、セルギウスとエウフミアという名を持つ、名高く、かつ敬虔なキリスト教徒の両親の息子であった。　幼い頃から、両親は彼を敬虔に育て、キリスト教の美徳を教えたが、少年の教育を最後まで成し遂げる間もなく、この儚い世を去り、永遠の命へと旅立った。

孤児となった聖人は、親戚の家に引き取られ、そこで暮らす中で学問において大きな進歩を見せると同時に、キリスト教の美徳においても優れた成果を収めました。

成人すると、聖人は親族の家を離れ、自らの労働によって生計に必要な資金を稼ぎ始めました。聖人は非常に勤勉であると同時に節制も心がけていたため、まもなく自らの労働によって莫大な財産を築き上げました。　しかし、聖人の心には、この世の富への執着は微塵もなかった。そこで彼は、全財産を貧しい人々に施し、奴隷たちを解放した後、オリンポス山[2880]へと赴き、そこで地元の修道院の一つで修道士としての剃髪を受けた。

修道院での生活において、聖人は極めて厳格な修道生活を送り、祈りの合間には、書物の写本や、教父たちの著作から有益な集成を編纂することに時間を費やした。　その修道院の院長テオクティストが死去すると、尊者プラトンは満場一致で同修道院のイグメンに選出された。これは聖人の35歳の時であった[2881]。イグメンの位についた尊者は、さらに熱心に修行に励み、自らの模範を通じて、その修道院のすべての兄弟たちに真のキリスト教的な生き方を示した。　当時、コンスタンティノ

[2878] まさにそのように、モーセはイスラエル人とアマレク人の戦いの最中に祈った（出エジプト記17:8–13）。

[2879] 聖ププリウスの死は4世紀に起こった。

[2880] オリンポス山は、小アジアのミシア地方、フリギアとビフィニアの境界に位置する山である。ここには、住人の修道生活で非常に名高い「シンボル」と呼ばれる修道院があり、そこで尊者プラトンが修行に励んでいた。

[2881] これは770年のことだった。

ープル総主教は聖タラシオスであった。尊者プラトンの功績を耳にした彼は、ニコミディア都主教区の統治を引き受けるよう彼に提案した[2882]。しかし、尊者プラトンは、隠遁生活と修行に専念することを望み、その謙虚さゆえに大主教区の統治を辞退し、サクディオンと呼ばれる人里離れた場所[2883]へと退き、後にそこで修道院を設立した。

偶像破壊運動の混乱を受けて、当時在位していたイリナ皇后[2884]は、至聖なるタラシオス総主教と共に、ニカイア[2885]で第7回全地公会議[2886]を招集した。この公会議では、偶像破壊派の異端者たちの不敬な教義が非難されると同時に、聖なるイコン　への崇敬と礼拝が回復され、再確認された。公会議に集まった教父たちは三百名以上にのぼり、その中には尊者プラトンもいた。彼は博学で神の聖書に精通していたため、公会議において非常に大きな役割を果たし、正教の教義を勇敢に擁護し、異端者の教えを果敢に糾弾した。

公会議の審議が終了すると、聖プラトンは自身の修業の地であるサクディオンへと戻った。この地は美しいだけでなく、隠遁生活を送る上でも極めて適していた。山の上に位置し、四方を美しく背の高い木々に囲まれており、ここへ通じる唯一の道は、森の茂みの中にかろうじて見える小さな小道だけだった。

プラトンと共に、ここには彼の甥であるテオドロスも修行に励んでいた。まもなく、彼らはここに聖ヨハネ・テオロゴスに捧げる教会を建立した。

その間、聖人の功績に関する評判はますます広まり、キリスト教徒としての生き方について教えや導きを求めて、多くの人々が彼のもとに訪れるようになった。師の弟子たちの数が増え始めると、彼はその場所に修道院を設立した[2887]、そして修道院長としての職務を自ら務めた。

その苦行に満ちた生活を通じて、尊者プラトンはすべての兄弟たちに、見習うべき良き模範を示した。とりわけ、彼の甥である至福のテオドールは、昼夜を問わず絶え間ない祈りと神への黙想に身を捧げ、尊者に熱心に倣っていた。

テオドールのこれほど高潔な生き様を見て、尊者プラトンは彼のために大いに喜んだ。　至福のテオドロスに聖職の位を授けることを決意した尊者プラトンは、彼を連れてビザンティウムへ赴き、至聖なるタラシオス総主教のもとを訪れました。総主教はテオドロスを司祭の位に叙階しましたが、それは彼の自発的な意志というよりは、むしろ従順さによるものでした。というのも、至福のテオドロスは、自らをそのような位にふさわしくないと考えていたため、　それを受け入れることを拒み、この聖職は自分の力量を超えていると語っていた。　しかし、霊的指導者である父の意志や総主教の意志に逆らうことができなかったため、彼は従い、聖職を受け入れた。聖テオドロスが新たな聖職者としての位を帯びて自身の修道院に戻ると、そこでもさらに熱心かつ熱意を持って修行を続けた。

[2882] ニコメディアは、小アジアのビフィニア地方にある都市で、マーブル海によって形成された湾の北東端に位置している。　ニコメディアは紀元前264年、ビフィニア王ニコメドス1世によって建設され、その名に由来している。ニコメディアは、ローマ皇帝や将軍たちが東方遠征を行う際、好んで滞在した地であった。現在、古代ニコメディアの跡地にはイスミドという小さな町がある。

[2883] この場所はオリンポス山からそう遠くない場所にあった。

[2884] 聖イリナは、皇帝レウ・ホザールの妃であり、夫の死後、息子のコンスタンティノス（VI）ポルフィロゲネトスが未成年のため、780年から790年まで国家を統治し、その後797年から802年までは単独で統治した。彼女の記念日は8月7日である。

[2885] 教会史において、ニカイアは二つの公会議の開催地として知られている。一つは325年に開かれた第一ニカイア公会議で、アレクサンドリアの長老アリウス（神の御子と父なる神との平等を否定した）の異端を糾弾するために召集されたものであり、もう一つはここで言及されている第七ニカイア公会議である。　ニカイアは、古代において小アジアのビフィニア地方に位置する豊かで繁栄した都市であった。現在、古代ニカイアの跡地には、非常に貧しく人口の少ない小さな町イシクがある。

[2886] この修道院は787年に創設された。

[2887] この修道院は、782年に聖プラトンによって設立された。

数年が経過し、尊者プラトンは、多くの労苦と高齢のため体力が衰え、修道院の指導者としての職務を退くことを決意し、自身の後を継いでイグメノスの地位に就く者として、至福のテオドロスを指名した。　彼はしばしばテオドロスにそのことを語り、修道院の指導という彼にとって重い負担から解放してほしいと懇願した。　しかし、至福のテオドロスはそのたびに修道院の院長職を辞退し、誰かを統率するよりはむしろ自ら他者の指導の下で暮らすことを選び、魂の救いにおいては、自ら誰かを指導するよりも、他者から教えを受けるほうが容易で有益であると信じていた。

尊者プラトンは、至福のテオドールの謙遜に打ち勝つのが難しいと悟ると、次のような策を講じることにした。彼は、あたかも病気であるかのように――実際、彼は体が弱っていたのだが――床に就き、すべての兄弟たちを呼び集めて、自分の死が近づいていると感じていると告げた。そして、彼らにこう尋ねた。

「私の後を継いで、誰を修道院長にしたいか？　あなた方の考えでは、誰が最もその任にふさわしいか？」

聖人は、兄弟たちがまさにテオドロスを修道院長に望むだろうことを知っていた。なぜなら、彼の偉大な美徳ゆえに、誰もが彼を愛し、尊敬していたからである。案の定、その通りになった。皆は提案された質問に満場一致でこう答えた。

「あなたの後は、テオドールが私たちの修道院長となりますように！」

そこで、尊者プラトンは、至福のテオドールに自らの権威を譲り渡した。というのも、テオドールはすべての兄弟たちの願いに逆らうことはできなかったからである。修道院長としての地位を引き受けた至福のテオドールは、同時にその功績をさらに高め、すべての人々の模範となり、言葉だけでなく行動によっても、皆に徳ある生き方を教え導いた。

その頃、敬虔なイリーナ皇后の息子であるコンスタンティン王は成人し、母を王位から追放して国政を自らの手に引き受けた[2888]。若くして堕落していた彼は、あらゆる種類の罪にふけっていた。そこで彼は、妻のマリアを追い出そうと企て、そのために 彼女を無理やり修道女にさせた。そして、彼女の代わりに、父の親戚にあたるテオドティアという名の別の女性を妻に迎えた[2889]。至聖なるタラシウス総主教は、この王の不法な行いを是認せず、その結婚を祝福することを拒んだ。しかし、ヨセフという名の長老――かつてコンスタンティノープル教会の財務官を務めていた人物である（[2890]）――が、神の律法を破り、総主教の命令に背いて、王に対して結婚の秘跡を執り行うことに同意した。

このことを耳にした至福のテオドール、そして彼と共に尊者プラトンは、深く心を痛めた。神の律法に対する熱意に燃え上がったテオドロスは、聖プラトンと共にすべての修道士たちに書簡を送り、その中で王の不法行為を告発し、神の律法を破壊した者として、王をキリストの教会から破門された者とみなすよう皆に勧告した。

この聖なるテオドールとプラトンの熱意と勇気に関する噂は至る所に広まり、彼らに非難された皇帝自身もそのことを知ることとなった。聖なる二人に対して激しく怒った皇帝は、尊者テオドールを残酷な拷問の末、ソロン[2891]への流刑に処し、プラトンを牢獄に閉じ込めるよう命じた。

[2888] それは790年のことで、コンスタンティノスが20歳になった年であった。

[2889] コンスタンティノス6世「ポルフィロゲネトス」皇帝の最初の妻はマリアであり、彼女は聖フィラレート「慈悲深き者」（記念日は12月1日）の孫娘であった。皇帝は母の意向により彼女と結婚した。皇帝の2度目の結婚は、それまで宮廷の侍女であったテオドティアとのもので、795年に結ばれた。

[2890] コンスタンティノープル教会のエコノム（財務官）の職は、コンスタンティノープル総主教のもとで最も重要な役職の一つであった。エコノムは、総主教の家計（エコノムは「Oixonomeo（家を管理する）」に由来する）を管理し、その財源を司るだけでなく、総主教区そのものの運営に関する問題の決定にも関与していた。

[2891] ソロン、あるいはテッサロニキは、古代においてマケドニアの極めて重要な都市であり、エーゲ海（アーキペラゴ）に面したソロン湾、あるいはフェルメイ湾の岸辺に位置していた。　ロシア正教会の歴史において、この都市はスラブ人

不義の皇帝の死後、尊者プラトンは牢獄から解放され、聖テオドロスは流刑地から帰還した。一方、聖テオドロスは、ビザンツ帝国の各地を荒らし、占領していたアガリア人[2892] の絶え間ない襲撃のため、修道院の兄弟たちの命を危険にさらすことを望まず、サクディオンを去り、兄弟たちと共にコンスタンティノープルへ赴き、そこで名高いストゥディオス修道院[2893] の運営を引き受けた。

かつて修道院長を務めていた聖プラトンは、今や謙虚な修道士として、至福のテオドロスのもとを訪れ、その修道院で修行に励むようになった。その際、聖プラトンは自らを謙遜させるあまり、自発的に足に鎖を巻きつけ、絶え間なく断食と祈りの修行に身を捧げた。

その直後、ビザンツ帝国の帝位を不法に奪取した皇帝ニキフォロス[2894] は、その権力をもって、前述の司祭ヨセフを教会に復帰させた。ヨセフは、その不法な行為により、総主教タラシオスによって教会から破門されていたのである。　その後、聖テオドロスが兄弟たちと共に、教会の規則に反する行為を行った皇帝を非難すると、皇帝は彼とストゥディオス修道院のすべての兄弟たちに対して激しく怒り、彼ら全員を、尊き長老プラトンと共に、都市の近くにある島の一つへ[2895] に流刑とした。

四年間の流刑生活を送った後、尊者プラトンはすでに高齢となっていたが、コンスタンティノープルに戻り、そこで再びストゥディオス修道院に定住した。

その修道院で熱心に修業に励んだ尊者プラトンは、さらに3年間をそこで過ごし、ついに主のもとへ帰天し、他の聖人たちと共に主の御座の前に進み出て、天において永遠に主を賛美することとなった[2896] 。アーメン。

テオドラ・ソロンスカヤ聖女の記念日。

記念日：4月5日

聖テオドラは、エギナ島に住んでいた敬虔なキリスト教徒の両親、アントニオスとクリサノファの娘として生まれた[2897] 。この敬虔な夫婦が暮らしていたのは、聖なる教会が偶像破壊の異端に揺さぶられていた時代、ミカイル皇帝の治世下であった[2898] 。しかし、敬虔な夫婦は偶像排斥の教えに動じることなく、まるで灯火のように正統な信仰を輝かせていた。まさにそのような敬虔な両親のもとから、尊者テオドラは生まれたのである。

成人すると、テオドラは結婚し、まもなく娘を授かった。敵の侵攻を機に、若い夫婦はソロンへ移り住んだ。

の聖なる最初の教師であるキリルとメフォディウスの生誕地として知られており、ヨーロッパ・トルコにおける（コンスタンティノープルに次ぐ）最初の商業都市の一つに数えられる。

2892 アガリア人――イスラム教徒であるアラブ人――は、アブラハムの側室であり、アラブ人の祖であるイシュマエルの母であるハガルにちなんでその名で呼ばれていた。　ビザンツ宮廷で絶え間なく続く動乱や内紛に乗じて、アガリア人は当時、ビザンツ帝国の辺境に対して壊滅的な襲撃を繰り返していた。

2893 聖テオドロス・ストゥディテスは798年にストゥディオス修道院の院長に任命された。ストゥディオス修道院は、その創設者であるローマのパトリキウス（当時の最高階級に属し、現代の貴族に相当する）ストゥディオスの名に由来して名付けられた。　ストゥディオスはコンスタンティノープルに、聖ヨハネ・洗礼者（前駆者）に捧げる大規模で美しい教会を建設し、その隣に修道院を設立した。彼は、コンスタンティノープルの「不眠の修道院」（5世紀に創設）の修道士たちをここに招いた。こうして、ストゥディオス修道院の歴史が始まった。

2894 ニキフォロス1世皇帝は802年から811年まで在位した。

2895 それは807年のことでした。

2896 尊者プラトンの逝去は814年、ラザロの復活の日、聖人が79歳を迎えた年にあった。

2897 エギナは、アルゴリスとアッティカの間に位置する、サロニコス湾にある島である。

2898 ミカイル1世・ランガヴは、ビザンツ帝国の皇帝であり、811年から813年まで在位した。

テオドラの娘が成人すると、聖女テオドラは彼女をソリュンの修道院の一つで神への奉仕に捧げました。その後、夫の死を機に、彼女自身もその修道院に入り、そこで修道者の位を受けました。

修道院での生活において、聖女テオドラは厳格な修道生活を送った。神の恵みに支えられ、彼女は従順と謙遜の行い、断食と祈りによって主を大いに喜ばせ、生前のみならず死後も奇跡を起こした[2899]。ある時、聖女が帰天した後、その修道院の修道院長も亡くなり、その遺体を聖テオドラの棺の近くに安置しようとした際、大きな奇跡が起こった。聖テオドラは、まるで生きているかのように、自らの棺とともに横に移動し、あたかも上長に場所を譲るかのように、死後もなおその謙遜さを示したのである。この奇跡を目撃した者たちは皆、恐怖に襲われ、声をあげて叫んだ。

「主よ、憐れみたまえ！」

聖テオドラの聖遺物からは芳香を放つ聖油が流れ出し、それによって多くの奇跡が起こった。悪霊が追い出され、盲人が目を開き、多くの病人が、私たちの神キリストの栄光のために、その病から癒やされたのである。

- 同日は、聖なる父たちテオナ、シメオン、フォルヴィンの記念日である。

4月19日

4月6日（旧暦）

同日、4世紀にペルシアでサポル王によって火刑に処された120人の殉教者たち。

同日、使徒に等しい聖メフォディオスの記念日

聖人伝：我らの父エウティキオス、コンスタンティノープル大司教

記念日：4月6日

聖エウティキオスの生誕地は、フリギア地方にあった「神聖なる」と呼ばれる村であった。その後、聖エウティキオスはこの集落を石の壁で囲み、ここに四十人の殉教者に捧げる広大な教会を建て、徳の高い人々、とりわけ　天使のような生活を送っていた修道士たちを住まわせた。彼は、その集落が名ばかりではなく、実際に「神聖な」ものとなることを望んでいたのである。　こうして、聖人の尽力により、すべては堅固な都市へと変貌を遂げた。聖エウティキオスの両親は、戦士アレクサンドロスと、アウグストポリの教会で奉仕していた誠実で高潔な司祭イシキオスの娘シネシアであった。　ある日、シネシアはこの祝福された子を身ごもっていた際、床に横たわっていると、言い表せない光に包まれているのを見た。彼女は恐怖に駆られ、これが一体何を意味するのかと考え込んだ。しかし、この幻視は、彼女から生まれようとしていた霊的な光――迷いの闇の中に留まっていた多くの人々を啓蒙する者――を予示していたのである。

主は、かつて預言者エレミヤを聖別されたように、このしもべを聖別され、生まれる前から彼を「世の光」であり「偉大な聖者」となるよう定められた。少年は、前述の司祭イシキオスである祖父によって洗礼を受け、彼から聖書の初歩的な教えを受けた。　幼少の頃から、エウティキオスの将来の聖職への前兆が見られていた。長老イシキオスのもとには、エウティキオスと同年代の多くの子供たちが学んでいたが、遊びの最中、彼らは壁に自分の名前を書き始め、ある者は自分を「長老」と、ある者は他の何らかの肩書きで名乗った。　至福のエウティキオスは、自らを「エウティキオス・パトリアルヒ」というパトリアルヒの称号で記した。これは、まるで将来、神からパトリアルヒの栄誉が授けられることを予言するかのような行為であった。聖エウティキオスが十二歳になった時、彼

[2899] 聖テオドラは879年に逝去した。

はさらなる教育を受けるため、両親と祖父によってコンスタンティノープルへ送り出された。　世俗の学問の修得において他の者たちより際立った才能を示した彼は、聖使徒ヤコブの言葉にあるように、外見上の知恵そのものは、天から下るものではなく、　むしろ地上的で、肉欲的で、悪魔的なもの、すなわち地上の利益を求め、情欲に駆られた魂の感覚的な欲望に奉仕し、それを愛する者たちにいかなる霊的な実ももたらさないものであることをはっきりと悟った。一方、*「上から下る知恵は、まず第一に、清く、次に平和で、謙遜で、従順であり、憐れみに満ち、善き実を結ぶ」*（ヤコブ3:17）ものであり、この至高の知恵を身につける者たちは、それらによって満たされるのである。このように、分別ある青年エウティキオスは、知恵ある者として、天から下る至高の知恵を熱心に探し求め、それを見出した彼は、この世のためではなく、神のために修道者たちの集団の中で奉仕するという善き決意を心に抱いた。やがて彼が成熟した年齢に達し、修道生活という揺るぎない決意について熟考していた時、神の御心により、彼をしばらくの間、修道生活への入会の道を阻む小さな障害が生じた。その内容は次の通りであった。アマシアの大主教[2900]と、同市の他の数名の要人たちが、至福の者に対し、修道生活を送ることなく、ラジキエ[2901]の司教職を引き受けるよう熱心に説得したのである。　大司教や他の者たちの意志を、主ご自身の御決定として受け入れた聖エウティキオスは、当時教会務めのためにコンスタンティノープルに滞在していたアマシアの大司教に、まるで毛を刈られる子羊のように身を委ねた。　彼はエウティキオスを連れ出し、東方の軍司令官ウルビキウスにちなんで「ウルビキエヴァ」と呼ばれていた聖母マリア教会へと導き、そこで洗礼堂という別室にて、彼を聖職者に叙階した。偶然にも、エウティキオスの叙階の最中、　剃り落とされた彼の髪が洗礼堂にあった聖水の中に落ち、その場にいた人々は驚きながら、「彼を霊的な誕生（すなわち洗礼）によって生み出した母（聖なる洗礼盤）が、彼の髪を受け入れたことで、聖職者への叙階において彼にとっての代母となったのだ」と語った。　その後、至福のエウティキオスは助祭に叙任され、30歳の時に司祭に叙階された。　そして、至福のエウティキオスが司教の位に就くだけとなった時、神の摂理は、そのしもべにより良い未来を用意するために状況を変え、ラジキアの司教座は別の男が受け継ぐことになった。　そこで聖エウティキオスは、再び当初の志に立ち返り、アマシアの修道院の一つに隠遁し、そこで修道者の衣をまといました。　この修道院は、聖メレティオス、ウラニオス、セレウキオスという聖なる人びとによって設立された。このうち最初の人と最後の人物は、それぞれその時代にアマシア教会の司教を務め、その聖職の位にあるまま主のもとで安らかに眠りについたが、彼らの墓からは病める者たちに奇跡的な癒しがもたらされている。　偉大なるセレウキオスについては、生前もすでに奇跡を行う者であったと伝えられている。かつてアマシア地方で激しい飢饉が起きた際、聖セレウキオスの元には数え切れないほどの乞食や貧しい人々が押し寄せ、ついには彼のパンの備蓄がすべて底をついてしまった。 パン配給を担当していた は、求めてくる人々を助ける術もなく、彼らの嘆きに耐えかねて、聖人のもとへ行き、穀物倉庫の鍵を彼に手渡した。　鍵を受け取った聖人は、それを自分の寝床の上に置き、その夜一晩中、飢えで死にそうな民を憐れみ、全能の御手をもって、神のみが知る泉から彼らに食糧を送ってくださるよう、神に祈り続けた。翌朝、穀物倉庫は小麦で満たされており、扉を開けることさえできないほどであった。　人々は皆、必要とする分や持ち運べる分だけ、自由に小麦を持ち帰ったが、取り出されても小麦は尽きることがなかった。　中には、計量器や数え棒を使って小麦を持ち帰る者もいたが、記録によると、聖人の祈りに応じて神によって増やされたセレウキアの穀物倉から運び出された量の合計は、10テム（すなわち10万メア）にも達した。これが聖セレウキアに関する伝承である。　同様に、かつてイベリアの司教の座に就き、そこに埋葬された聖ウラニオスの墓のそばでも、あらゆる種類の病からの癒しがもたらされた。このような偉大な

2900　アマシアは、アジア側のトルコ、シヴァス県にある都市で、人口15,000人を擁し、18のマドラサ（高等教育機関）があり、そこで2,000人のソフト（学生）が学んでいる。かつてアマシアはポントス王たちの居城であり、多くの古代遺跡が残されている。また、歴史家スグラボンの生誕地でもある。

2901 アマシアの南西、ガラティア地方の

人物たちによってアマシウス修道院は築かれ、その後、修道服を身にまとい、　天使の姿を体現し、真理をもって腰を締め、神の全武装を身にまとった後、アマシア都主教区内のすべての修道院を統括するアルヒマンドリトに任命され、修道者たちにとって頼もしい指導者となった。

当時、ユスティニアヌス大帝[2902] が統治しており、聖職者たちが第5回全地公会議[2903] に召集された際、アマシアの総主教が病に倒れたため、彼は尊者エウティキオス大修道院長に対し、自分に代わってコンスタンティノープルでの公会議に出席するよう依頼した。　至福のエウティキオスが旅の準備をしていたとき、夢の中で次のような幻を見ました。彼は、天の穹蒼から伸びた神の御指が、修道院の上にある非常に高い山を指し示しているのを見ました。その山には聖殉教者ファラレウスの教会が建っており、同時に上空からエウティキオスに向けた声が聞こえました。　「そこにおいて、あなたは司教となるであろう」。眠りから覚めた聖人は、その幻視に驚き、それが何を意味するのかと首をかしげた。しかし、それは、神の祝福により、彼がまもなく就くこととなるコンスタンティノープル総主教という高位を予兆していたのである。　尊者エウティキオスがコンスタンティノープルに到着したとき、すでに死期が迫っていた高齢の至聖なるミナ総主教は、この福者を見て、自分の聖職者たちに、彼が自分の後を継いで総主教になるだろうと預言的に告げた。　また、聖エウティキオスに自身の総主教邸に住むよう命じ、そこで彼と心温まる対話を交わし、神に霊感を受けたその言葉に喜びを見出した。ミナは、聖エウティキオスの賢明さと高潔な品行について皇帝に報告した後、彼を皇帝のもとへ送り出した。　偶然にも、まさにその時刻、王の御前には数人の異端者がおり、彼らは信仰の教義に関する問題について聖人と論争を始めたが、聖エウティキオスが語る知恵と霊に抗う力はなかった。　論点は、異端者たちを死後も破門すべきかどうかという点にあった。ある者たちは、死後に異端であることが判明した異端者たちには破門を科すべきではないと主張した。一方、聖エウティキオスは、それとは対照的に、異端者たちはあらゆる手段を用いて、たとえ死後であっても破門すべきであると主張した。　彼は聖書から、エルサレムの王ヨシヤの例を挙げた。ヨシヤは、死後何年も経ってから、墓から偶像崇拝者の遺骨を取り出し、火で焼いたのである。聖人は、同様に、異端者も死後であっても処罰すべきだと主張した。　それ以来、尊者エウティキオスは王の寵愛を受けるようになり、誰もが彼を称賛し、敬った。その頃（公会議が始まる前）、至聖なるミナ総主教が病に倒れ、非常に高齢のうちに主のもとへ召された。　そこで、聖職に就いた者たちの多くが、贈り物や請願を通じて、王からこの栄誉を自分たちに与えてもらおうと画策した。しかし、その心は神の御手にある王は、至福のエウティキオスについて思案し、　彼は、名高い顧問の一人であるペトロに、アマシアのアルヒマンドリトを密かに監視するよう命じた。それは、あたかも後者が世間の栄光を避け、密かに　コンスタンティノープルから逃げ出したかのように見せるためであった。その時、聖人は夢の中で別の幻視を受け、それについて後に自ら家族に語った。　「私には――」と彼は語った。「大きくて非常に明るい家が見え、その中には貴重な装飾で覆われた寝台があった。その寝台には、ソフィアという名の威厳ある女性が座っており、私を呼び寄せると、自分の装いを私に見せ始めた。その直後、私はその家の屋根が雪で覆われているのを見た。そして、その雪の中にソテリクという名の少年が立っていた。彼は滑って屋根から転落しそうになっていたが、私がそれを察知して、彼を屋

[2902] ユスティニアヌス帝は527年から565年まで統治した。482年または483年に生まれ、イリュリアの農民の息子であった。 叔父（後のユスティニアヌス1世）によってコンスタンティノープルのアナスタシウス皇帝の宮廷に連れて行かれたユスティニアヌスは、優れた教育を受け、叔父の死後、その前に叔父に養子として迎えられていたことから、帝位に就いた。ヴァンダル王国と東ゴート王国の征服によって、その治世を輝かせた。

[2903] 第5回全地公会議は553年5月、コンスタンティノープルで招集された。そこには165人の司教が出席した。その中にはすべての東方総主教が含まれていたが、西方からはアフリカの司教5人しか参加しなかった。 議長はコンスタンティノープル総主教エウティキオスが務め、この公会議は、テオドール・モプスエウテス（福者）、テオドリトス、イウェ・エデッサに関する問題を最終的に決着させるために招集された。また、公会議は、カルケドン公会議を含む、これまでのすべての公会議の信仰宣言を承認した。

根と雪の上から下ろし、転落から救ったのだ」。　この幻視は、彼が総主教に選出される前夜の夜に見たものであり、完全に現実のものとなった。というのも、ソフィアという名のその女性は、コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂そのものを象徴しており、彼女の装いは教会の務めを表していたからである。　屋根から落ちそうになっていた少年ソテリコスは、異端へと傾き、陥りかけていた教義上の告白を象徴しており、善良な擁護者による早急な助けを必要としていた。　皇帝は、敬虔なエウティキオスについて、まさに神からの啓示を受けた。彼は自ら、そのことを宣誓を伴って、全政府および大教会の聖職者たちに伝えたのである。　「ある時」と王は語った。「私はアフィレの聖使徒ペトロ教会[2904] で祈りを捧げていたところ、うたた寝をしてしまった。すると、その至高の使徒がエウティキオスを指さし、私にこう告げるのを見た。『この者を、あなたがたの司教に任命せよ』と」。　これを聞いた者たちは皆、口を揃えて「ふさわしい、ふさわしい！」と叫んだ。こうして、神の御心と啓示により、聖エウティキオスは40歳の時にコンスタンティノープル総主教の座に就いた。彼の総主教就任直後、聖なる父たちがコンスタンティノープルに集まった後、第五回全地公会議が開かれた。　そこには、古代ローマの教皇ヴィギリウス、アレクサンドリア総主教アポリナリウス、アンティオキアのドムヌスが出席し、彼らは新ローマの至聖なる総主教エウティキオスおよび他の聖なる教父たちと共に、敬虔さを確立し、異端者たちとその不敬虔な思索を破門した。　聖エウティキオスがキリストの教会を円滑に統率していた一方で、悪魔はその手先である異端者たちを用いて、彼に対する迫害を煽り立てた。数年が経過すると、皇帝ユスティニアヌスは知らず知らずのうちに異端者たちに惑わされ、彼らの側に加担するようになり、敬虔さを装って、アウタルトドケトス派（[2905] ）、すなわち　「朽ちない者たち」と呼ばれる者たちであり、彼らは、キリストの肉体は、神性との結合により、その死と復活以前にすでに朽ちることなく、人間の苦しみとは無縁であったと主張していた。　この異端の教義を広めることで、皇帝は教会を動揺させ、すべての人々に自分と同じように信じ、告白するよう強要した。聖なるエウティキオス総主教はこれに抵抗し、そのような教義は正教会に属するものではなく、異端者たちのものだと指摘した。　聖書と聖父たちの著作に基づき、彼は、キリストの肉体は罪を除いては、私たちの朽ちる肉体と似ており、苦しみを受ける可能性があったことを明らかにした。なぜなら、聖母マリアから生まれたキリストは、おくるみに包まれ、母乳を飲み、割礼を受け、この世での生涯を通じて食べ物や飲み物を必要としたからである。　では、朽ちることなく、苦しみとは無縁であるはずの肉体が、どうして私たちのために釘や槍の苦しみを受けることができたというのか。もしその「朽ちない」という性質を、単に「罪による朽ちから解放されており、墓の中で朽ち果てなかった」ということだけと解釈するのであれば。　しかし、皇帝は総主教の正統な教えに耳を傾けるどころか、あらゆる手段を用いて、その異端的な教えの正当性を自身の署名で裏付けるよう総主教を説得しようとした。総主教が皇帝の非正統的な思惑に署名することを拒んだため、皇帝は彼に対して激しく怒りを露わにした。　双方による度重なる論争の末、ユスティニアヌス帝は異端者たち、とりわけエフェリウスとアデウスという地方長官たちの唆しにより、自分と志を同じくする司教たちを集めて不法な集会を開いた（これはエウティキオス総主教の在位12年目のことである）；　皇帝はこの集会に対し、無実で聖なる総主教に対する虚偽の告発を提示し、偽証人による裏付けを得て不当な有罪判決を勝ち取り、こうして善良な牧者であり、聖なる人物であり、正統派の司教であるエウティキオスをその座から追放し、 その代わりに、彼は という偽りの牧者ヨハネ――通称スコラスティコス――という不敬虔で人に媚びる者を後任に選んだ。一方、聖エウティキオスは

[2904] アフィールは、マーブル海のほとりにある都市である。

[2905] モノフィシテ派の論争から生じた様々な見解の中でも、ユリアヌス・ガリカルナソスが支持した一つの見解が際立っていた。　彼は、救い主の肉体は朽ちることなく、アダムが罪を犯さずにいたならばその肉体が死から免れていたのと同様に、死から免れていたと主張した。また、その肉体は復活の前後を通じて同一であり、その飢え、渇き、　疲労は、決してその人間性の本質に由来するものではなく、彼が自ら進んで自らをさらした感覚であったと説いた。オートドケト派は、敵対者を「フタルトラトス」（すなわち、朽ちるものを崇拝する者）と呼んだ。

1月22日、聖使徒ティモテオの記念日に、兵士たちの手によって教会から引きずり出された。 地方長官エフェリウスは、武器と槍を携え、猛獣のように唸りながら現れ、聖人を無理やり引きずり出すよう命じた。さらに彼は聖人の司祭服を剥ぎ取り、アマシア地方へ追放した。 しかし、その後、エフェリウス自身も、かつての親友アデウスと共に、神の報復を免れることはできなかった。エフェリウスは聖職の地位、富、そして命を失った。同じ日、10月3日、二人はその悪行により当然の報いとして死刑を宣告され、斧で首を刎ねられた。[2906]

一方、キリストの聖人エウティキオスは、アマシア地方へ追放された後、自身の修道院で断食と祈りに専念し、そこでキリストの恵みによって人々の病を癒やし、多くの奇跡を起こした。ここでは、聖エウティキオスの奇跡のうちいくつかを紹介しよう。 アマシアの町には、アンドロギンという名の男が妻と共に住んでいた。 夫婦は、死産を繰り返していたため深く嘆いていた。子供は生まれる前に死んでしまうのだ。かつてソナミの女がエリシャのもとへ行ったように、夫婦は懇願と涙を込めて神の聖人のもとへやって来て、神に彼らのために祈り、子供たちが生きて生まれるよう恵んでくださるよう願った。 聖人は、命を与える十字架とソゾポルにある至聖なる聖母マリアのイコンから流れ出た聖油で夫婦二人を塗油し、彼らにこう言った。「胎内にいる赤ん坊（妻は妊娠していた）をペトロと名付けなさい。そうすれば、その子は生き残るだろう」。 その時、聖人のそばにいたエウスタフィオス司祭（この伝記の著者）が尋ねた。「もし女の子が生まれたら、どんな名前にすればよいのでしょうか？」すると聖人は、男の子が生まれ、その子をペトロと名付けるべきだと預言的に断言した。 やがて、妻は男の子を出産し、彼をペトロと名付けた。その子は無事に生き延び、成長していった。その後、彼女は二人目の息子も産み、その子を腕に抱いて神の司教のもとへ連れて行き、新生児にどのような名前を付けるべきか尋ねた。 「ヨハネと名付けなさい」と聖人は答えた。「主は聖ヨハネ教会でのあなたの祈りを聞き入れてくださったのだから」。二人の赤ん坊は成人し、両親の後継者となった。 ある教会の集落に住む長老が、十四歳の聾唖の息子ヌネヒアを、神の御使いエウティキオスのもとへ連れて行った。聖人は彼に聖油を塗ると、その耳を開き、舌を解き放った。こうして、聾唖の少年は聞こえるようになり、話せるようになった。 また、キリルという名の別の教会聖職者には、5歳の息子がいたが、彼もまた口がきけず、病気のため生死の境をさまよっていた。神の聖人は祈りによって彼を健康にし、話す能力を授けた。 ある日、ゼラ[2907] という町から、4歳の幼児が聖人のもとへ連れてこられた。その子はすっかりやせ細り、ほとんど肉がなく、皮膚に覆われた骨だけが残っている状態であった。また、母親の乳房から少し吸う以外、何も食べることができなかった。彼もまた、聖油を塗られて、聖人の手によって癒やされた。 キリストの聖人エウティキオスの祈りと聖油の塗油によって、死の淵から救い出されたのは、もう一人の突然病に倒れ、死の淵に立たされていた子供――アマシアの画家の息子――であった。ある女性が、7歳の息子や他の同行者たちと共に用事を済ませるために街へ向かっていた。 道中で出会った邪悪な悪魔に、無垢な子供は足を噛まれ、地面に倒れ込み、全く立ち上がることもできなくなってしまった。母親は同行者たちと共に子供を抱き上げ、修道院の至福の総主教のもとへ連れて行き、涙ながらに慈悲を示し、幼児を癒やしてくださるよう懇願した。 聖人は、いつもの治療法――祈りと聖油――によって、その子の健康を取り戻させ、その子は事故前の頃と同じように元気に歩けるようになった。 アマシアの町の近くには、フラウィアと呼ばれる女子修道院があった。この修道院から、聖なる秘跡を受けることができなかった若い乙女が聖人のもとへ連れてこられた。聖体拝領の前に、彼女には突然恐怖と戦慄が襲い、恐ろしい叫び声を上げて聖なる秘跡から顔を背けてしまった。 そこで、無理やり聖なる秘跡

[2906] ヨハネス3世スコラスティコスは、565年から577年までコンスタンティノープル総主教座を統括した。

[2907] アマシアの南、ポンティウス王国のイリス川沿いにあるゼラは、丘の上に築かれている。紀元前67年のローマとポンティウス人との戦争において、ローマのプレトル・トリアリウスはここでミトリダテスに敗北した。 現在は、小アジアのトルコ・シヴァス県にあるゼレフという村である。

を彼女の口に入れようとすると、彼女はそれを耐え難いほどの苦味であるかのように即座に吐き出しました。それは、彼女の中に邪悪な霊が宿っていたからです。神の司教は彼女のために神に熱心に祈りを捧げ、彼女からその邪悪な悪霊を追い出しました。 癒やされた少女は、大司教の手から 神聖な秘跡を穏やかに受け取った。モザイクで教会を見事に装飾する術に長けたある若者が、アマシアの市民クリサフィオスの家で、壁から古いモザイクを剥がし、その場所に聖人のイコンを描いていた。そこには、ちなみに、裸のヴィーナスを描いた古代の像[2908] があった。若者が壁からその像を取り除こうとしたとき、その像のそばにいた悪魔が、彼の手に「カンサー」[2909] と呼ばれる耐え難い病を患わせた。手は腫れ上がり、ひどく化膿し、治癒不可能な傷となってしまった。 その患部を見た者たちは皆、体の他の部分がすべて腐敗してしまうのを防ぐために、その手を切断しなければならないと口々に言った。この恐ろしい病に深く悲しみに暮れていた青年は、激しく泣きながら、神の御使いエウティキオスの元へ駆けつけ、取り返しのつかないほど失われた健康の回復を懇願した。 神に彼のために祈りを捧げ、聖なる油で患部を塗った聖人は、三日目に若者を癒やし、健康な姿で帰した。癒やされた手で、恥知らずなヴィーナスの像を破壊した青年は、病にかかったまさにその場所で、無償で治療してくれた医師である、至聖なる総主教エウティキオスの像を刻んだ。同様に、聖人は別の青年の手も癒やした。その手は不治の病に侵されており、医師たちは切断を勧めていたのだった。ある日、絶えず激しい苦痛に苛まれていた悪霊に取り憑かれた若者が、聖人のもとへ連れてこられた。 聖人が祈りを捧げながら十字の印を刻み、聖油でその額に塗ると、悪霊の力はまるで火の槍で貫かれたかのように、恐ろしい声で叫び始め、泡を吹き、歯ぎしりをした。その時、その若者が一人の悪霊ではなく、多くの悪霊に苦しめられていたことが分かった。 その後、若者は硬直して死人のように地面に横たわっていたが、しばらくすると、再び何日にもわたって、以前と同じ、いやそれよりもはるかに激しい苦しみを受け始めた。 聖人は、なぜこれほど長い間、若者の憑依が治まらないのかと不思議に思い、自身の司祭であるエウスタフィオス（この伝記の著者）に、若者に「あなたは誰か、どこから来たのか、どこに住んでいるのか、何をしているのか、そして憑依はどのように始まったのか」と尋ねるよう命じた。これらの質問に対し、若者は自分自身についてすべてを詳しく語った。 「私は」と彼は言った。「アクロポリにある聖ヨハネ修道院の修道士でした。 その後、私は修道生活を捨て、世俗に戻り、結婚し、多くの罪を犯しました。そして今、ご覧の通り、その罪の報いとして神に罰せられ、苦しんでいるのです――しかし、もし何かお力添えができるのであれば、どうか私を助けてください。」 これを聞き終えると、聖人はいつものように神に熱心に祈りを捧げ、その際、若者に以前の修道院に戻り、再び修道士になるよう諭した。 すると、若者が心からそうすることを約束すると、神の司教エウティキオスの祈りによって、彼は直ちに悪魔による苦しみの束縛から解放された。かつて、あるハンセン病患者が癒やしを求めて尊者のもとに現れたことがあったが、彼は聖人から「決してワインを飲んではならない」という戒めとともに健康を取り戻した。

また別の人物は、隣人との争いの最中に法廷で偽りの誓いを立て、正義の裁判官である神の裁きにより視力を失い、丸一年もの間、光を見ることができなかった。 他の人々に導かれて、彼は悔い改めの心を持ってこの奇跡を行う聖人のもとを訪れ、その前で自分の罪を告白すると同時に、心の病、そしてそれとともに身体の病の癒やしを求めた。 神の慈悲と、司教の権威、そして主の御心にかなうこのキリストの聖人の祈りによって、彼はその両方を授かり、以前と同じように自分の目で物を見ることができるようになって、自宅へと戻った。

良き医師である聖エウティキオスのもとには、多種多様な病に苦しむ数え切れないほどの男女や子供たちが集まり、彼の祈りによって、皆が速やかに癒やされた。 ペルシャ軍の侵攻の際、アマシアには、周辺の敵に占領され荒廃した地域や都市から多くの民衆が集まった。その密集により、こ

[2908] ローマ人のヴェーナ、ギリシャ人のアフロディーテは、愛と美の女神であり、ヘファイストスの妻で、海の泡から生まれた。彼女は裸体で描かれた。

[2909] カンツェル――蟹座。

の地では深刻な飢饉が発生したが、その時、神に愛された聖人は、自身の修道院で食糧が尽きることのないよう手配した。　毎日、食糧を求めて数え切れないほどの人々が彼の修道院にやって来たが、ついにある日、修道院の会計係たちが聖人に、穀物や小麦粉が底をついたため、訪れる人々に配るものが何もないばかりか、自分たち自身も食べるものがなくなってしまったと報告した。　そこで、聖人は穀物倉と貯蔵庫に入り、実際に何も残っていないことを確認すると、神に祈りを捧げ、兄弟たちを慰めながらこう言いました。「神を信頼し、あなたがたが困っている人々に与えるものはすべて、神が二倍にして返してくださると信じてください。　私は神の慈悲を固く信頼している――預言者エリヤの時代に、シドンのサレプタで未亡人の甕が尽きなかったように（参照：列王記下17:16）、　、今この時も私たちに必要なものが不足することはなく、皆が食べ、満腹になり、私たちの主なる神を賛美するだろう」。　聖人の信仰と言葉通り、実際にその通りになった。絶え間なく配られ続けたパンは減るどころか、その量は次第に増えていったのである。訪れる人々に配られるパンが多ければ多いほど、穀物倉や貯蔵庫にあるパンはさらに増え続け、その結果、飢饉のさなかにあっても、すべての旅人、来訪者、そして身内の人々は十分に食事をとることができたのである。

神の御心に適う者エウティキオスは、預言の賜物も備えていた。ユスティニアヌス皇帝の死の3年前、当時宮廷の位にあり、王の命によりどこかに赴任しようとしていた皇帝の甥ユスティヌスが、たまたまアマシアに滞在していた。　彼と二人きりになったとき、至福のエウティキオスは彼にこう言った。「私の言葉を聞いてください、キュロパラト様！* たとえ私が罪人であっても、それでも私は私の神のしもべであり、祭司です。その神は、私の叔父の死後、あなたが王位につくことを私に告げられました。　それゆえ、多くの務めに追われて遅れることのないよう用心し、主の御心によってまもなくあなたに課される務めを果たすにふさわしい者となるよう、自らを律しなさい。」　ユスティヌスはこれを聞き、神に感謝を捧げ、聖なる預言者に祈りの助けを求めた。その後、彼はまったく同じ方法で、ユスティヌスの後に王位につくことになっていた都市統治者ティベリウスにも、同じ内容の手紙で予告した。　聖エウティキオスは、シリアにいる彼に次のように書き送った。「神は今、あなたに民を治める権限を一部のみ与えられたが、まもなく王政の舵取りのすべてをあなたに委ねられるであろう」。そして、その予言はまもなく現実のものとなった。

ユスティニアヌス帝の死後、その甥であるユスティンが帝位に就き、　前述のコンスタンティノープル総主教ヨハネス・スコラスティクスが亡くなると、至聖なる総主教エウティキオスは、12年8か月に及ぶ流刑生活を経て、民衆の計り知れない喜びの中、総主教座に復帰した。その際、陸でも海でも人々は彼を出迎え、　*「主の御名によって来られる方は祝福あれ！」*と叫びながら。彼は10月3日の日曜日に教皇座に就いたが、その直前の同日、新皇帝の命令により、聖エウティキオスの敵である地方長官エフェリウスとアデイスが有罪判決を受け、処刑されていた。

聖なるエウティキオス総主教は、残りの生涯を平穏に過ごし、正教の教えと奇跡によって教会を輝かせた。彼はその祈りによって、突如として襲来したペストを食い止め、病人を癒やした。　その後、彼自身も自然の摂理に従い、キリストの輝かしい復活の祝日に病に倒れた。敬虔なティベリウス皇帝が彼を見舞いに訪れ、聖人は皇帝に対し、自身の死後まもなく皇帝もこの世を去ると予言したが、その予言は的中した。　復活節の七日間、病に伏していた至聖なるエウティキオスは、トマス復活の日にすべての聖職者を召集し、皆に平和と祝福、そして最後の口づけを授けた後、夜が更けるにつれて、主のもとで一時的な死の眠りについた。そして、その聖なる魂は、揺らぐことのない永遠の光の中へ、聖なる主教たちの元へと旅立った。　聖エウティキオスは、流刑からの帰還後、4年6ヶ月間、総主教の座に就いていた。生年は70歳であった。聖エウティキオスは、使徒教会内の祭壇の階段

の下に、聖使徒アンドレイ、ティモテイ、ルカの聖遺物が安置されている場所に、栄光のうちに埋葬された[2910]。

至聖なるエウティキオス総主教の帰天後、敬虔なティベリウス皇帝はわずか4ヶ月と8日間を生き、聖人の預言通り、安らかに息を引き取った。われらはこれらすべてについて、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美する。アーメン。

コンダク、第8調:

神聖なるエウティキオスを皆で賛美しつつ、人よ、愛をもって彼を喜ばせよう。彼は偉大な牧者であり、奉仕者であり、至賢なる教師であり、異端の退治者である。主よ、彼に私たち全員のために祈ってくださるよう願います。

---

* クロパラトス – ビザンツ帝国の宮廷職。当初は皇帝の宮殿の最高警備（φυλακή της αύλής）を任されていたが、後に純粋に名誉職となった。

聖プラトニダの記念日

記念日：4月6日

聖プラトニダは、当初、ディアコニッサ（女性奉仕者）でした[2911]。その後、隠遁生活の修行を志し、世俗を離れてニジビウスの砂漠[2912]へと赴き、そこで修道女たちのための修道院を設立しました。

敬虔かつ真に修道的な生活を通じて、尊者プラトニダは修道院の姉妹たちにとって模範となる良い手本を示しました。

プラトニダが設立した修道院の規則は、とりわけ厳格なものであった。修道女たちは一日一食のみを摂り、祈りの時間以外のすべての時間を、様々な仕事や活動、とりわけ手仕事に費やしていた。　しかし、金曜日には、私たちのために主が受けた救いの苦難と十字架上の死を記念する日として、修道院内のすべての活動が中止され、一日中が祈りと神への黙想にのみ捧げられた。　この日、修道女たちは朝から夕方まで教会に留まり、祈りの合間に聖書の朗読と解説に耳を傾けていた。

言葉だけでなく行いによってもすべての人を教え、その徳高い生活をもって神に喜ばれた尊者プラトニダは、この世の仮の命を終え、主のもとへ旅立ち、天の住まいで永遠の喜びを享受することとなった[2913]。

[2910] エウティキオス総主教は582年に死去した。聖エウティキオスの遺体は1246年、コンスタンティノープルの使徒教会からヴェネツィアへ移された。彼は562年から565年にかけて初めて、そして577年から582年にかけて再び、コンスタンティノープル総主教区を統治した。

[2911] 古代キリスト教教会において、「ディアコニッサ」（奉仕する者）とは、礼拝中に教会内の秩序を保ち、女性に対する洗礼の秘跡を執り行う際に司教を補佐した女性たちのことを指した。　ディアコニッサの職務は以下の通りであった。彼女たちは、女性たちを洗礼に備えさせ、洗礼を授ける者の質問に対してどのように、何を答えるべきか、また洗礼後の振る舞い方を教えた。さらに、女性の洗礼の際、司教を補佐し、　教会の女性用区域（古代の教会は互いに仕切られた二つの区域に分かれており、一方は男性用、もう一方は女性用とされていた）の秩序を維持し、また、女性が教会に入る扉を見張り、不適格な者の立ち入りを防いだ；　司教や長老が女性たちと対話する際に立ち会った。など。ディアコニッサは聖職者に数えられ、そのため特別な按手礼によってその職に就いた。ディアコニッサには通常、清く聖なる生活を送る女性――たいていは処女や未亡人であり、しかも40歳以上である――が選ばれた。

[2912] ニジビアはメソポタミアに位置し、ミグドニア川沿いにあった。

[2913] 聖プラトニダの死は308年頃であった。

- 同日は、聖使徒に等しいメフォディオス、モラヴィア大司教の記念日である（その生涯については5月1日を参照）。
- 同日、4世紀にペルシャのサポル王によって火刑に処された120人の殉教者の記念日。
- 同日、聖殉教者エレミヤと司祭アルキリウスの記念日。

4月20日

4月7日（旧暦）

同日、聖ルフィヌス助祭、聖殉教者アキリナ、および彼らと共に310年頃にシノペで殉教した200人の修道士たちの記念日。

同日、私たちの尊い父ダニエル・ペレヤスラフスキーの記念日。

私たちの尊い父、ミティレネの総主教ゲオルギオス・イスポヴェドニクの記念日

4月7日の記念日

幼い頃からキリストを愛した私たちの尊い父ゲオルギオスは、修道士となり、苦行に満ちた徳の高い生活を送り、誰よりも謙遜の徳を極めた。 、レウ・イサウリアノス帝の治世[2914] 、彼はキリストのために殉教者となり、偶像破壊派からの迫害と弾圧に耐えた。　その後、正教徒のコンスタンティノスとイリーナの治世[2915] において、彼はミティリーネ[2916] の司教座に就き、レスボス島[2917] の大主教区を統括した。聖ゲオルギオスは極めて慈悲深く、寛大な施しによって飢えた人々を養った。　その偉大な禁欲の功績により、彼は天使たちの友となり、邪悪な霊を追い払い、不治の病を癒やすことで、奇跡を行う者としてその名を馳せました。イコノクラシズムを再開した皇帝レウ・アルメニアヌ

[2914] レウ・イサウリアヌスは717年から741年まで在位した。彼は裕福な農民階級の出自であり、ユスティニアヌス2世のもとでの軍務において際立った功績を挙げたため、717年に万人の賛同を得て皇帝の座に就いた。 教会問題、とりわけイコン崇拝における迷信に注目した彼は、警察的な措置によってイコン崇拝を根絶することに決めた。まず彼は（726年）、イコン崇拝のみを対象とした勅令を発布し、民衆がイコンに口づけをしないよう、教会内のイコンを高い位置に設置するよう命じた。 730年には、聖堂からイコンを撤去するよう命じる勅令が発布された。レオン・イサウリアヌスは、イコンが一時的に教会での使用から排除されるという結果をもたらした。

[2915] コンスタンティノス5世コプロニモス皇帝（741–775）は、父であるレウ・イサウリアヌスよりもさらに過酷な残虐さで、イコン崇拝を弾圧した。彼はイコン崇拝を異端として厳粛に廃絶しようとし、そのために754年にコンスタンティノープルで「全地公会議」と呼ばれる公会議を招集した。 そこには338人の司教が参加したが、総主教は一人もいなかった。この公会議では、聖像崇拝は偶像崇拝であり、救い主キリストの唯一の像は聖体であるとの決定がなされた。公会議は、聖像崇拝の擁護者および聖像崇拝者全員、とりわけ聖ヨハネス・ダマスコスを破門した。　聖イリナは、780年から790年まで、そして797年から802年まで、息子のコンスタンティノス・ポルフィロゲネトスが幼少であったため、政務を執った。彼女は自らを聖像崇拝の支持者であると宣言した。 787年、イリナはニカイアにて、コンスタンティノープル総主教タラシオスの議長の下、第2ニカイア公会議および第7全地公会議を招集した。367人の教父から成るこの公会議において、聖像崇拝が復活した。

[2916] レスボス島（エーゲ海最大の島）にある都市ミティリーネは、古代トロイアやミジア（小アジア）の近くに位置し、人口は36,000人に達する。この島は山が多く、肥沃で、森林、穀物、ワインに恵まれている。1462年、メフメトの治世下でトルコに併合された。

[2917] 古代には、この島の都市であるクレゾス、ピルラ、ミティリーネが特に繁栄した

スの治世[2918] まで生き延びた彼は、すでに高齢の長老となっていたにもかかわらず、聖なるイコンをめぐる迫害を再び受けました。　皇帝レウ・アルメニアヌスの治世、偶像破壊運動の再開、そして聖ゲオルギオスの追放よりもさらに以前、ミティリーネでは、キリストの教会にまもなく混乱と災難が訪れることを予兆するいくつかの徴が現れていた。　ある日、埠頭の近くにある聖大殉教者テオドラの教会で、晩課の際、民衆が一斉に「キリエ、エレイソン」と唱えている最中　――主よ、憐れみたまえ――祭壇に立てられていた聖十字架が、突如として激しい音を立てて、目に見えない何らかの力によってその場所から引き抜かれ、天井に向かって上昇し、その後、上端を下に向けて地面に落下した。　これを見た人々は大きな恐怖と戦慄に襲われた。皆、目と両手を天に向け、長い間、声を張り上げて「キリエ、エレイソン」と叫び続け、レスボス島に何らかの突然の災いが降りかかるのではないかと恐れて、教会から出ようとはしなかった。　当時、教会にはシメオン聖人と、後に初代ゲオルギオスの王位を継承することになる弟のゲオルギオスが共にいた[2919] 。先見の明を持つシメオンは、涙を流しながら民衆にこう語った。

「兄弟たちよ、あなたがたが予想しているようにはならないでしょう。神はこの国を完全に滅ぼすことはありませんが、まもなく、神を憎み、神に敵対する王が王位に就くでしょう。その王は、聖なるイコンを地面に投げ捨て、教会からその美しさを奪い去るでしょう。」

数日後、教会の扉がたまたま施錠されていなかったため、耳と尾を切り落とされた巨大で恐ろしいイノシシが教会と祭壇に入り込み、そこで聖なる場所に横たわった。　これに気づいた教会の番人たちは直ちにイノシシを追い払おうとしたが、無駄だった。イノシシは獰猛で、祭壇から追い出そうとする者全員に襲いかかり、彼らを逃げ散らせてしまったからである。　その後、巨大な杭を持ち出し、長い間その動物を血が出るまで叩き続け、力尽きてようやく、辛うじて追い払うことができた。このことを知った、あの至福のシメオンは言った。

「子らよ、このイノシシは、神の御許しにより、この地に現れるであろう、その生き様や気質が豚に似た司教を象徴しているのだと信じてほしい。」

この予言はまもなく現実のものとなった。前述の皇帝レウ・アルメニア人は、王位に就くと、神の教会に対する迫害を開始すると同時に、多くの司教をコンスタンティノープルに召集し、彼らに偶像破壊の異端を受け入れるよう説得した。　私たちの尊い父ゲオルギオス、ミティレネの総主教も、他の司教たちと共に召喚されたが、恐れを知らぬキリストの戦士としての姿を現した。　当時、多くの者が皇帝の異端を是認していたが、彼はその真の英知をもって、皇帝、偽パトリアルヒ・テオドトス（通称カッシテロス[2920] ）、および彼らと志を同じくする他の異端者たちを恥じ入らせ、そのうちの何人かには自らの誤りを自覚させた。

王と総主教は、彼の非難に耐えかねて、彼をヘルソンへ追放した[2921] 、そして彼の後任として、ミティリーネに、ある異端者を大司教に任命した。その者は、野原のイノシシのように、キリスト

[2918] レフ・アルメニア人は813年から820年まで在位した。

[2919] レスボス島のミティリーネでは、2人のゲオルギオスが大司教を務めた。そのうちの1人、すなわち本伝記の主人公である人物は、816年のレフ・アルメニア人の治世中に追放されたが、もう1人のゲオルギオスは、予言者シメオンの兄弟であった。 彼は、コンスタンティノスとイリナの治世（762年）に、最初のゲオルギオスによって司祭に叙階され、ミハイル・コスノヤズニク皇帝（820–829年）の治世に主教の座に就いた。同皇帝は即位後、正教徒に自由を授けた。 この第二のゲオルギオスは、正教を理由に、偶像破壊派の皇帝テオフィロス（829–848年）によって追放された。 テオフィロスの死後、聖なる皇后テオドラ（842–865年）は、コンスタンティノープル総主教メフォディオスと共に正教を承認し、842年に第二のゲオルギオスを流刑先から呼び戻した。彼は神に喜ばれる生涯を送った後、その座で安らかに息を引き取った。

[2920] テオドトス1世・カシテルは815年から821年まで総主教座を統治した。

[2921] ヘルソン、あるいはコルスーン――ギリシャの植民都市であり、現在のセヴァストポリ近郊に位置するタウリカのヘルソネソス諸都市の中で最も重要な都市――は、大公ウラジーミルの洗礼の地である。

のぶどう園を荒らし、汚した。　彼は聖なるイコンを踏みつけ、神の言葉に従う羊たちを無意味に惑わせた。一方、聖ゲオルギオスは、残りの生涯を流刑の地で過ごし、キリストの恵みによって多くの奇跡を成し遂げた。　彼の帰天の時が近づくと、天にまばゆい星が輝き――それは彼の至福の死を告げる前兆であり――レスボス島からも見えた。この星によって、ミティリーネの「御言葉の羊たち」は、彼らの牧者である聖ゲオルギオスが主のもとへ旅立ったことを知った。

聖人の生涯は、その善行によって世の光となっていました。そして、神はその至福の死を明るい星によって称え、死後、御自身の御心に適う者を称えるために、その聖遺物から奇跡的な癒しの泉を湧き出させました。

聖殉教者カリオピオスの受難

記念日：4月7日

パンフィリアのペルギア（[2922] ）には、敬虔で神を畏れる女性テオクリアが住んでいた。彼女もその家族も皆、神への畏れに満ちており、徳高い生活を送りながら、テオクリアは惜しみなく施しを行っていた。 上院議員かつパトリキウス家の出身である[2923] という高名な男性と結婚していたテオクリアは、長年にわたり子供を授かることがなかった。熱心な祈りによって神に不妊の解消を願い求め、結婚から長い年月が経った後、ようやく身ごもった。　その頃、夫が他界し、彼女に莫大な財産を相続させた。息子を産むと、彼女は彼をカリオピイ[2924] と名付けた。彼に学問を教えるにあたり、テオクリアは主に、神への畏敬の念を植え付け、聖書の知恵を教えることに努めた。　当時、偶像崇拝が広く行われており、真理は虚偽によって覆い隠され、大多数の人々は邪悪な偶像を崇拝し、犠牲を捧げていた。しかし、聖カリオピオスの生涯には、祈りと断食が常に寄り添っていた。　聖なる若者がキリスト教徒であることが裁判官に告げられると、その母である福者テオクリアは、息子に十分な金銭と衣服を与え、さらに数人の使用人を同行させて、不当な裁きを避けるため、彼を船に乗せて他国へと送り出した。 こうして、至福のカリオピオスはキリキアのポンペオペル[2925] へと船出した。そこで、不敬虔な首長マクシムスが　で、邪悪な偶像を称えて犠牲の捧げ物や歌、踊りを執り行っているのを見た聖なる若者は驚き、ある人に尋ねた。「あなたがたがこれほど歓喜している理由は何ですか？」

「今日は我らの神々を称える祝日だ」と彼らは答えた。「さあ、君も来て、我々の祝宴に加わってくれ。」

「私はキリスト教徒です」と聖人は言った。「私は断食の中で、私のキリストを称える祝日を過ごしています。キリストを賛美する口が、不敬虔な神々の汚れた供え物を受け取るなど、ふさわしくありません。」

聖人のこの言葉は、軍司令官マクシムスの耳に入り、彼は怒りに燃えて、その聖なる若者を捕らえ、尋問のために自分の元へ連れてくるよう命じた。

「お前の名は？」――聖カリオピオスが裁判の場に連行されたとき、軍司令官は尋ねた。

[2922] パンフィリア――古代において、リキアとキリキアに挟まれ、パンフィルス海（現在のアダリア湾）沿いに広がっていた小アジア沿岸の一部。　小アジア全体の歴史的運命を共有し、パンフィリアは順次、ペルシア、マケドニア、シリアの支配下に置かれた後、ペルシア王国の構成地域となり、紀元前120年にローマの属州となった。 先住民と、キリキアやギリシャからの移住者が混在する住民は、その気質や習慣においてキリキア人に似ており、大規模な海賊行為を盛んに行っていた。　タウロス山脈が連なる、主に山岳地帯であるこの地域の主要都市は、アタレイア（アダリエ）、シデ（エスキ・アダリエ）、キビラ、アスペイド、ペルギア、ソリオンであった。

[2923] ローマにおけるパトリキは高貴な家系の出身者であり、元老院議員は国家の最高職を務める公職者であった。

[2924] カリオピオスとはギリシャ語であり、ロシア語に訳すと「愛らしい、美しい目をした」という意味である。

[2925] キリキアは小アジアの属州である。

「私はキリスト教徒です」と聖人は答え、「私の名はカリオピオスです」と続けた。

「今、全宇宙が」と軍司令官は言った。「神々の祭りを祝って盛大な宴を催しているというのに、なぜあなた一人だけが、私たちとこの祝宴を分かち合うことを拒み、何らかの迷いの中に留まっているのですか？」

「それこそあなた方こそ」と聖カリオピオスは答えた。「あなた方はまさに、闇と惑わしの中を歩んでいる者たちそのものです。なぜなら、あなた方は、天と地を創造し、御言葉によって万物を造られた生ける神を見捨て、人間の手に作られたもの――感覚のない木やひび割れた石――を崇拝しているからです。」

「お前の若さが、お前を傲慢にさせているのだ」と、軍司令官は反論した。「それゆえ、お前は数え切れないほどの拷問を受ける危険にさらされているのだ！　答えてくれ、お前はどこの国から来て、どこの家系の者なのか？」

「私はパンフィルスのペルギア出身です」と聖人は答えた。「上院議員であり、パトリキウス家の出身ですが、私にとって何よりも大切で、最も名誉なこととは、私がキリスト教徒であるということです。」

「両親はいるか？」と軍司令官が尋ねた。

「はい、母はいます」と聖人は答えた。「父はとっくに亡くなりました。」

「偉大なる太陽とすべての神々に誓って」と軍司令官は言った。「もしあなたが神々に拝礼するなら、私の唯一の娘をあなたに嫁がせてあげよう。」

「もし私が結婚を望むなら」と聖人は答えた。「あなたの娘を妻として迎え、母の元に連れて行くこともできたでしょう。しかし、知っておいてください。私を御自身の姿に似せて創造してくださった私の神、キリストに、この朽ちゆく肉体を清らかな処女のまま守り、その義なる御裁きの前に汚れのない姿で差し出すと誓ったのです。」 お前は好きにすればよいが、私はキリスト教徒だ。

「卑劣で悪辣な者め」と、軍司令官は叫んだ。「お前は、こうした言葉で私を激怒させ、一刻も早くお前を殺させようとしているのだろう？　それなら知っておけ。私は長い間お前を拷問し、お前の体を粉々に砕き、残りを火に投げ込んで焼き尽くしてやるのだ。」

「私の苦しみは長ければ長いほど、キリストは私の苦しみのために、より輝かしい冠を編んでくださるでしょう。聖書にも、『律法に従って苦しめられなければ、誰も冠を受けることはない』（テモテへの手紙第二 2:5）と書かれているのですから。」

「彼を縛り上げよ」と、軍司令官は処刑人たちに命じた。「そして錫の棒で、彼の骨をすべて砕きなさい！」

拷問の最中、聖カリオピオスはこう言った。「キリストよ、御名の栄光のために、私にこの苦しみを受けることを許してくださったことを感謝します。」

「神々に生贄を捧げよ」と、軍司令官は続けた。「そうすれば、故郷に帰ることができ、財産も失わずに済む。ほら、どれほど残酷に拷問されているか、見てみろ！」

「私は、キリストが私に約束してくださった未来の安息の甘美さを仰ぎ見ており、苦しみなど感じてはいない」と聖人は言った。「そして、私は現在、異国の地にいるとはいえ、それでもなお、*『主のものは地と、その中にあるすべてのもの』*（詩編23:1）であることを知っているのだ。」そしてここには、私の母と私の祖国が見えます。私の母とは、正教会のキリストの教会であり、祖国とは、使徒の言葉にある通り、天のエルサレムです。*「私たちの住まいは天にある」*（フィリピ3:20）。もしあなたが私の肉親の母のことを思い出させるなら、それはすなわち、*「父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない」*（マタイ10:37）と断言する神の御声なのです。　私は富の豊かさを何とも思わない。罪と共に、この狂った世の一時的な満足を得るよりは、十字架につけられたキリストと共に苦しむことを、より良いことだと考える。

「彼はすでに縛られているのだから」と軍司令官は家来たちに言った。「彼をひっくり返し、生皮の紐で腹を打ちながら、『不信心者よ、あれこれと答えるな、問われたことだけに答えよ！』と叫べ。」

「天の恵みを失い、獣よりも獰猛な狂人め！」と、聖なる殉教者は軍司令官に言った。「私はあなたに真理の言葉を語っているのに、あなたは心の目が曇り、耳を塞いで主の言葉を聞こうとせず、私を不当に拷問にかけ、まるで強盗のように殺そうとしているではないか！」

「さあ、」と、その時、軍司令官は処刑人たちに命じた。「鋭い鉄の棘がついた拷問用の車輪を用意し、その下に激しい火を燃やせ。そして、カリオピアを車輪に、関節が引き裂かれるほどきつく、その状態で車輪に縛り付け、鉄で切り裂かれ、火で焼かれて死ぬまで回転させよ。

このようにして聖なる若者が拷問され始めたとき、彼は激しい苦しみの中で主に向かって叫び、こう言った。「わがキリストよ、あなたのしもべを助けに来てください。――終わりが来る前に、私を通してあなたの聖なる御名が栄光を受け、あなたを信頼する者は永遠に恥をかくことがないことを、すべての人が知るように。」 すると直ちに主の天使が現れ、火を消し、車輪を止めて動かなくしたため、処刑人たちはそれを回すことができなかった。殉教者の若き体は車輪の上で血に染まり、深い傷口からは骨が透けて見えていた。というのも、車輪には両刃の鋸のような剣が取り付けられていたからである。 軍司令官は、殉教者の縄を解き、車輪から降ろすよう命じた。その苦しみを見る光景は、見物人全員の心を痛め、民衆は声をあげて叫んだ。「ああ、不公正な裁判官よ！ なんと残酷な最期を遂げる若者だろう！」

「私はお前に言ったではないか」と、軍司令官は聖人に言った。「お前の若さが、お前を傲慢にさせ、それゆえに残酷な拷問にさらされているのだと。」

「恥知らずな犬め」と聖人は答えた。「まさか、私がお前の拷問を恐れたとでも思っているのか？」

「この忌まわしい者よ」と軍司令官は言った。「お前は、私が一刻も早くお前を滅ぼすようにと、私を侮辱しているのだな。だが、そんなことはあり得ない！ さあ、近づいて、さらに残酷な拷問を免れるために、神々に生贄を捧げよ！」

「私は」と聖なる殉教者は答えた。「私のキリストを信頼している。お前は、私の中の神への信仰を汚すことなどできないのだ。 私の体は君に委ねる。好きに苦しめていい。その報いは、最後の審判の日に神から下るだろう。*「あなたがたが人に対して用いる尺度で、あなたがたに対しても用いられるからである」*（マタイ7:2）。

「彼を鉄の鎖で縛り上げよ」と、軍司令官は聖カリオピオスについて処刑人たちに命じた。「内側の牢獄で彼を監視し、彼に何の世話もしてはいけない。また、彼の忍耐を称賛する者が現れないよう、彼と親しいキリスト教徒の誰一人として彼のもとへ入ることを許してはならない。」 処刑人たちは直ちに聖なる殉教者を鎖で縛り、内側の牢獄に放り込んだ。

至福のテオクリアは、キリストのためにこのような苦難に遭っている一人息子である聖カリオピオスのことを知ると、自宅と全財産に関する遺言を書いた。彼女は250人の男女の奴隷を解放し、所有していた金や銀、そして貴重な衣類をすべて貧しい人々に配った。 残りの全財産と不動産、すなわち村々、畑、ブドウ畑などは、聖なる教会に寄付し、故郷を後にして、キリストのために苦難に耐えている息子のもとへ、キリキアへと向かった。 牢番に金を支払うと、彼女は内側の牢屋に入り、息子を見るやいなや、ひれ伏して彼に礼拝し、彼の瘡蓋から滲み出る膿を拭き取った。一方、聖カリオピオスは、全身を鉄の鎖で縛られ、数え切れないほどの傷で腫れ上がっていたため、母の前で立ち上がることもできず、ただこう呟いた。

「母よ、キリストのために私が受ける苦難の証人であるあなたが、ここに来てくれてよかった！」

テオクリアは、傷だらけの息子の姿を見て、彼にこう語りかけた。

「わが胎の果実よ、あなたは幸いであり、祝福されている。なぜなら、私はあなたを、アンナがサムエルを神への聖なる器として捧げたように、またサラがイサクをキリストへの喜ばれるいけにえとして捧げたように、神に捧げたのだから！」

その夜中ずっと、母は牢獄にとどまり、息子の足元に座って、彼と共に神を賛美し、栄光を称えた。真夜中になると、牢獄の中に明るい光が輝き、次のような声が聞こえた。

「汝らは、キリストの聖なる殉教者たち、偶像を滅ぼす者たち、キリストと共に苦難に遭うために故郷と財産を捨てた者たちである！」

朝になると、軍司令官マクシムスは裁判の席に着き、尋問のために聖殉教者カリオピオスを牢獄から連れ出した。彼を自分の前に立たせると、こう尋ねた。

「お前はその狂気を捨て、命を守るために王の命令に従い、神々に拝礼することに同意するのか？ それとも、逆に、お前の師であるキリストのように、従順に死を望むのか？」

「お前の厚かましさには驚かされる」と聖人は答えた。　お前は私から何度も同じ答えを聞いているはずだ。私はキリスト教徒であり、キリストのために死ぬ。それなのに今また同じことを尋ね、真理に逆らうことを恥じもしないのか。私は師であるキリストのように苦難を受けることを切に願い、彼のために惜しみなく死のうとしているのだ！

これを聞き、殉教者の揺るぎない決意を理解し、その揺るぎない精神の強さを確信した軍司令官は、彼をキリストのように十字架に磔にするよう命じた。その日は、キリストの最後の晩餐を記念する「聖木曜日」であった。　聖テオクリアは、連れ去られる息子を見て、兵士たちに金貨五枚を渡しながら、カリオピオスをキリストのようにではなく、逆さ吊りにして十字架につけるよう懇願した。これは彼女が謙遜の心から行ったことであり、息子が十字架刑の姿勢において主キリストに似ることはふさわしくないと考えたからである。　かくして、聖カリオピオスは、救いの晩餐の木曜日に、キリストに倣って頭を下にして十字架にかけられた。そして聖金曜日、午後三時に、天から神聖な声が彼のもとへ降りてくる中、彼はその霊を神の御手に委ねた。「キリストの同胞であり、聖徒たちの共同相続人よ、入りなさい」[2926]。

聖カリオピオスの遺体が十字架から降ろされると、その祝福された母は、キリストを賛美しつつ息子の首を抱きしめ、その後すぐに自らの魂も神に委ねた。　キリスト教徒の兄弟たちは駆けつけ、二人の遺体を運び出し、父と子と聖霊を賛美しつつ、名誉ある場所に一つの墓に葬った。アーメン。

- 同日、聖ルフィノ助祭、聖殉教者アキリナ、および彼らと共に、310年頃にシノペで殉教した二百人の戦士たちの記念日である。
- 同日、私たちの尊い父ダニエル・ペレヤスラフスキーの記念日。

4月21日

4月8日（旧暦）

ノヴゴロドの司教、我らの尊き父ニフォントの生涯

記念日：4月8日

[2926] 聖殉教者カリオピオスは、304年4月7日（金曜日）、キリキア（小アジア）の都市ポンペオツォレで亡くなった。

至福のニフォントは、聖ペチェルスク修道院のイグメン・ティモフェイ[2927] が同修道院を統率していた当時、その修道院の修道士であった。修道院で生活する中、聖ニフォントは祈りと断食、そしてその他あらゆる徳において卓越し、あらゆる点で神の偉大な聖人たちの生き方に倣うよう努めた。

ノヴゴロドの主教である至福のヨハネが、20年にわたる信徒の指導という労苦の末、体力が衰え、主教の座を退いて修道院に隠遁したとき[2928] 、 ——その時、すでにその美徳の光で各地を照らしていたこの至福のニフォントは、神の御心により、万人の推挙を受けてノヴゴロドの司教座に選出され、キエフ[2929] でミハイル大主教[2930] によって司教に叙階された。

司教座に就き、燭台の上の灯火として立てられた聖ニフォントは、正教会の整備に向けた献身的な配慮によって、その輝きをさらに増した。彼は神の栄光の増大に心を配り、自身の霊的な羊たちの、この世における生活と永遠の命の両方において、幸福な生活を送れるよう熱心に尽力した。 神の栄光を広めることに尽力し、この尊者はその熱意をもって、ノヴゴロドの中心に至聖なる神の母を称える石造りの教会を建設し、神の御加護により、まもなくそれを完成させた。さらに、 、聖ソフィアを称えるノヴゴロドの主教座教会をイコン画で飾り、その屋根を錫で覆った[2931] 。 また、自身の信徒たちのこの世での安寧を案じるこの大司教は、例えば次のような美徳を備えていた。正教徒の間で何らかの内紛が生じると、彼はあらゆる手段を尽くして彼らを和解させようとしたのである。 ある時、尊者はある情報を得た。キエフとチェルニヒウの人々が多くの兵士を集めてノヴゴロドにやって来て、同地を攻撃しようとしていたのだ。そこで彼は直ちにノヴゴロドの貴族たちを伴い、戦いを仕掛けようとしていた者たちの元へ向かい、神の御加護により彼らに武器を置くよう説得した[2932] 。このように、他の場面においても、尊師は神の民の平和な暮らしを気遣い、彼らの現世の幸福を熱心に守り抜いた。

しかし、尊者様は、ご自身の霊的な羊たちの永遠の命について、さらに深く心を配っておられました。 主が父なる神について語られた、「御命令こそが*『永遠の命』*である」（ヨハネ17:2）という御言葉を心に留め、聖ニフォントは常に正教徒たちに、永遠の命を失わないよう、神の律法と教会の伝承から離れないよう教え導いた。 一方、神の律法から離れ、罪を犯す者たちに対しては、聖人は彼らを糾弾し、その罪ゆえに滅びが訪れると予告し、使徒の命じるところに従い、*「時があるにもないにも、戒め、叱り、懇願し、あらゆる忍耐と教訓をもって」*（IIテモテ4:2）説教した。

この大牧者が、自らの羊たちの魂の救いに対して抱いていたこの偉大な熱意は、次の出来事からも明らかである。ノヴゴロドの人々が、彼らの公爵ヴセヴォロド・ムスティスラヴィチを追放した後[2933] 、彼らの招きに応じてスヴィャトスラフ・オルゴヴィチが統治に就いたが、彼は教会の規範に反して結婚していた。 その時、この至福の首席司牧者は、この公爵の結婚式を執り行わなかっただけでなく、自身の聖職者全員に対し、その不法な結婚式（その公爵は、自身と共にやって来た司祭た

[2927] ティモフェイは1124年からペチェール修道院のイグメンを務め、1131年に逝去した。

[2928] ヨハネは1110年から1130年までノヴゴロド教区を統治した。

[2929] ニフォントの叙階も、同じく1130年のことである。

[2930] ギリシャ人のミハイル大主教は、1130年から1145年までキエフ大主教区を統治した。

[2931] ノヴゴロドの人々は、ニフォンタ司教が神の聖堂に対して示した配慮を高く評価していた。「このことは私たち一人ひとりが知っている」と、ノヴゴロドの年代記作者は述べている： 「どの司教が聖ソフィア大聖堂をこれほど美しく飾り立てただろうか? 彼は前庭に壁画を描き、イコノスタスを設置し、外側は石灰で塗り、鉛を流し込んだ。プスコフではザヴェリチ地区に石造りの聖救世主教会を、ラドガでは聖クリメント教会を建立した」『ノヴゴロド年代記』第4巻。

[2932] この出来事は1135年に起こった。

[2933] 1132年。

ちによって結婚式を挙げられていた）に立ち会うことを禁じた。 聖ニフォント[2934] は、詩篇の歌い手が*「王たちの前であなたの啓示を語り、恥じることはない」*（詩篇118:46）と述べたことに倣い、その公爵の罪を大胆に糾弾した。

また、この大司教の熱意は、ロシア教会そのものを罪から守ろうとした際にも大いなるものであった。それは次のような状況下で起こった。

聖ニフォントが司教の叙階を受けたキエフ都主教ミハイル2世が死去した際、キエフ大公イジャスラフ・ムスティスラヴィチ[2935] は、彼の後任として、当時修道士であり、スキマ（隠遁者の衣）をまとっていた哲学者クリメントを選出した。 距離が遠いため、クレメントをコンスタンティノープルへ派遣して司教の叙階を受けることを望まなかった同大公は、この目的のためにロシアの司教たちを集めて公会議を招集した。 この公会議には、オヌフリー・チェルニゴフスキー、フェオドール・ベルゴロドスキー、エウフィミー・ペレヤスラフスキー、ダミアン・ユリエフスキー、フェオドール・ヴラジーミルスキー、聖ニフォント・ノヴゴロドスキー、マヌイル・スモレンスキー、イオアキム・トゥロフスキー、コズマ・ポロツキーが出席した。 公会議の審議が始まると、至福のニフォントは、ロシアの司教たち自身が、コンスタンティノープル総主教の祝福なしに、いかなる場合でも自ら大主教を選出することはできないと繰り返し述べた。 彼は公然と全公会議の面前で、これは聖なる正教東方教会の伝統に反するものであると大胆に宣言した。同教会は、聖 による洗礼を通じてコンスタンティノープル総主教座から啓蒙され、それによって私たちを神の子、東方の子とし、天より私たちを訪れてくださったのである。そして、初代キエフ都主教である ミハイルは、同じく（コンスタンティノープルから）任命されたのである。それ以来、キエフの総主教がコンスタンティノープル総主教から任命の祝福を受けることは、不変の規則となっていた。

こう語りながら、尊者ニフォントは、ロシアの息子たちに対し、その反抗によって東方、ひいては神との子としての関係から逸脱しないよう、大胆に諭した。なぜなら、彼はこう言ったからである。*「神の怒りは、反抗する者たちの上に下る」*（エフェソの信徒への手紙5:6）。

聖ニフォントの見解には、さらに五人の司教――コズマ・ポロツキー、イオアキム・トゥロフスキー、マヌイル・スモレンスキー、エウフィミイ・ペレヤスラフスキー、フェオドール・ベルゴロドスキー――が賛同した。 しかし、大公は傲慢さから自らの意図を放棄することを望まず、至福のニフォントの忠告に耳を貸さなかった。むしろ、他の司教たちの支持を得て、思い描いたことを実行に移した。こうして、大公の命とチェルニゴフの司教オヌフリーの助言により、 クリメントは、コンスタンティノープル総主教の祝福に代わって、ローマ教皇聖クリメントの聖遺物の頭部によって司

[2934] 聖ニフォントは、カノニカル（教会法）の規則に精通しており、それらを熱心に、献身的に遵守する人物であった。この教会規則遵守への熱意は、聖ニフォントがスヴィャトスラフ・オルゴヴィチの非正統的な結婚に対して示した態度だけでなく、コンスタンティノープル総主教の祝福を得ずにキエフ都主教の座に就いたクレメント・スモリャティチに対するニフォントの態度に関する後の記述からも見て取れる。 聖ニフォンテには、理解しがたいカノニカルな問題や教会生活における様々な事案について、他の司教や様々な人々が解決を求めて相談に訪れていた。 『キリコフの質問集』、すなわちノヴゴロドのアントニエフ修道院の修道司祭兼ドメスティク（聖歌隊長）キリクが、自身が質問を投げかけた様々な人々――主にノヴゴロドの3人の司教、 聖ニフォンタとイリヤ（1165年から1185年まで）、および教区不明のサヴァから得た回答の集大成である。この書物から、ポロツク司教の依頼を受けたあるクリムという人物が、ニフォンタに問いを投げかけていたことがわかる。 キリクの質問は主にノヴゴロドの司教ニフォンツに向けられており、ニフォンツは疑問を解消するために、健全かつ実践的な回答を与えていた。「キリクの質問？」 『ロシア歴史図書館』（考古学委員会刊、第6巻、21頁以降、パヴロフ編）に収録されており、それより前に『12世紀ロシア文学の記念碑』（173頁以降、カライドヴィチ編）にも掲載されていた。

[2935] イジャスラフ・ムスティスラヴィチは、1146年から1154年までキエフ大公であった。

教に叙階された（この頭部は、聖なる洗礼を受けた後、ヘルソン司教から寄贈されたものを、聖ウラジーミルがヘルソンから持ち帰ったものである）；　その後、クリメントはキエフ都主教区の主教座に不法に就いた。

クリメントは、至福のニフォントに自分と共に神聖な典礼を執り行うよう要求したが、この正教の擁護者は彼にこう言った。

「あなたはコンスタンティノープル総主教の祝福を受けていないのだから、私は以前と同様に今もなお、あなたの就任を承認しておらず、その理由により、あなたと共に礼拝を執り行うことはできない。」

このことで聖ニフォントに激怒したクリメントは、イジアスラフ公や自分に従順な司教たちに、この尊者（ニフォント）を流刑に処するよう働きかけた。　このため、イジアスラフ公は、至福のニフォンテをノヴゴロドの司教座に就かせることを許さず、あたかも流刑地であるかのように、彼にペチェールスク修道院に常駐するよう命じた。　一方、尊者ニフォントは、聖人たちと共に以前の静寂な生活に戻ることができたことを神に賛美し、感謝しつつ、大きな喜びをもってここに留まっていた。

やがて、キリストを愛するゲオルギー・モノマホヴィチ王[2936] がイジャスラフ・ムスティスラヴィチを打ち破り、キエフの公位を掌握すると、彼は至高の栄誉をもって、至福のニフォンにノヴゴロドの司教座を返還した。　それまで、まるで牧者なき羊のように、混乱し、見捨てられていたかのようなノヴゴロドの人々は、至福のニフォントを大いなる喜びをもって迎え入れた。　一方、コンスタンティノープル総主教は、尊者が先祖代々の伝統を守るためにどれほど大きな勇気を示したかを聞き及ぶと、聖ニフォンテに書簡を送り、その知恵と勇気を称賛するとともに、正教を堅く守り抜いた古代の聖なる教父たちと同列に位置づけた[2937] 。一方、尊者ニフォントは、総主教の書簡を読み、正教に対する熱意をさらに燃え上がらせた。さらに、彼の労苦に対して、牧者たちの長であるイエス・キリストからも相応の報いが与えられた。これは、これから述べる彼の至福の死の物語が示している通りである。

聖ニフォントが司教の座に戻ってからしばらくして、彼は、コンスタンティノープルからロシアへ向かうコンスタンティン大主教[2938] が、キエフの大主教クリメントを罷免し、その地位に就くことを目的として、コンスタンティノープル総主教によってロシアへ派遣されたという話を耳にした。このことを知った聖人は、二つの理由から大いに喜んだ。第一に、聖人から祝福を受けることを望んでいたからであり、第二に、ペチェールシクの修道院で至聖なる聖母マリアや他の聖人たちに礼拝を捧げたいと願っていたからである。　この目的のために、彼はキエフへ向かい、すでにコンスタンティノープルを出発していたコンスタンティン都主教の到着をそこで待った。　ペチェールスク修道院に滞在中、尊者は至聖なる聖母マリアや他の聖人たちに対して深い愛を示していた。まもなく、尊者はここで重い病に倒れ、その病は彼の尊い最期を告げるものとなった。病に倒れる3日前、尊者は不思議な幻視を体験し、それを修道院の兄弟たちに伝えた。

「私が朝の賛美歌の後に自分の独房に戻ったとき」と彼は語った。「少し眠らなければならないと感じた。やがて私は浅い眠りに落ちた。すると、まるでこの聖なるペチェルスク修道院の、ニコラ・スヴィャトシの場所に立っているかのように思えた。　そこで私は至聖なる聖母マリアに熱心に

[2936] すなわち、ウラジーミル・モノマフの息子、ユーリー・ウラジーミロヴィチ・ドルゴルーキーである。これは1150年のことだった。

[2937] ニフォンツ宛ての総主教書簡の一つは、クシェレフ＝ベルボロドコ編『ロシア文学記念碑』第IV巻5頁のニフォンツの伝記、およびジャマリエ大主教著『ロシア教会史』第3巻第2版297頁に掲載されている。

[2938] ギリシャ人のコンスタンティン都主教は、ルーシでの滞在期間は短く、1156年から1158年まで都主教区を統治し、1159年にチェルニゴフで死去した。

祈りを捧げ、善き建設者であり、死後も自らの修道院における美徳の増進を見守ってくださっている尊者テオドシオスを私に示してくださるよう願いました。その間、修道院の兄弟たちが教会に集まってきました。そのうちのひとりが私のところに近づき、こう言いました。

「私たちの尊い父、テオドシオス様にお会いになりたいですか？」

私はこう答えました。

「はい、会いたいです。もしよろしければ、彼を見せてください。」

すると、彼は私の手を握り、祭壇へと案内し、そこで聖テオドシオス様を見せてくれた。聖人を見たとたん、私は喜びながら彼の元へ歩み寄り、その足元にひれ伏し、地面に額を付けて拝んだ。すると聖人は私を立ち上がらせ、祝福してこう言われた。

「ニフォントよ、兄弟であり息子であるお前は、ここに来てよくやった。これからは、お前は私たちと常に共に過ごすことになるだろう。」

聖テオドシウスは、私が彼に求めた巻物を手に持っていた。私はその巻物を受け取り、広げて読んだ。その巻物は、次のような言葉で始まっていた。*「見よ、私と、主が私に与えてくださった子供たち」*（イザヤ書8:18）。「幻が終わった後」――至福のニフォントはこう語った――「私は正気を取り戻し、自分の病が神からの訪れであることを悟った。

十三日間病に伏した後、尊者ニフォントは、4月の20日、復活節の土曜日に、主のもとで安らかに息を引き取った。　その遺体は、聖テオドシオスの洞窟に尊く安置され、その霊は、この著名な聖人と共に、主キリストの御座の前に立ち、言葉に尽くせぬ天の恵みを享受している。　どうか、これらの聖人たちが、私たち、すなわち彼らの子らについても祈ってくださいますように。そして、三位一体において不可分であり、賛美される神、すなわち御子と聖霊と共に御父に、今、そして常に、また永遠の世に至るまで、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしいものです。アーメン。

聖人たる私たちの父、ローマ教皇ケレスティヌスの記念日

記念日：4月8日

この尊者は、テオドシウス2世の治世下でローマ市の司教を務めた[2939]　。彼は生活と言葉において極めて高い徳を備えていたため、教皇ゾシマが逝去し、その後、インノケンティウス大教皇の後継者である至福のボニファティウスが亡くなった後、ローマの司教座に選出される栄誉に浴した[2940]。　あらゆる事において使徒の伝承に従って語り、行動したケレスティヌスは、その書簡によって不敬虔なネストリウスを罷免したが、この件においては、至福のキリルも彼を支援した[2941]。 その他にも数多くの記憶に値する教訓を著し、彼は安らかに息を引き取り、永遠の至福の命へと移り、使徒たちや教父たちの群れの中で栄光に輝いている[2942]。

[2939] フェオドシウス2世（若き）は408年から450年まで在位した。

[2940] ここには明らかに誤りがある。 教皇インノケンティウス1世は402年から417年までローマ司教座に就き、その後を継いだのは、ゾシマ（417年から418年）、ボニファティウス1世（418年から422年）、そしてケレスティヌス（422年から432年）であった。

[2941] 430年、ネストリウスを非難したローマ地方公会議の後、ケレスティヌスはアレクサンドリアの大司教キリルに書簡を送り、その中で、もしネストリウスがこの書簡を受け取ってから10日以内にローマとアレクサンドリアで信じられている信仰を認めなければ、罷免され、破門されると述べた。　同時に、ケレスティヌスはコンスタンティノープル教会およびアンティオキアの大司教ヨハネスにも書簡を送り、その中でネストリウスの誤りを糾弾するとともに、ネストリウスが頑なに態度を改めない場合には下されるであろう裁きについて通知した。　また、ケレスティヌスは、ローマ司教の全権代表として、キリルにこの判決を執行するよう命じた。

[2942] 聖ケレスティヌスは432年に逝去した。

聖殉教者パヴシリポスの受難。

記念日：4月8日

聖殉教者パヴシリプは、アドリアヌス帝の治世下[2943]、エウトロピウス属州をルキウス総督[2944]が統治していた時期に殉教した。まず聖人は皇帝のもとに連行され、自らをキリスト教徒であると宣言したため、鉄の棒で殴打された。　その後、彼はプレキウス知事の裁きに委ねられた。知事は長い間、彼に偶像への生贄を捧げるよう説得したが、それが叶わなかったため、彼を足枷で縛り、剣で斬首するよう命じた。聖なる殉教者が処刑場へと連行される際、彼は足枷を引き裂き、警備兵から逃走した。　追手から追われる中、彼は主が自分の霊を受け入れてくださるよう祈った。そして聖人の祈り通り、逃走の最中に息を引き取った。すると、キリスト教徒たちがやって来て、賛美歌や聖なる賛美を歌いながら、その聖なる遺体を敬意を込めて厳かに埋葬した。

聖使徒ヘロディオン、アガヴァ、ルファ、アシンクリト、フレゴント、エルミアの記念日。

4月8日の記念日

聖使徒ヘロディオン（[2945]）は、聖使徒パウロの血縁者であり、キリキアの都市タルソス（[2946]）の出身であった。彼は聖使徒ペトロとパウロの同行者であり協力者であり、彼らによってパタラ（[2947]）の司教に任命された。 司教の位にある聖ヘロディオンは、異教徒であるギリシア人の間でキリスト教の教えを精力的に広めました。聖ヘロディオンが多くの異教徒をキリストへと改宗させたため、ユダヤ人たちはこの神の僕に対する嫉妬から、偶像崇拝者であるギリシア人たちと結託し、聖人を力ずくで捕らえ、様々な拷問にさらしました。　その際、拷問者の中には容赦なく聖人を殴打する者もいれば、石を投げつける者、棒で頭を殴る者もいた。　ある拷問者は聖人をナイフで激しく突き、聖人はその場で息絶えたかのように倒れた。聖人が死んだと思い込んだ拷問者たちは、彼を放置した。しかし、聖使徒は神の恵みにより生き延び、その後ローマで、聖なる首席使徒ペトロと共に神の言葉を宣べ伝えるために多大な労力を費やした。

聖使徒パウロは、コリントからローマ人への手紙（[2948]）を送る際、当時聖使徒ペトロと共にローマにいたヘロディオンにも、この手紙の中で挨拶を送っている。*「私の親族であるヘロディオンに挨拶を伝えてください」*（ローマ16:11）。　そして、聖使徒ペトロが十字架にかけられた際、メタフラストの証言によれば、聖ヘロディオンもまた、聖オリンポス[2949]や他の多くの信者たちと共に、剣によって斬り殺された[2950]。

[2943] ハドリアヌス帝は117年から138年まで在位した。

[2944] ここでは、エウトロピウス属州総督が、ヨーロッパ属州総督の代わりに誤って記載されている。エウロパ属州は、バルカン半島の北東部、フラキアに位置していた。

[2945] 聖使徒ヘロディオンは、今日記念される他の五人の使徒たちと同様、70人の使徒の一人に数えられます。70人の使徒全員の記念日は、聖教会によって1月4日に執り行われます。

[2946] タルススは、古代において小アジアのキリキア地方に位置していた大都市であった。この都市の遺構は現在も残っている。

[2947] パタラ（現在のパトラス）は、パトラス湾の岸辺にあるギリシャ王国の大きな商業都市です。

[2948] コリント――古代ギリシャの著名な都市で、イオニア海とエーゲ海の間に位置するコリント湾の南東端にありました。現在、古代コリントの跡地には、人口5,000人の小さな町クロンテがあります。 – 『ローマ人への手紙』は、58年にコリントから使徒パウロによって書かれた。

[2949] 聖オリンポス、あるいはオリンピックは、70人の使徒の一人である。その記念日は1月4日である。

[2950] 聖使徒ヘロディオンの死は、紀元67年頃であった。

聖使徒アガブは預言の賜物に満ちていた。彼については『使徒行伝』に言及されている。　そこでは、エルサレムから預言者たちがアンティオキアに集まった際、「*その中の一人、アガブという者が立ち上がり、御霊によって、全世界に大飢饉が起こると予告した。それは、クラウディウス皇帝の治世に実際に起こったことである*」（使徒行伝11:27–28）と記されている。 カイサリア[2951]において、聖アガブは使徒パウロに対し、エルサレムで彼に降りかかるであろう苦難について予言した。*「……パウロの帯を取り、自分の手足を縛って言った。『聖霊はこう言われる。この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人たちにこのように縛られ、異邦人の手に引き渡されるであろう』」*（使徒行伝21:11）。　聖使徒アガブは、さまざまな国でキリストを宣教し、多くの異邦人をキリストの信仰へと導きました。

使徒パウロが『ローマ人への手紙』の中で、*「主において選ばれたルフに挨拶を伝えてください」*（ローマ16:13）と挨拶している聖使徒ルフは、ギリシャのテーベ[2952]の司教であった。

同じく使徒パウロのローマ人への手紙（ローマ16:14）に言及されている聖使徒アシンクリトは、小アジアのヒルカニア地方の司教であった。

同じ書簡で言及されている聖使徒フレゴントとエルミオス[2953]は、それぞれトラキアの都市マラフォンとダルマチア[2954]の司教であった。

ここに挙げられた七十人の使徒たちは皆、全宇宙にキリストの福音を宣べ伝え、多くの異教徒をキリストのもとへと導くという、多大な功績を挙げた。彼らはそれぞれ異なる時期に、ユダヤ人やギリシア人双方から様々な拷問にさらされ、殉教の冠を受け、栄光のうちに主のもとへ帰った。

コンダク、第2調：

キリストの弟子たちであり、至聖なる使徒たちよ、栄光あるヘロディオネ、アガベ、ルファ、アシンクリテ、フレゴンテ、そしてエルモよ。私たちを讃える者たちに、主が罪の赦しを授けてくださるよう、絶えず祈ってください。

4月22日

4月9日（旧暦）

同日、聖殉教者たちを記念する日：ディサヴァ司教、マリアヴァ長老、アヴディエスおよびその他270名。彼らは362年から364年にかけて、ペルシャ王サポルによって殉教した。

聖殉教者エウプシキオスの殉教

記念日：4月9日

[2951] パレスティナのケサリアは、地中海東岸に位置する都市で、ユダヤ王ヘロデによって古代都市ストラトンの跡地に建設され、カエサル・アウグストゥスにちなんで名付けられた。

[2952] テーベ――ギリシャのベオティア地方の主要都市。

[2953] 本日記念される70人の使徒の一人、エルマは、フラキアの都市フィリッポポリスの司教を務めた。この聖人の記念日は、聖教会により1月4日に祝われる。

[2954] ダルマチアは、イリュリアの南部であり、北はパノニア、西はイタリアおよびアドリア海と接していた。

聖殉教者エウプシキオスは、高貴な両親の息子であり、カッパドキアのケサレア[2955] で生まれ育ち、若き日々をキリスト教の貞潔の中で汚れなく過ごし、白髪には知恵を、老いには非の打ち所のない生涯を備えていた（参照：箴言4:9）。

神に背くユリアヌス・背教王の治世[2956] 、彼は合法的な結婚を結び、婚礼の祝宴がまだ終わらないうちに、キリスト・イエスに対する偉大な熱意と愛を示した。

ケサリアの町には、「ティキ」と呼ばれる不浄な偶像の神殿があった。「ティキ」とは「幸運」あるいは「幸福」を意味する。この神殿は極めて崇敬されており、ユリアヌス帝はケサリアを訪れるたびに、そこで毎日不敬な生け贄を捧げていた。 ある時、エウプシキオスの結婚を祝う祝宴が、不敬な偶像の祭りと重なってしまった。 犠牲を捧げるために神殿へ向かうギリシャ人たちを見た聖エウプシキオスは、主への熱意に燃え上がった。多くのキリスト教徒を率いてそこへ赴き、偶像を打ち砕き、偶像崇拝の神殿を根こそぎ破壊した。 ギリシャ人たちは直ちにこのことをユリアヌス帝に報告したが、聖エウプシキイは、この行為によって自らに待ち受ける苦難を予見し、財産を貧しい人々に施し、断食と祈りに専念して殉教の覚悟を整えていた。 一方、ユリアヌス帝は、自らの神々の神殿が破壊されたことを聞くと、激しい怒りに満ち、エウプシキオスだけでなく、街全体に対しても憤りを抱いた。彼は直ちに、すべての名士を捕らえるよう命じ、そのうちの何人かを死刑に処し、他の者たちを に流刑に送り、財産を没収した。 また、ケサリアのすべての教会の財産も没収し、聖職者たちを兵役名簿に登録させ、強制的に軍隊へ連行させた。この都市からは、クラウディウス帝の治世中に与えられた[2957] 「ケサリア」という名誉ある名称が剥奪され[2958] 、かつての名称である「マザ」と呼ぶよう命じられた； 同市は都市の地位から除外され、村落の格に降格された。また、その住民である忠実なキリスト教徒たちには多額の貢納が課され、荒廃した神殿を必ず再建せよという厳命が下された。 ユリアヌスは誓いを立てて、この都市を絶えず不遇の身として扱い、ガリラヤ人（彼がキリスト教徒をそう呼んでいた）を一人も生かしておかないと脅した。 もし彼らが破壊されたギリシャの神々の神殿を再建しなければ――と誓いを立てて脅した。そして、この脅迫は、神を憎むこの王に早すぎる破滅が訪れなければ、実行されていたことだろう[2959] 。

一方、神殿破壊の主犯とされた聖エウプシキオスについては、ユリアヌスは彼を拷問にかけ、偶像への生贄を捧げるよう強要するよう命じた。 こうして、聖なる殉教者は拘束され、頻繁に拷問にさらされ、偶像崇拝を強要された。彼には、偶像にひれ伏すならば、神殿を破壊した罪を赦すと約束されたのである。 しかし、キリストの戦士は屈することなく、キリストの御名を告白し続け、勇敢に立ち続けた。彼は絞首台に吊るされ、鉄の櫛で内臓が削り取られるような拷問を受けたが、苦しみの中、彼のもとに現れた天使によって力を与えられていた。 ついに、長く厳しい拷問の末、彼は剣で首を斬り落とされた[2960] 、そして傷口からは、血の代わりに奇跡的に牛乳と水が流れ出た。信者たちは彼の聖なる遺体を運び出し、栄誉をもって埋葬した。

その頃、ユリアヌスはペルシアへの遠征に出発し、カッパドキアを通過してケサリアに近づいていた。この都市は大きな危機に瀕していた。というのも、無法な迫害者はすでに、この都市を根こそぎ破壊する意図を公然と表明していたからである。 そこで聖バシレイオス大聖人は、ユリアヌス

2955 「ケサリア」という名の都市はいくつか存在した。カッパドキアのケサリアは、小アジアにあるローマ属州カッパドキアの主要都市である。

2956 ユリアヌス・アポステートは、361年から363年まで皇帝の座に就いていた。

2957 「ケサリア」という名称は、ローマ皇帝の称号である「カエサル」に由来する。

2958 言うまでもなく、41年から54年まで在位したローマ皇帝クラウディウス1世のことである。

2959 ユリアヌス・アポステートは、ペルシア遠征中に矢に貫かれて亡くなった。死の直前、彼は「お前は私を打ち負かした、ガリラヤ人よ」と叫んだ。ここで言う「ガリラヤ人」とは、私たちの主イエス・キリストを指していたのである。

2960 これは362年のことだった。

を王として敬意を表し、彼を迎えに出て、自ら食べていた大麦のパン三つを祝福のために差し出した。

王は従者にこれらのパンを受け取るよう命じ、聖バシレイオスには一握りの干し草を渡しながら、こう言った。

「お前は我々に大麦、すなわち家畜の餌を与えた。それゆえ、我々からは干し草を受け取れ。」

聖バシレイオス大聖人はこう答えた。

「王よ、我々は自分たちが食べているものをあなたに差し上げたのに、あなたは我々に家畜の餌を与えた。あなたは我々を嘲笑しているのだ。なぜなら、あなたの権力では、干し草を人間の自然な糧であるパンに変えることはできないからだ。」

するとユリアヌスは怒りを込めてこう言った。

「よく覚えておけ。私がペルシアからここに戻ってきたら、この干し草でお前を養ってやる。私はこの街を根こそぎ破壊し、その場所を鋤で耕して野原に変えてやる。お前の助言によって、民がフォルトゥナの像と神殿を破壊する大胆な行為に及んだことは、私にもよく知られているからだ。」

そう言い放つと、皇帝は旅立ち、まもなく命を落とした。聖バシレイオス大教父の『聖人伝』に記されている通り、彼は聖大殉教者メルクリウスによって殺害されたのである。　ユリアヌスの死後、ケサリアの民は聖殉教者エウプシキオスの棺の上に美しい教会を建立し、その聖遺骨は、父と聖霊と共に永遠に賛美される我らの神キリストの栄光のために、癒やしの泉を湧き出させた。アーメン。

聖ヴァディム大修道院長殉教者の受難。

記念日：4月9日

ペルシャの四十人の聖殉教者たちが殺害された際、サポル王の命令により[2961]、聖アルヒマンドリト・ヴァディムは七人の弟子たちと共に捕らえられ、牢獄に投じられた。　この聖人は、ペルシアのヴィフラパタという町出身の非常に裕福な家系に生まれましたが、修道士となることを決意すると、全財産を貧しい人々に施し、町の外に修道院を建立して、あらゆる面で神に喜ばれ、神の聖なる御心を全うするよう努めながら、徳高くそこで暮らしました。　なぜなら、彼は恵みと真理に満ちた人物であり、神の　選ばれた器であったからである。この尊い父は、神聖かつ完全な知恵に導かれて、人里離れた山に登り、そこに住みながら、救い主である神から祝福を受け、*ヤコブの神*[2962]　*の御顔*を仰いだのである。　彼は当時のペルシャにとって、いわば「種」のような存在であった――すなわち、殉教とキリストへの揺るぎない告白という「種」であり、それは信仰において弱き者たちを強めたのである。　彼はまさに、古代のキリスト教徒に倣った信仰の礎石であり、多くの人々を救いの道へと導いた立派な神の司祭であり、キリストのために殉教することを勇敢かつ揺るぎなく決意し、神に対する偉大な熱意を示した。　彼はあらゆる汚れから清く、いかなる悪事にも場所を与えなかった。利欲は彼から遠く離れ、欲望は消え去り、彼を傷つけることはできなかった。彼は所有へのあらゆる情熱とは無縁であり、金に惑わされるような人ではなかった。　高慢は彼の前にへりくだり、傲慢は彼によって塵のように踏みつけられ、貧しさと柔和さは彼を愛した。正義は彼に寄り添い、真理は彼の中で輝き、愛は彼の意志を包み込み、平和は彼に口づけをし、彼を喜び祝った（詩編84:11–12参照）。　調和と一致が彼の心に宿り、この人はあらゆる義の実に満ちており、その霊的な実によって、すべての人が心ゆくまで満たされた。

[2961] 言うまでもなく、ペルシア王サポル2世、通称「大帝」のことである。在位は310年から381年まで。

[2962] 詩篇23:3–6の一節。

彼は弟子たちと共に四ヶ月間、牢獄で鎖につながれたまま過ごし、毎日激しい拷問にさらされたが、神への希望と誠実な信仰に支えられ、それらを忍耐強く耐え抜いた。

当時、ヴィドゲルミ地方のアリア市の長官であるニルサンという人物がいた。このニルサンはキリスト教徒であり、王が彼に太陽を礼拝するよう強要した際、彼は聖なるキリストの信仰を捨てようとはせず、鎖で縛られて投獄された。　しかしその後、彼は精神的に弱まり、待ち受ける苦難を恐れて、最後までキリストへの信仰を貫き通すことはできなかった。むしろ、この儚い現世の生活と王からの虚しい栄誉を愛したため、神からの命と永遠の栄光を失ってしまったのである。　しかし、後の物語が示すように、彼はこの世の快楽を享受することはできなかった。殉教を避けたことで苦しみの中に陥り、地上の栄光を求めながら、天上の永遠なる王よりも一時的で朽ちゆく王を優先し、サポル王の命じることは何でも従うと約束したために、不名誉を被ることとなったのである。　王は彼のその決断を聞いて大いに喜び、聖ヴァディムのことを思い出し、直ちに彼を鎖から解き放ち、牢獄から自分の元へ連れてくるよう命じ、傍らにいた高官たちにこう言った。

「もしニルサンが自らの手でヴァディムを殺せば、束縛から解放され、ヴァディムの全財産を授かることになる。」

王のこの言葉は直ちにニルサンに伝えられ、彼は王の意志を忠実に実行することに同意した。聖ヴァディムはニルサンの元へ連れてこられ、呪われたニルサンは抜刀して、キリストの殉教者を殺そうと身構えたが、恐怖に襲われて、石のように身動きが取れなくなってしまった。

その時、キリストのしもべは彼を見つめてこう言った。

「ニルサンよ、お前の悪意はそこまで及んでいるのか。自分の神を否定しただけでなく、そのしもべたちまで殺そうとしているとは。哀れな者よ、お前は不幸だ！　最後の審判の日に、永遠の神の前に立ち、答えを求められたとき、どうするつもりだ？　私は自分のキリストのために死ぬ覚悟はあるが、お前の手によって死ぬことは望まない。」

ニルサンはこれらの言葉を聞いても恥じる様子は見せなかったが、王の命令を遂行する気にはなれず、恐怖に震えながら立ち尽くしていた。　ついに、顔を石のように固め、心を鉄のように硬くして、殉教者の首筋に剣を振り下ろした。しかし、殺し手の手が震えていたため、聖人を即座に殺すことはできず、何度も斬りつけた末、ようやく聖人の首を切り落とした。

このような苦しみの中で、尊者ヴァディムは聖なる魂を神に委ねた。そして、その最期に立ち会ったすべての異教徒たちは、殉教者の忍耐力に驚嘆した。なぜなら、彼は幾度も剣で斬られながらも、石の柱のように動じることなく立ち続けていたからである。　一方、殺害者に対しては、皆が臆病者だと嘲り、軽蔑の眼差しを向けた。

ほどなくして、ニルサンは自らの行いにふさわしい報いを受けた。数多くの様々な精神的苦痛に苛まれ、絶望の末に自ら命を絶ったのである！

聖ヴァディムは、4月8日にキリスト・イエスのために殉教した。街の外に捨てられた彼の遺体は、敬虔な男たちによって密かに回収され、名誉をもって埋葬された。

一方、彼の七人の弟子たちは牢獄に残され、サポル王の死に至るまでの四年間、そこに留まった。

彼らが無事に釈放された際、主イエス・キリストの恵みにより、キリスト教の信仰を告白することが許された。主イエス・キリストに、永遠の栄光がありますように。アーメン。

- 同日、聖殉教者たち――ディサナ司教、マリアヴァ長老、アヴディエス、およびその他二百七十名――の記念日である。彼らは362年から364年にかけて、ペルシャのサポル王によって殉教した。

4月23日

4月10日（旧暦）

同日、聖殉教者ヤコブ司祭、アザダンおよびアヴディキア助祭の記念日。彼らはペルシアにおいて、サポル王の治世下、380年頃に殉教した。

聖殉教者テレンティウスおよび彼と共に殉教した者たちの殉教

4月10日の記念日

不敬虔なローマ皇帝デキウス[2963] は、すべての人々を自らの破滅的な偶像崇拝の信仰へと改宗させようと、王国の全地域に勅令を下した。それによると、すべてのキリスト教徒に偶像礼拝と偶像に捧げられた供物の摂取を強制し、従わない者は裁判にかけ、処刑することとされた。　この勅令がアフリカの総督フォルトゥナティアンのもとに届くと、彼は裁判官の席に着き、民衆全員を呼び集めて、次のように宣言した。

「神々に犠牲を捧げよ。さもなくば、残酷な拷問を受け、悲惨な死を遂げることになるだろう。」

そう言いながら、総督は拷問器具を見せつけた。それを見た多くの人々は恐怖に駆られ、キリストの信仰を捨てた。しかし、信者たちの中には、四十名ほどがキリストのために死ぬことを固く決意し、互いに大胆にこう語り合った。

「兄弟たちよ、堅く立ち続けよう。私たちの神であるキリストを否定してはならない。そうすれば、キリストもまた、天の御父と御自身の聖なる天使たちの御前で、私たちを否定されることはないだろう。」　主が言われたことを覚えよう。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるがよい」*（マタイ10:28）。キリストの僕たちがこのような言葉で互いに励まし合っていると、フォルトゥナティアヌスは彼らにこう言った。

「驚かされる。あなた方のような、成熟した年齢と知性を持つ人々が、どうしてこれほどまでの狂気に至り、ユダヤ人たちが悪人として十字架につけた方を、唯一の神であり王であると認めるに至ったのか。」

聖テレンティウスは皆を代表して彼にこう答えた。

「もしあなたが、統治者よ、偶像崇拝の迷いを捨てて、十字架につけられたキリストの力を知っていたなら、彼にひれ伏し、仕えていたことでしょう。なぜなら、彼は慈愛に満ち、憐れみ深く、恵み深い神の子であり、　御父なる神の御心により、この世に降りてこられ、御自身の神性を人間性と結び合わせ、私たちの救いのために自ら進んで十字架の苦しみを耐え忍ばれたのです。

統治者は言った。

「神々に生贄を捧げよ。さもなくば、お前の肉体を焼き尽くし、お前を滅ぼしてやる。」

「恐怖で我々を脅そうというのか？」と聖テレンティウスは答えた。「いいえ、我々は不死の命とその与え主を捨てて、偶像にひれ伏すほど弱くはない。さっさとやりたいことをやり、我々のために拷問を考案せよ。我らキリストのしもべは、揺るぎなく堅固だからだ。」

すると、総督は怒りを露わにして、彼らを裸にし、偶像の神殿へ連行するよう命じた。偶像たちは金や銀、そして高価な衣で飾られていた。神殿に入ると、総督は聖人たちに言った。

「強大な神ヘルクレスに犠牲を捧げよ。その力は偉大であり、その威光は輝かしいからだ。」

[2963] デキウス皇帝――キリスト教徒迫害で知られる人物。在位は249年から261年まで。

「あなたは誤っている」と聖テレントは言った。「あなたの神々は石や木、銅や鉄であり、人々を惑わし、永遠の命から遠ざけるために金で飾られているのだ。なぜなら、それらは見ず、語らず、 聞かず、歩かない。それらは人間の手に鋳造され、加工されたものに過ぎないからだ。 *『それらを作る者たち、そしてそれらに望みを置く者たちは、それらに似るであろう』*（詩編113:16）。

この言葉を聞いた統治者は、テレンティウス、アフリカヌス、マクシムス、ポンペイウスを牢獄の奥の房に閉じ込め、厳重に監視するよう命じ、こう言った。

「明日、彼らを試練にかける。」

また、至福のジノン、アレクサンドロス、テオドロスら、計三十六人を、偶像の神殿近くの法廷へ連行するよう命じ、彼らにこう言った。

「最初の論争では何の成果も得られなかった。だから今こそ私の言うことを聞き、偉大なる神ヘルクレスに犠牲を捧げよ。」

聖人たちはこう答えた。

「我々は何度も、自分たちがキリスト教徒であると述べてきた。お前は最初の質問の時点でそれを知っていたはずだ。そして、お前は決して我々を不浄な偶像を崇拝するよう説得することはできない。」

統治者は言った。

「もし自発的に私の説得に従う気がないのなら、力ずくで無敵の王たちの命令を遂行させるぞ」と言い、彼らを節の多い小枝や乾いた腱で容赦なく打つよう命じた。

聖なる殉教者たちは、天に向かって両手を挙げ、声を揃えて叫んだ。

「主なる神よ、私たちに御目を留めてください。御自分のしもべたちを助け、この試練から私たちを救い出してください。」

これを聞いた総督は、さらに激しく打つよう命じたため、役人たちは何度も交代し、小枝や腱が尽きてしまった。そこで総督は棒で打つよう命じたが、殉教者たちの内臓さえ露わになっていたにもかかわらず、彼らの顔はこれほどまでに明るく朗らかであったため、皆、聖人たちの不屈の忍耐と勇気に驚嘆した。 鞭打ちの後、総督は彼らにこう言った。

「神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前たちを釈放してやる。」

聖人たちは黙り込んでいたが、彼は怒りに任せて鉄の棒を赤熱させ、彼らの肩を焼くよう命じ、傷口には塩を混ぜた酢を注ぎ、粗布でこすりつけるよう命じた。すると、キリストの聖なる殉教者たちは天を見上げ、こう言った。

「主なる神よ、火の炉から三人の少年――　アナニア、アザリヤ、ミサイアを火の炉から救い出し、ダニエルを獅子の口から救い出し、モーセをファラオの手から救い出し、聖テクラを火と野獣から守り、御自身の愛する者たちに敵に対する完全な勝利を与え、羊の牧者である偉大なる主イエス・キリストを死者の中からよみがえらせた方 （参照：ヘブライ人への手紙13:20）、私たちに数えきれないほど多様な恵みを示し、光を創造し、天を皮のように広げ、星の数をかぞえ、それらすべてにその名を付け（参照：詩篇146:4）、真の信仰の教えを地の果てまで広め、 ――あなたに祈る私たちの声を聞き、私たちの苦難から救い出してください。まことに、あなたの栄光は永遠に続くからです。アーメン。

彼らがまだ祈りを終えないうちに、総督は激怒して、再び彼らを吊るし、鉄の爪で削るよう命じた。すると、彼らの肋骨から血が川のように流れ出した。しかし、拷問の凄惨さにもかかわらず、彼らは微塵も弱まることはなかった。神が彼らを支え、強さと力を与えておられたからである。総督は彼らに言った。

「この苦しみで我に返ったか。その狂気から立ち返る用意はあるか。それとも、なおも不義の道を歩み続けるつもりか。」

聖者たちは何も答えなかったが、統治者は激怒して言った。

「言っておくぞ、不敬虔な者どもよ！」

すると、聖徒たちは天を見上げ、こう言った。

「全能の神よ、かつてソドムの町の不法のために火を降らせた御方よ、今こそ御名の真実のために、この不義な神々の神殿を滅ぼしてください。」

そう言い終えると、彼らは額に十字を切って神殿の方へ息を吹きかけた。するとたちまち、神殿の中の偶像たちは大きな轟音とともに倒れ、塵と化した。そこで聖なる殉教者たちは総督に言った。

「ご覧なさい、あなたの神々とはこのようなものなのです。今、彼らの強さと力はどこにあるのですか？彼らは自分たちを守ることができたでしょうか？」

まもなく、神殿も倒れ、基礎まで崩れ落ちた。すると統治者は、神殿と偶像が破壊されたことに激しい怒りを覚え、聖なる殉教者たちに首を刎ねるよう命じた。　しかし、彼らはその判決を喜び、神を賛美し、喜びをもって処刑場へと向かった。そしてそこで、ひざまずき、キリストのために進んで首を剣に差し出し、剣によって息を引き取った。信者たちは彼らの聖なる遺体を運び出し、聖なる場所に埋葬した。

これらの聖なる殉教者たちが殺害された後、総督は聖テレント、アフリカヌス、マクシムス、ポンペイウスを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼らにこう言った。

「神々に生贄を捧げよ。さもなくば、惨めな死を遂げるだろう。そして、誰もお前たちを私の手から救い出すことはできない。」

聖人たちはこう答えた。

「我らはキリスト者であり、キリストに希望を置いている。悪魔には拝礼せず、お前の神々にも仕えず、お前の拷問も恐れない。どんな拷問を課そうとも構わない。我らは我らの神を信じている。悪魔がキリストに打ち負かされたように、お前も我らに打ち負かされるだろう。キリストは、お前の邪悪な企みを打ち破る力を我らに与えてくださる。」

総督は、聖なる殉教者たちを再び牢獄へ連れ戻し、首に重い鉄の足枷をはめ、手足を鉄の鎖で縛り、その状態で床に敷かれた鉄の三叉の棘の上に寝かせ、誰にも牢獄に入れないよう命じ、彼らに食物を持ち込む者がいないようにした。　聖人たちがそのような苦しみの中にあり、神に祈っていたとき、真夜中に牢獄に光が輝き、主の天使が現れて彼らにこう言った。

「テレンティウス、アフリカヌス、マクシムス、ポンペイウスよ、至高の神の僕たちよ、立ち上がって、体を養いなさい。」

そう言うと、天使は彼らの足枷に触れ、その瞬間、足枷は外れ、彼らの目の前には、あらゆるご馳走が盛りだくさんの食卓が現れた。

そして天使は言った。

「休んで、キリストがあなたがたに送ってくださった食事を召し上がってください。」

聖人たちは、キリスト・神を賛美しつつ、食べ物と飲み物で力を取り戻し、主なる神に感謝を捧げた。看守たちは、牢獄の中に光が差しているのを見て中に入り、聖なる殉教者たちが喜び、楽しんでいるのを見て、そのことを総督に報告した。総督は、朝になって殉教者たちを裁判に連れて行き、彼らに言った。

「苦しみによって悟りを得たのではないか。その狂気から立ち返る用意はないのか。神々の元へ行き、彼らにひれ伏せ。」

聖テレントはこう答えました。

「神よ、私たちと、神を愛するすべての人々を、この狂気から守ってください。なぜなら、『*神の愚かさは、人々の知恵よりも賢い*』（Iコリント1:25）からであり、人間の知恵は神の前では狂気だからです。もし私たちが神を捨てて、あなたのように悪魔を拝んだなら、私たちこそが狂人となるでしょう。」

これらの言葉に激怒した統治者は、彼らを絞首台に吊るし、鉄の爪で削り取るよう命じた。そのような拷問に耐えながら、聖人たちは神に祈り、こう言った。

「イエス・キリストよ、永遠に生きられる神の御子よ、キリスト教徒の光よ、私たちの堅固な希望よ、私たちと共にいて、私たちを助け、あなたの聖なる御名のゆえに苦しむ私たちを恥じさせないでください。」

このように祈っている間、彼らは苦痛を感じなかった。キリストが彼らの痛みを和らげてくださったからである。

その後、総督は彼らを再び牢獄に投獄するよう命じ、獣や爬虫類を操る術を持つ魔術師や呪術師を呼び寄せ、呪文によって最も凶暴な動物――アスピド、エキドナ、蛇――を集め、殉教者たちと共に牢獄に閉じ込めるよう命じた。　しかし、爬虫類たちは聖なる殉教者たちの足元を這い回ってはいたものの、彼らには触れず、害も与えなかった。一方、聖人たちは神を賛美し、栄光を称えていた。こうして彼らは爬虫類たちと共に牢獄で三日三晩を過ごしたが、四日目の夜、総督は殉教者たちが爬虫類によって殺されたかどうかを探るために使者を送った。　使者たちは牢屋の扉に近づくと、聖なる囚人たちが歌い、神を賛美している声が聞こえてきた。　牢獄内で何が起きているのかをより詳しく知りたかった彼らは、屋根に登ってそれを開けると、聖人たちが座っており、神の天使が毒蛇たちが殉教者に近づくのを許していないのを見た。これを見て彼らは恐怖に震え、その直ちに目撃したことを総督に報告した。

早朝、総督は呪術師たちに、牢獄から蛇、アスピド、エキドナ、そしてあらゆる毒蛇を追い出し、殉教者たちを裁判にかけるよう命じた。　呪術師たちが牢獄に到着し、いつもの呪文を唱え始めたとき、爬虫類たちは彼らの言葉に従わず、激しい怒りを露わにして開かれた扉から一斉に呪術師たちへと襲いかかり、彼らを死に至らしめただけでなく、そこにいた人々全員をも殺害した。　その後、聖人たちは法廷に連行されたが、総督は彼らが無傷であるのを見て激怒し、剣による斬首を宣告した。その時、殉教者たちは言い表せないほどの喜びに満たされ、喜びをもって死へと向かいながら、こう歌った。

「主よ、あなたは私たちを迫害する者たちから救い出し、私たちを憎む者たちを恥じ入らせました。」

役人たちは彼らを処刑場へ連れて行き、命じられたことを実行し、キリストの殉教者たちは殉教の冠を受け取った。敬虔な人々は聖なる遺体を収め、私たちの救い主イエス・キリストの栄光のために、町から二ポプリシュの距離にある場所に、尊厳をもって埋葬した。キリストは世々限りなく生きて支配しておられる。アーメン。

コンダク、第2声調:

今日、あらゆる者を喜ばせる、賢明なるテレンティウスとその仲間たちの殉教の尊い記念の日が訪れました。さあ、熱心に集い、癒やしを受けましょう。彼らは神から聖霊の恵みを受け、私たちの魂の病を癒やすからです。

- 同日、ペルシアにおいてサポーレの治世下、380年頃に殉教した聖殉教者ヤコブ長老、アザダンおよびアヴディキア助祭の記念日。

4月24日

4月11日（旧暦）

同日、4世紀に、聖ヨハネが井戸の中で修業していたのと同じ荒野に住み、彼に仕え、養った聖ファルムフィウスの記念日。

聖アンティパ（ペルガモスの司教）の殉教

記念日：4月11日

ドミティアヌス帝の治世[2964]、キリスト教徒に対する大規模な迫害が始まり、すべての諸侯や統治者に対して、キリスト教徒が帝国の命令に無条件に従い、異教の信仰を受け入れ、偶像を崇拝するよう命じる勅令が下された。 その時、多くの信徒たちが現れ、恐れを知らずに神の御言葉を告白し、救い主キリストのために奮闘した殉教者たちの偉大な勇気が示された。 この頃、[2965]、偉大なる使徒である聖ヨハネ・テオロゴス――教会の柱であり、キリスト教の真理の礎であり、神の独り子である永遠の神性の宣教者――がパトモス島に流刑に処されていた。 パトモス島で、七つの燭台の中に現れた主は、彼に啓示を与え、七人の天使、すなわち小アジアの七つの教会の司教たちに手紙を書き、殉教者たちの群れを強めるよう命じられました。その際、主は聖アンティパスについても言及されましたが、彼についてはこれから語られる物語の主題となります。 主は弟子にこう言われた。「*わたしはあなたの行いを知っている。あなたはサタンの御座のある所に住んでおり、わたしの御名を守り、サタンが住むその地で、わたしの忠実な証人アンティパが殺されたあの日でさえ、わたしの信仰を否定しなかった*」（黙示録2:13）。

というのも、聖アンティパはペルガモの教会の司教であったからである[2966]。ヨハネの黙示録のこの言葉から、アンティパがいかにキリストの忠実な証人であったか、また、サタンの住処であったペルガモの町の住民たちがどのような者たちであったかがわかる。 その中において、聖アンティパは、闇の中の光、茨の中の薔薇、泥の中、あるいはむしろ、火の炉の中の金のような存在であった。それは、「*彼らを炉の中の金のように試した*」（箴言3:6）と書かれている通りである。

そこでは自然の法則さえ守られず、分別など微塵もなかった。誰もが自己保身に走り、強者は弱者を虐げ、キリスト教徒を殴打したり 殺害したりする者が、勇敢で善良、かつ義人であると見なされていた。 そして、異教徒たちがこのようにキリスト教徒の共同体を迫害し、悩ませていたとき、信仰において揺るぎなく、徳において不変であった聖アンティパは、少しも動揺することなく、まるで人間の本性を天使のようなものへと変えたかのように、強固かつ恐れを知らずに敵に立ち向かった。

迫害者たちの脅しを意に介さず、彼はしばしば民衆の中へ出向き、その群衆の中で夜明けの光のように輝き、清く正しい信仰の光をもって、偶像崇拝という迷いの闇を追い払った。 そのため、悪魔たち（ギリシャ人たちは彼らを神々だと考えていた）は皆そこから逃げ去り、聖アンティパが住んでいたペルガモの町には、彼らの一人も留まることを敢えてしなかった。 悪霊たちは、自分たちの祭司たちの夢の中に現れ、「キリスト教徒の指導者に追い払われているため、もはや彼らの捧げる生贄を味わうことも、犠牲の香りを嗅ぐこともできない」と告げた。すると、ギリシャ人たちは激怒し、アンティパに襲いかかり、彼を捕らえて、彼らが普段、邪悪な生贄を捧げていた場所へと引きずっていった。 すると、総督は彼に言った。

[2964] ローマ皇帝ドミティアヌスは、81年から96年まで在位した。

[2965] パトモス――エーゲ海に浮かぶ不毛で岩だらけの島。エフェソスの南西、サノプスとナクソスの間に位置する。

[2966] ペルガモン――大ミシア（小アジア北西部）にある都市で、ペルガモン王国の首都であった。 古代、この都市は富と豪華さ、そして広大な図書館で知られていたほか、パーガメント（筆記用の皮）の加工法の発明、あるいはより正確にはその改良でも有名であった。その後、この都市はローマ帝国に併合された。

「お前こそが、自ら王の命令に従わず、他の人々にも同じことを教え、我々の犠牲の儀式を妨害し、どの神も供物の香りを十分に嗅ぐことさえ許さない、あのアンティパか？　お前のせいで神々は我らの街を見捨ててしまった。神々がもはやこの街を守ろうとはしないため、何らかの災いが降りかかる危険がある。キリスト教の魔術に染まるのはもう十分だ。今こそ悔い改め、我らの法律に従え。そうすれば、この美しい街を支配する神々が、我々への配慮と守護を絶やさないだろう。　もしあなたがこれに従わず、自らの信仰を捨てず、我々の神への崇拝を軽んじるならば、ローマの法律に基づき、相応の罰を受けることになるだろう。

聖アンティパはこれにこう答えた。

「総督よ、一つだけ知っておいてほしい。私はキリスト教徒であり、王の狂気じみた不敬な命令に従うつもりは決してない。しかし、あなたの質問には相応の答えをすべきであるから、私の話を聞いてほしい。　もし、あなたがたが全宇宙の支配者と呼ぶ神々が、彼ら自身の言葉によれば、一人の凡人によって追い払われたのであり、もしあなたがたが守護者や擁護者と見なしている者たちが、自らあなたがたの助けを求めているのであれば、そこからあなたがたの誤りを容易に悟ることができるでしょう。　もし彼らが、自分たちに加えられた侮辱に対して報復することもできず、たった一人の人間に打ち負かされたと認めているのなら、どうして全人類、あるいはせめて一つの都市さえも災いから救うことができるというのか？　このことを踏まえ、今こそ、あなた方は自らの破滅的な迷いから離れ、人類を救うために天から降臨されたキリストを信じるべきです。このキリストは、世の終わりに、まことにすべての人を裁き、各人の行いに応じて、苦しみか、あるいは栄誉かを授けるために来られます。

このような賢明な答えを聞いた後、統治者は再び聖アンティポスに語りかけました。

「あなたは、自ら作り出した新しい法律や規則に従い、私たちが先祖から受け継ぎ、彼らから代々受け継がれてきた古来の神への崇拝を軽んじています。　我らの先祖の慣習から逸脱するのは良くない。なぜなら、古いものは新しいものより優れており、より信頼でき、古くから確立されたものはより称賛に値するからだ。　それゆえ、あなたもまた、自らの信仰を改め、最近現れ、ある種の魔術によって人々の生活を混乱させ、ポンティウス・ピラトの時代に十字架にかけられたあの「人」に従ってはならない。　さあ、王の命令に従いなさい。そうすれば、あなたは私たちと共に安らかに暮らすことができ、私たちはあらゆる面であなたを助け、息子に対するような愛をもってあなたを愛するでしょう。あなたの年老いた身は、私たちがあなたを父として愛し、敬うにふさわしいからです。

これに対し、聖アンティパはこう答えた。

「たとえあなたが数え切れないほどの論拠を私に提示したとしても、私はそれほど愚かでも無分別でもありません。深い老齢に達し、死に近づいている今、自分の信仰を変え、この不幸で不名誉な生活のために、確固たる信仰告白から背くようなことは決してしません。　それゆえ、絶えず神の書物の読解に励んでいる私の心を惑わしてはならない。なぜなら、当初、あなた方の神々は一人も存在しなかったのだ。　彼らは後になって現れたに過ぎず、何の善も行わず、私たちに何の益ももたらさなかった。それどころか、彼ら自身が卑劣で無価値であったがゆえに、他者にとっても邪悪で情欲に満ちた生活の元凶となってしまったのだ。もし古くからの悪しき慣習を守らなければならないというのなら、兄弟殺しを犯したカインに倣うべきだろう。　なぜ、天に昇ろうとし、姉妹との近親相姦を恥じることさえせず、そのために大洪水によって滅ぼされた者たちの後を追わないのか。もしあなたがたも、その古さゆえに彼らの不法な行いを真似るならば、悔い改めなければ、もはや水ではなく、永遠の火と眠ることのない虫によって罰せられることになるだろう。

この言葉を聞いた後、不信心者たちは聖なる人を捕らえ、アルテミスの神殿[2967] へと引きずり込んだ。そこには青銅の雄牛が置かれていた。彼らはその雄牛を赤熱させ、聖なる殉教者をその中に投げ込んだ。聖人は十字の印を切りながら、神に祈りを捧げ、こう叫んだ。

「神よ、世の初めから隠されていた私たちの主イエス・キリストの奥義を私たちに示し、その方を通して御心の測り知れない深みを私たちに明らかにしてくださった方よ。あなたのすべての恵みに感謝いたします。 ——あなたを信頼する私たちを救い、この時に、あなたの聖なる御名のゆえに苦難を受けた聖なる殉教者たちの列に加えられるという栄誉を私に与えてくださったことにも感謝いたします。 今、この世を去ろうとする私の霊をお受け取りください。そして、私を御前と御独り子との御恵みにあずからせてください。私だけでなく、私の後に生きる者たちをも、御慈悲の分かち合いに与らせてください。そうして、御名の聖なる御名が、永遠にすべての人によって賛美されますように。アーメン。

聖アンティパは、灼熱の炉で拷問を受けながら、こうした言葉やそれに類する言葉を繰り返し、長く祈りを捧げた。その後、全世界のために祈りを捧げた後、まるで甘い眠りに落ちるかのように、神の御手に息を引き取り、栄光に満ちた殉教者の冠を戴いて天に昇った[2968] 。 敬虔な人々は彼の聖遺体を運び出し、同じペルガモの町で尊く埋葬した。そこからは、私たちの神キリストの栄光のために、あらゆる人間の病を癒やす聖油が流れ出た。キリストは、父と聖霊と共に、永遠に賛美される。アーメン。

トロパリオ、第4調:

アンティポよ、あなたは偶像崇拝の虚飾を打ち砕き、悪魔の力を打ち破り、神に敵対する者たちの前で大胆にキリストを告白した。それゆえ、あなたは天上の天使たちの列に加わり、万物の主への賛美を捧げ、私たちのために祈りと感謝を捧げ、癒しの恵みを授けてくださる。 このゆえに、我らは汝を崇める、聖殉教者アンティポよ。キリスト・神に、我らの魂を救ってくださるよう祈り求めてください。

コンダク、第4調:

使徒たちの共同司祭であり、聖人たちの栄光であったあなたは、幸いな者よ、殉教によって栄光を得、太陽のように輝き、すべての人を照らし、聖なるアンティポよ、不信心の深い闇を打ち砕きました。このゆえに、私たちはあなたを、神聖なる聖殉教者であり、癒しの与え手として崇めます。

聖殉教者プロケッサスとマルティニアヌスの記念日

記念日：4月11日

[2967] アルテミス——別名ダイアナ——は、ギリシャ人にとってよく知られた異教の女神であり、月を象徴し、森と狩猟の守護神とされていた。この女神への奉仕は、華やかで壮麗な儀式として執り行われた。

[2968] 殉教者アンティパ（アジアのペルガモの司教）は95年に死去し、その記念日（4月11日）はコンスタンティノープルで特に崇敬されていた。テオドシウス大帝（379～395年）の治世下、聖アンティパが焼かれた牛がペルガモからコンスタンティノープルへ運ばれたからである。

聖殉教者プロケッスとマルティニアヌスは、もともと異教徒であり、ローマにあったマメルティヌスの牢獄[2969]で看守の職務に就いていました。

その牢獄には、キリスト教を宣教した罪で、聖使徒ペトロとパウロが投獄されていました。牢獄内で使徒たちが行った奇跡を目の当たりにし、プロケスとマルティニアンはキリストを信じるようになりました。そして、使徒ペトロが祈りを捧げた後、タルペイの岩（[2970] ）に十字架の印を描き、その岩から水を湧き出させたとき、プロケスとマルティニアンだけでなく、牢獄に囚われていた他の全員、計47人が洗礼を受けました。

プロケスとマルティニアンは、キリストを信じ洗礼を受けた後、使徒たちを牢獄から解放した。しかし、主ご自身がローマからの帰路にある使徒ペトロの前に現れ、再び十字架にかけられると告げ、その言葉によって彼をローマへ引き戻させた。そこでペトロは再び兵士たちに捕らえられた。

その間、プロケスとマルティニアンの監守であるパヴリンは、二人がキリスト教徒になったという報告を受けた。パヴリンは聖人たちを呼びつけ、キリスト教を捨てるよう説得し始めた。しかし、彼らが反論し、偶像を冒涜し始めたため、彼は彼らの口を打つよう命じた。　その後、新たな説得――その説得は執拗であるばかりか、実りのない、無益なものだった――にもかかわらず、聖人たちは信仰を貫き通したため、彼らは拷問台に吊るされ、鋭利な道具で残酷に切りつけられ、脇腹を火で焼かれた。　しかし、聖人たちはこれらすべての苦難を勇敢に耐え抜き、その間、ルツィナという名のローマの女性が彼らを励まし、慰めていた。

一方、神の懲罰は、不義な拷問者を遅滞なく襲った。聖人たちを拷問するよう命じたパヴリンは、直ちに神から左目を失うという罰を受け、悪霊に苛まれて3日後に亡くなった。

パヴリンの息子は、ローマの総督[2971] に対し、聖なる殉教者たちを直ちに処刑するよう強く求め、その結果、彼らはローマの城壁の外[2972] で斬首された。彼らの尊い遺体は、前述のリュツィナによって回収され、聖なる殉教者にふさわしい栄誉をもって埋葬された。

- 同日、4世紀に、3月29日に記念される聖ヨハネが井戸で修行していたのと同じ荒野に住み、彼に仕えて世話をしていた聖ファルムフィウスの記念日である。

4月25日

4月12日（旧暦）

同日は、パレスチナでサラセン人による矢に貫かれて殉教した聖殉教者ミーナ、ダビデ、ヨハネの記念日である。

[2969] マメルティヌスの牢獄は、ローマ市の北部に位置していた。ここは主に国家反逆者のために設けられたもので、キリスト教徒もその数に含まれていた。　この牢獄は修復（復元）された姿で現在も残っており、特に使徒ペトロとパウロが収監されていた区画は、聖地としてカトリック教徒によって格別な注意を払って守られている。

[2970] タルペイアの岩は、ローマのカピトリーノの丘の西側にありました。古代ローマでは、この岩は死刑判決を受けた犯罪者を突き落とす場所として用いられていました。　ローマの伝説によれば、この岩はそのような経緯からその名がついたとされる。タルペアというヴェスタの巫女（異教の祭壇に仕える処女）は、ロムルスがサビニ人の王ティトゥス・タキウスと戦っていた際、金の約束に惑わされて、サビニ人をカピトリーノの丘に侵入させてしまった。　条件としてサビニ人はタルペアに左手に身につけていたものを渡さなければならなかったため、カピトリーノの丘に登ると、彼女を裏切ったタルペアに対し、彼女が期待していた腕輪の代わりに盾を投げつけた。その重みで彼女は息絶えた。それ以来、この崖はタルペイの崖と呼ばれるようになった。

[2971] プレフェクトとは、都市の長のことである。

[2972] 聖殉教者たちの殉教は、1世紀後半に起こった。彼らの聖遺骨は現在、バチカンの聖ペトロ大聖堂内、彼らにちなんで名付けられた小聖堂に安置されている。

聖母アファナシアの生涯

記念日：4月12日

聖人たちの生涯と功績を、読者や聴衆の教訓のために記述することは、称賛に値する救いの業であるだけでなく、彼らを称えて記念を行うよう命じる使徒の戒めを果たすことでもある。　それゆえ、私たちは、至福のアファナシアの生涯について、たとえ簡潔なものであっても、その物語を提示したいと考えるのである。とりわけ、彼女の生涯の善き模範は、すでに遥か昔に過ぎ去った出来事として忘れ去られてしまう恐れがあり、そうすれば多くの人々が、自らの魂にとって極めて教訓となるべき教訓を失ってしまうからである。

称賛に値し、不滅の名を冠するこの妻[2973] は、その徳高い生涯において天の主の忠実で善良なしもべであることを示しましたが、敬虔で高貴な両親――ニキータとマリア――の娘でした。　二人はエギナ島[2974]　に住んでおり、そこで後に聖霊の選ばれた器となる少女が生まれた。彼女はわずか7歳の時に早くも詩篇の読み方を習得し、書物への愛に際立っていたため、特に熱心に聖書の読解に励んだ。 ある日、 織機で作業をしている最中、彼女は上空から降りてくる輝く星を見ました。その星は彼女の胸元まで達し、全身を照らし出すと、消え去りました。この時から、少女の魂は啓発され、世の虚しさを憎むようになり、修道院に入ることを決意しました。　しかし、両親は娘の善意に強く反対し、彼女の意思に反して結婚を強いた。　結婚生活はわずか十六日間しか続かず、その後、彼女は予期せず未亡人となった。その国に突如として野蛮なムーア人が襲来したため、アファナシアの夫は戦場へ赴かざるを得なくなり、そこで神の計り知れない御業により、戦死してしまったのである。未亡人となったアファナシアは再び修道院に身を隠そうと決心したが、その願いを実行に移す前に、処女や若い未亡人は王の兵士たちと結婚しなければならないという王の勅令が下された。　両親に説得され、アファナシアは再婚した。そして、新たな結婚生活においても、彼女は自身の救いへの配慮を怠らなかった。快楽に惑わされることもなく、一時的な利益への過度な執着にも陥ることなく、彼女はほとんどすべての時間を、聖書の読誦か、詩篇の詠唱に費やしていた。　柔和さと真摯な謙遜こそが彼女の最大の美徳であり、それゆえ家族は彼女を愛おしく思うほかなく、彼女の徳高い生活を知っていた近所の人々も、彼女を称賛せずにはいられなかった。　彼女は貧しい人々を助けることを深く愛していたため、時には彼女の裕福な家には施すものが何も残っていないこともあった。彼女は訪ねてくる修道士や旅人を尊厳をもって迎え入れ、愛情を込めて宿を提供した。また、未亡人や孤児、そして困窮しているすべての人々に、生活に必要なものを惜しみなく配った。　ある時、その国で激しい飢饉が訪れ、多くの人々が極貧に陥った際、アファナシアは同信仰者だけでなく、そこに住む異教徒たちをも養った。飢えで死にそうな人々が聖アファナシアのもとを訪れると、彼女は彼らに食物や衣服だけでなく、彼らが必要とするあらゆるものを与え、こうして主の御言葉を果たしたのである。*「だから、あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深くあれ」*（ルカ6:36）、*「あなたがたは天の父の子らとなりなさい。父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、義人にも不義な者にも雨を降らせられるからである」*（マタイ5:45）。

日曜日や祝日には、アファナシアは近所の女性たちを温かく自宅に招き、聖書を読み聞かせ、神への愛を植え付け、徳ある生き方を教え導いた。こうして神に喜ばれる生活の中で絶えず成長していくにつれ、アファナシアは、まるで春の野原が花で彩られるかのように、美徳に彩られていった。結婚生活が数年を経た後、彼女は夫を説得し、この世とその誘惑を捨てて修道院に入るよう促した。夫は妻の教えに従い、真の修道士となり、その名にふさわしい生活を送ったが、剃髪からしばらくして、安らかに主のもとへ旅立った。

[2973] アファナシアは、ギリシャ語からロシア語に訳すと「不死」を意味します。

[2974] この島はギリシャの近くにあります。

独身となった聖アファナシアは、生涯を神への奉仕にのみ捧げた。神への同じ愛を持ち、彼女と同じ志を持つ他の敬虔な女性たちを見つけると、彼女は喜んで彼女たちに加わった。　まもなく、財産を貧しい人々に施し、ある敬虔な長老から修道衣を授かった後、彼女たちは世俗を離れ、静寂な生活を送るために人里離れた場所を選んだ。三、四年が経つと、聖アファナシアが辞退したにもかかわらず、彼女たちは彼女を説得し、自分たちの指導者となるよう受け入れてもらった。

しかし、彼女はイグメニアの称号を帯びてはいたものの、主の戒め「*あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、あなたがたのしもべとなりなさい*」（マタイ20:26）に従い、自分たちの中で最も低い者であると自認していた。

そして、彼女の謙虚さの深さを表現する言葉を見つけるのは難しい。彼女は、女性たちの間にいることさえ不相応だと考えていたため、ましてや彼女たちから世話を受けることなどなおさら不相応だと考えていた。そのため、たとえ手に水を注ぐようなことでも、誰一人として自分に仕えることを決して許さなかった。　彼女の節制は極めて厳格であった。夕方にわずかなパンを口にし、喉の渇きを癒すのに必要な分だけの水を飲むのみであった。オリーブ油やワイン、チーズ、魚は、キリストの降誕祭と復活祭の祝日に限り、神に感謝を捧げながら口にした。　聖なる四旬節やその他の断食期間には、生野菜だけが彼女の食事であり、それも二日に一度しか口にしなかった。また、その期間中は水をできるだけ少なくしていた。　地面に置かれ、ざらざらした羊毛の衣で覆われた石が彼女の寝床であり、毎晩、ダビデのように（参照：詩篇6:7）、彼女はそこに涙を注いだ。　そして、神への愛と自らの罪深さを自覚することから湧き上がるこれらの涙は、祈りや詩篇の詠唱の際、川のように彼女の目から溢れ出ていた。アファナシアの上着は羊毛でできていたが、肌には粗い毛皮の衣を身にまとっていた。　彼女はほとんど眠らなかったが、夜の大半を神への熱心な祈りと敬虔な思索に費やし、日中は一人で、あるいは他の の女性たちと共に、詩篇を歌うことに専念していた。 彼女は、祈りのない時間が一時間たりとも過ぎないよう心を配り、絶えず主を賛美した。それは、*「私は常に主を賛美し、私の口には絶えず主への賛美がある」*（詩篇33:2）と語ったダビデに倣ったものである。

修道院に入ったその日から、亡くなるその日まで、彼女は一度も果樹園の果実を口にすることはなかった。アファナシアは、姉妹たちを統率し、世話を焼く中で多くの苦難に直面したが、それでも謙遜と柔和さをもって、姉妹たちの誰に対しても、非難や侮辱の言葉を決して口にしなかった。彼女から不快な言葉を聞いた者は、老若男女を問わず、奴隷であれ自由人であれ、誰一人としていなかった。修道女たちによる度重なる不従順も、彼女は来世での報いを信じて、穏やかに、静かに耐え忍んだ。　四年間、姉妹たちを導いた後、至福のアファナシアは、この場所から、沈黙の中で神に仕えるのにより適した別の場所へ移り住もうと考えた。神の御心により、彼女はマタイという名の、かつて司祭であり修道院長でもあった一人の長老、つまり徳高く聖なる人物に出会った。　修道女たちの善意を知った彼は、同じエギナ島にある彼女たちが望む場所を教えた。そこは人里離れた山で、聖第一殉教者ステファノに捧げられた古代の教会が保存されていた。　その場所を見て、聖アファナシアはこう言った。「私はとっくに心の中でこの場所を知っていました。私たちはここで死ぬまで暮らすことになるでしょう」。聖マタイは、その国の司教の祝福を得て、聖ステファノの教会のそばに、聖アファナシアと姉妹たちのための修道院を設けた。

聖マタイの生涯についても、たとえ簡潔にせよ、触れておく価値がある。この聖なる父は、自らに偉大な修行を課していた。毎夜、詩篇を読み上げ、その読誦にさらに祈りを添えていた。そして、睡眠をとる必要が生じた際には、横になることなく座ったまま、ごくわずかな時間だけ眠った。詩篇を詠唱したり、祈りを唱えたり、あるいは無血の犠牲を捧げたりする際、彼は非常に深い感銘を受け、涙をこらえることができず、その場に居合わせた者たちは、この感動的な光景から大きな教訓を得ずにはいられなかった。　聖マタイは、粗い羊毛の衣をただ一枚身に着けており、厳しい禁欲と苦行によって自らの肉体を完全に枯渇させていた。彼は、主イエス・キリストの愛弟子である聖福音

記者ヨハネ・神学者に対して、特別な愛を抱いていた。　ある夏の日のこと、聖使徒の記念日に、聖マタイは神聖な聖体礼儀を執り行おうとして、共に奉仕していた長老の一人にこう言った。「今、エフェソスにいて、そこで聖福音記者ヨハネ・神学者を目にするにふさわしい者は、いったい誰だろうか？」　そう言うと、彼は心の底からため息をつき、激しく泣き出した。すると、驚くべき出来事が起こった。尊者とその二人の共同司式司祭は、祭壇のそばに立つ聖ヨハネ・神学者を目撃したのである。その幻視は、聖体礼儀が終わるまで続いた。　この光景に、聖マタイは深く感動し、霊的な喜びに満たされたため、その後三日間は食事を口にすることができなかった。ある日、全身が麻痺した男が聖者に連れてこられた。聖者は彼を憐れみ、自分のマントを脱いでその男に着せると、男はたちまち回復した。　また、悪魔の仕業で顔が歪んでしまった別の人が彼のところへやって来たが、聖人がその顔に手を触れ、十字を切ると、顔はたちまち元の姿に戻った。　また、悪霊に苦しめられていたある老女が聖人のもとを訪れ、彼の祈りによってその苦しめ手から解放された。同様に、同じく悪霊に苦しめられていた別の修道女も癒やされた。

しかし、今述べた通り、主から癒しの賜物を受けたこの偉大な神の御使いは、神の測り知れない御心により、水中で不慮の死を遂げた。　尊者様がコンスタンティノープルへ向かう途中、乗っていた船は、乗船していた人々全員と共に沈没してしまった。そのため、エギナ島は、多くの人々にとって癒やしの源となるはずだった尊者様の聖遺物を失ってしまった。彼の後を継いで司祭兼修道院長となったのは、生まれつき去勢されていたイグナティウスという人物であった。　その徳高い生活と主から授かった賜物において、彼は聖マタイに似ていた。死の瞬間まで神に喜ばれる生き方から逸れることなく、彼は誠実に主のもとへ旅立った。その棺の前では悪霊が追い出され、病の癒やしがもたらされた。さて、再び聖アファナシアの生涯の物語に戻ろう。

聖女アファナシアは、並外れた柔和さと謙遜さを備えていたと言われている。彼女はほとんど絶えず神に祈りを捧げ、天を見上げていると、時折、彼女に恐怖を覚えさせるような驚くべき光景を目にした。　彼女は、太陽の光を散らす明るい雲と、その真ん中に、言葉では言い表せないほどの美しさを放つある男性の姿を見ました。この度重なる幻視は彼女に驚きを与え、　「一体誰が、この男性にそのような美しさを与えたのか？　どのような美徳によって、彼はこれほど偉大な栄光に浴したのか？」と自問させるのでした。　こうした思索にふけっている最中、まるで彼女に語りかけるような声が聞こえてきた。「あなたが驚嘆しているその男性は、謙遜と柔和さが結びついた姿によってこのように飾られているのだ。知っておきなさい、これらの美徳を通じて、あなたも同じ境地に達するのだと。」

毎日、その不思議な光景を仰ぎ見ながら、修道女は謙遜と柔和さをもって自らを飾ることに熱心に励み、この点において彼女に匹敵する人物を見つけるのは困難であった。　彼女には怒りや高慢の痕跡が微塵も見られず、他の美徳においても優れていた。それゆえ、罪に曇らされていない彼女の心の目は、天の不思議な現象を仰ぎ見ることができたのである。同時に、主は彼女に奇跡を行う賜物も授けられた。　ある日、彼女が一人で敬虔な思索にふけっていたとき、目をひどく痛めている男が彼女のところへやって来て、神に彼のために祈ってほしいと頼んだ。彼女は謙虚に、まるで彼を慰めるかのようにこう言った。

「私も同じように目の病に苦しんでいます。あなたも耐えてください。そうすれば、神があなたを助けてくださいます。」

しかし、その男は彼女から離れようとはせず、信仰をもって癒やしを懇願し続けた。そこで、聖アファナシアは彼に手を置いてこう言った。

「生まれつき盲目だった者を癒やされた私たちの主イエス・キリストよ、兄弟よ、あなたにも完全な癒やしをお与えください。」

すると、その男はたちまち病から解放された。聖アファナシアの誉れは国中に広まり、多くの病人が修道院を訪れ、聖女の祈りによって癒やされた。　聖ステファノ教会に併設して、聖女アファナシアはさらに三つの教会を建立した。一つは至聖なる神の母の名に、もう一つは聖ヨハネ・洗礼者の名に、そして三つ目は聖ニコラオス・奇跡行者の名に捧げられたものである。　特に聖母マリアの教会を美しく飾り立て、その建設に必要なものはすべて、聖女を深く尊敬する敬虔な人々から提供された。

しかし、人々からの称賛や敬意、そして参拝者による窮屈さが、彼女の中に不満と、どこか別の場所で人目を避けて過ごしたいという願望を生み出した。彼女は二人の姉妹、マリーナとエウプラクシアを連れて、密かにコンスタンティノープルへと去り、そこである女子修道院に七年間滞在した。　自らの労苦によって築き上げた、愛する聖母マリア教会を深く恋しく思い、彼女はしばしば涙ながらにこう語った。

「人々の束縛と虚しい崇拝が、私を私の主である聖母マリアの教会から遠ざけました。虚栄の栄光を避けて、私は彼女の壮麗な聖堂を去り、今やここを放浪者として過ごしています。」

しかし、聖女はそこでも無名のままでいることはできず、ここでも神は御自分のしもべを栄光に輝かせられた。彼女は悪霊を追い出し、病人を癒やすようになったのである。　彼女に関する噂は、エギノス修道院に住む姉妹たちの耳にも届いた。彼女たちは聖アファナシアのもとを訪れ、自分たちと共に元の修道院へ戻るよう懇願した。彼女自身も、ある幻視によってそのように促されていたのである。　聖女はエウプラクシアとマリーナの姉妹たちにこう言った。「私たちもそろそろ帰らなければならない。幻の中で、私は聖母マリアの開かれた教会を目撃し、そこから私たちに『中へ入りなさい』と命じられたのだ。」

そして、コンスタンティノープルを後にし、彼女は姉妹たちと共にエギナ島の自身の修道院へと戻った。そこでは、帰還後まもなく、彼女は重病に倒れ、十二日後に自らの死を知らされた。彼女は、白い衣をまとった二人の男が自分に近づき、書かれた紙片を手渡してこう言うのを見たのである。　「これがあなたの自由だ。これを受け取り、喜びなさい」。幻視から正気を取り戻すと、彼女はまもなく主のもとへ旅立たなければならないことを悟り、それゆえ、12日間、食事も飲み物も摂ることなく、祈りと敬虔な思索にふけった。そして、彼女を取り囲む修道女たちにこう語った。

「歌いなさい、私の姉妹たちよ。絶えず神を賛美しなさい。そうすれば、神は私たちの罪に憐れみをお示しくださるでしょう。」

十二日目が訪れると、聖女は彼女たちにこう語りかけました。

「私を助けてください。もうすっかり衰弱してしまいました。教会へ行って詩篇の朗読を最後まで終えてください。私はもうこれ以上できません。ほとんど力を失ってしまったのですから。」

彼女たちは泣きながら尋ねた。

「どの詩篇まで読み進めましたか？　どこから読み始めればよいのでしょうか？」

彼女は静かに答えた。

「今、第九十篇を読んでいるところですが、これ以上は無理です。」

姉妹たちは去って行き、詩篇の朗読を最後まで読み終えた。その後、彼女たちは戻ってきて、聖女の寝台の前でひれ伏し、自分たちのために最後の祈りを捧げてくれるよう懇願した。聖女は皆のために祈りを捧げ、マリーナとエウプラクシアを抱きしめて言った。

「愛する姉妹たちよ、今日、私たちは別れを告げますが、来世において神は再び私たちを結びつけてくださいます。主があなた方に愛の平安と一致の心を授け、その寛大さを注いでくださいますように。」

こうした別れの言葉やその他の言葉を語っている間、彼女の顔は光のように輝き、その場にいた者たちは驚きと畏怖に満たされた。その頃、聖母マリアの被昇天の祝日が近づいており、聖女は姉妹たちにこう言った。

「よく注意して、祝日に必要なものを何も忘れないようにしなさい。礼拝も整然と執り行われ、孤児や貧者、未亡人たちには祝日の食事を用意してあげなさい。そして、神聖な聖体礼儀の後、私のこの貧しい体を大地に委ねてほしい。」

そう言い終えると、彼女は指定された修道女たちを抱きしめ、まるで普段通りの自然な眠りに落ちるかのように、主の御許に召された。彼女はまるで生きているかのようであった。自ら目を閉じ、口を閉じたため、死後に通常行われる儀式を行う必要はなかった。一方、修道女たちは彼女の遺体にすがりつき、自らの孤児となった境遇をこう嘆き悲しんだ：

「どこへ――」と人々は言った。「私たちの聖なる母よ、不死と同じ名を持つ方よ、あなたはどこへ去ってしまったのですか？　まさか、私たちの目の前から姿を消して、私たち孤児を完全に見捨ててしまったというのですか？」　どこで、あなたの天使のようなお顔を再び拝むことができるのか？　どこで、悲しみの際に慰め、善行へと導いてくださるあなたの声を聞くことができるのか？　私たちに活気と希望を注いでくれた灯が消えてしまったのだ！　今、あなたは眠っておられますが、私たちはあなたへの切ない想いで死にそうになっています。もはや、あなたが私たちと共に礼拝に参列し、言葉と自らの模範をもって私たちを教え導く姿を見ることはできません。主はあなたを、御自身の不滅の御国へと迎え入れられました。

彼らは、このような嘆きの中で、尊い修道女の遺体を葬り送った。

至福のアファナシアは、8月14日、至聖なる聖母マリアの被昇天の祝日の前夜に息を引き取りました。そして祝日当日、神聖な聖体礼儀が執り行われた後、姉妹たちの慰めようのない嗚咽の中、彼女は栄光のうちに埋葬されました。　聖女の後を継いで修道院長となった姉妹は、昼夜を問わず彼女の墓から離れようとしなかった。すると、聖アファナシアが夢の中に現れ、こう告げた。「疑うことなく信じてください。私が亡くなってから40日目に、主が私のために用意してくださったものを受け取るのです。」　修道院長は目を覚ますと、その幻視と聖女の言葉が何を意味するのか、戸惑った。40日目の日、修道女たちは、よくあることだが、いつもの追悼の儀式を行うのを忘れてしまい、あと二日後にその日が来ると考えていた。その日の夕方、聖なる修道院長が現れてこう言った。

「なぜ40日目を忘れて、私の追悼のために何もしなかったのですか。貧しい人々に施しをせず、私を偲びたいと願う人々を、本来あるべきように迎え入れなかったのです。」

修道院長は立ち上がり、日数を丹念に数え直して、確かに追悼を行うべき40日目の夕方になっていることを確認した。　翌朝、追悼の儀式が行われた神聖な典礼の最中、神によって心の目が開かれた聖歌隊の指導者である二人の修道女は、教会内で驚くべき光景を目にした。明るい衣をまとった二人の威厳ある男性が、聖アファナシアを連れて教会に入ってきたのである。　彼女を聖なる祭壇の前に立たせると、宝石で飾られた王の紫の衣を彼女に着せ、前後を十字架で飾られた王冠を彼女の頭に戴かせ、同じく宝石で飾られた金の笏を彼女の手に渡し、　その後、彼女を両脇から支え、王の門を通って聖なる祭壇へと導き入れた。

『プロローグ』には、至福のアファナシアについてさらに次のような記述がある。主のもとへ旅立つ際、彼女は姉妹たちに、四十日間の追悼期間中、毎日、貧しい人々のために追悼の食事を用意するよう命じた。しかし、彼女たちはその命令を九日目までしか守らず、その後は止めてしまった。すると、聖女は二人の天使を伴って彼女たちの前に現れ、こう言った。

「なぜ私の遺言を忘れてしまったのですか？　知っておきなさい。40日間にわたり、故人の魂のために捧げられる施しと司祭の祈りは、神を和らげるのです。もし故人の魂が罪深かったなら、主は彼らに罪の赦しを授けてくださいます。もし彼らが義人であったなら、彼らのために祈る者たちは善行の報いを受けるでしょう。」

そう言うと、聖女は自分の杖を地面に突き刺し、姿を消した。姉妹たちは朝起きて、その杖が花を咲かせているのを見て、万物の創造主である神を賛美した。これが『プロローグ』に記されている物語である。

聖アファナシアの帰天から一年後、彼女の追悼の日に、メタフラストの記述によれば、二人の聖職者が、悪霊に苦しめられている女性を連れて修道院を訪れた。　彼らは墓の覆いを外し、土を掘り起こして聖女の遺体が納められた棺そのものを取り出したところ、　、不浄な霊たちはたちまち去り、その女性は健康を取り戻した。　棺からは芳香が漂い、周囲の人々はそこから聖油が滴り落ちるのを見た。そこで棺を開けると、立ち会っていた人々の目に、まるで今まさに眠りについたばかりのような聖女の姿が現れた。彼女の顔は輝きに満ちており、聖油を滲ませる体は柔らかく、手を曲げることさえできた。何一つ腐敗の兆しはなかった。　この光景に、皆の目からは思わず喜びの涙がこぼれ落ちた。聖職者たちは棺を閉じた後、聖遺体を地中に埋葬せず、教会内に公開して安置することを決め、その通りに実行した。その後、新しい墓所を整備し、至福のアファナシアの尊い聖遺体をそこに移した。　一方、修道女たちは聖遺物から羊毛の衣を脱がせ、新しい絹の衣を用意したが、その尊い聖遺物にそれを着せようとしたとき、聖アファナシアの意思に反して、それを実行することができなかった。　彼女はまるで生きているかのように、胸元で両手をしっかりと組み、姉妹たちの意図に抵抗した。彼女は絹の衣を望まず、死後もなお貧しさを愛していたのである。修道女の一人は、その徳高い生涯によって聖霊の選ばれた器となっていたが、ひざまずいて、あたかも生きているかのように尊者に向かって祈りを捧げた。

「私たちの御母よ、生前、私たちと共に過ごされた時、常に疑いようのない従順を示してくださったように、今こそ私たちに耳を傾けてくださり、私たちが捧げるこの謙虚な衣を身にまとってください。」

彼女が祈り終えると、聖アファナシアは彼女の願いを聞き入れ、なんと奇跡のことか！　起き上がって座り、衣を受け取るために両手を差し伸べた。そして、衣を身にまとった後、再び棺の中に横たわった。また、彼女の聖遺物の周りでは多くの奇跡が起こった。あらゆる種類の病気が癒やされ、彼女の聖なる祈りによって悪霊が人々から去っていった。　彼女のすべての奇跡を詳細に記述する時間さえ足りないほどであり、その生涯を読む者や聞く者がこれを残念に思うことはないだろう。たとえ簡潔であっても、やはり有益なこの聖女に関する物語に満足しよう。

そして、至福のアファナシアよ、　不死の名をもって尊ばれ、神聖な天使たちと共に暮らし、福音の教えに従いキリストのために貧しさを選び、神の賜物によって豊かになり、常に涙を流し、何ものにも揺るがされない慰めを見出し、渇きと飢えの中でこの世の生涯を送り、永遠の至福を得た方、　貧しい者たちに慈しみ深く、神に憐れみを受けたあなたよ。心の清さゆえに聖霊の光と魂の平安を受け入れ、地上で聖霊の宮となり、美徳の宝庫となったあなたは、それゆえに天において言い表せないほどの栄光に浴し、　聖徒たちの群れに加わり、彼らと共に至福を分かち合うあなたよ、あなたの徳高い生涯を称え、霊的な喜びをもってあなたの記念を敬う私たちをも覚えてください。この世の荒れ狂う波の中で送られる私たちの生涯に目を留め、あなたの祈りによって義にかなった生き方をし、　悪魔の罠を避け、主イエス・キリストの恵みにより、あなたと共に永遠の至福に与かることができますように。主イエス・キリスト、父なる神、聖霊に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

私たちの尊き父イサアク・シリンの生涯。

記念日：4月12日

聖グリゴリオス・ディオスロス（ローマ教皇）は、助祭ペトロとの対話『[2975] 』の中で、聖イサアクについて次のように語っている。　古代ゴート族の時代、スポレート市の近くには、イサクという名の極めて敬虔な男が住んでいた。彼はゴート族の支配が終わるまでそこに留まり[2976] 、ローマの多くの住民に知られていた。その中でも、ローマの至聖なる聖母マリア教会に住んでいたある乙女グレゴリアは、聖イサクを特に崇敬していた。　若き日、グレゴリアは婚約していたが、結婚の時が訪れると、修道女となることを願い、急いで教会へと駆け込んだ。聖イサクは、彼女を力ずくで教会から引きずり出そうとした親族たちからグレゴリアを守り、神の御加護のもと、彼女を修道女として剃髪させた。　このようにして、グレゴリアは地上の婚約者を拒み、天の婚約者にふさわしい者と認められた。聖イサアクについて、聖　グリゴリウス・ドヴェオスロスは、同聖人と親交の深かった敬虔なエレウフェリウス神父から特に多くのことを学び、彼が聖イサアクについて伝えたことは、その生涯に関する他の記録によっても完全に裏付けられていた。

聖イサアクはイタリア出身ではありませんでしたが、ここでは彼がこの国で成し遂げた奇跡についてのみ記述します。尊者イサアクがシリアからスポレートに到着したとき、彼はまず教会に入りました。　そこで彼は、たとえ教会の扉が閉まった後も、一晩中教会に留まりたいと望んだとしても、好きなだけ教会で祈ることを許してほしいと、聖職補佐たちに頼んだ。そして、祈りを捧げ始めると、彼は休むことなく二日半をそこで過ごした。　　これに気づいた、傲慢な性質を持つある聖堂係――その傲慢さが彼を罪へと駆り立て、聖イサアクに対する不当な憤りを抱かせた――は、聖イサアクを罵倒し始め、名声を得るために三日近くも偽って祈っている偽善者だと罵った。　その後、聖人に近づくと、彼の頬を平手打ちし、偽善者であるとして、不名誉なまま教会を去るよう要求した。　すると直ちに、その聖堂係には罰が下った。神の御許しにより、突然、汚れた霊が彼に襲いかかり、激しい苦痛を与えながら、神の人の足元に倒れ込ませ、「イサクが私を追い出す！」と叫んだ。

その不浄な霊が名前を明かすまで、誰もその巡礼者の名前を知らなかった。聖人は苦しむ者の上に身を屈めると、不浄な霊は即座に彼から離れた。　教会で起きた出来事の知らせは瞬く間に街中に広まり、たちまち男女、貧富を問わず人々が神殿へと駆けつけ、神の御使いを自分の家に招こうとしました。ある者は村や領地を備えた修道院を建てると約束し、またある者は食料や生活に必要なあらゆるものを提供しようと望みました。

しかし、全能の神のしもべは、申し出た者たちのあらゆる約束を拒んだ。町を出て、彼はほど近い場所に人里離れた場所を見つけ、そこで小さな庵を構えた。　ここへ、多くの人々が彼のもとに集まってきた。彼の徳高い生き様を見て、訪れた者の中には永遠の命への愛に燃え上がり、尊者（プレポボド）の指導の下、もっぱら神への奉仕に身を捧げる者も現れた。こうして修道院が設立されたのである。　聖イサアクの弟子たちが、修道院の必要のために彼に捧げられる贈り物を受け取るよう懇願したとき、彼は貧しさを愛する心を固く守り、「財産を得る修道士は、もはや修道士ではない。彼は、裕福な守銭奴が自分の財宝を失うことを恐れるのと同じように、自分の貧しさを失うことを恐れていた」と答えた。

聖イサアクは預言の霊に恵まれており、その奇跡と、光のように輝かしい徳の高い生活のおかげで、その国のすべての住民にその名を知られるようになった。　ある日、日がすでに暮れかけていた頃、彼は修道士たちに、修道院にあるすべての鍬を菜園に投げ込むよう命じました。そして翌日、修道士たちが朝の祈りのために起きると、聖人はこう言いました。「日の出とともに、労働者たちの

[2975] この対話、あるいは会話は、聖グリゴリオス大司教の著名な著作『イタリアの教父たちの生涯と奇跡に関する対話』に含まれており、この著作によって彼は「二語」という異名を得た。 この著作は4巻から成り、神の恵みの助けを借りて敬虔な人々が成し遂げた偉業についての物語が収められている。これらの物語の資料は、聖グリゴリウスが一部はイタリアの教父たちとの自身の会話から得たものであり、一部はシラクーサの司教マクシミリアンから提供されたものである。

[2976] およそ6世紀後半の初め頃、イタリアにおけるゴート族の支配が完全に終焉を迎えた時期である。

ための食事を用意しなさい」。　指定された時間に食事が用意されると、聖イサアクはそれを持ち出すよう命じ、修道士たちと共に菜園へ向かった。そこでは、前日の夕方に投げ込まれた鍬の数と同じだけの労働者がいた。　彼らは泥棒であり、略奪を目的として菜園に忍び込んだのだった。しかし、中に入ると悪意を捨て、そこにあった鍬を手に取り、菜園に忍び込んだ最初の時から、聖なる方がやって来るまで働き続けた。その間に、彼らは菜園の耕されていなかった土地をすべて耕し終えた。彼らのところへ近づくと、聖イサアクはこう言った。「喜びなさい、兄弟たちよ！　一晩中、よく働いたのだから、もう仕事をやめなさい」。持参した食べ物を彼らに分け与え、腹ごしらえをして、労苦から休むよう促した。　彼らが腹を満たすと、聖人は次のように語りかけた。「これからは、悪事を働こうとするあらゆる企みを捨てなさい。もし菜園の作物が必要なら、堂々と入り、必要なものを求め、祝福を受けて持ち帰ればよい。盗みはやめなさい」。　その後、聖人は、彼らが望むだけの春麦を収穫するよう命じた。こうして、邪悪な意図を抱き、罪によって魂を重くしていた者たちは、罪を背負うことなく、祝福を受け、労苦の報いを持って菜園を後にした。　またある時、聖イサアクのもとへ、ぼろぼろの服を身にまとった旅人たちがやって来て、衣服を乞うた。少し待てと命じた後、聖人は弟子の一人を呼び寄せ、ひそかにこう言った。　「修道院の裏にある木立へ行きなさい。そこにある一か所に、空洞のある木がある。その中に見つかる衣服を、取ってここへ持って来なさい」。その兄弟は指示された場所へ向かい、探してみると、確かに空洞の中に隠された衣服を見つけた。それを手に取り、師と二人きりのところで渡した。　衣服を受け取った神の御使いは、旅人たちに「あなたがたは裸なのだから、これを受け取って着なさい」と言って手渡した。彼らはそれを受け取り、それが自分たちがわざと隠しておいた自分の服であることに気づいた。彼らは大きな恥に襲われた。他人の服を騙し取ろうとしたのに、　、結局は自分の服を受け取らざるを得なかったからである。　また、ある敬虔な人が、聖人に自分のために祈ってほしいと願い、使用人を伴って聖人に食事が詰まった二つの籠を送ったことがあった。使用人はそのうちのひとつの籠を道中で隠し、もうひとつを神の御使いのもとへ運び、送り主の願いを伝えた。　黙って籠を受け取った聖イサアクは、その後、使用人に次のように諭した。「私は贈り物を受け取るが、お前は道中で隠しておいた籠に触れる際には、もっと注意するように。そこに蛇が入り込んでおり、もし油断して手を伸ばせば、お前を噛み付くことになるだろう」。　この言葉は召使いを深く恥じ入らせ、一方では恐怖を、他方では、死に至る可能性のあった蛇の存在を知ることができたという喜びを彼の中に呼び起こした。

聖グリゴリオス・ドヴェオスロスは、このようにシリアの聖イサアクについて語っている。彼からは『修道者の言葉』という書が残されており、そこには修道士たちにとって極めて有益な教えが込められている。　彼はその生涯において、神から永遠の命の書に名を記される栄誉に浴し、聖徒たちの群れと共に、生ける御言葉である父なる神の御子キリストの御前に立っている。父と聖霊と共に、御子に永遠の栄光あれ。アーメン。

聖殉教者ジノン、ヴェロニアの司教の記念日

記念日：4月12日

聖ジノンはギリシャ人で、シリアの出身であった。キリスト教の教育を受けることを志して諸国を巡る旅の末、イタリアにたどり着き、ヴェローナという町に定住した[2977]。この町の住民たちは、聖人の徳高い生き様を見て、彼を自分たちの司教に選んだ。

当時、キリスト教徒への迫害はすでに終息していたものの、至る所には依然として多くの異教徒がおり、ジノンは彼らをキリスト教の教えの光で啓蒙した。　さらに、彼はアリウス派との闘いを

[2977] ヴェローナは、紀元前1世紀に築かれたイタリアで最も古い都市の一つである。現在、ヴェローナはイタリア有数の要塞都市となっている。

余儀なくされました[2978] 。この闘いにおいて、彼は正統信仰の真理を堅く告白する者であり、アリウス派を庇護した皇帝コンスタンティウス[2979] やヴァレントゥス[2980] による正統派への迫害にもかかわらず、その信仰から決して退くことはありませんでした。

神の教会のために多大な労を惜しまず、また十分な期間にわたって信徒たちを導いた後、聖ジノンは安らかに主のもとへ帰った[2981] 。

その偉大な功績により、聖ジノンは神から奇跡を行う賜物を授かりました。聖グレゴリウス大教皇は、558年の聖人の記念日に起こった次の奇跡について語っています。

この年、イタリアでは未曽有の大洪水が発生した。イタリアの主要河川であるテヴェレ川が氾濫し、ローマ周辺一帯が水に浸かった。 ヴェローナ市の近くを流れるアテシス川もまた氾濫し、その水は聖ジノンのために建てられた教会を取り囲み、ますます水位が上昇して、ついには教会の窓の高さまで達した。 教会の扉は開かれていたが、水は教会内には入り込まず、まるで扉の前に壁のように立ちはだかった。そのため、教会内にいた多くの人々が扉に近づき、自分の手で水を汲んで喉の渇きを癒した。

神の御心にかなう者ジノンの祈りによって、他にも多くの奇跡が成し遂げられた。

私たちの尊い父、殉教者ヴァシレイオス、パリオス司教の記念日

記念日：4月12日

パリア、すなわち小ミシアの古都には、キリスト教が広まって以来、キジケの総主教に属する司教座が設けられていた。パリアの司教たちの中には、その高潔で神に喜ばれる生涯により司教に選出された聖ヴァシレイオスも名を連ねている。 偶像破壊の異端が台頭した際、聖ヴァシレイは真のキリストの殉教者としての姿を示した。異端者たちとの一切の交わりを避け、自らの教区内での彼らの活動を許さず、あらゆる強制にもかかわらず、聖像破壊に関する書面による決議への署名を拒んだ。 この信仰への熱意ゆえに、彼は異端者たちからの迫害と侮辱に耐えざるを得ず、使徒パウロのように、苦難、災い、窮屈な生活を送り、絶えずある場所から別の場所へと移り住んだ。 その敬虔さと教会の教義の純潔を守ろうとする志ゆえに、聖ヴァシリーは異端者たちの不敬虔な公会議を憎まずにはいられず、それゆえ、彼らとは一切の交わりを持ちませんでした。その生涯をもって主に喜ばれた聖ヴァシリーは、安らかに主のもとへ旅立ちました。

聖アンフサの記念日。

記念日：4月12日

聖アンフサは、父親から長い間結婚を勧められていたが、彼女はそれに同意しなかった。そして、父親の死後[2982] 、身が自由になると、全財産を貧しい人々や教会、修道院に施した。彼女は多く

[2978] アリウス派は、神の御子は父なる神と等しくなく、神の被造物であると教えた。この異端の創始者は、アレクサンドリアの長老アリウスであった。彼の教義は、325年にニカイアで開催された第1回全地公会議で非難された。

[2979] ローマ皇帝コンスタンティウスは、353年から361年まで在位した。

[2980] ヴァレントは364年から378年までローマ帝国を統治した。

[2981] 殉教者ジノンの死は380年頃であった。聖ジノンは、様々な宗教的・道徳的問題に関する16の長い説教と77の短い説教、あるいは対話といった著作を遺した。

[2982] コンスタンティノス・コプロニモス皇帝は775年に死去したが、743年に義理の息子アルタバズドの後を継いで即位していた。

の孤児たちの母であり、未亡人たちの守り手であった。 敬虔なイリーナ皇后[2983] は、何度も彼女に自分と一緒に暮らし、帝国の統治に参加するよう強く懇願したが、彼女は断固としてこれを拒んだ。 宮殿に滞在している間、彼女は外見上は王女の豪華な衣装を身にまとい、その下には羊毛の衣[2984] を着て、質素な食事を摂り、水だけを飲み、その目には常に涙を浮かべ、口には教会の聖歌を歌い続けていた。 その後、オモニオス修道院[2985] で聖タラシオスの手によって修道誓願を立て、彼女は修道女となり、それ以来、自ら修道院から出ることはなく、他の姉妹たちにもそれを許さなかった[2986] 。 教会の礼拝を一つも欠かすことなく、休息も惜しんで、彼女は祈りにおける活力を失うことなく、祈りの徹夜も怠ることなく、その間も悔い改めの涙が常に彼女の目から流れ落ちていた。 彼女の謙遜は計り知れないほど深く、すべての修道女に仕え、教会を掃除し、水を運び、食事の時には決して食卓に着くことなく、他の者たちの世話をしていた。

このように生涯を全うし、尊者様は数えで52歳[2987] の年齢で、豊かな徳を携えて主のもとへ召されました。

- 同日は、パレスチナでサラセン人の矢に貫かれて殉教した聖殉教者ミナ、ダビデ、ヨハネの記念日である。

4月26日

4月13日（旧暦）

聖司祭殉教者アルテモンの殉教

記念日：4月13日

ディオクレティアヌス帝の治世下、キリスト教徒に対する大迫害が起こった[2988] ：ローマ帝国のすべての都市や地方に拷問官が派遣され、キリスト教徒に犠牲を捧げ、偶像を崇拝するよう強要し、これに抵抗する者は処刑や死に処された。

[2983] レフ・ホザールの妻であるイリナ皇后は、息子のコンスタンティノス・ポルフィロゲネトスが幼少であったため、780年から802年にかけて国政を執った。聖像の熱心な崇敬者であった彼女は、教会において聖像崇敬の教義を確立した第7回全地公会議の招集を後押しした。

[2984] ヴラサニツァとは、馬の毛を編んで作られた下着であり、修道士たちが裸の体に直接身につけていたものである。

[2985] オモニオス修道院はコンスタンティノープルにありました。その教会で第2回全地公会議の会議が行われたことで知られています。

[2986] 聖アンフサは、コンスタンティノープルの聖エウフィミア修道院で修道誓願を立て、その後オモニオス修道院に移り、そこで修道院長を務めた。

[2987] 聖アンフサは811年4月12日に逝去した。

[2988] ディオクレティアヌス帝の治世（284年から305年）には、キリスト教徒に対する4つの勅令が発布された。最初の勅令は303年2月に公布された。この勅令により、教会の破壊と聖書の焼却が命じられたほか、キリスト教徒は市民権、名誉、法の保護、および公職を剥奪された。 キリスト教徒の奴隷は、何らかの事情で自由の身となった後もキリスト教を信仰し続ける場合、自由の権利を失うこととなった。まもなく第二の勅令が発布され、すべての教会の司祭やその他の聖職者を投獄するよう命じられた。このように、この勅令は聖職者にのみ適用されるものであった； 彼らは、最初の勅令の発布直後に始まった（キリスト教徒にとって不幸なことに）シリアおよびアルメニアでの反乱の首謀者として、皇帝の前で告発された。同年303年には第三の勅令が続き、第二の勅令に基づいて投獄された者全員に対し、抵抗すれば拷問を受ける恐れがあるとして、犠牲を捧げるよう強制することが命じられた。 ついに304年、最後の第4の勅令が公布され、キリスト教徒に対する全面的な迫害が宣言された。この伝記で言及されている「大迫害」は、明らかに第4の勅令に続いて起きた迫害を指している。 この勅令によって、最も多くのキリスト教徒の血が流された。この勅令は、311年にガレリウス皇帝が特別勅令によりキリスト教を公認の宗教と宣言するまでの、実に8年間にわたって施行された。ディオクレティア

とりわけ、パトリキウスという名の使者がラオディキア地方にもやって来た[2989] 。そこで彼は、ためらうことなく、王の命令の遂行に取りかかった。　パトリキウスが到着する前から、その近々の来訪を知ったラオディキアの司教、至福のシシニウスは、聖なる長老アルテモンと数人のキリスト教徒を伴い、夜陰に乗じて女神アルテミスの神殿[2990] に潜入し、そこにあったすべての偶像をまず打ち砕き、その後焼き払った。　その後、街から五ポプリスの距離にある自身のキリスト教教会に戻ると、彼はいつもの礼拝を執り行い、信徒たちに次のような訓示を与えた。

「わが子らよ、キリスト教徒を虐殺するために反キリストがこの町に近づいているという噂が流れている。恐れてはならない。火であれ、剣であれ、獣であれ、その他の残酷な死刑であれ、いかなるものも、あなたがたをキリストの愛から引き離すことはできないのだ。」

パトリキウスが街に到着すると、まずアポロンの神殿で生贄を捧げた。その日、彼は民衆のために見世物を催し、キリスト教の信仰を禁じる王の勅令を公布した。　五日間にわたる見世物や狩猟の宴の後、パトリキウスはアルテミスに犠牲を捧げようとしたが、その神殿に入ると、驚いたことに、そこには偶像が見当たらなかった。

「それらはどこにあるのか？」と彼は尋ねた。

周囲にいたギリシャ人の何人かが、アルテミスの像やその他の偶像は、シシニウス司教が、その司祭アルテモンや他のキリスト教徒たちの協力を得て破壊したと答えた。パトリキウスが、司教とキリスト教徒たちは今どこにいるのかと尋ねると、すべてのキリスト教徒が自分たちの教会に集まっていると告げられた。　パトリキウスは直ちに馬にまたがり、武装した兵士たちに護衛されてキリスト教の教会へと向かった。彼はキリスト教徒たちを殺害し、シシニウスとアルテモンを四つ裂きの刑に処すつもりだった。　しかし、パトリキウスが旅の目的地に近づき、教会まであと一ポプリスほどしか残っていないという時、突然、激しい震えに襲われて馬から転落した。その震えは激しい熱に変わり、パトリキウスは担架に乗せられて、道端で最初に見つけた家へと運び込まれざるを得なかった。　夜、ろうそくを手に座り、上司の死を待つ兵士たちに囲まれながら、彼は最も親しい家来たちにこう言った。

「キリスト教徒たちは私を呪い、彼らの神が私を苦しめている。」

彼らはこう答えた。

「強き神々と、光り輝く女神アルテミスが、あなたに健康を取り戻させてくださるでしょう。」

激しい痛みに苛まれ、もはや生き延びることを諦めていたパトリキウスは、兵士たちにこう言った。

「キリスト教の教会へ行き、シシニウス司教にこう伝えよ。『王の使節パトリキウスはこう言う。キリスト教の神は偉大だ！　私の重い病から解放されるよう、神に祈ってくれ。そうすれば、私は金であなたの像を作り、それを街の中心に据える』と。」

兵士たちは行って、パトリキウスの言葉を司教に伝えた。司教は、次のような返答を伝えるよう命じた。

「お前の金は、お前の手元に残しておけ。もし我らの主イエス・キリストを信じるなら、お前は健康になるだろう。」

パトリキウスは再び使者を司教のもとへ送り、こう言った。

「あなたの神を信じよう。ただ、私が癒やされるなら。」

ヌスの迫害は最後のものであり、この迫害において、キリスト教は3世紀近くにわたる闘争の末、異教に対して決定的な勝利を収めた。

[2989] この地域は小アジアにある。

[2990] アルテミス――ギリシャ神話における狩猟の女神で、元来はおそらく月の女神であった。

司教は彼のために祈りを捧げると、たちまちパトリキウスは健康を取り戻し、病から完全に解放された。

回復してから数日後、パトリキウスはパレスチナの都市ケサレアへと向かった。　ラオディキアからおよそ三ポプリスほど離れたところで、彼は祈りを終えて帰路につく聖なる長老アルテモンに出くわした。アルテモンはキリストの御言葉によって野獣を捕らえており、彼の後には二頭の鹿と六頭の野生のロバが続いていた。　聖アルテモンは、自分の庭に野生動物を飼いたいと強く願っていたシシニウス司教のもとへ、それらを連れて行っていた。パトリキウスは戦車を止めさせ、神の僕アルテモンに尋ねた。

「どうやってこれらの獣を捕まえたのか？」

「私は、私のキリストの言葉で捕まえました」と彼は答えた。

「どうやら」とパトリキウスは再び尋ねた。「お前は、老いぼれよ、キリスト教徒なのか？」

聖アルテモンはこれに対し、こう言った。

「私は若い頃からキリスト教徒です。」

そこでパトリキウスは、聖人を二本の鎖で縛るよう命じ、二人の兵士に聖アルテモンをケサリアまで連れて行くよう指示した。これ以上進むことができなかった聖アルテモンは、後をついてくる獣たちに向き直り、シシニウス司教のもとへ行くよう命じた。　獣たちはそこへ向かい、教会の塀の門の前で立ち止まった。司教は門番に尋ねた。

「これらの獣たちはどこから来たのか？」

神から言葉を授かった鹿の一頭が言った。

「神のしもべアルテモンは、不敬虔な王の使節に捕らえられ、今、縛られたままケサリアへと連行されています。そして彼は、私たちをあなたのもとへ遣わしたのです。」

司教は、鹿から人間の言葉を聞いたことに愕然とし、同時に聖アルテモンが捕らえられたことを知って悲しみに沈んだ。彼は助祭フィレアを呼び寄せ、こう言った。

「新たな奇跡が現れた！今、君の目の前にいるこれらの獣のうち、一頭の鹿が人間の言葉で私に伝えたところによると、神のしもべアルテモンは不敬虔なパトリキウスに捕らえられ、縛られたままケサリアへと送られているという。　言葉を話す能力を持つ鹿を見て恐怖を禁じ得ず、またアルテモンに起きた出来事を思うと悲しみに打ちひしがれている。プロスフォラを持って、使用人と共にケサリアへ行き、鹿が伝えたことが事実かどうか確かめてこい。

助祭はプロスフォラを受け取り、祈りを捧げた後、使用人に付き添われて旅立った。ケサリアに到着すると、彼は確かにそこに、牢獄に閉じ込められている聖アルテモンを見つけた。心から彼を歓迎し、こう言った。

「至高の神のしもべであり、御言葉の羊の牧者よ。もしあの鹿が司教にこのことを告げてくれなかったなら、私たちはあなたが私たちと引き離され、迫害者の手に落ちたことを今に至るまで知らなかったでしょう。そのため、司教は彼の言葉の真実性を確かめるために私をここに遣わしました。司教はあなたのことを深く案じておられます。」

聖アルテモンはこう答えた。

「行け、神の僕よ。そして、私の主である聖なる司教に、私がキリストのために拷問を受け、牢獄に囚われていることを伝えよ。彼が私のために祈り、私がキリストを憎む拷問者の策略に打ち勝ち、こうしてキリストの共同体の一員となるにふさわしい者とされるよう、祈ってほしい。」

互いに口づけを交わして別れた。助祭は自分のところへ戻り、聖アルテモンは牢獄に残った。助祭が戻って聖アルテモンの言葉を司教に伝えると、司教は涙を流しながらこう祈った。

「主イエス・キリストよ、ダニエルを獅子の口から救い出し、三人の若者をネブカドネザルの火の炉から救われた方よ、あなたのしもべアルテモンを敵対するパトリキウスから救い出し、彼に拷問者の策略を乗り越える力を与え、聖なる殉教者たちの列に加え給え。」

ある日、ケサリアで催し物を開催していたパトリキウスは、聖アルテモンを呼び寄せ、こう尋ねた。

「老僧よ、お前の名は何か、教えてくれ。」

彼は答えた。

「私は、私の神であるキリストの僕であり、アルテモンと申します。」

「偉大なる女神の像を破壊したのはお前か？」とパトリキウスは言った。

「その通りです」と聖人は答えた。

「教えてくれ」とパトリキウスは再び尋ねた。「どうやって女神の力を打ち破り、その像を容赦なく破壊したのか？　なぜ罰を恐れなかったのか？　彼女は、その寛大さゆえに、まだお前の命を奪っていないだけではないか？」

「私の神に祈ることで」と聖人アルテモンは反論した。「私はお前や、お前の苦しみさえも打ち負かすことができる。ましてや、死んで声なき偶像など、なおさら容易に打ち負かすことができたのだ。」

パトリキウスは言った。

「お前の名前――アルテモン――を聞いて、私はお前が女神アルテミスの僕だと思った。彼女と同じ名を持つという理由で、彼女が君の命を救ったのだろう。」

聖アルテモンはこれに対し、こう叫んだ。

「不法で、不敬虔で、心が曇った悪魔の子よ。もし私の名を知りたいというのなら、それが私が母の胎内にいた頃から神によって授けられたものであることを知れ。」

パトリキウスは説得を続け、こう言った。

「老いと白髪に憐れみを持ち、この街の偉大なる神アスクレピオスに犠牲を捧げよ[2991]。」

「十六年間――」と聖人は答えた。「私は私の神の教会で朗読者であり、二十八年間は助祭として聖なる福音書を読み上げ、　三十三年間、私は長老の位にあり、キリストの助けを借りて人々を救いの道へと教え導いてきた。それなのに今、あなたは私に、あなたに倣って、無感覚な偶像の中に宿る悪魔に捧げ物をせよと要求する。とはいえ、私はあなたの神を見て、その力を試してみたいと思う。

パトリキウスは言った。

「アスクレピオス神は偉大な力と栄光を備えている。神殿の門前で祈りを捧げながら香を焚かない者は、中に入ることはできないのだ。」

アスクレピオスの神殿には蛇が棲んでおり、年に一度、祭司たちがそれらに甘い食べ物を捧げていた。

「アスクレピオスの神殿へ行こう」と聖アルテモンは言った。「もし彼が私を中に入れることを許さないなら、私が彼に香を捧げてやる。」

そして、聖人がパトリキウスや民衆に付き添われてアスクレピオスの神殿に近づいたとき、蛇たち――より正確には、そこに宿っていた悪霊たち――は、キリストの力に満たされた殉教者の接近に耐えかね、神殿の中で恐ろしい唸り声を上げ、大混乱を引き起こしたため、神殿はまるで風に揺れる木のように揺れ動いた。　これを見たパトリキウスと民衆は恐怖のあまり逃げ出した。パトリキウスは聖人にこう言った。

「見よ、アスクレピオスの力はなんと偉大か。彼には、あらかじめ香を捧げない限り、誰もその元へ近づくことを許さないのだ。」

「祭司に命じて、私がそこに入れるよう神殿を開けさせてくれ」と、聖アルテモンはパトリキウスに頼んだ。

[2991] アスクレピオス（またはアスクレピイ）は、医療の神である。

パトリキウスは、ある祭司にそうするよう命じた。ヴィタリウスという名の祭司は、パトリキウスに向かってこう言った。

「あなたの尊き御前に申し上げますが、アスクレピオス神の怒りは甚大であるため、祈りを込めて香を捧げるまでは神殿を開くことはできません。」

香炉を手に取り、いつものように香を捧げると、彼は神殿の扉を開け、すぐにその場から逃げ去った。すると、少し離れた場所に立っていたパトリキウスは、聖人にこう言った。

「老僧よ、もし中に入れるなら、入って見よ！」

聖アルテモンは扉に近づき、十字を切って恐れずに中へ入ると、蛇たちは動かなくなった。聖人は真の神に向かって、次のような祈りを捧げた。

「わが主なる神よ、御自分のしもべダニエルを通してバビロンのヴィルを打ち砕き、蛇を殺されたあなたよ。今、御力によって、この罪深い私を通して、これらの蛇の頭を打ち砕き、あなたの聖なる御名が賛美されますように！」

その後、彼は蛇たちに誰にも害を与えてはならないと命じ、自分についてくるよう命じて、蛇たちと共に外へ出た。神殿から出てきた蛇たちを見た民衆とパトリキウスは恐怖に駆られ、逃げ出した。聖アルテモンは彼らの後を追って叫んだ。

「なぜ逃げるのですか？恐れることはありません。立ち止まって、今、私が信じる真の神の力によって、これらの蛇があなたの目の前で死ぬ様子を見てください。」

そう言って彼は蛇たちに息を吹きかけると、蛇たちはたちまち死んで、まるで雷に打たれたかのように彼の足元に倒れ伏した。そして聖アルテモンはパトリキウスに言った。

「ご覧なさい。あなたがたが崇めている神々が、私たちの主イエス・キリストの父なる神の力によって死んだのです。」

民衆もパトリキウスも、何の道具も使わずに蛇が殺されるのを見て恐怖に震えた。そのうちの1匹は、幅が5キュビト、長さが25キュビトもあるほど巨大だった。すると、祭司ヴィタリウスは大声で叫んだ。

「キリスト教の神は偉大であり、この男もまた偉大だ。たった一息でこれらの蛇を殺したのだから！」

そして、聖人の足元にひれ伏して、こう言った。

「天の主のしもべよ、私はあなたから離れません。懇願します。あなたの神の力によって、私も御加護を賜り、あなたの群れの完全な羊とならせてください。これまで私は惑わされ、偶像やこれらの蛇を信じていましたが、今や真の神を知りました。」

一方、不信心なパトリキウスは、魂が盲目であったため、これほど偉大な奇跡を目の当たりにしたにもかかわらず、真の神を知ることを拒んだ。彼は、聖アルテモンが蛇を殺したのは神の力ではなく、魔術の力によるものだと考えていたのだ。　恥に耐えられず、自らの恥辱と蛇の殺害に対する怒りに満ちた彼は、聖なる殉教者を再び捕らえさせ、拷問を行うための不当な裁判にかけるよう命じた。そこで彼は怒りを込めて聖人にこう言った。

「もし、偉大なる女神アルテミスと輝かしいアポロンの蛇を、どのような力で殺したのか[2992]を明かさないなら、お前をバラバラに切り刻んでやる。」

「キリストの力と、神から遣わされた大天使ラファエルの助けを借りて、私はあなた方の蛇を殺したのだ」と、聖アルテモンは答えた。

「ユダヤ人に十字架にかけられた者が、そのような力を持つことができるだろうか？」とパトリキウスは疑いを抱いた。

すると、聖人は叫んだ。

[2992] アポロン――太陽の神であり、芸術の守護神である。

「悪意に狂った者よ、地獄の相続人であり、古の蛇よ。お前はすでに聞いたはずだが、もう一度聞け。私の神の力によって、お前の蛇たちは死んだのだ。」

この言葉を聞いたパトリキウスは激怒し、鉄のフライパンを熱く焼くよう命じた。そして、裸の殉教者をその上に引きずり出し、赤熱した鉄の棒で突き刺し、鋭い鉄で性器を切り落とすよう命じた。その際、彼は聖アルテモンにこう言った。

「見よ、不従順な老いぼれよ、お前の肉体がどれほど苦痛に苛まれているか。」

すると、殉教者は天を仰ぎ見て、こう祈った。

「主イエス・キリストよ、異教徒があなたのしもべである私を嘲笑うことを許さないでください。私があなたのために苦しみを受けていることを、あなたはご存知です。この苦しみ耐え抜く忍耐を私に与えてください。そうして、敵を恥じ入らせてください。」　神よ、私の祈りを聞き入れ、私の嘆願を受け入れてください、サバオットの神よ！あなたは天と地を創造し、全宇宙に奇跡を成し遂げられました。あなたは万物の主であり、あなたに抗う者は誰もいません。あなたの憐れみによって、私を救ってください、主よ。　あなたは、不当に殺された無邪気な少年アベルの無実を明らかにし、あなたの御心に適う者エノクを天に迎え入れて報い、ノアを箱舟の中で守り、祝福によって祭司メルキゼデクを高く上げられました[2993]、あなたはアブラハムの捧げ物によって彼を栄光に輝かせ、ヤコブの子孫を増やし、ソドムのロトを火から救い出し　、ヨブの忍耐によって彼を高められました。あなたの助けにより、ヨセフは肉欲に打ち勝ち、敵に勝利しました。　あなたのしもべモーセと、あなたが御力を現してその敬虔さを示されたすべての義人たちは、彼らを栄光に輝かせた神であるあなたを賛美しています。主よ、私もあなたのしもべとして、あなたに祈ります。あなたの憐れみによって私を憐れみ、あなたの力によって私をお助けください。

聖人が祈りを捧げている最中、ラオディキアで司教に人間の声で語りかけたあの鹿が、ケサリアへと駆け込んできた。人で溢れかえる広場へと出てくると、鹿は殉教者の尊い足元にひれ伏し、その足を舐めた。　その後、神の御命により、不義な者を糾弾し、その恥をさらすための言葉の賜物を再び授かった彼は、パトリキウスの前に立ちはだかり、こう語り始めた。

「知れ、不信心者よ、神にとって不可能なことは何一つない。御自身の力を示すために、神は言葉を持たない者にも言葉を授けることができるのだ。　知れ、神のしもべアルテモンはまもなく苦しみから解放されるが、お前は、義人を非人道的に苦しめ、かつて真実であると認め、信仰を捧げた神から背を向けた罪により、二羽の鳥に捕らえられ、沸騰する大釜に投げ込まれることになるのだ。

野獣に化けるという告発を単なる魔術としか見なさなかった不信心なパトリキウスは激怒し、兵士たちに鹿を殺すよう命じた。　そのうちのひとりが槍を手に取り、力を込めて殉教者めがけて投げつけたが、鹿は跳び退き、槍はパトリキウスの側近の一人に当たり、その腹を貫いて即死させた。パトリキウスはその側近の死を惜しみ、殉教者を再び牢獄へ連れ戻すよう命じて、裁判の場から自宅へと退いた。

翌朝、彼は大きな大釜に樹脂を満たして煮沸させ、殉教者を頭からその中に投げ込むよう命じた。命令が実行されると、パトリキウスに準備が整ったことが報告された。　彼は聖アルテモンの処刑を自らの目で確かめようと、馬にまたがり大釜へと向かった。しかし、彼がすでに大釜に近づいたその時、鷲の姿で天から降りてきた二人の天使がパトリキウスを捕らえ、沸騰する樹脂の中に投げ込んだ。その熱で、彼の骨さえも溶けてしまった。　兵士や民衆はこの光景を見て恐怖のあまり逃げ散った。一方、大釜の前に連れてこられた聖人は一人残され、神を賛美し続けた。彼はひざまずいて祈

[2993] 聖アルテモンはここで、旧約聖書の歴史における次の出来事について言及している。アブラハムが、親族のロトを捕虜にした王たちを打ち破って帰還した際、サリムの王であり、至高の神の祭司であるメルキゼデクが、パンとぶどう酒を持って出迎え、アブラハムを祝福した（創世記 14:1–20；　ヘブライ人への手紙 7:1）；この祝福には、アブラハムに対するメルキゼデクのより高い位階が表れており、聖使徒パウロは次のように述べている。*「異論の余地なく、小さい者は大きい者から祝福を受けるのである。」*（ヘブライ人への手紙 7:7）。

りを捧げると、立っていた場所から泉が湧き出た。　そこへ、司祭ヴィタリーや他の多くの異教徒たちが彼のもとを訪れた。彼らはキリストの信仰を教えられ、皆、聖アルテモンから洗礼を受けた。

その夜、聖なる殉教者の上に天からの声が響いた。

「この町を離れ、アジアの、ヴーリという名の海岸沿いの地へ行きなさい。そこではアレクサンドロスとその母ピロニアに出会うだろう。彼らと共に、あなたは多くの人々を悪霊から救い、病を癒やすことになる。そして、キリストの教えの光によってあなたから啓発された多くの人々が、神を賛美するだろう。」

朝になると、新たに改宗した者たちが皆、聖人のもとへ集まった。聖人は聖なる秘跡を取り、彼らにキリストの尊い御体と尊い御血を授けながら、こう言った。

「このパンはキリストの御体であり、この杯はあなたがたの魂のために流されたキリストの御血である。子らよ、あなたがたのうち誰一人としてキリストの愛から離れることのないよう気をつけなさい。信仰において揺るぎないままでいなさい。そして、私はアジアへ行くよう命じられている。」

一方、ケサリアの司教は、聖アルテモンに起こったすべての出来事を聞き、彼が多くの人々を洗礼し、福音を宣べ伝えて教えていることを知ると、キリスト教徒たちを連れて彼の元を訪れ、口づけをして彼を歓迎した。　その後、祈りを捧げた上で、殉教者が苦しんだ場所を聖別し、後にそこに教会を建てた。また、聖アルテモンによって洗礼を受けた者たちの中から、ある者たちを長老に、他の者たちを助祭に任命し、ヴィタリウスを司教に任命して、パレスチナ地方を彼の管轄下に置いた。聖アルテモンは、司教や民衆に別れを告げ、指示されたアジアの地へと向かった。道中、彼は天使によって連れ去られ、幻の中で示された場所に置かれた。そこで、神の御力により、彼は多くの偉大な奇跡を行い、多くの人々を主のもとへと導き、福音の真理を教えた。　説教の最中、聖アルテモンは異教徒たちに捕らえられ、剣によって斬首された後、私たちの神キリストから冠を受けるために永遠の住まいへと旅立った。キリストに、父と聖霊と共に、世々限りなく栄光と礼拝があるように。アーメン。

聖殉教者トマイダの記念日。

記念日：4月13日

聖殉教者トマイダは、アレクサンドリアの町で敬虔な両親の間に生まれ、両親は娘に真のキリスト教的な教育を与え、書物の読み方を教えました。　十五歳の時、両親は彼女をあるキリスト教徒の青年と結婚させました。夫の家では、聖トマイダは清らかに暮らし、貞潔、柔和、悪意のなさ、その他の善良な人柄によって、皆から尊敬されていました。彼らと同じ屋根の下には、聖トマイダの夫の父、すなわち彼女の義父も住んでいました。　彼は嫁の美しさに魅了され、肉欲に駆られて、サタンの仕業により、彼女に対して邪な企みを巡らせていた。彼は彼女と罪深い時間を過ごす好機を伺っていたが、見つからなかったため、毎日、父親としての愛情を装って彼女を抱きしめ、口づけをするにとどめていた。　一方、聖トマイダは、その貞潔さゆえに、義父に不純な思惑があるとは微塵も疑わず、したがって、彼からのそのような振る舞いに何ら不適切な点を見出さなかった。　彼女は、それが娘に対する彼の愛情から生じていると確信しており、義父を父親として敬っていたため、彼に対してはとりわけ厳格な慎み深さをもって振る舞っていた。

聖トマイダの夫は漁師でしたが、ある夜、同僚たちが訪ねてきて、彼を漁に連れ出しました。息子が家を空けた隙に、その父親が聖トマイダのもとへやって来て、彼女を罪へと誘おうとしました。この予期せぬ危険に彼女は恐怖を覚え、狂った老人にこう言い返して抵抗し始めました。

「何をしているのですか、神父様?　十字を切って立ち去ってください。あなたの企みはサタンに唆されたものです。」

しかし、老人は彼女の諭しを聞き入れず、恥知らずな言葉や行動に訴えて彼女を誘惑しようとした。一方、聖トマイダは、神への畏れと貞潔に満ちており、義父に対して断固として抵抗した。彼女は祈りを捧げ、その不法で不敬虔な欲望を捨て去るよう彼を説得した。　しかし、彼女が彼に抵抗すればするほど、彼はますます執拗に彼女を強要し、まるで火のように燃え上がる不浄な情欲に駆られていった。寝台の上の壁には剣が掛けられていた。老人はそれを取り外し、鞘から抜くと、聖トマイダを威嚇し始め、次のような脅しを浴びせた。

「もし私の言うことを聞かなければ、この剣で君の首を刎ねてやる。」

すると彼女はこう答えた。

「たとえ私をバラバラに切り刻んだとしても、私は決してそのような不法な行いに同意することはありません。」

老人はこの言葉を聞いて激しい怒りに駆られ、義理の娘を剣で激しく打ちつけ、彼女を真っ二つに切り裂いて殺してしまった。　福者トマイダは、自らの魂を神の御手に委ね、その清らかさと貞節のゆえに栄光ある殉教の冠を受けた。彼女は自らの血を流すまで罪と戦い、神の律法のために魂を捧げた。神を怒らせ、自らの肉体や夫の寝床を汚すよりは、むしろ死ぬことを選んだのである。

一方、殺人者には直ちに神の罰が下った。魂が盲目となった彼は視力を失い、剣を投げ捨てて出口を探した。家から出て跡形もなく逃げ去ろうとしたが、壁を手探りで探しても出口を見つけることができず、そのためその部屋にとどまることを余儀なくされた。　その間、他の漁師たちがやって来て、ドアを叩きながら、彼の息子を漁に誘った。すると父親はこう答えた。

「息子はもう釣りに出かけてしまった。出口がどこにあるのか分からないので、教えてくれ。」

彼らはドアを開けて中に入ると、血まみれの腕と服をまとった老人が手探りで出口を探そうとしている姿と、血の海に横たわり、真っ二つに切り裂かれた妻の姿を目にした。その光景に彼らは恐怖に襲われ、こう尋ねた。

「これはどういうことですか？　誰が、なぜこのような残虐な行為を犯したのですか？」

すると、老人は自分の罪について語り、その罪にふさわしい罰を受けるために、自分を裁判官のもとへ連れて行ってほしいと頼んだ。　聖トマエダの夫が仕事から戻り、この出来事を知ると、計り知れない悲しみと恥を感じた。彼は貞節な妻を悼み、神を恐れず卑劣な犯罪を犯し、白髪に恥を被せた自分の不義な父を恥じたのである。　老人は裁判にかけられ、剣による斬首の刑に処された。そして、殺害された女性の遺体の周りには、アレクサンドリアの住民たちが大勢集まってきた。彼らは皆、この信じがたいほど恐ろしい出来事に驚き、聖トマイダの貞潔を称賛した。

ちょうどその頃、アレクサンドリアにはスキトスの聖ダニエルが滞在していた。彼は弟子にこう言った。

「わが子よ、行って聖なる乙女を見てこよう。」

その願いを叶えるため、二人はオクトデカトス、すなわち第八十修道院へと向かった。その修道院の修道士たちは、尊い父を敬意をもって迎え、心から歓迎した。聖トマイダの苦難について彼らに語った後、彼は次のように命じた。

「行って、彼女の尊い遺体をここへ運んで来なさい。その遺体は世俗の人々と共に横たわるべきではなく、尊い修道士たちと共に安置されるべきだからである。」

修道者たちの中には、女性の遺体を聖なる父たちと共に安置するという命令に憤りを感じた者もいた。それに対し、尊師は彼らにこう言った。

「あなたがたがここに運びたがらないこの乙女は、私にとっても、あなたがたにとっても母である。彼女は貞潔を守るために亡くなったのだから。」

そこで修道士たちは、もはや聖なる父に逆らうことを敢えてせず、行って聖トマイダの遺体を受け取り、修道院の納骨堂に尊厳をもって埋葬した。その後、すべての長老たちに別れを告げ、聖人は弟子と共に自身の隠遁所へと去っていった。

その修道院のある兄弟は、肉欲の誘惑による激しい攻撃に苦しんでいた。彼は尊者ダニエルのもとを訪れ、肉欲との激しい闘いを打ち明けた。尊者は彼にこう言った。

「オクトデカト修道院へ行き、そこの修道院の納骨堂でこう祈りなさい。『神よ、殉教者トマイダの祈りによって、私を助け、淫らな情欲から私を救い出してください！』神を信頼しなさい。そうすれば、あなたは誘惑から解放されるでしょう」と、尊者である師は付け加えた。

その兄弟は行って、聖ダニエルが命じたことをすべて忠実に実行し、実際に肉欲の誘惑から完全に解放された。スキートに戻ると、彼は聖ダニエルの足元にひれ伏し、こう言った。

「聖殉教者トマイダの祈りと、父上のお祈りによって、神は私を淫らな欲望から救ってくださいました。」

長老は尋ねた。

「どのようにしてそれらから解放されたのか？」

兄弟は答えた。

「十二回の祈りを捧げ、聖殉教者の墓のそばにあるランプの油を身に塗った後、私はその墓に頭を乗せて眠りにつきました。すると、輝く乙女、聖トマイダが現れ、こう言いました。 『父よ、この祝福を受け入れ、平安のうちにあなたの修道室へ帰ってください』と。私はその祝福を受け入れ、目覚めたとき、肉欲から完全に解放されたのを感じました。夢の中で聖女から授かった祝福が具体的に何を意味するのかは分かりませんが、情欲から解放されたことははっきりと自覚しています。」

尊者ダニエルは、兄弟が語り終えた後、こう言った。

「貞潔のために神の前で奮闘する者たちは、これほど大きな大胆さを持っているのだ。」

その後、その兄弟は生涯を通じて、決して肉欲の誘惑に悩まされることはなく、神と、自分を癒やしてくれた聖なる殉教者トマイダを賛美し続けた。 同様の情欲に悩まされていた他の人々もまた、聖殉教者トマイダの墓を訪れると、彼女の聖なる祈りによって安らぎを得て、肉欲から解放された。彼らは聖殉教者を称え、同時に主キリストを賛美し、父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光と礼拝を捧げた。 アーメン。

聖殉教者クリスケントの受難。

記念日：4月13日

この聖なる殉教者は、リキアのミラという町[2994] で生まれ、名門の家系に属し、非常に著名な人物であった。多くの人々が偶像を崇拝しているのを見て、彼はある日、偶像崇拝者たちの群衆の中に身を投じ、彼らに異教の迷いを捨て、キリストに立ち返り、救われるよう説得し始めた。 このことを知った地方総督は、彼を捕らえて裁判のために自分の元へ連行するよう命じた。裁判の席で、総督は聖人に父親の名前や自身の名前を尋ねたが、クリスケントは自分を「キリスト者」とだけ名乗り、それ以外のことは何も答えなかった。すると総督は彼にこう言った。

「見せかけだけでも偶像に犠牲を捧げよ。心の中では、お前の神を崇める者であり続けなさい。」

しかし、聖なる殉教者は憤りを込めてその提案を拒絶し、皆の前で真理を告白して、総督にこう答えた。

[2994] ミリー（現在のミリ、トルコ語ではデムブレ）は、古代リキアの主要都市であり、海に近く、アンドラク川沿いに位置していた。

「魂が考えることと、肉体がなすことが異なるなどということはあり得ない。なぜなら、魂こそが肉体を支配し、動かすからである。」

その後、聖クリスケントは絞首刑に処され、その体は削り取られた。そして炉に火がくべられ、それが白熱したところで、彼はその中に投げ込まれた。こうして彼は主のもとへ魂を捧げた。

4月27日

4月14日（旧暦）

聖マルティヌス・イスポヴェドニク、ローマ教皇の殉教。

記念日4月14日

649年にローマ教皇テオドールが崩御すると、満場一致の選出により、至福のマルティヌス[2995]がその座に就いた。当時、東方のギリシャでは、コンスタンティヌス王の息子であり、ヘラクレイオスの孫であるコンスタンス[2996]が統治していた。 当時、ギリシャの王たちはまだ古代ローマを支配しており、そのため帝国の西部には彼らの総督が置かれていた。一方、東方では、モノフェリテ派、すなわち、我らの主イエス・キリストにおいて唯一の意志と唯一の志を認める「一意志論者」たちの異端がますます広まっていた[2997]。 この異端は、それに先立つエウティキオスの異端から生じたもので

[2995] それは649年のことでした。

[2996] 642年から668年にかけて

[2997] モノフィシテ派――単性論者――は、主イエス・キリストにおいて一つの神性があること、すなわちイエス・キリストにおいて神性と人性が完全に融合し、後者が前者に吸収されることを説いた異端者たちであった。 この異端は、コンスタンティノープルのアルヒマンドリト（修道院長）エウティキオスの名にちなみ、エウティキオニズムとも呼ばれる。彼はこの教義を最初に提唱し、モノフィシテ派の論争の端緒を開いた。この異端は、コンスタンティノープル地方公会議（448年）で初めて非難され、エウティキオスは罷免された； 公会議の議長を務めたコンスタンティノープル総主教フラウィアヌスは、その決議内容をローマ教皇聖レヴォス大教皇に伝えた。教皇はエウティキオスの非難に同意し、イエス・キリストにおける二つの本性の結合に関する正統な教義を述べた書簡を執筆した。 一方、エウティキオスはテオドシウス2世皇帝とアレクサンドリア総主教ディオスコロスの支持を得た。皇帝によってエフェソスで招集された公会議（449年）は、その不法な行為から歴史上「強盗公会議」として知られるようになり、フラヴィアヌス総主教を非難し、エウティキオスを正当化した。 公会議に出席していた教皇使節の助祭ヒラリウスは、公会議の決定に異議を唱え、ローマへ逃れた。そこで教皇は直ちにディオスコロスを教会から破門し、エフェソス公会議の決定を無効と宣言した。これに対し、ディオスコロスはアレクサンドリアで教皇レオを破門した。 主イエス・キリストにおける二つの本性の結合に関する問題は、テオドシウス2世皇帝の死（450年）をもって最終的に決着した。プルケリア皇后と共同統治者のマルキアヌスは異端者たちに反対の立場を表明し、451年には第4回 （ハルキドン）公会議が招集され、そこでディオスコロス総主教は罷免され、主イエス・キリストの御顔における二つの本性の結合のあり方に関する教義が次のように定められた。「神の父たちに倣い、我らは皆、満場一致をもって次のように告白することを教える…… 唯一かつ同一のキリスト、御子、独り子なる主が、二つの本性において、混ざることなく、変わることなく、分かたれることなく、切り離されることなく認識される……二つの位格に分割されるのではなく、その御子において唯一であり、独り子なる神の御言葉である」。– カルケドン公会議の決定は、エジプト、アルメニア、そしてシリアやパレスチナの一部では受け入れられなかった。これらの国々では、モノフィシテ派の異端者たちが現在もなお存在しており、 その総数は500万人に達する。シリアのモノフィシテ派（ヤコビ派）が60万人、アルメニアのグレゴリアン派が28万人、コプト派が約30万人、アビシニア人が200万人以上である。

モノフェリテス派、すなわち単意論の異端は、7世紀初頭、広く普及していたモノフィシテス派を教会に統合しようとするビザンツ帝国の統治者たちの意向の影響を受けて生じた。正教会とモノフィシテス派との間の対立は、教会上の問題にとどまらず、国家的な災厄でもあった。 モノフィジット派の司教たち、とりわけコルキスのファシス司教キルスは、皇

ある。エウティキオスは、受肉された我らの主イエス・キリストにおいて二つの本性と二つの意志、二つの志と二つの行為を告白する正統な教義に反し、キリスト・イエスにおいてただ一つの本性のみが存在すると冒涜的に主張した。　それぞれの本性には、唯一のキリストの御人格において、独自の意志、独自の志、独自の働きがある。主イエス・キリストは二つの人格に分けることはできないが、二つの本性が混ざり合うことなく、二つの本性として認識されるのである。

この異端の始祖は、アレクサンドリアのキルとコンスタンティノープルのセルギウスという二人の総主教であった。また、コンスタンティヌス王の祖父であるイラクリオスも、この異端の広まりに一役買った。セルギウスの死後、コンスタンティノープルの総主教にはピルスが任命され、その後をパヴェルが継いだが、両者ともモノフェリテ派の異端者であった。　パウロの助言に従い、コンスタンス王はモノフェリテ派の異端的な教義を盛り込んだ『ティポス』と題する書物を執筆し、これを各地に配布するとともに、主イエス・キリストの御人格に関する信仰教義をこの書物に準拠して守るよう命じた。　異端を認めなかった正教徒の多くは、王の不敬虔な命令に抵抗したため、追放や拷問、さらには死刑に処された。その中には、その生涯記『[2998] 』に詳述されているように、聖マクシムス・殉教者や、今まさに私たちが論じている聖教皇マルティヌスが含まれている。　彼がローマ教皇の座に就くやいなや、皇帝は異端の教えに満ちた書物を彼に送りつけ、新たに就任した教皇が自身の異端に同意し、公会議でそれを承認することを望んだ。しかし、至福のマルティンは次のように述べてこれを拒絶した。

帝ヘラクレイオス（611–641）に対し、正教会がキリスト・イエスにおいて「唯一の意志、唯一の作用」を認めるならば、彼らと正教徒との和解が可能になるという考えを提示した。 633年、皇帝と、アレクサンドリア総主教に任命されたキルスの尽力により、エジプトの単性論派と正統派との間の統一が実現した。この統一には、コンスタンティノープル総主教セルギオスを筆頭とする、ほぼすべての東方およびギリシャの司教たちが加わった。　このような違法な合意に対して、アレクサンドリア総主教ヨハネス・ミロスティヴィオスの愛弟子である修道士ソフロニオスが公然と反対し、単一意志の教義もまたモノフィシズム、すなわち主イエス・キリストにおいて単一の神性のみを認めるものであると論じた。なぜなら、もし性質が一つであるならば、当然、意志も一つであるはずだからである。 634年にエルサレム総主教に就任すると、彼はさらに熱心に正教を擁護した。彼はエルサレムで公会議を招集し、そこでモノフェリテ主義を非難した。　この争いに終止符を打とうと、638年、皇帝ヘラクレイオスは、総主教セルギオスが作成した「信仰宣言」（エクテシス）を公布した。そこには、イエス・キリストにおける二つの本性に関する正統的な教義が盛り込まれ、キリストの「意志」について語ることは禁じられていたが、同時に、正統信仰においては一つの意志を認めることが求められるとも付け加えられていた。　「信仰宣言」の公布後、正統信仰の熱烈な擁護者として名乗りを上げたのは、コンスタンティノープルの修道士マクシムス・コンフェッサーであり、彼は北アフリカやローマにおいてモノフェリテ派に対して成功裏に活動した。ヘラクレイオスの後継者コンスタンス2世は、さらに激しい争いを引き起こした「エクテシス」すなわち「信仰宣言」を廃絶しようと、648年に「ティポス」――信仰の規範――を公布した。そこでは、一つの意志についても二つの意志についても語ることを禁じ、これまでの五つの公会議に従って信じるよう強制した。　しかし、この『ティポス』は論争に終止符を打つことはなかった。本伝記からも明らかな通りである。ついに、コンスタンティノス・パゴナトス皇帝（668–685）は、コンスタンティノープルで第6回　（トルルス）公会議を招集し、そこでモノフェリテ派は異端として非難され、キリスト・イエスにおいては二つの働き、二つの意志を告白すべきであると決定された。その際、人間の意志はあらゆる点において神の意志に従い、それに服従するが、それによって消滅することはない。– モノフェリテ派の残党は、マロン派という宗派の形で現在まで存続している。彼らは当初（680年から）、レバノン山脈に避難先を見つけた。 十字軍時代（1182年）に、モノフェリテ派の教義は西方のヨーロッパにも浸透したが、教皇たちの働きかけにより、多くの信者を獲得することはなかった。とはいえ、1736年にユダヤ系のモノフェリテ派がカトリック教会に合流するまで、その教義は存続した。 東方では、シリア（ケスラヴァン地方）において、彼らは現在に至るまで存続している。

[2998] 記念日は1月21日

「たとえ全世界がこの正統信仰に反する教義を受け入れたとしても、それでも私はそれを受け入れることはなく、たとえ死を遂げることになっても、福音と使徒の教え、そして教父たちの伝承から決して離れることはない。」

その後、彼は教会の聖職者の中から数名の誠実な人物を伴い、コンスタンティノープル総主教パウロに手紙を送った。その手紙の中で、彼は愛をもって、教会の団結に不和をもたらさず、敬虔な信仰という小麦の中に異端という雑草を蒔くことなく、むしろ皇帝に対し、教会に反する教えを放棄するよう説得するよう懇願した。 しかし、パヴェル総主教は、至福のマルティンに従うどころか、その使節たちをも不名誉な暴行にさらし、帝国の辺境へ流刑に処した。 そこで聖マルティンは、当時ローマに滞在していたクリソポリスのアッバ・[2999] 、すなわちマクシムス尊者からの助言に従い、西方の司教百五名からなる地方公会議を招集し、キル、セルギウス、ピル、パウロの誤謬と、皇帝の著書『ティポス』を審議に付した。 公会議は異端を破門し、すべての正信者に向けて書簡を発布して、彼らを正教の信仰に確固たるものとし、異端のあらゆる有害性を明らかにし、それを極めて慎重に警戒するよう命じた[3000] 。 聖マルティヌスのこのような行動を耳にした王は、激しい怒りに駆られた。彼は、教皇マルティヌスを捕らえるため、オリンピアという名の軍司令官を自身の代理としてローマへ派遣した。 しかし、オリンピアはローマに到着すると、教皇を公然と捕らえるという考えを断念せざるを得なかった 。というのも、彼はまだ前述の公会議の真っ最中に遭遇し、そこには多くの司教や民衆が集まっており、街は聖職者や世俗の人々で溢れかえっていたからである。そのため、オリンピアはある兵士に、教会で聖マルティヌスをあたかも不慮の事故のように殺害するよう命じた。 ところが、服の下に鋭い剣を隠し持ち、教皇を殺害しようと教会に近づいたその兵士は、突然、予期せず失明してしまった。なぜなら、*「不義の者の杖を義人の分け前に向けさせない」*[3001] （詩編124:3）と、主は「不義の者の杖が義人の分け前を打つこと」を許さず、殺し屋が御自身の忠実なしもべに拷問の手を振るうことを許さなかった。主ご自身が御自分のしもべを守っておられるのを見て、オリンピオスは教皇を放っておき、シチリアへ退去し、そこでサラセン人との戦いで亡くなった。一方、王はパヴェル総主教の助言に従い、テオドロスという名の、カリオポエと呼ばれる別の軍司令官をローマに派遣した。 彼には、聖マルティンを捕らえるよう命じられていた。その前に、教皇に対し、王との戦争を始めようとしてサラセン人と結託し、彼らに反乱を煽っていること、また、先祖から受け継がれた信仰を正しく守っておらず、聖母マリアを冒涜しているという虚偽の告発を行うよう指示されていたのである。

ローマに到着すると、総督は人々の面前で公然と教皇を上記の罪で告発した。何の罪もない聖マルティンは、自分に投げかけられた誹謗中傷に対して弁明を始めた。

「私は決して」と彼は言った。「サラセン人とは、彼らの間に暮らす貧しく困窮した信仰の兄弟たちに施しを送った場合を除き、一切の関わりを持ったことはない。 聖母マリアを崇敬せず、彼女を神の母として認めず、彼女に礼拝を捧げない者は、この世でも来世でも呪われるであろう。そして聖なる信仰については――と彼は弁明を締めくくった――、私たちではなく、不当にも私たちと意見の異なる者たちが、誤った道を歩んでいるのである。

一方、王の代理人は、教皇の弁明に耳を貸さず、依然として提起された告発の正当性を主張し、さらには新たな告発――聖マルティヌスが教皇の座に就いたことが不適切であるという――さえも付け加えた。 そしてある夜、兵士たちの協力を得て密かに教皇を捕らえ、埠頭へ連行し、そこから船で、キクラデス諸島[3002] として知られる遠く離れた島々のひとつ、ナクシオス島へと送り出した。

[2999] 「父」はヘブライ語に由来する言葉である。

[3000] この公会議は、聖マルティヌスが教皇の座に就いた年、すなわち649年に開かれた。

[3001] すなわち、主は、不義な者たちが義人に対して一時的に勝利することを許される一方で、最終的な勝利は常に敬虔な者たちに与えられるのである。

[3002] これらの島々は60あり、エーゲ海に位置している。

聖マルティンはこの島で丸一年を過ごし、飢えや、生活に必要な最低限の物資の欠乏といった苦難に耐えた。　もし、島の敬虔な住民のうち、追放された教皇を憐れんで、彼の困窮を和らげるために何かを持ってくる者がいたとしても、看守たちは訪問者を囚人の元へ近づけることを許さず、贈り物を持ってきた者たちからそれを力ずくで奪い取り、同時に彼らを非難してこう言った。

「もしあなたがたのうち、彼を愛し、憐れむ者がいるなら、その者は祖国に対する敵である。なぜなら、追放された者は異端者であり、神に敵対する者であり、ギリシャ・ローマ帝国の反逆者だからだ。」

看守たちは聖マルティンに多くの侮辱を加え、罵倒や嘲笑にさらした。しかし、彼は日々の侮辱や苦難、そして罹患した病気によって肉体の力が衰えていく中でも、それでもなお精神の強さを失うことはなく、神のためにすべてを感謝の心をもって耐え抜いた。 島に定住してから1年が経過した後、聖マルティンはビザンティウムへ連行された[3003]。

船は秋にビザンティウムに到着し、早朝、アルハンディア近郊のエウフィミア埠頭に停泊した。するとすぐに、すでに重病に陥っていた聖人を、皇帝と総主教からの使者が煩わせ始めた。　彼らは一切の憐れみもなく、朝から晩まで一日中、この誠実な神の司教を辱め、あらゆる手段で中傷し、罵倒した。夕暮れが近づくと、多くの兵士を率いた総主教庁の書記官[3004] サゴリヴァがやって来た；船から聖マルティンを連れ出し、担架に乗せ（病気のため、もはや歩くことができなかった）、プランディアリアと呼ばれるある中庭へと運んだ。そこで彼らは聖マルティンを暗く狭い部屋に閉じ込め、市民の誰も彼の居場所を知らないよう、厳重に監視した。　聖人はこの監獄で九十三日間を過ごし、誰とも会話する機会はなかった。その後、聖マルティンはサケラリアの館[3005] へ運ばれ、そこには上院議員たち[3006] が集まっていた。彼が その場へ運び込まれると、最年長の上院議員の一人が叫び声を上げて、聖マルティンに対し、集会に運ばれてきた担架から立ち上がるよう命じた。　担ぎ手の使用人の一人が、「教皇は重病のため立ち上がることができません」と申し出た。しかし、その上院議員は聖マルティヌスの病状を顧みず、怒りを露わにして再び立ち上がるよう命じ、体力が衰えているため支えてやるよう指示した。　そこで聖マルティンは立ち上がり、両脇を支えられながら中央に立った。あらかじめ呼び出され、口裏を合わせていた偽証人たちも立ち上がり、聖マルティンに対して前述の不当な告発を繰り広げ、さらに他の告発も付け加えた。彼らは自らの言葉の正当性を証明するため、聖福音書に手を置いて誓った。　しかし、ギリシャ語を話せない聖マルティンが通訳を通じて弁明を始めると、集まった者たちは彼の話を聞くどころか、話すことさえきっぱりと禁じ、通訳に対しては罵詈雑言を浴びせた。これを見た聖マルティンは言った。

「主はご存知です。もしあなたがたが、まもなく何らかの刑罰によって私を死に追いやるなら、それは私にとってどれほど大きな恩恵となるかを。」

その後、聖人は外へ連れ出され、立つことができなかったため、普段多くの民衆が集まる広場にある、このような場合に備えて特別に設けられた高台に座らされた。王は宮殿の上階の部屋から密かに彼を監視し、サケラリウスを彼の元へ遣わした。サケラリウスは聖マルティンに近づき、威嚇するようにこう言った。

「ほら、お前は神を見捨てた。だから神もお前を見捨てたのだ。」そう言うと、彼は群衆に向き直り、聖マルティヌスを呪うよう命じた。すると、周囲を取り囲んでいた群衆は声を張り上げて叫び始めた。

「教皇マルティヌスに破門を！」

[3003] 現在のコンスタンティノープル。

[3004] 総主教の秘書。

[3005] サケラリウス――コンスタンティノープルの修道院を統括し、修道院の運営や経済管理を担当し、修道士たちの生活を監督する特別評議会の長を務めた、最高位の教会高官。

[3006] 上院議員――最高位の国家高官。

一方、教皇の完全な無実を知っていた出席者たちは、悲しげな表情を浮かべ、涙で目を潤ませながら、その光景から立ち去っていった。その後、サケラリウスはプレトリアの司令官[3007] にこう命じた。

「彼を捕らえて四つ裂きにせよ。彼は生きるに値しないのだから。」

直ちに、スペキュラトーリ[3008] が聖人を捕らえ、上着を脱がせ、下着を真っ二つに引き裂いた。そして、聖マルティンの首と全身に重い鉄の鎖を巻きつけ、彼を殺すつもりだった裸の剣を先頭に掲げながら、街中を横断してプレトリアへと引きずっていった。　群衆の中には、聖人を罵倒し、彼を嘲りながら首を横に振ってこう言う者もいた。

「彼の神はどこにいる？　彼の信条の真髄はどこにある？」

一方、神の聖人に加えられたこのような不名誉と苦しみを見て、涙と嗚咽をこらえきれない者もいた。　そして、聖人は二重の苦しみを味わっていた。肉体的には病気や重い縄、そして彼を引きずっていく拷問者たちからの打撃に苦しみ、同時に、魂の面では裸にされ、不名誉な嘲笑にさらされ、恥と心の痛みを耐え忍んでいたのである。　プレトリアに到着すると、監視人たちは縛られた聖人を階段を上って牢獄へと引きずり込んだ。最後の段でつまずいた聖マルティンは転倒して体を打ちつけ、その体はあざや擦り傷で覆われてしまった。そこで彼は悪党や強盗たちと共に放り込まれた。しばらくして、彼はここから別の牢獄――ディオミドの牢獄――に移送され、そこで病気と厳しい寒さ（当時は1月だった）のため、死にかけた。 ある獄吏の妻が聖マルティンを憐れんだ。彼女は密かに聖なる囚人のもとを訪れ、彼を自分の家に連れ帰り、傷の手当てをしてから自分の寝床に寝かせ、暖かい毛布をかけてやった。聖マルティンは夕方まで、まるで死人のように、微音も立てずに横たわっていた。 夜遅く、王室の宦官長である[3009] グリゴリウスは、家政係を少量の食事と共に遣わし、聖マルティンに次のように伝えるよう命じた。

「悲しみに打ちひしがれてはならない。神があなたを死なせることはないと、我々は信じている。」

これを聞いた聖マルティンは、心の底からため息をついた。その言葉は彼の願いとは合致しなかった。なぜなら、正教のために苦しみを受けていた聖マルティンは、むしろ早く死にたいと願っていたからである。すると直ちに、聖人の足枷は外された。

その朝、皇帝は瀕死の病に伏しているパヴェル総主教を見舞いに行き、教皇マルティンとの間に起きた出来事をすべて話した。パヴェルは壁の方を向くと、深くため息をついてこう言った。

「ああ、悲しや。またしても、私を裁く新たな罪を犯してしまった。」

皇帝は尋ねた。

「それはどういう意味か？」

「陛下、教皇にこのような苦しみを受けさせること――これほどの大悪行が、まだ足りないというのですか？」とパヴェルは答えた。

そして彼は、教皇へのさらなる虐待を止めるよう、王に懇願し、強く訴えた。八日後、すでにパヴェルが亡くなった後、王は、他の特別に派遣された者たちを伴った公証人デモスフェンを、ディオミドの牢獄にいる聖マルティンのもとへ送った。彼らは牢獄に入ると、こう言った。

3007 プレトリア――主に司法案件が審理され、それに関する判決が執行される裁判所。プレトル――古代ローマの最高裁判官。後にその職務範囲は拡大した。

3008 スペキュラトル――プレトールの補佐官であり、その命令を執行する者。

3009 宦官――去勢された使用人で、妻たちの監視を任されていた。当初、この目的でそのような使用人を置く習慣は小アジアで生まれた。宦官は古代ローマでも知られていた。　ビザンツ帝国では、東方の影響を受けて形成された宮廷生活の中に、宦官も存在した。宦官たちは、王妃たちを通じて支配者に働きかける機会を与えられ、時には国政の行方に強い影響力を及ぼすこともあり、そのため宦官長の地位は尊ばれていた。

「我らが王はこう言っている。かつてはこれほどの栄光に浴していたお前が、今やこれほどの不名誉に陥っているが、その責任はお前自身以外に誰にもない。」

聖マルティンはこれに対し何も答えなかった。天を仰ぎ見て、こう言った。「すべてのことに感謝と栄光を、唯一の不死の王に捧げます。」

使者たちは聖マルティンに、パウロの前任者であるピルレ総主教について尋ね始めた。すなわち、彼が自らの意志でローマに来て、そこでモノフェリテ派の異端を撤回したのか、そして、その後聖マルティンが後を継いだ教皇テオドロスが、彼をどのように教会に受け入れ、交わりを許したのか、ということである。　聖マルティンは、ピルレ総主教について詳しく語った。すなわち、彼が自らの意志でローマに来て、自らの異端に対する書面による撤回を提出したものの、結局はその異端に再び立ち返ったこと、そして教皇テオドールによって、司教の位にふさわしい敬意をもって受け入れられ、生活費も支給されたことである。　聖マルティンは、王から派遣された使節たちへの次の言葉で演説を締めくくった。

「私はあなた方の手に委ねられています。私に対して、あなた方が望むこと、そして神が許されることをなしてください。しかし、たとえ私をバラバラに切り刻んだとしても、コンスタンティノープル教会がその異端の迷いを捨てない限り、私はその教会と交わりを持たないことを確信してください。　私の言葉の真実を実際に試してみてください。そうすれば、主のしもべたちに対する主の恵みがどれほど大きいかがわかるでしょう。

聖マルティンの返答を聞いた使節団は、苦痛や死そのものさえも恐れない聖人の偉大さと精神の強さに驚嘆しつつ、皇帝のもとへ戻った。　八十五日後、公証人サゴリヴァが聖マルティンの牢獄を訪れ、彼にこう告げた。「私は、あなたをここから私の家へ連れ去り、そこからある場所へ送るよう命じられている。」

聖マルティンは尋ねた。

「一体どこへ送られるのか、具体的にはどの場所なのか？」

しかし、サゴリヴァはその質問に答えなかった。そこで聖マルティンは言った。

「送り出す時が来るまで、私を牢に留めておいてください。」

書記官は去っていった。日が沈む頃、教皇は共に囚われていた者たちにこう言った。

「兄弟たちよ、近づいてきて、互いに最後の口づけを交わそう。まもなく、私をここから連れ去る使者がやって来るのだ。」

皆は泣きながら彼に別れを告げたが、聖マルティンは顔に喜びを浮かべて、彼らにこう言った。

「泣かないで、喜びなさい。ほら、私は正教のために苦難へと向かうことを喜んでいるのだ。」

その後、再び前述の公証人がやって来て、聖人を牢獄から連れ出した。立ち会っていた者たちは皆、尊者との別れを惜しみ、嘆き悲しんで泣きじゃくった。　聖マルティンは船に乗せられ、ヘルソンへの流刑に送られた[3010]　；ここでは飢えに苦しめられ、生活必需品をすべて奪われたため、2年後に主のもとへ召された[3011]　。その尊い遺体は、ヘルソン市の外にある、ヴラヘルナと呼ばれる至聖なる神の母の教会に埋葬された。　まもなく、その墓は多くの人々を惹きつけるようになった　。病める者たちは、聖人の祈りと、我らの主イエス・キリストの恵みによって、多種多様かつ数多くの癒やしを受けた。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、永遠の栄光がありますように。アーメン。

[3010] クリミア半島の西岸にある岬。ここには紀元前5世紀にヘルソネスがあった。セヴァストポリから数ヴェルスタ離れた場所に、この都市の遺跡が見える。

[3011] 655年

リトアニアの聖殉教者アントニウス、ヨハネス、エウスタフィオスの殉教

記念日：4月14日

これらの聖なる殉教者たちは、リトアニアのヴィルニュスという町[3012] の出身であり、当時の不敬虔な慣習に従い、その国の他の住民たちと同様に、火を崇拝する者たち[3013] であった。 実の兄弟であるアントニウスとヨハネは、心からキリスト教の信仰を愛し、ある日、ネストルという名の長老がリトアニアを訪れた際、彼から神の洗礼を受けました。　その際、年長の者はヨハネと名付けられ、年少の者はアントニーと名付けられた[3014] 。洗礼を受けた二人の兄弟は、真のキリスト教徒にふさわしい生活を送った。

リトアニアのオルゲルド公[3015] に仕えていたアントニーとヨハネは、キリスト教徒であることを公にしないよう努めたが、キリスト教の慣習や行動が異教徒とはあまりにも際立って異なっていたため、それを隠し通すことはできなかった。　例えば、彼らは他の人々のように、異教徒がするように頭髪や髭を刈ることも、断食日に肉食を摂ることも望まなかった。また、キリスト教に反する他の不敬虔な慣習も一切行わなかった。　そしてある日、公爵が彼らに「なぜ古来のリトアニアの慣習に従わないのか」と尋ねたとき、聖人たちは恐れることなく、自分たちがキリスト教徒であることを告白した。

公爵は彼らに、キリスト教の信仰を捨て、食卓に供された肉料理を口にするよう強要した。しかし、彼らはキリスト教の信仰を堅く守り、その日は断食の日であったため、肉料理を口にすることを拒んだ。　そこで公爵は、彼らを薄暗い牢獄に投獄するよう命じた。聖人たちは、まるで牢獄ではなく王の玉座に向かうかのように喜びをもってそこへ向かい、神の聖なる御名のために苦難を受けることを許してくださった神を賛美し、感謝した。

聖人たちが一年間牢獄に閉じ込められた後、ヨハネは監禁生活に疲れ果て、拷問を恐れて、公爵に「すべての命令に従う」と約束し、自分を釈放してほしいと願い出ました。これを喜んだ公爵は、二人の兄弟を釈放するよう命じ、彼らを宮廷の重臣の地位に就かせました。

ヨハネは外見上は不信心者たちと同様であり、彼らのあらゆる慣習に従い、その君主の意のままに行動していた。しかし、心の中ではキリスト教の信仰を守り続け、拷問を恐れて公然と告白することを敢えてしなかったキリスト・神に、密かに祈りを捧げていた。　一方、アントニウスは、自らのキリスト教の慣習を微塵も変えることなく、真のキリスト教徒としてふさわしい振る舞いを公然と行っていた。彼は兄のヨハネに対し、その臆病さと恐れを咎め、あらゆる手段を用いて悔い改めるよう諭し、拷問を恐れずに再び公然とキリストを告白するよう促した。　一方、異教徒たちは、兄のヨハネがすべてにおいて公爵の命令に従っているのを見て、弟のアントニウスには目もくれなかった。

ある日、いつものようにヨハネとアントニオの両兄弟が公爵のもとを訪れた際、ヨハネは――その日は断食の日であったにもかかわらず――差し出された肉料理を口にした。一方、至福のアントニオは、自らをキリスト教徒であると公然と告白し、その食事を口にすることを拒んだ。　そこでア

[3012] ヴィルナは12世紀に、あるいは別の説によれば10世紀に創設された。しかし、歴史上知られるようになったのは14世紀初頭（約1323年）、リトアニアおよびロシアの大公ゲディミナスによる首都としてである。現在、ヴィルナは人口10万人を擁するロシアに属する州都である。

[3013] 古代に広く行われていた火の崇拝は、異教徒の地であったリトアニアでも行われていた。それは、火、雷、稲妻の神であるペルーンへの崇拝であり、その神を称えて1285年にヴィルナにかなり広大な神殿が建てられた。

[3014] キリスト教を受け入れるまで、アントニーとヨハネは異教の名前、すなわちネジロとクメツを名乗っていた。

[3015] リトアニア大公オルゲルドは、1341年から1377年まで統治した。 公爵位に就く直前に、オルゲルトはキリスト教に改宗したが、それは現実的な計算に基づくものであり、ロシアの王女マリア・ヤロスラヴナが所有していたヴィテブスク公国を掌握したいという意図からだった。オルゲルトはこの目的のために彼女と結婚した。　キリスト教徒であった妻が亡くなると（1346年頃のこと）、オルゲルドはキリスト教を捨て、再び異教徒となった。

ントニウスは、公爵の命により、再び　の牢獄に投獄された。一方、ヨハネは万人の軽蔑の対象となった――キリスト教徒からは背教者として嫌われ、異教徒からは、異教を捨てて改宗した新しいキリスト教の信仰も、かつての異教の信仰も守り通せなかった、気まぐれな人間として非難されたのである。

自らの大きな罪を自覚したヨハネは、涙ながらに自分の堕落を悔い改め始め、前述の長老ネストルのもとを訪れ、兄弟の前で彼のために取り成し、その兄弟が自分の罪を赦し、自分と交わりを持つよう受け入れてくれるよう懇願した。長老から兄弟の願いを聞いたアントニウスは、次のように答えた。

「私が兄弟と交わりを持つことができるのは、彼が公然とキリストとキリスト教の信仰を告白する場合に限られる。彼がそうする時、初めて我々はすべてを共有することになるのだ。」

ヨハネは悔い改め、兄弟の言葉を愛をもって受け入れた。そして、キリスト教の信仰を公然と告白できる好機を待ち求めるようになった。

ある日、公爵が風呂に入っている際、ヨハネが彼に仕えていた。好機が訪れたと見たヨハネは、大胆かつ恐れずに公爵の前で自分がキリスト教徒であることを告白した。しかし、公爵は今のところヨハネに対して怒りを露わにすることも、彼に何かをすることもなかった。というのも、風呂場には彼ら以外誰もいなかったからである。

その後、しばらくして、ヨハネは公爵の多くの重臣たちの面前で、声を張り上げて自らをキリスト教徒であると宣言した。直ちに公爵の命令により、彼は捕らえられ、そこにいた者全員の手や様々な道具によって容赦なく殴打された。この殴打はかなりの時間続き、その後、聖人は牢獄に投獄された。

この出来事を知った至福のアンソニーは、大きな喜びに満たされた。二人の兄弟は再び同じ牢獄に共に収監され、神を賛美した。そこで彼らは、前述の司祭から、至聖にして命を与えるキリストの聖体拝領を授かる恵みにあずかった。

数年が経過した後、聖なる殉教者アントニウスは、あたかも犯罪者のかのように、恥辱に満ちた死に処せられることとなった。彼は木に吊るされる刑を宣告されたのである。　処刑の前日、そのことを告げられると、彼は死を目前にして一晩中眠ることなく、祈りの中で神を賛美し、兄弟がキリストのために恐れずに苦難に耐えられるよう励ました。アントニウスは兄弟に対し、二度と信仰から離れないよう諭し、彼に間もなく訪れる死を預言的に告げた。

「私が亡くなった後、兄弟よ、あなたも間もなく、同じ死を経てキリストのもとへ旅立つことになるだろう」と彼は言った。

朝になると、二人の兄弟はキリストの聖なる、命を与える御体と御血を聖体拝領した。そして正午頃、キリストの聖なる殉教者アントニウスは牢獄から連れ出され、公爵の命令により、1月14日に木に吊るされて処刑された。　こうして、無敵のキリストの戦士は、その聖なる汚れなき魂を、心を尽くして愛した主なる神キリストの御手に委ねたのである。

聖なる殉教者ヨハネは牢獄に閉じ込められた。それは、不信心者たちが再び彼を誘惑し、キリスト教の信仰の告白から引き離そうと望んでいたからである。　しかし、彼らが、彼が聖なる信仰を堅く守り、牢獄の中でも恐れずにキリストを告白しているのを見ると、彼の兄弟が死んだのと同じ死に方を彼にも宣告した。しばらくして、異教徒たちは彼を（絞首刑により）殺害し、その遺体を、彼の兄弟が吊るされたのと同じ木に吊るした。　これは4月の24日に起こった。こうして、この殉教者もまた、その殉教の業を終え、そのために殉教の死を遂げたキリストのもとへと旅立った。聖アントニオと聖ヨハネの聖遺体は、信者たちによって尊く埋葬され、同じ場所に安置された。

聖殉教者アントニウスとヨハネの死後しばらくして、至福のユースタフィオスもまた殉教した。彼は若かったが、その勇気と気高さは多くの人々を凌駕していた。容姿も美しかったが、その魂と知性はさらに優れていた。　真の神を知ったエウスタフィオスは、異教の不敬虔を拒み、キリストを

愛するようになり、前述の長老ネストルのもとを訪れた。彼から聖なる信仰を教えられたエウスタフィオスは、彼から神の洗礼を受けた[3016]。

キリスト教徒となったエウスタフィウスは、真のキリスト教徒にふさわしいように、神に喜ばれる生活を送った。彼は常に断食、祈り、善行に励んでいた。

このエウスタフィオスは、オルゲルド公の侍従でもあった。ある日、オルゲルド公が公国の政務を審議していた際、エウスタフィオスはその職責に従い、公の面前に立っていた。 エウスタフィウスに目をやると、公は彼の頭に長い髪があることに気づいた（ここで留意すべきは、火を神として崇拝していた異教徒たちには、頭髪や髭を特別な方法で頻繁に刈り上げる習慣があったということである； しかし、至福のユースタフィウスは、彼らの不敬で狂気じみた信仰を拒み、洗礼を受けたため、頭には長い髪をなびかせていた）。 公爵は彼に、キリスト教徒かどうか尋ねた。エウスタフィオスがこれに対し、公然とキリスト教徒であることを告白すると、公爵は激しく怒り、エウスタフィオスをキリストの信仰から引き離そうとして、彼に肉を食べるよう強要し始めた。 しかし、聖人は差し出された肉を食べなかったばかりか、それを見ることも拒んだ。当時、キリストの降誕祭を控えた断食期間であった上、その日は金曜日であったからである[3017]。

すると、公爵はさらに激しい怒りに駆られ、慈悲もなく、鉄の棒で聖なる若者を打ちのめすよう命じた。 聖人はこの苦痛を非常に勇敢に耐え忍び、叫び声を上げるどころか、うめき声一つ上げず、目から一滴の涙もこぼさなかった。ただ、神が御自身の聖なる御名のゆえに、彼に苦難を受ける機会を与えてくださったことに感謝しただけである。

聖人がこれほど勇敢かつ忍耐強く苦難に耐えた姿に、公爵は再び激しい怒りに駆られ、殉教者の口に最も冷たい水を注ぎ込むよう命じた（当時は厳しい冬であった）。その結果、彼の体は激しい寒さで青ざめてしまった。 それにもかかわらず、聖人は公爵の命令に従わず、肉を口にしなかった。その後、公爵は殉教者にさらに過酷な拷問を加えるよう命じた。彼の足の骨――足首や脛――を砕き、頭髪は皮膚ごと引き剥がし、鼻と耳を切り落とした。

聖人は三日間このように拷問を受けたが、まるで痛みを感じていないかのように、うめき声も上げず、その顔にはわずかな苦痛の兆候さえ見られなかった。彼は、その苦しみを目の当たりにして泣いているキリスト教徒たちと、終始愛を込めて語りかけ、こう言った。

「兄弟たちよ、私の肉体が苦しみの中で砕かれているのを見て、私のために泣かないでください。私は、私たちの主なる神キリストから、人の手によって造られたものではなく、天において永遠に存続する体を受けると信じているからです。」

一方、公爵は拷問では何も得られないと悟ると、殉教者に死刑を宣告し、その年、前述の二人の聖なる殉教者――アントニウスとヨハネス――が吊るされたのと同じ木に、彼を吊るすよう命じた。家来たちは、すでに息も絶え絶えになっていた聖エウスタフィオスを連れ出し、処刑場へと向かった。 しかし、聖殉教者エウスタフィオスは、腰や足、膝が粉々に砕かれていたにもかかわらず、神の助けに支えられて、まるで全く健康であるかのように、元気よく、速やかに歩み、先導する者たちに遅れをとるどころか、むしろ彼らを追い越すほどであった。

皆が前述の木に近づくと、迫害者の手下たちは聖人の首に縄を巻きつけ、彼を吊るした。 こうして、このキリストのための殉教者は、12月13日、[3018] に、その聖なる魂を神の御手に委ねた。その尊い遺体は、獣や猛禽類に食われるよう、地面に近い木に吊るされたままにされたが、神がそれを守っておられたため、いかなる獣も鳥も遺体に近づくことはなかった。 それから3日後、その遺体は

[3016] 聖殉教者エウスタフィウスは、聖アントニウスと聖ヨハネの親族であり、キリスト教に改宗する前は、異教の名前であるクルヴレツを名乗っていた。

[3017] 金曜日（および水曜日）は、聖なる教会が主の受難を記念する日として定めているため、教会の規定によれば断食の日とされている。

[3018] 聖エウスタフィオスおよび前述の聖アントニオスと聖ヨハネの死は、1347年に起こった。

信者たちによって無傷のまま回収され、前述の二人の聖なる殉教者が先に埋葬されていた場所の近くで、尊厳をもって埋葬された。

特筆すべきは、聖人たちの死後、死刑判決を受けた犯罪者のうち、誰もその木に吊るされることも、その近くに埋葬されることもなかったという事実である（神は常に御自身の殉教者たちを栄光に包まれるからである）。　その場所は処刑場として定められており、死刑判決を受けた者たちは皆そこで息を引き取っていたが、聖人たちの苦難と死の後、その場所で処刑された犯罪者は一人もいなかった。

数年が経過し、その町でキリスト教徒の数が増え、聖なる信仰が日増しに広がり強まっていく中、信者たちは集まり、公爵のもとへ赴き、前述の三人の聖なる殉教者が安らかな最期を遂げたその場所を、彼らの 管理下に委ねてくれるよう懇願した。 公爵は、神の御心により、キリスト教徒たちの願いを受け入れ、彼らが求めた場所を譲り渡した。キリスト教徒たちはその木を切り倒し、その場所に、父と子と聖霊の栄光と誉れを称えて、至聖なる三位一体の名を冠した教会を建てた[3019]。そして、かつて木が生えていたまさにその場所に、聖なる祭壇を設置した。　この教会には、キリストの聖なる殉教者たち――アントニウス、ヨハネス、エウスタフィオス――の聖遺骨が安置され、聖三位一体において賛美される神を讃えるため、今この時も、そして世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝にふさわしい神を称えるためであった。アーメン。

聖殉教者アルダリオンの受難

記念日：4月14日

聖殉教者アルダリオンは、マクシミアヌス帝の治世下で殉教した[3020]。彼はパントマイム俳優であり、民衆の娯楽の場やその他の場所で、人々の苦難や様々な行動を演じていた。　ある時、彼はキリスト教徒が実際に受けた拷問を、ありのままに演じた。彼は偶像への生贄を捧げることを拒んだとして、絞首刑に処され、その遺体はまるで拷問を受けたかのように削り取られた。　その見世物に立ち会っていた人々の中から称賛の叫びや、彼の演技を褒める声が上がったとき、彼は観客の方を向き、大きな声で彼らに黙って、称賛の表現を控えるよう命じました。そして、皆が静まり返った後、彼は公然と、実は自分がキリスト教徒であることを告白したのです。　その光景を目撃していた市の統治者は、彼の決意を翻させるべく、長い間その技量を称賛し続けた。しかし、聖人はそれを拒み、真の信仰に留まることを決意した。そこで統治者は、鉄のフライパンを熱し、その上に聖アルダリオンを投げ込むよう命じた。こうして、聖なる殉教者は息を引き取った。

千人の聖殉教者たちとアザトの受難

記念日：4月14日

救いの日である聖なる聖金曜日が訪れ、キリスト教徒たちは祝賀の席で、私たちのために贖いの苦しみを耐え忍ばれたキリストを賛美し、感謝を捧げた。この日、シメオン司教が捕らえられ、処刑された。　その後、聖金曜日の日から10日間にわたり、すべてのキリスト教徒が捕らえられ、処刑

[3019] 聖殉教者たちの聖遺骨は現在、1826年に移されたヴィリニュスの聖霊修道院に安置されている。

[3020] ここでいうのは、最初はディオクレティアヌスと共同統治し、その後305年から311年にかけてその後継者として統治したマクシミアヌス・ガレリウスを指す。ディオクレティアヌスの勅令によるキリスト教徒への迫害は303年に始まった。

されるようになった[3021] 。その際、千人の聖なる殉教者たちも捕らえられ、彼らと共に、王宮で高い地位にあり、サポル王から特別な愛と尊敬を受けていた宦官[3022] アザトも捕らえられた。 尋問の際、彼らは皆、キリストへの信仰を勇敢に告白し、その直後に全員がこのために処刑された[3023] 。サポル王は聖アザトの死に深く悲しんだ。彼の死後、王はキリスト教徒を処刑することを禁じる勅令を発布し、この勅令はしばらくの間効力を保った[3024] 。

4月28日

4月15日（旧暦）

聖殉教者サヴァ・ゴトフの殉教

記念日4月15日

「ゴトフィアにある神の教会[3025] 、カッパドキアにある神の教会[3026] 、そして宇宙のあらゆる民族の中に住む正教会のすべてのキリスト教徒に対し、父なる神と我らの主イエス・キリストの恵み、平和、そして愛が、ますます豊かになりますように」。 このようにして、ゴットフ教会からカッパドキア教会への書簡[3027] は始まり、その中で以下の伝記が語られている。 かつて聖使徒ペトロが『*どの民族であれ、神を畏れ、義を行う者は、神に喜ばれる*』（使徒言行録10:35）と語った言葉は、神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの殉教者、聖サヴァにおいて完全に成就した。 聖サヴァは、ゴトフィア出身であり、不敬虔で堕落したゴトフィアの住民たちの中に暮らしていたにもかかわらず、聖なる人々に深く倣い、彼らと同様に美徳に彩られていたため、まるで輝く星のようにこの世で輝いていた。 なぜなら、彼は若き日から主の律法を愛し、その生涯の目標を、徳の完成に達し、神の御子を知ることで完全な人となることに定めたからである（参照：エフェソ4:13）。 神を愛する者たちには、すべてのことが益となる（参照：ローマ8:28）。そして実際、悪魔に勇敢に立ち向かい、世の虚栄を捨て去った聖サヴァは、すべての人々と平和を保ちつつ、天の御国に至り、神から永遠の至福を授けられたのである。 この聖なる殉教者を偲び、敬虔なキリスト教徒の教訓とするため、私たちはこの聖なる殉教者の輝かしい行いを黙して見過ごすことなく、その苦難の歴史を記録に残すことにした。

3021 ペルシア王サポル2世は343年、自国のキリスト教徒に対し、古代のゾロアスター教を信仰することを拒んだことを理由に、以前よりも高額な税を課す特別勅令を発布した。そして、彼らがこれらの税の支払いを拒否すると、 これを反乱とみなして、まずキリスト教の聖職者たちに対して、そしてやがてはすべてのキリスト教徒に対して、残酷な迫害を開始した。

3022 「エヴヌフ」はギリシャ語で「寝所の守護者」を意味する。これは、王の寝室を管理していた特別な宮廷官吏の呼称であった。通常、彼らは王に最も近い側近であった。

3023 聖殉教者たちの殉教日は、344年4月13日から23日の間とされています。

3024 ペルシアにおけるキリスト教徒への迫害は、サポル王の治世が終わる381年まで続いたことが知られている。

3025 ゴート族はゲルマン系部族の一族で、当初はヴィスワ川流域に居住していたが、後にドナウ川流域へと移住した。4世紀初頭、ゴート族の間でキリスト教が広まり始めた。この地における最初の伝道者であり、キリスト教を広めたのは、ゴート族の司教ヴルフィラ、あるいはウルフィラであった。

3026 カッパドキアは、小アジアにある地域である。

3027 この書簡は、テッサロニキ司教アスコリウスと、スキフィアの軍司令官でありカッパドキア出身のサランによって、聖殉教者サヴァの聖遺物がゴートフィアからカッパドキアへ送られたことを受けて、374年頃に書かれたものである。 当時、カッパドキア教会の首座主教は聖バシレイオス大主教であり、彼は聖遺骨と書簡を受け取ると、その送り主たちに感謝の手紙を送った。その手紙は、彼の著作の中に現存している。

聖サヴァは、キリスト教の聖なる信仰を堅く告白し、善行に熱心であり、敬虔さ、柔和さ、言葉の素朴さ（ただし知性の素朴さではない）に際立っていた。すべての人と和やかに暮らし、恐れを知らずに真理を守り、　それによって異教徒や偶像崇拝者たちの口を封じ、高慢になることはなく、謙遜な者にふさわしく、　すべての人に服従し、寡黙で、質問には常に穏やかに、怒りを露わにすることなく答え、教会の聖歌に参加し、教会の整備に心を配り、財産や金銭の獲得には心を向けず、日々の生活に必要なものだけで満足していた――節制を重んじ、あらゆることに自制し、女性とは一切関わらなかった。　彼は常に熱心な祈りと断食に時間を費やし、虚栄とは無縁であり、自らの模範によってすべての人を神に喜ばれる生活へと奮い立たせた。なぜなら、彼自身は善のみを行い、美徳に反することを避けていたからである。彼は生涯の終わりまで、*「愛によって働く」*（ガラテヤ5:6）を保ち続け、決して恐れずにキリストの御名を宣べ伝えることをやめなかった。聖なるキリスト教の信仰を告白したことで殉教者の冠を授かる前に、聖サヴァは自らの行いによって、真の敬虔さの堅固な擁護者であることを幾度となく示していた。

ゴート族の諸侯や裁判官たちがキリスト教徒を迫害し、偶像への生贄の供物を食べるよう強要し始めたとき、異教徒たちの一部は互いに取り決めを交わし　――キリスト教の信仰を告白している親族や知人に対し、偶像に捧げられた肉ではなく、偶像に捧げられていない肉を差し出すよう提案し、それによってキリスト教徒を偶像崇拝の肉を口にすることから守りつつ、迫害を行う異教徒たちをも満足させることにした。　聖サヴァはこのことを知ると、たとえ偶像の犠牲に供されたものではなかったとしても、偶像の犠牲に供されたものとして提供されたその肉を、自ら口にすることを拒んだだけでなく、使徒の言葉を心に留めていた。*「しかし、　もし誰かが『これは偶像の犠牲に供されたものだ』と言うなら、それを食べてはならない」*（Iコリント10:28）という使徒の言葉を心に留め、自らその肉を口にすることを拒んだだけでなく、人々の真ん中に立ち、恐れることなく皆に聞こえるようにこう宣言した。

「もし誰かがこの肉を食べたなら、キリスト者であり続けることはできない。」

このような戒めによって、聖人は皆が悪魔の罠に陥るのを防いだ。そのため、前述の策略を企てた者たちは聖サヴヴァを村から追放したが、まもなく彼に帰ってくるよう頼んだ。　再び迫害が始まると、同じ村の偶像崇拝者たちの中には、偶像に生贄を捧げていた者たちが、自分たちの村にはキリスト教徒が一人もいないことを公爵に知らせようとし、誓いを立ててその言葉を裏付けようとした。その時、聖サヴァは再び恐れを知らず人々の真ん中に立ち、大きな声で叫んだ。

「私のために誓う者は誰もいないように。なぜなら、私はキリスト教徒だからだ！」

一方、前述の偶像崇拝者たちは、キリスト教を信仰する親族の存在を隠したまま、公爵のもとへ赴き、自分たちの村には一人を除いてキリスト教徒はいないと公爵の前で誓った。

これを聞いた無法な公爵は、そのキリスト教徒（それは聖サヴァであった）を自分の元へ連れてくるよう命じた。彼が連れて来られると、公爵は立ち会っていた者たちに尋ねた。

「このキリスト教徒には、何か財産があるか？」

すると、彼らはこう答えた。

「彼が身に着けている服以外、何も持っていません。」

聖人を軽蔑の眼差しで見つめながら、公爵は言った。

「この男は、誰かを助けることなど到底できないし、誰かに害を及ぼすことなどできないだろう。」そう言うと、公爵は聖人をその場から連れ去るよう命じた。

しばらくして、ゴトフィアでは再び異教徒たちによるキリスト教徒への大規模な迫害が巻き起こった。　聖なる復活祭の日が近づき、至福のサヴァは、別の村に住むグフィンという名のキリスト教の司祭のもとへ行き、彼と共に聖なる復活祭を祝いたいと願った。彼がそこへ向かう途中、道で背が高く、顔を輝かせた男が現れ、彼にこう言った。

「引き返して、自分の村の司祭サプサルのもとへ行きなさい。」

サヴァはこう答えた。

「彼は家にいません。迫害のため村を離れ、ギリシャの地に住んでいるからです」（聖サヴァは、当時その長老が復活祭を自宅で迎えるために家に戻っていたことを知らなかった）。

その後、現れた男の横を通り過ぎ、サヴァは司祭グフィンのもとへ向かった。

その日は風が非常に強く吹いていた。突然、大きな雲が押し寄せ、雪が深く積もり、サヴァはそれ以上進むことができなくなった。その後、サヴァは神の摂理によって旅が阻まれたことを悟り、神を賛美しながら引き返した。

司祭サプサルの家に着くと、彼はサプサルを見て大いに喜び、道中で自分に起こったすべての出来事を彼や他の人々に語った。そして、彼らは皆で一緒に復活祭を祝った。

祝祭の三日目の夜、突然、不信心な首長の一人であり、ロテスタ公の息子であるアファリドが、大勢の異教徒の兵士を率いてその村を襲撃した。　司祭が自宅で安らかに眠っているところを見つけると、彼は司祭を捕らえ、さらにサヴヴァも、寝床から裸のまま引きずり出し、二人を縛り上げた。　長老は荷車に乗せられて運ばれ、サヴヴァは生まれたばかりの赤ん坊のように裸のまま、茨の茂みの中を引きずられ、棍棒や鞭で容赦なく打ちつけられながら、そのまま街まで引きずられていった。キリストの僕たちに対する拷問者たちの残酷さと残忍さは、これほどまでに凄まじいものだったのだ！　しかし、拷問者たちのその残忍さこそが、むしろこの義人の忍耐と信仰を、その全き力において顕現させる一助となったのである。

夜が明けると、聖サヴァは皆が聞こえるように主を賛美し、迫害者たちにこう言った。「あなたがたは、私を裸足で、裸のまま、茨の茂みの中を追い立て、引きずり回したではないか。さあ、今、私の足に傷があるか見てみよ。あるいは、私の体にあなたがたの打撃による痕跡はあるか？」

彼らは、聖人の体に殴打の痕が微塵も見当たらないのを見て、大いに驚いた。その後、彼らは荷車の車軸を取り出し、その一つを聖人の肩に乗せ、両手を車軸の両端に伸ばしてそこに縛り付けた。もう一方の車軸も、拷問者たちは同じように聖人の足に縛り付けた。　その後、拷問者たちは聖人を地面に倒し、その日一日中、真夜中になるまで激しく苦しめた。やがて拷問者たち　が眠りにつくと、夜中に起きて家族のために食事を用意していた女性がやって来た。彼女は聖人を解放し、聖人は立ち上がって、彼女の仕事を手伝い始めた。

日が明けると、アファリドは再び聖人の両手を縛り、家の中の横木に吊るすよう命じた。しばらくして、アファリドから遣わされた者たちが、偶像への生贄の肉を持って長老とサヴァのところにやって来て、こう言った。

「偉大なるアファリドはこう言っている。この肉を口にすれば、死を免れるだろう。」

司祭は使者たちにこう答えた。

「我々はこれを口にしない。悪魔によって穢されたものを食べることは、我々にふさわしくないからだ。むしろ、アファリドが我々を十字架にかけるか、あるいは他の何らかの方法で死に至らしめることなら、喜んで受け入れる。」

すると、聖サヴァは来た者たちに尋ねた。

「これを送ったのは誰か？」

彼らは答えた。

「我らの主、アファリドです。」

それに対し、聖人は彼らにこう言った。

「主はただひとり、天にまします神である。あなたがたが遣わされたそのアファリド自身のように、あなたがたの破滅をもたらす肉は不浄で忌まわしいものだ。」

聖人がこの言葉を口にした途端、アファリドの家来の一人が激しい怒りに駆られ、手にした槍で聖人の胸を激しく突き刺した。その一撃の勢いは、そこに立っていた者全員が、殉教者が死ぬだろ

うと思ったほどであった。　しかし、神の摂理に守られていた殉教者は、その一撃による傷跡も全く残らず、痛みも感じなかった。そして、殴った者にこう言った。

「お前は自分の槍で私を深く傷つけたと思っているだろう。しかし、私はその一撃を、まるで誰かが柔らかい羊毛で私を叩いたかのような感覚しか感じなかった。」

一連の出来事を知ったアファリドは、聖殉教者サヴヴァを処刑するよう命じた。そこで、不敬虔な家来たちは司祭サプサルを縛ったままにしておき、サヴヴァを連れ出し、「ムッソヴァ」と呼ばれる川[3028] へと向かい、そこで彼を溺死させようとした。 聖なる殉教者は、隣人を自分自身のように愛せよという主の戒め（参照：マタイ22:39）を心に留め、自分を連行する家来たちに尋ねた。

「なぜ長老は私と共に死なないのですか？」

彼らは聖人にこう答えました：

「それは君には関係ない。」

彼は喜びに満ちて、こう叫んだ。

「神よ、あなたは祝福され、御子の御名は永遠に賛美されますように、アーメン。なぜなら、アファリドは自ら死と永遠の滅びへと身を投じ、私を永遠に尽きることのない命へと送り出してくれたからです。主なる私たちの神よ、あなたのしもべたちにこのようにしてくださることを、あなたは望んでおられるのです。」

このようにして死へと導かれていく中でも、聖人は神を賛美し、感謝することをやめず、*「今この世での一時的な苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもない」*と考えたのである（ローマ8:18）。

その間、役人たちは互いにこう言い合っていた。

「なぜ、この罪のない人を放してやらないのか。もし彼を逃がしても、アファリドには知られないだろう。」

しかし、聖サヴァは彼らにこう言った。

「なぜそんな愚かなことを言うのか。むしろ、命じられたことを実行せよ。私は、あなたがたには見えないものを見ているのだ。見よ、私の魂を迎えに来るために、栄光のうちに現れた聖なる天使たちがそこに立っている。」

そこで、聖なる殉教者は川へと連行され、首に大きな木の塊を縛り付けられた後、川の深みに投げ込まれ、溺死させられた。こうして、生涯を通じて聖なる信仰を清らかに保ち抜いた聖サヴァは、この世を去った。 彼は三十八年間を生き、復活祭（ ）の五日後に殉教の冠を授かった（すなわち4月12日[3029] 、西ではヴァレンティニアヌス帝、東ではヴァレンティヌス帝の治世下[3030] 、アンフィパトス[3031] モデスタスとアリンフィオスの統治下において）。

しばらくして、処刑人たちは水の中から殉教者の遺体を引き上げ、埋葬することなく岸辺に投げ捨てた。しかし、その尊い遺体は敬虔なキリスト教徒たちの手によって隠されていたため、獣も鳥もそれに触れることはなかった。

真の神を崇拝していたスキタイの軍司令官の一人、イウニウス・サランは、忠実な部下たちを遣わし、ゴート族の地から殉教者の尊い遺体を回収し、ギリシャの地へと運びました。　彼は祖国を栄光で飾りたいと願い、長老たちの助言に従い、この驚くべき賜物であり、信仰の輝かしい実であるものを、カッパドキアの貴殿のもとへ送った――と書簡は締めくくられている――主の御心に従って、主を畏れる者たちに御恵みをお与えになる主の御心に従って。　殉教者が殉教の冠を授かったその

[3028] ムッソヴァ川はワラキアに位置していた。

[3029] 聖殉教者の死は372年に訪れた。

[3030] 皇帝ヴァレンティニアヌスは364年から375年まで在位し、その弟ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[3031] アンフィパトとは、プロコンスル、すなわち比較的広大な行政区域（州）の統治者を指す。

日[3032] に、この殉教者を記念し、他の兄弟たちにもこのことを告げ知らせてください。そうすれば、正統な使徒教会全体が霊的に喜び、御自身にこのようなしもべたちを選ばれた主を賛美するでしょう。　すべての聖人たちに敬意を表しなさい。私たちと共に迫害に耐えているすべての兄弟たちが、聖なる口づけをもってあなた方を祝福しています。その恵みと人愛によって、私たちを天の御国へと導いてくださる方に、その独り子と至聖なる御霊と共に、永遠に栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン」。

聖使徒アリスタルコス、プダ、トロフィモスの記念日[3033]

記念日：4月15日

使徒行伝（使徒19:29）や、聖使徒パウロのコロサイ人への手紙（コロサイ19:29）、フィレモンへの手紙（フィレモン1:24）に言及されている聖アリスタルコスは、シリアのアパメア[3034] の司教であった。

使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』の中で言及している聖プード（*「エウブルとプードに挨拶を」*（IIテモテ4:21））は、ローマ元老院議員であった[3035]。敬虔で徳の高い人物であった彼は、聖使徒ペトロとパウロを自宅に迎え入れた。　また、他の信者たちも祈りのために彼の家に集まったため、その後、彼の家は「牧者の教会」と呼ばれる教会へと変わった。伝承によれば、この教会では使徒ペトロ自身が聖職を執り行ったという。

聖トロフィモスは、『使徒言行録』（使徒20:4）に言及されており、使徒パウロも『テモテへの第二の手紙』の中で次のように述べています。　*「トロフィモは、ミリテで病に伏しているまま残しておいた」*（IIテモテ4:20）*と記されている聖トロフィモスは*、使徒プードスやアリスタルコスと共に、使徒パウロが受けたあらゆる迫害の中で彼に寄り添った。

言及されたこれら3人の使徒は全員、使徒パウロと共にローマで殉教した[3036]　。ネロ皇帝の命により、剣で斬首されたのである[3037]。

聖女殉教者ヴァシリッサとアナスタシアの記念日

記念日：4月15日

キリスト教の信仰を聖使徒ペトロとパウロから授かった聖ヴァシリッサと聖アナスタシアは、キリストのために殉教した聖なる殉教者たちの遺体を埋葬し、主に仕えることに身を捧げました。ネロ皇帝[3038] に彼女たちのことが報告されると、皇帝の命令により、兵士たちに連行され、牢獄に投じられました。　その後、彼女たちはキリストのために多くの拷問を受けた。容赦なく殴打され、鉄の刃で削られ、ろうそくの火で焼かれたが、キリスト教の信仰において揺るぎなく、断固としていた。

[3032] 聖ディミトリ・ロストフスキーは、聖サヴァの伝記のあとがきにおいて、この殉教者の記念日は本来4月12日に行うのがふさわしいと指摘しているが、プロローグでは15日に定められているため、彼は『ミネイ・チェティ』においても、聖サヴァの受難の物語を同日に掲載した。

[3033] 聖アリスタルコス、プード、トロフィモス――70人の使徒のうちの3人

[3034] アパメアはシリア南西部に位置し、オロンテス川のほとりにあった。

[3035] ローマの元老院は、すべての国政を司る最高政府機関であった。

[3036] 聖使徒たちの殉教は、65年頃に起こった。

[3037]　ネロ――ローマ皇帝。54年から68年まで在位し、キリスト教に対する最も残酷な迫害者の一人としてその名を後世に遺した。

[3038] キリスト教を激しく迫害したローマ皇帝ネロは、54年から68年まで在位した。

ついに、彼女たちの首は切り落とされ[3039] 、その後、彼女たちは主のもとへ旅立ち、天国において他の聖なる殉教者たちと共に主の御前に立つこととなった。

4月29日

4月16日（旧暦）

同日は、聖殉教者レオニドスと、彼と共にコリントで苦難を受け、251年に海に沈められた聖女たち――ハリエッサ、ヌネヒア、ヴァシリッサ、テオドラ――の記念日である。

聖殉教女アガピア、ヒオニア、イリナの殉教

記念日：4月16日

ディオクレティアヌス皇帝[3040] がイタリアの都市アクイレイア[3041] に滞在していた際、ローマから、すべてのローマの牢獄がキリスト教徒で溢れかえっており、彼らは様々な拷問にさらされているにもかかわらず、自らのキリストを否定していないという知らせが届いた。彼らは皆、クリソゴンを師とし、彼の教えに固く従っていた。　この知らせを受けて、ディオクレティアヌスは、クリソゴンを除くすべてのキリスト教徒を処刑するよう命じ、クリソゴン一人を自分の元へ連れてきて拷問にかけるよう命じた。

キリストの聖なる殉教者クリソゴノスが、縛られたままローマからアクイレイアへ、ディオクレティアヌス皇帝のもとへ連行される際、聖アナスタシア・ウゾレシテリツァは、彼を師として遠くから後を追った。

ディオクレティアヌスの元へ到着すると、キリストの殉教者は、不敬虔な皇帝の命令に従わない者として、残酷な拷問にさらされた。その後、彼は死刑を宣告され、[3042] 、街の外れにある人里離れた荒野で斬首された。その尊い遺体は海辺に放置され、獣や鳥に食われるままにされた。

その場所からそう遠くないところに、ゾイルという名の敬虔な老司祭が住んでいた。彼の近くには、肉と霊において姉妹である三人の乙女、アガピア、ヒオニア、イリーナが暮らしていた。　この司祭は、神の啓示によって聖殉教者クリソゴンの遺体の在り処を知ると、その遺体と頭部を共に持ち出し、木製の棺に納めて自分の家に隠した。それから30日後、聖クリソゴンが幻視の中で彼に現れ、こう言った。　「知れ、九日が過ぎるまでに、お前の近くに住む三人のキリストの乙女たちが拷問を受けることになる。それゆえ、主のしもべアナスタシアに、彼女たちが苦難の冠を授かるまで、勇気をもって試練に耐えるよう励まし、彼女たちの世話をさせるように告げよ。　あなたもまた、自らの功績の甘美な実を享受できると確信しなさい。まもなくあなたは地上の束縛から解放され、喜びをもってキリストのもとへ去り、聖人たちと共に安らぎを得るからである。」

聖アナスタシアにも同様の啓示がありました。神の御霊に導かれて、彼女は以前全く面識のなかった長老の家を訪れ、彼にこう尋ねました。

[3039] 聖なる殉教者たちの死は、1世紀後半に起こった。彼女たちの聖遺物は、ローマにある、神の母「平和をもたらす方」に捧げられた教会に安置されている。

[3040] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは、284年から305年まで在位した。

[3041] アクイレイアは、古代において北イタリアに位置する大都市であり、紀元前2世紀にローマ人によって建設された。キリスト教会の歴史において、アクイレイアはいくつかの地方公会議の開催地として、また特別な信仰告白（いわゆる「アクイレイアの信条」）の発祥の地として注目されている。

[3042] 聖殉教者クリソゴンの逝去は、教会によって12月22日に記念される。

「あの乙女たちはどこにいるのですか。彼女たちの殉教の死が、あなたに幻の中で示されたと聞いています。」

彼女たちの住まいがどこにあるかを知ると、彼女はそこへ赴き、愛を込めて彼女たちを迎え入れ、一晩を共に過ごした。その間、魂を救う、神の愛に満ちた対話を交わし、彼女たちが自分の花婿であるキリストのために、血を流すほど勇敢に立ち向かうよう励ました。　司祭の家で、キリストの聖殉教者クリソゴン――彼女の大いなる師――の聖遺骨を目にしたアナスタシアは、長い間その遺骨の前で泣き続け、涙を注ぎながら、この聖人の祈りに身を委ねた。　その後、彼女は再びアクイレイアの街に戻り、そこで牢獄に閉じ込められたキリストの囚人たちへのいつもの奉仕を続け、自身の財産から彼らを助けた。

確かに、聖クリソゴノスが幻視の中で司祭ゾイルに語ったとおりになった。10日後、この聖なる長老は主のもとへ召され、3人の聖なる乙女――アガピア、キオニア、イリナ――は捕らえられ、ディオクレティアヌス皇帝のもとへ連行され、拷問を受けた。

彼女たちを見た皇帝は、こう尋ねた。

「どのような狂気が、あなた方を哀れで卑しい迷信に従わせ、我らの公正な法を貶め、我らの神々を不浄なものとして軽蔑させたのか？　しかし、あなた方が高貴な家柄であり、若く美しいことがわかる。それゆえ、あなた方を憐れみ、身を守るよう勧める。　あなたがたのキリストを否定し、神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、私は自分の側近の中から、あなたがたの美しさにふさわしい高貴な家柄の若者三人を選び、あなたがたに立派な夫として与える。その夫たちのおかげで、あなたがた自身も尊敬されるようになるだろう。

この王の誘惑に対し、姉である聖アガピアがこう答えた。

「王よ、あなたは民の事柄や異民族、軍隊のことに心を配るべきであるのに、あなたは多くの不当なことを語り、生ける神を侮辱しています。その神の助けはあなたにとって極めて必要であり、その慈しみはあなたに対して長く忍耐してくださっているというのに、あなたは神を冒涜しているのです。」

すると、ディオクレティアヌスは言った。

「この娘は正気を失っている。別の者を連れて来い。」

その後、彼女の姉である聖ヒオニアが王の前に連れて来られ、彼女は王に次のように言った。

「王よ、私の姉は正気を失っていません。それどころか、健全な判断力をもって、偶像に拝礼せよというあなたの説得が誤りであることを示したのです。」

王は、この姉の話をこれ以上聞く気もなく、三番目の姉である聖イリーナを自分のそばに呼び寄せ、こう言った。

「お前の姉妹たちは正気を失ってしまったのだから、彼女たちの中で最も若いお前が、神々の前に頭を垂れよ。そうすれば、姉妹たちもお前を見て、同じことをするだろう。」

しかし、聖イリーナもまた断固としてこう答えた。

「真の神に背き、不敬虔のゆえに正気を失った敵どもは皆、偶像の前に頭を垂れよ。芸術家が一定の報酬を受けて作った作品に拝跪することほど、虚しく、狂気じみたことがあるだろうか？」
なぜなら、まずあなたは芸術家と相談し、どの価格でどのような偶像を作るか、立っているものか座っているものか、横たわっているものか跳ねているものか、笑っているものか泣いているものか、どのような素材で作るか――木か、石か、銅か、あるいは他の何かの素材か――を決めるからだ。　もしその出来が悪ければ、あなたは契約を破り、もし良ければ、約束した報酬を支払う。そしてその後、その購入し、作らせたものを崇拝し、その偶像を自分の神と呼ぶが、それは神というよりは、むしろ「買った奴隷」と呼ぶべきものである。

このような聖女たちの言葉に対し、ディオクレティアヌスは言った。

「そのような言葉には拷問をもって応じるべきだ」と言い、聖女たちを牢獄に投獄するよう命じた。一方、聖アナスタシア（いつものように牢獄に閉じ込められた者たちを訪ね回っていた）は、これらの聖女たちのところにもやって来て、神の助けへの信頼と、敵に対する輝かしい勝利と凱旋への希望をもって彼女たちを慰めた。

しばらくして、王は民の諸々の必要を整えるため、マケドニアへ赴く必要が生じた[3043]。王に随行して、アクイレイアに投獄されていたすべてのキリスト教徒が連行され、その中には三人の聖処女――アガピア、ヒオニア、イリナ――も含まれていた。聖アナスタシアもまた、彼女たちに従って行った。マケドニアに到着すると、王はドゥルキツィアのイゲモン[3044]に対し、キリスト教徒を拷問にかけて偶像への生贄を捧げさせるよう命じ、従わない者については様々な拷問の末に処刑するよう命じた。当時、そこで様々な拷問にさらされた数多くの聖なる殉教者たちの苦難をすべて記述することは不可能であるため、ここでは前述の三人の聖処女たちの苦難に満ちた功績についてのみ述べることにする。

これらのキリストの花嫁たちがイゲモン・ドゥルキティウスの前に拷問を受けるために連行されると、彼は彼女たちの並外れた美しさを目にした途端、彼女たちに対して不純な欲望を抱いた。彼は彼女たちを監禁するよう命じ、看守を通じて、もし公爵の不敬虔な欲望に応じれば、自由と多くの贈り物を与えると伝えるよう命じた。しかし、聖なる乙女たちは、たとえ一度でも汚されるよりは、千回死を選ぶと決意していたため、イゲモンは、甘言も脅迫も、贈り物も拷問も用いて、彼女たちを自分の不敬虔な欲望に従わせることはできなかった。彼を焼き尽くすような情欲の炎を抑えきれなかったイゲモンは、彼女たちを辱めるために、夜になって彼女たちが収容されていた部屋へ忍び込むことを企てた。

夜が更けると、聖なる乙女たちは祈りを捧げ、神に徹夜の賛美と詩篇を歌い上げた。彼女たちの部屋に入ろうとしたイゲモンは、部屋の敷居に触れた途端、たちまち正気を失い、それ以上進むことができなくなった。三人の姉妹がいた部屋の近くには台所があり、そこには煤で黒く汚れた鍋や釜、フライパンなど、多くの調理器具が置かれていた。聖なる乙女たちがいる部屋に入ることもできず、悪魔に惑わされたイゲモンは台所に入り、そこで煤まみれになり、顔や手、衣服のすべてを煤で汚してしまった。そして、その姿のまま、その部屋のそばで灯りを手に持ちながら待っていた家来たちのところへ出てきた。使用人たちは、エチオピア人のように真っ黒で恐ろしい姿のイゲモンを見て、ひどく怯え、灯りを放り投げてそこから逃げ出した。一方、イゲモンは、なぜ使用人たちが自分の姿を見て逃げ出したのか理解できず、彼らが自分を嘲笑し、からかっているのだと思い込み、激しい怒りに駆られた。その頃にはすでに夜が明けかけており、王子がどこを通りかかっても、その姿を見るやいなや、使用人も、衛兵も、兵士も、まるで何らかの恐ろしい怪物から逃れるかのように、皆、四散していった。そこでイゲモンは、自分の指揮下にあった兵士たちが自分の言うことを聞かず、さらには自分を嘲笑したとして、王に訴えようと思い、王宮へと向かった。しかし、彼が王の住居に近づいた途端、そこから響いてくる大音量で長く続く笑い声を耳にした。そこにいた者たちのうち、何人かは彼を恐れて逃げ出し、また、他の者たちは彼を殴りつけ、王の住居の扉から追い払おうとした。というのも、誰もそれがイゲモン・ドゥルキティウスだとは思いもよらず、皆、彼がただの狂人だと思っていたからである。しかし、イゲモンは、悪魔の仕業によって目が曇らされていたため、自分が煤まみれになっていることにまだ気づいていなかった。彼には、自分の顔は白く、衣服も手もきれいであるように見えた。しかし、ついに家来たちが主人が正気を失ったことに気づくと、すぐに彼を追いかけて家まで連れ帰り、「自分の姿を見てみろ、どんな有様だ！」と言った。

[3043] マケドニアは、バルカン半島に位置し、エーゲ海（テッサロニキ湾）の北西端に面している国である。
[3044] イゲモンとは、地方の統治者を指す。

彼が家に入ると、妻や家中の男奴隷、女奴隷たちは、彼が正気を失ったと思い、激しく泣き出した。一方、他の人々は彼を避け、彼と関わりを持たなかった。　彼自身は、なぜある者たちは自分のために泣くのに、他の者たちは自分をも嫌悪するのか、依然として理解できず、不思議に思っていた。やがて、彼の邪悪な目が開かれ、鏡に映った自分の顔がエチオピア人のように真っ黒になっていることに気づき、悪魔に辱めを受けたのだと悟った。　そこで彼は聖なる乙女たちに激しく怒りを覚え、彼女たちが魔法を使って自分にこうしたことを仕掛けたのだと思い込み、どうやれば彼女たちに復讐できるかを考え始めた。　体を洗い、着替えを済ませると、彼は民衆の目の前で裁判官の席に着いた。その後、イゲモンは拷問器具を準備させ、聖なる乙女たちを再び連れてくるよう命じた。聖なる乙女たちが連れて来られると、イゲモンは彼女たちの体を確かめるために、服を脱がせるよう命じた。　しかし、彼女たちの衣を脱がし始めた途端、何もできなくなってしまった。神の御心により、聖女たちの衣はまるで皮膚が体に密着しているかのように、彼女たちの体にしっかりと張り付いてしまったからである。人々は皆、この奇跡に驚嘆した。使用人たちは長い間、聖女たちの衣を脱がそうと試みたが、どうやってもできなかった。

一方、裁判の席に座っていたイゲモンは、突然うとうとし始め、やがて深い眠りに落ちてしまい、どうやっても目を覚ますことができなかった。彼を揺さぶったり、そばで大声で叫んだりしたが、彼はまるで死人のように眠り続けていた。そこで、眠っている彼を連れて行き、彼の家へと運んだ。しかし、家の中に運び込まれた途端、彼はすぐに目を覚ました。

ドゥルキティオス総督に起きた一連の出来事を知った王は、彼に対して激しく怒り、聖なる乙女たちをシシニオス判事に引き渡して拷問にかけるよう命じた。この判事は、末の妹イリーナから尋問を始めた。彼は尋ねた。

「王の命令に従うか？」

聖女はこう答えた。

「いいえ、従いません。私はキリスト教徒であり、全能の神のしもべだからです。」

すると裁判官は、彼女を牢獄へ連行するよう命じた。その後、アガピアとヒオニアを法廷へ連れてくるよう命じ、彼女たちにこう言った。

「お前の妹は、お前たちに惑わされ、神の律法を軽んじるよう教え込まれた。それゆえ、私は当面、彼女への拷問を延期することにした。そうすれば、彼女はあなたたちの苦しみを見て恐れをなして、我々の言うことを聞くようになるだろう。もしお前たちが苦しみから逃れたいのなら、我々が王の命令に従って行っているように、神々に生贄を捧げよ。」

聖アガピアは裁判官にこう答えた。

「私たちの信仰は揺るぎません。」

すると、裁判官はヒオニアに言った。

「では、お前は何か言うことはあるか？」

ヒオニアは答えた。

「私たちの信仰は決して揺らぐことはありません。」

すると、裁判官は尋ねた。

「キリスト教の書物は何か持っているか？」

聖なる乙女たちは答えた。

「本はありますが、それは私たちの心の中に隠されており、キリストの敵にはそこから取り出すことはできません。」

裁判官は尋ねた。

「誰が、あなた方に自発的にこのような拷問に身を委ねるよう教えたのですか？」

聖女たちはこう答えました：

「この苦しみは一時的なものであり、大きな益をもたらします。なぜなら、それを通じて永遠の栄光に到達できるからです。」

裁判官は厳しく言った。

「王の命令に従い、神々に生贄を捧げなさい。」

しかし、聖なる乙女たちはこう言った。

「私たちは神に賛美の捧げ物を捧げますが、悪魔には決して捧げ物を捧げることはありません。私たちを、私たちの主イエス・キリストから引き離そうなどと考えてはなりません。むしろ、私たちがこの天の王の命令に従うように、あなたもこの地上の王から命じられたことを実行してください。」

そこで、激怒したシシニウス判事は、聖人たちに対して次のような命令を下した。

「裁判での説得にもかかわらず、王の命令に従うことを拒んだアガピオとヒオニオを、生きたまま焼き殺すことを命じる。」

その判決を耳にした聖女たちは喜びに満ち、大声でこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、私たちがあなたの至聖なる御名の証人となることを許してくださったことを感謝いたします。主よ、私たちの魂をあなたの御手に受け入れてください！」

火の中に投げ込まれた聖なる乙女たちは、そこで祈りを捧げ、その祈りと共に自らの魂を主の御手に委ねた[3045] 。その間、激しい炎は聖なる乙女たちの身体を微塵も傷つけることはなく、衣服さえも焦がすことはなかったため、彼女たちには火の痕跡が一切残らなかった。 この出来事は、異教徒たちに対するしるしとなった。すなわち、聖なる乙女たちは火によって死んだのではなく、自らの祈りによって神から至福の死を授かったのだ。火の害を受けなかった彼女たちの尊い遺体は、聖アナスタシア・ウゾレシテリツァの従者たちによって夜中に運び出され、その主人の元へ届けられた。聖アナスタシアは、彼女たちの聖なる遺体に香油を塗って、新しい棺に尊く納め、心の中で喜びつつ、主が彼女自身もそれらの聖なる乙女たちの至福に与かる者とならせてくださるよう祈った。

翌日、裁判官シシニウスは再び法廷に腰を下ろし、聖イリナを連れてくるよう命じた。彼女が連れて来られると、彼は彼女にこう言った。

「神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前の姉妹たちが火の中で滅びたのと同じように、お前も火の中で滅びることはないだろう。」

しかし、聖女は勇敢にこう答えた。

「私は犠牲を捧げません。なぜなら、姉妹たちと同じ至福に与かりたいと切に願っているからです。彼女たちが神の御前に立つとき、私は彼女たちから離れてはいられません。」

「我々の忠告に従え」と裁判官は言った。「さもないと、お前は姉妹たちよりもさらに残酷な拷問にさらされることになるだろう。」

「私はあらゆる苦しみを受け入れる覚悟があります」と聖女は答えた。「私は真理のために死に、死を通して永遠の命を得たいと願っているからです。火の中を通り抜けて、慰めに達したいのです。」

すると、裁判官は彼女にこう言った。

「お前を裸のまま娼館へ連行させ、死ぬまでそこで辱めを受けるように命じる。」

聖女はこう答えた。

「私の肉体は、淫行者によっても、噛みつく犬や、狼や、熊、あるいは蛇の毒牙によられるのと同じように苦しむでしょう。 そして、私の穢れた肉体が苦しむことの方が、偶像崇拝によって私の魂を穢すよりも、はるかにましです。なぜなら、魂がそれを望まないのに、やむを得ず犯した罪は

[3045] 聖女殉教者アガピアとヒオニアの殉教は304年に起こった。

、神の前で罪とみなされないからです。　かつてイエス・キリストの御名を告白したために苦難を受けた聖徒たちは、迫害者たちによって無理やり偶像の犠牲の血を口に注ぎ込まれたが、果たして彼らは汚されたと言えるだろうか?

「果たして、私たちの犠牲の肉を口にした者たちは、汚されなかったというのか」と裁判官は尋ねた。

「汚されたどころか」と聖女は答えた。「むしろ、そのことで神から栄冠を授かったのです。なぜなら、両手を縛られた彼らに対し、無理やり口を開けさせられ、無理やり偶像の犠牲の血を注ぎ込まれたからです。自発的に犯した罪は罰に値しますが、意思に反して犯された罪は責められません。　同様に、私の体を私のキリストに捧げた私に対しても、もしあなたがたが何かを強要したとしても――私は、不死の花婿である主の前で恥をかくことはなく、むしろ主から報いを受けると信じています。なぜなら、主のために、私はあなたがたからの暴行に耐えているからです。　あなたがたが私の体に何をしようとも、私は気にしません。汚すにせよ、傷つけるにせよ、火にかけるにせよ、私は私の主なる神の御名のために、すべてに耐える覚悟があります。しかし、私の神には権威と力があり、あなたがたが私にしようとしていることを許されることはありません。

そこで、裁判官は兵士たちに、その若い娘を娼館へ連行するよう命じ、そこで彼女が死ぬまで辱めを受けるようにと命じた。道中、兵士たちが聖女を連行していると、外見は非常に威厳があり、顔立ちの明るい二人の兵士が追いつき、聖女を連行している兵士たちにこう言った。

「裁判官が、この乙女を我々が示す場所へ連れて行くよう、あなた方に伝えるために我々を遣わした。」

そして、彼らを町の外へ連れ出し、ある非常に高い丘の上に連れて行くと、兵士たちにこう言った。

「さあ、行って、シシニウス裁判官に、命じられた通り、その乙女を丘の上に置いたと伝えなさい。」

兵士たちは判事のもとへ向かったが、二人の色白の男は姿を消した。彼らは神の天使たちであったからである。

一方、聖なる乙女イリーナは丘の上に立ち、彼女を淫行者たちの手から救い出してくださったキリスト・神を賛美し、感謝していた。

裁判官にこの出来事が報告されると、彼は自分の命令が実行されなかったことに激しく怒り、馬にまたがってその丘へと向かった。

近づくと、裁判官は丘の上に立つ聖なる乙女を目にしたが、丘に登ることができなかった。なぜなら、その丘はまるで越えることのできない高い壁で囲まれているかのように見えたからである。丘の周囲を回りながら、彼は聖なる乙女に近づけないことに激しい怒りを燃やし、朝から夕方まで何の結果も得られずに馬を走らせ続けた。　一方、彼に付き従っていた兵士たちの中には、弓を引き絞り、聖なる乙女に矢を放って彼女を傷つけた者もいた。すると彼女は、裁判官に向かってこう叫んだ。

「私はあなたを嘲笑します、この忌まわしい者よ。まるで強靭な男であるかのように、武器を携えて、私のような弱い女に立ち向かってきたのですから。しかし、私は、あなたたちによって汚れも穢れも受けずに、私の主イエス・キリストのもとへ去ります。主は今、私を私の姉妹たちの仲間に加えてくださるでしょう。」

そう言い、神に感謝を捧げた後、聖女は地面に横たわり、その魂を主の御許に委ねた。この出来事は、聖なる復活祭の前日に起こった[3046]。

[3046] 聖殉教者イリーナの殉教は304年に起こった。

夜が更けると、聖アナスタシアは使用人を遣わして、聖なる殉教者イリーナの尊い遺体を丘から運び出させ、香油を塗った後、その姉妹たちの遺体と共に安置した。

こうして、聖なる殉教者たち、三人の姉妹であり処女であるアガピア、ヒオニア、イリーナは、その苦難の業を全うし、栄光のうちに至聖なる三位一体――父と子と聖霊、唯一の神――の御座の前に現れ、神に永遠の栄光がありますように。アーメン。

- 同日、聖殉教者レオニドスと、彼と共にコリントで苦難を受け、251年に海に沈められた聖女たち――ハリエッサ、ヌネヒア、ヴァシリッサ、テオドラ――の記念日である。

聖殉教者イリーナの殉教。

記念日：4月16日

聖殉教者イリーナは、ギリシャにおける聖復活祭の祝祭期間中に殉教した[3047]。彼女は他の多くのキリスト教徒たちと共に一つの洞窟に住み、皆が絶え間ない祈りに身を捧げていた。　不敬虔な偶像崇拝者たちが彼らを統治者に密告し、聖イリーナは統治者の命令により捕らえられ、足枷を嵌められて牢獄に投じられた。　その後、統治者の前に引き出され、尋問を受けた際、彼女は勇敢にもイエスを、すべての被造物の真の神、創造主、救い主であり、人々の贖い主、そして偶像の破壊者であると告白した。このため、彼女は殴打され、再び牢獄に閉じ込められた。　その後、総督は市民から持ち込まれた案件の審理に取りかかり、それが終わると、再び聖女を牢獄から連れ出すよう命じた。彼女が彼の前に連れて来られると、彼はキリストを否定するよう強要したが、彼女はそれを聞くことさえ拒んだ。そこで、拷問官の命令により、彼女は残酷な拷問にさらされた。舌を切り取られ、歯を打ち砕かれ、ついには剣で首を刎ねられた。

4月30日

4月17日（旧暦）

ペルシアの司教、聖殉教者シメオンの殉教

記念日4月17日

ペルシアにおいて[3048]、キリスト教徒の数が著しく増え、彼らには独自の教会、司教、司祭、助祭[3049]が存在していた。これを目にした異教の魔術師たちは、キリスト教徒に対して激しい憤りと怒りを抱いた。これらの魔術師たちは、最も古くからの魔術師たちを祖とし、不敬虔なペルシアの偽りの信仰の擁護者であり守護者であった。　彼らと共に、キリスト教の宿敵であるユダヤ人たちもまた、キリスト教徒に対して反旗を翻した。魔術師たちと結託した彼らは、ペルシャ王サポル[3050]に、

[3047] 『プロログ』によれば、この聖女殉教者はコリントの町で殉教したが、『チェティ・ミネイ』によればマケドニアでのことである。彼女の殉教は、205年（デキウス帝の迫害の時期）か、あるいは304年（ディオクレティアヌス帝の迫害の時期）のいずれかにさかのぼる。

[3048] ペルシャはイラン高原の西部を占めている。現在の国境は、西がトルコ、東がアフガニスタンとバルチスタン、南がインド洋、北がカスピ海沿岸地域である。　ペルシア王朝の創始者は、紀元前558年から529年まで在位し、その征服（西アジアのほぼ全域を征服した）で知られるキュロスである。

[3049] これは紀元後4世紀のことである。

[3050] サポル2世は、紀元310年から381年までペルシアの王であった。

キリスト教徒に対する迫害[3051]を開始するよう唆した。さらにその前から、彼らはセレウキア・クテシフォン（ ）の司教であった聖シメオン（[3052] ）を王の前で誹謗中傷し、このキリスト教の司教はペルシア王国に敵対しており、ギリシャの王と親しく、ペルシアで起きているすべてのことをその王に密告しているかのように語った。

そこで、サポル王はまず第一に、キリスト教徒に多額かつ極めて過酷な税を課し、厳格な者たちにその納税状況を監視するよう命じた。　その後、彼は公然と司祭や神の僕たちを殺害し始め、教会の財産を略奪し、教会そのものを破壊して、基礎まで取り壊した。また、シメオン司教については、ペルシャ王国の敵であり、ペルシャの不敬虔な迷信に反対する者であると見なして、彼を捕らえ、自身の元へ連行して裁くよう命じた。

皇帝の命令により、聖シメオンはアブデライとアナニヤという二人の司祭を伴って皇帝のもとに連行された。兵士たちに捕らえられ、鉄の鎖で縛られた司教は、皇帝の怒りを恐れるどころか、彼に頭を下げることもなかった。そこで皇帝は激しく怒り、聖人にこう尋ねた。

「なぜ、以前のように私に頭を下げないのか？」

聖人はこう答えました。

「以前は、今のようにあなたのもとに連れてこられたことはありませんでした。ですから、私はあなたの地位にふさわしい敬意を払い、あなたにひれ伏していました。しかし今、私の神を否定し、信仰から背くために連れてこられた以上、私の神の敵であるあなたにひれ伏すことは、私にはふさわしくありません。」

王は彼に太陽に拝むよう説得し[3053] 、その見返りとして多くの贈り物や栄誉を約束するとともに、従わなければ自分の王国からキリスト教を完全に根絶やしにすると脅した。しかし、王は聖人が不屈の精神を持ち、甘言にも脅しにも屈して自分の不敬虔な行いに従おうとしないのを見て、彼を牢獄に投獄するよう命じた。

聖人が王宮から牢獄へと連行されていたその時、ある宦官[3054] ウスファザン[3055] が彼を目にした。彼はすでに高齢であり、サポル王を幼少の頃から育て上げ、王に最も近い人物であったため、誰からも大きな敬意を払われていた。　この宦官は当時、王宮の近くで座っていたが、聖シメオン司教が連れ出されるのを見ると、すぐに席から立ち上がり、神の司教に深く頭を下げた。　しかし、聖シメオンは彼から顔を背け、その背教を大声で非難した。というのも、彼はもともとキリスト教徒であったが、王への恐れから太陽を拝してしまったからである。　その後、ウスファザンは深く悔い改め、泣きじゃくり、高価な衣服を脱ぎ捨て、質素で粗末な服に着替え、王宮の門の前に座り込み、涙ながらにこう独り言を呟いた。「ああ、この呪われた私よ！　私が背いた私の神の御前に、いったいどう立ち向かえばよいのか？　見よ、シメオンでさえ、私の背教のゆえに私から顔を背けた。ましてや、私の創造主は、私をどのように見られるだろうか？」

そう言いながら、彼は慰めようのないほど激しく泣きじゃくった。このことを知ったサポル王は直ちに彼を呼び寄せ、彼が泣いているのを見て、こう尋ねた。

「その悲しみの理由は何か。王宮で、お前に一体どのような悲しい出来事が起きたのか？」

[3051] キリスト教徒に対する迫害は、サポル2世によって在位32年目または33年目、すなわち343年から344年にかけて開始された。

[3052] セレウキア・クテシフォン――ティグリス川によって二つの対岸の地域に分断されたペルシアの都市の名称。この都市は、紀元前353年から281年まで在位したセレウコス1世ニカトルによって建設された。

[3053] 太陽崇拝は、ほぼすべての異教の宗教に共通する要素であった。

[3054] 宦官とは、去勢された使用人のことで、通常は東方のハーレムで仕えることを目的としていた。東方の支配者たちに対して、直接的にも、また彼らが寵愛する妻や側室を通じて影響力を行使する機会を与えられた宦官たちは、しばしば国政の行方に強い影響力を及ぼした。

[3055] ウスファザンの異教名はググシアタザドであった。

ウスファザンは答えた。

「いいえ、あなたの宮殿で私に悪いことや悲しいことが起きたわけではありません。とはいえ、今、私が心を痛め、泣いているこのこと――すなわち、今なおこの地上に生きているという事実――よりも、この世のあらゆる不幸や悲しみ、災難をすべて背負うほうがましだったとさえ思います。　私はすでに年老いており、とっくに死ぬべき時を迎えているのに、今もなお、神として崇める太陽を見つめている。全被造物の創造主である神から背き、創造主の代わりに被造物を崇拝するくらいなら、死んだ方がましだった。　しかし、私がそうしたことは、心からの願いからではなく、あなたに気に入られたいという偽善的な動機からでした。それゆえ、私は二つの理由から死刑に値します。第一に、私は私の神であるキリストを否認し、第二に、老いてあなたに不忠実となってしまったからです。　しかし、天と地を創造された神に誓って、私は二度とこのような罪を犯すことはありません。　もはや、死すべき王のために、私の主であり神であるイエス・キリスト、不死の王を怒らせることはしません。また、神の被造物である太陽の前で膝を屈めることもなく、今日から末永く、創造主ご自身を礼拝し続けます。

ウスファザンの言葉を聞いたサポル王は、彼のこのような予期せぬ変貌に大いに驚き、キリスト教徒たちが何らかの魔術でウスファザンを惑わしたのだと考え、彼らに対してさらに激しい怒りを抱き始めた。　しかし、老人を憐れんだ王は、まるで父親のように彼に懇願し、神々に対してそのような屈辱を与えたり、自らに不名誉をもたらしたり、王家に悲しみをもたらしたりしないよう求め、時には優しく説得し、時には脅しをかけて彼を諭した。しかし、ウスファザンは王にこう答えた。

「以前犯したあの無謀な行いだけで、私には十分だ。これからは、創造主の代わりに被造物を崇めるようなことはしない。」

長く多岐にわたる説得の末、王はウスファザンが断固として譲らないのを見て、彼を剣による斬首に処すことを命じた。

死刑の場へと連行される際、至福のウスファザンは、忠実な友である宦官で王の侍従長[3056]を呼び寄せ、王のもとへ行って自分の最期の言葉を伝えてほしいと頼んだ。彼はこう言った。

「王よ」とウスファザンは言った。「私の功績を思い出してください。私が若き日から、まずあなたの父に、そしてその後、つい最近まで、あらゆる熱意をもってあなたに仕えてきたことを思い出してください。これを裏付ける証人は必要ありません。あなた自身がそれをよくご存じだからです。　この長年の奉仕に対し、私はあなたにただ一つの報いを願います。私がなぜ死ぬのか、すべての人に知らせてください。　布告役を命じて、これを大声で宣言させよ。そうすれば、すべての諸侯、貴族、そして民衆が、ウスファザンが王に対するいかなる罪や過ちのためではなく、キリスト教徒であり、自らの神を否定することを拒んだがゆえに死ぬのだと知るだろう。

この願いがサポル王に伝えられると、王はそれに応じることに同意した。なぜなら、誠実で温厚な人物であり、王の教育係でもあった長老ウスファザンでさえ、王が容赦せず、キリストの御名を告白したために無慈悲にも死刑に処したという話をキリスト教徒たちが聞けば、彼らを大いに恐怖に陥れることができると期待していたからである。　しかし、聖ウスファザンは別の考えを持っていた。彼は、キリスト教からの離反によって恐怖と悲しみを味わわせたキリスト教徒たちが、自分の回心とキリストのための殉教の死を知れば、喜び、同様の苦難を堅く耐え抜く決意を固めるだろうと考えていた。

こうして、聖なる殉教者は首を刎ねられた。その際、告示役は「ウスファザンが処刑に臨んだのは、キリストを告白した以外のいかなる罪のためでもない」と大声で叫んだ。

[3056] クビキュラリウス（ラテン語のCubiculum＝寝室に由来）とは、王の寝室の世話役であり、監視役である。

このようなウスファザンの最期を、司祭たちや他のキリスト教徒たちと共に牢獄に囚われていた聖シメオン司教は知った。彼らは言い表せないほどの喜びに満たされ、ウスファザンを迷いから立ち返らせ、殉教の冠を授けた神を賛美した。

しばらくして、再び王の前に召された聖シメオンは、王の前でキリスト教の信仰について大胆に語り、太陽に拝礼することも、王にひれ伏すことも拒んだ。

すると、王は激怒し、牢獄や鎖に縛られていたすべてのキリスト教徒を、我らの主イエス・キリストの救いの受難の日に処刑場へ引き出すよう命じた。　処刑場に連れ出された者は百人にのぼり、その中には多くの司祭、助祭、聖職者が含まれていた。彼らは皆、シメオンの目の前で剣によって斬首されるよう王に裁かれ、その後、シメオンもまた処刑されることになっていた。　縛られたキリスト教徒たちが死へと連行される際、魔術師たちの最年長者が大声で叫んだ。「もしあなたがたのうち、生き残りたい者がいるなら、王と共に太陽にひれ伏せ。そうすれば、即座に自由の身となるだろう」。

しかし、その呼びかけに応じたキリスト教徒は一人もいなかった――誰も彼に返答しなかった。なぜなら、誰も永遠の命よりも一時的な命を優先しようとはせず、誰もが命の与え主であるキリストのために喜んで死のうとしていたからである。　聖なる司教は、聖書の言葉をもって皆を教え導き、天の御国における永遠の命への希望をもって苦難に耐えるよう励まし、皆が恐れずに拷問と死を受け入れるよう力づけた。そして、彼らは皆、剣によって斬り殺された。　その後、聖シメオンもまた、御言葉の群れの牧者として、自らの群れを牧者たちの長であるキリストのもとへ先立たせた後、最後に自らも剣の下に首を差し出し、主のもとへ旅立った[3057]。彼と共に、彼と共に連行された二人の長老、アヴデライとアナニアもまた、二人とも年老いていたが、共に殺害された。

アナニアが剣の下に頭を差し出す番になると、彼は恐れおののき、戦慄し始めた。　その傍らに立っていた、フシクという名の貴族がいた。彼は宮殿のすべての　下級使用人の長であり、密かにキリスト教を信仰していた。彼は、司祭アナニアが剣で首を切られるのを恐れているのを見て、彼に向かって叫んだ。

「恐れるな、老いぼれよ！　目を閉じて、心を強く持ちなさい。そうすれば、すぐに神の光を見るだろう。」

この男がそう言い終えるやいなや、彼は即座にキリスト教徒であると見破られ、捕らえられて王のもとに連行された。彼は王の前で恐れることなく自らをキリスト教徒であると告白し、ペルシャの不敬虔な信仰を放棄した。

その言葉を聞いた王は激しい怒りに駆られ、彼を処刑するよう命じたが、剣で斬り殺すのではなく、他の何らかの拷問的な方法で処刑するよう命じた。首の後ろを切り裂き、そこから舌を引き抜いて切り落とし、その後、聖人の全身の皮を剥ぎ取った。聖人はこのような拷問の末に命を落とした。

同時に、拷問者たちは彼の娘であるアスキトレウという名の乙女も捕らえ、激しい拷問の末、彼女もまた殺害した。この際、主イエスを信じる多くの他の信仰の殉教者たちも殺害された。　この出来事から1年後、同じく聖金曜日（グリーントゥース）に、去勢された聖アザト――王の最も愛された家臣――と、彼と共に千人の聖なる殉教者たちが殉教した。　聖教会は、この期間にキリストのために殉教した者の数を千百五十人と算定している。一方、教会史家ソゾメン[3058]とニキフォロス・

[3057] 聖シメオンおよび彼と共に殉教した他の殉教者たちの死は、343年または344年に起こった。

[3058] 教会史家ソゾメンは5世紀に生き、コンスタンティノープルで弁護士を務めた。彼は（歴史家エウセビオスが着手した）『キリスト教教会史』を323年から439年まで続編として執筆した。

カリストス[3059] は、それぞれの著作の中で、この時期、すなわちキリストの受難の日そのものと聖なる復活祭の日に、数え切れないほどの多くのキリスト教徒が殺害されたと記している。　というのも、不敬虔な王サポーラが「国内のすべてのキリスト教徒を殺せ」という命令を下すやいなや、信者たちは男女を問わず、老若を問わず、自ら急いで家を出て、恐れずに死を覚悟し、主のために喜んで死んでいったからである。

聖アザト・スコペツが殺害されたとき、王は彼を深く愛していたため、その死を大変嘆き、それゆえ殺戮を止めるよう命じた。ただ、自分の占星術師たちに、キリスト教の教師や指導者、司教や長老たちを探し出して拷問にかけるよう命じ、残りのキリスト教徒については容赦するよう命じたのである。　われらは、すべての聖なる殉教者たちの記憶を尊びつつ、殉教の模範であり、栄冠を授ける方である、われらの救い主キリストを、父と聖霊とともに永遠に賛美する。アーメン。

聖人伝：我らの父、メリティノスの主教アカキオス

記念日：4月17日

神の聖なる御使いアカキオスは、アルメニアの都市メリティナ[3060] の出身であり、敬虔で神を畏れる両親の間に生まれた。両親には子供がなかったが、祈りと断食によって、神からこの祝福された子を与えられていたのである。　息子を学問で育て上げた両親は、彼をその町の司教のもとへ連れて行き、神への奉仕に捧げました。それは、神に子供を授かるよう願った際に、そうすることを約束していたからです。

当時、メリティナ市の司教は至福のオトリイであった。このオトリイこそ、テオドシウス大帝の治世下[3061] に、異端者マケドニウス[3062] に対抗して召集された第二回全地公会議において、百五十人の聖父たちの中でも特に堅固な敬虔の擁護者であった人物である。

聖グリゴリオス・テオロゴス[3063] や、その他の正教の熱心な擁護者たちと共に、彼は正教を堅く守り、異端に対して戦った。まさにそのような敬虔な人物、聖オトリウスに、両親は至福の少年アカキオスを託したのである。

聖オトリウス司教は、その少年の中に神の恵みを見出し、彼を教会の聖職者に任命した。アカキウスは力から力へと成長し、徳を積み、教会の務めを熱心に果たし、徳と聖性を高め、すべての人にとって有益な存在となるよう努めた。　敬虔なエウフィミオス大聖人も、少年時代に彼のもとで学問を修めた。　しかし、聖アカキオスは子供たちだけでなく大人たちにも師となり、言葉と、その徳高い生活の模範によってすべての人を啓発した。特に司祭の位に達し、自分に委ねられた人々の魂の救いを顧みる義務を負うようになってからはなおさらであった。聖霊に選ばれた器として、彼はその時にふさわしい者として、司教の位に昇進した。　メリティノスの司教である聖オトリウスがこの世を去り、主のもとへ帰ったとき、彼の後任として、満場一致で至福のアカキウスが選ばれ、全宇宙を

[3059] ニキフォロス・カリストは14世紀の教会史家であり、コンスタンティノープルのソフィア修道院の修道士であった。彼の『教会史』（全18巻）は、ビザンツ皇帝フォキスの死（約611年）までを扱っている。

[3060] メリティナは、小アルメニアの北部に位置していた。

[3061] テオドシウス1世「大帝」は、ローマ皇帝として379年から395年まで在位した。

[3062] 異端者マケドニウスは、公会議による罷免されるまでコンスタンティノープル司教の位にあったが、聖三位一体の第三位格が最初の二位格と等しくないという不敬な教義を説き、聖霊を父なる神の被造物であると認めていた。　マケドニウスの異端は、381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議で非難された。

[3063] 聖グレゴリオス・テオロゴスは、4世紀の最も著名な教父であり教導者であり、328年から390年まで生きた。　彼が著したものは、243通の手紙、507編の詩（詩形式の対話）、および45編の演説であり、その中でも特に注目すべきは、アリウス派の誤った教えに反対して書かれた神学に関する5つの説教である。彼の記念日は1月25日である。

照らすために金の燭台に置かれた燃え盛る蝋燭のように（参照：マタイ5:15–16）、聖座に就いた。この司教は神に深く喜ばれ、その聖性は極めて高かったため、奇跡を行う賜物を受けるにふさわしい者とされた。ここでは、彼の数ある奇跡のうちいくつかを簡潔に紹介する。

ある時、大干ばつが起こり、その結果、深刻な飢饉が予想された。民衆全体が深い悲しみに包まれていた。　キリストの聖人は、飢えに苦しむ民と共に、町の外にある聖大殉教者エウスタフィオスの教会へと向かい、そこでキリストの殉教者に、彼らと共に主へ祈りを捧げ、乾ききった大地を潤すための雨を主にお願いするよう懇願した。　その後、彼は教会のすぐ近くの高台で、見渡しの良い場所に祭壇と神の玉座を設け、そこで涙を流しながら主に祈りを捧げつつ、血を流さない犠牲の儀式を執り行い始めた。　その際、聖人は、通常行われるように聖杯のワインを水で薄めることはせず、心を神に向け、神ご自身が天から水を降らせ、その雨の水で聖杯のワインを薄めるとともに、乾ききった大地にも潤いを与えてくださるよう、熱心に祈った。　聖人の祈りはあまりにも力強く、実効性があったため、たちまち激しい雨が降り出し、それは聖杯の中のワインを溶かすだけでなく、大地にも十分な潤いを与えた。　そこにいたすべての人々の悲しみは喜びへと変わり、皆が神を賛美し、感謝を捧げた。その年、神の御使いアカキイの祈りによって、果実の豊作がもたらされた。

その同じ国には、水量の多い川が一つあり、頻繁に氾濫して周辺の集落を水浸しにしていた。ある日、この川は異例なほど氾濫し、川からそう遠くない場所にあった大きな建物さえも完全に水没し、中には倒壊したものさえあった。　刻一刻と増水し続けるこの川は、周辺の多くの住居を水没させる恐れがあった。そこで、キリストの聖人アカキウスは、人々がこの洪水によって甚大な苦しみを受けているのを見て、川へと近づき、神に祈りを捧げた後、岸の近くに石を置き、川がその石で定めた境界を越えることを禁じた。　するとすぐに、水は堤防内に収まった。水量はかなり増していたにもかかわらず、川幅が狭くなっていたため、この川は、聖人があたかも障壁のように置いて川を堤防内に閉じ込めたその石を越えて、堤防から溢れ出ることはなかった。

前述の都市から18スタディオン[3064] の地点に、ミアシナと呼ばれるギリシャ人の所有地があり、そこは極めて美しく、平坦な土地であった。　その場所の中央には広大な平野が広がり、その中を東に向かって、アゾル、あるいはアズールと呼ばれる、流れが速く清らかな川が流れていた。この川はいくつかの湖を通り抜けていた。　その中最も美しく高台にある場所に、偶像崇拝の神殿があり、アズール川の湖の一つから水を引いて灌漑された果樹園に囲まれていた。この場所は悪魔的な忌まわしさによって穢されていた。なぜなら、ここでは偶像を崇拝するギリシャ人たちが頻繁に集まり、彼らの神々に不敬な生贄を捧げていたからである。

聖アカキオスは、キリストへの熱意に駆られ、この場所を清め、真の神を賛美するために聖別したいと願った。この事業のために、彼は多大な労力を費やさなければならなかった。なぜなら、異教の祭司たちは、自分たちの偶像の犠牲の場を明け渡そうとせず、彼の意図に激しく抵抗したからである。　そして、聖人がその地に至聖なる神の母の名を冠した教会を建て始めると、あの邪悪な者たちはあらゆる手段でそれを妨害した。信者たちが日中に建てたものは、夜になると不敬虔な偶像崇拝者たちによって破壊されてしまったのである。しかし、キリストの聖人アカキオスは、彼らに対して祈りを武器として立ち向かい、敵を打ち負かした。　彼は神の助けにより、偶像崇拝の聖所を破壊し、神の母を称える教会を建てた。この教会を奉献することで、かつて悪魔の住処であったその場所を聖なる天使たちの住処とし、　至聖なる聖母マリアの教会の傍らに、徳高い修道士たちが暮らすための修道院を設立した。　このようにして、かつて悪魔への血なまぐさい不敬な生贄が捧げられていたその場所で、今や真の神への血を流さない清らかな生贄と、日々の賛美と祈りが捧げられるようになった。　聖母マリアの恵みと、奇跡行者アカキオスの祈りにより、この地では奇跡が起こり、それを

[3064] スタディオンは、長さの単位であり、現在のサジェン約88本に相当した。

見たギリシャ人たちは不敬虔な行いを捨て、キリスト神への信仰に回心した。そこで起こった輝かしい奇跡の一つを振り返ってみよう。

ある時、前述の教会の建設者たちが不注意から教会の天井を不堅固に造ってしまったため、キリストの聖人アカキオスが祭壇で神聖な礼拝を執り行っていた際、その天井が教会内部に向かって傾き、今にも崩れ落ちようとしていた。　これを見た教会にいた人々は、慌てふためいて教会から逃げ出そうとしましたが、聖人はこう叫びました。

「主はわがいのちの砦。誰を恐れることがあろうか。（詩編26:1）」

するとたちまち、教会の天井の崩落は食い止められ、聖人の祈りによって、あたかも堅固な土台に支えられているかのように、天井は空中に宙吊りになったかのようであった。　そして、聖人が礼拝をすべて終え、聖職者たちと共に教会から出るまで、その状態は続いた。聖人がそこを出た途端、天井は大きな轟音と共に地面に崩れ落ちたが、誰にも危害は及ばなかった。

ある時、サムリアと呼ばれる村にある別の教会で、この同じ「言葉の羊」たちの良き牧者が、神の言葉を説きながら、その群れに霊的な糧を与えていた。　彼が人々に語りかけている最中、そこにいた多くのツバメたちが甲高い鳴き声で聖人の声を掻き消し、人々がその言葉を聞くのを妨げていた。そのため、時には司教の神を讃える口から発せられる言葉が、ほとんど聞こえなくなるほどであった。　そこで、人々に語りかける途中で少し間を置き、聖人はツバメたちに向き直り、創造主の名において、すべてに黙り、鳴き声を止めるよう命じた。するとたちまち、ツバメたちは一音も発することができなくなり、巣を残してその場から完全に飛び去ってしまった。　それ以来、ツバメたちはその場所に巣を作らなくなり、もしたまたまその教会に飛んできたツバメがいたとしても、そこでさえずることはできず、まるで声を出せないかのように、教会の周りを少し飛び回っただけで、まるで誰かに追い立てられるかのようにその場を飛び去っていった。

町のすぐ近くには、聖アカキオが司教の位に就く前から住んでいた家があった。彼が聖座に就くと、その家を病院兼、貧者や困窮者のための避難所へと改めた。聖人は頻繁にその病院を訪れ、病人に必要な物資を届け、自ら彼らの世話をした。　ある時、収穫の時期に病人のもとを訪れた聖人は、彼らに「すべてに満足しているか、何か不足しているものはあるか」と尋ねた。彼らは、必要なものはすべて十分にあり、ただ一つだけ悩まされていることがあると答えた。それは、数多くのハエが彼らの潰瘍やかさぶたに止まり、体を痛く刺すことで、大きな苦しみを招いているということだった。　聖人は直ちに神に祈りを捧げ、その祈りによってハエを追い払い、二度とそこへ現れないよう命じた。そして、この神の御使いが亡くなるまで、その状態は続いた。それ以来、その家では一匹のハエも見られなくなった。これこそが、この素晴らしい人物が神の恵みによって成し遂げた奇跡である。

同様に、彼は湖で激しく鳴き、病人の耳を苛立たせていたヒキガエルたちに、黙るよう命じた。しかし、しばらくして彼はヒキガエルたちを憐れみ、再び沈黙を解いたが、完全には解かなかった。というのも、彼はヒキガエルたちが以前のように大声で鳴くのではなく、静かに鳴くことを許したからである。　水のない場所で、聖人は乾いた岩から冷たい水の泉を湧き出させ、渇きを癒やした。この偉大な奇跡行者は、他にも多くの驚くべき奇跡によって、この世の人々を驚かせた。

聖アカキオスは、テオドシウス2世の治世下、エフェソスで開催された第三回全地公会議に出席した[3065]。そこで、聖キリル、アレクサンドリア総主教、および他の聖なる教父たちと共に、アカ

[3065] テオドシウス2世（若き）、ローマ皇帝は、408年から450年まで在位した。第3回全地公会議は、彼の治世下の431年に招集された。

キオスは、コンスタンティノープル総主教であり、聖母マリアを冒涜した不敬なネストリウス[3066] を罷免し、破門した。聖アカキオスは、すべての聖なる教父たちから愛され称賛され、皇帝自身からも尊敬を集めていた。

キリストの教会を長きにわたり賢明に統率し、数多くの奇跡を成し遂げた聖アカキオスは、安らかに主のもとへ帰った。 その尊い遺体は、聖殉教者ポリエウクトスの遺体の隣に埋葬された。 彼は今、主の御前に立ち、他の聖人たちと共に、全被造物によって永遠に賛美される唯一の神、父と子と聖霊を賛美している。アーメン。

聖殉教者アドリアンの受難

記念日：4月17日

キリストの聖殉教者アドリアンは、裁判が行われるずっと前に捕らえられ、様々な牢獄に投獄されたキリスト教徒の一人であった。彼は、異教の神々への生贄が捧げられ、偶像を崇める異教徒たちが皆、その生贄の儀式に参加していた時に、牢獄から連れ出された[3067] 。 聖殉教者もまた、祭壇に近づき、その上に手を置くよう強要されたが、彼はそれに応じるどころか、勇敢かつ毅然として祭壇に歩み寄り、それを破壊し、その上に置かれていた供物を引きずり下ろし、火を散らした。 この行為により、彼は統治者の怒りを買い、その場に居合わせた偶像崇拝者たちは激怒し、聖人を捕らえて容赦なく殴打し始めた。 ある者は棒で、ある者は鉄の棒で彼を殴り、またある者は石を拾って彼の歯を打ち砕き、ついには巨大な炉を赤熱させて、その中に聖なる殉教者を投げ込んだ。拷問者たちは彼の肉体を焼き尽くしたが、彼の霊は天に昇り、神のもとへ[3068] 。

我らの尊き父ゾシマ、ソロヴェツ修道院のイグメンの生涯

記念日：4月17日

尊者サヴァティイの帰天から一年後、主はソロヴェツキー島において、この聖なる人が修業に励んだその場所を、栄光に満ちた偉大な修道院を建立することで称えることを御心に留められた。この事業のために、主は尊者サヴァティイに匹敵する功績を持つ人物、すなわち尊者ゾシマを選ばれた。本稿では、この尊者ゾシマについて述べる。

尊者ゾシマはノヴゴロド地方の出身であり、その故郷はオネガ湖のほとりにあるトルヴヤという村であった。両親のガブリエルとバルバラは、厳格で敬虔な生活を送っており、幼い頃からこの少年をキリスト教の美徳をもって育て上げ、読み書きも教えた。 少年ゾシマは物静かな性格で、心は柔和かつ謙虚であり、若者の間にあるあらゆる悪しき習わしを遠ざけていました。心身ともに成長するにつれ、ゾシマは聖書を熱心に学び、そこから神の慈愛の豊かさを深く理解していきました。

心と体の清さを保ちたいと願ったこの貞潔な少年は、結婚しないことを決意した。彼は結婚そのものを悪いものとして忌み嫌っていたわけではないが、使徒の言葉にあるように、神に喜ばれることを妨げるものとして避けることにしたのである。 *「未婚の者は、主にどのように仕えるかを考え*

[3066] ネストリウスは、イエス・キリストにおいて神性と人性という二つの本性が結合しているという教義を不当に説いた。彼は、イエス・キリストが聖母マリアから単なる人間として、すなわち一つの人間性のみを持って生まれたと主張した。一方、神性はその後になって初めて彼に宿り、時折彼を離れるものだと説いた。

[3067] おそらく、この聖殉教者が牢獄から連れ出された当時、何らかの異教の祭りが行われており、民衆による異教の神々への生贄が捧げられていたのだろう。

[3068] ヴァシリーの暦によれば、聖殉教者アドリアンはレオニードおよびイリーナと同時に殉教した。彼らの記念日は4月16日に祝われる。

、*主を喜ばせようと努める。しかし、既婚の者は、この世のことに心を配り、妻を喜ばせようと努める*」（Iコリント7:32–33）。こうして、唯一の神に喜ばれるために、彼は自分の肉欲を断ち切ることを決意した。　ところが、両親が彼に結婚するよう説得し始めたとき、聖人はこれを深く嘆き、実家を離れ、世俗を捨て、修道者の姿をとって、実家の近くにある人里離れた場所に隠遁者として住み着き、そこで祈りと断食に励み始めた。

聖人は、自らまだ聖書を十分に学び尽くしておらず、厳格な修道生活についても教えられていなかったため、若者として徳を熱心に追求する者が学ぶべきことを、実際の行いをもって示してくれる熟練した指導者を必要としていた。　さらに、聖人は、身寄りの近くにいることが自身の修行の妨げになるのではないかと懸念していた。　そこで、彼はここから離れ、より人里離れた場所へ赴き、そこで厳格な修道生活に全身全霊を捧げられるようにしようと決心した。とりわけ、　において、彼の心には神への愛の炎がますます燃え上がり、徳においてさらに高みを目指すよう彼を駆り立てていたからである。

しかし当初、尊者にはどこで、どのように修道院を設立すべきか分からなかったため、神に修道院の場所を示してくださるよう、またその意図を実現するためのあらゆる手段を授けてくださるよう、熱心に祈った。

神の御計画により、尊者ゾシマは、かつてソロヴェツキー島で尊者サヴァティイと共に暮らしていた、ヘルマンという名の徳高い修道士に出会った。　この修道士は、尊者ゾシマに尊者サヴァティイの生涯と功績を語り、また、ソロヴェツキー島は世俗の集落から遠く離れており、森や魚が豊富な湖に恵まれているため、修道士たちが住むのに適していることを伝えた。

これを聞いた聖ゾシマは心から喜び、その島の住人となり、聖サヴァティイの後継者になりたいと願った。そのため、ヘルマンに、その人里離れた島へ連れて行ってくれ、そこで修道生活の手ほどきをしてくれるよう熱心に懇願した。

その頃、尊者ゾシマの両親はこの世を去った。両親の遺体を埋葬し、その財産を貧しい人々に施した後、至福のゾシマはゲルマンと共にソロヴェツキー島へと向かった。神の御加護により、彼らは無事に島にたどり着き、船乗りたちが普段立ち寄る場所に上陸した。そこは波が穏やかで、水は淡水であった。 岸からそう遠くない場所に、聖人たちはテントを張り[3069]、その中で徹夜祈祷を行い、ダビデの詩篇を詠み、キリスト神と至聖なる聖母マリアに、この人里離れた島への定住のために、天から助けと祝福を授けてくださるよう祈った。

翌朝、尊者ゾシマは天幕から出て、自分とその場所全体を照らす、明るく輝く一筋の光を見た。　東の方角に目を向けると、雲の上に壮大で美しい教会が見えた。聖ゾシマは、まだそのような神の啓示に慣れていなかったため、その教会を長く見つめることができず、すぐにテントへと駆け戻った。　ヘルマンは、彼の顔に動揺の色を見て、何か特別なものを目撃したのだと思い、こう尋ねた。「なぜ、愛すべき友よ、あなたの表情が変わったのですか？　何を恐れたのですか？　もしかして、何か新しい、あるいは珍しいものを見たのですか？」

このヘルマンの言葉に対し、ゾシマは、上から降りてきてその場所を照らし、また雲の上に浮かぶ教会を照らしていた一筋の光を見たことを彼に語った。　この幻視について考えを巡らせていると、ゲルマンは（サヴァティア修道院長時代に起きた）この島からの信徒たちの追放と、島に修道院を設立するというサヴァティアの予言を思い出し、ゾシマにこう言った。

「恐れるな、怯えるな、愛する者よ。しかし、よく心に留めておきなさい。主は、あなたを通じてここに多くの修道士を集めることを御心に適うと思われるからだ。」

[3069] 尊者ゾシマが初めてソロヴェツキー島に上陸したのは1429年のことである。尊者ゾシマはゲルマンと共に、現在の修道院から10ヴェルスタ離れたセキルナヤ山の近くで上陸し、そこで木製の十字架を立てた。

その後、ゲルマンは、漁師の妻とコレリの岸辺から来た男に起きた出来事について彼に語った。彼らは嫉妬からこの島を自分たちのものにするためにやって来たのだが――すなわち、二人の金髪の若者がその女性を殴りつけ、こう言ったというのだ。

「この島にはあなたたちの居場所はない。ここから立ち去りなさい。この場所は、神が修道士たちが住むために用意された場所だからだ。」

聖ゾシマは、ヘルマンからこの言葉を聞くと、霊的な喜びに満たされ、ここに修道院を建立するという決意をさらに固めた。

神に熱心に祈り、この事業が順調に進み、最後まで成し遂げられるよう助けを請うと、修道士たちは作業に取りかかった。　まず、彼らは修道室の建設に必要な木を切り倒し、次に修道室を建て、中庭を塀で囲んだ。彼らは肉体的な労働と霊的な労働の両方に同時に励んでいた。すなわち、肉体では修道院の建設に励み、霊では断食と祈りの全武装をもって悪魔に立ち向かっていたのである。修道士たちは、自らの汗を流して土地を耕し、種を蒔くことで、自らの糧を得ていた。神は、天から慈愛をもって彼らを見守り、彼らのあらゆる行いを助け、御自身の僕たちを力づけてくださった。

しばらくして、ゲルマンは生活必需品を調達するために海の向こう側へ旅立った[3070]；そこで数日間過ごした後、彼はすでに帰路につこうとしたが、秋が訪れ、空気が冷たくなり、雪が降り始め、嵐が吹き荒れ、海は荒れ狂い、氷で覆われてしまったため、　そのため、小舟でソロヴェツキー島へ戻ることはもはや不可能となっていた。そこで、至福のヘルマンは冬の間ずっとその岸辺に留まり、尊者ゾシマは島に一人残された。

当初、尊者ゾシマは孤独の中、長老ヘルマンを深く嘆いていたが、やがてすべての希望を神に託し、ダビデと共にこう語った。*「私は胎内からあなたに委ねられました。母の胎内から、あなたは私の神です。私から離れないでください」*（詩編21:11–12）。さらに、*「私は母の胎内からあなたに依り頼んできました。あなたは私を母の胎から引き出してくださったのです」*（詩編70:6）。聖人はさらに熱心に修行に励み、労苦に労苦を重ね、絶え間なく断食と祈りの行いに身を捧げた。　一方、悪霊たちは、その悪意と嫉妬ゆえに、この修行者の聖なる生活を耐え忍ぶことができず、彼に対して攻撃を仕掛けた。時には彼に落胆を植え付け、時には様々な幻影や凄まじい叫び声で彼を脅かし、この勇敢なキリストの戦士を怯えさせ、揺るぎない者を動揺させようと企んだ。　またある時は、野獣や蛇の姿をとって、まるで彼を引き裂こうとするかのように、猛烈な勢いで彼に襲いかかった。しかし、神のしもべは十字架の印と祈りをもって彼らに立ち向かい、彼らを嘲りながらこう言った。

「ああ、敵の取るに足らぬ力よ！もしあなたがたが神から権威を与えられているのなら、私を好きに扱え。もしそうでないのなら、無駄な努力をしているだけだ」――そしてダビデの詩篇から次の節を詠んだ。*「彼らは私を取り囲み、包囲したが、主の御名によって私は彼らを打ち倒した」*（詩編117:11）；さらに、*「神が立ち上がられれば、その敵は散らされる」*（詩編67:2）とも。

その後、聖人は神に向かって熱心な祈りを捧げ、心を動かされながらこう叫んだ。

――永遠の神よ、初めなき王よ、すべての被造物の創造主であり主よ！　あなたは、君臨する者たちの王であり、支配する者たちの主です。あなたは、魂の救い主であり、あなたを信じる者たちの救い主です。あなたは、労苦する者たちの希望であり、海を航行する者たちの頼りです。あなたは、あなたのしもべたちの導き手です。あなたは、あらゆる善の守護者であり、泣く者たちの慰め手であり、聖徒たちの喜びです。　あなたは永遠の命であり、決して消えることのない光です。あなたは聖なるものの源であり、父なる神の栄光、聖霊の満ち溢れです。あなたは父と共に座し、永遠に支配しておられます。あなたのしもべである私は、謙虚にあなたの御前にひれ伏して祈ります。最も聖なる王よ、　至慈愛なる主よ、私の祈りから御顔を背けず、私を飲み込もうと待ち構える破滅をもたらす蛇の口から私を救い出し、悪魔の中傷から私を無傷で守ってください。そうして、　御あなたの聖

[3070] それは1435年のことでした。

なる天使たちに守られ、その猛威から救われ、私の主であり、私が信じ、頼り、父と聖霊と共に永遠に賛美する御あなたのもとで救いを得ることができますように。

このように祈りながら、尊者様は敵のあらゆる攻撃を大胆に退けられました。その祈りと十字架の印によって、悪魔たちは風による塵のように逃げ去り、尊者様は彼らから何の害も受けずに、神を賛美し、栄光を帰し続けられました。

さらに、聖人に次のような試練が訪れた。　当時続いていた厳しい冬の最中、夏に蓄えた食糧が底をつき、聖人は夏まで何を食べて生き延びればよいのか分からず、心の中で動揺し始めた（これは、目に見えない敵たちが、迫り来る飢餓への恐怖と早すぎる死の幻影で彼を惑わせ、その魂に悲しみを植え付けていたからである）。　しかし、聖人は心の中で思索を重ねながら、主ご自身が聖なる福音書の中で語られた言葉を思い起こした。*「何を食べようか、何を飲もうかと心配してはならない。　まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる。あなたがたの天の父は、あなたがたがこれらすべてを必要としていることを知っておられるからである」*（マタイ6:31, 34, 33, 32）。　すべての希望を摂理の神に託し、聖人は詩篇の作者の言葉によって自らを慰めました。*「あなたの悩みを主に委ねよ。主はあなたを支えてくださる」*（詩篇54:23）。このように自らを慰めることで、聖人は、私たちの救いの敵によってその心に植え付けられたあらゆる落胆を追い払ったのです。

そして実際、神は御自身を信頼するこの敬虔な者を置き去りにすることはなかった。神は、パン、小麦粉、油が入った籠を携えた二人の男を彼の元へ遣わされた（海辺に住む人々は、冬の間、内陸のどこかへ出かける際、食料の備えを持っていく習慣があった）。　その二人の見知らぬ男たちは、聖者に食料の入った籠を差し出し、こう言った。

「敬虔な父よ、この籠から好きなだけ取って食べてください。私たちは、神が命じられる時に、またあなたのところへ参ります。」

そう言うと、正体不明の男たちはたちまち姿を消してしまったため、聖人は彼らが誰で、どこから来たのか尋ねる間もなかった。

長い時間が過ぎたが、正体不明の男たちは聖者に訪ねてこなかった。そこで聖ゾシマは、これが神による御訪問であったことを悟り、自分への神の御摂理と、天からの予期せぬ賜物に対して、心から主に感謝を捧げた。

冬が終わると、長老ゲルマンが訪れ、マルコという名の、職業は漁師であるある世俗の人を連れてきた。同時に、ゲルマンは十分な量の食料と、魚を捕るために必要な網も持ってきた。

しばらくして、マルコは修道者の位を受け入れた。その後、多くの世俗の人々が修道者たちの元を訪れるようになり、ここで自分の小部屋を築き、自らの労働で生計を立てるようになった。

その直後、尊者ゾシマは、我らの主イエス・キリストの栄光ある変容を記念して、主イエス・キリストの名を冠した小さな教会を建てた。　この教会は、尊者ゾシマが空中に教会と、それを照らす一筋の光を見たまさにその場所に建てられた。その後、尊者は教会に小さな食堂を増築し、こうして島に共同の修道生活を送る共同体を設立した。

その後、聖人は兄弟の一人をノヴゴロドの大司教イオネのもとへ遣わし、教会の奉献および新設される修道院のイグメーンに対する祝福を請うた。大司教は直ちに聖人へ祝福と、イグメーンとして聖司祭パウロを遣わした。　大司教の祝福と修道院長を受け取った聖ゾシマ、至福のヘルマン、そしてすべての修道者たちは、大いなる喜びに包まれた。その直後、神の栄光のために教会が奉献され、こうして尊厳と栄光に満ちたソロヴェツキー修道院がその歴史を刻み始めたのである。

しかし、しばらくして、修道院長パヴェルは、隠遁生活の労苦に耐えきれず、修道院を去ってノヴゴロドに戻った。　彼の後を継いでイグメンとなったのはフェオドシイだったが、彼もまたしばらくして修道院を去った。そこで修道士たちは、他の修道院からイグメンを迎えるのではなく、自分

たちの仲間の中からイグメンを選出することに合意した。そして、修道士たちは尊者ゾシマをイグメンに選出することを決めた。

一方、修道者たちの一部はノヴゴロドへ向かい、ノヴゴロドの大司教に対し、彼らが選んだ修道院長を呼び寄せ、たとえ彼がこの名誉ある職務を引き受けることを望まなかったとしても、彼を叙階してこの聖職に就かせるよう懇願した。

大司教は修道者たちの願いを叶えるべく、尊者へ招請の手紙を送った。その後、ゾシマが彼の元へ到着すると、大司教は彼を説得してイグメンの位を受け入れるよう促し、最後に激励の言葉を贈って、彼を栄誉をもって送り出した。

尊者がノヴゴロドを後にし、自らの修道院へ向かう際、多くのノヴゴロド市民が、修道院での共同生活に必要とされるあらゆる物――器、衣服、金銭、食料――を尊者に提供した。イグメンの位を帯びて修道院に戻ると、尊者は兄弟たちから大いなる喜びをもって迎えられた。

尊者が修道院で初めて聖体礼儀を執り行った際、すべての人の目の前で奇跡が起こった。尊者の顔は聖霊の恵みによって輝き、天使の顔のように明るくなった。同時に、聖堂は芳香に満たされた。これは、尊者が司祭職と修道院長職の位をふさわしく受け入れたことの証しであった。　そして、修道院の兄弟たちは皆、神の恵みに満ちたこのような牧者を得て大いに喜んだ。

ちょうどその時、その教会には数人の商人がいた。　聖人は、自身の聖務からプロスフォラを彼らに与えたが、彼らは不注意からそれを地面に落としてしまった。マカリイという兄弟が通りかかった際、地面に落ちているプロスフォラに気づき、そのそばに立ってそれを食べようとしていたが、炎に焼かれている犬を見た。　兄弟はプロスフォラを拾い上げ、聖者に持ち帰り、目撃したすべてを修道院の兄弟たちに語った。兄弟たちはこの出来事に驚き、神を賛美した。

修道者の数がますます増え、祈りのために集まる人々を教会が収容できなくなったのを見て、尊者様は全員を収容できる大きな教会を建て、多くの新しい修道室も設けた。

数年後、尊者は、同じ島で多くの修行を積んだ至福のサヴァティアを思い出し、その尊い遺骨が別の場所、　彼が息を引き取ったヴィーゲ川のほとりではなく、尊者ゾシマがすでに長年にわたり兄弟たちと共に荒野での修行に励んできた場所にあることを残念に思い、そこで尊者サヴァティアの聖遺骨をこの地へ移す方法について、兄弟たちと相談し始めた。　尊者ゾシマがまだこの件について兄弟たちと相談していたところ、ベリェゴエ湖にある至聖なる聖母マリア修道院から、聖キリル修道院の修道士の一人が届けた、イグメン・キリルと兄弟たちの名義で書かれた書簡が届いた。その書簡には次のように記されていた。

――父なる神と、我らの主イエス・キリストからの恵みと憐れみが、キリストに愛される霊的牧者であり、神を愛するイグメン・ゾシマと修道士たちの上にありますように。　貴方方から当方へ訪れた人々から、ソロヴェツキー島は、太陽が天に輝き始めて以来、そこへの航海が困難であったため、かつては人が住んだことがなかったが、今や神の御摂理と至聖なる聖母マリアの取り成しにより、修道士たちが定住しているとの話を伺いました。　また、貴殿方の勤勉な努力により、主なる神であり我らの救い主イエス・キリストの変容を称える修道院が島に建立され、すでに多くの修道士たちがそこで精進していると聞きました。さらに、至聖なる聖母マリアの祈りにより、貴殿方のすべてが整っていると聞きました。　ただ一つだけ欠けているものがあります。それは、あなた方の近くに、尊者サヴァティイの聖遺物がないということです。彼はあなた方よりさらに以前から、その島で多くの修道者の務めに励み、古の修道者たちのように極めて徳高い生涯を送りました。全霊をもってキリストを愛し、世を離れて、主のもとで至福の死を迎えたのです。　当修道院の兄弟たちのうち、ノヴゴロドに滞在していた者たちは、ヨアンという名の敬虔な男性から、彼が貿易のために海を渡り、ヴィーゲ川にいた際、尊者サヴァティウスを生きた姿で拝見し、彼から霊的な教えを聞く栄誉に浴したという話を聞いた。　ヨハネによれば、尊者サヴァティイが神のもとへ魂を帰した際、その尊い遺体

はイグメン・ナファナイルによって相応の礼遇をもって埋葬されたという。　またヨハネは、海上で起きた奇跡についても兄弟たちに伝えた。それは、聖サヴァティイの祈りによって、神が彼と彼の兄弟テオドロスを溺死から救われたという出来事であった。　ヨハネは他にも多くのことを伝え、さらに、尊者サヴァティイの棺の前で多種多様な癒やしや奇跡が起こっていることについても語った。というのも、尊者サヴァティイは神に喜ばれたからであり、　私たち自身も、この祝福された父がキリロフ修道院の聖母マリア修道院で、私たちと共に十分な年月を過ごされたことから、その徳高い生涯の証人である。　それゆえ、我々は今、貴殿に書簡を送り、次のように助言いたします。このような賜物を自ら奪うことなく、敬虔な心をもって聖サヴァティイの尊い遺骨を貴殿の修道院へ移し、彼が長年にわたり労苦を捧げた場所に安置されるようにしてください。　主イエス・キリストに喜び、私たちのために祈ってください。そうすれば、尊者サヴァティイの執り成しにより、神が私たちを取り巻くあらゆる災いから救い出してくださいますように。

ソロヴェツキー修道院の院長である至福のゾシマが、この書簡をすべての修道士たちの前で声に出して読み上げたとき、彼も修道士たちも皆、心躍らせ、まるで口を揃えてこう言ったのです。

「これは人間からのものではなく、神ご自身からのものだ！」

そして直ちに航海のための船を準備し、それに乗って対岸へと向かい、順風に乗ってすぐにそこにたどり着いた。ヴィギ川のほとりに建てられた教会に到着すると、修道士たちは尊者サヴァティイの墓を掘り起こし、たちまち空気が芳香に満たされた。　棺を開けてみると、聖人の遺体も衣服も、腐敗の兆しは微塵もなかった。驚いた兄弟たちは神を賛美し、聖歌を歌いながら尊い聖遺物を船へと運び込んだ。　その後、追い風に乗って修道士たちは航海に出発し、まもなく修道院に到着した。彼らは、聖サヴァティイの聖遺骨という霊的な宝物を授けてくださった神に喜びと感謝を捧げた。聖遺骨は、聖母マリアの被昇天教会の祭壇の後ろに、特別に設けられた礼拝堂に安置された[3071]。そして、信仰をもって聖サヴァティイの棺を訪れたすべての病人は、その病から癒やされました。至福のゾシマは毎夜、聖サヴァティイの墓を訪れ、朝まで何度も深く頭を下げながら、ここで熱心に祈りを捧げました。　前述の商人ヨアンは、かつて聖サヴァティアの葬儀に奉仕し、自身と弟テオドロスを海での難から救ってくれたことへの深い感謝を込めて、聖人のイコンを描き、それをイグメン・ゾシマに捧げるとともに、修道院と修道士たちのために必要な多くの物資も寄進した。　修道院長ゾシマは、聖サヴァティアの尊い聖像を受け取ると、それに口づけをし、聖人の遺骨の上に安置した。そして、その聖像を聖人そのものとして向き合い、こう言った。

「神のしもべよ！　あなたは肉体を離れてこの世の生涯を終えたとはいえ、その霊をもって私たちから離れないでください！　私たちをキリスト・神へと導き、主の戒めの道を歩み、私たちの主であり救い主の足跡に従って、忍耐強く自らの十字架を背負うよう、私たちを教え導いてください。尊者よ、主イエス・キリストとその聖母マリアに対して大胆に祈りを捧げるあなたこそ、この聖なる修道院――その創設者であるあなた――に住む、不適格な私たちのために、祈りの仲介者となり、執り成し手となってください。　神の御前で私たちの助け手であり、守り手となってください。そうすれば、私たちはこの地に住みながら、あなたの祈りによって悪魔や悪人からの害を受けずに済み、聖三位一体――父と子と聖霊――を賛美することができるでしょう。

ソロヴェツキー修道院が日増しに新たな入山者によって増え、徳高い修道士たちによって彩られ、また尊者ゾシマの偉業によって栄えるのを見て、　あらゆる善の敵である悪魔は、修道士たちへの嫉妬に燃え上がった。しかし、悪魔自身では修道院に何ら手出しができなかった。なぜなら、常に至福のゾシマや他の勇敢な修行者たちによって追い払われ、恥をかかされていたからである。そこで悪魔は、悪人たちの助けを借り、彼らの中に聖なる修道院に害を加え、侮辱したいという欲望を煽っ

[3071] 尊者サヴァティイの聖遺骨は1465年に移送された。

た。　悪魔の唆しにより、ソロヴェツキー島には、貴族の家臣やカレリア地方の住民たちが大勢やって来るようになった。彼らは湖で魚を捕りながら、同時に修道士たちが修道院の必要のために魚を捕ることを禁じた。　これらの人々は自らを「島の主人」と称し、尊者ゾシマや他の修道士たちを罵倒し、修道院を荒廃させ、修道士たちをここから完全に追放すると脅して、彼らに多くの苦難をもたらした。　そのため、尊者ゾシムは、ノヴゴロドの大司教テオフィロスのもとへ赴き、加害者たちからの保護と助力を請う必要があった。彼は弟子たち数名を連れてノヴゴロドへ向かい、大司教のもとに着くと、彼に頭を下げて、悪人たちに苦しめられている修道院からの嘆願を伝えた。　大司教は彼にこう言った。「敬愛する父よ、私は神の御加護のもと、いつでもあなたの修道院をあらゆる方法で助ける用意がある。しかし、何よりもまず、私たちの街を統治するボヤールや貴族たちに助けを求める必要がある。」

尊者ゾシマはボヤールたちの元へ向かい、彼らの家を回って、修道院を守り、悪人たちにそれを荒らさせないよう熱心に懇願した。町を統治するすべてのボヤールたちは、尊者に援助を約束した。

聖ゾシマは、マルファという名の未亡人であるあるボヤール夫人のところにも行かなければならなかった。というのも、彼女の使用人たちはもちろん、彼女の領地に住む村人たちまでもが、修道士たちをひどく虐げていたからである。使用人たちが聖人が訪ねてきたことを彼女に告げると、彼女は彼を恥辱とともに家から追い出すよう命じた。　謙虚な神のしもべは、この侮辱を忍耐強く受け止め、弟子たちにこう言った。「やがて、この家の住人たちはもはや自分の庭を歩き回らなくなる日が来るだろう。この家の扉は閉ざされ、二度と開かれることはなく、この家は荒れ果ててしまうだろう」。

やがて、その聖者が予言したことは現実のものとなった。

一方、大司教はボヤールたちを呼び寄せ、尊者ゾシマの修道院がボヤールの家臣や住人らから受けたあらゆる不当な扱いや不快な出来事について彼らに伝えた。　ボヤールたちは、聖ゾシマに援助と協力を惜しまないことを満場一致で決定し、その島全体を彼の所有として譲り渡した。島に対する所有権は、ボヤールたちが文書で確約し、そこに八つの印章を添付した。第一の印章は大司教のもの、第二はポサドニク（都市長官）のもの、第三は千人隊長のもの、そして残りの五つの印章は都市の五つの地区長によるものであった。　さらに、ボヤールたちは修道院に必要なあらゆる物資――礼拝用の器、聖衣、金や銀、そして大量の食糧――を尊師に贈り、今後もあらゆる面で修道院を支援することを約束した。

これらすべてを耳にし、さらに尊者ゾシマの徳高い生き様を知った前述のボヤリニャ・マルファは、自分のところに真の神のしもべがいたことを悟り、悔い改めて使いを尊者のもとへ送り、自分の邸宅での宴に招いた。　聖者が彼女の家に入ると、彼女は子供たちと共に聖者から祝福を受け、彼を上座に招いた。宴に招かれた者たちが皆、酒を飲み、たくさん食べ、楽しんでいる間、聖者はいつもの習慣通り、ごくわずかな食事しか口にせず、終始静かに、穏やかに座っていた。　食卓に着いていたボヤールたちを一瞥したとき、彼は非常に驚いた。そこには恐ろしい光景が広がっていたからだ。彼は顔を伏せ、誰にも何も言わなかった。　もう一度目を向けると、聖人は同じ光景を目にし、再び顔を伏せた。そしてついに三度目、彼は再びあの恐ろしい光景を目にした。すなわち、彼と共に食卓に着いていた最も重要な六人のボヤールたちが、頭のない姿で座っていたのである。　聖人はその光景に驚き、どうしてあの人々が頭のないまま宴を催せるのかと首をかしげた。しかし、　は、この幻視が何を意味するのかを即座に理解し、うつむいてため息をつき、涙を流した。それ以来、彼を接待する人々の執拗な勧めにもかかわらず、彼は差し出されたものを一切口にしなくなった。

宴の後、マルファは聖人に、彼に対して行った侮辱について謝罪し、スーマ川沿いの土地を修道院に贈り、その後、彼を平穏に送り出した。聖人が彼女の家を出ると、ダニイルという名の、聖人に特に愛されていた弟子の一人が、執拗に彼に尋ねた。

「なぜ、宴の最中に、食卓に着いていたボヤールたちを三度見渡した後、あなたはうつむき、ため息をついて涙を流し、その後は差し出されたものを一切口にしなかったのですか？」

聖人は彼にこう答えました。

「わが子よ！　お前は預言者エリシャが預言者エリヤに求めたように、あまりにも執拗に尋ねている[3072]。それゆえ、将来成就すべき神の言い表せない御計画について、お前から隠すつもりはない。しかし、私がお前に語ることは、神の御計画が成就するまで、秘密にしておかなければならない。」　私は、最も重要な六人のボヤールたちが、首のないまま宴席に座っているのを見ました。それを見て、私は恐怖に襲われ、そのため食事も飲み物も口にすることができませんでした。この者たちはまもなく斬首されるだろうと思います。しかし、子よ、私から聞いたことを誰にも話してはなりません。

その後、修道士は、身元証明書と、ノヴゴロドで寄進された多くの贈り物を携えて、自身の修道院へと戻った。

しばらくして、聖人は、モスクワ大公イオアン・ヴァシリエヴィチ[3073]が、大軍を率いてノヴゴロドにやって来て、他の者たちを威嚇するために、ボヤールの一部を死刑に処したとの話を耳にした。すなわち、聖人がボヤリーニャ・マルファの宴席で、首のない状態で座っているのを見たあの六人のボヤールが、剣で斬首されたのである。　一方、ボヤリーニャ・マルファ自身は、大公の命令により、子供たちと共にニジニ・ノヴゴロドへ流刑に処され、彼女の財産は略奪された。こうして、尊者ゾシマが予言した通り、彼女の家は荒れ果ててしまった。それは、尊者が不名誉な形で彼女の家から追い出されたその瞬間に、彼が予言していたことそのものだった。

尊者ゾシマが地上で十分に生き、多くの労苦を積み、あらゆる美徳を身につけた後、その至福の死の時が近づいた。　聖人はあらかじめ自分の棺を用意し、それを頻繁に見つめながら涙を流し、常に死を心に留め、絶えずその準備をしていた。死が近づいていることを予感し、労苦と老いによって衰弱した聖人は、兄弟たちを呼び集めてこう言った。

「さあ、子らよ、兄弟たちよ、私はこの儚き世を去ろうとしている。あなた方を、慈愛に満ちた神と、清き聖母マリアにお委ねする。教えてほしい。私の後を継ぐ修道院長として、誰を望むのか？」

すると、兄弟たちは声をあげて泣き叫び、口を揃えてこう言った。

「父よ、私たちの牧者よ、私たちはあなたと共に死にたいと願っております。しかし、それは私たちの力では叶いません。なぜなら、神の裁きは人間の裁きとは異なるからです。」　あなたに天の住まいに召されることを告げられた方、主キリスト、私たちの神こそが、私たちを救いへと導く導き手を与えてくださるのです。　どうか、あなたの祈りが私たちを守り、あなたの祝福が私たちの上に留まりますように。あなたは主にある私たちの父だからです。この世であなたが私たちを慈しんでくださったように、どうか、あなたが神のもとへ旅立たれた後も、私たちのために執り成してください。私たちを孤児のままにしないでください。

そう言うと、兄弟たちは黙り込んだが、泣きじゃくるのをやめなかった。そこで、尊者（プレポボドニー）は再び彼らにこう言った。

「子らよ！　改めて申し上げますが、私はあなた方を主と御母マリアに委ねます。修道院長にはアルセニオを任命します。彼は最もふさわしい人物であり、修道院と兄弟たちを統率するのに最も適任だからです。」

そう言うと、聖人はアルセニウスに修道院長職を委ね、彼にこう言った。

[3072] エリヤの霊（列王記下2:9–13）に比べて、格段に優れた預言の霊が彼に授けられたことについて。

[3073] イオアン・ヴァシリエヴィチ4世（グロズヌイ）は、1533年から1584年まで大公として統治した。

「さあ、兄弟よ、私はあなたを、この聖なる修道院と、ここに集まったすべての修道者たちの建設者であり指導者として選ぶ。　使徒の教えと教父たちの伝承に基づく修道院の規則、例えば、教会での聖歌の合唱、食事や飲酒に関する規定、そして私が授けた修道院の規則全般について、一つたりとも忘れられることのないよう、注意深く見守ってください。　修道院のすべてが損なわれることのないよう、見守ってください。主が、至聖なる御母であり、私たちの主である聖母マリアとすべての聖人たちの祈り、そして御自身の御愛する者である尊者サヴァティイの祈りによって、あなたがたすべてを御自身の戒めを行うように導いてくださいますように。　私たちの主イエス・キリストが、敵のあらゆる中傷からあなた方を守り、御自身の神聖な愛においてあなた方を強めてくださいますように。私自身は、肉体を離れてあなた方から去り、死という自然な義務を果たしますが、霊においては絶えずあなた方と共にあります。　また、もし私が神の御前に恵みを得ることができたならば、私があなた方のもとを去った後、この修道院がさらに拡大し、キリストへの愛によって結ばれた多くの兄弟たちがここに集い、霊的な賜物が豊かに溢れ、肉体の生存に必要な物資も十分に備わることを、心から願っております。

そう語り終えると、尊者はまだしばらくの間、兄弟たちに徳ある生き方について教えを説きました。その後、兄弟一人ひとりに口づけをして祝福を与えた後、尊者は両手を天に向け、修道院とすべての信徒たち、そして自分自身のために祈りを捧げ始めました。そして、十字の印を切ってから、尊者は兄弟たちに向き直り、こう言いました。

「平安あれ！」

続いて、聖人は天を仰ぎ見て、こう言った。

「人を愛する主よ、あなたが御自身の栄光のうちに臨み、生ける者と死せる者を裁き、各人にその行いに応じて報いを与えられる時、私をあなたの右の座に立たせてください。」

こう語り終えると、聖人は寝台に横たわり、その聖なる魂を、全霊と全心を尽くして愛し、幼い頃から善行に励み、[3074] に奉仕してきた主の御手に委ねた。

尊者の死は、その修道院の兄弟たちによって深く悼まれた。やがて、埋葬にふさわしい聖歌を歌い終えると、兄弟たちは尊者の尊い遺体を、生前に自らの手で掘った、主の変容教会の祭壇の後ろにある墓に葬った。　その後、修道院の兄弟たちは、その場所に聖人の遺骨の上を覆う礼拝堂を建て、そこにイコンや燭台を安置し、ここを訪れるたびに聖人への祈りを捧げた。　尊者の棺の周りでは、幾度となく神の御業や奇跡が起こった。というのも、尊者ご自身が主のもとへ魂を帰される際、修道院の兄弟たちに、自分が修行に励んだその場所を離れることはなく、霊として弟子たちと共にいると約束されたからである。　そして実際、聖人はその約束を果たし、天上の修道院からこの地上の修道院を訪れ、目に見えない形でその傍らに留まっていた。また時には、聖人は目に見える姿で陸や海に現れ、困っているすべての人々を助けた。　何度も、修道士は彼らが危険にさらされている時に海を漂う姿で現れ、嵐を鎮め、船が沈没するのを防いだ。また時には、修道士は教会に現れ、他の兄弟たちと共に列をなして祈りを捧げていた。 その死後まもなく、聖人は亡くなってから9日目に修道士ダニイルの前に現れ、神の御慈悲により、いかにして恐れることなく空中の精霊たちのそばを通り過ぎ、彼らの策略を免れ、聖人の列に加えられたかを彼に語った。

その後、聖人はタラシイ長老の前に、自身の棺の上で姿を現し、また弟子であるゲラシムにも同様に現れた。ゲラシムには、ある日曜日の早課の後、聖人はあたかも聖サヴァティイの墓から自身の墓へ向かう途中であるかのように姿を現し、ゲラシムを見つめてこう言った。

「励みなさい、わが子よ。そうすれば、あなたもその労苦に対する報いを受けるでしょう。」

[3074] 尊者ゾシマの逝去は1478年にあった。1566年8月8日、その聖遺骨はゾシマとサヴァティアに捧げられた大聖堂の付属礼拝堂へ厳かに移され、現在も銀の聖遺物箱に納められている。

その同じゲラシムに、聖人は聖木曜日の聖体礼儀の最中に二度目に現れた。その時、聖人は教会で祈りを捧げている人々のなかにいた。兄弟たちが聖体拝領を始めると、聖ゾシマはゲラシムにこう言った。

「お前も行って、聖体を受けなさい。」

その後、聖人は兄弟たちが聖体を受ける聖杯のそばにずっと立っていたが、全員が聖体を受けたとき、突然、姿が見えなくなった。

ある時、修道士ドシフェイが教会の玄関で晩の祈りを捧げ、悪霊に取りつかれたある兄弟のために祈っていたところ、聖人が現れてこう言った。

「あなたが祈っているその兄弟の癒やしは、彼の霊的な益にはならない。その兄弟には、まだしばらくの間、その苦しみのまま留まる必要があるのだ。」

ある老修道士テオドゥルが、たまたま足を滑らせて地面に倒れ、ひどく打ち身を負ったため、もはや通常の祈りの儀式に参加することができず、ずっと床に伏せざるを得なくなっていた。ある晩遅く、尊者ゾシマが彼の独房を訪れ、中に入ると、祈りを捧げた後、彼を癒した。

こうした事例や、それに類する多くの出来事を通じて、修道者たちは、尊者ゾシマが、この世での生涯において修業に励んだその場所を決して忘れてはいないことを、自らの目で確信した。なぜなら、彼は苦しむすべての兄弟を見捨てず、信仰をもって彼を呼び求める者すべてに、速やかに助けの手を差し伸べていたからである。

この修道院の修道士の一人、ミトロファンという名の者が、兄弟たちに自身の過去についてこう語った。彼がまだ世俗にいて商人として海を航海していた頃、ある時、あまりにも激しい嵐が吹き荒れ、船は波にほぼ完全に飲み込まれそうになった。　船に乗っていた者たちは皆、もはや生き延びることを諦め、涙ながらに主とその聖母マリアに助けを祈り始めた。船は三十日間も波に翻弄され続けた。乗船者たちは、ソロヴェツキーの奇跡行者である尊者ゾシマを思い出し、彼に助けを求めた。すると間もなく、彼らは船尾に座り、マントで波を叩いている聖ゾシメの姿を目にした。そのおかげで波は静まった。そして聖ゾシメは、船が岸に着くまで船を操縦し続けた。その後、この不思議な舵取りは船から姿を消した。

ある時、修道士エリセイが航海中に重病を患い、スキマ（修道服）を着用したいと願ったが、岸にたどり着く前に息を引き取った。　聖ゾシマは彼を死から甦らせ、その修道士は修道服を身にまとい、聖体拝領を受けるまで生き続けた。その後、その修道士は再び主のもとで安らかに眠りについた。

ニコンという名の信徒が、悪霊にひどく苦しめられていた。彼が聖人の聖遺物の前に連れて行かれると、聖人自身が彼に現れ、病から解放して、健康な状態で家に帰した。

ある農夫が失明していたが、聖人の棺の前に来ると癒やされ、目が見えるようになった。しかし、その農夫は信仰心が薄かったため、二度目に失明してしまった。再び聖人の棺の前に来て悔い改めながら祈ると、農夫は二度目の癒やしを受けた。　聖人は他にも多くの病人を癒やした。なぜなら、信仰を持って彼のもとに駆け寄る者すべてに対し、決して助けを拒むことはなかったからである。

聖ゾシマは、単独で現れるだけでなく、聖サヴァティイと共に現れることも多くあった。例えば、ある時、兄弟ヨセフがクゾヴェ島（ソロヴェツキー島から30ヴェルスタ離れた場所）に滞在していた際、夜、祈りを捧げるために山に登った。　ソロヴェツキー修道院の方角を見やると、修道院の中央に、大地から天へと伸びる二つの炎の柱が見えた。この兄弟が見たことを他の兄弟たちに話すと、彼らはこう言った。　「あれはソロヴェツキー修道院の創設者であり長であるゾシマとサヴァティイだ。彼らは神の恵みの曙光に照らされた霊的な柱であるため、棺の中から輝いているのだ」。

サヴァティイとフェラポントという二人の修道士は、大斎期が過ぎた後、修道院の物資調達のためにヴィルマへ派遣された。そこには、様々な物資が保管されていた修道院の倉庫があったからである。船で旅を続ける中、一行はソロヴェツキー島から60ヴェルスト離れたシュジュムイ島に近づい

た。　その時、旅人の一人であるサヴァティイは、その島にそれほど大きくない二つの炎の柱を見かけた。島に近づくと、旅人たちは小さな小屋を見つけ、その中には裸で飢え、足に重篤な病を患い、かろうじて息をしている二人の男がいた。　冬の初め、この二人は海を航海していたが、海で嵐が吹き荒れると、彼らの船は波に打ち砕かれた。岸に漂着した彼らは、ここから連れ出してくれる人に出会えなかったため、その地に上陸して冬を越すことになった。そして、この不幸な二人が修道士たちを見かけると、こう尋ねた。

「あなた方はどなたですか？まさか、ソロヴェツキー島の長老たちが私たちのもとへあなた方を遣わしたのでしょうか？」

サヴァティイとフェラポントは彼らに尋ねた。

「ソレヴェツ島のどの長老たちのことですか？」

病人はこう答えた。

「二人の高潔な長老がここを訪ねてきてくれました。一人はサヴァティイ、もう一人はゾシマという名前です。彼らが私たちのところに来ると、私たちの苦しみは和らぎ、空腹も　寒さも感じませんでした。今日、あなたがたが来る前に彼らが私たちのところに来て、『悲しまないでください。すぐに迎えに来ます』と言ってくれました。」

これを聞いた修道士たちは驚き、病人に食事を与えた後、彼らを自分たちの船に移し、修道院へと連れ帰りました。

尊者ゾシマとサヴァティイは、オニシマという夫を持つ、マリアという名の悪霊に取り憑かれた一人の女性を癒やしました。同様に、尊者たちは、ゾシマの元使用人であったエレミヤの娘である別の女性も蘇らせました。彼女は悪霊の唆しにより、自ら命を絶っていたのです。　彼女の傷さえも完全に癒やされた。というのも、聖者たちは彼女を蘇生させた後、夢の中に現れ、ある軟膏の入った器を彼女の手に渡し、こう言ったからである。

「その傷にこれを塗れ。あなたの父と母の涙のゆえに、我々はあなたを癒やすために来たのだ。」

その乙女は、聖人たちの命令（夢の中で受けたもの）に従い、三日後には完全に回復した。

かつて強盗だったヴァシリーという男は、悔い改めてソロヴェツキー修道院を訪れ、そこで修道者の位を受けた。しかし、しばらくして悪魔に誘惑され、彼は修道院から逃げ出そうと企んだ。舟を準備し、修道院の品々――書物、衣服、器物――を密かに積み込み、夜に修道院から逃げるつもりだった。その後、彼は修道院から15ヴェルスタ離れたアンゼル島に上陸したが、　そこで、彼を抗いがたい眠気が襲った。小舟を岸に繋ぎ留めると、その修道士は地面に横たわり、眠りについた。眠りの中での幻視の中で、二人の聖人が彼の前に現れた。そのうちのひとり、ゾシマは怒りの眼差しで彼を見つめ、こう言った。

「この忌まわしい者め！　お前は私から盗んでいる！　私が築き上げたものを、お前は台無しにしているのだ！」

一方、ヴァシリーはその幻視の中で聖者に許しを請うた。すると聖者は彼にこう答えた。

「許してはやるが、この場所に三日間留まらなければならない。」

目を覚ますと、ヴァシリーは誰の姿も見当たらず、岸辺に繋ぎ留めてあった舟も見当たらなかった。そこで、地面に腰を下ろし、三日が過ぎるまではここから立ち去るつもりはないと決心して、苦々しく泣き崩れた。

その間、その島のそばを通りかかった数人の商人たちが、その修道士を島から連れ出し、修道院へ連れて行った。そこで彼は悔い改め、兄弟たちの前で自分の罪を嘆き、聖者たちが現れたことを語った。

その頃、修道院の漁師たちは、島から五百ヴェルスタ離れたウンベ川で魚を捕っていた。彼らのリーダーは長老フォティイであった。聖人たちは彼の夢に現れ、こう言った。

「ほら、私たちはあなた方のために漁船を持ってきました。あなた方にまだ漁船が必要だと知っているからです。ただ、船の中にあるものを何も失くさないように気をつけて、すべてを無傷のまま修道院まで運び届けてください。」

目を覚ますと、フォティオスは他の漁師たちにその幻視について伝えた。岸へ向かった漁師たちは、確かにそこに小舟があり、その中には修道院に属する多くの品々が入っているのを目にした。漁師たちはその後、それらの品々を修道院へ運び、そこで聖人たちの現れについて語った。

スミ川近くの海岸に住んでいたテオドールという人物は、次のように語った。

「ある時、私は商品を積んで海を航行していた。突然、激しい嵐が吹き荒れた。錨を下ろしてその場に留まり、ひどく動揺しながら、私たちは神に祈りを捧げると同時に、聖ゾシムと聖サヴァティウスの助けも求めた。　私は船の内部に入り、うとうとしていたところ、ふと、船の上に立っている二人の老人の姿が見えた。彼らは端正な顔立ちをしており、舵取りに『船の船首を風の方へ向けてくれ』と言っていた。すぐに目を覚ますと、私は船から水を汲み出していた人々のところへ近づいた。　そのうちのひとりはひどく疲れてうたた寝をしていたが、目を覚ますと私にこう言った。「今、船の中で二人の老人が互いに話しているのを見ました。そのうちの一人がもう一人にこう言いました。『兄弟よ、この船を見守っていてくれ。私はソロヴェキへミサに急いでいるのだ』と。」　私たちはこれを聞いて驚き、大いに喜びました。なぜなら、これで滅びから救われる希望が持てるようになったからです。そして実際、まもなく嵐は収まり、静けさが訪れ、私たちは神と聖なる御使いたちを賛美し、感謝しながら航海を再開したのです」。

長老フィリモンは次のように語った。

「私が荒野で隠遁生活を送っていた頃、悪魔の仕業により、時折強い落胆に襲われることがありました。その落胆の原因は次の通りです。ある兄弟が、私のもとに自分の金、十二枚の硬貨を預けていたのですが、しばらくして、そのお金がどういうわけか消えてしまったのです。　その兄弟はそれを知って大変悲しんだ。私も悲しみ、数日間嘆き続けた。ある日、私が　の規則を終え、座って少しうたた寝をしていたところ、二人の長老が私の小部屋に入ってきた。私は彼らに言った。「なぜ祈りもなくここに入ってきたのですか？」　すると彼らは私にこう答えました。「いいえ、私たちは祈りを捧げました。もしかすると、あなたがそれを聞き逃しただけかもしれません。」そこで私は彼らに言いました。「お座りください、ご尊師たち。」そしてこう尋ねました。「お二人はどなたですか。もしかして、私たちの修道院の長老たちでしょうか？私はお二人を存じ上げません。」　そのうちのひとりが私に言いました。「私はゾシマと申します。そして、こちらはサヴァティイです。兄弟よ、失くした物について悲しむ必要はありません。それはきっと見つかるでしょう。」この尊者たちは、私を慰めながら他にも多くのことを語り、やがて姿が見えなくなりました。　私が目を覚ますと、もう誰の姿も見えなかったが、私の悲しみは消え去り、心に喜びを感じた。失われたお金は、置かれていたまさにその場所で発見された。私と私の兄弟は共に慰められ、私たちは共に神と、尊い父ゾシマとサヴァティイに賛美と感謝を捧げた」。

これらの尊い父たち、ソロヴェツキー修道院の院長たちによって、他にも多くの奇跡が成し遂げられた。ここで述べた奇跡が、私たちの魂の益となり、神の御心に適う者たちの栄光、そして父と聖霊と共に永遠に賛美される私たちの主イエス・キリストの栄光となるよう願う。アーメン。

トロパリオ、第4調：

神の御心の御定めに従い、あなたは荒野に身を置き、そこで、あなたの心を天の住まいに注ぎ、まるで天使のように地上で生活し、祈りと労苦と断食において、あなたの弟子たちの模範となられました。　それゆえ、神はあなたの善き意志をご覧になり、荒野においてあなたの子らを多く与え、あなたの涙の流れによって彼らを潤されました。しかし、神への大胆さをお持ちであるあなたは、賢

明なる者よ、あなたが集めた群れを思い起こし、約束されたとおり、あなたの子らを訪ねてくださることを忘れないでください、尊きゾシモス、私たちの父よ。

コンダク、第8調:

キリストの愛に貫かれ、尊き父よ、その栄光ある十字架を肩に担ぎ、神聖な武具を身にまとい、絶え間ない祈りを手にした槍として、悪魔の軍勢を力強く打ち砕かれた。　それゆえ、我らはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、尊き父ゾシモよ、修道士たちの慰めよ。」

聖人である我らの父アガピト、ローマ教皇の記念日

記念日：4月17日

聖アガピト（ローマ教皇）[3075] は、当時イタリアを支配していたゴート王テオドリック大王[3076] によって、和平交渉のためコンスタンティノープルのユスティニアヌス皇帝[3077] のもとへ派遣された。　旅の途中、彼は二つの病――口が利けないことと足が不自由なこと――に苦しむ男に出会った。聖アガピトは彼の手を取り、足の不自由を癒やし、さらにキリストの聖体と聖血の聖餐を授けることで、彼の口を解いた。

コンスタンティノープルに滞在中、聖アガピトは、いわゆる「黄金の門」のそばに座って施しを乞う盲人を見かけた。彼を憐れんだ聖アガピトは、その目に右手を当てると、盲人は視力を取り戻した。

聖アガピトがコンスタンティノープルに滞在していた際、皇帝ユスティニアヌスの命により、当地で地方公会議[3078] が開かれ、そこで、教会の規則[3079] に反して違法に に就いていたアンフィム総主教[3080] が罷免された。 罷免されたアンフィムの後任として、ミナという名の、聖なる生活と厳格な修道生活を送っていたある司祭が任命された。同時に、この同じ公会議において、セヴェロフの異端[3081] が非難された。

その直後、聖アガピトスは主のもとへ召され[3082]、コンスタンティノープルに埋葬された。

[3075] 聖アガピトは、535年から536年までローマ教皇を務めた。

[3076] 東ゴート王テオドリック大帝は、485年から536年まで在位した。東ゴート族はドニエプル川とドン川の間に居住し、4世紀に東ゴート族と西ゴート族に分裂したゴート族の東部系統を構成していた。

[3077] ローマ皇帝ユスティニアヌス1世は、527年から565年まで在位した。

[3078] それは536年のことだった。

[3079] アンフィムは熱心なモノフィシテ派であり、コンスタンティノープル総主教の座を得るためだけに、偽善的に正教を受け入れた。モノフィシテ派は、イエス・キリストにおける二つの本性の結合について誤った教えを説いていた。すなわち、彼らは、イエス・キリストにおける神性の人間性を吸収したと主張していたのである。　モノフィジテ派の異端は、その創始者であるコンスタンティノープルのアルヒマンドリト、エウティキオスの名にちなんで、エウティキウス主義とも呼ばれる。この異端は、451年にハルキドンで開催された第4回全地公会議で非難された。

[3080] アンフィム1世は535年から536年まで総主教を務めた。

[3081] アンティオキア総主教セヴェロス（在位512年から519年）は、「穏健派」のモノフィシテ派に属していた。彼の教えが他のモノフィシテ派の教えと異なっていた点は、イエス・キリストの肉体を、私たちのものと同質であり、朽ちるものとして認めていたことである。

[3082] 聖アガピトスは536年に逝去した。

5月

5月1日

4月18日（旧暦）

聖グリゴリオス・デカポリトスの弟子である、私たちの尊い父ヨハネの記念日。

4月18日の記念日

「デカポリス」という名の国は2つ知られています[3083] 。そのうちの1つは、パレスチナのガリラヤ近郊にありました[3084]；聖マタイ福音書には、次のように記されています： *「ガリラヤやデカポリス、エルサレム、ユダヤ、そしてヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆がイエスに従った」*（マタイ4:25）。

デカポリスという名は、イサウリア地方にあったもう一つの小さな国にも用いられていた[3085]。このイサウリアのデカポリスこそが、本日その記念が執り行われるこの聖ヨハネの師である聖グリゴリオスの出身地であった。　若き頃からこの世を捨ててキリストを愛した聖ヨハネは、前述の師であるデカポリトの聖グリゴリオスのもとへ赴き、彼から修道者の戒律を受け、師と共に修業に励み、その徳高い生活をもって神に喜ばれた。　彼は、これほどまでに謙遜と従順、そして全般的な霊的完成に達したため、彼の師である聖グリゴリオス自身も、彼を喜び、神を賛美したほどであった。

不敬虔な皇帝レウ・アルメニア人[3086] が、偶像破壊の異端を再燃させ、キリストの教会に対する迫害を開始したとき、この聖ヨハネもまた、師である聖グリゴリオスや聖ヨセフ・ペスノピストと共に、この時期に現地へ赴いた。　彼らは街を巡り歩き、正信者たちを励まし、聖なるキリスト教の信仰を堅く守り、勇敢に告白するよう説いた。その直後、ヨセフ はローマ[3087] へと向かったが、道中で異端者たちに捕らえられ、クレタ島の牢獄[3088] に投獄された。一方、聖グレゴリオス・デカポリトスは、ヨセフが追放された後、ローマで死去した[3089]。

ビザンティウムに滞在中、聖ヨハネは以前と同様に、自身の救いだけでなく、他の人々の救いにも心を配りながら、修道生活に励んだ。

数年が経過し、至福のヨセフが投獄から解放されてビザンティウムに戻ったとき、聖ヨハネはすでに主のもとへ召されていた[3090] 。それは、自らの労苦に対する報いを主から受けるためであり、

[3083] デカポリス――十都市同盟、いくつかの都市からなる連合体。

[3084] ガリラヤ（地方、郡）――パレスチナ北部に位置していた地域。 その境界は、北はシリアとレバノン山脈、西はフェニキア、東はヨルダン川、南はサマリアであった。ガリラヤは、上（または北）と下（または南）に分けられていた。

[3085] イサウリア――小アジアの地域であるリカオニアの南部の山岳地帯。

[3086] 皇帝レウス（5世）アルメニア人は、813年から820年までビザンツ帝国を統治した。

[3087] ローマ――ティブレ川沿いに位置する、イタリア国家の首都。

[3088] クレタ島は、地中海にある大きな島の一つである。

[3089] 聖グリゴリオス・デカポリトスの死は、820年頃であった。

[3090] 聖ヨハネの死は820年頃であった。

ヨセフの手によって、同じくヨセフという名の父の墓のそばに埋葬された。　その後、その遺体は別の場所へ移されたが、そのことについては、聖ヨセフ・ペスノピストの伝記に次のように記されている。

「都に入ると」とそこには記されている、「ヨセフは、愛する師である聖グリゴリオス・デカポリトスがすでにこの世を去っていることに気づいた。師はすでに主のもとへ旅立っていた。　彼が目にしたのは、グリゴリオスの弟子である至福のヨハネだけであり、グリゴリオスとはもう一度会うことが叶わなかったため、彼は長く嘆き悲しんだ。彼は聖ヨハネと共にその墓のそばに留まっていたが、しばらくしてヨハネもまた主のもとへ旅立ち、ヨセフは彼を聖グリゴリオスの墓の近くに葬った。　その後、聖ヨセフは、街の外れ、聖ヨハネ・クラマトルス教会の近くにある、人里離れた静寂な場所へと移り住んだ。ここに定住すると、聖ヨセフは聖ニコラオスに捧げる教会を建立し、そこに聖グリゴリオスと聖ヨハネの聖遺骨を移した。

ある人々は、聖グリゴリオス・デカポリトスの弟子であるこの聖ヨハネが、師の死後、パレスチナへと退き、そこで聖ハリトンの修道院で修行に励み、その地で主のもとへ帰ったと主張している。　しかし、これは別の聖ヨハネに関する話であり、その聖ヨハネは、聖ハリトンの修道院が最盛期にあった当時、実際にそこで修行に励んでいたのである[3091]。一方、現在言及されている聖ヨハネは、そのヨハネのずっと後の時代、偶像破壊派の皇帝レウ・アルメニアヌスの治世に生きており、その頃にはパレスチナにはすでに聖ハリトンの修道院は存在していなかった。　後者の修道院は、レフ・アルメニア人のはるか以前に生きたコンスタンティノスとイリナの治世中に、イスラム教徒によって完全に荒廃させられた[3092]。この荒廃については、スクキの聖ハリトン修道院「ヴェトハヤ・ラヴラ」にある聖サヴァ修道院で殴打された敬虔な修道士たちの苦難に関する記述の中で言及されている。そこでは、聖サヴァ修道院の聖父たちが虐殺された当時、聖ハリトンの修道院も完全に荒廃し、その後二度と再建されることなく、完全に廃墟と化したことが伝えられている。　このことから、今ここに言及されている聖ヨハネが、その完全に荒廃し廃墟と化したハリトンの修道院にどのように滞在し、そこで亡くなったのかがうかがえる。　さらに、聖ヨセフ・ペスノピツァの伝記には、この至福のヨセフが自らの手で、今ここに記念される聖ヨハネの遺体をビザンティウムで埋葬し、その後、最初の場所からそう遠くない別の場所へ移したことが記されている。

聖ヨハネ・ヴェホペシェルニクの記念日は4月19日である。

聖殉教者ヴィクトル、ゾティク、ジノン、アキンディン、セヴェリアンの記念日。

記念日：4月18日

不敬虔な皇帝ディオクレティアヌス[3093]がキリスト教徒に対して残酷な迫害を繰り広げていた当時、聖ゲオルギオスは捕らえられ、容赦なく拷問にさらされた。拷問の最中、聖ゲオルギオスは神の力によって驚くべき奇跡を行い、それを見た多くの異教徒がキリストを信じるようになった。　しかし、信仰を抱いた者たちは直ちに不信心者たちの手によって拷問にさらされ、その中には　の牢獄

[3091] ここでいうヨハネとは、もちろん「古洞のヨハネ」のことである。

[3092] コンスタンティヌス皇帝は780年から797年までビザンティウムを統治し、聖イリナ（彼の母）は797年から802年まで統治した。

[3093] ディオクレティアヌス皇帝は284年から305年までローマ帝国を統治した。

に送られた者もいれば、火で焼かれた者、剣で斬り殺された者もいた。そうした者たちの中に、これらの聖なる殉教者たち――ヴィクトル、ゾティク、ジノン、アキンディン、セヴェリアン――がいた。　彼らは、聖ゲオルギオスが（その肉体を引き裂くはずの）車輪に縛り付けられているのを見て、それでも何の傷も負っていないのを見て、我らの主イエス・キリストを信じた。そのため、拷問者たちは直ちに彼らの首を切り落とした[3094]。

聖殉教者ヨハネ・ノヴォイの殉教

記念日：4月18日

福者ヨハネの故郷は、イオアニナという都市[3095]であり、これはエピロス[3096]と呼ばれるギリシャの地方に位置していた。かつてこの都市は、ギリシャ王ピルロス[3097]の常駐地であった。聖ヨハネの両親は敬虔なキリスト教徒であった。　幼い頃に両親を亡くし孤児となったヨハネは、自らの労働によって生活に必要な生計を立てることを志し、コンスタンティノープルへとやって来た。彼は、他の職人や商人たちと同様に、公共の広場に店を構え、その職人業によって生計を立て、生活に必要なものはすべて十分に満たされていた。　彼は徳のある生活を送り、神の律法を厳格に守っていたため、神は彼のあらゆる行いに恵みを与えられた。彼はエピルス出身であったことから、コンスタンティノープルの住民からは「エピラト」と呼ばれていた。

当時、コンスタンティノープルはすでに、イスラム教を信仰するムスリムたちの支配下にあった[3098]。キリスト教徒の中にも、イスラム教の不敬虔さに惑わされて、イスラム教に転向する者が多くいた。とりわけ、以前はキリスト教を信仰していたが、後にイスラム教に改宗した職人や商人が多かった。

真のキリスト教徒である聖ヨハネは、まさにそのような人々の間で生活せざるを得なかった。商売上の隣人たちは、四方八方からキリストを拒絶し、イスラム教に加わった背教者たちばかりであった。　ヨハネは、賢明で弁舌さわやか、恐れずに真理を語る若者であったため、しばしば彼らと公然と論争し、その背教を糾弾した。こうしたことすべてにより、ヨハネの隣人たちは彼を憎むようになった。　彼らはまた、聖人の商売が繁盛しているのを見て不満を抱いていた。ヨハネが商売においてますます成功を収めるにつれ、他の商人や職人たちは彼を妬み、彼を滅ぼすためにどのような告発をでっち上げようかと画策し始めた。　しかし、祝福されたヨハネは、自分に対して企てられている陰謀を見抜いても、それを恐れることはなく、むしろキリストの真理のために苦難を受けることを、魂の底から一層強く願うようになった。

そしてある日、聖金曜日[3099]に、彼の霊的指導者であるコンスタンティノープルのプロトプレスヴィテルのもとを訪れ、彼は自分の罪を告白するとともに、自分に悪意を抱き、破滅を望む隣人たちの敵意についても伝え、キリストのために苦難を受けるという自身の願いも伝え、霊的指導者から

[3094] 聖殉教者たちの殉教は303年に起こった。

[3095] イオアニナ（またはヤニナ）の町は、エピロス地方にあり、テッサロニキ近郊のトリッカとエピロスのアンブラキアの間に位置し、その南側にあった。

[3096] エピルスは、北ギリシャの東部地域であり、アクロケルアン山脈からイオニア海のアンブロキオス湾にかけて広がっていた。

[3097] ピルスは、紀元前295年から272年までエピルスの王であった。この王は、ローマやスパルタとの戦争で知られている。

[3098] コンスタンティノープルは1453年にイスラム教徒によって陥落した。

[3099] それは1500年のことだった。

有益な助言と慰めを求めた。　聖人の若さを目の当たりにしたプロトプレスヴィテルは、彼に殉教に身を投じるよう勧めず、こう言った。

「わが子よ、まずよく吟味しなさい。その思いは悪魔によって植え付けられたものではないか。悪魔は多くの人々を殉教へと駆り立て、彼らが苦難に耐えきれず信仰から離反した後、全世界の恥さらしにすることを企てているのだから。」

すると、聖ヨハネはこう答えた。

「私は私のキリストを信頼しており、主が私を敵の嘲笑の的として引き渡すことはなく、むしろ御自身の力によって私を強め、私が敵の力を打ち負かすことができるようにしてくださると固く信じています。」

「子よ」と、プロトプレスビターはこれに対し言った。「神の言葉にはこう記されている。『*霊は熱心であるが、肉体は弱い*』（マタイ26:41）。　君が向かおうとしているその務めは、大いなる準備を必要とし、絶え間ない　断食と祈りを要する。断食と祈りの行いによってあらゆる罪から清められたとき、神ご自身が君にどうすべきかを告げてくださるだろう。なぜなら、神は通常、清らかな魂に宿られるからである。　さあ、愛する者よ、自分自身に心を配り、平安のうちに去りなさい。私は神に祈り、神があなたを、目に見える敵も目に見えない敵も――人々や悪霊たちからも――守り、彼らに対する勝利をあなたに与えてくださるよう願います。

そう言い終えると、プロトプレスビターは若者を平安のうちに送り出した。

その翌日の朝、至福のヨハネは再び、明るい顔つきと喜びに満ちた心で、自分の霊的父のもとを訪れ、こう言った。

「敬愛する父よ！昨夜、私は夢の中で、炎の中に立っている自分を見ました。しかし、火傷をするどころか、バビロンの炉の中の三人の若者のように（参照：ダニエル書3章）、喜び、歓喜していました。　ですから、私が企てているこの事業が、至高者の御加護により、無事に完結することを願っております。尊き父よ、どうかあなたにもお願いいたします。あなたの祈りで私を支えてください！

これに対し、霊的指導者は彼にこう言いました。

「わが子よ、神があなたを強め、地獄の狼――すなわち、目に見えぬ蛇――に打ち勝たせてくださいますように。そして、神があなたに殉教者の冠を授けてくださいますように。」

他にも多くの優しい言葉で若者の偉業への決意を固めた後、プロトプレスビターは、神に彼のために祈ると約束して、彼を見送った。

祝福されたヨハネが市場にある自分の店に着くと、彼を憎む者たちは、あらかじめ彼を滅ぼす計画を練っていたため、互いにこう言い合った。

「この男は、トリッカ[3100] で公然とキリストを否認したあの男ではないか。それなのに、なぜここで真のキリスト教徒であるかのように振る舞っているのか？」

その言葉を耳にした青年は、話していた者たちを威圧的な眼差しで見据え、こう尋ねた。

「あなたがたは私のことを話しているのか、それともももしかして他の誰かのことか？」

「君のことだ」と彼らは答えた。「他の誰のことでもない。我々の言っていることは真実ではないか？」

「私にとって、そのようなことはかつて一度もなく、これからも決してない」と聖人は答えた。「トリッカであれ、他のどこであれ、私が私の神であるキリストを否定することなどあり得ない。私は私の神であるキリストのために生きており、これからも常にそう生きるつもりだ。そして、キリストのためにいつでも死ぬ覚悟がある。」

[3100] トリッカは、ギリシャ北東部のテッサリア地方にある都市である。

聖人のその言葉に激しい怒りを覚えた敵たちは、まるで今すぐ彼を殺そうとするかのように、素早く彼に襲いかかり、たちまち彼を法廷へと引きずっていった。　聖なる若者は、まるで祝宴に向かうかのように、顔を輝かせながら急ぎ足で歩いた。聖人が法廷の前に引き出されると、敵たちはそこで、中傷者、証人、そして聖人の裁判官として現れた。　彼らが彼を告発した唯一の理由は、テッサリアの町トリッカで、彼が公然とキリストを拒絶し、イスラム教を受け入れたかのように見えたこと、そしてコンスタンティノープルに来てからは、再びキリスト教徒を装い、イスラム教徒を中傷しているというものであった。　尋問を始めると、聖人の敵たちはまず、あたかも彼を憐れむかのように、偽りの、偽善的な同情を装い、優しくキリストを否定するよう説得し始めた。　その後、彼がキリスト教の信仰を揺るぎなく守り続けているのを見て、彼らは脅しをもってキリスト教からの離反を迫ったが、この方法でも何の結果も得られなかったため、容赦なく彼を殴打し、その後、彼を牢獄に投獄した。彼らは、今後彼をどう扱うかを決めるまで、彼をそこに留めておくつもりだった。

翌日の朝、聖人を牢屋から連れ出した不信心な裁判官たちは、キリストを否定し、自分たちの信仰を受け入れる決心はついたかと尋ねた。しかし、彼が相変わらず揺るぎなくキリスト教を告白しているのを見て、彼らは再び太い棒で容赦なく彼を殴り始めた。　しかし、聖人は堅いダイヤモンドのように、まるで自分が打たれているのではなく、他の誰かが打たれているかのように、黙ってその殴打に耐え抜いた。彼はただ静かに神に祈り、こう言った。

「私はこの世の何物とも引き換えに、自分の信仰を捨てたりはしない。キリスト教徒としてふさわしい信仰とは異なる信仰を信じるようなことは、決して私にはない。また、甘い言葉に惑わされたり、拷問に屈したりすることも、決してないだろう。」　私を好きに扱ってください。そうすれば、このはかない人生から永遠の命へと、より早く移ることができるでしょう。キリストのしもべとして、私はキリストに従い、キリストのために死に、永遠にキリストと共に生きるのです。

不義な裁判官たちは、聖人を再び牢獄に投獄するよう命じた。殉教者はもはや歩かされることはなく、地面を引きずられ、髪を引っ張られ、頬を殴られ、足で踏みつけられた。ついに、彼は再び鎖で縛られた。

翌日、聖人は再び法廷に引き出されたが、以前と変わらぬ言葉を大胆に語り続けたため、またも容赦なく殴打され始めた。殴打されている間、殉教者は喜びに満ちて「キリストは死者の中から復活された！」[3101] などの教会賛美歌を歌い続けた。当時、ちょうど復活祭の期間であったからである。　聖人の全身は傷だらけとなり、その周囲の地面は血で染まった。その間、聖なる殉教者はまるで自分の体ではないかのように苦しみを受け入れ、拷問の最中も歌を歌ったり、拷問者たちに向かってこう語りかけたりしていた。

「打て、打て、全力を尽くして打て。打てる限り、その殴打を強めよ。しかし、それでもなお、お前たちは決して私を私のキリストから引き離し、お前たちの同調者に変えることはできない。」

その後、恥じ入った拷問者たちは、再び殉教者を牢獄に投げ込み、そこで数日間、飢えと渇きで苦しめた。そして再び彼を牢獄から連れ出し、あらゆる拷問にもかかわらずキリストへの信仰を曲げないのを見て、火刑に処した。

聖人が鉄の鎖で縛られ、*「屠られる羊のように」*（イザヤ53:7）死へと連行される途中、拷問者たちは彼を殴り、顔を叩き、罵詈雑言を浴びせた。しかし、そこにいた人々の中には、彼に哀悼の意を表し、若さを無駄にしないよう懇願する者もいた。　しかし、キリストの殉教者は、あたかも何らかの偉大な栄誉を受ける準備をしているかのように、大いなる威厳をもって死へと向かっていった。

ついに聖ヨハネは、拷問者たちが大きな焚き火を焚いていた場所にたどり着いた。聖人は、自分が焚き火に投げ込まれるのを待つことなく、勇敢にも自らその中に入り、炎の真っ只中に立った。

[3101] 聖なる復活祭のトロパリオ

すると拷問者たちは、聖ヨハネを縛っていた鎖の端をつかみ、彼を炎の中から引きずり出した。　すると、聖なる殉教者は迫害者たちにこう言った。

「なぜ、私を炎の中で焼かせてくれないのか？　なぜ、私がキリストに喜ばれる犠牲となることを妨げるのか？」

そこで裁判官たちは、火による死が極めて苦痛を伴うものであることを知っていたものの、聖人が自らその死を強く望んでいたため、決定を翻し、聖人を火刑ではなく、剣による斬首刑に処した。　彼らは処刑人に、不屈の若者の首を切り落とし、その後、切り落とされた首を胴体と共に火刑の炎の中に投げ込むよう命じた。こうして、キリストの新たな殉教者ヨハネス・エピラトスは、[3102] 年4月18日に殉教の冠を戴いた。

聖人の遺体は火刑に処されたにもかかわらず、信者たちは火から免れた骨の一部を発見した。彼らはそれを手に入れ、畏敬の念をもって大切に保管し、父と聖霊と共に永遠に賛美される私たちの神、キリストを称えた。アーメン。

私たちの聖なる父、ハルキドン司教コスマス・殉教者、および尊者アウクセンティウスの記念日

記念日：4月18日

キリストの聖人であり殉教者であるコスマは、コンスタンティノープル[3103] の出身であった。若き頃からキリストを愛し、この虚しい世を捨てて修道者となった。厳格な修道生活を送り、多くの美徳において完全さを極めた聖コスマは、聖霊の住処となった。

その後、聖コスマはハルキドン市の司教に任命された[3104] 。司教として、彼は当時、異端の偶像破壊者たちによって迫害されていた正教の教義を熱心に擁護した。

異端の聖像破壊者たちは、聖人に聖像を崇拝しないよう繰り返し強要しました。しかし、聖人は正教の教義を勇敢に守り、異端者たちには屈しませんでした。

正教への揺るぎない信念ゆえに、聖人は迫害者たちから多くの苦難を強いられ、流刑に処された。流刑先から呼び戻され、再び聖像を崇拝しないよう強要された際も、聖コスマは正教への揺るぎない信念を示した。　このため、彼は再び数多くの拷問と苦難にさらされ、その苦難を尊者アウクセンティウスも共に分かち合った[3105] 。こうした苦難の中、聖コスマは安らかな最期を迎えた[3106] 。

[3102] 聖殉教者の死は1526年に訪れた。

[3103] コンスタンティノープルは、古代に名高い都市であり、ビザンツ帝国の首都であった。現在はトルコのイスタンブールである。コンスタンティノープルは、地中海に面したボスポラス海峡の岸辺に位置し、古代にはその教養と商業で知られていた。

[3104] ハルキドン、あるいはより正確にはカルケドン――は、もともとボスポラス海峡の入り口にあるプロポンティス（マルマラ海）の岸辺に、紀元前2世紀または3世紀に設立されたメガラの植民地であり、その後、小アジアの地域であるビフィニアの主要都市の一つとなった。 キリスト教会の歴史において、ハルキドンは、451年にマリアヌス帝の治世下で、単性論（イエス・キリストに神性という単一の本性のみを認める異端）を糾弾するために招集された第4回全地公会議の開催地として注目される。– 現在、古代ハルキドンの跡地には、コディキオイという小さなトルコの村がある。

[3105] その記念日は同日に行われる。ここで言及されているアウクセンティウスは、2月14日に記念される聖アウクセンティウスと同一人物と見なすべきではない。後者はハルキドンの近くのオクシイ山で修業に励み、第4回全地公会議に出席した。彼は約470年に死去した。

[3106] 聖コスマの没は、9世紀初頭（816年頃）、偶像破壊派の皇帝レオン5世（アルメニア人、在位813年～820年）の治世中に訪れた。

5月2日

4月19日（旧暦）

尊い父ヨハネ・ヴェホペシェルニクの記念日

記念日4月19日

「古ラヴラ」という名は、エルサレム近郊のパレスチナの荒野にあった尊者ハリトンの修道院を指していた。　それが「古のラヴラ」と呼ばれたのは、聖ハリトンが他のどのラヴラよりも先にそれを建立したからであり、そのことは彼の伝記（[3107] ）に詳しく記されている。まさにこのハリトンの「古のラヴラ」において、今日記念される聖ヨハネは、断食の修行に励んでいたのである。　幼い頃から主への愛に燃えていた聖ヨハネは、聖書に記されている*「わたしにとって、神に近づくことこそが幸いである」*（詩編72:28）という言葉に従い、全霊をもって神に寄り添った。　虚しい世俗の生活を軽んじた聖ヨハネは、故郷を離れ、修道生活の十字架を背負い、主の名において各地を巡礼した。主は、ご自身の誕生の日から死に至るまで、*「頭を横たえる場所さえ持たなかった」*（マタイ8:20）のである。

エルサレムの聖地を訪れた聖ヨハネは、命を与える主の聖墓に礼拝を捧げた後、前述の至福のハリトンの修道院を訪れ、そこでその徳高い生涯が認められ、司祭の聖職に叙階された。　肉欲を大いなる節制によって抑え込んだ聖ヨハネは、ここでも偉大な古代の断食者たちの模範となった。徹夜祈祷と絶え間ない死の自覚によって、聖ヨハネは肉体の完全な死に至り、いわば「肉体の天使」のようになった。

かなりの年月を生き、常に神に喜ばれる生活を送った後、聖人は主のもとへ召された[3108] 。聖なる無形の天使たちの腕に抱かれて、その魂は永遠の天の住まいへと運ばれた。

聖ヨハネは、「ヴェトホラヴラト（ヴェトホ修道院の）」ではなく、「ヴェトホペシュチェルニク（ヴェトホ洞窟の）」と呼ばれるのは、尊者ハリトンのヴェトホ・ラヴラが当初、山賊の洞窟にあったためである。尊者ハリトンは、 、この洞窟に山賊たちによって閉じ込められていた。 しかし、山賊たちが蛇の毒を混入されたワインを飲んで死んだ後、聖ハリトンは彼らから解放されました。洞窟の中で山賊たちが略奪した大量の金を見つけた聖ハリトンは、洞窟のそばに教会を建立しました。そして、兄弟たちが彼のもとに集まると、洞窟の上に修道院も建てました。　また、聖ヨハネはその古くからの洞窟に住み、洞窟内の教会で礼拝を行っていたため、「古洞窟の聖人」と呼ばれるようになったのである。

聖殉教者クリストフォロス、フェオナ、アントニノスの記念日

記念日：4月19日

今日記念される聖殉教者クリストフォロス、テオナ、アントニンは、ディオクレティアヌス帝の槍兵であった[3109] 。 ある日、聖大殉教者ゲオルギオスの拷問の場に立ち会い、聖ゲオルギオスが行

[3107] 聖ハリトンは3世紀から4世紀初頭にかけてパレスチナで修道生活を送り、そこでスッキ（「古修道院」）、ファラン、エリコという3つの修道院を設立した。――その記念日は9月28日に祝われる

[3108] 聖ヨハネ・ヴェトホペシェルニクの没は、8世紀後半のことである。

[3109] ディオクレティアヌス帝は284年から305年まで在位した。

う奇跡を目撃すると、彼らは武器と軍用ベルトを捨て[3110] 、皇帝の前に進み出て、キリストへの信仰を勇敢に告白した。このため、皇帝の命令により、彼らは鎖で縛られ、牢獄に投じられた。

翌日、彼らは牢獄から引き出され、不敬虔な皇帝の法廷に連行された。皇帝は彼らにキリストを否定するよう強要した。しかし、聖なる殉教者たちは拷問者の命令に従わず、公然と真の神を賛美したため、拷問者は彼らの体を吊るし、鉄の道具で削り、火で焼くよう命じた。 しかし、それでもなお聖なる殉教者たちが揺るがなかったため、皇帝は彼らを火刑に処すよう命じた。

こうして、これらの聖なる殉教者たちは、キリストのためにその苦難を終えたのである[3111] 。

ピシディアのアンティオキア司教、私たちの尊い父ゲオルギオス・イスポヴェドニク（殉教者）の記念日

記念日：4月19日

キリストの殉教者、尊者ゲオルギオスは、聖像破壊運動の時代に生きた。若き頃からキリストを愛し、修道者の道に入り、その敬虔な生活と数多くの労苦および功績により、聖霊の住まいであり、聖霊の器となった。 彼はピシディアのアンティオキア主教に任命され[3112] 、その聖職において、彼の指導に委ねられた羊の群れを熱心に導いた。やがて、悪魔の唆しによって偶像排斥の異端が勢いを増し、皇帝の招きに応じてすべての主教たちがコンスタンティノープルへ急いで集まることになったとき、 この聖人もまた、同地へ赴き、正教を勇敢に擁護し、皇帝に対し、正教の導き手である聖なる父たちから私たちに伝えられた教会公会議の決定に従うよう助言し、聖使徒パウロの戒めに従い、*「さまざまな異端の教え」* （ヘブライ人への手紙 13:9）に惑わされることなく、聖使徒パウロの戒めに従うよう説いた。彼自身も聖なるイコンへの崇拝を放棄するよう強要されたが、不敬虔なイコン破壊者たちには従わず、そのために司教職を剥奪され、流刑地に追放され、そこで生涯を閉じた[3113] 。

コンスタンティノープル総主教、尊き父トリフォンの記念日

記念日：4月19日

ビザンツ皇帝ロマン[3114] は、コンスタンティノス・バグリアノロドス皇帝[3115] の義父であり、テオフィラクトという名の末息子を、生まれた直後から聖職に就かせることを約束していた。彼は、当時のコンスタンティノープル総主教ステファノス[3116] の死を機に、この息子をコンスタンティノープル総主教に任命しようと望んだ。 しかし、テオフィラクトは当時まだ若く、生後わずか16歳であったため、教会の規則によりそのような聖職に就くことはできなかった。そこで、一時的に修道士ト

[3110] 帯は、皇帝の恩寵のしるしとして、通常、高い地位にある兵士や、皇帝に特に近しい者たちが身につけていた（今回記念される聖殉教者たちもまさにその例であり、当初はディオクレティアヌス帝の槍持ちや護衛の務めを果たしていた）。

[3111] 聖殉教者たちの殉教は303年に起こった。

[3112] ピシディアは小アジアの地域である。

[3113] 聖ゲオルギオスの殉教は、偶像破壊派の皇帝レオン（5世）アルメニア人（813–820年）の治世中に起こった。

[3114] ローマヌス（ラカペノス）皇帝は、917年から944年までビザンツ帝国を統治した。

[3115] コンスタンティノス（7世）・ポプリオゴスは、912年から959年まで在位した。

[3116] 聖ステファノス2世は、925年から928年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

リフォン[3117]が代理者兼総主教座の管理者として選出され、彼は王の息子である テオフィラクトが、聖座を継承する資格を得る年齢に達するまでの間、教皇座を統治することになっていた。

教階を急速に昇進した修道士トリフォンは、司教に叙階され、総主教の統治を引き受けた。彼は清らかな生活を送っていたため、この聖職に真にふさわしい人物であった。総主教職を3年余り統治した後、彼は以下の事情によりその職から解任された。

テオフィラクトがまだ二十歳になったばかりの頃、皇帝ロマンは、トリフォンに patriarchal throne を自分の息子に譲るよう迫り始めた。しかし、至福のトリフォンは、若く未熟な青年に、そのような高位を譲ることは不可能だと考えていた。その地位に就くにふさわしいのは、年齢と知性の両面で極めて完成された人物であり、神の聖書を深く理解し、教会を適切に導く能力を備えた者だけだからである。

そこで皇帝ロマンは深く嘆き、どうすべきか途方に暮れた。トリフォンに対して、総主教の座から追放できるような非難材料が一つもなかったからである。ましてや、敬虔なトリフォンは、聖なる、非の打ち所のない生活を送る人物であった。 こうした状況下で、皇帝の友人であり、ケサリアの司教テオファンという狡猾な人物が、皇帝にこう言った。

「陛下、この件を私に任せてください。陛下の御意に沿って、見事に片付けて差し上げます。」

皇帝はテオファンの提案を大いに喜び、引き受けた件を一刻も早く片付けるよう彼に懇願した。

聖トリフォンのもとへ向かったテオファンは、彼に忠実な者であるかのように偽って、彼と会話を交わした。彼は次のように語った。

「大主教様、皇帝はあなたに対して大きな陰謀を企てています。彼は同調者たちと共に、あなたを総主教の座から引きずり下ろすための口実や理由を探しています。とはいえ、彼らのあらゆる努力にもかかわらず、彼らはほとんど何も成し遂げられないでしょう。なぜなら、彼らがあなたに対して突きつけている告発は、あなたが無実であるものだからです。 すなわち、彼らは、あなたがまるで文盲であり、全く文字を書くことができないかのように言っている。それゆえ、彼らはあなたを総主教の地位にふさわしくないと見なしているのだ。このことを踏まえ、あらかじめ彼らを恥じ入らせ、口を封じて沈黙させるよう手配しておきなさい。もし私の言うことを聞くなら、次のように行動しなさい。 全公会議の面前で、白紙にあなたの名前と総主教の称号を書き、それを皇帝に送り返しなさい。そうすれば、あなたが文字を書くことができないと誹謗する者たちを恥じ入らせることができるでしょう。

至福のトリフォンは、悪意のない人であったため、テオファノスの狡猾さを理解できず、その助言は良いものだと考え、それを実行した。公会議の審議が始まると、総主教は全員に向かって次のように演説した。

「神の祭壇に仕える者たちは、私を玉座から引きずり下ろそうとする者たちと共に、私に対する告発をむなしく探し求めている。たとえ彼らが懸命にそれを追求したとしても、神が私に託された玉座を剥奪されるような、私に対する何の罪状も見つからないことを、私は私の神に信頼している。」 ところで、彼らは私に対して、私が文盲であり、全く文字を書くことができないという虚偽の告発をでっち上げた。そこで私は、皆さんの目の前でこの文章を書き、私を中傷する者たちが恥じ入り、私に対する嘘を止めるようにするつもりだ。

そう言うと、至福のトリフォンは白紙を取り、皆の目の前でそこに次のように書き記した。

「トリフォン、神の御恵みにより、コンスタンティノープル、新ローマの大司教、全地総主教。」

[3117] 聖トリフォンは、928年から931年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

その後、その紙は皇帝に届けられた。皇帝は、前述のケッサリウス司教テオファンからの助言に従い、別の筆でそこに次の言葉を書き加えるよう命じた。

– 私が総主教の座を譲る理由は、他のいかなる理由によるものでもなく、ただ単に、自らがこの位にふさわしくないと考えるからに他ならない。

これらの言葉を書き加えた後、皇帝は諸侯、ボヤール、およびすべての役人の面前でこの文書を読み上げるよう命じた。その後、皇帝は志を同じくする者たちの助けを借りて、トリフォン総主教を総主教宮殿から強制的に連れ出し、自身の息子テオフィラクトを総主教の座に任命するよう命じた。　この結果、教会内では大きな混乱と不和が生じた。というのも、多くの聖職者がテオフィラクトではなく、トリフォンを依然として総主教と見なしていたからである。

一方、至福のトリフォンは、自身に対するこのような侮辱を忍耐強く耐え忍び、総主教の座に任命される前に滞在していた修道院へと退き、そこで2年5ヶ月を過ごした後、主のもとへ召された[3118]。その尊い遺体は大聖堂に移され、そこで総主教たちの墓所の傍らに安置された。

彼の死後、教会内の混乱と不和は収まった。というのも、聖トリフォンの帰天後、すべての者がテオフィラクトの総主教選出に同意し、彼との交わりに加わったからである[3119]。そして、人々は神を賛美し、感謝を捧げつつ、聖トリフォンの記念を尊んだ。

聖ニキフォロスの記念日

記念日：4月19日

我らの偉大なる父、至福のニキフォロスは、コンスタンティノープル出身であった。その両親であるアンドレイとテオドラは、名門の出身で極めて裕福な人々であった。彼らは息子に神への畏敬の念を教え込んだ。　両親の死後、ニキフォロスは世の虚しさを悟り、神への奉仕に身を捧げたいという願いを抱くようになりました。そこで、相続財産のすべてを貧しい人々に施し、コンスタンティノープルを離れてハルキドンへ赴きました[3120]。そこで彼は聖アンドレイ修道院を訪れ、修道者たちの完全な生活を見て、彼らと共に暮らすことを決意しました。　その直後、修道院のイグメンは彼をフィニキアの島へ送り出した。そこには至聖なる聖母マリアの修道院があり、そこでイグメンとしてキリストの羊の群れを牧会するよう命じられたのである。　島に到着すると、尊者は数々の奇跡によって、そこに住む異教徒たちをキリストへの信仰へと導き、彼らの神殿を破壊して、その代わりに教会を建てた。彼はその断食に励む生活によって、誰よりも優れていた。　修道院で三十三年を過ごし、主のもとへ召される時が近づいているのを感じると、彼はそのことを兄弟たちに告げ、自分の後任として敬虔な修道士ヨセフを修道院長に任命し、自身は急いでハルキドンへと向かった。船に乗り込んだ彼は病に倒れ、船員たちにこう言った。

「勇気と平静を保ってください。私は主のもとへ旅立つのです。私の遺体をハルキドンまで運んでください。」

そう言い残して、聖人は息を引き取った。追い風に乗って船はすぐにハルキドンに到着し、船乗りたちは聖人の遺体を棺に納め、敬意を込めて埋葬した。

[3118] 聖トリフォンは933年に逝去した。

[3119] テオフィラクト総主教は、933年から956年までコンスタンティノープル教会を統率した。

[3120] ハルキドンという都市は、コンスタンティノープルの対岸、ボスポラス海峡のアジア側に位置し、ローマ帝国のビフィニア属州に属しており、同州の主要都市であった。

5月3日

4月20日（旧暦）

シナイ山の修道院長、我らの尊き父アナスタシオスの記念日

記念日4月20日

聖アナスタシオスは、若き頃からすでに深い敬虔さの中で育てられた。それは、彼自身が語った次の言葉からも明らかである。

「肉体の姿でキリストをご覧になった方々は、彼を預言者と見なしました。しかし、私たちは、肉眼で彼をご覧になったわけではありませんが、それにもかかわらず、幼い頃から、まだ乳児や少年であった頃から、常に彼を神、全能の主、世々の創造主として認め、父なる神の栄光の輝きとして彼を告白することを学びました。　また、その聖なる福音書には、あたかも私たちの目の前に、私たちに語りかけておられるキリストご自身が立っておられるかのように、深い愛をもって耳を傾けています。そして、その清らかな御体の汚れなき真珠を受け入れるとき、私たちはキリストご自身を受け入れていると信じています。　また、イコンに描かれた御姿だけを見る時でさえ、あたかも天から私たちを見つめておられる御本尊その方をお見ているかのように、ひれ伏し、崇め、敬うのである。

この聖アナスタシオスの言葉から、彼が幼少の頃から、真の神であるキリストを知り、キリストを信じ、偽りのない畏れをもってキリストを畏れ、心を尽くしてキリストを愛し、キリストにふさわしい礼拝をもってキリストを崇めるよう教えられてきたことがはっきりと見て取れる。

成人すると、聖アナスタシウスは世俗を離れ、福音書の戒めに従って十字架を背負い（マタイ16:24）、献身的にキリストに従った。修道院に身を寄せたアナスタシウスは、そこで修道生活に入った。　しかし、可能な限り高い徳の業を達成したいと願い、徳において完全な人々に倣おうと努めた聖アナスタシウスは、エルサレムへと向かい、シナイ山に定住した。そこで彼は、修道生活の業に秀でた多くの聖なる人々と共に修行に励んだ。

当時、シナイ山の修道院長は聖ヨハネ・ラドスヴィチ（[3121] ）であった。その謙遜と知恵により、彼は神から霊的な洞察力と英知の賜物を受けた。彼は多くの魂に有益な説教をまとめ、いくつかの聖なる教父たちの伝記を著し、司祭の位を授かるにふさわしい者とされた。

聖ヨハネ・ラダーと彼の兄弟ゲオルギオスの後、聖アナスタシオスがシナイ山の修道院長となった。彼は、「アケファロイ」[3122] 、すなわち「頭なき者たち」と称される異端者たちを糾弾するために多大な労力を費やし、彼らに対して多くの著作を執筆し、彼らと論争を繰り広げながら、彼らを糾弾し、恥をかかせた。 アケファロスの異端は、アレクサンドリア[3123] で、ゼノン皇帝[3124] の治世中

[3121] 聖ヨハネ・クライストロフォロス（『梯子』の著者）は、シナイ山の修道院長であり、敬虔な生活を送った偉大な修行者である。その著書『梯子』には、道徳的完全性への道のりを登るための階段が、いわば段階的に描かれている。聖ヨハネは6世紀に生きた。――3月30日の彼の伝記を参照のこと。

[3122] アケファリ（ギリシャ語の「ケファリ」＝頭から派生）は、 エフェソス公会議（第3回全地公会議）において、キリルにもアンティオキアのヨハネにも追随することを拒んだ派閥や、アレクサンドリア総主教が『エノティコン』に署名した際に同総主教から離反した派閥、 ――およびその他いくつかの派閥にも付けられた名称である。

[3123] アレクサンドリア――エジプト北部に位置する都市で、古代にはその教養と商業で名高かった。

[3124] ゼノン皇帝は474年から491年まで在位した。

に発生した。その創始者たちは、ハルキドン[3125] で開催された聖なる教父たちの第4回全地公会議[3126]に敵対し、これに反対した者たちであった。この異端が発生した当時、アレクサンドリアには、偽パトリアルヒであり異端者であるペトロス（通称モゴス[3127] ）がいた。 その後、この「無頭派」の異端に、セウィルが加わった。彼は、無頭派の異端に属していたことから「無頭」というあだ名をつけられた。このセウィルこそ、アナスタシウス皇帝の治世[3128] に、アンティオキア総主教座[3129] を掌握した人物である。

聖アナスタシオスは、これらすべての異端者たちを打ち破り、シナイ山で彼らと戦っただけでなく、さらに自らシリア、アラビア、エジプトを巡り、至る所でこの異端を根絶し、追放して、キリストの教会を確固たるものにした。 このようにして主に長く仕えた後、聖アナスタシオスは高齢のうちに主のもとへ帰った。彼の死は、皇帝ヘラクレイオスの治世中に訪れた[3130] 。

なお、同じ「シナイ派」という異名を持つアナスタシウスは二人いたことに留意すべきである。一人は、年齢も位も上であり、皇帝ユスティヌスによって不当に追放されたアンティオキア総主教であり、もう一人は、今述べた人物で、その少し後に生きたシナイ山の修道院長であった。

聖アナスタシオス・シナイタ、アンティオキア総主教の記念日

記念日：4月20日

ユスティニアヌス大帝の治世35年目[3131] 、アンティオキア総主教ドムヌス・ザ・ヤング[3132] の死去後、アナスタシオスが総主教の座に就いた。彼は「シナイ人」という異名で知られていたが、これは彼がシナイ山から聖職の座に招かれたことに由来する。

この頃、教会では、キリストの神性ある肉体をめぐる一部の者たちの不敬虔な詭弁を巡り、混乱が生じ始めていた。すなわち、救い主が人々の間に留まっていた間、 自発的な受難に至るまで、その肉体は苦しみを感じず、自然の欲求にも従わなかった、また、我らの主イエス・キリストは、受難と復活の前に、復活後に使徒たちの前に現れた際と同じ方法で、食物や飲み物を摂取していた、といった主張であった[3133] 。この不敬虔な詭弁は、コンスタンティノープルで生まれたものである。これについては、コンスタンティノープル総主教聖エウティキオスの伝記に詳しく記されている[3134] 。この異端的な思弁には、当初、異端者たちに惑わされたユスティニアヌス皇帝も加わった（しかし後に彼はこの異端を捨てた）が、彼はこの異端的な教えを信仰の教義として確立しようとした。 その結果、教会には大きな混乱が生じ、異端に反対した聖エウティキオス総主教も総主教の座から追放された。

[3125] ハルキドン市は、ビフィニア（小アジア地方）のボスポラス海峡沿いに位置している。

[3126] 第4回全地公会議は、マルキアヌス皇帝（450～457年）の命により、451年にハルキドンで召集された。この公会議において、主イエス・キリストの御人において二つの本性がどのように結合しているかという教義が最終的に定められた。

[3127] ペトロス・モゴス、あるいはモングは、単性論者であり、477年から490年まで総主教を務めた。

[3128] アナスタシオス（ディコル）は、491年から518年まで帝国を統治した。

[3129] セウィル――異端の指導者であり、512年から519年まで総主教を務めた。

[3130] 皇帝ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

[3131] ユスティニアヌス大帝は、527年から565年まで在位した。

[3132] アンティオキア総主教ドムヌス2世は、546年から560年まで総主教座を統治した。

[3133] このような考えを掲げていたのが、いわゆる異端「アウタルトドケト派」（ギリシャ語で「朽ちない」の意）であり、これはモノフィシテ派という異端の一派である。

[3134] 4月6日の彼の伝記を参照のこと

この教義を受け入れるべきか否か、無知ゆえに迷っていた人々は皆、アンティオキア総主教アナスタシオス・シナイテスからの助言と指針を待っていた。というのも、聖アナスタシオスは聖書に極めて精通しており、正統信仰の告白に堅固であり、その生涯も聖なるものであったからである。異端者たちは、聖アナスタシウスを自分たちの側に引き込むためにあらゆる努力を尽くした。もし彼が彼らの教えに傾けば、すべての正信者たちが彼の例に倣うだろうと期待していたからである。 この目的のために、彼らは王に助けを求めたが、聖アナスタシウスが王の誤りを書面で糾弾したため、結局成功しなかった。また、彼はシリア全土の聖職者や信徒たちにも牧会的な書簡を送り、皆にその異端に警戒するよう教えた。 さらに、アンティオキアでは、彼は毎日教会で説教を行い、この使徒の教えを繰り返した。*「たとえ私たちや、天からの天使でさえ、私たちがあなたがたに宣べ伝えたこととは異なることを宣べ伝えたとしても、その者は呪われよ」*（ガラテヤ1:8）。

これらすべてを知ったユスティニアヌス皇帝は、聖なるアナスタシオス総主教に激怒し、コンスタンティノープル総主教エウティキオスと同様に彼を座から追放しようと望んだが、突然、自らの死が近づいていることを感じ取り、その意図を断念した。

臨終の際、皇帝は異端を悔い改め、遺言に聖エウティキオス総主教を流刑先から呼び戻し、その座に復帰させるよう記した。こうしてユスティニアヌスは悔い改めのうちに息を引き取り、敬虔な王たちの列に加えられた。そして教会には再び平和がもたらされた。

ユスティニアヌスの死後、国家の統治は彼の甥であるユスティヌス・ザ・ヤング[3135] が引き継いだ。異端者たちの唆しにより、彼はアンティオキアの神の司教アナスタシオス・シナイタを、不当な告発をでっち上げて王座から追放した。 こうして、聖アナスタシウスは、まず第一に、教会の資金を大切にせず、無駄遣いしていたと非難された。次に、皇帝から「なぜ教会の財産を惜しまないのか」と問われた際、次のように答えて皇帝を中傷したとして非難された。 「それは、全世界の破滅者ユスティンに、それを奪われないためだ」。さらに、アナスタシウスがアンティオキアの主教座に就いた際、叔父ユスティニアヌスの宮廷を管理していたユスティンが、貪欲な金銭愛好家であったため、アナスタシウスから金の贈り物を期待していたと主張する者もいた。 しかし、聖アナスタシウスは彼に何も与えなかった。聖職は金で得られるものではなく、聖霊の恵みによって授けられるものである以上、聖職を得るために金を渡すのは良くない、と正しく判断したからである。それ以来、ユスティヌスはアナスタシウスに対して怒りを抱くようになった。 そして、叔父の死後、彼が国政を掌握すると、何の罪もない聖アナスタシウスに対する告発材料を探し始め、虚偽の告発を利用して、彼を座から追放した。

アナスタシウスが追放された後、彼の意志に反して、ファラン修道院の修道院長グリゴリオス[3136] がアンティオキア総主教座に任命された。彼は敬虔さにおいて際立った人物であり、エルサレム総主教ソフロニオス聖下によって『リモナール』の中で称賛されている。 このグリゴリオスの死後、至福のアナスタシオス・シナイテスは、皇帝マウリキオス[3137] の治世下で23年間の流刑生活を送った後、再びアンティオキア総主教座に復帰した[3138] 。当時、ローマの教皇は聖グリゴリオス大教皇で

3135 ユスティヌス2世は565年から578年まで在位した。

3136 ファラン修道院は、近くにあるファランという集落にちなんでその名がついた。 この修道院の所在地は、聖エウフィミオスの伝記の中で次のように記されている。「エウフィミオスは、聖都から6マイル離れた、ファラと呼ばれる修道院を訪れた」。——グリゴリオス2世は573年から596年までアンティオキア総主教座を統治した。

3137 聖マウリキウスは582年から602年までビザンティウムを統治した。

3138 聖アナスタシオス・シナイテスは、561年から572年まで初めて、そして596年から601年まで二度目に総主教座を統治した。

あり、その異名は「二語者」、あるいは「対話者」であった[3139]。この聖人は、この至福のアナスタシウスと書簡を交わし、心からの霊的交わりを保っていた。聖教皇グレゴリウスは、アナスタシウスがその座に復帰したことを聞くと、直ちにその復帰を喜び、彼に書簡を送り、その中で次のように記した。

「天には神に栄光あれ。地には平和と喜びあれ。かつてアンティオキアの岩だらけの土壌を乾いたままにしていた広大な川が、今や再びその川床に戻り、その水で洗い流される谷々を潤しているのだから。」

別の手紙の中で、彼は再び次のように述べている。

「聖なる父よ、あなたは、もし可能であれば、紙やペンを介さずに私と対話を交わしたいと願っておられ、東と西の間の距離があまりにも遠いためにそれが叶わないことを残念に思っておられると伝えておられます。しかし、私は真実を申し上げます。紙の上であっても、あなたの思いは私と対話を交わしているのです――まるで紙がないかのように。　あなたの言葉から、私への愛が伝わってきます。そして、全能の神の恵みによって愛の絆で結ばれた私たちは、距離によって隔てられることはありません。なぜ、すでに持っている金箔を施した鳩の翼を、さらに手に入れたいと願うのですか？　なぜなら、この翼こそが、神と隣人への愛そのものだからです。聖なる教会はこの翼に乗って舞い上がり、それによって地上のあらゆるものを凌駕するのです。もしあなた、聖なる父よ、この翼を持っていなかったなら、手紙の中でこれほど深い愛を込めて私のところへ飛んできてはくれなかったでしょう。　それゆえ、お願いいたします。この弱き私のために祈ってください。あなたの祈りによって、主が、ローマにランゴバルド族がもたらす（[3140]）この甚大な災厄と動乱から、一日も早く私を解放し、永遠の安息の港へと導いてくださいますように。　私は、神の人であるあなたが謙虚な心で私に示してくださった、　というあなたの心温まる祝福を感謝して受け取りました。あなたはそれについて、「貧しい者が、貧しい者に属するもの以外に、何を与えることができるだろうか」とおっしゃっています。　しかし、もしあなたが霊において自らを貧しい者としないならば、あなたの祝福はこれほど寛大なものにはならなかったでしょう。全能の神が、その御加護をもって、あらゆる悪からあなたを守られますように。そして、あなたの生涯はすべての善良な人々にとって極めて重要であるゆえに、多くの年月が過ぎた後、至高なる御方があなたを天の故郷の永遠の住まいへと移してくださいますように」。

ローマ教皇聖グリゴリウスがアンティオキア総主教である福者アナスタシウスに宛てたこの書簡からは、聖霊における両者の相互の愛が明らかであり、同時に、この書簡はアナスタシウスの敬虔さと聖なる生涯を証ししている。

福者アナスタシオスは、教座に復帰してから6年間を過ごし、マウリキウス皇帝の治世14年目に主のもとへ召された。

[3139] 聖グリゴリオス・ディオスロスは、590年から604年までローマ教皇を務めた。教会では、3月12日の使徒ペトロの記念日に、彼の名に捧げられた付属教会で彼の記念礼拝が執り行われる。– 聖グリゴリオスの著作のうち、特に注目すべきものは、『イタリアの教父たちの生涯に関する対話』（この著作により、彼に「二語」という名称が与えられた）と、牧者の義務について述べられている『牧会規則』である。

[3140] ランゴバルド族はゲルマン系部族であり、古代にはエルベ川下流とアラー川の間に住んでいた。4世紀から徐々に南東のドナウ川方面へ移動し始め、6世紀にはパノニアを制圧した。　そこから568年、彼らはイタリアへと進軍し、東ローマ帝国との戦争において、リグリア、エクザルハト、ペントポリ、ローマ・ドゥカート、ナポリ地方、および両方の南半島を除くイタリア全土を征服した。 征服された中部イタリアの地域からはランゴバルド王国が成立したが、774年にカール大帝によって征服され、カール大帝はランゴバルド王の称号を名乗った。その後のドイツの王や皇帝たちは、イタリアの支配者として、ランゴバルド王の称号を名乗った。

その後、聖アナスタシオス・シナイテに続き、別のアナスタシオスが総主教の座に就いたが、彼はすでに「シナイテ」という称号を冠していなかった[3141] 。この人物は、キリスト教徒を迫害した皇帝フォキオスの治世中にユダヤ人によって殺害され[3142] 、信者たちからキリストの殉教者として崇敬された。

なお、「シナイ派」という称号を持つアナスタシウスは2人いたことに留意すべきである。 一人はアンティオキア総主教であり、マウリキウス帝の治世中に帰天した。もう一人は、現在記念されているこのアナスタシオスであり、シナイ山の修道院長を務め、マウリキウスを殺害した迫害者フォキスの後継者であるヘラクレイオス帝[3143] の治世中に死去した。 当時、アナスタシオスという名を持ち、徳高い生涯で名声を博した他の聖なる父たちもいたが、彼らはこのアナスタシオス・シナイテのようにシナイ山の修道士ではなかった。このアナスタシオス・シナイテは、アナスタシオス・シナイテの後を継いでアンティオキアの総主教の座に就いたが、ユダヤ人によって殺害された。 さらに、『リモナール』の第48章および第49章には、エルサレムにおいて、命の聖墳墓および我らの神キリストの復活教会の管理人を務めたアッバ・アナスタシウスが言及されている。

聖グリゴリオス、アンティオキア総主教の記念日。

記念日：4月20日

聖グリゴリウスは、シナイ山とライフの間に位置する「ファラン」と呼ばれる修道院の院長であった。 神の特別な摂理により、彼は奇跡的な形で、総主教の座にふさわしい人物として神によってあらかじめ示されていた。このことについては、エルサレム総主教ソフロニオス聖下の『リモナール』に次のように記されている。

アルメニア人のアッバ・ゲオルギオス、すなわちアッバ・セルギオスの弟子は、次のように語っている。「かつてファラナ修道院のイグメンであったアッバ・グリゴリオスが、何度も私にアッバ・セルギオスのもとへ連れて行ってほしいと頼んできたため、私は彼と共に、当時死海近くの荒野に滞在していた長老のもとへ向かった[3144] 。 長老は彼を見ると、歓迎し、非常に親切にもてなした。彼は水を持ってきて、彼の足を洗い、一日中、魂の救いについて彼と語り合い、翌日、彼を見送った。アッバ・グリゴリウスがアッバ・セルギウスの元を去った後、私は長老に尋ねた：

「父よ、ご存知でしょうか。私は惑わされてしまいました。というのも、多くの司教や長老、その他の父たちをあなたのもとへ連れて行ったのですが、あなたは彼らの誰の足も洗ってあげず、アッバ・グリゴリウスだけだったからです。」

この言葉に対し、長老は私にこう答えました：

[3141] アナスタシオス2世は、602年から610年までアンティオキア総主教座を統治した。

[3142] フォカス皇帝は602年から610年まで在位した。

[3143] ヘラクレイオス皇帝は610年から641年まで在位した。

[3144] 死海は、パレスチナ南部に位置する塩分濃度が高く、アスファルトを含む湖で、ソドムとゴモラの滅亡後にシディム渓谷に形成された。その長さは70ヴェルスト、幅は25ヴェルストである。北部は深く、南部は浅い。その水位は地中海より1200フィート低い。 この海の水には苦い塩分が大量に含まれているため、海の中もその周辺も生命は一切存在せず、魚も鳥も植物もいない。湖の中央まで進もうとする試みはすべて失敗に終わり、多くの人々にとっては死を招くものとなった。 死海の水は特に密度が高く、沈むのが難しい。波は岩だらけの岸に、まるで石の破片のように打ち寄せる。

「グリゴリウスという者が誰なのかは知らないが、私が自分の洞窟に総主教を迎え入れたことは知っている。なぜなら、彼がオモフォロス（[3145] ）を身にまとい、手に福音書を持っているのを見たからだ。」

これはアッバ・セルギオスが預言的な霊感をもってアッバ・グリゴリウスについて語ったものであった。なぜなら、五年が経過した後、神の御心により、アッバ・グリゴリウスはアンティオキアの都市で総主教に任命されたからである」[3146] 。

アンティオキアの総主教アッバ・グリゴリウスについて、ある長老たちは、彼が特に以下の美徳を備えていたと伝えている。すなわち、施し、恨みを抱かないこと、悔い改め、謙遜である。彼はまた、罪を犯す者たちに対して深い憐れみを抱き、その他多くの美徳も身につけていた。　エルサレム総主教ソフロニオス聖下は、彼について次のように証言している：

――アンティオキア総主教、至福のグリゴリオスといったような人物は、聖人と敬虔な人々の列に加えられるにふさわしい。彼は本意に反して総主教の座に就かされたが、我らの主キリストにあって聖なる生涯を送った。主なるキリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

私たちの尊い父テオドロス・トリキナの記念日

記念日：4月20日

尊者テオドロス・トリキナ、すなわち「毛衣を着る者」[3147] は、裕福な両親の息子であり、コンスタンティノープル出身であった。神のために両親、富、そして名声を捨て、故郷を離れ、ある荒野の修道院で修道生活に入った。

そこで彼は極めて厳格な生活を送り、肉体を極度に衰弱させたため、その顔はまるで死人のようであった。　彼は夜通し祈りを捧げ、寒さや霜にもかかわらず、決して頭部を覆うことはなく、とげのある毛皮の衣をただ一枚だけ身にまとい、そのことから、前述の通り、「毛皮を着る者」、すなわちトリキノスと呼ばれた。　その後、聖人がその過酷な生活を送った修道院も、彼の名にちなんで呼ばれるようになった。その功績により、聖テオドールは神から悪霊を制する力を授かり、多くの奇跡を起こした後、安らかに主のもとへ旅立った[3148] 。 彼は生前だけでなく、死後も奇跡を起こし続けました。というのも、彼の聖遺骨からは芳香を放つ癒しの聖油が流れ出ており、それによって、私たちの神キリストの栄光のために、多くの病が癒やされ、不浄な霊が追い払われたからです。

5月4日

4月21日（旧暦）

[3145] オモフォロス（ギリシャ語で「肩」と「担ぐ」の意）とは、司教の礼服の一部である肩掛けのことである。オモフォロスは、十字架の図柄が描かれた長くて幅の広い布で、他の司教の礼服の上から着用され、片方の端は前方に、もう片方の端は後方に垂れ下がる。　象徴的な意味において、オモフォルは、善き羊飼いが自らの肩に担いだ迷い羊を表している（ルカ15:4–7）。

[3146] 聖グリゴリオス1世は、573年から596年までアンティオキア総主教座を統治した。

[3147] ギリシャ語の「トリクス（trix）」――「毛」に由来する。

[3148] 聖テオドロスの生没年は正確には不明である。確かなのは、彼が4世紀から9世紀の間に生きたということだけである。

同日は、コンスタンティノープル総主教であり、テオドシウス2世の治世下で2年半にわたり教会を統率し、481年4月12日に安らかに天に召された、私たちの聖なる父マクシミアノスの記念日である。

聖殉教者イアンヌアリオスの受難

記念日：4月21日

不敬虔な皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[3149] がキリスト教徒を激しく迫害していた頃、イアンヌアリウス司教は捕らえられ、カンパニアの統治者[3150] ティモテオスの前に引き出されて尋問を受けた。 軍司令官は、イアンヌアリウスが、偶像崇拝を強要される中で――時には甘言で誘惑され、時には脅迫で威嚇されながらも――キリスト教の信仰を揺るがすことなく貫いているのを見て、彼を焼くために灼熱の炉に投げ込むよう命じた。 しかし、聖人は、バビロンの炉の中の三人の若者のように（参照：ダニエル書3章）、火の熱から無傷のままであった。それは、神の御使いが彼のもとへ降りてきて、火の力を無力化したからであり、聖人は火の中にあっても喜び躍り、神を賛美し、栄光を称えたのである。

彼が炉から出てきたとき、人々は皆、火が彼の衣服さえも傷つけていないことに気づき、これに大いに驚いた。 一方、軍司令官は、キリスト教の司教が何らかの魔力に守られて無傷で火の中から出てきたのだと考え、聖人に対して激しい怒りに満ち、彼を拷問台に極限まで引き伸ばすよう命じた。その力はあまりにも強かったため、彼の体の各部位が関節から引き剥がされ、 その後、聖人の全身が引き裂かれ、むき出しの骨が見えるようになるまで容赦なく殴打するよう命じ、その周囲の地面は血で染まった。

この恐ろしい光景を目撃するために、二人の聖職者――助祭フェストと朗読者ディジデリウス――がやって来た。彼らは群衆の中に立ち、自らの司教の苦しみをかしこまりながら見つめていた。彼らは、殉教者が示す忍耐に心から喜びを感じると同時に、彼に加えられる残酷な苦しみには涙を流していた。異教徒たちは、こうした様子から、彼らがキリスト教徒であることを察知した。 そこで、不信心者たちは二人を捕らえ、縛り上げると、聖殉教者イアンヌアリウス司教と共に、軍司令官の後を追ってプテオラ[3151] の町へと連行し、そこで彼らを牢獄に投獄した。

この同じ牢獄には、キリストを告白したためにここに投獄されていたプテオラ市の助祭プロクルスとソシウス、そして獣に引き裂かれる刑に処せられた二人の平信徒、エウティキオスとアクティオンが収監されていた。

日が明けると、彼らは皆、司教と共に広場へ連れ出され、野獣に投げ込まれた。しかし、御自身の聖徒たちの間で栄光を受けられる神は、かつてダニエルが投げ込まれた穴の中で獅子の口を封じたように（ダニエル書6章）、野獣たちの口を封じられた。 それらの獣のうち、聖なる殉教者たちに手を下したものは一頭もいなかった。むしろ、すべての獣が一時的にその生来の獰猛さを羊のような柔和さに変え、聖イアンナリウス司教のもとへ近づき、その足元にひれ伏した。この異常な出来事は、そこにいたすべての人々を驚愕と恐怖に陥れた。 一方、軍司令官は、この出来事もまたキリスト教徒の架空の魔力によるものと決めつけ、神の聖人と彼と共にいた者たち全員をどのように処刑すべきか考えを巡らせていた。

[3149] ディオクレティアヌスは284年から305年までローマ帝国を統治し、マクシミアヌス・ガレリウスは305年から311年まで統治した。

[3150] カンパニアは、中部イタリアの最南端に位置する州で、ティレニア海沿岸のマッシカ山からシラーラ川にかけて広がっている。

[3151] プテオラは、ナポリからほど近いカンパニア地方の海辺の都市である。

彼が霊的な目を見失い、そのことを思案している最中、突然、肉眼の視力も失い、壁を手探りで確かめながら、案内人を必要とするようになった。　そこで、キリストの聖人であり殉教者であるイアンヌアリウスが、その寛大さから、自分を苦しめる軍司令官ティモフェイのために祈ると、ティモフェイは直ちに肉体の視力を取り戻したが、心の目は開かれなかった。これらすべての奇跡を目撃した民衆のうち、約五千人がキリストを信じるようになった。　一方、殉教者の祈りによって突発的な失明から視力を取り戻したにもかかわらず、恩知らずで心が石のように硬くなった軍司令官は、真理を悟るどころか、さらに深い狂気に陥り、私たちの主であるキリストを賛美するどころか、キリストを冒涜する言葉を口にした。　これほど多くの人々がキリストに帰依したことに激怒し、聖なる殉教者たちを剣で斬り殺すよう命じた。　こうして、聖殉教者であり神の聖人であるイアンヌアリウスは、共に殉教した者たち――助祭のフェスト、プロクルス、ソッシウス、朗読者のディジデリウス、そして平信徒のエウティキオスとアクティオン――と共に、プテオラ市の城壁の外で彼らによって剣で斬殺され、殉教の冠を受けた[3152]。

これらの聖なる殉教者たちの遺体は、近隣の都市の住民たちによって引き取られた。各都市は、それぞれ神の御前で自分たちの執り成し手となる殉教者を一人ずつ持ちたいと願い、一人ずつ受け入れたのである。聖殉教者イアンヌアリウスの遺体は、ナポリの住民たちによって引き取られた。彼らはそれを栄誉をもって自都市へ運び、自分たちの教会に安置した。　プテオラから聖人の遺体を運び出す際、住民たちはその地にこびりついた聖人の血を地面から集め、ガラス製の器に入れ、敬虔に保管した。 この の血が入った器を殉教者の頭の上に置くと、血はたちまち溶け出し、まるで今まさに流されたかのように熱くなった。ナポリでも、聖殉教者イアンヌアリオの祈りによって様々な奇跡が起こった。とりわけ、そこで称賛されたのは次の奇跡である。

かつてヴェスヴィオ山[3153] が、膨大な量の溶岩を噴出したため、近隣の町だけでなく、遠く離れた都市の住民までもが恐怖と戦慄に襲われた。しかし、人々が聖人の棺の前に集まり、涙ながらに助けを求めて叫び始めたとき、溶岩は直ちにその山の中に消え去り、人々に何の被害も及ばなかった。亡くなった少年をめぐっては、他にも素晴らしい奇跡が起こった。

マクシミラという名の未亡人が一人息子を亡くし、その死を嘆き悲しんでいた。教会を訪れた彼女は、教会の扉の上に聖イアンヌアリオ司教の像が描かれたイコンがあるのに気づいた。　かつて旧約聖書に記された奇跡、すなわち聖預言者エリセウスがソナミテの娘の息子をよみがえらせた話（参照：列王記下4章）を思い出し、彼女は神と神の御使いに確固たる希望を置き、エリセウスの例に倣って行動した。　聖殉教者イアンヌアリオのイコンを取り、それを亡くなった息子の上に置き、目を目に、口を口に、そして描かれた体のその他の部分も死者の体に重ね合わせ、嘆きと熱い涙を流しながら祈り、こう言った：

「神の御使いよ！　私を憐れみ、私の悲しみを和らげてください。私の唯一の息子をよみがえらせてください。」

彼女がそう祈ると、息子はたちまち生き返り、健やかに立ち上がった。葬儀に集まっていた人々は皆、このあまりにも輝かしい奇跡を目撃し、驚き、聖人たちを通して驚くべき奇跡を行われる神を賛美し、感謝し、聖殉教者イアンヌアリオを、私たちにとって迅速な助け手として賛美の言葉を捧げた。　その聖なる祈りによって、主が私たちにも永遠に御慈悲を授けてくださいますように。アーメン。

[3152] 聖殉教者たちの殉教は、305年頃に起こった。

[3153] ヴェスヴィオ山は、イタリアのナポリ近郊にある火山である。 西暦79年、ヴェスヴィオ火山は最初の噴火を起こし、ヘルクラネウム、ポンペイ、ストビアの各都市を火山灰で埋めた。それ以来、ヴェスヴィオ火山の噴火は周期的に繰り返され、時には10年間に数回も発生した。とりわけ1906年には、かなり激しい噴火があり、いくつかの都市が破壊された。

聖殉教者テオドロスの受難

記念日：4月21日

アントニヌス帝の治世[3154] 、パンフィリアのペルギア[3155] を統治していた軍司令官テオドトの時代、この地では軍務に就かせるため、容姿端麗で体格の優れた若者たちが徴集されていた。 他の良家の子弟たちと共に、今ここに記念される、容姿の極めて美しい至福のテオドールも徴集され、軍司令官テオドトのもとに連れて行かれた。軍司令官は、他の若者たちと同様に、彼にも軍人の印を付けた。しかし、聖テオドールは直ちにそれを振り払い、こう言った。

「私は母の胎内から、天の王である主イエス・キリストによって印を授かっています。他の王のために兵士となることを望みません。」

すると、軍司令官は聖人に尋ねた。

「あなたはどの王の兵士なのか？」

「私は、天と地を創造されたその王の戦士です！」

軍司令官は、テオドールがキリスト教徒であることを察し、彼に尋ねた。

「我らの神々に犠牲を捧げないか？」

「私は不浄な悪魔たちに、これまで一度も生贄を捧げたことはなく、これからも捧げるつもりはありません」と聖人は答えた。

すると、軍司令官は彼を激しく殴打するよう命じ、その後再び尋問のために呼び出し、こう尋ねた。

「今、考え直したか？ 私の言うことを聞き、神々にひれ伏すつもりか？」

「もしあなたが」と聖人は答えた。「あなたを創造された神を知っていたなら、あなた自身もその神を崇拝したいと願うでしょう。」

その後、軍司令官は焚き火を準備させ、巨大な鉄のフライパンを持ち込ませ、大量の樹脂、硫黄、蜜蝋を溶かし、殉教者を裸のままフライパンの上に載せ、沸騰した樹脂をその上に注ぐよう命じた。 これらすべての準備が進められている最中、神は突然、驚くべき奇跡を起こされた。耳をつんざくような轟音が響き、火と鉄鍋があったまさにその場所で地震が起こった。続いて、その場所の地面が と割れ、地割れから水が溢れ出し、火と鉄鍋を消し止めた。 聖なる殉教者は全く無傷のままであり、軍司令官にこう言った。

「ほら、お分かりだろう。これは私によって成し遂げられたことではなく、私が仕える私の神、キリストによるのだ。」 もしあなたが自分の神々の力を知りたいというのなら、別の焚き火を用意し、再び鉄鍋を熱し、あなたの神々の名において、その上にあなたの兵士の一人を乗せるよう命じてみよ。そうすれば、あなたは自分の神々の無力さを目の当たりにし、私の神の全能を知ることになるだろう。

これを聞いたそこにいた兵士たちは、統治者にこう言った。

「いいえ、閣下、私たちにそんなことをなさらないでください。代わりに、私たちの神々の奉仕者（祭司）たちにそうしてください。その鉄鍋は、テオドロスと同様に祭司の命令にも従い、前者と同様に後者も火傷させないでしょう。」

直ちに祭司を呼び寄せるよう命じた後、軍司令官は彼に尋ねた。

「お名前は？」

「ディオスコルです」と祭司は答えた。「それが私の名前です。」

その後、軍司令官は司祭に尋ねた。

[3154] アントニヌス・ピウスは、138年から161年まで皇帝を務めた。

[3155] パンフィリア――小アジア南部に位置する細長い沿岸地帯で、紀元前78年にローマの属州となった。

「キリスト教徒たちは、今日フェオドールがそうであったように、恐れずに火の中へ飛び込み、そこで火傷を負わずに済むとき、どのような魔法の薬草を体に塗っているのか？」

「キリスト教徒は魔術師ではありません」とディオスコルスは答えた。「しかし、キリストの御名はそれほど強力であり、信仰をもってその御名が呼びかけられるところでは、あらゆる魔術の呪縛が打ち砕かれ、悪霊たちは震え上がるのです。」

「まさか」と軍司令官は尋ねた。「キリストは我らのゼウスよりも強いというのか？」[3156]

「ゼウスも他のすべての神々も、感覚もなく耳も聞こえない偶像に過ぎない」とディオスコルスは答えた。「私を鉄板の上に横たわるよう強要しないでほしいと懇願するが、もしゼウスの威力を知りたいというのなら、ゼウス本人を火にかけるほうがよいだろう。」

「だが、一体誰がそんなことができるというのか」と、軍司令官は続けた。「誰が神を火刑台に載せるなどという大胆なことをするだろうか？」

「私に命じてくれ」とディオスコルスは答えた。「そうすれば、私はそれを成し遂げる。もしゼウスが私に抵抗するなら、その時こそ、彼が神であり、自ら火の中から抜け出すことができると信じるだろう。」

「神々についてそのような言葉を口にするようでは、もはやお前は神官ではないな」と、軍司令官は指摘した。

「私は――」とディオスコルスは答えた、　「かつてはあなたと同様に、不敬虔な信仰を持つ祭司であった。しかし今、至福のテオドールが、あなたが彼に課した拷問に打ち勝っているのを見、火に焼かれることもないのを見て、私はキリストの力を知り、偽りの神々の無力さを悟った。キリストの信仰に確固として立ち、今やテオドールに倣いたいと願っている。」

「ディオスコーロスよ、そう言うのなら」と軍司令官は言った。「テオドロスのように、その鉄板の上に上がれ。」

すると、ディオスコーロスはキリストの殉教者に寄り添い、彼にこう言った。

「真の神であるキリストのしもべ、テオドールよ、私のために祈ってください。」

そして聖人はディオスコーロスのために祈った。やがてディオスコーロスが服を脱がされ、赤熱した鉄板の上に置かれると、彼は力強い声で叫んだ。

「主イエス・キリストよ、私を御自分のしもべの一人として数えてくださることを感謝します。さあ、どうか私の魂を安らかに迎え入れてください。」

この言葉を残して、彼は息を引き取った。かくも短い間に殉教の冠を受け、まるで十字架上の強盗が天国を得たかのように。

至福のディオスコロスの死後、聖テオドロスは牢獄に投獄された。その後、彼は再びそこから連れ出され、別の拷問を受けた。両足を縛られ、野生の馬に繋げられた彼は、馬たちが激しく駆り立てられる中、街の通りを引きずり回された。　追われた馬たちは、城壁のある場所で倒れて散り散りになったが、その間、殉教者は目に見えない神の力によって救われ、縛めを解かれた後も、万人の驚きの中で無傷のままだった。　聖人を馬に縛り付けた兵士のうちの二人、ソクラテスとディオニシオスは、この出来事について、次のような驚くべき幻視を皆に語った。馬たちが駆り立てられている最中、彼らは天から殉教者の元へ降りてきた炎の戦車を見、それが彼を乗せて、無傷のまま裁判の場へと連れて行ったという。 このことを皆に語りながら、兵士たちはこう叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

この言葉を耳にした軍司令官は、聖テオドロスと共にこれらの兵士たちも牢獄に閉じ込めるよう命じ、彼らを拷問するために炉を準備し、三日間もの間、激しい炎でそれを焼き続けた。　その後、彼はこの炉に殉教者と、キリストを信じた二人の兵士――ソクラテスとディオニシオス――を投げ

[3156] ゼウス――古代ギリシャの宗教における主神であり、天と地の支配者と見なされていた。

込んだ。すると直ちに、天からある種の神聖な露が降り注ぎ、殉教者たちを潤し、炎を冷ました。聖人たちは、あたかも涼しい場所にいるかのように炉の真ん中に留まり、互いに会話を交わしていた。その時、聖テオドールは、3年前に異民族に捕らえられ、他の捕虜たちと共にエチオピアへ連行された[3157]、その至福の母のことを思い出し、彼女のために神に祈りを捧げ、こう言った。

「主イエス・キリストよ、奇跡を行われる神よ！　あなたがご自身で知っておられる道によって、あなたの神聖な力をもって、私の母を私にお示しください。私は彼女に会いたいのです。あなたにとっては、すべてが可能なのですから。どうか彼女を私にお示しください。そうすれば、他の人々もあなたの偉大さを知ることができるでしょう。」

聖人がこのように祈っていると、炎は少しずつ消え始め、さらに殉教者の祈りによって雨が降り、白熱した炉をすっかり冷やした。聖人たちは、すでに夜になっていたため、その炉の中で眠る準備を始めた。すると、天使が夢の中で聖テオドロスの前に現れ、彼にこう言った。

「テオドールよ、あなたの母のことを悲しむな。あなたは彼女に会えるだろう。」眠りから覚めた聖人は、その夢の内容を友人たちに語った。　彼がその話をしている最中、炉の真ん中からフィリッピアという名の彼の母が現れ、愛しい息子を見て喜び、愛情を込めて彼と彼と共にいた兵士たちに口づけをし、目に見えない手に導かれてどこから、どのようにしてここに来たのかを語った。　その時、聖殉教者テオドールは、両手を天に掲げ、神にふさわしい感謝を捧げた。

朝、軍司令官は眠りから覚めると、側近たちにこう言った。

「テオドールと、彼と共に炉に投げ込まれた戦士たちの骨は、一欠片も残っていないだろう。」

彼がそう話している最中、炉を見張っていた番人の一人が軍司令官のもとへ駆け寄り、炉に投げ込まれた殉教者たちは生きており、さらに前夜から降り続いた雨によって火はすべて消え失せていたと報告した。　さらに、捕虜の中から突然現れたテオドロスの母が、まるで宮殿にいるかのように炉の中に座り、息子や戦士たちとキリスト教の神について語り合っているとも告げた。これを聞いた軍司令官は恐怖と戦慄に襲われ、自ら炉に近づき、至福のフィリッピアを呼び寄せてこう尋ねた。

「あなたはテオドールの母か？」

「ええ、そうです」と彼女は答えた。

すると、軍司令官は言った。

「息子を説得して、神々に拝ませなさい。そうしなければ、彼は死んでしまい、あなたを子なしにしてしまうことになる。」

「私の息子は」と彼女は答えた。「私が彼を身ごもる前に、私の主からその知らせを受けた通り、あなたによって十字架にかけられ、神に賛美のいけにえを捧げるでしょう。」

「お前自身が息子に十字架刑を宣告したのだから」と軍司令官は言った。「それならば、その通りにしよう。」

その後、軍司令官は聖テオドロスを直ちに十字架にかけるよう命じ、聖フィリッピイの首を剣で切り落とすよう命じた。また、ソクラテスとディオニシオスという二人の兵士も、剣で斬り殺すよう命じた。

こうして、聖なる殉教者たちはその栄冠を授かった。聖テオドロスは三日間、生きたまま十字架に吊るされていたが、その後、主のもとへ旅立った[3158]。そこで、敬虔な者たちの一部は、聖人たちの遺体を運び出し、高価な布で包み、香油を塗って、このために特別に用意された場所に尊く安置し、父と子と聖霊――三位一体の唯一の神、永遠に賛美される御方を賛美した。アーメン。

[3157] エチオピアまたはヌビア――エジプトの南に位置するアフリカの地域。

[3158] 聖なる殉教者たちの殉教は、2世紀半ばに起こった。

聖殉教者イサキイ、アポロス、コドラトスの記念日

記念日：4月21日

当初、これらの聖人たちはディオクレティアヌス皇帝の臣下であった[3159] 。聖大殉教者ゲオルギオスの奇跡を目撃し、地上の栄光を捨ててキリストに帰依したアレクサンドラ王妃の模範に倣い、彼らもまた主のもとへと帰依した。 聖なる殉教者たちは、王が子供を産んだ自らの妻さえも容赦しなかったことを指摘し、その不敬虔さと残酷さを大胆に非難した。 不敬虔な皇帝の命により、これらの聖なる殉教者たちは当初、牢獄に投じられ、そこで飢えと渇きに苦しめられた後、キリストを告白したために剣で斬り殺された[3160] 。

- 同日、コンスタンティノープル総主教であり、テオドシウス2世の治世下で2年半にわたり教会を統率し、431年4月12日に安らかに天に召された、私たちの聖なる父マクシミアンの記念日である。

5月5日

4月22日（旧暦）

私たちの尊い父、アナスタシウポリの司教テオドロス・シケオスの生涯

記念日：4月22日

ガラティア地方[3161] には、シケアと呼ばれる村があり、アンキラ地方（小アジア）の主要都市であるアナスタシオポリスから12スタディオン[3162] の距離にある。 この村で、聖テオドロス・シケオスは、母マリアと、当時ユスティニアヌス大帝[3163] のもとで速足兵[3164] として仕えていた有名なコスマという名の父の間に生まれた。 テオドロスの受胎が成った時、その夜、母マリアは眠りの中で不思議なしるしを目撃した。彼女は、自分の胎内に降りてくる大きな輝く星を見たのである。 目を覚ますと、彼女は一緒に暮らしていた母エルピディアと姉ディスペニアにそのことを伝え、その後、その集落から六スタディオン離れた場所で、隠遁者の沈黙の中で救いを求めていたある先見の明のある長老のもとへ行き、その奇妙な幻視について語った。 その老人は、神に喜ばれる生き方について霊的な教えを授けた後、こう言った。

「あなたの中に宿ったその幼子は、まことに偉大な人物となるでしょう。それは人間の間だけでなく、神の御前においてもです。そして、その明るい星は、賢明な夢の解釈者たちが説くように、王の栄光を象徴しています。 しかし、あなたにとって、その幻は地上の王権を意味するものではない。あなたが見た星は、神があなたの子供に授ける美徳と神の恵みの栄光を予告しているのだ。なぜなら、主は通常、御自分のしもべたちを、生まれる前から母の胎内で聖別されるからである。

[3159] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは、キリスト教を激しく迫害した人物であり、284年から305年まで在位した。
[3160] 聖殉教者たちの殉教は303年に起こった。
[3161] ガラティア――小アジアの地域。
[3162] スタディオン――長さの単位で、現在のサジェン約88本に相当する。
[3163] ユスティニアヌス大帝は、ローマ皇帝として527年から565年まで在位した。
[3164] スコロホディ――皇帝の護衛兵で、通常、皇帝の旅に随行していた。

こうして、先見の明のある老修道士はマリアに予言し、いくつかの助言を与えた後、彼女を安らかに送り出した。このことはすべて、アナスタシオポリスのテオドシウス司教の耳に入り、彼もまた、生まれた赤ん坊が世の光となるというその幻視を同様に理解した。

マリアは長老のもとから戻ると、その助言に従い、母と姉と共に、貞潔を保ちながら神に喜ばれる生活を送った。　そして出産の時が訪れると、マリアは息子を産み、キリスト教の慣習に従って彼は洗礼を受け、テオドロス（ギリシャ語で「神の賜物」を意味する）と名付けられた。その名自体が、この少年が神から世界への偉大な賜物となることを示していたのである。

彼が六歳になったとき、母は彼をあらかじめ軍務に就かせたいと願い、そのために高価な衣服や金の帯、その他軍務に必要な品々を用意し、　、彼を皇帝に仕えさせるためにコンスタンティノープルへ赴こうとした。しかし、眠りの中で聖大殉教者ゲオルギオスが彼女に現れ、こう言った。

「なぜ、あなたは自分の子に対してそのような企てを企てたのか。おお、妻よ、無駄な労苦をなすのはやめなさい。天の王が、あなたの息子を御自身のもとに求めておられるのだ。」

目を覚ますと、マリアは泣き出し、息子の死が近いと語り始めた。彼女は息子が間もなく死ぬだろうと思っていたのである。しかし、少年は年を重ね、知恵も深まっていった。　八歳になると、母は彼を学校へ通わせた。神の恵みにより、彼は他の子供たちよりも優れて学び、その善良な人柄ゆえに皆から愛された。子供の遊びの中でさえ、テオドロスの鋭い知性が表れていた。彼は悪態や冒涜を控え、他の子供たちにもそれらを戒め、彼らの口論や喧嘩を仲裁していた。

これらの女性たちの家には、ステファンという一人の長老が住んでいた。彼は神を畏れ敬虔な人物であり、その徳高い生き方ゆえに、父のように愛され、尊敬されていた。　少年テオドールは、彼が聖なる四旬節の間、夕方まで断食し、わずかなパンの切れ端と水だけを口にしているのを見て、神への愛に燃え上がり、彼に倣って、同じく夕方まで断食するようになった。　昼食の時間になると、彼は学校から家へ帰りましたが、母は彼に家族と一緒に食事をするよう強要しました。しかし、彼はそれを拒み、無理強いされないように、いつもの時間に家に帰るのをやめ、夕方にだけ帰るよう心がけました。　そしてすぐに家を出て、ステファノと共に教会へ行き、いつもの聖歌に参加した。彼と共に、私たちの神キリストの聖なる御体と御血の聖餐を受け、遅くに帰宅し、パン一片と水だけで腹を満たした。　母や家族全員が、彼に煮物やその他の食事を摂るよう説得しようとしたが、彼はそれに応じようとしなかった。母は、絶え間ない断食のせいで彼の体がひどく痩せ細ってしまったため、せめてこの方法で何かを食べさせるために、昼食の時間に学校から少年を帰宅させてくれるよう教師に頼んだ。　しかし、学校から帰らされたフェオドールは家には帰らず、その場所からほど近い山に登った。その山頂には大殉教者ゲオルギオスを称える教会が建てられており、そこで聖なる大殉教者は、おそらく美しい青年の姿で彼に現れ、彼を教会の内部へと導いた。　そこで若いフェオドールは、書物の読解に熱心に取り組み、昼食の時間をすべてそこで過ごした。教会をまるで家を出るかのように出てくると、彼は再び学校へと向かった。夕方、母親から「なぜ昼食に来なかったのか」と尋ねられると、彼は「詩を覚えられなかったから、残されたのだ」と答えた。　するとまた、母は先生のもとへ行き、彼を家に帰してくれるよう頼んだ。先生は誓いを立てて、母が最初に頼んだ時点で、昼食の時間にはテオドールを他の生徒たちと一緒に帰すと約束した。　ある日、母は彼が家に帰らず、山を登って教会へ向かっているのを見かけ、使用人を遣わして無理やり連れ戻させ、数々の脅しをもって昼食に帰るように説得したが、彼は母の言葉を聞き入れず、いつものように節制を守り続けた。

彼が10歳の時、その村で恐ろしい疫病が流行し、多くの人がその病で亡くなった。聖なる少年テオドールもまた、この病に感染してしまった。彼はすでに死の淵に立っていたため、近親者たちは皆、絶望に陥った。そこで、半死半生の彼を最寄りの聖ヨハネ・バプティスト教会へ運び、祭壇の前に横たえた。　教会の最上部、十字架の下には救い主の御顔の像があり、そこから二滴の露が病める少年の上に落ち、彼を癒やした。少年は立ち上がり、神を賛美しながら元気になって家路についた。

夜、彼と家族全員が眠っているとき、聖大殉教者ゲオルギオスが彼の元を訪れ、こう言って彼を起こした。

「起きなさい、テオドール。夜明けが訪れ、朝の祈りの時が来ました。聖ゲオルギオスの教会へ行きましょう。」

テオドールは急いで、喜びながらすぐに起き上がった。当初、聖ゲオルギオスは彼らの家に住んでいたステファンの姿で彼に現れたが、やがては自身の姿で現れ、毎晩彼を起こして自分の教会へと導いた。　道中、悪魔たちは少年の心を怯えさせようと、狼や様々な獣の姿になって彼に襲いかかろうとした。しかし、聖殉教者はテオドールの前を歩き、手に槍を持って、それらの恐ろしい幻影を追い払い、彼に恐れるなと説得した。　これは毎晩繰り返され、母や彼女と共にいた女性たちは、眠りから覚めてもテオドールが寝床にいないのを見つけると、戸惑いを覚えた。彼らが、彼が夜中に教会へ通っていることを知ると、夕方には彼女たちのそばで寝ていたにもかかわらず、彼が起き上がる音を誰も聞かないことに驚いた。　母は、彼が獣に食い殺されるのではないかと心配していた。当時、ある狼が家畜だけでなく幼い子供たちまでもさらうという噂が広まっていたからである。そのため、母は脅しを交えて、日の出前に家を出て教会へ行くことを禁じた。その場所は人里離れた場所だったからだ。　脅しにもかかわらず、この聖なる少年は母親の言うことを全く聞き入れず、いつもの夜更けに、聖ゲオルギオスに祈りを捧げるよう促されて、誰にも気づかれることなく教会へと向かった。ある日の夜明け、目を覚ました母親は　テオドロスや他の女性たちと共に、少年の寝床に彼がいないことに気づき、激しく怒って教会へと駆けつけた。　そこで母は彼の髪をつかんで教会から引きずり出し、殴りながら家まで連れ帰り、どこにも行かせないようにし、夜にはテオドールが決して逃げ出せないよう、ベッドにしっかりと縛り付けた。　その夜、聖大殉教者ゲオルギオスが、腰に剣を帯びた姿で、その母や他の女性たちの夢の中に現れ、剣を振りかざして威嚇し、恐ろしい口調でこう言った。

「もしあなたがたが、この少年をさらに殴り、私のもとへ行くことを禁じ続けるなら、あなたがたの首を切り落とすぞ。」

恐怖と戦慄に襲われて眠りから覚めた女性たちは、互いに殉教者の恐ろしい姿と脅しについて語り合った。特に、全員が同じ幻視を見たことに驚き、すぐに聖なる少年を解き放ち、彼を優しく撫でながら、彼を殴ったことに対して怒らないでほしいと謙虚に懇願した。　彼女たちは、夜明け前に家を出る際、どうして獣を恐れないのかと彼に尋ねた。彼は、毎晩、輝く若者が彼を起こし、教会へと導き、道中で恐ろしい幽霊から守ってくれていると答えた。その時、女性たちは、幻視の中で見た聖大殉教者ゲオルギオスが彼に現れ、彼を守っているのだと悟った。　それ以来、女性たちはテオドロに何一つ禁じることはなく、彼を神の摂理に委ね、こう言った。

「主の御心が成りますように。」

この聖なる少年には、ヴラッタという名の妹がいた。彼女は、親族の説得により若くして再婚した母テオドロスの二番目の夫との間に生まれた娘であった。　この少女は兄のテオドールを深く愛しており、日中はよく彼の後をついて教会へ行き、彼と共に祈りを捧げ、彼の生き方に倣おうと努めていた。神の御霊は、テオドールと同様に彼女の中にも働いていた。　彼らの家からそう遠くないところに、聖殉教者エミリアンの教会があった。エミリアンは、ガラティア地方のアンキラという町で、不義のユリアヌス・アポステート[3165]　の治世下、長い拷問の末、十字架に磔にされた[3166]　。福者テオドールはこの殉教者の教会に入り、そこで一晩中祈りを捧げた。　真夜中、彼はうたた寝をしたところ、次のような幻を見ました。テオドールには、大いなる栄光のうちに玉座に座し、多くの戦士た

[3165] ユリアヌス・アポステートは、361年から363年まで在位した。

[3166] 聖殉教者エミリアヌスの殉教は362年に起こった。聖教会では7月18日に彼を記念している。

ちに囲まれた王の前に自分が立っている姿が浮かびました。王のそばには、ポルフィラをまとった輝かしい王妃がおり、彼は王の声を聞き、こう言われるのを耳にしました。

「テオドールよ、天の御国で完全な報いを受けるよう努めなさい。そうすれば、わたしも地上であなたを栄誉にふさわしい者とし、人々の前であなたを称えるであろう。」

この幻視は、彼が十二歳の時に見たものであった。それ以来、彼は神への強い願望と愛に燃え上がり、より一層精進するようになった。　自宅の一室に閉じこもり、洗礼の祭日から棕櫚の週までそこに留まり、断食、祈り、書物の読誦に励み、ただ神とだけ語り合った。大斎の最初の週と中間の週には、誰とも話さず、深い沈黙の中に身を置き、全精神を神への思索に没頭させた。　こうして四旬節の聖なる日々が終わり、キリストの復活祭が訪れた。憎むべき悪魔は、これほど徳の高い若者をこれ以上見過ごすことができず、彼を滅ぼす方法を考え出し、次のような策略を企てた。　ある日、テオドールと同じ学校に通う青年ゲロンティオスに変身し、彼のもとへやって来て、まるで散歩に行くかのように誘い出し、「ツィドラマ」と呼ばれる高い丘へ連れて行った。　そして自分は大きな岩の上に立ち、キリストが荒野で悪魔に誘惑されたのと同じように（マタイ4:1–11）、彼を誘惑し始め、こう言った。

「もし、善良なテオドールよ、自分の勇気を示したいのなら、ここから下に飛び降りなさい。」

すると、フェオドールはこう答えた。

「とても高いので、怖いです。」

悪魔は彼に言った：

「お前は学校では誰よりも勇敢だったくせに、今となってはこんなことさえ怖がるのか？　私は怖くない。今すぐ下に飛び降りてみせる。」

フェオドールは彼にこう答えた。

「落ちても怪我をしないように、やめておいたほうがいいよ。」

悪魔は「何の害もない」と説得し続けた。すると、フェオドールは彼に言った。

「もしお前が先にやって、無傷でいるのを見たら、俺も飛び降りるよ。」

悪魔は高い場所から恐ろしい深淵へと飛び降り、そこに立ち、フェオドールを呼び寄せた。フェオドールは、悪魔が無傷であるのを見て恐怖に襲われ、これまでこれほどの勇気など一度も持たなかったゲロンティウスが、どうして突然、これほど高い丘から無傷で飛び降りることができたのかと考えた。　その考えが頭に浮かんだ瞬間——悪魔は下から叫びながらフェオドールを呼び寄せていた——聖大殉教者ゲオルギオスが現れ、フェオドールの手を取って言った。

「ここから立ち去り、私について来なさい！　あなたの魂を狙う誘惑者の言葉に耳を貸してはならない。あれはゲロンティウスではなく、我らの敵なのだ。」

そして聖ゲオルギオスは彼を自分の教会へと連れて行った。テオドールはそこに長く留まっていたため、やがて母と祖母がやって来て、多くの親族や隣人が祝宴のために集まって彼を待っているから、家に戻るよう聖人に懇願した。*「世と友となることは、神に敵対することである……世と友となろうとする者は、神の敵となる」*（ヤコブ4:4）という聖書の言葉を知っていた彼は、彼女たちの言葉には耳を貸さず、代わりに自分の金の帯[3167]、高価な上着、そして首飾り[3168]を外して、こう言った。

「あなたがたは、私がこれらを大切に保管できないのではないかと心配しているのは分かっている。これらすべてを持って行きなさい。私だけは置いていってくれ。」

[3167] 金糸で刺繍された帯は、通常、王の側近として仕える戦士（護衛）や、軍の高官たちが身につけていた。聖テオドロスの両親は、彼が王宮で軍務に就くことを想定していたため、（伝記によれば）幼い頃から彼のためにそのような帯を用意していた。

[3168] グリヴナとは、首飾りとして身につけられる金の鎖のことです。

そして、宴には行かなかった。

テオドールは、十ポプリシュの荒野に住むグリケリウスという名の徳高い老人の話を耳にし、彼から教えを受け、祝福を得たいと願い、その元へ向かった。　グリケリイは洞察力に富んだ人物で、その若者の内に神の御霊の臨在を見抜き、喜びをもって彼を迎え入れ、微笑みながら尋ねた。

「わが子よ、修道生活は好きか？」

少年はこう答えました。

「大変好きです、父上。そして、その生活にふさわしい者となれることを切に願っております。」

ちょうどその頃、その国では雨が降らず、激しい干ばつに見舞われていた。

二人は小部屋を出て歩き出し、聖ヨハネ・バプティスタ教会の前に立ち止まった。そして、聖グリケリウスは、祝福された少年テオドロスに向き直って言った。

「わが子よ、ひざまずいて主に祈ろう。主が憐れみ深く、乾ききった大地を潤す雨を降らせてくださるよう。そうすれば、我々が義人の数に含まれているかどうかが分かるだろう。」

長老がそうしたのは、主を試そうとしたからではなく、テオドロスの祈りが神の前で特に受け入れられやすいと期待していたからである。二人はひざまずいて祈り始めると、たちまち空は雲に覆われ、祈りを終える頃には、非常に激しい雨が降り、乾いた大地を十分に潤した。　長老は主の恵みに喜びに満ち、フェオドールに優しくこう言った。

「これからは、わが子よ、あなたが神に何を願おうとも、神はそれを与えてくださるだろう。なぜなら、神はあなたと共にいて、あなたを強め、あなたが肉体の年齢においても、また神について霊的な生活においても、力から力へと成長していくようにしてくださるからだ。そして、そのための時が来たら、あなたは望むことを成し遂げなさい。」

テオドロスは長老から祝福を受け、自宅へと戻った。

生後十四年になったとき、彼は家を完全に離れ、聖ゲオルギオス教会のそばの山で暮らすことを決意し、母や家族全員に、自分の決意を妨げず、訪ねてきて気を散らさないよう懇願した。　彼らは、神が彼と共におられることを知っていたため、彼を止めることはできなかった。フェオドールは山へ行き、祭壇の下の岩に洞窟を掘り、そこに住みながら、絶えず教会へ祈りを捧げに足を運んだ。母は彼に純粋なパンや、さまざまな茹でた鳥や焼いた鳥を送ったが、彼はそれらすべてを教会への道の途中の岩の上に置いておき、鳥や獣に食べさせたり、通りかかる人々が持ち帰ったりできるようにした。彼自身は、教会に供えられるプロスフォラを糧とし、夕方には一つだけを食べていた。

洞窟から八ポプリシュの距離にある場所に、「アレア」[3169] と呼ばれる、悪魔たちが棲む場所があった。そこでは、不敬虔な女神ディアナ[3170] が多くの悪魔たちと共に住んでいると伝えられており、そのため、特に正午の　7月と8月の間は、多くの人がそれらの悪霊によって死に至るまで苦しめられていた。この話を聞いた聖テオドールは、その時期になると毎日その場所を訪れ、一日中そこで過ごし、夕方になって帰ってきたが、悪霊から何の災いも受けなかった。というのも、悪霊たちは彼を見るやいなや、神の力に追い払われて逃げ去ったからである。 1月の主の顕現の祝日には、彼は他の人々や聖職者たちと共に水の聖別式に出かけ、裸足で水に入り、すべての賛美歌が終わるまでその場にじっと立ち続けた。祝日が明けると、彼は自分の洞窟に閉じこもり、棕櫚の週に至るまで、決して外に出ることなく沈黙を守り続けた。　二人の娘たちよりも彼を深く愛していた祖母エルピディア

[3169] 古代ローマ人にとって、この名前は、乾燥した、しっかりと踏み固められた（時には舗装された）広場を指し、通常は穀物の乾燥や脱穀のために用いられた（ラテン語の「area」、arare「乾燥している」に由来）。ここでは、時折、公共の競技も行われた。

[3170] ディアナ（ギリシャ語：アルテミス）は、ギリシャ・ローマ神話における光と生命の女神である。自然の瑞々しく花咲く生命を授ける存在として崇められていた。また、ディアナは出産の女神であり、動物の守護神とも考えられていた。

は、彼のそのような生き方に慰めを見出し、野菜や春麦のパンを食事として持っていった。彼は毎週の土曜日と日曜日にそれらを口にしていた。皆は、これほど幼い少年に現れた神の恵みに驚き、神を賛美しながらこう言った。

「『*知恵ある者や賢い者からはこれを隠し*、この幼子には*明らかにされた*』（マタイ11:25）。

また、アナスタシオポリスのテオドシウス司教も、テオドロスに関するこれらすべての話を聞き、喜び、皆に彼を称えながらこう語った。

「この少年は、神からこのような生き方を学んでいるのだ。」

ある日、テオドールは寒さで体調を崩し、うたた寝をしていると、聖大殉教者ゲオルギオスが現れてこう言った。

「子よ、お前の病気の原因は何なのか？」

テオドールは目を向けると、遠くに立っている邪悪な霊を見出し、それを殉教者に指さして言った。

「あの卑劣で忌まわしい者が、私にこの病を招いたのです。」

聖ゲオルギオスは悪魔を捕らえ、激しく拷問して追い払うと、フェオドールの手を取り、こう言った。

「立ち上がって、元気になりなさい。これからは、あの邪悪で狡猾な者は、お前の前に現れることはないだろう。」

するとすぐにテオドールは立ち上がり、すっかり元気になったのを感じた。

人を愛する神は、御自身の聖なる使徒たちに、汚れた霊を追い出し、人々のあらゆる病を癒やす権能を与えられたが、同様の権能を御自身の愛する少年テオドールにも授けられた。そして彼は、神の栄光のために奇跡を行い始めた。

ある男が、悪霊に取りつかれた息子を教会に連れてきて、癒やしてほしいと懇願した。テオドールは、まだあまりにも若かったため、どうすればよいか分からず、断った。すると、その男は泣き出し、テオドールの手に鞭を渡してこう言った。

「神の僕よ、この鞭を取り、威嚇しながらわが子を打ち、次の言葉を唱えよ。『主の御名によって、この少年から立ち去れ、不浄な霊よ』」

福者テオドールはその男に教えられた通りにし、少年に向かって大声で叫び始めた。

「去る、去る、たった一時間だけ私を放っておいてくれ。」

テオドールが祭壇の方へ歩み去ると、悪魔は叫んだ。

「ああ、苦しみよ！　ナゾレヤの偉大なる力よ！　それが地上に降りて以来、人間たちを我々に敵対させるように仕向け、今やこの取るに足らない少年にも、我々に対する権威を与えたのだ。ああ、なんと悲しきことか！　天から与えられた恵みに耐えきれず、私はこのようなまだ幼い少年によって追い出されてしまうのだ。　この小さな者によって、我らの種族には大いなる災いが降りかかるだろう。彼は多くの者を人間の肉体から追い出すだろうから。そして、私にとって最も苛烈な災いは、彼に与えられた権威の始まりを、彼が私に対して試み始めていることだ。私は、この小さな子供に追い出されて、父である悪魔のもとへ戻ることさえできないのだ。　もしこれが私と、ある老人との間で起きたことだったなら、これほどの自責や恥を感じることはなかっただろう。この私たちにとって恐ろしい少年が生まれた日は、呪われるべき日だ！

悪魔が叫び声を上げている間、聖テオドロスはランプから聖油を取り、それをもって憑かれた少年の頭に塗って、彼の上に十字を切って、悪魔にこう命じた。

「さあ、出て行け、狡猾な霊よ。二度とそのような言葉を口にするな。」

悪魔は大きな声で叫び、少年をテオドールの足元に投げ捨てて出て行った。少年は神の恵みによって健康を取り戻した。この奇跡を、その国に住む者たちは皆知り、神を賛美した。

フェオドールは、荒野での生活において聖ヨハネ・バプティストと預言者エリヤに倣いたいと願い、人々の目から身を隠せる場所を模索した。　そこで彼は山の頂上へと登り、人里離れた場所を見つけた。そこには大きな岩があり、その下を掘り進めて洞窟を作り、その後、ある聖職者、すなわち徳の高い助祭に、決まった時間に少量のパンと水を持ってくるよう頼み、神の御名にかけて誰にも自分のことを話さないよう厳命した。　彼は聖職者から粗い羊毛の衣を受け取った。それまでは、母から与えられた柔らかい服ばかりを着ていたのだが、この洞窟に閉じこもった。聖職者は彼の願いに従い、入り口を土で埋め、パン一片と水の入った杯を渡せるように、小さな穴だけを残した。　こうして聖テオドールは、まるで葬られた死人のように、完全な隠遁生活の中で二年間を過ごしたが、そのことを知っていたのは聖職者以外には誰もいなかった。その村の人々は教会を訪れたが、そこにテオドールの姿が見当たらず、彼がどこへ隠れたのかと驚き、首をかしげていた。　ちょうどその頃、軍隊の連隊がそこを通過したことがあり、一部の人々は、兵士たちがテオドールを連れ去ったのだと考え、領主に彼の使用人を探しに連隊へ派遣するよう頼んだ。しかし、連隊で入念に捜索したものの見つからず、彼らはテオドールが野獣に食われたのだと考えた。　母と家族全員が、まるで死者を弔うかのように、慰めようのないほど彼を泣き悲しみ、その村の人々も皆、彼を哀れんだ。二年が過ぎた頃、ある聖職者が、フェオドールの母の慰めようのない泣き声に心を動かされたこと、また彼がそのような狭い場所で死んでしまうのではないかと恐れたことから、彼のことを告げた。　すると、皆は急いで喜びながら駆けつけ、洞窟の扉を開けて、彼をほぼ死にかけている状態でそこから引き出した。彼は、日の光を見るやいなや、何時間も声を出さなかった。　彼の頭はかさぶたと蛆に覆われており、家族たちは彼を見て涙を流し、聖ゲオルギオス教会へと連れて行った。母はテオドロスを自宅に連れて帰って手当てをしようとしたが、彼はどうしてもそれを拒み、相変わらず殉教者の教会に留まり続けた。そして数日後、彼の頭は完全に癒やされた。　このことを知ったアナスタシオポリスのテオドシオス司教は、神の僕テオドールに会うために聖職者たちを率いてこの村を訪れ、彼を見てその生涯に驚嘆した。　聖霊の導きにより、司教はまずテオドロスを下位の聖職に叙階し、その後、彼がわずか十七歳であったにもかかわらず、長老の位に叙階した[3171]　。司教は彼について次のように語った。

「神の恵みが宿り、時を全うしているこのような人は、定められた時期より早く叙階されるにふさわしい。なぜなら、聖使徒パウロは、聖ティモテオがまだごく若かった頃に、彼を長老の位に就かせたからである。」

そしてテオドロスに対しては、次のように語りかけた。

「あなたに聖職を授けた主が、あなたが主の御言葉の群れを牧会できるよう、司教の位も授けてくださいますように。その前に、修道者の位を受け入れ、信仰と善行を深め、私のために祈ってください。」

そう言ってテオドロスを祝福すると、司教は自分の居所へと戻り、至福のテオドロスは、神の御座の前にふさわしく立ち、無血の犠牲を捧げ始めた。エルサレムの聖地を訪れたいという願いを抱き、良き旅の仲間を見つけた彼は、そこへ向かい、エルサレムにたどり着いた。　そこで彼は、深い熱意と畏敬の念をもって、命を与える十字架、主の聖なる墓に礼拝を捧げ、その他の聖地を巡り、それらに礼拝を捧げ、祈りを捧げた。　彼は、そこで隠遁生活や荒野での修道生活を送っていた聖なる父たちを訪ね、彼らから祈りと祝福を授かった。その後、ヨルダン川近くの至聖なる聖母マリア教会に隣接するホゼヴィト修道院へと向かった。そこでは、テオドールについてすでに神によってアルヒマンドリトに告げられていた。　修道院では、神の御心により、彼は修道服を授けられ、祝福を受けて帰路についた。

[3171] 教会の規範によれば、長老には通常30歳に達した者が、司教には35歳に達した者が按手を受けて任命された。

帰還後、彼は聖大殉教者ゲオルギオスの教会で暮らし続け、神に聖なる奉仕を捧げ、彼の中に豊かに宿る主の恵みによって、栄光ある預言者モーセのように輝いていた。その恵みの力によって、彼は人々に降りかかるあらゆる病を癒やし、権威をもって不浄な霊を追い出した。　彼の祖母エルピディア、叔母ディスペニア、そして幼い妹ヴラッタは、彼と離れがたかったが、彼の神に喜ばれる生き方を見て、自分たちの力の及ぶ限り、断食や祈りにおいて彼に倣おうと努め、自らの労働の成果から貧しい人々に施しを与えた。

ほどなくして、叔母のディスペニアは信仰を堅く守りつつ主のもとへ召された。彼女の葬儀の後、彼は12歳の妹ヴラッタを連れて女子修道院へ行き、彼女をキリストに捧げてそこに残し、一方、至福のエルピディアについては、当面の間、自分の近くの家に住まわせた。　聖なる清らかな生涯を送ったキリストの乙女ヴラッタは、3年が経過すると、不死の花婿の御許へと旅立った。彼女の死を知った聖テオドロスは、喜びをもって神に感謝を捧げた。　一方、エルピディアは聖人の助言に従い、近くにある聖殉教者クリストフォロスの教会に付属する女子修道院へと身を寄せた。そこへ、尊者（聖人）は、癒やしを求めて彼のもとに連れてこられた悪霊に取り憑かれた少女や病める少女たちを彼女のもとへ送り、エルピディアが彼女たちに祈り方や断食の仕方を教え、善行を説くようにした。その祝福された母が修道院へ去った後、彼には仕える者が誰もいなくなったため、彼は自分に仕えるために使用人を雇った。神の摂理は、テオドロスを「人の漁師」（マタイ4:19）としようとしており、彼と共に暮らすために何人かの人々を送り始めた。まず、若きエピファニオスという人物が、神を愛する熱意に駆られて彼の元を訪れた。　至福のテオドロスは、神が自分を一人にしておかなかったことを喜んだ。エピファニウスを受け入れ、彼に修道者の装いを与え、非常に聖なる生活を送るように導いたため、彼は悪霊に対しても権威を持ち、人々から悪霊を追い出すことができた。　また、聖テオドールによって病を癒やされたある敬虔な女性が、フィルーメナという名の幼い息子を彼のもとに連れてきた。その子は聡明で、読み書きにも長けていた。　この三人の同年代のキリストの僕たちは、バビロンの三人の若者に似ており（参照：ダニエル書3章）、神への愛と熱意によって結ばれていました。そして彼らの間には、主ご自身がいて、*「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」*（マタイによる福音書18:20）と語っておられました。

数年後、主のもとへ召された至福のエピファニオスの後を継いで、徳に極めて熱心なヨハネがやって来た。　その頃、プロトマリアと呼ばれる村から人々が尊者のもとにやって来て、彼らのところへ来てくださるよう懇願した。というのも、その近くには多くの不浄な霊が棲む場所があり、人であろうと家畜であろうと、特に正午や日没の時間帯には、誰も無傷でそこを通り過ぎることができなかったからである。　神の僕テオドロスはその場所へ向かい、そこで小さな洞窟を掘るよう命じ、冬の間ずっとその中に閉じこもり、断食と祈りに専念して、復活祭までそこに留まった。　悪魔たちは、彼がそこに留まっていることを耐えられず、聖人の祈りという武器に追い立てられるかのように逃げ去った。そして、テオドールに追い出されたことを嘆き悲しむ悪魔たちの悲痛な叫び声が、多くの人々によって何度も聞こえた。　その村の人々は彼に対して非常に強い信仰を抱いており、訪れては、聖者が住んでいた洞窟の土を取り、それを食べ物や飲み物に混ぜて、病気の人や家畜に確かな治療薬として与え、その信仰によって癒やしを得ていた。

その地には、鍛冶を職業とする一人の信心深い男が住んでいた。聖人は彼に、屋根のない鉄の檻を作るよう命じた。その檻は、人がかろうじて立つことができるほどの狭さで、聖人はその中で自らの肉体に並外れた苦行を課そうと考えたのである。　このことを知った多くの人々が鍛冶屋に鉄の道具を持ち寄ったため、その作業に必要な鉄は十分に集まり、檻が完成すると、十字架と共にシケイアの聖人に運ばれた。聖人はそれを自分の洞窟の上に設置し、しばしば長期間にわたってその中に閉じこもり、動かない柱のように立ち続け、あらゆる悪天候に耐え抜いた。　その檻には屋根がなかったため、夏には灼熱の太陽が彼を焼きつけ、冬には厳しい寒さが聖人の体を凍らせ、身動きが取れなくした。嵐や風が彼に襲いかかり、雪や雨が彼を濡らしたが、彼は石のように無感覚で、ダイヤモン

ドのように堅固であり続けた。　全能の神は、人々の驚嘆と神聖なる御名の栄光を称えるために、人間の知恵や自然の理を超越した、これほどまでに偉大な忍耐を彼に授けられたのである。　テオドールは、あの鉄の檻を自発的な牢獄として選んだだけでなく、自らの全身を鉄の束縛に閉じ込めた。足には鍛造されたブーツを履き、同様の腕輪を身につけ、重い鉄の鎧を纏い、太い鎖で身を縛り、先端に十字架が刻まれた鉄の杖を携えていた。　彼は次のように生活を送った。キリストの降誕祭の後、洗礼祭までの間、重い鉄の鎖を身にまとって洞窟に入り、復活祭までそこから出ることなく過ごした。そして復活祭の後、檻に閉じこもった。　彼は、このような鉄の重荷と自発的な監禁によって自らの肉体を苦しめ、奴隷や捕虜のようにそれを拷問し、抑圧することで、内なる戦いが起こらないようにした。聖なる四旬節の間は、野菜と春麦のパン以外は一切口にせず、それも土曜日と日曜日に限られていた。　神は、荒野にいた野獣たちを彼に従わせた。例えば、恐ろしい熊が三年間、彼のところへやって来て、彼の手から食物を受け取り、狼もまた彼から餌をもらっていた。聖人のもとへやって来て去っていく獣たち　は、たとえ誰かが彼らに出くわしたとしても、人にも動物にも何の害も及ぼさなかった。　これは、御自身を賛美するこの聖人を称えようとして、神が奇跡的な御業を行われたからであった。

ある日、檻に閉じこもっていたテオドロスのところに、全身がハンセン病に冒された男が訪れ、聖人の祈りによって癒やされたいと願った。聖人は病人に衣服を脱ぐよう命じ、水を取り、こうして神に祈った。

「主イエス・キリスト、私たちの神よ。あなたは預言者エリシャを通して、シリア人ネエマンをハンセン病から清め[3172]、またご自身の慈しみによって私たちのもとへ降りて来られ、人となられ、御言葉によってハンセン病患者たちを癒やされました。　今、私たちとこの水に御目を留め、これを祝福して癒しの力を与え、ここに立つこの人をらい病から清め、御名の栄光を現してください。

祈りを捧げ、水に十字を切った後、彼はその人の頭と全身に水を注いだ。すると、病人は即座にらい病から解放され、神を賛美しながら健やかに立ち去った。また、コリリイという名のらい病を患ったある司祭が聖人のもとを訪れ、聖人の衣を身にまとったその瞬間、癒やしを受けた。　テオドロスのそのような生き様と奇跡を目の当たりにして、至福のエルピディアは心から喜びを感じた。彼女は多くの女性を修道生活へと導き、神に喜ばれる生き方を教え導いた。というのも、彼女自身も極めて徳高く、霊的な行いにおいて孫に倣っていたからである。　エルピディアは、自分に与えられた啓示によって自らの死が近づいていることを知り、最後の面会と別れの挨拶のために敬虔な孫のもとを訪れ、彼に自分の幻視について語り、こう言った。

「わが子よ、わが目の光よ！　私は幻視の中で、明るい衣をまとい、金色の髪をしており、イコンに描かれている聖大殉教者ゲオルギオスに似た、この上なく美しい若者を目にした。彼は私のところへやって来て、あなたのことを尋ね、あなたの生き様や詩篇の詠唱について私から聞きたがっていた。私は彼にすべてを詳しく話した。すると彼は私にこう言った：

「詩篇を歌うときは、こう言いなさい。『*山々よ、丘々よ、主を賛美せよ！*』（ダニエル書3:75）。

そしてこう言った。

– 妻よ、あなたは神から大きな恵みを受け、孫がこのような姿でいるのを見ることができた。私、彼の助手に対しても、あなたは多くの恩義を負っているが、何よりもまず、あなたの孫を御自身の聖なるしもべの一人として認めてくださった、共通の主であり、共創造者である神に感謝を捧げるべきである。さあ、安らぎなさい。あなたはこれまで十分に労苦してきたのだから。

[3172] ネエマン――シリアの王ベナダドの軍司令官。預言者エリシャによってハンセン病が癒やされたという物語については、列王記下6:1–19を参照のこと。

聖エルピディアは、その幻視について聖テオドロスに語り、彼に最後の口づけを贈ると、自分の独房へと戻った。そこで少し病に伏した後、主のもとへ召され、聖テオドロスによって栄誉をもって埋葬された。　彼女の埋葬の後、アンキラの町からある人物がやって来て、聖なる方に、彼の母マリアが亡くなったという知らせを伝え、彼女が相続人を残さずに亡くなったため、彼女の財産を取りに行くよう手配するよう勧めた。聖なる方は彼にこう答えた。

「お前は嘘をついている。私の母はまだ死んでいないからだ。」

しかし、使者は自分の目で彼女が死んでいるのを見たと主張したので、聖人は再びこう言った。

「それは嘘だ。母は私にとって死んではいない。魂として死ぬこともなく、今も生きており、永遠に生き続けるのだ。」

そして、残された財産には一切目を向けず、自ら一週間もの間断食を続け、彼女の魂のために神に熱心な祈りを捧げた。尊者が洞窟に滞在している間、イリオポリス・ガラティアの教会の会計係が彼のもとを訪れ、使用人を通じて涙ながらの願いを伝えた。

「神のしもべよ、私に降りかかったこの悲しみに対して、どうか憐れんでください。私は教会のための献金を集めるために使用人を遣わしましたが、彼は金を集めると逃げ出してしまいました。私はあちこち彼を追いかけて探しましたが、見つけることができませんでした。主にお祈りください。どうか彼を私に示してくださいますように。私の使用人が持ち去ったものの代金を教会に支払うには、私の全財産では足りませんから。」

聖人は彼にこう答えました：

「もしあなたが、その使用人を罰することなく解放し、彼が持ち去ったもの以外は何も取り上げないと約束するなら、主はあなたを慰め、彼をあなたの手に引き渡してくださるでしょう。もし約束しなければ、あなたは彼を見つけることはできません。」

執事は、彼を殴ったりこれ以上何も取り上げたりしないだけでなく、教会の財産を取り戻すためなら自分からも差し出すと約束し、こう言った。

「もし教会から奪われた財産を返すことができないなら、私と子供たちは裸同然の身になってしまうでしょう。」

すると、聖人は彼にこう答えた。

「安心して家に帰りなさい。心配はいらない。神を信頼しなさい。神はまもなくあなたを慰めてくださるだろう。」

安心した会計係は、聖人の言葉を完全に信頼して家路についた。教会の財産を盗んで逃走していた男は、ニケアと呼ばれる集落の近くで、まるで縛られたかのように立ち止まり、一歩も先へ進むことができなかった。彼は自分が速く走っているように感じていたが、実際には同じ場所に留まっていたのだ。　たまたまその道を通りかかった人々が犯人を発見し、捕らえて会計係のもとへ連れて行った。こうして、彼が持ち去ったものはすべて教会に返還され、会計係は悪事を働かないという約束を守り、彼を解放すると、再び聖人のもとを訪れて感謝の意を表した。

ある日、聖霊降臨祭の期間中、ある男が悪霊に取り憑かれた妻を連れてきた。聖テオドールが悪霊を追い出そうとしたとき、悪霊は叫んだ。

「ああ、悲しや！　なぜ私に怒りを向けるのか、鉄を砕く者よ[3173]　。私は罪を犯したのか。私は自らの意志で彼女に入ったのではないのだ。私は、マザミアに住む、カラッポスと呼ばれる魔術師テオドールから遣わされたのだ。」

[3173] この称号は、聖テオドロスが、その伝記に記されているように、様々な鉄の道具を用いて肉体を死に至らしめた功績により授けられたものである。

しかし、神の御使いは、イエス・キリストの名によって悪霊を戒め、その女性から追い出した。 そしてその同じ夏、6月のこと、マザミアの村人たちは、聖テオドロスが行う奇跡の話を聞きつけ、涙ながらに彼のもとへやって来て、雲のように彼らの畑や果樹園に群がってきたイナゴを追い払うために、自分たちのところへ来てくれるよう懇願した。　聖人は彼らと共に歩き、彼らの教会に入り、そこで一晩中祈りを捧げた。翌朝、彼は畑へと向かい、そこで共同の祈りを捧げた後、三匹のイナゴを手に取り、民のために神に祈りを捧げた。すると、祈りの最中に、イナゴは彼の手に握られたまま死んでしまった。聖人は神に感謝を捧げ、民にこう言った。

「子らよ、教会に戻りなさい。主はまもなく、私たちに御慈悲を示してくださるからです。」

そして教会に戻ると、聖人は神聖な典礼を執り行い、翌朝、民はすべてのイナゴが死滅しているのを目にした。　その地に住んでいたテオドロス・カラッポスは、聖テオドロスに対して嫉妬に燃えた。というのも、以前にも、あの魔術師が女性に送り込んだ悪霊を聖テオドロスが追い出したことで、彼を恨んでいたからである。　聖人に怒りを抱き、彼の中に宿る神の奇跡的な力を妬んだ魔術師は、手下の悪魔たちを呼び寄せ、聖テオドロス・シケオトのもとへ行き、彼を拷問して死に至らしめるよう命じた。　しかし、彼らは聖人に近づくことができなかった。なぜなら、聖人は常に口に祈りを捧げており、悪霊たちは彼が眠りにつくのを待たなければならなかったからである。しかし、聖人が眠っている間、神の恵みがまるで彼から発せられる炎のように、悪霊たちを焼き払い、追い払った。　悪魔たちは再び戻ってきて聖人に襲いかかったが、またもや焼かれ、追い払われ、恥をさらして送り主のもとへ戻った。すると送り主は苛立ちながら彼らを叱りつけ、こう言った。

「まことに、お前たちの力は取るに足らない。眠っている者にさえ近づけなかったのなら、目を覚ましている彼に何ができるというのか？」

すると、悪霊たちはこう言い返した。

「私たちが彼に近づくとすぐに、彼の口から炎が噴き出し、私たちを焼き尽くす。それは耐え難いのだ。」

魔術師は、さらに激しい憎悪と嫉妬に駆られ、魚に致命的な毒を盛って、その魚を聖人に贈り物として送った。　キリストの恵みに守られた神の聖人は、いつもの食事の時間にその魚を口にしたが、何事もなく無事であった。魔術師テオドロス・カラッポスはこれに大いに驚き、　神の力と悪魔の無力さを悟り、心を打たれて、聖者に駆け寄り、その聖なる足元にひれ伏し、涙ながらに自分の罪を告白した。そして、魔術の書を焼き捨て、悪魔の行いを捨て去り、聖なる洗礼を受けた。

修道院に戻ると、尊者は重い病に倒れ、死を待っていた。というのも、彼は自分のもとを訪れた聖なる天使たちを見て、彼らがすでに自分の魂を連れ去ろうとしているのだと思ったからである。彼は、まだ死を迎える準備ができていないことを嘆き、泣きじゃくった。　彼の頭上には、無償で治療を行う聖なる医師コスマスとダミアンのイコンが掲げられていた。二人は　幻視の中で彼に現れ、医師としての慣例に従って彼の手の脈を診ると、まるで彼の命に絶望しているかのように互いに語り合った。というのも、彼の力はすでに衰えていたからである。彼らは彼にこう言った。

「兄弟よ、何のために泣いて嘆いているのか？」

病人はこう答えた。

「神に悔い改めなかったこと、父たちよ。そして、まだ真の道に完全に導かれておらず、多くの教えを必要としているこの小さな群れを、私が残して去らなければならないことについてです。」

聖人たちは彼に言った。

「もし望まれるなら、私たちが神にあなたのために祈り、神があなたの命を延ばしてくださるよう願おうか？」

病人は答えた。

「もしあなたがたがそうして、私に悔い改めるための時間を求めてくださるなら、あなたがたは私に多くの恵みをもたらした者となり、私の悔い改めに対する報いを受けることになるでしょう。」

聖人たちは天使たちに呼びかけ、自分たちが王であり神である御方の元へ行き、テオドールのために願いを申し上げるまで、少しの間待ってくれるよう頼んだ。　天使たちはそれを約束し、聖殉教者コスマスとダミアンは、かつてエゼキヤに十五年の寿命を授けた全能の王、私たちの神キリストのもとへ向かった[3174]、そして、テオドールに寿命を授けてくださるよう懇願した後、間もなく戻って来た。その中には、天使たちに似た、しかしそれ以上に輝かしい栄光を放つ若者がいた。その若者は天使たちにこう言った。

「テオドロスを生かしておいてください。彼のために、すべての王であり栄光の主である御方に懇願したところ、御方は彼にこの世に留まるよう命じられました。」

すると直ちに、聖なる天使たちはそのまばゆいばかりの若者を連れて天へと去っていった。一方、聖コスマとダミアンはテオドロスにこう言った。

「立ち上がれ、兄弟よ。そして、自分自身とあなたの群れに心を配りなさい。慈愛に満ちた主は、あなたに関する私たちの祈りを受け入れ、あなたに命をお与えになった。そうして、朽ちることのない、永遠の命に留まる糧を作り出し、多くの魂の救いを成し遂げるためである。」

そう告げると、聖なる医師たちは姿を消した。至福のテオドロスは意識を取り戻し、完全に健康になったのを感じると、すぐに立ち上がり、神を賛美し、熱心に詩篇の詠唱と断食に専念した。

神から授かった恵みによって、彼は奇跡を行い、様々な病を癒やし、言葉によって悪霊を追い出した。　彼の奇跡の噂は至る所に広まり、多くの人々が驚き、感動し、家を離れて彼のもとを訪れ、修道者の修行に励んだ。また、彼から癒やしを受けた人々の多くは、彼から離れず、そこに留まって修道院の諸務に奉仕した。なぜなら、多くの兄弟たちが集まるにつれて、大きな修道院が形成され、　テオドロスは自身の修道院でアルヒマンドリトを務めていたが、聖大殉教者ゲオルギオスの教会はあまりにも狭く、通常の聖歌の礼拝に訪れるすべての人々を収容できなかったため、尊者テオドロスは以前の教会の近く、聖大天使ミカエルの名に因んで、より広々とした別の教会を建設することに尽力し、　そこに修道士たちを配置した後、弟子であるフィルーメンをアナスタシオポリスの司教のもとへ送り、司祭の叙階を受けさせ、彼をこの修道院の院長に任命した。自身は、沈黙の生活に専心した。

神聖な典礼を行うための銀製の器が必要とされていた。それまでは、石造りの大理石の器を用いて秘跡を行っていたからである。　聖人は、礼拝用の銀の器を購入するため、自分の助祭をコンスタンティノープルへ派遣した。清らかで、見事に作られた器が購入され、彼の元へ持ち帰られたとき、聖人はそれを拒絶し、その器で聖務を行うことを望まなかった。なぜなら、彼はその器が不適格で、黒ずんでおり、悪臭を放っていることを見抜いていたからである。　助祭はその精巧な作りと純銀の美しさを称賛したが、聖人はこう言った。

「子よ、私もその器が美しく作られ、良質な銀でできていることは分かっている。しかし、それは目に見えない汚れによって穢されているのだ。もし私を信じないのなら、主があなたの心の目を開いてくださるよう祈ろう。そうすれば、あなたもその真実を見ることができるだろう。」

彼らがひざまずいて祈りを捧げるとすぐに、助祭だけでなく、そこにいたすべての兄弟たちも、まるでストーブから取り出したばかりの石炭のように真っ黒な器を目にし、驚いた。　ところが、助祭がそれを手に取ると、その器はたちまち元の通り清らかで輝きを取り戻した。助祭はそれを手に取り、コンスタンティノープルへ持ち帰り、かつて購入していた金細工師の　のもとへ行き、なぜ聖

[3174] ヒゼキヤ――紀元前8世紀に生きたユダ王。預言者イザヤによる彼の奇跡的な癒やしについては、『列王記下』に記されている。

テオドールがその器を受け入れなかったのかを彼に語った。　金細工師は、その銀の由来について思い返し、それがある娼婦の所有物であり、彼女の不義な財産の一部であったことを思い出した。彼は聖なる父の洞察力に驚き、許しを請い、その器を返却して、代わりに最も清らかな別の器と交換し、自分への聖なる祈りを求めた。

助祭は戻り、その器を修道院へ持ち帰り、最初の器がどのような銀で作られていたかを父と兄弟たちに語った。すると皆、神を賛美し、聖人の洞察力に驚嘆した。

ある日、グラツィアーノポリからほど近いヴージイの村から、ある人々が次のような用事で聖テオドロスのもとを訪れた。　彼らは自分たちの村で川に石橋を架けていたのだが、隣の丘から石を掘り出し、板を削っている最中、穴から無数の悪魔が現れ、人々や動物に襲いかかって苦しめているのを目撃した。また、ある悪魔たちは強盗のように道に待ち伏せし、通りかかる人々を傷つけていた。　訪れた人々は、聖人に彼らの集落に来て、悪魔の襲撃から救ってほしいと懇願し、テオドロスは神を信頼して彼らと共に旅立った。彼が彼らの集落に近づいた途端、人々に憑いていた悪魔たちは、彼の接近を察知して、叫び声を上げながら彼に向かって出てきた。

「ああ、悲しみよ、災いよ！　なぜガラティアを離れて、ここへやって来るのか、鉄を砕く者よ？　お前が何のために来たかは知っているが、ガラティアの精霊たちがそうしたように、お前の言うことには従わない。我々は彼らよりもはるかに邪悪で、強いのだ！」

聖人は彼らを制し、黙るよう命じた。翌朝、民衆を集め、村全体を聖なる行列で巡り、丘の頂上に登ると、長い間、神に向かって熱烈な祈りを捧げた。　すると直ちに、そこから出て行った悪霊たちが、神の力によって再びハエやネズミ、ウサギの姿となって現れた。聖人はそれらすべてを穴の中に追い出し、十字の印を刻み、土と石で埋め尽くすよう命じた。こうして、彼はその村を悪霊の災いから解放したのである。　同様の方法で、彼は他の多くの村や国、家々からも悪霊を追い払い、また多くの人々から、彼の名前を聞くだけで震え上がる悪霊たちを追い出した。

この聖人の弟子たちの多くは、その徳の高さで知られ、偉大な人物であった。　例えば、至福のアルシンという隠遁者は、狭い小部屋に暮らし、沈黙を守り、三日に一度だけ食事をとっていた。その食事は、わずかなパンと生の野菜、あるいは茹でた野菜、そして適量の水に過ぎなかった。また、聖なる四旬節の間は、土曜日と日曜日にのみ食事をとったが、それも乾食のみであった。　同様の生活を送っていたのは、アルシンの近くでそれぞれの隠遁生活を送っていたエヴァグリオスとアンドレイという二人の修道士でもあった。彼らの清らかな生き様に、聖テオドロスは大いに喜び、神に感謝した。　三人は皆、聖地を巡礼するためにエルサレムへ行くことに同意し、父に祝福を得て旅立たせてくれるよう願い出た。父はそれを許可し、彼らはエルサレムに到着して、周辺のすべての修道院や隠遁者の住居を訪れた。　エヴァグリオスはそこに留まりたいと願い、聖サヴァの修道院を訪れると、聖なる生活を送り、その行いそのもので、自分がテオドールの弟子であることを示した。一方、アルシンとアンドレイはガラティアにいる師のもとへ戻り、沈黙を守るために別々の場所で暮らすことを許してほしいと懇願した。　アンドレイは父の祝福を得て、修道院から八ポプリシュ離れたヴリアナの丘に定住した。アルシンはポタミアの山岳地帯へと身を隠し、人里から遠く離れた場所を選んだ。そこは悪魔の住処であると噂されていた場所であった。そこで彼は次のように祈った。

「神よ、私の父テオドロスの祈りによって、罪深い私をお守りください。悪魔の策略から私を守り、この地であなたに喜ばれる生き方ができるよう助けてください。」

まず彼は木造の小部屋を建て、そこで冬を越した。その後、高い柱を立て、そこで40年間、大いなる忍耐をもって過ごした後、主のもとへ帰った。また、エルピディウスは聖テオドロスの指導により、徳において大いに成長した。　父と共に数年間過ごした後、彼は父の祝福を受けて東へと旅立ち、シナイ山の近くに定住し、長い間沈黙の中で暮らし、義にかなった最期を遂げた。彼の死後、その場所はシナイの聖なる父たちによって「エルピディオスの沈黙」と名付けられた。

また、私たちの父テオドロスの弟子であるレオティオスも、隠遁生活において驚くべき人物であった。彼はペルマティアの近くで沈黙を守り、預言の賜物を受け、未来を予言した。　こうして彼は、ペルシャ人の侵攻と、彼らによる自身の殺害を予言したが、それは現実のものとなった。というのも、彼が沈黙の修道室から出ることを拒んだため、その場所でペルシャ人によって殺害されたからである。　その後、ドラコニオス山で断食を行っていたテオドールや、プシリア川沿いにいたステファノス、そして尊者テオドールの他の多くの弟子たちは、善行によって輝かしい名声を博した。ある者は彼のそばで暮らし、またある者は様々な荒野の地に定住した。

聖テオドールは、エルサレムの聖地をもう一度訪れたいという願いを抱き、二人の弟子を連れて旅立った。　当時、エルサレムのあるパレスチナでは、雨が降らず干ばつが続いており、人々も動物も水不足に苦しんでいた。 に水が溜まるすべての堀や貯水池は干上がっていた。 人々は神に雨を乞うて熱心に祈ったが、雨は降らなかった。それは、主がその恵みを御自身の聖人テオドロスのために取っておかれ、彼をパレスチナに導かれたからであった。そこには、ガラティア地方から来た者たちが数人おり、彼らは聖テオドロスを知っており、その奇跡の噂も聞いていた。彼らは人々にこう言った。

「私たちの国には、かつての預言者エリヤのように、ただ一つの祈りだけで全宇宙を雨で満たすことのできる聖なる父が一人います。」

聖者がエルサレムに到着し、命を与える十字架と、命の源であるキリストの聖棺に礼拝を捧げたとき、ガラティアからの訪問者たちは彼を認識し、まもなく聖都や周辺の修道院、ラヴラに彼の噂が広まった。　大勢の修道士が集まり、すべての聖職者たちが聖人を囲み、彼の到来を喜び、総主教の名において、乾ききった大地に雨を降らせてくださるよう主に願い求めてほしいと懇願した。聖人は、自らを罪深く、その資格に値しない者と自覚して断ろうとしたが、彼らは彼に懇願し、こう言った。

「父よ、あなたがご自身の祈りを他の父たちの祈りと合わせれば、神は私たちに憐れみをお示しになり、大地に雨を降らせてくださることを願っております。」

すると、聖人は彼らにこう言いました。

「もしあなたがたがそう信じるのなら、その信仰どおりになれ。」

礼拝が終わり、人々が十字架の行列で歩いているとき、聖人は彼らに向かってこう言った。

「子供たちよ、服を着替えておきなさい。あなたがたはびしょ濡れになるだろう。あなたがたの信仰ゆえに、主はまもなく御慈悲を示してくださるからだ。」

彼らが町の外に出たとき、ある場所で聖人は立ち止まるよう命じ、天に向かって両手を広げ、熱心に祈り始めた。するとすぐに西の方から小さな雲が現れ、次第に大きくなり、あっという間に空全体を覆った。聖人は祈りを終えると、雨を避けるために、祈りを捧げていた人々に急いで戻るよう命じた。　突然、激しい雨が降り注ぎ、皆がずぶ濡れになったため、人々は急いで町中の教会へと駆け込んだ。　雨は、大地を潤し、すべての堀や貯水池、窪みを満たすまで止むことはなかった。聖テオドールは、この奇跡によって人々に称賛され、崇められることを恐れ、二人の弟子を連れて町から姿を消し、自身のガラティアのシケオス修道院へと向かった。　しかし、故郷の周辺の多くの地域でも、人々の願いに応じて、彼は同様の奇跡を起こした。雨を降らせ、空気を清め、畑や果樹園の収穫を増やし、氾濫や洪水を止め、未来を予言した。

ペルシア戦争の後、ガラティアを経由してコンスタンティノープルへ帰還していたマウリキウス総督が、祈りと祝福を求めてこの聖人のもとを訪れた際、彼はマウリキウスが王になると予言した。 そしてその予言が実現すると、マウリキウス[3175] は、この預言者であり聖なる父である人物に手紙を書き、自身と自分の王国への祈りを願い、さらにこう付け加えた。「私に望むことは何でも求めて

[3175] マウリキウスは582年から602年まで在位した。

よい」。　聖テオドロスは、至福のフィロメノを王のもとへ遣わし、毎日修道院を訪れる多くの貧しい人々のために、王が修道院に小麦を寄進するよう求める手紙を送った。　そこで王は、ガラティアの役人たちに、毎年テオドール修道院に小麦を600チェヴェリクずつ支給するよう命じる書簡を送り、さらに教会に貴重な聖具を寄進した。

日ごとに増え続ける信徒たちや、祈りと癒やしを求めて修道院に集まる大勢の人々を見て、彼は、非常に狭かった聖大殉教者ゲオルギオスの教会を取り壊し、奇跡的な方法で大きな教会を建てた。彼は、動かないで立っていた巨大な岩を動かして、その場所から別の場所へ移動するよう命じたのである。　そして、近隣のエヴァルジアから教会の建設用に未溶解の石灰を運んでいたとき、突然雨雲が押し寄せ、作業員たちは石灰が発火して荷車や家畜に火が燃え移るのではないかと恐れた。その時、聖テオドールは祈りによってその雲を二つに分け、　道の両側には激しい雨が降り注いだが、石灰や荷車には、すべてが教会の建設現場に運ばれ、荷車から降ろされるまで、一滴の雨も落ちなかった。

教会の建設が終わりに近づいた頃、テオドシウスの後任であったアナスタシオポリスのティモテイ司教が世を去り、市民たちはアンキラ都主教区のパウロ大司教のもとへ赴き、シケオス修道院のアルヒマンドリトである聖テオドールを彼らの町の司教に任命するよう懇願した。　大司教はこれを喜んで受け入れ、至福のテオドロスを敬意をもって自分の元へ連れてくるよう使者を送った。当時、その聖人は洞窟に籠もり、沈黙を守りながら、いつもの祈りを熱心に捧げていた。　聖職者たちやアナスタシオポリスの市民たちが、彼に彼らの司教となるよう懇願しにやって来たとき、彼は聞く耳さえ持たなかったが、彼らは力ずくで彼の修道室を開け、尊者を引き出し、聖職者の馬車に乗せ、喜びと歓喜のうちにアンキラへと連れて行った。　一方、彼の兄弟たちは、自分たちの父が彼らのもとを離れることに涙を流し、嗚咽していたが、彼は彼らにこう伝えさせた。

「悲しむな、兄弟たちよ。しかし、私があなた方を置き去りにすることはないと信じてほしい。この地上に、私とあなた方を引き離すことのできるものは何一つないのだ。」

こうして、尊者は、そのような聖職を受けることを望んでいなかったにもかかわらず、アンキラのパウロ大主教によってアナスタシオポリスの司教に任命された。　彼がその聖職を受け入れたとき、ある著名な人物に次のような幻視が与えられた。まばゆいばかりの、極めて偉大な星が天から教会へと降りてきて、その光線で街や国だけでなく、周辺のすべての国や都市をも照らし出したのである。　まことに、この聖人は司教の座において、燭台の上の蝋燭のように、世の光となり、数え切れないほどの奇跡と、その驚くべき生涯の姿によって、全宇宙を照らし、驚かせた。　彼はしばしば自身のシケオス修道院を訪れ、修道者たちを慰め、また、自身の熱意によって建立された聖大殉教者ゲオルギオスの教会を聖別した。彼が司教としてどのような奇跡を、どれほど多く成し遂げたかを詳細に述べることは不可能である。彼は、自分に託された信徒たちを熱心に世話し、多大な労苦を背負っていた。　しかし、尊者もまた、沈黙の生活が中断されたことを深く嘆き、常に司教職を辞して再び修道院に戻り、沈黙の生活に戻りたいという切なる願いを心に抱いていた。

数年後、至福のテオドロスは再びエルサレムの聖地を参拝したいという願いを抱き、自身の修道院から二人の兄弟、すなわち大助祭ヨハネとマルティンを連れ、彼らと共に旅立った。聖地を巡る際、彼は司教としての身分を明かすことなく、ただの一人の長老として歩いた。

彼は、自分の修道院には戻らず、現地のどこかの修道院で暮らすことを考えた。というのも、司教の地位のために修道者の修行を断念せざるを得なかったことを痛感していたからである。　こうして彼は聖サヴァの修道院へ向かい、独房を求め、キリストの降誕祭から復活祭までの間、そこで沈黙を守って暮らした。復活祭の後、彼と共にやって来た二人の兄弟、ヨハネとマルティンは、絶えず彼に帰郷するよう説得したが、彼は彼らの言うことを聞き入れようとしなかった。　ある夜、眠りの中で聖大殉教者ゲオルギオスが彼に現れ、杖を手に渡してこう言った。

「さあ、ここから急いで出て、祖国へ戻ろう。祖国を離れて、ここでぐずぐずしている必要はない。」

テオドールは言った。

「私は自分のところへ帰ることはできません。なぜなら、司教の座を望んでいないからです。」

殉教者は彼に答えた。

「すぐにその職から解放してやる。ただ、帰れ。多くの者が君を案じているのだから。」

そのような説得の後、聖人は二人の弟子を連れて、自分の国へと向かった。　ガラティアに近づくと、彼は道中で偶然見つけたドルイニ修道院に立ち寄り、同行者たちに自分の正体を明かさないよう命じた。この修道院の修道士たちは、聖テオドールが並外れた人物であると以前から聞いており、彼に会いたいと願っていた。　修道士たちに正体を見破られることなく、聖人は修道院の宿舎に静かに滞在し、客間係のアニキタに迎え入れられた。そして、テオドールの弟子たちがその長老について「彼は誰か」と尋ねられた際、彼らは「ある遠い地方から旅をしてきた者だ」と答えた。　夕飯の席で、彼は空腹のあまり格別な喜びをもって食事をしていた弟子たちを見やり、こう言った。

「まことに、子らよ、我らはガラテヤ人のように食べている。」

そして一時間後、彼は同じ言葉を繰り返した。これを聞いたアニキタは、心の中で「この老人はガラティア出身ではないだろうか」と考えた。夕方、いつものように老人が夜を過ごすために地面に横たわると、アニキタは二人の弟子を別々に呼び出し、この老人が誰なのかを話すよう説得した。すると彼らは、その老人がシケオスの奇跡行者、アナスタシオポリスの司教テオドールであることを明かした。アニキタは直ちにそのことをイグメン・ステファノスと修道士たちに知らせに駆けつけた。彼らが切望していた人物に会えたことに、彼らは大きな喜びに包まれた。　朝の賛美の時間が訪れ、長老が立ち上がって教会へ向かうと、入り口で修道院長と修道士たちが彼を出迎え、その足元にひれ伏して、奇跡行者であり司教である彼に敬意を表し、祝福を求めた。　彼らは、聖人の天使のような御顔を仰ぎ見、甘美な会話に心満たされるため、数日間彼らのところに留まってくださるよう、と懇願し、聖人はかなり長い間、彼らの元にとどまった。　やがて、彼に関する噂は国中に広まり、多くの民衆が修道院を訪れ、病人を聖人のもとに連れてきた。そして聖人は、キリストの恵みによって彼ら全員を癒した。

その後、聖人は自らの信徒たちの元へ戻り、いつもの牧会の務めに従事しながらも、どうすれば司教職を辞することができるかについて考え続けることをやめなかった。　さらに、コンスタンティノープルから帰途についた隠遁者の至福のアンティオコスも、たまたま彼のもとを訪れた際、同じことを勧めた。というのも、このアンティオコスは、東方の国からマウリキウス王のもとへ派遣され、シノフリンの町を敵から守るよう請願していたからである。　アンティオキオスは高齢の男性で、生来百歳であり、六十年間はワインもオリーブ油も口にせず、三十年間はパンも食べず、塩と酢を添えた苦い草だけを糧とし、水だけを飲んでいた。　ガラティアとアナスタシオポリスを経由してやって来たこの祝福された父を、聖人は名誉と喜びをもって迎え入れ、彼を安らげ、彼との霊的な対話によって大いに慰めを受けた。祝福されたアンティオコスは、弟子たちにテオドロスについてこう語った。

「これまで、これほど聖なる人物を見たことがない。主が私に彼の生涯を明らかにしてくださったのだ。」

また、テオドロスも兄弟たちにアンティオキオスについてこう語った。

「東方の荒野全体を見渡しても、これほどの神のしもべを見たことも、聞いたこともない。」

聖テオドールは、主教職を辞任する意向を告げ、尊者アンティオコスに有益な助言を求めた。アンティオコスはその決意を称え、早急にその願いを叶えるよう勧めた。

アンティオコスが去った後、聖テオドールは教会の財産が横領されていることに心を痛めていた。さらに、彼は教区内に何人かの隠れた敵を抱えており、彼らは目に見えない敵によって嫉妬と憎悪に駆り立てられていた。　彼らはある日、神の御許しにより、彼に毒を盛った。聖テオドールは三日間、声も発せず、まるで死人のように動かず横たわっていたため、町にはすでに聖人の死の噂が広まっていた。　三日後、私たちの至聖なる御母マリアが彼に現れ、密かに与えられた毒による病気の原因を告げ、毒を盛った憎むべき者たちを指摘した。そして、御手に持っていた布から三粒の穀物を取り出し、彼に与えてこう言った。

「これを食べなさい。そうすれば、これからはいかなる悪にも苦しむことはなくなるでしょう。」

これらの穀物を食べると、尊者は意識を取り戻し、全身が健康になったのを感じ、立ち上がって、キリスト神とその清き御母に感謝を捧げた。彼は悪意に満ちた敵たちを非難することも、誰にもそのことを話すこともなかったが、神に彼らのために祈りを捧げ、このことを彼らの罪とみなさないよう願った。　聖大殉教者ゲオルギオスには、パレスチナからガラティアへ戻ることを望まなかった際、幻視の中で約束された通り、司教職から解放してくれるよう、常に祈りを捧げていた。

アナスタシオポリスでは、教会の所有地から、司教の食事代として年間365枚の金貨が納められる税が定められていたことは、言及せざるを得ない。 この税収のうち、聖テオドールは1年分の食事代としてわずか40金貨のみを費やし、残りは聖なる教会に捧げ、他の源から寄せられた施しは貧しい人々に配った。　ついに司教の職を完全に辞める決意を固めた聖テオドールは、まず何よりも、その意図が罪とみなされないよう、何日にもわたって熱心に長い祈りを神に捧げた。そして、神から啓示によって願いが叶えられたことを確認すると、彼はすべての聖職者と市民を集め、こう語った。

「兄弟たちよ、あなたがたが私を修道院から無理やり引き離し、司教職という重荷を背負わせたことは、あなたがたもご存じでしょう。当時、私は『あなたがたを導くに値しない』と申し上げましたが、あなたがたは私の言葉に耳を貸さず、自らの意思でそうしました。そして今や、私があなたがたを悲しませ、また私自身もあなたがたによって悲しめられてから、すでに11年が経ちました。お願いです、あなた方にふさわしい牧者を探してください。私はもはやあなた方の司教であり続けることはできません。今や、ただの一修道士として、生涯を神に仕えることを誓った私の修道院へと戻ります。

こう言い終えると、彼は自分の修道院から大助祭ヨハネを連れ出し、アンキラの大主教パウロのもとへ向かい、アナスタシオポリに別の司教を任命するよう懇願した。　二人の間では激しい論争が繰り広げられた。大主教は、この聖職にふさわしい人物を他に探すことは不可能だと主張し、いかなる理由があっても聖テオドロスを手放そうとはしなかった。一方、テオドロスは強く辞退し、この重責は自分の力量をはるかに超えていると述べた。　この件を、コンスタンティノープルの至聖なるキリアコス総主教[3176] および敬虔なマウリキオス皇帝に知らせる必要があった。彼らは神の導きにより、アンキル大主教に書簡を送り、沈黙を志す神の御使いを妨げず、彼の願い通り解放するよう求めた。

こうして、司教職という重荷から解放された聖テオドロスは、多くの心配事から自由になったことを喜び、自らの修道院へと戻り、独房で沈黙を守りながら、断食の修行に励んで生活を送った。彼は頻繁に礼拝を執り行い、血を流さない犠牲を捧げ、聖体礼儀の最中には、上から降りてきて聖なる供物を覆う、明るい紫色のポルフィラという姿をした聖霊の恵みを、自らの目で目撃する栄誉に浴した。　彼は、熱心な懇願に応じて、そのことを同僚の一人である、徳の高い修道士ユリアヌスに語った。　彼がこれを見たとき、言葉に尽くせない霊的な喜びに満たされ、その美しい顔は不思議な光

[3176] キリアコスは595年から606年まで総主教を務めた。

に照らされて輝き、その様子が変わったため、共に奉仕していた司祭や助祭たちは、尊者様の顔に神聖な輝きを見出し、驚嘆した。

ある日、次のような出来事があった。7月16日、聖殉教者アンティオコスの記念日に、教会で神の聖者テオドロスが聖体礼儀を執り行っていた際、聖なる供物の奉献の時が訪れると、彼は慣例に従い、聖なる小羊を載せたディスコスを高く掲げ、次のように宣言した。 「聖なる者よ、聖なる者へ」。すると、神聖な子羊は、まるで目に見えない手に支えられているかのように、ディスコスの上で自ら空中に浮かび上がり、その後、再びディスコスの元の場所へと降りてきた。 この奇跡を目撃した、その時聖餐式に参列していた者たちは皆、大きな畏怖と驚嘆に満たされ、聖テオドロスは涙を流しながら、言葉に尽くせぬ喜びをもって、御自身の至聖なる秘跡の中に真に宿っておられるキリスト・神を賛美した。

敬虔なマウリキウス皇帝と至聖なるキリアコス総主教は、その名を多く耳にしていた聖テオドールに会いたいと願い、彼の祈りと祝福を受けるために、コンスタンティノープルへ来るよう手紙を送った。 尊者テオドロスは彼らの願いを拒むことができず、コンスタンティノープルへと向かった。そこでは、すべての人々から大いなる敬意をもって迎えられた。彼はコンスタンティノープルに短期間しか滞在しなかったが、神の力によって多くの奇跡を起こした。盲目の少年の視力を回復させ、寝台に横たわっていた麻痺の女性を立ち上がらせ、 多くの悪霊に取りつかれた者を悪魔の苦しみの手から解放し、祈りによって出血の病を癒やし、王子のハンセン病を治し、不妊の夫婦に祝福を与えて子宝を授け、その他多くの輝かしい業を成し遂げ、すべての人を主の恵みをもって慰めた。その後、彼は自身の修道院へと戻った。しかしその後、間もなくして、彼はフォキス皇帝の治世中[3177]、キリアコスの後を継いで教皇の座についた至聖なるトマス総主教[3178] の招きにより、二度目にコンスタンティノープルへ召された。 彼が召された理由はこうだった。ガラティア地方で、ある異例の出来事が起きたのである。その地方のある都市で、民衆が十字架を掲げて行進していた際、大きな木製の十字架が、まるで不思議な力に動かされたかのように突然激しく揺れ始め、互いにぶつかり合って粉々に砕けてしまったのである。 この奇跡の噂は至る所に広まり、コンスタンティノープルにまで届いた。そこで、至聖なるトマス総主教は、聖テオドロスに急いで自分のもとへ来るよう要請した。聖人が到着すると、総主教はその奇跡について、またそれが何を予兆しているのかについて尋ねた。聖人は、確かに奇跡であったと答えたが、それが何を予兆しているかについては、神の知られざる神秘を知らないとして、語ることを拒んだ。すると、至聖なる総主教は懇願して彼の足元にひれ伏し、その謙虚な態度によって、尊者に対し未来を予言するよう説得した。 長老は、十字架が揺れ動き、互いにぶつかり合い、砕け散る様子は、神の教会とギリシャ王国に、一方では外部の敵から、他方では内部の敵から、将来大きな災いが降りかかることを示していると語った。 外部からは恐ろしい敵の侵攻が待ち受けており、内部からはキリスト教徒の間で信仰の分裂が生じ、普遍的な迫害が起こり、人々は互いにすべてを破壊し、滅ぼし合い、多くの教会が荒廃し、廃墟と化すだろう。そして、これらすべてがまもなく起こるだろう。 これを聞いた総主教は恐怖に駆られ、聖者に主への祈りを捧げてほしいと懇願した。すなわち、予言された荒廃が訪れる前に自分の魂を主が迎え入れ、教会に降りかかる災難を目撃することのないようにと。

しばらくして、聖テオドールがまだコンスタンティノープルの聖ステファノス教会に滞在していた頃、総主教は病に倒れ、当時隠遁生活を送り断食していた聖人に使いを送り、自身の病状を伝え、神に早急な死を願ってほしいと懇願した。 しかし、聖人はこれを拒み、応じようとしなかった。そこで、総主教は再び熱心に、教会に混乱が押し寄せる前に自分が死ねるよう懇願した。聖人は総主教の願いを聞き入れ、神に彼の死を祈り、使者を通じて次のように伝えた。

[3177] フォカス皇帝は602年から610年まで在位した。

[3178] トマスは607年から610年まで総主教を務めた。

「私にあなたのところへ来いとお命じになるのか、それとも、そこで共に我らの主の御前に立つのか？」

総主教は使者を通じてこう答えた。

「父よ、あなたの沈黙を破らないでください。あなたが『そこで私たちの主の御前に共に立つ』とおっしゃっただけで、私には十分です。」

その日、聖なるトマス総主教は、夕の祈りの前に、喜びのうちに肉体を離れ、主のもとへ旅立った。　総主教の死後、聖テオドールは自身の修道院に戻り、数年を経て彼自身の死も近づいた。その前に、彼は多くの偉大で輝かしい奇跡を行い、将来の出来事について多くの預言をした。　臨終を前に、彼は聖大殉教者ゲオルギオスを二度、夢の幻として見た。一度目は、旅の杖を差し出し、遠い旅路へ共にいくよう呼びかける姿で現れ、二度目は、馬にまたがり、もう一頭の馬を引いてこう言った。

「テオドールよ、この馬に乗れ。そして、私に従え。」

これによって、聖テオドールは、まもなくこの世を去ることを悟り、そのことを喜びをもって弟子たちに伝え、復活祭の後に自らの死を予告した。そして、その通りになった。彼が臨終の際、聖なる天使たちが彼を迎えに来るのを見て、喜びに満ちた顔で自らの魂を彼らの手に委ねた。

彼の死は、イラクリウス帝の治世3年目に起こった[3179]。

彼の生涯と奇跡は、師から修道名としてゲオルギオスという名を与えられた弟子エレウシオスによって記された。彼は自身のことを、両親が長い間夫婦でありながら子供に恵まれず、祈りと祝福によって子供を持つことができるよう、聖テオドロスに懇願したと語っている。　聖人は彼らの帯を受け取り、祝福して返すと、不妊が解消されることを予言した。そして実際にエレウシウスが生まれ、両親は彼を育て上げ、聖人のもとへ連れて行き、神への奉仕に捧げた。　十二年間、聖人に仕えて過ごした彼は、言葉では言い表せないほどの奇跡を目の当たりにし、それらについて非常に詳しく記したが、我々は彼の記述から、我々の魂の益となるよう、ごく一部のみを引用し、簡潔にまとめた。さあ、その奇跡を行う者たちを通して賛美される、驚くべき神、父と子と聖霊を、今、常に、そして世々限りなく賛美しましょう。アーメン。

トロパリオ、第2調：

幼少の頃から聖別され、恵みに満ちて現れ、世に奇跡の光を照らし、多くの悪魔を追い払われた、聖なる幼子テオドロよ、どうか私たちのために主にお祈りください。

コンダク、第3調：

神を宿す者よ、徳という炎の戦車に乗って天の住まいへと昇り、天使のように天に上り、人として人々と共に暮らし、人として天使たちと共に喜びを分かち合っておられます。このゆえに、あなたは神の奇跡の友として現れたのです、尊きテオドールよ。

私たちの尊い父、修道士ヴィタリオスの生涯

記念日：4月22日

[3179] ヘラクレイオス皇帝は610年頃から641年まで在位した。聖テオドロス・シケオトスの死は613年に訪れた。

アレクサンドリアの総主教座に、至聖なる総主教ヨハネス・ミロスティヴィが就いていた頃、シリド聖人の修道院から、ヴィタリイという名の修道士がアレクサンドリアにやって来た。　この修道士は、生年六十歳にして、　人の外見のみを見る人々にとっては不浄で罪深いものと映るが、内面を見渡し、人の心を探り出される（詩編7:10）神にとっては、喜ばれ、好ましいとされたような生き方を選んだのである。　というのも、その長老は、罪人や不義な人々を密かに悔い改めへと導こうと願っていたが、人々の目には、彼自身が罪人であり不義な者に見えていたからである。彼はアレクサンドリアに住むすべての娼婦の名簿を作成し、彼女たち一人ひとりについて、神が彼女たちを罪深い生活から立ち返らせてくださるよう、特に熱心に神に祈った。　その老人は朝から夕方まで街で働き、その労働の対価として十二枚の銅貨を受け取っていた。一枚の銅貨で豆を一粒買い、日没後にそれを食べていた。というのも、一日中働いていたため、断食をしていたからである。その後、売春宿にやってくると、残りのお金をある娼婦に渡し、こう言った。

「お願いだ。この金で、今夜一晩、誰とも罪を犯さず、清らかさを保ってほしい。」

そう言うと、彼は彼女と共に彼女の部屋に閉じこもった。彼女は自分のベッドで眠り、一方、老人は部屋の隅に立ち、一晩中眠らずに、ダビデの詩篇を静かに読み、朝まで彼女のために神に祈り続けた。翌朝、彼女のもとを去る際、彼は誓いを立てて、自分の行いを誰にも話さないよう彼女に頼んだ。

彼は長い間そのように行動し、昼間は断食に励み、夜には娼婦たちの元を訪れて、眠らずに祈りを捧げ続けた。毎晩、彼は別の娼婦のもとを訪れ、全員を回り終えると、また最初の人からやり直した。

主なる神は、御自分のしもべのこのような偉業をご覧になり、彼を助けられた。というのも、ヴィタリイのそのような徳に心を打たれた娼婦たちの中には、自ら祈りの姿勢を取り、彼と共にひざまずいて祈る者もいたからである。　聖人は、そのような者たちに、神の恐るべき審判や死後の永遠の地獄の苦しみをもって警告し、一方で神の慈悲と天国での永遠の祝福への希望をもって励まし、悔い改めるよう説得した。すると彼女たちは神への畏れを抱き、謙虚になり、生活を改めることを誓った。　そして、彼女たちの多くは以前の罪深い生活を捨て、正当な夫と結婚した。また、ある者たちは完全な清らかさの中で生きたいと願い、女子修道院に入り、そこで断食と涙の中で生涯を過ごした。さらに、世の中で夫を持たずに清らかに暮らし、自らの労働で生計を立てる者たちもいた。　そして、娼婦たちのうち誰一人として、聖ヴィタリオスの貞潔な生活について誰にも語らなかった。というのも、もし彼女たちの誰かが人々に、「ヴィタリオスは罪のためではなく、彼女たちの救いのために訪れている」と言い始めた途端、ヴィタリオスはその話を耳にして、自分の清らかな生活が露見してしまうことを深く嘆き、　神に、その女性を罰してくださるよう祈り、他の者たちも恐れを抱き、人々に彼の偉業を語らないようにと願った。すると直ちに、神の御許しにより、その女性は狂乱状態に陥り、他の女性たちはそれを見て恐れをなして、ヴィタリイの聖なる生活について人々に何も明かすことを敢えてしなくなった。人々は、狂乱状態に陥ったその女性にこう言った。

「ほら、最初、この修道士が淫行のためにあなたたちのところに来ているのではないと言っていたことに対して、神があなたにどのように報いているか見てごらん。彼が淫行者であることがはっきりと明らかになったではないか。」

そして皆、彼を嘲り、毎日こう言って非難した。

「さっさと行け、この忌まわしい者よ――娼婦たちが君を待っているぞ」と言い、彼に唾を吐きかけた。

しかし、聖人はすべてを柔和に耐え忍び、人々からの罵倒や非難を聞いても喜び、人々が自分を大罪人だと見なしていることに、心の中で慰めを見出していた。時には、自分を非難する者たちにこう言った。

「私にも、他の人々と同じように肉体があるではないか。神は修道士たちを無肉体として創造されたというのか。まことに、修道士たちもまた人間なのだ。」

ある者たちは彼にこう助言した。

「父よ」と彼らは言った。「娼婦の一人を妻に迎え、修道服を脱ぎ捨ててください。そうすれば、あなたを通して修道生活が誹謗されることはありません。」

しかし彼は、まるで怒っているかのように、こう答えた。

「あなたたちの言うことなど聞きたくない。妻を娶り、彼女や子供たち、家の世話をし、毎日を心配事や苦労の中で過ごすことに、何の得があるというのか？　なぜ私を非難するのだ？　神の前で私の責任を問われるのは、あなたたちではないのだから。各自、自分のことを考え、私は放っておいてくれ。」　すべての者を裁く方はただひとり、神お一人であり、神こそが各人の行いに応じて報いを与えられるのだ。

このように、聖ヴィタリーは人々の前から自らの徳を隠していた。

一部の聖職者たちは、アレクサンドリアの至聖なる総主教ヨハネス・ミロスティヴィの前で彼を誹謗し、ある長老が毎晩娼婦たちの家に入り込み、街全体を堕落させていると告発した。　しかし、至聖なる総主教は中傷者たちの言葉を信じなかった。というのも、彼は以前にも中傷者たちによって に惑わされ、ユダヤ人女性を洗礼した、貞潔で聖なる修道士――しかも去勢者であった[3180] ――を、彼を中傷した者たちの言葉を信じて、無実であるにもかかわらず殴打に処したことがあったからである。　その出来事を思い出して、総主教はヴィタリイを告発する者たちの言葉に耳を貸さず、彼らにこう言った。

「非難するのはやめなさい。とりわけ、修道士たちを非難してはならない。第一回全地公会議[3181] で何が起きたか、知らないのか。あの時、福者コンスタンティヌス大帝に対し、一部の司教や聖職者たちが、互いの罪を告発する文書を提出したのだ。」　皇帝は、火のついた蝋燭を持ってくるよう命じ、それらを読むことさえせずにその文書を焼き捨て、その際こう言った。「もし私が自分の目で、罪を犯している司教や修道士を見かけたなら、その者を自分の衣で覆い隠し、誰も彼が罪を犯しているのを見られないようにするだろう」。

こうして、至聖なる総主教は告発者たちを恥じ入らせた。一方、神の僕ヴィタリイは、罪深い魂の救いを案じることを決してやめず、彼のそのような徳高い生活については、彼がこの世を去るまで誰も知らなかった。

ある時、尊者ヴィタリーが夜明けに娼婦たちの家から出てきたところ、娼婦たちのもとへ罪を犯しに行く途中の、ある若い娼夫と出くわした。ヴィタリーを見ると、その若者は彼の頬を強く殴りつけ、こう言った。

「呪われた不敬虔な者よ、いつまで悔い改めず、その不浄な生活から離れず、キリストの御名をこれ以上冒涜し続けるつもりか？」

聖人は彼にこう答えた。

「信じてくれ、人よ。この謙虚な私を殴った代償として、お前も頬を殴られることになるだろう。その叫び声に、アレクサンドリア中が駆けつけるほどに。」

しばらくして、聖ヴィタリウスは、「太陽の門」と呼ばれる門の近くに自ら建てた、狭く小さな修道室に閉じこもり、そこで安らかに主のもとへ旅立った。　街の誰もこのことを知らなかった。その時、先述の若き放蕩者――聖なる長老の頬を打った者――の前に、恐ろしいエチオピア人の姿をした悪魔が現れ、彼の頬を激しく打ちながら言った。

[3180] すなわち、去勢者であった。

[3181] 第1回全地公会議は、神の御子を父なる神の被造物であると不敬に主張した長老アリウスの異端説をめぐり、325年にニカイアで招集された。

「修道士ヴィタリーが送ったこの一撃を受けよ。」

その瞬間、若者は取り憑かれ、地面に倒れ込み、狂乱のあまり身もだえし、口からは泡を吹いた。その間、彼は自分の服を引き裂き、あまりにも大きな叫び声を上げたため、アレクサンドリア中の住民がその恐ろしい叫び声に駆けつけた。彼はその後も長い間、悪魔に苦しめられた。　数時間が経過し、少し正気を取り戻すと、青年はヴィタリーの修道室へと急ぎ、こう叫んだ。

「神のしもべよ、どうか私を憐れんでください。私はあなたに罪を犯し、頬を打つことであなたを深く侮辱してしまいました。今、あなたの予言通り、私は相応の報いを受けました。」

そう叫びながら、彼は人々に囲まれ、素早く走っていった。そして、老修道士の庵に近づいたとき、悪霊は青年を地面に投げ捨て、姿を消した。

青年はすっかり正気を取り戻すと、人々に、自分が老僧の頬を叩いたこと、そして老僧がそれに対する報いを受けると予言したことを語り始めた。　その後、老人の修道室の扉を叩いたが、何の返事もなかった。扉を壊して中に入ると、彼は修道室の真ん中で、まるで祈っているかのようにひざまずいて立っていた。老人の聖なる魂はすでに主のもとへ旅立っていた。彼は手に一枚の紙を握りしめており、そこにはこう書かれていた。

「アレクサンドリアの人々よ！　義なる裁き主である主が来られるまでは、時期尚早に裁きを下してはならない。」

その頃、先に述べたように、かつてヴィタリオスの聖なる生涯を人々に伝えようとしていた、ある悪霊に取りつかれた女性がそこへやって来た。彼女は、現れた天使から尊者のお亡くなりになったことを告げられ、聖人の尊い遺骸に触れると、たちまち悪霊に取りつかれていた状態から癒やされた。 同様に、多くの盲人や足の不自由な者たちも、尊者の遺体に触れることで癒やされ始めた。

聖人の死を耳にすると、彼がその諭しによって罪の悔い改めへと導いた女性たちは皆、灯した蝋燭やランプを手に、彼の棺のもとに集まり、 の父であり師である彼を嘆き悲しんだ。 その際、彼女たちは人々の前で、この長老の徳について声高に語った。彼は彼女たちの誰一人として、手さえも触れず、罪を犯すためではなく、彼女たちを救うために訪れていたのだ。その話を聞いた人々は彼女たちに怒りを覚え、こう言った。

「なぜ、この高潔な老人の聖なる生き様を私たちから隠していたのか。私たちは無知ゆえに、彼を非難し、責め立て、多くの罪を犯してしまったではないか。」

女性たちは、民衆の非難に対して次のように答えた。

「私たちは恐れていたのです。この老人は、誰にも自分の生き様を話してはならないと、厳粛な誓いを立てて禁じていたからです。そして、私たちの友人の一人がその秘密を人々に話し始めた途端、狂乱状態に陥ってしまったのです。そのため、私たち一人ひとりは、そのような罰を恐れて、黙っていたのです。」

そして、民衆は皆、自らの聖なる生涯を人々の目からこれほど謙虚に隠していたこの神の僕に驚嘆した。人々が彼を大いなる罪人だと思っていたその間も、彼は神の友であり、聖霊の清らかな器であったのだ。　人々は互いに自責の念に駆られ、自分たちの愚かさを恥じた。彼らは、そのような神の御心にかなう者を非難し、罪なく、心清らかな人に傷つけ、侮辱を与えてしまったのである。

一連の出来事の詳細が、至聖なるヨハネ・ミロスティヴィイ総主教の耳に入ったとき、彼は聖職者一同を率いて長老の庵を訪れ、長老が自分を非難しないよう諭した前述の手紙と、そこで起こっている奇跡を目の当たりにすると、その長老を告発した聖職者たちにこう言った。

「ご覧の通り、もし私があなた方の言葉を信じ、無実の聖なる長老を侮辱していたなら、聖人を誹謗した若者がそうであったように、私もまた顔に打撃を受けていたことでしょう。しかし、私は謙虚に、あなた方の告発に耳を貸さず、それによって罪と報復を免れたことを神に感謝します。」

それでもなお、尊者に対する誹謗中傷や非難を行っていた者たちは、深く恥じ入った。

その後、至聖なる総主教は、尊者ヴィタリオスの尊い遺骸を手に取り、それを街中を練り歩き、罪を悔い改め、泣き叫ぶ女性たち全員の面前で、人々に知られざる多くの忠実な僕たちを擁する神を賛美しつつ、尊厳をもって埋葬した。

悪魔から打撃を受けたその男は、世俗を捨てて修道士となった。また、アレクサンドリアの住民の多くは、ヴィタリオスの徳高い生き方に感化され、決して誰をも非難しないことを自らの掟とした。　私たちも、尊い父ヴィタリオスの祈りと、永遠に栄光が帰される主イエス・キリストの恵みに支えられ、この点において彼らに倣いましょう。アーメン。

5月6日

4月23日（旧暦）

同日、聖殉教者アレクサンドラ王妃および聖殉教者アナトリアスとプロトレオンの記念日。

聖大殉教者ゲオルギオス・ポベドノスツの殉教

記念日：4月23日

ローマ帝国の不適格な統治者、不敬虔なディオクレティアヌス[3182]は、偶像崇拝の熱烈な信奉者であり、後援者であった。彼は、未来を予言する者として知られていたアポロ[3183]を、あらゆる神々の中で最も崇めていた。というのも、彼の無機質な偶像に宿っていた悪魔が未来を予言していたが、その予言は決して的中しなかったからである。

ある日、ディオクレティアヌスはアポロに、ある事柄について尋ねた[3184]。すると、悪魔は彼にこう答えた。

「私は未来を真実のままに告げることができない。なぜなら、義人たちが私を妨げているからだ。それゆえ、神殿の魔法の三脚台[3185]は嘘をついているのだ。義人たちは我々の力を打ち砕くのだ。」

ディオクレティアヌスは、アポロン神が預言できない原因となっている「義人」とは一体誰なのかを、祭司たちに尋ねた。祭司たちは、この世において義人とはキリスト教徒のことだと答えた。これを聞いたディオクレティアヌスは、キリスト教徒に対して激しい怒りと憤りに満ち、一旦中断されていた迫害を再開した。　彼は、神に属する義人、罪なき者、清らかな人々に対して剣を振るい、王国の全土に彼らを処刑せよとの命令を下した。　こうして、監獄は、姦通者や強盗、不道徳な者たちの代わりに、真の神を信じる者たちで満たされた。従来の拷問方法は不十分であるとして廃止され、さらに残酷な拷問が考案され、多くのキリスト教徒が毎日、至る所でそれにさらされた。　四方、とりわけ東方から、キリスト教徒に対する多くの誹謗中傷の手紙が王のもとに届けられた。これらの密告には、王の命令に従わず、自らをキリスト教徒と称する者たちがあまりにも多いため、彼らをそ

3182 キリスト教を激しく迫害したディオクレティアヌス帝は、284年から305年まで在位した。

3183 アポロンは、ギリシャ・ローマの異教の神々の中で最も崇敬された神の一人である。アポロンは太陽と知性の神とされ、また社会の繁栄の守護者であり、未来を予言する神とも考えられていた。

3184 人生のあらゆる困難な局面において、異教の皇帝たちは、偶像に仕える祭司たちに助言を求める習慣があった。彼らは、あたかも神々の意志を明らかにしてくれるかのように振る舞っていた。この習慣は、特に古代ギリシャで盛んに行われていた。　とりわけ、デルフォイのオラクル（神託所）は有名で、そこには特別な女性である予言者（ピティア）たちがいた。

3185 異教の祭司たちは、自分たちの神々に問いを投げかける際、三脚の椅子に座った。

の信仰のままにしておくか、あるいは彼らに対して戦争を仕掛けるべきである、と記されていた。そこで皇帝は、各地のアンフィパトスやイゲモノスをニコミディア[3186] に召集して会議を開き、諸侯、ボヤール、そして元老院全員を集め、キリスト教徒に対する自身の怒りを露わにした上で、異教から離反した者たちをどう扱うべきか、各自の判断で助言するよう命じた。　会議に出席した者たちの多くの発言の後、この迫害者は、古来の先祖の神々を崇めることほど、誠実で有益なことは何もないと宣言した。全員が王の発言に同意すると、王は次のように続けた。

「もし皆がそう考え、熱心に実行することを望み、そして私の愛を大切にするのであれば、あらゆる手段を尽くして、我々の神々に背くキリスト教の信仰を、我が王国全土から根絶やしにしようと努めよ。あなたがたがこれをより成功裏に成し遂げられるよう、私自身が全力を尽くして支援する。」

皆は王のこの言葉を称賛して受け入れた。ディオクレティアヌスと元老院は、キリスト教の根絶について、二度、三度と協議を重ねた。その後、その決定を民衆に布告し、それが絶対的な命令となるようにした。

当時、ローマ軍には、カッパドキア[3187] 出身の、キリストの素晴らしい戦士、聖ゲオルギオスがいた。彼はキリスト教徒の両親の息子であり、幼い頃から両親によって敬虔に育てられていた。彼はまだ幼い頃に、キリストを告白したために拷問を受けて亡くなった父を亡くした。一方、ゲオルギオスの母は、パレスチナが彼女の故郷であり、豊かな領地があったため、彼と共にパレスチナへ移り住んだ。

成長した聖ゲオルギオスは、端正な顔立ち、勇気、そして強靭な体躯で際立っていたため、[3188] の有名な軍団においてトリブーンに任命された。この地位において、彼は戦場で並外れた勇気を発揮したため、当時まだ彼がキリスト教徒であることを知らなかったディオクレティアヌス帝は、彼をコミタ[3189] および軍司令官の位に叙した。 一方、ゲオルギオスの母は、その頃にはすでに他界していた。

ディオクレティアヌスがキリスト教徒を拷問して根絶やしにしようと企てた時、聖ゲオルギオスは皇帝の側近として仕えていた。聖ゲオルギオスは、この不義な企てが決して撤回されることはないことを確信し、またキリスト教徒に対する不信心者たちの残虐さを知ったその初日から、自らの魂の救いにつながる時が来たと決意した。　直ちに、聖ゲオルギオスは自身の全財産、金、銀、そして高価な衣服を貧しい人々に施し、身辺にいた奴隷たちに自由を与え、パレスチナの領地にいる奴隷たちについては、その一部を解放し、他の一部を貧しい人々に譲るよう命じた。　三日目、無実のキリスト教徒たちを不法に殺害することについて、王とその諸侯たちによる最終会議が開かれることになっていたその時、キリストの勇敢な戦士である聖ゲオルギオスは、　は、あらゆる人間的な恐れを捨て去り、ただ神への畏れのみを胸に抱き、輝かしい顔と勇敢な精神をもって、その不敬虔で不法な集まりの前に現れ、次のように語りかけた。

「おお、王よ、そして諸侯や顧問たちよ！　あなたがたは善き法律と正義の裁きを守るために立てられたはずなのに、キリスト教徒に対して猛烈な怒りを向け、不法を是とし、罪もなく誰にも害を与えなかった人々に対する不当な判決を下している。　あなたがたは彼らを迫害し、苦しめ、敬虔であることを学んだ者たちまでも、あなたがたの狂おしい不敬虔に強制している。しかし、いいえ、

[3186] ニコメディアは、古代において小アジアの主要都市の一つであり、マルマラ海に形成された湾の北東端に位置していた。　この都市の名前は、紀元前3世紀に生きたビフィニアの王、ニコミデス1世に由来する。かつて栄華を極めたニコメディアの跡地には、現在、イスミドという小さな町がある。

[3187] カッパドキア――小アジアの地方。

[3188] トリブヌス――軍の長。

[3189] コミテスは、古代ローマにおいて、皇帝の旅に随行した最高位の軍司令官である。コミテスは皇帝の随行員であると同時に顧問でもあったため、この地位は非常に名誉あるものと見なされていた。

あなたがたの偶像は神ではない！この嘘に惑わされてはならない。　イエス・キリストこそが唯一の神であり、父なる神の栄光における唯一の主であり、御聖霊によって万物が創造され、万物が存在しているのです。あなたがた自身、真理を知り、敬虔さを学ぶか、さもなければ、真の敬虔さを知った者たちを、あなたがたの狂気によって惑わしてはなりません。

聖ゲオルギオスのこのような言葉と、その予想外の果敢な態度に驚愕し、皆は王に視線を向け、王が聖人にどう答えるかを待ちわびた。王は驚きで我に返ることができず、まるで雷に打たれたかのように、怒りを抑えながら黙り込んでいた。　ついに王は、評議会に出席していた友人であり、アンフィパトの位にあるマグネンティウスに合図を送り、彼にゲオルギウスに答えるよう命じた。

マグネンティウスは聖人を呼び寄せ、こう言った。

「誰が、お前をそのような大胆不敵な言動へと駆り立てたのか？」

「真理です」と聖人は答えた。

「それは一体どのような真理なのか？」とマグネンティウスは言った。ゲオルギウスは言った。

「真理とは、あなたがたに迫害されているキリストご自身のことだ。」

「では、お前もキリスト教徒なのか？」とマグネンティウスは尋ねた。

すると、聖ゲオルギオスはこう答えた。

「私は、私の神であるキリストのしもべであり、キリストを信頼して、自らの意志であなたがたの中に現れ、真理を証しするために来たのです。」

聖人のこの言葉に、集まった群衆全体が騒然となり、皆が口々に、ある者はこう、ある者はああと言い出し、大勢の群衆にありがちなように、不規則な叫び声と悲鳴が上がった。

そこでディオクレティアヌスは静粛を命じ、聖人へと目を向けると、彼を認めてこう言った。

「おお、ゲオルギオスよ、私は以前から、お前の気高さに感嘆していた。お前の風貌と勇気を名誉にふさわしいものと認め、私はお前を決して小さくない位階で敬ったのだ。　そして今日、お前が自らを害するような大胆な言葉を口にしているが、私はお前の知性と勇気を愛する者として、父として助言し、諭すのだ。戦士としての栄光や地位の尊厳を失わず、反抗によって若き日の輝きを苦しみへと変えることのないよう。さあ、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、我々からさらに大きな栄誉が与えられるだろう。

聖ゲオルギオスはこう答えた。

「ああ、もし王よ、あなた自身が私を通して真の神を知り、神が愛される賛美の捧げ物を神に捧げることができたなら！神はあなたに、より優れた王国――不死の王国を授けてくださるでしょう。なぜなら、あなたが今享受しているその王国は、はかないものであり、空しく、すぐに滅びてしまうからです。そして、それとともに、その束の間の快楽もまた滅びてしまうのです。　そして、それらに惑わされる者たちは何の益も得られない。これらはいずれも、私の敬虔さを弱めることはできず、いかなる苦痛も私の魂を脅かすことはなく、私の心を揺るがすこともない。

聖ゲオルギオスのこの言葉は、王を激怒させた。聖人が演説を終えるのを待たず、王は従者に命じて、槍でゲオルギオスを集会場から追い出し、牢獄に閉じ込めさせた。

兵士たちが王の命令を実行に移し、一本の槍が聖人の体に触れた瞬間、その鉄は鉛のように柔らかくなり、曲がってしまった。一方、殉教者の口からは、神を賛美する言葉が溢れ出た。

殉教者を牢獄に連行すると、兵士たちは彼を地面に仰向けに寝かせ、足を枷に縛り付け、胸の上に重い石を載せた。それは拷問者の命令であった。聖人はこれらすべてに耐え、翌日まで絶え間なく神に感謝を捧げ続けた。

日が明けると、王は再び殉教者を試練のために呼び出し、石の重さに押しつぶされそうになっているゲオルギウスを見て、こう尋ねた。

「ゲオルギオスよ、悔い改めたのか、それとも依然として反抗の姿勢を貫いているのか？」

胸の上に置かれた重い石に押しつぶされそうになっていた聖ゲオルギオスは、かろうじてこう答えた。

「おお、王よ。まさか、私がこれほどまでに衰弱し、これほどのわずかな拷問の後に自分の信仰を捨てるとでもお考えですか？　私を苦しめるあなたの方が、私を苦しめるあなたよりも先に力尽きるでしょう。」

そこでディオクレティアヌスは、巨大な車輪を持ち込むよう命じた。その下には、剣やナイフ、針のような鉄の刃が突き刺さった板が敷かれていた。その刃の中にはまっすぐなものもあれば、釣り竿のように湾曲したものもあった。　王はその車輪に、裸の殉教者を縛り付けるよう命じ、車輪を回転させながら、板に固定された鉄の刃で彼の全身を切り刻ませた。　聖ゲオルギオスは、四つ裂きにされ、葦のように打ち砕かれながらも、その苦痛を勇敢に耐え抜いた。最初は大きな声で神に祈り、その後は静かに、心の中で神に感謝を捧げた。彼は一声のうめき声も漏らさず、まるで眠っているか、あるいは感覚を失っているかのように振る舞っていた。

聖人が死んだと判断した王は、喜びのうちに自らの神々を称え、ゲオルギウスに向かってこう言った。

「お前の神はどこにいるのだ、ゲオルギイ。なぜ、お前のこの苦しみから救ってくれなかったのか？」

その後、王はゲオルギウスをすでに死んだものとして車輪から解き放つよう命じ、自らアポロンの神殿へと向かった。

すると突然、空が暗くなり、恐ろしい雷鳴が轟き、多くの人々が天からの声を聞いた。

「恐れるな、ゲオルギイ。私はお前のそばにいる。」

偉大で異様な光が現れ、光に包まれた美しく清らかな顔立ちの若者の姿をした主の天使が、車輪のそばに立っているのが見えた。天使は殉教者に手を置き、こう言った。

「喜びなさい！」

その幻視が続いている間、誰も車輪や殉教者に近づくことを敢えてしなかった。やがて天使が姿を消すと、殉教者自身は車輪から降りてきた。天使によって車輪から解放され、傷も癒やされていたのである。こうして聖ゲオルギオスは無傷の体となり、主を賛美した。

この奇跡を目撃した兵士たちは、大きな恐怖と困惑に襲われ、その出来事を、当時神殿で偶像への不浄な儀式を行っていた王に報告した。聖ゲオルギオスも兵士たちに続いて神殿へと向かい、王の前に現れた。

王は当初、目の前にいるのが聖ゲオルギオスだとは信じず、彼に似た誰かだと思った。王を取り囲んでいた者たちはゲオルギオスをじっと見つめ、それがまさに彼であることを確信した。そして、殉教者自身も大きな声でこう宣言した。

「私はゲオルギオスだ。」

恐怖と困惑が、皆の口を長い間封じた。そこにいた二人の男、アナトリーとプロトレオン――彼らはプレトール[3190] の尊い位にあり、以前からキリスト教の信仰を宣べ伝えていた――はこの驚くべき奇跡を目撃し、キリストへの信仰を完全に確固たるものとし、こう叫んだ。

「唯一の偉大で真の神、キリスト教の神よ！」

王は直ちに彼らを捕らえさせ、尋問もせずに城外へ連れ出し、剣で斬首するよう命じた。

神殿に同席していたアレクサンドラ王妃も、殉教者の奇跡的な癒やしを目の当たりにし、天使の出現について耳にすると、真理を悟った。しかし、彼女が大胆にキリストを告白しようとしたとき、管区長官が彼女を引き止め、王がそれを知る前に、彼女を宮殿へ連れ戻すよう命じた。

[3190] プレトル――都市の裁判官。

一方、悪辣なディオクレティアヌスは、善を行うことなどできず、ゲオルギオスを石で囲まれた堀に投げ込み、生石灰をその上に三日間も積み上げるよう命じた。

堀へと連行される際、聖人は主に向かって次のように力強く祈った。

「苦しむ者たちの救い主、迫害される者たちの避難所、絶望する者たちの希望、わが主なる神よ！　あなたのしもべの祈りを聞き入れ、私を見守り、憐れんでください。　敵の策略から私を救い出し、私の生涯の終わりまで、あなたの聖なる御名を告白し続けさせてください。主よ、私の罪のゆえに私を見捨てないでください。そうすれば、私の敵たちが「彼の神はどこにいるのか」と言わなくて済みます。あなたの御力を示し、この不肖のしもべである私を通して、あなたの御名を栄光に輝かせてください。 バビロンの炉を露に変え、御自分の若者たちを無傷で守られた（ダニエル書3章）あなたよ、この不適格な私を守る天使を遣わしてください。あなたは永遠に祝福されます。アーメン。

このように祈り、全身に十字の印を刻んだ後、ゲオルギオスは喜び、神を賛美しながら堀へと入った。殉教者を縛り、命令に従って堀の中に生石灰をまき散らした後、王の家来たちはその場を去った。

三日目に、王は殉教者の遺骨を石灰の堀から引き上げるよう命じた。王は、ゲオルギオスがそこで焼死したと思っていたからである。　使用人たちがやって来て石灰をかき分けると、予想に反して、聖人は無傷で、生きており、健康で、縛りからも解き放たれていた。彼は輝かしい顔つきで立ち、天に向かって両手を差し伸べ、神のすべての恵みに感謝していた。

その場に居合わせた家来や民衆は、恐怖と驚きに包まれ、まるで口を揃えるかのように、聖ゲオルギオスの神を「偉大なる方」と呼び、賛美した。

この出来事を知ったディオクレティアヌスは、直ちに聖人を自分の元へ連れてくるよう命じ、驚きながらこう言った。

「ゲオルギウスよ、お前にそのような力がどこからあるのか、どのような魔術を使っているのか、我々に語れ。お前は、キリストを信じるふりをわざと装い、魔術的な狡猾さを示し、その魔術で皆を驚かせ、それを通じて自らを偉大であるかのように見せつけようとしたのだと思う。」

「おお、王よ」と聖人は答えた。「私は、あなたが全能の神を冒涜するような言葉を口にすることはできないだろうと考えていました。神にとってはすべてが可能であり、神に希望を置く者たちを苦難から救い出してくださる方なのですから。」　しかし、あなたは悪魔に惑わされ、これほど深い迷いと破滅の淵に落ち込み、あなたの目にもはっきりと見える私の神の奇跡を、魔術や呪術と呼んでいるのです。私はあなたの盲目さを嘆き、あなた方を呪われた者と呼び、私の答えに値しない者と見なします。

そこでディオクレティアヌスは、鉄のブーツを持ってくるよう命じ、その靴底に打ち込まれた長い釘を赤熱させ、殉教者にそのブーツを履かせ、殴打しながら牢獄へと連行させた。このように履かされた殉教者を連行する際、拷問担当者は侮辱しながらこう言った。

「お前はなんて速足なんだ、ゲオルギオス。なんて速く歩くんだ！」

一方、非人道的に引きずられ、残酷な殴打にさらされていた殉教者は、心の中でこう言った。

「進め、ゲオルギーよ、到達するために。なぜなら、お前は*『未知なるもの』へではなく*（参照：1コリント9:26、すなわち永遠の救いへと）向かっているのだから。」

そして、神に呼びかけ、こう言った。

「主よ、天から御目を向けて、わが労苦をご覧になり、鎖に繋がれたあなたのしもべの嘆きを聞いてください。私の敵は増え続け、『激しい憎しみをもって私を憎んでいる』　（詩篇24:19）、しかし主よ、あなたご自身が私を癒してください。私の骨は砕け散っています。そして、私の敵が『私は彼に対して強い』と言わないように、最後まで忍耐を授けてください。」

聖ゲオルギオスは、そのような祈りを捧げながら牢獄へと向かった。そこに閉じ込められ、足は引き裂かれて肉体は衰弱していたが、その精神は決して折れることはなかった。　一日中、そして

一晩中、彼は神への感謝と祈りを絶やすことがなかった。そしてその夜、神の御加護により、傷は癒え、彼の足も全身も再び無傷となった。

朝、聖ゲオルギオスは、王と全廷臣たちが待機していた処刑場に王の前に引き出された。殉教者が、まるで傷を負っていなかったかのように、足を引きずることなくまっすぐに歩いているのを見て、王は驚きながら彼に言った。

「さて、ゲオルギオスよ、そのブーツは気に入ったか？」

「大変気に入っています」と聖人は答えた。

すると王は言った。

「生意気な態度はやめ、柔和で従順になりなさい。そして、魔術的な策略を捨てて、慈悲深い神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、多くの苦しみによってこの甘美な人生を奪われることはないだろう。」

聖ゲオルギウスはこう答えた。

「神の力を魔術と呼び、恥知らずにも悪魔の誘惑を誇りとするあなた方は、なんと狂っていることか！」

聖人を怒りの眼差しで見据えると、ディオクレティアヌスは凄まじい叫び声で彼の言葉を遮り、傍らにいる者たちに彼の口を殴るよう命じた。「王たちを苛立たせるなと、彼に教え込んでやれ」と拷問官は言った。その後、聖ゲオルギオスの肉が血と共に地面に張り付くまで、牛の腱で彼を打ち続けるよう命じた。

激しく拷問を受けても、聖ゲオルギオスはその穏やかな表情を崩さなかった。これに深く驚いた王は、周囲の人々にこう言った。

「まことに、これはゲオルギオスの勇気や強さによるものではなく、魔法のような狡猾さによるものだ。」

すると、マグネンティウスは王にこう言った。

「ここに、魔術に長けた男が一人いる。もし彼を連れてくるよう命じれば、まもなくゲオルギウスは打ち負かされ、あなたに従うようになるだろう。」

直ちにその魔術師が王の前に呼び出され、ディオクレティアヌスは彼にこう言った。

「この忌まわしい男、ゲオルギウスがここで何をしたかは、ここにいる者全員の目の前で明らかだ。しかし、彼がどのようにしてそれを成し遂げたのかは、その術に長けたあなただけが知っているはずだ。　彼の魔術を打ち破り、彼を我々に服従させるか、あるいは直ちに魔薬を用いて彼の命を奪い、彼が学んだその術にふさわしい死を遂げさせよ。それゆえ、私はこれまで彼を生かしておいたのだ。

アファナシイという名の魔術師は、翌日、命じられたことをすべて実行すると約束した。

拷問室で殉教者を監視するよう命じた後、王は法廷を去り、聖人は拷問室に入り、神にこう祈った。

「主よ、私に御慈悲を示し、私の歩みを御名への告白へと導き、御信仰の道を保たせてください。そうして、至聖なる御名が至る所で賛美されますように。」

朝になると、王は再び法廷に現れ、皆の目の届く高い場所に座した。魔術師アファナシイもやって来て、自らの知恵を誇り、王やそこに集まった者たちに見せるために、様々な器に入った魔術の飲み物を携えていた。そしてアファナシイは言った。

「さあ、今すぐその死刑囚をここに連れて来させよ。そうすれば、彼は我らの神々の力と、私の魔術の威力を目の当たりにするだろう。」

それから、ある器を手に取ると、アファナシイは王に言った。

「もしあの狂人があなたの言うことをすべて聞くようにしたいのなら、彼にこの飲み物を飲ませなさい。」

別の器を手に取ると、魔術師は続けた。

「もし、その者が苦痛に満ちた死を遂げるのをご覧になりたいのであれば、彼にこれを飲ませなさい。」

直ちに、王の命により、聖ゲオルギオスが法廷に連行された。そしてディオクレティアヌスは彼に言った。

「今こそ、ゲオルギオスよ、お前の魔術は打ち砕かれ、終わりを告げるだろう。」

そして、聖人に魔術の飲み物を無理やり飲ませるよう命じた。躊躇することなくそれを飲み干した聖ゲオルギオスは、無傷のままであり、悪魔の誘惑を嘲笑して喜んでいた。怒りに燃えた王は、致死性の毒が混入された別の飲み物も無理やり飲ませるよう命じた。　しかし、聖人は暴力を待つことなく、自ら進んで器を取り、その致命的な毒を飲み干したが、神の恵みによって死から守られ、無傷のままであった。

王と彼の全廷臣たちは驚き、魔術師アファナシウスもまた困惑した。しばらくして、王は殉教者にこう言った。

「ゲオルギイよ、いつまで我らをその行いで驚かせ続けるつもりか。いつになったら、どのような魔法の術によって、お前は自分に課せられた苦痛を軽んじ、致死性の飲み物からも無傷でいられるのか、その真実を我らに語ってくれるのか。謙虚に耳を傾けようとする我らに、真実をすべて語ってほしい。」

祝福されたゲオルギオスはこう答えた。

「王よ、私が人間の知恵によって苦痛を無視しているなどと思わないでください。いいえ、私はキリストへの呼びかけと、その御力によって救われているのです。キリストを信頼し、その神秘的な教えに従って、私たちは苦痛など何とも思わないのです。」

すると、ディオクレティアヌスは言った。

「では、お前のキリストの神秘的な教えとは、いったいどのようなものなのか？」

ゲオルギオスは答えた：

「キリストは、あなた方の悪意が何も成し遂げられないことをご存じであり、御自分の僕たちに、肉体を殺す者を恐れるなと教えられました。なぜなら、彼らは魂を殺すことはできないからです。　なぜなら、主は*こう言われたからです。「あなたがたの頭の毛一本さえも失われることはない*」（ルカ21:18）、*「彼らは蛇を手に取り、たとえ致命的なものを飲んでも、彼らには害を及ぼさない」*（マルコ16:18）。　*「わたしを信じる者は、わたしが行う業を、その者も行うであろう*」（ヨハネ14:12）。王よ、私が簡潔に申し上げている、私たちに対するこの偽りのない御約束に耳を傾けてください。

「あなたが言っている、その御業とは一体どのようなものなのか？」とディオクレティアヌスは尋ねた。

聖人はこう答えた。

「盲人の目を開き、らい病人を清め、足の不自由な者に歩行の力を、耳の聞こえない者に聴力を与え、汚れた霊を追い出し、死者をよみがえらせる――これらは、キリストの業であり、これらに類するものである。」

皇帝は魔術師アファナシウスに向き直り、こう尋ねた。

「これについて、どう思うか？」

「驚くべきことだ」とアファナシウスは答えた。「彼は、あなたの寛大さを踏みにじり、あなたの権威の手を逃れようとして、偽りを語っているのだ。」　私たちのように、不死の神々からの数多くの恩恵を日々享受している者でさえ、神々が死者をよみがえらせたことなど、これまで一度も見たことがない。それなのに、この男は、死んだ人間を頼りにし、十字架にかけられた神を信じ、恥じることなく、その方が偉大な業を成し遂げられたと語っているのだ。　ゲオルギオスは我々の面前で

、彼の神こそがそのような奇跡を行う者であり、また、彼を信じる者たちは、神から『神が行ったのと同じような業を自分たちも行える』という偽りのない約束を受けたと告白した。それゆえ、ゲオルギオスよ、王よ、そして我々全員の面前で、死者を蘇らせてみよ。　そうすれば、私たちも彼の神を全能者として崇めるでしょう。ほら、あそこに遠くから見える墓があります。そこには、私が生前知っていた死者がつい最近葬られたばかりです。もしゲオルギオスが彼を蘇らせることができれば、彼は真に私たちを打ち負かすことになるでしょう。

王はアファナシウスのこの提案に驚いた。彼が指し示した墓は、裁判所から半スタディオン[3191]の距離にあった。というのも、裁判はかつての劇場があった場所、すなわち城門のそばで行われていたからである。一方、その墓は城の外にあった。ギリシャ人の慣習によれば、死者は城の外に埋葬されるのが通例だったからである。　そこで王は殉教者に、自らの神の力を示すために死者を蘇らせるよう命じた。一方、アンフィパトスのマグネンティウスは、王にゲオルギオスの足枷を外すよう懇願した。ゲオルギオスの足枷が外されると、マグネンティウスは彼にこう言った。

「ゲオルギオスよ、お前の神の奇跡を見せてくれ。そうすれば、私たち全員をその神への信仰へと導いてくれるだろう。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「無から万物を創造されたわが神は、私を通してその死者をよみがえらせる力をお持ちである。しかし、あなたがたは心を曇らせているため、真理を理解することができない。だが、わが主は、ここに集う民のために、あなたがたが私を試そうとして求めていることを成し遂げてくださるだろう。そうすれば、あなたがたはこれを魔術の仕業だと決めつけないだろうから。」　あなたがたが連れてきた魔術師の言葉は正しい。魔術も、あなたがたの神々の力も、決して死者をよみがえらせることはできない。私は、周囲に立つすべての者の前で、皆が聞こえるように、私の神を呼び求めよう。

そう言うと、ゲオルギオスはひざまずき、涙を流しながら長い間神に祈りを捧げた。そして立ち上がると、ゲオルギオスは力強い声で主に向かってこう叫んだ。

「永遠の神よ、慈悲深い神よ、万力の神よ、全能なる神よ。主イエス・キリストよ、あなたを信頼する者たちを恥じ入らせないでください。あらゆる場所で、あらゆる奇跡やしるしにおいて、あなたの聖なる使徒たちの祈りを聞き届けてくださったあなたよ、今この時、あなたの謙虚なしもべである私の祈りを聞き届けてください。　この邪悪な一族に、求められているしるしを与え、棺に横たわる死者をよみがえらせてください。それは、あなたを否定する者たちの恥となり、あなたと、あなたの父、そして至聖なる御霊の栄光となるためです。　主よ、ここに集う者たちに、あなたが全地にとって唯一の神であることを示してください。そうして彼らが、万物が従い、その栄光が永遠に続く全能の主であるあなたを知ることができますように。アーメン。

彼が「アーメン」と言った瞬間、突然雷鳴が轟き、大地が揺れ動いたため、皆が恐怖に震えた。すると、墓の屋根が崩れ落ち、棺の蓋が開き、死者が生き返って棺から出てきた。この光景を目撃した者たちは皆、恐怖のあまり呆然としてしまった。　たちまち、この出来事に関する噂が民衆の間に広まり、多くの人々が泣きながら、キリストを偉大なる神として賛美した。　一方、王と彼に付き従っていた者たちは、恐怖と不信に満ち、当初は、ゲオルギーが偉大な魔術師であるため、棺から蘇らせたのは死者ではなく、ある種の霊や幻影であり、それを見た者たちを惑わそうとしたのだと語った。　しかし、目の前にいるのが幻影ではなく、確かに死からよみがえり、キリストの御名を呼び求めている人間であることを確信すると、王と貴族たちは大きな困惑と驚愕に陥り、どうすべきか全く分からず、黙ってゲオルギオスの周囲を取り囲んだ。　一方、アファナシイは聖人の足元にひれ伏し、キリストこそが全能の神であることを告白するとともに、無知のうちに犯した罪を赦してくれるよ

[3191] スタディオン――長さの単位。現在の約88サジェンに相当する。

う殉教者に懇願した。長い時間が経った後、ディオクレティアヌスはついに民衆に静まるよう命じ、こう言った。

「諸君、この惑わしを見よ。この魔術師たちの悪意と狡猾さを見よ。」　最も不敬虔なアファナシウスは、自分と同じような魔術師を助け、ゲオルギオスに毒ではなく、我々を惑わすのに役立つような、ある種の魔法の飲み物を飲ませたのだ。彼らは生きている人間に死んだように見せかけ、我々の目の前で魔法を使って、あたかも死からよみがえったかのように彼を蘇らせたのだ。

そう言い終えると、皇帝は尋問も事前拷問もなしに、アファナシウスと死から蘇った者の首を刎ねるよう命じた。一方、キリストの聖殉教者ゲオルギオスについては、自身が国政の務めから解放され、この殉教者をどう扱うか考えをまとめるまで、牢獄に閉じ込め、足枷をはめたままにしておくよう命じた。　皇帝は宮殿へと退き、聖ゲオルギオスは牢獄へと連行されたが、そこで彼は喜び、神に感謝を捧げた。

「主よ、あなたに信頼を置く者を恥じ入らせないあなたに、栄光がありますように。あなたが至る所で私を助け、日ごとにますます大きな恵みを示し、あなたの恵みをもってこの不肖の私を飾ってくださることに感謝します。　どうか、神よ、わが神よ、悪魔を最後まで打ち負かし、まもなく御栄光を拝むことができるよう、私をお導きください。

大殉教者ゲオルギオスが牢獄に囚われていたとき、彼の奇跡によってキリストを信じるようになった人々が彼を訪ねてきて、看守に金を渡し、聖人の足元にひれ伏し、聖なる信仰について教えを受けました。聖人は、キリストの御名を呼び、十字の印を掲げることで、牢獄に大勢訪ねてきた病人たちをも癒やしました。　訪れる人々の中には、グリケリウスという名の、ある男がいた。彼はただの農夫で、所有していた牛が山から森へと転落し、打ち砕かれて死んでしまった。聖人の奇跡の行いを耳にしたグリケリウスは、死んでしまった牛を嘆き悲しみながら、聖人のもとへ向かった。すると聖人は微笑んで、彼にこう言った。

「行け、兄弟よ。悲しむことはない。私の神であるキリストが、お前の牛を生き返らせてくださる。」

農夫は殉教者の言葉を固く信じてその場を去り、果たして自分の牛が生き返っているのを目にした。彼はすぐにゲオルギオスのもとへ戻り、町の真ん中を歩きながら大声で叫んだ。

「まことに、キリスト教の神は偉大なり！」

このため、彼は兵士たちに捕らえられ、そのことが皇帝に報告された。　ディオクレティアヌスは激怒し、彼に会うことさえ拒み、直ちに城の外で彼の首を刎ねるよう命じた。キリストのために死ぬことに対し、グリケリウスはまるで祝宴に向かうかのように喜びをもって、兵士たちの先頭に立ち、力強い声でキリストなる神を呼び求め、自らの流血を洗礼として受け入れてくださるよう祈った。こうしてグリケリウスは息を引き取った。

その時、シンクリトゥスに属する数人の男たちが、皇帝に次のように告げた。「ゲオルギウスは牢獄に囚われているにもかかわらず、民衆を扇動し、多くの人々を神々から十字架にかけられた方へと引き離し、魔術を用いて奇跡を起こしているため、皆が彼のもとに集まっている。」　彼らはさらに、ゲオルギオスを再び拷問にかけ、もし悔い改めず神々に帰依しないのであれば、直ちに死刑に処すべきだと進言した。王はアンフィパトスのマグネンティウスを呼び寄せ、翌朝、アポロンの神殿のそばに裁判の場を設け、民衆の目の前で殉教者を裁くよう命じた。　その夜、聖ゲオルギオスが牢獄で祈りを捧げていたとき、うたた寝をした彼は、夢の中に現れた主を目にした。主は彼を腕に抱き上げ、抱擁し、額に口づけをされ、その頭に冠を授けながら、こう言われた。

「恐れるな、勇気を出しなさい。そうすれば、わたしと共に支配するにふさわしい者となる。気力を失うな。あなたはまもなくわたしのところに来て、あなたのために用意されたものを受け取るだろう。」

眠りから覚めると、聖人は喜びをもって主に感謝を捧げ、牢屋の看守を呼び寄せてこう言った。

「兄弟よ、一つだけお願いがある。私の召使いをここへ呼んでくれ。彼に伝えなければならないことがあるのだ。」

看守は、常に牢のそばに立ち、聖人の行いや言葉を丹念に記録していた使用人を呼び寄せた。入ってきた使用人は、足枷をはめられた主人の前にひれ伏し、その足元に顔を埋めて涙を流した。聖人は彼を地面から起こし、心を強く持つよう命じ、次のように言って自分の幻視を告げた。

「わが子よ！　まもなく主は私を御許へ召される。私がこの世を去った後、あなたは私の謙虚な遺体を受け取り、私が殉教の前に書き残した遺言に従い、神の御加護のもと、パレスチナにある私たちの家へ運び、神を畏れ、キリストへの揺るぎない信仰を持って、私の遺言のすべてを遂行しなさい。」

召使いは涙ながらに、その命令を果たすことを約束した。聖人は愛情を込めて彼を抱きしめ、最後の口づけを贈り、平安のうちに彼を見送った。

翌朝、太陽が昇るやいなや、王は裁判の座に着き、怒りを抑えながら、自分の前に連れてこられたゲオルギーに穏やかに語りかけた。

「ゲオルギイよ、私が君に対して人愛と慈悲に満ち、君の罪を寛大に許していると思わないか？」　神々が証人である。私は、お前の若さと、咲き誇る美しさ、知性、そして勇気を鑑みて、お前の命を惜しんでいるのだ。もしお前が神々に帰依する意志さえあれば、私はお前を共同統治者とし、我が王国で第二の地位に据えたいと願っている。さあ、この件についてどう思うか、私たちに告げよ。

聖ゲオルギオスは言った。

「王よ、まずあなたが私に対してそのような慈悲を示すべきであり、これほど激しい拷問で私を苦しめるべきではありませんでした。」

殉教者のこの言葉を喜んで聞いた王は、こう言った。

「もしあなたが、父である私に愛をもって従うことを望むなら、あなたが耐えてきたすべての苦しみに対して、私はあなたに多くの栄誉を授けよう。」

ゲオルギオスは答えた。

「王よ、もしよろしければ、あなたがたが崇める神々を見るために、神殿の中に入りましょう。」

王は喜びながら立ち上がり、全シンクリトスと民衆を率いてアポロンの神殿へと向かい、聖ゲオルギオスを敬意を込めて伴った。民衆は王を歓声で迎え、自分たちの神々の力と勝利を称えた。

犠牲の供え物が用意されていた神殿に入ると、皆は沈黙のうちに殉教者を見つめ、彼が神々に犠牲を捧げることを疑いなく期待していた。しかし聖人はアポロンの偶像に近づき、その像に向かって手を差し伸べ、まるで生きているかのようにその愚かな像にこう尋ねた。

「お前こそ、神として、私からの供え物を受け取りたいのか？」

そう言いながら、聖人は十字を切った。すると、偶像の中に宿っていた悪魔が叫んだ。

「私は神ではない。神でもなければ、私のような者も誰も神ではない。唯一の神は、あなたが信仰を告白するお方である。我々は、そのお方に仕えていた天使たちの中から背教した者たちだ。我々は嫉妬に駆られ、人々を惑わしているのだ。」

すると聖人は悪魔にこう言った。

「真の神に仕える私がここに来たというのに、よくもまあ、お前たちはここに居座れるものだ。」

聖人のこの言葉に、偶像たちから騒ぎと泣き声が上がった。そして、それらは地面に倒れ、粉々に砕け散った。直ちに、祭司たちや民衆の多くが、狂ったように聖人に猛然と襲いかかり、彼を殴り、縛り上げ、王に向かって叫んだ。

「王よ、この魔術師を殺せ。彼が我々を滅ぼす前に、彼を殺せ。」

この騒動と叫び声の噂は街中に広まり、アレクサンドラ王妃の耳にも届いた。それまでキリストへの信仰を胸に秘めていた王妃は、もはや自分の信仰を隠し通す力を失い、直ちに聖大殉教者ゲオルギオスがいる場所へと向かった。

民衆の騒動を目の当たりにし、遠くから縛り上げられた殉教者の姿を見かけた女王は、群衆をかき分けて彼のもとへ近づこうと徒労に終わり、大声で叫び始めた。

「聖ゲオルギオスの神よ、私をお助けください。あなただけが全能なのですから。」

民衆の叫びが収まると、ディオクレティアヌスは殉教者を自分の元へ連れてくるよう命じ、その怒りはまるで悪霊に取り憑かれたかのようであり、聖人にこう言った。

「この卑劣者め、私の慈悲に対して、これほどの恩返しをするとは。お前はいつもこのように神々に生贄を捧げることに慣れているのだな。」

聖ゲオルギオスはこう答えた。

「そうだ、私はそのようにしてあなたの神々を崇めることに慣れている。狂った王よ、自分自身を救うこともできず、キリストの僕たちの存在さえも耐えられない神々に、自分の救いを帰するとは、恥を知れ。」

聖人がこう語っているとき、王妃はついに群衆をかき分けて中央へと進み、皆の前で大胆にも、キリストこそが真の神であると告白した。　彼女は殉教者の足元にひれ伏し、拷問者の狂気を嘲りながら、神々を非難し、それらを崇拝する者たちを呪った。殉教者の足元でこれほど勇敢にキリストを賛美し、偶像を貶めている妻の姿を見て、王は大きな驚きに襲われ、彼女にこう言った。

「アレクサンドラよ、お前はどうしたのだ。なぜこの魔術師や呪術師に同調し、これほど恥知らずにも神々を否定するのだ？」

しかし彼女は背を向け、王に答えなかった。ディオクレティアヌスはさらに激しい怒りに満ち、もはやゲオルギウスも王妃も拷問することなく、即座に二人に対して次のような死刑宣告を下した。

「ガリラヤ人[3192] の信奉者であると公言し、私や神々を激しく冒涜した極悪非道なゲオルギウスと、その魔術に惑わされ、彼と同様に狂ったように神々を非難したアレクサンドラ王妃を、共に剣で斬り殺すよう命じる。」

兵士たちは、足枷で縛られた殉教者を捕らえ、城の外へと連れ出した。彼らはまた、最も高貴な王妃も連行したが、王妃は抵抗することなくゲオルギオスの後を追い、心の中で祈りを捧げながら、しばしば天を仰いでいた。道中、王妃は力尽き、座らせてほしいと頼んだ。　座ると、彼女は頭を壁に寄りかからせ　、その魂を主の御許に委ねた。これを見たキリストの殉教者ゲオルギオスは、神を賛美し、自らの旅路も尊厳をもって終えられるよう主に祈りながら歩みを進めた。ゲオルギオスが処刑の場に近づくと、彼は力強い声でこう祈りを捧げた。

「主なるわが神よ、あなたは祝福されます。あなたは私を、私を追い求める者たちの獲物とはされず、私の敵を喜ばせることもなく、鳥を網から救い出すように、私の魂を救い出してくださったからです。　主よ、今この時も私の声に耳を傾けてください。この最後の時に、あなたのしもべである私の前に現れ、私の魂を、空の支配者の策略と、その不浄な霊たちから救い出してください。　無知のゆえに私に対して罪を犯した者たちを罪に定めないでください。むしろ、彼らに赦しと愛を授けてください。そうすれば、彼らもまた、あなたを知り、あなたの選民たちと共に、あなたの御国に与

[3192] すなわち、イエス・キリストのこと。

かることができるでしょう。　私の罪、すなわち故意に犯した罪も、無知のうちに犯した罪も顧みず、古より御心にかなった者たちと共に、私の魂をも御受けください。主よ、御名の栄光を呼び求める者たちを覚えてください。あなたは永遠に祝福され、賛美される方です。アーメン。

祈りを捧げた後、聖ゲオルギオスは喜びをもって自らの頭を剣の下に伏せ、こうして四月の二十三日に息を引き取りました。彼は信仰を汚れなく保ち、その信仰告白を立派に全うしたのです。それゆえ、彼は選ばれた義の冠を授けられました[3193]。

これこそが、勇敢な戦士の偉大な功績の祝典であり、敵に対する彼の戦いと輝かしい勝利である。このように奮闘したことにより、彼は朽ちることのない永遠の冠にふさわしい者とされたのである。　彼の祈りによって、私たちもまた、義人の分け前と、私たちの主イエス・キリストの再臨の日に御右の座に立つことを授からんことを。主イエス・キリストには、世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしい。アーメン。

聖大殉教者ゲオルギオスの奇跡

シリアの地には、ラメルと呼ばれる町があり、そこには聖大殉教者ゲオルギオスの名に因んで石造りの教会が建てられていました。しかし、その場所には、教会の建物を支えるための大きな石柱を作るのに適した石が見当たりませんでした。そのような石柱は通常、遠く離れた国から購入され、海路で運ばれてくるものでした。　ラメルの敬虔な市民の多くは、建設中の教会のために石柱を購入しようと、さまざまな国へと旅立った。その目的で旅立ったのは、聖大殉教者ゲオルギウスへの熱意と信仰を持ち、わずかな資金でゲオルギウス教会のための石柱を一つ購入したいと願っていた、ある敬虔な未亡人でもあった。　ある国で美しい柱を購入した彼女は、それを海岸まで運びました。そこでは、数本の柱を購入していたラメルの市長が、それらを船に積み込んでいました。そこでその女性は、高官に懇願し、自分の柱もその船に乗せて、殉教者の教会まで運んでくれるよう頼みました。その金持ちは彼女の願いを聞き入れず、柱を載せることもなく、自分の柱だけを船に積み込んで出航してしまった。すると、その女性は悲しみのあまり地面に倒れ込み、涙ながらに大殉教者に助けを求め、何とかして自分の柱をラメルの教会まで届けてくれるよう祈った。　悲しみと涙の中で彼女は眠りにつくと、夢の中に聖大殉教者ゲオルギオスが、軍司令官の姿で馬に乗った姿で現れ、彼女を地面から抱き上げ、こう言った。

「おお、女よ、どうしたのか、話してくれ。」

彼女は聖人に悲しみの理由を打ち明けた。聖人は馬から降りて、彼女に尋ねた。

「その柱をどこに立てたいのか？」

彼女は答えた。

「教会の右側に。」

すると聖人は直ちに、指で柱に次のように書き記した。

「この未亡人の柱は、教会の右側にある柱の列の中で、二番目に立てられるようにせよ。」

そう書き終えると、ゲオルギオスは女性に言った。

「あなた自身で私を助けてくれ。」

すると、二人が柱に手をかけると、石は軽くなり、彼らはその柱を海に投げ込んだ。これが、その女性が夢で見た光景である。

目を覚ますと、彼女は柱が元の場所になかったことに気づき、神とそのしもべである聖ゲオルギオスに希望を託して、故郷へと向かった。しかし、彼女がそこに到着する前、そして船が到着する

[3193] 聖大殉教者ゲオルギオスの殉教は304年に起こった。4世紀、聖ゲオルギオスを称えてローマに教会が建てられ、そこには彼の聖遺物の一部、槍、そして軍旗が安置されている。

前、　、彼女の幻視の翌日には、彼女の柱がラメルス埠頭の岸辺に横たわっているのが発見された。ヴァシリーという名の市長が、船で自分の柱を運び、岸に上がったとき、未亡人の柱と、聖人の指によって刻まれたその上の銘文を目にした。その男は驚き、大殉教者である聖人の奇跡を理解すると、自分の罪を悟り、未亡人の願いを軽んじたことを悔い改めた。　彼は幾度も祈りを捧げてゲオルギオスに許しを請い、幻の中で現れた聖人から許しを得た。そして、未亡人の柱は、その柱に刻まれた銘文が示す場所に、敬虔な女性を偲び、聖大殉教者によってなされた奇跡への驚嘆、そして奇跡の源である我らの神キリストの栄光のために、建立されたのである。

それから何年も経ち、サラセン人がシリアを征服した頃、ラメルの町にある聖大殉教者ゲオルギオスの教会で、次のような奇跡が起こった。

ある高貴なサラセン人が、同族の者たちを伴って礼拝の最中に教会に入り、聖ゲオルギオスのイコンと、その前に立ち、イコンを礼拝し、聖人へ祈りを捧げていた司祭を見たとき、サラセン語で仲間たちにこう言った。

「この狂人が何をしているか、見えるか？　板に祈っているのだ。さあ、弓と矢を持ってこい。この板を射抜いてやる。」

すぐに弓が運ばれてくると、サラセン人は皆の後ろに立ち、弓を引き、大殉教者のイコンに向かって矢を放った。しかし、矢はイコンの方へ飛ぶことなく、上空へと舞い上がり、落下してそのサラセン人の手に突き刺さり、彼を深く傷つけた。　サラセン人はすぐに、手に激しい痛みを感じながら自宅へと向かった。痛みはますます激しくなり、サラセン人の手は腫れ上がり、風船のように膨らんでしまい、激しい苦痛のあまり、サラセン人はうめき声を上げた。

そのサラセン人の家には、数人のキリスト教徒の女奴隷がいた。彼は彼女たちを呼び寄せ、こう言った。

「私は、お前たちの神ゲオルギオスの教会に行き、そのイコンを射抜こうとした。しかし、弓から放った矢の軌道がずれてしまい、落下した矢が私の腕を深く傷つけてしまった。今、私は耐え難い痛みに苛まれ、死にそうになっている。」

すると、その女奴隷たちは彼にこう言った。

「あなたはどう思いますか。聖殉教者のイコンに、あのような冒涜を敢えて加えたのは、正しいことだったのでしょうか？」

サラセン人は彼女たちにこう答えた。

「この聖像には、私が今こうして病に伏すような力があったというのか？」

女奴隷たちは彼に答えた。

「私たちは書物には詳しくないので、あなたにどう答えればよいか分かりません。でも、私たちの司祭を呼んでください。そうすれば、あなたが尋ねていることについて、彼が教えてくれるでしょう。」

サラセン人は女奴隷たちの助言に従い、司祭を呼び寄せてこう言った。

「お前が崇拝していたあの板、あるいは聖像には、どのような力があるのか知りたいのだ。」

司祭は彼にこう答えた。

「私が崇拝していたのは板ではなく、私の神、すなわち宇宙の創造主です。板に描かれた聖大殉教者ゲオルギオスについては、彼が神の前で私の取り次ぎ役となってくれるよう祈っていたのです。」

サラセン人は彼に尋ねた。

「ゲオルギウスとは、あなたの神以外の何者か？」

司祭はこう答えた。

「聖ゲオルギオスは私たちの神ではなく、ただ神と私たちの主イエス・キリストのしもべに過ぎません。彼はあらゆる点で私たちと同じ人間でした。彼は、キリストを否定するよう強要した異教

徒たちから数多くの苦難に耐え、　しかし、勇敢に彼らに立ち向かい、キリストの御名のために殉教者となったことで、神からしるしと奇跡を行うという賜物を受けました。私たちキリスト教徒は、彼を崇敬し、そのイコンも尊び、まるで聖人そのものを見るかのように、それに目を向け、礼拝し、口づけをするのです。　あなたも同じことをしている。つまり、あなたの心に大切な両親や兄弟が亡くなったとき、あなたは彼らの衣服を見つめ、その前で泣き、それらに口づけをする。その衣服の中に、まるで亡くなった人々そのものがいるかのように思い描いているのだ。　まさにそのように、私たちも聖人のイコンを崇敬している――神としてではなく（そんなことは決してあってはならない！）、奇跡を起こし、そのイコンそのものでさえも奇跡をもたらす神の僕たちの像としてである。聖なる殉教者のイコンに矢を放つという無謀な行為に及んだあなた自身も、他者への教訓と戒めとして、その力を身をもって知ることになったのだ。

これを聞いて、サラセン人は言った。

「では、私は今、どうすればよいのか？　ご覧の通り、私の手はひどく腫れ上がっている。耐え難いほどの苦痛に苛まれ、死が近づいている。」

司祭は彼に言った。

「もし生き延びて回復したいのなら、聖大殉教者ゲオルギオスの聖像をここに持ってくるよう命じなさい。それを自分の寝床の上に置き、聖像の前に聖油を入れたランプを置き、一晩中灯を灯し続けなさい。　朝になったら、そのランプの聖油で痛む手を塗り、自分が癒されると固く信じなさい――そうすれば、あなたは元気になるだろう。

サラセン人は直ちに司祭に聖ゲオルギオスのイコンを持ってくるよう頼み、それを喜んで受け取ると、司祭に教えられた通りにした。朝、彼はランプの聖油で自分の手に塗ると、たちまち手の痛みが消え、手は元通りになった。

この奇跡に驚き、感銘を受けたサラセン人は、司祭に「聖ゲオルギオスについて、その書物に何か書かれてはいないか」と尋ねた。

司祭は聖人の生涯と受難を記した物語を持ち出し、サラセン人に読み聞かせ始めた。サラセン人はその朗読に熱心に耳を傾けながら、ずっと殉教者のイコンを手に持ち、イコンに描かれた聖人をまるで生きた人間であるかのように見据え、涙を流しながらこう叫んだ。

「おお、聖ゲオルギオスよ！あなたは若くして賢明であったが、私は年老いていながら愚かである！あなたはまだ若い頃に神に喜ばれたが、私は老いまで生き延びたにもかかわらず、いまだに真の神を知らない！どうか私のためにあなたの神に祈り、私もまた神の僕となれるよう、神が私をその御心に適う者とさせてくださるよう願ってほしい！」

その後、サラセン人は司祭の足元にひれ伏し、聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願し始めた。

司祭は当初、サラセン人を恐れていたため、これに同意しようとはしなかった。しかし、彼の信仰の深さを目の当たりにし、その懇願に抗うことができなかったため、サラセン人の知らないうちに、夜陰に乗じて彼に洗礼を授けた。

朝になると、新たに洗礼を受けたサラセン人は家を出て、町の真ん中で皆の目の前で、熱意を込めて大声で真の神であるキリストを説き始め、サラセン人の信仰を激しく非難し始めた。　するとすぐに、大勢のサラセン人が彼を取り囲んだ。怒りと激怒に満ちた彼らは、野獣のように彼に襲いかかり、剣で彼を細かく切り刻んだ。

このようにして、そのサラセン人は、聖大殉教者ゲオルギオスの祈りによって、極めて短い間にキリストのための立派な信仰の業を成し遂げ、殉教者の冠を受けたのである。

ミティリーネ島[3194] には、聖大殉教者ゲオルギオスの栄光を称えて建てられた、壮大で輝かしい教会があった。　この島の住民たちは、聖殉教者の記念日にこの教会に集まり、聖ゲオルギオスを

[3194] ミティリーネ島は地中海の北部に位置していた。

共に厳かに称えるという敬虔な習慣を持っていた。このことを知ったのは、クレタ島[3195] に住むアガリア人[3196] であり、彼らはある晩、その場所を襲撃した。 教会の外にいたキリスト教徒たちは、アガリア人の手から逃れて助かったが、教会内にいた者たちはアガリア人に捕らえられ、捕虜として連行された。その中には、あるキリスト教徒の青年も捕らえられ、クレタ島へ連行された後、アガリア人の首領に仕えることとなった。

この若者の両親は、息子を失ったにもかかわらず、敬虔な習慣を変えることはなかった。聖殉教者の年次記念祭が訪れると、彼らは聖殉教者に祈りを捧げるために教会へ向かい、その後、自宅で聖ゲオルギオスを称え、その記憶を偲ぶ祝宴を催した。　客たちが宴に集まり始めた頃、その捕らえられた若者の母親は、自宅からほど近い教会を訪れ、涙ながらにひざまずいて、聖人に熱心に祈りを捧げた――聖人ご自身がご存知の方法で、息子を捕虜の状態から救い出してくれるよう。彼女の切実な祈りは聞き届けられた。　彼女が祈りを終えて宴会の客たちのところに戻ったとき、ちょうどその瞬間、夫が祈りを込めて「　」と聖大殉教者を呼びかけ、彼を助け手であり守護者として称え、客たちをもてなそうとしていたところであり、給仕人たちはすでに準備を整えていた。　――そのまさにその瞬間、その若者は聖ゲオルギオスによって捕らわれていた場所から連れ出され、両親の家へと連れてこられた。その時、若者は手にワインの入った器を持っており、それを母親に差し出していた。実は、その瞬間、その若者はクレタ島にいて、食事をとっていたアガリア人の長に仕えており、ちょうど彼にワインを差し出そうとしたまさにその時、古代のアブバクムのように、空中に引き上げられ、ワインで満たされた器と共にミティリーネ島へと運ばれたのである。　食卓に着いていた者たちは皆、その若者を目にして大いに驚き、口を揃えて彼に尋ねた。

「どこにいたのか、どこから来たのか、そしてどうやってここに来たのか？」

すると彼はこう答えた。

「私はこの器にワインを注ぎ、上司に差し上げようとしていました。しかしその瞬間、馬に乗ったある立派な男に突然連れ去られ、その男は私をも馬に乗せてくれました。　片手でその男の帯につかまり、もう片方の手にはこのワインの入った器を持っていました。そして、ご覧の通り、こうしてここにたどり着いたのです。

これを聞いて、皆はこのあまりにも素晴らしい奇跡に驚き、食卓から立ち上がって、神とその御使いである聖大殉教者ゲオルギオスに感謝を捧げました。

この奇跡に似た話を、修道士コスマも語っています：

「ギリシャのバシレイオス王の治世中[3197] （当時、私はまだ若者でした）、私が仕えていた上司である軍司令官が、王の命によりキプロス島[3198] へ派遣されました。ここに到着すると、私たちは、聖大殉教者ゲオルギオスの名に栄光と誉れを捧げるために建てられた教会で、その祝日に聖ゲオルギオスによって行われた奇跡の話を耳にしました。具体的には、　その教会で奉仕していた司祭の息子がサラセン人に捕らえられていたが、今日――聖ゲオルギオスの記念日に――ミサが行われている最中に、父親のすぐそばに現れたのである。総督は、その司祭とその息子を呼び寄せ、息子にこう尋ねた。

「どのようにしてサラセン人から逃れたのか？」

[3195] クレタ島は、地中海の大島の一つであり、地中海の東部、ギリシャの南に位置している。紀元前1000年頃、ギリシャからの移住者たちがここに定住した。 西暦70年代、クレタ島はローマの支配下に入った。西暦650年以降、クレタ島はサラセン人の襲撃にひどく苦しめられ、823年には島を制圧された。現在、クレタ島はギリシャ王室による暫定統治下にある（欧州列強の監視下）。

[3196] アガリア人とは、サラセン人のことである。「アガリア人」という名称は、もともとアラビアのベドウィン遊牧民を指すもので、伝承によれば、アブラハムの奴隷であったハガルに由来するとされる。しかしその後、この呼称はキリスト教の著述家たちによって、アラブ人全般、さらにはイスラム教徒にも広く適用されるようになった。

[3197] バシレイオス1世（マケドニア人）は867年から886年まで在位した。

[3198] キプロス――地中海の北東端に位置する。

すると、その若者は次のように語った。

「聖ゲオルギオスが私を解放してくださったのは、神の御心でした。私自身、どうやってここに来たのかは分かりません。ただ、すでに3年間も捕虜として囚われていたことだけは分かっています。」　ある時、父は私を数人の同行者と共に船に乗せ、いくつかの買い出しをさせました。しかし、サラセン人に襲われ、私たちは全員捕らえられ、私はパレスチナへ連行されました（当時、エルサレムおよびパレスチナ全土はすでにサラセン人の支配下にありました）。　「ここで私は――」と若者は語り続けた。「3年間、主人の下で仕えてきました。今日でちょうど18日目になりますが、主人はここで体を洗おうと、自分の寝床を風呂場に運ぶよう私に命じました。そして、体を洗い終えると、私にこう言いました。

『飲み物を運んできてくれなかったか。私が飲むために』

そこで私は（若者は語り続ける）こう答えました：

「いいえ、持ってきませんでした、ご主人様」

主人はすでに私を殴ろうとしていましたが、私はその手をかわし、女主人の家へ向かい、彼女からその飲み物が入った器を受け取ると、すぐに風呂場へ、主人のもとへ戻りました。　私が通った道は、キリスト教の教会を横切っていた。その教会ではちょうどその頃、聖体礼儀が執り行われていた。私は聖ゲオルギオスに捧げられるコンダクを耳にした。「神によって育てられ、現れた」と。その歌声に心を打たれ、涙がこぼれそうになり、私は心の底からこう言った。

「聖大殉教者ゲオルギオスよ！　果たして、父の嘆きは神のもとにも、あなたのもとにも届かなかったというのか？　果たしてあなたは、あなたの名に捧げられた教会で、私のためにあなたに懇願し、この捕囚から私を救い、この奴隷状態から私を解放してくださるよう祈り、流している父の涙を、見捨ててしまうというのか？」

そう言うと、私は風呂場へ向かった。主人は私の目に涙が浮かんでいるのを見て、私を叱りつけ、怒りを込めてこう言った。

「その飲み物を私に注げ。」

私は器に飲み物を注いだ。すると主人は私に言った。

「もう少し足せ。」

私が器を手に取り、そこから飲み物を注ごうとしたとき、主人の姿がぼやけて見え始めたように感じた。私は叫んだ。

「ご主人様、見えません！」

その瞬間、ある力が私を地面から引き上げ、それゆえ主人が私に何を言っているのかは聞こえなくなったが、次のような歌声が聞こえてきた。「唯一の聖なる方、唯一の主イエス・キリスト、父なる神の栄光のために。　アーメン」。その瞬間、私は自分が祭壇の中にいるのを見ました。また、聖杯を手に持ち、教会の奉仕者たちにこう言っている父の姿も見えました。

「飲み物を注いでください。」

父のそばに立っていた私は、手に持っていた飲み物を聖杯に注ごうとした。というのも、私が風呂場でサラセン人のそばに立ち、飲み物の入った器を手にしていたまさにその瞬間――その同じ瞬間に、私は突然、典礼を執り行っている父のそばの祭壇の中にいたからである。　父は私を見て、共祭者たちに尋ねた。

「この若者は誰か？」

彼らは驚いてこう答えた。

「彼が誰で、どこからここに来たのかは分かりません」――というのも、私は頭を剃り、サラセン人の服を着ていたからだ。そこで私は父に言った。

「父上！　まさか私を分からないのですか？　私はフィロフェイ――あなたの息子です。」

すると父は私にこう言った。

「その手にあるその器は何のためか。中には何が入っているのだ？」

私はこう答えた。

「これはサラセン人の飲み物です。つい先ほど、私は主人のと共にエルサレム近郊の浴場にいました。そして、この飲み物を彼に差し上げようとしたその瞬間、突然、この神殿であなたのそばに現れたのです。」

これを聞いて、父はひどく驚愕し、聖なる聖杯を手に持ったまま、思わず落としそうになった。その瞬間、私も飲み物が入った器を手に持ったまま、父の手を支えながらこう言った。

「お気になさらないでください、父上。礼拝を最後までお済ませください。」

その後、父は聖杯を聖卓に置き、両手を天に向けて、神と聖人ゲオルギオスに感謝を捧げた。私が大理石の床に落とした器は、割れることはなかった。

礼拝を終えると、父は私を抱きしめ、涙ながらに何度も私の頬にキスをした。それから私たちは家路についた。

親戚や友人たちは皆、私に起きた出来事を聞きつけ、我が家に集まってきた。そして私を見るやいなや大いに喜び、瞬く間にサラセン人から私を救い出してくださった神と、その聖人である聖ゲオルギオスを賛美した。

地方長官と彼に同行していた者たちは皆、この司祭の息子の話を聞き、神と聖ゲオルギオスを賛美した。その後、この若者と彼の父に多額の贈り物を与え、彼を名誉をもって送り出した。

聖大殉教者ゲオルギオスによる、これと似たもう一つの奇跡について、次のように伝えられている。

パフラゴニア[3199] のアマストリデという町に、レオンティウスとテオファナという敬虔な夫婦が住んでいた。二人は聖大殉教者ゲオルギオスに対して深い信仰を抱いており、彼らの住む場所からほど近く、パルテニオスと呼ばれる川のほとりにあった、その聖人の名を冠した教会に頻繁に足を運んでいた　（川の名前から、その教会は「パルテニエ」という通称で呼ばれていた）。この敬虔な夫婦は、聖人への愛から、自らの財産を費やしてこの教会を飾り立て、この聖殉教者を自分たちの全財産の守護者であり、恵みの与え手であると信じていた。　毎年、この敬虔なキリスト教徒たちは、聖殉教者の記念祭を誠実かつ敬虔に執り行い、その日には多くの施しを行い、貧者や困窮者、そして親族や友人たちのために宴を催した。　彼らにはゲオルギイという名の息子がいた。常にこの聖殉教者を心に留めていた彼らは、息子にもゲオルギイという名を付けた。

当時、ギリシャ人を統治していたのは、コンスタンティノス7世[3200]　――レオン「賢王」の息子――であった。その時、ブルガリア人とギリシャ人の間で戦争が始まった。ブルガリア人はハンガリー人やスキタイ人と同盟を結び、ギリシャの領土に侵攻して荒らし回り、住民を捕虜にした。　このため、ギリシャ人たちは戦争に備え、　する必要があった。パフラゴニアのアマストリダという町の住民であるレオティオスは戦士であったため、彼もまたブルガリア人との戦いに赴かなければならなかった。　しかし、レオンティウスはすでに高齢であり、息子のゲオルギオスは若年であったため、彼は自分の代わりに息子を軍に送り出すことに決めた。息子を連れて、レオンティウスとテオファナはまず彼と共に前述の教会へ向かい、そこで大殉教者のイコンの前で祈りを捧げながら、次のように語った。

「聖なる大殉教者ゲオルギオスよ、私たちはあなたを愛するゆえに、あなたの名に因んで名付けたこの一人息子を、あなたに託します！　どうか彼にとって旅路の導き手となり、戦いの守護者となってください。そして、彼を健やかに生きたまま私たちのもとへ返してください。そうすれば、私

[3199] 小アジア地方。

[3200] コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトス（レオ6世「賢王」の息子）は、912年から969年まで在位した。

たちは信仰によってあなたから恵みを受け、多くの善行をもって、あなたによる私たちへの配慮と慈しみを常に称え続けることができるでしょう。

このように祈った後、彼らは息子をギリシャ軍の部隊へと送り出した。

その後、戦争が始まった。当初、ギリシャ軍はブルガリア軍を圧倒していたが、やがてブルガリア軍は力を結集し、神の御許しによりギリシャ軍に勝利し始めた。敵同士の間で決戦が繰り広げられ、多くのギリシャ兵が敵の剣によって倒れた。

その頃、レオティオスの息子ゲオルギオスは、あるブルガリア人に捕らえられたが、聖ゲオルギオスの祈りによって死を免れた。というのも、そのブルガリア人は彼の若さと美しい容貌を憐れみ、ゲオルギオスを赦して自分の国へ連れ去り、そこでゲオルギオスは主人の下で奴隷として仕えたからである。

一方、レオンティウスとテオファナは、ギリシャ軍がブルガリア軍に敗れたと聞き、息子が戻ってこないのを見て、息子が戦場で殺されたと思い、慰めようのないほど泣きじゃくった。彼らは前述の教会を訪れ、聖大殉教者のイコンに向かって次のように訴えた。

「キリストの殉教者よ、私たちがあなたに息子を託したのは、彼が天の鳥や地の獣の餌となるためだったのか？　あなたは、私たちが毎日捧げる祈りや嘆きを、本当に聞いておられるのか？　もし、すでに老境に入った私たちのために憐れみをかけてくださらないとしても、せめてあの若者の花のような青春には、憐れみをかけてほしい。」　一体何のために、あなたは私たちの謙虚さを軽んじたのですか、神に愛された者よ？

長老たちは、こうした言葉やそれに類する言葉を、大きな叫び声と多くの涙を流しながら語ったため、その教会にいた者たちは皆、涙をこらえることができなかった。とりわけ、その若者の母は、毎日絶え間なく泣き続けていた。

前述のブルガリア軍によるギリシャ軍への勝利は、8月に起こった。　秋と冬が過ぎ、4月になり、聖大殉教者ゲオルギオスの記念日が近づいてきた。レオントイと妻は、息子が戦場で命を落としたと思い、すでに息子の命は絶望的だと考えていたが、それでも聖殉教者への敬虔な心を忘れず、慣例に従ってその記念日に豪華な昼食を用意した。

教会の礼拝が終わると、レオティウスとテオファナは、親戚、知人、物乞い、貧しい人々など、多くの客を自宅に招いた。食事の間、客たちは終始、戦場から戻らなかったレオティウスとテオファナの息子、ゲオルギウスについてばかり語り合った。　若者の両親は終始泣きじゃくっていたが、客たちは二人を慰めようと努め、とりわけ深く悲しんでいる母親を熱心に慰めた。

一方、捕虜となっていたゲオルギーは、主人のもとで料理人の務めを果たしていた。その日、食事を用意しながら、彼は実家やそこで開かれていた祝宴のことを思い出し、また親族や友人、知人たちのことも思い浮かべ、心の中でこう考えた。

「今、実家ではどんな昼食が振る舞われているのだろうか。誰が招かれているのだろうか。私のことについては、生きていると思っているのか、それとも死んだと思っているのだろうか」

そう独り言を呟きながら、ゲオルギーは苦々しく泣いた。

その間にも、主人の昼食の時間となり、ゲオルギー自身が鍋に入った料理の一つを主人の元へ運ばなければならなかった。ゲオルギーは涙をぬぐい、オーブンから熱い鍋を取り出して運んだ。すると突然、彼はまるで実家の客間の真ん中に立っているかのような感覚に襲われた。　なんと大きな奇跡だろう！そこにいた者たちは皆、熱い土鍋を持ったレオティエフの息子ゲオルギーを見て、大きな恐怖に襲われた。　一方、彼の両親は、目の前に幽霊が現れたのだと思った。しかし、それが幽霊ではなく現実だと気づくと、大きな喜びで息子のもとへ駆け寄り、彼の胸に抱きつき、抱きしめてキスをし、この予想外の大きな喜びに涙を流した。　そして、ゲオルギーに「どうやって生き延びたのか、どこにいたのか、どうやってここに来たのか」と尋ね始めると、彼は捕虜になった経緯から解放されるまでの経緯まで、すべてを詳しく語った。具体的には、彼は次のように言った。

「ついさっきまで、私は主人の台所で働いていました。　主人に、この鍋に入った食事を運ぶよう命じられた。鍋を手に取り、主人のもとへ向かったが、主人が食事をしていた部屋へと続く階段を数歩上ったところで、突然、馬に乗ったある戦士が、言葉に尽くせないほどの光を放っているのを目にした。　その戦士は、私とこの土鍋を一緒に持ち上げ、どういうわけか、こうして皆さんの前に私を連れてきたのです。

これを聞いて、そこにいた者たち、とりわけゲオルギイの両親は、神と、その聖なる御使いである大殉教者ゲオルギイに心から感謝を捧げた。

その後、皆がその壺の料理を食べ始めたとき、新たな奇跡が起こった。壺から食べれば食べるほど、その量はまた元通りになったのだ。壺はたった一人で食べきれるほど小さかったが、食事をする人は非常に多かったにもかかわらず、皆が満腹になるまで食べ、神を賛美しながらこう言った。

「ほら、聖大殉教者ゲオルギオスが、ご自身の祝日に、ブルガリア人から私たちに美味しい食事を送ってくださったのだ！」

その後、その壺は多くの贈り物や供物と共に聖大殉教者の教会へ運ばれ、聖大殉教者ゲオルギオスによって成し遂げられた輝かしい奇跡を記念して、聖なる器類の中に保管された。

前述の聖ゲオルギオス教会は極めて古く、すでにひどく老朽化しており、いつ崩れ落ちてもおかしくない状態だった。しかし、新しい教会を建てたり、その老朽化した教会を改修したりする者は誰もいなかった。というのも、その地域の住民が貧しかったため、その教会は放置されていたからである。ある日、そこで次のような奇跡が起こった。

子供たちがこの教会の周りに集まって遊んでいたところ、いつも遊びで負かしていたある少年を、罵倒し、嘲笑していた。絶え間ない嘲笑に耐えかねたその少年は、聖ゲオルギオスの教会に向かってこう言った。

「聖ゲオルギオスよ！　私も敵に打ち勝てるよう助けてください。そのお礼として、あなたの教会に大きなパイを捧げます。」

そして実際に、その少年は遊びで仲間たちに勝利し、一度だけでなく二度、さらに何度も勝利を収めた。

母のもとへ戻った少年は、聖人にパイを捧げることを約束したことを伝え、聖人への誓いを果たすために母にパイを作ってほしいと頼んだ。

母親は息子への愛情と、殉教者への敬意から、息子の願い通りにパイを作り、まだ温かくて冷めきっていないうちに息子に渡した。少年はパイを教会へ持ち込み、祭壇の前に置くと、一礼してその場を去った。

ちょうどその時、その教会の前を4人の商人が通りかかった。彼らは聖ゲオルギオスに礼拝を捧げるために教会に入り、床の上に置かれた美味しそうなパイ（まだ冷めておらず、香ばしい湯気が立ち上っていた）を見つけた。商人たちは互いにこう言った。

「聖人にはこんなものいらないだろう。パイを食べて、その代わりに香を供えよう。」

パイを食べ終えると、彼らは教会の出口へ向かったが、ドアが壁に見えてしまい、どうしても出口を見つけることができなかった。　そこで彼らは床に銀貨を一人一枚ずつ置いたが、それでも出口を見つけることはできなかった。その後、四人で一つの金貨を置き、聖人が彼らを外へ出るのを助けてくれるよう熱心に祈った。しかし、今回もまるで盲目になったかのように、出口を見つけることはできなかった。　ついに、4人全員がそれぞれ金貨を1枚ずつ置き、さらに熱心に祈ったところ、教会の扉が開いているのを見つけ、そこを通り抜けて外に出ることができた。

これらの金貨や銀貨は、その教会の改修に必要な資金を集めるきっかけとなった。というのも、その奇跡の噂がその国中に広まり、多くの敬虔な人々が自発的に金や銀をそこに持ち寄ったからである。　その資金によって、より広々とした新しい石造りの教会が建てられ、十分に装飾され、礼拝

に必要なあらゆる備品が整えられた。その教会では、キリスト・神の栄光と、聖大殉教者ゲオルギオスの称賛のために、多くの奇跡が起こった。

また、聖大殉教者ゲオルギオスが、致命的な蛇に噛まれた少年に対して行った次の奇跡についても伝えられている。この奇跡についての話は、敬虔な修行者の一人であるアッバ・ゲオルギオスによって伝えられた。彼には、名前の由来となった[3201]の助っ人――聖ゲオルギオス――がいた。

「ある日、私が山を登りながら十字架を手に持っていたところ、ある年老いた修道士に出くわしました。彼は私から十字架を受け取ると、私の前を歩いていきました。少し進むと、彼は小道へと曲がりました。　私は彼の後を追った。歩き続けると、羊の群れと、地面に横たわり、蛇に噛まれて死にかけている羊飼いの少年が見えた。その場所の近くには泉があった。老修道士は私に言った。

「水を汲んで、十字架に注ぎかけなさい。」

そこで私たちは水を汲み、少年の口を開かせて、十字架に注いだその水を彼の口に流し込んだ。その際、老人はこう言った。

「至聖なる三位一体の御名において、聖大殉教者ゲオルギオスがあなたを癒やす！」

その少年は身をかがめると、体の中から致命的な毒を吐き出し、立ち上がった。

すると、老人は彼にこう言った。

「教えてくれ。昨日、お前は、羊の世話を任されていたのに、三枚の銀貨で売ってしまったあの貧しい未亡人に、誓いを立てなかったか？『狼に羊を食べられてしまった』と彼女に言わなかったか？」

少年は彼に答えた。

「はい、父よ、確かにその通りでした。しかし、どうしてそれを知ったのですか？」

老人は彼に言った。

「私が自分の小部屋に座っていると、白い馬に乗ったある男がやって来て、こう言ったのだ。

『ソフロニオスよ、立ち上がって、あなたの右側、南にある泉へ急いで行きなさい。そこには、蛇に噛まれた少年がおり、また、木から彫り出された十字架を手に持った修道士もいるだろう。その十字架を受け取ったら、それを水で洗い、その水を少年に飲ませなさい。その際、次の言葉を言いなさい：『父と子と聖霊の御名によって、神の僕、殉教者ゲオルギオスがあなたを癒やす。』　それから、その若者にこう言いなさい。「もう二度と神の御名や聖人の御名にかけて誓ってはならない。誰に対しても不正な行いをせず、あの貧しい未亡人に羊を返せ。そうしなければ、お前にさらに悪いことが起こるだろう。」

若者は長老からこの言葉を聞くと、その足元にひれ伏して言った。

「お許しください、父よ。すべてはまさにその通りでした。私はあの未亡人の羊を三枚の銀貨で売り払い、昨日、狼に食べられたと嘘をついて彼女を騙しました。その女性は私に『それは本当なのか、そうでないのか』と尋ねました。　すると私は彼女にこう答えました。「はい、私は真実の神を証人として呼び出すことができます。」するとその女性は私に言いました。「私が貧しい未亡人であることを知らないのですか？　まあ、あなたが思うようにしてください。しかし、神と聖ゲオルギオスがあなたに報いを下すでしょう。なぜなら、私はその羊を聖ゲオルギオスの祝日に貧しい人々に施すと約束していたからです。」　そこで私は――と若者は続けた――誘惑に負けて罪を犯してしまったので、父よ、どうか私のために神と聖ゲオルギオスに祈ってください。私の罪が赦されますように。　そして私は今すぐ、その女性に聖ゲオルギオスの記念日に山羊三匹を差し上げ、この先一生、毎年聖殉教者の記念日には、貧しい人々のために、私が稼ぐものの十分の一を捧げ続けます。

このようにして癒やされたその若者は、至福のソフロニオスに祈りと赦しを請い、神と神の御心に適う者である聖大殉教者ゲオルギオスに感謝しつつ、自分の仕事に取り掛かった。

[3201] すなわち、同名であり、同じ名前を持つ人物である。

また、聖大殉教者ゲオルギオスが、故郷であるパレスチナに近い、シリア・フェニキア地方の地中海沿岸に位置するベイルート[3202] で、聖大殉教者の遺体が埋葬されたリダ市のほど近くで成し遂げた、蛇を退治した輝かしい奇跡についても触れないわけにはいかない。　この奇跡が行われた場所は、パレスチナを旅する人々に示されている。この奇跡に関する語り部たちの記述によれば、それは次のような状況下で起こったという。

前述のベイルート市の近く、レバノン山脈の麓には大きな湖があり、そこには巨大で恐ろしい、人々を滅ぼす大蛇が棲んでいた。その大蛇は湖から現れては多くの人々をさらい、湖へと引きずり込み、そこで食い尽くしていた。　人々は何度も武器を手に取ってそれに立ち向かったが、そのたびに蛇は人々を追い払った。というのも、蛇が町の城壁に近づくと、その破壊的な息で空気を満たしたため、それだけで多くの人が病に倒れ、死んでしまったからである。 このため、その町には常に 悲しみ、嘆き、叫び、そして大きな泣き声が絶えなかった。この町には不信仰な人々――偶像崇拝者たちが住んでおり、彼らの王自身もここに住んでいた。

ある日、その町の住民たちは集まり、王のもとへ赴いてこう言った。

「私たちはどうすればよいのでしょうか。あの蛇のせいで、私たちは滅びようとしているのですから。」

すると王は彼らにこう答えた。

「神々が私に啓示してくださることを、あなた方に伝えよう。」

その後、王は、偶像に住む悪魔たち――人間の魂を滅ぼす者たち――の教えに従い、彼らに次のような決定を告げた。もし全員が死にたくないのなら、毎日くじ引きで決めた自分の子供、息子か娘を、その蛇の餌として差し出せ、と。さらに王はこう付け加えた。

「私の番が回ってきたら、私には娘が一人しかいないが、彼女も差し出すつもりだ。」

その町の住民たちは、この王の――いや、むしろ悪魔の――助言を受け入れ、身分の高い者も低い者も問わず、毎日、息子や娘のうちの一人を大蛇の餌として差し出した。もっとも、彼らは子供たちを深く惜しみ、涙を流していた。　大蛇の餌として差し出される者たちは、湖のほとりに、最高の服を着せられて立たされた。すると、大蛇は湖から現れて、彼らをさらい去り、食べてしまった。

その町のすべての人々の順番が回ってきたとき、彼らは王のもとへやって来て、こう言った。

「王よ、あなたの助言と決定に従い、私たちは子供たちを蛇に差し出しました。もう全員の番が回ってきました。さて、今、私たちにどうせよとお命じになりますか？」

王はこれに対し、こう答えた。

「私も娘を差し出そう。たとえ彼女が私の唯一の娘であっても。その後、神々が私たちに何を示されるか、その時に皆に伝えよう。」

王は娘を呼び寄せ、できる限り美しく着飾るよう命じた。王は娘を深く憐れみ、宮廷の者たちと共に涙を流したが、悪魔たちを通じて伝えられた、まるで神聖なものであるかのようなその決定を、どうしても破ることはできなかった。　娘を蛇の餌として送り出す準備を整え、王は宮殿の高みから彼女を見つめ、涙を浮かべてその姿をじっと見送った。

一方、その乙女はいつもの場所、湖のほとりに立たされていた。湖から現れた蛇に食い殺される死の瞬間を待ちながら、彼女は苦々しく泣きじゃくっていた。

すべての人々の救いを望み、その町をも精神的・肉体的な破滅から救うことをお許しになった神の御業により、ちょうどその時、天の王の戦士である聖大殉教者ゲオルギオスが、手に槍を携えて馬に乗ってその場所へとやって来た。

湖のほとりに立ち、悲しみに暮れて泣いている少女を見て、彼は彼女に尋ねた。

「なぜここに立っているのか。何のために泣いているのか？」

[3202] ベイルート（またはベリト）――古代において最も重要な都市であり、フェニキアの都市であった。

すると彼女はこう答えました。

「優しい若者よ！　私と一緒に滅びてしまわないよう、早く馬に乗ってここから逃げなさい。」

すると聖人は彼女に言った。

「恐れることはない、お嬢さん。ただ、あなたを見つめる大勢の人々の前で、一体何を待っているのか教えてくれ。」

乙女は彼に答えた。

「立派な若者よ！　あなたが勇敢で気高い人であることはわかっています。でも、なぜ私と一緒に死にたいのですか？　早くここから逃げなさい！」

すると、聖人は彼女に言った。

「いや、君がなぜここに立っているのか、何のために泣いているのか、そして誰を待っているのかを教えてくれるまでは、私はこの場所を離れない。」

その後、その娘は、蛇のことや自分のことなど、すべてを順を追って彼に語った。

聖ゲオルギオスは彼女に言った。

「恐れるな、乙女よ。私は、私の主、まことの神の名によって、あなたを蛇から救い出すから。」

すると彼女は彼にこう答えた。

「勇敢な戦士よ！　なぜ私と共に死のうとするのですか？　逃げてください。そして、あなた自身をこの悲惨な死から救ってください。私がここで一人で死ぬだけでも十分です。ましてや、あなたは私を蛇から救うことなどできず、あなた自身も命を落とすことになるでしょう。」

乙女が聖人にそう話している最中、突然、湖から恐ろしい大蛇が現れ、いつもの獲物へと向かってきた。

それを見た乙女は、大きな声で叫んだ。

「逃げなさい、人よ、蛇がもうやってくる！」

聖ゲオルギオスは、十字を切って主を呼び求め、「父と子と聖霊の御名によって」と唱えると、馬に乗って蛇へと突進し、槍を振りかざして蛇の喉を力強く突き刺し、それを打ち倒して地面に押さえつけた。　聖人の馬は、その蛇を蹄で踏みつけました。その後、聖ゲオルギオスは乙女に、自分の帯で蛇を縛り、犬のように従順な状態で町へ連れて行くよう命じました。一方、民衆は乙女に引かれていく蛇を驚きの眼差しで見つめ、恐怖のあまり逃げ出しました。そこで聖ゲオルギオスは民衆にこう言いました。

「恐れるな。ただ主イエス・キリストに望みを置き、彼を信じなさい。なぜなら、あなたがたを蛇から救うために、主がわたしをあなたがたのところへ遣わされたのだから。」

その後、聖ゲオルギオスはその剣で、町の真ん中でその蛇を斬り殺した。町の住民たちは、蛇の死骸を町の外へ運び出し、焼き払った。

その後、王とその町に住む民は、主イエス・キリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。洗礼を受けた者は、女性や子供を除いても2万5千人にのぼった。その場所には後に、極めて広大で美しい教会が建てられ、その名は「至聖なる聖母マリア」、　天の王、父なる神の御娘、御子の母、聖霊の花嫁――である。また、キリストの教会と、あらゆる正信の魂を、その助けによって、地獄の深淵にいる目に見えない貪り手や、死をもたらす蛇のような罪からも守り抜く、勝利の聖ゲオルギオスを称えるためでもあった。――彼が、前述の乙女を目に見える蛇から救ったのと同様に[3203]。

[3203] この物語に基づき、聖大殉教者ゲオルギオスは、イコンにおいて、白い馬にまたがり、恐ろしい大蛇を槍で打ち倒す騎士の姿でしばしば描かれている。　勝利の象徴としての聖ゲオルギオスの騎馬像は、わが国の国章に取り入れられているほか、正教会の戦士が戦功を称えられて胸に授与される勲章にも採用されている。– 聖大殉教者ゲオルギオスは、この

ここで、ある新たな奇跡も起こった。　この教会が至聖なる聖母マリアと聖大殉教者ゲオルギオスに捧げられて奉献されたとき、ここに注がれる神の恵みのしるしとして、この教会の祭壇から「生ける水」の泉が湧き出し、栄光の王ご自身（その御許に永遠の命の泉がある）の栄光を求めて信仰をもって駆け寄るすべての人々のあらゆる病を癒やし、　三位一体の神、父と子と聖霊、その聖徒たちによって永遠に賛美される方の栄光のために、あらゆる病を癒やす「生ける水」の泉が湧き出たのである。アーメン。

トロパリオ、第4調：

捕らわれ人の解放者、貧者の守護者、病める者の医者、王たちの擁護者、勝利を収めた大殉教者ゲオルギオスよ、キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

同トロパリオ、同声調：

キリストの受難者よ、あなたは信仰によって善き業に励み、迫害者たちの不義を糾弾し、神に喜ばれるいけにえとして捧げられました。それゆえ、あなたは勝利の冠を受け、聖なるあなたのお祈りによって、すべての人に罪の赦しを授けてくださいます。

コンダク、第4調：

神に育てられ、最も高潔な敬虔の実践者として現れ、美徳の鎌を手に取り、涙の中で種を蒔き、喜びをもって刈り取り、血を流して苦難に耐え、キリストを受け入れ、聖なるあなたのお祈りによって、すべての人に罪の赦しを授けてくださる。

- 同日は、聖殉教者アレクサンドラ王妃および聖殉教者アナトリアスとプロトレオンの記念日である。

5月7日

4月24日（旧暦）

同日は、おそらく13世紀初頭に修業を積んだペチェルスクの聖サヴァの記念日である。その聖遺骨はアントニオの洞窟に安置されている。

私たちの尊い父、聖トマ・ユロディヴィの記念日。

4月24日の記念日

聖トマスは、ケサリアにある修道院の一つで修道士として過ごしていた[3204]。彼は、自修道院の必要経費を賄うための資金集めという務めを担っていた。この資金集めのために、彼はアンティオ

世を去った後も馬に乗って度々隣人に助けの手を差し伸べたという理由から、わが国では牧者や家畜の主たる守護聖人とみなされている。　そのため、ゲオルギエフの日、あるいは俗に「エゴリエフの日」と呼ばれる日には、ロシアの村や集落の敬虔な住民たちは、通常、冬が明けて初めて家畜を牧草地に放牧し、その際、聖大殉教者への祈りを捧げるとともに、羊飼いと家畜に聖水を振りかける儀式を行う。

[3204] ケサリア――小アジア東部に位置していたカッパドキアの主要都市。

キア[3205] へ派遣されたが、その近郊には修道院に属する村が一つあった。長老が町を訪れる際、彼は聖なる狂人としての振る舞いを演じていた。　ある日、アナスタシウスという名の、ある教会の管理人（建設責任者）が、修道院への施しを求める長老の懇願にうんざりしたため、その頬を平手打ちした。その場に居合わせた者たちは、この行為に憤り、アナスタシウスを非難した。すると、福者トマスは彼らに向き直り、預言者のような口調でこう述べた。

「これからは、私がアナスタシウスから何かを受け取ることもなければ、アナスタシウスが私に何かを差し出すこともできなくなるだろう。」

その両方の言葉はまもなく現実となった。アナスタシウスはその翌日、この世を去り、至福のトマスは街から修道院へ向かう途中、体調を崩してダフニ郊外の聖エウフィミア教会に併設された病院に立ち寄った。そこで病状が悪化し、不滅の命へと旅立ち、巡礼者たちが埋葬される場所に葬られた。

ある日、ある亡くなった巡礼の女性がここに運ばれ、この至福の長老の棺の上に埋葬された。この女性は午後2時に埋葬されたが、午後6時に土の中から彼女が現れた――そして、皆はこの出来事に大いに驚いた。　夕方、再び彼女を同じ棺に葬ったが、翌日、彼女が再び棺から放り出されているのが見つかった。そこで、彼女を別の場所に葬った。

数日後、別の女性がまったく同じようにアバ・トマスの近くに埋葬された。というのも、その地の住民たちは、主のもとで安らかに眠る長老が、自分の近くに女性が埋葬されることを快く思っていないことを理解していなかったからである。しかし、大地がこの女性をも吐き出したとき、人々は、長老が自分の聖遺物の近くに誰かが埋葬されることを快く思っていないことを理解した。

一連の出来事について、ドムナ総主教に報告がなされた[3206] 。総主教の命により、市民全員がろうそくを手に賛美歌を歌いながらダフニへ向かい、聖人の遺骨を回収し、敬意を込めて街へ運び、多くの聖なる殉教者の遺骨が安置されていたその墓所に納めた。　聖人の遺骨の上には小さな教会が建てられ、その聖なる遺骨によって、病める者たちへの多くの癒しがもたらされた。彼の祈りによってアンティオキアのペストが収まったため、アンティオキアの住民たちは、永遠に栄光あるキリスト・神を賛美しつつ、毎年彼の記念祭を執り行うことを定めた。 アーメン。

聖殉教者サヴァ・ストラティラトスと彼と共にいた七十人の戦士たちの記念日

記念日：4月24日

聖殉教者サヴァは、ゴート族の出身であり[3207] 、アウレリアヌス皇帝の治世[3208] にローマに住んでいた。彼はストラティラトの位にあり、すなわち軍司令官であり、天の王、我らの主イエス・キリストに忠実で、御心に適う者であった。　彼は、キリストの名のために苦難に遭っている人々を牢獄に頻繁に訪れ、自身の財産から彼らを助け、苦難を忍耐強く耐え抜くよう励まし、勇敢な行いに駆り立てた。　彼のこのような徳高い生活は神に大変喜ばれ、神は聖人の清さと断食の功徳ゆえに、彼に悪霊を制する力を授けられ、彼は人々から不浄な霊を追い出した。

[3205] ここでいうのは、言うまでもなくシリアのアンティオキアであり、かつてはシリア国家の壮麗な首都であったが、現在はアジア・トルコにある貧しい小さな町である。

[3206] ドムヌス総主教は、546年から560年までアンティオキア教会を統率した。

[3207] ゴート族――ゲルマン系部族の一族で、当初はヴィスワ川流域に居住していたが、後にドナウ川流域へと移住した。

[3208] ローマ皇帝アウレリアヌスは、270年から275年まで在位した。

まもなく、聖サヴァがキリスト教徒であるという報告が王のもとに届き、彼は尋問のために王のもとに連行された。

そこで彼は恐れを知らずキリストを告白し、軍用ベルトを解いて投げ捨て、将校の地位をも拒絶するとともに、キリストの御名のためにいかなる拷問にも耐える覚悟を示した。

そこで、拷問官の命令により、聖人は絞首刑に処され、激しく殴打された後、火あぶりにされ、ついには沸騰する樹脂の入った大釜に投げ込まれた。しかし、聖人は目に見えない神の力に守られ、無傷のままであり、大釜から無傷で出てきた。

この奇跡を目撃した、その場にいた七十人の兵士たちはキリストを信じ、大声で自分たちがキリスト教徒であることを告白した。直ちに彼らは拷問官の命令により剣で斬り殺され、こうしてあたかもキリストご自身の手から授かるかのように、殉教の冠を授かった。

一方、聖サヴァは牢獄に閉じ込められたが、そこで神の御現れと助けに恵まれた。真夜中に祈っていたとき、キリストが現れ、御自身の栄光の光で彼を照らし、拷問を恐れることなく、恐れずに自らの使命を果たすよう励ました。　そして、サヴァが再び尋問に連行され、偶像への礼拝を強要されたとき　――時には甘言で、時には説得で、時には残酷な拷問で――拷問者たちの命令に従わなかったため、川に投げ込まれ、そこで溺死して殉教の業を全うし[3209]　、キリストの御国における安らかな安息の地へと至った。

トロパリオ、第5声：

この世の地位と栄誉を捨て去り、殉教者よ、諂う王という拷問者の前で、キリストこそが神であることを告白し、その御名のために多くの苦難に耐え抜いた、栄光ある者よ。　それゆえ、すべての王の王より、その美しい勝利の冠を授かり、天の軍勢と共に輝かしく飾られた。サヴォよ、御前に立ち、我らの魂を救ってくださるよう祈り給え。

コンダク、第4調：

無敵の戦将よ、あなたは野蛮人の陰謀を打ち破り、苦難に耐え、栄光に満ち、揺るぎない強さで、数多くの目に見えぬ敵を打ち負かし、それによって勝利の冠を編み上げました。サヴォ、至福なる者よ、信仰をもってあなたを崇める私たちのために、キリストに祈ってください。

私たちの聖なる母、奇跡を行うエリサベタの記念日。

記念日：4月24日

聖なるエリサベタは、母の胎内にいる時からすでに神への奉仕に選ばれていました。というのも、彼女の母が生まれる前に、神から「彼女には娘が生まれ、その娘は聖霊の選ばれた器となる」と告げられていたからです。　幼い頃から神への奉仕に身を捧げ、不死の花婿であるキリストに嫁いだ聖エリサベタは、他の修道女たちと共に[3210]　、天使のような品格をもって神に仕え、断食と労苦によって自らの肉体を酷使し、　こうして神に深く喜ばれ、人々から肉体的だけでなく、精神的な病を

[3209] 聖サヴァの死は272年に訪れた。

[3210] 聖エリザベータは、皇帝ユスティヌス1世（在位518年から527年）によって、聖コスマスとダミアンの二聖人の栄光を称えて建立されたコンスタンティノープルの修道院の修道女であった。その後、彼女はこの修道院のイグメニア（修道院長）となった。　歴史的資料にその詳細な記録が残されていないため、彼女の生没年や活動時期を正確に特定することはできない。しかし、9世紀後半に聖ヨセフ（883年没）によって彼女を称えるカノンが作曲されたという事実に基づき、聖エリザベタは6世紀から9世紀の間に生きたと推定されている。

も癒やすという賜物を神から授かりました。彼女は祈りによってあらゆる肉体の病を癒やし、その言葉と神に霊感を受けた教えによって人々の魂を癒やし、悔い改めとあらゆる美徳へと導きました。彼女の身に着ける服は、ただ一枚の粗い毛皮の衣だけであり、体は寒さで震えていたものの、その魂は常に神の愛の炎で燃え上がっていた。

修道女たちの修道院長に任命されると、聖女は彼女たちの魂の救いを案じ、さらに偉大な功績を成し遂げました。

彼女の禁欲は並外れたもので、何年もパンを口にせず、果物や野菜だけで過ごした。また、生涯を通じて、油やワインを口にしたことは一度もなかった。　彼女はしばしば、偉大なるモーセのように四十日間断食を行い、その間は何ものも口にしなかった[3211]。三年間、彼女は福音書の徴税人の謙遜に倣い（参照：ルカ18:13）に倣い、肉眼で天を見上げることはせず、心の目をもって常に天に御住まいの神を見つめ、高い、美しく飾られた玉座に座し、セラフィムたちに囲まれている御姿を思い描いては、地上の事柄に思いを向けることはなかった。　夜、いつものように一人で祈っているとき、彼女は天からの光に照らされていた。

さらに、聖エリザベスは数多くの奇跡も行いました。ある時は、祈りによって凶暴な蛇を退治し、またある時は、長きにわたり出血に苦しんでいた女性を癒やし、人々から悪霊を追い出し、その他にも多くの奇跡を起こしました。　奇跡は、彼女の生前だけでなく、その至福の死後も起こり続けました。彼女の墓では、病める者たちに対して多種多様な癒しがもたらされました。例えば、彼女の棺の前で多くの盲人が視力を取り戻したのです。彼女を通して、聖徒たちの中で驚くべき御方であるキリスト・神が賛美されますように！

聖殉教者パシクラトスとヴァレンティンの受難

記念日：4月24日

キリストの殉教者パシクラトスとヴァレンティヌスは、ミシアの都市ロドストロル出身であり、兵士として、その地の総督アヴソランに仕えていた。その国には、悪霊に犠牲を捧げる偶像崇拝者が多くいた。というのも、その国の支配者たちは、拷問をちらつかせて人々を偶像礼拝に強制していたからである。　その国のキリスト教徒たちは、拷問を恐れて逃げ出し、身を隠していた。しかし、この二人の聖なる人々は、公然と勇敢に自らをキリスト教徒であると宣言し、唯一の真の神を賛美しつつ、魂のない偶像を呪った。　このため、彼らは偶像崇拝者たちに捕らえられ、法廷に連行され、そこで偶像の前で香を焚くよう強要された。そこにはアポロンの偶像が立っていた。聖パシクラトスは偶像に近づき、その顔に唾を吐きかけ、こう言った。

「これこそ、この神にふさわしい敬意だ！」

直ちにパシクラトスは重い鎖で縛られ、牢獄に投げ込まれた。しかし、キリストの戦士である彼は、その鎖をあたかも王の黄金の装飾のように身に着け、キリストのためにこの鎖を身にまとうことを許されたことを喜んだ。彼と共に、ヴァレンティンもまた牢獄に閉じ込められた。まもなく、彼らは再びイゲモンの裁判に召喚された。　彼らが法廷に現れると、そこへパシクラタの兄弟であるパピアンもやって来た。彼はキリスト教徒だったが、拷問を恐れて偶像に犠牲を捧げていた。　パピアンは涙ながらに兄弟に懇願し、自分を見習って偶像に香を捧げ、一時的に偶像崇拝者のふりをすることで、　激しい拷問から逃れるよう説得したが、パシクラトスは兄弟の願いを拒絶し、キリストの信仰から背いたことを理由に、彼を自分の一族の一員として数えるに値しない者だと断じた。　一方、パシクラト自身は祭壇に近づき、自らの手を火の上に置くと、イゲモンにこう言った。

[3211] モーセは、シナイ山に登り、そこで神から十戒を授かった際、四十日四十夜断食した（出エジプト記24:12–18）。

「肉体は死すべきものであり、あなた自身が見ている通り、火によって焼かれる。しかし、魂は不死であり、こうした目に見える苦しみすべてを軽んじるのだ。」

その場でイゲモンから尋問を受けた聖ヴァレンティンも、同じことを述べ、キリストのためにあらゆる苦痛に耐える完全な覚悟を示した。二人は共に剣による斬首を宣告された。　拷問官の従者たちが二人を処刑のために城外へ連行すると、パシクラトスの母が後を追って歩き、彼がまだ非常に若かったため、恐怖に屈することのないよう、恐れずに死へと向かうよう諭した。聖なる殉教者たちの首は斬り落とされた。聖パシクラトスは二十二歳、聖ヴァレンティヌスは三十歳であった。　一方、母は喜びと歓びをもって彼らの遺体を受け取り、キリスト・神を賛美しつつ、尊厳をもって彼らを埋葬した。

聖殉教者エウセビオス、ネオン、レオントス、ロンギノスおよび彼らと共に殉教した者たちの殉教

記念日：4月24日

栄光ある大殉教者ゲオルギオスの死後まもなく、ディオクレティアヌス皇帝は、場所を問わずすべてのキリスト教徒、とりわけ牢獄に囚われていた者たちに対し、偶像への礼拝を強いるよう命じた。この命令に従う者には自由を与え、従わない者には死刑を宣告するよう命じた。

今日記念される聖殉教者たち――エウセビオス、ネオン、レオティオス、ロンギノス――はこの時、[3212] の牢獄に収監されていた。彼らと共に、約40人の多くのキリスト教徒がいた。 聖ゲオルギオスが行う奇跡を目撃し、彼らはキリストを信じ、大胆にも人々の前で公然とキリストを告白したため、捕らえられ、足枷を嵌められて牢獄に閉じ込められた。

彼らが審問のために牢獄から引き出された際、キリストを否定することはなく、むしろ異教の神々を恥じ入らせた。キリストの御名を勇敢に告白したため、彼らは多くの拷問にさらされた。すなわち、拷問者たちは彼らを吊るし上げ、殴打し、内臓が露わになるまで様々な鉄の器具で彼らの体を削り取った。

ついに、聖なる殉教者たちは首を刎ねられ、こうして天の御国において冠を授かった[3213] 。

- 同日は、おそらく13世紀初頭に修業に励んだペチェルスクの聖サヴァの記念日である。その聖遺骨はアントニイの洞窟に安置されている。

5月8日

4月25日（旧暦）

聖使徒・福音記者マルコの生涯と殉教。

記念日：4月25日

[3212] おそらく、今ここに記念される聖なる殉教者たち――エウセビオス、ネオン、レオティオス、ロンギノス――は、キリスト教徒たちが投獄されていた牢獄の看守としての職務を全うしていたのでしょう。　もっとも、彼らは、キリスト教徒たちに同情と励ましの言葉をかけ、物質的な援助を行うことで、その苦しみを和らげるために、面会者として牢獄を訪れた可能性もある。

[3213] 聖殉教者たちの死は304年に訪れた。聖殉教者ロンギヌスの頭部は、イタリアのカプア（ナポリ近郊）にある。

聖マルコはユダヤ人であり、レビ族の祭司の家系に生まれ、当初はエルサレムに住んでいた。ヘブライ語ではマルコはヨハネと呼ばれていましたが、その名「マルコ」はラテン語由来です。このという名前を、彼は後に異国へ旅立つ際、すなわち使徒ペトロと共に当時の世界の首都であるローマへ福音を宣教しに行く前に、ヘブライ語の[3214]という名に付け加えたのです。 正教会で受け継がれている伝承によれば、いくつかの古代の著述家の証言[3215]にも合致するように、彼は主の七十人の弟子の一人であり、したがって、主イエス・キリストの生涯におけるいくつかの出来事を自らの目で目撃した証人であった。 福音書記者マルコ自身が記した、ゲツセマネの園における我らの主イエス・キリストの引き渡しに関する記述[3216]には、主の弟子たちが皆主を見捨てたその時、一人の若者が、裸の体に布を巻きつけ、神なる囚人の後を一人で追いかけていたことが言及されている。 しかし、兵士たちに捕らえられると、その布を彼らの手に残し、裸のまま彼らから逃げ去った（マルコ14:51–52）。その若者の服装[3217]から、彼が夜、突然、群衆の騒ぎの中へ飛び出したことがうかがえ、間違いなくその果樹園の所有者の家から出てきたのである。 古くから、この若者はマルコその人であり、ゲッセマネの園はマルコの一族が所有していたという伝承が伝わっている。 『使徒行伝』によれば、福音書記者マルコの母マリアは、エルサレムに自宅を所有していた[3218]。この家で、天使によって奇跡的に牢獄から救い出された使徒ペテロが身を寄せた（使徒行伝12:1–12）。 主が天に昇られた後、キリスト教徒への迫害のさなかに、この家は多くのエルサレムの信者たちのための祈りの集いの場となり、また一部の使徒たちの避難所ともなった。 このようにして、聖マルコは母の家で、キリスト者たちと絶えず交わり、彼らの祈りの集いに参加し、使徒たち自身とも親しくなる機会を得た。彼は特に使徒ペトロと親密な関係を築きました。ペトロは彼に対して、いわば父のような愛情と好意を抱いており、これは使徒ペトロ自身の言葉からも明らかです。ペトロは手紙の中でマルコを自分の息子と呼び、次のように述べています。 *「バビロンの、あなたがたと同様に選ばれた教会と、私の息子マルコが、あなたがたに挨拶を送ります」*（Iペトロ5:13）。聖マルコには、聖使徒バルナバという叔父がおり、彼はレビ人であり、キプロス島出身であった。 聖マルコは、このバルナバを通じて、もう一人の最高使徒である聖パウロにも知られるようになりました。パウロは、キリストへの信仰への奇跡的な回心（参照：使徒行伝9章）の後、初めてエルサレムを訪れた際のことでした[3219]。この二人の最高位の使徒、ペトロとパウロと親密な交わりを築いた聖マルコは、彼らから課せられる命令を遂行する最も身近な協力者となった。

キリスト降誕後44年か45年頃、エルサレムのキリスト教徒たちは大きな災難に見舞われた。エルサレムでキリスト教徒の数が増加するのを目の当たりにし、キリストの信仰の敵であるユダヤ人たちの憎悪は極限に達した。キリスト教徒への憎悪に駆り立てられたユダヤ人たちは、彼らの家々に襲いかかり、所有物を容赦なく略奪したため、キリスト教徒たちは深刻な飢餓に苦しむこととなった。 キリストにある兄弟たちのこのような悲惨な状況を知ったアンティオキアのキリスト教徒たちは、直ちに彼らを助けに駆けつけ、互いに献金を集め、当時アンティオキアに滞在していたバルナバとパウロに、エルサレムのキリスト教徒たちへ援助を届けるよう直接依頼した。 エルサレムに到着し、アンティオキアのキリスト者たちからの依頼を果たした後、バルナバとパウロはアンティオキアに戻り、今度はマルコを同行させた（使徒行伝12:25）。 この時から、マルコはバルナバとパウロの協力者となり、ユダヤ人や異邦人へのキリストの信仰の福音を宣べ伝えるという、使徒的働きという偉

[3214] 当時のユダヤ人の慣習に従って。

[3215] 3世紀のアレクサンドリアの長老オリゲネス、4世紀のキプロス司教聖エピファニオス、その他。

[3216] ヴェルトグラード——庭園。

[3217] 裸の体に巻きつけられた布。

[3218] マルコの母マリアの家で、主イエス・キリストによって過越の祭りが執り行われたという伝承が残っている。

[3219] キリスト降誕後、およそ39年または40年のことである。

大な使命を担うようになった。　聖マルコは、パウロとバルナバと共に、アンティオキアからの最初の使徒的旅路に参加し、福音宣教における彼らの最も身近な助手としての役割を果たした[3220]。マルコはパウロやバルナバと共に、海辺の町セレウキア[3221]に滞在し、そこからキプロス島へ船出し、サラミヌスからパフォスまで、島の東から西へと横断した。　ここパフォスで、マルコは、使徒パウロの言葉によって、ユダヤ人の魔術師ヴァリシウス（エリマという名）が奇跡的に盲目になるのを目の当たりにした。この男は、神の御言葉を聞くためにバルナバと　パウロを招いたプロコンスル・セルギウスを、主への信仰から遠ざけようとしていた（参照：使徒行伝13:6–12）。しかし、ペルギアという町[3222]に到着すると、マルコは使徒パウロとバルナバのもとを離れ、エルサレムにある母の家へと戻った。　エルサレムに到着すると、マルコは使徒ペテロに加わり、まもなく彼と共にローマへ福音を宣べ伝えるための使徒的旅に出た。この頃、ローマにはすでにキリストを信じる者たちがいた。『使徒行伝』によれば、聖霊が降臨したことで使徒たちに起こった驚くべき変容を目の当たりにした人々や、救い主キリストについて使徒ペテロが語った最初の説教を聞いた人々[3223]の中には、ローマから来たユダヤ人やプロゼリト、　すなわち、ユダヤ教に改宗した異邦人（参照：使徒行伝2:10–41）であった。これらの人々は、ローマへ戻った後、間違いなくキリストへの信仰をそこに持ち帰り、現地の人々に伝えたのである。　疑いなく、その後も、ローマに多数住んでいたユダヤ人の多くは、毎年祭りの時期にエルサレムを訪れ、すでに福音の教えに満ちていたその地でキリストについての説教を聞き、キリスト者としてローマに戻っていったのである。　最後に、世界の首都であるローマには、公務やその他の用事で各地から多くのキリスト教徒が訪れ、そこでキリストを信じる者の数を増やすことに貢献した。　聖使徒ペトロは、聖マルコの協力のもと、説教と奇跡によって、ローマにおけるキリストの教会をさらに広め、確固たるものとし、ユダヤ人や異邦人を問わず、多くの人々をキリストへと導いた。　使徒たちの口から語られる福音の聖なる言葉を聞き、主イエス・キリストへの信仰に燃えたローマのキリスト教徒たちは、使徒たちによるイエス・キリストに関する口頭での説教だけでは満足せず、口頭で伝えられた教えを文字に記した記録を自分たちの手に残したいと願った。彼らは使徒ペトロの同伴者である聖マルコのもとを訪れ、ペトロと共に主キリストについて語ったすべての聖なる言葉を書き留め、この聖なる書物を記念として残してほしいと懇願した。　マルコはローマのキリスト教徒たちのこの善き願いに応え、彼らのために自身の福音書を執筆した。その中で[3224]、主イエス・キリストがこの地上に滞在されていた間の生涯の出来事を叙述し、記憶している限り正確に記録し、　主が教え、行われたことを、聞いたことを何か見落としたり、歪曲したりしないよう細心の注意を払いながら、正確に記録した。　マルコは書き上げたものを使徒ペトロに提出し、聖ペトロは自らの証言によって、マルコによる福音書の真実性を確認し、教会での朗読を承認しました。[3225]そのため、マルコによる福音書は、使徒の書物であり、神の霊感を受けたものとして、いかなる異論もなくすべての教会に受け入れられました。[3226]

ローマでの宣教活動の後、聖マルコは使徒ペトロの命により、アドリア海北岸に位置するアクイレイアの町へ福音を宣べ伝えるために向かった。　「第二のローマ」と呼ばれたこの豊かな都市[3227]

[3220] 44年または45年。
[3221] 地中海の東岸で。
[3222] 小アジアにて。
[3223] そのうち約3,000人の男性が洗礼を受けた。
[3224] パピウスが証言しているように。
[3225] 福音書記者マルコは、その福音書の中で、主に救い主の御業、とりわけ異教徒の心に教えよりも大きな影響を与えた奇跡について記述している。
[3226] その執筆時期は、キリスト降誕後およそ46年にさかのぼります。
[3227] 当時、ローマ皇帝たちはこの地での生活を好んでいたからである。

で、マルコは教会を設立した。また、アドリア海沿岸の他の地域にも福音を宣べ伝えに訪れ、至る所に神の教会を設立した。その後、聖マルコは使徒ペトロの指示に従い、福音を宣べ伝えるためにエジプトへと向かった。　アレクサンドリアの総主教エウティキオスが証言するように、これはクラウディウス帝の治世9年目[3228]　のことであった。パレスチナと隣接する異教の国エジプトには、アレクサンドロス大王の時代[3229]　やエジプト王プトレマイオス・ラガの時代[3230]　以来、非常に多くのユダヤ人が住んでいた。　彼らはここで都市全体に居住し、独自のシナゴーグやサンヘドリン、さらにはエルサレムの神殿に似た神殿[3231]　を持ち、モーセの律法に基づく祭司やレビ人もいた。ここエジプトでは、プトレマイオス・フィラデルフォス王の命により[3232]　、旧約聖書の書物がヘブライ語からギリシャ語へと翻訳され、それによって人類の救いに関する神の啓示が異教徒たち自身にも理解できるようになった。　この地では、あるエジプトの神殿で起きたあの画期的な偶像の倒壊が、人々の記憶にまだ鮮明に残っていた。教父たちの証言（　）によれば、この出来事は、残虐なヘロデ王の手から逃れてきた、幼子イエスを伴う聖家族が到着したことに伴って起こったものである。　さらに、この国にも、使徒たちの上に聖霊が奇跡的に降臨したのを目撃した人々がおり、彼らがキリストの教えの種をこの地にもたらした可能性さえあった。これらすべてが、エジプトの住民をキリスト教の教えを受け入れるよう強く準備させ、聖マルコの宣教に大きな成功をもたらすことを約束していた。　そして実際、使徒たちの筆頭であるマルコがエジプトに到着し、人々に悪魔からの解放を告げ知らせる福音の説教を始めたとき[3233]　、説教が始まったその直後[3234]　、大勢の男女がキリストを信じるようになった。エジプトの主要都市であるアレクサンドリアそのもので、聖マルコは教会を設立し、その初代司教となった。

ここで聖マルコは、それまで偶像崇拝の闇の中にいたユダヤ人や異教徒を、キリストの信仰の光で啓蒙するという偉業に多大な労力を注ぎました。　その後、アレクサンドリアおよび近隣の都市の教会を、司教やその他の聖職者を按手して任命することで整えた聖マルコは、エジプトを去りました。彼がここからどこへ向かったのか、またエルサレムで開催された使徒公会議[3235]　に出席したかどうかは不明です。しかし、使徒パウロが第二回使徒旅行[3236]　に出発する前にバルナバと共にアンティオキアにいた際、『使徒行伝』が証言するように、聖マルコもここで彼らと合流し、そこから叔父であるバルナバと共に、マルコの故郷であるキプロスへと向かった（参照：使徒行伝15:36–40）。バルナバと共にしばらくの間、キリストの福音を宣べ伝える働きに励んだ後、マルコは再びエジプトへと向かい、そこへ同時期か、あるいは少し遅れて使徒ペトロも到着した。　エジプトの各地で福音を宣べ伝え、教会を設立する中で、使徒たちはこの頃、とりわけエジプトの都市バビロンにもキリストの教会の基礎を築いた。ペトロはそこから、小アジアのキリスト教徒たちへの最初の公同書簡を書き送った（参照：Iペトロ5:13）。聖マルコは、エジプトにネロの治世第8年まで滞在した[3237]。

その後、聖マルコは再び使徒パウロと合流し、その協力者の一人となった。使徒パウロがローマで投獄されていた間[3238]、聖マルコは他の数名と共に、この使徒の伝道活動を分担した。この時期

[3228] 紀元後49年頃。
[3229] 在位：紀元前334年～324年
[3230] 紀元前324年から284年まで。
[3231] イリオポダ市の近く。
[3232] 紀元前271年頃。
[3233] かつてモーセがファラオの重苦しい束縛から民を解放したように。
[3234] 歴史家エウセビオスが証言しているように。
[3235] 西暦60年または51年頃。
[3236] 52年から55年まで。
[3237] 54年から68年まで在位した。
[3238] 西暦61年から63年まで。

にローマから書かれたコロサイ人への手紙の中で、使徒パウロはマルコを、神の御国のために共に働く数少ない協力者の一人であり、当時彼にとって慰めとなっていた人物として挙げている（参照：コロサイ4:10–11）。　同じコロサイ人への手紙から明らかなように、マルコは使徒パウロの指示により、ローマから小アジアのフリギアの町コロサイ（コロサイ2:8–18）へと向かい、コロサイのキリスト者たちを惑わしていた偽教師たちに対抗した[3239]。 その後数年間、聖マルコがどこで過ごしたかは不明である。しかし、使徒パウロの死が近づく頃、聖マルコは小アジア、すなわちエフェソの教会司教である聖ティモテオの故郷であるエフェソの町に滞在していた。　この頃、ローマで二度目の投獄中だった使徒パウロは、テモテへの手紙を書き、その中でテモテをローマに呼び寄せ、自分の助けとなるよう求めるとともに、奉仕のために必要な人物としてマルコも連れてくるよう彼に命じた（参照：IIテモテ4:11）[3240]。 ここローマで、聖マルコは、キリストのために殉教した二人の師、すなわちキリストの偉大で首席の使徒であるペトロとパウロの両名の最期を目の当たりにしました。彼らはローマで同時にキリストのために殉教しました。ローマ市民権を持っていたパウロは剣で斬り殺され、ペトロは十字架に架けられました。

偉大なる師である使徒ペトロとパウロの死後、聖マルコ福音書記者は、自ら設立した教会の整備のため、再びエジプトへと向かった。彼はアレクサンドリアの地で、キリストの信仰を宣教するという偉業に多大な労力を注いだ。エジプトの首都アレクサンドリアは、ギリシャ文化の中心地であった。　ここには有名な図書館があり、異教の学問が栄えていました。その学問を求めて各地から人々が集まり、街は学者、哲学者、修辞家、そして　詩人であふれかえっていました。アレクサンドリアに多数住んでいたユダヤ人たちでさえ、異教の学問に熱中していました。　キリストの信仰を確立し、異教の学者やユダヤ人に対抗する目的で、聖マルコはアレクサンドリアにキリスト教の教理学校を設立した。　その後、この学校はキリスト教教育の中心地となり、パンテノス、クレメントといった著名な教会の教師や、ディオニシオス・アレクサンドリアス、グレゴリオス・テオロゴスなどの教父たちを輩出したことで名声を博した。

聖マルコは、教会の礼拝の整備に尽力し、典礼式次第を編纂して、アレクサンドリア教会のキリスト教徒たちに伝えた。この典礼式次第は、この教会において長きにわたり、またその後の数世紀にわたって保存されてきた。　エジプトのキリスト教徒（コプト教徒）の礼拝においては、今日に至るまで、福音書記者マルコに帰せられるいくつかの祈りが保存されている。

アレクサンドリアの教会を整備した後、聖福音記者マルコは、キリストの教えを宣教することに尽力する中で、エジプトの他の都市や地域の住民たちに対しても、その関心と熱意を注ぎ続けました。そして、堅固で勇敢な修道者として、　マルコは、神の御霊に導かれ、全力を尽くし、熱意をもって、至る所でキリストの教えを宣教するために急いだ。彼はアフリカの内陸部の多くの地域を訪れ、リビア、マルモリカ、キレナイカ、そしてペンタポロスにも足を踏み入れた。これらの地域はすべて、異教の偶像崇拝という闇に沈んでいた。　至る所の都市や村落、そして道端には偶像崇拝の場所が設けられ、そこには偶像が安置され、魔術や占術、呪術が行われていた。　聖マルコは、福音を宣べ伝えながらこれらの町や村を巡り、偶像崇拝の闇と薄暗がりの中にいた人々の心を、神の教えの光で照らし、同時に彼らの間で偉大な奇跡を行なった。　神の恵みの言葉一つで、彼は病人を癒やし、ハンセン病患者を清め、不浄な霊や凶暴な悪霊を追い出した。

そして、偉大で驚くべき奇跡に彩られた彼の説教は、大いなる成功を収めました。神殿は崩れ落ち、偶像は倒れ砕け散り、人々は清められ、啓発され、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けました。　至る所で、伝道者マルコのもとで神の教会が設立され、キリストの教会はエジプトの諸国で繁栄した。伝道者マルコの説教の聖なる言葉の力と、彼自身の高潔で聖なる徳ある生活の感化を受け

[3239] 紀元67年頃。
[3240] 使徒たちの同時代人。

、エジプトのキリスト教徒たちは、　神の恵みの働きにより、救いを得るための行いにおいて、これほどまでに清らかさと高潔さを示したため、キリスト教の美徳による聖性に満ちた彼らの生活は、異教徒や信仰を持たないユダヤ人からも、大きな驚きと称賛の対象となった。　パレスチナ・ケサリアのエウセビオス司教とニキフォロス（クサンフォポロス）――いずれも教会史家――は、その著書の中に、あるユダヤ人哲学者フィロンの証言を伝えている。彼はエジプトのキリスト教徒たちの徳高い生活を称賛し、次のように述べている。

「彼ら（すなわちキリスト教徒）は、この世の富に関するあらゆる心配事を捨て、自分の財産を気にかけることもなく、地上の何ものも自分のものとは見なさず、自分にとって大切なものとは考えていない。　また、彼らの中には、世俗的な事柄へのあらゆる配慮を捨て、都市を離れて人里離れた場所や庭園に身を置き、生活様式において自分たちと意見の合わない人々との共存を避け、彼らから徳の実践における妨げを受けないようにしている者もいる。　彼らは、節制と肉欲の抑制こそが、善き人生を築くための唯一の基盤であると考えている。　彼らのうち、夕暮れが訪れるまでは飲食をしない者が一人もいないが、中には4日目まで食事をとらない者もいる。一方、聖書の解釈と理解に熟達した者たちは、知識への渇望に満たされ、神を想うという霊的な糧を糧として、聖書の研究に時間を費やすため、6日目まで肉体の糧を忘れてしまう。 彼らの中には、ワインを飲む者は誰一人おらず、全員が肉を食べず、パンと水に塩とヒソップ（[3241] ）だけを添えて生活している。その中には、徳ある生活を自ら培い、それに深く慣れ親しんだ女性たちもおり、老いるまで処女のままでいる。しかし、彼女たちが処女性を保っているのは強制によるものではなく、自由な意志によるものであり、知恵への熱意と愛に駆られて、肉体的快楽を拒み、死すべきものではなく、不死の産物を獲得しようと努めている。そのような産物は、神を愛し、神を求める魂だけが自ら生み出すことができるものである。　聖書は、彼女たちによって、暗示された意味や秘められた意味、そして神秘を見出すことを通じて、比喩的に解釈される。なぜなら、彼女たちの考えによれば、聖書は生き物のようなものだからである。言葉による表現　がその目に見える体を構成し、それらの表現の下に秘められた思想と神秘がその目に見えない魂を構成している。　彼らは早朝に起きて、神を賛美し、祈りを捧げ、賛美歌を歌い、神の御言葉を聞く――男性と女性は別々に。彼らの中には、七週間にわたって絶え間なく断食を続ける者もいる。　彼らにとって第七の日は大いに尊ばれている。その日やその他の祝祭日に備えて、彼らは休息のために裸の地面に横たわる。神聖な礼拝は、司教の指揮下にある司祭や助祭たちによって執り行われる。

このような芳しいキリストの園を、聖福音記者マルコはエジプトの地で、多大な労苦を伴って植え、育て上げた。彼はそこで初代司教となり、アレクサンドリアに主教座を置き、同地で苦難に満ちた最期を遂げ、アレクサンドリア教会の最初の殉教者となった。

聖マルコの苦難と殉教の死について、至福のシメオン・メタフラストは『[3242] 』の中で次のように語っている。　聖マルコは、キリニア――ペンタポリス地方の都市――に滞在していた際、そこでキリストの教えを宣教し、キリストの教会を築き上げるという偉業に励んでいたが、聖霊から、そこからファリティスのアレクサンドリア[3243] へ赴き、福音を宣べ伝えるよう命じられた。 聖霊の御命令に従順なマルコは、全力を尽くして新たな使命へと急いだ。アレクサンドリアへ行くという主の御命令を兄弟たちに告げ、キリスト者たちとの別れの食事を終え、彼らの祝福を受けて、キリニアからアレクサンドリアへと船出した。　二日目にアレクサンドリアに到着し、船を降りて、メンディオン

[3241] 苦い草。

[3242] 9世紀の教会作家。

[3243] アレクサンドリアが「ファロスの」と呼ばれるのは、そこに小さな町ファロスが併合されていたためである。その町には大きく高い柱が立っており、夜になると、海から到着する船に埠頭への道を示すために、その柱の上で火が灯されていた。

と呼ばれる場所へと向かった。そこで、城門の入り口付近で、彼のサンダルが真っ二つに裂けてしまったが、聖人はこれを吉兆と受け取った。　そこで、古びた靴を修理している靴職人を目にした聖人は、自分のサンダルを修理してもらうよう彼に依頼した。靴職人はサンダルを修理している最中、誤って道具で自分の左手を刺してしまい、痛みに叫び声を上げながら神の御名を呼び求めた。

この叫び声を聞いた使徒は、主が彼に安泰な道を開いてくださるというしるしであると見て、心から喜びを覚えた。しかし、靴職人の手の傷は非常に痛々しく、そこから血が勢いよく流れ出ていた。聖マルコは地面に唾を吐き、唾液で湿らせた布を作り、その傷に塗ってこう言った。

「永遠に生きられるイエス・キリストの御名によって、癒やされよ。」

するとたちまち、靴職人の傷は塞がり、その手は元通りになった。靴職人は、目の前に立つその男の持つ力と、その言葉の力、さらにはその眼差しに宿る清らかさと聖なる生き様を見て、彼にこう頼みかけた。

「お願いです、神の人よ、どうか私の家に入り、このあなたのしもべのもとで、たとえ一日だけでも滞在し、私と共に食事を分かち合ってください。あなたは今日、私に憐れみを示してくださったのですから。」

使徒は喜んでその願いを受け入れ、こう言った。

「主があなたに命のパン、すなわち天のパンをお与えになりますように。」

すると、その男はすぐに使徒を連れ出し、大いなる喜びをもって彼を自分の家へと案内した。家に入ると、聖マルコは言った。

「主の祝福がここにありますように！兄弟たちよ、神に祈りましょう。」

そして皆で共に神に祈りを捧げた。祈りの後、食卓に着くと、靴職人は親しげに会話を始め、聖人に尋ねた。

「父よ！あなたはどなたですか？そして、あなたの言葉にはなぜこれほどの力があるのですか？」

聖マルコは答えた。

「私は、神の子である主イエス・キリストのしもべです。」

その男は言った。

「その神の子に会ってみたいものです。」

聖マルコは答えた。

「私がその方をお見せしましょう！」

そして、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、預言者たちが私たちの主について予告していたことを、預言書の言葉から解説し始めた。その男は、彼の説教を聞いて言った。

「あなたが解説してくださる聖書の言葉は、私は一度も聞いたことがありません。私が聞いたのは、『イリアス』や『オデュッセイア』、そしてエジプトの若者たちが学んでいることだけです。」

そこで聖マルコは、キリストについての説教を続けながら、この世の知恵が神の前では「狂気」[3244]であることを、はっきりと彼に示した。その男は、聖マルコが語ったすべてのことを信じ、その奇跡を目の当たりにして自ら洗礼を受け、彼と共にその一家全員が洗礼を受け、さらに彼らと共にその地方の多くの人々も洗礼を受けた。その男の名はアナニアであった。　その地では、信者の数が日ごとに増えていった。すると、町の指導者たちは、あるガリラヤ人がやって来て、自分たちの神々を冒涜し、彼らへの犠牲の捧げ物を禁じていると聞き、聖マルコを殺そうと企み、彼を捕らえる方法を協議するために集まった。　聖マルコは彼らのこの決定を知ると、急いで信者たちのためにアナニ

[3244]「放縦」とは、狂気、無分別を意味する（参照：コリントの信徒への手紙一 1:18–22）。

アを司教に、マレオン（あるいはマルカ）、サヴィン、ケルドンという三人の長老、七人の助祭、そして教会の奉仕にあたる十一人の聖職者を任命し、そこから逃れて再びペンタポリスへと戻った。ここで2年間を過ごし、現地の兄弟団を確立し、周辺の地方や都市に司教、長老、聖職者を任命した後、聖マルコは再びアレクサンドリアに戻った。そこで彼は、兄弟団の数が増え、主の恵みと信仰において繁栄しているのを見つけた。 アレクサンドリアにはすでに、海辺の「ヴクウル」[3245] と呼ばれる場所に建てられたキリスト教の教会が存在していた。その教会を目にした聖マルコは喜び、ひざまずいて神を賛美した。聖マルコはアレクサンドリアにかなり長い間滞在した。　その教会の信徒たちは数を増やし、信仰を強めるにつれ、ギリシャ人たちの偶像崇拝を公然と非難した。　ギリシャ人の都市の支配者たちは、聖マルコが自分たちの街に滞在していることを知り、また彼が病人を癒やし、耳の聞こえない者に聴力を取り戻させ、盲人に視力を与えるといった偉大な奇跡を行っていると聞くや、彼に対して憎しみと嫉妬に燃え上がり、彼を探し回った。　長い間彼を見つけられず、彼らは異教の神殿に集まり、歯ぎしりしながら怒りを込めて叫んだ。

「ああ、この魔術師や呪術師が、我々にどれほどの迷惑をかけていることか！」

輝かしい復活祭が近づいていた。そして4月24日、キリストの輝かしい復活の日――この日はたまたまセラピスを称える異教の祭りと重なっていた――異教徒たちは聖マルコを捕らえる好機を捉えた。　聖なる福音書記者は、その日、神聖な礼拝を執り行っていた。不敬虔な異教徒たちはこれを好機と見なし、自分たちの祭りを機に大群衆を集め、突然教会に襲いかかった。彼らは聖マルコを捕らえ、縄で縛り上げ、街の通りや郊外を引きずりながら、こう叫んだ。

「この牛を牛小屋、すなわち牛の厩舎へ連れて行こう。」

一方、聖マルコは拷問に耐えつつ、主を賛美してこう言った。

「主イエス・キリストよ、御名のゆえにこれらの苦しみを耐え忍ぶことを私に許してくださったことを感謝します。」

聖人は鋭い石が敷き詰められた地面を引きずられ、石に体を擦りむかれて傷だらけとなり、そこから溢れ出る血が道中を赤く染めた。　このように傷だらけになった聖人を、不敬虔な異教徒たちは牢獄に投げ込み、自分たちは夕暮れになると、彼をどのような死に追いやるかについて協議した。真夜中、使徒であり殉教者である彼のもとに主の天使が現れ、天国で彼を待ち受ける至福を告げ知らせることで、殉教の業に立ち向かうよう彼を励ました。　その後、主イエス・キリストご自身が彼に現れ、その御姿をもって彼を慰められた。翌朝、狂乱した異教徒の群衆は使徒を牢獄から引きずり出し、街の通りを引きずり回した。聖人はそのような苦痛に耐えきれず、まもなく息を引き取った。神に感謝し、神に祈りを捧げながら、こう言い残した。

– 主よ、私の霊を御手に委ねます！[3246]

異教徒たちの飽くことのない悪意は、使徒の死だけでは満足せず、彼らはその遺体を焼き払うことを決意した。　すでに火が焚かれていたところ、突然、暗闇と恐ろしい雷鳴、地震、雨、そして雹が降り注ぎ、不信心な者たちの群衆を散らし、雨は火を消し止めた。一方、敬虔なキリスト教徒たちは、畏敬の念をもって聖人の遺体を受け取り、彼らの祈りの集いの場にある石の棺に葬った。

310年、聖マルコの遺骨の上に教会が建てられ、それらは9世紀までアレクサンドリアに残されていた。 今世紀前半[3247] 、アラブのイスラム教徒による支配と単性論の異端がエジプトの正教会を著しく弱体化させた際、聖福音記者マルコの聖遺骨はヴェネツィアへ移送された。ヴェネツィア近郊（アクイレーア）で、彼はかつてしばらくの間、福音の宣教に尽力していた場所である：　その聖遺物は現在も、彼の名に捧げられた壮麗な教会に安置されている。ここには、薄いエジプト産パピルスに

[3245] ヴクウルとは、ギリシャ語の「雄牛」に由来する、牛に餌を与える場所のことである。
[3246] 聖マルコは、ネロの治世下、西暦68年頃に亡くなった。
[3247] 828年。

書かれた、非常に古いマルコによる福音書の写本が保管されており、伝承によれば、福音記者自身の手によるものであるとされる[3248]。

トロパリオ、第3調:

至高のペテロに教えを受け、キリストの使徒となられたあなたは、太陽のように諸国を照らし、アレクサンドリアの恵みとなられた、幸いな方よ。あなたによってエジプトは惑わしから解放され、あなたの福音の教えによってすべてが照らされた。あなたは光であり、教会の柱である。　このゆえに、マルコよ、神の御声よ、あなたの記念を尊び、輝かしく祝う。あなたによって福音を宣べ伝えられた神に祈り、私たちの魂に罪の赦しを授けてくださるよう願う。

コンダク、第2調:

高き所より聖霊の恵みを受け、修辞学の罠を打ち砕き、使徒よ、あらゆる言語を掌握し、栄光に満ちたマルコよ、あなたは主のもとに人々を導き、神聖なる福音を宣べ伝えた。

– イコンにおいて、福音記者マルコは獅子と共に描かれている。この描写については、マルコによる福音書の冒頭に注記がなされている。　彼の福音書は、洗礼者ヨハネの出現についての物語から始まります。ヨハネは、悔い改めと神の国の到来についての説教をもってユダヤの荒野に声を響かせ、荒野で叫ぶ声となり、その点において、荒野に住み、咆哮する獅子に似ていました。

– 聖マルコを自らの教会の創設者かつ守護聖人、そしてアレクサンドリアの初代総主教として正当に崇敬するアレクサンドリアの総主教たちは、その書簡において次のような言葉で祝福を授けている。　「主キリスト、至聖なる神の母、そして聖福音記者マルコの祝福がありますように」と説き、その印章には、福音書を掲げる翼のある獅子の図柄が刻まれている。

私たちの尊い父シルヴェストル・オブノルスキーの記念日。

記念日：4月25日

尊者シルヴェストルの出自や出生地については何も知られていない[3249]。知られているのは、彼が尊者セルギイ・ラドネジスキーから修道誓願を受け、当初はその修道院で修行に励んでいたということだけである。　著名なラドネジの修行者の祝福を受け、孤独を渇望していたシルヴェストルは、はるか北東へと向かい、オブノラ川のほとりに定住した[3250]。当時、この地は鬱蒼とした森に覆われており、近隣には住居は一切なかった。　質素で狭い小部屋を自ら整えると、聖シルヴェストルは完全な孤独の中で修行を始め、あらゆる苦難に耐えつつ、たゆまぬ祈りと徹夜祷に身を捧げた。

長い間、人里離れた森の中で隠者が修行していることを知る者はいなかった。しかしある日、その地方の住人の一人が道に迷い、人里離れた森の中で思いがけずその隠者の小部屋に出くわした。驚愕した旅人　のもとへ、ぼろ服をまとった隠者が現れた。それまで誰も見たことがなく、また見た

[3248] マルコによる聖福音書は、正教会の規定により、特別な場合を除き、ペンテコステ後の第11週から第17週まで、その後第29週から第34週まで、土曜日と日曜日を除いて、また四旬節の土曜日と日曜日（第1週の日曜日を除く）に、典礼で朗読される。

[3249] 聖シルヴェストルの伝記は現存しておらず、そもそも古代に書かれたものだったのかさえ疑わしい。写本から知られているのは、彼の奇跡に関する伝承のみである。彼の生涯に関する情報は、断片的な記録や伝承からのみ得られている。

[3250] ヤロスラヴリから105ヴェルスタ、現在のヤロスラヴリ州の郡庁所在地リュビシャから16ヴェルスタ、コストロマ川に合流するオブノレ川の上流に位置する。

くもなかったような人里離れた場所に人が現れたことに、彼は戸惑いを隠せなかった。旅人は聖者に、自分が誰であり、どのようにしてここへたどり着いたのかを語った。　その際、旅人は、隠者が住む場所の上空で、遠くから時折、明るい光の筋や雲の柱を見かけたと伝えた。隠者は、自分の隠遁の地が知られてしまったことに悲しみ、涙を流した。旅人は隠者に、名前やここでの暮らしについて教えてほしいと懇願した。　シルヴェストルは、すでにかなりの期間ここに住んでおり、木の樹皮や根を糧にしていると話した。当初はパンがなく、飢えと衰弱で力尽き、地面に倒れ込んでいたが、ある時、不思議な人物が現れて彼に手を触れてくれた。それ以来、彼はもはや苦境に陥ることはなくなったという。

偶然この隠者を見つけた旅人は、すぐにわざわざ彼の元へ戻り、備えとしてパンと小麦粉を差し出した。

このたった一度の出会いで、隠者の住処と修行の功績は、近隣（とはいえそれほど近くはない）の村々にも知られるようになった。村人たちは、魂の救いとなる対話や霊的な助言を求めて隠者のもとを訪れるようになり、その際、彼に食料も持参した。　中には、彼の指導の下で救いの行いを実践するために、彼のそばに留まることを決意する者もいた。自分に対する真摯な愛と、自発的な行いの意志を見て、聖シルヴェストルは新しい修道室を建てることを妨げなかった。その結果、彼の周りには多くの新しい修行者が集まり、神の教会を建立することが切実な必要となった。　そこでシルヴェストル自身はモスクワへ赴き、アレクシイ都主教から教会建設の祝福を請い、アンティミン（聖体布）を授かり、オブノル地方に設立されつつあった最初の修道院のイグメン（院長）に任命された。

尊者とその周囲に集まった修道者たちの尽力により、救い主キリストの復活を称える教会が建立された。

それ以来、一般の人々だけでなく、公爵やボヤールたちも、ますますシルヴェストルの元を訪れるようになった。　ある者は、尊者にお目にかかり、祝福を受け、その教えの言葉を聞きたいと願った。またある者は、自らの罪を悔い改め、赦しと慰めを得たいと願った。さらに、経験豊かな修行者の指導の下、生涯を修道生活に捧げたいと願う者もいた。

修道院の整備にたゆまぬ労力を注ぎつつも、聖シルヴェストルはあらゆる暇や都合の良い時間を活用して、修道院を離れ、森の奥の隠れ家へと赴き、彼の魂が切望し、慣れ親しんだ孤独な祈りと徹夜祷にふけった。　しかし、彼がそのような隠遁先から戻ると、修道院の近くには、彼に会って祝福と教えを受けたいと願う大勢の人々がすでに待っていた[3251]。人々は子供や病人を連れてきて、彼の祝福と癒しの祈りを求めた。そして今なお、かつての修道院の近くには、尊者シルヴェストルが隠遁のために立ち入っていた森の一部である木立が残っている。　また、オブノレ川へと下る坂道には、聖シルヴェストルが泉の上に掘った井戸も残っている。

こうして、森の僻地には、労働と徹夜祈祷、断食と祈り、肉体の苦しみと霊的な喜びが融合した、活気あふれる生活が生まれたのである。

聖人は年老いて、臨終の病に倒れた。兄弟たちは病人の寝床の周りに集まり、指導者であり保護者である彼を失う悲しみと、修道院の行方を案じる気持ちから、涙を流して嘆き悲しんだ。　「このことを嘆いてはならない、わが愛する兄弟たちよ」と、聖シルヴェストルは彼らを慰めてこう語った。「すべては神の御心である。主の戒めを守り、天国での報いを得るために、この世で苦難に遭うことを恐れてはならない。　もし私が神の御前で大胆さを持ち、私の行いが神の御心に適うものであれば、この聖なる場所は私が去った後も衰えることはないでしょう。ただ、主なる神と、その聖母マリアに祈り、悪しき者の誘惑からあなたがたが救われるよう願ってください。」

[3251] かつては民衆との対話が行われた場所に礼拝堂が建てられていたが、その後、その場所にラドネジの聖セルギイに捧げる教会を建設する計画があったため、礼拝堂は村の近くに移された。

尊者のお亡くなりになったのは、1379年4月25日、聖使徒兼福音記者マルコの記念日であった。尊者の遺体は、復活の木の教会の右側に埋葬された。

聖シルヴェストルによって設立された修道院は、創設者の死をもってその存在を終えることはなかった。400年以上にわたり、ここでは修道院生活が営まれ、修道士たちが代々引き継ぎ、この辺境の地の啓蒙に尽力した。

聖人の死後、その棺の周囲で奇跡が起こるようになり、時が経つにつれて、近隣や遠方でも聖シルヴェストルは奇跡を起こす聖人として崇められるようになった。

修道院ではこうした奇跡に関する継続的な記録は残されていなかったが、一方、ヴォスクレセンスキー教会に今なお保存されているいくつかの古物には、オブノルスクの奇跡行者シルヴェストル聖人の修道院への寄進に関する刻印、刺繍、あるいは手書きの銘文が残されている[3252]。現存する写本には、1645年以降の奇跡の記録が含まれており、計23件の奇跡が記述されている。聖人の遺骸の前では、悪霊に取り憑かれた者や、精神錯乱、眼病や失明、難聴、麻痺、失語症に苦しむ人々が癒やされた。ここにその一例を挙げる。　1645年、修道院で奉仕していたヨブという名の修道士が、修道院の農民たちを集め、修道院の近くにある木立を薪用に切り倒すよう命じた。農民たちは作業に取りかかった。　ヨブにとって、この命令は罪深いものでした。彼は、聖シルヴェストルの森に無断で手を伸ばしたのです。神を怒らせたヨブは失明の罰を受け、目が見えなくなりました。　四週間後、ヨブは自らの罪を悟り、主なる神、その聖母マリア、そして聖シルヴェストルの御前で悔い改め、自分の意志で行動せず、すべて兄弟たちの助言に従って行動することを誓った。彼は教会へ向かい、祈祷式を執り行い、涙ながらに罪の赦しと視力の回復を祈った。　聖なるイコンに手を合わせ、盲目のヨブは聖人の聖遺骸の棺の前に進み、信仰をもってそれを口づけすると、視力を取り戻した。この奇跡的な癒やしの後、彼は主なる神と聖シルヴェストルに感謝を捧げた。

5月9日

4月26日（旧暦）

聖殉教者ヴァシレイ、アマシウス司教の殉教日[3253]

記念日4月26日

神に背く暴君、ローマ皇帝マクセンティウス[3254]が滅びた後――彼は神の敵として、コンスタンティヌス大帝の前に天に現れた主の十字架の力によって打ち倒され、かつてのファラオのように水の深淵で命を落とした――西方のローマ帝国は、残酷な処刑の末、ようやく安堵の息をついた。　東方では、もう一人の神の敵であるマクシミアヌス皇帝[3255]によるキリスト教徒への迫害が続いていた。彼は真の神を冒涜し、キリストの忠実な僕たちを残酷に迫害した。敬虔なコンスタンティヌス帝は、彼に対抗するため、妹を嫁がせたリキニウス[3256]を東方へ派遣した。当時、リキニウスは我らの主イエス・キリストを信じており、神の助けによりマクシミアヌスを激しく打ち破ったため、後者はわ

[3252] それらは、1693年の祭壇用銀の十字架、1699年の絹刺繍の祭壇布、1661年の各ページに署名のある序文、1664年の絹刺繍による同聖人のイコンである。

[3253] アマシアは、小アジアの黒海沿岸にある小さな町である。

[3254] マクシミアヌスの息子で、306年から312年までローマ皇帝を務めたが、コンスタンティヌス大帝に敗れ、テヴェレ川で溺死した。その残虐さで知られている。

[3255] 305年から313年にかけてシリアとエジプトを統治したローマ皇帝。

[3256] 312年から324年まで皇帝を務めた。

ずかな部隊を率いてかろうじて逃亡に成功した。しかし、リキニウスの手からは逃れたものの、神の御手からは逃れることはできなかった。 彼がキリキアの都市タルスス[3257]に身を隠していたとき、突然、全身が治癒不可能な傷に覆われ、火のように耐え難い苦痛に苛まれて地面に転げ回り、体は溶けた蝋のように骨から塊ごとに剥がれ落ち、その罪深い魂は、肉体も血もない骸骨の中にのみ留まっていた。　ついに、骨さえも耐え難い痛みを伴って一つずつ剥がれ落ち、彼は、自らの不敬と残虐さによって、罪のないキリストの僕たちを迫害し殺害していたことを自覚すると、自らの神々を呪い、息を引き取った。

リキニウスは東方全土を制圧し、妻と共にニコミディアに威風堂々と入城した。当初、マクシミアヌスの残酷な迫害から解放され安らぎを得た信者たちの喜びと歓喜に包まれ、至る所に平和と静寂が支配していた。しかし、あらゆる善の敵である悪魔が、再びキリスト教徒たちを悲嘆の海へと沈めた。　リキニウスは東方での勢力を固めると、キリスト・神から背を向け、自身が育った忌まわしい偶像崇拝へと立ち返った。　コンスタンティヌスと帝位を分かち合い、そのキリスト教徒の妹と結婚するためだけに、彼はキリストの信仰を受け入れ、コンスタンティヌスに対して、決してキリスト教から背くことなく、常にそれを守り抜くと誓った。　その後、東ローマ皇帝となると、マクシミアヌスを打ち破り東方を手中に収めるのを助けてくれたキリスト・神の慈しみを忘れ、コンスタンティヌス帝の恩恵も忘れ、キリストと同様に彼からも背を向け、その悪しき敵となった。　ニコメディアにおいて、彼は公然とキリスト教を捨て、偶像を崇拝するようになり、至る所で異教の生贄の儀式を復活させるよう命じ、信者たちへの迫害を再び始めた。　まず第一に、彼は王宮からすべてのキリスト教徒――高官、使用人、従者――を追放し、キリストの慈悲を嘲笑し、異教の信仰に立ち返り、恥じることなく肉欲の罪にふけった。　彼は放蕩に溺れ、特にキリスト教徒の女性たちである上院議員の妻や娘たちを強引に淫行へと誘い込み、聖徒たちやキリストなる神そのものを冒涜しようとした。これを見た彼の妻、コンスタンティアという名の忠実なキリスト教徒は、心を痛め、密かに手紙でそのすべてを兄のコンスタンティヌスに伝えていた。

宮殿で彼女の侍女たちの中に、顔立ちが美しく貞淑な、グラフィラという名の少女がいた。彼女はイタリアの貴族の家系に生まれたキリスト教徒であった。　リキニウスは彼女を見て、不純な情欲に駆られ、ベニグヌという名の年長の宦官に、彼女に自分の情熱を伝えるよう命じた。ベニグヌはグラフィラに、皇帝が彼女に多大な栄誉を授け、彼女を愛し、会いたいと望んでおり、皇帝を迎える準備をするよう命じたと告げた。　しかし、神への畏れを胸に抱く敬虔な乙女は、そのような提案に憤り、宦官を恥辱とともに追い返し、その恥知らずさと不法さを非難した。皇后の疑念や嫉妬を招くことを恐れたグラフィラは、すべてを皇后に打ち明け、次のように懇願した。

「天と地を創造された主のために――あなたが畏れ、あなたの兄コンスタンティンが忠実に仕えているその主のために――私の貞操が、不法な好色漢によって汚されることのないよう、どうかお許しください。」

その言葉を聞いた王妃は、グラフィラの貞節と神への畏敬の念に深く心を打たれ、彼女をどのようにして匿うかを考え始めた。王がグラフィラの行方を尋ねると、王妃は宮殿内で「グラフィラは正気を失い、病に伏して死の淵にある」という噂を流すよう命じた。　その噂は王の耳にも届き、王はグラフィラのことは考えなくなった。そこで王妃は時機を待ち、敬虔なグラフィラを密かに宮殿から送り出し、金、銀、宝石、豪華な調度品、最高級の衣服、その他あらゆる品々を惜しみなく与えた。　多くの男奴隷と女奴隷を彼女の世話役として付け、王妃は自分の誠実で敬虔な家臣数人に彼女の世話を任せた。そして、誰にも一言も漏らさずにその娘をアルメニアへ送り届け、神が状況を好転させてくださるまで、そこで暮らさせるよう命じた。　家臣たちは、女王の命令を最大限の慎重さをもって遂行することを誓った。彼らはグラフィラとその侍女たちに男装をさせ、無事にニコメディアか

[3257] 小アジアにある古代都市。

ら連れ出した。長い旅の末、すでにアルメニアに近づいた頃、彼らはポンティウス大司教が住むアマシアの町に到着した。

その町の美しさにグラフィラは心を奪われ、もしそこにキリスト教徒がいるならこの町に留まろうと同行者たちに提案し、通行人に尋ね回るよう命じた。 そこで、アマシアの尊敬される市民クインティウスの家に住む一人の若者が彼らの前に現れた。この若者は、旅人たちが同じ信仰を持つ者たちを探しているキリスト教徒であると察し、そのことを主人に伝えた。クインティウスは直ちに自ら旅人たちのところへ出向き、自分の家に来て、望む限りそこに滞在するよう招待した。 彼は、自分もキリスト教徒であり、この街には多くのキリスト教徒がおり、使徒たちに匹敵するような高名な司教がいると語った。旅人たちはこの言葉を喜んで聞き入れ、クインティウスの元へ向かった。クインティウスは彼らに、住むための独立した静かな部屋を提供した。

また、この町の司教であるヴァシレイオスも彼らを訪ねてきた。彼については後ほど詳しく述べるが、雄弁で、霊的な美徳に恵まれた人物であった。彼は旅人たちに、自分たちが誰で、どこから来たのかと尋ねた。 貞淑なグラフィラは、イタリアの出身であり、キリスト教を信仰しており、コンスタンティヌス帝の姉、すなわちリキニウス帝の妻の侍女であったこと、そして旅に出た理由についても、すべてを正直に語った。 その話を聞き終えると、聖バシレイオス司教とクインティウスは、彼女とその使用人たちが 家の外へ出たり、誰かと話したりすることを禁じた。それは、市の統治者に彼女のことが知られ、アマシアのすべてのキリスト教徒が彼女のせいで災難に遭うことを防ぐためであった。

当時、聖バシレイオス司教は、キリスト教徒が街の外に小さな教会を一つしか持っていなかったため、街の中に教会を建設していた。福者グラフィラは、女王から与えられた金銀をすべて、自分には何も残さず、教会の建設のために司教に捧げた。 彼女は女王に、自分がどこに身を隠し、誰の家に住んでいるかを書き送った。また、教会の建設についても触れ、工事を完了させ、教会を装飾するためにさらに金を送ってほしいと懇願した。女王は喜んでその願いを聞き入れ、教会と司教に豊富な贈り物を送り、手紙の中で、貞潔なグラフィラを聖ヴァシレイの世話に委ねた。 ほどなくして、悪魔の策略により、グラフィラから女王への手紙が寝具係のヴェニグヌスの手に渡ってしまった。こうして彼は、誰もが死んだと思っていたその乙女が、実は生きてアマシアにいることを知ってしまったのである。 ヴェニグンはこのことをすべてリキニウスに伝え、リキニウスは激しい怒りに駆られて、アマシアの都市統治者に対し、キリスト教の司教ヴァシレイオスと女王の侍女グラフィラを鎖で縛り、直ちにニコミディアへ送るよう命令した。 しかし、神の御心により、至福の聖なる処女グラフィラは、その命令がアマシアの統治者に届く前に息を引き取った。そこで統治者は、バシレイオスだけを鎖で縛ってニコミディアへ送り、グラフィラについてはすでに亡くなったと報告した。 司教と共に、アマシアから二人の助祭、パルテニオスとテオティモスが同行したが、道中、不敬虔で残忍な兵士たちから多くの苦難を強いられた。 ニコミディアでは、神の僕ヴァシレイオスが牢獄に投獄され、パルテニオスとテオティモスは、牢獄からほど近い場所に住む、エルピディフォラという名の、旅人を温かく迎え入れるキリスト教徒の家に身を寄せた。

聖ヴァシレイについてすべてを知ったエルピディフォラは、知人の牢番に金を渡して賄賂を贈り、司教と自分、そして二人の助祭に面会できるよう手配した。こうして彼らは頻繁に聖ヴァシレイのもとを訪れ、毎日聖歌を歌い、夜には熱心に祈りを捧げた。

王の尋問を受ける前日のこと、聖なる司教は看守を呼び寄せ、助祭たちとエルピディフォラを呼んでくるよう頼んだ。看守は喜んでその依頼を遂行した。 すると、ヴァシリーはいつものようにダビデの詩篇を歌い始め、*「主よ、ダビデと、そのすべての苦悩を覚えてください」*（詩篇131:1）という詩篇から読み上げた。 *「たとえ私が夜明けの翼を羽ばたかせて海の果てへ移り住んだとしても、そこでもあなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を支えてくださる」*（詩編138:9–10）という箇所に差し掛かると、彼は両手を天に掲げて、その言葉を三度繰り返した。 祈る者の悲しみと

涙を見て、助祭たちは、司教がこれから待ち受ける苦難を恐れているのではないかと疑った。しかし、司教はこれらの言葉の意味を知っており、首を切られた後、自分の遺体が海に投げ込まれることを予言していたのである。詩篇の詠唱を終え、すでに夜明けが近づいていた頃、司教は助祭たちにこう言った。

「兄弟たちよ、悪魔の唆しにより、我々は過酷な試練に直面することになる。しかし、恐れてはならない。苦しみによって気力を失ってはならない。主の来臨の日に恥じることのないよう、勇気を持って揺るぎなく信仰を守り通せ。」　霊の目で、私たちを救うことのできる唯一の方、悲しみを喜びに、泣き声を歓喜に、涙を笑いに、労苦を安らぎに変えてくださる方へと、力強く目を向けなさい。　人生のあらゆる恵みと喜びを、神の御子イエス・キリストのために取るに足らないものと見なし、すべての聖徒たちと共に、御国の相続人となるようにしなさい。わが子らよ、この夜、主ご自身が私に現れ、私の人生にどのような結末が待っているか、そして神のしもべである私を通して、どれほどの御栄光が現れるかを告げられたことを知ってください。　それゆえ、あなたがたは悲しむことなく、それぞれの場所へ戻り、キリスト教の精神をもって兄弟たちを励ましてほしい。私の代わりに、カリストの息子エウティキオスを司教に選んでほしい。神はそう私に告げられた。神は、私の罪深いこの体をあなたがたに委ねられるだろう。

助祭たちは激しく泣いた。司教は、いつもの説教を述べた後、彼らにアマシアへ戻るよう説得した。そしてエルピディフォロスに向かって、次のように語りかけた。

「わが兄弟よ！　あなたは神によって旅人たちの奉仕に選ばれ、その愛ゆえに天において永遠の報いを受けるであろう。この二人の私の霊的な子供たちをあなたに託す。彼らを見捨てず、その悲しみを分かち合え。そして、神があなたを御自身の奉仕へと召された時には、熱心に努めよ。」

聖人がエルピディフォロスと二人の弟子を見送ると、王は彼を呼び出して尋問し、まず第一に、彼がグラフィラを自宅に迎え入れ、彼女を隠蔽し、王に報告しなかったと非難し始めた。　聖なる司教は直ちに、王を激怒させるほどの勇気をもって相応しい答えを返し、再び牢獄へと連行された。そこでリキニウスは、トリブヌスである[3258]　を彼のもとへ遣わし、グラフィラの一件を水に流すだけでなく、　、司教が神々に犠牲を捧げれば、栄誉を惜しみなく与え、さらには都市のすべての祭司の長に任命すると約束した。神の御使いヴァシリーは、トリブヌスにこう答えた。

「私の言葉を王に伝えてほしい。たとえあなたが私に王国全体を与えようとしたとしても、それはあなたが私から奪おうとしているものには及ばない。　あなたは、私を真の神から離れ、魂を滅ぼす悪魔に仕えさせようとしている。不滅の栄光を捨て、一時的で儚い栄誉を享受させようとしているのだ。その輝きは私にとって忌まわしく、光へと導くのではなく、救いようのない闇へと導くものである。　しかし、もし私の善き助言に耳を傾けるつもりなら、むしろ自分の罪を私に告白し、かつて背を向けたキリストのもとへ、以前のように立ち返るほうがよい。　謙虚に、慈悲深き神、私たちの義なる救い主の御足元にひれ伏しなさい。悔い改め、不義から離れなさい。そうすれば、あなたが神と呼びながら背を向けた、義なる裁き主が、あなたの狂気のためにあなたを罰することはないでしょう。

法廷で聖人のそのような言葉を聞いたリキニウスは、司教に対し、再び王に従うよう諭すよう命じ、もし拒否すれば、首を刎ねて海に投げ込むよう命じた。「そうすれば、あのガリラヤ人が彼を救うかどうか、見てみよう――[3259]」と彼は言った。

トリブーンは再び聖人のもとへやって来て、こう言った。

「生か死か、どちらかを選べ。王の言うことを聞き、その神々にひれ伏すか、さもなければ即座に首を刎ねられ、海に投げ込まれることになる。」

[3258] 軍部隊の長。

[3259] すなわち、イエス・キリスト。

そのような脅しを耳にした聖人は、喜びながらこう叫んだ。

「私はただ、不死の王であり神である御方にのみ仕えたい。そして、ただ御方の戒めのみに従う。」　あなたがたが神と呼ぶ者たちは、実は悪魔に過ぎない。彼らは、その崇拝者たちと共に、私の真の唯一の神であり、万物の主である方によって、義の審判の日に、消えることのない地獄の炎と、光の差し込まない闇の中に投げ込まれ、そこで泣き叫び、歯ぎしりすることになるだろう。私を好きに扱ってくれ。　私はキリストのために、剣による斬首や海への投棄だけでなく、数え切れないほどの他の苦しみも喜んで受け入れる覚悟がある。最後の息を引き取るまで、私は私の創造主である神を否定することはなく、永遠の火にさらされることもない。

これらの言葉から、説得が無益であると確信した裁判官は、聖人を鞭打つよう命じ、その後、首を切り落として海に投げ込むよう命じた。同じように、非常に多くのキリスト教徒、とりわけ神の羊の群れの牧者たちが、死に追いやられ、魚の餌食となった。キリストの殉教者ヴァシリーは、喜びをもって鞭打ちを受け入れ、こう叫んだ。

「いかなる苦しみも――痛みであれ、牢獄であれ、火であれ、剣であれ、死そのものであれ――私を全き慈愛の神から引き離すことはできない。神は、あらゆる苦しみから私を救い出す力をお持ちである。」

処刑場へ向かう道中、聖なる殉教者はダビデの詩篇を歌っていた。その後に、エルピディフォールが助祭たちや数人のキリスト教徒を連れて続いた。全員が指定された場所に到着すると、エルピディフォールは兵士たちに数枚の硬貨を渡して、ヴァシリーが友人たちと少し話せるように許可してほしいと頼んだ。　兵士たちは承諾した。海辺でひざまずき、両手を天に差し伸べて、キリストの忠実な僕である彼は、次のような言葉で祈りを捧げた。

「主よ、わが神よ、天の無形の御力を創造し、皮のように天を広げ、水の上に地を据え、海を造り、　至る所に、常に御臨在され、御あなたを畏れ、御あなたの戒めを守る者たちに慈しみ深い方よ、私の祈りを聞き入れ、御あなたが私、この取るに足らないしもべを牧者として立てられた御あなたの忠実な群れを、あらゆる災い、ギリシャ人の不敬、御あなたを冒涜する人々の悪口から守ってください。　全能なる御方よ、偶像崇拝を滅ぼし、悪魔の策略を打ち砕き、御自身の聖なる教会を尊び、増し加え給え。この都と周辺のすべての地を、心を一つにし、声を揃えるように導き、すべての者が、真の神である御方を告白するようにしてください。　すべての人々を善と御あなたへの奉仕に熱心な者とならせてください。そうして、すべての人において、父と子と聖霊の御名が、今、そしていつまでも、世々限りなく、賛美されますように。アーメン。

祈りを終えると、聖人はエルピディフォロスと二人の助祭を抱きしめて口づけし、かつて偉大なる使徒パウロがエフェソスの司祭たちを歓迎したのと同じ言葉で彼らに語りかけました（使徒言行録20:28–36参照）：

「私たちを見えざる敵の餌食となることを許さず、その陰謀を打ち砕き、私たちを救い出してくださった神に、賛美を捧げます。今や敵は、もはや私たちを試みることを敢えてしないでしょう。私の兄弟たちと霊の子らに、私からの敬意を表してください。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたすべてとともにあるように。アーメン。」

その後、聖なる殉教者は処刑人に「友よ！命じられたことを行いなさい」と言い、再びひざまずいて、喜びをもって剣の一撃に首を差し出し、その敬虔な偉業を全うした。

聖人が斬首されると、エルピディフォルは兵士たちに金を渡して、殉教者の遺体を海に投げ捨てず、埋葬のために自分に渡してくれるよう懇願した。しかし兵士たちは、そうすれば王に死刑に処されることを恐れるとして、同意しなかった。　そこでエルピディフォルは、司教の頭部だけでも渡してほしいと頼んだが、再び断られた。こうして兵士たちは、殉教者の遺体と頭部を漁船に乗せ、岸から遠く離れた場所まで漕ぎ出し、遺体をある場所に、頭部を別の場所に海に投げ捨てた。

岸辺からはキリスト教徒たちがその様子を見守り、苦々しく泣いていた。その中には、ニコメディア出身の司祭ヨハネもおり、彼は聖殉教者のこの偉業のすべてを目撃し、後にその様子を記した。キリストの忠実な僕エルピディフォルは、二人の助祭を自分の家へ連れ帰り、できる限り彼らを慰めた。

その夜、彼は夢の中で神聖な啓示を受けた。天使が現れてこう告げた。

「バシレイオス司教は今、シノペにおり、そこであなた方を待っている。彼の助祭たちを連れて、船で彼のもとへ向かえ。」

その幻視は夜の間、三度繰り返された。エルピディフォルはこれを助祭たちに話し、シノプという土地や都市がどこにあるか知っているかと尋ねた。パルフェニオスは答えた。

「シノプとは、聖使徒アンドレイがキリストの教えを説いた海辺の町です。そして私も夢の中で聖ヴァシリーを見ました。彼は使徒に手を差し伸べ、彼と共に教会に入り、私に『あなたが見ていることが実現するでしょう』と告げているように見えました。」

そこでエルピディフォルは、十分な量の金と旅に必要な物すべてを携え、助祭たちと共に船に乗り込み、神がその夢の幻を解き明かしてくださるよう熱心に祈りながら、シノプの町へと出航した。

船がシノプに近づいたとき、エルピディフォルは夢の中で再び天使を見ました。天使はこう言いました。

「町の右側で海に網を投げ入れなさい。そうすれば、あなたが探しているその宝物が見つかるだろう。」

天使は指でその場所を指し示し、それを見つけるための目印も教えた。エルピディフォルには、そこに明るい宮殿が見え、その中にはヴァシリーと多くの輝かしい戦士たちがいるように見えた。「ほら、探していた人物が見えるか？　朝になったら、彼を連れて行け。」　眠りから覚めたエルピディフォルは、その幻視について同行者たちに語った。

早朝、彼らは町の右側へ向かい、天使が示した手がかりに従ってその場所を見つけた。そこには、漁のために網を準備している漁師たちがいた。エルピディフォールはそれらの漁師たちにこう言った。

「私たち一人ひとりの幸運のために、網を投げ入れて、捕れた魚をすべて私たちに譲ってくださるなら、いくらでもお支払いします。」

漁師たちは同意し、値段も取り決めた。エルピディフォスと助祭たちは、誰の「幸運」で最初の網を投げるかをくじ引きで決めた。くじはテオティマスに当たった。網を投げたが、何も釣れなかった。次にパルフェニオスの「幸運」を試したが、やはり不発だった。そこでエルピディフォスは叫んだ。

「私の名ではなく、私の神の名において網を投げるよう命じる。神に信頼を置き、漁が実を結ばないことはないだろう。」

網を引き上げようとしたとき、漁師たちはその重さを感じ、互いにこう言い合った。

「この男の神は、他の神々よりも幸運だ。」

網を引き上げると、漁師たちは死体の姿を見て、今度は逆に、エルピディフォルの漁は最も不運なものだと語り始めた。　彼らは死体を再び海に投げ捨てようとしたが、エルピディフォロスとその一行はこれに反対し、漁師たちに遺体を引き渡して適切な埋葬を行わせ、約束の報酬を受け取った。漁師たちは「魚ではなく死体を捕まえたのだ」と言って金を受け取るのを拒んだが、結局、エルピディフォロスの強い要望により受け取った。　聖人の遺体は岸に運び出され、助祭たちとエルピディフォルは畏敬の念を抱き、喜びの涙を流しながら遺体に触れた。彼らは、処刑人が胴体から切り離し、海に投げ捨てたはずの頭部が元の位置にあり、首に残ったのは剣の傷跡だけであるという奇跡に驚嘆した。　殉教者の遺体からは、不思議な芳香が漂っていた。キリスト教徒たちは聖人の遺体を清ら

かな葬送の衣で包み、馬車を用意してアマシアへ運び、そこで哀悼の意を表した後、彼が建立した教会に丁重に埋葬した。このような殉教の偉業を成し遂げたのが、アマシアの司教聖ヴァシレイオスであった。

彼の死後まもなく、偉大なる皇帝コンスタンティヌスは、妹からの秘密の手紙を通じてリキニウスの放蕩、背教、残虐行為を知ると、大軍を率いて彼に攻め寄せ、神の御加護により彼を打ち破った。リキニウスは生け捕りにされ、ガリアに流刑に処され、そこで悲惨な最期を遂げた。　東方全土は迫害者たちの暴虐から解放され、キリスト・神を自由に礼拝した。全宇宙に、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の栄光が広まり、その神に、すべての者から、世々限りなく、栄光と礼拝が捧げられますように。アーメン。

コンダク、第4調：

王の命令に背き、天の御国を受けられたバシレイオスよ、その御国で喜び祝うとき、あなたの記憶を尊ぶ私たちを覚えてください、聖殉教者よ。

聖人伝：我らの父ステファノ、ペルミの司教

記念日：4月26日

聖ステファノは[3260]、ウスティユグ市で生まれた。彼の敬虔な父シメオンは、ロシア系であり、聖母マリア大聖堂の朗読者であった。　その妻マリアもまた模範的なキリスト教徒であり、彼女もまたロシア人の血を引いていた。この素晴らしい両親には、幼い頃から両親に喜びと感嘆をもたらした素晴らしい息子がいた。　幼い頃から両親によって学業に専念させられた彼は、その優れた記憶力、鋭い知性、そして並外れた勤勉さのおかげで、驚くべき速さと稀に見る堅実さをもって教えを身につけていった。学び始めてまだ一年も経たないうちに、彼はすでに、父が奉仕していたのと同じ教会で、カノナルクおよび朗読者の職にふさわしく就いていた。　聖書の知識において、多くの同世代の者たち――身内も他人も問わず――を凌駕していた彼は、その徳高い生活において、彼らをさらに上回っていた。彼は貞潔、清らかさ、節制、勤勉さの中で成長し、堕落した者たちや、虚しい遊びや娯楽に時間を費やす者たちとの付き合いを避けた。　彼が読んだ多くの旧約聖書と新約聖書の書物は、川のように急速に流れ、草の花のようにすぐに枯れてしまう、この現世の儚い人生について、彼の心に考えを芽生えさせた。同時に、聖書は彼の心に、神への消えることのない愛の感情を灯した。　こうした思いに駆られ、彼はロストフの聖グリゴリオス・テオロゴス修道院で、イグメン・マクシムから修道士としての戒律を受けた。修道院には豊富な蔵書があった。ここでステファンは、真に修道的な生活を送りつつ、同時に知識への渇望も満たしていた。　断食、祈り、涙、悔い改め、謙遜、忍耐、悪意のなさ、従順、愛、そして昼夜を問わず主の律法を学ぶこと――これらが、修道衣をまとうようになったばかりの彼を飾る美徳であった。さらに、彼自身も多くの著書を執筆し、それらは今日に至るまで彼の神への思索と勤勉さを物語っている。　その徳高い生涯により、彼はロストフのアルセニイ司教[3261]によって助祭に叙任され、同司教のもとで修道入会の儀式も執り行われた。数年後、全

[3260] その誕生年は、おそらく1340年であった。

[3261] 1374年から1380年までロストフの主教座に就いていたアルセニイ1世。

ロシア都主教区の長ミハイル（通称ミティア[3262] ）の命により、コロメンスクのゲラシム司教によって司祭に叙階された。

新たに叙階された修道士は、古くからモスクワ公国の支配下にあったペルミ地方が、まだ聖なる洗礼によって啓蒙されておらず、完全に偶像崇拝に耽っているという話を耳にした。 真の神を知らない闇の中で滅びゆく多くの人々の魂を思うと、聖ステファノは、ペルミの人々の元へ赴き、彼らを永遠の滅びから救い出したいという揺るぎない願いに駆られた。 しかし、この闇の中に、世界の創造主である神を知る真の光をふさわしい形で注ぎ込むためには、この新しい使徒は、最も重要な聖典をペルミ語に翻訳する必要があった。ステファンはこの 言語を徹底的に学び、ペルミ語のアルファベット[3263] を作成した。 聖書をより深く理解し、それをペルミ語に最も正確に伝えるべく、使徒的宣教の後継者はギリシャ語にも精通した。こうして彼は、ロシア・スラブ語、ギリシャ語、ペルミ語の3つの言語で聖書を十分に理解して読むことができるようになった。

人は神の恵みある助けなしにはいかなる善行も成し遂げられないことを深く理解していた彼は、自らの道を神が祝福してくださるよう、長く涙ながらに祈りを捧げた。

教会の従順な息子として、教会の霊的権威の許可なしにはいかなる重要な事柄も始めない聖ステファンは、当時のロシア都主教区の代理であるコロメンスクのゲラシム司教のもとへ向かった。その面前に進み出て、彼は自らの燃えるような願いを打ち明けた。それは、ペルミの人々をキリストへと改宗させること[3264] 、あるいは彼らによって苦難を受け、使徒の言葉*「あなたがたには、キリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦難を受けることも与えられている」*（フィリピ1:29）を成就するために、私たちの救い主のために命を捧げることのいずれかであった。 司教は、キリストに対する彼の熱意と、人々の魂を救いたいという願いに感銘を受けた。 彼の中に神の召命と聖霊の働きを見出した司教は、主キリストを賛美し、聖ステファノにこれから待ち受ける偉業に向けて祝福を与えた。同時に、彼はステファノに聖遺物の断片、アンティミンソ、聖油、そして教会の聖別に必要なすべてのものを授けた。

教会当局からの許可を得たステファンは、模範的な市民として、世俗当局の合法的な支援によって自らの事業を確固たるものにするよう努め、大公から保護状を受け取った。

万全の準備を整えたステファンは旅立った。不信心なペルミの地に到着すると、彼は主に向かって熱心に祈りを捧げ、まるで狼の群れの中の羊のように、反抗的で堕落した人々の間に身を置き、彼らにキリスト教の信仰を教え始めた。 彼の説教を聞いた者の中には、当初はこの新しい教えに驚いた者もいた。しかしその後、徐々に真理を悟り始め、聖なる信仰を受け入れ、洗礼を受け、説教者の教えに従うようになった。 しかし、多くの人々は彼の話を聞くことを拒んだだけでなく、彼に数多くの苦難をもたらした。ある者はあらゆる手段で彼を罵倒した。またある者は、彼を殺害しようと棍棒を持って襲いかかった。さらに別の者は、彼を焼き殺そうとした。しかし、主の御手は、御自身の聖なる御名を最も大いに栄光させるために、この神のしもべを殺意に満ちた手や死から守られた。

数人の魂に洗礼を授け、キリスト教の真理を教えた後、彼は、キリストの羊である小さな群れのために、大河ヴィチェグダ川に注ぐヴィミ川の河口近くに、壮麗な教会を建立した。その場所には、後に彼の修道院が設けられた。 彼は新しく建てられた教会を、尊く栄光に満ちた聖母マリアの受

[3262] ミティアは、 大公ドミトリー・イオアンノヴィチの寵愛を受けた司祭兼告解司祭であり、後にモスクワのスパス修道院のアルヒマンドリトとなった彼は、1378年の聖アレクシオスの死後、叙階を受けずに全ロシア都主教区を統括し、1379年、叙階を受けるために向かったコンスタンティノープルへの道中で死去した。

[3263] このアルファベットを作成するにあたり、彼は薄い四角い棒に刻まれたペルミ人の貨幣記号を利用した。

[3264] ペルミ人、あるいはジリヤ人は、トゥーラン語族のフィン系またはウラル系に属する民族である。その多くは中背で、がっしりとした均整の取れた体格をしており、黒髪に灰色の瞳や濃い茶色の瞳をしている。 勇敢さ、機知、忍耐力、狡猾さ、好奇心、そして創意工夫――これらは彼らに欠かせない資質である。とりわけ、その創意工夫は、鳥や獣、魚を捕獲するための数多くの多様な方法に表れている。

胎告知を記念して奉献した。この奉献によって、彼は、受胎告知が私たちの救いの始まりであったように、最初のペルミの教会もまた、ペルミの地の啓蒙の始まりとして現れたという考えを表現したのである。

この教会で、彼は昼夜を問わず涙ながらに、不信者たちの回心を神に祈り求め、こう語った。

「主よ、散らされた御民と迷い出た羊たちを集め、御自身の聖なる教会へと導き入れ、御自身の選ばれた群れに加え給え。」

彼自身も絶えず使徒のように彼らを教え、正しい道へと導き、誤った道から立ち返るよう懇願した。しかし、彼が彼らの魂を救おうと熱心に尽くせばするほど、彼らはますます彼に対して怒りを募らせていった。

ある日、ステファノは主に祈りを捧げた後、彼らが特に崇拝していた偶像の祠へと向かい、そこに火を放った。その時は偶像崇拝者が誰もいなかったため、祠は中のすべての偶像とともに灰と化した。聖人は焼け落ちた建物のそばに座り、不信仰者たちがどう反応するかを待っていた。

不信仰者たちは、自分たちの大切な偶像崇拝所が燃えているのを見ると、斧やクレーンを手に急いでそこへ駆けつけた。駆けつけると、そのそばに座っている聖ステファノの姿を目にした彼らは、激怒して彼に襲いかかり、四方から取り囲んで殺そうとした。

聖人は彼らに反論することなく、ただ両手を挙げて祈りを捧げ、死を覚悟して涙ながらに神にこう叫びました。

「主よ、私の霊を御手に委ねます。御慈愛の翼で私をお覆いください。」

すると、突如として、極度に激昂していた民衆の怒りは、子羊のような柔和さに変わった。神の御心に適う者は無傷のままであった――誰も彼を傷つけず、殴ることさえなかった。それは、民衆が一部には聖人の柔和さに心を打たれ、一部にはモスクワ政府を恐れ、モスクワから書簡を持ってやって来たこの男を殺すことを躊躇したからであるが、何よりも、　異教徒たちは、義人の運命を罪人の杖に委ねない神の力によって、自制していたのである。

そこで、至福のステファンは、特に目立つ場所に立ち、不信仰な民衆に向かってこう叫んだ。

「おお、人々よ、いつまで悪魔の誘惑から離れず、裁きと永遠の炎を免れようとしないのか？なぜ偶像を崇拝し、それらを『神々』と呼ぶのか。それらはあなたたち自身の手で造ったものに過ぎず、たとえ口があっても語らず、耳があっても何も聞かず、目があっても何も見ず、　その鼻孔は匂いを嗅ぐこともなく、手は触れることもなく、足は歩くこともなく、喉頭は声を上げることもない。彼らは捧げられた供え物を受け入れず――食べもせず、飲んでもいない。彼らは誰の助けにもならない。なぜなら、火が彼らを焼き尽くし、灰に変えたとき、自分たち自身を助けることさえできなかったのだから。　もし彼らが本当に神であるなら、なぜ火を消さず、炎を避けず、彼らを焼き尽くす者に赦しの言葉をかけず、何ら罰を与えなかったのか。そもそも、感覚のない木に何ができるというのか。それなのに、あなたがたは、声もなく、目も見えず、耳も聞こえない、自分たちの手で作ったものにひれ伏しているのだ。　あなた方を惑わしている誤りを悟り、この破滅的な虚飾を捨て去りなさい。キリスト教徒が信じる、唯一の真の神を知りなさい。　御方に近づき、啓発されなさい。御方は天を確立し、地を築き、被造物の存在を支え、全世界を統治しておられるからです。御方は一人ひとりの必要を知っておられます。御方はすべての人々の摂理者であり、助け手であり、守り手であり、御方以外に神は存在しません。それゆえ、ペルミの男たちよ、兄弟たちよ、父たちよ、子供たちよ！あなたがたに善を願う私の言葉に耳を傾け、私が宣べ伝える私たちの主イエス・キリストを信じなさい。真実を告げよう。もしあなたがたが信じて洗礼を受ければ、救われ、天の御国を受け継ぐことになる。しかし、もし信じず、洗礼を受けなければ、永遠の苦しみへと裁かれることになる。

聖ステファノがこのように教え、その言葉に他の教えも加えながら説き続けると、多くの人々が納得し、信仰を持ち始めて洗礼を受けました。そして日ごとに信者の数は増え、ペルミアのキリストの教会は成長していきました。

聖ステファノは、どこかで異教徒たちが集まっているのを見つけると、すぐに近づき、群衆の中に立ち、キリストについて説教した。　また時には、彼ら自身も長老たちや占い師、そしてペルミの最も高名な男たちを伴って集まり、信仰について論じるために聖ステファノのもとを訪れ、説教者の神を讃える口から発せられる敬虔な言葉によって、あらゆる点で打ち負かされることもあった。特に、信仰を持たないペルミの人々は、救いの祈りを求めてではなく、新しく建てられた教会の美しさとその内部の壮麗さを眺めたいという願望から、頻繁に訪れていました。そのようなものを一度も見たことがなかった彼らは、聖なる神殿の装飾に驚嘆し、立ち去る際に互いにこう語り合いました。

「見ての通り、キリスト教の神は偉大だ。私たちの神々よりもはるかに偉大だ。」

また時には、集まって互いに相談し合い、こう言い合った。

「もしステファノを傷つけず、彼を追い出さなければ、彼は私たちの国全体をその教えで満たし、私たちの神々の古代の神殿や祭祀場を荒廃させてしまうだろう。私たちは言葉では彼に太刀打ちできない。彼をここから追い出すには、力を使うしかない。」

他の人々は反論した。

「彼はモスクワから来ており、勅書も持っているのに、どうやって彼を殴り、追い出せるというのか。」

さらに、ある者たちはこう付け加えた：

「もし彼が先に戦いを仕掛けてきたのなら、戦いの最中に彼に傷を負わせるのも容易だっただろう。しかし、彼は狡猾なやり方をとっている――自ら攻撃を仕掛けず、我々が戦いを始めるのを待ち、モスクワで我々を告発する口実を得ようとしているのだ。　もし彼が我々の誰かを殴る勇気さえあれば、我々は即座に彼を打ちのめし、正当化できたはずだ――彼が先に我々を攻撃したのだから。しかし、彼は我々の侮辱に対して怒りや非難の言葉一つ発せず、すべてを忍耐強く耐えているため、我々は彼をどう扱えばよいのか分からない。

こうして彼らは何度も協議を重ねたが、何の合意にも至らず、解散した。これこそが預言者の言葉*「言葉を語っても、それは成就しない。なぜなら、神は我々と共におられるからである」*（イザヤ書8:10）が成就した瞬間であった。

こうして、ペルミ地方全体が二分された。住民の中には新たにキリスト教に改宗した者たちがいた一方で、異教の闇にとどまる者たちもいた。偶像崇拝者たちは信者たちを憎み、罵倒や非難の言葉で彼らを貶め、侮辱を加え、それによって彼らの安らぎを乱した。　信者たちが不信仰者たちから不当な扱いを受けているのを見て、聖ステファノは深く嘆き、昼夜を問わずしばしば涙ながらに、人を愛する神に祈りを捧げた。新しく集められた羊の群れを神の御加護で守り、不義な者たちを全能の御右の手で悪魔の罠から救い出し、真理を知るよう導いてくださるよう願ったのである。

この御自分の御使いによる絶え間ない涙の祈りを聞き、その労苦と忍耐をご覧になった、すべての人を救い、真理の知恵に至らせたいと願われる慈愛に満ちた神は、ペルミの地に聖なる信仰の光をもたらすことを御心に留められた。　神は、かつて使徒ペトロの説教に耳を傾けた人々のように、ペルミの民に心を打たれる霊をお遣わしになった。これは『使徒行伝』にも記されている。*「これを聞いて、彼らは心を打たれ、ペトロと他の使徒たちに言った。『兄弟たちよ、私たちはどうすればよいのでしょうか』」*（使徒行伝2:37）。

こうして、ペルミの民の多く――老いも若きも、大人も子供も――が集まり、互いに語り合ったのである。

――兄弟たちよ、ロシアからやって来たこの人をご覧なさい！　彼の言葉を聞きましたか？　彼の忍耐強さに気づきましたか？　私たちに対する彼の偉大な愛を理解しましたか？　彼はこれほどまでに苦しい状況に置かれているにもかかわらず、ここから去ろうとしないのです！　彼は私たちからどれほどの嫌がらせ、屈辱、侮辱を受けたことか。それにもかかわらず、怒ることもなく、誰に対しても傷つけるような言葉さえ口にせず、すべてを異議なく受け入れている。私たちに対して何の悪

意も抱かず、誰にも手を出さず、大きな敵意もなく、強靭な精神で全てを耐え忍んでいる。それどころか、　私たちが彼を傷つける時でさえ、彼は喜び、同時に、天の御国や永遠の苦しみ、そして各人の行いに応じた報いについて語り続け、常に私たちに、いかにして苦しみから解放され、御国を得られるかを教えてくれている。　もし彼の語る事が真実でなかったなら、彼はこれほどまで耐え忍び、これほどまでに尽力することはなかっただろう！まことに彼は、天と地を創造し、善き者には御国を、悪しき者には苦しみを用意された、彼が宣べ伝える偉大で生ける神のしもべであり、彼の言葉はすべて真実である！

さあ、彼のところへ行き、その信仰の完全さを私たちに教え、私たちをキリスト教徒にしてくれるよう懇願しよう。

こうして、大勢の男たち、女たち、そして子供たちが、聖なる説教者のもとへと向かった。

一方、聖ステファノは、これほど多くの人々がキリスト・神のもとへ向かうのを見て、言葉に尽くせないほど喜び、喜びの涙を流しながら、罪人の死を望まない慈愛に満ちた主に対して、言い尽くせないほどの感謝を捧げた。　彼は、まるで父親が子供たちを迎えるかのように愛をもって彼らを迎え入れ、神に霊感を受けた口を開き、聖なる信仰のすべての奥義について長く説き明かした。そして神は、彼らが聖人の教えを理解できるよう、彼らの心を啓発された。彼らは喜んでその言葉を受け入れ、彼に洗礼を請い、彼は父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けた。

このようにして、神の恵みと、聖ステファノの労苦と祈りによって、ペルミの地はキリスト教の光に照らされた。

新たに改宗した人々は、家々や村々、道端、森や林に立っていたかつての偶像を破壊し、その神殿を荒らした。とりわけ、聖ステファノ自身はこのことに尽力した。彼は至る所を巡り、斧で偶像を切り倒し、異教徒の供え物と共にそれらを焼き払った。

なお、ペルミの異教徒たちには、狩りで捕らえた動物――例えば、ソベル、イタチ、オコジョ、ヤマネコ、ビーバー、キツネ、クマ、オオヤマネコなど――の毛皮を神々に捧げ、それらを偶像に吊るす習慣があった。　さらに、彼らは偶像の上部を最高級の布で覆い、おくるみで巻きつけていた。これらの供え物のいずれも、誰も手を出そうとはしなかった。なぜなら、もし誰かがそれらに触れようものなら、その者は重病に陥り、サタンの仕業によって、体をよじらせ、痙攣に襲われるからである。　しかし、聖ステファノは、神への熱意に燃え、悪魔の力を恐れることなく、偶像に捧げられたすべての供物を、自ら切り刻んだ偶像と共に一か所に集め、焼き尽くして灰に変えた。　しかも、彼自身は供え物から何も取らなかっただけでなく、他の信者たちにもそれを許さなかった。供え物を悪魔の一部と見なしていたからである。ただ、彼の弟子である[3265]、すなわち新たに改宗したペルミ人のマタイに対しては、 の偶像の布や包帯から、[3266]という足袋を作るよう命じた。これは異教の神々を冒涜するためであった。　ペルミの人々は、尊者が貴重な品々を一切手に入れず、すべてを火に投げ込むこと、そして悪魔から何の害も受けないことに、大いに、そして二重に驚いた。これは、悪魔の力を打ち破るキリストの力への彼らの信仰をさらに強め、敬虔さを確固たるものにした。　各地で数多くの偶像を打ち砕いた聖ステファノは、さらに二つの教会を建立した。というのも、キリストを信じる者たちは日ごとに、しかも大勢ずつ増えていったのに対し、不信仰者たちは日ごとに減っていったからである。　ペルミの布教者は、教会に学校を設立し、若者や少年、幼い子供たちを集めて、ペルミのアルファベットや『時課書』の読み方を教え、　『詩篇』や、彼がペルミ語に翻訳したその他の書物から読み方を教え、ペルミ人の中から、彼らの部族と言語に根ざした司祭、助祭、その他の聖職者、そして教師を育成した。こうして、ペルミでは聖なるキリスト教の信仰が繁栄し、輝きを

[3265] すなわち、奉仕者。

[3266] 「オヌチャ」あるいは「オヌチカ」とは、ストッキングの代わりに足を包むための、キャンバス地やその他の布の切れ端を指す。

放っていた。　聖ステファノが、新たに改宗した者たちの信仰を確固たるものにするためにこうした活動を行っている最中、ある魔術師、すなわち[3267] と呼ばれる、呪術師や魔法使いたちの首領が彼の元を訪れた。ペルミの人々は洗礼を受ける前、この男をすべての魔術師の中で最も尊敬しており、その魔法の力でペルミの全土を支配する父であり師として崇めていた。　彼は、新しく洗礼を受けた者たちを惑わし始め、こう言った。「ペルミの男たち、兄弟たちよ、なぜ先祖代々の神々と信仰を捨てようとするのか？　なぜ、先祖たちがそうしていたように、彼らに犠牲を捧げるのをやめるのか？　誰の言うことを聞いているのか？　モスクワから来たあの男のことではないか？　果たして、モスクワから私たちにとって良いことがあり得るだろうか？　私たちに重税が課され、暴力が振るわれ、裁判官や役人が送り込まれるのは、まさにそこからのことではないか？　だから、このロシア人――それもモスクワ出身の、よそ者であるこの男の言うことを聞いてはならない。代わりに、あなたたちのことを思い、善を願う私、同族の者の言葉に耳を傾けてほしい。私はあなたたちと同じ部族、同じ国出身であり、同じ言葉を話しているのだから、この若者――年齢からして私の息子や孫にもなり得る者――よりも、あなたたちの長老であり父である私の言葉に耳を傾けるほうが、はるかにふさわしいのだ。」

これに対し、新啓蒙主義者たちはこう言った。

「さあ、行け。彼と論争しろ。私たちと論争するな。」

この魔術師は、尊者にとって最も手強い敵であり、二人の間には激しい争いが勃発した。魔術師は自分の魔術で尊者を滅ぼそうとした。彼は悪霊を呼び出し、呪術を働いたが、成功しなかった。悪霊たちは神の御心にかなう者に近づくことができなかったため、彼の魔術はすべて打ち砕かれたのである。　しかし、悪意に満ちた魔術師は止まることなく、毎日聖人に迷惑をかけ続けた。彼は公然とキリスト教の聖なる信仰を冒涜し、それによって信仰がまだ確固としていない人々を惑わせ、彼らを以前の不敬虔へと引き戻そうとした。また、ある者たちを言葉で惑わせ、他の者たちを贈り物で自分の側に引き寄せた。　彼はしばしば論争を仕掛けるために聖人のもとを訪れ、その際、罵倒や非難を浴びせて、あらゆる手段でこの無敵のキリストの戦士を打ち負かそうと試みた。ある時、彼は聖ステファノにこう言った。

「お前が冒涜する我らの神々は、ただその慈悲ゆえに、お前を滅ぼさなかったのだ。そうでなければ、とっくにお前を打ち砕いたり、萎縮させたりしていたはずだ。しかし、彼らはその寛大さゆえにお前を容赦し、お前が彼らの慈愛を知って、彼らに迷惑をかけるのをやめるようにしているのだ。そして、我らの信仰がお前たちのキリスト教の信仰よりも優れていることについては、こうして明確に証明してやる：　あなたたちには神が一人しかいないが、私たちには多くの神々、すなわち助け手や守護者がおり、彼らは水の中にいる魚、空を飛ぶ鳥、森や草原にいるテン、イタチ、オオヤマネコ、その他の獣――私たちの猟で捕らえられたものがあなたたちのところまで届く――といった、あらゆるものを私たちに与えてくれるのだ。　それらのおかげで、あなた方の公爵やボヤール、貴族たちは富を蓄え、それらを身にまとい、誇り高く威風堂々と歩き回り、互いに贈り合ったり取引したりし、隣国や遠く離れた土地――オルダ、ギリシャ、ドイツ、リトアニア――へと送り出している。これらすべては、私たちの多くの神々が私たちに授けてくれる獲物によるものである。　私たちの信仰は、あなた方のものよりはるかに優れています。その理由は他にもあります。　我々のところでは、たった一人か二人が熊と戦い、神々の助けを借りてそれを仕留め、その見返りとして神々に熊の皮を捧げることを約束する。しかし、あなた方の場合は、一頭の熊に対して百人、あるいは二百人以上もの人々が向かうが、それだけの数でも一頭の獣を倒すのはやっとであり、時には倒すことさえできず、むしろ自分たちが熊に傷つけられ、手ぶらで狩りから戻ってくるのだ。　さらに、私たちの信仰があなた方のものより優れているのは、たとえ遠く離れた場所で起きた出来事であっても、私たちには

[3267] この魔術師はパモイと呼ばれていた。

その日のうちに知れ渡るが、あなた方の場合はそうではなく、何日も経ってからようやく何らかの知らせが届くからです。これらすべてを考慮しても、私たちの信仰はあなた方のものより優れています。

これに対し、聖ステファノは、唯一のキリスト教の神は多くの異教の神々よりも優れていると反論した。なぜなら、それらの神々は神ではなく、天から深淵へと追放された悪魔であり、無知な人々を魂のない偶像へと誘惑する者たちだからである。　彼らは人々に助けを与えるどころか、むしろ害を与え、常に悪を行うことを企てている。邪悪で、慈悲がなく、怒りっぽく、激怒に満ち、嫉妬深く憎しみに満ちた存在である彼らは、もし神の力によって縛られ、抑えられていなければ、即座に人類を滅ぼそうとするだろう。　あらゆる獲物は、一か所に不動に立つ偶像や、神の被造物に対して何の権威も持たない悪霊たちによって人々に与えられるのではなく、すべての恵みの与え主ご自身――各人の労苦に応じてその賜物を分け与える神――から与えられるのである。また、獣との闘いはペルミアだけでなく、あらゆる土地や国々で起こっている。　人間が獣に打ち勝つのは、あなたがたの神々の助けによるものではなく、肉体の力か、あるいは格闘家の技によるものであり、何よりも、天の神があらゆる獣、家畜、鳥、魚を人間の足の下に服従させたという事実に基づいているのである。また、キリストの名によって猛獣を鎮め、獅子の口を封じ、言葉によって熊やヒョウを縛り[3268]、アスピド[3269]、バシリスク[3270]、そしてあらゆる蛇を踏みつけにしたキリスト教徒も数多くいた。

また、神々が東方の三博士に迅速に伝えた知らせへの言及に対して、聖人は次のように反論した。キリスト教教会には、霊的な目で、まるで目の前にあるかのように遠くで起きている出来事を見るだけでなく、自らの死後何年も経ってから起こるべき事柄さえ予言した、そのような先見の明を持つ人々が数多くいたのだ。　同様に、旧約聖書の聖なる預言者たちも、何年も前から、後に新約聖書のキリスト教教会で実現することとなる出来事を予告していた。

信仰をめぐる長きにわたる度重なる論争の末、聖ステファノと魔術師は、どちらの側に真理があるかを実践によって試すのが最善であるという結論に達した。　魔術師の提案により、彼らは次のように取り決めた――火と水の中を通り抜け、火の中で燃え尽きず、水の中で溺れない者の信仰こそが真実であり、民はその者に従うべきである、と。この取り決めは、論争を聞くために集まったペルミの民全員の賛同を得た。

聖ステファンは魔術師にこう言った。

「あなたは、私の微力では到底及ばないことを求めたが、私は、すべての者の救いを求めておられる全能の神の寛大さと慈悲に希望を置いている。神は、御自身の聖なる御名の栄光のために、火の中や水の中でも、私を奇跡的に生きたまま無傷で守ってくださるだろう。　この奇跡によって、ここに集う民の信仰が確固たるものとなり、お前は、頼りにしている悪魔たちと共に恥をかくことになるだろう。

魔術師にこう告げた後、聖ステファノは民衆に向かってこう言った。

「主を賛美せよ。火を取り、ここに持ち込み、この、特に離れた場所にあり、入り口が開いたままの空の小屋に火をつけてください。そして私は、魔術師と手を取り合って、その中に入ります。」

そして火が運ばれてきて、小屋に火が放たれた。聖ステファノは天に向かって両手を挙げ、次のように神に祈った。

「あわれみ深き主よ、*『苦難のうちに私たちを助けてください。人の守りはむなしいからです』*（詩篇 59:13）、あなたの憐れみを送り、あなたの慈愛を示し、あなたの力を現してください。そうすれば、ここに集う人々が真の信仰を理解し、あなたが唯一の真の神であり、私があなたのしもべ

[3268] 「パード」とは、パンテラのことである。

[3269] アスピド――非常に毒の強いヘビの一種。

[3270] ヴァシリスク――最も毒の強い蛇で、古代の伝説によれば、その息で相手を焼き尽くすと言われている。

であることを知るでしょう。*「見よ、あなたの敵は騒ぎ立て、あなたを憎む者たちは頭を上げている」*（詩篇　82:3）、*「彼らは天に向かって口を開き、その舌は地の上を歩き回る」*（詩篇　72:9）。それゆえ、*「私に幸いのしるしを示してください。そうすれば、私を憎む者たちはそれを見て恥じ入るでしょう。主よ、あなたが私を助け、私を慰めてくださったからです」*（詩編85:17）。あなたは、あらゆる苦しみの中で、御霊なる慰め主によって私たちを慰めてくださる神です。御霊とともに、永遠に祝福されますように。アーメン。

祈りを終えると、彼は民にこう言った。

「兄弟たちよ、平安あれ。逃れ去り、私のために祈り、懇願してください。私は聖なる信仰のために死ぬ覚悟ができています。信仰の指導者であり、完成者であるイエスに信頼を置き、私の前にある試練へと駆け出します。」

そして、魔術師の方を向いて、彼にこう言った。

「約束した通り、手を取り合って一緒に行こう。」

しかし、魔術師は、激しく燃え盛る炎による苦痛を恐れて、行くことを拒んだ。そこで聖人は、彼の衣服をしっかりと掴み、無理やり火の中へと引きずり込んだ。　魔術師は抵抗し、後ずさりして、地面に倒れ込みながら、わらや乾いた枝のようにすぐに火に焼かれてしまうだろうと叫んだ。すると、群衆は苛立ちを隠せず、彼自身の提案通りに火の中へ入るよう叫び始めた。しかし、彼は放っておいてほしいと懇願した。

その懇願に対し、聖ステファノは彼にこう言った。

「お前自身がこれを選び、生ける神を試そうとしたのではないのか。なぜ今になって拒むのだ？」

すると、魔術師は地面にひれ伏し、聖人の足元にすがりつきながら、自身の無力さを語り、自らの罪を自覚して、その欺瞞の虚しさを自白した。そして、聖ステファノを威嚇しようと、生ける神のしもべが怯えるに違いないと確信して、このような論争の解決策を思いついたことを明かした。しかし、魔術師の策略は彼自身に跳ね返り、その悪行は彼自身の頭上に降りかかった（参照：詩篇7:17）。同様に、ペルミの魔術師たちの長老も水の中へは入らなかった。川にはすでに二つの穴が掘られていた――一つは上流に、もう一つは下流に――　二人は手をつないで一つの穴に入り、氷の下を歩いてもう一つの穴から出てくるはずだった。聖ステファノが魔術師に、自分と一緒に穴に入るよう強要したとき、魔術師はそれを拒んだ。こうして、彼のすべての魔術の無力さと、かつて人々を惑わせていた教えの虚偽が露呈した。 その後、聖ステファノは魔術師にこう尋ねた。

「あなたはすでに打ち負かされたのだから、信仰を受け入れ、洗礼を受けたいか？」

しかし、彼はキリスト教の信仰と聖なる洗礼を受けることを拒んだ。そこで聖人は民衆にこう言った。

「あなたがたは、この呪われた者が、火と水によって正しい信仰を見極める方法を自ら考案しておきながら、火にも水にも入ろうとせず、自らの言葉を実行しようとしなかったことを目撃している。そして今なお、信仰せず、洗礼も求めない。彼についてどう思うか。答えてほしい。」

すると、民衆は叫んだ。

「死刑に処すべきだ！」

そして、彼を捕らえて聖ステファノの手に引き渡し、彼が望むいかなる死刑でも執行するよう命じた。その際、彼らはこう言った。

「もし彼を生かして放てば、お前にさらに大きな厄介事を引き起こすだろう。」

すると聖ステファノは彼らにこう答えた。

「いや、我らの手が敵に下ることはあってはならない。キリストは私を打つために遣わされたのではなく、福音を宣べ伝えるために遣わされたのだ。私を苦しめるよう命じられたのではなく、柔和をもって教え、穏やかに諭すよう命じられたのだ。同様に、私の主もまた、私を処刑するよう命じ

られたのではなく、*『義人が私を懲らしめるなら、それは恵みである。　私を責めよ』*（詩編140:5）。そして、彼は悪意に心を硬くされ、目がくらまされて信じようとしないのだから、彼には永遠の罰が待っている。なぜなら、私たちの主はこう言われているからだ。*「信じる者はバプテスマを受け、救われる。しかし、信じない者は裁かれる」*（マルコ16:16）。

彼がその偽りの教えによって神の民を惑わすことを、厳しく禁じるだけで十分である。キリストの群れの中に住まわせてはならない。闇が光に混じることなく、悪がすべての者の中から追い出されるように。　腐った肢は霊の剣によって切り捨てられ、この狼はこの地から追放されよ。もし彼が再びここに現れて教えを説こうとするなら、死刑を免れることはない。

このような禁止令により、その魔術師はペルミの領地から追放された。こうしてキリストの教会は平和を保ち、至る所に神の聖堂が建てられ、偶像崇拝の神殿は完全に破壊された。

まもなく、ペルミの地で教会は著しく拡大し、信者たちには専任の司教が必要となった。とりわけ、距離が遠いため、モスクワの都主教のもとへ司祭候補者を派遣するのは非常に不便であったからである。遠く離れたペルミは、モスクワからコンスタンティノープルまでの距離と同じくらい、モスクワから離れている。

聖ステファンは、信徒たちと事前に協議した後、モスクワの大公ディミトリ・イオアンノヴィチとミトロポリト・ピメンのもとへ向かった。彼は、神の恵みによってペルミ地方で成し遂げられたすべてのことを彼らに伝え、その地に司教を派遣するよう懇願した。なぜなら、「収穫は多いが、働き手は少ない」（マタイ9:37）と述べた。

大公、ミトロポリト、司教たち、そして聖公会は、聖ステファンの要請について協議し、彼こそが真にその栄誉にふさわしい人物であるとして、彼をペルミの司教に任命することを決定した。

――ペルミの地にキリストの恵みをもたらし、聖書をペルミ語に翻訳し、偶像を打ち砕き、教会を建立するという偉大な功績と労苦を成し遂げ、　こうしてペルミの使徒となった人物以外にいるでしょうか?

こうして、聖ステファンは[3271]によりペルミの司教に任命された。この任命は、かねてより聖ステファンを知っており、彼を愛していた大公を大いに喜ばせた。大公と大司教は、新たに任命された司教に贈り物を授けた後、彼をペルミへと送り出した。

新しく設立された教区に戻った彼は、信徒たちに大きな喜びをもたらした。司教の位についた聖ステファンは、以前と同様にペルミの教会のために熱心に尽力した。キリストに帰依した者たちを正教の信仰に堅く立たせ、　まだ信仰を持たない人々を信仰へと導き、洗礼を授けた。神の教会を建立し、司祭を任命し、教会の儀式を最善の形で整えた。また、修道院も建立した。寛大な施しを行い、乞食や貧しい者たちに食事を与え、裸の者に衣服を与え、悲しむ者を慰め、旅人を安らかにした[3272]。彼はすべての人にとって慈愛に満ちた父であり、偉大な恩人であり、また、牧される者たちの魂だけでなく、その肉体の必要にも心を配る、見守りの行き届いた牧者であった。例えば、ペルミで深刻な飢饉が起きた際、聖ステファンはヴォログダから船で頻繁に大量のパンを運び込み、それを貧しい人々に無償で配った。

こうして、神の御心に適う者、ペルミの司教ステファンは、ペルミの全土を神のもとへと導いた。聖なる教会を適切に統率し、彼は自らの導く信徒たちのために必要なあらゆるものを整えた。これほど多くの魂を救うために捧げられ、その健康を損なうこととなった長年の労苦の末、すでに高齢に達していた聖ステファンは、死期を迎えようとしていた。

[3271] 1383年、

[3272] 彼はまた、ボヤール（貴族）の指導者たちに対し、ペルミ人への賦税の軽減を請願し、ティウン（裁判官）や支配者たちによる暴行や賄賂から彼らを救った。

聖ステファンは、キプリアン都主教[3273] の在任中、ママイに対する勝利で名を轟かせた大公ディミトリの息子である大公ヴァシリー[3274] の治世の頃に、この世を去った。

人生の黄昏時、彼はいくつかの教会関連の用件のために、再びモスクワへ向かわなければならなかった。首都へ出発する前に、ステファンは信徒たちを招集し、聖書に基づいて、信仰を堅く守り、互いに偽りのない愛を保つよう教えを説いた。死が間近に迫っていることを感じ取り、彼は大牧者の説教を次のような言葉で締めくくった。

「わが主イエス・キリストが私に示されたように、私の死の時が近づいている。私はあなた方をその主にお委ねする。」

その後、祈りを捧げると、彼は旅立った。モスクワに到着すると、聖人は病に倒れ、数日間病床に伏した後、幼い頃から愛し続けてきた主のもとへ[3275] 召された。

その荘厳な葬儀には、公爵やボヤール、大主教をはじめとするすべての聖職者、そして大勢の民衆が参列した。皆が彼の遺体を敬意を込めて聖スパースキー修道院——現在のツァーリ宮殿がある場所——へと送り出した。修道院の石造りの教会において、神の御心に適う者の聖遺骨は左側に安置された。[3276]

ペルミの信徒たちは、自らの司教の死を深く嘆き悲しんだ。彼は、これほど多くの罪人の魂を主のもとへと導き、神の御使いたちをも大いなる喜びで満たしたのである。それゆえ、彼の聖なる魂は、御使いたちの手によって喜びをもって迎えられ、歓喜のうちに恵みの御座へと運ばれた。　聖なる主教たちの御姿と共に主の御前に立ち、聖ステファノはペルミの地だけでなく、全世界のためにも主に祈りを捧げている。

トロパリオ、第4調:

若き頃から神聖な志に燃え、至賢きステファノよ、あなたはキリストの軛を背負い、かつて不信仰によって心が凍りついていた人々の中に神の種を蒔き、福音の霊によって彼らを新生させた。それゆえ、あなたの栄光に満ちた記念を称えつつ、あなたに祈ります。あなたが宣べ伝えた御方に、私たちの魂を救ってくださるよう、どうか祈ってください。

コンダク、第8調:

自ら名乗ることなく、あなたを聖人として求める者たちの前に現れ、人々を偶像の誘惑から解放し、キリストの信仰へと導き、魔術師パンソトニクを恥じ入らせた。それゆえ、あなたはペルミの初代司教であり、教師であった。　このゆえに、あなたによって偶像から救われたあなたの霊的な子らは、感謝の声を上げて叫びます。「喜びなさい、ステファンよ、至賢き教師よ。」

聖なる義人グラフィラの記念日

記念日：4月26日

[3273] 彼は1375年から1381年まで、そして1383年から1390年まで大司教を務めた。

[3274] ヴァシリー・ドミトリエヴィチは1380年から1425年まで公爵を務めた。

[3275] 彼は1396年4月26日に死去した。

[3276] 彼の遺骨は、ボルのクレムリン内にあるスパスカヤ教会の地下に安置されている。

貞淑で神を畏れる乙女グラフィラは、皇帝リキニウスの妻コンスタンティア（[3277] ）に仕えていた。好色なリキニウスの不純な意図を知ると、彼女はニコメディア（[3278] ）を離れ、アマシア（[3279] ）へと移り、そこでバシレイオス司教の保護と守護の下で暮らしていた。　リキニウスに処罰のために呼び出された彼女は、バシレイオス司教と共に彼の元へ向かったが、道中で息を引き取り[3280] 天国の住処へと旅立った。

5月10日

4月27日（旧暦）

主の親族である聖使徒兼殉教者シメオンの記念日

記念日4月27日

聖シメオンは、肉親として我らの主イエス・キリストの親族と呼ばれ、聖ヨセフ・婚約者の兄弟であるクレオパの息子であった。このことは、ギリシャの教会史家たち――パレスチナ・ケサリアの司教エウセビオス[3281] 、ゲオルギオス・ケドリン、およびカリストスの息子ニキフォロス――が口を揃えて証言している。　クサンフォポロス。至聖なる神の母と婚約していたヨセフとクレオパは、同じ父と母から生まれた兄弟であり、前者が兄、後者が弟であった。　ヨセフがエジプトから戻ったとき、彼の娘マリアとクレオパは結婚した。この結婚から聖シメオンが生まれ、彼はすでに成人してからのことだったが、我らの主イエス・キリストの奇跡を目撃し、彼を信じた。自発的な苦難を経て、 復活、そして天への昇天を経て、シメオンは七十人の聖使徒の列に加えられ、 ら他の使徒たちと同様に、キリストの教えを宣べ伝え、町から町へと巡り、人々を教え導き、奇跡を行い、聖なる信仰の真理をもって諸国民を啓蒙し、偶像崇拝を糾弾した。　当時、エルサレムの初代司教は、主の兄弟であり、ヨセフ・婚約者の息子である聖ヤコブであった。不敬虔なユダヤ人たちは、キリストを賛美したとして、彼を神殿の玄関から突き落とし、棍棒で頭を殴打して殺害した。　この殺害の直後、ウェスパシアヌスの息子ティトゥスは、主ご自身が予言された通り、エルサレムを荒廃させた。　この壊滅の後、生き残ったキリストの弟子たちと、キリストの血縁者たちは集まり、神の兄弟ヤコブの後任として、第二代エルサレム司教にクレオパの息子シメオンを選出した。シメオンもまたキリストの血縁者であり、ヨセフ・ザ・ betrothed の孫であり、同時にその甥でもあった。 エルサレムには再び人々が住み着くようになった。聖シメオンはエルサレムの司教座を威厳をもって務め、迷える人々をキリストのもとへと導いた。

[3277] ローマ皇帝リキニウスは、311年から324年まで在位した。

[3278] ニコメディアは、小アジアのビフィニア地方にある都市で、マーブル海によって形成された湾の北東端に位置している。　ニコメディアは紀元前264年、ビフィニア王ニコメドス1世によって建設され、その名にちなんで名付けられた。ニコメディアは、ローマ皇帝やその将軍たちが東方遠征を行う際、好んで滞在した地であった。現在、古代ニコメディアの跡地にはイスミドという小さな町がある。

[3279] アマシアは小アジアの北部、黒海の沿岸に位置していた。

[3280] 聖グラフィラの死は、およそ322年に起こった。

[3281] エウセビオス・パンフィルス（283年 – 340年）、司教、第1回全地公会議の参加者。ゲオルギオス・ケドリン、11世紀末または12世紀初頭のビザンツの作家。ニキフォロス・クサンフォポロス、1350年から1362年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

それから何年も経ったトラヤヌス帝の治世中、ある異端者たちが嫉妬から、ローマの総督アッティクスに、シメオンの架空の罪――すなわち、彼がダビデ王の家系に属し、キリスト教の信仰を告白している――を密告した。当時、そのどちらについてもローマ皇帝による迫害が行われていた。ダビデの子孫たちは、ユダヤ王家の血筋の痕跡を一切残さず、ローマ皇帝が永遠にユダヤの地を支配できるよう、至る所で執拗に捜し出され、殺害された。また、全宇宙が異教の神々だけを崇めるようにと、キリストを信じる者たちも拷問され、殺害された。　そのため、聖シメオンは、ダビデ王の子孫として、またキリストの信奉者かつ親族として、すでに百歳の年齢に達していたにもかかわらず、アッティコス総督の命令により、不敬虔な異教徒たちに捕らえられました。長い拷問の末、聖人は、私たちの主イエス・キリストと同様に、十字架に釘付けにされ、その魂を神に委ねました。

トロパリオ、第1声：

キリストの親族であり、司祭長シメオンよ、また堅固な殉教者よ、世の誘惑を退け、信仰を守り抜いたあなたを、神聖に賛美します。それゆえ、今日、あなたの至聖なる記念を祝うにあたり、あなたの祈りによって罪の赦しを受けます。

コンダク、第4調：

大いなる星のごとく、教会は今日、神に愛されたシメオンを擁し、光に導かれてこう呼びかけます。「喜びなさい、殉教者たちの尊き冠よ。」

私たちの聖なる父ステファノ、ウラジミロ＝ヴォリンの司教の生涯

記念日：4月27日

「忍耐に慣れた者は」と、神に霊感を受けたエフレム・シリンは言う（[3282]）、「徳を求め、苦難の中で喜び、災難に遭っても気落ちせず、逆境のさなかにさえも喜びを見出す」。　これこそが、修道院の兄弟たちから多くの苦難を強いられた、私たちの尊い父ステファンであった。しかし、彼に悲しみが降りかかったとしても、神は彼に大きな喜びを与えてくださった。　預言者であり王であるダビデの*「私の心の悲しみが増すとき、あなたの慰めは私の魂を喜ばせる」*（詩編93:19）という言葉を心に留め、彼はあらゆる不幸を神から授かったものと見なし、喜びをもってそれらに耐え抜いた。　徳ある生活の長い試練の道を歩む中で、彼は幼少の頃から、称賛に値する修道院長、私たちの父テオドシオス・ペチェルスキーの指導の下にあり、常にその弟子として、まるで乳飲み子が母の乳房から乳を飲むように、師の蜜のように甘い口から発せられる神に霊感を受けた言葉を喜びをもって吸収していた。　立派な息子として、彼はその徳高い師に倣った。それゆえ、ステファン は兄弟団全員から愛され、教会規則の遵守を監督する「ドメスティコス」、すなわち監視役として選出され、イグメンである尊者テオドシウスと共に、教会において自らの教えをもって兄弟団を立派に導いた。

[3282] エフレム・シリン――4世紀に生きた教会の偉大な教師の一人。彼の著作の中でも、道徳的、教義的、そして聖書解釈的な性格を持つ数多くの「説教」が特に注目に値する。聖エフレム・シリンは、多くの心を打つ祈りと聖歌も残した。キリストの降誕に関するいくつかの聖歌や、埋葬の際に歌われる深く心を打つスティヒラも彼によるものです。彼が作成した祈りの中でも、特に注目すべきは、心を打つ四旬節の祈り「主よ、わが腹の主よ」です。――聖エフレムの記念日は、教会によって1月28日に祝われます。

尊者テオドシオスがこの世の生涯の終わりに近づいたとき、皆は彼に、修道者たちの中で最もふさわしいステファンをイグメンに任命するよう懇願した。　尊者テオドシオスは兄弟たちの懇願に耳を傾け、愛弟子である至福のステファノを呼び寄せ、修道士たちを導くよう託し、また、奇跡的な前兆のもとで建立された教会の建設を完成させるよう懇願した。　その後、修道院の規則を守り、純粋な心で兄弟たちを愛し、絶えず心の中で神に祈りを捧げ、巡礼者たちを忘れないよう教えを授けた後、聖人は永遠の命へと旅立ったが、ステファノに託したペチェルスク修道院への援助を決して絶やさないことを約束した。

こうして、聖テオドシオスの死後、ステファンは聖ペチェールスカヤ・ラヴラの修道院長職を引き継ぎ、修道者としての苦行に励みつつ、聖テオドシオスが着手し、すでに神の御加護に恵まれていた教会の建設や、その他の修道院の建物の建設に、並々ならぬ熱意をもって取り組んだ。

神の恵みと、私たちの尊い父であるアントニオスとテオドシオスの祈りにより、ステファノスは数年後に教会と新しい修道院の建設を完了し、旧修道院から修道士たちを新しい修道院へ移した。旧修道院には、慣習に従い、亡くなった修道士たちが埋葬されていたため、彼は数人の修道士を残した。　ステファンは、修道院において、亡くなった修道士たちと祝福された創設者たちを偲んで、毎日聖体礼儀が執り行われるという規則を定めた。この修道院に対する神の慈しみは尽きることがなく、この聖なる地において、神の恵みはますます鮮明に現れていった。しかし、あらゆる善と神の僕たちの敵である悪魔は　――は、聖なる修道院をこれほどまでに慈しむ至福の修道院長を憎み、その邪悪な策略によって、一部の修道士たちに騒動を起こさせ、彼らが満場一致で選出したステファンを修道院長職から追放しただけでなく、何の罪もないにもかかわらず、彼を修道院から追放してしまった。　尊者ステファンは、兄弟たちからのあらゆる仕打ちを恨みもなく耐え忍び、修道士たちと引き離されてもなお、彼らを愛し続けた。彼は彼らのために熱心に祈り、同名の初殉教者ステファンに倣って、こう叫んだ。

「主よ、彼らにこのことを罪として数えられませんように！」

まるで鉄が磁石に引き寄せられるかのように、彼は聖テオドシオスの安息の地へと抑えきれないほど強く惹かれていった。多くのボヤールや貴族たち――聖テオドシオスから彼に託された霊的な子ら――は、師の深い悲しみを聞き及ぶと、無実の罪で苦しむ彼に同情を覚え、熱心に彼に必要なものをすべて届けた。　その時、聖ステファンは、自ら目撃したあの輝かしい奇跡を思い出した。コンスタンティノープルから職人たちが来て、ペチェールスの聖アントニオスと聖テオドシオスの元を訪れ、至聖なる聖母マリアのイコンを捧げ、ヴラヘルナ教会で起こった皇后の幻視について語ったことである。　こうして、神の御加護と、聖アントニオスおよび聖テオドシオス両聖父の祈りにより、至福のステファノスはペチェールスカヤ・ラヴラからほど近いクロフの地に修道院を建立し、その中に至聖なる聖母マリアに捧げる石造りの教会を築き上げ、　コンスタンティノープルのヴラヘルナ教会を模して、聖母の尊い衣が安置されたことを記念して建てられた。毎年、聖人は7月2日を厳かに祝賀し、多くの修道士たちを集めて、神に喜ばれる生活を送った。　彼は教会の規則や修道院の組織体系をすべて取り入れ、ペチェールスク修道院の聖テオドシオスが定めた秩序に従って遵守するよう命じた。

自らの霊的完成に向けて多大な努力を重ねた結果、彼はますます名声を高めていき、最も辺鄙な地域でさえも、その徳高い生活によって知られ、称賛されるようになった。そのため、偉大なる大公ウラジーミルが自身の名にちなんで創設した栄光ある都市

ウラジーミルの司教が逝去した際――この都市は、大公ウラジーミルが自身の名にちなんで創設したものである――聖ステファンはこの都市の司教座に選出され、キエフ都主教ヨハネスによって司教に叙任された。　彼は、自分に託された羊たちの良き牧者であり、言葉、徳高い生活、愛、高潔な精神、信仰、そして清らかさをもって、信徒たちに模範を示した。

神の御心と、ペチェルスクの修道院長である至福のヨハネの思案により、私たちの尊い父テオドシオスの聖遺骨を洞窟から、神の御指示によって建てられた教会へ移そうとしたとき、称賛に値するステファン司教はウラジーミルから自身のクロフ修道院へとやって来た。　夜、洞窟の上の野原に明るい光を見た彼は、敬愛すべき　テオドシオスの聖遺骨が移送されているのだと思い（その計画については知っていた）、自分抜きで祝典が行われていることに心を痛めた。　彼は直ちに馬にまたがり、クロフ修道院の後任の修道院長に任命していたクリメントと共に、洞窟へと駆け出した。　彼らが洞窟に近づくと、遠くから見ていたあの明るい光が、無数の灯された蝋燭から発せられているものだと分かった。しかし、近くまで馬を走らせてみると、何も見えず、聖テオドシオスの尊い遺骸から発せられる神の栄光の光を拝見する恵みにあずかったのだと悟った。　すでに聖遺物の上の土を掘り起こし、洞窟の出口へと運び出していた。　この幻視の翌日、師であり父である聖テオドシオスの尊い遺骸を運んだ他の司教たちの中に、至福のステファンもいた。ウラジーミル大主教座に戻ると、彼は自らの徳をもって信徒たちを真理の道へと熱心に導き、それによって朽ちることのない栄光の冠に値する者となった。 その名「[3283] 」によってあらかじめ定められ、善行によって勝ち得たこの栄光の冠を受けるため、彼はキリストの降誕から1094年に、すべての牧者の長であるキリストのもとへ旅立った。　尊き冠を戴く聖ステファノの祈りによって、キリストなる神よ、私たちにも栄光の冠を授けてください。それは、あなたご自身、そして始まりなき御父と、同質なる御霊との栄光のためであり、今、そして常に、そして世々限りなく。アーメン。

5月11日

4月28日（旧暦）

聖使徒イアソンとソシパトル、および聖殉教者ケルキラの処女の記念日

4月28日の記念日

聖使徒ヤソンはタルソス[3284] の出身で、この町で最初のキリスト教徒であり、聖使徒ソシパトルはアカイア[3285] の出身であった。 キリストの聖なる信仰に帰依した後、二人は共に聖使徒パウロの弟子となり、パウロは『ローマ人への手紙』の中で彼らを「親族」とさえ呼んでいる（ローマ16:21）。イアソンは故郷のタルソスで司教に任命され、ソシパトルはイコニウムの教会の指導を引き受けた。　二人は共に勇敢に羊の群れを牧し、その数を増やしていった。西へと旅立った彼らは、ケルキラ島[3286] に到達し、そこで聖第一殉教者ステファノの名を冠した美しい教会を建立し、そこで礼拝を執り行い、多くの人々をキリストの信仰へと導いた。　島の王ケルキリノスに誹謗中傷された彼らは、七人の強盗――サトルニウス、イアキスホル、ファウスティアン、イアンヌアリウス、マルサリウス、エウフラシウス、マミウス――が収監されていた牢獄に投獄された。　聖使徒たちは、神に霊感を受けた説教によって彼らを聖なる信仰へと導き、狼たちを羊へと変えた。そこで王は、大釜で樹脂、硫黄、蜜蝋を煮溶かし、そこに新たに信仰を得たこの七人の囚人を投げ込むよう命じた。こうして彼らは殉教の死を遂げ、主から冠を授かった。　獄吏もまたキリストを信じるようになった。そのために、彼はまず左手を、次に両足を切り落とされ、そして、それでもなおキリストの御名を呼び続けると、ついに首を刎ねられた。こうして彼は聖なる殉教者たちの列に加わった。　また、聖使徒イア

[3283] ステファノスはギリシャ語で「冠」を意味する。
[3284] 小アジアにある都市で、イコニウムと同様である。
[3285] ギリシャのペロポネソス半島北部に位置する。
[3286] ギリシャに近いイオニア海に浮かぶ島。

ソンとソシパトロについては、王は彼らを牢獄から連れ出し、キプリアン公に拷問を委ねた。公は彼らをしっかりと縛り上げ、再び牢獄へ送り返した。

王宮から聖なる殉教者たちのそのような苦しみを見、彼らがキリストのために苦しんでいることを知った王の娘ケルキラは、自らをキリスト教徒であると宣言し、高価な衣装や装飾品を脱ぎ捨て、それらを貧しい人々に配った。

このことを知った彼女の父は深い悲しみに打ちひしがれ、娘をキリストの信仰から引き離すためにあらゆる努力を尽くした。しかし、すべてが徒労に終わったとき、王は激しい怒りに駆られ、彼女を別の牢獄に閉じ込め　、ある淫乱な男――ムリン――に彼女を淫行の犠牲として差し出すよう命じた。　ムリンが牢屋の扉に近づいたとき、突然熊が駆け寄り、彼を捕らえて噛みつき始めた。その騒ぎを聞き、窓からその様子を見た牢屋に囚われていた王女は、キリストの名によってその獣を追い払い、ムリンの傷を癒やし、聖なる信仰の真理を説いて彼をキリスト教徒にした。

「キリストの神は偉大なり！」とムリンは大声で叫んだ。そのために恐ろしい拷問に耐え、苦しみの中で息を引き取り、殉教者たちの群れと共に主の御前に立った。

そこで王は兵士たちに、牢屋を薪で囲み、火をつけて、牢屋とともに娘も焼き尽くすよう命じた。兵士たちは命じられた通りに実行し、牢屋は燃え尽きた。しかし、その乙女は生きて無傷であった。火は彼女には及ばなかったのだ。この奇跡を目撃した民衆の多くが、キリストを信じるようになった。

ついに、聖女は拷問者たちによって木に吊るされ、刺激性の煙で窒息させられ、矢で射抜かれて、神のもとへ魂を捧げた。彼女の死後、王はキリストを信じる者たちを迫害し始めた。彼らは拷問を恐れ、隣の島へ逃れ、そこで身を隠した。　これを知った王は、自らその島へと船出し、彼らに恐ろしい拷問を加えようと企てた。しかし、外洋に出たとき、神の怒りに追われ、かつてのファラオのように海の深淵に沈んでしまった。　キリスト教徒たちは、この迫害者から解放されると、主に向かって感謝の賛美を捧げた。聖使徒イアソンとソシパトルは、牢獄から解放されると、妨げられることなく民に神の御言葉を説いた。

別の王が即位し、聖なる使徒たちのことを知ると、彼らを捕らえ、鉄の釜に樹脂、硫黄、蜜蝋を煮立たせ、そこに聖徒たちを投げ込むよう命じた。しかし、使徒たちはキリストの恵みにより、その釜の中に立ちながらも焼けずに済んだ。一方、周囲に立っていた多くの不信仰者たちは、火に焼かれてしまった。　この奇跡を目撃した他の人々は、キリストを信じるようになった。王自身も信仰を抱き、首に石を巻きつけ、泣きながらこう叫んだ。

「ヤソンの神よ、ソシパトロスの神よ、私を憐れんでください！」

そこで聖なる使徒たちは、信仰を持った者たち全員を集め、彼らに神の御言葉を教え、王を導いた後、父と子と聖霊の御名によって彼に洗礼を授け、セバスティアンという名を授けた。数日後、王の息子が病に倒れ、亡くなった。そこで聖なる使徒たちは、神に祈りを捧げ、彼を死からよみがえらせた。　彼らは他にも多くの奇跡を行い、王と共に壮麗な教会を建てた。聖なる業を成し遂げ、キリストの羊の群れを増やし、使徒たちは高齢でこの世を去り、喜びのうちにキリスト・神のもとへ旅立った。

コンダク、第4調：

神聖なる使徒イアソンとソシパトルよ、宣教の光をもって全宇宙を照らす、まばゆい星のごとく現れ給うたあなたがたは、信仰をもってあなたがたを崇める者たちを救い給え。

聖殉教者マクシムス、ダダ、クインティリアヌスの殉教

記念日：4月28日

不義なるローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世第二年[3287]、総督タルクィニウスとガヴィニウスの治世下において、悪魔はキリスト教徒たちに恐ろしい怒りを注ぎました。これらの皇帝と総督からは、次のような勅令が出されました：

「我々は、すべての臣民が神々を敬虔に崇めていることを承知している。しかし、国家のより良い統治を図るため、現在ローマ帝国の領土内に住むすべての人々に対し、自らも神々をあらゆる面で崇め愛し、他の人々をもそのように導くよう、懇願し、説得する。　もしどこかでキリストの名を口にする者がいれば、その者は我々の怒りの対象となる。

この命令を聞いたすべての民は、急いで集まり、命じられた通り神々に犠牲を捧げ、次のような言葉で指導者たちを称えた。

「神々への崇拝をこれほどまでに配慮してくださった我らの君主たちに、喜びと長寿を！」

タルクィニウス総督は集まった者たちにこう言った。

「諸君のこのような熱意を見て、明日も集まって共に神々に犠牲を捧げるようお願いしたい。さて、今は我々と共に楽しみ、遠路の疲れを癒やしてほしい。明日、犠牲の捧げ終わったら、各自が自分の街へ帰ればよい。」　翌朝、皆が集まり、偶像に犠牲を捧げる神を冒涜する祝宴を催し、タルクィニウスによってそれぞれの家へと帰された。翌日、不敬な偶像崇拝者の一人がタルクィニウスに報告した。

「この町には、昨日、閣下の命令に背いて犠牲を捧げず、心の中で『天にまします唯一の神を崇拝している』と語っている三人の男がいます。」

タルクィニウスは直ちに家来たちを遣わして、命令に背いた者たちを捕らえさせた。家来たちはオゾヴィアの村で、神に祈りを捧げている彼らを見つけ出し、足枷をはめてすぐにドロストルという町へ連行した。ちょうどその時、その町には偶然にも二人の総督が滞在していた。　街に到着し、捕らえられたキリスト教徒たちの知らせが届いたのは、すでに夕方になってからだった。タルクィニウスは、朝まで囚人たちを監視するよう命じた。聖人たちは一晩中祈りを捧げ、こう叫び続けた。

「わが主、イエス・キリストよ！　天より御力を授けて、我らが敵を打ち負かすことができるよう助けてください。そして、御慈悲により、我らに勝利の冠を授けてください。」

朝、タルクィニウスとガウィニウスは裁判の席に着き、捕らえられたキリスト教徒たちを自分の前に連れてくるよう命じた。彼らを見て、タルクィニウスは尋ねた。

「この者たちが、我々の命令を無視し、勝手に自らの信仰を公言しているのか？」

それから聖人たちに、彼らの名前を尋ねた。聖マクシムスは答えた。

「信仰においては、この兄弟たちと同様、私はキリスト教徒ですが、人間としてはマクシムと呼ばれています。」

「お前は、我々の神々ではなく、別の神に仕えていると述べたな」と統治者は言った。「お前の仲間は、何という名だ？」

その男は自ら、ダダという名であり、兄弟と同様にキリスト教徒であると答えた。タルクィニウスが三人目の名を尋ねると、クインティリアヌスは自分の名を名乗り、自分もキリスト教徒であると述べた。書記官マグニリアヌスは、一人ひとりの供述を記録した。　ガウィニウス総督は彼に、名前を書き留めたかと尋ねた。マグニリアヌスは、命令があれば読み上げると答えた。

「読み上げよ」とガヴィニウスは言った。書記官は次のように読み上げた。

[3287] ディオクレティアヌスは284年から305年まで、マクシミアヌス（ガレリウス）は306年から311年まで統治した。

「キリスト教徒となる者たちの名前は、彼らの供述によれば、次の通りである。マクシムス、ダダ、クインティリアン。」

すると、タルクィニウスは聖徒たちにこう語りかけた。

「あなた方の命はあなた方の手の中にある。生きたいのなら、神々の母に犠牲を捧げ、その祭司となれ。なぜなら、その祭司は死に、天の偉大なる王ゼウスのもとへ去り、そこで彼に仕えているからだ。」

「不敬で恥知らずな男め！」とマクシムスは答えた。　「それとも、お前は主を恐れないのか。あの卑劣な姦淫者を神と呼び、王と呼ぶとは。知れ、狂った者たちよ。天の王はキリストであり、万人を顧み、万物を治められる方である。また、我々、真の神の被造物である者は、決してあなた方の破滅的な命令に従うことはないことも知れ！」

ガヴィニウス総督はダドゥとクインティリアヌスを呼び寄せ、彼らに自分たちの不敬で破滅的な教えを認めるよう説得しようと、長い説得を試みたが、成果は得られなかった。聖人たちはこう答えた。

「私たちは、兄弟であるマクシムスが語ったことを支持します。彼は私たちのカトリック教会の朗読者であり、聖書を深く理解し、私たちにとって何が有益かをよく知っています。しかし、あなたは悪魔的な狂気に囚われており、自分にとって何が不可欠なのかを知りません。もしあなたが私たちの言葉に耳を傾ける気があるなら、光を見出すことでしょう。」

すると、ガヴィニウスとタルクィニウスは言った：

「ほら、私たちはあらゆる手段を尽くしてあなたを諭し、何が最善かを助言しているのに、あなたは従おうとせず、相変わらずの狂気にとらわれたままでいる。」

– いいえ、– 聖マクシムスは答えた。– 善行を積み、唯一の神に仕える人々を悪魔の信仰へと改宗させようと望むあなた方こそが、狂っているのです。私たちに何をしようとも構いませんが、決して私たちを真の信仰から遠ざけることはできません。

そこでガウィニウスとタルクィニウスは、聖人たちをどうすべきか協議し、彼らを牢獄へ連行するよう命じた。聖人たちは、自らの救いについて語り合いながら、喜びをもってそこへ向かった。牢獄に囚われている間、彼らは霊的な対話を交わし、マクシムスはダドゥスとクインティリアヌスに聖書に基づいて多くの教えを授けた。　真夜中、彼らは眠りにつき、夢の中で武器を手に彼らに襲いかかる悪魔を見た。目を覚ますと、天使が現れ、こう語りかけた。

「恐れるな。あなたがたの希望である神が、あなたがたを御許に迎え入れてくださる。神はあなたがたから遠く離れてはおらず、あなたがたを助けてくださる。」

天使の出現とその言葉は殉教者たちを勇気づけ、彼らは朝まで神を賛美し、栄光を称え続けた。

裁判の席に着いた役人たちは、再び囚人たちを連れてくるよう命じ、ガヴィニウスは彼らにこう言った。

「我々はあなた方を呼び出した。改めて、神々に犠牲を捧げるよう勧める。そうすれば、我々はあなた方に多大な栄誉を与えるだろう。もし我々の言うことを聞かなければ、あなた方自身が自らの死の責任を負うことになる。今夜、我々の神々は夢の中で、あなた方に関する御意志を告げられたのだ。」

聖なる殉教者たちは、彼らにも神が御名のゆえにあらゆる苦難に耐えるよう命じられたと答えた。タルクィニウスはガウィニウスに向かってこう言った。

「彼らを拷問にかけなければ、決して我々の言うことを聞かないだろう。」

ガヴィニウスはこう答えた。

「彼ら自身が選んだことなのだから、自分たちで責任を取らせよう。」

そこで統治者たちは、殉教者たちの衣服を脱がせるよう命じた。それが実行されると、ガヴィニウスは彼らを縛り上げ、地面に引きずり出して殴打するよう命じた。それも実行されると、タルクィニウスは家来たちに言った。

「彼らに、我々の言うことを聞き、神々に生贄を捧げるつもりはないかと尋ねよ。もしそうしないなら、別の拷問を加え、残酷な死で滅ぼしてやる。」

使用人たちの問いに、聖なる殉教者たちは口を揃えてこう答えた。

「我らの神が我々を支えておられる。汝らの拷問など意に介さず、汝らの邪悪な助言には従わず、悪魔への生贄も捧げはしない。」

タルクィニウスは、昼食の時間になったため、家来たちに聖人たちを再び牢獄へ連れ戻すよう命じた。第七時が過ぎると、総督たちは再び法廷に着席し、聖なる殉教者たちを再び連れてきた。

ガウィニウスは尋ねた。

「マクシムスよ！　我々の助言に従い、神々に生贄を捧げる気にはならなかったのか？」

聖マクシムスは答えた。

「我々はあなた方の助言を受け入れない。以前にも述べた通り、今も繰り返すが、我々は主イエス・キリストと、父なる神、そして聖霊のみに礼拝を捧げる。」

激怒したガヴィニウスは叫んだ。

「もし正気に戻って神々に礼拝する気がないのなら、お前たちを滅ぼしてやる。人里離れた場所へ連行し、そこで首を刎ねさせるのだ。」

聖人たちは、支配者たちにその脅しを実行するよう懇願した。そこで、総督たちは殉教者たちを彼らの村へ連行し、そこで斬首するよう命じた。死刑宣告を聞いた聖人たちは、神を賛美し、こう祈った：

「主イエス・キリストよ、私たちをこの世の罪深い生活から救い出してくださった方よ、どうか御自身の宮に私たちをお迎えください。そして、天の御国に私たちを導いてください。」

祈りを捧げる聖なる殉教者たちはオゾヴィアの村へ連行され、そこで首を刎ねられ、聖なる殉教者マクシムス、ダダ、クインティリアヌスは、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、タルクィニウスとガヴィニウスの総督在任中の4月28日、神の御手にその霊を委ねた。 私たちを支配される主イエス・キリストに、世々限りなく栄光と力と御国がありますように。アーメン。

聖人としての記念：我らの父キリル、トゥロフの司教

4月28日の記念日

福者キリルは裕福な両親の息子であり、トゥロフの町[3288] で生まれ、そこで教育を受けた。この世の富や栄光を好まず、彼は並々ならぬ熱意をもって神の書物の研究に励み、聖書を完全に習得した。 時が来ると、彼は修道院に入りました[3289] 。修道服を身にまとい、他のどの修道士よりも神に仕え、断食と不眠によって自らの肉体を酷使し、それによって聖霊の清らかな住まいとなりました。この頃、彼は　、多くの者に恩恵をもたらした。すなわち、修道士たちに、修道院長への服従と従順を保ち、彼を神のように崇め、あらゆる事においてその言葉に従うよう教え、自らの模範をもって励

[3288] トゥロフという都市は、現在ミンスク州モジレフ郡にある小さな町で、ティリペティ川沿いに位置し、現在のモジレフとピンスクの間のほぼ中間にあった。　年代記によれば、この町はヴァリャーグのトゥロによって創設された。トゥロは、オルガまたはスヴィャトスラフの治世中に、ポロツク公国を築いた別のヴァリャーグ、ログヴォルドと共に海を越えてやって来た人物である。

[3289] 至福のキリルは、トゥロフの近くにあったボリソグレブ修道院で修行に励んだ。この修道院は、至福のマルティンの行伝にも言及されている。彼の記念日は6月28日である。

ました。また、与えられた誓いに従って修道院長に従わない修道士は、救われることはできないと説いた。　その後、より完全な修行を目指し、至福のキリルは柱の中に身を閉じこもり、そこでしばらくの間、断食と祈りに励みながら過ごした。そこで彼は多くの敬虔な著作を著し、それによって周辺の全地域で名声を博した。[3290] 公および市民たちの熱心な要請により、大司教は彼を司教の位に叙任し、当時その名で呼ばれ、キエフ近郊に位置していたトゥロフ[3291] の司教に任命した。

司教の位にある間、至福のキリルは神の教会の統治において勇敢に尽力した。彼は聖書に基づき、侮蔑の意味でそう呼ばれたテオドルツの異端[3292] を糾弾し、彼を呪い[3293] に付した。 また、福音書や預言書の言葉に基づいた多くの書簡を、アンドレイ・ボゴリュブスキー公[3294] に書き送ったほか、主の祝日に合わせて自らまとめた説教や、その他多くの魂に有益な著作も彼に送った。　これらすべてを執筆し、その他多くの著作をまとめた後、至福のキリルはそれらを自身の信徒たちの間に広めた。彼の著作は、今日に至るまで正教会のロシア人たちに活用され、人々はそこから啓発と慰めを得ている[3295] 。このような敬虔な行いの中で生涯を全うし、託された羊の群れを立派に導いた後、至福のキリルは永遠の安息、すなわち終わりのない命へと旅立った[3296] 。

さあ、兄弟たちよ、今こそこの聖人を次のような言葉で称えましょう。「喜びなさい、栄光ある聖人であり教師よ。ロシアにおいて、他の誰よりも『第二の金口』としての名声を勝ち取った方よ。喜びなさい、その輝かしい言葉によって、ロシア全土を霊的な知恵へと導いた方よ。」　このささやかな賛美を捧げつつ、あなたにこう祈ります。今やあなたが大胆に御前に立っておられる全能の御方に、私たちのために祈ってください。そうして、私たちを襲った災難と、常に私たちを虐げている不敬虔なアガリア人[3297] から救い出し、あなたの祈りによって、私たちが主から慈悲を受け、 罪の赦し、そして来世における永遠の至福を授かりますように。

- 同日、聖殉教者たち――サトルニウス、ヤキスホル、ファウスティアヌス、イアンヌアリウス、マルサリウス、エウフラシウス、　マミア（牢獄で使徒ヤソンとソシパトロによって教化され、沸騰する樹脂の釜に投げ込まれた強盗たち）、ジノン、エウセビオス、ネオン、ヴィタリオス（同じ使徒たちによって教化され、火刑に処された者たち）；これらすべての殉教者たちはケルキラ島で殉教しました。

[3290] ここでいうのは、当然ながら、1146年からトゥロフを治めたヤロスラフ・ゲオルギエヴィチ、あるいはヤロスラヴォヴィチ公のことである。

[3291] 福者キリルが主教座に就いた年は不明である。

[3292] ここで「フェオドールツァ」という名は、アンドレイ・ボゴリュブスキー公の寵臣であったフェオドールを指す。彼は当初スーズダリの修道院長であり、後にロストフの司教となったが、様々な悪行を働き、1169年頃に処刑された。　ノヴゴロド年代記では、黒のクロブクではなく白のクロブクを勝手に着用したことから、「白いクロブク」と呼ばれている。

[3293] 聖キリルは、1169年の公会議に出席し、そこでテオドールツが異端者かつ悪党として裁かれ有罪判決を受けた際、他の司教たちと共にその有罪判決に加わった。

[3294] これらの書簡はテオドールツの事件にも関連していたと考えられているが、そのいずれの書簡も現存していない。

[3295] 至福のキリルの著作のうち、現在まで伝わっているのは、教会で民衆に向けて語られた9つの説教、修道士たちへの書簡や訓示の形式をとった3つの論説、そして20以上の祈りと祈願のカノンである。これらの著作の真正性は疑いようがない。

[3296] 至福のキリルは1183年頃に逝去したが、隠遁生活を愛したため、その年の前に主教座を退いていた。

[3297] 言うまでもなく、タタール人のことです。福者キリルに関する『プロログ』の記述は、間違いなくタタール人がルーシを支配していた時代に作成されたものです。この記述は、14世紀の写本『プロログ』に収録されていたものが、1642年および1643年の版で初めて印刷された『プロログ』に収録されました。

5月12日

4月29日（旧暦）

同日、ディオクレティアヌス帝の治世下、カリアのアフロディシアで殉教した聖ディオドロスと聖ロドピアン（助祭）の記念日。

キジクで殉教した九人の聖殉教者たちの記念日

4月29日の記念日

キジクという都市は、小アジアのミシア地方にあり、アジアとヨーロッパを隔てるダーダネルス海峡[3298] の岸辺に位置している。この都市は、異邦人の師である聖使徒パウロ[3299] が説教を行い、同使徒によってキリスト教の聖なる信仰を授けられたトロアダという都市のすぐ隣にある。　この都市はキリスト教の光に照らされていたものの、異教徒によるキリスト教信仰への迫害のため、当初はキリスト教徒の数はそれほど多くありませんでした。コンスタンティヌス大帝以前の時代に統治していた不敬虔なローマ皇帝たちは、各地に恐ろしい勅令を発し、キリストの御名を告白する者すべてを偶像崇拝を強要し、そのために、皇帝の命令に従わない者をあらゆる方法で処刑し、死に至らしめることを義務づけられた残忍な総督たちを派遣した――その時、多くのキリスト教徒は街から逃げ出し、山や荒野をさまよった。また、他のキリスト教徒たちは異教徒の中に暮らしながらも、彼らから自分の信仰を隠していた。　また、自らの神であり主であるイエス・キリストをとりわけ熱烈に愛した者たちは、異教徒たちの真ん中で、公然と、誰の耳にも届くようにキリストの御名を告白し、キリストの御名のために、さまざまな拷問や死を喜んで受け入れた。　この後者の数には、今ここに記念される九人の聖なる殉教者たちも含まれている。彼らは、シオンの山のように聖なる信仰に堅固であり[3300]、またエリヤのように神への熱意に燃えていた勇敢な男たちである。 彼らの名は次の通りである：テオグニオス、ルフ、アンティパトロス、テオスティコス、アルテマ、マグヌス、テオドトス、ファウマシオス、そしてフィリモン。

これらの聖なる殉教者たちは、さまざまな都市の出身であった。キジクに集まった彼らは、恐ろしい王の命令も、拷問や死も恐れず、キリストを声高らかに賛美し、キリストこそが真の神であり、全世界の創造主であり、全能者であることを大胆に告白した。　同時に、彼らは、神の代わりに悪霊を崇め、全世界の創造主に礼拝を捧げる代わりに、　被造物を崇め、生ける神の代わりに魂のない偶像を崇め、真の神の代わりに偽りの神々を崇め、人々にあらゆる恵みを与える慈悲深い神への愛の代わりに、人々を苦しめる冷酷な悪魔たちに犠牲を捧げていたのです。　それゆえ、これらの聖なる殉教者たちは、不信仰によって目がくらまされた異教徒たちに対し、その迷いを捨てて真理を知るよう諭した。それは、キリスト教の教えの光に照らされて、天に御臨在し、全宇宙をその御手の中に収めておられる唯一の真の神を信じるようになるためであった。

聖人たちのこのような大胆な説教を知った、不義な悪魔の僕たちは、まるで狼が羊を襲うかのように、彼らを容赦なく捕らえ、縛り上げて、あたかも悪党であるかのように、市の長官に尋問のために引き渡した。

[3298] ダーダネルス海峡（古代のヘレスポント）は、マルマラ海とエーゲ海をつないでいる。

[3299] 「異邦人の教師」という称号は、聖使徒パウロが主に異邦人に説教を行ったのに対し、使徒ペトロは主にユダヤ人に説教を行ったことから、聖パウロに与えられている。――聖使徒ペトロとパウロの記念日は6月29日である。

[3300] シオン――エルサレムの南西部に位置する高台。ここには旧約聖書の時代に、エルサレムを守る要塞が築かれていた。　聖書において、シオンはしばしば、いわば神ご自身の住まいとして、またイスラエルの要塞、砦として描かれている（詩編73:2、75:3、98:2、109:2、145:10など）。

キリストの聖なる戦士たちは、不義な裁判官の前に勇敢に立ち向かった。　彼らの心は、神への愛の炎と、神の栄光に対する熱意によって燃え上がっていた。拷問者の前に出ると、彼らは神の全武装を身にまとい（エフェソ6:11参照）、不義な裁判官、とりわけ今まさに戦いを挑もうとしていた闇の君主そのものに、勇敢に立ち向かった。

不義な裁判官は彼らを様々な拷問や苦しみにさらした。彼は何度も彼らを牢獄に閉じ込め、その後また連れ出しては苦痛を与え、キリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう要求した。　しかし、キリストの勇敢な戦士たちは、いかなる場合でも、自分たちの神であり主であるキリストを否定することに同意しなかった。それどころか、彼らは偶像崇拝の虚しさを説き、裁判官自身をも不義であると非難した。その結果、彼らは他にも多くの様々な苦痛を受けた後、首を刎ねられた。その場所の近くには、彼らの遺体も埋葬された。

その数年後、コンスタンティヌス大帝が即位し、聖なる洗礼を受けた彼は、キリスト教徒への迫害を中止した。キリスト教の敬虔さの光は、今や宇宙の隅々まで広がった。

そこで、キジスのキリスト教徒たちは、畏敬の念をもって聖なる殉教者たちの遺体を地中から掘り起こした。その遺体は腐敗していなかった。その後、彼らは遺体を新しい棺に納め、聖なる殉教者たちを称えるために教会を建て、その貴重な宝物を畏敬の念をもってそこへ移した。

これらの聖遺物からは、多種多様な奇跡や癒しが起こった。悪霊が追い出され、麻痺した者は健康を取り戻し、熱病に苦しむ者たちは病から完全に癒やされた。

例えば、街で知られたある男性は、水腫を患っていたが、信仰をもって聖遺物が納められた聖櫃に触れたことで、その病から癒やされた。同様に、どのような病に冒されていようとも、信仰をもって聖殉教者たちの棺に触れた者は、即座に癒やされた。

これを見て、多くの異教徒がキリストに帰依したため、まもなく街全体がキリストを信じるようになった。偶像や異教の神殿は打ち壊され、その代わりにキリスト教の教会が建てられた。キジケの街では、そこに眠る九人の聖殉教者たちの祈りによって、敬虔な生活が栄えた。

しかし、長きにわたり統治した敬虔なコンスタンティヌス王とその息子コンスタンティウス[3301]の死後、不敬虔なユリアヌス・背教者[3302]が即位すると、その街に住むギリシャ人異教徒の一部がこの皇帝のもとへ赴き、キリスト教徒たちが彼らの神殿をすべて破壊し、祭壇を打ち壊したと告発した。

これを聞いた皇帝は、異教の神殿や偶像を修復するよう命じたものの、その都市に住むキリスト教徒が非常に多かったため（民衆の反乱を恐れたため）、彼らに対するいかなる迫害も許さなかった。しかし、この不敬虔な皇帝は、キリスト教の司教エレウシオスを投獄するよう命じた。　やがて皇帝がペルシャ遠征に出発し、そこで戦死すると、エレウシウス司教は解放され、キジケの町には再びキリストの信仰の光が輝いた。その町は、聖なる殉教者たちが神の前で熱心に執り成してくれたおかげで、堅固な城壁のように強められ、確固たるものとなったのである。　彼らの祈りによって、私たちもまた、心の病も体の病も癒やされ、主イエス・キリストからの恵みと憐れみを受けることができますように。アーメン。

[3301] コンスタンティウスは、337年から363年までローマ帝国の東部を統治した。この期間、帝国の西部を統治したのは、コンスタンス（337年から350年）とマグネンティウス（350年から353年）であった。353年から361年にかけて、コンスタンティウスはすでにローマ帝国の両方を統治していた。

[3302] ユリアヌス・アポステートは、361年から363年までローマ帝国を統治した。

コンダク、第2声調：

堅固で輝きに満ちた九人の殉教者たち、三一の神性を告白する者たちは、裁きの座に最初にこう叫びました。「私たちの血と魂と肉体を、汚れなきいけにえとして、主よ、あなたに捧げます。憐れみ深い神よ、天の御座に私たちを加え給え。」

私たちの尊き父、奇跡行者メムノンの記念日

記念日：4月29日

私たちの尊い父メムノンは、若き日から神への奉仕に身を捧げ、聖霊の清らかな住まいとなりました。彼は肉体を霊に服従させ、数多くの過酷な労苦によって肉体の情欲を死に至らしめたからです。聖メムノンは修道士たちの長（イグメン）に任命されました。　天使に等しいその生涯ゆえに、彼は神から豊かな奇跡の賜物を受け、不治の病人を癒やし、その他にも多くの奇跡を働かせました。例えば、聖人の祈りによって、乾燥した場所に泉が現れたり、　激しい海上の荒波に襲われ、すでに沈みかけていた船を、しばしば沈没から救い出した。また、その国に大群で飛来し、あらゆる果実や草を食い荒らしていたイナゴを追い払い、他にも多くの輝かしい奇跡を成し遂げた――その功績により、彼は「奇跡行者」と称された。

こうして、長年にわたり断食に励み、その徳高い生き方で神に喜ばれたメムノンは、心から愛した主のもとへ、喜びをもって旅立った。

聖人は生前だけでなく、死後も多種多様な奇跡を起こしました。なぜなら、その棺からは病める者への癒しがもたらされ、聖人の名を呼ぶだけでイナゴが追い払われ、不浄な霊のあらゆる策略が打ち砕かれたからです。こうして、神は御自身の聖徒たちにおいて永遠に賛美される御自身にふさわしい御使いを栄光に輝かせられました。アーメン。

- 同日は、ディオクレティアヌス帝の治世下、カリアのアフロディシアで殉教した聖殉教者ディオドロスと助祭ロドピアノスの記念日である。

5月13日

4月30日（旧暦）

5月

聖使徒ヤコブ・ゼベダイの記念日。

4月30日の記念日

聖ヤコブは、ゼベダイの子であり、聖福音記者ヨハネ・テオロゴスの兄弟であり、主によって単純な漁師の中から弟子として選ばれた十二使徒の一人であった。　イエス・キリストに召されたヤコブは、兄弟と共に船と父、そして漁網を捨ててキリストに従い（マタイ4:21–22）、どこへでもキリストの後を追って行き、その御言葉に耳を傾け、キリストが行う奇跡を目の当たりにしました。そして主は二人の兄弟を深く愛され、一人は御自身の胸に寄り添うことを許され（ヨハネ13:23）、もう一人（ヤコブ）には、御自身が飲まなければならない杯を飲ませると約束されました（マタイ20:22–23）。 そして使徒たち自身も、主を深く愛し、主に対してこれほどの献身を示したため、主を信じない者たちの上に天からの火を降らせて彼らを滅ぼそうとしたほどであった（ルカ9:54）； もし

慈悲深い主イエス・キリストご自身が彼らを制止されなかったならば、彼らは実際にそうしていたことでしょう。この二人の使徒、ゼベダイの子ヤコブとヨハネ、そして使徒ペテロに対して、主は他のどの使徒よりも特に、ご自身の神性とその奥義を明らかにされました。例えば、 ファボルの山で、主がご自身の神性の栄光を示そうと望まれ、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われた時のように（マタイ17章以下）

主の自発的な受難、復活、昇天の後、また聖霊が降臨した後、聖使徒ヤコブはスペインやその他の国々を巡り、神の御言葉を宣べ伝えました。 その後、彼は再びエルサレムに戻り、そこでユダヤ人にとって雷のような存在（マルコ3:17）となりました。なぜなら、彼は勇敢かつ大胆にイエス・キリストを宣べ伝え、「主こそが真のメシア、世界の救い主である」と語ったからです。 ヤコブは、ファリサイ派[3303] や律法学者[3304] との論争に勝利し、彼らの冷酷さと不信仰を暴き、非難した。しかし、彼らは彼に対抗する力がなかったため、金でヘルモゲネスという名の魔術師を雇い、ヤコブと論争を繰り広げて彼を恥じ入らせようとした。 しかし、その魔術師は高慢であったため、自らヤコブと対話することを望まず、フィリタという名の弟子を送り出し、こう言った。

「ヤコブは、私だけでなく、私の弟子さえも論争で打ち負かすことはできないだろう。」

フィリトはやって来て、聖使徒ヤコブと語り合ったが、使徒に満ちあふれていた聖霊の英知に抗うことができず、まるで口がきけないかのように黙り込み、使徒に反論するために口を開くことさえ全くできなかった。 真理を知ったフィリトは謙虚になり、魔術師である師のもとへ戻ると、奇跡をもってさえ自らの言葉を裏付けるヤコブには勝てないと告げた。 これを受けて、フィリトは師に対し、その思索や魔術を捨て、自らヤコブの弟子になるよう勧めた。しかし、高慢なヘルモゲンは魔術を用いて悪霊たちを呼び出し、フィリトをその場に縛り付け、一歩も動けないようにするよう命じ、こう言った。

「お前のヤコブが、どうやってお前を救い出すか見てやろう。」

一方、フィリトは、ヘルモゲンの魔術によって悪魔に縛られているという知らせを、密かに使徒のもとへ送った。 これを知った使徒は、フィリトのもとへ自分の手ぬぐいを送り、「送られた手ぬぐいを受け取り、次の言葉を唱えなさい。*『主は囚人を解き放たれ、主は盲人の目を開き、主は屈みこんだ者を起こされる』*（詩編145:7–8）」と告げた。

フィリトがこれらの言葉を口にした途端、彼は目に見えない束縛から即座に解放された。というのも、悪霊たちは使徒の布と、その言葉に宿る力に恐れをなして、フィリトから離れ、彼から逃げ去ったからである。そこでフィリトはヘルモゲンを嘲笑し、聖ヤコブの元へ行き、彼から聖なる信仰を教えられて、洗礼を受けた。

一方、ヘルモゲンは激しい怒りと憤りに満ち、自分に仕える悪霊たちに、ヤコブとフィリトを縛って自分のところへ連れてくるよう命じた。 しかし、悪魔たちが聖ヤコブとフィリトが住んでいた住居に近づくと、直ちに主の御使いが神の御命令により、それらの悪魔を捕らえ、目に見えない鎖で縛り上げ、彼らを苦しめ始めた。悪魔たちは、神の力によって苦しめられながら、声を揃えてこう叫んだ。

「キリストの使徒ヤコブよ、我らに憐れみをおかけください。我らはヘルモゲンの命により、あなたとフィリトを縛りに来たのですが、今や我ら自身がしっかりと縛られ、ひどく苦しめられているのです。」

聖ヤコブは悪魔たちにこう言った。

[3303] パリサイ派は、紀元前2〜3世紀にパレスチナで生まれた宗教的宗派である。この宗派は、モーセの律法に定められたすべての儀礼的規定を、しばしば些細で細かすぎるほど厳格に遵守することをその目的としていた。

[3304] 民衆の教師、ラビ。

「あなたたちを縛った神の御使いが、その束縛を解いてくれるでしょう。そうしたら、あなたたちは行って、ヘルモゲンをここに連れてきてください。彼に何の害も与えずに。」

するとすぐに、束縛から解かれた悪魔たちはヘルモゲンのところへ行き、彼を捕らえると、瞬く間に使徒の前に縛られた状態で連れてきて、ヘルモゲンに対する恨みを晴らすことを許してほしいと使徒に懇願した。

すると使徒は悪魔たちに、なぜヘルモゲンの命じた通りにフィリトを縛らなかったのかと尋ねた。悪魔たちはこれに対し、次のように答えた。

「私たちは、あなたの家ではハエ一匹さえも手出しできないのです。」

すると、使徒はフィリトにこう言った。

「我らの主は、悪に対して善をもって報いるよう命じられた。それゆえ、あなたもヘルモゲンを解放し、彼を悪霊から救い出せ。」

その後、使徒は悪霊の束縛から解放されたヘルモゲンにこう言った。

「我らの主は、強制されたしもべを望まれるのではなく、自発的なしもべを望まれる。だから、お前は望むところへ行きなさい。」

しかし、ヘルモゲンは言った。

「私があなたの家を出た途端、悪霊たちに殺されてしまうでしょう。彼らの怒りがどれほど激しいか、私は知っているからです。また、あなたが私を守ってくださらなければ、彼らから逃れることは不可能だとも知っています。」

そこで使徒は、旅の途中で使っていた自分の杖を彼に手渡した。　ヘルモゲンはその杖を持って自宅へと向かい、道中、悪魔たちから何の害も受けなかった。こうしてキリストの力を知り、悪魔たちの無力さを目の当たりにしたヘルモゲンは、自分の魔術書をすべて集め、聖ヤコブの元へ持ち込み、その足元にひれ伏して叫んだ。

「真の神の真のしもべよ、人々の魂を滅びから救い出される方よ。どうか私をも憐れみ、あなたの敵を弟子として受け入れてください！」

ヤコブから聖なる信仰を教えられたヘルモゲンは、洗礼を受け、使徒の命により自分の魔術の書物を焼き捨て、真のキリストの僕となり、イエス・キリストの名によって奇跡を行うようになった。

ユダヤ人たちは、これらすべての出来事を目の当たりにして激しく怒り、ヘロデ王を説得して[3305]、キリストの教会に対する迫害を開始し、ヤコブを殺害させた。*「ヘロデは、教会に属する者たちのうち数人に手を下して害を加え、ヨハネの兄弟であるヤコブを剣で殺した。　そして、これがユダヤ人たちに喜ばれるのを見て、続いてペトロも捕らえた――当時は過越の祭りの期間であった――彼を拘束し、牢屋に閉じ込めた」*（使徒行伝 12:1–4）。

パレスチナのケサリアの司教エウセビオス[3306]は、聖ヤコブについて語る中で、彼がヘロデによって死刑を宣告された際、ヨシヤという名の男が、　使徒をヘロデに密告した者の一人であったが、　聖ヤコブの勇気と大胆さを見て、その無実と聖さ、そして彼が語った言葉（メシア――キリストの到来について）の真実さを悟り、キリストを信じ、キリストの証人となった。　直ちに彼も、聖使徒ヤコブと共に死刑を宣告された。　二人が共に処刑場へ向かう途中、道端に横たわっている痲痺の男に出くわし、聖使徒は彼を癒やした。そして、二人が首を斬られるために頭を差し出したとき、ヨシヤは聖ヤコブに、無知のゆえに犯した罪――すなわち、彼を王に密告してしまったこと――を赦し

[3305] ここでは当然、アリストヴロスの息子であり、ヘロデ大王の孫であるヘロデ・アグリッパ1世を指し、彼は紀元40年から44年までユダヤを統治した。

[3306] エウセビオス・パンフィルスは、268年から340年にかけて生きた最も著名な教会史家である。彼の『教会史』は324年までを扱っている。

てくれるよう懇願した。　使徒は彼を抱きしめて口づけし、「平安あれ」と言った。そして二人は共に首を斬られて、共に息を引き取った[3307]。

彼らの殉教後、聖使徒ヤコブの弟子たちは、神の御心により、その遺体を運び出し、スペインへ移した[3308]。そこでは今日に至るまで、その棺から病める者への癒しがもたらされ、父と聖霊と共に、すべての被造物によって永遠に賛美されるキリスト・神の栄光のために、奇跡が起こっている。アーメン。

トロパリオ、第3調:

あなたはキリストの選ばれた使徒であり、神学者の愛する兄弟、万人に称えられるヤコブよ。あなたを讃える者たちに罪の赦しを願い求め、私たちの魂に大いなる憐れみをお与えください。

コンダク、第2調:

神の御声を聞き、あなたを招く声を聞いて、父の愛を顧みず、キリストのもとへ駆け寄った、ヤコブよ。あなたの親族である栄光ある者と共に、あなたは主の神聖な変容を目撃する恵みにあずかった。

聖人である私たちの父、ドナト司教の記念日。

記念日：4月30日

聖ドナトは、敬虔な皇帝テオドシウス大帝の治世[3309]に生き、古代エピロス[3310]に位置するエウリアの町で司教を務めていた。この町の近くにはソリアと呼ばれる場所があり、そこには泉があった。もし誰かがこの泉の水を飲めば、即座に激しい苦痛の中で死んでしまった。　聖ドナト司教はこれを聞きつけ、司祭たちを連れてその泉へと向かった。

彼が泉の近くまで来たとき、激しい雷鳴が響き、泉から巨大で恐ろしい大蛇が現れた。　その大蛇は神の聖人に向かって進み、聖人が乗っていたラバの足を尾で叩こうとした。そこでドナト司教は、近づいてくる大蛇の背中に、ラバを駆り立てるために使っていた鞭で一撃を加えると、大蛇は即座に死んだ。　一方、司教のそばにいた聖職者や民衆は、この奇跡を目撃すると、薪を集めて大きな焚き火を焚き、その上で蛇を焼き払った。その死骸が腐って毒で空気を汚染しないようにするためであった。とりわけ、その蛇は非常に巨大だったからだ。しかし、その泉の水は、依然として誰も飲むことを敢えてしなかった。　そこで聖ドナトは祈りを捧げた後、泉を祝福し、まず自ら水を汲んで飲み、続いて皆にも恐れることなく飲むよう命じた。その後、人々は皆、何の害も受けずにその水を飲み、神を賛美してそれぞれの住まいへと戻っていった。

[3307] 聖使徒ヤコブの死は、およそ42年に起こった。

[3308] 聖使徒ヤコブの聖遺骨は現在、スペインのガリシア王国の主要都市であるサンティアゴ・デ・コンポステーラに安置されている。これらは9世紀初頭にこの地へ移された。

[3309] ローマ皇帝テオドシウス1世「大帝」は、379年から395年まで在位した。

[3310] ギリシャ人は当初、「エピロス」という言葉で、島々とは対照的に、大陸（陸地）全般を指していた。特に、ギリシャ西部の島々（イオニア海およびアドリア海）の住民は、コリント海峡の入り口に至るまで、対岸のエラダ（ギリシャ本土）をこの名で呼んでいた。　その後、エピルスの境界は狭まり、エピルスという名称は、北はイリュリア、東はテッサリア、南はエトリアおよびアカルナニアと隣接する地域を指すようになった。

ある日、聖ドナトはある岩だらけで水のない場所にいた。彼は、周囲の人々が激しい暑さのために渇きで衰弱しているのを見て、自らの　手で小さな溝を掘り、神に水を降らせてくださるよう祈った。するとすぐに泉が湧き出し、今日に至るまで豊かな水を注ぎ続けている。

またある時、聖ドナトは祈りによって天から水を降らせた。雨が降らず、それゆえに激しい干ばつに見舞われた際、彼は主に向かって祈ると、たちまち激しい雨が降り出し、大地を潤した。その結果、その年は聖人の祈りのおかげで、豊かな収穫が得られた。

ある時、テオドシウス皇帝の娘が、悪霊に苦しめられて重病に陥った。皇帝と皇后は、娘が唯一の娘であったため、その病を深く嘆いていた。その時、彼らはドナト司教が奇跡を行っていると知った。　皇帝は直ちにエピルス地方へ勅令を送り、その地のすべての司教に、皇帝への祝福を受けるために来るよう命じた。エピルスの司教たちがコンスタンティノープルに到着すると[3311]　、皇帝は彼らを栄誉と親しみを込めて迎え入れ、こう尋ねた。

「あなた方のうち、鞭で蛇を殺し、岩だらけの地面から水を湧き出させ、神に天からの雨を乞い求めたドナト司教は誰か？」

人々は聖ドナトを指さした。皇帝は彼に口づけをし、皇后のもとへ連れて行った。そして二人は共に聖人の足元にひれ伏し、こう言いながら助けを懇願した。

――神に愛される方よ！どうか私たちに憐れみをお示しください。私たちには一人の娘がいますが、彼女は悪霊に苦しめられ、ひどく苦しんでいます。私たちは彼女のことを深く案じており、多くの医師や司祭を呼んでみましたが、誰も彼女を助けることができませんでした。　そこで、あなたの中に宿る神の偉大な恵みについて耳にした私たちは、あえてあなたにここへ来てくださるようお願いいたしました。神の前で力あるあなたの祈りによって、娘から悪霊を追い出していただければと願っております。もし娘を癒してくださるなら、その財産の半分をあなたに差し上げます。

聖人は王と王妃の願いに対し、次のように答えました。

「その娘はどこにいるのか。彼女を見せてくれ。」

ドナタは少女のもとへ連れて行かれた。　するとすぐに、神の御使いの臨在に耐えかねた悪霊は叫び声を上げ、乙女を地面に倒すと、彼女から出て行った。その時から、乙女は健康を取り戻した。王と王妃は娘の回復を大いに喜び、聖人に多額の贈り物を申し出たが、彼は差し出されたものの中から何も受け取ろうとはしなかった。　皇帝夫妻の善良な品性と信仰心を見て、聖人は彼らに、自分の司教区にあるオムファリアと呼ばれる村の近くの一画を譲り受け、その場所に教会を建てられるよう懇願した。皇帝は直ちに聖人の願いを聞き入れ、その贈り物を皇帝の勅書で正式に認めた。

聖人がコンスタンティノープルに滞在していた頃、ある男がそこで亡くなったが、その男には借金を返済していなかった貸主がいた。　その人が埋葬のために運ばれている際、貸主は故人の借用証書を手にし、棺を差し止め、200枚の金貨に上る借金が返済されるまで、故人の埋葬を許さなかった。　その時、その故人の家の近くにいた聖ドナトは、大勢の群衆が集まって起こした叫び声や激しい騒ぎを耳にし、同行していた司教たちにこう言った。

「さあ、貸し手のところへ行き、彼の債務者である故人の遺体を埋葬させてくれるよう懇願しましょう。」

しかし、司教たちは同行することを拒んだ。

そこでドナトは一人で向かった。故人の未亡人は聖人を見ると、その足元にひれ伏し、涙ながらにこう懇願した。

[3311] コンスタンティノープルは、ビザンツ帝国の首都である。コンスタンティノープルは、紀元前658年にメガラ人によって「ビザンティオン」という名で、黒海とマルマラ海を結ぶボスポラス海峡のヨーロッパ側に建設された。　海に面した戦略的な立地と、好都合な歴史的条件が相まって、ビザンティウムは古代において、商業および文化生活の中心地として目覚ましい発展を遂げた。教会史において、コンスタンティノープルは、いくつかの全地公会議や多くの地方公会議が開催された場所として知られている。

「神の御使いよ、どうか私を憐れんでください。私は二重の悲しみに襲われています。夫を失った上に、その遺体を葬ることができません。貸主がそれを妨げているのです。聖なる方よ、どうか彼を説得して、亡くなった夫の遺体を土に還させてください。」

聖人は女性に尋ねた。

「あなたの夫がこの男に借金があるというのは、本当に確かなことなのか？」

すると、女はこう答えました。

「ご主人様！　数日前、夫は私に、借金はすでに返済したと言っていました。ただ、借用書だけが貸主の手元に残っているだけなのです。」

すると、キリストの聖人は貸し手にこう言った。

「子よ、どうか故人の遺体を埋葬させてほしい。借金は後で返してもらうから。」

しかし、貸主は残酷で不公正な人間であったため、聖人の言葉に従うどころか、むしろ彼を罵倒した。

そこで聖なる司教は、故人が横たわっていた寝台に近づき、その死者に手を触れながら、大声でこう呼びかけた。

「私の言うことを聞きなさい、人よ！」

すると、死者はたちまち生き返り、目を開いてこう言った。

「はい、司教様！」

聖人は彼に言った。

「立ち上がりなさい。そして、あなたの借金取りをどうすべきか教えてくれ。彼は、あなたが借金の返済をしていないと言い、その証拠としてあなたの借用証書を手にしているから、あなたを埋葬することを許さないのだ。」

死者は立ち上がり、この驚くべき光景を目撃していた全員を大いに戦慄させた。貸し手に向かって威圧的な眼差しを向けると、死者はその欺瞞を非難し、いつ、どこで二百ズラトニツの借金を返済したかを具体的に挙げて、彼の嘘を暴いた。　金貸しは、どう反論すればよいか分からず、震えながら立ち尽くし、口がきけないかのように黙り込んでいた。一方、蘇った男は金貸しに自分の借用証書を要求した。それを受け取ると、寝台に座ったままそれを引き裂いた。それから、聖人の方を見て、こう言った。

「義人よ、この罪人を糾弾するために私を目覚めさせてくれたのは、よくやった。さあ、今、私に再び眠りにつかせてくれ。」

聖ドナトは彼に言った。

「安らかに眠りなさい、わが子よ。あなたは自分の受取証書を取り戻すことになるのだから。」

すると、その男はたちまち再び死の眠りについた。この驚くべき奇跡を目撃した者、また他者からその話を聞いた者たちは皆、大いなる喜びをもって神を賛美し、神の御心にかなう者の徳の力に驚嘆した。

聖ドナトがコンスタンティノープルに滞在していた頃、雨が降らず、その結果、大干ばつが起こった。皇帝の要請により、聖人は城外へ出て、[3312] の祈りを捧げ、乾ききった大地に必要な雨を神に送ってくださるよう懇願した。ドナトの祈りが終わるとすぐに、これほど激しい雨が降り注ぎ、民衆は皆こう言った。

「これは第二の大洪水だ。」

[3312] リティアとは、通常、教会の前庭、あるいはその外（広場や野原）で行われる、民衆による祈りの儀式のことである。

テオドシウス皇帝は、聖ドナト司教が、ただ一枚のローブを身にまとっただけで、これほど激しい雨の中に立っているため、ひどくずぶ濡れになってしまうのではないかと心配していた。　しかし、聖ドナトが礼拝の行列を終えて王宮に戻ったとき、誰もが彼の衣服が完全に乾いており、わずかな湿気の跡さえ見られないことに気づいた。雨の一滴もその衣服に触れていなかったからである。

皆はこの奇跡に深く驚嘆した。皇帝は、神に愛された聖人の輝かしい御業を目の当たりにして大いに喜び、自らの治世の間に、この世にこのような光、すなわちこの驚くべき奇跡を行う者を遣わしてくださった神に感謝した。

聖人と数多くの対話を交わし、彼から祝福を受けた後、皇帝は彼を自分の信徒たちの元へ帰した。その際、テオドシウスは聖ドナトに、聖人が皇帝に願い出て得た前述の場所に建設しようとしていた新しい教会の建設と装飾のために、多額の金銭を授けた。

自身の司教区に戻った至福のドナトは、王からの寄進により美しい教会を建立し、そこに自身の埋葬の地を用意した。 深き老齢に達した彼は、主のもとへ旅立った[3313] 。聖なる主教たちの群れの中に立ち、父と子と聖霊――三位一体においてすべての聖者たちによって永遠に賛美される唯一の神――を永遠に賛美するためである。アーメン。

5月14日

5月1日（旧暦）

同日には、1497年にミンスク県ストリゴロヴェ村にてタタール人に殺害された、キエフ都主教マカリア聖殉教者の記念日が祝われる。

聖預言者エレミヤの生涯と殉教

記念日：5月1日

聖預言者エレミヤ（[3314] ）は、エルサレムからほど近いベニヤミン族の領内にある、祭司の町アナフォテ（[3315] ）で生まれた。祭司ヘルキヤの息子である彼は、サムエル（列王記上2章）と同様に、生まれる前から預言者としての務めに選ばれ、定められていた。主ご自身が次のように語られた通りである。　*「わたしがあなたを母の胎内で形造る前から、わたしはあなたを知っていた。あなたが母の胎から出る前から、わたしはあなたを聖別した。わたしはあなたを諸国民への預言者として立てた」*（エレミヤ書1:4–5）。

生まれながらの祭司であり、神から与えられた職分として教師かつ預言者であった聖エレミヤは、聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）の証言によれば、生涯を通じて貞潔を保った（エレミヤ16:2）。　彼は紀元前630年に預言者としての務めを開始した。それはまだ幼い少年時代のことであった。彼の書の第一章に記されているように、主から預言者となるよう召された際、彼はその戸惑いを次のように表現した。

[3313] 聖ドナトの死は387年頃であった。

[3314] エレミヤは、ヘブライ語で「神によって高められた者」を意味する。

[3315] レビ族は、約束の地の分配において特別な割地を与えられず、他の部族の中に散らされ、くじ引きによってレビ人に割り当てられた町とその郊外に住むことになった。アナフォフの町はベニヤミン族の領土内にあり、アロンの子孫に属していた（ヨシュア記21:18； 歴代誌上6:60）。

「おお、主なる神よ！　私はまだ若く、少年ですので、話すことができません。」

しかし、主は彼を励まし、成熟した大人の知恵を授けてこう言われた。

「『私は若いです』と言ってはならない。私があなたを遣わすすべての人々のところへ行き、私が命じることをすべて告げなさい。彼らを恐れてはならない。私はあなたと共にいて、あなたを救うからだ。」

こう言われた後、主は御手を伸ばしてエレミヤの口に触れ、彼にこう告げられた。

「見よ、わたしはわたしの言葉をあなたの口に授けた。見よ、わたしは今日、あなたを諸国民と諸王国の上に立てた。それは、（人々の罪深い、不法な生活を）根絶し、荒廃させ、滅ぼし、打ち壊すためであり、また、打ち壊され、根絶された場所に、新たに築き上げ、植え付けるためである」[人々の善き品性と神に喜ばれる生活]（エレミヤ1:7–10）。

この主の言葉は、エレミヤを預言者の務めに召したものであり、ユダの王ヨシヤの治世第13年に語られた[3316]。当時、聖なる預言者は生後15年目を迎えていた。これほど若くして、彼は神の力ある恵みの器となったのである！

当時、ユダヤの民は、表向きは先祖代々の信仰への忠誠を守り、かつてエジプトから彼らを導き出した真の神を崇拝していたものの、内心では神への真の奉仕からはかけ離れていた。　周辺の諸民族と密接な関係を築くにつれ、ユダヤ人たちは道徳的に堕落していった。異国の風習に従ううちに、彼らの大多数、とりわけ裕福で権力を持つ者たちは、異教の忌まわしい行いに身を投じていた。エルサレムの周辺の丘や谷間だけでなく、エルサレム市内、ソロモンが建てた主の神殿のすぐそばにも偶像が立てられ、そこでは真の神と同様に犠牲が捧げられていた。　この道徳的腐敗は、民の生活に深く浸透し、神の正当な怒りを招き、ユダヤの地に荒廃と破滅をもたらそうとしていた。それは、聖なるエレミヤが「クルミの杖」と「沸き立つ大釜」という二つの幻の中であらかじめ告げられていたことでもあった。そして、主はエレミヤにこう言われた。

「エレミヤよ、何が見えるか。」

彼は答えた。

「アーモンドの木の杖が見えます。」

主は彼に言われた：

「お前の見ている通りだ。わたしは、わたしの言葉が速やかに成就するよう、[3317]、それを注視しているからだ。」

また、主は彼にこう言われた。

「何が見えるか。」

– 見ます――とエレミヤは答えた――風で吹き上げられている沸き立つ大釜が、北の方から現れています。

すると、主は彼に言われた。

「北から、この地のすべての住民に災いが降り注ぐ[3318]。あなたは腰に帯を締め、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをすべて彼らに告げなさい。彼らの前で臆病になってはならない。さもないと、わたしは彼らの目の前であなたを打ち倒してしまう。」　見よ、わたしは今、あなたをこの地全体において、ユダの王たち、その君主たち、その祭司たち、そしてこの地の民に対して、堅

[3316] ヨシヤは紀元前642年から611年まで在位した。

[3317] アーモンドの木は、他の木々よりも早く冬の眠りから目覚め、1月に花を咲かせ、3月にはすでに実を結ぶ。そのため、ユダヤ人たちはこれを「目覚めた者」と呼んでいた。

[3318] 東方の諸民族にとって、沸き立つ大釜は熾烈な戦争の象徴であった。エレミヤはユダにカルデア人の侵攻を予告した。バビロンはユダの東に位置していたが、カルデア人はアラビアの砂漠を迂回するため、シリアを経由して、まさに北からユダに侵攻したのである。

固な城、鉄の柱、青銅の壁として立てた。彼らはあなたに対して戦いを挑むが、あなたを打ち負かすことはできない。わたしはあなたと共にいて、あなたを救うからである（エレミヤ書1:17–19）。

神の命令に従い、聖なるエレミヤは、ユダヤ人たちが真の神から背き、異教の迷信に傾いていることを非難し始め、彼らに降りかかる全能者の怒りを警告し、主の怒りの恐ろしい結果から逃れるために悔い改めるよう諭した。　エレミヤの預言者としての奉仕は、すでに述べたように、ヨシヤ王の時代から、その息子ヨアハズやヨアハズの兄弟ヨアキム、さらにヨアキムの息子エホニア、そしてヨシヤの息子でヨアハズとヨアキムの兄弟であるゼデキヤの時代まで続いた[3319]。

神の預言者は、神への真の信仰と神への畏れを失った同胞たちから、多くの苦難を味わった！——彼は、主サバオスの恐るべき懲罰を、ためらいも躊躇いもなく告げ知らせ、真理の言葉を、神殿の庭でも、町の門でも、王宮でも、牢獄でも、そしてエルサレムの周辺でも、勇敢かつ大胆に宣言した。　彼は何度も王や高官たちの前に連れて行かれたが、誰に対しても、偽りや臆病な遠慮なく、率直にこう語った。「もしあなたがたが悔い改めず、偽りから離れないなら、恐ろしい災いがあなたがたを襲うだろう。」なぜなら、主はこう言われるからだ。

『わたしは北の諸王国のすべての部族を呼び集める。彼らはやって来て、それぞれがエルサレムの門の入口や、その城壁の周囲、そしてユダヤのすべての町々に、自分の王座を据える。彼らは、罪深い民に対するわたしの裁きの執行者となり、不法を行う者たちを処刑する者となる。　これらすべてを、彼らがわたしを捨て、異国の神々に香を焚き、自分の手のわざを拝んだゆえに、わたしは彼らに下すのである（エレミヤ1:15–16）。ヤコブの家よ、イスラエルの家のすべてのしもべたちよ、主の御言葉を聞きなさい！　主はこう言われる。「あなたがたの先祖たちは、わたしにどのような不正を見出したというのか。なぜわたしから離れ、迷い去り、『エジプトの地から私たちを導き出し、人の住まない荒野、乾いた地、死の影の地、誰も通らず、人が住んだことのない地を導いてくださった主はどこにいるのか』と言わなかったのか。　わたしはあなたがたを実り豊かな地へと導き入れ、その実と恵みによって養われるようにした。しかし、あなたがたはそこに入って、わたしの地を汚し、わたしの所有物を忌まわしいものにしてしまった。わたしはあなたがたと、あなたがたの孫の代に至るまで裁きを行う。　ヒッタイトの島々へ行って見よ。ケダルへ使者を送り、よく調べ、よく見よ。そこにこれと似たようなことがあったか。どの民も、たとえそれらが神でなくとも、自分の神々を他の神々と取り替えたことがあったか。しかし、わたしの民は、自分たちの栄光を、何の助けにもならないものと取り替えてしまった。　天よ、これを驚け。地の基よ、震え、おののけ。わたしの民は、わたしへの畏れを失い、二つの悪を行った。彼らは、生ける水の源であるわたし、主、彼らの神を捨て、水をもたない無価値なものを造り、彫り上げたのである。　わたしは、わたしの民をヨルダン川のほとりに、高貴なぶどうの木として植えた——最も清らかな種であったのに、それは見知らぬぶどうの木の野生の枝へと変貌してしまった。　イスラエル——わたしのしもべ、わたしの家族——は、気性の激しい雌ラクダのように、荒野をさまよう野生の雌ロバのように、魂の情熱に駆られて空気を飲み込みながら、こう言った。「期待するな、いや、だめだ！　わたしは異邦人を愛し、彼らの道を歩むからだ。」　イスラエルの家は自らを辱めた。その民、その王たち、その君主たち、その祭司たち、その預言者たちは、　私に背を向け、顔を向けず、こう言った。「我々は自分たち自身が主である。もはやあなたのもとには行かない」。しかし、災いの時にはこう言うだろう。「立ち上がって、私たちを救ってください！」——おお、民よ！　主の御言葉に耳を傾けよ。わたしは荒野であったか、それともイスラエルの地であったか。——処女が自分の装飾を忘れ、花嫁が自分の衣装を忘れることがあるだろうか。しかし、わたしの民はわたしを忘れ、その忘却の日々は数えきれないほどである！　そして、あなたは自分の不誠実さによって、敬虔さの衣で自分の恥を覆い隠し、愛を得ようと巧みに自分の道を導いている！それゆえ、あなたは自分の道を罪にさえ適応させ、その結果、あなた

[3319] 彼の在位期間は、紀元前627年から紀元前585年までの42年間に及んだ。

の衣の裾には、貧しく罪のない人々の血が付いている……（エレミヤ書2:4–34）。 それゆえ、彼らがその邪悪な心の頑なさに従って振る舞うゆえに、わたしは北から災いと大いなる破滅を彼らにもたらす。その日、主はこう言われる。「王の心も、君主たちの心も凍りつき、祭司たちは恐怖に震え、預言者たちは驚愕するであろう！」 （エレミヤ43:17、4:6–9）。泉が水を噴き出すように、エルサレムは悪を噴き出している。そこには暴行と略奪の声が聞こえ、わたしの御前の前には、常に傷と痛手が横たわっている。 「エルサレムよ、目を覚ませ。そうすれば、わたしの魂があなたから離れることもなく、わたしがあなたを荒れ野、人の住まない地とすることもない」（エレミヤ6:7–8）。

聖なるエレミヤは、このような、あるいはこれに類する熱狂的で情熱的な言葉をもって、幾度となく同時代の人々に語りかけた。それらは、岩を砕く槌の如く、彼の預言書に詳しく記されている。そして、彼が預言として語ったことはすべて実現した。

エルサレムにとっての政治的苦難と災いは、ヨシヤ王の治世に次のように始まった。彼の治世31年目（列王記下22:1；歴代誌下34:1）、エジプトのファラオ・ネハオが、アッシリア王に対してユーフラテス川へと遠征を敢行した。 その進路はユダ地方を通るものだったため、ヨシヤ王は自国をエジプト軍の侵攻から守るべく、軍勢を集めて彼らに立ち向かうことを決めた。ファラオは使者を彼のもとに遣わし、こう告げた。「ユダの王よ、私とあなたに何の関係があるというのか。今、私が向かっているのはあなたではなく、私が戦いを繰り広げている場所である。 神は私に急ぐよう命じられた。神に逆らってはならない。さもないと、神はあなたを滅ぼされるだろう。」

しかし、ヨシヤはネハオのこの警告に耳を貸さず、自らの軍を率いてマギドンの平野へと出撃した。そこは地中海沿岸からヨルダン川へと続く道筋にあり、ネハオはそこからダマスカスを経由する最短ルートでユーフラテス川の岸辺に到達しようとしていた。

戦いが起こり、敵の兵力優位に圧倒されたユダ軍は完全に打ち砕かれ、ヨシヤ王自身も致命傷を負った。護衛たちは、最愛の瀕死の王を急いで運び出し、エルサレムへ連れ帰った。そこで彼は神のもとへ息を引き取った。 ヨシヤは先祖の墓に葬られ、エルサレムおよびユダ全土の人々によって深い悲しみをもって悼まれた。彼はその慈愛と神を畏れる心において、王たちの中で最も優れ、最もふさわしい人物であったからである（歴代誌第二35:20–24；ゼカリヤ12:11）。 預言者エレミヤもまた、哀歌の中でヨシヤ王を悼んだ（歴代誌下35:25）。

その後、ファラオ・ネハオはアッシリアへの遠征を続けたが、エルサレムではヨシヤの次男ヨアハズ[3320] が王として油注がれた。しかし、彼はネハオがアッシリア遠征から帰還するまでのわずか3ヶ月間しか在位しなかった。 マギドの戦いの勝利後、ユダヤの地に対する支配権を掌握したエジプトの王は、当時、主要かつ強大な敵であるアッシリア・バビロニアを念頭に置いており、弱体なユダヤ王国には関心を払わなかったが、 帰路においてエルサレムとユダ全土を制圧し、自らの支配下に置いた——新に選出された王ヨアハズが、王位としての地位の承認を得るために、エマフの地リヴレにある彼の野営地を訪れた際[3321] 、 彼を廃位し、手錠をかけた捕虜としてエジプトへ送った。そして、ユダ王には彼の兄エリヤキムを即位させ、その名をヨアキムと改名させた。 同時に、ネハオはユダに銀百タラントと金一タラントの貢納を課した[3322] 。これは小さな国家にとっては耐え難いほど重い負担であり、ましてやそれが容赦ない厳しさで徴収されたためである（列王記下23:35）。

こうして、アブラハムの子孫である自由な民、かつては栄光に満ち、強大な王国であったユダは、その独自性を失い、奴隷状態に陥った。 そしてこれは、ユダヤ人たちの不法行為が招いた避けがたい結果であった。彼らは預言者たちの戒めに対して心からの悔い改めを示さず、神の律法に従って道徳的な生活を送らなかったため、至高の神を怒らせてしまったのである！

[3320] ヨハズはヨシヤと、その最愛の妻ハムタルの次男であり、サルムとも呼ばれていた（列王記下23:31；22:11参照）。

[3321] エマオはアンチレバノン山脈の麓に位置していた。

[3322] 金のタラントは12万5000ルーブルに相当する。貢納総額は、現在の30万ルーブルに相当した。

ユダ王ヨアキムの治世の初め、主は聖なるエレミヤにこう告げられた。「主の宮の庭に立ち、主の宮に礼拝にやって来るすべてのユダヤ人に、わたしがあなたに告げるべきすべての言葉を語りなさい。一言も省いてはならない。　――主はこう言われる。もしあなたがたが、わたしがあなたがたに与えたわたしの律法に従い、早朝からわたしがあなたがたのもとに遣わすわたしのしもべである預言者たちの言葉に謙虚に耳を傾けるという、わたしへの従順を怠り、彼らを無視し続けるならば、わたしの名が呼ばれ、あなたがたが希望を置いているこの家（エレミヤ7:14参照）、シロム[3323]に下したのと同じことを行い、この町を地上のすべての民の呪いの対象とする」（エレミヤ26:1–6）。

神の御名によって預言者が語ったこのような恐ろしい言葉を耳にすると、社会の平穏と国家の安全を守るふりをしていた者たち――すなわち、怒りに満ちた祭司たちや偽預言者たちは、エレミヤを捕らえ、彼に対する裁きを求め、貴族たちや民衆から彼に死刑判決を下すよう要求した。　主の宮には、このようにしてエレミヤに対して扇動された民の群衆が集まり、ユダヤの貴族たちや王宮の者たちもそこへやって来て、主の宮の門の入り口に腰を下ろした。　こうして、預言者に対する形式的な裁判が設けられた。不義な祭司たちと偽預言者たちは、集まった民とユダヤの貴族たちに向かってこう言った。

「この男は、あなたがたが自分の耳で聞いたとおり、この都に対して預言をしているのだから、死に値する。」

しかし、エレミヤは自身の弁明としてこう述べた。

「主は、あなたがたが聞いたすべての言葉を、この家とこの町に対して預言するよう、わたしを遣わされました。ですから、あなたがたの道と行いを改め、あなたがたの神、主の御声に聞き従いなさい。そうすれば、主はあなたがたに宣告された災いを撤回してくださいます。　私については、今、私はあなたがたの手に委ねられています。私に対して、あなたがたが望むままに、またあなたがたの目には最善かつ公正と思われることをしてください。ただ、一つだけしっかりと知っておいてください。もしあなたがたが私を殺すならば、無実の血の責任は、あなたがた自身、この町、そしてその住民たちの上に降りかかるでしょう。なぜなら、主はまことに、これらの言葉をあなたがたの耳に告げるために、私をあなたがたのところへ遣わされたからです。

そこで、民の集会で議長を務めていたユダヤ人の指導者たちと王の重臣たちは、激昂した祭司たちや偽預言者たちにこう言った。

「この人は、私たちの神、主の御名によって私たちに語ったのだから、死刑に処してはならない。」

また、その地の長老たちの中にも、エレミヤを擁護する者たちが立ち上がり、民に向かって次のように語った。

「思い出してください。モラスフィテ人のミカは、ユダ王ヒゼキヤの時代に預言し、ユダの民全体にこう言いました。『万軍の主はこう言われる。シオンは畑のように耕され、エルサレムは廃墟の山となり、神殿の山は森の生い茂る丘となる。』　――エゼキヤ王とユダの人々は、このために彼を殺したでしょうか。彼らは主を恐れ、主に懇願しなかったでしょうか。そして主は、彼らに宣告された災いを撤回されました。しかし、私たちは――私たちは、自分たちの魂に大きな災いをもたらそうとしているのです（エレミヤ26:11–19）。それゆえ、悔い改め、悪から離れ、無実の人の死を求めないようにしましょう。なぜなら、この町とこの地に対して、エレミヤが預言しているのと全く同じ言葉で、主の御名によって預言していた、カリア・フィアリム出身のシェマイヤの子ウリヤの、つい先日流された血に、果たして何らかの益があったでしょうか。　――王とその重臣たちは、当時このウリヤの言葉を聞いて彼を憎み、殺そうとした。しかし、死の宣告を受けた彼は恐怖のあまりエジプ

[3323] ここでは、大祭司エリヤの時代に、ユダヤ人がペリシテ人から惨敗を喫し、契約の箱が捕らえられた際、イスラエルから栄光が去ったという事実が指摘されている。列王記上4:10–22。

トへ逃れた。　ヨアキム王はエジプトにも使者を送り、彼をそこから連れ戻させた。ウリヤは剣で殺された。しかし、その結果どうなったか？――民の王とユダの高官たちに対する憤りである。もしあなたがたがエレミヤをも死に追いやれば、同じことが必ず起こるだろう。

その後、民の集会で意見が分かれた。ある者は聖なる預言者を殺すよう主張し、またある者は彼の無実を擁護した。　もし、王宮で影響力のある高官の一人、サファンの子アヒカムがエレミヤを庇護していなければ、エレミヤを憎む者たちは当然、彼を擁護する者たちを圧倒していただろう。彼は、エレミヤを殺害しようとしていた悪意ある者たちの手から彼を救い出したのである（エレミヤ26:20–24）。

一方、それ以前の長い年月を通じて民の良心を蝕み、道徳の極度の堕落を招いていた偶像崇拝は、ユダでますます勢いを増していた。ユダヤ人の中には、預言者の呼びかけ――すなわち、自分の生き方を改め、神の律法に従うこと――に対して、嘲笑混じりにこう言う者たちもいた。

「期待するな。我々は自分の思いのままに生き、それぞれが自分の邪悪な心の欲するままに行動する（エレミヤ18:12）」、「我々の口から出たことはすべて実行し、天の女神に香を焚き、彼女に酒を注ぐ。それは、我々と我らの父祖、王たちや君主たちが、ユダヤの町々やエルサレムの街頭で行ってきたことと同じだ。なぜなら、それによって我々は満腹と幸福を得てきたからである」（エレミヤ44:17）。

彼らには真理がなくなり、その口からは真理が奪われてしまった。小さい者から大きい者まで、一人ひとりが利益に走っており、偽預言者から祭司に至るまで、皆が偽りを働き、忌まわしい行いをしながらも、少しも恥じたり赤面したりしなかった（エレミヤ6:13–15）。　ユダ王ヨアキムもまた、不義の一般的な流れに流され、主の目にかなわないことを行った（列王記下23:37、歴代誌下36:5）。

そこで、聖なるエレミヤは再び主から命を受けた。

「行って、ユダ王の宮に入り、そこでこの言葉を告げ、こう言いなさい。『ダビデの王座に座するユダ王よ、あなたとあなたの家来たち、そしてこの門を通るあなたの民よ、主の言葉を聞きなさい。』」　主はこう言われる。『正義と公正を行いなさい。虐げられている者を迫害者の手から救い出し、寄留者、やもめ、孤児を虐げたり苦しめたりしてはならない。この場所で無実の者の血を流してはならない。　もしあなたがたがこの言葉を実行するなら、ダビデの家系からダビデの王座に就く王たちが、戦車や馬に乗って、この神殿の門から入ってくるであろう。彼ら自身、その家来たち、そしてその民も共に。　しかし、もしあなたがたがこの言葉に従わないなら、わたし自身が誓う（と主は言われる）。この家は荒れ果て、町々は無人となり、ユダの全地は荒野と化す。わたしは、悔い改めない者たちを、木を切り倒すように打ち倒すために、武器を携えた滅ぼし手を用意するからである。　そして、多くの民がこの荒れ果てた町を通り過ぎ、互いにこう言うだろう。「主はなぜ、この偉大な町にこのようなことをなさったのか。」すると、彼らは答えて言うだろう。「彼らが、自分たちの神である主との契約を捨て、他の神々にひれ伏し、それらに仕えたからだ。」

また、ユダ王ヨアキム自身について、聖なる預言者は主の御名によってこう語った。すなわち、彼の目と心は私利私欲と無実の者の血を流すこと、そして抑圧と暴力を振るうことに向けられているため、死後、人々は彼を悼んで、次のような嘆きの叫びを上げることはないだろう。　「ああ、王よ！」や「ああ、その偉大なる方よ！」といった嘆きの叫びを上げて悲しむことはないだろう――彼はロバのような葬送で葬られる。すなわち、引きずり出され、エルサレムの城門の遥か彼方に投げ捨てられるのである（エレミヤ書22:1–19）。

神の預言者が民衆の前で公然と語ったこのような大胆不敵な言葉は、王とその側近たちの激しい怒りを招いた。もし神の御計画が、主の御名による将来の神秘的な啓示のために聖なるエレミヤを守っていなかったならば、彼はその場で間違いなく死刑に処されていたであろう。　彼は粗暴に捕らえられ、不名誉な形で、足枷を嵌められて牢獄に投じられた。

その頃、異教の忌まわしい行いで汚され、無実の者の血で染められた罪深い都に対する神の裁きが下った。――ネブカドネツァル、 バビロンの王ナボパッラサルの息子であり、アッシリア王朝の代表者であったネブカドネツァルは、父の命を受けてエジプト王ネハオに戦いを挑み、カルケミシュ[3324] において、アッシリアを征服しようとしたファラオの軍勢を打ち破ると、直ちにその軍勢を、アッシリアの属王であるユダ王に対しても向けさせた。 エルサレムは短期間の包囲の末、ネブカドネツァルによって陥落した。 ユダ王ヨアキムは在位3年目に捕虜となり、王族や貴族の家系から選ばれた若者たち（その中には、まだ少年だった預言者ダニエルや、アナニア、ミサイエル、アザリヤの3人の若者も含まれていた）と共に （ダニエル書1:1–6）、バビロンへと連行された。そこへはエルサレムの市民の相当数も連行され、神の宮の器の一部も持ち去られた。

しばらくして、父の死後バビロンで即位したネブカドネツァルは、捕虜となっていたヨアキムをエルサレムへ戻し、彼をユダ王としての地位に復帰させたが、ただ彼を自分の属国としただけだった。こうして3年が過ぎた： ヨアキムは、かつてエジプトのファラオに貢ぎ物を納めていたのと同様に、バビロンの王に貢ぎ物を納めていた。こうして、 ユダに重くのしかかっていたエジプトへの従属から解放され、当時まだ若く、国内の政務に忙殺されていたバビロンという新興王国から将来的に迫る恐ろしい危険を予見できなかったため、 ヨアキムとその貴族たちは、傲慢にもカルデアの隷属から自らを解放しようと企て、放蕩や様々な狂気にふけった。

しかし、ユダ王ヨアキムがネブカドネツァルへの服従を公然と放棄し、バビロンからの王国の独立を明言する前に、当時牢獄に囚われていた預言者エレミヤに、主の御言葉が次のように臨んだ。

「巻物を取り、そこに、ヨシヤの時代から今日に至るまで、わたしがあなたに語り始めたその日から、イスラエルとすべての民について、わたしがあなたに語ったすべての言葉を書き記せ。 そうすれば、ユダの家、すなわちユダヤの民は、わたしが彼らに下そうとしているすべての災いについて聞き、それぞれが自分の悪の道から立ち返り、わたしが彼らの不義と罪を赦すようになるかもしれない。」

エレミヤは、この神の命令を、弟子であり書記であるニリヤの子バルクを通じて実行した。バルクは預言者の口から出たすべての言葉を巻物に書き記した。その後、エレミヤはバルクに言った。

「私は閉じ込められ、見張られている。ここから出て主の宮へ行くことはできない。だから、あなたが行き、断食の日に主の宮で、民の耳に聞こえるように、また、それぞれの町から集まってきたすべてのユダヤ人の耳に聞こえるように、私の口からあなたが書き記した主の言葉を読み上げなさい。 彼らに読み聞かせなさい。そうすれば、彼らは主の御前に祈りをささげ、それぞれが自分の悪しき道から立ち返るかもしれない。主がこの民に対して宣言された憤りと怒りは、まことに大きいからである。」

バルクは、民の集まりの前で、巻物に記された主の言葉を読み上げた。それはヨアキム王の治世第五年のことであった（エレミヤ36:9）。

巻物の朗読は皆に衝撃を与え、民の集会は動揺に包まれた。この出来事は王宮にも伝えられ、そこには当時、すべての高官たちが集まっていた。彼らはバルクを自分の元へ呼び出した。 バルクによって読み上げられたエレミヤの預言は、無頓着で放蕩にふけり、良心を失った高官たちさえも震撼させた。彼らは恐怖の表情で互いを見合わせ、バルクに、この預言をどのように書き記したのかと尋ねた。バルクは答えた。「エレミヤが口にしてくれたこれらの言葉を、私がこの巻物に書き記したのです」。

高官たちは言った。「これらの預言は極めて重要である。その内容を必ず王に伝えなければならない」（エレミヤ36:10–19）。

[3324] カルヘミシュの町は、ホワル川がユーフラテス川に合流する地点に位置していた。

その中ではバルクに好意を抱いていた者たちが、彼にしばらく身を隠すよう助言し、また預言者エレミヤについても、神の御旨を告げる者たちがどこにいるのか誰にも知られないよう、別の監禁場所へ移送するよう命じた。

預言の巻物について王に報告されると、ヨアキムは、その巻物を自分の元へ持ち込み、すべての貴族たちの面前で声に出して読み上げるよう命じた。当時は寒い時期で、11月のことだった。王は、燃える炭で満たされた火鉢の前に座り、貴族たちはその周囲に立っていた。

一部の貴族たちは、[3325] 、エルサレムのエレミヤの言葉を真剣に聞いていたが、王の硬くなった心や、彼に媚びへつらう高官たちには、その預言の朗読は本来あるべき印象を与えなかった。 そればかりか、朗読者が巻物を広げ、三、四段を読み上げるたびに、王は筆用ナイフで切り取り、火鉢の火の中に投げ込んだ。こうして巻物はすべて読み上げられ、完全に焼き尽くされた（エレミヤ36:1–26）。 その後、ヨアキムは側近たちに命じて、エレミヤとバルクを捕らえ、二人を死刑に処すよう命じた。しかし、神の御手配により、彼らはその時に隠され、死を免れた。そしてまもなく、ユダ王国には、預言者たちの敵や憎む者たちが、復讐を企てたり実行したりする暇さえなくなるような時代が訪れたのである。

その間、神の御命により、預言者エレミヤは不義な王を非難する新たな言葉を語った。

「別の巻物を取りなさい」と主は彼に言われた。「そして、ユダヤの王ヨアキムが焼いた最初の巻物に書かれていた以前の言葉をすべて、その巻物に書き記しなさい。 そしてヨアキムにはこう告げよ。『主はこう言われる。――あなたは巻物を焼き捨てた。そこには、バビロンの王が必ずやって来て、この地を荒廃させ、その中の人と家畜を皆殺しにする、と書かれていたからだ。 このため、主はヨアキムについてこう言われる。『彼の子孫は、ダビデの王座に 座することなく、彼の死後、その遺体は昼の炎熱と夜の寒さにさらされるであろう』（エレミヤ36:27–30）。

この主の御命令は、聖なる預言者によって成就された。すなわち、エレミヤの口から語られた言葉をバルクの手によって別の巻物に書き記され、そこには以前の預言の言葉に多くのことが加えられていた。

その頃、ユダヤ人にとって予期せぬことに、エルサレムは、カルデア人、シリア人、モアブ人、アンモン人からなる軽装部隊で構成されたネブカドネツァルの軍勢に包囲された。 防衛の準備ができていなかった聖都は、攻撃者たちによって容易に陥落した。ヨアキム王は捕らえられ、不名誉な死を遂げた。その遺体は城壁の外に投げ捨てられ、野獣や鳥に食われた。 こうして、聖エレミヤの預言の言葉が成就した。すなわち、ユダの王は「ろばのような葬り方」で葬られる、つまり、引きずり出されてエルサレムの門の遥か彼方に投げ捨てられ（エレミヤ22:19）、その死体は昼の灼熱と夜の寒さにさらされるというものである。 もっとも、獣に食われた彼の残りの骨は、ユダヤ人によって王家の墓所に埋葬された（歴代誌下36:8）。

ヨアキムの死後、その息子エホニアがエルサレムの王位に就いたが、彼は父よりも敬虔ではなかった。聖なるエレミヤは彼について、その全家族とともに主によってバビロンの王の手に渡され――もはや自分の地を見ることはないだろう――と預言したが、それはまもなく現実のものとなった。 エホニアはダビデの王座にわずか百日間しか就かなかった。父の後を継いで王位につくと、彼は無分別な盲目さに囚われ、ネブカドネツァルに立ち向かえるという実現不可能な夢にふけり、自発的に彼に服従し、その権威を認めることを拒んだ。 父と同様に不道徳で偶像崇拝的な忌まわしい行いにふけっていたエホニアは、エルサレムの堅固な城壁の内に安全を見出せると思い込み、首都が包囲された場合にはエジプトからの援助を期待していた。 しかし、エルサレムを包囲していた自軍の中に自ら姿を現したネブカドネツァルの迅速な奇襲に不意を突かれ、彼は家族全員、宮廷の者たち、そ

[3325] エルナファン、デライア、ゲマリア――王の家臣たち――は、どうやらこの朗読が王に感化を与え、父ヨシヤと同様に、王を道徳的な改善へと導くことを期待していたようだ。（列王記下22:10–13）。

して宦官たちと共に、勝利者の意のままになるしかなかった。　王室全体、高貴な貴族たち、ユダヤの地の選りすぐりの人々、精鋭の戦士や職人たち――計一万人にも及ぶ選りすぐりの民がバビロンへ連行された。そこへ、捕虜たちと共に、主の神殿の金の器や王の宝物も運び出された（列王記下24:8–16）。

こうして、エレミヤの預言の言葉が成就した。ユダヤの王エホニア――かつてユダヤ人をエジプトから導き出した主なる神の右手の指輪――はその場所から引き剥がされ、軽蔑され、見捨てられた存在として、　役に立たない器のように、母や一族と共に、彼らが知らず、生まれも育ちもしなかった異国の地へ放り出され、そこで、彼らの魂が切望していた故郷の地へ戻ることなく、死んでいったのである（エレミヤ書44:24–29）。

ネブカドネツァルによるエルサレムの陥落と、ユダ王国で最も尊敬され、優れた人々のバビロンへの追放の後、ユダには貧しく、身分の低い人々ばかりが残された。　このユダの残党を統治するため、カルデアの征服者によって、エホニアの代わりに、（敬虔な）ヨシヤ王の三男マタニヤ――エホニアの叔父であり、ヨアハズとヨアキムの兄弟――が王位に就かされ、セデキヤと改名された。

ネブカドネツァルの傀儡であったゼデキヤは、11年間統治したが、その治世を通じて、神の寛容の限界を押し広げるような行いばかりを行っていた。　彼の道徳的堕落は極めて深刻であり、彼を襲った最も過酷な試練にもかかわらず、彼は自身の不敬虔な性向を克服できず、心からの誠実さをもってイスラエルの神、主に向き合うことができなかった。彼を取り巻く側近や祭司たちもまた、同様であった。　ユダでは、異教の忌まわしい行いがますます増え続けていた。神の家そのものであるエルサレムの神殿でさえ、偶像礼拝の忌まわしい行いによって汚されていた（エゼキエル8章、エレミヤ23章参照）。　預言者たちの口を通して語られた主の御言葉には耳を傾けず、堕落した人々の情欲を甘やかす偽預言者たちの、お世辞めいた言葉にばかり耳を傾けていた。　これらすべてが、恐ろしい雲のように、エルサレムとユダヤ全土の上に主の怒りを集め、ついに主は御自身の民から御顔を背け、聖なる都エルサレムを完全な破滅と荒廃へと見捨てられた（エレミヤ書52:1–3）。

エルサレムに降りかかったこの最後の災いは、それまでのどの災いよりも恐ろしいものであり、次のようにして起こった。　ネブカドネツァルは、強大で自分に敵対的なユダヤ人たちをバビロンへ追放し、エルサレムでは神の民の弱体化した残党の上にゼデキヤを王として据えた。彼は、弱体化したユダヤを、依然として彼を悩ませ続けていたエジプトに対する拠点として利用することを望んでいた。　カルデアの支配者は、自分の傀儡である好戦的ではないゼデキヤが、自分の属国として留まり、　自身の強力な力に支えを求め、自分への服従を維持し続けると計算していた。実際、約3～4年間はそうであった。　しかしその後、勢力を固め――いや、より正確に言えば、王位に落ち着き始めたばかりのセデキヤは、その控えめな立場に満足しなくなり、バビロンの王の支配から脱却しようと望むようになった。　彼を取り巻く宮廷の重臣たちも、狂おしいほどの盲目さに囚われており、彼をその方向に導いていた。とりわけ、エドム、モアブ、アンモン、ティルス、シドンの周辺の小王たちの助言は彼にとって魅力的であった。彼らもまた、カルデアへの従属を憎悪していたのである。　これら諸国はネブカドネツァルに対抗する同盟を結成し、エルサレムに使節団を派遣して、ゼデキヤに彼らの同盟に加わるよう提案した。それは、共にバビロンの王の支配に立ち向かい、その憎むべき隷属から脱し、彼への貢ぎ物を支払わなくて済むようにするためであった。

その頃、主は預言者エレミヤにこう命じられた。「束縛の縄と軛を作って、それを自分の首にかけよ。そして、エドム、モアブ、アンモン、ティルス、シドンの王たちにも、彼らの使者を通じて同じものを送れ。そして、彼らに命じて、それぞれの君主に主の御言葉を告げさせよ」（エレミヤ27:2–4）。

聖なる預言者はそのとおりにした。自分の首に縄と木製のくびきを掛け、上記の王たちの使節たちがそこにいた時にセデキヤの宮殿に現れ、こう言った。

「万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。あなたがたも、それぞれの君主にこう伝えなさい。わたしは、わたしの大いなる力によって、地と、地の上にいる人と獣とを創造し、それをわたしの望む者に与えた。　そして今、わたしはこれらのすべての地を、バビロンの王ネブカドネツァルの手に渡す。すべての民は、彼と、その子、そしてその子の息子に仕えることになる。彼とその地、そして彼自身に定められた時が来るまで。　もし、どの国民や王国であれ、バビロンの王に仕えることを拒み、ネブカドネツァルのくびきに首を屈しないならば、その国民を、私は剣と飢饉と疫病をもって懲らしめ、バビロンの王の手によって滅ぼし尽くすまで続ける。　また、あなたがたは、自分の占い師や予言者、夢占い師、魔術師、星占い師たちの言葉に耳を傾けてはならない。彼らは『あなたがたはバビロンの王に仕えることはない』と断言しているが、彼らはあなたがたを自分の地から追い出し、わたしがあなたがたを追い出して滅ぼすために、偽りの予言をしているのである。　彼らの言うことを聞かず、バビロンの王に仕えて生きなさい。なぜ、この都とあなたがたの地を荒廃に追い込む必要があるのか（エレミヤ27:5–17）？

これは、ユダの王ゼデキヤの治世の第四年のことであった（エレミヤ28:1）。

ある時、神の預言者がくびきを首にかけたまま主の神殿に入ったところ、そこでアナニアという名の偽預言者の一人に遭遇した。彼は祭司たちや民衆全員の目の前でこう言った。

「イスラエルの神、主はこう言われる。わたしはバビロンの王のくびきを砕く。二年後には、バビロンに持ち去られた主の宮のすべての器をこの場所に戻し、エホヤキン王とすべてのユダ人をここへ連れ戻す。」

そこでアナニアは、預言者エレミヤの首にかかっていたくびきを取り、それを砕いた。エレミヤは神殿から出て行ったが、まもなく神からの啓示を受けて神殿に戻り、アナニアに言った。

「聞け、アナニヤよ。主はあなたを遣わされたのではない。あなたはこの民に偽りの希望を与えている。あなたは木製のくびきを砕いた。それなら、その代わりに鉄のくびきを作れ。神は、これらすべての民の首に鉄のくびきを課し、彼らをバビロンの王ネブカドネツァルの下で働かせるからだ。　そして、あなたは神の名において偽りを語ったゆえに、今年中に死ぬだろう。主の御心に逆らって語ったゆえに、この地から消し去られるのだ。

そして実際、一ヶ月後、その偽預言者は死を迎えた。

その知らせを聞いたゼデキヤは動揺し、その時点ではバビロンの王から公然と離反することを敢えてしなかった。　その後、カナン諸小王の同盟の先頭にエジプトのファラオ、ネハオの息子プサムメティクス2世が立った。彼はエチオピア人に対する勝利の後、自らの支配をユーフラテス川流域にまで拡大するという大胆な計画に熱中し、　ゼデキヤは公然と連合軍に加わった。ネブカドネツァルから離反し、自らを敵と宣言したのだ。聖なるエレミヤの論しには耳を貸さなかった。エレミヤは常に彼と民全体に、その時々にふさわしい有益な助言を与えていたのである。

一方、ちょうどその頃、預言者エレミヤは、バビロンに捕囚として連行されたユダヤ人たちに、密かに書簡を送った（[3326]）。その書簡の中で、彼は同胞たちに、神の定めにより彼らがそこに七十年間留まることになると伝え、神の名において、「そこで家を建て、ぶどう畑を耕し、息子や娘たちを結婚させ、捕囚の地でその数が減ることなく、　選ばれた民が増え続けるように」と、また、彼らが定住している町の整備に心を配り、その町のために　神に祈るよう促した。「なぜなら、その町が繁栄すれば、彼らも繁栄し、平和で安らかな生活を送ることができるからである」。　さらに、聖なる預言者は神の御名によって、同胞たちに対し、彼らの間にいて、捕囚からの早期解放を約束する偽預言者や、偽りの愛国者たちから警戒するよう戒めた。主はこう言われるからである。　「あなたがたがバビロンで七十年の歳月を全うしたとき、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたをこの地へ

[3326] エレミヤの手紙は、セデキヤがネブカドネツァルへの贈り物と共に派遣した王の使節たちによって、その地へ届けられた（エレミヤ書29:3）。

連れ戻すという、わたしの善き言葉を成就する。わたしは、あなたがたに対して抱いている計画を知っている。それは災いではなく、平安を与え、将来と希望を与えるための計画である」（エレミヤ29:5）。

エレミヤの書簡は、バビロンに連行されたユダヤ人たちによって注意深く読まれ、聞き入れられた。また、不幸な祖国を愛するふりをした偽りの預言者たちもそれを知ったが、彼らにとっては、それが怒りをかき立て、預言者への復讐心を掻き立てた。　彼らはエルサレムの祭司たち宛てに、エレミヤが預言したり書簡を書いたりすることを禁じるよう、自分たちから手紙を送った。それだけでなく、彼らは、エレミヤが言葉や手紙によって人々を動揺させ、長期にわたる捕囚を恐れるよう仕向けることがないように、縛られた状態で厳重な監視下に置かれることを要求した。　しかし、神の預言者は、自分に課せられた禁止令や束縛にもかかわらず、主の御言葉を宣べ伝えることをやめず、バビロンに追放された者たちには主が御慈悲をもって訪れ、逆にエルサレムに残った者たちには、主の義なる怒りによって滅ぼされるだろうと語り続けた。

「見よ、わたし――」と主は、ダビデの王座に座する王と、この都に住むすべての民についてこう言われる。「わたしは彼らに剣と飢饉と疫病を送り、彼らを、腐って食べられない無価値なイチジクのようにする。　また、彼らを追い詰め、地のすべての王国にとっての憎悪の対象とし、のろいと恐怖、すべての民の間での嘲笑と侮辱の対象として、わたしが彼らを追放するすべての場所に彼らを渡し、彼らがわたしの言葉に従わなかったことを罰する（エレミヤ29:1–32）。

エルサレムの近くには、トフェトと呼ばれるエノムの子らの谷があり、そこには高い祭壇が設けられていた。そこで不敬虔なユダヤ人たちは、自分の息子や娘を屠り、焼き尽くしてモロクに犠牲を捧げていた。　この一帯は、殺される子供たちの絶望的な叫び声を掻き消すかのように、角笛やシンバルの狂乱した音が頻繁に響き渡っていた。　このような同時代の人々の忌まわしく非人道的な不法を糾弾するため、預言者エレミヤは神の命により、陶工から焼成された土製の水差しを購入し、民の長老たちや祭司の長老たちを伴ってトフェトの谷へと向かった。そこで彼は大声で叫んだ。

「ユダの王たちよ、エルサレムの住民たちよ、主の御言葉を聞きなさい！　「イスラエルの神はこう言われる。『見よ、わたしはこの場所に災いを下す。それを聞く者の耳には、その音が響き渡るであろう。それは、わたしの民がわたしを捨て、この場所を異教の場所とし、かつて彼らの父祖も王たちも知らなかった他の神々に、そこで香を焚いているからである。　彼らはこの場所を無実の者の血で満たし、高い祭壇を築き、バアルへの全焼のいけにえとして自分の息子たちを火で焼き尽くしている。それは、わたしが彼らに命じたことではなく、わたしの心に思い浮かんだことでもない。それゆえ、見よ、主はこう言われる。「この場所がもはやトフェト――エノムの谷――と呼ばれず、死の谷、殺戮の谷と呼ばれる日が来る。なぜなら、ここで多くのユダヤ人が敵の剣によって殺されるからである。そして、わたしは彼らの死体を空の鳥や地上の獣の餌とする。　わたしは、このエルサレムを荒廃させ、すべての者にとって恐怖と驚きの対象とする。通りかかる者は皆、そのあらゆる傷跡を見て、驚き、口笛を吹くだろう。　そして、彼らは自分の息子や娘の肉を食べ、包囲され、窮地に追い込まれ、彼らの命をねらう敵に囲まれ、締め上げられたとき、互いに隣人の肉を食べることになる。（エレミヤ書19:3–9）」

怒れる神の名においてこのような恐ろしい言葉を告げた後、聖なるエレミヤは手に持っていた土製の水差しを地面に投げつけ、皆の目の前でそれを粉々に砕き、こう言った。

「万軍の主はこう言われる。わたしは、もはや修復することのできないこの土器が砕かれたように、この民とこの町を打ち砕く。わたしはエルサレムをトフェトのようになる。エルサレムの人々の家も、ユダの王たちの家も、トフェトの場所のように汚れたものとなる」（エレミヤ19:10–13）。

この恐ろしい預言を語り終えると、エレミヤはトフェトを後にし、エルサレムに戻った。そして、主の宮の庭に立ち、民に向かって次のように語った。

「イスラエルの神、主はこう言われる。『見よ、わたしはこの町とそのすべての町々に、わたしが宣告したすべての災いを下す。彼らは悪を行い、わたしの言葉に耳を傾けないからである』（エレミヤ19:14–15）」。

この預言の言葉は、主の宮の監督でもあった祭司パショルに大いに不快に思われた。彼は預言者エレミヤを殴り、主の宮のそばにあるベニヤミンの上の門の　にある檻に閉じ込めた。しかし翌日、パショルはエレミヤを釈放した。その時、エレミヤは彼にこう言った。　「あなたの名は『パショル』（『あなたに平安あれ』）ではなく、『マゴル・ミサヴィブ』（『周囲の恐怖』）である。主はこう言われる。『見よ、わたしはあなた自身と、あなたのすべての友とにとって、あなたを恐怖の的とする。あなたがたはみな、敵の剣によって倒れる。あなたはそれを自分の目で目撃する。　また、ユダ全土をバビロンの王の手に渡し、彼らをバビロンへ連れ去り、剣で打ち倒す。そして、この町のすべての富と、そのすべての財産、ユダの王たちのすべての宝物を敵の手に渡し、彼らはそれを略奪し、持ち去り、バビロンへ運ぶ。　そして、あなた、パシュルよ、あなたの家に住む者たちは皆、捕囚として連れ去られる。あなたはバビロンに行き、そこで死ぬ。あなたと、あなたが偽りの預言をしたすべての友人は、その地で葬られるであろう」（エレミヤ書20:1–6）。

まもなく、聖エレミヤのこの預言は実現した。 ユダ王ゼデキヤは、在位9年目にバビロンの王から公然と離反し、彼への従属関係を断ち切った。そして、10月10日、ネブカドネツァルは（エレミヤ書52:4）大軍を率いてエルサレムに迫り、四方から包囲した。 城壁の周囲に高い土塁を築き、その上に攻城塔を設置した。エルサレムにとって、恐ろしい時が訪れたのである！　堅固な城壁に守られ、水やあらゆる物資も十分に備えられていたユダ王国の首都において、カルデア人の侵攻から身を隠す人々が異常に集中した結果（エレミヤ35:11）、　まもなく、最も必要な物資に深刻な不足が生じ、都にはパンが足りなくなった（エレミヤ52:6）。この困難な時、神の預言者は神の御命により、ゼデキヤ王のもとへ現れ、王と民すべてにこう告げた。

「主はこう言われる。『見よ、わたしはこの町をバビロンの王の手に渡す。彼はこれを占領し、焼き払う。王よ、あなたは彼の手から逃れることはできず、必ず捕らえられ、彼の手に引き渡され、バビロンへ連行されるであろう』」（エレミヤ34:2–3）。

しかし、エルサレムを完全な荒廃から、またユダ王国を滅亡から救いたいという願いから、エレミヤはセデキヤに、ネブカドネツァルの寛大さを頼りに、自発的に降伏するよう助言した。　しかし、偽預言者たちや祭司の長老たちは、神の預言者の助言にあらゆる手段で反対し、利己的で野心的な高官たちの荒唐無稽な妄想に煽られて、王に対し、「彼らが言うところの『正気を失った』エレミヤ」（エレミヤ書28章）の言うことを聞かないよう説得した。

一方、バビロンの王への自発的な服従を認めようとしなかったゼデキヤと彼の顧問たちの無分別な熱狂は、たとえそれが短期間であったにせよ、一見、彼ら自身にとっては正当化されるものとなったようである。　ユダ王は、前述の他の同盟諸王たちと共に、エジプトのファラオに希望を託していたが、ファラオは軍勢を召集し、カルデア人に包囲されていたセデキヤを救援するために出陣した。　それを知ったネブカドネツァルは、エルサレムの包囲を急いで解除し、全軍を率いて最大のライバルへと向かった（エレミヤ37:5）。すると、エルサレムでは並外れた歓喜の声が上がった。ほぼ一年間も閉ざされていた城門が開かれると、エルサレムの住民たちは自由を満喫し、周辺の村や町の様子、畑やブドウ畑がどうなっているかを確認しようと、一斉に街の外へと駆け出した。　ユダヤ人たちは、ネブカドネツァルが自らの戦力の弱さと、首都の要塞を攻略できないことを悟り、急いで包囲を解いて撤退したのだと考えていた。　「ほら、」と、祖国の強大さという夢に酔いしれた熱狂者たちは自慢げに言った。「バビロンの王は我々を打ち負かすことができず、恥をさらして逃げ去ったのだ」。　そして彼らは、エレミヤの預言が外れたものだと罵り、冒涜的に非難した。しかし、聖なるエレミヤは、その時も臆することなく、エルサレムがカルデア人によって陥落すると告げていた。

「カルデア人は」と彼は言った。「再びやって来て、この都と戦い、それを陥落させ、火で焼き払うだろう。だまされてはならない！　「たとえあなたがたが、敵対するカルデア人の全軍を打ち破り、彼らに負傷者しか残らなかったとしても、その者たちでさえ、それぞれの天幕から立ち上がり、この町を火で焼き尽くすだろう」（エレミヤ37:7–10）。

カルデア人がエルサレムから撤退した後、包囲された町から脱出した他のユダヤ人たちと共に、神の預言者エレミヤもロバにまたがり、ベニヤミン族の領地にある故郷の町アナフォフへと向かった。そこには彼の所有地があった。　しかし、彼がベニヤミンの町の門にたどり着くやいなや、その門の警備隊長であるイルシア――先に言及した偽預言者アナニアの孫で、エレミヤが間もなく死ぬと予言していた人物――に止められた。　このイルシアは、祖父の件で預言者を憎んでいたため、彼を反逆の疑いで拘束した。

「お前はカルデア人のもとへ寝返ろうとしているのだな」とイルシアは言った。

それに対し、エレミヤはこう答えた。

「お前は嘘をついている。私はカルデア人のところへ行くのではなく、自分の財産がある自分の町へ帰るのだ。」

しかし、その弁明にもかかわらず、警備兵は神のしもべを捕らえ、乱暴に彼を貴族たちのところへ連行した。貴族たちは、自分たちを悩ませてきた無実の人物に対して、かねてから抱いていた悪意ある企てを実行する好機と喜び、　彼を本物のスパイと見なし、殴打を加え、書記官ヨナタンの家にある地下の牢獄に閉じ込めた。ヨナタンは（エレミヤ37:12–16）残酷で冷酷な人物であり、囚人の監視も彼に任されていた。　しかし、彼らは預言者に手を下して殺すことには踏み切れなかった。時折、たとえ臆病ながらも（エレミヤ37:19）、聖なるエレミヤに配慮を示していた王ゼデキヤの不興を買うことを恐れたからである。　ゼデキヤの命令により、神の預言者はまもなく地下の牢から宮殿の牢獄に移され、そこでパンを与えられ（エレミヤ37:21）、そこから民に教えを伝えることができた。

しかし、エルサレムでの喜びの歓喜は長くは続かなかった。 ユダヤの首都を390日間包囲し、セデキヤを助けにやって来たエジプトのファラオを撃退するためだけに包囲を解いたネブカドネツァルは、まもなく敵を敗走させ、再びエルサレムに戻り、以前よりもさらに厳しく包囲した。　カルデア人によるエジプト軍への遠征は100日余り続いたが、エルサレムに対する最後の包囲戦はわずか40日間であった（エゼキエル4:5–6）。

聖なる預言者エレミヤは、この間ずっと、ユダヤ人たちに悔い改めて神に立ち返るよう絶えず諭し続け、彼らに、　今や明らかに成就しつつある預言を挙げ、罪人たちの不法に対して神が定められた懲罰の時がすでに到来したことを示し、神の御心に逆らわず、カルデア人に服従するよう有益な助言を与えた。

「主はこう言われる」とエレミヤは語った。「この町に残る者は、剣と飢饉と疫病によって死ぬが、カルデア人のところへ出る者は生き残り、少なくとも最も大切な宝である自分の魂を守り、生き延びるだろう。 この町は、必ずバビロンの王の軍勢に占領されるだろう（エレミヤ38:2–3）。

預言者のこのような説得を耳にしたユダヤの貴族たちや、祖国への真の愛とは無縁の過激な愛国者たちは、王にこう要求した。

「この男を死刑に処せ。彼は兵士たちや民全体の意気込みをくじくような言葉を語っているからだ。この男は、自国民の繁栄を願っているのではなく、破滅と恥辱を望んでいるのだ。」

これに対し、ゼデキヤ王は絶望のうちに彼らにこう答えた。

「彼はあなたがたの手に委ねられている。彼を好きに扱え。王はあなたがたに逆らって何もできないのだ」（エレミヤ書38:4–5）。

その後、聖なるエレミヤは、宮廷の牢獄の中庭にある、不浄な泥が大量に溜まった深い穴へと、縄で降ろされた。　この穴の中で、首まで泥に沈められた神の人は、無実の身でありながら苦しん

だ。もし、ある敬虔な外国人が彼を救わなければ、彼はそこで湿気と飢えのために死んでいただろう。　王宮には、アブデメレクという名のエチオピア人の宦官がいた。彼は、エレミヤが穴に閉じ込められたと聞き、尊敬すべき預言者に対するそのような不適切な扱いに憤り、王に訴えてこう言った。

「わが王よ、王様！預言者エレミヤをそのような扱いにして、死の危険にさらしたのは、お賢明なご判断ではありませんでした。」

王はアブデメレクに、彼を穴から引き上げるよう命じた。その後、ゼデキヤはエレミヤを呼び寄せ、二人きりで、彼が預言していることはすべて真実なのかと尋ねた。

預言者は彼にこう答えた。

「もし私があなたに真実を告げれば、あなたは私を死に追いやるのではないでしょうか。また、もし私が助言をしても、あなたは私の言うことを聞き入れないでしょう。」

王はエレミヤに対し、彼を死に追いやらず、彼を殺そうとする者たちの手に渡さないことを誓って約束した。そこでエレミヤはセデキヤに言った。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。もしあなたが（自発的に服従して）バビロンの王の将帥たちのところへ出向くなら、あなたの命は救われ、この町は火で焼かれることもなく、あなたもあなたの家族も生き延びる。　もしバビロンの王の将校たちのところへ出向かなければ、この町はカルデア人の手に渡され、火で焼き尽くされ、あなたは彼らの手から逃れることはできない。」

王は、見せかけの友人たちに惑わされ、預言者の言葉に耳を傾けず、その良き助言に従わなかった。しかし、これらの友人たちによる裏切りを、エレミヤのためというよりはむしろ自分自身のために恐れ、彼は神の僕に、この秘密の会話は誰にも知られてはならないと告げ、もし王の将校たちからそのことについて問われた場合は、次のように答えるよう命じた。　「私は王の御前で、ヨナファンの家には戻さないでほしい、そこで死ぬことのないようにしてほしいと願い出たのだ」

こうして預言者は、エルサレム包囲の間ずっと、王の衛兵の庭で監視下に置かれ、カルデア人に捕らえられたその日までそこに留まった。これはゼデキヤ王の治世第11年に起こったことである（エレミヤ38:1–28）。

ついに、イスラエルの栄光ある要塞であるエルサレムにとって、最後の時が訪れた。守備兵の数は激減し、もはや城壁を守ることもできなくなっていた。都にはパンがなく、飢餓による死の恐怖がユダヤの首都を覆っていた。　恐怖に囚われたエルサレムの住民たちは、人間としての最後の良心さえも失っていた。もはや比喩的な意味ではなく、彼らは文字通り「互いに食い合い」、すなわち「自分の息子や娘、そして隣人の肉を食べて生き延びていた」のである。こうして、エレミヤの預言は実現したのである！（エレミヤ書19:9など）

第4ヶ月であるタムズ月の9日、ゼデキヤ王の治世11年目の9日（エレミヤ書39:2）（紀元前589年6月）、カルデア軍は城壁に大きな破口を開け、エルサレムに侵入した。 この時、ネブカドネツァル自身は不在であった。彼は当時、シリアのリヴレに滞在していた。彼の将軍たちは、城内に突入すると、シオンと下町の間にある中門に天幕を張った（エレミヤ書39:1–3）。 長期にわたる包囲戦に苛立ちを募らせた厳しい戦士たちは、街中に散らばり、誰に対しても容赦しなかった。飢えと恐怖に苛まれたユダヤ人たちは、できる限り逃亡を試みた（列王記下25:2）。 ゼデキヤ王は、身辺の護衛たちと共に、夜陰に乗じて、都の北東部にある王の庭園のそばにある秘密の通路を通って、首都から脱出することに成功した。彼はガリラヤの荒野に身を隠そうとした。　しかし、その逃走はすぐにカルデア人たちに気づかれ、彼と同行者たちを追う追撃隊が派遣された。逃亡者たちはエリコの平野で容易に追いつかれた。　王に随行していた兵士たちは、散り散りになったか、あるいは皆殺しにされた。ゼデキヤは捕らえられ、シリアの町リブラにいるネブカドネツァルのもとへ連行された。　そこへ、都で捕らえられた大祭司セラヤと神殿長ゼファニヤ、さらに宦官、軍総司令官、王の側近であった七人の高官、そして民の中から選ばれた六十人の名士たちも連行された。勝利者は敗者たちに対して次のように裁きを下した。　ゼデキヤの息子たちと、東方の支配者の威圧的な眼差しのもとに引き出さ

れたすべてのエルサレムの人々は、不幸なユダヤの王の目の前で刺し殺され、その後、王自身も両目をえぐり出され、さらに銅の足枷をはめられてバビロンへ送られ、そこで牢獄に投獄され、そこで息を引き取った（エレミヤ書52章、 エレミヤ書39:4–7参照）。

カルデア人によるエルサレムの陥落（エレミヤ書52:12）から1か月後、ネブカドネツァルの親衛隊長ナブザルダンがそこに到着した。当時、ユダ王国の首都は死者の住処と化していた。 すべての門は荒れ果て、シオンへの道は人影を失い、祭司たちは衰え、ユダの若者や乙女たちは、まるで石臼で踏み潰されたかのようであった（哀歌 1:1–15）。しかし、それまで素晴らしく栄光に満ちていたダビデの子孫の都は、依然として残っており、その威厳と美しさを保っていた。 この都市を征服した軍司令官たちは、その運命を決定する権限を持っていなかった。カルデア人の支配者自身も迷っていた。一方では、エジプト王の敵対的な企てに対抗するための拠点をユダヤの地に持ちたいと望んでおり、要塞の壁を持つエルサレムは役に立つかもしれないと考え、 一方で、常に狡猾で反逆的なユダヤ人たちが、この堅固な要塞を自らの裏切り的な企みに利用する危険性を、彼は疑わざるを得なかった。後者の懸念が勝った。ネブカドネツァルはナブザルダンを派遣し、エルサレムを根こそぎ破壊するよう命じた。 この決定的な、完全なエルサレムの破壊を、聖なるエレミヤは『哀歌』の詩句に自らの深い悲しみを注ぎ込み、感動的に描き出した。聖なる都の滅亡はイスラエルの民の心を深く揺さぶった――「バビロンの川辺」で （詩編136）で始まった彼らの嘆きは、今日に至るまで続いており、この出来事を記念する日には、悲しみのしるしとして、断食をし、足に靴を履かずに――長靴も靴も履かずに――過ごしている。

総督ナブザルダンは、聖なる預言者エレミヤに関して、その主君ネブカドネツァルから特別な命令を受けていた。それは、彼を捕らえ、彼が抑圧されることなく暮らせるよう細心の注意を払い、彼に悪事を働かず、あらゆる事において彼が望むままに行動できるようにすることだった （エレミヤ書39:11–12）。ネブカドネツァルは、エレミヤのこと、彼の予言、そして彼がセデキヤ王に与えていた助言について知っていた。それゆえ、彼はナブザルダンに対し、預言者の運命についてそのような指示を与えたのである。

聖なるエレミヤは、エルサレム包囲戦の間、宮廷警備隊の中庭で監視下に置かれ、足枷をはめられていたが、他のユダヤ人たちと共にカルデア人によって捕虜とされた。 エルサレムに到着したナブザルダンの元へ、彼は直ちに、この都市およびユダヤ王国全体の運命を掌握する全権者である彼の前に引き出され、彼から次のような好意に満ちた言葉を聞いた。「あなたの神、主はこの地にこの災いを宣告し、言われたとおりに成し遂げられた..... しかし、今日、私はあなたの手にある鎖を解いてやる。もし私と共にバビロンへ行くのが望みなら、行けばよい。もし私と共にいくのが望みでないなら、ここに残ってもよい。 全地はあなたの前にある。行きたいところ、気に入ったところへ、そこへ行けばよい」（エレミヤ40:1–4）。エレミヤは故郷の地に残りたいという意向を表明した。

自由を得て、ナブザルダンからの庇護と好意を目の当たりにしたエレミヤは、まず第一に、神の聖所、すなわちイスラエルの歴史上最も崇高な美と栄光である契約の箱について心を配った。それは、異民族によって破壊されることなく、神の栄光が辱められないようにするためであった。 預言者は、主の神殿が略奪や焼失に遭う前に、イスラエルの神の聖所を持ち出す許可を、その場で大胆に勝利者に求めた。 そして、その許可を得て、彼は生き残っていた敬虔な祭司やレビ人を探し出し、彼らを連れ出し、カルデア人の間を恐れず、何の妨げもなく通り抜け、ソロモンが建てた神殿に入った。 そこで神の預言者は、モーセとアロンの時代に全焼のいけにえのために主から奇跡的に下った火（レビ記9:24）によって、自ら用意した燭台に火を灯し、それ以来、祭壇の上で絶えることなく燃やされ続けていたその燭台を、水のない井戸の中に隠した。 揺るぎない信仰を持ち、預言者として、この火がたとえ一時的に消えたとしても（奇跡的に別の元素、すなわち濃い水へと変化したとしても）、やがて再び元の性質を取り戻して燃え上がることを予見していたのである。そして、それはイスラエル人がバビロン捕囚から帰還した際、 ネヘミヤの時代に神殿が再建された際、聖なる預言者

エレミヤの死から何年も経ってからのことだった。エレミヤはこの火を井戸に閉じ込め、その場所を埋め立てて目立たなくし、長い間誰にも知られずにいた（マカバイ記第二1:19–32）。

犠牲の火が隠された後、神の預言者は契約の箱を取り、それを神殿から運び出し、当時ナブザルダンがエルサレムの略奪と焼き払いを命じたことに起因して都市で生じた混乱が収まるまで、自身の住居に保管していた。

主の聖物が神殿から運び出されると、カルデアの兵士たちはナブザルダンの命令に従い、直ちに神殿の金、銀、銅の宝物をすべて集めてバビロンへ送るため、神殿そのものを完全に破壊した。同時に、エルサレムの街並みを彩っていたすべての王宮や立派な家々も荒らされ、焼き払われた。城壁も掘り崩され、地面と同じ高さまで平らにされた。　その際、膨大な数のユダヤ人が征服者たちの剣によって倒れ、とりわけ多くの犠牲者が出たのはトフェトの谷であった。そこはかつて、不義の者たちが自分の息子や娘をモロクへの生贄として犠牲にしていた場所であり、今やカルデア人たちは彼ら自身をその場所に集めて殺害したのである。生き残ってまだ力を失っていなかった者たちは、その後、捕虜として連れ去られた。　そして、罪深い民のうち、弱く、何一つ持たない者たちだけがユダに残され、ナブザルダンの命令により、耕作と生計のためにぶどう畑や畑が与えられた（エレミヤ39:10；列王記下25:12）。

略奪され荒廃したエルサレムを後にしたナブザルダンは、荒廃したユダ地方の地方長官として、ゴドリヤを任命した。ゴドリヤは、かつてエレミヤを暗殺者たちの手から救い出し、もはやエルサレムではなく、エルサレム近郊のマシフ[3327]に居を定めていたアヒカムの息子であった。預言者エレミヤもまた、ナブザルダンの命令に従い、地方長官の保護と庇護の下で暮らすため、そこに定住した（エレミヤ40:5）。

自由と祖国に訪れた平穏を活かし、聖なるエレミヤは敬虔な祭司やレビ人たちと共に、手元に保管していた神殿の聖物を持ち出し、ヨルダン川を越えたモアブ地方の山へ運びました。　エリコ近郊の、かつて預言者モーセが約束の地を仰ぎ見、そこで息を引き取り、その場所が誰にも知られぬまま埋葬された（申命記34章）山へと運んだ。その山　で、預言者エレミヤは洞窟を見つけ、そこに契約の箱を運び入れ、その洞窟の入り口を大きな石で塞いだ。　そして、この石は、あたかもエレミヤが自らの指で神の御名を刻み込んだかのように封印された。その刻印は、あたかも鉄の刃で刻まれたかのようであった。なぜなら、預言者の指が触れた堅い石は、蝋のように柔らかくなり、その後、その性質に従って再び固まったからである。こうして、その場所は、あたかも鉄で鋳造されたかのように堅固なものとなった。　その後、聖なるエレミヤは、同行者たちに向かってこう言った。「主はシオンを離れて天に上られた！――しかし、主は力強く戻ってこられる。そして、主の到来のしるしは、地上のすべての民がその木（世界の救い主である主イエス・キリストが十字架にかけられた十字架）にひれ伏すことである。」

さらにエレミヤは、その契約の箱をこの場所から運び出すことができるのは、神を直に見た預言者モーセだけであり、箱の中に収められた契約の石板を開き、その内容を読み解くことができるのは、神に愛されたアロンだけであり、他のどの祭司もできないと付け加えた。　そして、万人の復活の日には、その箱は神の御名で封印された石の下から運び出され、シオンの山に安置される。そして、すべての聖徒たちは、彼らの死を望む恐ろしい敵――反キリスト――から彼らを救い出す主の到来を待ち望みながら、その箱のもとに集まるであろう。　聖なるエレミヤがこれを祭司たちやレビ人たちに語っていたとき、突然、雲がその封印された洞窟を覆い、エレミヤの指で石に刻まれた神の御名を誰も読み取ることができなくなった。その場所さえも判別不能となり、誰もその場所を指し示すことができなかった。　そこにいた者の中には、その場所やそこへの道筋を覚えておきたいと願う者も

[3327] マシファはエルサレムからほど近い場所にあり、古代には祈りの場であった。サムエルは、ユダヤ人が襲来したペリシテ人を撃退する前に、そこで全焼のいけにえをささげた（列王記上7:1–17）。

いたが、どうしてもそれができなかった。そこで預言者は霊的な啓示を受けて、彼らにこう言った。「主が人々の集まりをまとめられるまでは、この場所は誰にも知られないであろう。しかしその時、主は憐れみ深く、この場所を示してくださる。そうすれば、その場所にある神の栄光がすべての人にはっきりと現れ、モーセの時代（レビ記9:23–24）やソロモンの時代のように、雲がその場所を覆うであろう」（列王記下8:10–11）。

かくして、その洞窟は依然として未知のままであり、その場所は世の終わりまで知られないであろう。しかし、神の栄光は、モーセの幕屋やソロモンの神殿でそれを覆っていたように、輝く雲によって契約の箱を隠微に照らし続けている。なぜなら、その輝きは決して絶えることがないからである！

七十年の歳月が過ぎ、バビロン捕囚から帰還した後、ユダヤ人たちはエルサレムに新しい神殿を建てたが、そこにはもはや、主の聖所である古き神殿の栄光はなかった。　そのとき、モーセの模範に従って金で新しい契約の箱が作られ、その内部にあるものや周囲を囲むものもすべて、かつての模範通りに整えられたが、そこにはもはや奇跡的な力はなく、神の栄光もそれを照らすことはなかった。　新しい神殿に残されていたのは、かつての神殿から持ち込まれた天の火だけであり、それは前述の通り、預言者エレミヤによって井戸に隠され、後に祭司たちによって発見されたものであった。

主の契約の箱が隠された後、聖なるエレミヤは、ユダヤの地の新しい首都マシファに戻り、荒廃した祖国を統治する新たな統治者ゴドリヤのもとへ赴き、残された同胞たちの中に身を置き、不幸な祖国を嘆き悲しんで絶え間なく泣き続けた。　ゴドリアの周りには、カルデア人の侵攻の際に周辺諸国へ散り散りになっていたユダヤ人たちが集まり始めた。支配者の寵愛を受けていたゴドリアは、彼らを励まし、カルデア人に対する自身の庇護と平和な生活を約束した。　主ご自身が不義な者たちを懲らしめた後、バビロニア人の侵攻から最初の年に、悲しみに暮れるイスラエルの子らの残された者たちを慰められた。彼らはその年、大地からあらゆる果実やぶどう酒を豊かに収穫した（エレミヤ40:9–12）。　しかし、道徳的法によって抑制されない反逆的な情熱と奔放な横暴の病は、ユダヤ人の民の心に深く浸透しており、その力と影響は、あの困難な時代においても現れていた。バビロンに連行されたゼデキヤ王の親族であるナファニヤの息子イシュマエル、　また、カレヤの息子たちであるヨハナンとヨナタン、そしてカルデア人から逃れてモアブ人、アンモン人、エドム人のもとに散らばっていたユダヤの軍司令官たちの一部が、戻ってきて、破壊されたエルサレムの周辺に自らの従者たちと共に定住した。　彼らはゴドリヤとも接触を持ち、マッシフに彼を訪ね、あたかも服従の意を示すかのように振る舞った。　純真なゴドリアは、彼らの邪悪な企みを疑うこともなく、彼らを温かく、かつ敬意を持って迎え入れ、さらには彼らのために宴会まで催した。カレヤの息子ヨハナンは、その際、ゴドリアに、イスマエルがアンモン人との密約に基づき彼を殺害しようとしていることを警告し、密かに自らの卑劣な「助力」を申し出た。

「私に任せてください」と彼は言った。「私が行って、ナファニヤの息子イスマエルを殺してきます。誰にも気づかれることはありません。なぜ、彼にあなたを殺させ、あなたの元へ集まったユダヤ人たちが滅び、ユダの残党が滅びてしまうのを許すのですか？」

「そんなことはするな」とゴドリアは彼に言った。「お前はイスマエルについて嘘をついている。」

その一方で、まもなく実際にイスマイルが、10人の家来を連れてゴドリアのもとを訪れ、夜遅くの宴の最中に剣でゴドリアと、彼のもとにいたすべてのユダヤ人、そしてそこに居合わせたカルデア人の兵士たちを斬り殺した。　このように卑劣で血なまぐさい悪行を巧みに成し遂げたイスマイルは、貪欲な共謀者たちの一団を率いてマシファを略奪し、その地方の統治者の娘たちや、そこで平穏な生活に慣れ始めていた人々を捕虜とし、彼らをアンモン人の領土へと連行した。　まるで祖国のために行動しているかのように振る舞ったこの強盗の厚かましい悪行は、彼に対する普遍的な憎悪を煽った。カレイの息子ヨハナンや他の軍隊の指導者たちはすぐに団結し、この悪党を懲らしめることを

決意した。彼らは各自の部隊を集め、イスマイルを追跡し、ガバオンで彼を追い詰めた。　イスマイルに捕らえられていたユダヤ人たちは、さらには彼の仲間たちでさえ、ヨハナンを一目見るやいなや喜び、彼の側に寝返った。イスマイルは、わずか八人の側近だけを連れて、アンモン人の元へ逃亡した。

しかし、ヨハナンとその仲間たちもまた、預言者エレミヤが常に力説していた、この不幸な祖国の利益について、真に理解するにはほど遠かった。　イスマイルに対する容易な勝利の後、ユダヤ人たちはベツレヘム近郊のヒマムという集落に立ち寄り、ヨハナンの主導のもとで評議会を開いた。そこでは、バビロンの王の傀儡であったゴドリヤに対する裏切り的な暗殺への報復を恐れて、エジプトへ逃れることを決定した。　そして彼らは、かつて全能の神の力強い御手と高き御腕によって、彼らの先祖たちが救い出されたエジプトへ、民全体で向かう準備を始めたのである！...しかし、その決定を実行に移す前に、彼らは聖なるエレミヤの意見を聞きたいと願った。そこで、すべての軍の長たち、カレヤの子ヨハナン、ゴシャヤの子イェザニヤ、そして老若男女を問わず民全体が集まり、預言者エレミヤにこう言った。

「どうか、私たちの願いをあなたの御前に届けてください。あなたの神、主のために私たちのために祈ってください（『あなたの』と言っているが、『私たちの』とは言わない、　――この点は特に注目に値する）この残された者たちすべてのために、祈ってください。多くの者の中から、あなたの目に見える通り、私たちにはわずかな者しか残っていません。どうか、あなたの神、主が、私たちが歩むべき道と、私たちがすべきことを示してくださいますように。

預言者は彼らに答えて言った：

「承知した。あなたがたの言葉どおり、あなたがたの神、主にお祈りしよう。そして、主が語られることはすべて、あなたがたに告げよう。一言たりとも隠すことはない。」

そこで彼らはエレミヤに言った。

「主が、私たちの間で、忠実で真実な証人となってくださいますように。あなたの神、主があなたを私たちのもとに遣わされたすべてのことを、私たちは確実に実行します。それが良いことであろうと悪いことであろうと、私たちがあなたを遣わした主なる神の御声に従います。そうすれば、私たちの神、主の御声に従うとき、私たちに幸いがあるからです。」

預言者はこの約束を果たし、十日が過ぎた後、ヨハナンと彼と共にいた軍司令官たち、そして民全体に次のように告げた。

「あなたがたが、あなたがたの祈りを主の御前にささげるためにわたしを遣わした、イスラエルの神、主はこう言われる。もしあなたがたがこの地にとどまるなら、わたしはあなたがたを安住させ、滅ぼすことはしない。あなたがたを植えるが、根こそぎにすることはない。わたしは、あなたがたに下された災いを憐れんでいるからだ。　あなたがたが恐れているバビロンの王を恐れてはならない。主は言われる、「彼を恐れてはならない。わたしはあなたがたと共にいて、あなたがたを救い、その手からあなたがたを救い出すからだ。　そして、わたしはあなたがたに恵みを示す。バビロンの王は、あなたがたを罰せず、あなたがたが自分の地にとどまることを許すであろう。しかし、もしあなたがたが、「この地に住みたくない」と言い、あなたがたの神、主の御声に聞き従わず、　『いや、私たちはエジプトの地へ行こう。そこでは戦いを目にすることもなく、ラッパの音を聞くこともなく、飢えることもない。そこで暮らそう』と言うなら、今、主の御言葉を聞きなさい、ユダの残された者たちよ。万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。　もしあなたがたが、エジプトへ行くために断固として顔を向け、そこに行って住もうとするなら、あなたがたが恐れる剣が、エジプトの地であなたがたを追い詰め、あなたがたが恐れる飢饉が、常にあなたがたに付きまとう。そこで、エジプトであなたがたは死ぬことになる。　エジプトへ行ってそこに住もうと決心する者は皆、剣と飢饉と疫病によって死ぬ。その中から一人も残らず、わたしが彼らに下す災いから逃れる者はいない。　イスラエルの神、主はこう言われる。「わたしの怒りと憤りがエルサレムの住民に注がれたように、あ

なたがたがエジプトに入ったとき、わたしの憤りがあなたがたにも注がれる。あなたがたはのろいであり、恐怖であり、あざけりの的であり、侮辱となる。そして、もはやこの地を見ることはない。ユダの残りの者たちよ、主はこう言われる。「エジプトへ行ってはならない。わたしが今、あなたがたに警告したことをしっかりと知れ。――自分たち自身に対して罪を犯してはならない。　あなたがたは、『主なる神が告げられることは何でも行う』と言って、わたしを主なる神のもとへ遣わした。そして今、わたしは神の御心をあなたがたに告げたのだ。　――それゆえ、あなたがたが、満ち足りて安らかに暮らすために向かおうとしているその地で、剣と飢饉と疫病によって死ぬことになることを、よく知っておきなさい（エレミヤ42:2–22）。

この預言の言葉は、抑制のきかない独断の毒に染まった彼らの心に、本来あるべき影響を与えることはなかった。オサイヤの子アザリヤ、カレヤの子ヨハナン、そして他の傲慢な者たちは、エレミヤにこう言った。　「あなたは偽りを語っている。主が『エジプトへ行ってはならない』と告げるためにあなたを遣わされたのではない。ニリヤの子バルクが、私たちをカルデア人の手に引き渡して、彼らが私たちを殺すか、バビロンへ連行するようにと、あなたを私たちに対して扇動しているのだ」（エレミヤ43:1–3）。

こうして、わがままな人々は、ユダの地にとどまって暮らすようという主の御言葉に耳を貸さなかった。ヨハナンとその仲間たち、そしてユダの残りの民は、家族や持ち物をまとめ、エジプトへと向かった。彼らは預言者エレミヤとその忠実な書記であるバルクをも無理やり連れ出したのである。

エジプトの地に着くと、彼らはタフニスの町に定住した。そこはかつて預言者モーセがファラオの前で驚くべき奇跡を行った場所であった。　そこで、自発的に移住してきた同胞たちの中に、エレミヤは4年間暮らした。彼はその義にかなった生活と、エジプト人に対して行った善行――祈りによってアスピドやワニを退治したこと――により、エジプト人から大きな尊敬を集めていた。彼はその地で亡くなり、埋葬された。

聖なる預言者の最期は殉教的なものであった。

タフニスにおいて、主はエレミヤにこう告げられた。

「大きな石を手に取り、タフニスのファラオの家の入り口にある練り土の中に、ユダヤ人たちの目の前で隠し、彼らにこう告げよ。『万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。　見よ、わたしはバビロンの王ネブカドネツァル、わたしのしもべを遣わし、彼を連れて来る。そして、わたしが隠したこれらの石の上に彼の王座を据え、彼はその上に壮麗な天幕を張る。彼は来て、エジプトの地を打ち砕く。　死に定められた者は死に渡し、捕虜となる者は捕虜となり、剣の下に置かれる者は剣の下に置かれる（エレミヤ書43:8–11）。 しかし、剣を免れたわずかな数のユダヤ人だけが、エジプトの地からユダの地へ戻ってくる。そして、エジプトの地に来てそこに住んでいた残りのユダヤ人たちは、どちらの言葉が実現するのかを知るだろう。わたしの言葉か、それとも彼らの言葉か。　「見よ、これこそがあなたがたへのしるしである、と主は言われる。わたしがこの場所であなたがたを懲らしめるのは、あなたがたに対するわたしの言葉が、あなたがたの滅びとして成就することを知らせるためである。見よ、わたしはエジプトのファラオを、ユダの王ゼデキヤを渡ししたように、その敵の手に渡す」（エレミヤ44:28–30）。

このようなエレミヤの言葉に、ユダヤ人たちの憤りは極限に達し、彼らはついに、恐れることなく真理を語った神の預言者を石で打ち殺してしまった！　聖なる預言者が亡くなった年、バビロンの王がエジプトに侵攻し、エジプト軍を打ち破り、ファラオ・ワフリアを殺害した。同時に、そこに定住していたイスラエルの子らも皆殺しにされた。

聖預言者エレミヤの聖遺骨は、それから何年も経って、マケドニア王アレクサンドロス[3328]によって、彼が建設した都市アレクサンドリアに移され、アレクサンドリアの人々から深く崇敬されていた「テトラピル」と呼ばれる場所に安置された。ヘレナ女王は、エレミヤが泥の穴に投げ込まれた場所を、エルサレムに建物を建てて飾り立てた。

聖エレミヤは、主イエス・キリストの受難についても預言し、自らの中に、主の神秘的な原型である「屠られるために連れて行かれる柔和な小羊」（エレミヤ2:19；イザヤ53:7参照）を現した。聖エピファニオスが記録した伝承によれば、預言者エレミヤは、エジプトに「幼子を抱いた聖母」――洞窟で生まれ、飼い葉桶に寝かされた幼子を抱いた聖母――が訪れる時、エジプトのすべての偶像が倒れ、破壊されることを予言した。 ――この預言こそが、エジプト人に存在した、寝台に横たわる乙女と、おくるみに包まれてその傍らの飼い葉桶に横たわる幼子を描いた像を崇拝する風習の根拠となったとされる。 さらに、エジプトの祭司たちは、プトレマイオス王から「なぜそのような像が崇められているのか」と問われた際、「これは聖なる預言者によって彼らの先祖に予告された秘密であり、彼らはこの秘密が実現するのを待っている」と答えたと伝えられている。

聖なる預言者エレミヤの死から長い年月が経過した。カルデア人に捕らえられていたユダヤ人たちは故郷の地に戻り、エルサレムには新しい主の神殿が建てられ、ユダヤ地方では、可能な限り教会および市民生活の秩序が回復された 。 しかし、当時、ユダヤ人たちはもはや政治的自由を享受しておらず、時にはシリア人、時にはエジプト人、時にはマケドニア人に服従し、カナン人の部族や、国内の動乱や不和からも苦難に耐えていた。

ある時、ユダヤの民に多大な害をもたらした裏切り者のシリアの将軍ニカノールが、傲慢な高慢さから、何としても宗教の自由の熱烈な擁護者であり、聖なる先祖伝来の信仰の恐るべき守護者であるユダ・マカベウスを滅ぼそうとしたとき、 このユダは、仲間たちを堅固な盾や槍で武装させるというよりは、むしろ自らの力強い言葉と、かつて全能者から受けた奇跡的な助けの事例を挙げて説き、さらに自身の夢についても語り、その話によって皆を喜ばせ、奮い立たせた（マカバイ記第二15:1–11）。

彼の幻は次のようなものであった。彼はオニア――元大祭司であり、誠実で善良な人物で、幼少の頃から徳に関するあらゆることを熱心に身につけていた――を見た。その威厳ある姿のオニアが、両手を広げてユダヤ人全体のために祈っているのを見たのである。 その後、白髪と栄光に彩られ、驚くべき並外れた威厳に包まれた別の男が現れた。するとオニアは言った。

「この方は、民と聖なる都のために熱心に祈りを捧げる、兄弟を愛する者、神の預言者エレミヤである。」

すると、エレミヤは手を伸ばしてユダに金の剣を渡し、それを手渡しながら言った。

「この聖なる剣を受け取れ。これは神からの賜物であり、これをもって汝は敵を打ち砕くであろう」（マカバイ記第二15:12–16）。

そして、ユダ・マカベオの戦友たちは、彼の言葉に慰められ、勇気づけられて、勇敢に戦いに飛び込み、敵を打ち破った。 ユダが語ったこの夢の物語は、神の聖なる御使いたちが、この世を去った後も、私たちのために神に祈り、私たちを助けてくださることを如実に証明している。まさに聖エレミヤが、ユダ・マカベオが敵を打ち負かすのを助けたように。 その聖なる祈りが、私たちも目に見える敵や目に見えない敵を打ち負かす助けとなりますように。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと愛によって。御父と聖霊と共に、御名に栄光がありますように。アーメン。

[3328] アレクサンドロス大王は紀元前336年から323年まで在位した。卓越した征服者として名声を博した。アレクサンドロス大王は紀元前332年にエルサレムを訪れた。

コンダク、第3調:

偉大なる預言者にして殉教者よ、栄光あるエレミヤよ、御霊によってその輝かしい心を清め、天より預言の賜物を受け、諸国において大声で叫ばれた。「この方こそが我らの神であり、この方に匹敵する者はいない。御身は受肉され、この地上に現れたのである。」

私たちの尊き父パフヌティウス・ボロフスキーの生涯[3329]

記念日：5月1日

聖パフヌティウスは、タタール人のバスカクの孫であった。ロシアの民の罪ゆえに、神の御許しにより、タタール王バトゥイ[3330]は、その大軍を率いてこの地を訪れ、剣と火で荒廃させ、都市を虜にし、神の教会とその聖物を破壊し、ロシアの公爵や首長たちを木や穂のように切り倒した後、バスカク[3331]と呼ばれるタタールの支配者たちをこの地に据えた。

そのバスカクの一人が、尊者パフヌティウスの祖父であった。ロシア人がタタール人に対して起こしたある反乱の際、パフヌティウスの祖父は洗礼を受けることを余儀なくされ、マルティンという名を与えられた。敬虔さで際立っていたこのキリストの新たな信徒には、イオアンという息子が生まれた。イオアンは成人すると、フォティニアという娘と結婚した。　ヨハネとフォティニアは、ボロフスクから4ヴェルスタ離れた、先祖代々の村クディノヴェに住んでいた[3332]　。敬虔で貧しい人々を愛するこの夫婦の間に、1395年頃、聖なる洗礼でパルフェニーと名付けられた聖パフヌティウスが生まれた。　肉体的に成長するにつれ、パルフェニーは同時に霊的にも高まっていった。読み書きの習得、とりわけ聖書の読解に秀でていたこの少年は、柔和さ、悪意のなさ、貞潔といった善良な品性も身につけていった。徳のある人々を喜んで模範とし、虚しい人々との交わりはきっぱりと避けた。

パルフェニーが二十歳になった時、彼は父の家、両親や親族、友人たちからの温かい愛情を後にし、世俗のすべてを捨てて、ボロフスクの町近くにあるヴィソキー・ポクロフスキー修道院（[3333]

[3329] 聖パフヌティオスに関する情報は、以下の2つの資料に含まれている。1）1477年または1478年、すなわち聖人の死去直後に、その弟子イノケンティウスが記した、聖人の最期の日々に関する優れた記録。2）別の弟子であり、聖 ヨシフ・ヴォロコラムスキーの異母兄弟である別の弟子、ヴァッシアン・サニンによって、1500年から1515年の間に、ヴァッシアンがモスクワ近郊のシモノフ修道院のアルヒマンドリト（1502年から1506年）あるいはロストフ大司教（1506年から1515年）を務めていた時期に執筆されたもの；　3) 聖ヨシフ・ヴォロコラムスキーの甥であり、同修道院の修道士であったドシフェイ・トポルコフの回想録において；4)　聖ヨシフ・ヴォロコラムスキーの遺言書およびその他のいくつかの文書において；そして最後に、5) 年代記において。

[3330] タタール人のハン、バトゥによるルーシへの侵攻は、1237年から1238年、および1240年に行われた。

[3331] ロシア語に翻訳すると、この言葉は「圧制者」を意味する。バスカクの直接的な職務は、住民の調査と貢納金の徴収であった。しかし実際には、ロシアの公爵や軍司令官よりも上位に立つこれらのタタール人官吏たちは、ルーシの完全な支配者であった。　軍隊や多数の様々な下級タタール人官吏を率いて派遣された彼らは、征服されたルーシの内部事情も統括していた。すなわち、公爵たちの行動を監視し、彼らの相互関係に深く関与し、争いを裁き、とりわけタタール・ハンに対する彼らの態度を注視していたのである。 彼らは、1240年に起きたキエフ陥落の直後にルーシに現れた。

[3332] ボロフスクは、現在、カルーガ県の県庁所在地である。クディノヴァ村があった場所には、現在、礼拝堂が残っている。

[3333] ヴィソキー＝ポクロフスキー修道院は、プロトヴェ川沿い、ボロフスクから1ヴェルスタの場所にあった。　1410年に創建された。1618年、この修道院はパフヌティエフ・ボロフスキー修道院の管轄下に入り、1764年に廃止された。「ヴィソキー」という名称は、その立地から付けられたもので、この一帯は周辺一帯を見下ろす高台にある。現在、この修道院の跡地には、ヴィソツカヤという城下町が建っている。

）に入りました。　この修道院の院長マルケルから、パルフェニーはパフヌティウスという名で出家し、聖セルギイの教え子であった高齢の聖職者ニキタの指導下に置かれた[3334]。七年間、聖パフヌティウスは敬虔な長老に従い、彼から修道者の美徳を学んだ。　彼は修道兄弟たちから広く愛され、尊敬を集めるようになった。イグメン・マルケルが逝去した際、修道士パフヌティウスは、修道兄弟たちおよびボロフスキー公シメオン・ウラジーミロヴィチからの長きにわたる切実な要請を受け、ヴィソカ修道院の院長に選出された。彼は全ロシア都主教聖フォティオスから叙任を受けた[3335]。

新しいイグメンは、修道士としての修行に加え、キリストの「言葉の羊」たちに対する善良かつ熟練した牧者としての配慮と、彼らを守る警戒心ある守護者としての役割も果たした。彼は自らの生涯を通じて、その群れに模範を示した。彼は昼も夜も絶え間なく主に仕えた。昼は修道院の務めに費やし、夜は祈りに捧げた。

主はこの忠実なしもべを、分別と洞察力、驚くべき啓示、そして聖霊のその他の賜物をもって飾られた。全知の神は、パフヌティウス尊者に、人の顔や眼差しから隠された心の情欲や弱さを見抜く能力を与え、また他のことは夢の中で聖人に明らかにされた。

以下に、その両方を如実に裏付ける物語がある。ある兄弟が、修道院の必要のために村へ遣わされたが、そこで肉欲の罪を犯してしまった。彼が堕落したその夜、聖人はいつもの祈りを終えた後、少し眠ろうと身を横たえたところ、次のような夢を見た。　聖人は、美しい果樹が並ぶ素晴らしい庭園を夢に見た。彼は喜びと驚きに満ちた眼差しでそれらを見つめ、とりわけ、驚くべき美しさを放つ一本の木に心を奪われていた。すると突然、その目の前で、その木が根こそぎ引き抜かれ、地面に倒れてしまった。　聖人は、他の木々の美しさを忘れ、その美しい木が突然倒れたことに深く悲しんだ。彼はその木に近づき、持ち上げて元の場所に植え直した。木が枯れないように、彼はその周りに堆肥を敷き詰め、土をしっかりと踏み固めた。聖人が引き抜かれた木を定着させるには、長い労力を要した。

目を覚ますと、彼はその幻視の意味を理解し、深く悲しんだ。美しい庭園は彼の修道院を意味していた。美しい果樹たちは、彼の兄弟たちであった。そして、引き抜かれて倒れた木は、堕ちた兄弟を象徴しており、その兄弟を元の場所に立て直し、定着させるために、修道院長である父に特別な労力を必要としていたのだ。　罪を犯した修道士は、与えられた任務を終えて修道院に戻り、イグメンの前に現れたとき、自分の罪を悔い改めつつ、当惑し、その顔は恥の赤みで真っ赤に染まった。尊師は修道士に、道中で何か悲しい出来事はなかったかと尋ねた。　過ちを犯した修道士はさらに恥じ入り、　、修道院長の前で自分の罪を告白する決心がつかず、彼の目を見ることもできなかった。弟子のそのような動揺を見て、聖人は彼に自分の夢の話をし、優れた霊的医師として、彼が自分の魂の奥底にある傷を打ち明けるよう強く促した。修道院長の長い説得の末、過ちを犯した修道士は悔い改めた。　尊者は長い間、その魂の傷にふさわしい霊的治療を施し、絶望しがちな彼を神の慈悲への希望をもって慰め、ついにはその罪人を完全な更生へと導いた。　このように、尊者は兄弟たちを慈し

[3334] 聖ニキタは、1395年から聖アファナシイ・ザ・ヤングの後継者として、ヴィソツキー・セルプホフ修道院のイグメンを務めた。19年間にわたり修道院を統率した後、高齢となり眼病を患った聖ニキタは、ヴィソキー・ボロフスキー修道院で7年間、静養の生活を送った。 この修道院を去った後（1421年頃）、聖ニキータは北へと向かい、コストロマにエピファニー修道院（1426年頃）を設立した。同修道院は現在も存続しており（1864年以降は女子修道院となっている）。ここでこの修行者は息を引き取り、埋葬された。

[3335] ボロフスキー公シメオンは、ウラジーミル・アンドレーエヴィチ・セルプホフスキーの息子であり、1426年にペストにより死去し、サヴァという名の修道士としてトロイツェ＝セルギエフ修道院に埋葬された。– 聖フォティイ大主教（その記念日は7月2日）は、1408年から1431年までロシア正教会を統率した。このことから、聖パフヌティイは遅くとも1426年までに修道院長に就任していたことがわかる。

んだ。熟練した医師のように彼らの魂の病を癒やし、良き羊飼いのように狼の口から羊を救い出して自らの肩に担ぎ、力強い男のように弱き者の弱さを背負ったのである。

尊者パフヌティオスは、ヴィソキー修道院で13年間、修道院長を務めた。その後、彼は重病に罹り、長い闘病生活の末、病床にてスキマ（隠遁者の衣）を着用した。

回復後、彼は修道院長職を辞し、一人の兄弟と共に、ボロフスクから3ヴェルスタ離れた場所にある、二つの川のほとりに生い茂る鬱蒼とした森に囲まれた、高く、非常に美しい場所に隠遁した[3336]。この場所はボロフスク管区ではなく、スホドル管区に属していた。尊者パフヌティウスが新しい場所に定住したのは1440年頃のことである。ここに兄弟たちが彼を訪ねてくるようになり、彼の祝福を受けて修道室を建て、彼の救いをもたらす指導の下で暮らすようになった。修道院は発展し、兄弟たちの数も増えていった。　修道士たちは師に、教会を建てる許可を懇願した。尊者パフヌティウスがこれを禁じなかったため、彼らは聖母マリアの降誕を記念して木造の教会を建立した。この教会は、モスクワ都主教である聖イオナの命により聖別された。

なお、聖人は謙虚なスキモナハとして、この新しい修道院では聖体礼儀を執り行わなかった。ただ一度だけ、臨終を前にしたキリストの復活の日に、多額の報酬を払っても司祭が見つからなかったため、深い敬意と感動を込めて聖体礼儀を執り行った。　「今や、私の魂はかろうじて私の中に残っているだけだ」と、彼は礼拝を終えた後、弟子たちに語った。

善を憎む悪魔は、一部の人々をそそのかして、尊者に対して厄介事を起こさせ、彼が新たに築いた修道院に害を及ぼさせようとした。しかし、尊者は善をもって悪に打ち勝ち、その忍耐をもってすべてを乗り越えた。

聖パフヌティウスを迫害したのは、当時のボロフスキー公ヴァシーリー・ヤロスラヴィチであった[3337]。聖人が去ったボロフスカヤ・ヴィソカヤ修道院の衰退と貧困、そして自身の公国外にある新しい修道院の繁栄と発展を目の当たりにし、ヴァシリー公は聖人に対して激しい怒りを抱き、尊者をここから追放する方法を画策した。　しかし、他人の公国でそれを公然と行うことはできなかったため、公は密かにその修行者を迫害し始めた。彼は何度も、荒々しい家来たちを送り込み、憎むべき修道院を四方から焼き払わせようとした。しかしそのたびに、修道士パフヌティウスとその弟子たちが懸命に働いているのを見ると、家来たちは何も得られずに公のもとへ戻っていった。　ボロフスキー公の家来の中には、エルモライという名の、洗礼を受けたばかりのタタール人がいた。ヴァシリー公が彼に聖人の修道院に火をつけるよう命じたとき、この野蛮人は喜び勇んで駆けつけた。聖人はそのタタール人と出会うと、優しくその名を呼びかけ、なぜ来たのかと尋ねた。　聖人のその親しみやすい態度に、エルモライの獣のような気性は瞬く間に一変した。彼は自分の邪悪な企みを悔い改め、なぜ遣わされたのかを率直に打ち明けた。その後、許しと祝福を請い、聖人の修道院に何の害も与えることなく立ち去った。

その頃、神の御許しにより、不敬虔なツァーリ・マモティアク[3338]が、大勢のタタール人を率いて予期せずロシアに侵攻してきた。大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ[3339]や他のロシアの諸

[3336] パフヌティエフ・ロズデストヴォ・ボゴロディツキー修道院は、イストレマ川がプロトヴァ川に合流する地点に位置している。

[3337] ボロフスキー公ヴァシリー・ヤロスラヴィチは、ヤロスラフ（アファナシー）・ウラジーミロヴィチ公の息子であり、1483年に死去した。

[3338] マモティアクは、オルディン王マゴメトの息子であり、カザン大公であった。ここで言及されている侵攻は1445年のことである。このような順序で出来事は、聖パフヌティウスの古来の伝記に記されている。しかし、この出来事は、教会の奉献（1448年頃）および修道院の公式開院よりも前のことだった。

[3339] 大公ヴァシーリー2世ヴァシーリエヴィチ・テムヌイは、1425年から1462年まで統治した。

公爵たちは、十分な軍勢を集める間もなく、スーズダリ[3340]で不信心なタタール軍と対峙した。戦いが起こり、タタール人はロシア軍に勝利し、大公を含む多くの人々を捕虜とした。捕虜の中には、尊者パフヌティウスと敵対していたボロフスキー公ヴァシーリー・ヤロスラヴィチもいた。　捕虜となった公は、聖パフヌティウスに対する自身の罪深い憎しみを悔い改め、彼の祈りによって捕虜から解放されるよう神に祈った　。一方、恨みを抱かないその修行者もまた、公の解放を熱心に祈っていた。　神の御心にかなう者の祈りは聞き届けられ、ヴァシリー公は無事、捕虜の身から逃れることができた。故郷に戻ると、彼は直ちに自身の祈りの支え手である聖人の修道院を訪れ、彼から許しと祝福を受けた。それ以来、公は聖パフヌティウスに対して深い信仰を抱くようになった。

尊者は侮辱を受けても悪意を抱かなかっただけでなく、困窮の際にも驚くほど忍耐強く、常に神の助けを揺るぎなく信じていた。ある時、復活祭が近づいていたが、修道院には魚が全くなかった。修道士たちや修道院の奉仕者たちはこれに深く悲しみ、聖人に対して不平を漏らすことさえあった。

「兄弟たちよ、このことで悲しむな。また、神を怒らせてはならない」と、聖人は彼らに語った。「私たちを創造し、ご自身の復活によって全世界を照らしてくださった、あまねく慈愛に満ちた主は、私たち、そのしもべたちの悲しみを慰め、主を畏れる者たちに豊かな恵みを与えてくださるだろう。」

全善にして至賢なる摂理者へのこのような希望は、間もなくその素晴らしい実を結んだ。　聖土曜日の夕方、復活の夜が迫る頃、聖堂係が典礼用の水を汲みに小さな泉へ向かうと、その地方の方言で「シジキ」と呼ばれる、ニシンより少し大きめの魚が無数に泳いでいるのを目にした。　当時は増水期であり、かつてないほど多くの魚が集まっていた。助祭は急いでそのことを聖人に報告した。聖人は神を賛美し、漁師たちに網を投げるよう命じた。そして、捕れた魚は、修道院全体が復活週間の昼食と夕食の両方に十分なほど大量であった。

尊者パフヌティウスの偉大な功績の評判は遠くまで広まり、修道生活の敬虔さを愛する人々を、彼の聖なる修道院へとますます惹きつけていった。その中には、高潔な徳を備えた人々が少なくなかった。　例えば、聖人の手によって修道衣を授かり、後にヴォロコラム修道院の創設者となった聖ヨセフ、長老インノケンティ、聖人の親族で「黒」の異名を持つイザヤ、聖人の伝記を著し、後にロストフ大司教となったヴァッシアンなどが挙げられる。

尊者様は、戦いのための修道者の生きた模範であった。彼は厳格な断食者であり、月曜日と金曜日には何も食べず、水曜日には乾食のみを許し、その他の日は共同の食事の席で極めて節度を持って食事をとっていた。「彼の糧は――と尊者様の弟子は語る――兄弟たちを喜ばせることだった」。

彼は、食事においても、生活の快適さに関することにおいても、常に最も劣ったものを選びました。衣服は、羊皮で縫われたマントと粗衣、そして履物――これらは、どんな乞食にもふさわしくないほど粗末なものでした。聖パフヌティウスの生涯は、額に汗を流す絶え間ない労働、苦行、苦しみ、そして祈りそのものでした。　彼より先に、共同の祈りの定時にも、労働の場にも現れる者など誰もいなかった。彼は最も過酷な奉仕を熱心にこなした。薪を切り、運び、土を掘り、庭の植物に水をやるといった作業である。　冬には読書や漁網の編み物に励んだ。怠惰の絶え間ない敵であるこの修道士は、母の胎内から処女性の忠実で非の打ち所のない友であった。　貞潔の名の下に、彼は誰にも自分の体に触れることを許さず、女性については修道院に入れるどころか、遠くからでも見たくないとさえ思っていた。貴族の女性でさえ、自分の修道院の門に近づくことさえ許さず、兄弟たちに対しても、女性に関するあらゆる会話を厳しく禁じていた。

この聖人は、教えを説くことに長けていた。彼は修道士たちとも、一般信徒たちとも、進んで語り合った。その言葉は常に簡潔で心地よいものであった。この修行者は人に媚びることを知らず、

[3340] スーズダリは、現在、ウラジーミル州の県都である。

決して相手の機嫌を取ろうとはしなかった。　公爵やボヤリンの顔を恐れることもなく、富裕層からの献金に態度を軟化させることもなく、常に神の律法と聖なる戒めに従って真実を語った。また、彼は庶民に対しても「兄弟たち」と呼びかけ、彼との対話を終えて悲しみに暮れて去った者は一人もいなかった。多くの人々にとって、これまで手の届かなかった心の奥底の秘密が、ここで明かされたのである。

尊者パフヌティイの説教の一部は、尊者ヨシフ・ヴォロコラムスキーの甥である長老ドシフェイ・トポルコフによって記録されている。その内容を以下に紹介する。

この修行者は、兄弟たちに1327年の大惨事について語った。当時、人々の罪ゆえに主の怒りがロシアの地に下り、都市や村々に大きな悲嘆が訪れた。人々の体に潰瘍が現れ、三日後には死が訪れた。　多くの人々が助けも得られずに亡くなった。病人を助ける者は誰もいなくなった。なぜなら、誰もが埋葬し、弔わなければならない死者を一人ずつ抱えていたからである。恐怖と戦慄が民を襲った。敬虔で神を畏れる者たちは悔い改めに立ち返り、修道衣をまとい、安らかに主のもとへ旅立った。　しかし、他の人々、すなわち無感覚な者たちは、神の怒りを恐れず、あるいは現実逃避を望んで、絶望のあまり、　、恐ろしいほどの酩酊にふけり、すでに病に倒れてからも酒を飲み続けた。中には、酒宴を繰り広げる友人たちの間でそのまま息を引き取る者もおり、友人たちは、その死者が酒に酔って死んだのだと思い込み、遺体を放り出した。　この疫病の期間中、多くの人々が亡くなった。死者の財産は放置されたままだったが、誰もそれを持ち去ろうとはしなかった。生き残った者たちは、金や銀だけを持ち去ったのである。

聖人は、聴衆に対し、美徳の女王である施しを行うよう熱心に説いた。彼は、死後に報いを受けた施しを愛する人々の例を挙げた。モスクワの大公イオアン・ダニリロヴィチ・カリタ[3341]は、貧しい者たちに誰に対しても拒むことなく施しを配り、　また、多くの施しをしたために主によって地獄の苦しみから救われたあるイスラム教徒の例も挙げた。「もし人が正しく生きているならば、たった一度の施しでもその人を救うことができる」と、尊師は語った。

ある慈善家が亡くなり、別の人がその死後の運命について啓示を受けた。亡くなった人は火の川へと連れて行かれ、川の向こう側には楽園――明るく、緑豊かで、美しい庭園という素晴らしい場所――が広がっていた。しかし、その人の魂はどうしても恐ろしい川を渡ることができなかった。すると、その人から施しを受けていた多くの乞食たちがやって来て、川に横たわり橋となった。そして、その慈悲深い人はその橋を渡って楽園へと入っていった。この物語について、聖人は次のように付け加えた。「義人の魂は天使たちによって楽園へと運ばれるが、主は私たちを戒めるために、義人の魂の運命をこのような形で示されたのである。」

修道院の兄弟たちが増えると、聖人は彼らの協力を得て、石造りの教会を建てた。建設期間中、聖人自身も一労働者として働き、石や水、建設に必要なあらゆるものを自らの肩に担いで運んだ。教会を完成させると、聖人はそれをイコン画で飾り、そのために最高の画家たちを招き、彼らは教会を「実に驚くほど美しく」彩った。聖人は教会をイコンや書物、あらゆる教会用具で飾り立てたため、教会の華やかさに慣れていた公爵たちでさえも感嘆したほどであった。

自らも生気あふれる教会を築き上げた聖パフヌティウスは、癒やし、透視能力、啓示、そして聖霊のその他の賜物として現れる、神からの驚くべき恵みに満ちていました。

ここに、この修行者の奇跡のいくつかを挙げる。

[3341] 1546年以前に書かれたドシフェイの著作は、一種の『パテリコン』のようなものであり、聖パフヌティウス、聖ヨシフ、およびヴォロコラム修道院の他の修道士たちから聞いた一連の短い物語で構成されている。　ドシフェイは、聖ヨシフの追悼説教も執筆している。16　聖ダニイル・アレクサンドロヴィチ公の息子であるイオアン・カリタは、1328年から1340年まで大公であった。

熟練のイコン画家である平信徒のディオニシウスは、尊者から修道院の礼拝堂の壁画制作を依頼されたが、足の病気のため作業ができなくなっていた。聖なる長老は彼にこう言った。「ディオニシウスよ！神があなたを祝福してくださいますように。この善き業を始めなさい。主と聖母マリアが、あなたの足に健康を与えてくださるでしょう」。

イコン画家であるディオニシウスは、尊者の言葉を固く信じ、喜びをもって作業に取りかかり、やがて癒やされた。このディオニシウスや他の一般信徒のイコン画家たちに対し、聖なる父は、修道院内では肉を食べず、最寄りの村で食べるよう命じた。　彼らはしばらくの間、この戒めを守っていた。しかしやがてそれを忘れ、修道院に持ち帰って夕食として、卵を詰めた子羊の臀部の煮込みを食べた。ディオニシウスが真っ先にそれを口にしたところ、詰め物の中に無数の虫が見つかり、禁じられた食べ物を犬に与えるしかなかった。 すると突然、彼は[3342]というかゆみに襲われた。瞬く間にディオニシオスの全身はまるで一面の瘡蓋のようになり、身動きが取れなくなってしまった。そこで病人は直ちに尊者のもとへ使いを送り、悔い改めを受け入れて赦しを与えてくれるよう懇願した。聖人は、ディオニシウスに今後一切禁じられたことをしないよう戒めた後、彼を教会へと連れて行った。そこには修道会の兄弟たちが全員集まっていた。共同の祈りが終わると、聖人は水を聖別し、病人にその水で患部全体を洗い流すよう命じた。　ディオニシオスがそうするやいなや、彼はしばらくの間眠りについた。その後、目を覚ますと、まるで一度も病気になったことがなかったかのように、完全に健康になったのを感じた。彼のかさぶたは鱗のように剥がれ落ち、彼は神を賛美した。

聖パフヌティオスの修道院は鬱蒼とした森に囲まれており、そこには多くの鳥が生息していた。特に黒い羽のカラスが数多く生息し、修道院の近くに巣を作っていた。聖人はそれらを眺めて感嘆し、カラスたちを捕まえたり殺したりしてはならないと命じた。　ところがある日、ある都市の総督の息子が聖パフヌティウスの修道院の前を通りかかり、カラスの群れを見て弓を引き、そのうちの1羽を射殺した。若者は喜んだが、すぐに、横を向いたままの頭が、その不自然な姿勢で動かないことに気づいた。 彼の心の中では、喜びと自満が悲しみと恐怖に取って代わられた。 同時に、若者の心には、自分に降りかかった災難の真の原因に対する自覚が生まれ、それに続いて悔恨の念が湧き上がった。　その思いに駆られて、軍司令官の息子は急いで聖者のもとへ駆けつけ、その足元にひれ伏して許しを請い、自分の癒やしのために主の前で聖なる祈りを捧げてくれるよう懇願した。　修道士は鐘を鳴らすよう命じ、教会へと向かった。不自然な時間に鳴り響く鐘の音に驚いた修道士たちは、急いで教会に集まり、この異例の鐘の音の理由を聖人に尋ねた。聖人は微笑みながら言った。「神はカラスに流された血の報復をなされたのだ」。

その後、祈りの歌を捧げ、苦しむ若者に聖なる十字架の印を授けた修道士は、彼に向かってこう語りかけた。「尊き、命を与える十字架の力によって、顔を前に向けなさい」。

するとたちまち、その若者の頭は自然な位置に戻った。

別の若者は、カラスにハヤブサを放った。しかし、ハヤブサはカラスを殺したものの、自らも死んでしまった。こうして、狩人は楽しみを奪われてしまった。

ある夜、盗賊たちがその聖人の修道院にやって来て、周辺の森で草を食んでいた修道院の作業用牛三頭を捕らえ、自分たちの家へ連れ去ろうとした。すると突然、彼らは道に迷い、まるで盲人のように修道院の周りをさまよった。朝になると、盗賊たちは牛を置き去りにして逃げ出そうとした。しかし、目に見えない神の力が彼らを縛りつけ、修道院の労働者たちが彼らを探し出し、聖者に連れてくるまで、彼らは盗んだ牛から離れられなかった。聖者は、他人の物を横取りしてはならないと彼らに諭し、盗人たちに食事を与え、平和のうちに彼らを解放した。

二人の修道士が密かに修道院を抜け出すことを企て、すでに荷物をまとめていた。しかし、神は夢の中でこのことを尊師に明らかにされた。朝の賛美歌の後、尊師は少し休もうと身を横たえたと

[3342]「スヴェルベージ」とは、疥癬（かいせん）や痒みと同じ意味である。

ころ、次のような夢を見た。黒人のエチオピア人が、尊師の個室の暖炉から燃え盛る火の塊を取り出し、その弟子たちの個室へと投げつけていたのだ。　聖人は、その行為によって修道院が火事になると言い、威厳をもってそれを禁じた。しかし、エチオピア人は、それこそが炭を投げつける目的だと答えた。　目を覚ますと、聖人はその夢の意味を理解し、直ちにその修道士たちを呼び寄せた。聖人が見た夢を彼らに語ると、彼らは恐怖を感じつつも、聖人の話に心を打たれ、持ち物を聖人に示し、自分の罪を告白して許しを請うた。

ある不平を口にする兄弟は、修道院で行われるすべての事柄や聖人自身をも誹謗していたが、夢の中で次のような幻視を見た。まるで自分が賛美歌を歌う人々の真ん中に立っているかのようだった。すると突然、聖なる父が教会に入ってきて、彼を怒りの眼差しで見つめ、「この者は冒涜者だ。彼を教会から連れ出せ」と言った。　するとすぐに、二人の黒い肌のエチオピア人が彼を捕まえ、外へ引きずり出し、その間ずっと激しく殴りつけた。目を覚ますと、その兄弟は強い恐怖を感じ、涙を流しながら急いで尊者のもとへ駆けつけ、許しを請うた。

その修道院には、コンスタンティンという名の敬虔な長老がいた。彼は病に倒れ、息を引き取った。　その死の瞬間――まだ誰にも知られていないことだったが――修道士ヨセフは、朝の賛美の後に休息していた聖パフヌティオスの独房の扉に近づき、修道院の慣習に従ってイエスの祈りを捧げようとしていた。すると突然、聖人は小さな窓を開け、ヨセフを見てこう言った。

「ある者が祈りを捧げ、『長老コンスタンティンが主のもとへ旅立った』と言った。しかし、私が目を覚まして窓を開けてみると、あなたが一人の歩いている姿以外、誰も見当たらなかった。」

ヨセフはこう言った。

「私は今、コンスタンティンのところから出てきたばかりだ。彼はまだ生きている。」

しかし、聖人は弟子にコンスタンティンの独房へ行くよう命じた。そこへ着くと、ヨセフは確かに彼が息を引き取っているのを見つけた。

聖パフヌティオスは透視の賜物を持っていた。彼は修道士の顔を見るだけで、その者がどのような情欲に苛まれているか、その日の定められた祈りの規則を果たしたかどうかを見抜いた。初めて会った人々の、隠された過去の罪さえも知ることができたのである。

ある初心の修道士が、聖人に同居していたが、まだ自分の中の情欲を克服できていなかった。ある用事で修道院を出た。道中、彼は一般の人々、その中には女性たちも混じっていた。彼らを一目見ただけで、その修道士は女性たちの色っぽい視線に惑わされ、罪深い考えにふけってしまった。聖人の独房に戻ると、罪を犯した修道士は、聖人が読書をしているのを見つけた。尊師は弟子を一瞥すると、即座に彼が不純な思いに惑わされていることに気づき、顔を背けて、その過ちを知っていることを示した。 その鋭い洞察力に恐れをなした修道士は、そのことを 同じ修道室に住むヨセフに打ち明けた。ヨセフは彼に、その罪を聖人に告白し、許しを請うよう命じた。修道士がそれに従うと、彼は許しと父のような教えを受けた。

ある時、やはり聖人が聖書を朗読している最中に、一人の男が彼の修道室に近づき、祈りを捧げた後、小さな窓越しに聖人を見つめ、彼の弟子であるヨセフの行方を尋ねた。その男はヨセフの同郷人であった。全く見知らぬ人物を目の当たりにした聖なる長老は、ヨセフにこう言った。

「出て行け！　邪悪な眼差しをした男が、お前のことを尋ねてきた。」弟子は外に出て、知り合いの姿を見ると、なぜ来たのかと尋ねた。すると、その男は答えた。

「修道士になりたいのです。」

ヨセフはその願いを聖なる修道院長に打ち明けたが、修道院長はこう言った。

「ナピタシュよ、この男を帰せ。彼は善良ではないからだ。」

ヨセフはその答えに驚いたが、あえて詳しく尋ねることはできなかった。聖人の指示に従い、彼は聖人の独房へと戻った。すると、聖人自身がヨセフにこう言った。

「この男は殺人者だ。まだ若者の頃、ある修道士をナイフで腹を刺し、殺してしまった。だが、それはずいぶん前のことで、彼は自分の罪を忘れてしまっていたのだ。」

ヨセフはこれらの言葉に驚いた。彼は、知人のこの罪について聞いたことがなかったからだ。

ある修道士が尊者の修道院を訪れた。修道士は彼を見ると、弟子たちに静かにこう言った。

「ご覧なさい、修道者の身でありながら、血の罪から清められていないではないか」

弟子たちは驚いたが、その言葉の意味を尊師に尋ねるのを恐れた。しかし、その後、尊師自らがその意味を説明した。

「この修道士は」と聖人は言った。「俗人だった頃、ノヴゴロドで仕えていた公爵を毒殺した。良心の呵責に苛まれ、修道生活に入ったのだ。」[3343]

アレクセイ・ガブリーナの妻であるボヤリーニャは、聖人に対して特別な敬意と信仰を抱いており、しばしば子供たちを贈り物と共に聖人のもとへ送り、祈りと祝福を求めていた。悪魔の仕業により、彼女は病に倒れ、しばしば多くの恐ろしい悪魔を目撃するようになった。　その後、背が低く、背中が丸く、大きな白ひげを生やし、粗末な服を着たある老人が彼女の前に現れた。その老人は威厳をもって悪魔たちを追い払い、その後、彼女は健康を取り戻した。ある時、病床にあった彼女は、その際に「ボロフスクにいるパフヌティイが、あなたから悪魔を追い払っている」という声を耳にした。

このような出来事は、ボヤリーニャに何度も起こった。しばらくして、彼女は完全に回復し、本当にその聖人が自分に現れて悪魔を追い払っていたのか確かめるために、聖人に会いたいと願った。ボヤリーニャは使用人たちを連れて修道院を訪れた。　しかし、修道院は女性立ち入り禁止であったため、彼女は門の前で立ち止まり、従者たちを聖人の弟子たちのところへ遣わし、どうすれば聖人に会えるか尋ねさせた。　修道士たちは、聖なる長老を従者たちに紹介し、昼食の時間が近づいていたため、彼が兄弟たちと共に食事に出る際に、その長老を女主人に指し示すよう命じた。　しかし、貴婦人は、何の指示も待たずに、尊者を見たとたん、彼こそが以前自分に現れた長老であるとすぐに気づき、涙ながらに叫んだ。「まことに、この方は、その御姿によって私から悪魔を追い払い、私に癒やしを与えてくださった方です」。

その後、神と聖母マリア、そして聖パフヌティウスに感謝を捧げ、施しを送った。

尊者の一人の弟子が目の病を患っていた。その病人は激しい苦痛に苛まれ、懸命に医師を探していた。聖人は彼に自分の数珠を与え、イエスの祈りを千回唱えるよう命じた。しかし、激しい苦痛に苛まれていた病人は、命じられた回数の半分をようやくこなしたに過ぎなかった。　五百回祈りを唱え終え、自分の目が癒やされたことに気づいた修道士は、喜びのあまり急いで尊者のもとへ駆けつけ、回復したことを報告しようとした。しかし、先見の明のある老修道士は、再び弟子に自分のもとへ戻り、命じられた祈りの回数を最後までやり遂げるよう命じた。

敬虔な信徒たちが、当時のモスクワ近郊シモノフ修道院のアルヒマンドリトが職を辞したことを、尊者とその修道室にいた兄弟たちに伝えた。この知らせをきっかけに、今後誰がシモノフ修道院のアルヒマンドリトになるかという話題が持ち上がった。ある者はこの人物を、別の者は　を、また別の者は別の人物を挙げた。　聖人は、ヴァッシアンという名の、ごく若い、修道誓願を立てたばかりの弟子――聖ヨセフ（後の自身の伝記作者）の実の弟――に目を向け、彼を指さして微笑みながらこう言った。「この者が、シモノフ修道院のアルヒマンドリトだ」。

[3343] ここで言及されているのは、当然ながら、1453年にヴェリキー・ノヴゴロドで毒殺されたディミトリ・ゲオルギエヴィチ・シェミャカ公である。公に毒を盛ったのは、彼のボヤリンであり寵臣であったイオアン・コトフであった。

この聖人の言葉には、より遠い未来を見通す洞察が表れていた。何年も後、ヴァシアンは実際にシモノフスキー修道院のアルヒマンドリトとなった[3344]。

ある時、尊者はある公爵に、オカ川のある一箇所で3日間魚を釣らせてほしいと頼み、釣れた魚はすべて修道院のために捧げられることとした。　この漁に一人の修道士を派遣する際、聖人は、指定された期間内に捕れた魚を塩漬けにするための器を購入するため、彼に5グリヴナ[3345]　の金を渡すよう命じた。その修道士は、小さな器一つすら魚で満たせる見込みがないと考え、それほど多くの金を受け取ろうとはしなかった。　しかし、聖人は彼を怒りの眼差しで見つめ、命じられた通りにするよう命じた。すると、遣わされた者は出かけて行き、三日間で730匹もの大きな魚を捕まえた。これは、公爵の漁師たちが夏の間中かけても捕まえられなかった数であった。聖人はこの奇跡的な漁を予見していたからこそ、あれほど多くの容器を買うよう命じたのである。

ある若者が修道士となった際、悪魔の誘惑にさらされた。人類の古くからの敵は、様々な姿で彼の前に現れた。時には見知らぬ獣や黒い犬の姿をとったり、また、修道士が独房に座っている時には、まるで熊のように独房の周りを歩き回り、壁を叩いたりした。　長老は若い修道士に、自分の前で詩篇を朗読するよう命じた。若者が聖人の命令に従うやいなや、悪魔的な妄想は完全に消え去り、彼は恐ろしい幻影から解放された。

尊者パフヌティオスの弟子たちの中にも、透視の能力を持つ者がいた。涙を絶やさない修道士エウフィミオスがその一人であった。この修行者は、独房だけでなく教会でのあらゆる礼拝の際にも、祈りの感動から涙を流していたが、神から透視の賜物を受け、それはある時、次のように現れた。二人の兄弟は、神に由来する愛ではなく、世俗的な愛を互いに抱いていた。聖人はこのことを深く憤っていたため、彼らは密かに修道院を抜け出そうと企んでいた。聖体礼儀の最中、いつものように涙を流して感極まっているエウフィミオスは、聖なる父と、彼と共に賛美歌を歌っている人々――その中にはこの二人の兄弟もいた――に目を向けた。　すると、彼らの背後から、鋭い兜を頭にかぶったエチオピア人が飛び出してくるのが見えた。その悪魔は、両手に鉄の鉤を持っていた。鉤で罪深い修道士たちの衣を引っ掛け、彼らを聖歌隊席の外へ引きずり出し、自分の方へ引き寄せて、自らの手で捕らえようとしていた。　しかし、彼らが自分に近づくとすぐに、鉄の鉤は跳ね返ってしまった。これは、二人の罪人が、敵によって植え付けられた「修道院を去り、父に従わない」という考えに傾いたとき、敵は容易に彼らを引き寄せることができたが、彼らがその考えに抵抗すると、悪魔の武器は無力となり、跳ね返ってしまうことを意味していた。　それを見て、透視能力者は霊的な目で、彼らの魂の中で何が起きているかを洞察していた。福音書の朗読中やケルビムの賛歌の最中、エチオピア人は姿を消した。　それらが終わると、彼は再び姿を現した。そして、聖体の聖別と、至聖なる神の母への賛歌「[3346]　」が歌われると、エチオピア人は煙のように消え去り、二度と現れることはなかった。　その透視能力を持つ老修道士は、礼拝の間中、畏敬と恍惚のうちに立ち続け、その後、その幻視について聖パフヌティオスに語った。聖パフヌティオスは罪人たちを呼び寄せ、罪深い思いと戦い、それらを心から引き抜くよう命じた。聖人の訓戒と諭しを受けて、二人の修道士は改心した。

聖パフヌティウスの聖なる生涯、そして神の御業においても人間的な事柄においても示されたその賢明さと経験の深さにより、修道士たちだけでなく、多くの信徒たちも彼を自らの霊的指導者として選ぶようになった。　彼のもとには、熟練した医師のように、貴族も庶民も、富める者も貧しい

[3344] ヴァッシアン（サニン）は、1502年にシモノフスキー修道院長によって言及されている。1506年、彼はロストフの司教に叙任された。――シモノフ修道院は、大公ディミトリ・ドンスキーの命により、聖セルギイ・ラドネジスキーによって1370年頃に創建された。　当初の建設地（スタロエ・シモノヴォのスロボダ）から、修道院はまもなく現在の場所――市の南端、モスクワ川の高台にある河岸――に移転された。修道院の初代イグメンは、聖セルギイの甥であるフェオドールであった（後にロストフ大主教、1395年）。

[3345] 私たちの負担としては、数十ルーブル程度になる。

[3346] すなわち、「ふさわしい」ということである。

者も、徳ある者も罪深い者も訪れ、誰もが有益な助言と適切な悔悛の行いを受けた。聖人は、訪れる人々を受け入れるにあたり、一切の差別をしなかった。権力者を恐れず、高慢な者を容赦しなかった一方で、この修行者は謙虚な人々に対しては非常に慈愛に満ちていた。

聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーは、自身の師である聖パフヌティイについて、必要な時には慈悲深く寛大であったが、状況に応じて厳しく怒りを示すこともあったと記している。　聖人の霊的な子らは、彼を敬い、また恐れていた。ゲオルギー・ヴァシリエヴィチ、ドミトロフスキー公は、聖人に懺悔しに行く際、膝が震えてしまったと語っている。その一方で、聖人を自分の父として選んだ霊的な子らは、彼が亡くなった後も、彼との交わりを絶やすことはなかった。　ある時、早課の前に教会の入り口でうたた寝をしていた聖人は、夢の中で、修道院の門が開き、ろうそくを手にした大勢の人々が教会へと向かって入ってくるのを見ました。その真ん中にはゲオルギー・ヴァシリエヴィチ公がいました。教会に着くと、公は教会に頭を下げ、続いて霊的父に頭を下げました。聖人は彼に尋ねました。

「わが子よ、公爵よ！　あなたはすでに天に召されたのか？」

「はい、敬愛する父よ！」

「さて、今、あちらではどのようなお気持ちですか？」と聖人は尋ねた。

「あなたの聖なる祈りのおかげで、神は私に恵みを与えてくださいました。とりわけ、私がアレクシン方面へ、不信心なアガリア人たちに立ち向かうために向かっていた際、あなたのもとで全ての罪を悔い改めたからです[3347]。」

その時、早課の鐘が鳴り始め、聖人は目を覚ました。

聖人は非常に慈悲深く、貧しい人々を愛しておられた。言葉で慈悲を説きつつ、この修行者はその美徳を実際に実践していた。　ボロフ地方で激しい飢饉が起こると、聖人は自身の修道院で、近隣の村々からやってくる飢えた人々を熱心に養った。こうして毎日千人、あるいはそれ以上の人々が集まり、慈悲深い修行者は修道院の備蓄をすべて使い果たしてしまった。翌年、主は地の実りを豊かにしてくださった。

尊者パフヌティウスは83歳という高齢まで生き、そのうち63年間を修道者の修行に捧げた。この世のあらゆる快楽を捨て、ただ神と永遠のために生きる聖なる修道士に残されていたのは、すべての儚いものから解き放たれ、神が御自身を愛する者たちのために用意された永遠の御国へと移ることだけでした。それは*「人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」もの*（Iコリント2:9）でした。

主は、この聖なる長老に、一週間も前からその至福の臨終の日を明らかにされ、修道士は平穏かつ恥じることなくその日を迎える準備をしていた。この間ずっと、聖人の傍らには弟子イノケンティが付き添っており、彼は聖なる師の最期の日々について記述を残している[3348]。

これは1477年の春、その年の4月6日であった聖なる復活祭の直後に起こったことである。

復活祭後の第3週の木曜日（4月24日）、早課の後、聖人はインノケンティと共に、自ら掘った池へと向かった。二人は、堰から水が漏れていることに気づいた。　聖人はインノケンティウスに、水の流れをせき止める方法を教えた。その後、聖体礼儀の時間が迫っていたため、修道院に戻った。長老が去ろうとした際、弟子は昼食の後に作業の手伝いに来てほしいと頼んだ。それに対し、聖人は「私には行けない。私には、それよりも重要で差し迫った用事があるからだ」と答えた。

[3347] ここには、当然ながら、1472年にハン・アフマットによってアレクシン（現在のトゥーラ県管轄の郡都）が壊滅させられたことが含まれている。ゲオルギー公や他の者たちは、この不幸な都市を助けることができず、また間に合わなかった。

[3348] イノケンティの『手記』は、古ロシアの聖人伝文学における最高傑作の一つと認められている。以下の記述は、若干の省略を加えて掲載するものである。

典礼の後、聖なる長老は兄弟たちと共に食事をとり、その後、イノケンティを呼び寄せ、池へ行くよう命じた。イノケンティは聖人の独房へ向かい、寝台に座っている師の姿を見ると、仕事のことを思い出させた。　「私には、君には知らされていない別の用事がある。ある結びつきを解きほぐさなければならないのだ」と聖人は答えた。

イノケンティは長老の言葉にひどく戸惑い、三人の修道士たちと共に仕事に出かけたものの、何も手につかなかった。

修道院に戻ると、弟子は修道士が再び寝台に座っているのを見つけた。長老は、ミハイル・アンドレイヴィチ公に「[3349]」と伝え、別の用事が迫っているため修道院に来ないようにと命じた。その日、聖人は夕の礼拝にも、夕後の礼拝にも教会へは行かず、イノケンティに自分の独房でそれらを執り行うよう命じた。兄弟たちは、なぜ聖人が礼拝に現れなかったのかを知るために、その独房へと近づいた。しかし、隠遁者は誰にも中に入ることを許さず、翌朝 に皆が集まるよう求めた。 弟子を見送る際、修道士は彼にこう言った。「ちょうど同じ木曜日に、私はこの病から解放されるだろう」。

聖人は一晩中、祈りに明け暮れた。

4月25日金曜日の朝、修道院の兄弟たちは、尊者にお別れを告げ、その祝福を受けるために訪れました。当時、修道院には95人の修道士がおり、病に伏している修道士のもとには、体の不自由な者や盲人を含め、一人残らず集まりました。　兄弟たちと別れを告げた後、聖人は弟子たちに支えられながら聖体礼儀へと向かった。その中の一人、すでに年老いた弟子が聖人を支えようとその手を握ったところ、聖人は怒りを露わにしてその手を振りほどき、衣服だけをつかむように命じた。　これほどまでに、彼は無執着の慎み深い守り手であった。老いと病に蝕まれ、死の直前にあっても、自らの身体に触れることを許さなかったのだ。その日、長老は何も口にしなかった。ただ「シティ」――すなわち蜂蜜入りの水――を求められただけだった。　ミハイル・アンドレーエヴィチ公は、尊者のお様子や、なぜ自分に面会を拒んだのかを知るため、自身の助祭を遣わした。しかし、尊者はその使者を受け入れなかった。また、トヴェリ地方から修道院に送られてきた書簡や金銭も受け取らなかった。その日、彼は晩課にも出席していた。　衰弱のため、病人は杖に両手を置き、その上に頭を預けて、かろうじて体を支え、立っていた。それにもかかわらず、彼は兄弟たちに熱心に合唱を合わせ、兄弟たちが彼を独房へ連れ戻そうとしたにもかかわらず、晩課の後も追悼礼拝に残った。「この追悼礼拝は私にとって必要なのだ」と尊者は彼らに言った。「もう二度とこれを聞くことはできないだろうから」。

26日の土曜日、病床の老修道士は聖体礼儀にも参列した。礼儀が終わると、イノケンティは彼のために少量の食事を用意し、土曜日であること、そして木曜日から何も食べていないことを指摘して、口にするよう勧めた。　しかし、聖人は食事を断り、こう言った。「私もそれを知っている。神の掟によれば、断食の合間の許された食事を土曜日に口にするのがふさわしい。しかし、病人は神の聖体拝領の前に三日間、食事を控えるべきである」。

これが、聖なる長老の長年にわたる慣習であった――聖なる秘跡を受ける前に断食し、一週間を沈黙の中で過ごすことである。

夕方、彼は修道士イザヤの前にて懺悔を行った。

信徒たちは、死を目前に控え、すべての思いを神に向け続けていた病める修行者に、しつこく付きまとった。　ミハイル公は再び修道院に、今度は自身の霊的指導者である司祭ヨハネを遣わし、

[3349] ディミトリ・ドンスキーの孫であるミハイル・アンドレーエヴィチ・ヴェレイスキー公は、ボロフ公の娘エレナ・ヤロスラヴナと結婚しており、おそらく彼女との結婚によってボロフ公国を得たものと思われる。彼は1486年に死去し、聖パフヌティウスの修道院に埋葬された。

聖人に自身と息子のヨハネへの赦しと祝福を求めた。イノケンティは公の願いを伝えた。少し沈黙した後、尊者はこう言った。

「公爵の行動には驚かされる。『わが子、ヨハネ公爵を祝福せよ』と送ってくるが、ヴァシリー公爵こそが彼の息子ではないのか？[3350] 神のみぞ知る、彼は自らを二分してしまったのだ。それなのに、どうして平安と祝福を得られるというのか？」

そして、こう付け加えた。

「たとえ公爵であろうとも、彼には私と何の関係もない。」

この言葉は公爵の霊的指導者に伝えられたが、彼はやはり長老に会いたがり、そのために晩課の時間に教会へ向かった。　修道士もそこへ向かったが、彼は急いで祭壇の中に身を隠し、公爵の使者が修道院を去るまでそこに留まった。尊者様は弟子たちに支えられながらも、徹夜祈祷を最後まで執り行った。その後、兄弟たちにこう言った。

「これからは、徹夜祷の声を聞くことはもうないだろう。」

尊者は祈りによって大いなる聖餐を受ける準備を整え、夜が明け始めたや否や、ヨシフ尊者に聖体拝領の規則を読み上げるよう命じた。

日曜日（4月27日）、聖堂での神聖な典礼において、命を与えるキリストの聖体拝領を終えた後、聖なる長老は独房へと連れ戻された。　またしても思いやりのあるインノケンティが、彼のために少しの食事を用意した。兄弟たちは彼に食事を摂るよう勧めたが、彼らの気持ちを傷つけないよう、尊者は少しだけ口にし、その後、自分に用意されたものを兄弟たちに譲った。

その日、モスクワ大公イオアン・ヴァシリエヴィチ[3351] は、どのようにして聖パフヌティウスの病を知ったのかは定かではないが、使者を遣わして書簡を届けた。弟子が修道士に大公からの書簡を手渡すと、彼はこう言った。

「その書簡を届けた者に返せ――送り主に渡させよ。今や私はこの世とは何の関係もない。名誉を望まず、この世の権力者たちを恐れることもない。」

イノケンティは師にこう言った。

「あなたに関しては、その通りです。しかし、神のために、私たちのために有益なことをしてください。大公を侮辱したり、怒らせたりしないでください。」

すると、長老はこう答えた：

「真実を言おう。唯一なる方を怒らせなければ、人間の怒りはあなた方に何の影響も及ぼさない。しかし、もし唯一なる方――すなわちキリスト――を怒らせれば、誰もあなた方を助けることはできない。人間は、たとえ怒ったとしても、やがて心を和らげるものだ。」

弟子はもはや師に異議を唱えることを敢えてせず、大使に大公の書簡を返した。

大公の母であるマリア・ヤロスラヴナも使者を遣わした。彼女はこの徳高い長老を深く敬っていた。また、大公の妻であるギリシャ人のソフィア・フォミニチナ[3352] も、長老に書簡と金を送った

[3350] ミハイル・アンドレイヴィチ公には、ヴァシリー（通称「ウダリイ」、1495年生まれ）、イオアン、そして娘のアナスタシアという子供たちがいたことが知られている。アナスタシアは、1485年にモスクワ大公に仕えたドロゴブジスキー公イオシフ・アンドレイヴィチと結婚していた。

[3351] イオアン3世ヴァシリエヴィチは、1462年から1505年まで大公であった。

[3352] マリア・ヤロスラヴナは、ヤロスラフ（アファナシー）・ウラジーミロヴィチ公の娘であり、前述のヴァシーリー・ヤロスラヴィチの妹である。1433年に大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムヌイと結婚し、1484年に修道女としてマルファという名で死去した。– ソフィア・フォミニチナは、モレイのデスポト、トーマス・パレオロゴス（1453年にトルコ軍によるコンスタンティノープル陥落の際、ギリシャの首都の城壁上で戦死した最後のコンスタンティノープル皇

。長老は何も受け取らず、すべてを返送するよう命じ、弟子に対しては、周囲が彼を煩わせていることについて叱責さえした。　多くのボヤールや一般の信徒たちが、病に伏す修道士のもとへ修道院に贈り物を送ってきたが、それについてはもはや彼に報告されることもなかった。

聖なる長老がひどく衰弱しているのを見て、イノケンティは彼にこう言った。

「パフヌティイ神父様、お体はどうでしょうか？」

長老は答えた。

「ご自分でもお分かりの通り、私は衰弱していますが、自分の力の及ばないほどの病気とは感じていません。」

修道士はもはや食事を口にしなかった。何か作らせるよう命じることはあったが、運ばれてくると、それを称賛した上で、兄弟たちにすべてを分け与え、こう言った。

「どうぞ召し上がってください。私も皆さんと共にいただきます。」

夜が更けた。修道士は寝台に座り、心の中でイエスの祈りを捧げていた。早課は彼の独房で読まれた。

月曜日、28日、修道士は兄弟たちの助けを借りて神聖な典礼を執り行った。礼拝の後、彼は何も口にしなかった。ただ、少しの水を飲んだだけだった。イノケンティは、なぜこの長老が修道院について何の指示も出さないのかと不思議に思い、戸惑いを押さえて尊者にお尋ねした。

「パフヌティイ師！　ご存命のうちに、修道院の運営に関する遺言書を作成するようお命じください。師の死後、修道士たちはどのように生活すべきか、また誰がイグメンになるべきかについてです。」

少しの間沈黙した後、長老は涙を浮かべてこう言った。

「兄弟たちよ、自ら教会の規律と修道院の秩序を守りなさい。教会の祈りの時間を変えてはならない。司祭たちを私と同じように敬い、彼らへの報酬を奪ってはならない。そうして神への奉仕が貧しくならないようにしなさい。なぜなら、すべての成功はそれに懸かっているのだから。」　旅人に対して食事を拒んではならない。施しに心を配り、物乞いをする者を何も与えずに追い返してはならない。手仕事に励め。しかし、世俗的な会話からは遠ざかれ。悪意ある思いから自分の心を注意深く守れ。夕の祈りの後は、集まって談笑してはならない。各自が自分の独房で黙って過ごせ。　体の不調による場合を除き、決して教会の祈りを欠かしてはならない。すべての規律、教会の規則、そして教会のあらゆる規定を、柔和に、動揺することなく、静かに守りなさい。　一言で言えば、私のように振る舞いなさい。もし私の戒めを軽んじなければ、全能の神と無原罪の聖母マリアを信じ、主はこの場所から御自身のすべての恵みを奪われることはないだろう。　しかし、私は知っている――と尊者は預言的に付け加えた――私の去った後、無原罪の聖母の修道院には反逆者が現れるだろう。彼は私の魂を混乱させ、兄弟たちに反乱をもたらすだろう。　しかし、無原罪の聖母は、その反乱と嵐を鎮め、御自身の修道院とそこに住む兄弟たちに静けさをもたらしてくださるだろう。[3353]

そう言うと、長老は疲れ果てて黙り込んだ。その夜は、いつものように祈りを捧げて過ごした。

29日、火曜日、尊者は沈黙を守っていた。その年は4月30日に当たる聖ペンテコステの中間祭の祝日に、キリストの聖体拝領に備えていたからである。長老は詩篇、祈祷文、カノン、そして聖なる詩を歌った。そうして一日中続いた。　インノケンティと尊者の侍者は、この並外れた歌声に黙って耳を傾けていた。修道士が「何事も気を散らしてはならない」と命じていたため、彼らは一言も口

帝コンスタンティノス11世の兄弟）の娘である。　彼女は大公イオアン3世の2番目の妻であり、1472年に彼と結婚し、1503年に死去した。

[3353] 聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーの古来の伝記より（その記念日は、9月9日に彼の修道院で祝われる。聖パフヌティウスの予言通り、彼の死後まもなく、修道院内で不和や口論が生じ、新たな修道院長である聖ヨセフは1477年または1478年に、密かにボロフスカヤ修道院を去った。

に出すことを敢えてしなかった。病床の尊者は、その夜を眠ることなく祈りに費やし、ほとんどずっと立ちっぱなしで、ほんの少しの間だけ腰を下ろしただけだった。

ようやく日（水曜日）が明けると、聖ヨセフは聖人のために聖体拝領の規則を読み上げた。聖堂で聖体礼儀を執り行い、キリストの命を与える聖体を受け取った。　慣例に従って司式司祭から祝福を受けた後、聖人は兄弟たちによって独房へと案内された。独房の玄関に立ち、両側から弟子たちに支えられながら、聖人は聖母マリアの聖像を見つめ、心の目で兄弟たち全員に向き直ると、ため息と涙を流しながらこう言った。

– 全能の主よ！心と思いを試みられる主よ、あなたはすべてをご存知です。もし誰かが私を憐れんでくださるなら、主よ、この世において百倍の報いを与え、来世においては永遠の命をお与えください。もし誰かが、罪人である私の死を喜ぶなら、主よ、それをその者の罪とみなさないでください。

これを聞いた者たちは戦慄し、それぞれが自らの良心の裁きに思いを巡らせた。やがて長老が独房に連れ戻されると、彼は喜びに満ちた表情で兄弟たちを慰め始めた。まるで、今言った言葉を忘れさせたいかのように。　聖人の以前の言葉――彼の病は重くない――を思い出した兄弟たちは、彼の容体が良くなってきているのだと考えた。彼らは彼に食事を摂るよう促したが、長老はそれを拒んだ。彼は少しの食事を口にし、それからそれを兄弟たちに手渡してこう言った。

「この杯を飲め、子らよ。これを私の最後の祝福として飲め。私はもう、これから飲むことも、味わうこともないのだから。」

彼は兄弟たちに多くの言葉、さらに慰めの言葉を語り、その後、自分の寝台に横たわった。そしてその二日後に息を引き取った。病床で彼に仕えていたイノケンティウスに、尊者は蜂蜜の入った器を遺贈し、それから兄弟たちを食事へと送り出した。すでに昼食の時間になっていたからである。病床の師のそばを離れなかったイノケンティウスは、食事から急いで戻ると、師が寝台に横たわっているのを見た。そして、少し間を置いて、尊者にお尋ねした。

「パフヌティウス師よ！　一週間も全く食事を口にされていないから、回復されないのです。なぜ黙っておられるのですか、師よ？　この修道院を誰に委ねるおつもりですか――兄弟たちに、それとも大公に？　なぜ何もおっしゃらないのですか？」

聖人は答えた：

「聖母マリアに。」

それから、少し間を置いて、彼にこう言った。

「イノケンティ兄弟よ！　お前の言うことは本当か？」

長老が戸惑っていることに気づくと、インノケンティは黙り込んだ。

「兄弟よ、私に修道院を命じたのは誰か？　聖母ご自身がそうお定めになったのだ。聖母は御名の栄光を称えるこの場所を愛し、御自身の聖堂を建て、兄弟たちと私という貧しい者を集め、長い間、兄弟たちと共に私を養い、安らぎを与えてくださった。　そして今、私のような死すべき人間が棺を目前にし、もはや自分ではどうすることもできないこの時、天の女王ご自身が、かつて始められたように、ご自身の修道院のために有益なことを成し遂げてくださるでしょう。　あなたもご存じの通り、この聖堂は、公爵の権力でも、強者の富でも、金や銀によっても建てられたのではなく、神の御心と、その聖母マリアの御意志によって建てられたのです。　私はすべての希望を彼女に託します。彼女の慈悲によって、私はこの世の旅路において、暗く悪意に満ちた霊たちの暴行から守られ、また、義の審判の日に、永遠の苦しみから救われ、選ばれた者たちの仲間に加えられるでしょう。もし私がその恵みを受けるならば、主に対してあなた方のために祈ることを決して怠りません。　ですから、あなた方自身も熱心に努めてください。清く生きなさい。私がいた時と同じように生きるだけでなく、それ以上に良く生きなさい。　恐れと震えをもって救いを築き上げなさい。そうすれば、あなた方の善行のおかげで、私は安らかに眠ることができ、私の後にここへやって来る者たちも安らかに

住むことができるでしょう。あなた方も、死後、安らぎを得られますように。　一人ひとりが、召されたその地位にとどまりなさい。分を超えた高慢に陥ってはならない――それはあなた方にとって益となるどころか、心に害を及ぼすものである。弱い兄弟たちに対して、思いにおいても行いにおいても高ぶってはならず、彼らを自分の体の一部として、長く忍耐しなさい。さあ、子供たちよ、善を行うことに急ぎなさい！

そう言い終えると、聖人は疲れ果てて沈黙した。

しばらくして、モスクワ都主教ゲロンティオスから遣わされた使者[3354]が修道院に到着し、大公および大公妃たちからの新たな使節団もやって来た。彼らは執拗に、尊者との面会と対話を求めた。　インノケンティは長い間、病に伏す長老に彼らのことを話すのを拒み、先延ばしにしていたが、ついに使者のことを報告した。長老は弟子を咎め、60年にわたる修道生活の間、常に公爵やボヤール、その他の世俗の人々と接してきたと彼に語った。

「今になって、それには何の益もないと悟った――それはただ魂への試練に過ぎない。主は、悔い改めのない罪人の死を望まれないという御慈悲により、私に悔い改めるための六日間を与えてくださった。それなのに、お前は私に安らぎを与えず、俗人を私のところに連れてくる。今や、彼らが私を煩わせないよう、私は修道室から出ることもできなくなってしまった。」

イノケンティは、長老を困惑させてしまったこと、そして使者たちへの許可が得られなかったことの両方に、深く心を痛めた。彼は小部屋を出て、使者たちに長老の返答を伝え、修道院を去るよう頼んだ。しかし、使者たちは修道院を出ると、翌朝に修道士に会うために、近くの村で一夜を明かした。　その翌夜、すなわち生涯の最後の夜を、聖なる長老は眠ることなく、絶え間ない祈りに費やした。時には詩篇を歌い、時にはイエスの祈りを唱えた。

5月1日木曜日、聖パフヌティウスの臨終の日が訪れた。修道士は、普段より早く聖体礼儀を執り行うよう命じた。彼自身もその礼儀に出席しようと考え、急いで身支度を整えながら、心の中で「さあ、その日が来た」と呟いていた。

兄弟たちは、長老が何を言っているのか理解できず、戸惑いながら互いに顔を見合わせた。イノケンティは、どの日のことを言っているのかと尋ねた。

「以前、あなたたちに話したあの日のことだ」と聖人は答えた。

弟子は日を挙げていった。「日曜日、月曜日、火曜日？」

聖人は言った。

「その日とは、以前にも話した木曜日のことだ」

修道者たちは困惑した。彼らは長老を教会へ案内しようとしたが、小部屋を出る間もなく、聖ヨセフがやって来て、高官たちから遣わされた信徒たちが彼を待っていると告げた。昨日いた者たちに加え、新たな者たちも来ており、彼らは皆集まって、修道士が教会へ向かう道を塞いで立っていた。　そこで、尊者様は、彼らが神の宮への道を塞いだことに憤り、小部屋から出ることを拒んだ。兄弟たちを教会へ送り出した後、彼は玄関に座り込み、こう言った。「これはすべてイノケンティの仕業だ。彼がそう命じたのだ」。

一方、インノケンティは言い訳をすることさえできなかった。

彼もまた教会へ向かい、長老は一人の弟子と共に庵に残り、遣わされた者たちが自分に近づけないよう扉に鍵をかけた。　聖体礼儀が終わると、信徒たちは聖人に会うことができないと悟り、引き返した。その後、弟子たちが再び彼の元へ来て、黙って寝台を取り囲んだとき、彼はまるで他の誰かのことであるかのようにこう言った。

「彼の日が来た。彼は死ぬだろう。」

「父よ、誰が死ぬとおっしゃるのですか？」とイノケンティが尋ねた。

[3354] ゲロンティイ大主教は、1473年から1489年までロシア正教会を統率した。

「あなたがたが『痛がっている』と言っているあの者だ。彼は悔い改め、死にたいと願っているのだ」と彼は言った。

昼食の時間となり、兄弟たちは食事に向かった。病人のそばに残ったのはインノケンティ一人だけだった。

聖人は弟子に、そこの方が静かだからと、病人を小部屋の反対側へ移すよう命じ、誰にも入れないようにと指示した。

「疲れた」と彼は言った。「夕べの賛美まで休みたい。夕方には、修道院の兄弟たちが皆、私のところに来てくれるだろう。」

その時、弟子は、聖人の最期の時が近づいていることを悟った。

イノケンティは聖人に尋ねた。

「父上、あなたが召される時、葬儀のために町のプロトポパスや他の司祭たちを呼ぶべきでしょうか？」

聖人は、修道院の司祭たちだけで済ませ、誰にも呼び出さないよう遺言した。それは、人々が修道院に集まり、彼の死の知らせを町や村中に広めてしまうのを防ぐためであった。弟子は尋ねた。

「どこに墓を掘るようお命じになりますか？」

聖人は、教会の南側、教会の扉の近くに掘るよう命じた。

「そして、樫の棺は買ってはいけない」と聖人は言った。「この六デナリでカラチ（パン）を買って、貧しい人々に配りなさい。」

弟子は黙り込み、老修道士は聖母マリアに希望を託して、自らの魂の救いを祈っていた。彼は修道院もまた、聖母マリアに委ねた。イノケンティは尊者のお世話係を起こし、病床の老修道士のそばに座るよう命じ、自身は体調が優れなかったため、外に出て眠りについた。　彼がうとうとし始めた途端、尊者の部屋から多くの聖歌隊の声が聞こえてきた。これに驚いたインノケンティは部屋に入り、世話係に尋ねた。

「兄弟たちのうち、誰がここにいたのか？」

「誰もいません」と彼は答えた。「あなたが去った後、彼は『聖徒たちは命の泉を見出した』と歌い始め、追悼の詩篇を繰り返し歌っていました。そして詩篇を終えると、次のような詩を歌いました：

「*『主の律法に従って歩む、その道に汚れなき者は幸いである』*（詩編118:1）」――といった具合に。

「長老は神のもとへ旅立たれた」と、イノケンティは修道院の係員に言った。

弟子たちは聖人の足元にひれ伏してその足に口づけをし、続いて聖人の胸に口づけをして、許しと祝福を請うた。しかし、長老はもはや彼らの言葉に耳を傾けることなく、ただ主に向かって祈っていた。「天の王、全能なる御方よ！　わが主イエス・キリストよ、あなたに祈ります。私の魂に憐れみをお与えください。それが悪しき者たちに捕らえられぬよう、あなたの御使いたちが迎え、暗き試練の罠をくぐり抜けさせ、あなたの慈悲の光へと導いてくださいますように。　主よ、私は知っています。あなたの取り成しなしには、誰も邪悪な霊たちの策略を乗り越えることはできないのです」。

その後、死にゆく者の言葉は不明瞭になり、弟子たちは理解できなかった。突然、彼は左から右へと体を向きを変え始めた。弟子たちは何度も彼を左側に向かせたが、彼はまた右へと向きを変え、聞き取れない言葉を囁き続けた。そこで彼らは、死にゆく修道士が何か尋常でないものを見ているのだと結論づけた。　兄弟たちは数回、尊者の小部屋を訪れたが、彼のそばにいた二人の弟子は、尊者が眠りについたと告げた。修道院で晩課が行われている頃、尊者は死を迎える準備を整えた。胸の前で両手を十字に組み、三度息を吹き出して、その聖なる魂を主の御手に委ねたのである。

聖パフヌティウスは、1477年5月1日木曜日、日没の1時間前、すなわち午後7時頃[3355] に永眠した。修道士たちは教会から出てきて、聖人の死を知ると、悲しみに暮れて彼を悼んだ。　その時点で、この修行者を埋葬するにはすでに遅かったが、信徒を伴わない埋葬という彼の遺言を履行するため、修道者たちは翌日の5月2日（金）午前5時に、師を葬った。修道者たちの悲しみは甚大で、全員が嗚咽し、涙を流していた。誰も歌を歌ったり、カノンを唱えたりすることができなかった。　葬儀を執り行ったのは、尊者（プレポボドニー）の忠実な弟子、イノケンティであった。涙のあまり、彼は葬儀の儀式を口にするのもやっとだった。「その際、世俗の人間は誰一人として立ち会わず、彼の遺体に触れる者もなく、棺に納められる様子を目撃した者もいなかった」――イノケンティはそう語っている[3356] 。

埋葬が終わるやいなや、ボロフスクでもこの修行者の死が知れ渡り、街全体が騒然となった。修道士や司祭だけでなく、市の役人や民衆までもが、尊者のお寺へと向かった。　街では聖人の遺体がすでに地中に葬られていることがすぐに知れ渡ったにもかかわらず、人々は一日中絶え間なく修道院を訪れ、深い敬愛の念を込めて、皆、故人の棺に頭を下げた。

聖パフヌティウスを称える地元の祝祭は1531年に始まった。モスクワ都主教ダニイル[3357] は、司教会議と共に、聖パフヌティウスのカノンを歌い、礼拝においてその行伝を朗読することを許可し、すなわち彼を称える地元の祝祭を定めたのである。　また、1547年の公会議では、聖パフヌティウスの記念日を全教会的に祝うことが決定された。

聖人の聖遺骨は、修道院の主教会堂である「至聖なる神の母の降誕」に捧げられた聖堂内の、聖パフヌティウスの名に捧げられた小聖堂に安置されている。

トロパリオ（第4調）：

その生涯の輝きをもって故郷を照らし、祈りと断食によって聖霊の賜物に満たされ、この世の生涯において善き働きを成し遂げ、すべての悲しむ者たちに慈愛と慰めの門を開き、貧しい者たちの擁護者となられた。　それゆえ、パフヌティエ神父よ、我らの魂を救うよう、キリスト・神に祈り求めてください。

コンダク、第8調:

神の光に照らされ、父よ、断食の生活を送り、尊き方よ、修道士たちの最良の導き手であり、断食者たちの美しい飾りとなられた。このゆえに、主はあなたの労苦をご覧になり、奇跡の賜物をもってあなたを豊かにされ、あなたは癒やしを注ぎ出しておられる。　われらは喜びつつ、あなたに叫びます。「喜びなさい、パフヌティエ神父よ。」

- 同日には、1497年にミンスク州ストリゴロヴェ村にてタタール人に殺害された、キエフ都主教マカリア聖殉教者の記念日が祝われます。

[3355] インノケンティはこのように伝えている。年代記によれば、この聖人は日の出から数えて15時間目に息を引き取ったと記されている。5月1日のボロフスクでは日の出がおよそ4時であることを考慮すると、この計算によれば、聖人の死は夕方7時頃にあたることになる。

[3356] もっとも、年代記や聖パフヌティウスの伝記には、この修行者の埋葬の際、アンドレイ・ヴァシリエヴィチ公の霊的指導者である世俗の司祭ニキータが立ち会ったことが記されている。

[3357] ダニイル大主教は1522年から1539年までロシア教会を統率した。

聖殉教者ヴァタの殉教

記念日：5月1日

聖殉教者ヴァタはペルシャの出身であった。その先祖はキリスト教徒であり、彼自身もキリスト教の信仰の中で育てられた。三十歳に達すると、父、母、妻、子供たちを離れ、財産を貧しい人々に分け与え、実家を去って修道生活に入った。　修道生活に熱心に励む中で、彼は殉教の死をもって生涯を閉じたいと願った。当時、キリスト教徒に対する迫害が激化していた[3358]。聖人が修道生活を送っていた修道院の修道士たちが皆逃げ去ったとき、彼だけがそこに残った。　まもなく彼は捕らえられ、ニジビアの都市の統治者[3359]の裁きに付された。統治者は彼にキリストを否定し、太陽と火に拝むよう強要した[3360]が、聖人はその命令に従わず、大胆にキリストを真の神であると告白した。このため、彼は両手を強く縛られ、その強い緊張のせいで両腕が肩関節から外れてしまった。　その後、聖人は地面を引きずられ、その間、全身を殴打された。聖なる殉教者は、これらすべての拷問の末、キリストへの信仰のために、剣で斬り殺されて息を引き取った。[3361]

5月15日

5月2日（旧暦）

聖殉教者エスペルとゾイの殉教

記念日5月2日

聖殉教者エスペル、その妻ゾイア、そして二人の息子キリアクとテオドゥルは、選民の父アブラハムのように地上の旅人として、天の故郷へと向かう道を歩んでいたが、[3362]ローマの貴族カトゥルスとその妻テルティアによって奴隷として買い取られた。　このカトゥッルスは、ローマからパンフィリア[3363]、アッタリア[3364]へと移り住んだ。異教徒のローマ人の慣習に従って奴隷を購入する中で、彼はフリギア[3365]で、キリスト教徒の家庭に生まれ、それゆえ主への信仰と希望に満ちていたこれらの聖なる殉教者たちを手に入れた。

偶像崇拝に没頭していたカトゥッラの異教徒の家族は、その信仰の慣習に従って偶像に犠牲を捧げ、それらを自分たちの神々と呼んでいた。　一方、キリストに忠実な奴隷たちは、主人の虚しい不敬虔な行いを見て深く嘆き、キリスト教徒として、異教徒である主人から与えられる食事を口にすることはできなかった。特に、主人の家の中に偶像が置かれていたため、汚されることを恐れたのである。

[3358] ここでいうのは、当然ながら、310年から381年まで在位したペルシアのサポル2世王によって引き起こされたキリスト教徒への迫害のことである。

[3359] ニジビアは、古代メソポタミアの北部、アルメニア国境近くに位置する最古の都市である。

[3360] ペルシャ人は、至高の神ミトラの像として太陽を神格化し、また火を崇拝していた。

[3361] 聖殉教者の死は364年頃であった。

[3362] 古代ローマでは、同時代の他の民族と同様、奴隷制度が広く普及していた。多かれ少なかれ裕福なローマ人なら誰でも、奴隷を所有していた。非常に裕福なローマ人の場合、その数は数十人、さらには数百人に達することもあった。

[3363] パンフィリアは小アジアの地方である。

[3364] アッタリアは、小アジアの南岸に位置するパンフィリアの都市である。この都市は、建設者であるペルガモンの王アッタロス2世（紀元前159年から138年）の名にちなんで名付けられた。アダリアという名で、この都市は現在までその名を留めており、人口は1万5000人で、トルコに属している。

[3365] フリギアは、小アジアの地域である。

ある日、聖ゾイアは主人たちから食事を受け取ると、門へと近づき、門番にこう言った。

「少し眠って休んでください。もしあなたが必要になったら、私が起こします。あなたは一晩中起きて、私たちの主人の家を訪れる、架空の女神フォルトゥナ[3366] を崇拝する虚栄心のある人々を出し入れしていたのですから、もう十分に疲れているでしょう。」

門番は彼女の助言に従い、門から離れて中庭で眠りについた。一方、ゾイアは、近くに繋いであった犬たちの吠え声で彼が目を覚まさないよう心配し、犬たちに少しのパンを与えた。そして、自分の昼食の残りを、門にやってくる貧しい人々や旅人たちに配り、彼らにキリスト教への改宗を勧めた。

カトゥッラの家でのゾイアの務めは、主人が飼っている家畜に餌を与えることであり、夫と子供たちは、主人たちのために残りのすべての仕事をこなしていた。

彼らは一日中働き、日没になると、異教の儀式によって穢されていないと確信できる食事から、わずかな量を食べた。 この食事は神の摂理によって彼らに与えられたものであり、それを口にするたび、彼らは主が聖なる福音書の中で語られた言葉を思い起こした。*「空の鳥たちを見よ。彼らは種を蒔かず、刈り取らず、倉に集めもしない。それでも、あなたがたの天の父は彼らを養ってくださる」*（マタイ6:26）。

ある日、祝福されたエスパーが主人に何らかの仕事を命じられて出かけた際、彼の息子たち、キリアクとテオドゥルは母にこう言った。

「私たちはもはや不信心者たちと一緒に暮らすことを望みません。聖書に従って、*『不信者たちと異なったくびきを負ってはならない』*（IIコリント6:14）という使徒の戒めを守るよう、あなた自身が私たちに教えてくれたではありませんか。」 もし私たちが、聖書に従い、主の戒めを守りたいと願っても、異教徒たちから離れなければ、彼らと同じ報いを主から受け、彼らと同じように滅びてしまうでしょう。

母は息子たちにこう答えました。

「愛しい子供たちよ！ どうして彼らから離れられるというの？ 彼らは私たちの主人であり、私たちの体さえも支配しているのだから。」

息子たちはそれにこう答えた。

「キリストは私たちのために、不信仰なユダヤ人たちの手にご自身を委ね、十字架にかけられ、葬られ、三日目に復活されました。もし私たちも、キリストの御名のために、不義なカトゥッラの支配下に身を委ねて拷問を受けるならば、たとえ彼が拷問の末に私たちを殺したとしても、私たちの魂は永遠に生き続けるのです。 それゆえ、 、喜び、歓喜する私たちを、私たちの主の御前に立たせてください。そして、主が私たちの口に何を語らせようとも、私たちは主の御前にそう申し上げましょう。

そして、二人の善良な若者たちは、キリストの勇敢な戦士として、キリストのために苦難に耐える覚悟を整え、主人の前に出る好機を待ち、主イエス・キリストの御名をその前で告白しようとしました。彼らは互いにこう語り合いました。

「もし私たちの主イエス・キリストが、私たちがその聖なる御名のために死ぬことを御心に適うのであれば、その報いとして、私たちは主にお目にかかり、永遠に主と共にいることができるでしょう」。

ところが、彼らの母は、子供たちが他の者たちのように拷問を恐れず、偶像礼拝に身を委ねてしまうのではないかと懸念し、そのために彼らの願いを聞き入れるのをためらっていた（その時点では、支配者たちは彼らがキリスト教徒であることを知らなかった）。すると、息子たちは母にこう言った。

[3366] フォルトゥナは、ローマ人にとって幸福の女神であり、家庭の守護神とされていた。

「なぜ躊躇しているのですか？何を恐れているのですか？聖書がこう言っていることを知らないのですか！*『わたしは王たちの前で、あなたの啓示を語り、恥じることはない』*（詩篇118:46）。」

ある日、カトゥルスは昼食の時間にどこかから家へ帰ってきた。二人の兄弟、キリアクスとテオドゥルスが彼を出迎え、こう言った。

「私たちの目に見える体の主よ、あなたに幸あれ。私たちの目に見えない魂の主は、天にいます主イエス・キリスト、まことの神であられます。」

カトゥルスは彼らの言葉に大いに驚き、こう言った。

「この若者たちは正気を失ったに違いない。彼らは、私にとって奇妙で聞き慣れない『イエス・キリスト』という名を口にし、彼を神であり主であると呼んでいるのだ。」

それから、使用人たちに呼びかけて言った。

「この若者たちの父と母を私のところへ呼んで来い。」使用人たちはすぐに走り出したが、父は見つけられず、若者たちの母だけを連れてきた。カトゥルスは彼女に尋ねた。

「あなたの夫はどこにいるのか？」

彼女はこう答えた。

「あなたこそ、彼をトリトニウムの村へ、何か用事で送り出したのではありませんか？」

「もし今、あなたも彼と一緒にトリトニウスの村にいたのなら」とカトゥルスは言った。「あなたが信奉する神について、私や他の誰も聞いたことのないような話を、私に聞かせて当惑させるようなことはなかっただろうに。」　とはいえ、今はあなた方を試すつもりはない。だが、テルティアが安産を迎え、その際に我らの偉大なる女神フォルトゥナに感謝の供物を捧げる時、その時にこそあなた方を試すつもりだ。

そして直ちに、聖ゾエとその子供たちを、夫のいるトリトニアへ送るよう命じた。

そこへ移り住んだ母と子供たちは、歌や会話の中で聖書の言葉、*「主は私の牧者。私は何一つ欠けることがない。主は私を緑の牧場に休ませてくださる」*（詩編22:1–2）を思い起こし、喜び、楽しんだ。　さらに、*「あなたは私の魂を地獄から救い出された」*（詩編85:13）や*「私の魂を死から救い出された」*（詩編114:7）という言葉も（聖人たちは心の中で、主人の家を「地獄」、カトゥッラを「死」、偶像を「地獄の炎」と見なしていた）。

ところが、カトゥッロに息子が生まれた。　町の人々は皆喜び、カトゥッルスと共に息子の誕生日を祝い、彼らの女神フォルトゥナに感謝の供物を捧げた。その間、聖ゾエは神に祈り、夫と子供たちに、彼女の偉業を勇敢に乗り越える力を与えてくださるよう願った。一方、カトゥッルスは宴の終わりに、妻テルキアにこう言った。

「家族も奴隷たちも、この祝宴で存分に楽しませよう」

すると彼女はこう答えた。

「ええ、皆が楽しめばいいわ」

直ちに、エスペルの家族も含まれていた使用人たちに、偶像への生贄の宴で供されたワインの器と肉盛りの皿を送り届けた。聖ゾエは、遠くから主人の贈り物を運ぶ使用人たちの姿を見て、ため息をつきながらこう言った。

「主よ、言い表せない神よ、人の秘められた思いを知っておられる方よ！私たち、貧しい旅人たちのそばにいてください。私たちの主であるあなた以外に、私たちは他の神を知りません。私たちがあなたの聖なる御名を堅く告白できるよう、助けてください。」

そう言うと、彼女は運ばれてきた贈り物のところへ近づき、肉を手に取って犬たちに投げ与え、ワインは地面に注ぎ捨てた。使用人はすぐに主人のもとへ行き、このことを報告した。

この知らせにカトゥッラは激しく怒り、直ちにエスペルとその家族を自分の屋敷へ連れてくるよう命じた。主人のもとへ向かう道中、ゾイアは夫と子供たちを励ましながらこう言った。

「不義なるカトゥッルの怒りや、彼が私たちのために用意している苦難を恐れてはなりません。しかし、それらを勇敢に耐え忍び、その試練を終えた後、キリストと聖人たちの天の御国に入ることができるようにしましょう。」

聖人たちがその家の主人の元へ連れて行かれると、カトゥッルは彼らに尋ねた。

「私にこれほどの侮辱を加えて、一体誰の庇護を頼りにしていたのか？　よくも私たちの贈り物を犬に投げ捨てたものだ。とはいえ、私が守ろうとしているのは、自分の名誉というよりは、我らが偉大なる女神フォルトゥナの栄光である。」

聖ゾエはこれにこう答えた。

「私たちの希望と拠り所は、生ける神の御子である主イエス・キリストです。あなたが崇める神々は、悪魔に過ぎません。」

カトゥルスはこれに対し、こう言った。

「さあ、私はお前の息子たちを拷問にかける。そうすれば、お前たちが神と呼ぶキリストが、果たして彼らをその苦しみから救い出せるかどうか、見てみよう。」

すると、処刑人たちは二人の若者を裸にし、木に吊るして、鉄の道具で拷問し始めた。聖ゾイアは、子供たちの苦しみを眺めながら、次のような言葉で彼らを励ました。

「勇気を持って苦しみに耐えなさい、私の子供たちよ！　不信心なカトゥッルがあなたたちに与える苦痛を、恐れることなく耐え忍びなさい。」

子供たちは彼女にこう答えた。

「この苦しみは私たちにとってはあまりにも軽いものです。不信心なその方に、もっと大きな苦しみを考え出すよう伝えてください。そうすれば、私たちは自分の苦しみによって、来世で殉教者の冠に値する者となることができるのですから。」

聖ゾイアはカトゥッロにこう言った。

「あなたはあまりにも弱い拷問で私の子供たちを苦しめている。彼らは特別な苦しみを感じていない。もっと彼らの苦しみを増すよう努めなさい。」

そこで、不信心なカトゥルスは、聖ゾエ、至福のエスペル、そして彼らの子供たちを激しく拷問した後、全員を激しく燃え盛る炉に投げ込むよう命じ、炉の警備のために見張りを配置した。

聖なる殉教者たちは、灼熱の炉の中で主を賛美し、称え続けた。一方、カトゥルスはその歌声を聞き、聖人たちが無傷であるのを見て、これほど激しい火の力がなぜ彼らを殺さず、その体を灰に変えなかったのかと、大いに驚いた。　キリスト教徒たちが何らかの魔術によって自然の力を鎮めているのではないかと推測した彼は、彼らを殺すために、さらに残酷な別の方法を考え始めた。一方、聖なる殉教者たちには聖霊によってこう告げられた。

「勇気を出しなさい。カトゥルスは、あなた方を滅ぼすために、さらに大きな苦痛を企てている。」

これを聞いた殉教者たちは、次のように祈った。

「神よ、我らの主イエス・キリストの父よ、我らの魂を平安のうちに受け入れてください。」

そしてまもなく、聖人たちはその聖なる魂を神の御手に委ねた。

これは、ハドリアヌス帝の治世[3367]、5月の2日に起こった。

翌日、不信心なカトゥルスは、志を同じくする者たちと共に炉へとやって来ると、聖人たちの殉教者の遺体が火によって傷つけられていないのを見つけた。遺体は東を向いて横たわっており、聖

[3367] ハドリアヌス帝は117年から138年までローマ帝国を統治した。聖殉教者たちの没年は正確には不明である。

人たちの魂は、高潔な殉教者たち、天使たち、そして大天使たちの列に加わっていた。そして、天から声が聞こえた。

「義人よ、あなたがたの主の楽園に入りなさい。しかし、不義なるカトゥッルよ、あなたはゲヘナへ行き、そこで消えることのない炎の中で永遠に苦しむことになる。」

かくして、不義なるカトゥッルは果てしない苦しみを受け、キリストの聖なる殉教者たちには天が開かれた。彼らはその苦しみによって、永遠の喜びを得て、永遠の栄光にふさわしい我らの主イエス・キリストと共にいるのである。アーメン。

ロシアの公爵ボリスとグレブ、聖殉教者たちの苦難と奇跡[3368]

記念日：5月2日

義人の子孫は、永遠に祝福されるであろう（詩編111:2）。

聖ウラジーミルは、スヴィャトスラフの息子、イゴリの孫であり、聖なる洗礼によってルーシの全土を啓蒙した。彼には12人の息子がいたが、それは一人の妻からではなく、それぞれ異なる妻たちから生まれたものであった。

長男はヴィシェスラフ[3369]、次男はイジャスラフ、三男はスヴィャトポルクであり、このスヴィャトポルクこそが、兄弟たちを悪意をもって殺害することを企てたのである。スヴィャトポルクの母はギリシャ人で、かつては修道女であった。ウラジーミルの兄ヤロポルクは、彼女の美しさに魅了され、彼女を修道院から引き離して妻とした。当時まだ異教徒であったウラジーミルは、ヤロポルクを殺害し、その妻を自分の妻とした。その妻から、あの忌まわしきスヴィャトポルクが生まれたのである。そしてウラジーミルは彼を好まなかった。

ウラジーミルには他にも息子たちがいた――ログネダとの間に4人：イジャスラフ、ムスティスラフ、ヤロスラフ、ヴェセヴォロド。チェコ人の妻との間にはヴィシェスラフ、別の妻との間にはスヴィャトスラフとムスティスラフ、そしてブルガリア人の妻との間にはボリスとグレブがいた。父は彼らをそれぞれの地に公として据えた。スヴィャトポルクをピンスクに、ヤロスラフをノヴゴロドに、ボリスをロストフに、そしてグレブをムロムに[3370]。

3368 この伝記は、ヤコブ修道士による『聖殉教者ボリスとグレブの受難と殉教の称賛』と題された著作の翻訳であり、彼らの殉教から数年後、すなわちヤロスラフの治世の終わりか、あるいはイジャスラフの治世の初め、いずれにせよ1072年以前のものであり、また、古写本においてこの伝記に付随する続編の翻訳も含まれている。この翻訳は、ヤコフ修道士に続いて1091年以前に尊者ネストル・レトピセツによって著された『聖ボリスとグレブの生涯および殉教に関する読本』、ならびに聖ディミトリ・ロストフスキーによって編纂された『ロシアの公爵である聖殉教者ボリスとグレブの殺害に関する物語』ボリスとグレブ」に基づいて補足されている（5月2日の『ミネイ・チェティイ』参照）。

3369 ヴェーシスラフは、父の存命中の1010年に死去した。

3370 聖ボリスとグレブの幼少期について、ネストル修道士は次のように伝えている。聖ウラジーミルは、自分の子供たち全員を、彼らに統治を任せた各郡へ送り出したが、ボリスとグレブだけは、彼らがまだ非常に幼かったため、自分のそばに置いておいた。聖グレブはまだ幼子に過ぎなかったが、聖ボリスはすでに優れた知性を示しており、神の恵みに満ち、読み書きができ、本を読むことを好んでいた。彼は聖人たちの伝記や殉教の物語を読み、涙ながらに祈り、主が彼をこれらの聖人の一人と同じ運命に導いてくださるよう願った。彼は絶えずそのように祈り続け、聖グレブは彼のそばを離れず、その言葉を聞き続けていた。聖ボリスが成人すると、父は彼を結婚させようと考えた。しかし、聖人は結婚を望まなかった。ところが、ボヤールたちは、父の言うことを聞かないようにはならないでほしいと彼を説得した。父への従順ゆえに、聖人は彼らの願いに応じて結婚した。その後、父は彼をウラジーミル・ヴォリンスキーへの統治に派遣した。そこで彼は多くの慈悲を示したが、スヴィャトポルクが嫉妬からボリスの命を狙っていることを知ると、彼をキエフへ呼び戻した。これは、ボリスがロストフへ派遣される前の出来事であった可能性がある。

聖なる洗礼を受けてから28年が過ぎた頃、ウラジーミルは重い病に倒れた。ちょうどその頃、ロストフからボリスが父のもとを訪れた。ペチェネグ族[3371] が軍勢を率いてルーシへと進軍しており、ウラジーミルは不信心者たちに立ち向かう力がなかったため、深い悲しみに沈んでいた。 このことに心を痛めた彼は、聖なる洗礼の際に「ロマン」[3372] という名を授けられたボリスを呼び寄せた。父は、敬虔で従順なボリスに多くの兵士を与え、不信心なペチェネグ族に対して彼を派遣した。 ボリスは喜びながら出陣し、父にこう言った。「父よ、私はあなたの心の望むことを成し遂げる用意ができています。」

これについて箴言にはこう記されている。*「その子は父に従順で、母に愛されていた」*（箴言4:3）。

しかし、ボリスは敵を見つけることができなかった。帰路の途中、使者が彼のもとにやって来て、父であるウラジーミル―― 聖なる洗礼においてヴァシリーと名付けられたが、亡くなった[3373] 。そしてスヴィャトポルクは父の死を隠蔽し、夜中にベレストヴォ村の宮殿の床を解体し、故人の遺体を絨毯に包み、縄で下ろし、そりで[3374] を運び、聖母マリア教会[3375] に運び、そこに安置した。これらすべては秘密裏に行われた。

これを聞いたボリスは、体がぐったりとし、顔中が涙で濡れ、言葉も出なかった。しかし心の中では、父をこう嘆き悲しんでいた。「ああ、哀れな私よ。わが目の光、わが顔の輝きと曙、わが青春の導き手 、わが愚かさを戒めてくださった方よ。ああ、哀れな私よ、わが父、わが主よ！ 私は誰にすがればよいのか、誰を見ればよいのか、どこであなたの知恵による良き教えと懲らしめに満たされるのか。ああ、私は哀れだ、ああ、私は哀れだ！ 私の太陽は沈んでしまったが、私はその場にいなかった。あなたの尊い遺体を自ら着せ、自分の手で棺に納めることもできなかった。あなたの美しく力強い遺体を抱くこともできず、あなたの白髪に口づけすることさえ許されなかった！ ああ、私の至福なる父よ、あなたの安息の地で私を覚えていてください。 私の心は燃え上がり、理性は混乱している。誰に打ち明け、この苦い悲しみを語ればよいのか分からない。もし、父の代わりに私が持っていた兄弟に話せば、彼は世の虚栄や、私を殺すことばかり考えているようだ。もし彼が私を殺す決心をしたとしても、私は主の殉教者となるだろう。 しかし、私は抵抗しません。なぜなら、*「主は高ぶる者に敵対し、へりくだる者には恵みを与えられる」*（ヤコブ4:6）と書かれているからです。使徒は言います。*「『私は神を愛している』と言いながら、兄弟を憎む者は、偽り者である」*（1ヨハネ4:20）。 さらに、*「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを追い払う」*（1ヨハネ4:18）*ともある*。しかし、私は何を言い、どうすべきだろうか。私は兄弟のもとへ行き、こう言おう。「あなたは私にとって父であり、長兄である。主よ、私に何を命じられるか？」

そう心の中で考えながら、ボリスは兄のもとへ向かい、心の中でこう語った。「そこで、私は弟のグレブの顔を、ヨセフがベニヤミンの顔を見たように見るだろう。主よ、あなたの御心が行われますように」（創世記43:29）。

そしてボリスは考えた。「もし私が父の家へ帰れば、多くの人々が、かつて父が聖なる洗礼を受ける前に、この世の公国の栄光のために私の弟を追放したように、私の心をその考えへと向かわせ

3371 ペチェネグは、テュルク系遊牧民族であり、10世紀後半からルーシへの襲撃を開始した。聖ウラジーミルは、ペチェネグに対する防衛線として、デスナ川、オストル川、トルベジュ川、スーレ川、ストゥグネ川沿いに都市を建設した。その後、南ルーシの草原地帯から、同じくテュルク系民族であるトルコ人やポロヴェツ人によって、彼らは駆逐された。

3372 聖ロマン・スラドコペヴェツの名の下に

3373 1015年7月15日

3374 古代ルーシでは、故人をそりに乗せて教会へ運び、葬儀を行う習慣があった。

3375 言うまでもなく、聖ウラジーミルが建設し装飾した、聖母マリアの栄光に捧げられたキエフのデシャティンヌイ教会である。古代のプロローグでは、この教会の奉献は5月11日に行われたと記されている。

るだろう[3376] 。しかし、それらはすべてはかないものであり、朽ちゆくものであり、蜘蛛の巣よりも無価値である。　もし私がこれに踏み切るとしたら、どこへ行けばよいのか、私に何が起こるのか、その時私はどのような答えを返せばよいのか、私の数多くの罪をどこに隠せばよいのか。　私の父の兄弟たちや父自身が得たものは何だったのか。彼らの生涯とこの世の栄光、紫の衣と饗宴、銀と金、ワイン、蜂蜜と小麦粉、俊足で背の高い馬、膨大な財産、数え切れないほどの貢ぎ物と栄誉、そして自らのボヤールたちへの誇り――これらすべては、あたかも最初から存在しなかったかのように、彼らと共にすべて消え去ってしまった。　そして彼らには、誰からも、財産からも、数多くの奴隷からも、この世の栄光からも、助けはない。ソロモンもまた、すべてを経験し、すべてを見、すべてを手に入れ、すべてを吟味した上でこう言った。*「空しい、空しい、すべては空しい」*（伝道の書 1:2）。助けは、善行と正しい信仰、そして偽りのない愛からのみ得られるのだ」。

自らの道を歩みながら、ボリスは自身の体の美しさと力について思い巡らし、苦々しく泣いた。涙をこらえようとしたが、できなかった。そして、涙に暮れる彼を見る者たちは皆、その高貴な美しさと善良な知性に心を痛め、一人ひとりが心の中で悲しんだ。彼の悲しみに、誰もが心を揺さぶられたのである。　ボリスの死を予感し、彼の憂いを帯びた顔と悲しみを目の当たりにして、誰が涙を流さずにいられようか！　なぜなら、この至福の公は、真実で、寛大で、穏やかで、柔和で、謙虚であり、すべての人を慈しみ、すべての人を助けていたからである。

しかし、聖ボリスを支えていたのは、たとえ弟が悪人たちの唆しによって彼を殺したとしても、自分は殉教者となり、主がその霊を受け入れてくださるという考えであった。彼は死の悲しみを忘れ、神の御言葉をもって自らの心を慰めた。*「わたしと福音のために自分の魂を失う者は、それを保つであろう」*（マルコ8:35）という言葉で心を慰め、永遠の命においてそれを守られると信じていた。

そしてボリスは喜びに満ちた心で歩きながら、こう言った。「慈悲深き主よ、あなたを信頼する私を軽んじないでください。どうか私の魂を救ってください」。

一方、スヴィャトポルクはキエフで父の公爵の座に就き、キエフの人々を呼び集め、多くの贈り物を配って彼らを帰した。その後、ボリスに次のような言葉を伝えて使者を送った。

「兄弟よ、私はあなたと愛をもって共に生きたい。そして、父の遺産におけるあなたの取り分を増やしてやろう。」

この言葉には、真実ではなく、お世辞が込められていた。

スヴィャトポルクは夜陰に乗じて密かにヴィシェゴロドに到着し、プツシャとヴィシェゴロドの重臣たちを呼び寄せ、こう言った。

「正直に答えてくれ。お前たちは私に対して好意を抱いているか。」

プツシャは言った：

「我らは皆、お前のために命を捧げる覚悟がある。」

古来より善良な人々を憎む悪魔は、聖ボリスがすべての希望を神に託しているのを見て、スヴィャトポルクへの影響力を強めた。スヴィャトポルクはカインのように兄弟殺しの炎に燃え、父のすべての後継者を打ち倒し、独りでその権力を掌握しようと企んでいた。

忌まわしき、呪われたスヴィャトポルク――あらゆる悪の助言者であり、あらゆる不正の首謀者――は、再びヴェシゴロドの勇士たちを呼び寄せ、その忌まわしい口を開き、邪悪な声を張り上げて、プツシャの部下たちにこう言った。

「もしあなたがたが、私のために命を捧げることを約束するなら、兄弟たちよ、密かに出かけて、私の兄弟ボリスを探し出し、好機を捉えて彼を殺せ。」

[3376] ウラジーミルは、弟のヤロポルクに対しても同様の措置をとった。

そして彼らはスヴィャトポルクに、その通りにすると約束した。預言者は、このような人々についてこう語っている。「*彼らの足は悪へと走り、彼らは無実の血を流すことに急ぐ。彼らの道は不法であり、不義によって自らの魂を包み込む*」（箴言1:16；イザヤ59:6–7；ローマ3:15）。

帰路についた聖ボリスは、アルテ川[3377] のほとりの天幕に立ち止まった。すると、彼の家臣たちが彼に言った。

「行って、父の公爵の座に着きなさい。すべての兵士たちがあなたのもとに集まっているのだから[3378] 。」

すると彼は彼らにこう答えた。

「私は兄弟に、ましてや私より年上で、父として敬うべき者に、手を下すことはできない。」

これを聞いた兵士たちはボリスのもとを去り、彼には自分の若者たちだけが残った[3379] 。

その日は土曜日であった。

悲しみに打ちひしがれ、彼は自分の天幕に入り、涙を流しながら哀切に叫んだ。

「主よ、私の涙を軽んじないでください。私はあなたに信頼を置き、あなたのしもべたち、そしてあなたのすべての聖人たちと共に、その運命を受け入れることを願います。あなたは慈悲深い神であり、私たちは永遠にあなたに栄光を捧げます。アーメン。」

そう言いながら、彼は聖ニキータと聖ヴィャチェスラフの拷問と苦難を思い巡らし、自分もこの公爵のように殺されるだろうと考え、また聖バルバラが実の父によって殺されたことを思い起こした。　彼には、賢明なるソロモンの言葉が思い起こされた。*「義人は永遠に生き、その報いは主にある。彼らを顧みられるのは至高者である」*（箴言5:15）。この言葉だけで、彼は慰められ、喜びを得た。

夕暮れが訪れ、聖ボリスは晩課を執り行うよう命じた。そして自身は天幕に入り、苦い涙と絶え間ない嘆息、そして数え切れないほどの嗚咽を伴いながら、祈りと晩課を捧げた。その後、横になって眠りについた。　そして彼の夢は、いかにして苦難に身を委ね、この世の生涯を終え、信仰を守り抜き、全能者の御手から用意された冠を受け取るかについて、多くの思いと深く恐ろしい悲しみに満ちていた。

早朝に目を覚ますと、すでに早課の時間であることに気づいた。その日は聖なる復活の日であった。そこで彼は自分の司祭に言った。

「起きなさい。早課を始めなさい。」

そして、自ら靴を履き、顔を洗い、主なる神に祈りを捧げ始めた。

スヴィャトポルクが遣わした使者たちは夜中にアルトゥに到着し、近づくと、聖なる殉教者が早課で歌われる詩篇を歌っている声を聞いた。聖人には、まもなく殺害されるという知らせがすでに届いており、彼はこう歌っていた：

–*「主よ！　私の敵はなんと増え続けたことか！　多くの者が私に立ち向かう！」*（詩編3:2）など、その他の詩編。

それから彼はこう歌い始めた。

–*「犬たちが私を取り囲み、多くの雄牛が私を包囲した」*。続いて、*「主よ、わが神よ！　私はあなたに望みを置く。私を救ってください！」*（詩編21:17、13:1–7、7:2）。

その後、カノンを歌った。早課を終えると、聖ボリスは主のイコンの前で祈りを捧げ、こう言った。「主イエス・キリストよ、あなたはこのようにして地上に現れ、自ら進んで十字架に上り、私

[3377] 南ペレヤスラヴリ近郊。

[3378] ネストールの伝承によれば、ボリスのドリュジナ（親衛隊）は約8,000人であった。

[3379] ネストルの伝承によれば、聖ボリスはスヴィャトポルクのもとへ、懇願する少年を遣わした。しかし、スヴィャトポルクはその少年を自分のもとに留めてしまった。

たちの罪のために苦しみを受けられました。私にも、その苦しみにあずかる恵みをお与えください」。

すると、天幕の近くで激しい足音が聞こえると、聖ボリスは身震いし、涙に暮れてこう言った。「主よ、この世において、嫉妬ゆえに苦い死を受け、あなたの愛と御言葉のために苦しむことを私に許してくださったことを、あなたに栄光がありますように。なぜなら、私は自ら公爵の地位を求めることを望まなかったからです。　私は何事においても独断で行動したことはなく、使徒の言葉通り、*『愛は寛容であり、すべてを信じ、自分の利益を求めない』*（Iコリント13:4–7）からです。また、*『愛には恐れがない。完全な愛は恐れを追い払う』*（Iヨハネ4:18）*ともあります。*　主よ、私の魂はあなたの御手の中にあります。私はあなたの戒めを忘れませんでした。主の御心に適うがごとく、そうありましょう」。

司祭と、聖ボリスの僕である少年は、主人が衰弱し、悲しみに打ちひしがれているのを見て、痛切に泣きながらこう言いました。

「愛すべき、私たちの尊い主よ、あなたはなんと大きな恵みにあずかったことでしょう。たとえ多くの兵士を従えていたとしても、キリストの愛のために、兄弟に逆らおうとはされなかったのですから。」

彼らは感極まってそう語った。

その時、彼らは天幕に向かって駆け寄ってくる者たちの姿、その武器の輝き、そして抜かれた剣を目にした。キリストの聖なる殉教者ボリスの尊い御体は、容赦なく貫かれた。プツシャ、タレツ、そしてエロヴィチ・リャシュコが槍で彼を突き刺したのである。

これを見て、聖ボリスの若き従者は彼の遺体へと飛びつき、こう言った。

「愛する主よ、私はあなたを置き去りにしません。あなたの肉体の美しさが消え去ったこの場所で、私もまた、あなたと共に生涯を閉じることを許されたいのです。」

彼はハンガリー出身で、ゲオルギーという名だった。聖ボリスは彼に金のグリヴナを授け、彼は公爵から限りなく愛されていた。その時、その少年も貫かれた。

傷を負った聖ボリスは恐怖に駆られて天幕から飛び出した。すると、彼を取り囲んでいた者たちが言った。

「何をしているのか、ただ立ち尽くして見ているだけか？　命じられたことを成し遂げよう。」

これを聞いた聖人は、彼らに懇願し、こう訴えかけた。

「愛する兄弟たちよ！　少し待ってくれ。私の神に祈らせてほしい。」

そして涙を流しながら天を仰ぎ、苦々しくため息をつくと、こう祈り始めた。

「慈悲深き主なる神よ、あなたに栄光あれ。あなたは私をこの世の誘惑から解き放ってくださったからです。あなたに栄光あれ、寛大なる命の与え主よ。あなたは私に、あなたの聖なる殉教者たちの苦難に与る恵みを授けてくださいました。あなたに栄光あれ、人を愛する主よ。あなたは私の心の願いを叶えてくださいました。　キリストよ、あなたの憐れみに栄光あれ。あなたは私の足を正しく平和な道へと導き、誘惑に惑わされることなくあなたのもとへ歩ませてくださいました。あなたの聖なる高みから私を見下ろし、私の親族から受けたこの心の苦しみをご覧ください。なぜなら、今日、彼らはあなたのために私を殺そうとしているからです。　彼らは私を子羊のように食い尽くそうとしています。主よ、あなたはご存知です。私が抵抗も反論もしないことを。父の配下のすべての兵士と、父の寵愛を受ける者たちをすべて手中にしながらも、私は兄弟に対して悪事を働くなどとは微塵も考えませんでした。それなのに、彼は全力を挙げて私に立ち向かってきました。　もし敵が私を侮辱したとしても、私は耐え忍んだでしょう。もし憎む者が私を辱めたとしても、私は身を隠したでしょう。しかし、主よ、どうか私と私の兄弟との間をご覧になり、裁きを下してください。そして、この罪を彼の責めとせず、私の魂を安らかに受け入れてください。アーメン。

それから、殺害者たちへと疲れ果てた顔を向け、哀れみ深い眼差しで彼らを見つめ、涙を流しながら、こう言った。

「兄弟たちよ、近づいて、命じられたことを成し遂げなさい。そして、私の兄弟にも、あなた方にも平安がありますように、兄弟たちよ。」

聖人の言葉を聞いた者たちは皆、恐怖と深い悲しみ、そして溢れる涙のあまり、声も出せなかった。皆、苦々しいため息をつきながら哀れみに満ちて泣き、一人ひとりがこう思った。

「ああ、哀れな私よ。わが愛しき、尊き、至福の公爵よ。盲人の導き手、裸者の衣、老人の杖、無学な者への教えよ！」 誰がこれを正すのか？ なんと驚くべきことか、あなたはこの世の栄光や威光を望まず、高潔な貴族たちの仲間入りを望まなかったのだ！ 彼の偉大な謙虚さに驚かない者がいるだろうか、その謙虚さを見て聞いて、心を改めない者がいるだろうか！

スヴィャトポルクが送り込んだ者たちは、多くの若者たちをも殴打した。しかしゲオルギーからは首飾りを外すことができなかったため、彼らは彼の首を切り落とし、それを投げ捨てた。そのため、その後も彼の遺体を特定することはできなかった。彼らは福者ボリスを天幕で包み、荷車に乗せて運び去った。

森に着くと、聖ボリスは頭を垂れ始めた。これを知ったスヴィャトポルクは二人のヴァリャーグを送り込み、彼らは殉教者の心臓を剣で貫いた。そして直ちに聖人は息を引き取り[3380] 、生ける神の御手に魂を委ね、7月24日にこの世を去った。 その遺体は密かにヴィシェゴロドへ運ばれ[3381] 、聖ヴァシリー教会のそばに安置され、地中に埋葬された。

こうして聖ボリスは、キリスト・神から冠を受け、義人たちに加わり、預言者や使徒たち、そして殉教者たちの列に加わり、アブラハムの懐に安らぎ、言い表せない喜びを味わい、天使たちと共に歌い、聖徒たちの列の中で喜びを分かち合っている。

一方、忌まわしい殺人者たちはスヴィャトポルクのもとへやって来て、不法な者たちながら、あたかも自分たちが称賛に値するかのようであった。悪魔の僕とは、まさにこのようなものである。なぜなら、悪魔は悪のために遣わされ、天使は善のために遣わされるからである。天使は人に悪を行うことはなく、常にその人の幸福を思う。 天使はキリスト教徒を助け、敵対する悪魔から彼らを守ります。一方、悪魔は常に悪を企み、常に人間を妬んでいます。なぜなら、人間が神に愛されているのを見ているからです。人間を妬む悪魔は、その人に悪を行おうと躍起になります。主は「誰がアハブを惑わすのか」とお尋ねになり、悪魔は「私が行きます」と答えました（列王記下22:20, 21）。しかし、悪を志す邪悪な人は、その悪において悪魔に劣らない。悪魔たちは人を恐れるが、邪悪な人は神を恐れず、人々を恥じもしない。悪魔たちは主の十字架を恐れるが、邪悪な人は十字架さえも恐れない。そこで預言者ダビデは彼らにこう言った。 *「人の子らよ、あなたがたはまことに真実を語り、公正に裁いているのか。あなたがたは心に不義を企て、地上で自分の手の悪行を天秤にかけている。不義な者たちは生まれながらにして背き、母の胎内からすでに迷い、偽りを語る。彼らの毒は、蛇の毒のようだ」*（詩篇57:1–4）。

忌まわしきスヴィャトポルクはこの殺害にとどまらず、狂乱のあまりさらに大きなことを企て始めた。心の望みが叶ったのを見て、彼はそのような邪悪な殺害や自身の誘惑について深く考えることもなく、少しも悔い改めの気持ちを抱かなかった。 サタンが彼の心に侵入し、さらに大きく、より悪質な犯罪、そしてさらなる殺戮へと彼を煽り立てた。 そして、その忌まわしき者は考えた。「私はどうすればよいのか？もしこの殺害で手を止めれば、私には二重の災いが待ち受けている。私の兄弟たちはこの犯行を聞きつけ、すぐに私に対して、犯した罪よりもさらにひどい仕打ちを下すだろう。たとえそうはしなかったとしても、私を追放するに違いない。そうすれば、私は父の王座から遠

[3380] ネストルの伝承によれば、暗殺者の一人が聖ボリスの心臓を刺した。

[3381] ヴィシェゴロドはキエフから15ポプリシュの距離にある。

ざけられ、我が国への未練に苛まれることになる。　敵たちは私を誹謗し、私の統治権は他人の手に渡り、私の家には住む者もいなくなるだろう。なぜなら、私は主が愛しておられる者を迫害し、傷にさらに病を加え、病を悪化させたからだ。それゆえ、私は不義に不義を重ねる。母の罪は清められず、私はやはり義人たちの名簿に記されることはない。それならば、いっそ命の書から私の名を消し去ってしまおう」。

これを心に企てたこの悪魔の邪悪な手先は、聖グレブに次のように伝言を送った[3382]：「急いで来い。父上は大変体調が悪く、あなたを呼んでいる」。

グレブは直ちに馬にまたがり、少数の従者を連れて呼び出しに応えて駆け出した。彼がヴォルガ川に到着し、ティーマ川の河口付近の野原で、馬が溝につまずいて足を負傷した。その後、スモレンスクに到着し、スモレンスクを離れてほど近いスミャディナ川で舟に乗り、そこで留まった。

その頃、プレドスラヴァからヤロスラフのもとへ、父の死の知らせが届いた。ヤロスラフはグレブのもとへ使者を送り、「行かないでくれ、兄弟よ。お前の父は亡くなり、お前の兄弟はスヴィャトポルクに殺されたのだ」と伝えた。

これを聞いた聖人は悲しみに打ちひしがれ、苦々しく泣き叫び、こう言った。

「ああ、哀れな私よ、わが主よ。私は二つの涙を流し、二つの嘆きを漏らしています。ああ、哀れな私よ、ああ、哀れな私よ。父の死を嘆き、さらに絶望のうちに、わが兄弟であり主であるボリスよ、あなたを嘆いています。いかにあなたが貫かれ、いかに慈悲もなく死に追いやられたことか——しかも敵からではなく、自らの兄弟の手によって死を迎えたのです。　ああ、私はなんと哀れなことか！　あなたと共に死ぬ方が、あなたを失って孤児となったこの世で独り生きるよりもましだった。私はあなたの天使のような御顔を見られると思っていた。それなのに、なんと大きな悲しみが私を襲ったことか。主よ、私はあなたと共に死ぬことを望んだ。　さて、父の美しさと深い知恵に心を打たれ、悲しみに暮れる私は、今、どうすればよいのでしょうか。愛する兄弟であり主よ、もしあなたが神から大胆さを与えられているのなら、この気落ちした私のために祈ってください。そうすれば、私も同じ死を迎え、この誘惑に満ちた世ではなく、あなたと共に生きることができるように。

聖グレブがそう嘆き、涙で大地を濡らし、ため息交じりにたびたび神に祈りを捧げていたとき、突然、スヴィャトポルクが送り込んだ邪悪な家来たちが現れた。彼らは容赦のない血に飢えた者たちであり、兄弟を憎む凶暴な者たちで、獰猛な魂の持ち主であった。　聖人は舟で下っていたが、彼らはスミャディニ川の河口で彼に出くわした。彼らを見て、聖人は心から喜びを覚えたが、彼らは顔を曇らせ、聖人のいる方へと舟を進め始めた。　聖人は、彼らから口づけを受けることを期待していた[3383]。舟が並んだとき、悪党たちは公爵の舟の舷側を掴み、自分たちのほうへ引き寄せ、水のように輝く抜刀した剣を手に、その舟へと飛び乗ろうとした。 その瞬間、漕ぎ手たちの 手から櫂が落ち、皆、恐怖のあまり身動きが取れなくなった。聖人は、自分たちが殺されようとしているのを見て、悪党たちを慈愛に満ちた眼差しで見つめ、心を痛め、謙虚な心と度重なる嘆息を漏らし、涙を流し、体が衰弱していく中で、哀れみを込めて彼らに懇願し始めた。

「私に触れないでください、愛しき兄弟たちよ、私に触れないでください——私はあなた方に何の悪事も働いていません。私に触れないでください、愛しき兄弟たち、そして主たちよ、私を捕らえないでください。私は兄弟や、兄弟たち、主たちであるあなた方に、いったいどのような恨みを与

[3382] 敬虔なるネストルの伝承によれば、聖ウラジーミルはボリスを公位に就かせた後、グレブを自分の元に残した。父の死後、聖グレブはスヴィャトポルクによる暴力を恐れ、北の兄のもとへ逃げることを企てた。　聖母マリア教会で祈りを捧げた後、彼は舟に乗り込み、逃亡した。これは聖ボリスが殺害される前のことである。

[3383] 聖ネストル師の伝承によれば、殺し屋たちは長い間、舟で聖グレブを追跡した。彼らが近づいてきたとき、聖グレブは彼らの悪意を察し、同行者たちに武器を手に取ったり抵抗したりしないよう懇願した。従順であれば単に兄のもとへ連れて行かれるだけだが、抵抗すれば全員が斬り殺されてしまうだろうと語ったのである。　聖人の願いに応じて、同行者たちは岸に上陸し、少年たちと共に川の中央に残された聖人を哀れみの眼差しで見送った。

えたというのでしょうか？　もし何か過ちがあるのなら、私をあなた方の君主のもとへ、そして私の兄弟であり主である方のもとへ連れて行ってください。私の若さを憐れんでください、容赦してください、主たちよ。私を主として扱ってください、私はあなた方の奴隷です。まだ熟していない私を刈り取らないでください。まだ実が熟していない穂を刈り取らないでください。その穂は、悪意のない純真さに満ちているのです。　まだ成長しきっていないが、すでに実をつけているぶどうの枝を切り落とさないでください。お願いいたします。使徒たちの口を通してこう言われた言葉を心に留めてください。*「心において子供であってはならない。悪に関しては、幼子でありなさい」*（Iコリント14:20）。これは殺人ではなく、未熟なものを刈り取る行為に過ぎません。　私が何が悪かったのか、証明してみせなさい。もしあなたがたが私の血を飲み干そうとするなら、私は惜しまない。私はすでに、兄弟たちよ、あなたがたの手の中、そして私の兄弟であるあなたがたの首長の手に落ちているのだから。

しかし、殺し屋たちはその言葉に少しも恥じ入ることはなく、彼らの企みを改めることもなかった。まるで獰猛な獣のように、彼らは聖人に襲いかかり、そうして彼を捕らえた。聖人は、彼らが自分の言葉に耳を貸さないのを見て、こう語り始めた。

「どうか救われ給え、わが愛する父であり主君であるヴァシリーよ。どうか救われ給え、母でありわが女主人よ。どうか救われ給え、兄弟ボリスよ、わが青春の仲間よ。兄弟ヤロスラフよ、わが助っ人よ。そして、兄弟であり敵であるスヴィャトポルクよ、お前も救われ給え。そして、兄弟たちよ、ドリュジナよ、あなた方皆も救われ給え。　もはやこの世で皆様にお目にかかることは叶いません。なぜなら、私は無理やり皆様から引き離されてしまうからです。

そして彼は涙ながらにこう言った。

「ヴァシリー、ヴァシリー、わが父よ、耳を傾けて、わが声を聞いてください。ご覧なさい、あなたの息子に何が起きたのか、罪もないのに、いかにして私が殺されようとしているかを。ああ、哀れな私よ、ああ、哀れな私よ！天よ、聞き入れよ。地よ、耳を傾けよ（申命記32:1参照）。そして、兄弟ボリスよ、私の声を聞いてください。私は父ヴァシリーに呼びかけましたが、彼は私の言うことを聞き入れませんでした。まさか、あなたも私の声を聞こうとしないのですか？私の心の悲しみと、魂の傷、川のように流れ落ちる私の涙を見てください。　誰も私の声に耳を傾けてはくれない。しかし、あなたは私を覚えて、すべての主なる神に私のために祈ってください。あなたは大胆に、御座の前に立つ者だからです。

彼はひざまずき、こう祈り始めた。

「寛大で、あわれみ深い主よ、私の涙を軽んじないでください。どうか憐れみをもって、私の砕かれた心をご覧になってください。私は今、苦しみに苛まれています。しかし、その理由や、どのような罪のためなのか、私にはわかりません。　主よ、わが主よ、あなたはご存知です。私は、あなたが使徒たちにこう言われたことを知っています。*「わたしの名のために、あなたがたに手をかけ、あなたがたは親族に引き渡される。また、兄弟は兄弟を死に渡し、あなたがたはわたしの名のために殺される」*（マタイ10:17, 21参照）。そしてまた、*「あなたがたの忍耐によって、あなたがたの魂を救いなさい」*（ルカ21:19）とも。主よ、ご覧になり、裁いてください。主よ、私の魂はあなたの御前に備わっています。父と子と聖霊に、栄光を捧げます。

それから、殺し屋たちを見据え、静かな声で彼らに言った。

「さあ、手をつけ、あなたがたが遣わされた目的を成し遂げなさい。」

すると、忌まわしきゴリャセルは、直ちに彼を斬り殺すよう命じた。料理長のグレバ、通称トルチンは、ナイフを抜き、ひざまずき、聖グレバの頭を抱え、悪意のない子羊のように、その祝福された者の喉を切り裂いた。これは九月の五日、月曜日であった。　こうして、清く、聖く、芳しい供え物が主のもとに捧げられ、天の御殿へと昇り、神のもとへ至った。聖人は待ち望んでいた兄弟と再会し、二人は共に、切に願っていた天の冠を授かった。そして、兄弟愛によって得た言葉に尽くせぬ

喜びに満ち溢れた。*「兄弟が共に暮らすことは、なんと良く、なんと楽しいことか！」*（詩編132:1）。

あの忌まわしい殺人者たちは、預言者ダビデが言ったように、彼らを送り出した者のもとへ戻った。*「不義な者たち、神を忘れるすべての民は、陰府へ戻れ」*（詩編9:18）。また、*「不義な者たちは剣を抜き、弓を引きしめ、正しい道を歩む者たちを貫こうとする。　彼らの剣は彼ら自身の心に突き刺さり、彼らの弓は砕かれる。そして不義な者たちは滅び、消え去り、煙のように消え去る」*（詩篇36:14–15, 19, 20）。

そして彼らはスヴィャトポルクに言った。

「我らは、あなたが命じられたことを成し遂げました。」

これを聞いて、彼は心高ぶった。そして、詩人ダビデが語った言葉が実現した。*「なぜ、悪事を誇りとするのか、強者よ。あなたの舌は滅びを企んでいる。あなたは善よりも悪を、真実を語るよりも偽りを好む。　あなたはあらゆる破滅的な言葉を愛し、その舌は狡猾である。それゆえ、神はあなたを徹底的に打ち砕き、あなたの住まいからあなたを引き抜き、生ける者の地からあなたの根を断ち切るであろう」*（詩篇51:3–7）。 やソロモンが言ったように： *「わたしはあなたがたの滅びを嘲り、あなたがたに恐怖が襲いかかる時、喜び祝う。それゆえ、彼らは自分の道の果実を味わい、自分の思いのままに満ち足りるであろう」*（箴言1:26,31）。

聖グレブが殺害された時、その遺体は人里離れた場所、二本の丸太の間に捨てられた。しかし、主は決して御自分のしもべを見捨てられることはない。ダビデが言ったように、*「主は彼のすべての骨を守られる。その骨の一つも砕かれることはない」*（詩篇33:21）。 そして、聖人の遺体が長い間荒れ地に横たわっていたとき、主はその遺体を無知と無関心のままに放置されることはなく、時には灯るろうそくによってその場所を示し、時には通りかかった商人や猟師、羊飼いたちが天使の歌声を聞くようにされた。　しかし、これを耳にした者も目撃した者も、聖人の遺体を探そうとは思い至らなかった。やがて、この殺害に憤ったヤロスラフが、兄弟殺しである呪われたスヴィャトポルクに対して戦いを挑み、多くの戦いの苦労を経て、神の助けと聖なる殉教者たちの支援により、彼を打ち破ったのである。 こうして、不敬虔な者は恥をかかされ、打ち負かされた。

兄弟たちを殺害したスヴィャトポルクは、キエフで公の座についた。一方、ヤロスラフは父の死をまだ知らなかった。ヤロスラフの配下には多くのヴァリャーグがおり、彼らはノヴゴロドの住民やその妻たちに暴行を加えていた。　ノヴゴロドの住民たちは憤慨し、パラモンの庭でヴァリャーグたちを打ちのめした。するとヤロスラフは激怒し、「殺された者をよみがえらせることなどできない！」と叫び、庭にある公爵の裁判所から、ヴァリャーグたちを斬り殺したノヴゴロドの貴族たちを呼び寄せ、騙して皆殺しにした。

その同じ夜、キエフから妹のプレドスラヴァを通じて「父が亡くなった。スヴィャトポルクがキエフを治めており、彼はボリスを殺害し、グレブには暗殺者を送り込んだ。彼に気をつけなさい」という知らせが届いた。

これを聞いたヤロスラフは、父と兄、そして妻のことを思い、悲しみに沈んだ。翌日、彼は残りのノヴゴロド人たちを集めて言った。

「愛する我がドリュジナよ！昨日はお前たちを殺してしまったが、今となってはお前たちが役に立つだろう。」

彼は涙をぬぐい、ヴェーチェでノヴゴロドの人々にこう言った。

「我が父は亡くなり、スヴィャトポルクはキエフに居座り、兄弟たちを殺し続けている。」

すると、ノヴゴロドの人々は彼にこう言った。

「たとえあなたが我らの兄弟を殺したとしても、我々はあなたのために戦うことができる。」

ヴァリャーグ千人と、その他の戦士四万人を集めたヤロスラフは、神の助けを祈り、スヴィャトポルクに向かって進軍し、こう言った。「兄弟たちを殺し始めたのは私ではなく、彼だ。　ならば

、兄弟たちの血の責任は彼に負わせよ。彼は無実のボリスとグレブの正しい血を流したのだから、私に対しても同じことをするかもしれない。しかし、神よ、真実をもって裁き、この罪人の悪意を終わらせてください」

そして、スヴィャトポルクへと向かった。一方、スヴィャトポルクはヤロスラフの進軍を聞くと、ルシとペチェネグの無数の軍勢を集め、リュベチへと出陣した。

それは6524年（1016年）の夏のことだった。

両軍はドニエプル川で遭遇し、川の両岸に互いに向き合って陣を敷いたが、どちらの軍も戦いを始める勇気を持てなかった。こうして彼らは約3ヶ月間、互いに向き合ったまま立ち尽くしていた。すると、スヴィャトポルクの軍司令官が川岸を馬で巡りながら、ノヴゴロドの人々を叱責し始めた。

「なぜ足の不自由な男を連れてきたのだ。お前たちは大工だろう。さあ、我々のために豪邸を建てさせてやる。」

これを聞いたノヴゴロドの兵士たちは侮辱されたと感じ、ヤロスラフにこう言った。

「明日、川を渡る。もし我々と共に来ない者がいれば、我々が自らその者を殺してやる。」

その頃にはすでに霜が降り始めていた。スヴィャトポルクは二つの湖の間に陣を敷いていた。岸に上陸すると、彼は一晩中、家臣たちと酒を酌み交わした。夜明けとともに、ヤロスラフは軍を率いて川を渡り、上陸すると船を岸から押し出した。

そして両軍は互いに進軍し、激突した。激しい戦闘が繰り広げられたが、ペチェネグ族は湖の向こう側にいて、スヴィアトポルクを助けることができなかった。ヤロスラフの兵士たちはスヴィアトポルクの軍勢を湖のほとりに追い詰め、氷の上へと押しやったところ、その下で氷が割れてしまった。こうしてヤロスラフが優勢となった。

これを見たスヴィアトポルクは、リトアニア人たちの元へ逃げた。一方、ヤロスラフは、ノヴゴロドに28年間滞在した後、キエフで父の領地を継いだ。

2年後、スヴィャトポルクはボレスワフ王やポーランド人と共にヤロスラフに攻め込んだ。ヤロスラフはルーシ、ヴァリャーグ、スロヴェン人から軍を集め、ヴォリニアへと向かった。　両軍はブガ川で遭遇し、対岸に陣を敷いた。ヤロスラフには乳母であるブディの軍司令官がおり、彼はボレスラフを非難し始めた。

「さあ、我々は槍で汝の腹を貫いてやる。」

一方、ボレスラフは巨体で重く、馬に乗るのもやっとだった。そこでボレスラフは自分の軍勢にこう言った。

「もしお前たちがこの非難を侮辱と受け取らなければ、私一人だけが死ぬことになるだろう。」

そして馬に乗ったまま川に飛び込み、彼の兵士たちも後を追った。一方、ヤロスラフは戦いの準備が間に合わず、ボレスラフに敗れた。　ボレスラフはスヴィャトポルクと共にキエフに入城し、ヤロスラフは4人の家臣を連れてノヴゴロドへ逃れた。そこから彼は海を越えて逃亡しようとしたが、ドブリニの息子であるポサドニク・コンスタンティンが、ノヴゴロドの民と共にヤロスラフの船を切り裂き、「我々はまだボレスラフやスヴィャトポルクと戦える」と言った。

そこで彼らは資金集めを始め、男一人につき4クナ、村長からは9グリヴナ、ボヤールからは80グリヴナを徴収した。その後、ヴァリャーグを招集し、集めた金で彼らに報酬を支払った。こうしてヤロスラフは大軍を召集した。一方、狂気のスヴィャトポルクは「各都市のポーランド人を打ちのめせ」と命じた。

彼らはその通りに実行した。するとボレスラフは、財産とボヤールたちを連れてキエフから逃げ出した。一方、ヤロスラフはスヴィャトポルクに襲いかかり、彼を打ち破った。スヴィャトポルクはペチェネグ族のもとへ逃げ込んだ。

6527年（1019年）の夏、彼は大勢のペチェネグを率いて戻ってきた。ヤロスラフは軍勢を集め、アルトゥで彼に立ち向かった。聖ボリスが殺害された場所に立ち、彼は天に向かって両手を挙げ、こう言った。

「主よ、ここに私の兄弟の血が、アベルの血のようにあなたに叫び求めています。兄弟殺しのカインに、あなたが嘆きと地震を課されたように（創世記4:12）、スヴィャトポルクに復讐をお下しください。主よ、どうかスヴィャトポルクにも同じ報いが下りますように。」

その後、祈りを捧げたヤロスラフはこう言った。

「わが兄弟たちよ、あなたがたは肉体は死んでも、恵みによって生きており、主の御前に立っている。祈りをもって私を助けてください。」

こう言うと、彼はスヴィャトポルクに向かって進軍し、アルタ川のほとりの野原は数多くの戦士たちで埋め尽くされた。そして日の出とともに両軍は激突し、激しい戦いが繰り広げられた。三度も攻防が繰り返され、一日中戦い続け、夕暮れになってようやくヤロスラフが勝利を収めた。

この忌まわしきスヴィアトポルクは逃げ出した。すると悪魔が彼に襲いかかり、その骨が弱り果てて、馬に乗ることもできず、担架で運ばれる羽目になった。こうして彼はベレストまで運ばれた。彼は「逃げろ、追われてるぞ！」と叫んでいた。

追跡者を捜しに行かせたが、誰も見つからなかった。衰弱して横たわっているにもかかわらず、スヴィアトポルクは何度も飛び起き、「逃げろ、また追ってくる。ああ、私はもうだめだ！」と叫んでいた。

彼はそうして一箇所に留まることができなかった。そして、神の怒りに追われるかのようにリトアニアの地を駆け抜け、リトアニアとチェコの国境にある荒野にたどり着いた。そこで彼は命を落とし、主からの報いを受けた。彼に降りかかった病は、死後の永遠の苦しみであることを示していたからである。　こうして彼は、この世の命もあの世の命も奪われたのである。ここでは、君主としての地位だけでなく、命そのものも失い、あちらでは、天の御国や天使たちとの交わりだけでなく、苦しみと炎にさらされたのである。彼の墓は今も残っている。そこから悪臭が立ち上り、人々にこう告げている。「もしこの話を聞いて同様の行いをする者がいれば、これよりもさらに厳しい報いを受けることになる」と。　カインは報復を知らなかったため、一つの罰を受けたが、ラメクはすでにカインの件を知っていたため、七十倍もの報復を受けたのである（創世記4:24）。悪を行う者たちは、このような報いを受けるのである。　多くの聖なる殉教者の血を流したユリアヌス帝が、誰によるものか分からないまま、心臓を槍で貫かれて苦しく非人道的な死を遂げたように[3384]、この者もまた、誰によって悪意に満ちた死がもたらされたのかを知らぬまま、逃亡の末に命を落とした。　それ以来、ロシアの地では反乱は収まり、ヤロスラフはルーシの支配権を確立した。

そして彼は、聖人たちの遺体がどのように、どこに安置されているのか尋ね始めた。すると、聖ボリスはヴィシェゴロドに埋葬されていると告げられたが、聖グレブについては、彼がスモレンスクで殺害されたことを知る者は皆無ではなかった。　そこで、ヤロスラフの側近たちは、そこから戻ってきた者たちから聞いた話として、彼らがその場所で、人里離れた場所に光とろうそくを見たという話を伝えた[3385]。これを聞いたヤロスラフは、司祭たちをスモレンスクへ捜索に派遣し、彼らに「彼は私の兄弟だ」と告げた。

[3384] ローマ皇帝フラウィウス・クラウディウス・ユリアヌス（背教者）は、361年から363年まで在位した。彼はキリスト教を放棄し、異教の復活を目指した。ペルシアとの戦いで殺害され、「汝は勝利した、ガリラヤ人よ」という言葉を残して息を引き取った。

[3385] ネストールの伝承によれば、その町の長老は、遺体が横たわっていた場所で、稲妻のように輝いている聖グレブ自身を目撃したという。

彼らは向かい、幻視が起きた場所[3386] で彼の遺体を発見した。敬意を払い、多くのろうそくと香炉を携えて、彼らは遺体を舟に移し、至福のボリス聖人の遺体が安置されていたヴィシェゴロドへと運んだ。そこで墓を掘り、その美しく、まるで生き生きとしたような姿に驚嘆しつつ、遺体を葬った。 驚くべきこと、また不思議であり 、記憶に値するのは、聖人の遺体が長年にわたり無傷のままであり、肉食獣に荒らされることもなく、死体によくあるように黒ずむどころか、明るく、美しく、完全な状態で、芳しい香りを放っていたことである。かくして神は、御自身の殉教者の遺骸を守られたのである。

多くの者は、ここに聖なる殉教者たちの遺体が眠っていることを知らなかった。しかし、聖なる福音書記者が言ったように、*「山の上にある町は隠れることができない。また、灯をともして、それを器の下に置くのではなく、燭台の上に置けば、すべての人を照らす」*（マタイ5:14, 15）と語ったように、主はこれらの聖人たちを、世界に光を放ち、ロシアの地で数多くの奇跡によって輝かせるようにされた。そこでは多くの苦しむ人々が救いを得た。盲人は目が見えるようになり、足の不自由な者は山羊のように軽快に歩けるようになり、背の曲がった者はまっすぐに伸びた。しかし、そこで起こった奇跡のすべてを語り尽くすことなどできるだろうか。 まことに、全世界をもってしても、なされた驚くべき奇跡をすべて収めきることはできず、それらは海の砂よりも数多い。聖人たちは、ここだけでなく、あらゆる国や土地で、病やあらゆる患いを癒やし、牢獄や束縛に囚われた者たちを訪ねて、奇跡を行なった。 また、彼らが殉教の冠を受けた場所には、彼らの名に因んで教会が建てられました。そして、彼らはそこで多くの奇跡を起こしました。

聖なる兄弟たちよ、あなた方を称える術も力も私にはありません！もしあなた方を、苦しむ者たちの元へ即座に駆けつける天使たちと呼ぶなら、あなた方は肉体をまとって人々の間に生きておられました。 もしあなた方を「人間」と呼ぶならば、数多くの奇跡によって人間の知恵を超越しておられます。もしあなた方を「皇帝」や「君主」と呼ぶならば、あなた方は質素で謙虚な人々よりもさらに大きな謙遜を身につけ、それによって天上の住まいに入られました。 まことに、あなた方は王の中の王、公爵の中の公爵である。なぜなら、あなた方の助けと守りによって、我らの公爵たちは敵を堂々と打ち破り、あなた方の助けによって栄光を得ているからである。 あなた方は彼らにとっても私たちにとっても武器であり、ロシアの地の盾であり支えであり、両刃の剣であり、それによって私たちは敵の傲慢を打ち砕き、悪魔の誇りを地に踏みつけるのです。 まことに、疑いなくこう申し上げねばなりません。あなた方は天の人々であり、地上の天使であり、わが地の支柱であり、支えです。どうか、偉大なるディミトリのように、あなた方の祖国を助けてください。彼はこう言いました。「もし私が彼らの喜びの時に共にいたのなら、彼らが滅びる時には、私も彼らと共に死ぬだろう」。

しかし、あの偉大なるディミトリは一つの都市についてこう語ったが、あなたがたは一つの都市や二つの都市だけでなく、すべて――ロシア全土――を顧み、そのために祈りを捧げているのです。 ああ、幸いな聖堂よ。あなたがたの尊い御遺体を、かけがえのない宝物として迎え入れた。幸いな教会よ。そこにはあなたがたの聖なる聖骸箱が安置され、あなたがたの幸いな御遺体が眠っている！ ああ、キリストの御心に適う者たちよ！ まさに幸いであり、高貴なる都市、ヴィシェゴロドよ。この地には、全世界を凌ぐような宝物が宿っている。 まことに、この都は他のどの都市よりも高きに位置することから、「ヴィシェゴロド」と名付けられたのです。ロシアの地において、この都は第二のテッサロニキとなり、無償の癒やしをその中に宿しています。そして、神によって救いが与えられたのは、私たちの民族だけでなく、全地に対してもです。 あらゆる国々から人々がそこへやって来て、無償で癒やしを受けている。聖なる福音書において、主が聖なる使徒たちに言われたように、*「ただで受けたからには、ただで与えなさい」*（マタイ10:8）。

[3386] ネストールの伝承によれば、聖グレブの遺体は猟師たちの助けによって発見された。

このことについて、主ご自身がこう言われました。*「わたしを信じる者は、わたしが行う業を行うようになり、それ以上に大きな業を行うようになる」*（ヨハネ14:12）。

しかし、キリストの祝福された殉教者たちよ、あなたがたが肉体をもって暮らした故郷を忘れることなく、そこを訪れることを怠らず、また祈りの中で常に私たちのために祈ってください。私たちに悪が降りかからず、あなたがたのしもべたちの肉体に病が及ばないよう。なぜなら、あなたがたには私たちのために祈る恵みが与えられており、主はあなたがたを、私たちのために祈る執り成し人となさったからです。　私たちはあなた方に助けを求め、涙を流してあなた方の足元にひれ伏し、懇願します。高慢の足が私たちを踏みにじることなく、罪人の手が私たちを滅ぼすことなく、あらゆる破滅が私たちを襲わないよう、あなた方に祈ります。　飢えと不幸を私たちから追い払い、剣と内乱から私たちを救い出し、罪に陥らせないでください。私たちはあなた方を頼りにしています。私たちの祈りを熱心にキリスト・神に捧げてください。私たちは罪を犯し、計り知れない不法を犯してしまったからです。　しかし、あなた方の祈りに希望を置き、救い主にこう叫びます。「主よ、罪なき方はあなただけです。あなたの聖なる天から、私たち貧しい者たちを見下ろしてください。私たちは罪を犯しました――私たちを清めてください。不法を犯しました――憐れんでください。つまずきました――容赦してください。娼婦のように私たちを清め、徴税人のように私たちを赦してください。御慈悲が臨み、御愛が私たちの上に注がれますように。私たちを罪の中に置き去りにせず、苦い死に委ねず、この世の悪から私たちを贖い、悔い改めの時間を与えてください。主よ、あなたの御前において、私たちの不義は甚大だからです。　主よ、私たちに憐れみ深くあれ。私たちはあなたを主と称するからです。　私たちを憐れみ、慈しみ、御自身の尊き殉教者たちの祈りによって私たちを守り、私たちを侮辱にさらさないでください。どうか、御自身の牧場の羊たちに御慈悲を注いでください。あなたは私たちの神であり、私たちは父と子と聖霊に栄光を捧げます」。

この敬虔なボリスは、高貴な家系の子孫であり、父に従順で、すべての人に敬愛されていた。体格は素晴らしく、背が高く、肩幅が広く、腰は細く、顔は丸く陽気で、目は優しく、髭と　口ひげは小さかった。彼はまだ若かったからである。　彼は王のように輝き、その咲き誇る若さという花のように飾られていた。戦場では勇敢であり、会議では賢明で思慮深く、神の恵みが彼の中に満ち溢れていた。

「人はすべてを語り尽くすことはできない。目は見ても飽きることがなく、耳は聞いても満たされることはない」　（伝道の書1:8）――と伝道の書は述べているが、聖なる殉教者たちの奇跡についても、私たちの知性では理解しきれず、舌では言い表せず、言葉では説明しきれない。彼らが、神の御国の子らとして、またその共同参加者として、その労苦に対して主からどのような報いを受けたのか。　神学者ヨハネが言ったように、*「しかし、彼を受け入れた者には、神の子となる権能を与えられた」*（ヨハネ1:12）。またダビデも、*「地上の聖徒たち――彼らこそが、私のすべての願いである」*（詩編15:3）と述べた。さらに、*「神よ、あなたは御自分の聖所において畏れ多い方、奇跡を行われる唯一の方です」*（詩編67:36、71:18）。 また、聖ヨハネ・ダマスコスは、そのような人々は死後も生きており、神の御前に立っていると記している。私たちの救いの源である主キリストは、彼らに助けを与えてくださる。なぜなら、殉教者の肉体からは芳しい香油が流れ出ているからである。さらに、神を信じ、復活の希望を持つ者は、彼らを死者とは呼ばない。　なぜなら、死んだ肉体がどうして奇跡を起こし得ようか。それによって悪霊が追い払われ、病が去り、弱さが癒され、盲人が視力を取り戻し、らい病人が清められ、悲しみや不幸が絶え、光の父からのあらゆる善き賜物が彼らを通して流れ出し、人々は信仰をもって、疑いなく彼らに祈りを捧げているのだから！　あなたは、死すべき王の前で、あなたに代わって責任を負ってくれる執り成し手を見つけるために、どれほど苦労しなければならないことか。しかし、これらの人々は全人類の執り成し手であり、私たちのために神に祈りを捧げてくださる。すべての人を教会へと、そして神へと導いてくださる彼らを、どうして敬わ

ないことができようか！　彼らの記憶を尊び、喜びをもって聖人たちの祝祭を祝おう。主は、豊かな恵みと奇跡によって彼らを栄光に輝かせられた――これら奇跡を行う者たち、わがロシアの地のあらゆる地方の執り成し手たちである。

多くの人々は、ヴィシェゴロドにキリストの聖殉教者であり受難者であるロマンとダヴィドが眠っていることを知らなかったが、主はそのような宝が地中に隠されたままになることを許さず、すべての人々のためにそれを明らかにされた。彼らが横たわっていた場所では、時には火の柱が見え、時には天使の歌声が聞こえた。　これを聞き、目撃した人々は神を賛美し、畏敬の念を抱きながらその地を訪れて礼拝した。他の国々からも多くの人が訪れた。噂を信じる者もいれば、使徒が十字架について語ったように、これを嘘だと考えて信じない者もいた。　*「滅びる者にとっては、愚かさに過ぎないが、救われる私たちにとっては、神の力である」*（Iコリント1:18）。主は聖なる福音書の中でこう言われた。*「この石にぶつかる者は、粉々に砕かれる」*（マタイ21:44）。しかし、主を信じる者は恥じることはない。　ある日、ヴァリャーグたちが、地中に埋葬された聖人たちが眠るその場所を訪れた。そのうちの一人がその上に足を踏み入れたところ、たちまち棺から炎が噴き出し、そのヴァリャーグの足を焼いた。彼は飛び上がり、その出来事を語り始め、仲間たちに焼けただれた足を見せた。 それ以来、彼らは近づくことを敢えてせず、恐れを抱きつつ礼拝するようになった。 しばらくして、聖人たちが安置されていた聖ヴァシリー教会が火事になった。その教会の司祭は、早朝の礼拝が終わった後、悪の根源であるサタンの仕業で眠気に襲われ、教会をきちんと点検せずに自宅へ帰ってしまった。そして、教会内の高い場所に灯されていた蝋燭を消し忘れたままにしてしまった。しばらくして、教会に火が燃え上がった。人々は教会へと駆けつけた。教会は上部から燃えていたが、皆がそこからイコンや聖器を運び出したため、建物そのもの以外は何も焼失しなかった。これらすべては神の御許しによって起こったことである。その教会は木造で、老朽化していた。　主はこの出来事を通じて、その場所に聖なる祝福された殉教者ボリスとグレブの御名によって新たな教会を建て、彼らの遺体を愛をもって地中から掘り起こすべきであるという御心を示された。そして、その通りになったのである。　これらすべてがヤロスラフに伝えられた。公はミトロポリト・イオアンを呼び寄せ、自身の兄弟である聖なる殉教者たちについて語った。するとミトロポリトは、まるで恐怖と疑念、喜び、そして神への大胆な信頼が入り混じったような様子を見せた。　公爵のもとを後にした大主教は、聖歌隊員とすべての司祭たちを集め、ヴィシェゴロドへ向かう十字行進を行うよう命じた。そして、聖人たちが眠る場所へと向かい、ヤロスラフ公も彼らに同行した。焼失した教会が立っていたその場所に、小さな礼拝堂が建てられた。　一方、大司教は十字架を携えてその場所へ赴き、そこで徹夜礼拝を執り行った。早朝、大司教は十字架を携えて聖人たちの尊い御遺体が安置されている場所へ向かい、祈りを捧げた後、聖人たちの棺の上にある土を掘り起こすよう命じた。そして掘り起こすと、棺を地中から取り出した。　そこで、ミトロポリト・ヨハネスと司祭たちは畏敬と愛を込めて近づき、聖人の棺を開けると、輝かしい奇跡を目の当たりにした。聖人の遺体には何の損傷もなく、完全に無傷で雪のように白く、その顔は天使のように明るく、そこから芳しい香りが漂っていた。大司教と人々は皆、深く驚嘆した。そして彼らは聖遺体を、焼失した教会の跡地に建てられたその聖堂へと運び、右側の床の上に安置した。

ヴィシェゴロドには、ミロネグという名の菜園師がいた。彼には息子がいたが、その息子の足は萎縮して曲がっていた。そのため、歩くこともできず、その足の感覚もなかった。彼は木製の義足を作って、それで歩いていた。　彼は聖人たちの元へやって来て、その棺にひれ伏し、神と聖人たちに祈りを捧げ、聖人たちに癒やしを懇願した。こうして彼は昼夜を問わず、　、涙ながらに祈り続けた。ある夜、キリストの殉教者である聖ロマンと聖ダヴィドが現れ、こう言った。「なぜ我々に叫び求めているのか？」

彼は、癒やしを必要としている足を差し出した。聖人たちはその萎えた足を取り、三度十字を切った。　眠りから覚めると、彼は自分が健康になっているのを見て飛び起き、神と聖人たちを賛美した。その後、彼は聖人たちがどのように自分を癒やしてくれたかを皆に語り、聖ボリスの少年ゲオルギウスが聖人たちの前を、ろうそくを掲げて歩いているのを見たとも語った。このような奇跡を目撃し、人々は神を賛美した。

ある盲人がやって来て、聖人たちの棺の前にひれ伏し、愛を込めてそれを口づけし、目を棺に当てて癒やしを願った。すると、たちまち目が見えるようになった。そして、皆が神を賛美した。

そこでミロネグは、この二つの奇跡について公に語った。ヤロスラフ公は神と聖なる殉教者たちを賛美し、大主教ヨハネを呼び寄せ、喜びながら聞いたことを彼に伝えた。　大司教もまた神を賛美し、公爵に、美しい教会を建てるという神に喜ばれる助言を与えた。公爵はその助言を快く受け入れ、大工たちに教会の建設用の木材を準備するよう命じた。すでに冬になっていた。　大工たちは木材を準備し、夏が訪れると、五つのドームを持つ壮大な教会を建て上げた。公は教会をあらゆる絵画で飾り、聖人のイコンを描かせるよう命じた。それは、信徒たちが教会でまるで聖人そのものを見ているかのように感じ、信仰と愛をもって彼らに礼拝し、そのイコンに口づけをするためであった。そして、聖体行列において、ヨアン大主教、ヤロスラフ公、すべての司祭、そして民衆全員が聖人の遺骨を教会へ移し、教会を奉献した。また、7月24日、至福のボリスが殉教した日を祝日と定めた。この日、聖人の遺骨の移送と教会の奉献も行われたのである。

聖なる典礼に公爵と大主教が出席していたとき、ある足の不自由な男がたまたま教会に居合わせた。　彼は神と聖人たちに祈りを捧げながら、大変な苦労をして教会まで這ってやって来た。すると、神の恵みと聖人たちの祈りによって、彼の足はたちまち健やかになった。そして立ち上がり、皆の先頭を歩いて行った。この奇跡を目撃した敬虔なヤロスラフ公、大主教、そして民衆は皆、神と聖人たちに賛美を捧げた。

聖体礼儀の後、公は皆――大主教や司祭たちをも含めて――食事に招き、彼らはふさわしい祝宴を催した。また、公は多くの財産を貧者、孤児、未亡人たちに施した。

こうしてヤロスラフは（1054年に）この世を去った。父の死後、38年間を名誉ある生涯を送り、息子たち――イジャスラフ、スヴィャトスラフ、ヴェセヴォロド――を後継者として残し、遺産を次のように彼らに分配した。　長男のイジャスラフをキエフに、スヴィャトスラフをチェルニヒウに、ヴェセヴォロドをペレヤスラヴリに、その他の息子たちをそれぞれの領地に配置した。　大公位を継承したイジャスラフ公は、父の遺体を大理石の棺に納め、父が建立した聖ソフィア教会の玄関ホールに安置した[3387]。

2年が経過すると、教会はすでに老朽化していた。ある日、イジアスラフ・ヤロスラヴィチがその教会を訪れた際、その老朽ぶりを目の当たりにし、大工の親方を呼び寄せ、聖殉教者たちの名に因む新しい単頭教会を建設するよう命じた。また、その建設場所として、最初の老朽化した教会の近くを指定した。　公はまた、ゲオルギー大主教に対し、その場所で祈りを捧げ、教会建設に必要な資金を提供するよう懇願した。　大工の親方はすべての職人を集め、すぐに指定された場所に教会を建て上げた。これを聞いた公は、町の長老のもとへ使者を送り、「教会の装飾のために、公の貢ぎ物から資金を差し出す」と伝えた。

教会が完全に完成すると、敬虔なイズヤスラフは、大司教ゲオルギーに対し、聖人の遺骨を新しい教会へ移す儀式を執り行うよう懇願した。イズヤスラフとヴセヴォロドの兄弟、キエフのゲオルギー大司教、その他、ネオフィト、　チェルニゴフの司教、ペトル・ペレヤスラフスキー、ニキータ・ベロゼルスキー、ミハイル・ユリエフスキー、ペチェールスク修道院のイグメン・フェオドシイ、

[3387] このキエフの教会は1037年に着工された。

聖ミハイル修道院のソフロニイ、聖救世主修道院のゲルマン、その他すべてのイグメンたちが集まり、輝かしい祝祭を執り行った。　まず、諸公爵たちは木製の棺に納められた聖ボリスの遺体を肩に担ぎ、蝋燭を手にした敬虔な修道士たちの先導のもとで運んだ。修道士たちの後には助祭や司祭たちが続き、その後に大主教と司教たちが続いた。そして棺を教会に運び入れ、安置すると、蓋を開けたところ、教会は不思議な香りに満たされた。　これを見た者たちは皆、神を賛美した。一方、大主教は恐怖に襲われた。彼は聖人への信仰が確固たるものではなかったからである。彼はひれ伏して許しを請うた。　そして聖遺みに口づけをした後、石の棺に納めた。その後、聖グレブの遺体が収められた石の棺をそりに載せ、綱を握って運び出した。しかし、教会の入り口に差し掛かったとき、棺は止まり、それ以上前に進まなくなった。そこで、人々に「主よ、憐れみたまえ！」と叫ぶよう命じた。人々は主と聖人たちに祈りを捧げた。するとたちまち、聖遺物箱は動き出した。その後、聖ボリスの頭部に口づけをした。ゲオルギー大主教は、聖グレブの　の手を取り、イジャスラフ、スヴィャトスラフ、ヴェセヴォロドの各公に祝福を与えた。　そして再び、スヴィャトスラフは、聖人の手を握っていた大主教の手を取り、自分の首にある腫れ物、目、そして頭頂部にその手を当てた。その後、その手を棺の中に置き、聖なる典礼の歌が歌われ始めた。その時、スヴィャトスラフはベルンに言った。「なんだか頭がズキズキする」。

ベルンは修道帽を持ち上げ、頭の上に聖グレブの爪があるのを見て、それを取り外し、スヴィャトスラフに手渡した。スヴィャトスラフは、聖人からのこの恵み深い賜物について、神を賛美した。聖体礼儀の後、兄弟たちは皆、共に昼食をとった。　彼らは祝祭を明るく祝い、貧しい人々に多くの施しを行った。その後、互いに口づけを交わし、平和のうちにそれぞれの家へと帰っていった。そしてそれ以来、[3388] 、聖なる殉教者たちの栄光と誉れを称え、我らの主イエス・キリストの恵みにより、5月2日にこの祝日が定められた。

ある男が、口が利けず、足が不自由で、膝から下を切断されていた。彼は木製の義足を作り、それを使って歩いていた。そして、他の貧しい人々と共に聖人の教会のそばに留まり、キリスト教徒から施しや衣服、あるいは誰かが与えたいと思うものを受け取っていた。　ヴィシェゴロドには、菜園管理人の長がいた。その世俗名はジダン、聖なる洗礼名はニコライであった。彼は毎年、聖ニコライの祝祭を執り行っていた。ある日、その祝祭の日に、貧しい人々とその足の不自由な男が、何かをもらえることを期待してそこへ向かった。彼は家に入ると、祭壇の前に座った。　ところが、彼には食べるものも飲むものも与えられず、空腹と渇きに苛まれながら座っていた。すると突然、彼は恍惚状態に陥り、幻視を見た。まるで聖人たちの教会のそばに座っているかのように思えた。そして、まるで祭壇から出てきたかのようにボリスとグレブが現れ、彼の方へと歩み寄ってくるのを見て、彼はひれ伏した。　聖人たちは彼の手を取り、座らせ、彼の癒やしについて語り始めた。それから、彼の唇に十字を切ると、痛む足を取り、あたかも油を塗るかのようにして、膝のあたりから引っ張った。病人はこれらすべてを、まるで夢の中で見ているかのように感じていた。というのも、彼はその家でひれ伏していたからである。　彼が地面に横たわっているのを見て、人々は彼をあちこちとひっくり返した。しかし彼は死人のように横たわっており、口も目も動かす力さえなかった。ただ、彼の内に魂があり、心臓が鼓動していただけだった。皆は、彼が悪霊に取り憑かれたのだと思った。人々は彼を運び出し、聖人たちの教会の入り口の前に横たえた。　大勢の人々が周囲に立ち、この驚くべき奇跡を目撃し、感嘆した。苦しむ男の膝から足が現れ、もう一方の足と同じ長さになるまで伸び続けた。そして、それは長い時間を要することなく、たった一時間で起こった。これを見たそこにいた人々は、神とその聖人、殉教者ロマンとダビデを賛美した。そして皆が声を上げて叫んだ：

– *「誰が主の御力を語り尽くし、そのすべての賛美を告げ知らせるだろうか。奇跡を行われる唯一の主なる神は、ほめたたえられるべきである！」*（詩編105:2、71:18）。

[3388] すなわち、1072年から

ドロゴブジェという町で、ある女奴隷が、聖ニコラスの日、皆が彼の教会へ向かう中、主人の命令に従ってその家で働いていた。他の女性たちは、彼女が働いているのを見て、彼女を責め、教会へ行くよう呼びかけた。しかし、彼女は彼らの言うことを聞かず、仕事を続けた。　すると突然、白い衣をまとった三人の男が中庭に乗り込んできた。彼女は戸口から顔をのぞかせ、彼らを見た。そのうちのひとりは年配の男で、その両脇には二人の若者が立っていた。そして若者たちは彼女にこう言った。

「おお、女よ、どうして私たちの父であるニコライを侮辱するようなことをしたのか。彼の祝日に働き、教会に行かないとは？」

すると彼女はこう答えた。

「私は貧しい未亡人です。教会に行くより、働く必要があります。」

すると、老人は若者たちに言った。

「彼女と何を話しているのだ？　その家を荒らしてやれ。」

若者たちはすぐに取りかかり、家の半分ほどを荒らした。老人は女に近づき、彼女の右手を掴んで部屋から放り出した。すると、彼女は死んだように倒れた。横たわっている女を見て、近所の人々は彼女を運び上げ、別の家へ運んだ。　彼女を寝かせ、その傍らに座り、彼女が何を言うか聞こうとした。しかし、彼女は目も口も動かすことができず、まるで死んだように横たわったままで、自力で何も食べることができなかった。ただ、口を開けてもらって、スプーンでミルクや水を注がれるだけだった。彼女はそうして四旬節まで過ごした。　肉断ちの週に、その女性は聖ニコラスの教会へ運ばれた。彼女のために捧げられた祈りの後、彼女は少し目を開き、まるで眠りから覚めたかのように食べ物を求め、食事を摂ることができ、起こった出来事を語った。しかし、彼女の右手は萎縮しており、感覚もなくなっていた。　こうして、彼女はもはや主人たちに仕える力さえ失ってしまった。彼女がこれほど衰弱しているのを見て、女主人は彼女を追い出し、自由の身で生まれた少年は奴隷となった。しかし、裁判官たちはそのような処置を許さず、　主人たちに彼女を無償で手放すよう命じ、彼女が強制的に働かされ、罰を受けたことを理由に、二人を解放した。 3年が過ぎた。その痩せた女性は、手足を曲げられた男が聖殉教者ロマンとダヴィドの教会で癒やされたという話を耳にした。そこで彼女はヴィシェゴロドへ向かった。　聖母マリアの被昇天のカノンが行われる土曜日、彼女は教会に到着し、その教会の聖職者長であるラザロに事情を話した。ラザロは彼女に、教会で一夜を明かすよう命じた。朝、十字架を掲げて聖母マリア教会へ向かう途中、片腕の女性はラザロに近づき、次のような自分の夢について語った。

「昨夜、私が教会のそばに座っていると、二人の美しい若者がやって来て、『誰があなたをここに座らせたのですか？』と尋ねました。私は『ラザロ神父がそう命じたのです。「ここに座りなさい。聖なる殉教者たちの祈りによって、神があなたを癒してくださるかもしれない」とおっしゃいました』と答えました。」　これを聞くと、すぐに年上の青年が指輪を外して私に渡し、『これを手に嵌めて十字を切れば、あなたの手は癒やされるだろう』と言いました。

これを聞いたラザロは、彼女に教会の扉のそばで聖体礼儀に立ち会うよう命じ、歌と祈りが終わった後、香炉の油で彼女の手に塗布してもらうようにした。聖体礼儀の歌が始まった。　「聖なる神よ」の歌が終わり、聖歌隊長が「聖母マリアへの賛歌、プロキメン：わが魂は主を賛美す」と言ったとき、突然、その女性の萎えた手が痛み出し、手を支えていた包帯が外れ、女性は震えながら手を振り回して祭壇へと駆け寄った。　これを見た人々や聖職者たちは、彼女を悪霊に取り憑かれた者と見なし、聖人の棺へと引きずっていった。彼女を見て、その正体を知ったラザロは恐怖に襲われた。その瞬間、彼女の手は癒やされていた。この光景を目撃した者たちは皆、このような奇跡を称え、神の迅速な御訪れと、キリストの聖なる殉教者たちの力に驚嘆した。

その町には、ある盲人が住んでいた。彼は聖ゲオルギイの教会を訪れ、視力を取り戻せるよう聖人に祈りを捧げていた。ある夜、聖殉教者ゲオルギイが彼に現れ、こう言った。「なぜ私に呼びか

けるのか！もし視力を取り戻したいのなら、その方法を教えてやろう。　聖ボリスと聖グレブのもとへ行け。彼らが望めば、お前の願う視力を授けてくれるだろう。なぜなら、彼らにはロシアの地において、あらゆる苦しみや病を赦し、癒やすという神からの恵みが与えられているからだ」。

これを見て、これを聞いて、盲人は目を覚まし、命じられた通りに旅立った。彼は聖殉教者たちの教会に到着し、聖人たちが彼を訪ねてくるまで、数日間そこに留まり、ひれ伏して聖人たちに祈り続けた。そして彼は視力を取り戻し、癒やしを受けたことを喜び、神と聖殉教者たちを賛美した。そして彼は、聖なる殉教者たちが自分のところに来て、三度目に十字を切ってくれた途端、目が開かれたという体験を皆に語った。人々は皆、聖なる殉教者たちによってなされた、その栄光に満ち、驚くべき、言葉では言い表せない奇跡に対して、神に感謝を捧げた。　なぜなら、「*主を畏れる者の願いを主はかなえ、彼らの叫びを聞き、彼らを救われる*」（詩編144:19）と記されており、また「*主は御心のままにすべてを行われる*」（詩編113:11）とも記されているからである。

聖人たちの奇跡は増え続け、彼らの恵みも高まっていった。そして、聖なる福音書に記されているように、「*そのすべてを書き記そうとしても、世界はそれらを収めきれない*」（ヨハネ21:25）ように、それらの奇跡は記録されることなく起こり、それを知る者は語り継いだ。　その時、ヤロスラフの息子スヴィャトスラフは、聖人たちのために石造りの教会を建立しようと企て、高さ50ロクティの教会を建てたが、その直後に（1079年に）亡くなった。　ヴェセヴォロドは、ルーシの地で公となり、その教会を完成させた。しかし、完成したその夜、すぐに上部が崩れ落ち、教会全体が崩壊してしまった。その後、ヴェセヴォロドは（1093年に）亡くなったが、平穏に暮らし、神から託された統治を正していた。　キエフの公位はスヴィャトポルク・イジャスラヴィチが、チェルニヒウの公位はダヴィドとオレグが、ペレヤスラヴリの公位はウラジーミルがそれぞれ引き継いだ。当時、わが国の敵は我々よりも強大となり、我々の罪ゆえに多くの暴虐を振るった。　聖殉教者たちの教会は忘れ去られ、その建造や奇跡の記録に気を配れる者は誰もいなかった。

以下は、起こった奇跡を目撃した者たちの証言である。スヴィャトポルク公は、ある罪を理由に、事件を調査することなく、彼らを誹謗中傷した者たちの言葉だけを鵜呑みにして、二人の男を重い足枷を嵌め、地下の牢獄に閉じ込めた。彼は預言者ダヴィドの言葉を忘れていた。「*堕落した心はわたしから遠ざけられる。悪を行う者を、わたしは認めない。　隣人を誹謗する者を、わたしは追い払う*」（詩編100:4–5）。　男たちを牢獄に閉じ込めた後、公爵は彼らのことを忘れてしまった。そのような苦境に置かれた彼らは、聖殉教者たちに熱心に祈りを捧げ、毎週日曜日には看守にお金を渡し、プロスフォラを買って聖ロマンとダビデの教会に持ってきてくれるよう頼んだ。　長い時間が過ぎても、囚人たちは悲しみと苦悩に苛まれ続け、絶えず祈りを捧げ、聖なる殉教者たちに呼びかけ続けた。そして聖者たちは彼らを見捨てず、救い出し、庇い、助けてくれた。ある夜、牢屋の扉が閉ざされ、取り外された梯子が外に置かれていた時、　囚人たちや他の多くの人々が眠りについていたその時、突然、囚人の一人の男が牢の外で眠っていることに気づいた。彼は束縛から解き放たれて目を覚まし、自分と仲間にかかっていた鉄の足枷が砕けてそばに転がっているのを見、足に巻かれていた輪は縄のようにねじれているのを見た。 彼は起き上がり、神とその聖なる御使いたちを賛美した。 で見た光景を思い出し、看守を呼び寄せ、何が起きたかを示してこう言った。「私を、栄光ある殉教者たちの教会へ連れて行ってくれ。」

木曜日の早朝礼拝のために教会に着くと、彼は聖遺物箱の前にひれ伏し、教会にいたすべての聖職者や人々にこう語った。

「私たちや他の多くの者が牢獄で眠っていたとき、突然、まるで屋根が持ち上がったかのように、聖人たちが中に入ってくるのが見えました。そして彼らは『なぜあなたがたはここにいるのか』と言いました。私たちは『それは公爵の意志であり、私たちは誹謗中傷されたのです』と答えました。」　すると聖人たちは私たちにこう言いました。「我々はあなたに命じる。あなたは教会へ行き、見たことを伝えなさい。あなたの仲間は牢獄に残しておく。彼を盲目にしておいたのは、他の人々が

信じない場合に備えて、証拠とするためだ。　我らはギリシャの地へ去る。三日後に戻り、彼を訪ねて視力を回復させてやる。さあ、行って公爵にこう伝えよ。『なぜ、事の真相を調べもせず、このように人々を苦しめ、拷問するのだ。　もしこのことを悔い改めず、このような行いをやめないならば、地獄を免れることは決してないことを知っておきなさい」。こう言い終えると、彼らは私たちの目の前から姿を消した。この光景を目撃した私が、兄弟たちよ、あなた方に語ったのである。もしもっとはっきりと見て聞きたいというなら、牢屋へ行こう。

牢屋に着くと、皆、錠前が無傷で施錠されており、出入り用の梯子が外に倒れているのを見た。そして彼らは驚き、主と聖人たちを賛美した。　牢を開けてみると、先程話されていた囚人は、確かに目が見えなくなっており、まぶたもまつ毛も区別がつかないほどだったが、傷跡はなかった。尋ねられると、彼は同じことを語った。　そこで、二人の囚人は釈放され、昼夜を問わず教会のそばを離れなかった。特に盲目になった男は、あたかも聖人たちから恥をかかされたかのように、またあたかも借りを返してほしいと懇願するかのように、墓にひれ伏して祈りながらこう言った。「おお、キリストの聖なる御使いたちよ、私を見捨てず、あなたの約束を忘れないでください。　あなたがたが誓ったとおりに、私に与えてください」

彼は三日間、そうしていた。日曜日になり、彼は教会に来て、早課が始まるまで祈り続けた。彼の叫び声が歌っている者たちの邪魔になったため、彼らは腹を立て、こう言った。

「この盲人を追い出さなければならない。歌えないからだ。」

しかし彼はその場に留まり、身もだえながら聖像にすがりつき、こう叫んだ。

「私を憐れんでください。あなたは私にそう約束してくれたのですから。」

すると彼は突然振り返り、こう言った。

「『主よ、憐れみたまえ』と歌え。神と聖人たちの栄光を仰げ。見よ、私は目が見えるようになった。」

そして、彼の目は、まるで病気でも盲目でもなかったかのように、健全になった。その時、皆は神と聖なる殉教者たちを賛美した。その後、彼らは聖ポリスク公のもとへ行き、耳にしたこと、目にしたことを伝えた。それ以来、彼は人々に暴力を振るうことはめったになくなり、長年にわたり聖人たちの祭りを執り行い、夏にはしばしばヴィシェゴロドを訪れるようになった。

彼はまた、聖人たちの棺の上にある古い場所に教会を建てようとし、「聖人たちの遺骸を場所から場所へと移すなど、私には到底できない」と語った。

しかし、神の御計画と聖なる殉教者たちの御意志により、彼の企ては実現しなかった。当時、前述の通り、ヴセヴォロドの息子でモノマフと呼ばれるウラジーミルが、ペレヤスラフ地方を統治していた。　彼は聖人たちに深い敬愛を抱き、多くの供物を捧げていた。そして、尊い殉教者たちの聖棺を銀と金で覆おうと企てた。夜中にやって来て、棺の寸法を測り、銀の板を剥がして金メッキを施した。　その後、再び夜に訪れ、すべての奇跡を起こし称賛に値する聖なる棺を銀と金で覆い、その夜中に立ち去った。朝になって訪れた人々はこれを喜びをもって目にし、敬意を表してひれ伏し、聖人たちと、この敬虔な公爵の心にそのような考えを授けた神を称えた。　人々は、敬虔な公爵ウラジーミルが示した、その柔和さと謙虚さ、高潔さと卓越した知性、聖人への愛、そして神と聖なる教会、とりわけこれらの聖人への献身を、多くの言葉で称賛した。

彼はこれを6610年（1102年）の夏に成し遂げたが、その後、聖遺骨が移された後、聖人の棺の上にさらに壮大なものを築き上げた。聖人の像を刻んだ銀の板を鋳造し、それらを金メッキし、銀と金、そしてろうそくが灯る大きな金メッキのクリスタル製燭台で飾った。　こうして彼はすべてを素晴らしく整えたため、その美しさを言葉で表現することは不可能であった。ギリシャや他の国々から訪れた人々はこう語った。「我々は多くの聖人の聖堂を見てきたが、これほど美しいものはどこにもなかった」。

彼は、自らの善行を後世に伝え、また*「地上に宝を積むな。天に宝を積め」*（マタイ6:19–20）と仰せになった主からの祝福、そして彼が深く敬った聖人たちからの祝福、さらにその様子を目撃し耳にした人々からの称賛と祝福を得るために、すべてをこれほど見事に整えたのである。

ウラジーミルが聖人の遺骸を聖櫃に納めたとき、スヴィャトスラフの息子であるオレグ公は、ヴィシェゴロドで崩壊した教会の代わりに、石造りの教会を建設することを企てた。　彼は教会建築の職人たちを呼び寄せ、建設を命じ、そのために必要なものをすべて惜しみなく与えた。教会が建てられ、壁画が施されると、彼はしばしばスヴィャトポルクに対し、聖なる殉教者たちを新しく建てられた教会に移すよう強く求め、懇願した。しかしスヴィャトポルクは、彼の労苦に対する嫉妬から、その教会を自分自身が建てたものではないという理由で、移すことを拒んだ。

しばらくして、教会の装飾が完了してから2年目の夏、スヴィャトポルクは世を去った。すると、民衆の間で激しい反乱と騒乱、そして不満の声が巻き起こった。　そこで、すべての人々、とりわけ有力で名高い者たちが結集し、ウラジーミルのもとへ赴き、反乱を鎮めてほしいと懇願した。ウラジーミルはそこへ向かい、反乱と不満を鎮め、ルーシの地で公の地位に就いた。

6623年の夏（1115年）、ウラジーミルがルーシを統治していた頃、彼はこれらの聖なる殉教者たちの遺骸を新築された教会に移すことを企て、そのことを兄弟であるダヴィドとオレグに告げた。彼らは常にウラジーミルに祈りを捧げ、聖人の遺骸を移すよう強く促していた。　そこで、ウラジーミルは息子たちを伴い、続いてダヴィドとオレグも息子たちを連れてヴィシェゴロドへ赴き、ニキフォール大主教も、すべての司教――チェルニヒフのテオクティスト、ペレヤスラヴリのラザリ、ポロツクのミヌ、ユリエフのダニイル――およびすべての修道院長――　ペチェルスクのプロホール、聖救世主修道院のサヴヴァ、聖ミカエル修道院のシルヴェストル、聖母ヴラヘルナ修道院のペトル、聖アンドレイ修道院のグリゴリー、聖ディミトリ修道院のテオフィロス、その他多くの修道院長、そして聖職者や修道者の全階級、すべての聖職者および司祭たち。　そして、ロシアの地のあらゆる地方や他の国々から、大勢の民衆や公爵たちがここに集まった。ロシア全土およびその支配下にあるすべての地域のボヤール、長老、軍司令官たち、　要するに、あらゆる地域から、富める者も貧しい者も、健常者も病人も、あらゆる人々がここに集まり、街全体が人で埋め尽くされ、人々は城壁の上でさえ立つ場所を見つけられなかったほどであった。そして、5月1日、復活祭後の第2週の土曜日に、教会が奉献された。 聖なる日曜日の朝、同月2日、両教会で早課の歌い始めが行われた。そしてまず、この目的のために用意された装飾を施したそりに聖ボリスの聖遺骨を載せ、それを運んだ。　そりの後を、ウラジーミルが畏敬と謙虚な心をもって歩き、大主教と司祭たちは蝋燭と香炉を手に従った。貴族やすべてのボヤールたちは、太いロープを引いてそりを引き、互いに押し合い、苦労しながら進んだ。ロープは両側に結びつけられており、そのロープを引いて尊い聖遺物箱を運んでいたが、人々の多さゆえに、歩くこともそりを引くこともできなかった。　そこでウラジーミルは、民衆に金銭や毛皮、布地を投げ与えるよう命じた。これを見た民衆の一部はそれらに殺到したが、他の人々はそれを放っておき、聖遺物箱に触れる栄誉に浴しようと聖遺物箱へと駆け寄った。どれほど大勢の人がいたとしても、喜びと大きな歓喜の涙をこらえることのできない者が一人もいなかった。　そのため、そりを引くことさえやっとのことであった。同様に、聖グレブの聖遺物箱も別のそりに載せられ、ダヴィド公、司教たち、聖職者、ボヤール、そして数え切れないほどの人々に護衛されながら運ばれた。彼らは皆、「主よ、憐れみたまえ」と叫び、涙ながらに神に祈りを捧げていた。そして、偉大な奇跡が起こった。　聖ボリスの聖遺物は無事に運ばれたが、人混みのせいで窮屈だった。ところが、聖グレブを運ぼうとしたとき、聖遺物箱が動かなくなってしまった。無理やり引っ張ってみたが、ロープが切れてしまった。そのロープは、人が両手でかろうじて抱えられるほど太かったにもかかわらず、たちまち切れてしまったのである。　人々は「主よ、憐れみたまえ」と叫んだ。街中には大勢の人々が集まり、柵や城壁に沿ってぎっしりと詰めかけていた。そして、民衆全体から「主よ、憐れみたまえ」という叫び声が上がった。　すると、その棺はたちまち自力で動き出した。こうして、聖殉教

者ボリスとグレブの遺体は、5月2日、新しく建てられた教会に運び込まれ、栄誉をもって安置された。その後、人々は皆、神と聖殉教者たちを賛美しながら、それぞれの家へと帰っていった。

ウラジーミル・ザレスキーの街では、ウラジーミル・モノマフの孫であるヴェセヴォロド・ユリエヴィチが公として治めていた。彼に対して、2人の甥であるムスティスラフとヤロポルク・ロスティスラヴィチが（1175年）、ヴェリーキー・ノヴゴロドから反乱を起こした。彼らは、ロストフの人々から密かに公位に就くよう招かれていたのである。　そして彼らは、叔父であるヴェセヴォロドに対し、彼を領地から追放し、自分たちがより広大な領土を手に入れることを望んで、ウラジーミル城へと軍を率いて攻め込んだ。大激戦の末、ロスティスラヴィチ兄弟はヴェセヴォロドに敗北し、捕虜となってウラジーミルへ連行された。　ヴセヴォロドは彼らに警備を付けましたが、自由に動き回ることを許しました。ヴラジーミルの民は、これらの捕虜となった公たちが牢獄ではなく自由に過ごしているのを見て、不満を募らせ、武器を持って彼らの公であるヴセヴォロドの宮廷に押し寄せ、こう叫びました。

「公よ、なぜ我らの敵を鎖で縛らず、自由に放っておかれるのか？　彼らを死刑に処すか、目を潰すか、あるいは我々へ引き渡せ。」

慈悲深い全伏ロドは、戦争で捕らえられた諸公に害を加えることを望まなかったが、民衆の反乱を鎮めるため、彼らを牢獄に閉じ込めるよう命じた。しばらくして、ウラジーミルの人々は再び大公全伏ロドにこう叫び始めた。

「ロスティスラヴィチたちを我々に引き渡せ。彼らの目を潰したいのだ。」

大公は悲しんだが、民衆の反乱を食い止めることはできなかった。ウラジーミルの人々は牢獄を襲撃し、ムスティスラフとヤロポルクを捕らえて目を潰し、解放した。こうして、より大きな栄光と権力を望んだ不幸なロスティスラヴィチ家のムスティスラフとヤロポルクは、鎮圧され、目を潰されたのである。　そして彼らはスモレンスクへと向かい、スミャディニャにある聖殉教者ボリスとグレブの教会にたどり着いた。その日は、聖グレブの殉教を記念する日、9月5日であった。　公爵たちは熱心に神に祈りを捧げ、聖殉教者たちを自らの親族であるかのように助けを求め、目の傷が化膿していたため、聖人たちが彼らに安らぎを与えてくれるよう願った。彼らが祈っていると、まず痛みが和らぎ、その後、思いがけず視力が回復した。　はっきりと見えるようになったロスティスラヴィチたちは、神、聖母マリア、そして聖公ロマノスとダヴィドを賛美し、感謝し始めた。そして彼らは喜びをもって自宅へ戻り、聖殉教者たちの祈りによって与えられた主の慈悲を至る所で語り広めた。

トゥロフの町には、古の時代、[3389] 、かつてトゥロフの司教シメオン、イグナティウス、ヨアキム、ゲオルギーの料理人を務めていた、マルティンという名の老人が住んでいた。ゲオルギー司教は、マルティンの高齢を考慮して、彼を職務から解放した。　修道者の姿をとったマルティンは、聖殉教者ボリスとグレブの教会に隣接する司教修道院で、独り、小部屋に住むようになった。そして彼はしばしば腹部の病に苦しめられた。苦痛が襲うと、長老は痛みに叫びながら横たわり、立ち上がって自分の体の世話をする力さえなかった。　ある日、その病に冒され、彼は独房に横たわり、渇きに苛まれていた。しかし、当時修道院の周囲は水に浸かっていたため、誰も彼を訪ねてこなかった。三日目に、聖殉教者ボリスとグレブが、イコンに描かれている姿のまま彼の元へ現れ、こう言った。

「老僧よ、何の病にかかっているのか？」

彼は自分の病について彼らに語った。すると彼らは彼に尋ねた。

「水が必要ではないか？」

「ああ、主よ」と老人は答えた。「私はとっくの昔から水を渇望していたのです。」

[3389] 12世紀半ばのことである。

そのうちの一人が水汲み棒を手に取り水を運んできた。もう一人はひしゃくですくった。そして彼らは老人に水を飲ませた。すると老人は彼らに尋ねた。

「君たちは誰の子か？」

彼らは彼にこう答えた。

「私たちはヤロスラフの兄弟です。」

老人は、彼らがゲオルギー・ヤロスラフ公の親族だと思い、こう言った。

「主があなた方に長寿をお与えになりますように、諸君。パンを自分で取って食べてください。私ではあなた方に仕えることができませんから。」

彼らは答えた。

「パンはあなたのために残しておいてください。私たちは行きます。もう病気にならず、安らかに眠ってください。」

そしてたちまち、彼らの姿は見えなくなった。回復した長老は、聖ボリスとグレブが訪ねてきたことを悟り、立ち上がって神とその聖人たちを賛美した。それ以来、彼は二度とその病に罹ることはなく、常に健康を保ち、聖殉教者たちから授かった癒やしについて修道院の兄弟たちに語り続けた。

「ネフスキー」と呼ばれた敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、ヴェリキー・ノヴゴロドを統治していた頃、スウェーデンと戦争を繰り広げていた。　彼が軍を率いてネヴァ川にたどり着いたとき、彼の配下の将の一人である、フィリッポという名の敬虔な男が、任された夜警の任務を遂行していたところ、日の出とともに水面を航行する船を目にした。　船の中央には、緋色の衣をまとった聖殉教者ボリスとグレブが立っており、漕ぎ手たちはまるで霧に包まれたかのように座っていた。すると、聖ボリスが聖グレブにこう言った。

「兄弟グレブよ、急いで行こう。我らの親族であるアレクサンドル公を、凶暴な敵から助けよう。」

この幻視を、軍司令官は自分の公に語った。そしてその日、アレクサンドル公は聖殉教者ボリスとグレブの助けにより、スウェーデン軍の勢力を打ち破り、その首領ビルゲルを自ら剣で顔に一撃を加え、勝利を収めてヴェリキー・ノヴゴロドへ凱旋した[3390]。

同様に、モスクワの大公ディミトリ・イオアンノヴィチがタタール王ママイと戦っていた際、夜警のトマ・ハツィベエフは、神から啓示された次のような幻視を見た。　高みには大きな雲が現れ、東からはまるで大軍が迫ってくるかのようであり、南からは、手にろうそくと鋭く抜かれた剣を持った二人の輝く若者が現れた。この若者たちは、聖殉教者ボリスとグレブであった。そして彼らはタタールの将軍たちにこう言った。

「誰が、主から私たちに授けられたこの祖国を滅ぼせと命じたのか？」

そして彼らは敵を斬りつけ、敵は一人も生き残らなかった。翌朝、その衛兵は大公にその幻視を語った。大公は天を仰ぎ、両手を挙げて、涙ながらにこう祈り始めた。

「人愛の主よ、聖なる殉教者ボリスとグレブの祈りによって、私をお助けください！　モーセがアマレクに（出エジプト記17章）、ダビデがゴリアテに（サムエル記上17章）、ヤロスラフがスヴィャトポルクに、私の曽祖父アレクサンドルがスウェーデン王に勝利したように、私にもママイに対して助けをお与えください。

そしてその日、モスクワ大公ディミトリは、聖殉教者ボリスとグレブの祈りによって、タタール王ママイを打ち破った[3391]。

[3390] これは1240年に起こった。

[3391] これは1380年9月8日に起きた。

主は、人々がキリスト・イエス、我らの主の御名において罪の赦しを願い、崇拝する聖殉教者たちを通して、この奇跡および数え切れないほどの奇跡を行われた。父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、主の栄光あれ。アーメン。

トロパリオ、第2調:

真の殉教者であり、キリストの福音の真の聴き手である、貞潔なロマネと、悪意のないダビデよ、兄弟である敵に抵抗してはならない。その敵は、あなたがたの肉体を殺すことはできても、魂には手を触れることはできないのだから。　それゆえ、邪悪な権力欲に駆られた者は嘆き悲しむであろう。あなたがたは、天使たちの群れと共に喜び、聖三位一体の御前に立ち、親族たちが神に喜ばれる者となり、ロシアの子らが救われるよう祈り続けているのだから。

コンダク、第3調:

今日、キリストの尊き殉教者たち、ロマノスとダビデよ、あなたがたの栄光に満ちた記念が輝き、私たちを私たちの神キリストを賛美するよう招いておられます。それゆえ、あなたがたの聖遺物の箱に駆け寄り、聖なる祈りによって癒しの賜物を受け取ります。あなたがたは、神の御医者だからです。

- 同日、アレクサンドリア総主教、我らの父アファナシオス大聖人の記念日である。彼の記念日は1月18日にも行われ、その伝記も同日に掲載されている。

5月16日

5月3日（旧暦）

聖殉教者ティモテオスとマヴラの殉教

5月3日の記念日

不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌスによるキリスト教徒迫害[3392]の最中、フィヴァイダ[3393] におけるキリスト教徒の弾圧のために、イゲモン・アリアン[3394] が任命されました。彼のもとに試練のために連行された他のキリスト教徒の中には、教会の朗読者ティモテオ[3395] もいました； 彼はペラペイの村の出身で、まだ若く、その直前にマヴロという娘と結婚したばかりだった。結婚から20日後、彼は異教徒たちに捕らえられ、イゲモンの尋問に連れて行かれた。イゲモンは彼を見ると、まずこう尋ねた。

「お前は誰だ？　どのような役職に就いているのか？」

ティモテイはこう答えた。

「私はキリスト教徒であり、神の教会の朗読者です。」

[3392] ディオクレティアヌスは284年から305年まで、ローマ帝国の東部を統治した。

[3393] フィヴァイダ——中エジプトの地域。

[3394] イゲモン・アリアンは後に自らキリストに改宗し、殉教者の冠を受ける栄誉に浴した。彼の記念日は12月14日である。

[3395] 朗読者、あるいは聖職補佐者。ティモテオの職務は、朗読だけでなく、礼拝用書籍の保管にも及んでいた。

イゲモンは彼に言った。

「まさか、お前だけ、我らの偉大なる神々に犠牲を捧げない者をすべて拷問にかけ、死に至らしめるよう命じる王の勅令を聞いていないというのか？」

ティモフェイは答えた。

「私は心から信じ、私の主イエス・キリストに全身全霊を捧げております。それゆえ、あなた方の神々に犠牲を捧げることはできません。」

イゲモン・アリアンは続けた。

「お前のそばに、拷問のために用意された道具が置かれているのが見えないのか？」

ティモシーは答えた：

「いずれにせよ、あなたは、私を力づけてくださる神の御使いたちが見えないのです。」

イゲモンは聖人に言った：

「[3396] 、お前の書物を渡してくれ。そうすれば、そこに秘められた魔法の力を理解できるだろう。」

聖人は答えた：

「愚かで分別のない者よ！　誰も自分の子供を死に追いやったりはしない、ということを知らないのか？　そして、私が書き記した書物は、私の子供たちなのだ。私がそれらを読むとき、神の天使たちが私の前に現れるのだ。」

イゲモンは言った：

「お前は、我々の神々に生贄を捧げることも、自分の書物を見せることも拒んでいる。その不従順が、お前の苦しみのもととならないよう気をつけよ。」

聖ティモシーはこう答えた。

「私はキリスト教徒であるゆえに、いけにえを捧げることも、あなたに私の書物を見せることもいたしません。」

すると、激怒したイゲモンは、家来たちに、真っ赤に焼かれた二本の鋭い鉄の棒を持ってくるよう命じ、それらを聖ティモフェイの耳に突き刺させた。耐え難い痛みに、殉教者の目から涙が溢れ出し、何も見えなくなってしまった。

その後、イゲモンの家来たちは聖人にこう言った。

「我々の神々に犠牲を捧げることを拒んだのだから、今やお前は視力を失ったのだ。」

すると、聖ティモフェイはこう答えた。

「多くの不条理な光景を見てきた私の肉眼は、今や盲目となり傷ついた。しかし、私の内なる、魂の目は、私の魂を照らし続けている。」

聖人がそう言うと、イゲモンは聖人の両手を後ろで縛り、口の中に木の塊を詰め込み、逆さ吊りにするよう命じた。さらに聖人の苦しみを増すため、拷問担当者は彼の首に重い石を縛り付けるよう命じた。

イゲモンの家来たちがこの不敬な命令を実行に移そうとしたとき、聖人は天を仰ぎ見て、こう言った。

「私は、天にまします神がおられ、その方が私をこの苦しみから救い出してくださることを信じています。」

ティモフェイが味わった苦しみは、あまりにも凄まじいものであったため、拷問者たちでさえ彼に同情を覚え、総督に対し、残酷さよりもむしろ慈悲をもって、ティモフェイを王の命令に従わせ

[3396] なお、ディオクレティアヌスの勅令は、キリスト教徒そのものを迫害するだけでなく、彼らの教会を破壊し、聖書を焼き払うことも命じていたことに留意する必要がある。この根拠に基づき、イゲモン・アリアンはティモテイオスに礼拝用聖書の引き渡しを要求した。

るよう懇願した。　その際、イゲモンをなだめようと、家来たちは、ティモフェイがわずか二十日前に結婚したばかりで、その妻はまだ非常に若い女性であると彼に告げた。

これを聞いたイゲモンは、ティモフェイの妻を法廷に連れてくるよう命じ、彼女にこう言った。

「お名前は？」

「私の名はマヴラです」と聖女は答えた。

イゲモンは彼女にこう言った。

「お前の不幸には深く同情する。お前はこれほど若くして、すでに未亡人になる準備をしているのだから。お前に命じる。最高の服を着て、髪を編み込み、顔を美しく整えて、今すぐ夫のもとへ行け。　彼の元に着いたら、あなたがこれほど若いうちに本当に未亡人にならないよう、神々に犠牲を捧げるよう彼を説得しなさい。もしあなたが彼を説得して神々に犠牲を捧げさせることができれば、私はあなたに多くの贈り物、金や銀を授けるつもりだ。

マウラはイゲモンの命じたとおりにすべてを行った。明るい色の服を身にまとい、夫のもとへ行き、多くの苦しみから逃れるために、せめて一時だけでもイゲモンの命令に従うよう、長い間彼を説得した。しかし、夫は口の中に木片を詰め込まれており、話すことができなかったため、彼女に一言も返すことができなかった。

そこでマヴラはイゲモンのもとへ戻り、夫の口から木の片を取り除き、彼が話せるようにするよう、熱心に懇願し始めた。イゲモンは彼女の願いを聞き入れることに同意した。殉教者の口から木の片が取り除かれると、マヴラは再び聖ティモフェイのもとへ向かった。

すると、聖人（目が見えなかった）は、マウラの衣服から漂う香りを嗅ぎつけ、大声で叫んだ。

「私の父、長老ピコルポスはどこにいるのか？」

その父は、少し離れた場所の群衆の中に立ち、息子の苦しみを眺めていたが、彼のところへ近づき、こう言った。

「何が必要なのか、愛するわが子よ？」

ティモフェイは答えた。

「父よ、お願いです――私のために善行をしてください。何かぼろ布を持ってきて、私の顔を覆ってください。そうすれば、マウラの衣服から漂う、魂を蝕む香りを嗅がずに済みます。　この香りは人々に有害であり、彼らをゲヘナへと導く。この香りは欲望の源であり、悪魔の仲間である。それは聖なる者や義人にとって忌まわしく、憎むべきものである。

聖人が話し終えると、マウラは彼にこう言った。

「愛するティモフェイよ！　なぜ私をこれほど辱めるのですか？　私はまだあなたを何一つ傷つけてはいないではありませんか！　私たちが結婚してまだわずか二十日しか経っていません。あなたはまだ私の性格を十分に理解しておらず、私もあなたの家を十分に知り尽くしていないのです。あなたが私を非難しているような不品行とは程遠いわ。だって、私はまだどの男性にも身を捧げると約束したことはないもの。今、あなたがこれほど大きな苦しみの中にいるのを見て、私はあなたのために苦々しく泣き、心が耐え難いほど苦しんでいる。だって、あなたは無実の罪で苦しんでいるのだから。　あなたの苦しみは、私を未亡人にしようとしているという点で、私の魂をも傷つけているのです。しかし、もしかすると、あなたは誰かからお金を借りて、返済する手段がなく、今、貸し手たちから苦痛を強いられているのでしょうか？　もしそうなら、私たちの最高の服を売って借金を返済しましょう。もしあなたが、支払う手段のない国民の借金や税金のせいでこれほど大きな苦しみを味わっているのなら、ここに私たちの家財道具、金、そしてすべての衣服があります。これらすべてを売って、王に税金を納めてください。

その後、聖ティモフェイは彼女にこう言った。

「私の妹、マヴラよ！　私が心の目で、あなたが家から出ていくのを見たとき、あなたの右側を歩いている悪魔に気づいた。彼は手に鍵を持っており、それを使ってあなたの心を世俗の快楽や執着へと向かわせていたのだ。

それに対し、マヴラはこう言った。

– 私の兄、ティモフェイ！私はあなたを探しているの。でも、一体どこであなたを見つけられるというの？もうすぐ土曜日か日曜日になるわ。そのとき、誰があなたの本を読んでくれるの？

聖ティモフェイは彼女にこう答えた。

「この世の虚栄を捨て、私と共にこの高潔な偉業へと歩み出そう、マヴラよ！神はこの偉業によって、私たちのすべての罪を赦し、御国において恵み深い冠を授けてくださるだろう。」

すると、マヴラはこう言った。

「あなたのもとへ向かうとき、私の心は確かに世俗的な情欲に満ちていましたが、あなたが私と語りかけ始めた途端、神の恵みが私の上に降り注ぎました。私の愛する兄弟よ、私もあなたと同じことを望んでいることを知ってください。」

聖ティモフェイは彼女にこう答えた。

「もしあなたが本当に真実を語っているのなら、イゲモンのもとへ行き、その不義を糾弾しなさい。」

それに対し、聖マヴラはこう言った。

「兄弟よ、私は恐れています。数多くの拷問器具や、怒り狂うイゲモンを目の当たりにした後、私が怯えてしまわないか心配なのです。私はまだ若すぎて――たったの十七歳ですから――激しい拷問に耐えられないのではないかと恐れています。」

聖ティモフェイは彼女にこう答えた。

「主であり、私たちの神であるイエス・キリストに信頼しなさい。そうすれば、あらゆる苦しみは、あたかもあなたの体に注がれる香油のようになり、また、あたかもあなたの骨を清涼させ、すべての苦しみを和らげる露のようになるでしょう。」

その後、聖なる殉教者は彼女のために神に祈りを捧げ、こう語った。「あらゆる恵みの神であり父よ、火の窟に投げ込まれた三人の若者（ダニエル書3章）を助け、 ダニエルを獅子の口から救い出された方（[3397] ）、預言者アバクムを通じて預言者に食物を送られた方、獅子の穴だけでなく火の炉の中でも助けを与え、あなたを信頼した者たちを、あなたの慈愛の証しとして救われた方。その慈愛の力によって、あなたは捕虜たちを預言者や殉教者となさった方：　主よ、主よ、今こそ御自分のしもべマヴラに御目を留めてください！主よ、私たちを夫婦として結び合わせてくださったあなたが、この試練においても私たちを結び合わせ、私たちがあなたの聖なる殉教者たちの列から切り離されることのないようにしてください；　主よ、私たちに、あらゆる苦しみと死そのものを勇敢に耐え抜く力を与えてください。そうすれば、私たちの敵たちは皆、恥をかくことになり、彼らは私たちを、私たちの主イエス・キリストへの唯一の信仰から引き離すことはできなくなるでしょう。父と聖霊と共に、彼にすべての栄光が永遠にありますように。アーメン！」

聖ティモテイが妻のマヴラのために神に祈りを捧げた後、マヴラは聖霊に導かれてイゲモンのもとへ赴き、彼の前に進み出てこう言った。

[3397] ダニエルは、「四大預言者」（イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル）のうちの第四人であり、王家の出身で、まだ若者のうちに、他のユダヤ人の捕虜たちと共にバビロンへ連行された。　優れた精神と肉体の資質に恵まれた彼は、そこでカルデアの言語と知恵を学び、3人の仲間、すなわちアナニア、アザリヤ、ミサイエルと共に、王宮に仕えることとなった。　ダニエルはバビロンの王ネブカドネツァルに、その驚くべき夢を解き明かし、自身も幾度となく幻視に恵まれ、その中で最も重要かつ驚くべき神聖な出来事が明らかにされた。　ダリウスが即位すると、彼は帝国の三人の統治者の一人に任命され、父の信仰への忠誠ゆえにライオンの穴に投げ込まれたが、奇跡的に救われた（ダニエル書6:10–24）。彼の生涯と活動は、彼自身の名を冠した聖書に彼自身によって記されている。聖教会では12月17日に彼を記念する。

「ああ、不敬虔なイゲモンよ！ あなたは私の魂を滅びへと導くために、銀や金を与えると約束した。あなたは、人間の魂を滅びへと導くこと以外、何も望んでいないではないか！ しかし、あなたはどんな誘惑をもってしても私を打ち負かすことはできない。なぜなら、私は主であり私たちの神である方の全武装を身にまとって、あなたの前に立っているからだ。」

イゲモン・アリアンは、側近や家来たちにこう言った。

「ティモテオが魔術師だと言ったではないか。ほら、彼はその魔術で妻をも魅了し、我々の命令に逆らうよう仕向けたのだ。」

それから、イゲモンはマヴラに向き直り、こう言った。

「お前もティモテオと共に、生ではなく死を選んでいる。少し考えてみれば、この甘美な人生を自ら手放し、苦痛に満ちた拷問に身を委ねようとしていることがわかるだろう。しかし、もしかすると、夫の死と自身の未亡人となる運命を予見し、彼と共に死ぬことを決心したのだろうか？」　その場合は、気後れしたり悲しんだりしないでほしい。なぜなら、あなたは未亡人になることはないからだ。私は、私の百人隊長たち の中でも最も優秀で裕福な一人[3398] にあなたを嫁がせるつもりだ。そうすれば、彼と共にこの人生を満喫し、以前よりもさらに高貴な夫を得ることで、あなたはさらに栄光に輝くことになるだろう。

これに対し、聖マヴラはこう答えた。

「私はこの世のあらゆる虚栄を捨てました。ですから、あなたの百人隊長など必要ありません。まことに、私は天の花婿、神の御子イエス・キリストと婚約しているのです。彼を信頼して、私は勇敢な心をもってあなたの前に立ち、あなたの不義な裁きを少しも恐れてはいません。」

激怒したイゲモンは、彼女の髪の毛がすべて引き抜かれるまで、それを引きちぎるよう命じた。そして、聖なる殉教者にこう言った。

「お前の頭から髪はすでに引き抜かれた。これ以上、さらに過酷な拷問を受けることのないよう、神々に犠牲を捧げることを勧める。」

聖マウラはこれにこう答えた。

「今、私は悟りました、イゲモンよ。キリストご自身が私を御許に迎え入れ、無知のゆえに犯した私の罪――すなわち、あなたの邪悪な助言に従い、夫を惑わすために髪を飾ったという罪――を赦してくださるのです。　そして、あなたが私の髪を引っこ抜いたのは正しいことでした。なぜなら、髪が奪われることで、私から大きな罪も取り除かれるからです。これからは、私を見守る周囲の人々にとって、もはや誘惑の種にはなりません。」

聖女からそのような言葉を聞いて、イゲモンは激しく怒り、彼女の指を切り落とし、それを脇へ投げ捨てるよう命じた。すると、聖女マウラは彼にこう言った。

「それによってあなたは私に恩恵を与えてくれているのです。なぜなら、私が虚しい装飾品を身に着けるために使っていた指を取り除いてくれたからです。しかし、あなたは自分が何をしているのか理解していないことを知ってください。あなたは私の指を切り落とすことで、私の第二の罪から私を清めてくれたのですから。それゆえ、私はあらゆる苦痛に耐える覚悟をもって、喜びと歓びをもってあなたの前に立っています。」

イゲモンは、聖なる殉教者のこの並外れた忍耐力に深く驚嘆した。一方、ティモテオの父であるピコルポス司祭は、聖人たちの尋問を見守る群衆の中に混じり、その場所の近くにいた。彼は聖マウラの偉業に感嘆し、彼女に静かにこう言った。

「おお、マウラよ、私の敬愛する娘よ！　どうしてあなたは指を切り落とされるという苦痛に耐えることができたのか？」

それに対し、聖マウラはこう答えた。

[3398] 百人隊長――通常100人からなる兵士の部隊の長。

「父上、あなたがぶどう園で枝が切り落とされるのをご覧になったのと同じように、私も自分の指が切り落とされるのを同じ気持ちで見ていました。だからこそ、何の痛みも感じなかったのです。」

これら一連の出来事の後、イゲモン・アリアンは、12人の兵士に大きな釜に水を満たし、火をつけて聖マヴラをその中に投げ込むよう命じた。釜の水が沸騰し、炎によって轟音を立て始めたとき、聖マヴラは釜の中に投げ込まれた。　しかし、彼女は釜の真ん中に立ち、少しも火傷をすることなく、イゲモンにこう言いました。

「私の罪を洗い清め、清らかな心で私の神のもとへ進み、神から永遠の命の冠を受け取れるようにと命じてくださったことに、改めて感謝します。あなたから受けるこの苦しみは、私のキリストであり主である方による救いを私に与えてくれます。　しかし、あなたは、まだ十分に熱くなっていないこの大釜に私を投げ込むのに、少しばかり性急すぎたようです。なぜなら、その中にある水はとても冷たく、私は全く熱を感じないからです。以前、他の苦しみも感じなかったのと同じように。

イゲモンは激しく怒り、兵士たちが殉教者への同情から、大釜の熱い水を捨て、その代わりに冷たい水を注ぎ込み、自分たちの肉欲のためにマヴラを生かしておこうとしたのではないかと疑い始めた。　直ちにイゲモンは裁判の席を立ち、大釜に近づき、大釜の中の水が本当に冷たいのか確かめようとした。大釜に近づくと、彼は聖女にこう言った。

「ここに水が冷たいかどうか確かめるために、私の手に少し水を注いでくれ。」

聖女は彼にこう答えた。

「この水はとても冷たく、私はその温もりを全く感じません。ですから、もし釜をさらに熱くするものがなければ、あなたの使用人の一人を私の父のもとへ遣わしてください。父は大工ですから、薪の束をくれるでしょう。その薪で釜を熱くすればよいのです。」

そう言うと、聖女は釜から沸騰したお湯をイゲモンの手に注ぎかけた。すると、たちまちイゲモンの手は火傷を負い、皮膚が剥がれ落ちてしまった。イゲモン自身は痛みに大声で叫び、皆が耳を疑うほど驚いてこう言った。

「主なる神マウリンを賛美せよ。彼以外に神はいない。今、マウラが栄光を受けるのは、彼を通してのことである。」

そう言うと、彼は聖女を解放するよう命じた。しかし、聖女が拷問の場から立ち去る前に、悪魔は再び総督の心に侵入し、神への正しい信仰を持ち、清い良心を保っている者たちすべてに反抗するよう彼を煽動した。殉教者を呼び寄せると、彼は彼女にこう言った。

「マウラよ、お前のキリストに信頼も希望も抱くな。むしろ、我らの神々に犠牲を捧げよ。」

すると、聖女は彼にこう答えた。

「私は偶像に犠牲を捧げません。私を守ってくださるキリストがおられるからです。」

これに対し、イゲモンは言った。

「もし我らの神々に犠牲を捧げないなら、お前の口に燃え盛る炭を詰め込んでやる。」

聖女はこう答えた：

「あなたは、その狂気じみた行いの意味を理解していない。あなたは、私が言葉や口によって犯した罪から清められるために、私の口に燃える炭を詰め込もうとしているのだ。　なぜなら、わが主もまた、預言者イザヤに御自身の栄光を現し、天使たちの歌声を聞くにふさわしい者とされた際、彼を罪から清めるために、祭壇から鉗子で取り出した燃える炭を手にしたセラフィムの一人を彼のもとへ遣わされたのである。　そのセラフィムは、その炭で預言者の口に触れ、*「これがあなたの口に触れた。あなたの不義は取り除かれ、罪は清められた」*（イザヤ6:7）と言いました。　もし預言者が、その口に炭が触れられた後に罪の赦しを受けたのであれば、どうか、私の口だけでなく、顔や頭、さらには全身をも燃える炭で満たし、それを焼き尽くして、それによって私がキリストの香となるようにしてください。 かつて預言者の罪を清められた神は、私をも罪から清めてくださるでしょう。

聖女からそのような言葉を聞いたイゲモンは、さらに激しい怒りに駆られ、殉教者を焼き尽くすために、硫黄と樹脂を詰めたランプを持ってくるよう命じました。その場所の近くに立ち、すべてを見ていた民衆は、大きな声でイゲモンに向かって叫び始めました。

「いつまで、この若き乙女に次から次へと新たな拷問を考案し続けるつもりなのか！　イゲモンよ、怒りを収めよ。我々は彼女の忍耐力に深く感嘆しているのだ。」

聖マヴラは民衆に向き直り、こう言った。

「皆さん、それぞれ自分の務めに専念してください。男性は男性の務めと責任を、女性は女性のそれを果たしてください。私については、誰も気にかける必要はありません。私は皆さんから助けや保護を求めてはいません。私には、私が信頼を寄せる守護者、神がおられるからです。」

聖女がそう語っている最中、イゲモンはランプの火で彼女の体を焼くよう命じた。聖女はランプを見つめながら、イゲモンにこう言った。

「あなたは、これまでの拷問で私を十分に試したではないかというのに、このランプで私を脅そうとしているのか。あなたは私を、激しく沸き立つ大きくて恐ろしい大釜に沈めたではないか。しかし、その釜は私には冷たい水で満たされているように見えたため、私には何の害も及ぼさなかったではないか。　あの時、あなたの手が水で傷つき、火傷を負った一方で、私は微塵も傷つかなかったことを、あなた自身が目撃したではないか。まさか、私がこの小さなランプを恐れると思うのか？　もし望むなら、イゲモンよ、炉全体に火を点けて私をその中に投げ込んでみよ。そうすれば、私がそのしもべである私のキリストの力を目の当たりにするだろう。私は、私の夫である祝福されたティモテオを通じて、この試練へと私を召してくださった私の神が、私を見捨てないことを信じている。　さて、あなたが私の体を焼くために用いているそのランプについては、私にとっては、まるで大地に降り注ぎ、木々や果実の成長を助ける朝露のようである。

聖なる殉教者の言葉――その言葉は実際の行いによって裏付けられていた――に打ちのめされ、聖マウラにこれ以上どのような拷問を加えればよいか分からなくなったイゲモンは、深く嘆き悲しんだ。その後、彼はティモテオとマウラを十字架に磔にし、互いに顔を向け合わせるように命じた。

聖人たちが磔場へ向かう途中、マウラの母親が彼らを出迎え、娘を抱きしめてこう言った。

「わが娘、マヴラよ！　なぜ、あなたを探している母を置いていくのですか？　誰があなたの装飾品を身につけるというのですか？　もしあなたが、わが娘よ、生き残らなければ、あなたの銀や金、そして貴重な衣服は、いったい誰の手に渡るというのですか？」

すると、聖女マヴラは母にこう答えました。

「金や銀は朽ち果て、衣は虫に食われるでしょう。若き顔の美しさも、やがて消え去るでしょう。しかし、イエス・キリストが私に授けてくださる冠は、永遠に色あせることはありません。」

母は聖マヴラに何も反論できなかった。そして殉教者は、母の手から抜け出すと、十字架の場所へと向かいながら、母にこう言った。

「なぜあなたは私を十字架から引き離し、私の主から与えられる冠を味わわせてくれないのですか。私は死において、その主に似たいと願っているのですから。」

そこで兵士たちは、聖人たちを互いに向き合わせるようにして十字架に磔にした。聖人たちは九日九晩にわたり十字架に留まり、互いに戒め合い、慰め合った。聖ティモフェイは夕方まで妻を教え導き、聖マウラは朝までその伴侶を戒めた。その際、聖マウラはティモフェイにこう言った。

「眠りに落ちてはなりません。そうすれば、私たちの主イエス・キリストが来られたとき、私たちが眠っているのを見て、私たちに怒りを抱かれることのないように。夜も眠らない人の家では、灯された蝋燭が泥棒の侵入を防ぎますが、逆に、蝋燭の火が消えていると、泥棒は容易に家に入り込み、家財を盗み去ってしまうのです。　それゆえ、私たちは目を覚まし、絶えず祈り続けましょう。そうすれば、私たちの主は、私たちが忍耐強くその到来を待ち望んでいるのを見出されるでしょう。

また、敵も、十字架に架けられた私たちに手を出すことを敢えてせず、私たちを侮辱することもできないでしょう。

しばらくして、聖マヴラは再びティモテオにこう言いました。

「勇気を出しなさい、私の兄弟よ。眠気を振り払い、目を覚まして、私が見たものを理解してください。まるで恍惚状態にあるかのように、私の目の前に、手にはミルクと蜂蜜で満たされた杯を持った人が立っているのが見えました。その人は私に言いました。『これを受け取って、飲んでください』。しかし、私は彼に尋ねました：　『あなたはどなたですか？』すると彼は答えた。『私は神の天使だ』。そこで私は彼に言った。『主にお祈りしましょう』。すると彼は私に言った。『私はあなたの苦しみを和らげるためにあなたのところへ来たのだ。あなたはこれまで何の食べ物も口にしてこなかったから、食べたり飲んだりしたいと強く願っているのを見た』。　私は再び彼に言った。「誰があなたに、私にこの慈悲を示すよう促したのですか？　私の忍耐や断食など、あなたには何の関係があるのですか？　神は、人間には不可能なことさえも成し遂げられるお方であることを、あなたは知らないのですか？」私が祈ると、その男が顔を西の方角に向けていたのが見えた。　このことから、私はそれがサタンの惑わしであることを悟った。サタンは十字架の上でも私たちを誘惑しようとしていたのだ。その後まもなく、その幻は消え去った。すると、別の人物が近づいてきて、私を乳と蜜が流れる川へと連れて行ったように感じられ、彼は私に言った。「飲みなさい」。――しかし、私はこう答えた。　「私はすでにあなたに言ったでしょう。私の主であるキリストのために『死の杯』を飲み干すまでは、水も、この世のいかなる飲み物も飲まない、と。その杯は、主ご自身が私のために、救いと永遠の命による不死へと変えてくださるのです」。私がそう言っている間、その男は川から水を飲み、突然、彼自身も川も共に消え去ってしまった。　また、私は三番目の男性も見た。その姿は美しく、顔は太陽のように輝いていた。彼は私の手を取り、私を天へと導き、白い衣で覆われた玉座と、見事な冠を見せてくれた。その美しさに驚いた私は、私を天へと連れてきてくれたその男性に尋ねた。「これは誰のものですか、ご主人様？」　すると彼は私にこう言いました。「これはあなたの功績に対する報いであり、この玉座も、衣も、冠も、すべてあなたのために用意されたものです。」その後、その同じ男性が私をもう少し高いところへ連れて行き、同じく美しく飾られた別の玉座と、白い衣、そして冠を見せてくれました。　私は再び、私を連れてきてくれたその男性に尋ねました。「では、これは誰のものですか、先生？」すると彼は私に言いました。「これはあなたの夫、ティモテオのものです。」――私は思い切って彼に尋ねました。「なぜ、これらの玉座は隣り合っていないのですか？　互いにかなり離れた場所にあるのはなぜですか？」　すると彼は私にこう答えました。「それは、あなたとあなたの夫との間に大きな違いがあるからです。あなた自身も、彼の勧めによって殉教の業を引き受けたことを知らないのですか。それゆえ、彼はある程度、あなたの冠の功労者なのです。　さあ、今はあなたの肉体に戻りなさい。明日の朝、第六の刻に、神の天使たちがやって来て、あなたたちの魂を受け取り、天へと導いてくれるでしょう。しかし、敵が再びあなたたちを誘惑し始めないよう、引き続き警戒を怠らないでください。」

聖マウラはこの幻視を弟のティモテオに語り、二人は主について互いに慰め合った。

そして、十日目の第六時が訪れると、神の天使たちが聖なる殉教者たちの魂を迎えに来ました。その時、聖マウラは、彼女の苦しみを見守っていた民衆に向かって、力強い声でこう言いました。

「兄弟姉妹の皆さん！　私たちが人々の間にいたときは、人間らしく（世俗的に）生きていたことを思い出してください。しかしその後、私たちは神のしもべとして、神の御心に適った生き方をしました。　そして今、私たちはまもなく、私たちの主イエス・キリストから不滅の冠を授かることになる。同様に、あなた方も、人間としての自然な欲求を満たしつつ、神に喜ばれる行いもなすよう努めなさい。そうすれば、罪の赦しを得て、その同じ主であり私たちの神から冠を授かることになるだろう。

聖マウラがこれらの言葉を語り終えると、二人の聖人はその清らかな魂を神の御手に委ねました[3399]。こうして、彼らの苦難は、私たちの主イエス・キリストによる義の冠をもって締めくくられました。主イエス・キリストには、父と聖霊とともに、永遠に栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調:

数多の苦難に耐え、神から冠を受けられた、偉大なるティモテオよ、そして栄光に満ちたマヴラよ、私たちのために主にお祈りください。あなた方の至聖なる記念を祝う私たちのために、都と人々を和解させてください。それこそが、信者たちの確固たる支えだからです。

ペチェルスクの修道院長、私たちの尊き父テオドシオスの生涯

記念日：5月3日

尊き神を宿す私たちの父アントニウスに続き、ロシア教会の偉大な灯火であり、栄光あるキエフ・ペチェルスク修道院の勇敢な修行者であったのは、神から数多くの功績と奇跡によって称えられた、尊き神を宿す私たちの父テオドシウスでした。　この栄光ある人物の生涯を知りたいと願うすべての人々のために、ペチェルスクの年代記作者である聖ネストルが、彼に関する詳細な記録を私たちに残してくれた。彼は天の忠実な証人として、聖テオドシイの生涯に関する確かな情報を私たちに提供している。ここに提示する物語は、この伝記を基に、若干の省略を加えて作成されたものである。

私たちの尊者であり、神に愛された父テオドシウスの故郷は、ルーシの地にある都市の一つ、ヴァシレフ[3400]であった。敬虔な両親は幼い頃から息子を敬虔に育て、彼が成長すると、読み書きを学ぶために学校へ通わせた。　まもなくテオドシウスは聖書をこれほどまでに深く学び、誰もが彼の知性と英知に驚嘆した。少年時代から、テオドシウスは毎日熱心に神の教会に通い、そこで読まれ、歌われるすべてに注意深く耳を傾け、常に礼拝の最後まで立ち続けていた。

すでにこの頃から、彼は同年代の子供たちとは距離を置き、子供たちの遊びには一切参加しなかった。

テオドシウスが13歳になった時、両親は何らかの理由で、ロシアの中心部に近い都市であるクルスク[3401]へ移住せざるを得なくなった。ここでまもなく、神の摂理の御心により、彼の父は死を迎えることとなった。その義なる魂は、この地上の谷から天の御国へと移り住んだのである。　父を亡くした13歳のテオドシイは、母と共に暮らし、年を重ねるごとに神の恵みによって強められていった。　この世の父の死後、テオドシウスは天国での永遠の命を得ることに、これまで以上に熱心に努めるようになった。彼は神に喜ばれる行いを渇望し、いかなる世俗の快楽からも身を遠ざけた。高価な衣服を身に着けるのをやめ、質素な服だけを身にまとうようになった。彼には常にただ一つの願い、すなわち救いを得ることだけがあった。

[3399] 聖殉教者たちの殉教は、およそ286年に起こった。その後、コンスタンティノープルでは、ユスティニアヌス帝の宮殿の近くに彼らのために建てられた教会で、聖殉教者ティモテオスとマウラの記念日が盛大に祝われた。このことから、この教会には彼らの聖遺骨、あるいはその一部が安置されていたと推測される。

[3400] ヴァシレフという名のヴァシルコフは現在も存在し、キエフ州の県都となっている。同地はキエフの南西36ヴェルスタに位置し、ドニエプル川の支流であるストゥグネ川沿いに位置している。――聖テオドシウスは1035年から1038年の間に生まれた。

[3401] テオドシイの両親がクルスクへ移住することになったきっかけは、テオドシイの父をヴァシレフからクルスクへ転任させるという公爵の命令であった。　ヴァシリエフでも、クルスクと同様、フェオドシイの父はおそらく、公爵の「ティナ」、すなわち裁判官や（刑事事件以外の）調停役としての職務を遂行していた。

ある日、フェオドシウスはエルサレムからの巡礼者たちと出会った。彼らの話に興味を惹かれ、聖地への強い愛に燃えたこの祝福された若者は、世界の救い主が私たちの救いのために住まわれ、その尊い血を流された聖地を、彼らと共に訪ねさせてほしいと懇願した。　そして、その決意を実行に移すため、テオドシウスは夜、母に内緒で遠い旅路へと出発した。　一方、母親は三日間、涙ながらに街中を彼を探し回り、彼がどこへ行ったのかを知るまで探し続けた。すると母親は末の息子を連れてすぐに彼を追いかけて行き、追いつくと激しい怒りで彼に容赦ない暴行を加え、地面に叩きつけて足で踏みつけた。その後、彼を家に連れ帰ると、部屋に閉じ込めた。　フェオドシイはこれらすべてを、不平一つ言わずに、むしろ感謝の念さえ抱いて耐え忍んだ。ついに母は彼を憐れみ、彼を解放すると、涙ながらに家から決して出て行かないよう懇願し始めた。そこでフェオドシイは以前の行いに戻り、相変わらず毎日教会に通うようになった。

ある時、教会ではプロスフォラが不足しているため、神聖な典礼が頻繁に行われないことに気づいたフェオドシイは、神への捧げ物となるパンを自ら作ることを決意した。そのためにフェオドシイは小麦を購入し、自分の手で挽いてプロスフォラを焼き、それを教会への献げ物として捧げた。また、聖体拝領のためにプロスフォラを捧げる人々からわずかな金を受け取ることがあっても、テオドシウスはそれを貧しい人々に施した。彼は、人類の敵である悪魔がこの行いに立ちはだかる妨害を意に介することなく、このような生活を2年か、それより少し長い間送った。　悪魔の唆しにより、テオドシウスの同世代の人々はこれに憤り、彼の母親さえも彼に敵対させようと画策した。母親はテオドシウスにこう言った。

「お願いだから、子供よ、その仕事をやめて。そのせいで、あなたの一族に非難の声が上がっているのよ。」

しかし、この祝福された少年は謙遜にこう答えました。

「母よ、どうか私の話を聞いてください！　私たちの主なる神、イエス・キリストご自身が、私たちのためにご自身を低くされ、私たちも主のために謙遜になるよう、その模範を示してくださったのです。　主ご自身が最後の晩餐において、パンを御自身の体へと変容させられました。それならば、この偉大な神秘――パンがキリストの体へと変容する――が成し遂げられるべきパンを準備する人を、どうして非難したり責めたりできるでしょうか?

その答えを聞いて、母は少年の英知に深く驚き、それ以来、彼を放っておくようになった。しかし、悪魔は謙遜で勤勉な少年に対して母を煽り立て続けることをやめず、息子にプロスフォラを焼くことを禁じるよう彼女に唆し続けた。　一年が過ぎた頃、母はテオドシオスがプロスフォラを焼き、炉の熱で日焼けしているのを見て、再びプロスフォラの焼き上げをやめるよう説得し始めた。彼女は息子に対して、時には優しく、時には脅し、時には暴力を振るうことさえあった。聖なる若者は、どうすればよいか分からず、夜中に起き上がり、こっそりと家を出た。　そこから隣の町へ逃げ出し、ある長老の家に身を寄せ、そこでその働きを続けた。母親は再び彼を見つけ出し、暴力を振るって、彼を再び自分の町へ連れ戻した。

クルスクの市長は、教会で聖テオドシウスの謙虚さと敬虔な祈りに気づき、彼に着るための明るい色の服を贈った。テオドシウスはその新しい服を短期間着た後、それを貧しい人々に与えた。市長は再び、さらに上質な服を彼に着せたが、少年はそれもまた貧しい人々に与えてしまった。このように、テオドシウスは何度も同じことを繰り返した。

その後、福者は鍛冶屋へ向かい、そこで鍛冶屋に鎖のような形の鉄の帯を打たせるよう依頼した。このきつく締め付けられ、血が出るほど体に食い込む帯を、彼は直接体に巻きつけ、それ以来、二度とそれを外すことはなかった。

ある祝日のこと、市の長はテオドシウスに、自身の招きによる晩餐会に出席するよう命じ、その若者に客人の給仕をさせたかったのだ。　晩餐会に出かけるにあたり、少年は母の教えに従い、祝いの服を着なければならなかった。ところが、彼が着替えを始めたとき、少年がどんなに隠そうとし

ても、母は彼のヒトン（下着）に血が付いているのを見てしまった。　なぜ少年の体に血が付いているのかを知りたかった母は、より注意深く見入ると、少年の体に鉄の帯があることに気づき、その帯が体に食い込んでできた傷口から血が流れていることを確信した。　テオドシオスに激怒した母は、彼の着ていたヒトンを引き裂き、殴りながら息子から帯を取り外した。しかし、その聖人は、まるで何の屈辱も感じていないかのように服を着ると、大いなる謙虚さをもって、市の長とその客たちの夕食の給仕を務めた。

しばらくして、テオドシウスは教会で福音書の次の言葉を耳にすることになった。*「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない」*（マタイ10:37）。そしてさらに、*「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の御言葉を聞き、それを行う者たちである」*（ルカ8:21）。これらの言葉に奮い立たされ、　テオドシウスは密かに家を出て、キエフへと向かった。そこで彼は、聖アントニオの洞窟での厳格な修道生活について耳にし、彼に関する話に興味を抱き、その尊い長老を訪ねたいと願った。　アントニオスの洞窟に到着すると、テオドシウスは彼の前にひざまずき、涙ながらに、修道生活を送るために自分を受け入れてくれるよう懇願し始めた。聖アントニオスは彼の話を聞き終えると、こう答えた。

「若者よ、この洞窟がいかに暗く、狭いかお前は見ているだろう。お前はここの不便さに耐えられないだろう。」

それに対し、神に導かれた若者は感動してこう答えた。

「神が私をあなたの聖なる洞窟へと導いてくださいました。それは、私があなたを通して救われるべきであることをはっきりと示しておられるのです。あなたが私に命じることは何でも従います。」

そこで、聖アントニオスは愛情を込めて彼を受け入れ、祝福を授けた後、教養ある司祭である至福のニコンの世話に託した。ニコンはまもなくその若者を修道士として剃髪させた。テオドシウスは、生後23歳の時、キエフの敬虔な公ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチの死後まもなく、剃髪を受けた[3402]。

聖なる修道者の位を受けた後、尊者テオドシウスは全身全霊を神への奉仕に捧げ、師であるアントニウスの意志を熱心に実行した。彼は、キリストの軛を受け入れた修道者として、修道者の重労働を熱心にこなした。眠気を振り払い、夜通し目を覚まして神を賛美し、　昼間は、禁欲と断食によって肉体を律し、様々な重労働に従事した。この若者の高潔さ、謙遜、活気、そして勤勉さは、聖アントニオや至福のニコノスでさえも驚嘆させた。テオドシオスの義にかなった生き様を見て、二人は共に神を賛美した。

一方、テオドシオスの母は、自分の住む町やその周辺で息子を懸命に探し回ったが、見つからず、すでに彼が亡くなったかのように嘆き悲しんでいた。それからかなり時間が経って初めて、彼女は息子がキエフの洞窟に住む聖アントニオのもとで修道者となったことを知った。そこで彼女は、その長老のもとへ赴き、洞窟から出てきてくれるよう懇願した。　ついに長老が彼女の元へ出てくると、彼女は涙ながらに、息子を見せてほしいと切に懇願した。母の願いを長老から聞いた若者は、母から隠れる術がないことにひどく戸惑ったが、アントニオの説得に従い、洞窟から出て母のもとへ向かった。　偉大な功績と労苦によって痩せ細った顔をした修道士となった息子を見て、母は彼の胸に倒れ込み、苦々しく泣きながらこう言った。

「私の家に戻ってきて、息子よ。そして、あなたの魂の救いになると思うことは、すべて自分の意志のままにやりなさい。私が死んだら、私の体を大地に委ねて、それからこの洞窟に戻ってきてください。あなたなしでは、私は生きていけないのですから。」

[3402] これは1055年から1056年のことである。ヤロスラフ1世・ウラジーミロヴィチは1019年から1054年まで公として統治した。

その祝福された若者は、母にこう答えた。

「母よ、ここキエフに残り、女子修道院で修道女になってください。そうすれば、時折私のもとを訪ねて会いに来ることができます。そうすることで、あなたは救いを得て、永遠の命の中で神を仰ぎ見ることができるでしょう。」

しかし、母は息子の言葉に耳を貸そうとしなかった。そこで聖人は洞窟に戻り、母の魂の救いを神に熱心に祈り始めた。そして神は、御自身の御心に適う者の祈りを聞き入れられた。数日後、母が彼の元を訪れ、こう言った。

「わが子よ、私はあなたの助言に従い、もう二度と家には戻らないつもりです。神の御心に従って修道衣をまとい、残りの生涯を女子修道院で過ごすつもりです。あなたが言った通り、この儚い世の平和など何の意味もないと、私は確信したからです。」

これを聞いた聖人は心から喜び、母の決意を尊者アントニオに伝えた。アントニオは、母の心が真理の道へと向かったことを神に賛美し、洞窟から出て、長い間、彼女の魂を救う教えを説いた。そして、彼女を聖ニコラオスの女子修道院へと導き、そこで彼女は修道衣をまとい、修道者となった。そこで数年間敬虔に過ごした後、テオドシオスの母は安らかに神のもとへ帰った。

母の修道入りを機に、あらゆる世俗の煩わしさから完全に身を引いた至福のテオドシウスは、聖アントニウスと至福のニコヌスと共に、修道者の務めに一層熱心に励むようになった。　長老たちの共同体において、テオドシウスは断食と祈りによって悪霊に働きかけ、それらを打ち負かす力をすぐに発揮した。このことにおいて、彼らを助けたのは神ご自身であり、神はこう言われた。*「二人または三人が、わたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるからである」*（マタイ18:20）。

至福のニコスが、より厳しい修行のために別の場所へ修道院を去らねばならなくなった際、至福のテオドシウスは神の御心と尊者アントニオスの願いにより、司祭に叙階された[3403]。この聖職を受け入れた彼は、日々、深い敬虔さをもって神聖な聖体礼儀を執り行うよう努めた。　テオドシウスの叙階直後、尊者アントニオスは洞窟に兄弟団から12人の修道士を集め、彼らに至福のヴァルラアムをイグメンに任命し、自身はその場を去って、自ら掘り開いた別の洞窟で修行に励むようになった。そこで、司祭の位を尊ばれ、敬虔な私たちの父テオドシオスは、至福のイグメン・ヴァルラアムと共にアントニオスの洞窟に残り、洞窟の上に至聖なる神の母を称える小さな教会を共同で建立し、兄弟たちの共同の祈りの場とした。

聖テオドシオスは当時、断食、活力、手作業、そして何よりも謙遜と従順という偉大な行いによって、誰よりも際立っていた。　彼は兄弟たちを助けていた。時には水を運び、時には森から薪を運び、時には夜間に他の修道士たちに割り当てられた仕事をこなした。さらに、彼は常に徹夜で祈りを捧げながら、一晩中目を覚ましていた。　夏の夜には、時折洞窟の最上部に登り、腰まで裸になって、無数のブヨや蚊に身をさらした。　その間、両手では羊毛を紡ぎ、口では詩篇の詩を詠んでいた。虫に何度も刺され、傷つけられた結果、全身は血に染まっていたが、彼は朝課の鐘が鳴るまで、その場から微動だにせずじっと座り続けていた。　教会へも彼はまた一番乗りでやって来て、定位置に立つと、虚しい考えに気を取られることなく、ひたすら教会の祈りを捧げた。そして教会を出るのも、誰よりも最後だった。これらすべてを目撃した人々は皆、彼の謙虚さと忍耐力に感嘆し、まるで父親のように彼を愛おしく思った。

しばらくして、洞窟修道者たちの長である至福のバルラアムは、イジアスラフ公[3404]により、聖大殉教者ディミトリイ修道院の修道院長に任命された。　その時、すべての兄弟たちの願いと要請に応じ、尊者アントニーは聖テオドシオスを呼び寄せ、当時ペチェール修道院にいた十二人の兄弟た

[3403] これは1056年から1057年のことだった。

[3404] イジャスラフ1世・ヤロスラヴィチは1054年から1073年まで、その後1076年から1078年まで再び公爵を務めた。

ちの修道院長となるよう彼を祝福した。　この称賛に値する修道院長、私たちの尊い父テオドシオスは、この高い地位にあっても、その謙虚な生活様式を変えることはなく、相変わらず自らの行いを厳しく律し、*「自ら善行の模範を示し」*（テトス2:7）、　誰よりも早く仕事をこなし、礼拝のために他の人より早く教会へ赴き、誰よりも遅くそこから立ち去った。この義人の神に喜ばれる祈りによって、それ以来、ペチェール修道院は繁栄し、豊かになっていった。こうして、聖書に記された次の言葉が成就したのである。　　*「義人はヤシの木のように栄え、レバノンの杉のように高くなる」*（詩篇91:13）。そして実際、神の恵みによって良き土壌に蒔かれた種が百倍の実を結ぶように、聖テオドシウスもまた、洞窟修道院の兄弟たちの数を増やしていった。　彼は少しずつ、自分の修道院に百人の兄弟たちを集め、彼らの生活は善良な徳によって花開いた。兄弟たちの多くは*「悔い改めのふさわしい実」*を結んでいた（マタイ3:8参照）。

兄弟たちの数が著しく増えたため、洞窟は手狭になり、修道士たちが厳格に沈黙の生活を送る妨げとなってしまった。また、教会も共同の祈りを捧げるには狭すぎた。　このため、聖テオドシウスは、洞窟からそう遠くない場所にあり、修道院の塀を築くのに十分な広さを持つ美しい場所を選び、そこに修道院を建設しようと決意した。　聖アントニオの祝福を得て、彼はキリストを愛するイジアスラフ公にその場所を請い求め、その後、神の御加護により、まもなくその地に聖母マリアの被昇天を称える広々とした木造の教会を建立した。　その後、彼はそこに修道院の塀を築き、十分な数の修道室を建てて、兄弟たちと共に新しい修道院へ移り住んだ。

ある時、この修道院を至福のエフレムが訪れた。神は、フェオドシイを彼のもとへ導き、ストゥディオス修道院の修道生活規律を詳細に学ぶようにされた[3405]。エフレムから聖 ストゥディオス修道院の規律の完全な写しを受け取ったフェオドシイは、自らの修道院の運営においても、そのすべてに従うようになった。　その後、この規則は、最も古いペチェルスク修道院の例に倣い、他のすべてのロシアの修道院にも受け入れられた。

聖テオドシオスは、弟子たちを熱心に教え導き、真の悔い改めへと励ました。この聖なる師は、毎晩、修道士たちの個室を巡回する習慣を持っていた。そうすることで、修道士たちの生活様式を把握し、各修道士の修行への熱意の度合いを知ることができたのである。　彼は、個室を巡回中に修道士の祈りの声を聞くと喜び、神を賛美した。しかし、夕の祈りの後、2、3人の修道士が個室に集まって談笑しているのを耳にすると、テオドシウスは自分の存在を知らせるためにドアを叩き、心を痛めながらその場を立ち去った。　翌日、彼は過ちを犯した者たちを呼び出し、直接非難することなく、たとえ話を用いて彼らに悔い改めを促した。　心優しい兄弟は、すぐに自分の過ちを悟って許しを請うたが、頑なな者は、修道院長がたとえ話で自分以外の誰かのことを言っているのだと思い込み、尊者様が直接非難して罪人に悔悛の罰を科すまで、自分の行いを認めようとはしなかった。　こうしてテオドシウスは、兄弟たちに神に熱心に祈るよう、晩の祈りの後は会話をせず、ましてや談話のために部屋から部屋へと行き来しないよう教えた。彼は、各自が自分の部屋で祈り、手仕事をしながらは常にダビデの詩篇を声に出して読むよう教えた。　彼の存命中、修道士たちはその功績において神の天使たちに匹敵しているかのようであり、ペチェルスク修道院はまるで天国の修道院のようであった。　実のところ、私たちの尊い父テオドシオスは、その修道院において、まるで偉大な天の灯火のように、善行の光で輝いていた。その義にかなった生涯ゆえに、テオドシオスは生前から、目に見える光に照らされ、人々の前で神によって称えられていた。それは次のような状況下で起こった。

[3405] 聖エフレムはコンスタンティノープルを訪れ、そこでストゥディオス修道院の規則を書き写した。 この規則は、9世紀初頭にコンスタンティノープルのストゥディオス修道院の院長であった聖テオドロス・ストゥディトスによって制定された。9世紀末には、ロシア正教会の指導原則として導入され、14世紀半ばまで遵守されていたが、その後、エルサレムの規則に取って代わられ始めた （この規律は、6世紀に聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイによってパレスチナの修道院に導入された。——聖サヴァの記念日は12月5日に祝われる）聖バシレイオス大主教の修道生活に関する共同生活規則に次第に取って代わられていった。聖エフレムの記念日は、教会によって1月28日に祝われる

ある暗い夜、聖大天使ミカエルの修道院のイグメンであるソフロニオスが、テオドシオスの修道院のそばを通り過ぎて自分の住居へ戻っていた。すると突然、その義人の修道院の上に輝く、尋常ならざる光が彼の目に飛び込んできた。　この異例の現象に感銘を受けたソフロニイは、神を賛美してこう言った。「主よ、あなたの憐れみはなんと偉大でしょうか！　あなたは、この地にテオドシイという灯台を人々に与え、彼はその輝きをもって修道院を照らしているのです」。

同様の現象は他の人々によっても何度も目撃され、人々がこのことを盛んに語り合ったため、その噂は公爵とその家臣たちの耳にも届いた。この輝きは、聖なる長老の義にかなった生活の光を映し出したものだった。人々は皆、この現象をそのように解釈していた。

至福のテオドシウスは、父ヤロスラフの後を継いでキエフの公位についた、キリストを愛する公イジャスラフからも深く愛されていた。イジャスラフは、神に霊感を受けた師の語りに耳を傾けるため、しばしば尊者のもとを訪れていた。　ここで注目すべきは、私たちの尊者テオドシイが門番に厳命を下していたことである。すなわち、正午の礼拝と夕べの礼拝の間の時間帯は、門を開けず、誰をも修道院内に入れないようにせよ、というものであった。これにより、彼は修道士たちが、長時間にわたる夜の祈りと朝の聖歌に備え、日中に休息をとる機会を与えようとしたのである。　ある日、その時間帯に、キリストを愛するイジアスラフ公が、少年を伴って馬に乗ってやって来た（それまで公が馬に乗って修道院を訪れたことは一度もなかった）。馬から降りたイジアスラフ公は門に近づき、門番に門を開けるよう命じてノックした。　門番は、修道院長の命令により、晩課が始まるまでは誰に対しても門を開けることはできないと説明した。そこで公は、自分が誰であるかを門番に伝えようと、こう言った。

「私だ。私一人だけのために門を開けてくれ。」

しかし、門番は相手が公爵であることに気づかず、こう答えた。

「言っておくが、修道院長は誰にも門を開けるなと言っている。たとえ公爵ご自身が来られたとしてもだ。だから、もしよければ、晩課まで少し待ってほしい。」

「私は公だ」とイジャスラフは言った。「まさか、私を開けてくれないというのか？」

門番は門の下に身を屈めて、それが公爵であることを確かめたが、それでも門を開けることはせず、このことを尊者にお知らせしに行った。公爵は仕方なく、門の前で辛抱強く待つしかなかった。その後、尊者が出てきて、公爵を見ると、彼に頭を下げた。そこで公爵は聖テオドシウスにこう語りかけた：

「父上、あなたの命令はなんと厳しいことでしょう。修道士によれば、あなたはお公様でさえも中に入れるなと命じられたそうです。」

聖人はこう答えました。

「それは、善良な君主よ、夜間の祈りの務めを控えた正午に、兄弟たちが少し休息をとれるようにするためです。しかし、聖母マリアへのあなたの称賛に値する熱意は、あなたの魂にとって善であり、救いとなります。私たちは、あなたがここに来てくださったことを大いに喜んでいます。」

そこで彼らは教会へ向かった。そこで、聖者が祈りを捧げた後、キリストを愛する公は、聖テオドシウスとの魂に益となる対話を楽しんだ。　その後、公は自らにとって大いに益となるものを得て、神を賛美しながら自宅へと戻った。この日から、イジャスラフは聖人への愛着をさらに深め、彼を古の聖なる教父たちに似た人物と見なし、あらゆる事においてその助言に従うようになった。

公爵や貴族たちから敬意を払われていたにもかかわらず、私たちの尊者テオドシオスは、これに少しも驕ることなく、まさに闇の中で明るく輝く星のように、さらに深い謙虚さを身にまとい、言葉だけでなく行動をもって弟子たちを教えながら、一層精進するようになった。　修道院長という地位にもかかわらず、聖テオドシオスはしばしばパン屋に立ち寄り、パン職人たちと共に働き、生地をこねたり、パンを成形したりした。　尊者は、神から授かった肉体の強靭さという才能を隠すことな

く、常に明るい精神で、その活気をもって他の人々を励まし、自分の仕事への熱意を決して緩めてはならないと説き続けた。

ある日、聖母マリアの被昇天の祝日の前夜、給仕係のテオドールが尊者のもとを訪れ、厨房の水が足りなくなったが、運ぶ者がいないと告げた。すると尊者は立ち上がり、直ちに自ら井戸から水を運び始めた。　修道者の一人が、イグメーンがそのような作業をしているのを見て、急いで他の修道士たちにそのことを伝えました。すると、彼らは大急ぎで集まり、十分な量以上の水を運び込みました。

他にも同様の出来事があった。ある時、食事の調理に必要な薪が十分に用意されていなかった。そこで、ケラーが再び尊者のもとへやって来て、こう言った。

「師よ、修道院の兄弟たちの中で、手空いている誰かに、必要な量の薪を準備しに行くよう命じてください。」

「私は手空きだ。私が行こう」と尊者は答えた。

この会話は昼食の時間に行われた。聖人は斧を手に取り、自ら薪を切り始め、他の修道者たちには昼食をとるよう命じた。　昼食後、食堂から出てきた修道士たちは、修道院長が作業をしているのを見た。その謙虚さに恥じ入った修道士たちは、自ら斧を手に取り、数日間分にも十分な量の薪を準備した。

ペチェルスク修道院に、修道士として剃髪した聖ニコン[3406] が修行の旅から戻ったとき、聖テオドシウスは、当時自らもイグメンの位にあったにもかかわらず、彼を父としてあらゆる敬意を払った。　また、至福のニコンが本を綴じるための糸を不足させたとき（彼はその作業に従事していた）、テオドシウスは彼のために糸を紡いだ。　これこそが、神に導かれたこの人物の、様々な労苦や活動における謙遜さと質素さであった。また、修道院長は質素で粗末な衣服を身にまとっていた。肌には硬い毛皮の衣を、その上にはもう一枚、ひどく擦り切れたものを着ていた。後者を着ていたのは、下に着ているとげのある毛皮の衣を人々に見せないためであった。

ある時、尊者はある用事でキリストを愛するイジアスラフ公のもとへ向かったが、公はその時街から遠く離れていたため、フェオドシウスは夕方までそこで待機せざるを得なかった。彼が帰路につこうとした時、キリストを愛する公は、自分の馬車で彼を修道院まで送るよう命じた。　道中、彼を乗せていた少年は、尊者様の粗末な服装を見て、これが修道院長ではなく、ただの修道士だと思い込み、こう言った。

「修道士よ、馬に乗れ。私は戦車に乗るから。」

聖人は直ちに謙虚に戦車から降り、その席を若者に譲り、自身は傍らを歩いたり、疲れると馬にまたがったりした。こうして彼らは夜通し旅を続けた。　夜明け頃になると、公爵のもとへ向かう高官たちが彼らの向かいから現れ始めた。彼らは聖者を認めるやいなや、馬から降りて深く頭を下げた。すると聖者は少年に向かってこう言った。

「もう日が昇った。戦車から降りて、自分の馬に乗れ。」

少年は、貴族たちが聖者に頭を下げているのを見て恐れをなすと、戦車から降りて自分の馬に乗った。一方、聖者が戦車に乗ると、向かいから来る者たちはさらに頻繁に聖者に挨拶をするようになった。それに同行していた少年は、そのせいでますます当惑していった。

彼らがこのように修道院に到着すると、修道士たち全員が尊者を出迎え、地面にひれ伏して敬意を表した。少年は、皆がひれ伏しているその人物が誰なのか理解できず、さらに大きな恐怖に襲われた。　聖人はその少年の手を取り、食堂へと連れて行き、そこで彼に食事と飲み物を与えるよう命じた 。その後、贈り物を渡して彼を帰した。 この出来事は、その少年自身によって広く知られるようになったが、聖人は誰にもこのことを語らなかった。なぜなら、聖人は常に兄弟たちに、何事にお

[3406] 聖ニコンはロシア南部のトムタラカンへと退去した。

いても決して高ぶることなく、常に謙遜を保ち、自らを誰よりも低い位置に置くよう教えていたからである。

聖人は、まさにこのような謙遜を兄弟たちに教えていた。ちなみに、彼はあらゆる事柄を始める際には、長老の祝福を求めるよう教えていた。それは、*「惜しみなく蒔く者は、惜しみなく刈り取る」*（IIコリント9:6）という聖書の言葉を心に留めていたからである。　この言葉の真実を、彼は自らの行いによって示した。彼には次のような習慣があった。信心深い人々が何らかの用事で彼を訪ねてくると、尊師は神聖な教えを授けた後、修道院の備蓄からパンと温かい食事を彼らに与えて送り出していた。ある時、ある公爵自身が修道院の食事を味わった後、尊師にこう言った。

「父上、ご存知の通り、私の屋敷はこの世のあらゆる恵みで満たされていますが、ここほど甘美な食事を食べたことはありません。私の家来たちは、様々な高価な料理を用意してくれますが、それらはこれほど甘美ではありません。どうか、父上、お教えください。なぜ、あなた方の食事にはこれほどの甘美さがあるのですか？」

すると、至福のテオドシウスはこう答えました。

「もし、善良な殿下、その理由を知りたいのであれば、よく聞いてください。こうです。私たちの兄弟たちが温かい食事を調理したり、パンを焼いたりするとき、次のような手順を守っています。　まず、修道士がイグメヌスのところへ行き、祝福を受けます。それから、聖なる祭壇の前で三度地面に頭をついて礼拝した後、祭壇のろうそくに火を灯し、その火で調理場とパン焼き場の薪に火をつけます。そして、大釜に水を注ぐ必要があるとき、修道士は最年長の者に『祝福してください、父上』と言います。 すると、長老は「神があなたを祝福されますように、兄弟よ」と答える。 このように、私たちのところではあらゆる仕事が祝福から始まるため、料理にも甘美さが宿るのだ。一方、あなたの家来たちは、互いに罵り合い、不平を言い、中傷し合いながら働いているのだろう。おそらく、上司から頻繁に殴打を受けていることさえあるかもしれない。それゆえ、彼らの仕事は罪を犯さずに成し遂げられているわけではないため、甘美さとは程遠いものになってしまうのだ。

これを聞いて、公爵は言った。

「まことに、父よ、それはあなたが仰る通りです。」

尊者がある料理について、それが長老の祝福なしに、また修道院の規則に反して作られていると耳にすると、その料理を「敵の料理」と呼び、祝福された信徒たちがそれを口にすることを許さなかった。そして、そのようにして調理された食事は、水か火の中に投げ捨てるよう命じた。　ある時、尊者とその兄弟たちが、聖大殉教者ディミトリオスの祝祭に際し、その聖人の名を冠した近隣の修道院へ向かう際にも、同様の出来事が起こった。　その日、ある敬虔な人々から、修道院にとても美味しいパンが送られてきた。テオドシウスは、ケラール（食糧管理係）に、その日のうちに残りの修道士たちの食事としてそれらを出すよう命じた。　しかし、ケラリウスはその命令に従わず、心の中でこう考えた。「明日、修道士たちが全員集まった時に、このパンを昼食に出そう。今日は残っている修道士たちに、いつもの修道院のパンを食べさせよう」。

彼はその通りにした。翌日、昼食の時間になると、修道院長と修道士たちが修道院に戻ってきた。食事の最中、尊者は、まさに贈り物として送られてきたパンが出されていることに気づき、ケラリを呼んで尋ねた。

「このパンはどこから来たのですか？」

給仕係は答えた。

「このパンは昨日届いたものですが、その日は昼食に集まった修道士が少なかったため、出さなかったのです。修道士たちが全員揃った時に、美味しいパンを皆に振る舞うほうがよいと考えました。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「君は明日のことを心配するより、私の命令に従うべきだった。主は常に私たちのことを気遣っておられるのだから、今日も必要なものはすべて、それ以上に与えてくださったはずだ。」

その後、彼はスライスされたパンを籠に集めて川に投げ捨てるよう命じ、その命令に背いたとして、その給仕修道士に悔悛の罰を科した。彼は、他の修道士たちが年長者の指示に背いた際にも、同様に処置を下した。

修道士たちが明日の生活や一時的な富の獲得への関心を完全には捨てきれていないこと（これは修道誓願に反していた）に気づいた聖テオドシウスは、兄弟たちに「無所有」という美徳に従うよう教えた。　彼は、修道士たちは朽ちる財産を求めるのではなく、信仰と神への信頼によって豊かになるべきだと語った。　彼はしばしば独房を巡回し、誰かのところに規則に定められていない余分な物――それが食べ物であれ、衣服であれ、あるいは他の何であれ――　見つけるたびに、それを取り上げて、悪魔に由来し、修道院の規則に反するものとして、炉に投げ込んだ。尊者フェオドシイは、このようにして兄弟たちに不貪の美徳を説いた。

「この世のすべてを捨てた私たち修道士が、独房に虚しい物を溜め込むのは良くない。朽ちる宝を独房に蓄えておきながら、どうして神に清らかな祈りを捧げられようか！　あなたがたも主の御言葉を聞いたはずだ。*『あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もある』*（マタイ6:21）。さらに、*「愚かな者よ！　今夜、あなたの魂はあなたから奪われる。それでは、あなたが蓄えたものは、いったい誰のものになるのか？」*（ルカ12:20）。それゆえ、兄弟たちよ――と彼は語った――定められた衣服と、食卓に供される食事に満足しよう。そして、独房にはそのようなものを一切持つべきではない。さあ、心を尽くして、あらゆる熱意をもって、神に清らかな祈りを捧げよう。

聖テオドシウスは、深い謙遜と涙をもって、このように兄弟たちに諭した。

尊者は慈悲深く、柔和で、短気ではなく、すべての人に配慮を尽くした。　例えば、彼の所有欲のない羊の群れの中から誰かが気力を失い、修道院を去ってしまうことがあったとき、尊者は去った者を深く悲しみ、嘆きながら、涙を流して神に祈り、その群れから離れてしまった羊を連れ戻してくださるよう願った。そして、去った者が戻ってくるまで、彼はそうして祈り続けた。

その兄弟たちのうちには、非常に気まぐれな修道士が一人いた。　彼はしばしば修道院から逃げ出していたが、彼が戻ってくるたびに、聖人は喜びをもって彼を受け入れ、「神は彼を見捨てず、修道院の外で生涯を終えることを許さないだろう」と語った。「たとえ彼が何度も私たちのもとを離れても」と聖人は言った。「それでもなお、彼はこの修道院で生涯を終えるだろう」。

そして、涙ながらに神に、その兄弟に忍耐を授けてくださるよう祈った。ある時、その兄弟はとりわけ長い間行方不明になっていたが、それでも戻ってきて、いつものように尊者に対し、再び受け入れてくれるよう懇願した。まことに慈悲深いテオドシウスは、今回も喜んで彼を受け入れ、迷い羊として戻ってきたその者を自らの群れに加えた。　長い不在の末に戻ってきたその兄弟は、自分の手で稼いだ（彼は衣服の縫製をしていた）わずかな金を持ち帰り、尊者様の前に置いた。すると、尊者様は彼にこう言われた。

「もし完全な者になりたいのなら、これを受け取って燃え盛る炉に投げ込みなさい。あなたが持ってきたものは、不従順の行いだからだ。」

彼は真に悔い改めた者として、すべてを集め、聖人の命に従って炉に投げ込み、焼き払った。それ以来、その兄弟は修道院を離れることなく、残りの生涯を悔い改めの中で過ごし、ここで、聖人の予言通り、安らかに息を引き取った。

聖テオドシウスは貧しい人々に対して非常に慈悲深かった。彼は修道院の近くに、聖第一殉教者ステファノに捧げられた教会のある施設を建設し、そこに乞食、盲人、足の不自由な者、ハンセン病患者を住まわせ、彼らに必要なものはすべて修道院から支給した。これには修道院の収入の十分の一が充てられていた。　さらに、聖人は毎週土曜日、牢獄や監獄に収監されている人々に小麦の荷車を届けていた。

私たちの尊い父テオドシオスは、貧しい人々だけでなく、修道院に害を及ぼす者たちに対しても慈悲深かった。ある時、修道院の周辺で盗みを働こうとしていた強盗たちが捕らえられ、修道院長のもとに連れてこられた。　彼らが縛られ、気落ちした様子を見て、聖父は涙を流し、彼らを解き放つよう命じました。彼らに食事と飲み物を与えた後、誰にも害を与えてはならず、各自が自分の労働の成果に満足すべきだと説きました。そして、十分な金銭を渡した後、悔い改めた強盗たちを平穏に送り出しました。

聖テオドシウスは、修道院の兄弟たちに必要なものはすべて、主ご自身が強盗たちから守ってくださると固く信じていた。この信頼が無駄ではなかったことは、次の奇跡によって裏付けられた。

修道者の数が増えるにつれ、私たちの尊い父テオドシオス聖人は、新しい独房を建設する必要があったため、修道院を拡張しなければならなくなった。聖人は修道者たちと共に作業に取りかかり、大きな塀の建設を始めた。　そして、古い塀を取り壊し、修道院がその防護を失ったある暗い夜、強盗たちが修道院にやって来て、互いにこう話し合った。「教会の部屋には修道士たちの財産が隠されている。そこへ行こう」。

しかし、強盗たちがその目的で教会に近づいたとき、歌声が聞こえてきた。夕べの祈りのために集まった修道士たちが歌っているのだと思い、強盗たちはそこから深い森へと逃げ去った。　そこで少しの間待機した後、彼らは再び教会へと近づいた。今回もまた歌声が聞こえ、内部からは不思議な光が見え、教会からは芳しい香りが漂っていた。これは、教会の中に　の天使たちがいて、神を賛美していたからであった。　一方、強盗たちは、修道士たちが今、深夜の賛美を行っているのだと推測し、再びその場を離れた。彼らは、修道士たちが散り散りになった後に教会に入り、そこにあるものをすべて奪い去るために、もう少し待つことにした。こうして彼らは何度も教会に近づいたが、そのたびにやはり天使たちの歌声を耳にした。

その間、早課の時間が訪れ、鐘守がいつものように鐘を鳴らし始めた。その音を聞いた強盗たちは、森へと退散しながら、互いにこう話し合った。「どうすればいい？　教会で見たのは、きっと幽霊だったに違いない。　こうしよう。修道士たちが教会に集まったら、出口を塞いで、全員を殺し、彼らの財宝を奪い取ろう」。

すべての修道士たちが、師である至福のテオドシオスと共に朝の祈りのために教会に集まるのを待ち、山賊たちは教会へと駆けつけた。　彼らは悪意を持って教会に近づいていたが、突然、恐ろしい奇跡に打ちのめされた。教会は中にいた修道士たちごと浮き上がり、空中に止まった。その高さは、強盗たちが銃弾を撃っても届かないほどだった。彼らはこれを見てひどく怯え、大きな恐怖と戦慄に駆られて家路についた。　この奇跡に打ちのめされた強盗たちは、これからは二度と略奪を行わないと誓い、その首領は三人の仲間を連れて聖テオドシオスのもとを訪れ、悔い改め、自らのすべての罪を告白した。その話を聞き終えた聖人は、教会の財産だけでなく、修道士たちの命までも守ってくださった神を賛美した。　そして、修道院長からの救いの教えを受けて解放された強盗たちは、神とその御使いテオドシオスを賛美し、感謝しながらその場を去っていった。

聖テオドシオス修道院長在任中、同修道院の教会で同様の奇跡が二度目に起こった。まことに、この教会は、至聖なる聖母マリアの御加護のもと、目に見えぬ形で空中に浮かんでいるかのように、天から神ご自身によって守られていたのである。

キリストを愛するイジアスラフ公のボヤールの一人が、ある夜、聖テオドシオス修道院から十五ポプリシュ離れた野原を馬車で通りかかった。すると突然、彼は遠くに、雲の下で空中に浮かんでいる教会を目にした。　その光景にボヤールは大きな恐怖を覚えたが、それでも従者たちと共に、それがどのような教会なのか確かめるため、直ちに馬を駆り立てた。そして、聖テオドシオス修道院に近づくと、彼の目には、その教会が地上へと降りてくるのが見え、やがて修道院の塀の内側、本来あるべき場所に収まった。　そこでボヤリンは門を叩き、修道院に入ると、その幻視について聖フェオドシオスに語った。それ以来、ボヤリンは頻繁に聖フェオドシオスを訪ね、神に啓示されたその説教

を喜びをもって聞き入った。その後、このボヤリンは、修道院の整備と、神に守られた教会の装飾のために、自身の財産の多くを寄付した。

次の出来事からも明らかなように、主は教会そのものだけでなく、聖テオドシオス修道院に属する財産をも奇跡的に守っておられた。

ある時、捕らえられた強盗たちを裁判官のもとへ街へ連行する必要が生じた。その道は、ペチェルスク修道院に属するある集落のそばを通っていた。　縛られた強盗たちがその村のそばを通り過ぎたとき、そのうちのひとりが村の方を頷きながらこう言った。「ある夜、我々は人々を殺し、修道院全体を略奪しようと、この村にやって来た。しかし、我々の計画は失敗に終わった。なぜなら、到着してみると、村は極めて高い場所に位置しており、まったく近づくことができなかったからだ」。

このように、神は、御自身に信頼を寄せる聖人の祈りに耳を傾け、修道院の財産を守ってくださったのである。テオドシオスは夜ごとに祈りを捧げながら修道院を一巡するのが習慣であり、その祈りによって、堅固な壁のように修道院とそこにいるすべての人々を守っていた。

聖テオドシウスが修道院長を務めていた間、神と至聖なる聖母マリアは、修道院を略奪者から守るだけでなく、天からその装飾を助けてくださった。　前述のイジアスラフ公のボヤリンの一人、スディスラフ・ゲイエヴィチ（洗礼名クリメント）は、公と共に戦場へ向かう際、次のような誓いを立てた。「もし神が私に健やかな身で家路につくことをお許しくださるなら、私は フェオドシイ・ペチェルスキー修道院の教会に、[3407] の金2グリヴナを寄付し、至聖なる聖母マリアのイコンのために金の冠を製作する」。

この戦いで多くの兵士が命を落としたが、それでも敵は打ち負かされた。ボヤリンは戦場から無傷で戻ると、その誓いを忘れてしまった。

数日後、彼は午後のひととき、自宅で安らかに眠っていたところ、突然、自分の名前を呼ぶ恐ろしい声に起こされた。

「クリメント！」

目を覚ますと、彼は目の前に、聖テオドシオス修道院にある聖母マリアのイコンが見え、そこから発せられる声を聞いた。

「なぜ、クリメントよ、あなたは私に約束したものを捧げなかったのか。だから今、私はあなたにそれを思い出させているのだ。どうか、その誓いを果たすよう努めなさい。」

その声が言葉を終えるやいなや、イコンはたちまちボヤリンの目の前から消え去った。ボヤリンはその幻影にひどく恐れをなして、約束した通りの量の金を用意し、さらに聖母マリアのイコンを飾るための金の冠を作ると、直ちに修道院へ向かい、これらすべてを聖テオドシオスに捧げた。

しばらくして、ボヤリンは同じ修道院に聖書を寄進したいと願った。その意図を胸に、彼は寄進用に用意した聖書を衣服の下に隠して、尊者のもとを訪れた。祈りを捧げた後、二人は座ろうとしたが、ボヤリンがまだ聖書を見せようとしなかったため、尊者はこう言った。

「クリメント兄弟よ、まず、聖母マリアに誓った、あなたの衣服の下に隠している聖なる福音書を取り出してください。それから座りましょう。」

これを聞いて、ボヤリンは聖人の洞察力に戦慄した。というのも、自分が持参した福音書については、誰にも知られていないと確信していたからである。　直ちに、服の下から聖なる福音書を取り出したボヤリンは、それを聖人に手渡した。その後、二人は腰を下ろし、ボヤリンはテオドシウスとの霊的な対話を満喫した後、家路についた。

[3407] グリヴナ（サンスクリット語のgriva＝首に由来）とは、本来は首飾りや鎖のことで、通常は金製であり、装飾品として首に身につけられていた。　首にグリヴナを身につける習慣は、タタール人からルーシに伝わった。その後、「グリヴナ」という名称は、一定量（72～96ゾロトニク）の金塊を指すようになり、貨幣として流通するようになった。

主は数多くの御奇跡によって、聖テオドシウスの神への希望と信頼が無駄ではなかったことを証明された。特に、ペチェルスク修道院で何かが不足していると感じられた時、神の御加護が顕著に現れた。　聖人は自分の独房で、修道士イラリオンと共に暮らしていた。普段、聖テオドシウスは詩篇の句を静かに唱えながら羊毛を紡いだり、何か他の作業をしたりしていたが、イラリオンは昼夜を問わず本を書き続けていた。後に、この修道士が次のような出来事を語ったのである。

ある晩、二人がいつものようにそれぞれの仕事に励んでいたところ、アナスタシウスという名の会計係が独房に入ってきて、尊者に向かってこう言った。

「明日、修道者たちの食糧を買うお金がなく、修道院の他の必要を満たす資金もありません。」

すると、尊師はこう答えました。

「今、ご覧の通り夕暮れ時であり、明日はまだ遠い。だから行って、忍耐強く待ちなさい。神に祈りなさい。神は私たちの必要を顧みてくださり、もし神の御心ならば、私たちを憐れんでくださるだろう。」

これを聞いて、会計係は去っていった。聖人はすぐに立ち上がり、いつものように自分の規則に従って祈りを捧げるため、内側の独房へと向かった。祈りを終えて戻ると、彼は座り、自分の仕事を続けた。すると、会計係が再び独房に入ってきて、同じことを言い出した。そこで聖人は彼にこう言った。

「神に祈れと、私はあなたに言わなかったか？　明日、町へ行き、商人から兄弟たちのために必要なものを借りてこい。そして、神の助けがあれば、後でその借りを返そう。イエス・キリストは真実を語られた。*『明日のことを心配してはならない』*（マタイ6:34）。神は御自身の恵みによって、私たちを見捨てられることはない。」

執事が去るやいなや、軍服をまとった、光を放つ少年が小部屋にやって来た。少年は一礼すると、聖人のそばの机の上に金のグリヴナを置き、何も言わずに外へ出て行った。聖人は立ち上がり、その金を受け取ると、感謝の涙を流しながら神に祈りを捧げた。

翌朝、聖人は門番を呼び、昨夜誰かが修道院に来たかどうか尋ねた。すると門番はこう答えた。

「いいえ、日が沈むやいなや、私はすぐに門を閉め、それ以来一度も開けていません。修道院には誰も来なかったからです。」

そこで聖人は会計係を呼び寄せ、金の一グリヴナを渡しながらこう言った。

「アナスタシイ兄弟よ、修道院の兄弟たちに必要なものを買うお金がないなどと言うが、さあ、この金を受け取って、必要なものを買いに行け。」

管理人は、これが神の御慈悲によるものだと悟ると、聖人の足元にひれ伏し、許しを請いました。そして、尊者はこの機会を利用して、彼に次のように教えを授けました。

「兄弟よ、決して絶望してはならない。常に神への信仰を強め、いかなる悲しみの中でも主の助けを信じなさい。主の御心であれば、主は私たちを顧みてくださるからだ。さあ、兄弟たちのために祝宴の食事を用意しなさい。これは神の御訪れだからだ。私たちが貧しくなっても、今日のように、神は私たちを顧みてくださるのだ。」

同様に、ある時、テオドールという名のケラールが尊者のもとを訪れ、こう言いました：

「兄弟たちに昼食として振る舞えるような食べ物が、私には何もありません。」

すると、尊者はあの時と同様にこう答えました。

「行って、少しの間耐え忍び、神に祈りなさい。神は私たちを顧みてくださる。もし私たちが神の憐れみに値しない者であれば、昼食には蜂蜜を添えた茹でた小麦を出せばよい。しかし、荒野で不従順な民にパンを送られた主（出エジプト記16:15）が、私たちにも食物を与えてくださることを信じなければならない。」

これを聞き終えると、給仕長は退出し、尊師は熱心に神に祈りを捧げ始めた。　すると、神の秘かな導きにより、イジャスラフ公の首席家臣であるヨハネという人物が、修道院の尊者のもとへ、パン、魚、野菜、小麦、蜂蜜といった食料を満載した荷馬車三台を送ってきた。これらを受け取った尊者は神を賛美し、給仕長にこう言った。

「ほら、テオドール兄弟よ、私たちが心を尽くして神に望みを置く限り、神は私たちを見捨てない。さあ、行って兄弟たちに食事を用意しなさい。これは神からの恵みなのだから。」

こうして、聖人は食事の席で兄弟たちと共に霊的に喜び、また*「主を畏れる者には欠けることがない」*（詩編33:10）という御言葉に感謝して、神を賛美した。神は、聖人の祈りによって、ペチェール修道院でこのような奇跡をしばしば行われた。

ある日、町から一人の司祭が聖人のもとを訪れ、神聖な典礼を行うためのワインを貸してほしいと頼んだ。　すると聖テオドシウスは直ちに教会の執事を呼び寄せ、司祭が持ってきた器にワインを注ぐよう命じた。しかし執事は、自分たちの手持ちのワインはごくわずかで、せいぜい三、四回の聖体礼儀を執り行うのにやっと足りる程度だと答えた。すると聖人は彼にこう言った。

「この人にワインをすべて注ぎなさい。私たちのことについては、神ご自身が顧みてくださる。」

教会管理人は、聖人の命令に従わず、こっそりと脇へ退いて、司祭の器にほんの少しのワインを注ぎ、残りは明日の神聖な礼拝のために取っておいた。すると、司祭は聖人のもとへ行き、教会管理人が自分に注いだワインがどれほど少ないかを示した。聖人は再び教会管理人を呼び寄せ、こう言った。

「すべてのワインを差し出すように、そして明日のことは心配するな、と私はあなたに言わなかったか。主は、御母の教会が明日、礼拝を行えないままになることを許されない。主は今日中に、余りあるほどのワインを送ってくださるだろう。」

そこで、修道院長は自分の持っていたワインをすべて司祭に渡し、彼を見送った。一方、昼食後の夕方、聖人の予言通り、ワインで満たされた樽を積んだ荷馬車3台が運ばれてきた。これは、キリストを愛するヴセヴォロド公の家政婦が、修道院への寄進として送ってきたものだった。　この出来事を目の当たりにした教会長老は、神を賛美し、聖テオドシウスの予言が成就したことに驚嘆した。聖テオドシウスは、「神は今日、修道院に余りあるほどのワインを送ってくださるだろう」と語っていたのである。

その同じ教会長老は、尊者テオドシウスの祈りによって成し遂げられた、もう一つの同様の奇跡の証人でもあった。その出来事は次のように起きた。

聖母マリアの被昇天の祝日に、教会のランプに火を灯すために必要な油が足りなくなったとき、教会管理人は種子から油を調製し、礼拝の際に木製のランプの代わりにその油を使うことに決めた。　教会管理人は、この件について聖テオドシオスに許可を求め、彼が何も異議を唱えなかったため、管理人は計画通りに実行した。しかし、調製した油をランプに注ごうとしたとき、油の入った容器の中に死んだネズミが浮かんでいるのを見つけた。そこで管理人は急いで聖人のもとへ行き、こう言った。

「私が調合した油の入った容器はしっかりと覆っておいたのですが、どうしてネズミが入ってしまったのか分かりません。」

聖人は、これが神の摂理によるものであると悟り、長老にこう言った。

「私たちは、神が私たちに必要なものをすべて与えてくださることを信頼すべきでした。主の全能性を信じずに行動するのは良くありませんでした。行って、その油を地面に注ぎなさい。少し待ってから神に祈りましょう。神は今日中に、私たちに木油をたっぷりと与えてくださるでしょう。」

長老は言われた通りにし、その間、聖人は祈りを捧げ始めた。夕方になると、ある裕福な人物が、実際に修道院へ非常に大きな樽に入った木油を寄進しに来た。　聖人は、これほど早く祈りを聞

き届けてくださった神を賛美した。受け取った油で全てのランプを満たしただけでなく、その半分以上も余った。こうして修道者たちは、聖母マリアの被昇天という輝かしい祝日を、相応の厳粛さをもって祝った。

ここに、主が聖テオドシオスの祈りによって修道院の切実な必要を満たされた、同様の奇跡がもう一つある。キリストを愛するイジアスラフ公は、聖テオドシオスに対して真にキリスト教的な愛を抱いており、しばしば彼を訪ね、その心地よい会話に喜びを見出していた。　ある時、公爵は気づかれないように彼と夕べの賛美の時間まで語り合い、その後、公爵は聖人と共に教会へ向かった。神の御計画により、ちょうどその時に激しい雨が降り出した。これに気づいた聖人は、管理人を呼び寄せ、公爵のために夕食を用意するよう命じた。

「師よ」と管理人は言った。「公爵様とその随行者たちをもてなすための蜂蜜が、まったく残っていません。」

すると、聖人は尋ねた。

「まさか、ほんの少しでもないのか？」

「はい、師よ、全くありません」と管理人は答えました。「飲み物が入っていた空の器さえ、底を上にしてひっくり返しておいたほどです。」

一方、その名「[3408] 」が示す通り、神の恵みに満ち溢れていた聖テオドシウスは、こう言った。

「そうか。しかし、私の命令に従い、我らの主、最も甘美なるイエス・キリストの御名の力への信仰をもって行けば、その器の中に蜂蜜が見つかるだろう。」

管理人は主の全能を信じてその場へ向かい、聖人が予言した通り、樽がその場所にあり、蜂蜜で満たされているのを見た。管理人は恐れおののきながら、急いで聖人にこの出来事を報告した。

「黙りなさい」と聖人は彼に言った。「このことを誰にも話してはならない。行って、その蜂蜜を公爵とその随行者たちに差し出しなさい。好きなだけ食べさせてあげなさい。この蜂蜜を修道院の兄弟たちにも振る舞いなさい。これは神の祝福なのだから。」

しばらくして雨が止み、公爵は帰路についた。一方、修道院にはまだたくさんの蜂蜜が残っており、修道士たちが長い間食べ続けるのに十分な量だった。

またある時、修道院長のもとへ、主任のパン職人がやって来て、修道院にはパンを焼くための小麦粉がないと告げた。

「行って穀物倉庫を見てきてくれ」と尊者は答えた。「もしかしたら、そこに少し小麦粉が見つかるかもしれない。そうすれば、主が再び私たちを顧みてくださるまで、何とか持ちこたえられるだろう。」

すると、パン職人は尊者に向かってこう言った。

「父上、本当のことを申し上げます。私自身で穀物倉庫をくまなく探しましたが、隅に残っていた三、四握りのふすま以外、何もありませんでした。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「信じてくれ、子よ。神は、この残ったふすまさえも小麦粉に変え、それで私たちの穀倉を満たすことができるのだ。エリヤの時代に、神が一握りのふすまから、飢饉の時期に未亡人と子供たちが収穫が豊作となり、皆にパンが十分に届くまで食べ続けられるほどの小麦粉を創り出されたのと同じように （列王記上17:8–16）。そして今、神は依然として全能であり、不足から豊かさを生み出すことができる。さあ、行って、主がその御慈悲をもって、我々の小麦粉が保管されている場所をも祝福してくださらないか、確かめてきなさい。

[3408] フェオドシイは、ギリシャ語からの訳で「神から与えられた」という意味であり、比喩的な意味では「神からの賜物に恵まれた」となる。

この言葉を聞いたパン職人はその場を去った。その後、穀物倉庫に入ると、以前は空っぽだったその倉庫が、聖テオドシオスの祈りによって今や溢れんばかりに満たされ、小麦粉が壁の縁から地面にこぼれ落ちているのを目にした。修道士は、これほど素晴らしい奇跡を目の当たりにして驚愕し、戻ってそのすべてを聖テオドシオスに報告した。

「行け、兄弟よ」と聖人は彼に言った。「この出来事については誰にも話すな。いつものようにパンを焼くがよい。この恵みは、私たちの聖なる兄弟たちの祈りによって、神が私たちに与えてくださったのだ。」

神のこのような偉大な恵みを賛美し、感謝しつつ、私たちの尊い父テオドシオスは、毎晩を祈りに費やした。涙を流し、ひざまずきながら、彼は神の偉大な恵みに感謝した。　修道院の兄弟たちは、毎日早課の前に礼拝を始めるための祝福を受けるために尊師のもとを訪れていましたが、扉の向こうから、イグメンが涙に暮れながら祈りを捧げ、しばしば頭を地面に打ちつけている音が聞こえていました。　しかし、尊者様は彼らの足音を聞くと、祈りを止め、眠っているふりをしたため、修道士たちは時には三度も扉を叩き、そのたびに「祝福してください、父よ！」と声をかけなければならなかった。

すると、尊者は、まるで今起きたばかりであるかのような素振りを見せながら、こう答えた。

「神があなた方を祝福されますように！」

そして、祝福を与えると、誰よりも先に教会へと向かった。彼は毎晩このようにしていたと伝えられている。

これらの功績に加え、尊者様はイグメン在任中、他にも多くの労苦に励まれました。彼がベッドで休んでいるところを見た者は誰一人おらず、肉体の衰えにより日中の祈りの後に休息が必要となった際も、彼はほんの短い間、それも座ったまま眠りにつくだけでした。　その後すぐに目を覚まし、徹夜祷の場へ向かい、そこでしばしばひざまずいて祈りを捧げた。また、快楽のために体を洗う姿も決して見られず、水で洗うのは手と顔だけだった。　また、修道院の規則が兄弟たちに乾食を命じた時には、彼自身も乾いたパンと油で煮たスープを口にし、飲むのは水だけだった。ましてや、彼が食卓で悲しげに座っている姿を見た者は誰もいなかった。彼の心は食物ではなく、神の恵みによって強められていたため、彼は常に明るい表情を浮かべていた。

毎年、大斎の期間中、尊者は洞窟（後に彼の尊い遺体が安置された場所）に移り住み、花咲く週が始まるまでそこで篭もっていた。花咲く週の前の金曜日、晩課の時間に、彼は兄弟たちの元へ戻ってきた。　兄弟たちは、彼が自分たちが知っている洞窟に閉じこもって生活していると思い込んでいたが、実際には夜になると、誰にも知られぬよう密かに修道院の近くの村へと向かい、そこにある人目につかない場所にある別の洞窟で一人きりで過ごしていたため、神以外の誰も彼の本当の居場所を知らなかった。 そこから、四旬節の第6週の金曜日を前に、彼は再び夜中に最初の洞窟へと向かい、金曜日になってそこから兄弟たちの元へと戻ってきた。そのため、皆は彼が四旬節の間ずっと、自分たちが知っているあの洞窟に滞在していたと思い込んでいた。

当時、洞窟にいる聖人に、悪霊たちは多くの苦しみや虚しい考えを吹き込み、時には彼に傷を負わせることさえあった。しかし、神は彼らに打ち勝つための目に見えない力を聖人に与えられ、悪霊たちはどうやっても聖人を洞窟から追い出すことはできなかった。　聖人は暗い洞窟に一人で留まり、闇の君主の無数の軍勢をも恐れなかった。しかし彼は、キリストの良き戦士として、祈りと断食によって悪魔たちを追い払い、それゆえ悪魔たちはその後、彼に近づくことを敢えてせず、ただ遠くから幻影のような姿で彼に現れるだけだった。

ある時、夕べの賛美が終わった後、フェオドシイは少し休もうと洞窟の中で腰を下ろした。すると突然、恐ろしい叫び声が響き渡った。まるで洞窟の中に無数の悪魔が集まったかのようだった。ある者は戦車に乗り、ある者は太鼓を叩き、またある者は笛を吹いていた。その騒音と声に、洞窟全体が震え上がった。　これらすべてを耳にしても、聖人は恐れることも、おののくこともなく、十字

を切って身を守ると、立ち上がって詩篇の詩句を歌い始めた。　地震と騒音はたちまち止んだ。しかし、祈りを終えて再び座って休もうとしたとき、以前と同じ騒音と、数え切れないほどの悪魔たちの声が再び聞こえてきた。聖人は立ち上がり、再び歌い始めると、騒音はまた止んだ。こうして何日何夜にもわたり、悪霊たちは彼を悩ませ、 ほんの少しでも眠ることを許さなかった。 この状態は、聖人が神の恵みの助けを借りて、ついに彼らを完全に打ち負かし、聖人が祈りを捧げている場所に彼らが近づくことさえできなくなるほどの権威を彼らに対して得るまで続いた。悪魔たちは自ら聖人から逃げ出すようになったが、これは以下に挙げる数多くの事例が裏付けている。

修道士たちのためにパンを焼く部屋では、悪魔たちはその悪巧みで修道士たちを大いに悩ませていた。小麦粉をまき散らしたり、パン用に用意された種菌をこぼしたり、その他にも修道士たちに多くの迷惑をかけた。　ある日、主任のパン職人が、悪魔たちの悪戯について聖テオドシオスに話した。すると聖人はその部屋へ向かい、扉を閉めて、早課が始まるまでずっとそこに留まり、その間ずっと神に祈りを捧げた。その時から、悪魔たちはその場所を永遠に放っておき、もはやそこで悪事を働くことはなかった。

またある時、修道院の村から一人の兄弟が聖者に訪ねてきて、家畜を追い込む牛舎に悪霊が現れ、家畜に餌を食べさせないなどして大きな被害をもたらしていると告げた。司祭は何度も祈りを捧げ、牛舎に聖水を振りかけたが、何の効果もなかった。　そこで、尊者は祈りと断食で心を整え、その村へ向かった。夕暮れ時、彼は牛舎に入り、扉を閉め切り、朝までそこで祈りを捧げ続けた。それ以来、その場所には悪魔が現れることはなくなり、村の誰に対しても悪事を働くことはできなくなった。

聖人は自ら悪魔の力を打ち負かすだけでなく、他の人々にも悪魔から逃れる方法を教えた。もし兄弟たちの誰かが悪魔に苦しめられていると知れば、その兄弟にその場所を離れるのではなく、祈りと断食によって身を守り、悪魔に打ち勝つために神を呼び求めるよう教えたのである。

師は、悪魔の策略について兄弟たちに次のように説いた。

「当初、私にも同様のことが起こった。ある夜、私が独房でいつもの詩篇を歌っていると、突然、黒い犬が私の目の前に現れた。しかも、あまりにも近くまで迫ってきたため、私は地面にひれ伏すことさえできなかった。犬は長い間その場に立ち尽くしており、私がもう殴りかかろうとしたその時、突然姿を消した。　その時、私はあまりにも強い恐怖と戦慄に襲われ、もし主が助けてくださらなければ、その場から逃げ出そうとしていたほどだった。恐怖から少し我に返ると、私は熱心に祈りを捧げ、頻繁に礼拝を捧げ始めた。それ以来、たとえ悪魔が私の目の前に現れたとしても、私は悪魔の誘惑を全く恐れることはなくなった。

兄弟の一人であるイラリオン（前述の人物）は、次のように語った。

「修道室で、悪魔たちは私に多くの悪事を働いた。例えば、夜、私が寝ようとすると、突然大勢の悪魔が現れ、私の髪をつかんで足で踏みつけながら、地面を引きずり回した。また、他の悪魔たちは壁を持ち上げながら、『こいつをここに引きずり込んで、壁で押しつぶしてやろう』と言っていた。　彼らは毎晩のように私にこのようなことを繰り返したが、私はもはや耐えきれず、そこから別の独房に移りたいと願って、すべてを聖テオドシオスに打ち明けた。すると、聖人は私にこう言った。

「いや、兄弟よ、去ってはならない。そうすれば、悪魔たちが君に対する勝利を自慢し、『彼は我々から逃げ出した』と言えなくなるからだ。　もし君が去ってしまえば、悪魔たちはそれ以来、君に対する支配権を得たかのように、さらに大きな害を君に及ぼすだろう。自分の小部屋で熱心に祈りなさい。そうすれば、神は君の忍耐をご覧になり、悪魔たちが君に近づくことさえできなくなるほど、君が彼らに打ち勝つよう助けてくださるだろう。

そこで私は再び尊師にこう申し上げました。

「お願いです、父上、別の独房に移らせてください。もう、古い独房にこれ以上留まる力は残っていません。そこには多くの悪魔が住んでいるからです。」

すると、尊師は私に十字を切ってから、こう言われました。

「行け、兄弟よ、自分の独房へ。これからは、悪辣な悪魔たちは、あなたに何の害も及ぼすことはできなくなるだろう。」

私は聖テオドシウスの言葉を信仰をもって聞き入れ、尊者にお辞儀をしてその場を後にした。それ以来、尊者テオドシウスの祈りによって一度きりで完全に追い払われたため、厚かましい悪魔たちはもはや私の独房に近づくことさえできなくなった。

聖テオドシオス師が、目に見えない敵との戦いにおいてどれほど粘り強かったかといえば、主キリストの目に見える敵との戦いにおいても、それと同じくらい勇敢であった。彼には次のような習慣があった。しばしば夜中に起き上がり、誰にも知られぬようにユダヤ人たちのところへ赴き、そこで勇敢にキリストについて彼らと論争を交わしたのである。　彼は彼らを「律法の違反者」であり「神殺し」であると非難し、糾弾した。彼は、真のキリストの模範者として、まさに私たちの主イエス・キリストご自身が死を受けられたのと同じ人々から、御名の告白のために死を受けることを切に望んでいたのである。

このキリストの御名を告白する勇敢な殉教者が、真に真理のために苦難を受けることを望んでいたことは、次の出来事が裏付けている。

彼が修道院長を務めていた頃、目に見えない敵である闇の君主が、三人のロシアの公の間で争いを煽った。　実の兄弟であるチェルニゴフ公スヴィャトスラフとペレヤスラフ公ヴセヴォロドは、キエフ公でキリストを愛する長兄イジャスラフに対して不当な戦争を仕掛け、彼を首都キエフから追放した[3409]。キエフで彼の座に就いた彼らは、聖テオドシウスに昼食に招くよう使者を送った。しかし、聖人は勇気と決意をもってその招待に応えた。

「不義の食卓、すなわちイェザベルの食卓に臨むことは、私にはふさわしくない」[3410]。

その後、ヴェセヴォロドがペレヤスラフ地方へ退き、スヴィャトスラフがイジャスラフの後を継いでキエフの王座に就くと、聖フェオドシウスは、スヴィャトスラフ公が正当な権利なく兄弟の王座に就いたことを絶えず非難し始めた。　彼のもとを訪れる公爵の使節たちに対し、尊者フェオドシイは、自身の行為を是認しない旨を公爵に伝えるよう求めた。　ある時、彼はスヴィャトスラフに長文の非難の手紙を送り、その中でとりわけ次のように記した。「あなたの同母の兄弟の血の叫びが、カインに対するアベルの血のように、神に向かってあなたを訴えている」（創世記4:10）。

彼への戒めとして、聖人はその手紙の中で、多くの不義な古代の兄弟殺したちの名を挙げた。スヴィャトスラフ公はこの手紙を読んで激怒し、怒りに任せてそれを地面に投げ捨て、それ以来、聖テオドシオスを修道院に幽閉する機会をねらうようになった。　一方、修道院の修道士たちは、公爵の意図に深く憂慮し、尊者に対し、公爵への非難をやめるよう懇願した。同様に、尊者を訪ねてきた多くのボヤールたちも、公爵の怒りを伝えつつ、公爵に逆らわないよう助言した。

「何しろ公爵は」と彼らは言った。「あなたを幽閉するつもりなのですから。」

しかし、聖人は彼らが幽閉について語っているのを聞くと、心から喜び、こう言った。

[3409] スヴィャトスラフ2世・ヤロスラヴィチは1073年から1076年までキエフで君臨し、ヴェセヴォロド1世・ヤロスラヴィチは1078年から1093年まで君臨した。

[3410] イゼベルは、イスラエルの王アハブの妻であり、極度の不敬虔さと放蕩で知られていた。彼女の影響に盲目的に従ったアハブは、不敬虔さにおいてすべての先王を上回り、最も恥ずべき偶像崇拝にふけった。　彼はサマリアにバアルの神殿を建て、聖なる森を造成し、イゼベルがティルスとシドンの神々の祭壇を築くことを許した（列王記下16:31–33）。イゼベルは400人の偽預言者たちを養い、彼らは彼女の食卓から食事をとっていた（列王記下18:19）。明らかに、聖テオドシウスがここで言及しているのは、まさにこの「食事」のことである。

「兄弟たちよ、私はこれを大いに喜ぶ！　私にとって、真理のために追放されることほど嬉しいことはない。真理のためなら、流刑にも死にも喜んで赴く。」

それ以来、聖人は、まるで自らの流刑命令を引き出そうとするかのように、兄に対する憎しみを理由に、公爵をますます激しく非難するようになった。　公爵は怒りを感じつつも、尊者に対する悪意を抱くことは敢えてしなかった。彼の義と聖さを知っていたからである。というのも、かつて彼は弟のイジアスラフ公爵に対し、その領内に偉大なるテオドシウスのような義人がいたことを羨ましく思っていたからである。　その直後、聖テオドシウスは、自身の厳しい非難が公爵に効果を上げていないことを悟り、修道士たちや貴族たちの懇願に応じ、公爵を非難することをやめ、それからは涙ながらに、弟にその領地を返還するよう説得し始めた。

それから数日後、スヴィャトスラフ公は、聖テオドシウスが非難をやめようとしていることを知ると、これを大いに喜び、聖人に「修道院へ訪ねてもよいか」と尋ねさせた。聖人が許可すると、公は喜びながらボヤールたちと共に修道院へ向かった。　聖人は修道士たちと共に教会から出てきて、公を丁重に出迎え、修道士たちは皆、公に頭を下げた。

「父上、あなたが怒って私を修道院に入れないだろうと思い、あえてお会いしに来る勇気がありませんでした」と、公は尊者におっしゃった。

すると、聖人はこう答えた。

「何をおっしゃるのですか、善良な君主よ。あなたの権威の前で、我々の怒りなど何の意味があるというのでしょうか。しかし、我々は魂の救いとなることを指摘し、語るべきであり、あなたはそれを聞くべきなのです。」

二人は教会に入り、祈りを捧げた。その後、聖テオドシウスは、公爵が弟を多くの点で非難していたため、兄弟愛について論じながら、聖書に基づいて長く彼を教え導いた。　長く心に残る有益な対話を終えた後、公爵は自宅へ戻り、そのような高潔な人物と語り合う機会に恵まれたことを神に感謝し、それ以来、頻繁にその修道院を訪れるようになった。　その後、聖フェオドシウス自身も何度も　、この威厳あるスヴィャトスラフ公のもとを訪れ、神への畏れと兄弟への愛について彼に語りかけた。

そうした訪問の際、聖人は公爵の邸宅で、様々な楽器を演奏する音楽家たちに出くわした。皆が楽しそうにしていた。聖人は長い間、目を伏せて公爵のそばに黙って座っていたが、やがてこう言った。

「あの世でも、このようなことが続くのでしょうか？」

心を打たれた公は涙を流し、演奏者たちに直ちに音楽を止めるよう命じた。それ以来、尊者が宮殿で音楽が奏でられている場面に遭遇するたび、公は尊者の来訪を知ると、直ちにそれを止めるよう命じるようになった。

高僧の来訪が公爵に伝えられると、公爵はしばしば自ら喜びに満ちた表情で外に出て、宮殿の門の前で高僧を出迎えた。喜びに満ちた公爵は、訪れた高僧にこう言った。

「父よ、まことに申し上げますが、もし私の実の父が死からよみがえったと告げられたとしても、私はあなたの到来ほどには喜びはしませんが、同時に、あなたの聖なる魂を恐れるほどには、そのことを恐れることもないでしょう。」

「もしあなたの言う通りであるならば」と聖人は答えた。「私の願いを叶えてください。あなたの敬虔な父が弟に与えた王位を、弟に返してください。」

公爵はこれに黙り込み、聖人に何と言ったらよいか分からなかった。敵が彼を激しい怒りに駆り立てたため、彼は兄弟の話を聞くことさえ拒んでいたのだ。　とはいえ、聖テオドシウスは、キリストを愛する公イジアスラフのために昼夜を問わず神に祈りを捧げ、教会の礼拝においても、彼をキエフの正統な公であり長兄として追悼するよう命じた一方で、スヴィャトスラフについては、兄弟の王座に不法に就いた者として、自身の修道院での追悼を禁じた。　その後になってようやく、修道士

たちの懇願に応じて、尊者テオドシウスは二人の名を共に記念するよう命じたが、それでもイジアスラフを第一に、スヴィャトスラフを第二に挙げた。

ルーシの公たち間のこのような争いの目撃者となることを望まなかった前述の至福のニコン（聖テオドシウスを修道士に叙任し、その後あらゆる面で彼を助けた人物）は、再びペチェールスク修道院を離れ、トゥムタラカン半島へと移り、そこで自らの修道院を設立した。　一方、聖テオドシウスは、彼の去った後も相変わらず独りでその務めを続けた。

彼の修道院長在任中に修道者の数が増加し、老朽化したペチェルスク修道院が修道者たちにとって手狭になってしまったため、私たちの尊者テオドシオスは、神の御加護のもと、いかにして、またどこへ移り住み、より広々とした場所に、同じく至聖なる聖母マリアの名を冠した大きな石造りの教会を建設できるかを考え始めた。　神は義人の祈りに耳を傾け、彼が移住先として選んだ場所を認め、大きな石造りの教会の建設を祝福された。主はその御心を、驚くべき奇跡によって示された。

ある敬虔で神を畏れる人が、ある暗い夜、老朽化したペチェルスク修道院のそばを通りかかったとき、次のような光景を目にした。修道院からは明るい光が放たれており、聖テオドシウスは教会の前に立ち、両手を天に掲げて神に祈りを捧げていた。　通行人は驚きながらその光景を見つめ続けていたが、突然、その光景が変わり、彼は別の奇跡を目にした。教会の屋根の上に非常に大きな炎が現れ、弧を描くようにして、別の丘へと移っていった。それはまさに、後に聖テオドシオスが新しい石造りの教会を建て始めたあの丘であった。　こうして、炎の弧の一端は古い教会の真上に、もう一端は新しい教会を建てる予定の場所の真上に浮かんでいた。この奇跡を目撃した男は、後に聖テオドシオスの修道院にそのことを伝えた。

ある夜、近隣の住民たちは、修道院の近くから聞こえてくる大勢の歌声で目を覚ましました。彼らは起き上がり、家から出て、高台へと向かい、その歌声がどこから聞こえてくるのか確かめようとしました。すると、次のような光景を目にしました。古びたペチェルスク修道院は明るい光に包まれており、　多くの修道士たちが古い教会から出て、新しい場所へと向かっていた。ある者たちは聖母マリアのイコンを運び、他の者たちは賛美歌を歌いながら、手に灯したろうそくを掲げて先頭を行く者たちに付き添っていた。その先頭には、修道士たちの師であり指導者である聖テオドシオス師が立っていた。　新しい場所にたどり着くと、彼らはそこで賛美と祈りを捧げ、その後、引き返して、再び歌いながら古い教会へと入っていった。その後、多くの目撃者がこの奇跡の真実性を証言した。そして、前述の行列には修道士が一人も参加していなかったため、人々は皆、彼らが天使たちを見たのだと理解した。

このようにして、神によってこれほど偉大な奇跡で示されたその場所に、至聖なる聖母マリアに捧げられた石造りの教会が建設されることになった[3411]。この教会の建設には、聖テオドシオス自身も労力を惜しまず深く関わった。彼は毎日その場所を訪れ、工事を注意深く見守り、可能な限り石

[3411] この教会は1073年に着工された。聖テオドシウスは、教会と修道院の建設を完成させることはできなかった。その建設を完成させたのは、テオドシウスの後継者たち、すなわちステファン（1074年から1078年まで修道院長を務めた）、ニコン（1078年から1088年まで修道院を統括した）、そしてヨハネス（1088年または1089年に修道院長に選出された）であった。　聖テオドシオスによって着工された新修道院の石造教会は、1075年にステファノスの治世下で石積み工事が完了したが、おそらく内装工事に必要な資金不足のため、その作業は遅々として進まず、14年後の1089年になってようやく奉献された。1108年には修道士たちのための食堂の建設が完了し、1182年には修道院を石の壁で囲む工事が行われた。新しい修道院が建設された後も、旧修道院は取り壊されることなく、そこに残った少数の修道士たちによって存続し続けた。一方、この修道院が位置していた洞窟は、修道士たちが去った後、修道院の納骨堂あるいは墓地として利用されるようになった。　1240年、ペチェルスク修道院はタタール人によって大部分が破壊された。修道院の再建は13世紀末に行われた。現在の姿において、修道院がモンゴル侵攻以前の時代から残しているのは、「大」教会、すなわち主教会堂の下部と、おそらく聖三位一体に捧げられた門前の教会堂のみである。　現在の修道院の石造りの壁は、17世紀末に（タタール族によって破壊された石造りの壁に代わって建てられた）木造の壁の跡地に築かれたものであり、そもそも修道院の現在の建物はすべて18世紀に建てられたものである（前述の主教会の下部と、聖三位一体に捧げられた門前の教会を除く）。

工たちと共に働きながら建設を手伝った。　作業中は、その身なりがあまりにも粗末だったため、彼は最下級の修道見習いには見えたとしても、決して修道院長には見えなかった。

ある日、聖者が教会の建設現場へ向かっていたところ、裁判官に不当な扱いを受けたある未亡人が彼に出くわし、こう尋ねた。

「修道士よ、教えてくれ。あなた方の修道院長はどこにいるの？修道院にはいないの？」

「彼に何を求めているのですか」と尊者は答えた。「彼もまた罪深い人間ではありませんか？」

すると、その女性はこう答えた。

「彼が罪人かどうかは知りません。ただ、彼が多くの人の悲しみや悪から救っていることだけは知っています。だから、不公正な裁判官の不当な扱いから私を守ってほしいと、彼に頼みに行っているのです。」

聖人は彼女の話の経緯を聞き、彼女を憐れんでこう言った。

「今は家に帰ってなさい。私たちの修道院長が戻ってきたら、あなたのことを話してあげる。そうすれば、彼はあなたをこの苦難から救ってくれるだろう。」

その言葉を聞いた女は家へ帰り、聖人は裁判官のもとへ向かった。聖テオドシウスの懇願に耳を傾けた裁判官は、未亡人の立場に立って情けをかけ、彼女が不当に奪われていたものをすべて返還した。

このように、聖テオドシオスは、聖母マリアに捧げられたペチェルスクの教会の建設を、このような高潔な行いをもって支えた。　彼は生前にこの教会を完全に完成させることはできなかったが、死後も、神に喜ばれる祈りによって、彼の後を継いで修道院長となり、聖テオドシウスが始めた教会の建設を続けた聖ステファノを助け続けた。

その間、私たちの尊い父テオドシオス聖人の神に喜ばれる生活は、やがて終わりに近づきつつあった。　神のもとへ旅立つことを予感していた聖人は、臨終の日、修道院にいる者だけでなく、何らかの理由で不在であった者や仕事に忙しかった者、さらには修道院のすべての使用人までも呼び寄せ、すべての兄弟たちを集めるよう命じました。　全員が揃うと、彼は一人ひとりに、あらゆる熱意と神への畏敬の念をもって、自分に課せられた義務を全うするよう説き始めた。　彼は涙ながらに、魂の救い、神に喜ばれる節制の生活、熱心な教会への参拝、礼拝に臨む際に皆が抱くべき畏敬の念、そして年長者だけでなく同輩に対しても示すべき愛と従順について語った。　一人ひとりの義務について語った後、彼は兄弟たちを祝福し、平安のうちに送り出した。その後、敬虔なスヴィャトスラフ公が聖者を訪ねてきた。聖者はその恵み深い口調で、公に敬虔さ、正教の守護、そして聖なる教会への配慮について教えた。そして、彼にこう言った。

「私は、主なる神と、その汚れなき御母に、あなたが敬虔さを強められるよう祈ります。神の御加護により、あなたの統治が穏やかで平穏なものとなりますように。さて、私はこの聖なるペチェルスク修道院と、聖母マリアの御意志によって建てられた聖母マリア大聖堂を、あなたの敬虔な御手に委ねます。」

激しい悪寒と、痛みを伴う灼熱の熱が交互に襲い、聖人の体はひどく衰弱し、これまで一度も横になったことのない寝床に就かざるを得なくなった。寝床の中で、彼はこう言った。

「神の御心なれ！」　主が御心に適うままに、そうしてくださいますように！しかし、私の主イエス・キリストよ、どうか私の魂に憐れみをお与えください。それが邪悪な悪魔たちから逃れ、御使いたちに出迎えられ、天上の試練を乗り越え、御慈悲の光のもとへと導かれますように！

そう言うと、彼は黙り込んだ。

三日間、尊者様は話すことも、目を開けることもできず、もしその口元から微かな息遣いが感じられなければ、死んだものと見なされてもおかしくなかったほどであった。聖なる長老の危篤状態

は、兄弟たちに大きな悲しみと嘆きをもたらした。　三日間その病状が続いた後、聖人は病床から起き上がり、集まった修道者全員に向かってこう言った。

「兄弟たちよ、父たちよ！　私の命は終わりを迎えようとしている――これは大斎の期間中、洞窟で主が私に示されたことである。皆で話し合い、私の代わりに誰を修道院長に迎えたいか決めてほしい。」

この言葉に深く悲しんだ兄弟たちは、泣き出した。尊者のもとを離れ、相談した末、すべての修道士たちは、規則担当のステファノ（[3412] ）をイグメンに選ぶことに合意した。翌日、尊者は再びすべての兄弟たちを呼び集め、こう尋ねた。

「諸子よ、互いにどう決めたのか？ あなた方のうち、誰が修道院長にふさわしいか？」

皆は、ステファンこそが修道院長にふさわしいと答えた。聖人はステファンを呼び寄せ、自分の後を継いで修道院長となるよう祝福し、こう言った。

「さあ、わが子よ、この修道院を君に託す。しっかりと守り抜いてほしい。私が定めた礼拝の秩序を、君もそのまま守り、あらゆる面で修道院の伝統に従うように。規則を変えてはならない。すべてを律法と修道院の規律に従って行いなさい。」

また、尊者様は修道者たちに長く説教をされ、新しいイグメーンに従うよう遺言として伝えられた。その後、皆を帰し、ご自身の臨終の日が土曜日であることをあらかじめ告げられた。

「日の出の後、」と彼は兄弟たちに言った。「私の魂は肉体から離れるだろう。」

その後、尊者は再びステファノ一人を呼び寄せ、聖なる群れをどのように牧するべきかについて、二人きりで長く教えを授けた。尊者は病により著しく衰弱していたため、ステファノはそばを離れることなく、謙虚に彼に仕えた。　その土曜日、夜明けとともに聖テオドシウスは兄弟たちを呼び寄せた。すべての修道士が集まると、聖人は別れを告げ、愛を込めて一人ひとりに口づけをした。一方、修道士たちは、これほど善良な牧者を間もなく失うことを予感し、悲しみに暮れて泣きじゃくっていた。すでに死への準備を完全に整えていた聖テオドシウスは、彼らにこう言った。

「愛するわが子らよ、兄弟たちよ！　私があなたがた全員に口づけをしたのは、私の主、イエス・キリストのもとへ旅立つからである。ここに、あなたがた自身が選んだ修道院長がいる。彼を霊的な父として敬い、その言葉に従い、彼の命じるままに、神に喜ばれるすべてのことを行いなさい。また、御言葉と英知をもって万物を創造された神ご自身が、あなたがたを祝福し、悪しき者の誹謗から守ってくださいますように。そして、あなたがたの最期の息を引き取るその瞬間まで、堅固で揺るぎない信仰と互いへの愛を、神があなたがたの中に保たせてくださいますように。　そして、お願いし、強く懇願します――私を今着ているこの服のまま葬り、私の体を、四旬節の間私が過ごしていたあの洞窟に安置してください。いかなる場合でも、私のみすぼらしい体を洗わないでください。　世俗の人々の誰一人として、私の埋葬を見ないようにしてください。修道士であるあなた方だけが、私が指定した場所に私を葬ってください。

聖人の言葉を聞いて、兄弟たちは激しく泣いた。尊師は再び彼らを慰め、こう言った。

「兄弟たち、父たちよ、私は肉体としてはあなた方から離れていくが、魂は常にあなた方と共にあり続けることを約束します。」

この言葉を終えると、聖人は誰もそばに残さず、皆を帰した。常に彼に仕えていた兄弟の一人が、扉に穴を開けて、彼が何をしているのか覗き見た。　聖人は床から起き上がると、ひれ伏して、涙ながらに慈悲深い神に自らの魂の救いを祈った。その祈りの中で、彼はすべての聖人、とりわけ私たちの至聖なる御母マリアに助けを求め、自らの羊の群れと修道院そのものを彼女に託した。　祈りを終えると、彼は再び寝台に横になり、少し休んだ後、天を仰ぎ、喜びに満ちた表情で、力強い声で

[3412] ウスタフチクとは、聖歌隊の管理者、指揮者を指す。

こう言った。「神は祝福された！　もしそうであるなら、もはや私は恐れることはない。むしろ、さらに大きな喜びをもってこの世を去るのだ」。

おそらく、上記の言葉を口にしたとき、彼はある種の幻視を仰ぎ見ていたのだろう。その後、彼は足を伸ばし、両手を胸の前で十字に組んで、その聖なる魂を神に委ね、聖なる父たちの列に加わった。 これは、尊者が予言した通り、1074年5月3日（土曜日）、 の日の出の後、起こった。聖テオドシオスの死を深く悼んだ修道者たちは、その聖なる遺体を教会へ運び、そこで故人を偲ぶ慣例通りの祈りと聖歌を捧げた。

神の御計画により、尊者のお亡くなりになったことは、たちまち多くの人々に知れ渡った。民衆や多くのボヤールたちは、自らの熱意で修道院の門前に集まり、尊者の遺体が修道院から運び出され、洞窟に埋葬される時を待っていた。　一方、修道院の兄弟たちは門を閉ざし、誰も修道院内に入れないようにしていた。彼らは、民衆が散っていくのを待ち、聖人が自ら遺言した通り、一般信徒の立ち会いのない中で遺体を埋葬する時を待っていたのである。すると、神の御心により、空は突然雲に覆われ、激しい雨が降り出した。　人々が散り散りになった途端、再び太陽が輝き出した。そこで修道士たちは教会から聖人の遺体を運び出し、[3413] の洞窟に敬意を込めて安置した。

義人の臨終の瞬間、スヴィャトスラフ公はペチェルスク修道院の近くにいた。すると突然、修道院の上空に、地から天へと伸びる火の柱が見えた。聖人の死を察した公は、同席していた者たちにこう言った。

「私の思うに、今日、尊者テオドシウスがこの世を去り、天へと召されたのだろう。私は昨日、彼のもとを訪ねたが、彼が非常に重い病に伏しているのを見たのだ。」

彼は聖人の安否を確かめさせ、その死を確かめると、深く嘆き悲しんだ。

[3413] 1091年、聖テオドシオスの尊い聖遺骨は、当初安置されていた洞窟から修道士たちによって聖母マリアの被昇天教会へ移され、同教会の玄関ホールの右側に安置された。　タタール族の侵攻の際、聖テオドシオスの聖遺体は保存のため、同教会の西側の扉の下に隠され、現在に至るまでそこに安置されている。聖テオドシオスの聖遺体の移送は、8月14日に祝われる。　1108年、ニキフォロス都主教（在任：1103年～1121年）は公会議において、「すべての司教区のシノディクにテオドシオスを記載すること」を決定した。この時から、至聖なるテオドシオスの帰天と、その尊い遺骸の移送の両方が、至る所で祝われるようになった。　聖フェオドシオスは、その苦行に満ちた生涯だけでなく、主に様々な場面における教訓という形で現代に伝えられている書面による教えを通じて、彼から遠く離れた世代の人々をも啓発している。　残念ながら、聖テオドシオスのいくつかの著作の真偽については、まだ完全に解明されていない。以下の五つの説教は、間違いなく聖テオドシオスに帰属するものである：1) 大斎第3週の水曜日の「礼拝の時間」における「忍耐と愛について」の説教； 2) 断食第3週の木曜日の「忍耐、愛、そして断食について」の説教；3) 断食第3週の木曜日の「礼拝の時間」における「忍耐と施しについて」の説教； 4) 断食第3週の金曜日に行われた「忍耐と謙遜について」の説教；そして最後に、5) 断食第3週の金曜日、「礼拝の時間」に行われた「教会への参拝と祈りについて」の説教。 さらに、聖テオドシウスには以下の説教も帰せられている：1) 「ケラール（修道院の司務長）への説教」（その職務について）；2) 「神の懲罰について」の説教（これは、1067年にポロヴェツ族との悲惨な戦いの後、聖テオドシウスによって語られたものとされている）； 3) 「食事と飲酒」に関する説教（修道者たち向け）；4) 「あるキリスト愛好者かつ正信仰の熱心な擁護者による言葉」；5) 「酩酊について、霊的父から子供たちへの戒め」； 6) 「ウラジーミルが洗礼を受け、コルスンを攻略した経緯に関する言葉」；そして最後に、7) 教訓からのいくつかの抜粋。また、聖テオドシウスには、大斎の第3週の火曜日と水曜日に向けられた、聖テオドロス・ストゥディトの名を冠した2つの教訓、およびその他のいくつかの教訓も帰属させられている。　さらに、聖テオドシウスには、大公イジャスラフ宛ての書簡が数通（おそらく2～3通）ある（これらの書簡は、現存する文献において、イジャスラフ大公の「質問」という名称で呼ばれている）。　列挙された聖テオドシオスの著作はすべて、非常に簡潔かつ深い情感を込めて書かれている。聖テオドシオスの説教や書簡には、修辞的な装飾が一切見られない。その内容に関しては、修道者たちに向けたものにおいて、聖テオドシオスは修道誓願と義務について語っており、　特に「不貪の誓い」については詳細に論じている。一方、民衆に向けた教訓においては、聖フェオドシウスは、当時ルーシで広く行われており、キリスト教の説教者たちによってようやく根絶され始めた様々な異教の慣習に対して、力強く反対した。　特に、聖テオドシウスは偶像崇拝と酩酊に対して強く立ち向かった。最後に、聖テオドシウスには、いくつかの古代の詩篇集に彼の名前とともに収録されているいくつかの祈りが帰せられている。

至福のテオドシオスが亡くなったその年、彼の祈りによって修道院の財宝は増え続け、畑には豊作が訪れ、修道院の家畜たちも大いに子孫を増やした。　これほど豊かな年はかつてありませんでした。これを見て、修道者たちは聖なる父の約束を思い出し、神が御自身の御寵愛を受ける者、福者テオドシウスに御自身の恵みの賜物を授けてくださったことを称えました。　聖テオドシオスの死後、その恵みの賜物は、助けを求めて熱心に祈るすべての人々の祈りに応えて、聖人が行なった数多くの奇跡によって明らかになった。

その頃、スヴィャトスラフ公はあるボヤリンに対して激しく怒りを露わにした。　多くの人が、公爵は彼を流刑に送ろうとしていると噂していた。一方、そのボヤリンは熱心に神に祈りを捧げ、聖テオドシウスに助けを求め、「父よ、あなたが聖なる方であることは承知しています。私は今、苦境に立たされています。どうか私を憐れんでください。天の主への祈りによって、この苦難から私を救い出してください」と訴えた。

ボヤリンが眠りにつくと、夢の中に聖人が現れてこう言った。

「なぜそんなに悲しんでいるのか。まさか、私があなた方の元を完全に去ってしまったと思っているのか。肉体は離れていても、魂は常にあなた方と共にいるのだ。明日、公爵は怒りを微塵も示さずにあなたを呼び出し、かつての位を再び与えてくれるだろう。」

我に返り、正気を取り戻したボヤリンは、部屋の後ろ、ドアの近くから部屋を出ていく聖人の姿を見た。聖テオドシウスが予言したことは確かに実現し、ボヤリンはこの時からペチェルスク修道院に対して、さらに深い愛を抱くようになった。

旅支度をしていたある男が、聖テオドシウスの修道院に銀の小箱を持ち込み、知人の修道士コノンに預けた。このことを知った修道士ニコライは、悪魔の唆しによってその小箱を盗み出し、隠しておいた。　戻ってきたコノンは、自分の独房に銀がないことに気づき、そのことで深く悲しんで、涙ながらに神に祈り、聖テオドシオスの助けを求めました。祈りの後、眠りについたコノンの前に聖テオドシオスが現れ、こう言いました。

「お前が嘆いているその銀は、悪魔の唆しによって修道士ニコライが持ち去り、洞窟に隠したのだ。

そして、金が隠されていた場所を明かした後、彼はこう言った。

「行って、誰にもこのことを話さずに、自分のものを取り戻しなさい。」

目を覚ますと、喜んだ修道士は素早く起き上がり、ろうそくに火を灯して、指示された場所へ向かった。盗まれた品を見つけると、彼は神と、その御心に適う者である聖テオドシオスに感謝を捧げた。

次のような出来事もあった。キエフの聖ソフィア大聖堂に勤めるある聖職者が重病に陥った。全身が激しい内熱で燃え上がるように熱かった。意識が戻ると、彼は神と、神の聖人テオドシオスに祈りを捧げ、苦しみを取り除いてくれるよう願った。　彼が眠りにつくやいなや、夢の中で聖テオドシオスを見ました。聖人は彼に杖を差し出し、「これを受け取り、これを持って歩みなさい」と言いました。

目を覚ますと、病人は体の熱が引いていき、病気が治まりつつあるのを感じた。その後、彼は完全に回復すると、ペチェールスク修道院を訪れ、聖テオドシウスの祈りによって病が癒やされた経緯を修道士たちに語った。修道士たちは、この義人にそのような恵みを与えた神を賛美した。

他にも次のような出来事があった。ペチェールスク修道院でイグメンを務めていた頃、聖テオドシウスは、大斎の最初の週の金曜日には、節制に励んだ善良な修行者たちとして、修道士たちの食事に、必ず蜂蜜とケシの実を添えた、完全に清らかなパンを供するよう定めた。　この規定は、聖フェオドシウス自身によってイグメンに任命された至福のステファン[3414] によっても常に遵守されてい

[3414] ステファン――1074年から1078年まで修道院長を務めた。

た。ステファンの後、ペチェール修道院のイグメン職を引き継いだのは至福のニコン[3415] であり、彼は四旬節の最初の週の金曜日が訪れると、ケラール（倉庫係）に対し、聖フェオドシウスの定め通りに準備するよう命じた。　しかし、ケラリウスは修道院長命令に背き、そのようなパンを作るための小麦粉がないという口実を理由に、聖テオドシオスが定めた規定を履行しなかった。だが、神ご自身が、聖テオドシオスが定めた慣習が失われることを許されなかった。　聖体礼儀の後、修道士たちが断食の昼食のために食堂へ向かっていたところ、どこからともなく、突然、新鮮なパンが積まれた荷車が運ばれてきた。　この奇跡を目の当たりにした修道者たちは、死後もなお彼らを見捨てなかった神とその御使いを賛美した。彼らは、修道者たちの幸福のために自らの定めを守り、また、神に喜ばれる行いによって主から修道院への援助を求める権利を勝ち得た聖テオドシオス――その父であり導き手である彼を賛美した。　聖なるテオドシオス尊者の大胆な祈りに支えられ、私たちもまた、神の賜物――私たちの主であるキリスト・イエスと共に過ごす永遠の命――を授かるにふさわしい者とされますように。主は、父なる神と聖霊と共に、世々限りなく賛美されますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

徳の高みに至り、若き頃から修道生活を愛し、高潔な志を成し遂げ、洞窟に身を寄せ、禁食と清らかさでその生涯を飾り、祈りの中で、まるで無形の者であるかのように に留まり、 ロシアの地に、まるで明るい光のように輝き渡った、父テオドシオよ。キリスト・神に、我らの魂を救ってくださるよう祈り給え。

コンダク、第3調:

今日、我らは東から輝き、西へと至ったロシアの星を称えましょう。この国全体を奇跡と慈愛で豊かにし、修道規則の業と恵みによって我々すべてを導いてくださった、至福のテオドシオス。

私たちの尊い父、奇跡行者ペトロの記念日

記念日：5月3日

この尊者のお生まれになった地はコンスタンティノープルでした。彼は敬虔な両親の間に生まれました。　尊者の両親が修道者の位を受け、その直後に二人の兄弟、パウロとディオニシオスも修道生活に入ったとき、彼もまた彼らに倣い、彼らと同じような生活を送りたいと願い、兄弟のプラトンと共に修道者となりました。　修道士となってからは、彼は並外れた熱意をもって修道生活に打ち込み、その点において同世代の誰よりも優れていた。というのも、最初は彼らに、その後は他のすべての修道士たちに倣おうと努め、彼らから美徳を学び取り、それを自らの生活に活かしていたからである。 その高潔な修道生活により、彼は当時イタリアの司教であったニコライ[3416] の愛顧を勝ち得た。ニコライは彼を司教の位に就かせたいと望んだが、彼は「自分はそのような名誉に値しない」と述べ、これを辞退した。　そこで、ニコラオス司教は彼の兄弟であるパウロのもとへ向かい、当時司教

[3415] ニコン – 1078年から1088年まで修道院長を務めた。

[3416] この人物こそ、コンスタンティノープル総主教ニコライ1世・ミスティコスである。 895年に彼はコンスタンティノープル総主教の座に就き、906年には、ゾエとの4度目の結婚をめぐり、皇帝レオ6世「哲人」を聖体拝領から破門したため、皇帝によってイリウ島へ追放されたが、911年に 再びその座に復帰し、925年に死去するまでその座に留まった。

を欠いていたコリントの教会を慰めるため、彼をコリントの司教に叙任した[3417]。 その後、聖ペトロもまた、司教職を受け入れるよう強く懇願されたもののこれを拒み、コリントにいる兄パヴロのもとへ赴き、沈黙の誓いを立てたが、 しかし、その誓いを最後まで果たすことなく、わずか1年しかその地にとどまらなかった。というのも、遠く離れた国から[3418] の貴族や船主たちがコリントのパウロのもとを訪れ、彼らの司教が亡くなったことを理由に、彼の兄弟を司教に任命するよう懇願したからである。 彼らは聖ペトロ自身に対し、彼らの司教となるよう執拗に懇願したため、彼は彼らを断る気力を失い、コリントから逃げ出そうと考えた。しかし、かなりの時間が経過しても、訪れた者たちはさらに強い執拗さで懇願を続けたため、彼はついに彼らの涙に心を動かされ、その申し出を受け入れた。

司教の位を受けると、聖人は全力を尽くして教会の教えに専念し、その熱意をもって、信徒たちの自分への献身に応えた。 慈善の行いにおいては、貧しい人々のために自らの衣服さえ惜しまないほどであった。彼は孤児に食事を与え、未亡人を世話し、貧しい人々に食料を届け、密かに施しを必要とするすべての人々に施しを行った。 ある時、不作の年が訪れ、国に飢饉が襲った際、彼は絶え間ない施しによって、飢えに苦しむ何千人もの人々を養った。その頃、ある時、器の中にわずかな食糧しか残っていなかったが、聖人はまもなくそれが完全に満たされているのを見つけた。その結果、その器にあった食糧は、困窮している人々に丸一年分も足りるほどになった。 苦しむ人々への慈悲から、彼は捕虜を身代金で買い戻し、強者による暴力から弱者たちを解放した。さらに、彼は悪霊に取り憑かれた一人の少女を癒やし、たとえ話の中でペロポネソス半島に降りかかる災難を予言し（[3419]）、はるか以前から（ ）自らの死の日を見通していた。 70歳に達し、数え切れないほどの善行を成し遂げた後、彼はその至福に満ちた魂を主のもとへ帰した。そして死後もなお、棺から芳香を放ち、悪霊を追い払い、あらゆる病を癒やし、また彼の棺のそばでそれを求めた人々を諭すなど、奇跡を起こし続けた[3420]。

5月17日

5月4日（旧暦）

聖女ペラギアの殉教

5月4日の記念日

不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌス[3421] がキリスト教徒への迫害を開始したとき、その多くは拷問を恐れて山へ逃げ込んだ。 しかし、信仰が堅固で、人よりも神を畏れるキリスト教徒たちは、所属する教会に残り、迫り来る戦いに勝利できるよう、神にその業を成し遂げる力を与えてくださるよう熱心に祈った。

[3417] コリントはギリシャ最古の都市の一つであり、古代アルゴリダ地方の北部、コリント湾の岸辺に位置している。この地におけるキリスト教教会の基礎は、聖使徒パウロによって築かれた。

[3418] すなわち、アルゴラド湾の岸辺に位置するアルゴスという都市からである。聖ペトロスがアルゴスで司教を務めていたことは、ある聖人暦に記されている。そこには、彼がニコラオス1世・ミスティコス総主教によって司教に叙階されたことも記されている。

[3419] ペロポネソスとは、古代において現在のギリシャの南部を指す名称であった。

[3420] 聖人は10世紀に逝去した。その聖遺骨は1421年にアルゴスからナフプリオへ移された。目撃者たちの証言によれば、棺が開かれた際、大地が揺れ、空気が香りに満ち、多くの癒しが起こったという。

[3421] ディオクレティアヌス帝は、284年から305年までローマ帝国を統治した。

この頃、タルスス[3422]の司教はクリノンであった。彼は多くの異教徒を真の神へと導き、洗礼を授けた。良き羊飼いのように彼らをキリストの群れに加えながら、一人ひとりに、キリストの御名を告白するために勇敢に立ち向かい、キリストのために自らの命を捧げるよう諭した。そして、天の御国においてキリストから勝利の冠を授かるという揺るぎない希望を抱くよう促したのである。

当時キリキアにいたディオクレティアヌスは、この勇敢な司教の話を耳にすると、彼を捕らえるよう命じ、彼が街から逃げて逃げ延びることができないよう、城門を閉ざすよう命じた。 しかし、その命令が下るより前に、司教は神からこれから起こるすべての事柄についての啓示を受けており、まだその時が来ていなかったため、誰にも知られずに密かに街を脱出した。彼は他のキリスト教徒たちと共に、山や荒野に身を隠していた。 一方、ディオクレティアヌスは、司教を見つけられないことに苛立ち、その怒りを司教がキリストへと導いた人々に向けました。彼は、改宗したばかりの多くのキリスト教徒を捕らえるよう命じ、彼らを牢獄に閉じ込めました。

その頃、タルソスという町に、ペラギアという名の若い女性が住んでいた。彼女は名門の出身で、富と美しさで知られ、神への畏敬の念と貞節に満ちていた。 彼女がキリスト教徒たちから、神の御子であるイエス・キリストについて聞いたとき、その心は主への愛に燃え上がり、彼女は主を信じ、この世のいかなる人間とも結婚の絆を結ばないことを誓い、天にあり、不死で、朽ちることのない花婿に嫁ぐことを決意した。キリストを信じた彼女は、聖なる洗礼を受けることを切望した。

しかし、キリスト教の司教が町を去ったことを知ると、彼女は深く悲しんだ。というのも、彼に会って、その手から聖なる洗礼を受けたいと願っていたからである。 それまで彼女は司教に会ったことがなく、ただその噂を耳にしていただけだった。ペラギアの母は未亡人であり、偶像崇拝に没頭していたため、ペラギアはキリストへの信仰も、自身の決意も、母から隠していた。

その頃、王の息子[3423]は、ペラギアという乙女の驚くべき美しさについて耳にし、彼女を目にする機会を得た。彼は彼女のもとへ高位の貴族たちを遣わし、王の息子が彼女と結婚したいという意向をペラギアに伝えるよう命じた。

ペラギアの母はこの展開を大いに喜んだが、聖なる乙女は別の決断を下した。十字を切って、彼女は恐れることなく使者にこう答えた。「私はすでに、神の子、不死の王と婚約しています」。

この答えを携えて、使者たちは王子の元へ戻った。

聖ペラギアの返答を聞いた王子は激怒した。彼は聖なる乙女に容赦なく復讐することを企てたが、すぐには実行しなかった。乙女が考えを改め、自分の望みを叶えてくれることを期待していたからである。

その間、ペラギアは母親に、長い間会っていない乳母に会いたいと告げた。彼女の乳母は町の外に住んでおり、ペラギアは、あるキリスト教徒たちからその秘密の隠れ家の場所を聞いていたキリスト教の司教を探すために、家を出る準備をしていた。 しかし、聖ペラギアの母は、悪魔の唆しにより、娘の願いを聞き入れることを拒み、断固として反対してこう言った。「今はそこへ行ってはならない。また今度行けばよい」。

[3422] タルス――小アジアのキリキア地方に位置する、古代に繁栄した大都市。アッシリア王センナケリブ（紀元前705年から681年）によって築かれた。キドネ川沿いの立地を活かし、盛んな交易が行われていた。 – キリスト教徒にとって、タルスは聖使徒パウロの生誕地であり、彼が最初に暮らした場所として重要な都市である。 主ご自身によって偉大な奉仕へと召された使徒パウロは、当初タルスで宣教活動への準備を整えていた（使徒行伝9:11–30参照）。現在、タルスはアダナ県にある人口8,000人の小さな町であり、トルコに属している。 注目すべきは、今日に至るまで、タルスとその周辺地域の住民の主な生業が、絨毯やテント用のフェルト、あらゆる種類の生活用具の製造にあるという点である。これは、テント作りで生計を立てていた使徒パウロの時代（使徒行伝18:3）と同様である。

[3423] ディオクレティアヌスには息子がいなかった。ここで言及されている「王の子」とは――聖ディミトリイ・ロストフスキーが説明しているように――ディオクレティアヌスに養子として引き取られ、王位継承権を与えられた青年を指すものと理解すべきである。

この言葉に、ペラギアは深く悲しんだ。

その夜、主がクリノン司教の姿で彼女の前に現れ、何も語らなかった。彼女は、現れた人物の清らかな顔が光を放ち、その衣が驚くほど美しかったため、この幻影に驚いた。

目を覚ますと、彼女は密かに、最も信頼できる二人の宦官を[3424]、そこに投獄されていたキリスト教徒たちの牢獄へ送り込み、司教の外見について尋ねさせることにした。彼らはその任務を遂行し、司教の外見について詳細な説明を持って戻ってきた。　その純真な乙女は、彼らの話によると司教の容貌が、夢で見たものとすべて一致していることに驚き、夢の中で見たのが司教であったと悟った。　喜びに満ち溢れた彼女は、心から現実の世界で彼に会いたいと願い、次のように神に熱心に祈った。「主よ、どうかあなたのしもべ、あなたの恵みの使者を見させてください。そして、あなたの聖なる秘跡を私から奪わないでください」。

その後、彼女は再び母に、乳母のもとへ行かせてほしいと懇願し、長い間会えていないため恋しいと訴えた。母は彼女を行かせたくなかった。しかし、悲しみのあまり病に倒れることを恐れて、母は彼女の願いを聞き入れ、旅のために戦車、馬、そして従者を用意するよう命じた。　そして、ペラギアに王子の花嫁として王家の紫の衣を着せ、金細工や宝石で飾り立てた後、最も信頼できる使用人や宦官たちに付き添わせ、豪華な馬車に乗せて送り出し、次のように別れの言葉を贈った。　「行ってきなさい、お元気で、私の娘よ。そして、私の代わりにあなたの乳母に挨拶を伝えてください。」

ペラギアは多くの従者に囲まれ、喜びながら旅立った。街から約10ポプリシュ[3425]ほど離れたところで、彼らは鬱蒼とした森に覆われたある山に近づいていた。その時、彼女の従者の一人、ロンギンという名の男が、山から降りてくる高潔な人物を目にした。　それはクリノン司教であり、神の御心により、ここで一行と出会うことになったのである。秘密のキリスト教徒であったロンギンは、その男がクリノン司教であることを見抜き、同じく秘密のキリスト教徒である別の使用人にこう言った。

「兄弟ユリアヌスよ！　私たちに向かって歩いてくるその男が誰か分かるか？　彼は神の人、クリノン司教だ。彼が成し遂げる奇跡のゆえに、その名声は東方全土に広まっている。王は彼のことを知ると、長い間彼を探したが、見つけることができず、そのためにキリスト教徒への迫害を始めたのだ。」

このロンギヌスとユリアヌスの会話を耳にしたのは、ペラギアが司教の容貌を確かめるために、キリスト教徒が収監されている牢獄へ送り込んだ二人の宦官であった。彼らは聞いたことをペラギアに報告した。

聖なる乙女は馬車を止め、そこから降りて、神の僕のもとへ向かった。彼女は、異教徒たちにキリスト教の聖なる信仰の秘密が漏れるのを望まなかったため、家来たちには少し離れた場所で、木陰に腰を下ろして休むよう命じた。神の僕のもとへ近づくと、彼女は次のように挨拶した。

「喜びなさい、キリストの僕よ！」

司教は彼女にこう答えた。

「わがキリストの平安が、お前にあるように、乙女よ。」

ペラギアは続けた。

「御姿を幻として私に示し、私の魂を滅びから救うためにあなたを私のところへ遣わしてくださった神に、賛美を捧げます。あなたが仕える神の御名によってお願いいたします。あなたはクリノン、キリスト教の司教でしょうか？」

クリノンは彼女にこう答えた。

[3424] 宦官とは、去勢された使用人のことで、東方のハーレムでの奉仕を目的としていた。使用人の去勢の慣習は古代ギリシャやローマにも見られたが、古代の小アジアでは特に広く行われていた。

[3425] ポプリシュチェ――長さの単位で、現在のサジェニ約690に相当する。

「私は、永遠の命を得ることを望む、キリストの御言葉の羊たちの牧者です。」

「あなたの羊たちが永遠の命を得られるように、あなたは彼らに何を命じているのですか？」とペラギウスは司教に尋ねた。

「私は彼らに、父と子と聖霊を知るよう教え、神を畏れ、キリストを愛する、神に喜ばれる生き方へと導いているのです。」

「父よ、あなたの神と結ばれたいと願う者たちは、まず何をするべきか、教えてください。」

「あなたに告げましょう」と司教は答えた。「罪の赦しと永遠のいのちのための洗礼です。これ以上に必要なものはありません。」

ペラギアは司教の足元にひれ伏し、懇願してこう言った。

「主よ、私を憐れんでください。そして、あなたの賜物を私に与えてください！あなたと語り合ってから、神の光が私の心に輝きました。私はサタン、その僕たち、その策略、そして私がかねてから憎んできた、命などなく、ただ死と永遠の破滅しかない無機質な偶像たちを否定します。　今、私は天の神に、この不適格な私を、私の心を照らしてくださった御子に嫁がせてくださるよう祈ります。御子はまさに「正義の太陽」だからです。

これを聞いて、司教はこの乙女の神に対するこのほど大きな愛に驚き、心の中で彼女を喜び祝った。そして、天に向かって両手を挙げ、次のように祈り始めた。「神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ！　天におられ、この乙女に御自身を知るよう招かれた御方よ、御愛する御子の聖なる洗礼を彼女に授けてください」。

司教はそう祈った。

すると突然、彼らの目の前で、地中から生ける水の泉が湧き出た。この奇跡を目撃した司教は、神を賛美してこう言った。

「わが神よ、父と子と聖霊よ、人々に永遠の命への洗礼を嗣業として与えてくださったあなたは、まことに偉大です。心を見通す主よ！　あなたの御前では、あなたのしもべの謙遜な心がさらけ出されています。私がこの乙女に洗礼を授けることを恥じていることを、あなたはご覧になっています。全能なる主よ、どうかあなたの御目によってすべてを整え、私にどうすべきかを教えてください。

「主よ、私の父よ」と、その時ペラギアは叫んだ。「あなたの祈りは聞き届けられました。ほら、泉のそばに、明るい光を放つ二人の若者が立っていて、その手には白い布を握っているのが見えます。あなたはためらうことなく、私に洗礼を授けてください。」

神に感謝を捧げた後、司教は泉へと歩み寄り、ペラギアが言った通り、乙女の体を覆うために雪よりも白い布を手にしている二人の神の天使を見ました。その後、司教は水に祝福を与え、その上で次のような祈りを唱えました：

– すべての被造物の王よ、*「あなたは御自分の天使たちを霊とし、御自分のしもべたちを燃えさかる火として造られた」*（詩編103:4）とあります。どうか、あなたが私のもとに遣わしてくださったこの乙女を、霊的ないけにえとしてあなたに捧げるにふさわしい者とならせてください。　彼女を御選びになった者たちの列に加え、御国の日に、彼女もまた五人の賢い乙女たちと共に、灯をともしたまま、御子キリストの宮殿に入ることができるようにしてください。[3426]。

祈りを終えると、司教は父と子と聖霊の御名によって、至福のペラギアに聖なる洗礼を授け、自身が携えていたキリストの御体の断片を彼女に与えた。

秘跡の執行後、聖ペラギアは司教に頭を下げ、その足に口づけをして、こう言った。

「主よ、尊き父よ、私のために主にお祈りください。主が御自身の聖霊によって私を強めてくださいますように。」

[3426]「十人の乙女」のたとえ（マタイ25:1–13）を参照のこと。

司教は彼女にこう言った。

「あなたが身を委ねた神が、御自身の住まいである*『聖所から助けを送ってくださいますように』*（詩編19:3）、そして敵に対する勝利をあなたに授けてくださいますように。」

聖霊による大きな喜びに満たされたペラギアは、司教にこう言った。

「父よ、あなたを通して私に救いを与えてくださった神の御名によって、お願いいたします。私の願いを拒まないでください。私はあなたの聖なる御手から、永遠の王の朽ちることのない紫の衣を授かりました。ですから、今や私はこの地上の朽ちゆく紫の衣や、これらの虚しい装飾品を身に着けるべきではありません。　どうかそれらを私から取り上げ、売り払い、その代金を貧しい人々に配ってください。私にとって、これらすべての宝物はただ嫌悪感しか呼び起こさないのですから。

司教は彼女にこう答えました。

「私がこれを手に取るのはふさわしくありませんが、あなたが神の御名によって私に求めておられるのですから、あなたを傷つけないために、これを受け取ります。よろしい、あなたの願いを叶えて差し上げましょう。」

「私は聞いたことがあります」とペラギアはそれに答えた。「私たちの主が聖なる福音書の中でこうおっしゃっているのを。*『だれも、ふたりの主人に仕えることはできない。神とマモンとに仕えることはできない』*（マタイ6:24）。それゆえ、私も唯一の神に仕えたいと願う者として、マモンを拒絶します[3427]。」

司教は聖ペラギアの知恵に感嘆した。彼女のために神に祈りを捧げた後、司教は彼女に祝福を与え、その場を離れた。

一方、聖ペラギアは聖霊を大いに喜び、神が彼女に天の賜物を受け取る恵みを授けてくださったことを、心を尽くして神を賛美し、感謝した。

彼女が待ち構えていた使用人たちのところへたどり着くと、彼らの目が悪魔の惑わしによって曇らされているのを見た。彼らは何も見えず、どこへ行くべきかも分からなくなっていた。　聖女は、これが私たちの救いの敵の仕業であると悟り、使用人一人ひとりに十字の印を施して、彼らを盲目から解放した。すると、彼らは以前と同じように、再びはっきりと見えるようになった。

視力を取り戻した使用人たちは、聖ペラギアに尋ね始めた。

「お嬢様！　あなたが話しておられたあの人はどこにおられますか？　あなたが不在の間、私たちは、あなたと私たちの間、二人の乙女と共に立っておられる、まばゆいばかりの御婦人を目にしました。その頭には二つのティアラがあり、ティアラの上には十字架が輝いていました[3428]。」

聖ペラギアは使用人たちに黙るよう命じ、それから彼らに、私たちの主イエス・キリストへの信仰について教え始めた。

使用人たちは彼女にこう答えました。

「主よ、死の後、私たちを永遠の苦しみから救い、天国で永遠の命を与えてくださるお方だけを、どうして信じないことがありましょうか！」

聖女は、使用人たちの回心を目の当たりにして喜び、彼らに直ちに聖なる洗礼を受けるよう勧めました。その後、馬車に乗り込み、彼女は乳母のもとへ向かう旅を続けました。

乳母は育ての娘を迎えに出て、以前よりもさらに美しくなったと述べたが、彼女がこれほど質素な服装で、装飾品を一切身につけていないことに驚いた。

再会の喜びがひとまず収まると、乳母は聖ペラギアの性格に大きな変化があることに気づいた。以前は高慢で傲慢だったが、今では謙虚で柔和になっていた。以前は饒舌だったが、今は寡黙だっ

[3427] マモナとは、富の守護神であるシリアの神の名である。比喩的な意味では、「マモナ」とは一般的に富や地上の恵みを指していた。

[3428] 明らかに、現れた不思議な御婦人は、神の母であった。

た。以前は様々な珍味を好んでいたが、今は断食と節制を守り、ごくわずかな食事しか摂らなかった。　以前は怠惰と快楽に日々を費やし、夜は柔らかい寝床で体を休めていたが、今では一日の大半を祈りに費やし、固い寝台で休み、夜もまた祈りのために起き上がっていた。これらすべての兆候から、乳母はペラギアがキリスト教の信仰を受け入れたことを悟った。そして彼女は彼女にこう言った。

「愛しい我が娘よ！かつて、その素晴らしい肉体の美しさで王の御子や、あなたに出会うすべての人々を驚かせたように、今こそ、真の心の美しさをもって、あなたが花嫁として身を捧げた神の御子、永遠の王に喜ばれるよう努めなさい。　あなたが天の真の神を信じたことが私にはわかります。どうか神が、あなたを神のために苦難に耐えるよう強め、敵に対する勝利を与え、　、御自身の栄光の勝利の冠をあなたに授けてくださいますように。さて、わが娘よ、どうか速やかに、安らかに私の元を去ってください。　あなたが私の家に長居することを望まない。あなたを留めておくことはできない。あなたを自分の花嫁と見なしている王子の怒りを恐れているからだ。しかし、私が自分のことを恐れているとは思わないでほしい。もし私があなたと共に苦難に遭うなら、あなたと共に神からの報いも受け取るだろう。だが、私は家族全員と親族全員のことを恐れているのだ。　もし、あなたの夫になろうとしている王子が、あなたがキリスト教徒であること、そして私の家に滞在していることを知れば、彼は私と私の家族全員を滅ぼしてしまうでしょう。

乳母のこの言葉を聞いた聖ペラギアは、うつむきながら、母親のもとへと戻っていった。

ペラギアが自宅に近づくと、母親が迎えに出てきた。王室の紫の衣も高価な装飾品も身につけておらず、質素な服を着た娘の姿を見て、母親は恐怖と困惑に襲われた。

使用人の一人が、道中で起こったすべての出来事を母に伝え、ペラギアがキリスト教の司教から聖なる洗礼を受けたことを告げた。これを聞いた母は、まるで体が麻痺したかのように動けなくなり、深い悲しみのあまり、長い間、死人のように寝台に横たわっていた。　その後、正気を取り戻すと、娘には何も告げずに王のもとへ急ぎ、娘をキリスト教に改宗させた司教を探し出して捕らえ、裁判にかけるために兵士を派遣するよう懇願した。王は彼女に、騎兵と歩兵を大勢与えた。

一方、聖ペラギアは、激しい怒りに燃える母の姿を見て、キリストを信じる数人の使用人を連れて、彼らと共に密かに家を出た。そして、キドヌス川（[3429] ）を渡り、この地に身を隠すことに決めた。

彼女の母は、兵士たちを連れて家に戻ったが、ペラギアが家にいないのを見て、さらに悲しみに暮れ、至る所に兵士たちを派遣し、ペラギアとクリノン司教を探すよう命じた。

兵士たちは周辺一帯に散らばり、道行く人々にペラギアの行方を尋ね、山や荒野の至る所を捜索したが、神ご自身が奇跡的に彼女を守っておられたため、見つけることはできなかった。　聖ペラギアは川のほとりに座り、対岸で自分を探している兵士たちを見ていた。しかし、そのとき神の御計らいにより肉眼が閉ざされていた兵士たちは、彼女も、彼女の同行者たちも、誰一人として見ることができなかった。そこで聖女は従者たちにこう言った。

「ご覧なさい、私たちの主は、御自身を信頼する御自分のしもべたちをいかに愛し、守ってくださっているか。」

懸命な捜索も実を結ばず、兵士たちは司教もペラギアも見つけることなく引き返した。この出来事はペラギアの母を極度の悲しみと嘆きに陥らせ、彼女は息も絶え絶えの状態に見えた。

その時、ペラギアは心の中で聖霊の導きを感じ、天の婚約者への愛に燃え上がり、キリストの御名のために自らを拷問に委ねる覚悟さえ固めた。彼女は母の家へ行き、その偽りの悲しみを捨て去るよう、次のように諭し始めた。

[3429] キドヌス――現在のテルス・チャイ――はキリキアにある小さな川で、タヴル山を源流とし、タルスス市を流れている。

「なぜ、」とペラギアは母に言った。「そんなに怒っているのですか？　なぜ真理を知ろうとしないのですか？　あなたは、至高の神、すべての被造物の創造主を崇める聖なる人を捜索するために、兵士たちを召集することさえためらわなかったではありませんか。天の神に敵対するなど、恥ずかしくないのですか！」　神のしもべである司教が、祈りによって神に、御自身の天使の一人を遣わしてくださるよう懇願し、その天使が瞬く間にすべての軍勢を殲滅させることができることを、あなたは知らないのですか？

聖ペラギアは、主イエス・キリストについてこうしたこと、そして他にも多くのことを語り、母に真の神を知るよう諭したが、全く成果はなかった。というのも、彼女の母は狂気に目がくらみ、憎悪に心を蝕まれていたからである。彼女は、娘の神に霊感を受けた言葉に耳を貸さず、王の息子に次のように伝えさせた。「お前の婚約者は、キリスト教の神に身を捧げたのだ」。

これを聞いた若者は深く落胆した。彼の希望は打ち砕かれた。彼は、父がどれほど多くのキリスト教徒を拷問したかを思い出したが、その誰一人として父に従うよう説得することはできなかった。困惑と悲しみに包まれ、彼は独り自分の寝室に座り、こう自問した。　「もしペラギアがキリスト教の神を信じ、その神と婚約したのなら、彼女が神から背いて私の妻になることなど、決して承諾しないだろう。では、私はどうすればよいのか？　彼女を拷問にかけるか――それは何の役にも立たない。なぜなら、キリスト教徒たちが、自分たちの神のために、どれほど大きな喜びをもって自ら拷問や最も残酷な死に身を投じるか、私は知っているからだ。　ペラギアも同様に行動するだろう。もちろん、彼女は私の妻になるよりは、むしろ死ぬことを選ぶに違いない。そして、私に残されるのは恥と、さらに大きな悲しみだけだ。キリスト教徒たちからの嘲笑による恥と屈辱、そして彼女の死による悲しみと苦しみ　――私は彼女を限りなく愛しており、彼女への愛の炎に全身が燃え上がっているのだから。　自分の運命は分かっている！　彼女の苦しみを見ずに、愛に傷つけられたこの心の苦しみから自らを解放するために、私は自ら命を絶つ。なぜなら、私が燃え盛るその愛のせいで軽蔑され、憎まれる中で、毎日死の苦しみを味わうよりは、一度だけ死ぬほうがましだからだ」。

そう言うと、その若者は剣を抜き、胸を露わにし、剣の刃を胸に当てて、泣きながらこう言った。

「私の目が、この偉大なる美しさを目にしたあの瞬間を呪おう。私はその美しさを堪能することも、心ゆくまで満喫することもできないのだから。しかし、これで私はすべての苦しみから一気に解放されるのだ！」

そう言い終えると、若者は剣で自分の胸を激しく突き、胸を貫くと、剣の上に倒れ込んで息を引き取った。

ペラギアの母はこれを知ると、ディオクレティアヌス帝が息子の復讐として彼女とその一族全員を処刑するのではないかと恐れ、恐怖に駆られた。そこで彼女は自ら娘を縛り上げ、帝のもとへ連れて行き、息子の死の責任をすべて娘一人に負わせ、彼女を死と処刑へと差し出した。　ディオクレティアヌスは母と娘を見つめ、心に深い悲しみを抱きながらこう言った。

「お前たちは何をしたのだ？　お前たちは私の息子を殺したのだ。」

母親はこう答えた。

「ほら、あなたの息子の死の犯人をあなたの元へ連れてきました。彼女を処刑し、この死への復讐を果たしてください。」

その間、ディオクレティアヌスはペラギアの並外れた美しさに目を奪われていた。彼女は彼のすべての妻や側室よりも美しく、これほど美しい女性を彼はこれまで見たことがなかった。彼はもはや処刑や復讐のことなど考えず、自分の中で燃え上がった情欲を満たすことばかりを思っていた。彼は、どうすればペラギアをキリストから引き離し、自分の妻にできるかを考え始めた。彼は、このキリストの花嫁を誘惑しようと、少女の前に大量の金や宝石を運ばせて置かせ、また彼女の母親には

100タラントの金[3430]　を与え、彼女を帰した。彼女は悪魔のような喜びに浸りながら、自分の家へと戻っていった。 一方、聖ペラギアは王宮に残され、王室の侍女たちの世話に委ねられた。

翌日、王は聖なる乙女を栄誉をもって自分の元へ連れてくるよう命じ、自らもすべての顧問たちを従え、その輝きを放つ姿で玉座に着いた。大勢の兵士たちが王を取り囲んでいた。これほど壮大な集まりの前で、王は聖なる乙女に向かって次のように語りかけた。

「ペラギアよ、ただ一つだけお願いがある。キリストを拒絶してくれ。そうすれば、私はお前を妻として迎え、お前は私の宮殿で第一の地位に就く。王冠を授け、私の王国全体を私と共に治めることになる。もしお前との間に息子が生まれたなら、私の死後、その子が私の王座に就くのだ。」

聖ペラギアは、神への熱意に満たされ、恐れることなく彼にこう答えた。

「王よ、私にそのようなことを言うとは、あなたは正気を失っているのです！　知っておきなさい、私はあなたの望みを叶えるつもりはない。私はあなたの忌まわしい結婚を嫌悪する。私には花婿――天の王であるキリストがおられるからだ。私はあなたの王冠、すなわち虚しく、はかない、一時的なものを望まない。なぜなら、天の御国において、私の主は私のために三つの朽ちることのない冠を用意してくださっているからだ。　第一の冠は信仰のためである。私は心を尽くして真の神を信じたからである。第二の冠は純潔のためである。私は自分の処女性を神に捧げたからである。第三の冠は殉教のためである。私は神のためにあらゆる苦しみを受け入れ、神への愛のために私の魂を捧げたいと願っているからである。

その言葉を聞いたディオクレティアヌスは激しく怒り、聖なる乙女を怯えさせようと、銅の雄牛を焼き熱くするよう命じた。雄牛が赤熱し、燃える炭のように火花が飛び散るほどになったとき、聖なる乙女がそこに引き出された。この光景を見物するために集まった群衆の中には、多くの隠れキリスト教徒がいた。　拷問に身をさらそうとする乙女を見て、彼らは密かに神に彼女のために祈り、神が天からの知られざる力によって彼女を強めてくださるよう願った。王や貴族たちは、甘言や脅しを用いて彼女に王の望みを叶えるよう説得したが、彼女は決意を揺るがすことはなかった。

そこで王は、彼女の衣服をすべて脱がせるよう命じた。自分が裸にされようとしているのを見て、聖女はディオクレティアヌスに向かって大声でこう言った。

「王よ、むしろあなたの妻や側室たちのことを思い出すべきです。私も彼女たちと同じ肉体を持っているのですから。」

しかし、皇帝は情欲に燃え上がり、乙女の裸体を目の当たりにして視線を満たそうと、急いで彼女を裸にするよう命じた。　しかし、殉教者は、不敬虔な者たちの手に触れられるのを待たず、自ら十字　の印を掲げ、素早くすべての衣服を脱ぎ捨て、それを王の顔元に投げつけ、天使や人々の目の前で裸となり、王の紫の衣のように、乙女ならではの羞恥心を誇らしげに掲げた。　そして彼女は、次のような言葉で王を非難し始めた。

「王よ、私はあなたを、エバを惑わしたあの蛇（創世記3:1–6）や、カインにアベルを殺すよう唆したあの蛇（創世記4:2–16）、そして義人ヨブを試みる許可を神に求めたあの悪魔（ヨブ記1:6–12）に等しい者と見なす。　しかし間もなく、キリストの敵であるお前は、お前の同調者たち全員と共に滅びるだろう。

そう言うと、彼女は再び十字架の印を切り、誰かに投げ込まれるのを待たずに、自ら灼熱の雄牛のもとへと歩み寄った。　彼女がその牛に両手を伸ばすと、その手は猛烈な炎によって蝋のように溶けてしまった。しかし、彼女はまるで痛みを感じていないかのように、頭を牛の穴に差し込み、その中に入ると、大声で神を賛美し始め、こう言った。

[3430] タラント――銀または金の鋳塊で、流通する時代や場所によって大きさや価値が異なる。

「主よ、至高の神の独り子よ、私のような弱き者をこの偉業に立ち向かわせ、悪魔とその策略に打ち勝つ力を与えてくださったことを、あなたに栄光がありますように。あなたと、あなたの始原なき父、そして聖霊に、このことに対する栄光と礼拝が永遠にありますように。」

そう言い終えると、聖女は自らの魂を、至聖にして不死の婚約者の御手に委ね、天使たちの歓呼と賛美歌「[3431] 」に包まれながら、彼と共に天の宮殿へと入っていった。一方、彼女の尊い遺体は、銅の棺の中で油のように溶け出し、香りのよい聖油のように広がり、街全体が言い表せないほどの芳香に満たされた。　その尊い遺骨を、不義の王は町から追い出すよう命じ、それらはリタトンと呼ばれる山へと運ばれた。砂漠からやって来た四頭のライオンが遺骨のそばに腰を下ろし、他の獣や肉食の鳥たちからそれを守った。

クリノン司教は、聖ペラギアの死と遺骨の在り処について、神からの啓示を受けた。そこで司教はその山へ向かい、そこで聖ペラギアの尊い遺骨と、それを守っている四頭の獅子を見つけた。獅子たちは、神の僕を見るや、彼のもとへ近づき、彼の前にひれ伏してから、砂漠へと戻っていった。　一方、司教は聖殉教者の遺骨を手に取り、その山の最も高い丘へと運び、石を据えた。その後、コンスタンティヌス帝の治世に入り、至る所で敬虔さが輝き渡るようになると、彼はそこで、キリストの花嫁の尊い遺骨の上に教会を建立した。　墓石には、クリノン司教が次のような碑文を刻んだ。「神に身を捧げ、最後まで真理のために奮闘した聖処女ペラギアは、その遺骨をもってここに眠り、その魂は天において、キリストの栄光のうちに天使たちと共に君臨している」。

こうして、聖なる殉教者ペラギアは、私たちの主キリストのためにその生涯を全うした。主キリストには、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光がある。

コンダク、第3調:

この世を軽んじ、天の恵みにあずかり、苦難の冠を受け入れた、至聖なるペラギアよ、あなたは血の流を主キリストへの捧げ物として捧げました。あなたの記念を尊ぶ私たちを、災いから救ってくださるよう、お祈りください。

聖殉教者シルヴァノス、ケシウス司教の殉教[3432]および彼と共に殉教した四十人の殉教者たち

記念日：5月4日

聖なる司祭殉教者シルヴァンは、ガザの近郊[3433] の出身であり、当初は兵士であった。その後、キリストの信仰のために地上の王の軍勢を離れ、天の王であるキリストの兵士となり、それゆえに司祭職の恵みにあずかるに至った。最初は長老となり、その後司教となった。　キリストの教会の指導者として、彼はその教えの言葉によって、多くの不信仰者を真の神へと導いた。　このため、熱心な偶像崇拝者たちは彼を捕らえ、ケサリアの町へ引き出して裁判にかけた[3434] 。そこで彼はまず残酷な殴打を受け、次に絞首刑に処され、遺体が引き裂かれた。そしてついに、銅鉱山での強制労働を宣

[3431] 聖殉教者ペラギアの死は287年に訪れた。8世紀、コンスタンティノス・コプロニモス皇帝（在位741年～775年）の治世下、彼女の尊い遺骸はコンスタンティノープルに移され、彼女の名を冠した教会に安置された。

[3432] 聖殉教者シルヴァンは、強制労働を科された場所から「ケシイの司教」、すなわち「ケサリアの司教」と呼ばれているが、奉仕の地としては『チェティ・ミネイ』にも記されている通り、ガザ（またはガザ近郊）であった。

[3433] 古代のペリシテ人の都市ガザはパレスチナにあり、ユダヤの南の国境からほど近く、地中海の海岸沿いに位置していた。4世紀には、ガザはすでにキリスト教の都市となっていたが、7世紀にはイスラム教徒に征服された。

[3434] かつてパレスチナのローマ総督の居城であったケサリアは、地中海沿岸の古代サマリアの領域内に位置していた。

告された[3435]。 この労働に従事する中で、聖なる殉教者は完全に衰弱してしまったが、絶えずキリストを神であると告白し続けた。そのため、異教徒たちは彼と、彼がキリストの信仰に導いた他の40人の殉教者たちの首を剣で切り落とした[3436]。

聖殉教者アルヴィアヌス司教[3437]およびその弟子たちの受難

記念日：5月4日

聖なる司祭殉教者アルヴィアンは、マクシミアヌス皇帝の治世[3438]、アジア[3439]がエリアヌスの統治下にあった際に殉教した。

聖アルヴィアンは、アグリピンという名の異教の祭司が偶像への生贄を捧げていた最中に捕らえられた。 聖人は偶像への生贄を捧げ、祭壇に掌を差し出すよう強要されたが、彼は威厳をもってこう答えた。「私はキリストへの信仰を称え、偶像への奉仕を軽蔑する」。

このため、聖人はまず、赤熱した鉄の棒で腹とすねを焼かれ、その後、容赦なく棒で殴打された。

このような拷問によって、拷問者たちは聖人にキリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう強要しようとしたが、聖人自身も、彼と共に拷問を受けた弟子も、これに同意しなかった。その後、彼は火刑に処されることとなり、炉が熱せられ、彼と弟子はそこに投げ込まれ、そこで聖なる殉教者たちは息を引き取った[3440]。

聖殉教者エラスムスの受難。

記念日：5月4日

福者エラスムスは、若き頃からキリストへの愛に燃え、その戒めを熱心に守り、フォルミア市の司教に任命された[3441]。 不敬虔な皇帝ディオクレティアヌスがキリスト教徒を拷問にかけ、その王国の都市の住民たちを混乱に陥れたとき、聖エラスムスは司教の座を離れ、レバノン山脈へ逃れました[3442]。そこで彼は迫害者たちから身を隠し、7年間を過ごしました。 ある日、彼は天から天使の声を聞き、こう告げられた。「エラスムスよ！ 眠っている限り、誰も敵に打ち勝つことはできない。さあ、自分の街へ戻り、勇敢に奮闘すれば、敵に打ち勝つことができるだろう」。

この言葉を聞いた後、エラスムスは天使に示された道へと向かったが、そこで兵士たちに遭遇し、「どの神を崇めているのか」と問われた。聖エラスムスは自らをキリスト教徒であると宣言した

[3435] 聖殉教者たちの同時代人であるエウセビオスは、シルヴァンがフェナ市の鉱山での労働に処せられたと述べており、フェナ市については、ある説ではアラビアの砂漠に位置していたとされるが、エウセビオスによればパレスチナにあったという。

[3436] 聖殉教者たちは311年に殉教した。

[3437] 聖殉教者アルヴィアヌスは、ローマ帝国の小アジア属州アシアに位置するアネアの司教であった。

[3438] ここでいうのは、もちろんディオクレティアヌスの共同統治者であり、305年からローマ帝国の東部を統治していたマクシミアヌス・ガレリウスである。

[3439] アシアとは、リディア地方にある、水が豊かで湿地帯の広がる小さな平野のことであり、すなわち、現在の小アジア半島の西部の中央部、エーゲ海東岸に位置していた。 そこには『ヨハネの黙示録』（黙示録1:11）に言及されている小アジアの七つの都市があり、聖使徒ヨハネ・テオロゴスがしばらくの間、活動した場所でもあった。

[3440] ミニウスによれば、聖なる殉教者たちは304年に殉教した。

[3441] フォルミアという都市は、イタリアのカスターニャ湾沿い、地中海沿岸に位置していた。

[3442] レバノン山脈はシリアにある。

。すると兵士たちは彼を捕らえ、アンティオキア[3443] へ連行し、ディオクレティアヌス皇帝の前に引き出した。 道中、聖人は公然と キリスト教徒であることを認め、皇帝は彼を棒で打つよう命じたが、聖人は皇帝を非難した。そこで皇帝は鉛の棒で打つよう命じたが、それでもなお聖人は信仰を揺るがすことはなかったため、拷問官の命令により、新たな拷問が加えられた。 まず鉄の鉤で全身の皮膚を引っ掻きむしり、次に樹脂と硫黄を溶かして傷口に注ぎかけたが、これでも彼には何の痛みも感じさせなかった。 その後、拷問官は彼の首に重い鉄の足枷をはめ、彼を牢獄に閉じ込めるよう命じた。しかし、主の天使が牢獄の扉を開き、彼を足枷から解放してこう言った。「私について来なさい。私はあなたをイタリアへ連れて行く。そこでも、あなたは多くの人々を救いに導くことになるだろう」。

その後、天使は聖エラスムスをリキアの町[3444] へと導き、そこで彼を残した。エラスムスは皆にキリストへの信仰を教え、洗礼を授けるようになった。その際、彼は偉大な奇跡を行い、とりわけアナスタシアという名の貴族の息子を復活させ、その後、一万人に洗礼を授けた。
マクシミアヌス[3445] はこれを知ると、兵士たちを派遣して彼をイタリアへ連行させ、聖人が連れて来られると、頬を打たせるよう命じ、異教の神々に犠牲を捧げなければ十字架に磔にすると脅した。するとエラスムスは彼にこう言った。

「あなたの神々はどこにおられるのか。そうすれば、私は彼らに犠牲を捧げることができるのだが。」

聖人はユピテル神殿に連行された。そこで彼は祈りを捧げると、その祈りによってすべての偶像が倒れ、神殿から炎が噴き出して偶像崇拝者たちを焼き尽くしたため、マクシミアヌスは街から逃げ出さざるを得なくなった。 その後、聖エラスムスはこの地で多くの人々を洗礼し、シルミウムの町へと向かった[3446] 。この町で、マクシミアヌスの命令により、彼は再び捕らえられ、新たな拷問にさらされた。彼には銅の鎧を着せられ、灼熱の床に座らされ、足は釘で地面に打ち付けられた。 その後、寝台を頂上まで薪で囲み、火をつけた上で樹脂と油を注ぎかけたが、薪は燃え尽きたものの、聖人は無傷のままであった。 マクシミアヌスは民衆を恐れ、宮殿へと退いた。一方、主の天使は聖人を連れ出し、フォルミアという町へと導いた。そこで、さらに多くの人々が洗礼を受けた。これらすべての出来事を経て、聖エラスムスは、すべてに対する感謝の祈りを捧げながら、その魂を神の御手に委ねた[3447] 。そして、キリスト教徒たちは彼を尊厳をもって葬った。

5月18日

5日（旧暦）

聖大殉教者イリーナの殉教

記念日 5月5日

[3443] シリアの古都アンティオキアは、オロンテス川の河口付近、地中海に注ぐ地点の近くにあった。
[3444] リキアの都市の位置については諸説ある。ニコディムによれば、それは同名の湖のほとりに位置するマケドニアの都市リクニドであった。
[3445] アウグストゥスの称号を冠したマクシミアヌス・ヘルクルスは、ディオクレティアヌスの共同統治者であり、285年から305年までローマ帝国の西部を統治した。
[3446] シルミウムの都市は、イリュリアのドナウ川の支流であるサヴァ川のほとりに位置していた。
[3447] この聖なる殉教者は、303年7月10日に逝去した。聖教皇グレゴリウス（590–604年）の時代、その聖遺骨はフォルミアに安置されていたが、9世紀にカイストゥへ移された。

当時、使徒たちの宣教のおかげで、キリスト教の聖なる信仰の光が、偶像崇拝の闇に沈んでいた人々の間に輝き始めた頃、マゲドンの町[3448] には、リキニウスという名の領主[3449] が住んでいた。彼には、彼と同じくリキニアという名の妻がいた。二人に生まれた娘には、ペネロペという名が付けられた。 彼女が成長し、6歳になった頃、その顔立ちは並外れて美しく、その容姿は同年代の少女たちすべてを凌駕していた。父親は、街から遠く離れた の風光明媚な場所に、彼女のために塔を建てた。その塔には多くの部屋があり、最も洗練された趣味で装飾され、富の輝きに満ちていた。 椅子、テーブル、照明器具、寝台、そしてすべての器物は、純金で縁取られていた。父はこの塔に、娘のペネロペと13人の美しい乙女たちを住まわせ、娘を守るために金でできた偶像をそこに安置した。そして、娘が結婚適齢期に達するまで、この塔で暮らすよう命じた。 リキニウスは、娘の教育係としてカリアという名の誠実な老婦人を付け、常に娘のそばにいて共に食事をとるよう命じ、すべての乙女たちの監督を彼女に任せた。 さらにリキニウスは、アペリアヌスという名の高潔で賢明な老人に、毎日娘のもとを訪れ、書物から得られる知恵を教えるよう命じた。こうして少女は6年3ヶ月を過ごし、12歳になったとき、父は最も名高い諸侯の息子たちのうち、誰に彼女を嫁がせるべきか考え始めた[3450] 。

ある日、少女が自分の部屋に座っていると、東向きの開いた窓から、くちばしに小さな小枝をくわえた鳩が飛び込んできた。鳩はそれを机の上に置くと、すぐに窓から部屋を飛び去った。 それから一時間後、様々な花で編まれた花冠をくわえた鷲が部屋に飛び込んできた。鷲もまた、花冠を机の上に置くと、すぐに飛び去った。その後、別の窓から、くちばしに小さな蛇をくわえたカラスが飛び込んできた。カラスは蛇を机の上に置くと、自分もまた飛び去った。

この一連の出来事を目の当たりにした少女は、乳母と共に大いに驚き、この鳥たちの飛来が何を予兆しているのかと首をかしげた。教師のアペリアンが彼女たちのところへやって来ると、二人は起こった出来事を彼に話した。 アペリアンは秘密のキリスト教徒であり、先見の明に恵まれていた。彼女たちから伝えられたことをすべて心の中で熟考した後、彼はペネロペに向かってこう言った。

「わが娘よ、知っておきなさい。鳩は、あなたの善良な気性、柔和さ、謙虚さ、そして乙女としての貞節を象徴しているのだ。 オリーブの枝は、洗礼を通じてあなたに授けられる神の恵みを象徴している。高く舞い上がる鷲は、王であり勝利者を表しており、あなたが自らの情欲を制し、神への思いによって高みへと昇り、鷲が鳥たちを打ち負かすように、目に見えない敵に打ち勝つことを示している。 また、花で編まれた冠は、天の御国において、キリスト王からあなたの功績に対する報いとして授けられるしるしであり、そこでは朽ちることのない永遠の栄光の冠があなたのために用意されています。蛇を伴ったカラスは、あなたに苦しみ、悲しみ、迫害をもたらそうとする敵である悪魔を象徴しています。 少女よ、天と地をその御手の中に抱く偉大なる王が、あなたを御自身の花嫁として迎え入れようとしておられることを知れ。そして、あなたは御名のゆえに多くの苦難に耐えることになるだろう。

師の言葉を聞きながら、乙女はその言葉を心に刻み込み、その心には少しずつ神の愛の炎が灯り始めた。

[3448] マゲドン、あるいはミグドニアは、エーゲ海北岸に位置するフラキア地方の都市である。

[3449] ここで言及されているリキニウス公は、ローマ帝国の東半分を統治したローマ皇帝リキニウス（在位311～324年）とは区別すべきである。後者はコンスタンティヌス大帝の妹コンスタンティアを妻にしていたが、このリキニウス公はリキニアを妻にしていた。 前者は栄光ある都市ニコメディアに、後者はマゲドンに居住していた。前者は不義のうちに没したが、後者はキリストを信じる者として誠実にこの世を去った。最後に、前者は4世紀初頭に、後者は1世紀末、ほぼ使徒たちの時代に生きていた。

[3450] 古代の東方では、少女たちは非常に若い年齢で嫁がされていた（これは、かつてのロシアでも慣習となっていた）。

翌日、ペネロペのいる塔に、彼女の父であるリキニウス公爵が、公爵夫人と廷臣たちを伴って入ってきた。彼は彼女に会って、結婚について話し合おうとしていた。彼女の顔が太陽の光のように美しさで輝いているのを見て、彼は大いに喜び、彼女にこう言った。

「ほら、愛しい我が子よ、君はもう結婚適齢期に達した。さあ、教えてくれ。どの公爵の息子が、他の誰よりも気に入っているのか？　その若者に、私は君を嫁がせるつもりだ。」

そして、彼は周辺の多くの公爵たちの息子の名前を彼女に挙げた。ペネロペは父にこう答えた。

「父上！どうか七日間だけ、考える時間をください。それからお答えいたします。」

彼女の願いを聞き入れ、父は彼女を残して自分の家へと帰った。

リキニウスが去ると、ペネロペは偶像に近づき、こう言った。

「もしあなたがたが神であるなら、私の声を聞いてください。父は私を嫁がせようとしていますが、私は処女のままでいたいのです。なぜなら、世俗の心配事は、心を尽くして神に仕えることを妨げるからです。教えてください。私は結婚すべきでしょうか、それともすべきではないのでしょうか？」

声なき偶像たちは、魂を持たないため沈黙していた。ペネロペは彼らに唾を吐きかけ、東の方角に向き直り、天の高みを見上げながら言った。

「もしあなたが真の神――キリスト教徒たちが説くそのお方であるなら、お願いです。教えてください。私は夫を迎えるべきでしょうか、それともずっと処女のままでいるべきでしょうか？」

すでに夕方になっていたため、ペネロペはうたた寝をしてしまった。　夢の中で、彼女は神の天使を見、天使は彼女に次のように告げた。「ペネロペよ！　これからは、あなたはペネロペではなく、イリーナと呼ばれることになる。なぜなら、あなたは　多くの人々にとっての避難所となり、安らぎの港となるからである[3451]。そして、あなたを通して、何千もの人間の魂が神に立ち返り、救われるだろう。　あなたの名は、全宇宙において偉大かつ驚くべきものとなる。長老アペリアンが、あなたが見た鳥について語ったことは真実である。それは、神の御霊が彼の口を通して語られたからである。　今夜、ティモテイという名の神の人があなたのところに来るでしょう。彼はキリスト教の教えに精通し、聖パウロから司祭の聖職を授かった者です。この人は、教会々を巡り、パウロの手紙を伝えています。彼はあなたに聖なる洗礼を授け、あなたが何をすべきかを告げてくれるでしょう」。

この言葉を残して、天使は姿を消した。ペネロペは我に返ると、喜びを感じ、長老の到来を心待ちにした。

まもなく、確かに、神の御使いに導かれ、柱の上に上げられた神の僕ティモテオがその柱のところにやって来た。少女に喜びをもって迎えられた彼は、座って、彼女や彼女の教育係、そして彼女の友人たち全員にキリスト教の教えを説き始めた。そして、彼の言葉は皆にとって心地よいものだった。　信仰について十分に教え、真の神であるイエス・キリスト、キリストへの聖なる信仰、そしてキリスト教の秘跡について知るべきことをすべて明らかにした後、彼はペネロペを父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けた。　洗礼の際、ティモシーは彼女に「イリーナ」という新しい名を授け、こうして彼女をキリストに捧げ、生涯を通じて貞潔を保つよう彼女に遺言した。ティモシーはまた、彼女の養育者カリアと、すべての侍女たちにも洗礼を授けた。　その後、彼はイリーナに対し、私たちの主イエス・キリスト、すなわち真の神であり、不死の彼女の花婿である御名の告白のために彼女が受けなければならない殉教の業において、勇敢であるよう諭し始めた。続いてティモテイはイリーナとその同年代の少女たちを祝福し、彼女たち全員を神の恵みに委ねて、別れを告げた。

[3451]「イリーナ」という名前は、ギリシャ語の「ειρήνη（eirini）」――平和、幸福――に由来する。

一方、福者イリーナは侍女たちと共に昼夜を問わず神を賛美し、感謝を捧げ、聖ティモフェイが彼女に残した使徒の書簡を熱心に学んだ[3452] 。その後、彼女は父が設置した金の偶像を一つずつ手に取り、窓から下に投げ落とし、「もしあなたがたが神であるなら、自分たちで救われなさい」と言った。

高いところから地面に落下した偶像たちは粉々に砕け散り、塵と化したが、聖女はその無力さを嘲り、真の神である我らの主イエス・キリストを喜び称えた。

七日が過ぎると、イリーナの父と母は貴族たちと共に彼女のいる柱へと登り、結婚について語りかけた。彼女は彼らにこう答えた。

「私がキリストのしもべであることを知ってください。私は、永遠の天の王であるキリストを信じ、愛しています。私は、この清く、天に属し、不死の花婿に身を捧げました。他の花婿は望みませんし、他の神には拝しません。なぜなら、キリスト以外に神はいないからです。」 「あなた方は、窓から地面に落ちて滅びたあなた方の神々の姿を見なかったのですか？」とイリーナは続けた。「彼らは自分たちを救うことさえできなかったのです。それなのに、どうして彼らがあなた方の助け手になり得ましょうか？ 彼らへの期待は無駄であり、偶像へのあらゆる労力や出費はすべて虚しいのです。 金や銀は、物乞いや貧者、孤児、未亡人たちに配るべきだったのです。しかし、あなたたちは職人を呼び寄せ、魂のない偶像を作り上げ、それによって貧者たちから施しを奪いました。そのせいで、あなたたちは生ける神の敵となり、悪魔の僕となってしまったのです。いつまで、調教されていない馬のように暴れ続けるつもりなのですか？ いつになったら、あなたがたは生ける神、すなわち、死なせたり生かしたりすることのできるお方を知るようになるのか。いつになったら、神の光があなたがたの心に輝き出すのか。その時、人を光から闇へと、滅びへと引きずり込み、正しい道から誤った道へと人々をそらそうとする悪魔は、あなたがたから逃げ去るだろう。 しかし、あなたがたはまず、今すぐ悪魔から逃げ出そうと努めなさい。なぜなら、悪魔は邪悪で獰猛だからです。悪魔は、あなたがたが真理を知ることができないように、あなたがたの心の目を覆い隠す誘惑者なのです。父よ、お願いです、懇願します。御言葉によって万物を創造された真の神を知ってください。あなたが私のためにこの柱を建てようと決心されたとき、そのために多くの人々を集められました。労働者だけで三千五百人、監督者が三百人いました。それにもかかわらず、彼らは十ヶ月でかろうじて建物を完成させることができました。 しかし、永遠なる神は、ただ一つの御言葉によって、天と太陽、月と星々、光と闇を創造し、光を「昼」と、闇を「夜」と名付けられました。 神は地を空中に支え、私たちのために水が流れるよう命じ、様々な木々を育て、季節や年、月を定め、地上の獣、空の鳥、水中の魚を創造された。 最後に、御自身の清らかな御手をもって、土をひと握り取り、人を創造し、彼を全宇宙の支配者として立て、すべてのものを彼に従わせた。 そして、これらすべてを、神は六日間で、御自身の「 」という御言葉によって成し遂げられた。この御言葉こそ、神の独り子イエス・キリストであり、母を介さず神から生まれ、神と同質であり、神と同座に坐するお方である。御子は、聖霊の働きにより、父なしに、至聖なる永遠の処女マリアから生まれ、受肉し、人々と共に暮らし、数え切れないほどの奇跡を行われました。盲人の目を開き、らい病人を清め、死者をよみがえらせ、麻痺者を立ち上がらせたのです。 ユダヤ人たちは嫉妬から、私たちの救いのために苦難を受けるという御自身の御意志に従って、御方を十字架につけました。 しかし、主はご自身の死と埋葬の後、三日目に神性の力によって復活され、天に昇り、父なる神の右の座に着き、弟子たちに聖霊を降臨させ、彼らを全世界に遣わされました。それは、彼らが霊的に暗闇に包まれた者たちを啓発し、迷える者たちを回心させ、滅びゆく者たちを救うためです。 なぜなら、主はすべての人に救いを望んでおられ、人類に対する主の慈しみは、永遠に尽きることはないからです。

[3452] 使徒テモテは、キリスト教徒の間で聖使徒パウロの手紙、特に彼宛てに書かれた（2通の）手紙を精力的に広めました。

聖女はそう語り、その言葉は皆の耳に甘美に響いた。公爵と公爵夫人は愛しい娘を連れ、彼女を連れて街へと向かった。　彼女を出迎えるように、町のすべての乙女たちが頭に花冠を戴いて現れ、彼女に頭を下げた。そして、民衆は高台や塀の上、家の屋根などに集まり、美しい乙女に向かって喜びの叫びと賛美の声を上げた。彼らが公爵の宮殿に近づいたとき、聖イリーナはある悪魔を見かけ、その悪魔が彼女に向かってこう叫んだ。

「この町において、私と君には何の共通点もない、乙女よ。私たちの町から立ち去れ。ここにはキリスト教徒など誰も住んでいないのだから。」

すると聖女は彼にこう言った。

「主イエス・キリストの御名によって、あなたが誰なのかを私に告げよ。」

すると、悪魔はこう答えた。

「私は偶像の中に住む悪魔であり、淫行者や姦通者の師であり、魔術師たちの手先であり、敵の首領であり、酔っ払いの友である。私は流血を喜び、あらゆる不正と嘘、そしてあらゆる悪の父である。」　もう一度言う。さあ、この町から出て行け。さもないと、お前の父をそそのかし、お前に向けてその怒りを煽り立て、お前の父がお前を殺すことになる。

多くの人がこの悪魔の声を聞いたが、その姿を見る者はいなかった。しかし、聖イリーナは振り返って、彼にこう言った。

「主イエス・キリストの御名によって、この町から出て行けと命じる。」

すると、悪魔はたちまち震え上がり、姿を消した。その後、悪魔は公爵の心に侵入し、娘に対する怒りを煽り立てた。リキニウスは公爵夫人を呼び寄せ、こう言った。

「どうすればよいのか？　わが娘はキリスト教徒たちの罠にかかってしまった。ああ、なぜ私はこの柱を建ててしまったのか！　我が子を救おうとしたのに、かえって破滅させてしまった。今や、私の希望はすべて失われてしまった。」

公妃は彼にこう答えた。

「なんて奇妙なことをおっしゃるのですか！　わが娘は一体何に惑わされたというのですか？彼女は一体どんな悪いことをしたのですか？」

公爵は答えた。

「彼女はキリストを信じ、我々の神々を否定しているのだ。」

「それなら、天と地を創造しなかった神々は滅びてしまえ」と公妃は反論した。「私の娘は、彼女を永遠の命へと招いてくださったキリスト王の栄光に与かることを願う！」

怒りに駆られた公は、公妃を宮殿から追い出すよう命じた。侍女の一人がこの知らせをイリーナに伝え、彼女は父のもとへ向かった。王は最愛の娘の姿を見ると、うつむいた。しかし、悪魔の唆しにより、彼の心の中では怒りが渦巻いていた。聖イリーナは父にこう言った。

「なぜそんなに悲しんでいるのですか、父上？　あなたの王国は平和で、戦争の脅威もありません。ここに、あなたの娘である私が会いに来ました。それなのに、なぜあなたの顔はそんなに悲しげなのですか？」

リキニウスは彼女にこう答えた。

「お前を産まなければよかった。私はどれほど心を込めてお前を育て、お前のために美しい柱を建て、お前を守るためにその中に金の偶像を安置し、お前のために柱や寝台を金で飾ったというのに、お前は私の善意に悪で報いたのだ。」

「父よ、私があなたにどんな悪事を働いたのか、説明してください」と聖イリナは彼に言った。

「わが娘がキリストを神と認め、私の神々を否定すること――それこそが、私にとってこの上ない悲しみではないか？」

聖女はこう答えた。

「父よ！　私は真の神を信じ、あなたの偶像ではなく神に希望を置いただけで、何も悪いことはしていません。」

「神々に生贄を捧げよ、ペネロペ！」と、公爵の威嚇するような叫び声が響いた。

「私の名前を間違えないでください、父上。私はペネロペではなく、イリーナと申します。この名は、幻視の中で天使から、そして洗礼の際に司祭から授かったものです」と、聖イリーナはリキニウスに穏やかに答えた。

「神々に生贄を捧げよ、私の子ではなく、他人の子よ！」――リキニウスは再び叫んだ。

「彼らに犠牲を捧げるつもりはない。彼らこそがあなたを怒りに駆り立てているのだ。彼らのせいで、あなたは異教徒たちと共に火の中で苦しむことになるだろう。」

怒りに我を忘れた公は、乙女を縛り上げ、凶暴な馬の蹄の下に投げ込むよう命じた。リキニウスの命令が実行され始めた時、彼は自らその死を目撃しようと現場に駆けつけた。　しかし、最も獰猛な一頭の馬が、繋ぎから抜け出し、リキニウスに飛びかかり、彼の右手を掴んで肩から引きちぎり、公を踏み殺した後、静かに元の場所に戻った。　他のすべての馬は子羊のようにおとなしく振る舞い、聖イリーナには手も触れなかった。一方、リキニウスを殺した馬は、神の御心により人間の声で叫び、聖なる殉教者をこう慰めた。

「幸いなことよ、キリストの鳩よ、蛇を踏み砕いた者よ[3453]　。あなたは地上で栄え、天では愛をもって迎え入れられるであろう。　あなたは義人たちの間で喜び歌うであろう。賢く勇敢な乙女として、永遠の光と不死の花婿の宮殿があなたを待っている。生まれながらの女性でありながら、あなたは戦士のような勇気を示したのだ。

聖イリナから束縛が解かれたとき、彼女は祈りによって亡き父をよみがえらせ、その手を癒やした。この奇跡を目撃し、公爵夫妻と彼らの家臣一同、そして多くの民衆――計約三千人――がキリストを信じるようになった。

リキニウスはまもなく、キリストに自由に仕えるために公国の統治を離れ、妻や側近たちと共に、かつて娘のために建てたあの塔に住み着いた。一方、聖イリーナは町に残り、人々にキリストへの信仰を教え、多くの人々を神であるキリストのもとへと導いた。彼女は師であるアペリアンの家に住んでいた。

リキニウスの後、セデキアという名の別の王が国政を引き継いだ。イリーナのことを耳にした彼は、アペリアンを呼びつけ、王女イリーナがその元にいるかどうかを尋ねた。アペリアンは肯定して答えた。セデキアは彼にこう尋ねた。

「彼女がどのように暮らしているか、知っているか？」

老人はこう答えた。

「彼女は、私や、真の神を信じるすべての人々と同じように暮らしています。」　彼女の生活は、毎日夕方まで断食し、夕方には小さなパン一片を食べ、水を一杯飲むというもので、寝床もなく、むき出しの地面の上で少しの間だけ休む。昼も夜も、彼女は神への祈りに明け暮れ、聖典の読誦に励んでいる。

これを聞いて公爵は驚き、イリーナを連れてくるようエパルヒの[3454]　を遣わし、その娘を丁重に自分の元へ連れてくるよう命じた。公爵の元へ来た聖イリーナはこう言った。

「公爵よ、おめでとうございます！」

セデキアは彼女にこう答えた。

「あなたも喜びなさい、素晴らしい乙女よ！」

[3453] すなわち、人類の救いの敵である悪魔のことです。

[3454] エパルフとは、都市や地域の長のことである。

「なぜ私をお呼びになったのですか？」とイリーナは尋ねた。

「座って、平和に、愛を込めて語り合いましょう」と、王は答えた。

聖なる乙女は言った。

「私は聖書の言葉に従っています。*『私は偽り者たちとは共に座らず、律法を破る者たちとは共に歩まない』*（詩篇25:4）とありますから。」

「我々は一体、どのような罪を犯したというのですか？」とセデキヤは尋ねた。

聖なる乙女はこう答えた。

「真の神を知らず、偶像を崇拝する異教徒は、すべて罪人です。」

「お前は、私の意に反して、王女であるお前を容赦なく苦しめるよう、私に強いているのだ」とセデキアは反論した。

「なぜ無駄に会話に時間を費やすのですか」と、聖イリナは勇敢に答えた。「さあ、私を拷問し始めなさい。私は、私のキリストのために、いかなる苦しみにも耐える覚悟があります。」

「その狂気を捨てよ、乙女よ。神々に生贄を捧げなさい。」

聖女はこれに対し、こう答えた。

「サタンに惑わされた王よ、あなたが心配するのは無駄です。私は悪魔に仕えることはなく、私の主キリストのために、この肉体を惜しむこともありません。」

怒りに満ちた王子は、聖女にどのような刑罰を下すべきか、司教と相談し始めた。拷問官の命令により、深い堀が掘られ、そこに蛇や這うもの、あらゆる毒蛇が放たれ、聖なる乙女がそこに投げ込まれた。　しかし、彼女は十日間、そこで健在で無傷のままでいた。主の御使いが堀に降りてきて、彼女を無傷のまま守ってくれたからである。一方、そこにいたあらゆる爬虫類は皆、死んでしまった。

ゼデキヤは、殉教者が堀の中で生き残っていることを知ると、驚き、彼女が魔法の力で爬虫類たちを魅了し、殺したのだと考えた。彼は彼女を堀から引き上げ、尋問のために自分の元へ連れてくるよう命じた。裁判の席に着くと、彼は彼女にこう言った。

「お前を容赦してくれた神々に犠牲を捧げよ。神々は蛇たちを死なせ、お前を生き延びさせたのだ。それは、お前が神々の力と慈悲を知り、神々にひれ伏すためである。」

聖女はこれに対し、こう答えた。

「私が軽蔑するサタンに惑わされた狂人よ！　この木や石の偶像が、かつて蛇を殺したことがあるというのか？　お前自身もまもなく、仕えている神々と共に地獄の深淵に投げ込まれ、サタンがお前に用意した*「漆黒の闇」*に沈むことになるだろう。「*そこでは泣き叫び、歯ぎしりする*」（マタイ25:30）。

公爵は怒りに駆られ、鉄ののこぎりを携えた大工たちを呼び寄せ、聖なる乙女をのこぎりで切り裂くよう命じた。聖女が木に縛り付けられ、のこぎりを入れ始めたが、のこぎりは乙女の体に触れることなく、まるで鋭い石に当たり鈍ったかのように切れ味が落ち、ついには真ん中で折れてしまった。　別ののこぎりが持ち込まれたが、これも折れてしまい、のこぎりを引いていた者たちは倒れ、のこぎりの破片で自らを傷つけ、死んでしまった。　ついに、三つ目となる、最も鋭く頑丈な鋸が持ち込まれ、セデキヤは乙女の腰のあたりから鋸で切るよう命じた。彼女を縛り、地面に寝かせ、その胸を大きな石で押さえつけ、大殉教者の聖なる体を鋸で切り始めた。今度は鋸が体に触れ、そこから血が流れ出した。

するとセデキヤは笑いながら殉教者に言った。

「お前の神はどこにいる？　もし神に力があるのなら、今すぐ来てお前を助けてみろ。」

セデキヤのその言葉を聞いた途端、突然稲妻が走り、恐ろしい雷鳴が轟き、空には旋風が巻き起こった。聖なる殉教者の体を苦しめていた家来たちは、意識を失った。公爵は恐怖に駆られて自分の宮殿へ逃げ込み、民衆は広場からそれぞれの家へと散り散りになった。　まるで川のように激しい

雨が降り注ぎ、大きな雹も混じり、拷問者たちの多くは、稲妻や雷、雹によって打ち倒され、死んでしまった。そして、主の天使が天から降りてきて、聖なる殉教者の胸から石を取り除き、その傷を癒やし、彼女を健やかな姿で立ち上がらせた。

八千人の人々がこの奇跡を目撃し、キリストを信じた。しかし、悪魔にそそのかされた公爵は、再び聖女を捕らえるよう命じ、彼女をどのように滅ぼすべきかについて、再び司教と協議を始めた。拷問者たちは彼女に対して次のような刑罰を考案した。彼女を水車の車輪に縛り付け、その回転によって彼女を粉砕しようとしたのである。　しかし、水車を動かすために水を流すと、水はまるで石になったかのように止まり、一滴も流れず、聖女は無傷のままでした。すると、公爵は側近たちと共に叫びました。

「おお、なんと偉大なる魔法の力か。水の元素を別の物質へと変えたのだ。」

この奇跡を目撃した民衆は、不義な公爵に反旗を翻し、非難と憤りの大声とともに彼に石を投げつけ、街から追放した。公爵は故郷に戻ると、そこで七日間を過ごし、悲しみと怒りと恥辱のあまり息を引き取った。

セデキアの死後、その息子サヴァフは、父の恥を晴らそうと、約10万人の兵士を集め、マゲドンという町へ戦いを挑んだ。この町の住民たちは、サヴァフ王が近づいていることを知ると、恐怖のあまり町に閉じこもり、聖イリーナにこう言った。

「あなたのせいで、私たちは滅びてしまう。」

しかし、彼女は彼らに敵を恐れるなと命じ、次のような言葉で神に祈り始めた。

「かつてあなたのしもべである預言者エリシャの祈りを聞き届けてくださったあなたよ、私の祈りも聞き届けてください。この町を滅ぼそうと迫る民を目に見えない形で打ち倒し、私たちの敵の目をくらませてください。そうして、彼らがあなたが唯一の真の神であることを悟らせてください。」

するとすぐに、主はその祈りを聞き入れ、首長と彼に従うすべての兵士たちを盲目にした。

サヴァフ将軍は、イリーナが自分と軍勢に盲目をもたらしたことを悟り、彼女に使者を送り、次のように頼んだ。

「今や、お前の神の力が無敵であることを知った。どうか、私と私の兵士たちのために、お前の神に祈ってほしい。私と彼らに視力を取り戻させてほしいのだ！」

聖女は憐れみ深く、万物の主に向かって熱心に祈りを捧げると、公爵と彼と共にいた者たちは皆、視力を取り戻した。その後、サヴァフは街へ使者を送り、市民たちに次のような平和的な言葉を伝えた。

「私の父を君主として迎えたように、私を君主として迎え入れてほしい。そうすれば、あなたがたが私の父に与えた不名誉を赦してやる。」

市民たちは、王の軍勢がいかに大いであるかを見て、彼と和平を結び、城門を開き、彼にひれ伏して、彼を自分たちの王として認めた。さて、サヴァフが王位につくと、悪魔の唆しにより、聖イリーナに怒りを抱き、彼女を呼びつけてこう言った。

「私はこの町の罪は許すが、お前には怒っている。お前は私の父に対して反乱を扇動し、そのせいで父は石打ちにされたからだ。しかし、もしお前も私から許しを得たいのなら、私の望みを叶えよ。神々に犠牲を捧げれば、自由にしてやる。」

聖女は公爵の狂気を非難し始めたが、それによって公爵の怒りをさらに募らせてしまった。

サヴァフは彼女を牢獄に投獄するよう命じ、貴族たちと相談して、彼女にどのような拷問を施すべきかを考え始めた。その間、聖女はすでに七日間も牢獄に閉じ込められていた。そこへキリストが現れ、彼女にこう言われた。

「恐れるな、わが娘よ。わたしがあなたと共にあり、あなたを強めるからである。」

サヴァフは、殉教者を牢獄から引きずり出すよう命じ、彼女の踵に鉄の釘を打ち込み、さらに、砂の入った重い袋を彼女の肩に担がせた後、街から五ポプリシュの距離にある場所[3455] まで彼女を追い立てるよう命じた。使用人たちは聖女の口に手綱をくわえさせ、馬を駆るように彼女を指定された場所へと追い立てた。 聖女は、このように辱められながらも、神に向かってこう語った。

「まことに、主よ、*『私はあなたの御前で家畜のようでした』。しかし、私はいつもあなたと共にいます。あなたは私の右の手を握ってくださいます。あなたは御自身の御計らいをもって私を導き、栄光のうちに迎え入れてくださいます」*（詩編72:22–24）。

右側を見やると、聖女は自分と共に歩む主の天使たちを見て、心から喜びに満たされた。拷問者たちが指定された場所に到着すると、使用人たちは聖なる殉教者を罵声を浴びせながら手綱を引いて連れ、街へと引き返していった。　大勢の民が彼らの後を追っていたが、聖女は目の前で、杖で地面を叩く天使を見て、心の中でこう思った。「神の敵たちは滅びるだろう」。

彼らが天使が立っていた場所にたどり着くと、地面が突然裂けて、聖女を連行していた迫害者の家来たちを飲み込んだ。　聖女は束縛から解かれたのを感じ、目に見えない手が彼女の肩から砂の入った袋を取り除き、足から釘が抜け落ち、彼女は足を癒やされ、神を賛美しながら歩いた。このことを知った公爵は言った。

「神々が大地を裂き、この魔女から私の家来たちを地下へと連れ去ったのだ。」

しかし、他の人々は彼に反論してこう言った。

「生ける神よ、聖なる殉教者イリーナと共に！」

一方、ある者たちは聖なる乙女を罵倒した。すると天使は大地を裂き、一万人に及ぶ多くの不信仰者を突然の死で打ち倒した。生き残った異教徒たちは叫んだ。

「イリーナの神よ、私たちを憐れんでください。私たちはあなたを信じ、あなたにすがります。」

この時、実に約三万人がキリストを信じるようになった。しかし、サヴァフ公は神を信じようとはせず、神の天使はそれゆえに彼を死で打ち倒した。

一方、聖イリーナは町の中でキリストの御名を宣べ伝え続け、キリストの力によって多くの奇跡を行なった。彼女は病人を癒やし、ハンセン病患者を清め、人々から悪霊を追い出すだけでなく、、両親に深く嘆き悲しまれていた亡くなった若者をよみがえらせ、一万人に及ぶ民をキリストへと導いた。

その頃、神の御心により、聖ティモフェイ司祭が町を訪れ、聖イリーナに洗礼を授けた。　聖イリナは喜びをもって彼を迎え、彼やキリストを信じた他の人々と共に、父と母が住み、静寂の中で神に仕えていた柱のそばへと向かい、そこでキリストを信じた者たちは皆、聖なる洗礼を受けた。

聖イリナはマゲドンの町で3年間を過ごし、人々に教えを説き、キリストの信仰を確固たるものにした。その後、彼女はカリポリ[3456] という別の町へ向かった。そこは、イリナを迫害した王セデキアとサヴァフの親族であるヌメリアン公が統治していた。

イリナが町に入ろうとした時、異教徒たちはそこで女神アルテミス[3457] を称える不敬な祭りを執り行っており、王は偶像の前で生贄を捧げていた。聖イリナは王の前に立ち、その不敬を糾弾し、キリストこそが真の神であると告白した。王は家臣たちにこう言った。

「この乙女は顔立ちも背丈も、父リキニウスに似ているが、悪しき子は親にとって不幸の種となるものだ。」　そう、この少女のせいで、彼女の善良な父は王位を失ったのだ。彼女こそ、私が聞

[3455] ポプリシュチェ――長さの単位。現在のサジェニ約690に相当した。

[3456] カリポリという都市は、マゲドンと同様に、フラキアに位置していた。

[3457] アルテミス、あるいはディアナ――ギリシャ・ローマ神話の光と月の女神であり、狩猟の守護神ともされていた。

いたところによれば、私の兄弟セデキヤの死の原因であり、またその息子サヴァハをも、彼女の魔術によって殺害した。まことに、この少女は王たちの破滅者である。

その後、ヌメリアンは聖イリネにこう言った。

「どうするつもりだ、魔女よ？　神々に生贄を捧げるのか、それともその破滅的な迷いを続けるのか？」

聖女は十字を切って答えた。

「私は至高の神に賛美の捧げ物を捧げますが、あなたの悪魔たちや魂なき偶像には捧げ物を捧げません。　さて、あなたの親族である諸侯たちについては、知っておきなさい。彼らに死を命じたのは私ではなく、一人ひとりの生と死を司る私の神である。あなたもまた、私の神を畏れなさい。あなたに残された命はわずかであり、まもなく死があなたをも襲うのだから。」

これを聞いたヌメリアンは激怒し、歯ぎしりをして、獅子のように唸り声を上げ、家来たちに三頭の銅の雄牛を溶かすよう命じた。聖女がひとりの雄牛の中で火の力を耐え抜けば、もうひとりの雄牛に投げ込まれる。もしもうひとりの雄牛でも同じことを成し遂げれば、三頭目の雄牛に投げ込まれる、と決めたのである。そして、その通りになった。　銅の雄牛が燃えさかる炭のように熱くなったとき、聖女はそれらのうちの1頭に投げ込まれた。そこで彼女は、次のような言葉で大声で祈り始めた。「主よ！ あなたの聖なる御名のゆえに苦しむ私に、速やかに助けをお与えください！」

すると、主の天使が彼女の前に現れた。天使は彼女に苦しみをおそれないよう諭し、炎を鎮めた。一方、民衆はヌメリアヌスに対して不平を漏らし、こう言った。

「若さあふれる乙女を、むやみに殺してしまったな。」

銅が冷めたとき、聖女は火による傷ひとつなく、健在で無事であることが判明し、公爵は周囲の人々にこう言った。

「この娘が魔女だと、私は警告していなかったか？　彼女が火を消した様子を見よ。彼女を別の炉に投げ込め。」

そして聖女は別の鋳型に投げ込まれた。しかし、その鋳型も奇跡的に冷め切ると、彼女は三つ目の鋳型に投げ込まれた。すると、全能にして全知の神の御命令により、その三つ目の鋳型はまるで生き物のようにその場から動き出し、競技場の四分の一を通り抜け、元の場所に戻ると崩れ落ち、聖なる殉教者は無傷でそこから出てきた。 民衆は、この奇跡を目撃して、大声で叫んだ。

「イリーナの神よ、あなたは偉大です！　あなたの偉大な憐れみによって、私たちを憐れんでください！　あなたは私たちの神、強き、力強い方、驚くべき、栄光に満ちた奇跡を行われる方です！」

そして、その時、十万人もの人々がキリストを信じるようになった。一方、ヌメリアン公は不信仰にとどまっただけでなく、至高の神を冒涜したため、目に見えない神の天使に打たれ、死に至る病に倒れた。　死の床で、彼は自分の管区長ヴァヴォダンに、イリーナを様々な拷問にかけ、その後、最も残酷な刑で処刑するよう命じた。

不敬虔なヌメリアン公が亡くなると、聖イリーナは町にとどまり、人々に主キリストへの信仰を教え続け、あらゆる病を癒やした。また、その頃そこにやって来たティモフェイ長老は、キリストを信じた者たちに洗礼を授けた。

エパルヒは、民衆全体が聖イリーナに同情しているのを見て、この町で彼女を拷問にかけることを恐れた。民衆の不満や反乱を招くことを危惧したからである。彼はコンスタンティナ[3458]と呼ばれる別の町へと向かい、殉教者を自分の兵士たちに連れて行かせた。その町に着くと、彼は裁判の場に座り、聖人にこう言った。

[3458] コンスタンティナは、カリポリからほど近いフラキアに位置していた。

「私がお前に対する権威を与えられていることを知っているか？　さあ、我らの神々に近づき、彼らに犠牲を捧げよ。さもなければ、私はお前を激しい拷問にかける。」

聖女は彼にこう答えた。

「聞いてください、総督よ。私の答えはこうです。あなたが思いつく限りのあらゆる拷問を私に施してみてください。そうすれば、神の御力を目の当たりにすることになるでしょう。」

総督は鉄の格子を持ってくるよう命じ、殉教者をその格子の上に載せ、鉄の鎖で格子に縛り付けるよう命じた。そして、格子の下に薪を敷き、火をつけるよう命じた。　激しい炎が燃え上がり、そこで総督の命令により、殉教者の上に油、獣脂、そして樹脂が注がれた。こうして聖女は数時間にわたり拷問を受け、鉄格子と鉄の鎖は真っ赤に焼けた。　しかし、聖女は無傷のままであり、あたかも冷たい露に濡らされているかのように、神を賛美し、讃美の歌を歌い続けた。やがて鉄の鎖は彼女から外れ、彼女は健やかで全く無傷のまま立ち上がった。

これを見た司教とその顧問たちは、大いに驚いた。聖女の足元にひれ伏し、司教は彼女にこう言った。

「まことの神のしもべよ！　お願いだ、あなたが我らの君主たちを滅ぼしたように、私を滅ぼさないでほしい。私もまた、神の御子を信じ、キリスト教徒になりたいのだ。」

こうして、ヴァヴォダン司教はキリストを信じ、彼と共に多くの民も信仰を抱いた。神の天使がこの町にティモテオ長老を導き、キリストを信じた者たちは皆、彼から洗礼を受けた。

この町に五十日間滞在した後、聖イリナはそこを去ったが、フラキアの町メセムヴリアに住んでいたサヴォリウス公の兵士たちに捕らえられた。この公は彼女のことを耳にしており、かねてから彼女を捕らえたいと望んでいたため、彼女は公のもとに連行された。　聖女を見た彼は激怒し、剣で彼女を処刑し、彼女は町の外に埋葬された。その後、サヴォリウスは人々の前でこう言った。

「この魔女については恐ろしい噂が広まっていた。彼女は魔術を用いて諸侯を殺していたからだ。それなのに、なぜ今、彼女は私を殺すことができなかったのか。むしろ私が彼女を殺したのだ。彼女の助け手であるキリストはどこにいるのか。なぜ彼は彼女を私の手から救わなかったのか？」

こうして、不信仰な王はキリストの力を冒涜し、イリーナの征服者として自らを誇った。

しかし、全能の神の力にとって不可能なことなどあるだろうか。自らの自発的な死の際、*「多くの聖徒たちの遺体」*を復活させ、彼らが*「復活の際、墓から出て聖なる都に入り、多くの人々の前に現れた」*（マタイ27:52–53）方である。その方が、この聖女をも死からよみがえらせ、メセムブリアに入り、公爵の前に現れるようにすることはできなかっただろうか？　まことに、天と地において、私たちの神キリストは力強く、御心のままにすべてをなされる。主は御自身の天使を遣わし、聖イリナを墓から生きたままよみがえらせられた。その時、主の天使は彼女にこう言った。

– あなたはすでに苦難の業を成し遂げ、安息するにふさわしい。あなたは天の至福に値する者だからである。　しかし、不義で不法な者たちが再び高ぶって、『我々は我らの神の力を打ち負かした』と自慢することを防ぐため、町へ行き、人々にあなたが生きているのを見させ、すべての不義な者たちが、我らの神が全能であることを知って恥じ入るようにしなさい。これからは、あなたはもはや誰からもいかなる苦しみも受けることはない。」

そして聖女は、手にオリーブの枝を握りしめて、メセムブリオの町に入った。市民たちは彼女を見るや、心に大きな恐怖を抱き、大いに驚いた。民衆全員が、大声で叫びながら聖女を取り囲んだ。

「イリーナの神は驚くべき方であり、神はただお一人しかおられない。」

その町の領主には、イリーナが死からよみがえったと報告された。これを聞いた彼は大いに恐れ、聖女を見ると、その足元にひれ伏してこう言った。

「今、私はあなたの神が偉大であることを悟りました。どうか私たちの街に留まり、私たちをキリスト教徒にしてください。」

聖女は七十日間彼らと共に過ごし、聖なる信仰を教え、その町の住民全員がキリストを信じるようになった。また、神の御命によりその地を訪れた祝福された長老ティモフェイは、公爵と他のすべての人々に洗礼を授けた。

そこから聖イリナは故郷のマゲドンへと向かったが、その頃、彼女の父はすでに亡くなっていた。彼女は父の死を悼み、神に父のために祈りを捧げた。　彼女はしばらくの間、母と共に過ごしたが、その後、雲に乗ってエフェソスへ運ばれ、そこに安置された[3459]。そして彼女はこの街を歩き回り、使徒のようにキリストの御名を宣べ伝え、ここで多くの奇跡を行い、様々な病を癒した。　聖イリナはその説教によって、多くの異教徒を偶像崇拝からキリストの信仰へと改宗させた。

しばらくして、かつて聖イリナの師であった長老アペリアンが、神の御使いとしてエフェソスの聖イリナのもとを訪れた。聖女は彼を見て、大いに喜んだ。数日後、彼女は民衆にこう語った。

「喜びなさい、私の兄弟たちよ！主イエス・キリストの平安があなたがたと共にありますように。私たちの主を喜び、心を和らげ、信仰にしっかりと立ち続けなさい。私は今、あなたがたのもとを去りますが、旅人である私を受け入れてくださったことに感謝します。旅人を受け入れる者は皆、天の神の友となることを知ってください。」

市民たちは彼女の言葉を聞き、互いに尋ね合った。

「私たちの先生はどこへ行くのだろう？」

また、ある人々は言った。

「彼女は死にたいのか？」

また、ある人々はこう語った。

「彼女は神にふさわしい方だ。私たちが罪深いゆえに、彼女は私たちの目の前から連れ去られるのだ。」

翌日、聖イリナは長老アペリアヌスと六人の敬虔な男たちを連れて城の外へ行き、岩の断崖に、これまで誰も葬られたことのない新しい空の棺を見つけると、その棺の中に入り、アペリアヌスや他の男たちにこう言った。

「四日目が来るまで、誰も私を開けられないよう、上から石でしっかりと覆ってください。」

それから彼女は、アペリアンと彼と共にいた男たちに最後の別れを告げた。その後、十字を切って横になった。男たちは棺の上に重い石を載せ、町へと戻った。

四日目に、アペリアヌスは同じ男たちと共に棺のもとへ来たが、そこに聖イリーナの遺体が見当たらないのを見て、心の中で「キリスト・神が彼女を天国へ召されたのだ」と考えた。彼はこれを告げるために町へ向かった。多くの人々が棺の周りに集まり、棺が空であることを見て驚き、畏敬の念を抱きながら神を賛美した。

こうして、聖処女イリナの苦難は終わりを告げた。これこそが、キリストの花嫁であるこの処女の偉業であった。彼女は、まず父リキニウス、次にセデキアとその息子サヴァフ、続いてヌメリアヌス、ヴァヴォダン総督、そして最後にサヴォリウスの前で、キリストへの信仰を告白した。　彼女が殉教した都市は、次の通りである。マゲドン――彼女の故郷、カリポリス（あるいはカリニク）、コンスタンティナ、そしてフラキアのメセムヴリア。彼女は5月5日、エフェソスで主のもとへ召された[3460]。

キリストの御前に進み出た彼女は、全宇宙のために主を懇願している。彼女の功績と受難に関する伝承は、父と子と聖霊、三位一体において賛美される唯一の神の栄光のために、長老アペリアン

[3459] エフェソスは、古代において小アジアのコレス山とピオン山の麓に位置する非常に大きな都市であり、広大な港（現在は完全に泥で埋まっている）を有していたため、盛んな貿易が行われていた。　キリスト教会の歴史において、エフェソスは聖使徒パウロの説教の地として、また第3回全地公会議（431年）の開催地として著名である。

[3460] 聖大殉教者イリナの死は、1世紀末か2世紀初頭に起こった。

によって記された。その神には、今、そして常に、そして世々限りなく、あらゆる被造物からの栄光と礼拝がふさわしい。 アーメン。

トロパリオ、第4調:

イエスよ、あなたの小羊イリーナは、大いなる声でこう呼びかけます: 「わが花婿よ、私はあなたを愛しています。あなたを求め、苦しみ、十字架に架けられ、あなたの洗礼に埋もれ、あなたのために苦しみます。それは、 であなたと共に王となるためであり、あなたのために死ぬのは、あなたと共に生きるためです。どうか、愛をもってあなたに身を捧げるこの私を、汚れなきいけにえとして受け入れてください。 その祈りによって、憐れみ深い御方よ、我らの魂を救いたまえ。

コンダク、第4調:

処女の美徳に満ちた乙女よ、苦難によって最も美しいイリーナとなられた方よ、流れ出た御血によって染められ、その美しさをもって不敬虔を打ち砕かれた方よ。このゆえに、あなたは御創造主の手によって、勝利の栄誉を受けられたのです。

5月19日

5月6日（旧暦）

聖なる義人にして多き苦難を耐え忍んだヨブの生涯

記念日5月6日

聖なる義人ヨブは、その出生においてアブラハムの部族に属していた。彼はアラビアに住んでおり、その居住地はフスの地[3461] であった。そこには、アブラハムの兄弟ナホルの長子であるアブラハムの甥ウツの子孫たちが住んでいた（創世記22:20–21）。 ヨブは真実の人であった（ヨブ記6:24–30; ヨブ記27:2–4参照）であり、非の打ち所のない行い、すべての人に対する公正さと慈愛、そして慈善活動で際立っていた。とりわけ、神を畏れ、心の清さを保ち、自分の行いだけでなく内なる思いにおいてもあらゆる悪から遠ざかっていた。 彼には七人の息子と三人の娘がいた。彼はその国で富でも知られており、七千頭の羊、三千頭のラクダ、五百組の牛、五百頭の雌ロバ、そして多くの使用人を所有していた。 彼は同族の生活に生き生きと積極的に関わり、社会的事柄に大きな影響力を及ぼしていた。というのも、彼の気高さと誠実さゆえに、東方全域で彼は大いに尊敬されていたからである（ヨブ記30:5–10; 参照 ヨブ記30:1–3）。 ヨブの息子たちは、それぞれが自分の天幕、すなわち家の中で別々に暮らしていたが、互いに非常に強い愛を抱き、互いに調和して暮らしていたため、親族の絆を離れて別々に飲食することを決して許さなかった。 毎日、順番に各自の家で宴を開き、姉妹たちと共に兄弟の輪の中で、いかなる節度を欠くこともなく、酩酊や乱行とは無縁の、無邪気な楽しみの中で時を過ごしていた。 不道徳な集まりなど、彼らの善良で義なる父は決して許さなかっただろう。しかし、ヨブの子供たちの宴は、彼らの兄弟愛と穏やかな品行の表れであったため、この義人はそれを禁じるどころか、家族の和に慰めを見出し、むしろ奨励していた。 七日が過ぎ、毎回の兄弟の集いが終わるたびに、ヨブは子供たちに、誠実な良心に従って自らの行いを慎重に点検するよ

[3461] フスの地は、パレスチナの南東、死海の向こう側に位置していた。

う促した――彼らのうち誰かが、言葉や思いによって神に対して罪を犯していないか、と。　というのも、彼は神を深く畏れていたが、それは奴隷のような恐れではなく、子としての愛に満ちた畏れであり、主なる神を怒らせるようなことが起きないよう、自分自身と自分の家も注意深く見守っていたからである。　しかし、神を畏れるこの義人は、家族を監視し、彼らが清らかな生活を送り、そのうちの誰一人として、思いの中でさえも創造主に対して罪を犯さないよう諭すことだけに留まらなかった。祝宴の日々が終わるたびに、　ヨブは早朝、家族全員の面前で、子供たち一人ひとりの数に応じた全焼のいけにえと、彼らの魂の罪のための雄子牛一頭を捧げた。なぜなら、彼は「もしかすると、私の息子たちは罪を犯し、心の中で神を冒涜したかもしれない」と言ったからである。ヨブは、そのような特別な日にはいつもそうしていた（ヨブ記1:5）。

ある時、天において、人類の守護者である神の天使たちが、全能の神の御座の前に集まり、人々のために神に執り成し、　あらゆる生活の必要に関する人々の祈りを神に捧げようとしていたとき、彼らの間に、人類の誹謗者であり誘惑者である悪魔が現れた。　天から追放されたサタンは、神の許しを得て、天使たちの間に現れた。しかし、その堕落した本性を変えることなく、善のために善意をもって執り成そうとしたのではなく、自らの悪意を吐き出し、善を誹謗中傷するために現れたのである。　サタンの高慢は、その内なる盲目さゆえに、決して真理と和解することはなく、謙遜や全善なる神の御意志への従順な献身の中に、喜びに満ちた平和を見出すこともない。　それは、自らの陰鬱な視点に基づき、既存のものを大胆に再評価し、自分とは無縁の、神の生命の輝かしい領域にまで踏み込み、すべてを自らの傲慢という尺度で厚かましく測りかねるのだ！

そして、天使たちと共に現れたサタンに、主はこう言われた。

「どこから来たのか。」

サタンは答えた：

「私は地を歩き回り、その全土を巡り歩いた。」

主は彼に言われた：

「わがしもべヨブに目を留めたか。地の上には、彼のように、これほど清く、正義に満ち、神を畏れ、あらゆる悪から遠ざかっている人は他にいないのだ！」

これに対し、サタンは主にこう答えた。

「ヨブが神を畏れるのは、ただ偶然のことでしょうか。彼を守っているのは、あなたではありませんか。彼の家も、彼が持つすべてのものも、あなたが四方から守っているではありませんか。あなたは彼の手の業を祝福し、その家畜を増やし、地の上に広げられました。しかし、どうか御手を伸ばして、彼が持っているすべてのものに触れ、それを彼から取り上げてください。そうすれば、彼がまだあなたを祝福するかどうか、お分かりになるでしょう。」

そこで主はサタンに言われた：

「彼のもつすべてのものを、わたしはあなたの手に委ねる。あなたの望むままにせよ。ただ、彼自身には手を触れてはならない。」

サタンは主の御前から去っていった（ヨブ記1:6–12）。ある日、ヨブの息子たちと娘たちが、長兄の家で宴会を開いていた。すると、使者がヨブのところに来て言った。

「あなたの牛たちは野で二頭ずつ軛をくぐって耕しており、その傍らで雌ロバたちが草を食んでいました。すると突然、セバ人が襲いかかり、それらを奪い去り、使用人たちを皆殺しにしました。私だけが生き残り、あなたに報告するために駆けつけました。」

その者が話している最中、別の使者がヨブのもとに来て、こう告げた。

「天から火が降りてきて、すべての家畜と羊飼いたちを焼き尽くしました。私だけが生き残り、あなたに報告しに参りました。」

その者がまだ話し終えないうちに、また別の使者がやって来て、こう報告した。

「カルデア人が襲来し、三つの部隊に分かれてラクダを取り囲み、連れ去りました。使用人たちは皆殺しにされ、私一人だけが生き残り、あなたに知らせに来ました。」

その者がまだ話している最中、また別の使者がやって来て、ヨブにこう告げた。

「あなたの息子たちと娘たちは、長兄の家で宴会を開いていました。すると突然、砂漠から恐ろしい旋風が吹き荒れ、家の四隅を巻き込み、あなたの子供たちの上に家を倒しました。全員が亡くなりました。私だけが生き残り、あなたに知らせに来ました。」

こうした恐ろしい知らせを次々と聞いたヨブは、立ち上がり、深い悲しみのしるしとして上着を引き裂き、頭を剃り、地にひれ伏して、主に向かってひざまずき、こう言った。

「私は母の胎から裸で生まれ、また裸で母なる大地の胎に帰っていく。主が与え、主が取り去られた！　主の御心どおりになった。主の御名がほめたたえられますように！」

こうして、ヨブはこれらすべての出来事において、神の前で無分別な言葉を一つも口にすることなく、罪を犯さなかった（ヨブ記 1:13–22）。

ある日、神の御使いたちが再び主の御前に現れた。その中に、サタンもまた現れた。

主はサタンに言われた。

「どこから来たのか。」

サタンは答えた。

「私は地上にいて、その全土を巡り歩きました。」

主は彼に言われた。

「わがしもべヨブに目を留めたか。地上の誰一人として、彼に匹敵する者はいない。彼はこれほど善良で、真実で、敬虔であり、あらゆる悪から遠く離れているのだ！　彼を襲った の災いにもかかわらず、彼は今なおその清さを堅く保っている。それなのに、お前は彼を無実のままで滅ぼそうと、わたしを彼に対して煽動したのだ！」

すると、サタンは主に答えて言った。

「皮は皮で済むが、人は自分の命のためなら持っているものすべてを差し出すだろう――つまり、他人の皮の中にいれば、人は苦しむことはできる。　他人の皮の上なら打撃もそれほど痛くはなく、その皮を剥がされても耐えられるほどで、痛みも感じず、平静を保つことができる。しかし、もし彼の自身の体に触れてみよ。御手を伸ばして、彼の骨や肉に触れてみれば、彼があなたを祝福するかどうか、お分かりになるだろう。

そこで主はサタンに言われた。

「見よ、彼はあなたの手に委ねられている。私はあなたが彼に望むままにさせる。ただ、彼の魂だけは守れ――彼の存在の根幹である自由意志には手を出すな」（ヨブ記2:1–6）。

サタンは主の御前から退き、ヨブの全身を、足の裏から頭のてっぺんに至るまで、恐ろしいハンセン病で襲った。この苦しみを受ける者は、彼を襲った病気の伝染性ゆえに、生ける人々の間では受け入れられず、その中から追い出されなければならなかった。　彼の体は、嫌悪感を催す悪臭を放つかさぶたに覆われ、すべての関節には灼熱のような内なる炎が燃え広がっていた。集落の外の灰の中に座り込み、ヨブは陶器の破片で自分の化膿した傷を掻きむしっていた。近所の人々や知人たちは皆、彼から距離を置き、見捨ててしまった。妻でさえ、彼への同情を失ってしまった。

長い時が経った後、彼女は絶望のあまり、ある日ヨブにこう言った。「いつまで耐え続けるつもりなの？――私は、自分の救いを期待してもう少し待ってみようと思う。だって、この地上から、あなたの記憶も、息子や娘たちも、私の胎内の子供たちも、そして私が無駄に労力を費やしてきた苦労も、すべて消え去ってしまったのだから。　あなた自身は虫の悪臭の中に座り、覆いもなく夜を過ごしているのに、私はさまよい、仕え、場所から場所へ、家から家へと移り歩き、太陽が沈むのを待ちわびて、今私を苦しめている労苦や病から安らぎを得ようとしている。　頑なに自分の清さを主張し続けたり、断固としてそれを守り通したりしないで。神に一言でも語りかけ、神を冒涜して死んで

しまえ――死によって、あなたは自分の苦しみから解放され、私もまたその苦しみから救われるのだから」。

このように、ヨブの妻は、彼と自分自身のために、人生という問題を、一見すれば単純かつ自然で、さらには満足のいくものさえあるかのように解決していた。サタンの唆し――「皮は皮で償う」――に従い、人生の意味や目的について、この世の理解の範囲を超えて深く考えることはなかったのだ。　精神的に疲れ果て、消耗しきった彼女は、真の命の最後の灯を消そうとしていた。「神を冒涜して――死ね」。

しかし、苦難に遭ったヨブ自身は、狭隘な利己主義の観点からではなく、人間としての本質を見つめ、自らの境遇についてそうは考えなかった。彼は妻を哀れみながら見つめ、こう言った。

「なぜ、狂った女たちのようにそんなことを言うのか。もし私たちが神から善を受け取ったのなら、悪を耐えられないというのか――受け入れないというのか！」

こうして、この時もヨブは神の前で罪を犯すことはなかった――彼の口からは、神を冒涜するような言葉は一言も発されなかった（ヨブ記2:7–10）。

ヨブに降りかかった不幸の噂は、周辺の国々に広まった。彼の三人の友人、テマン人のエリファズ、サウケヤ人のビルダド、ナアミ人のソファル[3462] は、彼の不幸を知ると、苦しむ者を慰め、その悲しみを分かち合うために集まった。　しかし、彼に近づいても、その顔が膿んだかさぶたで覆われていたため彼だと気づかず、彼らは遠くから恐怖のあまり叫び声を上げ、泣き崩れ、それぞれ上着を引き裂き、深い悲しみのあまり頭上に土を投げ上げた。　その後、彼らは七日七晩、友人の向かいの地面に座り、一言も発することなく過ごした。なぜなら、彼の苦しみが極めて甚大であることを目の当たりにし、そのような状態の彼を慰める術を見出せなかったからである（ヨブ記2:11–13）。　この耐え難い沈黙を破ったのは、ヨブ自身であった。彼が最初に口を開き、自分の生まれた日を呪い、なぜ今や闇に覆われてしまったこの光を目にする運命にあったのか、と深い嘆きを吐露した。彼にとって人生が絶望的な苦しみであるならば、なぜ命を与えられたのか?

「私が恐れていた恐ろしいことが、まさに私の身に降りかかり、私が恐れていた恐ろしいことが、まさに私のところへやって来た。私には平安もなく、安らぎもなく、慰めもない！」（ヨブ記3:1–26）。

すると、彼の友人たちも彼との会話に加わったが、彼を慰めようとした彼らの議論は、苦しみに苛まれた彼の心をさらに傷つけるだけだった（ヨブ記21:34；ヨブ記16章以下）。　彼らの真摯な信念、すなわち「正義の神は善人を報い、悪人を罰する」という信仰に基づき、彼らは、不幸に見舞われる者は罪人であり、その不幸が大きければ大きいほど、その者の罪深い状態もまた深刻であるということを、議論の余地のない、疑いようのない事実として受け止めていた。　それゆえ、彼らはヨブについても、彼が人々から巧みに隠していた（ヨブ記32:1–22、33:1–33など）何らかの隠れた罪があり、全知全能の神がその友を罰しているのだと考えていた。　彼らは、会話の冒頭からこの苦難に遭った者にそのことを感じさせ、その後、長い議論を続ける中で、彼に自分の罪を認め、悔い改めるよう説得した。　ヨブは、一見説得力のある彼らの言葉にもかかわらず、自らの清らかさを確信していたため、心の中では彼らの議論を正当だと認めることなど到底できないと考えていた（ヨブ記27:1–7；参照 ヨブ記10:17）。彼は無実の力を尽くして、自らの名誉を守り抜いた。

「いつまで私の魂を苦しめ、その言葉で私を苛むつもりか。見よ、あなたがたはすでに十回も私を辱めたのに、私を苛むことを恥じもしないのか！　哀れな慰め手たちよ！　あなたがたの空虚な言葉に終わりは来るのか」（ヨブ記19:2–3；参照 ヨブ記16:2）。

ヨブは友人たちに説明し、自分が罪のゆえに苦しんでいるのではなく、神が人間には理解しがたい御心によって、ある者には苦難に満ちた人生を、またある者には幸福な人生を与えているのだと

[3462] 彼らはエサウ、すなわち「エドム」の子孫であった（創世記36:1–43参照）。

確信させた。　ヨブの友人たちは、神もまた、人間の正義が裁きを下すのと同じ報復の法則に従って人々を扱われると考えていたため、彼を非難する言葉を止め、彼の言葉に返答することもやめたものの、その弁明の言葉には納得しなかった（ヨブ記32:1–15）。　その頃、若きエリウイという人物が、この議論に熱心に加わった。彼はバラキエルの子であり、ラモの部族に属するウジ人であった。彼は燃えるような大胆さをもって、年老いた苦難の身であるヨブに対し、「彼が神よりもむしろ自分自身と自身の無実を弁護していた」という理由で、激しく非難した　（ヨブ記32章以下）。この対話者もまた、人間には到底及ばない公正さを創造主に帰しつつ、ヨブの苦しみの原因を、たとえ人々の目には見えないものであっても、彼の不義に見出していた。

「神は全能であり、強固な心を軽んじられることはない。神は不義な者を支えず、義人からも御目を背けられない。　しかし、あなた――エリウはヨブにこう言った――あなたは不義な者たちの判断に満ちている。なぜなら、あなたの判断によれば、神からあなたに下された懲罰は不当なものだが、「しかし、裁きと非難は近い」、それらはあなたの中でこれほどまでに密接に結びついているからだ（ヨブ記36:5–17）。

ついに、苦しみを受ける者は、神ご自身が自分の無実を証ししてくださるよう、神に祈りを捧げた。

果たして、神は激しい旋風の中でヨブに現れ、世界の統治に関する事柄について説明を求めようとした彼の意図を戒められた。　全能者はヨブに、人間にとって、目に見える周囲の自然現象や被造物の中にも、理解しがたいことが極めて多いことを指摘した。そして、その上で、神の御計画の神秘を解き明かし、なぜ神が人々にこう振る舞い、そうではないのかと説明しようとする欲求――そのような欲求は、すでに厚かましい独りよがりである。

「誰だ、無意味な言葉で神の摂理を曇らせている者は？」と、主は激しい旋風の中からヨブに問いかけた。「さあ、今こそ男らしく腰に帯を締め、答えよ。わたしが地の基を据えたとき、お前はどこにいたのか？　知っているなら、言ってみよ。　その土台は何を支えとしているのか、あるいは、天の光る星々が一斉に歓喜し、神の子らが喜びの賛美の叫びをあげている中で、誰がその礎石を据えたのか？　お前は、生涯で一度でも朝に命令を下し、夜明けの場所を定めたことがあるか。天の定めを知っているか。雲に向かって声を上げることができるか。稲妻を放つことができるか……お前は、自分を正当化するために、わたしの裁きを覆し、わたしを非難しようとしているのか。――お前の力は、わたしと同じほどあるというのか？　――威厳と栄光で身を飾り、輝きと華麗さをまといなさい。怒りの激しさを注ぎ出し、高慢で傲慢な者すべてを見据えて屈服させ、その場にいる強大な不義の者たちを打ち砕きなさい。そうすれば、私もまた、あなたの右手があなたを守るのに十分強いことを認めるだろう。 全能者と争い、神を非難する者は、神に答えよ。

そこでヨブは主に答えて言った。

「あなたがすべてをなすお方であり、あなたの御心は変わることがないことを、私は知っています。

「この者、御計画を見誤り、何も理解していないのは誰か。

「それは私です。理解できないこと、すなわち、私にとって不思議で、知らなかった御業について語っていたのです。　以前はただ耳の端であなたのことを聞いていたが、今や私の目はあなたを直視している。それゆえ、私は自分の言葉を撤回し、　、塵と灰の中で悔い改める。私は取るに足らない者であり、あなたに何と答えられようか。――私は自分の口に手を当てよう（ヨブ記38–40）。

その後、主はヨブの友人たちに、ヨブのもとへ行って、彼らのために犠牲を捧げるよう頼むよう命じられた。主はテマ人エリファズにこう言われた。「ヨブという人物こそが、　『あなたがたがわたしについて語ったことは、わたしのしもべヨブほど正確ではなかったが、あなたがたを拒むことのないように、ヨブの顔だけを受け入れる』と主は言われた（ヨブ記42:7–9）。友人たちはこの主の命令に従い、犠牲として七頭の子牛と七頭の雄羊をヨブのところに連れて行った。ヨブは神に犠牲を

捧げ、友人たちのために祈った。　神は彼らのためにヨブが捧げたとりなしを受け入れ、ヨブ自身の肉体の健康を回復させ、以前持っていたものの二倍のものを与えられた。ヨブの親族やかつての知人たちは、彼の癒やしを聞きつけ、彼を訪ねて慰め、共に喜びを分かち合い、それぞれが贈り物と金の指輪を捧げた。　主はヨブを御自身の祝福をもって憐れまれた。それ以来、ヨブは小家畜一万四千頭、らくだ六千頭、牛千頭、雌ろば千頭を所有するようになった。　また、ヨブには、亡くなった子供たちの代わりに、七人の息子と三人の娘が生まれた。全地において、ヨブの娘たちほど美しい女性はいなかった。そして、父は彼女たちに、兄弟たちの中で相続分を与えた（ヨブ記42:10–15）。主は、ヨブの牧畜の富を二倍にされたのとは異なり、ヨブの子供たちの数を二倍にはされなかった。それは、最初の子供たちが死んで完全に滅びてしまったと誰かが思うことのないようにするためである。いや、彼らは死んだとはいえ、滅びたわけではない。彼らは、義人たちの総復活の日によみがえるのである。

ヨブは、辛抱強く試練に耐えた後、百四十年間生き（地上での生涯は計二百四十八年であった）、その子孫が四代にわたるのを目にした。そして、満ち足りた日々を過ごし、大老齢に達して息を引き取った（ヨブ記42:16–17）；今や彼は、父と子と聖霊、三位一体において唯一の栄光ある神の御国において、老いも病も知らぬ生涯を送っている。なぜなら、地上で被った苦難の最中にも、彼はすでに、アブラハムが主の偉大な日を見たように、それを見て喜び喜んでいたからである（ヨハネ8:56）。

「私は知っている」と、悪臭を放つ腫れ物に蝕まれながらも、彼は言った。「私の贖い主は生きておられ、最後の日に、この崩れゆく私の肌を塵の中からよみがえらせてくださることを知っている。そして私は、この肉体のままに神を仰ぎ見るだろう。　私自身が主を仰ぎ見るのだ。他人の目ではなく、私のこの目で主を見るのだ。この期待に、私の胸の中の心は溶けていくのだ！（ヨブ記19:25–27）

これは、義人ヨブが友人たちの前で告白したものであり、彼らに、肉体の苦しみや地上の恵みの喪失ではなく、「主の剣」、すなわち全能者の怒り、「不義を報復される方」を「恐れる」よう促したものである。

「裁きがあることを知れ（ヨブ記19:29）[3463]」と、彼は私たちへの訓戒として告げている。「その裁きにおいて、真の知恵――主を畏れること――と、真の分別――悪から遠ざかること――を持つ者だけが義と認められるのだ（ヨブ記28:28）。

[3463] 『ヨブ記』の主題は、この世でしばしば見られる現象――すなわち、徳ある人々が災難に囲まれて生きる一方で、不義な者たちが繁栄しているという現実――を、神の摂理の存在とどのように調和させるかという問題の解決にある。　義人ヨブを襲った不幸について、彼の友人であるエリファズ、ビルダド、ソファルは知りました。彼らは苦しむヨブを見舞いに訪れ、友が膿の床に横たわっているのを見ると、七日間、黙って彼を悼みました。その後、彼らはヨブと会話を交わしました。　旧約時代の一般的な考え、すなわち「あらゆる苦しみは何かしらの不正に対する罰である」という観念から離れ、彼らはヨブに向けた言葉の中で、もし彼が今苦しんでいるのなら、それは間違いなく自身の罪によるものであり、それゆえに悔い改めなければならない、という考えを展開した。　友人たちの言葉に心を痛めつつも、神の前では自分が正しいと確信していたヨブは、主の御手が自分に対して重くのしかかっていることを嘆きつつ、人間の思考では及ばない神の御計画の不可解さへの信仰、そして主ご自身が自分を裁いてくださることを願う気持ちを表明した。　神は嵐の中でヨブに現れた。神は、世界の治めについて神に説明を求めるというヨブの無分別な要求を非難し、すべてを善き行いへと導く、神の摂理の計り知れず、理解しがたい御業に対する畏敬の念をヨブに植え付けた。　結末において、主はエリファズとその仲間たちに、ヨブに対して不当な非難という罪について、ヨブに祈りの執り成しを求めるよう命じ、ヨブにはその損失と苦しみに対して二倍の報いを与えられた。『ヨブ記』の著者については議論が分かれている。　聖グレゴリオス・テオロゴスとヨハネス・クロイソストモスは、著者がソロモンであったという見解に傾いていた。しかし、この書物から受ける全体的な印象――すなわち、その起源がはるかに古いことを示唆している――と、この見解を調和させることは難しい。　この書物ではモーセの律法については全く触れられていない。一方で、その記述には、すでに高度に発達した社会生活の兆しが見て取れる、家父長制的な生活様式の特徴が表れている。ヨブは、名高い戦士、君主、そして裁判官として、華やかな生活を送り、近隣の都市を頻繁に訪れる際には敬意を払われている。　さらに、この書物には、適正な裁

トロパリオ、第1声：

ヨブの美徳の豊かさを目の当たりにし、義人の敵は陰謀を企ててそれを奪おうとしたが、その肉体の柱を打ち砕いても、霊の宝を奪うことはできなかった。なぜなら、彼は汚れなき魂という防具を身につけていたからである。私をも裸にして捕らえた者よ。終わりが来る前に、私を先回りして、欺く者から私を救い出してください、救い主よ。そして、私を救ってください。

コンダク、第8調：

まことに真実で義に満ち、神を畏れ、汚れなき者、また聖別された者、全き栄光に満ちた、神の真の御心に適う者よ。最も忍耐強く、最も高潔なあなたはその忍耐によって世界を照らした。それゆえ、神に賢き者たちよ、あなたの記憶を讃える。

判手続きの形式や、ヨブの同時代人が天体現象を観察し、その観察から適切な天文学的結論を導き出す能力についての記述がある。また、鉱山や大規模な建造物、さらには大きな政治的変革についても言及されている。　これらすべてが、ヨブの生きた時代を、ユダヤ人がエジプトに滞在していた時期に位置づけることを、極めて高い確率で裏付ける根拠となっている。ヨブは、繁栄の日々を経て財産や子供たちを失い、激しい病に苦しんだ後、再び、しかも以前よりもはるかに豊かな形で（ヨブ42:10）、神から失ったものを取り戻した。彼は、　自らを低くして恥辱に満ちた十字架の死を受け入れ、それゆえに父なる神から高く上げられた（フィリピ2:7–9）――人類のための贖いの偉業に対する冠として、世が造られる前から父のもとで持っていた栄光を受け取られた方（ヨハネ17:6）――の先駆けとなっている。　4世紀に生きた聖殉教者ジノン、ヴェローナ司教は、この「型」と「実体」との間に、さらに他の――極めて細やかな類似点を見出している。「私の見解では、ヨブは――と聖父は語る――私たちの救い主イエス・キリストの型であった。この比較によって、この真理が明らかになるだろう。　ヨブは義人であった――私たちの救い主こそが真理そのものであり、私たちの義の源である。なぜなら、主についてこう預言されていたからである。*「見よ、その日が来る……義の太陽が昇る」*（マラキ4:1–2）。ヨブは真実であった――私たちの主こそが、真の、完全な真理である。*「わたしは道であり、真理であり、命である」*（ヨハネ14:6）。ヨブは富んでいたが、全宇宙が属する私たちの主の富に、いったい誰の富が匹敵できようか。祝福されたダビデの証言によれば、*「地と、その中にあるもの、世界と、そこに住むすべてのものは、主のもの」*（詩篇23:1）である。　ヨブは悪魔によって三度試みられた（財産の喪失、子供たちの死、そして病気）。同様に、福音書の記述によれば、悪魔は私たちの主をも三度試みた（マタイ4:1–11）。すべての財産を奪われ、貧しくなったヨブ――私たちの主もまた、私たちへの愛ゆえに、天とそのすべての恵みを後にして地上に降りてこられ、私たちを豊かにするために、同様に貧しくなられたのです。　ヨブの子供たちは、猛威を振るう悪魔によって殺された――私たちの主の子供たちである預言者たちは、狂気じみたパリサイ人たちに打ち殺された（ルカ13:34；使徒7:52）。　ヨブは腫れ物に冒されました――私たちの主は、私たちの肉と全人類の罪を御自身に負われたと同時に、あらゆる不浄と罪による腫れ物もすべて引き受けられました。ヨブは友人たちに襲われました――私たちの主に対しては、とりわけ大祭司や律法学者たちが、誰よりも先に反旗を翻しました。彼らは本来、主を特に敬い、主の友人であるべき人々だったのです。　ハンセン病に冒され、虫に食われながら、ヨブは町の外の灰の上に座っていた――私たちの主は、全人類の罪によるすべての病を御自身に負われ、この不浄な世の中で、悪徳に満ち、情欲に燃える人々の間に身を置かれた。そして、その人々こそが、主を町の外で恥辱に満ちた死に追いやったのである。　ヨブは、その不屈の忍耐によって、再び健康と富を取り戻した――私たちの主は、ご自身の復活によって死に打ち勝ち、御自身を信じる者たちに健康だけでなく不死をも授け、父なる神から万物に対する権威と支配を受けられた。主ご自身がこう証言されたとおりである。*「すべてのものは、わたしの父によってわたしに委ねられている」*　（ルカ10:22）。祝福されたヨブは平安のうちに息を引き取りました――私たちの主は、御自身の血の代価によって買い取られた平安を私たちに残し、柔和で平和な栄光のうちに御父のもとへ昇天されました。　このように、義人ヨブの生涯が持つ模範的な意義に鑑み、教会は古来より、キリストの受難を記念する日々に、信徒たちにヨブ記の朗読を捧げることを定めてきました。――受難週の各日におけるヨブ記の朗読箇所は以下の通りです：月曜日の晩課ではヨブ記1:1–12；　火曜日の晩課ではヨブ記1:13–22；水曜日の晩課ではヨブ記2:1–10；聖木曜日の晩課ではヨブ記38:1–23、42:1–5；聖金曜日の晩課ではヨブ記42:12–17。

聖殉教者バルバラ（戦士）および彼と共に殉教した者たちの受難

記念日：5月6日

神を憎む背教者ユリアヌス王[3464] がフランク人[3465] との戦争を始めたとき、彼は彼らに対して将軍バッカスを派遣した。その軍団には、バルバルという名の勇敢な戦士が仕えていた。彼はキリスト教徒であったが 、その信仰を隠していた。 両軍の部隊は戦いの準備を整えた。フランク軍の中には、ゴリアテ（サムエル記上17章）のような強大な格闘家が一人いた。　彼はローマ軍の前へ進み出て、誰か一人でも自分と一対一で戦う者が出るよう挑発した。しかし、その力強さを物語る外見そのものが彼らを恐れさせ、ローマ兵の誰も彼に立ち向かう勇気を持てなかったため、彼は彼らを嘲笑した。 そこで、総督バッカス（Vakch）は、聖バルバロの勇敢さを知っていたため、彼を呼び寄せ、自らの力を誇示するこの傲慢な格闘手と戦うことができるかと尋ねた。バルバロは、自分が信じる主イエス・キリストの助けを頼りに、一対一の決闘を拒むことはなかった。　十字の印を胸に刻み、敵に向かって進み出て、彼と組み合い、神の助けによって彼を打ち負かし、殺した。というのも、主は聖バルバラに天使を遣わし、その天使が彼を助けていたからである。　すると、フランク族は恥じ入り、恐怖に駆られた。一方、ローマ兵たちはその勇気に奮い立ち、彼らに襲いかかり、決定的な勝利を収めた。このような聖バルバロの勇敢さは、ローマ軍団の中で彼に大きな名誉をもたらし、皇帝の称賛も得た。彼はコミタ（[3466] ）の位を授けられた。

その後、軍司令官バッカス（Bакх）は、敵に対するこの輝かしい勝利の後、軍を率いてフラキアに滞在していた際[3467] 、勝利への感謝を捧げるため、偶像への生贄を捧げたいと望んだ。彼はその勝利を、キリストなる神ではなく、自らの虚しい偶像の功績だと考えていたからである。　そこで彼は、その不浄な生贄の儀式に、最初の勝利者であるコミタ・バルバラを招いた。しかし、聖バルバラは自分がキリスト教徒であることを公然と告白し、偶像を拒んだ。　そこで総督はそれを王に報告した。王は、キリストの戦士を自分の前に連れてくるよう命じ、偶像への生け贄を捧げるよう強要した。しかし、祝福されたバルバラが従わなかったため、王は彼を拷問用の木に吊るし、内臓が地面にこぼれ落ちるまで剣で腹を切り裂くよう命じた。　しかし、聖人が祈っている最中、天使が現れ、その内臓を集めて殉教者の腹の中に元通りに戻し、彼を癒やした。その結果、彼の体には傷跡さえ残らず、その後、天使は彼を拷問の木から解き放った。　この奇跡を目撃した総督バッカスと、二人の兵士――カリマコスとディオニシオス――は、キリストを信じ、キリストを告白し、邪悪な異教の神々

[3464] ユリアヌス・アポステート（背教者）は、コンスタンティヌス大帝の甥であり、331年に生まれた。345年、兄のガッロと共にコンスタンティウスによってカッパドキアへ追放され、そこで厳重な監視の下で6年間を過ごした。　351年、彼は流刑地を離れ、ニコメディアで数年間を過ごし、そこで哲学の研究に没頭した。355年、コンスタンティウスによってガリアの軍司令官に任命された。そこで彼は軍隊の支持を巧みに獲得し、361年、軍は彼を皇帝として擁立した。 異教徒の師の指導の下での哲学の研鑽、アリウス派の動乱に起因するキリスト教徒間の不和、そしてコンスタンティウスへの憎悪が、ユリアヌスに、彼を迫害した宗教であるキリスト教への憎悪をも抱かせるようになった。彼は異教を復活させ、キリスト教を根絶することを目標とした。しかし、彼の試みはすべて完全な失敗に終わった。 ユリアヌスは363年、ペルシア軍との戦いの最中に槍で致命傷を負い、死去した。彼の最期の言葉「お前の勝ちだ、ガリラヤ人よ！」は、異教に対するキリスト教の勝利を自覚していたことを示していた。

[3465] フランク族――下ライン川流域のゲルマン諸民族の連合体である。ローマ領への襲撃により、フランク族はローマ帝国の崩壊を著しく早めた。　北ガリアに侵入したフランク族は、先住民と混血し、その風俗をある程度取り入れた。ローマ人、南部のアリマンニ族、西ゴート族に対する勝利を経て、カロリング朝時代のフランク族の勢力は、世界史的な重要性を帯びるほどに高まった。

[3466] コミタとは、王の近衛兵を指す言葉であった。その後、この称号は公職者（プロコンスル、地方長官、総督といった最高位の役人の随行員）にも用いられるようになり、彼らの職務には後に国庫への税収の徴収も含まれるようになった。

[3467] ビザンツ帝国の、バルカン半島北東部に位置する地域。現在、フラキアはロモリアまたはルメリアという名称で、欧州トルコの州を構成している。

を冒涜した。　このため、ユリアヌス帝の命により、キリストの名を告白した新たな殉教者たち――バッカス、カリマコス、ディオニシオス――は首を刎ねられ、こうして天の聖なる殉教者たちの列に加わった。　また、聖バルバラについては、不敬虔な王が、彼女を鉄の車輪に縛り付け、その下に激しい火を燃やし、縛られた殉教者ごと車輪を回転させ、苦しむ彼女の体に沸騰した油を注ぐよう命じた。　しかし、神に心からの祈りを捧げていた殉教者は、火によって全く傷つけられることはなかった。それどころか、火は拷問を行う兵士たちへと向けられ、彼らを焦がし、そのうち二人を灰に変えてしまった。その後、キリストの殉教者は牢獄に投じられたが、そこで主ご自身が現れ、彼を力づけてくださった。

翌朝、聖バルバラは再び拷問のために連れ出された。裸にされた彼女は四方に引き伸ばされ、その後、牛の腱で背中や腹を容赦なく打ちつけられた。その後、殉教者は、あらかじめ三日間かけて燃やされていた炉に投げ込まれた。　七日間その中に留まった後、聖人は再び生き生きと、健やかで、火による傷ひとつ負わずに発見された。つまり、まるで風呂から出るかのように炉から出てきて、神を賛美したのである。　その後、聖バルバラは再び牢獄に投げ込まれ、そこで彼を死に至らしめることを狙って、無数のサソリや蛇、あらゆる種類の爬虫類が放り込まれた。しかし、この監禁においても、聖バルバラは十字の印で毒のある爬虫類を追い払い、何の傷も負わずに済んだ。

そこで、キリストの力を認めようとしなかった激怒した拷問官は、銅の雄牛を可能な限り高温に焼き熱し、その中に殉教者を投げ込むよう命じた。しかし、そこでも聖人は無傷のままであった。聖人は火による痛みを全く感じなかったが、銅の雄牛は、まるで火の熱さを感じているかのように、まるで生き物であるかのように動き出し、何らかの音を発し、歩き回った。この奇跡を目撃した多くの異教徒たちが、キリストを信じるようになった。

ついに、これらすべての後、拷問官は聖殉教者バルバラに首を斬り落とすよう命じた。こうして彼は、主キリストのために、その苦難の業を勇敢に成し遂げたのである。　その尊い遺体は、敬虔なフィリキオ司教が丁重に受け取り、ペロポネソスのメフォンという町で埋葬した。そして、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を賛美した。アーメン。

かつて強盗であった聖バルバラの記念日。

記念日：5月6日

この祝福されたバルバラは、かつてルカ地方で凶悪な強盗であった[3468]。彼は多くの人々の血を流したが、並外れた肉体的強さを備えていたため、誰も彼を捕らえることはできず、ましてや彼と戦うことなどできなかった。　しかし、罪人の死を望まず、すべての者の救いを求めておられる、至善にして人愛に満ちた神は、かつて使徒パウロ（使徒言行録22:1–30）を救われたのと同様に、この強盗をも御摂理の働きによって救いの網に捕らえられた。　ある日、この強盗が洞窟に座り、略奪した大量の金を見つめていたとき、突然、罪人を悔い改めの道へと導く神の恵みが彼の心に触れた。すると、強盗は心を動かされ、神の最後の審判を思い起こして嘆き始め、心の中でこう言った。　「ああ、罪深い私よ、何ということをしてしまったのか！　私は多くの人間の血を流し、多くの女性を汚し、他人の財産を奪い、その他にも多くの悪事を働いた！　それなのに、今日か明日か、いずれにせよ私は死ななければならない。そして、私が得たものは――誰の手に残るというのか！」　そして再びこう叫んだ。「キリストは、その憐れみによって（ルカ23:40–43）、あの昔の強盗を御自身のもとに迎え入れたことを私は知っている。もし私が悔い改めさえすれば、主は私をも受け入れてくださるだろう。今、私は悔い改め、自分の悪行を深く嘆き、主の憐れみを求める。」

[3468] おそらくギリシャにおいて。

心の奥底でそう言い聞かせると、バルバルは身を起こし、仲間たちに何も告げることなく、ただ剣を衣服の下に隠し、すべてを置き去りにして、夜中に教会のある最寄りの村へと向かった。早朝の礼拝の時間に教会に到着した彼は、礼拝が終わると、涙を流しながら司祭の足元にひれ伏し、こう叫んだ。

「聖なる父よ！　あなたの聖なる御前に来たこの呪われた罪人を、追い払わないでください。私は、自分が犯した悪行を悔い改めたいのです。」

司祭は彼を床から起こし、聖なる祭壇へと導いてこう言った。

「わが子よ、神の前で、お前の犯した罪を告白せよ。私は、お前の告白と悔い改めの謙虚な証人となる。」

悔い改める男はこう語り始めた。

「父よ、私は、おそらくあなたも耳にしたことがあるであろう、あの強盗バルバルその人です。私は数多くの罪、肉体の不潔さ、略奪、そして殺人に満ちています。というのも、私は三百人もの人々を殺害し、その中には、私を悔い改めの秘跡に受け入れることを拒んだ二人の長老をも剣で殺したからです。　さて、父よ、もし神が悔い改める私を受け入れてくださることをお知りなら、あなたの裁量で、神の戒めをもって私の罪の傷を縛ってください。もしそうでないなら、この剣を取り、彼らに私を殺すよう命じてください。

しかし、長老は彼にこう言った。

「わが子よ！神の憐れみに打ち勝つ罪などない。ただ、絶望してはならない。私の家へ来なさい。私が命じることを、その通りに実行しなさい。」

教会を出ると、長老は振り返り、バルバルが肘と膝をついて自分の後をついてくるのを見て、彼にこう言った。

「子よ、一体何をしているのだ？」

バルバルは答えた。

「今この瞬間から、私は自分の罪を背負って主なる神の御前に地にひれ伏しました。私のすべての悪行が赦されるまで、私はこの地から立ち上がることはありません。」

「子よ」と長老は彼に言った。「お前は自らの意志で神に誓いを立てたのだ。その誓いを守り通せば、お前のすべての罪は赦されるだろう。」

家に着くと、長老は再び彼に言った。

「ほら、わが子よ、私の子供たち、奴隷たち、家畜、犬たち――その中から、誰と同等に扱われ、彼らと共に食事をしたいのか？」

野蛮人はこう答えた。

「父よ、私は自分自身が犬たちと同等だとは思いません。しかし、食物という身体的な必要に迫られているため、私を彼らと一緒に置いてください。そうすれば、彼らと共に食事を摂り、昼夜を問わず屋根のない場所で過ごすことができます。」

これに対し、長老は言った。

「子よ、神の前で語ったとおりに振る舞い、神の偉大なる慈悲を信じなさい。」

こうしてバルバルは、その長老のもとで三年間、四足獣のように、手と足で這い回り、地面から身を起こすこともなく、人間と共にいるに値しない者だと自らを認め、ただ四足獣や犬たちと共に食事をし、昼も夜も彼らと共に屋外で過ごした。 三年目も過ぎた頃、長老は彼にこう言った。

「もう十分だ、わが子よ。犬たちと一緒に食事をするのはやめなさい。主はあなたに御慈悲を注いでおられるのだから。」

「しかし、父よ」とバルバルは答えた。「私はまだ家畜たちと一緒に草を食みたいのです。」

すると、長老は彼にこう言った。

「わが子よ！神は、あなたが謙遜の心から神に捧げるこの誓いも見ておられる。あなたはこうして、自らの罪のために苦しみを受けようとしているのだ。」

そしてバルバルは家畜と共に村の外へ出て、四足動物のように歩き、貧弱な草を食みながら過ごした。　草原にたどり着くと、彼はそこで十二年間を過ごし、裸のままで、ぼろ服一枚さえ身にまとうこともなかった。そして、彼の肌は木の樹皮のようになった。太陽の灼熱に焼かれ、寒さでひび割れ、石炭のように黒ずんでいった。こうして、至福のバルバルは自発的な殉教者となった。

荒野でのそのような苦難の十二年が過ぎたとき、彼は神の啓示により、自らの罪が赦されたこと、そして悔い改めの業を自らの血をもって殉教的に完結させなければならないことを告げられた。そしてある日、草原を歩いていたバルバルは、ある商人たちが立ち止まっていた道に近づいた。　彼らは、何かの獣が近づいてきたのだと思い込み（茂みの中で何であるか見分けられなかったため）、張り詰めた弓から数本の矢を放ち、彼を三本の矢で射抜いた。しかし、近づいてみると、人間を射殺してしまったことに気づき、恐怖に襲われた。　バルバラは彼らに恐れることも悲しむこともないよう命じ、自身のことをすべて語り、自分の死をその村の長老に知らせるよう彼らに命じた。そう言い終えると、彼は自分の魂を神の御手に委ねた。

前述の長老は、商人たちからこの出来事を聞くと、その場所へ向かい、そこで光のように輝いている聖バルバラの遺体を目にした。　死者にふさわしい儀式を執り行った後、彼は、聖バルバラが殺害されたまさにその場所で、彼を埋葬した。その後、聖バルバラの棺からは、様々な病に苦しむ人々への癒しの力が流れ出すようになった。

しばらくして、人々が司祭を伴ってここに集まった。棺を開けてみると、聖人の遺体は腐敗していないばかりか、癒しの香油を滲み出していた。　そこで皆は驚き、神を賛美した。そして、聖バルバラの尊い遺骸を大いなる敬意をもって自分たちの村へ運び、教会に安置した。彼らは、私たちの神であるキリストの驚くべき人間愛と慈悲に感嘆し、父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光と誉れが捧げられることを称えた。アーメン。

5月20日

5月7日（旧暦）

聖殉教者アカキイの受難

記念日5月7日

聖アカキオスは、マクシミアヌス帝の治世[3469]　、すなわちこの皇帝が悪魔の唆しによって引き起こした第三次キリスト教迫害のさなかに、キリストの御名を告白したために殉教した。

聖アカキオスはカッパドキア[3470]　の出身で、百人隊長という軍人としての地位にあり、フィルム大佐の指揮下にあるマルティシウス連隊[3471] に所属していた。

当時、マクシミアヌス帝は、都市だけでなく兵士の列の中からもキリスト教徒を探し出すよう命じていた。もし兵士の中にキリストを信じる者がいれば、その者を裁判にかけ、拷問に処するよう命じられていた。キリスト教徒が皇帝の勅令に従わなかった場合、その者は死刑に処されることになっていた。

[3469] マクシミアヌス――284年から305年までローマ帝国の西半分を統治した。

[3470] 小アジアの地域。

[3471] マルティシウス連隊――マルスの（すなわち勇敢な）部隊。

このような命令を受けて、フィルム大佐は兵士を一人ずつ呼び出し、それぞれの信仰について尋問した。もし兵士の中にキリストを信じる者がいることが判明すれば、フィルムは甘言や脅迫などあらゆる手段を用いて、その者を偶像崇拝へと強要した。　このようにして、フィルムは信仰が揺らいでいたり臆病であったりした多くのキリスト教徒を異教へと堕落させた。

フィルムが百人隊長アカキウスを呼び寄せたとき、アカキウスは皆が聞こえるようにこう言った。

「私はキリスト教徒の家庭に生まれ、これからもキリスト教徒であり続ける。このことを、主イエス・キリストご自身が証人となってくださる。私の父や母だけでなく、祖父や曽祖父までもがキリスト教徒であった。それゆえ、私もキリスト教徒であり続ける。」

聖人のこの言葉の後、フィルムスは甘言や脅しを用いて彼を偶像崇拝へと誘い始め、三度にわたり彼を呼び出し、王の命令に従うよう説得した。しかし、アカキウスが断固として譲らないのを見て、フィルムスは彼を足枷で縛り、軍司令官ヴィヴィアヌスの元へ送るよう命じた。

その頃、軍司令官ヴィヴィアンが法廷に腰を下ろし、他のキリストの殉教者たちを尋問していたところ、[3472] アントニヌスという副官が彼のもとに近づき、こう言った。

「昨日、マルティシウス連隊のフィルム大佐が、配下の百人隊長アカキイを足枷で縛り上げました。今、彼はアカキイを貴殿のもとへ送ってまいりました。アカキイは皇帝の勅令に従わず、キリスト教の信仰を公言しているからです。」

直ちにアカキイは、軍司令官の尋問を受けるために引き出された。

彼を見据えると、軍司令官は尋ねた。

「お前の名は？」

聖人は答えた。

「私にとっても、私のすべての親族にとっても、キリストの栄光ある御名に由来するその名が最も望ましいものです。私はキリスト教徒と名乗りますが、人間としての名はアカキイです。」

これに対し、軍司令官は言った。

「その名にふさわしい気性だ。王の命令に従わないのだから、お前は悪人だ！」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「おお、総督よ！　あなたは嘘を言い、私の名前の意味を誤って解釈しています。なぜなら、アカキイとは『悪意のない者』を意味するからです[3473] 。私は、人間の血を吸う悪魔の悪意に加担したくないからこそ、この名にふさわしく呼ばれているのです。」

総督は言った：

「どこでそんな無分別な言葉を覚えたのだ？」

聖人は答えた：

「私はカッパドキア出身です。この地からはキリストの御名のために多くの殉教者が生まれました。そして私自身、聖人たちが亡くなった後、主から与えられた恵みと力によって行われた奇跡を目撃しました。棺や聖遺物が、多くの病人に癒やしをもたらすのを、この目で見てきました。　だからこそ、私はあなたたちではなく、これらの聖なる殉教者たちの模範に従いたいのです。そして、あなたたちと共に滅びていくであろう、あなたたちの不敬虔な法律には従いません。

すると、総督は聖人にこう言った。

「お前が取るに足らない拷問で済むなどと思うな。お前の傲慢と虚言のゆえに、お前は重い刑罰に値する。しかし、もしその刑罰を免れたいのなら、キリスト教の信仰を捨て、皇帝の命令に従い

[3472] コメンタリシウス――刑務所の長。

[3473] アカキオス（ギリシャ語のΑχαχιος、χαχος「悪い、邪悪な」と否定の接頭辞aから）は、実際には「悪意のない」という意味である。

、皇帝たちがその慈悲によって統治し、敵に勝利を収めている神々にひれ伏せ。　この法廷に坐す私をも恥じよ。自分をすべての人より賢いなどと思わず、キリストと呼ばれる者に期待するな。その方は、伝えられるところによれば、拷問を受け、法に基づき死刑を宣告されたのだ。

これに対し、聖人は次のように答えた。

「裁判官よ、そう言うのは誤りであり、サタンに目をくらまされて大いなる罪を犯している。なぜなら、王たちが統治し、勝利を収めるのは、あなた方の神々の慈悲によるのではなく、全き善なる我らの神の摂理と御許しによるものだからである。　また、私が拷問を受け、死刑を宣告された人間に希望を置いているとあなたが言うことについては、それが私たちの主イエス・キリスト、神の御子であることを知ってください。御子は、私たち罪深い人間を救うために地上に来られ、真の神であり続けながら人となられました。　私たちの主イエス・キリストは、何とも不思議で言い表せない方法で、私たちの本性を御自身に受け入れてくださいました。それがどのようなものだったか――あなたがあらかじめキリスト者とならなければ、理解することはおろか、聞くことさえできないでしょう。　キリスト・主は、私が述べたように、真の神であり、御言葉（ヨハネ1:1）であり、父と共に存在し、父と共からあるお方として、御心に適う時に、私たちの救いの業を成し遂げ、それによって、時の初めから私たちを妬んできた敵である悪魔の奴隷状態から私たちを解放してくださいました。

この聖人の言葉に対し、軍司令官はこう言った。

「もし王たちがあなたのキリストに敵対しているのなら、なぜ、あなたが言うように全能の神であるキリストは、彼らを滅ぼさないのですか？」

聖人はこう答えました：

――だからこそ、あなたがたは神の限りない慈悲と計り知れない力を知るべきである。神は、あなたがたに侮辱されながらも、あなたがたを殺すことなく、あなたがたギリシャ人が悔い改め、悪魔ではなく神にふさわしい栄光を神に捧げるのを、忍耐強く待ち続けておられるのだ。　さらに、神は、御自身の選ばれたしもべたち、すなわち御心に適う者たちが、すべての人々の目の前でその輝かしい功績を現すことができるようにと、忍耐しておられるのである。もし私たちの神がすぐにあなた方を滅ぼされたならば、あなた方は永遠に滅びてしまい、神のしもべたちは世に現されることもなかっただろう。そして、神の恵みの力も人々に示されることはなかっただろう。　もし主が、私たちの大きな罪に対してその寛容さを示さなかったならば、主はどのようにして栄光をお受けになったでしょうか。　それゆえ、主は今もなお、あなたがたを罰せずに見過ごしておられる。しかし、主の寛容を軽んじ、不義のうちに留まり、罪のない私たちに対して怒りを向けるあなたがたは、もし悔い改めなければ、自らの不義のゆえに滅びを招き、その中に沈んでいくことになるだろう。　しかし、私たちの神の力と威光を熟知し、御名のために苦難を忍耐強く耐え忍ぶ私たちは、神から永遠の至福の命を受けるでしょう。また、自らの過ちに気づき、悔い改めて生活を改める人々にも、神の栄光が明らかにされるでしょう。

殉教者のこの賢明な答えに驚いた軍司令官ヴィヴィアンは、彼にこう尋ねた。

「あなたは書物を学んだのではないか。私に賢明に答えたからだ。人の命は神の御手の中、神の摂理と寛容の中にあり、というあなたの言葉は正しい。」

聖人はこう答えた。

「書物による知恵を学んでいない私が、このようにあなたに答えたという事実から、あなたは全世界を支配する私たちの神の力と恵みを悟るべきでした。なぜなら、神ご自身が御自分のしもべたちの口を通して語られるからです。それこそが、自らを極めて賢明だと自負するあなたがたが驚いていることなのです。」　また、初めから、私たちの主が全宇宙に福音を宣べ伝えようと望まれたとき、主は宣教のために、高貴で裕福な人々や、賢明な哲学者、雄弁な弁論家ではなく、漁師や徴税人、すなわち素朴で貧しい人々を選ばれた。　主がこのようにされたのは、御自身の測り知れない力と、

あらゆる理解を超越する英知が、聖霊ご自身が目に見えない形で教え、導かれた者たちの中に現れるためであった。

その後、軍司令官は聖人にこう言った。

「無駄な長話をやめて、この質問に答えよ。キリスト教徒であるあなたがたに対し、神々に犠牲を捧げるか、あるいは厳しい拷問を受けるかを命じる王の勅令を知っているか。答えよ。王の命令に従うのか。神々に犠牲を捧げるのか、それとも捧げないのか。」

聖人はこう答えた。

「私は以前、私を取り調べたフィルム大佐に対しても、何度も、自分がキリスト教徒であると明言しました。フィルムに言ったことを、あなたにも言います。私はキリスト教徒であり、あなた方の邪悪な悪魔たちにはいかなる生贄も捧げません。」

すると、軍司令官は言った。

「お前は二十五歳にも満たない若さであることから、その若さを憐れみ、また百人隊長という地位を尊重して、私は決してお前を苦しめたくはない。しかし、もしお前が再びその不敬な態度を改めないならば、私はお前を最も残酷な拷問にかけざるを得なくなるだろう。」

聖人はこれに対し、次のように答えた。

「これは狂気ではなく、最も賢明で、神に最も喜ばれる行いです。唯一の真の神、すなわち私の創造主への信仰を捨てないこと――その御心によって、私は今日まで生き延びてきたのです。」

軍司令官は聖人に言った。

「どうして『神は唯一である』などと言うのか？　つい先ほど、あなたは神の子キリストを告白したではないか。しかし、もしあなた方の神に、ご自身と同等の御子がいるというのなら、あなたは二つの神――すなわち、父なる神と子なる神――を認めなければならないはずだ。もしあなた方に二つの神がいるのなら、なぜ今、私にただ一人の神だけを告白したのか？」　今、お前の言葉に矛盾があることから、お前が誤りを犯し、私に嘘をついていることがわかる。

これに対し、聖アカキオスは次のように答えました。

「私は、ポンティウス・ピラトの治世下で十字架につけられた私の主イエス・キリストを信じ、希望を置いています。主が聖霊によって私に悟りを与え、あなたの問いに答えるよう導いてくださることを。なぜなら、あなたが『なぜ我々は二者を挙げながら、ただ唯一の神のみを認めるのか』と問うこの問いは、難解であり、容易に解決できるものではないからです。　しかし、私はあなたにこう言います。私たちキリスト教徒は、父と子だけでなく、聖霊をも真の神として告白しているのです。この三つの名称には三つの位格がありますが、神性は一つであり、力も一つです。私たちは、御言葉と聖霊と共に唯一の神を認めています。なぜなら、神が御言葉と命を与える聖霊なしに存在することはふさわしくないからです。　私の言葉を説明するために、たとえ話を挙げよう。ここに、あなたが「君主」と呼び、私が「人間」と呼ぶ王がいる。その名はマクシミアンであり、彼にはマクセンティウスという息子がいる。この二人は別々だが、その本質は一つ――人間の本質であり、彼らの王国は不可分である。　息子は父のために尊ばれ、父は息子のために栄光を受ける。これと同様に、我々は神についても考える。なぜなら、父、御言葉、聖霊の神性の本質は一つであり、決して変わることはないからである。我々が崇める神は唯一だからである。

総督は聖人に言った。

「何度も言っただろう、本題についてだけ話せと。それなのに、お前はこうした無益な言葉ばかり並べて、話題から逸らしている。これが最後だ。この世を存在させている我らの神々に犠牲を捧げよ。もしこの命令に従わぬなら、もはやお前の不服従を許すつもりはない。」

これに対し、聖人はこう答えた。

「拷問で私を脅そうなどと思うな。この肉体はすでに傷を受ける準備ができている。好きなだけ苦しめてみよ。しかし、私の思いや心の信念を、お前も、王も、お前が崇める悪魔たちも、そして他の誰一人として、決して変えたり、悪へと導いたりすることはできない。」

すると、軍司令官は激怒し、聖人を裸のまま四本の柱に縛り付け、六人の兵士に容赦なく粗い鞭で、まず背中を、次に腹を打ち据えるよう命じた。その際、軍司令官は言った。「彼の神が彼を助けてくれるかどうか、見てみよう。」　聖なる殉教者は長い間このように苦しめられ、彼を打っていた兵士たちは何度か交代し、地面はすでに彼の血で赤く染まっていた。しかし、苦しむ者はただこう言うだけだった。「キリストよ、わが救い主よ！　あなたの謙虚なしもべである私を助けてください！ わが主、わが神よ！ 私を見捨てないでください！」

やがて、軍司令官は、聖なる殉教者が全身に傷を負い、血まみれになっているのを見て、彼にこう言った。

「さあ、今こそ神々に生贄を捧げるか？」

聖人はこう答えた。

「私は悪魔たちに犠牲を捧げるつもりはない。なぜなら、私を助けてくださる私の主イエス・キリストを信じているからだ。　今、私はこの苦しみの中で、以前よりもさらに勇敢で揺るぎない気持ちになっています。これまで、苦しみを受けることを待つことは、多少私を動揺させていました。しかし、苦しみが始まるとすぐに、キリストの力が私を強め、たとえさらに大きく、さらに過酷な苦しみであっても、それに耐える覚悟が自分の中に湧き上がりました。なぜなら、私は　を固く信じ、私の主であり神である方に希望を置いているからです。　しかし、知っておいてほしい。あなたが私に苦しみを与えるほど、私にとっての益は大きくなる。あなたが私をどれほど激しい苦しみへと追いやろうとも、それによってあなたは神から私のために、より大きな恵みを請い求めてくれることになるのだ。

一方、軍司令官は聖人のこの言葉に激怒し、錫の板で彼の口を打つよう命じた。聖人の美しい頬が拷問者たちによって傷つけられていると、軍司令官は殉教者にこう言った。

「神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前のために用意されている、さらに過酷な苦しみから逃れられるだろう。」聖人は彼にこう答えた。

「私は、これから待ち受ける苦しみについても、すでに経験した苦しみについても、同じように気にしていない。」

すると、軍司令官は言った。

「お前は戦士であり、しかも学問を修めていないというのに、どうしてこれほど理路整然と答えることができるのか？」

聖なる殉教者はこう答えた。

「聖霊は御自分のしもべたちに忍耐を与え、裁きの場で答えるのを助けてくださいます。なぜなら、私たちの救い主である主イエス・キリストは、弟子たちにこう言われたからです。『あなたがたが総督や役人たちに引き渡される時、*何を、どのように話すべきか心配してはならない。その時には……あなたがたが話すのではなく、あなたがたの父の御霊があなたがたの中で語られるからである*』（マタイ10:19–20）。

すると、アントニンという解説者が聖人にこう言った。

「この忌まわしい者よ、王の命令に背き、そのために拷問を受けているというのに、お前のその饒舌が一体何の役に立つというのか。しかし、これからお前はさらに激しい拷問を受けることになる。そうなれば、お前は間違いなく王の命令に従うことになるだろう。」

聖人は彼にこう答えた。

「私から離れなさい。むしろ、あなた自身を戒めるべきだ。私が多くの拷問を受けたにもかかわらず、総督の命令に従わなかったのだから、どうしてあなたに従うだろうか？」

その後、軍司令官は、殉教者をフラキアのペリンファの牢獄に閉じ込めるよう命じた[3474]。聖なる殉教者はここで七日間を過ごした。

聖アカキオスが牢獄に囚われていた頃、彼は主を喜び祝し、主の聖なる御名のゆえに苦難を受けることを許してくださったことに感謝していた。そんな時、軍司令官ヴィヴィアンのもとに、フラキアの総督フラッキンからの書簡が届いた。　その書簡には、ヴィヴィアンに対し、手元のすべての囚人を連れてビザンティウムへ向かうよう命じられていた。軍司令官ヴィヴィアンは直ちに出発し、彼と共にビザンティウムへ向かったのは、いくつかの罪で牢獄に投獄されていた他の数名の囚人と共に歩んでいた聖アカキウスでもあった。　聖殉教者は、道中の疲労に加え、傷や鉄の足枷、飢え、渇き、そして何よりも長期間にわたる急ぎの旅路によって、ひどく衰弱していた。とりわけ、聖人を護送する兵士たちは容赦がなく、聖人に早く歩くよう促すために頻繁に暴行を加えていたからである。これらすべての苦しみの中で、聖人は生き延びられるとは期待しておらず、まもなく息を引き取るだろうと考えていた。そのため、彼は自分を連行する兵士たちに、神に祈ることができるようしばらく立ち止まってほしいと長く懇願したが、聖人の願いは聞き入れられなかった。　やがて一行がある場所で夜を明かすために立ち止まったとき、聖人は天を仰ぎ、すぐにこう祈り始めた。「神よ、御慈悲により、あなたを愛するすべての人々に御慈悲を示してくださるあなたに、栄光あれ！罪深い私をこの試練へと招いてくださったあなたに、栄光あれ！　主イエス・キリストよ、私たちの肉の弱さを知り、苦難に耐える力を私に与えてくださったあなたに、栄光がありますように！　今、主よ、私が四方八方からこれほど多くの苦しみに取り囲まれ、私の魂さえも、肉との結びつきから解き放たれたいと願っているように思われるこの時、あなたの聖なる御使いを遣わし、私の傷を癒やし、私の苦しみを和らげてくださいますように。　あるいは、私を苦しめる者たちに、一刻も早く私を死に追いやるよう命じてください。そうすれば、私はより早く、私の主である御許へと移ることができるでしょう」。

聖人がこのように神に祈っていたその時、突然その場所に雲が現れ、雲の中から声が聞こえてきた。「アカキイよ！ 勇気を出し、強くあれ！」

その声は、そこにいた者たち――兵士も囚人も――全員の耳に届いた。彼らは驚きながら、互いにこう語り合った。

「まさか、雲も人間と同じように話すことができるのだろうか？　今、私たちが聞いたようなことを、誰が聞いたことがあるだろうか？」

そして、皆、目の前の出来事に驚嘆した。　囚人の多くは、その声を聞いて、神の御子である主イエス・キリストを信じ、聖アカキイの足元にひれ伏し、キリスト教の信仰の真理を教えてくれるよう熱心に懇願した。キリストの聖殉教者アカキイは、彼らと共に歩きながら、次のように語りかけた。

「これまで私は書物ではなく、軍人としての務めに励んできましたが、私は司祭の家系に生まれ、司祭の家で育てられました。　私は司祭たちから、神が楽園から追放された人間を救い、地獄から解放しようと望まれ、御自身の永遠の御言葉である御子をこの世に遣わされたと聞いたことを覚えている。　そして、神の御子は、この世に来られ、至聖にして至清き聖母マリアから肉体をとり、人の姿となられました；　そして、十字架の木によって、神の戒めに背いたアダムの罪を贖うために、十字架の死を耐え忍ばれました。裁きを受けた人間に救いを与えるため、御自身、十字架上の自発的な苦しみによって、神の正義に対する私たちの負債を支払われたのです。　十字架に釘付けにされた

[3474] トラキア――マケドニアの北東に位置していたローマ帝国の地域。現在、トラキアはルメリアという名称で、ヨーロッパ側のトルコの一部となっている。

とき、神の御子はそれによって私たちの罪の記録を無効にし、御自身の死によって私たちの死に打ち勝ち、地獄を捕らえ、悪魔のすべての力を打ち負かし、無力化されました。　そして、神の御子がすべての悪霊を打ち倒し、銅の門を砕き、鉄の鎖を[3475]、三日目に死からよみがえり、それによって全人類に、皆がよみがえり、来たるべき世で永遠に生きる機会を与えられた。この目に見える世界は取るに足らないものであり、わずかな間しか存在しない。

殉教者のこうした言葉やそれに類する言葉を聞いて、聖人に同行していた囚人たちは、喜びをもってキリスト教の信仰に改宗した。

夜が更けると、一行は近くの村で宿泊するために立ち寄った。そこで囚人たちは真夜中に不思議な幻を見ました。すなわち、彼らは、明るい服（それは聖なる天使たちでした）を身にまとい、まるで軍人のような姿をした数人の若者たちが、聖アカキウスと語り合っているのを見たのです。　囚人たちはこれを見て、アカキオスの親族や友人が（拷問者を恐れて）夜中に彼を訪ねてきたのだと思った。

翌朝、一行は旅立った。その日、皆は猛スピードで進んだため、夕方までにビザンティウムに到着し、その夜は皆で一つの家に泊まることになった。そしてその夜、囚人たちは前夜と同じように、聖アカキウスと語り合っていたあの若者たちを再び目にした。　その際、囚人たちは、これらの輝く若者たちが温かい水で殉教者の傷を洗い、癒やしていることに気づいた。これを見て、囚人たちは心の中でこう考えた。「まことに、この幻は神からのものだ。なぜなら、昨夜聖人のもとを訪れたのは人間ではなく天使たちであり、今夜も聖なる天使たちが彼を訪ねてきたのだから」。

朝になると、彼らは皆、牢獄へと連行された。一方、聖アカキオスは、軍司令官の命令により、他の者たちとは別に、牢獄の奥の区画に閉じ込められた。彼は鉄の鎖で縛られ、足枷をはめられていた。　彼のもとには誰も面会を許されず、飲み物も食べ物も与えられなかった。拷問者たちは、飢えと渇き、そして激しい苦痛によって、彼にキリストを否定させ、彼らの命令――偶像に拝礼すること――に従わせようとしたからである。他のすべての囚人たちは、牢獄の外側の区画に収容されていた。

夜が更ける前に、囚人たちは再び同じ不思議な現象を目にする機会に恵まれた。すなわち、彼らは牢獄の内側の区画で明るい光が輝いているのを見たのである。それが何なのか確かめようと窓に近づくと、数人の輝くような姿の男たちが見えた。　彼らは殉教者の足枷を外し、その傷を癒やし、雪のように白い不思議な食事と飲み物を差し出した。

これが毎晩続いたため、囚人たちはそのことを牢屋の看守に報告した。看守は夜、窓に近づいてみると、同じ光景を目にした。しかし、看守が牢屋の奥の部屋に入ると、足枷をはめられたままの聖なる殉教者以外、誰もいなかった。この一連の出来事は、看守を大きな恐怖に陥れた。

囚人たちがビザンティウムに到着してから七日が過ぎたとき、軍司令官ヴィヴィアンは裁判の席に着き、聖殉教者アカキオスを尋問のために呼び出した。　キリストの殉教者が身体は健やかで、顔には喜びの色が浮かんでいるのを見て、ヴィヴィアンは大きな驚きを覚えた。彼は、傷や足枷、飢えや渇き、そして長旅の疲れで病み衰えた殉教者の姿を見るものと思っていたからである。　ヴィヴィアンは、兵士たちが聖人の苦しみを和らげているのだと考え、彼らに激しく怒りをぶつけ、こう言った。

「私は、この男を牢獄の奥の部屋に閉じ込め、足枷と鉄の鎖で縛り上げ、食べ物も飲み物も一切与えないよう命じたではないか。それなのに、お前たちは彼を自由にさせ、傷を治すのを手助けした。そして今、私は彼が以前よりもさらに健康で、顔色も良くなっているのを見ている。」

これに対し、アントニン・コメンタリシスはこう答えた。

[3475] 教会歌の一節。

「将軍、お命じになった通り、すべて実行いたしました。ペリンファからこの町に至るまで、我々は彼を重い鉄の足枷で連行しました。あなたご自身でそれを持ち上げてみれば、どれほど重いかがわかるでしょう。この町では、我々は彼を牢獄の最も奥深く、最も狭い区画に閉じ込め、兵士たちは誰も彼に食べ物も飲み物も一切与えませんでした。」　牢番に尋ねてみれば、すべてがご命令通りだったかどうかがわかるでしょう。

直ちに軍司令官は、牢屋の看守を呼び出すよう命じた。看守が軍司令官の前に現れると、軍司令官は怒りを込めて彼に言った。

「この忌々しい者め、なぜ私の命令に従わず、アカキウスに食事を与え、傷の手当てをさせたのか。その結果、彼は今や体力が回復し、戦いに十分耐えられるほどになっているではないか。」

それに対し、聖アカキウスはこう述べた。

「この力と強さは、天から、私の傷を癒やし、私を健康にしてくださった救い主イエス・キリストが与えてくださったものです。」

すると、軍司令官は怒りを込めて言った。

「彼の顔を殴り、口を砕け。そうすれば、質問されていない時に口を開くことはないだろう。」

その後、家来たちは聖人を殴り始めた。すると、軍司令官は牢屋の看守に言った。

「お前、この忌々しい者よ、私にどう答えるつもりだ？」

すると、看守はこう答えた。

「あなたの権威にかけて誓います。あなたが私に命じたことはすべて、私は実行しました。」私は彼を非常に厳しく監視し、あらゆる手段で彼を苦しめてきた。しかし、彼に食事を与え、手当てをしてくれた者たちがいた。これは牢獄に囚われている者たち全員が知っていることだ。彼らに尋ねてみよ。もしそれとは異なる話を聞いたら――ここに私の首がある。私を好きに扱ってくれ。　私たちには、しばしば何人かの兵士たちが彼のところへやって来るように見えた。そのうちの一人は彼の足枷を外し、別の者は彼の傷を洗い清めて癒やし、そして最後に、三番目の者は彼に食べ物や飲み物を運び、親しげに彼と語り合っていた。　これらすべてについて、ペリンフから彼と共にここに連行されてきた囚人たちが私に話してくれた。彼らは、それが道中でも、ここ牢獄の中でもあったと語った。しかし、私は彼らの言葉を信じず、自らあの明るい姿の男たちをこの目で見たいと思った。そして実際、私は彼らから伝えられたことをすべて、自分の目で確かめたのである。　そして、私が突然扉を開けて牢屋の奥の部屋に入り、アカキヤに、彼を訪ねてきた者たちが誰なのか、どこから来たのか、そしてどのようにして施錠された扉を通り抜けたのかを尋ねようとしたとき――そこには、足枷と鉄の足鎖で縛られた囚人本人以外、誰もいなかった。　時には彼が神に祈っているところを見かけ、時には眠っているところを見かけた。

牢屋の看守の話を聞き終えると、軍司令官は彼にこう言った。

「この忌々しい奴め、お前はきっとアカキイの親族から金を受け取り、彼らを食事や飲み物、薬を持って彼のもとへ通していたに違いない。」

そう言い放つやいなや、軍司令官は看守を鉄の棒で激しく殴打するよう命じた。

看守は殴打を受けながら、こう叫んだ。

「お願いです、軍司令官。まずは事の経緯を徹底的に調べてください。もし私が話した通りでなかったことが判明したら、その時は私を殺してください。」

これに対し、総督は言った。

「それなら、あの男は魔術師であり、呪術師だ。」

すると、番人はこう答えた。

「私はただ、自分の目で見たことだけを話したのです。あの男が魔術師かどうかは、私にはわかりません。」

その後、軍司令官は牢番をさらに激しく殴打するよう命じた。こうして、この牢番はキリストの殉教者のために不当な苦しみを受けたのである。　聖なる殉教者アカキウスは、この様子を見て、口や頬が打ち砕かれていたにもかかわらず、軍司令官の愚かさを嘲笑した。これを見た軍司令官はさらに激怒し、殉教者に怒りを込めて言った。

「お前は、自分の魔術で助かろうとして、我々を嘲笑いに来たのか？」

聖人はこう答えた：

–私があなたを嘲り、あなたの滅びを喜んでいるなどと思わないでください。いいえ、私はあなたがたの永遠の滅びを思うと、心を痛め、苦しんでいるのです。それなのに、あなたがた自身こそ、私たちを嘲り、侮っているのです。なぜなら、天と地の創造主であり、万物の源である真の神を見捨て、石や木に神としての崇敬を捧げているからです。

この言葉を聞いた後、軍司令官は十人の兵士に、殉教者の背中と腹を樫の棒で打つよう命じた。殉教者は、その殴打を忍耐強く耐えながら、こう言った。「主イエス・キリストよ！　あなたのしもべである私を助けてください！」すると、天から聖人を力づける声が聞こえてきた。その瞬間、殴打していた兵士たちはまるで凍りついたかのように、殉教者に向かって手を上げることができなくなってしまった。　そこで、軍司令官は、どうすべきか分からず、その時点でビザンティウムに到着していたイゲモンに聖人を送ることに決め、イゲモンに次のような書簡を書いた。「親愛なる、また尊厳ある裁判官フラッキヌス、フラキアのイゲモンへ、軍司令官ヴィヴィアンより――ご機嫌よう。私は、不敬虔なキリスト教の信仰の擁護者であるアカキオスを、様々な拷問にかけてきた。彼は、皇帝の命令に従わなかったため、二十日前にマルティシウス連隊の長フィルムによって私の元へ送られてきたのである。　私はどうしても彼に皇帝の勅令に従わせることができなかった。貴殿ならこの男をさらに厳しく罰することができるだろうから、私は彼を、コメンタリシオンが作成した彼の行状記録とともに、貴殿のもとへ送り送ることにした。」

イゲモンはヴィヴィアンの書簡を読み、殉教者を牢獄に閉じ込めるよう命じたが、足枷もかけず、厳重な警備も付けなかった。　彼がそうしたのは、キリスト教徒の妻がいたからである。妻は涙ながらに何度も懇願し、尋問のために連れてこられるキリスト教徒をあまり長く苦しめるのではなく、もし釈放できないのであれば、一刻も早く死刑に処すべきだと彼を説得したのである。

それから五日後、イゲモンは殉教者を呼び出して尋問を行うと、その前に、殉教者のすべての行い――すなわち、軍司令官ヴィヴィアンから送られてきた彼の苦難の記録――を読み上げるよう命じた。　イゲモンは、拷問の残酷さにも、聖アカキオスの勇気にも大いに驚き、ヴィヴィアンが戦士という身分の人間をこれほど長く苦しめ、すぐに処刑しなかったことを激しく非難した。　しかし、聖アカキウスがキリストの御名を告白することから決して引き離すことはできないと悟ると、イゲモンは（ビザンティウムの）城壁の外で彼の首を刎ねるよう命じた。聖なる殉教者が拷問の場へと連行されたとき、彼は神に向かってこう叫んだ。

「いのちの源であられるキリスト、神の御子よ、罪深い私に対してこれほどまでに慈しみ深く、憐れみ深くあられ、私に殉教の業を成し遂げる栄誉を授けてくださったことを、いかにあなたを賛美したいことか！」

聖人が斬首の場に着き、兵士たちに祈りの時間を求めたとき、ひざまずいてこう言った。

「神よ、あなたに栄光あれ！　あなたには絶え間ない賛美を捧げるべきです。なぜなら、あなたは罪にまみれた私たち人間の中で栄光をお示しになるからです。そして、あなたが私たちに御慈悲を現わされるほど、私たちの罪を赦してくださるほど、あなたの慈愛と計り知れない憐れみの栄光は、より強く、より鮮やかに輝きます。　神よ、あなたの聖なる御名が祝福されますように。なぜなら、あなたは、私のような不適格な者に、キリストの殉教者と呼ばれるという、これほど偉大な栄誉を授けてくださったからです。そして、この偉大な栄誉を、あなたは私のいかなる功績によってもなく、ただあなたの言い表せないほどの慈愛と、言葉に尽くせないほどの憐れみゆえにのみ、私に与えて

くださったのです。　主なるイスラエルの聖なる神よ、御独り子と聖霊と共に、あなたを賛美し、称えます。なぜなら、今、そして常に、世々限りなく、あなたに栄光と誉れと礼拝が捧げられるべきだからです。アーメン。

そう言い終えると、聖人は剣の下に頭を垂れ、斬り殺された[3476]。

こうして、聖なる殉教者アカキオスは、キリストのためにその苦難を終えた。彼の尊い遺体は、彼が斬り殺されたまさにその場所で、キリスト教徒たちによって尊厳をもって埋葬された。その場所は「スタヴリオン」と呼ばれていた。　これらすべては、前述の通り、異教徒の間ではマクシミアヌスの治世に、キリスト教徒の間では、永遠に栄光と誉れと礼拝が捧げられる我らの主イエス・キリストの治世に起こった。アーメン。

天に現れた主の尊き命を与える十字架の御しるしの記念

記念日：5月7日

最初のキリスト教徒であり、信仰深く敬虔な皇帝コンスタンティヌス大帝の崩御後、その王位を継いだのは息子のコンスタンティウス[3477]であった。彼は、神の御子[3478]を冒涜したアリウス派という邪悪な異端に傾いた。　その時、邪悪な異端者たちを恥じ入らせ、不信仰者を確信させ、正信者たちを確固たるものにするため、聖都エルサレムに驚くべきしるしが現れた。　聖霊降臨祭の期間中、5月7日の第3時[3479]、天に主の尊き十字架の姿が現れ、太陽の光よりもはるかに強い、言葉では言い表せないほどの光を放ち、それを見た民衆は皆、大きな恐怖と驚愕に打ちのめされた。　この十字架の御徴は、我らの主が十字架につけられた聖なるゴルゴタの山[3480]の上空から始まり、ゴルゴタから十五スタディオン離れたエレオン山[3481]にまで達し、十字架の御徴の幅はその長さに等しかった。

[3476] 聖殉教者の死は303年に訪れた。その聖遺骨は、コンスタンティヌス大帝によって埋葬地であるスタヴリオン（またはスタヴロドロミオン）に建立された、彼にちなんで名付けられた教会に長きにわたり安置されていた。　聖アカキオスの聖遺骨は、偶像破壊運動の時代までここに安置されていたが、その際、キリスト教徒たちは不敬虔な迫害者たちからの迫害から聖遺骨を守るため、南イタリアの都市スキラクスへと移した。

[3477] コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスは、東方、アジア、エジプトを領有した。357年、兄コンスタンスを殺害したマグネンティウスを打ち破り、ローマ帝国全土を自らの支配下に統一した。彼は異教の神殿を破壊するか、キリスト教徒に譲り渡して教会へと改築させた。　異教の礼拝を禁じる法律を数回にわたり公布した。しかし、コンスタンティウスはアリウス派の異端に同情を示したことで、当時の宗教的対立を著しく激化させた。彼は正統派の司教たちを迫害し、司教座から追放し、さらには投獄さえ行った。彼の治世下では、アリウス派が国家の要職を占めていた。　コンスタンティウスは361年、ガリアで軍によって皇帝と宣言された従兄弟のユリアヌスに対する遠征の最中に死去した。彼は自らユリアヌスをガリアの総司令官に任命していたのである。ナジアンゾスのグレゴリウスは、コンスタンティウスが死の直前に正統派に対する迫害を悔い改めたと伝えている。

[3478] アリウス派異端の始祖は、アレクサンドリアの長老アリウスであった。彼は、神の御子が父と同質であることを否定し、イエス・キリストを被造物として崇め、全能、全知などの神聖な完全性を彼に認めなかった。　アリウスの異端は、第1回（325年）および第2回（381年）の全地公会議において断固として非難され、神の御子と父との平等が確立された。これは、第1回全地公会議の教父たちによって制定された『使徒信条』の第2条において、すべてのキリスト教徒が告白しているものである。　5世紀には、アリウス派はローマ帝国においてほとんど信者を失っていたが、ゲルマニアのゴート族、ブルグンド族、ヴァンダル族、ロンゴバルド族の間で再興し、7世紀まで存続した。

[3479] 私たちの暦では午前9時頃である。――この出来事自体は351年にさかのぼる。この年、復活祭は3月31日、それに続く聖霊降臨祭は5月19日であった。5月7日は、聖霊降臨祭前の最後の週の火曜日に当たる。

[3480] ゴルゴタはかつてエルサレムの外にあった（マタイ27:32–33、ヨハネ19:17–41、ヘブライ13:12）が、現在は聖都の北西側に位置している。　その名称（ゴルゴタはヘブライ語で「頭蓋骨」「額」を意味する（ルカ13:33））は、おそらく頭蓋骨に似た形状に由来する。伝承によれば、ここにアダムが埋葬されたとされる。

[3481] エレオン山とオリーブ山は、エルサレムの東に位置するユダヤの山々である（エゼキエル書11:23）。オリーブ山は、その山に数多く生えていたオリーブの木にちなんでその名が付けられた。　主イエス・キリストは、この世におられた間

その美しさは、色とりどりの虹を彷彿とさせるほどであり、あまりにも壮麗であったため、すべての人の視線を惹きつけた。そして、手元に何らかの用事があった者も、家の中にいた者も、皆、手元の用事をすべて放り出し、家から飛び出して、畏敬の念と畏怖の心をもって、この驚くべきしるしをじっと見つめた。　その後、この神聖な光景に畏敬と喜びに満たされたエルサレムの民の膨大な群衆は、深い感動と心からの温もりを胸に、聖なる教会へと急いだ。老いも若きも、　男女、さらには乳飲み子連れの者たち、また沈黙を守っていた未婚の乙女たちまでもが――彼らもまた、それぞれの住まいを出て、同じ場所へと駆けつけ、総じてあらゆる年齢や身分のエルサレムの住民、旅人や異邦人、正教会のキリスト教徒や異教徒までもが。　そして、彼ら全員が心を一つにして、私たちの主イエス・キリスト、神の独り子、真の神から出た真の神、偉大な奇跡の御業をなされる方を、声高らかに賛美した。

その時、キリストの神性を信じない異端者たち、敵対者たち、そして冒涜者たちは、十字架の現れの中に、主キリストのこれほど偉大で神聖な栄光と力を目の当たりにし、　その現実そのものによって、キリスト教の信仰こそが正しく、真実で、敬虔なものであり、信じる者に人間の外的な知恵から学んだ言葉ではなく、聖霊の啓示と恵みに基づき、天のしるしと奇跡によって証しされていることを、その時に確信した。　この語られている十字架のしるしの奇跡的な現れについて、エルサレムのキリル総主教[3482] はコンスタンティウス王への書簡で報告し、彼に正統な教えに立ち返るよう勧めた。 一方、エルミウス・ソゾメン[3483] は、この天に現れた聖なる十字架[3484] の現象を通じて、ユダヤ人やギリシア人の非常に多くが真の信仰に導かれ、悔い改めをもって我らの神キリストのもとへ歩み寄り、聖なる洗礼を受けたと証言している。　そして、すべての人が敬虔に、父と聖霊と同一の本質を持ち、共に存在される私たちの神、キリストを賛美した。　私たちもまた、十字架によって現された、その測り知れない御力を告白し、感謝の賛美をもって私たちの主なる神を称え、御足の御座である聖なる十字架にひれ伏し、主の憐れみを懇願して、キリストが、その恐るべき再臨の際、その時現れることとなる *「人の子のしるし」*（マタイ24:30）、 聖なる十字架を、救いの喜びと希望のうちに仰ぎ見させてくださいますように。そして、かつて賢明な強盗に楽園を開かれたように（ルカ23:40–43）、その十字架をあたかも鍵として、天の御国の門を私たちに開いてくださり、御自身の祝福された羊たちと共に、私たちを永遠に御国に迎え入れてくださいますように（マタイ25:33–34）。 アーメン。

、弟子たちと共にしばしばこの山を訪れました（ヨハネ8:1、18:2）。　オリーブ山の西側の斜面にはゲッセマネの園があり、主は受難の前夜にそこで祈りを捧げ、またそこでユダに裏切られました（マタイ26:36–57；マルコ14:26–53；　ルカ22:39–54；ヨハネ18:1–13）。山の南東斜面にはベタニヤという村があり、主はそこからエルサレムへの荘厳な入城をなされた（マタイ21:21；　ルカ14:29）。伝承によれば、主はオリーブ山から天に昇られた（使徒1:12）。2世紀、コンスタンティヌス大帝の母によってオリーブ山にキリスト教の教会が建立されたが、後にトルコ人によってモスクへと改築された。

[3482] 聖キリル（エルサレム大司教）は、350年から387年まで総主教を務めた。アリウス派の異端との闘いで知られている。その記念日は3月18日である。

[3483] ソゾメンは5世紀の教会史家である。彼の『教会史』は323年から439年までの期間を網羅している（ただし、現存するのは423年までの記述のみである）。ソゾメンはキリスト教の最初の3世紀の歴史も著したが、残念ながらそれは現存していない。– ソゾメンは、この驚くべき奇跡について、『教会史』第4巻第5章で言及している。

[3484] 天に現れた十字架は、教会にとって困難な時代――アリウス派の支配――を予兆していた。 アリウス派は、コンスタンティウス帝のもとでちょうど10年間（361年）権力の座に留まり、その後、ユリアヌス帝の背教（361～363年）へと移り変わった。ユリアヌス帝の後、皇帝ヴァレント（364～378年）が14年間にわたりアリウス派を庇護した。

十字架のトロパリオ、第8調：

今や、あなたの十字架の御姿は太陽よりもなお輝き、あなたはそれを聖なる山からゴルゴタの丘に至るまで伸ばされました。そして、その中にあなたの救い、すなわち堅固な砦を明らかにされ、これによって私たちの忠実な王たちをも強められました。どうか、聖母マリアの祈りによって、キリストよ、神よ、彼らをこの世で救い、また私たちをも救ってください。

コンダク、第4調：

閉じられていた天が開かれ、天にはまばゆい光が輝き、地上には至聖なる十字架が輝きました。その輝きの御業を受け入れ、私たちは沈むことのない光へと導かれ、戦いの場において、この十字架を平和の武器として、無敵の勝利を手にします。

5月21日

5月8日（旧暦）

尊き父アルセニオス大聖人の生涯

記念日5月8日

聖アルセニオスは、敬虔なキリスト教徒の両親のもと、ローマで生まれた。両親は彼を神への畏れをもって育て、学問を授けた。アルセニオスは徳高い人物であるだけでなく、極めて賢明でもあった。彼はあらゆる修辞家や哲学者の著作を研究し、ギリシャ語と　ラテン語の両方に精通していた。 しかし、彼は世俗の虚しい生活を捨て、ギリシャの学問を軽んじ、 聖使徒ヤコブが称賛した真の知恵、すなわち*「清く、平和で、謙虚」*であり、従順で、*「慈愛と善き実」*に満ちた（ヤコブ3:17）その知恵を求めて、神への奉仕に身を捧げ、聖職者の列に加わったのである。　アルセニイは、偉大なるローマ教会の助祭の位を受け、貞潔な生活を送り、自らを聖霊、すなわちすべてを聖化する御霊のふさわしい住まいとするよう努めた。

当時、ローマ帝国の東部はテオドシウス大帝[3485] が、西部はグラティアヌス[3486] が統治していた。テオドシウスにはアルカディウスとホノリウスという二人の息子がおり、彼は彼らに、人間的な知恵だけでなく、神聖な知恵をも教えてくれるような教師を探していた。　テオドシウスは、子供たちに哲学やその他のギリシャの学問だけでなく、キリスト教徒として徳高く神に喜ばれる生き方も学ばせたいと考えていた。　この目的のために、テオドシウスは帝国全土でそのような人物を探すよう命じたが、見つけることはできなかった。というのも、派遣された者たちは、知性豊かで学識のある人々を多く見つけはしたものの、彼らは神に喜ばれる生活を送っておらず、逆に、敬虔な生活を送っているが、世俗の学問については全く教育を受けていない人々にも出会ったからである。　そのため、テオドシウスは西ローマ皇帝グラティアヌスに書簡を送り、子供たちの教育のために、前述のような人物が必要であることを伝えざるを得なかった。グラティアヌスは、この件について教皇ダマスス[3487] と相談した上で、次のように述べた。「テオドシウス皇帝が求めているような、高潔で賢明な人物を我が王国で見つけられなければ、我が王国にとって恥となるだろう。我々は、彼の息子たちに哲

[3485] テオドシウスは、379年から395年までローマ帝国の東部を、383年から395年まで西部を統治した。
[3486] グラティアヌスは375年から383年まで在位した。
[3487] ダマス1世は、366年から384年まで教皇の座に就いた。

学を教え、言葉だけでなく、自らの高潔な生活の模範によって神への畏敬の念を説くことのできる人物を見つけなければならない。」

ローマ全土をくまなく探したものの、彼らは、アルセニウスという助祭ほど賢明で高潔な人物を見つけることはできなかった。彼は高潔な生活を送り、その功績において多くの人々を凌駕しており、すでに若くはなかった。彼を呼び寄せ、東方の皇帝の意向を伝え、アルセニウスに皇帝のもとへ向かうよう命じた。　しかし、アルセニウスはあらゆる手段で辞退し、自分はすでに長い間、世俗の学問を捨て、聖職者として神に仕えることに身を捧げることを決心したと述べた。また、アルセニウスは、教会と祭壇への奉仕に全力を注ぐことを決心したため、修辞家たちの言葉などはずっと前に忘れてしまったとも語った。

しかし、アルセニウスが断れば断るほど、皇帝と教皇は、その依頼がキリスト教世界全体と神の教会にとって有益な事柄であるとして、彼らの願いを叶えるよう彼を強く説得した。　彼らはアルセニウスに、王子の子供たちに書物による知恵だけでなく、キリスト教の敬虔さも教えなければならないと語った。そうすることで、彼らが異教の伝説を信じることなく、キリスト教の信仰を守り、広めるようになるためである。

そこでアルセニオスは、本意に反しながらも皇帝と教皇の命令に従った。彼らは彼をコンスタンティノープルのテオドシウス皇帝のもとへ、大いなる栄誉をもって送り出した。

尊者アルセニイがコンスタンティノープルに到着すると、テオドシウス皇帝から非常に温かく迎えられた。彼を見たテオドシウスは、その外見からして、彼が知恵と神学に満ちた神の人であることを見抜き、その到来を大いに喜んだ。　神に感謝を捧げた後、テオドシウスは自分の子供たち、アルカディウスとゴノリウスをアルセニオスの元へ連れて行き、彼らを彼に託してこう言った。

「これからは、あなたが私よりも彼らにとっての父親となるだろう。なぜなら、彼らを産むことよりも、育てることの方が難しいからだ。私は彼らをあなたとあなたの英知に託す。私の願い通りに彼らを育ててほしい。彼らに美徳を身につけさせ、英知を授けてほしい。彼らの霊的な父として、彼らが若者の様々な誘惑を避けるよう、気を配ってほしい。　これらすべてに対して、あなたは神から報いを受けるだろう。誠実なアルセニイよ！ ああ、もしあなたが彼らを敬虔さと徳ある生活の中で育て上げてくれるなら！ 私はどれほどそれを喜び、神に感謝することか！　私はこれらすべてを、息子たちの面前であなたに語っている。彼ら自身がこれらすべてを耳にし、目にするためである。彼らが王の息子たちであるということに目を向けるな。彼らを、あなたへの服従と従順の精神で育ててほしい。なぜなら、私は彼らが、あなたを父であり師として、あらゆることに従い、あなたの子供や弟子としてあなたの言葉に耳を傾けることを望んでいるからだ。

フェオドシウスは自分の子供たちをアルセニウスに託し、宮殿の近くに彼らのための学校を建設するよう命じた。それは、自分自身が気軽に訪れて、彼らの教育や生活を見守れるようにするためであった。　また、皇帝は至福のアルセニウスに対し、多大な敬意を表した。彼を自身の顧問の一員として迎え入れ、子供たちの父であるだけでなく、自身の父とも呼ぶよう命じたため、アルセニウスは皆から「皇帝とその子供たちの父」と呼ばれた。　さらに、聖アルセニウスが、王子のアルカディウスとゴノリウスの洗礼の代父を務めたという伝承もある。というのも、両者とも乳児期ではなく、青年期になってから洗礼を受けたからである。

王子の教育を自らの手中に収めたアルセニイは、彼らの育成と教育に熱心に尽力した。彼は彼らと共にギリシャ語やラテン語の書物を学び、同時に聖書を解説して敬虔な生活を送るよう指導した。　とりわけアルセニオスは、主が彼らに国家の統治を委ねられるようになった際に、どのように振る舞うべきかを教えた。彼は、彼らが王冠によってではなく、敬虔な善行によって自らを飾らなければならないと語った；　――たとえ不敬虔で不法な者たち、すなわちすべての異教の皇帝たちが統治していたとしても、キリスト教の王たちは徳のある者でなければならず、神に喜ばれ、人々に善を行うべきであり、そうしてこそ、彼らの記憶が代々受け継がれていくのだ。

こうしてアルカディウスとゴノリウスを教え諭す一方で、アルセニウスは彼らを王の息子たちとしてあらゆる敬意を払っていた。そのため、彼は通常、彼らに玉座に座るよう勧め、自身は立ったまま彼らと語り合っていた。

ある時、フェオドシウスが授業の最中に予期せず彼らの元を訪れた。自分の息子たちが座っているのに対し、彼らの教師であるアルセニイが彼らの前に立っているのを見て、フェオドシウスは深く悲しみ、アルセニイにこう言った。

「私がそんな命令をしたか？　私の息子たちを弟子であり、自分の子供たちとして扱い、彼らが王の子供であるということに気を配らないように、と私はあなたに言わなかったか？」

すると、至福のアルセニイは謙虚にフェオドシイにこう答えた。

「王よ！　あらゆる物事にはそのふさわしい務めがあります。若さには学びが必要であり、王としての威厳には敬意がふさわしいのです。」

この言葉を聞いて、王はさらに憤り、こう言った。

「つまり、お前は彼らを王だと見なしているのか？」

そう言うと、テオドシウスは息子たちから王の威厳の象徴を取り上げ、アルセニウスを無理やり王座に座らせ、息子たちには自分の前に立たせ、こう言った。

「もし彼らが神を畏れ、その戒めを守り、徳ある生活をもって神に喜ばれるようになれば、天の王は、彼らがそれにふさわしい者であるならば、彼らを地上の王として立てられるだろう。しかし、もし彼らが邪悪で、王位にふさわしくない者であるならば、彼らには王となることなどないほうがましだ。　私は神に、彼らが若いうちにこの世から召される方が、悪の中に育ち、自らの魂のみならず他の人々の魂をも破滅へと導くような者になることを許すよりはましであると、祈っている。

そう言うと、王は立ち去った。

アルセニイは心の中で王の言葉を称賛し、それ以来、王の命令に従って行動した。すなわち、王の息子たちが自分の前に立っている間、自分は座ったまま彼らに教えを説いた。

しかし、アルセニウスを包む栄光が大きくなればなるほど、彼はますます心を痛めた。なぜなら、彼の心は栄光にも、富にも、世の虚しい称賛にも向いていなかったからである。心の奥底では、彼は謙虚な修道生活の中で、沈黙と貧しさのうちに神に仕えることを強く望んでいた。　それゆえ、アルセニイは主に向かって熱心に祈り始め、王宮での生活から解放され、荒野での修道生活を送れるよう願った。

ある時、アルセニイはアルカディイにある過ちを目撃した。彼に腹を立てたアルセニイは、彼を鞭で打ち、しかも非常に激しく打ちつけたため、アルカディイの体には鞭の跡が残り、彼は死ぬまでその懲罰を忘れなかった。　これらすべては神の御計画によるものであり、それによってアルセニイをこの世俗の生活から解放し、尊者である彼が切望していた荒野での修道生活を送る機会を与えるためであった。　アルカディは、師に対する怒りを心に秘め、成人すると、どうすればアルセニウスを殺せるか考え始めた。彼はその意図を、信頼する一人の顧問に打ち明け、どんな手段でも構わないからアルセニウスを殺してほしいと懇願した。　しかし、その相談相手は、神とテオドシウス皇帝を畏れ、ましてやアルセニウスの多くの美徳を　に敬愛していたため、そのような悪行を犯すことを望まず、密かに、二人きりの場でアルカディウスの企みをアルセニウスに伝え、尊者に対し、自らの命を守るよう忠告した。

アルセニウスは悲しみと恐怖に打ちひしがれ、再び涙ながらに神に祈り始め、救いの道へと導いてくださるよう願った。

夜、祈りの最中、アルセニイは天から「アルセニイよ！　人々から逃げよ。そうすれば、あなたは救われる」という声を聞いた。

これを聞いたアルセニイは、粗末な服を身にまとい、王宮から密かに抜け出して海辺へと向かった。そこで、神の御摂理により、アレクサンドリアへ向かう船[3488] を見つけた。彼はその船に乗り込み、すべての希望を神に託して旅立った。　船がアレクサンドリアに到着すると、アルセニイは直ちに修道士たちの隠遁所へと向かった[3489] 。教会に着くと、彼は涙ながらに長老たちに、自分を修道士として叙階し、救いの道へと導いてくれるよう懇願し始めた。長老たちは、自分たちに話しかけているのが誠実で敬虔な人物であることを見抜き、彼に尋ねた。

「あなたはどなたで、どこから来られたのですか？」

すると彼はこう答えた。

「私は旅人であり、貧しい身です。」

長老たちは、この来訪者を誰に託して修道生活について指導させるべきか互いに相談した末、アッバ・ヨハネス・コロフに託すことに決め、その旨を彼に伝えた。老修道士ヨハネスは、神に祈りを捧げた後、「主の御心がありますように！」と言った。

その間、ヨハネは、すでに正午を過ぎていたため、兄弟たちのために食事を用意するよう命じた。兄弟たちは食卓に着いたが、アルセニイは誰も座るよう誘ってくれなかったため、立ったままだった。　兄弟たちは食事を始めたが、アルセニイは何も食べず、まるで神とその聖なる天使たちの御前に立っているかのように、ずっとうつむいたまま立ち続けていた。そこで、長老ヨハネは食事用に用意された乾パンの一つを取り、アルセニイに向かって投げながら言った。

「食べたいなら、食べなさい。」

ヨハネがそうしたのは、この来訪者の謙遜さを試すためであり、彼が本当に世俗を捨ててここに来たのかを知るためであった。

一方、アルセニイは心の中でこう考えていた。「この長老は神の天使であり、透視能力者だ。なぜなら、私が犬よりも劣っていることを知っているからだ。だからこそ、犬に与えるように乾パンを投げたのだ。同じ理由で、私も犬のようにそれを食べなければならない」。

そして、地面に身を屈め、四足動物のように四つん這いで乾パンの方へ進み、それを口で直接くわえ、それからそれを抱えて隅へ行き、そこで地面に横たわってそれを食べた。

聖ヨハネは、聖アルセニオスのそのような謙遜ぶりを見て、長老たちにこう言った。

「彼は偉大な修行者となるだろう。」

ヨハネスはアルセニウスの謙虚さを深く愛し、まもなく彼を修道士に叙階した。その後、修道生活について教えを授けた上で、すでに徳において確固として経験豊富な修道士として、自身の近くにある独房を与えた。

一方、皇帝テオドシウスは、アルセニウスが宮殿を去った直後から、彼の行方を探し始めた。テオドシウスはアルセニウスのことを深く惜しんでいたため、各地の都市で彼を探すよう命じた。しかし、主が、多くの人々の益となるよう、ご自身の御心に適う時に世に現すまで、この御心に適う者の居場所を隠しておられたため、どうしても彼を見つけることはできなかった。

一方、アルセニイは、長老から示された小部屋で暮らし、断食と祈り、そして修道者の務めに励み、あらゆる美徳においてこれほどまでに優れた成果を上げたため、その功績において多くの長老たちをも凌駕した。ある日、彼が祈っているとき、こう言った。

[3488] アレクサンドリア――古代に名高い都市で、エジプトのナイル川河口に位置し、アレクサンドロス大王（紀元前336～323年）によって建設された。古代のアレクサンドリアは貿易、産業、文化の中心地であり、キリスト教初期にはキリスト教教育の温床であった。 現在、アレクサンドリアは最も重要な港湾都市の一つに数えられている。

[3489] エジプトは、多くの修道士たちが住む一般的な場所であった。修道院は中エジプトにも下エジプトにもあった。エジプトでは特に、下エジプトにあり、ナイル川を越えて内陸深くに位置するニトリア砂漠が有名であった。　スキトス砂漠はリビアの近くに位置していた。そこは荒涼とした砂漠であり、ここへ通じる整備された道すらないため、星の流れを頼りに道が定められていた。

「主よ、私に救われる道を教えてください！」

それに対し、天から声が聞こえてきて、こう言った。

「アルセニイよ！ 人々から身を隠し、沈黙を守りなさい。それが徳の根源である。」

この声に従い、アルセニイはその場所を離れて砂漠の奥深くへと入り、そこで自分用の小さな小部屋を建てた。この小部屋では常に一人で過ごし、あらゆる面で沈黙を守るよう努めた。彼はあらゆる会話を避け、絶えず心を天へと向けていた。肉体は地上にありながらも、その霊は天上の力へと舞い上がっていた。　毎週の日曜日や祝日には、彼は教会へ通った。礼拝が終わると、すぐに黙って自分の小部屋へ戻った。その際、彼は決して誰とも会話を交わさなかった。ただ時折、尋ねられた時に限り、できるだけ簡潔に答えると、すぐにその静寂の住処へと戻っていった。　スキトの荒野に住むすべての修道士たちは、尊者アルセニオスの徳高い生き方に深く感嘆していた。ある時、アッバ・マルクが彼に尋ねた。

「敬愛する父よ、なぜあなたは私たちから離れておられるのですか？」

するとアルセニオスはこう答えた。

「私がどれほどあなた方を愛しているかは、神のみがご存知です。しかし、私は神と人々の両方に同時に留まることはできません。なぜなら、天には、たとえ非常に多くの高次の力――千の千、あるいは数万――が存在するとはいえ、それらはすべて一つの意志を持ち、それゆえに心を一つにして神を賛美しているからです。しかし、地上には多くの人間の意志があり、一人ひとりがそれぞれの考えを持っています。　私たち一人ひとりが異なる意図や考えを持っている。それゆえ、私は神を離れて人々と共に生きることはできないのだ。

神にできるだけ近づこうと願うアルセニイは、あらゆる手段を講じて人々から距離を置き、誰にも自分を見られたり、自分のことを知られたりすることを望まなかった。しかし、灯火のように、彼は隠れることはできなかった。彼の偉業に関する噂は至る所に広まり、コンスタンティノープルにまで届いた。

敬虔なテオドシウス大帝の死後、その息子アルカディウスが即位した[3490]。アルセニオス聖人の居場所と生活様式を知ったアルカディウスは、彼に書簡を送り、その中で謙虚に自身の若き日の罪の赦しを請うとともに、自身と、ローマ帝国の西部を統治していた弟のゴノリウス[3491]のために神に祈りを捧げ、彼らの治世が神に祝福されるよう願った。　さらにアルカディウスは、アルセニウスに対し、エジプトから徴収された貢ぎ物のすべてを自由に使用し、自らの裁量で教会や修道院、そしてすべての困窮者に分配する権利を与えた。聖アルセニウスは皇帝に書面で返答することを望まず、ただ使者にこう告げた。

「あなたを遣わした者たちにこう伝えてください。『謙遜なるアルセニオスはこう言います――神があなたがたの罪を赦し、あなたがたの治世を祝福し、神の聖なる御心を果たすようあなたがたを助けてくださいますように』。あなたは貢ぎ物について書いていましたが、アルセニオスはそれを必要としません。なぜなら、彼はこの世のために死んだからです。もはや誰も彼を生きている者（すなわち、この世のために生きる者）とは見なさないようにしてください。」

使者はその返答を携えて皇帝のもとへ赴き、一方、尊者アルセニイは自身の荒野の独房へと引き上げ、そこで沈黙を守り、絶えず祈りの中で神と語り合い、時折だけそこから出て、他の人々に修道者の美徳を説いた。

ある日、聖アルセニオスは、葦が非常に多く生い茂っている場所を訪れた。そこで彼は、葦のそばに座っている修道士たちを見つけた。風で葦がざわめいていたため、聖人は修道士たちに尋ねた。

[3490] アルカディウス皇帝は、395年から408年にかけてローマ帝国の東部を統治した。

[3491] 395年から423年にかけて

「この物音は一体どこから来ているのか？」

すると、修道士たちはこう答えました。

「それは葦が風に揺れて音を立てているのです。」

すると、聖人は彼らにこう言いました。

「なぜ、あなたがたはここに座って葦の音を聞いているのですか？真に沈黙を愛する者は、心の平安を乱す恐れのある鳥のさえずりさえも聞いてはなりません。ましてや、葦の音が修道士の心を乱すことなどあり得ないのです。」

ある日、アレクサンドリアの大司教テオフィロス[3492] が、聖人と対話をし、その教えを受けたいと願うある高官を伴って訪ねてきた。聖人は少し間を置いて、彼らにこう言った。

「私が言うことを、お二人は実行していただけますか？」

彼らは、師が何と言おうともすべて実行すると約束した。

すると、聖人はこう言った。

「アルセニウスがいる場所には、決して近づいてはならない。」

訪れた者たちは聖人の答えに驚いたが、その言葉に従い、その場を去った。

しばらくして、大司教は再びアルセニウスに会いたいと思い、使者を送ってこう尋ねさせた。「大司教があなたのところに来たら、あなたの独房の扉を開けてくれるか？」

聖人は使者にこう答えた。「あなたが来れば開ける。しかし、あなたに部屋を開けてしまえば、すべての人にも開けなければならなくなる。そうなれば、私はその部屋を離れざるを得なくなる。」

そのような答えを聞いた大司教は、聖者がその場所から去ってしまうのではないかと恐れたため、聖者のところへは行かなかった。

ある日、ある巡礼の修道士が、アルセニオス聖人を会いたいと願い、その庵を訪れた。扉の前に来ると、彼はノックをした。アルセニオスは、自分の世話をしていた見習い修道士が来たのだと思い、すぐに扉を開けた。　しかし、見知らぬ人物であることに気づくと、来訪者の顔を見ないようにと、顔を地面につけて倒れ込んだ。ところが、その来訪者は聖者に立ち上がるよう懇願し始めた。アルセニオスは立ち上がることを拒み、「あなたがここから立ち去るまでは、私は立ち上がりません」と言った。

そして実際、彼は長い間、地面から起き上がろうとしなかった。修道士は長い間、尊者にお立ちになるよう懇願したが、尊者がその願いを聞き入れようとしなかったため、修道士はそこを去っていった。

別の時、また別の修道士が遠くからスキートを訪れ、同じく尊者にお会いしたいと願い、兄弟たちにアルセニイの独房への道案内を懇願し始めた。その際、彼は兄弟たちにこう言った。

「アルセニイ神父とお話ししたいのです。」

しかし、兄弟たちは彼にこう答えた。

「兄弟よ、日曜日まで待てば、彼が教会に来る時に会えるだろう。」すると、その修道士は兄弟たちにこう言った。

「尊者にお会いするまでは、食事をとらないつもりだ。」

そこで、兄弟たちは一人の修道士をその新参者と共に送り出し、アルセニイ長老の独房への道案内を任せた（なお、アルセニイの独房はスキタから三十スタディオン離れていた）。[3493] 。

小部屋に近づくと、その修道士は扉をノックした。

[3492] テオフィロスは385年から412年まで総主教を務めた。

[3493] 現在の単位で約5ヴェルスト。

長老は扉を開けて来訪者たちを部屋の中に招き入れ、それから頭を下げて座り、黙り込んだ。訪れた者たちも黙って座っていた。皆、かなり長い間沈黙を守っていた。ついに、スキタ修道院の修道士が言った。

「私は戻らなければなりません。教会での務めを果たさなければならないからです。」

そう言って席を立ち、立ち去ろうとした。

一方、彼と一緒に来たもう一人の兄弟は、長老と一緒にいる勇気がなく、彼にこう言った。

「私もあなたと一緒に帰ります。」

そして、立ち上がって長老に頭を下げ、尊者から一言も言葉を聞くことなく、小部屋を出て行った。

その後、巡礼中の修道士は、その兄弟に、修道生活に入る前は強盗だったモーセのもとへ連れて行ってくれるよう懇願し始めた。兄弟はその願いを聞き入れ、彼を尊者モーセのもとへ案内した。

彼らがモーセのもとに着くと、モーセは喜びをもって彼らを迎え入れ、休息をとって食事をとるよう勧め、深い慈愛を示した後、彼らを見送った。

帰り道、スキトスの修道士は来訪者にこう言った。

「さあ、あなたはアルセニイ神父にも、モーセ神父にも会った。あなたとしては、どちらが優れていると思うか？」

修道士はこう答えた。

「私たちを愛をもって迎え入れてくれた方が、より優れているのです。」

ある修道士は、この話を聞くと、神に向かって次のように祈り始めた。「主よ！　どちらがより完全であり、あなたのより大きな恵みに値するのか、教えてください。あなたのために人々から身を隠す者か、それとも同じくあなたのためにすべての人を受け入れる者か？」

この修道士は、自身の祈りに応えて次のような幻を見ました。ある非常に大きな川を航行する二隻の船が目に浮かんだのです。一隻の船には聖アルセニオスが乗っており、神の御霊がその船を操り、深い静寂の中で彼を守っていました。もう一隻には聖モーセが乗っており、　その船は神の天使たちが操り、モーセの口に蜂蜜を注いでいた。

この幻視について、その修道士は他の、より経験豊富な修行者たちに語った。そして皆、沈黙を守っているアルセニオスの方が、旅人を受け入れているモーセよりも完全であると認めた。なぜなら、アルセニオスには神ご自身が共におられ、モーセには聖なる天使たちだけが共におられたからである。

アルセニイは、人々と顔を合わせることや、彼らとの会話をあらゆる手段で避けていたが、とりわけ女性と顔を合わせたり、彼女たちと会話したりすることを警戒していた。それは、次の出来事からも見て取れる。

ある裕福な貴婦人がいた。彼女は敬虔で、貞潔であり、極めて神を畏れ、厳格な生活を送っていたが、尊者アルセニイの話を耳にし、彼に会いたいと願った。　その目的のために、彼女はローマからアレクサンドリアの大司教のもとを訪れ、アルセニウスに、彼女を旅人として迎え入れ、これほど遠い旅を敢行した彼女に祝福を与えてくれるよう説得してほしいと頼んだ。　大司教は、彼女が名門の元老院議員の家系に生まれた者であったため、彼女を大いなる敬意をもって迎え入れ、あらゆる手段を尽くして聖者に彼女の願いを叶えるよう説得を試みたが、全く成功しなかった。というのも、その老聖人は彼女に会おうとさえせず、ましてや女性の話など聞くことさえ拒んでいたからである。

このことを知った貴婦人は、使用人たちに旅の準備をするよう命じ、こう言った。

「私は神に信頼を置いている。神が私にアルセニイに会うことをお許しくださることを。なぜなら、私がここに来たのは、ただの普通の人（私たちの街にはそんな人はたくさんいる）に会うためではない。いいえ、私は預言者に会いたいのだ。そのために、私はこれほど遠い旅に出たのだ。」

そう言うと、彼女は修道院の荒野へと向かった。貴婦人が尊者のお部屋に近いところまで来たとき、神の御心により、老修道士は部屋の外にいた。彼女は予期せず彼のところへ近づき、彼の足元にひれ伏した。老修道士は彼女に立ち上がるよう命じ、彼女の顔をまっすぐに見つめながら、怒りを込めてこう言った。

「もし私の顔を見たかったのなら――ほら、これだ。よく見なさい。」

しかし、彼女は恥ずかしさのあまり、彼に目を向けることさえできなかった。すると、長老は彼女にこう言った。

「もし私の善行について何か聞いたことがあるなら、それを実践すればよい。私の顔など見る必要はない。一体、なぜこれほど遠くまで来たのだ？　お前は自分が女であり、それゆえに家にいて、どこにも出かけてはならないことを知らないのか？まさか、ローマに戻って、他の女たちの前でアルセニウスに会ったことを自慢するために、ここに来たというのか？もしそうするなら、街中の女たちが皆、私のところへやってくるだろう。

すると彼女はこう答えた。

「もし主が私の帰還をお助けくださるなら、あなたの偉業を妨げないよう、誰にもあなたのもとへ行くことを許しません。ただお願いがあります――私のために神に祈り、あなたの祈りの中で私を覚えていてください。」

すると、長老は彼女にこう言った。

「私は神に、私の心からあなたの記憶を消し去ってくださるよう祈るつもりだ。」

これを聞いて、貴婦人は非常に動揺した心で聖人の元を後にした。アレクサンドリアの街に着くと、彼女はさらに深い悲しみに沈んだ。

大司教は、貴婦人が尊者のもとから深い悲しみを抱いて戻ってきたことを知った。彼女の元を訪ね、その悲しみの理由を尋ねた。すると貴婦人はこう答えた。

「私がここに来なかったほうが、私にとっては良かったのです。私は長老に、祈りの中で私のことを覚えていてほしいと頼みましたが、彼は私にこう言いました。『私は神に、私の心からあなたへの記憶を消し去ってくださるよう祈ります』と。そのせいで、私は死ぬほど悲しんでいるのです。」

すると、大司教は彼女にこう言った。

「そのことで悲しむな、わが娘よ。老修道士がそう言ったのには理由があるのだ。あなたは女性であり、悪魔は女性を通じて聖なる男たちに多くの災いをもたらすからだ。だからこそ、老修道士は悪魔の誘惑を恐れてあのような言葉を口にしたのだ。しかし、あなたの魂については、彼は祈っており、これからもずっと祈り続けるだろう。」

貴婦人はこの言葉を聞いて心を落ち着かせ、悲しむのをやめ、喜びをもって帰路についた。

聖アルセニイは沈黙を守り続け、ますます神への思索に深く没頭していった。彼は神への愛にこれほどまでに燃えていたため、その熱烈な祈りのゆえに、常にまるで炎の中にいるかのようであった。

ある時、ある兄弟が用事のためにスキタから長老の独房を訪れた。窓に近づくと、長老が祈りを捧げながら立っているのが見えた。その長老は、まるで火に包まれたかのように、祈りに燃え上がっていた。　それを見た兄弟は恐怖に襲われた。しかし、彼はこの光景を目にするにふさわしい者であったため、少しの間立ち止まった後、扉をノックした。長老は小部屋から出てきて、何かを恐れている様子の兄弟を見て、こう尋ねた。

「ここに来てからどれくらい経つ？何か変わったものを見なかったか？」

しかし、その兄弟は言った。

「何も見ていません。」

その後、用件について話し合った後、長老は彼をスキートへと帰した。

この驚くべき長老については、王宮に住んでいた頃は、彼より立派な服を着ている者は誰もいなかったが、世俗を捨てた後は、彼より粗末な服を着ている者は誰もいなかったとも伝えられている。

この長老は、王宮での生活から一つの習慣だけを残していた。すなわち、時折、座る際に足を組むことがあり、それはあまり品位があるようには見えなかった。　一部の兄弟たちはそれを見ていたが、誰もが彼を深く尊敬していたため、誰も彼に何か指摘しようとはしなかった。しかし、ただ一人の長老、アッバ・ピメンだけが兄弟たちにこう言った。

「アッバ・アルセニオのところへ行け。私は彼のそばで、彼が時折座るように座ってみせる。そのとき、君たちは私に『座り方が良くない』と注意してくれ。私は君たちに謝罪する。そうして、その長老の座り方も正していこう。」

彼らは行ってその通りにした。すると、アルセニオス聖人は、修道士がそのような座り方をするのは不適切であると悟り、その習慣を改めた。

至福のアルセニオスは、ごく平凡な修道士たちからの教えさえも耳を傾けるほど謙虚な人でした。例えば、あるエジプト人の長老と語り合っていた際、彼は、どのようにすれば罪深い思いから自分を遠ざけることができるかを教えてほしいと頼みました。このことを知った別の兄弟が、後にアルセニオスにこう言いました：

「誠実な父よ、あなたは学問に長け、ギリシャ語やラテン語にも精通しているのに、なぜ罪深い考えを追い払う方法について、素朴な者に助言を求めるのですか？」

すると、聖人はその修道士にこう答えました。

「私はギリシャ人やローマ人の世俗的な学問についてはよく知っている。しかし、徳ある生活に関して、あの素朴な人が知っていることについては、その基礎さえも知らないのだ。」

聖人はこう語ったのは、謙遜こそがあらゆる美徳の基礎であり、それはアルファベットがあらゆる学問の基礎であるのと同じであることを示すためであった。この世の知恵をすべて学んだとしても、真の謙遜の心を持たない者は、救われることはできないのである。

謙遜に加え、その聖人はさらに感極まる心という賜物も備えていた。

生涯を通じて、彼は手仕事をする際、常に胸にハンカチを当てていた。それは、彼の目から絶えず涙が流れ出ていたからである。彼は肉体も精神も極めて健やかで、一日中働き、夜通し神に祈りを捧げ、ただ時折、眠りに身を委ねるだけだった。　目が重くなり、眠気が強く襲ってきたとき、彼は自分自身にこう言い聞かせた。「去れ、邪悪な僕よ、私のそばに留まるな！」

そして、その後、座ったまま軽くうたた寝をしてしまうことがあっても、すぐに気を取り直して立ち上がり、神に祈りを捧げた。彼はしばしば弟子たちにこう言っていた。

「修道士は、一時間だけ眠りに身を委ねるべきである。」

毎週日曜日の前日には、土曜日の夕方からすでに祈りの姿勢を取り、両手を天に向かって掲げていた。彼は太陽に背を向けて立ち、翌日の朝、太陽が彼の顔に光を照らし始めるまで、その姿勢を保ち続けた。

その祝福された長老は、常に手仕事に励んでいた。具体的には、ナツメヤシの葉で籠やマットを編んでいたのだが、葉を浸している水は一年間一度も替えず、たまに少しずつ水を足すだけだった。このため、兄弟たちの中には彼にこう言う者もいた。

「敬愛する父よ、なぜナツメヤシの葉を浸している水を替えられないのですか？その水のために、あなたの独房がどれほど悪臭を放っているか、お気づきではないのですか？」

すると、その聖人は彼らにこう答えました。

「世に生きていた頃、私が嗅いでいた乳香や香油の代わりに、今はこの悪臭を嗅がなければならないのです。そうすれば、最後の審判の日に、主が私をゲヘナの耐え難い悪臭から救ってくださるでしょう。」

時折、聖人は悪魔たちに試みられることがあった。彼に仕えていた兄弟が、聖人の独房に近づくと、そのような時に長老が神に向かってこう叫んでいるのを耳にした。「主よ、私を見捨てないでください！　私はあなたの御前で何一つ善い行いをしてはいませんが、あなたの恵みによって、今こそ善き行いの第一歩を踏み出せるよう、私をお助けください！」

ある時、聖アルセニオスが重病に陥った。スキトスの修道士たちは聖人のもとへ駆けつけ、彼を抱きかかえて、世話をしようと教会の付属病院へ運んだ。彼らは、きれいに整えられ、柔らかい枕が置かれたベッドに彼を寝かせた。　ある兄弟が聖人を訪ねてきた。その兄弟は、聖人が柔らかいベッドに横たわっているのを見て、誘惑に駆られ、こう言った。

「これがアルセニイ師なのか！まさか、彼が柔らかいベッドに横たわっているとは？」

これを聞いた長老の一人が、その兄弟を呼び寄せ、二人きりになって尋ねた。

「兄弟よ、あなたが世俗にいた頃、どのような職務に就いており、どのような生活を送っていたのですか？」

彼はこう答えた：

「私は羊飼いで、多くの苦労や悲しみに満ちた人生を送ってきました。」

すると、長老は再び彼に尋ねた。

「では、今はどのように暮らしているのか？」

彼は答えた。

「今は安らかに暮らしており、必要なものはすべて揃っており、何の心配も悲しみも知りません。」

すると、長老は彼にこう言った。

「ほら、君の目の前にいるこの人、アルセニイ神父は、世にいた頃、王たちの父であった。彼の周りには、明るい服を着て、金の帯とグリヴナを身につけた何千人もの使用人が仕えていた[3494]；彼の寝床は極めて豪華に飾られ、その富は数え切れないほどであった。一方、君はかつて家畜を飼い、貧しい者だった。　あなたは世俗の世界では、今享受しているような安らぎを持っていなかった。あなたは世俗の労苦から休息しているが、アルセニー神父は今、世俗での安らぎと満ち足りた生活の後、労苦に励み、貧困の中で苦しんでいるのだ。

その兄弟は、長老の言葉に心を動かされ、頭を下げて彼に許しを請い、こう言った。

「確かに、敬愛する父よ、すべてはあなたが言われた通りでした。私は労苦から安らぎを求めてここに来ましたが、アルセニイ神父は安らぎから労苦を求めてここに来られたのです。」

魂に有益な教えを受けたその兄弟は、長老のもとを後にした。

ある時、その国に野蛮人の侵攻があった。すべての修道士たちはスキートから町や村へと逃げ出したが、尊者アルセニイは荒野から町へ出ることを拒み、こう考えた。「もし主が私を守ってくださらないのなら、この地上に生きる意味などない」。

蛮族たちは修道院全体を略奪したが、神ご自身が御自分のしもべを彼らから隠しておられたため、尊者アルセニオスを見つけることはできなかった。　しかし、心の中で熟考した末、他の修道士たちからの称賛に耳を傾けたり、虚栄心に溺れたりしないよう、尊者もまた、他の修道士たちが逃げたのと同じ道へと向かった。アルセニオスは、修道院が荒廃したことを深く嘆き、こう語った。

「ローマは平和を滅ぼした[3495]、そして修道士たちはスキトを滅ぼしてしまった。」

[3494] グリヴナとは、首飾りとして身につけられた金の鎖のことである。

[3495] ここでの「迫害」とは、おそらくローマ皇帝たちによってキリスト教徒に対して行われた迫害を指すものと思われる。

野蛮人たちがスキタを去ると、修道士たちは再びそこへ戻り、スキタを再建して、元の場所で暮らし始めた。彼らと共に、聖アルセニオスもまた自分の独房へと戻った。

ある日、聖者にローマから、彼の親族であるあるボヤリンの遺言書が届けられた。そのボヤリンは、自身の数多の財産のすべてを聖者に遺贈し、聖者が　ご自身の望むままにそれらを費やすことを望んでいた。聖者はその遺言書を受け取ると、それを破り捨てようとしたが、遺言書を持って来た者は、その文書を破らないよう懇願し、こう言った。

「お願いです、敬虔な父よ、この遺言書を破棄しないでください。送ってきた者たちが、私にその責任を問うことになるでしょう。」

そこで、聖人は遺言書を無傷のまま彼に返しながら、こう言った。

「私は彼より先に（この世を）去った。それなのに、なぜ、つい最近亡くなった彼が、すでに死んでいる私を、自分の財産の相続人に指名するのだろうか？」

そして、彼は遺言書を持ってきた使者を、送り主のもとへ戻した。

聖人は常に同じ場所で修行していたわけではなく、時にはスキトスの荒野から、より人里離れた静寂な場所へと移り住み、会話を求めて訪れる人々から距離を置いていた。彼らは聖人の心の平安を乱していたからである。　こうして彼は、バビロンの近く、メンフィスの対岸にあるトロギネでしばらく修行し、その後、アレクサンドリア近郊のカノープスやその他のいくつかの荒野で過ごした。そして再びスキテスに戻ったため、誰も彼の生活様式を知る者はいなかった。

ある時、尊者（聖人）がエジプトの低地に住んでいた際、彼のもとを訪れる人々が大勢いて、その静寂な生活が妨げられていたため、自分の小部屋を離れてどこか別の場所へ行きたいと願った。何も持たずに旅に出る際、彼は二人の弟子、アレクサンドロスとゾイルにこう言った。

「アレクサンドルよ、君はここに残りなさい。ゾイルよ、君は私と一緒に川へ行き、アレクサンドリア行きの船を探してくれ。それから、兄弟のアレクサンドルのところへ戻りなさい。」

弟子たちはこの言葉に大いに戸惑ったが、それでも、誰も長老に「なぜ私たちのもとを去るのですか」と尋ねる勇気はなかった。

アレクサンドリアへ船出した長老は重い病に倒れ、かなり長い間病床に伏した。一方、長老の庵に残ったアレクサンドルとゾイルは、互いにこう問いかけ合った。「私たちのうち誰かが、何らかの不従順によって尊師を傷つけてしまったのではないか？」自分たちに非がないと分かると、彼らは長老のことで深い悲しみに沈んだ。

尊者が回復すると、自らこう言った。「さあ、今こそ弟子たちのところへ行こう。」

そして、立ち上がって歩き出した。

たまたま川の近くを通りかかったところ、その道を歩いていた大勢の旅人に出くわした。その時、あるエジプト人の女性が尊者の衣に触れた。しかし、尊者はそれを不快に思い、女性は修道士の衣に触れてはならないと彼女を戒めた。すると、その女性は彼にこう言った。

「もしあなたが修道士なら、荒野の山へ行きなさい。」

長老はその言葉に心を打たれ、しばしばその女性の言葉を繰り返して自分に言い聞かせた。「アルセニオよ！　もしお前が修道士なら、山へ行き、荒野をさまよえ。」

ついに、尊者は弟子たちが住んでいた「石」と呼ばれる場所へとたどり着いた。アレクサンドロスとゾイルは彼に出迎え、その足元にひれ伏して喜びの涙を流した。長老もまた、彼らを抱きしめながら涙を流した。その後、弟子たちは長老にこう言った。

「尊い父よ、あなたがここを去られたことで、私たちは深い悲しみに襲われました。ある修道士たちから、もし弟子たちが不従順で師を悲しませなければ、アッバ・アルセニイは自分の独房を離れることはなかっただろうと聞いたからです。」

すると、長老は彼らにこう言った。

「子らよ！　私も、自分がここを去ることについて、修道士たちがそう言うだろうと考えていました。だからこそ、私はあなたたちのところに戻ってきたのです。今、修道士たちは私のことをこう言うかもしれません。『ノアの箱舟から飛び立った鳩は、足元の堅い地を見出せず、ノアのいる箱舟に戻ってきた』（創世記8:8–9参照）。

聖人のこの言葉に弟子たちは慰められ、それ以来、聖人が亡くなるまで、彼と常に共に過ごした。

ある日、尊者が自分の独房にいたとき、神からある啓示を受けた。ある声が聞こえてきた。「あなたの独房から出てきなさい。そうすれば、私はあなたに人間の行いを見せてあげよう」。

長老は小部屋を出ると、まるで恍惚としたような状態になった。彼は神の天使を見かけ、その天使は彼の手を取り、ある場所へと導いた。そこで天使は、薪を割り、それを非常に多く用意していた黒人の男を彼に見せた。　その後、その男は切り終えた薪を肩に担いで運ぼうとしたが、薪が多すぎてできなかった。しかし、束から少し　薪を減らす代わりに、その男は再び薪を切り続け、また持ち上げようとしたが、もはや全く持ち上げられなくなった。それでもなお、ますます薪を切り続け、自分の荷をますます増やしていった。　その後、神の天使は、別の場所で、井戸のそばに立ち、穴の開いた器に水を汲んでいる男を尊者に示した。水は器から流れ出て、再び井戸に戻っていたが、水を汲んでいた男は、無駄な労苦を続けようとしていた。　ついに、天使は修道士に新たな幻を示した。アルセニイは、扉が開かれた教会と、それぞれ手に丸太を一つずつ持った二人の騎手を目にした。この騎手たちは教会の扉を通り抜けようとしたが、丸太が道の真ん中に横たわっていたため通ることができなかった。一人がもう一人の丸太を道の横に置くのを邪魔していた。一方がもう一方に道を譲る代わりに、騎手たちは同時に扉を通り抜けようとし、そのためずっと扉の周りで慌ただしく動き回り、どうしても教会に入ることができなかった。

これらすべてが終わった後、老人は天使に尋ねた。

「この幻は何を意味しているのか？」

すると天使は彼にこう言った。

「手にそれぞれ丸太を一つずつ持っている二人の男は、徳あるが傲慢で、互いに謙虚になろうとしない人々の象徴です。彼らは天の御国に入ることはなく、その傲慢さゆえに、すべての徳を台無しにしてしまい、御国の外にとどまることになるでしょう。」　水を汲んで穴の開いた器に注いでいた男は、いくつかの善行はあるものの、罪も捨て去らない人の姿である。この人は無駄に労苦している。なぜなら、自らの罪によって、神から受けられるはずだった報いを台無しにしてしまうからだ。薪を切り、自らにますます重い負担を課していた黒い男は、多くの罪にふけり、悔い改めるどころか、不義に不義を重ねる人の姿に似ている。

この幻視について、聖アルセニオスは弟子たちの教訓となるよう語り、その際、謙虚さから、これらすべてを自分が見たのではなく、別の長老から聞いた話に過ぎないと彼らに告げた。

さらに、アルセニオスは弟子たちに、他の荒野の父たちに与えられた、キリストの神聖な秘儀に関する恐ろしい啓示についても語った。

「かつて」とアルセニオスは語った。「スキートに、非常に厳格な生活を送り、すべての修道士の間でその徳を称えられていたある長老がいた。　この長老は、その純朴さゆえに（彼は聖書について教えを受けていなかった）、キリストの至聖なる秘跡について惑わされ、私たちが聖なる祭壇から受けるパンや、聖体拝領に用いる杯は、キリストの真の御体と御血ではなく、　キリストの御体と御血の単なる模倣に過ぎないと考えていた。このことを二人の経験豊富な長老が知った。その長老がそう考えたのは悪意からではなく、純真さと無知によるものであると理解した彼らは、彼を正そうと決心した。その目的で彼らは彼の元を訪れ、魂の益となる多くのことについて語り合った後、とりわけ次のように述べた。

「敬愛する父よ、ある兄弟が、私たちが聖なる祭壇から受けるパンや、私たちが飲む杯について、誤った考えを抱いていると耳にしました。すなわち、それらは真のキリストの御体と御血ではなく、あくまでその似姿に過ぎないというのです。」

すると、長老は彼らにこう答えました。

「そう思うのは私です。」

彼らは彼を説得し始め、こう言った。

「敬虔な父よ、そのような考えは捨て、聖なる公会議的かつ使徒的な教会が教えるとおりに信仰を保ってください。私たちは、パンこそが真のキリストの御体であり、杯の中のぶどう酒こそが真の御血であると信じ、告白しています。それは単に御体と御血に似たものに過ぎないというわけではありません。」

その後、その司祭たちは、自分たちの言葉の真実性を証明するために、聖書や教会の教父・教師たちの著作から数多くの証言を引用し、その長老に誤った信仰を捨てさせるよう説得を試みた。しかし、彼は純真な心で彼らにこう言った。

「実際に体験してみなければ、信じない。」

すると、長老たちは彼にこう言いました。

「私たち三人は、このことについて神に祈りましょう。一週間の断食を終えた後、神がこの奥義を私たちに明らかにしてくださるよう。神は、あなたの長年の労苦を無駄にはなさらないと私たちは信じていますから、この奥義を明らかにしてくださるでしょう。」

長老は愛をもって彼らの助言に耳を傾け、彼らは皆、一週間の間、それぞれの独房に閉じこもり、断食と祈りに時間を費やした。その長老は神にこう祈った。

「主よ！　私がこのように考えるのは悪意からではなく、私の単純な知力ではこの奥義を理解できないからです。どうか御恵みによって、私に真理を啓示してください。そうすれば、私は不信仰に陥ることなく済みますように。」

一方、他の二人の長老は、それぞれの祈りの中でこう語った。

「主よ！　私たちの兄弟に、あなたの偉大な神秘を明らかにしてください。そうすれば、彼がそれを信じないままになることもなく、自身の労苦や徳を台無しにすることもないでしょう。」

神は御自分のしもべたちの願いを聞き入れ、その恐るべき秘密を次のように彼らに明かされた。

長老たちが断食と祈りを始めてから一週間が過ぎ、日曜日が訪れると、その三人の長老は神聖な典礼に参列するため教会へ向かい、教会の中で互いに隣り合って座った。主は彼らの霊的な目を開かれた。聖餐のためのパンが用意されたとき、彼らはパンの代わりに幼い赤ん坊を見た。　司祭がパンを裂こうと手を伸ばしたその時、長老たちは、天から降りてきて、手にナイフを持った神の天使を見た。天使は赤ん坊を刺し殺し、その血を聖杯に注いだ。司祭がパンを裂くたびに、天使はその御体を細かく砕いた。

その間、聖体拝領の時刻が訪れた。他の兄弟たちと共に、信仰を持たない兄弟も聖体拝領に向かった。生々しく血を滲ませている肉の塊[3496]　を手に取り、聖杯の中の血を目にしたその長老は、恐怖に駆られて叫んだ。

[3496] 兄弟たちが尊いキリストの御体を手に取ったことに驚くべきではない。キリスト教の初期の時代には、未洗礼者であっても聖なる御体を手にとり、自宅や旅先に持ち帰ることが許されていた。　しかしその後、教会の教父や教師たちは、次のような理由からこれを禁じた。コンスタンティノープルで聖ヨハネス・クロイソストモスが総主教を務めていた頃、ある女性が聖なる聖体を自宅に持ち帰り、魔術のための薬と混ぜ合わせてしまったのである。　このことを知った聖ヨハネス・クラマトリオスは、すべての教会に対し、尊いキリストの御体を信徒の手に渡すのではなく、神の御血とともに聖

「主よ、私は信じます。このパンはあなたの御体であり、このぶどう酒はあなたの御血であることを。」

その瞬間、肉はパンに、血はワインへと変わった。

そこで、その老修道士は、深い畏れと心の感動を胸に、キリストの聖なる秘跡を拝領した。

他の二人の長老は彼にこう言った。

「キリストなる神は、人間が生肉を食べたり、血を飲んだりすることはできないことをご存じです。それゆえ、信者たちに、パンという姿で御自身の至聖なる御体と、ワインという姿で御自身の命を与える御血を授けてくださるのです。」

その後、長老たちは、この啓示と、あの徳高い長老が不信仰のうちに滅びることを主が許されなかったことに対して、主に感謝を捧げた。

ある日、ある兄弟がアルセニオスに、魂にとって何が有益なのかと尋ねた。すると、その聖人は彼にこう答えた。

「心の中で考えることが、神の御心にかなうよう、あらゆる面で気を配りなさい。そうすれば、あらゆる罪を容易に打ち勝つことができるだろう。」

聖人がこう語ったのは、あらゆる罪や情欲が、心で受け入れられ、快楽をもって抱き続けられる邪悪な思いから生じることを示すためであった。自らの思いに注意を払い、罪深い考えを追い払う者は、それによって自らの情欲を消し去り、罪深い欲望に打ち勝つのである。

また別の機会に、その聖人はこう言われました。

「もし私たちが心から神を求めれば、神ご自身が私たちのところに来られ、私たちは神を見ることができる。そして、清い生活によって神を私たちのそばに留めておけば、神は私たちと共におられる。」

ある長老がアブ・アルセニオスに尋ねた。

「敬愛する父よ、私はどうすればよいのでしょうか。私は年老いたため、断食も修道者の行いもできないという考えがどうしても頭から離れません。ですから、病人を訪ねて回るのが、キリスト教の愛の行いであるように思えるのです。」

しかし、尊者は、それが悪魔の誘惑であることを悟り、その長老にこう言いました。

– 食べ、飲み、眠りなさい。ただ、自分の小部屋からは決して出てはいけません。

尊者様がそう言われたのは、自分の独房を出て世俗の集落に近づく修道士には、敵による多くの誘惑や試練が待ち受けていることを知っていたからである。そもそも、世のために死んだ者は、死者が棺から出ないのと同様に、正当な理由なしに修道院を出るべきではないのだ。　しかし、自らの意志で修道院を出る修道士は、魂が死ぬため、真に死んだ者となるのである。

また、尊師はこうも語った。

「肉体の清さをあらゆる手段で守ろうと努め、そのために断食や徹夜、そして多くの労苦によって自らの肉体を死に至らしめる人々は多くいる。しかし、虚栄、高慢、金銭への執着、嫉妬、兄弟への憎しみ、怒り、恨み、非難といった罪から、自らの魂を熱心に守ろうとする者は少ない。　そのような人々は、外見上は肉体が清いが、その魂は汚れている。彼らは、外側は美しく飾られているが、内側は悪臭を放つ骨で満たされた棺のようなものである。肉体も魂も汚れから守ろうと努める者は幸いである。心（肉体だけではなく）が清い者はまことに幸いである。なぜなら、彼らは神を見るからである。

ある兄弟が尊師にこう言った。

杯から信徒に授けるよう指示を出した。 – 聖ディミトリ・ロストフスキーは、11月9日の項において、聖女テオクティスタの生涯に関する記述の中で、このことについて述べている。

「敬愛する父よ！私は多くの書物や詩篇を学び、心を動かされながらそれらを読みたいと願っていますが、聖書の力を理解できないため、その感動を得ることができず、このことを深く嘆いております。」

聖人はこれに対し、こう答えました。

「わが子よ！たとえその力を理解できず、感動も抱けなかったとしても、あなたは絶えず神の御言葉を読むことを学ばなければならない。」　私は、アッバ・ピメンや他の父たちがこう語っているのを聞いたことがあります。蛇使いたちは、自分たちが口にする言葉を自分たちでは理解していないにもかかわらず、蛇たちはその言葉を聞くと、あたかもその言葉を理解しているかのように大人しくなり、何の抵抗もなく彼らの手に身を委ねるのです。　私たちも、たとえ聖書の力を理解していなくても、同じことができる。なぜなら、私たちが口に聖書の言葉を唱えるとき、悪魔たちはそれを聞いて恐れを抱き、私たちから逃げ去るからだ。彼らは、御自分のしもべである預言者や使徒たちを通して語られた聖霊の言葉を耐えられないのである。

尊者（プレポボドニー）の祝福された最期が近づいたとき、彼は弟子たちにこう言いました。

「私が死んだら、私のための追悼の集まりを開いたり、兄弟たちを食事に集めたりしてはならない。ただ、私の罪深い魂のために神聖な犠牲が捧げられるよう、心を配ってほしい。」

弟子たちはこれを聞いて深く悲しみ、泣き出した。しかし、聖人は彼らにこう言った。

「泣かないでくれ、子らよ！　私の死の時はまだ来ていない。とはいえ、もうすぐそこまで来ているのだが。」

すると、弟子たちは彼に尋ねた。

「尊い父よ、どのようにあなたを葬ればよいのでしょうか？」

すると、師は彼らにこう言いました。

「私の足に縄を結びつけ、山の向こうへ放り出してくれ。」

やがて、尊者の最期の時が近づくと、彼は激しく泣き出し、大きな恐怖に襲われた。弟子たちは彼が泣いているのを見て、こう尋ねた。

「まさか、尊い父よ、あなたまでもが死を恐れているのですか？」

しかし、彼は彼らにこう答えた。

「確かに、私は修道服を身にまとったその日から、修道生活を送る日々を通じて、常に死への恐怖を感じてきたのだ。」

その後、尊者は至福の死の眠りにつき、生涯を通じて熱心に仕えてきた主の御手に、その清らかな魂を委ねた。

アッバ・ピメンは、その聖人が安らかに息を引き取ったと聞くや、涙を流し、こう言った。

「アーセニイ父よ、あなたは幸いである。あなたは生涯を通じて涙を流してきたからだ。そのおかげで、あなたは永遠に喜びを享受するだろう。しかし、この世で自らの意志で泣かない者は、死後、苦しみの中で否応なく泣くことになるが、その涙は誰の役にも立たないのだ。」

尊者アルセニイについては、彼がしばしば自分自身にこう言い聞かせていたと伝えられている。「アルセニイよ！　なぜここに来たのか？　あなたは休息のためではなく、労苦のために、怠惰のためではなく、功徳を積むためにここに来たのだ。さあ、奮起し、労苦し、怠けてはならない」。

また、尊者アルセニイは次のような言葉もよく口にしていた。「私は自分の口から出た言葉を何度も後悔したが、沈黙については一度も後悔したことはない」。

アッバ・ダニエルは、聖アルセニオスについて、聖書を熟知していたにもかかわらず、たとえ出題できたとしても、決して誰にも書物からの質問を投げかけなかったと語っていた。聖アルセニオスがそうしていたのは、書物において過度に博識であるように見られたくなかったからであり、　また、聖人は、キリストのために自らを愚か者であり無知な者と見なしていたため、　誰にも手紙を書

いたことは一度もなかった[3497] ；また、助祭の聖職に叙階されていたためその権利はあったにもかかわらず、決して聖所には入らず、常に素朴な修道士たちと共に聖体拝領に与っていた。　これらすべては、彼の深い謙遜ゆえに行われたものであった。また、至福のアルセニオスが礼拝のために教会に来ると、柱の陰に立ち、自分が誰の顔も見ず、また誰にも自分の顔が見られないようにしていた。

外見上、尊者は天使のように端正であった。白髪で、体つきは美しく、厳しい節制のせいで痩せこけており、顎鬚は腰まで伸びていた。絶え間ない涙で目はくぼんでおり、背は高かったが、老いによって背中が丸まっていた。　尊者は、55年間にわたり修道者の労苦と功業に励み、断食と祈りによって神に喜ばれる生活を送った後、この世を去った。スキテでは40年間を過ごし、メンフィス近郊のトロギンと呼ばれる場所で10年間暮らした。その後、アレクサンドリア近郊のカノープスで3年間を過ごし、 そこから再びトロギンに戻り、ここで2年間を過ごし、その地で主のもとへ帰った。聖人は計して約100年を生き[3498] 。主が、彼の聖なる祈りによって、私たちにも罪の赦しと、私たちの主キリストにおける永遠の命をお与えくださいますように。キリストには、父と聖霊とともに、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深淵からの嘆きによって、百の労苦の末に実を結ばせ、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、我らの父アルセニオよ。キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第3調:

ローマより、汝は偉大なる太陽のごとく輝き、至福のうちに王都に至り、汝の言葉と行いをもってこれを照らし、あらゆる無知の闇を追い払った。このゆえに、我らは汝を崇める、父たちの栄光よ、尊きアルセニオよ。

聖使徒にして福音記者、神学者ヨハネの記念日

記念日：5月8日

この聖なる使徒にして福音記者、キリストの胸に寄り添う者、処女であり、最愛の弟子である神学者ヨハネの尊い帰天は、9月26日に祝われ、その日付の下に彼の伝記が記されている。 一方、本日は、彼の棺から癒しの力を放った尊い遺骨を偲ぶ日である。

聖ヨハネ・テオロゴスは、キリストの福音を宣べ伝えるために多大な労苦を捧げ、百歳まで生き延びた後、七人の弟子たちと共にエフェソの街を去り[3499] 、彼らに十字架の形をした墓を掘るよう命じ、その中に横たわり、まだ生きているうちにそこで死ぬ準備を整えた（これは彼の伝記に記され

[3497] 聖アルセニオスについては、上述の2つのような、修道士たちへの格言や訓示がわずかしか残っておらず、それらは古代の『パテリコン』や、古代の教父たち――隠者たち――の格言集に保存されている。

[3498] 聖アルセニイの生涯と活動は、年代順に次のようにまとめられる。354年に生まれ、29歳の時（383年）に宮廷に迎え入れられ、11年間（394年まで）宮廷で暮らし、40年間（434年まで）スキトの荒野で過ごし、　トロギネ（あるいはトロエネ）で10年間過ごし、カノペで3年間滞在し、最後の2年間は再びトロギネで過ごし、95歳の時、449年または450年初頭に亡くなった。

[3499] エフェソスは小アジアのエーゲ海沿岸に位置し、広範な貿易で知られ、古代における科学と芸術の主要な中心地の一つであった。現在、かつて名声を博したこの都市には、廃墟だけが残されている。

ている通りである）。　エフェソスに住んでいたキリスト教徒たちは、使徒の死後、その墓を掘り起こしたが、使徒の遺体は見つからなかった。　彼の尊い死を悼んで街に戻り、その後も頻繁に使徒の墓を訪れ、そこで神への熱心な祈りを捧げ、聖ヨハネ・テオロゴスの助けと神への執り成しを求めた。 その際、毎年この日と月（ ）には、使徒の棺から、いわば微細な粉のようなものが漂い出し、癒やしの奇跡をもたらした（[3500] ）。信者たちはこの粉を集め、それを使って様々な病や不調を治した。 それゆえ、この日、また9月と同様に、他のどの聖なる神の御心に適う者たちよりも神に愛されたこの偉大な神の御心に適う者を、賛美歌をもって称え、讃えることが信者たちの間での慣習となったのです[3501]。 彼の祈りによって、主が私たちにも心と体の病の癒やしを授けてくださり、私たちもまた、私たちの神であるキリストに喜ばれ、愛される者となることができますように。

5月22日

5月9日（旧暦）

聖預言者イザヤの生涯

記念日5月9日

聖イザヤの預言者としての奉仕の時代（ヘブライ語ではこの名は「イェシャ・ヤハウェ」と発音され、「エホバの救い」、すなわち主から与えられる救いを意味する）は、ユダヤ民族にとって苦難の時代であった。　この偉大な預言者の時代、イスラエル王国は滅亡し、ユダ王国もバビロン捕囚を目前に最後の年を迎えていた。　この悲惨な運命――「選民」が異教の王たちの厳しい支配下に置かれたこと――は、彼らが神への従順を捨て、ますます不法と偶像崇拝に溺れていったことに対する、主からの懲罰であった。　特にイスラエル王国においては、神の契約からの背きが甚だしく、そのために早まった懲罰が下されたが、「ユダ王国においては、時折、より良い未来への希望が垣間見えた」　ユダヤにおいて神への聖なる熱意の炎が完全に消え去ることはなく、主がそれを正すための懲罰を下すのをまだ遅らせておられたとすれば、それは主に聖イザヤの預言活動によるものであった。

ベニヤミン族の出身である聖預言者イザヤは、紀元前760年頃に生まれた。彼はアモスの息子であったが、聖書にはアモスについて何も記されておらず、ユダヤの伝承では、アモスをアマシア王の兄弟アモスと同一人物と見なしている。　聖イザヤの定住地は、ユダ王国の首都エルサレムであった。預言者が意識的な幼少期と青年期を過ごした時期には、賢明で慈悲深い王ウジヤの輝かしい統治が重なっていた。この治世は、疑いなく、将来の預言者の魂に宗教的・政治的に有益な影響を与えた。　聖イザヤの青年期の初期については、実際には何も知られていないが、主の栄光が彼に現れ、主によって偉大な奉仕へと選ばれたという事実は、この人生の時期における預言者の敬虔さを疑いようのない証しとなっている。彼の預言的な言葉もまた同じことを物語っており、そこから彼が自民族の聖典を深く熟知していたことがうかがえる。　明らかに、聖イザヤは幼い頃から神の律法を学んでい

[3500] この遺灰、あるいはマナについては、聖アウグスティヌスとグリゴリウス・トゥルスキスが言及している。また、12世紀のロシア人巡礼者であるイグメン・ダニイルも、神学者ヨハネの棺から出土した指骨について言及している。

[3501] シナイの福音書では、この祝日は「ροδισμος」、すなわち「バラの祭日」と呼ばれている。 神学者ヨハネの墓から湧き出たマナそのものが「ροδις」――バラの軟膏、バラの粉末――と呼ばれていたと考えられている。しかし、「バラの祭日」とは、我々が三位一体の日に花を用いるのと同様に、バラを用いて祝うことを指すと解釈する方がより正確である。

た。敬虔な人として、彼は神を畏れる妻を娶り、その妻との間に二人の息子をもうけた。彼の妻についても、彼女もまた預言者であったことが知られている（イザヤ7:3、8:3、8:18）。

聖イザヤは、オジヤ王が亡くなった年（紀元前737年）に、特別な幻によって預言者としての召命を受けた。　ある日、彼は神殿で礼拝に参列していた。彼の目の前には、祭司たちの庭と至聖所が広がっていた。祈りを込めて至聖所を見つめていると、聖イザヤは突然、神殿が割れていくのを見た。　彼の霊的な目の前には聖所の内部が露わになり、続いて神秘的な至聖所を覆っていた垂れ幕が消え去ると、驚愕し動揺した預言者の前に、「高く、崇高な御座に座しておられる」天と地の主の荘厳な幻が現れた――まるで天と地の間に立っておられるかのように。　神の王なる衣の裾が神殿を満たしていた。主の周りには「　」のセラフィムたちが立っていた。彼ら一人ひとりは六つの翼を持っており、それぞれ二枚の翼で顔を覆い、二枚の翼で足を覆い、二枚の翼で飛んでいた。　そして彼らは互いに呼びかけ合い、こう言った。「聖なる、聖なる、聖なる主サバオット。全地は御栄えに満ちている！」[3502]　セラフィムたちの雷鳴のような賛美の声に、「門の頂が揺れ動き、神殿は香の煙で満たされた」。聖イザヤは恐怖に襲われ、怯えて叫んだ。

「ああ、私は滅びた！　私は滅びた！　私は口が汚れた者であり、口が汚れた民の中に住んでいるからだ[3503]、そして私の目は、主サバオットの王をご覧になったのだ[3504]。」

すると、動揺している預言者のところへ、セラフィムの一人が飛んできた。その手には、火ばさみで祭壇から、すなわち聖バシレイオス大主教が説明するように「天の祭壇」から取り出した燃える炭を持っていた。彼は預言者の唇に触れながら、こう言った。

「見よ、これがあなたの口に触れた。あなたの不義は取り除かれ、あなたの罪は清められた。」

その直後、預言者は主の神秘的な声を聞き、こう問いかけるのを耳にした。

「誰を遣わそうか。誰がわたしたちのために出向くのか。」[3505]

神聖な確信に満ちた聖イザヤは、「不従順な」ユダヤの民に対して神の御心を宣べ伝えるという、責任重く困難な任務を引き受けたいと志を表明した。

「私です。私をお遣わしください」と彼は言った。

主は聖イザヤの申し出を拒まず、次のようにして同意を示された。

「行って、この民に告げよ。『耳で聞いても悟らず、目で見ても見えない』と。」　この民の心は鈍り、耳は聞き取りにくく、目は閉ざして、目で見ようともせず、心で悟ろうともせず、わたしが彼らを癒やすために立ち返ることもないからだ。」

イザヤは主に尋ねた。「民はいつまでこのような道徳的な鈍感さに留まるのでしょうか。」すると、主はイスラエルを襲うであろう来るべき災いについての恐ろしい啓示を彼に与えられた：

「いつまで町々は荒れ果て、住民がいないままとなり、家々は人がいなくなり、この地が完全に荒れ果てるまで続くのか」（イザヤ6:1–11）

幻は終わり、聖なるイザヤの上に神の御霊が臨み、神秘的で遠い未来をあたかも現在であるかのように彼の前に明らかにし、自国民の間の道徳的混乱との困難な闘いにおいて彼を強めた。

[3502] このセラフィムたちの賛美は、神性の聖性を三度指し示しており、キリスト教徒だけでなく、一部のラビたちによっても、神性の三つの位格に関する啓示として認められている。

[3503] ここで聖イザヤは、おそらく自分自身と自分の民を、モーセの律法（レビ記13:45）に従って口元まで覆い、出会った人々に「不浄、不浄」と叫んで警告しなければならなかったハンセン病患者に例えているのだろう。

[3504] 主はモーセにこう言われた。*「人はわたしを見て、生きていられることはない」*（出エジプト記33:20）。サバオトとは、（天の）軍勢の主のことである。

[3505] この複数形の代名詞「私たち」は、唯一の神を指しており、これもまた聖三位一体の奥義の啓示である。創世記4:26、11:7を参照。

民を愛する預言者の心は、その政治的な分裂など意に介さず、神の御心に従順な彼は、自らの預言者としての奉仕をひとつの王国の境界内に限定することはなかった。　とはいえ、聖イザヤが預言的な説教を行ったとき、イスラエル王国の命運はすでに尽きかけており、預言者に残されたのは、北王国の首都サマリアにすでに迫っていた大いなる「災い」を予言することだけだった。

– ゴレ（サマリアよ）、酔いしれたエフライム人の誇りの冠、その美しい装飾のしおれた花よ。それは、酒に打ち倒された者たちの肥沃な谷の頂上にあった。見よ、主の御許には力強く、強大な者がいる……その力は、それを地面に打ち倒す。　酔いしれたエフライム人の高慢の冠は、足で踏みつけられる。そして、その美しい装飾の枯れた花は……時期尚早に熟したイチジクと同じ運命をたどる。それは、誰かがそれを見るやいなや、すぐに手に取って飲み込んでしまうようなものである（イザヤ28:1–4）。

この悲痛な預言はまもなく成就した。紀元前722年、サマリアはアッシリア王サルゴンに占領され、イスラエル王国は永遠にその存在を終えた[3506]。こうして、「主なる神のすべての戒め」を捨て去ったイスラエル人たちは、、主の御前から拒絶されたのである。「ユダの部族一つを除いて、誰も残らなかった」（列王記下17:16–18）。

サマリアの陥落に伴い、聖イザヤは預言者としての視線を主にユダ王国の運命へと向けました。そこでは、アハズが即位して以来、道徳的堕落が特に深刻化していました。　アマシア、オジヤ、ヨアファムの各王の後、ユダ王国はアハズへと引き継がれ、国家としての勢力は著しく高まり、アンモン人や多くの近隣のペリシテの町々がユダ人の属国となっていた。　これに伴い、ユダには莫大な富が蓄積されたが、不義なアハズの手に渡ると、神に選ばれた民にふさわしくない用途に用いられることとなった。出自はイスラエル人でありながら心は異教徒であったアハズは、エルサレムをフェニキア、とりわけアッシリアといった異教国家の首都と全く同じ姿にすることを目標とした。　彼はエルサレムで、太陽、月、その他の天の星々への礼拝を導入し（列王記下23:5）、さらには主の神殿そのものを汚すことさえも躊躇しなかった。　主の宮には、淫乱の女神アスタルテの偶像が安置され、また神殿のすぐそばには「娼館」があり、そこで女性たちがアスタルテのための衣を織っていた（列王記下23:6–7）。神殿の入り口のすぐそばには、太陽神に捧げられた白い馬が飼われていた。また、聖なる器を保管したり、奉仕の当番を務める祭司たちが滞在したりするための部屋の一部が、馬小屋に転用されていた（列王記下23:11）。　ソロモンが設置した全焼の祭壇そのものを、アハズは聖所の前の場所から神殿の北側へ移し、アッシリアの様式に従って造られた新しい祭壇と取り替えた（列王記下16:14–15）。エルサレムの至る所に祭壇が設けられ、通りかかる人々がそこで香を焚くことができた（歴代誌下28:24）。　エルサレムの城門や他のユダヤの町々には、かつてから残っていた、エホバへの犠牲を捧げるための「高き所」があった（列王記下15:4, 35）。主の神殿が建てられた後、それらの存在はすでに違法となっていた（列王記上3:2；　申命記12:13–14）。フェニキアの神モロクを祀るため、エルサレムの城壁のすぐ下、ギンノムの谷に新しい神殿が建てられた。そこには巨大な銅製のモロクの偶像が立っており、その内部には炉があり、両手を広げた像の下には、子供たちが捧げられる祭壇が設けられていた。　アハズ自身、この非人道的な偶像崇拝への熱心な献身の模範を示した。彼は自分の息子の一人をモロクに生贄として捧げたのである（列王記下16:3；歴代誌下28:3）。

ユダ王国を腐敗させ、主の義なる怒りを招いたこの不義のゆえに、ユダはまもなく懲罰に遭い、それは将来、神によるさらに恐ろしい懲罰の前兆となった。　イスラエルの王ファケイとシリアの

[3506] この出来事について、サルゴン自身の年代記には次のように記されている。「私はサマリアの町を包囲し、これを陥落させた。27,280人の市民を捕虜として連れ去り、奪った戦車の中から50台を自分のために選び取り、この町の民のその他のすべての富は、私の家来たちに奪わせた。　私は彼らの上に常任の支配者を任命し、以前と同じ貢納を課した。捕虜となった者たちの代わりに、私が征服した土地の住民をそこに送り込み、アッシリア人に課しているのと同じ貢納を彼らに課した」。参照：列王記下17:6。イスラエルの残存民と、アッシリア王によって強制移住させられた異教徒たちとの混住により、後にサマリア人と呼ばれるようになった混血民族が形成された。

王レツィンは連合軍を率いてユダ王国に侵攻し、道中のすべてを略奪し荒廃させながら、エルサレムそのものまで到達した。さらに、エドム人とペリシテ人も反乱を起こし、独立を取り戻そうとした。*「主は、ユダの王アハズのためにユダをこのように辱められた。彼はユダを堕落させ、主の御前で重く罪を犯したからである」*（歴代誌下28:19）。

同盟を結んだファケイ王とレツィン王がエルサレムの城門の前に陣取ったとき、都には恐怖と混乱が蔓延し、まるで強い風に揺さぶられる樫の林のようであった（イザヤ7:2）。 しかし、憐れみ深い主は、御自身の罪深い民を見捨てられなかった。懲らしめとともに、主は預言者イザヤを通して、彼らに慰めと戒めを送られた。神の御命により、ベリリニの野へ向かう道、上池の水路のそばでアハズに出逢った聖なるイザヤは、彼にこう言った。

「見守り、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたの心が落胆することのないように……（レツィンとファケイ――これら煙を立てる松明の先端）は、あなたに対して悪を企て、『ユダへ行って、そこを騒がせ、それを支配しよう』と言っている……」 しかし、主なる神はこう言われる。それは実現せず、成し遂げられることはない。

アハズが自分の言葉に不信を抱いているのを見て、聖イザヤは彼にこう言った。

「あなたの神、主からしるしを求めなさい。深き所でも、高き所でも、求めなさい。」

これに対し、アハズは、主を試すことを望まないふりをして自分の不信仰を隠し、こう反論した。

「求めはしないし、主を試すこともない。」

そこで預言者は、王の不信仰を戒めた後、自分の言葉が成就することを裏付けるしるしとして、処女からメシア・キリストが奇跡的に誕生することを示した。また、レツィンとファケヤがまもなく退くことを予言すると同時に、将来、さらに恐ろしいアッシリア人の侵攻が起こることも予言した。

– ダビデの家よ、よく聞きなさい！ ... 主ご自身があなたがたにしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもって、男の子を産む。その名はインマヌエル[3507] と呼ばれる。彼は乳と蜜を食み、善悪を見分けられるようになるまで、あなたが恐れるその地は、その地の二人の王によって見捨てられる。しかし、主はあなたとあなたの民、そしてあなたの父の家の上に、エフライムがユダから離反して以来かつてなかったような日々をもたらし、アッシリアの王を送り込むであろう（イザヤ7:1–17）。

しかし、不信仰なアハズは、神への希望よりも、預言者が警告していたアッシリアの王への希望を選んだ。ユダに侵攻してきた王たちに対する防護を求めて、アハズはアッシリアの王テグラ・ペルラサール2世と同盟を結び、その際、自分の王宮だけでなく神殿の宝物までもすべて彼に差し出した。 彼自身もフェグラ・フェラサルの元へダマスカスへ赴き、拝謁し、そこで前述のアッシリアの祭壇の設計図を受け取った。この服従への報いとして、アッシリアの王はシリアと、イスラエル王国を構成していたパレスチナの一部を略奪した。一方、アハズは神殿を略奪した後、その大扉を閉ざした； 神殿の灯は消え、香はもはや捧げられず、聖なる場所は完全に放置された。エホバへの真の礼拝は、ますます蔓延する忌まわしい偶像崇拝に取って代わられ、ほとんど忘れ去られてしまった（列王記下16:5–10；歴代誌下28:5–25）。

アハズの死後（紀元前728年）、彼の20歳の息子ヒゼキヤが王位に就いた。彼は、選ばれた民の王たちの中でも最も優れた王の一人であった。 ヒゼキヤは父から悲惨な遺産を受け継いだ。アッシリアに屈辱的で破滅的な貢ぎ物を納めていたユダ王国は、さらにその内部体制を蝕む悪弊によって

[3507] 聖マタイによる福音書は、至聖なる処女マリアから主イエス・キリストが誕生したことを、聖イザヤのこの預言の成就と見なしている。 *「これらすべてのことは、主が預言者を通して語られた言葉が成就するためであった。『見よ、処女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。これは「神は我々と共におられる」という意味である』」*（マタイ1:22–23）

揺らいでいた。　司法権を掌握していた上流階級の間では不正が横行し、金に目がくらんだ裁判官たちによる貧しい人々への暴力が日常茶飯事となっていた（ミカ3:9–11；　イザヤ1:17、1–23、3:14–15）。民を導くべき祭司たちもまた、同じ悪徳に蝕まれていた（ミカ3:11）。そして、真の預言者たちの声は、私利私欲に駆られた偽預言者たちによってかき消されていた（イザヤ30:20–21；ホセア9:8）。 全般にわたり、放蕩に溺れ（イザヤ1:21）、心において主から遠く離れていた民は、せいぜい律法の儀式的な部分のみを履行し[3508] 、生活においてその規定に従うことはなかった。それゆえ、主は預言者イザヤを通して、ご自身の民に次のような感動的かつ威厳ある戒めを語りかけ、改心を呼びかけた。

「わたし――と主は言われる――は、子らを育て上げ、高めたが、彼らはわたしに反抗した。牛は主人のことを知り、ろばは主人の飼葉桶を知っている。しかし、イスラエルはわたしを知らず、わたしの民は理解していない。　ああ、罪深い民よ、不義の重荷を負った民よ、悪人の一族よ、滅びゆく子らよ！　彼らは主（エホバ）を見捨て、イスラエルの聖なる方を軽んじ、背を向けた。なおも頑なさを続けるあなたがたを、さらに何をもって打つべきか。頭はすべて腫れ物で覆われ、心はすべて枯れ果てている。　足の裏から頭のてっぺんまで、健全な箇所は一つもない。ただただ、腫れ物、斑点、化膿した傷ばかりであり、それらはいずれも清められず、包帯も巻かれず、油で和らげられてもいない……。ソドムの君たちよ、主の御言葉に耳を傾けよ。ゴモラの民よ、わが神の律法に耳を傾けよ。あなたがたの多くのいけにえが、わたしにとって何の役に立つというのか……。　わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪にうんざりしている。また、子牛や子羊や雄山羊の血など、望んでいない。あなたがたがわたしの御前に現れるとき、誰があなたがたに、わたしの庭を踏み荒らすよう求めているのか！　もはやむなしい供え物を携えてくるな。香はわたしにとって忌まわしい。新月祭や安息日、祝祭の集まりは、不義と祝宴に他ならない。あなたがたの新しい月や祝祭は、わたしの魂が憎むものである。それらはわたしにとって重荷であり、　それらを背負うのは私にとって重荷である。あなたがたが手を差し伸べても、わたしはあなたがたから目を背ける。あなたがたが祈りを重ねても、わたしは聞かない。あなたがたの手は血にまみれている（イザヤ1:2–15）。あなたの銀は灰となり、あなたのぶどう酒は水で薄められている。　あなたの指導者たちは律法を犯し、盗人の共犯者である。彼らは皆、贈り物を愛し、賄賂を追い求める。孤児を守らず、未亡人の訴えは彼らの耳に届かない（イザヤ1:22–23）。身を洗い、清めよ。あなたがたの悪行をわたしの目の前から取り除け。　悪を行うのをやめよ。善を行うことを学び、正義を求め、虐げられた者を救い、孤児を守り、未亡人のために立ち上がれ。そうすれば、来て、わたしと裁き合おう……たとえあなたがたの罪が緋色のように赤くても、雪のように白くする。たとえ紫のように赤くても、羊毛のように白くする（イザヤ1:16–18）。

預言者ザカリヤの母方の子孫であるヒゼキヤ王は、不義でアッシリアのあらゆるものに傾倒していた父とは正反対の人物であった。　ヒゼキヤは自国の風習や慣習に忠実であり、真の信仰への愛に燃え、生涯の目標を、エホバへの崇拝の回復と、異教によって汚された土地の浄化に定めた。　その活動は、大多数が異教的な傾向を持っていた民の間では容易なものではなかった。そこで、敬虔な王を助けるために、彼が尊敬する預言者たちが駆けつけ、その筆頭に聖イザヤがいた。彼は多くの弟子たちを周囲に集め、彼らは師から教えを受けた後、今度は自ら民の啓蒙者としての役割を果たした。　こうして、聖イザヤによって創設された預言者の学校は、民の宗教的・道徳的復興において、ヒゼキヤ王に強力な支援を提供した。　――ヒゼキヤが真っ先に取り組んだのは、神殿から異教の忌まわしいものを一掃し、そこで礼拝を復活させることでした（歴代誌下29:3–36）。同時に、「高き所」を破壊することで、ヒゼキヤは私的な礼拝の行いを終わらせました。　偶像崇拝の根絶を目指し、彼は国の聖なる宝物さえも容赦しなかった。彼の命令により、多くのユダヤ人によって崇められてい

[3508] アハズ王の治世の終わりには、すでに述べたように、神殿も閉鎖されていた。

た、約800年前にモーセによって作られた（民数記21:9）銅の蛇が、エルサレムの中心に立っていたが、 （列王記下18:4）に立っていたものであった。 その後、ヒゼキヤが自らの王国の安泰を危惧して援助できなかったイスラエル王国の滅亡後、エルサレムにおいて多くのユダヤ人の面前で[3509] 、かつてはおそらく各家庭で私的に執り行われていた過越祭が、盛大に祝われた（歴代誌下30章）。

その間、サマリアを征服したサルゴンが死去し、その末息子センナケリムが王位を継いだ。サルゴンの死をきっかけに、アッシリアの重苦しい支配に苦しめられていた諸民族の間で反乱が勃発し、その波は広範囲に広がった。彼らは西アジア全域を覆う広大な地域に居住し、そこからさらにナイル川の河岸にまで及んでいた。 反乱軍の先頭に立っていたのは、エジプトのファラオ・セティと、エチオピアの王ティルガクであった。反乱を起こした諸民族には、ヒゼキヤ王も加わった。 センナヒリムは、膨大な軍勢を率いて反乱勢力の鎮圧に向かった。遠征の最終目標をエジプトに定めた彼は、まず北からパレスチナに侵攻した。ここで反乱を起こしていたいくつかの民族を再びアッシリアの支配下に置くと、センナヒリムは軍の一部をエルサレムへと向かわせた。 ユダヤの46の要塞都市を強襲して占領し、略奪した後、センナヒリムの部隊はまもなくその首都であるエルサレムを包囲した。一方、センナヒリム自身は、エジプトとの国境にあるユダヤ王国の都市ラヒスを包囲した。 包囲されたエルサレムの住民たちは恐怖に襲われたが、聖イザヤは彼らに励ましの言葉を惜しまず、アッシリア人には神の懲罰が待ち受けており、それはまさに選民の地において下されるであろうと預言した（イザヤ14:24–25）。しかし、預言者の言葉は、恐怖に打ちひしがれた人々の心に勇気を与えることはできなかった。 エゼキヤはエルサレムを明け渡すことを拒み、その防衛を強化したため、包囲戦は長期化した。さらに災いに拍車をかけるように飢饉が発生し、絶望した者の中には放蕩にふける者も現れたが、それに対し聖イザヤは厳しい非難を浴びせた（イザヤ書22:1–2, 12–14）。 ついに、アッシリア軍への抵抗が無益であると悟ったヒゼキヤは、降伏を決意した。彼はラヒスにいるセンナケリムのもとへ、服従の意を表明する使節を派遣した。 センナケリムはエルサレムへの包囲を解き、ユダ王国に以前よりも多額の貢納を課した。そのため、その支払いのために、以前の神殿略奪の際に残されていた、聖所へと通じる門や扉の枠に施されていた金を取り外さざるを得なかった。 しかし、その矢先、センナヒリムは、かつて自らに敗北を喫したエジプトのファラオ・セティが、上ナイル川の岸辺から軍を率いて進軍してきたエチオピア王ティルガクと連合して、自分に対して出兵したとの報を受けた。 こうした状況下で、センナヒリムは、ヒゼキヤの服従を、同盟諸王の援軍が到着するまでの時間を稼ぐための、単なる裏切り的な策略に過ぎないと見なした。 そのため、センナヒリムは、エゼキヤと結んだばかりの条約を無視し、再び3人の軍司令官を率いる部隊をエルサレムへ派遣した。その中には参謀総長のラプサクも含まれていた。部隊は、エルサレムの門が閉ざされ、城壁が防衛態勢を整えているのを目の当たりにした。 アッシリア軍の将帥たちはヒゼキヤ王の使節団と交渉に入り、エルサレムに自発的な降伏を説得した。やむを得ず、交渉は城壁越しに、大勢の民衆が見守る中で行われた。交渉は、包囲されたすべての人々に向けられたラプサクの次の神を冒涜する演説をもって締めくくられた。

「…偉大なるアッシリア王の言葉を聞きなさい。王はこう言われる。ヒゼキヤに惑わされてはならない……また、主によって希望を抱かせてはならない……『主が私たちを救い、この町はアッシリア王の手に渡されることはない』と 。 ヒゼキヤの言うことを聞いてはならない。アッシリアの王はこう言っている。「わたしと和解し、わたしのもとに出て来なさい。そうすれば、各人は自分のぶどうの木の実やいちじくの木の実を食べ、自分の井戸の水を飲むことができる。わたしがやって来て、あなたがたを、あなたがたの地と同じような地、 すなわち、パンとぶどう酒の地、果実とぶどう畑の地、オリーブの木と蜂蜜の地へ連れて行くまで、あなたがたは生き続け、死ぬことはない。だか

[3509] ヒゼキヤは、サルゴンによる移住から残っていたイスラエル人を祝宴に招いたが、彼らはこの招待を軽蔑して拒んだ（歴代誌下 30:5–10）。

ら、エゼキヤの言うことを聞いてはならない。彼は『主があなたがたを救われる』と言って、あなたがたを惑わしているのだ。諸国の神々は、それぞれの地をアッシリアの王の手から救ったことがあるか。エマフとアルパドの神々はどこにいるのか。　セパルヴァイム、エナ、イッバの神々はどこにいるのか。彼らはサマリアをわたしの手から救ったのか。これらの地の神々のうち、だれが自分の国をわたしの手から救ったというのか。それなのに、主がエルサレムをわたしの手から救うというのか。（列王記下18:28–35）。

この言葉がヒゼキヤに伝えられると、彼は深い悲しみのしるしとして自分の衣を引き裂き、荒布を身にまとって神殿へ向かった。また、預言者イザヤのもとには、宮廷の高官であるエリヤキムとセブナを、長老の祭司たちと共に遣わした。　王に倣って粗布をまとったヒゼキヤの使者たちは、聖なるイザヤにこう言った。

「今日は悲しみと懲らしめ、そして恥辱の日です……　ひょっとすると、あなたの神、主は、アッシリアの王が遣わしたラプサクのすべての言葉を聞いてくださるかもしれない……生ける神を冒涜し、あなたの神、主が耳にされたような言葉で侮辱している。どうか、まだ生き残っている者たちのために祈りを捧げてほしい（列王記下19:3–4）。

この、ある種の不安をにじませた言葉に対し、神の預言者は、主の助けに対する揺るぎない信仰に満ちた答えを返した：

「さあ、あなたの主君にこう伝えなさい。『主はこう言われる。アッシリア王の家来たちがわたしを侮辱した、あなたが聞いたその言葉を恐れてはならない。見よ、わたしは彼に霊を送り、彼はその知らせを聞いて自分の国へ戻り、わたしは彼の国で彼を剣で打ち倒す』と。[3510]（列王記下19:6–7）。

預言者によって勇気づけられたヒゼキヤは、アッシリア王の使節に対し、城を明け渡すことを拒否して答えた。しかしその後、アッシリア軍の侵攻から自国を救うため、裏切りを企てていないことを保証して、自らセナヒリムに使節団を派遣した。　ヒゼキヤの使節たちは、すでにラヒスにいたセンナヒリムに面会したが、成果は得られず、センナヒリムは彼らの話を聞くことさえしなかった。自軍の背後を固めるため、彼はエルサレムを攻略することを決めた。都市の包囲に時間を費やすことを望まなかった彼は、まずヒゼキヤに戦わずして都市を明け渡すよう説得を試みた。　そこでセンナヒリムは、ヒゼキヤのもとへ二度目の使節団を派遣し、手紙を届けた。その手紙の中で、彼は自らの強大さを誇り、ヒゼキヤに対し、エホバによる都の救済への希望を捨てるよう説得した。その巻物を受け取ったヒゼキヤは、神の宮へと赴き、主の御前でそれを広げ、次のような心からの祈りを主に向けて捧げた。

「イスラエルの神、ケルビムの上に座しておられる主よ。あなたは地上のすべての王国の唯一の神です。あなたは天と地を創造されました。　主よ、どうか御耳を傾けて（私）の声を聞いてください。主よ、どうか御目を開いてご覧になり、生ける神であるあなたを冒涜するために遣わされたセンナケリムの言葉を聞いてください。まことに、主よ！アッシリアの王たちは諸国民とその地を荒廃させ、彼らの神々を火の中に投げ込みました。　しかし、それらは神々ではなく、人の手による造り物、木や石に過ぎない——だからこそ、彼らはそれらを滅ぼしたのです。今、主よ、私たちの神よ、どうか私たちを彼の手から救い出してください。そうすれば、地上のすべての王国が、主よ、あなたこそが唯一の神であることを知るでしょう（列王記下19:15–19）。

ヒゼキヤの祈りに、聖なる預言者イザヤも自らの祈りを加えた（歴代誌下32:20）。そして、彼らの祈りは聞き入れられた。主は預言者イザヤを通して、ヒゼキヤに次のような、魂を強める御言葉を語られた。

[3510] センナケリムは、実際に数年後にアッシリアで、自分の息子たちによって殺害され、この世を去った（列王記下19:37）。

「イスラエルの神、主はこう言われる。あなたがアッシリアの王センナケリムに対してわたしに祈ったことを、わたしは聞いた。主が彼について語られた言葉はこうである。『シオンの処女はあなたを軽蔑し、あなたを嘲り、エルサレムの娘はあなたの後ろで頭を振って嘲笑するだろう。　あなたは誰を非難し、誰をののしったのか。誰に向かって声を張り上げ、その目をそれほど高く上げたのか。イスラエルの聖なる方に対して.....わたしに対するあなたの傲慢さ、そしてあなたの高慢さがわたしの耳に届いたゆえに、わたしはあなたの鼻の穴に輪を通し.....　そして、あなたが来たのと同じ道を通って、あなたを連れ戻す。見よ、ヒゼキヤよ、これこそがしるしである。今年、落ちた種から生えたものを食べ、来年は自然に生えたものを食べ、三年には種を蒔き、刈り取り、ぶどう畑を植え、その実を食べなさい。 また、ユダの家から生き残った者は、再び下で根を張り、上で実を結ぶ[3511]。　エルサレムからは残りの者たちが現れ、シオンの山からは救われた者たちが現れるからである[3512]。それゆえ、主はアッシリアの王についてこう言われる。「彼はこの町には入らず、そこに矢を放たず、盾を持ってこれに迫らず、その周囲に土塁を築くこともない.....　わたしは、わたし自身と、わたしのしもべダビデのために、この町を守り、救う。（列王記下19:21–22, 28–34）。

そして主は、アッシリアの王に対する御自身の力と、ユダに対する御自身の恵みを、驚くべき方法で速やかに示された。　夜の闇を晴らした日の出とともに、エルサレムに立ち込めていた恐怖と不安も晴れ去った。その同じ夜、*「主の御使いがやって来て、アッシリアの陣営で一八万五千人を打ち倒した。朝になって起きると、そこには死体の山があった」*（列王記下19:35）、そしてアッシリアの王は*「恥をさらして自国へ戻った」*（歴代誌下32:21）。一方、エルサレムの住民たちは、守りを失ったアッシリアの陣営に溢れていた莫大な戦利品を手に入れた[3513]。

平穏を享受しながら、ヒゼキヤは国家の平和的な整備に取り組み、その国は徐々に周辺諸国からの尊敬を集めるようになった（歴代誌下29:22–23）。しかし、この平和で幸福な日々は新たな不安に取って代わられた。ヒゼキヤ王が死に至る病に倒れたのである。　彼の寝所に預言者イザヤが現れ、主からの悲痛な御言葉を伝えた。すなわち、ヒゼキヤにはまもなく死が訪れるため、自分の家について遺言を残すべきだというものであった。旧約聖書の時代、死後の闇の中に、来たるべき贖い主の微かな光がかすかに差し込むだけの時代に生きた、　地獄と死に打ち勝つ方の光が、死後の闇の中に微かにしか輝いていなかった時代を生き、さらに王国を譲り渡せる後継者もなく、人生もまだ十分に満喫できていなかったヒゼキヤは、絶望のあまり日光を避けて壁の方を向き、苦々しく泣き叫んだ。「ああ！　主よ」と彼は叫んだ。「私があなたの御前に忠実に歩み、あなたに献身的な心で、あなたの目に喜ばれることを行ってきたことを思い出してください」（列王記下20:3）。

病に伏す王のもとを離れた預言者イザヤは、「まだ町を出る前に」、忠実なしもべの祈りを聞き入れた主からの「御言葉」を受けた。

「戻って、わが民の君であるヒゼキヤにこう告げよ。『あなたの父ダビデの神、主はこう言われる。わたしはあなたの祈りを聞き、あなたの涙を見た。　見よ、わたしはあなたを癒やす。三日目に、あなたは主の宮へ上る。また、あなたの寿命を十五年延ばし、アッシリアの王の手からあなたとこの町を救い出し、わたし自身と、わたしのしもべダビデのために、この町を守り抜く（列王記下20:5–6）。

3511 ユダ全土の収穫は、アッシリア軍によって奪われたり踏み荒らされたりした。そのため、ユダの人々には、どうやら避けられない飢饉が迫っていたようだ。　しかし、主は――預言者が言うように――そのような事態を許さない。地面に落ちた穀粒は、アッシリア軍が撤退した年だけでなく、翌年にも、生計を立てるのに十分な実を結ぶだろう。こうして、「（穀物の）生き残った残りは、再び地下で根を張り、地上に実を結ぶ」のである。

3512 ここでいう「残された者」とは、もちろん、不信仰なユダヤ人の民の中に常に存在していた、真の神に忠実な「残された者」のことを指している（イザヤ1:9；10:22；　エゼキエル6:8；ローマ8:29）を指しており、そこから旧約聖書の義人たちが生まれ、キリストの使徒たちが属し、そして世界への救いである教会が育まれたのである。

3513 選ばれた民が、救い主である神に対して抱いた熱烈な喜びと感謝は、一部の解釈者が指摘するように、詩篇45:1–12、46:1–10、75:1–13に表現されている。

ヒゼキヤの病を癒やすため、預言者イザヤは、今日でも東洋で最も一般的な薬であるイチジクの葉を使うよう命じた。預言者の指示に従い、王の体にできた腫れ物[3514]にそれを当てた。 王を励ますため、また王の願いに応じて、主は彼に驚くべきしるしを与え、回復したヒゼキヤが「主の宮へ行く」ことに対するあらゆる疑いを払拭した。預言者イザヤは王にこう言った。

「見よ、主からのしるしだ。主が語られた御言葉――影が十歩進むか、それとも十歩戻るか――を、主が果たされるというしるしである。」

ヒゼキヤは答えた。

「影が十段分進むのは容易なことだ。いや、影を十段分引き戻してほしい。」

– そこで、預言者イザヤは主に祈り、影を、アハズ王の階段を降りてきた十段分だけ、逆戻りさせた。[3515]（列王記下20:8–11）。

預言者イザヤの書には、ヒゼキヤが自身の回復という吉報を受けた際に捧げた祈りが記されている。この祈りは、死を目前にしながらも、そこから救われた王の心の内を、次のような感動的な言葉で描き出している。 「わたしは心の中で言った。『わたしの生涯の半ばに、わたしは陰府の門へと向かわねばならない。残りの年月は奪われてしまった。わたしは言った。「主、生ける者の地におられる主を、もはや見ることはない。この世に生きる人々のうち、もはや誰一人として見ることはない。」 私の住まいは、羊飼いの天幕のように、その場所から取り除かれ、私から運び去られる。私は織工のように自分の命を断たなければならない。主（すなわち神）は私を織機から切り離される。昼も夜も、あなたが私に死を遣わしてくださるのを待ち望んだ。 私は朝まで待ち続けた。獅子のように、主は私のすべての骨を砕かれた。昼も夜も、あなたが私に死を遣わしてくださるのを待ち望んだ。鶴のように、つばめのように声を上げ、鳩のように嘆き悲しんだ。私の目は憂いを帯びて天を見上げた。「主よ！ 私は窮地に立たされている。私を救ってください。」私は何を言えばよいのか。主は私に告げられた――そして、そのとおりにされた。私は、魂の悲しみを心に留めつつ、残りの生涯を静かに過ごそう……見よ、この激しい悲しみは私の益となり、あなたは私の魂を滅びの穴（すなわち墓）から救い出し、私のすべての罪を御自身の背に負ってくださった[3516]（イザヤ38:11–15, 17）。

ヒゼキヤ王の奇跡的な回復の噂は急速に広まり、バビロニアのような遠く離れた国にまで届いた。 その王メロダク・バラダンは、アッシリアの強力な圧力の下でもなお国家の独立を維持しており、この機会を利用して、エゼキヤの回復を祝うという名目で使節団を派遣し、それに伴う奇跡的なしるしについて詳しく探ろうとした。 しかし、使節団の真の目的は、ヒゼキヤと攻守同盟を結ぶことでした。使節団は、バビロニアの王からの手紙と贈り物をヒゼキヤのもとへ運んでいたのです。ヒゼキヤは、広大な国の王から派遣された使節団を喜び、自分の宝物をすべて見せた。この使節団は、神がヒゼキヤに与えた試練であり、「彼の心の内にあるすべてを明らかにするため」であった。そして、敬虔な王はこの試練に耐えられなかった。つい最近まで、奇跡的なしるしと結びついた神の憐れみの現れを目の当たりにしていたヒゼキヤは、主の栄光について考える余地のない虚栄心に駆られ、神への信頼を人々や自分自身へと移してしまったのである。 しかし、ヒゼキヤがバビロンの君主の使節たちに自国のあらゆる秘密を明かしてしまったことそのものが、神の測り知れない御計画を

3514 ヘブライ語の原文では、ヒゼキヤの病気は「シェヒン」と呼ばれており、これはペスト性の膿瘍であったと推測されている。

3515 ここでいうのは、アハズがバビロニアの様式に従って設置した日時計のことである。それは、上向きの階段を備えた高い建造物であったか、あるいは一定の順序で線が引かれた水平な円盤であった可能性がある。日時計に落ちる太陽の影は、階段や線に沿って徐々に移動し、それこそが時間の目印となっていた。 注目すべきは、天文学的な計算によれば、エゼキヤの病に罹った時期にあたる紀元前703年9月26日、エルサレムで部分日食が観測されたという点である。この日食こそが、聖書に記されているあの奇跡的な現象（日影が10段分後退したこと）の原因であった可能性がある。

3516 つまり、彼らを許し、そのことを忘れたのである。

知る上で、人間の理性の弱さを露呈するものであった。その御計画によって、ユダはまさにバビロンの君主の侵攻によって滅びる運命にあったのである。　使節たちが去った後、預言者イザヤは、エゼキヤの傲慢に対する懲罰となったこの悲痛な啓示を携えて、ユダの王のもとを訪れた。　使節たちが「遠い地、バビロンから」やって来たこと、そして「王が自分の領土のすべてにおいて、彼らに見せなかったものは一つもなかった」ということをヒゼキヤ自身から聞いたイザヤは、ユダ王にこう言った。

「主の御言葉を聞きなさい。見よ、やがてその日が来て、あなたの家にあるもの、またあなたの先祖たちが今日に至るまで集めてきたすべてのものが、バビロンへ運び去られ、何も残らない。あなたから生まれ、あなたが産む子らのうちから、何人かが連れ去られ、バビロンの王の宮殿で宦官となるであろう。」

「あなたが告げた主の御言葉は、まことに良いものです」と、悔い改めたヒゼキヤは謙虚に答え、同時に、せめて自分の生涯だけは平和と繁栄に恵まれるよう祈った（列王記下20:13–19；歴代誌下32:31；イザヤ39）。

主は罪を犯した王の祈りを拒まれなかった。ヒゼキヤは安らかに「先祖たちのもとへ帰った」（列王記下20:21）のであり、多くのユダヤ人が集まる中、エルサレムにあるダビデの子らの墓の上で、あらゆる栄誉をもって葬られた[3517]（歴代誌下32:33）。

まもなく、偉大な預言者聖イザヤもその生涯を閉じた。テルトゥリアヌス、ラクタンティウス、そして至福のヒエロニムスが受け入れたユダヤの伝承によれば、聖イザヤはエゼキヤの後継者マナセの治世下で、のこぎりで体を切り裂かれて殉教した[3518]。

もし、聖キリロス・エルサレムスが言うように、「預言者たちのうち、キリストを知らなかった者は一人もいなかった」とするならば、預言者イザヤについては、とりわけそう言わなければならない。　彼の書には、救い主キリストに関する予言が極めて完全かつ明瞭に記されており、教会父たちの口を通じて、聖イザヤは「旧約の福音記者」という称号を正当に授けられている。

この偉大な旧約の預言者には、来たるべきメシアの姿が詳細に描かれている。

先駆者（イザヤ40:3）の到来に先立って現れるメシアは、人間としての系譜においてイッサイの家系に属し（イザヤ11:1）、 夫のいない処女から生まれ（イザヤ7:14）、聖霊の賜物に満たされ（イザヤ11:2）、その神聖な尊厳を疑いなく示す御名を持つ（イザヤ9:6）。　謙遜で柔和な神のしもべであり、主によって愛され、諸国民に真理を宣べ伝えるために召されたメシアは、*「折れかけた葦を折らず、くすぶる亜麻の火を消さない」*一方で、地上でその王国を確立する際に偉大な力を発揮する（イザヤ書　9:1–4）。その御国は、正義と平和、そして神を知る御国となる――*「その時、狼は子羊と共に住み、ヒョウは子山羊と共に横たわり、　また、子牛と若い獅子と雄牛は共に住み、幼子たちがそれらを導き、雌牛は雌熊と共に草を食み、その子らは共に横たわり、幼子たちがそれらを導き、獅子は雄牛のようにわらを食べ、乳飲み子はアスピドの穴の上で遊び、幼子は蛇の巣に手を伸ばす。　わたしの聖なる山全体において、悪や害を行う者はいない。地は、海が水で満たされるように、主の知恵に満ちるからである」*（イザヤ書 11:6–9）。しかし、この王国の到来には、メシアが人々の罪のために受ける屈辱、苦しみ、そしてついに死が先行しなければならない。　「*主よ*」と、預言者は、まるで十字架に架けられた救い主のすぐそばに立っているかのように叫ぶ。「*私たちから聞いたこと（すなわち、受肉された神の御子についての説教）を誰が信じ、主の御業が誰に現れたのか。彼は、若枝のように、乾いた地から生える若芽のように、主の御前に現れた。彼には見目も威厳もなかった。私たちは彼を見たが、彼には私たちを引きつけるような見目もなかった。彼は人々の前で軽蔑され、卑しめられ、悲しみの男であり、病を知り尽くした者であった。私たちは顔を背け、　彼は*

[3517] 最も信頼できる資料によれば、ヒゼキヤは699年に亡くなった。

[3518] おそらく、聖イザヤの殉教的な最期を指しているのだろう。ヘブライ人への手紙11:39。

軽蔑され、私たちは彼を何とも思わなかった」。それなのに、「彼は私たちの弱さを引き受け、私たちの病を負ってくださった。しかし、私たちは、彼が神によって打たれ、懲らしめられ、辱められているのだと思っていた。しかし、彼は私たちの罪のために傷つけられ、私たちの不義のために苦しめられた。私たちの世界の懲らしめは彼の上にあり、彼の傷によって私たちは癒やされた。　私たちは皆、羊のように迷い、それぞれが自分の道にそれてしまったが、主は私たちのすべての罪を彼に負わせられた。彼は苦しめられたが、自ら進んで耐え、口を開かなかった。羊が屠殺場へ連れて行かれるように、彼は導かれ、毛を刈られる小羊が黙っているように、彼は口を開かなかった。　縛りと裁きから、彼は連れ去られたが、その系図を誰が語り得ようか。彼は生ける者の地から断ち切られた。彼は自分の民の罪のために刑罰を受けた。彼には悪人たちの墓が割り当てられたが、彼は富める者のそばに葬られた。それは、彼が罪を犯さず、その口に偽りがなかったからである」。　この、計り知れない謙遜さにおいて荘厳な、苦難に満ちたメシアの姿の傍らで、預言者は、その苦難によって栄光を受けた、教会の創設者であるメシアを描き出している。　*「主は彼を打つことを喜ばれ、彼を苦しみに委ねられた。しかし、彼の魂が贖いのいけにえをささげるとき、彼は長きにわたる子孫を見、主の御心は彼の手によって見事に成し遂げられる。彼は自分の魂の業を満足のうちに眺める。　その知識によって、この義人、わたしのしもべは、多くの人々を義とし、彼らの罪を自ら負う。　それゆえ、わたしは彼に偉大な者たちの間の分け前を与え、力ある者たちと共に戦利品を分け与えよう。それは、彼が自分の魂を死に委ね、悪人たちに数え入れられたからである。彼は多くの者の罪を自ら負い、罪人のために執り成し人となったのである」*（イザヤ書 53:1–12）。

コンダク、第2調:

預言の賜物を受け、預言者にして殉教者、神の御言葉を宣べ伝えるイザヤよ、あなたは主の受肉をすべての人々に明らかにし、最後に大声でこう宣言した。「見よ、処女が胎内に受け入れるであろう」。

聖殉教者クリストフォロスの受難。

記念日：5月9日

この輝かしい殉教者[3519] については、奇妙で並外れた話が伝えられている。すなわち、彼は犬の頭を持ち、人喰いの国[3520] の出身であったという。ある伯爵[3521] によって戦場で捕虜にされた際、彼は人間の言葉を話す能力を持っていなかった。　彼は神に祈ると、主は天使を遣わし、天使は彼に「勇気を出せ、レプレフ！」――これが彼の最初の名前であった――と言い、その後、彼の唇に触れて、それによって話す能力を与えた。その後、彼がある町に到着すると、キリスト教徒を迫害していた者たちを非難し始めた。　そのことで、あるバクフという男に殴打されたが、彼はそれに対し、キリストの戒めのためだけに謙虚にその殴打を受け入れるとバクフに告げた。もし彼が怒りに屈していたなら、バクフ自身も、さらには皇帝の権力も、彼には敵わず、彼はそれらを無に帰していただろう

3519 聖クリストフォロスの記念は、東方でも敬われているが、西方、とりわけスペインではさらに深く崇敬されている。西方では、伝染病が流行する際に彼に助けを求める。

3520 聖クリストフォロスの出自について、ある者は彼がカナン人であったと主張し、またある者は彼をカニネ人（canis＝犬）あるいは人食いのキノケファロスに由来すると説く。スラブの『プロログ』における聖人の容貌描写はペシウスによって否定されており、シナクサリストのニコディムは彼を醜悪な姿としてのみ描いている。

3521 コミティとは王の近衛兵を指したが、後にこの称号は、プロコンスルや地方長官などの随行員全般に広く用いられるようになった。

。 まもなく、彼を皇帝のもとへ連行するため、二百人の兵士が派遣された[3522] 。彼らが道を進むと、聖人の手に握られていた完全に枯れた杖が奇跡的に花を咲かせ、さらに旅の途中で兵士たちのパンが尽きかけたとき、彼はそれを豊かに増やした。　この偉大な奇跡に兵士たちは驚き、キリストを信じるようになり、聖人と共にアンティオキアの司教であり、聖殉教者バビロによって洗礼を受けた。その際、聖人はレプレヴという名に代わってクリストフォロスという名を授けられた。　聖人が皇帝の前に引き出されると、皇帝は彼を見るやいなや恐怖に襲われ、不意に仰向けに倒れ込んだ。その後、正気を取り戻した皇帝は、彼にキリストを否定させることを企てた。しかし、露骨な暴力ではなく、まず狡猾な手段で彼の心情を揺さぶり、その後、優しさをもって自分の意志に従わせるよう仕向けることにした。　その目的のために、彼は二人の女性――顔立ちが美しく、淫らな交わりに身を委ねる用意のある娼婦たち――を呼び寄せるよう命じた。彼女たちは、誘惑的な会話によって、若者たちの心に、抗いがたい、狂おしいほどの淫行への渇望を掻き立てた。　その女性たちのうち一人はカリニキア、もう一人はアキリーナという名だった。皇帝は彼女たちに聖人の元へ入り、いつものように様々な誘惑的な考えを植え付けるよう命じた。そうして、彼女たちへの罪深い愛に駆られて、　キリストへの信仰を捨て、異教の神々に犠牲を捧げることに同意するよう仕向けるためであった。しかし、聖クリストフォロスは彼女たちにキリストへの信仰を説き、その言葉によって彼女たちを偶像崇拝から遠ざけた。　皇帝のもとへ戻った彼女たちは、自らをキリスト教徒であると宣言した。そのために残酷な拷問にさらされ、キリストへの信仰のためにこのように苦難に耐え抜いた末、殉教の冠を授かった。　これらの女性たちに激しく怒った皇帝は、聖クリストフォロスを自分の前に連れてくるよう命じ、その異様な顔つきを嘲笑したが、聖人はこれに対し、皇帝デキウスの名には「悪魔の所業の巣窟」という意味があるとして、彼をそう呼んだ。　その後、皇帝は、聖クリストフォロスを連れてくるために派遣され、彼と共に聖なる洗礼を受けた200人の兵士たちを死刑に処した。彼らは聖人のもとへ行き、皇帝の目の前で彼にひれ伏したからである。　皇帝は彼ら全員の首を切り落とし、遺体を焼き払うよう命じ、聖クリストフォロについては銅の器に閉じ込め、釘で打ち付け、その器を赤熱させるよう命じた。しかし、それが実行されたとき、聖人は無傷のままであった。　火の熱さにも、釘で打ち付けられることにも何の苦痛も感じることなく、彼はまるで心地よい涼しさの中にいるかのように、赤熱した器の中に立っていた。　その場にいた多くの人々には、これはまやかしのように見えたが、聖人は信者たちに、拷問の最中に、背が非常に高く、容姿端麗で、白い衣をまとった一人の男を見たと、全く真実を喜びをもって語った。その男からは太陽をも凌ぐ光が放たれており、頭には輝く冠を戴き、　その周囲には多くの戦士たちが取り囲んでおり、彼らと、ある黒い、悪臭を放つ黒人たちが戦いを繰り広げていた。黒人たちは聖人を捕らえて連れ去ろうとしていたが、この恐ろしい指導者は怒りの眼差しで彼らを見据え、その視線だけで敵軍全体を混乱させ、打ちのめした。そして聖人には、無傷で拷問に耐え抜く力を与えた。　そのような話を聞き、聖人が全く無傷であるのを見て、民衆の多くは彼を信じ、キリストに帰依した。そして、聖人を灼熱の器から救い出したため、彼らは王の処刑人によって切り刻まれた 。 その後、聖クリストフォロスの首に石を縛り付け、井戸に投げ込んだが、天使が彼をそこから救い出し、次に彼に灼熱の銅の服を着せ、ついに剣で首を切り落とした[3523] 。

聖クリストフォロスと、彼と共に苦難を受けた他の聖殉教者たちの記念日は、キパリシア[3524] で、聖大殉教者ゲオルギオスの殉教日に近い、彼の殉教日に祝われる。

[3522] ギリシャ語のプロローグに基づき、アッセマニは、この皇帝が249年から251年までローマ帝国を統治したデキウス皇帝であったと推測している。

[3523] この聖殉教者は、デキウス帝の治世下、紀元250年頃にリキアで殉教した。殉教記録によれば、その殉教日は、東洋・西洋を問わず、最も古い暦のすべてにおいて4月23日とされている。

[3524] キパリシオンまたはキパリスは、コンスタンティノープルにある地域である。

トロパリオ、第4声調：

血に染まった衣を身にまとい、主なる万軍の王の御前に立つ、永遠に記憶される聖クリストフォロスよ。今や、霊なる者たちや殉教者たちと共に、三聖なる恐るべき甘美な賛美を歌っている。その祈りによって、あなたの羊の群れを救い給え。

ミルリキの大司教、聖ニコラオスの聖遺骨の移送に関する伝承[3525]

記念日：5月9日

1087年の夏、 ギリシャ皇帝アレクセイ・コムネノス[3526] の治世下、コンスタンティノープル総主教ニコライ・グラマティコス[3527]

の在任中、ルーシではキエフにヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチ[3528] が、チェルニヒウにその息子ウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフ[3529] が統治していた頃、イスマイル人[3530] が、海の両側からギリシャ領に侵攻した。 彼らはコルスニ[3531] からアンティオキア、さらにはエルサレムに至るまで、あらゆる都市や村々を蹂躙した。その際、男性を斬り殺し、女性や子供を捕虜とし、家屋や財産を焼き払った。教会や修道院は荒廃し、都市は異教徒の支配下に入った。　その頃、リキアのミラスも荒廃した。そこには、驚くべき輝かしい奇跡を起こした、尊く、至聖なる聖ニコラオスの遺体が安置されていた。　この敬虔な聖人は、自らの都市と教会を荒廃から守ることができたはずだが、神の御心に従い、これに抗うことはせず、「主よ、御心のままに行います」と述べた。

しかし、私たちの主イエス・キリストは、聖人の遺骨が荒廃した場所に安置され、誰からも称えられないままになることを許すことはできませんでした。聖書に記されているとおり、「聖徒たちは栄光のうちに喜び祝う」（詩編149:5）、また「そのすべての聖徒に栄光がある」（詩編149:9）からです。

当時ノルマン人の支配下にあったバリの町[3532] には、キリストを愛し、義にかなったある長老が住んでいた。　聖ニコライが彼の夢に現れ、こう言った。「行って、市民たちと教会の全会衆に告げなさい。彼らがミレの町へ行き、そこから私を連れ出し、ここに安置するようにと。私はあの荒廃した場所に留まることはできないからだ。これが主の御心である」。

そう言い終えると、聖人は姿を消した。朝目覚めた長老は、その幻視の出来事を皆に語った。人々は喜び、こう言った。「今、主は御自分の民と私たちの町に対して、その慈しみを大いに示され

[3525] 聖ニコライ・奇跡行者の生涯については、12月6日の項目を参照のこと。

[3526] アレクセイ1世コムネノスは、1081年から1118年までビザンツ帝国を統治した。

[3527] ニコライ3世・グラマティコスは、1084年から1111年まで総主教を務めた。

[3528] ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチは、ヤロスラフ・ムドリーの息子であり、聖ウラジーミルの孫で、1075年から1076年まで（6ヶ月間）公爵を務め、その後1078年から1093年まで再び公爵を務めた。

[3529] ウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフは、1073年から1125年まで統治した。

[3530] ここでいう「イズマイルの民」とは、トルコ人、ペチェネグ人、ポロヴェツ人といった、同じ部族に属する東方の諸民族を指す。

[3531] クリミアのセヴァストポリ近郊にある古代都市で、タウリスのヘルソネスとも呼ばれていた。

[3532] バーリ市は、イタリア半島の南端、アドリア海に面した東岸、かつてアプリアと呼ばれた地域に位置している。南イタリアの住民は古くからギリシャ系であった。 9世紀末までに、この地ではギリシャ皇帝の支配が確立された。1070年、バリーの街は、ゲルマン民族の北方の部族であるノルマン人によってギリシャ人から奪われたが、その後もアプリアのいくつかの修道院では正教の信仰と礼拝が維持され、それらはコンスタンティノープル総主教の管轄下に置かれていた。

た。なぜなら、御自分の御使いである聖ニコラオスをお迎えするにふさわしい者と私たちを認めてくださったからだ」。

彼らは直ちに、自分たちの仲間の中から敬虔で神を畏れる者たちを選び出し、三隻の船に乗せて聖人の聖遺物を求めて送り出した。商売に行くふりをして、その者たちは船に小麦を積み込み、旅立った。

アンティオキアに到着すると、彼らは小麦を売り払い、必要なものをすべて買い揃えた。そこで彼らは、そこに滞在していたヴェネツィア人たちが、彼らに先んじて聖ニコラオスの聖遺物を奪おうとしていることを知った。直ちに、貴族たちは急いで出発し、リキアのミレにたどり着き、町の埠頭に停泊した。　自分たちと故郷の街を救うため、彼らは武装して聖ニコラオスの教会に入った。そこで四人の修道士を見かけ、聖ニコラオスの聖遺骨がどこに安置されているか尋ねた。修道士たちは聖遺骨の安置場所を指し示した。男たちは教会の床を掘り起こし、聖油で満たされた聖遺骨箱を見つけた。 彼らはミロを器に注ぎ出し、聖人の遺骸を船へと運び、その後出航した。2人の修道士はミールに残り、残りの2人は聖ニコラオスの遺骸を[3533] まで護送した。彼らは4月11日にミールを出発し、5月9日の日曜日の夕方にバリに到着した。　ミールから聖ニコラオスの聖遺物が到着したのを見て、バーリの住民全員、男女を問わず、老若を問わず、ろうそくと香を手に聖人を迎えに出た。そして、喜びと大きな敬意をもって聖遺物を受け取り、海辺にある聖ヨハネ・洗礼者教会に安置した。

聖人の聖遺物はここで多くの奇跡を起こした。聖遺物は日曜日の夕方にバーリに到着したが、月曜日の朝にはすでに、様々な病に苦しむ47人の男女を癒やした。ある者は頭痛に、ある者は目の病に、またある者は手足や心臓の病に、さらには全身が邪悪な霊に苦しめられていた者もいた。　火曜日には22人の病人が癒やされ、水曜日には29人が癒やされた。木曜日の早朝、聖ニコライはすでに5年間も病んでいた聾唖者を癒やした。　その後、聖人はある敬虔な修道士のもとに現れ、こう言った。「さて、神の御心により、私は日曜日の第九時にこの地を訪れた。そして、111人が私によって癒やされたのだ」。

そして聖ニコライは、尽きることのない泉のように、日々さらに多くの奇跡を起こし続けた。人々は聖人に、金や銀、高価な衣服など、多くの献げ物を捧げた。その輝かしい奇跡を目の当たりにした市民たちは大きな喜びに満たされ、聖ニコライ、すなわち奇跡行者の名に因んで、[3534] という壮大で美しい教会を建立し、その聖遺骨のために金メッキを施した銀製の聖遺物箱を造った。　リキアのミールから聖遺骨が移送されてから3年目の夏、彼らはローマ教皇ウルバヌスに使者を送り、聖ニコラオスの聖遺骨の移送のために、司教たちや教会の聖職者全員を率いてバーリに来るよう要請した。教皇は司教や聖職者たちに付き添われて到着した。　彼らは聖人の遺骸を銀製の聖遺物箱に納め、その後、司教たちと貴族たちがそれを新しく壮大な教会へと運び、5月9日に祭壇に安置した。また、彼らは聖人がミルから運ばれてきた際に使われていた古びた棺も運び、教会内に安置し、その中に聖人の遺骸の一部である片腕を納めた。　多くの人々が訪れ、聖人の遺骨や聖遺物箱に口づけをして聖人を崇拝した。ローマ教皇ウルバヌス、司教たち、そしてすべての市民は、その日、聖人を称える盛大な祝祭を行い、その称賛は現在に至るまで続いている[3535]。 その間、人々は食事と飲み物で楽しみ、貧しい人々に惜しみなく施しを施した後、神と、神に愛された聖ニコライを賛美し称えながら、平和のうちにそれぞれの家へと帰っていった。

[3533] 聖ニコラオスの聖遺骨の移送を祝う礼拝では、次のように歌われている。「聖人よ、あなたの巡行は海を越え、リキアのミールからバールグラードへと至った。あなたの棺から聖櫃が取り出され、東から西へと至った。あなたの棺の傍らで敬虔に付き従い、あなたに敬意を表した修道士たちよ、万物の主の御手招きにより、栄光ある聖ニコライよ」［詩篇の2番目のスティヒラ］。–*『信仰のABC』編集部*]。

[3534] ルーシにおける聖ニコラオスの聖遺骨移送の祝日は、1089年、キエフ都主教ヨアンヌス2世の時代に制定された。

[3535] この教会は現在も存続している。

トロパリオ、第4調：

輝かしい祝祭の日が訪れ、バルス市は喜びに満ち、それとともに全宇宙が霊的な歌と賛美の歌で歓喜に沸いている：　今日こそは、尊く、多くの癒やしをもたらす聖ニコラオス、奇跡行者の聖遺骨の移送を祝う神聖な祝祭の日である。まるで沈むことのない太陽が輝き、その光り輝く光線で、試練の闇を追い払い、叫び求める信者たちの苦難を払いのけるかのように。おお、我らの偉大なる執り成し手ニコラオスよ、我らを救いたまえ。

コンダク、第3調：

東から西へと星のように輝き渡る、聖ニコラオスの御威光よ。海はあなたの御行列によって清められ、バルスクの街はあなたによって恵みを受けました。あなたは、私たちのために、優雅で、驚くべき、そして慈悲深い奇跡の行い手として現れたのです。

5月23日

5月10日（旧暦）

聖使徒シモン・ゼロテの記念日

5月10日の記念日

この聖シモンはガリラヤのカナの出身であり、カナの町はナザレからそれほど遠くなかったため、主とその聖母マリアに個人的に知られていた。シモンが結婚を祝う宴を開いた際、彼はその宴に主とその弟子たち、そして聖母マリアをも招いた。　しかし、客たちのためのワインが足りなくなったため、主は水をワインに変えられた（参照：ヨハネ2:1–11）。この奇跡に深く感銘を受けた新郎は、主イエス・キリストを真の神として信じ、婚礼の宴とその家そのものを後にして、熱心に主イエスに従った。それゆえ、彼は「ゼロト」、すなわち「熱心者」[3536]と呼ばれたのである。なぜなら、彼は非常に大きな熱意に燃え上がり、キリストへの愛のために、花嫁も、あらゆる愛着も捨て去り、自らの魂を天の花婿に捧げたからである。　この功績により、シモンはキリストの弟子たちの仲間に加えられ、十二使徒の聖人の列に数えられた。

五旬節の日に、火の舌のような姿で聖霊が使徒たちの上に降ったとき、彼らは異言の賜物を受け、あらゆる民族に福音を宣べ伝えることができるようになった。そしてシモンも、他の十一人の使徒たちと共に、聖霊を受ける恵みにあずかった。　聖霊を受けた後、彼はキリストを宣べ伝えるために各地へと旅立ち、エジプト、モーリタニア、リビア、ヌミディア、キリニア、アブハジアを巡った。　また、ブリタニアにも赴いた。そこで彼は、キリストを知らなかった多くの異教徒たちにキリス

[3536] 「ゼロット」と「熱心者」は同義語である。「ゼロット」とは、ヘブライ語の「カナニット」（「カナ」＝熱意に由来）のギリシャ語訳である。　シモン・ゼロットは、使徒に召される前、ゼロット派――モーセの律法の儀式的規定の遵守に特に注意を払った、自国の信仰の熱心な擁護者たち――の一員であったという説がある。

トの信仰を説き明かしたが、そのために不信仰者たちによって十字架にかけられ、イエス・キリストが受けた十字架の苦しみと同様の拷問の末に生涯を閉じた[3537]。

コンダク、第2声調:

敬虔な人々の魂に植え付けられた教えの至高の知恵は広く知られている。それゆえ、神の御言葉を語ったシモンすべてを賛美し、喜び祝おう。彼は今や栄光の御座の前に立ち、霊的な者たちと共に喜び、絶えず私たちすべてのために祈っているからである。

聖イシドーラ・ユロディヴァの生涯

記念日：5月10日

フィヴァイダにあったタヴェンニシオ女子修道院（[3538]）には、他の修道女たちの中に、イシドーラという名の一人の乙女がおり、彼女は聖なる愚者の道を歩んでいた。　彼女は愚かで正気を失ったかのように振る舞っていたため、他の修道女たちから非常に軽蔑され、彼女と一緒に食事をとる者は一人もいませんでした。彼女は皆から侮辱され、侮辱され続けましたが、イシドーラは大きな忍耐をもってその修行に耐え、常に神に感謝し、神を賛美していました。

イシドーラは常に修道院の厨房で働き、すべての修道女に仕え、最も困難で汚い仕事さえも厭うことなく、修道院のあらゆる務めを果たした。彼女は自らの手で、修道院からあらゆる汚れや不浄を取り除いた。　このように、尊者イシドーラは朝から夜まで絶えず働き、一時間たりとも休息をとることなく、常に自らの肉体を酷使し続けた。

時折、イシドーラは周囲の修道女たちの前で自分の美徳を隠すため、あたかも悪霊に取り憑かれたかのように振る舞った。こうして彼女には、使徒の言葉『*この世で賢い者と思われたいと思う者は、愚かな者となりなさい。そうすれば、真に賢い者となるのです*』（Iコリント3:18）が成就したのである。

その修道院の修道女は計四十人おり、彼女たちは皆、修道院生活の規則に従って頭にベールを被っていたが、イシドーラだけは頭部を粗末な布で覆っていた。　彼女がパンを一口でも食べる姿や、食卓について調理された食事を口にする姿を、誰も見たことがなかった。というのも、彼女は食卓から落ちるパンくずを集めてそれを食べていたからである。調理された食事の代わりに、イシドーラは鍋や釜を洗った後のその水を飲んでいた。　聖女は決して誰に対しても言葉で侮辱することはなく、誰に対しても怒りを露わにすることもなく、神に対して不平を言うこともなく、常に沈黙を守って

[3537] シモン・ジロットはアブハジアで殉教し、ジゲティアの近くにあったニコプシアという町に埋葬された。この町の遺構は、今でも地元住民によって、スフミから20ヴェルスタほど離れた、海岸からほど近い場所にあると示されている。聖人の死の地には教会が建てられ、1875年に大公の一人の尽力により再建された。今日記念されている聖使徒シモン・ジロトは、第一に、　同じく十二使徒の一人であるシモン・ペトロ、および、主の肉親であるシモン（またはシメオン）（マタイ13:55）――彼は70人の使徒の一人であり、主の肉親である使徒ヤコブの後継者としてエルサレムの第二代司教を務めた――と区別しなければならない。 ――シモン・ゼロテの記念日は、他の11人の使徒たちと共に、6月30日に聖教会によって祝われている。

[3538] タヴェンニシの修道院は、エジプトの著名な修道士である聖パコミオス大聖人（その記念日は5月15日）によって設立され、上フィヴァイダに位置していた。この修道院が設立されたきっかけは、パコミオスの姉が隠遁生活を送りたいと願ったことによるものであった。　修道院の地として選ばれた場所は「メン」と呼ばれ、ナイル川の岸辺に位置していたのに対し、男子修道院はナイル川の中州に位置していた。聖パコミオスは、隠遁生活を送る女性たちに、自身の修道院とほぼ同じ厳格な規則を与えた。

いた。他の修道女たちが彼女を頻繁に殴ったり、悪口を言ったりしていたにもかかわらず、彼女は誰とも長い会話も短い会話もせず、そもそも誰とも話さなかった。

聖女イシドーラがそのような修行に十分な年月を費やした後、近隣のポルフィリトの荒野で修行に励んでいた、極めて徳の高い人物ピティリムに、彼女に関する啓示が与えられた。彼のもとに主の天使が現れ、こう告げた。 「なぜ、この荒野に身を置きながら、心の中で自分を誇り、自分を徳高い者だと考えているのか? お前より徳が高く、その修行によって神に喜ばれている女性を見たいのか? もしそのような女性を見たいのなら、タヴェンニシイの女子修道院へ行け。そこでは、頭に穀物の殻の代わりにぼろ布を巻いた一人の修道女に出会うだろう。 その修道女は、常に他の修道女たちの中に身を置き、愛をもって皆に仕えているため、誰からも軽蔑されているが、それにもかかわらず、彼女の心は決して神から離れることはなく、その精神も常に神への思いに没頭している。 それに対し、あなたはここで孤独に過ごし、ここから決して離れることなく、心の中ではあらゆる町を巡っているのだ」。

ピティリムは直ちにタヴェンニスの女子修道院へと向かった。タヴェンニスにある男子修道院に到着すると、ピティリムはその修道院の院長に、女子修道院まで案内してくれる者たちを派遣してほしいと頼んだ。 ピティリムはここでその功績によって知られていたため、彼の修道生活と高齢に配慮して、修道院長は修道士たちの中から案内人を手配した。彼らは慎重かつ慈愛をもって、男子修道院と女子修道院を隔てる川を渡らせ、彼を女子修道院へと案内した。

修道院に到着すると、尊者はまず修道院の礼拝堂へ向かった。そこでいつもの祈りを捧げた後、ピティリムは、すべての修道女たちが自分の目に見えるように集まってくれるよう頼んだ。 イシドーラを除くすべての修道女が集まった。天使から知らせを受けたあの修道女——彼がここに来た理由そのものである——の姿が見えないと、長老は言った。

「すべての修道女を私のところへ連れてきてください。どうやら、ここに一人欠けているようですから。」

すると、修道女たちはこう答えた。

「私たちは皆、ここにあなたの尊い御前に立っています。」

しかし、長老は言った。

「ここには、神の天使から啓示を受けたあの修道女が一人もいない。」

すると、修道女たちは言った。

「私たちは皆ここにいます、尊い父よ。ただ一人、厨房にいる姉妹がいないだけですが、彼女は愚かで、悪霊に取りつかれているのです。」

すると、長老はこう言いました。

「その修道女も私のところへ連れてきてくれ。彼女に会いたいのだ。彼女のために、私はここへ来たのだから。」

修道女たちは彼女を連れ出し、長老が呼んでいると伝えた。しかし、彼女は行くことを拒んだ。なぜなら、天使から長老に与えられた啓示のことを、霊によって悟っていたからである。

そこで修道女たちは彼女を掴み、力ずくで引きずりながら言った。

「敬虔なピティリム神父があなたを呼んでいる。」

イシドーラが長老のもとへ連れて行かれると、長老は彼女を見て、これがまさに天使が彼に告げたあの修道女であることを悟り、彼女の足元にひれ伏してこう言った。

「尊き母よ、私を祝福してください!」

しかし、イシドーラ自身も彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「あなたこそ、私を祝福してください、敬虔な父よ!」

この様子を見て、修道女たちは大いに驚き、長老にこう言った。

「そんな不敬なことをなさらないでください、敬虔な父よ！　この姉妹は正気を失っているのですから。」

すると、聖ピティリムは彼女たちにこう言った。

「もしかすると、あなた方全員が正気を失っているのかもしれない。しかし、この姉妹は私やあなた方全員よりも、神に喜ばれている。彼女は私たち全員の母であり、私は主が審判の日に、私を彼女と同じ運命に与えてくださるよう祈るつもりだ。」

これを聞いて、修道女たちは皆、長老の前にひれ伏し、涙ながらに、彼女に毎日加えていたあらゆる侮辱について打ち明けた。その際、ある修道女がこう言った。

「私はいつも彼女を叱りつけていました。」

別の修道女はこう言った。

「私は彼女に汚物をぶちまけていました。」

三番目の修道女は：

「私は彼女を平手打ちにしていました。」

4人目：

– 私は棒で彼女を殴った。

そして他の姉妹たちも、修道女に与えた数々の侮辱について長老に打ち明けた。イシドーラの前にひれ伏し、彼女たちは皆、許しを請うた。

一方、誠実な長老ピティリムは、敬虔なイシドーラと共に、姉妹たちの罪が赦されるよう、神に熱心な祈りを捧げた。　その後、ピティリムは姉妹たちに十分な時間をかけて教えを説き、彼女たちの魂の益となるよう語り合い、ついに、万人の目から隠された御自分のしもべを見ることを許してくださった神を賛美し、栄光を帰しながら、自らの修業の場へと戻っていった。

一方、聖イシドーラは、姉妹たちからの敬意を受けることを望まず、長老が去った直後、誰にも知られぬままその修道院を密かに去り、最期の日まで誰にも知られぬ場所で修行を続けた。

このように、すべての人から隠された神の御使いの生涯は、その「狂人」という仮面の下で、誰にも知られずに主に仕えるものであった。　その功績により、彼女は天において、すべての天の同胞たちの目の前で、主から公に報いを受けるであろう。彼らと共に住まうようになり、彼女は父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美する[3539]。

聖タシシアの記念日

記念日5月10日

エジプトには、タイシアという名のキリスト教徒の少女が住んでいた。　両親が亡くなり、彼女が孤児となったとき、処女の清らかさを保ちたいと願ったタイシアは、全財産を貧しい人々に施し、自分の家をスキトスの修道士たちの宿舎とした。こうして彼女は長い間、修行者たちを家に迎え入れ、旅の疲れを癒やすために尽力した。　かなりの時間が経つと、タイシアは全財産を使い果たしてしまい、極度の貧困に陥った。悪魔の狡猾さにより、彼女に近づいた罪を愛する者たちが、彼女をも罪へと誘い込み、救いの道から逸らしてしまった。それ以来、タイシアは淫行や放蕩にふける罪深い生活を送るようになった。

スキトスの修道者たちは、タイシアの生活がこのように一変したことを知ると、深く悲しんだ。互いに相談した後、彼らはアッバ・ヨハネ・コロフのもとへ行き、こう告げた。

「あの姉妹が罪深い生活を送っているという話を耳にしました。しかし、彼女はかつて私たちに深い愛を示し、自宅に私たちを泊めてくれたのですから、私たちも彼女に霊的な愛を示し、彼女の

[3539] 聖イシドーラの死は4世紀末に訪れた。

魂の救いを案じたいと思います。　どうか、敬虔な父よ、あなたも尽力して、彼女のところへ行き、悔い改めを勧めてください。あなたは神から知恵を授かっていますから、きっとそれを成し遂げられるでしょう。私たちは断食を行い、主があなたを助けてくださるよう、神に熱心に祈りを捧げます。」

アッバ・ヨハネ・コロフは、敬虔な父たちの願いに応えて、その女性のいる町へ向かった。道中、彼は心の中で、すべての者が救われることを喜ばれる、自身の助け手である神に祈りを捧げていた。

タイシアの家に着くと、長老は扉をノックし、家の入り口を守っていた女性にこう言った。

「ご主人様に、私がお話ししに来たとお伝えください。」

すると、門番の女は怒りを込めてこう答えた。

「あなた方修道士たちは、彼女の全財産を浪費してしまったではありませんか！」

しかし、老僧は彼女にこう言った。

「彼女に、私が非常に貴重なものを持ち込んだと伝えてくれ。」門番の女は去り、長老の言った通りに女主人に伝えた。

すると、その女性はこう答えた。

「あの修道士たちは、黒海の近くを歩いていると、時々真珠を見つけるのよ。その老僧を私のところへ連れてきて。」

家に入ると、老僧はタイシアのそばに座った。そして、彼女の顔を見つめ、深くため息をつくと、頭を垂れて泣き出した。

すると、タイシアは老人に尋ねた。

「敬愛する父よ！　なぜ泣いておられるのですか？」

すると、老人は彼女にこう答えた。

「サタンがあなたの顔の上で戯れているのが見える。どうして私が泣かずにいられようか？　なぜあなたは、至聖にして不死の婚約者である、我らの主イエス・キリストを、ご自身の花婿として迎えようとしなかったのか？　なぜあなたは主の宮を軽んじ、自らをサタンに委ねたのか？　なぜあなたはサタンの邪悪な行いに従うのか？」

その言葉を聞いて、タイシアは心を深く動かされた。老修道士の言葉は、まるで彼女の心を貫く火の矢のようだったからだ。たちまち、彼女は自分の罪深い生活に対して嫌悪感を抱き、自分自身と自分の罪深い行いを恥じるようになった。そして、彼女は老修道士にこう言った。

「敬愛する父よ！　罪人にも悔い改めの道はあるのでしょうか？」

すると、長老は彼女にこう答えた。

「まことにあります。救い主はあなたの回心を待ち望んでおられ、父なる御腕の中にあなたを受け入れる用意ができておられます。なぜなら、主は罪人が滅びることを望まず、罪人が救いの道へと立ち返ることを望んでおられるからです。」　そして、私があなたに保証しましょう。もしあなたが心から悔い改め、全き心をもって主に向き直るならば、主は再びあなたを御自身の花嫁として愛し、あらゆる罪の汚れからあなたを清め、朽ちることのない天の御殿へと導いてくださるでしょう。その時、すべての天使の階級があなたを喜び祝うでしょう。なぜなら、彼らはたった一人の悔い改める罪人のためでさえも喜ぶからです。

タイシアはこれに対し、こう言いました。

「神の御心がありますように、敬愛する父よ！私をここから連れ出し、あなたがご存知の場所へ導いてください。そこで、悔い改めにふさわしい場所を見つけられるように。」

すると、長老は言った。

「行こう。」

そう言って立ち上がり、彼女の家の出口へと向かった。

タイシアも立ち上がり、長老の後を追った。家の中を片付けることも、家について誰かに一言も告げることもなく、キリストのためにすべてを即座に捨て去ったのである。

タイシアが自分の家のことを全く気にかけず、誰にも何も告げなかったのを見て、ヨアン神父は、このような突然の変化と、タイシアの神に対する熱意に大いに驚いた。このことを神に感謝した後、彼は旅立った。タイシアは彼の後ろを、彼からかなりの距離を置いて歩いていた。

旅人たちが荒野にたどり着いた頃には、すでに時刻は遅く、夜が迫っていた。

地面に砂で小さな寝床を整えると、長老はタイシアにこう言った。

「神の恵みの覆いの下で、ここで眠りなさい。」

それから、彼女に十字を切って守りを施すと、少し離れた場所に身を退いた。いつもの祈りを捧げた後、老修道士は地面に横たわり、眠りについた。

真夜中になると、老修道士は空に光を見たため目を覚ました。上を見上げると、天からタイシアの方へと伸びる炎の帯が見えた。

この光景に、ヨハネは恐怖に襲われた。しかし、タイシアをじっと見つめると、神の天使たちがその道筋に沿ってタイシアの魂を天へと昇らせていることに気づいた。ヨハネは、その驚くべき光景が視界から消えるまで、じっと見つめ続けた。　その後、ヨハネは立ち上がり、タイシアのもとへ向かった。彼女のそばに近づくと、手で彼女を軽く押してみたが、彼女はすでに息を引き取っていたことがわかった[3540]。その時、老修道士は恐れと戦慄に駆られ、地面にひれ伏した。 すると、天から声が聞こえてきて、こう言った。「たった一時間の間に示された彼女の悔い改めは、長い間続く悔い改めよりもはるかに喜ばしい。なぜなら、後者の場合、悔い改める者の心にはそのような温かさが生まれないからだ」。

長老は朝まで祈りを捧げ続けた。　その後、聖なるタイシアの尊い遺体を大地に葬り、彼はスキートに戻り、そこで父たちにあらゆる出来事を語った。一連の出来事を知った修道士たちは、キリスト・神の偉大なる慈悲を賛美し、感謝を捧げた。真の神である御方に、永遠の栄光が帰されますように。アーメン。

聖シモン、ウラジーミルおよびスーズダリの司教の伝

記念日：5月10日

シラの子イエスが、オニアの子シモンについて語った言葉[3541]：*「大祭司は、その生涯において家を修復し、その時代において神殿を堅固にした」*（シラ書 50:1）；また、*「雲の中に輝く明けの明星の如く、昼の満月の如く、至高者の神殿の上に輝く太陽の如く、荘厳な雲の中に輝く虹の如く」*（シラ書 50:6–7）――これこそ、私たちの尊い父シモン、ウラジーミルおよびスーズダリの司教、ペチェルスクの聖人たちの生涯の証人であり記録者、そして至福のネストルに次ぐ第二の年代記作者についても、私たちが語らなければならないことである。　まことに、彼は神の家を立派に築き上げ、自らの生き様と聖人たちの生涯に関する教訓に満ちた物語によって教会を強固なものとした。そ

[3540] 聖タイシアの死は5世紀に訪れた。

[3541] ここでいうのは、もちろん、ユダヤ人の大祭司シモン1世のことである。彼は大祭司オニア1世の息子であり後継者であり、その敬虔さから同時代の人々から「義人」と呼ばれていた。　エジプト王たちの支配下で平穏な時代を活かし、彼はエルサレムの要塞化を再開し、神殿を美しく飾り、高い城壁で囲み、その内部に大幅な改修と改良を加えた。　しかし、何よりも重要なのは、彼が自らの敬虔な生き方の模範によって、民の宗教的・道徳的な生活を高めたことであり、それゆえに彼は人々の心に最も良き思い出を残した（シラ書 50:1–21）。――シモンが大祭司としての務めを果たしたのは、紀元前3世紀初頭のことである。

れは、主が預言者エレミヤに「*わたしはあなたがたに、わたしの心にかなう牧者たちを与え、彼らは知恵と分別をもってあなたがたを牧する*」（エレミヤ書3:15）。まことに、シモン、 、すなわち善良な羊飼いでありユダヤの律法の守護者に対するすべての称賛は、この尊いシモン、すなわちウラジーミルおよびスーズダリの大司教に対しても当てはまるのである。

この至福のシモンは、聖なるペチェルスク修道院で修道者の生活を送った。その修道院は、まるで天の如く、聖なる修行者たち――あたかも心の星、月、太陽の如き者たち――によって飾られていた。 修道院に入ったシモンは、かつてこの世に生きた、神に喜ばれた聖人たちの生涯を記した物語を熱心に読みふけった。その聖人たちは、天の星の数ほどにも多かった。そして、至福のシモン自身も、これらの聖人たちの偉業への愛に心を燃やし、あらゆる方法で彼らに倣おうと努めた。 彼は、この修道院の最初の創設者である聖テオドシオスの功績を愛情を込めて思い返し、修道院の「霊的な星」である修道士たちをこれほどまでに増やしたその人物の生き方に、あらゆる面で倣おうと努めた。 また、聖アントニウスの功績についても思い起こした。彼は太陽のように、自らの善行の光で万人を照らした。聖シモンは、その天使に等しい生き方に倣った。月や太陽に仕える、星のように数え切れないほどの聖人たちを見つめながら、シモンは謙遜を学んだ。 とりわけ、月のように他のどの星よりも明るく輝き、他の兄弟たちに比べて神からより栄光ある冠を授かった聖テオドシオスの模範から、謙遜を学んだ。 アントニオスからは、まるで他の天体なしに独り空を巡る太陽のように、シモンは天使に等しい沈黙の生活様式を学んだ。鏡のように、彼は自分の中にそれらのすべての霊的な天体――星、月、太陽――を映し出し、自らも星の光、月の光、太陽の光を放っていた。 さらに、あの古代の大祭司シモンと同様に、このシモンもまた、明けの明星の如く、満月の如く、そして至高者の教会を照らす太陽の如き存在であった。 彼は、天に似た聖なるペチェルスク修道院で熱心に修行に励み、シモン自身もその行いによって明けの明星の如くあり、常に月のように美しく、太陽のように栄光に満ちた至聖なる神の母に倣っていた。 彼は持てる力の限り、神の母に熱心に仕え、常に深い謙遜と、兄弟たちとの共同の祈り、そして一人きりの祈りに専心していた。

この聖シモンが、その功績によって周辺の多くの国々で名声を博し、はるか遠くの国々でも知られるようになった頃、ちょうどその当時、ウラジーミル・スーズダリ教区の主教座には、その長が不在であった。 聖ヨハネが『黙示録』に記しているように、教会は星の冠で飾られるのがふさわしい（黙示録12:1参照）。そのウラジーミル・スーズダリの主教座には、牧者――まばゆい太陽や美しい月――がいなかったため、その教会は詩篇の言葉、「わが座はわが前にある太陽の如く、また*『月は永遠に完全である』*」（詩篇88:38）を誇ることができなかった。 まさにその頃、牧者たちの長であるイエスの御心により――かつて「誰よりも主を愛した」（ヨハネ21:15–17）シモン・ペトロに委ねられたこの時、神の聖母を心から愛したこの至福のシモンは、神によって司教の座に召され、神に守られた都市――ウラジーミルとスーズダリ――を統治することとなった。 こうして、教会の冠は星の光で飾られ、その座は太陽や満月のように輝いた。 この至福の牧者は、その善行によって、朝の星、月、そして太陽のように司教座で輝き、その教えによってすべての人を啓発し、愛をもって温め、神に願い求めた恵みによって、すべての人に（霊的な）命を与えた。 この至福のシモンは、常に自らを、夜の終わりと日の始まりを告げる明けの明星の如きものと見なしていた。それゆえ、彼は常にあらゆる悪事や罪深い行いから身を遠ざけ、全力を尽くして善き、恵みに満ちた行いに邁進した。 また、聖人は、太陽と月はまるで天において絶え間なく見守る二つの目のようなものであるとも考えていた。 それゆえ、彼は自らの座が太陽や満月のように輝くようあらゆる面で心を配り、自らもまた、その絶え間なく見守る天の瞳に倣おうと努め、そのために、絶え間ない活力をもって、自身の霊的な群れを熱心に牧した。

至福のシモンは、長い間、熱心な羊飼いとして、自らの羊の群れを熱心に、そして注意深く世話する修業に励んだ。そして、この尊者はその奉仕を大いに成功させていたことに留意すべきである

。　同時に、聖人は修道者としての務めも怠らず、常に心の中で洞窟の敬虔な修道者たちの労苦と功績を思い描き、主がこの尊い修道院において修道者の姿をとらせ、いわば洞窟の聖なる修道者たちと共に暮らすことを許してくださったことを、魂の底から喜びとしていた。　聖シモンは絶えず祈りの中で彼らに助けを求め、神の前での彼らの執り成しと神の恵みの助けにより、自身の牧会の務めを成功裏に整えた。こうして、シラフの息子イエス、　旧約聖書において神に喜ばれたユダヤ人の大祭司シモン。上記の呼称に加え、シラフの息子イエスは、　シモンについて、彼がまるで天の弓のようであり、茨の中の花のように、ユリのように、　レバノンの木のように、火の上の乳香のように、金打ちの器のように、オリーブの木のように、そしてヒノキのようにであったと記している（シラ50:8–11）。　これらの名称によって示されるすべての司牧的徳を、善き羊飼いシモンもまた、自らの生涯において体現した。彼は、天の虹によって示された人々の間の平和を保ち、確立することに深く心を配った。　さらに、彼は自らの行いそのもので皆に忍耐を教え、茨の中に咲くリンゴの花のように成長し、常に自分の羊の群れの心の園で労を惜しまず働いた。また、まるで白いユリを植えるかのように、行いと言葉の両方で皆に霊的な清さを説き、　絶え間ない神への祈りをすべての人に教え、あたかもレバノンの芳香を放つ植物を増やし続けるかのように；自らの悲しみの中にあっても常に神に感謝し、さらに、あたかも火の上で香りを放つ乳香のように、愛と霊的な英知という尊い器に盛られてすべての人に捧げられる存在として、自らの羊の群れを導いた；　彼は、羊の群れの中に、隣人への慈悲と愛というオリーブの木を根付かせ、また、キパロスのように、神への絶え間ない思いを羊の群れに呼び戻した。

この至福のシモンは、洞窟の聖なる修道者たちの修道生活を深く学び、あたかもそれを自らの心の石板に刻み込んだかのようであった。それゆえ、彼は他の敬虔な人々にも、洞窟の修道者たちの生活が知られることを望んだ。そしてそのために、洞窟の修道士たちの修道生活について記述をまとめることを決意した。　なお、当時、数多くの戦争や内乱により多くの書物が失われており、それらの書物に記されていた多くの出来事は、次第に忘れ去られつつあったことに留意すべきである。　この状況を鑑み、至福のシモンは、ペチェルスクの修道院で起こった様々な奇跡的な出来事の目撃者を熱心に探し求め、そのようにして得た情報を、賢いミツバチのように勤勉に一つにまとめ上げたのである。　それゆえ、彼は私たちを太陽、月、そして星の光で照らしてくれたのである。というのも、彼は私たちに、この輝かしい太陽である聖アントニオの奇跡と、満月のような聖テオドシオスの聖遺骸の奇跡的な封印について記述してくれたからである。　これらすべてに加え、至福のシモンは、天に似た聖なる洞窟教会についての伝承を付け加えた。その祭壇は、まことに太陽のように、また満月のように輝いていたのである。――これらすべては、敬虔なるネストルによって『パテリコン』の第一部に収録されている[3542]。さらに、至福のシモンはポリカルプへの書簡において、その功績によって星のように輝いた多くのペチェルスクの修道士たちの生涯に関する情報を提供した。――これは『パテリカ』の第2部に収録された。その後、シモンは再び同じポリカルプに書簡を送り、その中で他の多くのペチェルスクの修道士たちの功績について述べている。

この至福のシモンの著作からは、彼が至聖なる神の母およびペチェルスクの聖アントニオスと聖テオドシオスといった尊い父たちに対して深い愛を抱いていたことがうかがえる。そのため、彼は肉体としては自身の教区に暮らしていたにもかかわらず、精神と心においては、あたかも同じ洞窟の中にいるかのように、これらの聖人たちと共に暮らしていたのである。

[3542] 「パテリク」とは、ギリシャ語からの訳で「父の書」を意味し、すなわち、敬虔な修行者たちの生涯に関する短い物語や、彼らの教訓的な言葉を収めた集成である。キエフ・ペチェールスクのパテリクは、ペチェールスクの修道士たちの偉業に関する短い物語の集大成である。　この『パテリク』の基礎となっているのは、ウラジーミルおよびスーズダリの司教シモンによる14の伝承と、年代記作家ネストルやその他の人物によって編纂された聖人伝である。　シモンの伝承のうち、9つはペチェルスクの奇跡行者たちについて、5つはペチェルスクの主教会堂の建設に伴って起こった奇跡について語っている。

シモン・ペトロが他の使徒たちよりも主を愛したように、その栄光ある使徒と同じ名を持つこのシモンもまた、至聖なる聖母マリアと、彼女のペチェルスクの修道院に対して、誰よりも深い愛と熱意を示した。

彼の生前、信者たちは天に不思議なしるしを目撃した。すなわち、ある女性、すなわち「花嫁でありながら花嫁ではない」聖母マリアが、その足元に月明かりだけでなく、星の光や太陽の光をも宿しているのを彼らは見たのである。　というのも、この善良な牧者は（前述の通り）その善行によって、星や月のように輝き、　しかも、彼は非常に大きな謙遜を示し、司教でありながら、自身の書簡の中で、通り過ぎる人々の足に踏みつけられ、横に蹴り飛ばされるような恥辱を受けることを、自分にとっての誉れだと考えていたと記しており、そのことは彼の書簡が証言している。

この善良な牧者は、かなり長い間、霊的な羊たちに、命へと導く朽ちることのない糧を与え続け、ペチェルスクの修道院で修業に励んだ聖人たちの生涯を、書物や自らの生き様を通じて、すべての羊たちに示していた。

十二年間、大司教の座に就いた後、至福のシモンは、十二の玉座に座する牧者たち、そして大牧者ご自身である主イエスのもとへ旅立ち、　彼から朽ちることのない栄光の冠を受け取るためであった。　また、その尊い遺体は、至福のポリカルプへの書簡に示された彼の遺志に従い、また洞窟の聖なる修道者たちへの愛に則り、洞窟の中に安置され、今日に至るまで朽ちることなく、父と子と聖霊、三位一体において賛美される唯一の神に、今、そして常に、世々限りなく。アーメン[3543]。

聖殉教者イシキアの受難

記念日：5月10日

聖殉教者イシキオスは、マクシミアヌス帝の治世中に殉教した[3544]。同帝の宮廷において彼は第一の地位にあり、マギストリアヌスの称号を持ち[3545]、アンティオキアに住んでいた[3546]。マクシミアヌスはキリスト教徒を軍務から排除し、キリスト教の信仰を保ちたいと願う者たちに対し、軍用ベルトを外し、傭兵の身分に移るよう命じた。このような皇帝の命令を受けて、多くの者は、軍人としての地位に伴う破滅的な名誉よりも、傭兵としての不名誉な生活を好んだ。　その中には、名高いイシキオスもいた。このことを知ったマクシミアヌスは、彼に高官の貴重な衣装を脱ぎ捨て、粗末な毛皮の衣[3547]を身にまとい、女中たちの仲間として過ごすよう命じた。それから数日後、彼はイシキオスを呼び寄せ、こう言った。

「イシキオスよ、教えてくれ。このような不名誉な状態に留まっていることを、本当に恥じないのか？」

[3543] 聖シモンの死は1226年に訪れ、これは彼がウラジーミル・スーズダリ教区を統治して11年目のことだった（1215年から1226年まで同教区を統治していた）。

[3544] ここで言及されているのは、もちろん、ディオクレティアヌス帝の娘婿であり後継者であるマクシミアヌス・ガレリウスであり、彼は305年から311年までローマ帝国の東半分を統治した。292年、ディオクレティアヌスはガレリウスを帝国の統治における補佐役として選任し、カエサルの称号を与え、イリュリアおよびドナウ川沿いの諸国を彼に委ねた。ディオクレティアヌスと親族関係にあったガレリウスは、高齢の皇帝に強い影響力を持ち、303年にキリスト教徒に対する一般勅令が発布される前から、キリスト教徒を軍務から排除する個別勅令を発布するよう皇帝を強要し、自らもこの勅令を最も熱心に執行した。彼はキリスト教徒を軍務から追放しただけでなく、宮廷からも排除した。

[3545] 「マギストリアヌス」あるいは「マギストル」という称号は、ローマ皇帝の宮廷において、最高位の宮廷職の一つ、いわば我々の「宮内大臣」に相当する地位を指していた。

[3546] ここでいうのは、かつてはシリアの壮麗な首都であったが、現在はトルコ・アンティオキア地方の貧しい町となっている、シリアのアンティオキアのことである。

[3547] ヴラサニツァとは、馬の毛を編んで作られた衣服のことである。

しかし、聖人はこれにこう答えた。

「あなたから授かった名誉は、一時的なものに過ぎません。」

この答えを聞いたマクシミアンは、イシキイの首に石臼の石を縛り付け、川に投げ込むよう命じた。こうして、聖殉教者[3548]は息を引き取った。

聖殉教者アルフィア、フィラデルファ、キプリアン[3549]および彼らと共に殉教した他の聖人たちの受難

記念日：5月10日

これらのキリストの聖なる殉教者たちは、イタリアの出身であった。その中でも、アルフィウス、フィラデルフ、キプリアヌスは、イタリアの君主[3550]の息子たちであり、あるオニシモスという人物によってキリスト教の信仰を教えられ、洗礼を受けた。　当時、ローマから彼らの国へ、キリスト教徒を捜し出すよう命じる勅令が下されていた。彼らがキリスト教徒であることが発覚すると、彼らはオニシモス、エラスムス、および他の十四人のキリスト教徒と共に、
ローマの皇帝リキニウス[3551]の元へ送られた。リキニウスの命令により、オニシモスの胸には巨大な石が載せられ、それによって彼は息を引き取った。一方、エラスムスと他の14人の聖殉教者たちは剣で首を刎ねられ、アルフィウス、フィラデルフ、キプリアンはセレウキア[3552]へ送られ、そこでキリストへの信仰ゆえに処刑された[3553]。

5月24日

5月11日（旧暦）

聖司祭殉教者モキアの殉教。

記念日5月11日

ディオクレティアヌス帝の治世下[3554]、ラオディキアのアンフィパトス[3555]とマクシムスの統治下、キリスト教徒に対する迫害が至る所で繰り広げられていた頃、マケドニアにあるアンフィポリ

[3548] この聖殉教者はディオクレティアヌス帝の治世中に亡くなったが、その没年は不明である。

[3549] 『ミネイア』におけるギリシャ語の韻律ではキプリアンは「キプリン」と記されているが、聖人伝やその他の古代文献では「キリン」と記されている。

[3550] ボランディストたちの研究によれば、これらの聖殉教者たちの故郷は、シチリア海またはイオニア海の沿岸に近い南イタリアの都市バスタであった。皇帝バシレイオスの月暦によれば、彼らの父はヴィタリオという名であった。

[3551] ボランディストたちの主張によれば、リキニウスは当時まだ皇帝ではなく、単に地方総督の職に就いており、帝国を統治していたのはデキウスであった。皇帝バシレイオスの『聖人暦』によれば、聖なる兄弟殉教者たちや、彼らと共に苦難を受けた者たちを拷問したのは、ディオミド総督であり、リキニウスは彼らを裁判と処罰のためにディオミドに引き渡したのである。

[3552] セレウキアは小アジアのローマ属州キリキアにある都市であるが、ここ『プロローグ』には誤植か筆誤がある。聖人伝によれば、聖なる三人の殉教者兄弟はシチリアのレオティナという町を放浪していた。

[3553] 聖殉教者たちは251年5月10日に殉教した。統治者テルティルスはアルフェウスに舌を切り落とすよう命じ、彼は失血により死亡した。フィラデルフスは鉄の格子の上で焼かれ、キプリアヌスは鉄板の上で焼かれた。　1517年、彼らの遺体はレオティナで発見され、崇敬のために厳かに公開された。

[3554] ディオクレティアヌスは284年から305年までローマ帝国を統治した。

[3555] アンフィパト――地方の統治者。

スという町に、キリスト教の長老モキイが住んでいた。　異教徒たちが、彼らの不敬虔な神ディオニュシオス、すなわちバッカス[3556] に捧げる不浄な祭りを執り行っていたその時、この長老はキリストの御名に対する熱意に燃え上がり、異教徒たちの真ん中に立ち、皆が聞こえるようにこう言った。

「聞け、惑わされ、迷い歩く者たちよ！　いつまで迷い続け、偶像崇拝の闇の中を無分別に行き続けるつもりなのか？　いつまで、自らの滅びに気づかないつもりなのか。いつになったら、これらすべての悪魔的な忌まわしい行いに嫌気が差すのか。さあ、立ち返り、御子なる主イエス・キリストによって私たちに現された主なる神を知りなさい。主は真理の光をもって、無知の闇を追い払われた方である。

至福のモキイは、これらに類する言葉を数多く語り、一度だけでなく、毎日、民衆のもとへ赴き、皆が聞こえるように、偶像を崇拝する異教徒たちの迷いを糾弾し、真の神であるキリストを宣べ伝えました。　しかし、狂気に目がくらんでいた市民たちは、尊者のお言葉に耳を貸さず、不浄な儀式を続けました。

その間、同じくマケドニアにあるアポロニアという町から、ラオディキオという名のアンフィパトスがアンフィポリスに到着し、そこでディオニュソスへの生贄を捧げ始めた。ラオディキオには、キリストの僕であるモキアが、多くの人々をディオニュソス神への祭祀から遠ざけているという話が伝えられていた。　異教徒たちは聖人を激しく中傷し、こう言った。「ここには、奇妙な教えで民を惑わそうとするキリスト教の教師がいる。彼は皆に、十字架にかけられて死んだ人間を信じるよう説得している。実際、多くの者が我々の神々を捨てて、彼の信仰を受け入れた。　もしあなたが、彼がこの教えを広めるのを阻止しなければ、街全体が彼に従うことになり、そうなればもはや神々に犠牲を捧げる者は誰もいなくなってしまうだろう」。

アンフィパトは激しく怒り、聖人を殴打するよう命じた。その後、裁判の席に着くと、聖モキアを自分の元へ呼び出すよう命じた。彼が呼び出されると、アンフィパトは彼に尋ねた。

「答えよ。我々と共に犠牲を捧げることを拒み、人々に神々への犠牲を捧げるのを思いとどまらせているお前は、一体何者なのか？」

聖人モキイはこう答えた。

「真理を知らぬ無知者よ！　どうせ理解できないことを、なぜ私に問うのか？　少しは自分自身について考え、真理を認めよ。私は聖書を学び、そこから、すべての異教の神々は悪魔のものであること（詩篇95:5）、そして彼らへの希望は虚しいことを知ったのだ。」

すると、ラオディキアは言った。

「お前は長広舌を身につけているようだ。」

モキイはこれに対し、こう言った。

「我々の長広舌は、我々に真理を教えるのだ。もし真理を理解したいのなら、私の言うことを聞いてほしい。あなたがたが崇拝する神々は悪魔そのものであり、彼らは口が利けず、耳も聞こえないのだ。」

ラオディキアは言った：

「もし、自ら滅ぼそうとしているその命を保ちたいのなら、神々に生贄を捧げよ。」

しかし、聖人はこう答えた。

「おお、アンフィパトよ！キリストのために死ぬことは、私にとって大きな恵みである。」

[3556] ディオニュシオス、あるいはバッカス（バクス）は、ギリシャ神話によれば、ゼウスとセメラの息子であり、ブドウとワイン造りの神で、ワインという贈り物によって人々の心を喜ばせた。ディオニュシオスは、花や果実など、野原で育つあらゆるものの守護神とみなされていた。　ディオニュソスを称える祝祭は、当初は節度あるものであったが、後に放蕩と淫乱へと変質していった。　これらの祭りの間、異教徒たちは興奮し、酩酊した状態で走り回り、動物を引き裂き、血まみれの肉を食べた。ディオニュソス神を称える祭りは年に4回行われ、そのたびに数日間、あるいは数週間にもわたって続いた。

すると、アンフィパトは激怒し、聖モキアを拷問の木に吊るし、頭から足まで鉄の道具でその体を削り取るよう命じた。

拷問に耐えながら、聖人は神に向かってこう叫んだ。「永遠に君臨し、正義の光に輝く主よ！あなたのしもべたちに、あなたの神聖な力を示し、私があなたの聖なる戒めのために最後まで戦い抜く力を与えてください。」

拷問者の手下たちは、聖人の体をあまりにも長い間苦しめ続けたため、ついに自分たち自身が疲れ果ててしまった。そこでアンフィパトスは、彼らを怠惰で力のない者たちとして退去させ、殉教者については再び自分の元へ呼び出して尋問するよう命じた。

受けた拷問にもかかわらず、聖人はラオディキアの前に健やかな姿で現れ、さらに大きな勇気をもって真理を証しする準備ができていた。拷問官のもとへ向かう途中、モキイは声高らかに神を賛美した。

ラオディキオスは聖人にこう言った。

「ディオニシウス神に犠牲を捧げよ。そうすれば、彼は君を多くの災いから救ってくれるだろう。」

しかし、殉教者はこう答えた。

「まさか、人の手によって造られ、動かない、声も発しない偶像を神だとでも思っているのか？　ああ、迷いゆく悪魔の僕よ！　私の体が、お前の拷問で衰弱していないことが、お前に見えないのか？　私の傷に全く痛みを感じていないことが、お前に見えないのか？　お前の力など、何の意味もないのだ。

この言葉を聞いて、ラオディキアは言った。

「拷問に耐えるお前の不屈の精神は、お前の神の力によるものではなく、お前の魔術によるものだ。さあ、私はお前の体を火で焼き尽くすよう命じる。そうすれば、お前のすべての肢体は灰と化し、風によって吹き飛ばされるだろう。」

すると直ちに、拷問官は極めて巨大な炉を準備するよう命じ、そこに樹脂と小枝を詰め込み、火をつけるよう命じた。炉からの煙は六十キュビトも上空へと立ち上り、炉の周囲の空気は広範囲にわたって暗闇に包まれた。その時、ラオディキオスは聖人にこう言った。

「ディオニシウス神に犠牲を捧げよ。」

しかし、殉教者は黙り込んだ。

すると、ラオディキウスは再び言った。

「いつまで私の命令に逆らうつもりだ？　ほら、お前のために用意した火だ。これを見て、我らの神ディオニシオスの偉大さと威力を悟り、彼にひれ伏せ。」

聖人はこう答えた。

「アンフィパトよ、私はすでに言った通り、耳が聞こえず、目が見えず、口もきけない、人間の魂を滅ぼす者に拝むつもりはない。お前が神と呼ぶその存在が、神ではなく偶像であることを確かめてみないか？」

ラオディキオスは怒りを込めて答えた：

「おお、呪われた者よ！　神聖な力を宿している者が、どうして偶像であり得ようか？　彼の中に宿る力が、我々からの生贄を受け入れ、我々に幸福をもたらしているのを、お前自身も目撃しているではないか。」

しかし、聖人は彼に言った。

「私があなたの神に犠牲を捧げようか。そうすれば、私がディオニシウス神に犠牲を捧げているのを見た者たちは皆、その偉大な力を知るだろう。」

ラオディキオスは言った。

「ひれ伏して犠牲を捧げなさい。そうすれば、その偉大さを悟るだろう。」

そこでモキイは、偶像の神殿に入ると、まず自分自身に十字の印を切り、悪魔に対してキリストの武器を身に着けた。そして、ディオニシウスの偶像が置かれている場所の近くに立ち、神にこう祈った。　「主よ、すべての被造物を御手の内に留め、御子キリストを通して万物を創造し、御真理を知らぬ悪魔を恥じ入らせ、御身を畏れ、御聖なる御名を崇めるすべての人々に、神を知る喜びと貞潔の恵みをお与えになった方よ！　聖なる主よ、バビロンの偶像を打ち砕き、御自分の預言者ダニエルの真の信仰を示された方。御自分の三人の若者を介して忌まわしい偶像の祭壇を廃し、炉の火を消された方（ダニエル書3章）；　あなたは、ファラオを海の深みに沈め、モーセの祈りに耳を傾けられた方（出エジプト記14章）；あなたは、岩から水を湧き出させられた方（出エジプト記17:1–7）；あなたは、永遠の王、今なお存在し、かつて存在し、永遠に存在し続ける方――どうか、あなたのしもべである私の声に耳を傾けてください！　今、私はあなたに懇願します。私を助けに来てください。そして、真理の代わりに偽りを抱く者たちにあなたの力を示し、彼らがあなたが唯一の真の永遠の神であることを悟らせ、あなたの光が偶像崇拝という迷いの闇を追い払うようにしてください」。

このように祈った後、聖人は大きな声で偶像に向かって叫んだ：

「無益で虚しい者よ！　無口で無情なディオニシウスよ！　天にましますわがキリストの偉大かつ栄光に満ちた御名によって、汝に命じる。倒れ、地にひれ伏せ。そうすれば、汝の弱さと無力さがすべての人々の目に明らかとなるであろう。」

するとたちまち、大地とあの神殿が揺れ動き、偶像は大きな音を立てて地面に倒れ、粉々に砕け散った。これを見たそこにいた異教徒たちは皆、恐怖に駆られてそこから逃げ去り、自分たちの目の前で起きた出来事に内心驚愕した。

その後、聖モキイはラオディキアのアンフィパトにこう言った。

「お前の偶像、すなわち悪魔たちの虚しさを見よ。さあ、近づいて、お前が頼りにしていた神の残骸を拾い集め、自分がどれほど破滅的な道に立っているかを悟れ！」

ラオディキオスは、ディオニュソスの偶像を失ったことを深く嘆き、直ちに聖人を燃え盛る炉に投げ込むよう命じた。

聖人が火の中に投げ込まれたとき、彼はまるで何らかの庭園の中にいるかのように、恐れることなく炎の中に立ち、皆が聞こえるように神を賛美した。　炉の中には、彼と共に歌っているさらに三人の男が見えた。その三人のうちの一人は、太陽のように輝く非常に明るい顔をしていた。その顔から放たれる輝きは、炎の輝きよりも強かった。その後、聖人は炉の中に共にいた男たちにこう言った。

「私たちの先祖の神、主よ、御言葉にすべてが従う御方に感謝いたします。力ある主よ、天のすべての力の創造主よ、聖なる大天使たちの口によって賛美され、かつて炎の中にいた三人の若者のそばに御臨在された方よ（その三人の若者の真ん中で、あなたは第四の者として見えました）。　わが救い主よ、どうかこの燃え盛る炉の火を打ち砕き、滅ぼし、このアンフィパトを火で焼き尽くしてください。彼に御怒りを示し、地上の面から彼を滅ぼし、あなたが天にいます唯一の真の神であることを、すべての者が見ることができるようにしてください。

するとたちまち、炉の炎はアンフィパトにまで広がり、彼のそばに立っていた九人の従者たちと共に彼を灰へと変え、彼らの遺体は何も残らなかった。神の怒りが彼らを滅ぼしたからである。民衆は、この一連の出来事を目の当たりにして大いに恐れ、恐怖のあまり炉から逃げ去った。一方、聖モキウスは、全く無傷で、何事もなく炉から出てきた。

この奇跡を知った都市の統治者ファラシウスは激しい怒りに満ち、聖モキイを捕らえて牢獄に閉じ込めるよう命じた。

それから二十日後、マクシムという名の別のアンフィパトがその街に到着した。聖人が成し遂げたことすべて、そしてラオディキアの滅亡についても知ったマクシムは、聖人を滅ぼす手段を模索

し始めた。　裁判の席に着くと、マクシムスはキリストの殉教者を尋問のために呼び出すよう命じた。聖人が連行されると、アンフィパトは彼に尋ねた。

「教えてくれ、お前の名は何か、またどの家系に属しているのか？」

聖人はこう答えた。

「もし私の名前と家系を知りたいのなら、よく聞いてください。父の名はエウフラティア、母の名はエウスタフィアでした。二人が聖なる洗礼を受けた際、私にモキエという名を授けました。両親に敬虔な生活の中で育てられ、私は私の神であるキリストの教会において司祭の位に就く恵みにあずかりました。そして今、私の生涯はすでに老境に近づいています。」

すると、マクシムスは言った。

「あなたの両親はどなたでしたか？」

聖人は答えた：

「父は偉大なる都市ローマの市民であり、軍人としての職務を全うしておりました。母はアンフィパトス・ランパディウスの娘でした。」

マクシムスは言った。

「もしあなたがそれほど高貴な家系の出身であるなら、なぜあなたには不相応な魔術に身を投じたのですか？なぜ偉大なる神ディオニシオスを滅ぼし、王の友人であるアンフィパトのラオディキオを焼き殺したのですか？なぜ神々への祭祀の捧げ物を妨げたのですか？」

聖モキイは答えた：

「私ではなく、全能の私の神、主イエス・キリストこそが、魂なき神ディオニシオスを滅ぼし打ち砕き、御自身の怒りの炎でラオディキアを焼き尽くされたのです。私はただ、畏れと愛をもって私の神に仕え、この口でその聖なる御名を告白しているに過ぎません。」

マクシムスはこれに対し、こう言った。

「その狂気を捨て、アポロンに犠牲を捧げよ[3557]；さもなくば、お前は凄惨な死を遂げるだろう。」

しかし、殉教者はこう答えた。

「私が、私の神が私に与えてくださった恩恵と慈しみを忘れ、神ではなく偶像である者たちを崇拝し、敬うならば、その時にこそ、私は凄惨な死を遂げるでしょう。」

そこでマクシムスは、殉教者を拷問用に用意された二つの車輪に縛り付け、車輪が回転する際にその肉体が引き裂かれるように命じた。

聖人は苦しみの中、こう叫んだ。

「神への愛はなんと甘美なことか！」

そして、拷問者に顔を向け、こう言った。

「お前の父である悪魔の意志を、熱心に果たせ。私に関しては、キリストの御名のために、あらゆる拷問、さらには死さえも受け入れる。」

その後、聖人は次のように祈り始めた。「主よ、清らかさの源、私の助け手、守り手、そして救い主よ！　私のような不適格な者に、この偉業を成し遂げる機会を与え、悪魔に打ち勝つ力を与えてくださったことに感謝します。　あなたは唯一の真の神であり、私の心を清く保ち、不浄な思いから守ってくださいます。あなたは、私の心が私の創造主であるあなたに喜びを見出すよう導いてくださいます。なぜなら、あなたを愛する者たちにとって、あなたの御名は偉大だからです」。

聖人がこのように祈り終えると、突然、拷問用の車輪が粉々に砕け散り、殉教者は全く健康で無傷のまま地面に立ち上がった。

[3557] アポロン――ギリシャ神話によれば、ゼウスとラトナの息子――は、幸福と秩序の神であり、法の守護者である。人々にゼウスの意志を伝える者として、予言と神託の神とも見なされていた。

この奇跡を目撃した者たちは皆、起こったことに大いに驚いた。一方、拷問官は、殉教者に打ち負かされたことに恥じ入り、聖人に対してさらに激しい怒りを抱き、彼を牢獄に投獄するよう命じた。それから三日後、彼は聖人を牢獄から引き出し、野獣の餌食にするよう命じた。

聖人のところへ、大声で咆哮する二頭の飢えたライオンが放たれた。ライオンたちは聖人のそばに近づくと、まるで彼にひれ伏し、その足を抱きしめるかのように、聖人の前に地面に伏した。そして、ライオンたちは聖人の足を舐め始め、まるでそれに口づけをするかのようにした。

この一連の出来事を目撃した民衆は、声を高らかに上げてこう叫んだ。

「獣たちさえも敬い、神に愛されているこの義人を、自由の身にしてください！」

そこで、アンフィパトスのマクシムスは、殉教者を、現在はイラクリエと呼ばれるトラキアの都市ペリンフへ、イゲモン・フィリッピシオスのもとへ送った。そして、殉教者に関するすべてを彼に書き送った。　このイゲモンは、聖人を八日間牢獄に閉じ込めた後、ビザンティウムへ連行し、そこで殉教者の首を刎ねるよう命じた。

聖人が斬首の場へ連れて行かれたとき、天を仰ぎ見てこう言った。

「主よ、あなたは世を創造し、聖人たちの功績を完結させてくださる方です。どうか私の霊を安らかに受け入れてください！」

すると、天から聖人に向かって声が聞こえ、こう告げた。

「喜びなさい、わが良き修道士モキイよ。あなたはすべての人の前で、迫害者の力を明らかに打ち破った。さあ、天の御国で他の修道士たちと共に住みなさい。あなたは地上で十分に労苦した。今こそ安らぎ、天で喜びなさい。」

その後、キリストの殉教者は首を斬られた[3558]。

聖モキイは、5月の11日に殉教の偉業を成し遂げ、その後、コンスタンティヌス皇帝はこの日を彼の記念日と定めた。同皇帝はまた、聖人を称えるために教会を建立し、そこに殉教者の聖遺骨を移した。　聖殉教者モキイの記念を祝うすべての者が、彼らもまた、父と聖霊と共に、永遠に栄光と誉れと礼拝が捧げられる、我らの主イエス・キリストの恵み深い御国において、彼と共にその一員となるという信仰に励まされますように。アーメン。

コンダク、第2調:

信仰の盾を身にまとい、不義の軍勢を打ち砕かれた聖殉教者よ、キリストより冠を受けられたモキアよ。それゆえ、天使たちと共に喜びつつ、あなたを讃える者たちを災いから救い、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

スラブ人の教師である、尊い父メフォディオスとコンスタンティノス（修道名キリル）の生涯と業。

5月11日の記念日

ギリシャの偶像破壊派の王たち、レウ・アルメニア人[3559]、ミハイル・トラヴラ[3560]（別名バルバ）、そしてミハイルの息子テオフィロス[3561]の時代、マケドニアのテッサロニキという町に、レ

[3558] 聖殉教者の死は、およそ295年に起こった。

[3559] レウ5世（アルメニア人）は813年から820年まで在位した。

[3560] ミカエル2世・バルバ、あるいは「口ごもる者」は、820年から829年まで在位した。

[3561] テオフィロスは829年から842年まで在位した。

ウという名の、百人隊長という位を持つ高貴で裕福な貴族が住んでいた。彼の妻はマリアと呼ばれていた。　彼は、かつてのヨブのように、神のすべての戒めを守り、敬虔に暮らしていた。彼らには七人の息子がおり、長男はメフォディオス、末っ子はコンスタンティノス（修道名はキリル）と呼ばれていた。

聖メフォディウスは当初、父と同様に軍人として仕えていた。　王は、彼が優れた戦士であることを知ると、かつてギリシャの支配下にあったスラブの公国、スラヴィニアの軍司令官に任命した。これは神の特別な御心によるものであり、後にスラブ人の霊的指導者および牧者となるメフォディウスが、スラブ語をより深く学ぶことができるようにするためであった[3562]。

約10年間、総督の職に就き、世の虚しさを悟ったメフォディウスは、この世のすべてから身を引く決意を固め、その思いを天上のものへと向けるようになった。さらにこの時期、聖像破壊派の皇帝テオフィロスが聖像に対する迫害を開始した。　この迫害は、メフォディウスに世俗の生活の虚しさをさらに痛感させ、彼は総督の職と世のあらゆる快楽を捨て、オリンポス山[3563]で修道士となった。そこで彼は、深い服従と謙虚さをもって修道誓願を果たすよう努め、その傍らで聖書の研究に励んだ。

レウスの末子である至福のコンスタンティヌスは、まだ乳児の頃から驚くべき兆しを見せていた。出生後、母が彼を乳母に預けて育てさせようとした際、彼は他人の乳を一切飲みたがらず、ただ母親の乳だけを欲しがった。　明らかに、この敬虔な子は他人の乳を飲むべきではなかったのだ。コンスタンティンの誕生に際し、善良な両親は兄弟姉妹のように共に生きることを誓い、実際に死に至るまでの14年間、そのように暮らした。夫の死を前に、マリアは涙ながらにこう語った。

「コンスタンティンのことほど、私が悲しむことはありません。彼は将来、どうなってしまうのでしょうか？」

「信じてくれ、妻よ」とレフは答えた。「私は神を信頼している。主なる神が彼を、すべてのキリスト教徒を導くような父であり、建設者にしてくださることを。」

そして、その通りになった。

7歳の時、コンスタンティンはある夢を見て、それを両親に話した。

「夢を見たんだ」とコンスタンティンは言った。「地方総督が町のすべての娘たちを集めて、私に『その中から花嫁を一人選びなさい』と言った。私は彼女たちを見回し、明るい顔立ちで、多くの金の装飾品や高価な宝石で飾られた、ソフィアという名の最も美しい娘を選んだ」。

両親は、主がこの若者にソフィアという乙女――[3564]、すなわち神の知恵――を授けてくださったのだと悟り、心から喜び、熱心にコンスタンティンに、単に書物を読むことだけでなく、神に喜ばれる高潔な品性――すなわち霊的な知恵――を教え始めた。

[3562] スラブ人がいつヨーロッパに到来したかは定かではない。およそ西暦2世紀頃、スラブ人はドナウ川の中流域および下流域に存在していたことが知られている。ここでは、トラヤヌス帝の時代にヴォロフ人、すなわちローマ人から多くの迫害を受け、スラブ人はドナウ川沿いの居住地を離れることを余儀なくされた。　その後、2世紀から7世紀にかけて、スラブ人はカルパティア山脈に定住した。ここから、ドゥレブ公の指揮の下、スラブ人はビザンツ帝国と長期にわたる戦争を繰り広げ、またここから、アヴァール族の侵攻を受けて、各地へと散らばっていった。 7世紀、ギリシャの王ヘラクレイオスがアヴァール族との戦いのために、スラブ人をバルカン半島に招いたという伝承がある。　一方、同じスラブ族の他の部族は、アヴァール人の攻勢を受けてドナウ川の支流を遡り、そこで様々な名称で生活するようになった。モラヴァ川沿いにはモラヴァ人、その西側にはチェコ人が住んだ。　チェコ人の北にはセルビア人（ルジチャ人）、ヴィスワ川を東へ遡った先にはポーランド人がいた。一方、カルパティア山脈から東および北東へと向かったスラブ人の一部は、ドニエプル川やオカ川沿い、さらにはノヴゴロドに至る地域に定住した。これらは、ロシア平原に居住したポリアーニ人、ドレヴリャーニ人、セヴェルヤーニ人などである。

[3563] オリンポス山は、小アジアのフリギアとビフィニアの境界にある山である。

[3564] ソフィア――ギリシャ語で「至高の知恵」を意味する。

「息子よ」と、彼らはソロモンの言葉を引用してコンスタンティンに言った。「*主を敬えば、あなたは強められる。戒めを守れば、あなたは生きる*。神の言葉をあなたの心の石板に書き記せ。『*知恵よ、言え。あなたは私の姉妹だ！　また、知恵をあなたの親しい友と呼べ*」（箴言7:1–4）。この知恵は太陽よりも明るく輝き、もしそれをあなたの助け手とするなら、多くの悪からあなたを救ってくれるだろう」。

両親はコンスタンティンを学問の道へと送り出した。彼は優れた記憶力と知性を備えており、学業においては同年代の誰よりも優れていた。彼には次のような出来事があった。

裕福な両親の息子であるコンスタンティンは、ある日、仲間たちと共に鷹狩りに出かけた。コンスタンティンが鷹を放った途端、強い風が吹き荒れ、鷹は行方知れずとなってしまった。コンスタンティンは鷹のことで深く悲しみ、二日間、パンさえも口にしなかった。　人愛に満ちた主は、若者が世俗的な事柄にこれほど心を痛めることを望まず、かつてプラキドを鹿で捕らえたように、このハヤブサを通じて彼を捕らえたのである。この世の喜びについて思索を巡らせながら、聖コンスタンティンはこう語った。「喜びが必ず悲しみをもたらすとは、なんとこの人生は。　今日からは、この世の虚しさを避けることができるよう、これよりも優れた別の道を歩むことにしよう」。それ以来、彼はほとんど常に家に留まり、学問、とりわけ聖グリゴリオス・テオロゴスの教えを熱心に学ぶよう努めた。

コンスタンティンはこの聖人に深い愛を抱いており、その教えの多くを暗記していた。壁に聖十字架の絵を描き、その十字架の下に、聖グリゴリオスを称える次の言葉を記した。「おお、神の聖人、神学者グリゴリオスよ！　あなたは肉体においては人でありながら、その生涯においては天使の如き存在であった。あなたの口はセラフィムの口のように、賛美をもって神を讃え、その正統な教えによって全宇宙を照らしたからである。どうか、あなたへの信仰と愛をもってひれ伏す私を受け入れ、私の師であり導き手となってください」。

熱心に書物を学んでいたコンスタンティノスは、良き師がいなかったために自分の知識がいかに乏しいかを痛感し、それゆえに深い落胆に陥った。彼らの町には、文法に精通した一人の男（旅人）が住んでいた。コンスタンティノスは彼の元へ赴き、懇願し、彼の前にひれ伏してこう言った。

「どうか私を助けてください。文法を教えてください。」

すると、旅人はこう答えた。

「若者よ、頼まないでくれ。私はもう誰にも教えないと誓ったのだ。」

コンスタンティンは再び涙を流しながら彼にこう言った。

「父の家にある、私に帰属する分だけを受け取ってくれ。ただ、私に教えてくれ。」

しかし、それさえもその男を説得することはできなかった。そこでコンスタンティノスは家に戻り、主が彼の心の願いを叶え、彼のために師を見つけてくださるよう、熱心に祈り始めた。主はまもなく彼の願いを叶えてくださった。

その頃、ギリシャの地でテオフィロス王が亡くなり、その息子ミハイルが、敬虔な王妃テオドラと共に統治するようになった。　この王は父の死後、まだ幼かったため、三人の高官が彼の教育担当として任命された。すなわち、ドメスティコス（[3565] ）のマヌイル、パトリキオス（[3566] ）のフェオクティスト、そしてロゴフェトス（[3567] ）のドロミである。ドロミは、メフォディオスとコンスタンティノスの両親と親交が深かった。　ロゴフェトは、コンスタンティノスの学業の成果と勤勉さを知っていたため、彼を呼び寄せ、若き皇帝ミハイルと共に学問に励ませた。ミハイルには、コンスタ

[3565] ドメスティック――最高位の軍人高官で、常に皇帝の宮廷に居住していた。その職務は、皇帝の身を守ることであった。

[3566] 古代において、パトリキイとは高貴な家系の出身者を指した。

[3567] ロゴフェト――印章の保管者。現代の国家首相に相当する。

ンティノスの勤勉さに倣うよう期待されていたのである。　少年は意気込みを新たにし、喜びをもって旅立ち、ソロモンの祈りを神に捧げた。「父祖の神、慈愛に満ちた主よ――コンスタンティンはこう祈った――人間を創造された方よ。　御座に宿る知恵を私に与え、御身の若き者たちの数から私を除かないでください。私は御身のしもべであり、御身の女奴隷の子だからです。御心に適うすべてのことを知ることができ、生涯を通じて御名のゆえに奉仕できるよう、私に与えてください」。

コンスタンティンはコンスタンティノープルで、時には貴族の屋敷に、時には王宮に滞在していた。3ヶ月で文法を習得し、その後ホメロス[3568]や幾何学を学び、レオンとフォティオス[3569]から弁証法と哲学を学んだ。これらの学問に加え、修辞学、算術、天文学、音楽芸術、そしてその他すべてのギリシャの学問を修めた。　ギリシャ語だけでなく、ラテン語、シリア語、その他のいくつかの外国語にも精通していた。その知性と勤勉さによって、彼は師たちを驚かせ、その功績により後に「賢哲」という称号を授かった。　しかし、彼は学問においてのみならず、人生においても極めて賢明であり、謙虚であることを心がけ、教えを請いたい相手とは対話し、悪へと誘い込む恐れのある者たちからは距離を置いた。一言で言えば、彼は地上のものを天上のものへと変え、神と共に生きるよう努めたのである。

ロゴフェトは、コンスタンティンの高潔な生き方と学問における成功を見て、彼を自分の家の管理人に任命し、また、報告なしに王宮に入ることを許した。ある日、ロゴフェトはコンスタンティンに尋ねた。

「教えてくれ、哲学者よ。哲学とは何と呼ばれるものか？」

「哲学とは」とコンスタンティンは答えた。「神と人間の事柄を理解することであり、それは、人間を自らの姿と似姿に創造された神に、徳を通じて可能な限り近づくよう教えるものです。」

その後、ロゴフェトはコンスタンティンをますます慕うようになり、彼から哲学の教えを受けたいと願った。コンスタンティンは簡潔な言葉で哲学の教えを彼に説き明かした。それに対し、ロゴフェトは彼に特別な敬意を払い、多額の金さえ差し出そうとしたが、コンスタンティンはそれを断った。

この高官には、裕福で名門の家系の娘である洗礼の娘がいた。ロゴフェトはコンスタンティンをその娘と結婚させようと企み、次のように説得した。

「君の美しさと知恵は」とロゴフェトは言った。「思わず君を愛さずにはいられない。私には名付け子がいる。美しく、裕福で、良家かつ名門の家柄の娘だ。もし望むなら、彼女を妻に迎えてほしい。王から大きな栄誉と公国を与えられ、やがては軍司令官にも任命されるだろう。」

「この贈り物は、それを望む者にとっては大きなものですが」とコンスタンティンは答えた。「私にとっては、知恵と真の名誉、そして富を得ることができる学問ほど貴重なものはありません。」

そう言うと、ロゴフェトは皇后のもとへ赴き、こう言った。

「あの若き哲学者は、この世の虚飾を好まない。彼を我々のそばに留めておこう。そのためには、聖職に就き、聖ソフィア大聖堂の総主教付図書館長となるよう説得するつもりだ。それだけが、彼を引き留める唯一の方法である。」

彼らはその通りにした。コンスタンティノスは聖ソフィア大聖堂の司祭兼図書館長となった。しかし、この地位に就いてからも、コンスタンティノスは彼らと共にいることは長くは続かなかった。 誰にも一言も告げずに、彼はゴールデンホーン（[3570]）へと向かい、そこである修道院に身を隠した。コンスタンティノスを長い間探し続け、ようやく6ヶ月後に彼を見つけた。彼らは彼に以前の職

[3568] ホメロス――『イリアス』や『オデュッセイア』の著者である、紀元前3000年に生きた有名な古代ギリシャの作家。
[3569] 後に総主教となった人物。
[3570] 金角湾は、ボスポラス海峡の入り江を形成する細長い湾である。

に復帰するよう説得することはできず、コンスタンティノープルの主要な学校で哲学の教師を務めるよう懇願するにとどまった。

この頃、総主教ヨハネス[3571] は聖像に対する迫害を開始した。そこで公会議が開かれ、この総主教をその座から罷免することが決定された。公会議のこの決定に対し、ヨハネスは次のように述べた。

「私は暴力によって追放されたが、誰も私の言葉に逆らうことはできないため、私を非難することはできなかったのだ。」

皇帝は新任の総主教と共に、コンスタンティノスをヨハネのもとへ遣わし、次のように告げさせた。

「もしこの若者を糾弾することができれば、再び座に就くことができるだろう。」

これほど若い哲学者を見て、その鋭い知性を知らなかったヨハネスは、コンスタンティンとその使節たちにこう言った。

「お前たちは私の足元にも及ばない。どうして私がお前たちと議論などできようか？」

「世間の慣習に囚われるな」とコンスタンティヌスは答えた。「神の戒めに目を向けよ。お前も我々も土から造られたが、魂は神から与えられたものだ。それゆえ、土を見下ろす人間よ、高ぶってはならない！」

「秋に花を探すのは愚かなことだ」とヨハネは言った。「同様に、老人を戦場に送り出すのも愚かである。」

「君は自らを暴いているのだ」と哲学者は答えた。「教えてくれ、魂が肉体よりも強くなるのは、どの年齢のことか？」

「老い」とヨハネは答えた。

「我々は君をどのような戦いに招いているのか」と哲学者は尋ねた。「肉体的な戦いなのか、それとも精神的な戦いなのか？」

「精神的な戦いだ」とヨハネは答えた。

「もし今、君が精神において最も強いのなら」と哲学者は言った。「そのような比較を持ち出す必要はない。我々は時期尚早に花を探したりはしないし、同様に時期尚早に君を論争に引きずり出したりもしないのだ。」

その後、彼らは会話に移った。老人は尋ねた。

「若者よ、教えてくれ。もし十字架が折れてしまえば、我々はもはやそれに礼拝もせず、口づけもしない。それなのに、あなたたちは、顔の部分が一つだけ残っているだけで、それを聖像として崇めることを恥じないのか？」

「十字架には四つの部分がある」と哲学者は答えた。「もし一つの部分が欠けていれば、十字架はその姿を失ってしまう。しかし、イコンは、描こうとした人物の顔が描かれていれば、その姿と似姿を持つ。それを見る者は、ライオンやオオヤマネコの顔を見るのではなく、原型を見るのだ。」

「あなたは十字架に頭を下げていますね」と老人は言った。「たとえそこに文字が書かれていなくても。しかし、イコンには、描かれたものがなければ、敬意を払わないのですか。」

「どんな十字架も」と哲学者は答えた。「キリストの十字架に似ていますが、イコンには一つの姿はなく、それぞれ異なります。」

ついに老僧は言った。

「神が預言者モーセに『いかなる像も造ってはならない』（出エジプト記20:4）と言われたのに、なぜあなたはイコンに頭を下げるのですか？」

[3571] ヨハネス7世は832年から842年まで総主教を務めた。

「もし主が『いかなる形も造ってはならない』とおっしゃっていたのなら」と、哲学者はこれに応えた。「その場合は、あなたの言う通りでしょう。しかし、主は『あらゆる』とおっしゃいました。つまり、ふさわしいものを除いて、ということです。」

これに対し、長老は反論できず、黙り込んでしまった。その頃、シリアを支配する異教徒のアガリア人、すなわちサラセン人から使節団がコンスタンティノープルにやって来た。　これらのサラセン人は、前王テオフィロス在位中、神の御許しにより罪の報いとしてギリシャの地に侵攻し、美しい都市アモリアを荒廃させた[3572]。それ以来、彼らはキリスト教徒の前で自らの力を誇示するようになり、至聖なる三位一体を冒涜する書簡をツァールグラードに送ってきた。

「キリスト教徒の諸君は、神は唯一であると口では言いながら、なぜ神を三つに分けて、父、子、聖霊を告白するのか」とサラセン人は書き送った。「もしそれを証明できるなら、信仰について我々と議論し、我々を説得できるような人物を我々のところへ送ってほしい[3573]。」

当時、聖コンスタンティヌスは24歳であった。皇帝は総主教と共に公会議を招集し、そこにコンスタンティヌスを呼び寄せ、彼にこう言った。

「哲学者よ、あの卑劣なアガリア人たちが我々の信仰について何を言っているか、聞いているか。もしお前が聖三位一体の僕であり弟子であるならば、行って彼らを糾弾せよ。」　そして、あらゆる業を成し遂げられる神、三位一体において賛美される父、子、聖霊は、あなたに言葉による恵みと力を与え、三つの石でゴリアテを打ち倒したもう一人のダビデ（サムエル記上17章）として現れさせ、その後、無事にあなたを我々の元へ連れ戻してくださるだろう。

その言葉を聞いて、哲学者はこう答えた。

「キリスト教の信仰のために赴くことを嬉しく思います。聖三位一体のために死ぬこと、あるいは生き続けること、私にとってどちらがより良いことでしょうか？」

コンスタンティンには二人の助祭、[3574]が与えられ、彼らはサラセン人の元へと送り出された。彼らは、ユーフラテス川のほとりに位置し、サラセン人の君主アミルムシュナが住んでいたサラセン公国の首都サマルへと直行した。　そこで彼らは、その地に住むキリスト教徒を侮辱し嘲笑するために、アガリア人たちがなしていた奇妙で忌まわしい光景を目にした。　サラセン当局の命令により、キリスト教徒が住む家の扉の外側には、悪魔の絵が描かれていた。これにより、アガリア人たちは、キリスト教徒を悪魔のように忌み嫌っていることを示そうとしたのである。コンスタンティンが彼らの元へ到着するやいなや、サラセン人たちは悪魔の絵を指さして、彼にこう尋ねた。

「哲学者よ、これらの絵が何を物語っているか、理解できるか？」

「悪魔の姿が見える」と哲学者は答えた。「ここにはキリスト教徒が住んでいるのだろう。悪魔はキリスト教徒と一緒に暮らすことはできず、彼らから逃げている（扉の外にいる）。扉の外側にこの絵が描かれていない場所では、明らかに悪魔が建物の内部に住んでいるのだ。」

サラセン人たちはコンスタンティンを公爵の居間に招き、昼食を振る舞った。食卓には、幾何学や天文学などの科学を学んだ、聡明で学識豊かな人々が座っていた。彼らはコンスタンティンを試すように、こう尋ねた。

「ほら、哲学者よ、驚くべきことだ。預言者ムハンマドは神からの善き教えをもたらし、多くの人々を改宗させた。我々は皆、等しく彼の律法を堅く守り、何も変えてはいない。　一方、キリストの律法を守るあなた方キリスト教徒の中には、ある者はこう信じ、別の者はそう信じ、思いのままに生きている。あなた方の間には、それぞれ異なる教えを説く多くの教師がおり、黒い衣をまとい、独特な生活を送る修道士たちもいる。それにもかかわらず、あなた方は皆、キリスト教徒と名乗っている。

[3572] この話については、3月6日の「アモレイの聖殉教者たちの苦難」の記述に記されている。

[3573] それは851年のことだった。

[3574] ゲオルギオスという名の者がいた。

「二つの質問が私に投げかけられました」と、至福のコンスタンティンは答えた。「キリスト教の信仰について、そしてキリスト教の律法について、すなわち、キリスト教徒はどのように信仰し、その信仰をどのように生活の中で実践しているか、というものです。まず、信仰についてお話ししましょう。　私たちの神は、海の深淵のように――計り知れない広さと深さを持ち、人間の知恵では理解できず、人間の言葉では言い表せないお方です。聖なる預言者イザヤが神についてこう語っているように、*「その系図を誰が語り尽くせようか」*（イザヤ53:8）。これに基づき、私たちの師である聖使徒パウロも、次のように叫んでいます。　*「ああ、神の富と知恵と知識の深淵よ！　その御計画はどれほど測り知れず、その道はどれほど探り知れないことか」*（ローマ11:33）。この深淵には、神を求めようとする多くの人が入り込みますが、その中で知性に優れ、主ご自身の助けを得た者たちは、神の測り知れない御業の海を安全に航海します。　一方、知性が乏しく、自らの驕りによって神の助けを失い、穴の開いた船でこの深淵を渡ろうとする者たちは、異端や迷いに陥って沈んでいくか、あるいは不確実さや疑念に揺られながら、かろうじてその場に留まるに留まる。それゆえ、（あなたがたが言うように）多くのキリスト教徒は信仰において異なっている。　これは信仰について述べたことですが、信仰に基づく行いについては次のように言います。キリストの律法とは、他ならぬ、神がシナイ山でモーセに与えられたもの（出エジプト記20:1–18）であり、殺してはならない、盗んではならない、姦淫してはならない、他人のものを欲してはならない、などです。私たちの主はこう言われました。*「律法を破るために来たのではなく……『それを破るために来たのではなく……』」*（マタイ5:17）と語られました。より完全な生活と、神へのより良い奉仕のために、主は、より清く、純潔な生活を送り、狭く苦難に満ちた道を通じて永遠の命へと導く特別な行いを実践するよう助言されました。しかし、主はこの生活への強制はなさらず、強制によってそれが成し遂げられることもありません。　神は人を天と地の間に創造された：　。理性と知性において、人は無言の生き物とは異なり、怒りと情欲において天使とは異なる。　そして神は、人間に自由意志を与え、その人が望むことを行い、近づくものへと向かうようにされた――そうして、そのものと交わりを持つことになるのである。すなわち、信仰によって啓発された理性が教える通りに神に仕えるならば、天使たちと交わりを持つことになるだろう。あるいは、一切の自制なくあらゆる肉欲を満たすならば、理性を欠いた家畜たちと交わりを持つことになるだろう。　そして、神は人間を自由意志を持って創造されたので、私たちが強制ではなく、自らの意志によって救われることを望んでおられ、こう言われます。*「もしだれでもわたしに従いたいなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従いなさい」*（マタイ16:24）。また、*「受け入れることができる者は、受け入れるようにしなさい」*（マタイ19:12）。忠実なキリスト教徒の中には、この世でより安楽な道を歩み、自然の法則に従って貞潔に、誠実な夫婦関係の中で生きる者もいれば、より熱心で、より完全でありたいと願う者たちは、天使のように生きようと努め、狭い道を歩む。それゆえ、キリスト教徒の生き方は様々である。

「しかし、あなた方の信仰と律法は」とコンスタンティヌスは続けた、「何の不便も伴わない。それらは海のようなものではなく、大小を問わず誰もが何の困難もなく飛び越えることのできる小さな小川のようなものだ。」　あなた方の信仰と律法には、神聖なものや神の霊感によるものは何一つなく、ただ人間の慣習や肉欲的な思惑があるだけであり、それらは容易に実行できるものである。何しろ、あなた方の立法者であるムハンマドは、実行困難な戒めを一つも与えなかった。彼はあなた方を怒りや不法な情欲から遠ざけることさえせず、すべてを許してしまったのだ。それゆえ、あなた方は皆、まるで自分の情欲に合わせて与えられたかのように、画一的にその律法を守っている。　しかし、私たちの救い主キリストはそうはされませんでした。御自身、至聖なる方であり、あらゆる清さの源であるキリストは、御自分のしもべたちも聖く生き、あらゆる情欲から遠ざかり、清い者は清い者のみと交わることを望んでおられます。なぜなら、キリストの御国には*「汚れたものは何一つ入ることができない」*からです（黙示録21:27）。

そこで、サラセン人の賢者たちはコンスタンティヌスにこう尋ねた。

「なぜあなた方キリスト教徒は、唯一の神を三つに分けて、『父』、『子』、『聖霊』と呼ぶのですか。もし神に子がいるのなら、神に妻も与えて、神々をたくさん作り出せばよいのではないでしょうか？」

「神聖なる三位一体を冒涜してはなりません」と、キリスト教の哲学者は答えた。「私たちは、あなた方も割礼を守っている者として認めている古代の預言者たちから、この三位一体を告白することを学びました。彼らこそが、父、子、聖霊は三つの位格であり、その実体は一つであると教えてくれているのです。　これと同様の例を天に見出すことができます。神が聖三位一体の御姿として創造された太陽には、円、明るい光線、そして熱という三つの要素があります。聖三位一体において、太陽の円は父なる神の象徴です。円には始まりも終わりもないように、神もまた始まりがなく、無限です。　太陽の円から明るい光線と太陽の熱が生まれるように、神の父から御子が生まれ、聖霊が流れ出ます。このように、全宇宙を照らす太陽の光線は、父から生まれ、この世に現れた神の御子の象徴であり、その光線と共に同じ太陽の円から流れ出る太陽の熱は、　は、御子と共に、永遠に父から発出される聖霊の象徴である。ただし、時間的には御子と共に人々に遣わされるのである！[3575]　、例えば使徒たちには、炎の舌の形で遣わされたように。　また、円、明るい光線、熱という三つの要素から成る太陽が、三つの太陽に分かれることはないのと同様です。これらの要素はそれぞれ独自の特性を持っています――一つは円、もう一つは光線、三つ目は熱ですが、三つの太陽ではなく、一つの太陽です。それと同様に、至聖なる三位一体も、　父、子、聖霊という三つの位格を持っていますが、神性において三つの神に分かれることはなく、ただ一つの神です。聖書が、あなたがたが割礼を守っているその源である、マムレの樫の木の下で、神が先祖アブラハムの前に現れたことについて語っているのを覚えていますか。神はアブラハムの前に三つの位格として現れました。　「（アブラハムは）*目を上げて見ると、三人の男が彼の前に立っていた。それを見て、彼は天幕の入り口から彼らに向かって走り寄り、地にひれ伏して礼拝した。そして言った。『主よ。もし私があなたの御目にかなう者であるなら、どうかこのしもべのそばを通り過ぎないでください』*」（創世記18:2–3）。

注目すべきは、アブラハムは目の前に三人の男を見ながらも、あたかも一人の相手と会話するかのように、*「主よ！もし私があなたの御心に適う者であるならば*」と語っている点である。明らかに、この聖なる先祖は、三位一体の神を信仰していたのである。

サラセン人の賢者たちは、至聖なる三位一体の教義について何を言えばよいか分からず、沈黙を守った後、こう尋ねました。

「キリスト教徒の諸君は、どうして神が妻から生まれたと言うのか？　神が女性の胎内から生まれることなどあり得るのか？」

「単なる妻からではなく」と哲学者は答えた。「聖霊の働きによって、未婚の聖なる処女から神の御子が生まれたのです。聖霊は、聖なる処女の胎内で、言葉に尽くせぬほどにキリスト・神に肉体を授け、父なる神の御言葉の超自然的な受肉と誕生を成し遂げられたのです。」　それゆえ、聖霊によって御子を宿した処女は、出産前も、出産中も、そして出産後も、すべての被造物が従う神の御心により、清らかな処女であり続けた。これは教会の賛美歌にある通り、「神が望まれるところには、自然の秩序は打ち破られる」[3576]。

また、キリストが聖霊によって清らかな処女から生まれたことは、あなた方の預言者ムハンマドも次のように記していることで証明されている。「聖霊は清らかな処女のもとへ遣わされ、神の御心により、彼女が御子を産むようにされた」。

[3575] すなわち、キリストの十字架上の功績のために：*「まだ聖霊が彼らに降っていなかったからである。イエスがまだ栄光を受けられていなかったからである」*（ヨハネ7:39）。

[3576] 第7声の教義書より。――*『信仰のABC』編集部*

「キリストが清らかな処女から生まれたことについては異論はない」とサラセン人たちは言った。「ただ、彼を神とは呼ばないだけだ。」

「もしキリストが単なる人間であり、神でもなかったとしたら、なぜ聖霊による受胎が起こらなければならなかったのか？　単なる人間は既婚の女性から生まれ、処女からは生まれない。また、自然の摂理によって夫から受胎するのであり、聖霊の特別な啓示や働きによるものではない。」

その後、サラセン人たちはこう尋ねた。

「もしキリストがあなた方の神であるなら、なぜあなた方はキリストが命じていることを行わないのですか？　福音書にはこう書かれています。『敵のために祈り、あなた方を憎み、迫害する者たちに善を行い、あなた方を打つ者にはもう一方の頬も差し出せ』と。しかし、あなた方はそうはしていません。敵に対しては武器を研ぎ澄ましているではありませんか。」

これに対し、哲学者は次のように答えた。

「ある律法に二つの戒めが記され、人々にそれを守るよう命じられたとしよう。その場合、真の律法の遵守者とは、一つの戒めを守る者か、それとも二つの戒めを守る者か？」

「もちろん、より優れた遵守者は、二つの戒めを遵守する者でしょう」とサラセン人たちは答えた。

「私たちの神であるキリストは」と、哲学者はこれに対し言った。「私たちに、私たちを傷つけた者のために祈り、彼らに慈善を行うよう命じられた。しかし、主はまたこうも言われた。*『友のために自分の命を捨てることほど、大きな愛はない』*（ヨハネ15:13）。」　私たちは、侮辱が特定の個人に向けられているだけなら耐えるが、それが社会全体に向けられている場合は、兄弟たちが捕虜となり、神に背く悪行へと誘惑されることのないよう、身代わりとなり、さらには自らの命を捧げることも厭わない。

サラセン人たちは再びこう言った。

「あなたがたのキリストは、ご自身と他者（使徒ペテロ）のために貢ぎ物を納められた。それなのに、なぜあなたがたはこれに従わず、貢ぎ物を納めようとしないのか？もしあなたがたが本当に互いに守り合っているのなら、兄弟たちのために、この偉大で強大なイスマイル族の民に、必ず貢ぎ物を納めるはずだ。」

「もし誰かが師の足跡をたどり、常にその道を歩みたいと願っているのに、他の誰かがその人をその道からそらそうとするなら、その人は彼にとって友か、それとも敵か？」とコンスタンティンは答えた。

「間違いなく敵だ」とサラセン人たちは答えた。

「キリストが貢ぎ物を納めたとき」と、そこでコンスタンティンは尋ねた。「それはどの王国だったのか？ イスマイル人の王国か、それともローマ帝国か？」

「ローマ帝国だ」とサラセン人たちは答えた。

「それゆえ、我々も――」と哲学者は答えた。「キリストに従い、新ローマ（コンスタンティノープル）に住み、古代ローマを支配する王に貢ぎ物を納めているのだ。しかし、あなたがたは我々から貢ぎ物を要求することで、キリストの道から我々をそらそうとしており、我々の敵となっているのだ。」

その後、彼らはコンスタンティヌスに、自分たちが知っている学問の中から多くの質問を投げかけた。すべての質問に対し、コンスタンティヌスはサラセン人たちが反論できないような答えを返した。そこで彼らは彼に尋ねた。

「なぜ、お前はこれらすべてを知っているのか？」

するとコンスタンティヌスは、次のような例えを挙げた。

「ある男が」と彼は言った。「海から水を汲み、それを袋に入れて運んだ。海から遠く離れたところで、彼は水入りの袋を指さし、皆にこう言った。『私以外に誰も持っていないこの水が見える

か？ 』」 すると、ある海辺の住民が彼に近づき、こう言った。「私たちには海全体があるというのに、水が入った袋一つを自慢して、恥ずかしくないのか」。あなたがたも、私たち（ギリシャ人）から学んだ科学について質問をする時、まさにそのように振る舞っているのだ。

その後、サラセン人たちは、かつて熱心に植えられ、見事に繁茂したブドウ畑を、まるで何か不思議なものであるかのようにコンスタンティヌスに見せた[3577] 。コンスタンティヌスは、その栽培方法を説明した。するとサラセン人たちは、金や銀、宝石で飾られた宮殿など、自分たちの富のすべてを彼に見せ、こう言った。

「ほら、哲学者よ、サラセン人の支配者オマールが、どれほどの力と富を持っているか、お分かりだろうか？」

「これには何の不思議もない」と哲学者は答えた。「これらすべては、人々が楽しむためにこの富を与えた神を賛美すべきものである。これらすべては神に属しており、他の誰のものでもない。」

結局、サラセン人たちはその正体を現した。彼らは聖コンスタンティンに毒入りの飲み物を与えたのである。しかし、御名のゆえに労苦する者すべてに対し、*「たとえ死に至るものを飲んでも、害を受けることはない」*（マルコ16:18）と約束された主は、御自分のしもべを無傷で守られた。 サラセン人たちはこの奇跡を目の当たりにし、コンスタンティンを、自国へ派遣された他の使節たちと共に、自国の君主からの栄誉と贈り物を携えて送り出した。

コンスタンティノープルでは、皇帝と総主教が、聖コンスタンティノスを迎え、彼が成し遂げた神に喜ばれる働きを称賛した。しかし、コンスタンティノスはコンスタンティノープルに長くは留まらなかった。 まもなく彼は、静かで人里離れた場所へと赴き、そこではただ自身の救いのみを念頭に置いて生活した。彼は食料を一切持参せず、その点については神の摂理に希望を託し、キリストを愛する人々を通じて食糧が届けられることを信じていた。 コンスタンティンは、届けられた食物を翌日のために一切残さず、いつもの食事を終えた後、残りをすべて貧しい人々に配った。それは、その寛大な御手を広げ、その慈しみをもってすべての生き物を養ってくださる神を信頼していたからである。

ある時、大きな祝祭日を控えていたにもかかわらず、コンスタンティンには食糧が全くなく、そのことを彼の使用人は深く嘆いていた。至福のコンスタンティンは彼にこう言った。

「かつて荒野で長年にわたりイスラエルの民を養ってくださった方が、この偉大な日に私たちを養ってくださらないはずがないでしょう。あなたは必ず行って、少なくとも五人の貧しい人々を昼食に招いてください。私たちは神の憐れみを待ち望みましょう。なぜなら、神は私たちを見捨てられないからです。」

案の定、その通りになった。昼食の時間になると、一人の男がやって来て、様々な食べ物をたくさんと、金貨十枚を持って来た。聖コンスタンティンはそれを受け取り、自らの養い主である神を賛美した。

そこからコンスタンティンはオリンポスへ赴き、兄のメフォディオスのもとへ行き、彼と共に暮らすようになった。そして、断食の修行に励み、祈りや書物の読解に時間を費やした。[3578]

[3577] ここでの「耕作」とは、明らかに何らかの人工的な手段によるブドウ畑の特別な耕作方法を指している。

[3578] オリンポス山で、至福のコンスタンティンは初めてスラブ語の研究に取り組み始めた。彼が置かれた環境は、これに好都合であった。 山にあった修道院には、近隣のさまざまな国から来たスラブ人の修道士が多くいたため、コンスタンティンはここで継続的な実践の機会を得ることができた。これは彼にとって特に重要であった。というのも、彼はほぼ幼少期からずっとギリシャの環境で過ごしてきたからである。 ここで聖なる兄弟たちがスラブ語の学習に取り組んでいたことについては、ブルガリア出身のスラブ人修道士フラブラの証言がそれを裏付けている。

その頃、ギリシャ王ミハイルのもとへ、コザール族の使節団がやって来た[3579] 。彼らは次のように述べた。

「我々はまず第一に、万物を支配する唯一の神を知っており、東に向かってひれ伏してその神に祈りを捧げていますが、その一方で、いくつかの不適切な慣習も続けています。

ユダヤ人たちは、我々に彼らの信仰と行いを受け入れるよう働きかけており、すでに我々の多くは信仰上ユダヤ人となっています。一方、サラセン人たちは、我々と同盟を結び、贈り物を差し出す一方で、イスラム教を受け入れるよう強要し、サラセン人の信仰こそが他のあらゆる民族の信仰よりも優れていると主張しています。 それゆえ、古くからの親愛と友情を育んできた貴殿方からも、有益な助言を賜りたく存じます。どうか、何人かの学識ある人物を我々の元へ派遣してくださるようお願いいたします。もしその方がユダヤ人やサラセン人の誤りを暴いてくださるならば、我々は貴殿方の信仰を受け入れる所存です。

そこで、ミハイル王は、聖メフォディウス[3580] の後を継いだ至聖なるイグナティウス総主教[3581] の助言に従い、オリンポス山から招かれた至福のコンスタンティンをコザール族のもとへ派遣することを決めた。コザール族の願いを伝えた後、王はコンスタンティンにこう言った。

「行け、哲学者よ、あの民のもとへ。そして聖三位一体の御力により、彼らに至聖なる三位一体の教えを宣べ伝えよ。この使命を、君ほど立派に果たせる者はいない。」

[3579] ギリシャ人が「ハザール人」、ローマ人が「ガザール人」と呼んだコザール族は、総称して「スキタイ人」として知られていた。彼らはスラブ語あるいはロシア語を話し、メオティア湖（または死海、アゾフ湖）の近くに住んでいた。この湖には、古代においてヨーロッパとアジアを隔てていたドン川が流れ込んでいる。 この地には当初、ヤフェトの長男ガメルの部族が住んでおり、彼らはゲメリーと呼ばれ、ギリシャ語ではキメリー、ロシア語ではツィンブリーと呼ばれていた。彼らにちなんで、エウクシノス海（黒海）に注ぐメオティア湖の河口は、キメリアのボスポラス、 すなわち、キメリス海の狭窄部を意味していた。ツィンブリ族が北方の国々（北へ）へ移り住み、リトアニア人、シュムディ人、 ゴトファなどと呼ばれるようになった。その頃、メオティア湖あるいはキメリイのボスポラス海峡付近の彼らの居地には、アラン人（アラン山脈に由来）と呼ばれる、トルコ系起源のスキタイ族の一つが定住し、後にコザール人（コザール川に由来）と呼ばれるようになった。 この部族は著しく増殖し、ドナウ川の両岸に居住するようになった。アジア側ではカスピ海またはフヴァリン海に注ぐヴォルガ川まで、ヨーロッパ側では黒海に注ぐドニエプル川まで、さらにはパノニア地方にまで及んだが、そこではすでにアヴァール人、フン人など、別の名称で呼ばれていた。 コザール族は粗野な気質を持ち、外見も醜かった。彼らは遊牧民として、テントに住み、場所から場所へと移動していた。食生活はパンよりも野菜や半生肉を主とし、戦場では非常に勇敢で、誰からも恐れられていた。 コザール族の統治者は「カガン」（ハガンまたはハヤン）と呼ばれ、我々のところのツァールやクニャージに相当する。この民族の勇敢さについては、ギリシャやローマの年代記作者たちによって多くの記述が残されている。 コザール族は、イラクリオス帝の治世、セルギオス総主教の時代にコンスタンティノープルに多大な苦難をもたらしたが、その際、無敵の力を持つ聖母マリアによって奇跡的に打ち負かされた。聖母マリアは、異教徒であるコザール族および彼らと結託したペルシア人から自らの都を守られたのである。この出来事は、『シナクサール』の大斎第5土曜日に詳しく記述されている。 それから久しくして、ギリシャ王レウ・イサウリア人は、コザール族と平和に暮らしたいと願い、息子のコンスタンティノス（コプロニモス）を、洗礼を受けてイリーナと名付けられたコザール族のカガンの娘と結婚させた。 彼らにはレウという息子がおり、母の名にちなんでカザリンまたはハザリスと呼ばれていた（このレウにはイリーナという妻がおり、彼女は夫の死後、第7回全地公会議において偶像破壊の異端を排斥し、正教を復活させた）。この結婚を機に、ギリシャ人はコザール人と平和に暮らすようになり、コザール人もキリスト教の信仰に触れるようになった。 キリスト教は、主にヘルソンの人々（ヘルソンはギリシャの植民地）を通じて、特に聖コンスタンティノスと聖メフォディオスという二人の教父たちの後、コザール族の間で広まっていった。 コザール族は古くからロシアのスラブ人たちに貢納を課していた。各家庭からハタネズミの皮を1枚、各耕作用プラウからシェリャグ1枚を徴収していた。この貢納は、アスコルドとディルによって廃止され、彼らはコザール族からセヴェル人およびラディミチ族を奪い取った。 （ヨーロッパ系の）コザール族を最終的に打ち破ったのは、聖ウラジーミルの父であるスヴィャトスラフであり、彼は彼らの都市ベリャ・ヴェジュを攻略して貢納を課した。一方、アジア系のコザール族（ドン川とヴォルガ川の間に住んでいた）は、ポロヴェツ人やペチェネグ人に征服された。

[3580] 聖メフォディウスの記念日は10月23日に祝われる。

[3581] イグナティウスは847年から857年まで、その後867年から877年まで、2度にわたり総主教を務めた。

「お命じになるなら、陛下」とコンスタンティンは答えた。「私は喜んで、徒歩で、裸足で、そして主が弟子たちを説教に遣わされる際、持っていくことを禁じられたものすべてを携えず、そこへ向かいます。」

「もしあなたが私的な意思でこれを行うのであれば」と皇帝は答えた。「私はこれに何の異論もない。しかし、あなたが我々の命を受けて出発する以上、名誉と皇帝の支援を伴って行け。」

その後、コンスタンティンは、スラブ語を心得ていた弟の聖メフォディウスを説得し、キリストの信仰の光をもって異教徒を啓蒙するという使徒的奉仕に共に赴くよう促した。メフォディウスは同意し、二人は共に旅立った。　彼らの行く手には草原が広がっていたが、当時その草原にはウグリ族、すなわち現在のハンガリー人、あるいはマジャール人が住んでいた。このウグリ族は極めて恐ろしく、人間とはほとんど似ても似つかないほどであった。彼らは毛皮を裏返しに着ており、小麦を蒔くこともなく、略奪を糧として生きていた。　聖なる兄弟たちがここで祈りを捧げるために立ち止まると、ウグリ族が襲いかかってきた。彼らは狼のように吠え、二人を引き裂こうとした。コンスタンティンは怯むことなく、祈りを中断することもなく、主に向かって「主よ、憐れみたまえ！」と繰り返し叫んだ。

祈りが終わると、ウグリ族は、神の御摂理により、コンスタンティンを見て柔和になり、彼に頭を下げ始めた。コンスタンティンは彼らにいくつかの教訓的な言葉を語り、その後、ウグリ族は彼らを旅立たせた。

まず、聖なる兄弟たちは、コザール族と国境を接するギリシャの都市ヘルソンへと向かった。この都市は、（現在の）セヴァストポリからそう遠くない海辺に位置していた。　そこで彼らはかなりの時間を過ごし、コザール語[3582]　とギリシャ語を学んだ。コンスタンティンはこの地で、ユダヤ語の文法書8巻を翻訳した。彼らがこれを学んだのは、コザール人をより効果的に啓蒙し、コザール人の中に多くいたユダヤ人[3583] と論争するためであった。

そこにはあるサマリア人が住んでおり、彼はコンスタンティンのところへ訪ねては、信仰について語り合っていた。ある日、彼はサマリアの書物を持ってきて、コンスタンティンに見せた。　コンスタンティンはサマリア人からその書物を譲り受け、自分の部屋に閉じこもって、それらを学ぶことができるよう神に熱心に祈り求めた。神の助けにより、コンスタンティンはすぐにこれらの書物をしっかりと習得した。これを知ったサマリア人は、「まことに、キリストを信じる者は、すぐに聖霊の恵みを受けるのだ」と叫んだ。

サマリア人の息子は直ちに洗礼を受け、その後、サマリア人自身もキリストの信仰を受け入れた。

ヘルソンで、コンスタンティンは「ロシア文字で書かれた福音書と詩篇」を見つけることに成功し、またその言語を話す人物にも出会った。　コンスタンティンは彼と語り合ううちにその言葉を習得し、会話を通じて文字を母音と子音に分類し、神の助けにより、まもなく発見された書物を読み解き、解説し始めた。多くの人々は、その知恵を目の当たりにして驚き、神を賛美した。

ここで、聖なる兄弟たちは、ローマ教皇である聖殉教者クレメントの聖遺骨（[3584] ）が海中に眠っていることを知った。彼らはヘルソンの司教に対し、その聖遺骨を掘り起こすよう説得し始めた。この聖遺骨については、次のように伝えられている。

[3582] コザール人はスラブ語を話していた。

[3583] ユダヤ人の影響はここで非常に強く、コザール・カガン朝とその宮廷、すなわちコザール社会の上流階級でさえ、ユダヤ教を受け入れたほどであった。

[3584] 聖教会では、11月25日に彼の記念日が祝われる。

聖クリメントがローマからヘルソンへ流刑に処され、そこで多くの人々をキリスト教の信仰へと導いたとき、イゲモン・アウフィディアンは、トラヤヌス帝[3585] の命により、キリスト教徒たちが彼の遺体を見つけられないように、彼の首に船の錨を巻きつけて海に沈めるよう命じた。 聖人の忠実な弟子たちは岸辺に立ち、泣きながら師が海に沈められるのを見守っていました。その後、最も忠実な二人の弟子、コルニリウスとフィブが、キリスト教徒たちにこう言いました:

「皆で心を一つにして祈りましょう。主が聖なる殉教者の遺体を私たちに示してくださるように。」

キリスト教徒たちの祈りにより、海は三ポプリシャ分後退した[3586] 。人々は、かつて紅海を渡った古代イスラエル人のように、乾いた海底を歩き、教会の形に造られた大理石の墓所を見つけ、そこで聖なる遺体と、聖人が溺死させられた際に使われた錨が横たわっているのを見た。 キリスト教徒たちはそこから聖遺体を運び出そうとしたが、前述の弟子たちは啓示を受け、聖遺体はそのまま手つかずのままにしておくべきであること、そして毎年、聖人を偲ぶ日に海が7日間後退し、聖遺体に参拝したい人々に道を開くことを告げられた。 この現象は、トラヤヌス帝の治世からギリシャのニキフォロス王の治世に至るまでの700年間続いた[3587] 。しかし、人々の罪のゆえに、ニキフォロス王の治世において海は後退しなくなり、それはキリスト教徒たちに大きな悲しみをもたらした。

聖コンスタンティノスとメフォディオスは、聖遺骨が完全に隠されてからすでに50年以上が経過した頃、ヘルソンに到着した。聖なる兄弟たちに説得され、聖遺骨の公開を決意したヘルソンの祝福された司教ゲオルギオスは、まずコンスタンティノープルへ赴き、皇帝と総主教からこの公開の許可を得た。 コンスタンティノープルからの司教と共に、聖ソフィア大聖堂の聖職者全員が聖遺物の開棺に駆けつけた。その後、聖コンスタンティノスとメフォディオスを含む一行は、民衆に囲まれながら、願いが叶うことを期待して海岸へと向かった。 しかし、海は引こうとしなかった。そこで、日没後、彼らは船に乗り込み、海へと出航した。すると夜、真夜中のちょうどその時刻、海から光が輝き、聖なる頭部が現れ、続いて聖クレメントの全身がはっきりと見えるようになった。 聖遺骨は船に納められ、大いなる栄誉をもって街へと運ばれ、使徒教会（[3588] ）に安置された。聖コンスタンティンとメフォディウスは聖遺骨の一部を手に取り、自分たちが訪れるあらゆる場所へ持ち歩き、やがてその一部をローマへと運んだ。

ヘルソンから、コンスタンティンとメフォディウスはコザール族のもとへ向かい、そこでコザール族のカガンから丁重にもてなされ、ギリシャ王からの書簡を手渡した。至福のコンスタンティンは、コザール族、ユダヤ人、サラセン人らと長時間にわたる対話を余儀なくされた。 これらの対話において、メフォディウスはほとんど関与しなかった。彼はコンスタンティンほど学識が深くなかったからである。元軍司令官であった彼は、学術的な議論を交わすことよりも、人々との接し方をよりよく知っていた。 そのため、幼い頃から学問に精通し、聖書を熟知し、あらゆる質問に答える準備の整った優れた説教者であったコンスタンティンが、信仰に関する対話を一人で進めざるを得なかった。一方、メフォディウスは、神に喜ばれる祈りをもってコンスタンティンを支えた。

コザール人は、コンスタンティンのもとへ、狡猾で抜け目のない一人の男を送り込み、その男は彼にこう言った。

[3585] トラヤヌスは98年から117年まで在位した。

[3586] ポプリシュチェは千の大きな歩幅から成り、その各歩幅は五フィートと数えられていた。

[3587] ニキフォロス1世は802年から811年まで在位した。

[3588] パノニアの聖人伝によると、聖遺骨の発見は次のように行われた。皆は船に乗って、聖遺骨があると推定される場所へ向かった。海が完全に静まると、捜索を始め、その間、教会歌を歌った。まず、あたかも多くの香炉から立ち上るかのような強い芳香が広がり、その後、聖遺骨が現れた。

「あなた方ギリシャ人は、一人の王の代わりに、王家ではない平民の出身者を王に据えるという悪い習慣を持っています。ニキフォロス王の後は、ボヤリンのミハイル・クロパラトを王に据え、彼を退けた後は、平民出身のレフ・アルメニア人を王位に就かせ、その死後にはアモリア出身のミハイル・トラヴルを王に据えました。　しかし、我々の場合はそうではない。我々のカガンたちは皆、カガン家出身であり、この家系に属さない者は誰も王位に就くことはできないのだ。

これに対し、コンスタンティンは簡潔にこう答えた。

「神が、御心に適わぬ王サウルを退け、羊飼いたちの中から御心に適うダビデという男を選ばれたのは、果たして悪いことだったでしょうか？」

コザリンはこれに対して反論できず、別の質問を投げかけた。

「あなたは手にした書物から教訓を説いておられますが、私たちはそうではありません。私たちは、あなた方のようには自らの書物を誇ることなく、知恵そのものからすべての知恵を語り出します。すべての知恵は、あたかも私たちの内にあるかのようです。」

「もし裸の人に出会ったとして――」とコンスタンティンは答えた。「その人が、たくさんの衣服や金、財産を持っていると断言したとしても、彼が裸で、手には何も持っていないのを見て、あなたは彼を信じるだろうか？」

「いいえ」とコザリンは言った。「もし何か持っていたなら、裸で歩き回るはずがないでしょう。」

「もし君が、自慢しているようにあらゆる知恵を吸収したのなら」とコンスタンティンはコザリンに言った。「教えてくれ。アダムからモーセまでの間に、いくつの氏族があり、どの氏族が地球のどこに住んでいたのか？」

コザリンは何も答えられなかった。コンスタンティンは続けた。

「だからこそ、お前があらゆる知恵を学び尽くし、書物など必要としないという言葉を、私は信じないのだ。」

聖なる兄弟たちは、カガンに昼食に招かれた。食卓に着く前に、カガンは彼らに尋ねた。

「どの家系に属しているのか教えてくれ。そうすれば、どこに座らせればよいか分かるから。」

「我らの祖父は」とコンスタンティンは答えた。「偉大で栄光に満ちた家柄であり、王の側近にいました。しかし、彼は与えられたその偉大な栄光を保つことができず、王から追放され、異国の地へ身を隠し、そこで我々を産んだのです。　我々は今、祖父の古き栄光を求めており、それ以外のものは一切望まない。我らの祖父はアダムであった。

「客よ、お前の言葉は筋が通っており、正しい」とカガンは言い、それ以来、コンスタンティンを格別に敬うようになった。

食卓に着くと、カガンは杯を手に取り、こう言った。

「すべての被造物を創造された唯一の神に乾杯しよう。」一方、コンスタンティヌスは杯を手に取り、こう言った。

「唯一の神と、天を確立されたその御言葉、そして被造物の存在を支える命を与える御霊の栄光に乾杯する。」

「ほら、我々も」とカガンはコンスタンティンに言った。「すべての被造物の創造主である神について、同じ教えを掲げている。ただ、あなた方が三位一体を称えるのに対し、我々はユダヤの書物が教える通り、唯一の神を称えるという点で異なるだけだ。」

「もしあなたがたが」とコンスタンティヌスは答えた。「ユダヤの書物から神は唯一であることを知ったのなら、その同じ書物から聖三位一体についても知ってください。ユダヤの書物は、その預言において、父のほかに『御言葉』と『御霊』を説いているのです。　王であり預言者であるダビ

デはこう言っている。*「主の言葉によって天は造られ、その口の息によってそのすべての軍勢は造られた」*（詩篇32:6）。この箇所には、唯一性と三位一体がはっきりと示されている。すなわち、主、その御言葉、そして御霊である。　主は父なる神、御言葉は子なる神、主の御口の御霊は聖霊なる神である。しかし、三人の主ではなく、御言葉と御霊を持つ唯一の主であり、また、神性の中に三つの神がいるのではなく、唯一の崇められる神である。　また、次の点にも注目してほしい。二人のうち、あなたの王としての威厳を最もよく崇めるのは、あなただけに敬意を表し、あなたの言葉や口から出る霊を軽んじる者か、それとも、あなたとあなたの言葉、そして口から出る霊を等しく崇める者か？

「間違いなく後者だ」とカガンは答えた。

「それゆえ、私たち――」と哲学者は続けた――「聖なる三位一体、すなわち父、子、聖霊を等しく崇める私たちは、あなた方よりも優れた、真の神の崇拝者なのです。このような神への崇拝は、預言者の書から学んだものです。前述の箇所以外にも、他にも例を挙げましょう。　聖なる預言者イザヤは、神の御子について次のように語っている。*「わたしに耳を傾けよ、ヤコブよ、わたしの召された者であるイスラエルよ。わたしは同じ者であり、最初であり、最後である……そして今、主なる神とその御霊がわたしを遣わされた」*（イザヤ48:12, 16）。この聖書の箇所について、私たちの古代の教父たちは[3589]次のように解説しています：

「遣わされる者とは、御子以外には誰がいるだろうか。誰から遣わされるのか。父と、父なる聖霊以外にはいないのではないか。」

その晩餐会には多くのユダヤ人がいた。そのうちの何人かが、聖コンスタンティヌスにこう言った。

「キリスト教の哲学者よ、教えてほしい。天使たちでさえ直視することのできない神を、どうして女性の胎内に宿すことができるというのか？」

哲学者（コンスタンティノス）は、指をさしてカガン（君主）の首席顧問を指し示し、こう言った。

「もし誰かが、『この首席顧問はカガンを自宅に迎え入れ、もてなすことなどできない。それなのに、最下級の奴隷でさえそれができる』と言ったとしたら、我々は彼を何と呼ぶだろうか。狂人か、それとも賢者か？」

「いや、極めて狂人だ」とユダヤ人たちは答えた。

そこで哲学者は、次のような問いを投げかけた。

「天の下に見られるすべての被造物の中で、最も高潔なのはどれか？」

「人間こそが最も高貴な被造物です」とユダヤ人たちは答えた。「なぜなら、人間には神の御姿に似せて造られた理性ある魂があるからです。」

「それゆえ、人間の胎内に神が宿ることは不可能だと認める者たちは、理性を欠いているのです」と哲学者は答えた。「彼らは、モーセの時代に神が茨の茂み（ブッシュ）に宿ったことを知っているにもかかわらず、そう主張しているのですから。」　魂も感覚もない被造物である荊の茂みが、神に似た魂を持つ、感覚と理性を持つ生き物よりも尊いというのか？　荊の茂み以外にも、神はヨブやモーセ、エリヤの前に現れた際、雲や煙、炎の中に宿られた。　とりわけ驚くべきことは、神が、アダムの罪によって人類に与えられた死という災いから人々を救い出すために、地上に現れ、人々と共に生きることを望んで、最も尊い、魂を持つ被造物の中に宿られたということです。　最も尊い被造物、すなわち人類に対して、癒しと再生を期待すべきは、創造主ご自身以外に誰がいるというのでしょうか。ダビデこそが、*「御言葉を送り、彼らを癒された」*（詩編106:20）と預言したのではないだろうか。それゆえ、父なる神の御言葉、御子なる神は来られ、人間の性質を癒されたのである。

[3589] アファナシオス大聖人、バシレイオス大聖人、グリゴリオス・ニッサス。

もし受肉によって人間と結びつき、癒しの絆創膏のように人間に寄り添わなければ、父なる神の御言葉がどうして人間を癒やすことができただろうか。傷ついた人を癒やそうとする医師が、患者ではなく木や石に絆創膏を貼るだろうか。　それゆえ、神は御自身の独り子なる御言葉を、絆創膏のように、木には貼り付けませんでした――かつて御言葉は茂みの中の木々の間にも現れていましたし、石にも貼り付けませんでした――シナイ山やホリバの岩山でモーセやエリヤによって目撃されていたにもかかわらず――、むしろ、罪という病に冒された人間に貼り付けたのです。　その結びつきは切っても切れないものとなりました。なぜなら、主は、単に女性というだけでなく、清く処女である胎内に宿ることをお選びになったからです。これはイザヤが預言した通りです。*「見よ、処女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。これは『神は我らと共におられる』という意味である」*（イザヤ7:14）。ここで預言者は、神の御子が、清く、未婚の処女からこの地上に生まれることをはっきりと語っている。そして、私たちの救いのために、神が処女の胎内に宿ることがいかに可能であったかについては、あなたがたの書物に書かれていることを思い出してほしい。あなたがたのラビ、アキッラはこう述べている。

「雷鳴やラッパの音の中で、主よ、私たちに現れないでください。寛大な主よ、私たちに現れないでください。どうか私たちの胎内に宿り、私たちの罪を赦してください。」

――もしモーセが神に、私たちの胎内に宿ってくださるよう祈ったのなら、なぜあなたがたは、神が女性の胎内に、それも単なる女性ではなく、処女の、清く、汚れなく、未婚の女性の胎内に宿られたと告白する私たちを非難するのですか？　私たちキリスト教徒が聖餐式において神秘的な犠牲に与るとき、神は私たちの胎内にも宿られるのです。ご覧の通り、ラビ・アキラの証言によれば、あなたがたの書物に記されているモーセの古の祈りは成就しました。神は私たちの胎内に宿り、私たちの罪を引き受けてくださったのです。

昼食後、皆は散り散りになり、再び信仰について語り合う日を定めた。約束の日、皆が集まり、カガンの招きに応じて、割り当てられた席に着いた。コンスタンティヌスは、対話の冒頭で次のように述べた。

「私はここにいる皆さんの中で唯一の異邦人ですが、私たちは皆、すべて、そして私たちの心までもその御手の中にある神について語り合っています。話し合いの際、言葉に長けた方が、もし理解できたなら、私たちの言葉を裏付けてください。もし理解できなければ、改めて質問してください。私たちは説明するよう努めます。」

ユダヤ人たちは、次のような質問から対話を始めた。

「教えてほしい。神は最初に、モーセの律法を与えられたのか、それとも、あなたがたキリスト教徒が守っている律法を与えられたのか？」

「もしかすると」と、至福のコンスタンティンは答えた。「あなたがたは、どの律法が最初なのかと私に尋ねたのは、その後で『最初のものが最も優れている』と言うためではないのか？」

「はい」とユダヤ人たちは答えた。「それゆえ、最初の律法こそが最も重要であり、最も優れているのだから、それに従うべきなのです。」

「もし最初の律法だけを遵守したいのなら、割礼を放棄しなさい」と、コンスタンティンはユダヤ人たちに言った。

「なぜそう言うのですか？」とユダヤ人たちは尋ねた。

「正直に答えてほしい」とコンスタンティヌスはユダヤ人たちに言った。「最初の掟は、割礼にあるのか、それとも割礼がないことにあるのか？」

「我々は、割礼において与えられたものだと考えています」とユダヤ人たちは答えた。

「神が最初の律法を授けたのは、ノアではなかったか？」とコンスタンティヌスは言った。「それは割礼が行われる前であり、アダムが堕落した後、楽園で与えられた戒めの後のことだった。神はノアに、人の血を流してはならないと命じられた。*『人の血を流す者には、その血も流される』*

（創世記9:6）。その後、草や動物、家畜、鳥、魚を食べることについて、神はノアにこう言われた。*「わたしは、あなたがたと、あなたがたの後の子孫との間に、わたしの契約を結ぶ」*（創世記9:9）。

「しかし、契約は律法ではない」とユダヤ人たちは言った。「神はノアに『わたしの律法』とはおっしゃらず、『わたしの契約』とおっしゃった。我々は律法について語っているのだ。」

「あなたがたは割礼を律法として守っているのか、そうでないのか？」とコンスタンティヌスは尋ねた。

「律法として守っている」とユダヤ人たちは答えた。

「しかし、割礼については」とコンスタンティヌスは続けた。「神はそれを律法とは呼ばず、ただ『契約』と呼んだ。アブラハムにこう言われた時だ。*『あなたと、あなたの後の子孫は代々にわたり、わたしの契約を守らなければならない……男子は皆、割礼を受けなければならない……これが、わたしとあなたとの間の契約のしるしとなる…… そして、わたしの契約は、あなたがたの肉に永遠の契約として刻まれるであろう』*（創世記17:9–13）。ほら、見てください――とコンスタンティヌスは言った――神は一度も割礼を律法とは呼ばず、契約と呼んだのです。　それゆえ、あなたがたは割礼を不法なものとして放棄するつもりか。もし割礼の契約を律法として守るのなら、ノアに与えられた契約もまた律法として守り、それを、楽園から追放され、大洪水の水から救われた人類に神が与えた最初の律法と呼ぶべきである。

「いいえ」とユダヤ人たちは答えた。「モーセに与えられた律法だけが律法であり、私たちはそれを守っているのです。」

「もしノアに与えられた契約が」とコンスタンティンは言った、「律法ではなく、単なる契約であるならば――神はそれを律法とは呼ばず、契約と呼んだのだから――それならば、モーセに与えられた律法もまた律法ではない。なぜなら、神は預言者エレミヤ書の第11章において、それを律法とは呼ばず、契約と呼んでいるからだ。*『この契約の言葉を聞きなさい…… イスラエルの神、主はこう言われる。『わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地から導き出したとき、彼らに命じたこの契約の言葉を聞かない者は、のろわれる』』*（エレミヤ11:2–4）。もしこの契約があなた方にとって律法であるならば、ノアに与えられた契約もまた律法である。そして、この律法は割礼の前に与えられたものであるから、あなた方はこれを第一の律法として守り、その後にあった他の律法、すなわちアブラハムの律法やモーセの律法には従ってはならない。何しろ、あなた方自身が、最初の律法こそが最も優れており、それに従うべきだと述べたではないか。

ユダヤ人たちはそこでこの質問から話をそらし、別の話題に移ってこう言った。

「モーセの律法を守った者は、神に喜ばれた。それゆえ、私たちもそれを守ることで、同様に神に喜ばれることを望んでいる。しかし、あなた方は、自分たちで作り出した新しい律法に従い、古い律法を軽んじているではないか。」

「新しい律法を受け入れたことは、正しい行いでした」と哲学者は答えた。「なぜなら、もしアブラハムが割礼を受けず、ただノアの契約を履行していただけでは、神の友とは呼ばれなかったでしょう。同様に、アブラハムの後のモーセも、以前にノアとアブラハムに与えられた律法に満足せず、新しい律法を記したのです。　我々も彼らの例に倣っている。しかし、彼らが互いに引き継いでいく中で、以前の律法を廃止しなかったように――アブラハムはノアの律法を拒まず、　モーセは両者を否定したわけではなく、欠けていた部分を補い、主の戒めが確固たるものとなるよう、より詳細な律法の中に、より完全な神の御心を示したのです。それと同様に、私たちもモーセの石板に記された旧約を否定するのではなく、唯一の神、すなわちすべての被造物の創造主を知るために、また、　「殺してはならない」「盗んではならない」といったその他の戒めも守っている。私たちが遠ざけているのは、モーセの石板に記されていないもの、例えば割礼や、声なき者たちの犠牲の捧げ物、その他類似の慣習だけである。　それらは、来るべき新しい律法の単なる影であり、その模倣に過ぎなかっ

た。それゆえ、その到来とともに、それらを捨て去る必要があったのである。　実物そのものを手にしているのに、なぜその影を保つ必要があるのか?

「もし、あなたが旧約について語っていること――すなわち、モーセの十戒以外の規定や契約が、あなた方の新しい契約の単なる影や模倣に過ぎないというのなら、古代の立法者たちはそれを知っており、将来到来するあなた方の新しい律法について言及していたはずだ」と、ユダヤ人たちは反論した。　何しろ、影や模倣とは、目で見ることを待ち望んでいるそのものを描き出すものでなければならないのだから。　しかし、立法者たちはあなた方の律法を待ち望んではいなかった。それゆえ、旧約聖書のすべての規定や契約は、モーセの十戒と同様に、影や模倣ではなく、まさに真実（そのもの）であり、あなた方も、モーセの十戒に記されているように、それを真実として守らなければならないのである。

これに対し、哲学者は次のように答えた。

「もし旧約の時代の古代の立法者たちが、自分たちの律法に続いて新しい律法が到来することを知らなかったとしたら、私はあなたにこう尋ねたい。神が以前話したあの契約をノアに与えられた当初、神はノアに、その後、御自分の愛する者アブラハムに別の律法を与えると告げられただろうか?」　もちろんそうではありません。むしろ、最初の契約を永遠に存続するものとして定められたのです。また、アブラハムに契約を与えた際、後にモーセに別の律法を与えると告げられたでしょうか。一方、私たちの新しい契約については、神は聖なる預言者たちを通して詳細に告げられました。それでは、預言者エレミヤの言葉を聞いてください：　*「見よ、主はこう言われる。日が来ると、わたしはイスラエルの家とユダの家とと、新しい契約を結ぶ。それは、わたしが彼らの先祖たちをエジプトの地から導き出すために彼らの手を取った日に、わたしが彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らは、わたしが彼らと契約を結んでいたにもかかわらず、その契約を破った、と主は言われる」*（エレミヤ31:31–32）。これこそ、私たちの新しい契約に関する有名な預言です。また、預言者イザヤも、主の御名において新しい契約について預言し、次のように語りました。*「しかし、あなたがたはかつてのことを思い起こさず、古きことを心に留めようともしない。わたしは新しいことをなす。今、それが現れる」*（イザヤ43:18–19）。このように、古代の律法制定者たちは、新しい恵みの律法について知っており、それを待ち望み、それについて預言していた。それゆえ、あなたがたの旧約の規定や契約は、私たちが待ち望む律法の影であり、その模倣に過ぎず、真実そのものではない。したがって、それらは不要なものとして捨て去らなければならない。

「すべてのユダヤ人は、新しい律法が与えられることを真理として認めている」とユダヤ人たちは言った。「しかし、油注がれた者が現れる時はまだ来ていない。」

「では、何をまだ待っているのですか」とコンスタンティヌスは答えた。　「預言者ヤコブの預言によれば、キリスト・メシアの到来までしか存続しないはずの、あなた方の王国と支配の権威は、すでに終わっていないのか。エルサレムは破壊されていないのか。いけにえは拒絶されていないのか。主の栄光は、預言者マラキが『　『わたしはあなたがたに好意を抱いてはいない、と万軍の主は言われる。あなたがたの手から捧げられるいけにえも受け入れない。　『太陽が昇る東から沈む西に至るまで、わたしの名は偉大となる。あらゆる場所で、わたしの名に香を焚き、清い供え物をささげられる。わたしの名は諸国民の間で偉大となる、と万軍の主は言われる』」（マラキ1:10–11）。

「私たちはこの箇所を、異邦人たちが私たちを通して祝福される、すなわち、私たち――アブラハムの子孫――が祝福されているように、エルサレムの都で割礼を受けるようになる、と理解しています」とユダヤ人たちは答えた。

「アブラハムの子孫は、誰を通して祝福されるのか」とコンスタンティヌスは答えた。「その方、すなわち、アブラハム、イサク、ヤコブ、イッサイ、ダビデに由来するメシアを通してである。神はアブラハムに*『地上のすべての民族は、あなたによって祝福される』*（創世記12:3）、またイサクには*『あなたの子孫によって、地上のすべての民は祝福を受ける』*（創世記26:4）、そしてヤコブ

にも同じように（創世記28:14）と告げられました。ダビデはこう言っています。*『彼によって諸部族は祝福され、すべての民は彼を賛美する』*（詩篇71:17）と語っている。また、メシアがアブラハムの子孫のためだけでなく、異邦人の救いのためにも来られるべきであったことについては、かつてヤコブがユダを祝福する際、次のように語った。*「ユダから統治の杖が、その子孫から支配者が、和解者（メシア）が来るまで、また諸国民が彼に従うまで、決して離れることはない」*（創世記49:10）。また、預言者ゼカリヤは、シオンの娘であるエルサレムに対し、ロバとその子ロバに乗る柔和な王の到来を告げ知らせる際、次のように語っている。 *「そのとき、エフライムの戦車とエルサレムの馬を滅ぼし、戦用の弓は砕かれ、彼は諸国民に平和を告げ知らせる」*（ゼカリヤ9:10）。ご覧の通り、メシアはあなた方ユダヤ人のためだけでなく、異邦人のためにも来なければならなかったのです。 私には、主はあなた方のためというより、むしろ異邦人のために来られたように思われます。なぜなら、あなた方は主を受け入れなかったが、異邦人は主を受け入れたからです。あなた方は主を殺しましたが、異邦人は主を信じたからです。あなた方は主を拒みましたが、異邦人は主を愛したからです。それゆえ、主もまたあなた方を拒み、異邦人を招き、彼らの中で栄光をお示しになっているのです。 そして、真に待ち望まれていたメシアがすでに到来したことは、聖なる預言者ダニエルを通して確かめることができます。バビロンにおいて、ダリウス王の治世の初年 、この預言者の前に主の天使ガブリエルが現れ、その時からメシアがこの世に来られるまでの期間を70の「七」と定めました。 一つの「七」は7年を含み、全部で490年となる。これは、あなた方のタルムードも同様に計算している。これらの年月は、すでにどれほど前に過ぎ去ったのだろうか。よく調べてみれば、ダニエルに告げられた「七」が満ちてから、すでに800年以上が経過していることが分かるだろう（ダニエル書2:1–49）。

「もう一つお尋ねしたいのですが」とコンスタンティヌスは言った。「ダニエルがネブカドネツァルに、巨大な像の夢について説明した際、言及した『鉄の王国』とは、あなた方の考えではどのようなものだったのでしょうか？」

「鉄の王国とはローマ帝国を指していました」とユダヤ人たちは答えた。

「では、人の手によらず山から切り離され、その像を打ち砕いた石は、誰を意味するのでしょうか？」と哲学者は尋ねた。

「その石はメシアを意味します」とユダヤ人たちは答え、さらにこう付け加えた。「もし預言者たちの伝承や、あなたが言うような他の出来事から判断して、メシアがすでに到来しているのなら、なぜローマ帝国は今もなお権力を握っているのですか？」

「いいえ」と哲学者は答えた。「もはや権力を握ってはいない。他の王国と同様に、その時代は過ぎ去ってしまったのだ。」 我々の王国はローマの王国ではなく、キリストの王国である。預言者が言ったように、*『天の神は、永遠に滅びることのない王国を築き上げられる。その王国は他の民に譲られることはなく、すべての王国を打ち砕き、滅ぼし、それ自体は永遠に存続する』*（ダニエル書2:44）。キリストの名にちなんで名付けられたこの王国こそ、キリスト教の王国ではないだろうか。ローマ人は偶像を崇拝していたが、キリスト教徒たち——その一部はこの民から、一部は他の部族や民族から成っている——は、預言者イザヤが次のように述べているように、キリストの名によって統治している。「あなたがたは、*わたしの選民に、あなたがたの名を呪いの言葉として残すことになる。 主はあなたがたを滅ぼし、御自分のしもべたちには別の名を授けられる。地上でその名によって自らを祝福し、まことの神にかけて誓う者となるであろう」*（イザヤ65:15–16）。キリストについて語られたすべての預言は、果たして成就しなかったと言えるだろうか。イザヤは、処女からの御降誕を次のように予言していた。 *「見よ、処女が身ごもって、男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」*（イザヤ7:14）。また、聖なる預言者ミカは、ベツレヘムでの誕生について次のように語っている。*「ベツレヘムよ、エフラタの家よ、あなたはユダの千の町の中でも小さいのか。 あな*

たから、イスラエルを治めるべき方が、わたしのもとに出る。その方の起源は太古の昔、永遠の昔からある。それゆえ、産むべき者が産む時まで、主は彼らを見捨てられる」（ミカ5:2–3）。

「我々は」とユダヤ人たちは言った、「父ノアから祝福を受けたシムの祝福された子孫である。しかし、あなたたちは祝福を受けていない。」

「ノアによるシムへの祝福は、あなた方とは何の関係もありません」とコンスタンティンは言った。「そこにはただ神を賛美する言葉があるだけです。なぜなら、ノアは*『シムの主なる神は祝福される』*と言ったからです（創世記9:26）。ここでは、徳の高いシムのために、ノアの口を通して主なる神が祝福されているだけであり、それ以上の意味はありません。」　一方、私たちの祖先であるヤフェトに対しては、ノアはこう言った。*「神がヤフェトを広げ、シムの住む地に住まわせ給わんことを」*（創世記9:27）。あなたがた自身も、神の恵みによってキリスト教が広まり、あなたがたがますますその重要性を失っている様子を目の当たりにしているはずです。かつてあなたがたが住んでいた場所ですら、今やキリスト教徒たちによって、私たちの主イエス・キリストの御名が祝福され、賛美されているのです」。

「ほら、あなたたちは」とユダヤ人たちは言った。「人間に頼って、祝福されるとでも思っているのか。それなのに、聖書はそのような者たちを呪っているではないか。」

これに対し、哲学者はユダヤ人たちに次のような問いを投げかけた。

「ダビデは呪われているのか、それとも祝福されているのか？」

「大いに祝福されている」とユダヤ人たちは答えた。

「それならば」とコンスタンティヌスは言った。「私たちも祝福されている。なぜなら、彼もまた、詩篇で*『私の平和の人、私が頼りにしていた者』*（詩篇40:10）と語ったとき、その方に頼っていたのだから。」　その方こそ、キリスト、神である。もし誰かが単なる人間に信頼を置くならば、我々はその者を呪われた者と見なす。

その後、ユダヤ人たちは別の質問を投げかけた。

– なぜ、あなたがたキリスト教徒は割礼を拒むのですか。キリストはそれを拒まず、律法に従って行われたではありませんか。

哲学者はこう答えた。

「『これはわたしとあなたとの間のしるしとなる』と最初にアブラハムに告げられた方が、来られてそれを（割礼を）行われたのです。それゆえ、それ（アブラハム）からこの方（キリスト）に至るまで、それが守られてきたのです[3590]。キリストは割礼の代わりに洗礼を定められました。

すると、ユダヤ人たちは言った：

– では、なぜある人々は、そのしるし（洗礼）を受けず、アブラハムのしるし（割礼）によって神に喜ばれたのでしょうか？

「彼らの中には」と哲学者は答えた、「アブラハムを除いて、二人の妻を持っていた者は誰もいなかった。それゆえ、神は彼に割礼を与え、それ以上踏み越えないよう制限を設け、アダムの最初の生き方（一人の妻を持つこと）に従って生きるようにされたのだ。　また、ヤコブが二人の妻を持っていたために足を傷つけられた際も、神は同様の指示を与えた。ヤコブは、なぜそのようなことが自分に起きたのかという罪を悟り、そこで「イスラエル」、すなわち「心で神を見る者」という名を与えられた。しかし、アブラハムはこれを理解しなかった。

「あなた方は、偶像に拝礼しながら、どうして神に喜ばれていると思うのですか？」と、ユダヤ人たちは新たな質問を投げかけた。

[3590] 割礼は、アブラハムの時代から始まり、キリストによるその成就（「わたしとあなたとの間」）に至るまで、しるしとして与えられていたため、キリストによって終わらなければならなかった。割礼は、キリスト教徒にとって不要な重荷として、使徒公会議において完全に廃止された（使徒行伝15:1–41）。

「まず第一に」と哲学者は答えた。「『イコン』とは何か、『偶像』とは何か、その名称の違いを区別することを学んでください。そうすれば、あなたがたがキリスト教徒を非難するのは誤りであることがわかるでしょう。像に関する多くの指針が、あなたがたの書物には記されています。 いくつかお尋ねしましょう。モーセは、山で見た姿に基づいて幕屋を造ったのでしょうか、それとも彼の芸術的想像力に基づいて造ったのでしょうか。彼は木や皮、羊毛を用いて、ケルビムにふさわしい幕屋を築いたのですか？ しかし、前者が正しいのであれば、あなた方は木や皮、羊毛に敬意を表し、礼拝していることになり、かつてモーセに幕屋のそのような姿（像）を示された神ではなく、それらに礼拝しているということになるのではないでしょうか。ソロモンの神殿についても同じことが言えます。そこにはケルビムや天使、その他の像が数多くありました。 それと同様に、私たちキリスト教徒も、神に喜ばれた儀式を尊ぶことによって、神に栄光を捧げているのです。

「なぜ、神に忌み嫌われる豚肉やウサギ肉を食べるのですか」とユダヤ人たちは言った。

「最初の契約（ノアの契約）は」と哲学者は言った。「*『動くすべての生き物は、あなたがたの食物となる。草の葉のように、すべてをあなたがたに与える』*（創世記9:3）と定めている。なぜなら、清い者にとってはすべてが清く、邪悪な者にとっては良心が汚れているからだ。」 また、神はすべての被造物について、*「すべては極めて良い」*[3591]（創世記1:31）と語っておられる。あなたがたの飽食と、あなたがたの戒めのために、神はあなたがたから最も些細なものを取り去られたのである。 そして、過食があなた方にとっていかに有害であるかについては、次のように記されている。*「イスラエルは満腹し、神を捨てた」*（申命記32:15）、あるいは*「民は座って食べ、飲み、その後、立ち上がって遊び始めた」*（出エジプト記32:6）。

至福の哲学者コンスタンティノスは、キリスト教の信仰について、ユダヤ人たちとこのような対話を交わした。これらの対話は、カガン本人の面前で毎日行われ、かなり長い期間続いた。それらは後に至福のメフォディオスによって記録され、八つの部分に分けられたが、ここではそのごく一部を引用する。

至福のコンスタンティンは、ユダヤ人だけでなく、サラセン人たちとも対話を交わし、彼らに対しても、御自分のしもべたちに*「口と知恵」*を与え、*「すべての敵対する者たちが、それに反論することも、立ち向かうこともできないようにする」*と約束された（ルカ21:15）我らの主の助けを借りて、その誤りを暴いた。

このような甘美で、キリストの信仰にふさわしい言葉を耳にしたカガンとその主要な顧問たちは、コンスタンティンにこう言った。

「神は私たちを教え導くために、あなたを遣わされたのです。あなたは神から書物を学び、すべてを正しく語り、聖書の蜜のような言葉で私たちを心ゆくまで満たしてくださいました。私たちは人間であり、学のない者（「書物を知らぬ者」）ではありますが、この教えが神からのものであると信じています。 もし、私たちの魂を完全に安らげたいのであれば、本からの引用だけでなく、たとえ話を通じて、私たちが信仰について尋ねるあらゆる事柄について語ってください。

その後、皆は休息のために散っていった。翌日、再び集まり、コンスタンティンにこう言った。

「誠実なる人よ、議論と例えを用いて、どの信仰が最も優れているかを私たちに証明してください。」

「ある王がいた」と哲学者は答えた。「その王は、ある夫婦を大いに重んじていた。しかし、彼らが罪を犯したとき、王は彼らを住んでいた土地（楽園）から追放した。彼らはそこで長年にわたり暮らし、貧しさの中、子供たちを産んだ。 子供たちは集まり、どうすれば両親の尊厳を取り戻せ

[3591] 使徒公会議において、キリスト教徒は偶像に捧げられた物、血、絞め殺された動物の肉を避けるよう命じられた（使徒行伝15:29）。

るか考えを巡らせた。ある者は　あることを言い、別の者は別のことを言い、それぞれが自分にとって正しいと思う助言をした。では、これらの助言のうち、どれに従うべきだったのだろうか。やはり、最も優れた助言にこそ従うべきではなかったか？」――コンスタンティンは、その比較を締めくくるようにそう言った。

「なぜそう言うのですか？」とコザールたちは答えた。「誰もが自分の助言を他より優れていると考えています。どの助言が最も優れているのか、私たちが理解できるように、あなたから教えてください。」

「火は」と哲学者は答えた。「金や銀を精錬するが、人間は知性によって嘘と真実を見分ける。教えてほしい、最初の堕落はなぜ起きたのか。甘い果実を見たことと、神になりたいという欲望からではなかったか？」

「なるほど」とコザールたちは答えた。

哲学者は続けた。

「もしある病人に蜂蜜や冷たい水が害となる場合、どちらの医師がより良い助言をするだろうか。　蜂蜜が体に悪い人には『蜂蜜を食べなさい』と言い、冷たい水が体に悪い人には『冷たい水を飲み、裸で寒空の下に立ちなさい』と言う医者か、それとも、害となるものとは正反対の薬を処方する医者か――蜂蜜の代わりに注意深く苦い飲み物を、冷たい水の代わりに温かく体を温めるものを与える医者か？

「もちろん」と皆は言った。「反対の薬を処方する医師こそが、最良の助言を与えるでしょう。同様に、罪を愛する情欲は、苦難に満ちた生活によって打ち砕き、高慢は謙虚さによって打ち砕くべきです。つまり、反対のものは反対のもので治療すべきなのです。」　私たちは気づく。春にトゲだらけの果樹が、秋には良質で甘い実を結ぶのだ。

「よくおっしゃいました」とコンスタンティンは答えた。「キリストの律法もまた、神に従って生きるとは、厳しい生活（狭い道を歩むこと）を送ることであると説いており、それは永遠の住まいにおいて百倍の実を結ぶのです。」

その後、カガンの主要な顧問の一人で、ムハンマドの不敬虔な教えをよく知っている人物が、哲学者に向かって尋ねた。

「教えてくれ、客よ、なぜあなたはムハンマドを尊ばないのか？　彼は自分の書物の中でキリストを大いに称賛し、こう語っていたではないか。『モーセの妹である処女から、死者をよみがえらせ、大いなる力であらゆる病を癒した偉大な預言者が生まれた』と。」

「カガンご自身が裁きを下してください」と哲学者は言った。「教えてほしい。もしムハンマドが預言者であるなら、私たちはダニエルの言葉を信じるべきだろうか。彼は『キリストによって、あらゆる幻視と預言は終わる』と語った。それなのに、どうして彼が預言者であり得るというのか？したがって、もし私たちがムハンマドを預言者と呼ぶなら、それはダニエルを否定することになるのだ。」

これに対し、出席者の多くがこう言った。

「ダニエルが神の御霊によって預言したことは知っていますが、ムハンマドについては、彼が偽預言者であり、多くの人々の救いを滅ぼす者であることを知っています。」

すると、カガンの首席顧問はユダヤ人たちのほうを向き直して言った。

「神の助けにより、この客人はサラセン人の誇りをすべて地に打ち砕き、あなた方の誇りは、まるで汚物のように捨て去ったのだ。」そして、出席者全員に向き直って言った。

「神は、キリスト教の王にすべての民に対する権威と完全な英知をお与えになった。彼らの信仰こそが最善であり、それなしには永遠の命を得ることはできない。」

皆が言った：

「アーメン。」

その後、哲学者は涙を浮かべて皆に向き直り、こう言った。

「兄弟たち、父たち、友人たち、そして子供たちよ！　こうして我々は、神の御加護により、すべてを十分に説明し、ふさわしい答えを提示した。もし今なお、何か理解できない点がある者がいれば、私のところに来て、そのことについて尋ねてほしい。　この教えに耳を傾ける者は、聖三位一体の名において洗礼を受けよ。もし耳を傾けない者がいたとしても、私にはその罪はない。その者は、審判の日、歳老いた審判者がすべての民を裁く座に着く時、自らの罪を目の当たりにするだろう。

これに対し、コザール人とカガン（首長）は次のように答えた。

「我々は互いに敵ではない。そこで、次のように定める。今後、望む者、そしてできる者は、よく考え抜いた上で、洗礼を受けるがよい。しかし、西の方角に向かって拝む者（異教徒）、ユダヤ教の祈りを捧げる者（ユダヤ人）、あるいはサラセン人の信仰を保つ者（ムスリム）は、速やかに死を迎えることになる。」

このような決定を下した後、皆は喜びながら散っていった。200人のコザール人が偶像崇拝の忌まわしい行いや不法な共同生活を捨て、キリスト教の信仰を受け入れた。

コザール王国にキリスト教の信仰を根付かせた後、聖なる教師コンスタンティンとメフォディウスは、自らの故郷へ戻ることを決意した。彼らは、ヘルソンから共にやって来た司祭たちをコザールに残した。カガンは聖なる兄弟たちに、ギリシャの王へ次の手紙を届けるよう命じた。「主よ！　あなたは、私たちにキリスト教の信仰を伝え、聖三位一体を説いたそのような人物を遣わしてくださいました。彼を通じて、私たちはこの信仰こそが真の信仰であることを知り、自らもそれを受けることを望みつつ、希望する者すべてに妨げられることなく聖なる洗礼を受けるよう命じました。　我らは皆、あなたの王国の友であり、もしお望みならば、あなたに仕える用意がある」。

聖なる兄弟たちを見送る際、カガン（王）は彼らに多くの贈り物を差し出しましたが、彼らは「ここにいるすべてのギリシャ人の捕虜を私たちと共に解放してください。それが私たちにとって最高の贈り物となります」と言って、それを断りました。

捕虜は200人以上集まり、彼らは皆、喜びながら旅立った。旅人たちは、人里離れた水のない場所を通らなければならなかった。そこで、皆は渇きで力尽きてしまった。時折湖に出くわしたが、水には塩分が多く含まれており、胆汁のように苦かったため、飲むことはできなかった。　皆は良い水を探しに散らばったが、コンスタンティンだけは、あまりに衰弱してこれ以上歩けなくなっていた。彼は兄のメフォディウスにこう言った。

「もう喉の渇きに耐えられない。この水を汲んでくれ。かつてイスラエルの民のために苦い水を甘い水に変えてくださった方が、喉の渇きに苦しむ私たちにとっても、この水の苦さを和らげてくださると信じているからだ。」

水を汲んで味わってみると、それは蜜のように甘く、冬のように冷たかった。皆はこの水で渇きを癒やし、神を賛美した。

ヘルソンに到着すると、聖なる兄弟たちは司教を訪ねた。夕食の席で、コンスタンティンは司教にこう言った。「司教様、私のために祈ってください。そして、父が子に最後の祝福を与えるように、私を祝福してください。」

それを聞いた者たちは、コンスタンティンが翌朝旅立つつもりだと考え、彼に尋ねた。しかし彼は、司教が翌朝この世を去り、主のもとへ旅立つだろうと、密かに数人に告げた。そしてその通りになった。朝、司教は息を引き取った。

コンスタンティノープルへ向かう道中、フルス族が住む国を通らなければならなかった[3592]。この民族は、「アレクサンドル」と呼ばれる、サクランボの木と一体化した大きな樫の木の下で生贄

[3592] アゾフ海周辺に住んでいた異教の部族。

を捧げていた。女性はこの樫の木に近づくことも、生贄の儀式に参加することも禁じられていた。祝福されたコンスタンティンはこの民族のもとへ赴き、彼らの真ん中に立ち、こう言った。

「ギリシャ人たちは、天と地――これほど偉大で善良な被造物――を崇拝していたにもかかわらず、永遠の苦しみから逃れることはできなかった。ましてや、樫の木という、計り知れないほど劣った被造物にひれ伏しているあなたがたは、永遠の炎から逃れることはできないだろう。」

「我々」と異教徒たちは答えた。「今になってこうしたことを始めたのではなく、先祖からこの慣習を受け継いだのだ。樫の木の前で犠牲を捧げれば、雨やその他多くのものを、願った通りに得られるのだ。」　私たちのうち、誰一人としてそれを断ち切ることなどできないのに、どうしてこの崇拝を捨てられるだろうか? もし誰かがそれを敢えてしようものなら、二度と雨を見ることもなく死んでしまうだろう。

哲学者は次のような言葉で彼らを諭し始めた。

「神は聖典の中であなたがたについて語っておられるのに、どうして神を拒むことができるのか。預言者イザヤは主の御名によってこう叫んでいる。『*わたしはすべての民を集めるために来る。そして、彼らはわたしの栄光を見る。　そして、彼らにしるしを与え、救われた者たちの中から諸国民――パルシス、プーラ、ルドゥ、トゥバル、ヤヴァン、また、わたしについて聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない遠い島々――へと遣わす。彼らは諸国民に、わたしの栄光を告げ知らせる……』*と主は言われる。*「多くの漁師を遣わし、あらゆる山や丘、岩の裂け目で彼らを捕らえさせる」*（イザヤ66:18–19；エレミヤ16:16）。

「さあ、兄弟たちよ、」とコンスタンティンは続けた。「あなたがたを創造された神の御言葉に耳を傾けてください。これこそが、あなたがたが聖なる洗礼を受けるべき、神の『新約』の福音です。」

このような言葉で、至福のコンスタンティンは異教徒たちを説得し、この樫の木を切り倒して焼き払わせた。その民族の長老がコンスタンティンのところへ歩み寄り、聖なる福音書に口づけをした。他の異教徒たちもこの例に倣った。　その後、哲学者は白い蝋燭を配り、皆は灯した蝋燭を手に、歌いながら樫の木へと向かった。コンスタンティンは斧を手に取り、樫の木を33回打ち、その後、他の者たちが　根元から樫の木を切り倒し、それを焼き払った。その夜、主は激しい雨を降らせられた。 皆は喜びながら、罪人の救いを喜ぶ神を賛美した。 コンスタンティンとメフォディウスは、コンスタンティノープルで使徒たちと同様に大いなる栄誉をもって迎えられた。彼らには司教の位が申し出られたが、二人はそれを受け入れることを拒んだ。メフォディウスはポリクロニオス修道院の修道院長となり、コンスタンティンは聖使徒教会のそばに居を構えた。まもなく、二人は新たな使命に召された。

ブルガリア王ボリス（あるいはボゴリス）は、ギリシャ人との戦争の後、キリスト教への改宗を望んだ。ボリスの姉は、その数年前にコンスタンティノープルで捕虜となっていたが、キリスト教徒としてブルガリアに戻り、弟にも同じ信仰を受け入れるよう説得を試みた。　彼は長い間承諾しなかったが、飢饉と致命的な疫病が彼の国を荒廃させた。そこで彼は姉の助言に従い、キリスト教の神に祈りを捧げると、災いは収まった。ボリスは指導者を招くため、ツァールグラードへ使者を送った。　メフォディオスはブルガリアへの旅に出た。彼は王宮の壁に「最後の審判」を描き、王に義人の至福と罪人の苦しみについて説いた。王は、すでに姉の言葉や行動、そして災いが奇跡的に収まったことに心を動かされており、キリスト教の信仰を受け入れた。これは860年か861年のことだった。[3593]

コンスタンティンとメフォディウスが、ブルガリア人の洗礼という着手した事業を終える間もなく、彼らの使徒的活動のために新たな舞台が開かれた。　モラヴィアの公ロスティスラフは、神の

[3593] ブルガリア全土の洗礼は869年に実施された。

導きにより、自身の諸侯たち[3594] およびモラヴィアの全民と協議を行い、ギリシャの皇帝ミハイルに使者を派遣し、キリスト教の教師を送ってほしいと請うことにした。会議では、次のような言葉を添えて使者を派遣することが決定された。「わが民[3595] は異教を捨て、キリスト教の律法を守っている。　ただ、我々の言語でキリストの信仰を説いてくれる教師が、我々の間にはいない。他の（スラブの）国々も、これを見れば、我々に従いたいと願うだろう。このことを踏まえ、大主教よ、そのような司教であり教師である方を我々のところへお送りください。あなたのもとから、すべての国へと善き律法が広まっているのだから」[3596]。

ミハイル王は公会議を招集し、そこに哲学者コンスタンティンを招いた。王は彼にスラブ人の願いを伝え、こう言った。

「哲学者よ、あなたが体調を崩していることは承知している。しかし、あなた以上にこの任務を遂行できる者はいないのだから、どうしてもそこへ行かなければならない。」

「確かに体は弱く病んでいるが」と哲学者は答えた。「もし彼らが自国語の文字を持っているのなら、喜んでそこへ赴こう。」

「私の祖父も、父も、そして他の多くの人々も――」と王は答えた。「探したが、見つけることはできなかった。ましてや、私がどうやって見つけられるというのか？」

「では、どうやって彼らに説教すればよいのでしょうか？」と哲学者は言った。「それはまるで、水の上に会話を書き留めるようなものです。それに、もしスラブ人が私の言葉を誤解すれば、異端者扱いされる恐れもあります。」

これに対し、王は叔父のヴァルダと共に、哲学者に向かってこう言った。

「もし君が望むなら、神は君の願いを叶えてくださるだろう。なぜなら、神は信仰をもって願う者すべてに与え、理解する者にはその道を解き明かしてくださるからだ。」

コンスタンティンは王のもとを去り、このことを弟のメフォディウスや、一部の弟子たちに語った[3597]。いつもの習慣通り、コンスタンティンはまず祈りを捧げ、その後、40日間の断食を自らに課した。　ほどなくして、御自分のしもべたちの祈りに耳を傾ける神は、コンスタンティンが願ったことを叶えてくださった。彼は38文字からなるスラブ文字を考案し、その後、ギリシャ語の聖書をスラブ語に翻訳する作業に着手した。この作業には、至福のメフォディウスと弟子たちが彼を助けた。聖書の翻訳は、ヨハネによる福音書の第一章から始められた。*「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった」*――これが、スラブ語に翻訳された最初の言葉である。

聖なる兄弟たちは、その翻訳を皇帝、総主教、そして聖職者会議全体に提出した。皇帝は大いに喜び、聖職者会議全員と共に、与えられた恵みに感謝して神を賛美した。

その後、コンスタンティンは弟のメフォディウスや弟子たちと共に、スラブの地へと向かった。　王は彼らに旅に必要なあらゆる物資を十分に与え、ロスティスラフには次のような書簡を送った。「すべての人に真の知恵を与え、至高の尊厳へと昇華することを望まれる神は、あなたの信仰と献身をご覧になり、今、我らの時代にあなたの願いを叶えようと望まれた。　神は、これまで知られていなかった（「知られていなかったが、最初の数年のうちにのみ」）、あなたの言語の文字を明らかにされ、あなたをも、自らの言語で神を賛美する偉大な民族の一員に加えようとされた。そこで我々

3594 この会議には、ロスティスラフの甥であるモラヴィア公（ニトラ）のスヴィャトポルクや、ブラトネ公（パノニア）のコツェルも参加した。

3595 モラヴァには以前、コンスタンティノープルや西方からの宣教師が訪れ、洗礼を授けていたが、キリスト教徒と見なされる者はほとんどいなかった。　その後、ドイツ人の司祭たちがやって来て、次々と人々を洗礼し始めた。これらの司祭たちはラテン語で礼拝を行い、民衆とはドイツ語で話していた。そのため、これらの言語を理解できなかったスラブ人たちは、何のために洗礼を受けているのか分からず、キリスト教の教えも理解できなかった。

3596 この使節団は862年のことである。

3597 コンスタンティンはオリンポスに滞在していた当時、すでに弟子たちを擁しており、彼らと共にスラブ語の学習に取り組んでいた。これらの弟子の中で知られているのは、ゴラズド、クリメント、サヴァ、ナウム、アンゲラールである。

は、神がその文字を明らかにされた人物、すなわち誠実で、信仰深く、学識豊かで、哲学者である男を、あなたのもとへ遣わす。　あらゆる金や銀、宝石、そして儚い富よりもはるかに尊いこの贈り物を受け入れ、彼が速やかにその使命を果たせるよう助けてください。心を尽くして神と全人類の救いを求め、そのために、すべての（臣民）が自らの救いを顧み、真の道を歩むよう促すことを怠らないでください。　そうすれば、あなたもまた、民を神の御心に導くために尽力した報いとして、この世においても来世においても、最期まで私たちの神キリストを信じようとするすべての魂のために報いを受けるでしょう。こうしてあなたは、大公コンスタンティノスと同様に、後世の世代に真の誉れを残すことになるでしょう」。

コンスタンティンとメフォディウスがモラヴィアに到着すると、彼らはそこで大いなる栄誉をもって迎えられた。まず第一に、ロスティスラフは多くの若者たちを集め、聖なる兄弟たちからスラブ文字や新たに翻訳された書物を学ぶよう命じた。　その後、ロスティスラフは聖なる兄弟たちの指導の下、教会の建設を始めた。1年後にはすでにオロモウツの町で最初の教会が完成し、その後、モラヴィアにさらにいくつかの教会が建てられた。コンスタンティンはこれらの教会を奉献し、スラヴ式で礼拝を執り行った。

ここに滞在中、コンスタンティンは弟子たちと共にすべての教会儀式を翻訳し、彼らに早課、時課、ミサ、晩課、夜課、そして「秘儀」を教えた。　そして、預言の言葉通り、耳の聞こえなかった者たちの耳が開かれ、聖書の言葉を聞くようになり、口が不自由な者たちの舌も雄弁になった。たった一人の罪人の救いを喜びとする神は、民全体が改心する様子を喜びをもって見守られた。

スラブ人の間で神の教えが広まり、礼拝が彼らの言語で行われるようになると、最初の、そして執拗な嫉妬者である悪魔は、これを耐えられず、自らの器に入り込み、多くの人々を煽り立て、こう言い始めた。「これでは神は栄光を受けられない。　もし神がこれを喜ばれるのであれば、神の栄光を称えるために、最初から、神の御言葉の説教が、それが宣べ伝えられる民の言語で記されるようにすることもできたはずではないか。しかし、神が選ばれたのは、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語の三つの言語だけであり、これらを用いてこそ、神に栄光を帰するのがふさわしいのだ」。

ラテン系やドイツ系の司教、司祭、そして彼らの弟子たちはこのように語った。コンスタンティヌスは、かつてダビデが異邦人たちと論争したように、彼らと論争を交え、聖書の言葉をもって彼らを打ち負かし、彼らを「三言語主義者」と呼んだ。それは、主の十字架に三つの言語で題名を書いたピラトに似ているからである。

ドイツ人やラテン人の司祭たちは、このことだけでなく、他にも多くの不敬な教えを民衆に説いていた。彼らはこう語った。「地下には多頭の者たちが住んでいる[3598]、すべての爬虫類は悪魔の創造物である。もし誰かが蛇を殺せば、その者には九つの罪が赦される。もし誰かが人を殺したなら、その者は木製の杯から飲むべきであり、ガラス製の杯には触れてはならない」。

彼らは、民が古い慣習に従って異教の生贄を捧げることや、一夫多妻制を禁じることはなかった。

聖なる兄弟たちは、これらの偽りの教えを、雑草のように、言葉の炎で根絶しようと努めた。

「神に捧げよ」――彼らは預言者の言葉をもって非難した――「*賛美を捧げ、至高者へあなたの祈りをささげよ*」（詩篇49:14）。　*「あなたがたの霊を保ちなさい。そして、だれも、若き日の妻に対して不誠実な行いをしてはならない。もし彼女を憎むなら、彼女を去らせなさい*、と万軍の主は*言われる。そうすれば、主はあなたがたの不義な思いをおおってくださる。それゆえ、あなたがたの霊に*気をつけなさい……そして、妻を見捨ててはならない。　もし憎むなら、*主があなたとあなたの若き日の妻との間の証人であったことを*覚えなさい……*彼女はあなたの友であり、あなたの正妻である*」（マラキ書2:15–16, 13–14）。　福音書の中で、主はこう言われている。「*『姦淫してはならない*

[3598] 大きな頭をした人々。

』と、古の人々に言われたことを、あなたがたは聞いた。しかし、わたしはあなたがたに言う。女性を欲情をもって見る者は、すでに 心の中で彼女と姦淫を犯したのである」（マタイ5:27–28）。 *「わたしはあなたがたに言う。姦淫以外の理由で妻と離婚して他の女性と結婚する者は、姦淫を犯している。また、離婚した女性と結婚する者も、姦淫を犯している」*（マタイ19:9）

こうして、聖なる兄弟たちはモラヴィアで40ヶ月間を過ごし、ある場所から別の場所へと移りながら、至る所でスラブ語を用いて民に教えを説いた。スラブ人たちに、母国語による神の言葉という計り知れない贈り物を授けるにあたり、コンスタンティンは聖福音書の序文の中で、彼らにこう語っている。 「すべてのスラブの人々よ、心と精神を強めるこの御言葉を聞きなさい」。スラブの若者たちのために学校を設立し、彼らは多くの弟子たちを育て上げ、彼らは自民族の中で優れた教師となり、ふさわしい聖職者となる準備ができていた。 この目的、すなわち弟子たちを聖職に叙任させるために、聖なる兄弟たちはローマへ赴くことを決意した。さらに、当時在位していた教皇ニコラウス[3599] は、聖コンスタンティンとメフォディウスの布教の成功を知り、彼らを「神の天使たち」としてローマで迎えることを望んでいた[3600] 。

ローマへ向かう途中、聖コンスタンティンとメフォディウスはパノニアに立ち寄った[3601] 。そこにはプリビナの息子であるコツェル公がおり、彼は聖なる兄弟たちをブラトノの町に招き、自ら彼らからスラブ文字を学ぶとともに、その後、公が自国民の中から集めた50人の弟子たちにもそれを教えてもらうことを望んだ。 別れの際、コツェルは聖なる宣教師たちに多大な敬意を表し、豪華な贈り物を差し出した。 しかし、コンスタンティンとメフォディウスは、ロスティスラフ・モラヴィア公からもコツェル公からも、金も銀も、その他のいかなる品物も受け取ることを望まなかった。彼らは報酬を求めずに福音の言葉を説き、両公からただ900人のギリシャ人捕虜の解放だけを懇願した。

パノニアのほか、聖コンスタンティンとメフォディウスはヴェネツィアにも立ち寄った。そこで、ラテン系やドイツ系の司祭や修道士たちは、三言語説という異端を説きながら、カラスがハヤブサに襲いかかるようにコンスタンティンに群がり、こう言った。

「教えてくれ、人間よ」と彼らはコンスタンティンに言った。「なぜあなたはスラブ人たちに聖書を翻訳し、その言語で彼らを教えているのか。かつては誰もそんなことはしなかったではないか。使徒たちも、ローマ教皇も、神学者グレゴリウス[3602] も、ヒエロニムスも、アウグスティヌスも。」[3603] 神を賛美するのにふさわしい言語は、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語の三つだけだと我々は知っている。

哲学者は彼らにこう答えた。

「神からの雨は万人に等しく降り注ぐのではないのか。太陽は万人のために輝いているのではないのか。すべての被造物は同じ空気を吸っているのではないのか。それなのに、なぜあなたがたは、この三つの言語以外のすべての民族や言語が、盲目であり耳が聞こえないはずだと考えることを恥じないのか。」 まさか、神は全能ではなく、それゆえにこれを行うことができない、あるいは嫉妬深くてそうしようとはしない、などとお考えではないでしょう？ しかし、私たちは、独自の聖典を持ち、それぞれの言語で神に栄光を捧げている多くの民族を知っている。その中でも特に知られているのは、アルメニア人、ペルシャ人、アブハズ人、イヴェル人（グルジア人）、スグド人、ゴート人、オブリ人、トルコ人、コザール人、アラヴラン人、エジプト人、シリア人、そしてその他多くの民族である。

[3599] 858年から867年まで在位した。

[3600] 教皇が、ドイツ人やラテン人の司祭たちの唆しによって、聖なる説教者たちをローマに呼び寄せたと推測される。

[3601] 現在のハンガリー。

[3602] 4世紀に生きた東方教会の最も著名な教父――1月25日の彼の伝記を参照

[3603] 西方教会の師。4世紀末から5世紀初頭に生きた。

もしこれに同意したくないのであれば、聖書があなたの裁き手となるでしょう。なぜなら、ダビデはこう叫んでいるからです。*「主に向かって新しい歌を歌え。全地よ、主に向かって歌え！」*（詩篇95:1）、また別の箇所では、*「全地よ、主に向かって叫べ。歌って喜び、歌え」*（詩篇97:4）、さらに、*「全地よ、主を礼拝し、主を賛美し、主の御名を歌え」*（詩篇65:4）、また、*「すべての民よ、主を賛美せよ。すべての部族よ、主を賛美せよ…… 息のあるものはすべて、主を賛美せよ」*（詩篇116:1、150:6）。福音書にはこう記されている。*「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その御名を信じた者には、神の子となる権能を与えられた……」*（（ヨハネ1:12）。*「わたしは、ただ彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも祈ります。父よ、あなたがわたしの中に、わたしがあなたの中にいるように、彼らも皆一つとなりますように」*（ヨハネ17:20–21）。マタイによる福音書にはこう記されています：　*「天と地の一切の権威が、わたしに与えられました。さあ、行って、すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じたすべてのことを守るように教えなさい。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。アーメン」*（マタイ28:18–20）。福音書記者マルコもまたこう言っています：　*「全世界に出て行き、すべての被造物に福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は救われるが、信じない者は裁かれる。信じる者には、次のようなしるしが伴う。すなわち、というわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい舌で語るようになる」*（マルコ16:15–17）。聖書の言葉を借りて、あなた方（ドイツ人およびラテン系の司祭たち）に対してもこう言おう。*「ああ、律法学者たち、パリサイ人たち、偽善者たちよ。あなたがたは人々に天の御国を閉ざしている。あなたがた自身は入らず、入ろうとする者をも妨げているからだ」*（マタイ23:13）。　*「ああ、律法学者たちよ、あなたがたは知恵の鍵を奪い取った。自分たちは入らず、入ろうとする者をも妨げた」*（ルカ11:52）。　使徒パウロはコリントの信徒たちにこう語っている。*「あなたがた全員が異言を語ることができればと願う。しかし、預言するほうがよい」*（Iコリント14:5）、あるいはまた、*「すべての舌が、主イエス・キリストが父なる神の栄光のために来られたことを告白する」*（ピリピ2:11）。

聖コンスタンティンは、このような言葉やその他多くの類似した言葉を用いて、ラテン系およびドイツ系の司祭たちを非難した。

ヴェネツィアから、コンスタンティンとメフォディウスはそのままローマへと向かった。彼らがまだヴェネツィアにいた頃、教皇ニコラウスが死去し、後任としてアドリアン2世が選出された[3604]。新教皇は、コンスタンティンとメフォディウスがヴェネツィアにいることを知ると、彼らをローマに招いた。　聖なる兄弟たちがローマに近づくと、教皇自らが聖職者たちや、ろうそくを灯した市民たちを率いて、聖なる説教者たちを出迎えた。それは、彼らがヘルソネソスで発見された聖殉教者クレメンスとローマ教皇の聖遺物を携えていたからである。　主は、聖遺物の移送を多くの奇跡をもって栄光に輝かせられた。こうして、ある中風を患っていた者が癒やされ、他にも多くの病人がその病から解放された。

教皇はスラブ語の聖書を受け取り、それを聖別して、「ファトニ」（飼い葉桶）と呼ばれる聖母マリア教会に安置し、この聖書を用いて礼拝が行われるようになった。その後、教皇は二人の司教に対し、コンスタンティノスとメフォディオスと共に到着したスラブ人の弟子たちを叙階するよう命じた。　初日の弟子たちの叙階は聖使徒ペトロの教会で行われ、聖体礼儀はスラブ語で唱えられた。翌日は聖ペトロニラの教会で、3日目は聖使徒アンドレイの教会で行われた。 その後、諸国民の偉大な教師である使徒パウロの教会でスラブ語による徹夜祷が捧げられ、朝には聖なる棺の前で聖体礼儀が執り行われた。この礼拝において、前述の二人の司教を補佐したのは、七人の司教の一人であるアルセニウスと、図書館司書のアナスタシウスであった。

[3604] ハドリアヌス2世は867年から872年まで在位した。

コンスタンティンとメフォディウスは弟子たちと共に、あらゆる事柄について絶えず神に栄光を帰し続け、ローマ人たちは彼ら、とりわけコンスタンティンのもとへ絶えず訪れ、あらゆる事について尋ね続けた。　中には二、三度も訪れて教えを受ける者もいた。ある日、あるユダヤ人がコンスタンティンのもとを訪れ、「預言者たちが、処女から生まれると語っているキリストは、まだ来られていない」と言った。コンスタンティンは、アダムからキリストまでの世代数を彼に数え上げ、キリストはすでに来られ、それ以来どれだけの年月が経過したかを証明した。

その直後、それまで体力が弱く、労苦と長い旅路に疲れ果てていたコンスタンティンは重病に倒れ、病床において主は彼に自身の死を告げられた。コンスタンティンは自らの死を知ると、次の教会賛美歌を歌い始めた。

「『主の宮に参り入ろう』と私に告げた者たちよ、わが霊よ、喜びなさい。わが心よ、喜び躍れ」[3605]。

その後、彼は最も立派な服を身にまとい、その一日を喜びに満ちて過ごし、こう語った。

「今より、私は地上の誰のしもべでもなく、ただ全能の神のみに仕える者であり、過去も現在も、そして永遠にそうあり続ける。アーメン。」

翌日、コンスタンティンはスキマ（修道服）を着用することを望み、キリルという名を与えられた。彼の病は50日間続いた。

ある時、病床にあるキリルはメフォディウスにこう語りかけた。「ほら、兄弟よ」と彼は言った。「我々はまるで、一つの畑を耕す仲睦まじい二頭の牛のようだった。そして今、私は轡に倒れ、この世の生涯を終えようとしている。　君がオリンポス山を深く愛していることは知っているが、その山のせいで教えを捨てようなどと考えてはならない。この偉業によってこそ、君は救いに至ることができるのだ」。

安息を迎え、別の人生へと旅立つ時が近づくと、聖キリルは両手を神に向けて上げ、涙ながらにこう祈った。「主よ、わが神よ！　あなたは、無形の天使の軍勢を造り、天を広げ、地を築き、その上に存在するすべてのものを無から有へと導かれた方。常に、あらゆる事において、あなたの御心を行い、あなたを畏れ、あなたの戒めを守る者たちの声に耳を傾けてくださる方。 私の 祈りを聞き入れ、あなたが私という罪深く、ふさわしくないしもべに牧させるように定められた、あなたの忠実な群れを守ってください。この群れを、あらゆる不敬虔と不義、そしてあなたを冒涜するあらゆる多弁な異端の言葉から救い出してください。　三つの言語による異端を滅ぼし、御自身の教会を大いに増し加えください。すべての人を一致のうちに結び合わせ、御自身の真の信仰と正しい告白について、皆が心を一つにさせてください。　彼らの心に御教えの言葉を吹き込んでください。それは御あなたの賜物だからです。もし御あなたが、不適格な私を、御あなたのキリストの福音を宣べ伝えるにふさわしい者とされ、善行をなし、御あなたに喜ばれることをすべて行おうと努める者となさったのなら、御あなたが私に与えてくださったすべてのものを、御あなたのものとして御あなたに捧げさせてください。　御自身の力強い右の手をもって彼らを守り、御自身の御覆いで彼らを包み、すべての者が、父と子と聖霊の御名を永遠に賛美し、栄光を帰しますように。アーメン」。

その後、皆に口づけをして、こう言った。「私たちの神は祝福されます。神は私たちを見えざる敵の獲物とされず、彼らの罠を打ち砕き、私たちを滅びから救い出してくださったからです。」

これらの言葉を残して、聖キリルは869年2月14日、主のもとで息を引き取った。

教皇アドリアンは、ローマに滞在していたすべてのギリシャ人、そしてローマ人にも、葬儀に参列し、灯された蝋燭を手にキリルの棺のそばに立つよう命じ、その送別式については、教皇自身の葬儀で行われるような形式で執り行うよう命じた。　聖メフォディオスは、聖キリルの尊い遺体がローマで埋葬される予定であることを知ると、教皇のもとを訪れ、こう言った。

[3605] アンティフォン、第1声。

「私たちの母は、私たちにこう誓わせました。『もし私たちのうち誰かが先に亡くなったら、もう一方がその兄弟を（オリンポスの）自分の修道院へ運び、そこで葬りなさい』と。」

その後、教皇はキリルの尊い遺体を棺に納め、鉄の釘で打ち固め、旅立ちの準備をするよう命じた。聖遺体は、その状態で七日間安置された。

一方、ローマの司教たちは教皇にこう言った。

「神は、多くの地を巡ったキリルをこの地へ導き、ここでその魂をお召しになったのですから、この地で、敬虔な人として彼を葬るべきです。」

「そうであるならば」と教皇は言った。「私はローマの慣習を変え、キリルの聖性と愛を称えて、聖使徒ペトロの教会にある私の墓に彼を葬ろう。」

すると、聖メフォディウスはこう言った。

「もしあなたがたが私の言葉に従わず、彼を私に渡さないのであれば――あなたがた自身が彼をここに留めておきたいと望んでいるのなら――その場合は、彼を、彼と共にここへやって来た聖クレメンスの教会に安置してください。」

教皇は、聖メフォディウスの言葉通りにするよう命じた。再びすべての司教、修道士、そして民衆が集まり、聖遺物を聖クレメンテ教会へと敬意を込めて送り出した。棺を降ろす前に、司教たちは言った。

「棺を開けて確認しましょう。聖遺物から何かが持ち去られていないか？」

しかし、いくら努力しても、神の御心により棺を開けることはできず、そこで聖遺体は聖クレメンテ教会の祭壇の右側に安置された。　その後、この地では多くの奇跡が起こるようになった。これを見たローマの人々は、聖キリルをますます称え始め、そのイコンを描いて、その前で昼夜を問わず蝋燭を灯し、神を愛する者たちを称える神に賛美を捧げた。

聖キリルの死後、パンノニアの公コツェルから使節団が教皇のもとを訪れ、至福のメフォディオスを彼らのもとへ送り出してくれるよう懇願した。教皇は使節団に次のように答えた。

「彼を、あなた方だけでなく、すべてのスラブ諸民族へと、神と、天の御国の最初の侍者であり鍵の管理者である聖ペトロから遣わされた教師として送り出します。」

聖メフォディオスをスラブ人たちの元へ派遣するにあたり、教皇は彼に、スラブの諸公爵たちへの以下の書簡を託しました。「神の僕である司教アドリアンより、ロスティスラフ、スヴィャトポルク、コツェルへ：*『天には神の栄光、地には平和、人々に神の御心』*（ルカ2:14）。主があなたがたの心を奮い立たせて御自身を求めさせ、信仰だけでなく善行によっても主に仕えるべきであることを示してくださったことを、私たちは喜びをもって知りました。*「行いのない信仰は死んでいる」*（ヤコブ2:26）。それゆえ、神を知っていると思いながら、その律法を履行しようとしない者たちは罪を犯しているのです。　あなたがたは、この聖職者の席だけでなく、敬虔なミハイル王のもとでも指導者を求めた。あなたがたは、彼に、至福の哲学者コンスタンティヌスとその兄弟をあなたがたの元へ派遣するよう求めたのである。　聖なる兄弟たちは、あなたがたの国が使徒座の管轄下にあることを知ると、カノンに反する行為は一切行わず、私たちのところへやって来て、聖クレメンスの聖遺物を携えてきました。　そこで我々は喜び、知性に優れ、正統な信仰を持つ我が子メフォディオスを貴国へ派遣し、彼とその弟子たちを聖職に叙任することを考えました。　彼は、あなたがたが求めているように教えを授け、聖書をあなたがたの　言語に翻訳し、それに基づいて聖なる礼拝（典礼）や洗礼、そして聖哲コンスタンティヌスが神の御加護と聖クリメントの祈りによってその礎を築いたすべての教会儀式を執り行うことができるでしょう。　また、もし他の誰かが、あなたがたが神の戒めをより容易に理解できるよう、聖書をあなたがたの言語に正しく、かつ正統な信仰に基づいて翻訳できるならば、その行いは神、そして私たちと全カトリック教会によって聖なるものとして祝福されるであろう。　ただ一つ、典礼において、まずローマ式で使徒書簡と福音書を読み、その後スラブ語で読むという慣習を守りなさい。そうすることで、聖書の言葉*「すべての民よ、主を賛美せよ」*（詩編

116:1）や、*「他の言語で語り始めた……」（使徒言行録2:4）*という箇所が成就されるためである。神の偉大さを、*「聖霊が彼らに語らせるままに」*（使徒言行録2:4）宣べ伝えるためである。もし誰かが、上記の教師たちを非難し、真理から虚構へと人々を惑わそうとしたり、あるいはあなた方を堕落させて、あなた方の言語で書かれた書物を誹謗したりするならば、その者は破門され、教会の裁きに付され、改心するまでは赦しを受けることはできない。　彼らは羊ではなく狼であり、その実によって見分け、警戒すべきである。愛する子らよ、神の教えに耳を傾け、教会の教えを拒んではならない。そうすれば、あなたがたはすべての聖徒たちと共に、天の父への真の礼拝者となるであろう。アーメン」。

コチェルはメフォディウスを大いなる栄誉をもって迎え入れたが、ほどなくして再び彼を教皇のもとへ送り戻し、それに伴い20人の貴族の男たちも同行させ、教皇に対し、聖メフォディウスをパノニアの聖アンドロニクス（七十人の使徒の一人）の座に司教として叙任するよう請願した。教皇はそのままその通りに行った。

その後、古くからの敵であり真理の敵対者である者が、モラヴィアの公[3606]　や、この地方のドイツ系およびラテン系の司教たちを動員して、メフォディウスに立ち向かった。聖メフォディウスは評議会に招かれ、そこで次のような質問を突きつけられた。

「なぜ、あなたは私たちの領土で教えているのですか？」

「もしこれがあなた方の領地だと知っていたなら――」と聖メフォディウスは答えた――「私はここで教えはしなかったでしょう。しかし、この地は聖使徒ペトロに属しているのです。」　もしあなたがたが、争いや強奪のために規則に背き、神の教えを説くことを禁じるのであれば、鉄の山を頭蓋骨で突き破ろうとする時、自らの頭を打ち砕かないよう気をつけなさい。

「怒りを込めて話すとは、」と司教たちは答えた。「あなた自身が災いを招いているのだ。」

「私は王たちの前であっても、真実を語ることを恥じません」と聖メフォディオスは答えた。「私に対しては、あなたがたが望むように振る舞えばよい。私は、この世で真理のために多くの苦難に耐えてきた人々より優れているわけではないのです。」

この集まりでは多くの演説がなされたが、メフォディウスに反対する言葉を口にすることは、彼の敵たちにはできなかった。すると、公爵は嘲笑を込めて言った。

「わがメフォディオを疲れさせないでくれ。まるで熱い炉のそばにいるかのように、彼は汗をかいているではないか。」

「はい、殿下」とメフォディウスは答えた。「ある時、汗をかいている哲学者に出くわし、人々が『なぜ汗をかいているのですか』と尋ねたところ、『無礼な使用人たちと議論していたからだ』と、その哲学者は答えたのです。」

司教たちはメフォディウスについて多くの議論を交わした。ついに彼はシュヴァーベンへ追放され、そこで二年半にわたり牢獄に閉じ込められた[3607]。

聖メフォディオスの投獄の知らせが教皇の耳に入った。これを知った、アドリアヌス2世の後継者である教皇ヨハネス8世は、ドイツの司教たちに対して破門の宣告を下し、メフォディオスを解放するまでは彼らに典礼を執り行うことを禁じた。　そこで司教たちはメフォディウスを解放したが

3606　この頃、聖なる兄弟たちを助けていたロスティスラフが監禁中に亡くなり、その後を継いだのは彼の甥であるスヴィャトポルクであった。彼は統治初期、ドイツ皇帝と親密な関係にあった。

3607　シュヴァーベン地方はドイツにある。――牢獄の中で、ドイツ人たちは聖メフォディウスをあらゆる手段で虐待した。数日間も食事を与えず、冬には彼を裸足で、頭も覆わずに牢屋の中庭へ連れ出し、雪の上に立たせ、一か所に一日中、あるいはそれ以上も立ち続けさせた。　彼らは聖メフォディウスを鞭で打つことさえありました。しかし、主は聖人を守り、強めてくださいました。聖人にとって大きな慰めとなったのは、牢獄に頻繁に面会に来てくれた弟子たちでした。

、パノニアの公コツェルに対し、「もしあなたがメフォディウスを引き取るなら、我々を味方だとは思わないでほしい」と告げた[3608]。

しかし、これらの司教たち自身も、神の裁きと使徒ペトロの裁きを免れることはできなかった。そのうち4人はまもなく亡くなった。

一方、この頃モラヴィアでは、スラブ人とドイツ人司祭たちの間に不和が生じた。　モラヴィアの人々は、自分たちの地に住むドイツ人司祭たちがスラブ人の敵であり、彼らをドイツ人に売り渡そうとしていることに気づいた。彼らは　彼らを追放し、教皇に次のような嘆願を送った。「かつて私たちの先祖が聖ペトロから洗礼を受けたように、今、私たちにも大司教であり教師であるメフォディウスを送ってください」。

教皇は直ちに聖メフォディオスをモラヴィアへ派遣した。そこでは、すでにドイツ人とは決別していたスヴィャトポルク公とモラヴィアの人々が彼を迎え入れ、すべてのスラブの都市にある教会と聖職者たちの管理を彼に委ねた。聖メフォディオスは、追放されたドイツ人司祭たちの代わりに、スラブ人の司祭たちを任命した。　聖メフォディウスと司祭たちがスラヴ語で礼拝を執り行い、民衆を教えたため、神の教えは急速に広まっていった。多くの異教徒が自らの迷いを捨て、真の神を信じるようになった[3609]。この頃、モラヴィア王国はかつてないほど強大になっていた[3610]。

聖メフォディウスは預言の賜物を持っていた。彼の多くの予言は的中したが、その中からいくつか挙げてみよう。

ヴィスワ川沿いに住むある異教の公爵が、キリスト教徒を罵り、彼らに苦難を与えていた。聖メフォディウスは彼のもとへ使いを送り、こう告げさせた。「息子よ、他国の地で捕虜として無理やり洗礼を受けるよりは、自らの意志で、自らの地で洗礼を受けるほうがよい」。

そして、まさにその通りになった。

ある時、スヴィャトポルクは異教徒たちと戦っていたが、戦いは長引いていた。聖使徒ペトロの記念日が近づいていたため、聖メフォディウスはスヴィャトポルクに次のように伝えた。「ペトロの日に、あなたの軍勢を率いて私の元に来ると約束してくれるなら、神がまもなく異教徒たちをあなたの手に渡してくださると信じている」。

そして、その通りになった。

ある金持ちが、自分の嫁と結婚してしまった。聖メフォディウスは彼に多くの教えを与え、諭したが、二人を離婚させることはできなかった。一方、他の人々は、その富ゆえに二人を諂っていた。そこでメフォディウスはその金持ちにこう言った。「やがて、諂う者たちがあなた方を助けることができなくなり、あなたは私の言葉を思い出すだろう。しかし、その時にはもう手遅れになっているだろう」。

すると突然、神の御心により、この金持ちたちに、安らぎの場所さえ見つけられないほどの病が襲いかかった。彼らはその状態で息を引き取った。

人類の古くからの敵であり、嫉妬深い者は、かつてダファンとアビロンがモーセに対してそうであったように（民数記16章）、メフォディウスに対して、公然たる敵も隠れた敵も再び立ち上がら

[3608] 明らかに、コツェルも聖メフォディオスの解放に関与していた。

[3609] そこで、チェコの公ボリヴォイは、スヴィャトポルクのもとに使者を送り、チェコの公が洗礼を受けたいと望んでおり、司祭を要請していると伝えた。スヴィャトポルクはチェコの使者たちにこう言った。「メフォディウス司教に尋ねてみよ。彼に司祭を二、三人選んでもらい、あなたたちと共にあなたの公のもとへ送り出させよ」。　聖メフォディウスは自らチェヒアへ赴き、ボリヴォイとその妻リュドミラ、そして二人の息子たちに洗礼を授けた。聖メフォディウスはチェヒアに約1年間滞在し、チェヒアで最初の2つの教会――一つはリトミシュル、もう一つはレヴォ・グラツ――を奉献した。　その後、メフォディウスはチェコに数人のスラブ人司祭を残し、モラヴィアへ戻った。聖メフォディウスは司祭たちをポーランドへ派遣し、そこで彼らは王や多くのポーランド人を洗礼した。

[3610] それはヴェレグラードの戦いの後のことであり、スヴィャトポルクがドイツ軍を打ち破り、ほぼすべてのスラブ人を統一した時期であった。

せた。　その頃、聖霊は御子からも発する、と教える異端者たちが現れた。これらの異端者たちは、正信者たちを真の道から迷わせ、彼らの不敬虔な教えを糾弾した聖メフォディウスについて、「教皇が我々に権威を与え、メフォディウスとその教えを追い出すよう命じた」と語った。

モラヴィアの人々は皆集まり、メフォディウスが追放されたとされるその書簡を、民衆全員の前で読み上げるよう命じた。民衆は、そのような牧者であり教師を失うことに深く悲しんだ。ただし、お世辞に風が葉を揺らすように翻弄される者たちは例外であった。　その教皇の書簡には、次のように記されていた。「わが兄弟メフォディウスは正統であり、使徒的奉仕を全うしている。使徒の座からは、すべてのスラブ諸国が彼に従属しており、彼が呪う者は呪われ、彼が聖別する者は聖なる者となる[3611]」。

その後、メフォディウスの敵たちは皆、恥じ入って散っていった。しかし、聖メフォディウスの敵たちの悪意はこれで終わらなかった。聖人を苛立たせようと、彼らは「ギリシャの王が彼に怒っており、もしメフォディウスが王の支配下にあったなら、彼は生きてはいられないだろう」と語った。　しかし、慈悲深い神は、御自分のしもべがこのように中傷されることを望まれず、王の心に――王の心は常に神の御手の中にあるのだから――聖メフォディオスに次のようなメッセージを送るよう促された。「敬虔なる父よ、私はあなたに会いたいと切に願っている。　善行をなし、我々のところへ来てくださるよう努めていただきたい。あなたが生きているうちにあなたにお会いし、あなたから祝福を受けたいのだ。[3612]」。

聖メフォディウスはコンスタンティノープルへと向かい、そこで王と総主教から大いなる栄誉と喜びをもって迎えられた。王は彼の教えを称賛し、聖メフォディウスの弟子である司祭と助祭の二

[3611] この頃までに、情勢は一変していた。前述の異端に染まっていた者も多いドイツ人司祭たちが、再びモラヴィアに現れ、スヴィャトポルクを自分たちの側に引き込もうとし始めた。　スヴィャトポルクは洗礼を受けてはいたものの、キリスト教徒らしい生活を送っていなかった。ワインを大量に飲み、多くの妻を持ち、怒り狂うと自制できなくなっていた。メフォディウスはあらゆる手段を尽くして公にその悪癖を改めるよう説得し、二人きりの時にも、人々の前でも彼を非難したが、何の効果もなかった。　やがて、ドイツ人司祭たちがスヴィャトポルクの元を訪れるようになると、彼らはメフォディウスについてこう語り始めた。「公よ、なぜあの老人の言うことを聞くのですか。ご覧の通り、彼は他の人々とは違っています。すべてを人々に分け与え、乞食のように暮らしているではありませんか。公よ、あなたは自らの領地の支配者なのです」。　こうしたお世辞めいた言葉を数多く用いて、ドイツ人司祭たちはスヴィャトポルクと聖メフォディウスの関係を完全に決裂させた。そこで彼らは、メフォディウスを異端であると告発し、とりわけスラブ式の礼拝を根絶しようと企みながら、教皇ヨハネスにメフォディウスを訴え始めた。　教皇ヨハネスは、当時サラセン人に対する支援をドイツ王から得たいと考えていたため、ドイツ人司祭たちの味方につき、モラヴィアへ次のような書簡を送った。そこにはスラブ式の礼拝が禁止され、説教においてのみスラブ語の使用が許されるという内容だった。メフォディウスはこの書簡を読み、こう言った。「さて、これからどうなるのか？　人々は教会に来て、何も理解できないまま立ち尽くすことになるだろう。そして、キリストの教えを忘れ、モラヴィアに異教の慣習が復活してしまう。いや、私はラテン語で礼拝を行うつもりはない。それは人々に害を及ぼすだけだ」と述べた。　ドイツ人司祭たちがこのことを教皇に報告すると、教皇はメフォディウスをローマへ召喚した。聖メフォディウスはローマに到着し、教皇は彼に対して裁判を開いた。この頃、教皇はサラセン人との戦争において、ギリシャ王ヴァシレイオス・マケドニアスから支援を受けていたため、メフォディウスの味方についた。　この裁判で聖メフォディウスは無罪となり、スラブ諸国の大司教の地位に復帰し、スラブ語で礼拝を行う許可を得た。しかし、スヴィャトポルクを侮辱することを望まなかった教皇は、彼に次のような書簡を送った。「公よ、もしスラヴ語のミサが気に入らないのであれば、宮殿でドイツ人司祭によるラテン語のミサを聞くこともできるだろう」。メフォディオスと共に、その補佐役として、ドイツ王の寵臣であり、スラヴ人の宿敵であるヴァイキングの司祭がモラヴィアへと向かった。　このヴィキングこそが、聖メフォディウスの最大の敵となった。ドイツ人司祭たちはスヴィャトポルクに、メフォディウスが持ち込んだのは本物の教書ではなく、別の教書があり、それに基づいてメフォディウスを追放し、ヴィキングを大司教に据えるべきだと吹き込み始めた。　そこで聖メフォディウスは教皇ヨハネスに次のような手紙を書いた。「父よ、あなたが大司教に任命したのは、私か、それともヴィキングか？」この手紙に対し、教皇は前述の使者を派遣した。

[3612] この頃、皇帝はヴァシレイオス・マケドニアスであった。

人を、スラブ語の書物と共に自分の元に残し、メフォディウス自身には多額の贈り物を与えてモラヴィアへ帰した。

聖メフォディウスは多くの苦難に遭遇しました。砂漠では強盗に、海では激しい波に、川では突然の渦に襲われ、それゆえ、彼には使徒の言葉が成就したのです。*「川での災い、強盗による災い……海での災い、異教徒による災い； 労苦と疲労の中、しばしば断食、飢え、渇きの中で」*（IIコリント11:26–27）。その後、聖メフォディオスはすべての心配事を捨て、すべての悲しみを神に委ね、二人の弟子である司祭たちと共に、兄である至福のコンスタンティノスと共に翻訳しきれなかった書物の翻訳に取り掛かった。 彼らと共に、彼はマカバイ記を除く旧約聖書全体を翻訳し終えることに成功したほか、『ノモカノン』（聖なる教父たちの規則）や教父の書（パテリク）も翻訳した。 聖メフォディオスは3月に翻訳を開始し、10月26日に完了した。翻訳を終えると、聖メフォディオスは、翻訳を完了した日が記念日であり、テッサロニキ出身者として特に崇敬していた聖ディミトリオス・テッサロニキスに、神と聖ディミトリオス・テッサロニキスにふさわしい賛美と栄光を捧げた。

その頃、ドナウ川流域に滞在していたハンガリー王が、聖メフォディオスに謁見したいと望んだ。多くの人々は、拷問を受けることを恐れて、メフォディオスに王のもとへ行くべきではないと説得したが、聖メフォディオスは王のもとへ向かった。 ハンガリーの王は、王にふさわしい礼遇をもってメフォディオスを迎え、彼と対談し、多額の贈り物を与えて送り出した。別れの際、王は聖人にこう言った。「敬愛する父よ、あなたの聖なる祈りの中で、常に私を覚えていてください」。

このように、聖メフォディウスは自らの羊の群れを慈しみ、あらゆる国でキリストに忠実な信徒を探し求め、悪意に満ちた言葉を封じ込めた。彼は使徒と共にこう言うことができた。*「私は戦いを全うし、信仰を守り抜いた。今や、義の冠が私を待っている」*（IIテモテ4:7,8）。

そして、聖メフォディオスが苦しみから解放され、多くの労苦に対する報いを受ける時が近づくと、人々は彼にこう尋ねた。

「敬愛すべき父であり師であるあなたよ、弟子たちの中から誰を後継者として指名なさいますか？」

聖人は、弟子の一人であるゴラズドを指差し、こう言いました。

「ほら、この人はあなたがたの地の者であり、正統な信仰を持ち、ラテン語の書物に精通している。もし神の御心とあなたがたの愛がそう望むならば、私は彼が私の後継者となることを願う。」

花週間のある日、聖メフォディオスは教会に来たが、衰弱のため礼拝を執り行うことができず、ただギリシャの王、スラブの諸侯、聖職者たち、そして民衆全員のために祈りを捧げ、こう言った。

「子供たちよ、三日目まで私のことを見守ってくれ。」

そして実際、三日目の夜明けに、聖メフォディウスは「主よ、私の霊を御手に委ねます」という言葉と共に、司祭の手の上で主のもとへ召された。それは885年4月6日のことだった。

葬儀はラテン語、ギリシャ語、スラブ語で行われ、遺体はヴェレグラードの大聖堂に安置された。葬儀には数え切れないほどの人々が集まった。そこには、男女、老若、貧富、自由人と奴隷、未亡人と孤児、旅人と地元の人々、病人と健常者がいた。 皆、涙を流しながら、すべての人にとって「すべて」であったこの善良な教師であり牧者を見送った。「すべての人を救い給え」。

聖なる、高潔な指導者よ！ 天において、祈りの中で、あなたを呼び求める私たちをも覚えてください。そして、キリストの教えを広め、異端を糾弾するあなたの弟子たちを、あらゆる災いから救い出してください。そうして、この世でその名にふさわしい生き方を全うし、あなたと共に、あなたの群れを率いて、私たちの神キリストの右の座に立ち、彼から永遠の命を受けられるように。 まことに、御方にこそ、世々限りなく栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

使徒に等しい者であり、スラブ諸国の教師である、神に賢明なキリルとメフォディよ、万物の主なる神に祈り、すべてのスラブ語を正教と一致の信仰に堅く立て、世を和解させ、我らの魂を救い給わんことを。

コンダク、第3調：

私たちの啓蒙者である聖なる二人組を称えましょう。神の御言葉の解釈を通じて、私たちに神を知る源を注いでくださったお二人を。その源から今日に至るまで尽きることなく汲み取りながら、私たちはあなた方を賛美します、キリルとメフォディエよ。至高者の御座の御前に立ち、私たちの魂のために熱心に祈り続けてくださるお二人を。

5月25日

5月12日（旧暦）

私たちの聖なる父、コンスタンティノープル大司教ゲルマノスの生涯。

記念日5月12日

聖ヘルマンはコンスタンティノープルで生まれた。父のユスティンは、パトリキウスという高貴な身分にあり、他の誰よりも名声と名誉に優れた、最も高位の元老院議員の一人であった。しかし、コンスタンティノス・ポゴナトス[3613]がギリシャの王位に就いた際、嫉妬から彼を殺害した。この高貴な上院議員が殺害された後、コンスタンティノスは、当時まだ少年であったその息子、福者ヘルマンを去勢させ、教会の聖職者にさせるよう命じた。これは、ヘルマンが成人し、世俗で高い地位や元老院議員の称号を得たとしても、父の殺害についてポゴナト家に対して何らかの形で復讐できないようにするためであった。このようにして聖職に就いた福者ヘルマンは、神の天使のように生きた。世俗への執着や世俗の虚栄から遠く離れ、その心をすべて神に向け、常に口に主への賛美を捧げ、昼夜を問わず熱心に聖書の研究に励んだ。そこから彼は、知恵の深遠さを悟り、神の霊感を受けた教えという命の水を汲み上げ、牧者および教師としての職務において、キリストの教会にその水を注ぎ与えた。聖ヘルマンが成人すると、その徳高い生活によって灯火のように輝いていた彼は、まずキジケスの都市の司教に叙階された[3614]。ここで彼は、モノフェリテ派の異端[3615]に対し、至聖な

[3613] コンスタンティノス・ポゴナトスは668年から686年まで統治した。

[3614] キジクは、小アジアのフリギア地方にある都市である。

[3615] *モノフェリテス派*、すなわち単意論の異端は、7世紀初頭、ビザンツの統治者たちが、キリスト教と、広く*普及していた*モノフィシテス派の異端とを和解させようとした動きの影響を受けて生じた。主イエス・キリストには*唯一*の神性のみが存在すると説いていた。というのも、正統派とモノフィジット派との間の対立は、教会上の問題にとどまらず、国家的な災いとなっていたからである。モノフィシテ派の司教たち、とりわけコルキスのファシス司教キルスは、正教会がイエス・キリストにおいて唯一の意志、唯一の作用を認めるならば、彼らと正教会との和解が可能になるという考えを、皇帝ヘラクレイオス（611年～641年）に提言した。633年、皇帝とアレクサンドリア総主教に任命されたキルスの尽力により、エジプトのモノフェリテ派と正統派との間の統一が実現した。この統一には、コンスタンティノープル総主教セルギオスを筆頭とする、ほぼすべての東方およびギリシャの司教たちが加わった。このような違法な合意に対して、アレクサンドリア総主教ヨハネス・ミロスティヴォスの愛弟子である修道士ソフロニオスが公然と反対し、単一意志の教義も

るキルス総主教[3616] と共に闘い、そのキルス総主教と共に、不信仰な王フィリッピ[3617] によって追放された。　迫害者である王が間もなく不名誉な最期を遂げ、流刑の地で亡くなったキルス総主教の死後、異端者ヨハネという偽総主教が廃位され、アナスタシオス2世と称されるアルテミオスの治世下において、民衆の歓喜の中、聖ヘルマンがコンスタンティノープルの王座に就いた。　彼は立派な人物であり、さらに神の恵みに満ちており、そのことは、彼が未来を見通し、預言的にそれを告げていたことにも表れていた。　ある時、彼が司牧の初日として聖ソフィア大聖堂に厳かに参入した際、新たに選出された総主教を一目見ようと集まった民衆に囲まれていると、アンナという名の妊婦が近づき、こう言った。

「父よ、私の胎内に宿った子を祝福してください。」

総主教は彼女を見つめ、内なる目で未来を見通して、こう言った。

「主が、聖なる第一殉教者の祈りによって、あなたを祝福されますように。」

この言葉によって、彼は、聖なる第一殉教者ステファノと同じ名を持つ男児が生まれることを予言した。そして、この予言を奇跡によって裏付けた。　ヘルマンが語っている間、彼の口からは言葉とともに炎が噴き出し、それを女は目撃した。彼女は後に皆に誓いを立ててそのことを証言し、それが彼女を聖人の預言を固く信じるようにさせた。そして実際、アンナは男児を出産し、至聖なる総主教ヘルマンの預言に従って、その子をステファノと名付けた。　このステファノスは、成長して修道者の衣をまとい、アウクセンティエフ山で敬虔に修行に励み、その後、キリストの御名のために殉教者となり、邪悪な皇帝コンスタンティノス・コプロニモス[3618] によって、聖なるイコンを守るために殉教した。このコプロニム（ギリシャ皇帝レウ・イサウリアノスの息子[3619] ）については、聖ヘルマンによる預言もあり、彼が正信者たちに対する獰猛な迫害者かつ拷問者となるだろうとされていた。　聖なるゲルマン総主教によって執り行われた洗礼の際、コンスタンティンは聖なる洗礼盤を排泄物で穢した。その時、聖ゲルマンは洗礼を受ける者についてこう述べた。

またモノフェリテ主義、すなわちキリスト・イエスにおいて唯一の（神性）の本性のみを認めるものであると論じた。なぜなら、本性が一つであるならば、当然、意志も一つであるからである。 634年にエルサレム総主教に就任すると、彼はさらに熱心に正教を擁護した。彼はエルサレムで公会議を招集し、そこでモノフェリテ主義を非難した。　争いに終止符を打とうとした皇帝ヘラクレイオスは、638年に、セルギオス総主教が起草した「信仰宣言」（エクテシス）を公布した。そこには、キリスト・イエスにおける二つの本性に関する正統的な教義が盛り込まれ、キリストの「意志」について語ることは禁じられていたが、同時に、正統信仰においては一つの意志を認めることが求められるとも付け加えられていた。　「信仰宣言」の公布後、正統信仰の熱烈な擁護者として名乗りを上げたのが、コンスタンティノープルの修道士マクシムス・コンフェッサー（記念日は1月21日）であり、彼は北アフリカやローマにおいてモノフェリテ派に対して効果的に活動した。　ヘラクレイオスの後継者コンスタンス2世は、さらに分裂を煽った『エクテシス』を廃絶しようと、648年に「ティポス」――信仰の規範――を公布した。そこでは、一つの意志についても二つの意志についても語ることを禁じ、過去の五つの公会議に従って信じるよう強制した。しかし、「ティポス」は論争に終止符を打つことはできなかった。ついにコンスタンティノス・ポゴナトス皇帝はコンスタンティノープルで第6回（トルルス）公会議を招集し、そこでモノフェリテ主義は異端として非難され、キリスト・イエスにおいては二つの働き、二つの意志を告白すべきであり、その際、人間の意志はあらゆる点で神の意志に従属するが、それによって消滅することはない、と定められた。– モノフェリテ派の残党は、現在に至るまでマロン派として存続している。彼らは当初（680年から）、レバノンの山岳地帯に避難先を見出した。　十字軍時代（1182年）に、モノフェリテ派の教義は西方のヨーロッパにも浸透したが、教皇たちの働きかけにより多くの信奉者を獲得することはなかった。とはいえ、1736年にユダヤ系のモノフェリテ派がカトリック教会に加わるまで存続していた。東方では、シリアにおいて現在に至るまで存続している。

[3616] 聖キルスは705年から711年までコンスタンティノープルの総主教の座に就いていた。714年、流刑の地で死去した。

[3617] フィリッピ・バルディン、ビザンツ皇帝（711年～715年）。

[3618] コンスタンティノス・コプロニモスは741年から776年まで統治した。

[3619] レウ・イサウルスは716年から741年まで統治した。

「この子は、成長すれば、キリスト教徒と教会全体に大きな災いをもたらすだろう。教会の聖なるものを異端によって穢し、キリストの忠実な僕たちの血を多く流すことになる。」

コンスタンティンはその後、「コプロニム」と呼ばれるようになった。これは「糞」を意味する[3620] である。聖ヘルマンの予言はまさに的中した。コプロニムは、尊いイコンを崇拝した多くの人々を拷問で殺害したが、その中には前述のステファノスも含まれていた。

聖像破壊の異端は、コプロニムの父であるレウ・イサウリアヌスの治世に始まった。この異端に深く染まっていたレウ・イサウリアヌスは、それを可能な限り強固にし、民衆の間に広めようと努めた。　彼は、自国のすべての州に邪悪な勅令を下し、至る所で聖なるイコンを教会から投げ捨て、足で踏みつけ、焼き払うよう命じた。というのも、彼は聖なるイコンを偶像と見なし、それらを崇拝する者たちを偶像崇拝者とみなしていたからである。

聖なる総主教ゲルマンは、異端者である皇帝に勇敢に立ち向かった。彼は度々、聖職者の中から分別があり誠実な人物を皇帝のもとへ遣わし、また自らも訪れて、その邪悪な企みを断念するよう説得したが、聖ゲルマンの諭しは全く実を結ばなかった。

ある日、総主教は皇帝にこう言いました。

「ある聖なる人物の預言を耳にしました。いつの日か、不信心者たちによる聖なるイコンへの迫害が訪れるでしょうが、どうかそれがあなたの治世の間に起こることのないように。」

「では、いつ、誰の治世にそれが起こるというのか」と、皇帝は注意深く尋ねた。

「コノンという名の皇帝が、聖なるイコンに対する迫害を起こすでしょう」と聖ヘルマンは言った。

「私の名はコノンです」と、レフ・イサヴリアニンは答えた。「それは洗礼の際に与えられた名であり、『レフ』という呼び名はその後、付けられたものです。

それゆえ、この預言は私の治世の間に必ず成就するはずだ」。

「いいえ、陛下」と、聖ヘルマンは王に反論した。「そのようなことがあってはなりません。あなたの治世において、そのような悪が成されることなどあってはなりません。なぜなら、この悪意を引き起こそうとする者は、反キリスト、すなわち神の受肉に対する敵だからです。　王よ、この際、あなたが王位に就く前に、聖なる使徒たちや神に導かれた教父たちの伝承を何も破壊せず、キリスト教の信仰に反する新しいものを何も持ち込まず、聖なる信仰を汚れなく守るという誓いを立てたことも思い出してください。

王は、至聖なる総主教のこうした言葉を耳にすると、時には恥じ入り、時には激怒し、総主教を真理の殉教者としてではなく、反逆者としてその座から追放するための告発材料を見つけ出そうと努めた。　彼は、その邪悪な企みの共犯者として、ヘルマヌスの弟子であるある長老アナスタシウスを見出した。ユダのような気質のこのアナスタシウスに対し、皇帝はヘルマヌスが追放された後に総主教の座を与えると約束し、その見返りとして、アナスタシウスは異端を確立し、聖なるイコンを破壊する上で皇帝を助けることを約束した。　そのため、アナスタシウスは聖ヘルマンの執拗な敵となり、聖ヘルマンが追放される前から、総主教の座を奪おうと画策した。聖ヘルマンは、霊によって彼の邪悪な企みと将来の運命を見抜き、次のような状況下でアナスタシウスにその運命を予言した。

ある日、総主教ヘルマンが皇帝の御座所に入ろうとした。誇らしげに彼の後を歩いていたアナスタシウスは、後ろから彼の衣の裾を踏んでしまった。「急ぐな」と、その時ヘルマンはアナスタシウスに言った。「やがて、大衆の群れに囲まれ、叫び声を上げられながら、ディッピンへと連行される時が来るだろう」[3621] 。

[3620] コプロニムは、ギリシャ語の「コプロス」（糞、排泄物）に由来する。

[3621] コンスタンティノープルでは、「ディッピン」とは、通常、様々な興行が行われていた民衆の集まる場所を指していた。

しかし当時、アナスタシウスも、その言葉を耳にした他の人々も、聖ヘルマンのこの言葉に注意を払わなかった。彼らがこれを思い出したのは、その言葉が現実のものとなった後になってからであり、それについては後述する。

聖ヘルマンは、キリストの良き戦士として、恐れを知らず、勇敢に、神の言葉という剣をもって異端者たちと戦った。彼は、最も優れた聖職者の一人を皇帝のもとへ遣わし、次のように告げさせた。

「王よ、あなたに命と王位を与えた、あなたの創造主である神の前で、無分別に高ぶることはふさわしくありません。また、言われる通り、動かないものを動かす権利などあなたにはありません。古の時代に聖なる先人たちが定めた境界線を越えることは、あなたにとって相応しくありません。」　何しろ、神の御言葉が至聖なる聖母マリアから受胎された人間の姿によって、悪魔への奉仕は根絶され、偶像崇拝は滅ぼされたのである。　板に絵の具で描かれた、キリストの人間の姿と、言葉では言い表せないほど聖なる御母の姿、そして神の聖なる御使いたちの像は、725年前、私たちの主が人間の姿でこの地上に現れた時から、私たちに崇敬するよう伝えられてきたのである。　主の昇天後、主の衣の端に触れて出血の病を癒やされた女性（マルコ5:25–34）は、この　への感謝の印として、救い主の像を描きました。　しかし、それ以前にも、主ご自身がご自身の神聖な御顔を布（スカーフ）に描き、それをエデスのアヴガル王のもとへ送られました。　聖福音記者ルカは、至聖なる聖母マリアの像を描きました。それゆえ、様々な時代や場所で開かれた神聖な公会議は、聖なるイコンを破壊するのではなく、崇敬するよう命じたのです。それゆえ、王よ、もしあなたがこのイコン破壊の教義を確立するのを助けるならば、私が真っ先にそれに反対するでしょう。　私は、堕落した私の魂の姿を刷新するために御自身の血を流された、私のキリストの御像のために、喜んで血を流す覚悟である。　キリストの像に加えられる冒涜は、原型、すなわちキリストご自身にも及ぶことは明らかであり、同様に、像に対して捧げられる敬意もまた、キリストご自身に帰されるのである。それゆえ、私たちキリストの忠実な僕たちには、主を崇敬するために死ぬことがふさわしいのである。

また別の機会には、聖ヘルマン自身が王にこう語った。

「もし私がヨナであるならば、私を海に投げ込んでください。なぜなら、私は全地公会議なしには、教義に関して新たなことを制定する権利を持たないからです。」

やがて、聖なる総主教は、王を異端から引き離すために自分には何もできないと悟ると、神聖な祭壇の聖座に自身のオモフォルを置き、その聖職を辞した。　王は、聖ヘルマンのその大胆不敵な言葉に激しく怒り、まるで戦場へ送り出すかのように武装した兵士たちを派遣した。兵士たちは聖人を殴打し、不名誉な形で彼を総主教の邸宅から追放した。　聖ヘルマンはその後、修道院に退き、そこで修道士たちと共に残りの生涯を沈黙の中で過ごし、安らかに主のもとで息を引き取った。彼は14年6ヶ月間、総主教を務めた[3622]。

[3622] 聖ヘルマンは740年に96歳で死去し、コンスタンティノープルの北側にあるホレ修道院に埋葬された。聖ヘルマンは教会作家として知られており、「その著作は全宇宙で称賛されている」と、彼を聖人ディプティクに載せた第7全地公会議が証言している。　聖ヘルマンの著作は、その構成において多岐にわたる。彼の遺した著作には、聖書の最も難解な箇所の解説、死後の義なる報いに関する論考などがある。また、7つの主日 の祝日に、聖像崇敬に関する彼の三通の手紙が朗読され、また「聖ヘルマンの古代の伝記作家が言うように、『敬虔な者たちへの教訓となる言葉』がかなり多く」残されている――聖母マリアの神殿奉献、聖母の被昇天、受胎告知、神殿の改修、および至聖なる聖母マリアの帯の安置に関する説教である。　使徒たちの時代からの異端や、イコノボレツ・レオの治世下の教会公会議について記した著作は、その歴史的情報の豊富さにおいて重要である。　聖ヘルマンは、礼拝に関連する多くの著作を残した。その中でも特に重要なのは、聖体礼儀に関する解説である。この種の他の著作は、聖人を称え、恵みの奇跡を讃えるために総主教によって作曲された賛美歌である。

至聖なる総主教ヘルマンが追放された後、皇帝は前述のアナスタシオス司教を後任に任命した[3623]。彼は皇帝と共謀して、教会から聖なるイコンを排除し、偶像排斥の異端を是認した。聖ヘルマンによる彼に関する預言は、次のようにして成就した。

不義のレウ・イサウリア人が死去すると、その王位を息子のコンスタンティノス・コプロニモスが継いだが、彼はレウの娘婿であるアルタバスドによって王座から追放された。この際、アルタバスドを助けたのが総主教アナスタシオスであり、彼こそがアルタバスドとその息子ニキフォロスを王位に即位させたのである。 3年が経過すると、コプロニムは大軍を率いてコンスタンティノープルを攻略した。コンスタンティノスは、義理の兄弟であるアルタバスドとその息子たち、すなわち自分の甥たちの両目をえぐり出し、アルタバスドの支持者である多くの貴族を殺害した。 また、コンスタンティノスは、アナスタシオス総主教に対し、「ディッピン」と呼ばれる場所で、民衆の面前で服を脱がせ、鞭打つよう命じた。その後、ロバに後ろ向きに乗せ、侮辱しながら街中を引き回した。こうして、アナスタシオスに対し、「大勢の民衆が集まる中でディッピンへと引き回される」と予言していた聖ヘルマノスの予言が成就したのである。 不敬虔な皇帝コプロニムスは、アナスタシオスを総主教の座から追放さえしようとしたが、聖なるイコンを冒涜することにアナスタシオス以上に熱心な人物を見つけられなかったため、彼を総主教の座に留まらせた。そこで彼は、聖なる場所における荒廃の憎むべきもの（マタイ24:15）として、24年間その座に留まった。 生涯の終わりに、彼は「コルダスポス」と呼ばれる病に襲われ、聖なるイコンや自身の師を冒涜した神に忌み嫌われるその口は、彼にとって不浄な通路となり、そこから自然の膿が流れ出た。アナスタシウスはこの病により息を引き取った。

かくして、アナスタシオスは恐ろしい死を遂げたが、聖ヘルマンは聖なる主教たちと共に、我らの主イエス・キリストの御国において至福の生涯を継承した。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがあるように。アーメン。

聖なる父サヴィン、キプロスの司教の記念日

記念日：5月12日

この尊者（サヴィン）はフィニキアの地[3624]に由来し、リキアの都市で生まれ、そこで聖エピファニオスによって洗礼を受け、修道生活に入った。神がエピファニオスを栄光に輝かせたとき、リキアの住民たちは、彼らの中で名高いある人物を彼のもとに遣わし、その人物を自分たちの都市の司教に任命するよう求めた。 その頃、その人物と共にサヴィンもエピファニオスのもとを訪れ、世俗を捨ててエピファニオスと共に留まり、修道生活に入った。 その後、彼はエピファニオスと共に荒野へ赴き、そこで五年間彼と共に過ごした。彼はこの聖人の伝記を著し、その中で、聖人の徹夜祈祷、熱心な土への礼拝、そして主が聖人を通して行われた奇跡について記した。 聖エピファニオスがキプロス島の司教であった頃[3625]、サヴィンを長老の位に叙階しようと望んだが、彼はそれに同意しなかった。そこで聖人は彼を教会に招き入れ、こう言った。

「ここに立ち、じっと動かないでいなさい。」

彼はその場に立ち、まるで足が地面に釘付けにされたかのように動けなくなり、聖エピファニオスは彼を長老に叙階した。エピファニオスの死後、サヴィンは後継者となり、エピファニオスも司

[3623] アナスタシオスは730年から753年まで総主教の座に就いていた。

[3624] フェニキアは、パレスチナと古代シリア国家の間に位置する地中海沿岸に広がっていた。フェニキアにおけるキリスト教の始まりは、使徒たちの時代に遡るとされている。

[3625] キプロス島は、地中海に浮かび、古代フェニキアの海岸近くに位置している。キリスト教は、聖使徒パウロが最初の伝道旅行の際に、この地に広めたものである。

教を務めていたのと同じコンスタンティアの町[3626]で司教の座に就いた。 数多くの記憶に値する奇跡を行い、異端者から自らの教会を守り、敬虔な生涯を送った後、聖サヴィンは主のもとへ帰った[3627]。

リノキル司教、私たちの聖なる父ポルヴィウスの記念日。

記念日：5月12日

私たちの尊い父ポルヴィイは、聖エピファニオスの弟子であった。彼は、師がコンスタンティノープルから船で帰還する際、その旅に同行した。その時、聖エピファニオスは彼にこう言った。

「わが子ポルーヴィイよ！　私はもうこの世を去ろうとしている。だから私の戒めを守り、エジプトへ行きなさい。私の死後も、私はあなたを見守っているから。」

そして聖エピファニオスが亡くなると、ポルーヴィオスは、遺体が十日間も埋葬されなかったため、葬儀を待たずに、師の遺言に従ってエジプトへと向かった。そこで、リノキラという町の長[3628]に出迎えられ、こう尋ねられた。

「どこから来たのですか？」

「キプロスからです」とポルヴィイは答えた。「私は、すでに主のもとへ旅立たれたキプロスの大司教エピファニオスの弟子でしたから。」

リノキラの都市統治者は、その尊者の死を深く悲しみ、聖ポルヴィイを自身の元へ招き入れ、彼をその都市の司教に任命した。その高潔で清らかな生涯により、聖ポルヴィイは奇跡を行う賜物を受けた。　こうして、彼は祈りによって天から雨を降らせ、それによって畑の収穫を増やした。高齢に達した後、彼は主のもとへ召された[3629]。

私たちの聖なる父エピファニオス、キプロス大司教の生涯

記念日：5月12日

ユダヤ系出身の聖エピファニオスの故郷はフェニキアであった[3630]：レバノン山脈からフェニキア海へと流れるエレフェロス川のほとり[3631]、ニカイアの町から3ポプリシュ[3632]の距離にあるビサンドゥクという集落に、聖エピファニオスの両親は住み、農業を営んでいた。　息子以外にも、彼より年下の娘カリトロピアがいた。少年が10歳の時、父が亡くなり、妻には子供たちを育てるという重い負担が残された。親を亡くした家族には、かろうじて食いつなぐだけの収入しかなく、その上子供たちはまだ幼かった。　母は自らの労働で子供たちを養わざるを得なかった。そうして数年が過ぎた。ある時、未亡人の手元には、非常に頑固で暴れん坊なロバがいた。そしてある日、母はエピファニウスにこう言った。

「息子よ、そのロバを連れて、町の市場へ行き、そこで売って、私たちのために食べ物を買ってきなさい。」

3626 聖エピファニオスが司教を務めたサラミスの町は、別名「キプロスのコンスタンティア」とも呼ばれていた。この町は、島の東岸、海辺に位置している。

3627 聖サヴィンは5世紀半ば頃に亡くなりました。

3628 リノキルという都市は、上エジプト（南部）のフィヴァイド砂漠の山岳地帯に位置していた。

3629 聖ポルーヴィイは5世紀に亡くなった。

3630 フェニキア――パレスチナの北西、地中海沿岸に位置する国。その住民は航海者や商人として名高かった。

3631 すなわち、地中海のことである。

3632 ポプリシュチェはおよそ690サジェンに相当した。

「お母さん、あのロバが暴れ者なのはご存知でしょう。市場で買い手がそれに気づいたら、私を殴り始めるでしょう」とエピファニオスは母に答えた。

「行け、わが子よ。私たちの先祖の神が、そのロバをなだめてくださるでしょう」と母は彼に言った。そこで少年は、母の命令に従い、ロバを売りに町へと連れて行った。そこで最初に現れた買い手もまたユダヤ人だった。売り手が同族であることを知ると、彼はこう言った。

「わが子よ、我々は共に、真理を愛する唯一の神を信じている。我々の神を怒らせたり、後に互いに恨み合ったりすることのないよう、互いに傷つけ合うべきではない。さあ、ロバの値段を公正に決めよう。」

エピファニウスはこれに対し、こう答えた。

「このロバを君に売りたくはない。まだ調教されておらず、しかも頑固で気性が荒いからだ。ただ、飢えに苦しみ、食料を買うお金がないため、母が売ることに決めたのだ。しかし、君の言葉を聞いて、利益を得るために隣人に害を及ぼすのは罪だと知った。神に罰せられるのではないかと恐れている。」

その少年の分別と善良な人柄に感銘を受けたユダヤ人は、彼に三ペニア[3633] を渡して、こう言った。

「わが子よ、これを受け取り、母のためにパンを買って、ロバを連れて家へ帰りなさい。もしロバが大人しくなれば、手元に置いておきなさい。そうでなければ、誰かを殺さないよう、追い出してしまえ。」

エピファニオスは家路についたが、道中、自分の村の近くで、ロバを買いたいと願うキリスト教徒のクレオヴィウスに出会った。しかし、正直な少年はそれを売ることを拒んだ。二人が話している最中、ロバは反抗し始め、鼻を鳴らして暴れ回り、やがてエピファニオスを振り落として道から走り去った。　転んだ少年はひどく打ち身を負い、立ち上がれず、横たわったまま苦しそうに泣いていた。打撲した太ももが激しく痛んでいたのだ。クレオヴィウスは彼のそばに近づき、太ももを触診すると、三度十字を切った。するとすぐにエピファニウスは回復し、立ち上がった。その後、クレオヴィウスはロバに向き直って言った。

「我らの主、十字架にかけられたイエス・キリストの名において、お前に立ち止まるよう命じる。そして、お前の主人を殺そうとした罪ゆえに、お前自身はこの場所から一歩も動けないだろう。」

すると、ロバは即座に倒れて息絶えた。この出来事に驚いた少年は、クレオヴィウスに尋ねた。

「父よ、十字架にかけられたイエス・キリストとは、いったいどのようなお方なのですか。その御名によって、このような奇跡が起こるのですか？」

「ユダヤ人たちに十字架にかけられた神の子だ」とクレオヴィウスは答えた。エピファニオスは、自分がユダヤ人であることを明かすのを恐れ、十字架にかけられたキリストのことを思い巡らせ、彼を信じたいという願いを抱いて家路についた。母のもとへ戻ると、彼は起こったことすべてを母に話した。　一方、母親は子供たちを養う食糧がなく、自分の畑を売り払い、エピファニウスには、将来、自分と娘たちを養えるよう、町へ行って何らかの手仕事を学ぶよう命じた。　エピファニオスが町へ向かおうとしたまさにその時、町からヴィサンドゥクへ、裕福なユダヤ人の律法学者トリフォンがやって来た。彼はエピファニオスの両親をよく知っており、彼らの村にいくつかの土地を所有していた。エピファニオスの母が未亡人になったことを知り、彼女が貧困に陥っているのを見て、彼は彼女にこう言った。

[3633] ペニャズ――ドラクマの6分の1。

「あなたの息子を私に預けてください。私が養子に迎えましょう。もしあなたが承諾してくださるなら、これからは彼を私の息子として扱います。あなたと娘さんは、私の家で養われてください。」

未亡人はこの上ない喜びをもって、予期せぬ恩人であるトリフォンに息子を預けた。こうしてエピファニオスはトリフォンの家で息子として暮らし、ユダヤ教の書物を学んでいた。この品行方正な少年は、学習の吸収が早く、類まれな聡明さを備えていたため、教育者のお気に入りとなった。トリフォンは、自分の一人娘をエピファニウスに嫁がせようとも考えた。しかし、神の御心により、彼女は亡くなってしまった。まもなく、彼女の両親も、そしてエピファニウスの母も亡くなった。トリフォンの全財産の唯一の相続人となったエピファニオスは、妹のカリトロピオスを引き取って育て、彼女に、自分の名付け親であり師であるトリフォンの善き教えを説いた。

ある日、エピファニオスはトリフォンから受け継いだ領地を見に、故郷の村へ向かった。神の摂理により、彼は道中で、本を執筆し、それを売って自分と物乞いたちの生計を立てていた修道士ルキアノスと出会った。ちょうどエピファニオスがその修道士と会話を交わしている最中、ある物乞いがルキアノスの足にしがみつき、こう言った。

「神の御使いよ、どうか私を憐れんでください。もう三日もパンを食べておらず、今、何を食べればよいのか分かりません。」

聖ルキアノスは、手元に何も持っていなかったため、自分の服を脱いでその乞食に与え、こう言った。

「町へ行って、この服を売って、パンを買いなさい」。これを目撃したエピファニオスは、出会った修道士のそのような慈悲深さに驚き、まるで恍惚とした状態になったかのように、修道士に降りかかり、彼を覆っている輝くような白い衣に気づいた。　恐怖に駆られて、彼は急いで馬から降り、修道士の前でひざまずき、頭を下げながらこう言った。

「お願いです、あなたがどなたなのか教えてください」

「まず、あなたがどのような信仰を持っているのか教えてくれ。それから、私のことを話そう」とルキアノスは答えた。エピファニオスは言った。

「私はユダヤ人です。」

すると、彼の相手である洞察力に富んだ老僧は、目の前のユダヤ人に神の救いの恵みが働いていることに気づき、次のように語りかけた。

– あなたはユダヤ人でありながら、なぜ私――キリスト教徒に「私は誰か」と尋ねるのですか？　ユダヤ人とキリスト教徒の間には、共通点がほとんどないからです。あなたは私がキリスト教徒であることを知ったのですから、これ以上私と会話を続けるべきではありません。

「では、父よ、私がキリスト教徒になるのを妨げているものは何でしょうか？」とエピファニウスが尋ねると、キリストの弟子からは次のような答えが返ってきた。

「ただ一つ、君が望んでいないという点が妨げになっている。あらゆる善行は、まずその意志が先立つものだからだ。もし君が本当に望んでいたなら、とっくにキリスト教徒になっていただろう。」

この言葉にエピファニウスは心を打たれた。故郷の村を訪れるという当初の計画を捨て、彼は街の自宅へと戻った。その前に、話し相手にも一緒に来てくれるよう懇願していたのだ。彼を自宅に連れて行くと、エピファニウスは自分の全財産を見せた。

「これが私の財産です、神父様」と主人は客に言った。「私はキリスト教徒となり、修道生活を送りたいのですが、幼い妹がいます。彼女について、どうお考えでしょうか？」

「子よ」と、そのキリスト教徒は答えた。「あなたは、この世の富も妹も持ちながら、真のキリスト教徒であり続けることができます。そのどちらも、聖なるキリスト教の信仰に反するものではありません。しかし、修道生活は受け入れることはできません。　まず第一に、妹と共に聖なる洗礼

を受けなさい。それから、十分な持参金を添えて、彼女をキリスト教徒の男性に嫁がせなさい。その後、手元に残った財産を貧しい人々に施しなさい。そうして初めて、あなたは真の修道士となることができるのだ。

「父よ、これらすべてを――」とエピファニオスは言った。「あなたの戒めに従って、確かに実行いたします。ただ、私たちをキリスト教徒の共同体に加えることについては、お急ぎください。」

「その件については」とルキアノスは言った。「司教に知らせなければならない。彼なしでは洗礼の秘跡を執り行うことはできない。さて、私は彼のもとへ行く。君は、私たちの神キリストに対する揺るぎない決意と熱意を保ち続けてほしい。私はすぐに戻ってくる。」

ルキアノスは地元の司教のもとへ向かった。一方、エピファニオスは姉の部屋を訪れ、彼女にこう言った。

「私はキリスト教徒となり、修道者の衣をまといたい。」

「あなたが望むことは、私も望むことよ。あなたがする事は、私も同じようにするわ」と、姉は弟に答えた。

エピファニオスが洗礼を受けたいという願いを聞いた司教は、大いに喜び、その良き使者にこう言った。

「行って、その若者と彼の妹に聖なる信仰を教え、キリストの教えを授けなさい。そして、日曜日に私たちが教会に入る時、彼らを慈悲深く人を愛する神のもとへ連れてきて、聖なる洗礼によって彼らを神に結びつけてあげよう。」

ルキアノスがエピファニオスのもとに戻ると、エピファニオスとその妹は長老に地面にひれ伏して礼をし、涙ながらにこう懇願した。

「お願いです、父よ、どうか私たちを一日も早くキリスト教徒にしてください。」

ルキアノスは彼らを連れ出し、キリスト教の敬虔さを教え始めた。祈りを伴うその教えは、日曜日まで昼夜を問わずほぼ途切れることなく続いた。　そして日曜日、ルキアノスはエピファニオスとカリトロピオスを司教のもとへ連れて行った。二人は、あたかもキリストご自身の前であるかのように司教の前にひれ伏し、聖なる啓蒙を懇願した。司教は二人を起こし、親しみを込めて語り合った後、彼らに洗礼を授けた。　その後、司教はルキアノを後ろに従え、その後に新しく洗礼を受けた者たちが続いて、教会へと向かった。エピファニオスが教会の入り口の最初の段に足を踏み入れたとき、彼の左足からサンダルが脱げ落ちた[3634]　。そして、彼が裸足で敷居を跨いだとき、右足からもサンダルが脱げ落ちた。　エピファニオスはサンダルを取りに戻ることなく、裸足で教会に入った。それほどまでに、彼は神のもとへ熱心に歩み寄っていたのである。教会の中でエピファニオスを見やった司教は、彼の頭上に冠があり、その顔が栄光に包まれているのを見た。　そして、司教とルキアノスはエピファニオスと妹を洗礼槽へと導き入れ、父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けた。エピファニオスの代父はルキアノスであり、カリトロピアの代母は聖処女ヴェロニカであった。神聖な聖体礼儀において、新しく洗礼を受けた者たちはキリストの聖体を受け取った。　その後、彼らは司教の命により彼と共に食事をとり、司教館に八日間滞在した。それからエピファニオスは、妹とルキアノス、そしてヴェロニカを自分の家へ連れて行った。そこで、千ズラティスを取り出し、それらと自分の妹ヴェロニカを、キリストの処女修道女たちの長としてヴェロニカに託し、二人の女性を見送った。 最後に、全財産を売却して得た金を貧しい人々に配り、神聖な書物を購入するための400ズラティスだけを自分に残して、新しく洗礼を受けた彼はルキアノスと共に、長老が設立した修道院へと街を後にした。そこには十人の修道士が修行に励んでおり、熱心に書物の執筆に取り組み、それによって生計を立てていた。

[3634] サンダル――靴の一種。革または葦製の靴底が、革紐で足に固定されていた。

二十六歳のエピファニオスは修道者となり、ルキアノスに次ぐ地位にある修道士イラリオンに指導を委ねられた。イラリオンは若くはあったが、徳に優れ、偉大な奇跡を行う賜物に恵まれていた。　師の行いを注意深く見守りながら、新入修道士は彼の断食の修行を模倣し始めた。彼はルキアノスの指示により、イラリオンからギリシャ語の書物の読み書きを学んだだけでなく、修道生活における苦行と神に喜ばれる生き方についても彼から教えを受けた。　キリストの恵みの助けにより、エピファニオスは日増しに成長していった。師である聖ルキアノスの死後、彼の指導者は修道院長となり、さらに厳格な生活を送るようになった。まるで人間ではなく、常に神に仕える天使の一人のようであった。イラリオンが食卓に並べるのは、少量のパンと、適量の塩、そして水だけだった。　しかも、それを口にするのは一日おき、あるいは二日おき、三日おきであり、時には一週間も何も食べないこともあった。エピファニオスは、そのような断食の生活を見て、彼に倣おうと努め、その後、生涯を通じて、偉大な断食者イラリオンから受け継いだ断食の規則を守り続けた。主は、御自身の御心に適う者に、奇跡を行う賜物を授けられた。　彼の奇跡の始まりはこうだった。修道院は水のない土地に囲まれており、修道士たちは昼間の耐え難い日差しを避けるため、夜間に5ポプリシュの距離を歩いて水を汲みに行っていた。ある時、酷暑の日、通りかかった旅人たちが、激しい渇きを癒やすために修道院に立ち寄った。　しかし、修道院にはその時点で一滴の水もなかったため、修道士たちはその願いを叶えることができなかった。旅人たちはもはや死を覚悟していた。エピファニオスは彼らを憐れみ、彼らが持っていたワインの入った器に手を伸ばし、それに触れて修道士たちにこう言った。

「兄弟たちよ、かつて水をワインに変えられた方が、今、ワインを水に変える力をお持ちであることを信じてください（ヨハネ2:1–11）。」

すると、エピファニオスの言葉通り、たちまちワインは水へと変わった。喜びに満ちた旅人たちは、自分たちが飲み干しただけでなく、家畜にも飲ませた。その後、水は再びワインへと変わった。　皆は思わずその奇跡に驚き、それ以来、エピファニオスの聖なる生き方を特に敬うようになった。しかし彼は、兄弟たちからの敬意に耐えかねて　、密かに修道院を抜け出し、スパニドリオン砂漠に身を隠し、そこで育つ穀物を食べて暮らした。

しばらくして、その荒野を徘徊していた四十人のサラセン人[3635] が、修道服をまとったエピファニウスを見て、彼を嘲り始めた。その盗賊たちの中に、片目が不自由な者が一人おり、とりわけ残虐さと非人道性で際立っていた。彼は剣を抜き、エピファニウスを斬りつけようとした。

しかし、その盗賊が手を振り上げて一撃を加えようとしたその瞬間、彼の目は見えるようになった。驚きで彼は剣を地面に投げ捨て、仲間たちに治った自分の目を指さした。この奇跡を目撃した者たちは、エピファニオスを無理やり連れ去り、こう言った。

「お前は我々の神だ。我々と共に歩き、我々に降りかかる災いから守ってくれ。」

聖人は三ヶ月間、彼らと共に歩んだ。彼らをあらゆる悪行から遠ざけ、目の前で不道徳な行いをさせないようにしつつ、その間ずっと、真の神を知るよう教え、彼らに救いをもたらす神への畏れを植え付けた。

「もしあなたがたが悪行を改めなければ」と彼は彼らに言った。「この地で安らかに暮らすことはできず、主の懲罰的な正義の怒りによって滅びてしまうだろう。」

しかし、温厚な修道士が、横暴な強盗たちの指導者を長く務めることはできなかった。　「肉体の天使」による絶え間ない訓戒と抑制は、三ヶ月も経つと、人間の姿をした悪魔たちにとって全く耐え難いものとなった。かつては、この奇跡を行う修道士と出会うたびに、彼らは彼に自分たちと共に行動するよう懇願していたが、今では逆に、聖人に以前の場所へ戻ってほしいと懇願するようになった。　彼をその場所へ連れて行くと、彼らは彼のために小屋を用意した。その後、キリストを信じ

[3635] サラセン人――アラビアの住民。当初、この名称は遊牧する盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの名称をイスラム教徒全般に転用した。

、尊者にとってふさわしい弟子となった一人を除いて、彼らは彼と別れを告げた。一年半にわたり、キリストを愛する師は、悔い改めた山賊に聖書を教え、禁食の生活について指導した。　その後、師は弟子を連れて聖イラリオン修道院を訪れ、新しく信仰を告白した者を洗礼に与えてくれるよう懇願した。偉大なる修道院長は彼にこの秘跡を授け、ヨハネと名付けた。ヨハネは師のそばを離れず、尊者より先に亡くなるまで、その生涯を記録し続けた。

修道院から荒野の庵へ戻る途中、聖エピファニオスと、洗礼を受けたばかりの弟子ヨハネは、裸のまま荒野をさまよっている悪霊に取り憑かれた若者に遭遇した。　彼を憐れんだ聖人は、主なる神に祈りを捧げた後、その若者から悪霊を追い出した。悪霊はかつての宿主を離れ、こう叫んだ。

「おお、エピファニオスよ、お前は私が二十二年も住んでいたこの場所から私を追い出すが、私はお前をペルシアへ連れ去り、そこでお前は望まぬまま王の前に引き出されるだろう。」

そう言い残して、悪魔は姿を消した。一方、青年は完全に回復し、自分を癒やしてくれた聖人の足元にひれ伏して感謝を捧げた。聖人は、癒やされた者に神への感謝を捧げるよう教え、彼を家に帰した。その間、追い出された悪魔は、ペルシアにやって来て[3636]、王女に取り憑き、彼女を激しく苦しめ始めた。その際、悪魔は叫んだ。

「エピファニオスがここに来なければ、この乙女から離れない。エピファニオスよ、フェニキア出身の者よ、ここへ来い。そうすれば、私は王女から出て行く。」

王はフェニキアの国について耳にすると、エピファニオスを探し出すために家来たちをそこへ遣わした。家来たちはフェニキアのすべての町や村で彼について尋ね回ったが、何も知ることができず、スパイだと誤解した現地の人々に殺されそうになった。　彼らが手ぶらで王のもとに戻った後、その乙女の中に宿っていた悪魔は、大声で叫び続けた。

「エピファニオスはスパニドリオンと呼ばれる荒野に住んでいる。彼をここに連れて来い。」

そこで王は、側近三十人を呼び寄せ、こう命じた。

「ペルシャの服を脱ぎ捨て、ギリシャの服を着て、フェニキアへ行き、『スパニドリオン』と呼ばれる荒野を探せ。そこにはエピファニオスという名の男がいるはずだ。彼を連れてきて、私のところへ連れて来い。」

服を着替えた使者たちは出発し、その荒野にたどり着いた。彼らはそこで長い間エピファニオスを探し回った。ついに、ある人の指示に従って、夜になって彼の修道室にたどり着いた。その時、聖　はいつものように弟子と共に夜の祈りを捧げていた。使者たちは彼の部屋の扉を激しく叩いた。しかし、キリストの修道士は、自身の祈りの規則を中断したくなかったため、ノックの音に少しも怯むことなく、まるでそれに気づいていないかのように、祈りを続けていた。激しい怒りに駆られたペルシャ人たちは、ついに修道室の扉を破り開けることに決めた。そのうちのひとりが、扉を叩き割るために武器を振り上げた。　すると突然、その男が振り上げた手が木のように硬直し、萎んでしまった。　残りの者たちは恐怖のあまり、思わず修道室から少し距離を置き、夜が明けるのを待つことにした。夜明けとともに、すでに夜と朝の祈りを終えていたエピファニオスは扉を開けて外へ出た。尊者を見かけると、傷を負った男は彼の前にひれ伏し、こう言った。

「不死の神のしもべよ、私を憐れんでください。」

「罪深い人間に何を求めているのか？」と、謙虚な神の御使いは尋ねた。

「この場所には元気な状態でやって来たのですが」と彼は答えた。「ところが、私の手が萎えてしまいました。」

「健やかな状態でここに来たのだから、そのまま健やかであれ」と聖人は言った。

そう言いながら、彼は萎えた手に触れると、たちまちその手は、もう一方の手と同じように健康な状態に戻った。この奇跡を目撃した、癒やされた男の仲間たちは聖人に近づき、頭を下げて、訪

[3636] ペルシアは、イラン高原の西部を占めている。

れた目的を明かした。彼らは、王の娘を癒やすために、聖人に王のもとへ行ってほしいと懇願したのである。　聖人は、自分がその若者の体から追い出した悪霊が、ペルシャ王の娘に取り憑いていることを悟ると、祈りをもって悪霊に立ち向かい、神への信頼を胸に、弟子と共にペルシャ人のラクダに乗って旅立った。三十五日後、一行はペルシャに到達し、ウリオンという町に滞在した。　一方、ペルシャ人三人が王のもとへ赴き、エピファニオスの到着を報告した。王は直ちに彼を自分の前に連れてくるよう命じた。聖人は、王としてではなく、一人の普通の人間として王のもとへ赴いた。　この地上の支配者は、玉座から立ち上がって、天の王の忠実な僕を歓迎した。聖人は、真の神であり、私たちの救い主であるキリストについて、またあらゆる悪魔の種族を追い払うその無敵の力について、王と語り合った。対話の後、王の娘で悪霊に取りつかれた少女が、奇跡を行う聖人の元へ連れてこられた。　聖人は苦しむ者のために神に祈りを捧げ、彼女の上に三度十字を切った。彼がその動作を終えるやいなや、悪霊は少女から出て行き、少女はその後、完全に健康を取り戻した。娘の癒やしに喜びを隠せない王は、尊者に向かって頭を下げた。

その奇跡を目撃したペルシャの賢者の一人[3637]は、聖人にこう呼びかけた。

「おお、我らの教えを正すためにここへ来られた愛すべき賢者よ、どうかここに我らと共に留まり、我らを教え給え。そうすれば、我々ペルシャの賢者たちは皆、あなたの言葉に耳を傾けるでしょう。」

賢者の言葉に対し、聖人は彼を威圧的な眼差しで見据え、怒りを込めてこう言った。

「おお、真理の敵よ！　私の主イエス・キリストのしもべである私を『賢者』と呼ぶ、その偽りの口を塞がれよ。」

すると、その魔術師はたちまち言葉を失った。皆は思わず戦慄した。言葉を失った魔術師は、至高の神のしもべの足元にひれ伏し、頭を下げて、言葉を話せるようにしてほしいと懇願した。十分な訓戒の後、慈悲深い義人は、罰を受けた者を癒した。

「神のしもべよ、私はあなたに対して罪を犯しました」と、癒やされた者は叫んだ。「どうか私をお赦しください。」

一方、感謝の念に満ちた王は、この驚くべき癒し手に、大量の金、銀、宝石を贈り物として差し出すよう命じた。しかし、物欲のない修道士は、自分には何も受け取らなかった。

「我々は、来世において、我らの主キリストが約束してくださった、より良き永遠の富を望んでいるため、こうした一時的な富は求めません」と、彼は王に語った。　「あなたは自分のものを手元に置いておきなさい。あなたは富を愛し、そのせいで自分の魂を滅ぼしている。金に執着する者として、他人のものを奪い、困っている者には与えないのだから。」

彼は、王から共に食事をしようと招かれた際も、それを断った。

「私の弱った体を支えるには、ふすまのパン一枚と少量の塩だけで十分です」と、偉大な断食者は王の呼びかけに答えた。　しかし、聖人の断りにもかかわらず、王がヨハネと共に彼を、高価なご馳走が並べられた食卓のある特別な部屋へ連れて行くよう命じたとき、厳格な修行者はパン以外は何も口にしなかった。

この真のキリストの信徒は、宮殿で十日間を過ごし、王に聖なるキリスト教の信仰を説いた。しかし、キリスト教の説教の種は、石のように固まった心と、異教の迷信に目がくらんだ精神に落ちた。不信仰な王との最後の面会の際、聖エピファニオスは、義の裁き、慈悲、悪魔の僕である三賢者、そしてキリスト教の王たちと戦ってはいけないことについて、王の前で説教を行った。

[3637] 古代において「ヴォルフ」という名称は、広範な知識、とりわけ自然の秘力や天体に関する知識を備えた賢者を指していた。彼らは自然現象を観察し、夢を解き明かし、未来を予言した。その多くは同時に祭司でもあり、王宮や民衆の間で大きな尊敬を集めていた。

「もし彼らに対して戦争を仕掛ければ、あなたは十字架にかけられたキリストご自身に敵対することになり、恐ろしい最期を遂げるだろう」――聖人は、王自らが王宮から見送る中、このように説教を締めくくった。　宮殿を出ると、生ける神の奉仕者は、埋葬のために運ばれていく死体を目にした。それを運ぶ者たちに立ち止まるよう命じ、聖エピファニオスは天を見上げながら言った。

「四日間の死からラザロをよみがえらせた（ヨハネ11:39–44）神の子よ、御名の至聖なる栄光のために、この死者をもよみがえらせてください。」

祈りを捧げた後、聖エピファニオスは死者に触れると、彼はたちまち生き返った。周囲の人々は恐怖に駆られ、この奇跡を行う者を何らかの神と見なした。しかし、謙虚な修道士は自らを神の僕と名乗り、聖三位一体において賛美される真の神について彼らに説教した。　彼の聴衆はキリストの羊ではなかったため、彼は急いで自国へと戻った。王は、ペルシャの国境まで護衛の軍隊を彼に同行させようとした。しかし、不屈のキリストの戦士はそれを拒んだ。

「私を守ってくださる神がおられます」と彼は王に言った。「そして、神の戦士たち――聖なる天使たちもいます。」

そこで王は、その隠者に別れを告げ、次のように言って彼を見送った。

「平安のうちに去れ、エピファニオスよ、ギリシャ人の栄光よ。そして、ペルシアにいる我々を忘れるな。」

こうして、神に守られた聖人は、サラセン人たちが彼のために築いた荒野の修道院へと向かった。そこに着くと、彼は再び沈黙の生活に戻った。

集落の周囲には、広範囲にわたって水が見当たらなかった。神の御心にかなうこの人は、主なる神に熱心に祈りを捧げた後、かつてモーセが荒野の岩から水を湧き出させたように（民数記20:11）、乾いた大地から泉を湧き出させた。　その後、隠者は弟子の助けを借りて小さな菜園を開墾し、そこに食用となる穀物を植え、その奇跡の泉の水で灌漑した。しかし、菜園にやってくる獣たちがそれらを食べてしまった。ある日、菜園でこれらの厄介な訪問者たちを目にした聖人は、まるで人間に語りかけるかのように、次のように言った。

「ここに定住し、自らの罪を嘆いている、貧しく罪深い人間に害を与えてはならない。神が私の糧として与えてくださったこの穀物も、もともとわずかな量しかないのだ。」

すると、動物たちはまるでその言葉を理解したかのように、恥じ入った様子で立ち去り、それ以来、聖人に被害を与えることはなくなった。スパニドリアの荒野に住むこの聖なる修行者の名声は、フェニキア全土に広まった。その名声に惹かれて、サラセン人たちが再び彼のもとを訪れ、彼から祝福を受けたいと願い、彼の周りに集まった数多くの弟子たちのために、さらに三つの修道室を建てた。　やがて、ここには50人の修道士を擁する本格的な修道院が形成された。その中には、ローマのエパルヒ[3638]であるアエティウス・カリストの息子もいた。彼は次のような経緯でエピファニオスから修道士としての戒律を受けた。少年時代に悪霊に取りつかれていた彼は、ある時、夢の中でエピファニオスがこう語りかけるのを見た。

「カリストよ、私がお前から不浄な霊を追い払ってあげようか？」

「主よ、あなたは一体どなたですか。私からこの凶暴な苦しめる者を追い払うことのできる方とは？」と、現れた少年は尋ねた。すると彼はこう答えた。

「私はエピファニオスだ。パレスチナのフェニキアにある、スパニドリオンと呼ばれる荒野の修道院に住んでいる。もし私がお前から悪霊を追い払ってあげたら、私のところに来て、私の修道院で私と一緒に暮らしてくれるか？」

「先生」と病人は答えた。「ただ、私からその苦しめる者を追い出してください。そうすれば、私はすぐにあなたのところへ行って、あなたと一緒に暮らすつもりです。」

[3638] エパルフ――地方の長。

「よく聞け、子よ」とエピファニオスはカリスタに忠告した。「その約束を破ってはならない。」

目を覚ますと、悪霊に取りつかれていた少年は完全に健康になったと感じ、両親にこの奇跡的な治癒について語った。三ヶ月が過ぎた頃、カリストは両親に次のような願いを伝えた。

「私をパレスチナのフェニキアへ送り出して、エピファニオス様を探し出し、そのお許しで暮らすことを許してください。そうでなければ、私を苦しめる悪魔がまた戻ってくるのではないかと恐れているのです。」

両親は直ちに、息子を奴隷たちと、大量の金銀を携えて、その聖者に送り出した。癒やしの師のもとへたどり着くと、癒やされた者はその手から修道服を受け取り、持参した金銀を修道院の建設費として彼に捧げた。そして、自分の奴隷たちを両親のもとへ送り返した。

当時、パレスチナ全土で、もう一人のキリストの修道士――ガッソのマイウム近くの荒野に修道院を構えていた聖イラリオン大聖人――が名声を博していた。　聖エピファニオスはある日、弟子ヨハネを伴って彼を訪ねた。住職と修道者たちは客人を温かく迎え入れ、数日間滞在させた。その頃、悪魔はエピファニオスの姿に変身し、あたかも大イラリオンから戻ってきたかのように、彼の修道院へと向かった。　変身した悪魔を目撃したのは、不用意で不注意な一人の修道士で、必要もなく修道院の外に出ていた。彼はその悪魔を本物のエピファニオスだと勘違いして礼拝したが、その瞬間、悪魔が彼に取り憑き、苦しめ始めた。　修道士たちは、取り憑かれて暴れ回るその姿を見て、これまで健康だった修道士にどうしてこのような病が降りかかったのかと首をかしげ、彼を憐れんだ。彼と共にいた兄弟たちには理解できなかったその事態を、修道院を離れていた先見の明のある修道院長は、霊的な洞察力によって見抜いていた。

「父よ」と、エピファニオスは当時イラリオンにこう語った。「狼が私の群れに入り込み、羊たちを混乱させている。私はそれを追い払いにいく。」

そう言うと、彼は偉大な長老と兄弟たちに別れを告げた。急いで修道院に戻ると、彼はただそこにいるだけで、悪魔をその欺きの犠牲者から追い出した。癒やされた男は、自分がどのようにして悪霊に取り憑かれたのかを彼に語った。聖人はその話を聞いた後、兄弟たちに悪魔の策略から身を守るよう教えた。

エピファニオス修道院からそう遠くない場所、砂漠を横切る道沿いに、多くの通行人を襲って殺した凶暴なライオンが住んでいたため、旅人たちは大勢の集団を組んでしか通ることができなかった。　ある日、彼らは集まって修道院の聖人のもとを訪れ、多くの人を殺したその獣の凶暴さについて報告した。彼らの話を聞き終えると、聖人はこう言った。

「さあ、子らよ、主の御名によって、その獅子を見に行こう。」

そして皆で向かった。ライオンの巣穴に近づくと、皆に恐怖が襲い、皆逃げ出そうとした。しかし聖人は言った。

「その場所を見せてくれ。」

人々は遠くからその場所を指し示した。すると聖人は、叫びながら獣の方へと歩み寄った。

「獅子の住処はどこか？」

するとすぐに、ライオンは人の声を聞いて巣穴から飛び出してきたが、聖人の顔を見るや否や、その場で息絶えた。遠くに立っていた者たちは、飛び出してきたライオンに気づくと、恐怖のあまり逃げ出し、ライオンがエピファニオスを引き裂くのではないかと恐れた。しかし、神に愛された聖人は、大きな声で彼らに叫んだ。

「恐れるな、子らよ。ここに来て、その獣の死体を見てみよ」。彼らは長い間躊躇した後、勇気を振り絞って聖人のもとへ近づき、その足元に横たわる死んだ獅子を見て、大いに驚き、神を賛美した。

奇跡を行う賜物や他の多くの賜物に加え、主は御自身の忠実なしもべに、聖書の知識と解釈という偉大な賜物を授けられた。彼は兄弟たちに聖書を読み聞かせながら、誰にでも分かりやすく明確に解説した。あるギリシャの哲学者が、彼の博識さと卓越した知性について耳にした。 エデッサ[3639]から聖人の修道院を訪れたその哲学者は、ギリシャの賢人たちの書物を根拠に彼と論争を交わした。彼はギリシャの多神教を称賛したが、エピファニオスは聖書の教えを用いて、聖三位一体において賛美される唯一の神に対するキリスト教の信仰の真実性を立証した。 そのギリシャの学者は、キリスト教の賢者の修道院に丸一年滞在し、彼と議論を交わしつつ、聖人とその弟子たちの天使に等しい生活ぶりを観察した。さらにエピファニオスが行う奇跡を目の当たりにするにつれ、その哲学者は徐々にキリストの真理を悟るようになった。 ついに、ある奇跡が彼を特に深く感動させ、彼を完全にキリスト教へと させた。60人の人々が、鎖で縛られた悪霊に取り憑かれた男を修道院に連れてきた[3640]。尊者は哲学者に向かって言った。

「聞け、罪深いエピファニオスと論争している哲学者よ。君が自分の神々を呼び出して、この男から凶暴な悪霊を追い出し、私がそれらを信じるようにするか、あるいは私が私の神、十字架にかけられたイエス・キリストを呼び出して悪霊を追い出し、その時に君が私たちのキリスト教の信仰に改宗するか、どちらかだ。」

哲学者は返答に困り、黙り込んでしまった。そこで聖人は、神の御名を呼び、悪魔を戒め、神の被造物から追い出した。この奇跡の後、哲学者は奇跡行者の足元にひれ伏し、洗礼を願い求め、唯一の真の神、十字架にかけられたキリストを告白した。 聖人はこの新改宗者をイラリオンのもとへ送り、イラリオンは彼にエピファニオスという名をつけて洗礼を授けた。新改宗者はその後、修道生活に入り、長老となり、修道士たちの院長を務めた。

毎日、各地から大勢の修道士や信徒が聖者に訪ねてきた。この数多くの、望ましくない訪問者たちによる聖なる隠遁生活の妨害を避けるため、エピファニオスはエジプトの地へ退去することを決意した。修道士たちが自分たちから彼を離さないことをよく知っていた彼は、彼らを呼び集めてこう言った。

「偉大なる長老イラリオンを訪ねたいと思う。」

一方、兄弟たちは師の意図を悟ると、叫び声を上げて彼の前にひれ伏し、自分たちを置き去りにしないよう懇願した。長老は彼らのもとを離れないと約束し、修道室に残った。しかし、10日後、弟子ヨハネと共に密かに修道院を抜け出し、エルサレムへと向かった[3641]。 そこで、主の命を与える十字架に礼拝を捧げた後、彼はエルサレムの他の聖地でも祈りを捧げた。その後、彼はヨッピへ[3642]

[3639] エデッサ（現在のウルファ）は、メソポタミア北部のユーフラテス川沿いに位置する都市であり、紀元前137年からは新たに成立したオズロエス王国（あるいはエデッサ王国）の首都であった。紀元217年、ローマ人によって東方の植民地とされた。 エデッサでは早くからキリスト教が広まった。4世紀には聖エフレム・シリアヌスによって神学校が設立されたが、5世紀にはネストリウス派に傾倒し、エデッサ神学校の教師であった長老イヴァが、その支持に特に尽力した。641年、エデッサはアラブのカリフたちに征服された。 1098年にはバルドゥイン伯爵がこれを占領し、エデッサ公国の首都とした。1144年にはトルコ人に征服され、それ以降、支配者が次々と変わり、1637年にようやくトルコの支配下に入った。

[3640] ヴェリギ——束縛、鎖。

[3641] *エルサレムは*、ヘブライ語で「世界の住まい」を意味し、パレスチナで最も古く、最も有名な都市である。ケドロン川の源流に位置し、ヨルダン川や死海からほど近く、ユダヤ山地の3つの支峰であるアクラ、シオン、モリヤの斜面にある。 エルサレムの起源はアブラハムの時代に遡るとされ、そこはメルキゼデクが王であり大祭司であった「サリュート」という都市であると考えられている（創世記14:18）。 旧約聖書および新約聖書において、選民であるユダヤ人の歴史的出来事の中心地として知られるこの都市は、主イエスの受難と復活の地であり、キリスト教会の発祥の地として、すべてのキリスト教徒にとって計り知れないほど尊い場所であり、そこから福音の言葉が全宇宙へと広まっていった。

[3642] ヨッピア（現在のヤッファ）は、地中海北西岸に位置するアジア最古の都市の一つである。ここは、ソロモンの治世の頃からすでにユダヤ人の港として知られていた。

へ向かい、そこにある港からアレクサンドリア[3643]へ向かう船に乗り込んだ。 この街に入ると、ユダヤ人の律法学者アクイラが出迎え、聖書に基づいて信仰について彼と論争したいと申し出た。論争は二日間続いた。ついに、キリスト教徒に論破されたユダヤ人は、洗礼を受けたいと願った。聖人は彼をアファナシオス大司教のもとへ連れて行った。　聖人は二人を喜んで迎え入れた。ユダヤ人はキリストに回心した者として、エピファニオスは正しい道へと導いた者としてである。しばらくして、アレクサンドリアのエピファニオスは弟子を連れてフィヴァイダへ向かった[3644]。そこで彼らを出迎えたのは、かつてアントニオス大聖人の弟子であった[3645]パフヌティオスであった。

「父よ、私たちを祝福してください」と、聖人は彼に言った。

それに対し、パフヌティウスはこう答えた。

「主があなた方を祝福されますように。」

祈りを捧げた後、二人は腰を下ろして語り合った。エピファニオスはアントニオスの生涯について尋ね、パフヌティオスはそれについて語った。

「父よ、私は――」と、その話を聞いた後、彼は言った。「ニトリアの荒野[3646]で暮らしたいのです。」

「行け」と、エピファニオスの相手は答えた。「そして、ニトリアに住む聖なる父たちとの対話を楽しみ、彼らから霊的な糧を集めなさい。その糧をもって、キプロス島の言葉の羊たちを養うのだ[3647]。」

パフヌティオスの言葉は、キプロス島におけるエピファニオスの将来的な司教職についての預言であった。祈りを捧げた後、二人は別れを告げ、それぞれ自分の道へと旅立った。　レオニトポリの町に近づくと、エピファニオスは、町の近くにイェラクという修道士が住む修道院があるという話を耳にした。彼は外見は敬虔そうに見えたが、実際には異端者であり、私たちの肉体について正統的な教えとは異なる説を説いていた。　彼の見解によれば、肉体は復活せず、その代わりに神が来世で別の体を授けてくださるという。なぜなら、*「あなたは塵であり、塵に帰る」*（創世記3:19）と書かれているからである。

彼はまた、その世において子供たちは未熟な存在であると語っていた。エピファニオスはパレスチナにいた頃から彼のことを耳にしており、彼に会いたいと願っていた。　同様に、イエラクスもこの尊者について聞いていた。この修道院を訪れた聖人は、イエラクスの教えに耳を傾ける大勢の人々を目にした。皆、彼を、油も口にせず、ワインも飲まない偉大な断食者として、徳の高い人物だと考えていた。二人の巡礼の修道士を見たイエラクスは、彼らに尋ねた。

「どこから来たのですか？」

[3643] アレクサンドリアは、エジプトの重要な港湾都市であり、紀元前332年にアレクサンドロス大王によって、現在の同名の都市よりやや南に位置する地中海南岸に突き出た岬に建設された。　かつては科学の中心地であり、世界一の商業都市であった。4世紀初頭にはキリスト教の中心地となり、総主教の居城となった。

[3644] 古代に名高い都市テーベの地域。この名称は、その主要都市の名にちなんで、上エジプト（南部）全体を指す名称としても用いられていた。この地にあった砂漠は、4世紀から5世紀にかけて、東方の隠者たちのお気に入りの滞在地であった。

[3645] 修道生活の最初の創始者である聖アントニオス・ザ・グレートは、エジプト出身で、ナイル川の東岸、フィヴァイダ近郊で修行に励みました。そこで、毛皮の衣を身にまとい、草や根菜だけを糧として、絶え間ない労苦と祈りの中で、20年間、人知れず過ごしました。 神の恵みによって、誘惑や恐怖をもって彼を悩ませた誘惑者の霊を打ち負かした。 やがて、その聖なる生活と奇跡が、多くの修道士たちをアンソニーのいる荒野へと引き寄せた。彼らは彼の近くに定住し、アンソニーが定めた規則を手本とした。これが修道生活の始まりであった。聖アンソニーは366年、105歳でこの世を去った。記念日は1月17日である。

[3646] 言うまでもなく、エジプト北西部に位置するニトリウス山に隣接するニトリウス砂漠に住んでいた隠者たちのことです。

[3647] キプロス島は、地中海の北東端に位置している。

「パレスチナからです」と巡礼者たちは答えた。その後、彼らの名前を尋ねると、彼は憂いを帯びた。エジプトでその聖性と知恵で名高いエピファニウスが、彼には好ましく思えなかったからである。　エピファニウスにはもはや一切注意を払わず、彼は人々に教えを説き続けた。異端者が説教の中で死者の復活の話題に及び、人間の肉体は復活しないと教え始めたとき、エピファニウスはその誤りを我慢できず、彼に次のような懲らしめの言葉を投げかけた。

「お前の口が塞がれよ――そうして、我らの希望を冒涜してはならないことを学べ。」

するとたちまち、その誤った教えを説く者は声を失い、身動きが取れなくなった。この奇跡を目撃した者たちは、深い恐怖に襲われた。　そして、奇跡を行う聖人は死者の復活について教え始め、彼らはこの世で生きていたのと同じ、ただ形を変えただけの肉体でよみがえるのだと断言した。説教を数時間続けた後、聖人は罰を受けた男にこう言った。

「真の信仰を学び、それを他の人々に教えなさい。」

すると、その口がきけない男は突然話し出し、自らの過ちを告白し、悔い改めることを誓った。聖人は彼に正しい信仰を十分に教え、その後、上フィヴァイダへと向かった。そこにはヴヴゥリエと呼ばれる一つの人里離れた場所があった。聖人はそこに定住し、七年間を過ごした。　しかし、この荒野でさえも、彼を訪問者たちから守ってはくれなかった。その中には、エウデモンという名の地元の哲学者がおり、信仰について聖人と論争するためにやって来た。その哲学者には、片目が斜視の息子が付き添っていた。長い議論の末、聖人は哲学者の息子を見つめ、彼にこう言った。

「なぜあなたは、息子をその身体的な欠陥から救うために、彼を気遣わないのですか。」

「もし天下のすべての中で――」と、問われた男は笑いながら答えた。「エウデモンの息子だけが片目だったなら、確かに私は彼のことを気にかけるべきでしょう。しかし、この世には片目の人々が数多くいるのですから、彼もそのままにしておけばよいのです。」

「しかし、もし実際に天下のどこを見渡しても、あなたの息子だけが片目であり、この世の他のすべての人々が両目で見えているとしたら、あなたは彼の治癒のために何をするだろうか？」と、エピファニオスはエウデモスに問い続けた。

「他に何もせず」と哲学者は答えた。「ただ自分自身にこう言い聞かせるだけだ。『この世で、私の息子ほど不幸な人間はいない』と。」

「私の言葉を冗談だとは思わないでほしい」と聖人は言った。「しかし、息子を癒やすために私を頼ってくれれば、あなたは神の栄光を見るだろう」と聖人は反論した。そして少年を抱き上げ、その目の上で三度十字を切って、彼を癒やした。この奇跡を目の当たりにして、哲学者とその息子は共にキリストを信じるようになった。　正しい信仰について十分に教えられた後、エウデモンは家族全員と共に、地元の司教から洗礼を受けた。

聖エピファニオスに関するこの評判は、多くの人々を彼のもとに引き寄せた一方で、エジプトの司教たちの中に、この尊者を何らかの地方都市の守護聖人にしようという欲望を抱かせた。しかし、聖人は司教たちの意図を霊的に見抜き、弟子にこう言った。

「わが子よ、我らの故郷へ戻ろう。」

そして二人はフェニキアへと向かった。道中、彼らは偉大なるイラリオンが住む修道院に立ち寄ったが、そこには長老の姿はなかった。この修道院を訪れる多くの参拝者たちにより、彼はキプロスの都市パファ[3648]の境界内にあるある人里離れた場所へと身を隠していたのである。 去っていった師を嘆き悲しんでいた修道者たちは、聖エピファニオスが目の前に現れたのを見て、悲しみを和らげられた。彼は四十日間、彼らを慰め続けた。その後、彼は自身の修道院であるスパニドリオンへと向

[3648] 古代、キプロス島には「パファ」または「パフォス」という名の都市が二つありました。一つは島の西岸、海から10スタディオン離れた場所に位置する*「旧パフォス」*で、フェニキアの植民地でした。もう一つは、旧パフォスから北西へ15ヴェルスタ離れた場所に位置する「*新パフォス*」（現在のバッフォ）です。両都市の遺跡が現存しています。　聖エピファニオスがどちらの町の周辺に住んでいたかは不明である。

かい、そこでは皆が彼の帰還を喜んだ。　その年、干ばつのためフェニキアでは飢饉に見舞われていた。偉大な奇跡行者の帰還を知ると、大勢の人々が彼の修道院を訪れ、神に雨を乞い、大地が実りを与えるよう熱心に祈った。

「なぜ私を煩わせるのですか」と聖人は彼らに言った。「私は罪深い人間に過ぎません。」

しかし、人々は長く、たゆまず彼に懇願し続けた。ついに聖人は、自分の独房に閉じこもり、切なる祈りを捧げ始めた。すると突然、それまで全く晴れ渡っていた空が雷雲に覆われ、そこから三日間、フェニキア全土に激しい雨が絶え間なく降り注いだ。そこで人々は、神の御使いに雨の止むよう願い始めた。 聖人の祈りによって雨は止み、その年は大地の実りが豊かになった。

尊者の名声が高まるにつれ、日々数え切れないほどの参拝者が彼のもとに集まるようになったが、それゆえに彼は、再びフィニキアを去ることをますます強く考えるようになった。その意図はまもなく決意へと変わった。 リキアの[3649] ――聖エピファニオスが洗礼を受けた地――で司教が亡くなり、近隣の都市の聖職者たちが新たな司教を選出するために集まった際、彼らは聖エピファニオスのことを思い出した。公会議に出席していた者の中には、若くとも生活は完璧で、貞潔かつ高潔な修道士ポルーヴィオスがおり、彼はその尊者を知っていた。　司教たちは彼に、できるだけ早く馬に乗ってスパニドリオン修道院へ行き、密かにしっかりと調査するよう命じた。エピファニオスが本当にエジプトから戻ってきたのか、そして自分の修道院にいるのかどうかを調べるためである。

「この任務については、たとえエピファニオス本人であっても、誰にも明かしてはならない」と、公会議の司教たちはポルーヴィオスに告げた。ポルーヴィオスは修道院で聖人を見つけ、挨拶を交わした。

「なぜここへ来たのか、わが子よ？」と聖人はポルヴィアに尋ねた。ポルヴィアは答えた。

「聖下にお目にかかりに参りました。」

「子よ、お前は――」と、先見の明を持つ聖人は反論した。「私がここにいるかどうか、私の取るに足らない存在を確かめに来たのだな。」　私に命じられたことを隠してはならない。偽りを語ることは罪だからだ。真実を語れ。神は我々の真ん中にいらっしゃるのだから――真に真理の奉仕者たれ。一方、罪深いエピファニオスは、自らの多くの罪を嘆き、恐れながら、あちこちをさまよっている。しかし、よく聞け、ポルヴィウスよ。お前はここに留まり、馬は司教たちのところへ送り返せ。　彼らには、司教職にふさわしい人物として知っている人を探させよ。私は彼らの目には知られぬままでいよう。

ポルヴィイは予言者の言葉に従った。馬と従者を送り出した後、彼自身は聖人のもとに残った。そして夜が更けると、エピファニオスは、常連の弟子ヨハネと新しく来たポルヴィイを伴い、誰にも知られぬよう密かに修道院を出て行った。　まず彼は、主の命を与える十字架と、エルサレムおよびその周辺にあるその他の聖地を礼拝するために、エルサレムを訪れた。キリスト教徒にとって神聖なこの都市に三日間滞在した後、聖エピファニオスは二人の弟子にこう言った。

「子らよ、我らの偉大なる父イラリオンが、今やキプロスの地、パファの町の近くにおられると聞いた。さあ、彼のもとへ行き、彼から祝福を受けよう。」

そう言うと、彼は彼らと共に、パレスチナにあるケサレア・フィリッポス[3650] へ向かい、そこからキプロス島行きの船に乗ることにした。キプロスの海岸に着くと、彼はパフォスの荒野にいる偉大な隠者イラリオンのもとへ向かった。　長い別離の末の再会に、二人の隠者は大きな喜びに満たされた。数多くの訪問客に悩まされ、別の場所へ移り住もうとしているイラリオンを見て、エピファニ

[3649] リキアは、おそらく小アジアの南岸にある同名の山岳地帯の主要都市であった。

[3650] ケサリア・フィリッポス、あるいはパネアは、パレスチナの最北東端、ヨルダン川の源流付近にある都市である。この都市は、ヘロデの息子フィリッポスが領地として与えられたことにちなんで「フィリッポス」と名付けられ、地中海沿岸に位置するケサリア・パレスティナとは区別されている。

オスは二ヶ月後、この心温かなもてなしの主のもとを去ることを決めた。別れの際、イラリオンは客にこう尋ねた。

「エピファニオスよ、どこへ行こうとしているのか？」

「アスカロンやガザへ行くつもりだ[3651] 、そしてさらに先へ、砂漠のどこかに静寂な場所が見つかるまで。」

それに対し、聖エピファニウスは、先見の明を持つその人から次のような助言を聞いた。

「行け、わが子よ、キプロス島にあるサラミンの町へ[3652] 。その町で、あなたは安らかな日々を過ごせるだろう。」

エピファニオスは、自分がその町で大司教になるという予言を含むこれらの預言的な言葉を、聞く耳すら持ちたくなかった。すると、聖なる予言者は彼にこう言い、その願いを繰り返した。

「わが子よ、あなたはその町へ行き、そこに住むべきだと告げる。だから、海上で災難に見舞われないよう、私の言葉に逆らってはならない。」

イラリオンと別れを告げたエピファニオスは、弟子たちと共に港へ向かった。そこには二隻の船が停泊していた。一隻はアスカロンへ、もう一隻はサラミンへ向かう船だった。　聖人は前者の船で出航した。数時間後、予期せず海上で激しい嵐が吹き荒れた。激しい波が、いつ船を砕き、海の深淵に沈めてもおかしくないほどだった。皆、命の終わりを覚悟した。　この災難は三日間続いた。ついに四日目に、波にさらわれた船はサラミンという町に打ち上げられた。船から降りた旅人たちは、長引く恐怖と激しい飢えに疲れ果て、まるで死人のように地面に倒れ込んだ。　疲れ果てた船員たちの休息と、損傷した船の修理のために、三日間の停泊が必要だった。そして四日目にようやく、船は出航の準備が整った。修道士もまた、航海を続けようと考えていた。しかし、神の御心は違った。

ちょうどその頃、街では大司教の選出が行われていた。この件のために集まった司教たちは、この偉大な聖職にふさわしい人物を神が示してくださるよう、数日間祈りを捧げていた。　その中には、先見の明を持つキフェルスの[3653] 聖人パッピオスもいた。彼は50年にわたり司教を務め、サライミの司教ゲラシオスと共に、キリストの御名のために多くの苦難に耐えてきた人物である。　キプロスのすべての司教たちから父として敬われていたこのキリストの殉教者に対し、神は、聖エピファニオスがサラミンに到着したことを明らかにされ、彼をその町の司教に任命するよう命じられた。当時は秋の時期で、ブドウの収穫の季節が訪れていた。

「さあ、子供たち、町へ行こう」とエピファニオスは弟子たちに言った。「旅の途中に食べるぶどうの房を買おう。」

彼らが市場でブドウの売り手のところへ近づき、エピファニウスが大きな房を二つ手に取って尋ねた。

「これ、いくらですか？」と尋ねたところ、突然、4人の司教が自分に近づいてくるのに気づいて驚いた。その中にいて、2人の助祭に支えられていた老いたパッピウスは、聖霊の導きにより、エピファニウスを見たとたんに彼を聖人であると悟り、こう言った。

「アッバ・エピファニオスよ、ぶどうの房は置いて、私たちと一緒に聖なる教会へ来なさい。」

3651 アスカロンとガザは、地中海沿岸にあるペリシテ人の主要都市の一つである。

3652 サラミンは、キプロスで最大かつ最も要塞化された都市であり、島の東岸に位置していた。そこには、艦隊全体を収容できる素晴らしい港があった。サラミンは、トラヤヌス帝（98–117年）の治世下、ユダヤ人の反乱の際に陥落し始め、その大部分が破壊された。 その後、コンスタンティヌス大帝（306–337年）の時代に発生した地震により、都市は完全に破壊され、住民のほぼ全員が犠牲となった。コンスタンティウス（337–361年）がこれを再建し、「コンスタンティエア」と名付けた。その遺跡はファマグスタの近くにある。

3653 キフェラ、あるいはキテラ、またキテラは、地中海にある同名の、イオニア諸島最南端の島の南岸に位置する主要都市である。

招かれた聖人は、ダビデの言葉を思い起こし――*「『主の家に参りましょう』と言われたとき、私は喜びました」*（詩編121:1）――ぶどうを置き去りにして、司教たちと共に歩み出した。聖人が教会に入ると、司教団全員が次のように彼を迎えた。

「神があなたを我々のところへ遣わされたのです、アッバよ。どうか、この都市とキプロス島全体の総主教となられなさい。」

しかし聖人は、自らを罪深く不適格であると称し、これほど偉大な位階に就くことを拒んだ。だが司教たちは、彼の願いに耳を貸さず、彼を聖職の段階に従って順次昇格させ始めた。　叙階を受ける者は、聖職という重荷を自分には耐え難いものだと考え、苦々しく泣いていた。悲しみに暮れる後継者の涙を見て、パッピウスは彼にこう言った。

「わが子よ、我々があなたについて受けた啓示については黙しておくべきだが、あなたが悲しみ、泣いているのを見る以上、神が我々に明らかにしてくださったことをあなたに告げなければならない。ここに集まった聖なる父たちである司教たちは、この不適格な私に大司教の選出を委ね、罪深い私にこう言ったのだ。　『神に熱心に祈りなさい。神が、大司教の職にふさわしい人物をあなたに示してくださると、我々は信じているからである』と。そこで私は、自室に閉じこもって救い主なる主にお祈りしていたところ、突然、稲妻のような光が私を照らし、罪深い私に向かってこう語る声が聞こえた。　「パッピイ、パッピイ、聞きなさい！」　私は恐怖に駆られて言いました。「主よ、何をお命じになりますか？」　すると、その声は静かにこう告げました。「立ち上がって市場へ行きなさい。そこでは、預言者エリシャに顔立ちや頭容が似ており、二人の弟子を連れた修道士が、ぶどうの房を買っているのを見ることになるでしょう。　その修道士を連れて行き、大司教に叙任せよ。その修道士の名はエピファニオスである。」そこで私は立ち上がり、命じられたとおりにした。子よ、あなたは神の御心に従うがよい。*「あなたがた自身と、聖霊があなたがたを牧者として置かれたすべての群れとを、よく見守りなさい」*（使徒行伝20:28）。

パッピオスの説教の後、エピファニオスは彼に深く頭を下げ、主の御心に従って司教の叙階を受けた。その後、喜びに満ちた司教たちはそれぞれの帰路についた。　一方、新たに任命された大牧者は、自分に託されたキリストの羊の群れを、霊的な牧草地で、教えの言葉だけでなく、徳ある生活の模範によっても牧し始めた。

聖エピファニオスの大牧者としての活動が始まった頃、エウグノモンという名の貴族のローマ人が、サラミスの市民ドラコに100ザラティスの借金を負っていたため、牢獄に投獄された。そして、この囚人を救い出す者は見当たらなかった。彼は故郷であるローマから遠く離れていたため[3654]、誰も彼のために保証人になろうとはしなかった。　この話を聞き、債務者に同情した聖人は、裕福だがけちな異教徒ドラコンのもとへ赴き、エウグノモンの解放を懇願した。聖人の願いは、偶像崇拝者を激しく怒らせた。

「この街によそ者が現れたか！」と彼は悪意を込めて答えた。「もしその借金者を解放してほしいというのなら、百ズラティスを持ってこい。」

至福のエピファニオスは、教会の金から百枚の金貨を彼に与え、こうして債務者を束縛からも借金からも解放した。配られた金について、高慢で悪意に満ちた助祭カリンが聖人に対して不平を言い始め、他の聖職者たちの中にも聖人に対する不満を煽った。

「このよそ者を見よ」と彼は彼らに言った。「彼は教会にあるものをすべて略奪しようとしている。そうすれば、我々は教会の宝を横領した罪に問われることになるだろう。」

かつて富豪だったカリンは、これを口実に聖エピファニオスを大司教の座から追い落とし、自らその座に就こうとしていた。彼に煽られて、大司教の慈悲深い行いに偏見を抱いた聖職者たちは皆、エピファニオスにこう言った。

[3654] ローマはイタリアの首都であり、テヴェレ川の両岸、同川が海に注ぐ地点に位置している。

「あなたが受けた聖職者の栄誉だけでは不十分なのか？　それなのに、あなたはまるで旅人やよそ者、ここへ裸一貫でやって来た乞食のように、教会の財産を浪費している。さあ、教会に百ズラティスを返すか、それともここを去って、来た場所へ戻るか、どちらかを選べ。」

聖人は黙って耐え忍んだ。そして、束縛から解放されると、ローマへ向かい、すべての財産を売り払い、大量の金を携えて聖人のもとへ戻った。売却で得た全額をエピファニオスの手に委ねると、彼は自らを神とその大司教に仕える身とし、死ぬまでエピファニオスのもとで暮らした。　聖師は、持ち込まれた金の中から100ズラティスを取り出し、カリーヌに手渡しながらこう言った。

「これは、債務者を解放するために借り入れた教会の金だ。」

カリンはそれを受け取った。一方、残りの金については、聖人は困窮している人々に配った。そしてカリンは聖職者たちを呼び集め、彼らの前で誇らしげに自慢した。

「ほら」と彼は彼らに言った。「これはエピファニオスが浪費した金で、私が彼から取り戻したものだ。」

しかし、聖職者たちは、彼らを聖人の不平や侮辱という罪へと誘ったカリンを非難し始め、怒りを込めて、この金貨を聖人に返還するよう命じた。

「なぜなら、聖人は――」と彼らは言った。「教会の富を慈善事業に費やす権限を持っているからだ。」

カリンは神の御使いに他にも多くの厄介事を引き起こしたが、彼はすべてを柔和に耐え忍んだ。

ある日、聖人が自室で、すべての聖職者たちが同席する昼食の席で、聖書のいくつかの奥義を解説していたところ、窓辺にカラスが飛んできて、カアカアと鳴き始めた。するとカリンは、聖人の教えを嘲笑うように、他の聖職者たちにこう言った。

「このカラスがカアカアと鳴いて何を言っているか、誰か知っている者はいるか？」

皆が説教に熱心に耳を傾けていたため、誰も助祭の質問に答えなかった。

カリンは二度、三度と尋ねた。

「カラスが何を言っているのか理解できるほど、賢い者は誰か？」

しかし、誰も相変わらず彼の言葉に耳を傾けず、聖エピファニオスの神に啓示された説教に耳を傾け続けていた。生意気な助祭は、ついに聖人自身にこう尋ねた。

「もしあなたが賢明なら、このカラスが何を語っているのか教えてくれ。もし答えられれば、私の全財産をあなたに差し出そう。」

すると聖人は彼を一瞥して、こう言った。

「カラスが何を言っているかは知っている。彼は、これからはお前が助祭の務めを果たすことはないと語っているのだ。」

すると、聖人のその言葉が響くやいなや、カリーナは恐怖に襲われ、さらに何らかの病に冒されてしまったため、もはや食卓に着いていられなくなり、家来たちに連れられて家へ戻った。

翌日の朝、彼は息を引き取った。すべての聖職者たちは大きな恐怖に襲われ、それ以来、畏れを抱きつつキリストの聖人エピファニオスに従い、彼を崇敬するようになった。一方、神を畏れ、子供のない、処罰を受けた男の未亡人は、夫の死後に残された財産を教会に持ち込み、神への奉仕に身を捧げた。　彼女の片手は、10年前に襲った完全な麻痺に陥っていた。何も握ることさえできない未亡人の患った手の上に十字の印を画いた聖エピファニオスは、彼女を完全に健康な状態に戻した。その後、彼はその未亡人を、貞潔で教会の奉仕にふさわしい者として、ディアコニッサ（[3655] ）に任命

[3655] ディアコニッサとは、古代キリスト教教会において、未亡人や年配の未婚女性からなる教会奉仕者のことである。ディアコニッサの奉仕は、とりわけ女性に対するいくつかの教会的務めとして表れていた。例えば、次のようなものである：　女性の洗礼準備、洗礼司式者からの質問に対する適切な回答の指導、司教がこの秘跡を執り行う際の補助、額を除く身体の各部位への塗油、洗礼後の適切な振る舞いの指導、教会内での彼女たちの品行の監督、および司教、長老、助祭に

した。　神の偉大なる司教である聖エピファニオスは、また、無血の犠牲が捧げられる際、聖なる供え物に聖霊が降りる様子を見るという主からの恵みも受けており、通常、聖霊の降臨を目撃するまで、奉献の祈りを終えることはなかった。　ある時、奉献の祈りを唱えていた司教は、そのしるしを見ることができなかった。彼は最初から二度繰り返し祈ったが、その幻は現れなかった。そこで聖人は涙ながらに、この悲痛な現象の原因を明らかにしてくださるよう神に祈った。　すると、左側に立っていたリピド（聖体盤）を捧げる助祭に目を向けると、その顔は黒く、額にはハンセン病の痕が覆っていたことに気づいた[3656]。聖人は彼からリピドを受け取ると、穏やかにこう言った。

「わが子よ、今は神の賜物の聖体拝領を受けてはならない。家に帰りなさい。」

彼が祭壇から去ると、聖人は、捧げられた供え物に聖霊の恵みが降り注ぐのを見た。聖体礼儀の後、聖人は追い出された助祭を呼び寄せ、彼の心に 何か特別な罪はないかと尋ねた。 助祭は、昨夜、妻と交わったことを打ち明けた。そこで聖人は、すべての聖職者を集めてこう言った。

「おお、祭壇の奉仕にふさわしい子らよ、言葉なき肉欲の靴を脱ぎ捨てよ。情欲に縛られたまま神の祭壇に近づいてはならない。聖なる使徒の言葉を聞きなさい。*『妻を持つ者は、持たない者のようにあるべきである』*（Iコリント7:29）。」

それ以来、キリストの聖人エピファニオスは、敬虔な修道士や非の打ち所のない未亡人だけを助祭や司祭に任命し、既婚者は決して認めなかった。そして、清らかな奉仕者たちによって飾られた彼の教会は、美しい花嫁のように輝いていた。

ここまでは、尊者エピファニオスの生涯が、長老の位で永眠したその弟子ヨハネによって記述されている。聖人の生涯に関するその他の部分は、もう一人の弟子であるポルーヴィイによって記されている。彼は次のように書き始めている。

「神に栄光あれ。神は命を与え、御自身を賛美する者を栄光に輝かせられる。神は、その奇跡的な恵みによって、御自分の御使いエピファニオスを栄光に輝かせられた。その奇跡的な御業について、私もその記述者となる恵みにあずかることができたのである。」　私たちの聖なる父エピファニオスの弟子である、祝福された長老ヨハネは、死の床に就くと、私を呼び寄せ、こう言いました。

– ポルーヴィイよ！

「父よ、私に何をお命じになりますか？」と私は尋ねた。するとヨハネはこう答えた。

「我らの父エピファニオスは、神がその聖なる御業を通じて行われた奇跡を文字に記すことを禁じておられる。それゆえ、私が今日まで密かに、彼が成し遂げたすべてのことを書き留めてきたこれらの紙片を受け取れ。そして、これから先、お前が見ることも書き記せ。神は『*お前の寿命は延びる*』　（箴言9:11）と仰せられている。そうすれば、あなたは生涯を通じて、その聖なる方の御許にとどまることになるだろう。私は今、この世のすべての人にとって避けられない旅路へと旅立つ。だから、書くことを怠ってはならない。私は神に促されてこれを記しているのだ……さあ、父に私のところへ来てくれるよう頼んでくれ」と、彼はその後付け加えた。

私は行って、神の司教を呼び寄せた。病人の元へ来ると、彼は言った。

「ヨハネよ、あなたは怠けてしまったな。罪深いエピファニオスのために神に祈ることを。」

「父よ」と病人は反論した。「今こそ、あなたの僕である私のために祈りを捧げる方が、あなたにはふさわしいでしょう。」

病人のために聖職者による祈りが捧げられた後、彼は聖人にこう言った。

「父よ、もう少し近くに寄ってください。」

よる彼女たちとの面談への立ち会い。　さらに、ディアコニッサたちは、慈善や介護を必要とする貧しい人々や病人の世話も担っていた。

[3656] ハンセン病は、最も伝染性が高く、恐ろしく、そして大半が致命的な病気の一つである。通常、この病気は「白」、「黒」、「赤（エレファンティアス）」の3種類に分類される。中でも最も伝染性が高いのは「赤」である。これらの名称は、体に現れる3種類の異なる色の斑点に由来しており、その後に腐敗した痂皮が現れる。

聖人は近づいた。

「父よ、あなたの御手を私の目の上に置き、最後の口づけをしてください。私はもうこの世を去ろうとしていますから」と、死にゆく者は言った。

そして、司教が彼の目に手を置き、口づけをしたその瞬間、彼は主のもとへ息を引き取った。最愛の弟子を深く悼んで涙を流した後、師である司教は彼にふさわしい葬儀を執り行った。

その後、尊者（聖人）は、以前の小さくて非常に老朽化した教会の場所に、新しい教会を建てることを決意した。彼は神に助けを求め、祈りの最中に天からの声を聞いた。その声は助けを約束し、躊躇することなく彼が企てた事業を始めるよう命じていた。主の偽りのない御言葉は、間もなく実現した。　――前述のギリシャ人ドラコンには、長い間病気の息子がいた。父親は息子のために最も腕の良い医師たちを呼び寄せたが、何の役にも立たず、ついには自分まで病気になってしまった。聖人はその家を訪れ、祈りによってまず息子を、そして父親をも癒した。そこでドラコンは信仰を抱き、家族全員と共に洗礼を受け、教会の建設のために五千ズラティスを寄進した。こうして、神の栄光のために、大きく、石造りで美しい教会が建てられた。

同じ町の別の市民、裕福な異教徒シニシオスの唯一の息子である13歳のエウストルギオスが亡くなった。病気によって首が曲がり、そのせいで窒息死してしまったのである。ギリシャ人の富豪の家では、大きな嘆きの声が上がった。それを聞いた隣人のキリスト教徒エルミオスは、亡くなった少年の母親にこう言った。

「奥様、もし偉大なるエピファニオスがここに来れば、彼はあなたの息子をよみがえらせてくれるでしょう。」

彼女は隣人の言葉を信じ、エピファニオスを連れてくるよう彼に頼んだ。エルミオスは神の司教をその家へ招いた。待望の客が入ってくると、女主人は彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「キリストの偉大なる癒し手よ、どうか私たちの子供にあなたの癒しの御業を示し、彼を死からよみがえらせてください。もしそうしてくださるなら、私たち一家は直ちにあなたのキリストのもとへ帰依いたします。」

「もし十字架にかけられた方を信じるなら」と聖人は彼女に言った。「あなたは息子が生きてるのを目にするでしょう。」

「私の心に抱いているのは、ただ彼を信じるということだけです」と彼女は答えた。「私の子が生きているのを見られるでしょうか？」

すると聖人は、亡者の寝床に近づき、右手でその首を撫でながら、彼に向けられた明るい眼差しで、静かにこう言った。

「エウストルギオス！」

少年はたちまち目を開き、ベッドに腰を上げた。この途方もない奇跡を目の当たりにし、家の中にいた者たちは皆、驚きと畏怖の念に打たれた。そして、蘇生した少年の父親は、妻や家族全員と共に、キリストの御名によって洗礼を受け、聖人に三千の金貨を捧げた。しかし、奇跡を行う聖人は彼にこう言った。

「私はそれを求めない。それを教会の建設者たちに届けてくれ。」

こうして、シニシアに新しく建てられた教会は金で華やかに飾られ、聖人の弟子であるポルヴィアが司祭として迎えられた。

ある日、エルサレムからある助祭がキプロス島を訪れ、聖人に、エルサレムの司教ヨハネが金に執着し、貧しい人々を軽蔑している人物であると告げた。ヨハネはかつて、偉大なるイラリオン修道院でエピファニオスと共に生活していた人物であった。　彼は知人である聖人に、貧しい人々への慈悲深い接し方について諭す手紙を書いた。しかし、金に執着するその人物は、神の御心にかなう者の諭しには耳を貸さなかった。数年後、キプロスの大司教は弟子であるポルヴィウスにこう言った。

「さあ、わが子よ、エルサレムへ行って、尊き十字架と主の聖墓に礼拝を捧げよう。礼拝を終えたら、帰ろう。」

こうして彼らはキプロスからケサレア・フィリッポスへ船で渡り、そこからエルサレムへと向かった。そこで聖地を巡礼した後、彼らはヨハネ司教のもとを訪れた。ヨハネはエピファニオスとの再会を大いに喜んだ。キプロスの聖人は彼にこう言った。

「兄弟よ、私に宿を貸してほしい。しばらくここに滞在したいのだ。」

エルサレムの司教は、客の願いを聞き入れた。彼に素晴らしい家を提供すると、毎日食事に招いた。　招待されたエピファニオスは、一方では料理や飲み物と共に運ばれてくる数多くの銀の器を目にし、他方ではヨハネの吝嗇を嘆く多くの貧しい人々の不平を耳にすると、いかにして彼を慈悲の心へと導くか考え始めた。そしてある日、彼は裕福な主人に向かってこう言った。

「ヨハネ父よ、しばらくの間、これらの銀の器を貸してください。キプロスから高名な方々が私のところへ来られるので、彼らを私の家に泊めたいのです。そうすれば、あなたの親切さと、私の安息のために与えてくださったあなたの家の銀の器を、彼らの前で誇示することができます。　これはあなたにとって名誉となるでしょう。なぜなら、訪れた人々は帰路につくと、他の高名な人々に、あなたが私にどれほど大きな愛を示してくれたか、そしてあなたの家の栄光、名誉、富がいかに偉大であるかを語り始めるからです。ですから、この銀器をすべて、ほんの短い間だけ貸してください。私はすぐに感謝の気持ちを込めて、それらをあなたに返します。

ヨハネは、さまざまな銀の器を数多く彼のもとに運んできた。するとエピファニオスは尋ねた。

「父上、もっとお持ちですか？」

「これで十分だ」と、金に目がくらみ、名声を好む男は答えた。「これだけでいい。」

「いいえ」とエピファニオスは言った。「しかし、あなたが持っている最も貴重で最高のものすべてをください。そうすれば、客たちは驚嘆し、あなたには最大の栄光がもたらされるでしょう。」

ヨハネは彼に最高の器を運びながら、こう言った。

「エピファニオス神父様、お望みのものは何でもお取りください。」

聖人は彼から約1500リットル[3657] の銀を受け取り、自分の居室へ持ち帰った。その頃、ローマから銀商人のアステリウスという男が用事でエルサレムにやって来た。聖人は、地元の大司教から授かったその銀を、適正な価格でその商人に売った。アステリウスはそれを買い取ると、自分の宿へと戻っていった。　一方、神の御使いは昼夜を問わず、その売却代金を最後のレプタに至るまで、貧しい人々に配り続けた。数日後、ヨハネはエピファニオスにこう言った。

「父よ、私があなたに預けた銀を返してください。」

「もう少し待ってください、父上」とキプロスの大司教は答えた。「すべてお返しします。もう一度、私の家で客をもてなしたいのです。」

さらに数日が過ぎると、エルサレムの司教は、主の救いの十字架が安置されている教会で、再びその聖人に銀の返還を催促した。

「私に返してください」と彼は言った。「あなたが私から受け取った銀を。」

「もう申し上げました、父上」とエピファニオスは静かに答えた。「すべてお返しします。ただ、もう少しお待ちください。」

その答えを聞いて、ヨハネは怒りに満ち、エピファニオスの服をつかんで強く握りしめ、脅すように言った。

[3657] リトラは、72ゾロトニクに相当する重量単位である。銀製のリトラは最大42ルーブル、金製のリトラは最大506ルーブルの価値があった。

「私の銀を返すまでは、ここから出ることも、座ることも、休むことも許さない。なんと邪悪で狡猾な男だ！ 奪ったものを返せ。教会のものは教会に返せ。」

エピファニオスは、激怒した相手の振る舞いに動揺することはなかった。相変わらず、彼は穏やかな様子だった。一方、激昂したエルサレムの司教は、二時間ほど聖人に執拗に詰め寄った。教会に居合わせた者たちは皆、神の御使いに向けられたその残酷な言葉を聞いて、驚愕した。 しかし、侮辱された聖人は、罵倒する者の抑えきれない怒りと激昂を見て、その顔に息を吹きかけた。すると、その男はたちまち目が見えなくなった。奇跡的な懲罰に思わず恐怖を覚え、他の参列者たちと共に、ヨハネは聖人の前にひれ伏し、視力を取り戻せるよう神に祈ってほしいと懇願した。

「行って、主の尊き十字架に礼拝しなさい」と、神の御心にかなう者はその願いに応えて言った。「そうすれば、視力を取り戻すだろう。」

しかし、罰を受けた男はエピファニオスから離れようとはせず、懇願し続けた。そこで、偉大なる聖人は、神に導かれた口を開き、貪欲な男に貧しさを愛することと施しについて長く説教した。その後、祈りを捧げ、彼に手を置くと、その右目を開かせた。 半ば癒やされた男は、奇跡を行う聖人に左目も見えるようにしてほしいと懇願した。しかし、聖人は彼にこう答えた。

「それは私の仕事ではなく、わが子よ、神の仕事である。神が目を閉ざされたのだから、神が再び開かれるだろう。そうして、あなたが悟りを得るためである。」

この懲らしめを受けて、ヨハネは改心し、貧しい人々に対して慈愛深く、あらゆる行いにおいて義人となった。

エルサレムから自身の司教区へ戻る途中、エピファニオスは二人の道化師に出くわした。彼らは次のようにして彼を嘲笑おうとしていた。遠くから聖人を見かけると、そのうちのひとりは死んだふりをした。もうひとりは、聖人が近づいてくると、彼にこう言った。

「父よ、この死者を訪ね、その裸の体を何か服で覆ってください。」

聖人は、死んだふりをしている者を見つめると、故人のための祈りを捧げるため、東を向いた。祈りを終えると、彼は自分の服を脱ぎ、それで死者を覆い、そのまま自分の道へと進んだ。

聖人が去った後、生きている男は死んだふりをしていた男に言った。

「起きなさい、兄弟。あの愚か者はもう去ってしまった。」

しかし、死んだふりをしていた男は答えない。もう一度呼びかけ、体を揺さぶってみると、彼は本当に死んでいたことがわかった。恐怖に駆られた道化師は、神の司教の後を追って走り出した。偉大な奇跡行者に追いつくと、彼はその足元にひれ伏し、自分の罪を赦してほしいと懇願し、自分が罰した者の上から衣服と死の束縛を取り除いてくれるよう懇願した。

「行け、わが子よ」と聖人は答えた。「その死者を葬りなさい。なぜなら、彼が死ぬ前に、あなたは彼を覆うための衣を私に求めていたのだから。」

キプロスの司教が自身の主教座都市に到着すると、ローマから使者がやって来て、長引く不治の病に苦しむプロクリシア――テオドシウス大帝の娘[3658] であり、アルカディウスとホノリウスの姉妹[3659] で、ある名門のパトリキウスと結婚していた――を癒やしてほしいと懇願した。 皇帝からの使

[3658] テオドシウス大帝は、389年から395年まで東ローマ帝国で、また392年から395年まで西ローマ帝国でも統治した。 彼は392年に独裁者となったことで、異教に決定的な打撃を与えた。テオドシウスは、神々への崇拝を陛下への冒涜と同等の犯罪とみなす法律を公布した。

[3659] 東ローマ皇帝アルカディウスは、テオドシウス大帝の息子であり、父の死（395年）後、いわゆる東ローマ帝国を継承したのに対し、弟のゴノリウスは西ローマ帝国を継承した。377年に生まれ、408年に没した。 彼の治世を通じて、気弱な皇帝を自らの影響下に置く術を知った者たちが国家を統治していた。例えば、治世の初期にはルフィンが国家を統治し、もともと莫大な税負担をさらに増大させ、罰金の数を倍増させ、それによって帝国に恐怖をもたらした。 ルフィンの死後、その地位を宦官エウトロピウスが引き継ぎ、皇后エウドクシアが彼の処刑を勝ち取った（399年）とき、アルカディウスは、当時コンスタンティノープル総主教であった聖ヨハネス・クラマトルスに対して敵対的な態度で知られていた

者の到着の知らせは、地元の由緒ある、かつ非常に裕福な異教徒ファウスティニアヌスの耳にも届いた。彼は聖エピファニオスに対して強い敵意を抱いていた。ファウスティニアヌスは彼らを自宅に招き入れ、毎日もてなした。彼らが滞在している間、彼はほぼ絶え間なく聖人を中傷し続けた。

「なぜ、あなたたちはこの惑わし者である神を信じるのか」と彼は彼らに言った。「なぜ、その空虚な言葉に耳を傾けるのか。彼は偽りの言葉しか語らず、極めて悪しき習俗に染まっているのだ。」

ところが、ある教会の建設現場で、ローマ人たちに付き添われた聖エピファニオスとファウスティニアヌスが偶然顔を合わせる事態となった。建設中の教会に立っていた彼らの目の前で、つまずいた大工が上の方から地面へ転落し、その足で聖人の敵を蹴りつけた。　皆の驚きにも、転んだ大工は全く怪我をせず、すぐに立ち上がった。一方、打撲傷を負ったファウスティニアンは、その場で息絶えてしまった。エピファニオスは彼のところへ歩み寄り、その手を握りながらこう言った。

「立ちなさい、わが子よ。主の御名によって、健やかに家へ帰りなさい。」

すると、死者はたちまち生き返り、立ち上がって家路についた。ファウスティニアヌスの妻は、夫の死と予期せぬ復活を知ると、彼を癒した聖人に1000ズラティスを捧げた。

「これを私に与えるのではなく」と聖人は彼女に言った。「教会の建設に充ててほしい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになるだろう。」

その後、神の御心に適う聖人はローマへ向かった。そこで彼は、祈りと十字の印によってプロクリシアを癒やし、彼女の新生児の息子を蘇らせ、その子と、ホノリウスおよびアルカディウスという二人の王子の両方に洗礼を授けた。　その後、この偉大な奇跡行者は、治癒不能で耐え難い足の病に苦しんでいたテオドシウス大帝自身によって、コンスタンティノープルへ招かれた。聖エピファニオスは、十字の印を一つ描くだけで彼を癒やし、その功績によりテオドシウス大帝から特別な寵愛を受けた。

ある年、キプロス島で大飢饉が起きた。多くの乞食や貧しい人々がそのせいで命を落とした。一方、けちな富豪ファウスティニアヌスは、小麦や大麦、その他の穀物で満たされた数多くの穀物倉を持ちながら、パンを非常に高い値段で売りさばいていた。

「親愛なる友よ」と、ある日聖人は彼に言った。「あなたの穀物倉から小麦を少し分けてください。貧しい人々に食べさせてあげたいのです。そうすれば、私はあなたに借りを負うことになります。」

「お前が信じているイエスに祈れ」と、冷酷な異教徒は悪意に満ちた嘲笑を浮かべて答えた。「お前の友人である貧しい者たちを養うための小麦を、イエスが与えてくれるように。」

しかし、嘲笑として発せられたその言葉は現実のものとなった。聖エピファニオスには、毎晩、聖殉教者たちの墓を訪れ、そこで必要とされるものを授けてくださるよう神に祈るという敬虔な習慣があった。聖エピファニオスは、その祈りに加えて、聖殉教者たちに対し、

妻の影響下に完全に従属することとなった。　アルカディウス帝の治世下、皇帝の勅書を与えられた宣教師たちは、まだ異教徒が居住していた諸州の各地でキリスト教を説いた。

アルカディウスの弟ゴノリウスは、西ローマ皇帝であった。彼の治世の初め、政務のトップには、聡明な政治家であり、西ゴート族、ヴァンダル族、スエビ族、ブルグンド族による帝国への攻撃を幾度も撃退した名将スティリコが立っていた。彼の失脚と処刑後、帝国の情勢は悪化の一途をたどった。 408年、西ゴート族の首領アラリクはローマを包囲し、多額の貢納を強要した。そして410年、彼は都市を制圧し、軍勢に略奪を許した。アラリクの死後、その義弟アタウルフはゴノリウスと和平を結び、その後、西ゴート族はアルプスを越えて撤退した。 ゴノリウス帝の治世下、411年には、迫害の最中に悔い改めた背教者を受け入れたことを理由に教会から分離した分派「ドナティスト」に対する公会議が招集された。彼らによれば、信徒の中に罪人がいる限り、教会は聖なる存在でなくなるというからである。　ゴノリウスの命令により、残っていたすべての異教の神殿は破壊され、異教徒たちは公職から追放された。

主への執り成しを聖なる殉教者たちに願い、常に願いを叶えられていた。そして今、いつものように聖エピファニウスは夜、聖なる殉教者たちの墓へと向かい、そこで涙ながらに、飢えで死にゆく者たちを救うよう慈悲深い神に祈った。祈りの最中、彼はこう告げる声を聞いた。

「エピファニオスよ！ 恐れることなく、ディエウスの[3660]神殿へ行きなさい。そうすれば、扉はあなたの前に開かれ、その中には金と銀があるだろう。それを手に入れて、ファウスティニアヌスからミレットや大麦、その他の穀物を買い、貧しい人々を養いなさい。」

なお、この「ディエの要塞」と呼ばれた神殿は、この国を支配下に置いたキリスト教の君主たちが、もはやそこで神に忌み嫌われる悪魔的な生贄の儀式が行われないよう、王権をもってすべての神殿を閉鎖し封印して以来、閉ざされたままになっていた。　民衆の間には、異教徒たちの間で確固たる信仰として根付いていた噂が広まっていた。すなわち、誰もその神殿に近づいて触れることはできず、もし触れた者は（まるで）その場で突然の死が待っているというのだ。　そして、人々は皆、の偶像崇拝所を遠く迂回して通り過ぎた。とりわけ、悪魔たちは人々を脅かし、さらには、神の御許しにより、異教徒の崇拝者たちに対してと同じような権威を振るうことのできたキリスト教徒たちさえも殺害していたからである。

神の御命令に従順な聖エピファニオスは、直ちにその偶像崇拝の館へと向かい、その扉は彼の目の前でたちまち開かれた。そこで彼は、大量の金と銀を発見した。この奇跡的に手に入れた富を用いて、彼はファウスティニアヌスからパンを買い始めた。　金に目がくらんだ金持ちは、喜んで聖エピファニオスに家にあるすべてのパンの備蓄を売り渡した。それらは、慈悲深い司教の施しによって、貧しい人々や物乞いの家へと届けられた。こうして飢えた人々は食料を得たが、ファウスティニアヌスの裕福な家からは食料が失われ、そこには飢餓が訪れた。　聖人に自分の家のための食料を頼むのが恥ずかしかった金持ちは、友人のロンギヌスを、金と11隻の船を伴ってカラブリアへ送り出した[3661]　。しかし、帰路、パンで満たされた船は、街から100スタディオン離れた場所で、激しい嵐によって予期せず難破してしまった。　この災難を知ったファウスティニアヌスは、深い悲しみに沈み、至高なる神とその聖人を罵った。

「ご覧なさい」と彼は言った。「このキリスト教の魔術師が、私にどんな悪戯を仕掛けているか。彼は陸上でその誘惑によって私の家から食糧を奪っただけでなく、海の上でも悪魔たちを通じて私の船を沈め、私の小麦を台無しにしたのだ。」

その間、荒れ狂う海は、沈んだ穀物をサラミスの海岸に打ち上げていた。それらは貧しい人々に拾い集められた。こうして、詩篇の言葉が実現したのである。「*貧しい人々は苦しんで飢えに耐えているが、主を求める者は、いかなる恵みにおいても欠けることがない*」（詩篇33:11）。

飢えで死にかけようとしていた、罰を受けた金持ちの妻は、聖人に金を送り、その金で家族のためにパンを買ってほしいと頼んだ。すると、聖人はその金を彼女に返送し、こう告げた。

「さあ、必要なだけ、私から無償で受け取ってください。収穫の時期が来たら、その時に返してください。」

その金持ち自身は、聖人に対して恨みを抱いていた気性の荒い助祭ルフィンをそそのかし、聖人を殺害するよう仕向けた。その見返りとして、自身の富と人脈を駆使して、彼を司教の座に就かせる手助けをすると約束したのである。しかし、神は御自身の御使いを、その不信心者の陰謀から守られた。　ルフィンは鋭いナイフを用意し、その先端を上に向けて教会にある司教の座に固定した。その後、彼はその座をいつもの覆いで覆った。これは、礼拝の定刻に聖人がその座に着いた際、致命的な刺し傷を負わせるためであった。　しかし、やがて礼拝の儀式の順序に従い、司教が上の席に着くべき時が訪れた。その席に近づくと、聖エピファニオスは助祭ルフィヌスにこう言った。

[3660] この偶像崇拝の場所は、異教の神ディウ、あるいはゼウスに捧げられていたことから、「ディエウの」と呼ばれていた。

[3661] カラブリア――サロニコス湾にあるポロス島の古称。

「わが子よ、座の覆いを取りなさい。」

しかし、聖師が三度も命令を繰り返したにもかかわらず、ルフィンは聞き入れなかった。そこで聖エピファニオスは自ら覆いを取り除いたが、その際、ナイフが落ちて、その刃が助祭の右足に突き刺さった。

助祭の陰険な企みを悟った聖エピファニオスは、こう言った。

「わが子よ、さらなる不幸に見舞われないよう、その悪巧みをやめなさい。今すぐ聖堂から出て行きなさい。あなたは神の聖餐を受けるにふさわしくないのだから。」

助祭は家に帰ると病に倒れ、三日目に亡くなった。一方、ファウスティニアヌスはまもなく王に対する冒涜の罪で告発され、王によってコンスタンティノープルの牢獄に投獄された。敵をも愛する聖人は、王に囚人の釈放を請願しようとした。　しかし、王は激怒し、聖人に対し、彼に関するいかなる嘆願も禁じた。聖人は黙り込み、しばらくして、牢獄でのファウスティニアヌスの予期せぬ死を悼んだ。夫の死後、ファウスティニアヌスの妻は全財産を教会に寄付し、自身の希望に従って聖人によって助祭婦に叙任された。

聖エピファニオスの司教邸に滞在していた八十人の修道士の中には、サヴィンという助祭がいた。彼は、高潔な生活、知性、そして雄弁な著作を執筆する才能で際立っていた。　彼はとりわけ聖エピファニオスの生涯を記しており、その叙述の中で、聖人の徹夜祈祷、ひざまずく姿勢、そして奇跡について語っている。この修道助祭の類まれな資質を高く評価し、大司教は彼を教会裁判の裁判官に任命した。　ある日、裁判所に、真実を語る金持ちと、虚偽の証言をする貧しい男が現れた。裁判官は貧しい男に同情し、彼を擁護した。裁判の最中、聖師が密かに訪れ、隠れた場所に身を潜めていたが、裁判官が不正な貧しい男を無罪としたのを耳にするやいなや、そこから姿を現した。

「わが子よ」と、大司教は裁判官に言った。「行って、書物を書き、聖書の言葉を熟考し、正しく裁くことを学べ。なぜなら、こう記されているからだ。　*『裁判において不正を行ってはならない。貧しい者を偏愛してはならず、権力者の顔色をうかがってはならない。あなたの隣人を正しく裁きなさい』*（レビ記 19:15）。

それ以来、聖エピファニオスは、自分のもとを訪れるすべての人を常に自ら裁くようになった。

自分の羊の群れを深く慈しむ彼は、言葉と奇跡によって異端者たちを打ち負かした。彼は異端の司教アエティウス[3662]　を口がきけなくし、その6日後に彼は亡くなった。この奇跡を目撃した多くの信奉者たちは、奇跡を行う聖人の足元にひれ伏し、正教会へと改宗した。　さらに、正統信仰の擁護者である彼は、悔い改めなかったすべての異端者について王に報告した。王は彼に、彼らをキプロスから追放する権限を与えた。これらすべてのおかげで、良き羊飼いの霊的な群れは、貪欲な狼たちから守られた。

長年にわたり聖職という重い責務を担い、深き老齢に達した聖エピファニオスは、至福の最期を迎えようとしていた。その直前に、彼は次のような理由でコンスタンティノープルへ向かわなければならなかった。　父テオドシウス大帝の後を継いで東方で統治していたアルカディウス帝の妃エウドクシアは、アレクサンドリア総主教テオフィロス（[3663] ）と共謀し、コンスタンティノープル総主教ヨハネス・クラウディウス（ヨハネス・ザラトゥストス）の追放に同意した上で、狡猾な書簡を用いてエピファニウスをコンスタンティノープルでの公会議に出席させるよう仕向けた。　テオフィロ

[3662] アエティウス（またはアエティオス）は、370年に没したアンティオキアの助祭である。アリウスに続き、神の御子と父なる神が「同質」であることを否定し、それゆえに至聖三位一体の第二位格と第一位格との不平等を公然と主張したアリウス派の指導者であった。

[3663] テオフィロスは386年から412年まで総主教の座に就いていた。

スはその手紙の中で、ヨハネスを、オリゲネス[3664] の思想を共有する異端者であるかのように中傷していた。聖人はその純真さゆえにそれらを信じ、コンスタンティノープルへと向かった。皇帝との謁見の際、皇帝は彼から祝福を受け、彼に「生年は何歳か」と尋ねた。

「六十歳です」と聖エピファニオスは答えた。「私は司教の位を受け、司教職に55年と3ヶ月在任しました。したがって、私の年齢は計115年と3ヶ月となります。」

皇帝は、彼の尊厳に満ちた白髪と神聖な面容を称えた。一方、皇后エウドクシアは聖人を呼び寄せ、こう言った。

「エピファニオス神父、あなたは、ローマ帝国全体が私たちの手に握られていることをご存じでしょう。そこで今日、もしあなたが私の言うことを聞き、私の心の悲しみを癒やし、私が考えていることを行ってくれるなら、私はあなたに教会の全権を授けます。」

「おっしゃってください、わが娘よ」と聖人は答えた。「私たちの力の及ぶ限り、あなたの魂の救いとなることを成し遂げるよう努めます。」

すると、女王は狡猾な手段で聖人を自分の思惑に屈服させようと企み、聖ザラトウストについて次のように語り始めた。

「このヨハネスは、王に反旗を翻し、我々にふさわしい敬意を払わないため、もはや教会を統率し、これほど偉大な位階に就くに値しない者となってしまった。　さらに、多くの者が彼について、昔から異端者であると語っている。そこで我々は公会議を招集し、彼を聖職から追放して、代わりに教会を正しく導き、今後わが王国が平和であるようにできる者を据えることに決めたのだ。

そう言いながら、女王は激しい怒りに震えていた。

「多くの神父たちを公会議に招集してご苦労をかける必要はない」と彼女は続けた。「しかし、父上、あなたの聖なる御裁きにより、彼を教会から追放し、その代わりに神があなたに示される別の人を任命してください。私が、皆があなたの言葉に従うよう手配いたします。」

「わが娘よ」と聖師は答えた。「怒りを抑えて、父の言葉を聞いてほしい。もしヨハネスが、おっしゃる通り異端者であり、かつその異端を悔い改めないならば、彼は総主教の位にふさわしくない。その場合は、お命じの通り彼を処遇するつもりだ。　しかし、もしあなたが、彼があなたを侮辱したというただ一つの罪だけで彼を追放したいと望むのであれば、エピファニオスはそれに同意しないだろう。なぜなら、王には恨みを抱かず、親切で、柔和であり、自分への侮辱を赦すことがふさわしいからだ。あなた方もまた、天に王がおられ、その方からご自身の罪の赦しを願っているのだから。*「だから、あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深くあれ」*（ルカ6:36）。

[3664] オリゲネス（254年、アレクサンドリア教会の著名なキリスト教教師）は、その並外れた知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡と称された。　多くの傑出した教父たちは、オリゲネスの神学著作と功績に対して深い敬意を払っていた。しかしその後、彼は生前にアレクサンドリアで開催された2回の地方公会議で、また死後には543年のコンスタンティノープル地方公会議において、異端者として非難された。　オリゲネスは、自身の非正統的な見解を不変の真理として表明することはなかったものの、キリスト教教会の信仰教義における多くの真理について誤った考えを抱いており、そのため、主要なキリスト教の教義に対する彼の確固たる信念を疑う者もいた。　魂の先在に関する非正統的な教義を展開する中で、彼はキリストについて誤った考えを抱き、神が、神性を理解し、神に似る能力を持つ、同等の尊厳を持つ一定数の霊的存在を創造したと主張した。　これらの被造された霊のうちの一人が、神性に対してこれほどまでに熱烈な愛を注ぎ、神の御言葉と不可分の一体となり、あるいはその被造物としての器となった；　オリゲネスによれば、これこそが、神である御言葉が地上に受肉することを可能にした人間の魂である。というのも、*彼の誤った*見解によれば、神性の直接的な受肉は考えられないからである。神である御言葉の受肉や、世界および人間の創造に関する異端的な見解に固執し、　オリゲネスはキリストの死についても正統的ではない意味で理解し、それを霊界において霊的に繰り返されるものであり、そこで天使たちの解放に作用するものとして描き、また、救いの業において、私たちの本性に与えられた通常の力に過大な作用を帰していた。　オリゲネスは、復活と来世に関する教義のいくつかの点、例えば悪魔も救われるという主張においても誤った考えを持っており、聖書の解釈においても神秘的な意味を過度に誇張して理解し、それによって聖書の歴史的な意味を損なっていた。

この言葉を聞いた後、自尊心の強い女王の怒りはさらに激化した。激しい苛立ちのあまり涙に暮れながら、彼女は怒りを込めてこう言い放った。

「もしあなたがヨハネの追放を妨げるなら、私は偶像の神殿を開き、多くの人々が神から背いて偶像を崇拝し始めるように仕向ける。そうなれば、後の方が最初よりもさらに悪くなるだろう。」

エピファニオスは、彼女の激しい怒りに驚き、こう言った。

「私はその非難から無実である。」

そう言い放つと、彼は王の御殿から出て行った。一方、街中では、ヨハネの追放をめぐってエピファニオスが女王と協議し、彼女と合意に達したという噂が広まっていた。この噂は、最も直接的に関係する人物の耳にも届いた。コンスタンティノープルの聖人は直ちにエピファニオスに次のような手紙を書いた。

「兄弟エピファニオスよ、あなたが私の追放を助言したと聞いた。知っておけ、あなたはもはや自らの座に就くことはないだろう。」

聖エピファニオスはこれに対し、次のように答えた。

「殉教者ヨハネよ、不当な扱いを受けても勝利を収めよ。しかし、あなたもまた、追放されるその地にはたどり着けないだろう。」

そして、二人の予言は的中した。

聖ヨハネを不当に断罪しようとする意図を見抜いた聖エピファニオスは、そのような不法な裁判に加担することを拒んだ。側近たちと共に密かに船に乗り込み、故郷へと戻った。　海を航海している間、老いの衰えを感じ、神のもとへの旅立ちが近づいていることを予感して、彼は弟子たちにこう語りかけました。

「わが子らよ、わたしの戒めを守りなさい。そうすれば、神の愛があなたがたと共にあります。あなたがたも知っている通り、わたしの生涯は多くの苦難に満ちていましたが、わたしはそれらを苦難とは見なさず、常に神にあってそれらを喜びとしてきました。そして神はわたしを見捨てず、あらゆる敵対的な災いからわたしを守ってくださいました。*『神を愛する者には、すべてのことが益となる*」（ローマ8:28）。ある時、愛する者たちよ、私が荒野に住み、敵対する者の策略から私を救い出してくださるよう、キリストなる神に祈っていたところ、突然、神の許しによって多くの悪魔が私に襲いかかってきた。彼らは私を地面に叩きつけ、足をつかんで地面を引きずり回した。　中には私を殴る者もいました。彼らは十日間も私にそうし続け、その後姿を消しました。それ以来、私は生涯一度も彼らを見ることはありませんでした。私を悩ませたのは、邪悪な人々や異端者たちだけでした。私の子供たちよ、注意深くあり、罪人エピファニオスの言葉に耳を傾けてください。財産を望んではなりません。そうすれば、多くの財産があなたに与えられるでしょう。　いかなる人に対しても憎しみを抱くな。そうすれば、神に愛されるだろう。兄弟を中傷してはならない。そうすれば、悪魔の嫉妬に支配されることはない。私が『パナリオン』[3665] で書いた異端を、毒蛇のように避けよ。世俗

[3665] 彼の著作『パナリオン』（薬局、薬箱）は、20のキリスト教以前の異端と80のキリスト教の異端についての解説と反駁をまとめたものである。　異端の糾弾に捧げられたエピファニオスのもう一つの著作は、『アンコラト』（錨）と題されており、この著作では、主にアリウス派、半アリウス派、ドゥホボルツ派、アポリナリウス派の異端者たちに対して、三位一体、受肉、死者の復活、来世に関する正統的な教義が明らかにされている。　聖エピファニウスには、さらに以下の著作がある：a) ユダヤ人の大祭司の胸当てにある12の石について解説した『石について』；b) 『旧約聖書の22人の預言者と新約聖書の3人の預言者、ならびに12人の使徒とキリストの70人の弟子について』――ここには、貴重な口伝による教会史的伝承が数多く含まれている；c) 『（聖書の）重量と測定に関する書』。これには、聖書における測定に関する知識に加え、聖書のギリシャ語訳に関するいくつかの指針が含まれている；d)　『フィジオロガス』（聖書に登場する動物の性質に関する考察）への注釈；e) おそらく12の説教。ただし、その真偽については異論がある。

聖ヨハネス・クラマトリオスの著作は、4世紀から5世紀にかけてすでにキリスト教世界全体で広く知られるようになっていた。それらは王宮で宝物のように大切に保管され、金文字で書き写されていた。　今日まで彼の著作の多くは伝わっていませんが、それでも彼からは、他のどの教父や教会の教師よりも多くの著作が保存されています。ギリシャ語の聖務日

の欲望を忌み嫌い、 、それによって肉体も心も燃え上がるものから身を守れ。 それらはサタンの策略であることを知ってください。なぜなら、たとえ不注意な者であっても、肉体が戦いを挑まなくても、心はやはり悪を夢見ているからです。もし私たちの心が清く、神を心に留めているならば、敵を容易に打ち負かすことができるでしょう。

これらの、そして他にも数多くの霊的な訓示を弟子たちに与えた後、尊師はポルヴィウスに対し、彼がまもなく上フィヴァイダにあるリノキルスクの司教になることを予言した。また、カラベル船乗りたちには、まもなく激しい嵐が訪れると予言し、恐れることなく神に希望を置くよう命じた。そのうちのひとりに、こう言った。

「誘惑してはならない。そうすれば、自らも誘惑されることはない。」

聖人はこれらすべてを、その日の午前11時に語った。ところが、日が沈むと、大嵐が吹き荒れ、それは二日間続き、船に乗っていた者たち全員を大きな恐怖に陥れた。 聖人は死の床で、船と船に乗っているすべての人々の安全を神に祈った。そして三日目に、彼は弟子たちに炭に火をつけ、その上に乳香を載せて神に祈るよう命じた。その後、自らも祈りを捧げると、彼ら全員を抱きしめ、口づけをして、次のような最期の言葉を残した。

「子供たちよ、逃げなさい。エピファニオスは、この世ではもうあなたたちと共にいられないのだから。」

課書によれば、今日まで伝わっている聖ヨハネ・クラマトルスの全著作は1447点、書簡は244通に上ります。 ヨハネス・クラマティスから最も多く残されているのは、説教と教会談話である。聖ヨハネの説教は、その構成の整然さ、思想の深さ、そして内容の多様性によって人々を驚嘆させる。 「他の人々については言うまでもないが」と、聖イシドールは金口ヨハネについてこう記している。「雄弁さで名高いリヴァニウスでさえ、あの著名なヨハネの言葉遣い、その思考の優雅さ、そして論証の力に驚嘆したのだ」。 聖ヨハネス・クロソストモスの説教の中で最も優れたものとして、アンティオキアの民に向けた彫像に関する説教、エウトロピアに関する説教、「貧者について」の説教、首都からの追放および首都への帰還に関する説教、使徒パウロを称える説教が、当然のことながら挙げられている。 その説教の中で、金口聖ヨハネは、キリスト教徒の活動のほぼすべての具体的な事柄について教訓を説いた。さらに、公的な奉仕の全期間を通じて、彼は説教の中で聖書、とりわけ新約聖書を解説した。 金口聖ヨハネの解説的談話は、いずれも二つの部分から成っている。一つは神の言葉のテキストの解説に、もう一つは道徳的な訓戒にそれぞれ割かれている。 聖ヨハネス・クロイスモスによる厳密な教義論的著作は少なく、そのすべてに、信者たちの道徳的改善に対する彼の深い配慮が滲み出ている。後者の種類の著作の中では、『スタギリウスへの書簡』が特筆すべきものであり、そこでは、神の摂理が存在するにもかかわらず、なぜ義人にも苦難が降りかかるのかという問題が論じられている。 また、アノメイ派の異端者たちを糾弾するために述べられた「不可解なるものに関する六つの説教」も注目に値する。彼らは独自の推論に基づいて、父なる神と子なる神との関係を解明しようと試み、神の子は被造物であり、父によって無から創造されたと教えていた。 さらに、聖霊が父から発出するという教義について論じた、ヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）の聖霊に関する著書も注目に値する。 ユダヤ人や異教徒に対する著作では、預言の成就や、人々の心に及ぼすキリスト教の福音宣教の働きを通じて、キリスト教の教えの神性が証明されており、また『ユダヤ人に対する八つの説教』では、ユダヤ教の儀式が廃止されたことが示され、したがって現在それらを行うことは神の御心に反する行為であることを説いている。 聖ヨハネス・クロイスモス（金口）は、現在もその名を冠する特別な典礼形式を制定したことでも著名である。 聖プロクルス――金口ヨハネの弟子であり、後にコンスタンティノープル総主教座の後継者の一人となった――は、この聖人の制定について次のように記しています。「聖バシレイオス（大）は、人々を病人のように扱い、簡略化された形式の典礼を提示しました。 しばらくして、私たちの父であり、金口ヨハネは、一方では善き羊飼いとして羊たちの救いを熱心に顧み、他方では人間の性質の弱さを鑑み、あらゆる悪魔的な口実を根こそぎ取り除くことを決意した。 それゆえ、彼は多くの部分を省略し、極めて簡略化された聖体礼儀を制定した」。ヨハネスによって簡略化された聖体礼儀は、当初、現在のようなすべての聖歌を含んでいたわけではないが、それらは聖体礼儀の本質的な順序を変えるものではなかった。 概して、エピファニオスは非常に博学な人物であり、ヒエロニムスの証言によれば、ヘブライ語、シリア語、ギリシャ語、ラテン語に通じており、「その知識において卓越した牧者」であった。第7回全地公会議は、彼を教会の父であるだけでなく、その教師とも称している。

そう言い終えると、彼は神の御手に息を引き取った[3666] 。彼の死は、悲しみと喜びを結びつけた。亡き師を痛切に悼む弟子たちや船乗りたちは、海上の嵐が突然、完全に収まったことに喜びを覚えた。 その際、聖人から「誘惑してはならない。そうすれば、誘惑されることはない」と言われた船乗りの一人が、好奇心から、エピファニオスが割礼を受けているかどうかを知りたがった。 彼が聖人の尊い遺体を露わにし始めたとき、亡くなった奇跡行者は右足を上げ、その好奇心旺盛な男の顔を激しく蹴りつけたため、男は遺体から遠くへ吹き飛ばされ、息絶えてしまった。 皆が恐怖に包まれたが、船乗りの仲間たちは、罰を受けた男を憐れみ、彼をエピファニオスの足元に横たえた。その遺体が遺体に触れた途端、亡くなった船乗りは蘇った。そして、皆はさらに大きな恐怖に襲われた。サラミンに到着すると、聖人の弟子たちは街中で彼の帰天を告げた。 するとたちまち、四方八方から大勢の人々が泣き叫びながら集まってきた。父の尊い遺体を受け取った孤児となった子供たちは、父が建立した教会へとそれを運び込んだ。聖人の棺の前では、あらゆる病に苦しむ人々に対して数多くの奇跡が起こった。とりわけ、 で、三人の盲人が視力を取り戻した。 十日目に、島中の聖職者、司祭、修道院長、そして数え切れないほどの人々が集まり、聖エピファニオスの尊い遺骸をその教会に栄光をもって埋葬した。彼らは、この世を去った大牧者の功績、奇跡、そして神に霊感を受けた教えを偲び、三位一体の唯一の神を賛美し、 御名に永遠の栄光あれ。アーメン。

コンダク、第4調:

神聖なるエピファニオスとヘルマンという、この驚くべき二人の聖職者を、信徒として当然の義務として称えよう。彼らは不信心な者たちの舌を黙らせ、最も賢明な教義をすべての人に授け、正統に讃える者たちに、永遠の敬虔という偉大な秘跡を歌わせたのである。

5月26日

5月13日（旧暦）

聖殉教者グリケリアと、彼女と共に拷問を受けた獄吏ラオディキアの殉教

5月13日の記念日

不義なるローマ皇帝アントニヌスの治世元年[3667] 、ギリシャを統治していたヘゲモン・サヴィヌスの治世下において、トラキアの都市トラヤノポリスに住むキリスト教徒たちは、毎日自分たちの教会に集まっていた。 そこで彼らは熱心な祈りをもって、神から平和と信者の増加を願い求めていた。当時、神を畏れるキリスト教徒はわずかしかおらず、しかも迫害のため、彼らは深刻な苦難に直面していたからである。 キリスト教徒に対する迫害が引き起こされたのは、異教徒であったアントニヌス皇帝が不浄な偶像に犠牲を捧げ、異教の神々に犠牲を捧げない者はすべて殺害せよという命令を至る所に発したためであった。 この皇帝の命令がフラキアに届くと、イゲモン・サヴィンはこの命令を携えてトラヤノポリスへと向かい、同市の市民に対し、神ディヤ[3668] を称える祝祭に参加すべ

[3666] 聖人は403年4月に亡くなり、5月12日に埋葬された。

[3667] アントニヌス・ピウスは、138年から161年までローマ帝国を統治した。

[3668] ディオス、あるいはゼウス――古代ギリシャの宗教における最高神であり、他の諸神の祖とみなされていた。

き日を指定した。 この祭りは「ランパドフォリア」[3669] 、すなわち聖火の行列と呼ばれ、サヴィンがトラヤノポリスに到着してから3日後に始まることになっていた。

この町には、かつてローマのアンフィパトスであったマカリアの娘、グリケリアという名のキリスト教徒の少女が住んでいた[3670] 。グリケリアは両親と共にローマからこの地に移り住んだが、その後両親を亡くした。ここで彼女はキリストを信じ、キリスト教徒の仲間に加わった。 彼女は毎日、彼らと共に神の教会を訪れ、そこで主イエス・キリストと、神の御子の母として特に深い愛を寄せていたその聖母マリアの両方に、熱心に祈りを捧げた。聖母の無原罪の処女性を模範として、グリケリアは自らを主イエス・キリストの花嫁として捧げた。 彼女はしばしばキリスト教徒たちに次のように説き諭した。

「兄弟たち、姉妹たち、そして父たち、そして私にとってこの世の母の代わりとなってくださるすべての方々よ！ 私の言葉に耳を傾けてください。私たちがどのような王に仕えているか、どのような王の姿を身にまとっているか、そしてどのようなしるしによって自分を守っているかを思い起こしてください。さあ、私たちに永遠の救い が与えられるよう、この王の戒めをあらゆる面で果たすよう努めましょう。その救いは、キリスト教徒としてのすべての義務を誠実かつ勇敢に果たす者にのみ与えられるのです。

すると、キリスト教徒たちは彼女にこう答えました。

「私たちは皆、たとえ今この瞬間であっても、主のために魂を捧げる覚悟ができています。」

それに対し、グリケリアは彼らにこう言った。

「お願いです、私のために主にお祈りください。主が私をも強め、皆さんと共にこの偉業に立ち向かえるように、また、主の御名のために私も苦難に遭うにふさわしい者とされるように。私のために主にお祈りください。主が、天の御殿に留まる、朽ちることのない御自身の花嫁たちの列に、私をも加えられますように。」

そして、キリスト教徒たちは彼女のために祈った。

一方、サヴィナがトラヤノポリスに到着してから三日後、異教の不敬な祭りが始まった。その街に住む異教徒の市民たちは一堂に会し、灯した蝋燭を手に、一斉にディヤの神殿へと向かった。これを見た聖なる乙女グリケリアは、主なる神キリストへの熱意に燃え上がった。胸に十字の印を刻むと、彼女は急いでディヤの神殿へと向かい、異教徒たちの集まりの前に立ち、イゲモンに向かって大声でこう言った。

「尊いイゲモンよ！ 私は今、真の神への犠牲の捧げ物を始めたいと願っています。私の家系は、この町のどの住民よりも高貴なものです。なぜなら、私の父は、栄光あるローマ市のアンフィパトという名誉ある地位に就いていたからです。それゆえ、私が真っ先に神に犠牲を捧げるべきなのです。」

すると、イゲモンは彼女にこう言った。

「しかし、あなたの供物を燃やすためのランプはどこにあるのですか？」

聖グリケリアはこれにこう答えた。

「私のランプは私の額に刻まれています。それは決して消えることなく、真の神に捧げられるあらゆる供物を照らし出します。」

[3669] 古代ギリシャ人にとって、「ランパドフォリア」または「ランパドドロミア」とは、文字通り松明を掲げて走る競技のことを指した。この競技には主に若者たちが参加した。これらの競技は賞品をかけて行われ、火のついた松明や灯火を掲げて所定の距離を走り抜けた若者たちが賞品を獲得した。 ランパドフォリアは、さまざまな宗教的な祭典や祝典と結びついており、通常は光と火の神々（プロメテウス、パナ）や、最高神ゼウスを称えるものであった。

[3670] アンフィパトス – 都市の長。

しかし、イゲモンはグリケリアの言葉を理解できなかった。そこで、彼女に向き直って言った。

「よし。さあ、一番最初に近づいて、犠牲を捧げなさい。」

しかし、聖女はこう言った。

「永遠の神は、煙を立てるランプを焚くことを求めてはおられません。ですから、この忌まわしい煙が見えないよう、皆のランプを消すよう命じてください。そうすれば、私が自分の神に捧げようとしている、汚れのない私の供え物をご覧いただけるでしょう。」

イゲモンはすべてのランプを消すよう命じた。

その時、聖女グリケリアは、民衆全員に見えるように高台に立ち、額を開き、その額に刻まれたキリストの十字架の印を皆に見せた。そして、そこに集まった人々の前で、声を張り上げてこう言った。

「今、私の額に輝く、このまばゆいばかりの灯火が見えますか？」

そして、天に目を上げ、両手を天に差し伸べて、こう言った。

「全能の神よ、御自分のしもべたちによって賛美される方よ、バビロンの炉の中に御自分の三人の若者に現れ、彼らを火から救い出された方（ダニエル書3章）、 獅子の口を封じ（ダニエル書6）、御僕ダニエルを勝利者とし、偶像ビールを打ち砕き[3671] 、蛇を滅ぼし[3672] 、デイレの野で悪魔の像を打ち砕かれた方よ！ （ダニエル書3章）イエス・キリストよ、至聖なる神よ、聖なる小羊よ！お願いいたします、どうか来て、この謙虚なあなたのしもべを助けてください。人の手によって造られたこの偶像を打ち砕き、これらの忌まわしく虚しい悪魔のいけにえを滅ぼしてください。

聖女がこのように神に祈っていると、突然雷鳴が轟き、ディエウスの偶像が地面に倒れ、粉々に砕け散った（それは石で造られていた）。

イゲモンと祭司たちはこれを見て激怒し、民に聖女を石で打ち殺すよう命じた。しかし、聖女に投げつけられた石は彼女に触れることなく、彼女のそばに落ち、まるで要塞のように 聖女の周囲を取り囲み、異教徒たちから彼女を守った。 不敬虔な異教徒たちは、神の力を知らず、聖女を魔女と呼んだ。しかし、彼女は彼らにこう言った。

「私を通して働くキリストの力が、あなたがたの迷いを暴き出します。そして、私の神の助けが、あなたがたが私に企てるあらゆる苦しみを取り除いてくださるでしょう。」

その後、イゲモンは聖女を縛り上げ、牢獄へ連行するよう命じた。また、イゲモンは牢獄の看守たちに対し、聖女を細心の注意を払って監視するよう命じ、こう言った。

「彼女が魔術を使って牢獄から逃げ出さないよう、よく見張れ。そうすれば、彼女は『自分の神が救ってくれた』と言うだろう。それによって、彼女は多くの人々を惑わすかもしれない。」

すると、聖なる乙女は総督にこう言った。

「狂った、不敬虔で、無分別な人よ！ 私が主なる神の戒めに縛られ、その律法に固く結びつけられていることを、あなたは本当に理解していないのですか？私は、この私にとって喜ばしい束縛から自らを解き放つことはできません。それゆえ、私の救い主であるキリストのために、自らの意志で歩み出しているこの苦難の道から逃れることもできないのです。

聖女がこう語り終えると、彼女は牢獄へと送られた。

[3671] ヴィルまたはバアル――バビロニア人の最高神であり、太陽および光そのものを司る神である。バビロンには、彼を称えるために、高い四角錐形の塔のような姿をした巨大な神殿が建てられていた。 その最下層には、寝台と金の食卓が置かれており、祭司たちは毎日、ヴィルのために用意された食物をその上に供えていた。バビロニア人は、ヴィルを、食べたり飲んだりする生ける神だと信じていた。しかし、この欺瞞は預言者ダニエルによって暴かれた（ダニエル書14:1–22）。

[3672] バビロニア人から深く崇められ、ビルと同じ塔の中に鋳造された金の像が安置されていた蛇は、預言者ダニエルによって打ち倒され、塵と化した（ダニエル書14:23–27参照）。

聖女グリケリアが牢獄に収容されている間、キリストの囚人を訪ねたいと願う神の司祭フィロクラトスが彼女の元を訪れた。聖女は彼にこう言った。

「私に十字架の印を授けてください。この印を、あたかも聖油の塗油のように私に授けて、私が私の神であり、あなたが仕える王に喜ばれるよう、私のために祈ってください。また、私が尊き十字架の印に守られて、悪魔の悪意に打ち勝つことができるよう、私のために祈ってください。」

司祭はグリケリアに尊い十字架の印を施し、こう言った。

「キリストの印があなたを助けますように。あなたを御自身の恵みで油注がれるキリストご自身が、あなたにとって霊的な平安となりますように。そうして、あなたが勇敢にその試練に耐え抜くことができますように。」

フィロクラトスは、主によってグリケリアを力づけ、彼女に平安を授けた後、牢獄から出て行った。

翌朝、イゲモン・サヴィンは、聖グリケリアをここで拷問するつもりで、王宮に到着した。彼女を自分の法廷に呼び寄せ、こう言った。

「グリケリアよ、今や、我らの皇帝自身も崇拝し、犠牲を捧げている偉大なる神ディウスに、犠牲を捧げることに同意するか？」

聖女はこう答えた。

「あなたの神が地面に落ちて粉々に砕け散り、自らを救うことさえできなかったというのに、どうして私がその神を崇めたり、犠牲を捧げたりできるでしょうか。私が知っているのは、天にましますただひとりの神だけです。その神こそが、私があなたの不浄な偶像を打ち砕くのを助けてくださったのです。まさにこの神こそを崇め、犠牲を捧げ、その御心に適うべきなのです。」

イゲモンは再び言った。

「苦痛に遭いたくないのなら、犠牲を捧げなさい。」

聖女はこう答えた。

「もしあなたの言うことを聞けば、私の神が私を罰されるでしょう。」

イゲモンは言った。

「では、お前は死にたいのか？」

殉教者はこう答えた。

「私は、この肉体の苦しみによって、心の病を癒したいのです。」

そこでイゲモンは、聖女を拷問台に髪を結んで吊るし、彼女が死ぬまで鉄の爪でその体を削り続けるよう命じた。

聖女が吊るされ、拷問を受けている間、彼女は苦痛を全く感じず、イゲモンにこう言った。

「不敬虔で、あらゆる悪意に満ちた、悪魔の僕よ！　あなたが私に課すすべての拷問は、私にとっては何の意味もありません。なぜなら、私はそれらを全く感じていないからです。私のそばには、私を助けてくださる主であり、私の神であるイエス・キリストがおられます。もっと激しい拷問を用意してください。なぜなら、これらの拷問による痛みを、私は全く感じていないからです。

聖女がそう語っている間、彼女を拷問していた手下たちは力尽きてしまった。イゲモンは、グリケリアのために考案した拷問が聖女によって打ち破られたのを見て、グリケリアを拷問台から降ろし、顔を殴るよう命じた。

殴打されながら、聖女はこう言った。

「私の神は私の光であり、キリストは私の砦です。主は御自分のしもべを慈しみをもって守ってくださいます。」

その後、聖女は天を見上げ、こう言った。

「主よ、どうか私の顔を照らし、この打撃を勇敢に受け止めることができるよう助けてください。主よ、私を強めてください。あなたは真の神であり、迫害者たちの前であなたの至聖なる御名を恐れずに告白するすべての人を、聖霊の宝で豊かにしてくださる方だからです。　あなたは、地上であなたに喜ばれるすべての人を助ける主であり、あなたの聖徒たちを守り護る方です。その聖徒たちを通して、私もまた、真の神であるあなたを知り、私の創造主を愛するようになりました。　今、御名のゆえに奮闘する、この謙虚な御僕である私のお祈りを聞き入れ、悪魔の罠と蛇の口から私を救い出してください。

聖女がこのように語っている間、拷問者たちは容赦なく彼女の口を殴りつけていた。しかし、突然、彼らの間に主の天使が現れ、拷問者たちをひどく恐怖に陥れたため、彼らは皆、死人のように地面に倒れ込んだ。一方、天使を見ることができなかったイゲモンは、聖女にこう言った。

「教えてくれ、グリケリアよ。なぜ王の命令に従わないのだ？」

聖女はこれにこう答えた。

「一体、どの王に従うべきというのですか？」イゲモンは言った。

「ローマの独裁者だ。彼は、先祖から受け継がれたこの古くからの律法――すなわち、我々の神々を崇拝するよう定めた律法――を遵守するよう命じたのだ。」

しかし、聖女はこう言った。

– 私は全能の神に従い、その律法に従う。私は神の律法を守っているからこそ、自らを犠牲として捧げるのだ。それは、かつてアブラハムが自分の息子イサクを神に捧げた（創世記22:1–19）のと同じであり、そのことでアブラハムは真の神に喜ばれた。　この犠牲に対して、神は彼に祝福を授け、彼が多くの民の父となるだろうと告げられた。

イゲモンは言った：

「さあ、ついに私の命じることを実行せよ。さもなければ、惑わされた女のように、凄惨な死を遂げることになるぞ。」

しかし、殉教者はこう答えた。

「キリストは、私たちキリスト教徒の指導者であり、最初の殉教者であり、男性だけでなく女性をも殉教の業へと強めてくださいます。そして、あなたの父である悪魔と戦い、勇敢に奮闘した女性たちには、キリストは輝かしい冠を授けてくださいます。」

その後、イゲモンは殉教者を牢獄へ連行するよう命じ、そこで何日も飢えと渇きで苦しめるよう命じた。

聖女は喜びをもって牢獄へと向かい、神を賛美し続けました。彼女が牢獄の奥の部屋へと入り、その背後で扉が閉ざされると、彼女は次のような言葉で主を賛美し始めました。「主よ、私たちの先祖の神よ、あなたは祝福されます！　あなたは祝福されます、神よ。御自身の戒めを忠実に守る聖徒たちに御自身を知らしめ、ローマから出てきた聖使徒ペトロに御自身を現し[3673]、その敵である魔術師シモンを恥じ入らせ[3674]、ダビデを助け、の下でゴリアテを彼の足元に屈服させられた方（サム

[3673] ここで言及されているのは、聖使徒ペトロの生涯における次の出来事である。その伝記（6月29日の項）によれば、ローマ（死の直前に）で、ローマ当局は彼を死刑に処すために捜索していた。　ローマのキリスト教徒たちの切実な願いを受け、ペトロは敵の迫害から身を隠すことを決意し、その目的のために夜陰に乗じて密かにローマを脱出した。ペトロがすでに城門の近くまで来たとき、主が現れた。ペトロは主を拝んで言った。「主よ！　どこへお出かけになるのですか？」と尋ねた。主はペトロにこう答えられた。「わたしはローマへ行き、再び十字架にかけられるために身を捧げるのだ。」主のこの言葉から、ペトロは主が自分に苦難を課そうとしていることを悟り、ローマへと戻った。そして間もなく、そこで殉教した。

[3674] シモン・魔術師――使徒ペトロと同時代のユダヤ人。サマリアの出身で、その後アレクサンドリアで哲学と魔術を学んだ。魔術の力を備えた魔術師として名声を博した。　シモン・魔術師は、使徒ペトロの宣教活動を幾度となく妨害した

エル記上17:4–51）。最も尊く、最も清き神よ、私のお祈りを聞き入れ、あなたのしもべである私を助けてください。敵の策略と、この不義な支配者の誘惑から私を救い出してください」。

その三日後、イゲモンはトリブーンに言った。「私の指輪を取って、あの魔女が閉じ込められている牢屋の区画に封印を押しなさい」。

トリブーンは直ちにそこへ行き、牢屋の扉に封印を押し、看守たちに、誰も殉教者に食べ物や飲み物を渡さないよう注意深く見張るよう命じた。しかし、神の天使たちは聖なる殉教者に食べ物と飲み物を運び、キリストの花嫁を力づけていた。

それから数日後、イゲモンはヘラクレイアという町へ向かう途中、彼女を連れて行こうと考え、殉教者に会いに牢獄を訪れた。牢獄の扉に自分の封印が押されているのを見て、彼はグリケリアがすでに飢えと渇きで死んだのだと思った。というのも、彼女が牢獄に閉じ込められてからすでに何日も経っていたからである。 しかし、扉を開けて聖女が生き生きと、束縛から解き放たれているのを見、さらにグリケリアの前に置かれた食器（そこには純粋なパンと牛乳があり、杯には水も入っていた）を目にしたとき、 イゲモンはこれらすべてに大いに驚いた。あの呪われた男は、神ご自身が御自分のしもべを養っておられたことを理解できなかったからである。その後、イゲモンは殉教者を牢屋から連れ出し、イラクリオの町へ連れて行くよう命じた[3675] 。聖女は、すべてのことについて主に感謝を捧げ、こう言った。「主なる神よ！ 御自身の真理を知ることを私たちに教え、忠実なしもべたちを顧み、ダニエルが穴の中にいた時に彼に食物を送り[3676] 、預言者エリヤが川のほとりに住んでいた時に彼にも食物を送り（列王記下17:2–6）、迷える者を真理へと導き、盲人の目を開かれる方よ！ 「私のような謙虚なしもべである私をも覚えてくださり、飢餓のさなかに、あなたの数えきれない宝から、その寛大な御手をもって私を養ってくださったことを、感謝いたします」。

そう語りながら、聖女はイラクリオの町へと向かった。一方、イゲモンは先にそこに到着しており、すでにディウス神に捧げられた神殿で犠牲を捧げていた。

一方、イラクリオの町に住むキリスト教徒たちは、トラヤノポリスでキリストのために殉教したグリケリアが自分たちのところへやって来ると知ると、敬虔な司教ドメティオスと共に彼女を出迎えた。 町から三ポプリスほど離れたところで聖女の姿を目にした彼らは、キリストのために苦難を耐え抜いた彼女を大声で称え、司教は皆が聞こえるように神に祈りを捧げ、こう語った。「主イエス・キリストよ、消えることのない光よ、闇の中にいるすべての人々を照らす方よ、 迷える者たちの導き手よ、モーセを海を乾いた地のように渡らせ、ファラオを海に沈めた方（出エジプト記14章）よ、私たちはあなたに祈ります。どうか、このあなたのしもべの導き手となってください。彼女が最後まで勇敢に、あなたの尊く、至聖なる御名を告白できるよう、助けてください！」

その間、聖女は彼女を護衛する兵士たちによって、手錠をかけられたまま街へと連行された。

が、常に彼に打ち負かされた。使徒ペトロとシモン・魔術師との闘いの経緯については、『使徒行伝』8章9～25節および聖使徒ペトロの生涯に関する記述（6月29日の項）を参照のこと。

3675 古代には「イラクリア」という名の都市が約20か所知られているが、ここでは当然、フラキアにあり、プロポンティス（マーブル海）の近くにあったイラクリアを指す。

3676 ある時、ペルシャ王キュロスの治世下で、ダニエルは剣も杖も使わずに、バビロニア人が神として崇めていた大蛇を退治した。そこでバビロニア人たちはダニエルに対して激しく反発し、王に懇願して、ダニエルを堀に投げ込むことを許してもらった。 その穴には7頭のライオンがおり、ダニエルを食い尽くすよう、餌を与えられていなかった。この頃、ユダヤには預言者ハバククがいた。彼は食事を調理し、野原へ持って行き、住民たちに配ろうとした。しかし、そこに天使が現れて言った。*「あなたが持っているその食事を、バビロンのダニエルがいるライオンの穴へ持って行きなさい」*。*「主よ」*とハバククは答えた。*「私はバビロンを見たことがなく、その穴がどこにあるのかも知りません」*。すると天使はハバククの髪の毛をつかんで持ち上げ、バビロンの穴の縁に立たせた。ハバククは叫んだ。*「ダニエル、ダニエル！ 神があなたに送ってくださった食事を召し上がってください」*。ダニエルは答えた。*「神よ、あなたは私を覚えておられ、あなたを愛する者たちを見捨てられませんでした」*。その後、ダニエルは立ち上がり、アバクムが持ってきた食事を食べた（ダニエル書14:29–42）

翌朝、イゲモンは、もし彼女が神々に犠牲を捧げなければ、この殉教者を火刑に処すことを決めた。彼は彼女を裁判の場に呼び出し、こう言った。

「グリケリアよ、我らの神々に犠牲を捧げる気はないのか？」

聖女はこう答えた。

「真の神から与えられた律法には、*『あなたの神、主を試してはならない』*（申命記6:16）と書かれています。ですから、私を説得するのはやめてください。　私はすでに申し上げました。私は全身全霊でキリスト、すなわち私の神であり主である方に帰依し、仕えているのです。そして、あなたが仕える悪魔を拒絶します。　しかし、もし私がキリストと結ばれ、キリストに身を捧げたのであれば、まさか私が、私の神であるキリストを否定し、永遠の命の代わりに死を選ぶなどと思うのですか？　あなたは私に好きなように振る舞うことはできるでしょう。しかし、私は天の恵みを獲得し、手に入れたいと願っているため、この世の虚しいすべての恵みを軽蔑し、これからも軽蔑し続けるでしょう。

聖女が語り終えると、イゲモンは彼女を火の窟に投げ込むよう命じた。

炉が燃え上がったとき、聖女は十字を切って身を守り、こう言った。

「全能の主なる神よ！　あなたが私にこの日、この時を永遠の喜びとして与えてくださったこと、また天使たちと人々の前で私の告白を記してくださったことを、私はあなたを賛美し、あなたの聖なる御名を称えます。　お願いいたします――私の魂の願いを叶えてください。この不義で忌まわしい支配者に、あなたがまことに私の助け主であることを示してください。

この言葉を語り終えるや否や、聖女は炉の中に投げ込まれた。しかし、その瞬間、天から露が降り注ぎ、炉の炎を消し去った。聖女は炉の真ん中に立ち、清らかな子羊のように、

次のように歌いました。「神よ、あなたは聖なる方です！　私のような謙虚なしもべに、天からの助けを送ってくださったあなたは祝福されます。すべての被造物があなたに服従していることを、すべての人が悟りますように。あなたの御心によって、この窯の炎がその力を失ったことを、すべての人が悟りますように」。そう言うと、聖女は無傷のまま窯から出てきた。　一方、イゲモンは、グリケリアが自身の魔術によって火の害を受けなかったのだと考え、彼女の頭から皮を剥ぐよう命じた。イゲモンの家来たちがその命令を実行に移そうとしたとき、聖なる殉教者は神に向かってこう叫んだ。「光を創り出された主なる神よ！　これらの拷問の中にあっても真理が栄えることをお許しくださったあなたよ、不義な総督サヴィヌスに、あなたを堅く信じ、あなたの力を頼る者は、あなたの御名のために受ける拷問を決して恐れることはなく、むしろ、より栄光ある殉教の冠を受けるために、さらなる殉教の偉業を望むことを示してください。　私の頭から皮が剥がされた後、あなたが私の魂の内なる本質を明らかにしてくださったことを、私はあなたを賛美し、感謝いたします。そうして、あなたの光に照らされた私は、今や自分自身についてこう言うことができます。*「私の目を開いてください。そうすれば、あなたの律法の不思議を見ることができます」*（詩編118:18）。

一方、イゲモンは、聖女のこの言葉に自分への侮辱を見出し、彼女を牢獄へ連行するよう命じ、手足を縛らせた上で、裸のまま鋭い石の上に横たえるよう命じた。

真夜中になると、主の天使が牢獄に降りてきた。天使は牢獄を照らし、聖女の束縛を解き、彼女を癒やした。そして、拷問者たちによって剥ぎ取られた頭皮を元通りにしたため、聖女の顔には傷跡が全く見られず、彼女は健康で、生き生きとした表情を浮かべていた。

翌朝、イゲモンは再び聖女を尋問のために呼び出すよう命じた。牢屋の看守ラオディキオスが牢屋の扉を開け、聖女が鎖から解放されているのを見ると、恐怖と戦慄に襲われた。　それがグリケリアだとは思いもよらず、グリケリアが牢獄から脱走したのだと考え、自ら命を絶とうとした（看守がそうしようとしたのは、イゲモンからの罰を非常に恐れていたからである）。しかし、聖女は彼にこう言った。

「自分を傷つけてはならない。私こそがグリケリアなのだから。」

すると、恐怖に駆られた看守は言った。

「どうか私を憐れみ、救ってください。恐怖のあまり死なぬよう。私は、あなたを助けてくださる神を信じていますから。」

すると、聖女は彼にこう言った。

「キリストに従いなさい。そうすれば、あなたも救われるでしょう。」

看守は牢屋から出て、殉教者が縛られていた縄を自ら身にまとい、それを背負ったまま、イゲモンのもとへ向かった。

イゲモンは彼を見ると、こう言った。

「ラオディキウス、一体何をしたのだ？　お前の監視下にあった囚人はどこにいる？」ラオディキウスはこれに対し、こう答えた。

「ほら、彼女があなたの前に立っています。今夜、彼女は神の光に照らされ、神から遣わされた天使によって癒やされ、その鎖から解放されました。私はその鎖を自ら身にまといました。それと同時に、彼女は本来の美しい顔を取り戻し、天使によって傷も完全に癒やされました。」　これらの神の奇跡をすべて目撃し、私は神を信じるようになり、グリケリアの死に共にあずかりたいと願う。

すると、イゲモンは怒りに満ちて言った。

「この忌まわしい者を斬り捨てよ。そうすれば、キリストが彼を助けに来るかどうか、我々は見てやろう！」

剣による斬首の時が近づくと、ラオディキオスは天を仰ぎ見て、大声で叫んだ。

「キリスト教徒の神であり主よ！　御国において、御身の聖なるしもべグリケリアと共に私を数えてください。」

聖グリケリアは彼のために神にこう祈った。「私たちの主イエス・キリストの父よ、死に至る病を癒やし、罪に囚われた人を地獄の束縛から解き放たれた方よ、あなたのしもべ　であるラオディキアをも、悪魔の支配から解き放ってください。　彼が信仰告白の業を最後まで全うできるよう助け、その魂を平安のうちに迎え入れてください」。

ラオディキアは、グリケリアの祈りを聞いて、「アーメン」と言った。

その後、彼は首を刎ねられた。その遺体は敬虔なキリスト教徒たちが密かに運び出し、尊厳をもって埋葬した。

一方、イゲモンはグリケリアに向き直り、こう言った。

「お前の父がローマのアンフィパトであったことは我らも知っているし、母も同様に高貴な家柄であったことも知っている。だが、誰がお前を助けているのか、我らには分からない。お前自身、そのことを語れ。」

聖女はこう答えた。

「私を助けてくださるのは、世界の救い主であり、あらゆる喜びの源であるキリストです。キリストは、牢獄にいる私に食物を送り、私を鎖から解き放ち、あなたが踏みにじった私の顔の美しさを回復してくださったのです。」

その後、イゲモンは聖女を野獣の餌食にするよう命じた。

聖女は、まるで何らかの祝宴に向かうかのように、喜びと楽しみをもって獣たちのもとへと歩みを進めた。獣たちが放たれる場所にたどり着くと、彼女は立ち止まった。するとすぐに、威嚇するように咆哮する大きな雌ライオンがグリケリアのもとへ放たれたが、聖女に近づくと、静かに彼女の足元に横たわり、その足を舐め始めた。　聖女は天を仰ぎ見て、こう言った。「全能の神よ、先祖たちの神よ、慈悲深い神よ、感謝いたします！　すべての人々に御自身の神聖な力を示すために、獣の猛威を鎮めてくださったことを感謝いたします！　また、最も過酷な苦しみさえも、私にとって軽きものにしてくださったことを感謝いたします。神よ、私の祈りを聞き届け、この邪悪な支配者にその行いに応じて報いを下し、私を他の御聖人たちと共に、御恵みの冠から切り離さないでください。」

聖女がこのように祈り終えると、天から声が聞こえてきた。「あなたの祈りを聞き入れた！平安をもって私のところに来なさい！見よ、天国の門があなたのために開かれている！」

まもなく、もう一頭の雌ライオンが放たれ、聖女に近づいて彼女を噛みついたが、聖女の体は雌ライオンに引き裂かれることはなかった。こうして聖女は、その魂を神の御手に委ねた[3677]。一方、獣たちは直ちに檻へと戻っていった。　その同じ時刻、イゲモンは重い病に倒れ、全身が水腫でひどく膨れ上がり、家まで運ばれる間もなく路上で息を引き取った。一方、ドメティウス司教は、聖殉教者グリケリアの苦難に満ちた遺体を運び出し、イラクリア近郊の美しい場所に埋葬した。　その後、聖グリケリアの尊い遺骸からは、[3678]、父と子と聖霊、三位一体において賛美される唯一の神の栄光のために、様々な病を癒やす治癒の聖油が流れ出た。その神に、今、そして常に、世々限りなく、誉れと栄光と礼拝が捧げられる。アーメン。

コンダク、第3調：

処女を愛し、神の母マリアよ、あなたは朽ちることのない処女性を守り抜きました。主への愛に熱心に励み、死に至るまで賢明に苦難に耐え抜きました。このゆえに、殉教の処女よ、キリスト神はあなたに特別な冠を授けられます。

聖殉教者アレクサンドルの殉教

記念日：5月13日

不敬虔なローマ皇帝マクシミアヌスの治世下、ローマ帝国の全土において、キリスト教徒に対する残酷な迫害が繰り広げられた。　百人隊長の一人、異教の神々 を熱心に崇める者は、皇帝の命令により、ローマからほど近い場所、およそ一ポプリスほどの距離に、自らの邪悪な神ディウス[3679] のための神殿を建立した。同時に、すべてのキリスト教徒に対し、異教の神々に犠牲を捧げるとともに、ディウスの神殿の改修のために集まるよう命じられた。　皇帝の使者は至る所を巡り、大声で次のように宣言した。

「聞け、神々の友よ！　明日の朝、皇帝と共にディウス神の神殿に集まらなければならない。」

王の使者のこの呼びかけを聞いた異教徒たちは皆、ディエ神の神殿へ向かうつもりで、翌朝に備えていた。朝になると、異教徒の多くは町で買い物を済ませ、神殿へと向かった。その目的は、ディエ神への礼拝や生け贄を捧げるためでもあったが、買ったものを売るためでもあった。

その頃、ティベリアンという名の、高貴で裕福な男がいた。彼はトリブンの職にあり[3680]、軍司令官フィラクスからその指揮を任された多くの兵士を配下に置いていた。彼はこれらの兵士たちを呼び寄せ、こう言った。

[3677] 聖殉教者の死は、およそ177年に起こった。

[3678] 聖殉教者グリケリアの棺から聖油が流れ出るのを目撃したのは、とりわけマウリキウス皇帝（在位582～602年）であった。　彼の治世中、聖殉教者の墓で次のような奇跡が起こった。イラクリオスの司教は、聖なるミロが流れ出していた銅製の器を銀製のものと交換したいと考え、その目的のためにコンスタンティノープルで銀製の器を購入した。しかし、その器が聖人の棺のそばに置かれると、ミロの流れが止まってしまった。　熱心に祈りを捧げ、器を元の物に戻すと、聖油は再び流れ出した。調べてみると、その銀の器は以前、魔術を営む者の所有物であり、彼によって不敬虔な行いに用いられていたことが判明した。

[3679] マクシミアヌス皇帝は285年から305年まで在位した。

[3680] トリブーンとは、部族または連隊の長のことである。

「聞け、兄弟たちよ！　今日、我々が皇帝と共にディエウスの神殿に参列するよう命じる皇帝の勅令を知っているか？　さあ、準備を整えよ。」

彼がそう話している最中、皇帝がすでにその神殿に到着したという報告が入った。直ちに全員が、皇帝に同席するため、急いで神殿へと向かった。しかし、その兵士の一人、アレクサンドルという名の者は、幼い頃からキリスト教の敬虔さを教え込まれ、神を畏れる者であったため、トリブーンにこう言った。

「天にまします真の神に拝礼しに行くべきだとおっしゃる方が、よほど賢明でしょう。あなたがたが神と呼ぶ者たちは、神などではなく、悪魔に過ぎません。」

ティベリウスは彼に言った。

「今日、我々はすべての神々にではなく、ただディウスという一神にのみ犠牲を捧げるつもりだ。とはいえ、我々には多くの神々がおり、王自身も我々もそれらを崇めているのだが。」

聖アレクサンドロスはこれに対し、次のように答えた。

「あなたが神と呼ぶディウスは、他の諂い深い悪霊たちと同じである。彼らは信者たちを破滅へと誘い込み、忌まわしく不法な行いに惑わす。あなたがたが語るように、あなたがたの神々自身も、そうした行いによって穢されていたのだ。　すなわち、時折、彼らは肉欲に駆られて女性を誘惑し、彼女たちと忌まわしい行いを犯し、大地だけでなく、海や空気までも穢していたのだ[3681]。しかし、神が淫行にふけるのを、誰がいつ聞いたことがあり、あるいは見たことがあるだろうか？　それに対し、私たちの神は、肉眼では見ることのできないが、信仰によってのみ知ることができる神、至聖なる神、全能の神、天と地の創造主である。私たちの神は、あなたがたが不浄な悪魔たちに捧げているような犠牲を自らに求めない。その代わりに、神は私たちに清く、血を流さない犠牲を求めておられる。

アレクサンドルの話を聞き終えると、ティベリアヌスは言った。

「その狂気をやめよ、アレクサンドル！　我らの恩人である神々を冒涜してはならない。王がこれを聞きつけ、我が軍団にそのような神を冒涜する者を在籍させているとして、私に怒りを向けることのないように！」

そう言うと、ティベリアンは王のもとへ向かい、アレクサンドルは自分の家へ帰った。

生贄を捧げる時が来ると、王はその神殿で、忌まわしき神ディウに生贄を捧げ始めた。その時、ティベリアンは王に、アレクサンドルという名の兵士の一人が王の命令に従わず、神ディウに生贄を捧げないばかりか、神々を侮辱し冒涜していると告げた。　王は直ちに彼を呼び出すよう命じ、鉄の足枷をはめて自分の元へ連行するよう命じた。

その時、時刻は正午を過ぎていた[3682]。アレクサンドルは、その頃、自分の寝台に横たわり、眠りについていた。すると突然、眠りの中での幻として主の天使が現れ、こう言った。「アレクサンドルよ！　勇気を出し、強くあれ。あなたはイエス・キリストの名のために多くの苦難に遭うことになるからだ。　すでに、あなたのために少なからぬ苦難が用意されている。兵士たちが、あなたを捕らえるためにすでに追ってきている。しかし、彼らを恐れてはならない。あなたの心　も彼らを恐れてはならない。なぜなら、私はあなたを助けるために遣わされたからだ。さあ、起きて神に祈りなさい。そうすれば、あなたの闘いの間、私は常にあなたと共にいる。」

ベッドから起き上がると、アレクサンドルはダビデの詩篇を歌い始めた。*「至高者の庇の下に住み、全能者の陰に安らぐ者は、主に向かってこう言う。『わが避難所、わが守り、わが神、わが望み』」*（詩篇90:1–2）、そしてその詩篇の残りの言葉を最後まで歌った。その後、家を出ると、アレ

[3681] 聖アレクサンドロスがここで指しているのは、ギリシャ神話における神々の行いを描いた下品で卑猥な物語のことである。古代ギリシャ人の見解によれば、彼らの神々は人間と同じような欠点を持っていた。

[3682] 私たちの暦では、正午12時である。

クサンドルは彼の後を追って来た兵士たちに出くわした。彼らは同じ連隊の仲間たちだったが、聖アレクサンドルを見るや、恐怖のあまり皆地面に倒れ込んだ。聖人の顔は稲妻のように輝いていたからである。しかし、聖人は彼らにこう言った。

「立ちなさい、兄弟たちよ！　何を恐れているのか？」

すると、兵士たちは言った。

「あなたが神の力に包まれているように見えたので、恐怖のあまり地面に倒れてしまいました。」

しかし、聖人は彼らにこう言った。

「よく聞け、兄弟たちよ！天と地の神が、このしもべを訪ねてくださったのだ。だが、恐れることはない。命じられたことを行いなさい。お前たちは、私を縛って王の尋問に引き渡すために遣わされたのだから。」

すると、兵士たちはこう答えた。

「我々は、あなたに何も話さないという取り決めをしていた。一体どこでそれを知ったのか、教えてくれ。」

聖人は答えた。

「私はあなたがたと多くを語るべきではありません。なぜなら、私は天の王が私のために用意してくださった、目前に迫った試練へと急いで向かっているからです。私はローマからビザンティウムへと向かわねばなりません。」

そう言うと、聖人はひざまずき、次のような言葉で主に向かって祈った。「主よ、私たちの先祖の神よ、永遠に賛美され、祝福される方よ！　今、私はあなたに願い、懇願します。どうか、私をあなたの義人たちの御前から引き離さないでください。あなたが私にあなたの聖なる、畏れ多い御名をお示しくださったのですから、あなたのもとへ来る私を拒まないでください。主よ、私の助け手であり、守り手であるあなたよ、あなたの御使いを私のもとへ遣わしてください。そうすれば、その御使いが私を助け、拷問者の前でどう答えるべきかを教えてくれるでしょう。」

聖人が祈りを終えると、兵士たちは彼に手をかけ、鉄の鎖で縛り上げた。そして、彼をマクシミアヌス皇帝のもとへ連行した。一方、聖人の母ピメニアは、息子のアレクサンドルが皇帝の尋問に連行されたことをまだ知らなかった。　聖人は体格がたくましく、背が高く、顔立ちも美しく、若々しかった。というのも、彼は生まれてからまだわずか十八年しか経っていなかったからである。聖人が皇帝の尋問に引き出されると、マクシミアヌスは彼にこう尋ねた。

「お前こそ、私を侮辱する大胆不敵な者か？　上司の命令に従わず、私の偉大なる神ディウスに拝礼することを拒んだ者か？」

聖人はこれにこう答えた。

「私は、天におられる私の神と、その独り子である主イエス・キリスト、そして聖霊を崇拝しています。他の神は知りませんし、告白することもありません。ですから、他の神について私に尋ねないでください。」　そして、あなたの権力など、私は少しも恐れてはいないし、怖くもない。あなたの脅しや、あなたが私に与えるであろう拷問も、私は恐れない。

これを聞いて、マクシミアヌスは大いに激怒し、こう言った。

「お前が信じるその神は、一体何ができるというのだ？」

聖人は答えた。

「私の神は目に見えず、全能の神である。それゆえ、私の神にとって不可能なことは何一つない。」

これに対し、マクシミアヌスは言った。

「人々に十字架にかけられ、殺されて死んだ者が、神であるはずがあるか？」聖人はこう答えた。

– 黙れ、サタンよ。お前は、その汚れた口で、御自身の御意志により十字架刑と死を耐え忍ばれた、わが主イエス・キリストの至聖なる御名を口にするなど、決して許されないのだ！　愚かな者よ！　もしあなたが彼を「十字架にかけられ、死に追いやられた」と言うのなら、なぜ彼が死からよみがえり、多くの死者に命を与えたことについては語らないのか?

マクシミアンは言った。

「お前はまだ非常に若いと見るから、その若さを憐れんでやりたい。しかし、聖人はこう答えた。

「むしろ、あなた自身を憐れみ、悪魔に巻き込まれたその罠から抜け出すよう努めるべきだ。私に関しては、神を味方につけているのだから、いかなる拷問も恐れない。」

マクシミアヌスは言った。

「すでに言った通り、私はお前を赦してやりたい。さあ、近づいて犠牲を捧げよ。そうすれば、お前は常に王宮に留まり、ここでも第一の地位に就くことになるだろう。」

聖人は答えた:

「一体、どの神に拝むよう命じるというのか?」

マクシミアンは答えた:

「偉大なる神ディウにひれ伏し、犠牲を捧げよ。」

聖人は両手を天に向け、次のように祈り始めた。「主イエス・キリストよ！　あなたの謙虚なしもべである私を見捨てないでください。罪深く、ふさわしくない私を助けてください。」

そう祈っていると、聖人は天に目を上げ、天が開かれているのを見た。そして、父の右に座しておられる神の御子をも見た。この幻視により、聖人は大きな霊的な喜びに満たされた。その後、再びマクシミアンに尋ねた。

「どの神に、私が犠牲を捧げることを望むのか?」

マクシミアンは言った。

「偉大なる神ディウに犠牲を捧げよ。」

聖人はこう答えた。

「お前が神と呼ぶその者が、かつては人間であり、しかも放蕩で卑劣な人間であったことを知らないのか。ある時、女への肉欲に駆られて、雄牛の姿に変身し、その魔術で女を惑わせ、汚したではないか?」[3683]

マクシミアンはこれを聞いて笑い、こう言った。

「これは、私たちの神々の力を証明するものです。なぜなら、神々はご自身の望む姿で人々の前に現れるからです。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「忌まわしき者よ！　お前は自らの神々の邪悪で忌まわしい行いを称賛している。それは、お前自身も不浄な行いによって彼らに倣っているからであり、お前には、名誉と王国を授けてくださった真の神を知る気がないからだ。」

マクシミアンは言った。

「王の権力は、私の神々から与えられたものだ。」

聖人は言った。

「私はあなたに驚かされる。自分は賢いと思い込んでいるくせに、自らを滅ぼしているではないか。あなたは生ける不死の神を捨てて、悪霊を信じ、声も魂もない偶像に仕えているのだから。なぜ、あなたの父であるサタンに従うのか。　むしろ、闇から光へと立ち返りなさい。そうすれば、火のゲヘナで永遠に滅びることはないだろう。

[3683] この場合、聖アレクサンドロスが指しているのは、ギリシャ神話における神々の行いに関する物語である。

すると、マクシミアヌスは怒りに満ち、アレクサンドロスをトリブヌス・ティベリウスに引き渡し、聖人を拷問するよう命じた。同時に、マクシミアヌスはティベリウスに対し、アレクサンドロスだけでなく、すべてのキリスト教徒を拷問するよう命じた。その目的のために、彼はトリブヌスをフラキアへ派遣し、至る所でキリスト教徒を迫害するよう命じた。　マクシミアヌスは、アレクサンドロスをビザンティウムまで自分の後ろに従わせるよう命じた。聖アレクサンドロスはこれを聞くと、王にこう言った。

「拷問者よ、私の名を多くの国々に知らしめようとしてくださることに感謝します。主であり私の神が、この聖なる御名のために、地の果てに至るまであらゆる病と苦しみを受け忍ぶことができるよう、私を導いてくださいますように。」

一方、マクシミアヌスは聖人を自分の目の前から退けるよう命じた。トリブヌスのティベリウスは聖人を引き取り、翌朝、聖人を拷問用の木に吊るし、鉄の爪でその体を削り取るよう命じた。アレクサンドルは、拷問の間、ため息一つ漏らさず、ただ天を仰ぎ見て、神に感謝を捧げた。その後、聖人を拷問の木から降ろすと、トリブヌス・ティベリウスは彼を鉄の鎖で縛るよう命じ、兵士たちに彼をフラキアへ連行するよう命じた。

聖アレクサンドロスが兵士たちに連れられてフラキアへ向かっていたその時、主の天使が彼の母ピメニアの夢の中に現れ、こう告げた。「目を覚まし、床から起き上がり、使用人　と家畜を連れて、あなたの息子を追ってフラキアへ行きなさい。　そこへは、キリストの御名のために苦難を受けるよう、あなたの息子が連れて行かれるのだ。そして、彼が亡くなった後は、その尊い遺体を埋葬しなさい」。

祝福されたピメニアは目を覚ますと、悲しんだり泣いたりすることはなく、むしろ息子について大きな霊的な喜びに満たされた。すぐに起き上がり、旅に必要なものをすべて用意すると、彼女は息子が通ったのと同じ道を急いで進んだ。ピメニアはカタルゲネの町でアレクサンドロスに追いついた。

その町に入ると、彼女は息子が、彼を裁くティベリアヌスの前に立たされているのを見た。そして、アレクサンドロスが拷問や苦しめられ始めているのを見て、最愛の息子の偉業に深く喜びを感じたピメニアは、声を張り上げてこう叫んだ。

「至高の神、慈愛に満ちた羊飼いよ、わが子よ、どうかあなたを助けてください！」

ティベリアヌスはその声を聞くと、こう尋ねた。

「その声は誰のものか？」

しかし、その場所の周囲にはあまりにも多くの民衆が立っていたため、誰もその声がどこから聞こえてきたのか答えることができなかった。すると、ティベリアヌスは殉教者にこう言った。

「この忌まわしき者よ、神々に生贄を捧げよ！」

聖人はこう答えた。

「私は神に賛美の捧げ物を捧げることに同意する。」

それに対し、拷問官は言った。

「お前の神は、いかなる犠牲も求めないと言ったではないか？」聖人は答えた。

– 確かに、私の神は、あなたがたが偶像に捧げるような生け贄は求められませんが、神は聖く義なる方であるゆえに、真実と聖さによる生け贄を求めておられます。

すると、ティベリウスは聖人の体をろうそくの火で焼くよう命じ、こう言った。

「さて、その神が私の手から彼を救いに来るかどうか、見てみよう。」

聖人は、火あぶりにされながら、天を仰ぎ見てこう言った。「主イエス・キリストよ、あなたに栄光がありますように。あなたは御使ミカエルをバビロンに遣わし、三人の若者を炉の火から救い出してくださいました（ダニエル書3章）。 主よ、どうか私をもこの痛ましい苦しみから救い出し、

拷問者を恥じ入らせてください。そうすれば、私は詩篇の作者ダビデと共にこう言えるでしょう。『*私たちは火と水の中に入ったが、あなたは私たちを自由へと導き出してくださいました*』（詩篇65:12）。

ティベリウスは、火が殉教者に全く害を与えていないのを見て、大いに恥じ入り、兵士たちにアレクサンドルを縛り、さらに先へと連れて行くよう命じました。一方、聖人の母は、息子が兵士たちによって拷問者から連れ去られるのを見て、兵士たちに息子との面会を許してくれるよう懇願しました。 兵士たちはそれを妨げなかった。聖なる殉教者は、母の姿を見てこう言った。

「母上、ここに来てくださって本当によかった。主が私に示された通り、私が[3684] でその功業を全うするその場所まで、私と共に歩んでください。」

その際、兵士たちの中にはこう言う者もいた。

「アレクサンドルよ、あなたは幸いである。あなたの信仰は偉大であり、キリスト教の神もまた偉大だからだ。あなたはこれほど多くの苦難に耐えてきたにもかかわらず、信仰の告白を少しも揺るがすことはなかった。」

彼らは、ティベリアヌスの命令によって行われた旅の途中で、このように語っていた。

旅人たちが道端に偶然湧き出ている泉にたどり着くと、そこで立ち止まり、食事をとった。同時に、彼らはアレクサンドロスにも一緒に食事をとるよう懇願し始めた。何しろ、彼はすでに十四日間、パンも食べず、水も飲んでいなかったからである。 しかし聖人は、食事を祈りに置き換え、ひざまずいて詩篇を歌い始めた。*「わたしは目を山々に向ける。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは、天と地を造られた主から来る」*（詩篇120:1–2）。 そして、次のように祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、あなたの小羊である私を、汚れのないまま守ってください。そうすれば、私の敵が私のことを喜ぶことはありません。私はあなたの至聖なる御名を知ったからです。 主よ、拷問者の前で私を恥じ入らせないでください。むしろ、あなたの聖なる御使いと御右の手を私の助けとして遣わし、私の守り手、助け手、そして庇護者となってください」。

聖人が祈りを終えると、主の天使が現れてこう言った。「恐れるな、アレクサンドルよ！ 主はあなたの祈りを聞き入れられた。私は神からあなたを助けるために遣わされたのだ」。

天使がこう語っている間、兵士たちは誰かがアレクサンドロスに話しかけているのを耳にしたが、それが誰なのかは見えなかった。そのため、彼らはひどく恐れおののき、恐怖と戦慄のあまり、顔を地面に伏せて倒れ込んだ。そこで、福者アレクサンドロスは彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、何を見たのか。なぜそれほど恐れたのか。」

すると彼らは言った。

「私たちは、あなたの神があなたに語りかける声を聞きました。それゆえ、私たちは恐れおののき、恐怖のあまり地面に倒れ伏したのです。」

兵士たちが聖人にそう話している最中、ティベリアヌスが都市の高官たちに付き添われてその場所に近づいてきた。ティベリアヌスは高官たちに尋ねた。

「この場所は、何という名か？」

彼らは彼にこう答えた。

「ここは『裁きの場』と呼ばれています。」

ティベリアンはこれに対し、こう言った。

「もしここが『裁きの場』であるなら、そこで裁きを行うべきだ。さあ、キリスト教徒のアレクサンドロスを私のところへ連れて来い。」

聖人がティベリアスの前に現れると、ティベリアスは彼にこう言った。

[3684] つまり、ビザンティウムの街まで。

「まさか、お前は今なおその狂気に囚われ、依然として我らの神々に拝礼しようとはしないのか？お前の心が頑なになっていることは分かるが、私はお前を深く憐れんでいる。それゆえ、全宇宙の支配者である神々を崇めるよう、お前を改心させたいのだ。」

殉教者はこれにこう答えた。

「不敬虔な者よ、知性に盲目となった者よ、悪魔の子よ、その父であるサタンに仕える者よ。どうして私を憐れみ、私に慈悲を注ぐことができるのか。あなたの父であるサタンは、誰に対しても慈悲深くなどない。それどころか、彼はすべての人を火のゲヘナに引きずり込み、自分と共に滅ぼそうとしているのだ。」

ティベリアンは言った。

「おお、邪悪で悔い改めない者よ！　よくも私にそんなことを言う勇気があるものだ。私がお前と同等であるかのように、なぜそんな厚かましいことを言うのか？　私がお前を容赦しているからといって、私を侮辱するつもりか？　私の慈愛と憐れみに対して、お前は私をさらに敬い、尊重すべきであり、罵詈雑言で私を貶めるべきではないではないか！」

聖人はこう答えた。

「まことに、お前は父であるサタンに似ている。お前の心は、まるで堅い石のように頑なだからだ。」　この場所が『審判の場』と呼ばれることを、お前は理解していないのか。これは明らかに、まもなく神の公正な裁きが君に下ることを示している。神は生ける者も死せる者もすべてを裁き、各人にその行いに応じて報いを与えられる。その時になって初めて、私が真実を語っていたことを君は知るだろう。　神は、あなたが慈悲もなく私を苦しめていることについて、あなたを裁かれるでしょう。神は、あなたがどれほど残酷に、そして不当に私を苦しめているかをご存知です。しかし、知っておきなさい。これらの苦しみは私に栄光をもたらす一方で、あなたには永遠の滅びをもたらすことになるのです。

その言葉を耳にしたティベリアヌスは、さらに激しい怒りに燃え上がり、地面に鉄の棘を敷き詰め、その上を殉教者を引きずり回すよう命じた。　しかし、聖人はこれほど激しい拷問を受けている間も、まるで全く痛みを感じていないかのように沈黙を守っていた。拷問が目的を果たしていないのを見て、ティベリアヌスはさらに激怒し、四人の兵士に節のある棒で聖人を殴打するよう命じた。拷問の最中、聖人は殴打を受けながら、ティベリアヌスにこう言った。

「ああ、不信心者よ！　お前は私のために、ただこれらの苦痛だけを考案したのか。もっと厳しい苦痛を加えよ。なぜなら、これらの苦痛からは全く痛みを感じないからだ。私の神、キリストが私を助けてくださっているからである。」

これに対し、ティベリアヌスは言った。

「お前の体をバラバラに切り刻み、火の中に投げ込み、灰に散らしてやる。そうすれば、この地上にお前の記憶さえも残らないだろう。そうして、キリストがお前の助けに来て、私の手からお前を救い出すかどうか、見てやろう。」

聖人はこう答えた。

「わがキリストは、たちまちお前を滅ぼされるだろう。お前の体は粉々に砕かれ、骨は地上に散らされる。お前はもはやローマを見ることも、その不義な皇帝の顔を見ることもないだろう。主がお前の記憶をこの地上から消し去られるからだ。　これらすべては、あなたが真の神を知らず、この名誉と権力を与えてくださった方を敬わなかったことに対する罰となるのだ、この呪われた者よ。しかし、もしあなたが神を知っていたなら、天において永遠の命を得ることができたはずだ。　しかし今、あなたは真の神を捨て、　、心の中であなたの父であるサタンを愛してしまった。あなたは彼と共に、火のゲヘナへと投げ込まれるだろう。私は、常に私の主であり救い主である主イエス・キリストを賛美し続ける。主は私をあなたの手から救い出し、御自身の永遠の御国において、御自身の恵みにあずからせてくださるからだ。

その言葉を耳にした拷問官は、怒りと激怒のあまり顔色を変えた。しかし、拷問を止めるよう命じた。

その間、日は暮れかけていた。夜が訪れると、ティベリアスはその場所で夜を明かすことにした。眠りにつくと、彼は夢の中で、剣を手にした恐ろしい姿の神の天使が現れるのを見た。天使は彼に言った。「不義なる者よ！　見よ、私があなたのところに来たのは、あなたが神の僕アレクサンドルを激しい苦しみへと追いやったからだ。知っておけ、私はこの剣であなたを打ち倒すこともできたのだ。しかし、私はまだしばらくの間待つことにする。目を覚ましたら、急いでイリュリアを経由してビザンティウムへ行きなさい。神の僕アレクサンドルの死の時が近づいているからだ。」

ティベリアヌスは恐怖で目を覚ました。恐怖のあまり、全身が震えていた。同行していた顧問たちを呼び寄せ、自分の見た幻について語った。すると彼らはこう言った。

「我々はかねてより、あなたがあの人をこれほど残酷かつ不当に苦しめるのをやめるよう、申し上げたいと思っていました。しかし、そうする勇気はありませんでした。キリスト教の神は偉大であり、神のしもべたちを苦しめる者たちを、消えることのない炎の中で永遠の苦しみへと裁かれると聞いています。」

この言葉を聞いて、ティベリアヌスはさらに大きな恐怖と戦慄に襲われ、直ちに兵士たちに殉教者を先へ連れて行くよう命じた。彼自身はその後ろを歩いた。ティベリアヌスは多くの町を通り過ぎたが、天使の命令に従い、ビザンティウムへ急いでいたため、どの町にも立ち寄らず、立ち止まることもなかった。　しかし、あの夢のような幻影は、その後も何日も彼の頭から離れなかった。そのため、ティベリアヌスは大きな恐怖に駆られ、聖アレクサンドロスに苦痛を与えることを敢えてしなかった。ティベリアヌスがイリュリアを通過し、サルディキアの町に近づいたとき、町の長や貴族たちが彼を出迎えた。　しかし、ティベリアヌスは街に入らず、通り過ぎていった。その街にいたキリスト教徒たちは、ローマからやって来たトリブヌス・ティベリアヌスが殉教者を連れていると聞き、街から出てきた。しかし、それはトリブヌスを出迎えるためではなく、殉教者を見たいがためであった。　殉教者が一人で歩いているのを見て、キリスト教徒たちは彼のところへ近づき、その足元にひれ伏して言った。

「キリストの苦しむ者よ、私たちのために神に祈ってください！」

すると彼は彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、あなたがたも私のために祈ってください。そうすれば、私はキリスト・イエスのために自分の使命を最後まで全うし、その聖なる右の手から、私に約束された冠を受け取るにふさわしい者となれるでしょう。」

その後、殉教者は兵士たちに連れられて、さらに旅を続けた。　クリスラという町を過ぎると、一行はフィリッポポリスから四十ポプリシュ離れた「ヴォノマシイの野」と呼ばれる場所に近づき、そこで宿営した。この頃、ティベリアヌスは、殉教者アレクサンドロスに関して抱いていたあの恐ろしい幻視を、すでに忘れ始めていた。 聖人を呼び出して尋問し、彼はこう尋ねた。

「アレクサンドルよ、まさか今なおその狂気に囚われているというのか？　宇宙を支配する、我らの慈悲深い神々ディウスとアスクレピオス[3685]に、犠牲を捧げる気はないのか？」

聖人はこう答えた。

「正気を失った者よ、サタンの子よ！　私にこれ以上何を聞きたいというのか？　私はすでに、悪魔たちには犠牲を捧げないと告げたではないか。」

ティベリアヌスは言った：

「いや、私は悪魔に捧げ物をしろと説得しているわけではない。ただ、我らの偉大なる神々であるディウとアスクレピオスに捧げ物を捧げてほしいとお願いしているだけだ。」

[3685] アスクレピオスは、古代ギリシャ人にとって医療の神とされていた。

聖人は答えた：

「狂人め！　お前の言うディウスやアスクレピオスが、実は悪霊そのものであることを、本当に理解していないのか。」ティベリアヌスは言った：

「いや、彼らは私の神々だ。そして、私と私の神々に対するこの甚大な冒涜のせいで、お前の名が全土で誹謗されるようにしてやる。」

聖人は答えた：

「私自身が、キリストの御名が私を通して全地で栄光を受けることを願っているのだ。」

すると、ティベリアヌスは傍らに立っていた兵士たちに言った。

「彼を私の前から連れ去れ。私は彼の冒涜に耐えられないからだ。彼をフィリッポポリスへ連れて行き、そこで牢獄に閉じ込めよ。私がその街に到着するまで、彼を牢獄に留めておけ。」

殉教者は、ティベリアンの命令に従い、兵士たちによってフィリッポポリスへ連行され、そこで牢獄に閉じ込められた。

一方、その町の市民たちは、ティベリアヌスがまもなく町に到着することを知ると、彼を出迎えた。町に入ったティベリアヌスは、ディウスとアスクレピオスへの生贄の儀式を行う準備をしていた。　その町に住むキリスト教徒たちは、自分たちの町の牢獄に聖なる殉教者アレクサンドルが収監されていることを知ると、牢獄へと近づき、キリストの殉教者を見られるよう、看守に牢の中へ通してくれるよう懇願した。看守は、自身も神を畏れていたため、彼らを妨げることはしなかった。　牢屋の中に入り、聖人が足枷で縛られているのを見ると、キリスト教徒たちは彼の足元にひれ伏し、その足枷に口づけをしてこう言った。「キリストの受難者よ、私たちを祝福してください。また、私たちの祖国も祝福してください。私たちはキリスト教徒なのですから。　私たちはこの街に住んでいますが、常に大きな恐怖に苛まれています。この街の総督が絶えず私たちを探し回り、拷問によって私たちをキリストから引き離そうとしているからです。しかし、彼はこれまで、私たちをキリストの御名を告白することから引き離すことはできませんでした。神の恵みにより、ここには多くの私たちが集まっています。私たちクリスチャンの中には、この地の最も栄えある著名な市民さえも含まれています。　私たちは、キリストの力が不敬虔なギリシャの信仰に打ち勝ち、やがてこの街全体が一致してキリストの御名を賛美するようになることを願っている。そして、キリストのために苦難に耐えるあなたよ、キリストのために自らの戦いを最後まで貫き通してください」。

一方、ティベリウスは偶像に忌まわしい生贄を捧げながら、牢獄に閉じ込められているアレクサンドルのことを思い出し、市の重臣たちにこう言った。

「諸君もご存じの通り、私は試練のために引き渡されたキリスト教徒をここに連れている。私は様々な拷問を用いて彼に我々の神々への崇拝を強要したが、全く成功しなかった。私の問いかけに対して、彼は非常に無礼に答え、絶えず私や我々の神々を罵倒している。　彼をここに連れて来させよ。もしかすると、彼はここに居合わせる皆を恥じ入り、神々に犠牲を捧げるかもしれない。

直ちにアレクサンドルが連れてこられた。ティベリアヌスはイゲモンの隣に座り、殉教者にこう言った。

「アレクサンドルよ、教えてくれ。お前は今なお、我々の神々に犠牲を捧げることに同意しないのか？この街に住むキリスト教徒は皆、すでにディオスとアスクレピオスに拝礼している。お前だけが我々に抵抗しているのだ。」

すると聖人はこう答えた。

「お前は、お前の父であるサタナと同じように、嘘をついている、忌まわしき者よ。この地のキリスト教徒のうち、誰一人として、お前たちの不敬虔な命令に従った者はいない。」　私に関しては、以前にも言った通り、私はキリスト教徒であり、あなたたちの邪悪な悪魔たちに犠牲を捧げるつもりはない、ということ以外、あなたに何も言うことはない。　今こうして、ここに集まったすべて

の者の前で、私は改めて宣言する。私は天の神の僕であり、私の神であるキリストを決して否定することはない。

ティベリウスは恥じ入り、兵士たちに言った。「彼を鉄の足枷で縛り、私の前に連れて行け。私はまもなく後を追う。」

こうして聖人は、さらなる旅路へと連れ去られた。

シルミエと呼ばれる泉にたどり着くと、殉教者は顔と手を洗った。それから、東の方角に向き直り、こう祈り始めた。「主なる私の神よ、フィリッポポリスにおいて、あなたの至聖なる御名を告白する恵みを私に与えてくださったことを感謝します」。

しかし、兵士たちは彼が祈り終えるのを待たず、旅を続けるよう強いた。

「群衆の場所」（ここでは異教の祭りが行われていた）と呼ばれる場所にたどり着いたとき、ティベリアヌスが旅人たちに追いついた。ティベリアヌスはアレクサンドロスを呼び寄せ、こう言った。

「アレクサンドルよ、私がイゲモンの前で、穏やかにあなたに語りかけ、我らの神々に犠牲を捧げるよう諭したことを知らないのか。しかし、あなたは、これほど選りすぐられた人々の面前で、私の願いを軽んじた。それならば、せめて今こそ私の命令に従えば、苦しみから解放してやろう。」

聖人はこう答えた。

「私が総督の前であなたに言ったことは、どんな場所でも同じように言います。それゆえ、サタンの子よ、悪魔に惑わされた者よ、私がキリストの御名を告白することから、いつの日か私を遠ざけることができるなどとは、決して思うな。」

そこでティベリアンは兵士たちに、地面に四本の杭を打ち込むよう命じ、殉教者を四方に引き伸ばして、その杭に縛り付け、二百回の打撃を加えるよう命じた。殉教者は、自分に加えられる傷を黙って受け入れつつ、主なる神に祈りを捧げていた。　その時、天から声が聞こえてきた。「勇気を出せ、アレクサンドルよ。苦しみをおそれないでよい。それは一時的なものであり、すぐに過ぎ去るからだ。私は常にあなたと共にいる。」

天からの声を聞いたティベリアヌスは大いに恐れをなして、直ちに拷問を中止するよう命じ、その後、旅を続けた。　フィリッポポリスとベレアの間に位置するカラスラという町に着くと、ティベリアンは町に入った。一方、兵士たちはティベリアンと共に町に入ることはせず、町の近くにある木陰で休憩した。時刻は午後六時であった。非常に暑かったため、聖人は兵士たちにこう言った。

「兄弟たちよ、私は喉が渇いてたまらない。」

しかし、兵士たちはこう答えた。

「私たちも喉が渇いていますが、ここでどこから水を手に入れればよいのでしょうか？」聖人は彼らにこう言った。

「ここで少し待っていてくれ。神が、この場所でさえも私たちに水を与えてくださるかもしれないから。」

そう言うと、聖人はひざまずき、次のような言葉で主に祈りました。　「主イエス・キリストよ、かつて荒野で、渇きに苦しむイスラエルの民のために岩から水を湧き出させられた方（出エジプト記17:1–7）、今、あなたのしもべに憐れみ深く目を留め、この場所で私たちに水をお与えください。そうすれば、私と私と共にいる者たちすべての渇きを癒すことができます。　これにより、あなたの聖なる御名が栄光を受けるでしょう。」

聖人がこのように祈ると、突然大地が割れ、樫の木の下から清らかで冷たい泉が湧き出ました。この奇跡を目撃した兵士たちは言いました。

「まことに、キリストの神は偉大である。御自身の忠実なしもべたちの願いを叶えてくださる。」

その後、殉教者と兵士たちはその泉の水を飲み、キリストなる神を賛美した。

その後、かなりの距離を進んだ兵士たちは、アルゾンと呼ばれる川にたどり着いた。長い道のりで皆が疲れ果てていたため、そこで休息をとることになった。アレクサンドロスも休息のために腰を下ろした。そこへティベリアヌスが兵士たちに追いつき、殉教者が座っているのを見て、怒りを込めて兵士たちに言った。

「なぜ、お前たち、忌まわしい者どもは、あの不敬虔な男に座らせているのだ？」

その後、立ち上がって、ヴェレイの町へと向かった。

その町に近づくと、市民たちはティベリアンを敬意を込めて出迎えた。この町には非常に多くのキリスト教徒がおり――住民の半数以上を占めていたが――彼らは異教徒による拷問を恐れ、キリストの御名を告白することを密かに守っていた。トリブーンとは別行動で歩いていたキリストの殉教者を見かけると、彼らは彼の元へ近づき、こう言った。

「喜びなさい、キリストの受難者よ！　勇気を出し、強くあれ。不義な拷問者たちは、私たちの主イエス・キリストの全能の力に決して打ち勝つことはできないのだから。」

その間、ティベリアヌスは殉教者を呼び寄せ、こう言った。

「アレクサンドルよ、実の父の言うこととして私の言葉に耳を傾けよ。今、私と共に我らの神々に犠牲を捧げよ。もしそうすれば、ここに居合わせる者全員の前で約束する。お前を解放してやる。そして、望むなら、私の連隊の指揮官の座に就くこともできる。もし連隊の指揮官になることを望まないなら、お前の望む場所へ行ってよい。」

すると聖人は微笑んで、彼にこう言った。

「ああ、もしあなたが、あなたが私を慰めようとしているその慰めが、私にとってどれほど苦いものかを知っていたら！　なぜなら、あなたのその言葉は、私の魂に大きな苦痛を与えるからだ。しかし、神が私を助けてくださり、あなたの助言に従わないようにしてくださるだろう。私は以前にも何度もあなたに言ったし、今も言うし、もう一度繰り返すが、私はキリスト教徒であり、あなたの悪魔たちにはいけにえを捧げない。」

そしてティベリアンはそこからさらに先へと去っていった。殉教者は鉄の鎖で縛られたまま、彼の後を追った。　彼らは、同じアルゾナ川のほとりにある別の場所へとたどり着いた。その場所はヴェレイから十四ポプリシュの距離にあった。ここには多くの宿屋や旅人を受け入れる家があった。ティベリアンは、ヴェレイの町から多くのキリスト教徒に付き添われて来る殉教者を待ちながら、ここで一晩を過ごした。

兵士たちが殉教者と共にティベリアンがいた場所に到着すると、殉教者はティベリアンに、しばらくの間、自分の神に祈ることを許してほしいと願い出た。ティベリアンはそれを許した。　聖人は、近くに大きなクルミの木があるのを見て、その木に近づき、　その枝の下に立ち、ひざまずいて、次のように神に祈った。「主イエス・キリストよ！　あなたの聖なる天使を遣わし、私の魂をお受け取りください。私の体はすでに疲れ果て、もはやこの苦しみには耐えられません。」

ティベリアンは、殉教者が祈っているのを見て、兵士たちに言った。

「不思議だ。アレクサンドロスはどこでそんな魔法の祈りを学んだのか。彼は私の目の前で育ったのだ。私が自ら彼を戦士に任命したのに、彼が魔法を知っているとは夢にも思わなかった。」

それから、アレクサンドルを呼び寄せ、こう言った。

「アレクサンドルよ、神々に生贄を捧げよ！」

聖人はこう答えた。

「まことに、お前の心は曇っている。私がすでに何度も話したことを、また聞きたがっているのだから。」

この聖人の言葉の後、ティベリアヌスは家来たちに、殉教者の背中に沸騰した油を注ぐよう命じた。しかし、主の天使が殉教者のそばに目に見えない形で現れ、油が入っていた器を打ち砕いた。

その際、油は拷問者の家来たちにかかり、彼らをひどく火傷させた。　ティベリアヌスは、油で火傷を負ったのが殉教者ではなく、自分の家来たちであることを見て、大いに激怒し、四人の兵士に命じて、殉教者をクルミの木の下に縛り付け、容赦なく棒で打ち据えさせた。殴打は、兵士たちが疲れ果てるまで続いた。　拷問者たちが殴打をやめたとき、聖アレクサンドルはこう言った。「主よ！この木を祝福し、それに癒しの力を与えてください。私はあなたの聖なる御名のゆえに、この木の下で苦しみを味わったのですから」。

それ以来、その木の果実や葉には治癒の力が宿り、信仰を持つ者たちを様々な病気や不調から癒やすようになった。

その後、兵士たちは再び殉教者をティベリアンの先頭に立たせて行進させた。アンドリアノポリスを過ぎると、ヴルトデキシオンと呼ばれる場所へと近づいた。　そこで聖人は、殉教者より先にこの地へ到着していた母、至福のピメニアと再会した。最愛の息子を目にした彼女は、泣きじゃくりながら彼の足元にひれ伏した。その後、立ち上がって彼の顔に口づけをした。すると聖人は彼女にこう言った。

「泣かないでください、母よ。私は主を信頼しています。主は翌朝、私がこの業を成し遂げるのを助けてくださるでしょう。」

そこで、ティベリアヌスの兵士たちが追いついた。日はすでに夕暮れに差し掛かっていたため、ティベリアヌスはそこで一晩泊まることにし、眠りについた。夜の第八時[3686]、彼は寝台から起き上がり、ジオンケルと呼ばれる川辺にある宿屋へと向かった。　太陽はすでに昇っていた。ここで旅の疲れを少し癒やした後、ティベリアンは殉教者にこう言った。

「私はすでに君を多くの苦痛にさらしてきたが、それでもなお、君は私の神々を崇拝しようとはしなかった。知っておけ、もし私の命令に従わなければ、今こそ私は君を死に追いやるつもりだ。」

そう言うと、ティベリアンはその場を去った。ビザンティウムに近づき、エリゴネ川沿いに位置するドリジペルの町にたどり着くと、ティベリアンはここで殉教者に対する最終的な裁きを下すことを決め、彼にこう言った。

「アレクサンドルよ、お前の死が目の前にある。どうする？　我々の神々に犠牲を捧げるか、それとも捧げないか。ここで私はお前を殺し、その遺体を川に投げ込み、魚に食い尽くさせるつもりだ。」

すると、聖人は彼にこう答えた。

「もしお前の言ったとおりにしてくれれば、私は大いに感謝する。そうすれば、私はお前の手から早く解放されるからだ。しかし、たとえお前が私を何千回も殺そうとも、私は決して、お前の忌まわしい神々に犠牲を捧げることはない。」

そこで拷問官はアレクサンドロスを死刑に処し、兵士たちに引き渡して、首を切り落とし、その遺体を川に投げ込むよう命じた。その後、彼は旅を続けたが、兵士たちはティベリアヌスの命令を遂行するためにその場に残った。　ここには、キリストの殉教者の最期を見届けたいと願う大勢の人々が集まり、その中には多くのキリスト教徒もいた。聖なる殉教者は、処刑人に目を向け、首を切るのを少し待って、祈る時間を与えてほしいと頼んだ。その際、殉教者は水を求めた。　その光景を見物しに来た群衆の一人が、器を手に取り、川から水を汲んで殉教者の元へ運んだ。聖人はその水で顔と手を洗うと、東の方角に向き直った。そして、聖なる十字架の印で身を守りながら、次のように祈り始めた。「私たちの父たちの神よ、あなたに栄光あれ！　あなたに栄光あれ、アブラハムの神、イサクとヤコブの神よ！　すべての被造物が震え、すべてが礼拝するあなたに栄光あれ。あなたは天と地の創造主だからです！　すべての神、目に見えず朽ちることのない神であるあなたに、セラフィム

[3686] 私たちの暦では、午前2時。

たちは畏れおののき、あなたを見つめることさえできず、絶えずこう叫びます。*「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主！ 全地は主の栄光に満ちている！」*（イザヤ書6:3）。 天を巡る太陽があなたを賛美し、大地とその上のすべてのもの、人と動物、あらゆる息づくものがあなたを讃えます。あなたはまことの神、まことの父、子、そして聖霊であり、永遠に存しておられるからです。　主よ、あなたを畏れる者たち、そしてあなたの至聖なる御名に感謝を捧げる者たちを覚えてください。謙遜で不適格なあなたのしもべである私をも、見捨てないでください。人を愛する主よ」。

その後、聖人はキリスト教徒たちに向き直って言った。

「兄弟たち、そして父たちよ！　私の労苦を覚えておいてください。私は、私たちの主イエス・キリストの御名のために苦難を受けることを厭わず、主が私と他のすべてのキリスト教徒たちに憐れみをお示しくださるよう願ったのです。　知っておいてほしい。私がローマからこの地まで辿った長い道のり――至る所で縄で縛られ、鎖を掛けられ、殴打されながら引きずられ、あらゆる方法で苦しめられた――この過酷な道のりを、私は自分の力ではなく、私たちの主イエス・キリストの助けによって成し遂げたのである。　主イエス・キリストの力によって、私は迫害者ティベリウスも、その手先である悪魔も打ち負かしました。今、私はここから去り、私の主の御前に立つために向かいます。どうか、私のために祈ってください。そうすれば、私は主から憐れみを得ることができるでしょう。

その後、聖人は処刑人にしばらく待ってほしいと頼み、ひざまずいて、次のように神に祈り始めた。「主イエス・キリストよ！　御名のゆえに苦しむこのしもべの声を聞いてください！私の体に恵みをお与えください。そして、それがどこに安置されようとも、至聖なる御名の栄光のために、病める者たちにあらゆる場所で癒やしをもたらすようにしてください」。

するとすぐに、天から声が聞こえ、殉教者の願いを叶えると約束した。

その後、殉教者は兵士たちにこう言った。

「兄弟たちよ！　命じられたことを速やかに実行せよ！」すると、セレスティンという名の処刑人が聖人に言った。

「キリストの殉教者よ！　あなたの神に祈って、この行為が私の罪とならないよう願ってください。私はあなたを殺すよう命じられているのですから。」

聖人は彼にこう言った。

「自分の意志でそうするのではなく、他者の命令に従って行いなさい。命令した者に罪が帰するのだ。あなたは命じられたことを速やかに実行しなさい。私は急いで私の主のもとへ去らなければならないのだから。」

セレスティンは聖人の目を清潔な布で覆い、剣を鞘から抜くと、すでに殉教者に一撃を加えようとしていた。しかし、殉教者の魂を迎えに来た聖なる天使たちを見て、ひどく恐れおののき、どうすればよいか分からずに立ち尽くしてしまった。一方、聖人はまもなく自分の首が斬り落とされるのを待ちながら、処刑人にこう言った。

「兄弟よ、命じられたことを行いなさい。」

しかし、処刑人は答えた。

「神のしもべよ、私は恐れています。あなたのそばに、ある不思議な人々が立っているのが見えるからです。」

そこで聖人は神に向かってこう叫んだ。「主イエス・キリストよ！　この時に、私の戦いを全うさせてください！」

その後、天使たちは聖人から少し離れた。そこで、処刑人セレステインは殉教者の尊い首を切り落としたが、その直ちに、彼の聖なる魂は天使たちの手によって天へと迎え入れられた。天使たち

は、神を賛美する声を上げながら、その魂を天へと昇らせていった。その天使たちの声は、その場所の近くに立っていたすべてのキリスト教徒に聞こえた。

こうして、キリストの聖殉教者アレクサンドルは、その苦難の業を全うした[3687]。一方、その尊い遺体は、拷問者の命令に従い、ティベリアヌスの兵士たちによって川に投げ込まれた。しかし、神の御心により、殉教者の尊い遺体は四匹の犬によって水から引き上げられ、岸辺に運ばれた。犬たちは聖なる遺体を舐め、その傍らに座って、猛禽類や野獣から遺体を守った。やがて、殉教者の母である聖ピメニアがその場所を訪れると、彼女は最愛の息子の苦難に満ちた遺体を抱き上げ、香油を塗り、清らかな布で包み、エリゴネ川のほとりに尊厳をもって埋葬した。殉教者の棺からは、信仰をもって駆けつけたすべての人々に、数え切れないほどの癒しがもたらされた。

ほどなくして、聖なる殉教者は幻の中で母の前に現れ、彼女を慰め、まもなく彼女もまた神の御前に召されることを告げた。今やこの聖なる殉教者は、他の聖なる殉教者たちと共に、神の栄光の御座の前に立ち、人を愛する主に対して私たちのために祈り、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美し、称え、目に見えるもの、目に見えないものを含むすべての被造物によって、今、そして常に、そして世々限りなく、賛美され、称えられています。アーメン。

シナドの主教、私たちの尊い父パヴシカキエの記念日

記念日：5月13日

至福のパヴシカキエの生誕地はアパメア[3688]であり、彼は高貴で気高く、真のキリスト教の敬虔さに熱心な両親の家系に生まれました。幼少期から、彼は厳しい断食や祈り、その他の過酷な修行に身を捧げ、そのために後に修道生活に入った。わずかなパンと水だけで身を養い、祈りを通じて癒しの賜物を得た彼は、肉体の病だけでなく、心の病をも癒やした。こうして、悪霊たちと戦いを繰り広げ、遠隔から悪霊に取り憑かれた者たちから悪霊を追い出し、盲人の視力を回復させ、身が曲がった者をまっすぐにし、その他にも驚くべき奇跡を成し遂げた。このことが広まると、彼はコンスタンティノープル大司教である至福のキリアコス[3689]の耳にも入り、同大司教は彼に司教叙階を授け、シナド教会の司教に任命した[3690]。

司教となった聖パヴシカキオスは、直ちに言葉という投石器[3691]を用いて、自分の羊の群れから教会の狼たち[3692]を追い出し、まるで体の感染した部位のように、言葉という剣で彼らを切り刻み、健康な部位に害を及ぼさないよう、彼らを追い出した。このように熱心に自分の羊の群れを顧み、その救いの業を助ける中で、聖人はコンスタンティノープルへと旅立ち、そこで当時病に冒されていたマウリキウス皇帝を癒やした。その功績に対し、皇帝は金印を添えて、聖人の住む町へ、彼が受けるにふさわしい報酬として1リトラ[3693]の金を送った。聖人はコンスタンティノープルからシナドへ帰路についた際、シロン[3694]に滞在中に、祈りによって地中から泉を湧き出させ、同行者たちは

[3687] 聖殉教者アレクサンドロスの死は、3世紀末か4世紀初頭に起こった。

[3688] アパメアは、シリア南西部のオロンテス川沿いに位置していた。この都市は古代、シリアのアパメア地方の中心都市であり、その名はシリアの支配者セレウコス1世の妻アパメに由来する。

[3689] キリアコスは592年から606年までコンスタンティノープルの総主教を務めた。

[3690] シナド、あるいはシナディは、フリギア北部の都市であり、現在はエスキパル（ガッサフ）近郊の遺跡となっている。

[3691] スリング――石を投げるための手持ちの武器。「言葉のスリング」――言葉の力。

[3692] 「教会の狼」とは、異端者や自由思想家、また不品行な生活を送り、堕落に固執する人々を指す。

[3693] リトラ――72ゾルトニクに相当する重量単位（1ゾルトニク≈4.265グラム）。

[3694] シロン、あるいはギリシャ語の序文によればソロンと呼ばれる人物の居場所は不明である。

そこで渇きを癒した。このように敬虔に、神に喜ばれる生き方をし、多くの人々を救った後、聖パヴシカキオスはこの世を去り、彼が愛した主のもとへ旅立った[3695]。

聖ゲオルギオス・イスポヴェドニクの記念日。

記念日：5月13日

キリストの聖殉教者であり信仰告白者であるゲオルギオスは、コンスタンティノープルで生まれた。　尊いイコンを崇拝し、それらを敬ったため、彼はイコン破壊派に捕らえられ、不敬虔な皇帝テオフィロスのもとに連行された[3696]。皇帝は脅しや説得を用いて、キリストと 聖なるイコンへの崇拝を放棄するよう彼を強要したが、聖人はこれに同意しなかった。　拷問者の卑劣で虚偽に満ちた言葉に憤り、彼はこう言った。「あらゆる真のキリスト教徒は、尊い聖像を崇拝し、敬うべきである。なぜなら、聖像への崇敬は、その原型へと受け継がれるからである」。

このような言葉を述べたため、聖ゲオルギオスは首に縄を巻かれ、悪党のように街中を引きずり回された。その後、牢獄に投獄され、ついには全財産を没収・略奪された上、妻のイリーナと子供たちと共に流刑地に送られた。そこで数々の苦難を乗り越え、彼は喜びをもって主のもとへ旅立った[3697]。

5月27日

5月14日（旧暦）

同日は、キリストのために聖なる狂人となり、1474年に帰天したロストフの奇跡行者、聖イシドールの記念日である。

同日、ペチェルスクの隠遁者であり、後にノヴゴロドの司教となった、1108年に逝去した尊い父ニキタの記念日。

聖殉教者イシドールの受難

記念日：5月14日

デキウス皇帝の治世元年[3698]　、ローマ帝国のすべての地域および諸国に対し、兵士の再調査を行い、彼らを連隊に編成するよう命じる皇帝の勅令が発布された。　この機会に、軍司令官ヌメリウスの船団がヒオス島[3699]に到着し、そこで兵役に適したすべての若者たちを集めることとなった。

当時、ヒオス島には、アレクサンドリア出身の聖イシドールが住んでいた。彼は体も強く、精神もたくましく、信仰においてはキリスト教徒であった。　彼は神に喜ばれる生活を送り、常に断食と善行に励んでいた。彼はこの世の虚しい事柄や不純な快楽とは無縁であり、同様にギリシャ人の不

[3695] 聖パヴシカキオスは606年に死去した。

[3696] ビザンツ皇帝テオフィロス（ミカエル2世の息子であり後継者）は、教育者ヨハネス・グラマティコスの影響を受け、幼少の頃からイコンに対して強い嫌悪感を抱いており、イコン崇拝者たちを激しく迫害したが、彼らを死刑には処さなかった。在位は829年から842年までであった。

[3697] 聖ゲオルギオスの没年は不明である。いずれにせよ、彼はテオフィロス帝の治世中に亡くなったため、9世紀前半の終わり頃であったと考えられる。

[3698] デキオスは249年から251年まで在位した。

[3699] ヒオス島は地中海（その北部）に位置している。

純な行いからも距離を置いていた。このイシドールは、その勇敢さと気概により兵士として登録され、ヌメリウスの連隊に編入された。

ほどなくして、皇帝から新たな命令が下された。それは、すべてのキリスト教徒にローマの神々を崇拝させること、　崇拝しない者に対しては、拷問によって強制することとされた。特に兵士たちを監視するよう命じられており、もしその中にキリスト教徒がいた場合は、古代ローマの慣習に従って、偶像への崇拝と生贄の捧げ物を強いるよう規定されていた。

その頃、ユリウスという名の百人隊長が、ヌメリウス総督のもとへやって来て、祝福されたイシドールがキリスト教徒であると告発した。総督は直ちに聖人を捕らえるよう命じた。聖人がヌメリウスの法廷に引き出されると、総督は彼に尋ねた。

「お前の名は何か？」

「私はイシドールと申します」と聖人は答えた。

総督は言った：

「お前は、我らがデキウス皇帝の命令に従わず、神々に生け贄を捧げることを拒んでいるのか？」

聖イシドールはこれにこう答えた。

「あなたがたの神々とは一体何者なのか。私がキリスト教徒であるのに、どうして彼らに犠牲を捧げなければならないのか。彼らは耳も目も聞こえず、何も感じない偶像ではないのか？」

これに対し、総督は言った。

「おお、邪悪で不敬な冒涜者よ！　まことに、お前は激しい拷問と処刑に値する！」

聖人はこう言った。

「確かに、私はわが神の御名のために苦難を受けるにふさわしい。その至聖なる御名のために、私はあらゆる苦しみ、さらには死さえも喜んで受け入れる。そうすれば、わが主が、私より先にその聖なる御名のために苦難を受けた聖なる殉教者たちと同じ運命に、私をあずからせてくださるだろうからである。しかし、私は、主イエス・キリストご自身が*「わたしを信じる者」*（ヨハネ6:47）、*「たとえ死んでも、生き返る」*（ヨハネ11:25）と仰せになったように、主を信じ、その聖なる御名に望みを置くすべての者が、決して死ぬことはないことを信じ、固く希望している。

「イシドールよ、生き残りたいのなら、神々に生贄を捧げるか、それとも捧げないか？」とヌメリアヌスは言った。

聖人はこう答えた。

「たとえあなたが私を殺したとしても、私の魂に対してはあなたには何の権威もない。だから、好きなように私を苦しめてもよい。私は、真の、生ける神であり主であるイエス・キリストを助け手としているからだ。主は今も私と共にあり、私の死後も私と共にいてくださる。そして私も主と共にいるのだ。」私の体に命の息がある限り、私はその至聖なる御名を告白し続ける。

総督は言った。

「せめて一度だけでも、王の命令に従って犠牲を捧げよ。その後は、好きにすればよい。」

しかし、聖人は答えた。

「不義なる者よ、お前の狡猾さで私を惑わすなどと考えてはならない。　一度でもキリストと自分の神から背を向けた者が、どうしてその忠実な僕と呼べるだろうか。*「小さなことに不忠実な者は、大きなことにも不忠実である」*（ルカ16:10）。しかし、私は主の御心に適わないことを、思いの中でさえ考えることを決して許さない。

総督は言った：

「イシドールよ、お前のためを思って忠告する。私の言うことを聞きなさい。もし私の言うことを聞かなければ、お前を激しい苦痛にさらし、我らの神々の偉大さを告白するまで、お前を苦しめ続けるつもりだ。」

その後、総督は兵士たちに聖人を縛り上げさせ、四人の兵士に容赦なく殴打するよう命じた。

拷問者たちが聖人を殴打しているとき、周囲に集まっていた民衆は彼にこう言った。

「イシドールよ、苦しみの中で生涯を終えたくないのなら、皇帝の意志に従え。」

しかし、聖人はこう答えた。

「私は、永遠に存続される私の神、天の王の御心と御命令に従う。私はこの神を信仰し、崇める。私は神を否定することはなく、審判の日に神に見捨てられることもない。」

拷問の後、拷問官は長い間、甘言や脅しを用いて聖人を偶像崇拝へと誘惑したが、全く成功せず、殉教者からは自分自身や自分の神々に対する罵倒や非難を聞くばかりだった。ついに怒りに満ちて、こう言った。

「お前のその汚らわしい舌を、切り刻んでやる。」

聖人はこう答えた。

「たとえお前が私の舌を切り刻んだとしても、私の口からキリストの御名を告白することを奪うことはできない。」

そして、拷問者の命令により、聖人の舌は切り落とされた。しかし、聖人は舌を切り落とされた後も、真の神であるキリストを賛美しながら、十分に明瞭に語り続けた。一方、総督は恐怖のあまり地面に倒れ込み、声が出なくなった。彼が地面から引き上げられたとき、彼は一言も発することができず、手を振るだけで自分の考えを表現していた。 その後、紙を求め、そこにこう書き記した。

「王の勅令に従わないイシドールを、剣で斬り殺すよう命じる。」

この言葉が殉教者に読み上げられると、彼は喜びのうちにこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、あなたが私にあなたの恵みを奪わなかったことを感謝します！」わが主よ、わが命、わが息よ、あなたを賛美します！　主よ、わが力、わが心の光よ、あなたを讃えます！ 私に舌を与え、絶えずあなたの偉大さを賛美させてくださるあなたを、私は賛美します！

処刑人は殉教者を引き取り、斬首の場へと連れて行った。聖イシドールは喜びと急ぎ足で歩き、まるで犠牲となる子羊のようにその場へと向かった。そして、明るい顔と喜びに満ちた眼差しで天を見上げ、聖人はこう言った。

「聖なる主よ！　御慈悲により、今や私を御国と安息の地にお迎えくださることを、私はあなたを賛美します。」

そして、殉教者の首が斬り落とされることになっていた場所に到着すると、聖人は処刑人に祈りを捧げる許可を求めた。 その後、十分な時間祈りを捧げた後、聖なる首を剣の下に差し出した[3700]。こうして、私たち罪人のために十字架上でその清らかな首を垂れてくださった、神の御子イエス・キリストの御名を告白したために、聖人は斬首されたのである。

斬首後、聖なる殉教者の尊い遺体は、拷問者たちによって埋葬されることなく、犬や野獣の餌として投げ捨てられた。　しかし、聖人の友人の一人であるアモニウスという名の秘密のキリスト教徒が、聖殉教者の遺体を回収し、他の忠実な兄弟たちと共に墓を掘り、イシドールの尊い遺体を、まるで貴重な宝物であるかのように地中に葬った。　このキリスト教徒自身も、イシドールの勇敢な偉業に倣う者であることを示した。ヘレスポント海峡を渡り、キジクで[3701] 、殉教の冠を受けたのである。　聖イシドールの尊い遺骸は、後にエフェソスからここを訪れたミロピエという名の敬虔な女性によって地中から掘り出された。彼女は尊い遺骸に貴重な香油を塗り、清らかな布で包み、それを尊

[3700] 聖殉教者イシドールの死は250年に起こった。

[3701] キジクは、プロポンティス（マーブル海）のアルクトニッセ半島に位置していた。

い場所に安置した。　キリスト教徒への迫害が終息すると、聖殉教者イシドールを称えて教会が建立され、そこでは、キリストの殉教者の聖遺物によって、病める者たちに多種多様な癒しがもたらされた。これは、父と子と聖霊と共に永遠に賛美される、私たちの神キリストの栄光のためである。アーメン。

コンダク、第4調:

聖なる者よ、あなたは神への祈りによって、全宇宙の偉大な統治者として現れた。それゆえ、我らは今日、神に賢き殉教者、栄光に満ちたイシドールを讃える。

私たちの尊き父セラピオン・シンドニトスの生涯

記念日：5月14日

エジプトには、セラピオンという名の老修道士が住んでいました。彼は「シンドニタ」[3702]というあだ名で呼ばれていました。それは、肉体の裸身をただ一枚のマントだけで覆っていたからです。　彼は若い頃から修道生活を送っていた。何の財産も持たず、ケリアさえも持たなかった。彼には住む場所がなく、まるで空の鳥のように暮らしていた。　彼は休息や寝床を求めて家に入ることは決してなかった。身に着けていたのは小さなマント一枚だけで、持っていたのは小さな福音書一冊のみであった。セラピオンはあちこちを歩き回り、夜が更ける場所であればどこでもそこで夜を明かした。　翌朝、眠りから覚めると、彼は同じ場所に留まることはなく、まるで肉体を持たないかのように再び旅を続けた。そのため、多くの人々は彼を「無情な者」と呼んだ。彼が泊まっていた村の近くで、何度も彼に出くわした。人々は、彼が道端に座って泣いているのを見て、こう尋ねた。

「何のために泣いているのですか、老僧よ？」

すると彼は尋ねた人々にこう答えた。

「私の主は、ご自身の富を私に託してくださいました。しかし、私はそれを失ってしまいました。それゆえ、主は私を罰しようとしておられるのです。」

聖人は比喩を用いてこう語ったのである。主とは神を指し、富とは神の御姿に似せて造られ、神の御子の血によって贖われた自身の魂のことである。

その答えを聞いた人々は、その言葉の意味を理解できず、老人が金について話しているのだと思い込んだ。そこで、各自が持てるものを――ある者はパンを、ある者は野菜を――彼に投げ与え、こう言った。

「兄弟よ、せめてこれを受け取ってくれ。失った富については悲しむな。神がそれをあなたに返してくださるかもしれないのだから。」

すると、老人はこう答えた。

「アーメン！　アーメン！」

さて、セラピオンがアレクサンドリアに到着したとき、ある物乞いに遭遇した。その男は全裸で、寒さに震えていた。老人は心の中でこう考えた。

「どうしてこんなことがあり得るのか。自分は断食者であり、キリストの戒めを忠実に守る者だと自負している私が衣服を身にまとっているのに、キリストそのものを体現しているこの乞食が、寒さに苦しんでいるとは。どうして彼を憐れまずにいられようか！」　まことに、もし私が彼の裸身を覆わず、寒さで死なせてしまうなら、私は審判の日に殺人者として裁かれることになるだろう。

[3702] 「シンドニタ」という名称は、尊者セラピオンが粗い亜麻の衣であるシンドンをただ一枚しか身に着けていなかったことから、彼に付けられたものである。

その後、セラピオンはマントを脱ぎ、それを物乞いに与えると、その場所の近くに裸のまま座り、胸には決して手放すことのない聖なる福音書だけを抱いていた。

たまたま、その場所を通りかかった人物が、その老僧を知っていた。セラピオンが裸であるのを見て、通りすがりの人は彼に尋ねた。

「セラピオン師よ！　誰があなたの裸体をさらけ出したのですか？」

セラピオンは聖なる福音書を指さして、こう答えた。

「これこそが、私の裸身をさらけ出したのです。」

その後、この聖人は、借金のせいで牢獄に連行されようとしていたある男に出会った。彼を憐れんだものの、与えるものが何もないため、聖人は持ち歩いていた福音書を売り払い、その代金でその男の借金を返済してやった。その後、セラピオンは時折滞在していた小屋に戻った。　聖人の弟子が、彼が裸であるのを見て、こう尋ねた。

「尊い父よ、あなたのマントはどこにあるのですか？」

老人は答えた。

「私はそれを、その代わりにもっとずっと良いものが手に入る場所へ送ったのだ。」

弟子が再び言った。

「では、小福音書はどこにあるのですか？」

老人は答えた。

「子よ、それ（福音書）は毎日、私にこう言っていたのだ。*『あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい』*（マタイ19:21）、そうして最後の審判の日にそれを手に入れるために。私はその言葉に従い、それが勧める通りにした。　私は財産を売り払い、その代金を困っている人々に与えた。それは、聖なる福音に従ったことに対して、私たちの神、イエス・キリストの御恵みを勝ち取るためであった。

しばらくして、知人の一人が、その尊者に対し、体の裸を覆うことができるよう、古くて薄っぺらなマントを贈った。

この物欲のない老修道士は、ある時ギリシャを訪れ、アテネに三日間滞在した。彼はひどく空腹だったが、誰も彼に何も与えてくれなかったため、誰からもパン一片すら得ることができず、またパンを買うお金もなかった。　キリストの御言葉に従い、彼は決して硬貨も、金入れも、衣服も持ち歩かなかった（マタイ10:9–10）。ただ、自身の裸身を覆うための薄っぺらなマントだけは例外であった。 アテネに滞在して4日目、セラピオンはひどく空腹になった。彼は街の高台に立ち、泣きながら大声で叫び始めた。

「アテネの人々よ！　私を助けてください！」

すると、哲学者や市の指導者たちが彼のもとに近づき、こう尋ねた。

「老いぼれよ、どこから来たのか？　どんな悲しみを抱えているのか？」

すると彼はこう答えた。

「私はエジプトの出身だ。故郷を離れたとき、すぐに三つの借金に陥ってしまった。すなわち、私からは何も取り立てられない二人の貸し手が残ったが、三番目の貸し手は今もなお私を放っておかず、借金の返済を要求して私を苦しめているのだ。」

すると、哲学者たちは彼に尋ねた。

「その債権者たちは一体誰なのか。そして、誰があなたを苦しめているのか。教えてくれれば、私たちが助けてあげよう。」

すると、老人は彼らにこう言った。

「若い頃から、肉欲、金銭への執着、そして大食への情熱に悩まされてきました。そのうち二つからはすでに解放され、もはや私を悩ませることはありません。なぜなら、私は肉欲を感じないからです。また、 な財産や富も持ち合わせていません。 しかし、食欲だけは私を離れない。もう四日

も、口に何も入れていないのだ。それゆえ、食欲は私を離さず、私を悩ませ、いつものように満たされることを求めているのだ。

哲学者たちの中には、彼が自分を騙しているのではないかと疑った者もおり、彼に金貨を一枚渡したが、彼がどうするかを遠くから観察していた。

老人はその金貨を受け取ると、急いでパン屋のもとへ行き、金貨を彼らの前に置くと、パンを一つ取ってその場を去り、それ以来、その町には二度と現れなかった。そこで哲学者たちは、この老人が確かに徳の高い人物であることを確信した。　彼らはパン屋のもとへ行き、老人が買ったパンの代金に相当する硬貨を彼らに渡し、金貨は自分たちで手元に残した。

至福のセラピオンは、ラケダイモンにやって来て[3703]　、その地の都市長の一人がマニ教徒[3704]でありながら、同時に徳のある生活を送っていることを知ると、彼の元へ行き、自らを奴隷として売り渡した。　二年後、神の恵みにより、セラピオンは彼を説得して異端を捨てさせ、その結果、彼は家族全員と共に正教会の聖なる教会に加わった。すると、この地の者たちは皆、この長老を単なる忠実な奴隷としてではなく、実の父のように愛し、深く敬い、異端からの救いを喜び、神を賛美した。一方、その長老は、人々の魂の救いのために必要だと考えただけの期間をそこで過ごし、彼らから受け取った金銭を返した後、いつものように多くの国や都市を巡りながら、その地を去った。

この長老については、彼がまだ若者の頃、あるギリシャ人の道化師に二十シルバーで身を売り、その金を蓄えながら、そのギリシャ人の元で暮らしていたが、やがて彼とその一家全員をキリスト・神へと改宗させたという話も伝えられている。　このようなことが起きたのは、道化師が、自分の奴隷が毎日絶えず断食に励み、パンと水を口にするのは夕方にわずかな量だけであるのを見ていたからである。また、夜にはいつも寝床から起き上がり、涙を流しながら神に祈っていた。　これらすべてを目撃したスコモロフは心を打たれ、真の神であるキリストを信じ、洗礼を受けた。そして、彼に続いてその妻と家族全員が洗礼を受けた。その後、そのギリシャ人はセラピオンにこう言った。

「行け、兄弟よ。あなたが私たちを悪魔の奴隷状態から解放してくれたように、私たちもあなたをその奴隷状態から解放したいのだ。」

すると彼は彼らにこう言った。

「私の神があなた方に救いを授けてくださったのだから、私の秘密を明かそう。私は奴隷ではなく、自由なエジプト人だった。しかし、あなた方が迷い、滅びの瀬戸際にいるのを見て、あなた方を憐れみ、神の助けによってあなた方を救いの道へと導くために、自ら進んであなた方に奴隷として身を売ったのだ。　しかし、あなたがたはすでにその道に導かれたのだから、銀を取り戻してください。私は、他の人々の救いのために尽力してまいります。

しかし、彼らは長い間彼に懇願して言った。

「私たちはあなたを、私たちの父であり主として敬う用意があります。ですから、これからは私たちの主となってください。私たちはあなたの奴隷となります。どうか私たちのもとを去らないでください！」

しかし、どう説得しても、彼をその場に留まらせることはできなかった。さらに彼らは、その老人から銀貨を受け取ることを拒み、こう言った。

[3703] ラケデモニア、あるいはラコニアは、ペロポネソス半島の南東部に位置し、北はアルゴリダとアルカディア、東はミルタ海、南はラコニア湾（あるいはヒフェアトス湾）、西はメッシニアと接していた。

[3704] マニ教――キリスト教の教義とゾロアスター教の原理が混ざり合った異端の偽教義である。マニ教の創始者は、ペルシアの魔術師マネスであった。マネスは、太古の昔から「善」と「悪」という二つの独立した王国が存在し、それらが絶えず互いに争っている、と説いた。　また、マネスの教えによれば、人間もまた「光」と「闇」という二つの要素が混ざり合って構成されており、いわば「善の魂」と「悪の魂」という二つの魂を持ち、それらが絶えず互いに争っている。マニ教徒たちは生活において極めて禁欲的であり、独身生活と絶え間ない断食を説いた。マニ教は3世紀から4世紀にかけてかなり広く普及していた。

「誠実な父よ、これを貧しい人々に分け与えてください。私たちにとっては、あなたが私たちを救いの道へと導いてくださったことだけで十分です。」

しかし、神の人は彼らにこう答えました。

「あなた方自身、自分たちの持ち物を施すことはできますが、私は他人の銀貨を貧しい人々に施すことはできません。」

彼らは再び、せめて一年後には訪ねてきてほしいと懇願した。その後、聖人はそこから別の国へと去っていった。

ある日、アレクサンドリアからローマへ向かう船に出会ったセラピオンは、ローマへ行きたいと願い、その船に乗り込んだ。しかし、船乗りたちは岸を離れてから、その長老に運賃を支払ったかどうか尋ねようとはしなかった。　彼らは互いに、誰かがその長老から金や品物を受け取ったのではないかと疑っていた。彼は非常に粗末なマントを身にまとっているのを見ていたにもかかわらず、運賃を支払うだけの金はあるだろうと考えていたのだ。

船乗りたちが岸から約五百スタディオンほど沖に出ると、夕方に食事をとった。しかし、老人が食事をとっていないのを見て、彼らはその日、老人が断食をしているのだと思った。　二日目、三日目も同様の様子を見て、なぜ老人が食事をとらないのか理解できず、海で風邪をひき、海風に苦しんでいるのだと考えた。四日目、五日目になっても老人が食事をとらないのを見て、彼らは彼に尋ねた。

「おい、おじさん！　なぜ何も食べないんだ？」

すると、彼はこう答えた。

「食べるものがないから、食べていないのだ。」

船員たちは、誰がその男の荷物を船に積み込んだのかについて話し合い、彼が運賃を支払っていないことを知ると、尊者に対して不平を言い始め、怒りを込めてこう言った。

「何も持たずに、なぜここに入ったんだ？ ここで何を食べるつもりだ？ 運賃はどうやって払うつもりだ？」

すると、長老は彼らにこう答えた。

「ご覧の通り、このぼろ服以外、私は何も持っていません。もし私を乗せたくなければ、私を元の場所まで連れ戻してください。私を拾った場所へ戻してください。」

しかし、船乗りたちは老人に言った。

「たとえお前一人を乗せるために、百枚の金貨をくれたとしても、我々は引き返すつもりはない。ましてや、今は追い風が吹いているのだから。」

そして、神の御名において、老人を船に乗せ、食事を与えた。

一方、その聖人はローマに到着すると、敬虔な生活を送っていると聞いた市民たちの家を一つひとつ訪ね歩いた。　彼らと語り合う中で、彼は霊的な恵みを得た。このために彼は旅を続け、霊的な富を集め、それによって永遠の安息における天の恵みを手に入れようとしたのである。そして彼は、私たちの主イエス・キリストの恵みによって、その恵みを得た。主イエス・キリストに、世々限りなく栄光がありますように。アーメン[3705]。

聖殉教者マクシムスの受難

記念日：5月14日

キリストの聖殉教者マクシムは、心に神への熱意を抱いていたが、ある日、偶像崇拝者たちが自ら偶像に仕えるだけでなく、他の人々をもそれに誘い込み、異教の神殿にひれ伏させるよう強いて

[3705] 聖セラピオンの死は5世紀に訪れた。

いるのを見た。　その後、彼は神に、キリスト教徒への迫害を止めてくださるよう祈り始め、多くの異教徒を自ら洗礼を授けた。ある時、偶像への礼拝が行われていた際、　異教徒たちがこぞって集まり、神々に動物だけでなく人間までも生贄として捧げ始めたとき、聖なる殉教者はその光景に耐えかねて、偶像崇拝者たちの真ん中に入り込み、彼らの偶像を「木や石に過ぎず、自分自身を助けることさえできない無力なもの」だと公然と非難した。　すると異教徒たちは彼を捕らえ、まず激しく殴打し、その後、石で打ち殺した。こうして聖なる殉教者[3706]は息を引き取った。

5月28日

5月15日（旧暦）

同日、1090年に帰天した、我らの父イザヤ・ロストフ司教の聖人記念日。

同日、1591年に殉教した、モスクワおよび全ロシアの奇跡行者である聖ディミトリイ皇子の記念日。

同日、1115年に帰天されたペチェルスクの聖イザヤ・奇跡行者の記念日。

尊者パホミオス大聖人の生涯

5月15日の記念日

パホミオスは、上エジプトのフィヴァイダ、具体的にはエスネ[3707]　の近郊で、3世紀の最後の10年間に生まれた。[3708]　彼の両親は熱心な異教徒であった。彼がキリスト教徒と知り合ったのは、軍隊での短期間の勤務中という、ずっと後のことだった。　清らかな生活を送る素質は、キリストを知る前から、彼の中に早くから現れていた。

ある日、両親はパホミオスに、労働者たちへ牛肉の入った鍋を届けるよう頼んだ。やむを得ずその場所で一晩を明かすことになったパホミオスは、誘惑に直面した。　その家の娘の一人、非常に美しい少女が、彼に自分と罪を犯すよう説得した。貞潔なパホミオスは彼女に厳しくこう答えた。「私がそのような悪事を働くことなどできません。私の目が犬の目であるかのように、どうして私の姉妹と罪を犯せるというのですか？」

彼は直ちに家路についた。その後、彼は自らこの出来事を修道士たちに語り、誘惑を慎重に見極め、それを打ち勝つよう説いた。

聖パホミオスは、学問的な教養に疎い人物ではなかった。その後の彼の活動がそれを証明している。さらに、彼の両親は裕福な人々であり、エジプト人の中には教育への愛が根付いていた。　子供たちは非常に早い時期、5歳から8歳の頃に学校へ通わされた。そこで彼らは読み書きを学び、さらに道徳の規則も教えられた。これらの規則は、書き取りの課題そのものに盛り込まれていた。

パホミオスが二十歳になったとき、彼は軍に徴兵された。当時、コンスタンティヌス帝は315年、ある「暴君」――おそらくマクセンティウス――との戦争を繰り広げていた。パホミオスは仲間たち――新兵たち――と共に旅立った。　夕方頃、彼らはエスネという町に到着した。そこでパホミオスと仲間たちは、看守の監視下にある牢獄に収容された。　まもなく、パンや様々な食べ物を携え

[3706] 皇帝ヴァシレイオスの暦によれば、聖殉教者マクシムスは、デキウス帝の迫害下にある250年5月14日に亡くなった。

[3707]　メタフラスト、そして後に聖ディミトリイ・ロストフスキーは、住民の敬虔さで知られたオキシリイヒについて言及している。ルフィンの証言によれば、その領内には最大で1万人の処男と2万人の処女が暮らしていたという。しかし、新たに発見された文書によると、この都市の名前はエスネであると明確に示されている。

[3708] 295年頃

たキリスト教徒たちがここに現れ、旅人たちに力を回復するよう熱心に懇願した。後にパホミオスが、なぜ見知らぬ自分たちのことをこれほど気遣ってくれるのかと尋ねると、彼らはキリスト教徒であり、神のためにそうしているのだと答えた。これは、感受性の豊かなパホミオスの心に強い感銘を与えた。

翌日、パホミオスとその一行はさらに先へ進み、アンティノエの町へ向かった[3709]。ここでは、非常に多くの若い兵士たちが、あらゆる享楽や肉欲の快楽にふけっていた。彼らはパホミオスをも誘惑しようとしたが、彼はその誘惑に打ち勝ち、仲間たちを悪から遠ざけるよう執拗に説得した。

その頃、コンスタンティヌス皇帝は敵に勝利を収め、軍を解散するよう命じた。パホミウスも他の者たちと同様に、遠征に参加する必要から解放された。 今や彼にとって、キリスト教徒となる時が訪れた。彼は、キリスト・神に忠実に仕え、肉と霊のあらゆる汚れから身を清め、力の及ぶ限り隣人に善を行うことを熱烈に願っていた。キリストへの完全な忠誠を誓ったのは、エスネの町に投獄されていた頃、キリスト教徒たちの慈悲に深く感銘を受けた時であった。

自由の身となった聖パホミオスは、人里離れたシェネシト（ヒノヴォスク）の村へと向かった。そこで彼はキリストの信仰の真理を学び、地元の教会で聖なる洗礼を受けた。 パホミオスはシェネシトの集落周辺でかなり長い間暮らした。彼は、当時すでに廃墟となっていた古いセラピス神殿に身を寄せた。キリスト教が広く普及するにつれ、多くの異教の神殿が廃墟となったことに留意すべきである。彼は、 、野菜や数本のヤシの木を丹念に栽培し、懸命な労働によって生計を立てていた。これらの野菜や果実は、偶然あるいは意図的にここを訪れる人々だけでなく、シェネシタに住む貧しい人々にとっても糧となった。パコミオスはここで隣人愛を実践し、多くの人々が彼に慰めを求めた。彼の名声はシェネシタの外にも広まっていった。 パホミオスの敬虔さ、隣人愛、そして分別は、この頃からすでに多くの人々を惹きつけ、彼のもとで永住する者も現れ始めていた。当時、神に喜ばれたいという熱意から、多くの人々が騒がしい都市や村を離れるよう促されていた。そして、どこかに特に熱心な修行者が現れると、荒野での生活を好む人々がその人物のもとに集まってきた。 やがてパホミオスは、より深い孤独を求め始め、自らも霊的修行の指導者を探し求めるようになったことが見て取れる。おそらく、共同生活者たちを指導した経験こそが、パホミオス自身にも指導者を必要とする欲求を呼び覚ましたのだろう。シェネシタの周辺に住んでいたパホミオスは、この村の住民たちに多くの面で役立っていた。 村で、多くの人々が命を落とす恐ろしい伝染病が猛威を振るい始めたとき、パホミイは病人の世話をし、さらには住民たちにアカシアの枝を大量に届け、それを燃やすことで空気を浄化できるようにした。

修道生活を送り始めた当初、パホミオスは正統な教義と異端の虚構とをまだ完全には区別できておらず、真のキリストの教会がどこにあるのかについても、正確には把握していなかった。異端者マルキオンの信奉者たちは、彼を自分たちの側に引き込もうと試みた[3710]。しかし彼は、互いに異なる様々な教義が存在し、それぞれが自らの真実性を証明しようと躍起になっていることを知っていた。 この意見の相違に戸惑い、彼は涙ながらに、真理がどこにあるかを明らかにしてくださるよう神に祈った。すると、彼は感嘆のうちに、真理はアレクサンドリアの司教アレクサンドロスが率いる教会に守られているという声を聞いた。もちろん、パホミオスは今や心を尽くしてこの真理を知り、常にそれに完全に忠実でありたいと願うようになった。

指導者を必要としたことから、パホミオスはシェネシタ近郊の住居を離れることを決意した。これには、自分自身を神、霊的な浄化、そして完成へと全身全霊を捧げたいという願いも動機となっ

[3709] ナイル川の右岸、エルモポリスの対岸に位置するこの都市は、皇帝ハドリアヌスが寵愛したアンティノオスに敬意を表して建設したものである。

[3710] 2世紀の異端者マルキオンは、世界には二つの独立した原理が存在すると説いた。すなわち、善なる原理――善なる神、そして悪なる原理――悪魔の支配下にある物質である。

ていた。　パホミオスはまた、信徒たちの様々な必要に対する絶え間ない配慮――それは何よりも司祭や忠実な信徒にふさわしい務めである――が、より弱い修道士たちを誘惑してしまうことを恐れていた。彼らはパホミオスの例に倣い、世への奉仕に夢中になり、同時に世から汚れずに自分自身を守ることができなくなるかもしれないからである。 パホミオスは、シェネシタの周辺で3年間過ごした後、その地を去った。去る際、彼は一人の年老いた修道士に、ここを訪れる貧しい人々のために野菜やヤシの木を栽培するよう頼んだ。

そこでパホミオスは、その功績で名高い長老パラモンの修道室を訪ねた。この長老は、町や集落から少し離れた場所に暮らしていた。彼は周辺一帯で尊敬を集めていた。　彼の周りには、彼の助言に従い、その生き方を模範としていた他の修道士たちも住んでいた。しかし、その厳格な生活様式に耐えられないと感じ、多くの者がすぐにここを去っていった。パホミオスがアッバ・パラモンに扉を叩くと、長老は尋ねた。

「なぜノックしたのか？」

パホミオスは、自分も修道士になりたいと答えた。

長老はこれに反論し、パラモンの弟子たちが送っているような厳しい生活様式に耐えられるかどうか、自分自身を試すために一旦帰ったほうがよいと説得した。彼はパホミオスにこう言った。

「まず、修道生活のあり方についてお話ししておかなければならない。それはこうだ。我々は常に夜の半分を徹夜して、神の御言葉を黙想している。また、夜から朝にかけて、自分の手でロープを編むなどの作業に没頭し、眠気と戦いながら、肉体を維持するために必要なものを自ら調達することもよくある。　必要以上に余ったものは、貧しい人々に分け与える。油や煮物を食べたり、ワインを飲んだりすることについては、私たちにはそれがどういうことかさえ分からない。　夏の間は毎日夕方まで断食し、冬には二日または三日連続で断食する。共同の祈りの規則は、昼に六十回、夜に六十回祈ることだが、これは私たちが刻一刻と捧げている、その回数を数えきれない祈りとは別である。

アッバ・パラモンはパホミオスに対し、まず自分自身を試してみてから、改めて彼の元を訪れるよう説得した。

パホミオスは長老に断固としてこう答えました。

「私は、あなたの元を訪れる前に、何日もかけてあらゆる面で自分自身を試してきました。」

するとパラモンは扉を開け、兄弟愛を込めてパホミオスの頬に口づけをし、自分がこうしたことを語ったのは虚栄心からではなく、彼の救いのためであり、こうしたことは世俗の人々には明かさないのだと急いで説明した。しかし、アッバ・パラモンは再び、パホミオスが以前の住処に戻り、そこでさらに自らを試すべきだと望んだ。

しかし、パホミオスはこう反論した。

「私はすでにあらゆる面で自分の魂を試されてきた。神の御加護と、あなたの聖なる祈りによって、あなたの心は私に対して安らぎを得るだろうと確信している。」

長老は彼にこう答えた。

– それは素晴らしい。

パホミオスは即座に受け入れられた。アッバ・パラモンは数日間、パホミオスを特に注意深く観察し、祈り、不眠、断食において彼を試した。パンを食べる時になると、長老はパホミオスを一人にして食事をさせた。

三ヶ月の試練の後、アッバ・パラモンはパホミウスに修道服を着せ、修道帯[3711] を締めさせた。その前に、二人の修行者は一晩中共に祈りを捧げた。　その後、パラモンは特にパホミオを夜の祈りの徹夜に慣れさせるよう努めた。夕方になると、彼らは手仕事の材料を準備し、その後、熱心に長い間祈りを捧げ、最後に仕事に取り掛かった。その際、祈りの精神を保ち、眠気に負けないよう心がけた。

聖なる復活祭の日が訪れると、パラモンはパホミウスに、この日は二回食事をとると告げた。食事を用意する際、パホミオスはそこに少量の油を注いだ。しかし、パラモンは、たとえ復活祭の日であっても、そのような断食の緩和を望まなかった。彼は深い悲しみをもってこう言った。「私の神は私のために十字架にかけられたのに、私は体に力を与える油を食べるというのか！」

彼は翌日まで食事を完全に断とうとしていた。長老が食事を受け入れることに同意したのは、パホミオスが少量の油を含んだ塩を捨て、灰をまぶした塩を差し出したときだけだった。パホミオスは深い謙虚さをもって許しを請うた。　もちろん、二人は共に塩を添えたパンを口にした。厳格な長老と、愛する師のすべてを模倣しようとした謙虚な弟子の頬を、涙が伝った。

パホミオスはしばしば山中に身を隠し、そこで一晩中、熱烈な祈りを捧げて過ごした。夏の酷暑の中、天に向かって両手を上げ、決して下ろすことを許さずに祈っていたその場所は、時には彼の体から滴り落ちる大量の汗による泥で覆われることさえあった。　パホミオスは、時折、足にイバラの棘が刺さっても気にも留めなかった。砂漠での生活でどんな不自由に遭遇しようとも、彼は、私たちの救いのために主イエス・キリストが耐え忍ばれた苦難を常に思い起こしながら、すべてを穏やかに受け入れていた。

あらゆる面で自らに厳しく、かつ謙虚であったパラモンとパホミイは、神に奇跡を求めることを敢えてせず、決して自らの義に頼ることはなかった。アッバ・パラモンの晩年については、老齢と苦行によって体力が著しく衰えていた時期でさえ、パホミイの師がいかに自らに厳しかったかを示す、次のような逸話が伝えられている。

ある日、パラモンは重病に陥った。修道士たちは経験豊富な医師を彼のもとへ招いた。しかし、医師は「まず第一に栄養状態を改善する必要がある」と言って、長老の治療を断った。兄弟たちは長老に医師の指示に従うよう説得した。彼は病人に処方された食事を摂ることに同意した。それでもパラモンが回復しなかったとき、彼は深い確信を持って修道士たちにこう語り始めた。

「健康は朽ちるべき食物から得られるなどと考えてはならない。力と健康はキリストから来るのだ。キリストの殉教者たちは、ついに首を刎ねられるまで、四肢を切り落とされ、火刑やあらゆる種類の拷問に耐え抜いた。それなのに、私は！　私は些細な病気さえ耐えられず、医師に私の世話を頼んだ。　薬も服用した。しかし、服用することに同意したにもかかわらず、そこから何の益も得られなかった。私にできることはただ一つ——再び修業に励むことだ。それが最良の薬であり、私がその道を歩むお方は、きっと私の意図を御存知であり、私自身が成し得る以上に、私を慈しんでくださるだろう。

アッバ・パラモンは、以前と変わらぬ熱意と不変の心で、あらゆる欲求を抑制しつつ、修道者の修行に身を捧げた。慈悲深い主は、しばらくの間、彼の健康を回復させてくださった。

ある日、パホミオスは荒野を歩いていた。やがて、彼はテンティル地方のシェネシタの少し南にあるタヴェンニシの集落の廃墟にたどり着いた[3712] 。そこでパホミオスは、「パホミオスよ、パホ

[3711] 修道生活初期に特別な修道服が存在したことについては、聖アントニオス大聖人の言葉からすでに知られている。アルヒマンドリト・パラディオスの著書『新たに発見された聖アントニオス大聖人の言葉。聖人に関するコプト語の伝承集に基づく』（カザン、1898年）、30ページを参照のこと。

[3712] 現在、タヴェンニシという集落は完全に消滅している。

ミオスよ、この地で修行に励み、留まりなさい。ここに修道院を建てなさい。そうすれば、多くの人々があなたの元を訪れ、あなたのそばで修道士となり、彼らの魂は恵みを受けるだろう」という声を聞いた。

パホミオスは直ちにアッバ・パラモンのもとへ行き、このことを伝えた。そこで二人はタヴェンニシへ向かい、そこに修道院、すなわち小さな修道者の住居を建てた。パラモンは再びかつて修行に励んだ場所へと戻っていった。その際、彼は自身の死が近いことを示唆し、パホミオスの修道院が将来栄えることを予言した。　長老は、愛弟子に対し、主が数多くの兄弟たちを統率するための力と忍耐を彼に与えてくださると確約した。長い祈りの後、二人は別れた。パラモンには、師を訪ねてきた数人の弟子たちが同行していた。

しばらくして、アッバ・パラモンは重病に陥った。　弟子たちはパホミオスを呼びに行った。彼は急いで長老のもとへ赴き、長老が息を引き取るまでその傍らに留まり、仕えた。ついに、長老はアヴィヴァ月の25日10時に、義人の死を遂げた。弟子たちは一晩中、長老のそばで聖書を読み、詩篇を歌い続けた。　朝、彼らはいつもの祈りを捧げた後、故人の遺体を、その独房から少し離れた山へと運び、そこで、聖人たちと共に眠る故人の長老の魂の安息を願って、改めて熱心に祈りを捧げた上で、彼を埋葬した。彼らは皆、今や深い悲しみに包まれていた。　偉大なる長老アッバ・パラモンの助言と慰めを失い、彼らは自分たちを孤児だと感じていた。パホミオスは、亡き師を悼みながらタヴェンニスの自分の修道室に戻り、孤独の中で敬虔な修行に一層励んだ。やがて彼自身も、救いへの道において他者を導く指導者となった。

パホミオスがタヴェンニシで独り暮らしていたとき、彼の兄であるヨハネスが訪ねてきた。パホミオスは愛をもって兄を迎え入れた。　パホミオスが軍に徴兵されて以来、家に帰っていなかったため、二人の別れからすでに長い年月が経っていた。パホミオスの敬虔な語りかけはヨハネに深い感銘を与え、彼はタヴェンニシに永住することとなった。

二人の兄弟は、これからは力を合わせて働いた。懸命な労働で得たものは、困窮している人々に分け与えた。彼らは極めて厳格な生活を送っていた。　粗い羊毛の衣を身にまとい、彼らは暑い場所へと向かい、そこで朝まで、天に向かって伸ばした手も膝も曲げることなく、祈りを捧げ続けた。彼らはこのような徹夜の祈りを頻繁に行っていたが、そのせいで足が張り、蚊に手を血が出るほど刺されることもあった。　修道者たちが眠気に襲われると、彼らは祈りを捧げていたその場に座り込んだが、何かに寄りかかることは決して許さなかった。日中は、南の太陽の灼熱の光による暑さが耐え難くなるまで、肉体労働に従事していた。

将来の共同生活者たちのために、パホミオスは、兄弟と共に修行していた場所の周囲に柵を設けることを考え始めた。パホミオスは、その柵ができるだけ広い範囲を囲むことを望んでいた。彼は、他にも多くの修道士たちがやってくると予想していたからである。　しかし、ヨハネは、二人がいつまでも二人きりのままだと想定していたため、この作業を快く思わなかった。彼は、二人が築いていた塀を故意に壊すことさえした。パホミオスは、ある時この件について彼にこう言った。「もう、そんな馬鹿げたことはやめろ！」

ヨハネはひどく怒り、パホミオスが許しを請うたにもかかわらず、その後も長い間落ち着くことができなかった。

その日の夕方、パホミオスは壁から降りて、長い間祈りを捧げた。その間、彼はヨハネに対する自分の罪をこれまで以上に痛感し、翌朝、さらに深い謙虚さをもって彼に許しを請うた。　もちろん、修道者である兄弟たちは、この後ますます互いを愛し合い、互いに謙虚に振る舞うようになった。ヨハネは、敬虔さと自己犠牲の行いにおいてますます卓越していった。やがて高い霊的完成に達した彼は、兄弟パホミオに悼まれながらこの世を去った。

この頃、パホミオスはすでに完成された修道士となっていた。そのため、彼には非常に強い誘惑が訪れていたが、祈りと忍耐によって、彼は常に敵の最も恐ろしい策略を退けることに成功していた。

彼には次のような出来事が起こった。時折、祈りのためにひざまずこうとすると、悪魔の仕業により、彼の目の前にまるで穴のようなものが現れたが、パホミオスは恐れることなく祈りを捧げた。また、道中で悪魔たちが儀仗兵のように彼を取り囲み、「神の人のために道を空けよ」と大声で叫ぶこともあった。

悪魔はパホミオスに虚栄心と高慢を植え付けようと必死だったが、彼はこの誘惑に全く動じなかった。ある時は、悪魔がパホミオスの独房を、まるで崩れ落ちそうであるかのように揺さぶり、揺らした。　しかしパホミオスはこれに微塵も動じることなく、深い平静を保ちながら詩篇の言葉を繰り返した。「*神は私たちの避難所であり、力であり、患難における速やかな助け手である。それゆえ、たとえ大地が揺れ動こうとも、山々が海の底で揺れ動こうとも、私たちは恐れない*」（詩篇45:2–3）。

ある時、悪魔たちがパホミオの前に、ロープを使って石を動かそうと懸命に努力している労働者の姿で現れたが、成功しなかった。パホミオの祈りによって、彼らは姿を消した。　パホミオスがわずかな食事をとろうと座るたび、悪魔たちは裸の女性の姿で現れたが、パホミオスは目を閉じ、その幻影から心を遠ざけると、悪魔たちは消え去った。　地獄の闇の勢力との戦いは、パホミオスに全力を尽くすことを求め、時には彼をひどく疲れさせた。ある日、主は修道士アポロンの姿で、彼に新たな慰め主を送られた[3713]。パホミオスの元を訪れたこの敬虔で、経験豊富で、善良な修道士は、断固として彼にこう言った。

「パホミオよ、勇気を出しなさい。霊たちによるいかなる仕打ちも恐れてはならない。神の助けが、彼らに対する勝利をあなたに与えてくれるからだ。」

この長老はパホミオスの元にとどまり、二人にとって大きな慰めとなった。しかし、長老アポロンはまもなくこの世を去った。ある日、パホミオスが手仕事の材料となる葦を集めていたとき、主の天使が現れて彼にこう言った。「パホミオス、パホミオス、パホミオス！　神の御心は、あなたが人類に仕え、人々を神と再び結びつけることにある」。

主の天使が去った後、パホミオスはその姿を見送りながら、「これは主の御業だ」と呟いた。

葦を少し集めると、彼は自分の住処へと向かった。

天使の出現から間もなく、三人の男――プシェンタイシ、スルス、プショイ――が尊者パホミオスのもとを訪れた。彼らはパホミオスにこう言った。「私たちはあなたのそばで修道士となり、キリストのしもべになりたいのです」。

彼らの誠実な敬虔さを確信したパホミオスは、愛と喜びをもって彼らを受け入れ、修道服を与えた。

この三人の修道士は、聖パホミオスの模範と教えに導かれ、熱意と不屈の精神をもって、最も困難な修行に打ち込んだ。彼らはパホミオスの勤勉さに深く感銘を受けた。　アッバ・パホミオスは自らすべての世話をし、自ら庭を掃除して水やりをし、訪れる人々に門を開けて語りかけ、熱心に病人の世話をした。新しい修道士たちについて、彼はこう語った。「彼らはまだ、他者に仕えるほどには成長していない若い苗木のようなものだ」。

パホミオスは、新しく入った修道士たちをあらゆる外的な心配事から解放し、心の浄化や善への意志の強化に直結する行いに熱心に取り組むよう彼らに説いた。最初の弟子たちが、自分たちのために絶え間なく労を惜しまないパホミオスに対し、公然と気の毒がりを口にしたとき、彼は深い信念

[3713] アラビア語の「伝記」では、この地をアムリアラガブルと呼んでいる。この名前の別の表記として、イエラカポロンというものもある。

をもってこう語った。「いったいどんな人間が、動物を車に繋ぎつけ[3714]、それが倒れて死ぬまで放っておけるだろうか。主が私が疲れ果てているのをご覧になれば、あらゆる善行において私たちを助けてくれる人々を遣わしてくださるだろう」。

最初の弟子たちを徳に導くため、聖パコミオスは彼らにいくつかの規則を定めた。食事や服装の統一は、この小さな共同生活においても必要不可欠とされた。

聖パホミオスの敬虔さと知恵に関する評判は、エジプト全土にますます広まっていった。より高い修行への渇望に駆られた人々が、次々と彼の元を訪れた。時には、すでに高い霊的完成度に達していた隠者たちも、聖 パホミオスの指導の下に身を委ねるためにやって来た。 こうして、以前は隠遁生活を送っていた五人の立派な修行者たちが現れた。彼らは、アッバ・ペチョシュ（あるいはペクシウス）、アッバ・コルネリウス、アッバ・パウロ、アッバ・パコミオス、そしてアッバ・ヨハネスであった。パコミオスは彼ら全員を喜んで受け入れた。時には、心の状態が不安定で、悪い習慣を持つ人々も現れた。 パホミオスは、彼らを改心させることはできないばかりか、その振る舞いが他の修道士たちを堕落させる恐れがあると見抜くと、彼らを共同生活から追放した。多くの人々が聖パホミオスのもとに集まり、彼は彼らにとって常に導き手であり、師であった。

隣人への愛に駆られ、聖パホミオスは修道士たちの助けを借りて、修道院に最も近い集落に教会を建てた。それは、その集落の住民たちがより頻繁に聖体拝領を受け、神の御言葉を聞くことで霊的に励まされるためであった。 住民たちの貧しさゆえに、聖パホミオスは聖体礼儀を行うためのすべての費用を自ら負担した。彼自身も兄弟たちと共に、この教会で聖書を朗読した。司祭が見つからないときは、パホミオスが教会に来て、神の言葉を朗読することで参列者たちを啓発した。 教会内の修道士たちは非常に敬虔な態度で振る舞い、パホミオスも朗読者の務めを熱心に果たしたため、この教会を訪れる人々は次第に罪を捨て、心の清めを重んじ、名ばかりではない真のキリスト教徒となっていった。彼らはアブ・パホミオスを単なる人間としてではなく、神の天使として仰ぎ見ていた。

タヴェンニシの共同生活施設にいる修道士たちの数は、ますます増えていった。その数が百人に達したとき、パホミオスは修道院の敷地内にも教会を建てる必要があると考えた。 教会が建てられると、修道者たちは以前と同様に、土曜日に村にある教会へ出向いたが、日曜日には司祭が修道院を訪れ、そこで聖体礼儀を執り行った。その後、土曜日に聖体礼儀に参加するために修道者たちが村へ出かけることはなくなった。

パホミイ修道院の修道士たちの間には、司祭の位を持つ者は誰もいなかった。パホミイ自身もこの位を受けようとはしなかった。彼はしばしば修道士たちにこう語った。「私たちにとって、そのようなことを求めないのが良い。そうすれば、神の御心に反して、修道士たちの間に嫉妬も、争いも、不従順も、分裂も生じないからだ。 脱穀場の火のように、もし急いで消さなければ、一年の労苦を台無しにしてしまうだろう。高慢の思いも、その始まりはまさにそれと同じである。私たちが神の教会に堅く、穏やかに従うのがよい。そして、いついかなる時も、司教によって叙階された者を見かけたら、その人こそが私たちにとってこの事柄のために十分である。」

尊者パホミオスのもとには、修道士になりたいと願う長老たちも訪れました。聖アッバは、彼らを修道院に受け入れることを拒みませんでした。 もちろん、彼らは修道生活の規則や共同生活の慣習に、すべてにおいて無条件に従わなければならなかった。パホミオスは、隣人の救いの奉仕において、彼らが常に謙虚で従順であるならば、彼らの協力を求めた。パホミオス自身は、その資質が皆から高く評価されていたにもかかわらず、決して司祭になることには同意しなかった。

彼の生涯には、次のような逸話が伝えられている。ある日、アレクサンドリアの大司教である聖アファナシオスが、管轄区域を巡回していた。彼はどこへ行っても盛大に出迎えられた。司教や長

[3714] 言うまでもなく、水を汲み上げる車輪を回転させるために動物を繋ぎつける水力機械のことである。

老、そして民衆が彼を迎えに出た。一部の司教や長老、そして多くの聖職者が彼に同行していた。パホミオス自身も、自身の修道士たちを率いて、この偉大な聖人の出迎えに出た。彼らは、大司教が修道院に入るまで、詩篇を歌い続けた。その時、テンティルスの司教セラピオンが大司教アファナシオスの手を握り、こう言った。

「どうか、修道士たちの父であるアブ・パホミオスを司祭に任命し、私の管区のすべての修道士たちを統率させてください。」

これを聞いた聖パホミオスは、たちまち姿を消した。大司教は席に着いた。大勢の群衆が彼を取り囲んだ。聖アファナシオスは、セラピオン司教に向かって大声でこう言った。

「私は、まだアレクサンドリアにいた頃、叙階される前から、パホミオスの信仰について聞いていました。」

その後、聖アファナシオスは立ち上がり、祈りを捧げた後、パホミオスの弟子たちにこう言った。

「あなたがたの父に挨拶を伝え、こう告げなさい。『あなたは私から身を隠し、嫉妬や競争心を煽るような事態を避けた。あなたは、キリストと共に永遠に続く美徳を選んだのだ。主が、あなたの願い通りに与えてくださいますように。』」

もちろん、パホミオス尊者の謙遜さは、タヴェンニシの共同体の兄弟たちをも謙遜へと導いた。彼らの偉大なるアッバと同様に、彼らは地位の上昇を求めず、むしろそれを恐れていた。ギリシャ人史家もコプト人史家も、彼らの間に長老が存在したことを記していない。

タヴェンニシの修道士が増えるにつれ、ここで整然とした共同生活の秩序を強固にし、修道士たちのあらゆる行動を厳格な共同生活規則に則らせる機会が生まれた。尊者パホミオス自身は、キノヴィトたちにとって[3715] であり、教師であり、裁き手であり、また一人ひとりの行動における規範であり模範でもあった。

すべての人、そして一人ひとりの幸福を、何よりもまず偉大なるアッバ・パホミオス自身が気にかけていた。彼は絶えず修道士たちに、祈りを怠らず、神の御名を呼び続けるよう説き、祈りなしにサタンに不意を突かれることのないよう促していた。 聖パホミオスは、あらゆる機会を利用して、この兄弟やあの兄弟に教訓の言葉を語りました。しかし、こうした個人的な会話に加え、彼は通常、週に三回の一般説教も行いました——土曜日に一度、日曜日に二度です。彼は、修道院の長も常に週に三回の説教を準備し、行うよう命じました。 修道院長による三回の説教に加え、土曜日と日曜日の修道士たちの集会の際、また毎週の水曜日と金曜日という二回の断食日には、各棟の責任者が必ず修道士たちに説教を行っていた。

修道士たちは毎晩、霊的な談話のために集まり、概して、各自が神の言葉の読解や、様々な人々の生活への観察から得た教訓をもって、互いに戒め合うことを好んだ。修道士たちは聖書の言葉を引き合いに出して繰り返し、それについて熟考することを好んだ。 そのため、互いの対話においても、彼らは常に聖書の教えや言葉を用いて互いに戒め合うことができた。タヴェンニスでは、無駄話や噂話は見られない。共同生活施設には多くの棟があり、それぞれの棟には専任の責任者がおり、その下には補佐役がいた。この補佐役は、責任者が不在や病気の際、その代わりを務めた。

聖パホミオスは、修道院に入会する兄弟一人ひとりを、特に敬虔で賢明な修道士たちが出迎えるよう配慮した。 これらの「門番」役の修道士たちは、新しい兄弟一人ひとりを迎え入れ、受け入れの手配を行い、修道服を授かるまでの3年間の試練期間を通じて、熱心に説教を施し、あらゆる悪から彼を守った。 このようにして、タヴェンニシの初心者は、経験豊富で献身的な指導者たちに出

[3715] キノヴィア（ギリシャ語の「コイノス（κοινος）」＝「共通の」と「ビオス（βιος）」＝「生活」に由来）とは、修道院の費用で修道士たちの生活が賄われ、その見返りとして修道士たちが修道院全体の利益のために労働を提供する共同生活を行う修道院のことを指す。

会い、修道院での生活の最初の数年間から敬虔な心構えを養うことができた。聖パホミオ自身も、初心者を注意深く見守っていた。若い修道士たちの成功と熱心さは、彼をいかに喜ばせたことか。彼は彼らの必要にどれほど細やかに気を配っていたことか！　彼は、あらゆる誘惑や試練から、また不純な思いに駆られることから、いかに彼らを守っていたことか！

タヴェンニスの病に伏している兄弟たちには、非常に手厚い配慮がなされていた。彼らを世話するのは、病棟での奉仕のために特別に任命された修道士たちとその責任者であり、尊者パホミオス自身もまた、彼らを気遣っていた。

兄弟たちの食事の際には、専任の修道士たちが給仕を担当した。彼らは三週間ごとに交代した。兄弟たちは一斉に食事をとるわけではなかったため、これらの修道士たちには絶え間ない献身が求められた。食事の給仕を担当する修道士たちは、三時間にわたり、パンや様々な野菜、オリーブを準備し、分配し、並べた。　許可された日には、食事としてチーズ、卵、茹で野菜、茹でた穀物を使ったスープが供された。各修道士は、希望する時間に食卓に近づき、自分の分を受け取った。　しかし、食事は1日1回のみであった。ある者は6時に、ある者は7時に、またある者は8時、9時、10時、11時に、さらに夕暮れ時、空に星が現れる頃になる者もいた。一部の修道士は自らに極めて厳しく、2日に1回しか食事をとらなかった。　概して、[3716] の断食は、当初の規則によれば、誰に対してもその意思に反して強制されることはなかった。聖パホミオスは、自分に親しい修道士たちに対してのみ、水曜日と金曜日に断食、すなわち食事を完全に控えるよう勧めていた。しかし、多くの修道士たちは自ら進んで厳しい断食を課していた。

タヴェンニシの共同生活には多くの修道士がいたため、様々な役職や奉仕の務めも数多く存在した。その中には、遂行が特に困難な役職もあった。　修道院で何らかの「務め」を担う者、特に責任者たちは皆、非常に熱心であった。聖パホミオスは、しばらく経つと、特定の「務め」を担っていた者を他の人と交代させることがあった。この場合、彼は二つの目的を達成しようとしていた。　第一に、新たに任命された者がその「奉仕」から霊的な実りを得て、兄弟団のために献身的に働いたことに対する報いを、主から 受けられるようにすることでした。 聖パホミオスは、修道院におけるあらゆる「奉仕」が、熱意を持って行われれば、修道士が熱心に断食し、徹夜し、神に祈ることによって得られるものと同等以上の報いを、その修道士にもたらすとの見解を持っていた。　第二に、パホミオスは、熱心な労働者たちが労働の後に、たとえ短時間であっても休息をとる機会を持つことを望んでいた。しかし、自らの「奉仕」の遂行に熱心に取り組んでいた兄弟たちは、偉大なるアッバが許した休息に、しぶしぶ同意するしかなかった。　彼らは、この世は休息の場ではなく、それどころか、激しい労働、絶え間ない闘争、そして自己犠牲的な偉業の場であり、ここで労苦する者だけが、来世において真の安息と尽きることのない至福を得られると確信していた。　そして誰もが、自分が熟知している仕事や職人技、あるいは修道院のためならどんな仕事でも、上長の指示に忠実に従い、熱心に取り組み続けた。

どの修道士も、修道院内でどのような役職に就いていようとも、長への完全な服従と、規則の無条件かつ正確な遵守が求められた。これこそが、キノヴィアの生活と、狭義の隠遁生活との主な違いであった。　完全な服従こそが、キノヴィアの修道者たちの霊的完成の保証でもあった。服従こそが、キノヴィアの大きな道徳的優位性であった。たとえ修業への熱意からであっても、上長の指示や規則に違反することは、常に他の者からの不満を招き、共同生活におけるあらゆる混乱の原因となり得た。　そのため、パホミオスは、たとえ彼らがどのような言い訳をしようとも、服従の義務に違反した者を厳しく罰した。タヴェンニシウスの共同生活においても、そのような事例はあったが、極めて稀であった。

[3716] 断食（ギリシャ語：νηστεια）とは、食物を一切口にしないことを意味する。

必要な物品の購入や修道院の手工芸品の販売にあたっては、世の誘惑に惑わされることなく、むしろ世の人々の模範となるよう、あらゆる美徳を備えた特に信頼できる修道士が選ばれた。　たとえその利益が修道院にとって大きな恩恵となるものであったとしても、彼らが金銭への執着を持たないよう、特に注意が払われていた。

タヴェンニシで修道士の数が増え続けるにつれ、ここには様々な経済的施設も増えなければならなかった。また、修道院の様々なニーズを満たすために、何らかの「奉仕」に従事する人々の数も増えなければならなかった。　パホミオスのキノヴィアにおける修道士や修道院の数が増加すると、そこでは修道院内の様々な職務を任された多くの修道士たちの姿が見られるようになった。ここでは、当初はタヴェンニシのみであったが、後にペヴォウ（最も主要な修道院）やフェヌムの修道院にも、適切に整備された穀物倉庫が設けられていた。　これらの穀物倉庫では、修道士たちは極めて深い静寂の中で働いており、それは作業の成功と精神の集中を助長していた。ここでは会話は許されなかった。水や小麦粉を求めることさえできず、必要なものは石臼を叩いて要求しなければならなかった。作業中は、暗記した神の言葉を朗読していた。

当時、タヴェンニシの共同生活施設には、仕立て屋15人、鍛冶屋7人、　大工4人、染色職人15人、皮なめし職人20人、ラクダ使い12人、園芸家20人、靴職人15人、覆い布を仕立てる修道士12人、夜警10人、そして写本家10人がいた。　修道士たちは自らの労働によって修道院に必要なものをすべて賄っており、町で購入しなければならないものはごくわずかだった。キノヴィト派の間では特に藁マットの製作が広く行われており、これは修道士たちにとって良い手仕事であるだけでなく、キノヴィアの資金力を強化することにもつながり、ここでも資金は必要とされていた。

聖パホミオスの戒律に従い、資金は一か所に保管され、会計係の管理下に置かれていた。この会計係が、修道院のあらゆる必要を満たしていた。しかし、修道士たちは自分専用の金銭を持つことは許されなかった。修道士の中には、幼少の頃に両親と共に修道院に入ってきた者も多かった。　成長しても、彼らは金と銀を見分けることができず、金銭に対して全く無関心であった。

修道者たちの生活は極めて質素であった。無欲の精神は極めて強く、誰もが羊や山羊の皮で作られた服を一着と、頭巾を一つしか持っていなかった。　破れた服は、特別に任命された修道士が繕い、洗濯し、その後、古着の倉庫に保管しなければならなかった。修道士のうち誰かが自分の服を洗いたいときは、これらの繕われた服の中から一枚を取り、自分の服を洗った後、その服を管理している修道士に返却した。

キノヴィアには非常に多くの写本師がいた。これらの熟練した筆写者たちは、長の指示に従い、修道士たちにとって特に有益な書物を熱心に写し取っていた。彼らの努力は実を結び、修道院の書庫は充実していき、どの修道士もそこで自分にとっての霊的な糧を見出すことができた。

世俗とのあらゆる関わりにおいて、修道士たちは特別な慎重さを守らなければならなかった。旅の途中、彼らは聖書のよく知られた言葉たちを心の中で繰り返し、それについて深く思索を巡らせなければならなかった。旅に出る際は、常に数人、少なくとも二人が一緒に行動した。　道中で話しかけてくる女性に出会った場合、年長の修道士が彼女に近づき、目を伏せて、極めて謙虚に短い会話を交わした。道中で役人や兵士に出会った際、各修道士は自分のロバから降り、脇に退いて祈りを捧げ、旅人に道を譲った。

世俗の家では、修道士たちは通常、食事を口にしなかった。やむを得ない場合であっても、修道院の規則で許可されたものだけを口にした。

世俗からの書簡による往来が修道士たちに悪影響を及ぼさないよう、修道院に届く手紙は院長が受け取り、その手紙に善意が込められていると判断した場合は、宛先へ渡した。　修道院の誰も、それが共同体の教訓につながらない限り、世俗の世界で目にしたことや耳にしたことを語ることは許されなかった。教訓となるようなことは、長の許可を得て初めて伝えることができた。一般的に、修道士たちの間ではおしゃべりは奨励されていなかった。

巡礼者は専用の部屋で迎えられた。修道者たちは、自分の独房に巡礼者を受け入れることは許されなかった。親族の誰かが訪れたことさえ、修道者たちに伝えることは誰にも許されなかった。巡礼者の来訪については、門番だけが関係者に報告する役割を担っていた。宿舎では、巡礼者たちに最も温かいもてなしが施された。　女性には男性とは別の部屋が用意されていた。聖パホミオスは、他修道院の修道士でさえ、自身の修道士たちと同じ場所に宿泊させることはなく、共同の食事の場への参加さえ許さなかった。とはいえ、彼らには兄弟愛のあらゆるしるしを示し、異端者ではなく正教徒である限り、共同の祈りの時間には教会に入ることを許可していた。

聖パホミオスの名声は、エジプト全土にますます広まっていった。ついに、キリスト教の信仰に目覚め、処女のままだった実の妹マリアも、彼の偉大な功績を知ることになった。兄パホミオスに会いたいと強く願った彼女は、タヴェンニシへと向かった。彼女の到着がパホミオスに伝えられた。あらゆる世俗的な情欲を断ち、女性との面会を避けていた聖パホミオスは、妹との面会を拒んだが、同時に門番の修道士を通じて、彼女に新たな生き方を示した。　彼は彼女に、この世の生活は来世への準備に過ぎず、世俗から離れた生活、すなわち修道院での生活こそが、救いへのあらゆる手段を与えてくれると語った。パホミオスは、もし彼女が修道院での生活を送りたいと望むなら、修道士たちが彼女のために人里離れた住居を建ててくれると約束した。　そうすれば、と彼は言う、他の女性たちも彼女と共に住み、霊的な完成を目指すことに全身全霊を捧げることができるだろう。兄自身が彼女と話をしたがらないと聞いて、マリアは悲しくなった。彼女は泣き出した。　しかし、門番の修道士を通じて伝えられたパホミオスの言葉には、多くの慰めも含まれていた。彼女はパホミオスが勧めたことに同意した。そこでパホミオスは、修道士たちを遣わして、村の近く、男子修道院からかなり離れた場所、ナイル川の対岸に、彼女のための住居を建てさせた。

ほどなくして、すでに多くの女性たちがマリアのもとを訪れ、彼女と共に永遠に暮らすようになった。パホミオス尊者の妹は、彼女たちにとって母、すなわち長老となった。彼女は自らの死に至るまで、彼女たちを救いへの道へと導き続けた。

一方、アッバ・パホミオスもまた、この修道院を熱心に世話した。女子修道院の霊的生活を直接指導するため、彼は長老ペトロを任命した。パホミオス自身、修道生活の規則を記した特別な書物を執筆し、修道院の修道女たちはこれらの規則を熱心に学び、遵守しなければならなかった。

もちろん、修道士のうち誰かが、ある修道女を訪ねる必要がある場合もあった。こうした面会は、必要に応じてパホミオ自身によって許可された。パホミオの許可を得ると、修道士は女子修道院を統括する長老ペトロのもとへ赴いた。　長老は、修道女たちの母上、修道士が面会を必要とする修道女、そしてさらに別の修道女を呼び寄せた。全員が席に着くと、会話が始まったが、もちろん、長々とした、とりわけ無益な会話は修道者にふさわしくないということを、全員が心に留めていた。

もし修道女が亡くなれば、姉妹たちは彼女を祈りの集いの場へと運んだ。　修道女たちの母上は、彼女に葬送用の布をまとわせた。アッバ・ペトロスは、修道女の死をパホミオスに報告した。彼によって指名された、非の打ち所のない生活を送ってきた修道士たちが、女子修道院へと向かった。彼らは 祈りの家の門の前で立ち止まり、そこで聖なる賛美歌を歌った。 ついに故人は埋葬され、その際、修道女たちは修道院長の先導のもと、歌を歌いながら墓所まで彼女を見送り、長老は彼女たちの後ろを歩いた。故人を地中に葬り、その上で最後の祈りを捧げた後、人々は散っていった。時には修道女たちは修道院そのものに埋葬され、時には最寄りの山へと運ばれた。

また別の事例では、タヴェンニシの男子修道院の修道士たちが、女子修道院に多大な援助を差し伸べた。　女子修道院の建物を改修したり、新たに建設したりする必要が生じると、パホミオスはそのために最も敬虔な修道士たちを派遣した。彼らはそこで、長老ペトロの絶え間ない監督下に置かれていた。彼らは女子修道院に留まって食事をとることは許されず、その日のうちに自らの修道院へと戻らなければならなかった。

女子修道院の修道女の数は、まもなく400人まで増えた。修道女たちの普段の食事、断食、服装（頭巾を除く）は、すべて男子修道院で受け入れられている慣習に準じていた。　尼僧たちは男子修道院のためにも働いていた。彼女たちは修道士たちのために羊毛の衣服を仕立てていた。その見返りとして、彼女たちは男子修道院の会計係から必要な物資を受け取っていた。

女子修道院の生活において、ある重要な出来事が知られている。ある修道女が、ある日修道院の塀の外へ出た。彼女は一般人の仕立て屋と出会い、不思議に思って、なぜこの場所に来たのかと尋ねた。彼は、仕事が欲しいと答えた。　修道女は、「私たちには専属の仕立て屋がいる」と反論した。仕立て屋は立ち去った。この会話を目撃していたのは、ある一人の修道女だった。ある日、その修道女と口論になった彼女は、相手を非難し始め、仕立て屋との会話を非難めいた口調で持ち出した。その若い修道女は、不当な非難に動揺し、激しく泣き崩れた。彼女は、修道院で今や自分待ち受けているであろう恥辱を、過度に誇張して想像していた。　悲しみに押しつぶされ、彼女は密かに川へと向かい、波の中に身を投げて溺死した。このことを知った、あの不幸な若い修道女を不当に責めてしまったもう一人の修道女は、深い絶望に陥り、縄で首を絞めて自ら命を絶った。

まもなく、このことを聖パホミオスも知った。この出来事に深く悲しんだ長老は、修道院内の祈りの中で彼女たちの名を唱えること、彼女たちのために聖体礼儀を執り行うこと、そして彼女たちのために施しを行うことを禁じた。　パホミオスは、共同生活の修道女たち全員に対しても厳しく対処した。彼女たちは、無実の者と加害者を見つけ出し、両者を和解させ、なだめるために必要な努力を尽くさず、彼女たちの状況や心の安らぎを軽視し、ひょっとするとある修道女の中傷を信じてしまったため、長老は彼女たちを7年間、聖体拝領から破門した。

至る所から多くの人々がパホミオのもとを訪れ、彼に永遠に従うことを誓った。タヴェンニシの修道士の数はあまりにも増えすぎてしまい、非常に手狭になってしまった。神の導きにより、聖パホミオは新しい修道院を建設するのに適した場所を探しに出かけた。　タヴェンニシの北、そこからそう遠くない場所に、非常に適した場所が見つかった。その場所はペヴォウ（3717 ）と呼ばれていた。ここに新しい修道院が建てられ、それは非常に広大で、まもなく共同体全体の中心地となった。

この修道院は塀で囲まれていた。ディオスポリス管区の司教は修道士たちに好意的であった。彼の提案により、パホミオス尊者はここに教会も建立した。

こうして、ここに永住を希望する者なら誰でも共同生活に受け入れることが可能となった。パホミオスは古い修道院から新しい修道院へ多くの修道士を移した。しかも、共同生活の規律にすっかり慣れ親しみ、経験豊富な指導者となり、新しい兄弟たちにとって良き手本となれる者たちを選んだのである。　ここでも、長、会計係、そして様々な務めを果たす修道士たちが任命された。皆は、これらの規則が初心者のためだけでなく、指導者たち自身のためにも等しく定められていることを心に留め、熱心に共同生活の規則を遵守しなければならなかった。

しばらくすると、2つの修道院では、ここで修行を志すすべての人々を受け入れることができなくなった。次第に、さらに7つの修道院が設立された。タヴェンニシの共同生活における修道士の数は、7,000人に達した。　もちろん、修道院によっては住人が多いところもあれば、少ないところもあった。そして、多くの修道院に散らばっていたこの大勢の修道士たちは、一つの修道兄弟団を成していた。

聖パホミオスは、すべての修道院を頻繁に訪れていました。彼自身は、すべての修道院の統括管理が行われていたペヴォウ修道院に住むようになりました。この修道院は最も多くの修道士が暮らしていました。他の修道院の修道士たちは、ここから必要な物資を受け取っていました。　この修道院の会計係には、　の業務について報告がなされていた。ここには、すべての修道院の修道士たちが年に二度集まり、祈りに参加し、説教に耳を傾け、自らの修行について聖パホミオスから祝福を受け

3717 ペヴォウ修道院は、タヴェンニシの少し北、ナイル川の東岸、ディオスポリス地方に位置していた。

ていた。　ペヴォウ修道院では、四旬節の期間中に、洗礼志願者の洗礼式も行われていた。その際、すべての修道院から洗礼志願者がここに連れてこられた。このように、修道士の中にはまだ聖なる洗礼を受けていないが、それに備えている人々、すなわち洗礼志願者がいた。　彼らが洗礼を受けるためにペヴォウに連れてこられたのは、おそらくそこに司祭がいたのに対し、他の修道院には司祭がいなかったからだろう。もちろん、このすべての修道院間の交流は、修道士たちにとって極めて有益であった。それは、パホミオスの修道院に属するすべての修道士たちを、霊的な愛という最も緊密な絆で結びつけ、　気弱な者を励まし、衰えた者に熱意を呼び起こし、また、熱心で成果を上げている修行者たちにとっては、修行生活の崇高な模範を目の当たりにし、彼らに倣い、自らの功績を謙虚に見つめることを学ぶことが極めて重要であった。　しかし、ペヴォウへのこれらの旅が最も重要だったのは、すべての修道士に聖パホミオスの日常の生活を見、その教えに耳を傾ける機会を与えたという点にある。　また、修道院を巡回する旅の途中、聖パホミオスは言葉だけでなく、自らの模範によっても修道士たちを教え導いた。彼は誰に対しても従順であり、身分の低い者に対しても謙虚に振る舞い、共同体の最年少のメンバーからでさえ喜んで教えを受け入れた。以下に、そのような数多くの事例の一つを紹介する。

聖パホミオスは特に頻繁にタヴェンニシを訪れていた。こうした訪問中も、彼はいつもの手作業を怠らなかった。アッバ・テオドロスの指示により、ここでは特別な藁マットの編み方が用いられていた。縄を強く締めすぎないこと。そうすれば労力も少なくて済み、藁マットの出来も良くなるのだ。　パホミオスがここで藁マットを編んでいたとき、修道院に住むある少年――その週、この奉仕当番を任されていた――が、アッバ・テオドロスの指示通りには編んでいないと率直に指摘した。パホミオスは、その少年の指摘を穏やかな喜びをもって聞き入れ、具体的にどのように作業すべきかを教えてほしいと頼んだ。少年はパホミオスに、彼らがどのように作業しているかを見せた。アッバ・パホミオスは、すぐにその通りに藁マットを編み始めた。

タヴェンニシオの住民たちの間に大きな恐怖を煽ったのは、近隣に住む野蛮人たちであった。彼らは当時だけでなく、その後も村や修道院を襲撃し、略奪や強奪を行い、住民から身代金を強要したり、奴隷として連れ去ったりするなど、甚大な被害をもたらした。　北方の修道院の修道士たちは、彼らから逃げ散った。北方の修道院が完全に崩壊したり、修道士たちが完全に破滅したりしないようにするため、パホミオス師は北方の修道院に多数の修道士を送り込んだ。　彼自身はペヴォウ修道院に残り、愛弟子テオドロスを、読書用の書物と共に北方の修道院の修道士たちのもとへ送り出した。テオドロスをそこへ送り出す際、パホミオスは神の助けへの希望をもって彼を慰めた。　パホミオスは誓いを立てた――もし野蛮人が撤退したら、彼らに略奪された教会へ、書物や大量の小麦、そしてその教会が必要とするあらゆるものを送ると。翌日、皇帝の軍隊に完全に打ち負かされた野蛮人たちは撤退した。これにより修道士たちは安堵した。

野蛮人たちがまだ敗北する前、彼らは一人の隠者を見つけ出し、彼らにワインを飲ませるよう強要した。しかし、彼がワインを注ごうとすると、彼らはまず自分たちの神々に生贄を捧げるよう要求した。修道士はそれに応じようとしなかった。野蛮人たちは、要求に従わなければ彼を殺すと脅し始めた。　不幸な隠者は、異教の神々への生贄を拒む勇気を持っていなかった。彼は野蛮人たちの要求に従った。その後、彼は野蛮人たちにワインを飲ませ始めた。彼らは酔って眠り込んでしまった。これにより、隠者は彼らから逃げ出す機会を得た。　しかし、隠者の心は慰めようがなかった。彼は悲しみに打ちひしがれ、祈ることさえできなかった。パホミオスの慈愛と英知を思い出し、この修道士は急いで彼の元へ向かい、偉大なる長老の裁きに身を委ねることを決意した。　彼は深い悲しみをもって聖パホミオに、偽りの神々に犠牲を捧げることでキリストから表向き背いた後、もはや悔い改め、罪の赦しを得る道はないと感じているため、この一ヶ月間、神に祈ることさえしていないと告げた。

パホミオスは、まるで天使が彼の頭上に掲げ、今まさに彼に授けようとしていた冠を、彼が火の中に投げ捨ててしまったかのように、父のように彼を諭した。　キリストに不本意ながら背いてしまった修道士の誠実な涙を見て、パホミオスは彼に心の安らぎへの道を示した。彼は、昼夜を問わずできるだけ多く祈り、常に夕方まで断食し、重病の場合を除いては決して煮込んだものを口にしないよう勧めた。そうすれば、彼は神の憐れみを得て、赦しを受け、再びキリストの忠実な僕となることができるだろう。　パホミオスの信仰は、この修道士を勇気づけた。彼はもはや絶望することをやめ、神の慈悲を真摯に願いながら、自らの罪を悔い改め始めたのである。

長い間、タヴェンニシオの共同生活施設では、コプト人だけが修業に励んでいた[3718]。ついに聖パコミオスの名声はギリシャ人やローマ人の耳にも届いた。そして彼らの中にも、賢明なアッバ・パコミオスの指導の下、この共同生活施設を志し、ここで修道士となる者たちが現れた。　聖パホミオスは彼らに対しても熱心に世話を焼いた。彼らもまた、コプト人と同様に彼にとって大切な存在であった。

パホミオスにとって、ギリシャ人修道士たち（その数はローマ人よりも多かった）との関わりにおいて、ある程度の困難となったのは、ギリシャ語を知らなかったことだった。同様に、他のコプト人の修道士たちもこの言語を知らなかった。アレクサンドリアから最も近い場所である[3719]でさえ、日常語はギリシャ語ではなく、コプト語であった。　アレクサンドリアから比較的近い場所に暮らしていた修道士たちでさえ、例えば、大イラクレオポリス近郊で生まれた聖アントニオス大聖人や、生涯を下エジプトのスキテ、　テレヌオフェや北ディオルケで生涯を過ごした聖ピメン大聖人といった修道士たちでさえ、ギリシャ語を話さず、ましてやフィヴァイデ[3720]でギリシャ語を話す修道士に出会うことは極めて困難であった。ギリシャ人への奉仕において、パコミオス師を助けたのは、かつてアレクサンドリア教会の朗読者であったテオドロスであった。　しかし、聖パコミオス自身も、ギリシャ語を習得するよう努めた。

聖パホミオスは、言葉と模範の両方で修道士たちを指導した。修道士たちは彼の中にあらゆる美徳の模範を見出していたため、彼の言葉は一層強い影響力を及ぼした。　パコミオスの絶え間ない祈りの心、深い謙遜、自分自身に対する厳しさ、病気の時でさえも緩まない厳格さ、すべての人への愛、洞察力と知恵――これらすべてが修道者たちの心を彼に引き寄せ、誰もが理屈抜きに彼の言葉に従い、その助言を受け入れるようにさせた。

パホミオスの謙遜は極めて深かった。彼は並外れた偉業を成し遂げ、修道士や信徒、さらには司教たちからも最大の敬意を払われていたにもかかわらず――司教たちは時折、修道士たちを彼のもとに送り、彼らに対する裁きを下してもらうこともあった――聖パホミオスは、たとえ心の中であれ、他人を非難することを恐れていた。　神からの幻視や啓示を度々授かっていた彼は、その話が兄弟たちにとって道徳的な益になると期待できる場合にのみ、それらについて兄弟たちに語った。

ある時、兄弟たちは彼に、その幻視のうちのどれか一つを語ってほしいと頼んだ。彼の答えは注目に値する。主から特別な霊的賜物を授かった修道士たちが驕り高ぶることを防ぐため、自身の幻視について語ることを望まなかった聖パコミオスは、こう言った。「罪に満ちた者は、霊的な幻視の恵みを受けることはない。　しかし、もしあなたが美しく素晴らしい幻視を望むなら、その一つを教えよう。敬虔で、心謙虚で、清らかな人を見たとき――これこそが最も美しい幻視である。あなたはこの目に見える人の中に、目に見えない神を見ているのだ。これよりも優れた別の幻視を求めようとしてはならない。」

[3718] コプト人――エジプト人（キリスト教徒）。

[3719] アレクサンドリア――その教養、政治的重要性、そして貿易で名高い都市であり、紀元前333年頃、ギリシャの皇帝アレクサンドロス大王によってエジプトに建設された。

[3720] フィヴァイダ――上エジプトの地域。

謙虚なパホミオスは、兄弟たちに対して何事においても優位に立つことを望まなかった。彼は、他の兄弟たちと比べて自分により多くの食事を分け与えない兄弟を、真に公正な者と呼んだ。そして、他の兄弟たちと同様に働くことを望んだ。彼は、誰かが自分の労働を楽にしてくれることを許さなかった。

ある日、偉大なアッバは兄弟たちと共に仕事に出かけた。各人は自分の相棒と共に、決められた量のパンを運ぶことになっていた。パホミオスの相棒は、すべてを一人で運ぼうとした。しかしパホミオスはこれに同意せず、「指導者は何事においても、兄弟たちと同じ労苦を負わなければならない」と述べた。

極めて質素な生活を送っていたパホミイは、非常に粗末な服を着ていた。その服は、彼にとって衣服であると同時に、寒い時期の防寒着の代わりにもなっていた。彼はその服のまま、訪ねてくる司祭や修道士たちを迎えていた。

アファナシイという名の、修道院の衣服を管理していたある兄弟が、聖テオドロスに、アッバが服を脱いだらそれを倉庫に預け、その代わりに、長にふさわしい新しい服を着てほしいと頼んだ。

テオドールはアファナシウスの言葉に従い、一つの衣を別のものと交換した。

ところが、パホミオスが以前の衣を探し始めた。テオドロスは新しい衣を指さしたが、パホミオスは自分の古い衣を返してほしいと強く主張した。　長老が三度も繰り返したその願いに対し、フェオドールは「今となってはその服はもう見つからない」と答えた。しかし、フェオドールは、寒い時期には覆いとしても使っていたその服を長老から奪ってしまったことを深く悔やんだ。彼はそのことで涙を流すことさえあった。　しかし、パホミイもこの件に関しては自分が正しいとは考えていなかった。彼は、他者に従順を説きながら、修道院で衣服を管理する者に自ら従わなかったことを、長い間主に対して赦しを請うた。なんと偉大な謙遜なことか!

ある日、パホミオスが病気になったとき、テオドロスは彼を、病気の修道士たちが食事をとっている場所へ連れて行った。彼のために美味しいスープが用意されていた。彼はその料理を作っていた兄弟にこう言った。

「君は料理が下手だ。水を少しくれ。」

パホミオスは差し出された水をその料理に注ぎ込んだ。すると、フェオドールは食事の前に彼の手に水を注いだ。パホミオスは今度は、彼の足に水を注いだ。

食事の後、二人の間で会話が交わされた。フェオドールが「なぜ水で料理を台無しにしたのか」と尋ねると、パホミイはこう答えた。

「兄弟よ、私に食事を用意してくれた人は、私のために熱心に料理をしてくれた。しかし、人同士のそのような熱意は長くは続かないものだ。そこで私はこう考えた。今回は美味しく食べるが、明日になれば私は病気になり、また兄弟が美味しい食事をくれるのを待たなければならない。そう考えると、私の心は動揺してしまうだろう。　だからこそ、私は差し出された美味しい料理を台無しにしたのだ。そうすれば、次に彼が不注意で、以前のように美味しく作ってくれなくても、私にとってはもうどうでもよくなるからである。

フェオドールは長老に、なぜ自分の足に水を注いだのかと尋ねた。聖パホミオスは彼に素晴らしい答えを返した。

「私がそうしたのは、もしあの世で『フェオドールがあなたの手に水を注いだ』と言われたとき、私が『私が自ら彼の足を洗ったのだ』と堂々と言えるようにするためだ。」

病床にあったパホミイは、油の入った料理を口にしようとはしなかった。また別の時、病気の最中に、藁マット代わりに上質な毛布を掛けたり、一握りのナツメヤシの実を受け取ったりすることを拒んだ。なんと自らに対する厳しさのことか!

パホミイは、病気の修道士たちに対して特別な愛情を注いでいた。　何よりも彼は、病に倒れた兄弟の魂の救いを気にかけていた。彼は病人に神に感謝するよう説き、敬虔な思いを呼び起こし、

この世への執着や不純な思いに流されないよう戒め、神に許しを請い、主への希望を託して自らの未来を明るく見つめるよう促した。　彼は常に、病に伏した兄弟の肉体的なケアにも気を配っていた。共同生活の中で、病人は決して過度な断食を強制されることはなかったが、断食すること自体を妨げられることもなかった。パホミオスは、断食が病人の体力を著しく消耗させ、回復を妨げていると判断した場合、断食を緩和する必要があると考えたこともあった。

例えば、ある兄弟が四旬節の期間中に病気になったことがあった。しかし、彼は煮込んだものを食べることも、ワインを飲むことも拒んだ。たとえ過度な節制のせいで死に至るとしても、彼は自分に例外を許そうとはしなかった。　賢明なアッバ・パホミオスは、もし彼がその断食を完全にやめるつもりがないのなら、体力が完全に回復するまで断食を延期し、その時点で、今断食すべきだった日数分を厳格な断食として行うようにと助言した。

病院で奉仕していた修道士の中には、患者からの要望の中には、修道士として許されない気まぐれだと見なされるものもあり、それらに応じようとしない者もいた。しかし、聖パホミオスはこれを違った視点で見ていた。彼は、患者に可能な限りの慰めを与える用意があった。

例えばある時、パホミオス自身も重病に陥った。病院で、彼は少量の茹で野菜を食べるよう勧められた。その頃、病院には重病の修道士が一人入院しており、その体は皮と骨だけになっていた。長期にわたる病気のせいで、それほどまでに痩せ細っていたのだ。この修道士が病院の兄弟たちに少量の牛肉をくれと頼んだが、彼らはそれを承諾しなかった。　そこで、その病人は自分をアッバ・パホミオスのところへ連れて行ってほしいと頼んだ。偉大なるアッバは、その修道士の極度の衰弱と、病院の兄弟たちに見られる賢明な思いやりの欠如に衝撃を受けた。彼は彼らに厳しくこう言った。「愚か者たちよ、神への畏れはどこにあるのか？　神は『隣人を自分自身のように愛せよ』とおっしゃったではないか。」　この兄弟が死にかけていることが、お前たちには見えないのか？　なぜ、彼が求めたもの――　――を彼に与えなかったのか？　私は今、食べることも飲むこともできない。病気には違いがあり、ある病気は他の病気よりも過酷なものだからだ」。

パホミオスは、重病の修道士と、食事に関する規則を厳格に遵守しようとする他の者たちの無情な嫉妬を目の当たりにして、涙をこらえることができなかった。　そこで修道士たちは、自分たちの過ちに気づいた。彼らは直ちに子山羊を買ってくるよう命じ、それを料理にして、病に伏した兄弟の衰弱した体を養い、落ち込んだ心を元気づけた。

パホミイは、弟子たちに神への信頼を育むよう努めていた。これを裏付ける出来事が一つある。

ある晩、兄弟たちが葦を船に積み込むためにやって来た。テオドールは、自分が作ったシチュー[3721]が全員分には足りないのではないかと心配していた。パホミオスは彼の考えを察し、食事に対する過度な心配や臆病な懸念を戒め、神が人間を顧みておられることを指摘した。その信頼はパホミオスを裏切らなかった。

ある日、修道院で小麦が不足する事態が起こった。これは修道士たちを大いに悲しませ、不安にさせた。　近い将来への彼らの不安を払拭しようと、パホミオスはある善良な人物から寄贈された二枚の美しい絨毯を彼らに示した。万が一の時にはそれらを売り払い、その代金を小麦の購入に充てることができると。パホミオスは一晩中、熱心に祈りを捧げた。

翌日の朝、ある町の長が修道院の門を叩いた。門番が門を開けると、彼は、困っている人々に一定量のパンを施すという誓いを立てていたが、その夜、夢の中でまさにこの修道院の修道士たちがパンを必要としていることを知ったと告げ、誰か自分が持ってきたパンを受け取ってほしいと頼んだ。　このことをパホミオス自身に伝えると、彼は大いに喜び、その町の長に、確かにパンは必要だが、代金の支払いは猶予してほしいと伝えた。善良なキリスト教徒は言った。「私は金のためではなく

[3721] 植物性食品の一種。

、あなたがたが神の民であるからこそこれを持ってきたのです。さあ、修道士たちにこれを運び込ませてください」。

パホミオスは、極度の困窮時に修道院を助けてくれたその善良な人に心から感謝し、祝福として修道院のパンと野菜を彼に贈った。　市の長はこれを喜んで受け取り、神の僕たちに助けの手を差し伸べられたことに満足して立ち去った。修道士たちは、修道院を愛するこの市長の予期せぬ贈り物に驚き、喜びを覚えた。

パホミオスは、修道士たちがこの世のいかなる美しさにも執着してしまうことを恐れていた。彼は、教会の調和のとれた美しさや優雅ささえも、修道士たちを惑わすのではないかとさえ恐れていた。　聖パホミオスは、弟子たちに対し、虚栄心に陥らないよう熱心に戒めた。彼は修道士たちに、人間の称賛のためではなく、神のために、人知れず善行を積むよう説いた。また、外見において兄弟たちの輪から際立たないよう助言した。ここに、彼が修道者のこの敵とどれほど執拗に戦ったかを示すいくつかの事例がある。

ある修道士は、人々から特別な尊敬を得られるという期待に浸りながら、多くの夜を絶え間ない祈りの徹夜に費やしていた。　パホミオスは彼に生活様式を変えるよう説得し、兄弟たちが招かれる時には食事の場へ行き、彼らと共に食事を摂るが、満腹になるまでは食べないようにと告げた。また、すべての修道士に定められた量の祈りを捧げ、独房を出た後は誰に対しても親しみやすく振る舞い、陰気な様子を見せないようにと助言した。　もちろん、自らの修行を放棄してはならない。それもまたサタンに喜ばれることになるからだ。しかし、すべてを神のためになし、心の中に悪魔の入り込む隙を与えてはならない。　その修道士が、兄弟たちに弱く情けない者と思われないようにと恐れ、相変わらずの行動を続けたとき、パホミオスは再び、修行の度合いを緩めるよう執拗に助言した。彼は、虚栄心の強いその修道士に、以前の教えを何度も思い起こさせ、ついには、「情欲を滅ぼすためではなく、他人からの尊敬を得るために、外見的な修行への執着を固執し続ければ、狂気の境地に達してしまうだろう」と告げた。しかし、その修道士は自分のやり方を貫き、パホミオスの予言は的中した。　その虚栄心の強い修道士は、表向きの敬虔さを理由にますます傲慢になり、狂気と自我喪失の境地に達してしまった。アッバが、この修道士を、その虚栄心に満ちて神に不快な祈りから引き離すよう彼を遣わしたとき、彼は聖テオドロスを殺そうとさえしていた。　幸いなことに、木の切り株を握りしめて伸ばしていた彼の手は感覚を失い、彼はただテオドロスに向かって「神の敵だ」と叫び続けた。彼は長い間、そのような哀れな状態に置かれていた。やがて彼は狂気から癒やされ、かつての頑なな高慢さも同時に消え去った。

ある日、聖パホミオスは数人の長老たちと共に独房の外に座り、彼らと神の御言葉について語り合っていた。その時、ある兄弟が自分の独房の入り口で藁マットを編んでいた。彼は並々ならぬ熱意を持って作業に取り組み、その日だけで二枚の藁マットを編み上げることに成功した。彼はアッバ・パホミオスから称賛されることを期待していた。　その心の状態を見て、パホミオスは話し相手たちにこう言った。「この不幸な兄弟が見えないか？彼は今日の一日の労苦を無駄にしてしまった。なぜなら、神からの栄光よりも、人々からの栄光を愛してしまったからだ。彼は自分自身を疲れさせ、その魂からあらゆる成功と実りを奪ってしまったのだ。」

パホミオスはその修道士を呼び寄せ、その考えを厳しく叱責した。その後、叱責の口調を和らげ、パホミオスは、兄弟たちが教会に集まる際に、この二枚の藁マットを持って行き、修道士たちに許しと祈りを請うよう命じた。昼食の食事の際にも、同じことを行わなければならなかった。　さらに彼の魂を癒やすため、パホミオスは彼に、独房から一歩も出ずに、毎日1枚ではなく2枚の藁マットを準備し、パンと塩だけを食し、パンを届けてくれる一人の兄弟以外とは誰とも話さず、自分の罪について神に熱心に許しを請うよう命じた。　この懲罰は、その修道士の最大の情欲に真っ向から向けられたものであった。彼は、かつて虚栄心から行っていたことを、懲罰として行わなければならなかったのだ。　この懲罰は、彼が犯した罪を絶えず思い起こさせ、彼の心に最も切実な悔い改めを呼び

起こすはずだった。彼はパホミオスの称賛を何よりも大切にしていた。もちろん、偉大なるアッバが、皆の前で彼を非難した上で、これほど厳しく懲罰を下したのは、それなりの理由があるのだと理解せざるを得なかった。

もう一つの注目すべき出来事がある。ある日、聖パホミオスは、修道士たちが異端的な思想に染まっていた修道院を訪れることになった。　そこで修道士たちは、パホミオスの弟子たちに、彼らの長がパホミオスに「どちらが正しいか、どちらが神に喜ばれるかを示すために、共に川を渡ろう」と提案していると伝えた。弟子たちがこのことをパホミオスに告げると、彼は自分の修道士たちがそのような提案に耳を傾け、それを伝えてきたことに深く悲しんだ。　パホミオスは彼らに厳しくこう言った。「異端者は、神の許しと、その不敬虔な信仰を確固たるものにし、他の人々をその信仰へと誘い込もうとするサタンの助けによって、陸を歩くように水の上を歩いて川を渡ることができる。さあ、行って、あの人々にこう伝えなさい。『神の僕パホミオスはこう言っている。私の労苦と心遣いは、徒歩で川を渡ることではなく、神の懲罰を免れ、私たち人間全員が、主イエス・キリストの御座の前で渡らなければならないあの火の川を渡ることに向けられているのだ。　さらに、福音書には『あなたの神、主を試してはならない』と記されている。

聖パホミオスは、異端者たちの提案の中に、奇跡的な現象によって修道士たちの信仰を揺るがし、彼らの中に虚栄心を煽ろうとするサタンの策略を見抜いていた。彼は弟子たちに、決してそのような誘惑に屈せず、虚栄心に惑わされないよう説き続けた。

ある修行者に、虚栄心に汚されていない美徳がたった一つでも現れると、聖パホミオスはその兄弟のわずかな進歩を喜び、その美徳を彼の救いの保証と見なして、丹念に育んでいった。　聖パホミオスは、修道士たちが自らの志ではなく、強制によって厳しい修行に身を投じることを望んでいなかった。このことは、修道院での生活における次の出来事が雄弁に物語っている。

ある日、聖パホミオスが他の修道院を訪問した後、常駐していた修道院に戻ると、兄弟たちが迎えに出てきた。出迎えの際、ある若者が大声で、パホミオスが彼らのもとを去って以来、穀物も野菜も何も調理されていないと告げた。　聖パホミオスは穏やかに、そして親しみを込めて彼にこう答えました。

「悲しむな、わが子よ。これからは私があなたたちのことを引き受け、食事の世話をするつもりだ。」

修道院に入り、教会で祈りを捧げた後、パホミオスはまっすぐ厨房へ向かった。料理人たちは藁マットを編んでいたが、パホミオスは料理長の男に尋ねた。

「いつから修道者たちのためのスープを作らなくなったのか？」すると、彼が一度もスープを作っていないのは、すでに二ヶ月も前であることが判明した。パホミオスは彼に尋ねた。

「規則では、毎週の土曜日と日曜日に修道士たちにスープを振る舞うよう定められているのに、なぜそんなことをしたのか？」

料理長は、修道士たちは修行への愛ゆえにスープを口にせず、少量の野菜と油で満足しているからだと答えた。　以前は油を使って調理されたスープは捨てられていたが、今は一人の修道士にオリーブ、野菜、酢を食事の場に運ばせるようにし、自身と他の者たちは藁マットの製作に励んでいる。この間、厨房では五百枚の藁マットが製作された。

パコミオスは、厨房を管理していた修道士の独断専行に深く心を痛めた。勝手に作られた藁マットを焼却するよう命じた後、聖パコミオスはその修道士に対し、職務以上の熱意が規則の軽視につながったと厳しく指摘した。　しかも、この状況下での修道士たちの節制は、もはや自由意志によるものではなく、必然の結果であった。もはや誰も自らの熱意を示す余地はなく、皆がやむを得ず断食を強いられていたのだ。

「私としては」と聖パホミオスは語った。「さまざまな種類の料理を用意し、あらゆる種類の果物を調理して、それらを兄弟たちの前に並べたい。そうすれば、彼らが欲望を抑え、自発的に、修

行のためにそれらを食べることを断ることで、神の前で偉大かつ善き行いを成し遂げることができるからだ。」　もし食事の席で、規則で認められたものを供しなければ、体の弱い兄弟たちは衰えた体力を十分に回復することができず、完全に衰弱してしまう恐れがある。　さらに、兄弟たちの間には多くの新入者がおり、その中には非常に若く、体が弱い者もいます。彼らは修道生活における修行において、完成された者たちには及ばないのです。もし土曜日や日曜日、祝日であっても食事を取り上げられたら、彼らにとっては特に辛いことでしょう。彼らは、自分たちにとって慣れない厳しい生活から、落胆に陥ってしまうかもしれません。

なんと正しい見方であろうか！　規則を破った者に対するこのほどよい厳しさ、共同生活における秩序の維持への配慮、そして節制への過度な熱意から食事の規則を破ってしまった料理人へのこの叱責の中に、弱々しい兄弟たちへの深い愛が感じられるではないか！

聖パホミオスは、過度な厳しさが一部の修行者を絶望に追い込む可能性があることを常に念頭に置いていた。彼は、修道生活を始めたばかりの未熟な修道士たちに対して、彼らを世話と支えを必要とする「若い苗」と見なし、特別な配慮と優しさをもって接した。　パホミオスは、愛弟子テオドロスが弟のパフヌティオスに対して厳しすぎたことを叱責した。パフヌティオスを修道院に留まらせたのは、パホミオスの愛と知恵だけだった。ここに、他修道院の修道士に対する、そのような先見の明と愛を示す一例がある。

タヴェンニシからそう遠くない場所に、共同修道院に属さない小さな修道院があった。その修道院の院長は、聖パホミオスの賢明な教えを聞くために頻繁に訪れ、それを自分の修道士たちに伝えていた。その修道院のある修道士が、自分には不相応な役職を執拗に求めていた。　ある時、修道院長は彼の願いに対し、パホミオスが「彼はその地位にふさわしくないから与えてはならない」と助言したと答えた。しかし、パホミオスは実際にはそのようなことは言ってはいなかった。　傲慢な修道士は、説明を求めるため、ほぼ無理やり自分のアッバを聖パホミオのもとへ引きずっていった。青ざめ、深く物思いにふけりながら、修道院長は、修道士の抑えきれない怒りに戸惑いながらも、彼の後をついていった。

彼らは、パホミオスが修道院の塀を築いているところに出くわした。怒りに我を忘れたその修道士は、パホミオスに向かって叫んだ。

「降りて、私の罪を証明してみろ、パホミオ――この嘘つきめ！」

極めて柔和で忍耐強いパホミオスは、無礼な修道士に何も答えなかった。しかし、修道士は罵倒を続けた。パホミオスは彼の心の状態を理解し、穏やかに答えた。

「許してください、私は罪を犯しました。あなたは一度も罪を犯したことがないのですか？」

修道士の怒りは収まった。その後、パホミオスは修道院の院長を脇に呼び、何が問題なのかを尋ねた。アッバは彼にこう助言した。

「私の言うことを聞き、彼の願いを叶えてやりなさい。そうすれば、彼の魂を敵の手から救い出せるでしょう。」

修道院長は、この助言に従った。彼も、その修道士も、パホミオスによって慰められ、心を落ち着かせられた。

数日後、その修道士はパホミオに対する自分の無礼を悔い改め、彼のもとへ許しを請いに行った。彼は、パホミオが人々が言う以上に高潔な人物であることを認め、次のように語った。　「神はご存知です。もしあなたが私に対して寛大でなく、たった一言でも粗野な言葉を口にしていたなら、この罪深い私は修道生活を捨て、再び俗人になっていたでしょう。どうか祝福あれ、神の御使いよ。主はあなたの寛大さを通して、私に新たな命を吹き込んでくださったのですから。」

聖パホミオスは、修道士たちに、彼らが持つべき熱意について頻繁に説いた。彼はあらゆる機会を利用して、彼らの中に、善行への熱意、罪の悔い改め、そして霊的な成長への意欲を掻き立てようとした。

ある日、弟子テオドールと共に墓地の近くを通りかかったとき、パホミオスはそこで数人の女性が悲しみのあまり泣き崩れているのを見かけた。彼はテオドールにこう言った。

「死者を蘇らせることのできないのに、その死を嘆いて涙を流しているこれらの女性たちが見えるか？　それならばなおさら、修道士と呼ばれる我々は、罪によって死んだ自らの魂のために、そしてキリストがその人愛によって蘇らせてくださるその魂のために、泣くべきではないだろうか！」いずれにせよ、善意から流される涙は称賛に値する。

聖パホミオスとその修道士たちは、自分たちの救いと幸福だけでなく、隣人の救いと彼らの真の幸福についても喜びを覚えていました。誤った教えは信者たちを惑わせ、教会に動揺と分裂をもたらします。聖パホミオスはこれを嘆いています。　正教徒が勝利を収め、異端が弱まる――聖パホミオを筆頭とするタヴェンニシオの信徒たちの心を、なんと大きな喜びが満たしていることか！　飢饉やその他の社会的な災難が国を襲うとき、エジプト全土の悲しみはすぐにタヴェンニシの首長のもとに届き、そこで他者の苦しみは最も深い同情を呼び起こす。

ある時、聖パホミオは、エジプトで大規模な飢饉が発生し、それに飢饉のほぼ切っても切れない伴侶であるペストまで加わったと告げられた。　パコミオスが食事を摂らずに過ごして、すでに二日目になっていた。しかし、彼は飢えに苦しむ多くの人々の苦しみを生々しく感じ取り、翌日まで全く食事を口にせず、苦しむ人々に対して深い同情を込めてこう語った。「私の同胞たちが飢えていて、パンもないのに、私は食べることができない」。

そして、エジプトで飢饉が続いている間ずっと、パホミオスは深い悲しみに沈み、最も厳しい断食に身を捧げ、民の災いが収まるよう祈り続けた。

すべての人々、とりわけ修道士たちに深い同情を抱いていた聖パホミオスは、皆のために熱心に祈りを捧げた。彼は、主が修道士たちがその崇高な誓いを果たし、一人ひとりが聖霊の清らかな宮となるよう助けてくださるよう祈った。　他の人々のために祈る際、彼はまず第一に、善を行う人々のために祈り、主が彼らの心から、生活に必要なもの以外のあらゆる世俗的な心配事を消し去ってくださるよう願った。偉大なるアッバはまた、まだ罪に囚われている者や異端に惑わされている者たちのためにも祈り、主が彼らに悔い改めの心を授けてくださるよう願った。　彼は王たちやすべての統治者のためにも祈った。彼らが神とすべての人々から愛され、不当に扱われた者たちに正義を施し、儚い栄光に執着せず、神の御心を行い、神に喜ばれた王たち――例えばダビデ王のような――に倣うことができるようにと。　パホミオスはまた、牧者たちのためにも祈り、主が彼らを使徒たちの忠実な後継者とならせ、主のすべての戒めに汚れなく従い、真の知恵、堅固な使徒的信仰、清らかさと敬虔さをもって身を飾ることができるよう、主が助けてくださるよう願った。

世界の平安を祈った聖パホミオスは、可能な限りすべての人に助けの手を差し伸べた。　多くの人々が、彼の聖なる生き方と、厳格さではなく柔和さをもって語られる言葉の影響を受けて、善き生活へと立ち返った。多くの修道士たちが、彼の直接の指導の下で救われた。それだけではない。聖パホミオスは、神の御加護のもと、人々の肉体の病に対して奇跡的な助けを与えた。

ある長老ディオニシウスが、誰からも助けを得られなかった出血の病を患う女性を修道院の門まで連れてきたが、彼女は聖パホミオスの衣の端に触れたことで、完全に癒やされた。　尊者パコミオスは、ある男性に連れられてきたその男性の娘を、聖油を塗ることで癒やし、その父親に対し、娘が貞潔な生活を送っていないと告げ、父親を通じて娘に貞節を守るよう命じた。　また別のある男が、汚れた霊に取りつかれた息子を聖パホミオのもとに連れてきた。その若者は癒やされた。さらに、もう一人の悪霊に取りつかれた者も、まもなく偉大なるアッバによって癒やされた。同様の癒やしの事例も他にもあった。

聖パコミオスはある時、不浄な霊に取りつかれた人のために祈っていたが、天から声がかかり、その人への祈りをやめるよう命じられた。というのも、この不幸は彼自身の魂の益のために降りかかったものだったからである。

ペヴォウの修道院には、一人の兄弟が病気で苦しんでいた。彼はすでに三日間、病と闘っていた。パホミオスの元を訪れ、多くの信徒が癒やされていることを挙げながら、涙ながらに自身の癒やしを祈ってほしいと懇願した。　パホミオスはこれに対し、次のように反論した。「信徒たちの信仰は彼らの肉体に癒やしをもたらし、神が彼らに与えてくださるその癒やしによって、彼らは善を行う気概を持つようになる。しかし、私たちキリストの僕たちに関しては、私たちの信仰とは、神があの世で私たちに与えてくださる朽ちることのない安息である。病も悲しみもなければ、私たちは戒めに背くような振る舞いをしてしまうだろう」。

このパホミオスの教えは、病に伏していた修道士を慰めた。

しばらくして、彼の病が依然として続いていたとき、彼は兄弟たちの付き添いのもと、パホミオスのもとを訪れた。　皆、この兄弟の癒やしを願って、偉大なるアッバに祈りを捧げるよう懇願した。パコミオスは祈り始めたが、すぐに次のような声を聞いた。「この兄弟のために祈ってはならない。主は、悪魔の策略から彼を救うために、この病を彼に送られたのだ」。

その時、すべての兄弟たちは、御自分のしもべたちを慈しみ、彼らの救いを整えてくださる主を賛美した。

主はパホミオスの手を通して多くの癒やしをなされたが、偉大なるアッバは常に、偶像崇拝、偽り、淫行、あらゆる種類の不潔さ、ひいてはあらゆる罪から魂を癒やすことを、より高次かつ不可欠なものと見なしていた。そして、肉体の癒やしを与える際にも、彼は常に人の魂をも同時に癒やすことを目指していた。

聖パホミオスの活動の成果は偉大であった。彼の指導の下、修道士たちは高い完成度に達した。怠惰で悪癖に染まった者でさえも改心し、最高の完成度を達成しようと努めた。偉大な修行者たちの中で、何か特別な点で際立つことは難しかった。だからこそ、これらの修道士たちの名前が私たちに伝わっているものはごくわずかである。 ここに、いくつかの傑出した修行者たちを紹介する。

勤勉さ、忍耐、そして肉体の執着からの解脱の模範を、庭師イオネに見出すことができる。彼は85年間、修道者の務めに身を捧げた。庭にある木々はすべて彼が植えたものだったが、彼はその実を一度も口にしたことはなかった。それらの実は、イオネを訪ねてくる修道士たちに、活力と慰めをもたらしていた。　彼の着物は最も粗末なもので、体をかろうじて覆うだけの革の覆いのようなものでした。粗い羊毛の服は、聖体拝領の前にのみ身に着け、その後は直ちに脱ぎました。この服一着で、彼は一生を過ごしました。彼は火で調理された料理を一度も口にしたことがありませんでした。パンと酢からなる彼の普段の食事は、夕方になって初めて口にし、それも満腹になるまで食べなかった。彼は肉体の安らぎなど全く考えず、病気のときでさえ、死の淵に立たされたときでさえ、病院に行くよう説得されることはなかった。彼は、他人の世話を受けるに値しないと考えていたのだ。　一日中、灼熱の太陽の下で庭仕事に従事していたイオナは、夕方になってようやくこの過酷な労働を終えた。夜が訪れると、彼は自分の小部屋に戻り、部屋の真ん中の椅子に座って、真夜中まで縄を撚りながら、口と心で神を賛美した。　その後、彼は椅子に座ったまま、ロープを手放すことなく、ほんの短い間だけ眠りについた。精神的に活気あふれるアッバ・イオナは、すぐに起き上がり、祈りに身を捧げた後、庭仕事に取りかかった。　夜、祈りや手仕事の最中、彼は決して灯りをともさなかった。彼は他にも、驚くべき行いを数多く成し遂げた。彼は椅子に座ったまま息を引き取り、その手にはなおも縄が残っていた。　彼を埋葬しようとした兄弟たちは、彼の両足を合わせることができず、両手を体に沿わせて曲げることもできず、また、彼が普段着ていた革の服を脱がせて、清潔な羊毛の衣を着せることもできなかった。彼らは、彼が亡くなったままの姿で、羊毛の死装束だけを身にまとわせて彼を埋葬した。　パホミオスの修道院には、アフィノドールという名の、ハンセン病に冒された一人の修道士がいた。この修道士は、絶え間なく続く過酷な病に苛まれながらも、忍耐、寛容、勤勉さを示した稀有な模範であった。ハンセン病患者として他者から離れて暮らしていたアフィノドールは、パンと塩だけを糧としており、それも二日ごとに夕方に一度だけ口にしていた。　修道院の他の

修道士たちと同様に、彼は毎日藁マットを編んでいたが、ハンセン病で傷ついた彼の手は、作業のたびに血に染まっていた。日中は決して横になって休むことを許さなかった。少しずつ、聖書の箇所を暗記していった。　就寝前には長く祈りを捧げ、真夜中には共同の兄弟的祈りの場へと向かった。しかし、彼において最も驚くべきことは、病を忍耐強く耐え忍んでいたことだった。聖パコミオスは、この修道士を見るだけで多くの人々の心に敬虔な熱意を呼び起こすと確信し、しばしば彼を様々な修道院へ派遣した。　ある日、ある親切な修道士が彼の独房を訪れた。彼は、アッバ・アフィノドロスの忍耐と病弱な姿に深く心を打たれた。この修道士は兄弟愛をもって、藁マットの編み物による労働をやめるよう彼を説得した。それは、その作業が彼の手をひどく痛めているからであった。　その修道士は、自分たちなら誰でも喜んで彼の代わりに働くし、それが決して負担にはならないと語った。彼らはもともと、主のために病人や旅人の世話をしているのだから。しかし、忍耐強いアフィノドールは、一人ひとりの人間、とりわけ修道士にとって労働がいかに重要であるかを深く理解しており、善意の助言者に対して、自分には仕事をやめることはできないと断固として告げた。

思いやりのある兄弟は、せめて手に油を塗って、少しでも柔らかくし、ひび割れを治すよう彼に助言した。アフィノドールはその助言に従った。しかし、油を塗ったことで手はさらに柔らかくなり、作業中に以前よりもさらに激しい痛みを感じるようになった。　パホミオスは、この兄弟が油の助けに　頼っていることに気づいた。アッバは兄弟愛に満ちた叱責をもって、アフィノドールにこう指摘した。「油に希望を託すべきではなく、すべてを神の御心に委ねるべきだ。なぜなら、この病が彼を襲ったのは、神の摂理によるものであり、彼自身や他者にとって有益なものであるからだ。」アフィノドールは自分の過ちを認め、パコミオスに許しを請いました。その後、彼は丸一年間、この罪を悔い改め続けました。パコミオスの共同体の修道士たちは、これほどまでに自らに厳しかったのです。聖パコミオスは、誰に対して厳しくすべきか、誰に対して寛容であるべきかをよく知っていました。

ある日、二人の若者がパホミオスのもとを訪れた。二人とも修道士になりたいと願っていた。そのうちのひとり、シルヴァンは十六か十七歳の若者で、それまで肉欲にまみれた生活を送っていた。　パホミオスは次のような考えで彼らを受け入れた。「彼らを修道士にしてやろう。もし、不品行な生活を送っていた若者が悔い改めを捧げたなら、私は彼を受け入れよう。もし悔い改めていないなら、彼を追い出そう」。

アッバ・パホミオスはシルヴァンと二人きりで話し、その若者はかつての罪について率直に打ち明けた。彼は改心し、二度と罪を犯さないと約束した。　しかし、ほどなくしてシルヴァンはかつての罪に再び陥ってしまった。アッバ・パホミオスは、彼の例が修道院の誰かを堕落させることのないよう、すでに彼を追放するつもりだった。アッバは敬虔な修道士一人を呼び寄せ、シルヴァンと他の五人の修道士を連れて、彼が指定した修道院へ向かい、そこで彼を待つよう命じた。

翌日、アッバはそこでシルヴァンに対し、共同生活から追放するという決定を告げるつもりだった。しかし、まさにその前日の夜、神の恵みが若者の心に触れた。彼は自分の生き方を改め、心を正すことを固く決意した。　その夜、彼はベッドから起き上がり、その修道院へ同行してくれる敬虔な兄弟を見つけると、その隣に座り、苦々しく泣き出した。　その兄弟が涙の理由を尋ねると、シルヴァンはこう答えました。「私が泣いているのは、神への畏れを持っていないからです。もし私が主を畏れていたら、神の人である私たちのアッバ・パホミオスの言葉を守っていたでしょう。」

親切な修道士は彼を慰めようと努めた。彼は若者にこう助言した。「今日まで、あなたは神への畏れを持たずに過ごしてきた。しかし今、彼があなたに命じたことすべてに心を捧げなさい。そうしてそれを守り通せば、神への畏れを得ることができるだろう」。

朝、聖パホミオスが二人の修道士を連れてこの修道院を訪れた。彼は密かにシルヴァノを呼び寄せ、朝から午後七時まで彼と語り合った。その会話の中で、彼は若者の心の状態を明らかにし、そ

の大きな罪深さを指摘し、もはや彼を修道院に留めておくことはできないと告げた。　偉大なるアッバの言葉は、若者を深く打ちのめした。彼はすでに自己改善や心の浄化、霊的な再生について考えていたが、今や、心から愛し尊敬していた修道士たちの仲間から、今すぐ追放されると聞かされたのである。　シルヴァンは苦い涙を流しながら、パホミオスの足元にひれ伏した。長老に慈悲を懇願しながら、彼はこう言った。「今回は悔い改め、あなたが命じることはすべて実行します。それはあなたのためだけではなく、あなたの中に宿り、私の不浄さをあなたに明らかにしてくださった神のためです」。

彼は、今後二度と誓いを破らなければ、修道院から追放しないでほしいと長老に懇願した。シルヴァノスの悔い改めの誠実さは明らかであった。　パホミオスはしばらくの間、彼から離れて人里離れた場所へ行き、主がシルヴァノに誓いを果たすための確固たる意志を与えてくださるよう、彼のために祈った。その後、彼は敬虔な修道士サナモンを呼び寄せ、シルヴァノの世話を任せた。その際、この若者の振る舞いについて彼に話し、この件については口外しないよう頼んだ。　パホミオスは、この修道士に対し、シルヴァノを正すには多くの労苦が伴うだろうと警告し、この善良な修行者が、彼の霊的な再生を丹念に世話することを承諾して初めて、その若者を彼に託した。　その後、パホミオスはシルヴァンを呼び寄せ、この長老のそばに常に寄り添い、その生き方に倣い、決してその元を離れず、許可なく何事も行わないよう説き、戒めを与えた。シルヴァンはパホミオスの戒めを守ることを約束した。　パホミオスは、この修道院の院長に対し、いかなる場合でもこの二人の修道士を引き離してはならないと告げたが、シルヴァンの過去の行いについては何も明かさなかった。　今や神への愛に燃えるシルヴァンは、天からの助けを求め、あらゆる苦難や侮辱を当然の報いとして耐える用意があることを誓い、自らの心を絶えず見守ることを約束した。　シルヴァンはその誓いを果たした。彼はますます修行を厳しくしている。食事は一日一回のみとし、水を飲む際も喉の渇きが完全に癒えるまで飲まない。熱心に祈りを捧げ、夜の大半を祈りに費やし、眠気に襲われそうになると、壁にもたれかかることを許さず、自分の藁マットの上に座り込む。　彼はこれらすべてを、いかなる虚栄心もなく、ただ心の浄化、邪悪な欲望の抑制、そして神への至高の愛の獲得のみを念頭に置き、極めて謙虚に行っている。　彼の謙虚さは、自らをすべての修道士の中で最も劣った者と見なし、食事には　で最も質の悪い野菜を選び、藁マットや籠を編むための葦も最も質の悪いものを手に入れようとするほどであった。

ほどなくして、シルヴァンは完全な霊の清らかさに達した。パホミオス自身も、悔い改めの実を結んだこの若き修行者の霊的な成長を見て、喜びを感じていた。

ある日、シルヴァンが住んでいた修道院の兄弟たちが葦を採集していた。パホミオスもその時は彼らと共にいて、神の御言葉をもって彼らを戒めていた。やがて彼は修道士たちにこう言った。

「主があなたがたの間でなされた奇跡について、お伝えしたいと思います。あなたがたの中に、回心し、第二の誕生によって新しい人となり、心の清さにおいて完全な者となった者が一人います。」

パホミオスはさらに、この兄弟が極めて高い霊的清らかさを持ちながら、高慢とは全く無縁であり、魂の清らかさと高潔さにおいて彼に匹敵する修道者は一人もいないことにも言及した。修道士たちは、パホミオスがシルヴァンについて語っていたことを知って驚いた。　兄弟たちは皆、シルヴァンに最大の敬意を表すようになった。彼らは次々と彼の元へ駆けつけ、彼から教訓の言葉を聞こうとした。彼らは今や、彼を「アッバ・シルヴァン」としか呼ばなくなった。しかし、謙虚なその修道士は、深い柔和さをもって彼らにこう言った。「私があなた方のアッバだというのは本当でしょうか？」

彼はそのような高みに達するために、並々ならぬ努力を重ねた。その後、彼は長くは生きられなかった。神と良心との和解のうちに、この世を去った。

主は聖パホミオに、修道生活の将来の姿をも示された。　ある日、多くの兄弟たちがパホミオスと共に葦を切りに行くことになった。修道士たちの一部が彼らを見送った。その中には、パホミオスの愛弟子である聖テオドロスもいた。岸から漕ぎ出す時が近づくと、パホミオスはテオドロスに言った。「急いで舟に乗りなさい」。

テオドロスは理由を尋ねることなく、直ちに長老の命令に従い、舟に乗り込んだ。その頃、霊的啓発のために読んでいた本を持っていくことなど、微塵も考えなかった。　彼は、長老が自分に従順を示す機会を与えてくれたことを喜んだ。それは、神の命令に従って自分の地を離れたアブラハムのように、どこへ、なぜ導かれるのか尋ねることのない従順であった。たとえ自分がどこへ向かっているのか知らなくても。舟に葦を積み終えた頃、パホミイは極めて恐ろしい光景を目にした。　彼の目には、修道士たちの一部がライオンの口の中に、またある者はワニの口の中に、さらに他の者は炎の中に、そしてある者は波が押し寄せる山のふもとにいるように映った。彼らは山に登ろうとしていたが、その努力はすべて無駄に終わっていた。彼らは皆、「主よ、私たちを助けてください！」と叫んでいた。

修道士たちがそのような苦境にあるのを見て、パホミイは肩に担いでいた葦を地面に投げ捨て、天に向かって両手を広げ、これらの不幸な者たちのために主の助けを請い、大声で祈り始めた。それを見たすべての修道士たちもまた、荷物を捨てて祈り始めた。多くの修道士たちによるこの切実な祈りは、夕方まで続いた。　パホミオスには、この幻視が、彼がすでにこの世を去った後の時代に関するものであることが啓示された。夕方、食事の席でパホミオスは何も口にしなかった。葦の収穫中に、ある用事で一人の修道士と共に派遣されていた聖テオドールは、この出来事について何も知らなかった。　その後、彼はパホミイの幻視について知らされた。長老が何も食べていないことを知ると、テオドールはパンを水でふやかし、何か料理も用意して、ある兄弟を通じてパホミイに、彼に会いたいと伝えた。テオドールが自分を呼んでいると聞いて、パホミイは直ちに彼のところへ向かった。多くの修道士たちの運命を案じ、長老は依然として泣き続けていた。そしてテオドールに対し、彼もまた主の前で泣くべきだと告げた。その時、ある兄弟が、テオドールがまだ何も食べていないことに気づいた。パホミオスは彼にこう答えた。「お前と彼に何の関係がある？　彼には食べずに泣いていればいいのだ」。

長老自身は、愛する弟子をこれ以上悲しませないよう、心にはまだ深い悲しみが残っていたにもかかわらず、テオドロスが差し出した食事を口にした。

生涯の最後の数年間、聖パホミオスは修道生活の運命について、さらに別の啓示を受けた。ある日、自分の独房に閉じこもったパホミオスは、11時（私たちの時間では午後5時）から真夜中まで祈りを捧げていた。　すると突然、まばゆい光が彼の部屋を照らし出した。彼はある声を聞いた。「あなたに続く世代は、この日々と同じように、神に喜ばれるような生活を送ることになるだろう。」

その後、修道院がいかに広く普及するかが彼に示された。しかし、そこで彼は、ある非常に深く、険しく、陰鬱な堀を、感嘆の念を抱きながら目にした。その堀の中には、互いを区別することもできず、ぶつかり合いながら、数え切れないほどの修道士たちが歩いていた。中には、この堀から抜け出すために必死の努力を する者もいた。 そのうちの何人かは深さの半分までたどり着くことができたが、その後、真っ逆さまに落ちていった。多くの者が哀れみを求めて悲痛に叫んでいた。中には、ついにこの深淵の最上部――パホミオスにこの恐ろしい暗闇を照らし出していた光の差し込む開口部――に到達することに成功した者もいた。　彼らはその時、神に大いなる賛美を捧げた。我に返ったパホミイは、この幻視において、自らの不注意によるものであれ、不適格な指導者の過失によるものであれ、行いの悪い修道士たちの魂が将来どのような状態になるかが示されたのだと悟った。　パホミオスは深い悲しみをもって神に叫び、修道院と修道士たちへの神の慈悲を懇願した。彼は彼らのためにほとんど絶望しかけていた。神への叫びに応えて、彼はこう言う声を聞いた。「パホミオスよ、あなたが人間であることを忘れてはならない。すべてはわたしの慈悲にかかっているのだ」。

パホミオスは地面にひれ伏し、神に自分への慈悲を祈った。すると、彼は、若々しい姿で、言葉では言い表せないほどの美しさを持ち、頭に茨の冠を戴いた救い主キリストご自身が現れたことで慰められた。　キリストは彼に、弟子たちが彼を、自分たちのための光を借りることができる「灯」として仰ぎ見るようになることを明かされた。彼らの振る舞いは規則に従ったものとなり、内面は善意に満ちるだろう。後続の修道士たちは彼らを模範とするだろう。しかし、信仰が弱まり、悪徳が強まる時が来る。　怠慢と肉欲への傾倒が、その時代の修道士たちを特徴づけるだろう。霊的な闇は深まる。彼らは世俗的な富を巡って互いに争うことになる。真の修行者はごくわずかしかいない。彼らには指導者がいない。自らを奮い立たせて善を行い、悪から遠ざからなければならないのだ。　もちろん、彼らの功績は、初期の修道士たちの功績に比べれば、さほど価値のあるものではないだろう。しかし、彼らは初期の修道士たちと同等の報いを受けることになる。なぜなら、彼らは当時の生活環境が修道士にとって過酷であったため、少なからぬ苦難を強いられることになるからだ。パホミオスは、これらすべてが明らかにされたとき、大変喜んだ。　彼は何日も食事を摂らなかった。翌日、兄弟たちが祈りのために集まったとき、アッバは彼らと共に教会へ向かった。そこで、祈りの後、彼は集まった修道士たちに心打つ話を語った。

「この世の生活はあっという間に過ぎ去り、死は私たちに近づいている」と彼は語った。「死は、私たちがまだ全く準備ができていない時に、突然私たちを襲うかもしれない。それゆえ、人は常に神の戒めを熱心に守り、一つたりとも疎かにしてはならない。義人の至福と罪人の苦しみについて考えることは、常に私たちの心に留めておかなければならない。」　兄弟たちの墓を目の当たりにすると、私たちは人間の儚さ、すなわち、この現世の生活には、誇りに思うべきものや、執着すべきものは何一つ含まれていないということを、考えずにはいられない。　聖パホミオスは修道士たちに、世を捨てた彼らこそが、もし自らの義務に背き、神の代わりに悪魔や罪に仕えるならば、誰よりも哀れな存在になってしまうと、執拗に警告している。偉大なるアッバは、弟子たちに自らの救いのために熱心に労し、可能な限りのことを行い、常に神に希望を置くよう招いている。

苦行のせいで著しく衰弱していた尊者パホミオスは、復活祭の直後に、すでに多くの修道士が命を落としていた重篤な病に襲われた。この病に罹ると、激しい高熱に襲われ、目が赤くなり、顔色が変わり、息苦しさを覚えるようになった。　すべての修道院で修道士たちが次々と亡くなり、さらに多くの者が病に伏していた。パホミオスが病に倒れたとき、テオドロスは息子のような愛情を込めて彼に仕えた。偉大なるアッバの病は長きにわたり続いた。彼は次第に衰弱していった。高熱は尋常ではなかった。　長老は三日間、食事も水さえも一切口にしなかった。しかし、彼は兄弟たちとの対話を続けていた。パホミオスは四十日間、病床に伏していた。彼は他の病人たちと同様に手厚く世話を受けた。彼はひどく衰弱し、分厚い掛け布団さえも重荷に感じるほどだった。彼はテオドールに、もっと軽い毛布をかけてくれるよう頼んだ。　テオドールは直ちに、軽くてしかも新しい毛布を持ってきて、長老をその毛布で覆った。パホミオスは、自分だけが特別扱いされていることに気づき、それを不公平だと感じた。長老は、これが誰かを誘惑する恐れがあることを恐れた。そこでテオドールはその毛布を取り除き、他の患者たちと同様に別の毛布をかけた。

修道士たち、とりわけその指導者たちに多くの有益な教えを授けた後、聖パホミオスはパションス月の14日[3722]、おそらく348年、享年53歳でこの世を去った。

フェオドールの手が、偉大なるパホミオスの目を閉じた。修道者たちは聖遺体に駆け寄り、涙を流しながらアッバ・パホミオスの口元と聖なる遺体を口づけした。彼らは、その安息を祈る祈りを、その日一日中、そして 一晩中捧げた。 朝、彼のために無血の犠牲が捧げられた。その後、修道士たちは歌を歌いながらパホミオスの遺体を山へと運び、慣習に従って埋葬した。それはパションス月の15日のことだった。

[3722] パションス月は、4月26日から始まり、私たちの5月に相当する。したがって、パションス14日は5月9日となる。

修道院に戻った兄弟たちは、深い悲しみに包まれながら互いにこう語り合った。
「まことに、我らは今日、親を失ったのだ。」

トロパリオ、第8調:

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深き嘆きから百の労苦を実らせ、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、パホミイ、我らの父よ。キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第2調:

あなたは地の果てに輝く灯として現れ、数多くの修道者たちによって荒野に都市を築き上げられました。自らを十字架に架け、その十字架を肩に担ぎ、節制によって肉体を消耗させ、絶えず私たちすべてのために祈り続けておられます。

我らの尊き父エウフロシノス、プスコフの奇跡行者の記念日

記念日：5月15日

聖殉教者エレアザル（[3723] ）は、ロシアの大島、すなわち北と西の間に位置するヤフェトの領地、北の国、神に守られた大都市プスコフ（[3724] ）の近郊に由来する。彼は、プスコフ市から三十ポプリシュ（[3725] ）の距離にあるヴィデレビ村（[3726] ）で生まれ、育った。 彼の肉親が誰であったかは不明であるが、ただ一つ分かっているのは、彼が霊的な誕生を遂げたということ、そして彼の父は、水と御霊によって彼を産み出した神であり、母は正教会の父なる教会であったということである。それゆえ、彼は正しい信仰と教えの中で育てられたのである。　成長すると、両親は彼を聖書の学びに預け、彼はまもなく聖書を極めて明確に理解するようになり、それを言葉で説明できるだけでなく、独自の教訓的な著作を執筆するに至った。また、哲学も学んだため、年長者たちでさえ彼の知恵に驚き、称賛の言葉を口にした。　彼は遊びや娯楽には決して興味を示さず、何よりも聖書の読解と教会の賛美歌を愛していた。さらに、幼い頃から厳しい節制に身を捧げ、甘いものを一切口にしないことを決めていた。少年のそのような節制ぶりを見て、両親は彼にこう言った。

「わが子よ！　なぜ、そのような過酷な生活様式で自分の体を疲れさせ、私たちに大きな悲しみを与えるのか？」

[3723] エウフロシンは世の中でこの名で知られていた。

[3724] この聖人が生まれた地域の描写は、あまりにも華美に綴られているため、言葉の意味を正確に把握するのは難しい。この地域が「島」と呼ばれているのは、おそらくその北部にネヴァ川によって結ばれたフィンランド湾とラドガ湖があり、東にはラドガ湖とイルメン湖を結ぶヴォルホフ川が流れ、　西にはナロヴァ川によってフィンランド湾とつながるチュド湖があり、さらに南にはチュド湖の延長であるプスコフ湖がある。プスコフ湖は、南でヴェリカ川とシェロニャ川を通じてイルメン湖とつながっている。　この地域の北部にはヴォディ族やイジョラ族といった異民族が、西部にはチュド族、リヴ族、リトアニア人が住んでいたが、この地域自体はスラブ人が居住しており、おそらく「ヤフェトの領地」と呼ばれていたものと思われる。

[3725] ポプリシュチェ――690サジェーニに相当する距離の単位。

[3726] ヴィデレビエは、プスコフ郡にある村である。ここはプスコフの聖ニカンドルの生誕地でもあり、その記念日は9月24日に祝われる。

「父上、母上」と少年は答えた。「聖書には、食べ物や飲み物は私たちを神に近づけるものではない（Iコリント8:8）と書かれています。断食、祈り、身体の清さ、そして節制――これこそが私たちを神に近づけるのです。」

その後、エレアザルの両親は彼を正式に結婚させようと望んだが、分別のあるその少年は、網から逃れる山羊のように両親のもとから逃げ出した[3727] 。両親は長い間、涙ながらに至る所を探し回ったが、どこにも見つけることはできなかった。しかし、神の恵みが彼を守っていた。やがて彼の父は亡くなり、母は未亡人となった。 その時、すべての人々が救われ、真理の知恵に至ることをお望みの慈悲深い神は、彼がどのようにして自らの救いを成し遂げ、この世から離れるべきかという善き考えを、彼の心に植え付けられた。彼はこの考えを直ちに実行に移した。スネズナヤ山にある「聖母マリアの降誕」修道院―― ――これはプスコフの街から三ポプリシュの距離にあるヴェリカヤ川のほとりの地名である――そこで、彼はその修道院のイグメンから修道士の剃髪を受け、世俗へと誘うあらゆる思いを永久に捨て去り、修道生活の誓いに全身全霊を捧げた。剃髪の際、彼にはエウフロシンという名が与えられた。

修道者となった聖エウフロシンは、断食、不眠、 祈り、そして徹夜の祈りの立ち祷りに熱心に励む一方で、修道院の慣例に従い、厨房やパン屋、その他すべての修道院の作業において、怠ることなく兄弟たちに奉仕し、それによって修道院に住むすべての修道士たちの好意を勝ち取った。 まもなく、その高潔な生活ぶりゆえに、この尊者に関する評判は至る所に広まっていった。 彼はこれを聞いて心を痛めた。なぜなら、彼は世間の名声を嫌悪し、それを罪であり、自分にとっての恥であると考えていたからである。そのため、この名声を避けることを考え始め、そのために人里離れた静寂な生活を選び、ただ神のために精進しようと決意した。 彼はその決意を霊的指導者に告げた。指導者は、彼が徳において成長しているのを見て、彼を祝福し、こう言った。「平安のうちに去れ、わが子よ。主があなたと共におられますように。主があなたを悟らせ、主があなたを召されたその善き業へと導いてくださいますように」。

その後、至福のエウフロシンは、霊的指導者からの祝福を受け、聖母マリアの修道院を後にし、人里離れた場所で沈黙の生活に専念できる場所を探して、多くの地を巡り歩いた。 神の特別な御心により、彼はトルヴァ川のほとりにあるある場所について耳にした。そこはプスコフの町から二十五ポプリシュの距離にあり、キリストの恵みによって、現在、[3728] という修道院が建っている場所である。 この土地の所有者たちは、ある敬虔な人々を通じて彼を招き入れました。それは彼ら自身の意志によるものではなく、むしろ主の御心によるものでした。主は、この地においても御自身の聖なる御名が賛美されることを望まれたのです。 そこで、尊者（プレポボドニー）はこの地に定住し、静寂で人里離れた生活を送りました。それは、神の預言者が言った通りです。*「私は遠くへ去り、荒野にとどまるであろう。『嵐や暴風から急いで身を隠そう』*（詩編54:8–9）と。彼はここに小屋を建て、熱心に修道者の修行に励み、断食、不眠、祈り、徹夜の立ち祈り、そして地面への拝礼によって、目に見えない敵の策略を退けていった。 ある夏の猛暑の日、尊者は小屋から出て、修行の疲れを少し癒やすために地面に横たわったところ、たちまち夏の眠りに落ちた。そのとき、教父たち――バシレイオス大聖人、 聖グレゴリオス・テオロゴス、そして聖ヨハネス・クラマトルス）が現れ、彼が修行に励んでいたその地に、彼らにちなんで名付けられる教会の建設場所を指示した。その後、彼が眠りから覚めると、そこにはもう誰もいず、この異例の幻視に彼は戸惑いを覚えた。

[3727] 「テネタ」とは、鳥や獣を捕らえるための網のことである。

[3728] 言うまでもなく、プスコフ州のトルヴェ川沿い、プスコフから30ヴェルスタの地点にあるスパソ＝ヴェリコプスティンスキー・エレアザロフ修道院のことである。

それから長い時間が経ち、聖人の母は数人から彼の居場所を聞きつけた。旅に必要なものをすべて携えて、彼女はトルヴァ川のほとり、聖人が住んでいたその場所へと向かった。彼の小屋に近づくと、彼女はこう言いながら彼に懇願し始めた。

「愛しい我が子よ！　老いた母を慰めてくれ。その天使のような顔を私に見せてくれ。私たちの先祖たちが眠る墓へ、悲しみを抱えたまま下りていくことのないようにしてくれ。」

聖エウフロシンは隙間から母親の姿を見て、彼女だと気づくと、こう言った。

「悲しまないでください、母よ。ここから立ち去り、老いた体を労わってください。もしここで私を見たいと願うなら、あの世ではもう私を見ることはできません。さあ、修道院へ行き、修行に励んで、あなたの魂を救ってください。」

こうして、尊者エウフロシノスの母は、その願いを叶えることはできなかった。彼女は悲しみを抱きつつ彼の元を去り、ある修道院に入り、敬虔な修行に日々を費やし、最期を迎えるまでそこに留まった。一方、尊者エウフロシノスは、勇敢かつ輝かしい生涯を送り、主のもとに召された[3729]。

ラリシスの主教、私たちの尊い父アキリイの記念日

記念日：5月15日

この聖人は、コンスタンティヌス大帝の治世に生き、敬虔な両親の間に生まれた。　敬虔で神を畏れる生活に身を捧げ、世俗の学問や高次の哲学を学んだ後、あらゆる神に喜ばれる行いで自らを飾り立てたため、全エラダに居住するキリスト教徒のために、上ラリシスのテッサリアの司教に任命された[3730]。　ニカイアで開催された全地公会議[3731]に出席し、アリウスとその同調者たちを糾弾した[3732]。その後、再びラリスに戻ると、多くの偶像崇拝の神殿を破壊し、悪霊に取り憑かれた者たちから悪霊を追い出し、その他にも数え切れないほどの奇跡を行った。さらに、彼は教会堂を再建し、豪華に装飾した後、安らかにこの世を去った[3733]。

5月29日

5月16日（旧暦）

同日は、842年にミティレネの司教に叙任された、私たちの父ゲオルギオス聖人の記念日である。

同日、ディオクレティアヌス帝の治世下で殉教した聖殉教者ヴィタ、モデスタ、クリスケンティアの記念日。

[3729] 聖エウフロシンは1481年5月15日、95歳で逝去した。その聖遺骨は当初、彼が創設したスパソ・ヴェリコプスティンスキー・エレアザロフ修道院に安置されていた。　その後、この修道院は山の上に移転され、そこに「三聖人」に捧げられた新しい石造りの大聖堂が建設され、尊者エウフロシノスの聖遺骨はそこへ移された。現在、その聖遺骨は、第一聖歌隊席の後ろの壁の近くにある地下室に安置されている。

[3730] テッサリアは、古代ギリシャの地方である。上テッサリアは、ペネウス川沿いに位置するラリサという都市にちなんで、ラリシアと呼ばれている。

[3731] ニケアの町は、小アジアの古代ローマ属州ビフィニアにあり、アスカニア湖の東岸に位置していた。

[3732] 皇帝バシレイオスの月暦には、聖アキリウスが第1回全地公会議において異端者たちを論破し、万人の驚嘆を誘ったと記されている。

[3733] 聖アキリウスは330年頃に逝去した。その聖遺骨は978年以降、ブルガリアの、彼の名にちなんで名付けられたアギル村に安置されている。

同日は、1523年9月26日に逝去した、ノヴゴロドの奇跡行者である聖エフレム・ペレコプスキーの聖遺骨の移送が祝われる。聖遺骨の移送は1545年5月16日に行われた。

パホミイの弟子である、私たちの尊い父テオドール・オスヴィャシェンヌイの生涯

記念日：5月16日

聖パホミイは、テオドール・オスヴィャシェンヌイがまだ少年だった頃、すでに至る所で知られるアッバ（長老）となっていた。彼はすでに修道院の一つで生活し、若者の情熱をもって至高の完成を目指していた頃、パホミイについて知ることとなった。

テオドロスは、裕福で高貴な両親の息子であった[3734]。生後12年目には、父の望みにより毎日学校に通っていた。彼はその聡明さと敬虔さゆえに、他のどの子供よりも母に愛されていた。　ある時、主の顕現の祝日に、両親は素晴らしい料理を用意し、様々なワインを並べ、すべての部屋に絨毯を敷き詰めた。　幼いフェオドールは、家の中の荘厳な雰囲気と豪華な食卓を見て、ある考えに深く動揺した。彼は心の中でこう言った。「もしこの料理を食べてしまえば、神は来世の恵みを授けてくださらないだろう」。　その考えに深く動揺した少年は、人目につかない場所へ行き、ひざまずいて涙ながらに救い主に祈った。

「私は、滅びへと導くこの儚い食べ物は望みません。しかし、来世において信者たちに定められた恵みとともに、あなただけを求めています」と彼は言った。

彼は長い間、涙ながらにこの言葉を繰り返した。その間、母親は家中をくまなく彼を探していた。フェオドールを食卓で待っていたが、誰も食事を始めようとはしなかった。彼を見つけ、その顔に涙を認めた母親は、優しい愛情を込めて彼に言った。

「泣いていたのね、息子よ！　どこに行っていたの？　あなたを探していたのよ。」

フェオドールは、自分に何事もなかったと答えた。母は彼を食事に呼び寄せ、もし彼が食べなければ、誰も食卓につかないと付け加えた。フェオドールは祝宴の食事を断固として拒んだ。　彼はその後もしばらくの間、実家で過ごし、断食と祈り、そして涙に身を委ねていた。その涙のせいで、若きフェオドールの目は痛むほどになった。その間も彼は学校に通い続けていた。しかし、やがてその年の終わりが訪れた。　フェオドールの両親が住んでいた集落からそう遠くないところに、ある修道院があった。ここでは、各修道士が他の者とは別々に、それぞれの独房で暮らしていた。フェオドールはここを訪れ、隠遁者として暮らすようになった。彼の知性、敬虔さ、そして謙虚さゆえに、すぐに皆から愛されるようになった。

聖テオドールが住み着いたその修道院では、毎晩の食事の後、皆が集まって霊的な談義を交わすのが慣例となっていた。　聖書から学んだことや、聞いたことのうち、皆の霊的成長に役立つと思われることについて語り合いました。こうした対話は、魂に豊かな糧を与え、無駄話や邪な考えにふけることから守ってくれました。　ある日のそのような対話の最中、最近パホミイ修道院を訪れたある修道士が、パホミイから聞いた聖書の箇所についての解説を思い出した。その修道士は、タヴェンニシの共同生活の規律や、そこでどれほど愛情を込めて迎えられたか、そして何よりもパホミイ自身について、熱狂的に語った。　いつものように、普段は常に沈黙を守っていた若きテオドールが、とりわけ注意深く耳を傾けていた。パホミオスについてのそのような熱狂的な話を聞いた後、テオドールは偉大なるアブに会いたいという強い願望に燃え上がった。一人になると、彼は熱心に祈りを捧げた。若き修行者の祈りの内容は次の通りである。

[3734] 彼は316年頃に生まれた。

「神よ、主よ、万物の創造主よ！　もしあなたが私の声を聞き、私がお願いしていることを叶えてくださるなら、もしあなたがあなたの僕パホミオスに会う機会を私に与えてくださるなら、私は生涯を通じてあなたに仕え、死ぬその日まであなたから離れることはありません。あなたの御心が行われますように。どうか、あなたの僕に会うにふさわしい者にしてください！

彼は一晩中眠れず、偉大なる修道士たちの師との再会について思いを巡らせていた。　朝になるまで、彼は何度も起き上がり、涙ながらに主に対し、パホミオスに会うにふさわしい者にしてくださるよう懇願した。その後、彼はタヴェンニシにいたその兄弟の独房を訪れ、パホミオスの生涯や、彼が修道士たちに定めた規則について、ぜひ詳しく話してほしいと頼んだ。　その兄弟は、パホミオスについて、その生涯や規則について、自分が知っていることを詳しく彼に伝えた。それ以来、テオドールは、パホミオスに会えるよう、神にさらに熱心に祈るようになった。テオドールは、パホミオスを介して、神とその聖なる御心をより深く知ることができると期待していた。

その頃、テオドールは病気になった。両親は彼に食事を運んだが、テオドールはそれを拒んだ。しかし、やがて病状は悪化した。両親は彼を修道院から家に連れ帰った。彼は病気のためしばらく意識を失っていたため、そのことに気づかなかった。意識を取り戻すと、再び実家にいることに気づき、深く落胆した。　両親は、彼の決意が揺るぎないことを確信し、彼を修道院に戻した。その後は、修道士たち自身が、この若き修行者が完全に回復するまで、献身的に世話をした。

さらに四ヶ月が過ぎても、フェオドールはパホミオスとの再会を願う祈りを絶やすことはなかった。その頃、フェオドールが住む修道院に、パホミオス修道院の修道士であるアッバ・ペチョシュ（あるいはペクシウス）がやって来た。彼はここに滞在する間、修道士たちの世話をするよう任されていた。　彼の謙虚さ、祈りに満ちた心構え、そしてその振る舞いすべてが、すべての修道士たちに驚きと尊敬を呼び起こし、皆の心は自然とペチョシュに惹かれていった。もちろん、フェオドールも彼と知り合った。彼は、このアッバを仲介に立てれば、自分の願いを叶えるのが最も容易になることに気づいた。そこで彼はペチョシュに、その手助けをしてほしいと頼んだ。　しかし、ペチョシュは、少年の両親の怒りを恐れて、　フェオドールを連れて行くことをためらった。フェオドールは自分の決意を固くしていた。アッバ・ペチョシュが数人の修道士と共にパホミイ修道院へ向かうため舟に乗り込んだとき、フェオドールは徒歩で彼らの後を追った。　まだ誰にも気づかれることなく、彼はボートからそれほど遠くない距離を、ナイル川の岸辺に沿って歩いていた。やがて、数人の修道士が彼に気づいた。彼らは、かつてフェオドール自身がアッバ・ペチョシュに「自分もボートに乗せてほしい」と頼んでいたことを思い出し、彼を指さしてアッバに告げた。ついにタヴェンニシに到着した。

修道院の壁を目にすると、テオドールは自分の願いが叶ったことを主を賛美し、喜びのあまりその壁に口づけをした。パホミオス自身を目にしたとき、彼は歓喜の涙を流しながら、この偉大な長老に挨拶を捧げた。　パホミオスは、彼が主のために世俗を捨てたのだから、その敬虔な心のあらゆる願いを叶えてくださる主を指し示した。フェオドールはタヴェンニシに残り、修道生活のあらゆる規則を遵守し、指導者たちの意志にすべて従う覚悟を固めた。彼はまだ十四歳に過ぎなかった。　パホミオスの共同生活が設立されてから、すでに5年が経過していた。

アモン司教の語るところによれば、テオドールがタヴェンニシに来ることは、パホミオス自身によって正確に予言されていたという。

タヴェンニシに定住すると、フェオドールは神に喜ばれることに対して並外れた熱意を示すようになった。この若き修行者は、パホミイの教えや個人的な対話が、修道生活の完成に至る正しい道を指し示し、また共同生活全体の規律が彼の熱意を衰えさせなかったことを幸いに思っていた。

ある日、兄弟たちとの会話の中で、パホミオス聖人は次のような考えを述べた。「もし人が真の知恵を身につけていれば、神に対しても、隣人に対しても罪を犯すことはないだろう」。　テオド

ロスの魂は、この真の知恵を身につけたいという熱望に燃え上がった。同時に、彼はその願いを叶えることが難しいだろうと考え、深く嘆いていた。彼は、自らの不適格さと、真理を知る力がないことを謙虚に自覚しつつ、神に真の知恵を授けてくださるよう熱心に祈った。

「主よ」と彼は祈りの中で言った。「主よ、私が頼りとする方よ！　あなたが御自身を愛する者たちに約束されたように、私に知恵をお与えください。そうすれば、私はあなたを喜ばせることのできるすべてのことを行えるでしょう。」

テオドールは、自分が真の知恵からほど遠いことを嘆き、しばしば涙を流した。パホミオスは心の底からこの若者の涙を喜び、真の知恵を得ようとする彼の志を励ました。会うたびに、彼はテオドールにこう言ったものだ。

「真の知恵を身につけるよう努めなさい。

ある夜、月が明るく輝いている時、彼はテオドールを呼び寄せた。その素晴らしい星空と天体から、若者の思いを目に見えない万物の創造主へと向けさせながら、アッバ・パホミオスはテオドールにこう言った。

– 生涯のあらゆる日に、神を畏れなさい。まさに神こそが、私たちとすべての被造物を創造されたこと、そして私たちが神の御手の中にあることを知れ。神を畏れ、神があらゆる瞬間にあなたを見守っておられると考えるなら、神に対して罪を犯さないよう気をつけなさい。そうすれば、神から確かな助けが与えられるだろう。毎日、神に栄光を帰しなさい。

溢れんばかりの涙が、彼らの会話の誠実さを物語っていた。彼らは、神と神に喜ばれることについての語り合いを、祈りをもって締めくくった。

彼らはこのような対話を一度だけでなく、何度も交わしていた。神に喜ばれることへの聖なる熱意に燃え、極めて感受性の豊かな青年テオドールにとって、聖パホミオスの一言一言は大きな意味を持っていた。彼の魂の中では、敬虔な感情や志が確固たるものになるだけでなく、霊的な知恵も育まれていったのである。　パホミオスは、その対話、とりわけテオドールとの親密な交流を通じて、意図的か無意識かに関わらず、テオドールを、将来、修道士たちの霊的生活における指導者として奉仕する準備を整えていた。

尊者パホミオスは、テオドールのあらゆる行いや言葉の一つひとつにどれほど細やかな注意を払い、この若き修行者をどれほど確固として至高の完成へと導いたことか!

ある日、テオドールは、修道院での何らかの奉仕から戻ってくる途中、肩に絨毯を載せた一人の兄弟に出くわした。テオドールは彼に、どこから来たのかと尋ねた。パホミオスはその質問を耳にした。テオドールを呼び寄せ、こう言った。

「テオドールよ、よく聞きなさい。一瞬たりとも、自分の心の主人であり続けなさい。兄弟に『どこから来たのか』と尋ねてはならない。それが習慣になってしまうかもしれない。なぜそんなことを言う必要があるのか？　その言葉は、慰めにも救いにもならないのだから。」

テオドールは、師のこの教えをしばしば思い返し、それを大いに重んじた。彼は、小さなことへの忠実さが大きなことへの忠実さへとつながり、それが救い主の戒めとして求められていることを知っていたからである。

ある時、フェオドールはパホミオスに、ひどい頭痛に悩まされていると愚痴をこぼした。パホミオスはそれに対し、信者は自分の肉体の病について誰にも話すべきではないと告げた。ただし、病気を他人に隠せない場合を除き、そのような病気もまた、相応の忍耐をもって耐え忍ぶべきである。何しろ、自発的であれ他者によるものであれ、苦しみはすべて、いわば殉教の一種だからである。そもそも、神への愛ゆえに自らの肉体を鍛錬すべきである。聖テオドールはこのパホミイの教えを深い信仰をもって受け入れ、長い間苦しんでいたその頭痛を人々に隠すようになった。彼はその後も二十年間、この痛みに耐え続けなければならなかったが、もはや彼から苦情を聞く者はいなかった。テオドロスには、多かれ少なかれ長期にわたる他の病気――例えば耳の痛み、発熱、目の病気――も

襲ったが、彼はすべてを黙って、穏やかに耐え抜いた。そもそも、修道士たちの中で、テオドロスほど自らを鍛え上げた者はいなかった。彼は自らの苦行を人々の目から入念に隠していたのである。彼は毎日、夜遅くになって初めて食事をとったが、時には二日間連続で断食し、二日目の終わりになってようやく食事をとることもあった。時には食事をとるものの、二日間連続で水を飲まないこともあった。煮込んだ食べ物は、病気の時にのみ口にした。味の良い果物を食べることは、基本的に控えていた。　しかし、兄弟たちがナツメヤシの実を食べる時は、彼も修道士たちと一緒にそれを食べ、かなり多く持ち帰ることもあったが、実際に食べるのはせいぜい二個までだった。彼は夜を徹して起きていることを好んだ。聖テオドールは、短期間のうちに多くの霊的な実りを得ることができた。

テオドールは、偉大なる師である聖パホミオスや、共に修行する修道士たちに、全身全霊で心を寄せた。　彼らは皆、精神的に彼と親しい存在であり、また皆、彼を愛していた。しかし、この若き修行者は、血縁者への執着とは全く無縁であった。彼らにとって、血縁者はほとんど存在しないも同然であり、パホミオスや修道士たちへの愛から彼の注意をそらすことはできなかった。

テオドールがいかに血縁への執着を恐れていたかは、次の出来事が物語っている。彼がタヴェニシに来てから、すでに10年が経過していた。かねてより息子に会いたいと願っていた彼の母が、エスネ地方の司教からの手紙を持ってここを訪れた。　聖人はパホミオスに、この女性が息子と面会することを許可するよう求めた。司教の手紙を読んだパホミオスは、母親がそれを強く望んでおり、司教もそう求めているのだから、テオドールに母親との面会に行くよう告げた。しかし、テオドールはこの指示に従う決心がつかず、聖パホミオスにこう言った。

「一つお尋ねしたいことがあります。　教えてほしい。もし私が母のもとへ行ったら、主の御前で罪を犯したことになるのではないか。なぜなら、福音書に記された戒めに従わなかったことになるからだ。私たちの主はこう言われた。*「父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない。」*（マタイ10:37）。

パホミオスは、神に完全に喜ばれるために、親族への愛着を断ち切るという福音の戒めを破るよう彼に強いるつもりは全くないと述べた。しかし、母の涙を知っており、テオドール自身も母の悲しみに心を痛めるのではないかと懸念していたため、母に会いに行くよう勧めたのである。　パホミオスは、弟子であるテオドールが神の戒めを忠実に守っていることを自らも大変喜んでいると認めつつ、福音書の教えを説くのはまさに司教たちである以上、司教もこれを喜ぶだろうとの考えを述べた。　兄弟たちのうち数人は、フェオドールの母に少しでも慰めを与えたいと願い、修道院の外で修道士たちが共同で行う作業を企画した。フェオドールもその作業に出かけた。母は、遠くからとはいえ、修道士たちの間に自分の息子である修行者を見かけたことで慰められた。

ある日、テオドールが修道院の外で何らかの奉仕に従事していたとき、実の兄弟パフヌティウスが修道院を訪れた。彼は修道士になりたいという希望を表明したが、その条件として、テオドールと一緒にいられることを求めた。　テオドールが修道院に戻ると、弟の言葉が伝えられた。しかし、熱心な修道士である彼には、弟がまるで自分のためだけに修道士になろうとしているかのように思え、それが気に入らなかった。そのため、彼は弟に会うことさえ拒んだ。しかし、パホミオスは、弟との面会を断らないよう彼を説得した。互いに挨拶を交わした後、テオドールは弟にこう言った。

「もし私のためにここに来たのなら、来たところへ戻りなさい。もし神のために来たのなら、なぜ私があなたのところへ来る前に、修道士になることに同意しなかったのですか？」

そう言うと、フェオドールはすぐに兄のもとを去った。しかし、パフヌティウスは彼の後を追って、追いつくと涙ながらにこう言った。

「私は何日もあなたの来訪を待ちわびていたのに、現れてはそんな残酷な言葉を私に言うとは！」

テオドールは彼にこう答えた。

「もし私のために来て、今修道士になろうというのなら、私が修道院生活を捨てれば、あなたもそれを捨てることができたはずだ。しかし、もしあなたが神への畏れからそうしているのなら、私がこの生活を耐え抜けるかどうかにかかわらず、あなたは常に修道院に留まることになるだろう。」

フェオドールは兄弟を修道院に案内した。ほどなくして、パフヌティウスはフェオドールの独房を尋ね、中に入って座った。自分の独房に兄弟がいるのを見て、フェオドールはひどく当惑し、彼にこう言った。

「ここに留まってくれ。だが、私はもうここに住みたくない。私たちが肉親同士のように見なされることを恐れているからだ。他の兄弟たちと同様に、あなたの近くで暮らさせてほしい。この修道院には区別などない。私たちは皆、神の僕であり、私たちのアッバの子だからだ。」

フェオドールの厳しい言葉は、その兄弟をひどく悲しませた。パフヌティウスは直ちに聖パホミオスのもとへ行き、涙ながらに彼を故郷へ帰してくれるよう懇願した。フェオドールによるそのような兄弟らしくない扱いは、彼にとって耐え難いものだったからだ。そこでパホミオスはフェオドールを呼び寄せ、厳しくこう言った。

「なぜ彼にそんな冷酷な言葉を浴びせたのか？　彼がまだ若く、成長途上にあることを知らないのか？　修道士になろうとやって来る者なら誰でも、すでに聖霊への畏れを持っているとでも思っているのか？　魂を救うために来る者もいれば、他の動機で来る者もいるのだ。」

パホミオスはテオドールに、修道士はどのような場合でも、そのような人々に対して完全な忍耐をもって接し、彼らもいずれ神の道を悟り、肉的な思惑を捨て去ることを期待すべきだと指摘した。　最後に、パホミオスはテオドロスに対し、その兄弟が修道者としての義務を真に理解できるようになるまで、修道生活における指導者となってほしいと頼んだ。

聖パホミオスの直接の指導の下、その教えをたゆまぬ熱意をもって実行したテオドロスは、まもなくすべての修道士にとって模範となる存在となった。尊者パホミオスは、教えや慰めを求めて多くの修道士を彼のもとへ送りさえした。　聖テオドロスは、その賢明で愛に満ちた言葉によって、多くの人々を慰め、安らぎを与えることができた。ある修道士は、聖パホミオスの厳しい叱責に耐えられなかった。彼は修道会を去ろうとしてさえいた。しかし、聖テオドロスだけが彼を落ち着かせる方法を見つけた。

「苦しんでいるのはあなただけではありません」とテオドロスは言った。「私も彼のために心を痛めています。彼はよく私を叱責していたからです。今は、彼が私たちを叱責するのをやめるかどうか見極めるまで、互いに慰め合いながら一緒にいましょう。もしそうならなければ、私たちは別の場所へ行きましょう。」

この言葉は修道士の心を落ち着かせた。その間、テオドロスは他の者たちに内緒で、すべてをパコミオスに報告していた。一ヶ月後、テオドロスはその兄弟をパコミオスの元へ招いた。もちろん、パコミオスは大きな柔和さと父のような優しさをもって、二人の修道士を迎えた。　二人はともに安堵した。以前パホミオスに心を痛められていた修道士は、アッバが自分に対する態度を変えてくれたことを喜び、フェオドールは彼が安らぎを取り戻したことを喜び、悲しみに暮れていた修道士にとって救いの道具となる機会を授けてくださった神に感謝した。

ここに、パホミオスとテオドロスの両者を特徴づけていた、兄弟たちへの先見の明ある愛を物語るもう一つの出来事がある。ある若い修道士が、どうしても両親に会いに帰りたいと願った。　パホミオスは、彼が修道院に戻ってこないのではないかと大いに懸念した。そこで、賢明なアッバは彼を一人で行かせるのではなく、テオドールを同行者として与えた。

「彼が君と一緒にここへ戻ってくるように、何事にも彼に同意しなさい」と、パホミオスはテオドロスに言った。

若い修道士の両親は、息子とその同行者を愛情を込めて迎えた。特別な部屋で、修道院の慣習で許された食事が振る舞われた。若い修道士はテオドールにも食べるよう勧めた。テオドールは最初

、断った。しかし、兄弟は、もしテオドールが自分と一緒に食べなければ、もう修道院には戻ってこないだろうと言った。　テオドールはパホミオスの戒めを思い出し、食事に手を伸ばして少し口にした。しかし、このようにパホミオスの最後の戒めを果たす一方で、テオドールは最初の、非常に重要な戒めの一つをよく覚えていた。アッバはかつて彼に、自身も修道生活を送っていた頃、一般信徒の誰にも自分が食事をする姿を見せることを許さなかったと語っていたのだ。　したがって、尊者パホミオスの考えによれば、修道士は極度の必要性がある場合を除き、世俗の家で食事を口にしてはならない。このことは長い間、フェオドールの心に悔恨を呼び起こし、彼は、若い修道士が世俗に留まる機会を完全に与えないために犯してしまった罪を、神に赦してくださるよう祈った。尊者フェオドールは、それほどまでに自分自身に対して厳しかったのである。

聖テオドロスが自分自身に対して厳格であり、自分の意見に疑いを抱くこと――これらが彼の際立った特徴である。　ここに、彼の自己に対する厳しさが特に鮮明に表れた一例がある。ある兄弟がネギをたくさん食べていた。若い修道士にとって、体を強めるネギを多く食べるのは良くないだろうと考えたテオドールは、穏やかに　彼を諭した。その後、テオドールは自分の行動が正しかったかどうかを思案した。もしかすると、その修道士は自発的に改心したかもしれないからだ。　しかし、フェオドールの言葉は若い修道士に非常に強い影響を与えた。彼はその後、死ぬまでの29年間、ネギを一切口にしなかった。この修道士の節制を知ったフェオドールは、自分が他人に課した規則を破ったとして主の御前で罪を問われないよう、自らも死ぬまでネギを食べなかった。

この自己犠牲と極めて繊細な高潔さという点において、聖テオドールは、他のあらゆる面と同様に、聖パホミオスの真の弟子であった。

九つの修道院に散らばる数多くの修道者たちを統率することは、聖パコミオスにとって容易なことではなかった。彼には助手が必要だった。偉大なる長老の弟子たちの中でも最も優れたテオドール・オスヴィャシェンヌイは、修道者たちの救いの奉仕において、最高の助手となり得たのである。パホミオスの『行伝』によれば、彼は天からの啓示を受け、それによって聖テオドロスを自身の助手とするという決断を確固たるものにしたという。

テオドール・オスヴィャシェンヌイは、徳高い生活だけでなく、卓越した雄弁さと聖書に関する深い知識でも際立っていた。ある時、聖パホミオスは彼に、日曜日に兄弟たちに説教を行うよう命じた。テオドールは、いささかの驕りも示さず、パホミオスの席に着き、長老の意志を自らの掟として説教を行った。　パホミオス自身は、すべての修道士たちの列に加わり、弟子による熱意あふれる説教を深い注意を払って聞いていた。しかし、一部の修道士たちは、パホミオスの代わりにこの若い修道士テオドールが彼らに説教をすることを快く思わなかった。彼らには激しい嫉妬心が湧き上がった。彼らは集会を途中で退席してしまったほどである。　説教が終わった。パホミオスは説教を途中で退席した修道士たちを呼び止め、彼らの高慢さゆえにテオドールの説教に耳を傾けなかったことを叱責した。それどころか、彼は彼らの面前でそのように指示していた上、自らも注意深く、魂の益となるよう弟子の言葉を聞いていたのだ。　パホミオスは、彼らが心からの悔い改めを示さなければ、神からいかなる慈悲も得られないと断言した。もちろん、長老の厳しい言葉に心を改めた者も多く、多くの者が、心から嫉妬と高慢を追い出すという彼の助言を受け入れた。　しかし、長老の非難を受けて、テオドロスを以前にもっと強く憎むようになり、彼を平然と見つめることさえできなくなった修道士たちもいた。テオドロス自身は、彼らに対して微塵の敵意も抱くどころか、常に特別な配慮と愛をもって接していた。

まもなく、聖パホミオスはテオドロスをタヴェンニスの建設責任者に任命した。偉大なる長老自身は、別の修道院であるペヴォウに移り住んだ。彼は、テオドロスが自分の精神に従って修道院を運営し、その賢明な語りかけと模範となる行動が修道士たちにとって大きな益となることを期待していた。

この頃、テオドロスがどのような霊的高みに達していたかは、パホミオスの最初の弟子の一人であり、経験豊富で熱心なアッバ・コルニリウスの証言からうかがえる。　聖パホミオを「肉体の天使」として仰ぎ見ていたコルニリウスは、テオドールにパホミオの弟子たちの中で最も優れた人物を見出し、来世ではまさにテオドールの次に位置したいと語っていた。

タヴェンニスの長となった聖テオドールは、しばしばペヴォウを訪れ、アッバ・パホミオスに助言を求めたり、彼の一般の教えに耳を傾けたりした。自分の修道士たちの元に戻ると、彼はパホミオスから聞いたことを彼らに伝えていた。　アッバ・パコミオスは、説教の終わりに修道士たちに語った内容を復唱させる習慣があった。聖テオドロスもこの習慣を取り入れた。彼自身、説教を行うという労苦を自らにとって必要なものと見なし、神の言葉を深く理解し、他者に伝えることに大きな喜びを感じていた。

パホミオスもまた、時折タヴェンニシを訪れ、そこで皆と、あるいは誰かと個別に、魂の救いについて語り合った。彼の知恵、美徳、とりわけ、兄弟団の最も若いメンバーに対しても示す謙遜さ――これらすべてが、すべての人にとって教訓の源となっていた。　しかし、とりわけテオドロスはこれらの訪問を大切にし、偉大な長老の生き様や言葉から得た教訓を心に刻んでいた。

パホミオスは、時宜を得て彼に良き助言を与えられるよう、フェオドールのあらゆる行動を注意深く見守っていた。　フェオドールがパホミイが定めたすべての規則の遵守を厳格に監視していなかったとき、パホミイは彼に、修道士たちには完全な服従、些細なことにおいても服従を求める必要があると指摘した。なぜなら、ほんのわずかな規則の違反でさえ、修道院生活の秩序を乱し、修道士たちの間に不服従の精神を育んでしまうからである。

ある時、二人の修道士がパン工房での作業中に会話を交わしてしまったが、フェオドールはそれに気づかなかった。パホミイは、外見上の行動規範の遵守を監視すべきだと、厳しく、そして執拗に彼に説いた。

テオドールがますます修養を深め、ついに心の清らかさと霊的な知恵の高い境地に達したとき、聖パホミオスは彼をタヴェンニシからペヴォウへ呼び寄せ、テオドールにすべての修道院の管理業務を共に担ってほしいと願った。　すなわち、モーセにとってのヨシュア・ナヴィンのような、彼にとっての助手となることを望んだのである。今やパホミオスは、しばしばフェオドールに極めて重要な任務を委ねるようになった。彼は、兄弟たちの霊的な状態を観察し、彼らの霊を癒やすために、自身の代わりにフェオドールを派遣した。　フェオドールは、すべての修道院において、修道士の受け入れや、改心せずその振る舞いで兄弟団に悪影響を及ぼす者を修道院から追放する権限を持っていた。聖書を解説する際、パホミオスはフェオドールを自分の隣に座らせる。　今やテオドールは、以前よりもさらに頻繁にパホミオスの代わりに説教を行うようになった。　彼の言葉は、聴衆に極めて有益な影響を与えた。古代の伝記作家の証言によれば、フェオドールが各修道士だけでなく、あらゆる人に対して抱いていたその愛は、彼に兄弟たちの霊的な必要を深く理解し、賢明で温かい言葉で彼らを助けることを可能にしていた。　パホミオスは、その一方で、テオドロスにとって経験豊かな助言者であり、厳格な戒め手でもあった。彼は、テオドロスが、あれほど早く到達した道徳的清らかさと霊的知恵の段階にとどまることなく、ますます研鑽を積み、霊において完全に清らかとなり、もはやその清らかさを失うことのない者となることを望んでいたのである。

聖テオドールはしばしば修道士たちに教えを説いた。その際、彼はしばしば修道士たちに向けて、多くの者に共通する欠点や、個々人の過ちを、罪人を名指しすることなく指摘する説教を行った。時には、彼ら自身が集まりの全員の前で悔い改めを表明し、兄弟たちに許しを請うこともあった。

聖パホミオスと、その後に短期間しか生きられなかった後継者アッバ・ペトロニオスの死後、聖テオドロスは、タヴェンニシのすべての修道院にとって、救いへの道における賢明な指導者となり

、一部はアッバ・オルシシウスの修道院運営を補佐し、また一部は彼に代わって修道院を統括したが、それは彼と完全に一致し、いわば共同統治者としての立場であった。　彼はその生き様と言葉によって修道士たちに多大な恩恵をもたらし、さらにその奇跡によっても名声を博した。その偉業と知恵ゆえに、聖アタナシオス大聖人は彼を格別な敬意をもって扱った。彼は、尊者パホミオスの死から二十年後にこの世を去った[3735]。修道士たちは、アッバ・オルシシオスを筆頭に、長い間彼を悼んだ。聖アタナシウスもまた、彼らの悲しみを心から分かち合った。修道士たちを慰めるため、アレクサンドリアの聖人は彼らに長い書簡を送り、その中でアッバ・テオドロス・オスヴィャシェンヌイの美徳と功績について、多くを雄弁に語った。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちに天使、そして奇跡を行う者、神を宿した我らの父テオドロよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救う。　あなたに力を授け給うた方に栄光あれ。あなたを冠せ給うた方に栄光あれ。あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第2調：

神の御殿において、あなたは不死鳥のように栄え、厳格な禁食によって主への美徳の実を捧げられました、尊き父よ。それゆえ、あなたは霊的な者たちと同等の者として祝福されています。

聖なる乙女ムーサの記念日

記念日：5月16日

聖グリゴリオス・ドゥオスロス、ローマ教皇[3736]は、自身の首席助祭ペトロに、至福の乙女ムーサについて次のような物語を語った（ムーサの兄プロヴァの言葉による）：

「ムザがまだ幼い乙女であった頃、ある夜、眠りの中での幻視として、至聖なる神の母、永遠の処女マリアが現れた。神の母には、ムザと同じくらい幼い多くの乙女たちが付き添っていた。神の母はムザに尋ねた：

『この乙女たちと共に暮らし、常に私に従いたいと思わないか？』

それに対し、ムザはこう答えました：

「はい、ぜひそうしたいと願っております、私の御母よ。」

すると、神の母はムザに、子供じみた遊びや神にふさわしくないあらゆることを控えるよう告げました。というのも、30日後にはムザが彼女の元へやって来て、他の若い乙女たちの仲間に加わるからでした。

[3735] おそらく368年のことである。

[3736] 聖グレゴリウス大（二語者）――6世紀に生きた西方教会の著名な教師である。彼の著作のうち、特に注目すべきものは以下の通りである：『イタリアの教父たちの生涯に関する対話』（対話形式、すなわち会話形式で書かれたこの著作により、聖グレゴリウスは「二語者」という異名を得た）；　「牧者の規則」――牧者がどうあるべきか、またどのように職務を遂行すべきかについての考察が盛り込まれている；「聖別された供え物の典礼式次第」；福音書や預言者エゼキエルの書に関する講話など――聖教会では3月12日に彼の記念日が祝われる

それ以来、ムーザは生活を一変させた。子供らしい遊びや娯楽を捨て、神に喜ばれる生活に全身全霊を捧げたのである。

娘の生活がこれほどまでに変わったのを見て、ムザの両親は大変驚いた。　両親が彼女にその変化の理由を尋ねると、ムザは夢の中で至聖なる聖母マリアを見たと答え、聖母マリアから与えられた戒めについて語り、また、いつこの世を去り、聖母マリアに付き従った他の乙女たちの群れに加わるかについても告げた。

聖母マリアがムザに現れてから二十五日目が訪れると、少女は重い病に倒れ、まるで火に焼かれるかのように全身が熱を帯びていた。　30日目、この祝福された乙女の最期が近づいたとき、ムザは再び、同じ乙女たちに付き添われて彼女の元を訪れた聖母マリアを目にした。聖母マリアはムザを御自身のもとへと呼び寄せた。すると、祝福された乙女は静かな声でこう答えた。

「参ります、私の御母よ、参ります！」

そう言い残して、聖なるムザは自らの魂を至聖なる神の母の御手に委ね、この地上の生涯を後にし、神の母に付き従った他の乙女たちと共に、永遠の住まいへと移り住んだ」[3737]。

大助祭ペトロはこの物語を聞き終えると、聖教皇グリゴリウスに尋ねた。

「敬愛する大司教様、義人の魂は、肉体から離れる前に天国に迎え入れられることがあるのでしょうか？」

すると、聖グリゴリウスはこう答えました：

– すべての義人について、例外なくその魂が天国に迎え入れられるとは断言できない。同様に、誰の魂が天国に迎え入れられないとも断言できない。　しかし、おそらく、その魂が天の御国からある種の距離を置かれているような義人たちが存在するだろう。その理由は、まさに、そうした人々が地上の生涯において、徳ある生活において一定の完成度に達しなかったことにある。　さて、地上で神に喜ばれる生き方をした義人の魂が、肉体との結びつきから解き放たれたとき、天の住まいに入ることについては、この真理は太陽の光そのものよりも明らかである。なぜなら、私たちの主イエス・キリストご自身がこう言われているからである。*「死体のあるところには、鷲が集まる」*　（マタイ24:28）と語っておられる。すなわち、私たちの主イエス・キリストが、ご自身に受けられた私たちの人間の肉体を伴ってどこにおられるか、そこには疑いなく義人の魂たちもいるのである。また、聖使徒パウロは、*「この肉体を脱ぎ捨て、キリストと共にいること」*を切に願っていた（フィリピ1:23）。主が天におられることを信じる者は、パウロの魂もまたキリストと共に天におられることを信じなければならない。その同じ使徒は、義人の魂が肉体から離れると天の故郷に定住することを、誰の目にも明らかな形で証ししている。なぜなら、彼はこう言っているからである。　*「私たちの地上の住まい、すなわちこの仮の住まいが取り壊されても、神から天に、人の手によらない、永遠の住まいが与えられていることを、私たちは知っています」*（IIコリント5:1）。私たちの神に、今、そして永遠に、栄光と誉れと礼拝が捧げられますように。アーメン。

5月30日

5月17日（旧暦）

[3737] 聖女ムーザの逝去は5世紀のことである。

聖使徒アンドロニコスと、その助手ユニアの記念日

5月17日の記念日

聖使徒アンドロニクスは七十人の使徒の一人であり、彼は聖使徒パウロよりも先にキリストを信じた。パウロはローマ人への手紙の中で、彼と親族関係にあったことを次のように証言している。*「私の親族であり、私と共に囚われの身となっているアンドロニコスとユニアに、ご挨拶を。彼らは使徒たちの間で名声を博し、私よりも先にキリストを信じた者たちです」*（ローマ16:7）。

聖アンドロニクスはパノニアの司教であった[3738] 。しかし、彼は特定の都市や国だけの説教者や教師であったのではなく、全宇宙にわたって教えを広めた。彼は様々な国を巡り、至る所でキリストの御名を宣べ伝え、悪魔の惑わしを根絶した。　彼のすべての宣教活動において、助け手となったのは、高名なユニアであった。アンドロニクスは、ユニアと共に、多くの人々を真の神への認識へと導くため、キリストのためにこの世を去った。　そして実際、アンドロニクスはユニヤと共に、その説教によって多くの偶像の神殿を破壊し、その代わりにキリスト教の教会を建て、至る所で人々から不浄な霊を追い払い、弱者や病人の病を癒した。　やがて、聖アンドロニクとユニアは、すべての人間に共通する義務を果たし、この世の生涯を終えたとき、異教徒たちから多くの苦難を受けたことから、主より使徒の冠と殉教の栄冠を授けられた。 彼らの尊い聖遺骨は、エウゲニア[3739] において、他の多くの聖なる殉教者たちの聖遺骨と共に発見された。これらの聖遺骨については、神の特別な啓示によってキリスト教徒たちに告げられたものであり、これについては2月22日の記述に詳しく記されている。

コンダク、第2声調：

神の知恵の光をもって諸言語を照らした、まばゆい星、キリストの使徒アンドロニコスを讃え、彼と共に福音を宣べ伝えるために尽力した、英知に満ちたユニアを称え、こう叫びます。「キリストなる神に、私たちすべてのために絶えず祈ってください。」

聖殉教者ソロホンの記念日

記念日：5月17日

聖殉教者ソロホンは、マクシミアヌス帝の時代[3740] に生き、エジプト出身であり、キリスト教徒であった。彼は、三　千の兵士を指揮下に置くトリブヌス・カンパナの配下で、兵士として仕えていた。 皇帝の命令により、カンパンが自身の連隊を率いてエジプトからハルキドン[3741] に到着した際

[3738] その通り、彼はパンノニアのシルミア司教でした。パンノニアは、ローマ帝国のドナウ川以南の主要な地域の一つであり、その境界は、西はアルプス山脈、南はサヴァ川、東と北はドナウ川で構成されていました　――キリスト教会の歴史において、パノニアは、スラブ人の最初の教師である使徒同等の聖キリルとメフォディウスの布教活動の地として注目されています。

[3739] 聖アンドロニクスとユニアの死は、1世紀後半に起こった。– コンスタンティノープルにある「エウゲニア」と呼ばれる地域は、アルカディウス皇帝（在位：396年～408年）およびゴノリウス皇帝（在位：396年～423年）の治世中に、多くの尊い聖遺骨が発見されたことで知られている。　他の聖遺物の中に、聖アンドロニクスと聖ユニアの聖遺物も発見された。12世紀には、使徒アンドロニクスを称えて、皇帝アンドロニクス1世（在位：1183年頃～1185年）によってここに教会が建立された。 – 聖アンドロニクスの記念日は、7月30日に、七十人の使徒であるシロ、シルアノス、クリスケントス、エペネトスの記念日とともに祝われる。

[3740] ローマ皇帝マクシミアヌスは、284年から305年まで在位した。

[3741] ハルキドン――より正確にはカルケドン――は、もともとマルマラ海沿岸にあったメガラの植民地であった。キリスト教皇帝の治世下、ハルキドンは小アジアのビフィニア地方の首都であった。　キリスト教会の歴史において、ハルキド

、すべての軍司令官は兵士たちと共に偶像に犠牲を捧げるよう命じられた。皇帝の命令に従い、カンパンは犠牲の儀式に取りかかった。

カンパノの連隊の兵士たちが偶像に犠牲を捧げている最中、聖ソロホンは二人の兵士、　パンフィルとパンファロンという二人の兵士と共に、自らをキリスト教徒であると公言し、たとえ最も残酷な拷問にさらされたとしても、決してキリストを否定することはないと皆の前で宣言し、生涯を通じてキリストに忠実であり続けると誓った。　その後、聖人たちは様々な凄惨な拷問にさらされ、残酷に殴打されたが、パムファミルとパムファロンは自らの魂を神の御手に委ねたのに対し、聖ソロホンは依然として勇敢に、皆が聞こえるようにキリストの御名を告白し続けた。　これを知ったカンパンは激しく怒り、家来たちに命じて、剣で殉教者の口を開かせ、偶像に捧げられた血をその口に注ぎ込ませた。　しかし、殉教者はその強靭な歯で鉄を砕き、続いて束縛を解き放ち、拷問者の前に自由な姿で現れ、キリストの御名を讃え、カンパノの不義を非難した。その時、天から声が聞こえ、聖人を苦しみの中で励まし、勇気を奮い立たせた。　その後、聖人はさらに多くの拷問にさらされた。拷問者たちは容赦なく彼を殴打し、足を引きずって瓦や鋭い石の上を引きずり回した。そして、彼の右手を家に固定された木に吊るし、左足には大きな石を縛り付けた。　聖人はこの状態で第六時から第九時まで吊り下げられていた。その間、拷問者たちはあらゆる手段を尽くしてソロホナにキリストを否定するよう説得したが、彼は彼らの不敬虔な望みを聞き入れなかった。夕方になって聖人が拷問用の木から降ろされ、地面に立たされたとき、皆の驚きをよそに、彼は健康な人のようにしっかりと立つことができた。　ついに夜も更けた頃、カンパンは激怒し、筆記用の杖を手に取り、怒りに任せてそれを聖人の耳に突き刺したため、杖は頭全体を貫通してしまった。　兵士たちが拷問の場から立ち去ると、そこへキリスト教徒たちがやって来て、拷問によってひどく衰弱していた聖殉教者の尊い遺体を運び出した。彼らはその遺体を寝台に寝かせ、あるキリスト教徒の未亡人の家へと運んだ。そこで聖人は少しのパンを口にし、水を飲んだ。　少し体力を取り戻すと、彼は自分の寝床を取り囲むキリスト教徒たちと語り合いを始め、キリストの信仰を告白するにあたり、揺るぎなく、勇敢であるよう彼らを励ました。 その後、聖人は天を仰ぎ、神に十分な時間祈りを捧げた後、キリスト[3742]、すなわち私たちの神にその霊を委ねた。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

5月31日

5月18日（旧暦）

聖殉教者テオドトスと、彼と共に殉教した七人の乙女たち――ファイナ、クラウディア、マトローナ、テクサ、ユリア、アレクサンドラ、エウフラシア――の殉教記念日

5月18日の記念日

聖殉教者テオドトスの多くの恩恵を身をもって体験した者として――と、聖殉教者の伝記を著したニールは語る――私は、言葉だけで彼の殉教の偉業を称えるだけでなく、行動をもって彼に感謝

ンは451年にマルキアヌス皇帝によって召集された第4回全地公会議の開催地として注目される　（在位：460年～467年）によって招集された第4回全地公会議の開催地として注目される（モノフィシテス派の異端は、コンスタンティノープルのアルヒマンドリトスであるエウティキオスによって提唱されたもので、彼は「イエス・キリストにおける人間性は神性によって完全に吸収されており、したがって彼には神性という一つの性質のみを認めるべきである」と説いた）。

[3742] 聖殉教者ソロホーン、パンファミール、パンファロンの殉教は、3世紀末または4世紀初頭に起こった。

する義務があると考えている。　言葉でも行いでもこれを完全に果たすことはできないが、それでもできる限りのことを努めたいと思う。なぜなら、聖殉教者テオドートの生涯の物語、そしてその受難の物語を、神を愛する者たちの知るところとし、彼らの霊的益となるよう書き残すことは、極めて必要であると思われるからである。 彼について、当初は世の他の多くの罪深い人々（ ）と同様に暮らしていたと語る者もいる。というのも、彼もまたこの世の富を得ることに心を砕き、合法的な結婚をした後、財産を増やすために宿屋を買ったと言われているからだ。しかし、彼の殉教の偉業こそが、その生涯全体を冠し、飾り立てているのである。　人々が彼について何を言おうと構わない。私は、彼と共に暮らした者として、自分の目で見たことをすべて語り、また、聖人から授かった会話についても伝えるつもりである。

殉教の偉業を成し遂げるずっと前から、聖人は多くの善行を行っていました。例えば、彼は肉欲に対してあらゆる面で戦いました。彼は合法的な結婚生活を送っていましたが、使徒の言葉「*妻を持つ者は、持たない者のようにあるべきである*」　（Iコリント7:29）という使徒の言葉に従い、聖人はこの徳において極めて卓越しており、多くの人々にとって清さと貞潔の師となることができた。聖人はあらゆる快楽や罪深い不純さから徹底して身を遠ざけ、断食と節制によって自らの肉体を霊に服従させた。　断食をあらゆる善行の始まりであり基盤であると見なした聖人は、それをあたかも盾のように身にまとい、霊的な戦いに備えました。聖人は、肉体を死なせることをすべてのキリスト教徒の義務であると考えていました。また、富への渇望や財産の蓄積に対しては、自身のすべての富を貧しい人々に熱心に施すことで打ち勝ちました。　彼の生涯から学ぶべき点は、宿屋を所有していたにもかかわらず、豊かな霊的な取引を行い、神のために多くの人々の魂を救ったことである。その理由は、聖テオドトスが宿屋の経営という形を借りて、使徒としての務めを果たしていたからである。神に霊感を受けた教えや語りかけによって、多くのギリシャ人やユダヤ人をキリストへと導き、多くの罪人を自らの罪を悔い改めるよう促した。聖テオドトスは病を癒す賜物も持っていた。手を置いて祈ることで多くの肉体の病を癒し、その言葉によって心の傷を癒やした。

聖テオドトスがキリストの御名のために苦難に遭うことになった経緯は、次の通りである。あるイゲモン、名もテオテクンという者が、ガラティアのアンキラ地方の統治権を掌握した[3743] 。このイゲモンは極めて残忍で不敬虔な人物であり、　彼は流血や殺戮の光景を楽しみとしており、その不敬虔さはあまりにも甚だしく、人間の言葉では到底言い表せないほどであった。テオテクンは、ディオクレティアヌス帝[3744] からイゲモンの権力を授かった際、アンキラに住むすべてのキリスト教徒を近いうちに異教へと改宗させると約束した。

そして実際、テオテクンがアンキラに到着したとき、彼の到着という知らせを聞いただけで、キリスト教徒たちはこれほどまでに大きな恐怖と戦慄に襲われ、即座にその場所から逃げ出した。その集落は無人となり、砂漠や山々には逃亡者たちが押し寄せた。テオテクンは自らの名において、次々と使者を派遣し、　彼らは至る所を巡り、皇帝の厳しい命令を告げ知らせて回った。その命令とは、キリスト教の教会を破壊し、地面と同じ高さに平らにすること、またキリストの御名を告白する者すべてを縛り上げ、地下牢に投獄し、そこでキリスト教徒たちが激しい拷問を待つようにすること、さらにキリスト教徒の財産を没収し、略奪することだった。　この時、キリストの教会は、大波の中にあって大いに苦難に遭い、海の深みで沈没することを恐れている船のようであった。なぜなら、不敬虔な異教徒たちはキリスト教徒の家に襲いかかり、その財産を略奪し、恥じることなく家から男女、　少年や少女を家から引きずり出し、彼らを自分たちの不敬虔な生贄の場へ、あるいは牢獄へと連行した。当時、キリスト教徒たちが耐えなければならなかったあらゆる苦難を語り尽くすことさえ難しい。　多くの司祭は拷問を恐れて自らの教会から逃げ出し、教会の扉は開け放たれたままとなった

[3743] ガラティアは小アジアの地域である。

[3744] ディオクレティアヌス帝は、284年から305年までローマ帝国を統治した。

。しかし、逃亡者たち自身も、異教徒たちの迫害から身を隠せる場所を見つけることはできなかった。　キリスト教徒の財産が略奪されると、異教徒による拷問そのものと同じくらい過酷な飢餓が訪れた。その時、山や砂漠に身を隠していた多くのキリスト教徒は、飢えによる死の苦しみに耐えきれず、異教徒のもとへやって来て、彼らの慈悲を期待して自ら身を委ねた。　当時、砂漠や山中で避難場所を探そうとしていたすべての逃亡者たちにとって、状況は過酷であった。とりわけ、以前は豊かさと満ち足りた生活を送り、困窮を知らなかったキリスト教徒たちにとっては、この状況は耐え難いものだった。今や、そうしたキリスト教徒たちは、荒野で見つけた根を噛み砕き、様々な雑草を食らって生き延びなければならなかった。

まさにこの時期、至福のテオドトスは、主の戒めを果たすために多大な労力を費やし、恐れずに多くの危険に身をさらした。彼が宿屋を営んだのは、　ある人々が言うように金を稼ぐためではなく、迫害されるすべてのキリスト教徒に避難所と安らぎを提供するために、宿屋を構えたのである。さらに、彼は投獄されているキリスト教徒たちの世話を熱心にこなし、異教徒の迫害者から逃れてきたキリスト教徒たちを自分の家に匿った。また、山や荒野に身を隠していたすべてのキリスト教徒に食事を提供した。　また、異教徒によって犬や獣、鳥に食わせようと捨てられた聖なる殉教者たちの遺体は、密かに埋葬した（ここで留意すべきは、イゲモンが、兄弟たちの遺体を埋葬したキリスト教徒を死刑に処すよう命じていたことである。そのため、至福のテオドトスは遺体を密かに持ち出し、密かに埋葬していた）。　このように、聖テオドトスの家は宿屋であると同時に、キリスト教徒たちの避難所でもあった。というのも、テオドトスは酒場の主人と見なされていたため、異教徒からキリスト教徒であるという疑いを招くことがなかったからである。　そして、聖人はすべての人にとって、あらゆる存在であった。迫害される者にとっては守護者、飢える者にとっては養い手、病める者にとっては医師、迷う者にとっては確固たる確信、信仰と敬虔の教師、神に喜ばれる生活の導師、そして殉教の偉業への鼓舞者であった。

この頃、不敬虔な総督テオテクノスは、市場で売られているあらゆる食物や飲み物に、偶像への生贄の血を至る所に振りかけるよう命じた。彼はキリスト教徒を標的にしてこれを行い、たとえ彼らの意志に反してでも、偶像への生贄の血で穢された食物を口にさせることを意図していた。　その結果、キリスト教の教会では、真の神への捧げ物を捧げることができなくなってしまった。というのも、街中に異教徒によって穢されていないパンやワインが一つもなかったからである。このことを知った聖テオドトスは、あらかじめ購入し、豊富に備えていた麦や小麦、ワインを信徒たちに配り始めた。　至る所で食料と飲み物を配り、また自身の宿で多くのキリスト教徒を養ったテオドトは、その宿を、大洪水から船内にいたすべての人々を救ったノアの箱舟に例えた（創世記7:1–24）。なぜなら、かつてノアの時代、ノアの箱舟の中にいた者たち以外、誰も大洪水の水から逃れることができなかったのと同様に、今や私たちの町においても（聖テオドトスの伝記の著者はこう述べている）、テオドトスの家に行かなければ、キリスト教徒の誰一人として、偶像への生け贄による忌まわしいものから身を守ることができなかったからである。　このようにして、テオドトスの宿屋は、旅人の宿となり、祈りの聖堂となり、そしてここで血を流さない神の犠牲を執り行う神の司祭たちの祭壇となった。　人々は皆、大洪水の際の船のように、テオドトスの家へと駆け込んだ。これこそが、この至福のテオドトスの宿屋経営であり、彼の財産と獲得物であった。しかし、この話はこの程度にしておこう。聖殉教者の他の行いについても語ろう。

キリスト教徒に対するこの迫害の最中、テオドトスの友人であるヴィクトルという人物が、次のような理由で異教徒たちに捕らえられた。アルテミスの祭司たちの一部[3745]が、ヴィクトルが彼らの女神を冒涜したとイゲモンに誹謗し、ヴィクトルが「アポロン[3746]が、同母の妹であるアルテミス

[3745] アルテミス、あるいはディアナ――狩猟の女神であり、森の守護神。
[3746] アポロン――太陽の神であり、芸術の守護神。

を強姦し、デレの祭壇の前で彼女を汚した[3747]」と述べたと言い、さらに、エリンノス人は、貞潔な人々が聞くことさえできないような忌まわしい行いを平然と行う、このような淫乱な神々を崇めていることを恥じるべきだと指摘した。このように誹謗中傷されたヴィクトルを捕らえたイゲモンは、彼を牢獄に閉じ込めるよう命じた。囚人の元には多くのエリンノス人が訪れ、次のように諂いながら彼を説得した。

「イゲモンの命令に従いなさい。そうすれば、あなたは大きな名誉を授かり、王の友となり、王から様々な富を授かり、王宮で暮らすことになるでしょう。 しかし、もしイゲモンの言うことを聞かなければ、どのような苦痛があなたを待ち受けているか考えてみてください。そうなれば、あなたの家屋や財産はすべて略奪され、親族は皆殺しにされ、あなた自身の肉体も、多くの凄惨な拷問の末、悲惨な死を遂げ、犬に食わせるために投げ捨てられることになるでしょう。

彼らはヴィクトルに、こうしたこと、そして他にも多くのことを語った。

一方、敬虔の守護者テオドトスは、夜になってヴィクトルの牢獄を訪れ、これから待ち受ける試練に向けて彼を励まし、こう語った。

「ヴィクトルよ、いかなる場合でも、不敬虔な異教徒たちが君に語るあの甘言に耳を傾けてはならない。彼らの悪意ある助言を受け入れてはならない。彼らの後を追ってはならない。我々を見捨ててはならない。貞潔よりも不潔や不敬虔を優先してはならない。また、真実よりも偽りを愛してはならない。そうしてはならない、わが友よ！ あの不敬虔な者たちが、その狡猾で媚びた約束によって、あなたを破滅へと引きずり込もうとしていることを知っているのだから、決してそうしてはならない。ユダヤ人たちは、まさにそのような約束で、裏切り者ユダを惑わしたのではないのか？ 彼らが彼に与えた三十枚の銀貨は、彼に何の益をもたらしただろうか？ 彼はその三十枚の銀貨によって、自らを絞め殺した縄以外、何も得なかったのだ（マタイ27:3–5）。悪しき者たちから何か良いものを得られるなどとは決して思ってはならない。彼らの約束は永遠の死を招くものだからである」。

聖テオドトスは、こうした言葉やそれに類する言葉で、ヴィクトルを信仰の道に堅く立たせた。そしてヴィクトルは、聖テオドトスが彼に諭した言葉を覚えている限り、確かに勇敢にその苦行を貫き通した。 聖人の苦しみを見守っていた者たちは皆、その輝かしい功績を称賛した。そして、殉教の最期が近づき、この世を去る時が迫ったとき、ヴィクトルは拷問者に、しばらくの間苦しみをやめてほしいと頼んだ。そうすれば、心の中でじっくりと考える時間ができるからである。 するとすぐに、総督の家来たちは拷問を止め、ヴィクトルを牢獄へと連れ去った。しかし、ヴィクトルは牢獄の中で傷のため息を引き取り、その信仰告白の結末は謎のままであった。

その後、至福のテオドトスは、「マロス」と呼ばれる、町から十四スタディオン離れた村へと向かった。 聖人がここへ向かったのは、以前ミディキナで苦難に遭った聖殉教者ヴァレントが、この地で殉教の業を全うし、ガリオスと呼ばれる川に投げ込まれたことを知ったからである。 テオドトはこの村へ向かったが、村の中に入ることはせず、村から二ポプリスの距離にある川辺に留まった。聖殉教者の遺骨を見つけたテオドトは、それを尊く埋葬した。 彼がそこから戻る途中、数人のキリスト教徒に出くわした。彼らはテオドトを見るや、すべてのキリスト教徒の恩人として深く感謝を捧げた。 とりわけ、彼らは聖人が彼らに施した一つの偉大な恩恵に対して感謝した。すなわち、アルテミディンの祭壇が破壊された際、これらのキリスト教徒たちはイゲモンに引き渡され、拷問を受けることになっていたが、聖テオドトスは多くの苦労の末、多額の身代金を支払って彼らを買い戻したのである。 まさにこのことのために、キリスト教徒たちは今、彼に頭を下げ、歓迎の意を表し、感謝の言葉を捧げていた。 聖人は彼らとの再会を喜び、共に食事をとろうと誘った。高台で美しい場所を見つけ、彼らは草の上に横たわった。その場所には美しい木々が数多く生い茂り、花も咲き乱

[3747] ここで言及されているのは、神々の冒険を描いたギリシャ神話の伝承である。古代ギリシャの宗教は、その神々に様々な恩恵をもたらす力や芸術、知識だけでなく、道徳的に最も低い人間に特有の欠点までも与えていたことに留意する必要がある。

れ、至る所で鳥のさえずりが聞こえていた。食事を始める前に、　聖人は彼らの中から二人を村へ送り出し、司祭を呼んできた。その司祭に食事を祝福してもらい、彼らと共に食事を摂り、その後、慣例通りの祈りで彼らを見送ってもらうためであった（なお、聖テオドトスは常に司祭の祝福を受けて食事を摂る習慣があり、可能であれば司祭の面前で食事をとっていた）。　遣わされた者たちがその集落に近づくと、第六時の賛美が終わった後、教会から出てくる司祭を見かけたが、彼らはそれがその集落の司祭であるとは知らなかった。その集落の犬たちが旅人たちに向かって激しく吠えているのに気づいた司祭は、彼らに近づき、犬たちを追い払って挨拶をした後、こう尋ねた。

「あなた方はキリスト教徒ですか？もしキリスト教徒なら、私の家に入って、キリストの愛を分かち合いましょう。」

すると彼らはこう答えた。

「はい、私たちはキリスト教徒です。そして、キリスト教徒を探しているのです。」すると司祭は微笑みながら、心の中でこう呟いた。

「フロントン！（それが彼の名前だった）。ほら、お前の夢の幻が現実になっているではないか！」

それから、旅人たちに語りかけて言った。

「今夜、私は夢の中で、あなた方にとてもよく似た二人の男を見ました。彼らは私に『私たちはこの地に宝物を持ってきました』と言いました。あなた方はその二人の男にとてもよく似ているように思えますので、教えてください。一体、どのような宝物を持ち込んだのですか？」

すると、その男たちはこう答えた。

「確かに、私たちには、いかなる宝物よりも尊い、至福のテオドトスという男が同行しています。もし望まれるなら、彼をご覧になってもいいですが、まずはこの村の司祭を私たちに紹介してください。」

すると、彼はこう答えた。

「私が、あなたがたが探している者です。さあ、私の家へ行って、神の御使いを連れてきましょう。」

その後、皆は聖テオドトスのもとへ向かった。

司祭はテオドトスを見るや、愛を込めて彼を迎え入れた。他のキリスト教徒たちにも同様に挨拶を交わし、その後、皆を自分の家へ招き入れようと懇願し始めた。しかし、聖テオドトスは行くことを拒み、こう言った。

「私は一刻も早く町へ急がねばなりません。今やキリスト教徒たちにとって偉大な試練が訪れているからです。それゆえ、私は苦難と大きな危険にさらされている兄弟たちに、力の及ぶ限り奉仕しなければなりません。」

その後、司祭が祈りを捧げ、皆で食事を始めた。食事が終わると、聖テオドトスは笑顔を浮かべて長老にこう言った。

「この場所はなんと美しく、聖遺骨を埋葬するにはなんとふさわしい場所でしょう！」

すると、司祭は彼にこう答えました。

「どうか、ここに尊い聖遺物を運んでくださるよう、ご尽力ください。」

聖テオドトスはこれに対し、次のように答えました：

「父よ、どうかこの場所に、聖遺物を安置できる礼拝堂を建ててください。そうすれば、まもなく殉教者の聖遺物があなたのもとに運ばれてくるでしょう。」

それから聖人は自分の指から指輪を外し、それを司祭に手渡しながらこう言いました。

「主が、私とあなたとの間の証人となってくださいますように。まもなく、ここに殉教者の聖遺物が運ばれてくるでしょう。」

聖人はこう語り、ここに自身の遺骨が安置されることを預言的に予言していたのである。なぜなら、彼は全身全霊で殉教の偉業を志していたからである。

その後、聖テオドトスは自分の町、そして自分の家に戻ったが、そこはまるで大地震があったかのように、すべてがひどく略奪され、破壊されていた。

その町には、七人の敬虔な処女たちが住んでいた。彼女たちは幼い頃から敬虔さと神への畏れの中で育てられ、肉体的・精神的な清さを守り、朽ちることのない不死の花婿、すなわち神の御子キリストに身を捧げていた。敬虔で神に喜ばれる生活を送り、これらの処女たちは老齢に達した。　彼女たちの最年長は、聖テオドトスの叔母にあたるテクサであった。イゲモンはこれらの聖なる処女たちを捕らえ、様々な拷問を加えた。しかし、拷問では彼女たちの信仰を揺るがすことができなかったため、彼は彼女たちを淫らな若者たちに引き渡し、汚させ、キリスト教の敬虔さを侮辱し、罵倒した。　それらの処女たちが穢されるために連行されたとき、心の底からため息をつき、天に目を上げ、両手を天に向かって掲げ、次のような言葉で神に祈り始めた。

「主イエス・キリストよ！　あなたがご存知の通り、私たちにはそれができる限り、どれほど注意深く、熱心に処女性を守ってきたか。しかし今や、恥知らずな若者たちが私たちの体を支配する権力を手に入れてしまいました。どうか、あなたご自身がご存知の方法で、私たちを清く保ってください。」

聖なる処女たちが涙ながらにこのように神に祈っているとき、ある恥知らずな若者が、彼女たちの中で最年長のテクススを引き寄せ、彼女を汚そうとした。すると彼女は、彼の足をつかんで、涙ながらにこう言った。

「若き人よ！　あなたがた自身の目にも明らかなように、老い、断食、病気、そして苦しみによって衰え果てた私たちの体が、あなたにどのような快楽をもたらすというのですか！　私はすでに七十歳を超えています。他の姉妹たちも、私より少し若いだけです。　これほど若きあなたがたが、もはや死んだも同然のこの身体に触れるのはふさわしくありません。まもなく、この身体が獣や鳥に食い荒らされるのを目にするでしょう。イゲモンはすでに私たちに死の判決を下したも同然なのですから。私たちに害を加えないでください。そうすれば、私たちの神、主イエス・キリストから報いを受けるでしょう。

そう言いながら、聖テクサは頭からベールを外し、若者に白髪交じりの頭を見せ、再び彼にこう言った。

「子よ！恥を知りなさい。あなたにも、もしまだ生きておられるなら、私と同じように年老いた母がおられるはずです。もし母が亡くなられたのなら、母のことを思い出し、私たちを放っておいてください。そうすれば、あなたは私たちの主キリストから報いを受けるでしょう。なぜなら、主への希望はむなしいものではないからです。」

テクーサのこうした言葉に、その若者と仲間たちは心を動かされた。肉欲を捨て去った若者たちは泣き出し、聖なる処女たちに何の害も与えることなく、彼女たちから離れていった。

テオテクンは、それらの処女たちが穢されていなかったことを知ると、彼女たちを強引に穢そうという考えを捨て、彼女たちに女神アルテミスの巫女となるよう命じた。その際、彼女たちの義務として、異教の慣習に従い、最寄りの湖で偶像を洗い清めることが課された。

偶像を清める日が訪れ、異教徒たちはこれを非常に盛大に祝った。異教徒たちは、それぞれの偶像を専用の戦車に乗せ、歌と歓声を上げながら、民衆の目の前で湖へと運んでいった。　異教徒たちは、イゲモンの命令により、聖なる処女たちを偶像の先頭に、それぞれ別の　戦車に乗せて運んだ。処女たちは、異教徒たちの娯楽と侮辱のために裸にされていた。　すべての市民がこの祝祭に繰り出し、ラッパやキンヴァルの音、そして頭巾を脱ぎ、髪を解き放って通りを歩く女性たちの歌声を聴きに集まった。　群衆の喧騒と足音、そしてラッパの音によって、まるで大地全体が震えているかの

ようだった。民衆全員と共に、イゲモン・テオテクン――エヒドナの産物であり、悪魔の僕――も歩いていた。　異教徒たちは裸の処女たちを見つめていたが、その中には嘲笑する者もいれば、彼女たちの忍耐と勇気に驚嘆する者もいた。また、傷で衰弱した彼女たちの体を憐れみ、感動のあまり涙を流し、心を痛める者もいた。

このような状況下でこの不敬虔な祝祭が行われている間、聖テオドトスは聖なる処女たちのために非常に深い悲しみに沈んでいた。というのも、彼女たちのうち誰かが、女性としての弱さゆえに、苦難の行いにおいて気力を失い、主イエス・キリストの助けへの希望を見失ってしまうのではないかと恐れていたからである。　これを思い巡らしたテオドトスは、聖なる修道女たちのために熱心に祈りを捧げ始め、神に聖なる処女たちがその修業において強められるよう懇願した。　祈りのため、聖テオドトスは、親族のポリクロニオス、同じく親族である若きテオドトス、そして他のキリスト教徒たちと共に、聖なる総主教たち――アブラハム、イサク、ヤコブ――に捧げられた教会の近くにある、テオハリダという名の貧しいキリスト教徒の家に籠もった。　フェオドトと、彼と共に祈っていた他のキリスト教徒たちは、ひれ伏して地面に横たわり、正午から午後6時まで祈り続けた。やがて、テオハリダの妻が、敬虔な処女たちの遺体が[3748] 湖に沈められたと告げた。 その知らせを聞いた聖テオドトスは、地面から少し体を起こした。そして、ひざまずいたまま両手を天に向け、雨の雫のように溢れる涙を流しながら、次のように祈った。

「主よ、私の嘆きの声を聞き届けてくださり、私の涙を無駄にされなかったことを感謝いたします！」

その後、彼はテオハリダの妻に、処女たちがどのようにして水に沈められたのか、またその場所は岸辺だったのか、それとも川の中ほどだったのかと尋ね始めた。すると彼女は彼にこう答えた。

「私は他の女性たちと一緒にその場所の近くに立っていて、イゲモンが処女たちに、偶像への清めの儀式を行うよう長く説得し、多くの贈り物を約束しているのを見ました。しかし、イゲモンの願いは全く叶わず、むしろ聖なるテクーサの叱責の言葉によって、さらに恥をかかされました。」

一方、アルテミスとアテナの祭司たちは[3749] 、彼女たちに白い衣と装飾された冠を差し出し、その衣と冠を身にまとって偶像への清めの儀式を行わせようとした。　しかし、殉教者たちはその衣と冠を受け取ると、それらを地面に投げ捨て、足で踏みつけ始めた。そこでイゲモンは、聖女たちの首に重い石を縛り付けるよう命じ、その後、彼女たちを舟に乗せ、深い場所へ連れて行き、水中に投げ込むよう命じた。彼女たちは、岸から二スタディオン離れた場所で水中に投げ込まれた。

これを聞いた聖人は、夕方までポリクロニオスとテオハリドスと相談し、聖なる殉教者たちの尊い遺体を水から引き上げ、埋葬に付すにはどうすればよいかを話し合った。　日没頃、グリケリウスという名のキリスト教徒の若者が彼らのところへやって来て、イゲモンが湖のほとりに兵士たちを警備として配置し、殉教者たちの遺体が湖から持ち出されないよう見張るよう命じたと告げた。　これを聞いた聖テオドトスは深く嘆いた。なぜなら、警備兵の存在に加え、聖女たちの首に縛り付けられた重い石のせいで、聖なる殉教者たちの遺体を今や容易には引き上げることができなかったからである。これらの石は極めて重く、戦車に乗せて運ぶことさえ困難なほどであった。　夕方、テオドトスは近くの聖なる総主教たちの教会へ向かったが、その入り口は異教徒たちによって塞がれており、キリスト教徒が中に入れないようになっていた。教会に着くと、聖人はその前で地面にひれ伏し、長い間祈りを捧げた。　その後、立ち上がって教会の入り口へ向かったが、入り口が塞がれているのを見て立ち止まり、そこで再び祈りを捧げた。少し離れたところで叫び声やざわめきを耳にし、異教徒たちが自分を追いかけてきているのだと思い、聖人はすぐに立ち上がってテオハリドの家へ向かった

[3748] 聖なる処女殉教者たちの殉教は、4世紀初頭に起こった。

[3749] アテナ、あるいはミネルヴァは、知恵の女神である。

。　そこで彼はしばらくの間、眠りについた。夢の中で、彼の叔母である聖テクサが現れ、こう言った。

「あなたは眠っているだけだ、テオドトの息子よ。私たちのことを少しも気にかけていない。あなたがまだ若かった頃、私があなたをどのように導いたか、覚えていないのか？　私が父や母の代わりとなって、徳ある生き方を導いてあげたことを、覚えていないのか？私が生きていた頃、あなたは決して私を侮辱することなく、常に　実の母のように私を敬っていたではないか。しかし今、私が亡くなってからは、あなたは私を忘れてしまった。あなたは生涯を通じて私に仕えるべきだったのに。　しかし、お願いだ。私たちの遺体を水中に放置して、魚の餌にさせないでほしい。一刻も早く水から引き上げてほしい。あなた自身も、あと二日で殉教の道へと旅立つのだから。ベッドから起き上がり、湖へ行きなさい。ただし、裏切り者には気をつけなさい。

そう言い残して、聖女はテオドトスの元を去った。

目を覚ましたテオドトスは、その家にいた他のキリスト教徒たちに自分の幻視について伝え、皆は涙ながらに主へ祈りを捧げ、聖なる殉教者たちの遺体が見つかるよう助けを求めた。　一方、福者テオドトスは、その幻視について考えを巡らせながら、テクーサが彼に告げた最後の言葉「裏切り者に気をつけなさい」が何を意味するのか、首をかしげていた。しかしその後、この言葉は的中することになる。それは、以下の物語から明らかになるだろう。

朝になると、テオドトスは、前述の青年グリケリオンをテオハリドと共に、川のほとりに立っていた兵士たちについてより詳しく偵察に行かせた。その日は異教徒たちが女神アルテミスの祭りを執り行っていたため、兵士たちは去っただろうと考えていたからである。　使者は出かけたが、兵士たちがまだ去っていないのを見て、戻って他のキリスト教徒たちにそのことを知らせた。そして、皆はその日を断食と祈りに費やした。　夕方になると、キリスト教徒たちはまだ食事をとらずに、聖なる殉教者たちの首に巻かれた縄を切断できる鋭い鎌を携えて、湖へと向かった。　その時は、その夜、月も星も輝いていなかったため、辺りは真っ暗だった。皆が、悪党や強盗たちに対する死刑が執行されていた場所（そこは非常に恐ろしい場所であり、日没後は誰もそこを通ることを敢えてしなかった。　そこには死体や骨、体から切り落とされた頭部が転がっており、そのうちのいくつかは棒に刺さっていた）、皆は大きな恐怖に襲われたが、すぐに勇気づけられた。なぜなら、次のような声が聞こえてきたからである。

「恐れずに進め、テオドトよ！」

この言葉を畏敬の念を持って聞き終えると、皆は十字の印を切った。するとたちまち、東側の空に、四方八方に炎のような光線を放つ、まばゆいばかりの十字架が現れた。この十字架を見て、皆は喜びと畏怖に包まれた。そして、ひざまずいて聖なる十字架に礼拝し、主に向かって祈りを捧げた。　祈りを終えて立ち上がると、皆は湖へと向かった。しかし、その頃には十字架の幻影が消え去っていたため、再び辺りは暗くなり、誰も互いの姿を見ることができなくなった。その時、雨が降り出し、道が滑りやすくなり、旅路は極めて困難なものとなった。　そこで皆は祈りを捧げ、このような苦難の中で神の助けを請うと、たちまち道を照らす炎のランプが現れた。同時に、聖テオドトスの前に、白い衣をまとい、頭と顎鬚に白髪のある二人の高潔な男が現れ、彼にこう言った。

「勇気を持ちなさい、テオドトよ。主であり私たちの神であるイエス・キリストは、聖なる花嫁たちの遺体を見出すことについて、あなたの涙に満ちた祈りを聞き届け、殉教者たちの名簿にあなたの名を記されたからです。私たちは主によって、あなたを助けるために遣わされました。　我らは、昨夜あなたがその教会の前で祈りを捧げた先人たちの列に属している。湖に着けば、そこには武装した殉教者ソサンドラがおり、湖を守っている兵士たちを恐れさせ、追い払っているのを見るだろう。しかし、あなたは裏切り者を連れて行くべきではない。

そう言うと、聖人たちは姿を消した。

聖テオドトスは、自分と共に旅をした者たちのうち、誰が裏切り者であったのか、結局知ることはなかった。

現れた灯火の後を追って、皆は湖へと近づいた。その時、雷鳴が轟き、稲妻が走り、激しい雨が降り注ぎ、恐ろしい嵐が吹き荒れた。湖のほとりに立っていた兵士たちは、ひどく怯えてそこから逃げ出した。彼らが恐れたのは、雷や稲妻、嵐そのものというよりは、むしろ恐ろしい幻影であった。　というのも、彼らは、鎧と盾、そして槍を手にした非常に大柄な男を目撃したからである。その男の頭には兜が被せられており、その周囲からは明るい光が放たれていた。それは殉教者ソサンドロスであった。　その幻影に恐怖を覚えた兵士たちは、大きな恐怖に包まれながら逃げ去った。その間、湖の水は風によって湖の片側から反対側へと吹き飛ばされ、湖底が露わになった。すると、キリスト教徒たちの目に、湖底に横たわる聖なる殉教者たちの遺体が映し出された。　聖なる殉教者たちの元へ近づくと、キリスト教徒たちは鎌で、殉教者たちの首に石を縛り付けていた縄を切り落とした。その後、尊い遺体を運び出し、戦車に乗せて聖なる総主教たちの教会へと運び、そこで栄誉をもって埋葬した。　その殉教者たちの名は、テクサ、アレクサンドラ、クラウディア、ファイナ、エウフラシア、マトローナ、ユリアであった。これらの聖なる処女たちは、5月の18日に殉教した。

翌日の朝、聖なる殉教者たちの遺体がキリスト教徒たちによって湖から引き上げられたことが、街中に知れ渡った。これを知ったイゲモン、偶像の祭司たち、そしてその他の異教徒たちは激しい怒りに満ち、通りで偶然出会ったキリスト教徒を一人残らず尋問のために引きずり出した。　この時、多くのキリスト教徒が尋問にかけられ、残酷で苦痛に満ちた死を遂げた。彼らは、まるで獣の牙のように、拷問者たちによって引き裂かれたのである。聖テオドトスはこのことを知ると、自ら異教徒の手に身を委ねようとしたが、親族たちにそれを止められた。　一方、ポリクロニオスは服を着替えて農夫の姿になり、町で起きていることをすべて知るために町の広場へ行ったが、すぐに異教徒たちに捕らえられ、イゲモンへの尋問に引き出された。　ポリクロニオスは拷問者たちから激しい殴打と傷を負わされたが、沈黙を守り続けた。しかし、自分の頭上に振りかざされた剣を目にしたとき、彼はひどく恐れをなして、拷問者たちに、湖畔の住人テオドトが聖なる殉教者たちの遺体を湖から引き上げ、聖なる総主教たちに捧げられた教会に埋葬した経緯を語った。　これを知った異教徒たちは、直ちに聖女殉教者たちの尊い遺体が埋葬されていた場所へ向かい、墓を掘り起こして遺体を焼き払った。その後、異教徒たちはテオドトスを探しに出たが、そのことは同日の夕方に密かに彼に伝えられた。　その時、聖テオドトスは、ポリクロニオス――彼の親族であり友人である――こそが、聖なる総主教たちが警戒するよう命じていた裏切り者であることを悟った。自ら殉教の苦難に身を投じることを決意したテオドトスは、親族たちにこう語った。

「私のために、主イエス・キリスト、私たちの神に祈ってください。どうか主が私に殉教者の冠を授けてくださいますように。」

そして皆は彼と共に一晩中祈りを捧げ、その間、聖テオドトスは次のように祈った。

「主イエス・キリストよ、絶望する者たちの希望よ、私が勇気をもって殉教の業を成し遂げられるよう助けてください。そして、私の拷問者たちが流す私の血を、迫害されるすべてのキリスト教徒のためにあなたに捧げるいけにえとして受け入れてください。　彼らの苦しみを和らげ、迫害という激しい嵐を鎮め、信者たちが静けさと平安のうちにいられますように。

日が明けると、聖人は迫害者たちの元へ赴き、自らを彼らの手に委ねることを決心しました。これを知った親族たちは皆、声をあげて泣き叫び、彼を抱きしめながらこう言いました。

「救いを得られますように、教会の光であり栄光である、高潔なテオドトよ！　苦難の終わりに、天の光の分かち合い者となり、天使たちと大天使たちの群れに加えられ、聖霊と、父なる神の右に座しておられる我らの主イエス・キリストの栄光があなたを照らしますように。　あなたが今まさに成し遂げようとしているこの偉業に対し、これらすべての恵みがあなたに授かりますように。しか

し、このような苦難の中に残される私たちにとって、あなたの旅立ちは多くの悲しみと涙をもたらすことを知っておいてください。

皆がそのような言葉を口にしながら泣いている間、聖テオドトスは一人ひとりを抱きしめ、最後の口づけを交わしました。そして、もし迫害者たちから密かに遺体を奪い返すことができれば、マロス村から彼の指輪を持ってやって来る司祭フロントンに、自分の遺体を渡すよう命じました。

ついに、聖テオドトスは十字の印で身を守り、勇敢に自宅を出て行った。

道中、彼はその町の長老たち二人と出会った。彼への愛と敬意を示すため、彼らは彼に一刻も早くどこかに身を隠すよう勧め、こう言った。

「アテナとアルテミスの祭司たちは、他の異教徒たちと共に、あなたがすべてのキリスト教徒に、無感覚な石や木を崇拝しないよう勧めていると、イゲモンにあなたを誹謗中傷しています。彼らはあなたについて他にも多くのことを言っています。そしてポリクロニオスは、あなたが密かに処女たちの遺体を盗んだと語っています。」　まだ手遅れではないうちに、テオドトよ、身を隠せ。自らを拷問者たちの手に委ねるなど、正気の沙汰ではないからだ。

すると、聖人は彼らにこう答えた。

「もしあなたがたが私の友人であり、本当に私への愛を示したいのなら、私が進む道を妨げてはならない。それどころか、裁判所へ行き、そこで長老たちにこう告げなさい。『ほら、祭司たちや民衆から誹謗中傷されているテオドトが、ここに、門の前に立っている』と。」

そう言うと、聖人は急いで先へ進み、法廷の中央に立ち、喜びに満ちた顔で拷問器具を見つめた。そこには、燃え盛る炉、沸騰した湯の入った大釜、車輪、そして他にも多くの拷問器具が並んでいた。　これらすべてを目の当たりにしても、聖人は心の中で少しも恐怖を感じず、思考も乱れることなく、喜びに満ちた表情で立ち続け、その不屈の勇気を皆に示していた。イゲモンが聖人を見ると、彼にこう言った。

「もし神々に犠牲を捧げるなら、ここにあるあらゆる拷問器具のどれ一つとして、お前を傷つけることはない。そうすれば、祭司たちや我々の街全体が告発しているすべての罪から解放されるだろう。さらに、お前は我々の友となり、王にも好意を持たれ、王はお前に大きな栄誉を与えるだろう。　ただ、かつて我々より前に統治していたピラトがユダヤで十字架につけたイエスを、否定するだけだ。　このことをよく考えてみよ、テオドトスよ！　君は分別のある人物のように思える。分別のある人間は、何事においても慎重さと分別をもって行動すべきである。あらゆる狂気から離れよ。また、他のキリスト教徒たちにも、その狂気を捨てるよう説得せよ。そうすれば、君はこの街全体の指導者となるだろう。　そうすれば、あなたは私たちの主神アポロンの祭司となるだろう。アポロンは人々に多くの恵みを与え、未来を予言し、その医術によって病を癒やす神である。もしあなたがこの神に仕えるならば、他のすべての神々に仕える祭司たちを任命する権利を得るだろう。　すべての重要な役職への任命はあなたを経由することになり、あなたは裁判官たちの前で取り次ぎ役を務めることになる。あなたは王の名において、民の様々な必要について諸国民へ書簡を送ることになる。あなたは極めて裕福になり、あなたの親族全員も大いに尊敬されることになる。もしあなたが富や財産を必要とするなら、私は今すぐでもそれを与えることができる。

イゲモンがそう語っている間、民衆の間から、イゲモンの言葉を称賛し、テオドトにイゲモンからの富と栄誉を受け入れるよう促す大きな歓声が上がった。しかし、聖テオドトはイゲモン・テオテクヌスに次のように答えた。

「まず第一に、私は私の主イエス・キリスト（あなたが単なる人間と呼んだ方）に助けを求めます。主が、私にあなたの誤りを暴き、あなたの神々の虚しさを明らかにする力を与えてくださるよう。同時に、簡潔な言葉で、私の主の受肉の神秘と、主が成し遂げられた奇跡について、あなたに語ってあげましょう。　おお、テオテクンよ！　私は本来、私の信仰と行いについてあなたに語るべき

である。しかし、私はあなた方の恥となるように、あなた方の目の前で、口にするのも恥ずかしいほどであるあなた方の神々の行いを暴いてみせよう。 あなたがたがディウス[3750]と呼び、他のすべての神々よりも栄光ある神だと見なしているその者は、あらゆる悪の始まりであり終わりとも言えるほど、極めて卑劣な肉欲に身を委ねていた。 あなた方の詩人オルフェウス[3751]は、ディオスが実の父サトゥルヌス[3752] を殺害し、実の母レイアを妻として迎え、彼女との間に娘ペルセフォネをもうけたと語っている。しかし、彼はそれだけでは留まらなかった。 彼は実の娘とも不義を犯し、さらに妹のユノー[3753]を妻とした。同様に、アポロンもデロス島の祭壇の前で、実の妹ダイアナを汚した。 同様に、マルス[3754]も、ヴィーナス[3755]への肉欲に溺れ、ヴルカン[3756]もミネルヴァへの情欲に駆られた――実の兄弟が実の姉妹を犯したのである。イゲモンよ、お前は、お前の神々の不法行為がいかに忌まわしいか、本当に気づかないのか？ お前たちの法律は、そのような犯罪を犯す者をすべて罰するのではないのか？ それなのに、あなた方は、そのような淫らな神々の行いを自慢し、父殺し、近親相姦者、姦通者、児童を汚す者、魔術師たちを崇拝することに恥じ入らないのです（これらすべてについて、あなた方の詩人たちは、あなた方の神々の忌まわしい行いを称賛して書き記しています）。 それに対し、私たちの主イエス・キリストの御業と奇跡は清く、いささかの欠点もありません。 私たちの主イエス・キリストの受肉の神秘については、すべての聖なる預言者たちがあらかじめ告げており、終わりの時に天から神が人々のところに来られ、人間として人々と共に暮らし、言葉では言い表せないしるしと奇跡を行い、多種多様な病を癒やし、人々を天の御国にふさわしい者にしてくださると語った。 そして、主の受肉だけでなく、私たちのために自ら進んで耐えられた苦難、その死と埋葬についても、同じ聖なる預言者たちが極めて正確にあらかじめ予言していたのである。 その証人となったのは、カルデア人と賢明なペルシャの東方の三博士であり、彼らは星を頼りに主の誕生の地を見つけ出し、神として主を礼拝するために、贈り物を携えて主のもとを訪れたのである。 また、主の復活の証人となったのは、主の墓を守っていたローマの兵士たちであった。彼ら自身が、主が墓から復活されるのを目撃し、そのことを 大祭司たちに報告したのである。しかし、私たちの主イエス・キリストが、この世に生きた間に成し遂げられた、すべての驚くべき栄光に満ちた御業を、いったい誰が語り尽くすことができようか。 まず第一に、主は水をワインに変え、次に、五つのパンと二匹の魚で荒野にいる五千人の民を満腹させ、病人を癒やし、海の上を陸地のように歩かれた。火の性質さえも主の御力に恐れをなした。 生まれつき目の見えない者に視力を与え、足の不自由な者を軽快に歩けるようにし、御命令によって死者をよみがえらせ、四日間も死んでいたラザロをもよみがえらせ、命を取り戻させた。これらすべての輝かしく驚くべき奇跡は、イエス・キリストが単なる人間ではなく、真の神であったことを誰の目にも明らかである。

聖人がこのようにして、私たちの主イエス・キリストの神性を証ししたとき、その場所の近くに立っていたすべての異教徒たちは、大いなる動揺に陥り、風が海を騒がせるようにざわめき立てた。 祭司たちは髪を引きむしり、衣を引き裂き、花輪をちぎった。一方、民衆はますます動揺し、怒

[3750] ディオス、あるいはゼウス――古代ギリシャ宗教の最高神であり、他の神々の始祖とみなされていた。

[3751] オルフェウス――古代ギリシャ神話における主要な登場人物の一人。 オルフェウスは、フラキアの王エアグロスとミューズの一人カリオペの息子とされていた。神話によれば、彼の竪琴は、野獣たちが巣穴から出てきて彼に従うほど、素晴らしい音色を奏でたという。オルフェウスは、優れた詩人であり、古代ギリシャ詩歌の創始者と見なされていた。

[3752] サトゥルヌスは、大地と作物の神である。

[3753] ユノーは家庭生活の守護神とされていた。

[3754] マルス――戦争の神。

[3755] ヴィーナス、あるいはアフロディーテ――愛と美の女神。

[3756] ヴルカヌス――火と金属の神。

りを込めて総督に問いただした。「なぜ、死に値するこのような神を冒涜する者に、これほど長く語らせることを許し、処刑や拷問に処さないのか？」

　　すると、イゲモンはさらに激しい怒りに駆られ、兵士たちに聖人の衣服を剥ぎ取り、裸のまま拷問の木に吊るし、鉄の器具でその肉体を苛むよう命じた。イゲモン自身も席から立ち上がり、自らの手で聖人を拷問しようとした。その瞬間、民衆の叫び声によって大嵐のような騒ぎが巻き起こった。　民衆は叫び、イゲモンの家来たちに拷問を始めるよう要求し、命じた。家来たちは拷問の道具を準備していた。しかし、ただ一人の聖なる殉教者だけが、魂を微塵も乱すことなく、心を怯えることもなく、静かに立ち続けていた。テオドトスはあまりにも平静で、まるでその拷問が彼のために用意されたものではないかのようであった。

　　その後、聖人は木に吊るされた。兵士たちが鉄の爪で聖人の体を容赦なく引き裂き始めたとき、聖人はまるで喜びに満ちた顔を輝かせているかのようであった。それは、主イエス・キリストが彼の助け手となっていたからである。こうして聖人は長い間、拷問に耐え続けた。　やがて、兵士たちは疲れ果て、別の者たちと交代した。しかし、殉教者はキリストの御名を告白することに揺るぎなく立ち続け、まるで自分の体ではなく、他人の体で苦しんでいるかのように見えた。彼はすべての思いを、自分を助けてくださる主イエス・キリストへと向け続けた。

　　しばらくして、イゲモン・テオテクンは、聖人の傷口に塩を混ぜた最も強い酢を注ぐよう命じ、続いてろうそくの火で殉教者の尊い肋骨を焼くよう命じた。　火で焼かれる殉教者は、体のあらゆる方向から立ち上る悪臭を感じ取り、顔をそむけ始めた。それに気づいたイゲモンは、すぐに彼のところへ歩み寄り、こう言った。

　　「さて、テオドトよ、お前のあの大胆不敵な言葉はどこへ行ったのか？　お前は苦痛に打ち負かされているのが見て取れる。もしお前が我々の神々を冒涜せず、彼らにひれ伏していたなら、今こうして苦しむことはなかっただろう。」　だが、私はお前――身分の低い、酒場の経営者であるお前――に、お前の生と死を掌握する王の命令に逆らうなと忠告しなかったか？

　　これに対し、聖なる殉教者はこう答えた。

　　「イゲモンよ、私が焼かれる肉体の悪臭を嗅がないよう顔をそらしているのを見て、あなたの拷問が私を打ち負かしているなどと思わないでください。むしろ、あなたの家来たちに、命じられたことをより熱心に実行するよう命じてください。彼らは職務をあまりにも怠慢にこなしているように思われるからです。　あなた自身、私のためにさらに過酷な拷問を考案しなさい。そうすれば、この苦しみの中で私を強めてくださる私の主イエス・キリストの力がどれほど大きいかが分かるだろう。私の神の助けに依り頼み、信頼して、私はあなただけでなく、あなたの王をも、最も卑しい捕虜として軽蔑する。

　　聖人がそう語ると、イゲモンは兵士たちに、殉教者の口を殴り、顎と歯を砕くよう命じた。聖人は殴打を受けながらも、イゲモンにこう言った。

　　「たとえあなたが私の舌を切り刻んだとしても、あなたの企ては決して成功しない。なぜなら、神であり私たちの主であるイエス・キリストは、沈黙する御自分のしもべたちの声にも耳を傾けておられるからだ。」

　　聖人が兵士たちによって十分な時間、拷問され苦しめられた後、総督の家来たちが皆疲れ果てたため、総督はテオドトを拷問台から降ろし、次の拷問まで牢獄に閉じ込めるよう命じた。

　　兵士たちは聖テオドトを街中を通り抜けて牢獄へと連行した。聖人の全身は傷だらけであり、それによってテオドトは、拷問者や悪魔に対する自らの勝利を皆に示していた。牢獄への行進の間、聖人の周囲には非常に多くの人々が集まり、キリストの殉教者を、ある種の　興味深い見世物として

眺めていた。　聖人は、皆が聞こえるように、私たちの主イエス・キリストの力を次のように告白した。

「見よ、わが主キリストの力がどれほど偉大で栄光に満ちているかを。ご覧の通り、主の御計画により、その聖なる御名のために苦しむ者たちは、傷や拷問による痛みを感じない。主が、弱々しい人間の肉体を火よりも強靭なものに変えておられることがお分かりだろう。　また、主は身分の低い人々にこれほど大きな勇気と強さを与え、彼らが王や君主たちの命令さえも何とも思わないほどにされていることも、あなた方の目には明らかでしょう。私たちの主は、主を信じるすべての人――身分の低い者も高い者も、奴隷も自由人も、異邦人もギリシア人も――に御自身の恵みをお与えになります。

そして、ご自身の傷跡を指さして、再びこう言われた。

「信者たちは、私たちすべてのためにご自身も苦難に遭われた、私たちの神であり主であるイエス・キリストに、このような犠牲を捧げなければならない。」

聖人がこう語ると、牢獄に連行され、狭く窮屈な場所に閉じ込められた。

聖テオドトスが牢獄に閉じ込められてから十六日が過ぎた頃、イゲモンは、通常、見世物が催されていた街の中心部に、裁判の場を設けるよう命じた。聖なる殉教者は牢獄から連れ出され、裁判の場に引き出された。彼を見て、イゲモンはこう言った。

「テオドトよ、もう少しこちらへ近づいてくれ。以前には十分に罰を受けたのだから、今やその高慢さを捨て、改心したように思えるからだ。」　まことに、お前はこれほど大きな苦しみをもたらすような、愚かな行いをした。我々は本来、お前を苦しめるつもりはなかったのだ。しかし今、その頑なさを捨て、我らの神々の力と威光を悟りなさい。そうすれば、以前話した通りの贈り物を授けてやろう。　我々は以前にもこれらの贈り物を約束したし、今も約束する。もし我々の神々に拝礼すれば、それらを受け取ることができるだろう。しかし、もし神々に拝礼しなければ、すぐに、お前のために用意された火、鋭い鉄の道具、そしてお前を引き裂こうとする獣たちの口を見るだろう。

すると、聖なる殉教者はこう答えた。

「おお、テオテクンよ！　苦しみの中で私を強めてくださる私の主イエス・キリストの力を打ち砕くような拷問を、お前は考え出すことができるのか？　しかし、私の体は、あなた自身も目にする通り、すでに拷問の道具によって十分に傷つけられている。それでもなお、私の強さを再び試してみよ。私を新たな拷問にさらせば、以前の拷問と同様に、それらもまた勇敢に耐え抜くことがわかるだろう。

そこで、イゲモンは聖人を再び拷問の木に吊るし、鉄の拷問具でその肉体を苛み、古い傷を再び抉り出すよう命じた。拷問の間、聖人は大声でキリストの御名を告白した。その後、拷問官は兵士たちに、聖人を拷問の木から降ろし、燃え盛る陶器の破片の上を引きずり回すよう命じた。　その後、聖人は再び木に吊るされ、鉄の器具で拷問を受けたため、殉教者の体には傷のない場所が一つも残らなかった。まるで全身がただ一つの潰瘍のようであった。ただ舌だけは無傷で、それを使って神を賛美し、拷問者や兵士たちを無力な者たちとして罵倒した。　聖人にこれ以上どのような拷問を加えればよいか分からなくなったイゲモンは、聖人に死刑を宣告する以下の命令を下した。

「我らは、ガリラヤの信仰の擁護者であり、我らの神々の敵、王の命令に背く者、そして我を冒涜する者であるテオドートを、剣で斬首するよう命じる。その遺体は、キリスト教徒たちが彼を埋葬できないよう、焼却されなければならない。」

こうして聖人は、斬首されるため、城の外の野原へと連行された。彼の死を目撃しようと、男女を問わず非常に多くの人々が後を追い、その列に加わった。定められた場所にたどり着くと、聖人は次のような言葉で神に祈りを捧げ始めた。

「主イエス・キリストよ、天と地の創造主よ、御名の聖なる御名に望みを置く者すべてを見捨てない方よ！　私を天の祖国の市民とし、御国の共同相続人としてくださることを感謝いたします。私が蛇に打ち勝ち、その頭を打ち砕くのを助けてくださったことを感謝いたします。　お願いいたします――御自身の忠実な僕たちに、彼らを取り巻く苦難からの安らぎをお与えください。私の死をもって、不敬虔な異教徒たちが御教会に対して仕掛けた迫害が終わりを告げますように。御教会に平安をお与えになり、敵の誹謗中傷から御教会をお救いください。

祈りを終え、「アーメン」と唱えると、聖人は振り返り、自分のために泣いているキリスト者たちを見ました。その時、聖人は彼らにこう言いました。

「兄弟たちよ、私のために泣くのではなく、むしろ、私が勇敢にその業を全うし、敵に打ち勝つことを助けてくださった、私たちの主イエス・キリストの御力を賛美してください。私は天において、大胆に神にあなた方のために祈り続けます。」

そう言うと、殉教者はその尊い頭を剣の下に差し出し、6月の7日、[3757] に斬首された。

その間、総督の家来たちはその場所に多くの薪を運び込み、焚き火を焚き、キリストの殉教者の遺体をその上に載せ、総督の命令に従ってそれを焼き尽くそうとした。　しかし、神の御心により、突然激しい嵐が吹き荒れ、殉教者の遺体の周囲を稲妻のように輝く光が包み込んだため、兵士たちは誰も薪に近づいて火をつけることを敢えてしなかった。

総督がこのことを知ると、兵士たちにその場から離れないよう命じ、キリスト教徒に殉教者の遺体が奪われないよう警護させた。兵士たちは総督の命令に従い、柳の枝や葦でテントを張り、その中に座って、キリスト教徒から殉教者の遺体を守った。

ところが、神の御計画により、その場所を通りかかったのは、殉教者テオドトスの指輪を手にしていた司祭フロントンであった。彼は自分の村から隣の村へ向かっており、聖テオドトスに何が起きたのかは何も知らなかった。フロントンはロバに、かなり前から醸造されていた非常に美味しいワインを積んでいた。　このワインを、フロンタンは町で売るつもりだった。彼には自分のブドウ畑があり、その収穫で家族を養っていたからである。フロンタンが、兵士たちのテントが張られ、殉教者の遺体が横たわっている場所に近づいたとき、ロバが躓いて地面に倒れてしまった。それを見た兵士たちはフロンタンを助けに駆け寄り、彼にこう言った。

「旅人よ、どこへ行くのか？　もう夜が更けている。私たちと一緒に泊まったほうがいい。何しろここには家畜の牧草地もあるのだから。」

司祭は彼らと一晩過ごすことに同意し、彼らのテントへと向かった（なお、殉教者の遺体は小枝や干し草で覆われていた）。テントのそばでは火が焚かれており、食事もすでに用意されていた。戦士たちはフロントンに、一緒に食事をとるよう誘った。フロントンは彼らから器を受け取ると、そこにワインを注ぎ、戦士たちにそれを飲むよう勧めた。ワインを口にした戦士たちは、その味が実に素晴らしかったため、それを称賛した。その後、戦士たちはフロントンに尋ねた。

「このワインは何年物ですか？」

フロントンはこう答えた。

「もう5年ほどになります。」

戦士たちは、その客がキリスト教徒であり、しかも司祭であることを知らずにワインを飲んだ。食卓を囲みながら、戦士たちはフロントンとここ数日間に起きた出来事について語り合った。　彼らは、偶像を洗うことを拒んだために7人の処女が溺死させられたこと、宿屋の主人テオドトスが夜中に湖から彼女たちの遺体を引き上げ埋葬したこと、そのことで市当局が彼を捜索したこと、彼が自

[3757] 聖殉教者テオドトスの死は303年または304年に起こった――聖殉教者の記念日は、彼の死の日である6月7日にも祝われる。 その生涯が5月18日に取り上げられているのは、彼の殉教の功績が、この日に記念される七人の聖処女たちの殉教と密接に関連しているためである。

ら法廷に出頭して拷問を受けることを受け入れたこと、いかに勇敢にそれを耐え抜いたか、そして、まるで鉄の体を持っているかのように。それから彼らは言った。

「ここに、我々がイゲモンの命令に従って見張っている者の、首を切られた遺体が横たわっている。」

彼らの言葉を聞いて、司祭は、聖なる殉教者テオドートの苦難と最期を知ることを許してくださった神に感謝を捧げた。それから司祭は、どうすればここからキリストの殉教者の尊い遺体を運び出せるか考え始めた。　器をいっぱいに満たすと、彼はそれを兵士たちに差し出し、好きなだけワインを飲んでよいと告げた。　兵士たちが酔いつぶれて眠りにつくと、フロントンはキリストの殉教者の尊い遺体のそばに近づき、その体を露わにして、涙ながらに口づけを始めた。そして、自分の指から指輪を外し、殉教者の指にはめながら、こう言った。

「おお、キリストの聖なる殉教者、テオドトよ！　あなたは、私がお願いしたことを確かに果たしてくれた。」

その後、フロントンは自分のロバに殉教者の尊い遺体と頭部をしっかりと縛り付け、ロバだけを一人で自分の村へと帰らせた。そしてロバは、殉教者の尊い遺体を背負ってフロントンの村へと向かっていった。　一方、フロントンは再び、殉教者の遺体が横たわっていた場所に枝や干し草を敷き、テントに入って眠りについた。

翌朝、フロントンは非常に早く起き、まるでロバのことを気の毒に思うかのようにこう言った。

「私の動物がここから逃げ出した。誰かが盗んだのではないか？」

兵士たちは、枝や干し草が元の場所に置かれているのを見て、殉教者の尊い遺体がここから持ち去られたことを知らず、フロントンに同情した。司祭は彼らにワインを残し、まるで自分のロバを探しに行くかのように彼らのテントから出て行ったが、自分の村へ向かったため、二度と彼らの元には戻らなかった。

一方、ロバは神の導きにより、かつて聖テオドトスがフロントンと語り合い、この場所を「聖遺骨を安置するのに極めて美しく、ふさわしい」と称賛したまさにその場所へとたどり着いた。　まさにこの場所で、キリストの殉教者はフロントンに教会を建てるよう助言し、そこに殉教者の聖遺骨を送ると約束していたのである。その場所にたどり着くと、ロバは立ち止まり、主人のフロントンがやって来て、その背から尊い聖遺骨を取り下ろすまで、一歩も前に進もうとしなかった。　その後、フロントンはここにキリスト教徒たちを呼び集め、殉教者の聖遺体を尊厳をもって埋葬し、後にこの地に聖殉教者テオドトスの名に因む教会を建て、私たちの神であるキリストの栄光を称えた。

これらすべてを、謙虚なニールが記録した（聖殉教者テオドートの伝記の著者が語る）。私は、キリストにあって愛するすべての兄弟たちのために、細心の注意と熱意をもってこれを記した。なぜなら、私は聖殉教者の生涯を知っており、彼と共に牢獄に囚われていたからである。　あなたがたもまた、信仰と愛をもってこれを読み、聖殉教者テオドトスや、敬虔さのために奮闘したすべての聖人たちと共に、天の御国において一つの運命を分かち合い、また、私たちの主キリスト・イエスにおいて天で喜びを得ることができますように。主キリスト・イエスに、　栄光と誉れと礼拝が、父と聖霊と共に、世々限りなく捧げられますように。アーメン。

コンダク、第2調:

テオドトよ、汝の殉教者たちと共に苦難の中で善き働きをなし、高潔な殉教の乙女たちと共に栄光の冠を受けられた。それゆえ、キリスト・神に、私たちすべてのために絶えず祈り求めてください。

聖なる殉教者ペトロ、ディオニシオス、アンドレイ、サウロ、クリスティーナ、イラクリオス、パヴリン、ヴェネディムの殉教。

記念日：5月18日

異教徒たちによるキリスト教徒への迫害のさなか、キリストの忠実な戦士たちは、主のために自らの命を捧げ、その結果、全宇宙が殉教者の血で染まった。　その頃、異教徒たちによって、キリスト教徒のペトロも捕らえられた。彼は美貌の青年で、肉体も精神も等しく強靭であった。彼はヘレスポントスの都市ランプサコスで捕らえられたのである。ペトロがイゲモン・オピティミンの尋問に連行されたとき、イゲモンは彼にこう尋ねた。

「お前はキリスト教徒か？」

「はい、私はキリスト教徒です」とペトロは答えた。イゲモンは言った。

「お前の目の前には、我らが無敵の王たちの勅令がある。さあ、我らの偉大なる女神ヴィーナスのために犠牲を捧げよ。」

青年はこう答えた。

「イゲモンよ、あなたには驚かされる。どうして、口にするのも恥ずかしいほど忌まわしい行いを平然と行った、不潔で淫らな女に、私に拝ませようと説得する気になれるのか？　あなた方は今、あなた方の女神ヴィーナスに帰せられるような行いを犯す者たちを、法律によって追及し、処罰しているではないか。　しかし、もしあなたがたが自らの女神を淫婦だと見なすのなら、どうして私がそのような忌まわしい淫婦に拝礼し、犠牲を捧げることができるでしょうか。いいえ、私は生ける真の神、万世の王、私の主キリストに拝礼すべきです。祈りと賛美と敬慕の犠牲を捧げるにふさわしいのは、ただ御方ただお一人なのです。

そのような言葉を聞いたイゲモンは、兵士たちに命じて、その若者を車輪に縛り付け、木や鉄の道具でその肉体を苛み、骨を砕かせた。　しかし、神の僕ペトロは、拷問が激しくなればなるほど、主イエス・キリストの助けへの希望をますます堅く、強く固め、総督の狂気を嘲笑った。その後、ペトロは天を仰ぎ、次のように祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、苦しみの中にあっても私にこのような強さと堅固さをお与えくださったことを感謝いたします。どうか、私が勇気をもってこの業を最後まで成し遂げ、不義の敵に打ち勝つことができるよう、お導きください。」

拷問では勇敢な若者ペトロに何の手も及ばないと悟ったイゲモンは、剣で彼の首を刎ねるよう命じた。

ちょうどその頃、同じくキリスト教の信仰を告白していたディオニシウスも捕らえられ、牢獄に投じられた。イゲモンがランプサコスからトロア――ゲレスポント地方に近い都市――へ向かおうとしていた時、メソポタミア[3758]出身の二人のキリスト教徒の兵士、すなわち

アンドレイとパヴェルという名の2人のキリスト教徒の兵士が連れてこられた。彼らと共に、キリスト教徒のニコマコスも連れてこられ、彼は大声で絶え間なくこう叫んでいた。

「私はキリスト教徒だ！」

イゲモンは、皆の耳に聞こえるように自らをキリスト教徒だと告白したニコマコスを見て、アンドレイとパウロに尋ねた：

「お前たちはどう答える？」

[3758] メソポタミアは、ティグリス川とユーフラテス川の間に位置し、北はアルメニアから南はペルシャ湾まで広がる、岩だらけで砂の多い土地であった。

彼らは答えた。
「我々もキリスト教徒だ。」
すると、イゲモンはニコマコスに言った。
「王の命令に従い、神々に生贄を捧げよ。」
ニコマコスは答えた：
「キリスト教徒が悪魔に犠牲を捧げないことを、お前は知らないのか？」
すると直ちに、イゲモンは兵士たちに命じて、ニコマコスを裸にし、拷問用の木に吊るし、鉄の器具でその肉体を苛むようにさせた。
ニコマコスがすでに死の淵に近づき、殉教の冠（それはまるで彼の手にすでに握られているかのようだった）を得るために、あと少しの苦しみしか残されていなかったその時、彼は予期せずしてこの栄光ある冠を自ら手放してしまった。堅固な信仰告白を捨て、キリストを否認し、皆が聞こえるように叫んだ。
「私は決してキリスト教徒などではなかった！ 神々に犠牲を捧げることに同意する。」
すると直ちに、兵士たちは彼への拷問を止め、彼を拷問用の木から降ろした。
この忌まわしい背教者が偶像に犠牲を捧げ、それらにひれ伏したとき、悪霊が彼に襲いかかり、激しく地面に叩きつけた。その結果、ニコマコスは激しく狂乱し、自分の舌を噛み、血の泡を吐き続け、ついにその忌まわしい魂を吐き出した。
こうした出来事が繰り広げられている最中、群衆の中に立っていたクリスティーナという名の十六歳の少女が、狂乱状態のニコマコスに向かってこう言った。
「ああ、呪われし、滅びゆく人よ！　たった一時間の過ちのために、今やあなたは永遠の、言葉に尽くせぬ苦しみを手にしてしまったのだ。」
これを聞いたイゲモンは、その少女を捕らえて法廷の前に立たせるよう命じ、そして彼女に尋ねた。
「お前はキリスト教徒か？」
少女は答えた。
「はい、私はキリスト教徒です。そして今、私は、永遠の安らぎを得るために、ほんのわずかな苦しみさえも耐えようとしなかった、この呪われた人の滅びを嘆き、悲しんでいるのです。」
イゲモンは彼女に言った。
「彼は神々に生贄を捧げたので、今や安らぎを得た。しかし、あなた方キリスト教徒が彼を誹謗しないよう、我らの偉大なる女神ダイアナとヴィーナスが、彼をここから連れ去ってくださったのだ。だが、お前も、辱めを受けたり火あぶりにされたりしたくないのなら、これらの女神たちに生贄を捧げるがよい。」
聖女はこれにこう答えた。
「私にとって、私の神はあなたよりも大切ですから、あなたの脅しなど恐れません。私は私の神を頼みとし、神が私を守り、あらゆることに耐える忍耐を与えてくださると信じています。」
そこで、イゲモンは彼女を二人の放蕩な若者たちに引き渡すよう命じ、彼らに彼女を穢し、辱めさせた。一方、アンドレイとパヴェルは、ディオニシウスが収容されていた牢屋の区画に投獄するよう命じた。
一方、あの二人の恥知らずな若者たちは、清らかで聖なる乙女を連れ去り、彼女を辱めようと急いで自分たちの住処へと向かった。しかし、彼女を家に連れて入った途端、彼らの肉欲は消え失せ、真夜中になるまで彼女を汚すことはできなかった。　その夜、クリスティーナのそばに、その家全体を自らの光で照らし出す、輝く若者が現れた。　若者たちは恐怖のあまり、まるで死人のように地面に倒れ込んだ。正気を取り戻すと、彼らは聖クリスティーナの足元にひれ伏し、神からのいかなる

罰も下らないよう、彼女に神へ祈ってほしいと懇願した。彼女は彼らを地面から起こし、こう言った。

「恐れることはありません。あなたがたが見たあの若者は、私の神であるキリストから、私の処女性を守るために私に遣わされた聖なる天使であり、私に手を触れる者は誰であれ、いつでも殺す用意があるのです。」

このようにして、聖女クリスティーナは、神ご自身に守られながら、清らかさを保ち続けた。

翌朝、その町の市民たちは、偶像崇拝の祭司たちに煽られて、イゲモンの元へやって来て、牢獄に囚われているキリスト教徒たちを自分たちの手に引き渡すよう要求し始めた。イゲモンはディオニシオス、アンドレイ、パヴロを牢獄から連れ出し、彼らにこう言った。

「お前たちは偉大なる女神ディアナに犠牲を捧げなければならない。」

しかし、聖人たちはこう答えた。

「私たちは、ダイアナも、あなたがたが崇拝する他のいかなる悪魔も知りません。私たちが知っており、崇拝しているのは、ただ私たちの神、主イエス・キリストだけです。」

民衆は殉教者たちからそのような答えを聞くと、大声で再び総督に対し、自分たちの神々を冒涜するキリスト教徒たちを彼らの手に引き渡すよう要求し始めた。総督は殉教者たちを鞭打つよう命じ、その後、彼らを民衆に引き渡すよう命じた。

すると群衆は、聖人たちの足に縄を結びつけ、大声で叫びながら彼らを城の外へ引きずり出し、そこで石で打ち殺そうとした。

聖なる殉教者たちが石で打ち殺されようとしていた時、聖クリスティーナはそれを知ると、急いでその場へ駆けつけ、石で打ち殺されようとしている聖人たちの遺体に涙ながらにすがりつき、こう言った。

「私は、この地上であなた方と共に死に、天国でもあなた方と共に生きたいのです！」

その間、イゲモンには、二人の若者に汚されるために引き渡されたあるキリスト教徒の乙女が、ある光り輝く若者の手によって彼らの手から解放されたという報告が届いた。彼女は二人の若者の家から逃げ出し、キリスト教徒たちが石打ちに遭っている現場へやって来て、彼らの遺体にすがりついた。 これを知ったイゲモンは、彼女を剣で斬首して処刑するよう命じた。

このように、悪魔、この世、そしてイゲモン・オピティミンに立ち向かって奮闘した、前述の聖なる殉教者たちは皆、私たちの神であるキリストの助けにより、敵に打ち勝つ栄誉に浴した。その際、ペトロは様々な拷問の末に殺害され、ディオニシウス、　アンドレイとパウロは石打ちの刑に処され、聖女クリスティーナは剣で斬り殺された。これらすべては、デキア王の治世下、ランプサコスで起こったことである[3759]。

また、聖なる殉教者たち――イラクリウス、パヴリン、ヴェネディム――はアテネの市民であった。彼らはアテネにおいて、大いなる大胆さをもってキリストの御名を宣べ伝え、すべての不信心者たちに、その虚しい偶像崇拝を捨て、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けるよう勧めた。　その説教のゆえに、彼らは捕らえられ、アテネの総督のもとへ連行されて尋問を受けた。尋問の際、彼らは万物の創造主である真の神を告白し、偶像については、人間の手に造られた無感覚な石や木に過ぎないと述べた。　キリストの御名を告白したため、これらの聖なる殉教者たちは様々な拷問にさらされ、ついに弟子たちと共に火の炉に投げ込まれ、その後息を引き取った[3760]　。その功績により、彼らは私たちの神キリストから朽ちることのない冠を授かった。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

[3759] デキウスは249年から251年まで在位した。

[3760] 聖殉教者イラクリウス、パヴリヌス、ヴェネディムの殉教年は不明である。おそらく4世紀か5世紀のことと思われる。

聖殉教者シメオン、イサク、ヴァフティシスの受難。

記念日：5月18日

キリストの聖殉教者シメオン、イサク、およびヴァフティシイは、ペルシャの出身であり、不義の王サポル[3761] の治世中に殉教した。彼らがキリスト教徒であったため、偶像崇拝者たちは彼らを捕らえ、キリストを否定し、太陽と火に礼拝するよう強要した[3762] 。しかし、彼らはこれに対し次のように答えた。

「我らは万物の創造主を否定することはなく、太陽や火を崇拝することもない。」

すると、拷問者たちは彼らの手足を縛り、残酷に殴打した後、牢獄に投げ込み、そこで七日間、彼らは食事を与えられなかった。その後、彼らは牢獄から引き出され、様々な拷問に耐え、ついに剣で尊い首を斬り落とされた。こうして聖なる殉教者たちは息を引き取った。

6月

6月1日

5月19日（旧暦）

同日は、1537年に自ら設立したコメル修道院（グリアゾフツ市から5ヴェルスタの地点）で逝去した、ヴォロゴダ地方の奇跡行者である聖コルニリイ・コメルスキーの記念日であり、同修道院には彼の聖遺骨が安置されている。

聖司祭殉教者パトリキウスと、彼と共に殉教した三人の司祭、アカキウス、メナンドロス、ポリエンの受難

記念日：5月19日

聖パトリキウスの司教座は、ビフィニアのプルッセという町にあった[3763] 。ある日、彼は異教徒の迷いを公然と糾弾し、キリストの信仰を説き始めた。　その説教によって多くの異教徒がキリストへと改宗した。このため、彼はアカキオス、メナンドロス、ポリエノスの3人の長老と共に異教徒たちに捕らえられ、偶像崇拝に熱心なビフィニアの総督ユリウスのもとへ連行され、尋問を受けた。このユリウスは、ちょうどその頃、温かい温泉[3764] へ向かう途中、鉄の鎖で縛られたキリスト教の司教とその長老たちを、自分の後ろに連行するよう命じた。　温泉に到着してその水で身を清めた後、

[3761] サポル2世「大帝」は、310年から381年までペルシアで統治した。ローマ人との戦いで勝利を収めたことで知られ、キリスト教徒に対する残酷な迫害者でもあった。

[3762] ペルシア人は、最高神としてミフル（太陽）を崇拝していた。また、火も崇拝していた。

[3763] 小アジア地方。

[3764] イゲモン・ユリウスは、治療を目的として温泉を訪れていた。これらの温泉は、水に様々な鉱物質が混ざっていたおかげで、確かに治癒効果を持っていた。古代イタリアのシチリア島には、そのような温泉が数多く知られていた。

ユリウスは、自らの不浄な神アスクレピオス[3765] と、忌まわしい女神ソティリア[3766] に生贄を捧げた。その後、裁判の場に腰を下ろし、聖パトリキオスと長老たちを呼び寄せると、ユリウスは彼にこう言った。

「キリストを呼び求め、空虚な寓話を信じる狂人よ！　見よ、我らの神々の全能がいかに偉大であるかを。見よ、神々が我らの益となるよう、これらの泉にいかに治癒の力を与えたかを。そして何よりもまず、我らの父アスクレピオスの力がいかに偉大であり、その慈悲がいかに深いかを悟れ！」 もし 、束縛や苦しみから逃れ、故郷で平穏に暮らしたいのなら、ひざまずいて、謙虚な祈りを捧げ、彼に犠牲を捧げよ。

聖パトリキウスはこれに対し、次のように答えた。

「イゲモンよ、その短い言葉の中に、なんと多くの悪意が込められていることか！」

すると、イゲモンは怒りを込めて彼に言った。

「私が一体何の罪を犯したというのか？　お前は何を根拠に私を非難できるというのだ、この忌まわしき者よ！　お前自身も認めざるを得ないはずだ。それは、いかなる欺瞞や狡猾さもなく、自ずと明らかである事実だ。全能の我らの神々の力によって、温かい泉から与えられる癒やしを、お前のこの目で見ていないというのか？」

聖パトリキウスはこう答えた。

「尊きイゲモンよ！もしこの温水の源泉の起源、流れ、そして治癒力についての真実を知りたいのであれば、私がそのすべてをお話ししましょう。ただ、どうか謙虚な心で私の話に耳を傾けてくださるなら、ですが。」

これに対し、イゲモンは言った。

「たとえ、君から聞けるのが、作り話に満ちた寓話以外には何もないと分かっているとしても、それでも話してくれ。君が何を言いたいのか、聞いてみたい。」

聖人はこう答えた。

「作り話ではなく、真実をあなたに伝えたいのです。」

イゲモンは言った。

「我らの神々の力以外に、温水の力の源を他に何があるというのか？」

聖人はこう答えた。

「私はキリスト教徒であり、このキリスト教の聖なる教えを信奉し、唯一の真の神を崇める者は誰でも、自らの理性をもって神の神秘を知ることができる。それゆえ、私も、罪人ではあるが、自らをキリストの僕であると告白する者として、この水に関する真実を知っており、あなたに伝えることができるのだ。」

イゲモンは言った。

「まさか、お前は我々の哲学者たちよりも賢いなどという、それほど厚かましい無謀なことを言うつもりか？」

聖人はこう答えた。

– 「*この世の知恵は、神の御前では愚かである。聖書にこう書かれている通り、『知恵ある者たちを、その狡猾さによって捕らえる』*（Iコリント3:19）。私たちの主キリストは、御父を賛美してこう言われた。*『『父よ、天と地の主よ、あなたがこのことを知恵ある者や賢い者からは隠して、幼子たちに現わしてくださったことを、私はあなたを賛美します』*」（ルカ10:21）。また、使徒は

[3765] アスクレピオス、あるいはエスクラプスは、医療の守護神とみなされていたギリシャ・ローマの神である。

[3766] ソティリア（ギリシャ語で「救い主」の意）とは、異教徒の考えによれば、病気を治す女神たちの総称である。通常、この名はアテナやアフロディーテといった女神たちに当てはめられていた。

こう言っている。「彼らは真理を理解しなかった。『もし理解していたなら、栄光の主を十字架につけることはなかっただろう』」（1コリント2:8）。

イゲモンは聖人にこう言った。

「あなたの言うことは理解しがたい。むしろ、この温かく癒やしの水は、どのような力と仕組みによって流れているのか、教えてほしい。私としては、このように人々に助けを与えようと望まれた我らの神々の御業によるものだと考えている。」

これに対し、キリストの聖人パトリキウスは、イゲモンにこう答えた。

「話を始める前に、イゲモンよ、[3767] の柵を取り外すよう命じてください。そうすれば、誰もが私の言葉を聞くことができるでしょう。」

総督の命により、柵は取り除かれ、人々は周囲のその場所を埋め尽くした。その後、聖人は大声で次のように語り始めた。

– 火と水を無から創造されたのは、人類の創造主である、その全能にして永遠の神ご自身、すなわち御独り子である。　火の中から、御言葉によって光、太陽、その他の天体を創造し、昼も夜も輝くよう定められました。その全能の力は、御心のままに及ぶ限りまで広がりました。水から天の蒼穹を形作り、その水の上に地を確立されました。　御自身のすべてを見通す摂理によって、神は天と地において、神が創造された人間が生きるために不可欠なすべてのものを整えられた。　しかし、御自身が創造された人々が、創造主である神を怒らせ、真の神への崇拝を捨てて、魂のない偶像を作り、それらを崇拝するようになることを予見されたため、神は、この理由により、人々が地上の生涯を終えた後に移り住む二つの場所を用意された。 最初の場所を、神は 、永遠の光で照らし、豊かで言葉に尽くせない恵みで満たされた。もう一方の場所には、絶え間ない闇と、消えることのない炎、そして永遠の苦しみで満たされた。　明るい場所には、神の戒めを守り、神に喜ばれる者たちが移り住む。一方、暗い場所には、不義な生き方によって創造主を怒らせ、それによって罰を受けるに値する者たちが投げ込まれる。　こうして、明るい場所に定住する者たちは、絶え間なく、果てしない喜びの中で不死の命を送ることになるが、暗い場所にいる者たちは、果てしない永遠の歳月、絶え間なく苦しめられることになる。そして、火を水から、光を闇から分け隔て、創造主はそれらをそれぞれ個別に形作り、それぞれの場所に定めたのである。　火と水は、天の大空の上にも、地の下にも存在する。地上で目に見える水は、その貯水池に集められ、「海」と呼ばれる（創世記1:10）が、地の下にある水は「深淵」と呼ばれる。　この深淵からは、地上に住む人々、ひいてはすべての生き物のために、あたかも水道管を通るかのように、地中を貫いて高みへと水が送り出される。地表に湧き出るその水は、泉や井戸、あるいは川を形成する。　地下を流れる水のうち、火の近くを通るものは温かい状態で地表に湧き出し、火から遠く離れた場所を流れるものは冷たい状態で地表に湧き出る。　だからこそ、これらの水は温かいのである。それは、流れる際に地下の火に近づいているからである。一方、他の場所には、火から遠く離れているため、凍りついて氷となるほど冷たい水もある。　かくして、地底の火は不義な魂を苦しめるために定められている。一方、氷へと変わった冥界の水はタルタロス[3768] と呼ばれ、そこでは、あなたがたの神々や、それらを崇拝する者たちが、終わりのない苦しみを受けることになる。あなたがたの詩人の一人が次のように詠んだように：　「大地と海の果てと

[3767] 通常、イゲモンが座してキリスト教徒に対する裁判を行っていた場所は、囲いで仕切られていた。というのも、キリスト教徒に対する裁判は、ほとんどの場合、屋外で行われていたからである。

[3768] タルタルについて論じる際、聖パトリキウスは周囲の異教徒たちの理解に配慮し、彼ら自身のタルタルに対する見解を彼らに説明している。「古代ギリシャ神話におけるタルタルとは、天が地から離れているのと同じだけ、地表から遠く離れた暗黒の深淵である。　ギリシャ人の想像によれば、タルタルは三重の闇と鉄の壁に囲まれており、追放された神々を閉じ込める場所として機能していた。

は、まさにイアペトスとサトゥルヌス[3769]（これらがあなた方の神々の名である）が、明るい太陽の輝きにも、涼しい風にも恵まれない、その最果ての地である」；　言い換えれば、闇とタルタロスに住むあなた方の神々は、太陽の光に照らされることも温められることもなく、火の中に住む神々は、風によって涼むこともない。–タルタロスは、地底において、天が地上のあらゆる高さを上回るのと同じだけ、他のあらゆる深淵よりもはるかに深く位置している。そして、地底に不義な者たちのための火が用意されていることは、シチリアの[3770]で地底から湧き出る沸き立つ泉[3771]によっても裏付けられている。

聖人のこの言葉を聞いた後、イゲモンは彼に尋ねた。

「つまり、あなたが語るすべてのものの創造主こそが、あなた方のキリストということか。」

聖パトリキウスはこう答えた。

「まことに、キリストこそが、他の誰でもない、すべての被造物の創造主です。なぜなら、*『万物は彼によって始まった。彼なしには、始まったものはない』*（ヨハネ1:3）と書かれているからです。」　また、*「諸国民の神々はすべて無に等しいが、主は天を造られた」*（歴代誌上16:26）*とも記されている。*

そこで、イゲモンは再び聖人に尋ねた：

「キリストを天の創造主と呼んでいるのか？」

聖人はこう答えた。

「私はキリストをすべての被造物の創造主と呼びます。なぜなら、*『あなたの天、すなわちあなたの御手のわざ、あなたが設けられた月と星を見上げるとき』*（詩篇8:4）と書かれているからです。」

イゲモンは言った。

「もし私が、あなたが私たちの神々ではなくキリストをその創造主と呼ぶこの熱湯の中にあなたを投げ込んだら、キリストはあなたをその火から無傷で守ってくれるだろうか？」

聖人はこう答えた：

「私は私のキリストの力を知っています。もしキリストが望まれるなら、この水から私を無傷で守ってくださることを知っています。私自身も、その水を通じてこの一時的な人生から解放され、キリストと共に永遠に生きたいと願っています。　とはいえ、私に対してなされるのは、私の意志ではなく、キリストの聖なる御心である。その御心なしには、人の頭から一本の髪さえも落ちず、一羽の鳥さえも網にかかることはないのだ。　しかし、今私の言葉を聞いているすべての人々に知ってもらいたい。あなたと共に、無感覚な石を神として崇拝する者たちには、地下の消えることのない火と、冥界のタルタロスにおいて、永遠の苦しみ待ち受けているのだ。

これを聞いたイゲモンは激しい怒りに駆られ、直ちに聖人を裸にして、沸き立つ水が湧き出るその泉の場所に投げ込むよう命じた。聖人は投げ込まれる際、神に向かってこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべである私を助けてください！」

聖人が水の中に投げ込まれると、泉から飛び散った水滴は火の粉のように灼熱し、周囲に立っていた者たちに当たって、彼らにひどい火傷を負わせた。しかし、聖パトリキウスは、あたかも涼しい場所にいるかのように、その水の中で無傷のままであり、喜び勇んでキリスト・神を賛美した。

[3769] イアペトスは、ウラノス（天）とゲイア（地）の子であるタイタンたちのひとりである。ギリシャ神話によれば、イアペトスは（クロノスと共に）最高神ゼウスに反旗を翻し、そのためにゼウスによってタルタロスに投獄された。–サトゥルヌスは、大地と作物の守護神とみなされていた古代ローマの神である。ギリシャ神話によれば、サトゥルヌスはイアペトスと同様に、ゼウスによって天から追放され、一時的にタルタロスに閉じ込められた。

[3770] シチリアは、地中海に浮かぶ大きな島の一つであり、現在はイタリア王国の一部を構成している。

[3771] シチリア島は、島を覆う石灰岩の山々に多くの亀裂や窪みがあるため、数多くの温泉を有していた。

これを見た拷問者たちは、さらに激しい怒りに燃え上がった。イゲモンは兵士たちに、聖人を水から引き上げ、斧で彼と三人の長老たちの首を切り落とすよう命じた。

斬首に備えて、キリストの殉教者であり信仰の証人である聖人は、両手を天に向けてこう言った。

「神よ、万物の王であり主よ。目に見えるものも見えないものすべての被造物を御自身の御力の中に保たれ、真にあなたを呼び求めるすべての者の声に耳を傾けられる方よ。義人の救いとなり、不義な者への懲らしめとなるこの水さえも創造された方よ！今、あなたの信仰を告白するために証しとして死ぬ私に、御臨在ください！」

祈りを終えると、聖人は首を斬られるために聖なる頭を垂れ、殉教の死を遂げた。彼と共に、三人の聖なる司祭、アカキオス、メナンドロス、ポリエノスもまた首を斬られ、皆が聖徒の栄光のうちにキリスト・神の御前に現れた。

聖パトリキオは、その奉仕者たちと共に、5月19日に殺害された[3772]。そして、私たちの主イエス・キリストから勝利の栄冠を受け、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れが帰される方に。アーメン。

コンダク、第4調:

聖職の慈愛によって輝き、血の苦難によって飾られ、あなたと共に苦難を受けた者たちと共に、キリストの御前に立ち、私たちのために祈ってください、尊き殉教者よ。

エジプト人聖殉教者カルフの殉教

記念日：5月19日

キリストの聖殉教者カルーフは、マクシミアヌス帝の治世下で殉教した[3773]。彼はエジプトの都市テーベ[3774]の出身であり、キリストへの信仰を告白したために捕らえられ、総督のもとに引き渡された。総督は彼の首に大きな石を縛り付け、逆さ吊りにするよう命じ、その後、処刑人たちは彼を殴り始めたが、聖殉教者は彼らにこう語った。

「私は来世の至福を望んでおり、そのためにこの殴打と苦しみも辛抱強く耐えているのだ。」

このような拷問の後、聖人は木から降ろされ、偶像への生贄を捧げるよう強要されたが、彼はそれを拒んだ。そこで彼は火の中に投げ込まれ、そこでこの世の生涯を終えた。

ウグリチの大公ヨハネ（修道名イグナティウス）、ヴォロゴダの奇跡行者の帰天

記念日：5月19日

[3772] 彼女たちの没年については正確には不明だが、4世紀半ばであったと推定されている。

[3773] ここで言及されているのは、もちろん、ディオクレティアヌスの共同統治者であり、284年から305年まで「アウグストゥス」の称号をもってイタリアとアフリカを統治したマクシミアヌス・ヘルクルスである。

[3774] テーベの都市は上エジプトに位置し、ナイル川の両岸に広がっていた。

聖なる敬虔なイオアン公は、敬虔でキリストを愛するアンドレイ・ヴァシリエヴィチ・ウグリチ公[3775] と、敬虔なエレナ公妃の息子であった。 彼はヴェリキエ・ルキ市[3776] で聖なる洗礼を受け、成長するとすぐに読み書きを習得した。彼は穏やかで平和的な性格を持ち、子供らしい遊びを好まず、何事にも節度を保ちながら、30歳になるまで父の家で暮らした。　この頃、善を憎む人類の敵は、モスクワの大公イオアン・ヴァシリエヴィチ[3777] に、実の弟である敬虔なウグリチ公アンドレイ・ヴァシリエヴィチとその息子たち、すなわちこのイオアンとディミトリに対する憎悪を植え付け、　そこで彼は、彼らを捕らえ、重い足枷をはめさせ、ペレヤスラヴリの町[3778] へ連行し、牢獄に閉じ込めるよう命じた。 その後、彼らはまずベロオゼロ[3779] へ、そしてヴォログダ[3780] へと移送され、そこで足枷を嵌められたまま牢獄に閉じ込められ、厳重な警備の下で長年にわたり過ごした。賢明さを際立たせていた至福のイオアン・アンドレイヴィチ公は、弟のディミトリイ公を慰め、こう語った。

「兄弟よ！　牢獄に閉じ込められ、この足枷に苦しんでいることを嘆いてはならない。神は、私たちの叔父である大公イオアン・ヴァシリエヴィチに、私たちの魂に益をもたらすために、このように私たちを扱うよう導かれたのだ。なぜなら、それによって神は、私たちがこの世の虚栄に心を奪われることを不可能にされたからである。　さあ、主なる神に祈りましょう。主が御慈悲を授けてくださり、御名のために私たちの苦しみを喜びをもって耐え忍び、永遠の苦しみから解放されるように。

このようにして、苦しみの中で安らぎを得、自らの罪を悔い改めた聖なる公は、牢獄と鎖の中で三十二年間を過ごし、ついに重病を患い、死が近づいていることを感じ取った。　彼はスパス修道院から聖ディミトリウス（[3781] ）とミサイール修道院長を呼び寄せ、彼から修道者の剃髪を受け、その際、イグナティウスという名が与えられた。　至福の公爵は、天使の位に就いたとき、その魂が喜びと歓喜で満たされた。キリストの至聖なる秘跡を拝領した後、彼は十字の印を自らに刻み、永遠の住処へと旅立った。　これは1522年5月19日に起こった[3782] 。尊い公爵の死後、その遺体からは芳香が

[3775] ウグリチ市は、現在ヤロスラヴリ州の県都であり、ヴォルガ川沿いに位置している。

[3776] ヴェリキエ・ルキという都市は、15世紀までは「ヴェリキエ」という形容詞を付けずに単に「ルキ」と呼ばれており、ロシア最古の都市の一つに数えられる。1166年の『ノヴゴロド年代記』にその名が記されている。　現在はプスコフ州の県都であり、ロヴァティ川の両岸およびディャトロフカ島に位置している。

[3777] 大公イオアン3世ヴァシリエヴィチは、1462年から1505年までモスクワを統治した。彼は、弟のアンドレイがタタール族との戦いで自分を支援するために軍隊を派遣しなかったことを不審に思い、反逆の疑いを抱き、そのために彼とその家族を牢獄に閉じ込めた。

[3778] 聖公ヨハンの時代、北東ルーシには「ペレヤスラヴリ」という名の都市が二つあった。 一方は現在のウラジーミル県に位置し、ペレヤスラヴリ・ザレスキーと呼ばれており、もう一方は現在のリャザン県に位置し、1778年にリャザン管区が設置された際にリャザンと改称され、県都となった。　後者は1095年頃、ムロム公コンスタンチン・ヤロスラフ・スヴィャトスラヴィチによって築かれ、現在の場所に位置するペレヤスラヴリ・ザレスキーは1162年、スーズダリ公ユーリー・ウラジーミロヴィチ・ドルゴルーキーによって築かれた。　アンドレイ公とその一族が幽閉された場所は、ペレヤスラヴリ・リャザンスキーであったと考えられる。というのも、同地では1513年頃に、木製の城壁に囲まれた監獄が言及されているからである。

[3779] ベロ・オゼロ（現ベロゼルスク）は、ノヴゴロド州の郡庁所在地である。兄弟の公爵たちは、1443年10月7日に父が死去した後、ベロ・オゼロへ移送された。彼らの母であるエレナ公妃は、それより前の1442年にすでに亡くなっていた。

[3780] ヴォログダは、現在では州都であり、セヴェルナヤ・ドヴィナ川の支流であるスホネ川沿いに位置している。

[3781] ここで言うのは、もちろん、1371年にヴォログダから5ヴェルスタ離れた場所で、聖ディミトリによって設立されたスパソ＝プリルツキー修道院のことである。聖ディミトリは、ヴォログダ地方で初めて共同生活を導入した人物である。聖ディミトリの記念日は2月11日に祝われる。

[3782] この尊者である公は、生後45年でこの世を去った。

漂い、街全体を満たした。そこで、街の住民たちは遺体を埋葬の準備を整え、尊い父ディミトリ・プリルツキーの修道院へ運び、　「至慈の救い主」教会へ運び、ディミトリ・チュドトヴォルツの近くにある祭壇の下に埋葬した。この場所では、現在に至るまで、敬虔な聖人たちが信仰を持って訪れる人々に癒やしを与えている。

我らの尊い父、ゴトフの主教ヨハネの記念日。

記念日：5月19日

私たちの聖なる父ヨハネは、ゴトフの地[3783]　で、コンスタンティヌス皇帝の治世[3784]　に生きていました。彼は、古の預言者サムエル（サムエル記上1:9–20）のように、両親の祈りによって生まれ、幼い頃から修道生活の修行に身を捧げ、キリストの住まいとなりました。　彼はエルサレムへ旅立ち、3年間にわたってすべての聖地を巡礼した後、故郷へと戻った。 当時、コンスタンティヌス帝は現地の司教をフラキアのヘラクレイア[3785]　へ転任させたため、ゴート族の正教徒たちは聖ヨハネに、自分たちの司教になってくれるよう熱心に懇願し始めた。彼らは彼をイベリア[3786]　へ送り届け、そこで彼は司教の叙階を受け、その後再び故郷の国へ戻った。 彼の国で、カガン[3787]　による混乱が起こり、多くの罪のない民が剣で虐殺されたとき、彼はかろうじて逃れる機会を得て、アマストリダ[3788]　に到着し、そこで4年間を過ごした。カガンの死を耳にすると、彼は傍らにいた者たちにこう言った。

「40日後、私はキリストの御前で彼と裁きを受けることになるだろう。」

そして、まさにその通りになった。それから40日後、聖ヨハネは民に説教し、魂の救いへと導いていたが、その最中に主のもとへ息を引き取った[3789]　。 その直後、彼の予言通り、船が埠頭に到着した。そこで、アマストリドの聖ゲオルギオス司教は、聖ヨハネの遺体を棺に納め、ろうそくと香を捧げながら、町の住民全員に見送られ、船へと送り出した。　船で聖人の遺体は、彼が所属していたパルフェニト修道院[3790]　へと運ばれ、そこで修道院の修道士たちが埋葬される場所に葬られた。この場所では、聖ヨハネの埋葬後、多くの奇跡が起こり、現在に至るまで続いている。尊者ヨハネは、生前にも多くの奇跡を行っていた。

3783　「ゴート人の国」という名称は、ここでは当時ゴート人の支配下にあったクリミア半島の南岸の地域、いわゆるタウロスキフィアを指しています。聖ヨハネの居住地は、アユダガ山の麓にあるパルフェニツキー港でした。

3784　それは、歴史上「聖像破壊運動」で知られるコンスタンティノス・コプロニモス皇帝であり、741年から775年まで在位した。

3785　フラキアのイラクリオン、別名ペリンフという都市は、プロポンティス、すなわちマーブル海の岸辺に位置していた。ゴートフの司教は754年に偶像排斥公会議の決定書に署名し、その功績によりコンスタンティノス・コプロニモスによってイラクリオンの大司教に任命された。

3786　イベリアは現在のジョージアである。当時、この地は聖像破壊の異端に染まっていなかったため、聖ヨハネスが司教叙階のためにこの国へ派遣されたのである。

3787　ハザール人は、聖ヨハネの教区の中心都市であるドーリに駐屯地を構えた。聖ヨハネはゴトフィアの支配者にハザール人を追放するよう説得したが、ハザール・カガンが再び同都市を制圧し、多くの人々を処刑した上、ヨハネを監禁した。ヨハネはゴトフィアのキリスト教徒たちの助けを借りて監禁から脱出し、海を越えてアマストリダへと逃れた。

3788 アマストリダは、古代ローマの小アジア属州パフラゴニアにあり、エウクシノス海（黒海）の沿岸に位置していた。

3789 聖ヨハネは8世紀末の6月26日、およそ790年に死去した。

3790　プロローグでは、聖ヨハネの埋葬地として誤ってパルテノンと記されている。パルテノンはクリミアのヘルソネス近くに位置していたが、聖人の遺体が埋葬された修道院は、アユダガ山の麓にあった。　聖ヨハネはここで暮らし、またここで聖使徒ペトロとパウロに捧げる大きな教会を建立したが、この教会は1425年にゴットフィア全土の大主教ダミアンによって再建されたものの、現在は存在していない。

6月2日

5月20日（旧暦）

同日、1299年にモスクワ公ドヴモント・ティモフェイ聖人が帰天した。

聖殉教者ファラレイの受難

記念日5月20日

ヌメリアヌス帝の治世中[3791]、イゲモン・テオドロスはエゲエの町[3792]で神の教会に対する迫害を開始し、キリストの忠実な僕たちを様々な方法で死に至らしめた。　その頃、ファラレイという名のキリスト教徒の青年が迫害者たちに捕らえられた。彼は顔立ちも体格も美しく、金髪で、生後18歳。職業は医師であり、無償であらゆる病気を治療していた。 その青年は、アドリアヌス神殿[3793]にある不敬虔な法廷の前に引き出された。彼を見てその美しさに驚いたイゲモンは、周囲の人々にこう言った。

「この美しい若者はどこから連れてきたのか？」

すると、彼らはこう答えた。

「アナザール[3794]へ向かう途中、彼の姿を前方で目撃しました。彼は私たちに気づくと、すぐに樫の森へと逃げ込みました。私たちは懸命に彼を探し回り、ようやく野生のオリーブの木の下に座っている彼を見つけました。その後、彼を捕らえて、裁判のためにあなたの元へ連れてきました。」

イゲモンは聖人にこう言った。

「若者よ、教えてくれ。お前はどのような信仰を持ち、どこの町出身で、両親は誰で、名前は何というのか？」

聖人はこう答えました：

「私はキリスト教徒です。名はファラレイ。レバノン[3795]の出身です。父の名はベルーキで、軍司令官でした。母の名はロミリアです。また、教会の聖職者であり、副助祭の位にある兄が一人います。私は医師マカリアから医術を学びました。」　レバノンに住んでいたすべてのキリスト教徒が、異教徒による迫害のために山や砂漠へ逃げたとき、私は捕らえられ、エデッサの[3796]のイゲモン、ティベリウスの元へ連行されました。　彼から拷問を受けた際、私は父と子と聖霊、まことの神であり、万物を創造された至福の神の御名を告白し、主の御力によって拷問者たちの手から救い出され、逃亡しました。しかし今、再び捕らえられ、あなたの支配下にあります。　私を好きに扱ってください。私は、天の神であり、私の救い主であるキリストのために死ぬにふさわしいのですから。

イゲモンは言った。

「この忌まわしき者よ、ティベリウスの手から逃れたように、私の手からも逃れられるとでも思っているのか？」

[3791] ローマ皇帝ヌメリアヌスは283年から284年まで在位した。

[3792] エゲイア、あるいはエグは、小アジアのキリキア地方にある海辺の都市である。この地は、アヤスカラという名で現在まで残っている。

[3793] すなわち、ハドリアヌス皇帝（在位117年～138年）を称えて建てられた神殿のことである。なお、古代ローマ人は、皇帝を称えて神殿を建設し、また神殿や広場にその像を安置する習慣があったことに留意すべきである。

[3794] アナザルという都市はキリキアに位置していた。

[3795] レバノン――シリアにある山脈。シナイ半島から始まり、アラビア、パレスチナ、シリアを経て地中海東岸と並行して北へ伸び、タウロス山脈に接する山脈系に属する。レバノンは、この山脈系の中央部かつ最高峰をなしている。

[3796] エデッサはマケドニアの都市である。

聖人は答えた：

「もう逃げるつもりはありません。私は主イエス・キリストを信じ、主が私を恥じさせることを許さず、苦しみ最後まで耐え抜くよう助けてくださると信頼しているからです。」

聖人のそばには、アレクサンドロスとアステリウスという二人の処刑人が立っていた。イゲモンは彼らに、殉教者のすねにドリルで穴を開け、その穴に縄を通して彼を吊るすよう命じた。しかし、神の御計画により、彼らの心の目が開かれ、彼らは聖人の代わりに木に穴を開けて吊るしてしまった。　一方、聖ファラレウスの弟子であるティモテイという名の信者の一人が、そこに立ち、起こっていることすべてを見ていた。彼は聖人にうなずきながら、こう言った。

「彼らが何をしているか、見えるか？」

聖人は彼にこう答えた。

「黙れ、兄弟よ。キリストが私と共にいて、私を助けてくださるのだ。」

イゲモンはそれを見て、殉教者ではなく、吊るされた木であることに気づき、処刑人たちに言った：

「一体何をしたのだ？　私は人を吊るせと命じたのに、木を吊るしたのか？」

そして、イゲモンは怒り狂い、彼らが自分を嘲笑っていると思い込み、二人を容赦なく打ちのめすよう命じた。しかし、彼らは打たれながらもこう言った。

「主の御名が祝福されますように。今より私たちもキリスト教徒となります。主イエス・キリストを信じ、その御名のために苦しみを受けるからです！」

その言葉を聞いた総督は、直ちに彼らを剣で斬るよう命じた。そして彼らは苦しみながら息を引き取り、他の聖なる殉教者たちと共に、キリスト・神から冠を授かった。

一方、イゲモンは聖ファラレウスにこう言った。

「神々に犠牲を捧げれば、命は助かる。そして、この世の恵みを味わうことができるだろう。」

殉教者はこう答えた。

「キリストのしもべに、悪魔たちへの生け贄を捧げさせようなどとは、到底できない。」

イゲモンは激怒し、自ら聖人のすねを貫こうとしたが、席から立ち上がろうとしたその瞬間、力が衰え、身動きが取れなくなってしまった。アドリアヌスの神殿にいたすべての異教徒たちは、この出来事を目撃すると、声を張り上げて叫んだ。

「このような奇跡を起こすキリスト教の神は偉大だ！」

一方、イゲモンは恥に打ちひしがれ、殉教者にこう懇願し始めた。

「ファラレイよ、私のためにあなたの神に祈ってほしい。私がこの席から立ち上がれるように。まことに、あなたの神は偉大だからだ。」

聖人が祈ると、イゲモンは立ち上がったが、これを神の力ではなくファラレイの魔術だと見なして、歯ぎしりしながら聖人に激しく怒りをぶつけた。そこで、ドリルを掴むと、自ら殉教者の足を穿ち始めたが、たちまちその両手が萎えてしまった。イゲモンは再び殉教者に呼びかけ、こう言った。

「もう一度頼む、ファラレイよ、私のために祈ってくれ。私の手が癒やされるように。」

聖人はその祈りによって、彼の両手を癒した。すると、イゲモンは周囲の人々に言った。

「この魔術師を私の目の前から連れ去り、海の深みに沈めて、滅びさせてしまえ。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「お前は私に対する審問を始めたのだ。それゆえ、それを最後までやり遂げなければならない。」

イゲモンは答えた。

「去れ、魔術師よ。別の場所で滅びよ。私はまだお前に何の害も与えていないのに、お前はすでにその魔術で私にこれほど多くの害をもたらしたのだ！」

聖人は言った。

「拷問者よ、私がお前の脅しに怯えて、私の神から背を向けるとは思わないことだ。いかなる場合でも、お前の神々に生贄を捧げることは決してない。お前が仕える悪魔たちには、決してひれ伏さない。」

この言葉を聞いたイゲモノスの家来たちは、聖人を捕らえて舟に乗せ、海の深淵の真っただ中へと連れて行き、そこで彼を溺死させた。溺れかけている最中、聖人は神に向かって次のような祈りを捧げた。

「わが主なる神よ！今、私を死なせないでください。私はまだ、あなたの聖なる御名のゆえに苦難を受けたいのです。そうして、さらに偉大な殉教の業を成し遂げ、永遠の命において、あなたから朽ちることのない冠を授かるためです。」

殉教者を海に沈めた後、戻ってきた家来たちは、イゲモンにこう言った。

「我々はあなたが命じられたとおりにしました。ファラレイを海に投げ込み、彼は我々の目の前で沈んでいきました。」

しかし、従者たちがまだイゲモンにそう話している最中、白い衣をまとった聖ファラレイが現れた。イゲモンと彼と共にいた者たちは皆、聖人を見て大いに驚いた。そしてイゲモンは聖人に言った。

「お前の魔術は、海までも制したのか！」

聖人は彼にこう答えた。

「今や、お前の神々の力と威光はどこにあるのか？　お前の誇りはどこへ行ったのか？　見よ、わが主イエス・キリストが、お前の企みを打ち砕き、私が死ぬことを許さなかったのだ。それは、私がなお、お前の父である悪魔に打ち勝つためである。」

イゲモンは激怒し、周囲にいる者たちに言った。

「見よ、この魔術師が海さえも呪術で操り、我々を侮辱している。もしこのまま彼を放っておけば、彼はその魔術で我々全員を滅ぼしてしまうだろう。」

そのとき、総督のそばにはウルヴィキという名の魔術師が一人いた。彼は総督にこう助言した。

「支配者よ、彼を野獣の餌食にせよと命じなさい。」

すると直ちに、総督は獣に餌を与える番人を呼び寄せ、見世物の場を用意するよう命じ、聖人にこう言った。

「ファラレイよ、神々に生贄を捧げるのか、それとも、お前の肉体を獣の餌にしたいのか？」

これに対し、聖なる殉教者は答えた。

「まさか、あなたはまだ、私の主であり神であるイエス・キリストの力と偉大さを知らないのですか？　私は預言者の言葉をもってあなたに告げましょう。*『主の右の手は高く、主の右の手は力を行なわれる。私は死なず、生き続け、主の御業を宣べ伝えるであろう』*（詩編117:16–17）。」

その後、聖人は広場へ連行され、野獣に引き裂かれることとなった。しかし、野獣たちは聖人に手を出さなかった。一頭の獰猛な雌熊が聖人の元へ近づき、その足元に横たわって、足を舐め始めた。これを見たイゲモンは、怒りに震え、歯を食いしばり、獅子のように唸り声を上げた。　その後、彼は飢えた雄ライオンと雌ライオンを聖人のところに放つよう命じたが、それらも近づくと、殉教者の足元にひれ伏し、その足を舐め始めた。イゲモンは激怒して自分の衣服を引き裂き、民衆は声を張り上げて叫び始めた。

「キリストの神は偉大なり！ ファラレアの神よ、我らを憐れみ給え！」

魔術師ウルヴィキアを捕らえると、人々は彼を獣たちに投げ込み、彼はたちまち獣たちに引き裂かれて食い尽くされた。イゲモンは席から立ち上がり、殉教者を剣で斬り殺すよう命じた。

そして、聖なる殉教者は、エデッサと呼ばれる、そのために特別に用意された場所へ斬首のために連行され、祈りを捧げた後、5月20日[3797] に息を引き取った。これは、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく賛美される、我らの主イエス・キリストの栄光と誉れのためである。アーメン。

コンダク、第3調:

殉教者にして憐れみ深い者、また栄光の王の立派な戦士であり、試練と苦難をもって偶像崇拝者たちの高慢を打ち砕かれた。それゆえ、賢きファラレイよ、我らは汝の尊き記憶を讃える。

アスカロンの聖殉教者の受難。

記念日5月20日

イゲモン・アリアンがエルモポリス[3798] からアンティノイ[3799] へ向かう途中、アスカロンという名のキリスト教徒が彼の元へ連れてこられた。彼を見て、イゲモンは言った。

「あれは誰だ？」

すると、イゲモンの顧問の一人でアポロニドという名の者が言った。

「おそらくキリスト教徒でしょう。」

イゲモンはアポロニドに言った。

「彼に、自分が誰なのか尋ねてみよ。」

アポロニドは聖人に尋ねた。

「あなたは誰ですか？」

聖人は答えた。

「私はキリスト教徒だ。」

イゲモンは彼に言った。

「キリスト教徒に神々への生贄を捧げることを義務付ける、すべての国々に発布された王の勅令について、聞いたことはあるか？」

聖アスカロンは答えた。

「はい、多くの人々を惑わすために発布された、あの不敬な勅令については聞いています。」

イゲモンは言った。

「王たちの神聖で救いをもたらす勅令を『誘惑』などと呼んで、よくもまあ王たちをこれほどまでに誹謗するとは、何事か。」

聖人はこう答えた:

「私を好きに扱ってくれ。私はそれらの勅令を遵守しない。それらは違法に発布されたものであり、人々の利益のためではなく、破滅をもたらすものだからだ。偶像崇拝を呼びかけるような勅令に、果たして何の益があるというのか？」

イゲモンは言った。

[3797] 聖ファラレイの死は284年に訪れた。

[3798] エジプトには「エルモポリス」という名の都市が2つ知られている。1つ（小エルモポリス）は下エジプトに、もう1つ（大エルモポリス）は中エジプトに位置していた。ここで言及されているのは、当然ながら後者である。

[3799] アンティノイアの都市は中エジプトに位置し、大エルモポリスの対岸、ナイル川の反対岸にありました。

「我らの王たちを誹謗するだけでは物足りないのか。お前は我らの神々までも偶像と呼んでいる。神々そのものを証人として誓うが、もしお前が彼らに拝礼せず、犠牲を捧げなければ、不従順な者たちに用意された拷問に処されることになるだろう。」

聖人は答えた：

「私はあなたの脅しを恐れない。むしろ、*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきである』*（マタイ10:28）と言われた方を恐れるのだ。」　それゆえ、人間全体を永遠に苦しめることのできる神を恐れるべきであり、ただ一つの肉体を、それも永遠ではなく、ほんの短い間だけ苦しめるあなた方を恐れるべきではないのです。

イゲモンは言った。

「私の言うことを聞き、不死の神々に犠牲を捧げなさい。もし従わなければ、拷問の場も拷問者たちもすでに用意されているのだから。」

聖人は答えた：

「どちらがより強いのか、見てみよう。汝が拷問によって、私が偶像を神と呼ぶよう説得するのか、それとも私が、キリストを私の主であり、真の神であり、万物の創造主であると認めるよう、汝を説得するのか。」

激怒したイゲモンは、裸にされ木に吊るされた殉教者を打ち、鉄の道具で削るよう命じた。聖人は、容赦なく拷問され、肉体が引き裂かれてその断片が地面に落ちても、痛みのうめき声一つ上げず、一言も発することなく沈黙を守った。

すると、イゲモンは彼に言った。

「神々に生贄を捧げるために、お前の心は和らいだのではないか。」

そこに立っていたヴィザモンという名の修辞家[3800]が言った。

「すでに死が彼に近づき、彼は正気を失ってしまったのだ。」

すると聖人は、すぐに力強く彼にこう言った。

「私は正気を失ってはいない。そして、私の創造主である神から、決して背くことはない。」

アリアノスは言った。

「またお前は心を硬くしている。しかし、この道中の場所は、お前をふさわしく拷問するにはあまりに適していない。さあ、街へ行こう。そこで、お前の不服従に対して、お前にふさわしい拷問を受けることになるだろう。」

そう言うと、イゲモンは直ちに殉教者の縄を解き、彼を連れて行くよう命じた。道中、町の近くにはナイルという名の大きな川が流れていた。聖なる殉教者アスカロンはすでにアンティノイの町へと連れて行かれていた。というのも、イゲモンは急ぐことなく後方を歩いていたからである。　イゲモンを出迎えに現れたアンティノイの市民たちは、川岸の地面に裸で傷だらけの状態で横たわっている聖人を取り囲んだ（傷のせいで、彼は立つことも座ることもできなかったからである）。そして彼に哀悼の意を表し、　そしてすぐに、川までやって来て舟に乗り込もうとしているイゲモンを見かけると、彼を出迎え、歓迎する準備を始めた。しかし、聖なる殉教者は、イゲモンが舟で渡ろうとしているという話を耳にすると、力を振り絞り、地面から立ち上がり、両手を天に向けて、主に向かってこう叫んだ。

「わが神、イエス・キリストよ。あなたのために私はこの苦しみを受け、あなたへの愛ゆえに、すべての者の恥となるように裸で立っているのです！　今、御名の栄光のために私の声を聞き入れ、全能の御手を伸ばしてください。不義な裁判官が乗っているこの舟を川の真ん中で止めて、彼があ

[3800] 修辞学の教師。

なたを唯一の真の神、　万物の創造主であり主であることを告白し、彼が憎むあなたの聖なる御名を、すべての民の前で賛美するまでは、彼をこの岸に到達させないでください。

聖人がそう祈ると、突然、イゲモンが乗っていた舟が川の真ん中で止まり、まったくその場から動けなくなってしまいました。これを見て、アリアンは驚き、キリストを神として認めるよう導くと約束した殉教者の言葉を思い出し、家来たちに言いました。

「船が海の上で止まってしまったことについて、どう思うか？　これはあのキリスト教徒の魔術によるものではないか？」

そう言うと、イゲモンは別の舟を連れてくるよう命じてそれに乗り込んだ。すると、イゲモンが降りた舟はたちまちその場から動き出したが、彼が乗り込んだ舟は、まるで陸の上にあるかのように止まったまま、どうやっても動こうとしなかった。漕ぎ手も大勢おり、帆も張られ、風も追い風だったにもかかわらずである。イゲモンはこれを見て、殉教者にこう伝えさせた。

「お前は、私が脅した拷問を恐れたため、そのせいで、お前の魔術によって、私が川を渡って街に入ることができないようにしたのだな。」

殉教者は使者にこう答えた。

「私の主なる神が生きておられる限り、アリアンが乗っている舟は、私が以前彼に告げた通り、彼が私の主イエス・キリストの御名を告白するまでは、一歩も動かないだろう。」

すると、使者は彼に言った。

「たとえイゲモンが、お前の望む通り、川の真ん中であなたの神の御名を告白したとしても、川はご覧の通り非常に広いのだから、岸に座っているお前が、どうして彼の声を聞くことができるというのか？」

殉教者は彼に言った。

「彼に、私の主への告白を羊皮紙に書き記させ、それを私に送らせなさい。そうすれば、その瞬間、舟はその場から動き出し、岸に接岸するだろう。」

使者は戻ると、殉教者の言葉をイゲモンに伝えた。するとイゲモンは直ちに羊皮紙を取り、自らの手で次のように書き記した。

「唯一の真の神がおられ、アスカロンはその神を崇めている。神以外に神はいない。神は万物の創造主であり、主である。」

そう書き終えると、イゲモンは文書をアスカロンへ送った。殉教者はその文章を読み、神に祈りを捧げると、たちまちイゲモンを乗せた舟は動き出し、岸にたどり着いた。

街に入ると、イゲモンは裁判の席に着き、殉教者が彼の前に連れて来られると、こう言った。

「お前は、私を川に留めておくために、神を憎むすべての魔術の力を私に対して振るった。しかし、陸の上では、私がお前に私の権威の全力を示してやる。」

そして直ちに、殉教者の服を脱がせ、木に吊るし、その肋骨と腹を、全身が溶けてしまうまで焼き尽くすよう命じた。

しかし、聖人は火に焼かれながらも、黙り続けていた。

すると、アリアンは彼に言った。

「見よ、お前はすでに死んでいるようだ、アスカロンよ。」

聖人はこう答えた。

「たとえ私が死んだとしても、それでもまた生き返るだろう。」

そして、イゲモンは家来たちに言った。

「彼を苦しめるのは、ただ我々の労力ばかりだ。彼は信仰を捨てるよりは、むしろ死ぬ方を選ぶだろう。とはいえ、できることはまだある。」

そう言うと、イゲモンは聖人の足に大きな石を縛り付けるよう命じ、聖人を川の深みに投げ込むよう命じた。　兵士たちは聖人を捕らえ、川へと連行した。その後を大勢の群衆が追いかけてきた

が、その中には殉教者の最期を見届けに来た多くのキリスト教徒も含まれていた。キリスト教徒たちはパンを持参し、聖人にそれを口にするよう懇願した。しかし聖人はそれを拒み、こう言った。

「私は、この世の朽ちるべき食物からは何も口にしない。なぜなら、私は『*目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない*』（Iコリント2:9）ものを受け入れるために、旅立つ準備を整えたからだ。兄弟たちよ、あなたがたもまた、神の聖なる者たちに用意された恵みを受け取るよう努めなさい。」

聖人がそう語ると、兵士たちは彼を舟に乗せ、岸から離れ、彼の足に大きな石を縛り付け始めた。すると彼は、岸に立っていたクリスチャンたちに向かってこう言った。

「わが子らよ、私の埋葬を怠ってはならない。しかし、今日と明日は私の遺体を探してはならない。三日目に、町の北側へ来なさい。そこでは、岸辺に石が縛り付けられた私の遺体が見つかるだろう。その石と共に私を葬ってほしい。」

そして、その通りになった。　殉教者が水に沈められてから三日後、キリスト教徒たちは、彼が告げた通り、石が結びつけられたままの聖なる遺体を見つけ、主　イエス・キリストを賛美しつつ、彼を尊厳をもって葬った。主には、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と礼拝が捧げられる。 アーメン。

全ロシアの総主教であり、奇跡を行う者であるアレクシオスの尊い遺骨の発見と移送

記念日5月20日

敬虔なる大公ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ[3801] 、全ロシアの独裁者の治世の頃、聖アレクシオスの逝去から約60年が経過した後、　聖人たちのうちに驚くべき御業をなされ、彼らを称え給う全善なる神は、このようにして計り知れない宝、すなわち、この聖なる大聖人、アレクシオス大主教の多大な治癒の力を持つ聖遺骨を明らかにされたのである。

この修道院に、聖アレクシオス自らが聖大天使ミカエルの名において建立した最初の教会は、[3802] 、 ホナでのかつての奇跡を記念して建てられたものでしたが、木造であったため、長い年月を経て老朽化したその教会の屋根が、神聖な聖体礼儀の最中に崩れ落ちました。しかし、神の御摂理により、その時に教会内にいた者たちは皆、無傷で済みました。　そこで大公は石造りの教会を建設するよう命じ、かつての木造教会の内部で新しい教会の基礎のための溝を掘っていたところ、大聖人アレクシオスの聖遺骨が無傷で、その身にまとっていた衣さえも朽ちていない状態で発見された。　その直後、聖大天使ミカエルの名に因む石造りの教会が建設され、南側には聖母マリアの受胎告知を称える小礼拝堂が設けられた。　この教会は地面から三段の高さがあったが、以前の木造の教会よりは小さかった。以前の教会はより広々としていたものの、一段の構造で、床は地面に直接敷かれていた。新しく建てられた教会が相応しく装飾され、聖別されると、聖アレクシオスの多大な治癒力を持つ聖遺骨が運び込まれ、聖母マリアの受胎告知を称える小礼拝堂に安置された。

3801 ここでは、当然ながら大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムヌイのことを指している。彼は1425年から1462年まで統治した。

3802 「この修道院」とは、1365年に聖アレクシイ大司教によってクレムリン内に建立されたチュドフ修道院を指す。その場所は、彼によって病を癒やされたタタール王妃タイドゥラが彼に贈ったものである。この修道院が「チュドフ（奇跡の）」と名付けられたのは、聖人が彼女を失明から奇跡的に癒やしたことを記念してのことである。

その後、長い年月が流れ、大公イオアン・ヴァシリエヴィチの治世[3803]、ゲロンティイ大主教[3804] の在任中に、この修道院のアルヒマンドリト・ゲンナディイの尽力により、聖アレクシイ大主教に捧げられた食堂を併設した新しい教会堂の建設が始まったが、 しかし、この教会は当時完成に至らなかった。というのも、アルヒマンドリト・ゲンナディイがヴェリキー・ノヴゴロドの大司教に任命されたからである[3805] 。それからしばらくして、同じく大司教ゲンナディイの尽力により、 教会と食堂、およびその他の建物が完成し、教会が装飾されて奉献されると、聖アレクシオスの尊い聖遺骨は、聖母マリアの受胎告知を祀る小聖堂から移され、彼の名に因んで建てられた教会の南側の壁際に安置された。 1534年、大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチ[3806] は、奇跡を行う聖アレクシオスの聖遺骨のために銀製の聖遺物箱を作らせ、その上蓋に聖アレクシオス自身の像を銀で彫り、金、宝石、ビーズで装飾するよう命じた。 聖遺物箱は大公の死後、1535年に完成し、聖アレクシオスの遺体は、その息子である大公イオアン・ヴァシリエヴィチ（[3807] ）の治世下、聖人の命日である2月12日（大斎の第一週の木曜日から金曜日にかけて）に、その聖遺物箱に納められた。

聖アレクシオスの聖遺骨を納めた聖遺物箱は、1686年まで約200年間、指定された場所に安置されていた。 ノヴゴロドの大司教ゲナディによって建設された教会と食堂が老朽化したため、1683年、敬虔なツァーリであり全ロシアの独裁者である大公フェオドール・アレクセーヴィチ[3808] の命により、またモスクワおよび全ロシアの至聖なる総主教イオアキムの祝福のもと、 当時この修道院の院長であったアルキマンドリト・アドリアンの尽力と熱意により――彼はその後まもなく、王都カザンの大主教となり[3809] 、さらに神の御許しにより、王都モスクワおよび全ロシアの至聖なる総主教の位に就いた[3810] ――新しい場所に、新しい大きな食堂が建設された。 そのほとんどは修道院の敷地外に移され、ごく一部と北側の壁のみが、教会群とともに修道院内に残された。その教会群のうち、最初のものは聖母マリアの受胎告知を称えるもので、以前は聖大天使ミカエルの教会の付属礼拝堂であった。二つ目は、すでに述べたように、最初の教会の隣にあり、 ――聖アレクシオス大主教に捧げられたもので、その両側には、奇跡を起こす聖遺物を拝礼し、祈りを捧げ、教会の礼拝に耳を傾けるために訪れる人々を受け入れるために設けられた二つの前庭、すなわち食堂があった。 同じ敷地内、これら二つの教会の間に、修道院の修道士たちのために、聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイに捧げられた新しい教会が建てられた。これは、彼らが常に、とりわけ冬の間、修道院の教会を訪れる外部の参拝者とは別に、様々な教会礼拝に耳を傾けることができるようにするためである。 さらに、これらすべての建物の西側には、修道士たちが食事をとるための別の食堂が設けられた。これは、修道院を訪れる世俗の俗人らからあらゆる面で隔てられ、ただ神のみを想い、自らの救いを念頭に置き、 熱心に祈り、断食、手仕事に励むこと――これこそが修道生活そのものだからである。こ

[3803] イオアン3世ヴァシリエヴィチは、1462年から1505年までモスクワ大公であった。

[3804] ゲロンティイ大主教は、1473年から1489年までモスクワの主教座に就いていた。

[3805] これは1484年12月12日に起こった。ゲンナディ大司教は、ユダヤ教化派の異端との闘いに積極的に関与した。1504年6月、「自身の衰弱のため」に教区の統治を辞し、チュドヴォ修道院に身を寄せ、1505年12月4日に同地で死去した。

[3806] イオアン3世の後継者であるヴァシーリー4世イオアンノヴィチは、1505年から1533年までモスクワ大公であったため、大公が聖人の遺骨を納める聖櫃を注文した年としてプロローグに記載されている年は誤りである。

[3807] イオアン4世ヴァシリーヴィチ・グロズヌイは、1533年から1584年までモスクワのツァーリであった。

[3808] フェオドール3世・アレクセーヴィチは、1676年から1682年まで在位した。

[3809] カザンが「王都」と呼ばれているのは、かつてカザン・タタール王国の首都であったからだと考えられる。

[3810] 全ロシア総主教の最後を飾ったアドリアン総主教は、1690年から1700年までロシア正教会を統率した。

のため、修道院の外から教会へ通じる様々な入り口も設けられ、男性用には聖アレクシオス教会への専用入り口が、　女性用には聖母マリアの受胎告知教会への専用の入り口が設けられ、聖人の多大な癒しの力を持つ聖遺物を参拝する人々が修道院の外からこれらの教会に入り、男女が混ざることなく、それぞれの性別ごとに専用の教会で、男性は男性用、女性は女性用の教会に立って参拝できるようにしていた。　一方、この修道院に住む修道士たちのためには、これらの教会や食堂へ、修道院内から通じる別の入り口が設けられていた。　これは、修道士たちが静寂に満ち、世俗の喧騒から離れた生活を送れるようにするためであり、また、聖なる父たちの伝承および修道院の規則に従い、修道院の門を常に閉ざしておくことで、信徒が不適切な時間に修道院に入ってくるのを防ぎ、修道士がいつでも修道院から出られるようにするためでもあった。　というのも、かつては修道院の規則として、週のうち3日間、すなわち 月曜日、水曜日、金曜日には、修道士たちは決して修道院の壁の外へ出ることが許されていなかった。残りの4日間は、何らかの必要が生じた場合に限り外出が許されていたが、それも勝手に出るのではなく、あらかじめ院長または修道院を管理する者に許可を求めてからでなければならなかった。

礼拝堂や食堂の工事が完全に完了し、相応の威厳をもって装飾されると、敬虔な皇帝たち、すなわち大公イオアン・アレクセーヴィチとペトル・アレクセーヴィチ自らの手によって、全大、　小ロシア、白ロシアの専制君主たち、そして彼らの宮廷高官たちによって、全ロシア総主教イオアキム、当時モスクワに滞在していた司教たち、　全聖職者および大勢の民衆に囲まれ、大聖人アレクシイ大主教の多大な癒しの力を持つ聖遺物は、香と芳香を伴って、旧食堂教会から新築された教会へと移され、二つの教会、すなわち聖母マリアの受胎告知教会と聖アレクシイ教会の間に用意された場所に安置された。　これは1686年5月20日のことでした。聖アレクシオス大主教に捧げられたこの教会は、唯一の神、すなわち三位一体において賛美される父と子と聖霊の栄光のために、至聖なるイオアキム総主教自らが大聖堂式で奉献しました。

トロパリオ、第4調：

使徒たちの後継者たる司教たちの同席者、全ロシアの牧者にして教師、至福の父アレクシオよ、万物の主なる御方に祈り、あなたの羊の群れに平和を授け、魂に救いと、大いなる憐れみをお与えください。

トロパリオ、第2調：

まるで、地中に長きにわたり秘められていた極めて豊かな宝のように、あなたの尊い聖遺体は、奇跡を現すものとして発見されました、至福の父、聖アレクシオよ。それらから癒しを受け、私たちは豊かになり、キリストを賛美してこう唱えます。「御自身の聖徒たちを賛美される方に、栄光あれ。」

コンダク、第8調：

朽ちることのない太陽のように、墓から私たちに輝きを放ち、長年にわたり秘められていたあなたの尊い聖遺体は朽ちることなく、聖アレクシオよ、私たちはあなたによって恵みを受けます。この国全体を、またあらゆる奇跡と慈愛をもって、恵みの御業によって豊かにしてくださるあなたに、私たちはこう歌います。「喜びなさい、父よ、ロシアの光よ。」

6月3日

5月21日（旧暦）

同日は、1504年10月2日に逝去した、ウグリチ出身のギリシャ人カッシアン聖人の記念日である。

聖使徒同等のコンスタンティン王とその聖母ヘレナの生涯

記念日：5月21日

3世紀末から4世紀初頭にかけて、異教世界が火と剣をもってキリスト教に立ち向かい、キリスト教徒という名そのものを地上から完全に消し去ろうと企んでいた[3811]、神の摂理は、キリストの教会のために、キリスト教を迫害する皇帝たちのただ中にあって、コンスタンティヌスという王という姿で、その王を教会の威厳ある守護者として用意しておられた。彼は生前に、キリスト教史において永遠に定着した「使徒に等しい」という称号を授かり、世界史においては「大帝」と称されるようになったのである。

274年に、キリスト教徒ではなかったものの、キリスト教に親しみ、彼を庇護していた両親の間に生まれたコンスタンティヌスは、幼少の頃から異教の迷信を避け、真の神であるキリストに近づいていった。　主の御手そのものが、彼を徐々に備えさせ、神の栄光の選ばれた器として、さまざまな方法で彼を清めていったのである。

コンスタンティヌスの父コンスタンティウス・クロルス（帝国西部のカエサル[3812]）は、外見上――公式には――偶像崇拝者であったが、心の中では異教の迷信とはかけ離れていた。　内面においては、多くの偽りの神々への奉仕を拒絶し、唯一の真の神を認めていた――彼自身も、子供たちや家来たちを含む家族全員も、ただ一人の王である神にのみ仕え、その御名に捧げていた[3813]。コンスタンティウスが偶像への迷信的な奉仕からどれほど遠かったかは、彼の生涯における次の驚くべき出来事が物語っている。　偶像への生贄や香を焚くような崇拝を拒んだコンスタンティウスは、ある日、宮廷人たちの真の心構えを試してみたいと考えた。彼は、迷信的な異教の儀式を行おうとするふりをし、廷臣たちにこう言った。

「私の好意と愛を享受し、栄誉を保ちたい者は、偶像に犠牲を捧げなければならない。これを拒む者は、私の目の前から去り、今後私の好意を期待してはならない。なぜなら、私は信仰を同じくしない者たちと交わり続けることはできないからだ。」

皇帝の言葉を真実として受け入れた廷臣たちは、たちまち二つの派閥に分かれた。一方には、偽善的で、真の宗教的信念を持たず、良心が柔軟で、右にも左にも傾くことのできる者たちがおり、

[3811] ディオクレティアヌス帝の勅令――303年2月23日――により、キリスト教とそのすべての機関および教会を根絶することが命じられた。　その時の残酷な迫害は、東ローマ帝国の首都ニコメディアにあるキリスト教の聖堂が軍事力によって略奪・破壊されたことから始まった。そこでは一度に2万人の信者が焼き殺された。その後、迫害の恐怖はシリア、パレスチナ、小アジア、エジプト、そしてイタリアにまで広がった。　迫害の残虐さについて、ラクタンス（『迫害者たちの死』第15章および第16章）は次のように記している。「たとえ私に百の口と鉄の舌があったとしても、信者たちが耐え忍んだあらゆる苦難をすべて数え上げることはできなかっただろう……　鉄は鈍り、折れ、殺し屋たちは疲れ果て、交代で、順番に働いた……」

[3812] ディオクレティアヌス皇帝は、広大なローマ帝国の統治を円滑に行うため、帝国を二分した。そのうちの一方である東方帝国は、ニコメディアに居住し、共同統治者としてカエサル・ガレリウスを従えて自ら統治し、　もう一方の西部にはマクシミアヌスを皇帝に据え、その共同統治者としてコンスタンティウス・クロルスを任命し、彼はガリアとブリタニアを直接統治した。

[3813] エウセビオス『コンスタンティヌス伝』第1巻第17章

直ちに王の提案に同意を示した。彼らはそれまで、卑しい計算から、偶像崇拝を否定するという王の「善き模範」に従っていただけであった。　他方、心からの誠意をもって異教の迷信を拒み、今もなお自らの信念に忠実であり続け、真のキリストの僕として、この世の儚い栄誉を拒んで、王の随行団から離れ始めた者たちもいた。これを見たコンスタンティウスは、王宮を去ろうとしていた真のキリスト教徒たちを呼び戻し、彼らにこう言った。

「あなたがたが自らの神に忠実に仕えているのを見るからには、私はあなたがたを私の家臣、友人、そして助言者として迎えたい。あなたがたが自らの神に忠実であるのと同じように、私に対しても忠実でいてくれると信じているからだ。」

一方、キリスト教から離れ、偶像崇拝に傾きかけていた者たちに向かって、王はこう言った。

「お前たちを私の宮廷に留めておくことはできない。もしお前たちが自分の神への忠誠を守らないのなら、どうして私に忠実でいられるというのか！」

こうして彼らを恥じ入らせた後、王はこれらの偽善者たちを自分の前から追放し、神に忠実な僕たちを身近に迎え入れ、彼らを自分の領地の統治者に任命した[3814]。こうして、広大なローマ帝国の他のすべての地域でディオクレティアヌスの迫害が激化していた当時、コンスタンティウスの領地では、キリスト教徒たちは平和と繁栄の中で暮らしていた[3815]。とはいえ、最年長の皇帝であるディオクレティアヌスの意志に逆らうことはできなかったため、コンスタンティウスはただ一つ、キリスト教の教会の一部を破壊することを許した[3816]。

これこそが、使徒同等のコンスタンティヌスの父、コンスタンティウス・クロルスであった。――キリスト教徒に対する彼の好意と、異教徒よりも彼らを重んじる姿勢、そして妻である聖ヘレナ（コンスタンティヌスの母）や、コンスタンティウスの娘でありコンスタンティヌスの妹であるコンスタンティア（[3817]）が幼い頃からキリストに帰依していたことは、コンスタンティヌスの心に神とその律法に対する真の愛を植え付け、彼の道徳的性格を育み、強固にするための確固たる基盤を築いた。そして、幼い心に蒔かれたこの小さな種は、後に大木へと成長した。

コンスタンティヌスは、青春時代を実家の家族のもとではなく、ニコメディアのディオクレティアヌス帝の宮廷で過ごさなければならなかった。彼は、父コンスタンティウス長老がディオクレティアヌス帝への忠誠を保証するため、いわば人質として――とはいえ名誉ある立場で――そこに連れて行かれたのである。　当時の首都における宮廷生活は、不純で情欲に駆られた心の欲望に支配され、「不義の心」（ローマ人への手紙1:28）に陥った人類が到達しうる、あらゆる道徳的・宗教的堕落を、縮図として示していた。　虚栄に満ちた華やかさと贅沢、酩酊と暴食、思考と生活における抑制のきかない放蕩、陰謀と反逆、真の神への崇拝に対する敵意、そして架空の神々への偽善的で虚偽に満ちた敬意――　――これこそが、神の摂理がコンスタンティヌスに異教の無価値さと不名誉のすべてを提示した、陰鬱な光景である。その一方で、まさにその瞬間、同時に、それゆえに一層際立って、コンスタンティヌスの眼前に別の共同体の生活が浮かび上がった。　――キリスト教の共同体である。そこでは、老いた男女、若者や乙女、素朴な人々や学識ある賢者、さらには子供たちまでもが、自らの信仰の真実、その内容の清らかさと高潔さを、言葉だけでなく、自らの行いによって、徳ある生活による告白によって、そして死に至るまでの苦難によってさえも証明していたのである。　なぜなら、この時、キリストの教会に対して、他のあらゆる迫害を凌駕する、最も恐ろしい迫害が勃発し

[3814] エウセビオス『コンスタンティヌス伝』第1巻第16章

[3815] エウセビオス『教会史』第8巻13章；『コンスタンティヌス伝』第1巻13章

[3816] ラクタンス：『迫害者たちの死』、第15章。

[3817] コンスタンティヌスはヘレナの唯一の息子であった。コンスタンティアは、コンスタンティウスが他の子供たちももうけていた別の妻、クロラ・テオドラの娘であった。残念ながら、同時代の人々は、幼少期のコンスタンティヌスに対する聖ヘレナの影響については言及していない。

たからである。その迫害は、迫害者たちの悪意、拷問の多様性、殉教者の数、そして――あらゆる異教の陰謀に対するキリストの信仰の勝利、すなわち勝利の祝典において、他を圧倒していたのである。　神の摂理によって異教の悪意のまさに中心に置かれたコンスタンティヌスは、打ち勝つことのできないものを打ち負かそうとするそのすべての努力の虚しさを、見ずにはいられなかった。彼は自らの目で、弱さの中に現れ、すべてを征服する神の力を直に目の当たりにしたのである。　一人ひとりのキリスト教の殉教者、一つひとつの殉教の偉業の中に、コンスタンティンの目には、キリストの信仰の正しさ、異教に対するその優越性、そしてその神聖な起源を疑いようのない証しとして映し出されていた。　そしてコンスタンティヌスは、幼少期に蒔かれた善の種を自らの魂の中に守り続けた――道徳的に堕落した環境に身を置いていながらも、心の清らかさと無垢さ、そして神の律法への敬意を保ち続けたのである。　しかし、堕落した宮廷生活からコンスタンティンが抱いていたこの内面的な疎外感、彼の探究心豊かな知性、そして謙虚さに覆われた精神的な安らぎは、当然のことながら、彼を取り巻く宮廷人たちの悪意を煽ることとなった。　また、長身と並外れた体力に支えられた威厳ある美しい立ち姿は、民衆の視線を彼に引きつけ、全軍からの愛を彼に寄せさせたが、それは多くの人々、とりわけカエサル・ガレリウスの嫉妬の的となった。　後者は彼を滅ぼそうと企み、コンスタンティヌスが生まれながらにして持つ権利である帝位への即位を阻止するための陰謀さえ企てた。

コンスタンティヌスの命は危険にさらされたが、神の御手は選ばれし者を救い、奔放で狡猾な嫉妬が彼から奪おうとしていたものを、かえって彼に授けたのである。コンスタンティヌスはガリアへ退き、父のもとへ向かったが、父はすでに死の床にあり、まもなく息を引き取った。

コンスタンティウス・クロルスの死後、彼に従っていた軍勢は（306年）、当時生後32年目を迎えていたコンスタンティヌスを、万人に愛され尊敬されるカエサルの最愛の息子として、ガリアおよびブリタニアの皇帝に擁立した。　東方におけるキリスト教徒への恐ろしい迫害を目の当たりにした生々しい印象を抱いていたコンスタンティヌスは、父から権力を継承すると、最初の課題として、キリスト教徒に有利な父のすべての布告を再確認することを選び、自身の領土内でキリスト教の信仰の自由を宣言した。こうして、異教の迷信に対するキリストの信仰の勝利の時が近づいたのである！しかし、教会にとっての良き時代の到来に先立ち、その迫害者たちに対する神の裁きの時が訪れた。――ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝は、聖なる真理のために揺るぎない苦難に耐える者たちに対する自らの悪意に疲れ果て、帝位を退くことで安らぎを求めることを決意した。しかし、彼らの権力放棄は、最も獰猛な迫害者たち自身に安らぎをもたらすどころか、社会的な混乱を招く一因ともなった。　ディオクレティアヌスの後を継いで東方で即位したガレリウスは、北西部でのコンスタンティヌスの即位に不満を抱き、彼を皇帝として認めず、代わりにイタリアとアフリカを統治していたセウェルスを皇帝と認めた。一方、イタリアでは、マクシミアヌスの息子マクセンティウスが皇帝として擁立された。　セウェルスを支持したガレリウスは、マクセンティウスに対して戦争を仕掛けた。マクセンティウスは父に保護を求め、マクシミアヌスは再び統治を引き受けた。　セウェルスはマクシミアヌスに降伏し、処刑された。そこでガレリウスは自身の将軍リキニウスを皇帝に擁立したが、軍はマクシミアヌスをカエサルとして支持した。こうして、ローマ帝国には一挙に6人の皇帝が君臨することとなり、彼らは互いに敵対し合った。　平和と繁栄を享受していたのは、コンスタンティヌスの臣民たちだけだった。彼は父から受け継いだ領地で満足し、他の共同統治者たちの争いに加わることを望まず、神の摂理に従い、清らかな心と健全な知性に従って国政に専心していたのである。

「私は、これまでの統治者たちとは一線を画している」とコンスタンティヌスは自らについて語った。「彼らの風習の野蛮さを目の当たりにしたからだ[3818]。」

[3818] エウセビオス。『コンスタンティヌスの生涯』第2巻、49

キリスト教徒に対しては、父の例に倣い、平和的な政策を貫いた。なぜなら、彼らを熱心で忠実な臣民として高く評価していたからである。　コンスタンティヌスは、キリスト教こそが世界を再創造しうる偉大な力であることを理解していた。とはいえ、彼はまだキリスト教徒ではなかった。キリストの僕たちに対する深い敬意を抱きつつも、内なる葛藤なしに、古来の異教の戒律を容易に捨て去ることはできなかった。　そして、差し迫った脅威に満ちた困難な状況こそが、彼を「十字架にかけられた神」の偉大さに公然と頭を垂れるように導いたのである。その神は、不思議なほどに彼の迷いを晴らし、キリスト教徒になるという決意を確固たるものにしてくれたのである。

恐ろしく猛烈な病により（311年に）死去したガレリウス、そしてシリアの統治者であり（313年に）不名誉な死――自殺――を遂げたマクシミアヌスの後、帝国の東部ではリキニウスが唯一の支配者として残り、彼は後にコンスタンティヌスの妹と結婚した。 一方、西 の半分、すなわちイタリア地方では、マクシミアヌスの再治世の後、ローマ市民の意向に反して、再びマクセンティウスが即位した。　コンスタンティヌスはローマにおいて彼を皇帝として承認し、和平使節団さえ派遣した。しかし、マクセンティウスはコンスタンティヌスとの平和的な関係を望まなかったばかりか、彼を皇帝と呼ぶことさえ拒み、ローマ地域のすべての領土と諸国を独裁者として単独で支配することを望んだ。　王位を固めると、彼はキリスト教徒に対してだけでなく、同じ異教徒である同信者たちに対しても、彼に固有の狡猾な残虐性と強欲さを余すところなく発揮した。　即位際、必要な人物たちを贈り物や約束で誘惑した後、彼は高名な元老院議員たちを迫害し、拷問し始めた。彼らの財産を略奪し、自身の獣のような情欲、そして側近たちの情欲を満たすために、彼らの妻や娘たちを拉致した。そして、その残虐さと堕落した生活ゆえに、彼はローマ全土にとって極めて重荷であり、忌まわしい存在であった。ローマ市民たちは、彼の厳しい支配の下で苦しむ中、密かにコンスタンティヌスに保護を求め、この迫害者から救い出してくれるよう懇願することを決意した。　コンスタンティヌスはまず、この件に関してマクセンティウスに書簡を送り、友好的な口調で暴力を止めるよう説得した。しかし、マクセンティウスは彼の善意の助言に耳を貸さず、改心するどころか、さらに激昂した。その激怒は、コンスタンティヌスに対する戦争の準備を始めるほどにまでエスカレートした。

これを聞いたコンスタンティヌスは、312年にローマ皇帝に対する遠征を決意した。彼は、邪悪な暴君の手からローマを奪い返そうとしたのである。しかし、この遠征には乗り越えられない困難が待ち受けていた。　――最も勇敢で、軍隊から愛される将軍であっても、軍を率いてイタリアの心臓部に剣を突き立て、当時の諸民族にとって神聖な大ローマの地に戦争を持ち込むことは容易ではなかった。そのような企ては、帝国軍に衝撃を与え、深い不満の呟きを引き起こすに違いない。　コンスタンティヌス自身も、この遠征に乗り出すにあたり、無意識の恐怖から逃れることはできなかった。とりわけ、彼はローマを一度も目にしたことがなく、ローマは彼にとって恐ろしい巨人のように映ったかもしれないからだ。　さらにコンスタンティヌスは、敵の軍勢が自軍よりも数で上回っていること、そしてマクセンティウスが自国の神々の助けを強く頼りにしていることを知っていた。マクセンティウスは、少年や少女を犠牲にすることさえ厭わず、惜しみない供物をもって神々をなだめようとしていた。　――マクセンティウスはあらゆる呪術や魔術で自身と軍勢を守り、悪魔の偉大な力を味方につけていることも。人間の力や手段だけに頼ることはコンスタンティヌスにとって不十分であり、彼は天からの助けを得たいという切実な願いを抱いた。　無情な偶像に守りを求めても無駄に終わる帝国の悲惨な状況、父と彼自身に幾度も現れた神の助け、彼の目の前で起こった政治的転覆、そして帝国の最高権力を彼と分かち合っていた三人の人物が短期間のうちに不名誉な最期を遂げたことについて熟考した末、　彼は、存在しない神々にむなしく固執し、これほど多くの証拠があるにもかかわらず迷いの中に留まることは狂気であると認めた[3819]。

[3819] エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』第1巻27章

こうした不安に満ちた思索の中で、コンスタンティヌスは父なる神に祈りを捧げ始め、神ご自身について悟りを与え、勇気を授け、これから直面する事柄において御手を差し伸べてくださるよう願い求めた[3820]。そして、この彼の祈りは、かつての牢屋の看守の祈り（使徒行伝16章）と同様に聞き入れられた――主はまもなく、直接現れて彼を慰め、彼がなすべきことを示されたのである。この出来事の同時代人で、王から直接その話を聞いたエウセビオスは、次のように語っている。

「ある日の午後、太陽がすでに西へと傾き始めた頃――」と王は語った。「私はこの目で、光で形作られ、太陽の上に横たわる十字架のしるしを目撃した。そこには『これをもって勝利せよ』という文字が記されていた。」

この光景は、皇帝自身だけでなく、その周囲にいた軍勢をも恐怖に陥れた。なぜなら、十字架は異教徒の間では、恥辱的な処刑の道具として、不吉な前兆と見なされていたからである。コンスタンティヌスは困惑し、心の中でこう自問した。「この現象は一体何を意味するのか？」　しかし、彼が考えを巡らせている間に、夜が訪れた。すると夢の中で、キリストが天に見えたしるしを携えて現れ、天に見えたものと同じような旗を作り、敵の攻撃から身を守るためにそれを使うよう命じた。

眠りから覚めたコンスタンティヌスは、友人たちに夢の中で見た幻の秘密を語り、その後、熟練した職人たちを呼び寄せ、その不思議な旗の姿を説明した上で、それに倣って金と宝石でできた軍旗を作るよう命じた。また、自分の兵士たちには、盾や 兜に十字架を描くよう命じた。 その不思議な幻に深く感銘を受けたコンスタンティヌスは、同時に、自分に現れたキリスト以外のいかなる神をも崇拝しないことを決意した。そして、キリストの言葉を秘める者たち――すなわちキリスト教の司祭たち――を招き入れ、彼らにこう尋ねた。「その神とは誰なのか。そして、私が見たそのしるしにはどのような意味があるのか。」　唯一の神について、人類の救いのために御独り子がお現れになった神秘について、死の権勢に打ち勝たれた主イエスの十字架上の死について、そして彼に現れた十字架のしるしが勝利のしるしであることについての彼らの答えを聞き、コンスタンティヌスは心の中で完全に、かつ自覚的にキリスト教徒となった。　それ以来、彼は熱心に聖書の読解に取り組み、まだ聖なる洗礼を受けてはいなかったものの、常に司祭たちを側近に置いていた[3821]。

「万物の神と、その助け手であり守護者であるキリストを呼び求め、また救いの印を掲げた勝利の軍旗を兵士たちの前に掲げ、コンスタンティヌスは全軍を率いてガリアの境界を越え、イタリア地方のマクセンティウスに対する遠征に出発した」。[3822]

残虐な暴君からローマを解放するためにコンスタンティヌスが敢行したこの遠征は、マクセンティウスを改心させることはなかった。　――不敬虔なマクセンティウスは、荘厳な儀式をもって神々に多額の供物を捧げ、妊婦の内臓を占う占い師たちの予言に耳を傾けた後、大軍を率いてコンスタンティヌスに立ち向かった。しかし、彼はその不敬虔さゆえに、相応の報いから逃れることはできなかった。　救いのしるしである十字架に守られたコンスタンティヌスは、敵との三度の激戦を経て、永遠の都そのものに迫り、そこで敵に決定的な敗北を喫させた。　マクセンティウスはティブルス川を渡って逃亡を試みたが、橋が崩落した際、古代のファラオのように、選りすぐりの騎兵たちと共に水の深淵に飲み込まれて命を落とした。勝利者は凱旋してローマに入り、民衆から大いなる歓喜をもって迎えられた。　この勝利が神の御加護によるものであることを自覚したコンスタンティヌスは、街で最も人通りの多い場所に聖なる軍旗を掲げ、その後、感謝の念を抱くローマ市民たちが新皇帝を称えて像を建立した際、その像の手に十字の形をした高い槍を持たせ、次のような銘文を刻むよう命じた。　「この救いのしるしによって、私はこの都市を暴君の支配から解放し、ローマ市民と元老院にかつての栄光と名声を取り戻した」[3823]。

[3820] エウセビオス『コンスタンティヌス伝』第1巻36；ラクタンス『迫害者たちの死について』44。

[3821] エウセビオス。『コンスタンティヌス伝』、第1巻、28–32。

[3822] エウセビオス。『コンスタンティヌス伝』、第1巻、37。

[3823] エウセビオス。『教会史』第IX巻、9；『コンスタンティヌス伝』第I巻、40。

こうしてローマ帝国西半分の全土の支配者となったコンスタンティヌスは、313年に勅令を発し、自身の支配下にある諸民族に対して完全な宗教寛容を宣言した最初の皇帝となった。異教徒には自らの神を崇拝する儀式を行う権利を残し、キリスト教徒には唯一の真の神を自由に崇拝することを許可した。 この勅令に続き、キリストの教会にとって好ましい一連の勅令[3824] が公布された。十字架刑が禁止され、サーカスでの血なまぐさい闘技が廃止された。　祝祭日における異教の生贄や香の焚き上げが廃止され、日曜日の祝日が定められ、その日の裁判の執行が禁止され、自由民も奴隷も労働を休むこととなった；　孤児や親に見捨てられた子供たち、貧しい者や困窮者――異教の時代には援助も憐れみも与えられなかった者たち――が、皇帝の庇護下に置かれた；すべての都市で、教会の改修と聖別を祝う祭りが始まった；　至る所で神への賛美の歌と感謝の祈りが響き渡った。司教たちは自由に集まり、教会の必要について協議した。コンスタンティヌス自身も時折これらの集会に出席し、信仰に関する問題に深く耳を傾け、キリスト教社会のために必要なことは何でも進んで行った。彼は聖職者たちをあらゆる無関係な職務や税から解放した――異教の祭司たちが税を免除されていたのと同様に――、彼らが神への奉仕に完全に身を捧げられるようにするためであった；　彼は、迫害者たちによって奪われた教会墓所やすべての場所を教会に返還しただけでなく、礼拝のために「バシリカ」と呼ばれるいくつかの広大な建物を寄贈した。そこでは裁判官たちが審理を行っていたが、その内部構造から、容易に教会へと改築することができた。また、キリスト教徒間の紛争や相互の不和を解決する権利を牧師たちに与えた。　キリスト・神への敬虔な崇敬の証として、すべての人の目に留まるように兜に「キリスト」のモノグラム[3825] を掲げ、 コンスタンティヌスは、兵士たちに日曜日に唱えるべき祈りを授けた。　これは皇帝自身の心の信仰の告白であり、すべての人々に、唯一の全能の恵みの与え主を認め、あらゆる事柄においてその助けを求めるよう促すものであった。[3826] 。

皇帝の恩寵はキリスト教徒たちの間に歓喜を呼び起こした。新しい統治の下で人生の甘美さを味わうことで、彼らの心は大きな霊的な喜びで満たされたのである。同時代人のエウセビオスは、その時代を次のように描写している。

「今や、いかなる雲にも曇らされることのない、明るく澄んだ日が、天の光の輝きをもってキリストの教会を照らし出した。我々は、この幸福が我々の功績を超えるものであることを認めざるを得ない。これほど偉大な賜物の与え主の恵みによって、我々は最大の驚嘆に包まれている。我々は彼にふさわしい畏敬の念を抱き、預言者と共にこう語るのだ：　*『来て、主の御業を見よ。主が地上でどのような荒廃をもたらされたかを』*（詩編45:9）。あらゆる年齢の男女が、魂の全力を尽くして喜び、心と精神を込めて神に祈りと感謝を捧げている。[3827] 。

しかし、西ではキリスト教徒たちがコンスタンティヌスの統治下でこのように安寧を享受していた一方で、リキニウスが君臨していた東では全く異なる状況であった。ディオクレティアヌスの宮廷で育てられ、ガレリウスの下で将軍を務めた彼は、皇帝の地位に就くと、心の中でキリスト教徒を憎んでいた。　コンスタンティヌスと姻戚関係になったリキニウスは、当初、その強大な義兄に逆らうことを躊躇していた[3828] ――彼は、コンスタンティヌスが発布した宗教寛容に関する勅令（ミラノ勅令）に署名さえしたほどである。しかし、まもなく、マクシミアヌス帝の死後、東方全土の絶対的な支配者となると、キリスト教徒を弾圧し、屈辱を与え始めた。　帝位を失うことを恐れ、また偶像崇拝の代表者たちからの讒言に耳を傾けた彼は、キリスト教の教会がコンスタンティヌスに対する反逆の祈りを捧げているという口実で、それらを閉鎖し破壊し、すべての人々、とりわけ自らの軍隊に対して、異教の宣誓と偶像への生贄の捧げ物を要求した。　また、自分の意志に背く者たちに対して

[3824] エウセビオス。『教会史』、第X巻、5および6。
[3825] このモノグラムは、2つの文字「X」と「P」から成り、前者が後者を覆う形になっていた。
[3826] エウセビオス。『コンスタンティヌスの生涯』、第IV巻、19。
[3827] エウセビオス。『教会史』、第10巻、1–3。
[3828] 彼は313年にコンスタンティヌスの妹と結婚した。

は、投獄や凄惨な拷問を加え、殉教へと追い込んだ。この時、とりわけ40人の殉教者からなる勇敢な一団が犠牲となった。　――リキニウスは、もっとも、キリスト教徒に対してのみ残酷だったわけではない。彼の支配下にあったすべての民族も、彼の強欲と悪意によって多大な苦難を強いられた。彼の猜疑心と残虐さは、かつての庇護者ディオクレティアヌスの妻と娘を処刑し、皇帝マクシミアヌス、セウェルス、ガレリウスの子供たちをすべて殺害したという事実だけでも十分に証明されている。　エウセビオスの描写によれば、二分されたローマ帝国は、昼と夜という二つの対極を体現していた。東方の住民は夜の闇に包まれ、西方の住民は最も明るい昼の光に照らされていたのである。

リキニウスとコンスタンティヌスの関係は、友好的なものではあり得ず、実際そうでもなかった。リキニウスはその関係において狡猾さと二面性を露わにした。彼はコンスタンティヌスに友情を誓いながらも、密かに彼を憎み、あらゆる悪事を働こうとした。しかし、その陰謀は成功せず、両者の間では度々争いが勃発し、戦争へと発展した。　コンスタンティヌスは勝利を収め続けたが、義理の息子の偽りの約束に騙され、彼と和平を結んでいた。しかし、時が経つにつれ、両皇帝の関係はますます緊迫したものとなっていった。リキニウスの支配下で抑圧され、彼によって迫害されるキリスト教徒たちは、自らの苦難に終わりが見えなかった。　リキニウスはついに、コンスタンティヌスに対する陰謀を隠すのをやめ、公然と戦いを挑んだ。323年、両者の間で熾烈な戦争が勃発した。この戦争は、「全宇宙」をその懐に抱いていたローマ帝国におけるキリスト教の運命を、決定的に決着させるはずだった。

両皇帝はそれぞれ、自らの信仰に従って相当な兵力を集め、決戦に備えていた。まるで、老朽化した異教が、人類を刷新するためにこの世に現れたキリスト教に対して、一斉に牙をむいたかのようであった。　――戦いの前夜、リキニウスは祭司や占い師たちに囲まれ、選りすぐりの戦士たちと親しい友人たちを、偶像が立つ木陰の林に集め、厳粛な生贄の儀式を執り行い、そこにいた全員に向かってこう言った。

「友よ！　これこそが、我々の先祖から教えられた通り、我々が畏敬の念を抱くべき共同体の神々である。一方、我々に敵対する軍隊の指揮官は、先祖代々の慣習を捨て去り、虚偽の教えを受け入れ、ある未知の異国の神を称えている。彼はその恥ずべき旗印（十字架）をもって自らの軍勢を辱めている。　彼を信頼して、彼は我々に対してというよりは、むしろ神々に対して武器を振るっているのだ。　誰が正しく、誰が誤っているかは、事態そのものが明らかにするだろう――もし我々が勝利すれば、我々の神々が真の神々であることは明らかだ。もし、我々が嘲笑する、異国の神であるコンスタンティヌスの神が勝利を収めるならば、彼を崇めるがよい。　しかし、我らの神々が勝利することは疑いようもない。それゆえ、武器を手に、大胆に不信心者たちへと突き進もう！[3829]

それに対し、コンスタンティヌスは戦いの前に自らの天幕へと退き、そこで祈りと断食によって戦いに備えていた。人生のこの決定的な瞬間、彼は自らの過去を振り返り、生涯の出来事や、直面したものの無事に切り抜けた数々の危険を記憶の中でたどった。　――キリスト教迫害者たちの恥ずべき最期や、キリストの弟子たちの勇敢かつ安らかな最期を思い返し、これらすべてに全能の神の驚くべき御計画を見出し、自分自身と自らのすべての事業を、天の至高の導きと庇護に委ねた。　キリスト教徒たちは、自分たちの庇護者である皇帝のために熱心に祈りを捧げた。聖なる軍旗はコンスタンティヌスの軍団の中に高く掲げられ、天の助けへの希望を兵士たちに吹き込んだ。彼の軍勢はこの勝利の軍旗を畏敬の念をもって見つめたが、敵たちはそれを恐怖の眼差しで見つめた。　リキニウス帝国の多くの都市では、真昼間に、この旗を掲げて勝利の行進をするコンスタンティヌスの軍勢の幻影が目撃された。リキニウス自身、自らの兵士たちに敵の軍旗を凝視しないよう説得した。「なぜなら――と彼は言った――その旗は恐るべき力を持ち、我々にとって敵対的なものだからだ」。

[3829] エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』第11巻、9。

異教の祭司や占い師たちはリキニウスの勝利を予言したが、神はその勝利をコンスタンティヌスに授けた。リキニウスは迫り来る敵に対して幾度も攻撃を仕掛けたが、そのたびに敗北を喫し、逃走を余儀なくされた。　悔い改めたふりをして和平を求めつつ、密かに新たな民兵を集め、蛮族に援軍を求めた。ついに、コンスタンティヌスの息子クリスパによるビザンティウム近郊での海戦での勝利と、アドリアノープルでの戦いが、戦争の行方を決定づけた。　リキニウスは降伏したが、しばらくしてテッサロニキで処刑された。というのも、勝利者に降伏したにもかかわらず、コンスタンティヌスに対する陰謀を企てたからである。323年、コンスタンティヌスはローマ帝国全土の唯一の君主となった。

リキニウスに対するこの勝利は、地上の恵みと成功が真の神を崇める者たちに与えられることを、コンスタンティヌスに改めて、そして極めて明白かつ鮮明に確信させた。そして、彼は自らを至高者の手にある従順な道具と見なし、その成功についてただ神のみに謙虚に栄光を帰している。

「もちろん、誇りなど一切ない」と、彼はある勅令の中で述べている。「至高の存在から恩恵を受けたことを自覚する者にとって、それを自慢することなどあり得ないのだ。」　神は私の奉仕を見出し、御自身の御意志を遂行するのにふさわしいと認められた。ブリテン海から出発し、私はある至高の力の助けを借りて、遭遇するあらゆる恐怖を前に追い払い、私の影響下で育まれる人類を、最も神聖な法への奉仕へと招き、至高の存在の導きのもとで、至福の信仰を深めるようにした。

「私は固く信じていた」と彼は付け加える。「自分の魂のすべて、息をするすべて、心の奥底に存在するすべてのものを――そのすべてを、偉大なる神に捧げなければならないと。」

このように心に決意を固めたコンスタンティヌスは、勝利後、東ローマ帝国のキリスト教徒に対しても、西ローマ帝国で彼らが享受していたのと同じ権利を速やかに拡大した。　また東方においても、皇帝の名において偶像に犠牲を捧げることを禁じ、地方の統治者には主にキリスト教徒を選任し、教会の改修や建設に尽力し、迫害の際に没収された信徒の財産を返還した。

「財産を失った者は――とある勅令にはこう記されていた――　――恐れることなく、臆することなく、栄光に満ちた神聖な殉教の道を歩み、あるいは信仰の告白者となり、永遠の希望を勝ち取った者、あるいは信仰の裏切りを要求する迫害者たちに屈することを拒んだために移住を余儀なくされ、財産を失った者――そのような者たちの財産はすべて、返還するよう命じる。

近親者がいない場合、キリスト教徒から没収された財産は地元の教会に譲渡された。一方、殉教者の財産を没収された個人には、王室の財庫から報奨金が支給された。コンスタンティヌスのキリスト教的な心情は、地方長官たちへの勅書において、とりわけ豊かに、かつ特徴的に表現されていた。

– 今、――彼はここで神にこう呼びかける――偉大なる神よ、どうか懇願いたします！ あなたの東方の民に慈悲と好意を注いでください。そして、あなたの僕である私を通して、すべての地方総督に癒やしをお与えください……。　御導きのもと、私は救いの業を始め、それを成し遂げました。至る所で御旗を掲げ、　、勝利の軍勢を率いてきました。そして、いかなる公共の必要性が私を呼び寄せようとも、御力のそのしるしに従い、敵へと向かいました。　それゆえ、私は愛と畏れにおいて十分に試練を経た自分の魂をあなたに委ねたのです。なぜなら、私はあなたの御名を心から愛し、あなたが多くの試練を通して示され、私の信仰を強めてくださるその力に畏敬の念を抱いているからです……。　私は、あなたの民が平穏と安らぎを享受することを願います。また、信者たちと同様に、迷いにある者たちもまた、平和と静寂の喜びを味わうことを願います。なぜなら、そのような交わりの回復こそが、彼らをも真理の道へと導くことができるからです。誰も他者を煩わせないように……分別ある人々は、あなたご自身が聖なる御法の下で安らぐよう招かれる者たちだけが、聖く清く生きることを知るべきです。そして、背を向ける者たちは、もし望むならば、自らの誤った教えという運命に身を委ねておけばよいのです……　誰も他者に害を与えてはならない。ある者が知り、理解したことは、可能であれば隣人のために用いるべきである。しかし、それが不可能な場合は、それを放っ

ておくべきである。なぜなら、不死のための闘いを自発的に受け入れることと、処刑によってそれに追い込まれることは、別物だからである……　良心をあらゆる相反するものから遠ざけ、与えられた恵み、すなわち平和の恵み[3830]を享受しよう。

ローマ帝国全土の唯一の支配者となり、「全宇宙において」（ルカ2:1）信仰の寛容を宣言したコンスタンティヌスであったが、その帝王としての生活において「冷めかかった」（黙示録3:15）存在ではなかった。　異教を捨ててキリスト教社会の指導者となった彼は、キリスト教を帝国の最も重要な支柱、国家の権力と繁栄の主要な保証と見なしていた。彼の考えによれば、国家は、地上に神の王国を自由かつ暴力なく確立するための道を切り開き、　――キリストの精神に基づき、人類を教育し、向上させるための指針を示し、その手段を提供すべきであった。キリスト教の公然たる庇護者であったコンスタンティヌスは、依然として多くの異教の慣習や風習が残っていたローマではあまり好かれていなかった。　彼自身も、征服されたすべての民族の異教の神々が、いわば機械的に集められていたパンテオンのあるローマを好まず、かつての首都を訪れることはめったになく、また不本意ながら訪れていた。　また、暴君（マクセンティウス）から解放してくれた解放者に感謝していたローマ人たちは、皇帝の活動を理解できず、その真価を正しく評価することもできなかった。彼らは皇帝を、古くからの民の秩序を乱す者、ローマの政治的偉大さと密接に結びついた自らの宗教の敵と見なしていたのである。　彼らの不満や不平、さらには陰謀や――時には露骨な反乱さえもが、コンスタンティヌスの心に、異教とは一切無縁の、キリスト教の都という新たな首都を築こうという考えを芽生えさせ、熟成させた原因となった。　コンスタンティヌスは、ボスポラス海峡のほとりにある古くからの小さな町ビザンティウムの立地を気に入った。この地は、リキニウスに対する海戦での勝利という記念すべき場所でもあった。そこで彼はこの地を選び、帝国の新たな首都とした。自ら厳粛な行列を率いて、新しい都市の境界線を遠くまで定め、壮麗な建造物の建設を始めた。　広大な宮殿、水道、浴場、劇場が首都を彩り、ギリシャ、イタリア、アジアから運ばれた芸術の至宝で満たされた。しかし、異教の神々に捧げられた神殿はもはや建設されず、剣闘士の戦いが繰り広げられていたコロッセウムの代わりに、馬の競技のためのサーカスが設けられた。　新しい都市の最大の誇りは、真の神に捧げられた教会であり、その建設には、キリスト教の王たる庇護者自身が積極的に関与していた。　彼の配慮は、今回は礼拝堂の壮麗さだけでなく、例えば、彼の崇高な地位にふさわしい、一見些細な事柄にまで及んでいた。首都に新しい教会が建設されるにつれ、礼拝用書籍の不足が顕在化したため、皇帝はそれらの早急な作成に心を配り、　――ケサリアの司教エウセビオスには、特別の使節団が派遣され、「優秀な筆記者に、加工済みの羊皮紙に書籍を50部書き写させる」こと、そしてこれらの巻物を彼に届けるよう命じられた。また、「その労務に対する報酬については、彼が自ら決定する」とされた[3831]。

また、彼の命令により、首都の教会では、礼拝用書籍は品位があり豪華な装丁で保管されることとなっていた。

深い宗教的感性に満ちたコンスタンティヌスは、新首都において、敬虔さと神聖さの要求に則って自身の日常生活も整えた。宮殿そのものが、彼のキリスト教的な心構えを如実に反映していた。「王宮には神の教会の模倣が設けられており、皇帝は敬虔な行いへの熱意をもって他の人々に模範を示していた。　彼は毎日決まった時間に人目につかない部屋に閉じこもり、そこで神と一対一で語り合い、祈りの際に　ひざまずいて、必要なものを願い求め、時には宮廷の人々を招いて共に祈りを捧げた。彼は特に敬虔な心をもって日曜日と、主イエスの十字架の死を記念する金曜日を過ごした；これらの日には通常の業務を中断し、神への奉仕に身を捧げた。このように、コンスタンティヌスの宮殿は、かつてのローマ皇帝たちの宮殿とは全く異なるものであった。ここでは、空虚な言葉や陰険

[3830] 『正教会の歴史』（1892年版、ポベドノスツェフ編）、73–74頁。
[3831] エウセビオス。『コンスタンティヌスの生涯』、第III巻、1。

な陰謀は聞こえず、騒々しく、虚栄に満ち、しばしば血なまぐさい娯楽もなかった。　ここでは「神を賛美する賛美歌」が響いていた。皇帝の対話相手は「神の御言葉の秘儀を司る者たち」――司教や司祭たち――であり、彼の奉仕者であり、宮殿全体の守護者たちは、清らかな生活と徳を備えた者たちであった。槍持ちや護衛たちでさえ、敬虔な皇帝の模範に従っていた。　キリスト教徒である宮殿の主は、すべてにキリスト教の印を刻み込んでいた。大広間の金箔を施された天井の窪みには、金枠に収められた宝石でできた十字架の像が飾られていた。王の寝室へと通じる扉の上には、「誰の目にも見えるように」蝋で作られた彩色された絵が掲げられていた。　この絵は次のようなものであった。皇帝の顔、その頭上には十字架、そして足元には深淵へと投げ落とされる竜が描かれていた。この絵の意味はこうである。人類の敵である竜――キリスト教迫害者たち、すなわち異教の皇帝たちを象徴する存在――を、コンスタンティヌスは十字架の救いの力によって、滅びの深淵へと投げ落としたのである。　この絵は、その所有者が、御子による十字架の死によって人類に新しい命を与えた真の神を崇める者であることを、見る者すべてに強く印象づけた。

その建設者の名にちなんで「コンスタンティヌス王の都」と名付けられた新しいキリスト教の首都、　コンスタンティノープルは、かつて「ダビデ王の都」と呼ばれたエルサレムが、イスラエルのどの部族にも独占的に属していなかったように[3832]、帝国の旧首都であるローマとニコメディアの中間に位置し、その恵まれた地理的条件により、　また、聖母マリアの庇護に委ねられたこの都市は、急速に繁栄し、華やかなニコメディアのみならず、最も偉大なるローマそのものの栄光と威光を凌駕した。　そして、古代にダビデがシオンに居を構えた際、「自分は*杉の家に*住んでいるのに、*契約の箱は皮の幕の下にある*」と恥じ入ったように（2サムエル5:9–11、7:2；　1歴代誌17など）と述べたように、今やコンスタンティヌスも、美しいビザンティウムに居を構えた後、冒涜された「キリスト教の揺りかご[3833]」――主イエスの地上での生涯、その受難、死、そして復活の地――に対して無関心でいることはできなかった。　十字架の御印を畏敬の念をもって仰ぎ見ながら、彼は「命を与える木、すなわち王であり主である方がその上に十字架につけられた」その木そのものを称えようと願った。　しかし、戦士として、しかも多くの血を流してきた者として、彼は自らその儀式を行うには不適格であると考えた。皇帝のこの敬虔な意図は、彼と同等の徳を持つ母、ヘレナ皇后によって実行に移された。皇帝は彼女に全権と豊かな贈り物を与え、エルサレムへと送り出したのである。

エウセビオスの記述[3834]によれば、ヘレナはこの老女でありながら、若者のような軽快さで東方へと駆け出し、主の御足にふさわしい礼拝を捧げようとした――預言者の言葉にあるように、*「その御足の元にひれ伏そう」*（詩編131:7）。

驚くべき出来事に彩られた聖なる地において、そこではすべてが「敬虔の偉大な神秘――神の受肉」を思い起こさせる中で、この王家の老婦人の謙虚な魂の偉大さがはっきりと現れました。　そこで聖ヘレナは、自身の位にふさわしい衣装を身にまとうことなく、最も質素な服を着て民衆の群れの中に溶け込み、誰にも気づかれないよう努めながら、惜しみなく施しを配った。　主イエスに倣い、彼女は自らの謙遜を極め、自宅に処女たちを集め、もてなし、自らも単なる女中として食卓に仕えた[3835]。女王の誠実な敬虔さの模範は、キリストを信じる者たちだけでなく、非信者たちにも深い感銘を与えた。

[3832] シオン山と要塞イェヴス（エルサレム）は、ユダ族とベニヤミン族の境界線上に聳え立っていた。ダビデがカナン人の部族イェヴス人から奪い取ったこの地は、あたかも約束の地の部族分割の境界の外側に位置しているかのようであった。

[3833] 「我らの宗教のすべては、この国（パレスチナ）とこの都市（エルサレム）にその発祥の地がある」――これは聖ヒエロニムスの言葉である。『著作集』第II巻、6ページ。

[3834] エウセビオス。『コンスタンティヌスの生涯』、第3巻、42。

[3835] ルフィヌスの『教会史』、第1巻、8ページ。

「キリスト教の発祥の地」における王妃の滞在は、彼女の王子の運命の成就によっても象徴された。パレスチナでは、福音書の出来事で聖別されたすべての場所が、すでに長い間荒廃していた。異教徒たちは、キリスト教への憎悪から、それらに関する記憶そのものを消し去ろうと努めた。キリスト教徒の心にとって最も尊い場所である主の墓の洞窟は、　、がれきで埋め尽くされ、敬虔な人々の目からこのように隠されていた。　そればかりか、あたかも「十字架にかけられた神」とその崇拝者たちを嘲笑するかのように、聖なる洞窟の上に盛り上げられた丘の上に、「官能的な愛の悪魔」（ヴィーナス）を祀る神殿が建てられていた。　ヘレナの指示により、キリスト教徒にとって神聖な場所に建てられていた偶像崇拝の神殿は破壊され、その代わりに聖なる教会が建設された。　こうして、女王の希望と資金により、ベツレヘムのキリスト降誕の洞窟の上、主の昇天の地であるオリーブ山に、美しい教会が建てられた。また、聖母マリアの永眠の地であるゲッセマネや、マムレの樫の木の下で神がアブラハムに現れた場所も、教会で飾られた。

しかし、この王妃の最大の関心事は、彼女の偉大なる息子の想いを具現化し、世界の救い主が磔にされたあの「木」を見つけ出すことでした。

主の十字架が隠されていた場所は不明であったが、敬虔なヘレナは、その発見のためにあらゆる手段を尽くし、王妃としての影響力も駆使した。　そして、長きにわたる徹底的な尋問と捜索の末、その場所は、ユダヤ人のユダという、高齢の老人――ユダヤ人の教師の息子――によって、主の墓の洞窟を覆う丘の上に建てられた異教の神殿の下にあると指摘された。　女王の命令により、忌まわしいヴィーナスは追放され、その神殿は直ちに破壊された。エルサレムの聖マカリオスは冒涜された場所で祈りを捧げ、高台の整地作業が開始された。　そして、その敬虔な熱意は驚くべき裏付けを得た。土を掘り返していた信者たちは、地中から漂ってくる芳香を嗅ぎ取ったのである。　キリストの御名の栄光に対する熱意が、作業者たちを駆り立て、聖ヘレナの願いに従い、破壊された異教の神殿の資材やその下から出たすべての瓦礫を、主イエスの埋葬地からできるだけ遠くへ運び去らせた。そうすることで、偶像崇拝によって穢されたものが、偉大なるキリスト教の聖地に一切触れないようにするためであった。　主の聖墳墓の洞窟は発見され、清められました。その近く、東側では、三つの十字架と、その傍らに碑文が刻まれた板、そして聖なる釘が見つかりました。　「しかし、三つの十字架のうち、どれが救い主の十字架であるかを、どうやって見分けることができたのだろうか？」――この件をめぐる人々の困惑は、神の摂理により、次のような奇跡的な出来事によって解決された。ちょうどその時、その場所のそばを、埋葬のために死体を運ぶ行列が通りかかった。　聖マカリオスは遺体を運んでいた者たちに立ち止まるよう命じ、司教の助言に従って、発見された十字架を一つずつ死者の上に載せていった。そして、キリストの十字架が載せられたとき、死者はよみがえった。この奇跡を目撃した人々は皆、喜びに満ち、主の命を与える十字架の驚くべき力を賛美した。老女王は畏敬の念をもって尊い十字架にひれ伏し、それに口づけをした。しかし、大勢の民衆がいたため、女王の例に倣って　一人ひとりが取り戻された十字架に相応の敬意を捧げることは不可能であったため、聖マカリオスは、せめて遠くからでも聖遺物を見たいという人々の願いに応え、それを敬虔に掲げ、高台に立ち、多くの信徒たちの目の前で主の十字架の掲揚を行った。その時、信徒たちは声を揃えてこう叫んだ。　「主よ、憐れみたまえ！」これが、尊き命を与える十字架の最初の掲揚であり、326年に執り行われた。正教会はこの出来事を毎年9月14日に祝う[3836]　。当時、多くの異教徒やユダヤ人がキリストに改宗した。　改宗者の中には、聖なる十字架が保管されていた場所を教えたあのユダ

[3836] 聖十字架の挙揚の祝日――断食の日――正教会の礼拝は、主の十字架の栄光と、救い主の十字架上の死を偲ぶことに捧げられる。　徹夜祈祷において、大賛美の後、聖職者たちによって十字架が祭壇から聖堂の中央へと厳かに運び出され、そこで十字架への礼拝が行われる。　大聖堂における十字架の掲揚の儀式は、特に荘厳さを際立たせており、司教によって執り行われ、聖職者たちが「主よ、憐れみたまえ」と繰り返し唱和する中で行われる。

もいた[3837] 。聖なる十字架はその後、保存のために銀の聖櫃に納められた。聖金曜日には、礼拝のためにゴルゴタ（まもなく建設され、そこに十字架が保管されていた教会）へと運び出された。　しかし、聖ヘレナはエルサレムを去る際、命を与える聖木の断片を、息子コンスタンティヌスへの贈り物として持ち帰った。その後、ほどなくして、この祝福された王妃は世を去り、尊厳をもって埋葬された。

母である聖ヘレナから、聖十字架の断片という計り知れない宝を受け取ったコンスタンティヌスは、主の聖墳墓の洞窟を装飾し、その隣に「現存するあらゆる教会よりも壮麗な」教会を建設することを決意した……　「エウセビオスの言葉によれば、王のキリストへの愛に満ちた寛大さは、全体を統括する頭である洞窟を、見事な柱と数多くの装飾で彩った。洞窟からは、　広大な野外広場へと通じていた。この広場は輝く石で敷き詰められ、三方を途切れることのないポルティコが取り囲んでいた」。　そして、キリスト教徒である王が、洞窟の東側に建てられた神殿の建設にどれほど驚くべき細心の注意を払っていたかについては、コンスタンティヌスがエルサレムの聖マカリオスに宛てた手紙の中の以下の文章が、最もよく物語っている。　「神殿の建設および壁の精巧な装飾に関しては、その責任をパレスチナの統治者たちに委ねたことを知っておいてほしい。私は、彼らの手配により、芸術家や職人、そして建設に必要なすべてのものが直ちにあなたのもとに届けられるよう手配した。　さて、柱や大理石については、あなたが最も貴重で有用だと認めるものを、よく検討した上で、少しも遅れることなく私に書き送ってください。そうすれば、あなたの手紙から、どのような資材がどれほど必要かを確認し、あらゆる場所からそれらを調達することができます。　さらに、神殿の天井については、モザイク式が良いのか、それとも別の仕上げが良いのか、あなたの好みを聞きたい。もしモザイク式であれば、その他の部分は金で装飾することができるだろう。　貴殿は、できるだけ早急に、前述の統治者たちに、必要な職人や芸術家の数、および費用について知らせてください。また、大理石や柱だけでなく、どのモザイクが最良であると認めるかについても、直ちに私に報告するよう努めてください。」

ちなみにコンスタンティヌスは、使徒の数にちなんで十二本の柱で神殿を飾り、その頂上に銀で鋳造された花瓶を置くのが良いと自ら考案した。　それゆえ、この神殿が美の奇跡そのものであり、その姿で同時代の人々を感嘆させたのも不思議ではない。歴史家エウセビオスは、この最初のキリスト教皇帝の敬虔な熱意の記念碑について、次のように記述している。「バシリカ（神殿）は、計り知れない高さを持ち、幅と長さが並外れた、並外れた建造物である。　その内部は色とりどりの大理石で覆われており、外側の壁は、磨き上げられ、互いに密接に組み合わされた石が輝きを放ち、極めて美しい光景を呈しており、大理石に決して引けを取らない。　ドーム状の天井は見事な彫刻で飾られており、それはまるで大海のように、互いに連結したアーチによってバシリカ全体に広がり、至る所で黄金に輝き、まるで光の束のように聖堂全体を照らし出している。　その中心となるのは、バシリカの最端（東側）に位置する半円であり、十二使徒の数にちなんで十二本の柱で囲まれており、その頂上には銀で鋳造された大きな花瓶が飾られている――これは王自らが神に捧げた素晴らしい献品である」。

しかし、敬虔な皇帝は、キリスト教に対する姿勢を、その外見的な栄光の醸成にとどめることはなかった。彼は、キリスト教会の内面的生活にも心を配っていた。コンスタンティヌスの考えによれば、教会は国家生活の最も重要な支柱となるべきであり、宗教的統一こそが帝国の繁栄を保証する強固な基盤でなければならない。　教会は、その威厳と外見的な華やかさで輝きつつ、その内なる平和によって異教徒の民を惹きつけ、国家全体を徐々に、キリストの唯一の御霊によって生かされる、内的に結束した一つの有機体へと変えていくべきであった。　このような教会の統一と繁栄こそが、

[3837] ユダ（洗礼名はキリアコス）は、後にエルサレム総主教となり、ユリアヌス「背教者」の治世下で殉教した。その記念日は10月28日である。

「思慮深い皇帝に平和な日々と安らかな夜をもたらした」のであり、彼はそこに、自身と、その支配下にあるすべての民の幸福を見出していたのである。

しかし、この「平穏な日々と安らかな夜」が、偉大な皇帝に常に、また容易に与えられたわけではなかった。　彼の時代、すでに殉教という勝利の冠を戴き、異教よりも優遇される権利さえ与えられていたキリストの教会は、迫害という苦難の時代に芽生え、熟成した内部の混乱に揺さぶられていた。　コンスタンティヌスがローマで即位するやいなや、彼は驚きと悲しみをもって、帝国の広範な地域が「唯一の父」の子らによる内紛に揺れていることを知った。– アフリカのキリスト教徒の間で、カルタゴの司教にセシリアヌス――「裏切り者」[3838] ――が任命されたことをめぐり争いが勃発した。彼の反対派はマイオリヌスを司教に選出したが、まもなく――マイオリヌスの死後――彼らの反抗の主たる首謀者であるドナトゥス[3839] をその地位に就けた。 後者の支持者たち――「ドナティスト」――は、「ノヴァティアヌス派」[3840] と結託し、自分たちだけがキリストの教会を構成していると主張し、狂信的な熱狂の中で、敵対者たちに対する誹謗中傷をためらわず、さらには彼らから教会を暴力で奪い取ることもあった。事態は、　敵対する両陣営の間で流血の争いに発展することも珍しくなかった。　彼らを和解させ、相互の訴えを検討するため、コンスタンティヌスはまず、自身の「愛し、尊敬する」司教オシウスをカルタゴへ派遣し[3841] 、同時に、現地の困窮しているキリスト教徒たちに金銭的援助を配るよう命じた[3842] ； その後、ドナティスト問題に関して皇帝の直接の命令により、ローマでの小公会議と、アレラートでの「各地の多くの司教」による公会議の2つの公会議が招集された[3843] 。 これらの公会議によって、騒動を起こしていた分派者たちに対して下された判決は、ついに316年にミラノでコンスタンティヌス帝自らが議長を務めて確認され、この問題は一見して収束したようであった。

しかし、敬虔な皇帝がキリスト教の現状を知るにつれて、それはキリストの教会の聖なる一致という彼の理想像をますます裏切るものとなっていった。コンスタンティヌスが即位当初に頭を悩ませたドナティスト問題の重要性は、その本質というよりは、争う者たちの情熱の激しさにこそあった。 323年、リキニウスに勝利し、帝国全体の単独統治者となったコンスタンティヌスは、国家全体をより良く、より強固な基盤の上に再構築したいという真摯な願いに駆られて、東方へと向かった。 彼の計画において、第一の地位を占めていたのはキリスト教教会であり、彼の考えによれば、この教会こそが、政治的に結束した世界帝国を精神的に統合すべき存在であった。　しかし、東では、西よりもさらに過酷な失望が彼を待ち受けていた。彼がここに到着したのは、アリウス派の異端[3844] によ

3838 この呼称は、迫害の時代に、恐怖のあまり異教徒に自らの信仰の対象を差し出した者たちに対して、キリスト教徒たちが用いたものである。セシリアヌスについては、迫害者たちに聖書を差し出したと噂されたが、この告発は虚偽であることが判明した。

3839 ドナトはカルタゴの長老であった。

3840 ノヴァティアヌス派は、迫害の際に堕落した者や、そもそも重罪――「死に至る罪」――を犯した者たちを、悔い改めではなく、再洗礼を通じて教会の交わりに受け入れるべきだと教えた。

3841 スペイン出身のオシアは、60年以上にわたり司教を務め、ディオクレティアヌスの迫害の際、キリストのための殉教者として名声を博した。彼はコルドバの司教であった。コンスタンティヌス帝は彼を宮廷に招き、愛情と信頼を注いだ。当時のキリスト教社会では、コンスタンティヌス帝がこの寵愛する顧問から強い影響を受けていたという見方が広く流布していた（ソクラテス『教会史』1, 7）。

3842 エウセビオス『教会史』第10巻、6章。

3843 同上、X、5。

3844 アリウスは、イエス・キリストは永遠かつ始まりなき神ではなく、父と同質ではなく、父の被造物であり、かつては存在しなかった時期があったと、神を冒涜するような教えを説いた。アリウスはアンティオキアで殉教者ルキアノスの学校にて神学教育を受け、　アレクサンドリアで長老となった彼は、その知的な才能と厳格で節制の取れた生活によって、人々の注目を集めた。知性と学識に驕ったアリウスは、司教アレクサンドロスによる諭しや勧告に耳を貸さず、司教が招集し彼を非難した公会議にも従わなかった。　そればかりか、その雄弁さで聖職者や民衆を魅了し、彼は自らの偽りの教えの雑草を、管轄教会の境界を越えて広めようと努めた。数多くの支持者を擁していた彼は、東方の諸教会の多くの司教

って煽られた論争が、何の抑制も受けずに極限まで激化していた時期であった。　エウセビオスはこの時代を次のように描写している。「教会の指導者たちが互いに論争を繰り広げただけでなく、民衆も分裂していた。事態は、神の教えが異教の劇場においてさえ侮辱的な嘲笑の的となるほど、不適切な事態にまで達していた」。この時代は、主イエス・キリストの神性を冒涜する者たちの活動にとって好都合な時期であった。　コンスタンティヌスの義兄弟であるリキニウスは、当時、統治の晩年を迎えており、かつてコンスタンティヌスと共にミラノ勅令（宗教寛容に関する勅令）に署名した人物であったが、キリスト教徒全般を、自分に対して信頼できない人々として疑いの目で見なし、彼らを憎み、さらには残酷に迫害した。　しかし、アリウス派の異端によって引き起こされた両者の対立については、彼は自分にとって望ましく、有益な現象と見なしていたのかもしれない。これらの論争は教会の力を弱め、強大な義兄に対する彼の企てを後押ししてくれるという希望を彼に抱かせたのである。そして、リキニウスのこうした計算は的外れではなかった。　例えば、ニコメディアのエウセビオス司教について、コンスタンティヌス自身は次のように述べている。「彼は私にスパイを送り込み、暴君（リキニウス）に、ほとんど武力に等しい支援さえ提供していた」[3845]。

ニコミディアに到着したコンスタンティヌスは、アリウス派によって煽られた内紛に深く衝撃を受けた。とはいえ、彼はこれらの出来事の重要性をすぐには理解しなかった。　彼自身も、西から同行して来た神聖な教えの秘儀参入者たち　も、ここではニコミディアの住民たちからアリウス事件について一方的な説明を受けました。ニコミディアの住民たちは、教義上の問題を、生命に関わる敬虔な信仰の対象ではなく、学術的研究の領域、さらには単なる言葉の論争と見なしていたのです。それにもかかわらず、コンスタンティヌスはアリウス派の問題を無視しませんでした。　当初、彼はアレクサンドリアへ広範な和解の書簡を送り、アレクサンドロス司教とアリウスに対し、互いの不和を止めるよう説得力のある要請を行った。皇帝の見解によれば、不注意で辛辣な問いかけをした司教にも非があり、司教に従わず交わりを断ったアリウスにも責任があった。　彼は両者に、互いに議論を交わしつつも平和に共存する哲学者たちを見習うよう勧めている。さらに、両者は共通の基盤に立っている。すなわち、両者とも神の摂理を認めているため、和解するのは容易である[3846]...

この書簡とともに、コンスタンティヌスは、アレクサンドリアに自身の「寵愛する」司教オシアを派遣した。オシアは現地でこの件を調査し、アレクサンドリアの人々の和解を図るよう命じられていた。オシアは皇帝の命を果たした。　「確かに彼は対立する両者を和解させることはできなかったが、論争の調査を通じて、アリウス派の異端は単なる空虚な戯言ではなく、キリスト教信仰の根幹を揺るがす脅威であり、キリスト教そのものの否定へとつながるものであるという確信を得たのである。」 324年、コルドゥブのオシアは皇帝のもとへ戻り、アリウス派運動がもたらす深刻な危険性を説明した。そこでコンスタンティヌスは、教会を和解させる唯一の手段であると彼が考えていた「全地公会議」を招集することを決意した。　皇帝の考えによれば、この公会議は、当時教会の平和を乱

たちに対し、苦情を訴える使節団を派遣した。　そこには彼の支持者がおり、その筆頭となったのがニコメディアのエウセビオスであった。彼は以前、ルキアノスの学派でアリウスと知り合いであった。「学識豊かな人物」であるだけでなく、王家の親族でもあり、それゆえに有力者でもあった。　首都の司教であったエウセビオス（当時はまだリキニウス皇帝が存命で、その居城はニコミディアにあった）は、アレクサンドリアの司教による裁判の権威を認めなかった。　彼はアリウスへの手紙の中で次のように答えた。「あなたは見事に思索を巡らせているが、すべての人々がそう思索することを望むがよい。なぜなら、創造されたものは、存在へと導かれるまでは存在しなかったことは誰にでも明らかであり、存在へと導かれたものには始まりがあるからだ」。 そのため、アレクサンドリアの司教は悲惨な立場に追い込まれた。318年頃、アレクサンドルは極端な手段に踏み切った――100人の司教からなる公会議を招集し、アリウスとその支持者たちを教会から破門し、神を冒涜する者をアレクサンドリアから追放し、回勅によってすべての教会にその旨を告げた（『神学報』 1906年12月号：A. A. スパスキー、584ページ）。この措置は、アリウス派をめぐる論争をさらに激化させ、その炎を東方全土に広めた。アリウス事件はもはや局地的な性格を失い、教会全体に関わる問題となった。

[3845] 『神学報』1906年12月号、694頁。

[3846] エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』II、64–72。

していた「主たる敵」、すなわち冒涜的なアリウス派の異端に対して「戦いを挑む」とともに、その他の諸問題についても検討し、キリスト教徒の内部生活のあり方に関する決定を下すべきであった[3847]。

皇帝の権限により、全地公会議はニカイアで開催されることが決定された[3848]。コンスタンティヌスは、招集された司教たちが会議会場へ容易に旅できるようあらゆる手配を行い、ニカイアに到着した者たちの滞在費は国費で負担した。 ニカイアには、エジプトやパレスチナ、シリアやメソポタミア、小アジア、ギリシャ、ペルシア、アルメニア、そしてドナウ川以西のゴート族から聖職者たちが集まった。ローマからは、高齢の司教に代わって、二人の長老が派遣された。 集まった聖職者たちの中には、アリウスを最初に非難した高齢のアレクサンドリアのアレクサンドロス（彼は、アリウス派との闘いにおいて勇敢かつ巧みな戦士であった大助祭アタナシオスを伴っていた。アタナシオスは後に「大」の称号を授かり、アレクサンドリアの大司教となった）、リキアの都市ミルの聖ニコライ、奇跡行者聖スピリドンらがいた。 総計で（司教たちに加え、長老や助祭もいたため）2000人以上が公会議に集まり、聖職者だけでも318人に上った。

公会議は325年6月、皇帝宮殿の広大な広間で開幕した。部屋を取り囲むように司教たちのための席が設けられ、中央には、真理の確かな証しとして聖書が置かれた机があった。 全員が集合すると、コンスタンティヌスは皇帝としての威厳を存分に漂わせつつ、武装した護衛を伴わず、キリスト教徒の宮廷人たちに囲まれ、金や宝石がきらめく最も豪華な帝王の衣装を身にまとって現れた。 その姿は集まった人々、とりわけ遠くの国々からやって来て、皇帝の御顔もその威厳も一度も目にしたことのない者たちを深く感銘させた。 しかし、彼自身もまた、キリストの教会の栄えある牧者たちがこれほど多く集まっているのを見て戸惑った。その中には、厳格な修行者や奇跡を行う者、殉教者や、信仰のために手を焼かれ、目を刺された者たち[3849]がおり、彼は黙って、うつむいたまま、彼のために用意された金の玉座へと歩み寄り、聖職者たちが座るよう招くまで立ち尽くして待った。 その後、アンティオキアのエウスタティオスと、歴史家 であるケサリアのエウセビオスによる歓迎と感謝の言葉を聴き終えると、コンスタンティヌスは自ら集まりに向けて演説を行い、これほど偉大な教父たちの集まりを目の当たりにできた喜びを表明し、論争の的となっている問題について平和的に解決するよう彼らに懇願した。 「神は、迫害者たちの不義な権力を打倒するのを私に助けてくださった」と彼は語った。「しかし、私にとって、いかなる戦争や流血の戦いよりもはるかに悲痛であり、神の教会における内なる争いほど破滅的なものはない」。

アリウス派は公会議に赴き、そこで勇敢かつ自信に満ちた態度で振る舞った。彼らは、自分たちの主張が完全かつ全面的に打ち砕かれることになるとは予期していなかった。それどころか、彼らは自らの企てが幸先の良い成功を収めることを期待していた——彼らの側には17人もの司教が味方していたからである。 その先頭には、王宮とのつながりを持つ首都の大司教が立っていた。アリウス

[3847] エウセビオス『コンスタンティヌス伝』III17、V:6。

[3848] ニカイア（現在のイシク）は、現在は貧しい村であるが、当時は広大で豊かな都市であり、ビティニア沿岸地方の主要都市であった。海とは湖を介してつながっており、海路からも陸路からも同様にアクセスが容易であった。 そこには広大な皇帝の宮殿があり、公会議に集まった司教や聖職者たちが余裕を持って収容できる建物も数多く存在していた。ニカイアは、当時の皇帝の居城であったニコメディアからわずか20マイルしか離れておらず、皇帝にとっては公会議に参加するのに非常に都合が良かった。 エウセビオスの示唆によれば、ニカイアが公会議の開催地として選ばれた背景には、その地名そのもの——「勝利」（ロシア語訳）——が影響を与えたようである。エウセビオス『コンスタンティヌス伝』III, 6。

[3849] 公会議の参加教父の数については、歴史家によって見解が一致していない。例えば、エウセビオス（『コンスタンティヌスの生涯』第3巻、8章）は250人と数えているが、聖アタナシオス・アレクサンドリアスは自身の著作において、また皇帝自身も300人程度と述べている。 318という数字は、聖アタナシウスがアフリカの教会宛てに送ったある書簡の中で言及している。ギリシャ文字での表記「TIH」は「イエスの十字架」を連想させるため、広く一般に受け入れられ、その結果、ニカイア公会議は「318人の教父による公会議」という名称で呼ばれるようになった。

派は、たとえ公会議が自分たちの見解に同意しなくても、厳しい非難を下すことはないだろうと期待していた。

アリウスは、その雄弁の力を尽くして自らの教義を執拗に擁護した。しかし、公会議の教父たちが示した、真の教会教義に対する揺るぎない、確固たる献身こそが、神を冒涜する者の偽りの知恵を恥じ入らせたのである。　正統信仰の擁護者たちは、アリウス派の異端の本質が何にあるかをよく理解しており、深い宗教的感性と真に啓発された知性をもって、それを堂々と反駁した。　とりわけ、アレクサンドリアの助祭アタナシウスは、言葉の力と異端の妄言を暴く鋭さにおいて際立っていた。彼の言葉は、異端者の詭弁を、まるで薄い蜘蛛の巣のように引き裂いた。　論争は白熱し、長期に及んだ。コンスタンティヌスは、論争する者たちを和解させ、友好的な解決へと導こうと自らの影響力を駆使したが、それは徒労に終わった。議論が続くにつれ、アリウス派が真理からいかに遠く逸脱しているかが、ますます明らかになっていった。　アリウス派の指導者であるニコメディアのエウセビオスが公会議に提出した信仰告白には、「神の子」は「被造物」であり、　「被造物」であり、「かつては存在しなかった時期があった」という考えが明確に示されていたが、これは虚偽かつ不敬虔なものとして、公会議の教父たちによって満場一致で退けられ、それが記されていた巻物そのものが引き裂かれた。

このようにアリウス派を断固として非難した後、公会議の教父たちは、信徒たちに正統な教義の正確な告白――信仰告白――を与えることを決定した。　ケサリアのエウセビオス司教は、古くから彼の教会で使用され、ほぼ例外なく聖書からの引用句で構成されていた「洗礼の信条」を、彼らの検討に提出した。　教父たちはこの信条を好意的に受け入れたが、そこに異端的な考えが読み込まれる可能性を断固として排除するため、教会真理を完全に定義するような表現に、信条中のいくつかの一般的な表現を置き換える必要があると認めた。　公会議に出席していた皇帝は、教父たちと同様にケサリア信条を承認し、これに全面的に同意することを表明した。　しかし同時に、コンスタンティヌスは、神の御子および御子と父なる神との関係に関する教会の考えを表現するために、予備会議の段階ですでに教会の指導者たちが合意していた表現――すなわち、御子を「父と同質」であると称する表現――を信条に盛り込むことを提案した。　皇帝の発言は公会議によって満場一致で受け入れられ、キリスト教の中心的な教義である主イエスの位格に関する教義の決定的な基礎となった。

「洗礼の信条」は修正され、公会議によって、全カトリック教会にとって揺るぎない新たなニカイア信条が制定された。

ニカイアにおける教父たちの最終的な厳粛な集会は、325年8月25日に皇帝宮殿で執り行われた。これは、コンスタンティヌスの即位20周年[3850]と重なった。

公会議の聖父たちを見送る際、コンスタンティヌスは別れの演説の中で、彼らに互いに和合するよう懇願した。

「注意せよ」と彼は言った。「あなたがたの間で苦い論争が起こらないように。特別な知恵を示した者に対して、誰も嫉妬を抱いてはならない。各人の尊厳は、教会全体の共有財産であると見なすべきである。」　高貴で優れた方々よ、身分の低い者たちを見下してはならない。誰がより優れているかは神のみがご存知である。完全さはめったにないものであり、最も弱い兄弟たちには寛容であるべきだ。平和な調和こそが何よりも尊い。　不信仰者を救うにあたっては、学識ある議論によって誰もが改心できるわけではないことを心に留めなさい。教えは、医師が様々な病気に応じて薬を処方するように、一人ひとりの異なる気質に合わせて調整されなければならない。

こうして、敬虔な皇帝が、かつては神ご自身を証人として挙げながら公言した切なる願い――「その領土内のすべての民族の、　　なる神性に関する教えを、一つの共通の体系に統合すること」――が成就したのである。　皇帝の聖なる宗教的感性から導き出されたこの偉大な思想――その実現

[3850] エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』第2巻、65。

を、皇帝は心からの願いをもって自らの生涯の課題として掲げていた――この、内容の崇高さと範囲の広さにおいて驚くべき、偉大なるコンスタンティヌスの思想は、今や人々の共通の意識に浸透し、キリスト教世界全体の財産となった。　それだけでなく、この思想をキリスト教の生活の中で実現するために、敬虔な皇帝は最も確かな道――全地公会議――をも示した。その道を歩むことで、キリストの羊の群れは、すでに召された者も、まだ召されていない者も、神の恵みによって、間違いなく天の父の御庭に入り、真の命を得るのだ（ヨハネ10:9）。そして、この真に勝利に満ちた、使徒に等しい王の祝賀は、当時、彼にとって喜ばしい出来事――母である皇后ヘレナがエルサレムから贈り物として持ち帰った、主の命を与える十字架の一片という計り知れない宝の受領――によってさらに彩られた。

コンスタンティヌスはその後さらに10年以上生き、在位中の全期間を通じて、変わらぬ忠誠をもってニカイア信条[3851]を堅持し、自らの姿をもって模範を示すことで、王国におけるキリスト教の敬虔の精神を確立しようと熱心に努めた。　幅広い一般教養、とりわけ神学の深い知識を備えていた彼は、信仰や敬虔、キリスト教的生活のあり方について、各教会の首座司教たちと広範な書簡のやり取りを行い、またしばしば宮殿で、宮廷の重臣や民衆が集まる場で、「神聖な」説教さえ行っていた。　彼の勤勉さは並外れており、怠惰を一切許さなかった。すでに高齢となっても、自ら手書きで膨大な立法文書を執筆することさえ、負担とは考えていなかった[3852]。生まれつき誠実で寛大、かつ謙虚な彼は、自身の帝王としての威光や、民衆の群衆による騒々しい歓声に惑わされることはなかった――むしろ、そうした歓声は彼に退屈さえ感じさせた。　高い道徳的境地に立っていたコンスタンティンは、自分と関わるすべての人々を、その同じ境地へと引き上げたいと願っていた。ある時、彼はある強欲な貴族を次のように説得した。彼を自分の元へ招き入れ、その手を握って言ったのである。

「我々の貪欲さは、どこまで広がるというのか？」

そして、槍で人の背丈ほどの範囲を囲みながら、こう言った。

「たとえお前が世界のすべての富を手に入れ、地上のあらゆる要素を支配したとしても、この一塊の土地以上のものは何も利用できないだろう。ましてや、この土地さえも手に入れられるかどうかは定かではないのだ！」

もう一つの例：ある高位の聖職者が、王を「至福なる方」と呼び、「彼は現世においてすでに万物に対する絶対的な支配権を授かり、来世では神の御子と共に統治することになる」と諂うような言葉を述べたのを聞いたコンスタンティヌスは、その諂い者にこう答えた。

「むしろ、皇帝のために祈ってほしい。彼も来世において、神の僕となるにふさわしい者となれるように。」

同時代の証言によれば、皇帝の慈善活動は絶え間なく行われており、「朝から晩まで、誰に恩恵を施すべきかを探し求めていた」という。　乞食や、路頭に迷った人々には、金銭、食料、そしてきちんとした衣服を与えた。親を亡くした子供たちには、父親の代わりに世話をし、両親を失った娘たちには結婚相手を見つけ、自身の国庫から持参金を支給した。特に復活祭の日には、多くの慈善活動を行った。　コンスタンティヌスは、新たな首都において、復活祭の夜には街中の至る所で高い蝋の柱――「まるで炎のランプのように」――を灯すという慣習を導入した。それにより、神秘的な夜は昼よりも明るく照らされ、朝が訪れるやいなや、　コンスタンティヌスはすべての貧しい人々に右手を差し伸べ、贈り物を配った。皇帝は、息子の結婚といった家族の喜びの行事の際にも、同様の寛大さで施しを行った。　――後者の場合、招待客のために豪華な宴や食事が催され、その歓びは宮殿

[3851] アリウス派の異端は、公会議後も完全に沈静化したわけではなかった。アリウス派は、その狡猾な策略によって時折皇帝の信頼を勝ち取り、皇帝の寛大さと平和愛好の精神を悪用して、時折正統派に対して不適切な攻撃を仕掛けていた。特に聖アタナシオス大聖人は、彼らから多くの苦難を強いられた。

[3852] エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』第IV巻：66、IV

から街路にまで溢れ出し、――皇帝は女性たちの輪舞を温かく迎え入れた。しかし、皇帝の治世においては常に、あらゆる場面で完全な節度が守られ、下品で誘惑的な行為は一切許されなかった。

コンスタンティン皇帝の晩年、とりわけ最期の数日間とその死は、彼のキリスト教的な敬虔な心構えにふさわしい結末であった。 コンスタンティンは、死のずっと前から、 その死に備え始めていた。――彼は新たな首都に、聖使徒たちの名に因む教会を建立した。この教会は、とりわけ使徒たちの栄光を称える12の聖櫃で飾られており、それらの聖櫃の中央には墓所が設けられていた。 当初、なぜここに墓所が設けられたのかは不明だったが、後にその理由が明らかになり、敬虔な皇帝が自らのためにこの墓所を造らせたことが判明した。コンスタンティヌスにとって、死という概念は、自身の体力が衰え始めた途端、深く思索を巡らせる対象となった。

337年、コンスタンティヌスはコンスタンティノープルで最後となる盛大な復活祭を祝ったが、まもなく病に倒れた。 死が近いことを予感して、彼は聖なる行いに身を捧げた。頻繁にひざまずき、神の前で熱心に祈りを捧げた。また、医師の助言に従い、この頃エレオノポリスという町に移り、そこで温浴療法を受けた。

しかし、コンスタンティヌスはこの時点に至るまで、まだ洗礼を受けていなかった！これは現代の私たちにとっては極めて奇妙な現象に思えるかもしれないが、キリスト教会の古代においては、多くの人が成人してからの年齢、あるいは老齢になってから洗礼を受けていた。ある者は、この偉大な秘跡に対する深い敬意から、それを受けるには長い準備期間が必要だと考えていたためであり、――また、ある者は悪意ある欲望を抱きつつ――まずは罪深い快楽に浸り、その後で新たな霊的な生活へと生まれ変わろうとした（神が彼らを裁かれるであろう！）。 幼い頃から心にキリストを宿し、かねてより魂の底でキリスト教徒となっていたコンスタンティヌスは、自らの罪深さを謙虚に自覚していたため、洗礼を先延ばしにし、生涯をかけてこのための準備を整えようとしていた。さらに、彼の心にはヨルダン川の水で洗礼を受けたいという切実な願いが秘められていた。

エレオノポリスで安らぎを得られず、肉体の力が極度に衰えを感じたコンスタンティヌスは、ニコミディアへと渡り、そこで司教たちを召集して、聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願した。

洗礼に先立ち、死を目前にした皇帝は次のように語った。

「私がかねてより切望し、救いの時として祈り求めてきた、待ち望んだ時がやって来た。今こそ、私たちも不死の印を受け、救いの恵みに与る時である。私は、私たちの手本として救い主ご自身が洗礼を受けられたヨルダン川の水辺でこれを行うつもりだった。しかし、何が有益かを御存知なる神は、ここで私にこの恵みを授けてくださった。」

聖なる洗礼を受けたコンスタンティヌスは、「霊において喜びに満ち、その心は生き生きとした喜びで満たされていた。洗礼の際に、光のように輝く白い衣を身にまとった彼は、死ぬまでそれを脱ぐことはなかった。 彼は白い覆い布で覆われた寝台で息を引き取り、王としての象徴である紫の衣については、「神の僕」である彼はもはやそれに触れることさえ望まなかった。王は「声を高めて」最後の感謝の祈りを捧げ、次のような言葉で締めくくった。

「今、私は真に幸いな者であると自覚している。なぜなら、私は神の光に与り、不死の命に与るにふさわしい者とされたという、揺るぎない信仰を持っているからだ。」

偉大にして使徒に等しいコンスタンティヌスは、337年のペンテコステの日に、在位32年目、生後65歳でこの世を去り、王位を三人の息子たちに遺した。 その遺体は盛大な儀式をもって、彼が築いた都市コンスタンティノープルへ移送され、遺言に従い、聖使徒教会内の、彼自身が用意した墓所に安置された。今や彼は、私たちの神であるキリストの永遠の御国において、果てしない命を生きておられる。キリストに、父と聖霊と共に、世々限りなく栄光と誉れがあるように。 アーメン。

トロパリオ、第8調：

天にあなたの十字架の御姿を仰ぎ見、またパウロが人間からその召命を受けなかったように、主よ、王たちの中のあなたの使徒を、あなたの御手の中に王都としてお置きください。唯一の人を愛する方よ、聖母マリアの祈りによって、彼を常にこの世において救い給え。

コンダク、第3調：

今日、コンスタンティンは母エレナと共に、すべてのユダヤ人にとって恥辱であり、信仰深い王たちに対する敵への武器である、至聖なる十字架を現わします。それは、私たちのために現れた大いなるしるしであり、戦いの場における恐るべき力なのです。

聖なる信仰深い公爵コンスタンティンとその子ら、ミハイルとテオドール、ムロムの奇跡行者の記念日。

5月21日の記念日

この聖なる信仰深い大公コンスタンティン・スヴィャトスラヴィチは、聖なる洗礼によってルーシの地をキリスト教化した大公ウラジーミルの家系に由来する。 1192年、[3853] は、息子であるミハイル公とフェオドール公を伴い、栄光ある都市シェヴァからリャザン地方のムロムへとやって来た。当時、この都市には、まだ真の神[3854] の知識に目覚めていない異教徒たちが住んでいた。 聖公コンスタンティンのずっと以前、彼の親族であり、大公ウラジーミルの息子である敬虔な公グレブは、ムロム城の支配権を任されていたが、この地を掌握し、住民を聖なる洗礼を受け入れるよう説得するために多大な努力を払った。しかし、それを成し遂げることはできず、2年間、そこから2ポプリシュの距離離れた場所で暮らしていた[3855] 。 その後、スヴィャトポルクは偽りの口実で彼を父のもとへ呼び出し、その道中で彼は殺害された[3856] 。そして、この聖なる敬虔な公コンスタンティンは、息子たちおよび彼に従う軍勢を率いて、都市のすぐ下でムロムの住民たちと戦いを交え、非常に大規模な戦闘が繰り広げられ、その中で敬虔な公ミハイルが戦死した。 その後、彼は再び都市の住民たちと戦いを繰り広げ、彼らに勝利を収めた後、ムロムを自らの支配下に置き、そこで公として統治した。

まず第一に、彼は町の古い山岳地帯に、聖母マリアの受胎告知を称える最初の教会を建立し、そこで戦死した息子である敬虔な公ミハイルを埋葬した。その後、異教徒であった町民たちをキリス

[3853] コンスタンティン＝ヤロスラフ・スヴィャトスラヴィチは、当初チェルニヒフ公、後にキエフ大公（1073年～1077年）であったスヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチの末子であり、ヤロスラフ大公の孫、聖ウラジーミルの曽孫であった。1097年のリュベチ公会議における諸公の決定により、ムロムはコンスタンティン・ヤロスラフの領地として承認された。彼は聖グレブに次いでムロムの初代公となり、その後のムロムおよびリャザン公家の始祖となった。 聖コンスタンティンは1096年から1129年に死去するまで、ムロムで統治した。『プロローグ』に記されている、聖公がムロムに到着した年として1192年（1092年？）とされている記述は、誤りと見なすべきである。

[3854] ムロム――ロストフ・スーズダリ地方北部の中心地であり、現在はウラジーミル州の取るに足らない郡庁所在地――は、古代にはムロマ、 メリア、モルドヴァといったフィン系部族の集落に属していた。この町は異教徒の異民族が居住していたにもかかわらず、現在に至るまで存続しているスパースキー修道院がすでに存在していた。ラヴレンティエフ年代記では、1096年の項で同修道院について言及されている。 ムロムはチェルニヒウ公爵の領地であったことから、この修道院はチェルニヒウの司教たちの尽力によって設立されたと考えられる根拠がある。

[3855] ポプリシュチェとは、690サジェーニに相当する距離の単位である。聖グレブはムロムの住民からの抵抗に遭ったため、ムロムから12ヴェルスタ離れたイシュネ川沿いに定住したとされている。

[3856] 聖公グレビの没年は1015年である。彼の記念日は9月6日に祝われる。

ト教へと改宗させ、聖なる洗礼を授けた。　この事業の成功を神に感謝した後、聖公はその後、多くの教会を建設し[3857]、自身の都市に司教座を設立した。 その後、真の信仰とあらゆる面での清らかさの中で生涯を送り、常に貧しい者や孤児の擁護者であり続けた彼は、まもなく主のもとへ旅立った。彼の死は民に大きな悲しみをもたらした。皆が彼を父のように悼み、彼が建立した受胎告知教会に、息子の敬虔な公爵ミハイルとフェオドールのそばに埋葬した。

その後、聖公コンスタンティンの親族である敬虔な公ゲオルギー・ヤロスラヴィチが、聖母マリアの受胎告知教会（[3858] ）を再建し、それ以来、主は聖公コンスタンティンとその息子たちを栄光に包まれた。というのも、彼らの棺の周囲で奇跡が起こるようになったからである。

それから長い年月が経った1553年、全ロシアの敬虔なツァーリ兼大公イオアン・ヴァシリエヴィチは、不敬虔なタタール人に対してカザンへの遠征に向かう途中、ムロム市に立ち寄り、ここで 2 週間滞在した。　聖なる奇跡行者たちの棺の前で祈りを捧げた後、彼は遠征から勝利して帰還できれば修道院を建立すると誓った。神の御加護により、彼は栄光あるカザン市を攻略し、王都モスクワに戻ると、聖なる奇跡行者たちの棺のそばに石造りの教会を建てるよう命じた。　そして、この教会のための堀を掘り始めたところ、聖なる公爵たちの聖遺骨が完全な状態で、微塵も傷ついていないことが発見された。教会の建設が完了すると、教会の壁のニッチに特別な場所が設けられ、そこに彼らの聖遺骨が安置された。　敬虔なツァーリであり大公であるイオアン・ヴァシリエヴィチ、全ロシアの独裁者は、当時、リャザンの司教グリーに新しく建てられた教会を聖別するよう命じ、その聖別のために様々な教会用具を送った。　教会は聖別され、その敷地内に修道院が設けられ、この出来事は盛大に祝われた。当時、聖なる公爵たちの棺の周りでは多くの奇跡が起こり、それらは今もなお、キリスト・神の栄光のために続いている。

トロパリオ、第4声：

コンスタンティンは今日、喜びに満ちて歓喜している[3859] 、聖三位一体の御座の前に立ち、自らの祖国が霊的な威光に輝いているのを見て[3860] 、彼に従ったのは、その息子たちミハイルとフェオドールである。そして、三人は共に、我らの魂のために祈っている。

コンダク、第8調：

立派な将軍であり、正教の公コンスタンティンとその息子は、彼を指導者かつ守護者とする祖国を称え、叫びを上げる。彼らが偶像の惑わしと汚れから救い出されたからである。このゆえに、我らは彼にこう叫ぶ。「喜びなさい、至福の公コンスタンティンよ。」

6月4日

5月22日（旧暦）

[3857] こうして、彼らは聖ボリスと聖グレブに捧げる教会を建立した。

[3858] ユーリー・ヤロスラヴィチによる聖母受胎告知教会の再建は、1351年にさかのぼります。

[3859] すなわち、喜びに満ちて祝われている。

[3860] すなわち、キリストへの正教の信仰を告白し、キリスト教の敬虔さの中で奮闘している。

聖殉教者ヴァシリスカの殉教

記念日5月22日

聖殉教者エウトロピオスとクレオニコスが殺害された後、彼らと共に多くの苦難を受けた聖ヴァシリスコス（彼は生き残ったものの、牢獄に囚われていた）や、統治者アスクレピオドトスの死後、迫害者マクシミアンとマクシミンによってポンテ地方に派遣された　アグリッパという名の別の総督が、迫害を継続し、キリストを信じる者たちを殺害せよとの命令を持って到着した。彼がアマシアの町に到着する前から、そこで牢獄に囚われていた聖ヴァシリスクは、涙ながらに次のように神に祈っていた。　「主イエス・キリストよ、私を覚えていてください。苦しみの最期の一瞬まで私を忘れないでください。そして、私が、私と共に捕らえられ、私より先に苦しみを受け、殉教の冠を受けた聖なる人々と引き離されることのないよう、一日も早く殉教の冠を授かることができるよう、私をお助けください。」

真夜中、主は眠りの中の幻として彼に現れ、こう言われた。「わたしはあなたを覚えており、決してあなたを忘れない。あなたの名は、（殉教者の名簿に）あなたと共に連れ去られた者たちの先頭に記されている。彼らの後にあなたが苦難に遭うことを嘆いてはならない。あなたは多くの人々に警告を与えることになるからだ。そして、あなたの名声を全宇宙に広める。」　さあ、行って、母や兄弟、親族たちに最後のお別れを告げなさい。そして戻ってきたら、すぐに　殉教者の冠を受け、コマナに[3861]　葬られるだろう。あなたが受ける苦しみをおそれないでよい。わたしがあなたと共にいるからだ。人の悪意は、あなたの魂を滅ぼすことはできない。」

目を覚ますと、聖ヴァシリスクは喜びに満たされ、神に感謝を捧げた。すると、牢屋の扉が開いていることに気づいた。夜が明け始めた頃、彼は自分を見張っていた兵士たちと牢屋の主任看守にこう言った。

「四日間、私を解放してください。そうすれば、クミアルの村に住む私の母と兄弟たちに別れを告げることができます。そして戻ってきたら、私は私の真の父である主イエス・キリストのもとへ去ります。」

すると、兵士たちと牢屋の看守は彼にこう答えた。

「あなたが絶えず仕えているあなたの神が、証人となってくださいますように。もし、まもなく到着すると予想される統治者を恐れていなければ、私たちはあなたを牢から完全に解放していたでしょう。」

聖人は彼にこう反論した。

「私は完全に釈放されることを望んではいない。先ほども言った通り、ただ母や兄弟、そして親族たちに別れを告げに行くだけだ。なぜなら、私の主がそうするように命じられたからである。」

「お前の追放後、すぐに――」と兵士たちはしつこく言い張った。「我々のところからお前を引き渡すよう要求されるのではないかと恐れているのだ。というのも、我々が聞いたところによると、今日、総督が街に到着する予定であり、すべての囚人は裁判記録簿に記録されているからだ。」

聖ヴァシリスクはこれに対し、次のように答えました。

「私の神の御心は、私が故郷の村へ帰ることです。ですから、もしあなたがたが承諾してくださるなら、あなた方のうち数人が私と共に旅立ち、また私と共に帰ってきてください。」

そこで兵士たちは彼の願いを受け入れ、数人が集まってヴァシリスクと共に彼の村へと向かった。

聖人を、彼の兄弟たち（彼には三人の兄弟がいた）と母が大きな喜びをもって出迎え、兵士たちは彼らの家で大いなる敬意をもって迎えられた。

[3861] この都市はアマシアから4日間の道のりに位置していた。

翌日の朝、聖人はすべての親族を呼び集め、魂の益となることについて多くを説き、またキリスト教の教えの真理についても彼らを導いた。彼は、苦難を経ることで初めてキリストの御国に入ることができるということについても、彼らに多くを説いた。

こうして皆を慰め、親族たちと最後の一吻を交わした後、聖人はこう語った。

「兄弟たちよ、キリストにあっての父たち、子たちよ！　私たちの主イエス・キリストへの信仰に留まり、いかなる場合でも主から離れてはなりません。なぜなら、この世と、そこに含まれるすべてのものは、ただ瞬く間に消え去る影に過ぎないからです。しかし、主は永遠に存続なさるのです。　どうか、私たちすべての主である神に、私のために祈ってください。そうすれば、神は私に、聖テオドロス・ティロンやエウトロピオス、クレオニコス――彼らも私と共に捕らえられた者たちですが――が成し遂げたように、苦難に耐え抜く力を与えてくださるでしょう。　皆さん、夫たち、妻たち、兄弟たち、姉妹たち、そして子供たちよ、どうか身を引き締めてください。私は今、あなた方の元を去ります。この儚い人生において、もう二度と私の姿を見ることはないでしょう。

聖人がこの言葉を終えると、激しい泣き声とすすり泣きが上がり、皆が聖人にこう懇願し始めました。

「聖なる生涯を終えられた際には、私たちとすべてのキリスト教徒のために主にお祈りください。そうして、迫害者たちによって引き起こされた正教への迫害が終わり、偶像崇拝が滅び、キリストの恵みが全地に輝き渡りますように。」

その後、聖ヴァシリスクは兵士たちと共に旅立ち、再び牢獄の鎖へと戻っていった。

その頃、総督アグリッパがアマシアの街に到着し、最も高位の市民たちを全員召集すると、彼らと共に「ペタソン」[3862] と呼ばれる異教の神殿に入り、続いて「セラピオン」[3863] と呼ばれる別の神殿に入り、自らの不浄な神々に犠牲を捧げた。　そして翌朝、総督は法廷へと赴き、そこで拘束されている者たちの様子を尋ね、とりわけヴァシリスケについて尋ねた。というのも、彼のことを耳にしており、真っ先に彼を法廷に引き出そうと考えていたからである。

市長はヴァシリスクを総督のもとに連行しようと牢獄へ向かったが、そこで彼を見つけられなかったため、牢番を捕らえて縛り上げ、裁判所の前に引き出した。総督は彼に拷問を加えた上で、こう問いただした。

「よくもまあ、我らの神々の敵であり、王の命令に背いた者を牢獄から逃がすなど、よくもそんなことをしたな？」

「ヴァシリスクが兵士たちと共に自分の村へ去ってから、今日で二日目になります」と、牢屋の看守は答えた。

「お前が我らの神々を冒涜したその男を私の前に連れてこなければ、お前を処刑するぞ！」と、怒りに満ちた総督は叫んだ。

「四日目に、その男をあなたの前に引き出します」と、牢屋の看守は答えた。

すると直ちに、総督はその看守と共に、[3864] という、邪悪で獰猛な気性のマギストリアンを、さらに兵士たちを伴わせて送り出し、次のように命じた。

[3862] ここでの「聖堂」とは、明らかにエジプト・ヘレニズム時代の神プタ（Ptah）――死者の神――を祀る聖堂を指している。

[3863] セラピオンは、古代ギリシャのゼウスに相当するエジプト・ヘレニズムの神セラピスに捧げられた神殿である。セラピスも、（前述の）プタ神も、本来はエジプト固有の宗教の神々であった。　しかし、東方宗教への熱狂が広まった時期（紀元前2世紀）には、ギリシャ人たちはこれらの神々を深く崇敬し、その栄光を称えて数多くの神殿を建設した。

[3864] マギストリアンは、地方総督の補佐役であり、一定数の兵士を指揮下に置いていた。通常、総督から様々な任務を帯びて、その兵士たちと共に属州へ派遣されていた。

「お前が我らの神々を熱心に守る者だと信じるのは、その神を冒涜した者を捕らえて、私の元へ連れてきた時だけだ。彼をコマニーへ連れて行け。私もそこへ向かうからだ。」

マギストリアンは統治者の元を去ると、内部に無数の鋭い細長い鉄の釘が打ち込まれた銅製の長靴を作り上げ、牢屋の看守と兵士たちを連れて、殉教者のために用意された重い鉄の鎖をロバに積んで、ヴァシリスカの故郷の村へと向かった。

「私もまた、」と、その後の出来事を記述した聖エウシグニオス[3865] は語る。「聖ヴァシリスカの苦しみと最期を目撃したいと願い、彼らの後を追った。その村に到着すると、彼らはすでに家を出てアマシアの町へ向かい、自身の牢獄へ戻ろうとしていた殉教者を捕らえ、二重の鎖で縛り上げた。　さらに、首にも鉄の鎖を巻きつけ、足には内部に釘が打ち込まれた銅のブーツを履かせた。そのため、釘は聖人の足の骨にまで突き刺さり、傷ついた足からは血が大量に流れ出た。その上、拷問者たちは、キリストの殉教者をコマヌスへと連行する途中、激しく殴打した。　彼の母、兄弟、そして親族たちは、泣きながら彼を見送った。別れの際、母は彼にこう言った。

「愛しいわが子よ！　あなたが愛したキリストが、この殉教の業においてあなたの助け手となってくださいますように。この世でのあなたの生涯は長くは続きませんが、その代わり、来世では永遠の命があなたを待っています。今は厳しい苦しみを受けていますが、その代わりに、キリスト・神から栄光の冠を授かるでしょう。　この地では悪しき者たちがあなたを苦しめるが、その代わりに天の天使たちがあなたを迎え入れてくれるでしょう。あなたは強盗のように裁かれますが、キリストと共に十字架にかけられたあの強盗こそが、あなたを楽園に迎え入れてくれるでしょう。死すべき、朽ちゆく王たちはあなたから命を奪いますが、永遠の神があなたに命を取り戻し、天使の軍勢に加えられるでしょう。　そして、愛するわが子よ、あなたが歩むこの主への道において、私たちをも覚えていてください！

そう言い終えると、母は家へと戻り、主に対して息子のために祈り、主が彼を強め、苦難を勇敢に耐え抜けるようにしてくださるよう願った。

聖人は振り返り、自分の後を追ってくる三人の兄弟や、親族、そして彼のために泣いている多くの民衆を見て、次のような言葉で彼らに家へ帰るよう懇願した。

「私のために泣かないでください。むしろ、主が私に悪魔に打ち勝ち、その僕たちを恥じ入らせる力を与えてくださるよう、主にお祈りください。」

それから彼は一人ひとりに口づけをし、皆に帰るよう諭して、こう言った。

「復活の日、永遠の命の日に、また皆さんと再会しましょう。」

しかし、聖人を送り出していた人々は帰ろうとはせず、泣きながら彼の後を追った。

聖人は再び、次のような言葉で彼らを諭した。

「なぜ、その泣き声や涙で私の心を乱すのですか？ ああ、もし私が、私たちの主イエス・キリストのために何度も死ぬことが許されるなら！ どうか、戻って、私のために神に祈ってください！」

しかし、それでも彼らが引き返そうとしなかったため、マギストリアンは彼らにこう言った。

「わが王たちの健康を誓って言うが、もしあなたがたが戻らないなら、私はあなたがた全員を縛り上げ、総督のもとへ連行する。」

しかし、彼らがその言葉にも従わなかったため、マギストリアンは兵士たちと共に彼らを殴りつけ、かろうじて聖人から引き離すことができた。

[3865] 聖殉教者エウシグニオスは、聖殉教者ヴァシリスカの生涯と功績を記述したが、60年間にわたり、ディオクレティアヌス（284–305年）、マクシミアヌス（305–311年）、コンスタンティヌス大帝という3人のローマ皇帝の下で兵士として仕えた。

このように連行される中、聖人は鉄の鎖の重さを勇敢に耐え、銅製のブーツに散りばめられた鋭い釘が至る所で足を貫く痛みを気高く耐え忍び、その道筋は血で染まっていった。そして聖人自身は喜びをもってこう歌った。

「たとえ軍勢が私に対して立ち向かおうとも、私の心は恐れない」（詩編26:3）。なぜなら、主キリストよ、あなたが私と共におられるからです。

聖人は、歌と祈りをもって主に語りかけながら、他にも多くのことを語った。一方、マギストリアンとその一行は、殉教者の足が釘の打ち込まれたブーツを履いているにもかかわらず、軽やかに歩いているのを見て、大いに驚いた。しかし、聖なる殉教者と共にいたのは主であり、主がその苦しみを和らげておられたのである。

彼らがダコザリアと呼ばれる集落にたどり着いたとき、真昼で暑かったため、マギストリアンと兵士たちは休息を取りたがった。その集落の女主人であるトロヤナという名の未亡人は、兵士たちを連れたマギストリアンを見て、彼らに家に入って食事をとるよう誘った。彼らの総数は四十人ほどだった。　彼らが中に入ると、彼女は彼らのためにすべてを整えてくれた。こうして、彼らは食べ、飲み、楽しんでいたが、聖殉教者ヴァシリスコスは、両手を後ろ手に縛られたまま、彼女の家の門のそばに生えていた枯れた樫の木に縛り付けられていた。　聖人の周りには、男女や子供たちを含む大勢の人々が集まった。彼らが、重い足枷で縛られ、炎天下に縛り付けられ、足から血が流れ出ているのを見て、心を動かされ、彼に同情の言葉をかけました。　一方、聖人は神に祈りを捧げ、こう叫んだ。「主よ、あなたが牢獄にいたヨセフ（創世記41章）、獅子の穴にいたダニエル（ダニエル書6章）、バビロンの炉にいた三人の若き者たち（ダニエル書3章）を訪ねられたように、私をも訪ねてください。　また、邪悪な長老たちから迫害を受けたスザンナ（ダニエル書13章）に憐れみを示し、ペトロを牢獄から救い出し（使徒行伝5:17–20）、　またフェクラを冒涜から守られたように、この謙虚で不適格なあなたのしもべである私にも、あなたの驚くべき憐れみを示し、あなたの至聖なる御名の栄光のために、あなたの奇跡を現してください！」

聖人が祈りを終えると、突然地震が起こり、天から「恐れるな、わたしはあなたと共にある」という声が聞こえました。

すると、殉教者の足に履かれていた銅のブーツが、まるで火に溶ける蝋のように突然溶けてしまった。鎖は聖人から外れ、枯れていた樫の木は緑を取り戻し、聖人の上に数多くの茂った枝を広げ、周囲の広い範囲をその木陰で覆った。　そして、聖人が立っていた場所、すなわちその血で大地が染まったその場所から、泉が湧き出た。

その後、聖人は次のような言葉で神に感謝を捧げた。「主イエス・キリストよ、　永遠の御言葉であり、測り知れず、言葉に尽くせぬ御父の御子よ。私たちを古き敵である悪魔から贖い、そのあらゆる悪巧みから救い出すために、この地上に降りて人となられることをお許しになり、私たちを天へと引き上げ、悪魔を打ち負かし、深淵に閉じ込める裁きを下し、私たちに新しい命を与えてくださった方よ、　――どのような口であなたを賛美し、どのような言葉で私の思いをあなたに伝え、どのようにあなたを讃え、あなたが今、あなたのしもべである私に、かつてあなたの聖徒エウトロピアとクレオニケが、統治者アスクレピオドトスの命令によって拷問を受けた時と同様に、示してくださったあなたの偉大な御業と御力を告げ知らせるべきでしょうか！　まことに、私は不適格な者ですが、なぜこれほど偉大で驚くべき恵みを私に示してくださったのでしょうか。あなたの御力を目の当たりにした大地そのものが、震え上がったのです」。

一方、マギストリアンと兵士たちは、地震を恐れてその家から逃げ出し、起こった奇跡を目にして深く戸惑った。　その中には、これは単なる錯覚に過ぎないと語る者もいれば、これを魔術だと考える者もいた。一方、聖人の周りに集まっていた民衆は、恐怖と驚きをもってこの出来事を眺め、

キリスト・神の力を賛美した。そして多くの人々がキリストを信じるようになり、「見よ、神が私たちのこの場所を聖別するために、ここに聖なる人を遣わされたのだ」と言った。

聖人のもとへ、床に横たわっていた麻痺者が運ばれてきた。キリストの殉教者が彼に触れると、その麻痺者はたちまち健常者のように立ち上がり、自分の寝床を背負って家へと帰り、神を賛美した。さらに、ハンセン病患者たちも連れて来られ、聖人は彼らにも触れて癒した。　水恐怖症や発作に苦しむ者、またあらゆる他の病に苦しむ者や、汚れた霊に取りつかれた者たち――聖人はその言葉によって、すべての人を癒した。これらの奇跡を目撃した者たちは皆、真の神を賛美し、神を信じた。そして、その村の住民たちは大きな喜びに満たされた。　その村の女主人トロヤナもまた、キリストを信じるようになり（　）、息子のトロイヌと共に、洗礼を授けてほしいと願った。「私、罪深いエウシグニオスは」と語り手は言う、「起こったすべての出来事を目の当たりにし、心から主を賛美した」。　その日の夕方、牧草地から村へと向かい、キリストの聖なる殉教者が立っていた道を通りかかった牛の群れは、あたかも神の偉大な御業を賛美するかのように、聖人の前にひざまずいた。

その時、マギストリアンと兵士たちは、聖人に加えた残虐な行為を悔い改めた。というのも、聖人の祈りによって主が成し遂げられた驚くべき奇跡を目にしたとき、彼らを恐怖が襲ったからである。翌日、マギストリアンは殉教者に穏やかにこう言った。

「もしよろしければ、ヴァシリスク様、旅立ちましょう。そうすれば、あなたのために我々が統治者から罰を受けることもありませんから。」

「よし、旅立ちましょう」と聖人は答えた。「私は主のために死にたいのですから。」

彼らがその集落を出ると、トロヤナ夫人をはじめとする民衆全員が聖人を送り出した。聖なる殉教者は皆に、自分たちのところへ戻るよう懇願したが、戻った者もいれば、引き続き彼に従った者もいた。　やがて、イレオス川に架かる大きな橋に足を踏み入れたとき、キリストの御臨在によって橋が揺れ動いた。キリストは、御自分のしもべである聖ヴァシリスクと共に、目に見えない形で歩んでおられたのだ。これは、後に聖殉教者ヴァシリスク自身が、私のような不肖のエウシグニウスに語ってくれたことである――と語り手は言う。　――橋が揺れたとき、聖人は立ち止まり、神を賛美しつつ、人々に引き返すよう懇願し、ようやくその願いを聞き入れてもらった。

行進中、聖人は高くて美しい場所ごとにひざまずき、次のような言葉で主に向かって祈った。「主の支配するすべての場所で、わが魂よ、主を賛美せよ！」（詩編102:22）。

やがて皆がサオンと呼ばれる集落にたどり着くと、兵士たちとマギストリアンは食事をとる準備を整え、聖人に彼らと共にパンを口にするよう勧めた。しかし聖人は、「主は私の牧者。私は何一つ欠けることがない」（詩編22:1）と言い、それを断った。「私の主、イエス・キリストが私を養ってくださる」

彼らは再び彼を説得して言った。

「どうか召し上がってください、ご主人様。そうしなければ、あなたは飢え死にしてしまいますし、私たちがあなたを総督のもとへ連れて行かなければ、あなたのせいで私たちが罰を受けることになります。何しろ、あなたが全く食事をとられていないのは、もう三日目になりますから。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「私は不死の糧で満たされている。それゆえ、死すべき食物を口にしたくない。あなた方を養うのは地上のパンだが、私を養うのは天の神の言葉である。あなた方を喜ばせるのはワインだが、私を喜ばせるのは聖霊の恵みである。あなた方を満たすのは肉だが、私を満たすのは断食である。あなた方を強めるのは肉体の活気だが、私を強めるのはキリストの御名による十字架である。　あなた方を豊かにするのは金だが、私を豊かにするのはイエス・キリストへの愛である。あなた方を飾るのは衣服だが、私を飾るのは美徳である。あなた方は笑いの中に喜びを見出すが、私は祈りによって自分の霊を慰める。　あなたがたは、一時的で、死すべき、朽ちゆくこの世の王を愛し、その姿を見るこ

とを切望し、その律法を遵守するが、私は神と、天の私の王を愛し、その律法を崇め、御顔を仰ぎ見ることで養われることを願う。あなたがたは地上の栄光を待ち望むが、私は天の栄光を待ち望む。あなたがたは人々の間で名声を求めているが、私は、義人の復活の際、最後の審判において栄光を得ることを望んでいる。その時、私の主はこう言われるだろう。「来なさい、わたしの父に祝福された者たちよ。世界の創造以来、あなたがたのために用意されていた御国を受け継ぎなさい」（マタイ25:34）。

聖人がそう語ると、マギストリアンは動物に鞍を載せるよう命じ、殉教者に一頭のロバに乗るよう勧め、こう言った。

「三日間も空腹のまま歩いているのだ。完全に力尽きないよう、せめて動物に乗るがよい。」

しかし、聖人は乗ることを拒み、こう言った。

「私の主イエス・キリストが私を強めてくださり、聖霊が私に安らぎと喜びを与えてくださる。」

その後、一行は旅立ち、夕方になるとある村に到着し、そこで一晩を過ごすことにした。兵士たちが夕食の席に着くと、マギストリアンは聖ヴァシリスカに、彼らと一緒に何か口にするよう懇願したが、彼はそれを断り、一晩中祈りと賛美に費やした。その間、聖なる天使たちまでもが、キリストの御心にかなうこの聖人と共に歌っていた。

日が明けると、一行は再び旅立ち、午後4時にコマナという町に到着した。町に近づくと、道中で出会った多くの人々から、統治者が偶像に拝礼することを拒む者をすべて処刑しているという話を聞いた。　しかし、主は聖ヴァシリスクの前に現れ、こう言われた。「勇気を出しなさい。偶像崇拝者たちの脅しを恐れてはならない。わたしがあなたと共にあるからだ。」

彼らが町に入ると、聖人を護衛していた兵士たちは、町の住民たちに尋ねた。

「総督は今どこにおられますか？」

すると、総督はアポロンの神殿（[3866] ）にいて、そこで神々に生贄を捧げていると告げられた。

マギストリアンは統治者のもとへ向かい、ヴァシリスカを連れてきたことを報告した。統治者はこれを聞いて大いに喜んだ。マギストリアンはまた、旅の途中で起きた奇跡についても語ったが、統治者はそれを信じず、こう言った。

「これらはすべて、キリスト教徒の魔術だ。」

その後、彼は聖ヴァシリスカをアポロンの神殿へ連れてくるよう命じ、そこで彼に犠牲を捧げさせるつもりだった。直ちに統治者の兵士たちが聖ヴァシリスカのもとへ駆けつけ、聖人を神殿へと無理やり引きずり込みながらこう言った。

「生き延びたいなら、神殿へ行って統治者の元へ行き、神々に拝め。」

一方、マギストリアンと旅の途中で彼と共にやってきた兵士たちは、統治者の兵士たちに自分たちが目撃した奇跡について語り始め、こう付け加えた。

「まことに驚くべきしるしと神の御力を、我々は見た。それは幻や魔術ではなく、実際に起こったことである。」

それから、聖人に向かってこう言った。

「ヴァシリスク様、私たちの無知ゆえにあなたに与えてしまった残酷な仕打ちをどうかお許しください。そして、私たちのためにあなたの神に祈ってください！」

彼らがそう話している間に、総督から派遣された新たな兵士たちが殉教者を捕らえ、神殿へと連行した。聖人は、主、すなわち自らの神を喜びながら、明るい表情で神殿に入った。

彼を見て、総督は尋ねた。

[3866] アポロンは、ギリシャ神話において、ゼウスとラトナの息子である光の神である。

「お前がヴァシリスクか？」

「はい、私です」と聖人は答えた。

「では言ってみよ」と総督は続けた。「神々に犠牲を捧げるのか、それとも捧げないのか？」

「誰が私に、私が神に捧げ物をしないと言ったのか」と聖人は反論した。「私は毎分、私の神を称える賛美の捧げ物を捧げているのだ。」

しかし、統治者はその言葉を理解できず、聖人にこう言った。

「よし、それなら、我々の神々の中から好きな神に捧げ物をしなさい。」

聖ヴァシリスクは偶像に近づき、周囲の人々に尋ねた。

「その神様の名前は何ですか？」

彼にこう言われた。

– アポロンです。

– 彼がアポロンと呼ばれるというのは、おっしゃる通りです――と聖人は確認した。――アポロンとは「滅びをもたらす者」[3867] を意味し、彼は神ではないため、彼を神として信じ、崇拝する者たちを、まさに破滅へと導くのです。

「では、あなたが犠牲を捧げようとしているその神の名は何か？」と統治者は尋ねた。

「私の神です」と聖人は答えた。「その性質は、言葉では言い表せず、理解できず、目に見えず、説明のつかないものです。」

「お前の神には名前がないのか？」と統治者はさらに問い詰めた。

「聖典には私の神の御名が記されています」と聖人は答えた。「もし聞きたいのであれば、お教えしましょう。」

「その名を挙げよ」と、統治者は言った。すると、聖なる殉教者はこう言った。

「私の神は、父であり、全能者であり、サバオテの主[3868] であり、万物の王であり、慈悲深く、憐れみ深く、忍耐強い救い主です。私はただその方だけに、賛美の捧げ物を捧げます！」

「どの神に捧げようが、私にはどうでもいい。とにかく捧げなさい」と統治者はしつこく言った。「お前は議論するためではなく、ただ捧げ物をするために呼ばれたのだから。」

「では、よく聞いてほしい」と聖人は統治者に語りかけた。「私の捧げ物とはどのようなものか。」

そして天に向かって両手を挙げ、神にこう祈った。

「永遠なる神よ、天と地の創造主よ、真にあなたに仕える者たちの声に耳を傾ける方よ、今、あなたのしもべである私の声にも耳を傾けてください。そしてこの瞬間、この耳も目も不自由で、感覚のない偶像を打ち砕き、不敬虔な民たちが、自分たちがどのような神を崇拝しているのかを理解させ、そして恥じ入り、あなただけが唯一の全能の神であることを信じるように。」

聖人が祈りを終えたその瞬間、大地が揺れ動き、偶像は地面に倒れ、粉々に砕け散った。神殿にいた統治者と民は恐怖のあまり外へ逃げ出したが、聖ヴァシリスクただ一人だけが神殿に残り、こう歌った。

「神よ、立ち上がってください。その敵は散らされ、神を憎む者たちは御前から逃げ去りますように。煙が散るように、彼らを散らしてください……火によって蝋が溶けるように、不義な者たちは神の御前から滅び去りますように」（詩編67:2–3）。

しばらくして、統治者は聖人を神殿から連れ出すよう命じ、彼に対する憎悪で歯ぎしりしながら言った。

[3867] アポロン――ギリシャ語から訳すと「滅ぼす者」を意味する。ギリシャ人にとって、彼は通常、弓、矢、矢筒を携えた姿で描かれ、光、すなわち道徳的な秩序に害を及ぼす力に対する敵であり、その打ち勝つ者として描かれていた。

[3868] 主サバオト――万軍の主、力の主（サムエル記上1:3, 11）。

「わが神々の敵よ！　なぜ、約束したことと違うことをしたのか。神に犠牲を捧げると約束しておきながら、お前の魔術によって、わが神アポロンを倒し、粉々に砕いてしまったではないか。」

すると聖人はこう答えた。

「あなたがたの神を打ち砕いた者が、その神殿も焼き尽くすだろう。」

聖人がその言葉を言い終えるやいなや、天から火がアポロンの神殿に降り注ぎ、それを根こそぎ焼き尽くした。恐怖に駆られた統治者と民衆は皆、そこから逃げ去った。その後、統治者は聖ヴァシリスクを呼び寄せ、こう言った。

「おお、お前の魔法はなんと偉大なのか！　お前は神を打ち砕き、その神殿を焼き払ったのだ！」

しかし、聖人はこう反論した。

「もしお前の神が、お前が言うように真の神であるなら、自ら私への復讐を成し遂げさせよ。」

「我らの神々は慈悲深く、敵に何の害も与えないのだ」と統治者は反論した。

「ああ、愚かな人よ！」と聖人は叫んだ。「本来邪悪な悪魔たちが、どうして善を行えるというのか。彼らは、あなたたちのような崇拝者たちまでも、自分たちと共に地獄へ引きずり込むだろう。」

「忌まわしい魔術師よ」と、統治者は聖人に説得した。「神々に生贄を捧げよ。さもなくば、私はお前を惨たらしい死に追いやる。」

これに対し、聖人は統治者にこう答えた。

「森に住む獣よ、血を舐める犬よ、放蕩者アグリッパよ、悪魔の化身よ、無法な拷問者よ！　なぜまだ私を拘束しているのか？　私は一刻も早くこの世を去りたいのだ！」

統治者は聖人に激しく怒り、剣で彼を斬首するよう命じた。

兵士たちは聖人を連行し、斬首の場であるディオスコリアと呼ばれる場所へと、街の外へ連れ出した。その際、大勢の民衆が聖人を見送った。統治者は、斬首の後、聖人の遺体を川に投げ込むよう命じた。

「キリストの殉教者[3869]が斬首されたとき、私たち（聖エウシグニオスが語るように）は、その光景を目撃する恵みを与えられた者として、恐るべき奇跡を目撃した。すなわち、多くの聖なる天使たちが現れ、聖人の魂を受け取り、それを天へと昇らせていったのである。　私たちの主イエス・キリストは、天に立っておられ、こう語っておられたのが見えた。「来なさい、わが良き忠実なしもべ、ヴァシリスケよ。義人の群れと共に天の御国に入りなさい。そこには、私のためにあなたと共に殉教した私のしもべたちが留まっている。」

私たち、これらすべてを目撃し耳にした者たちは――語り手は続ける――地面にひれ伏して主に礼拝し、このような幻を見させてくださったことに感謝を捧げた。

その後、プリスクという名の処刑人が殉教者の遺体を抱え、川へと引きずっていった。私たちは彼に近づき（エウシグニオスはこう語る）、群衆が散るまで少し待ってくれるよう頼み、殉教者の遺体の引き換えとして三十枚の金貨を渡した。彼は私たちに殉教者の遺体を引き渡しながら、こう言った。

「誰にもバレないように、そして統治者にこのことを告げ口しないように気をつけてください。そうしなければ、あなたにも私にも厄介なことになるでしょう。」

そして私たちは、その尊い遺体を受け取り――とエウシグニウスは続ける――それを隠し、夜になって耕された畑へ運び出し、埋葬し、その場所に種を蒔いた。その夜、種は芽を出し、翌日には花を咲かせ、実を結んだ。　私たちが殉教者の墓を掘っていたとき、私たちの中には水を飲みたいと

[3869] 聖殉教者の死は4世紀初頭に訪れた。

願う者もいました。私たちが呼び求めた聖ヴァシリスコの祈りによって、すぐに墓の近くに泉が現れました。水を飲み干した後、私たちは神を賛美し、感謝を捧げました。その泉は現在に至るまで存在しており、信仰を持ってそこから水を飲む病人は、癒やされています」。

これらすべての出来事の後、不浄な霊が統治者アグリッパに憑き、彼は心の中で「もしヴァシリスコの遺体に触れれば、きっとこの不幸から解放されるだろう」と考え、殉教者の遺体を探し始めた。

しかし、殉教者の遺体が地中に埋葬されていたことを、誰も彼に告げる勇気はなかった。ある者たちは彼にこう言った。「あなたは遺体を川に投げ込むよう命じたではないか。なぜ今になってそれを探しているのか？」

そこでアグリッパは、キリストの殉教者が斬殺された場所へ向かい、そこで彼の血を数滴見つけ、それを自分の手で土の塵と共に集め、腰帯に結びつけた。するとすぐに、彼は不浄な霊から解放され、我らの主イエス・キリストを信じるようになった。

しばらくして、コマナの市民である敬虔な男マリンが、聖殉教者ヴァシリスカの名を冠した教会を建て、地中からその聖遺骨を取り出し、この教会に移した。　聖人の遺骸からは、彼の祈りと、父と聖霊と共に今、そして常に、世々限りなく栄光と誉れが捧げられる、私たちの主イエス・キリストの恵みによって、あらゆる病気からの数多くの奇跡的な癒しがもたらされた。アーメン。

コンダク、第8調：

苦難において強靭かつ勇敢であり、奇跡において驚くべき御業を示し、キリストの御名を公に掲げ、迫害者を恥じ入らせた。それゆえ、我らは汝をヴァシリスカとして崇め、常に「殉教者たちの輝ける慈愛よ、喜びなさい」と尊称する。

6月5日

5月23日（旧暦）

同日、ロストフの主教であり、奇跡行者である聖レオンティウスの聖遺骨発見（1164年）が祝われる。

同日は、ガリチ出身の敬虔なるパイシオス（かつて（ガリチ近郊の）ウスペンスキー・ニコラエフスキー修道院のアルヒマンドリトを務め、1460年に逝去した）の記念日である。

尊者ミハイル・懺悔者の記念日

5月23日の記念日

今日記念される聖ミハイル、シナドの主教[3870]　は、天の軍勢の大天使と同じ名を冠し、処女の清らかさとあらゆる美徳に彩られた天使のような生涯を送った。　幼少の頃から神に捧げられ、青年期には修道生活に入り、聖テオフィラクト（ニコミディアの司教[3871]　）と共に、聖タラシオス総主教の治世下で修業に励み、神にふさわしい奉仕者となりました。二人は総主教によって、黒海の岸辺にある修道院へ派遣されました。　ここで修道者の務めに励む中、二人の聖人は徳において大いに成長し、彼らの祈りは神の前で大きな力を持っていた。

[3870] シナド――黒海沿岸の古代都市の一つ。

[3871] ニコメディア――大理石の海によって形成される湾の北東端に位置する都市。紀元前264年に建設され、その名はビフィニアの王ニコメデス1世に由来する。古代ニコメディアの跡地には、現在イシニドという都市がある。

ある時、収穫の最中、空気が耐え難いほどの暑さに包まれ、その場所では水が不足していたため、多くの人が渇きで力尽きかけていた。そこで聖人たちは神に祈りを捧げると、その祈りによって、空の銅の器から十分な量の水が湧き出るようになった。　このように、主は御自身を崇める者たちの願いや祈りを聞き入れ、彼らの祈りに御耳を傾けてくださる。この奇跡は、かつて荒野で起こった奇跡、すなわち、渇きに苦しむイスラエルの民のために、神が岩から水を湧き出させた奇跡（出エジプト記17:6）や、――渇きで死にそうになっていたサムソン（イスラエルの士師）のために、神が乾いたロバの顎の骨から生ける水の泉を湧き出させた奇跡（士師記15:19）にも似ていた。

その後、至聖なるタラシウス総主教は、天の星のように輝いていたこれらの尊い父たちの徳高い生涯を見て、彼らを高い司教の位にふさわしいと認めた。　彼は、至福のテオフィラクトをニコメディアの総主教に叙任し、聖ミカエルをシナドの司教に叙任した。そして、二人は共にキリストの羊の群れを牧し、自らの生涯をもって信徒たちに良き模範を示した。

その後、至聖なるタラシウス総主教がこの世を去り、主のもとへ帰られた後、聖ニキフォロスがコンスタンティノープル教会の座を引き継ぐと、すでに第7回全地公会議において聖なる父たちによって非難されていた偶像排斥の異端の嵐が再び巻き起こった[3872]。 不敬虔な皇帝レウ・アルメニア人[3873] は、その異端に染まり、キリストの教会に対する迫害を開始した。彼は聖なるイコンの崇敬を否定し、それらを偶像と呼び、それらを崇拝する者たちを拷問や死に追いやった。　まず第一に、彼は至聖なるニキフォロス総主教をはじめ、他の正教会の司教たちをもその座から追放し、その代わりに自らの思想を共有する異端者たちを任命した――こうして、聖なる場所には荒廃の忌まわしさがはびこった（ダニエル書9:27）。

この時、聖ミカエルは正教の熱心な擁護者であり、異端の不敬を糾弾する者として現れた。聖霊の恵みによって強められ、知恵を与えられた彼は、異端者たちに立ち向かい、聖なるイコンを非難する彼らの口を封じた。　不敬虔な皇帝レウスは、自らの異端的な迷いを大胆に非難する聖人の糾弾に耐えかね、キリストの聖人を拷問にかけた。しかし聖人は、拷問を恐れず、勇敢に自らの信念を貫き、皇帝にこう言った。

「私は、私の救い主イエス・キリストと、その母である聖母マリア、そしてその他の聖人たちの聖なるイコンを尊び、それらに礼拝を捧げています。しかし、あなたの命令に従うことはできません。」

恥をかかされたレウスは怒りに満ち、キリストの殉教者を追放の刑に処した[3874]。

ある場所から別の場所へと追放され、聖人は多くの苦難と試練に耐え、ついに天の住まいに至り、永遠の安息を得た。こうして彼は、二つの冠を戴き、司教として司教の列に、また殉教者として殉教者の列に加えられ、私たちの神キリストの栄光のために、その義なる生涯を全うした[3875]。

コンダク、第8調:

まことに、至高の司教であり、敬虔な殉教者よ、悪名高い迫害を恐れず、異端の反抗を打ち破り、自由な声で高らかに叫ばれた。「私はキリストの聖像と、その至聖なる御母に礼拝を捧げる」。このゆえに、我らはあなたを崇める、ミハイルよ。

[3872] 第7回全地公会議は787年にニカイア市で開催された。

[3873] 皇帝レウス（V世）アルメニア人は、813年から820年まで在位した。

[3874] 当初、聖ミカエルはフラキアの都市エウドキアドに追放された。

[3875] 聖殉教者の死は818年頃であった。

聖ミハイル・チェルノリツァの殉教

記念日：5月23日

聖殉教者ミハイルは、エデッサの町[3876] の出身であり、キリスト教徒の両親の息子であった。両親の死後、彼は両親から相続した全財産を貧しい人々に施し、聖地を巡礼するためにエルサレムへと向かった。当時、エルサレムはすでにイスラム教徒の支配下にあった。

聖地を参拝した後、彼は聖サヴァの修道院に身を寄せ、そこで修道生活に入った。

しばらくして、彼は師匠からエルサレムへ派遣され、修道士たちが作った工芸品を販売することになった。そこで、イスラム教の女王セイダの宦官[3877] に出迎えられ、彼が販売していた器が非常に美しく、精巧に作られていたため、彼を連れ去り、女王のもとへ連れて行った。　女王は、顔立ちは美しいが断食のせいで痩せ細った若い修道士を見て、彼に魅了され、姦通へと誘い始め、こう言った。

「私の言うことを聞きなさい。もしあなたが病気なら、私がその病を治してあげるわ。」

この女王の言葉に対し、至福のミハイルは次のように答えた。

「私は自分の罪に苦しんでいる。私は主イエス・キリストに仕えているのだから、あなたの言うことには従わない。」

女王は、かつてエジプトでペンテフリュスの妻が「美しいヨセフ」を不義に誘ったのと同じように（創世記 39:1–23）、あらゆる手段を用いて聖人を不義へと強要したが、貞潔なミハイルは不義に同意せず、次のように女王を説得した。

「私にはそれができません。私は修道士であり、生涯を通じて、この身を汚れなく清く保つことを神に誓ったからです。」

しかし、その不義な女は、貞潔な修道士が決して自分の不義な要求に応じないことを確信すると、恥と怒りに満ちて、聖人を棒で打つよう命じた。　その後、彼女は、あたかも彼らの信仰を非難する者であるかのように装って、当時エルサレムの近くにおられた王のもとへその修道士を送り込んだ。

王は聖人に事情を尋ねた後、彼を解き放つよう命じ、イスラム教に改宗するよう説得した。

しかし、聖人は王にこう言った。

「私は自分の神を見捨てて、悪魔の信者になることはできません。」

王は再び彼を誘惑し始めた。

「望むものを何でも求めよ。そうすれば、私と共に王となるだろう。」

「三つのうちの一つを願います」と聖人は答えた。「私を師のもとへ解放するか、私の神の名において洗礼を受けるか、あるいは剣で首を刎ね、私を私の神であるキリストのもとへ送ってください。」

しかし、王は聖人に致死性の毒が入った杯を差し出すよう命じた。聖人はその毒を飲み干したが、聖なる福音書に記されたキリストの御言葉*「たとえ死に至るものを飲んでも、彼らには害を及ぼさない」*（マルコ16:18）通り、無傷のままであった。

恥をかかされた王は、エルサレムの中心で、キリストのしもべの首を剣で切り落とすよう命じた[3878] 。

[3876] エデッサは、古代にメソポタミア北部に位置していた都市である。

[3877] 宦官とは、通常、東方のハーレムで仕えることを目的として去勢された使用人のことである。

[3878] 聖殉教者の死は9世紀に訪れた。

聖サヴァ修道院の修道士たちは、聖殉教者の遺体を受け取り、それを自らの修道院へと運び、キリストの殉教者を聖なる父たちと共に敬意を込めて葬り、御自身の聖徒たちにおいて驚くべき御方であるキリスト・神を賛美した。アーメン。

ポロツクの修道院長、聖エウフロシニアの生涯

記念日：5月23日

ポロツクという町に、ヴセスラフという名の公爵[3879] が住んでおり、彼にはゲオルギーという息子がいた。このゲオルギーから、至福のエウフロシニアが生まれたのである。

修道生活に入る前、聖エウフロシニアはプレディスラヴァという名を持っていた。幼い頃から読み書きを教えられていたエウフロシニアは、聖書やその他の魂を救う書物を熱心に学んだ。聖書を通じて、彼女は神への畏敬の念と、自らの創造主である神への熱烈な愛を学んだのである。

聖女は顔立ちが非常に美しく、12歳になった頃には、多くの名高い公爵たちがエウフロシニアの父に、娘を自分の息子たちと結婚させてほしいと懇願した[3880] 。しかし、この少女は、いかなる場合でも、この世の死すべき夫との結婚には決して同意しませんでした。なぜなら、彼女は不死の天の花婿、主イエス・キリスト、神の御子に身を捧げていたからです。聖女のすべての思いは神に向けられていました。しかし、エウフロシニアの父は、たとえ彼女の意志に反してでも、ある の公爵に娘を嫁がせることを決めた。エウフロシニアがこれを知ると、誰にも内緒で女子修道院へ逃げ込み、至福の修道院長であるロマナ公爵夫人のもとへ行き、修道女としての剃髪（トス）を熱心に願い始めた。 しかし、至福のロマーナ修道院長は、エウフロシニアの若さという理由もあれば、彼女の父親に対する恐れもあったため、長い間これに同意しなかった。そのため、ロマーナは、彼女がまだそれほど若く、顔立ちも非常に美しいと述べ、世俗の生活に戻るよう彼女に勧めた。 しかし、エウフロシニアが貞操を守り、天の御国を得るために修道に入るという固い決意を持っていること、また、エウフロシニアが主イエス・キリストに対して深い心の愛を抱いていることを見て、 ロマナは、彼女の修道院にいた司祭に命じて、プレディスラヴァに修道服を着せ、彼女を天使のような姿に整えさせた。その際、この若い王女にはエウフロシニアという名が与えられた。

この至福の乙女の両親は、一連の出来事を知ると、深い悲しみに打ちひしがれ、直ちにその修道院へと向かった。 そこで修道服をまとった娘の姿を目にした両親は、抑えきれない涙に暮れた。しかし、至福のエウフロシニアは、両親の涙に動じることなく、泣くのではなく、娘が天の王である主イエス・キリストに婚約したことを喜ぶよう彼らに勧めた。

修道院では、聖エウフロシニアは絶え間ない断食と祈りに専念し、他の修道女たちと共に修道院のあらゆる務めをこなし、すべての人に対して深い謙遜をもって従っていた。

しばらくして、聖エウフロシニアは、ポロツクのイリヤ司教に対し、聖ソフィアに捧げられた大聖堂のそばに設けられたテントに住まわせてくれるよう懇願し始めた（このように行動することで、聖エウフロシニアは、至聖なる聖母マリアもその中に含まれていた古代のエルサレムの乙女たちに倣っていたのである； それらの乙女たちは、ソロモンの教会の近く、教会の壁際に設けられた特別な天幕の中で暮らしていた[3881] 。司教は、聖女の天使のような生活と、神に対するセラフィムのよう

[3879] ヴセスラフ・ブリャチスラヴィチは、ブリャチスラフ・イジアスラヴィチの息子であり、1044年から1101年までポロツクで公として統治した。

[3880] 古代ロシアでは、早い年齢での結婚が一般的であった。

[3881] これに関するより詳細な記述は、11月21日に掲載されている「聖母マリアの聖堂への奉献」の伝承で読むことができる。

な愛を見て、彼女の心の善き願いを妨げることはしなかった。　こうして聖女は、まるで神の天使のように、教会のそばのテントに常駐し、昼夜を問わず絶えず神に祈りを捧げ、神を賛美し続けた。祈りの合間には、自らの手で本を書き、それを売っていた。そのようにして得た収益はすべて、貧しい人々に施した。

聖女が聖ソフィア教会で十分な期間修業を積んだ後、ある夜、彼女は夢の中で神の天使を見ました。　天使は彼女の手を取り、街の外、セルツェムと呼ばれる場所へと導いた。そこにはソフィア宮殿があり、また聖救世主を祀る小さな木造の教会もあった。そこで天使は聖女にこう言った。

「あなたはここに留まるべきである。なぜなら、神はあなたを通して、この場所で多くの人々を救いに導かれるからである。」

この幻視は二度、三度と繰り返された。聖女は、目にした光景に驚き、戸惑いながらも、このような幻視を授けてくださった神に感謝した。しかし、神の御命令に従い、エウフロシニアはこう答えた。

「主よ、私の心は準備ができています。私の心は準備ができています！」

そして、その司教の前に天使が幻として現れ、こう言いました。

「神のしもべエウフロシニアを、セルツェにある救い主の教会へ導き、その教会のそばに住まわせなさい。そうすれば、そこに、神に奉献された乙女たちの修道院が設けられ、神はこの至福のエウフロシニアを通して彼女たちを救おうと望んでおられるのだ。」　彼女の祈りは、香りのよい香油のように神のもとへ昇り、聖霊は王の頭の上にあるかのように彼女の上に宿る。そして、太陽が全宇宙を照らすように、彼女の生涯は神の御使いたちの前で輝きを放つであろう。

司教は眠りから覚めると、神の御心を告げるために、尊者エウフロシニアのもとへ向かった。エウフロシニアは司教に自分の幻視について語り、二人は共に神に感謝を捧げた。

その後、司教はエウフロシニアの叔父であるボリス公、父であるゲオルギー公、そして多くのボヤールやその他の高潔な人々を呼び寄せ、幻視について伝えた上で、こう言った。

「さて、私は諸君の面前において、エウフロシニアにセルツェの聖救世主教会に隣接する土地を授ける。そこに女子修道院が建てられるようにするためである。誰も彼女を妨げてはならず、私が彼女に与えたものを奪ってはならない。」

皆は司教の決定に同意した。

その後、聖エウフロシニアは救世主を称える教会のそばに定住し、そこで、清らかな心をもって主イエス・キリストに仕えたいと願う乙女たちのための修道院が建てられた。こうして、聖エウフロシニアは、世俗を捨てて修道者の生活を送ることを選んだ多くの乙女たちの導き手となり、指導者となった。　至福のエウフロシニアの神に喜ばれる生き様を目の当たりにして、他のすべての乙女たちも、神に喜ばれる行いに励まされた。

しばらくして、聖女は父に次のように伝言を送りました。

「私の妹グラディスラヴァを私のところへ送ってください。私が彼女に聖書を教えたいのです。」

父はグラディスラヴァを許した。聖エウフロシニアは妹に書物の読み方を教え、多くの魂を救う教えを授けた後、彼女をキリストに捧げた。すなわち、エウドキアという名で修道者の姿をとるよう促したのである。

しばらくして、エウフロシニアの父は彼女にこう伝言を送った。

「お前の妹を我々のところへ送ってくれ。」

すると、エウフロシニアはこう答えました。

「彼女はまだ聖書を完全に学び終えていないので、もう少しの間、私と一緒にいさせてください。」

しかし、エウフロシニアの両親は間もなく、もう一人の娘も修道女になったことを知った。怒りに満ちた彼らは修道院を訪れ、心の底からの苦々しさを込めて、聖女エウフロシニアにこう言った。

「ああ、わが娘よ！　あなたは私たちに何をしたというのか！　あなたは私たちの古い悲しみに新たな悲しみを、一つの嘆きにさらなる嘆きを加えました！　私たちを置き去りにしただけでは足りなかったのですか？　今や、私たちにとってかけがえのないもう一人の愛しい子までも、私たちから奪ってしまったのです！　私たちがあなたたちを産んだのは、あなたたちを修道院に閉じ込め、死よりも早く棺の中にいるかのように黒い修道服を着せ、私たちから待ち望んでいた慰めを奪うためだったのですか！」　私たちがあなたたちを産んだのは、あなたがたが死ぬ前に、まるで棺の中のように、この黒い修道服に身を包み、修道院に身を置き、私たちがあなたたちから期待していた慰めを奪い去るためだったのか……？

一方、聖女エウフロシニアは、両親を魂を救うような言葉をもって慰め始めた。少しばかり慰められた両親は、親としての心に宿る自然な悲しみを霊的な喜びで和らげながら、自宅へと戻っていった。

ほどなくして、聖女エウフロシニアのもとへ、彼女の親戚であり、叔父ボリスの娘であるズヴェニスラヴァ王女が訪ねてきた。ズヴェニスラヴァは、結婚式のために用意していたすべての貴重な衣装を聖女のもとに持ち込み、聖女にこう言った。

「私の主よ、そして姉妹よ！私はこの世のあらゆる宝物を何とも思いません。これらの婚礼の装飾品を救い主の教会に捧げ、私自身は主であり私の神である方との霊的な結婚によって身を捧げ、その慈愛に満ちた軽やかな軛の下に頭を垂れたいと願っています。」

聖エウフロシニアは彼女を喜んで受け入れ、直ちに彼女を修道女として剃髪させ、エウプラクシアという名を授けた。そして、二人の修道女は断食と徹夜の祈りに励み、心を一つにして、敬虔さと真実をもって主に仕えた。

修道院の姉妹の数が日ごとに増えていることに気づいた聖エウフロシニアは、救い主の名を冠した石造りの教会を建てたいと願った。神の御加護のもと、彼女の熱意は実を結び、成功を収めた。ほどなくして、その年のうちに美しい石造りの教会が建てられた。工事の監督を務めていたのは、ヨハネという名の男であった。ある夜、彼がまだ日の出前に眠っていたとき、何度も次のような声が聞こえてきた。

「ヨハネよ！起きなさい。行って、全能者を称える聖堂の建設を見守りなさい。」

ある日、彼はエウフロシニアのもとへ行き、こう尋ねた。

「奥様、私を起こして、一刻も早く仕事に取り掛かるよう命じているのは、あなたでしょうか？」

エウフロシニアは、その声が人間のものではなく、神からのものであると悟り、ヨハネにこう答えた。

「たとえ私があなたを起こすよう命じたのでなかったとしても、あなたを仕事に呼びかけるその声に従い、その声が命じることを行いなさい。なぜなら、これは神の御業だからです。」

聖堂の建設工事はすでに終盤に差し掛かっていた。不足していたのは、聖堂の建設に必要な煉瓦だけだった。そこで、聖女は神にこう祈った。

「感謝いたします、人を愛する主よ、全能の神よ！　私たちに大きな恵みをお与えくださったあなたが、小さな恵みも与えてください。そうして、あなたの至聖なる御名の栄光のために建てられているこの神殿の建設を、私たちが最後まで成し遂げることができますように。」

翌朝、神の御心により、建設作業員たちは、焼成された煉瓦で満たされた窯を発見した。その煉瓦はすでに冷めており、しかも非常に堅固であった。これらの煉瓦は目に見えない手によって、極めて短期間――たった一夜のうちに――作られ、この奇跡的な出来事が起こったのである。皆は喜び

に満ち溢れ、神を賛美した。　こうして、教会の建設は完了した。その後、教会の奉献式のために、司教が聖職者たちや諸侯、そして町民全員を率いてここに到着し、皆が喜びに満ちて教会の奉献を祝った。一方、聖エウフロシニアは教会でひれ伏し、涙ながらに次のような言葉で神に祈りを捧げた。

「主よ、人の心を知り尽くす方、全能者よ、かつてソロモンの神殿に御目を留められたように、御名のゆえに建てられたこの神殿にも御目を留めてください。また、御神殿の周りに集められた御言葉の群れにも御目を留めてください。　この聖なる教会であなたに仕える私たちすべてに、憐れみをお与えください。あらゆる善き行いにおいて私たちを助け、私たちに課せられた重荷を無事に担い、私たちの花婿であるあなたに従って歩むことができますように。あなたご自身が、この言葉の羊たちの群れをお守りください。　私たちの羊飼い、門番、そして守護者となってください。そうすれば、姉妹たちの誰一人として、人々の魂を滅ぼす狼――悪魔――にさらわれることはありませんように。主よ、あなたが私たちの武器となり、堅固な守りとなってください。そうすれば、「*悪*が私たちに触れることなく、*傷*が私たちの体に近づくことも*ありません*」（詩編90:10）、また私たちの罪のために私たちを滅ぼさないように。私たちはすべての希望をあなたに託します。なぜなら、あなたは、あなたを信じるすべての人にとって、憐れみ深く、慈愛に満ちた神だからです。私たちは、生涯の終わりまで、絶えずあなたに栄光を捧げ続けます。

その後、聖女は姉妹たちに次のように説き始めました。

「見よ、私は主の御名のために、鳥が雛を翼の下に集めるように、あなたがたを集めました。私は、神の羊たちとして、あなた方を神の牧草地に集めました。ですから、主の戒めの中で草を食み、徳をますます高めてください。そうすれば、私も悲しみではなく喜びをもって、あなた方の救いを顧み、教え導くことができ、また、あなた方の労苦がもたらす霊的な実を見て、霊を喜ばせることができるのです。　ご覧の通り、私はどれほど大きな労苦を払って、あなたがたの心に神の御言葉を蒔いているか。しかし、時折、あなたがたの心の畑は、まるで実を結ばず、徳において成長していないかのようであり、それにもかかわらず、収穫の時は近づいている。　すでに脱穀場には鍬が置かれており、それは麦と稗とを分け隔てるでしょう。私の姉妹たちよ、あなたがたの中に、消えることのない火に投げ込まれるような稗が混じっていないか、私は大いに恐れています。　どうか、罪深い雑草から身を守り、ゲヘナの火を免れるよう、急いでください。自らをキリストの清らかな小麦とし、断食の労苦によって自らを磨き、謙遜、清さ、愛、そして祈りの中で奮闘しなさい。そうすれば、あなたがたは神に喜ばれるパンを自ら作り出すことになるでしょう。

このように、聖エウフロシニアは、まるで慈愛に満ちた母が自分の霊的な子供たちを大切に世話するように、修道院の姉妹たちを注意深く導きました。彼女の教えと祈りのおかげで、すべての修道女たちは徳のある生活を送り、聖霊が宿るにふさわしい器となるよう自らを磨き上げました。

前述の石造りの教会に加え、聖エウフロシニアは、至聖なる神の母の栄光と称えのために、もう一つの石造りの教会を建設しました。その教会をイコンで飾り立てた後、彼女はこの教会の隣に修道院を建設し、修道女たちに引き渡しました。[3882]

聖エウフロシニアは、自身の修道院に「オディギトリア」[3883] と呼ばれる至聖なる聖母マリアのイコン――すなわち、聖福音記者ルカが生前に描いたイコンの一つ――を安置したいと願った。

[3882] 聖エウフロシニアによって設立された修道院は、現在も「スパソ＝エウフロシニエヴァ」という名称で存続している。1579年にイエズス会に占領されたが、1820年にその支配から解放された。　修道院には、聖エウフロシニアが制作した祭壇上の十字架が保管されており、参拝者には、尊者エウフロシニアが修行に励んだ2つの独房が公開されている。修道院には、修道女を養成するための女子学校が併設されている。

[3883] オディギトリア（道しるべ）は、ギリシャ語で「道案内人」を意味する。この名称は、信者たちの霊的な道案内人である聖母マリアを称えて、いくつかのイコンに付けられたものである。　特に、コンスタンティノープルのヴラヘルナ教会に安置されていた聖母オディギトリアのイコンは、かつて聖母ご自身が二人の盲人の前に現れ、彼らをヴラヘルナ教会の自身のイコンのもとへ導き、その前で視力を授けたことから、このように名付けられました。　「オディギトリア」という名称は、航海者たちが船の船首や船尾に安置した聖母マリアのイコンにも用いられました。そのため、多くの地域で

聖女は、聖ルカによって描かれた三つのイコンのうち、一つがエルサレムに、もう一つがコンスタンティノープルに、そして三つ目がエフェソスにあることを知っていました。涙を流しながら神に熱心に祈り、願いを叶えてくださるよう懇願した後、彼女は修道院の従者の一人であるミハイルを、　コンスタンティノープル へ、敬虔なマヌイル王[3884] と至聖なるルカ総主教[3885] の元へ、多くの贈り物を携えて派遣し、福音記者ルカによって描かれた至聖なる神の母のイコンのうち、特にエフェソスにあるものを彼女に送ってほしいと懇願した。　王と総主教は、至福のエウフロシニアが神と聖母マリアに対して抱く並々ならぬ熱意を見て、彼女の願いを叶えることを決め、使者をアジアへ派遣した。その使者はエフェソスからコンスタンティノープルへ、奇跡的な聖母マリアのイコンを持ち帰った。皇帝と総主教は、そのイコンをエウフロシニアの修道院の従者に託し、彼を見送るとともに、キリストのしもべである彼女への称賛と総主教の祝福を記した書状を授けた。

尊いイコンを受け取った聖エウフロシニアは、大きな喜びに満たされ、主イエス・キリストとその聖母マリアに感謝を捧げた。エウフロシニアはこのイコンを聖救世主教会に安置し、金や宝石で飾った[3886] 。

その間、聖女エウフロシニアの両親は他界した。修道生活において十分な年月を過ごした後、至福の聖女エウフロシニアは、エルサレムの聖地を訪れ、キリストの聖棺に礼拝を捧げたいと願った。彼女はそこで生涯を終えたいと考え、そのことを主に向かって熱心に祈っていた。　彼女を取り巻く者たちがその意図を知ると、皆、深い悲しみに打ちひしがれた。彼女の元へ駆けつけ、皆は涙ながらに、自分たちや故郷を置いて行かないでほしいと懇願し始めた。しかし、聖女は、まるで母親が子供たちを慰めるかのように、愛を込めて、魂に益となる言葉で皆を慰めた。　その中、エウフロシニアのもとには、最愛の兄ヴィャチェスラフが、妻と子供たちを連れてやって来た。彼女に頭を下げると、彼は涙ながらにこう言った。

「お姉様、私の姉であり母よ。なぜ今、私を置き去りにしようとするのですか！　なぜ私たちを置き去りにするのですか、私の目の光であり、私の人生の導き手である方よ！」

すると聖女はこう答えた。

「あなたたちを置き去りにしたいわけではないのです。あの聖なる地で、私自身とあなたたちのために祈りたいのです。」

至福のエウフロシニアは、兄との霊的な対話を終えると、二人の娘、キリニアとオルガを、姉のエウドキアのもとに残すよう彼に命じた。　というのも、至福のエウフロシニアは、その霊的な賜物によって、誰かをその瞳で見つめるやいなや、その人に徳の霊が宿っているか、また主のために選ばれた器となり得るかを即座に見抜くことができたからである。そのようにして、彼女はあらかじめ、その二人の若い乙女たち、すなわち弟の娘たちが、その徳ある生活によってキリストに喜ばれることを知っていたのである。　ヴィャチェスラフがエウフロシニアのもとを去ったとき、聖女は彼の娘たちにこう言いました。

「私は、あなた方を不死の花婿に婚約させ、天国の宮殿へと導きたいのです。」

その乙女たちは、彼女の神に導かれた言葉に心を和ませられ、魂が感動して、彼女の足元にひれ伏し、こう言った。

「主の御心がありますように！　あなたの聖なる祈りが、あなたの望む通りに私たちを導いてくださいますように。」

、遠方への旅、特に航海に出る際、聖母マリア・オディギトリアのイコンの前で祈りの歌を捧げるという敬虔な慣習が今も残っています。 聖母オディギトリアのイコンの祝日は、1月21日、7月28日、およびその他の日に執り行われる。

[3884] マヌイル・コムネノス皇帝は1143年から1180年まで在位した。

[3885] ルカ・クリソヴェルゴスは1186年から1196年まで総主教を務めた。

[3886] 1239年、このイコンは聖アレクサンドル・ネフスキー大公の妃によってトロペツ市へ移された。

エウフロシニアは、少女たちのその善意に心から喜び、彼女たちに魂を救う教えを説き、その心にキリストへの愛を育んだ。

それからしばらくして、エウフロシニアは弟のヴィャチェスラフを呼び寄せ、こう言った。

「私はあなたの娘たちを修道女として剃髪させたい。そうすれば、彼女たちはキリストの花嫁となるでしょう。」

しかし、ヴィャチェスラフは彼女の言葉に心を乱され、こう言った。

「母上よ！　あなたは私に一体何をしようとしているのですか？　あなたは私の悲しみに、さらに別の悲しみを重ねようとしているのです。まず第一に、あなたが遠い国へ去ってしまうことで私を泣かせようとし、さらに、子供たちから慰めを奪われることで、私を泣かせようとしているのです！」

一方、ヴィャチェスラフの妻、すなわちあの少女たちの母は、夫以上に心を痛め、非常に激しく、長く泣き続けた。　しかし、ヴィャチェスラフとその妻は、至福のエウフロシニアの言葉に逆らうことを敢えてしなかった。彼らは彼女の言葉を、あたかもキリストご自身の言葉であるかのように受け止め、彼女が真のキリストのしもべであり、聖霊のふさわしい器であることを知っていたからである。

その後、エウフロシニアは当時司教であったディオニシオスに、修道院に来て、少女たちを教会に導き入れ、修道服を着せるよう頼んだ。その際、キリニアにはアガフィアという名が、オルガにはエウフィミアという名が与えられた。その後、司教は、古来より神に喜ばれた聖なる父たちと母たちの祝福をもって、彼女たちを祝福した。

しばらくして、至福のエウフロシニアは自身の修道院を妹のエウドキアに託し、すべての修道女たちに口づけをして、神に祈りを捧げ、すべてを神に委ねて、エルサレムへと向かった。その際、皆がエウフロシニアを見送り、苦い涙を流した。　もう一人の兄弟であるダビデと、親戚のエウプラクシアを伴い、エウフロシニアはまずコンスタンティノープルに到着した。そこで彼女は、皇帝と総主教から大いなる栄誉をもって迎えられた。その後、この地の聖なる教会や多くの聖人の遺骨に礼拝を捧げた後、エルサレムへと向かった。　この街に到着すると、彼女はキリストの聖棺に拝礼し、その後、聖棺のそばに金の香炉を置き、エルサレム教会と総主教に多くの献品を捧げた。福者エウフロシニアは、エルサレム近郊の他の栄光に満ちた場所も巡り、　聖地を深い感銘をもって礼拝した後、エウフロシニアは「ロシア修道院」と呼ばれる修道院に身を寄せた。その修道院は、至聖なる神の母マリアの栄光と誉れを称えて建てられた教会のそばに位置していた。その後、再び主の聖墳墓を訪れ、涙と心の感動を込めて、次のように祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、神の御子よ、私たちの救いのために、清き御母マリアから生まれ、『求めよ、そうすれば与えられる』（マタイ7:7）と仰せになった方よ。　罪深い私が、お願いしたことをあなたから授かったことに対し、あなたの慈愛に感謝いたします。なぜなら、私は、あなたがその清らかな御足で聖別されたこれらの聖地を拝見する恵みにあずかり、私たちのために死を受け入れ、その清らかな御肉を安らかに休ませたあなたの聖なる御墓に口づけする恵みにあずかったからです。　おお、至聖なる主よ！　もう一つお願いがあります。この聖なる地で息を引き取らせてください。私の謙虚な祈りを軽んじないでください、私の創造主よ！　この聖なる都で私の霊をお受け入れになり、あなたに喜ばれた他の者たちと共に、アブラハムの懐に私をお迎えください。

このように祈った後、聖女は前述の教会へと向かい、その近くに身を寄せました。そこで彼女は肉体の病に倒れました。病床に伏しながら、彼女は主に向かって次のように祈りました：

「栄光はあなたにあります、わが主、主イエス・キリストよ！　あなたにふさわしくないこのしもべの願いを聞き入れ、あなたご自身の御心通りに私を導いてくださったことに感謝いたします。」

至福のエウフロシニアはヨルダン川にも行きたいと願っていたが、病のためにはもうそこへ行くことができなかった。そこで、彼女は弟のダビデとエウプラクシアをヨルダン川へ遣わした。二人はそこから戻ると、ヨルダン川の水を彼女に持ってきた。　聖女はその水を大いなる喜びと感謝をもって受け入れ、その水を飲み、全身に振りかけた。その後、床に横たわってこう言った。

「この世に生まれるすべての人を照らし、聖別してくださる神に、賛美あれ。」

その病の最中、聖女は天使の幻視を受け、そこで神から、彼女の幸いな最期と、彼女のために用意された安息について告げられた。そして聖女は、自らの救い主である神を心に喜び、神の多くの恵みを称え、賛美した。

その後、聖女は聖サヴァ修道院へ使者を送り、アルヒマンドリトと修道者たちに、そこに埋葬の場所を譲ってもらえないか尋ねさせた。

すると彼らはこう答えた。

「我らには、聖なる父サヴァからの戒めがあります――彼の修道院には決して女性を埋葬してはならない、と。聖母マリアの栄光と誉れのために建てられた、フェオドシエフ共同修道院があります。　そこには多くの聖なる女性たちが眠っている。聖サヴァの母も、聖テオドシオスの母も、聖テオドティオス（無銭の聖人）の母も、その他多くの敬虔な女性たちもそこに眠っている。至福のエウフロシニアも、そこに埋葬されるのがふさわしい。

尊者である彼女は、そのような返答を聞くと、自身の遺体が聖なる女性たちの聖遺物と共に安置されることに対し、神に感謝を捧げ、直ちにテオドシイ尊者の修道院へ使者を送り、埋葬の場所を用意するよう依頼した。　その修道院の修道女たちは、教会の玄関付近の場所を指定し、聖女を埋葬するための棺を用意した。

聖女エウフロシニアは、病床でさらに二十四日間を過ごした。　その至福の臨終の時が近づくと、彼女は司祭を呼び、彼からキリストの聖なる秘跡を受け、祈りの最中に、その聖なる魂を神の御手に委ねた。それは、 年5月[3887] の23日であった。彼女の尊い遺体は、聖テオドシオスの修道院、至聖なる聖母マリア教会の玄関付近に安置された[3888] 。

その後、彼女の兄ダヴィドと親族のエウプラクシアは、故郷のポロツクに戻り、尊者エウフロシニアの安らかな死と尊厳ある埋葬の知らせをここに伝えました。　至福のエウフロシニアの死を悼み、皆は、父と子と聖霊の栄光のために、今この時も、そして永遠に、すべての被造物によって賛美され、称えられる御名を讃え、毎年彼女の記念を執り行うことを決めた。アーメン。

6月6日

5月24日（旧暦）

私たちの尊い父シメオン・ディヴノゴルツの記念日

記念日5月24日

[3887] 聖エウフロシニアは1178年に帰天した。

[3888] 聖エウフロシニアの尊い遺骸はその後（一部の説によれば1187年に）、キエフへ移され、そこで聖テオドシオスの洞窟に安置されている。

ヨハネという名の若者が、両親と共にエデッサ[3889] からアンティオキア[3890] にやって来た。ヨハネは結婚適齢期に達していたため、両親はそこでマルファという名の非常に美しい娘を見かけ、彼女の両親に、娘を自分たちの息子に嫁がせてくれないかと尋ねた。マルファの両親は、このことをマルファに伝えた。　しかし、その娘は、自分の処女性を清く保つために、キリスト、すなわち神であり主である方に身を捧げることを決意していたため、結婚生活を望んでいなかった。　しかし、両親が結婚を強要したため、マルファは家を出て、アンティオキアの街の近くにある洗礼者ヨハネの教会へと急いで向かった。そこに着くと、彼女はひれ伏し、涙ながらに主に向かって祈り始め、自分にとってより有益で救いとなるよう、すべてを整えてくださるよう願った。　すると、その教会でマルタに幻が現れ、両親に従い結婚するよう命じた。神の御心に従い、この乙女はヨハネと結ばれ、生活のあらゆる面で彼の助け手となるだけでなく、あらゆる善行へと彼を導く指導者ともなった。　マルファは、神に喜ばれることを目指し、敬虔さ、節制、そして祈りによって自らの生活を彩った。誠実なマルファは、しばしば洗礼者ヨハネの教会を訪れ、そこで洗礼者ヨハネに深い熱意をもって祈りを捧げ、彼の祈りによって神から「男の子を授かる」という恵みを請い求めた。　その際、マルファは、かつてアンナがサムエルを神への奉仕に捧げたように（サムエル記上1:11）、その子を神に捧げることを誓った。それから1年後、マルファが夜ここに祈っている最中にうたた寝をしたとき、聖ヨハネ・洗礼者が彼女に現れてこう言った。

「希望を持ちなさい、妻よ。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたは願ったものを授かるでしょう。神の御好意のしるしとして、この香を受け取りなさい（そう言って、彼は彼女に香を盛った香炉を渡した）；この香炉であなたの家を燻しなさい。」

眠りから覚めると、マルタは自分の手に、言葉では言い表せないほどの芳香を放つ香炉があることに気づいた。

すると、再び主の先駆者が彼女に現れ、こう言った。

「夫のもとへ行きなさい。あなたは息子を身ごもり、その子をシメオンと名付けるでしょう。彼はあなたの右の乳房からの乳のみを飲み、左の乳房には全く触れないでしょう。　彼は『右の手の息子』となる。肉も、ワインも、人の手によって巧みに調理された他のいかなる食物も口にしない。彼の糧は、パン、蜂蜜、塩、そして水のみである。　あなたは、主なる私たちの神に仕えるために定められた聖なる器として、彼を細心の注意を払って育てなければならない。彼の　誕生から二年後、あなたは彼を私の教会に連れてきて、そこで彼に洗礼を授けるのだ。その幼子が洗礼の恵みにあずかる時、彼が将来どのような者になるかが、すべての人々に明らかになるだろう。

マルタは、この幻視に恐れと喜びに満たされ、神と主の聖なる先駆者ヨハネに深く感謝を捧げた。その後、夫の家に戻り、彼との間に身ごもり、時が満ちると、何の苦しみもなく息子を産み、その子をシメオンと名付けた。　マルタは右の乳房で赤ん坊に授乳した。時折、幻の中で聖ヨハネ・バプティストが彼女に語った言葉を試すように、左の乳房を赤ん坊に与えたが、赤ん坊は泣きながら左の乳房から顔を背け、いかなる場合でもそこから乳を飲もうとはしなかった。　さらに驚くべきことに、マルタが肉を食べたりワインを飲んだ日は、その日、赤ん坊は母親の乳房から全く乳を飲まず、翌日まで空腹のままでいた。　赤ちゃんが母乳を飲まない理由を理解したマルファは、肉やワインを控えるようになり、自らも絶えず断食と祈りに励みながら、将来偉大な断食者となるはずのその子を育てた。

その幼児が二歳になった後、両親は彼を洗礼者ヨハネ教会に連れて行き、そこで洗礼を授けた。洗礼を受けた直後、その幼児はすぐに話し始め、次のようにはっきりと語った。

[3889] 「エデッサ」という名前の都市はいくつか知られている。この場合、おそらくメソポタミア北部に位置していたエデッサ（現在のウルファ）を指すものと思われる。

[3890] 言うまでもなく、シリアのアンティオキアのことである。

「私には父がいるが、父はいない。私には母がいるが、母はいない！」

彼はこの言葉を七日間繰り返し口にした。　両親はこれに大いに驚き、この幼子が地上の事柄ではなく、天上の事柄を模範とする者になることを予感した。幼子が母乳で育てられた後、肉は決して口にしようとしなかったため――煮込んだものも一切口にしなかったのと同様に――パン、蜂蜜、水で養われるようになった。

その子が6歳になった頃、（ユスティニアヌス大帝の治世下で）アンティオキアで地震が起こった[3891]。この地震の際、シメオンの両親が住んでいた石造りの家が倒壊し、父親は倒壊した家屋に押しつぶされて亡くなったが、母親は、神の御心により、地震の最中に家を出て神殿に身を置いていたため、一命を取り留めた。　幼いシメオンもまた、その時、自宅にはおらず、聖第一殉教者ステファノの教会にいて、そこで神によって無傷で守られていた。教会を出たシメオンは、倒壊した家々の瓦礫が至る所に散乱していたため、自宅へ帰る道が分からなかった。　自分の家が見つからず、彼はアンティオキアの瓦礫の中を長い間さまよった。ついに、彼の両親を知っていたある敬虔な女性が、彼を肩に担ぎ上げ、彼女が住んでいた街からそう遠くない山へと連れて行った。

一方、シメオンの母である聖マルファは、自分の家が倒壊したことを知り、夫と共に息子も石の壁に押しつぶされて亡くなったと思い込み、激しく泣き崩れた。それから七日後、聖ヨハネ・洗礼者が彼女に現れ、その少年は生きていると言い、彼がどこにいるかも教えてくれた。　マルタは直ちにその山へ向かった。そこに着くと、彼女はシメオンのことを先述の女性の元で見つけた。その女性は驚きながら、シメオンの母に、その少年が七日間ずっと、わずかなパンと水以外は何も口にしていないと告げた。　母は息子を連れて洗礼者ヨハネの教会へ向かい、少年を生き延びさせてくださった神と、その御使いである洗礼者ヨハネに感謝を捧げた。その後、彼女は自宅に戻った。

ある日、マルファが心の中で、その少年について見た幻や、すでに少年に関して起こった多くの驚くべき出来事について思い巡らせていたとき、彼女は自分の息子に将来何が起こるのかと戸惑っていた。眠りにつくと、彼女は次のような幻を見た。まるで翼が生え、少年を両腕に抱いたまま高みへと舞い上がったかのようだった。 彼を主への捧げ物として天へと捧げ上げながら、こう言った。

「わが子よ、あなたのそのような昇天をこの目で見たいと願う。多くの女性たちから祝福されるにふさわしいと認められた私を、私の創造主が安らかに見送ってくださいますように。私は、至高なる御方に、私の胎の果実を捧げるのですから」

その後、マルファは息子と共に、アンティオキアにある「ケルビム」と呼ばれる場所に定住した。この地名が付けられた由来は次の通りである：
ローマ皇帝ウェスパシアヌスの息子ティトゥス[3892]は、エルサレムを征服した後、エルサレム神殿から、契約の箱の上に立っていた二つの金の　ケルビム像を取り上げ、それらをアンティオキアへ持ち帰った。これらのケルビム像が安置されたその場所こそが、「ケルビム」と呼ばれるようになったのである。

その頃、聖なるマルタが息子と共にこの地にとどまっていたとき、シメオンにはある幻が見えた。彼は、高い玉座に座しておられる主イエス・キリストを目撃し、四方から多くの義人たちが主のもとに集まってくるのを見た。玉座の前には「いのちの書」が開かれており、それに基づいて裁きが行われていた。　東には至福の楽園が、西には燃え盛るゲヘナが見えた。すると、聖霊がシメオンにこう言われた。

[3891] ユスティニアヌス1世（大帝）は527年から565年まで在位した。

[3892] ウェスパシアヌスは西暦70年から79年までローマ帝国を統治した。その息子ティトゥスは79年から81年まで在位した。

「聞け、少年よ。ここで見ているすべてのことを悟りなさい。神に喜ばれるよう努めなさい。そうすれば、あなたは他の聖人たちと同じ栄光と誉れに与り、主を愛するすべての人々のために用意された、言葉では言い表せないほどの恵みを受けることになるだろう。」

この幻を見た後、少年は神の知恵に満たされ、多くの知られざる驚くべき神秘についての啓示と幻を受けた。

しばらくして、シメオンはある男を見かけた。その男は顔立ちが素晴らしく、白い衣をまとい、彼にこう言った。

「私について来なさい。」

シメオンは彼の後を追った。彼に現れたその男は、セレウキアに隣接するティベリヌスの地へと彼を導いた。男は少年を「ピラ」と呼ばれる場所へ連れて行った。そこで少年は荒野の山に滞在し、獣たちを子羊のように扱って共に暮らした。　彼の同居者は獣たちだけであり、人間には誰一人として彼を見る者はいなかった。昼も夜も、彼は言い表せない光に照らされていた。シメオンは、彼をここに連れてきたあの光り輝く男の手に、食事を授かっていた。その男は頻繁に彼の前に現れ、あらゆることを教え、時が来れば食事を差し出した。

しばらくして、その同じ男の教えに従い、シメオンは山の頂上へと登り、そこで小さな修道院を見つけた。その修道院の院長であったのは、柱の上に立っていた至福のヨハネであった。この院長は頻繁に幻視を受け、至福の少年シメオンが自分のもとを訪れることを予見していた。　例えば、彼は白い衣をまとった少年を、時には戦車に乗って修道院へ向かう姿で、時には空を飛んで修道院の上を漂う姿で、時には明るい柱の上に立ち、その柱と共に修道院に近づいてくる姿で見た。この至福のヨハネは、その少年を指さしてこう言う天使も見た。

「ほら、この者こそ、あなたを救いに導く者だ。」

修道院長ヨハネは、これらすべての幻視について、共に暮らしていた修道士たちに語った。

やがて、神の御心により、至福のシメオンが彼の修道院を訪れたとき、修道士たちは、まだ六歳にも満たないそれほど幼い子供が、一人でこのような荒野を歩き回り、修道院を見つけられたことに大いに驚いた。　一方、修道院長ヨハネは、自分の柱の上からシメオンを見て、これがまさに自分が幻視の中で何度も見ていた少年そのものであると悟った。この出来事に大いに喜び、ヨハネはシメオンを自分のところへ呼び寄せ、腕に抱き上げ、涙を流しながら神に感謝しつつ、その頬に口づけをした。　その少年は顔立ちが非常に美しく、金髪で、その眼差しは清らかで輝き、その心の優しさをすべての人に示していた。少年は柔和で、寡黙であり、答えを急ぐことはなく、言葉遣いは理知に富み、天からの賜物に満ちていた。シメオンはその修道院で、他の者たちとは隔絶して過ごし、口を閉ざして沈黙を守っていた。　彼の食事は、時として三日おき、時として七日おき、また時には十日おきに、水に浸したエンドウ豆を口にし、ごくわずかな水を飲むというものであった。これらすべてを見て、修道院長ヨハネは深く驚嘆した。

その修道院には、羊の群れを飼う一人の素朴な男が住んでいた。彼は、その若者の超自然的な苦行を見て、悪魔のような嫉妬に燃え上がり、彼を殺そうと企んだ。　しかし、彼がその邪悪な企てを実行に移そうとした瞬間、その手はたちまち萎えてしまった。全身に病が襲い、もはや死の淵に立たされた。その結果、彼は修道院長と至福のシメオンに自分の罪を告白し、悔い改めた。　一方、その少年は悪意のない人であったため、彼の罪を赦しただけでなく、神に彼の癒やしを祈った。すると、彼がその萎えた手に触れた途端、その手は癒やされ、その男の全身は健康を取り戻した。　この時から、修道院長と兄弟たちは、この祝福された少年をますます崇敬するようになった。彼らは、彼の中に、母の胎内からすでに神によって御自身に仕える者として選ばれた者を見出したからである。

しばらくして、聖シメオンは、アバ・ヨハネの柱の近くに自分のための柱を建ててほしいと、兄弟たちに熱心に願い始めた。彼の願い通り、その柱はヨハネの柱のそばに建てられた。　その少年

は、生後わずか7歳にして、聖ヨハネによって修道者の装いを授けられ、その柱に登った。そして、アバ・ヨハネに倣って、柱の上に立っていた。

彼が柱の上での苦行を始めたとき、私たちの主イエス・キリストが、言葉では言い表せないほどの美しさを放つ少年の姿で彼の前に現れた。その少年を見た聖シメオンは、心の底から彼への愛に燃え上がった。そして、それが神であり、自分の主であることを悟ると、彼は大胆にもこう尋ねた。

「主よ、どうしてユダヤ人たちはあなたを十字架につけたのですか？」

すると主は、両手を十字架の形に広げ、彼にこう言われた。

「このように、ユダヤ人たちはわたしを十字架につけたのだ。とはいえ、わたし自身が進んで十字架にかけられることを望んだのである。あなたは勇気を奮い起こし、強くなれ。そして、生涯を通じて、わたしと共に十字架を背負いなさい。」

この時から、聖シメオンはまるで自分の肉体を完全に忘れ去ったかのように、無形の存在のようになり、天使のような生活を送り、その功績においては長老ヨハネさえも凌駕するようになった。ヨハネは毎晩三十篇の詩篇を歌ったが、シメオンは五十篇、時には八十篇を歌い、しばしば一晩で詩篇全巻を歌い上げ、全く眠りに落ちることなく、昼間も聖人は絶えず主を賛美した。　一方、長老はシメオンの若さを憐れみ、これほど大きな労苦によって彼が疲れ果ててしまわないかと懸念し、次のように諭した。

「わが子よ！　人間の力をはるかに超えるその労苦を止めなさい。そのせいで、私たちさえ眠ることができないのです。あなたが生まれた時からキリストと共に十字架につけられたことだけで、あなたにとっては十分すぎるほどです。あなたには、たとえわずかであっても、自分の肉体の世話をする必要があります。　少なくとも短い眠りに身を委ね、適度な食事を摂る必要がある。そうしてこそ、あなたは断食の生活という偉業を最後まで貫き通せるのだ。何しろ、食べ物や飲み物は人を汚すものではない。主ご自身が聖書の中でこう言われているではないか。「*生き物で動くものはすべて、あなたがたの食物となる。草の緑のように、すべてをあなたがたに与える*」（創世記9:3）。

聖シメオンは長老にこう答えました：

「食べ物は人を汚すものではありませんが、罪深い思いを生み出し、心を曇らせ、情欲を根付かせ、霊的な人を肉的な人へと変え、その思いを地上の欲望へと向かわせます。　しかし、私たち修道士には、昼も夜も主の律法を学ぶことがふさわしい。そうしてこそ、眠気による惑わしに陥ることなく、また、預言者が言うように「*わが魂は悲しみによって衰え果てる*」（詩篇118:28）という落胆に陥ることもないのだ。　とりわけ、神を賛美するためには、眠ることのない活気をもって口を開かなければならず、そうしてこそ、私たちは聖霊の恵みを引き寄せることができるのです。とはいえ、敬愛すべき父よ、私の言葉などあなたには何の関係があるでしょうか。私は自分自身のために、決して他人のためではなく、この律法を説いているのです。なぜなら、私にはこの若き肉体をこれほど偉大な修行によって鍛え上げなければならないからです。

長老は、この若者の賢明な答えに大いに驚いた。

ある日、シメオンが聖霊の光に照らされたとき、悪魔の王国と悪魔たちのあらゆる妄想が彼に明らかにされた。彼は、大きな玉座に座り、頭上に輝く冠を戴き、その周囲に悪魔の軍勢が控えている闇の君主そのものを目撃したのである。　闇の君主の御前には、彼が用意したこの世のあらゆる誘惑――金、銀、宝石、真珠――が目に映っていた。それらはまるで沼地の中に浮かんでいるかのようであり、至る所でラッパや笛、その他の楽器の音が響いていた。　そして、美しい女性の姿をした罪も見えた。その背後には、人々を罪へと誘惑する誘惑者の僕たちが従っていた。虚栄の霊、不潔の霊、怠惰の霊、そして金銭欲の霊が見えた。また、その口は決して満たされることなく、全世界を飲み込もうとしている大蛇も見えた。　これらの誘惑の霊たちは、シメオンをも罪へと誘おうとした。　彼らは様々な狡猾な言葉で彼を罪へと誘ったが、彼はいつもの武器――尊き十字架の御印――で身を守

り、キリストの御名を呼び求めて、まるで太陽が闇を追い払うかのように、常にそれらの悪魔的な妄想を自らから追い払っていた。　そして教会を見上げると、シメオンは神の御座を目にし、そこから神の栄光が放たれ、シメオンをも照らし出した。その時、教会から一人の総主教が聖シメオンのもとへ遣わされ、その手には香りのよい聖油を持っていた。彼はそれをシメオンの頭に注ぎながら、こう言った。

「この塗油の力によって、悪霊たちを追い払え！　天より与えられた神の力に身を固め、彼らを千単位で打ち倒し、数万単位で打ち負かしてください。さあ、あなたの創造主を信頼して勇気を奮い立たせなさい。なぜなら、*「敵は彼に打ち勝つことはできず、不義の子は彼を苦しめることはない」*からです（詩編88:23）。

この時から、至福のシメオンは不浄な霊たちに対する権威を授かり、人々からそれらを追い出し、あらゆる他の病気からも人々を癒やすようになった。

ある日、神の僕シメオン・柱上者は、次のような言葉で祝福された長老に語りかけました。

「父よ！つい先日、ほんの数日前、主は私にサタンの権威と、そのすべての破滅的な富を明らかにしてくださいました。私は、サタンが徳ある人々と戦う際に用いる、あらゆる諂いと狡猾さを目の当たりにしました。」

すると、ヨハネはシメオンにこう答えました。

「神が、わが子よ、そのあらゆる策略からあなたを守られますように。」

シメオンは言った：

「たとえ不義な悪魔の力が、私たちに多くの悪をもたらそうと企んだとしても、その企みは決して成功することはないでしょう。」

一方、長老は、その若者が悪魔の誘惑を何とも思っていないのを見て、彼が驕りに陥らないか心配し、こう言った。

「いずれにせよ、わが子よ、我々は悪魔の多種多様な策略を警戒すべきであり、ただ我々の徳だけに頼るだけでは不十分である。なぜなら、我らの敵は鉄のブーツを履き[3893]、常に修道士たちを誘惑に引きずり込もうと努めているからだ。そして、好機と見るや、常に修道士たちに対して激しい戦いを仕掛けてくるのである。」それゆえ、私たちは常に神に祈り、エマヌエル[3894]の助けを求めなければなりません。そうして、神が常に私たちと共にいてくださり、敵のすべての力を打ち砕いてくださるよう願うのです。

聖人たちがこのように語り合っている間、その会話を耳にしたサタンは激怒し、若き修行者に向かって歯ぎしりし始め、　その後、様々な幻影で彼を脅かし始め、時には凶暴な蛇に、時には獣へと姿を変え、昼夜を問わず彼に襲いかかり、まるで彼を食い尽くそうとしているかのようでした。しかし、至福のシメオンは、至高の神を助け手とし、十字架の印で身を守りながら、こう言いました。

「*『夜の恐怖、昼に飛ぶ矢、暗闇を彷徨う疫病、真昼に荒廃をもたらす疫病』*を恐れない」（詩編90:5–6）。

12月の夜、まさに夜の第二番の番の頃、悪魔はすべての軍勢を集め、突然聖シメオンのもとへと向かい、柱の上に設けられた屋根を引き剥がし、至福のシメオンを柱から下に突き落とした。しかし、その少年は神の御手によって守られていた。　それゆえ、聖人は無傷のまま柱のそばに立ち、精神は凛としており、敵の襲撃を微塵も恐れていなかった。その後、悪魔は海から荒れ狂う激しい風を巻き起こした。嵐が吹き荒れ、雷鳴が轟き、一晩中シメオンの柱を打ち続ける稲妻が見えた。　一方、聖ヨハネは、シメオンがすでに雷と稲妻によって殺されたと思い込み、泣き出し、修道士たちに、

[3893] これは、悪魔たちの力と狡猾さを示す比喩的な表現である。

[3894] エマヌエル――これは、処女から生まれる御子について記されたイザヤの有名な預言（イザヤ書7:14）における、メシア、すなわちイエス・キリストの呼称である。この名はヘブライ語で「神は我らと共におられる」を意味する。

少年がまだ生きているか、柱の上にいるかを確認しに行くよう頼んだ。　しかし、修道士たちはヨハネに答えなかった。あの悪魔的な幻影を恐れて、彼らは自分の独房から一歩も外に出ようとしなかったからである。また、修道士の中には、悪魔の誘惑に屈して、少年シメオンに憎しみを抱いている者たちもいた。修道士たちは互いにこう語り合った。

「あの少年の、人間の力を超えた苦行はどこへ行ったのか？　その偉業はどこにあるのか？　奇跡はどこにあるのか？　今こそ、彼自身で自分を救ってみろ！」

しかし、祝福されたシメオンは、長老ヨハネが自分のことを嘆いているのを耳にすると、彼に向かって大声でこう叫んだ。

「父よ、私のことを悲しまないでください。私はキリストの恵みに守られているため、何一つ傷ついてはいません。悪魔は恥をかかされたのです。」

朝になると、修道士たちはシメオンの柱へと向かった。少年がすでに死んでいるだろうと思っていたが、彼の顔が神の天使のように輝き、生き生きと喜びに満ちているのを見て、恥じ入った。長老ヨハネの叱責を受け、彼らは恥じ入ったまま、それぞれの独房へと戻っていった。

アンティオキアの大司教エフレムは、至福のシメオンについて耳にした。　彼がどれほど偉大な功績をもって生涯を送っていたかを知ったエフレムは、彼の元を訪れた。そして、肉体はかくも若くとも、すでに徳のある生活において十分に完成され、キリストと共に十字架につけられたその少年を見て、神を賛美し、涙を流しながら自分の街へと戻り、市民の益となるよう、至る所でこのキリストのしもべの厳格な断食の生活について語り広めた。

この時から、修道士も一般信徒も、多くの人々が至福のシメオンのもとを訪れるようになった。ある者は彼に会いたいがために、ある者は神に霊感を受けた彼の語りかけに耳を傾けたいがために、そして最後に、シメオンを無償の医師であり癒し手と見なし、自らの肉体の病を癒やしてもらおうとする者たちもいた。

ある日、至福のシメオンは、訪ねてきた人々から丈夫で硬い縄を求め、誰にも知られぬよう密かにそれを自分の体に巻きつけた。その結果、縄は骨にまで食い込み、彼の体は傷だらけとなり、そこから血が流れ出した。血に染まった毛皮の衣は聖人の体に張り付き、　すでにその肉体は腐り始めていたが、聖シメオンはこの苦行を勇敢に耐え抜いた。ついに、腐敗した肉体から悪臭が漂い始めた。柱の上へ登ってきた修道士たちは、当初、この悪臭がどこから来ているのか分からなかった。しかしその後、聖人の偉大な苦行を理解し、そのすべてをアッバ・ヨハネに報告した。　ヨハネは、これほど偉大な苦行に戦慄し、シメオンの体から縄を少しずつ取り除くよう命じ、彼に自分の体をこれほど激しい苦痛にさらすことを禁じた。

祝福されたシメオンは、その口から川のように流れ出る教えの恵みも持っていた。　長老ヨハネは兄弟たちを集め、シメオンに説教を語らせるよう命じ、自らも愛を込めてその言葉に耳を傾けた。こうして、この若き少年は、年長者たちにとって賢明で有益な教師となった。なぜなら、彼の口は聖霊の恵みに満ちていたからである。

長老ヨハネは、シメオンの教えの賜物ゆえに、彼を「新しいダビデ」と呼んだ。また、夢の中で彼に関して見た幻についても語った。すなわち、右手に百の蜜の壺を持ち、その蜜が少年の頭上から流れ落ちているような、ある種の神聖な力を見たと語ったのである。

ある時、別の長老がシメオンの柱を指さしながら、兄弟たちにこう尋ねた。

「この柱には鳩が住んでいるのか？」

修道者たちは彼にこう答えた。

「いいえ。」

すると、老人はこう言った。

「私は、明るい姿をした鳩が、扉からその若者のところへ飛び込んでくるのを見ました。それから一時間後、その若者の元から飛び立ち、天へと昇っていきました。」

その老修道士が兄弟たちと語り合っている間、至福のシメオンは幻視を見た。彼は、まるで翼を持つかのように、高みへと引き上げられ、全宇宙を飛び回っているかのように感じられた。　その後、七つの階段を登って高い山に導かれたかのように感じられ、そこで聖使徒パウロのように、*「目が見たことのないもの」*を見、*「耳が聞いたことのないもの」*を聞いた（Iコリント2:9）。

聖シメオンはそこから降りてくる際、案内していた者に尋ねた。

「私が今見たものは何だったのか？」

すると、その人はこう答えた。

「それは、あなたが引き上げられた七つの天です。」

その後、聖人は楽園と、美しい庭園、そしてまばゆいばかりの広大な宮殿、そしてそこに流れ出る平和の泉を目にした。ここで、聖人はアダムと賢明な強盗以外、誰の姿も見なかった。

シメオンが正気を取り戻すと、見たすべてのことを長老ヨハネに語った。長老はそれを聞き終えると、こう言った。

「わが子よ！　あなたにそのような恵みを与えられた神を賛美せよ。」

その間、少年は断食の修行においてますます精進していった。もし衣服を持たない者が彼のところに来ると、彼は自分の服を脱いでその人に与え、自分は裸のままでいた。彼は夏だけでなく冬もそうしていた。　一方、長老ヨハネは、少年が寒さや冷えで死んでしまうのではないかと心配し、彼がそれを望まないにもかかわらず、何度も彼に衣服を着せてやった。しかし、少年は胸を叩きながら泣き、こう言った。

「ああ、この呪われた私よ！ 聖なる四十人の殉教者たちは、キリストの御名のために、[3895] 湖で寒さと厳寒に耐えたというのに、私はほんの少し寒くなることさえ恐れている。それでは、どうして私は永遠の歯ぎしりから救われることができようか？　どうすれば聖人たちと同じ運命を分かち合えるというのか？」

そしてシメオンは、このような言葉やそれに類する言葉を口にし、長い間泣き続けた。

すると、長老は心を痛め、こう言った。

「シメオンよ、あなたはまだ自分に何をしようというのか？　もう、自分を殺すためのナイフさえあればいいというではないか！」

しばらくして、シメオンは自らの肉体に次のような苦行を課した。彼は自分の足の上に座り込み、丸一年間立ち上がらなかった。その結果、聖人の太ももやすねは腐り始め、その腐敗から周囲に悪臭が立ち込めた。　アッバ・ヨハネは医者を呼び、シメオンの潰瘍を治療するよう頼んだが、シメオンは微笑みながらこう言った。

「わが主よ、生きておられますように！ 人の手や助けが、私に及ぶことのないように。」

しかし、主は御自身の恵みによって彼に健康を授けられ、その若者は両足と両太ももが健全な状態で立ち上がり、そこには傷跡が全く残っていなかった。聖人はひざまずき、自身の癒やしに対して長い間、神に感謝を捧げた。

聖霊降臨祭の日が訪れると、祝日の朝、至福のシメオンは尊者ヨハネにこう尋ねた。

「父よ、聖なる使徒たちが火のような舌の中で聖霊を受け入れたように（使徒行伝2:1–4）、誰が聖霊を受けるにふさわしいのでしょうか？」

長老は彼にこう答えました。

「自分より高いものを求めたり、自分には分からないことを探ったりしてはならない。むしろ、自分に命じられたことを深く考えなさい。」

すると、その若者はこう言いました：

[3895] 4世紀にアルメニアの都市セバスティアで殉教した40人の聖殉教者たちの功績を指している。彼らの記念日は、聖教会において3月9日に祝われる。

「聖書にはこう書かれています。*『主を畏れる者の願いを主はかなえ、彼らの叫びを聞き、彼らを救われる』*（詩編144:19）。」

そう言うと、少年は天を仰ぎ、心の奥底から次のように神に祈った。

「主よ、御自身の聖なる御霊を、御自身の聖なる弟子たちや使徒たちに遣わされた方よ、どうか私にも御恵みの賜物を授けてください。*『私を悟らせてください。そうすれば、御命令を学ぶことができます』*（詩編118:73）、あなたは*「幼子の口」*（詩編8:3）*を通して*、御自身への賛美を成し遂げることができるからです。私が人々に永遠のいのちの言葉を宣べ伝えることができるよう、あなたの聖霊を私に注いでください。

聖人がこのように祈っている間、天から聖霊が燃えるろうそくの姿で彼の上に降り、その心を知恵と理解で満たしました。それにより、聖人は多くのことを語り始め、聖書に基づいてすべての人を教え導きました。彼の中に宿る聖霊の知恵に、誰も逆らうことはできませんでした。　そして、聖人は口頭だけでなく、文章によっても、修道生活、悔い改め、キリストの受肉、将来の審判について、多くの魂を救う教えを語り残した。さらに、聖書の中の理解しがたい多くの箇所を解説した。

長老ヨハネは、この若き少年の持つそのような賜物に深く感嘆し、こう語った。

「この少年には、ダビデが記した*『主の御言葉が彼を試みた』*（詩編104:19）という言葉が成就した。今、私は彼が、使徒たちの業にほぼ匹敵するほど栄光に満ちた、多くの驚くべき業を成し遂げることを悟った。」

他のすべての修道士たちもその若者に深く驚嘆し、彼の教えだけでなく、彼が成し遂げる奇跡にも感服して、彼を恐れさえするようになった。

その修道士たちの中には、夢の中で三つの宮殿、その中に三つの玉座、そして玉座の上に置かれた三つの冠を見た者もいた。その修道士たちが、そのような栄光は誰のために用意されているのかと尋ねると、ある声がこう告げた。

「若きシメオンに！」

一方、聖シメオンは、その天使のような生活で太陽のように輝きながら、地上のあらゆるものから天へとますます高みへと昇っていった。彼はさらに高い柱の上で修行を積みたいと願ったため、彼のために高さ四十段の柱が建てられた。　シメオンがこの柱に登る準備を整えると、そのことを知ったアンティオキアの大司教とセレウキアの司教が、以前からこの若き少年の偉業を耳にしていたため、彼のもとを訪れた。　彼らは聖職者たちを伴って修道院を訪れ、敬虔な心でその祝福された少年を迎え、灯された蝋燭を手にまず教会――聖なる祭壇へと導き、そこで彼を助祭に叙階した後、詩篇を歌いながら彼をその柱へと導いた。そして聖シメオンはこの柱の上で八年間を過ごした。　長老ヨハネは、その少年のことを深く心を痛めていた。なぜなら、　彼の顔を見ることができなかったからである。一方、シメオンは高い柱の上で修行に励み、ケルビムに倣って、その天使のような生き様をすべての人々に示し、絶えず神を賛美していた。

しかし、いかなる者も神の前で自慢したり、高ぶったりすることがないよう、神はサタンにシメオンに対して厳しい肉的な戦いを仕掛けることを許された。サタンは眠りの中の空想によって彼を汚そうとしたが、少年は勇敢にその誘惑に抵抗した。　シメオンは目を閉じて眠ることを許さず、主に向かって熱心に祈り、自分に立ち向かう敵に対する助け手となってくださるよう懇願した。　その後、シメオンは、天から降りてくる、顔は明るく、髪は白髪で、司祭の衣をまとい、手にキリストの御体と御血という神聖な秘跡を盛った聖杯を持った、ある高潔な人物を目にした。　その際、空気が言葉に尽くせないほどの芳香に満たされた。その明るい顔をした人物が至福のシメオンに近づくと、聖なる命を与える秘跡を授け、こう言った。

「勇気を出しなさい。そして、あなたの心を強く保ちなさい。これからは、眠りの中の夢があなたを悩ませることはない。ただ、自分の考えを注意深く見守り、神に信頼を置きなさい。」

聖シメオンは、この幻視によって計り知れない喜びと、言葉に尽くせない心の甘美さに満たされ、神を賛美した。

この祝福された少年は、様々な神にふさわしくない思いからも、人々との会話からも自らを守っていた。彼は毎日、第九時までは部屋に閉じこもり、唯一の神以外とは誰とも語り合うことを望まなかった。

その間、アッバ・ヨハネ・柱上者の至福の死の時が訪れた。この死を予見して、至福のシメオンはヨハネに次のように伝えた。

「敬虔なる父よ、ご自身の臨終の日を耳にしても悲しまないでください。死はすべての人々に共通の運命だからです。今、キリスト・神があなたを安息へと招いておられることを私は知っています。それは、あなたが労苦の末、他の聖人たちと共に安らぐためです。　どうか、尊き父よ、アブラハムの祝福を私に与えてください。そして、至聖にして同質なる三位一体の栄光の御座に礼拝しに行く際には、私のことを覚えていてください。私たちのためにお祈りください。そうすれば、私たちもこの世に打ち勝ち、天の御国を受け継ぎ、そこで互いに再会することができるでしょう。

ヨハネはこれらの言葉を聞き、その真実性を疑うことはなかった。また、心も怯えることはなかった。なぜなら、彼は常に死を迎える準備ができていたからである。その当時、彼は何の病にも苦しんでおらず、身体は完全に健やかであったにもかかわらず。ヨハネは使者を通じてシメオンにこう答えた。

「わが子よ、あなたが求め続けた父なる神、あなたが愛した父なる神の独り子、そしてあなたが心の底から切望した命を与える神の御霊が、あなたを祝福してくださいますように。　至聖なる三位一体の唯一の神が、あなたにとって砦となり、守りとなり、あなたを導き、慰めてくださいますように。　あなたを祝福する者たちは皆、祝福され、あなたを呪う者たちは呪われるように。あなたが、あなたの霊的な父である私を、肉親の父のように敬ったことに対し、主があなたに栄光と誉れをお与えになりますように。また、私に多くの奉仕をしてくれたあなたの祝福された母も、主から恵みと憐れみを受けますように。

長老のそばに立っていた兄弟たちは、その言葉を聞いて恐れに満たされ、聖ヨハネに尋ねた。

「敬愛すべき父よ、少年シメオンについて、一体どのような遺言をなさるおつもりなのですか？」

すると、長老はこう答えられた。

「私は、あなたがた全員が、神へのシメオンの熱烈な祈りに倣うことを切に願っている。そうすれば、あなたがたもこの少年の祈りの助けを受けることができるだろう。なぜなら、彼は神ご自身が選ばれた、偉大で尊い器だからである。」

その後、アッバ・ヨハネは兄弟たちに魂を救う教えを説き、彼らのために祈りを捧げた。そして、しばらく休むかのように床に就くと、まもなく、肉体に何の苦痛も感じることなく、永遠の安らかな眠りについた――こうして、他の祝福された父たちの元へと旅立ったのである。

祝福された長老ヨハネの死後、聖シメオンはさらに大きな労苦に励むようになった。　彼の生活は次のようなものであった。早朝から九時までは祈りを捧げ、九時以降は日没まで書物の読解や写本に励み、日没後は再び祈りを始め、夜明けまで一晩中眠ることなく絶え間ない祈りに身を捧げた。そして日が昇ると、シメオンは、あたかもある種の奴隷であるかのように、眠りを短時間だけ許した。　少しうたた寝すると、すぐに起き上がり、いつもの祈りの規則を始めました。祈りの間、彼は右手に香炉を持ち、火のついた炭を使わずに、周囲に　芳香を漂わせていました。時折、まるで空中にいる大勢の群衆のような声が聞こえ、彼に合わせて歌い、こう叫ぶのが聞こえました。

「ハレルヤ！」

それは聖なる天使たちの声であった。

聖人はしばしば、昼も夜も全く眠らずに過ごした。ある時、彼は三十日間、三十晩の間、全く眠ることなく、神に自分の目から眠りを追い払ってくださるよう祈り続けた。すると、神からこう告げられた。

「たとえほんのわずかな時間であっても、あなたは自分の体を眠りで休めるべきである。」

しかし、悪魔は、至福のシメオンのこの輝かしい功績に耐えかね、再びその全軍勢を率いて彼に襲いかかり、様々な幻影で彼を脅かそうとした。時には蛇に、時には聖人の喉元を狙う様々な獣に変身し、　時には、少年の顔をした奇妙な鳥に変身して聖人に襲いかかり、また時には、大声を上げて戦いに赴く多くの戦士たちの姿で現れ、聖人を柱から追い落とし、柱そのものを地面に倒そうと企んだ。　ある時、悪魔は大きな石で柱を打ちつけた。柱は倒れそうになるほど傾いたが、目に見えない神の力がそれを支え、まっすぐに立て直した。またある時は、悪魔は顔色が黒く、恥知らずな気性の乙女の姿で現れ、聖人の首に両腕を回そうとし、こう言った。

「これが最後、あなたと戦うわ。もしあなたが私を打ち負かすなら、しばらくの間、あなたから離れるわ。」

聖人は、これらやそれに類する悪魔の幻や幻影を、祈りと聖十字架の印によって追い払った。

また、聖人は神聖で驚くべき幻視も体験した。天が開かれ、私たちの主イエス・キリストが、まるで炎のような言葉では言い表せない輝きに包まれているのを見たのである。　主の御前には、聖なる大天使ミカエルとガブリエルが、一人は右側に、もう一人は左側に立っていた。主の足元には深紅の雲があった。これらすべてを目にした聖シメオンは、主に向かってひれ伏し、両手を主へと差し伸べ、御慈悲によって善き実を結ぶことができるよう、主の御加護を懇願した。　キリストである主は、御指でシメオンを三度祝福された。その後、シメオンが下を見下ろすと、地上には様々な姿をした非常に多くの悪魔たちがいた。その中には野生のイノシシの姿をした者もいれば、山羊の姿をした者もいた。　そして主は、シメオンがそれらすべての悪霊を追い払えるよう、シメオンにそれらに対する権威を与えられた。この権威のしるしとして、主はシメオンにナツメヤシの杖を与えられた。すると直ちに、すべての悪霊はシメオンの前から逃げ去り、どこへ消えたのか分からなくなった。

祝福されたシメオンは、彼のもとに連れて来られた、悪霊に取りつかれた人々から、すべての邪悪な霊を追い払った。また、聖人は他の多くの病気を癒やし、さらには死者をよみがえらせることさえあった。ある時、息子を亡くした一人の男が聖人のもとを訪れた。　その男は涙ながらに聖人の足元にひれ伏し、この大きな災いから救い出してくれるよう、また亡くなった息子のために神に祈ってくれるよう、神の御心にかなう者に懇願した。聖人は神に祈りを捧げた後、その男にこう言った。

「主の御名によって行きなさい。あなたの息子は生きています！」

その男は聖人の言葉を信じました。家に帰ると、確かに息子が死からよみがえっているのを発見しました。息子を抱き上げ、その男は言い表せないほどの喜びをもって聖人のもとへ息子を連れて行き、神と、神に愛された聖人シメオンに感謝を捧げました。

その後、シメオンは再び、天使たちの列が侍る主、すなわち私たちの神を仰ぎ見た。その時、天使たちの筆頭たちは、宝石で飾られた王冠を手に持っていた。その王冠の頂上には、稲妻のように輝く十字架が掲げられていた。天使たちは、この王冠をもってシメオンを王位に就かせようとしていたのだ。これらすべてを目撃したシメオンは、天使たちにこう言った。

「キリストの御名のために身にまとったこの毛皮の衣を、私から取り上げないでください。」

すると天使たちは彼にこう答えた。

「それゆえ、あなたはあなたのために用意されたキリストの御国の冠を受け取り、聖霊の恵みを緋色の衣のように身にまとい、他の聖人たちと共に、果てしない御国で君臨することになるのです。」

すると、祝福されたシメオンは、主を見つめてこう言った。

「主よ、万物の創造主よ！もしあなたが、御国において御自身の聖徒たちの栄光に私をあずからせてくださるお心をお持ちなら――どうか、あなたの慈しみにより、私がこの世の朽ちる人間の食物を口にしないようにしてください！」

そしてシメオンは、主が彼の願いを聞き入れてくださったことを知った。その後、天使たちがこの祝福された者に近づき、彼の断食用の毛皮の衣の上に、まばゆいばかりの王の衣をまとわせ、その頭に冠を戴かせ、大声で歌いながらこう言った。

「天と地の王、神であるキリストはまことに栄光に満ちておられます。そのしもべシメオンもまた、賛美されますように！」

この幻視の後、聖シメオンは生涯の終わりまで、もはや地上の食物を一切口にすることはなく、天使が運んでくる天の糧のみを糧としていた。

聖シメオンがどれほど偉大な奇跡を行い、その功績がいかに栄光に満ちていたかについては、多くの物語が伝えられている。ここでは、至福のシメオンの数ある功績のうち、ほんの一部を紹介する。

ある時、聖シメオンには、まもなくアンティオキア市とその周辺一帯を襲うことになるあらゆる災いが啓示された。シメオンは、剣を手に、アンティオキア市の上空に浮かんでいる天使を見たのである。　そこで聖人は、心を尽くして熱心に主へ祈りを捧げ始め、新たなモーセとして神の御前でアンティオキアの街のために執り成し、主に対し、民から御怒りを退けてくださるよう懇願した。すると主は彼にこう言われた。

「この町の罪の叫びが、わたしの耳に届いた。それゆえ、わたしはこの町に怒りを燃やし、火と剣と死を送り込んで、これを滅ぼそう。この町が罪によってわたしを怒らせたため、わたしはそれを愚かな民の手に渡して捕虜とする。」

聖シメオンはこの幻について、彼を訪ねてくるすべての町民に語り、彼らに自分の罪を悔い改めるよう諭した。

ほどなくして、主は確かにアンティオキアにペルシャ王ホズロイ（エルサレムで主の命を与える十字架の木を捕らえた若きホズロイの祖父）を送り込まれた。[3896]。 ホズロイは、ペルシャ軍とカルデア軍の大軍を率いてやって来て、アンティオキアの市民たちと激しい戦いを繰り広げた。　一方、祝福されたシメオンは、柱の上に留まり、その地を訪れた野蛮人たちから神によって守られながら、熱心に主に向かって祈り、神の怒りをこの都市から退け、敵の手に渡さないよう懇願したが、神をなだめ、神の義なる怒りを鎮めることはできなかった。　聖シメオンには新たな幻が現れた。恍惚とした状態で、彼は眼前にまばゆいばかりの十字架を見、その十字架のそばには、張られた弓と準備された矢を手にした二人の天使が立っていた。そして天使たちは彼にこう言った。

「この十字架は、主があなたの守りのため、また平和のしるしとして送られたものである。なぜなら、この国に向けられた神の怒りは、あなたには及ばないからだ。そして、これらの矢は、もし敵があなたが修業しているこの場所に近づこうとするならば、彼らを追い払うために用意されている。我々はあなたを守るために遣わされたのだ。」

その後、シメオンは幻の中で、街が陥落するのを目にした。敵が街の中を闊歩し、至る所で大きな悲鳴と泣き声が響いていた。その中、市民の中には剣で斬り殺される者もいれば、捕虜として連れ去られる者もおり、また城壁から飛び降りて逃亡する者もいた。　この逃げる者たちのなかに、彼は自分の修道院の二人の修道士も見た。彼らは野蛮人の侵攻を恐れて、修道院と山を離れ、街へと逃

[3896] ホズロイ（より正確にはホスロー）は、ペルシア語で「王」を意味する。この称号は通常、特定の王の名前に付け加えられていた。この場合は、当然ながら、531年から579年まで統治したホズロイ1世アヌシルヴァンを指す。 その孫であるホズロイ2世パルヴェズ（在位：590年～628年）は、614年、ギリシャ皇帝フォコスとの戦争中に、エルサレムから「命を与える主の十字架」を奪取した。　この聖十字架は、628年にホズロイ2世の後継者スヴロエスによって、ギリシャ皇帝ヘラクレイオスとの和平締結に伴い返還された。

げ込んでいたのだ。しかし、この二人の修道士が街から逃げ出そうとしたその時、野蛮人たちに追いつかれ、そのうちの一人は剣で殺され、もう一人は捕虜として連れ去られた。

聖人が見たことはすべて、その幻視からわずか数日後に実際に現実のものとなった。アンティオキアの街は敵に占領され、剣と火にさらされ、多くの市民が捕虜として連れ去られた。しかし、聖シメオンの祈りにより、一部の市民は蛮族の手を逃れることができた。　こうして、野蛮人たちが街に侵入したとき、多くの市民は、まだ敵に占領されていなかった別の門から逃げ出すことができた。また、多くの市民は城壁を飛び越えて逃げた。逃亡者たちは、前述の二人の修道士を除き、神の慈悲に守られながら山や砂漠に身を隠した。

野蛮人たちは、修道院とシメオンの柱があったその山にもやって来たが、何も得られずに引き返した。というのも、かつてシナイ山がそうであったように、その山は彼らから　（出エジプト記19:16）という闇と雲に覆われていたため、野蛮人たちは修道院も柱も見ることができなかったからである。　敵の多くは、ある目に見えない力によって恐怖に駆られ、逃げ惑わされた。彼らは、あたかも武装した戦士の大群に追われているかのような激しい恐怖の中で逃げ去った。聖シメオンの祈りは、敵対者たちにとって恐ろしく、打ち破ることのできない武器であったからである。　修道院で修行に励んでいた修道士のうち、前述の二人を除き、敵を恐れて修道院から町へ逃げ出した者たちは、その野蛮人たちによって傷つけられることはなかった。

野蛮人たちがその国を去った後、多くの負傷者が聖人のもとを訪れた。祝福されたシメオンは、彼ら全員に癒やしを与えた。さらに、聖人は、すでに捕虜として連行されていた多くの市民をも、束縛と捕囚から解放した。というのも、束縛されている最中にシメオンの名を口にした者は皆、即座にそこから解放され、　足や手から束縛が解け、彼らは野蛮人の間を、彼らに気づかれることなく歩き回り、その後、敵からのいかなる妨害も受けずに自国へと戻った。　前述の修道士（その同行者は敵の剣によって倒された）は、まさにこの方法で捕虜となることから救われた。あるアンティオキアの戦士と共に敵から逃れたその修道士は、次のように語った。

「私たちが聖シメオンを思い出し、感極まって涙ながらに彼に助けを求めた途端、私たちを縛っていた縄がほどけ、自然に外れた。その後、私たちは野蛮人の群れの中を通り抜けたが、彼らの中から誰も私たちに何も尋ねず、妨げる者もいなかった。」

アンティオキアの町の近く、ある山のふもとには、盲目の老修道士が一人座っていた。彼は、その道を通りかかるすべての人々から施しを乞い、その施しで生計を立てていた。　野蛮人たちが急いで町へと駆け寄ったとき、そのうちのひとりが老人の首筋を剣で斬りつけた。しかし、首を切り落とすことはなく、ただ致命傷を負わせただけだった。老人は、自らから流れ出る血の池の中で、かろうじて息がある状態で転がっていた。　聖シメオンは、その透視の眼でこのすべてを見届けると、数人の兄弟を遣わして、その老人を連れてくるよう命じた。修道士たちは老人を藁の敷物に寝かせ、シメオンの柱のそばまで運んだ。聖人は土を手に取り、聖水で振りかけた後、その土を傷口に当てながらこう言った。

「エマヌエルの御名によって、頭よ、そのべき場所に帰れ、そしてそこにしっかりと定着せよ。」

するとたちまち、長老の頭は元の位置に戻り、血管と癒合して完全に健康になった。長老がそのような恐ろしい傷から癒やされたとき、聖シメオンは言った。

「ほら、彼の目も開いたではないか！」

その奇跡を目撃した者たちは皆、神を賛美した。

しばらくして、至福のシメオンは、さまざまな国からやって来て、多くの病人と弱者を連れてくる数え切れないほどの人々によって引き起こされる絶え間ない騒ぎに心を悩ませるようになった。これらすべてが彼の静寂な生活妨げとなっていたため、彼は、すでに八年間修行を続けてきたこの柱を離れ、もっと静かな別の場所へ移ることを決意した。　そこから少し離れたところに、高く、そし

て極めて人里離れた山があった。そこには水が全くないため、水がないという理由で、人は誰もその山に登ろうとはしなかった。そこには野生の獣や蛇、その他の毒を持つ爬虫類だけが棲んでいた。

まさにこの山へ移り住むことを、至福のシメオンは心に決めた。彼がそう考えたとき、多くの天使たちに囲まれた主が、明るい雲に乗って天からその山へと降りて来られた。主は彼にこう言われた。

「シメオンよ、この『[3897] 』という名を持つ素晴らしい山に登りなさい。今より、この山はこの名で呼ばれることになる。そこで、私は万人の驚嘆の的となるよう、あなたに私の恵みを現すであろう。」

すると直ちに、聖人に対して、山の上にある一つの高い丘と、主の御足が立っておられた岩が示された。その岩のふもとは、主の栄光によって太陽のように輝き出した。主はシメオンに、その岩の上に立ち、そこで修行に励むよう命じられた。

この幻が終わると、シメオンは兄弟たちを呼び寄せ、主が彼をその山へ移住させることをお許しになったことを告げた。シメオンは、年老いて経験豊かな一人の男を修道院長に任命し、自分の柱から降りて、彼の去りゆくことを嘆き悲しむ兄弟たちに囲まれながら、ディヴナヤ山へと向かった。

聖人が神から示された丘に近づくと、立ち止まり、長い間神に祈りを捧げた。祈りが終わると、大勢の天使たちの声が聞こえ、「アーメン！」と叫んだ。

その後、至福のシメオンは弟子たちに、その場所で聞いた天使の声を常に思い起こせるよう、その場所に石の十字架を建てるよう命じた。　そして、ディヴナヤ山にある小高い丘を見上げると、聖人はその丘を照らす神の栄光を見た。その後、喜びをもってその丘に登り、主を見たまさにその石の上に立った。この時、至福のシメオンは生後19歳であった。

しかし、聖シメオンはここでも、訪ねてくる人々によって安らぎを見出すことはできなかった。　かくして、翌日の朝、シメオンの修道院を訪れた人々は、そこで神の御心にかなう聖人を見つけられず、大いに嘆き悲しんだ。聖人がここから別の山へ移ったことを知ると、人々は多くの病者や体の不自由な人々を連れて、急いでそこへ向かった。　やって来た人々を見て、聖人は悲しみに沈んだ。ここでも、神と二人きりでいることを許されなかったからである。しかし、新しく来た人々に同情し、慈悲の心で彼らを受け入れ、病人の上に手を置き、キリストの御名を呼びながら彼らを癒やし、完全に健康な状態で家に帰した。

ある時、その山に住む一頭のライオンが、聖者に会いに来ていた一人の男に襲いかかった。ライオンはすでにその男を食い散らす準備を完全に整えていた。しかし、その男は逃げても獣から逃れられないと悟り、叫んだ。

「神に愛されたシメオンの御名によって、私に害を加えないでください！」

すると、その瞬間、ライオンはシメオンの名を聞くやいなや、おとなしくなり、その人に何の害も加えなかった。

その男は聖人のもとへやって来て、起きた出来事を語った。他の訪問者たちは、その獣を恐れ、皆が恐れることなく聖人のもとを訪れることができるよう、その山から追い払ってほしいと聖人に懇願した。　そこで聖人は、弟子アナスタシウスを呼び寄せた。かつてキリストがそうされたように、彼から七つの悪霊を追い出した者である[3898] 。そして彼にこう言った。

「ライオンがいる洞窟へ行き、こう言いなさい。

『キリストの僕シメオンが、神の御名によってこう告げる。この山から立ち去れ。ここを汝の巣窟とせず、ここに訪れる兄弟たちを脅かすことのないようにせよ。』

[3897] 「神聖な山」は、オロンテス川沿いのアンティオキア、セレウキア・シェリエ、そしてロスという3つの都市によって形成される三角地帯に位置していた。

[3898] イエス・キリストはマグダラのマリアから七つの悪霊を追い出した（マルコによる福音書16:9参照）。

アナスタシウスはライオンのいる洞窟へ向かい、そこで獣を見つけると、まるで理性を備えた存在と対話するかのように、聖人の言葉を彼に伝えた。

獅子は聖人の言葉に従い、道中で誰にも害を与えることなく、急いでそこから他の荒野へと去っていった。

その頃、その国では様々な病気が激増し、非常に多くの人々が命を落としていた。　聖人は、これが人々の罪に対する神の怒りによって引き起こされたことであると霊によって悟り、涙を流しながら主に向かって熱心に祈り始め、御自分の民を憐れみ、彼らから御自身の義なる怒りを退けてくださるよう懇願した。すると、聖人は主からの声を聞いた。主はこう言われた。

「なぜ、あなたはこれらの人々のために心を痛めるのか。まさか、私よりも彼らを愛しているというのか。彼らの罪と不法が増大した以上、彼らは罰を受けるに値する。しかし、あなたを悲しませないために、私はあなたに、彼らの様々な病や不調を癒す力を与える。」

主は、そのしもべシメオンにこう語られた。

その場所の近くに住む人々は、病に倒れるやいなや、直ちに神の御心に適う聖シメオンに助けを求め、夢の中で彼が自分たちの家を訪れ、十字架を掲げて祝福し、すべての人に癒やしを与えるのを見た。夢から覚めると、彼らは健康を取り戻していた。　彼らは次のようにしてシメオンの名を呼び求めた。すなわち、家の中で油を注いだランプに火を灯し、香を焚きながら、こう唱えたのである。

「我らの神キリストよ、ディヴナヤ山で修業に励むあなたのしもべシメオンの祈りによって、私たちを憐れんでください！」

そして、主から恵みを受けた。

また、オリーブ油をあまり持っていなかった者たちは、香炉にオリーブ油を注ぎ、火を灯した。すると、その香炉の火は三日目、四日目になっても消えることがなく、あたかも絶えず新しいオリーブ油が注がれているかのようであった。このように、シメオンの名を呼び求めたおかげで、彼らの香炉のオリーブ油は不思議なことに尽きることはなかった。

ある日、聖シメオンは、アンティオキアの大司教エフレムが間もなくこの世を去ることを、主から啓示された。　聖シメオンは兄弟たちを呼び寄せ、このことを告げた。その後、シメオンは兄弟たちに、主に対してより熱心に祈るよう求めた。「なぜなら」と彼は言った。「教会の偉大な柱が倒れようとしているからだ。」しかし、兄弟たちはこう答えた。

「大司教はご健在だと聞いております。」

翌日、朝の賛美の後（その日は金曜日であった）、聖シメオンは再び兄弟たちを呼び寄せ、心を込めてこう語った。

「神の聖人エフレムは今夜、天に召されました。私は聖なる天使たちに天へと運ばれていく彼の魂を見たからです。私のそばを通り過ぎる際、エフレムは私に口づけをして、こう言いました：

「お願いだ、主への祈りの中で、私のことを覚えていてほしい。」

その後、シメオン聖人は涙を流しながら、こう語り始めた。

「ああ、アンティオキアよ、今やエフレムを失ってしまったとは！　ああ、この街よ、今やエフレムが連れ去られてしまったとは！」[3899]

至福のエフレムの死後、コンスタンティノープルからアンティオキアにやって来たドムヌス[3900]が、大司教の座を引き継いだ。このドムヌスは貧しい者たちに冷酷であった。これを知った聖シメオンは、ドムヌスのその無慈悲さに対して、神による懲罰が下ると予言した。　そして実際、間も

[3899] エフレムは527年から545年まで総主教を務めた。

[3900] ドムヌス2世は546年から560年まで総主教を務めた。

なくドムンは重い病に倒れた。手足がこわばってしまい、歩くことも手を動かすこともできず、まるで木の塊のように横たわっていた。

その後、聖シメオンは、アンティオキアで起こるであろう、最初の地震よりもさらに恐ろしい地震について啓示を受けた。 このことを集まったすべての人々に告げると、シメオンは泣き出し、神にその怒りを退けてくださるよう懇願し始めた。その日の夕方、大地は激しく揺れ動き、城壁が崩れ落ち、市内の様々な建物が地面に押しつぶされた。人々は皆、大きな恐怖と戦慄に襲われた。市民の多くは城壁の下敷きになって命を落としたが、 それでも残りの人々は急いで「ディヴナヤ山」へと駆けつけ、神の御心にかなう聖人のもとへ行き、涙ながらに災いの終息を主にお願いするよう懇願した。聖人が熱心に祈りを捧げると、地震は収まった。その後、聖人は東側の空が開いているのを見た。 そこから言葉に尽くせない光が放たれ、それは悔い改めた人々に対する神の御好意を意味していた。その後、神の御命により、シメオン聖人は「驚異の山」に修道院を建立し、また、彼によって癒やされた人々の手によって教会も建てた（というのも、聖シメオンの祈りによって病を癒やされた人々は非常に多かったからである）；さらに、聖シメオンは自らの祈りによって、修道院に必要な十分な量の水を神から請い求めた。彼の祈りによって、修道院の穀物倉にある小麦も増え、多くの来訪者の糧として穀物倉から大量に取り出されていたにもかかわらず、その量は3年間、ほとんど減ることなく保たれた。

その後、聖シメオンは新たな柱を建てた。その柱には（尊者がはっきりと目撃したように）、主イエス・キリストご自身が聖なる天使たちを伴って臨まれ、その柱を聖別された。至福のシメオンは大きな喜びをもってその柱に登り、生涯の終わりまでそこで修行に励んだ。

至福のシメオンが誕生から三十三歳になった時、神の御命令（聖人に啓示として示されたもの）により、シメオンは司祭の聖職に就くことを決意した。それ以前は、この高貴な聖職を受けることを望んでいなかったにもかかわらずである。 神の御計画により、セレウキアの司教ディオニシオスが聖シメオンのもとを訪れ、シメオンを長老として按手した。

司祭の叙階後、至福のシメオンは、深い敬虔さをもってキリストの御体と御血による神聖な無血の犠牲を執り行い、天使のように清らかに神に仕えた。 聖人はしばしば、神から多種多様な驚くべき幻視や啓示を受けた。彼は、遠い未来の出来事をあたかも現在のことであるかのように予見し、未来の出来事を予言した。また、聖人は人々の心の奥底にある秘密の思いまでも見通していた。彼は、地上でも海でも、幻視の中で現れて、数多くの奇跡を行った。 盲人の目を開き、ハンセン病患者を清め、足の不自由な者に健康を与え、人々から悪霊を追い出し、獣の口を封じ、あらゆる傷や病を癒やし、死者をよみがえらせた。こうして、キリストの御言葉が彼において成就したのである。 「*わたしを信じる者は、 わたしが行うような業を行い、さらにそれ以上の業を行うであろう*」（ヨハネ14:12）。まことに、そのしもべ、驚くべきシメオンの中に現れた神は、驚くべきお方であった！

尊者シメオンが七十五歳の誕生日を迎えたとき、彼はまもなく主のもとへ旅立つことを予感し、兄弟たちを呼び寄せ、十分な時間をかけて教えを説き、 その後、夕刻に皆に最後の口づけを捧げ、5月24日[3901] 、彼が普段天使から食事を受け取っていたその時刻に、その魂を神の御手に委ねた。今や彼は聖なる天使たちと共に、果てしない御国において神の御顔を仰ぎ見ながら喜びを享受し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しており、その御方に今、そして永遠に栄光が帰されます。アーメン。

[3901] 聖シメオン・ストルプニクの生涯における重要な出来事は、年ごとに次のように分けられる。聖シメオンは521年に生まれ、527年、生後6歳で柱に登った。 その8年後、535年に別の柱へと移った；22歳の時、すなわち543年にディヴナヤ山へ移った；560年、39歳の時に司祭に叙階された。596年、76歳で逝去した。– 本日記念される聖シメオン・ストルプニクは、同じく9月1日に記念される別のシメオン・ストルプニクと区別すべきである。後者もシリアのアンティオキア地方で修業したが、はるかに以前の時代（459年に没）に生きていた。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちに天使、そして奇跡を行う者として現れた、神を宿した我らの父シメオンよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって、天からの賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救う。　あなたに力を与えた方に栄光あれ。あなたを冠した方に栄光あれ。あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第2調：

天上のことを望み、地上のことを捨て、天の柱の如くになられたゆえに、尊き御方は奇跡の曙光に包まれ、キリストなる万物の神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けておられます。

聖殉教者メレティオス・ストラティラトスと、彼と共に殉教した1318人の戦士たちの殉教

記念日：5月24日

聖殉教者メレティオスは、ローマ皇帝アントニヌスの治世[3902]に生き、ストラティラトの職に就き[3903]、ガラティア地方の南部[3904]の出身であった。キリスト教徒として、彼は異教の迷いが完全に消え去るよう神に祈った。　すると、悪魔たちは自らの滅亡を悟り、犬に取り憑いて自らの破滅を嘆き悲しんだ。彼らは至る所を徘徊し、遠吠えをして人々に恐怖を植え付けたが、聖メレティオスは配下の兵士たちと共に彼らを打ち倒し、異教の神殿を破壊した。　このため、聖殉教者がいた都市の統治者マクシミアン[3905]は、聖殉教者[3906]を捕らえさせ、偶像への生贄を捧げるよう強要したが、聖人はそれを聞くことさえ拒んだ。そこで拷問官は、鉄のハンマーで彼を殴打し、その他の拷問を加えるよう命じた。　その後、聖メレティオスは松の木に吊るされ、釘で打ち付けられ、そのために息を引き取った。一方、[3907]のステファノスと のヨハネス、そして彼らの配下にあったすべての兵士たち、その妻や子供たちまでもが、剣で首を刎ねられた。こうして、キリストのために聖なる殉教者たち[3908]は息を引き取った。

[3902] シナクサリストにおけるニコディムや、アントニヌスという名で言及される他の人物は、218年から222年まで在位したローマ皇帝アントニヌス・ヘリオガバルスを指す。

[3903] ストラティラトとは、軍司令官、軍指揮官を意味する。

[3904] ガラティアは、小アジア半島のほぼ中央に位置していた。北はパフラゴニア、西はビフィニアとフリギア、南はリカオニアとカッパドキア、東はポントスと国境を接していた。

[3905] イゲモン・マクシミアン、あるいはマクシムスは、当初エジプトの総督であったが、その後アントニヌス帝によって、キリスト教徒を迫害するためにガラティアへ派遣された。

[3906] この都市はタヴィアと呼ばれていた。それはガラティア東部、ポントスとの国境近くに位置していた。

[3907] コミトとは、王の護衛、王庫への税収徴収官、都市の統治者を指すが、ここでは「コミト」という言葉は軍事トリブーン、すなわち都市の統治者を意味している。

[3908] 聖メレティオスおよび彼と共に殉教した他の聖殉教者たちの殉教は、218年にさかのぼるとされている。

聖殉教者セラピオンと、彼と共に殉教したカリニカス、テオドロス、ファウストの受難

記念日：5月24日

キリストの聖殉教者セラピオンは、エジプトの出身であった。聖メレティオスが殉教の業を成し遂げていた頃、彼はエジプトからやって来て、自分と共に拷問を受けている者たちを見て、キリストを信じるようになった。　このため、彼は捕らえられて牢獄に投じられたが、そこで神の御使いが、キリストのために苦難を受けることを望む者たちを導くために、彼を司教に任命した。この日、聖メレティオスの親族や貴族、兵士たちが集まり、自分たちもキリスト教徒であると大声で宣言したため、統治者の怒りを買った。　セラピオン司教と、キリストを信じた魔術師カリニクスは剣で首を刎ねられ、テオドールとファウストは他の多くの人々と共に火あぶりにされ、女性や子供たちは処刑人によって木製の剣で切り刻まれた。こうして、聖なる殉教者たちは自らの魂を主の御手に委ねた。

我らの尊き父、ニキタ・ストルプニク、ペレヤスラフの奇跡行者の記念日

記念日：5月24日

この尊い父は、ペレヤスラヴ・ザレスキーの町で生まれ、そこで育ちました[3909]。若い頃から、彼は気性が荒く、些細なことで腹を立てる性格で、騒動を起こし、人々を裁判に引きずり込んだり略奪を行ったりして、多くの害を及ぼしていました。彼には、自分と同じような友人たちもいました。　ある日、学業を終えた彼は、夕方の礼拝の時間に教会を訪れ、そこで預言者イザヤの次の言葉が朗読されるのを耳にしました。*「身を洗い、清めよ。あなたがたの悪行をわたしの目の前から取り除き、悪を行うのをやめよ」*（イザヤ書1:16）など。彼はこの言葉を聞いてたちまち恐怖に襲われ、家に戻ると、一晩中眠れずにその言葉について考え続けた。　翌日、いつもの習慣通り、彼は友人たちのところへ出向き、彼らと楽しく過ごし、その日は自分の家で昼食を共にしようと誘った。その後、彼は市場へ食料を買いに行き、それを家に持ち帰ると、妻に昼食の支度を命じた。　妻が肉を洗っていると、そこから異常に血が流れ出ていることに気づいた。そして、鍋に入れて煮込み始めると、鍋の中で血が泡立ち、人の頭や手、足の指が次々と水面に浮き上がってくるのを見た。彼女はこれに恐怖を覚え、夫にそのことを話した。　夫が帰宅し、妻から聞いたことを自分の目で確かめると、長い間恐怖に襲われたが、やがて我に返り、心の底から深い溜め息をついてこう言った。

「ああ、私は不幸だ！ 私は多くの罪を犯してしまった。」

そう言うと、祈りを捧げながら涙を流して家を出て、町から一ポプリシュチェほど離れた場所にある、聖大殉教者ニキタの修道院[3910]へと向かった。そこで彼は、その修道院のイグメンの足元にひれ伏し、こう言った。

「滅びゆくこの魂を救ってください。」

ニキタのこの尋常ならざる変貌に驚いた修道院長は、彼にこう言った。

「自らを試してみよ。三日間、修道院の門の前に立ち続け、修道院に出入りするすべての人々の前で泣きながら、自分の罪を告白しなさい。」

[3909] ペレヤスラヴリ・ザレスキーは、現在ウラジーミル州の郡庁所在地であるが、当初はクレシノ湖畔、ペルミのクラーズマ川の支流の上流付近に位置していたが、その後1152年頃、スーズダリの公ユーリー・ドルゴルーキーによって、5ヴェルスト南の新しい場所に移された。　「ザレスキー」と名付けられたのは、他の町から隔てる鬱蒼とした森の中に位置していたためである。

[3910] ニキツキー修道院は、町の北側、3ヴェルスタ離れた野原に位置していた。この修道院は、聖ニキタの行伝によって知られるようになった。その創建時期は不明である。

ニキータはその通りにした。三日間、彼は泣きながら祈り、皆の前で自分の罪を告白し続けた。　その後、彼は修道院の近くに、葦が生い茂る湿地帯と、その上を飛び交う無数の小蠅や蚊を見かけた。彼はその場所へ行き、衣服を脱ぎ捨て、全裸のまま沼地に入り、葦の中に座って神に祈りを捧げた。 3日が過ぎた頃、修道院長はニキータの様子を見に行くよう一人の修道士を遣わした。その修道士は修道院の門でニキータの姿を見かけず、少し探した末、葦の中に横たわっている彼を見つけた。その頭上には、蚊やブヨが巨大な雲のように渦を巻いていた。　修道院に戻った修道士は、このことを修道院長に報告した。すると修道院長は修道院の兄弟たちと共にニキータのもとへ行き、彼の体が血で覆われて（血がこれほど大量に流れ出ていたため）その姿さえ判別できない状態であるのを見て、彼にこう言った。

「わが子よ！　一体、自分に何をしているのだ！」

しかし、ニキータはそれ以外の答えはせず、ただ修道院長にこう言った。

「父よ！滅びゆくこの魂を救ってください。」

その後、修道院長は彼を修道院に迎え入れ、修道士としての剃髪を行い、狭い独房に収容した。そこで彼は絶え間ない祈りと断食に身を捧げ、昼夜を問わず眠ることなく過ごした。　その頃、悪意に満ちた敵が様々な幻影で彼を恐怖に陥れようとしたが、彼は十字を切ってこれらの幻影から身を守り、聖大殉教者ニキタの助けを求め、このことを誰にも話さなかった。　まもなく、ニキータは教会の近くに柱を立て[3911]、教会の壁の下に細い小道を掘り、それを通って祈りのために教会に通うようになった。このような功績により、彼は神から奇跡を行う賜物を受け、様々な病に苦しむ多くの人々が彼のもとを訪れ、彼によって癒やされたのである。

その頃、チェルニヒフの敬虔な公ミハイル[3912]は、麻痺の病に倒れた。聖ニキータの話を耳にした彼は、治癒を求めてボヤールたちに命じ、ペレヤスラヴリの町にいるその聖人のもとへ自分を連れて行かせた。　道中、ある悪魔が修道士の姿で彼に出会い、自分は聖ニキータが修行していたのと同じ修道院の者だと名乗った。公が修道士について尋ねると、悪魔は「彼は詐欺師だ」と答えた。これを聞いて、公は深く悲しんだ。　しばらくして、その同じ悪魔が別の姿に化けて再び道中で公爵に出会い、こう言った。

「公爵よ、これほど長い道のりを歩いて苦労するのは無駄だ。」

そして、公が尊者のおられる修道院まであと一ポプリシャの距離に近づいたとき、旅の疲れを癒やすために天幕を張るよう命じ、自分の到着を尊者に知らせるため、家臣の一人を修道院へ遣わした。　すると、あの悪魔が、片目の見えない修道士に化け、手に鍬を持って使者を出迎え、聖人が亡くなり、すでに彼を埋葬したと告げた。

欺瞞に気づいたボヤリンは、聖人の祈りをもって悪魔を制止し、悪魔はその場に完全に動けなくなった。ボヤリンはその後、聖ニキータの柱のもとへ行き、公爵の到着と彼の重い病について伝えた。すると聖人は、公爵に自分の杖を送った。　敬虔なミハイル公はこの杖を手に取ると、完全に健康な状態で立ち上がり、聖人の柱まで歩いて行き、聖人から祝福を受け、旅の途中で自分に降りかかった悪魔の誘惑についてすべてを語った。　そこで、尊者は神の御名によって悪魔を戒め、三時間にわたり、皆の目の前で自分の柱のそばにじっと立ち続けるよう命じた。その後、悪魔は聖人に、二度と人々に害を及ぼさないことを誓い、直ちに姿を消した。　癒やしを受けた敬虔なミハイル公は、神と聖なる長老に心から感謝を捧げ、修道院に豊かな献金を捧げた後、自らの都へと戻った。

こうして、私たちの聖なる父ニキータは、その柱に留まり、絶えず神に祈りを捧げながら、病の治癒を求めて彼のもとを訪れるすべての人々に癒やしを与え続けた。

[3911] 尊者が修行のために設けた柱は、地表ではなく地中にあった。それは柱状の円形の穴、あるいは単に洞窟であったため、聖ニキータの柱上修行は、本質的には隠遁生活であった。

[3912] ミハイル公は、チェルニヒフ公ヴセヴォロドの息子であった。彼の治癒は1186年のことであるとされている。

ある夜、聖人の親族数人が、彼らのために祈ってほしいと願いを込めて聖人のもとを訪れた。彼らは、聖人の身に巻かれた重い鎖が、長い間身体に擦れて磨き上げられ、輝いているのを見て、それが銀製だと思い込んだ。　悪魔の唆しによって心を曇らされた彼らは、聖人を殺害しようと企み、柱に近づくと、そこに掛けられていた覆いを外し、中に入り込み、聖人の魂をその肉体から無理やり引き離した[3913]。

その後、鎖を手に取ると、粗い麻布に包んで逃げ去った。朝の礼拝の前に、副教会司祭[3914]が慣例に従って聖人の柱のもとへ祝福を受けにやって来たが、柱の覆いが取り外されているのを見て、修道院長のもとへ行き、そのことを報告した。そこで人々が柱のもとへ駆けつけると、尊者ニキタの遺体はまだ温かく、そこから芳香が漂っていた。　人々は敬虔に遺体を柱から降ろし、香を焚き、詩篇を歌いながら、聖殉教者ニキタの教会の祭壇の右側近くで、厳かに埋葬した。その際、当時そこにいたすべての病人が癒やされた。

一方、聖人の殺害者である不信心者たちは、貴重な宝物を手に入れたと思い込み、逃げ続け、やがてヴォルガ川にたどり着いた。　そこで彼らは布を広げ、三つの聖なる十字架と重い鉄の鎖――長い間の摩擦によって磨かれ、輝きを放っていた――を見て、ヤロスラヴリ市の近く、聖使徒ペトロ修道院のそばの川にそれらを投げ捨てた[3915]。その直後の最初の夜、この修道院のシメオンという名の修道士が、岸からほど近いその場所で、3本の明るく輝く柱を目撃した。それらは地面から空へと伸び、光の束を放っていた。　その修道士は修道院のアルヒマンドリトにこのことを報告し、アルヒマンドリトは市の長に知らせた。そして、大勢の民衆に付き添われてその場所へ向かうと、聖人の尊い鎖を見つけ出した。それらは枯れ木のように、不思議なことに水面に浮かんでいた。　彼らはそれを敬虔に手に取り、詩篇を歌いながら町へと運んだ。その道中で、足を引きずって地面を這うように歩いていた足の不自由な人に出くわすと、鎖に付いていた十字架で彼に祝福を与えた。すると、彼の足と膝が力強くなり、完全に健康な状態で立ち上がった。　このほかにも、さまざまな病に苦しんでいた多くの病人が、聖人の鎖によって癒やされた。しばらくして、聖人ニキータは前述の修道士シメオンのもとに現れ、彼にこう言った。

「この私の功績を示す尊い印を、近いうちにここから移し、私の棺の上に安置せよ。」

その後、聖人の鎖は栄誉をもってヤロスラヴリからペレヤスラヴリへと移され、彼の聖なる棺の上に安置された。信仰をもって訪れるすべての人々に、それらはキリスト・神の栄光のために多くの癒やしをもたらしている。

トロパリオ、第4声：

正教の教えに従い、若者の欲望を憎み、高潔な徳を身につけ、敵に打ち勝ち、賢明さをもって神に喜ばれた。そして神から奇跡の賜物を受け、悪霊を追い払い、病を癒やす、栄光あるニキタよ、キリスト・神に、我らの魂を救ってくださるよう祈り求めてください。

[3913] 聖ニキータは1186年5月24日に逝去した。

[3914] パレアエククリシアーク――修道院で聖像の前にランプに火を灯す者、聖堂係。

[3915] ペトロパヴロフスキー・ヤロスラヴリ修道院は、ヴォルガ川のほとり、現在のペトロフスカヤ教会のあった場所に建っていた。

コンダク、第8調:

キリストの御名のために、あなたは御自分の僕たちのために必要な死を耐え忍び、御方から朽ちることなき冠を受けられました。信仰をもって訪れる者たちには、あなたの尊い墓から癒やしを授けてくださいます。ニキトよ、敬虔なる者よ、私たちの魂のために祈り給え。

6月7日

5月25日（旧暦）

同日には、聖ヨハネ・バプティスタの尊い頭部の第三回発見が祝われる（この出来事については2月24日の項を参照）

聖フェラポンティオス、キプロス司教、聖殉教者の記念日

記念日：5月25日

この聖フェラポントは修道士であり、司教の位に就いてキプロス島で奉仕を行っていた[3916]。異教徒たちがキリスト教徒に対して起こした迫害[3917]の際、彼は勇敢に主イエス・キリストの御名を告白し、殉教の冠を受けた[3918]。彼の尊い遺骸は当初キプロスに安置され、そこですべての人々に奇跡をもたらしていたが、しかし、その後、コンスタンティノープルへ移された。その経緯は次の通りである。アガリア人が、神の許しを得て、我々の罪ゆえに東方の諸国を荒らし、その住民を捕虜にしていた時、彼らはキプロス島にも近づき、他の東方諸国で行ったのと同じことをこの島にも行おうとしていた。その時、聖フェラポントは自身の教会の司祭に現れ、こう告げた。

「急いで行き、私の聖遺物を持ち出し、コンスタンティノープルへ運べ。キリストの十字架の敵たちがこの島に攻め込み、荒廃させようとしているからだ。他のキリスト教徒たちにもこのことを伝え、アガリア人の侵攻の前にここから逃げ出せるようにせよ。」

直ちに聖職助手は、聖人の御出現と彼の命令についてすべてのキリスト教徒に伝えた。ほどなくして、キリスト教徒たちは船での旅の準備を整えた。新しい聖遺物箱を用意し、そこに聖フェラポントの尊い聖遺物を納め、それを船に持ち込んで旅立った。

旅人たちが海の大部分を通り過ぎ、すでにコンスタンティノープルに近づいていたとき、突然、海上で激しい嵐が吹き荒れた。皆は大きな恐怖と動揺に襲われた。しかしその時、聖遺物が入った聖櫃から（まるで微かな蒸気のように）素晴らしい香りが漂い始めた。その芳香は船全体を満たしただけでなく、船の周囲三スタディオンにわたって海に広がった。するとたちまち、まるでその不思議で言葉に尽くせない芳香によって鎮められたかのように、嵐は静まった。一方、聖なる殉教者の尊い聖遺物を愛を込めて守っていた聖堂奉仕者は、聖遺物箱の中から聞こえてくる、自分をその場所へと呼び寄せる声を耳にした。ついに周囲の者たち全員が、聖フェラポントが自身の聖遺物の守護者を呼び寄せているその声を耳にした。すると皆、畏怖と敬虔の念を抱きながら聖櫃に近づき、聖なる殉教者の聖遺物を拝観しようとした。聖棺に近づくと、皆は聖殉教者の聖遺物から漂い、聖棺全

[3916] キプロス島は、地中海の北東部、古代フェニキアの海岸近くに位置していた。キリスト教は、聖使徒パウロによってここに広められた。

[3917] これはディオクレティアヌス帝（在位284年～305年）による迫害を指すと理解すべきである。

[3918] 聖フェラポントの没年は、ディオクレティアヌスの迫害の時期に基づいて推定される。没日は不明である。5月25日は、おそらく彼の聖遺骨がコンスタンティノープルへ移送された日である。

体を満たしていた芳香のある聖油を目にした。船に乗っていたキリスト教徒たちは、その聖油をガラス製の器に汲み取り、魂と肉体の癒やしを求めて信仰をもってその油を身に塗った。

コンスタンティノープルに到着すると、キリスト教徒たちは、至聖なる神の母の栄光と誉れを称えて建てられた教会に、聖殉教者フェラポントの尊い遺骨を安置した[3919]。これらの一連の出来事は、ニキフォロス帝の治世中に起こった[3920]。その後しばらくして、その尊い遺骸から多くの奇跡が起こったことを受け、キリスト教徒たちは聖フェラポント神殉教者の名に因む別の教会を建立した。そして、この教会へと、神の御心に適う者の尊い遺骸が移されたのである。

神に愛されたフェラポントによって行われた数多くの奇跡のうち、記録に残されているのはごくわずかである。そのうちのいくつかについて、伝承を紹介しよう。

あるイタリア出身のフロリンという名の男は、不浄な霊の軍団に苦しめられていたが、聖フェラポントの聖遺物の前で癒やされ、完全に健康な状態で自宅に戻った。彼は、聖なる遺骨の棺から、まるで微かな霧のような、非常に芳しい香りが立ち上るのを見たと言っていた。この香りを悪魔の軍団は耐えられず、まるで誰かに追われているかのようにそこから逃げ去ったのである。

ヴィクシニア市の市民アナスタシイは、長い間、片腕が萎えてしまい、まるで死んだかのように肩にだらりと垂れ下がっていた。しかし、主の顕現の前夜、聖殉教者フェラポンテの教会を訪れたとき、彼は完全な癒やしを受けた。その手は力強くなり、もう一方の手と同じように健康になった。皆の目の前で、アナスタシイは癒やされた手で器を取り、それを洗礼の水で満たした。これを見た者たちは皆、聖なる御従者フェラポンテにおいて賛美される神に感謝を捧げた。

また、ゲオルギーという名の男がいた。彼は十人隊長[3921]であり、戦士であった。悪魔の策略により、彼の顔は後ろ向きになっており、片目が盲目となっていた。このゲオルギーは、殉教者の棺の前で祈りを捧げると、すぐに癒やされた。彼の顔は元の向きに戻り、目も見えるようになった。そこでゲオルギーは、無償で治療をしてくれた医師に感謝の意を表した。

テオドールという名の麻痺した男が、聖殉教者に捧げられた教会に運ばれてきた。眠りの中で、聖人が彼に現れ、パンとワインの入った杯を差し出した。彼は夢の中で聖人の手からそれを受け取ると、たちまち目を覚まし、体の中に力がみなぎるのを感じた。ベッドから起き上がると、主イエス・キリストとその聖なる殉教者を賛美し、こう言った。

「ああ、聖フェラポントよ、あなたはなんと容易に、そして速やかに、あらゆる病や不調を癒やしてくださるのか！」

聖殉教者の教会には、ある少女が連れてこられた。彼女は生まれて以来、両足が癒着し、後ろに曲がって背中にくっついていた。しかし、両親が聖フェラポントに熱心に祈りを捧げた後、少女の足はたちまち本来の姿に戻った。脚はまっすぐに伸びて分かれ、その少女は成人する頃には、神を賛美し感謝しながら歩くことができた。

マリアという名の女性には、がんと呼ばれる不治の病が体に現れた。激しい苦痛に苛まれ、もはや回復を絶望していたマリアは、熱心な祈りを捧げながら聖殉教者の棺へと急ぎ、そこでその病から迅速かつ完全な癒やしを受けた。

また、七年間も出血に苦しんでいた別の女性は、熱心な祈りと信仰をもって聖フェラポントのもとへ駆けつけ、その棺に触れた途端、出血はたちまち止まり、彼女は完全な健康を取り戻して自宅へ戻った。

[3919] この教会は、聖母マリアの「エレイナ（油注がれた）」あるいは「慈悲深い」と呼ばれるイコンを称え、その栄光を讃えるために建てられた。この聖母のイコンを称える祝日は、正教会において11月12日に執り行われる。

[3920] ニキフォロス1世皇帝は802年から811年まで在位した。聖殉教者フェラポントの尊い遺骸の移送は806年に行われた。

[3921] すなわち、10人の兵士を率いる長のこと。

さらに、水腫に苦しんでいたある女性は、聖フェラポントの聖遺物の前に来ると、眠りの中で幻視を見、聖殉教者が彼女の体の患部に何らかの軟膏を塗っているのを見た。目を覚ますと、患部から大量の膿が流れ出ているのを見て、その後、彼女は完全に健康になったのを感じた。

アルメニア軍に所属する戦士ステファンは、肉体に甚大な苦しみを抱えていた。彼は体が縮こまり、地面にへばりつくようにかがんでいた。同じく、テオドールという名の別の戦士も、同じ病に苦しんでいた。二人が共に神の御心に適う聖人の助けを求め、心からの祈りを捧げたところ、完全な癒やしを得た。

あるハンセン病患者が聖人の棺の前に来ると、その祈りによって病が癒やされ、神に感謝を捧げた。

ある哲学者は、胸に危険で非常に大きな腫れ物を患っていたが、聖人の墓を訪れてそこでうたた寝をしたところ、聖人が彼の胸の患部に湿布を当てているのを見た。　眠りから覚めると、彼は病の症状が著しく和らいでいるのを感じ、その翌日、完全に癒やされたため、神に感謝を捧げた。

他にも多くの病や不調が、神の御心に適う者フェラポントの尊い遺骨から流れ出る聖油の塗布によって癒やされ、　その同じ聖油によって、人々から悪霊が追い出され、死にかけていた者たちが死から生へと蘇った。これらすべては、聖殉教者フェラポントの祈りによって、私たちの主イエス・キリストの恵みにより成し遂げられたものであり、主には永遠の栄光が帰せられる。アーメン。

6月8日

5月26日（旧暦）

同日は、聖殉教者アヴェルキイとエレナの記念日であり、一部の文献によれば、彼らは使徒アルフェイの子である。聖アヴェルキイは、裸のままで蜂の群れの中に縛り付けられ、その刺に刺されて傷だらけになるという苦難をキリストのために耐え忍んだ。一方、その妹エレナは石打ちの刑に処された。

同日は、カリアジンの聖マカリオの聖遺骨発見の祝日である。その生涯については3月17日の項を参照のこと

聖殉教者ゲオルギオス・ノヴォイの殉教[3922]

記念日：5月26日

聖ゲオルギオスは敬虔な両親の息子であった。父はイオアンと名乗り、スレツ市[3923] の最も高貴な貴族の一人であり、母はマリアと名乗っていた。　ゲオルギオスは、両親の熱心な祈りによって授かった子であった。というのも、彼らはすでに高齢であり、古代のアブラハムとサラのように子供がいなかったからである。　このため、ヨハネとマリアは主、その聖母マリア、そして聖大殉教者ゲオルギオス・カッパドキアスに熱心に祈りを捧げた。彼らはこの神の御使いの教会に毎日通い、そこで施しを行い、不妊が解消されるよう主へ熱心に祈り求めた。　そして主は彼らの祈りを無視される

[3922] 「新」という呼称は、聖ゲオルギオスにのみ与えられており、彼よりはるかに以前に活躍した他のゲオルギオスという名の聖人たち、例えば大殉教者ゲオルギオス（その記念日は4月23日など）と区別するためである。

[3923] スレデツ、あるいはソフィアは、ブルガリア公国の首都である。古代から、ソフィアは重要な交易拠点であり、ローマ帝国のダキア属州の主要都市であった。　441年、ソフィアはフン族によって荒廃させられ、809年にはブルガリア人に征服され、1382年にはトルコ人の手に落ちた。1877年12月22日、グルコ将軍率いるロシア軍によって占領され、その際、イスラム教徒の住民の大部分が逃亡した。

ことなく、老齢にして彼らに男子の御子を授けられた。ヨハネとマリアは赤ん坊を聖大殉教者ゲオルギオスの教会に連れて行き、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授け、聖なる洗礼において彼にゲオルギオスという名を授けた。

少年は神を畏れる心を持って育てられ、書物の読み方を教えられた。ゲオルギオスはすぐに聖書を深く学び、その知識において同年代の誰よりも優れていた。ゲオルギオスが青年期に達すると、その端正な顔立ちと貞潔さにおいて、旧約聖書のヨセフに非常によく似ていた。

当時、ブルガリアはサラセン人に支配されていた。祝福されたゲオルギウスが生後二十五歳になった時（その頃、両親はすでに主のもとへ旅立っていた）、サラセン人たちは彼を自分たちの不敬虔な信仰へと誘い始め、こう言った。

「ゲオルギイよ、キリスト教を捨てて、我々の信仰を受け入れよ。神の使徒ムハンマドの言葉を聞きなさい[3924]；我々の律法を受け入れよ。」

そう言いながら、サラセン人たちは聖ヨハネの尊い頭に、彼らの慣習に従って頭にかぶり、礼拝所に入る際に着用するタフィヤ（帽子）を被せようとした。しかし、聖人は次のように答えた。

「私たちキリスト教徒が、あなたがたの不敬虔な慣習を真似て、頭にタフィヤを被ることはふさわしくない。また、真の神であり、天と地の創造主であるキリストを否定し、聖なる洗礼の恵みを自ら奪うことも、私たちにはふさわしくない。」　教えてほしい。私は、神からも、神の預言者たちからも、使徒たちからも遣わされず、ただ悪魔の軍団の単なる指揮官に過ぎず、悪魔の軍旗を掲げていたムハンマドを、信じるべきだろうか？　ほら、あなたたちは自分たちが何を信じているのかさえ分かっていない。あなたたち自身が、真の道から逸れてしまったのだ。

このようにサラセン人を糾弾した後、聖ゲオルギオスは、キリストこそが、目に見えるものも見えないものも、地上のものも天上のものも、あらゆる存在の真の神であり、創造主であることを、声高らかに告白し始めた。

その後、聖人は不信心者たちの顔に唾を吐きかけ、彼らを神を信じない者たちと呼び、タフィヤを地面に投げ捨て、それを足で踏みつけながら、心の中でこう言った。「おお、ゲオルギオスよ！　なぜ躊躇しているのか？　キリストがあなたを呼んでいるのだ！」

不信心なサラセン人たちは怒りに満ち、聖人を捕らえ、激しい殴打と罵声を浴びせながら、彼を支配者の前に引き出し、彼を告発してこう言った。

「この男は我々の信仰を冒涜し、誹謗している。」

しかし、イゲモンは聖人の美しい顔立ちと気高い眼差しに心を打たれ、お世辞を交えてこう語りかけた。

「もし、あなたがたが『神の子』と呼ぶイエス・キリストを否定し、独裁者セリム[3925]の命令に従い、その意志を遂行するならば（このセリムには多くの王国が服従している）、わが王から多くの贈り物とあらゆる栄誉を与えられ、大都市スレドツのすべての軍司令官の長に任命されるだろう。

しかし、キリストの殉教者は、再び大勢の群衆の前で主イエス・キリストを告白し、サラセン人の信仰を糾弾し、非難した。すると、拷問官は激怒し、聖人を容赦なく棒で打つよう命じた。　こうして聖ゲオルギオスは残酷に拷問され、その肉体は棒に張り付き、傷口からは血が滴り落ちた。しかし、それにもかかわらず、聖人は不敬虔な王の命令に従う気配を微塵も示さなかった。

そこで統治者は、頭から足先まで全身をナイフで切り刻み、その傷口を燃えるろうそくで焼くよう命じた。聖人の全身がろうそくで焼かれたため、顔さえも判別できなくなり、その肉体は火によ

[3924] マホメット、あるいはムハンマド――イスラム教の創始者（6世紀末から7世紀初頭にかけて生きた）。
[3925] セリム1世は、トルコのスルタンであり、1512年から1529年まで在位した。並外れた狂信（宗教的偏狭さ）で知られていた。

って蝋が溶けるように溶け始めた。　しかし、キリストの殉教者は、主イエス・キリストの御名を呼び求め、告白しつつ、勇敢に苦難に耐え抜いた。

その後、拷問官は兵士たちに、殉教者を街中を引き回させ、太鼓を打ち鳴らしながら、「神の使徒ムハンマドを侮辱してはならない。また、サラセン人の信仰に関する彼の教えを誹謗してはならない」と叫ぶよう命じた。

聖人は主キリストに祈りを捧げ、サラセン人たちにキリストを信じるよう説き続けた。

その後、不信心者たちは聖人を焼き殺すつもりで、町の真ん中に大きな焚き火を築いた。そして、キリストの殉教者ゲオルギオスは、焼かれるために用意された場所へと連行された。

しかし、傷の痛みに耐えきれず、彼は声も出せないまま地面に倒れ込んだ。ただ、その唇だけが動いて、主の助けを求めていた。サラセン人たちは、まだ生きている聖人を捕らえ、火刑台に投げ込んだ。こうして、キリストの殉教者ゲオルギウスは、その苦難に満ちた生涯を閉じた。　不信心なサラセン人たちは、キリスト教徒たちが殉教者の遺骨を識別できないようにと、多くの犬もまた火刑台に投げ込んだ。しかし、神は御自身の聖人を栄光に包まれた。突然、その場所に雷と稲妻を伴う雲が現れ、激しい雨が降り注ぎ、火を消し去ったため、火刑台からは煙さえも立ち上らなかった。　サラセン人たちは、これほど大きな奇跡に恐れをなして、その場から逃げ去った。その間、雨は夜になるまで降り続いた。

夜が更けると、殉教者の尊い遺体が焼かれたその場所の上空に、非常に大きな光が現れ、その一帯全体を照らし出した。　そこで、聖大殉教者ゲオルギオス・カッパドキアスを祀る大聖堂の首席司祭は、他のキリスト教徒たちと共に裁判官たちの元へ赴き、彼らに金銭を渡した上で、聖殉教者の尊い遺骨を回収し、通常の埋葬を行う許可を懇願した。　裁判官たちがこの要請に同意を示すと、その大司祭はイェレミヤ大主教のもとへ赴き、聖殉教者に関するすべてを報告した。　一方、大主教は、聖なる殉教者の遺骨のもとへ、大きな急ぎと信仰をもって向かった。その道中、聖職者全員と多くのキリストを愛する人々が同行し、詩篇や賛美歌を歌い、ろうそくと香炉を携えていた。　光が見えたその場所で灰をかき分けると、キリスト教徒たちは、聖殉教者ゲオルギオス・ノヴォイの尊い遺骨を、火の被害を受けることなく発見した。一方、犬たちの骨は塵と灰と化していた。

キリストの聖なる殉教者が夜間に街中を引き回され、その血が滴り落ちたまさにその場所では、夜になると、まるで灯りがともっているかのような光が現れ、すべてのキリスト教徒がその光景を目撃した。

聖殉教者の尊い遺骨を受け取った大主教は、それらを聖大殉教者ゲオルギオス・カッパドキアスの教会にある聖遺物箱に納めた。聖殉教者の尊い遺骨は今もなおここに安置されており、神の恵みにより、信仰をもってそれに近づくすべての人々に癒やしをもたらしている。

キリストの聖殉教者ゲオルギオスは、自身が育ったブルガリアの都市スレデツで殉教した。その殉教の業を成し遂げたのは、世界の創造から7022年、神の御言葉の受肉から1514年、5月26日[3926]　、万物の主イエス・キリストの治世の時代であり、御父と聖霊と共に、永遠に栄光が帰せられる御方に。アーメン。

トロパリオ、第4調:

若き頃から神の御心により、自らをすべて主に委ね、祈りと断食において徳の模範となり、富や栄光、そして肉体の美しさを無きものとして軽んじ、唯一のキリストを心から愛し、　その真の神

[3926] 一部の説によれば、聖ゲオルギオスは2月11日に殉教した。その場合、5月26日は彼の聖遺物が移された日とされている。

、三位一体として崇められる御方を、不敬虔なトルコ人の前で宣べ伝え、異教の信仰とムハンマドの律法を足の下に踏みつけ、迫害者を震え上がらせ、拷問という栄冠を身にまとい、天へと昇り、喜びの群れに加わった、至賢きゲオルギオスよ。　キリスト・神に、あなたの祖国を守り、正教の皇帝と、民と、都市を救ってくださるよう、また、あなたの功績を常に尊ぶ者たちを救ってくださるよう、祈り求めてください。

コンダク、第4調:

あなたは、この世に惑わされることのない、まばゆい星として現れ、義なる太陽キリストを告げ知らせた。あなたの苦難によって、キリストの偉大なる殉教者ゲオルギオスよ、あなたはサトラキアの惑わしを消し去り、モアメフの教えと律法をあなたの足の下で踏み砕いた。　また、不義の王や迫害者たちを、あなたの強靭な忍耐をもって震え上がらせ、信者たちに光を与え、私たちすべてのために絶えず神に祈り続けておられます。

尊き父ヨハネ・プサイハイトの記念日

記念日：5月26日

私たちの聖なる父ヨハネは、幼い頃からキリストを愛し、その性格において聖なる預言者エリヤやヨハネに似るようになりました。 世俗を捨てて、彼はプサイハイト修道院[3927] へと赴き、そこで修道生活に入り、その後、神から悪霊を追い出し、病を癒やす賜物を受けました。彼は偶像破壊運動の激動の時代に活動し、その教えによって正教徒たちの信仰を強めました。　彼に対して、聖像を迫害していた皇帝[3928] への密告がなされ、皇帝は彼を呼び出して、尊い聖像への礼拝を放棄し、自身の異端に加わり、不敬な文書に署名するよう強要したが、尊者（聖人）はこれに応じず、むしろ皇帝を異端者と呼んで非難した。　このため、彼は流刑に処され、そこで無法かつ不公正な聖像破壊者たちから数多くの苦難に遭い、そこで生涯を閉じた。

七十人の使徒の一人、聖カルパの記念日

記念日：5月26日

七十人の使徒の一人である聖カルポは、聖使徒パウロの弟子であり、その奉仕者であった。彼は、パウロの書簡が宛てられた各地へとそれを届けた。 カルプは、 使徒パウロと共に十分な期間、至る所でキリストの御言葉を宣べ伝え[3929] 、そのために数多くの苦難と災難に耐えました。その後、聖カルプは使徒パウロによって、フラキアのベリアの司教に任命されました[3930] 。

[3927] ボランディストたちの指摘によれば、プサイハイト修道院はコンスタンティノープルにあった。

[3928] 特に残酷なイコン迫害者であったのは、ギリシャ皇帝コンスタンティノス・コプロニモス（743–775年）である。彼は、法的手続きを遵守しつつ、イコン崇拝を異端として厳粛に根絶しようとしており、そのために754年に公会議を招集し、それを「全地公会議」と名付けた。 同様に、皇帝レウ・アルメニア人（813–820年）も聖像崇拝を激しく迫害した。彼は、修道士たちが聖像崇拝について説教することを禁じる勅令を発布し、すべての修道士はこの勅令に署名することを義務づけられた。 おそらく、ここで「聖像を迫害した皇帝」とは、当然ながら最後の皇帝を指している。

[3929] ちなみに、トロアには使徒パウロがフェロンや様々な書物を残しており、その中で使徒は特に羊皮紙の書物について言及している（IIテモテ4:13）。

[3930] トラキアとは、マケドニア、エーゲ海、マルマラ海の北側に位置するバルカン半島の地域を指していた。 現在、古代フラキアの地には、ハンガリー東部、トランシルヴァニア、ベッサラビア、モルドバ、ワラキア、ブルガリア、セルビア

聖使徒カルポスは、クレタ島でもキリストの福音を宣教するために尽力した[3931]； ここで彼は、とりわけ、聖ディオニシオス・アレオパゴスを自宅に迎え入れ[3932] 、また、カルポスが二人の罪人を処刑するよう主にお願いしていた際に、幻視の中で現れた主を目撃し、「私をさらに苦しめよ。私は人々の救いのために、もう一度苦しみを受け、十字架にかけられる用意があるからだ」と宣言する主の声を聞いた[3933] 。

聖ディオニシオス・アレオパゴスは、この聖カルポスについて、また彼が、天から現れた神聖な御姿を拝するまでは、決して至聖にして命を与える秘跡を執り行わなかったという事実についても証言している。[3934]

ベリアで司教を務めていたカルポスは、多くのギリシャ人異教徒をキリストへと導いた。ユダヤ人たちを非難しつつ、彼は彼らに、彼らが十字架につけたキリストこそが真の神であり、万物の創造主であると語った。 その後、彼はユダヤ人たちによって残酷に殺害され、こうしてその魂を主の御手に委ねた[3935] 。彼の尊い聖遺骨は、彼が司教を務めたのと同じ町で、信仰深く神を畏れる人々によって安置され、この聖遺骨によって、私たちの神であるキリストの栄光のために、病める者たちに多種多様な癒しがもたらされた。

、そしてルメリア東部が含まれている。 ベリアという都市は現在、ヴェリアまたはカラ・ヴェリアと呼ばれており、人口は約12,000人である。– 使徒パウロは、第二回伝道旅行の際にベリアを訪れた。

3931 クレタ島（別名カンディア――同名の主要都市に由来する）は、地中海の中央部、エーゲ海の南に位置している。キリスト教の始まりは、使徒たちへの聖霊降臨という出来事によってここに築かれた。なぜなら、その出来事にはクレタ人も同席していたからである（使徒行伝2:11）。その後、キリスト教は使徒パウロによってこの地で確立され、パウロは「*未完成の事を成し遂げ、すべての町に長老を任命する*」ために、ここにテトスを司教として任命した（テトス1:5）。――17世紀、クレタ島はトルコの支配下に入った。

3932 ディオニシオス・アレオパゴイテスは、アテネの最高裁判所であるアレオパゴスの一員であった。使徒パウロの第二回伝道旅行（紀元54年頃）の際に、パウロによってキリスト教に改宗した。正教会によって聖人の列に加えられた。――その記念日は10月3日に祝われる。

3933 この言葉を理解するためには、聖使徒カルポスの生涯における次の出来事を思い起こす必要がある。ある不信仰者が、あるキリスト教徒を堕落させ、不幸へと導いた。カルポスはこれに深く悲しんだ。それまで決して苛立ちを見せたことのなかったカルポスだったが、この時は心の底から深く憤りを感じていた。 彼は心の中で、人々を堕落させ破滅させる不信心者たちは、この地上に生きるべきではないと考え、天から火が降り注ぎ、その二人の不信心者――誘惑した者と誘惑された者――を焼き尽くすよう、神に祈り始めた。 彼がそう祈っていると、突然、彼が立っていた部屋が揺れ動き、二つに割れた。目を上げると、天が開いており、そこには人間の姿をした主イエス・キリストが座しておられた。 そして視線を下げると、深い淵があり、その縁には、カルプが滅びを願っていたあの二人の罪人が立っていた。 カルプは、自分を悲しませた者たちがすでに深淵に落ち、下で這い回る蛇に食い尽くされようとしているのを見て、喜びに満たされた。しかし、彼らがまだ深淵に落ちていなかったため、カルプは再び苛立ちと悲しみに襲われ、彼らの滅びを神に祈り求めた。 ところが、彼が天を仰ぎ見ると、主がそれらの罪人たちに近づき、助けの手を差し伸べているのが見えた。その後、主はカルプにこう言われた。「さらにわたしを苦しめよ。わたしは、人々の救いのために、もう一度苦しみを受け、十字架にかけられる用意があるからだ。」 この物語は、聖ディオニシオス・アレオパゴスが修道士デモフィロスへの書簡の中で伝えている。この書簡は、10月3日（聖ディオニシオス・アレオパゴスの記念日）に読むことができる。

3934 ディオニシオス・アレオパゴイテスは、使徒カルポについて大いに称賛している。例えば、修道士デモフィロスへの書簡の中で、彼はカルポについて次のように述べている。「この人はその徳において偉大であり、極めて高潔な心の清らかさを備えていたため、神を視る能力に極めて優れていた」。

3935 聖使徒カルパの死は、1世紀末に起こった。

トロパリオ、第3調：

聖なる使徒カルペよ、慈悲深き神に祈り、私たちの魂に罪の赦しを授けてくださいますように。

コンダク、第4調：

教会は常に、あなたを使徒カルペよ、まばゆい星として仰ぎ、あなたの数多くの奇跡によって照らされています。信仰をもってあなたの記念を尊ぶ者たちを救ってください。

聖使徒アルフェイの記念日

記念日：5月26日

聖使徒アルフェオは、使徒ヤコブ・アルフェオとレビの父であった。このレビは徴税人であった[3936]、主は彼を召して、*「わたしについて来なさい」*と言われた（マルコ2:14）。

レヴィはすべてを捨ててキリストに従い、常にキリストの変わらぬ伴侶でした。

使徒レビはマタイとも呼ばれ、まさに彼が最初の福音書を著したのです。

聖使徒アルフェオはカペナウムの出身でしたが、彼がどこで福音を宣べ伝えたかは不明です。

6月9日

5月27日（旧暦）

聖殉教者テオドラとディディモスの殉教

記念日5月27日

ディオクレティアヌス皇帝[3937]とマクシミアヌス皇帝[3938]の治世中、アレクサンドリア[3939]を統治していたエウストラティオス公の時代に、皇帝の勅令が発布され、キリスト教徒に対し、神々に犠牲を捧げるか、あるいは殉教を受けるかの選択を迫った。

エウストラティオス公は、アレクサンドリアの法廷に腰を下ろし、最近捕らえられて牢獄に閉じ込められていたキリスト教徒の乙女テオドラを、裁判のために自分の前に連れてくるよう命じた。彼女が連れて来られると、裁判官は彼女に尋ねた。

「お嬢さん、あなたはどの信仰を奉じているのか？」

聖女はこう答えた。

「私はキリスト教徒です。」

裁判官は言った。

「お前は自由人か、それとも奴隷か？」

[3936] ミタールとは、税収吏のことである。

[3937] ディオクレティアヌスは284年から305年まで、ローマ帝国の東部を統治した。

[3938] マクシミアヌスは、284年から305年までローマ帝国の西部を統治した。

[3939] アレクサンドリア――紀元前333年頃、アレクサンドロス大王によってエジプトの地中海沿岸に築かれた名高い都市。紀元前より科学と商業の中心地として知られ、4世紀初頭からはキリスト教生活の最重要拠点の一つとなり、総主教の居城となった。

「私はあなたに言ったでしょう」とフェオドラは答えた。「私はキリスト教徒です。キリストがこの世に来られ、私を罪から解放してくださいました。そして私は、この虚しい世において、立派な両親の間に生まれました。」

公爵は、ルキウスという名の市長を見やり、彼に尋ねた。

「この娘を知っているか？」

ルキイは答えた。

「ええ、彼女が気高く誠実な家柄の出身であることは知っています。」

すると、公爵はテオドラに向き直って言った。

「お嬢さん、もしあなたが高貴で誠実な家柄の出身であるなら、なぜ今なお結婚していないのですか？」

その娘は答えた。

「私はキリストのために結婚を断念しました。なぜなら、私たちの主イエス・キリストは、この世に来られ、無原罪の永遠の処女マリアから生まれ、私たちを朽ちる運命から解放し、永遠の命を授けてくださると約束されたからです。そこで私は、主を信じ、主への愛ゆえに、死ぬその日まで処女の清さを保つことを決心したのです。」

これに対し、裁判官は言った。

「王たちは、清さを保とうとするすべての乙女を、我らの神々に拝ませるよう命じている。もし神々に拝むことを拒むならば、売春宿に送り込まれることになる。」

少女はこう答えた。

「おそらくあなたも理解しているでしょうが、神はまず何よりも心の意志をご覧になります。心を見通すお方である神は、私たちのあらゆる思いを知っておられ、私たちの真の意図そのものを、行いとして受け入れてくださるのです。　私の神は、私の処女性を清く保つという私の意図をご存知です。ですから、たとえあなたが自慢するように、私を淫行者に引き渡すよう命じたとしても、それは私の身体にとって姦淫ではなく、私に対する暴力と苦しみとなるでしょう。　また、もしあなたが私の首や手、あるいは足を切り落としたり、無理やり私の処女を奪ったりしたとしても、それによって私を淫婦にするのではなく、殉教者にすることになるのです。しかし、主であり私の神は、お望みになれば、私の処女性を清く保つ力をお持ちであることを知っておいてください。

裁判官は言った。

「お前の高貴さを汚そうなどと考えてはならない。ここにいる者たちが証言しているように、誠実で名誉ある両親の娘であるお前は、自らを侮辱や嘲笑の的にしてはならない。」

乙女は答えた：

「私は、私に高潔さと清らかさを与えてくださったキリスト、すなわち私の神を賛美します。そして、主が御自身の鳩を無傷のまま守ってくださることを願っています。」

裁判官は言った。

「なぜ、十字架にかけられた人間を神であるかのように信じて、惑わされているのか。果たして、その方が、お前を汚そうとする者たちの手からお前を救い出してくれるというのか。淫行の巣窟に入っても、清らかなままそこから出てこられるなどと考えてはならない。」

テオドラはこう答えた。

「私は、ポンティウス・ピラトのもとで苦難に遭われたキリスト、すなわち私の神が、淫行者の不浄な手から私を救い出し、御自分のしもべを清く守ってくださると信じています。」

その後、裁判官はテオドラに三日間の熟考期間を与えた。しかし彼女は、三日後であろうと、それ以上の日数が経とうとも、自分の神であるキリストのために死ぬこと以外に、他の意図も願望もないと語り、苦難を受ける覚悟を示した。

その後、聖女は牢獄に連行され、三日後に再び尋問に引き出された。イゲモンは、彼女が揺るぎなくキリスト教の聖なる信仰に留まり続けることを悟ると、彼女を娼館へ連行するよう命じた。そこへ連れて行かれる途中、聖女は主に向かって次のように祈った。

「キリストよ、神よ。御自身の聖なる殉教者テクラ（9月24日の彼女の伝記を参照）の御前で、言葉を持たない獣たちを鎮められた方よ、私の体の清さを傷つけようとする、最も凶暴な『言葉を持つ獣』たち、すなわち淫行者たちをも鎮めてください。　神よ、スザンナを姦淫を企む老人の手から救い出された方（ダニエル書13章）、私というあなたのしもべをも、そのような淫行者たちから救い出してください。ただあなたお一人にのみ捧げられたこの聖なる神殿が、汚されることのないようお守りください。　私の処女の宝を密かに奪おうとした目に見えない敵を私から追い払ってくださったあなたよ、私の富を強奪しようとしているこれらの露骨な強姦者たちも、どうか追い払ってください。　主なる私の神よ、私を守りにおいでください。そして、あなたの全能の力によって、私がここから清らかなまま立ち去れるように、これらの不義な手に触れられないようにし、私があなたの聖なる御名を賛美できるようにしてください。

聖女がこのように祈っている間、卑劣な淫行者たちはその家の近くに立ち、誰が最初にその乙女のもとへ入るべきか互いに言い争っていた。その時、体格がたくましく、戦士のような装いをしたある若者が彼らに近づき、その家から彼らを追い払うと、乙女のもとへ入っていった。そして、誰も彼が彼女のもとへ通るのを妨げる者はいなかった。　彼はディディムという名のキリスト教徒の一人で、神の御計画により、あたかも罪を犯すかのように戦士の姿でその家に入ったが、実際には乙女を守るためにここに来たのであった。彼を見て、聖テオドラは大変驚いた。しかし、祝福されたディディムは彼女にこう言った。

「恐れるな、姉妹よ！　外見上は狼のように見えるその者は、実は子羊であり、聖なる信仰におけるあなたの兄弟なのだ。　私は、私の神のしもべであり鳩であるあなたを救うために来たのだ。服を交換しよう――あなたは私の服を着て、　私はあなたの服を着る。そうすれば、あなたは私の服に身を包まれ、処女性を傷つけることなくここから連れ出せるだろう。私はあなたの服を着て殉教の業に赴き、キリスト・神の真の戦士であることを示そう。

聖なる乙女は、ディディムが神から自分に遣わされた者であることを悟り、この提案を受け入れた。服を交換し、乙女は男装を、青年は女装を身にまとった。その後、青年は乙女にこう言った。

「ここから出る時は、まるで恥ずかしがっているかのように顔を隠しなさい。皆が恥じ入った様子でここを去っていくのだから、そうすれば誰もあなたを認識しないでしょう。」

乙女はその通りにし、顔を隠したまま軍服姿で外へ出た。そして、神が彼女を娼夫たちから、まるで鳥を網から、あるいは羊を狼から救い出されたかのように、その御摂理によって守ってくださったことを賛美しつつ、急いで自宅へと向かった。

テオドラが売春宿を出たとき、ある若者が、淫らな情欲に駆られてそこに入ってきた。乙女の代わりに男がいるのを見て、彼は大いに驚き、叫んだ。

「これは一体何だ？　どうして少女が男に変わったのか？　かつてキリストが、キリスト教徒たちが言うように、水をワインに変えた（ヨハネ2:1–11）と聞いたことがあるが、今や私は、キリストが女性の性を男性の性に変えたのを目の当たりにしている。」

そして、売春宿から出てくると、彼は友人たちにこう言った。

「さあ、ここから急いで逃げよう。キリストに私たちを女に変えられないように！」

そして走り去り、そのすべてをエウストラティオス判事に報告した。エウストラティオスはディディモスを法廷に連行するよう命じ、彼に尋ねた。

「お前は誰だ？」

ディディムは答えた。

「私はイエス・キリストの僕です。私の名はディディムです。」

裁判官は言った。

「なぜ、お前は男らしい服ではなく、女のような服を着ているのか？」

ディディムは答えた。

「私はテオドラからこれを借り、自分の服を彼女に渡しました。そうすれば、彼女は淫行者たちに正体を見破られることなく、彼らの手から逃れられるからです。」

裁判官は尋ねた。

「誰が君にそうするよう命じたのか？」

ディディムは答えた：

「私の神、イエス・キリストが、このように行動するよう教えてくださったのです。主は、御自身の羊を獣の牙から、無傷で無事に救い出すよう、私を遣わされたのです。」

裁判官は言った：

「では、テオドラはどこにいるのか？　我々に拷問されたくないのなら、彼女の居場所を教えよ。」

ディディムは答えた。

「実のところ、彼女が今どこにいるのかは存じ上げません。私が彼女について知っているのは、彼女が誠実で忠実なキリストのしもべであり、私たちの神であるキリストの至聖なる御名を告白しているということだけです。それゆえ、キリストも彼女を愛し、ご自身の花嫁として清く守ってくださったのです。」

すると、公爵は怒りに満ち、ディディムの首を剣で切り落とすよう命じ、その遺体は火の中に投げ込むよう命じた。

聖ディディムは、自らの死刑判決を知ると、喜びに満ち溢れ、神に向かって次のように叫んだ。

「神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ、あなたは私の祈りを軽んじることなく、私の願いを叶えてくださいました。あなたは御自分のしもべテオドラをも清さと無傷の状態で守り、私にも殉教者の冠を授けてくださるのです。あなたは祝福されます！」

そして、聖人は斬首のために城の外へと連行された。聖テオドラはこれを知ると、聖殉教者ディディモスの後を追って行き、斬首の場に着くと、殉教の冠について彼と論じ合い、こう言った：

――あなたは私を汚されることから救ってくれたけれど、死から救ってほしいとは頼んでいない。私が最初に捕らえられ、最初に拷問を受け、裁かれたのだから、殉教の死を私に譲ってほしい。私を斬り殺して、あなたは好きなところへ行ってほしい。あなたが私の　処女性を清らかなまま守ってくれたというそのことだけで、主からあなたには大きな報いが与えられるだろう。　私は、あなたが私の代わりに死んで、私の冠を先取りすることを望まない。私はあなたの死の原因になりたくない。私は自ら死ぬ。自らその義務を果たす。私には頭があるのだから。その頭がキリストの御名のために切り落とされるように。　私には血がある。それが私たちの主のために流されるように。私は汚されることを望まなかったし、今も望まない。しかし、拷問を受けることを望んでいたし、今も望んでいる。だから、私があなたより先に編み始めた冠を、私から奪わないでほしい。　しかし、もしあなたが私の殉教を羨むのなら、私に先に剣の下へ行くことを許してください。あなたは私の後にキリストの殉教者となることができます。私は、あなたが私の後に残ってほしいのです。私があなたの後に残るのではなく。なぜなら、あなたからは清らかさを奪うことはできませんが、私からは無垢さを奪われる可能性があるからです。もしあなたが私を娼館から清らかなまま救い出したのなら、私にキリストの御前に清らかな姿で現れることを許してください。

すると、聖ディディムスは彼女にこう言った。

「愛する姉妹よ！　かつて一度、あなたを汚れなく守ってくださった私たちの主は、これからも常にあなたの清さを守ってくださるでしょう。しかし、死に定められた私を、死ぬことを妨げないでください。私はキリストのために死に、自分の血で自分の罪を洗い清めます。」

彼らが愛をもって互いに語り合っている最中、二人を剣で斬るよう命じられた。聖なる殉教者テオドラが真っ先に剣の下に頭を差し出し、続いて聖なる殉教者ディディムもまた、その首を剣の下に差し出した[3940]。そして、彼らの遺体は火の中に投げ込まれた。こうして彼らは、私たちの神であるキリストから勝利の冠を受けました。キリストには、父と聖霊とともに、永遠に栄光と誉れと礼拝が捧げられます。アーメン。

聖なる司祭殉教者フェラポントの記念日

記念日：5月27日

この聖フェラポントは、サルディスの[3941]教会の司祭であった。そこで彼は、その教えによって多くのギリシャ人偶像崇拝者をキリストへと導き、聖なる洗礼によって彼らを啓蒙した。　聖フェラポントは、イゲモン・ユリアヌスに捕らえられ、鎖で縛られて牢獄に投じられた。彼は長い間、飢えと渇きに苦しめられた。牢獄から引き出されると、様々な拷問にさらされ、その後、縛られたままフリギアの都市シナオン（[3942]）へ、そしてガラティアの都市アンキルへと連行され、至る所で多岐にわたる拷問を受けた。　やがて聖人がアスタラと呼ばれる川のほとりに連れて行かれると、裸のまま地面に引きずり出され、地面に打ち込まれた四本の杭に縛り付けられた。その後、拷問者たちは聖人を激しく殴打し、そのあまりに激しい殴打のせいで、皮膚さえも体から剥がれ落ち、大地は彼の血で染まった。その杭からは芽が吹き出し、枝や葉が生い茂り、　やがて大きな木へと成長し、その葉で人々の様々な病や不調を癒した。ついに聖フェラポントは、リディア地方にある、ヘルムス川（リディアを流れる）の近く、サタリア司教区（サルディス都主教区の管轄下）へと連行され、　そこで、多くの苦難の末、キリストの御名を告白したために殉教し、こうして主から朽ちることのない冠を授かった[3943]。

キエフおよび全ロシアの奇跡行者である聖キプリアン、フォティオス、イオナの尊い遺骸の移送

記念日5月27日

1472年4月、全ロシアの大公であり、キリストを愛するイオアン・ヴァシリエヴィチ[3944]　の治世中、フィリッポ大主教[3945]　の下、栄光ある都市モスクワにおいて、聖なる大聖堂「至聖なる神の母

[3940] 聖殉教者テオドラとディディモスの殉教は、303年または304年に起こった。

[3941] サルディス（またはサルド）という都市は、小アジアのリディア地方に位置していた。古代にはリディア王国の首都であり、その富で知られていた。ここでは、使徒たちの時代からすでに多くのキリスト教徒がいた。サルディスの教会については、『ヨハネの黙示録』（黙示録1:11、3:1–4）に言及されている。

[3942] 小アジア地方。

[3943] 聖フェラポントの没年は不明である。

[3944] ここでいうのは、もちろん、1462年から1505年までモスクワを統治した大公イオアン・ヴァシリエヴィチ3世のことである。

[3945] これは、1465年から1473年にかけて大公イオアン3世の治世下でモスクワの主教座に就いていたフィリッポ1世大主教のことである。

の被昇天大聖堂」の建設が開始された 。 そして、聖ペトロ・チュドトヴォルツによって建てられた最初の教会[3946] を解体し始め、床まで取り壊した際、かつてのロシアの聖人である、尊厳なる大主教キプリアン、フォティイ、イオナの棺が発見された。 5月28日、午後2時頃、彼らの棺は土で覆われた。その時、全ロシアのフィリッポ大主教が、大司教たちと共に、そして彼と共にモスクワの聖職者全員を率いて参列した。また、敬虔な大公イオアン・ヴァシリエヴィチも息子を伴って参列し、大公の母、その兄弟であるゲオルギー公、アンドレイ公、 ボリス、アンドレイの各公爵、大公宮廷のすべての重臣、諸公爵やボヤール、そして栄光あるモスクワの住民である多くの正教徒、男女が参列した。 この機会にふさわしい詩篇を詠んだ後、まず全ロシアのキプリアン都主教の棺を運び出し、新しく建立された聖堂の右側にある特別な聖櫃の中に、あらかじめ用意された場所に安置した。続いて、フォティイ都主教の棺を運び出し、同じ場所に安置した。 聖人たちが身に着けていた聖衣とオモフォリオンは、彼らの死去から長い年月が経過していたにもかかわらず、朽ちていなかった。というのも、キプリアン大主教の死去からは18日足りない65年が、フォティオス大主教の死去からは34日足りない41年が経過していたからである。 聖キプリアンとフォティオスの聖遺骨が移された後、人々は聖イオナ大主教の棺へと向かった。その直後に棺の蓋が開けられると、非常に強い芳香が立ち込め、その場に立っていた者全員がそれを嗅ぎ取った。 その際、皆は聖人の聖遺体が完全に無傷であることを目撃した。ただ、肉体が骨に張り付いていただけであり、彼が身にまとっていた衣もまた無傷で、腐敗の跡は一切見られなかった。それにもかかわらず、彼の死去からその時点で11年2ヶ月が経過していたのである。聖人の棺を運び出し、教会の左側の地面の上に安置した。

その後、敬虔なイオアン公と尊厳なる大主教は、大勢の正教徒たちと共に、この出来事に対して神に感謝を捧げ、5月27日を聖人たちの尊い遺骨発見の記念日として祝うよう命じた。

我らの尊き父フェラポンティ、ベロゼルスクの奇跡行者の記念日

記念日：5月27日

この私たちの尊い父フェラポントは、モスクワ地方のヴォロカ・ラムスキーの町[3947] の出身であった。彼は敬虔なポスコチン家の息子であり、世俗の名はフェオドールであった。成人すると、彼は神への畏敬の念に満たされ、世俗を離れることを望んだ。 家と両親を後にし、彼は栄光ある都市モスクワへと赴き、聖母マリアのシモノフ修道院[3948] で修道者となり、そこでフェラポントという名を与えられました。その後、服従と祈り、断食に励みながら、彼は長年にわたりこの修道院で修行に励みました。 ある日、修道院の用事のため、彼はアルヒマンドリトによってベロエ湖地域[3949] へ派遣され、その地の様子を視察して大変気に入り、自身の修道院へと戻った。

神の摂理により、この修道院には、沈黙を守りながら過ごしていた聖キリル（後にベロゼールスの奇跡行者となる）がおり、彼はこの時、至聖なる聖母マリアの御出現を授かり、聖母は彼にベロ

[3946] 言うまでもなく、1325年にウラジーミルからモスクワに移住し、その強い要望により、モスクワ公イオアン・カリータによって最初の石造の聖母被昇天教会が建設された聖ペトロ大主教のことである。

[3947] ヴォロク・ラムスキー（別名単にヴォロクとも呼ばれた）、現在のモスクワ州ヴォロコラムスク郡の郡庁所在地は、ノヴゴロドからの入植者たちによって、ラマ川の支流であるゴロデンカ川沿いに建設され、1135年にはすでに存在していた。 古代、この町は非常に広大で人口も多かったが、現在では人口1000人の取るに足らない小さな町となっている。

[3948] モスクワ川近くの「シモノヴォ」という地名にちなんで名付けられたシモノフ修道院は、1370年頃に、ラドネジの聖セルギイの弟子であり実の甥であるロストフ出身の修道士によって設立された。彼は、聖母マリアの栄光ある降誕を称えて、同修道院内に最初の聖堂を「至聖なる聖母マリア」の名で建立した。彼の記念日は11月28日に祝われる。

[3949] ベロエ湖、あるいはベロオゼロは、現在のノヴゴロド州に位置している。

ゼール地方へ行くよう命じられた。その詳細については、彼の伝記[3950]に詳しく記されている。 聖キリルと聖フェラポントは、互いに相談し合い、 シモノフ修道院を共に去り、ベロゼール地方へと向かった。 その地にあるすべての荒野を巡った後、彼らは現在キリロフ修道院が位置する場所[3951]にたどり着いた。ここで聖キリルはフェラポントに、かつて聖母マリアが彼に現れたことを語り、二人はその場所で自分たちの修道室を建て始めた。 しかし、聖フェラポントは聖キリルと共に長く暮らすことはなかった。まもなく彼は聖キリルの元を離れ、二つの湖の間に気に入った場所を見つけた。彼はその場所を開墾し、自分用の小部屋を建てた。その後、修道士たちが彼の元へ集まり始め、修道院を建設し、その中に聖母マリアの降誕を称える教会を建てた[3952]。 聖フェラポントは、聖キリルの修道院からわずか十二ポプリシュの距離という近所に住んでいたため、霊的な対話や修道院生活の整備のために頻繁に聖キリルを訪れ、彼から多大な恩恵を受けていた。こうして、聖人たちは神に捧げる生活を送っていた。

このような徳高い生活の結果、彼らの名声はその国の統治者たちの耳に届き、さらにはベリョエ湖の地域もその領地に含まれていた大公アンドレイ・ディミトリエヴィチ自身の耳にも届いた。聖なる修行者たちの話を聞いた大公は、自分の領地にそのような敬虔な人々が現れたことを大いに喜び、神を賛美し、修道院の建設のために自身の財庫から豊かな寄進をした。ちょうどその時、ベロゼール地方の大公の代理人は、大公の親しいボヤリンであった。 彼は至聖なる聖母マリアの修道院を訪れ、敬虔な長老フェラポントと面会し、彼と語り合い、深く敬愛するようになった。その後、モジャイスクに戻った彼は、その長老のことを公爵に報告した。公爵は極めて敬虔で神を愛する人物であったため、この話を聞いて深く感動した。

それからしばらくして、公爵は、自身の公爵邸があったモジャイスクという街に修道院を建立したいという強い願望を抱くようになった。 彼は、修道院を建立できるような人物をどこで見つけられるか、ボヤールたちに助言を求めると、ボヤールたちは至福のフェラポンテを挙げ、「この聖なる事業には、彼以上に経験豊富な人物はいない」と告げた。 そこで公爵は、高位の家臣の一人を聖なる長老のもとへ使いとして送り、手紙と贈り物を託し、この願いを断らないよう懇願した。聖人は公爵の願いを聞き、真剣に熟考した上で、それを修道院の兄弟たちに伝えた。兄弟たちは、公爵の願いを叶えるよう聖人に助言した。 尊者は修道院の兄弟たちの意思に従い、修道士の一人を伴ってアンドレイ公のもとへ赴いた。公は聖なる長老とその同行者を大いなる敬意をもって迎え、修道院を建設するための場所を探してほしいと頼んだ。 聖人は長い間これを拒み、公爵に自分の修道院へ帰らせてほしいと懇願したが、どうしても断ることができず、公爵の意向に従って出向き、モスクワ川のほとり、モジャイスクの町から一ポプリシュチャの距離にある、適した美しい場所を見つけた[3953]。その後、公爵と共に司教から祝福を受け、彼らは聖母マリアの降誕を称える教会を建立した。この教会の名称は、尊者自身の最初の修道院の教会と同じであった。また、修道院の慣習に従って、その周囲にすべての建物を建設し、それらを華やかに装飾し、修道士たちを集めた[3954]。 公爵はこの修道院

[3950] 聖キリルは、モスクワのシモノフ修道院の創設者である聖テオドールの弟子であった。テオドールがロストフ大司教の座に就いた後、1390年に彼は修道院のアルヒマンドリトに選出されたが、その職に長く留まることはなかった。 裕福な人々や貴族たちが頻繁に訪ねてくることに煩わしさを感じた彼は、かつての自分の独房に閉じこもり、沈黙を保つよう努めたが、それでもなお、彼の魂は荒野での完全な孤独と沈黙へと向かっていた。彼の記念日は6月9日である。

[3951] この場所はマウラ山の麓、シェクスナ川からほど近いところにある。修道院は1397年、シヴェルスコエ湖の北岸に設立された。

[3952] 現在「ベロゼルスキー・フェラポントフ修道院」と呼ばれるこの修道院は、1398年にボロダフスキー湖の高台にある岸辺、現在のキリロフ市から14ヴェルスタ離れた場所に建立された。

[3953] この場所は「ルジキ」と呼ばれており、そこから修道院は「ルジェツキー」と呼ばれるようになった。

[3954] それは1408年のことだった。

を、近隣にある他のどの修道院よりも深く敬った。彼はその修道院長にアルヒマンドリトの位を授けるよう働きかけ、聖フェラポントを初代修道院長に任命し、その老後を慈愛をもって支えた。

その後、尊者フェラポントは、残りの生涯を神に喜ばれるように過ごし、深き老齢に達して、若き日から愛していた主[3955] のもとへ旅立ち、この修道院に栄誉をもって埋葬された。わが神に、今、常に、そして永遠に栄光あれ。

6月10日

5月28日（旧暦）

聖殉教者エリコニダの殉教

記念日 5月28日

聖殉教者エリコニダは、ゴルディアヌス[3956] とフィリッポス[3957] の治世に生きた。彼女はテッサロニキ[3958] で生まれ、そこで育った。キリスト教徒への迫害が始まると、彼女はコリント[3959] の街へと向かった。そこで偶像に犠牲を捧げている人々を目撃すると、彼女は高い場所に立ち、大声でこう叫んだ。

「ああ、無知で冷酷なコリントの男たちよ！　あなたがたは極めて不敬虔である。なぜなら、永遠で朽ちることのない神を見捨て、魂を滅ぼす偶像の崇拝に身を向けたからだ。どうか、天の高さと地の広さを見上げなさい。　あなたがたの頭上に、皮のように天を広げられた方を考えてみてください。深淵の上に地を築かれたのは誰でしょうか。その恐ろしくも栄光に満ちた御名によって、抑えがたい海の波を鎮めることのできる方は誰でしょうか。土から人を造り、その顔に命の息を吹き込まれたのは誰でしょうか。　ただ、御手をもってすべての被造物を支えておられる方こそ、天に御臨在される唯一の真の神である。*「諸国民の神々はすべて、偶像である」*（詩篇95:5）――それらは声もなく、魂もない。それらにひれ伏す者たちも、すべてそれらに似るがよい！

聖女がこのように自由かつ力強く語っている間、不敬虔な異教徒たちは彼女を捕らえ、彼らの総督ペリニオスの元へ裁判のために引きずっていった。

総督は彼女を見つめ、その顔立ちが非常に美しく、品格があるのを見て、穏やかに彼女に語りかけ、こう言った。

「わが美しい娘よ、あらゆる恵みがあなたに降り注ぎますように。あなたは、我らの神々が永遠に存続すると信じているようだから、私はあなたを喜ばしく思う。」

聖女はこう答えた。

[3955] 聖フェラポントは、生後約90年となる1426年5月27日に、ルジェツキー修道院で18年間を過ごした後、この世を去った。　彼の崇敬は15世紀末から始まり、1547年のモスクワ公会議で聖人として列聖された。彼の聖遺骨はルジェツキー修道院の大聖堂の地下に安置されており、ベロゼルスクの修道院には彼の名に因んで捧げられた教会がある。

[3956] ゴルディアヌス皇帝は238年から244年まで在位した。

[3957] フィリップ皇帝は244年から249年まで在位した。

[3958] テッサロニキ、あるいはソロンは、古代において極めて重要なマケドニアの都市であり、エーゲ海に面したフェルメイ湾の岸辺に位置していた。　ロシア正教会の歴史において、この都市はスラブ人の聖なる最初の教師であるキリルとメフォディウスの生誕地として注目されている（5月11日の彼らの伝記を参照）。また、サロニカとも呼ばれ、（コンスタンティノープルに次いで）ヨーロッパ・トルコにおける最初の商業都市の一つに数えられる。

[3959] コリント――古代に名高い都市で、イオニア海とエーゲ海の間に位置するコリント湾の南東端にありました。現在、古代コリントの跡地には、人口5,000人の小さな町クロンテがあります。

「不信心な者たちに、いったいどのような喜びがあるというのでしょうか。イゲモンよ、あなたの喜びは嘆きへと変わり、あなたの誇りは無力へと変わるでしょう。私は万物を治める神を信じており、私の神のためにこの試練に身を投じることができたことを喜びとしています。この試練において、私は間違いなく勝利の冠を授かると確信しています。」

イゲモンは言った：

「その長々とした言葉遣いで、狂った女たちのようにならないでほしい。穏やかに、簡潔に、あなたの名前を教えてくれ。」

聖女は答えた：

「私は狂っているわけではありません。私の主であるキリスト・イエスについて知恵を授かっています。もしあなたが私の名前を知りたいというのなら、私はエリコニダと呼ばれています。」

イゲモンは言った：

「エリコニダという名は、お前の功績によって与えられたものではない。お前は、その甚だしい狂気ゆえに、自らの体を苦しみと傷にさらしているのだ。」

聖女は答えた：

「いいえ、私は正当にエリコニダと呼ばれています。なぜなら、私の神の憐れみは常に私と共にあり、私はあなたの父である悪魔に矢を放っているからです。[3960] 。」 それと同じように、あなたにも「　」ペリンニアという名が、まったく正当に与えられている。なぜなら、あなたの不敬虔で呪われた肉体は、その汚れた魂と共に、火の三叉の矛によって滅びへと引きずり込まれるからだ。

イゲモンは言った：

「手短に答えよ。神々に犠牲を捧げるのか、それとも捧げないのか？　わが神、医神アスクレピオス（[3961] ）に誓って言うが、もし王の命令に従わず、我らの神々に拝礼しなければ、お前を容赦しないぞ。」

「聞こえたか」と聖女は答えた。「私は率直に言っている。私はキリストの僕だ。あなたのアスクレピオスとは誰のことか、私には分からない。私を好きに扱ってくれ。」

すると、イゲモンは怒りに満ち、聖女を拷問し始めた。まず、彼女を裸にして地面に横たえ、殴打し、足を切りつけるよう命じた。その後、沸騰した樹脂で満たされた大釜に殉教者を投げ込むよう命じた。　しかし、突然、主の天使が現れ、大釜を冷やし、沸騰する樹脂を冷たい露に変えたため、大釜からは芳しい香りが漂った。これを見たイゲモンは叫んだ。

「おお、火を水に変えることのできるキリストよ、なんと偉大な魔術師のことか！」

聖女はイゲモンに向かってこう言った。

「キリストのしもべである一人の女性に恥をかかされた今、あなたはまだ、ディヤ[3962] 、アスクレピオスといったあなたの神々を偉大だと考えるのですか？」

この言葉を聞いて、イゲモンはさらに激しい怒りに満ち、聖女を魔女と呼び、彼女の頭から毛を皮ごと引き剥がし、ろうそくで頭と胸を焼くよう命じた。聖女は、まるで痛みを感じていないかのように、これらすべての拷問を勇敢に耐え抜いた。

その後、イゲモンは怒りを柔和さに変え、聖女に媚びを込めてこう語りかけた。

[3960] 「エリコニダ」という名は、ギリシャ語の「慈悲」と「投げる」に由来する。エリコニダとは、すなわち神の慈悲によって悪魔に矢を放つ者という意味である。

[3961] アスクレピオスは、古代ギリシャ人によって医療の神とみなされていた。

[3962] ディオス、あるいはゼウスは、古代ギリシャ宗教の最高神である。

「愛しい娘よ！　さあ、私たちの無敵の神々、とりわけヴィーナス[3963] とミネルヴァ[3964] に犠牲を捧げなさい。そうすれば、私はあなたを偉大なるディアナ[3965] の巫女とし、上院議員の妻たちと同等の地位を与える。あなたを称えて、街の中心に黄金の柱を建て、王たちに書簡であなたのことを報告し、あなたはこの街全体の母のような存在となるだろう。

聖エリコニダはこう答えた。

「私をあなたの神々の神殿へ連れて行ってください。そうすれば、私は彼らに犠牲を捧げます。」

これを聞いて、イゲモンは大きな喜びに満たされ、直ちに説教者やラッパ手に、これを街中に告げ知らせるよう命じた。そして、盛大な祝典を執り行いながら、聖女を偶像の神殿へと導いた。聖女は神殿に入ると、祭司たちにこう言った。

「私は一人きりで、自分自身と向き合いながら清らかな供物を捧げたい。だから、皆に神殿から出るよう命じてほしい。あなたたちも出て行き、ドアを閉めてください。」

祭司たちは彼女の命令に従い、彼女を神殿に一人残して、自分たちは神殿の外に立ち、歓声を上げ、ラッパやティンパニを鳴らして祝った。

その間、キリストの花嫁は神殿の中に入り、ヴィーナスの偶像を手に取って三つに砕き、同様にミネルヴァの偶像も倒し、それは地面に落ちて完全に粉々になった。その後、アスクレピオスの像を祭壇から引きずり下ろし、その手、足、そして頭を切り落とした。ディオスに対しても同じことを行った。　しかし、神殿の外にいた人々は、内部で何が起きているのか聞こえなかった。ラッパとティンパニの音がすべてを覆い隠していたためである。彼らは皆、神殿の外に立ち、その乙女が祈りと犠牲の儀式を終えるのを待っていた。

しばらくして、待ちくたびれた祭司たちは神殿に忍び込み、自分たちの神々が地面に倒されているのを見、さらに祭壇に座り、キリストを賛美している聖女の姿を目にしたとき、　自分たちの神であるキリストを賛美しているのを見て、たちまち飛び上がり、衣服を引き裂き、激しい怒りをもってその乙女を捕らえ、イゲモンのもとへ引きずっていった。イゲモンのところへ着くと、彼らはこう言った。

「この魔女を滅ぼせ！」

すると、偶像が打ち砕かれたことに激怒した民衆の間で騒ぎと叫び声が上がり、皆が声を揃えて叫んだ。

「おお、イゲモンよ！　早くこの魔女を滅ぼせ！」

イゲモンは、聖なる殉教者の乳房を切り落とし、彼女を牢獄に閉じ込めるよう命じた。それは、彼女をどのような残酷な死に追いやるかを熟考する時間を確保するためであった。そして、聖女は五日間、牢獄に留められた。

その頃、ペリンニオスの後任として、ユスティンという名の別のイゲモンがコリントに到着した。彼には、殉教者エリコニデのこと、彼女の苦難、そして彼女が偶像を打ち砕いたことが報告された。　ユスティヌスは、自らの神々を深く敬っていたため、エリコニデが偶像を打ち砕いたことに激しい怒りに満ち、炉を可能な限り激しく燃え上がらせるよう命じた。その炉は三日間燃やされ続け、その後、ユスティヌスは聖女エリコニデをその炉に投げ込むよう命じた。　しかし、聖女は、バビロンの昔の若者たちのように、炉の中で喜び躍り、主を賛美し、祝福した。なぜなら、彼女にとって火はまるで露のようで、炎はまるで涼しい風のようなものだったからである。　その後、炉から大きな炎が噴き出し、周囲に立っていた異教徒たちへと襲いかかった。その際、七十人もの男性が焼死したが、聖女はかなりの時間が経ってから、無傷のまま火の中から出てきた。

[3963] ヴィーナス、あるいはアフロディーテは、愛と美の女神である。

[3964] ミネルヴァ、あるいはアテナは、知恵の女神である。

[3965] ディアナ、あるいはアルテミス――狩猟の女神であり、森の守護神。

イゲモンは彼女に向かってこう言った。

「言え、忌まわしい女よ、どのような魔術によって、お前は火の力を打ち勝つことができたのか？」

聖女はこう答えた。

「私の主であるキリスト――あなたは彼を見たこともなく、見ることもできないが――が私のところに来て、炉の炎を鎮めてくださったのです。」

これを信じなかったイゲモンは、法廷の前に銅の床を運ばせるよう命じ、それを燃やして、自分の目の前で聖女をその上に寝かせるよう命じた。床の下から炭で火を燃やすよう命じた後、イゲモンは言った。

「さあ、キリストが彼女を救いに来るかどうか見てみよう。」

聖女がこのように拷問を受けている間、彼女から大量の血が流れ出し、それが火を消し、寝台は冷めてしまった。

そこで殉教者はベッドから降ろされ、牢獄へと連行された。そこで彼女は地面にひれ伏し、こう祈った。

「イエスよ、私たちの力、私たちの砦よ！イエスよ、私たちの栄光よ！キリストよ、私たちの希望よ！どうか私の助け手となって、私の傷を癒してください。慈愛に満ちた医師よ、御自身の慈しみによって、あなたを信頼するすべての人を救ってくださる方よ。」

彼女がこのように祈っていると、世界の救い主であるキリストが、極めて明るい光に包まれ、聖なる大将軍ミカエルと大天使ガブリエルと共に現れた。キリストは彼女のそばに歩み寄り、御手を差し伸べてこう言われた。

「立ちなさい、足を踏みしめて、力を取り戻しなさい！わたしは常にあなたと共にいる！わたしはあなたの奮闘を見守り、わたしの神聖な力によってあなたの苦しみを和らげ、あなたの傷を癒やす。」

立ち上がった殉教者は、主の御前にひれ伏し、主を礼拝してこう言った。

「イエスよ、キリストよ、わが神よ！　あなたのしもべである私を癒してください！　私の敵に打ち勝つ力を与えてください。そうすれば、私はその力を打ち破り、歌と喜びの声を上げて、あなたの神殿に入ることができますように。」

すると、主は彼女にこう言われた。

「勇気を出しなさい、わが娘よ！見よ、わたしはあなたを癒やし、わたしの永遠の御国において、不滅の冠をあなたのために用意しておこう。」

そう告げると、主は天へと去り、聖なる天使たちはエリコニダに、太陽のように輝く清らかなパンを与えた。　そのパンを口にしたエリコニダは、完全に健康になったのを感じた。彼女の顔は太陽のように輝き、体は雪のように白くなった。そして聖女は神に感謝し、夜明けまで神を賛美し続けた。

朝になると、聖女は牢獄から連れ出され、裁判の場へと連れて行かれた後、野獣の餌として差し出された。彼女には、三日間何も食べていなかった二頭の飢えたライオンが放たれた。しかし、ライオンたちは聖女に近づくと、彼女に頭を下げ、その足を舐め始めた。　これを見た民衆は叫び声を上げ、こう叫んだ。

「まことに、この女は魔女に違いない。獣たちさえも魅了し、彼女に近づくことさえできないのだから。おお、イゲモンよ！この女を滅ぼせ！一刻も早く滅ぼせ！」

民衆がそう言い争っている最中、神の力によって建物の扉が砕け散り、開いた。すると、あの獅子たちが飛び出し、激しく唸りながら民衆に猛然と襲いかかった。民衆は　逃げ惑い、イゲモン自

身も恐怖のあまりプレトリアへ[3966] 逃げ込んだ。 一方、獅子たちは逃げ惑う人々を追いかけて、民衆のうち百二十人を殺害した。そこでイゲモンは、殉教者にどう対処すべきか分からず、剣で彼女の首を刎ねるよう命じた。

聖女が斬首のために城外へ連行されると、彼女は両手を天に向け、次のように祈り始めた。

「おお、キリスト、わが神よ！ 今、私のところに来てください！ この時に、あなたのしもべの御前に現れてください！ あなたの約束を果たし、私をあなたの聖なる囲いの中へと導き入れ、私をあなたの祝福された羊の一員に加えてください。あなたに喜ばれた女性たち―― サラ、リベカ、ラケル、リア、スザンナ、そして御身の無原罪の母、至聖なる永遠の処女マリア、またラザロの姉妹であるマルタとマリア、そして御身の出会いの際に聖シメオン・神受容者と共に御身を証しした預言者アンナ； また、御前駆者ヨハネの母エリサベトや、最初の殉教者フェクレーにも私を数え加えてください。私を彼女たちの仲間に加え、永遠に彼女たちと共に安らぐことをお許しください。

聖女がこのように祈っていると、天から声が聞こえ、こう宣言しました。

「来なさい、わが娘よ！ あなたのために、すでに冠と玉座が用意されている。見よ、天使たちも、あなたが天に昇ることを祝して、荘厳な賛美歌を歌い始めた。」

その声を聞いた聖エリコニダは、大きな喜びに満たされ、喜びながら剣の下に頭を差し出した。彼女が斬り落とされたとき、傷口からは血の代わりに乳が流れ出た。それは彼女の清らかさのしるしであった[3967]。 そして、敬虔なキリスト教徒たちは、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しつつ、その尊い遺体を畏敬の念をもって葬り、その神に、今この時も、そして永遠に、栄光と誉れと礼拝が捧げられますように。アーメン。

私たちの尊い父、ハルキドン司教ニキタの記念日[3968]

記念日：5月28日

私たちの尊い父ニキタは、若き頃からキリストを愛した。世とあらゆる世俗的な執着を捨て去り、その徳高い生活をもって神に喜ばれ、ハルキドンの司教の座に就いた。そこで彼は、燭台に立つ蝋燭のように、世を照らし、キリストの教会を飾り立てた。

聖ニキタは貧しい人々に対して極めて慈悲深く、飢えた者たちに食事を与え、裸の者たちに衣服を与え、旅人を自宅に迎え入れ、安らぎを与えました。彼は孤児たちの父であり、未亡人たちの擁護者であり、すべての虐げられた者たちの救い主でした。

[3966] プレトリア――都市にある公共の場所で、通常、裁判が行われていた。

[3967] 聖殉教者エリコニダの死は244年に起こった。

[3968] ハルキドン、あるいはより正確にはカルケドンは、もともとマルマラ海沿岸にあったメガラの植民地であった。キリスト教皇帝の治世下、ハルキドンは小アジアのビフィニア地方の首都であった。– キリスト教会の歴史において、ハルキドンは451年にマルキアヌス皇帝によって召集された第4回全地公会議の開催地として注目される （在位：450年～457年）によって招集された第4回全地公会議の開催地として注目される（この異端は、コンスタンティノープルのアルヒマンドリトスであるエウティキオスによって提唱されたもので、彼はイエス・キリストにおける人間性は神性に完全に吸収されており、したがってキリストにおいては神性という単一の性質のみを認めるべきであると説いた）。

偶像破壊の異端が猛威を振るった苦難の時代[3969] 、レフ・アルメニア人の治世[3970] において、聖ニキタは、キリストの御名の勇敢な殉教者としての姿を示した。彼は不敬虔な教えとの闘いに多大な労力を注ぎ、正統ではない教義を糾弾し、すべての人々に、主キリストと御母マリア、そしてその他の聖人たちのイコンを敬虔に礼拝するよう諭したからである。　この勇敢なキリストの殉教者は、不敬虔な王とその同調者たちから多くの苦難を耐え忍びました。また、正統な信仰を守るために、追放や屈辱、その他の災難も耐え抜きました。

十分な時が経ち、多くの殉教の労苦を経て、聖ニキタは地上の生活から天の御国へと移った[3971]；神は天において御自身の天使たちの前で、また地において人々の前で彼を栄光に輝かせられました。なぜなら、彼の尊い聖遺物からは多くの奇跡が起こり、あらゆる病の癒しがもたらされ、御自身の聖人たちにあって賛美される神の栄光が現れたからです。

コンダク、第8調：

尊き者よ、あなたは御業の輝きをもって輝き、使徒の座の継承者であったニキトよ。父よ、あなたは神の教えに満ち溢れ、太陽のようにあなたの羊の群れを照らした。それゆえ、我らはあなたにこう呼びかける。「ハルキドンの慰めよ、喜びなさい。」

ロストフの主教、聖イグナティウスの記念日

記念日：5月28日

聖イグナティウスは敬虔な両親の間に生まれ、彼らによってあらゆるキリスト教の美徳をもって育てられました。　この世の虚しさを悟ると、彼は世俗を捨て、修道院に入り修道衣をまといました。彼は極めて徳高い生活を送っていたため、当初はアルヒマンドリトに任命され、その後、ロストフ市の司教に任命されました[3972] 。ロストフ教区をその管轄下に受け入れた彼は、大きな配慮をもってその羊の群れを牧しました。　聖職に就いて26年が経った後、彼は、世界の創造から6796年目の夏、すなわち神の御子キリストの受肉から1288年目の5月28日金曜日、晩課の後、主のもとへ召された[3973] 。

聖人の死を知ると、ロストフの街全体がその遺体の前に集まった。　皆、苦々しく泣きじゃくり、嘆き悲しんだ。彼らは、皆の牧者であり師であり、苦難や悲しみにおける助け手であり守護者であり、未亡人や孤児の擁護者であり、貧者や困窮者を養い、司祭や修道者の指導者であり、また公爵や貴族たちの助言者であったその方の死を悼んだのである。　聖イグナティウスの尊い遺体を担ぎ出

[3969] 偶像排斥の異端は8世紀に現れた。偶像排斥派は、偶像崇拝と偶像礼拝を無分別に混同していた。この異端の創始者は、ナコイアの司教コンスタンティノス（フリギア――小アジア地方）とされている。　イコノボリアの最も熱心な擁護者は、レウス3世・イサウリア人（717年～741年）とコンスタンティノス5世・コプロニモス（741年～776年）の両皇帝であった。この異端は、第7回全地公会議（787年にニカイアで開催された）で非難された。

[3970] レウ5世・アルメニア人は813年から820年まで在位した。

[3971] 聖ニキタの没は9世紀初頭のことである。

[3972] 聖イグナティオスは1262年9月19日に司教に叙階された。

[3973] 1269年、聖イグナティウスがシェクスナ川の河口、ベリョエ湖のほとりに、聖三位一体の名を冠した修道院を設立したという伝承がある。この修道院の修道士たちは、チュディ族やコレル族のキリスト教への改宗に多大な尽力をした。1274年、聖イグナティウスはウラジーミル地方公会議に出席した。聖人は、自身の教区のために請願を行うため、2度にわたりオルダへの過酷な旅を余儀なくされた。聖イグナティウスは、ディミトリイ公とコンスタンティン・ボリソヴィチ公の和解の仲介者として知られている。　この和解を記念して、ロストフにボリソグレブ教会が建立された。聖イグナティウスは1288年に逝去した。その尊い遺骨は、今もなおロストフのウスペンスキー大聖堂に安置されている。

した人々は、皆でそれを教会へと運んだが、教会に集まった大勢の人々のために、教会の中へ運び入れることができず、教会の前に安置した。その後、葬送の聖歌が歌われ始めた。

その時、二人の敬虔な修道女が教会の前を通りかかった。そのうちのひとりはテオドシエという名で、聖パウロの副助祭の妻であったが、合法的な結婚をした直後から、二人は貞潔で清らかな生活に身を捧げていた。　二人は生涯を通じて、断食と祈りに励んだ。多くの人々が、彼女たちの清らかな生き様を証言することができた。　祝福されたパウロが主のもとへ召されたとき、その妻は修道女としての剃髪を受けた。聖イグナティウスの死を知ると、彼女は彼の聖遺物に礼拝しに来た。彼女と共に、クセニアという名のもう一人の修道女もやって来た。彼女もまた、同様に徳高く、神に喜ばれる生活を送っていた。　この二人の修道女と、さらに神の啓示に恵まれた数人の敬虔な人々は、次のような奇跡を目撃した。聖イグナティウスの尊い遺骨が教会へと運ばれる際、神の聖人は司教の法衣を身にまとったまま棺から立ち上がり、空を歩いて教会の真上高くに浮かび上がった。　その後、民衆全体と街全体を祝福し、続いて祭壇の近くの地中に掘られた洞窟に入り、そこには彼のために棺が用意されていた。

神は、御自身の御愛する者を称え、その聖性をすべての人々に示すために、この出来事を修道女たちや、その他数人の敬虔な人々に明らかにされた。これにより、主は人々に、聖イグナティウスが主からの恵みに値し、聖人たちと同等の地位にふさわしい者であることを示されたのである。

ほぼ同じ頃、もう一つの奇跡も起こった。あるステファンという大修道院長は、生まれた日から一つの指が手のひら側に曲がっていたが、聖イグナティウスの尊い遺体に触れた途端、その曲がっていた指はまっすぐに伸び、他の指と同じように健全になった。

その後、聖イグナティウスの尊い遺体は教会へと運ばれた。翌朝、人々は再び神の御心にかなう者の聖遺物の前に集まり、定例の礼拝を行い、葬送の賛美歌を歌った。　神の聖人の遺体を棺に納め、聖イグナティウスが司祭および助祭の聖職に叙階した者全員の名前が記された巻物をその手に渡すと、神の御心に適う聖人は、まるで生きているかのように手を伸ばして、その巻物を受け取った。この奇跡を目撃した者たちは皆、深い畏敬と喜びに満たされ、神を賛美した。この神の御心に適う者、聖イグナティウスの祈りによって、私たちも彼と共に、私たちの主キリスト・イエスによって備えられた永遠の恵みにあずかる者となることができますように。主には永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

信仰の光に照らされ、聖職の教えを受け、羊の群れを導き、使徒の継承者となった聖イグナティオよ、あなたは神から奇跡の賜物を受けられました。キリスト・神に祈り、私たちの魂を救ってくださいますように。

コンダク、第4調：

今日、聖なる父イグナティオよ、この世に明るく輝き、すべての人に神の光を示される、あなたの最も輝かしい記念の日が訪れました。

聖殉教者エラディオスの記念日

記念日：5月28日

聖エラディオは、様々な拷問を受けた後、火の中に投げ込まれながらも無傷で残り、殴打の末に息を引き取りました。礼拝の文には、牢獄でキリストが彼を訪れ、傷を癒やし、束縛が彼から解けたと記されています。彼は、ペルシャ人がローマ帝国の東部属州に侵攻した際に、ペルシャ人によって殉教したとされています。

6月11日

5月29日（旧暦）

聖殉教者テオドシアの記念日

5月29日の記念日

[3974]ティルスの聖テオドシアについて[3975] パレスチナ・ケサリアの司教エウセビオス[3976] ——この事件の目撃者である——は、次のように伝えている。 「わが国において、不敬虔な偶像崇拝者たちによるキリスト教徒への迫害がすでに5年間続いていた頃、4月の17日、すなわちキリストの復活祭の当日、わが町の敬虔で神を畏れる一人の乙女が、 ——エウセビオスはこう語る——ティルス出身で、まだ18歳にも満たないその少女は、プレトリアに囚われていたキリスト教徒たちの元へ近づいた。その時、キリスト教徒たちは大胆にも互いに神の御国について語り合っていた。 彼女に近づいたテオドシアは、彼らが苦難の業を終えて神の御前に立つ時、主の御前で自分を覚えていてほしいと頼み始めた。 しかし、兵士たちは、キリスト教徒の囚人たちに頭を下げる少女の姿を見て、彼女を捕らえ、あたかも何か悪事を働いたかのように、尋問のためにイゲモン・ウルヴァンの元へ引きずっていった。 イゲモンは激しい怒りと憤りに満ち、彼女に凄惨な拷問を加えるよう命じた。彼女の肋骨と乳首は鉄の爪で引き裂かれ、肉は骨まで剥がれ落ちた。その後、イゲモンは、まだ生きており、喜びに満ちた顔で拷問に耐えていたこのキリストの殉教者を、海に沈めるよう命じた」。

このように語るのは、そのすべてをこの目で目撃したエウセビオスである。

さらに、このキリストの聖なる殉教者テオドシアは、海に沈められた後、天使たちによって水から陸へと、完全に生き返った状態で引き上げられたと付け加えられている。そして聖女は、首に縛り付けられた石を両手で抱えながら歩いた。その後、聖女は再び異教徒たちに捕らえられ、裁判の場へと連行された。 聖テオドシアは野獣に食われる刑に処されたが、彼女は野獣から全く無傷で済ん

[3974] パレスチナのケサリアは、地中海の東岸に位置していた。古代、ケサリアはローマの総督の居城であり、この国の社会・政治生活の中心地であった。– キリスト教会の歴史において、パレスチナのケサリアは、使徒ペトロが百人隊長コルニリウスを洗礼したことで（使徒行伝10章）、異邦人に初めてキリストの教会への門戸が開かれた場所として注目される。 また、この地では使徒パウロに対する最後の裁判が行われ、その後彼はローマへ送られた（使徒行伝26章、27章）。– パレスチナには、本物のケサリアとは区別して「フィリッポのケサリア」と呼ばれる別のケサリアも存在した。それはヨルダン川の源流付近に位置していた。

[3975] 聖殉教者フェオドシヤの出身地はティルという都市であった。ティルは、死海の北東岸、ガラアド山脈の南西斜面に位置している。

[3976] エウセビオス、ケサリアの司教（268年から340年まで生きた）は、教会史の礎を築いた著名な教会史家であり、その博学さで知られていた。彼による著作には以下のものがある：1) 『教会史』、使徒の時代から324年までを網羅している； 全10巻から成る；2) 『コンスタンティヌスの生涯』；全4巻からなり、『教会史』の直接の続編である；3) 『クロノグラフィア』。このほか、エウセビウスには、弁証的、論争的、および聖書解釈的な性格を持つ多くの小著がある。

だ。ついに拷問官は、彼女を剣で斬首するよう命じた。斬首の際、聖人の口から、金のように輝き、天へと舞い上がる一羽の鳩が見られた[3977]。

夜が更けると、聖なる殉教者は他の多くの聖なる乙女たちと共に両親の前に現れた。聖女は雪よりも白い衣をまとい、手には金の十字架を、頭には花冠を戴いていた。その時、聖女は両親にこう言った。

「ご覧なさい、私のキリストの栄光と恵みがどれほど偉大であるかを！　ご覧なさい、あなたがたが私から奪おうとしたその栄光が、どれほど偉大であるかを。」

聖女がこのように語ったのは、両親が彼女の中にキリストのために苦難を受けるという願いを見抜き、あらゆる手段でそれを妨げようとしたからである。しかし、彼女は両親に内緒でキリストの囚人たちの元へ急ぎ、前述の通り、拷問を受け、その模範となられた主イエス・キリスト、私たちの神から栄冠を授けられたのである。

聖女テオドシアの殉教

記念日：5月29日

キリストの聖なる花嫁テオドシアは、コンスタンティノープルで、裕福で、誠実で、敬虔かつ徳の高い両親の間に生まれた。 当初、両親は長年にわたり子宝に恵まれなかった。 このことを深く嘆き、彼らは祈りを捧げ、多くの断食を行い、昼夜を問わず神の聖堂に駆けつけ、貧しい人々に惜しみなく施しをした。

ある日、聖殉教者アナスタシアに捧げられた教会で徹夜祈祷に参加していたとき、聖テオドシオスの母は、これまで以上に熱心に不妊が解消されるよう祈っていました。彼女が少しうたた寝をしたとき、聖殉教者アナスタシアが現れてこう言いました。

「悲しむな、女よ。あなたは身ごもり、子を産むだろう。」

目を覚ますと、彼女は大きな喜びに満たされ、その幻視のことを夫に話した。すると夫は彼女にこう言った。

「主は生きておられる！もし主が私たちの不妊を癒やしてくださり、息子であれ娘であれ子を授けてくださるなら、その子を私たちの主、キリスト・神への捧げ物としよう。」

しばらくして、妻は実際に身ごもり、この聖なる少女を産んだ。彼女をテオドシエ、すなわち「神から与えられた者」と名付けた。彼女は神から授けられたからである。その後、その赤ん坊は聖なる洗礼を受けた。

生後四十日が過ぎると、母は娘を抱き上げ、聖アナスタシアの教会へと連れて行き、　喜びの涙を流しながら神と聖なる殉教者に感謝を捧げ、娘を修道生活に捧げ、彼女がキリストの処女たちや花嫁たちの列に加えられるようにと誓った（なお、その教会のそばには、神への奉仕に身を捧げた少女たちのための修道院があった）。

神の祝福を受けた母は自宅に戻り、神に誓ったその子を細心の注意を払って育て始め、テオドシアに聖書の読み方や神への畏敬の念を教え、彼女の心に神への愛の炎を灯していった。

テオドシヤが生まれてから7年が経った頃、彼女の父が亡くなった。そこで母は少女を連れて聖アナスタシア修道院へ行き、彼女を聖なる天使の位に叙階するために預けた。

3年後、フェオドシヤの母も亡くなり、その全財産を修道女となった娘に遺した。 しかし、フェオドシアは成人し、知恵と神への愛に満ちあふれていたため、母から受け継いだ財産を受け取るこ

[3977] 聖殉教者の逝去は、307年または308年の4月6日であった。5月29日は、彼女の聖遺骨が移された日である。聖殉教者の聖遺骨は、当初コンスタンティノープルへ、その後ヴェネツィアへと移された。

とを望まず、それを神に捧げ、自らをも神への捧げ物とした。　彼女は金細工師を呼び寄せ、救い主キリスト、至聖なる聖母マリア、そして聖殉教者アナスタシアの三つのイコンを制作するのに十分な量の金と銀を与えた。これらのイコンの大きさは三肘であった[3978]。福者テオドシアはそれらを教会に安置し、残りの全財産を貧者、困窮者、孤児、未亡人に施し、自身は修道者の貧しさの中で昼夜を問わず主に仕え続け、神から霊的な富を授かった。目に見えない敵に対して祈りの鎧を身にまとい、彼女は、霊に敵対する肉体を断食の行いによって打ち砕き、無形の敵に打ち勝ち、地獄の蛇の頭を踏みつけ、高慢なヴェリアール[3979]を、謙遜、柔和、神に喜ばれる愛、清さ、敬虔、従順、そしてその他の修道的な美徳をもって打ち倒した。

ある夜、聖女が祈りを捧げていると、悪魔が近づいてきてこう言った。

「お前は私に敵対するつもりか。それなら、私もお前に対して敵対する。お前だけでなく、すべてのキリスト教徒に対してもだ。なぜなら、私はある人物を見つけたからだ。その者を通じて、私は教会に対して戦いを挑むことができる。私は多くの人々をキリストのイコンへの礼拝から遠ざけるだろう。多くの人々が私の後をついてきて、私の意志を実行するようになるだろう。」

聖テオドシアは、十字の印を切ってこう言った。

「呪われよ、悪魔よ、キリスト教徒の敵よ！　私の神、キリストの力によって、お前のすべての策略が打ち砕かれ、滅び去らんことを！」

すると、悪魔は姿を消した。聖テオドシアは、尊い十字架の印を自らに描くと、ダビデの詩篇を詠み始めた。*「神よ、立ち上がってください。その敵は散り散りになり、神を憎む者たちは神の御前から逃げ去りますように」*（詩篇67:2）。

この恐ろしい幻と、悪魔のあらゆる高慢な言葉について、聖テオドシアは自分の修道院長に伝え、彼女に尋ねた。

「敵がもたらすと約束しているあの災いは、一体どこからキリスト教徒に降りかかるのでしょうか？」

修道院長は彼女にこう答えました：

「わが娘よ！使徒はこう証言している。*『また、キリスト・イエスにあって敬虔に生きたいと願う者は皆、迫害を受けるであろう』*（IIテモテ3:12）。　なぜなら、キリストの群れは常に、不義に知恵を働かせ、すべての人を惑わし、自らも惑わされている悪意ある者たちによって混乱させられてきたからです。これらの悪意ある者たちこそが、悪魔の道具なのです。同様に、現在においても、悪魔によって神の教会に混乱と迫害がもたらされるでしょう。　*「あなたは、教えられたこと、またあなたに託されたことに留まりなさい。誰があなたに教えたのかを知っているのだから。また、あなたは幼い頃から聖書を知っており、それによって、キリスト・イエスへの信仰による救いへの知恵を得ることができるのです」*（IIテモテ3:13–15）。

しばらくして、正統派のテオドシウス王（アドラミティヌスと呼ばれていた[3980]）に対して、その属州総督であるレウ（コノンとも呼ばれ、イサウリア人であった[3981]）が反乱を起こした。テオドシウスから王権を奪ったレウは、自ら王位に就いた[3982]。

[3978] 「ロコート」は8〜10ヴェルシュカに相当した。

[3979] ヴェリアル、あるいはより正確にはヴェリアルは、ヘブライ語からの訳で「不適格な者、不敬虔な者、邪悪な者」を意味する。使徒パウロはこの名称を、あらゆる悪の源である悪魔に当てはめている（IIコリント6:15）。

[3980] テオドシウス3世・アドラミティヌスは715年から716年まで在位した。

[3981] イサウリアは、東はリカオニア、北はフリギア、西はピシディア、南はキリキアと国境を接する小アジアの地域である。

[3982] レウ3世・イサウルは、716年から741年まで在位した。

即位当初、彼は敬虔な人物であるかのように振る舞っていたが、ほどなくして、教会の聖所を冒涜し、至高の神キリストとその尊いイコンを崇拝しない、新たなバルタサールへと変貌した[3983]。そして彼は、魂を蝕むマニ教の異端という毒蛇の毒を教会に吹き込んだ。 さらに、この獣のような男は、まるで獅子の声のように咆哮し、聖なるイコンに対して冒涜的な異端の言葉を吐き、それらを偶像と呼び、それらを崇拝する者たちを偶像崇拝者と呼んだ。この不敬虔な王は、自らの王国全土においてイコン崇拝を根絶するよう命じる勅令を発した。

当時、コンスタンティノープルの主教座には聖ヘルマンが就いていた。彼は他の正教会の司教たちと共に、皇帝に強く反対し、イコンの崇拝を放棄するよう命じたその異端的な命令を受け入れなかった。ヘルマンはこの冒涜者に対し、次のように語った。

「主であり、私たちの救い主が、至聖なる聖母マリアの尊い血統から受肉され、私たちの救いに関する神のすべての御計画を果たされた後、偶像へのあらゆる礼拝は廃され、すべての偶像の像は火に投げ込まれたのです。 使徒たちが宣教に励み、キリストの救いの教えを世界に宣べ伝えてから、すでに七百年以上が経過した。 この七百年の間、数多くの義人であり敬虔な教父たちがいましたが、その誰一人として聖なるイコンを冒涜した者はおらず、ましてや、あなたがたが教会にもたらしているような、古来より聖なるものに当然捧げられてきた聖なるイコンへの崇敬を拒絶するという不敬な思惑について、その誰一人として耳にした者はいません。 なぜなら、聖なる教会は、救い主ご自身がエデッサの王子アヴガルに布の上に送られた、人の手によらずして現れた御像に始まり、太古の昔から尊いイコンを崇敬する慣習を受け入れてきたからである。 その後、キリストの衣の端に触れて癒やされた出血の病を患っていた女性が、主が天に昇られた後、石でイエス・キリストの像を彫りました。さらに、聖福音記者ルカは、聖母マリアのイコンを描きました。 この時から、聖なるイコンを描き、それをもって神の教会やキリスト教徒の家を飾るという敬虔な慣習が始まった。かくして、我々に先立つ六つの全地公会議[3984]も、この慣習を非難することはなく、むしろ、聖人の像を崇拝し、それを拒絶してはならないと命じたのである。 王よ、知っておいてほしい。私は聖なるイコンのために、いかなる苦難にも耐えるだけでなく、死さえも受け入れる覚悟がある。なぜなら、キリストのイコンは、無原罪の聖母マリアから受肉し、地上で人々と共に生きた、まさにそのキリスト御自身の御名を冠しているからである。 敬虔なキリスト教徒は皆、キリストの御名のためだけでなく、その尊いイコンのためにも死ぬ覚悟を持たねばなりません。なぜなら、イコンを冒涜する者は、そのイコンに描かれた御方そのものを冒涜することになるからです」。

これを聞いた皇帝は怒りと激怒に満ち溢れ、獅子のように唸り声を上げ、極めて残酷に暴れ回り、信者たちを迫害し、自分に反対する者すべてを様々な方法で処刑した。 まず第一に、彼は兵士たちを武器を携えて派遣し、聖ゲルマンを 、侮辱と殴打を加えて総主教座から追放するよう命じた。ゲルマンの代わりに、レウスは偽総主教アナスタシウス[3985] ——異端者であり、自身の同志——を据えた。その後、レウスはすべての神聖な書物と、神に導かれた賢明な教師たちの著作を焼き払うよう命じた。 なお、聖ソフィア大聖堂には約30万冊の蔵書を有する図書館があり、この図書館には12の学校と同数の賢明な教師たちがいた。そして、これらの教師たちの長として、皇帝と総主教からその栄誉を授かった賢明なギムナジアルクがいた。 これらの教師たちは皆、不敬虔な皇帝の神を冒涜する命令に反対した。そのため、無法な迫害者は、自らの兵士たちと共にその図書館と、教師や生徒たちを含むすべての学校を取り囲み、四方から火を放って焼き払った。その結果、そこにいた者は誰も火から逃れることができず、一冊の書物も火から免れることはなかった。

[3983] バルタサール——ネブカドネツァルの子孫の一人で、バビロンの王——は、不敬虔で放蕩な人物として知られている（ダニエル書5:1–4、22–23参照）。彼は、ネブカドネツァルがエルサレムから奪い取ったユダヤ人の聖なる器を冒涜した（ダニエル書5:3）。

[3984] この時点では、第7回全地公会議はまだ招集されていなかった。

[3985] アナスタシオスは730年から753年まで総主教を務めた。

この時、コンスタンティノープル全市は深い悲しみと嘆きに包まれた。人々は皆、泣き、嘆き、 ある者は、至聖なるゲルマン総主教の不当な追放を嘆き、ある者は、これほど多くの書物が焼かれ、賢明な教師たちが命を落としたことを嘆き、またある者は、イコンに加えられた甚大な冒涜を嘆いた。というのも、至る所でイコンが打ち砕かれ、沼地に投げ捨てられ、火刑台で焼かれていたからである。

一方、新たに任命された異端の総主教アナスタシウスは、聖なる場所に「荒廃の憎むべきもの」（マタイ24:15）として立っていたが、皇帝の意に大いにかなっていた。というのも、彼は皇帝の聖像破壊という異端の行いをあらゆる面で助長していたからである。 この偽の総主教は、まもなく大聖堂から尊いイコンを追い出し、他のすべての教会でも同様に扱うよう命じた。

コンスタンティノープルには「銅の門」と呼ばれる門があった。それは偉大なるコンスタンティヌスの時代に建てられたもので、皇帝の宮殿へと通じていた。 この門の上には、400年、いやそれ以上の間、ここに掲げられていた救世主の銅像があった。あの不敬な総主教は、この尊い像を取り外して焼き払うことを企て、そのために斧を持った兵士たちをこの不敬な行いに送り込んだ。 兵士たちの指揮官であるスパファリオスという地位の者が、門に梯子をかけ、斧を手にそれを登り始め、すでに神に背く行いに着手しようとしていたその時――たまたまそこを通りかかった敬虔な女性たちが彼を目撃した。また、修道女たちも彼を見かけ、その中には聖テオドシアもいた。 キリストのイコンに対する熱意に燃え、とりわけ聖なるイコンを誰よりも熱心に守り、神聖な勇気と大胆さに満ちあふれていたこの至福のテオドシアに促されて、修道女たちははしごへと駆け寄り、それを地面に倒した。 同時に、彼女たちはその兵士をも突き落とし、彼は高所から転落してひどく打ち砕かれた。 彼女たちは彼を地面に引きずり回し、息絶えるまで殴り続けた。その後、急いでアナスタシオス総主教のもとへ駆けつけ、彼の不敬を糾弾し始めた。彼女たちは彼を、狼、略奪者、異端者、そしてキリストの教会の敵であると非難し、やがて彼に石を投げつけた。 一方、アナスタシオスは恥に打ちひしがれ、まるで民衆による反乱が自分に対して巻き起こるのではないかと恐れて、急いで皇帝のもとへ駆けつけ、あの女たちから受けた不名誉について報告するとともに、銅の門でスパファリオスが殺害されたことも報告した。 王は怒りと激怒に満ち、直ちに剣を抜き放った兵士たちを遣わし、総主教への冒涜とスパファリオスの死に対する復讐を命じた。こうして、敬虔さゆえに示した熱意ゆえに、それらの聖なる女性たちは斬り殺された。 一方、至福の修道女テオドシアについては、その出自がより高貴であり、より大胆に敬虔さを公言していたこと、そして一連の出来事の首謀者であると見なされたことから、王は彼女を捕らえて牢獄に閉じ込め、毎日百回の鞭打ちを科すよう命じた。こうして、聖女は七日間にわたり拷問を受けた。

8日目、拷問官は聖女を街中を引き回させ、容赦なく殴打するよう命じた。 聖女が「ヴォロヴィイ・トルグ」（ここでは家畜が売買され、屠殺されていた）と呼ばれる場所へ連れて行かれたとき[3986] 、聖女に付き添っていたある兵士が、うっかり大きな山羊の角を踏んでしまい、それで足を傷つけてしまった。 怒りに駆られた彼は、その角を取り上げ、聖なる殉教者の頭を容赦なく打ちつけ始め、続いてその角で聖女の喉を突き刺した。 すると直ちに、聖なる殉教者であり処女であるテオドシア、すなわちキリストの聖なる花嫁は、その清らかな魂を不死の花婿の御手に委ね、処女性と殉教という二重の冠を戴いて、キリストの天の御殿へと旅立った[3987] 。 一方、地上に投げ捨てられた彼女の苦難に満ちた遺体は、キリスト教徒たちによって の畏敬の念をもって回収され、特別な場所に埋葬された。聖テオドシアの尊い聖遺物からは、病める者たちへの癒しがもたらされ、それは、父と聖

[3986] ある説によれば、この場所は「牛の場所」と呼ばれていたのは、ここに犯罪者を焼くための牛の形をした炉があったからである。

[3987] 聖殉教者テオドシアの死は730年に訪れた。

霊と共に、今この時も、そして永遠に賛美される、私たちの神キリストの栄光のためであった。アーメン[3988]。

トロパリオ、第4調:

殉教者よ、あなたは美徳を恵み深く体現し、キリストの清き友となり、聖霊の愛される住まいとなりました。それゆえ、人類と戦う敵を恥じ入らせ、立派に苦難に耐え、信仰の剣をもってコプロニモス・テオドシオスを打ち倒し、喜びのうちに天の宮殿へと移り住まれました。　あなたを信仰をもって崇める者たちのために、常に大いなる憐れみをお与えください。

コンダク、第2調:

労苦なくして安らかな生涯を全うし、また、キリストの教会に対する邪悪な敵であるコプロニモスの血をもって、殉教者よ、彼を打ち倒した、至福のテオドシエよ。今や、あなたを称え、その記憶を包み込む天の軍勢と共に喜び祝っている。

聖なる狂人ヨハネ、ウスチュジの奇跡行者の記念日。

記念日：5月29日

至福のヨハネは、敬虔な両親――父の名はサヴァ、母の名はナタリア――のもと、偉大なる都市ウスチュグ[3989]の近郊、プホヴォという名の村で生まれた。その村は、古代都市ウスチュグがあった場所の向こう側、スホノイ川と呼ばれる川の対岸に位置していた。　幼い頃から、彼は並外れた禁欲の精神を示していた。水曜日と金曜日には何も食べず、その他の日はパンと水だけで済ませ、夜は常に眠らずに祈りに明け暮れ、いつも悲しげで哀れな表情を浮かべていたため、彼を見た人々は、彼が正気ではないと思ったほどであった。　このように、この至福の少年は常にそのように振る舞っていたため、母親は何度も彼に、そのような生活様式を変えるよう説得し、こう言った。

「わが子よ、食事を摂らないことで体を衰弱させてはならない。そのような過酷な禁欲は、あなたを病気にさせるかもしれない。」

「母よ、私にそれを強要しないでください」と少年は答えた。「節制こそが、私を罪から救ってくれるのです。」

「一体どんな罪があるというの、わが子よ」と母は尋ねた。「まだこんなに幼いのに？　あなたの中には神の恵みしかなく、私たちにはあなたの罪など何一つ見当たらないわ。」

それに対し、少年は母にこう答えた。

[3988] 13世紀に生きた大ロゴフェト（総主教の印章保管官）コンスタンティンによって記録された、聖殉教者の聖遺物による奇跡に関する記述が現在も残されている。　フリギア出身のある青年は、両足を動かすことができなくなっていたが、聖殉教者の棺の前に連れて行かれた後、完全に癒やされた。また、馬から落ちて正気を失った別の青年は、聖テオドシーの棺の前に連れて行かれ、そこでランプの油を塗られた後、瞬時に癒やされた。　ロゴフェトのコンスタンティン自身も、最高の医師たちでも治せなかった足の病にひどく苦しんでいたが、聖殉教者に助けを求めたところ、完全に癒やされたと語っている。ロゴフェトのコンスタンティンは、その記述の中で、聖テオドシヤによって行われた奇跡は数え切れないほど多いと述べている。　聖殉教者の尊い遺骸は、コンスタンティノープルの金角湾からほど近い、ディオクラティスまたはデクシオクラティス（修道院の教会を建設したパトリキウスの名）修道院に安置された。

[3989] ヴェリキー・ウスチュグは、現在ヴォロゴダ州の郡庁所在地であり、スホナ川の左岸、ユガ川が合流する地点に位置している。

「母よ！　そのような言葉を言うのはやめてください。聖書の言葉を聞いてください。『人はだれも、自分が罪がないと誇るべきではありません。罪のない方は、ただ神お一人だけです』（ローマ3:10, 23；Iヨハネ1:8, 9）。　さらに、食べ物や飲み物は、私たちを神に近づけるものではない（Iコリント8:8）。それゆえ、私たちの体が敵とならないよう、それを養うのはやめましょう。

聖ヨハネは、このような言葉で母親を説得した。彼自身は文盲であったが、預言者が言ったように、「*主なる神の御力を思い巡らし、あなたの御義、ただあなたの御義のみを思い起こす*」（詩編70:15–16）という、聖霊の恵みによって教えられていたのである。

その後、プホヴァ村に住んでいた聖人の父は、同じくウスチュグ近郊にあるユグ川沿いのオルレツという町[3990]に移り住み、そこで息を引き取った。そこで、母は当地にあった「命の源なる三位一体」修道院へ赴き、修道服を着用して修道者となり、まもなく同修道院の修道院長に選出された。彼女は常に息子を傍らに置いていたが、この世の虚しさを悟ったその祝福された少年は、聖なる狂人のふりをするようになった[3991]。母は彼のそのような振る舞いを見て、彼を神の御心に委ねた。

その後、聖ヨハネは修道院を去り、ウスチュグの町に来て、至聖なる聖母マリアの聖堂、すなわち彼女の尊い眠りの聖堂の近くにある教会管理人の小屋に住み着いた。　夜通し目を覚まして、主への絶え間ない祈りを捧げ、昼間は人々に狂人であるかのように見せかけ、その偽装がばれないよう街中を走り回った。彼は通常、牛糞の上で休み、完全に裸で歩き回っていたが、腰には破れたぼろ服を一枚だけ巻いていた。　しかし、たまたまシャツを着ることもあったが、それも常にぼろぼろで、決して洗うことはなかった。尊者は、軽薄な人々からの侮辱、嘲笑、暴行に多く耐え、絶えず飢えと渇きに苦しんでいたが、誰からも何も受け取らなかった。　ある時、冬の寒さのため、彼は激しく燃え盛る炉の中に入り、燃える炭の上をまるで寝床のようにして横になったが、それによって何の害も受けなかった。このほか、彼は「赤い」[3992]と呼ばれるテオドールという名の公爵の妻、マリアという名の公爵夫人の熱病を治した。

このように生涯を送った後、至福のヨハネは、主のもとへ旅立つ時が来たことを悟ると、全世界のために祈りを捧げ、十字を切って身を守り、地面に横たわって、その聖なる魂を神の御手に委ねた。これは1494年、5月29日のことである。　この聖人は大聖堂の近くに埋葬され、信仰をもって彼に祈りを捧げる者たちに奇跡を起こしている[3993]。

トロパリオ、第5声：

肉体の裸身と忍耐をもって、あなたは敵の狡猾さを暴き、その不道徳な行いを糾弾し、灼熱の太陽の下で激しく苦しみ、極度の寒さ、霜、そして炎をも感じることなく、神の助けに守られておられた、賢明なるヨハネよ。　信仰をもってあなたの記念を尊び、あなたの聖遺物の聖櫃に熱心に駆け寄る者たちのために、災いから救われ、堕落を免れるよう、祈り給え。

[3990] オルレツの町は、ウスティウグから40ヴェルスタ離れた、スホナ川の支流であるユガ川沿いにあった。

[3991] 「ユロディヴィ」とは、本来「愚かな」「狂った」という意味である。これは、謙遜の心から、また自らの永遠の救いのために、愚か者や変わり者であるかのように振る舞ったキリスト教の修行者たちを指す呼称である。

[3992] その人物は、ウスティウグの代官であったフェオドール・クラスヌイ公であった。

[3993] ウスティウグの住民たちは、王位空位の間の災難の際に、至福のヨハネに祈りを捧げ、1610年にはサペガに対する王軍による勝利を彼に託した。また、1613年には、ウスティウグの奇跡行者たち（プロコピウスとヨハネ）の祈りによって、自分たちの街をポーランド軍から守っただけでなく、彼らを打ち破ったのである。　ウスチュグには、至福のヨハネに捧げられた教会が建てられている。

コンダク、第8調:

高き美を求め、この世の甘美な肉体の糧を慎重に捨て去り、虚しい世の富を求めず、天使のような生き方を愛し、この世を去った、至福のヨハネよ。彼らと共に、私たちすべてのために、絶えずキリスト・神に祈り求めてください。

6月12日

5月30日（旧暦）

尊き父イサアク・殉教者の生涯

記念日5月30日

偉大なるコンスタンティヌスの治世下、私たちの主イエス・キリストの尊き命を与える十字架が発見された直後、5月21日に記されるその生涯において、キリスト教徒、とりわけ私たちの救い主であるキリスト御自身を憎み、聖なる信仰に敵対する者は、その狡猾さによって神の教会に混乱をもたらしました。すなわち、 彼は、不敬虔で不法な皇帝ヴァレント[3994] に、アリウス派の異端[3995] を擁護し、その普及を助長するよう唆した。　この不敬虔な皇帝は、正統なキリスト教徒に対する迫害を開始し、聖なる教会を閉鎖して、そこで慣例的な神への捧げ物が執り行われないように命じ、他の教会は馬小屋に変え、またあるものは基礎まで破壊した。　この迫害は長い間続いた。その間、キリスト教徒の間には大きな嘆きと深い悲しみが広がり、彼らは昼夜を問わず主に向かって祈り、御自身の聖なる教会に憐れみを示し、不義な王に対して正しい裁きと報復を下してくださるよう懇願した。当時の状況は、使徒たちの時代、ヘロデ王が*「教会に属する者たちの一部に手を下して、彼らに害を加えようとした」*（使徒行伝12:1）時と似ていた。

しばらくして、神は教会を守るために、御自分のしもべである修道士イサアクを立てられました。これは、かつて神が、罪なきスザンナを守るために預言者ダニエルを立てられたのと同様でした[3996] 。 この祝福されたイサアクは、当初、東方の荒野で、預言者エリヤに倣い、天使のような生活を送っていた。アリウス派が神の教会に対して迫害を仕掛けていること、また王までもが異端の蔓延に加担していることを知ると、彼は深く悲しんだ。　荒野を後にし、信者たちの信仰を堅く支えるためにコンスタンティノープルへと向かった。その言葉は燃えるろうそくのようであり、神の御霊が彼の上に宿り、天の恵みが彼を照らしていた。　不信心な皇帝とその同調者たちによって信者たちが被っている大きな苦難をこの目で目の当たりにし、彼は神に祈り、御座の高みから不当に迫害されている者たちを見守り、彼らに御慈悲を示し、迫害者たちの高慢を砕いてくださるよう願った。

かつて、苦難に遭っていた民のために祈った御自分の愛する僕モーセの声を聞き　（サムエル記上28:17–22）、そのしもべイサアキアの祈りも聞き入れ、不義な王ヴァレントに対して蛮族を送り込んだ。すなわち、当時ドナウ川沿いに住んでいた蛮族たちは、全軍を動員してギリシャ人との戦いを開始した。　彼らはすでにトラキアを制圧し、コンスタンティノープルに迫っていた。敵と戦いを交えるためには、ヴァレント王も兵士を集める必要があった。しかし、ここで王に起こったのは、かつてダビデの敵であったイスラエルの王サウルに起こったことそのものであった。　すなわち、サウ

[3994] ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[3995] アリウス派の異端については、第1回全地公会議に関する以下の補足記事を参照のこと

[3996] スザンナの物語はダニエル書第13章に記されている

ルは神を怒らせたため、聖サムエルの預言通り、戦場から生還することはなかったのである（列王記下22:1–53）。

ヴァレントが自らの軍勢を率いてコンスタンティノープルを出ようとしていたとき、聖イサアクが彼の前に立ちはだかり、大声でこう叫んだ。

「王よ！正信者たちのために教会を開いてください。そうすれば、主はあなたの旅路を祝福してくださるでしょう。」

しかし、王は彼に答えず、彼を素朴な者であり狂人であるかのように軽蔑し、その言葉を重要視することなく、自らの道を進み続けた。

翌朝、聖なる長老は王に近づき、再びこう言った。

「王よ、正信者たちのために教会を開いてください。そうすれば、この戦争はあなたにとって幸いな結末を迎えるでしょう。あなたは敵に打ち勝ち、無事で健やかなまま、平穏に故郷へ帰ることができるでしょう。」

王は、「無事に、健やかな体で故郷へ帰れる」というその言葉に耳を傾け、教会の扉を開き、正信者たちに教会を明け渡そうと考え、すでに貴族たちとこの件について相談し始めていた。　しかし、アリウス派の邪説に固執していたある軍司令官が、王にその修道士の話に耳を貸さず、恥辱を与えて追い払うよう助言した。王は老僧を罵倒し、恥辱を与え、殴打して追い払うと、旅を続けた。

そして三日目に、その祝福された老僧は再び王のもとへ近づいた。イサアクは、王が乗っていた馬の手綱を掴むと、神殿を開くよう王にさらに熱心に懇願し、諭し始めた。そうしなければ、神の裁きが下ると警告したのである。

その場所には深い谷があり、その底には茨が生い茂り、沼地が広がっていた。この沼地に動物が落ちると、そこから抜け出すことはできず、沼地に吸い込まれて死んでしまうのだった。王はイサアクをこの沼地に投げ込み、そこで死なせるよう命じ、その後、旅を続けた。

しかし、聖イサアクは、この沼に投げ込まれても、神の御手によって守られ、そこで何の害も受けなかった。茨に傷つけられることもなく、沼に飲み込まれることもなかった。　彼は茨の中に横たわりながら、まるで花に囲まれた柔らかい寝床の上にいるかのように、神を賛美し感謝し続けていた。やがて、三人の輝く姿の男たちが現れ、彼を健やかで無傷のまま沼地から引き上げ、乾いた場所に立たせた。そして、彼ら自身は姿を消した。

その時、聖イサアクは、主ご自身が御自身の天使たちを遣わして、あの深淵から彼を救い出されたのだと悟った。彼はひざまずき、御自身のしもべたちを顧み、主を畏れ、主に信頼する者たちを見捨てなかったことに対し、救い主に感謝を捧げた。

十分な時間祈りを捧げ、聖霊によって力を得たイサアクは立ち上がり、急いで迂回して王を追い抜き、王の行く手を塞いだ。聖人を見て、王はひどく恐れおののき、恐怖と驚きから言葉を失った。聖人は大胆に彼にこう言った。

「お前は私を茨と沼地で滅ぼそうとしたが、主は私を生かし、御自身の天使たちを遣わして、あの深淵から私を救い出された。さあ、王よ、私の言うことを聞きなさい！　正信者たちのために教会を開けなさい。そうすれば、あなたは敵に打ち勝ち、栄光のうちに帰還できるだろう。しかし、もし私の言うことを聞かなければ、戦場から生還することはなく、そこで命を落とすことになるだろう。」

王は、その修道士の大胆不敵さと、その顔の輝きに大いに驚いたが、それにもかかわらず、彼の言葉には耳を貸さなかった。なぜなら、王の心は頑なで、神から遠ざかっていたからである。その後、王は聖人を二人の高官、サトゥルニヌスとヴィクトルに引き渡し、彼を鎖で縛って監禁するよう命じた。その際、王は彼らにこう言った。

「この厄介な老人を、私が戻って来て、その厚かましさと大胆不敵さに対する報いを与えるまで、お前たちの元で拘束しておけ。」

しかし、聖イサアクは聖霊の恵みに満たされ、かつて預言者ミカがイスラエルの王アハブに対して示したのと同様に、さらに強い熱意に燃え上がり、ヴァレントに向かって大声で叫んだ。

「*もし平穏に帰還*するならば」、知っておけ、「*主は私を通して語られたのではない。そして言われた、『民よ、皆、聞きなさい！』*」（列王記下22:28）。 言っておくが、お前が軍勢を率いて戦いに赴いても、野蛮人たちを打ち負かすことはできず、彼らから逃げ出し、捕らえられ、生きたまま火に焼かれることになるだろう。

聖人がこう告げると、王は怒りを露わにして旅を続け、聖人は縛られて連行された。

その間、ギリシャ軍は蛮族と激突した。戦いは極めて熾烈を極め、神の御許しにより、聖イサアクの預言通り、蛮族が勝利を収めた。多くのギリシャ兵が剣の下に倒れ、ヴァレント王自身も負傷し、敵に抗う力がなかったため、逃走した。 野蛮人たちはギリシャ軍を追撃し、ギリシャの兵士たちを草を刈るように薙ぎ倒した。彼らはすでに皇帝自身にも追いついていた。皇帝は、イサアキオスの言葉に耳を貸さないよう助言した、アリアニ派の軍司令官であるただ一人の側近だけを伴って逃げていた。 ある村に差し掛かったとき、彼は藁が積まれた納屋を目にした。馬はすでに疲れ果てていたため、彼は馬から降り、その顧問と共に納屋に身を隠した。 しかし、彼は神の懲罰の手から逃れることはできなかった。というのも、彼を追跡していた蛮族たちがその村にたどり着き、その納屋にギリシャ人が隠れていることを知ると、四方から火を放ち、納屋を根こそぎ焼き払ったからである。こうして、その忌まわしい王と、彼の邪悪な顧問は命を落とした。

その戦いの後、無傷で残ったギリシャ軍は、ギリシャ人を救援するために向かっていたローマ皇帝グラティアヌス[3997]を迎え撃つために進軍した。 ギリシャの領土に到着すると、グラティアヌスは、テオドシウス（「大帝」と呼ばれる）[3998] をギリシャ人の王に選出した。テオドシウスは兵士たちを集め、蛮族に向かって出陣し、彼らを打ち破って追い払い、凱旋してコンスタンティノープルに戻った。

一方、ヴァレンティヌスの死をまだ知らなかったギリシャ兵の一部は、彼の死後まもなく、監禁されていた聖イサアクのもとを訪れ、こう言った。

「答えを用意しておきなさい。まもなく皇帝が戦場から戻り、あなたを尋問し、拷問するだろうから。」

しかし、聖人は彼らにこう答えた。

「彼の焼かれた骨の悪臭を嗅いでから、すでに七日が過ぎた。私が言った通り、彼は焼かれたのだ。」

これを聞いた者たちは大いに恐れおののいた。そして実際、まもなくヴァレンティウスの死の知らせが届いた。その後、聖イサアクは束縛から解放され、人々は皆、彼を神の預言者として崇めるようになった。

テオドシウスが凱旋して都に入城したとき、前述の高官であるサトゥルニンとヴィクトルは、聖イサアクについてすべてを彼に報告し、その大胆不敵な行動と預言について語った。 王はそのような人物を敬い、大いなる栄誉をもって彼を自分の元へ連れてくるよう命じ、彼を神の偉大な御用達者として崇め、自分と王国全体のために神に祈ってほしいと懇願して、彼に頭を下げた。 一方、聖人は王に対し、敬虔な生活を送り、教会に平和を取り戻し、迫害されている者たちを慰めるよう諭した。王は聖人の言葉に従い、その通りに実行した。すなわち、コンスタンティノープルからアリウス派を追放し、それによって信者たちは大いに喜んだ。

一方、至福のイサアクは、すべてのことについて神に感謝を捧げた後、荒野へ赴いてそこで修行に励もうと決意した。しかし、サトゥルニヌスとヴィクトルは、尊者に対し、王都を去らず、彼ら

[3997] グラティアヌス皇帝は375年から383年まで在位した。

[3998] テオドシウス大帝は、379年から395年までローマ帝国の東部を、393年から396年まで西部を統治した。

のそばに留まり、その祈りと教えによってキリスト教徒の平和な暮らしを支えてくれるよう懇願した。聖人は彼らの願いを聞き入れた。

その頃、サトゥルニヌスとヴィクトルの間で論争が起こった。二人とも、聖人が自分の家に住んでほしいと願っていたからである。その論争の原因を知った聖人は、彼らに向かってこう言った。

「子らよ！　あなたがたが私に対して抱く愛はよく分かっている。しかし、あなたがたは私の謙遜な心を慰めたいと願っているのだから、こう言っておく——私の人生を全うするまで、最初に私のために家を建ててくれた者のところにとどまるつもりだ。」

こうして、二人は神に愛されたこの人のために、一日も早く家を建てることに取り掛かった。

サトゥルニヌスは町の外に、修道士たちの生活には極めて適した、とても美しい場所を持っていた。彼はその場所に、急いで神の御使いのための修道院を建て、尊者イサアクはそこに住み着いた。同様に、ヴィクトルも聖人のために美しい住まいを建てたが、サトゥルニヌスに先を越されてしまったことを深く残念に思った。　聖人のもとを訪れた彼は、自分のために建てた独房へ移り住むよう、熱心に懇願し始めた。しかし、尊者イサアクはサトゥルニヌスの修道院で修行を続け、時折ヴィクトルのところへ訪れて数日間滞在することはあったものの、断ることで彼を悲しませることを望まなかった。

その間、聖人と共に修道生活の労苦に励みたいと願う多くの人々が、聖人のもとへ集まり始めた。こうして、サトゥルニヌスとヴィクトルの敬虔な人々の資金によって、大きな修道院が建てられた。　そして、尊者は多くの修道士たちの指導者であり修道院長であり、また信徒たちにとっても有益な教師であった。なぜなら、彼は言葉と、自らの徳ある生活の模範によって、すべての人を救いの道へと導いたからである。　聖人は貧しい人々に対して極めて慈悲深く、時には物乞いに与えるものが何もない場合でも、自ら着ていた衣服を脱いで与えたほどであった。また、聖人は他にも多くの神に喜ばれる行いを実践した。　やがて老齢に達し、死が近づいた。聖イサアクはすべての修道者たちを呼び集め、皆に魂に有益な教えを授けた後、自身の後任として、聖なる生活を送っていたある高潔な人物、至福のダルマートを修道院長に任命した。その後、その修道院は彼の名にちなんで「ダルマート修道院」と呼ばれるようになった。

多くの神への奉仕に尽力した後、尊者イサアクは主のもとへ旅立ち、永遠の安息を得た[3999]；その葬儀には街中の人々が集まった；　その尊い遺体は、聖第一殉教者ステファノの教会に安置された。そして、その聖なる魂は、聖なる三位一体の御座の前に、聖人たちや敬虔な教父たちと共に立ち、彼らと共に、三位一体の唯一の神である父と子と聖霊のために、私たちのために祈っている。その神に、永遠の栄光が帰せられる。アーメン。

コンダク、第8調：

神に忠実な御用者よ、キリストの教会への熱意に燃え、ウアレントの支配を退け、預言者として、教会の閉鎖が招く破滅的な死を予言された尊者よ。それゆえ、あなたを崇める私たちのために、常に祈ってください、尊者イサアクよ。

6月13日

5月31日（旧暦）

6月

[3999] 聖イサアクの死は4世紀末に起こった。その聖遺骨は当初、ダルマチアの修道院の隣にあった聖ステファノ教会に安置されていたが、その後、諸聖人の教会に移された。

聖殉教者エルミアの受難

記念日：5月31日

不敬虔なローマ皇帝アントニヌスの治世下[4000]、キリスト教徒に対する迫害が行われていた際、あるセバスティアンという名の貴族が、キリスト教徒を拷問する役目を皇帝から任命された。　キリキアからカッパドキアへ到着した際[4001]、彼はコマナ[4002]で、エルミアという名の戦士に出会った。彼は白髪交じりの老戦士であり、唯一の真の神を信じ、徳のある生活を送っていたキリスト教徒であった。その貴族はエルミアにこう言った。

「ローマ皇帝アントニヌスから、すべてのキリスト教徒にローマの神々への生け贄を捧げるよう命じる勅令が私に送られてきた。もしキリスト教徒が生け贄を捧げることを拒めば、多くの残酷な拷問にさらされることになる。だから、エルミアよ、お前も神々に生け贄を捧げよ。そうすれば、お前は王の友となり、大きな栄誉を授かるだろう。」　私の言うことを聞きなさい。さもないと、私はお前の魂も肉体も苦痛にさらすことになる。

キリストの戦士エルミウスは、これに対し次のように答えた。

「私は、天の、不死の王キリストの戦士である。その御国には終わりがない。それゆえ、私は、死すべき不義な王の命令には従わない。その王の治世は一時的なものに過ぎないが、私たちの主イエス・キリストの御国は、永遠に変わることなく存続する。主を信じる者は皆、永遠の命を受け継ぐのだ。　私もまた、主を信じている。以前は密かに主に仕えていたが、今は公然と仕えている。悪魔は私を打ち負かすことはできない。お前はただ私の肉体に対してのみ権威を持っているが、それも神の許しによるものである。私の魂に対しては、ただ唯一の神だけが権威を持っており、その神が私に忍耐を与え、永遠に私を無傷で守ってくださるのだ。

セバスティアンは聖エルミアの言葉を聞き終えると、彼に向かってこう言った。

「この世の喜びを味わいたいなら、神々に犠牲を捧げなさい。」

しかし、聖人はこう答えた。

「もし私が、私の創造主から背き、悪魔を崇拝するならば、私にどのような喜びがあり、どのような楽しみがあり、どのような人生があるというのか。まことに、それは喜びではなく悲しみであり、楽しみではなく苦しみであり、人生ではなく永遠の死である。」

公爵は言った。

「お前は実に賢明なようだ。」

聖人は答えた。

「私は、私が信じ、全力を尽くして仕える私の神、主について賢明なのです。主のために苦難に耐える覚悟があり、喜んで死ぬことも厭いません。」

「お前の白髪と知恵を尊重して」と公爵は言った。「私はお前を赦し、慈悲を施す用意がある。」

聖人は答えた。

「私はあなたに慈悲を求めるのではなく、御自分のしもべたちに聖霊によって知恵をお与えになる神に慈悲を求めます。」

[4000] アントニヌス1世皇帝は138年から161年まで在位した。

[4001] キリキアとカッパドキアは、小アジアの地域である。

[4002] コマナという都市は、小アジア北東部のポンテ州に位置していた。――キリスト教会の歴史において、この都市は聖ヨハネ・クラマトルスの流刑地として知られている（11月13日の彼の伝記を参照）。もっとも、ここをカッパドキアにあったコマナの都市と解釈する者もいる。

これに対し、公爵は言った。

「では、お前は生よりも死を選ぶのか？」

「この死は」と聖人は答えた。「死ではなく、永遠の命である。もし私が、お前から課せられた苦痛を忍耐強く耐え抜くならば。」

そこで公爵は、聖人の顔を石で打ち砕き、口を殴り、顔の皮を剥ぎ取るよう命じた。すると聖人は言った。

「わが神に感謝します。その恵みが私と共にありますから。」

その後、公爵は兵士に尋ねた。

「なぜお前は、他の兵士たちが皆そうしているように、貢ぎ物を受け取らないのか？」

「あなたがたは貧しい者たちから不当に搾取しているからです」と殉教者は答えた。「それゆえ、私はあなたがたの貢物を受け取らず、それを食べていません。私には聖霊から与えられる霊的な糧があり、それによって決して飢えることがないからです。」

そこで王子は、炉に火を焚き、その中にキリストの殉教者を投げ込むよう命じた。三日後、炉の蓋を開けてみると、聖人は生きて無傷で、神を賛美していた。火は彼の体には触れていなかったからである。

その後、公爵は魔術師を呼び寄せ、エルミヤに毒を飲ませるよう命じた。

しかし聖人は、神に祈りを捧げた後、毒入りの飲み物を飲み干したが、主キリストの*「たとえ死に至るものを飲んでも、彼らには害を及ぼさない」*（マルコ16:18）という御言葉通り、微塵も害を受けなかった。

魔術師はさらに危険な毒を用意し、殉教者に与えながらこう言った。

「もしこの毒で少しも苦しむことがなければ、私は魔術を捨て、あなたが仕える十字架にかけられた神を信じる。」

しかし、聖エルミウスはその毒を口にし、底まで飲み干しても、微塵も害を受けることなく、健やかで無傷のままでいた。すると、魔術師は叫んだ。

「お前は私を打ち負かした、エルミウスよ！　キリストの僕よ、お前は私を制し、打ち勝ったのだ！　お前は、地獄に落ちようとしていた私の魂を救い、私に神に仕えるよう導いてくれた。まるで、鉄で造られた古い彫像が、打ち直されることで新しく生まれ変わるように、罪と不義の中で老い衰えた私の魂もまた、新しく生まれ変わる。永遠に存続する生ける神に立ち返ることで、私は新たに生まれ変わるのだ。　天の神よ、唯一真の神よ、御使いエルミアを通じて、私を悪魔の惑わしと偶像崇拝の汚れから救い出してくださった方よ！御前に立ち返るこの罪人を受け入れ、御名を告白する私に憐れみをお与えください！

彼がこのように叫ぶと、公爵は激怒し、彼を斬首するよう命じた。そして、その魔術師は自らの血をもって洗礼を受け、首を刎ねられた。こうして、新たなキリスト教徒であり殉教者である彼は、自らの命を捧げたキリスト・神のもとへと旅立った。

一方、聖エルミヤに対しては、公爵は容赦なく拷問を加え、全身の血管を引き抜くよう命じた。かくも残酷に拷問を受けている最中、聖人はこう言った。

「私はこの拷問による痛みを全く感じていない。なぜなら、ナイフが静脈を切り開いて不浄な血を流し出し、体に健康をもたらすのと同じように、私もまた、体から静脈を引き抜かれることを受け入れることで、キリストの信仰においてますます健全になっていくからだ。」

その後、拷問官は聖人を沸騰した油で満たされた大釜に投げ込むよう命じた。しかし、大釜はたちまち冷め、沸騰していた油は冷たい露へと変わった。キリストの殉教者は大声で叫んだ。

「私は痛みを感じず、拷問者よ、お前の命令には従わない！私はただ、天の父の御心のみを実行する。私は自らを、汚れなき生け贄としてその御前に捧げる。なぜなら、御方は私たちの魂と体の主だからである。」

聖人がそう語っている間、拷問官は胆汁を混ぜた苦い酢を彼の喉に注ぎ込むよう命じた。すると殉教者はこう言った。

「この苦味は、私にとって、私の神のために捧げる百の蜂蜜の壺に等しい。私はその御名のために、これらすべてに耐えているのだ。」

その後、拷問官は聖エルミオの目をえぐり出すよう命じた。それを聞いた聖人は拷問官にこう言った。

「もし、この世の虚しさを見る私の肉体の目が必要なら、それを奪い取れ。私には心の目があり、それによって真の光をはっきりと見ているのだ。」

こうして、聖なる殉教者の目はえぐり取られた。

その後、聖人は逆さ吊りにされ、その状態で三日間吊るされたため、鼻の穴から大量の血が流れ出た。三日が過ぎた頃、聖人がすでに亡くなったと思い、彼を見に来た者たちがいたが、彼は生きて神を賛美しているのを見つけ、大いに驚いた。　しかし、彼らの不信仰ゆえに、彼らの目は闇に覆われ、彼らは盲目となり、こう叫び始めた。

「真の神のしもべよ、私たちを憐れんでください。私たちは盲目となってしまいました！」

すると、聖人は彼らにこう言った。

「私のところに来なさい！」

彼らが聖人のところへ近づくと、聖人は彼らに手を置いてこう言った。

「わが主イエス・キリストの御名によって、目を開けなさい。」

するとたちまち、皆の目が開かれ、彼らは戻って、起こったことすべてを語った。

一方、公爵はさらに激しい怒りに駆られ、殉教者の全身の皮を剥ぐよう命じた。家来たちが拷問者の命令を実行している間、聖人は公爵を罵り、その忌まわしい神々を非難したため、公爵の怒りはさらに激化した。獅子のように咆哮すると、彼はナイフで聖なる殉教者の尊い首を切り落とした。

こうして、キリストの殉教者エルミオスはその偉業を全うした。[4003]。

キリスト教徒たちは密かにその場所を訪れ、彼の尊い遺体を運び出し、カッパドキアのコマナと呼ばれる場所に埋葬した。　この地では、殉教者の尊い遺骸から多くの奇跡が起こり、私たちの神であるキリストの栄光のために、多種多様な癒しがもたらされた。父と聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、キリストに栄光と誉れと礼拝が捧げられる。アーメン。

コンダク、第6調:

キリストに倣って熱心に奮闘し、白髪になるまで勇気を培った殉教者エルメエよ。キリストの力によって不法者たちの悪意を打ち砕き、魔術の飲み物からも無傷でいられたあなたは、「神は私と共におられ、私に敵対する者は誰もいない」と叫んだ。

聖哲人殉教者の受難

記念日：5月31日

[4003] 聖殉教者エルミアの死は、約166年に起こった。

このキリストの聖殉教者フィロソフォス（[4004] ）は、アレクサンドリアの近郊[4005] に由来する。彼について、また彼がどのようにして殉教の偉業を成し遂げたかについては、修道士たちの偉大なアンソニー[4006] が伝えている。

そこには、色とりどりで芳香を放つ植物で満ち溢れた、この上なく美しい庭園があった。その庭園には、拷問のために豪華に装飾された寝台が設えられており、手足を縛られたこの聖なる殉教者フィロソフは、その上に寝かされていた。　彼のもとを訪れた不貞な妻から、誘惑的で恥知らずな言葉を耳にした時、この勇敢な殉教者は彼女を見ないように目を閉じたが、まぶたや耳を覆うことはできなかった。彼は縛られていたため、それ以上のことは何もできなかったのだ。　そこで彼はこうした。自分の舌を歯で噛み、それによって激しい痛みを自らに与えた。その痛みのせいで、恥知らずな妻が囁く言葉を聞くことができなかった。また、鼻の穴を塞ぐことができなかったため、血まみれの舌で不浄な寝床を濡らし、衣服を血で染め上げ、こうして の誘惑から無傷で済んだのである。 この偉業を成し遂げた勇敢な殉教者は、拷問者に屈することはなかった。その後、彼は首を刎ねられた[4007] 、そして今や天国で永遠に喜びを謳歌している[4008] 。

6月14日

6月1日（旧暦）

聖殉教者ユスティヌス・フィロソフォスの生涯と受難

記念日：6月1日

キリストの聖殉教者ユスティヌス・フィロソフは、パレスチナのシリア、サマリア地方にある、当初はシケムと呼ばれ、後に[4009] ネアポリス・フラヴィウス[4010] と名付けられた町で生まれた。 彼の父プリスクは名門の異教徒であり、ユスティヌス自身も、聖なる信仰の光に照らされるまでは異教徒であった。真理への愛に駆られ、彼は若き頃から学問に熱心に取り組み、鋭い知性のおかげで、ギリシャの異教学校で教えられていた諸学問に秀でていた。　雄弁術を身につけた彼は、哲学への志を抱き、まずある哲学者――ストア派の[4011] ――の弟子となり、ストア派の教えがどのようなものかを知ろうとした。　ユスティヌスは神について理解したいという強い願望を抱いていたが、ストア派の

[4004] 「哲学者」は固有名詞ではなく、この聖人に与えられた他の名称と同様である。5月31日の項目に、6月1日に記念されるユスティヌス・フィロソフォスの名にちなんで掲載されている。

[4005] アレクサンドリア――エジプトの都市で、アレクサンドロス大王によってナイル川の河口、地中海沿岸に建設された。

[4006] ここでいうのは、もちろんエジプトにおける隠遁修道生活の創始者である聖アントニオス・ザ・グレートのことである。彼の記念日は1月17日である。

[4007] 聖殉教者フィロソフは、デキウス帝の治世下、およそ252年に殉教した。

[4008] 聖殉教者フィロソフォスの功績に関する伝承は、聖パウロ・フィヴェイオスの『数と生涯』という伝記の中で、より詳細かつ分かりやすく語られている。

[4009] ローマ人によるパレスチナ征服後（西暦1世紀）。

[4010] 現在のナブルス。

[4011] ストア学派の創始者はゼノン（紀元前3世紀）である。この学派は主に実践的なものであり、あらゆる生活状況において情欲を制し、無関心さを保つことを目的としていた。

哲学者のもとでしばらく過ごしても、神について何も学ぶことはできなかった。というのも、そのストア派の哲学者は神を知らず、神に関する教えを必要とは考えていなかったからである。　そこでユスティヌスはその師を離れ、いわゆるペリパトス学派[4012] に属し、賢者と見なされていた別の哲学者のもとへ向かった。数日もしないうちに、その哲学者はユスティヌスに無償で教えようとはせず、報酬について話し合いを始めた。　師の金銭への執着を見て、ユスティヌスは彼を強欲な者として軽蔑し、世俗の富を軽んじる心を持たないこの師は、哲学者と呼ばれるに値さないと断じた。　こうした理由からストア派やペリパトス派を拒絶したユスティヌスは、神への認識へと導く真の哲学への満たされない渇望に駆られ、ある著名なピタゴラス派の哲学者[4013] を師に選びたいと考えた。 その哲学者は、ユスティヌスがまず第一に、天文学、幾何学、算術、音楽、およびその他のいくつかの学問を学ぶべきだと考えた。それらは、彼の見解によれば、この世の生活において必要不可欠なものだったからである。しかし、ユスティヌスは、これらの学問を学ぶには多くの年月を費やすことになる一方で、魂にとっては何の益もないと判断した。　この教師からも、日ごとにますます神への愛に燃え上がる彼の心の願いを満たすような言葉を何も聞けなかったため、ユスティヌスは彼のもとを去った。その後、彼はプラトン派の一人[4014] に師を求め、当時その教えは大きな名声と尊敬を集めていた； そのプラトン派の哲学者は、物質的なものから非物質的なものへの認識、低次の知識から高次の知識への移行、そしてイデアの理解から神の理解へと導くと約束した――というのも、このプラトン派の教えの最終的な目的は、イデアの認識から神の理解への移行とされていたからである。　至福のユスティヌスは、自らの志の目標である――神の知識を与え、神の恵みで満たしてくれる神聖な知恵――を悟ることを望み、喜んでその道に身を委ねた。彼はプラトン派の師のもとでかなりの時間を過ごし、すぐにプラトンの教義と規範を学び、 ギリシャの哲学者として、卓越と名声に達した。 しかし、この道によって、ユスティヌスはまだ真のキリスト教的な神の認識に到達することはできなかった。なぜなら、ギリシャの哲学者たちは、朽ちることのない神を、人間や鳥、四足動物、爬虫類といった朽ちるべき姿の下に崇め、神にふさわしい敬意をもって賛美していなかったからである。　それでもなお、ユスティヌスは、神への思索に励み、真の教えによってまだ啓発されていなかったその知性が理解しうる限りにおいて神の認識を学んでいたことで、ある種の霊的な慰めを得ていた。

ある日、街の外れ、海に近い人里離れた場所を散歩しながら、心の中で様々な哲学的教義について思索を巡らせていたユスティヌスは、見知らぬ、白髪交じりの威厳ある老人の姿を見かけた。彼がその老人をじっと見つめていると、老人はこう言った。

「私を知っているのかい？　なぜそんなにじっと私を見つめているのだ？」

「いいえ、知りません」とユスティヌスは答えた。「しかし、誰にも出会うとは思っていなかったこの人里離れた場所で、あなたにお会いできるとは驚きです。」

「私の家族は――」と老人は言った。「あちらへ行ってしまった。彼らの帰りを待ちながら、遠くからでも姿が見えるように、迎えに出たのだ。ところで、君はここで何をしているのか？」

ユスティンはこう答えた。

「私は、哲学について自由に思索にふけるために、人里離れた場所を散歩するのが好きなんだ。」

「哲学から、いったいどんな益を得ているのだ？」と老人は尋ねた。

ユスティヌスは答えた。

[4012] ペリパトス学派――アリストテレスの追随者たち（紀元前4世紀）；彼らは、あらゆる認識は経験に由来すると教えた。

[4013] ピタゴラス（紀元前5世紀）の教義の性質は、ピタゴラス派のユスティヌスへの教訓からうかがえる。

[4014] プラトン（紀元前4世紀）は、神、真理、善に関する概念や、魂の独立した存在などを先天的なものと認めていた。彼の教えは、他の古代の哲学的教えよりもキリスト教に近い。

「哲学以上に有益なものがあるでしょうか？　哲学は知性を啓発し、あらゆる推論の導き手であり、人生の指針です。哲学を深く理解する者は、まるで鏡を見るかのように、他者の無知や迷いをはっきりと見抜くことができます。哲学の教えと正しい理性の行使なくして、真の英知は存在し得ないのです。　それゆえ、何が有益で何がそうでないか、何に固執すべきで何を拒むべきかを知るために、すべての人は哲学を学ぶべきである。

「しかし、哲学は人間に幸福をもたらすのでしょうか？」と老人は尋ねた。

ユスティンは答えた。

「もちろん、もたらします。」

「では、哲学とは何か、そしてそこからどのような幸福が得られるのか、教えてくれ。」

「哲学とは」とユスティヌスは答えた。「存在するすべてのものを理解し、真理を知ることである。その理解と英知を身につけることこそが、哲学がもたらす幸福なのである。」

老人は尋ねた。

「もし真理が正しい哲学的理解によって知られ得るのなら、神についてはどうお考えですか？」

ユスティヌスは答えた。

「決して変化することなく、常に同じ状態にあり続ける存在、あらゆる存在の第一原因――それが私の考える神の姿です。」

長老はこの答えを気に入り、さらに問い続けた。

「存在するすべてのものには、一つの共通した理性があるのだろうか？　何らかの技芸に精通している者については、その技芸を理解していると言われるではないか。測量であれ、航海であれ、あるいは医術であれ。神聖な事柄や人間的な事柄についても、同じことが言えるのではないだろうか？」　さらに教えてほしい。神的なものも人間的なものも、あらゆる事物を認識する源となるような知性があるのだろうか？

「確かにあります」とユスティヌスは答えた。

– 神を理解することと、音楽や算術、天文学、あるいはそれに類するものを理解することは、同じことなのでしょうか？

「全く違います。神を理解することと、ある種の芸術を知ることとは別物です。」

「よく答えたね」と老人は言った。「ある種の知識は、我々が耳で聞いたり教えを受けたりすることによって得られるものもあれば、自分の目で対象を観察することによって得られるものもあるのだ。　例えば、もし誰かがあなたに、インドには他のどの獣にも似ておらず、その多様な性質においてそれらとは全く異なる、ある種の獣が生息していると告げたとしたら――自分の目でそれを見なければ、あなたはその獣について知ることはできず、また、最初にその獣についての話を自分で聞いていなければ、他の人にそのことを語ることもできないだろう。　そこで今、私はあなたに問いたい。ギリシャの哲学者たちは、神を一度も見たことがなく、聞いたこともなく、したがって神について何の認識も持っていないのに、どうして神について正しく理解し、神について真実なことを主張できるというのか？

ユスティヌスはこう答えた：

「師よ！神性の力は、人間が地上の生き物を眺めるように肉眼で見るものではなく、私が従っているプラトンの教えにあるように、心のみをもって神を悟ることができるのです。」

長老は尋ねた。

「私たちの心の中には、そのような性質を持ち、かつ極めて強大な力が存在しないだろうか。その力によって、肉体の感覚で物事を認識するよりも、むしろ目に見えないものをより速やかに把握することができるのではないか？」

ユスティヌスは答えた：

「まことに、そのような力は存在する。プラトンはそれを『知性の眼』と呼んでいる。彼の教えによれば、この眼は、知恵の教えによって浄化され、啓発された後、知性によって把握される万物の原因である、最も神聖な真理そのものを観照できるようになることを目的として、人間に与えられているのだ。　しかし、この真理には、特定の姿も、いかなる類似性も、年齢も、あるいは肉眼で捉えられるようなものも一切なく、すべての存在を超越した、不可解で測り知れない、善と美の融合である存在そのものである。　この存在そのものが、初めから高貴な魂の中に、御自身を知ろうとする願望を植え付けておられる――なぜなら、そのような魂が御自身を知り、御姿を仰ぎ見ることを、御自身が喜ばれるからである。

老人はそのような言葉を聞いて喜んだが、それでも、キリスト教の信仰告白が欠けているという点で不完全であるとして、ユスティヌスがプラトンの教えに基づいて神について述べたこの論考には完全には満足できず、プラトンを是認せずにこう言った。

「もしプラトンが、あなたが信じるように教えているのなら、なぜ彼自身は神の真理を知り、悟ることができなかったのか？」　神は目に見えず、理解しがたいと主張しながら、彼は目に見える被造物――空や星々、木々、そして人間の姿に彫り上げられた石――を、あたかも神そのものであるかのように崇拝し、神の真理を偽りへと変え、偶像崇拝に固執し、他の人々にもそれを教えたのだ。私は、プラトンやその他のギリシャの哲学者たちが、真の神の認識に到達しうる正しい理性を備えていたとは考えない。*「彼らは、その思い巡らしの中で迷い、無知な心は暗くなった。自分たちを賢い者と呼びながら、正気を失ってしまった」*（ローマ1:21–22）。　要するに、こう言おう。聖霊に導かれず、信仰によって照らされていない人間の知性は、神を知り、理解することなど全くできないのである。

このように、長老は正しい神学、真の神への崇拝、そしてその他の神聖な事柄について、ギリシャの哲学者たちの誤りを糾弾しつつ、これに類する多くのことを語った。長老の言葉に驚いたユスティヌスは尋ねた。

「もしプラトンや他の哲学者たちに真理がないのなら、真理を教える師は一体どこに、どのような人物がいるというのでしょうか？」

すると、長老は聖なる預言者たちについて語り始め、こう言った。

「太古の昔、あらゆる哲学者よりもはるか以前に、聖なる、義にかなった、神に喜ばれる人々がいた。彼らは聖霊に満たされ、今起こっていることを予言し、その人々は預言者と呼ばれている。彼らこそが誰よりも先に真理を知り、それを人々に宣べ伝えるにあたり、誰の前でも臆することなく、誰をも恐れなかった。誰も彼らを説得して、たった一言でも真理から逸脱させることはできず、虚栄の栄光も彼らを打ち負かすことはできなかった。　彼らが神から受けた啓示の中で、神から見たことや聞いたことすべてについて、彼らは率直に、真実を語り、恐れを知らずに語った。彼らの書物は今も残っており、信仰をもってそれを読む者には多くの益をもたらし、真理を知るための知恵を授けてくれる。 これらの聖なる預言者たちは、巧みな言葉遣いや、いかなるソフィスティックな[4015] 論証や推論によっても自らの言葉を裏付けるのではなく、素朴な語り口で真実そのものを語っている。なぜなら、彼ら自身こそが、あらゆるソフィスティックな論証を凌駕して、唯一の真の神、　万物の創造主である唯一の真の神を信じ、その御子である主キリストのこの世への到来を予告した者たちだからである。そして、預言者たちが信頼に値することは疑いようがない。なぜなら、彼らの予言の一部はすでに成就しており、他の部分は今まさに成就しつつあるからである。　また、彼らは自らの予言のうちのいくつかを、神の恵みによって上から与えられた力によって驚くべき業を行うという奇跡によっても裏付けていた。これに対し、偽りの預言者たち――神によって立てられたものではない者た

[4015] ソフィストたちは、物事に関する肯定的な知識の可能性を否定し、いかなる考えであれ、たとえそれが誤りであっても、その証明を試みた。ここから「ソフィズム」――誤った前提からの正しい推論――という概念が生まれた。

ち――は、そのような業を行うことは決してできず、ただ悪魔的な幻影や欺瞞によって人々を脅かすことしかできなかった。

こうして、ユスティヌスには見知らぬその至福の人は彼と語り合い、最後にこう言った。

「何よりもまず、真の神に熱心に祈りなさい。そうすれば、神はあなたに光の扉を開いてくださるでしょう。なぜなら、神ご自身が啓示に値すると認めた者だけが、神聖なものを観照し、理解することができるからです。そして神は、祈りをもって神を求め、愛をもって神に近づく者すべてに、その扉を開いてくださるのです。」

そう言うと、その長老は彼から離れ、姿が見えなくなった。その後、ユスティンは二度と、どこを探してもこの人物を見つけたり見たりすることはできなかった。長老が去った後の心境について、ユスティン自身は、著名なユダヤ人トリフォンとの対話の中で、次のように語っている。

「ある種の炎が私の内に燃え上がり、神への渇望によって私の霊を燃え立たせ、聖なる預言者たちや、キリストの友である人々への愛が私の内に高まった。」　長老の言葉を深く思索するうちに、私は彼が説いた哲学こそが唯一の真理であると悟り、預言者や使徒たちの書物を読み始め、それらを通じて真の哲学者、すなわち真のキリスト教徒となったのである。

後にトリフォンにこのことを語った際、至福のユスティヌスは、見知らぬ男――まるで天から遣わされたかのように――によって正しい道へと導かれたとき、自分の神への回心がどのように始まったかを同時に回想した。

神に霊感を受けた長老との心に響く対話を終えた後、ユスティヌスは直ちにキリスト教の書物に目を向け、心を込めて聖書を読み始めた。古代のシヴィルの預言（[4016]）を、キリストが聖母マリアから受肉すること、その自発的な受難、将来の審判、そして目に見える世界の終焉について聖なる預言者たちが語った予言と照らし合わせ、　両者に完全な一致を見出し、驚嘆するとともに、聖霊の内なる導きのもと、少しずつ、神と神の御子に対するより完全な認識へと至っていった。　日ごとに彼の魂における敬虔への渇望は強まり、キリスト教の信仰へと傾くにつれ、彼は自分の中にあるギリシャ的な狂気を非難した。当時、キリスト教の敬虔を志す魂の善意にとって少なからぬ障害となっていたのは、キリスト教徒に対する頻繁かつ激しい迫害、そして、異教徒たちがキリスト教徒に対して虚偽にでっち上げた、多くの不名誉で、　恥ずべき、耳を疑うような、キリスト教徒に対して異教徒たちがでっち上げた悪徳に関する誹謗中傷――あたかもキリスト教徒たちが夜の（祈りの）集会で、灯火を消すと同時に清らかさの光も消し去り、互いに不浄によって穢し合い、獣のように人間の肉を食べているかのように。　このような、あるいは類似した卑劣な中傷によって、異教徒やユダヤ人たちは、罪のないキリスト教徒をすべての民族の前で貶めていた。　不敬虔で狂気じみた者たちの嘘を、あたかも真実であるかのように信じ込み、すべての異教徒は、義人であり聖なる者であるキリスト教徒を憎み、嫌悪し、軽蔑し、重大な罪を犯した大いなる不法者であるかのように彼らから背を向け、多くの多様な拷問の末にキリスト教徒を死に追いやった。　こうした状況は当初、ユスティヌスがキリスト教徒に加わろうとする意図を妨げていた。しかし、彼はキリスト教徒に対する告発をあまり信用していなかった。なぜなら、理不尽な民衆の裁きによって、無実の者が有罪とされ、清らかな者が放蕩者として貶められ、義人が罪人と見なされることがよくあることを、彼はよく知っていたからである。　しかし、キリスト教徒たちが法廷で恐れることなく答弁し、苦痛を勇敢に耐え忍び、この世の目に見えるあらゆる恵みを塵芥のように軽んじ、主のために進んで拷問を受け入れ、死をまるで祝宴のように待ち望んでいるのを見て、ユスティヌスは心の中でこう考えた。

「キリスト教徒について、彼らがそのような不法行為を行っていると言われているのは真実ではない。無制限な肉欲の快楽に溺れ、快楽追求のために人肉を食らう罪人は、苦痛に耐えられず、自

[4016] シヴィラは、ギリシャ人やローマ人の未来を予言する者たちである。彼女たちに帰せられた予言には、救い主の地上での生涯における様々な状況がかなり明確に示されている。

ら進んで傷を負うことをせず、むしろそれを避ける。　また、何らかの裁判にかけられた際には、あらゆる手段を尽くしてその場から逃れようとし、罰を免れるために手段を選ばず、その後、苦痛なく生き、肉体の健康を享受して、さらに自分の欲望にふけるのだ。　キリスト教徒はそうではない。彼らが信じるキリストのために自発的に苦難を選び、生よりも死を好むのだから、果たしてそれほどまでに罪を愛することができるだろうか。

このように論じながら、彼はキリスト教徒の生活について入念に調査し、彼らが主への畏れをもって清く汚れなく生き、貞潔を堅く守り、断食と節制によって絶えず自己を律し、頻繁に祈りを捧げ、常にあらゆる善行に励んでいることを十分に確信した。　これらすべてを確信したユスティヌスは、心からキリスト教徒を深く愛し、彼らに親しみを抱き、聖なる　洗礼を受けた。そして彼はキリストの信仰の偉大な擁護者となり、言葉と書物をもってギリシア人やユダヤ人に対して戦い、キリストの無敵の戦士、堅固で勇敢な修道士となった。

人々の魂の救いを求めて、彼は様々な国々を巡り、キリストの御名について教え、説教し、異教徒たちを彼らの迷いから神へと導いた。彼は哲学者として――哲学者の装いをまとって、弟子たちと共に――ローマにもやって来た[4017]。多くの人々が教えを求めて彼のもとに集まったため、彼は学校を設立し、表向きは知恵の教えを装いながら、真のキリスト教哲学を教えた。そこで、異端の創始者であるマルキオン[4018]と出会うと、彼は力強くこれに立ち向かい、その異端を論破し、彼の異端やその他の異端的な教えに対する反論書を著した。　また、ローマには、キリスト教徒の偉大な敵である、ある異教のキニク派哲学者[4019]クリスケントがいた。この不敬虔な哲学者に対し、真のキリスト教哲学者である聖ユスティヌスは、絶えず言葉をもって戦い、彼を批判する書物を著した。　このキニク派の哲学者は、自ら不潔かつ極めて不法な生活を送りながらも、神に従って貞潔な生活を送るキリスト教徒たちを憎み、神から霊感を受けた英知と清く汚れのない生活によって、すべてのローマ人から尊敬と名声を得ていたユスティヌスの良き評判を妬んでいた。　その悪意から、このキニク派の者は、ユスティヌスとその同信者たちを民衆の目に恥じ入らせるため、また彼らに対する嫌悪を煽るために、キリスト教徒を中傷し、多くの恥ずべき行いを犯したと非難した。これを耳にし、目にした聖ユスティヌスはこう語った。

「私はキリストの信仰のために苦難を受け、不信仰者たちの手によって死を遂げる覚悟がある。　そして、その死は、このキスケントというキニク派の者――狂気じみており、知恵よりも高慢を愛し、哲学者という名に値しない者――によってもたらされるだろうと思う。彼は、確かな知識もないのに、キリスト教徒は無神論者であり（神を持たず）、多くの不浄で不法な行いをしているなどと断言する大胆さを持っているからだ；　彼は憎しみと悪意から、私たちをこのように中傷しているが、それは一般の人々よりもさらに悪い。なぜなら、一般の人々は、知らないことについて何も口に出そうとはしないからだ。

当時、ローマではハドリアヌスの後継者であるアントニヌス[4020]が統治していた。アントニヌス自身はキリスト教徒に対して敵意を抱いてはいなかったが、過去の皇帝たちの勅令により、民を支配していた不敬虔な偶像崇拝者たちは、キリスト教徒に対する激しい憎悪と、彼らの財産を略奪しよ

[4017] ローマ――ローマ帝国の首都であり、イタリア中部、ティベリス川の両岸、同川が海に注ぐ地点に位置している。

[4018] マルキオンは異端者――グノーシス派――に属し、目に見える世界は神によってではなく、神のより低い力によって創造されたと教えた。彼は旧約聖書を否定した。

[4019] キニク派（創始者はアンティセーン、紀元前4世紀）は、科学、芸術、そしてあらゆる外的な文化を拒絶し、質素な生活という教えを極限まで推し進めた。

[4020] 聖ユスティヌスの『弁明』は2つ知られている。1つ目は150年以前に書かれたもので、68章からなり、彼はこの著作を通じて、キリスト教徒にアントニヌス帝の庇護を得ようとした。2つ目（およそ162年に書かれた）は、マルクス・アウレリウス帝に、キリスト教徒に対してより寛大な対応をとるよう働きかけることを目的としていた。　哲学者ユスティヌスは、自身の弁明書において、「不当に憎まれ、迫害されているキリスト教徒たちを代表して」語っている。

うとする強欲から、キリスト教徒を迫害し殺害した。　キリストの御名を告白したからというよりも、多くの不法行為に関する虚偽の中傷的な告発を理由に、信者たちは裁判にかけられ、でっち上げられた誹謗中傷について尋問され、様々な方法で処刑された。　その頃、ローマで次のような出来事があった。ある異教徒の女性が、不品行な生活を送っていたが、キリスト教徒から真の神についての言葉や、貞潔な生活、義人への報い、そして罪人への苦しみについての教えを聞き、心を打たれてキリストを信じるようになった。　彼女は、熱心な偶像崇拝者であり、肉欲の不潔さに溺れていた夫に対し、節制ある生活へと導き、真の信仰へと回心させたいと願い、あらゆる手段で諭した。　しかし、彼を改心させることは全く不可能だと悟ると、彼女はもはや共に暮らし、不潔さに汚されることのないよう、夫との婚姻関係を解消する方法を模索した。夫は、どのキリスト教徒が妻にキリスト教の信仰を教えたのかを知ると、プトレマイオスという名のそのキリスト教徒を告発するために、都市の統治者のもとへ向かった。　キリストの僕であるプトレマイオスは捕らえられ、悪臭漂う牢獄に長く閉じ込められた後、裁判にかけられ、総督によって死刑を宣告された。この不当な裁判の最中、ルキウスという名の男がそこに立っており、祝福されたプトレマイオスが不当に有罪とされたのを見て、不公正な裁判官にこう言った。

「総督よ、どのような罪ゆえに、死に値しないこの男を死に追いやるのですか？彼は姦通者でも、強姦犯でも、殺人者でも、泥棒でも、強奪者でもなく、その他のいかなる不法行為についても告発されてはいません。彼の唯一の罪は、自らをキリスト教徒であると告白したことだけです。」

話している者を威圧的な眼差しで見つめ、市長は憤りを込めて尋ねた。

「お前もまた、キリスト教徒の一人ではないか？」

ルキウスは答えた。

「はい、私はキリスト教徒です。」

すると、市長は彼をも死刑に処すよう命じた。この二人のキリスト教徒に、彼らの友人である第三の者が加わり、皆の前で自らをキリスト教徒であると公言した。こうして三人は皆、キリストのために命を捧げた。

福者ユスティヌスは、この聖人たちの不当な殺害を知り、深い悲しみに満たされ、キリスト教徒の無実を証明する文書、すなわち『弁明書』（[4021] ）を執筆し、キリストのために苦難や死をも恐れることなく、それを皇帝、その息子たち、そして元老院全員に手渡した。　王はこの巻物を注意深く読み、キリスト教哲学者の深遠な知恵に感嘆し、彼を怒ったり死刑に処したりすることはなかったばかりか、その知性を称賛さえした。　この巻物の中で、ユスティヌスは異教の神々の虚偽を暴き、キリストの全能性を明確に描き出し、キリスト教徒に向けられた告発が虚偽であり、彼らの生活が貞潔で義にかなっていることを証明した。　心を動かされた王は、キリストの名を告白したからといって、キリスト教徒を拷問したり、その財産を略奪したりしてはならないと命じた。ただし、真に非難され、処刑に値する犯罪を犯した場合を除く。

聖ユスティヌスはこの皇帝の勅令を書き留めた。皇帝に解放された彼は、皇帝の許可を得て、当時キリスト教徒が特に迫害を受けていたアジアへと向かった。　死に至るまで脱ぐことのなかった

[4021] 2世紀から3世紀にかけて、キリスト教徒に対する激しい迫害のさなかに、ローマ政府や社会に対して、キリスト教の文学的擁護者および異教の糾弾者として立ち上がった高潔な人々は、教会史において「アポロゲート」――すなわち擁護者――として知られており、彼らの著作は総称して「アポロギア」と呼ばれる。　キリスト教会の歴史において、以下のアポロゲートが知られている。東方では：アリスティデス、コドラトス、　メリトン（サルディスの司教）、タティアヌス、アフィノゲネス、ミルティアデス、聖テオフィロス（アンティオキアの司教）；西方では：ミヌキウス・フェリクス、クィントゥス・セプティミウス・テルトゥリアヌス、アルノビウス、ラクタンティウス、そして聖キプリアヌス（カルタゴの司教）

哲学者の装いをしたユスティヌスは、エフェソス[4022] に到着し、王の勅令をすべての人に告げ、その内容を説明した上で、周辺の国々や都市へと伝達させた。キリストの教会には平穏が訪れ、迫害は一時的に止み、信者たちは大きな喜びに包まれた。　エフェソに滞在中、聖ユスティヌスは、賢明なユダヤ人のラビ、トリフォンと論争を交わし、旧約聖書を引用して勝利を収めた。この論争については、前述の弁明と同様に、ユスティヌスの著書に詳しく記されている[4023] 。

エフェソスにしばらく滞在した後、彼は再びイタリアに戻り、使徒たちの模範に倣って、旅の途中の至る所でキリストを宣べ伝え、議論を通じてユダヤ人やギリシア人を聖なる信仰へと導き、信者たちをその信仰に堅く立たせた。　彼がローマに到着すると、前述のギリシャ人哲学者でキニク派のクリスケントが、激しい憎悪と並々ならぬ悪意をもって彼に立ち向かった。聖ユスティヌスは彼と頻繁に論争を交わし、常に彼を打ち負かし、衆人の前で恥をかかせた。　ユスティヌスに対抗する術がなく、他にどうすべきかも分からなかった悪意に満ちたクリスケントは、ローマの法廷で彼に対して多くの虚偽の告発を行った。聖人は逮捕され、処罰に値する者として、手錠をかけられて苦しめられ、法廷で拷問を受けたが、彼には何の罪も見つからなかった。　一方、嫉妬に駆られたその男は、ユスティヌスが釈放されることを恐れ、密かに致死性の毒を用意し、それによって欺瞞的な手段で、この無敵のキリストの戦士から命を奪った。

こうして、[4024] 、真のキリスト教哲学者である聖ユスティンは、キリストの教会にとって極めて有益であり、聖霊の英知に満ちた多くの著作を残してこの世を去った[4025] 。 キリスト・主の御前に進み出て、彼は主から殉教の冠を受け、聖三位一体、すなわち父と子と聖霊を永遠に賛美する聖なる殉教者たちの列に加えられた。アーメン。

コンダク、第2調:

ユスティンよ、あなたの神聖な御言葉の英知によって、神の教会はすべて飾られ、あなたの生涯の輝きによって世界は照らされています。血を流した功績により冠を受け、天使たちと共にキリストの御前に立ち、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

聖殉教者ユスティノスとその仲間たちの殉教

記念日：6月1日

当時、あらゆる国や都市の偶像崇拝者たちは、敬虔で善き律法を遵守するキリスト教徒たちに対して、キリストを信じる者はすべて偶像への生贄を捧げるよう強制するという不敬な命令を下した。そこで、聖殉教者ユスティヌス、ハリトン、ハリタ（女性）、エヴェルピスト、イエラク、　ペオン、ヴァレリアヌスが捕らえられ、ローマへ連行されて、都市長官ルスティクスの裁判にかけられた。ルスティクスはユスティヌスにこう言った。

[4022] エフェソスは、小アジアのアシア州の主要都市であり、カイストル川沿いに位置している。現在、古代エフェソスの跡地には、セイシャ・セルユクと呼ばれる貧しいトルコの村がある。

[4023] 『ユダヤ人トリフォンとの対話』。

[4024] 165～166年。

[4025] 前述の著作に加え、古代には聖ユスティヌスの『魂に関する考察』、ならびに異教を糾弾した『ギリシャ人に対する告発』、『ギリシャ人に対する演説』といった著作も知られていた。　聖ヨハネス・ダマスコスによって、現存しないユスティヌスの著作『復活について』の大部分が保存されている。著名な教会史家エウセビオスは、ユスティヌスが『詩人』、『あらゆる過去の異端に対する非難』、および『マルキオンに対する論駁』という書物を著したと主張している。哲学者ユスティヌス自身も、第一弁明において、異端に対する自身の著作について言及している。哲学者ユスティヌスの最も傑出した著作は、『ユダヤ人トリフォンとの対話』と題された、ユダヤ人を批判する対話形式の著作であった。

「神々と皇帝の命令に従い、裁きを受けることのないようにせよ。」

聖ユスティヌスは彼にこう答えた。

「私たちの救い主イエス・キリストの戒めに従う者なら、誰も、いかなる時も、裁かれることはない。」

「お前はどのような教えを信奉しているのか？」と総督は尋ねた。

ユスティヌスはこう答えた。

「私はあらゆる世俗の教えを熱心に学び、あらゆる知識において熟達しましたが、その後、真のキリスト教の教えに帰依しました――たとえそれが、誤った思索に迷う者たちからは認められていないとしても。」

すると、ルスティクは言った。

「そうか、この忌まわしい者よ、お前は我々の思索に反する教えを愛しているのか？」

「はい、愛しています」と聖ユスティヌスは答えた。「私はキリスト教徒の正しい教えに従っているからです。」

「それはどのような教えなのか？」

「私たちキリスト教徒が揺るぎなく守っている正しい教えとは、目に見えるもの、目に見えないものすべての創造主であり造り主である唯一の神を知り、かつて預言者たちによって予告され、やがて人類を裁くために来られる神の御子、主イエス・キリストを告白することである。　主は救いの宣教者であり、徳に堅く立つことを望む者たちの師である。　その無限なる神性について、私のような力なき者、すべての者の中で最も卑しい者は、十分な力を持って語ることはできませんが、これが預言者たちによって予告されていたことを告白します。彼らは、私が「神の子」と呼んだお方が地上に来られることを、何世紀も前から予告していたのです。

市長は尋ねた。

「キリスト教徒たちはどこに集まっているのか？」

ユスティヌスは答えた：

「誰もが、自分の望む場所、行ける場所へ行くのです。まさか、私たち全員がひとつの場所に集まっているとお考えでしょうか？　それはあり得ないことです。なぜなら、キリスト教の神は特定の場所に留まっているのではなく、目に見えない存在として天と地を満たしておられるからです。至る所で信者たちは神を礼拝し、神の栄光は至る所で讃えられているのです。」

市長は言った。

「それでも、あなたがたがどこに集まるのか、またあなたが弟子たちをどこに集めているのか、答えてほしい。」ユスティヌスは答えた：

「私はこれまで、あるマルティヌスの家の近く、ティミオティニと呼ばれる浴場のそばにいましたが、ローマには今回が二度目の来訪であり、その場所以外の場所は知りません。私のもとを訪れたいと願う者すべてを、私は真の教えに導いてきました。」

「では、あなたはキリスト教徒なのか？」とルスティクが尋ねた。

「はい、私はキリスト教徒です」とユスティヌスは答えた。すると、市長はハリトンに向かって言った。

「お前もキリスト教徒ではないのか？」

聖ハリトンは答えた。

「神の御加護により、私もキリスト教徒です。」

その後、ルスティクはハリトンの妻ハリタに、彼女もキリストの信仰に従っているかどうか尋ねた。ハリタもまた、神の恵みにより、自分はキリスト教徒であると宣言した。それからルスティクはエヴェルピストに尋ねた。

「お前は誰だ？」

「私は王の奴隷です」と彼は答えた。「しかし、キリスト教徒として、キリストご自身が私に自由を与えてくださいました。その慈悲と恵みによって、私はあなたが目にしている人々と同じ希望を分かち合う者となったのです。」

続いて、総督はイエラクスに、彼もまたキリスト教徒ではないかと尋ねた。イエラクスは彼にこう答えた。

「まことに、私もキリスト教徒です。なぜなら、私も同じ神を尊び、その神に礼拝を捧げているからです。」

「あなた方をキリスト教徒にしたのはユスティヌスか？」と、市長は尋ねた。

イェラクス氏はこう答えた。

「私はこれまでキリスト教徒であり、これからもキリスト教徒であり続ける。」

そこにいた聖ペオンはすぐにこう言った。

「私もキリスト教徒だ。」

「誰があなたにキリスト教を教えたのですか？」

「両親からこの善き信仰を受け継いだのです」とペオンは答えた。

その後、エヴェルピストが言った。

「私も両親からキリスト教の教えを受けましたが、ユスティヌスの言葉に耳を傾けることで、キリスト教の信仰をさらに強固なものにしました。」

「では、あなたの両親はどこにいるのですか？」と、市長は尋ねた。

「カッパドキアです。」

それから、市長はイエラクサスに尋ねた。

「お前の両親はどの国に住んでいるのか？」

イエラクスはこう答えた：

「私たちの真の父はキリストであり、母はキリストへの信仰です。この世の両親はすでに他界しましたが、私はフリギアのイコニアからここへやって来ました。」

市長はヴァレリアヌスに目を向け、彼にも答えるよう促した。

「お前もキリスト教徒なのか。神々への信仰には熱心ではないのか？」

ヴァレリアヌスは答えた：

「私もキリスト教徒であり、唯一の真の神を尊び、その神に礼拝を捧げている。あなた方の神々については軽蔑している。」

再び、市長はユスティヌスに語りかけた。

「聞け、雄弁家と自称し、真の教えの信奉者と見なされている者よ。もし頭から全身に至るまで腫れ物で覆われたとしても、それで天国に入れるとでも思っているのか？」

ユスティヌスは答えた。

「もし私があなたが言ったような拷問に耐えるならば、キリストの教えを守り抜いた者たちに用意されているのと同じ報いを、私の主から受けられることを望みます。なぜなら、敬虔に生き、神のために何らかの苦難を受けた者たちすべてに、この世の終わりまで、神の秘められた恵みが待っていると知っているからです。」

これに対し、都市長官ルスティクは言った。

「では、お前は天に昇り、お前の神から何らかの報いを受けると信じているのか？」

「そうは思いません」とユスティンは反論した。「しかし、私はそれを確信しており、疑いなくそれを望んでいます。」

ルスティックは言った。

「さて、我々に待ち受ける務めに取り掛かろう。皆で集まり、共に神々に犠牲を捧げよ。」

これに対し、ユスティヌスは反論した。

「健全な判断力を持つ者なら、誰しも敬虔さを失い、迷いや不法に陥ることを望まないでしょう。」

市長ルスティックは言った。

「もし我々の命令に従わなければ、容赦なく苦痛を味わうことになるだろう。」

ユスティヌスはこう答えた。

「まことに、我らは主イエス・キリストのために苦しみを受け、救われたいと願う。なぜなら、これらの苦しみは、神の御命令により全世界が立ち向かうことになる主の最後の審判において、我らに救いと大胆さをもたらしてくれるからである。」

他のすべての聖なる殉教者たちも同様に語り、次のように付け加えた。

「さっさとその意図を実行せよ。我らはキリスト者である。偶像に犠牲を捧げることは決してない。」

これを聞いた都市長官は、次のように判決を下した。

「神々に犠牲を捧げることを拒み、王の命令に従わない者は、杖で懲らしめられ、ローマ法の定めるところに従い、斬首による死刑に処せられることとする。」

こうして、神を賛美する聖なる殉教者たちは、通常の処刑場へと連行され、傷を負い、斧で首を刎ねられ、救いをもたらす信仰告白のうちにその苦しみを終えた。　その後、信者たちの一部が密かに彼らの尊い遺体を運び出し、主イエス・キリストの恵みの助けにより、ふさわしい場所に埋葬した。主イエス・キリストに、世々限りなく栄光あれ。アーメン。

ペチェルスクの聖アガピト、無償の医師の生涯

記念日：6月1日

私たちの尊い父アントニー・ペチェルスキーが癒しの賜物によって称賛されていた時、キエフから至福のアガピトが彼の洞窟を訪れ、修道服を着用することで魂の癒やしを得たいと願った。　願いが叶うと、彼は心を尽くして聖アントニイの天使のような生活に倣い、その教えに従って歩んだ。アガピトは、この偉大な人物が自ら病人の世話をし、自らの祈りによって彼らを癒やす様子を目の当たりにした。その際、聖アントニーは自身の祈りに与えられた賜物を隠し、薬と偽って自分の食事から取った草を病人に手渡していた。これを見た至福のアガピトは、聖なる長老の功績に倣い、長年にわたり献身的に努めた。　兄弟たちの誰かが病に倒れると、至福の者は、盗まれるようなものが何一つない自分の小部屋を離れ、病める兄弟のもとへ駆けつけ、彼に仕えた。彼を抱き起こし、寝かせ、自分の腕で運び出し、病人の癒やしを神に絶えず祈り求めた。　もし病気が時に長引いたとしても、それは主が、御自分のしもべアガピトの信仰を増し加え、祈りを強めようとしておられたからである。　聖アントニオの偉業に倣い、至福のアガピトは、彼と同等の恵みにあずかるにふさわしい者とされた。彼は祈りによってすべての病人を癒やし、また、自ら食事として煮ていた薬草を彼らに与えた。そのことから、彼は「医者」と呼ばれるようになったのである。　彼に関する評判はキエフ中に広まり、多くの病人が彼のもとを訪れ、健康を取り戻して帰っていった。

当時、キエフにはある医師が住んでいた。彼はアルメニア系の出身で、アルメニア教徒であり、その腕前はかつて比類のないほど卓越していた。死に至る病に冒された患者を一目見るだけで、彼は即座にその死の日時を見抜き、告げることができた。その予測は常に外れることがなかった。そのため、彼はそのような患者を、いかなる理由があっても治療しようとはしなかった。　そのような病

人の一人、大公ヴセヴォロドの首席ボヤリンである[4026]　は、アルメニア人医師から「8日後に死ぬ」と宣告され、絶望の淵に追い込まれていたが、ペチェールスク修道院に運ばれた。　しかし、聖アガピトは彼のために祈りを捧げ、自らも口にしていた薬草を彼に食べさせ、彼を癒した。そして、その評判はたちまちロシア全土に広まった。　嫉妬の矢に刺されたアルメニア人は、至福の者を非難し始め、ペチェールスク修道院に、アガピトの前で毒を飲んで死ぬことになっていた死刑囚を一人送り込んだ。　聖人は、その男が死にかけているのを見て、彼のために祈りを捧げながら、自ら口にしていたその草を与え、それによって死に定められていた者を死から救った。それ以来、アルメニア人は聖人に対して特に敵意を抱くようになり、同信者たちをそそのかして、アガピト自身に致死性の毒を混ぜた飲み物を飲ませようとしたが、　しかし、聖人はそれを受け取ったが、無傷のままであった。*「主は、敬虔な者たちを試練から救い出す方法をご存知である」*（IIペテロ2:9）という御言葉通り、*「たとえ死に至るものを飲んでも、彼らには害を及ぼさない」*（マルコ16:18）のである。

その後、チェルニヒウでウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフ公[4027]　が病に倒れた。アルメニア人の医師は懸命に治療を試みたが、効果はなく、病状はますます悪化した。死の床に就いた公は、当時のペチェールシク修道院のイグメンであるヨハネに対し、　治療のために、チェルニヒウへ至福のアガピトを派遣するよう懇願した。　修道院長は彼を呼び出し、公爵の願いを伝えたが、修道院の外で治療を行うために門を出る姿をまだ誰も見たことのなかった至福のアガピトは、謙虚にこう言った。

「もし私がこの件で公爵のもとへ行くなら、すべての人々のところへも行かなければなりません。父上、お願いです。人間の栄光のために修道院の門の外へ出るよう私を促さないでください。私は神の前で、最期の息を引き取るまでそれを避けることを誓ったのです。もしよろしければ、私は別の国へ退き、この必要が過ぎ去った後に、再びここへ戻ってまいりたいと思います。」

公爵の使者は、至福のアガピト自身を主君のもとへ呼び出すことはできないと悟ると、せめて治癒のための薬草だけでも与えてほしいと懇願し始めた。修道院長の説得により、至福のアガピトは使者に自身の食事から薬草を与えた。それらは公爵のもとに運ばれ、公爵はそれを口にした途端、至福のアガピトの祈りによって即座に回復した。

そこで、ウラジーミル・モノマフ公は、神が彼に健康を取り戻させてくださったその人物に会いたいと願い、自らペチェールスク修道院を訪れた。彼はそれまで聖人に会ったことがなく、この時、彼を敬意を表し、惜しみなく贈り物を贈ろうとした。しかし、アガピトは世俗の名声を望まず、姿を隠してしまった。　そこで公は、神の聖人のために持参した金を修道院長に手渡した。しかし、しばらくして、その同じウラジーミルが再び、多くの贈り物を携えたボヤールの一人を、至福のアガピトのもとへ遣わした。使者は聖アガピトを独房で見つけ、公からの贈り物を彼の前に置いた。至福の者は彼にこう言った。

「わが子よ、私は（癒しの対価として）これまで誰からも何も受け取ったことはない。なぜなら、私は自分の力ではなく、キリストの力によって癒やしてきたからだ。今もそれを求めることはない。」

ボヤールは答えた。

「父よ。私を遣わした者は、あなたが何も求めないことを知っています。しかし、あなたを通して神が健康を授けてくださったあなたの息子を慰めるために、どうかこれを受け取ってください。そして、もしお望みなら、その贈り物を貧しい人々に施してください。」

[4026] ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチは、最初に6か月間（1075年～1076年）、そして1078年から1093年まで二度目の統治を行った。

[4027] その後、ウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチは1114年から1125年までキエフで公位に就いた。

長老は彼にこう答えた：

「そう言うのなら、喜んで受け取ろう。君を送り出した者にこう伝えてくれ。彼が持っている他のものもすべて、他人のものであり、死を迎える時には何も持ち去ることはできないのだ。だから、残りのものもすべて貧しい人々に分け与えなさい。　なぜなら、貧しい人々の間にいらっしゃる主ご自身が、彼を死から救われたのであり、私一人では何の力もなかったからだ。どうか彼が私のこの助言に背かず、これ以上大きな苦しみを味わうことのないよう願う。

そう言い終えると、聖アガピトは持ち込まれた金を受け取り、それを隠すかのように修道室から持ち出し、外に投げ捨てると、自ら逃げ出して姿を消した。しばらくしてボヤリンが出てくると、門の前に投げ捨てられた贈り物を見つけ、それを拾い上げてイオアンヌ修道院長に手渡した。　ボヤリンは公爵のもとへ戻り、聖人のところで目にしたこと、そして聖人から聞いたことをすべて語った。すると皆、彼が人々からではなく、ただ神からの報いを求める真の神の僕であることを悟った。公爵もまた、聖人の言葉に逆らうことを恐れ、貧しい人々に惜しみない施しを与え始めた。

数多くの神に喜ばれる労苦と功績を積み重ねた後、無償で診療を行っていた聖者アガピト長老もまた病に倒れた。これを聞いた前述のアルメニア人医師が彼を見舞いに訪れ、アガピトの病をどのような手段で治療すべきか問いかけ、医療技術について議論を始めた。

聖人はこう答えました。

「心と体の医者である主ご自身が、健康を与えてくださるその方法によってです。」

アルメニア人は、彼が医療について全く無知であると見なし、同行者たちにこう言った。

「彼は我々の医療の術について何も知らない。」

それから、彼の手を取り、こう言った。

「真実を言おう。三日目に彼は死ぬ。もし私の言葉が外れるなら、私は自分の人生を変え、自らも同じような修道士になるだろう。」

その聖人は熱くこう言った。

「なるほど、それがお前の治療法か。助けよりも死についてばかり語るのか！　もしお前に腕があるなら、私に命を授けてくれ。それができないのなら、なぜ私を辱め、三日目に死を宣告するのだ？　主は、三ヶ月後に私が主のもとへ旅立つと告げておられるのだ。」

アルメニア人は再び彼に言った。

「ほら、お前はすっかり変わってしまった。そんな者は決して三日以上生き延びることはない。」

聖アガピトは確かに極度の衰弱状態にあり、他人の助けなしには身動きすらできなかった。その間、最も重病であった聖アガピトのもとへ、キエフからある病人が癒やしを求めて運ばれてきた。聖人は神の助けにより、まるで病気などなかったかのように即座に立ち上がり、普段口にしている薬草を取り出してアルメニア人に見せながら、こう言った。

「これが、私が治療に用いる薬草だ。よく見て、理解せよ。」

その男はそれを見て、聖人にこう言った。

「これは我々の草ではないが、おそらくアレクサンドリアのものだろう。」

福者は、その男の無知を戒めつつ、病人にその薬草を味見させ、祈りを捧げると、たちまち彼を健康な状態に戻した。その後、彼はアルメニア人にこう言った。

「わが子よ、もし望むなら、私と一緒にこの薬草を口にしてほしい。他にあなたをもてなすものはないのだから。」

「父よ」とアルメニア人は答えた。「私たちはこの月、四日間断食しており、今まさに断食中なのです。」

これを聞いて、聖人は彼に尋ねた。

「あなたはどなたで、どのような信仰をお持ちですか？」

すると、彼は答えた。

「私がアルメニア人だということは、聞いたことがないのですか？」

すると、聖人は彼に言った。

「よくもまあ、ここに入り込んで私の庵を穢し、さらに私の罪深い手を握るなどという無礼を働いたものだ。異教徒[4028]、不信心者よ、私の前から立ち去れ。」

すると、その男は恥じ入って立ち去った。

その後、聖アガピトは、以前予言していた通り、三ヶ月を生き、少し病に伏した後、主のもとへ旅立った。地上で無償の医師であった彼は、病のない天国において、すでに偉大な報いを受けたのである。　兄弟たちは、その尊い遺体を埋葬の準備を整え、慣例通りの賛美歌を歌いながら、聖アントニオの洞窟に安置した[4029]　。聖人の死後、あるアルメニア人がペチェルスク修道院を訪れ、修道院長にこう言った。

「これからは、私はアルメニアの異端を捨て、主イエス・キリストを真に信じます。その主のために、聖なる修道生活の中で奉仕したいと願っています。祝福されたアガピトが私に現れて、こう言いました：

「あなたは修道者の姿を受け入れると約束しました。もし嘘をつけば、命も魂も滅ぼしてしまうでしょう。」　私に現れた方は聖なる方であると信じています。もし彼がここで長く生きたいと願ったなら、神はそれを彼に与えられたでしょう。私は彼が三日も生き延びられないだろうと思っていましたが、神は彼に三ヶ月の命を授けられました。もし彼が望んだなら、三年も生きられたことでしょう。　しかし、私は、彼自身が聖人として、聖徒の御国へと向かうべく、私たちのもとを去りたいと望んだのだと思う。もし神が彼をこの修道院での現世の生活から召されたのなら、その代わりに天の修道院で永遠の命を授けてくださったのだ。それゆえ、私はこの聖なる人の命じられたことを一刻も早く果たしたいと願う。

修道院長は、アルメニア人の話を聞き終えると、彼を修道士として剃髪させ、この「肉体の医者」に対し、至福のアガピトに倣って、自らの魂を癒す術に長けるよう、長く教えを授けた。　そのアルメニア人は神に喜ばれるように精進し、残りの生涯を同じペチェルスク修道院で過ごし、そこで至福の死を迎え、自らの魂を、魂と肉体の医者である　主イエス・キリストの御手に委ね、主は、初めなき御父と、至聖なる、善き、命を与える御霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、賛美されますように。アーメン。

私たちの尊い父、グルシツキー修道院のイグメン、新たな奇跡行者ディオニシオスの記念日

記念日：6月1日

[4028] アルメニア人は、ハルキドンで開催された第4回全地公会議（451年）で非難された単性論の異端を信奉しており、それに続くすべての全地公会議を拒否している。　モノフィシテス派の異端の本質は、二つの本性から生まれた主イエス・キリストが、実際には二つの本性の中に存在しているわけではないという教義にある。すなわち、神である御言葉の御顔における人間の本性は、その神性の本性と極めて密接に結びついているため、概念上のみその神性とは区別できるに過ぎないからである。　古代ルーシでは、一般的にアルメニア人を邪悪な異端者とする見方が存在していた。例えば、キプリアン都主教（1376–1406）は、その教会法上の回答の中で、アファナシイ修道院長に次のように記している。「アルメニアの異端は、あらゆる異端の中でも最も忌まわしいものである。　このゆえに、正教の農民（すなわちキリスト教徒）は、彼らと一切の交わりを持つべきではない」

[4029] 聖アガピトは遅くとも1095年までに死去し、その聖遺骨は聖アントニオの洞窟に安置されている。

この尊い父ディオニシオスは、当初、ヴォログダ市の東、十四ポプリシュ（[4030] ）の距離にある、ヴェリキー・クベンスキー湖（[4031] ）と呼ばれる湖の近くで修業に励んでいました。 その後、彼はその地を離れ、パホミイという名の修道士を伴い、前述の湖の周辺に点在する多くの場所を巡り、人里離れた場所で神への奉仕に専念できる場所を探し求めた。　尊者ディオニシウスとパホミイは、ルチツァ[4032] と呼ばれる集落にたどり着き、まずそこで自分たちの修道室を建て、その直後に聖ニコラオスに捧げる教会を建立し、ロストフの司教グリゴリーの祝福を受けてそれを奉献した。　その後、彼らと共に暮らし、魂の救いのために修業を積もうと、修道士たちが集まり始めた。指定された場所に修道院を設立した聖ディオニシウスは、そこに共同生活区を設け、その後司祭の聖職に就き[4033] 、清らかな心をもって主に捧げ物を捧げるようになった。

その直後、尊者ディオニシオスは、自ら設立した修道院の院長として、前述の弟子パホミオスを任命し、修道者たちに平安の祝福を与えた後、自ら修道院を離れ、十五ポプリシュの距離にあるグルシツァ川へと向かい、そこで一晩を過ごした。　うとうとした夢の中で、彼はまるでこの人里離れた場所で響き渡り、自分を呼ぶような声を聞いた。　彼はすぐに目を覚まし、大きな喜びを感じ、祈りを捧げた後、持参していた十字架をその場所に立て、その後、ある木の下――その木は現在も修道院の敷地内に生えており、黒い実をつけ、「チェレムハ」と呼ばれている――に、自分用の小さな小部屋を建てた。　ある男が歯痛に苦しんでいたが、信仰を込めてその木の実を食べると、たちまち健康を取り戻した。その後、尊者ディオニシウスはこの場所で、厳格な禁欲、徹夜の祈り、断食、そして祈りに身を捧げた。　そしてしばらくすると、修道士たちが次々とこの場所を訪れるようになり、彼の弟子たちの数は増え続けた。これを見た聖ディオニシウスは、この場所に至聖なる聖母マリア、その尊き「ポクロフ」[4034] の名を冠した教会を建て、修道院を設立した。 それから数年が経ち、修道士たちの数は増え続け、教会のスペースでは手狭になったため、彼らは聖ディオニシウスに、この教会よりも大きな別の教会を建ててほしいと願い出た。　修道者たちの願いに応え、尊者ディオニシオスは最初の教会よりもはるかに大きな新しい教会を建設し（[4035] ）、見事なイコンで装飾し（[4036] ）、書籍を備え付け、倦むことなく修道者たちを教え導き、彼らの魂に益となることを説いた。

ある日、尊者が礼拝のために教会へ向かおうとしたとき、大勢の悪魔が彼に襲いかかった。歯ぎしりをしながら、彼らは彼を殴りつけ、その後、床を剥がして彼をそこに寝かせ、こう言った。

「この場所から立ち去れ。さもないと、お前は悲惨な死を遂げるぞ！」

しかし、聖人は祈りによって彼らの弱い力を打ち破り、彼らはたちまち姿を消した。その間、聖人の姿が見えないと気づいた兄弟たちは、彼の独房を訪れ、床板に押しつぶされている彼を見つけると、床を持ち上げた。すると、聖人は彼らにこう言った。

[4030] 「ポプリシュチェ」とは、690サジェーニに相当する距離の単位である。

[4031] 聖ディオニシウス（俗名ディミトリイ）は、1362年にヴォログダ市の近郊で生まれた。彼の両親や修道生活に入る前の生涯については、記録が残されていない。　彼は、クベンスコエ湖畔にあったスパソカメンナ修道院の院長ディオニシウスによって出家し、この修道院で9年間修行に励んだ。クベンスコエ湖が「大湖」と呼ばれるのは、おそらくヴォロゴダ地方のすべての湖の中で最も大きいからである。

[4032] 「聖ルカ」とも呼ばれるルチツァの集落は、クベンスコエ湖の湖畔、クベニ川の河口付近に位置していた。ここには、尊者ディオニシウスが到来する以前から廃墟となっていた修道院が存在しており、ディオニシウスはそれを再建した。

[4033] 聖ディオニシウスは、ロストフの大司教グリゴリーによって司祭に叙階されたが、フィラレート大主教（『聖人伝』、6月号、11ページ）によれば、それはルチツァの教会が完成する前であったという。

[4034] この教会は1403年に建てられた。クベンスクの公ディミトリは、尊者ディオニシウスを支援したいと考え、その建設のために自身の職人や大工を派遣した。

[4035] この2番目の教会は、最初の教会から9年後の1412年に建てられた。

[4036] 聖ディオニシウスは熟練した画家であったため、自らイコンを描いていた。彼の筆によるイコンは、現在も保存されている。例えば、プリルツク修道院には、彼が描いた聖ディミトリイのイコンが展示されており、キリロ＝ベロゼルスク修道院の大聖堂のイコノスタスには、聖キリルのイコンがあるが、これも彼の作品である。

「兄弟たちよ、敵が私たちに対してどのような戦いを仕掛けているか、ご覧になったでしょう。しかし、それによって私たちが怯えてはなりません。」

その後、ディオニシオス聖人は修道院の兄弟たちには内緒で修道院を離れ、大修道院[4037] から南へ4ポプリシュの距離にある、同じグルシツァ川のほとりに位置し、「ソスノヴェツ」と呼ばれていた人里離れた場所へと向かった。 そこで彼は、洗礼者ヨハネに捧げる教会[4038] を建立し、ケリイを建て、自身の修道院から一部の修道士たちをここに移住させた。彼は彼らに、ここが自分の遺体が埋葬される場所になると告げ、生活に必要なものはすべて大修道院から受け取るよう伝えた。 この最後の修行の地で、聖人は亡くなる7年も前に自ら墓穴を掘り、毎日、そこに自分の遺体が納められる時が来ることを思い起こせるようにした。 この時から、彼は断食、祈り、不眠による神への奉仕をさらに強化し、何度も一晩中、寒さの中を立ち続け、それによって自らの肉体を苦しめた。 キリストの力によって数多くの奇跡を行い、魂が旅立つ前に至聖なる御体と御血を聖体拝領した後、聖ディオニシオスは永遠の安息へと旅立った」[4039] 。

トロパリオ、第1声:

若き日から神の愛に燃え上がった尊者ディオニシオよ、この世のあらゆる美しいものを憎み、ただキリストのみを愛した。そのゆえに、あなたは内なる荒野に住み、獣たちと共に生き、すべてをキリストに捧げた[4040] 。 それゆえ、全知全能の御目[4041] は、あなたの労苦をご覧になり、奇跡の賜物をもって、またこの世を去った後もあなたを豊かにしてくださった。それゆえ、私たちはあなたに叫びます。「私たちすべてのために絶えず祈ってください。あなたの尊い御名を、歌の中で常に称える者たちのために。」

コンダク、第8調:

あなたは、神への知的な願いをすべて注ぎ込み、心から揺るぎなく神に従い、荒野に住み着き、そこで天使のように生き、多くの人々にとって救いへの道となりました。このゆえに、キリストはあなたを称え、奇跡の賜物をもって豊かにしてくださったのです。 それゆえ、我らは皆、あなたにこう叫びます。「喜びなさい、尊きディオニシオスよ、荒野の住人よ。」

6月15日

6月2日（旧暦）

[4037] ここで「ポクロフスキー修道院」と呼ばれるのは、同尊者が去ったその修道院のことである。

[4038] この教会は1420年に建立された。

[4039] 聖ディオニシウスは、1437年6月1日の日曜日、74歳でこの世を去った。 1547年、マカリー大主教の在任中に開催されたモスクワ公会議は、彼を聖人の列に加えた。16世紀には、彼に捧げられた最初の教会が建設された。彼の聖遺骨は、ソスノヴェツ修道院内の聖ディオニシウスと聖アンフィロキオスに捧げられた教会で、地下に安置されている。 修道院には2つのイコンが保管されており、1つは「聖母の庇護」、もう1つは「聖母の御徴」であり、伝承によれば、いずれも尊者ディオニシオスによって描かれたものである。 尊者の容貌は次のようであった。身長は低く、体は極めて痩せていたが、頭はそれなりの大きさで、眉は半円形、顔は細長く、頬はこけ、目は穏やかで、あごひげは胸まで届くほど濃く、髪は明るい金髪で、半分白髪交じりであった。

[4040] 「キリストにすべてを捧げた」、すなわち、自らのすべてをキリストに捧げ、そのすべての力をキリストの戒めの履行に捧げた。

[4041] 「すべてを見通す目」、すなわち、すべてを見通す神。

聖ニキフォロス・殉教者、コンスタンティノープル総主教の聖人伝

記念日6月2日

敬虔さの偉大な擁護者である聖ニキフォロス聖人は、コンスタンティノープル[4042] で、敬虔かつ神を畏れる両親テオドロスとエウドキアの間に生まれた。その父は、聖なるイコンを崇敬したために傷を負い、追放されるという苦難を耐え忍び、殉教者の冠にふさわしい栄誉を授かった。　コプロニモス帝の治世[4043] 、彼は王室の機密事項を担当する書記官[4044] を務めていましたが、不義な皇帝のもとへ、彼が聖なるイコンを敬虔に崇め、救い主、聖母マリア、そしてすべての聖人の像に礼拝を捧げているという密告が寄せられました。　皇帝は直ちに至福のテオドロスを呼び出し、尋問を行い、密告の真実性を確認すると、長い間、彼にイコン崇拝をやめるよう強要した。　しかし、キリストのしもべが王の意志に従わなかったため、激しい拷問を受けた後、モリンの町へ流刑に処され、そこで恐ろしい牢獄に放り込まれ、正統信仰のために苦しみ続けた。　しばらくして、彼は再びコンスタンティノープルに呼び出され、皇帝が説く異端に屈服するよう、さらに執拗に強要された。しかし、彼は[4045] のように堅固な信仰を貫き、教会の掟や聖なる教父たちの伝承を破るよりは、むしろ傷を負い、死を選ぶことを選んだ。　不法な皇帝の命令により、彼は再び様々な残酷な拷問にさらされ、再び追放された。ニカイアで[4046] 、囚人として、また苦難の身として6年間を過ごした後、彼は主のもとへ旅立ち、至福の生涯における永遠の自由へと至った。

彼の妻である高潔なエウドキアは、夫のあらゆる苦難と災いに共に立ち向かい、彼に従って流刑の地へ赴き、肉体的にも精神的にも彼と離れることなく、束縛の中で苦しんだ。　夫の死後、彼女はコンスタンティノープルに戻り、キリスト教の未亡人にふさわしい、神に喜ばれる日々を過ごした。その間、息子のニキフォールは学問を修めた後、宮廷において父と同じ地位に就いた。　その後、至福のエウドキアは、まず天使の姿として、そして聖職者の位に就いた息子を目にする恵みにあずかった。そこで、神に感謝を捧げた後、彼女は女子修道院に身を寄せ、修道衣をまとい、神に喜ばれる行いを重ねた末、尊い老齢のうちに主のもとへ召された。

ここで語る祝福されたニキフォロスは、聖なる根から生えた聖なる枝であった。母の乳を飲みながら敬虔に育てられ、善良な品性を身につけ、神に喜ばれる生き方を教え込まれ、　彼は若き日を貞潔に、大いなる節制をもって過ごし、外面的・内面的、すなわち世俗的・霊的な知恵に満ちていた。彼はギリシャの知恵を愛する者たちの書物だけでなく、神の聖書をも完璧に学び尽くした。　雄弁な演説家であり、あらゆる美徳に恵まれ、知性と高潔な品性を兼ね備えていた彼は、すべての人から愛され、尊敬されていた。 成人したニキフォロス（コプロニモスの息子レオの治世下[4047] ）は、王室顧問の位を授かり、異端者たちの只中で正統信仰を守り、聖なるイコンを崇拝するとともに、神に導かれた説得によって他の人々をも同じ信仰へと導いた。　その後、レオの死後、その息子コンスタン

[4042] コンスタンティノープル、あるいはツァールグラード――ビザンツ帝国（現在のトルコ）の首都。4世紀にコンスタンティヌス大帝によって、かつてのビザンティウムの地に築かれた。

[4043] コンスタンティノス5世コプロニモスは、741年から775年まで在位した。

[4044] 「ノタリオス」とは本来、「速記者」を意味する。西暦初期には、公文書に署名・捺印を行う皇帝の秘書官をこう呼んでいた。コンスタンティヌス大帝の時代には、最も重要な国家会議の議事録を作成するノタリオスの秘密事務局が設置された。コンスタンティノープル総主教の秘書官もまた、ノタリオスと呼ばれていた。

[4045] 「アダマント」はギリシャ語から訳すと「ダイヤモンド」を意味し、その硬さが際立つ石である。

[4046] ニカイアは、記述された当時、ビフィニア沿岸地方の重要な都市であったが、現在はイシニクという名の貧しい村となっている。キリスト教会の歴史において注目すべき点は、ここで最初の（325年）全地公会議が開催されたことである。

[4047] レフ4世・ハザールは776年から780年まで在位した。

ティノスと、その母イリーナ[4048]の治世において、ニカイアで偶像排斥の異端[4049]に対抗する第7回全地公会議が招集された際、　その時、まだ平信徒であった至福のニキフォロスは、賢明で聖書に極めて精通した人物として、公会議に出席した聖なる父たちに多大な助力をもたらした。また、卓越した貴族としての地位ゆえに、彼は皇帝の名において公会議で演説する任務を任された。

このように、司教に叙任される以前から、彼は正教の殉教者かつ教師としての資質を示し、論争の的となった問題の解決において異端者たちを論破した。その功績により、公会議の聖なる父たちは彼を称え、祝福した。

その公会議の後、ニキフォロスはいまだ数年間、世俗の栄誉ある地位である王の顧問として留まった。その後、虚栄に満ちた反逆的な世のために働くことが魂に益をもたらさないことを確信し——宮廷で息子と母親の間に不和が生じ始めているのを見て—— ——ニキフォロスはいとわしい 栄光を顧みず、高い地位を捨て、都を離れ、トラキアのボスポラス海峡[4050]のほとりの、人里離れた静寂な一角に定住した。そこで彼は、ただ神のために孤独に奉仕し始め、祈りと断食を通じて自らの救いを求めた。　しばらくして、彼は教会を建て、修道士たちを集めて修道院を設立した。自身はまだ修道服を身にまとっていなかったが、すでに修道士として働き、苦難に満ちた修道生活という試練に耐えられるかどうかを自ら試していた。そして、彼はニキフォロス帝の治世のほぼ半ばまで、長年にわたりそのように暮らした[4051]。

コンスタンティノープル総主教タラシウスが主のもとへ召された後、至聖なるニキフォロス（外見は平信徒でありながら、生活においては完全な修道士であったが、総主教に選出され、その際に初めて修道服を身にまとい、その後、まず司祭に叙階され、さらに自身の望みとは裏腹に、ニキフォロス皇帝の説得により、聖なる復活祭の最も輝かしい日に主教の座に就いた。　そして彼は、教訓に満ちた言葉と徳高い生活をもって聖なる教会を輝かせ、堕落した者を正し、正しい者を励まし、異端者たちを、言葉の群れから狼を追い払うかのように追い払った。その頃、ギリシャ人とブルガリア人の間で戦争が起きており、戦場へ向かったニキフォロス王は戦死した。　彼の後を継いでその息子スタヴリキオスが統治したが、その期間はわずか二ヶ月で、その後亡くなった。スタヴリキオスの後を継いで王位についたのは、ランガヴと呼ばれた敬虔な人物ミハイルであり、彼は以前キロパラトの位にあった[4052]。二年後、ギリシャ王国の王笏を奪ったレフ・アルメニア人[4053]によって、彼は追放された。　聖なるニキフォロス王は、この強奪者が王位に就く前に、正教の信仰告白書を持った司教たちを彼のもとへ遣わし、かつての敬虔な王たちの慣例に従い、その告白書に記された聖なる信仰の教義を不変に遵守するという誓約に、新王が自らの手で署名するよう求めた。　狡猾で偽善的な王は、口先では敬虔であるかのように振る舞い、信条に署名することを約束したが、戴冠式の後まで待たなければならないと述べた。

「王冠が私の頭に戴かれる時、その時に署名する」と彼は言った。

そして人々は、この狐のような男を信じてしまった。敬虔な信仰の告白書の代わりに、この諂い者は、異端者たちが密かに持ち込んだ書物に署名し、真の羊飼いよりも、むしろ自分と同じような貪欲な狼たちに従ったのである。　その後、彼は王としての壮麗さと栄光を帯びて、ソフィア大聖堂に入場した。そして、通常の王冠戴冠式が執り行われ、至聖なる総主教がその不適格な頭に王冠を戴

[4048] 息子のコンスタンティノス皇帝（ポルフィロゲネトス）が幼少であったため、統治の初期にはイリナが政務を執っていた。

[4049] 787年にニカイアで開催された第7回全地公会議は、偶像排斥運動を非難し、聖像崇拝を復活させた。

[4050] 黒海とマルマラ海を結ぶボスポラス海峡、すなわちコンスタンティノープル海峡は、同様の名称を持つ多くの海峡とは区別して、フラティウス海峡と呼ばれている。

[4051] ニキフォロス帝は802年から811年まで在位した。

[4052] ミカイル1世は811年から813年まで在位した。キロパラトは宮殿警備隊の長である。

[4053] レウ・アルメニア人は813年から820年まで在位した。

かせようとしたとき、神は総主教に、この王がどのような者であるかを明らかにされた。　というのも、戴冠用の王冠が総主教の手の中で、あたかも茨の冠へと変わり、その棘が総主教の手を痛々しく刺し貫いたからである。総主教は、これがまもなくその王から降りかかる迫害と拷問の前兆であることを悟り、心を痛めながら、そのことを自身の聖職者たちに告げたのである。

結婚式から翌日、聖ニキフォロスはいっそう強く、王に対し、かつての敬虔な王たちの例に倣って、約束を果たし、正教の信仰告白書に署名するよう求めた。しかし、レウスはすでに虚偽の道を歩み始めており、王の紫の衣を汚すような行為に及んで、聖人の提案を断固として拒否した。　しばらく時が経つと、王は聖なるイコンを公然と冒涜し始めた。その矛先は、ギリシャに四方八方から侵攻し、国を荒廃させていた敵ではなく、キリスト、聖母マリア、そしてすべての聖人のイコン、さらにはそれらを崇拝する者たちに向けられていた。　コンスタンティノープルに、様々な罪により規定に従って神聖な祭壇での奉仕から破門されたすべての司教と司祭たちを呼び集め、彼らを王宮に宿らせ、まるで飼育されている獣のように養い、それによって「腹[4054] 」と呼ばれる者たちの好意を買い、　皇帝はしばしば彼らと懇談し、偶像排斥の異端について学び、第七回全地公会議で退けられた偶像に対する冒涜的な教義を、どのような手段で復活させるべきか相談した。　彼らを自分と意見が一致するように誘導しやすくするため、彼は、彼らが剥奪されていた以前の位階を回復するだけでなく、さらにその栄誉を増すことを約束した。　王の恩寵に驕った彼らは、王を熱心に助け始め、至る所で正信者たちを迫害して騒ぎ立てた。王の名の下に、彼らは各地から数え切れないほどの書籍を集め、共同でそれらを検討した。　もし、聖像に反対して書かれた異端の書物を見つけると、それを正統な福音書であるかのように喜んで受け入れ、手元に保管した。一方、　聖像排斥の異端に反対して書かれた書物に出くわすと、彼らはそれを即座に忌まわしいものとして火の中に投げ込み、焼き払った。　その後、皇帝はすべてのギリシャ人司教に対し、コンスタンティノープルに集まって公会議を開くよう命じた。司教たちはそれぞれの地から出発し、都に到着すると、慣例に従って聖なるニキフォロス総主教のもとを訪れた。しかし皇帝は、そうした司教たちを直ちに捕らえて牢獄に投じるよう命じた。　その中から、皇帝の恐ろしい怒りや迫害を恐れて、皇帝との異端的な同調に傾いた者たちについては、皇帝は彼らを束縛や牢獄から解放し、栄誉を授けた。一方、正統信仰を揺るぎなく守り続けた者たちに対しては、不名誉な束縛で抑圧し、飢えと渇きで苦しめた。　非常に多くの人々が恐怖に駆られて王との同調に加わり、異端の集団は相当な勢力を得た。偽の教師たちは、あらゆる教会で大胆かつ妨げられることなく、冒涜的な教えを広め始め、民衆に聖なるイコンを崇拝しないよう唆し、　一方、正統信仰の真の教師たちは教会から追放され、害を被らされ、さらには神の御声を伝えるラッパである至聖なる総主教でさえ、沈黙を強いられ、大聖堂への立ち入りを禁じられようとした。

神の僕である聖ニキフォロス聖人は、教会で起きているすべてのことを耳にし、目にして、絶えず涙を流しながら神に祈り、神が御自身の教会を汚れのないまま守り、御自身の羊の群れを異端者たちから無傷で守ってくださるよう願った。　多くの正信者を自分のもとに呼び集め、彼は彼らを諭し、懇願し、教え導いた。すなわち、異端者たちと結ばず、パン種を避け（マタイ16:6；　ルカ12:1–9）や、その教えを避けること――それはマムシの咬み傷のようなものだから――また、当時の激しい迫害や、魂ではなく肉体だけを殺す拷問者の脅しを恐れてはならない（ルカ12:4–10）と。

「たとえ」と彼は教えた。「民全体が王に従って異端に傾き、正しい信仰に忠実な者がわずかしか残らなくても、残された者たちはその少数であることを気にする必要はない。主は多数を好まれるわけではないからだ。　主は、神の畏れを軽んじる大勢の人々よりも、御言葉を恐れ、震える一人の者を、より深く顧みておられる。それは福音書にある御言葉の通りである。*『恐れるな、小さな群れよ。あなたがたの父は、あなたがたに御国を与えることを喜ばれたからである』*（ルカ12:32）。

4054 *「彼らの終わりは滅びであり、彼らの神は腹であり、彼らの栄光は恥にあり、彼らは地上のことを考えている」*（フィリピ3:19）。

その後、至聖なる総主教は、最も著名な司教たちを召し出しました：　エミリアノス・キジケス、エウフィミオス・サルディス、ヨセフ・テッサロニキス、エウドクシオス・アモレイオス、ミハイル・シナドス、テオフィラクトス・ニコミディオス、ペトロス・ニカイオス、そして他にも多くの聖なる父たち――その中にはテオドロス・ストゥディトス[4055] 、ミディキオスの修道院長ニキタ、その他の正信の紳士たちも含まれていた。　聖なるイコンの崇敬について、聖書と聖なる教父たちの伝承に基づいて彼らと長い対話を交わした後、彼は夕方、聖ソフィア大聖堂へ向かい、徹夜礼拝を始め、教会に平和がもたらされ、異端から救われるよう神に祈った。　このことを知った皇帝は、徹夜礼拝のために教会に集まった大勢の民衆の中で、総主教が自分に対して反乱を起こすのではないかと動揺し、恐れをなした。彼は、民衆が総主教を愛しており、皆が喜んで彼に従い、彼のために死ぬ覚悟さえあることを知っていたからである。　そこで、夜明けとともに、王は教会にいる総主教のもとへ使いを送り、こう告げさせた。

「なぜ、お前は民を惑わせ、平和と一致を望む皇帝に対して陰謀を企てるのか？　なぜ、狂った者たちを反乱へと駆り立て、内戦の血で都を満たそうとするのか？」

至聖なる総主教は、王の使者にこう答えた。

「あなたがたがおっしゃるようなことは、我々は微塵も考えてはいない。ましてや、あなた方を遣わした王が我々についてどう思っているかなど、我々の頭には一度も浮かんだことはない。」我々が神の家に集まったのは、王に敵対する何らかの評議のためではなく、神を賛美し、祈りと嘆願を捧げるためである。神が御心を和らげ、御自身の教会と王、そして民全体を平和で守り、異端の迷いを廃し、すべての人を一致した正統信仰に確固たるものにしてくださるよう願うためである。

使者たちは言った。

「いいえ、それはあなたが言うようなことではありません。あなたは口ではあることを言いながら、心の中では別のことを考え、その考えを実行に移そうとしているのです。　そして、あなたが明らかに王に反旗を翻そうとしているのだから、その日が来たら、あなた自身と志を同じくする者たちは王の御殿へ行き、そこで我々が提示した質問に王ご自身に直接答えてください。そうすれば、王もまた、あなた方の意図についてより詳しく知ることができるでしょう。

そう言い終えると、使者たちは去っていった。教会にいた者たちは皆、この光景を見て、この言葉を聞いて、これから何が起こるか――神の僕とキリストの教会全体が、どのような迫害と苦難に

[4055] 聖テオドロス・ストゥディテスは、若くして修道生活の道を歩み始め、当初は叔父である聖プラトン（記念日は4月5日、第7回全地公会議でその像が崇敬された）の指導の下で修行に励んだ。その後、聖テオドロスはコンスタンティノープルのストゥディオス修道院の院長となり、　この修道院は、彼の統率の下、かつてないほどの高みに達した。聖テオドロスは、皇后マリアと不法に離婚し、さらにフェオドータとの不法な結婚によってその罪を重くした皇帝コンスタンティノス・バグリアノロドスを糾弾したため、コンスタンティノープルから二度追放された。　流刑先からストゥディオス修道院に戻った後、聖像に対する迫害が勃発した際、聖テオドロスは聖像破壊派の脅迫を意に介さず、敬虔な修道士たちと共に公然と十字架の行進を行った。　そこで、皇帝レウ・アルメニア人は彼を流刑に処し、彼は湿気と蒸し暑さに満ちた牢獄に閉じ込められ、度重なる残酷な拷問にさらされた。　ミカイル・コスノヤズニク帝の治世下で、聖テオドールは流刑地から解放されたが、監禁生活で衰弱していたため、長くは生きられなかった。826年11月11日、67歳で死去し、この日が彼の記念日となっている。　聖テオドロスが息を引き取る瞬間、ダルトマスの聖イラリオンは、天から降りてくる天使の群れを目にし、次のような声を聞いた。「見よ、ストゥディオスの修道院長テオドロスの魂が、栄光のうちに天へと昇り、天の軍勢がそれを出迎えている」。
聖テオドロスは、説教、布告、書簡、カノン、スティヒル、エピグラム、伝記など、数多くの著作を残した。　ロシア語による聖テオドール師の著作の最も完全な集成は、雑誌『キリスト教の読書』の編集部によって、同誌の1907年および1908年号の付録として刊行された。

直面することになるかを悟り、さらに熱心に、多くの涙と嘆きをもって祈り始めた。　徹夜祷が終わると、聖ニキフォロス大主教は教会の真ん中に進み出て、皆に聞こえるように説教した。

「神の御霊によって集められた会衆よ！　聖なる教会が、今我々の目の前で起きているような災難に見舞われることなど、誰が予想しただろうか！？　喜びの代わりに悲しみを味わい、静寂から動揺へと移り変わっている。良き牧草地で言葉の群れを牧している教会は、堕落した者たちによる略奪に遭い、すべての子供たちを一致へと導く母は、引き裂かれているのだ！　キリストがご自身の尊い血によって贖い、あらゆる不品行から清く保たれ（エフェソ5:27）、使徒たち、預言者たち、殉教者たち、そしてあらゆる階級の聖人たちによって守られ、壁で囲まれた楽園のように示されたその教会は、　――今や、外見は私たちに似ているが、実際には私たちから遠く離れ、私たちの敵となり、その悪意が極限に達して、像とともにそこに描かれた者をも冒涜し、板に描かれたキリストの御顔とともにキリストご自身をも拒絶している人々から、どのような災難に苦しめられていることか。　なぜなら、像に加えられる栄誉も不名誉も、イコンに描かれたその人自身に帰属するからです。今や、真理の敵たちは、聖なるイコンを崇敬するという古来の教会の伝統を破壊し、異端者たちが考案した、以前のものとは正反対の新しい伝統を正当化し、それによって信徒たちの魂を惑わせています。兄弟たち、そして子供たちよ！　お願いいたします。恐れたり臆病になったりせず、彼らの脅しに心を怯えさせず、神の助けを待ち望みましょう。　私たちに敵対し、教会から真理を根絶やしにしようとする者たちは、川の急流に逆らって泳ぐ者のようなものです。彼らは結局、力尽きて深みに沈んでしまうでしょう。なぜなら、真理は打ち勝つことができず、それを尊ぶ者を栄光に導き、それに敵対する者を打ち負かすからです。　真理に固執する者は、たとえ無防備であっても敵を打ち負かすだろう。真理を失った者は、たとえ戦いに備えた武装した戦士であっても、容易に打ち負かされるだろう。私たちの言葉の証人は、私たちが語っている者たちそのものです。彼らは真理について何の知識も持っておらず、読み書きを習っている少年たちでさえ彼らを嘲笑しています。なぜなら、彼らはその虚しい知恵の論じ合いの中で自らと矛盾し、まるで狂ったように自らの肉体を食い尽くしているかのようだからです。兄弟たちよ、私の言っていることがお分かりでしょうか?

教会に集まっていた者たちは皆、声を揃えて叫んだ。

「聖なる父よ、私たちは、私たちの正教の信仰こそが真実であることを知っており、確信しております。その信仰のために、私たちは皆、死ぬ覚悟があります。」

総主教は言った。

「兄弟たちよ、我々は正教の信仰を告白するにあたり、一致団結し、心を一つにすべきである。そうすれば、敵は我々の中から一人たりとも引き離して、自らの不運に招くことはできないだろう。なぜなら、キリストの恵みによって、我々は彼らよりも数が多いのだから。」

人々は大きな声で叫び、死に至るまで教会を守るという固い誓いを改めて立てた。教会で民衆と長い対話を交わした後、日が昇ると、至聖なる総主教はオモフォルを肩にかけ、同行していた司教たち、修道院長たち、そして聖職者全員を率いて王宮へと向かった。　彼らの後を、多くの民衆もついていった。しかし、総主教と正教徒たちが宮殿の門にたどり着くと、一行は全員立ち止まらされ、通されたのは総主教ただ一人であった。通常、ギリシャの王たちは総主教から祝福を受け、霊的な愛のしるしとして互いに右手を口づけし合うのが慣例であった。　しかし、不敬虔なレフ・アルメニア人は、入ってきた総主教に対して慣例通りの敬意ある挨拶をせず、祝福を求めず、座るよう勧めることさえしなかった。むしろ、威圧的な眼差しで彼を見つめ、怒りを込めてこう言い放った。

「お前たちの間で一体どのような分裂が生じ、王の威信に対する反逆や反乱が起きたのか?　我々の知らぬ間に公会議を招集し、民を惑わせ、動揺や反乱へと駆り立てているのか?　我らの許可や協議なしに公会議を招集し、あたかも我らが教会の教えではなく迷信に固執しているかのように民衆に広めることは、明らかな敵意であり、不和の始まりではないのか?もし我らが、あなたがたが「古き」と呼ぶ正しい規律を根絶しようとしたのであれば、その時点で我々を中傷し、貶め、邪悪な異

端であると非難するのは当然のことだっただろう。　しかし今、正統信仰への愛から、我々が不和や対立を根絶し、すべての人を信仰の一致へと導こうとしているこの時に、なぜあなたがたは我々を中傷し、敵対し、あたかも我々が教会を傷つけているかのように語るのか。それどころか、我々は教会の平和と静穏を心より願っているではないか。　あなたは知らないのか。多くの人々が、聖像が描かれ、安置されているという理由で、混乱のうちに教会から離反していることを。離反する者たちは書物を持ってきて、聖像を作ったり崇めたりすることを禁じている聖書の言葉を、その中から示しているではないか。　もし彼らが提起する疑問に答えられなければ、信仰の分裂を何がかたくなに防ぐことができようか。その分裂は、もはや決して和解することのないものとなるだろう。それゆえ、心をかき乱され、困惑している人々のために、あなたがたは直ちに、イコンを巡って（教会から）離反する者たちと論争を行うべきである。　わが権威は、あなたがたが彼らを論破して自らの見解に導くか、あるいは論争に敗れて自ら彼らに従うかのいずれかを望み、命じる。そうすれば、我々もまた、真理がどこにあるかを見極めた上で、より優れた側に加わり、わが王権をもってそれを確固たるものとし、こうして揺るぎなくそれを支持するであろう。

聖なるニキフォロス王は皇帝にこう答えた：

– いいえ、陛下、どうか私たちを分裂や反乱の罪人とはお見なさないでください。私たちは、祈りさえも陛下の権威に対する武器として用いたことはありません。なぜなら、聖書から、王のために祈り、王に悪を願ってはならないと学んだからです（テモテへの手紙第一 2:2）。 また、私たちは健全な言葉や信仰の教えを、異端的な思索や破滅へと転じさせることもありません。なぜなら、そのような行いを敢えて行う者たちについては、真理の教師である聖ヨハネ・テオロゴスが、家には迎え入れず、挨拶もしてはならないと命じているからです（2ヨハネ1:10）。　平和と静寂が極めて善きものであることは、私たちだけでなく、ほんの少しの分別を持つ者なら誰にでも確かな事実として知られている。そして、もし誰かが平和を乱す罪を犯すならば、正義に従い、すべての人はその者を悪人と呼ぶべきである。争いを平和へと、反乱を静寂へと導くことのできる王こそが善き王である。　しかし、あなたは志を同じくする者たちと共に、平和のうちにある教会に争いを引き起こそうと企て、キリストの十字架を賛美し、敬虔さが全宇宙を照らす聖なる律法を捨て去り、どの教会も受け入れない、破滅的な者たちの歪んだ教えを導入しようと提案した。　なぜなら、エルサレムも、ローマも、アレクサンドリアも、アンティオキアも、キリスト、至聖なる神の母、　使徒たち、およびその他の神の聖人たちのイコンを拒絶しておらず、それどころか、聖なる教父たちの伝承に従って敬虔に崇めている。聖霊によって正教の信仰の教義を確立した全地公会議のうち、どれが偶像排斥の思惑を承認し、受け入れたというのか？　それゆえ、王よ、あなたは、すでに退けられた異端を復活させてはならず、すでに非難された考えを聖なる教会に持ち込んではならない。我々は異端者たちと論争をするつもりはない。なぜなら、聖なる教父たちによってすでに公会議で反駁され、退けられ、破門の宣告を受けたことについて、何のために論争する必要があるだろうか。

王はこれに対し、至聖なる総主教に反論した：

「神はモーセにこう言われたではありませんか。*『あなた自身のために、偶像や、天の上にあるもの、地の下にあるもの、地の下の水の中にあるもののいかなる像も造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない』*（出エジプト記 20:4–5）。　では、どのような合理的な根拠に基づいて、あなたがたはイコンを描き、神ご自身にふさわしい栄光を、あなたがたが作り出した像やイコンに捧げているのですか？　昔、偶像崇拝者たちがしていたことを、今、あなた方も行っているのです。モーセに、そして彼を通じて、旧約時代の古代の人々だけでなく、私たち新約の恵みを受けた忠実なキリスト教徒すべてに与えられた神の戒めを無視して。

聖ニキフォロス大主教はこう答えました。

「イスラエルの民がエジプトから脱出する際、なぜ神が『偶像やあらゆる像を作ってはならない』という戒めを与えられたのか、あなたは知らないのですか？　それは、エジプトでの生活が、イ

スラエル人を不義と、エジプト人の偶像崇拝的な多神教に慣れさせてしまったからである。エジプト人は、とっくに亡くなったある人々を神と崇めたり、空の鳥や地上の獣、爬虫類、 魚、そして様々な怪物を神として崇め、それらの像を作り、真の神であるかのように礼拝していたのです。 イスラエル人がエジプトで慣れ親しんだ偶像崇拝を根絶するため、神は彼らに、偶像やいかなる形像も造ってはならないという戒めを与えられたが、神への崇敬を損なうのではなく、むしろ増進させるために用いられる、敬虔な像やイコンを造ることを禁じはしなかった。 なぜなら、モーセはまさにその神の命令によって幕屋を築き、契約の箱を四方から金で覆ったのではないだろうか。その箱の中には、の十戒の石板、アロンの杖、そしてマナが納められていたではないか。（列王記下7章以降）神は、金のケルビムを造り、それを幕屋の契約の箱の上に置くよう命じられ、また幕屋の垂れ幕には、ケルビムの顔の模様が織り込まれていなかったでしょうか？ そして、これらすべては、イスラエル人によって尊い、神聖なものとして崇められていなかったでしょうか。また、これらすべての前で、イスラエル人は神を礼拝し、いけにえを捧げていなかったでしょうか。 彼らが幕屋、契約の箱、そしてケルビムの前でひれ伏し、いけにえを捧げたとき、彼らが礼拝し、いけにえを捧げたのは、幕屋でも、契約の箱でも、ケルビムでもなく、天に住まわれる神ご自身であった。 幕屋や、その中に収められていた契約の箱、そしてケルビムの像については、神聖な対象として敬意を払い、神格化して崇拝していたわけではありません。それは、私たちが今、聖なるイコンに礼拝し、その前でろうそくを灯し、ランプを供えるのと同じです。 私たちが拝むのは、板や絵の具ではなく、イコンに描かれた受肉した神であるキリストの御姿そのものであり、イコンに描くのはキリストの神性ではない――なぜなら、神性は目に見えず、理解しがたいものであり、表現することはできないからである。 ――しかし、かつて人間の目で見られ、手で触れられたキリストの人間性を描き出しているのであり、キリストのイコンを神と呼ぶのではなく、神であるキリストの御顔の像と呼ぶのである。 私たちは、聖なるイコンの前に立つキリスト・神に、神として礼拝を捧げ、キリストのイコンを神聖な対象として崇敬するが、それを神として崇拝することはない。同様のことは、至聖なる神の母のイコンや、その聖徒たちの中に神ご自身が崇敬される他の聖人たちのイコンについても言える。 しかし、旧約聖書の話から始めたとはいえ、まだ終わっていません。神はモーセに、荒野で青銅の蛇を掲げ、蛇に噛まれた人々がそこに来てそれを見つめるようにと命じられたのではありませんか？そして、その青銅の蛇は、生きた蛇に噛まれた人々を奇跡的に癒やす、奇跡を起こす像ではなかったでしょうか？ なぜなら、その蛇はそれ自体に癒しの力を持っていたのではなく、それが予表していたお方からその力を得ていたからです。 その蛇は、私たちの救い主キリストを予表していたのである。キリストは、後にキリストご自身が福音書で語られた言葉通り、*「モーセが荒野で蛇を掲げたように、人の子もまた掲げられなければならない」*（ヨハネ3:14）と、十字架の木に掲げられることになっていたのだ。

旧約聖書において、青銅の蛇によって奇跡が起きたのであれば、今日でも聖なるイコンが奇跡を起こすことに、何ら驚くべきことがあるでしょうか。しかし、その蛇がそれ自体によってではなく、それが象徴するお方の力によって奇跡を起こしたように、聖なるイコンもまた、そこに描かれた御方の力によって奇跡を起こすのです。 さらに、ソロモンの神殿についても思い起こそう。神は、ソロモンが建てた神殿において、モーセが作ったものとは別の、大きな金のケルビムを造り、その姿を壁や柱、扉に描き、十二頭の彫像の雄牛の上に銅の海を置いたことを、ソロモンの罪として数えられただろうか。 神はこれをソロモンの罪とは見なさなかったばかりか、ご自身がその神殿とその中にあるすべてのものを訪れられた際、この行いが御心に適うものであることを示された。なぜなら、次のように記されているからである。*「雲が主の宮を満たした。その雲のゆえに、祭司たちは奉仕に立つことができなかった。主の栄光が神殿を満たしていたからである」*（列王記下8:11）

したがって、王よ、あなたが先ほど言及された、モーセに与えられた「いかなる像も造ってはならない」という神の律法の戒めは、異教の偶像崇拝のみを排除するものであり、私たちのキリスト教的な敬虔さ――聖なるイコンへの崇敬――を否定するものではない。 もし神が、この最初の戒め

によって、不敬虔な像を禁じたのと同様に、敬虔な人物のあらゆる描写や像をも完全に禁じていたならば、後にモーセに、前述の通り、幕屋とその備品を造り、さらには青銅で鋳造された蛇を掲げるよう命じたことは、神ご自身との矛盾となってしまうでしょう。　しかし、そのようなことは言うべきではない。神はご自身と矛盾されることはなく、そのすべての御言葉において真実であるのと同様に、そのすべての御業においても聖なるお方である。　神は言葉によって異教の偶像を作ってはならないと命じられたが、教会の装飾や神の栄光のために聖なるイコンを描くことについては、行いによって教えられ、ご自身でモーセにそれを示し、ケルビムの顔の像を描くよう命じられたのである。

このように、皇帝と総主教は聖なるイコンについて、最初は二人きりで多くのことを語り合ったが、その後、扉の外に立っていた司教や聖職者たちも中へ招き入れられた。多くの元老院議員も入室した。さらに皇帝は、自分に同意しない者たちを威嚇するために、剣を抜き放った武装した兵士たちをもその場へ呼び寄せた。　そこで何が起こったのか、どのような議論が交わされたのか、そして恐れを知らぬ心たちがどのような高潔さと勇気を示したのかについては、11月11日の聖テオドロス・ストゥディトスの伝記や、4月3日の聖ニキタ・殉教者の伝記に記されている。　しかし、結局のところ、これらすべては皇帝の怒りと激怒によって終わり、総主教とその側近全員が不名誉な形で王宮から追放された。　聖ニキフォロスに仕えていた司教たちは、直ちに各地へ流刑に処されたが、総主教は当面の間その地位に留め置かれた。その理由は、彼に決定的な危害を加えることを躊躇したためでもあり、また、彼を巡って民衆が反乱や騒乱を起こすことを恐れたためでもあった。　一方、聖職者や多くの修道者たちは、牢獄や監獄で傷を負わされ、飢えと渇きに苦しめられ、異端への改宗を強要された。

至聖なる総主教は、皇帝が正統信仰から完全に逸脱していることを目の当たりにし、　また教会が甚だ混乱し、聖職者たちが迫害にさらされ苦しんでいることを目の当たりにし、皇后に書簡を送り、皇帝に対し、そのような迫害を止めるよう必要な助言を与えるよう諭した。また、皇帝と志を同じくし、その首席顧問である都督エウティキアヌスにも書簡を送った。　使徒的な熱意と預言者の霊に駆り立てられ、彼はその諭しに次のような厳しい言葉を添えた。

「もし主の正しい道から人々をそらし続けるならば、主の懲罰の手がまもなくあなた方に下るであろう。」

しかし、聖なる総主教は、頑なな者たちを説得できなかったばかりか、かえって彼らの怒りをさらに煽ることになってしまった。　皇帝は、ある貴族トマスを遣わし、総主教から聖ソフィア大聖堂の管理権を剥奪させ、総主教がそこで礼拝を執り行ったり、民衆に説教をしたりすることを禁じさせた。そのため、総主教は自宅に閉じ込められたかのように、どこにも出られなくなった。　悲しみと数々の苦難により、彼は肉体が衰え、病に倒れ、病床に伏して死を待っていた。一方、異端者たちの集団は騒ぎを止めず、彼との論争を望んでいた。　そこで、皇帝と彼に同調する者たちから、皇后の兄弟であるテオファン（[4056] の位にあるスパファリオス）が、至聖なる総主教のもとへ遣わされ、彼を連れてきて彼らと論争させるよう命じられた。聖人は使者にこう答えた。

「羊を失った羊飼いは、狼に対して戦場へ出ることはなく、自らの安寧を求める者は獣と戦うことはない。なぜあなたがたは、キリストから私に託された羊を奪い取りながら、私を論争へと招き、私一人に異端者たちを狼のように戦わせようとするのか？　もしあなたがたがそれを望むのなら、私の羊たちを返してください。司祭や聖職者たちを束縛や牢獄から解放し、それぞれが本来の地位に就けるようにしてください。また、追放された司教たちが帰還し、再びその座に就けるようにし、現在その地位に就いている異端の偽司教たちは、　不当に任命された者たちは追放され、迫害され苦しんでいるすべての正信者たちが（迫害からの）安息と本来の自由を取り戻すように。そうすれば、もし神の御心であり、私が回復すれば、我々は公会議において、異端者たちが抱く破滅的な悪意を糾弾

[4056] 帝国の剣の保持者

する用意がある。　また、公会議および信仰に関する議論は、キリスト・神ご自身が至聖なる秘跡の中に臨在される大聖堂において行われるべきであり、王宮において行われるべきではない。なぜなら、教会に関する事柄は教会で論じられ、王宮では世俗の事柄が処理されるべきだからである。

このような返答を携えて、テオファンは彼を送り出した者たちの元へ戻った。彼らは聖人に対してさらに憤りを募らせ、再び自分たちの集まりから数名を彼のもとへ送り、今度は裁判に召喚しようとした。聖なる総主教は彼らにこう反論した。

「誰が私を裁判に召喚するのですか？ローマ、アレクサンドリア、アンティオキア、あるいはエルサレムのいずれかの総主教でしょうか？もし彼らがお前の公会議にいないのなら、私は誰のもとへ行けばよいのですか？それとも、お前たちが私、総主教を召喚しているのですか？　お前たち、不法な者たちが、合法的な牧者である私を裁くというのか？　私の明らかな敵のもとへは行かない。彼らは猛獣のように、私に何の罪もないのに引き裂こうと待ち構えているのだから。それに、病床から立ち上がることもできない病人の私が、どうして行けるというのか？　まさか、病床ごと私を運び出すつもりか？

こうして遣わされた使節たちは、何の成果も得られずに戻ってきた。そこで、激しい憎悪に満ちた異端の集まりは、何の罪もない、聖なる、神に喜ばれる人物であるニキフォロス総主教を不法に聖職から追放し、破門した。彼ら自身こそ、最も極度の追放と呪いを受けるに値する者たちであるにもかかわらず；　彼らは聖ニキフォロスだけでなく、彼の先達である、正統な信仰を持ち、至福の死を経て主のもとへ旅立った、最も聖なる総主教タラシオスとゲルマノスをも破門した。こうして、この悪辣な異端の集会は幕を閉じた。

夜遅く、皇帝は兵士たちを遣わし、総主教の邸宅からニキフォロスを連れ出し、流刑の地へ連行させた。凶暴な兵士たちは武器や棍棒を手に邸宅に迫り、騒ぎと騒乱を引き起こしながら、至聖なるニキフォロスや、かつての総主教であったヘルマンとタラシオを罵倒した。　これを耳にした総主教は涙を流し、正教のためにこのような悪口を言われるに値する者となれたことを神に感謝した。

前述のパトリキウス・トマスは、皇帝から聖ソフィア大聖堂を任され、同時に総主教邸の守護者でもあったが、兵士たちに騒ぎを止めるよう命じ、総主教邸の玄関扉をしっかりと閉ざすと、皇帝のもとへ赴き、こう言った。

「陛下！　これほど多くの兵士は必要ありません。さもないと、民衆が騒ぎを聞きつけて集まり、何か悪事を働く恐れがあります。ただ二人の男と、それに数人の使用人を遣わし、彼らにパトリアルカを腕に抱えて運び出させてください。彼は重病で、自力で歩くことができないのですから。」

皇帝はそのまま実行に移し、兵士たちに総主教の邸宅から退くよう命じ、1時間後には自身の宮殿から2人の男を派遣した。そして、聖ニキフォロス様は自宅から連れ出され、というよりむしろ運び出されたのである。　聖ソフィア大聖堂で祈りを捧げたいと願った聖ニキフォルは、二人の男に支えられて聖堂に入り、ろうそくを灯し、乳香を焚くよう命じた。そして、十字架の形に地面にひれ伏し、泣きじゃくりながら地面に涙をこぼし、長い間祈りを捧げた。

その後、彼は地面から立ち上がった。同じく教会に来て総主教を悼んで泣いている正教徒たちを見かけると、彼らに祝福を与え、次のように言って最後に別れを告げた。

「子らよ、私はあなたがたを正統なキリスト教徒として見出し、正統なキリスト教徒として残していく。」

そして教会を出た。兵士たちは彼を戦車に乗せ、真夜中、皆が眠っている間に、海辺へと連れて行った。そこで彼を小舟に乗せ、クリソポリス[4057] へ、ヴォルエ[4058] と呼ばれる、修道院のある場

[4057] クリソポリ――ビフィニア地方のビザンティウム近郊、現在のスコダル。

[4058] ギリシャ語の原文では「善き者」、すなわちキリストの修道院とあったが、ラテン語の写本者は「ヴォビ（善き者）」の代わりに「ヴォラ」と記したため、スラブ語訳では「ヴォルエ」となった。

所へと運んだ。　こうして、神の偉大な御心にかなう者、至聖なるニキフォロス総主教は、キリストの教会を9年間統治した後、不当にその座から追放されたのである。ほどなくして、彼はさらにプロコンニス島[4059]にある、聖大殉教者テオドロスの修道院へと追放された。 さて、その島へ向かう途中、船で聖テオファンが住む地域を通りかかったとき、大村の修道院長である聖テオファンと、船に乗せられていた聖ニキフォルは、透視の眼で互いを見出し、挨拶を交わした。　聖テオファンは、自分の修道室にいて、弟子に香炉に燃える炭を入れるよう命じ、蝋燭に火を灯し、炭の上に乳香を載せ、まるで通り過ぎる誰かと話しているかのように、地面にひれ伏して礼をした。弟子は彼に尋ねた。

「師よ！　何をしているのですか？　誰に頭を下げ、誰と語り合っているのですか？」

聖人はこう答えました：

「正統信仰ゆえに不当に追放された、至聖なるニキフォロス総主教が、この国を通り過ぎて船で流刑の地へ向かっている。そこで我々は、総主教に相応しい敬意を表すために、ろうそくと乳香を灯したのだ。」

その瞬間、船上にいた至聖なるニキフォロス総主教は、突然ひざまずき、聖なる長老に互いに礼を捧げ、両手を空中に伸ばして祝福を与えた。総主教と共に船に乗っていた者の一人が彼に尋ねた。

「聖なる父よ、誰に祝福を授けておられるのですか。また、誰の前でひざまずかれたのですか？」

総主教はこう答えられた。

「大村の修道院長である殉教者テオファンが、私たちを迎え、灯された蝋燭と香で敬意を表してくれた。私もまた、彼に頭を下げた。というのも、彼もまた、間もなく私たちと同様に苦難に遭うことになるからだ。」

その言葉はまもなく現実のものとなった。彼に定められた流刑の地に着くと、キリストの聖人ニキフォロスは、そこで窮屈な生活と度重なる病に苦しみ、生活必需品も乏しい中で十三年間を過ごし、主のもとへ永遠の安息へと旅立った。　そして、この世を去る際、喜びに満ちた魂をもってダビデの言葉を口にした。*「主を賛美せよ。主は、私たちを彼らの牙の餌食となさなかった。私たちの魂は、鳥のように、捕らえる者の網から逃れた。網は破られ、私たちは救われた」*（詩編123:6–7）。

そう言い終えると、彼は自分の魂を主の御手に委ね、信者たちは彼を悼んで泣き、異端者たちは喜びました。　その尊い遺体は、聖大殉教者テオドロスの教会に埋葬された。その後、異端の指導者たちが滅び、偶像破壊運動による迫害が終わり、再び平穏と正統信仰が輝きを取り戻すと、聖ニキフォロスの尊い遺骸は、846年3月13日、　テオフィロスの息子ミカエルとその母テオドラの治世下で、聖ソフィア大聖堂に尊く安置された。これは、父と聖霊と共に永遠に賛美される、我らの神キリストの栄光のためである。アーメン。

コンダク、第4調：

天より与えられた勝利の冠よ、おお、栄光に満ちたニキフォロスよ、神より授かったその冠をもって、キリストの聖職の長であり師であるあなたを信仰をもって崇める者たちを救い給え。

聖大殉教者ヨハネ・ノヴォイの受難

記念日：6月2日

[4059] プロコニス――マルマラ海に浮かぶ島。現在のマルマラ。

その神に喜ばれる徳高い生涯によって、私たちに模範を示してくれた聖なる人々は数少ない。その中には、時代的には最後であるものの、初期の聖人たちに決して劣らない、この真の神の御心に適う者も含まれている。　主キリストは、初代教会の殉教者たちだけでなく、今、終わりの時代においても、それを求める者たちに（御国の）門を開き、彼らに同じ栄光と賜物を授けておられます。それでは、聖ヨハネ――キリストの勇敢な戦士であり、聖霊の恵みに満ちたこの人物――について、彼がどのような人物であったか、どこ出身か、そしていかにして殉教者の位と冠にふさわしい者とされたのか、その物語を始めよう。

この人物の故郷はトラペゾントであり、それは東方の地、アッシリアと偉大なるアルメニアの国境の近くに位置する、栄光に満ちた偉大な都市であった。　あらゆる必需品に恵まれたこの都市は、各地からやって来る船にとって便利な寄港地となっており、海辺に暮らす住民たちは貿易や航海に従事し、そこから生計を立てている。　まさにそのように、聖ヨハネもまた貿易に従事し、海路でさまざまな都市へと頻繁に旅をしていた。ある時、彼は大量の商品を積んで、ある外国人の男の船に乗り込むことになった。その男はフレイグ人[4060] であり、東方教会の信仰を持たず、気性は粗暴で、慈悲深くもなく、非人道的であった。　聖人がその男と共に航海している間、敵である悪魔はヨハネの清らかな生活に嫉妬し始めた。悪魔は、祈りと断食に励み、品行方正で誰に対しても親しみやすく、船上で困窮している者や病に伏している者たちに対して慈悲深い、この至福の人の高潔な生活を、ほとんど耐え難く感じていた。　キリストのしもべは、そのような人々を慰め、自分の持ち物から必要なものを分け与え、助けの手を惜しみなく差し伸べた。そして、涙でいっぱいの目で、心の中でこう語った。

「苦しむ兄弟に慈悲を示せば、あなた自身も憐れみを受けるだろう。そして、悲しむ者を慰めれば、あなた自身も神からの慰めを受けるにふさわしい者となるだろう。」

目に見えない敵はこれを見て嫉妬し、救いへの道において聖人に妨害を加えようと試みた。まず第一に、彼は聖人を敬虔な信仰から引き離そうと企み、目に見える敵――異なる信仰を掲げる船長――を聖人に対して送り込んだ。その船長は、正教（東方正教会）の敬虔さについて論争を仕掛け、正統なキリストの僕を悩ませ始めたのである。　航海中に二人の間で交わされた信仰をめぐる数多くの論争において、聖ヨハネは、極めて賢明で書物による学問に精通した人物として、常に船長を打ち負かし、その誤った考えを糾弾した。　一方、その修道士は、打ち負かすことのできないキリストの戦士に対して怒りを募らせ、苛立ち、多くの非難で彼を苛立ちさせ、敵意から彼に対して悪意を抱くようになった。　彼の中にそのような敵意が燃え上がった頃、船はベオグラードの岸辺、ボスポラス海峡の近く[4061] に停泊した。そこで、邪悪な船主は、出身も信仰もペルシャ人[4062] であり、先祖代々の伝統を熱心に守り抜く地元の城主のもとへ赴き、聖ヨハネに対する次のような誹謗中傷を彼の前で繰り広げた。

「長官！私の船に乗ってここにやってきた男がいます。彼は、先祖から受け継いだキリスト教の信仰を捨て、あなたの信仰に改宗し、あなたの伝承を共有したいと望んでいます。航海の途中、彼は私にそのことを告げ、多くの誓いをもって、その 決意を変えないと断言しました。 もしあなたが早急に彼をあなた方と同じ信仰へと導くよう尽力すれば、あなたの民から大いなる称賛を受けるでし

4060 「フリアギ」とは、古くのルーシにおいて主にジェノヴァ人を指し、後に西ヨーロッパ人全般を指すようになった。

4061 著名な教会史家E.E.ゴルビンスキーの見解によれば、ここで言及されているベオグラードは、現在のベッサラビアのベルツィである。他方、ベオグラードをアッカーマンと解釈する者もいる。

4062 モルドヴァ・ワラキア教会の司祭（1416年から南ロシアのミトロポリス、1419年）によって編纂された聖ヨハネの伝記、および典礼書によれば、この殉教者は火礼拝者たちによって殉教したが、ギリシャの殉教者名鑑によれば、イスラム教徒によるものとされている。　しかし、歴史上、これらの火崇拝者がペルシャ人あるいはイスラム教徒であったという証拠は見当たらない。大殉教者ヨハネが亡くなったとされる14世紀半ば、アッカーマンはポロヴェツ族の支配下にあり、彼らには、バトゥの時代のタタール人と同様に、火を崇拝する習慣があった可能性がある。

ょう。というのも、この男は言葉に極めて長けており、トラペゾントの最も高貴な貴族たちの中でも、決して劣らない人物だからです。

これを聞いて、不信心な長官は喜びに満たされた。彼はいつもの裁判の席に着くと、聖ヨハネを敬意を込めて自分の元へ連れてくるよう命じ、彼にこう言った。

「尊い方よ、あなたのことはよく耳にしている。あなたが我らの信仰を愛し、それに帰依しようとしていると聞いた。我らの信仰は、誠実な思索の対象であり、それを理解する者の心に愛を燃え上がらせる。喜んでそれを受け入れる者には、幸福な人生と長寿をもたらす。　一方、キリスト教の信仰は嘲笑に値するものです。尊い友よ！　それを速やかに遠ざけ、この民衆の集まりの前で、万人が聞くようにキリスト教の伝承と律法を冒涜してください。なぜなら、あなたの妻や子供たちを含め、皆がここに集まったのは、あなたが私たちの明るく輝かしい信仰を告白したいと望んでいると聞いたからです。　さあ、素晴らしい人よ、私たちと共に立ち、最も明瞭な声で輝かしい太陽を賛美し、太陽に先立つ星に敬意を表し、宇宙を照らす天の光に犠牲を捧げなさい。　そうすれば、あなたは我らの王から多くの栄誉と高位の地位を授かることになり、我々にとっては誠実な兄弟となり、すべての人々に愛される人生を楽しむことになるだろう。

統治者が悪意と狡猾さを交えてこのお世辞を語っている間、聖ヨハネは心の目を天に向け、主の助けを求め、主はこう言われた。「わたしの名のために、あなたがたが王や支配者たちの前に引き出される時、その時に何を語り、どう答えるかをあらかじめ心配してはならない。　『あなたがたには、あなたがたに敵対する者たちが抗し得ない言葉が与えられるからである』（マルコ13:11参照）。その後、聖ヨハネは肉眼で拷問官を見つめ、恐れずに手を差し伸べて、こう答えた。

「おや、長官よ、あなたは明らかに嘘をついているようだ。私は、私のキリストを否むつもりだなどとは一言も言っていない。そのようなことが私にあってはならない。私の主イエス・キリストが、そのような考えを私の心に抱かせることさえ決して許さないだろう。それは、真理の敵、すなわちあなたの父であるサタンの企みである。　彼は、あなたを自らの真の器として取り込み、あなたを通して私と語りかけ、私を滅びへと誘い込もうと企み、私を真の神、　すべての目に見えるもの、見えないもの、そしてあなたが神として崇めているこの太陽そのものさえも、創造されたすべての被造物の創造主である真の神から離れさせようとしている。あなたは闇の力に惑わされ、狂気の中で、本来は神ご自身にのみ捧げるべき栄光を、被造物に捧げているのだ。　どうか私を偽りに傾くよう惑わさないでほしい。それどころか、私から真理の奥義を自ら知り、あなたの魂に重くのしかかっている不義の闇を払い除け、神聖な洗礼の暁によって太陽よりも明るく輝き、光の子となるにふさわしい者となれるよう、お願いする。　また、空に見える太陽を神だとは思わないでください。それは、創造主が人々に仕えるために定め、第四の日に創造された、火の性質を持つ天体であることを知ってください。創造物が、どうして神であり得ましょうか?

そう言うと、聖ヨハネは両手を挙げ、天を仰ぎ見て、皆が聞こえるように叫びました。

「わが救い主キリストよ、あなたと、あなたと共に賛美される、初めなき御父と、至聖なる御霊とを、決して否定はいたしません！　私は太陽を拝むことも、火に仕えることも、異教の伝説が『ヴェーナース』と呼ぶ星――その名は淫らな情欲と同名である――に犠牲を捧げることも決していたしません！」

殉教者は、力強い声と喜びに満ちた表情でそう語った。　内なる怒りの炎に駆り立てられた拷問官は、しばしば表情を変え、自分に反論するその男の言葉を長くは耐えられなかった。というのも、聖ヨハネは多くの民衆の前で、その長官が冒涜していたキリストを賛美し、彼を真の神であると告白し、最後まで不敬虔な信仰を貶め、打ち砕いていたからである。あるいは、　むしろ、支配者の惑わしを徹底的に打ち砕いていたのである。そこで拷問官は兵士たちに、殉教者の衣服を剥ぎ取るよう命じた。兵士たちはその言葉を即座に、むしろ急いで実行した。そして聖人は裸のまま――キリスト

に身を包まれて――立っていた。その後、拷問官は殉教者の前に多くの棒を置くよう命じ、彼にこう言った。

「お前は、寓話を語るのではなく、その無益な信仰を捨てると約束し、我々の輝かしい信仰に加わり、我々の律法によって身を飾ることを熱望していた。さあ、長きにわたる悪口を止め、約束を果たせ、　――我らの栄光に満ちた信仰に加わり、輝かしい太陽を拝め。もしそうしなければ、この並外れて慈愛に満ちた我らの信仰のために、これらの杖で汝の体を打ち砕くだけでなく、人間には耐え難い他の最も残酷な拷問で汝を苦しめ、ついには最も苦痛に満ちた死に追いやるだろう。

聖なる殉教者はこう答えた。

「おお、あらゆる汚れに満ちた拷問者よ！私は迷信家ではなく、三位一体において賛美される真の神の僕であり、その神を宣べ伝える者である。私は先祖や両親から、その神を信じることを教えられた。　今や、ただ御方のみを礼拝し、御方に賛美の捧げ物を捧げ、御方を万物の創造主として認め、告白し、生ける者と死せる者の審判者として御方を待ち望んでいる。御方の御命令により、人々のために置かれたこの目に見える太陽が沈む時、御方は来られ、各人の行いに応じて報いを与えられるであろう。　それゆえ、私からそれ以外の言葉を聞くことを期待してはならない――私が最初に言ったことを、今もまた言う。私が正気を保ち、理性を働かせている限り、創造主の代わりに被造物を尊ぶことも、創造主の代わりに被造物にひれ伏すことも決してない。　そして、不義を行う者よ、遅れることなく、お前に潜む卑劣で非人道的な本性を露わにし、私に対する拷問を考案する手間から自分を解放せよ――どのような拷問や死の方法であれ、私を主なる神のもとへ送り届けよ。私は自らその御許へと向かっているのだ。　何をしようとも、さっさと実行せよ。預言者が「*彼らは心の中で悪を企み、日々戦いを仕掛ける*」（詩篇139:3）と語った、お前の不敬虔な言葉が、私の耳にあまり長く響き渡らないように。そして、私の目が、お前のあらゆる点で醜悪な顔をこれ以上見なくて済むように。　ほら、私の裸の肉体は、お前の拷問を受ける準備ができている。杖で打て、火で焼け、水に沈め、あるいは剣で切り刻め。もしお前にもっと残酷な拷問があるなら、それを私に与えるのをためらうな。私のキリストへの愛のためなら、すべてを喜んで受け入れる用意がある。

殉教者のこの言葉は、凶暴な拷問官の怒りに火をつけた。彼は直ちに、その福者を地面に引きずり下ろし、節の多い棒で容赦なく打ちつけるよう命じた。　手下たちはキリストの受難者をあまりにも残酷に打ちのめしたため、砕かれたその肉体の多くの断片が棒と共に空中に舞い上がり、聖人が拷問を受けた場所全体が血で染まった。しかし、この勇敢な殉教者はこの苦しみをも勇敢に耐え忍び、知性あふれるその目を天に向け、こう語った。

「主なる神よ、感謝いたします。聖なる洗礼を受けた後、人間の弱さゆえに陥った私の罪を、この血によって清めてくださったことを。」

滅びの子らは、殉教者が神に捧げる祈りを耳にすると、さらに激しい怒りに満ち、その声が途絶えるまで彼を容赦なく打ちのめした。　夕暮れが迫ると、総督は、かろうじて息をしているだけの殉教者を二本の鎖で縛り、牢獄に投げ込み、朝まで厳重に監視させて、極度の拷問にさらすよう命じた。そして、殉教者は激しい傷のため自力で歩くことができなかったため、まるで死体のように引きずられ、牢獄に放り込まれた。

翌朝、獣のような拷問官は、いつもの裁判の席に着くと、聖殉教者ヨハネを連れてくるよう命じた。キリストの受難の証人は、明るい顔つきと喜びに満ちた心で現れた。　殉教者を見やり、その明るく喜びに満ちた顔を見た不敬虔な裁判官は、これほど激しい拷問を受けた後にもかかわらず、どうして彼の中に魂が宿り、まるで何の苦しみも味わわなかったかのように喜んでいるのか、大いに驚いた。

「ほら、ヨハネよ」と彼は言った。「お前の不従順が、どれほど不名誉な事態を招いたか、わかるか？　お前は、甘美で、すべての人々にとってこの上なく愛すべき命を、危うく失うところだったのだ。」　とはいえ、もし私の理にかなった説得に従うなら、健康を取り戻すことも可能だ。数日

以内に、お前の傷ついた肉体は癒やされるだろう。なぜなら、我々のところにはインドやペルシャから来た非常に腕の良い医師たちがいるからだ。もしそれでもなおキリスト教を貫こうとするなら、さらに大きな災いがお前を待ち受けていることを知っておけ。

聖なる殉教者はこう答えた。

「裁判官よ、私の傷ついた肉体など、私は少しも気にかけてはおりません。主の偉大なる使徒が語っているように（IIコリント4:16）、私たちの外なる人は朽ちていくほどに、内なる人は新しくされるのです。」　私が心を砕いているのはただ一つ、あなたから与えられる苦しみ最後まで耐え抜くことだけです。私を強めてくださるキリストよ、主はこう言われました。*「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」*（マルコ13:13）。　もしあなたが、私に対してさらに何か拷問を考案したのなら、それを私に加えなさい。あなたが最初に私に与えた傷は、私にとっては何でもないものだからです。

聖人のこの賢明な言葉に恥をかかされた狂気の拷問官は、怒りで体を震わせ、獣のように咆哮を上げて、再び殉教者を地面に押し倒し、さらに残酷に殴打するよう命じた。そして、家来たちは交代で容赦なく殉教者を殴り続け、ついに殉教者の内臓までもが傷つけられるほどであった。　しかし、彼は口元でささやきながら、神への祈りを捧げていた。　ダイヤモンドのような魂を宿したその肉体を打ちのめしていた兵士たちが疲れ果て、拷問を見物するために集まった老若男女が、その邪悪な裁判官に向かって叫び始め、彼の冷酷で苛烈な気性を非難したとき、拷問官は野性的で獰猛な馬を連れてくるよう命じ、　殉教者の足をその馬の尾にしっかりと縛り付け、兵士の一人に馬に乗せて街の通りを駆け巡らせ、馬が走る力を失うまでキリストの殉教者を引きずり回すよう命じた。こうして聖人は街中を引きずり回され、敬虔な者たちの目には、その光景が痛ましいものとして映った。　やがて、聖人を引きずっていた騎手が、　ユダヤ人の住居に到達し、その通りを駆け抜けると、ユダヤ人の群衆は引きずられる殉教者を罵倒した。これらの悪意に満ちた人々は、顔を歪め、叫び声を上げながら、手にしたものを彼に投げつけ、無作法で滑稽な笑い声を上げていた。　ついに、ユダヤ人の一人が家の中に駆け込み、抜刀した剣を掴むと、引きずられていく聖人に追いつき、その尊い首を切り落とした。こうして、イエス・キリストの勇敢な戦士は、その苦難に満ちた功業を終え、聖なる魂を主の御手に委ねた[4063]。その戦士は、聖人の尊い遺体を馬の尾から解き放ち、その場に投げ捨てた。遺体は首を切り落とされたまま、埋葬も手当てもされずに横たわっていたが、不信心者たちの怒りを恐れて、キリスト教徒の誰もそれに触れることを敢えてしなかった。

夜が更けると、殉教者の遺体の上で驚くべき奇跡がはっきりと見えた。無数のランプが明るく灯り、三人の光に満ちた男たちが言葉に尽くせぬ聖なる賛美歌を歌い、香を焚き、聖人の遺体の上には炎の柱が立ち上っていた。この奇跡を多くの人が目撃した。　あるユダヤ人は、その多難な遺体が横たわっている場所の近くに家を構えていたが、これはキリスト教の司祭たちが遺体を運び出し、通常の埋葬を行うために来たのだと考えた。　彼は弓と矢を手に取り、その場所へ近づき、目に見える（架空の）司祭たちのうちの一人を射殺しようと、矢を番え、それから精一杯の力で弓を引き絞った。　ところが、矢を放とうとした瞬間、矢と弦が彼の右手の指に張り付き、弓は左手に張り付いてしまい、彼は矢を放つことも、弓と矢から手を解き放つこともできなくなった。こうして、このユダヤ人――蛇の化身――は一晩中苦しんだ。　夜明けになると、不思議な男たちは見えなくなり、火の柱も、ランプも消え去った。そして、この場所に集まったあらゆる年齢の人々は、その呪われた射手がいまだに同じ姿勢で留まっているのを見た――彼が弓と矢を引き絞ったまま、まるで鉄の足枷のように、神の見えざる力によって縛られたままだったのだ。　このユダヤ人は、自らの意志に反して、殉教者の遺体の上で目撃したすべての出来事について、また、悪意に満ちた行いを敢行しようとした大胆な試みに対して神から下された報いについて、詳細に語らざるを得なかった。この奇跡が十分に語り尽くされた後、彼の手は解かれ、彼は罰から解放された。　このことを知った総督は深く恐れをな

[4063] 聖殉教者は、おそらく1340年までに亡くなったと考えられる。

して、キリスト教徒たちに殉教者の遺体を埋葬するよう命じた。キリスト教徒たちは遺体を受け取り、自分たちの教会のそばに尊厳をもって葬った。

数日後、聖人を拷問に引き渡したフリアグは、その尊い遺体を盗み出し、自分の故郷へ持ち帰ろうと考えた。彼はすでに自らの悪行を悔い改めていた。　ある夜、好機を伺って、彼は仲間たちと共に殉教者の棺のもとへやって来た。墓を掘り起こし、棺を開けて、尊い遺骸を持ち去ろうとした。しかし、そのとき、キリストの戦士が、その教会の司祭の夢の中に現れ、こう言った。

「起き上がって、急いで教会へ行きなさい。私を盗もうとしているのだから。」

長老は直ちに起き上がり、急いでその場所へ向かった。すると、棺が掘り起こされ、開け放たれているのを発見し、聖人の遺体は危うく持ち去られそうになっていた。　敬虔な人々を呼び集め、彼は起こった出来事を語った。すると皆、御自身の聖人たちを称える神を賛美した。そして、聖殉教者の尊い遺骨を運び出し、教会へと持ち込み、聖壇の聖座の近くに安置した。　聖遺骨はそこで七十年以上安置され、昼夜を問わず、その周囲で様々な奇跡的な現象が頻繁に起こった。時には不思議な光が現れ、時には火の柱が現れ、時には棺から言葉に尽くせない芳香が漂い、癒しの力も現れた。

その噂は、当時モルドヴァ・ラキアとポモリエを統治していた、敬虔でキリストを愛する偉大な総督アレクサンドルの耳にも届いた。彼は多くの美徳を備え、殉教者を敬愛する人物であった。そして彼は、この極めて貴重な宝物――キリストの聖殉教者ヨハネの尊い遺骨――を自らの元に迎え入れたいと強く願った。 至聖なるヨセフ大司教[4064] との協議を経て、彼は数名の重臣を十分な兵力を伴ってベオグラードへ派遣し、彼らは遅滞なくそこから殉教者の聖遺物を持ち帰った。　大ヴォエヴォダはすべての貴族たち、至聖なる大司教は聖職者たちを率いて出迎え、民衆も皆、ろうそくや香炉、芳香のミールを持って、殉教者の到来を喜びをもって歓迎した。　大総督は聖人の聖棺にひれ伏し、その苦難に満ちた聖遺物を抱きしめ、目と口で殉教者の尊い御手に触れ、喜びの涙を溢れさせながら、聖人に自らの領土の守護者となってくださるよう祈った。　殉教者の尊い遺骸は、モルドヴァ・ラフニア王国の首都ソチャヴァにある至聖な大主教区に、大いなる栄誉をもって安置された[4065] 。 当時およびその後、殉教者の聖遺物によって、様々な病に苦しむ人々に与えられ、今もなお与えられている癒やしについては、　――記述者はこう述べている――その恩恵を受けた者たち自身に語らせ、彼から受けた恩恵を宣べ伝えさせることにしよう。　ここでは、聖ヨハネがどのような苦難に耐え、不義な都市の統治者をいかに恥じ入らせ、どのような偉業を成し遂げ、キリストという偉業の創始者の手から栄冠を受けたかを伝えるだけで十分であった。　聖ヨハネの得た善き報いは、まさにこのようなものであった。彼はわずかなものを与えたが、多くのものを得た。狡猾な拷問者に自らの肉体を重荷として残し、トラペゾントではなく、天上のエルサレム――殉教者として殉教者の列に加わり、アブラハムの懐、　聖徒たちの集う場所へ、良き安息の地へ、朽ちることのない宮殿へと向かい、そこで三聖なる、至神なる三位一体の御前に現れた。その御方に、今、そして永遠に、栄光、権威、誉れ、賛美、そして礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4声：

地上の生涯を、施しと絶え間ない祈りと涙をもって立派に全うし、再び勇敢に苦難へと身を投じ、ペルシャの不義を糾弾した。それゆえ、あなたは教会の支えとなり、キリスト教徒の誉れとなった、永遠に記憶されるヨハネよ。

[4064] 1401年または1402年にモルドヴァ・ワラキアの大司教に任命された。

[4065] 現在のジュルジャ（一部の説によれば）は、ルーマニアの都市であり、ドナウ川の左岸、ルシュチュクの対岸に位置している。

コンダク、第4調：

海の深淵を商売で渡り歩き、東から北へと向かっていたが、神がマタイを税吏として召されたように、あなたも商売を捨て、その方に従い、血の殉教を経て、この世の困難を贖い、不敗の冠を受けた。

6月16日

6月3日（旧暦）

聖殉教者ルキリアヌスと、彼と共に殉教した四人の少年、クラウディウス、イパティウス、パウロス、ディオニシウス、および聖処女パウラの記念日

記念日：6月3日

聖殉教者ルキリアヌスは、ローマ皇帝アウレリアヌスの時代[4066] に殉教した。当初は異教の多神信仰に身を置き、偶像の祭司さえ務めていた。すでに白髪交じりの尊厳ある風貌を備えた、矍鑠たる老齢に達していた。 彼はニコメディア[4067] の近くに住み、神殿で邪悪な神々に仕えていた。その後、すべての人を救い、だれも滅びることのないことを望まれる、私たちの神キリストの恵みにより（参照：テモテへの手紙第一 2:4）により、彼は悪魔の欺瞞と異教の迷いを悟り、真理を知り、唯一の真の神、私たちの主イエス・キリストを信じ、偶像を拒絶し軽蔑し、老いてなお、鷲のように若返った（詩篇 102:5）。 そして、聖なる洗礼によって新たに生まれ変わり、心と思いをすべてキリストへの愛に捧げた。

彼は他の異教徒たちに対しても、彼らの不敬虔の虚しさと破滅を明らかにし、救いへと導き、自らの教えによってキリストへと導いたため、多くの人々にとって、神への回心の模範となった。地元のユダヤ人たちは、ルキリアヌスが偶像崇拝からキリスト教の信仰へと改宗し、多くの人々が彼の模範と教えに従って偶像崇拝を捨て、キリスト教徒に加わり、聖なる洗礼を受けているのを見て、怒りと憎しみに満ちた。 神を殺すような残忍な者たちは、嫉妬から彼を誹謗中傷し、不義な裁判所に引き渡した。こうして、キリストのしもべは、ニコメディアの総督シルヴァヌスの前に引き出され、尋問を受けた。総督は、この長老に対し、キリストを否定して偶像崇拝に戻るよう激しく強要したが、彼は従うことを拒んだ。 そこで総督は激怒し、ルキリアヌスを様々な拷問にかけるよう命じた。彼は 顎を砕かれ、容赦なく棒で殴られ、逆さ吊りにされ、そして長く激しい拷問の末、牢獄に投げ込まれた。 そこで聖ルキリアヌスは、キリストへの信仰のために投獄されていた四人の少年――クラウディウス、イパティア、パウロ、ディオニシウス――に出会った。 彼は彼らとキリスト・神について喜びをもって語り合い、殉教の業へと彼らを励ました。それは、天における永遠の報いを心に留め、一時的な苦しみや、来世のための死を恐れず、また、御国において彼らに枯れることのない至福を用意してくださるキリストのために、自らの若き日々を惜しまないようにするためであった。彼らは皆で昼夜を問わず神に祈りを捧げ、キリストへの希望をもって互いに慰め合った。 かなりの日が過ぎた後、聖ルキリアヌスは再び少年たちと共に拷問を受け、彼らと共に灼熱の炉に投げ込まれた。しかし、全能の神は、かつてバビロンの炉に投げ込まれたユダヤ人の少年たち（ダニエル書3章

[4066] *アウレリアヌスは*270年から275年まで在位した。

[4067] ニコメディアは、小アジアのビフィニア地方にあり、プロポンティス（マルマラ海）の湖岸に位置する都市である。

）に対してそうされたように、彼らに対しても驚くべき御慈悲を示された。　火は冷たさに変わり、炎は露となり、天から降り注いだ激しい雨が炉全体を完全に冷やし、聖ルキリアヌスと少年たちは無傷で出てきた。　不信仰と悪意に目がくらんだ異教徒たちは、この輝かしい神の奇跡を、神の力によるものではなく、キリスト教徒の魔術によるものと見なした。そこで、不義な裁判官は聖なる殉教者たちに死刑を宣告し、彼らをビザンティウムへ送った[4068]、そこで処刑を受けるためである。彼らがビザンティウムに到着すると、四人の聖なる少年たち、クラウディウス、イパティウス、パウロス、ディオニシウスは剣で斬り殺され、聖ルキリアヌスは十字架に吊るされ、全身を釘で打ち付けられて、そのようにして神に息を引き取った。　彼はユダヤ人たちによって十字架に磔にされた。これは、彼に捧げられたカノンの第三の歌からも明らかであり、そこには次のように記されている。「ユダはかつて、救い主キリストを神殺したちに引き渡した。そして今、あなたは不法なユダヤ人によって引き渡されたのである」。

彼らの苦難の冠に、聖処女パヴラも加わった。キリスト教徒の両親の間に生まれた彼女は、若き頃から心にキリストへの熱烈な愛を育み、不死の花婿であるキリストのために処女性を守り、天の宮殿にふさわしい者となるよう努めた。　両親の死後、孤児となりながらも裕福な身であった彼女は、牢獄を巡り、看守に金を払って入場許可を得て、キリストのために苦しむ囚人たちを訪ねた。　彼女はキリストの僕たちに奉仕し、自分の財産から必要なものをすべて与え、飢えと渇きに苦しむ者たちには食べ物と飲み物を届け、裸の者たちには衣服を与え、拷問で傷つき腐りかけた殉教者たちの体を癒やし、洗い、拭き、薬用湿布を当て、清らかな布で包んであげた。　キリストのために負った彼らの傷に口づけをしながら、彼女は涙ながらに、キリスト神に自分のために祈ってくださるよう懇願し、神が彼女から御慈悲を奪わないよう願った。この選ばれたキリストの花嫁は、ニコメディアの牢獄に少年たちと共に閉じ込められていた聖ルキリアヌスのもとにも訪れ、彼の有益な教えに耳を傾けた。　聖人と少年たちが拷問を受けている間、彼女は彼らの偉業を目の当たりにし、心の奥底で熱心にキリストに祈りを捧げた。主が御自分のしもべたちを強め、彼らに勇気と助けを与え、御名の栄光のために、最後まで苦難に耐え抜けるようにと。　処刑が終わり、人々が散っていった後、彼女は聖人たちが拷問を受けた場所を訪れ、地面にこぼれた彼らの血を拾い集め、聖遺物として大切に保管した。　長老と四人の少年たちがビザンティウムへ連行され、処刑される際、彼女は彼らに付き従い、仕えた。そして、聖なる少年たちが斬首されると、聖なる処女は彼らの尊い遺体を受け取り、敬虔な心をもって埋葬した。聖ルキリアヌスと聖なる少年たちの死後、彼女はニコミディアに戻り、同じように行動し続けた。　不信心者たちは、彼女がキリスト教徒であることを知り、彼女を捕らえて、同じ総督シルヴァヌスの裁判にかけました。総督は、多くの甘言や威嚇による説得にもかかわらず彼女が屈服しないのを見て、彼女の裸の体を枝や棒で長く容赦なく打ち据えるよう命じました。しかし、彼女が多くの傷によって肉体が衰弱したとき、　しかし精神は折れなかった。主の天使が現れて彼女を癒やした。こうして殉教者の肉体は健康を取り戻し、彼女は苦しみの中でさらに勇敢かつ気高く振る舞った。その後、彼女は拷問官を痛烈な言葉で苛立たせたとして、口を激しく殴打された。　その後、彼女は牢獄に投げ込まれ、再び拷問の場へ引き出されて、激しく燃え盛る炉に放り込まれた。しかし、彼女は無傷で炉から出てきた。なぜなら、かつての聖なる殉教者たちと同様に、彼女に対しても神の力が火の力を打ち消し、キリストの花嫁である彼女に灼熱の炎が及ばないようにしたからである。　これらすべての後、拷問官は彼女を剣による斬首の刑に処し、聖ルキリアヌスと少年たちが息を引き取ったのと同じ場所で処刑を受けるよう、ビザンティウムへ送った。　ルキリアヌスがキリストのために十字架の死を遂げたその場所に連れて行かれると、キリストの殉教者は、彼女に殉教者の

[4068] ビザンティウムは、紀元前658年にボスポラス海峡のヨーロッパ側に設立されたメガラの植民地であり、黒海とマーブル海を結ぶ狭い海峡において支配的な地位を占めていた。 330年、コンスタンティヌス大帝はリキニウスに勝利した後、ローマ帝国の首都をここに移し、ビザンティウムはコンスタンティノープル、すなわち「新ローマ」と呼ばれるようになった。

冠と聖徒たちとの交わりを授けてくださった神に、 熱心に感謝を捧げた。 主に向かって熱心に祈りを捧げた後、彼女は喜びをもってその処女の頭を剣の下に差し出し、斬首を受けた。こうして彼女は地上の世界から天上の世界へと移り、主の喜びのうちに天の宮殿へと入り、最も愛すべき花婿であるキリスト、我らの主から、処女性と殉教という二重の冠を授けられたのである。

聖ルキアノ司祭殉教者の生涯と受難

記念日：6月3日

栄光に満ちた殉教者たちが悪魔とその手下たちに打ち勝ち、キリストの従者たちが耐えた苦難の行いを思い起こすことは、すなわち、私たちの神キリストの栄光を宣べ伝え、その聖なる御名の栄光のために苦難に耐えた殉教者たちの善行に現れた御力を説くことである。 キリストご自身が、ご自身の言葉*「勇気を持ちなさい。わたしは世に打ち勝った」*（ヨハネ16:33）の通り、あらゆる事において勝利者であり、当初はただお一人で、すべての者のために敵と戦われました。 キリストに続いて苦難に遭った聖なる殉教者たちは、キリストの（体）の一員（Iコリント12:27）として、使徒の言葉によれば、*「キリストの苦しみの不足を補う」*（コロサイ1:24）を自らの肉において補い、彼らが御名の聖なる御名のために奮闘し、打ち負かされることなく死んでいくゆえに、キリストは彼らにおいて勝利者となられる。なぜなら、キリストは彼らを御自身の体の肢体として苦しみ、 彼らの中で敵に対する御自身の勝利を現し、御自身が栄光を受けるにつれて、御自身と共に、御自身のために苦しみを受けた御自身の肢体、すなわち聖なる殉教者たちをも栄光に輝かせられる。彼らは、苦しみにおいてキリストに倣った分だけ、栄光において誰よりもキリストに近づいているのである。 それゆえ、私たちもまた、キリストの善き戦士たちを賛美し、称えるべきである。彼らの教えと勇敢な功績の模範によって、キリストの教会は全宇宙に輝いている。 彼ら自身は祭壇の下で、白い衣をまとい、自らの血で染められ、キリストの血によって白くされたまま、至福のうちに安らぎを得ている（マタイ5:14参照）。

聖ルキアノスもまた、殉教者の列に属していた。神の恵みが洗礼の水で彼を清めたその瞬間から、彼が人々の間で偉大かつ栄光に満ちた存在となることは、すでに彼の中に見て取れたのである。肉親である両親は、彼の一族の祖である偉大なプロコンスル・ルキウスにちなんで、彼をルキウスと名付けた。その後、聖霊の恵みと教父たちの慣習に従い、洗礼の際にその名はより良い名へと改められた。 両親から「ルキウス」、すなわち「輝かしい者」と名付けられた彼は、神からの賜物が彼の中に増し加わるにつれて、より完全な名「ルキアヌス」、すなわち「光として現れた者」という名を得た。これは、新しい恵みの光の中で、彼が主について世の光となることを示していたのである（マタイ5:14）。 彼はローマ人であり、高貴な家柄に生まれましたが、キリスト教による「第二の誕生」（ヨハネ3:3）によってさらに高貴な者となり、永遠の王の子としての地位にふさわしい者とされました。彼は知恵に長け、ギリシャ語とラテン語を習得していましたが、完全な知恵は聖使徒ペトロの教えから得ました。 彼はペトロに寄り添い、その弟子となり、彼から天の知恵を注ぎ込まれたからである。また、彼から使徒としての品行と働きも学んだ。ペトロが殉教した後、彼はイタリアの多くの地を巡り、神の言葉の種を蒔いた。

ルキアノスがすでに神の知恵において完全な境地に達していた頃、神に導かれて聖ディオニシオス・アレオパゴス[4069] がローマを訪れ、聖なる囚人である使徒ペトロとパウロに会おうとしたが、

[4069] 聖ディオニシオス・アレオパゴス（アテネの最高政府機関であるアレオパゴスの議員）は、使徒パウロの説教（使徒行伝17:34）の影響を受けてキリスト教に改宗し、同使徒によってアテネの司教に叙階された。 その後、90年に長老ルス

彼らはすでにこの世を去っていた。当時、使徒座を統括していたのは教皇クレメンスであった。　教皇は、ディオニシウスの聖性と、キリストにおける両者の長年にわたる霊的な愛ゆえに、彼を友好的に、そして大いなる敬意をもって迎え入れ、ディオニシウスは教皇のもとでかなりの期間を過ごした。二人は互いの顔を拝むことで慰め合い、魂に益となる対話を楽しみ、言葉だけでなく徳の模範によっても互いを励まし合った。ある日、聖霊に満たされた至福のクレメントは、こう言った。

「ああ、わが愛する兄弟ディオニシオよ！　異教徒たちの中に蒔かれた主の種がどれほど豊かな実を結んでいるか、また、神の御言葉を宣べ伝える働き手がどれほど少ないか、お分かりだろうか（マタイ9:37）。そして、あなたは正教の信仰を十分に学び、キリスト教の律法における徳において完全さを達成しているのだから、――お願いだ――主イエス・キリストの御名のために、西方の　諸国へ行き、主の良き戦士として、主の敵に立ち向かい、あなたを強めてくださる神の力によって彼らに打ち勝ちなさい。

聖ディオニシオスは心からこれに同意し、そこで至福のクレメンスは、敬虔で英知に富み、聖なる生活によって輝いている友人、助手、そして共同奉仕者たちを探し集め始めた。　その中から聖ルキアノスを選び出し、彼を司教に任命して聖ディオニシオスと親しくさせ、神の御言葉を宣教する上で彼の伴侶であり同志となるよう、また他の者たちにとっては聖霊における父、教師、そして導き手となるよう手配した。　このように手配を済ませた後、至福のクレメンスは、選ばれた者たちを温かい言葉で励まし、こう語った。

– さあ、愛すべき兄弟たちよ、行け、キリストの無敵の戦士たちよ。主が聖なる先祖である使徒たちやその同志たちと共にいてくださったように、主の聖なる御名を宣べ伝えるあなたがたと共にいてくださいますように。なぜなら、異教徒の中から数えきれないほど多くの人々が、あなたがたによって主のもとに導かれ、主の囲いの中へと迎え入れられるからです。

長い語り合いの末、聖クリメントは彼らに心から別れを告げ、祝福を与え、平安のうちに送り出した。彼らは皆で共に旅立ち、まずイタリア全土でキリストを宣べ伝えた。

彼らがティチーノの町に近づいたとき[4070]、至福のルキアノスはパルマと呼ばれるある場所で、民に神の御言葉を宣べ伝え、彼らを虚しい偶像崇拝から遠ざけた。　その地の住民たちは、不信仰者であり、過度に熱心な偶像崇拝者であったため、自分たちの神々に対する侮辱に耐えられず、また神の御言葉の福音を聞き入れようともせず、直ちに聖ルキアノを捕らえ、彼に多くの侮辱を加えた上で、彼を一人きりで民の牢獄に投獄した。　牢獄に入る際、この祝福された聖人は大きな喜びをもって次のように歌った。*「主よ、あなたの道を私に示してください。そうすれば、私はあなたの真理のうちを歩みます」*（詩編85:11）、そしてさらに、*「私の歩みをあなたの道に堅く立ててください。私の足がよろめかないように」*（詩編16:5）。このように主を喜び祝う聖人は、まるで神の御翼の庇の下にいるかのように牢獄に留まり、キリストの御加護への完全な希望を抱き、次のように主にお祈りした。「*私の魂を牢獄から救い出し、私があなたの御名を賛美できるようにしてください*」　（詩編141:6）「なぜなら、義人となるべき者たちが私を待っているからです。――私を通して、キリストよ、世界の救い主よ、永遠の命に定められている異邦人たちが、あなたのもとへ立ち返りますように」（ローマ8:28）。聖人はこのような祈りを心から捧げ、その祈りは天を貫き、主の御耳に届いた。なぜなら、彼は、共に苦難を分かち合い、遣わされた地へと至ることを望んでいた同志たちを失うことなく、その道を歩み続けられるよう願っていたからである。　この勇敢なキリストの戦士がこのように祈ったのは、主のために死ぬことを恐れたからではなく、まず主に霊的な実を豊かに実らせ、

ティクスおよび助祭エレフテリオスと共に、福音宣教のためガリアへ派遣された。96年、ドミティアヌス帝の治世下で彼らと共に殉教した。その記念日は10月3日である。

[4070] ティチヌム（現在のパヴィア）は、キサルピナ・ガリアにある古代都市で、ティニヌム川の左岸、その川がポー川に合流する地点の近くに位置する。

そして豊かで実り多い収穫を収めた後、友人たちと共に殉教の冠と労苦への報いを受けたいと願ったからである。　そしてまもなく、彼は神の助けを受けた。あるキリスト教徒たちが、この聖なる人の境遇を知り、キリストへの愛に駆られて夜中に牢獄を訪れ、あらゆる手段を尽くしてルキアノスを束縛から解き放ち、彼が聖なる友人たちと共に旅立つことができるようにしたのだ。

主の導きを受けた聖なる一行は、イタリアのティチーノ地方にある栄光に満ちた都市、別名パヴィアへと無事に到着した。そこで労苦から少し休息をとった後、彼らは神の栄光をますます広め、様々な場所で絶え間なく、豊かにキリストの御言葉を宣べ伝えた。それゆえ、彼らには預言者の言葉が成就しているのが見て取れた。　*「山々を駆け巡る、平和を告げ、喜びの知らせを伝える使者の足は、なんと美しいことか」*（イザヤ52:7；ローマ10:15）。　彼らが救いの言葉をすべての人に宣べ伝え、短期間のうちにどれほど多くの人々をキリストへと導いたかは、言葉では言い表せないほどであった。そして、神の力が彼らにこれほどまでに味方したため、彼らを見る人々は、まるで天の市民を見ているかのように思った。なぜなら、彼らはしるしと奇跡によって人々の真ん中で輝き、神に選ばれた者たちの魂を照らしていたからである。　その後、彼らはイタリアを後にし、海岸にたどり着くと船に乗り込み、聖霊が導くままに航海に出た。彼らは喜びをもってアレラトの港に停泊し、上陸すると、その町の住民たちから敬意と親しみを込めて迎えられた。　そこで休息をとった後、聖なる使徒たちの模範に倣い、神の言葉を宣教するための地を選び始めた。キリストの福音の宣教によって、異教徒の間、さらにはブリタニア海に至るまで至る所で神の教会を広め、増し加えるため、聖マルケリンは少数の兄弟たちを率いてスペインへと向かい、　至福のサトゥルニヌスはガリアへ、聖ディオニシウスは至福のルキアヌスや他の者たちと共にパリの領内へと向かった。ここから、聖ルキアヌスは長老マクシアンと助祭 ユリアヌスを伴い、ベルギーへ宣教のために旅立った。 聖霊の恵みに満ち溢れた彼は、そこで主の御名を宣べ伝え、敵の力を打ち破り、キリストの教会を築き上げ、言葉だけでなく、徳ある生活の模範によっても、人々を救いへと導いた。　さらに、神から奇跡を行い、人々のあらゆる病気や病苦を癒やす力が彼に与えられていた。また、悪霊に対しては、その命令を聞くやいなや、悪霊に苦しめられていた人々を即座に放つほどの権威を授かっていた。

昼も夜も絶え間なくキリストについて説教する一方で、ルキアノスは祈りと徹夜、日々の断食、節制、そして肉体の完全な死滅に身を捧げ、絶えず自らを消耗させ続け、ついには使徒の言葉にあるように、*「自分の体を、生きた、聖なる、神に喜ばれる供え物としてささげた」*（ローマ12:1参照）。彼の普段の食事は小さなパンの切れ端と野菜、飲み物は水だけだったが、神の力が彼を養い、主の恵みが彼の疲れ果てた体を強めた。この福者は、殉教の冠をこれほどまでに切望して求めたため、世にとってはすでに死んだ者のように見えた。

こうして、この主キリストの真の従者は、自らの十字架を背負った。彼は、苦難には二種類あることを知っていた。一つは隠れたものであり、もう一つは公然たるものである。そして、公然たる殉教の偉業を成し遂げ、主から朽ちることのない冠を授かる前に、彼は人知れず自らを消耗させていた。とはいえ、彼の節制ぶりは誰の目にも明らかであった。　肉体を死に至らしめるような苦行によって彼は衰弱し、忍耐によって飾られていた。驚くべき謙遜を備え、柔和さに満ちた彼は、徳においてこれほどの完成度に達したため、地上で肉体を持ちながら、霊においてはすでに天の天使たちと共に生きているかのように見えた。　それゆえ、彼の顔は常に明るく親しみやすく、心は穏やかであり、驚くべき白髪に飾られたこの老人の姿そのものが、地上の天使、天上の人のようであった。

ルキアノスの名声がベルギー全土に広まると、洗礼を受けたいと願う人々が彼のもとに集まり、父と子と聖霊の御名によって彼から洗礼を受け、その後、かつて崇めていた偶像を打ち砕いた。一方、古くからの敵である悪魔は、キリストがそのしもべたちを通して御自身のもとに引き寄せた者たちによる冒涜を目の当たりにし、神の聖なる教会を破滅させるためにあらゆる狡猾さと陰謀を向け、　彼は、すでに亡くなっていたネロの後を継いで、キリスト教徒に対する第二の迫害を開始したドミティアヌスに対し、キリスト教徒に対する怒りと憎悪を煽り立てた。ドミティアヌスに対し、ロー

マ帝国の全領土において、キリスト教徒に彫像の神々への生贄を捧げさせるよう強制し、信仰を曲げない者たちには様々な拷問の末に処刑するよう教えたのである。　ドミティアヌスは、自身の帝国のすべての都市や村々に不敬虔な勅令を下し、すべての地方長官に対し、キリスト教徒に偶像を崇拝し、それらに犠牲を捧げるよう説得し、従わない者は様々な拷問によって処刑するよう命じた。　キリストの御名を迫害する者たちは、ガリアへ派遣され、キリストの戦士たち、とりわけローマからここへやって来た者たち――その名声はすでに遠くまで広まっていた――を探し出すよう命じられた。彼らは、彼らと共にキリストの御名そのものを根絶やしにしようとしたのである。ここへ、ラトリン、アリウス、アントルの三人の迫害者が派遣された。　彼らには特別な命令が下されていた――神の聖なる僕ルキアノスを見つけ出し、捕らえて皇帝の裁判にかけるか、あるいは偶像への生贄を捧げることを拒むならば、即座に剣で殺すことだった。迫害者たちはガリアの都市や村々を巡ったが、どこにも彼らが探していた人物はいなかった。　その後、神の僕ルキアヌスが、永遠の御国の福音を宣べ伝え、ベルギーの民を啓蒙しているという知らせが彼らの耳に入った。これを聞いた迫害者たちは、極度の激怒と憤りに駆られ、急いでベルギーへと向かった。

聖ルキアヌスは、聖霊の啓示によって、迫害者たちが到着するより前に、彼らの到来が近いことを知っていた。彼は、民に命の言葉を説いていたその場に留まり、そこにはすでに彼の説教によってキリストに回心した大勢の人々が集まっていた。　永遠の栄光と至福の報いを望みながら、彼は心を込めて彼らにこう説き諭した。

「キリストにあって愛する兄弟たち、そして子供たちよ！　私の主イエス・キリストは、私の労苦の果実を私に示し、あらかじめ約束された報いを授けてくださることを喜ばれておられます。愛する者たちよ、キリストの信仰において堅固で、揺るぎないままでいてください。　私はすでに年老いて疲れ果てているが、殉教の冠を喜びとし、あなたがたのもとを離れて主のもとへ旅立とうとしている。あなたがたは、受け入れた神の恵みの中に、変わらず留まり続けなさい。　迫害者たちへの恐れが、あなたがたをキリストの信仰から遠ざけることのないように。脅しによって怯えることのないように。お世辞に惑わされることのないように。いかなる名誉や富の約束にも心を奪われることのないように。そうして、あなたがたのために用意された言葉では言い表せないほどの報いが待っている来世において、永遠の喜びを味わうことができますように。　私もまた、この良き希望を抱いてそれらを目指しており、それらのために、迫害者たちの猛威を恐れることはありません。

そう言うと、ルキアノスは天を仰ぎ、皆の前で、神が彼を聖なる殉教者たちの運命に与え、友たちから引き離さないことを感謝した。彼はこう言った。

「主イエス・キリストよ、生ける神の御子よ、私を至福のディオニシオスとその死を共にした仲間たちと友とし、その労苦において彼らと同等にしてくださったことを感謝します。どうか、天の御国においても彼らと共にいられるよう、私をそのにふさわしい者とさせてください。」

そう言うと、彼はベロヴァカの町を出た[4071]。それは、恐怖から拷問を避けるためではなく、迫害者から身を引くよう命じる主の戒め（マタイ10:23）に従い、自分の羊の群れに模範を示すためであった。　彼の祝福された同志である長老マクシアンと助祭ユリアンと共に歩みながら、彼は道中ずっと、魂に益となる語り合いと祈りを絶やすことはなかった。ついに、彼は目指していた山の頂上にたどり着いた。その山は、街から西へ三ポプリシュの距離[4072]を流れているファラと呼ばれる川の近くにある。　彼がそこに着くと、まるで山の頂上に立つ町のように、身を隠すことはできなかった（マタイ5:14）。というのも、川の上に絵のようにそびえ立つその山自体が、遠くからでも見えたからである。　そこで、聖人は、まるで人々の目にさらされる場所にいるかのようにしっかりと立ち、殉教の冠を待つことを決意した。

[4071] 現在はフランスのボヴェである。

[4072] 競技場の長さは、およそ690サジェンである。

前述の拷問者たちは、町に到着して聖ルキアノスを見つけられなかったため、彼がどこへ行ったのかを確かめ始めた。彼らが「彼は町の近くで民衆に教えを説いている」と告げられると、直ちに速足の馬に乗ってそこへ駆けつけ、神の人が民衆や弟子たちと共に滞在していた山にたどり着いた。まず、神の聖なる僕たちであるマクシアンとユリアヌスを捕らえ、彼らの拷問と死によって聖ルキアヌスを威嚇し、偶像崇拝へと引き込もうとした。捕らえられた殉教者たちに対し、偶像に拝むよう威圧的に命じ、次のように言って恐怖を植え付けようとした。

「もし我らの不死の神々に犠牲を捧げなければ、直ちに剣で処刑する。」

しかし、信仰に揺るぎない殉教者たちは、恐れを知らずにこう答えた。

「我々は決して偶像を拝むことはない。それらは虚しいものであり、人の手によって造られたものに過ぎないからだ。我々は、唯一の真の主イエス・キリスト、生ける神の御子を知った。その御方を信じるために、我々は死ぬ覚悟がある。」

これを聞いた悪人たちは、聖ルキアノの目の前で即座に彼らを剣で殺した。こうして聖人たちは、主から約束された栄冠を受け、聖なる殉教者たちの列に加わった。聖ルキアノは、彼らの偉業を喜び、神を賛美しつつ、皆の前でこう言った。

「わが主、わが神よ、あなたを喜び、喜び歌います。私の子供たちが、私より先にあなたの栄光の冠を受け取るのを見るからです。」

すると、ラトリン、アリウス、アントルは、激怒と憤りを込めて、口を揃えてその福者に厳しい言葉を浴びせた。

「お前こそが、魔法を使って民を惑わし、強大な皇帝とローマ元老院の命令に従わず、不死の神々に恵みをもたらす生贄を捧げないようにさせているのではないか？」

至福のルキアノスはこう答えた：

――私は魔術師ではなく、イエス・キリストの僕であり、魔術ではなく神の知恵を学んだ者です。その力によって、人々に神の真理の道を示し、彼らが何の妨げもなく、私の主イエス・キリストに従うことができるよう教え導いています。　主は天から地へ降りてこられ、ご自身の血によって、ご自身の被造物を敵の奴隷状態から贖い出し、偶像――いや、むしろ悪魔――への崇拝から遠ざけ、迷信の闇から真の光へと導かれる者たちに救いを授けられました。そして、彼らがただそのお方だけに心の襟を正してひれ伏すのは当然のことです。　すべての者を救うために、十字架の苦しみと死を甘受してくださった方へ。

迫害者たちは反論した：

「死んだだけでなく、十字架にかけられたとさえ呼ぶその方を、どうして神として告白できるのか？」

聖ルキアノスは彼らにこう答えた。

「あなたがたは不信仰ゆえに、天の王の奥義を聞くに値しないが、ここに集う多くの信者たちのために、私は簡潔にこう告げよう。　真の神、真の神の御子、永遠に父と共に御在りになる方は、世の終わりに、アダムの罪によって滅びつつあった人類を刷新しようと望まれ、真の神であり真の人間であるために、不朽かつ言葉に尽くせぬ御姿で、至聖なる処女から生まれ出ることをお許しになりました。それは、一つの御人格において二つの本性を併せ持つ唯一のキリスト、　真の神の子であり、真の人子となられた。そして、神性においては無情であり、常に父と共にありながら、　、目に見える姿となっただけでなく、人間の本性に従い、私たちのために苦しみを受け入れられた。すなわち、私たちの贖いのために、父なる神に従順であり続け、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順であったからである（フィリピ2:8参照）。もし神の御子が人の子となることを望まず、死すべき者の姿をとらなかったならば、人類は神から赦しを受けることもなく、死すべき者たちは不死をまとうこともなかったであろう。

これらの言葉や、その他多くの聖ルキアノスの言葉は、拷問者たちをさらに激しい怒りに駆り立て、彼らはこう言った。

「お前はすでに高齢に達しているのだから、子供じみた戯言はやめるべき時だ。だからこそ、躊躇いもなく死へと向かうことを敢えてし、偉大な虚栄に惑わされ、度を越した饒舌によって理性を奪われても、恐れることを知らないのだ。」　真実を告げておく。もしすぐに悔い改めず、その狂気と傲慢を捨てず、不滅の神々に喜ばれる生贄を捧げなければ、直ちに、お前の老いも容赦なく激しい拷問にさらすことになる。

その後、拷問者たちは腰を下ろし、威圧的な口調で彼に問い詰め始めた。

「さあ、早くお前の名前と生い立ちを言え。」

キリストの戦士は彼らにこう答えた。

「私は両親からルキアという名を授かりましたが、キリストにおいて永遠の命に生まれ変わった聖なる洗礼において、ルキアヌスと改名されました。私はローマ人であり、この出自は全世界で尊敬されています。　しかし、私が誇るのはローマ人であることではなく、私の主イエス・キリストの僕であるということだ。それは、あなた方も私を見て明らかにわかるはずである。なぜなら、私にとって、私の主イエス・キリスト以外に、他のいのちも栄光もなく、主のために死ぬことは、私にとって得であるからである（フィリピ1:21参照）。

すると、迫害者たちは言った。

「我々の言う通りだ。お前は魔術師であり、お前の言葉を聞く者たちを惑わす者だ。何よりもお前は高慢な者であり、恥知らずな言葉を絶えず口にし、老いも顧みないではないか。」　もしあなたがローマ人であるなら、なぜ、カエサルやローマ元老院全体、そして全世界が崇拝するローマの神々への敬意から、これほど無謀に背を向けたのか?

聖ルキアノスはこう答えた。

「私が洗礼を受けた、またいちばんの神として知ったキリストの恵みによって、私は信仰において、悪魔や偶像だけでなく、そのすべての行いをも拒絶したのです。　しかし、あなたがたは、主キリストに関する私の言葉や説教を、聞くことも、心に留めることも望まない。それは、あなたがたの不信仰が、あなたがたと、あなたがたにそのような命令を下した皇帝とその元老院の目を曇らせているからである。その命令により、私たち　我々、理性ある被造物である人間が、悪魔に犠牲を捧げ、人の手によって造られた無感覚な偶像の前にひざまずくよう、そのような命令を下したのです。

ラトリン、アリウス、アントルは、自分たちの神々や皇帝への冒涜をこれ以上耐えられず、聖人に手をかけ、彼を縛り上げ、兵士たちに引き渡した。兵士たちは殉教者を縛り上げ、容赦なく長い間、残酷な鞭で打ち続けた。　拷問に耐えながらも、キリストの戦士は苦しみには屈せず、脅しにも怯むことなく、キリストへの信仰を堅く保ち、その気丈な精神で、老いによって衰え、傷ついた仲間たちを励まし続けた。顔つきも心も変わることなく、彼は絶えず力強い声でキリストの御名を告白し続け、こう語った。

「私は決して、心と信仰と口をもって、神の御子キリストを賛美することをやめない。」

拷問者たちはさらに激怒し、聖なる殉教者を剣で殺すよう命じた。すると、一人の兵士が剣を抜き、すでに斬首の準備が整えられていた聖人の首に斬りつけ、尊い首を切り落とした。　聖なる遺体が首を切られて横たわり、まだ動いているとき、殺害者たち自身を含め、すべての者が、天からその上に大いなる光が輝き、その光とともに天からの声が聞こえるのを目撃した。

「喜びなさい、善き僕ルキアヌスよ。わたしのために自らの血を流すことを恐れなかった者よ。来て、かつてあなたに約束された冠を受け取り、聖人たちと共に天に宿りなさい。来て、天使たちと共にあなたのために用意された永遠の栄光の住まいを受け継ぎなさい。」

この声は、神から約束された報いを常に固く信じていた聖人のためではなく、周囲に立っていた民衆のためであった。それは、聖ルキアンがこれほど長い間説き続けてきた、私たちの主イエス・キリストへの信仰を、民衆がさらに確固たるものにするためであった。　これらすべての出来事は、前述の山で、町から三ポプリシュの距離にある場所で、安息日に起こった。これを見て、これを聞いた人々は、信者も非信者も問わず、大きな恐怖に襲われた。　ある者はそこから逃げ去り、ある者は悪魔の罠から解放されたことを喜びながら驚嘆したが、　、現れた光の輝きを見つめることができなかったため、その場所から少し後退した。　その時、聖ルキアノスは、肉体は死んでいたにもかかわらず、神から奇跡的に動く力を授かり、まるで生きているかのように地面から立ち上がり、両足で立った。　その後、自らの尊き頭部を手に取り、彼の中に宿る聖霊の恵みと天使たちの助けに導かれて、何事もなく歩き出し、まるで生きた肉体であるかのように力強い足取りで旅を始め、その聖なる頭部を携えて進んだ。これは、パリの街で彼の友である聖ディオニシオスが行ったのと同じことである。　約三ポプリシュを歩き、前述のファラ川を渡った後、この神の人は自ら埋葬の地として選んだ場所にたどり着いた。そこで地面に横たわり、安らかに主のもとで息を引き取った。

殉教者の説教によってキリストに改宗した敬虔な人々がやって来て、その聖なる遺体に香油を塗り、清らかな布で包み、天使たちの臨在のもと、多くの栄誉をもって埋葬した。　というのも、その尊い遺体が埋葬される際、地上の香りに加え、ある種の不思議で言葉に尽くせない芳香が漂っていたからである。そこにいた者たちは皆、驚き、互いに尋ね合った。

「これは何だろうか？」

そしてこう言った：

「主イエス・キリストよ、私たちの鼻がこれまで嗅いだことのないようなこの芳香を嗅がせてくださったことを、あなたに栄光あれ！　救い主キリストよ、あなたに栄光あれ。私たちは、この芳香によってこれほどまでに慰められたので、これからは、いかなる恵みも奪われることはないだろうと信じています！」

そして、彼らがそう語り合っている間、神聖な香りは絶えることなく漂い続けた。ここから、聖なる天使たちの臨在が疑いなく感じられた。彼らは、殉教者の苦難が始まってから、その死と埋葬に至るまで、常に彼のそばに寄り添っていたのである。　尊厳ある埋葬を執り行った後、敬虔な埋葬者たちは地面にひれ伏し、心を痛めながらこう叫んだ。

「イエス・キリストよ、私たちは信じます。あなたが真の神の子であり、御父と聖霊と共に天において御国を治めておられることを。私たちは、あなたの聖なる殉教者ルキアノスから、耳で聞き、心で信じることを学んだのです。」

近隣の町や村から葬儀に集まった大勢の人々は、この光景を目の当たりにし、また最後に到着した者たちは目撃者からその話を聞いて、心を打たれ、その日、約五百人の魂が、私たちの主イエス・キリスト、神の御子を信じるようになった。　それ以前にも、聖ルキアノの教えによって、その地では男女を問わずあらゆる年齢層の三万人に及ぶ人々がキリストへと回心し、偶像を捨てて、生れざる父なる神と、その独り子、そして聖霊とを、三位一体の真の唯一の神として告白した。　その後、改宗者たちの一部は、熱意をもって、神の栄光と、神に愛された聖ルキアンの栄誉を称えるため、殉教者の墓の上に教会を建立した。　聖殉教者マクシアヌスとユリアヌスの遺体は、彼らが殺害された山に埋葬されたが、その後、キリスト教徒の数が増加したため、そこから移され、至福のルキアヌスの遺体と共に安置された。そして、主イエス・キリストは、その聖なる殉教者たちの執り成しによって、その地で多くの恵みを授けられた。　彼らが苦難の中で一つの信仰、一つの愛、一つの告白を共有していたように、――私たちは信じます――永遠の至福においても、彼らには一つの交わりと、永遠の御国の相続があるのです。三位一体を告白し、殉教によって完全さに達した御方の三人の証人に

ついて、私たちの創造主に感謝します。　私たちは彼らを畏敬の念をもって崇め、彼らによって盲人に視力が与えられ、足の不自由な者に歩行が与えられ、悪霊が追い出され、また彼らの聖なる祈りによって様々な病からの多くの癒しがもたらされることを知っています。これは、私たちの主イエス・キリストの恵みによるものです。父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

6月17日

6月4日（旧暦）

聖なる父ミトロファン、コンスタンティノープル総主教の記念日

6月4日の記念日

私たちの聖なる父ミトロファンは、最初のキリスト教皇帝であるコンスタンティヌス大帝の時代に生きていました[4073]。彼は、王家に由来するローマ人ドメティウスの息子でした。このドメティウス（別名ドメティアヌス）は、かつてローマ皇帝の座に就いていたプロヴァの兄弟であった[4074]。分別ある人物であったドメティウスは、まもなく偶像崇拝の虚偽に気づき、偽りの異教の神々を捨て、真の神――我らの主イエス・キリスト――を信じるようになった。　当時、ローマは異教の不義に満ちており、キリスト教徒たちはそこで激しい迫害を受けていたため、ドメティウスは帝国の首都を離れ、二人の息子プロヴとミトロファンと共にビザンティウムへと向かった。　当時、ビザンティウムには、神に愛され聖なる人物であるティトス（トラトスまたはトラトとも呼ばれる）[4075]が司教を務めており、ドメティオスとその息子たちは彼の元で暮らし始め、キリストの信仰と主の律法を学び、徳ある生活について教えを受けた。　ドメティウスが心と魂のすべてをキリストに捧げ、主のために尽力する熱意に満ちているのを見て、司教は彼を教会の聖職者の一員に加え、長老に叙階した。ティトスがドメティオスを指導した後、世を去ると、ドメティオスは彼の後を継いで司教の座に就いた[4076]。そして、祝福されたドメティオス司教の死後、その息子プロヴが司教の座を引き継いだ[4077]。　その後、プロヴァが世を去ると、ドメティウスの息子でありプロヴァの兄弟である聖ミトロファン[4078]がビザンティウムの主教座に就いた。彼については、これから述べることにする。

この頃、コンスタンティヌス大帝はトラキア地方[4079]に到着し、ビザンティウムに滞在した。そこで聖ミトロファンと出会った皇帝は、彼との対話を通じて、彼が神に深く愛される偉大な人物であることを知り、聖人の徳高い生活とその英知に深く感嘆した。　彼を深く愛し、その神に導かれた言葉に耳を傾けたいと願った皇帝は、彼をローマへ連れ帰った。

[4073] コンスタンティヌス大帝（在位：306年～337年）。
[4074] プロヴまたはプロブは276年から282年まで在位した。
[4075] 聖ティトゥスは242年から272年までビザンティウムの司教職に就いていた。
[4076] ドメティウスは272年から303年までビザンティウムの司教を務めた。
[4077] プロヴは303年から315年まで司教を務めた。
[4078] 聖ミトロファン（コンスタンティノープル初代総主教）は、315年から325年までコンスタンティノープルの主教座に就いていた。
[4079] トラキアはバルカン半島の東端に位置し、黒海とマルマラ海に面していた。現在は、トルコのルメリア東部州にあたる。

その直後、コンスタンティヌス皇帝は、首都をローマからビザンティウムへ移すことを望んだ。　皇帝はこの街を、その美しさと好立地から大いに気に入った。この街はバルカン半島の南東端、黒海と地中海、そしてマルマラ海を結ぶボスポラス海峡の岸辺に位置している。　陸路も海路も、この街へと続く素晴らしい道が整備されており、周辺一帯は様々な農産物に恵まれていた。これらすべてがコンスタンティヌス帝の心を強く惹き、彼は帝国の首都をここに移すことを決意した。皇帝は新しい首都を最も美しい建造物で飾り立て、「新ローマ」と名付けた。

しかし、その創設者の名にちなんで、この都市はコンスタンティノープル、すなわち「コンスタンティヌスの都市」と呼ばれることが多く、また皇帝の居城として「ツァールグラード」とも呼ばれていた。　帝国の首都をビザンティウムに移したコンスタンティヌスは、旧ローマから聖ミトロファンもここに招き、彼を自分の父と称し、ニカイアで第1回全地公会議に集まった司教たちに対し、[4080] 彼に総主教の称号を授けるよう働きかけた。こうしてミトロファンは、コンスタンティノープル初の総主教となった。

高齢と体の衰えのため、ミトロファン自身はニカイアの公会議に出席しなかった。　その代わりとして、彼は自身のホレピスコプスであるアレクサンドロス（[4081] ）を派遣した。アレクサンドロスは、高潔で聖なる老人であり、フラキアとイリリアにおける教会界のために多大な労力を捧げてきた人物であった（[4082] ）。彼は公会議において、総主教ミトロファンの代理として席につき、アリウスに反対した。

この全地公会議の終了後、敬虔な皇帝コンスタンティヌス大帝は、公会議に出席していたすべての聖職者たちに、彼と共にコンスタンティノープルへ赴き、そこで死の床に横たわっていた病床のミトロファン総主教を訪問するよう懇願した。　ある日曜日のこと、聖職者たちは皇帝と共にミトロファンの元を訪れ、彼と長い間語り合った。その際、皇帝は聖人にこう言った。

「敬愛すべき父よ！　あなたは老いと病に蝕まれ、衰えつつあるのが見て取れます。そこで、お願いです。あなたの後継者としてふさわしいのは誰か、教えてください。」

この言葉に、聖ミトロファンは喜びに満ちた眼差しで皇帝に答えた。

「まことに、今、聖霊があなたの口を通して語っておられます。確かに、七日前に私がこのことについて思索にふけっていたとき、主は十日が過ぎれば私がこの世を去ることを私に啓示してくださいました。　そして、私がこの世を去った後、私の同僚であるアレクサンドルが私の後を継いでください。彼はまことに、選出にふさわしく、聖霊の賜物を受けた者です。その次に、現在朗読者であるパヴェルが後継者となるべきです[4083] 。

それから、アレクサンドリア総主教である至福のアレクサンドロス[4084] に目を向け、彼にこう言った。

「兄弟よ！　あなたもまた、優れた後継者を残すことになるだろう。」

そして、彼の副司祭であるアファナシオスの手を握り、こう述べた。

[4080] この公会議は325年に開催され、神の御子は父と同質ではなく、単に父に類似した存在であり、他の被造物よりも高い地位にある被造物であると説いたアリウス派の異端を糾弾するために招集された。　この公会議には、ローマ帝国の領内にある様々な国々から集まった318人の司教が出席した。

[4081] ホレピスコプとは、都市の司教の管轄下にあった地方の司教のことである。

[4082] イリュリアとは、アドリア海沿岸の東部全域とその背後の地域を包含していた州である。現在、この州のあった場所には、アルバニア、ダルマチア、ボスニアがある。

[4083] 聖ミトロファンの後、コンスタンティノープルの総主教には確かに聖アレクサンドロスが就任し、その後に聖パウロが続き、341年から350年にかけて、いくつかの中断を挟みつつ総主教の座に就いた。

[4084] 聖アレクサンドロスは、312年から326年までアレクサンドリアの総主教の座に就いていた。

「見よ、これこそキリストの勇敢な戦士である。彼はあなたの後継者となるだろう[4085] 。そして、私の兄弟アレクサンドロスと共に、アリウス派の不敬虔に断固として立ち向かうだけでなく、偉大な功績を成し遂げるだろう。それゆえ、勇敢なパウロと共に、彼には多くの苦難が待ち受けているのだ。」

こうして聖人は未来を予言し、主からの啓示から十日後、6月の4日に安らかにこの世を去り、生誕からわずか百十七年の生涯を全うした。　今や聖人は、天を通り抜けた大司祭、すなわち私たちの救い主キリストの御座の前に立ち、永遠の命の中にいます。御名に永遠の栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調：

あなたはキリストの信仰を明確に宣べ伝え、これを守り通すことで、あなたの忠実な群れを真に数多く増やしました。それゆえ、ミトロファンよ、天使たちと共に喜び、私たちすべてのために絶えずキリストに祈り続けてください。

イン・コンダク、第4調：

幼少の頃からあなたは尊い器として現れ、神に選ばれた聖人となり、喜びをもって神にこう叫びました。「キリストよ、あなたは父と聖霊と等しい方です。」

聖殉教者コンコルディウスの受難

記念日：6月4日

アントニヌス帝の治世[4086] 、ローマ市ではキリスト教徒に対する極めて苛烈な迫害が巻き起こり、神々に犠牲を捧げない者は、何も買うことも売ることも許されなかった。当時、ローマ市にはコンコルディウスという名の男が住んでいた。彼は貴族の家系に生まれた。　コンコルディウスの父ゴルディアンは聖職に就き、長老であった。ゴルディアンは息子コンコルディウスに、聖書の教えとキリストの信仰を授けた。そのため、マルクス・アウレリウス皇帝の治世[4087] にキリストのために殉教したローマ司教ピウスによって、　コンコルディウスは副助祭に叙任された。この祝福された人は、父と共に、昼夜を問わず断食　と祈りに励み、さらに、貧しい人々やすべての困窮者に対して惜しみなく施しを行った。また、彼らは主に対し、キリスト教徒に対する迫害の残虐さから逃れることができるよう、その機会を授けてくださるよう祈り求めた。

ある日、至福のコンコルディウスは父にこう言いました。

「父上！もし私の考えに異存がなければ、聖エウティキオスのもとへ赴き、私たちの敵であるアントニヌス皇帝の猛威が収まるまでの間、彼のもとでしばらく暮らすことをお許しください。」

[4085] 聖アレクサンドロスの後、アレクサンドリア総主教には、確かに聖アタナシオスが373年まで就任した。彼はアリウス派やアリウス主義を支持する皇帝たちから多くの迫害を受けた。　彼は何度か街を離れ、西方に逃れて身を隠した。時にはアリウス派によってアレクサンドリアから追放されることもあった。コンスタンティノープル総主教である聖パウロも、彼と同じ運命をたどった。

[4086] ローマ皇帝アントニヌスは、異教徒たちから「シェム」、すなわち「敬虔なる者」と呼ばれ、138年から161年まで在位した。

[4087] マルクス・アウレリウスは、161年から180年までローマ皇帝の座に就いていた。

「むしろここに留まろう、わが子よ」と、コンコルディウスの父はこの願いに対しこう言った。「そうすれば、私たちも主から殉教者の冠を授かることができるのだから。」

聖人はこう答えた。

「殉教の冠は、キリスト・神が御心に適う場所であればどこでも受け取ることができます。ですから、私の決意を遂行させてください。」

この言葉を聞いた父は彼を解放し、コンコルディウスは親戚のエウティキオスのもとへ去っていった。エウティキオスは当時、トレブラーの町に近いサラリウム街道沿いの自分の領地におり[4088]。

コンコルディウスを大いなる喜びをもって迎え入れた福者エウティキオスは、神に感謝を捧げ始め、二人はその地で共に過ごし、断食と祈りに励んだ。そこへ、様々な病に苦しむ多くの人々が彼らを訪ねてきた。　二人は主イエス・キリストの御名によって祈り、彼らに癒やしを与えた。それにより、二人の名声は遠く離れた人々の間にも広まっていった。当時スポレート[4089] に居住していたトゥスの教区長トルクヴァト[4090] が、二人のことを耳にした。彼は至福のコンコルディウスを呼び寄せ、まず聖人にその名を尋ねた。

「私はキリスト教徒です」とコンコルディウスは答えた。

「私はあなたの名前を尋ねているのだ」と司教は再び言った。「あなたのキリストのことではない。」

「すでに言った通りだ」と聖コンコルディウスは答えた。「私はキリスト教徒であり、キリストを信仰しているのだ。」

「不死の神々に生贄を捧げなさい」とエパルクスは言った。「そうすれば、あなたは我々の友となる。私はあなたを父の代わりに見なし、私の主であるアントニヌス皇帝に、あなたを神々の祭司に任命するよう願い出るつもりだ。」

「お前の神々は、お前のそばにいたほうがよいだろう」と、聖コンコルディウスはそう答えた。

「私の言うことを聞き、不死の神々に犠牲を捧げなさい」と、エパルヒは説得を続けた。

「むしろ、あなたが私の言うことを聞き、主イエス・キリストに犠牲を捧げなさい。そうすれば、永遠の苦しみから逃れることができる。もしそうしなければ、来世で罰を受け、消えることのない炎の中で苦しむことになるだろう。」

そこで、エパルクは彼を棒で打ち、共同の牢獄に投獄するよう命じた。

夜になると、至福のエウティキオスが聖アンフィム司教と共にコンコルディウスの元を訪れた。アンフィムはトルクヴァトの友人であり、彼に囚人を短期間だけ解放するよう懇願した。　こうしてコンコルディウスは夜間に牢獄から解放され、アンフィムと共にかなりの時間を過ごした。その間、アンフィムはコンコルディウスを司祭に叙階し、二人は共に暮らし、断食と祈りに励んだ。

しばらくして、トルクヴァトはコンコルディウスを呼び寄せ、彼に尋ねた。

「自分の人生について、どうするつもりだ？」

4088 トレブラーという名は、ローマの東、イタリア中部にあるサビニア地方の3つの小さな町に付けられていた。その後、スポレートに住んでいたトゥスの司教が聖コンコルディアを招いたことが語られていることから、　ここでは「トレブラー」という名称で示されている都市は、サビニア地方の北部、ローマの北東に位置するウンブリア州からほど近い場所にあったと考えられる。

4089 スポレタ（現在のスポレート）は、中部イタリア、古代のウンブリア地方にあり、エトルリアとの国境に位置する都市である。おそらく、ウンブリアとエトルリアは同一の統治者の支配下にあったものと思われる。

4090 ローマ人は、中イタリアの西部、ローマの北に位置するエトルリアの住民を「トゥスキ」と呼んでいた。したがって、トゥスの教区長はエトルリアの統治者であった。

「私の命はキリストです。私は毎日、キリストに賛美のいけにえを捧げています。しかし、あなたはゲヘナで燃やされることになるでしょう」と、コンコルディウスはエパルフに言った。

そこでトルクヴァトは、聖人を恥辱の柱に縛り付けるよう命じた。しかし、聖人は喜びをもってこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたに栄光あれ！」

「偉大なるゼウスに捧げ物をしなさい[4091]」と、エパルヒは執拗に迫った。

「私は、耳も口も利かない石に犠牲を捧げるつもりはない」と、至福のコンコルディウスは答えた。「私の魂が仕える主イエス・キリストが、私と共にいてくださるからだ！」

その後、エパルヒは激怒し、コンコルディウスを狭い牢獄に投獄し、その手と首に鉄の枷をはめさせ、誰にも彼のもとへ立ち入ることを禁じた。それは、聖人を飢え死にさせようとしたからである。

しかし、牢獄に閉じ込められた至福のコンコルディウスは、気落ちすることなく、喜びをもって全能の神に感謝を捧げ始めた。

「*天には神に栄光あれ、地には平和、人々に神の御心あり*」と、彼は歌った。

真夜中、主の天使が彼の前に現れ、こう言った。

「恐れるな。信仰に堅く立ち続けよ。わたしがあなたと共にいるからだ。」

三日が過ぎた後、地方総督は夜、二人の従者を彼のもとへ遣わし、こう命じた。

「行って、その囚人に伝えよ。我らの神々に犠牲を捧げるがよい。さもなければ、その首を刎ねられることになる」と命じた。

従者たちはゼウス神の偶像を携えてコンコルディウスの元へやって来て、彼に尋ねた。

「総督の命令を聞いたか？」

「それは知らない」と聖人は答えた。

「ゼウス神に犠牲を捧げよ」と兵士たちは続けた。「さもなくば、お前は斬首されるぞ！」

すると、至福のコンコルディウスは、神に感謝しつつこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたに栄光あれ。」そしてゼウスの顔に唾を吐きかけた。

それを見た兵士の一人が剣を抜き、聖人の首を切り落とした。こうして、至福のコンコルディウスは、主を告白しつつ、息を引き取った[4092]。

その後、二人の聖職者と数人の敬虔な人々が牢獄を訪れ、聖人の遺体を運び出し、スポレータの町の近く、豊かな泉が湧き出る場所に安置した。　ここで、殉教者の墓の前では、悪霊に取りつかれた者や様々な病に苦しむ者たちが、聖コンコルディウスの祈りによって癒やされるようになった。聖コンコルディウスは、父と聖霊と共に世々限りなく御支配される我らの主イエス・キリストの御前に立ち続けている。アーメン。

聖殉教者フロンタシウス、セヴェリヌス、セヴェリアヌス、シラヌスの殉教

記念日：6月4日

[4091] ゼウス（ローマ神話ではユピテル）は、主神であり、神々と人間の父として崇められていた。彼は天と地、雷と稲妻、風と雨の支配者であった。

[4092] それは紀元175年頃のことだった。

聖フロントアシウス、セウェリン、セウェリアヌス、およびシランは、ペトラゴリアの初代司教フロントン[4093] によって、神の御言葉を宣教するために派遣された。宣教の最中、彼らはイゲモン・スクイリドンに捕らえられ、次のように尋問された。

「答えよ。お前たちはどこから来たのか。そして、どのような名で呼ばれているのか。お前たちは神々に犠牲を捧げなかったばかりか、多くの者をその道から遠ざけ、神々の神殿さえも破壊したではないか。さあ、どのような権威によってそのようなことをしているのか、答えよ。」

彼らはこう答えた。

「イゲモンよ、なぜ神聖な美徳からかけ離れたあなたが、私たちを尋問するのですか？　もはや、正義の行いを滅ぼそうとしているのではないのか？　それなら、その意図を実行に移す前に、よく考えてみよ。誰があなたの魂と肉体を創造したのか？　異教の偶像は、人間の手による造り物に過ぎず、自分自身に利益をもたらすことも、他者を助けることもできず、ましてや何かを創造することなど到底できないのだ。

「なるほど」とスクウィリドンは言った。「あなたたちは、その師からあらゆる空虚な言葉遣いを教え込まれ、厚かましく、口数が多いようだ。」

「我らの言葉は真理に満ちている」とセウェリンとセウェリアンは答えた。「お前は、悪魔によって置かれた石に過ぎない偶像を崇めているではないか。それらは耳が聞こえず、口が利けず、空虚なものである。」

「議論はよせ」とスクウィリドンは彼らの言葉を遮った。「生き残りたいのなら、神々に生贄を捧げよ。」

「我々の望みは、」とフロンタシウスは答えた。「キリストのために生き、キリストのために死ぬことにあるのだ！」

その後、イゲモンは、グスルや響き美しいキンヴァル、リラを奏でる術に長けたシランに目を向け、彼に尋ねた。

「おまえ、若者よ、なぜ神々に生贄を捧げないのか？」

「私は、」聖シランは答えた。「私の主イエス・キリストに、自分自身を捧げる準備ができています。主は、洗礼の恵みによって、この世を罪の汚れから清めてくださったのです。」

「どのように洗い清めたのですか？」とイゲモンは尋ねた。

シランはこう答えた。

「私の主イエス・キリストは、弟子たちにこう言われました。*『行って、すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らに洗礼を授けなさい』*（マタイ28:19）、*『信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は裁かれる』*（マルコ16:16）。 したがって、イゲモンであるあなたも、もしキリストを信じ、洗礼を受ければ救われるでしょう。しかし、信じなければ、裁かれることになるでしょう。

激怒したイゲモンは、彼らを城外の処刑場へ連行し、最も残酷な拷問を加えるよう命じた。その際、拷問者たちは、私たちの救い主のいばらの冠に倣って、殉教者たちの頭に鉄の釘を打ち込み、柱に釘付けにした。　各人の頭には九本の釘が打ち込まれた。しかし、拷問者たちの残酷な怒りも、キリストの戦士たちをキリストから引き離すことはできなかった。　イゲモンは、前述の拷問をもって聖人たちを屈服させることができなかったため、彼らに対する最終的な決定を下し、首を刎ねるよう命じた。そこで聖なる殉教者たちは、地面にひざまずき、自らの魂を神に委ねると、処刑人に首を差し出し、キリストの御名を告白したために殉教の死を迎えた。　不敬虔な兵士たちは、殉教者たち

[4093] ペトラゴリウスの司教座は、別名ペリスコとも呼ばれていた。ペリゴーの町は南ガリアに位置していた。

の首を切り落とした後、その遺体を侮辱のために地面に投げ捨て、尊い遺骸を埋葬もせずに放置した。しかし、その際、神の御力によって次のような奇跡が起こった。

聖霊が突然彼らに降りかかったとき、聖人たちの遺体は蘇り、それぞれが近くに転がっていた自分の首を手に取り、人の助けを一切借りることなく立ち上がり、こうしてイルと呼ばれる川へと向かった。そこで水の中に入ると、蘇った殉教者たちの遺体は、あたかも乾いた大地を歩くかのように川の上を歩いた。　その後、多くの人が驚嘆の眼差しでその奇跡を見守る中、川を渡り、高い丘へと登った。そこで彼らは、聖フロントン司教が祈りを捧げていた、聖母マリアの教会へとたどり着いた。　聖なる殉教者たちは教会の中に入り、ひざまずいて司教の足元に頭を垂れ、その体を十字架の形に地面に横たえると、再び死者の姿となった。　そこで、聖フロントン司教は、長老アニアヌスと共に、大勢の民衆が参列する中、栄誉と賛美歌を捧げながら、前述の教会でフロンタシア、セヴェリナ、シラナを埋葬した。　一方、セウェリアナについては、ある敬虔な女性の願いに応じて、彼女の所有地内にある、聖なる同志たちの墓からほど近い別の場所に、敬意を込めて埋葬した。

聖なる殉教者たちは、ローマ皇帝クラウディウス[4094]の治世中に殉教し、その行いと、私たちの主イエス・キリストに対する揺るぎない信仰告白によって栄光を現した。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

我らの尊き父ゾシマ、バビロン主教の生涯。

記念日：6月4日

キリクスと呼ばれた（キリキア出身であったため[4095]）尊者ゾシマは、若き頃から神を愛した。世俗を捨て、シナイ山[4096]へ赴き、そこで修道服を身にまとい、断食と祈りに励み始めた。しかし、彼はシナイに長く留まることはなかった。　静寂と沈黙を求め、ゾシマは若くしてシナイ山を離れ、リビアの荒野[4097]へと向かい、そこで「アンモニアク」と呼ばれる人里離れた場所に定住した。ここで彼は完全な隠遁生活を送り、唯一の神に喜ばれることを心掛けた。　ある日、彼はその砂漠で、とげのある毛皮の衣をまとった長老を見かけた。ゾシマは長老に近づき、礼を捧げ、慣例に従って祝福を請おうとした。しかし、長老は彼にこう告げて制止した。

「ゾシマよ、なぜここに来たのか。ここから立ち去れ。お前はここにいるべきではないのだ。」

その長老が昔から自分のことを知っているのだと思い、ゾシマは彼に頭を下げて祝福を請い、こう言った。

「お願いです、父上、どうかお慈悲を！　どうして私のことをご存知なのですか？」

長老は答えた。

「二日ほど前、見目麗しい男が私のところに現れ、こう言った。『見よ、シナイ山からゾシマという名の修道士があなたのところに来るだろう。彼にこの荒野に留まることを許してはならない。私は彼に、エジプトにあるバビロンの教会を託したいのだ』と。」

4094 ローマ皇帝クラウディウスは、41年から54年まで在位した。

4095 キリキアは、小アジアの南東部に位置し、シリアとの国境沿い、地中海の南岸に広がる地域である。

4096 シナイ山は、花崗岩の岩盤からなる山群そのものであり、険しく起伏に富んだ谷に切り裂かれ、囲まれている。シナイ半島を形成する、よく知られた紅海の入り江のほぼ中央に位置している。この山は3つの山脈から構成されている。 中央の山脈の南東にある山頂こそが、有名なシナイの律法の制定地であった。西暦4世紀以降、シナイ山は修道者たちのお気に入りの地となり、至る所に修道院が点在するようになった。

4097 リビアは、北アフリカ、エジプトの西に位置する州である。 地中海に面したリビアの一部は人が住んでいたが、大陸の奥深くへと続く部分は、いくつかのオアシスがある砂漠であった。ここは、エジプトから大西洋の海岸近くまで広がる有名なサハラ砂漠の最東端である。

そう言うと、隠者はゾシマから石を投げられるほどの距離まで離れ、両手を神に向けて祈りを捧げた。彼は約二時間祈り、祈りを終えると、再びゾシマのところへ近づき、父のように彼を抱きしめ、その顔に口づけをして言った。

「わが愛しき子よ、ここに来てくれてよかった。まことに、神があなたを私のところへ導かれたのだ。私は主のもとへ旅立つから、私の肉体を大地に委ねてほしい。」

すると、ゾシマは長老に尋ねた。

「師よ、あなたはここ何年、この地におられるのですか？」

すると、長老は答えた。

「ここに来てから、もう四十五年が経った。」

修道者のその言葉を聞くや、その顔は火のように輝いた。再びゾシマに向き直り、長老はこう言った。

「平安あれ、わが子よ。私のために祈ってくれ！」

そう言い終えると、彼は地面に横たわり、静かに主なる神のもとへと旅立った。

至福のゾシマは、墓穴を掘り、この偉大な修道者の尊い遺体を葬り、その場所に二日間留まった後、神を賛美しながらシナイ山へと戻った。

彼がシナイ山に再び滞在していた際、ある強盗が彼のもとを訪れ、次のように懇願した。

「アッバ、[4098] 、どうか私を憐れんでください。私が沈黙の中で自分の罪を悔い改めることができるよう、修道服を授けてください。私は多くの殺人を犯しましたが、今や自分の罪深い生活について悔い改め、残りの日々を、数え切れないほどの悪行を嘆き、心から悔い改めながら過ごしたいのです。」

尊者ゾシマはこの男を導き、修道服を着せました。しかし、しばらくして、悔い改めたこの強盗を呼び寄せ、こう言いました。

「子よ、信じてほしい。お前がここに留まることは不可能だ。もし高官の誰かが、お前が我々のところに身を隠していることを知れば、お前を捕らえてしまうだろう。さらに、お前に被害を受けた者たちの誰かが、お前を認めて密告するかもしれない。だから私の言うことを聞きなさい。私はお前をもっと人里離れた修道院へ連れて行ってやる。」

その修道士は尊者（プレポビド）の諭しを受け入れ、聖なる長老は彼をガザ近郊にあるアヴァ・ドロフェイのキノヴィアへ連れて行った[4099] 。彼をその修道院に預けると、ゾシマはシナイ山へと戻った。

その兄弟は、アッバ・ドロフェイのキノヴィアで九年間を過ごした。しかしその後、詩篇を学び、修道生活の務めに熟達すると、彼は再び尊者ゾシマのもとへ戻り、こう言った。

「父よ、どうか私を憐れんでください。私の世俗の服を返してくださり、修道服は私から取り去ってください。」

尊者は悲しげに彼に尋ねた。

「なぜだ、わが子よ？」

すると、その修道士はこう答えました。

4098 「アッバ」はシリア語で、「父」を意味する。この呼称は通常、修道院の長や、年長の修道士たちに与えられていた。試練を受けるために、ある経験豊富な長老の指導下に置かれた新入りの修道士も、その長老を「アッバ」と呼んでいた。

4099 ガザの町は、地中海の東岸、パレスチナの最南端、エジプトからほど近い場所に位置しており、かつてはカナン人の南の境界であった。　ローマ帝国の全盛期、ガザはパレスチナにおける重要な商業都市であった。この地位は、その後しばらくの間、ビザンツ帝国時代にも維持されていた。しかし、時が経つにつれ、この繁栄した都市はすべての重要性を失い、今では砂丘と哀れな廃墟だけが、かつてここに偉大な都市が存在したことを物語っている。

「父上、ご存じの通り、私は九年間、キノヴィアに滞在し、断食とあらゆる節制に励み、柔和さと沈黙、そして神への畏れをもって勤勉に働き、すべてに従ってきました。それは、神の限りない慈悲と、私の数え切れないほどの罪の赦しを願ってのことでした。　それにもかかわらず、絶え間ない修行と労苦にもかかわらず、私はいつも目の前に、私に「なぜ私を殺したのか」と問いかける子供の姿を見るのです。この幻は夢の中だけでなく、現実でも見ます。教会に立っている時も、聖体拝領に臨む時も、兄弟たちと食卓を囲んで何かを口にする時もです。　私は一時間たりとも安らぎを知りません。歩いている時でさえ、目の前にその子供が立ち、いつも同じことを私に言い続けます。「なぜ私を殺したのですか？」そこで私は決心しました、神父様。私が強盗を働いた場所へ行き、捕らえられて裁判にかけられることにしたのです。あの子供を無謀に殺してしまった罪を償うために、私は死ぬ必要があります。

こうして、その修道士は尊い父から世俗の服を受け取り、世俗へと去っていった。彼がディオスポルという町[4100] に到着すると、捕らえられ、その翌日には剣で斬り殺されるという刑に処された。こうして彼は、自らの血で罪を洗い清め、主なる神のもとへと旅立ったのである。

この出来事の直後、聖ゾシマは、荒野の静寂と沈黙の中で生きたいという抑えきれない願望に駆られ、再びシナイ山を去ることを決意した。そして、弟子ヨハネを伴い、聖ゾシマはポルフィリオンと呼ばれる荒野[4101] へと向かった。この荒野を歩いていると、彼らは二人の隠者に出会った。一人はガラティア出身[4102] で、パウロという名を持ち、もう一人はメレティナ地方[4103] 出身で、テオドロスと呼ばれ、アッバ・エウフィミオス・ヴェリコス修道院で修道誓願を立てていた。二人の修行者はともに、水牛の皮で作られた服を着ていた。　尊者ゾシマは、弟子と共に、それらの隠者たちの近く、約2ポプリシュの距離[4104] に定住し、そこで2年間を過ごした。

しかしその後、尊者ゾシマの弟子ヨハネが蛇に噛まれた。彼の全身は蛇の毒に侵され、目や鼻の穴、耳、そして皮膚のあらゆる開口部や毛穴から血が噴き出し、ヨハネは息を引き取った。

至福のゾシマは深く悲しみ、前述の二人の隠者のもとへ向かった。彼らは、深い悲しみに暮れるゾシマの姿を見るや、ゾシマが何かを言う前に、彼を慰めるようにこう言った。

「どうしたのですか、アッバ・ゾシマ。あなたの兄弟が亡くなったのですか？」

ゾシマは彼らの先見の明に驚きつつ、弟子であるヨハネの死の経緯を彼らに告げたが、それはもともと長老たちには知られていたことでもあった。

すると、二人の隠者は立ち上がり、ゾシマと共にヨハネ兄弟のもとへ向かった。地面に横たわる故人を見て、彼らはこう言った。

「悲しむな、アッバ・ゾシマよ。神があなたを助けてくださる。」

そして、その言葉を終えると、亡くなった者に向かって大声で叫んだ。

「ヨハネ兄弟よ、起きなさい。あなたのアッバがあなたを呼んでいるのです。」

すると、死者はたちまち生き返り、地面から立ち上がった。そこで長老たちは蛇を見つけ出し、それを二つに引き裂いた。そして、尊者ゾシマにこう言った。

[4100] ディオスポルは、エルサレムからヨッピア（ヤッフェ）へと続く北の街道沿いにあるパレスチナの都市である。

[4101] 言うまでもなく、これはおそらく、フェニキアのポルフィルゴンという都市の近く、カルメル山（プトレマイダスの南）付近にあった砂漠のことである。この砂漠、とりわけカルメル山には、多くの修道士たちが集まっていた。

[4102] ガラティア――小アジアの、山岳地帯ではあるが肥沃な小州で、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置していた。その名は、ガリア系またはケルト系の起源を持つ好戦的な部族であるガラテ人たちに由来する。

[4103] メレティナ――小アルメニア北部の、ユーフラテス川からほど近い地域。トラヤヌス帝（98～117年）の治世下、この地域には同名の集落が発展し、かなりの規模の都市へと成長した。

[4104] ポプリシュチェ――距離の単位。これは現在の690サジェンに相当する。したがって、2ポプリシュチェは1,380サジェン、すなわち2ヴェルスタとなる。

「アッバよ、私たちは神の御心を偽って告げているわけではありません。シナイ山へ行きなさい。神は、エジプトにあるバビロンの教会で、あなたに司教の職を委ねようとしておられるからです。」

これを聞いた尊者ゾシマは、聖なる隠者たちから祝福を受け、弟子ヨハネを伴って、再びシナイ山へと戻った。

しばらくして、シナイ山のアッバ・[4105] は、シナイの修道院の事情を考慮し、至福のゾシマを他の二人の修道士と共にアレクサンドリアへ派遣した[4106]。 アレクサンドリアの総主教は、これらの祝福された長老たちを深く愛し、彼らを都に留めて、一人はイリオポリス[4107]、もう一人はレエントポリス[4108]、そしてゾシマをエジプトのバビロンに、それぞれ司教として叙階した。 というのも、古代には二つのバビロンが存在したからである。一つは、最も著名で最も古いもので、カルデアの地[4109] にあり、そこでネブカドネツァルやすべてのカルデアの王たちが統治していた。もう一つは、あまり知られておらず、面積や人口の点でも小さいもので、エジプトにあった。 この都市は、ナイル川のほとりに、古代バビロンからの移住者たちによって築かれたものであり、彼らはこの新しい定住地を、自分たちが後にした故郷の名にちなんで名付けたのである。

まさにこの「エジプトのバビロン」において、聖ゾシマは、神の御心と荒野の修道士たちの預言に従い、司教の座に就き、キリストの羊の群れを牧し始めた。彼は聖なる教会を善く統率し、言葉と行いと清さにおいて群れの手本となった（テモテへの手紙一 4:12）。 彼はバビロンの教会の指導者としてかなり長い間留まり、多くの人々を救いの道へと導いた。やがて聖人が高齢に達すると、自身の肉体の衰えを自覚し、死が近いことを予感して、司教の座を離れ、かつて住んでいたシナイ山へと再び戻った。 ここでしばらく過ごした後、聖人は主の御許で息を引き取りました（[4110]）、そして今や聖なる主教たちの列に加わり、私たちの主イエス・キリストの御前に立っています。主には永遠の栄光がありますように。アーメン。

6月18日

6月5日（旧暦）

聖殉教者ドロテオス、ティルスの司教の記念日。

6月5日の記念日

[4105] シナイ山の修道院は、シナイ山のアッバという一人の総責任者の管轄下にあった。

[4106] アレクサンドリアは、エジプトおよび北アフリカの諸州の主要都市であった。アレクサンドロス大王によって、下エジプト（北部エジプト）のナイル川河口に建設された。 ローマに次いで、アレクサンドリアは世界一の都市と見なされ、貿易、産業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教の初期の数世紀にはキリスト教教育の温床となった。5世紀以降、アレクサンドリアの司教は総主教の称号を冠し、エジプト、リビア、北アフリカのすべての教会が彼に服従した。 シナイ半島とその修道院群も、アレクサンドリア総主教の管轄下にあった。現在、アレクサンドリア（トルコ語およびアラビア語でイスカンデリ）は、地中海沿岸の最も重要な貿易拠点の一つであり、人口は23万人に達する。

[4107] イリオポリスはアフリカの都市であり、ナイル川の右岸、その東側の支流の一つ沿い、下エジプトの南部に位置している。

[4108] レオントポリスは、中エジプトにある都市である。

[4109] カルデアはメソポタミア、ティグリス川とユーフラテス川沿いに位置していた。

[4110] 6世紀末に死去した。

不義なるローマ皇帝ディオクレティアヌス[4111] の治世において、ティルスの都市[4112] の司教であったのが聖ドロフェイでした。不義なる皇帝がキリスト教徒に対して残酷な迫害を開始したとき、ドロフェイは司教座を離れ、行方をくらませました。　しかし、306年から337年まで在位したコンスタンティヌス大帝の即位により、教会に平穏が訪れたとき、聖ドロフェイは再びティルスの司教座に戻り、神の言葉に従う羊の群れを安らかに牧し、多くの者を偶像崇拝の迷いから神のもとへと導いた。ドロフェイの生涯は、背教者ユリアヌス皇帝の時代まで続いた[4113] 。即位したユリアヌスは当初、公然とキリスト教徒を迫害することはなかったが、自分と志を同じくする地方総督たちに、あらゆる手段を用いてキリスト教徒を弾圧し、苦しめるよう命じた。　その時、聖ドロフェイは、信者たちに対して新たな迫害が迫っているのを見て、再びティルスの教会の司教座を離れ、こうして迫害者たちの手から逃れた。なぜなら、主は迫害者たちによる明らかな災難に身を委ねるのではなく、それらを避けるよう命じられたからである。主はこう言われた。　*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい」*（マタイ10:23）。

こうして、ティルスを去ったドロフェイは小アジアへと向かったが、ここでも彼は偶像崇拝者たちから身を隠すことはできなかった。神が彼を殉教の冠へと招いておられたからである。　彼は、ウードス[4114] の町で、不法な王の手先たちに捕らえられた。そこで様々な拷問に耐え、苦しみの中、生後107年[4115] を迎えて、その祝福された魂を主の御手に委ねた。

世俗の学問と神学の両方を完璧に修めた聖ドロフェイは、ギリシャ語とラテン語の両方に極めて精通していたため、キリスト教徒にとって極めて重要な様々な著作を遺した。　とりわけ、彼は預言者や使徒たちの伝記をはじめ、その他にも極めて有益な著作や物語を著した[4116] 。そして今、彼自身も「いのちの書」にその名が記され、この世での生涯の間にその生涯の物語を著した聖人たちと共に、天の住まいへと迎え入れられている。

コンダク、第5声：

この徳と、太陽よりも輝かしい神の教え、そして至福の苦難によって、あなたは輝きを放たれた。そして、多神教の闇と激しい異端を追い払い、地を照らした、ドロフェイよ。このゆえに、私たちはあなたの記念を輝かしく祝う。

エジプトの殉教者にして隠遁者、尊き父アヌヴィウスの帰天

記念日：6月5日

キリスト・神に対する大いなる信仰と愛を持っていた尊者アヌヴィウスは、エジプトの出身であった。不敬虔な偶像崇拝者たちによって引き起こされたキリスト教徒への迫害の際、彼は異教徒たちの前で大胆にキリストを告白し、そのために拷問を受けた。　しかし、神の御心により、彼は異教

[4111] ディオクレティアヌスは、284年から305年までローマ帝国の東部を統治した。

[4112] ティルスはフェニキアにあり、地中海の沿岸に位置していた。

[4113] ユリアヌス・アポステートは、361年から363年まで皇帝であった。

[4114] ウドの都市、あるいはウドは、小アジアのミシア州に位置していた。古代のウドがあった場所には、現在ヴァルナという都市がある。

[4115] これは362年頃のことである。

[4116] 聖ドロテオスが具体的にどのような著作を執筆したかは定かではないが、彼が『シノプシス』、すなわち預言者や使徒たちの生涯に関する伝承集を著したと考えられている。しかし、すべての学者がこの見解に同意しているわけではない。

徒の手から解放され、荒野へと向かった。そこで神に喜ばれるよう精進し、深き老齢に至るまで荒野をさまよった。彼の死は、次のような状況下で訪れた。

神の御計画により、エジプトの地を潤すナイル川のほとりのある場所で、ある日、三人の隠者が集まった。アッバ・スール、イザヤ、そしてパウロである。　互いにどこへ向かうのか尋ね合ったところ、三人の意図がすべて同じであることがわかった。というのも、三人は皆、アッバ・アヌヴィアの元へ向かっていたからである。修道士たちが集まった場所からアヌヴィアの修道院までは、水路をたどって三日間の道のりであり、しかも流れに逆らって上流へ漕ぎ上がらなければならなかった。そこで、修道士たちは岸辺に座り込み、そこへ向かう船が現れないか待ち続けた。その船に乗れば、尊者アヌヴィーが住む地へたどり着けるからだ。しかし、長い間船の姿が見えなかったため、彼らは落胆し、互いにこう言い合った。

「主の御慈悲により、私たちの願いが叶い、この旅の障害を乗り越えられるよう、主に祈ろう。」

イザヤとパウロは、その際、アッベ・スールにこう言った。

「とりわけ、父よ、あなたが祈ってください。私たちは、あなたを通して神が私たちの願いを叶えてくださると信じているからです。」

スールは彼らにも自分と共にひざまずいて祈るよう命じ、自身は十字架の形に両手を広げ、地面に伏して主の前に顔を地面につけてひれ伏した。祈りを終えて長老たちが地面から立ち上がると、岸辺に一隻の舟が停まっているのに気づいた。　彼らは喜び、主に感謝を捧げてその舟に乗り込んだ。舟は風に乗せられ、目に見えない神の力に導かれて、流れに逆らって上流へと進み始めた。その速度は極めて速く、通常なら三日間かけてもやっとたどり着くような距離を、わずか一時間で渡り切った。

舟がアヌヴィエの修道院の対岸に接岸すると、修道士たちは岸に上がった。その時、イザヤはこう言った。

「主よ、私たちが向かっているその人物が、私たちを迎えに出て、私たち一人ひとりにその心の奥底を明かしてくれるよう、お示しください！」

すると、パウロ師は彼らにこう言った。

「主は私に、三日が過ぎれば、アヴ・アヌヴィーをこの世から御許へ召し上げられることを啓示されました。」

その後、彼らは岸辺から修道院へと向かい、川から少し離れたところで、尊者アヌヴィーが彼らを迎えに出てきて、挨拶を述べながらこう言った。

「主を賛美します。かつて私が霊の中であなた方を見たのと同じように、今こうして肉体の姿であなた方にお会いできることを、主は私に許してくださいました。」

彼らを温かく自分の独房へと案内すると、彼は一人ひとりに、唯一の神以外には誰にも知られていない彼らの善行について語り始めた。すなわち、誰がどのようにして完全な隠遁生活を送り、主であるキリストに奉仕しているか、また誰が主からどのような恵みを受けているか、ということである。

その後、アバ・イザヤはアヌヴィウスにこう言った。

「敬愛すべき父よ、主は私たちにも、三日が過ぎればあなたをこの一時的な人生から召し上げられることを明らかにされました。ですから、お願いです。あなたが神に喜ばれるように行ってきた、荒野での労苦と功績についても、ぜひ語ってください。」　決して虚栄に陥るなどとは思わないでください。この世を去るにあたり、あなたは後世の人々に、神に喜ばれる生き方の模範を残し、あなたを模範とする者たちが現れるようにするのですから。

そこで、長老は彼らに、自分自身について次のように語った。

——私が偉大で栄光あることを成し遂げた記憶はありません。ただ、私の神の恵みによって、私の記憶に刻まれているのは、かつてキリスト教徒に対する迫害のさなかに、拷問者たちの前で私たちの救い主の御名を告白して以来、私の口から偽りの言葉が一度も出なかったということです。　なぜなら、一度真理を告白した以上、その後で偽りの言葉を口にすることを望まず、また一度天のものを愛した以上、残りの生涯において地上のものを愛することを望まなかったからである。その点において、神の恵みも私を助けてくださった。主は、私が決して地上のいかなる恵みも求めないよう、力を与えてくださったからである。　聖なる天使たちが、私に必要な食物を運んでくれた。そして、私の主は、地上で起こる事柄のうち、私から何も隠さなかった。　その間、私の心は常に主との交わりを渇望していた。私の魂が愛した主キリストへと、あらゆる思いを向け、常に心の目で主を見つめ、主を仰ぎ見る喜びに浸るために、私は昼も夜も眠らなかった。　また、常に私のそばにいて、この世のすべての支配者たちを見せてくださる神の御使いも見ています。私の知性の光は決して消えることがありませんでした。——主にお願いしたことはすべて、即座に与えられました。　私は何度も、神の御前に立つ天使たちの姿を仰ぎ見ました。聖なる殉教者や信仰の証人たちの姿、修道士たちの集い、そしてすべての聖人たち——とりわけ、　地上での生涯において、心の純真さと信仰をもって常に主を賛美し、祝福すること以外に何の務めも持たなかった者たちの姿を仰ぎ見ました。　また、永遠の火に投げ込まれたサタンとその天使たちも見た。そして再び、それらとは反対側の場所で、永遠の喜びを享受している義人たちを見た。

聖アヌヴィイは、三日間にわたり、彼を訪ねてきた司祭たちに、これらやその他多くの類似した出来事を語った。それは虚栄のためではなく、聞き手の益となるためであった。なぜなら、彼は訪れた者たちの懇願に促され、深い謙遜をもって語っていたからである。　そして三日目の終わりに、彼は安らかに、喜びをもってその霊を神に委ねた。彼の霊が肉体から離れるやいなや、たちまち聖なる天使たちの群れが現れ、聖人の魂を受け取り、それを天の高みへと昇らせていった。その際、空にはこの上なく甘美な天使たちの賛美歌が響き渡った。　こうして、異教徒たちの前でキリストの御名を告白し、そのために拷問に耐え抜いた[4117]　、尊者アヌヴィイは、この地から天の御国へと移り住んだ。今や彼は、天の天使たちの前で、私たちの主イエス・キリストの殉教者の一人として称えられている。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、永遠に栄光と誉れが捧げられる。 アーメン。

尊き父テオドロス・プスティニクスの記念日

記念日：6月5日

私たちの尊い父テオドールは、若き日から去勢者であった。彼は世俗を離れ、修道生活に入り、ヨルダン川の荒野へと退いた。神に喜ばれることを熱心に求め、そこで多大な労苦を捧げたため、神から奇跡を行う賜物を受けた。　ある日、彼はコンスタンティノープルへ向かうことになった。海辺に着くと、出航の準備が整った船を見つけ、それに乗り込んだ。航海の最中、船は航路を外れて長い間彷徨い、その結果、乗船していた者たちの飲み物や食料の備蓄は底をついてしまった。　船員たちや乗船していた者たちは皆、困惑し、深い落胆に陥った。その時、聖テオドールは天に向かって両手を挙げ、人々の苦難から救い出してくれる神に熱心に祈りを捧げた。そして、祈りを込めて海の水に十字を切って祝福し、船員たちにこう言った。

「神は祝福された！ 必要なだけ水を汲みなさい。」

[4117] 聖アヌヴィウスの没は4世紀のことである。

彼らは水を汲んで口に含んでみると、海水が苦いものから川の水のように淡水に変わっていることに気づいた。その後、彼らは自分の水瓶や他のすべての容器を海から汲んだ淡水で満たし、神を賛美して、長老に地面にひれ伏して礼拝した。しかし、聖人はこう言った。

「どうかお許しください、諸君！　全能の神によるこの奇跡は、私のためではなく、水不足に苦しんでいた諸君のために行われたのです。神は、諸君の苦しみと死を招きかねないほどの悲しみを御覧になり、憐れみをもって、塩辛い海水を甘い川の水に変えてくださったのです。」

その直後、聖なる長老の祈りにより、船は目的地である埠頭へと無事にたどり着いた。この聖なる父テオドールは他にも多くの奇跡を成し遂げ、その後、神のもとへ召された[4118]。

キエフ都主教、至福のコンスタンティンの死に関する物語

記念日：6月5日

キエフ大公の座が、至福のイゴールから剥奪され[4119]、ウラジーミル・モノマフの孫であるイジアスラフ・ムスティスラヴィチ[4120]によって奪取された直後[4121]、キエフの至聖なるミハイル2世大主教[4122]が主のもとへ召された。これは、イゴールが殺害される少し前のことだった。ミハイルの後任として、大公イジャスラフは、すでに修道服を身にまとっていた、非常に学識豊かな修道士、哲学者クリメント[4123]を選出した。イジアスラフはこの修道士をスモレンスクから連れてきたが、距離が遠いため（かつての慣例通り）コンスタンティノープルへ送り、全地総主教の祝福を受けることを望まなかった。そのため、キエフでルーシの司教たちによって叙任が行われることを強く望んでいた。イジアスラフはロシアの司教たちを集めて公会議を招集し、彼らにスキマナフのクリメントをキエフ都主教に叙任するよう命じた。しかし、すべての司教がこれに同意したわけではなく、コンスタンティノープル総主教の祝福なしに叙任を行うことをためらった者もいた。　しかし、公爵に気に入られたいと願う司教たちもおり、彼らは聖クレメント（ローマ教皇）の頭蓋骨――聖ウラジーミルがヘルソネスからキエフへ持ち帰ったもの――を用いて、クレメントを司教に叙階した。　この公会議およびクリメントの司教叙任については、聖ニフォントの伝記の4月8日の項に詳しく記されている（この至福のニフォントは、この違法な叙任を認めようとはしなかった）。

イジャスラフ・ムスティスラヴィチの後、キエフの王位はモノマフの息子ゲオルギー・ウラジーミロヴィチ[4124]に引き継がれた。彼は、違法に叙階された者として、クレメンティウスをキエフの総主教に据えることを望まなかった。　まさにこの頃、大公の要請により、コンスタンティノープルから全地総主教のもとを経て、キエフにこのコンスタンティン大主教[4125]が到着した。彼こそが、これから我々が語る人物である。　このコンスタンティンは、総主教から与えられた権限により、クリ

[4118] 聖テオドロスは6世紀に修道生活を送った。

[4119] イゴール・オレゴヴィチは、キエフをわずか2週間（1146年）しか統治しなかった。彼は教会によって聖人の列に加えられている。――彼の記念日は6月5日である。

[4120] イジャスラフ・ムスティスラヴィチは、1146年から1149年まで、そして1150年から1154年まで、キエフ大公を務めた。

[4121] ウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフは、1114年から1125年までキエフを統治した。

[4122] ミハイル2世大主教は、1131年から1146年までキエフの大主教座に就いていた。

[4123] クリメントは1147年から1164年までキエフ都主教区を統治した。

[4124] ゲオルギー（またはユーリー）・ウラジーミロヴィチ・ドルゴルーキーは、キエフ大公の座に3度就いた。1回目は1149年から1160年まで、2回目は1150年末頃、3回目は1154年から1157年までである。

[4125] コンスタンティン都主教は、1155年から1158年までキエフ都主教区を統括した。

メントを司教職および大主教の座から罷免し、さらに、クリメントが何らかの聖職に叙階した者全員をその職務から罷免した。

数年後、キエフ大公ゲオルギー・ウラジーミロヴィチ・モノマホヴィチが死去した。すると、ロシアの諸公爵の間で、大公の座をめぐる争いだけでなく、大主教の座をめぐる争いも激化した。ある者たちはコンスタンティンを指導者と見なした一方で、他の者たちは大主教クリメントの再就任を要求したからである。　特に、亡くなった大公イジアスラフ・ムスティスラヴィチの息子であるムスティスラフ・イジアスラヴィチ[4126]、すなわちウラジーミル・モノマフの曽孫は、コンスタンティンを支持せず、クレメントを支持した。彼は次のように述べた。

「私は、コンスタンティンがキエフのメトロポリタンになることを望まない。なぜなら、私の父はクリメントを支持したために多くの人々から呪われたからだ。」

この結果、ルーシの諸公は、クレメントとコンスタンティンの両メトロポリタンをその座から解任せざるを得なくなった。その後、諸公はコンスタンティノープルの至聖なる総主教に対し、新たなメトロポリタンを派遣してほしいという要請を送った。　至聖なる総主教は、ルーシの諸公の間で生じていた混乱と不和を収めたいと考え、テオドロという名の新しい大主教をキエフに派遣した。その時、至福のコンスタンティンは、諸公の間の不和を目の当たりにし、騒乱から逃れたいと願って、新しい大主教がキエフに到着するよりもさらに早く、その座を去った。　キエフを後にしたコンスタンティンは、チェルニヒフへと向かった。そこで彼は死の病に倒れた。　自らの死を予感した彼は、書簡を書き、封印してチェルニヒフの司教アントニーに手渡した。その際、コンスタンティンはアントニーから、自身の死後、封印を解いて書簡を読み、そこに書かれたすべてを履行するという誓約を取り付けた。

至福のコンスタンティン大主教[4127]がこの世を去るとすぐに、アントニー司教は、大主教が封印した書簡を受け取り、それを携えてチェルニヒウ公スヴィャトスラフ・オルゴヴィチ[4128]の元へ向かった。そこで封印を解き、アントニーは全員の面前でその書簡を読み上げた。

そして、その書状には驚くべき、そして恐ろしいことが記されていた。すなわち、

「私の死後、私の遺体を埋葬してはならない。私の足に縄を結びつけ、私を街から引きずり出し、犬に食わせよ。　私は罪を犯した。私のせいで反乱が起こった。その報いとして、主の御手が私の上に下るがよい。私が苦しむことで、主が御自分の民から不和と争いを遠ざけてくださるよう願う。

これを聞いて、皆は恐怖と戦慄に襲われた。すると、公爵は司教に言った。

「お前の思うままにせよ。」

司教は、大主教の命令を無視する勇気もなく、また自らの誓いを破ることも敢えてせず、書簡に命じられたことをすべて実行した。すなわち、死者の遺体を町から引きずり出し、野原に投げ捨てたのである。　こうして、大主教の遺体は三日間、埋葬されることなく放置された。人々は、この驚くべき出来事を目の当たりにし、皆、大きな恐怖と戦慄に包まれた。

三日目に、スヴィャトスラフ・オルゴヴィチ公は、神への畏れに満たされ（あの恐ろしい出来事の後、彼には大きな恐怖と戦慄が襲いかかった）、捨てられていた神の司教の遺体を、相応の栄誉をもって埋葬するよう命じた。　そして、その遺体は大いなる栄誉をもって都へ運ばれ、聖救世主教

[4126] ムスティスラフ・イジャスラヴィチは、1158年、そして1168年にキエフの王位に就いた。

[4127] 至福のコンスタンティンは1159年に逝去した。

[4128] スヴィャトスラフ・オルゴヴィチは、1137年から1165年まで君主を務めた。

会、すなわち「赤いテレム」に安置された。そこには、キエフの人々に殺害された新たな殉教者、キエフ公イゴール・ブラジェニーが埋葬されていたのである。

コンスタンティンの尊い遺体がチェルニヒウの街から投げ出されたその頃、キエフでは太陽が暗くなり、大地さえも揺るがすほどの大嵐が吹き荒れ、雷鳴が轟き、稲妻が走り、キエフの住民たちは皆、大きな恐怖と落胆に陥った。　その時、雷が一撃で八人を打ち倒した――司祭二名、助祭二名、そして信徒四名である。

キエフ公ロスティスラフ・ムスティスラヴィチ[4129] は、ウラジーミル・モノマフの孫であり、当時ヴィシュゴロド近郊のポヴァリに滞在していた。嵐により、彼のそばにあった天幕が吹き飛ばされてしまった。　恐怖に駆られ、大司教の死を思い出した彼は（その知らせはチェルニヒフ公から使者を介して伝えられていた）、キエフの聖ソフィア大聖堂やその他の大聖堂へ使者を派遣し、すべての教会で徹夜祷を行うよう要請した。

「これは、我々の罪のゆえに、主が我々に下された懲罰である」と彼は語った。

こうした恐怖や惨状はキエフに限られたものであり、一方、チェルニヒフではこの数日間、太陽が明るく輝き、何の惨状もなかった。夜になると、城の外に捨てられた至福のコンスタンティン大主教の遺体の上空に、天まで届くほど明るく輝く三本の火の柱が現れた。

至福のコンスタンティンの尊い遺体が埋葬された後、キエフには完全な平穏が訪れた。皆、起こった出来事に驚きつつ、神を賛美した。神に、今この時も、そして永遠に、栄光が帰されますように。アーメン。

聖殉教者たちの受難：マルキアヌス、ニカンドロス、イペレヒイオス、アポロン、レオニドス、アリアス、ゴルギオス、セリニオス、イリニオス、パムヴォン

記念日：6月5日

キリストの聖殉教者マルキアヌスとニカンドルとその仲間たちは、エジプトの出身であった。キリストへの信仰ゆえに、彼らは地方総督の命令により捕らえられ、キリストを否定して偶像を礼拝するよう強要されたが、彼らはこれに同意しなかった。　そこで彼らはまず激しく殴打され、次に蝋燭で肋骨を焼かれ、最後には吊るされた状態で鉄の爪で削り続けられ、肉片が地面に落ちるまでその苦痛に耐えさせられた。その後、かろうじて息のある状態で牢獄に閉じ込められたが、牢獄の中で主の天使が現れ、彼らを癒やした。　多くの日が過ぎた後、彼らは健やかな姿で牢獄から出て、再び地方総督の裁判の場に現れた。これらの奇跡を目撃し、多くの異教徒が真の神への信仰に改宗した。総督の裁判において、聖なる殉教者たちは再び牢獄への投獄を宣告され、そこで飢えと渇きに苛まれながら、[4130] に息を引き取った。

[4129] ロスティスラフ・ムスティスラヴィチは、1154年に（わずか1週間だけ）、そして1158年から1167年にかけて再びキエフを統治した。

[4130] 聖殉教者たちの没年は正確には不明である。 フィラレート大主教（『聖人伝』、6月、31ページ）は、彼らの没年をマクシムスの治世の時期と位置づけている。マクシムスは305年にシリアとエジプトの最高権力を掌握し、その領土内でキリスト教徒を残酷に迫害した。在位は305年から312年までであった。

6月19日

6月6日（旧暦）

我らの尊き父ヴィッサリオン聖人の生涯。

記念日6月6日

私たちの父たちのうち偉大なるヴィッサリオンは、エジプトで生まれ育った。若き頃から神を愛し、神の恵みの光が彼の心に輝いた。彼はあらゆる罪の汚れから身を清く保ち、聖なる洗礼の際に授かった霊的な衣を汚さないよう努めた。

聖ヴィッサリオンは、エルサレムの聖地への巡礼の旅に出た。そこで彼は、ヨルダン川のほとりで断食と隠遁の生活を送り、一頭のライオンに仕えられていた聖ゲラシモスに会った。　また、彼はその地のあちこちに住み、後にその徳によって名を轟かせた多くの他の修行者たちにも出会った。彼らと語り合う中で、聖ヴィッサリオンは自らの魂に多くの益を得た。

故郷に戻ったヴィッサリオンは、イシドール・ペルシオティスを霊的指導者として仰ぐようになった。頻繁に彼のもとを訪れ、徳を学び、厳格な生活を送るよう励まされた。　ついに、両親から受け継いだ全財産を貧者や修道院に施し終えると、ヴィッサリオンは世俗を捨て、修道者の戒律を受けた。

ある人里離れた場所に身を隠したヴィッサリオンは、沈黙の誓いを立てた。数多くの労苦で身を疲れさせ、断食の修行によって肉体を律し、彼は肉体を持つ者でありながら、肉体を離した者たちのようであった。　彼の断食は比類のないものであった。時には一週間何も口にせず、また時には40日間も飲食を絶った。ある時、茨の茂る野原の真ん中に立ち、天に向かって両手と目を上げ、心もそこに向け、40日40夜、微動だにせず祈りを捧げ続けた。　この40日間、彼はその場から一歩も動かず、何も口にせず、誰にも一言も発せず、うたた寝もせず、肉体の衰弱による疲労にも陥らず、この世の何事についても心で考えず、まるで無形の存在のように、その霊的な目を神へと向け続けた。　このため、聖人は神から大いなる恵みを授かった。すなわち、奇跡を行う賜物が与えられ、彼は古の聖なる預言者たちのようであった。　こうして彼はモーセに倣った。かつてモーセが、神から示された木を用いて、渇きに苦しむイスラエルの民に飲ませるために、荒野の苦い水を美味しい水に変えたように（出エジプト記17:6）、同様に、尊者ヴィッサリオンもまた、祈りと十字の印によって海水の苦味を和らげ、渇きで力尽きかけていた弟子に水を飲ませた。すなわち、聖人が弟子と共に人けのない海岸を歩いていたとき、弟子は激しい暑さで疲れ果て、激しい渇きを感じ、聖人にこう言ったのである。

「師よ、私はひどく喉が渇いています。」

聖人は祈りを捧げ、海に十字の印を掲げてから、こう言いました。

「主の御名によって、水を汲んで飲みなさい。」

弟子は、持ち歩いていた小さな器に海水を汲み入れ、その水を口に含んでみると、まるで生きた泉から湧き出たかのように、とても美味しく[4131]　、ひんやりとしていた。十分に飲み、涼をとった後、弟子は旅の途中に備えて、さらに器に水を満たした。それを見た長老は、弟子にこう言った。

「なぜその器に水を満たしたのか？」

弟子は答えた。

「お許しください、師匠！　再び喉の渇きに悩まされないよう、旅の途中で飲むために水を持っていったのです。」

[4131] 周知の通り、海の水は通常、塩辛いものである。

老僧は言った。

「この場所に臨在する神は、あらゆる場所に臨在しておられる。ここでも、他の場所でも、神は渇く者に美味しい水を与えてくださるのだ。」

その弟子の名はドゥラであった。

尊者ヴィッサリオンは、イエス・ナヴィンにも似ていた。イエス・ナヴィンがアモリ人を打ち破った際[4132]、太陽の動きを止めた（ヨシュア記10:12–13）ように、この神に愛された者もまた、次のように行った。すなわち、彼が弟子と共にとある長老のもとへ向かっていた時、太陽は西に傾きつつあったが、道のりはまだ遠かった。その時、その長老は神にこう祈りかけた。

「主よ、どうか私があなたのしもべのもとに着くまで、太陽を止めてください。」

そして、その通りになった。尊者（プレポボディ）がその長老のもとへ到着するまで、太陽は沈むことがなかった。

聖ヴィッサリオンは、神の預言者エリヤにも似ていた。そう、干ばつの際、彼は天から地上に豊かな雨を降らせた（列王記下18:1–46）。このことを、尊者は一度や二度ではなく、何度も成し遂げたのである。

さらにエリシャについても：エリシャがエリヤの外套で水を分け、ヨルダン川を渡ったように（列王記下2:14–15）、この聖者もまた、その祈りによって水を乾いた道に変え、水の上を歩いた。大河ナイルをまるで乾いた地を歩くかのように渡り、道中で川に出くわすたびに、どこでも乾いた地を歩くかのように渡っていった。

ある時、聖人がスキテに滞在していた際、悪霊に取りつかれた男が教会に連れてこられた。教会では、彼が不浄な霊から解放されるよう祈りが捧げられたが、悪霊は彼から出て行かなかった。というのも、その悪霊は非常に獰猛だったからである。そこで聖職者たちは互いにこう語り合った。

「この悪霊に取り憑かれた者を、どうすればよいのか？」

また、ある者たちはこう言った。

「ヴィッサリオン神父以外、この悪霊を追い出すことは誰にもできない。しかし、もし我々が彼にそう頼めば、彼は教会に来てくれないだろう。だからこうしよう。明日の朝、彼が真っ先に教会に来るはずだが、我々は彼より先に着き、彼の席にその憑かれた男を座らせる。それから長老に『眠っている者を起こしてください』と言うのだ。」

聖職者たちはその通りにした。

尊者様が教会に入ると、自分の席に座っている人物に気づいた。彼をここから追い出したくなかったため、尊者様は彼のそばに立った。教会の規則の朗読が始まるとすぐに、聖職者たちは長老にこう言った。

「師よ、眠っている者を起こしてください。」

ヴィッサリオンはその男のところへ近づき、彼を突き飛ばして言った。

「起き上がって、ここから出て行け。」

するとたちまち、聖人の言葉によって追い払われた悪霊がその人から出て行った。その人は立ち上がり、神が自分を悪霊の憑依から救ってくださったことに感謝し始めた。その人はそれ以来、完全に健康を取り戻した。

[4132] アモリ人は、カナンの地に住んでいた異教の部族の一つである。アモリ人は、ヘブライ語から訳すと「高地の住民」を意味し、これに対比されるのがフェレゼ人、すなわち「低地の住民」である。　ユダヤ人がエジプトから脱出する少し前、アモリ人は非常に肥沃なヨルダン川東部地域を占領した。ヨシュアはアモリ人と戦い、五人のアモリ人の王を打ち破った（ヨシュア記10:5–11）。

このようにして、聖職者たちは聖人に悪霊追放の奇跡を行うよう促したのである。というのも、この尊い父は、人々から称賛されることを避けるため、公然と奇跡を行うことを望まなかったからである。謙虚であり、自らを罪人であると見なしていた彼は、人間からの称賛を避けていたのだ。

ある時、修道院のある兄弟がある過ちを犯したため、司祭は彼を、兄弟たちとの交わりにふさわしくない者として、教会から出るよう命じた。すると、尊者ヴィッサリオンは立ち上がり、その罪を犯した者と共に外へ出て、こう言った。

「私も罪人だ。」

これこそが、聖ヴィッサリオンの謙遜であった。

彼の弟子たちは、彼が40年もの間、休息のためにベッドに横になることはなかったと伝えている。彼はほんの少しの間だけ眠ることを許し、それも立ったままか、あるいは座ったまま眠りについた。聖人はしばしば弟子たちに、目を覚ましていなさい、そして敵の誘惑にあらゆる手段で警戒しなさいと諭した。彼はこう語った。

– 修道士は、ケルビムやセラフィムのように、いわば「目」となるべきである。もし誰かが誘惑に遭うことなく平穏に暮らしているならば、その者はなおさら、神の前で警戒を怠らず、自らを謙虚に保つ必要がある。そうしてこそ、うっかり高慢になって、何らかの重大な罪に陥ることを防げるのである。 なぜなら、高慢のゆえに、多くの者が 悪魔との戦いに陥ってきたからである。時に神は、私たちの弱さを憐れんで、私たちが完全に滅びてしまわないよう、試練を私たちに与えないこともある。

この聖なる父の生涯は、天の鳥の生涯に似ていた。なぜなら、彼は決して地上のものを何も手に入れず、自分の修道室も、いかなる住処も持たなかったからである。彼は荒野をさまよい、場所から場所へと移り住み、迷い込んだ旅人のように山や森を歩き回った。 彼は自分の肉体の必要を全く気にかけず、食べ物も衣服も顧みなかった。その身には、裸身をかろうじて覆うだけの、最も粗末な衣をまとっていた。昼は灼熱の太陽に焼かれ、夜は寒さに震えるにもかかわらず、彼が屋根の下に入ることはめったになかった。 彼は鳥のように山々を歩き回り、孤独を求め、心を唯一の神へと向け、ただその神のみに思いを留めていた。彼の目からは絶えず涙が流れ、心の奥底からは頻繁に嘆息が漏れていた。なぜなら、彼は生涯のすべてを涙の中で過ごし、常に泣き、嗚咽していたからである。深き老齢に達すると、彼は永遠の命へと旅立ち[4133] 、嘆きから、私たちの主キリスト・イエスと共に、すべての聖人たちとの永遠の喜びへと移った。主キリスト・イエスに、永遠の栄光が帰せられる。アーメン。

コンダク、第2調:

尊き父よ、あなたは天上の力に倣い、鳥のような生き方をされ、この世のことは忘れ去り、絶え間ない渇望をもって、キリスト王の天の恵みへと導かれ、ついにその御許に到達されました、ヴィッサリオンよ。どうか、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

尊い父イラリオン・ノヴォイの記念日

記念日：6月6日

[4133] 聖ヴィッサリオンの没は、4世紀末か5世紀初頭のことである。

至福のイラリオンは、王の食卓に仕えていたカッパドキア人のペトロス（[4134] ）と、母テオドシヤの息子であり、両親は敬虔で神を畏れる人々であった。彼は若き日に聖書をよく学んだ。20歳になったとき、彼は福音書の言葉（マタイ10:37； ルカ14:26）に従い、父と母、家と富を捨て、ビザンティウム近郊のイシヒエヴァ修道院で修道士となった。 その後、彼はダルマティアの修道院[4135] へ赴き、そこで偉大な天使の像を受け入れ、当時そこに住んでいた聖グリゴリオス・デカポリトスの弟子となった。聖イラリオンは、従順、沈黙、そして深い謙遜をもって修行に励んだ。彼は修道院の菜園で働き、この務めに10年間従事した。　同名の聖ヒラリオン大聖人の徳高く神に喜ばれる生涯の物語を読みながら、彼は可能な限り、断食、徹夜の祈り、そしてその他のあらゆる修道者の修行を通じて、この神に愛された聖人に倣おうと努めました。そのため、彼は「新ヒラリオン」と呼ばれるようになったのです。　太陽のように自らの魂を清め、照らし出した彼は、神から不浄な霊に対する権威を授かり、それらを追い払うことができるようになった。

その修道院のイグメンは、聖グリゴリオス・デカポリトスがすでにこの地を離れて他の場所へ去った後、彼の本意に反して彼を司祭に任命した。数年後、イグメンが亡くなると、尊者イラリオンは、兄弟たちが自分をイグメンにしようとしていることを知り、この地を去ることを決意した。　その目的のため、彼は夜、誰にも知られぬよう密かに修道院を出て、ビザンティウムへと向かった。そこで師である聖グリゴリウスを見つけ出せることを期待していたが、師はすでにローマへと船出し、そこから戻るとオリンポス山[4136] に定住していた。一方、イラリオンはビザンティウムのある修道院にたどり着いた。　ダルマチアの修道院の修道士たちは、このことを知ると、聖なるニキフォロス総主教[4137] に、たとえ彼の 意思に反してでも、イラリオンを修道院長に任命するよう懇願し始めた。総主教はこれを皇帝に報告した。皇帝はイラリオンを呼び寄せ、皇帝と総主教は共に、ダルマチアの修道院の修道院長職を引き受けるよう彼を説得した。　皇帝と総主教の意志に逆らうことを恐れ、イラリオンは修道院長としての権威を受け入れ、8年間にわたり、彼に託された神の羊たちを熱心に導いた。 その後、ギリシャ王国の王位を、獣のような迫害者であるレフ・アルメニア人[4138] が引き継ぎ、彼はキリストの教会を偶像排斥の異端[4139] で混乱させ始め、多くの人々を自らの異端的な教義に従うよう強要した。彼に従わなかった者たちに対しては、拷問を加えるか、あるいは遠い国へ追放した。彼の命令により、聖ヒラリオンは修道院から皇帝のもとへ連行され、皇帝は彼に異端の教えを受け入れるよう強要した。　キリストの忠実な戦士である彼は、異端者である皇帝に従わなかったばかりか、大胆にも彼を非難し、不信心者であり新たな犯罪者であると断じ、それによって皇帝の激しい怒りを自ら招いた。不義の皇帝は、この祝福された者に多くの傷を負わせ、様々な拷問を加えた後、彼を牢獄に閉じ込めた。　しばらくして、再び彼を呼び出し、激しく苦しめたものの、何の成果も得られなかった王は、彼を、敬虔さゆえに追放された聖ニキフォロスに代わって教皇の座に就いた、同調者

[4134] カッパドキア――小アジアの地域。

[4135] ダルマタの修道院は、聖イサアク自身によって（5月30日の彼の伝記を参照）、イサアクの後継者であり、55年間にわたり修道院を統率したイグメン・ダルマタの名を冠して設立された。

[4136] オリンポス――小アジアのミシア地方にある山で、フリギアとビフィニアの境界に位置する。ここには、とりわけ、修道者たちの厳格な修道生活で名高い「シンヴォラ」の修道院があった。

[4137] ニキフォロス1世は806年から815年まで総主教を務めた。

[4138] レフ5世（アルメニア人）は813年から820年まで在位した。

[4139] イコノボリア（聖像破壊運動）の創始者は、8世紀に生きたニコライの司教コンスタンティンとされている。聖像崇拝を偶像崇拝と無分別に混同したイコノボリア派は、聖像崇拝に対して残酷かつ執拗な迫害を行い、正教会からこれを根絶しようとした。　この異端の最も熱心な擁護者は、皇帝レウス・イサウリアス（在位：717年～741年）とコンスタンティノス・コプロニモス（在位：741年～775年）であった。　この異端は、787年にニカイアで開催された第7回全地公会議で非難された。

であるフェオドトス[4140]（通称カシテル）に引き渡した。この偽パトリアルヒ・テオドトスは、王と同じことを尊者に対して行った。すなわち、聖人を薄暗い牢獄に閉じ込め、パンも水も与えないよう命じて、何日も飢えと渇きに苦しめたのである。一方、尊者が修道院長を務めていた修道院の修道士たちは、王のもとへやって来て、こう懇願した。

「王よ、私たちの父を返してください。その代わり、私たちはあなたの意志に従うことを誓います。」

王はこの約束を喜び、彼らに修道院長を返した。

聖人は修道院に戻り、そこで一年を過ごした。　苦しみと飢えからわずかに休息を得るやいなや、聖人は再び苦難に身をさらすことになった。というのも、修道士たちの約束の履行を待っていた王は、騙されたことに気づいたからである[4141]。そこで王は兵士たちを修道院に送り込み、修道士たちを罰し、その尊者を引き取って再び牢獄に閉じ込めた。その後、彼をファネエフの修道院[4142]に送り、そこで聖人を最も狭い牢獄に閉じ込めるよう命じた。　この牢獄で聖人は六ヶ月間苦しめられ、その修道院の残酷な修道院長からあらゆる苦難や嫌がらせを受けた。その後、王の命により、彼は再びコンスタンティノープルへ連行された。そこでも、様々な諂いのある説得によって、聖像破壊の異端を受け入れるよう誘導された。　しかし、キリストの受難者は異端者たちの言葉に耳を貸さなかったため、皇帝は彼をキクロヴェエヴァと呼ばれる別の修道院[4143]へ送った。そこで彼は2年6ヶ月を過ごし、狭い牢獄で苦しめられ、様々な拷問に耐えた。そこから聖人は再び皇帝のもとへ連行され、激しい殴打を受けた後、プロティルスクの町[4144]に幽閉された。

多くの人々を滅ぼしたこの邪悪な王は、自らも凄惨な最期を遂げた。彼は、キリストの聖なるイコンを冒涜し、それを投げ捨てたまさにその場所にある神殿で、自らの兵士たちによって剣で斬り殺されたのである。こうして、この不信心な王は、自らの呪われた魂を悪しき方法で滅ぼしたのである。

彼の後を継いで王位についたミハイル・トラヴル[4145]は、すべての正信者たちを束縛と監禁から解放するよう命じた。聖ヒラリオンも他の者たちと共に牢獄から解放されたが、　しかし、彼は自らの修道院へは戻らなかった。というのも、偶像破壊の異端はまだ収まっておらず、司教の座は異端者である偽教師や偽牧師たちによって占められていたからである。彼は、ある信仰深く敬虔な女性の元にとどまった。その女性は、自身の領地内に彼のために人目につかない場所を用意し、庭付きの小部屋を整え、必要なものをすべて供給してくれた。

その頃、流刑から戻り、主のもとへ帰ったのは、聖テオドロス・ストゥディオスであった。彼もまた、正統信仰のために異端者たちから多くの苦難を強いられていた。聖イラリオンは、天使たちに天へと運ばれていく彼の聖なる魂を目撃した。このことは、テオドロスの伝記にも記されている。聖テオドロス・ストゥディオスがこの世を去ったその日、至福のイラリオンは、自分の庭を歩き回り、作業に励みながらダビデの詩篇を詠んでいたところ、突然、空から不思議な声が聞こえ、何とも素晴らしい香りを嗅ぎ取った。　驚いて立ち止まり、それがどこから来るのか見回した。上を見上げると、白い衣をまとった多くの天使たちが、輝くような顔をして、賛美歌を歌いながら誰かに向かって

[4140] テオドトス1世・カシテルは、815年から821年まで総主教を務めた。

[4141] 修道士たちは、皇帝のあらゆる命令に従うことを明らかに誓約していたが、正教の信仰に反する命令については、当然ながら従うことはできなかった。

[4142] ファネエフの修道院は、ビザンティウムとポントスの間に位置していた。

[4143] この修道院の所在地は不明である。

[4144] プロティルスの都市、あるいはより正確にはプロティルスの陣地。その所在地は不明である。

[4145] ミハイル2世トラヴル（口ごもる者）は、820年から829年まで在位した。

進んでいるのが見えた。この光景を目の当たりにした至福のイラリオンは、大きな畏怖の念に駆られて地面にひれ伏し、次のような声を聞いた。

「これは、聖なるイコンのために血を流すほどの苦難に遭い、その苦しみの中で極めて勇敢であった、ストゥディオス修道院のイグメン、テオドロスの魂である。彼は今、この世を去り、天の軍勢に迎えられながら、荘厳に天へと昇って行くのだ。」

このような驚くべき幻視を授かった聖ヒラリオンは、大きな慰めと霊的な喜びに満たされた。彼は何日も魂を喜ばせ、その顔は喜びに満ちて、まるで天使の顔のように輝いていた。

尊者イラリオンはその女性の元で七年以上を過ごした。その後、ミハイル・トラヴラに続いて、その息子テオフィロス[4146] が王位に就くと、彼はすべての殉教者たちを集め、かつての邪悪な王たちの例に倣って、再び彼らに聖像破壊を強要し、従わない者には残酷な拷問を加えた。 この頃、聖ヒラリオンも捕らえられ、皇帝のもとに連行された。聖像破壊を強要された彼は、皇帝の命令に従わず、再び皇帝を、真の信仰の教義を踏みにじる不義な法違反者として非難した。このため、聖人は背中に百七十回の鞭打ちを受け、アフシヤ島[4147] に流刑に処された。 聖人にとって大きな救いとなったのは、彼がここで牢獄や足枷に囚われることなく、たとえ極めて狭くはあったものの、独房で生活できたことだった。この独房で、彼はテオフィロスが亡くなるまで暮らした。 この不敬虔な王が亡くなると、テオドラ王妃はすべての殉教者を首都に集め、正教の信仰を復活させ、聖堂に聖なるイコンを安置するよう命じた。その時、尊者イラリオンも解放された。彼は再びダルマティアの修道院で修道院長職に就き、奇跡によって名声を博した。 ここで3年間を過ごし、弟子たちを魂の救いのために導いた後、彼は主のもとへ帰った[4148] 。 彼の尊く聖なる魂は、彼が見たテオドロスの魂と同様に、天使たちによって天へと運ばれ、今や聖なる殉教者たちの列に加わり、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の栄光の御座の前に立っており、その神に永遠の栄光が捧げられます。アーメン。

コンダク、第2調:

あなたの牧場の生ける柵よ、あなたは羊飼いの如く群れを無傷で守り抜き、その偉大な行いによって、敬虔のゆえに多くの苦難と悲しみを耐え忍んだ、新たなイラリオンとして現れました。それゆえ、天のシオンにおける至福の命へと移られた尊き方よ、私たちのために祈ってください。

聖なる殉教者アルケライ、フェクラ、スザンナの受難

記念日：6月6日

世を打ち勝ち、肉欲を制する貞潔は、万人の母であるエバには知られていなかった。なぜなら、神は彼女にこう告げられたからである。*「あなたは苦しみながら子を産む。そして、あなたは夫に惹かれるようになる」*（創世記3:16）。しかし、貞潔はこうしたものから自由である。それは長い年月を経ても色あせることなく、常に咲き誇り、貞潔を守る者の生涯を飾る。処女はキリストの花嫁となり、その花婿である天の宮殿へと入っていくのである。

この尊く神聖な賜物――清らかな貞操――によって、至福のアルケライアは飾られ、キリストの花嫁となり、世を打ち勝った者としての姿を現した。彼女はローマ近郊のある場所、キリスト教徒にとって過酷だった偶像崇拝の時代にあり得たような、小さく無名の修道院で暮らしていた。

[4146] テオフィロスは829年から842年まで在位した

[4147] アフシア島、あるいはオフィウッサ島は、コンスタンティノープル近郊のパサ・リマニ湾に位置していた

[4148] 聖イラリオンは845年に没した。

不敬虔な皇帝ディオクレティアヌス[4149] がローマでキリスト教徒に対する大迫害を開始したとき、聖処女アルケライアは、キリストにある二人の姉妹であり同志であるフェクラとスザンナと共に、迫害者たちから逃れるため、ローマを離れ、カンパニア[4150] へと逃げた； 彼女たちは皆、処女であることが誰にもバレないよう、衣服を男性の服に着替えた； そこで、ノラと呼ばれる町[4151] からそう遠くない場所にある、人里離れた人けのない地に、聖なる処女たちは定住し、昼夜を問わず神への熱心な祈りに明け暮れ、様々な神に喜ばれる行いに励み、苦しむ人々の病を癒やした。というのも、彼女たちは清く聖なる生活を送ったゆえに、病を奇跡的に癒やす恵みにあずかることができたからである。　彼女たちの顔は謙虚で柔和であり、同時に輝きに満ちていた。それは、彼女たちが常に心の中で主イエス・キリストを喜びとしていたからであり、その眼差しには貞潔と聖さが輝いていた。　身に着けていたのは、羊毛製の質素で粗末な衣服であり、その姿は修道士や断食者そのものでした。頭髪は男性のように短く刈り上げられていたため、多くの人が彼女たちを女性ではなく男性だと見なしていました。　次第に、周辺の人々が、癒やしを求めて、あるいは霊的な指導を求めて、彼女たちの元へ集まるようになった。というのも、彼女たちは癒やしの賜物に加え、神に導かれた教えを説く能力も持っていたからである。彼女たちは肉体だけでなく、人々の魂をも癒やし、多くの者を異教の不義からキリストの信仰へと導いた。彼女たちの名声は国中に広まった。

聖なる処女たちに関する知らせは、カンパニア地方の司令官レオントスにも届いた。当時、キリスト教徒を監視するために多くの場所に兵士が配置されていたからである。兵士たちは、これらの聖なる処女たちについて司令官に報告した。司令官は彼女たちを捕らえ、当時キリスト教徒が裁判にかけられ、拷問を受けていた都市サレルノ[4152] へ連行するよう命じた。 聖なる乙女たちは捕らえられ、サレルノへ連行されて尋問を受けた。　彼女たちは、主イエス・キリスト――彼女たちの不死で朽ちることのない花婿――が、殉教の冠へと彼女たちを招き、処女性だけでなく、まるで王家の紫の衣のごとく、苦難の血で飾られた彼女たちを、御自身の天の宮殿に迎え入れようとしておられることを悟った。　大いなる大胆さと神への信頼に満ち溢れ、彼女たちは恐れずに拷問官の前に現れ、自由な声で自分たちについてのすべての真実――自分たちが誰であり、どこから来たのか――を彼に語った。　彼女たちは、自らの生もキリスト教の信仰も隠さず、また、自分たちが――処女として――キリストに婚約し、最期まで清らかさを保つことを彼に誓った者たちであることも隠さなかった。　イゲモン・レオティオスは、彼女たちを見つめ、至福の処女アルケライアが他の者たちより年長であり、会話においてより大胆であることを見抜き、また彼女の顔つきがとりわけ敬虔であることに気づくと、彼女に語りかけてこう言った。

「聞け、アルケライアよ！　いかなる権利をもって、善人も悪人も問わずあらゆる人々を自分のもとに集め、ナザレのイエスを崇拝するよう教えているのだ？　彼は拷問を受けた際、自分自身さえ救うことができなかったのに、ましてや他の誰かを助けることなどできるはずがないではないか？」　よくもまあ、そんな魔法の言葉を使って人々を惑わすなどという大胆な真似ができるものだ。実際、お前は卑劣で有害な魔女であるにもかかわらず、どうして男装して男を装うなどという厚かましい真似ができたのか？　おそらく、この二人の乙女たちにも魔術を教えたのだろう。もし私が今、お

[4149] ディオクレティアヌスは284年から305年まで在位した。

[4150] カンパニアは古代イタリアに位置し、西はラツィオ、北はサムニウム、東はルカニア、南はティレニア海に接していた。 このイタリアの属州では、8世紀頃から初めて鐘の鋳造が始まったため、教会の規則においてそれらは「カンパナ」と呼ばれている（それ以前は、木槌や鉄板が使用されていた）。

[4151] ノラという都市はカプアの南に位置しており、現在も存在している（現在はイタリアのカゼルタ県に属する）人口約15,000人の都市である。

[4152] サレルノ市はティレニア海沿岸に位置しており、現在も存続している。

前を滅ぼさなければ、お前は経験の浅い女性や男性たちを、その偽りの教えで惑わしてしまうだろう。

これに対し、聖なる乙女はこう答えた。

「私はキリストの力によって、悪魔の力と権威を打ち砕きます。　そして私は人々に善を教えた――すなわち、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された唯一の真の神を知るよう導いたのだ。また、すべての病める者への癒しは、私の主イエス・キリスト、神の独り子のお名によって、そのしもべである私を通して与えられている。　私は男を装ってはいない。今や、私は処女であり、キリストのしもべであると公言したからである。そして、この二人の姉妹は、幼い頃から主においてキリストの信仰の中で育てられてきた。

すると、イゲモンは言った。

「王の命令に従わない者は、誰であれ、残酷な死に処されるであろう。」

聖女は答えた：

「私たちには、王、すなわち私たちの主イエス・キリストがおられます。その方のために、私たちはこの世と、その中にあるすべてのものを軽んじました。私たちは主の命令に従い、天と地、そしてその他すべてのものを支配される方からの憐れみを待ち望んでいます。」

イゲモンは言った：

「我らの神々は万物を支え、すべてを支配している。その名は数多い。クロノス[4153] 、トリスメギストス[4154]、ヘルメス[4155]、アフロディーテ[4156]、ヘラ[4157]、アテナ[4158]、そして万物の上に立つディオ[4159]。これら神々の力が、全宇宙を支え、支配しているのだ。」

乙女はこう答えた：

「あなたの神々は盲目であり、盲目な者たちが彼らを崇拝し、信じているのです。」

イゲモンは言った：

「あなた方の神はただひとりだが、その神は自らを守る力さえ持たない。なぜなら、十字架に磔にされ、酢を飲まされ、いばらの冠を被せられ、槍で刺し貫かれたからだ。」

聖女はこれに対し、こう答えた。

「これらすべては、私たちの救いのために、私たちの神が耐え忍ばれたのです。それは、神を信じる者たちが皆、滅びることなく、永遠の命を得るためです。しかし、あなたの神々は、見ず、聞かず、語らず、それゆえ、自分自身にも、他者にも助けを与えることができないのです。」

その言葉を聞いて、イゲモンは激怒し、聖女を飢えた獅子に食わせよと命じた。獅子たちがすぐに彼女を引き裂くものと思っていたが、獣たちは羊のようにおとなしくなり、聖女の足元に横たわった。聖女は神にこう祈った。

「主なる神よ、父、子、聖霊よ、これまで私の体をあらゆる汚れから清く保ってくださった方よ！今、あなたが獣たちをなだめ、獣よりもさらに凶暴な総督に打ち勝つ力を私に与えてくださったように、どうか常に、あなたのしもべである私に、絶え間ない助け手となってください。」

4153 クロノス――ギリシャ神話において、ウラノスとゲイアの末息子であり、タイタン族の一人である。彼は作物の栽培と収穫の守護神とみなされていたため、手に鎌を持った姿で描かれていた。

4154 トリスメギストスの名は、ユピテルまたはゼウスに帰せられていた。

4155 ヘルメス――幸福の神。

4156 アフロディーテ、あるいはヴィーナスは、愛と美の女神である。

4157 ヘラ――結婚と出産の守護神。

4158 アテナ、あるいはミネルヴァ――知恵の女神。

4159 ゼウス、あるいはユピテル――古代ギリシャ宗教の最高神であり、他の神々の祖であり、万物の創造主とみなされていた。

イゲモンは、聖女が獣たちから無傷でいるのを見て、さらに激しい怒りに満ち、兵士たちに獣たちを殺すよう命じ、聖女殉教者とその仲間たちを縛り上げて牢獄に閉じ込めた。しかし、牢獄の中で、主の天使が聖女殉教者たちの前に現れ、言葉では言い表せない光で彼女たちを照らし、こう言った。

「恐れるな、キリストの乙女たちよ！　あなたがたの祈りは神に届き、天にはすでにあなたがたのための冠が用意されている。」

看守たちが牢獄の中でこの異様な光を見たとき、恐怖と戦慄に駆られてこう言った。

「確かに、これらの乙女たちが信じる神こそ、真の神である。」

朝、イゲモンは家来たちに言った。

「昨日、私や私の神々を様々な冒涜の言葉で侮辱したあの魔女を、私のところへ連れて来い。」

するとすぐに、聖なる殉教者アルケライアが裁判にかけられ、こう言った。

「おお、総督よ、私ではなく、あなたの邪悪な行いが、あなたに冒涜と不名誉をもたらし、消えることのない火を準備しているのです。その火の中で、あなたはあなたの神々と共に永遠に苦しむことになるでしょう。もしあなたが永遠の苦しみから逃れたいのなら、私の魂に益となる言葉に耳を傾け、私の善き助言を受け入れてください。 あなたを創造された父なる神、 、そしてその独り子である主イエス・キリスト、さらに父から発する聖霊を信じなさい。これこそが、地においても天においても、三位一体として賛美される唯一の神なのです！

長官は、この言葉を嘲笑や狂気だと受け止め、聖人にこう反論した。

「もし私の言うことを聞き、私の神々を信じるなら、富と名誉が与えられ、高潔なローマの女性たちの間で決して末席に置かれることはないだろう。しかし、もし私の言うことを聞かないなら、私はあなたを淫行者たちの侮辱の餌食とし、その後、残酷な拷問にさらし、ついには凄惨な死へと追いやる。 そして、お前の肉体は犬や獣、鳥たちに食わせることになるだろう。

聖女はこう答えた。

「私には、私の主イエス・キリストという助け手がおられます。主は、私の魂と肉体の両方を守ってくださる方です。　主は、かつて多くの殉教した聖なる乙女たちを守られたように、あなたが私に用意しているその汚らわしさから私を守ってくださるでしょう。死を恐れることはありません。なぜなら、私の主のもとで永遠の命を得られると信じているからです。主は私に限りない喜びを与え、御自身の聖なる天使たちの仲間に加えてくださるでしょう。

その後、総督は聖女を裸にし、その清らかな乙女の体を鉄の道具で削り、残酷に打ち据えるよう命じた。さらに、その傷に、このために用意された熱い油と樹脂を注ぐよう命じた。こうして聖女の体は削り取られ、骨まで焼け尽くされた。　その場にいた者たちは皆、聖なる殉教者の苦しみを見つめながら、これほど虚弱な乙女が、どうしてこれほど残酷な苦痛に耐え、生き延びることができるのかと、極めて驚き、首をかしげた。しかし聖女は、天に目を上げ、両手を十字架の形に組んでこう言った。

「主よ、天より、御自身の聖なる御座の高みより、御自身の忠実なしもべを見守ってください！燃え盛る炎を、御恵みの露で鎮め、イゲモンによって私に課せられた苦しみの中で、私の体に慰めをお与えください。」

聖女がこれらの言葉を口にするや否や、たちまち彼女の頭上に光が輝き、次のような声が聞こえた。

– 恐れるな！私はあなたと共にいる。

イゲモンは、聖女が無傷であるのを見て、怒りに歯ぎしりした。

その場所の近くには、数人でやっと動かせるほどの大きな石があった。イゲモンは、その石を持ち上げて殉教者の上に載せ、彼女をその石で押しつぶすよう命じた。　使用人たちがイゲモンの命令を実行しようとしたとき、聖女のそばに目に見えない形で共にいた主の天使が、素早くその石を反対側へ押しやった。その結果、石は迫害者の使用人たちを押しつぶしたが、聖女は生き残り、神を賛美してこう歌った。

「主よ、私たちの先祖の神よ、あなたを信頼する者を救ってくださる方よ、あなたは祝福されます！」

これを見た民は、こう叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり。この乙女が信仰を告白するその神こそ！」

イゲモンは言った。

「この魔女を今どうすべきか？　彼女はあらゆる拷問に耐え抜いている。彼女を捕らえて街の外へ連れ出せ。彼女に従うあの二人の乙女も一緒に連れて行き、三人全員を剣で殺せ。」

兵士たちは直ちに聖なる殉教者たちを捕らえ、両手を後ろ手に縛り、町の外へと連行した。

全員が指定された場所に到着すると、兵士たちはすでに聖なる殉教者たちの尊い首を切り落とす準備を整えていた。その時、彼らは天使たちを目撃して恐怖に震えた。一方、聖なる天使たちは、殉教者たちの苦しみを見つめながら、栄光のうちに殉教者の魂を迎え入れる準備をしていた。　兵士たちは、何らかの形でこれらの天使たちの存在を感じ取り、恐怖に襲われ、震え上がり、まるで自分たち自身を忘れてしまったかのようだった。しかし、聖アルケラヤは神に祈りを捧げた後、兵士たちにこう言った。

「命じられたことを実行しなさい。」

兵士たちはこれに対し、こう答えた。

「お許しください、お嬢様。私たちは恐怖に襲われてしまい、できません。」

すると、乙女たちは一斉に彼らにこう言った。

「もし命令に従わなければ、私たちと共にあることは許されません。」

兵士たちはこれを聞くと、剣を抜き放ち、彼女たちの首を切り落とした[4160]。

こうして、三人の聖なる殉教者――アルケラヤ、テクラ、スザンナ――、清らかな乙女たちは、その偉業を成し遂げ、天の御殿に入り、今や天使たちと共に、父と子と聖霊、三位一体において賛美される唯一の神の御前に立ち、その神に永遠の栄光が捧げられています。 アーメン。

6月20日

6月7日（旧暦）

同日、303年に剣で斬殺された聖殉教者テオドトス・アンキルスの記念日（その生涯については5月18日の項を参照

聖マルケッロ・ローマ教皇および彼と共に殉教した聖人たちの殉教

6月7日の記念日

聖マルケッルはローマ出身であり、父の名はベネディクトであった。彼は聖殉教者マルケリンの後を継いでローマ教会の教皇の座に就き、不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌス[4161]、マクシ

[4160] 聖女殉教者たちの殉教は293年に起こった。

[4161] ディオクレティアヌス帝は、284年から305年までローマ帝国の東部を統治した。

ミアヌス・ヘルクルス[4162] 、別名のマクシミアヌス（ガレリウス[4163] ）、そしてマクセンティウス[4164] の治世下で、5年6ヶ月にわたりその座に留まった。当時、ローマでは次のような出来事が起こっていた。皇帝マクシミアヌス（通称ヘルクルス）は、ディオクレティアヌスによって共同統治者に任命された。 アフリカの属州[4165] からローマに戻ったマクシミアンは、東方に滞留していたディオクレティアヌス皇帝に気に入られようと、ローマで皇帝に敬意を表して石造りのテルマ（浴場）の建設を始めた。この浴場は異教徒たちに不快な涼しさをもたらした[4166] 。ローマの軍団の中から、キリストを信じる多くの兵士を見つけ出し、 マクシミアヌスは彼らから軍人としての地位を剥奪し、かつてエジプトのファラオがイスラエル人に課したのと同じような労働を命じた[4167] 。すなわち、ある者には煉瓦作りを、別の者には石灰作りを、さらに別の者には土を掘り、前述の浴場の建設のために石を運ばせたのである。 彼がこれらすべてを行ったのは、ローマにいたキリスト教徒を威嚇するためであった。なぜなら、多くのローマ人が、庶民だけでなく貴族の中にも、公には明かしていなかったものの、キリスト教を信仰していることを知っていたからである。

当時、ローマにはフラソンという名の、裕福で誠実なキリスト教徒が住んでいた。キリスト教徒たちが過酷な労働に苦しめられ、飢えに苛まれていることに気づいたフラソンは、自らの財産を密かに彼らに差し伸べようと決意した。 その目的のために、神を畏れる四人の男を選び、彼らを通じてキリスト教徒たちに食料や衣服、その他必要な物資を供給した。この四人の男たちの名は、シシニウス、キリアクス、スマラグド、ラルギウスであった。

福者マルケル教皇がこのことを知ると、キリスト教徒たちに施しが行われていることに心から大いに喜び、前述の4人の男たちを呼び寄せ、フラソンの寛大さについてすべてを聞き出した後、マルケルはフラソンに深く感謝し、シシニウスとキリアコスをローマ教会の助祭に任命した。

ある夜、この二人の助祭が、フラソノが聖なる殉教者たちのために送った食糧を肩に担いで運んでいたところ、不敬虔な異教徒たちに捕らえられ、エクスペリウス執政官のもとに連行された。彼らが連行されるやいなや、トリブヌスは彼らを公共の牢獄に投獄するよう命じ、三日目に が皇帝マクシミアヌスに彼らのことを報告した。皇帝は、他のキリスト教徒たちと同じ労働を彼らに課すよう命じ、こうして彼らは石造りの建物の建設のために砂を運ぶ人々の仲間に加わることとなった。

そのキリスト教徒たちの中には、サトゥルニンという名の老人がいた。彼は高齢のため、自分に割り当てられた重い荷物を運ぶことができなかった。そこで、祝福された助祭シシニウスとキリアクはこの老人を助け始め、自分たちの仕事だけでなく、他の人たちの仕事もこなした。そして、彼らは絶えず口にして神を賛美し、称え続けた。 この一連の出来事を、警備兵がトリブヌスに報告し、トリブヌスは皇帝に伝えた。

そこで皇帝はシシニウスを自分の元へ呼び出すよう命じ、彼が現れると、こう尋ねた。

「お前の名は何か？」

「私は罪人です」と聖人は答えた。「シシニウスと申します。私は、私たちの主イエス・キリストの僕たちの僕です。」

[4162] マクシミアヌス・ヘルクルスは、284年から305年までローマ帝国の西部を統治した。

[4163] マクシミアヌス・ガレリウスは、305年から311年まで東部を統治した。

[4164] マクセンティウスは305年から312年まで西部を統治した。

[4165] マクシミアヌスの管轄下には、アフリカ、スペイン、イタリアが含まれていた。

[4166] なお、古代ローマの異教徒たちにとって、テルマは単なる浴場であるだけでなく、売春宿でもあったことに留意すべきである。

[4167] イスラエル人を抑圧し弱体化させるため、エジプトのファラオは彼らに重労働を課した。 比較的短期間（ヨセフの死からエジプト脱出まで）の間に、イスラエル人はエジプト人のためにピフォム、ラムセス、ヒリオポリスの3つの都市を建設した（出エジプト記1:1–14）。

「お前たちが歌っているその賛美歌とは、一体何なのか？」とマクシミアヌスは尋ねた。

「もしあなたが、私たちが歌っている賛美歌の意味を知ることができたなら」と聖人は答えた。「あなたは、あなた自身の創造主をも知るでしょう。」

それに対し、皇帝は言った。

「我らの創造主とは、無敵のヘラクレス[4168]以外、誰がいるというのか！」

聖なる助祭シシニウスはこう答えた。

「私たちにとって、その名を口にするだけでなく、その話を聞くことさえも忌まわしいのです。」

「二つのうち、どちらか一つを選べ」と皇帝は続けた。「神ヘルクレスに生贄を捧げよ。さもなければ、お前の肉体を火で焼き尽くしてやる。」

「私はかねてより、私の神であるキリストのために苦難を受けることを望んでおります」と聖シシニウスは答えた。「そうして、切望する殉教の冠を得たいのです。」

すると皇帝は激怒し、彼をラオディキアの地方総督に引き渡して拷問させた。

同知事は聖人をマメルティヌスの牢獄[4169]に投獄し、殉教者はそこで十七日間を過ごした。その期間が満了すると、同知事は再び聖シシニウス助祭を尋問のために自分の元へ連れてくるよう命じた。

牢獄から連れ出された囚人は、まず刑務所長アプロニアヌスの前に連れて行かれた。アプロニアヌスは彼を見ると、その顔が不思議な天の光で輝いていることに気づいた。その際、彼は次のように語る声も聞いた。

– *「さあ、わたしの父に祝福された者たちよ、世の初めからあなたがたのために用意されていた御国を受け継ぎなさい」*（マタイ25:34）。

すると、アプロニアンは恐怖と戦慄に襲われ、聖シシニウスの足元にひれ伏して言った。

– あなたが告白するキリストの名によって、あなたに懇願します。直ちに私に洗礼を授け、あなたの冠の共同相続人にしてください。

すると、すぐに水が運ばれてきた。

そこで、聖シシニウス助祭は、アプロニアンに対して「[4170]」という洗礼の宣言を行い、水を祝福した。その後、アプロニアンに裸のまま水で満たされた器に入るよう命じ、彼にこう尋ねた。

4168 ヘラクレス、あるいはヘラクレスは、古代ギリシャの国民的英雄である。ギリシャ神話の伝承によれば、ヘラクレスはゼウスと、ティリノスの王アンフィトリオンの妻アルクメネの息子であった。ヘラクレスには並外れた肉体的力が備わっていたため、体操選手や剣闘士の守護神と見なされていた。

4169 マメルティヌスの牢獄は、ローマ市の北部に位置していた。ここは主に国家反逆者を収容するためのものであり、その中にはキリスト教徒も含まれていた。　伝承によれば、この牢獄には聖使徒ペトロとパウロが投獄されていた。この牢獄は修復（復元）された姿で現在まで保存されており、特に使徒ペトロとパウロが投獄されていた区画は、聖地としてカトリック教徒によって格別に大切に守られている。

4170 「オグラシェニエ」とは、正教会の信仰の真理に関する口頭による教導であり、古代教会において、洗礼の秘跡を受けようとするすべての人々に授けられていたものである。聖書や教訓を聞くために教会に入る権利を持ち、さらには典礼の第一部および第二部（プロスコミディアと「オグラシェニエの典礼」）に立ち会うことさえ許されていた　洗礼志願者は、典礼の第三部、すなわち最も重要な部分（「信徒の典礼」）が始まる前に、直ちに教会から退出しなければならなかった。このことは、助祭による呼びかけによって告げられ、今日でも正教会における典礼の執行中に受け継がれている。求道期間の長さは一律ではなく、多くの人は生涯を通じて求道者のままであった。必要に応じて、求道期間は数日間、あるいは数時間（例えば今回のケースのように）にまで短縮されることもあった。――求道の教会儀式は、現在も正教会で執り行われている。　その内容は、洗礼を受ける者に対して祈りを唱え、悪魔に対する呪文を唱えることである。その際、洗礼を受ける者はサタンを拒絶し、キリストと結ばれ、使徒信条の朗読によって自らの信仰を告白する（幼児洗礼の場合は、代父・代母によって行われる）。

「全能の父なる神、その独り子である我らの主イエス・キリスト、そして聖霊を信じますか?」

彼は答えた:

「信じます。」

「父と子と聖霊が、あなたを照らしてくださいますように」と聖シシニウスは言った。

その後、聖人はアプロニアンに水から上がるよう命じた。

その後、シシニウスは新しく洗礼を受けたアプロニアンを、聖マルケッロ教皇のもとへ連れて行った。　マルケッロ教皇は、新たに洗礼を受けたアプロニアヌスに聖油を塗って祝福し、聖なる典礼を執り行った後、シシニウスとアプロニアヌスの両名、そしてそこにいたすべてのキリスト教徒たちに、我らの主イエス・キリストの至聖なる御体と御血を授けた。

その日の正午、地方総督ラオディキウスは、シシニウス執事を尋問のために自分の元へ連れてくるよう命じた。彼と共に、刑務所の長である至福のアプロニアン――キリストの新たに洗礼を受けたしもべ――もやって来た。ラオディキウスの前に進み出たアプロニアンは、彼に向かって大声でこう叫んだ。

「なぜ悪魔は、あなたを神の僕たちに対して敵対させ、罪のない者たちにこれほど多くの苦しみを与えるよう教唆するのですか?」

アプロニアヌスのその言葉に驚いた地方長官は、彼にこう言った。

「どうやら、あなたもキリスト教徒になったようですね。」

「ああ、この罪深い身よ」と、至福のアプロニアンは答えた。「私は、真の神を知ることなく、不義のうちに日々を浪費してしまったのだ。」

「その通りだ」と地方総督は叫んだ。「今、お前は自分の日々を台無しにするのだ!」

そして、彼はこう言いながら、その首を刎ねるよう命じた。

「もしこの者が滅びなければ、他にも多くの者が滅びてしまうだろう。」

その後、兵士たちは聖アプロニアンを城の外へと連れ出した。 城から二ミリアリ[4171] の距離を離れたところで、兵士たちはサラリウス街道[4172] で聖アプロニアンの首を刎ねた。こうして、新たに信仰に目覚めたアプロニアンは殉教の冠を受けた。一方、聖シシニウス助祭と、彼と共にいた前述の老僧サトゥルニヌスについては、地方総督は彼らを牢獄に投獄するよう命じ、こう告げた。

「もし神々に犠牲を捧げなければ、私はあなた方を滅ぼし、あらゆる種類の拷問にさらすだろう。」

これらの聖人たちが牢獄に収容されている間、多くの異教徒たちが彼らを訪れ、恐れることなく彼らから洗礼を受けた。　四十日が過ぎた頃、地方総督ラオディキウスはこのことを知った。彼は女神テリュラの神殿（[4173] ）に裁判の場を設けるよう命じ、そこに着席すると、長老サトゥルニヌスと助祭シシニウスを自分の前に連れてくるよう命じた。キリストの囚人たちは、鉄の足枷をはめられ、裸足で拷問者の前に引き出された。

[4171] ミリアリウムとは、ローマのマイル、より正確にはローマの里程標を指す。というのも、各ミリアリウムの終わりには、標識として石柱が立っていたからである。ミリアリウムは8スタディオン（1スタディオン＝88サジェン）に相当し、これは現在のヴェルスタの約1.5に相当する。 マイルストーンはイタリア全土に点在しており、通常、建設者または建設当時の皇帝の名前が刻まれていた。他のすべてのマイルストーンの起点となり、すべての道路が合流していた最初のマイルストーンは、サトゥルヌス神殿のそばにあった。ローマでの発掘調査において、この石の残骸が発見された。

[4172] サラリア街道は、古代ローマで最も大きな街道の一つである。この街道はティブレ川沿いにクールまで伸び、ラツィウムやサビニアなどを経てアルディアへと至っていた。この街道の名称は、サビニア人が海辺から自国へ塩（ヴァイ）をこの道を通じて運んでいたことに由来する。

[4173] テュラまたはガイアは、ギリシャ・ローマ神話における大地と豊穣の女神である。

「さて」と地方総督は彼らに尋ねた。「ついに、キリスト教という虚しい惑わしを捨てたのか？ まさか、今になっても、わが王たちが崇める神々にひれ伏すことに同意しないというのか？」

「私たちは罪人ですが」と、聖なる助祭シシニウスは答えた。「私たちの主イエス・キリストを崇拝しており、悪魔や魂のない石の前に決して頭を垂れることはありません。」

すると、ラオディキオは言った。

「神々への香を焚くための銅製の三脚台をここに持ち込ませよ。」

すぐに、燃えさかる炭の入った三脚台が運ばれてきた。拷問官は聖人たちに、偶像に香を焚くよう強要し始めた。

聖なる長老サトゥルニヌスは拷問官にこう言った。

「主が異教の偶像を塵と化されますように。」

するとたちまち、青銅の三脚台は溶けて、水のように広がっていった。

そこにいた二人の兵士、パピウスとマウルスという名の者たちは、これを見て、大声で叫んだ。

「まことに、シシニウスとサトゥルニヌスが崇める主イエス・キリストこそ、真の神である。」

地方総督ラオディキオは怒りに燃え、聖なる殉教者たち、サトゥルニヌスとシシニウスを恥辱の柱に吊るし、容赦なく縄や節のある棒で打ち据えるよう命じた。このように苦しめられながら、聖人たちはこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、あなたのために苦難を受けたあなたのしもべたちと共に歩むことを許してくださったことを、感謝いたします。」

すると、聖人たちの苦しみを見ていた兵士パピウスとマウルスは、地方長官に向かって再び叫びました。

「なぜ悪魔は、あなた方を神のしもべたちに対して煽り立て、罪のない彼らを容赦なく苦しめるよう教えているのですか？」

ラオディキオは、これらの兵士たちに対して怒りを燃やし、彼らの口を石で打つよう命じた。聖徒たちの口を砕いた後、彼らを牢獄に閉じ込めた。　同時に、彼は家来たちに、恥辱の柱に吊るされた殉教者たちの脇腹をろうそくの火で焼くよう命じた。しかし、彼らはこれほど大きな苦しみを受けながらも、喜びに満ちた顔で神に感謝を捧げた。

その日、拷問官は聖人たちに対して死刑判決を下した。そのため、彼らは恥辱の柱から降ろされ、ヌマンティア街道[4174]を通って城外へ連れ出され、剣で斬り殺された。

前述の敬虔な人物フラソンは、長老ヨハネと共に聖殉教者たちの遺体を運び出し、サラリウス街道沿いの自分の土地に埋葬した。

一方、牢獄に閉じ込められていた兵士パピウスとマウルスは、聖なる洗礼を受けることを切に望んでいた。主への祈りを捧げた後、彼らは誰にも気づかれることなく、開かれた扉から牢獄を抜け出した。その後、至聖なる教皇マルケッロのもとへ赴き、彼から聖なる洗礼を受けた。　洗礼を受けた後、彼らは再び自分たちを探していた兵士たちの手に渡り、地方長官の尋問に引き渡された。彼らを見た地方長官は言った。

「今、お前たちがキリスト教徒だと分かった。」

「はい、私たちは確かにキリスト教徒です」と聖パピウスは答えた。

「キリスト教という虚しい迷いを捨てなさい」とラオディキウスは続けた。「そして、我らの王たちが崇める神々にひれ伏しなさい！」

[4174] ヌマンティア街道は、ローマからヌマンティアの町へと向かう道であった。

「永遠に滅びたいと願う者たち、すなわち魂を失った者たちは皆、彼らを崇拝すればよい」と、聖マウルスはラオディキウスに答えた。

それに対し、地方総督ラオディキオスはこう言った。

「今すぐ、我らの不死の神々に生贄を捧げなければ、お前たちは魂を失うことになる。生き残りたいのなら、私の言うことを聞き、私の命令に従え。」

「永遠に苦しみたいのなら、彼らに犠牲を捧げなさい」と、聖パピウスは答えた。

その後、地方総督は聖人たちを地面に寝かせ、容赦なく棒で殴打するよう命じた。しかし、彼らは激しく殴打されながらも、ただ次の言葉だけを繰り返し唱え続けた。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべたちを助けてください！」

その後、ラオディキオスは聖人たちを錫の棒で打つよう命じた。彼らが長い間そのように打たれている間、彼らは自らの魂を神の御手に委ねた。

長老ヨハネは、夜になって聖人たちの遺体を運び出し、以前に殉教した聖シシニウスとサトゥルニヌスの墓のそばに、尊厳をもって彼らを葬った（これは聖マルケッロ教皇の命によるものであった）。

その頃、ディオクレティアヌス皇帝がローマに戻ってきた。地方総督ラオディキウスは、聖なる殉教者たちに関するすべてをディオクレティアヌスとマクシミアヌスに報告し、自分がいかに容赦なく彼らを拷問し、殺害したかを語った。皇帝たちはこの知らせを喜び、地方総督の熱心さを称賛した。

一方、前述の聖キリアクスは、至聖なる教皇マルケッロによって助祭に叙階されたが、この頃、聖シシニウスと共に牢獄に囚われていた。そこにはスマラグドやラルギウス、そしてその他のキリストの囚人たちも収監されていた。　彼らは皆、課せられた過酷な労働に従事していた。昼間は労働のために連れ出され、夜になると再び牢獄に閉じ込められていた。神は至福のキリアクスに病を癒す恵みをお与えになった。　多くの人々が彼のもとを訪れ、病人を連れてきた。聖キリアコスは神への祈りの後、彼らを癒した。こうして、ここでは盲人が視力を取り戻し、中風患者が健康を取り戻し、人々から悪霊が追い出され、聖人の祈りによって、様々な病に苦しむ者たちに癒しがもたらされた。

ディオクレティアヌス皇帝には、アルテミアという名の娘がいた。　神の御許しにより、彼女は悪霊に取り憑かれ、不浄な霊に苦しめられていた。そのことを知ったディオクレティアヌスは深く悲しみ、その日は悲しみのあまり食事を口にしなかった。彼が娘の部屋に入ると、ちょうどその時に娘は悪霊に取り憑かれていたが、悪霊は娘の口を通してこう叫んだ。

「私はここから出て行かない。そして、助祭キリアコス以外には、誰も私を追い出すことはできない。」

そこでディオクレティアヌスは、助祭キリアコスを探し出すよう命じた。彼が牢獄で見つかり、友人のスマラグドとラルギオスと共に皇帝のもとに連れて来られると、皇帝は彼に、娘の部屋に入って彼女を癒やすよう懇願した。　聖キリアコスは、王女の部屋に入ると、彼女を苦しめていた悪霊に向かって次のように語りかけた。

「我らの主イエス・キリストの名において、お前に命じる。この乙女から出て行け。」

すると、悪霊は彼女の口を通してこう答えた。

「もし私を彼女から追い出したいのなら、私が入ることのできる別の住処を示してくれ。」

「ここに私の体がある」と聖キリアコスは答えた。「もしできるなら、そこに入りなさい！」

「お前の体には入れない」と悪霊は続けた。「なぜなら、それは四方八方から閉じられ、封印されているからだ。」

そこで聖キリアコスは彼にこう言った。

「我らの主、十字架にかけられたイエス・キリストの名において、この乙女から出て行け。そうして、彼女が聖霊に仕えるための清らかな器となるように。」

すると、不浄な霊は叫んで言った。

「おお、キリアクよ！もしお前が私をここから追い出せば、お前をペルシャへ送られるように仕向けてやる[4175]。」

そう言い終えると、汚れた霊は出て行った。そして、悪魔の苦しめから解放された乙女アルテミアは、聖人にこう言った。

「あなたが信仰を告白する神の名にかけて誓います。私を洗礼してください。遠くに、あなたが宣べ伝える主がお見えになるのですから。」

そこにはアルテミアの母であるシレーナ皇后も立っており、娘の癒やしと、キリストの力の現れ（彼女は密かにキリスト教徒であったため）の両方によって、格別の喜びに満たされていた。

水を用意し、翌日、ディオクレティアヌス帝に内緒で、乙女アルテミアを父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けた。

それ以来、聖キリアクスはディオクレティアヌス皇帝の寵愛を得るようになり、皇帝は彼とその友人であるスマラグドとラグリアに自由を与え、ローマの自身の浴場の近くに家を与え、平穏な生活を約束した。

一方、皇后シレーナは、娘に心を尽くしてキリストを愛し、その律法を揺るぎなく守るよう教え諭していた。

しばらくして、ディオクレティアヌスのもとへペルシャ王からの書簡が届いた。その書簡の中で、ペルシャ王はディオクレティアヌスに対し、助祭キリアコスを自分のもとへ送るよう要請した。というのも、王の娘が悪霊に取り憑かれており、その悪霊が彼女の口を通じてこう叫んでいたからである。

「ローマの助祭キリアコス以外、私を追い出す者はいない。」

そこで皇帝は、妻であるシレーネ皇后に、キリアコスを呼び寄せ、悪霊に取り憑かれた王女のもとへペルシアへ赴くよう懇願するよう命じた。

聖キリアクスが皇后のもとへ呼ばれ、ペルシアからの使者の話を聞くと、こう言った。

「わが主イエス・キリストの名において、私はためらうことなく向かいます！」

キリアクは皇后から必要な物資をすべて支給され、その後、友人のスマラグドとラルギオスと共にペルシアへと旅立った。

彼がペルシアに到着し、激昂している王女のもとへ連れて行かれると、悪魔は彼女の口を通してこう叫んだ。

「どうだ、キリアクよ。以前お前にも言った通り、ここへ来るのに苦労させられただろう？」

「私はここへ来た」とキリアクは答えた。「私の主、主イエス・キリストの助けを借りて、お前をここから追い出すために。さあ、不浄な霊よ、主イエス・キリストの名によって命じる。この乙女から出て行け。二度と彼女に戻ってはならない。」

「だが、キリアクよ、君は疲れているだろう。まずは旅の疲れを癒やす必要があるはずだ」と悪霊は言った。

「万事を整えてくださる神の助けのおかげで、私は疲れを感じていない」とキリアクは答えた。

[4175] 悪魔が聖キリアコスにペルシアへの旅を脅しとして用いたのは、当時、適切な交通路がなかったため、旅そのものが非常に過酷であったからである。

「だが、私の方は」と悪魔は続けた。「望んだことはすべて成し遂げた。お前をペルシャへ来させると約束し、お前は来たのだ。」

「無力で呪われたお前は、望むことを成し遂げることはできない。お前ができるのは、我らの創造主が許すことだけだ。」

すると、悪魔は乙女を苦しめ始めた。一方、聖キリアクスは地面にひれ伏し、涙ながらに神に祈り始めた。その間、悪魔は聖人にこう叫んだ。

「もし私をここから追い出すのなら、私が入り込める場所を示してくれ。」

聖人はこう答えた。

「おお、愚かな者よ！　神の被造物のどこにも、お前の居場所など見つからない。なぜなら、わが主イエス・キリストの打ち負かすことのできない全能の力が、あらゆる場所からお前を追い払うからだ。」

すると、悪魔は直ちにその少女から出て行き、逃げ去りながら、空中に叫び声を響かせ、こう言った。

「ああ、私を追い出す御方の御名は、なんと恐ろしいことか！」

それ以来、その少女は健康を取り戻した。彼女の名はヨビアであった。彼女はキリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。王家の者たちの多くもキリストを信じ、洗礼を受けた。その数は計約四百人にのぼった。ペルシャの王は聖キリアコスに多くの贈り物を申し出た。しかし、彼は何も受け取らず、ただパンと水だけで満足した。　ペルシアに45日間滞在した後、彼はそこを去り、ペルシア王からローマ皇帝へと、感謝の手紙を携えて帰還した。ディオクレティアヌスはその手紙を丁重に受け取った。皇后シレーナとその娘アルテミアは、キリアクの帰還を大いに喜んだ。

その少し後、ディオクレティアヌスはローマから東方へ、マクシミアヌス・ヘルクルスはメディオランへ旅立った[4176]。そこで両者は皇帝の地位を捨てた。その時、（もう一人のマクシミアヌスである）ガレリウスという名の男――ディオクレティアヌスに養子として迎えられ、後にその娘、すなわちアルテミアの姉であるヴァレリアを妻に与えられた者――がローマにやって来て、キリスト教徒を迫害し、殺害し始めた。　彼は他の者たちと共に聖キリアコス執事を捕らえた――キリアコスがアルテミアをキリスト教に改宗させたことに怒りを抱いていたからである――そして、彼を友人のスマラグドとラルギオスと共に牢獄に投獄した。　その際、拷問官は、キリアコスを裸にし、鉄の鎖で縛ったまま、自分が向かうあらゆる場所に引き回すよう命じた。これは他のキリスト教徒を威嚇するためであった。

ある日、拷問官がある町へ向かっていたところ、聖マルケル教皇が出迎え、大声でこう言った。

「なぜ、お前の王国のために祈っている神の僕たちを殺すのか！」

すると迫害者は激怒し、聖人を容赦なく棒で打つよう命じ、動物の世話係に任命した。　こうして、聖マルケルは動物の餌やりを任され、看守たちは彼が怠けずに職務を遂行しているかを見張っていた。一方、聖キリアクスとその仲間たちについては、皇帝は総督カルパシウスに次のように命じた。

「民衆をキリスト教へと誘惑しているこれらの魔術師たちに、生贄を捧げさせるよう説得せよ。たとえ拷問を用いても、彼らにそうさせるのだ。」

[4176] メディオラン（現在のミラノ）は、北イタリアのロンバルディア地方にある最も重要な都市であり、紀元前数世紀という遥か昔に設立された。　キリスト教会の歴史において、メディオランは、アリウス派の異端との闘いに多大な熱意を示したアンブロシウス大司教（374年から397年）の牧会活動の地として知られている（彼の記念日は12月7日に聖教会によって祝われる）。

カルパシウスは、聖人と彼と共にいたキリスト教徒たちを捕らえて牢獄に閉じ込め、その後、テリュラ神殿の裁判席に着くと、聖なる殉教者たち――助祭キリアコス、その友人である　スマラグドとラルギオス、そして彼らと共に、キリストの御名を告白したために同じく牢獄に閉じ込められていたクリステンティアという名の第四の囚人を呼び出した。カルパシウスはキリスト教徒たちに次のように語りかけた。

「なぜ、皇帝の命令に従わず、我らの不死の神々に犠牲を捧げないのか？」

キリアコスとその友人たちはこう答えた。

「私たちは、永遠に生きられる神であり、私たちの主イエス・キリストに、私たち自身を捧げているのです。」

「お前の老いによって、」とカルパシウスはキリアクスに言った、「お前の髪は白くなった。しかし、今、私はその老いを若さへと変えよう。」

そう言いながら、彼は樹脂を溶かして聖人の頭に注ぐよう命じた。聖人はこう叫びながら言った。

「主よ、あなたに栄光あれ。あなたが私たち、あなたのしもべたちを、あなたの天の御国の門に入るにふさわしい者としてくださることを！」

一方、クリスケンティアンについては、拷問官は彼を裸のまま恥辱の柱に吊るし、縄や棒で打ち、鉄の爪で削り、火で焼くよう命じた。このような拷問の中、聖クリスケンティアンは、終始神に感謝を捧げながら息を引き取った。

その後、拷問官は彼の遺体を運び出し、埋葬もせずに犬に食わせよと命じ、他の聖なる殉教者たちを再び牢獄に閉じ込めた。しかし、前述の長老ヨハネは、夜になって密かに殉教者の遺体を運び出し、他の殉教者たちと共に埋葬した。

それから四日が過ぎた後、拷問官はキリアコスを一人呼び出して尋問し、こう尋ねた。

「なぜ、老後の日々を激しい苦しみの中で地獄に落とすつもりなのか？　神々に犠牲を捧げれば、生き延びることができるぞ。」

「私は」と聖人は答えた。「私の神であるキリストのために拷問を受けて死ぬことを切に願っている。あなた方の神々への生け贄は、真の神、すなわち自らの創造主を知らない者たちが捧げればよい。」

カルパシウスは怒りに駆られ、聖人を裸のまま恥辱の柱に吊るし、聖クリスケンティウスと同じ方法で拷問するよう命じた。すなわち、縄や棒で殴打し、爪で引っかき、火で焼くといった拷問を加えるよう命じたのである。

その間、キリストの殉教者は、これらすべてを勇敢に耐え忍びながら、こう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、罪深い私を憐れんでください！神の子よ、あなたに栄光あれ！」

カルパシウスは、いかなる拷問を加えてもキリアクに生贄を捧げさせることはできないと確信すると、拷問を中止するよう命じた。その後、キリアクや他の殉教者たちに関するすべてを皇帝に報告した。皇帝は、キリアクと彼と共に牢獄に囚われていた者全員を処刑するよう命じた。

聖キリアコスが仲間たちと共に収監されていたその牢獄には、男女合わせて計二十一名のキリスト教徒がいた。　異教徒たちは彼ら全員を城外へ連れ出し、聖キリアコス、スマラグド、ラルギオスと共に斬首した。その夜、長老ヨハネが数人のキリスト教徒を連れてその場所を訪れ、聖殉教者たちの遺体を運び出し、他の殉教者たちが埋葬されたのと同じ場所に彼らを葬った。

ちょうどその頃、キリストの御名を告白したために、当時ローマに滞在していたディオクレティアヌスの娘、至福の王女アルテミアもまた拷問の末に殺害された。　彼女は、あの不敬虔な迫害者マクシミアヌスの命令によって殺害されたのである。この忌まわしい男は、血縁者さえも容赦しなか

った。というのも、アルテミアは彼の妻ヴァレリアの実の妹であり、ディオクレティアヌスに養子として迎えられた彼自身にとっても、彼女は姉にあたるからである。

聖キリアコスや、彼と共に牢獄に囚われていた他のキリスト教徒たちが殺害された後、前述のカルパシウスは皇帝から、ディオクレティアヌスの浴場の近くにあったキリアコス家の屋敷を譲り受けた。この屋敷は、ディオクレティアヌスによってキリアコスに贈られたものであった。　その家に入ったカルパシウスは、聖キリアコスによって造られ、マルケッロ教皇によって聖別された、極めて美しい泉を目にした。この泉では、キリスト教に改宗した多くの異教徒たちが洗礼を受けていた。キリスト教徒への侮辱と冒涜として、カルパシウスはその家を公衆浴場および淫行の場へと変え、自らも頻繁にそこで身を清めた――いや、むしろ汚していたと言うべきだろう。なぜなら、ここで友人たちと宴を催す際、彼とその共犯者たちは、忌まわしい肉欲の罪によって自らを穢していたからである。

ある日、彼はそこで自分用の宴会を開くよう命じ、19人の友人を連れてやって来て、食べ、飲み、体を洗い、淫行にふけった。　そして、彼らがその忌まわしい行いにふけっている最中、突然、目に見えない神の力に打たれて、全員が死んでしまった。この出来事に、周辺の住民たちは皆、大きな恐怖に襲われ、その家を板で塞いでしまった。なぜなら、誰もその家に入ることを敢えてしなかったからである。

一方、不敬虔な皇帝マクシミアヌス・ガレリウスは、ローマから東方へと旅立った。当時、皇帝の座はコンスタンティヌスに属しており、337年までその地位にあった（5月21日の彼の伝記を参照）。　ちょうどその頃、ローマの聖職者たちは夜中に集まり、聖マルケッルが家畜の世話を任されていたその庭へと向かい、そこから彼らの大司教を連れ出した。

強引な手段でローマの帝位を掌握したマクセンティウスは、先人たちと同様にキリスト教徒の迫害を始めた。

この頃、ローマにはプリスキラとルキナという、高貴な元老院議員の家系の二人の女性が住んでいた。彼女たちは共に未亡人であり、主イエス・キリストの忠実なしもべであり、主に対して熱心に奉仕していた。この二人の女性は多くの財産を持っており、それを使って聖人たちのあらゆる必要を満たしていた。

彼女たちは、聖なる殉教者たちの遺体を埋葬するために、自分たちの領地に非常に立派な墓所を設けた。というのも、当時、キリストの御名を告白したために、数え切れないほどのキリスト教徒が殺害されていたからである。　プリスキラは、サラリウム街道沿いの町から三ポプリス離れた場所に墓所を設け、ルキナはオスティア街道沿いの七ポプリス離れた場所に設けた[4177]。彼女たちは夜陰に乗じて、異教徒たちによって犬や獣、鳥の餌として投げ捨てられた殉教者たちの遺体を密かに回収し、自らの墓所に尊厳をもって埋葬した。　そして、聖マルケルが、動物に餌を与えていた庭から聖職者たちによって連れ出されると、彼は至福のルキナと共に、聖殉教者キリアコス、スマラグド、ラルギオスが斬殺された場所へと向かった。　地中から彼らの聖遺骨を掘り起こし、香りのよい清らかな布で包んだ後、ルキナが所有する墓所へ運び、石棺に尊く納めた。

この頃、聖ルキナは自身の多くの財産をローマ教会に寄付した。また、ローマ市の中心部にあった彼女の美しい邸宅を、信者たちがそれを教会に転用できるよう、彼らに寄付した。　教皇はこの家を教会の定められた儀式に従って聖別し、そこで典礼を執り行い、神に血を流さない犠牲を捧げ、昼夜を問わず神を賛美した。こうして、ルキナの家は神の家となり、ローマの大聖堂となった。

このことが不敬虔な皇帝の耳に入った。皇帝はルキナに激怒し、彼女を大罪人として不名誉な形で都市から追放するよう命じ、さらに彼女の全財産を略奪に委ねるよう命じた。彼はまた、マルケ

[4177] オスティア街道は、ティベリス川の河口に築かれたローマ市の港、オスティアへと通じていた。この港の遺構は現在も残っているが、海岸の砂の堆積により、岸から1時間ほど離れた場所にある。

ッロ教皇を自らの不敬虔な道に引き込もうと試みたが、全く成功しなかった。　また、聖マルケッロが前任者のマクシミアヌスによって家畜の世話をする労働に処されていたことを知ると、彼は聖人に対しても同様の判決を下した。教皇だけでなく教会までも辱めようとした彼は、教会のために聖別されたルキナの美しい邸宅を家畜小屋に変え、そこに多数の家畜を飼育するよう命じた。　また、聖マルケル教皇に対しては、死に至るまで生涯を通じて、監視下に置かれたまま、その屋敷で家畜の世話をさせるという判決を下した。

かくして、この至聖なる牧者であり、人々の魂の導き手である彼は、九ヶ月にわたり家畜の世話という仕事をこなした。偉大なる神のしもべは、まるで捕らえられた奴隷のごとく、不敬虔な偶像崇拝者たちから嘲笑の的とされた。 彼は常に仕事に追われていたため、 は休息も安らぎも全く得られず、生活必需品にも大きく欠けていた。十分な食事も衣服もなかった。なぜなら、看守たちは誰も彼のもとを訪れて何かを持ってくることを許さなかったからである。彼の衣服は、体にまとったとげだらけの毛皮の衣ただ一枚だけだった。　こうした労苦、苦しみ、生活必需品の欠乏、さらには家畜の悪臭のため、聖マルケルは身体が著しく衰弱し、病に倒れ、その苦難に満ちた魂を神の御手に委ねた[4178] 。 その長老ヨハネは、夜になって彼の遺体を受け取り、プリスキリンの墓所へ運び、聖職者たちを呼び集めて、そこで尊厳ある埋葬を行った。

かくして、至聖なるローマ教皇マルケルは、まず殉教の道において数多くの子らを神のもとへ送り出し、その後、彼らに続いて自らも聖なる司教たちと共に、大司教、我らの主イエス・キリストの御座の前に立つために旅立った。今、そして永遠に、主なるキリストに栄光がありますように。アーメン。

聖女キリアキア、カレリア、マリアの記念日

記念日：6月7日

キリストの殉教者キリアキア、カレリア（またはヴァレリア）、マリアは、パレスチナのケサレア[4179] の出身であった。あるキリスト教徒からキリスト教の信仰を教えられた彼女たちは、忌まわしい偶像への生け贄を拒み、キリストのもとへ歩み寄り、洗礼を受けた。　その後、彼女たちはある小屋に身を寄せ、沈黙を守りながら神に祈りを捧げ、偶像崇拝の虚飾が払拭され、キリストの信仰が全世界に輝き、それによってキリスト教徒への迫害が終息することを願った。　彼らがこのように敬虔と祈りのうちに暮らしていたところ、その国の統治者の前で偶像崇拝者たちによって誹謗中傷され、キリストを否定し、偶像を崇拝するよう強要された。しかし、彼らはいかなる場合でもそれを行うことを拒んだ。　そのため、彼らは容赦なく残酷な拷問にさらされ、その苦しみの中で、自らの魂を神の御手に委ねた。

[4178] 聖マルケッロ教皇の殉教は310年に起こった。彼は5年6ヶ月間（304年から310年まで）、ローマ教会を統率した。 聖マルケッロ教皇の伝記に言及されているその他の殉教者たちは、それより少し前の305年および306年に殉教した。

[4179] パレスチナのケサリアは、地中海の東岸に位置していた。古代、ケサリアはローマの総督の居城であり、この国の社会・政治生活の中心地であった。– キリスト教会の歴史において、パレスチナのケサリアは、使徒ペトロが百人隊長コルニリウスを洗礼したことで（使徒行伝 10）、異邦人に初めてキリストの教会への門戸が開かれた場所として注目される。　また、ここには使徒パウロに対する最後の裁判も行われました（使徒行伝25章～27章）。パレスチナには、このケサリアとは別に、「フィリッポのケサリア」と呼ばれるもう一つのケサリアがありました。それはヨルダン川の源流付近に位置していました。

聖殉教者マルケリンの記念日。

記念日：6月7日

教皇マルケリンは、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、至聖なる教皇カイウスの死去後[4180] 、キリスト教徒に対する最も苛烈な迫害の最中に教皇の座に就いた。その時期、ローマでは30日間にわたり、様々な拷問の末、男女合わせて1万7千人のキリスト教徒が虐殺された。　この頃、教皇マルケリンも捕らえられ、ディオクレティアヌスの尋問に引き出された。しかし、残酷な拷問を恐れた彼は、偶像の祭壇で香を焚き、ウェスタとイシスに犠牲を捧げた[4181] 。皇帝は彼に報いるため、高価な衣を授け、友と呼んだ。

その後、家に戻ったマルケリンは、かつてキリストを否認した使徒ペトロ（マタイ26:75）のように、苦々しく泣き崩れ、号泣した。　マルケリンは自らを責め、非難し始めた。なぜなら、多くの者　を信仰に堅く立たせ、殉教の業へと駆り立てたにもかかわらず、彼自身は最も恥ずべき形で信仰から離反してしまったからである。このことを思い巡らす中、教皇は心の中で言い表せないほどの悲しみに沈んだ。

その頃、カンパニアのシヌエッセという町では[4182] 、地方教会公会議[4183] が開催されており、多くの司教や司祭、計百八十人が集まっていた。マルケリンもこの公会議に参集した。　毛皮の粗衣を身にまとい、心を痛めて頭に灰をまき、彼は司教たちのいる公会議の場に入り、被告人のように彼らの前に立ち、皆の前で公然と自らの罪を告白した。苦い涙を流しながら、彼は高潔な司教たちに、自分に対する裁きを求めた。すると司教たちはこう言った。

– 自分の口で自らを裁きなさい。あなたの口から罪が語られたのだから、その同じ口で裁きの言葉も語られなければならない。聖ペトロも恐怖のあまりキリストを否認してしまったが、自らの罪を深く悔いて泣いた後、再び主の御心に適う者となったことを、私たちは知っている。

そこでマルケリンは、自分自身に対して次のような宣告を下した。

– 私は、自分には不相応な聖職の位を剥奪されたことを認める。その代償として、私の死後、私の遺体は通常の埋葬に委ねられることなく、犬に食わせるために投げ捨てられよ。そして、それを埋葬しようとする者は誰であれ、呪われよ。

その後、公会議の終了に伴いローマに戻ったマルケリンは、ディオクレティアヌスから授かった高価な衣を手に取り、同皇帝のもとへ向かった。そして、その衣を皇帝の足元に投げ捨て、彼を非難し、その偽りの神々を糾弾するとともに、自らを重罪人と呼び、苦々しく泣き崩れた。　怒りに駆られた皇帝は、彼を拷問にかけ、その後、死刑を宣告した。こうして、福者マルケリンは、クラウディウス、キリヌス、アントニヌスという三人のキリスト教徒と共に、首を切られるために城外へと連行された。彼の後には、後に教皇の座に就くことになる長老マルケルが従っていた。　キリストの殉

[4180] カイは283年から296年までローマ教会を統率した。

[4181] ウェスタ、あるいはヘスティアは、古代ローマ人やギリシャ人にとって、家庭の炉と祭壇の火の守護神とされていた。通常、重要な事柄を始める前に彼女に供物が捧げられたため、異教徒の間では「ウェスタから始める」という格言が生まれた。　ローマでは、ヴェスタ女神を称えて、パラティーノの丘の斜面にある森の中に神殿が建てられた。この神殿には祭壇が設けられており、その上では常に火が灯され、女神の巫女であるヴェスタル女司祭たちによって維持されていた。ヴェスタ女神を称える主要な祭りは、ローマで6月に行われた。 – イシス――豊穣の女神。イシスは本来、古代エジプトの女神であったが、紀元後初期にはその崇拝がギリシャやイタリアにも広まり、そこでは彼女を称える数多くの神殿が建てられた。

[4182] カンパニアは、古代イタリアの地域であり、西はラツィオ、北はサムニウム、東はルカニア、南はティレニア海に囲まれている。このイタリアの地域で、8世紀頃から初めて鐘の鋳造が始まったため、教会の規則では「カンパナ」と呼ばれている。

[4183] この公会議は300年頃に開催された。

教者マルケリンは彼を呼び寄せ、信仰において揺るぎないままであるよう諭した。また、自身の遺体については、誰もあえて地中に埋葬してはならず、犬に食わせるために捨てられるべきだと述べた。

「私は、人間の埋葬に値しない。大地に受け入れられるに値しない。なぜなら、私は私の主、天と地の創造主を拒んだからだ！」

処刑の場に着くと、聖殉教者マルケリンは、悔い改める罪人を受け入れてくださる主キリストに熱心に祈りを捧げ、進んで首を斬られるために首を差し出し、当初は拷問への恐怖から拒んでいたキリストのために死んだ[4184]。彼と共に、前述の三人の男、クラウディウス、キリン、アントニヌスも斬首され、その遺体は道端に埋葬されずに放置された。しかし、数日後、信者たちは夜間にクラウディウス、キリン、アントニヌスの遺体を運び出し、彼らを埋葬した。　一方、マルケッリーノの遺体については、彼が「自分の遺体を埋葬させてはならない」と誓いを立てていたため、誰もそれを持ち去って埋葬しようとはしなかった。こうして、キリストの殉教者の尊い遺体は、36日間もの間、道端に放置されたままとなった。その期間が過ぎた後、新たに就任した教皇マルケッロのもとに聖使徒ペトロが現れ、こう言った。

「なぜ、今に至るまでマルケリーノの遺体を埋葬しないのか？」

「彼の誓いを恐れているのです」とマルケルは答えた。「彼は、自分の遺体を埋葬しないという誓いを立てたからです。」

「*『自分を低くする者は高められる』*（ルカ18:14）と書かれていることを、覚えていないのか」と使徒は言った。「さあ、行って、その遺体を尊厳をもって葬りなさい。」

そこで、マルケッリノ教皇は殉教者の尊い遺骸を受け取り、サラリウム街道沿いにあるプリスキラの墓所に埋葬した。

こうして、聖殉教者マルケリン教皇は息を引き取り、当時同様の罪に陥っていた多くの人々（当時、拷問への恐怖からキリストを拒む者が多かったからである）に悔い改めの模範を残した。われらは、常に、そして永遠に、神の言い表せない憐れみを賛美する。アーメン。

6月21日

6月8日（旧暦）

聖エフレム、アンティオキア総主教の生涯

記念日6月8日

聖エフレムは当初、アナスタシウス皇帝[4185]　およびユスティヌス皇帝[4186]　の治世下、東方における軍司令官であった。その後、彼はアンティオキア総主教[4187]　に任命された。彼は敬虔な人物であり、徳高く神に喜ばれる生活を送り、貧しい者たちに対して極めて慈悲深く、苦難や不幸に見舞われたすべての人々に同情の心を寄せていた。　彼が総主教に選出されたのは、神の御心と、アンティオキアが荒廃から復興しつつあった当時、そこに住んでいたある聖なる司教への啓示によるものであった。

[4184] 聖マルケッリーノ教皇の死去は300年頃であった。

[4185] アナスタシウス1世は491年から518年まで在位した。

[4186] ユスティヌス1世は518年から527年まで在位した。

[4187] エフレムは527年から545年まで総主教を務めた。

当時、アンティオキアでは、ネストリウス派[4188] 、エウティキウス派[4189] など、様々な異端や異端者たちが急増していたため、キリストの神性に対する冒涜が繰り返され、至聖なる神の母の栄光が貶められていた。そのため、アンティオキアの街に神の怒りが降りかかった。 5月の29日、金曜日の正午、この地で恐ろしい地震が発生した。同時に、火が街全体を包み込んだ。地震は石造りの建物や城壁を破壊し、火はそれ以外のすべてを焼き尽くした。これは、人々の罪に対する神の偉大な怒りをすべての人々に示すためであった。 アンティオキアは、ソドムとゴモラ[4190] のようになってしまった。というのも、街の大部分が滅び、それとともに数え切れないほどの市民が命を落としたからである。その中には、崩れ落ちる建物の下敷きになった者もいれば、炎に焼かれた者もいた。 とりわけ、倒れ込んだ柱の下で命を落としたのは、アンティオキア総主教エウフラシオスであった[4191] 。その時、生き残った者たちの間からは泣き声と苦悶の嗚咽が上がり、周辺のすべての都市や国の住民たちは、この一連の出来事に大きな恐怖と戦慄を覚えた。 アンティオキアに猛烈に降りかかったこの神の怒りを、街からかなり離れた場所にいた聖なる教父たちの一部（例えば、パレスチナにいた聖テオドシウス大聖人、パレスチナのケサレアにいた聖ゾシマなど）は、霊的な目で見通していた。 そこで彼らは涙ながらに、神が義にかなって怒りを注がれたこの都市を、完全に滅ぼさないよう神に懇願し始めた。

この恐ろしい地震と激しい火災の後、皇帝ユスティヌスは、都市に新しい建物を建設する目的で、東方の軍司令官であるこの至福のエフレムをアンティオキアへ派遣した。エフレムは、与えられた任務を熱心に遂行した。

そこで働いていた人々の中には、当時誰にも知られていなかったある司教がいた。彼は司教の位と称号を捨て、乞食に扮して他の労働者たちと共に建物の建設に従事していた。

ある日、軍司令官エフレムはこの司教について次のような啓示を受けた。 仕事に疲れ果てた司教は、地面に横になって眠りについた。すると、彼の上空に天まで届く炎の柱が見えた。至福のエフレムは、これを一度や二度ではなく、何度も目撃し、その光景に深く戦慄した。まことに、この奇跡は恐ろしく、恐怖に満ちていたからである。

一方、地方長官は、この労働者が司教であることを知らなかった。なぜなら、その外見からは彼が何者であるか見分けることができなかったからである。彼はただの物乞いのような姿をしていた。頭はいつもほこりにまみれ、衣服は泥で汚れたボロボロの着古しであり、その体は過酷な労働と計り知れない禁欲によって衰弱していた。 エフレムはこの労働者を呼び寄せ、二人きりになって、彼が何者か、どこから来たのか、そして名前は何かと尋ね始めた。すると彼はこう答えた。

「私はこの街で最も貧しい者の一人です。生きるために必要な糧を持っていないため、報酬を得て働き、神が私を養ってくださっています。」

[4188] ネストリウス派は、コンスタンティノープル司教ネストリウス（428年から431年まで司教を務めた）によって設立された。 イエス・キリストは真の神ではなく、単にヨセフとマリアの息子である人間に過ぎず、その聖なる生涯によって神の特別な恵みを授けられ、自らの贖いの功績によってではなく、教えと生涯の模範によってのみ私たちを救うと説いた。 ネストリウス派は、エフェソスで開催された第3回全地公会議（431年）で非難された。公会議による非難にもかかわらず、ネストリウス派の異端は7世紀まで、ペルシャ、インド、中国で存続した。

[4189] エウティキウス派は、コンスタンティノープルの大修道院長エウティキウスによって創設された。彼は、イエス・キリストには神性というただ一つの本性しかないと教えたが、一方、正教会は常に、イエス・キリストにおいて、融合せず、かつ分離しない二つの本性、すなわち 神性と人性である。エウティキウス派は、モノフィシテ派（あるいは「単性論者」――ギリシャ語の「μονος」（一つ）と「φυοις」（本質）に由来）とも呼ばれた。 この異端は、451年にハルキドンで開催された第4回全地公会議で非難されたが、聖エフレム（6世紀）の時代にも、さらにはそれよりかなり後にも存在していた。

[4190] ソドムとゴモラは、ヨルダン川流域に位置していたパレスチナの都市であり、その不道徳さで知られていたため、神によって滅ぼされた（創世記19:1–28参照）。

[4191] エウフラシオスは523年から527年まで総主教を務めた。

するとエフレムは、神の啓示を受けて、彼にこう言った。

「信じてほしい。君が真実をすべて打ち明けるまでは、決して君を帰さない。」

もはや身を隠す術がなくなった司教は、軍司令官にこう言った。

「神の前で誓ってほしい。私が生きている限り、私のことを誰にも話さない、と。」

エフレムは神に誓ってそれを約束した。すると、その労働者は言った。

「私はかつて司教でしたが、神のために司教職を捨て、ここへ見知らぬ人々の元へやって来ました。ここで働き、その労苦によってささやかな生計を立てています。しかし、私の名前や、私が司教を務めていた都市については、あなたには告げません。 あなたは、今示しているその慈愛に、もう一つの慈愛を加えてほしい。近いうちに、主はあなたをこのアンティオキア教会の司教の座に就かせられるだろう——*「主であり神である方が、ご自身の血によってご自身のために獲得された教会を牧する」*（使徒言行録20:28）——私たちの真の神である。 それゆえ、私が言ったように、惜しみなく施しを行い、異端者たちに立ち向かい、正統な信仰を堅く守り通せ。そのような行いによって、あなたは神に喜ばれるだろう。

そう言い終えると、その名も知れぬ司教はエフレムのもとを去っていった。

一方、至福のエフレムはこれを聞いて大いに驚き、心の中でこう言った。「神には、神ご自身だけがご存知の、どれほど多くの隠れたしもべがおられることか！」

その司教は、もはや労働者たちの間にとどまることはなく、どこか別の場所へと去っていった。彼は人々に知られることを望まず、虚しい人間の栄光を避けていたからである。 しかし、彼の預言はまもなく実現した。数日が過ぎると、至福のエフレムは神の御心により、大都市アンティオキアの総主教に任命されたのである。

至聖なるエフレム総主教が、敬虔さと聖性に対してどれほど熱心であったかは、以下の記述から明らかである。

ある日、イェラポリスの近郊に住むある柱上修道士について、エフレムに報告があった[4192]——すなわち、その柱上修道士がセヴェリア派の異端者たちと交わっていたと伝えられたのである[4193]。 そこで、神の偉大なる司教は自らその柱頭修道士のもとへ赴き、セヴェリアンの迷いから離れ、使徒的聖公会との交わりに加わるよう懇願し、さらには涙ながらに懇願した。すると、その柱頭修道士は総主教にこう答えた。

「私は決してあなたの教会には加わらない！」

「どのような形で、」と総主教は尋ねた、「我らの主イエス・キリストの恵みによって、使徒的公会議の教会が不信仰者たちの迷いから自由であることを示す証拠を見たいのか？」

総主教を威嚇しようと、柱上者はこう答えた。

「総主教様、大きな焚き火を燃やさせ、二人でその中に入りましょう。火の中から無傷で出てきた者の信仰こそが正しいのです。私たちは皆、その者に従うでしょう！」

総主教は柱上者にこう答えた。

「あなたは私を父として聞き入れ、我々の力の及ばないことを試みるべきではなかった。しかし、もしあなたが私の取るに足らない力の及ばないことを試みたいというのなら、私は全能の神の御子の慈悲を頼りに、御子があなたの魂の救いのためにこれを成し遂げてくださると信じている。」

その後、総主教は参列者たちにこう言った。

[4192] イェラポリスは、小アジアのフリギア地方に位置していた。

[4193] セウェリア派とは、単性論の異端を改変した形で受け入れた異端者たちである。 セウェリア派は、モノフィシテ派の異端者たちと同様に、イエス・キリストには神性というただ一つの本性しか認めなかったが、その中に神的な属性と人間的な属性の違いを認めていた。すなわち、彼らは、復活前のキリストの肉体は、私たちと同様に朽ちるものであったと主張した。 この異端の名称は、アンティオキア総主教セウェロス（在位512年から518年）の名に由来する。

「主を賛美せよ！ ここに薪を持って来い。」

大量の薪が運ばれてくると、総主教は柱のそばに巨大な焚き火を焚くよう命じ、それから柱に立つ者にこう言った。

「柱から降りなさい。そして、あなたの言葉通り、二人で火の中へ入ろう。」

一方、柱上者は、総主教の熱烈な信仰と神への揺るぎない信頼に驚嘆し、柱から降りることを拒んだ。

すると、総主教は彼にこう言った。

「お前自身がそう決めたのではないのか？　まさにこの方法で神を試そうとしたのではないのか？　なぜ今になって火の中に入ることを拒むのか？」

その後、総主教はオモフォルを脱ぎ、焚き火のそばに立ち、天を仰ぎ見て神に祈りを捧げ、こう言った。「主イエス・キリスト、私たちの神よ、私たちの救いのために、まことに受肉し、私たちの至聖なる御母、神の母であり、永遠の処女マリアから生まれ出でられた方よ！　今、私たちに真の信仰をお示しください」。

祈りを終えると、総主教は自分のオモフォルを炎の真ん中に投げ込んだ。

火は約三時間燃え続け、薪もすっかり燃え盛っていたにもかかわらず、総主教は自分のオモフォルを、無傷で全く損なわれていないまま火の中から取り出した。

– 起こったすべての出来事に驚嘆した柱上修道士は、真の信仰とは総主教の信仰であることを悟った。　そこで、自身の不敬を悔い改め、セヴェラを呪い、聖なる使徒的教会へと立ち返り、至聖なるエフレム総主教の手から、キリストの御体と御血という神聖な秘跡の聖体拝領を受け、神を賛美した。

この偉大な神の御使いは、他にも多くの奇跡を成し遂げた。

羊の群れを立派に導いた後、彼は神のもとへ帰った[4194]　。彼はこの世での生涯のすべての日々、信仰と真実をもって神に仕えたのである。彼は主の喜びの中に入り、地上で敬虔に賛美していたその方を、今や天においてすべての聖人たちと共に賛美している。アーメン。

尊き父ゾシマの記念日。

記念日：6月8日

尊者ゾシマはフェニキア出身であり、ティルスから二十スタディオン離れたフェニキアの海辺の村シンデで生まれた。　修道生活の行いに励み、ゾシマは節制、断食、そして彼の中に輝いていたその他の美徳によって、神からこれほどまでに偉大な恵みを授かりました。それゆえ、彼は良心のいかなる動揺からも自由であっただけでなく、霊的な目をもって、遠い未来をあたかも現在であるかのように見通すことができたのです。　彼の修道院は、彼が生まれたシンディという村の近くにありました。

ある時、彼はパレスチナのケサリアに滞在することになった。当時、その地の司教を務めていたのは、ホゼヴィトという通称を持つ聖ヨハネであった。彼は、エルサレムからそれほど遠くない、

[4194] 聖エフレムは545年に逝去した。聖シメオン・ディヴノゴレツは、天から彼の死を告げられた。彼が息を引き取る瞬間、聖シメオンは、天使たちに導かれて神のもとへ昇っていくエフレムの魂を目撃した（これに関する詳細は、聖シメオン・ディヴノゴレツの伝記――5月24日の項――を参照のこと）。　フォティオス総主教（857年から867年まで、その後877年から886年までコンスタンティノープル教会を統率した）は、聖エフレムについて、出身や言語はシリア人であったものの、ギリシャ語も巧みに操っていたと証言している。　聖エフレムの著作のほとんどすべては、モノフィシテ派に対抗し、イエス・キリストの御人格および、その御内に神性と人性という二つの本性が結合しているという正統な教義を擁護するために書かれたものである。

エリコへと続く道沿いにあるホゼヴィト修道院[4195] から、自身の意思に反して、その徳高い生活が評価され、司教の座に就かされたのである。　その同じ都市ケサリアには、アルケシライという名の貴族[4196] が住んでいた。彼は敬虔な人物であり、あらゆる美徳に恵まれていた。彼の元には、かつて で、名誉と喜びをもって迎えられた尊者ゾシマが滞在していた。　アンティオキアが地震によって崩壊したまさにその瞬間[4197] 、その長老は突然嘆き、激しく泣きじゃくり、心の奥底からため息を漏らし、非常に多くの涙を流した。　その後、香炉を求め、そこに乳香と燃える炭を盛ると、そこにいた全員に香を焚いた。それから、彼は十字架の形に地面に伏し、感極まって神に祈りを捧げた。その時、アルケシライが彼に尋ねた。

「なぜそんなに悲しんでいるのか？」

彼は皆に聞こえるように答えた。

「私の耳には、アンティオキアの恐ろしい破壊と陥落の騒音が響き渡りました。その音は今もなお、私の耳に鳴り響いています。」

アルケシラオやそこにいた他の人々は、驚きと恐怖に駆られ、その聖者が言葉を述べた時刻を記録した。そして間もなく、長老の言葉が真実であったことが明らかになった。というのも、アンティオキアが陥落したのは、まさにその長老が涙を流して祈りのために身を横たえ、その陥落を予告したその瞬間だったからである。　尊者には他にも多くの奇跡が起きたが、ここではそのうちのいくつかについて触れておこう。

ある時、前述のアルケシラオスが、シンデにある尊者のお住まいの修道院を訪れた。この修道院は、パレスチナのケサレアから五百スタディオン離れた場所にあった。その頃、アルケシラオスの妻は不注意から針で自分の目を刺してしまい、ひどく苦しんでいた。　聖ヨハネス・ホゼヴィト司教がこのことを知ると、急いで彼女の元へ駆けつけ、傷口を診察したところ、まつげが抜け落ち、眼球が眼窩から飛び出しているのを確認した。　そこで彼は、そこにいた医師の一人に、スポンジを取り、飛び出した目を元の位置に戻し、そのスポンジをハンカチで固定するよう命じた。

これらの一連の出来事が起きている最中、アルケシラオのもとへ、彼の家で起きた出来事をすべて報告するために使者が急ぎ足で向かった。その頃、アルケシラオはシンディの修道院に滞在し、尊者ゾシマと対談していた。自宅で起きた出来事を知ると、アルケシラオは激しく泣き叫び、自分の髪を引きむしり始めた。　聖ゾシマは彼に泣いている理由を尋ね、答えを聞くと、いつものように常に祈りを捧げていた自分の内室へと向かった。　それから間もなく、彼は明るく喜びに満ちた表情でアルケシライのもとへ出てきて、こう言った。「喜びをもって家へ帰りなさい。ホゼヴィトが、神から授かった恵みによって、あなたの妻を癒やしたからです。今や彼女の両目は完全に健康です。病気は彼女に何の害も及ぼしませんでした。彼女はホゼヴィトによって奇跡的に癒やされたのです。」

これら二つの奇跡は、たった一時間の間に、この二人の義人によって成し遂げられたのである。聖ヨハネ司教は、女性の抉り取られた目を癒やし、一方、尊者ゾシマは、その霊的な目によって遠くからその癒やしを見通し、それをアルケシラオに伝えたのである。

ある日、尊者ゾシマはケサリアへと向かった。彼は荷物を載せたロバを連れていた。道中、一頭のライオンに出くわした。ライオンはロバを捕らえると、それを連れて荒野へと走り去った。聖ゾシマはライオンの足跡を追った。

やがて、ライオンがロバを食べて満腹になったとき、長老はライオンのそばに近づき、微笑みながらこう言った。

[4195] エリコという町は、ヨルダン川の西岸、非常に肥沃な谷間に位置し、ヤシの木が溢れる果樹園に囲まれていたため、「ヤシの町」と呼ばれていた。現在、古代エリコの跡地には、貧しい村リハが建っている。

[4196] ローマにおけるパトリキは、我々の貴族に相当する最高階級であった。

[4197] これは、526年にアンティオキアで起きた地震を指している。

「ねえ、友よ！ 私は年老いてひどく疲れているため、歩くのがとても辛いのだ。 老いたこの肩では、私のロバに積まれていた荷物を運ぶ力がない。だから、もしゾシマから解放されたいのなら、たとえそれが君の気性に反することでも、その荷物を運んでくれ。その後、君は再び自分の本性通りに、凶暴で獰猛な姿に戻ればいいのだ。

すると、そのライオンは、まるで生まれつきの猛々しさを忘れたかのように、聖人に寄り添い始め、子羊のように柔和になり、その愛撫そのもので従順のしるしを示した。 聖ゾシマは、ロバが背負っていた荷をそのライオンに負わせ、ケサリアの門まで連れて行った。そしてそこで荷を下ろすと、再びその獣を荒野へと放した。ここには、一方では、凶暴な獣たちを御自分のしもべたちに従わせ、服従させる主の全能の力が現れ、 他方では、主の戒めを守り、創造主である神に心を尽くして仕える徳高い人に対しては、他のすべてのもの、理性を持ち合わせない生き物でさえも、従い仕えることが明らかに示された。 そして最後に、この出来事は、フェニキアのゾシマ（[4198]）の聖性を疑いようもなくすべての人に証明している。これらすべてについて、今この時も、そして永遠に、私たちの神に栄光あれ。アーメン。

聖大殉教者テオドロス・ストラティラトスの聖遺骨の移送[4199]

記念日：6月8日

聖大殉教者テオドールは、不敬虔なローマ皇帝リキニウス[4200] の治世下、ヘラクレイア[4201] という町で、キリストの御名のために殉教しました。同地で聖人は軍司令官を務めていました。その殉教の日は2月8日でした。 現在では、聖テオドールの遺志に従い、その尊い遺骨がヘラクレイアから故郷のエウカイタイ[4202] へ移されたことが祝われている。というのも、殉教者の苦難を見守り、それを記録していた使用人のウアルに対し、聖テオドールは次のような遺言を残していたからである。

「私の遺体は、エウカイティにある私の両親の領地に埋葬せよ」。

この聖人についてより詳しい情報を知りたい方は、2月8日の項に掲載されている彼の受難に関する詳細な記述をお読みください。ここでは、彼のイコンから起こった驚くべき奇跡についてのみ触れておきます。この奇跡については、アナスタシオス・シナイテスとヨハネス・ダマスキノスが証言しています。その奇跡とは次のようなものでした。

ダマスカスから四千歩の距離にある[4203] には、カルサタと呼ばれる場所がある。そこには、聖大殉教者テオドロス・ストラティラトスに捧げられた教会が建っていた。サラセン人がこの地を占領し、ここに定住すると、彼らの多くは教会に入り込み、あらゆる手段でそれを冒涜した。 例えば、家畜を教会に追い込んだり、妻や子供を連れて教会に入り、そこで卑劣で罪深い肉欲の行為に及んだりした。その教会の壁の一つには、絵の具で描かれた聖大殉教者テオドロスの像があった。 ある日

[4198] 聖ゾシマの死は6世紀半ばに起こった。

[4199] ストラティラトはギリシャ語で「戦士」「軍司令官」を意味する。この称号は、聖テオドロスが地上の王の軍司令官でありながら、真のキリストの戦士、すなわち聖教会がトロパリオで讃える「天の王の最も善良な軍司令官」としての姿を現したことから、彼に与えられたものである。

[4200] リキニウスは307年から324年までローマ帝国の東半分を統治した。聖テオドロスの殉教は319年のことである。

[4201] ヘラクレイアは、小アジア北部の属州ポンテに位置していた。

[4202] エウカイタの町は小アジアの北部、ヘラクレイアの近くに位置しており、現在はマルシヴァンという小さな町となっている。

[4203] ダマスカスは、聖書においてすでにアブラハムの物語（創世記14:15）で言及されている、最も古いシリアの都市である。パレスチナの北東、アンチレバノン山脈の東麓に位置する美しく肥沃な平野に位置していた。 キリスト教会の歴史において、ダマスカスはサウロがキリストへと奇跡的に回心した場所として注目される（使徒行伝9:1–22）。634年にアラブ人に征服され、1516年からはオスマン帝国に編入された。

、多くのサラセン人がこの教会に集まり、互いに話し合っていたとき、そのうちのひとりが弓と矢を取り、狙いを定めて聖人の像に向かって放った。矢は聖人の右肩に突き刺さり、たちまち像からはまるで生きた人間のように血が流れ出した。　これほど偉大な奇跡を目の当たりにして、サラセン人たちは大いに驚いたが、教会から出て行くことはなく、依然としてそこに住み続け、彼らの慣習に従って不浄な行いを続けていた。　この教会には計二十人のサラセン人が住んでおり、その一人ひとりが妻と子供を連れていた。彼らは皆、この奇跡的な出来事の直後に、突然の悲惨な死を遂げてしまった。一方、教会の外に住んでいたサラセン人たちは、その間、健やかで無傷のままであった。

アナスタシオス・シナイテスは、この聖人のイコンについて、自らそれを目撃したこと、そしてイコンには潰瘍から流れ出た血の痕があったと述べている。

この奇跡は、主が不信心なサラセン人を威嚇するために、また私たち信者に対しては、聖なるイコンを崇敬すべきであることを思い起こさせるために、行われたのである。なぜなら、聖なるイコンのそばには、私たちの神の奇跡的な恵みが宿り、それを通してその恵みが働くからである。

トロパリオ、第4調：

真の殉教者よ、天の王の最善の将軍であったテオドロスよ。あなたは信仰という武器を賢明に手に取り、悪魔の軍勢を打ち破り、勝利を収めた殉教者として現れた。それゆえ、私たちは信仰をもって、常にあなたを賛美する。

コンダク、第2調：

魂の勇気で信仰に身を包み、神の御言葉をまるで槍のように手に取り、敵を打ち破った、偉大なる殉教者テオドールよ。彼らと共に、キリスト神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

6月22日

6月9日（旧暦）

同日、346年にペルシャで殉教した聖女フェクラ、マルファ、マリアの記念日。
同日、1427年に逝去したベロゼルスクの修道院長、聖キリルの記念日。

我らの聖なる父キリル、アレクサンドリアの大司教の生涯

記念日：6月9日

偉大なる教会の師――聖キリル・アレクサンドリアは、アレクサンドリアの出身であった。彼はキリスト教徒である高貴な両親の間に生まれ、母方の叔父は、アレクサンドリア総主教として著名なテオフィロスであった[4204]　。キリルは当時としては極めて優れた教育を受け、世俗的なギリシャ

[4204] テオフィロスは、385年から412年までアレクサンドリア総主教の座に就いていた。 歴史上、主にヨハネス・クロソストモスに対する敵意と野心で知られており、彼はコンスタンティノープル大司教を自らの影響下に置こうと画策した。そのため、381年から397年までビザンツの座に就いていたネクタリオスの死後、　この座に、自身であるテオフィロスに忠実な人物が選出されるよう画策した。　テオフィロスの計画に反して、それまでアンティオキアで司祭を務めていた聖ヨハネス・クラマトルスが首都の司教に選出されると、テオフィロスは彼に対して恨みを抱き、クラマトルスに反対する派

の知恵を完璧に習得しただけでなく、聖書やキリスト教の教義についても深く学んだ。　キリルの叔父であるテオフィロス総主教は、甥の卓越した才能と貞潔な生活態度を見て、彼を自身の聖職者団に加え、若きキリルを大助祭に任命した。　こうして、聖キリルは、教会の庭に植えられた芳しい花のごとく、高潔な清らかさで咲き誇り、キリストの教会に神の知恵に満ちた教えの香りを漂わせた。

テオフィロスの死後、至福のキリルは満場一致で総主教の座に選出され[4205]、総主教に就任すると直ちに、ノヴァティアヌス派と呼ばれる異端者たちを都から追放した。彼らは、人々の目の前で自らを正当化し、自分たちは清く義にかなっており、いかなる罪にも関与していないと主張するファリサイ派に似ていた。　ノヴァティアヌス派は、自らの生活が汚れのないものであることを示す印として白い衣を身にまとい、洗礼後に死に至る罪を犯した者は教会の交わりに受け入れるべきではないと説いた。そのような者の死に至る罪は赦されるはずがない、と彼らは主張し、再洗礼によってのみその罪を洗い流すことができると説いた。

この異端はノヴァティアヌスに端を発する。彼はデキウス帝の治世下[4206]にローマで長老を務め、教皇ファビアヌスの殉教[4207]後、教皇の座を狙った[4208]。しかし、あらゆる陰謀を企てたにもかかわらず、彼は望みを叶えることができず、教皇の座には至福のコルネリウスが選出された[4209]。コルネリウスを妬んだノヴァティアヌスは、彼に対して陰謀を企て、あらゆる面で彼に反対した。当時、教会は異教徒たちから激しい迫害を受けていた[4210]。多くの信徒たちは、残酷な拷問を恐れて、気弱にも偶像に犠牲を捧げてしまったが、その後、悔い改めて教会に戻り、涙ながらに自分の罪を告白した。　彼らの悔い改めを見て、聖コルネリウス教皇は、キリストが苦々しく泣いていたペトロを受け入れたのと同様に、彼らを再び聖なる教会との交わりに迎え入れた。　一方、長老ノヴァティアヌスは教皇に反対し、キリストを否認して悪魔に犠牲を捧げた者たちが、キリストの教会の庇護下にいることはふさわしくない、と主張した[4211]。その際、彼は聖なる教皇を冒涜し、彼を偶像崇拝者たち

閥の支柱となった。　彼は、コンスタンティノープルの聖人に対する複雑な陰謀に積極的に関与し、その結果、聖ヨハネ・クラマトリオスは罷免され、首都から二度追放されることとなった。クラマトリオスを罷免する目的で、その敵対者たちによって召集されたドゥブナの公会議において、テオフィロスは議長として出席した。　概して、彼とクロイソスに対する関係は、その名声に暗い汚点を残すようなものであった。しかし、それ以外の点では、テオフィロスはかなり賢明な聖職者であり、アレクサンドリア教会のために多くの有益なことを成し遂げた。

[4205] 聖キリルは、412年から444年までアレクサンドリア総主教の座に就いていた。

[4206] ローマ皇帝デキウスは249年から251年まで在位した。

[4207] ローマ司教ファビアンは、236年から250年までローマの座に就いていた。

[4208] ファビアンは250年1月に殉教し、迫害の苛烈さゆえに新教皇の選出が行えなかったため、その座は翌年の6月まで空席のままであった。デキウスは、「ローマに新しい司教が現れるよりは、皇帝の座を争う者が現れるほうがましだ」と述べたと伝えられている。 ローマ教会が1年間にわたり教皇不在の状態にあったこの期間、雄弁さと学識、そして厳格な生活態度で知られていたノヴァティアヌスは大きな影響力を持ち、司教に選出されることを期待していた。しかし、その期待は裏切られた。

[4209] 聖コルネリウスは、251年から252年までローマの教皇を務めた。

[4210]　これは、キリスト教徒に対する7回目の大規模な迫害であった。この迫害は、主に司教や聖職者を標的としていた。迫害の犠牲者には、ローマのファビアン、アンティオキアのバビラ、エルサレムのアレクサンドロスがいた。また、他の聖人（カルタゴのキプリアヌス、オリゲネス、奇跡行者グレゴリウス、アレクサンドリアのディオニシウスなど）にとっても、この時期は追放やその他の苦難に彩られた。　しかし、迫害の主たる目的は、キリスト教徒を死に追いやることではなく、彼らに信仰の放棄を強いることにあった。この目的のために、彼らは拷問、投獄、飢餓にさらされ、こうした試練の中で、多くの者の信念は揺らいだ。

[4211] ノヴァティアヌスは当初、堕落した者たちに対して不寛容な態度を示していなかった。カルタゴの司教キプリアヌスは、ローマの聖職者たちが、死の危機に瀕している場合には堕落した者たちも教会に受け入れられることを認めた書簡の著者がノヴァティアヌスであったと証言している。　しかし、コルネリウスが選出された後、彼は全く異なる見解を掲げる派閥の指導者となった。　ノヴァティアヌスは、悔い改めた堕落者たちは神の慈悲に受け入れられる可能性があり、それゆえ悔い改めを勧められることはあっても、教会には彼らに赦しを与える権限はなく、彼らを交わりから永久に破門しなければならないと説き始めた。さもなければ、教会はそのキリスト教的な性格と特権を失ってしまうからである。

の共犯者であるかのように非難した。　彼自身は教皇との交わりを断ち、志を同じくする者たちを集めて、ローマで第二の教皇となった[4212]。こうしてノヴァティアヌスの分裂が生じた[4213]。

その後、ノヴァティアヌス派の分裂は至る所に広がり、アレクサンドリアにまで達し、聖キリロスの時代までそこに存続した。　ここでノヴァティアヌス派は、正統信仰に反する多くの行為を行った。例えば、かつてカトリック教会で洗礼を受けていた者で、分裂派に引き入れられた者に対して、彼らは二度目の洗礼を施し、再婚を「姦淫の罪」として禁じた。他にも、彼らには不合理な革新がいくつかあった。

聖キリルは、総主教就任当初から、彼らの司教テオペンプトスと共に、これらの異端者たちをアレクサンドリアから追放した。その後、彼は人類の敵である不浄な霊たちに対しても立ち向かい、それらをその棲みかから追い出した。

アレクサンドリアから120スタディオン離れた場所[4214]に、コノプ[4215]と呼ばれる村があった。その近くには、マヌフィン[4216]（かつては村であった）と呼ばれる場所があった。ここには、かつて悪魔の住処であった古代の神殿があり、この場所はすべての人に恐怖を与えていた。かつてテオフィロス総主教も、この場所を悪魔から清め、神を賛美するために聖別しようとしていた。しかし、他の用事に気を取られ、彼はその意図を実行に移すことができなかった。　聖キリルは、テオフィロスの後を継いでアレクサンドリアの主教座に就くと　、叔父であり先任者であったテオフィロスの願いを叶えることを決意し、神に熱心に祈りを捧げ、天からの助けと、マヌフィンから不浄な霊を打ち負かし、追い出すための力を与えてくださるよう願った。　すると、この聖なる人物の前に、主の天使が幻として現れ、マヌフィンから悪魔の力を追い払うために、殉教者キュロスとヨハネの尊い聖遺物をマヌフィンへ移すよう命じた。　聖キリルはその通りに実行し、聖人の遺骨をマヌフィンへ運び、そこで彼らの名に因んで教会を建立した。不浄な霊たちは即座にそこから追い払われ、その場所は殉教者たちの遺骨による癒やしの源となった。

このようにしてアレクサンドリアの郊外から目に見えない悪霊を追い払った後、聖人は、キリストを憎むユダヤ人たちという目に見える悪霊を、街そのものから完全に一掃するために全力を尽くした。古くから、彼らはこの街に数え切れないほど多く住んでいた。　アレクサンドロス大王の時代、すなわちアレクサンドリアの創設以来[4217]　、ユダヤから多くの移住者がここに定住し、やがて数多

[4212] ノヴァティアヌスの司教叙階は、取るに足らない都市の司教3人によって行われた。彼らは支持者たちによって些細な口実で招集され、夕食後の夕方に彼に按手した。

[4213] ノヴァティアヌス派は西方で多くの信奉者を獲得し、その教義は以前よりもさらに厳格なものとなった。当初は信仰を放棄した者にのみ適用されていた「生涯にわたる教会共同体からの破門」という判決は、後に、洗礼を受けた後に多かれ少なかれ重い罪を犯したすべての人々にも拡大された。　これに伴い、ノヴァティア派は「カファール」、すなわち「清き者」という名称を名乗った。彼らは、教会からの離脱者に対して再洗礼を施し、教会との交わりを不浄なものとし、その結果として教会の聖職行為は無効であると見なした。　ノヴァティア派の一部は再婚を非難し、それを姦淫と同列に扱った。しかし、福音の主要な真理に関しては、ノヴァティア派は正統派であり続け、その多くは信仰のために死に至るまで苦難に遭った。

[4214] 1スタディオンは87 1/2サジェンに相当する。したがって、120スタディオンは21ヴェルスタとなる。

[4215] コノプはナイル川の河口に位置しており、その名にちなんで「コノピイスク」と呼ばれていた。アレクサンドリアが建設されるまで、コノプはこの地域で最も重要な都市であったが、エジプトの首都としてアレクサンドリアが台頭するにつれてその重要性は低下し、キリスト教が導入される頃にはこの都市は消滅し、その跡地にはその後、取るに足らない集落が残るのみとなった。

[4216] 聖殉教者キュロスとヨハネの聖遺物が移されたという伝承（下記28日参照）によれば、この場所はコノプから2ポプリシュ、すなわち約2ヴェルスタの距離にあった。

[4217] マケドニア王アレクサンドロス大王は、文明化された東方全域をその支配下に収め、紀元前4世紀末に生きた。エジプトにあるアレクサンドリア市は、紀元前332年にギリシャの支配を確立するために彼によって建設された。 東洋で最も豊かで繁栄した都市の一つとなったこの街は、創設後まもなく、他国、とりわけパレスチナ――当時のユダヤ人住民の中から――からの進取の気性に富んだ移住者たちを引き寄せ始めた。アレクサンドリアのユダヤ人たちはかなり大規模なコロニーを形成しており、ユダヤ人地区は極めて人口密度が高かった。 紀元前1世紀に生きたユダヤ人の著述家フィロンは、

い一族へと成長した。彼らはキリストと、キリストの名を掲げる人々を憎み、公然と、あるいは密かに、キリスト教徒にあらゆる嫌がらせや苦難をもたらしていた。　前述の異端者ノヴァティア派も都市にとって有害であったが、比類なきほど邪悪で有害な敵であったのはユダヤ人たちであり、彼らは都市内で内紛を煽っただけでなく、数多くの殺人や流血事件も引き起こした。　神の聖人は、ユダヤ人のシナゴーグの長たちを呼び寄せ[4218]、彼らに対し、民をそのような悪行から遠ざけるよう諭した。しかし、ユダヤ人の長老たちは聖人の諭しに耳を貸さなかったばかりか、さらに激しい悪意に駆り立てられた。

街には、その建設者であるアレクサンドル司教にちなんで「アレクサンドロフスカヤ教会」と呼ばれる、大きくて美しい教会があった[4219]。ある日、ユダヤ人たちはまるで戦争に出るかの如く武装し、夜が更けるやいなや、キリスト教徒の家々が立ち並ぶ通りで騒ぎと混乱を引き起こし、「アレクサンドロフスカヤ教会が燃えている」と叫んだ。

その叫び声を聞いたキリスト教徒たちは、火事を消そうと、次々と家から飛び出し、その架空の火災現場へと駆けつけた。　すると、冷酷なユダヤ人たちは、家の門から出てきたキリスト教徒たちを、即座に剣で斬りつけたり、槍やナイフで刺したり――要するに、手当たり次第に殺害した。その夜、多くのキリスト教徒が殺害された。

日が明けると、この大虐殺の事実を聖なるキリル総主教が知った。殺害された者たちへの悲しみを乗り越えた彼は、ユダヤ人に対する正義の裁きを求めるようになった。　しかし、オレスト市のエパルヒは、信仰上はキリスト教徒であったものの、聖人に対して敵意を抱いていたため、ユダヤ人を助け、殺人者たちを庇った。そこで聖キリルは、多くのキリスト教徒を率いて自らユダヤ人の集落へ向かい、すべてのユダヤ人を街から追放し、彼らの住居を破壊し、シナゴーグを焼き払った。

これに対し、エパルクスは聖人に対して激しい怒りを燃やし、聖人の近親者や、総主教の支持者である他の著名な市民たちにも危害を加え始めた。こうして彼は、文法学者イェラクサス（[4220]）を広場にて、衣服を剥ぎ取って容赦ない拷問にかけた。　エパルヒと総主教の間には大きな対立が生じていた。というのも、至聖なる総主教はキリスト教徒を擁護していたのに対し、エパルヒはユダヤ人を支援していたからである。両者はそれぞれ、テオドシウス2世皇帝[4221]へ独自に書簡を送り続けたが、やがて皇帝から、ユダヤ人の市内居住を禁止する勅令が発布されるに至った。

彼の時代、エジプト全土、とりわけアレクサンドリアには100万人以上のユダヤ人がいたと述べている。エルサレムの陥落後、プトレマイオス1世はアレクサンドリアに多数のユダヤ人入植者を定住させ、彼らにギリシャ人と同等の権利を与えた。　ローマ人もこれらの権利を認めており、アウグストゥスは皇帝の代官の管轄下でユダヤ人の事務を統括するための特別なユダヤ人評議会を設立した。しかし、カリグラの治世下では、彼らは特権の大部分を剥奪された。

[4218] シナゴーグとは、ユダヤ人の宗教的集会所である。これらは、ユダヤ人の共同礼拝を行うために設けられた開放的な建物であった。律法によれば、礼拝は幕屋、そして後にエルサレム神殿で行われるべきものとされていた。しかし、バビロン捕囚の間に神殿は破壊されたため、集会のための特別な場所が必要となった。　こうしてシナゴーグが誕生した。シナゴーグは、ユダヤ人の真の信者が十分な数集まる場所であれば、どこにでも設けることができた。そのため、イエス・キリストや使徒たちの時代には、ユダヤ人が住むあらゆる場所に広く普及していた。　シナゴーグと神殿の構造には、ある程度の類似点があった。シナゴーグの中央の部屋には、モーセの律法の巻物が保管された棚が置かれており、その巻物は民衆に朗読されるために用意されていた。シナゴーグの中央には、低い壇（ナロイ）または説教壇が設けられていた。座席の中には、他のものより高く設けられたものがいくつかあり、長老たち、すなわち共同体の年長者や有力者たちが座る場所として指定されていた。長老たちは評議会を構成し、シナゴーグの最高運営権を握っていた。この評議会の議長は、シナゴーグの長または統治者と呼ばれた（マルコ5:22；　使徒13:15）。シナゴーグの長は、律法を破った者を共同体から追放し、鞭打ちの刑に処する権限を持っていた。また、シナゴーグでは様々な裁判も審理されていた。

[4219] 言うまでもなく、聖アレクサンドロスは、312年から326年までアレクサンドリアの司教を務め、アリウス派の異端に反対した正統信仰の最初の擁護者の一人である。

[4220] グラマティックとは「教師」のことである。この名称は、単に読み書きを教える教師を指すのではなく、ギリシャ古典文学全体を真の意味で熟知し、文の構成や内容の両面から批判的に研究していた人々を指していた。

[4221] テオドシウス2世（若きテオドシウス）は、408年から450年まで東方帝国を統治した。

当時、街の路地では頻繁に騒乱や反乱が発生し、その最中に、騒乱とは無関係な多くの人々が命を落とした。　アレクサンドリアには、哲学者テオンの娘であるヒパティアという名の少女が住んでいた。彼女は信仰深く徳の高い女性であり、キリスト教の知恵に秀で、貞潔を守りながら清らかで汚れのない日々を過ごしていた。　彼女は若い頃から父テオンから哲学を教えられ、知恵の修養において極めて優れた成果を収め、当時のあらゆる哲学者たちを凌駕していたと、プトレマイオスの司教シシニウス[4222]や、彼女を多くの賛辞をもって称えたスウィダスが伝えている。彼女は結婚を望まなかったが、それは一因として、妨げられることなく学問に励み、書物を研究したいという願いがあったからであるが、とりわけ、キリストへの愛ゆえに処女を守り通した。　アレクサンドリアには、至賢なる乙女イパティアに会い、その理知的な言葉を聞くために、至る所から学問を愛する人々が集まってきたため、彼女は多くの人々の師となった。彼女は教会および世俗の権力者たちすべてから尊敬され、民衆からも敬愛され、多くの人が彼女の賢明な助言を求めて彼女のもとに駆けつけた。　エパルヒと総主教の和解を願って、彼女は謙虚さと柔和さをもって両者の元を訪れ、賢明な言葉で彼らを和解へと導いた。総主教ご自身もエパルヒと和解する機会を模索していたが、エパルヒは悪意に満ちた性格ゆえに、和解の話など聞くことさえ拒んでいた。　ある日、イパティアがどこからか馬車で自宅へ帰っている途中、平和を憎む反乱者たちが彼女を襲い、馬車から引きずり出し、衣服を引き裂き、殴り殺した。　しかし、彼らの獣のような怒りはこの悪行にとどまらず、狂おしいほどの憎悪に駆られて、少女の死体までもを冒涜し始めた。死体をバラバラに切り刻んだ後、彼らはそれをキナロンと呼ばれる場所で焼き払った[4223]。

町の住民たちがこの出来事を知ると、皆、とりわけ学問を愛する人々は、イパティアを深く悼んだ。ところで、この反乱の噂はニトリア山の修道士たち[4224]にも届いた。彼らは悲しみに打ちひしがれ、反乱の無実の犠牲者たちに同情を覚え、500人もの大群を率いて砂漠から街へとやって来て、総主教を守ろうとした。　偶然、彼らはどこかで、戦車に乗って向かってくるエパルヒに出くわした。統治者を見ると、修道士たちは彼に向かって叫び始め、かつて彼がギリシャの信仰を奉じていたこと[4225]、そしてごく最近になってコンスタンティノープルで洗礼を受けたばかりであることを理由に、彼を「ギリシャ人」や「偶像崇拝者」と呼んで非難した。　修道士の一人がエパルクに石を投げつけ、それが彼の頭に命中した。エパルクを取り囲む人々の叫び声に、大勢の民衆が駆けつけると、修道士たちはその場から退いた。一方、エパルクの家来たちは、アモニウスという名の修道士の一人を捕らえた。　エパルフは、修道士たちが総主教によって自分に対して扇動されたのだと推測し、激しく怒り、アモニウスを残酷な拷問と苦痛にさらし、その最中に彼は息を引き取った。このことを知った至聖なる総主教は深く心を痛め、殉教者の遺体を回収するよう命じ、敬意を込めて彼を埋葬した。

一方、街から追放されたユダヤ人たちは、自分たちのために見世物や遊戯の場を設け、キリストを冒涜し、キリスト教徒を侮辱するために長い十字架を立て、あるキリスト教徒の少年を捕らえて、十字架に両手を広げた状態で磔にした。　その際、彼らは釘で彼を十字架に固定するのではなく、縄で縛り付けた　、そして長い間、彼を罵り、嘲笑し、唾を吐きかけた。嘲笑を終えると、彼らは彼が十字架上で息絶えるまで殴り続け、こうしてキリストの殉教者は、キリストの受難を体現する者となった。　聖キリルは、ユダヤ人によるこの新たな悪行を知ると、皇帝に書簡を送り、起こった出来

[4222] ここで言及されているプトレマイダは、上エジプト（フィヴァイデ）のナイル川沿いに位置していた。

[4223] キナロンとは、大聖堂広場の近くにある市街地区の名称である。

[4224] ニトリア山は、アレクサンドリアの南、ナイル川の西、リビア砂漠の近くに位置していた。この山の名は、その麓にある湖にニトラ（硝石）が豊富に存在することに由来する。エジプトの他の砂漠地帯と同様に、ニトリア山も隠遁者たちにとって好まれる居住地であった。

[4225] 「エリン」とはギリシャ人のことである。彼らの宗教は、擬人主義、すなわち人間の性質のあらゆる長所と短所を併せ持つ人間そのものの神格化、および人間の天才の様々な現れを神格化する、鮮やかな表現であった。ギリシャの神々は、人間の肉体的・精神的性質の様々な特性や現れを体現したものである。

事の全容を報告した。そして皇帝からは、時間はかかったものの、公正な処分が下された。　この命令により、前述の悪行を企てたユダヤ人の指導者たちは処刑され、エパルヒは職を解かれた。

その後、キリストの聖人キリルは、キリスト教の名を敵視する者たちの騒乱、悪意、敵意を打ち破り、彼に託されたキリストの羊の群れを無事に牧した。

しかし、アレクサンドリアで前述の動乱が収まると、ネストリウスの異端によって引き起こされた、天下全体にわたるさらに大きな騒動が勃発し、聖キリルは新たな――より偉大な功業を成し遂げることとなった。 コンスタンティノープル教会では、アッティクス[4226]の後継者であったシシニウス総主教[4227]の死去後、アンティオキア[4228]から転任してきたネストリウス[4229]が総主教の座に就いた。彼は、信仰において堅固で生活においても徳高い人物と見なされていたが、その内面では秘密の異端者であった。　彼は、信者たちの間に、小麦の中の雑草のように、異端の教えの種をまき散らした。当初は自ら直接ではなく、志を同じくする者たちを通じてであった。彼の異端とは、キリストなる神と、聖母マリアに対する冒涜に他ならなかった。　というのも、この忌まわしき者は、女性の胎は神を宿すことはできず、人間しか宿せないため、聖母マリアから生まれたのは単なる人間であるキリストであり、神ではないと主張したからである。ネストリウスの教えによれば、神である御言葉は、受胎の瞬間からただ恵みによってのみ人間イエスと結びつき、神殿のように彼の中に宿っていた。そのため、ネストリウスは聖母マリアを「神の母」ではなく、「キリストの母」と呼んでいた。ネス

[4226] 聖アッティクスは406年にコンスタンティノープルの主教座に就き、425年までその職を務めた。

[4227] 聖シシニウスは、426年から427年にかけてコンスタンティノープルの司教座に就いていた。

[4228] シリアのアンティオキアは、シリアで最も古く、最も豊かな都市の一つであり、同国の首都である。オロンテス川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れた場所にある。紀元前300年にセレウコス・ニカトルによって建設され、その父アンティオコスにちなんで名付けられた。　キリスト教教会にとって、アンティオキアは、エルサレムに次ぐキリスト教の第二の中心地として、また異教徒から生まれたキリスト教諸教会の母として、特別な重要性を持ちました。　「キリスト者」という名称そのものが、初めてアンティオキアの主イエスの信徒たちに与えられた。また、キリスト教の宣教活動もここで初めて始まった。というのも、まさにこの地から、使徒パウロとバルナバが最初の宣教旅行に出発し、また同じ地に戻ってきたからである（使徒行伝13:1–4、14:26）。　彼らの二度目の旅も同地から始まったが、この時はすでに二人は別行動をとっていた（使徒行伝15:39–40）。また、使徒パウロの二度目の旅は同地で終わり、三度目の旅が始まった（使徒行伝18:22–23）。その後、アンティオキアでは、異端をめぐる論争を理由に、数多くの重要な公会議が招集された。アンティオキア教会は、古くからアレクサンドリア、エルサレム、ローマの各教会と並んで、特別な特権を享受していた。　古くから、この教会には独自の神学学校が形成され、それは冷静で理性的である点、神の啓示の発展の連続的な過程を明確に説明している点、そして聖書の解釈に歴史的・文法的手法（すなわち、歴史的・文法的な参照を介して）を導入している点で際立っていた。 この学派の起源は、3世紀に生きたアンティオキアの長老ルキアノスとその同時代人ドロフェウスに遡る。その後、この学派からはヨハネス・クロイスストモス、テオドロス（モプスエテスの司教）、テオドリトス・キルスキスらが輩出された。　ネストリウスもまたこの学派に属していたが、彼はその冷静で理性的であるべき原則を極限まで推し進め、受肉の神秘を我々の理解に近づけようとするあまり、異端に陥ってしまった。

[4229] ネストリウスは428年から431年までコンスタンティノープルの主教座に就いていた。首都の主教に選出される前は、アンティオキアで長老を務めていた（これについては後述）。彼は禁欲的な生活様式を特徴としており、修道士となって教会での活動を始めた。　さらに、ネストリウスは学問への傾倒があり、流暢で響きのある雄弁さで知られていた。しかし同時に、高慢や野心家であるとの非難も受け、名声への愛着が、彼の生活における見せかけの聖性と、説教における大げさな文体に走らせていると噂されていた。　いずれにせよ、彼はコンスタンティノープル主教に選出されるまでは、良好な評判を博していた。彼の個人的な名声に加え、コンスタンティノープルでは、彼が深く尊敬されていたヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）と同じ教会出身であるという事実が、彼の名に対して特別な信頼を醸成していた。　首都の司教となったネストリウスは、当初、正統信仰の熱心な擁護者としての姿を見せた。就任式の日に大聖堂で説教を行う際、彼は皇帝に向かってこう語った。「異端者から清められた地を私に与えてください。そうすれば、私はその見返りとして、あなたに天の御国を差し上げましょう」。　この言葉は大きな喝采を浴びたが、その後の状況から、ネストリウス自身が正統信仰において確固たるものではなく、羊の皮を被った狼であったことが明らかになった。

トリウスの異端は、彼に付き従っていた信奉者たち――彼がアンティオキアから連れてきたドロフェイ司教とアナスタシオス長老――によって民衆の間に広められていた。

ある祝日のこと、アナスタシウスはコンスタンティノープルの大聖堂で民衆に向けて説教を行う際、至聖なる聖母マリア（　）を指して「フェオトコス（神の母）」という言葉を用いることに異議を唱えた（[4230]）。 まさに彼こそが、聖母マリアは人間であった以上、「神の母」と呼ぶことはできないと主張したのである。神がどうして人間の肉から生まれることができるというのか? この説教は教会内に不満の囁きと騒ぎを引き起こした。アナスタシウスには異端の非難が浴びせられた。

この件についてネストリウス自身に問いただされたとき、彼は明らかにその狂気を露わにし、キリストなる神と、その清き御母に対して、冒涜の毒を吐き散らした。

「私は――と彼は言った――、自分と同じ本質を持つ肉なる人間を産んだ女性を『神の母』と呼ぶことはできない。なぜなら、彼女は聖霊によって神の御言葉が宿るために用意された幕屋の母であったからだ。　それゆえ、彼女を『キリストの母』と呼ぶ方がより妥当である。この言葉によって、我々は、神性が宿られた御方に対する彼女の関係を表すのである。」

こうして民の間には争いと不和が生じた。ある者たちは異端に反対し、ネストリウスとの交わりを拒んだが、他方、ある者たちは逆に異端的な思弁に惑わされ、異端者たちの教えを受け入れた。この異端はコンスタンティノープルだけでなく、地の果てに至るまで波紋を広げた。というのも、不敬虔なネストリウスは、自らの教義を擁護するために同志たちと共に数多くの著作を執筆し、それらを近隣の都市や遠方の国々、さらには砂漠の修道者たちの間へと送り届けたからである[4231]。 これにより、彼はかつてキリストの衣を引き裂いた不敬虔なアリウス[4232] が引き起こしたのと同じような分裂をキリスト教徒の間に生じさせた。なぜなら、かつて多くの者がアリウスの後を追ったように、多くの聖職者や信徒がネストリウスの後を追ったからである。

アレクサンドリア総主教聖キリルは、ネストリウスの異端の教義と、その説教が広まっていることを知ると、心を憤らせ、キリスト神と至聖なる神の母の忠実な僕であり勇敢な戦士として、キリストの敵に立ち向かい、神と至聖なる神の母の栄光を守るために断固として立ち上がった。　彼は、キリストの羊たちの真の牧者となり、その群れを鋭く見守り、狼と戦った。　当初、聖キリルはネストリウスに親しみを込めて書簡を送り、偽りの教えから離れ、正しい信仰を告白することで、彼がキリストの教会に巻き起こした混乱を終わらせるよう諭した[4233] 。その後、ネストリウスが改心しないのを見て、彼はネストリウスに厳しい書簡を送り、その誤りを糾弾した。　聖キリルはまた、コンスタンティノープル教会の聖職者たちや皇帝の宮廷に対しても書簡を送り[4234] 、ネストリウスの教えに惑わされないよう説得した。彼は古代ローマの教皇セレスティヌス[4235] 、および他の諸総主教たち[4236] 書簡を送り、ネストリウスの異端について知らせるとともに、彼を悔い改めへと導くよう懇願

[4230] アナスタシオスやネストリウスによって攻撃の対象となった「聖母マリア」という呼称は、それ以前の世紀において、エウセビオス・ケサリアス、アタナシオス大聖人、グレゴリオス大聖人、グレゴリオス・ニッサスらによって用いられていた。　これは、至聖なる処女が救い主に神性を授けたことを意味するものではなく、ただ「神の子は人間の位格そのものではなく、人間の性質のみを自らに受け入れた」という、神性と人間性の同一性のみを主張するものであった。

[4231] ちなみに、ネストリウスの説教録はエジプトの修道士たちの間で広まり、その結果、彼らの多くは聖母マリアを「神の母」と呼ぶことをやめてしまった。

[4232] アレクサンドリアの司教アレクサンドルは、夢の中で現れた主を見たが、その主の衣は引き裂かれていた。彼が現れた方に「主よ、誰があなたの衣を引き裂いたのですか」と尋ねると、次のような答えが返ってきた。「狂信的で不法なアリウスだ」。 その直後、アリウスは主イエス・キリストの御人格に関する異端の教義を提唱した。

[4233] キリルは、430年の復活祭の書簡の中で、このような戒めをネストリウスに向けて述べた。

[4234] 聖キリルは二つの特別な論考を執筆した。一つはテオドシウス2世皇帝へ、もう一つはプルケリア皇后とエウドキア皇后へ宛てたもので、前者は皇帝の姉、後者は皇帝の妻であった。

[4235] セレスティヌス1世は、422年から432年までローマの司教を務めた。

[4236] すなわち、アンティオキア総主教およびエルサレム総主教に対してである。

した。　さらに、彼は各国の諸当局や諸都市の司教たち全員に書簡を送り、その中でネストリウスの異端に惑わされないよう皆に警告した。　この異端は、とりわけ多くの修道士たちをも惑わしていたため、聖キリルは彼らにも書簡を送り、異端が魂に及ぼす破滅的な害を明らかにし、その誘惑から彼らを遠ざけようとした。要するに、聖キリルは、この「狼」をキリストの群れから完全に追い払うまで、絶えずこの異端に対して声を張り上げ続けたのである。

一方、ネストリウスはキリルの書簡によって改心するどころか、その支持者たちと共に、さらに悪しき方向へと突き進んだ。まさに彼の支持者の一人であるドロフェイ司教は、ネストリウス本人の面前で、公会議の壇上に立ち、大声で次のように宣言した。

「もし誰かが聖母マリアを『神の母』と呼ぶならば、その者は破門とされるがよい。」

そしてその後、ネストリウス自身も、自分に抵抗し、その異端を認めなかったコンスタンティノープル教会の聖職者や修道士たちを拷問にかけるようになった。同時に、彼は聖キリルに対しても激しく攻撃を繰り広げ、虚栄心と傲慢さをもって彼に反旗を翻し、彼を異端者と呼んだが、実のところ、異端者であったのは彼自身の方であった。　その後、聖なる義人であるキリルに対して多くの不当で虚偽の中傷をでっち上げ、それらを民衆の間に広め、キリルの名を誹謗し、汚した。しかし、アレクサンドリアの聖人はこれらの中傷に一切耳を貸さず、ただひたすらに人々の魂の救いのみを心に留めていた。

キリルのこうした活動にもかかわらず、動乱と混乱は続き、ネストリウス派の異端は日増しに勢いを増し、ますます勢力を強めていった。すでに多くの司教たちが、この魂を滅ぼす異端の教えに染まり、ネストリウスの追随者となっていた。 ちなみに、アンティオキア総主教ヨハネス・[4237] は、ネストリウスの主張を是認はしなかったものの、キリルに対し、その言葉に過度な重要性を与えないよう求めた。しかし、それだけでは燃え盛る炎を鎮めることはできなかった。　混乱を収めるための手段は一つしか残されていなかった――全地公会議を招集することである。公会議の招集は、ネストリウスの反対派も支持派も等しく望んでおり、各陣営は自らの教義が勝利することを期待していた。そこでテオドシウス2世は、総意の要請を受け入れ、そのような公会議を招集することを決定した[4238]。

公会議の開催地として小アジアのエフェソス[4239] を指定し、帝国内のすべての総主教および司教に対し、431年のペンテコステまでに同地へ集まるよう招集した。また、皇帝の代表として公会議に出席させるため、自らコミタ[4240] カンディディアヌスをエフェソスへ派遣した。

ネストリウスは復活祭（4月19日）の直後に、16人の司教を伴ってエフェソスに到着した。聖霊降臨祭の直前に、聖キリルが50人のエジプト人司教を率いて現れた。　小アジア周辺の都市からは約40人の司教が到着した[4241] 。教皇セレスティインは、病気と老齢のため出席できず、自身および「西

[4237] アンティオキア総主教ヨハネス1世は、423年から440年までアンティオキアの座に就いていた。

[4238] 全地公会議の招集に関する勅令は、テオドシウスだけでなく、423年から455年まで在位した西ローマ皇帝ヴァレンティアン3世によっても署名された。

[4239] エフェソスは、小アジアのイコニア州の主要都市であり、カイストル川（現在のキュチュク・メンデレツ）の河口近くに位置し、前アジア全域の貿易の中心地として機能していた。かつては、有名なディアーナ神殿で知られていた。　キリスト教史において、エフェソスは使徒であり聖人であるヨハネ・テオロゴスが晩年を過ごした地として知られている。そのため、エフェソスの教会は使徒に由来するものとして大きな尊敬を集め、エフェソスの司教たちは5世紀に総主教の権限を付与されたが、それは長くは続かなかった。

[4240] コミットとは「随行者」を意味する。これは皇帝の随行団に属する者たちの呼称であった。この時代、コミットという名称は、帝国の最高位の高官に与えられる名誉称号となっていた。

[4241] これらの司教たちの筆頭は、エフェソスの司教メムノンであり、その司教座はこの当時、総主教の権限を享受していた。その後、エフェソスの司教は、その地域の都主教という称号を持ちつつ、コンスタンティノープル総主教の管轄下に入った。

方の全公会議」の代表として2人の司教と1人の長老を派遣し、聖キリルの判断に従うよう命じた。総勢で約200人の司教が集まったが、アンティオキアのヨハネスや、その大半がネストリウス派を支持していた他のシリアの司教たちは、誰も出席しなかった。公会議に集まった司教たちは6月21日まで彼らを待ち続けたが、結局現れることはなく、ついに会議を開いた　（431年6月21日）。聖座の威信により、聖キリルがこの公会議の議長を務め、共同議長にはエルサレムのユヴェナリウスとエフェソスのメムノンが就任した。　しかし、不敬虔なネストリウスは、召集された公会議に反対し、アンティオキアのヨハネスおよびシリアの司教たちの到着を待つという口実で、公会議に出席しなかった。公会議の父たちは三度にわたり彼に出席を呼びかけたが、彼は頑なに拒否した。　そこで、彼らはネストリウスの著作の検討に着手し、綿密な調査の末、それらを異端として断罪した。聖キリルは、ネストリウスやその他の人物宛てに書いた書簡を公会議に提出した。その書簡の中で、彼は異端者の不敬な思索を糾弾しており、また、その前にアレクサンドリアで開かれた地方公会議の決定も提示した。　公会議の父たちは、この聖人の教えに同意し、彼を正統かつ神に賢明であると認め、アレクサンドリアの地方公会議の決定を承認した。

その間、アンティオキアのヨハネスがシリアの司教たちを率いてエフェソスに到着した。事態の経過を知った彼は、ネストリウスを擁護するため、ネストリウスとその支持者全員が参加する別の公会議を招集した。　異端に染まっていたカンディディアンはこの不法な公会議を支援し、そこで聖キリルは、キリストの真の人間性を否定し、キリストには魂がなく、その代わりに神性を宿していると主張するアポリナリウス派[4242] の異端として不当に告発された。 この聖なる人物にそのような告発を向け、虚偽の中傷を浴びせることで、ネストリウスの支持者たちは皇帝自身を彼に対して敵対させることを企てた。当初、彼らはその目的を達成することに成功した。皇帝は彼らの誹謗中傷を信じ、聖キリルをエフェソスの司教である至福のメムノンと共に牢獄に投獄するよう命じた[4243] 。 しかしその後、すべての事情を詳細に調査し、一方では義人キリルの無実を、他方では敵たちの明らかな虚偽と悪意を認めたテオドシウスは、聖なる高潔な教父と、その支持者メムノンをそれぞれの職位に復職させ、前者の忍耐と柔和さを称賛して慰めた。　異端者たちについては、彼らを抑制するよう命じた。

こうして、聖キリルは再び、ネストリウスの教説を検討するためにエフェソスに集まった聖なる教父たちの指導者となった。　この公会議において、聖母マリアから受肉された我らの主イエス・キリストは真の神であり、彼を産んだ聖母マリアは真の神の母であるという信仰の教義が確立された。　この決定が民衆に宣言されると、すべての信者たちの間に大きな喜びが広がり、エフェソスの市民たちは皆、厳かに叫び声を上げた。しかし、かつて「エフェソスのアルテミスよ、偉大なり」[4244]

[4242] アポリナリウスは、シリアのラオディキアの司教であった（390年没）。当初、彼はニカイア信条の主要な擁護者の一人であったが、その後、アリウス派の異端との闘いの中で、正反対の極端な立場に陥った。　「完全なる神と完全なる人間は一つの位格に結合することはできず、もしキリストが完全なる人間であったならば、罪から清くあり続け、贖いを成し遂げることはできなかったはずである」という立場に基づき、　――アポリナリウスは、キリストには人間の存在として肉体と魂という二つの部分しかなく、第三の部分である霊は、彼の中に神性が占めていたと教えた。この異端は、362年のアレクサンドリア公会議で非難された。

[4243] 聖キリロスとメムノンと共に、皇帝の命によりネストリウスも投獄された。 この措置は、テオドシウスが、対立する二つの派閥の主要な代表者を排除することで、両派の和解と合意を達成しようと考えていたことを示している。事件の経緯をより詳細に把握した結果、彼はこの措置を撤回し、キリルとメムノンに自由を与えることにした。

[4244] ここには、『使徒行伝』（使徒行伝19:24–28）に記述されている有名な出来事への言及がある。この出来事は使徒たちの時代に、当時有名なアルテミス（あるいは狩猟の女神ダイアナ）の神殿があり、この女神の名が特別な崇拝の対象となっていた、まさにそのエフェソスで起こった。　『使徒行伝』の記述によれば、使徒パウロとバルナバがエフェソに来て、偶像の虚しさについて説教したとき、ダイアナ神殿の模型の製作で生計を立てていた職人たちが、使徒たちに対する民衆の反乱を扇動し、群衆はこう叫んだという。　「エフェソスのアルテミスよ、偉大なり！」と叫んだ。しかし、この騒動は治安維持官によって鎮圧された。

と唱えていた時とは異なり、全く異なる言葉、「聖母マリアよ、偉大なり」と叫んだのである。　ネストリウスは異端者かつ神を冒涜する者として非難され、聖職を剥奪されただけでなく、キリストの教会から破門され、永遠の呪いを受けた。この公会議の決定には、後にアンティオキアのヨハネスもシリアの司教たちと共に賛同した。一方、皇帝はネストリウスを、オアシム[4245]と呼ばれる最も辺境の地へ追放した。そこで、悔い改めることなく、不敬虔なネストリウスは激しい苦痛の中でその生涯を終えた。まさに彼が生きていた間に、その神を冒涜する舌は虫に食い尽くされたのである。

異端者ネストリウスによる聖母マリアへの冒涜が、正教にとっていかに忌まわしいものであったかについては、聖ヨハネが著書『霊の牧場』[4246]で語っている次の出来事が物語っている。「ある時」と彼は記している。「私たちはコロマン修道院[4247]の長老、アッベ・キリアコスを訪ねたところ、彼は次のように語ってくれた。　『ある時、私は夢の中で、自分の独房の扉の向こうに、深紅の衣をまとった、光に満ちた、この上なく美しい聖母が立っており、その傍らには二人の輝かしい男性が立っているのを見ました。そして、それが私たちの主である、至聖なる聖母マリアであり、彼女と共にいた二人の男性は、聖ヨハネ・バプティストと聖ヨハネ・テオロギオスであることを知った。私は直ちに自分の修道室から出て、お辞儀をして、御方が私のところへお入りになり、私の修道室を祝福してくださるよう懇願したが、御方はそれを望まれなかった。　私は長い間、こう言いながら彼女に懇願し続けました。「御母よ！　このへりくだり、恥じ入ったあなたのしもべが、あなたから遠ざかることのないようにしてください」。そして、他にも多くの祈りを彼女の御前で捧げました。すると、私の熱心な祈りを見て、彼女は私にこう答えられました。

「あなたの小部屋には私の敵がいるのに、どうして私があなたのところへ入ることを望むことができるのですか？」

そう告げると、御方は去って行かれた。眠りから覚めると、私は泣き悲しみながら、自分の心の中で聖母マリアに対して何か罪を犯してしまったのではないかと考え込んだ。というのも、私の独房には私以外、誰もいなかったからだ。　自分自身を詳細に省みてみたが、御前に対して罪を犯し得るようなことは何も見つからなかった。悲しみに蝕まれているのを見て、私はその悲しみの中で少しでも気を紛らわそうと、本を読み始めた。それは、エルサレムの聖なる長老イシキオスによる『[4248]』という書物で、私は彼から一時的に借りていたものだった。　その本を読み終えると、巻末に不敬虔なネストリウスの言葉が二語記されているのを見つけ、こうして私の修道室に、聖母マリアのどのような敵が潜んでいたのかを知った。そこで私は立ち上がり、その本を貸してくれた人のところへ持って行き、こう言った。

「兄弟よ、その本を返してください。私はそこから益を得るどころか、害ばかりを受けてしまいました。」

[4245] オアシムという名で知られるのは、上エジプト（フィヴァイダ）の西に位置するリヴィア砂漠のオアシスであり、これは「大リヴィア・オアシス」とも呼ばれていた。ここには古くからギリシャ人植民地が存在し、流刑地としても機能していた。

[4246] 『霊の草原』（ギリシャ語でリモナル）は、修道士ヨハネス・モスカ（622年没）による著作である。7世紀初頭に執筆され、パレスチナ、エジプト、シリアの修道士たちに関する簡潔な伝記が収められている。

[4247] 「ラヴラ」とは、多くの修道士を擁し、その重要性で際立っていた修道院を指す呼称であった。「ラヴラ」はギリシャ語で「街の一角、路地」を意味し、教会や修道院長邸の周囲に、街の路地のように配置され、柵や壁で囲まれた一連の独房群のことをそう呼んだ。　ラヴラの修道士たちは隠遁生活を送り、それぞれ自分の独房で修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のためだけに集まり、それ以外の日は沈黙を守っていた。このような修道生活の規律は多くのラヴラで守られており、特に前述のコロマノヴァのラヴラでも同様であった。　この修道院は、ヨルダン川と死海の近くにあるヨルダン砂漠に位置していた。

[4248] エルサレムの長老イシキイ聖人の記念日は、乳製品を許される土曜日である。

彼は、その本がどうして私に益ではなく害をもたらしたのかと尋ねてきた。　そこで私は、自分に現れた幻視について彼に語った。すると彼は、神聖な熱意に満たされ、その本からネストリウスの二語を切り取り、火で焼きながらこう言った。「わが主の御母――神の母であり、永遠の処女マリア――の敵が、私の修道室に残ることはあってはならない。」

また、キリストの聖人キリル――この偉大な神の御心に適う者――が、その極めて高い聖性にもかかわらず、自らの内に恥ずべき点や敬虔さに反するものを抱えていたことについても、彼の驚くべき改心を目の当たりにするために、触れておくべきである。彼は、聖人同士であるにもかかわらず、理由もなくヨハネス・クラウディオス（金口ヨハネス）に怒りをぶつけていた。　これは驚くべきことではない。なぜなら、完全さはただ神のみに属するものであり、人間においては、キリストの*「その満ち溢れる恵みから、私たちはみな、恵みの上に恵みを受けた」*[4249]（ヨハネ1:16）*という恵みを受け取らない限り*、誰もそれ自体で完全であることはできないからである。それゆえ、聖人たちも人間として、人間の弱さを免れないのである。　聖キリルにも、まさにヨハネス・クロイスストモスに対する関係において、そのような弱さがあった。彼は、この聖人が存命中だけでなく、その死後もなお彼に怒りを抱き、聖人として記念することを拒んだのである。キリルのこのような怒りは、悪意からではなく、無知から生じていた。　彼は、一方では叔父であるテオフィロス総主教から、他方では金口ヨハネに敵意を抱く者たちから、この全教会の光に対する多くの不当な誹謗中傷を耳にし、悪意のない性格ゆえに、その嘘を真実として信じてしまったのである。　なぜなら、*「愚かな者はどんな言葉でも信じる」*（箴言14:15）と書かれているからである。ネストリウスより前に生きたコンスタンティノープル総主教アッティクスは、その書簡の中で、聖ヨハネス・クロイスストモスの名を教会のディプティク[4250]、すなわち聖人の名が記された書物に加えるよう彼に説得していた。アッティクス自身も以前は聖ヨハネス・クラマトルスの敵の一人だったが、後にこの聖人の無実と、同時に彼に対して犯した自身の罪を悟り、悔い改めた。　アルサキオスの後を継いでコンスタンティノープル総主教の座に就くと、彼はディプティクに金口ヨハネの名前も記載し、存命中は聖キリルに手紙を送って、彼にも同様に振る舞うよう懇願した。　しかし、聖キリルは彼の言葉に耳を貸さなかった。以前、テオフィロス[4251]によって招集された、ヨハネに対する公会議の意義を覆すことを望まなかったからである。

同様に、聖イシドール・ペルシオテス[4252]―キリルの親族であり、高齢の男性―も、聖キリルがヨハネス・クロソストモスを聖人の列から除外したことに対して多くの者が憤慨しているのを見て、大胆にも彼に手紙を書き、ヨハネス・クロソストモスの非難の経緯を公平に検討するよう諭した。

[4249] 神学者ヨハネによる福音書の有名な箇所（ヨハネ1:16）への言及、すなわち、イエス・キリストにおける恵みの賜物の豊かさから、私たちは皆、神の恵みの働きを豊かに受け入れた。

[4250] 「ディプティク」とは、木製、骨製、あるいは金属製の小さな板を紐で結び合わせたもので、古代ギリシャ人やローマ人にとって記念の書物として用いられていた。キリスト教教会において、ディプティクは古くから記念の書物として用いられ、そこには司教、殉教者、そしてあらゆる聖人の名が記されていた。

[4251] 言うまでもなく、これはおそらく、ハルキドンからほど近いドゥブナ近郊で開催された公会議のことである。この公会議ではテオフィロスが議長を務め、聖ヨハネス・クラマトルスが有罪判決を受け、罷免された。

[4252] 聖イシドール・ペルシオテスは、その厳格な生活で知られた著名な修道士であり、エジプトのペルシアの町の近くで修道生活を送った。436年頃に没した。その著作から見て、彼は教会の偉大な教父の一人であった。彼の著作は書簡から成り立っており、その大部分は聖書の解釈である。　もっとも、同時代の様々な人物を諭し、戒める目的や、敵対する者たちを和解させる目的で書かれた書簡も数多くある。聖イシドールの書簡の総数は、伝えられるところによれば1万通にも及んだが、現存するのは約2090通である。

「偏見は視野を狭め、憎しみは全く何も見ることができない――」と、ペルシオットは聖キリルへの書簡の一つにこう記した。「それゆえ、もしあなたがその両方の欠点から清らかでありたいと望むのであれば、軽率な判決を下すことなく、その行いを公正な裁きに委ねなさい。　なぜなら、すべてが成就する前にすべてをご存知である神でさえ、人間を愛する御心から天から降りてきて、ソドムの叫び（創世記18:20）をご覧になり、私たちにすべてを綿密な調査に基づいて行うよう教えられたからである。　というのも、エフェソス公会議であなたと共にいた多くの人々が、嘲笑を込めて、あなたが自らの敵意を満たしているだけであり、イエス・キリストのために求められる正統な道を追求しているのではないと語っているからだ。彼らは、「彼はテオフィロスの甥であり、その精神を受け継いでいる」とあなたについて語っている。　テオフィロスが、神を崇め、神を愛するヨハネに対して明らかにその狂気をぶちまけたように、この者もまた、そのことを自慢したいと考えている。もっとも、被告としての立場には大きな変化が生じている。なぜなら、ヨハネはすでに追放の処分を受け、今やこの世にはいないからである」。

別の書簡で、聖イシドール・ペルシオテスはキリルに次のように記している。「聖書の例が私を恐れさせ、書くべきことを書かざるを得なくさせている。　なぜなら、もし私が――あなた自身が言うように――父であるならば、罪を犯した息子たちを貞潔に保たなかったためにエリが受けた非難を恐れるからです[4253]；しかし、私がより正確に知っているように、 私が、あの偉大なるマルコの姿を身にまとったあなたの前で息子であるならば――ヨナタンが、魔女を探し求めた父を止めなかったために受けた懲罰に、私は恐れを抱くのです[4254] 。なぜなら、彼には止めることができたにもかかわらず、先に罪を犯した者よりも先に戦場で死んでしまったからです。　それゆえ、私も裁かれることのないよう、また神があなたを裁くことのないよう、争いをやめ、自らの侮辱に対する復讐――それは本来、死すべき者たちに報いるべきものである――を、生ける教会に持ち込まないでほしい。敬虔を口実に、その中に永遠の不和を引き起こしてはならない」[4255] 。

また別の箇所で、聖人はキリルに次のように書いている。「あなたは聖なる人ヨハネの追放の経緯について私に尋ねているが、私はそれについて詳しく書くつもりはない。他人を非難し、断罪する人間と思われないためである。なぜなら、人々による聖人への数多くの不正は、あらゆる度を越えていたからである。　私は、あなたの近くにあるエジプトの残酷な気質を簡潔に思い出させてあげよう[4256] ：エジプトはモーセを否定し、ファラオに身を委ね、謙虚な者たちを傷つけ、勤労者を苛立た

[4253] 言うまでもなく、預言者サムエルの時代に生きた大祭司エリです。彼は優しさで知られていましたが、その優しさは弱さにも近いものでした。これは特に、幕屋で様々な不品行を働いていた息子たちである祭司オフニとピネハスに対する彼の態度に顕著に表れていました。　気弱なエリは、神から度重なる戒めを受けていたにもかかわらず、これに十分な注意を払わなかった。すると、神の裁きは遅れることなくエリの家に下った。　ペリシテ人との戦争が勃発し、戦いの最中にエリの息子たちによって契約の箱がイスラエル軍に運び出されたとき、大惨事が起こった。エリの息子たちは殺され、契約の箱は奪われ、エリはこの知らせを聞くと、座から転げ落ちて死んでしまった（サムエル記上4:1–22）。

[4254] ヨナタンは、ユダヤの王サウルの息子である。神がサウルから離れ、ペリシテ人との戦いの最中に戦いの行方について啓示を与えなかったとき、彼は迷信に頼ることを決意し、イッサカル族の小さな町アエンドルに住む魔女のもとへ向かった。　そこで彼はサムエルの霊を呼び出し、自分に待ち受ける運命を知ろうとした。その後行われた戦いで、サウルの軍は敗北し、三人の長男たちは彼の目の前で殺された。サウル自身も剣に身を投じて自害した。

[4255] ザラトゥストの死後、彼をめぐって大きな意見の相違が生じた。コンスタンティノープル教会やアレクサンドリア教会の公式代表者たちは彼を聖人として認めなかった一方で、ローマ教会やアンティオキア教会などの他の教会では、彼は聖人名簿に名を連ね、聖人の列に加えられた。　しかし、前者の二つの教会にも、公式代表者の見解に同意せず、彼を聖人であると見なすヨハネス・クロソストモスの支持者が少なからずいた。このことが原因で、論争や不和が生じた。コンスタンティノープルでは、ヨハネス・クロソストモスの支持者たちは「ヨハネ派」と呼ばれた。この分裂は、438年になってようやく解消された。

[4256] 地中海の海岸沿いに位置するアレクサンドリアは、ギリシャ起源の都市として、ここではいわば真の古代エジプトの外にあるとみなされている。

せ、都市を築き、労働者への賃金を支払わなかった[4257]。このような行いにふける中で、彼は、金を神と崇める不法なテオフィロスを世に送り出した[4258]。そして、志を同じくする者たちと共に、神を愛し、神について説教した聖ヨハネに反旗を翻した。　それにもかかわらず、ダビデの家は確固たるものとなり、その勢力を増しているのに対し、サウル家は、あなたが見ている通り、衰えつつある[4259]」。

これこそが、聖イシドール・ペルシオタが聖キリルに宛てた書簡の内容であった。それらは聖キリルに多大な影響を与え、彼はそれを読んだ後、自らの罪を自覚するようになった。　とりわけ、彼は次の幻視に恐怖を覚えたとき、その罪を深く自覚し、心から悔い改めた。彼は、ある極めて美しく、言葉では言い表せないほどの喜びに満ちた場所に立っているような感覚に襲われた。　そこで彼は、アブラハム、イサク、ヤコブといった偉大な人物たちや、旧約聖書および新約聖書の他の聖人たちを見出した。同時に、彼はそこに、人間の言葉では表現しきれないほど美しく、広大で明るい聖堂を目にし、その中から甘美な歌声が聞こえてきた。　この聖堂に入り、その美しさと壮麗さに驚嘆していると、キリルは、栄光の輝きに包まれ、多くの天使たちに囲まれた、至聖なる御母マリアをその中に見出した。　聖母マリアの周囲に立つ者たちの間には、名誉ある席に聖ヨハネ・クラマトリオスもおり、彼は神の天使のように不思議な光を放ち、手には自身の著作を収めた書物を握っていた。多くの立派な人々が、まるで従者のように彼を取り囲んでいた。彼らは皆、まるで攻撃に備えているかのように武装していた。　そして、キリルが聖母の足元にひれ伏して礼拝しようとしたその時、聖ヨハネは付き添いの従者たちと共に即座に彼に襲いかかり、聖母マリアに近づくことを禁じ、その奇跡の聖堂から追い出した。　キリルは、自分に憤るヨハネの姿と、自ら聖堂から追い出されようとしている状況を見て、戦慄を覚えた。しかし突然、聖母マリアがヨハネに語りかける声が聞こえてきた。聖母は、キリルが悪意からではなく無知ゆえに過ちを犯したのだから、彼を許し、聖堂から追い出さないよう懇願したのである。　しかし、ヨハネはまるでキリルを許そうとしないようだった。そこで、至聖なる聖母マリアはこう言われた。「私のために彼を許してあげて。彼は私の栄光のために多大な労苦を払い、人々の前で私を賛美し、私を『神の母』と呼んだのだから」

至聖なる聖母マリアがこうおっしゃると、ヨハネは直ちに心を和らげ、聖母マリアにこう答えました。

「御母よ、あなたの取り成しにより、私は彼を許します」。そして、親しげにキリルのところへ歩み寄り、彼を抱きしめて口づけをし、こうして彼らは幻視の中で互いに和解した。

この幻視の後、聖キリルは、それまで神に愛される聖人に対して無意味に怒りを抱いていたことを深く悔い改め、自らを責めるようになった。その後、エジプトのすべての司教たちを集め、聖ヨハネ・クラマトリオスを称える盛大な祝典を行い、彼を教会の記録に「偉大な聖人たちの列」として記した。　このようにして、聖ヨハネに敵対していた聖キリルという聖なる人物に付いていた汚名は晴らされ、しかも、神のしもべたち間の敵意を解消したのは、まさに聖母マリアご自身であった。それ以来、聖キリルが存命である間、彼は称賛の言葉を述べて聖ヨハネ・クロソストモスを称え続けた。

4257　ここには、エジプトのファラオの時代に、ピラミッドやその他のエジプトの建造物を建設する奴隷たち、そしてとりわけユダヤ人に対して行われた甚大な迫害についての言及がある。過酷な労働で消耗させられた彼らは、十分な食事を与えられず、その労働に対する報酬も一切受け取らなかった。

4258　アレクサンドリアの主教座におけるキリルの前任者であり、彼の叔父であるテオフィロスは、聖ヨハネ・クロソストモス（11月14日）の伝記からも明らかなように、利欲に駆られた人物であった。

4259　この比喩的な表現は、死後に多くの教会で聖人と認められ、多数の信奉者や崇敬者を持つ義人・金口ヨハネの栄光を指し示している。

聖キリルは残りの生涯を偉大な功績に満ちた日々を過ごし、自らの救いだけでなく他者の救いにも心を配り、多くの人々を正しい道へと導いた。神に愛された聖人キリルの生涯には、次のような逸話が伝えられている。当時、下エジプトには、その聖なる生活で知られたある長老が住んでいた。それにもかかわらず、彼は教養のない素朴な人であったため、ある誤った見解を抱いていた。すなわち、その無知ゆえに、その老修道士はメルキゼデクこそが神の子であると主張していたのである[4260]。この彼の思惑について聖キリルに伝えられると、聖キリルは　その老修道士を自分のもとへ招いた。　その長老が奇跡を行い、神に深く愛され、神が彼のあらゆる願いを叶えてくださることを知っていた――そして、メルキゼデクについて彼が誤った考えを抱いているのは、単に彼の純朴さゆえに過ぎないことを理解していた――ため、総主教は彼を真理の道へと導くために、次のような知恵を働かせた。穏やかに長老に語りかけ、彼はこう言った。

「アッバよ、ある疑問を解き明かす手助けをしてほしいと懇願します。一方では、理性が『メルキゼデクは神の子である』という結論へと私を導きますが、他方では、何かが『それは不当であり、彼はただの人間であり、神の司祭に過ぎない』と私に告げているのです。　そこで私は疑念と困惑に陥り、どちらの結論にたどり着けばよいのか分からなくなっています。それゆえ、あえてあなたを呼び出したのです。この件について神に祈り、そのことを明らかにしてくださるよう願ってほしいのです。そして、神があなたに何を啓示なさっても、それを私に伝えてくださるよう、どうかお断りにならないでください。」

神に喜ばれる生き方を自信として、長老は聖キリルに大胆にこう答えました。

「大主教様、どうか三日間、私を一人にしてください。その期間が過ぎたら、私はこの件について神に尋ね、私に啓示されたことをあなたにお伝えいたします。」

その後、自分の小部屋に引きこもり、三日間そこに閉じこもった長老は、メルキゼデクについて神が啓示してくださるよう祈った。願いが叶うと、彼は聖キリルのもとへ行き、こう言った。

「メルキゼデクは人間であり、神の子ではありません。そして、大司教様、これが事実であることをご承知おきください。」

聖キリルは、その長老の魂を救うことができたことを大いに喜び、感謝を述べて彼を見送った。長老は去ると、メルキゼデクは人間であり、神の子ではないと、すべての人々に説き始めた。こうして、神に愛されたこの人は、無知な者を真の道へと賢明に導いたのである。

アレクサンドリア総主教の座に32年間在任し、生涯を通じてキリストの教会から当時存在したあらゆる異端を一掃し、多くの霊的益となる著作を著した[4261]、聖キリルは主のもとで安らかに息を

[4260] サリムの王であり、至高の神の祭司であるメルキゼデクは、聖書（創世記14:18）に言及されている（参照：詩篇109:3；ヘブライ人への手紙5:6, 10, 6:20, 7:1, 10, 11, 15）。アブラハムが、ロトを略奪したエラムの王とその同盟軍に勝利して帰還した際、メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って彼を出迎え、至高の神の名によって祝福した。アブラハムはこの祝福を非常に高く、また畏敬の念を持って受け止め、戦利品の十分の一をメルキゼデクに捧げた。　メルキゼデクが誰であったかは、依然として謎のままである。おそらく彼は、当時パレスチナに住んでいたアモリ人の部族に属していたのだろう。なぜなら、彼らには王であり大祭司であったからである。サリムは、後にイェブス、さらにエルサレムとなった場所であると考えられている（詩篇75:3）。メルキゼデクは、パレスチナ全土で名高く、真の神に仕える特別な人物であったと推測できる。聖書は、彼をキリストの型として示すために、彼に関する詳細を隠している。メルキゼデクの祭司職が持つ型としての意義については、王であり預言者であるダビデも、神の御子について語った際に次のように指摘していた。　*「あなたは、メルキゼデクの位に従って、永遠の祭司である」*（詩篇109:4）。しかし、メルキゼデクの予型としての意義は、使徒パウロの『ヘブライ人への手紙』（ヘブライ7:1–28）において、とりわけ明確かつ詳細に明らかにされている。

[4261] 聖キリロス・アレクサンドリアスの著作は、その内容によって、解説的、弁証的（キリスト教を擁護する）、教義的、そして道徳的という種類に分類される。　キリルの解説的著作の中で最も優れたものは、ルカによる福音書の注解であり、簡潔でありながら聖書の言葉を正確に解き明かしている点が際立っている。また、ヘブライ人への手紙やコリント人への手紙に対する彼の解説も傑出している。　旧約聖書の注解の中では、『雅歌』への解説が特筆すべきであり、次いでイザヤ書および小預言者たちへの解説が挙げられる。ユリアヌスに対する聖キリルの著作は傑作であり、これはユリアヌ

引き取った[4262]。 彼の最期には、聖母マリアご自身が立ち会われました。それは、彼が聖母のために忠実に尽力し、その栄光のために勇敢に奮闘したからです。　彼は聖金口ヨハネにふさわしく数え入れられ、彼と共に、決して冷めることのない愛に燃えながら、キリスト神と聖母マリアの両方の御前に立ち、聖母の栄光の中にあり、その御座の近くにとどまり、聖母マリアと、彼女によって生み出された真の神を、永遠の世々にわたり賛美し続けています。 アーメン。

コンダク、第6調:

神学の教えの深淵を、救い主の泉より明らかに注ぎ出され、異端に沈みゆく祝福されたキリルを救い、群れを動揺から無傷で守り抜かれました。すべての国々にとって、神聖なる御姿を示される尊き導き手よ。

クシュトの修道院長、尊者アレクサンドルの記念日。

記念日：6月9日

この尊者様はヴォログダ市の出身であり、カメンヌイ修道院（[4263] ）にて、ディオニシイ修道院長（[4264] ）のもとで修道誓願を立てました。 人々からの称賛を避け、彼はこの修道院を去り、クベンスキー湖の近くにあるクシュタという名の川へと向かい、ロストフの大司教ディオニシオス[4265] の祝福を受けて、至聖なる神の母、その尊く栄光ある御眠りを称える教会を建立した。　ヤロスラヴリの公ディミトリイとシメオン[4266] は、聖人のこのことを知ると大いに喜び、教会や修道院の必要のために多額の援助を与えた。また、公ディミトリイの死後、その妻であるマリア公妃は、聖人の功績を見て、夫の追悼の意を込めて、修道院の維持費として、　農民たちと共に暮らす村を寄進した。その

スが異教の哲学者たちの助けを借りて、異教を擁護しキリスト教を攻撃するために執筆した著作を反駁するために著されたものである。　キリルの教義に関する著作の大部分は、ネストリウス問題に関して書かれたものである。その代表例が『ネストリウス反駁』の五巻である。ここでアレクサンドリアの聖人は、ネストリウスの名を明言することなく、その教義を論破している。『宝庫』として知られる、聖三位一体に関する膨大な著作について、福者　フォティオス（コンスタンティノープル総主教）は、この著作が緻密さを特徴とし、アリウスやエウノミオスの異端的な教義を覆す方向性を帯びていたと述べている。その明快さにおいては、他のあらゆる著作を凌駕している。 聖三位一体に関する2つの、それほど長くない教義的著作と、受肉に関する著作は、カテキズム的な教えの様相を呈している。これらの著作は、正教の教義を正確に述べている点で重要である。ここで特に注目すべきは、聖霊の在り方に関する教えである。　人形論に対する論考は、無知ゆえに神を人間の姿として想像していたエジプトの修道士たちのために、聖キリルによって書かれたものである。　聖キリルは多くの対話集を著した。魂の旅立ちに関する彼の言葉は、砕かれた心の深みにおいても、また肉体から引き離された魂の状態についての考察においても、特筆すべきものである。それは、キリスト教徒にとって極めて教訓的であるとして、スラブ語の『追随詩篇集』およびギリシャ語の『時課書』に収録されている。

[4262] 聖キリルの逝去は、448年6月27日にあった。

[4263] カメンヌイ、あるいはカメンスキー修道院は、現在のヴォロゴダ県にあるクベンスコエ湖の無人島に位置していた。

[4264] アトス山で出家したディオニシウスは、スパソカメンヌイ修道院に厳格なアトス山の規律を導入し、自らの生き様をもって多くの人々をこの人里離れた修道院に引き寄せたことで知られている。聖アレクサンドルは彼から出家の儀式を受けた。

[4265] ディオニシウスは、1418年にスパソカメンヌイ修道院のイグメン（修道院長）から、ロストフ大司教の位に昇進した。

[4266] ディミトリ・ヴァシリエヴィチ公はヤロスラヴリの公ではなく、ザオゼルスク、あるいはクベンスクの公であり、その居城は、現在クベンスコエ・ウスティエと呼ばれる村で、聖アレクサンドルの修道院から3ヴェルスタの場所にありました。　一方、ヤロスラヴリの公はディミトリの兄弟であるシメオン・ヴァシリエヴィチであり、彼は1320年頃に亡くなった。

後、聖アレクサンドルはさらにその労苦を強めた。彼は修道士たちと共に自ら土地を耕し、多くの実りを収穫した。

この聖人は、生誕から60年2ヶ月2日を生き、1439年6月9日[4267]に永遠の命へと旅立った。彼は中背で、体は極めて痩せており、頭は中くらいの大きさ、顔は丸く、目は穏やかで、あごひげは濃く丸みを帯びて胸まで届き、髪は白髪交じりの濃い金髪であった。

6月23日

6月10日（旧暦）

我らの聖なる父ヴァッシアン、ロディの司教の生涯[4268]

記念日6月10日

神の助けを借りて肉欲に対して勇敢に立ち向かった聖人たちの生涯を今ここに記述し、その記憶を後世に伝えることは、二つの理由から有益である。　第一に、聖人たちの勇敢な功績を思い起こすことで、聖人たちもまた神の前で私たちを覚えていてくださると信じるからです。第二に、聖人たちの功績と勇気を記述することで、それによって私たち自身や他の人々が、これらの功績に倣うよう促すことになるからです。　このことを念頭に置き、私たちはロディオの司教であり殉教者である聖ヴァッシアンの生涯と功績を簡潔に記述しようと努める。この神に愛された聖人の助けを借りて、彼が天の御国に与るにふさわしい者と認められたその功績について述べるのである。

この聖人は幼い頃から、年齢ではなく、知性と高潔な品性において、すでに長老のような存在であった。彼の父セルギイは、シラクーザ地方の統治者[4269]であり、ギリシャ式の不敬虔な信仰に傾いていた。

彼は、息子が父の後を継いで、市民を巧みに統治できる統治者となるよう、異教の哲学を学ぶためにローマへ送り出しました。生まれつき賢明で思慮深いヴァッシアンは、熱心に哲学を学び始め、学業で優れた成績を収めました。　その頃、彼はキリストの名とキリスト教徒の生き方について耳にし（[4270]）、直ちに心を尽くして、ギリシャの哲学を、魂を救うキリスト教の知恵へと転換したいと願った。そこで彼は、父の家来たち（彼に任されていた者たち）のうち、誰に自分の心の秘密を打ち明けることができるか、考え始めた。

しかし、主は、御自身の戦士を、彼に定められた使命から長く遠ざけたくなかったため、ある敬虔な長老に、夢の幻の中で三度、若きヴァッシアンがキリスト教徒になりたいという願いと決意を告げられた。　眠りから覚めた長老は、ローマ市内のすべての学校を巡り、夢の幻の中で主が示されたその若者を必死に探し始めた。ついに、長い探求の末、長老は神の助けにより、探していた人物を見つけ出し、彼に「どこ出身か」「両親は誰か」「なぜローマに住んでいるのか」と尋ねた。

[4267] 聖アレクサンドルの崇敬は16世紀から始まった。その聖遺骨はクシュツキー修道院に安置されており、同修道院は1838年にスパソカメンヌイ修道院の管轄下に入った。

[4268] ロディア、あるいはラヴダはメディオランの近くに位置していた（下記384ページ参照）。

[4269] シラクーサは、シチリア島の東岸に紀元前8世紀に設立された最初のギリシャ植民地の一つであり、後に島で最大かつ最も豊かな都市となった。

[4270] その後の記述から、聖ヴァッシアンは幼少の頃からすでにキリスト教徒について耳にしていたことがうかがえる（伝記によれば、ヴァッシアンは赤ん坊の頃、地面に十字架の印を描いていたという）。しかし、ローマにおいてヴァッシアンはキリスト教についてより詳しく知り、キリスト教徒の生活そのものを直接観察する機会を得た。

ヴァッシアンという名のその少年が、自身のことを詳細に語り、賢明で分別のある答えを返したことに、長老は驚き、これがまさに自分が探していた若者であると悟った。

慈愛に満ちた父のように、長老は青年を抱きしめ、頬にキスをした。そして彼を自宅に連れ帰り、神から与えられた幻について語った。その後、二人は共に神を賛美した。続いて、ヴァッシアンは長老の足元にひれ伏し、一刻も早く自分をキリスト教徒にしてくれるよう懇願した。　長老はまず、若者に聖なる信仰の真理を教え、キリスト教の律法における秘跡について説明した。若者はその教えを聞き、心を打たれ、キリストへの愛に燃え上がった。 その後、長老は彼に[4271] を告げ、聖なる洗礼の際、どのように振る舞うべきかを教えた。この時から、ヴァッシアンは、あらゆる面で彼に忠実な最年長の奴隷を一人連れて、敬虔な長老のもとへ頻繁に訪れるようになり、霊的な師の神に導かれた口から、キリスト教の知恵を学んだ。

洗礼の告知を受けてから、ヴァッシアンは厳しい生活を送るようになった。昼間は断食と祈りに励み、夜は祈りか書物の読解に没頭し、眠りに就くのはほんのわずかな時間だけだった。差し出された食事のうち、彼はその三分のの一しか口にせず、残りの三分の二は貧しい人々に施した。

その間、かなりの時間が経過し、ついにヴァッシアンの洗礼の時が訪れた。ヴァッシアンは忠実な使用人を伴って長老の家へ向かい、そこで聖なる洗礼が執り行われた。　ヴァッシアンが、洗礼の慣例に従って聖なる洗礼槽に入ったとき、彼は太陽のように輝いている美しい顔立ちの若者を目にした。その若者は洗礼の介助役を務めており、洗礼槽から出た後に新受洗者が身にまとうべき衣を手に持っていた。聖ヴァッシアンは思い切って彼に尋ねた。

「あなたは誰ですか？　どこから来たのですか？」

「私はずっと前から、あなたのもとへ遣わされていたのです」と青年は答えた。「あなたが聖なる決意を成し遂げ、その決意に反するあらゆるものを追い払うのを助けるために。」

そう言うと、その若者は姿を消した。若者が去った後、部屋は半時間ほど続く不思議な香りに満たされ、そこにいた者たちは皆、自分たちが地上ではなく天国にいるかのように感じた。

聖なる洗礼を受けた後、ヴァッシアンはさらに厳格な生活を送るようになり、若々しい肉体を律し、それを精神に服従させた。総督セルギイからヴァッシアンを瞳の如く大切に守るよう命じられていた護衛や使用人たちは、ヴァッシアンの秘密を知らず[4272] 、彼の 異例の節制ぶりを見て大いに驚き、さらには不安さえ抱いた。　彼らは、なぜ彼がこれほどわずかな食事と飲み物しか摂らないのか、なぜ眠らずに夜を明かすのか、なぜ顔色が青ざめ、体が衰弱していくのか、と首をかしげた。これらすべてを目の当たりにし、彼らは戸惑いながら互いに尋ね合った。「主人は一体何のために、これほどまで自分を酷使しているのか？」

一方、聖ヴァッシアンに忠実で、その秘密を知っていた最年長の奴隷は、彼らにこう語った。「これを不思議に思うな。なぜなら、哲学の教えは、あらゆる情欲を軽蔑し、生命を維持するために必要なものだけに満足する弟子たちによってのみ理解されるものだからだ。　それゆえ、私たちの主人は、至高の知恵を学びたいと願って、このような禁欲と不眠を自らに課しているのだと、知っておいてほしい。」

しかし、使用人たちはこの答えに納得しなかった。彼らは、ヴァッシアンがまだ赤ん坊の頃、時折砂の上に十字の印を描いたり、わらを十字の形に並べたりしていたことを思い出した。そのせいで、乳母はしばしば彼を叱っていたのだ。　ついに、様々な調査を重ね、ヴァッシアンがどこへ行く

[4271] 通常、古代教会において洗礼を受ける者は皆、事前に「カテキズム」――すなわち、キリスト教の信仰の真理に関する口頭による指導――を受けなければならなかった。カテキズム受講者は、神聖な典礼の第一部（プロスコミディア）および第二部（カテキズム受講者のための典礼）の執行にのみ立ち会うことが許されていた。　第三部（信徒の典礼）が始まる前に、求道者は教会から退出しなければならず、そのことは助祭による「求道者よ、出て行きなさい」という宣言によって告げられた。求道期間の長さは様々で、数日から数週間、あるいは数ヶ月、さらには数年にも及んだ。

[4272] つまり、自分がキリスト教徒であることを知らずにいたということである。

かを尾行した結果、使用人たちは、主人がキリスト教の信仰を受け入れ、キリスト教の教えに従って生活しているのではないかと推測するようになった。これにより、彼らは少なからぬ動揺と恐怖に襲われた。ヴァッシアンの父であるセルギイの怒りを恐れていたからである。　彼らがヴァッシアンがキリスト教徒であることを最終的に確信したのは、次の出来事によるものであった。

ある日、徹夜の祈りと徹夜の務めを終えた後、この祝福された若者は疲れ果てて深く眠りについた。眠りの中で、彼は祈りの言葉を口にし、三位一体の唯一の神を呼び求め、神を愛するすべての人に約束された栄光への道へと導いてくださるよう願った。　その祈りの後、天から声が聞こえた。「喜び、喜びなさい、キリストの最も忠実な戦士、ヴァシアンよ！　あなたの祈りは神に受け入れられ、天国で最高の場所があなたのために用意されている」。

この出来事の後、家来たちはヴァッシアンがキリスト教徒であることを完全に確信した。そこで彼らは密かに、一人また一人と、シラクーサにいるかつての主人である統治者セルギウスのもとへ戻り、彼にとって不愉快な知らせを伝えた。彼らは統治者に、その息子ヴァッシアンがキリスト教の信仰を受け入れたと告げたのである。

偶像崇拝者であったセルギウスは、このことに深く悲しみ、息子をキリスト教から遠ざけるにはどうすればよいか――甘言で説得すべきか、それとも脅迫すべきか――と熟考し始めた。

こうして、ヴァッシアンの使用人たちは次々とローマを去っていった。彼のそばに残ったのは、同じくキリスト教徒であった、ただ一人の年老いた忠実な使用人だけだった。去っていった使用人たちの代わりに、ヴァッシアンの父は新しい使用人を送り込み、彼らにヴァッシアンをローマから連れ出し、自分のもとへ連れてくるよう命じた。

その頃、聖ヴァッシアンは夜、鶏の最初の鳴き声の頃[4273]、聖ヨハネ・テオロゴス（神学者）の教会に入らなければならなかった。そこで、いつものように祈っていると、白髪に飾られた高潔な人物が現れ、彼に次のように告げた。

「キリストの忠実な告白者よ、知っておきなさい。あなたは、あなたの忠実なしもべと共に、ここからラヴェンナ[4274]へと向かわなければならない。なぜなら、あなたを肉体の命へと生み出したあなたの父は、あなたの魂の救いを妨げようとしているからだ。彼があなたを正しい道から迷わせないよう、ここから逃げなさい。　このため、御自分のしもべを見捨てない慈悲深い神は、私、その使徒を遣わして、このことをあなたに告げ知らせたのである。そうすれば、あなたの父が遣わした者たちが、ここであなたを見つけ出しても、あなたがここから逃げるのを妨げることはないだろう」。

聖ヨハネ・テオロゴスは、こう告げると、ヴァッシアンの元を去った。

至福のヴァッシアンは、使徒の御出現に心を大いに喜び、神に祈りを捧げながら何度も深く頭を下げ、御助けを絶やさないよう懇願した。祈りが終わると、ヴァッシアンは目にしたこと、耳にしたことをすべて自分の使用人に伝えた。　翌朝、彼らは持ち物をすべて貧しい人々に分け与え、霊的指導者であるゴルディアヌスから祝福を受けた後、夕方にローマを出て、ラヴェンナへと向かった。

数日間の旅の途中、聖ヴァッシアンは雌鹿と2頭の子鹿を見かけた。動物たちは、追いかけてくる猟師たちに追われ、すでに力尽き、息も絶え絶えになっていた。 狩人たちは、もうすぐ 、鹿たちに追いつこうとしていた。それを見た聖人は、雌鹿とその子鹿たちに憐れみを覚え、こう言った。「我らの主イエス・キリストの名において、恐れることなく私のところへ来るように命じる」。

[4273] 初期のキリスト教徒たちは、古代ユダヤ人の例に倣い、夜を4つの部分（各3時間）に分け、これを「番」と呼んでいた。第三の番に聞こえる雄鶏の鳴き声は、「ペトログラシェニエ」または「クログラシェニエ」と呼ばれていた。

[4274] ラヴェンナは、いわゆる「チスパダニア・ガリア」に位置し、アドリア海沿岸にあった。 自然条件と築城技術により、この都市は強固で、ほとんど攻略不可能な要塞となっており、そのためラヴェンナはイタリアの要衝と見なされていた。ホノリウス（395～423年）以降のローマ皇帝たちは、ここを居城として選んだ。

雌鹿はまるでその言葉を理解したかのように、たちまちおとなしくなり、立ち止まって、恐れることなく子鹿たちを連れて聖人のところへ近づいた。ヴァッシアンは、まるでその動物が昔から自分に慣れ親しんでいるかのように、手で雌鹿を撫で始めた。すると雌鹿は彼の足を舐め始めた。

雌鹿を追いかけていた猟師たちが駆けつけ、雌鹿が旅人の前に大人しく立ち、旅人が手で撫でているのを見ると、非常に驚き、どうして動物の野性味がこれほど早くおとなしさに変わったのかと首をかしげた。　その時、気性が荒く残酷な猟師の一人が仲間たちに言った。「馬鹿者ども！　なぜ躊躇している？　なぜ獲物を仕留めないんだ？」

そう言うと、彼は聖人の手から雌鹿を奪い取ろうとした。

「私ではなく、至高の神があなたに命じているのだ」と、聖ヴァシアンは狩人に言った。「この野生の動物にも、その子たちにも、決して害を与えてはならない」。

狩人は怒りと傲慢さをもって、神の御使いの手を押し退けようとした。しかし、その傲慢な行いの直後、悪霊がその残酷な狩人に襲いかかり、激しく苦しめ始めた。苦しみの中で彼は地面に倒れ込み、恐ろしい叫び声を上げ、泡を吹き、硬直してまるで死んだかのようになった。　すると、残りの猟師たちは恐怖に震え上がり、聖人の足元にひれ伏して、自分たちも同じような運命をたどるのではないかと恐れ、涙ながらに許しを請い始めた。ヴァシアンは彼らにその場から退くよう命じ、自身は十字架の形に両手を広げて祈りを捧げ、全精神を神に向け、こう祈り始めた。　「神よ――万物の驚くべき創造主、慈悲深き神よ――堕ちた人類の救い主よ。死者の滅びではなく、生ける者の救いを喜ばれる方よ。無知ゆえに罪を犯し、御慈悲を怒らせた、この不幸の中に横たわる者を赦してください！」

聖人は、このような、そしてこれに類する心を打つ言葉で祈った。祈りを終えて立ち上がると、彼は地面に横たわっている男のところへ歩み寄り、その右手を握り、その男の中に宿っていた悪魔に向かって言った。「悪魔よ！　天の高みから深淵へとあなたを打ち落とした御方は、今すぐ神の像――この人――を離れ、あなたのために用意されたタルタル[4275]へと退去するよう命じておられる。そこでは、あなたは永遠に苦しみを受けることになるだろう」。

聖人がこの言葉を言い終える間もなく、人類の敵はすでにその男から出て行った。その男は、ほんの短い間に激しく苦しめられ、死の淵に立たされていたのだ。狩人が意識を取り戻し始めたとき、自分の目には何も映らず、地面に動かないまま横たわっていた。

聖人は再び神に祈りを捧げ、祈りが終わると、猟師の目に十字を切った。すると、その目はたちまち開き、猟師は見えるようになった。その後、ヴァッシアンは彼の全身に十字を切って守り、立ち上がるよう命じた。すると、猟師はまるで何の害も受けていないかのように、元気な姿で立ち上がった。

遠くに立っていた他の猟師たちは、この奇跡的な出来事に畏敬の念を抱いて見守っていた。その後、彼らは聖人の元へ近づき、彼に頭を下げた。　彼らと共に、癒やされた男も頭を下げ、聖人に許しを請い、自分を癒やしてくれた者に心から感謝した。その後、皆はそれぞれの場所へと散っていった。猟師たちは自宅へ帰り、雌鹿と子鹿たちは自由の身となり、聖ヴァッシアン自身は従者を連れて旅を続けた。

ラヴェンナに到着すると、ヴァッシアンは、この町の司教であり、彼と親戚関係にあったウルスを訪ねた。司教は親戚の姿を見て大いに喜び、とりわけ、彼がキリストを信じ、キリストへの愛のためにすべてを捨てて放浪の旅に出たことを知ると、さらに喜びを深めた。　ヴァッシアンの希望に応じて、司教は街の外にある、聖アポリナリウス（ラヴェンナ市の初代司教であり、聖使徒ペトロによって叙階され、ウェスパシアヌス帝の治世下でキリストの名のために殉教した[4276]）の教会に隣接

[4275] 古代ギリシャ人は、「タルタロス」という名で、地底深くにある暗い深淵を指していた。
[4276] ウェスパシアヌス皇帝は70年から79年まで在位した。

する静かな場所を彼のために用意した。　この教会のそばには、ヴァッシアンにとって非常に適した場所があった。ここで彼は、世とすべての世俗的なものを捨てて隠遁生活を送りながら、断食と祈りに励み、神のために熱心に奉仕することができた。

主はまもなく御自分のしもべを栄光に輝かせられた。主は彼に、祈りによって肉体の病を癒し、神の霊に導かれた教えによって心の病を癒すという、驚くべき恵みを授けられた。これらすべてにより、彼は周囲のすべての人々から尊敬と愛、そして名声を得た。

その頃、ヴァレンティニアヌス王[4277] から、ラヴェンナ市の統治者および同市の全市民に対し、ヴィフィムニアという名の市判事を処刑せよとの命令が下った。　これは、中傷者たちがヴィフィムニウスを、あたかも彼が犯したかのような重大な罪で皇帝に誣告したためであった。ヴィフィムニウスは縛られ、斬首されるべき場所へと連行された。そこで彼は聖ヴァッシアンを思い出し、心の中でこう言った。「神の僕ヴァッシアンよ！　神から授かった恵みによって、どうか私の助けとなってください！」

市の統治者自身と大勢の民衆が、ヴィフィムニオスの最期を見届けようとそこに集まっていた。そして、ヴィフィムニオスはすでに首を差し出し、両刃の剣を握った処刑人が、その剣を振り上げてヴィフィムニオスの首を力強く斬り落とそうとした。しかし、その瞬間、予期せぬ出来事が起こった。　剣は処刑人の手から滑り落ち、その場所から遠く離れたところに転がった。処刑人は再び剣を手に取り、以前よりも強く握りしめて、ヴィフィムニウスの首を刎ねようと振り上げたが、振り下ろそうとした途端、剣は先ほどと同様に再び手から滑り落ち、遠くへ転がった。　処刑人は再び怒りを込めて剣を掴んだが、またしても同じことが起きた。皆はこの奇跡に驚愕した。市の統治者は、処刑人が受け取れると思っていた報奨金のために死刑囚を容赦しているのだと考え、その処刑人を退け、別の者にヴィフィムニアの首を刎ねるよう命じた。　しかし、もう一人の死刑執行人にも同じことが起きた。剣は三度も、目に見えない力によって死刑執行人の手から引き抜かれ、遠くへ落ちていった。その後、市の統治者は、起きた出来事に驚き、また恐れをなして、死刑囚を処刑場から連れ去るよう命じた。とりわけ、民衆もヴィフィムニオスの釈放を求めていたからである。神の力が彼を死から守っていたのだ。

ヴィフィムニオスは牢獄に投獄され、二人の処刑人でも死刑囚を斬り殺すことができなかったという知らせが王のもとへ送られた。この知らせを受け、王からは直ちに慈悲深い勅令が下り、ヴィフィムニオスを死刑から解放し、その罪を赦すこととなった。

ヴィフィムニオスはそれを隠すことなく、むしろ、神によって与えられた自身の守護者である聖ヴァッシアンについて語り、祈りの中で彼に助けを求めていたことを明かした。　牢獄から解放されると、彼は聖人のもとへ赴き、その足に口づけをして感謝を捧げたが、神に愛された聖人は、彼を死から救ってくださった神のみに感謝するよう命じた。　それ以来、町の住民たちは皆、聖人を神の天使として仰ぎ、助けを求めて彼に頼るようになり、聖人に対して深い敬意を払うようになった。

一方、聖職者や高貴な市民たちは一斉に司教に懇願し、聖ヴァッシアンに司祭の聖職に就くよう説得してほしいと頼んだ。そうすれば、無血の犠牲を捧げる際にヴァッシアンが捧げる、神に喜ばれる祈りが、神の前でより力強いものとなるからである。　こうして、神の御心に適うこの聖人は、自らの望みではなかったものの、司祭の聖職に叙階され、その職にかなり長い間従事した。

その頃、ローマから彼と共にやって来たヴァッシアンの忠実な従者が亡くなった。聖ヴァッシアンは、その者の安息を祈って無血の犠牲を捧げ始めた。　その従者の死去から七日目のこと、聖体礼儀の最中、聖人は新しく亡くなった者の魂の安息を熱心に祈っていたところ、天から声が聞こえ、亡き者の魂が神の恵みを受け、聖人の列に加えられたことを告げられた。　この知らせを、ヴァッシ

[4277] ヴァレンティニアヌス2世皇帝は383年から392年まで在位した。

アンは礼拝のために教会にいたヴィフィムニウスに伝え、二人は共に、亡くなった者の魂の救いを心から喜び祝った。

その頃、リグリアのロディエ市[4278] で、司教が亡くなった。この町の住民たちは三日間の断食を課し、主に向かって熱心に祈り、聖座に就いてキリストの教会を円滑に統率できるふさわしい人物を遣わしてくださるよう願った。

皆で断食と祈りを捧げていた最中、大聖堂の司祭の一人であるクリメントという、徳高く誠実な人物が、教会の務めを終えて眠りについたところ、夢の中で光に包まれたある人物が現れ、こう告げた。 「皆、知れ。神は、ラヴェンナに在住し、神の賜物に恵まれた長老ヴァッシアンを、あなたがたの司教として定められたのだ。」

眠りから覚めたクリメントは、直ちに教会の聖職者や信徒の中から最も高潔な人々を呼び集め、主が幻の中で彼に告げられたことを彼らに伝えた。そこで、高名な人々が選ばれ、聖ヴァッシアンに対し、ロディオへ来て主教の座に就くよう要請するために、ラヴェンナへ派遣された。

聖ヴァッシアヌスには、使者がラヴェンナに到着する前から、神が夜の幻の中で彼らの到来を告げ、断ることなく彼らと共に旅立つよう命じられた。

その朝、ロディの使節たちが聖人のもとを訪れ、彼らに下された命令を伝えた。 聖人は使者たちに次のように語りかけた。「神は、人間が常にその創造主の御心と御指示に従うことができるよう、不死の者として人間を創造された。しかし、人間は楽園で与えられた神の戒めを破り、自らを死すべき存在とし、同様にその子孫をも死すべき存在にしてしまった。 それゆえ、人は自らの神の御心に逆らい、その戒めを破ってはならない。むしろ、誰もが全力を尽くして、神の御心に適い、神によって命じられたことを実行するよう努めなければならない。このことを踏まえ、私もまた、名誉を望むからではなく、同じ信仰を持つ兄弟たちの必要のため、神の御命令に従い、私に課せられた重荷を受け入れることを拒まない。」

そう言うと、聖ヴァッシアンは、旅の疲れを癒やすよう旅人たちに勧めた。 しかし、使者たちは、聖人の承諾に喜びつつも、そこに留まって休むつもりはなく、この計り知れない宝を一刻も早く自分たちの街へ届けたいと願い、速やかに旅路に戻ろうと急ぎ、聖人に彼らと共に早急に出発するよう懇願した。そのため、その晩、聖人と使者たちは旅立った。

彼らがロディアに近づくと、民衆全員が喜びと歓喜に満ちて、神から授かった自分たちの牧者を出迎えた。

その時、群衆の中に、麻痺を患い、言葉を話すことのできない一人の男がいた。この病人は、民衆と共に、たとえ大変な苦労を伴ったとしても、聖人の元へと近づき、神の御使いの聖なる右手を口づけした。するとたちまち、彼の体は力強くなり、舌が解けて、彼は神の偉大さを賛美し始めた。民衆は、神が彼らにどのような聖なる牧者であり、奇跡を行う者を授けてくださったかを目の当たりにし、喜びをさらに深めた。

聖ヴァッシアンの司教叙階式のために、メディオランの聖アンブロシウス司教と、前述の聖ヴァッシアンの親族であるラヴェンナのウルスがロディウスを訪れた。 1月1日、神に選ばれたヴァッシアンが司教に叙階され、この出来事は街全体に大きな喜びと祝賀の雰囲気をもたらした。

聖ヴァッシアンは司教となってから、言葉と行いによって、とりわけその徳高い生活の模範を通じて、信徒たちを教え導いた。彼は聖アンブロシウスに対して聖霊による深い愛を示し、アンブロシウスからも同様の愛を受け、それは互いに頻繁に交わされる親愛に満ちた書簡に表れていた。

[4278] イタリアの「リグリア」とは、ケルト系民族であるリグリア人が居住していた地域の名称であった。リグリアはガリアと国境を接していた。

しばらくして、キリストの聖人ヴァッシアンは、町の東郊外に聖使徒たちの名に因む壮麗な教会を建立し、その教会の奉献式に、聖アンブロシウス・メディオランスキイとフィラクス・コマンスキイを招いた[4279]（ウルス・ラヴェンニイスキイはこの時すでに主のもとで安らかに眠っていた）。

司教たちが教会を奉献していたその時、奉献式に集まった群衆の中に、一人の悪霊に取りつかれた少女がいた。悪魔はその少女の口を通じて、大声で叫び始めた。「なぜ、神の僕たちよ、私に対して不当に反旗を翻すのか？　なぜ三人が一丸となって、私に対して無敵の武器を振るうのか？　あなたがたから、誰かを害する力を奪っただけではまだ足りないのか？　今や、あなたがたは、我々が支配していた者たちからも我々を追い出そうとしている。もしここから私を追い出せば、私は二体以上の（悪霊）を連れて、あなたがたが決して来ることのない別の場所へ行くのだ」。

キリストの僕たちは、悪魔の叫び声を聞くと、ひざまずき、主に向かってより熱心に祈り始めた。　祈りの最中、悪霊は彼らの祈りの力に耐えきれず、少女を地面に倒し、恐ろしい叫び声を上げて彼女から出て行った。そこで聖職者たちは少女のもとへ歩み寄り、すでに健康を取り戻していた彼女を地面から起こして両親に返し、娘が悪霊の苦しみの手から解放されたことに対し、主に感謝を捧げるよう命じた。

教会の奉献式の後、神の栄光を称えるための食事が設けられ、その席で聖人たちは、神の教会にとって有益なことについて語り合った。食事と親しい会話の後、訪れた司教たちはそれぞれの地へと旅立ち、聖ヴァッシアンは一人ひとりを丁重に見送った。

ある時、収穫の最中、一人の少年が刈り取り人たちの間で束を拾っていたところ、蛇に噛まれて亡くなってしまった。　両親は息子の死を嘆き悲しみながら、埋葬のために、聖ヴァッシアンによって新たに建設された　、聖使徒たちの栄光と誉れを称える教会へと彼を運んだ。その時、偶然にも神の司教ヴァッシアン自身もその場にいた。彼はしばしばこの教会を訪れ、そこで礼拝を執り行っていた。　通常の葬儀カノンの歌声が響く中、少年を悼む両親の泣き声が、聖歌隊の声を覆い隠すほどになった。神の司教は、泣き悲しむ両親を憐れみ、皆に教会から退出するよう命じた。その後、一人残って、涙を流しながら神の御前にひれ伏し、主が少年の魂を肉体に戻してくださるよう懇願した。聖人の祈りの最中、亡くなった少年の遺体は、最初はわずかに、やがてますます激しく動き始めた。聖人は祈りを終えて立ち上がり、少年の手を取り、起き上がるよう命じた。　少年は、まるで眠りから覚めたかのように目を開き、母親を呼ぶと立ち上がった。教会の外にいた両親や人々は、少年の声を聞くと、喜びのあまりその場に留まることができず、すぐに教会の扉を開けて聖堂の中へ駆け込んだ。　死からよみがえった少年を見て、皆は驚き、畏敬の念を抱き、聖人の足元にひれ伏して、喜びのうちにその手と衣に口づけをした。聖人は、全能の神に感謝を捧げ、説教を述べた後、皆を平安のうちに送り出した。

それから数年が経った後、キリストの聖人アンブロシウスが死の淵に瀕する病に倒れた。神の司教ヴァッシアンは、愛する者、聖霊、父であり友である彼の病を知ると、急いでメディオランへ赴き、病床の彼を見舞った。　そこで、病床にあるアンブロシウスを見て、彼はその傍らに留まり、彼に仕え、共に祈り、キリストへの希望をもって彼を慰めた。

聖アンブロシウスにはある幻が見えました。それは、主イエス・キリストが明るい御顔で彼のもとへ歩み寄り、親しげに微笑みかけている姿でした。

聖アンブロシウスは、その傍らにいた聖ヴァッシアンにこの幻視について語った。するとヴァッシアンは、聖アンブロシウスの最期の時が近づいていることを悟り、泣きつつも喜び始めた。　彼は、聖なる人が、彼を呼び寄せているキリストのもとへ旅立とうとしていることを喜び、一方で、こ

[4279] コマナという都市は、小アジア北東部のポンテ属州に位置していた。現在、この都市があった場所にはグメネクという集落がある。

の世の生活において親愛なる友を失うことを悲しんで泣いた。しかし、彼はキリストに対して、来世でキリストと再会し、故人と共に聖職者の列に加わるという確固たる希望を抱いていた。

聖アンブロシウスの死後、ヴァッシアンとメディオランのすべての住民は聖人を悼み、その聖なる遺体を尊厳をもって埋葬した。　その後、ヴァッシアンは自分の街へと戻り、アンブロシウスの安息を祈る祈りと共に、主の前に無血のいけにえを捧げ続けた。彼は、アンブロシウスの魂が聖人たちと共に安らぎを得ていると確信していたが、聖人たちへの祈りや無血のいけにえが実を結ばないことは決してないからである。　もし聖人への祈りが何らかの形でその人に役立つことができないとしても、その祈りは祈る者の内へと戻り、その者に益をもたらすのである。ダビデが言うように、「*わたしの祈りは、わたしの内へと戻った*」（詩編34:13）。

かなり長い時間が経った後、聖ヴァッシアンは再び教会の用事でメディオランへ向かわなければならなかった。街に入ると、彼は広場で、天秤に様々な商品を載せている秤屋を見かけた。この秤屋は不義な者で、多くの人を騙し、それによって利益を得ようとしていた。　聖人は、天秤の上で、小さなエチオピア人の姿をした悪魔が天秤を片方に傾けているのを見ました。不義な秤屋は、そのことを利用していたのです。聖人は同行者たちに尋ねました。「何か奇妙なものは見えますか？」　彼らは、特に何も見えないと答えました。そこで聖人は、確かな証しとなるよう、他の者たちの目も開かれ、自分が見たのと同じものが見えるようにと祈りました。　すると、確かに長老クレメントと助祭エルヴォニウスの霊的な目が開かれた。彼らは、神の司教が見たのと同じもの、すなわち、天秤の上に座り、秤量人の命令に従っている小さなエチオピア人の少年を見たのである。　彼らは聖人にその光景について語り、ダビデの言葉を裏付けた。*「人の子らは偽りである。もし彼らを天秤にかければ、そのすべてを合わせても、空虚よりも軽い」*（詩編61:10）。聖人は秤師を呼び寄せ、こう尋ねた。

「どのような不正な手段を用いて、重さを水増しし、商人たちを騙しているのか？」

「私は不正など一切行っていません」と秤屋は答え、自分の秤が正しいことを誓って確認した。

すると、聖人は天秤の上にいる地獄のエチオピア人を彼に指さし、こう言った。

「このエチオピア人はすぐにでもお前の体に入り込み、お前の肉体を打ち砕き、恐ろしい苦しみと共に、お前の魂を引きずり出すだろう。」

不義な秤量人は恐怖のあまり震え上がり、悔い改めの念を抱いて聖人の足元にひれ伏し、不正を改めることを誓った。聖人は聖書を用いて彼を諭し、不正で得た財産をすべて貧しい人々に施すよう命じた。その後、聖人は祈りによって秤から悪魔を追い払い、自らの道へと旅立った。

自分の町に戻ると、神の御心に適うこの聖人は、いつものように神への奉仕と信徒たちの世話に専念した。彼は司教の地位に五年間あり、生まれながらにして九十歳[4280] に達し、忠実に、誠実に仕えてきた主のもとへ安らかに旅立った。　忠実な羊たちは、彼自身が建立した使徒教会で、その牧者を敬意を込めて埋葬し、そのような父を失って深く嘆き悲しんだ。聖人は、西ではゴノリウス帝[4281] の治世に、東ではアルカディウスの息子テオドシウス帝[4282] の治世に、この世を去った。 生前もそうであったが、特にその死後、彼は奇跡を行う者であった。彼の棺からは、彼の聖なる祈りと、私たちの主イエス・キリストの恵みによって、病める者たちへの奇跡的な癒しがもたらされた。父と聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、主イエス・キリストに栄光と誉れが帰せられる。アーメン。

[4280] 聖ヴァッシアヌスの死は、409年頃であった。

[4281] ゴノリウス皇帝は395年から423年まで西ローマ帝国を統治した。

[4282] テオドシウス2世皇帝は、408年から450年まで東ローマ帝国を統治した。

聖テオファンの記念日。

記念日：6月10日

聖テオファンは異教徒の両親の間に生まれた。　青年期に達すると、ある娘と結婚したが、彼女はまもなく亡くなり、テオファンはキリストを信じ、洗礼を受けた。その後、すべてを捨てて、その町の近くにある小屋に籠もり、かなり長い間そこに住み、訪ねてくる人々に神の戒めを守ることと貞潔な生活を説いた。　ある娼婦が、その美しさによって多くの人を破滅させていることを知った聖テオファンは、隠遁生活から出て、明るい色の服を身にまとい、まるでその女性を自分のものにするかのように、父から9リットルの金をせがんだ。 その後、その娼婦のもとを訪れ、金を渡し、彼女に人生を改めるよう説得して、洗礼を授けた。　その後、聖テオファンは自分の小屋の近くに別の小屋を建て、そこでその女性を隠遁させた。そして、かつては罪の器であった彼女を聖霊の住まいとし、金は貧しい人々に配った。この二人は主の御心に適い、同じ日に天の御国へと旅立った[4283]。

聖殉教者ティモフェイ、プルス司教の記念日

6月10日の記念日

ヴィフィニア、フリギア、リディアの境界に位置するプルッセの町[4284]、オリンポス山[4285]の近くで、聖ティモテイが司教を務めていました。彼は清らかな生活と聖性により、神から奇跡を行う賜物を受けました。　ある時、彼は、キパリス（ヒノキ）の木の下の洞窟に住み着き、動物や人々に多大な害を及ぼしていた巨大な蛇を退治した。聖人は、神の祭壇で聖別されたパン（子羊）を覆う布をその蛇の口の中に投げ込むことで、この蛇を退治した。　またある時には、アリタという名の王を癒やしました。その王は重病に苦しみ、すでに死の門に近づいていたのです。同様に、ある王妃をも死の淵から生へと蘇らせただけでなく、偶像崇拝という闇から、真の信仰の光へと導きました。　さらに、聖ティモフェイは、神から授かった恵みによって、様々な病を癒やし、キリストの力によって他にも多くの奇跡を行った。　また、その説教によって、彼はすべての信徒を啓発し、多くの非信者をキリストへと導いた。キリストを拒み、偶像を崇拝し、神の教会に対して激しい迫害を繰り広げた皇帝ユリアヌス[4286]がローマの帝位につくと、 – そこで聖ティモフェイは、とりわけ熱心に神の御言葉を宣教する働きに励み、信者たちを励まし、異教徒たちの迷いを糾弾した。聖人のことを耳にした不敬虔な皇帝ユリアヌスは、彼を捕らえて自分の元へ連れてくるよう命じ、　その後、彼を牢獄に投獄した。　そこへ、聖人のもとには大勢の人々が集まり、聖人は彼らに真の神であるキリストについて説教した。ユリアヌスには、牢獄に閉じ込められたキリスト教の司教が、訪ねてくる人々に自らの信仰を教えているという報告がもたらされた。　そこでユリアヌスは、イエス・キリストの名について教えるなという命令を彼に送った。しかし、聖ティモテーオスは、不敬虔で不法な王の命令に従わず、恐れずに、キリスト教の司教としてふさわしい民への教えを続けました。　その後、皇帝ユリアヌスは、聖ティモフェイが依然として恐れを知らずにキリストについて説教し続けていることを再び知ると、激怒し、処刑人を送り込み、牢獄の中で聖人の首を刎ねさせた[4287]。聖殉教者が安らかに息を引き取った後、信者たちはその聖なる遺体を運び出し、尊厳をもって埋葬した。　その棺からは、

[4283] 聖テオファノスの没は4世紀後半のことである。

[4284] ビフィニア、フリギア、リディアは小アジアの地域である。

[4285] オリンポス山は小アジアの北東端、フリギア、ミジア、ビフィニアの境界に位置していた。

[4286] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

[4287] 聖ティモテオの死は4世紀後半に訪れた。

私たちの神キリストの栄光のために、様々な病気に対する数多くの奇跡的な癒しがもたらされた[4288]。

聖殉教者アレクサンドルとアントニナの殉教

記念日：6月10日

キリスト教徒に対するある迫害の際、迫害が始まってからかなりの時間が経過した後、多くのキリストを信じる者たちが様々な拷問の末に殺害された中、クロダムナという町出身の、アントニナという名のキリスト教徒の乙女が捕らえられ、残忍な統治者フィストのもとに連行された[4289]。彼女の敬虔で徳高い生涯ゆえに、主は彼女に殉教の業を成し遂げる栄誉を与え、悪しき悪魔を恥じさせ、打ち負かすことを許された。

アントニナが苛酷な統治者フィストの前に引き出されると、彼は多くの狡猾な言葉で彼女を誘惑し始め、こう言った。「アントニナ様、私はあなたという清らかで貞淑な乙女を、女神アルテミスの巫女にしよう[4290]。多くの贈り物と栄誉を与え、私の全財産の管理人にしよう」。

このフィストの提案に対し、聖アントニナは長い間何も答えなかったが、やがてこう言った。「なぜ私に虚しい贈り物を約束するのですか？　むしろ、フィストよ、あなた自身が私の富を私と分かち合い、私の主イエス・キリストへの信仰を通じて、永遠の祝福という宝を得られるようにしてください。」

「そんなことはあってはならない」とフィストは反論した。「あなたが言っているようなことなど、神々が私を守ってくださいますように。私が、十字架に釘付けにされ、そこで死んだような神――いや、むしろ『人間』を信じるようなことがあってはなりません！」

聖アントニナはこれに対し、フィストにこう答えた。

「私たちの主イエス・キリストが十字架に釘付けにされ、死後、墓に葬られたことを、私は隠しているわけではありません。しかし、私はまた、主が三日目に死者の中から復活し、今や御父なる神の右の座におられることも宣べ伝えています。それは、私たちの書物にこう記されているとおりです。*『主は私の主にこう言われた。　『わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足の台座の下に置くまで』』*（詩篇109:1）。

「お前の長々とした話はすべて偽りだ」とフィストは言った。「なぜ、私に服従し、我々の神々に犠牲を捧げて、この世にあるあらゆる恵みを享受することに同意しないのだ？

「私はそのような魂のない神々には拝まない」と聖なる乙女は答えた。「彼らは悪霊だからだ。私の主の律法にもこう記されている。*『諸国民の神々はすべて偶像であるが、天の主は創造された』*」（詩篇95:5）。

「よくもまあ、わが神々を悪魔などと呼ぶとは！」とフィストは叫んだ。

「ええ、私はそう呼ぶわ」と聖アントニナは答えた。「彼らには何の力もなく、あなたも彼らからは何の助けも得られないのだから。彼らは真に神ではなく、悪魔なのだ。」

聖アントニナのこの言葉に、フィストは激しい怒りに駆られ、彼女がこれほど大胆にならないよう、兵士たちに彼女の頬を激しく打つよう命じた。そして再び彼女に向かってこう言った。

[4288] 聖ティモテオの尊い遺骸は、コンスタンティノープルのメランデシオン門の近く（コンスタンティノープルの12区画のうちの一つ）に建てられた、彼にちなんで名付けられた教会に安置されていた。

[4289] クロダムヌスという都市は、小アジアのフラキア地方に位置していた。

[4290] アルテミス、あるいはディアナは、ギリシャ・ローマ神話の光と月の女神である。

「神々に誓って言うが、もしお前が王の命令に従わなければ、私はお前を最も残酷な拷問にかけた後、売春宿へ連行するよう命じ、それによってお前を最大の恥辱にさらすつもりだ。」　それゆえ、　、お前には三日の猶予を与える。私の命令を完全に拒むのか、それとも悔い改めて神々に犠牲を捧げるのか、よく考えよ。何しろ、お前たちと同じ信仰を持つ者たちの多くは、最初はお前と同じように振る舞っていたが、後に考えを改め、我々の神々を崇拝するようになったのだ。

すると、聖アントニナは統治者にこう言った。

「好きにしろ、不敬虔な拷問者よ！」

その後、聖女は四人の兵士に護送され、心には喜びを、顔には笑顔を浮かべて牢獄へと向かった。　一方、統治者は密かに牢屋の看守長を呼びつけ、聖女に何の危害も加えないよう命じ、優しい言葉でキリスト教の信仰を捨て、偶像に犠牲を捧げるよう説得するよう命じた。なぜなら、フィストは付け加えたが、キリスト教徒に信仰を捨てさせることは極めて困難だからである。　そして、牢獄の看守長が聖女を牢獄に閉じ込めると、彼女の元へやって来て、次のような言葉で説得し始めた。

「清らかな乙女アントニナよ、なぜ頑なに抵抗するのだ？　一体何のために、考えを改めようとしないのだ！　待ち受ける苦しみから逃れるために、我らの神々に犠牲を捧げよ。」

しかし、聖女は彼に何も答えなかったため、牢獄の看守は大変驚き、なぜ聖なる乙女が一言も返答しないのかと首をかしげた。一方、聖アントニナは地面にひざまずき、昼夜を問わず主なる神に祈りを捧げ、その間ずっと断食を続けていた。

聖アントニナが牢獄に閉じ込められてから三日が過ぎた頃、突然激しい雷鳴が轟いた。牢獄の錠前が壊れ、扉が勝手に開いた。すると、牢獄全体が強い光に照らされ、天から次のような声が聞こえてきた。

「立ちなさい、アントニナよ。食事をとって力を取り戻し、パンと水を口にしなさい。勇気を出し、不義な統治者フィスタを少しも恐れてはならない。なぜなら、わたしがあなたと共にあるからだ。」

聖女は祈りを終えると、こう言った。

「アーメン。」

それから、膝から立ち上がり、パンと水を口にし、少し眠るために横になった。

翌日、総督は裁判官の席に着き、こう言った。「あの生意気な女を私のところへ連れて来い。彼女の考えを確かめてやろう。」

兵士たちは総督の命令に従い、聖女を彼の元へ連れて行った。聖女が裁判へと連行される際、彼女は天を仰ぎ、祈りを捧げた。

「主よ、わが神よ、私に御心を成し遂げてくださることを感謝します。どうか、私が死ぬその瞬間まで、私を見捨てないでください。」

すると突然、天から声が響き渡った。

「恐れることなく、あなたの道を歩みなさい。わたしはあなたと共にあるから！」

聖女アントニナが、フィストが座する裁判の場に連れて行かれると、彼女は笑った。

フィストは、彼女が笑ったのを見て、こう尋ねた。

「なぜ笑ったのだ？」

聖女は彼にこう答えた。

「私が笑った理由をお教えしましょう。あなたが座っている玉座がまもなく崩れ落ち、あなたが滅びるのを私は見ているからです。だからこそ、私は笑ったのです。」

統治者は、彼女が自分を嘲笑しているのを見て、彼女を鞭で打つよう命じた。聖女は、霊的な目を天に向け、次のように祈った。　「主なる私の神よ、私のような堕落した罪深い者に、御自身の聖徒たちの運命を分かち合う恵みをお与えくださったことを感謝いたします。この不法者であり、無

実の血を流す者を、まもなく地獄の底へ突き落としてください。そうすれば、彼は自らの希望のすべてを託している偽りの神々の無力さを知るでしょう。」

そのような言葉を聞いた、人の血を渇望していた総督は、さらに激しい怒りに駆られ、兵士たちにこう言った。「この邪悪で厚かましい女は、我らの神々を冒涜するだけでなく、我々自身をも脅かしている。それゆえ、彼女を不道徳な家に連行し、汚しなさい。」

兵士たちは聖女を連れ出し、別の家へと連れて行った。聖アントニナは、その別室で一人きりになると、神に熱心に祈りを捧げた。その時、主の天使が、統治者の配下の兵士の一人、生後二十三歳のアレクサンドルという名の若者の前に現れた。天使は彼の前に現れると、こう言った。

「統治者のところへ行き、アントニナの元へ入ることを許してもらうよう伝えなさい。彼女の元へ行ったなら、あなたのマントを彼女に着せ、あの家から立ち去らせなさい。そうすれば、悪意に満ちた統治者に彼女を見破られることはないだろう。」

キリストの勇敢な戦士は、天使の命令に従い、統治者の元へ行き、こう懇願した。「アントニナの元へ入らせてください。もし私が彼女を説得できれば、彼女を解放してください。もし説得できなければ、彼女を好きに扱ってください。」

統治者はその願いを聞き入れ、彼に言った。「彼女に対して、お望みのままに振る舞ってよい。」そこでアレクサンドルは、聖なる乙女がいる部屋に入り、彼女の足元にひれ伏して、こう語りかけた。「主のしもべ、乙女アントニーナよ！　主は、あなたの処女性が守られることを（主が私に告げられた通りに）あなたに伝えるために、私を遣わされたのです」。

聖女は恐れおののいた。しかし、突然、部屋を強い光が照らし、ある声が聞こえてきた。「恐れるな、アントニナよ！　あなたをこの偉業へと招かれた方は寛大で、あまねく慈しみ深い方であり、このアレクサンドルをも同じ殉教の偉業へと招いておられる。彼のマントを身にまとい、頭を下げて顔を隠し、その姿のままここから出て行きなさい。そうすれば、統治者はその姿のあなたを認識できないだろう。私があなたを隠してやるから、彼はあなたを認識できないはずだ！」

そこで聖アントニナはアレクサンドロからそのマントを受け取り、それを身にまとい、頭を覆って家から出て行き、手振りで統治者に「お望みのままに」とでも言うように合図を送った。こうして、キリストの聖なる乙女は、山羊が罠を逃れるようにして、自らの道を歩み、救われたことを喜びながら去っていった。　一方、総督は、アレクサンドロスが家から出てきたのだと思い込み、さらに四人の兵士をアントニナのもとへ送り、こう命じた。「彼女のもとへ行き、好きに扱え。そして、彼女を辱めた後、外へ連れ出し、彼女に大きな恥をかかせてやれ。そうすれば、我々全員が彼女を嘲笑うことができる。」

兵士たちは統治者の命令に従い、その娘を辱めようと部屋に入ったが、彼女を見つけられず、アレクサンドル一人しか見当たらなかった。大いに驚いた彼らは彼に尋ねた。「あの女はどこだ？　なぜお前一人なのか？」

その後、彼らはアレクサンドロスを捕らえて統治者の元へ連れて行き、こう告げた。「あの部屋には彼一人しかおらず、その娘の姿はありませんでした。」

統治者もまた、この出来事に大いに驚き、アレクサンドルに問い詰めた。「不誠実で欺瞞に満ちた者よ、よくも我々を欺くなどという大胆なことをしたな。あの不貞な娼婦はどこにいるのだ？　お前は彼女を辱めた後、自分のマントを羽織らせて解放し、彼女を妻にしようとしたのだ。だが、そんなことは許されない。お前は私の怒りを免れることはできない。」

アレクサンドロスがこれに対して統治者に何も答えなかったため、統治者は長い間考え込んだ後、彼を苦痛を与えるために吊るし、容赦なく打ち据えるよう命じた。　統治者の命令が執行され、聖アレクサンドロスが殴打されている最中、統治者は再び彼に尋ねた。「お前が関係を持ったあの不義な女はどこにいる？」しかし、アレクサンドロスはまた何も答えず、ただ天を仰いでいた。

すると突然、天から声が聞こえ、統治者にこう告げた。

「残酷なフィストよ、なぜ無実の人を苦しめるのか？」

この声を聞いた統治者は、聖人への拷問を止めるよう命じ、殉教者を木から降ろして牢獄へ連行させ、聖女アントニナについては至る所で捜索するよう命じた。

五日が過ぎると、総督は再びアレクサンドルを裁判のために呼び出し、こう尋ねた。

「どうするつもりだ？ 神々に生贄を捧げるのか、それとも捧げないのか？」

聖アレクサンドルは総督にこう答えた。

「不敬で残酷な拷問者よ、私が自分の考えを変えることなどできるだろうか！」

「お前のところへ入っていたあの女はどこにいる？」とフィストは尋ねた。

「彼女がどこにいるのかは知りません」とアレクサンドルは答えた。

その間、彼らがそう話している最中、聖女アントニナのもとに主イエス・キリストご自身が現れ、こう言われた。

「勇気を出し、あの不義で残酷な統治者がいた場所へ行きなさい。」

そこで聖女は立ち上がり、恐れを知らずに統治者の前に現れて、彼にこう言った。

「不義で残酷なフィストよ、あなたが探しているのは私ではないか？　今、私自身があなたの前に現れた。あなたの力を恥じさせ、打ち砕くためだ。」

聖女を見たフィストは激しい怒りに駆られ、兵士たちに彼女を吊るし、激しく殴打し、こう問いただすよう命じた。

「お前は処女か、そうでないか？」

聖女は激しい殴打を受けても、一声のうめき声さえ漏らさなかった。やがて彼女が木から降ろされると、統治者自らが彼女に問いただした。彼女はまだ処女なのか、そうでないのかと。すると、聖なる殉教者は統治者にこう答えた。

「ああ、不敬で残酷な拷問者よ！私たちキリスト教徒は、あなたの不浄な欲望に決して屈服することはありません。なぜなら、主であり私たちの神は、その憐れみによって、私を清らかなまま守ってくださったからです。」

フィストは驚きながら彼女を見つめ、こう言った。

「もしお前がまだ処女なら、アレクサンドルと共にここへ来て、我らの神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前たちは無傷でいられるだろう。」

この統治者の提案に対し、キリストの聖なる殉教者アレクサンドルと処女アントニナは、まるで口を揃えて統治者にこう答えた。

「残酷なフィストよ、理性も力も持たないあなたの忌まわしい神々に、私たちを拝ませるために、あなたがどれほどの拷問を加えようとも、私たちを屈服させることはできない。」

聖なる殉教者たちのこの答えを聞いた統治者は、彼らの両手を切り落とすよう命じた。そこで、勇敢で高潔なキリストの戦士たちは、切り落とされるために両手を差し出し、こう言った。

「まず第一に、不敬で残酷な拷問者よ、いかなる拷問をもってしても、我らの敬虔な思いを打ち砕くことはできないと知れ――我らを好きに扱え！」

戦士たちは剣を抜き、聖なる殉教者たちの両手を切り落とした。しかし、彼らはまるで痛みを感じていないかのように主を賛美し、その後、統治者に向かってこう言った。

「残酷で最も卑劣な統治者よ！我々は、あなたが我々に与えた拷問を微塵も感じてはいない。しかし、我らが主――我々は主のしもべである――は、まもなくあなたを火のゲヘナに投げ込み、そこであなたは絶え間ない苦しみの中で永遠に苦しむことになるだろう。」

聖なる殉教者たちからのこのような非難に、統治者は激しい怒りに駆られ、深い穴を掘るよう命じた。そしてまず、聖なる殉教者たちを吊るし上げ、彼らが打撃による痛みを感じるようになるまで打ち続けるよう命じた。　また、穴には大量の薪や小枝を山のように積み上げ、穴の縁まで満たして、その中で聖なる殉教者たちを焼き殺すよう命じた。一方、聖なる殉教者たちは、残酷な殴打にも

かかわらず、まるで自分たちの体がそのような拷問を受けているのではないかのように、何の痛みも感じず、主イエス・キリストを賛美し続けた。　これを見た総督は、燃えるろうそくで彼らの肋骨を焼くという新たな拷問を加えるよう命じた。すると、聖なる殉教者アレクサンドルとアントニナは、大きな声で総督に向かって叫んだ。「不敬虔なフィストよ！　我らは、主イエス・キリストへの愛のためにこの苦難に耐えている。この一時的な人生の後、来世において天の御国で永遠の報いを受けると固く信じている。しかし、主であり我らの神は、無実の御僕たちをこれほど激しく苦しめるお前を、まもなく滅びに委ねられるだろう！」

フィストはこの言葉を聞くと、激しい怒りに駆られて家来たちにこう命じた。「穴の中にある薪に火をつけ、この者たちを一刻も早く火の中に投げ込め。」

統治者の命令が兵士たちによって実行されると、その残酷な拷問者は、聖なる殉教者たちに樹脂を浴びせ、炎が燃え盛る穴に投げ込むよう命じた。さらに、殉教者たちが完全に焼き尽くされ、その骨さえも灰となるよう、薪の上に乾いた樹脂をさらに載せるよう命じた。　処刑が執り行われると、総督はその穴を土で埋め尽くすよう命じ、「キリスト教徒の慣習のように、彼らの妻たちが遺骨を集めることができないようにせよ！」と言った。

フィストの命令により、聖なる殉教者たちは火の中に投げ込まれ、その穴は土で埋められた。その後、フィストは自宅に戻ったが、食事も飲み物も口にすることができず、声も出せなくなってしまった。それは、聖なる天使たちによって彼に送り込まれた悪霊が、七日間も彼を苦しめたからである。　こうして、七日間にわたる悪魔による激しい苦しみの後、その統治者はその不敬虔な魂を吐き出した。　こうして彼は息を引き取り、その地におけるキリスト教徒への迫害は終焉を迎えた。聖殉教者アレクサンドロスとアントニナの祝福された最期は、5月 日[4291] の土曜日、午後9時に訪れた。これは、永遠に栄光と誉れが捧げられる我らの主イエス・キリストの御支配のもとでのことである。アーメン。

6月24日

6月11日（旧暦）

聖使徒バルトロマイの生涯と受難

記念日：6月11日

聖使徒バルトロマイは、キリストの十二使徒の一人であった。　火の舌のような姿で使徒たちの上に降りた聖霊（使徒言行録1:13、2:1–4）を受け入れた後、聖バルトロマイは、使徒フィリポと共に、シリアと小アジアへ福音を宣教しに行くというくじを引き当てました。　そこで二人はその地へと向かい、時には共に宣教し、時には別々の都市へと分かれて行き、また時には再び合流し、イエス・キリストへの信仰を通じて人々を救いへと導いた。

小アジアで福音を宣べ伝えていた聖フィリッポスは、しばらくの間聖バルトロマイと離れ、リディアとミシアの野性的で反抗的な住民たちをキリストへと導いた[4292] 。 その頃、近隣の町々でキリ

[4291] 聖殉教者たちの殉教は313年5月3日にあったが、彼らの生涯に関する記述が6月10日の項に置かれているのは、プロローグにおいてその日付で記載されているためである。彼らの聖遺骨はその後、コンスタンティノープルに移され、マクシモス修道院に安置された。

[4292] リディアとミジアは、小アジア北西部の地域である。

ストを宣教していた聖バルトロマイは、主から聖フィリッポを助けに行くよう命じられた。彼に合流した聖バルトロマイは、聖フィリッポと共に心を一つにして、使徒としての働きと偉業に励んだ。フィリッポスの後には、彼の妹である処女マリアムナも従い、彼らは皆で人類の救いの業に奉仕するようになった。　シリアやミシアの町々を巡り、神の御言葉を宣べ伝える中で、彼らは不信仰者たちから多くの迫害、殴打、苦難に遭い、牢獄に閉じ込められ、石打ちの刑に処されましたが、あらゆる迫害にもかかわらず、神の恵みによって、キリストの信仰を広めるという今後の働きのために生き延びました。

リディアの村の一つで、彼らはキリストの愛する弟子である聖ヨハネ・テオロゴスと出会い、彼と共にフリギア地方へと向かった。イェラポリス[4293]という町に入ると、彼らはそこでキリストを宣教した。この町は偶像であふれており、住民全員がそれらを崇拝していた。他の偽りの神々の中でも、そこには巨大なエヒドナ[4294]がおり、そのために特別な神殿が建てられていた。そこへ食物が捧げられ、数多くの多様な生贄が捧げられていた。狂信者たちは、他の爬虫類やエヒドナも同様に崇拝していた。聖フィリッポスはまず、妹と共に祈りを武器としてエヒドナに立ち向かい、当時彼らと共にいた聖ヨハネ・テオロゴスもこれを助けた。　彼らは皆、祈りをあたかも槍のように用いて、そのエヒドナを打ち負かし、キリストの力によってそれを滅ぼした。その後、神学者ヨハネは彼らと別れ、神の言葉を宣教するためにイェラポールを彼らに委ね、自身は他の都市へと向かい、至る所で聖なる福音を広めた。　一方、聖フィリッポスはバルトロマイとマリアムナと共にイェラポールに残り、迷える者たちに真理を知る光が輝くよう、偶像崇拝の闇を打ち砕くことに熱心に努めた。　彼らは昼夜を問わずこのことに尽力し、未信者に神の言葉を教え、無知な者を啓発し、迷える者を真の道へと導いた。

その町には、スタキウスという名の男が住んでおり、彼はすでに四十年間、盲目であった。聖なる使徒たちは、祈りの力によって彼の肉体の目を開かせ、キリストの説教によって彼の魂の　盲目さを照らし出した。　スタキオスに洗礼を授けた後、聖使徒たちは彼の家に滞在した。すると、盲人だったスタキオスが目が見えるようになったという噂が街中に広まった。彼の家には大勢の人々が集まり始めた。　聖なる使徒たちは、自分たちの元へ集まってくるすべての人々に、キリスト・イエスへの信仰を説いた。そこには多くの病人も運ばれてきたが、聖なる使徒たちは皆を祈りによって癒やし、悪霊を追い出した。その結果、大勢の人々がキリストを信じ、洗礼を受けた。

その町の長官ニカノラの妻は、蛇に噛まれて病に伏し、死の淵にありました。スタキオの家にいる聖なる使徒たちが、一言であらゆる病を癒やすと聞き、夫の不在中に使用人たちに命じて自分を彼らのところへ運ばせ、二つの癒やしを受けました。　肉体的な癒やし――蛇に噛まれた傷からの回復――と、精神的な癒やし――悪魔の惑わしからの解放――である。というのも、聖なる使徒たちから教えを受け、彼女はキリストを信じるようになったからである。市長が帰宅すると、奴隷たちは、スタキオの家に滞在している見知らぬ外国人たちから、妻がキリストを信じるよう教えられたと彼に伝えた。　激しく怒ったニカノールは、直ちに使徒たちを捕らえ、スタキオスの家を焼き払うよう命じた――そしてその命令は実行された。　大勢の群衆が集まり、聖なる使徒フィリポとバルトロマイ、そして聖女マリアムナは、殴打されながら街中を引き回され、侮辱された末、ついに牢獄に投げ込まれた。　その後、都市の長官は裁判官の席に着き、キリストの宣教者たちを裁こうとした。すると、偶像を崇めるすべての祭司たちと、滅びたエヒドナの祭司たちが彼の元に集まり、聖なる使徒たちに対する告発を申し立て、こう言った。「長官よ！　我らの神々への冒涜に報復してください。この

[4293] イェラポリス（ギリシャ語で「聖なる都市」の意）は、小アジアのフリギア地方に位置していた。イェラポリスにはかつて、325年の第1回全地公会議に出席した司教がいた。現在、ここには廃墟しか残っておらず、この場所はハンセン病患者の避難所となっている。

[4294] エキドナ――サジェニ以上の大きさを持つ毒蛇であり、その咬傷は非常に危険で、ほとんどの場合、即死に至る。

異邦人たちが現れて以来、我らの町では偉大なる神々の祭壇が荒れ果て、民は彼らに恒例の生け贄を捧げることを忘れ、我らの名高い女神エヒドナは滅び、町全体が不法に満ちてしまいました。この魔術師たちを殺しなさい！」

そこで、町の長は、聖フィリッポの衣服に魔術の呪文が込められていると思い、それを脱がせるよう命じたが、衣服を脱がせても何も見つからなかった。聖バルトロマイに対しても同様に扱ったが、彼の衣服からも何も見つからなかった。　彼らが同じ意図でマリアムネに近づき、衣服を脱がせてその処女の体をさらそうとしたとき、突然、彼女の姿は彼らの目の前で炎へと変わり、不信心者たちは恐怖に駆られて彼女から逃げ去った。聖なる使徒たちは、総督によって磔刑に処される判決を受けた。

最初に苦難に遭ったのは聖フィリッポであった。拷問者たちは彼の両足の足首に穴を開け、そこに縄を通すと、エヒドナの神殿の扉の前で、彼を逆さ吊りにして十字架に磔にし、同時に石を投げつけた。その後、彼らは聖バルトロマイを神殿の壁際に磔にした。　すると突然、大地震が起こった。大地が裂け、総督とすべての祭司、そして多くの不信仰者たちを飲み込んだ。　生き残った者たち――信者も異教徒も――は深い恐怖に襲われ、泣き叫びながら聖なる使徒たちに憐れみを乞い、唯一真の神に、自分たちもあの人々と同じように大地に飲み込まれないよう懇願した。人々は急いで、十字架に架けられた使徒たちを降ろそうと駆け寄った。　聖バルトロマイはそれほど高い位置に吊るされていなかったため、すぐに降ろされた。しかし、フィリッポはすぐに十字架から降ろすことができなかった。それは、彼が高く吊るされていたからであり、とりわけ、神の特別な御心によるものだったからである。すなわち、この使徒がこれらの苦しみと十字架の死を通じて、生涯その歩みを向けていた天へと、この地から移されるためであった。　そのように吊られたまま、聖フィリッポは敵たちのために神に祈り、主が彼らの罪を赦し、真理を知るよう彼らの心を照らしてくださるよう願った。主はその祈りに耳を傾け、直ちに大地に命じて、大地に飲み込まれた犠牲者たちを生き返らせた。ただし、その都市の長とエヒドナの祭司たちは例外であった。　すると、皆が大きな声でキリストの御力を告白し、賛美し、洗礼を受けたいと願った。聖フィリッポを十字架から降ろそうとしたとき、彼はすでにその聖なる魂を神に委ねていたことが分かり、死体となって降ろされた。　実の妹である聖マリアムナは、兄フィリッポスの苦しみと死をずっと見守っていたが、木から降ろされた彼の遺体を愛を込めて抱きしめ、額に口づけをし、フィリッポスがキリストのために苦難を受ける栄誉に浴したことを喜んだ[4295]。聖バルトロマイは、主を信じたすべての人々に洗礼を授け、スタキオを彼らの司教に任命した。新たに改宗した人々は、聖使徒フィリッポの遺体を尊厳をもって埋葬した。　聖使徒の血が流れたその場所に、三日後にブドウの木が生え、これは聖フィリッポがキリストの御名のために流した血により、御国の主と共に永遠の至福を享受していることのしるしであった。

使徒フィリッポの埋葬後、聖バルトロマイと聖女マリアムナは、新たに設立された教会をキリストの信仰において確固たるものにするため、イェラポリスに数日間留まり、その後、それぞれ自分の道へと旅立った。　聖マリアムナはリカオニアへと向かい、そこで、神の御言葉の宣教が成功を収める中（ ）、安らかに主のもとへ召された（[4296]）。一方、聖使徒バルトロマイはインド諸国へと向かい、そこでかなり長い期間滞在し、イエス・キリストの福音を宣べ伝えることに尽力し、町や村を巡り、その御名によって病人を癒やした。説教によって多くの異教徒を啓蒙し、教会を設立した後、彼は持ち歩いていたマタイによる福音書を彼らの言語に翻訳し、彼らに手渡した。また、彼はヘブライ語で書かれた福音書を彼らのもとに残したが、それは百年が経過した後、キリスト教の哲学者パン

[4295] 聖使徒フィリッポス（12使徒の一人）の記念日は11月14日
[4296] 聖マリアムナの記念日は2月17日に祝われる

テノスによってアレクサンドリアへ持ち込まれた[4297] 。インドから、聖バルトロマイは大アルメニアへと向かった[4298] 。 彼がここに現れると、偶像、あるいはむしろ偶像に宿っていた悪霊たちは、バルトロマイが彼らを苦しめ、まもなく追い出すだろうという最後の言葉を大声で叫んだ後、沈黙した。そして実際、使徒が近づくだけで、偶像だけでなく人々からも不浄な霊が追い出され、そのおかげで多くの人々がキリストに帰依した。

その国の王ポリミオスには、悪霊に取りつかれた娘がおり、その口を通して悪霊はこう叫んだ。「バルトロマイよ、ここからも私たちを追い出すのか！」

王はこれを聞くと、直ちにバルトロマイを探し出すよう命じた。そして、キリストの使徒が憑依された娘のもとに来ると、悪霊はたちまち彼女から逃げ去り、王女は癒やされた。 その後、王は聖人に感謝の意を表そうと、金、銀、真珠、その他の貴重な贈り物を積んだラクダを彼のもとへ送った。しかし、霊的な貧しさ（マタイ5:3参照）に満ちていた使徒は、送られてきたものの何も手元に残さず、すべてを王のもとへ返送し、次のように述べた。 「私はこうした物を求めるのではなく、人の魂を求めている。もしそれらを得て天の都へと導くことができれば、主の御前で偉大な商人となるだろう」。

ポリミオス王は、このような言葉に心を打たれ、家族全員と共にキリストを信じ、王妃や癒やされた娘、そして多くの高官や民衆と共に、聖なる使徒自身から洗礼を受けた。当時、王の模範に倣って、十以上の都市で聖なる洗礼が授けられたのである。

これを見た偶像崇拝の祭司たちは、聖なる使徒に対して激怒し、自分たちの神々が滅ぼされ、偶像崇拝が消え去り、生計の糧を得ていた神殿が荒廃していくことを深く嘆いた。 彼らは王の兄弟であるアスティアゴスに近づき、バルトロマイを殺害し、彼らの神々への侮辱に対する復讐を果たすようそそのかした。アスティアゴスは好機を捉えると、聖使徒を捕らえ、アルバネの町[4299] で、頭を下にした状態で十字架に磔にした。 しかし、聖なる使徒はキリストのために喜んで苦難を受け入れ、十字架に吊るされたまま、神の御言葉を宣べ伝えることをやめなかった。彼は信者たちの信仰を強め、不信者たちには真理を知り、悪魔の闇からキリストの光へと立ち返るよう諭した。 この言葉を聞くに耐えかねた拷問者は、使徒の皮を剥ぐよう命じたが、聖人は大きな忍耐をもってこれらの苦しみを受け止め、沈黙することなく、すべての人に神について教え、神に賛美を捧げ続けた。 ついに、拷問官は、皮膚とともに聖バルトロメオの首も切り落とすよう命じた。その時、神を讃えるその口は沈黙したが、首が切り落とされた後も、その体は十字架に吊るされたままであり、両足は上を向いており、あたかも使徒が天へと向かう姿を表しているかのようであった。 こうして、キリストの使徒バルトロメオは、多くの病と苦難を経て、痛みのない安息へと移り、その主の喜びの中へと旅立ったのである。[4300] 。 聖使徒の臨終に立ち会った信者たちは、十字架からその遺体、頭部、そして皮を取り下ろし、それらを錫製の棺に納め、大アルメニアのアルバネという同じ町で埋葬した[4301] 。 そし

4297 パンテノス（3世紀に活躍）は、多くの教父たちがキリスト教教育を受けたアレクサンドリア学派の著名な教師の一人である。

4298 大アルメニア――クーラ川とティグリス川・ユーフラテス川の上流の間に位置する山岳地帯。この地域は、ユーフラテス川とガラサ川の上流の間に位置し、ポンティウス・ミトリダテス王国の領土であった「小アルメニア」と対比して「大アルメニア」と呼ばれた。西暦70年からは、ローマ帝国の領土となった。

4299 アルバン（またはアルバノポリス、アバルノポリスとも）は、カスピ海西岸に位置する都市であり、現在のバクーにあたる。

4300 聖使徒バルトロマイは、西暦71年に死去した。

4301 この場合、聖ディミトリ・ロストフスキーの伝記の著者は、誤ってアルバンの街を「大アルメニア」の領土に位置づけている。 使徒バルトロマイが殉教した場所であるアルバン（現在のバクー）は、歴史上、大アルメニアの一部を構成する領土に属したことは一度もなく、その名称が示す通り、コーカサス・アルバニアの都市であった。――*『信仰のABC』の注記。*

て、使徒の聖遺物からは病める者たちへの奇跡的な癒しがもたらされ、そのおかげで多くの異教徒がキリストの教会へと改宗した。

それからかなり長い時間が経った後、その国を支配していた残忍な迫害者たちは、偶像崇拝に溺れ、他者から聞いたり自ら目撃したりした聖人の遺骸から起こる奇跡を、神の力を認めようとはせず、その聖なる遺骸を錫の棺に収めて海に投げ込んだ。　その錫の聖遺物箱は、まるで軽やかな小舟のように水面を漂い、リパロ島に漂着した。[4302] 現地の司教アガフォンは、夢の啓示によって聖人の聖遺物が彼らの島に漂着したことを知ると、聖職者たちや民衆全員を率いて海岸へと向かった。　聖使徒の聖遺物を目の当たりにした司教と集まった人々は皆、錫製の聖遺物箱が水に沈むことなく、小舟よりも軽やかにこれほど遠い海の旅路を漂ってきたことに深く驚嘆した。　そして皆、これほど驚くべき奇跡的な御業をなされる神を賛美した。聖遺物が入った聖櫃を受け取ると、彼らは大きな喜びのうちに、詩篇を歌いながらそれを自分たちの教会へと運び込んだ[4303]。

また、聖ヨセフ・ペスノピストの伝記に記されている、聖使徒バルトロマイに関する次の逸話についても触れておくべきでしょう。

ある時、テッサリアに滞在していた聖ヨセフは、知人であるある徳の高い人物から、聖使徒バルトロマイの聖遺物の一部を授かった。　それをコンスタンティノープル近郊にある自身の修道院に持ち帰り、そこで聖使徒バルトロマイの名を冠した特別な教会を建立すると、ヨセフは聖使徒の聖遺物の一部をその教会に尊く安置した。　聖使徒に対する深い愛と信仰を抱いていた彼は、しばしば夢の中で聖使徒の姿を見る恵みにあずかり、それゆえに聖使徒の祝祭日を賛美の聖歌で飾りたいと願ったが、　しかし、この行いが聖使徒の御心に適うかどうか疑念を抱き、実行に踏み切れなかった。そこで彼は、神と神の使徒に対し、この件について啓示を与え、聖バルトロマイにふさわしい賛美の詩を創作するための天からの英知を授けてくださるよう、熱心に祈り求めた。　尊者ヨセフは断食と涙をもって四十日間祈り続け、使徒の記念日が近づいた祝祭の前夜、祭壇に白い衣をまとった聖バルトロマイが現れ、祭壇の幕を開けて彼を自分の方へ招いているのを見た。　そこで、聖ヨセフが近づくと、聖使徒は玉座から聖福音書を取り、それをヨセフの胸に置きながら、こう言った。　「全能の神の右の手があなたを祝福し、天の知恵の水があなたの舌に注がれますように。あなたの心が聖霊の宮となり、あなたの賛美歌が全宇宙を喜ばせますように」。

聖使徒バルトロマイはそう告げると姿を消し、尊者ヨセフは自らの内に知恵の恵みを感じ取り、言葉に尽くせない喜びと感謝に満たされた。　それ以来、彼は教会の賛美歌やカノンを書き始め、それによって聖使徒バルトロメオの祝日だけでなく、多くの聖人の祝日も彩った。とりわけ、彼は数多くのカノンをもって、聖母マリアと聖ニコラオスを深く崇敬した。　彼は聖なる教会を賛美歌で豊かに飾り立てたため、「賛美歌作家」という称号を得た。これらすべてについて、私たちの救い主キリストに、父と聖霊とともに、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

バルトロマイは、フィリポがキリストのもとに連れてきたナタナエル（ヨハネ1:45）と同一人物であると考えている者もいる。すなわち、このキリストの使徒の名前はナタナエルであったが、通称、あるいはより正確には父の名に因んで、彼はバルトロマイ、すなわちフォロメオスの息子と呼ばれていたとされている。　というのも、「バル」という言葉はヘブライ語で「息子」を意味し、他の

[4302] リパラは、イタリアとシチリアの間に位置するゾリア諸島の一つである。

[4303] アナスタシウス帝の治世、508年頃、聖使徒バルトロメオの聖遺骨はアルバナからダリ（メソポタミア）の都市へと移された。 574年にペルシャ人がこの都市を制圧した際、ダリのキリスト教徒の一部は聖使徒バルトロメオの聖遺物を持ち出し、黒海の沿岸へと退避したが、そこで敵に追いつかれ、聖遺物は海に投げ込まれた。しかし、それらは沈むことなく、奇跡的にリパロ島へと漂着した。　その後、この島はアラブ人に占領され、使徒バルトロメオの聖遺骨は散逸してしまったが、奇跡的に再び一つに集められた。聖バルトロメオはある修道士に現れ、聖遺骨が見つかる場所を教えたのである。 その後、聖使徒の聖遺骨はナポリの都市ベネヴェントへ移送され（9世紀）、そこから（少なくとも聖遺骨の一部は）10世紀にローマへ移された。聖使徒の聖遺骨がリパルー島へ移されたことは、教会において8月25日に記念されている。

箇所でも主キリストが使徒ペトロに「*シモン、ヨナの子よ、あなたは幸いである*」（マタイ16:17）と語られたように、すなわち「ヨナの子」という意味だからである。また、エリコの盲人はバルティマイと呼ばれ、すなわち「ティメオの子」であった。　バルトロマイについても同様に解釈されており、彼は父の名に因んでバルトロマイ――フォロメエの息子――と呼ばれていたとされる。というのも、フォロメエはユダヤ人にとって古くからよく使われていた名前であったのに対し、バルトロマイの本来の名前はナタナエルであったと考えられているからである。この推測は、次のような根拠に基づいている。　まず第一に、福音書にはバルトロマイが使徒として召されたことについて、ナファナイルという名前をその代わりに見なさない限り、どこにも言及されていない。次に、最初の三人の福音書記者、すなわちマタイ、 マルコ、ルカの3人の福音書作家は、バルトロマイについて記述しているものの、ナタナエルについては何も触れていない。　一方、ナタナエルについて記述しているヨハネ福音書は、バルトロマイについては言及しておらず、復活した救い主の御出現時の漁の場面において、使徒たちに近かった人物の一人としてナタナエルを挙げている。具体的には、次のように記されている。「*シモン・ペトロ、トマス、ナタナエル、そしてゼベダイの子らが共にいた*」（ヨハネ21:2）。　しかし、この見解に同意しない解釈者もおり、プロローグに従って、シモン・ゼロテとナタナエルは同一人物であると考える者もいれば、ナタナエルはキリストの70人の弟子の一人であると考える者もいる。

コンダク、第4調:

あなたは、教えの輝きと恐るべき奇跡によって、全宇宙の偉大なる太陽として現れ、あなたを崇める者たちを光へと導く、主の使徒バルトロマイよ。

聖使徒バルナバの生涯と受難。

記念日：6月11日

聖使徒バルナバは、七十人の使徒の列に属しています。彼の本来の名前はヨセフでしたが、後にバルナバと呼ばれるようになりました。これについては、後ほど詳しく述べます。　彼はキプロス島[4304] で、レビ族の家系に属するユダヤ人の両親の間に生まれました。このレビ族の家系からは、モーセ、アロン、サムエルといった、神の古の偉大な預言者たちも輩出されました。

バルナバの先祖たちは、パレスチナで起こっていた戦争を理由に、パレスチナからキプロス島へと移住した。　彼の両親は非常に裕福で、エルサレムの近くに、果樹園や様々な果実が豊かに実り、大きな建物が建つ村を所有していた。そこには彼らの家があったからである。というのも、聖なる預言者イザヤが「彼らは家を建て、そこに住む。彼らは主から祝福された子孫となるからである」（イザヤ65:21–23）と記して以来、遠い国々に住んでいたユダヤ人たちは、この言葉の霊的な意味を理解することなく、エルサレムに自分たちの家を持つよう努めてきた。このため、バルナバの両親もまた、エルサレムの近くに自分たちの家と村を持っていたのである。

この物語の主人公が生まれたとき、両親は彼をヨセフと名付け、聖書の学びの中で育てた。少年が成人すると、彼らは彼をエルサレムへ送り、当時最も著名な教師ガマリエルのもとへ預けた。それは、バルナバがユダヤの書物と神の律法全体について、より深い理解を得られるようにするためであった。　そこでヨセフは、後にパウロと呼ばれることになるサウロを同級生の一人として迎え、二

[4304] キプロス島は地中海の北東端に位置していた。

人は共にガマリエルの教えを受け、知恵と聖書の理解、そして徳のある生活において目覚ましい進歩を遂げた。

ヨセフは毎日、朝と夕方にソロモンの神殿を訪れ、そこで熱心に神に祈りを捧げ、若き日々を頻繁な断食と厳格な節制の中で過ごした。　自身の純潔を守りたかった彼は、放蕩な若者たちとの付き合いを避け、若者の心を曇らせるような言葉を決して耳にしたがらず、自らを注意深く律しつつ、昼も夜も絶えず主の律法を学んでいた。

その頃、私たちの主イエス・キリストは、受肉から三十年を経て、世に御自身を現し始め、ガリラヤからやって来られた。そこで主は神殿で教えを説き、数多くの輝かしい奇跡を行われた。　人々は皆、主を驚嘆し、四方八方から主のもとに集まり、その聖なる御顔を見、蜜や蜂の巣よりも甘い神聖な御言葉を聞こうとした。若きヨセフもまた主を目にし、その至聖なる御口から発せられる教えに耳を傾け、心を打たれ、主が行われた奇跡に深く驚嘆した。羊の池のほとりで（ヨハネ5:1–15）、主が御言葉によって中風の人を癒やされるのを見、またキリストの他の多くの驚くべき御業を目撃したヨセフは、主への心の愛に燃え上がり、主のもとへ歩み寄って、主の御足元にひれ伏した；　その際、ヨセフは主に、自分を祝福し、御自身の弟子の一人として受け入れてくださるよう懇願した。人の心の奥底を見通しておられる主は、ヨセフの心が神への愛に燃えているのをご覧になり、親切に彼を祝福し、ご自身に従うことを禁じられませんでした。ヨセフはまず、マリアという名の叔母――後にマルコと呼ばれるヨハネの母――の家へ急ぎ、彼女にこう言いました。「　」「さあ、来て、私たちの先祖たちが切に待ち望んでいたお方をご覧になってください。ガリラヤのナザレ出身の預言者イエスという方が、神殿で教えを説き、偉大な奇跡を行っておられるのです。そのため、多くの人々が、その方を皆が待ち望んでいたメシアだと考えています。」

その女はこれを聞くやいなや、すぐにすべてを置き去りにして、急いで神殿へと向かった。そして、主イエス・キリストをお目にかかると、その御足元にひれ伏し、懇願してこう言った。「主よ！　もし私があなたの御前に恵みを得たのであれば、あなたのしもべの家にお入りください。そうして、あなたの御来訪によって、私の家の者たちすべてを祝福してください」。

彼女の信仰を見て、主は彼女の家に入り、彼女と家の中にいたすべての人々を祝福された。主はマリアによって、大きな敬意と多くの喜びと畏敬の念をもって迎えられた。それ以来、主はエルサレムに来られるたびに、弟子たちと共にマリアの家を訪れるようになった。

主がエルサレムからガリラヤへ戻られる際、ヨセフも他の弟子たちと共に主の後を追って行った。そして、主が御自分の使徒たちを*「イスラエルの家の迷い出た羊たち」*（マタイ10:6）と宣教に遣わそうとされたとき、その数が少ないことに気づかれ、*「収穫は多いが、働き手は少ない」*（マタイ9:37）と仰せになりました。このため、主は世にさらに七十人の弟子たちを現し、彼らを二人ずつ組にして、ご自身の先駆けとして各町や村へ遣わされました（ルカ10:1）。この主の七十人の弟子たちの中には、聖使徒たちによってバルナバ、すなわち「慰めの子」と改名された聖ヨセフが、最初期のひとりとしていました。それは、この世に到来したメシアについての説教を通じて、メシアの到来を熱心に待ち望んでいた人々を慰めたからです。ゼベダイの子らが「雷の子ら」（マルコ3:17）と呼ばれたように――彼らの説教が雷のように全宇宙に轟くはずだったから――、この聖ヨセフもまた「慰めの子」と呼ばれた。なぜなら、彼の使徒としての働きは、神に選ばれた者たちに大きな喜びをもたらすはずだったからである。　また、聖金口ヨハネは、彼の改名の理由をこのように説明し、次のように述べている（使徒行伝11:1–30）：「彼はその功績によってその名を与えられたのだと思う。なぜなら、（『慰めの子』となるために）彼は十分にその資質を備えていたからである」。

主が天に昇られた後、聖なる使徒たちは皆、エルサレムで共に暮らしていた。これは『使徒行伝』にも次のように記されている。*「信者たちの群れは、心を一つにし、魂を一つにしていた。また、だれも自分の持ち物を自分のものとは呼ばず、すべてを共有していた。　彼らの間には、困窮して*

いる者は一人もいなかった。というのも、土地や家屋を所有している者は皆、それを売り払い、その代金を使徒たちの足もとに置いたからである」（使徒行伝4:32–35）。 その頃、使徒バルナバと呼ばれた聖ヨセフも、エルサレムの近くにある、両親から相続した前述の村を売り、 その売却代金を、自分には何も残さず、使徒たちの足もとに捧げた。彼は神において富むことを望んでいたからであり、実際に神において富んだのである。これについては、*「彼は善良な人で、聖霊と信仰に満ちていた」*（使徒行伝11:24）と証しされている。 バルナバはしばしばサウロと顔を合わせ、聖書に基づいて主イエス・キリストについて彼と論じ合い、サウロを聖なる信仰へと導くために全力を尽くしたが、サウロは先祖代々の伝統を熱心に守る者であった。 そのため、彼は聖バルナバを惑わされた者として嘲り、さらには主イエス・キリストに対しても冒涜的な言葉を浴びせ、主を「大工の息子」であり、卑しい身分の者であり、恥辱の死を遂げた者だと呼んだ。 その後、ユダヤ人によって聖なる最初の殉教者ステファノが殺害されると、サウロは教会を迫害し始め、*「信者たちの家に入り込み、男女を引っ張り出して牢屋に閉じ込めた」*（使徒行伝8:3）、聖バルナバは彼を深く憐れみ、清らかな両手を天に掲げて神に熱心に祈り、サウロの心の目が開かれて真理を知ることができるようにと願った。彼は、ガマリエルの学堂でサウロを友としていたのと同様に、キリスト教の信仰においてサウロを友として迎えたいと強く望んでいたのである。

バルナバの涙と祈りは無駄にはならなかった。神の憐れみの時が訪れると、サウロはダマスカスへの道中で、天からの主の御声に招かれて、キリストに回心した[4305]。こうして、狼は羊へと変貌し、キリストの御名を冒涜していた者が、主イエス・キリストを賛美し始めた。 かつての迫害者は、教会の擁護者となった。というのも、聖なる洗礼を受けた後、サウロは直ちにユダヤ人の集会へと赴き、イエスについて宣教し始め、「彼は神の子である」と語り、またダマスカスに住むユダヤ人たちを非難したからである。 さて、サウロがエルサレムに戻ったとき、*「弟子たちの仲に加わろうとしたが、 、皆が彼を恐れ、彼が弟子だとは信じなかった」*（使徒言行録9:26）。 その時、聖バルナバは彼に出会い、こう言った。「サウロよ、いつまであなたは、イエス・キリストという偉大な御名を冒涜し、その忠実な僕たちを迫害し続けるつもりなのか。いつまで、古くから預言者たちによって予告され、今や私たちの救いのために成就した、この畏るべき神秘に逆らうつもりなのか。」

するとサウロは、彼の足元にひれ伏し、涙ながらにこう答えた。「真理の師よ、バルナバよ、どうか私をお赦しください！ 今、私は、あなたがキリストについて私に語ったことはすべて真実であると悟りました。かつて私が『大工の息子』と呼んで冒涜していたその方を、今や私は、父と同等であり、父と同一の起源を持つ、神の独り子であると告白します。*『この方は、父の栄光の輝きであり、その本質の像である』*（ヘブライ人への手紙1:3）、この終わりの日に*「ご自身を低くして、しもべの姿をとられた」*（フィリピの信徒への手紙2:7）、至高の御母マリアから生まれ、完全な人間となり、自ら進んで苦難と十字架を受け入れ、 その後、三日目に復活し、あなたがた、すなわち御使徒たちの前に現れ、天に昇り、父なる神の右の座に着いておられます。御自身は再び栄光のうちに再臨し、生ける者と死んだ者を裁き、御国には終わりがないのです」。

かつてはキリストを冒涜し迫害していた者からこのような言葉を聞いて、聖バルナバは驚いた。喜びの涙を流し、サウロを抱きしめて、こう言った。

「サウロよ、誰があなたに、このような神の霊に導かれた言葉を語るよう教えたのですか。誰があなたを説得して、ナザレのイエスを神の子として告白させたのですか。あなたはどこで、これほど完璧な神の教義の知識を学んだのですか。」

[4305] サウロの回心の経緯は『使徒行伝』9章1～19節に記されている。ダマスカスの街は、パレスチナの北東、アンチレバノンの東麓に位置している。

すると、サウロは涙を流し、心を砕かれてこう答えた。「私のような罪人が冒涜し、迫害していた主イエス・キリストご自身が、これらすべてを私に教えてくださったのです。主は、私のような忌み嫌われる者に現れてくださったからです。そして今なお、私は耳に主の神聖な御声を聞いています。　天から驚くべき光が私を照らし、恐怖のあまり地に倒れたとき、*『サウロ、サウロ！　なぜわたしを迫害するのか』*と言う声を聞きました。私は恐怖と戦慄に襲われ、こう言いました。

「主よ、あなたはどなたですか？」

すると、主は柔和さと慈愛をもって私に答えられた。*「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」*

その御忍耐に深く驚嘆し、祈りを捧げた後、私はこう言いました。

「主よ、私に何をなさりたいのですか？」

すると、主は私があなたに話したすべてのことを教えてくださった（使徒行伝9:3–6）。

この言葉を聞いた後、聖バルナバはサウロの手を取り、彼を使徒たちのところへ連れて行き、こう言った。

「ほら、かつて私たちを迫害していたこの人が、今や私たちの一員となった。かつて私たちに敵対していた者が、今や私たちと共に主について考えている。かつては私たちの敵であった者が、今や私たちの友であり、キリストのぶどう畑における共同労働者である。かつては獰猛な獣であったが、今や柔和な子羊となったこの人を、あなたがたに紹介する。」

その際、サウロは使徒たちに、道中で主をどのように見たか、そして主が彼に何を語られたかを語り、またダマスカスでキリストの御名のためにどのように奮闘したかについても語った。

使徒たちはこれを聞いて驚き、喜び、神を賛美した。そしてサウロは彼らと共にいた。彼は彼らと共にエルサレムに出入りし、キリストの御名のために奮闘し、ユダヤ人やギリシア人を勇敢に論じ立てた。　後者たちは、つい最近までイエスの御名を呼ぶ者たちを迫害していた男が、今や自らイエスを宣べ伝えていることに大いに驚き、彼を殺そうと企てた。　しかし、異教徒たちのこの企みを察知した兄弟たちは、サウロをエルサレムからカイサリアへ連れ出し、彼の故郷であるタルソス[4306]へ送り出し、そこで主イエス・キリストを宣べ伝えるようにした。

その頃、シリアのアンティオキアという、大きく栄えある都で、私たちの主イエス・キリストへの聖なる信仰が広まり始めた。　というのも、聖なる最初の殉教者ステパノが殺害されたその日、エルサレムの教会に対して激しい迫害が起こり、使徒たちを除いて、すべての信者たちがユダヤやサマリアの各地に散らされたからである。　その時、散らされた者たちの中には、*「フェニキア、キプロス、アンティオキアにまで*至り、*ユダヤ人以外には御言葉を宣べ伝えなかった」*（使徒11:19）者もいたが、その後、彼らはギリシャ人に対しても主イエスの福音を宣べ伝え始めた。　*「主の御手が彼らと共におり、多くの人々が信じて主に立ち返った」*（使徒11:21）。このことをエルサレムの教会が耳にしたため、使徒たちは聖バルナバをシリアのアンティオキアへ遣わし、そこで起こったすべてのことを詳しく調べさせ、新たに回心した者たちを で堅く立たせるようにした。 聖バルナバはそこへ赴き、神の恵みを目の当たりにして大いに喜び、主の御言葉をもって皆を慰め、主から決して離れないよう皆に勧めた。聖バルナバがそこで短期間説教している間に、非常に多くの人々が主に帰依した。　弟子たちは日ごとに増えていったが、教師は少なかったため、豊かな収穫に働き手が足りなかった。そこで聖バルナバは、しばらくアンティオキアを離れ、タルススへと向かい、そこで友であるサウロを見つけようとした。　彼を見つけると、アンティオキアへ連れ帰った。そして二人は共に、ユダヤ人やギリシア人をキリストへの信仰へと導き、人々の心をキリスト・神へと回心させるため

[4306] タルソスは、古代において小アジアのキリキア地方に位置していた大都市であった。この都市の遺構は現在も残っている。

に尽力した。彼らはアンティオキアに丸一年滞在し、神殿に集まって民を教え続けた。ここで初めて、彼らの弟子たちは「キリスト者」と呼ばれるようになった。

一年が過ぎると、バルナバとサウロは、アンティオキアで神の恵みがどのように働いたかを聖なる使徒たちに報告するために、エルサレムに戻ることを決めた。 その際、アンティオキアの住民は、それぞれの経済状況に応じて、バルナバとサウロと共に、ユダヤに住む同胞たち、特に貧しくなり困窮している者たちに必要な物資を送った。当時、聖アガブの預言通り、ユダヤには大飢饉が起きていたからである。このアガブもまた、七十人の使徒の一人であった[4307]。 十分な施しを集めたアンティオキアの信徒たちは、バルナバとサウロを通じて、それを長老たちに送った。

バルナバと、もはやパウロと呼ばれていたサウロがエルサレムに到着すると、彼らはアンティオキアにおける信者の増加を告げ、彼らからの惜しみない施しを携えてきたことで、教会を大いに喜ばせた。

その頃、エルサレムの教会では突然大きな動揺が起きた。というのも、*「ヘロデ王が教会の者たちの一部に手を下した」*（使徒12:1）上、*「ヨハネの兄弟であるゼベダイの子ヤコブを剣で殺した」*（使徒12:2）からである。そして、これがユダヤ人たちに好意的に受け止められたのを見て、ペトロを捕らえさせ、牢屋に閉じ込めたが、そこから使徒ペトロは聖なる天使によって連れ出された。エルサレムで迫害者たちによって教会に与えられた混乱が収まるまでの間、バルナバとサウロは、前述のバルナバの叔母マリアの家に身を隠していた。天使に牢屋から連れ出された後、聖ペトロも彼女の元を訪れた。 その後、バルナバとサウロはエルサレムでの務めを終えると、マリアの息子で、マルコと呼ばれていたヨハネを連れて、再びアンティオキアに戻った。 彼らが皆、アンティオキアで十分な期間を過ごし、断食と祈り、聖体礼儀の奉仕、そして神の御言葉の宣教に励んだ後、聖霊は彼らを異邦人への宣教に遣わすことを良しとされた。 聖霊は、アンティオキアにいた預言者たちと教師たちにこう言われた。*「わたしが彼らを召した働きのために、バルナバとサウロをわたしのもとに差し出せ。」そこで彼らは、断食と祈りを捧げ、彼らに手を置いて送り出した*（使徒13:2,3）。 彼らはまずセレウキア[4308] へ向かい、そこからキプロスへ船出し、サラミス[4309] に滞在した。彼らが通る先々で、彼らは神の言葉を宣べ伝えた。彼らには、前述のヨハネ――後にマルコと呼ばれた、マリアの息子――が従者として同行していた。 島を横断してパフォス[4310] に到着すると、彼らはアンフィパトス・セルギオスの元で、エリマという名のユダヤ人の偽預言者である魔術師に出会った。セルギオスは極めて聡明な人物であった。そこで彼らはアンフィパトスに聖なる信仰を説き明かし、彼らに反対した魔術師エリマを、御言葉によって盲目にした。 パフォスを出発して、彼らはパンフィリアのペルギアに到着した。彼らの従者ヨハネ、すなわちマルコは、キリストの御名の福音を宣べ伝えるために彼らが耐えていた大きな苦難（彼らは死を少しも恐れていなかったからである）を見て、若さゆえに彼らと共に旅することを恐れた。 そこで、彼らを置いて、エルサレムにある母のもとへ戻った。一方、バルナバとパウロはペルギアを通り過ぎ、ピシディアのアンティオキア（シリアの偉大なアンティオキアとは別の都市）に到着した。 そこから追放されると、彼らは足のほこりを払い落とし

[4307] 預言者アガブが予言した飢饉は、クラウディウス帝の治世下、44年にパレスチナで実際に発生した（使徒行伝11:28）。 当時パレスチナを襲った激しい飢饉については、ヨセフス、スウェトニウス、タキトゥスなど、当時の多くの世俗の著述家たちも証言している。その後、使徒パウロがカイサリアに滞在していた際、アガブは彼に対し、投獄されることについても予言した（使徒行伝21:10–11）。聖預言者アガブの記念日は、聖教会において4月8日に祝われる。

[4308] セレウキアは、シリアの地中海沿岸、オロンテス川の河口からほど近く、アンティオキアから25ヴェルスタ離れた場所にある海辺の都市である。この都市は、紀元前300年にシリア王セレウコス・ニカトルによって建設された。

[4309] サラミンという都市は、キプロス島の東側に位置していた。その遺跡はファマグスタの集落付近にあるとされる。

[4310] パフォスは、キプロス島のサラミンと対岸に位置していた。パフォスは島の主要都市であり、プロコンスルの居城でもあった。

、イコニオ[4311] に到着した。しかし、ここでもユダヤ人や異邦人たちは彼らを石打ちにしようとした。彼らはそれを知ると、急いでリカオニアの町々[4312] 、リストラ、デルベ、およびその周辺へと向かい、そこで福音を宣べ伝えた 。 そこで彼らは、生まれつき足の不自由で、一度も歩いたことのない一人の人を癒した。使徒たちは彼を立たせると、彼は完全に自由に歩けるようになった。 しかし、民衆は彼らを神々と見なし、彼らに犠牲を捧げようと企てた。その際、民衆はバルナバをゼウス[4313] 、パウロをヘルメス[4314] と呼び、聖なる使徒たちはかろうじて民衆を説得して、自分たちに犠牲を捧げないよう止めた。 その後、その民はユダヤ人たちからそそのかされ、聖なる使徒たちに対して反乱を起こした。民はパウロを石で打ち、彼が死んだと思い込んで町から引きずり出したが、パウロは立ち上がり、町に戻った。そして翌朝、パウロとバルナバは町を出て、デルベへと向かった。 この町で十分に福音を宣べ伝え、多くの人々をキリストへと導いた後、聖なる使徒たちは、同じ町や村々を経由して、シリアのアンティオキアへと帰路についた。 彼らは道中至る所で弟子たちの心を強め、信仰に留まるよう励まし、多くの苦難を経てこそ天の御国に入ることができると教えた。すべての教会に長老たちを按手し、断食を伴って祈りを捧げた後、彼らは弟子たちを、彼らが信じた主の御手に委ねた。
ペルギアに滞在し、そこで主の御言葉を宣べ伝えた後、使徒たちはそこからアッタリア[4315] へと向かい、その後、シリアのアンティオキアへと船出した。彼らはそこから、聖霊によって異邦人たちに主の御言葉を宣べ伝えるよう遣わされたのである。 その町に着くと、信者たち全員を集め、神が彼らと共に成し遂げられたこと、そしてどれほど多くの異邦人をキリストに導いたかを語り、アンティオキアにかなりの期間滞在した。

その直後、信仰を持ったユダヤ人とギリシャ人の間で、割礼をめぐる論争が巻き起こった。ユダヤ人の中には、モーセの律法に従って割礼を受けない者は救われないと主張する者たちがいたからである。一方、ギリシャ人信者たちは、割礼を自分たちにとって大きな負担だと考えていた。 バルナバとパウロはユダヤ人たちに反対し、ギリシャ系信徒たちを割礼から守った。しかし、この問題をめぐる論争と口論が収まらなかったため、バルナバとパウロは、割礼について尋ねるために、アンティオキアの教会から再びエルサレムへ赴き、使徒たちや長老たちに会う必要が生じた。 さらに、バルナバとパウロは、神が*「異邦人のために信仰の門を開かれた」*ことを使徒たちに告げ知らせる必要があった（使徒15:4）。（アンティオキア）教会から遣わされたバルナバとパウロは、フェニキアとサマリアを通り抜けながら、至る所で異邦人の回心について宣べ伝え、信者たちはこれを大いに喜んだ。

彼らがエルサレムに到着すると、聖なる使徒たちや長老たちから愛をもって迎えられた。皆は、神が彼らの手を通して異邦人の間でなされたすべての驚くべきしるしと奇跡について語ったバルナバとパウロの話を、喜びをもって聞いた。 また、割礼に関しては、使徒たちは共同で協議した末、新しい恵みの時代においては不必要であるとして、ギリシャ人だけでなくユダヤ人の信者たちに対しても、これを永久に廃止することを決定した。 これに伴い、使徒たちは、バルナバとパウロと共に、自分たちからも数人のクリスチャンをアンティオキアにいるギリシャ人信者たちのところへ派遣する必要があると判断した。この目的のために、兄弟たちの間で最も著名なユダ（バルサバと呼ばれる者）とシラを選び、次のように書き送った。 *「アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちへ、使徒たち、長老たち、そして兄弟たちより。喜びなさい。私たちのもとから出て行った*

[4311] イコニアは小アジアの都市である。現在のコンヤにあたる。
[4312] リカオニア——小アジアの地方。
[4313] ゼウス、あるいはユピテルは、ギリシャ・ローマ神話の最高神である。
[4314] ヘルメス、あるいはメルクリウスは、古代ギリシャ人やローマ人にとって、商業と工業の守護神とされていた。
[4315] アッタリアという都市は、小アジアのパンフィリア州にあり、ペルギア近郊、地中海沿岸からほど近い場所に位置していた。現在は、人口800人のアンタリという小さな町がある。

者たちが、割礼を受け、律法を守らなければならないと語り、あなたがたをその言葉で惑わせ、心を揺さぶったと聞いた。しかし、私たちは彼らにそのようなことを命じたわけではない。　そこで、私たちは集まり、満場一致で決定し、数名の者を選び、私たちの愛するバルナバとパウロ――主イエス・キリストの御名のために自らの命を捧げた人々――と共に、あなたがたのところへ遣わすことにした。そこで、私たちはユダとシラを遣わした。彼らは口頭でも同じことをあなたがたに説明するであろう。　なぜなら、聖霊と私たちとが、この必要なこと以外には、もはやあなたがたに何の重荷も負わせないことを望んでいるからです。すなわち、偶像に捧げられた物、血、絞め殺されたもの、不品行を避け、自分たちが望まないことを他人にしないことです。これらを守れば、あなたがたは善を行うことになります。ご健勝でありますように」（使徒15:23–29）。

このようなメッセージを携えて、聖なる使徒バルナバとパウロは、ユダとシラを伴い、エルサレムからアンティオキアへと旅立った。　その頃、前述のヨハネ、すなわちマルコと呼ばれる、バルナバの叔母マリアの息子は、聖パウロに近づくことを敢えてせず、叔父である聖バルナバのもとへ、悔い改めと涙をもって近づき、彼らが異邦人に福音を宣べ伝えていた時に自分たちが彼らから離れてしまったことを悔やんで言った。 ヨハネは、主のためにいかなる 苦難や死さえも恐れることなく受け入れると約束し、聖バルナバに再び自分を引き取ってほしいと懇願し始めた。バルナバは彼を甥として受け入れた。こうして皆は共にアンティオキアへとたどり着いた。使徒たちは信者たちを集め、彼らに手紙を手渡した。それを読んだ者たちは皆、大いに喜んだ。　一方、ユダとシラは、その言葉によって兄弟たちを慰め、主への信仰を確固たるものにした。しばらくして、ユダはエルサレムに戻ったが、シラはそこに留まり続けた。パウロとバルナバはアンティオキアに住み、他の人々に主の御言葉を教え、福音を宣べ伝えた。

それからしばらくして、パウロはバルナバに言った。「私たちは再び兄弟たちを訪ねるべきです。主の御名を宣べ伝えたすべての町を巡り、兄弟たちがどのように暮らしているかを確認しなければなりません。」

聖バルナバはこれに同意した。その際、バルナバは自分の甥であるヨハネ、通称マルコを同行させたいと考えたが、　しかし、パウロはこれを望まず、こう言った。「なぜ、以前パンフィリアで私たちを置き去りにし、私たちが遣わされた働きに同行することを拒み、私たちから離れて実家に戻ってしまった、あの臆病な若者を連れて行く必要があるのか？」

バルナバはヨハネを連れて行きたがり、パウロはそれを望まなかったため、二人の間で争いが生じた。そこで彼らは互いに別れ、それぞれが自分の道を進むことにした。

これらすべては、神の御心によって起こったことであり、彼らが別々の道を歩むことによって、より多くの魂を救うためであった。二人の偉大な教師が行こうとしていた場所に、一人の偉大な教師が説教するだけで十分であった。　しかし、それぞれが別々に宣教することで、教会にとって格段の恵みをもたらすことになった――一人はある国で、もう一人は別の国で、さまざまな民族をキリストの信仰へと導いたのである。聖パウロは聖シラを伴ってデルベとリストラへと向かい、聖バルナバは甥のヨハネと共にキプロスへと船出した[4316]。

故郷であるキプロス島に到着すると、聖バルナバは多大な労力を費やし、この地で多くの人々をキリストへと導いた。キプロスで信者の数を増やした後、バルナバはローマへと向かい、ある説に

[4316] 使徒行伝15:36–41、16:1。聖使徒バルナバは、キプロス島やその他の場所で宣教を行った後、再び聖使徒パウロに合流し、その宣教活動を共にしていたと推測する者もいる。　また、使徒パウロがティトスと共にコリント人へ遣わした兄弟こそがバルナバであり、使徒パウロの言葉によれば、その人は福音宣教のゆえにすべての教会で称賛されている（IIコリント8:18）とも考えられている。

よれば、ローマで初めてキリストを宣教した人物であるという。 その後、メディオランの町で[4317] 司教座を設立し確立すると、バルナバは再びキプロスに戻った。彼がここでキリストについて教えていた時、サラミスの町にシリアから来たユダヤ人たちが現れ、バルナバの説くことはすべて神とモーセの律法に反すると言い、彼に反対し、民を扇動し始めた。　これらのユダヤ人たちは、バルナバの名誉ある名を多くの冒涜の言葉で貶め、多くの人々を扇動して彼を殺害しようと企てた。　使徒は、自らの殉教の死を予見して、その町に住むすべての信徒を呼び集めた。信仰と善行について十分に教え、キリストの御名を告白する際に勇敢であるよう説き伏せた後、神聖な礼拝を執り行い、すべての者にキリストの聖餐を授けた。その後、同行者であるマルコを別室に呼び寄せ、彼にこう言った。　「今日、私は主が私に告げられたとおり、不信仰なユダヤ人たちの手によって死を受け、この世を去ることになる。あなたは、町の西側の外で見つける私の遺体を受け取り、それを葬り、私の友である使徒パウロのもとへ行き、私について知っていることをすべて彼に伝えなさい。」

聖バルナバは、自らの手で書き記したマタイによる福音書を携えていた。彼は聖マルコに対し、その福音書と共に自分を埋葬するよう遺言した。その後、親族である聖マルコに最後の口づけを贈ると、バルナバはユダヤ人の集まりへと向かった。　彼がそこで預言書の言葉に基づいてキリストについて語り始めると、シリアからやって来たユダヤ人たちは彼に反旗を翻し、他のユダヤ人たちをも扇動して、殺意に満ちた手を彼に伸ばし、彼を町の西側へと連れ出し、そこで石打ちの刑に処した。その後、焚き火を焚き、聖使徒の遺体をそこに投げ込んで焼却しようとした。　しかし、その後、聖マルコが他の兄弟たちと共に、誰にも知られずにこの地を訪れたとき、彼は聖使徒バルナバの遺体が無傷で、火による被害を全く受けていないのを見つけた。　その遺体を受け取ると、彼はそれを町から五スタディオン離れたある洞窟に埋葬し、使徒の遺言に従って、その胸の上に福音書『　』を置いた[4318] 。その後、彼は使徒パウロを探しに出かけ、エフェソスで彼を見つけると[4319] 、聖使徒バルナバの死についてすべてを語った。聖パウロはバルナバの死を悼み、マルコを自分のそばに留めた。

聖バルナバが殺害された後、サロミナではユダヤ人による信者たちへの激しい迫害が巻き起こった。そのため、人々は皆この町から逃げ出し、できる限り身を隠した。この時から、使徒バルナバの尊い遺骨が安置されていた場所は忘れ去られてしまった。　長い年月が経ち、キリストの信仰が地の果てまで広まり、ギリシャ・ローマ帝国がキリスト教の王たちによって統治され、キプロス島が敬虔さと正統な信仰に輝いていた頃、主は使徒バルナバの聖遺骨が安置されていたその場所を栄光に包むことを御心に適わせられた。その場所では、多くの驚くべき奇跡が起こり始めた。　まず最初に、その場所で一夜を明かしたある病人が、健康を取り戻しました。同じことが別の病人にも起こりました。　このことを信者たちが知ると、わざわざその場所を訪れ、そこで一夜を過ごし、それぞれの病から癒やされた。こうしてその場所は広く知られるようになり、多くの病弱者や麻痺した人々がここに連れてこられた。皆、ここで病から完全に癒やされ、健康な体で家路についた。　また、悪霊に取りつかれた者たちもここに連れて来られ、するとすぐに、汚れた霊たちは大声で叫びながら人々から逃げ去った。ここでは、足の不自由な者は歩けるようになり、盲人は目が見えるようになり、そもそもどのような病に苦しんでいようとも、誰もがここで癒やされた。　サラミナの住民たちは、このことを大いに喜んだ。とはいえ、なぜこの場所でこれほど偉大な奇跡が起こるのか、その理由は知らなかった。というのも、使徒たちの聖遺物について誰も何も知らなかったからである。そのため、その

[4317] メディオラン、あるいはミラノは、ロンバルディア州にあったイタリアの都市である。キリスト教会の歴史においては、4世紀に生きた西方教会の最も著名な教父であり教師である聖アンブロシウスの大司教としての活動の地として知られている。聖アンブロシウスの記念日は、聖教会において12月4日に祝われる。

[4318] 聖使徒バルナバの死は、紀元62年頃であった。

[4319] エフェソスは、スミルナとミレトスの間に位置する小アジアの都市で、カイストル川のほとり、同川がイカルス海に注ぐ地点の近くに位置する。

場所は「癒やしの地」と呼ばれるようになった。しかし、聖使徒の尊い聖遺物がどのようにして発見されたのかを知る必要がある。

ある邪悪な異端者、ペトロス・ベリニク（通称クナフェイ）は、ハルキドン[4320] で開催された第4回全地公会議[4321] に反対し、エウティケスの異端[4322] を擁護するとともに、アポリナリオスの迷信を助長した人物であり、ゼノン[4323] の治世において、 狡猾な手段でアンティオキア総主教座の座を奪い、その誤った教えによってキリストの教会に甚大な害をもたらした。しかし、彼は自分に割り当てられたアンティオキア教区に満足せず、そこでキリスト教徒を迫害し、多くの苦痛を与えた。 古来より自由であったキプロス島をも自らの支配下に置こうと望み、そこに自らの偽りの教えを広め、自分に反対する者すべてを迫害しようとした（なお、キプロス人は正統なキリスト教徒として、十字架上で神性が苦難を受けたという彼の誤った主張を拒絶していたことに留意すべきである）。

しかし、彼はあらゆる手段を尽くして彼らを味方につけようと努め、次のように語った。「神の言葉はアンティオキアからキプロスに伝わったのだから、その理由により、キプロスの教会はアンティオキア総主教に従わなければならない」。

こうした一連の出来事により、アンフィムという名のキプロス大司教は深い悲しみに沈んだ。というのも、彼は、そのペトロが王の寵愛を受けているため、望むことは何でも容易に成し遂げられることを知っていたからである。 そして実際、まもなくキプロスに王の命令が届き、キプロス大司教に対し、キプロス島をアンティオキア教区の管轄下に置くことを要求するアンティオキア総主教の前で、コンスタンティノープルで開催される公会議にて答弁を行うよう命じた。

大司教は、どうすべきか迷っていた。帝王の命令に背く勇気はなかったが、コンスタンティノープルへ行くことも恐れていた。彼は聖なる生活を送ってはいたものの、雄弁の才に恵まれておらず、 論争において敵に打ち負かされてしまうのではないかと恐れていた。 そこで彼は熱心に断食と祈りを始め、涙ながらに神ご自身から助けと守り、そして有益な助言を請い求めた。

ある夜、アンフィムが激しい祈りの労苦の末にうたた寝をしたとき、天の光に照らされた、明るい聖衣をまとったある神聖な人物が彼の前に現れた。 現れた人物は言った。「大司教よ、なぜそれほど悲しみ、嘆いているのか。恐れるな。あなたは敵たちから少しも害を受けることはないからだ」。

そう言うと、現れたその人物は突然、姿が見えなくなった。大司教は眠りから覚めると、恐怖に打ち震えた。その後、祈りのために十字架の形に地面にひれ伏し、多くの涙を流しながらこう祈り始めた。「主イエス・キリストよ、生ける神の御子よ！ あなたの教会を見捨てず、あなたの聖なる御名の栄光のために、教会を助けてください。もしこの幻があなたからのものであるなら、どうか私がもう一度、そして三度目もそれを見られるようにしてください。そうすれば、罪深い私が、あなた、私の助け主が私と共にいてくださることを、ついに確信することができるでしょう！」

[4320] ハルキドン、あるいはカルケドンは、もともとプロポンティス（大理石の海）の岸辺にあったメガラの植民地であった。キリスト教皇帝の治世下、ハルキドンは小アジアのビフィニア州の州都であった。

[4321] 第4回全地公会議は451年に開催され、コンスタンティノープルのアルヒマンドリト・エウティキオスの異端を糾弾するために招集された。彼は、イエス・キリストにおいて人間性は神性に完全に吸収されたと主張し、それゆえキリストには神性という単一の本性しか認めなかった。

[4322] ラオディキアの司教アポリナリウスは、神の御子が受肉した際、完全な人間性ではなく、人間の魂と肉体のみを受け入れ、その人間の知性は神性によって置き換えられたと、不当に説いた。 この異端は、381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議で非難された。

[4323] ゼノンは474年から491年まで在位した。

その翌夜、大司教は同じ幻を見ました。あの同じ輝かしい御方が彼に現れ、こう言われました。「私はすでにあなたに、敵から何の害も受けないと告げた。だから、何も恐れることなく、コンスタンティノープルへ行きなさい。」

そう言うと、現れたその人は姿を消した。

アンフィム大司教は、再び神に感謝を捧げ、見たことを誰にも告げることなく、祈りに祈りを重ね、涙に涙を流し、この幻視が三度目にも与えられ、現れた者が誰であるかが明らかにされるよう願った。

三夜目、同じ男が現れて言った。「いつまで、近い将来に実現する私の言葉を信じないつもりか。恐れることなく帝都へ行きなさい。そこから、敵に少しも傷つけられることなく、栄光のうちに帰ってくるだろう。神ご自身が、御自分のしもべである私のために、あなたの守り手となってくださるからだ」。

そこで大司教は、現れた者にこう尋ねた。「お願いです、主よ、私にこう語っているあなたは、いったいどなたなのですか？」

すると、その方はこう答えられた。「私はバルナバである。私たちの主イエス・キリストの弟子であり、聖霊によって、御自身の選ばれた器である聖使徒パウロと共に、異邦人への神の御言葉の宣教に遣わされた者だ。　また、あなたが私の言葉の真実性を確かめられるように、ここにしるしを授けよう。町の外へ出て、西へ五スタディオン進み、『癒やしの場所』と呼ばれる場所（そこでは、私のために神が病める者たちに奇跡的に癒やしを与えておられる）に行き、角の生える木の下の土を掘り返しなさい。　そこには洞窟と、私の遺骨が納められた聖櫃がある。また、聖なる福音書記者である使徒マタイの著作から私が書き写した、私自身の筆による福音書も見つかるだろう。　そして、この教会を自らの支配下に置こうとするあなたの敵たちが、『アンティオキアこそが使徒の座である』と言い始めたら、彼らに反論してこう言いなさい。『私の街もまた使徒の座である。なぜなら、私の街には、そこに眠る使徒がいるからだ』と。」

聖バルナバが大司教にこう告げると、たちまち姿が見えなくなった。大司教は大きな喜びに満たされ、神に深く感謝した後、聖職者たち、市の指導者たち、そして民衆全員を呼び集め、自分に三度現れた聖使徒バルナバの姿と、その言葉を皆に語った。　その後、賛美歌を歌いながら、尊い十字架を掲げてその場所へと向かった。指定された場所に到着すると、幻の中で使徒が告げた通り、木の下を掘り始めた。表土を掘り起こすと、石で塞がれた洞窟が見つかった。　石を取り除くと、聖骸箱が見え、偉大で言葉に尽くせない芳香を感じた。そして聖骸箱を開けると、その中には聖使徒バルナバの尊い遺骨が完全かつ無傷の状態で納められており、また、彼の胸の上に置かれた福音書も目にした[4324]。皆、大きな喜びと歓喜のうちに神に栄光を帰し、敬虔な心で尊い聖遺物にひれ伏し、信仰と愛をもってそれに触れた。この時、多くの奇跡が起こった。いかなる病に冒されていた者であれ、尊い聖遺物に触れた後、健康を取り戻したのである。　その後、アンフィム大司教は、その場所から使徒の聖遺物が入った聖櫃を持ち出すことを敢えてせず、それを錫で封印し、聖職者たちに聖櫃のそばに留まり、使徒の墓の前で昼夜を問わず通常の詩篇の詠唱を行うよう命じた。彼自身はコンスタンティノープルへと向かった。　を公会議に提出し、使徒バルナバから教えられた通りに、自身の敵対者たちに対して答弁した。皇帝ゼノンは、自身の治世の間にこれほど偉大な霊的宝物が発見されたことを大いに喜び、直ちに、キプロス島が総主教の管轄下にあるのではなく、独自の大司教によって統治されるよう命じた；　また、キプロスの大司教は、その管轄下の司教たちによって任命されるよう命じた。

このようにして、聖使徒バルナバの聖遺物のために、キプロス島には自由が与えられた。この時から、キプロスの主教座は、他の総主教座と同様に「使徒座」と呼ばれるようになった。また、キ

[4324] 聖使徒バルナバの尊い遺骸は、485年から488年の間に発見された。

プロスの大司教である福者アンフィムは、皇帝および全聖職者会議から多大な栄誉を授けられた。王は、使徒の胸元から発見された福音書を求め、それを受け取ると、金と宝石で装飾し、自身の教会の王室の部屋へと安置した。また、大司教には、使徒バルナバの尊い遺骨が発見されたまさにその場所に、美しい教会を建設するための多額の金を授けた。

こうして大司教は栄光と名誉を帯びて帰還し、まもなく使徒の名を冠した壮大で美しい教会を建立した。　聖使徒の尊い遺骨を聖なる祭壇の右側に安置し、キリストの栄光のために、聖使徒バルナバの記念日を6月の11日（その日に彼の尊い遺骨が発見された日）に祝うことを定めた。 父と聖霊と共に、今また永遠に賛美される、私たちの神の栄光のために。アーメン。

コンダク、第3調：

主のまことに真実な奉仕者であり、使徒たちの中では七十人のうちの一人目として現れた方よ。パウロと共に、救い主キリストをすべての人に宣べ伝える御説教を輝かせた。このゆえに、バルナバよ、我らは聖なる賛美をもって、あなたの神聖な記念を捧げる。

6月25日

6月12日（旧暦）

同日、1447年にノヴゴロドの奇跡行者、聖アルセニイ・コネフスキーが帰天した。

同日、1492年に尊者オヌフリー・マルスキーが帰天した。

同日は、15世紀末から16世紀初頭にかけて修道生活を送ったヴォロゴダ出身の聖オヌフリオスと聖アウクセンティオスの記念日である。

同日は、1561年に白海で溺死したペルトミンスクの聖ヴァッシアンと聖イオナの記念日である。

尊者オヌフリオ・ザ・グレートの生涯

記念日：6月12日

エジプトの隠遁修道院の一つで修行に励んだ聖パフヌティオス（[4325] ）は、砂漠で聖オヌフリオス大聖人および他の隠遁者たちと出会った経緯について、私たちに物語を残しています。彼はその物語を次のように始めています：

[4325] 「どのパフヌティオスという聖人が荒野で聖オヌフリオスと出会ったのか、正確には分からない」と聖ディミトリイ・ロストフスキーは述べている。なぜなら、教会史や『パテリコン』には、パフヌティオスという名の聖人が数人登場するからである。　また別のパフヌティウス――エジプトの地方の一つである山岳地帯フィヴァイダの大司教――は、不敬虔なローマ皇帝マクシミアヌス（305～311年）の時代に殉教し、その際、右目をえぐり取られた。　その後、偉大なるコンスタンティヌス帝（在位306–337年）の治世下、彼はニカイア（325年）で招集された第1回全地公会議に出席した。 聖なる教父たちが、司祭や助祭が妻を持たないことを法として定めたかったとき、彼は公会議の真ん中に立ち、大声でこう宣言した。「教会の奉仕者たちに重い負担やくびきを負わせないでください」。　そして、このパフヌティオスは、自身は母の胎内から処女であったにもかかわらず、この件に関してすべての聖なる父たちに非常に熱心に反対した。誰も彼に反論することができなかったため、この問題は各人の裁量に委ねられることとなった。それゆえ、東方教会の長老や助祭たちは、今に至るまで祝福された結婚を受け入れているのである。　このことについては、ギリシャの歴史家たち――ソクラテス（第1巻、第8章）、ソゾメン（第1巻、第22章）、ニキフォロス（第8巻、第19章）――が記している。このパフヌティウスの記念日は、ローマの聖人暦では9月11日に定められているが、 ロシアの聖人暦や『プロログ』においては、

ある日、私が自分の修道院で沈黙を守っていたとき、内なる荒野（[4326] ）へ行き、そこに私よりも主のために熱心に奉仕している修道士がいるかどうか確かめたいという願いが湧き上がりました。私は立ち上がり、少量のパンと水を携えて旅立ちました。誰にも何も告げずに自分の修道院を出て、最も奥深い荒野へと向かいました。　私は四日間、パンも水も口にせず歩き続け、四方を塞がれ、小さな窓が一つあるだけの洞窟にたどり着いた。私は一時間ほどその窓の前に立ち、修道者の慣習に従って、誰かが洞窟から出てきて、キリストの御名による挨拶を述べてくれることを期待していた。しかし、誰も私に何も話しかけず、扉も開けてくれなかったので、私は自ら扉を開けて中に入り、祝福の言葉を述べた。洞窟の中には、座ってまるで眠っているかのようなある老人がいた。　私は再び彼に祝福の言葉を述べ、彼を起こそうとして肩に触れたが、その体はまるで土の塵のようであった。手で触れてみると、彼がすでに何年も前に亡くなっていたことがわかった。壁に掛けられた衣服を見て、それに触れてみると、それは私の手の中で塵のようであった。　そこで私は自分のマントを脱ぎ、それを死者の体に掛け、それから自分の手で砂地の穴を掘り、いつものように詩篇を唱え、祈りを捧げ、涙を流しながら、その修行者の遺体を葬った。　その後、少しパンを口にし、水を飲んで力を取り戻し、その老人の墓のそばで一夜を明かした。

翌朝、祈りを捧げた後、私は内陸の砂漠へとさらに旅を続けた。数日間歩き続けると、別の洞窟に出くわした。その近くで人の叫び声を聞いたので、おそらくその洞窟には誰かが住んでいるのだろうと思った。　扉を叩いたが、返事がなかったため、洞窟の中に入った。しかし、そこには誰もいなかったので、外に出て、ここにはおそらく、この頃砂漠へ去った神の僕の一人が住んでいるのだろうと心の中で考えた。　私は、その神のしもべに会って、主について語り合いたいと願っていたため、この場所で彼を待つことにした。そして、一日中待ち続け、その間ずっとダビデの詩篇を歌い続けた。　その場所は私にとって非常に美しいものに思えた。そこには実をつけたナツメヤシが生え、小さな泉が湧き出していた。私はその場所の美しさに深く感嘆し、もし可能であれば、自分自身がこの地に住みたいと願った。

日が暮れ始めようとした頃、私は自分の方へ向かってくる水牛の群れを見かけた。また、その動物たちの真ん中を歩いている神のしもべの姿も目にした（それは隠者ティモフェイであった[4327] ）。群れが私に近づくと、私は衣服を身にまとわず、ただ髪の毛だけで体の裸身を覆っている一人の男を見た。　その男は、私が立っていた場所まで近づき、私を見ると、私を精霊や幽霊だと勘違いし、

彼について言及されている箇所は一切ない。別のパフヌティオスという殉教者がおり、彼もまたエジプトの砂漠で修業に励み、ディオクレティアヌス帝の治世（284〜305年）に殉教し、ナツメヤシの木に磔にされた。 彼に関する記述は、9月25日のプロログに収録されており、エジプトの都市アレクサンドリア出身で、9月25日に記念される聖エウフロシニアの父である。また、別のパフヌティウスという人物もおり、同じくエジプト人で、10月8日に記念される娼婦タイシアを悔い改めさせた人物である。　また、アレクサンドリアの聖マカリオスの弟子であったパフヌティオスという修道士がおり、ハイエナが自分の盲目の子を治療のために聖マカリオスのもとに連れてきたという話を伝えている。　また、パフヌティウスという人物がおり、通称「ケファル」と呼ばれ、4世紀の歴史家ルフィヌスの著書『教父たちの教え』や、パラディオスの著書『ラウサイク』（第91章）に言及されており、80年間同じ服を着続けていた。　『プロログ』には、他にもいくつかのパフヌティウスに関する記述が見られる。例えば、11月25日には、パフヌティウスという修道士が、ワインを一杯飲み干して強盗を救ったという記述がある。また、3月9日には、パフヌティウスという修道士が、自分が誰に似ているかを神に尋ね、村の長老に似ているという啓示を受けたという記述がある。　また、同月の27日には、このパフヌティウスについて、彼が笛吹きに似ているという説教がある。一方、尊者オヌフリオスを見出したパフヌティウスについては、我々は一切の情報を持っていない。

[4326] エジプトは多くの修道士たちが住む一般的な場所であった。修道院は下エジプトにも中エジプトにもあった。特にエジプトで名高かったのは、下エジプトにあり、ナイル川を越えて内陸深くに位置するニトリアの砂漠であった。　内陸の、あるいはスキトスの砂漠は、共同生活を行う修道院のある砂漠から数日の道のりをさらに進んだ場所に位置していた。そこは荒涼とした砂漠で、時折水源が見られる程度であり、整備された道すらなかった——そこへの道は星の流れを頼りに進んだ。

[4327] 同日の追悼。

祈りを捧げ始めた。というのも、その場所では多くの不浄な精霊たちが幽霊の姿で彼を誘惑していたからであり、彼は後でそのことを私に自ら語ってくれた。

そこで私は彼に言った。

「なぜ恐れるのか、私たちの神、イエス・キリストのしもべよ。私と私の足跡をよく見て、私があなたと同じ人間であることを知ってください。触れて確かめて、私が肉と血でできていることを確かめてください。」

彼は私を見て、私が確かに人間であることを確かめると、安心し、神に感謝してこう言った。

「アーメン。」

それから彼は私のところへ近づき、私に口づけをし、自分の洞窟へ案内して、ナツメヤシの実を私に食べさせてくれた。また、泉の清らかな水も差し出し、私のために自分も口にした。そして、私にこう尋ねた。

「兄弟よ、どうやってここへ来たのか？」そこで私は、彼に自分の考えと意図を打ち明け、こう答えた。

「この荒野で修業に励むキリストの僕たちを見たいと願い、私は自分の修道院を出てここへやって来ました。そして神は、私の願いを叶えてくださり、あなたの聖なる御姿を拝む恵みを授けてくださいました。」

それから、私は彼に尋ねた。

「父よ、あなたはどのようにしてここへ来られたのですか？この荒野で何年修業を続けられているのですか？何を食べておられるのですか？そして、なぜ裸で、何も身に着けていないのですか？」

すると、彼は次のように自身のことを語ってくれた。「当初、私はフィヴァイドのキノヴィーの一つ[4328]に住み、修道生活を送りながら、熱心に神に仕えていました。 私は織物作りに従事していた。しかし、私の心に次のような思いが浮かんだ。『修道院を出て、一人で暮らし、神から大きな報いを受けるために精進して働け。なぜなら、自分の手の労働の成果によって、自分自身の糧を得るだけでなく、貧しい人々を養い、旅する兄弟たちに安らぎを与えることもできるからだ。』 その思いに愛をもって従い、私は修道院を去り、町の近くに自分の小部屋を建て、手仕事に励んだ。私にとってはすべてが十分であった。なぜなら、自分の手による労働で、自分に必要なものはすべて賄えたからである。多くの人々が私の手作りの品を求めて訪れ、必要なものをすべて持ってきてくれた。 私は旅人に宿を提供し、余ったものは貧しい者や困窮している人々に配った。しかし、私たちの救いの敵である悪魔――常にすべての人と戦っている者――は、私の暮らしを妬んだ。私のすべての労苦を台無しにしようと、彼はある女性に、私の手仕事を目当てに私のもとを訪れ、布を仕立ててほしいと頼むよう唆した。 仕立て終えると、私はそれを彼女に渡した。その後、彼女はさらに布を仕立ててほしいと頼んできた。そして、私たちの間で会話が交わされ、大胆さが見え始めた。罪を犯し始め、私たちは不法を生み出した。そして私は六ヶ月の間、彼女と共に過ごし、その間ずっと罪を犯し続けた。 しかし、ついに私は心の中でこう考えた。「今日か明日か、死が私を襲い、私は永遠に苦しみ続けることになるだろう」。そして私は自分にこう言った。「ああ、哀れな私の魂よ！ 罪から、そして同時に永遠の苦しみからも逃れるために、ここから逃げ出したほうがよい！」

「そこで、すべてを捨てて、私は密かにそこから逃げ出し、この荒野へとやって来た。この場所にたどり着くと、この洞窟と泉、そして十二本の枝を持つナツメヤシを見つけた。毎月、その枝の一つが、私が三十日間生き延びるのに十分な量の果実を実らせる。 一ヶ月が終わり、ある枝の実が尽きると、別の枝の実が熟す。こうして、神の恵みによって私は生かされており、この洞窟には他に

[4328] キノヴィア（ギリシャ語の「共同」と「生活」に由来）とは、修道院の費用で修道士たちが生活し、その見返りとして修道院全体の利益のために労働を提供する共同生活修道院のことを指す。

何も持っていない。　また、私の衣服は長い年月を経てぼろぼろになり、ついに使い物にならなくなってしまった。多くの年が経ち（私はすでにこの荒野で30年間修行を続けている）、あなたが見ているように、私の体には毛が生えてきた。それらは私にとって衣服の代わりとなり、私の裸身を覆ってくれているのだ」。

この修道士からこれらすべてを聞いた後（パフヌティウスはこう語る）、私は彼に尋ねた。

「父よ！この地で修行を始めた当初、何か困難に直面しましたか？」

彼は私にこう答えた。

「私は数え切れないほどの悪魔の攻撃に耐えてきました。彼らは何度も私と戦いを挑んできましたが、私を打ち負かすことはできませんでした。なぜなら、神の恵みが私を支えてくれたからです。私は十字の印と祈りをもって彼らに立ち向かいました。敵の攻撃に加え、私の修行を妨げたのは、さらに肉体の病気でもありました。　というのも、私は胃の痛みにひどく苦しみ、激しい痛みのために地面に倒れ込んでしまったからだ。いつもの祈りを捧げることはできなかったが、自分の洞窟に横たわり、地面を転がりながら、多大な努力を払って賛美を唱え、洞窟から出る力など全く残っていなかった。 私は慈悲深い神に、この病気 のゆえに、私の罪を赦してくださるよう祈った。ある日、私が地面に座り込み、胃の痛みにひどく苦しんでいたとき、一人の高潔な男が私の前に立っているのを見かけ、彼は私にこう言った。

「何に苦しんでいるのか？」

私はかろうじてこう答えるのが精一杯だった。

「お方よ、私は胃の痛みに苦しんでいます。」

すると彼は私に言いました：

「どこが痛いのか見せてくれ。」

私は彼に示した。すると彼は手を伸ばし、その手のひらを痛む場所に置いた。私はたちまち治った。彼は私にこう言った。

「さあ、あなたは今や健康になった。これ以上悪くならないよう、罪を犯してはならない。今から永遠に、あなたの主であり神である方のために働け。」

それ以来、神の御慈悲により、私は病気にならず、神の憐れみを賛美し、称え続けています。

（パフヌティウスはこう語る）私はその尊い父と、このような会話を交わしながら、ほぼ一晩中を過ごした。そして朝になると、いつものように祈りを捧げた。

日が明けると、私はその尊い父に、彼のそばか、あるいは彼の近くで別々に暮らすことを許してほしいと熱心に願い始めた。すると彼は私に言った。「兄弟よ、君はここで悪魔の襲撃に耐えられないだろう」。このため、彼は私が彼のそばに留まることを許さなかった。私はまた、彼に自分の名前を教えてほしいと頼んだ。　すると彼は言った。「私の名はティモテイオスだ。愛する兄弟よ、私を覚えていてくれ。そして、キリスト・神に私のために祈ってほしい。そうすれば、神は私に、その御慈悲を最後まで示してくださるだろう。神は私をその御慈悲にふさわしい者と認めてくださるのだ。」

パフヌティオスはこう語る。「私は彼の足元にひれ伏し、私のために祈ってくださるよう懇願した。すると彼は私にこう言った。『我らの主イエス・キリストが、あなたを祝福し、敵のあらゆる誘惑からあなたを守り、正しい道へと導き、あなたが妨げられることなく聖性に達することができますように』」。

私を祝福した後、ティモテイオス尊者は私を平穏のうちに送り出してくれた。　私は旅の糧として、その手からナツメヤシの実を受け取り、泉から水を汲んで器に満たした。そして、聖なる長老に頭を下げて、その場を後にした。神が、このような御自分の御愛する者に会わせ、その言葉を聞き、祝福を受けさせてくださったことを、神を賛美し、感謝しながら。

そこから帰る途中、数日後、私は人里離れた修道院にたどり着き、休息をとってしばらく滞在するためにそこに身を寄せた。　私は悲しみに満ちて、心の中でこう考えた。「私の人生とは何なのか？　私の功績とは何なのか？」私が今目にした、この偉大な神の御心にかなう人の生涯や功績に比べれば、私の人生は影にも及ばないものだった。　私は、その義人と同じく神に喜ばれる生き方をしたいと願いながら、こうした思索にふける日々を長く過ごした。自分の魂の救いを気にかけるよう私を奮い立たせてくださった神の憐れみにより、私は再び、マズィクと呼ばれる野蛮な民が住む、人跡未踏の道を通って内陸の荒野へと向かうことをためらわなかった。　私は、主に仕えるそのような隠者が他にもいるのか、ぜひ知りたかった。そして、自分の魂のために彼から何か得るものを得るべく、どうしても彼を見つけたいと強く願っていた。

私が挑もうとしていた荒野の旅に出発する際、私はわずかなパンと水を持参したが、それらは短期間しか持たなかった。パンと水が尽きると、私は食糧がないことに嘆いたが、それでも気力を振り絞り、さらに四日四晩、飲食なしで歩き続けたため、体はひどく衰弱してしまった。　私は地面に倒れ込み、死を待つばかりとなった。その時、聖人のような、美しく、まばゆいばかりの男性が私のところに近づいてくるのを見た。彼は私の口に手を当てると、見えなくなってしまった。その瞬間、私は体の中に力がみなぎるのを感じ、もはや食べたり飲んだりしたいとは全く思わなくなった。

立ち上がると、私は再び内なる荒野へと向かい、さらに四日四晩、飲食を絶って歩み続けた。しかし、やがて再び飢えと渇きで衰弱し始めた。天に向かって両手を挙げ、主に祈ると、再びあの同じ人物が現れ、私の口元に手を触れ、やがて見えなくなった。　これにより新たな力を得て、私は旅を続けた。

旅の17日目、私はある高い山にたどり着いた。道のりで疲れ果てた私は、少し休むために山のふもとに腰を下ろした。その時、一人の男が私に向かって近づいてくるのが見えた。その姿は実に恐ろしいものであった。　その男はまるで獣のように全身が毛に覆われており、その毛は雪のように白かった。それは老いによって白髪になっていたからである。頭髪と髭は非常に長く、地面にまで届き、まるで衣服のように全身を覆っていた。また、その腰には砂漠の　植物の葉が巻きつけられていた。　私がこの男が自分に近づいてくるのを見ると、恐怖に駆られて、山の頂上にある岩へと駆け上がった。一方、彼は山のふもとにたどり着くと、日陰に座り込み、休息をとろうとした。彼は酷暑と老いのせいで、ひどく疲れていたからである。　山の方を見やると、彼は私を見つけ、私に向かってこう言った。「神の人よ、こちらへ来なさい。私もあなたと同じ人間だ。私はこの荒野に住み、神のために修業に励んでいるのだ」。

私（パフヌティオス）はそれを聞くと、急いで彼のところへ駆け寄り、その足元にひれ伏した。すると彼は私に言った。

「立ちなさい、わが子よ！　あなたもまた、神のしもべであり、神の聖徒たちの友なのだ。あなたの名はパフヌティウスだ」。

私は立ち上がった。すると彼は私に座るよう命じ、私は喜びながら彼のそばに座った。私は彼に熱心に懇願し始めた――自分の名前を教えてくれ、自分の生涯について語ってくれ、どのようにして荒野で修行に励んでいるのか、そしてここにどれほど長く住んでいるのかを。私の執拗な願いに折れて、彼は自分自身について次のように語り始めた。　「私の名はオヌフリオス。この荒野で六十年間、山々をさまよいながら暮らしてきた。これまで誰一人として人を見たことがなく、今、目にするのは君ただ一人だ。以前は、エリティ（[4329]　）と呼ばれる、フィヴァイダ地方のヘルモポリスという町の近くにある、ある敬虔な修道院に住んでいた。　その修道院には百人の兄弟たちが暮らしており、彼らは皆、互いに完全な一致を保ち、私たちの主イエス・キリストへの愛のうちに、調和のとれた共同生活を送っています。彼らは食事も衣服も共有し、主の慈しみを賛美しながら、平和のうちに沈

[4329] あるいはエラティ。

黙を守り、禁食の生活を送っています。　幼少の頃、私は修道生活の初心者として、そこで聖なる父たちから、主への熱心な信仰と愛について教えを受け、また修道生活の規則についても学びました。私は、彼らが神の聖なる預言者エリヤについて語り合うのを耳にしました。すなわち、彼が神に支えられ、断食しながら荒野で暮らしていたこと、また、主の聖なる先駆者ヨハネについても聞きました。彼は、荒野での生活に関して、イスラエルに現れるその日まで、いかなる人間にも決して似ていなかったのです（マタイ11:11）であり、イスラエルの民の前に現れるその日まで、荒野で過ごした生活についても聞きました。これらすべてを聞いた私は、聖なる父たちに尋ねました。「では、荒野で修業に励む者たちは、神の御目には、あなた方よりも偉大であるということですか？」

　　すると、彼らは私にこう答えました。「そうだ、わが子よ、彼らは私たちより優れている。なぜなら、私たちは毎日互いの顔を見合わせ、喜びをもって共に教会の賛美を捧げているからだ。食べたいと思えば、すでに用意されたパンがあり、同様に、飲みたいと思えば、用意された水がある。もし私たちの誰かが病気になったとしても、その人は兄弟たちから慰めを受けます。なぜなら、私たちは共に暮らし、互いに助け合い、神の愛のために仕え合っているからです。しかし、荒野に住む者たちは、これらすべてを欠いているのです。　もし砂漠の隠者たちの誰かに何らかの災いが降りかかったら、病気の時に誰が彼を慰め、誰が彼を助け、仕えてくれるだろうか。もし彼にサタンの力が襲いかかったら、彼は一人きりである以上、どこで心を励まし、教えを授けてくれる人を見つけられるだろうか。もし彼に食べ物がないなら、どこで苦労せずにそれを手に入れられるだろうか。　同様に、喉が渇いても、近くには水が見つからない。そこでは、わが子よ、共に暮らす私たちよりも比べものにならないほど大きな苦労がある。荒野での生活を選んだ者たちは、より熱心に神に仕え始め、より厳しい断食を課し、飢えや渇き、真昼の暑さに身をさらし、　寛大に夜の寒さに耐え、目に見えない敵による策略に強く抵抗し、あらゆる手段を尽くしてそれを打ち負かそうとし、天の御国へと続く狭く苦難に満ちた道を熱心に歩もうとするのだ。　このため、神は彼らに聖なる天使たちを遣わし、天使たちは彼らに食物をもたらし、岩から水を湧き出させ、彼らを大いに強める。それゆえ、預言者イザヤの次の言葉が彼らに関して成就するのだ。　*「主を待ち望む者は、新たな力を得て、鷲のように翼を広げ、走っても疲れることなく、歩いても疲れることがない」*（イザヤ40:31）。　たとえ彼らのうち誰かが天使の姿を目にする恵みにあずかれないとしても、いずれにせよ、神の天使たちの目に見えない臨在を欠くことはない。天使たちは、そのような隠者のあらゆる道を護り、敵の誹謗中傷から守り、その善行を助け、隠者の祈りを神に捧げてくれるのである。　もし誰か一人の隠者に対して、予期せぬ敵の災いが降りかかったとしても、その人は神に向かって両手を挙げれば、直ちに天から助けが下され、その心の清らかさゆえに、あらゆる災いは追い払われるのである。　わが子よ、聖書に記されていることを聞いたことがないのか。神は御自身を求める者を無視されることはなく、貧しい者は永遠に忘れ去られることはなく、貧しい者の希望は最後まで失われることはない（詩篇9:19）。また、　「彼らは苦しみの中で主に叫び求めた。主は彼らをその苦難から救い出された」（詩編106:6）。主は、各人が自ら引き受ける労苦に応じて、その報いを与えられるからである。「地上で主の御心を行い、熱心に主に仕える人は幸いである。そのような人には、たとえ目に見えなくとも、天使たちが仕える。彼らは霊的な喜びをもってその人の心を喜ばせ、その人が肉体に留まっている間、常にその人を強めるのである」。

　　これらすべてを、私――謙虚なオヌフリオ――は、自分の修道院で聖なる父たちから聞いた。そして、これらの言葉によって私の心は甘美に満たされた。なぜなら、これらの言葉は私にとって蜜よりも甘く、まるで別世界にいるかのように思えたからである。私の内には、荒野へ赴きたいという抑えきれない願望が湧き上がったのだ。　夜中に起き上がり、四日間も持たないほどのわずかなパンを手に取り、私はすべての希望を神に託して修道院を出た。そこから荒野へ向かうつもりで、山へと続く道を進んだ。荒野に入りかけたその瞬間、目の前に明るく輝く一筋の光が見えた。　ひどく恐れて立ち止まり、修道院に戻ろうかと考え始めた。その間にも光の束は私に近づいてきて、そこから声

が聞こえた。「恐れるな！私は、あなたが生まれた日からあなたと共に歩んできた天使だ。神があなたを守り護るために、私をあなたに遣わされたのだ。　主から、あなたをこの荒野へ導くよう命じられたのだ。主の前で心を清くし、謙虚であり、喜びをもって主に仕えなさい。創造主が私にあなたの魂を連れ去るよう命じるまで、私はあなたから離れることはない」。

そう言い終えると、天使は明るい光の束の中から私の前を歩き出し、私は喜びながら彼の後を追った。 六、七ミリアリ[4330]ほど進んだところで、私はかなり広々とした洞窟を目にした。そのとき、天使の光の束は私の目から消え去った。洞窟に近づくと、私はそこに誰か人がいないか確かめたくなった。入り口に近づき、修道者の慣習に従って、「祝福を！」と呼びかけた。

すると、私は、誠実で品格のある風貌の老僧を見出した。その顔と眼差しには、神の恵みと霊的な喜びが輝いていた。この老僧を見て、私はその足元にひれ伏し、敬意を表した。すると彼は、その手で私を引き起こし、口づけをしてこう言った。　「お前は、兄弟オヌフレイか。主において私の協力者よ。さあ、わが子よ、私の住まいに入りなさい。神がお前の助け手となられますように。神を畏れつつ善行をなし、その務めを全うしなさい。」

洞窟に入ると、私は座り、彼とかなりの日数を過ごした。私は彼からその美徳を学ぼうと努め、そしてそれを成し遂げた。というのも、彼は私に隠遁生活の規則を教えてくれたからである。　やがて、長老は、私の心がすでに十分に啓発され、主イエス・キリストに喜ばれる行いがどのようなものであるかを理解しているのを見抜いた。また、私が荒野に潜む隠れた敵や恐怖との恐れを知らぬ戦いに備えて強くなったのを見て、長老は私にこう言った。「立ちなさい、わが子よ。　私はあなたを、内なる荒野にある別の洞窟へ連れて行く。そこで一人で暮らし、主のために精進しなさい。主があなたをここに遣わされたのは、まさにこのため、すなわち、あなたが内なる荒野の住人となるためなのだ」。

そう言うと、彼は私を連れて、最も奥深くの荒野へと向かった。私たちは四日四晩歩き続けた。　ついに、五日目に小さな洞窟を見つけた。その時、その聖なる人は私にこう言った。「こここそ、神があなたの修行のために用意された場所だ」。そして、その長老は三十日間私と共に過ごし、善行について教えてくれた。三十日が過ぎると、私を神に委ねて、彼は自分の修行の場へと戻っていった。　それ以来、彼は年に一度、私のところへやって来た。主のもとへ召されるまで、毎年私を訪ねてくれた。最期の年、彼はいつものように私のところに滞在した後、主のもとへ召された。私は大いに泣き、彼の遺体を私の住まいの近くに葬った。

その後、謙虚なパフヌティウスは彼にこう尋ねた。「尊い父よ！　あなたが荒野にやって来た当初、どれほどの労苦を背負われたのですか？」

祝福された長老は私にこう答えました。「愛する兄弟よ、私を信じてほしい。私はこれほど過酷な試練に直面し、何度も人生に絶望し、死が近いと感じたことがある。なぜなら、私は飢えと渇きに苛まれていたからだ。　荒野に到着した当初から、食べ物も飲み物も何も持っていなかった。たまたま荒野の草を見つけ、それを糧としていた。喉の渇きを癒やしてくれたのは、天の露だけだった。昼は太陽の熱に焼かれ、夜は寒さに震えた。私の体は、天の露による雨粒で覆われていた。この通り抜けられない砂漠で、他にどんな苦難を耐え抜き、どんな労苦や偉業を成し遂げなかったというのか？　すべての労苦と偉業を語り尽くすことは不可能であり、ましてや、神への愛のために人が独りでなすべきことを公に告げるのは不適切である。　しかし、慈愛に満ちた神は、私が飢えと渇きに身を

[4330] ミリアリウムとは、ローマのマイル、あるいはより正確にはローマの里程標を指す。というのも、各ミリアリウムの終わりには、標識として石柱が立っていたからである。ミリアリウムは8スタディオン（1スタディオンは88サジェン）に相当し、これは*現在のヴェルスタで*約1.*12*に相当する。 *マイルストーンはイタリア全土に点在しており、通常、それらが建設された当時の建設者や皇帝の名前が刻まれていた。他のすべてのマイルストーンの起点となり、すべての道路が交差していた最初のマイルストーンは、ローマのサトゥルヌス神殿のそばにあった。ローマでの発掘調査において、この石の残骸が発見された。*

さらし、断食の修行に全身全霊を捧げているのをご覧になり、御使い　に、私の世話をし、私の体を支えるために毎日少量のパンと水を持ってくるよう命じられました。こうして私は、三十年にわたり御使いによって養われてきました。　そして30年が過ぎると、神は私にさらに豊かな糧を与えてくださいました。というのも、私の洞窟の近くで、12本の枝を持つナツメヤシを見つけたからです。それぞれの枝は他の枝とは別々に実を結び、ある枝は1ヶ月目に、別の枝は2ヶ月目に実を結び、12ヶ月すべてが終わるまで続きました。　ある月が終わると、その枝の実も尽き、別の月になると、別の枝に実がなり始める。さらに、神の御心により、私のそばに生ける水の泉が湧き出た。　そして、もう三十年もの間、私はこのような豊かさに恵まれながら修業を続けており、時には天使からパンをいただき、時には砂漠の根付きナツメヤシの実を味わっている。それらは、神の御計らいにより、私にとっては蜂蜜よりも甘く感じられる。　水は、神に感謝しつつ、この泉から飲んでいる。そして何よりも、私は神の言葉の甘美さによって養われ、潤されている。それは、*「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる」*（マタイ4:4）と書かれている通りである。パフヌティウス兄弟よ！　もしあなたが全力を尽くして神の御心を行えば、神から必要なものはすべて与えられるでしょう。聖なる福音書にはこう記されています。*「だから、心配して、『何を食べようか、何を飲もうか』と言ってはなりません。　何を着ようか、などと言ってはならない。こうしたものはすべて異教徒たちが求めているものであり、あなたがたの天の父は、あなたがたがこれらすべてを必要としていることを知っておられるからだ。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる」*（マタイ6:31–33）。

オヌフリオスがこれらすべてを語っているとき、私は（パフヌティオスはこう語る）彼の驚くべき生き様に深く感嘆した。それから再び彼に尋ねた。「父よ、あなたは安息日や日曜日に、どのようにしてキリストの至聖なる秘跡を拝領されるのですか?

すると彼は私にこう答えました。「主の御使いが私のところに来て、キリストの至聖なる聖体を携えてきて、私に授けてくれるのです。　その天使は、神聖な聖体を持って私のもとだけに来るのではなく、神のために荒野に住み、人の顔さえ見ることのない他の荒野の修行者たちのもとにもやって来る。聖体を与えながら、天使は彼らの心を言葉に尽くせないほどの喜びで満たすのだ。　もし、これらの荒野の修行者の誰かが人の姿を見たいと願うならば、天使はその人を抱き上げ、天へと連れて行き、聖人たちを見て喜びを得るようにする。そうして、その修行者の魂は光のように照らされ、天の恵みを見るにふさわしい者とされ、霊において喜びに満たされる。　その時、その隠者は荒野で取り組んできたすべての労苦を忘れてしまう。そして、その修行者が自分の場所に戻ると、天国で目にすることを許されたものを得ることを望み、さらに熱心に主に仕え始めるのである」。

オヌフリオス（パフヌティオス曰く）は、私たちが出会ったあの山のふもとで、これらすべてについて私と語り合った。私もまた、その尊者とのこのような会話に大きな喜びに満たされ、飢えと渇きを伴う旅の苦労をすべて忘れてしまった。　心身ともに力を得て、私は言った。「聖なる父よ、あなたにお目にかかり、その美しく、この上なく甘美な御言葉を聞くことができた人は、なんと幸いなことでしょう！」すると彼は私に言った。「さあ、兄弟よ、立ち上がって、私の住まいへ行きましょう」。

そして立ち上がり、私たちは歩き出した。

私（パフヌティオスが語る）は、その尊い長老の恵みに驚嘆し続けていた。二、三ミリアリオンほど歩くと、私たちは聖人の尊い洞窟にたどり着いた。　その洞窟の近くには、かなり大きなナツメヤシが生えており、小さな生ける水の泉が流れていた。洞窟のそばで立ち止まると、尊い長老は祈りを捧げた。祈りを終えると、「アーメン」と言った。

それから座り、私にも自分の隣に座るよう勧めてくださった。そして私たちは、互いに神の恵みについて語り合った。

日が暮れ始め、太陽がすでに西へと傾き始めた頃、私は私たちの間に置かれた白いパンと、用意された水に気づいた。　すると、その聖なる方は私にこう言われました。「兄弟よ、あなたの目の前にあるパンを味わい、水を飲んで力を取り戻しなさい。あなたは飢えと渇き、そして旅の疲れで力尽きているのが見て取れるからだ」。

私は彼にこう答えました。「私の主よ、生きておられますように！私は一人では食べたり飲んだりしません。あなたと一緒にだけそうします。」

しかし、その長老は口にすることを拒んだ。　私は長い間彼に懇願し、ようやく私の願いを聞き入れてもらうことができた。私たちは両手を差し伸べてパンを取り、それを裂いて口にした。私たちは満腹になり、パンには余りさえあった。その後、水を飲み、神に感謝を捧げた。そして、その夜一晩中、神への祈りに費やした。

日が明けると、朝の賛美歌を歌った後、尊者の表情が変わっていることに気づき、私はそれを大いに恐れた。　聖人はそれを察して、私にこう言われました。「恐れるな、パフヌティウス兄弟よ。神は、　すべての人に憐れみ深いお方であり、あなたが私の遺体を葬るために、私のもとへあなたを遣わされたのだ。今日、私はこの世の生涯を終え、私のキリストのもとへ、永遠の平安のうちに、終わりのない命へと旅立つのだ。」

その日はちょうど6月の12日であった。そして、尊者オヌフリオスは私、パフヌティウスにこう遺言を残した。「愛する兄弟よ！エジプトに戻ったら、すべての兄弟たちとすべてのキリスト教徒たちに、私のことを思い出させてほしい」。

そこで私（パフヌティオス）は彼にこう言った。「父よ！　あなたが旅立たれた後、私はここに、あなたの代わりに留まりたいのです」。

しかし、尊者様は私にこう言われました。「わが子よ！　あなたは神によってこの荒野に遣わされたのは、ここで修行するためではなく、神の僕たちを見、戻ってきて、兄弟たちに荒野の修道者たちの徳高い生活について語り、彼らの魂の益となり、また私たちの神キリストの栄光となるためである。　さあ、わが子よ、エジプトへ、自分の修道院へ、そして他の修道院へも行き、荒野で見たこと、聞いたことすべてを語りなさい。また、これから見るであろうこと、聞くであろうことについても語りなさい。そして、あなた自身も、主に仕えながら、善行に励みなさい」。

尊者様がそうおっしゃると、私はその足元にひれ伏し、こう申し上げました。「尊き父よ、私を祝福してください。そして、私が神の御前に恵みを得られますよう、私のために祈ってください。また、私の救い主が、この世であなたにお会いできたのと同じように、来世でもあなたにお会いできる恵みを私に与えてくださいますよう、私のために祈ってください。」

すると、尊者オヌフリオスは私を地面から起こし、こう言われました。「パフヌティオスよ！あなたの願いが神によって見過ごされることなく、神がそれを叶えてくださいますように。神があなたを祝福し、御自身の愛の中に堅く立たせ、あなたの知恵ある目を神を見るために照らしてくださいますように。　あらゆる不幸と敵の罠からあなたを救い出し、あなたが始めた善き業を継続させてくださいますように。主の御使いたちが、あなたのすべての道においてあなたを守り（詩篇90:11）、目に見えない敵からあなたを守り、恐ろしい試練の時にも、彼らが神の前であなたを誹謗することができないようにしてくださいますように」。

その後、尊い父は私に主への最後の口づけを授け、それから涙と心の底からの嘆息を込めて主に祈り始めた。ひざまずいてかなり長い間祈った後、彼は地面に横たわり、最後の言葉を口にした。「わが神よ、私の霊を御手に委ねます！」　彼がそう語っている間、天から驚くべき光が彼を照らし、その光の輝きの中で、尊師は喜びに満ちた表情を浮かべて、息を引き取った[4331]。するとすぐに、

[4331] 聖オヌフリオの没は4世紀のことである。

空中で天使たちの声が聞こえ、彼らは歌いながら神を賛美し、祝福していた。聖なる天使たちは、尊師の魂を受け取り、喜びをもってそれを主のもとへ昇らせていったのである。

一方、私（パフヌティオスが語る）は、その尊い遺体の前で泣き崩れ、つい最近出会ったばかりの人を、これほど突然に失ってしまったことを深く嘆いた。　その後、私は自分の衣服を脱ぎ、その内側の裏地を引き剥がして聖人の遺体を覆い、上着は再び身に着けた。それは、裸のまま兄弟たちの元へ戻らないためであった。　私は大きな石を見つけました。そこには、神の御業により、棺のような窪みができていました。私はその石の中に、この機会にふさわしい詩篇の詠唱を捧げながら、偉大なる神の御使いの聖なる遺体を安置しました。その後、多くの小石を集めて、聖人の遺体を覆いました。

すべてを終えた後、私は神に祈りを捧げ、その場所に留まることを許してくださるよう願った。　すでに洞窟に入ろうとしたその時、私の目の前で洞窟が崩れ落ち、聖人を養っていたナツメヤシが根こそぎ引き抜かれ、生ける水の泉も枯れてしまった。これらすべてを見て、私は、神が私がここに住むことを良しとされなかったのだと悟った。

そこから立ち去ろうと思い、昨日の残りパンを食べ、器に入っていた水も飲み干した。それから、両手を天に上げ、目を天に向け、再び祈り始めた。　すると、以前砂漠を旅していた時に見たあの男の姿が見えた。それは、私を励まして、私の前を歩いていたあの男その人だった。

その場を離れる際、私は心深く悲しみに沈み、尊者オヌフリオスに、もっと長い間、生前に会うことができなかったことを残念に思った。しかしその後、私は彼の聖なる語りかけを味わい、その口から祝福を受けることができたのだと考え、心から喜びを感じた。そして、神を賛美しながら歩み続けた。

四日が過ぎた頃、私は山の高台にある、洞窟を備えたある小部屋にたどり着いた。中に入ってみると、誰もいなかった。しばらく座っていると、私は心の中でこう考え始めた。「神が私を導いてくださったこの小部屋に、誰か住んでいるのだろうか？」

そう考えていると、白髪交じりの聖なる老人が入ってきた。その姿は素晴らしく、光に包まれていた。彼は柳の枝を編んだ服を身にまとっていた。私を見ると、彼は言った。

「あなたこそ、パフヌティウス兄弟か。尊者オヌフリオスの遺体を埋葬した者か？」

私は、彼が私について神からの啓示を受けたのだと悟り、彼の足元にひれ伏した。彼は私を慰めながら、こう言った。「立ちなさい、兄弟よ！　神は、あなたを御自身の聖徒たちの友となるようお選びになった。なぜなら、神の御計画により、あなたが私のところに来るべきであったことを私は知っているからだ。愛する兄弟よ、私はあなたに、私自身についても明かそう。私はこの荒野に六十年間留まってきたが、その間、私と共にここに住む兄弟たち以外、私のところへやって来た人間を一度も見たことがないのだ。」

私たちが互いに語り合っている間、聖人のような三人の長老が入ってきた。そして彼らはすぐに私に言った。「祝福を、兄弟よ！　あなたはパフヌティウス兄弟、主の御業に共に従事する者です。あなたは聖オヌフリオスの遺体を埋葬しました。兄弟よ、神の偉大な恵みを目にする恵みにあずかったことを喜びなさい。主は、あなたが今日私たちのもとに来られることを、私たちに告げられました。主は、あなたが私たちと共に一日を過ごすよう命じられました。　私たちはすでに六十年間、この荒野に留まり、それぞれ別々に暮らしている。しかし、安息日から日曜日にかけては、ここに集まるのだ。私たちはこれまで誰一人として人を見たことがなかったが、今、あなたただ一人を見ているのだ」

私たちが尊者オヌフリオや他の聖人たちについて語り合った後、二時間ほど経って、その長老たちは私にこう言いました。「兄弟よ、少しパンを取って腹を満たしなさい。あなたは遠くから来たのだから。私たちはあなたと共に喜びを分かち合うべきです。」

立ち上がって、私たちは神に心を一つにして祈りを捧げると、目の前に五つの清らかなパンが現れた。それはとても美味しく、柔らかく、温かく、まるで焼きたてのようだった。その後、その長老たちは地の実りをいくつか持ってきてくれた。　一緒に座り、私たちはパンを食べ始めた。すると長老たちは私にこう言った。「ほら、私たちがあなたに話した通り、私たちはこの荒野に六十年間滞在しているが、いつも神の御心により、私たちには四つのパンだけがもたらされていた。しかし今、あなたがここに来たことを機に、五つ目のパンも送られてきたのだ。　これらのパンがどこから運ばれてくるのかは私たちには分かりませんが、私たち一人ひとりが自分の洞窟に入ると、毎日そこに一つのパンが見つかります。そして、日曜日の前日に私たちがここに集まると、ここでは四つのパンが見つかり、一人に一つずつ配られるのです」。

その食事を終えると、私たちは立ち上がり、主に感謝を捧げた。

その間、日は暮れかけていた。まもなく夜が訪れるはずだった。私たちは土曜日の夕方から祈りを捧げ始め、日曜日の朝まで一晩中眠らずに祈り続けた。

朝になると、私は父たちに対し、死ぬまで彼らと共にいさせてほしいと熱心に願い始めた。しかし、彼らは私にこう言った。　「神の御心は、あなたが私たちと共にこの荒野に留まることにはない。あなたはエジプトへ行き、キリストを愛する兄弟たちに、私たちを偲び、聞く者たちの益となるよう、あなたが見たすべてのことを伝えなければならない。」

彼らがそう言ったとき、私は彼らに自分の名前を教えてくれるよう熱心に懇願し始めました。しかし、彼らはそれを私に明かすことを望みませんでした。私は長い間、熱心に懇願し続けましたが、その願いは全く叶いませんでした。彼らはただこう言っただけです。「すべてをご存知の神は、私たちの名前もご存知です。　私たちを覚えていてください。そうすれば、神の天の御国で再び互いに会えるでしょう。愛する者よ、この世の誘惑や惑わしをあらゆる手段で避け、それらに打ち負かされないように努めなさい。それらは多くの人々を破滅へと導いてきたのです」。

それらの尊い父たちからこの言葉を聞き、私は彼らの足元にひれ伏し、彼らから祝福を受けて、神の平安を胸に私の旅路へと出発した。あの父たちは、後に実際に起こったいくつかの出来事について私に予言してくれた。

そこを出て、私は内陸の荒野の方へ一日ほど歩いた。ある洞窟にたどり着くと、そこには生ける水の泉があり、私はそこで休むために腰を下ろし、その場所の美しさを堪能した。というのも、その場所は実に美しく、泉の周りには実をたわわに実らせた多くの果樹が生い茂っていたからである。少し休んだ後、私は立ち上がり、木々の間を歩き回りながら、その果実の多さに驚き、心の中で「一体誰がここにこれらすべてを植えたのだろう」と考えた。 そこには様々な果樹があり、例えば： ナツメヤシ、シトロン、大きくて赤いリンゴ、イチジク、モモ、そしてブドウのつる[4332] が、大きな房をたわわに実らせていた。他にも多くの果樹がここに生えていた。　その果実は蜂蜜よりも甘く、そこから素晴らしい香りが漂い、そこを流れる泉が、それらの植栽すべてに水を注いでいた。これらすべてを見て、私はこここそが神の楽園なのだと思った。

私がその場所の素晴らしい美しさに感嘆していると、遠くの砂漠から私に向かって歩いてくる四人の端正な若者たちを見かけた。彼らは羊の皮の帯を腰に巻いていた。私のところに近づくと、彼らは言った。「喜びなさい、パフヌティウス兄弟よ！」

私は顔を地面につけて、彼らに礼をした。

彼らは私を助け起こすと、私の隣に座り、語りかけ始めた。その若者たちの顔は神の恵みで輝いており、私には、彼らが人間ではなく、天から降りてきた天使たちのように思えた。　若者たちは私の到来を大いに喜び、木の実を手に取って私に味わうよう勧めてくれた。彼らの愛に、私の心は喜

[4332] なお、エジプト、とりわけナイル川沿いの地域は、植物相が非常に豊かであったことに留意すべきである。そこでは、ナツメヤシ、アカシア、クワ、綿花、サトウキビ、インディゴなどが豊富に生育していた。

びで満たされた。私は七日間彼らと共に過ごし、あの木々の実を食べて過ごした。その間、私は彼らに尋ねた。「どうやってここに来たのですか？　どこから来たのですか？」

すると彼らは私にこう答えた。「兄弟よ！神ご自身があなたを私たちのもとに遣わされたのだから、私たちの生涯をあなたに語ろう。私たちはオキシリンコスという町[4333]の出身だ。両親はその町の指導者だった。私たちに学問を学ばせたいと願い、ある学校へ通わせたところ、私たちはすぐに基本的な読み書きを身につけた。　そして、より高度な学びでも成果を上げ始めた頃、主が私たちに恵みを与えてくださったおかげで、私たち全員に共通し、一致した信念が芽生えました。私たちは、至高の霊的な知恵を学ぶことを決意したのです。それ以来、毎日集まっては、互いに神への奉仕に熱心に取り組むよう励まし合い、　心に善き意図を抱き、私たちはどこかに静寂で人里離れた場所を見つけ、そこで数日間祈りに専念し、私たちに対する神の御心を知りたいと願った。私たち一人ひとりは、七日間分になるだけの少量のパンと水を持ち、それから街を出た。　数日間歩くと、私たちは荒野にたどり着きました。荒野に入ると、私たちは恐怖に襲われました。なぜなら、目の前には天の栄光に輝くある光り輝く人物が見えたからです。その人は私たちの手を取り、ご覧の通り、この場所へと導いてくれました。そして、すでに年老いた、主に仕えるある男性に私たちを託しました。　そして今、私たちはここにすでに6年目になります。その老僧と共に1年間修行に励み、その間、彼は私たちに、いかにして主に仕えるべきかを教え、導いてくれました。しかし、1年が過ぎると、私たちの父は主のもとへ召され、それ以来、私たちはここで二人きりで暮らしています。さて、愛する兄弟よ、私たちはあなたに、私たちがどのような者であり、どこから来たのかを語りました。　この6年間、私たちはこれらの果樹の実以外のパンも、いかなる食べ物も口にせず、それぞれが他の人々から離れて沈黙を守って過ごしています。安息日になると、私たちは皆この場所に集まり、互いの顔を見て、主について語り合い、慰め合います。　安息日と日曜日の二日間を共に過ごした後、再びそれぞれが自分の場所へと戻っていくのです」。

彼らからこれらすべてを聞いた私は、謙虚な心で、パフヌティウスは言う、彼らにこう尋ねた。「では、安息日と日曜日に、あなたがたは、私たちの救い主であるキリストの至聖なる御体と御血の聖なる秘跡を、どこで受けられているのですか？」

彼らは私にこう答えました。「それこそが、私たちが毎週土曜日と日曜日にここに集まる理由なのです。神から遣わされた聖なる天使が私たちのもとにやって来て、聖なる聖体拝領を授けてくださるからです。」

私はこれを聞いて大いに喜び、聖なる天使を目撃し、その手から神聖な聖体拝領を受けるために、彼らと共に土曜日を待ちたいと願った。そして土曜日までそこに留まった。彼らも私のために、それぞれの修道室に散らばることなく、一箇所に留まってくれた。　そして私たちは、神を賛美し、祈りを捧げながら、果樹園の果実を食し、泉の水を飲みながら、その日々を過ごした。安息日が訪れると、キリストの僕たちは私にこう言った。「愛する兄弟よ、身支度を整えなさい。今、神の天使が来て、私たちに神聖な聖体をもたらしてくれるからです。　その御手から聖なる聖体拝領を受けるにふさわしい者は、すべての罪の赦しを得て、悪魔にとって恐るべき存在となるため、サタンの誘惑は彼に近づくことさえできないのだ」

彼らが私にそう話している間、私はまるで強い乳香の焚き香のような素晴らしい香りを嗅ぎ、非常に驚いた。なぜなら、これほど素晴らしい香りを嗅いだことは一度もなかったからだ。私は若者たちに尋ねた。

「この言葉では言い表せないほどの芳香は、どこから漂ってきているのですか？」

彼らは私にこう答えた。

[4333] オキシリンコスという都市は、上フィヴァイダに位置していた。この都市は住民の敬虔さで知られており、4世紀に活躍した歴史家ルフィヌスの証言によれば、その領内には最大で1万人の未婚の男性と2万人の未婚の女性がいたという。現在はベネゼフという村となっている。

「主の御使いが、至聖なるキリストの聖体と共に近づいておられます。」

私たちは直ちに立ち上がって祈りを捧げ、私たちの神である王キリストを賛美し始めた。すると突然、天から光が私たちを照らし、私たちは高みから降りてくる、稲妻のように輝く神の御使いを見た。　私は恐怖のあまり地面にひれ伏した。すると、あの若者たちは私を助け起こし、恐れるなと言った。その時、私は私たちの前に立つ神の御使いを、美しい若者の姿で見出した。その美しさは言葉では言い表せないほどであった。彼は手に、神の賜物を宿した聖なるポティル（聖杯）を握っていた。　神の僕たちは一人ずつその御前に進み出て、聖体拝領を受けた。彼らの後、罪深く、ふさわしくない私である私も、大きな畏れと恐怖、そして同時に言い表せないほどの喜びを抱きながら進み出て、天使の手からキリストの至聖なる秘跡を拝領する恵みにあずかった。聖体拝領の際、私は天使の言葉を聞いた。

「主イエス・キリスト、私たちの神の御体と御血が、あなたがたにとって朽ちることのない糧となり、尽きることのない喜びとなり、永遠の命となりますように。」

私たちはそれにこう答えました：

「アーメン。」

聖なる聖体拝領の後、私たちはその栄光に満ちた天使から祝福を受けた。その後、天使は私たちの目の前で天へと舞い上がり、私たちは地にひれ伏して神に礼拝し、私たちへの偉大な憐れみに感謝を捧げた。　私たちの心は大きな喜びで満たされ、まるで自分が地上ではなく天にいるかのように思えました。その大きな喜びゆえに、私はまるで恍惚とした状態にあったのです。その後、神の聖なる僕たちが野菜を持ってきて私に差し出し、私たちは座ってそれを味わいました。

その間、安息日は終わり、夜が訪れた。私たちは一睡もせず、詩篇を詠み、神を賛美してその夜を過ごした。日曜日には、安息日と同じ神の恵みにあずかることができた。というのも、神の御使いが同じ順序で、同じ姿で私たちのところに来て、私たちに聖体拝領を授け、私たちの心を大きな喜びで満たしてくれたからである。　そこで私は、勇気を奮い起こして、神の御使いに、私の生涯が終わるまで、神の聖なる僕たちと共にそこに住まわせてほしいと願い始めた。しかし、彼は私にこう言った。「神は、あなたがここに住むことを喜ばれない。　神は、あなたが直ちにエジプトへ行き、荒野で見たこと、聞いたことをすべての兄弟たちに告げ知らせるよう命じておられる。そうすれば、他の兄弟たちも善き生活を送り、キリスト・神に喜ばれるよう努めるだろう。とりわけ、あなたが岩の中に葬った聖オヌフリオスの聖なる生涯と至福の最期について、皆に詳しく語れ。　また、彼の口から聞いたことすべてを兄弟たちに伝えてほしい。あなたは、神の聖徒たちを通して現された、これほど驚くべき神の偉大な御業を目にする恵みにあずかった。主を信頼しなさい。主は、来世において、あなたを、あなたが見て、語り合ったあの聖徒たちと共に数えてくださるであろう。　さあ、今こそあなたの道へ進みなさい。神の平安があなたと共にありますように。」

そう言うと、天使は天へと舞い上がった。

私（パフヌティウスが語る）は、天使の言葉にこれほど大きな畏怖と喜びに満たされ、立ち続けることができず、意識を失ったかのように地面に倒れ込んだ。すると、神の聖なる僕たちは私を助け起こし、慰めてくれた。その後、野菜を振る舞い、私と共に味わい、神に感謝を捧げた。

最後に、聖人たちに別れを告げ、私は自分の旅路についた。その高潔な若者たちは、旅の糧として野菜を私に与え、五ミリアリオン先まで見送ってくれた。私は彼らに、自分の名前を教えてくれるよう熱心に頼んだ。彼らは言った。「一人はヨハネ、二人はアンドレイ、　三番目はイラクラムヴォン、四番目はテオフィロスだ」と答え、兄弟たちに自分たちの名前を伝えて、彼らのために祈りを捧げてほしいと私に命じた。私は彼らに、自分のことも祈りの中で覚えていてほしいと頼んだ。それから、もう一度主の名において互いに口づけを交わし、私たちは別れた。彼らは自分たちの場所へ戻り、私はエジプトの方へと向かった。

荒野へと旅立つ際、私は悲しみと喜びが入り混じっていた。それほど偉大な神の聖徒たち――彼らに面会し、甘美な対話を交わす機会を失ったことを嘆いた。彼らに会う資格など、この世のすべてを合わせても私にはなかったのだから。　一方で、彼らの祝福と天使の御姿を拝む恵み、さらには天使の手から聖体拝領を許されたことに喜びを感じていた。

私は三日間歩き続け、やがて隠遁所へとたどり着いた。そこで、隠遁生活を送る二人の兄弟に出会った。 私は彼らのところに十日間滞在し、 の荒野で見たこと、聞いたことすべてを彼らに語った。彼らは深い感動と喜びをもって私の話に耳を傾け、その後こう言った。「まことに、パフヌティウス父よ、あなたは神の偉大な恵みにあずかったのです。なぜなら、あなたはこれほど偉大な神の僕たちを見たからです。」

その二人の兄弟は、極めて徳高い生活を送り、心を尽くして神を愛していた。彼らは、私の口から聞いたことをすべて書き留めた。私は彼らに挨拶を述べ、自分の修道院へと向かった。そして彼らは、私の語ったことを記録した文書を、スキテに住むすべての聖なる父たちや兄弟たちに送った。皆、それを読み、聞くことで大きな霊的益を得て、御自分のしもべたちに偉大な憐れみを示してくださる神を賛美した。その後、彼らは私の語ったことを教会に掲示し、望む者なら誰でも読めるようにした。というのも、それは極めて教訓に富み、神への思索を導くものであったからである。　私、パフヌティウスという卑しいしもべは、このような神の恵み（私は決してそれに値する者ではない）に与かり、神の栄光のため、神の聖徒たちの記憶のため、そして自らの魂の救いを求める人々の益のために、私に告げ知らせるよう命じられたことを、口頭および文書をもってすべての人に伝えている。主イエス・キリストの恵みと平安が、主を喜ばせた聖なる尊い先人たちの祈りによって、今この時も、そして永遠に、あなたがたすべての上にありますように。アーメン。

コンダク、第3調:

至聖なる御霊の輝きによって神に賢明な者として聖別され、世の噂を捨て去り、荒野に至られた尊き父よ、あなたは万物の主であり創造主である神を大いに喜ばせられました。このゆえに、キリスト、祝福された大いなる賜物の与え主は、あなたを賛美なさいます。

我らの尊き父、アトス山のペトロの生涯。

記念日：6月12日

聖ペトロはギリシャ出身で、職業は戦士、階級は軍司令官であった。彼が修道生活に入ったのは、次のような出来事がきっかけであった。

ある日、ペトロは他の兵士たちと共に、シリア[4334]へ、戦争へ[4335]派遣された。ギリシャ軍は敵に敗北し、ペトロは捕虜となり[4336]、他の多くの捕虜たちと共にアラビア[4337]、ユーフラテス川[4338]のほとりにあるサマルという町へ連行された。そこで彼は牢獄に閉じ込められ、重い鉄の足枷を嵌められた。　牢獄に囚われ、かつての自分の人生をじっくりと振り返る中で、ペトルは、何度も世俗を捨てて修道生活を送ろうと心に決めていたことを思い出した。その時、彼は、その善意を実行に移そ

[4334] シリア――地中海東岸に位置する地域。
[4335] アラブ人との戦い。
[4336] 667年。
[4337] アラビア――アジア南西部の広大な半島で、ペルシャ湾によってアジア大陸から隔てられ、シリア・アラビア砂漠の平原を通じて大陸とつながっている。
[4338] アジア最大の河川であり、チグリス川と合流して、同地域で最も重要な水系を構成している。

うとしなかったことに対して、神がこの過酷な捕囚という罰を下されたのだと悟った。　自身の怠慢を悔い改め、かつての生き方を深く嘆き悲しみながら、ペトルは、自らの自覚によれば、まさに自業自得であるその苦難を忍耐強く耐え抜いた。

長い間牢獄に閉じ込められ、人間からの救済を期待できなくなったペトロは、全能の神に熱心に祈りを捧げ始めた。神は、かつてアダムを地獄から救い出したように（Iペテロ3:18–19）し、かつてヘロデによって牢獄に閉じ込められた使徒ペトロを解放された（使徒言行録12:1–25）ように、人々に知られざる御業によって彼を牢獄から解放してくださる全能の神に、熱心な祈りを捧げ始めた。同時に、ペトロは、苦難にある者たちの迅速な助け手である偉大な奇跡行者、聖ニコラオスに助けを求め、神への力強い執り成しを懇願した。ペトロは古くから、神に次ぐほどに聖ニコラオスへの深い信仰と愛を抱いており、しばしば彼に助けを求めていた。　ペトロは自身の祈りに、次のような誓いを添えた。もし束縛から解放されれば、もはや世俗の世界には戻らず、自分の家にも帰らず、直ちに神が指し示す場所へ赴き、修道者の業を全うするというのである。　彼は、もし神が彼を束縛から解放してくださるなら、ローマへ向かい、そこで聖なる首席使徒ペトロの墓の前で修道服をまとい、世俗からの離脱を誓うつもりだった。 このことを祈りながら、聖ペトロは断食を課した。彼は二 、あるいは三日に一度、それも少しずつしか食事をとらず、ついには一週間丸々、食事を断った。　その一週間が終わりに近づいたとき、聖ペトロの夢の中にキリストの聖人ニコライが現れ、こう言った。「私はあなたの祈りを聞き、あなたの心の嘆きを受け入れ、慈悲深く人を愛する神にあなたのために願いを捧げた。　しかし、あなた自身が主の戒めを守ることに熱心でなかったため、主もまた、あなたを束縛からすぐに解き放つことを望まず、救いのためにより良い道を備えておられる。とはいえ、聖なる福音書の中で*『求めよ、そうすれば与えられる……叩け、そうすれば開かれる』*（ルカ11:9）と私たちに希望を与えてくださった、慈悲深い主の約束に従い、祈りを捧げ、主の慈愛の扉を叩くことを決して怠ってはならない。そうすれば、主は御自身の慈悲によって、あなたを束縛から解き放ち、牢獄の扉を開いてくださるだろう。ただ、祈りの中で忍耐強く、神の憐れみを待ち望みなさい」。

そう言うと、聖ニコライは囚人ペトロに食事を摂って体を養うよう命じ、姿を消した。眠りから覚めて食事を口にしたペトロは、救いへの確かな希望を抱き、昼夜を問わず、かつて以上に熱心に祈りを捧げ、助け手である聖ニコライに絶えず呼びかけた。

しばらく時が経つと、聖ニコライは再び夢の中で聖ペトロの前に現れ、まるで悲しみに暮れる男の姿をとって、静かで穏やかな言葉で彼に語りかけた。　「兄弟よ、安心しなさい。私はあなたのために神の慈しみを懇願し続けてきました。しかし、主がどのような運命やご計画のために、あなたの救いを先延ばしにされているのか、私には分かりません。　しかし、主の慈悲を絶望してはならない。慈悲深き主は、私たちの願いの成就を、私たち自身の益のために遅らせることが常である。それは、誰かがすぐに願いを叶えられて、主の恵みを軽んじないようにするためだ。その上で、主はあなたや、主に喜ばれた他の人々のための祈りを望んでおられる。　私は、あなたが助けを求めて呼びかければ、あなたの執り成し手となってくれるあの偉大な祈りの人をあなたに紹介しましょう。そして、私たちが共にあなたのために祈れば、人を愛する御方が私たちの祈りを聞いてくださると信じています」。

「では、聖なる大主教様」とペトロは聖ニコライに尋ねた。「誰があなたよりも早く神を懇願できるというのでしょうか。あなたの祈りの取り成しによって、全世界が救われているのですから。キリスト教徒のすべてがあなたに助けを求め、あなたによってその苦難から救われているのですから。」

「ペトロよ、知っていますか」と聖ニコライは尋ねた。「『神を受け入れた者』と呼ばれる義人シメオンを。彼は、生後40日目に神殿に連れてこられた主キリストを、自らの腕に抱いたからです。」

「はい、神の聖人よ」とペトロは答えた。「聖福音書（ルカ2:25–36）に記されている、あの義人ですね。」

「その方を、私とあなたと二人で、祈りによって呼び求めましょう」と聖ニコライは続けた。「そうすれば、未解決のことはすべて良い結末を迎えるでしょう。義人シメオンは、神の御座のそばで、聖母マリアと聖ヨハネ・バプティストと共に立ち、神の前で大きな力と大胆さを持っています。」

そう言うと、聖ニコライは立ち去った。

一方、ペトロは眠りから覚めると、再び熱心な祈りと限りない悔い改めに身を捧げ、聖ニコライと共に聖シメオン・ボゴプリイムツァの助けを求めました。

やがて、至善なる神が、御自身の偉大な聖人たちの懇願に応じ、苦しむ者を束縛から解き放とうと望まれたとき、神の御心により、キリストの聖人ニコライが三度目にペトロの前に現れた。それは以前のような夢の中の幻ではなく、現実の姿であり、また一人ではなく、聖シメオン・ボゴプリイムツと共に現れたのである。

「勇気を出しなさい、兄弟ペトロよ」と聖人は言った。「悲しみを脇に置き、あなたの誓いを、万人の執り成し手であり、私の祈りの仲間である彼に語り、神の名において彼に感謝を捧げなさい」。

ペトロは目を上げると、聖シメオンが輝きに包まれ、手に金の杖を持ち、旧約聖書の祭司のエフォドを身にまとった尊厳な姿で立っているのを見た[4339] 。この驚くべき老人の姿を見て、ペトロは恐怖に襲われた。 すると、聖シメオンは彼にこう言った。「お前こそ、兄弟ニコライに、この束縛から解放してくれるよう熱心に懇願していた者か？」

ペトロは恐怖のあまり、かろうじて口を開き、聖シメオンにこう答えた。

「はい、神の御心に適う者よ――あなたを、神への私の取り次ぎ人として得た者です。」

「修道士となり、徳ある生活を送るという誓いを果たすか」と、聖シメオンは彼に言った。

「はい、師よ」とペトルは答えた。「神の御加護により、果たします。」

聖人は言った。

「もしそれを果たすと誓うなら、ここから自由に外に出て、望むところへ行くことができる。いかなる障害も、あなたをここに留めることはできない。」

するとペトロは、鉄で縛られた自分の足を聖人に見せた。聖シメオンが金の杖でその足枷に触れた途端、鉄は火の中で蝋が溶けるように、たちまち溶けてしまった。 その後、ペトロは立ち上がり、牢の扉が開いているのを見て外へ出て、聖シメオンと聖ニコラオスの後を追った。彼らがすでに城の外に出たとき、ペトロは自分の置かれた状況を考えを巡らせ、こう言った。

「私が目にするこのすべては、もしかして夢の中のことではないのか？」

すると、聖シメオンは彼に語りかけて言った。

「なぜ、明らかにあなたに示されている神の恵みを、夢だと見なすのですか？ 自分がどこにいて、誰に従っているのか、はっきりと見えていないのですか？」

そう言うと、聖シメオンはペトロを聖ニコラオスに託し、ペトロは聖人の後を追った。日が明けると、聖ニコラオスはペトロに尋ねた。

「旅の途中で食べるためのものは何か持ってきたか？」

[4339] エフォド――大祭司の上着で、金、ビソン、およびヒヤシンス色、紫、緋色の3色の羊毛で織られた2枚の布から構成されていた。 肩の部分の布は2本の肩紐でつながれており、その上に12個の宝石が輝き、イスラエルの12部族の名前が刻まれていた。下部では、エフォドの裾がリボンで結ばれていた。一方、祭司たちのエフォドは、単純な亜麻布製であった。

「いいえ、ご主人様、何も持って行きませんでした」とペトロは答えた。すると聖ニコライは、その場所からそう遠くないところにある菜園に入るよう彼に命じ、こう言った。

「あそこに、君に果物をくれる人が見えるだろう。旅の途中で必要な分だけ好きなだけ取って、私の後について来なさい。」

ペトルは確かに菜園で一人の男に出会い、その男から果物をいただいた。果物を受け取ると、ペトルは再び聖ニコラオスの後を追い、彼の案内でほどなくしてギリシャの地へとたどり着いた。すると聖ニコラオスはペトルにこう言った。「ほら、兄弟よ、君はついに故郷の地に戻った。これで、誓いを果たすための自由な時間があるだろう。　再びサマールの牢獄に囚われないよう、早急にそれを果たしなさい。」

その言葉を言い終えると、キリストの聖人ニコライは姿を消した。ペトルは、神と、彼の取り次ぎ人である聖ニコライと聖シメオンに賛美を捧げた後、直ちに自分の決意を実行に移そうとした。彼は自分の家へ帰って親族に会うことはせず、むしろ*「至高者への誓いを果たす」*（箴言7:14）ため、そして悲しみの日々において口にしたすべてのことを成し遂げるために、古きローマ（[4340] ）へと向かった。　キリストの聖人ニコライは、ペトロを自らの庇護下に置き、決して彼を一人にせず、かつてペトロがアラビアからギリシャへ向かう際に目に見える形で同行したように、ギリシャからイタリアへの旅の間も、目に見えない形で彼と共にいた。　キリストの聖人は絶えず彼を見守り、慈愛に満ちた父のように、あるいは慈悲深い教育者、倦むことなく彼を見守る守護者として、彼を慈しんだ。

ペトロがローマに近づいたとき、聖ニコライは夜、教皇の夢の中に現れ、ある男の手を握り、教皇にその男を指し示しながら、サマリアの牢獄から彼を解放した経緯を順を追って語り、さらに、この男が聖なる首席使徒ペトロの墓の前で修道誓願を立てることを誓ったことにも言及した。　聖人はその男の名前も明かし、教皇に彼を受け入れ、速やかにその願いを叶えるよう命じた。眠りから覚め、その幻視について思い巡らしながら、教皇は聖使徒ペトロ大聖堂へ向かい、神聖な典礼を執り行うとともに、夢で見たその男を現実の世界でも目にすることを願った。　しかし、その日は日曜日であったため、教会には大勢の人々が集まっており、教皇は多くの参列者の中から、自分が探している人物を見つけることができなかった。そこで、長い間探し回った末、教皇は声を張り上げて叫んだ。

「ギリシャの地から来たペトロよ、聖ニコライがサマリアの牢獄から解放した者よ――私のところへ来なさい。」

ペトロは直ちに群衆の中から抜け出し、教皇のもとへ歩み寄り、その足元にひれ伏してこう言った。

「はい、ここにあなたのしもべがおります、主よ。」

ペトロは、教皇が自分の名前を呼んだことについて驚きを口にした。なぜなら、教皇は彼、ペトロのことを知らなかったばかりか、見たこともなく、ペトロ自身も自分の解放について誰にも話していなかったからだ。

それに対し、教皇はこう言った。

「驚かないでください、ペトロ。あなたに関することはすべて、偉大なる聖ニコライが私に話してくれたのです。」

その後、教皇はペトロを温かく迎え入れ、約束通り使徒の墓の前で彼を修道者に叙階した。叙階後、教皇はペトロを長い間傍らに置き、救いの道について教え導き、やがて神の御心により、次のような言葉を添えてローマから送り出した。

[4340] これは、イタリアのテヴェレ川沿いに位置するローマを指し、「新ローマ」、すなわちコンスタンティノープルと区別されていた。

「行け、わが子よ、神があなたを導こうと望まれる場所へ。神の恵みがあなたと共にあり、道を示し、悪魔の罠からあなたを守ってくださいますように。」

至福のペトロは、教皇の足元にひれ伏してこう言った。

「さようなら――お元気で――敬愛する父よ。キリストの弟子であり、私の守護者である聖ニコラオスの協力者であるあなた、どうか私という罪人のために祈ってください。」

教皇からの祝福を受け、聖職者全員に別れを告げたペトロは、神の取り成しを信じてローマを後にし、ギリシャの地へ戻ることを願った。そして海辺に着くと、東へ向かう船を見かけ、それに乗り込んで出航した。風は追い風であり、航海は順調に始まった。

彼らは長い間休むことなく航海を続けたが、パンが尽きてしまったため、船乗りたちはある村の近くに停泊せざるを得なくなった。そこで船乗りたちは、パンを焼くためにその村の家の一つへ向かったが、主人もその家族全員が病気で寝込んでいた。　そこで彼らはパンを焼き、それを味見して、仲間のひとりにこう言った。「この温かいパンを持って、船の舵手と神父に届けてくれ」。

「父」という言葉を耳にした家の主人は、船乗りたちに、どのような父が彼らと一緒に航海しているのか尋ねた。船乗りたちは、ローマから修道士ペトロが一緒に航海していると答えた。

「お願いです、皆様」と、家主は船乗りたちに語りかけた。「どうかその神父様に、私の家に来て、病に苦しむ私たちのために祈り、祝福してくださるよう、お願いしてください。ご覧の通り、私たちはこの激しい病で、もう死にかけているのですから」。

船乗りたちは出かけて行き、そのことを神父に伝えた。ペトロは当初、謙遜の心から、また自分の正体を明かしたくなかったため、その人のところへ行くことを拒んでいた。しかし、懇願に説得され、人愛の心にも駆られて、ついにそこへ向かった――なぜなら、その人の死が本当に目前に迫っていることを知っていたからである。家の戸をくぐりながら、彼はこう言った。　「この家と、そこに住む者たちに平安あれ」（マタイ10:12参照）。ペトロの言葉により、その家の主人はたちまち重い病から癒やされ、健康を取り戻したかのように、まるで眠りから覚めたかのように病床から素早く起き上がり、感謝の涙を流しながら聖人の足元にひれ伏し、その足を口づけした。　この奇跡的な癒やしを目撃した者たちは皆、畏敬の念を抱き、神を賛美した。そして、癒やされた家主は聖人の手を握り、病人が横たわっているすべての寝床を彼と共に巡った。聖人は病人一人ひとりに十字の印を施すと、彼らは病から癒やされた。　その後、聖ペトロは急いで船に戻り、そこにいた者たちは皆、彼を偉大な神の御使いとして礼拝した。一方、癒やされた男は家族全員と共に、パンとワインと油を持って船へとやって来て、受けた癒やしに対して聖人に感謝を捧げようとした。　聖人はその熱意を称えたが、自分ではなく神に感謝するよう命じ、供え物を受け取ることを拒んだ。すると、その男は涙ながらに聖人の足元にひれ伏し、こう言った。「愛すべきキリストのしもべよ、もしこのささやかな供え物を私たちの手から受け取ってくださらなければ、私たちの家には喜びが訪れません。」

その際、船員たちも聖人に贈り物を受け取るよう懇願した。そこでようやく聖人は渋々それを受け入れることに同意し、祝福を与えた後、その男と同行者たちを帰し、持参された品は船員たちに渡し、自身は一切口にしなかった。　その後の航海において、聖人の糧は一塊のパンだけであり、それも夕方にのみ与えられ、飲み物としては、主が彼のために淡水に変えてくださった、小さな杯一杯の（苦い）海水であった。

ある日、聖ペトロはうたた寝をしたところ、幻視の中で、天の栄光の光によって太陽よりも明るく輝いている聖母マリア、すなわち神の母を仰ぎ見、その傍らには、畏敬の念を抱いて御前にひれ伏している聖ニコラオスがいた。聖ニコラオスはペトロを指さしながら、聖母マリアにこう言った。「御母よ！　あなたは御自分のしもべを重い束縛から解き放ってくださったのです。どうかあなたご自身が、彼がこの世の生涯を終えるべき場所を彼に示してください」。

「アトス山[4341]で――」と聖母は答えられた――「彼には安らぎがあるでしょう。この場所は、私の御子であり神である方から私に与えられた私の分であり、ここで世俗の喧騒を拒み、力の及ぶ限り霊的な行いに励み、信仰と愛をもって私の名を呼び求め、悲しみなくこの一時的な生涯を送り、神に喜ばれる行いのゆえに永遠の命を受け継ぐ者たちのための場所である。　私はその場所を深く愛しており、修道士たちの数を増やしたいと願っている。彼らが救いの戒めを守り続ける限り、私の御子であり神である方の恵みは決して彼らから離れることはないだろう。　私はその山の上で、南から北へと修道院を広め、修道士たちは海から海に至るまでこの山を支配し、彼らの名は全宇宙に讃えられるであろう。――アトス山で忍耐強く断食の修行に励む者たちを、私が守り護るであろう」。

聖ペトロはこのような幻視を授かった。眠りから覚めると、彼はキリスト・神、その聖母マリア、そして偉大なる父ニコライに感謝と賛美を捧げた。　船は追い風に乗って速やかに進んでいた。しかし、アトス山のふもとに近づくと、風が帆を膨らませ、水深も十分あったにもかかわらず、船は動かなくなってしまった。すると、船乗りたちは恐怖に駆られて互いに尋ね合った。「これは一体どういうことか？」

ペトロは彼らの戸惑いを見て、こう言った。

「子供たちよ、この場所の名前を教えてくれ。」

「ここはアフォン山です」と船乗りたちは答えた。

「おそらく、私のために――」と聖人は彼らに言った。「船は動かなくなったのだ。私を岸に連れて行き、そこに置いていってください。もしそうしなければ、ここから出航することはできないでしょう。」

船乗りたちは、神の御心に逆らうことを望まず、悲しみに暮れながら聖なる父を見送った。彼らは岸に近づき、聖人を船から降ろしてそこに置き去りにし、泣き叫びながらこう言った。

「今日、私たちは偉大な守りと助けを失ってしまった。」

「神は人を愛しておられる」と聖人は彼らを慰めた。「神は至る所にいらっしゃり、すべてを成し遂げられる。神はあなたがたの伴侶となり、あらゆる悪からあなたがたを守ってくださるだろう。」

そう言うと、聖人は船乗りたちに主による別れの挨拶を述べ、聖なる十字架の印で船を護り、皆を祝福して、平安のうちに旅立たせた。　聖人は自ら、岩だらけの地へと向かい、多くの沼地や渓谷、森を通り抜け、ついに住処として、爬虫類や悪魔さえも数多く棲む、極めて暗い洞窟を見つけた。そこで聖人が悪魔からどれほどの苦難に遭い、どれほどの災難を乗り越えたかは、計り知れない。ここでは、教訓としてそのうちのいくつかだけを振り返ってみたい。

聖ペトロは、前述の洞窟に身を寄せ、昼夜を問わず祈りに明け暮れ、二週間にわたり食事を完全に断った。　悪魔は、そのような断食の忍耐に耐えられませんでした。彼はすべての軍勢を集め、まるで戦いに臨むかのように、矢や弓、剣や槍で武装させ、恐ろしく激しい叫び声を上げながら、聖人をそこから追い出そうと、激昂して洞窟に突入しました。　すると、悪魔たちの中には、弓を引き絞って矢で聖人を威嚇する者もいれば、槍で脅かす者もいた。また、剣を抜き放って彼の脇腹を突き刺そうとする者もいれば、大きな石を猛烈な勢いで投げつけ、大地を震わせ、洞窟が崩れ落ちそうに

[4341] アフォン山（アフォン）は、ギリシャ語で「聖なる山」を意味し、エーゲ海に突き出た細長い山岳半島であり、ギリシャ正教世界における修道生活の中心地として知られている。ここでの修道生活は古代に始まったが、シリアやパレスチナよりは若干遅かった。　ロシア正教会にとって、アトス山は17世紀まで大きな意義を持っていた。ここでは、ロシア修道生活の父とされる聖アントニオスが修道誓願を立てた。また、聖テオドシオスが自身の（ペチェルスク）修道院のためにここから「ストゥディオス規律」を取り入れ、その後、年代記作者の言葉によれば、他の修道院にも広まった。　また、アトス山を訪れたロシアの修道士たち（例えば、聖ニール・ソルスキー）は、ここにある豊富な修道院図書館で、当時としては最も幅広い宗教教育を受けていた。

なるほどだった。　聖人は、生き延びる望みはないと悟り、ただ「もし私の神の御心ならば、ここで死ぬだろう」と繰り返した。

それから、目を天に向け、両手を挙げて、こう叫んだ。「至聖なる神の母、聖母マリアよ、あなたのしもべである私を助けてください」。

悪魔たちは、自分たちにとっては恐ろしく忌まわしいが、私たちにとっては甘美で愛すべき聖母マリアのお名を耳にするやいなや、たちまち騒音を立てて姿を消した。一方、聖人は、その間も主イエス・キリストのお名を大声で呼び求めながら――　「主イエス・キリストよ、私を見捨てないでください」――まるで鞭や投石器で逃げ去る悪魔たちを追い払うかのように叫んだ。それ以来、悪魔たちの策略はしばらくの間止み、聖ペトロは安らぎのうちに、神と至聖なる聖母マリアを賛美した。山での生活が始まった当初、聖人の糧は、　船から少量持ち出したパンであった。その後、パンが尽きると、その山に生えていた荒野の穀物や野生の木の実を糧とした。　こうして聖ペトロは、天使が天からマナをもたらしてくれるようになるまで、そのようにして食を摂っていた。これについては後ほど述べることにする。さて、ここからは順を追って話を進めていこう。

前述の敵の侵攻から50日が経過した後、悪魔は再び、最初の時と同様に、その数多の軍勢を率いて、無敵のキリストの戦士に立ち向かった。　そのために悪魔は、その山にいたあらゆる獣やあらゆる這う爬虫類を、聖人が住んでいた洞窟へと集まらせた。そして、彼らと共に、悪魔自身とその仲間たちも、様々な獣や爬虫類に変身して、その場所へとやって来た。　すると、恐ろしくも凄惨な光景が目の前に広がった。獣の中には聖人の足元を這い回るものもいれば、恐ろしい声で鳴き叫ぶものもおり、また口を大きく開けて聖人に襲いかかり、まるで生きたまま飲み込もうとするかのような者たちもいた。　聖人は、十字架の印で身を守り、キリスト神と聖母マリアの名を呼び求めて、それらの力を打ち砕き、自らから遠くへ追い払い、神、すなわち自らの救い主を称え、喜び祝った。

悪魔との度重なる闘いの中で、聖人は隠遁生活の最初の1年を過ごすことになった。その後、悪魔は別の方法で聖人を誘惑し始めた。

そうして悪魔は、彼が世俗で軍司令官であった頃に仕えていた少年ペトロの一人の姿をとった。その少年の姿で悪魔は聖者に近づき、忌まわしい思いに満ちて聖者に口づけをしようとして、彼にひれ伏した。　そして、泣きながらこう語り始めた。「主よ、私たちは、あなたが戦いで捕らえられ、サマラへ連行され、そこで恐ろしい牢獄に閉じ込められたこと、そして神が、私たちの聖なる父ニコライの祈りによって、あなたをその牢獄から解放し、ギリシャの地へ導かれたことを耳にしました。　それを知った私たち、あなたの家族一同は、泣き叫びながら至る所であなたを探し求め、多くの町や村を巡り、あなたの行方を尋ね歩きました。　あなたの居場所が見つからず、どこにおられるのかも分からなかったため、私たちは涙を流しながら聖ニコライに熱心に祈りを捧げ、私たちの秘められた宝であるあなたがどこにおられるかを明らかにしてくださるよう願いました。すべての人々の迅速な助け手である聖ニコライは、私たちの祈りを無視されることなく、あなたに関するすべてを明らかにしてくださり、私たち、あなたのしもべたちは大いに喜びました。　私は、誰よりも先を急いで、わが主であるあなたのもとへ駆けつけました。どうか、あなたは起き上がり、ご自宅へお戻りください。そうすれば、あなたの御顔を拝みたいと願うすべての人々があなたを見ることができ、あなたを束縛と捕囚から奇跡的に救い出された神を賛美するでしょう。　また、沈黙の生活については悲しむ必要はありません。そこにも修道院があり、隠遁者たちが沈黙を守るのに適した場所があるからです。あなたは、お望みの修道院に身を置くことができます。　さらに、あなた自身も公正に考えてみてほしい。二つのうち、神がどちらをより好まれるか――砂漠や山の渓谷での隠遁生活（それは隠遁者自身にしか益をもたらさない）か、それとも、神に喜ばれ、神に導かれた人の生き方か。後者は、その教えによって多くの人々を神へと導き、救いの道へと導くものである。　まことに、後者の方が優れている。神ご自身が聖書の中でこう証言しておられる。「あなたは、無価値なものから貴重なものを引き出す。そうすれば、あなたはわたしの口となるであろう」（エレミヤ書15:19参照）。　ご存

じの通り、私たちの街には情欲の深みに沈んでいる人々が大勢おり、彼らを悔い改めへと導くことのできる人物を求めているのです。　主よ、もしあなたがここに来て彼らを神へと立ち返らせることができれば、神からより大きな報いが与えられることでしょう。それなのに、なぜ私たち、あなたを心から愛するあなたのしもべたちを軽んじ、私たちから離れ、荒野に身を隠すのですか？」

悪魔は涙ながらにこうしたこと、そして多くの同様の言葉を語ったため、聖人は少し戸惑い、涙を浮かべて彼にこう言った。「私をここに導いたのは、人間でも天使でもなく、神ご自身と至聖なる聖母マリアである。もし彼らからここを去れという命令がない限り、私はこの場所を離れない。」

しかし、悪魔は神と聖母マリアの名を聞くや否や、たちまち姿を消した。聖人は悪魔の策略に驚いたが、十字を切って身を守り、心を神に向け、平静を保っていた。

七年が過ぎた後、邪悪な敵は再び光り輝く天使の姿に変身し、手に武器を露わにして洞窟の近くに立ち、こう叫んだ。

「ペトロよ、キリストのしもべよ、私のところへ来なさい。そうすれば、あなたに良き知らせを伝えよう。」

「お前は誰だ」と聖人は答えた。「私に良き知らせを伝えようとする者は？」

「私は主の総司令官だ」と、狡猾な誘惑者は答えた。「お前に遣わされたのだ。力を出し、勇気を奮い起こし、喜び、楽しめ。神はお前に栄光の玉座と、決して枯れることのない冠を用意しておられるのだから。」　さあ、今この場所を離れ、世に出て、多くの人々に益をもたらしなさい。あなたのそばにあった泉も、神の御命令により干上がってしまった。それは、あなたを脅かしていたすべての獣たちが、水不足で死に絶えるためである。

そう言いながら、狡猾な敵は、神の許しを得て、別の悪魔を送り込み、小川の流水をせき止めさせた。しかし、聖ペトロは謙遜な知恵をもって、悪魔の諂うような言葉にこう答えた。

「私は、臭い犬のような者でしかないのに、どうして主の大天使が私の前に現れるというのか？」

「これを不思議に思うな、主のしもべよ」と悪魔は答えた。　「今や、あなたはモーセ、エリヤ、ダニエル、ヨブをも凌駕した。モーセとエリヤには飢え餓えで、ダニエルには口を封じた爬虫類や獣たちで、ヨブには忍耐で勝った。それゆえ、あなたは天において偉大と呼ばれるだろう。」　立ち上がって見てみよ――水はすでに枯れ果てている――世にある修道院へ行きなさい。わたしはあなたと共にあり、あなたを通して多くの人々を救う、と全能の主は言われる。

「知っておきなさい」と聖人は悪魔に答えた。「私の助け手である至聖なる神の母と、私の苦難における温かい守護者である聖ニコライが私にそう命じるまで、私はここから立ち去らない。」

悪魔は、聖母マリアと聖ニコラオスの名を聞くやいなや、たちまち姿を消した。聖人は、悪魔の狡猾さと、それと同時にその無力さを見抜くと、神に向かってこう言った。「主イエス・キリスト、わが神よ！　この私の敵は、咆哮する獅子のように、私を飲み込もうと彷徨っている（参照：ペトロの手紙一　5:8）。しかし、あなたは御自身の力強い御手をもって、あなたのしもべである私を守ってくださる。私を見捨てられなかったことを感謝します。至善なる主よ、どうか最後まで私を見捨てないでください」と祈った。

その日が過ぎ、夜、眠りの中での幻において、敬虔なペトロに、キリスト教徒の迅速な助け手であり、人を愛する御母、至聖なる聖母マリアが聖ニコライと共に現れ、こう言われました。

「今や、悪魔の策略を恐れることはない。主はあなたと共におられるからだ。明日の朝、主の御使いがあなたを訪れ、糧としてマナをもたらしてくれるだろう。神は、あなたの生涯を通じて、40日ごとに御使いにマナをもたらし、あなたの糧とするよう命じられているからだ。」

聖ペトロにマナを見せながら、至聖なる聖母はこう言われました。

「この糧が、あなたの生涯において40日ごとに届けられることになるでしょう」。

そう告げ、聖ペトロに平安を授けた後、聖母は彼から離れ去った。ペトロはひれ伏し、聖母と聖ニコラオスの足が立っていた場所を口づけした。朝になると、聖母が告げた通り、神の御使いが現れ、ペトロに天の糧をもたらし、聖人にそれを手渡すと、立ち去った。　そこでペトロは神と聖母マリアに感謝を捧げ、その後、天使の手によってもたらされたマナを口にし、それによって十分に力を得たため、40日間、食物を摂らずに過ごすことができた。　その後、40日ごとに天使が聖人にマナをもたらし、聖ペトロはそれによって40日間を乗り切った。　こうして聖人は、沈黙と断食、そして祈りの中で53年間を過ごした。この間、特に当初ペトロを頻繁に悩ませていた悪魔のあらゆる策略――幻影、妄想、恐怖――は、神の御加護により彼から追い払われた。　山でこれほど長い年月を過ごした聖人は、人の顔を見ることもなく、裸身を覆う衣服も、人間の生活に必要なものも何も持たなかった。ただ空が彼の覆いであり、大地が寝床であった。　夏は灼熱の太陽に焼かれ、冬は寒さに震えた。彼はこれらすべてを、神への愛と将来の報いのために耐え忍んだ。

やがて主が御自分のしもべを人々に現そうと望まれたとき、主の特別な御摂理により、次のような出来事が起こった。ある猟師が、弓と矢筒を手に取り、アトス山へ狩りに出かけた。　険しい岩場や深い谷間を通り抜け、高く連なる丘を越えていくと、彼は聖ペトロが天使のような生活を送っていた場所にたどり着いた。狩人がその場所に近づくと、森から飛び出してきた大きな鹿が、戯れるように彼の前を遠くへ走っていくのが見えた。　その美しい鹿を目にした狩人は、それを追いかけ、射殺しようと一日中追跡を続けた。やがて、神の御心により、鹿は聖人の洞窟にたどり着き、その前でじっと立ち止まった。　狩人は鹿を追いかけていると、その獣の右側に、濃い髭を生やし、腰まで届く長い髪を持ち、その体がまるで獣のように毛に覆われた裸の男を見かけた。聖人を見て、狩人はひどく恐れをなして、後ろへ逃げ出した。　すると、聖ペトロは、狩人が後ずさりしているのに気づき、大きな声で彼に呼びかけた。「兄弟よ！　なぜ私を恐れて逃げ出すのか？　私はあなたと同じ人間であり、あなたが思ったような悪魔の亡霊などではないのだ。　戻ってきて、私のところへ来なさい。主があなたをここに遣わされたのだから、私のことすべてを話してあげる。」

猟師はその声を聞いて立ち止まり、恐れおののきながら、自分を呼んだ敬虔な神父のもとへ近づいた。聖人は猟師を励まし、彼を抱きしめて主の御名において口づけをし、座ると彼と語り合いを始め、自分自身について詳しく語り始めた。　かつて軍司令官であった彼が戦場で捕らえられたこと、サマールの牢獄に囚われていたこと、聖ニコラオスと聖シメオンの御出現によって束縛から解放されたこと、ローマへ　へ赴き、そこから戻ってきたこと、この山に定住したこと、そしてどのように闘い、何を食べ、どれだけの年月を隠遁生活の中で過ごしたか――要するに、　狩人に自分の生涯のすべてを語った。狩人は聖人の話を聞き、驚き、畏敬の念を抱き、感極まって言った。「今、私は主があなたの恵みによって私を訪ねてくださったことを理解しました。主は私に、御自身の隠れた御使いであるあなた、父上をお目にかからせてくださったのです。今日から、私は常にあなたと共にいます、神のしもべよ」。

「そうはならないように、わが子よ」と、聖人は彼に言った。「まずは自分の家に戻り、自分自身を試してみなさい。断食や隠遁の修行を成し遂げることができるか？　そして、次のように自分を試してみなさい。肉、酒、チーズ、油、そして何よりも妻を断ち、自分の財産を貧しい人々に分け与え、熱心に祈り、断食し、砕かれた心で自分を試みなさい。そうして一年を過ごし、その一年が過ぎたら私のところに来なさい。神が望まれることは、あなたが果たさなければならないのだ。」

そう言うと、聖人は猟師に誓いの印として祈りと祝福を与えた。そして、彼を仲間のもとへ送り出す際、別れの言葉としてこう言った。「わが子よ！　平安のうちに去りなさい。そして、あなたに明かされた秘密を誰にも明かしてはならない。多くの者に知られた宝は、盗まれてしまうかもしれないからだ」。

猟師は聖人に頭を下げてその場を去り、神がこのような御自分の聖人に肉眼で会い、語り合うことを許してくださったことを賛美し、感謝した。家に着くと、猟師は聖人が言ったことをすべて実行した。

一年が過ぎ、狩人は二人の修道士と自分の兄弟を伴い、船で旅立ち、聖ペトロが滞在していた場所の対岸に停泊した。船を降りると、彼らはまっすぐ上方の荒野へと向かった。　聖人の住んでいた場所へ向かう途中、猟師は熱烈な愛に駆られ、皆より先んじて洞窟へと急いだ。彼は、聖なる父が地面に横たわって亡くなっているのを見つけた。その両手は胸の上で十字架のように組まれ、目は端正に閉じられ、体の他の部分も整然と清潔に保たれていた[4342]。これを見た猟師は恐怖に襲われ、聖人の遺体の前で激しく泣き崩れた。猟師の仲間たちがやって来て、この驚くべき遺体と、その上で泣いている友人の姿を見ると、こう尋ねた。「お前が見つけたこの死者は誰だ？　なぜそんなに悲しげに泣いているんだ？」

すると、猟師は涙と嗚咽を交えながら、去年の夏に聖人の口から直接聞いたその生涯について、彼らに詳しく語った。　亡き聖人の奇跡的な行いについての物語は、それを聞く者たちの心を深く感動させた。彼らは、これほど偉大な神のしもべを生前に目にすることも、彼と語り合うこともできなかったことを嘆き、苦々しい涙を流した。　猟師の兄弟は、邪悪な霊に取りつかれていたが、神の御使いの聖遺に触れた途端、即座に癒やされた。悪霊は「おお、ペトロよ！　私を私の巣窟から追い出しただけでは足りないのか。今や、私のこの住処からも私を追い出そうというのか！」と大声で叫びながら、彼を地面に叩きつけた。

そう言い終えると、まるで煙のように、まるで死んでいるかのように横たわっていた男の口からその言葉が消え去った。しばらくして、彼は心身ともに健やかな姿で起き上がり、兄弟にこう言った。「ありがとう、兄弟よ。私のためを思って、私をここに連れてきてくれたのだから」。　その後、彼は聖人の遺骨にひれ伏し、癒やされた喜びと感謝の念を込めて、その遺骨に口づけをした。その後、彼らは神の御心にかなった聖人の尊い遺骨を手に取り、岸辺へと運び、自分たちの小舟に乗せて、マケドニアの支配下にあったある比較的有名な村へと運んだ。　聖人の遺骸から多くの癒しがもたらされていると聞き及んだその町の大司教は、司祭団と共に聖ペトロの癒しの力を持つ遺骸を受け取り、それを敬意を込めて自身の司教区へ運び、香を添えて貴重な聖遺物箱に納め、教会に埋葬した。三日間、三晩にわたって、至聖なる三位一体、父と子と聖霊――すべての被造物によって、常に、今、そして永遠に、世々限りなく賛美される神――への民衆による賛美の儀式の後、その遺骸を教会に埋葬した。アーメン。

コンダク、第2調：

人間社会から身を引いて、岩の洞窟や裂け目に住まわれたペトロよ、神の御心と愛によって、あなたの主から冠を受けられた。私たちが救われるよう、絶えず祈ってください。

6月26日

6月13日（旧暦）

同日、1395年にモスクワの聖アンドロニクスが帰天した。

[4342] 聖ペトロは734年頃に没した。

聖殉教者アキリナの殉教

記念日6月13日

パレスチナの都市ヴィブロス（[4343] ）には、聖使徒たちの時代からキリスト教徒が住んでいたが、そこにエウトルミオスというキリスト教徒が住んでいた。彼の誠実な夫婦生活は、主によって祝福され、アキリナと名付けられた少女が生まれた。 幼子誕生から4ヶ月後、母は彼女をエウファリウス司教のもとに連れて行き、司教は幼児に洗礼の宣言を行い、十字の印を授けた。その後2ヶ月が経過すると、司教はその少女に洗礼を授けた。 2歳になる頃、アキリナは天の御国へと旅立った父を亡くし、母の世話の下に残された。母は娘を育てながら、敬虔なキリスト教徒としての生活の規範を教え込み、7歳になる頃には、少女はすでにこれらの教えを完全に身につけていた。 年を重ねるにつれ、アキリーナはますます聖霊に満たされ、キリストの恵みに彩られていった。彼女はそれに深く感化され、若く未熟な年頃でありながら、不敬虔な王たちがすべての人に偶像崇拝を義務付けた勅令を、取るに足らないものとして勇敢に打ち破ったのである。 これについて、これから語っていこう。

絶えず祈りの中で神を呼び求めていたアキリナが10歳になった時、ディオクレティアヌスの治世は7年目を迎えていた[4344] 。この頃、パレスチナ地方の統治権を、あるヴォルシアンという人物が掌握したが、彼は人間というよりはむしろ悪魔の産物であった。 万物の創造主である真の神を認めようとしなかったヴォルシアンは、飽くことのない悪意をもって、救い主キリストの敬虔な信徒たちを迫害し始めた。そして、多くの勇敢なキリストの戦士たちは、苦難を勇敢に耐え抜き、朽ちることのない冠にふさわしい者とされた。

当時、神の知恵に満ちた聖なる乙女アキリーナは、同年代の少女たちにしばしば次のように諭していた。

「無言で感覚のない偶像を崇拝することに、あなたたちにとって何の益があるというのか？ それらを信仰をもって崇拝する者たちは、空虚で有害な、悪魔的な希望に自らを欺いていることを知らないのか？ それらは死んでいて無力な神々である。果たして、それらが恩恵をもたらすことができるだろうか？」

「では、あなたはどのような神を崇めているのですか？」と、同年代の少女たちはアキリナに尋ねた。

彼女はこう答えた：

「私は、天と地と海、そしてそれらを満たすすべてを創造された、崇拝に値する唯一の神を崇め、敬っています。神は初めから、御自身を信じ、御自身に希望を置くすべての人々に恵みを与え、全能者として、世の終わりまで御自身を呼び求める者たちに御恵みを注ぎ続けてくださるでしょう。」

[4343] ヴィブロス、あるいはビブロスは、本来フェニキアにある都市である。

[4344] ディオクレティアヌス帝の治世（284～305年）には、キリスト教徒に対する4つの勅令が発布された。最初の勅令は303年2月に公布された。この勅令により、教会の破壊と聖書の焼却が命じられたほか、キリスト教徒は市民権、名誉、法の保護、および公職を剥奪された； キリスト教徒の奴隷は、何らかの事情で自由の身となった後もキリスト教を信仰し続ける場合、自由の権利を失うこととなった。 まもなく第二の勅令が発布され、すべての教会の司祭およびその他の聖職者を牢獄に投獄するよう命じられた。このように、この勅令は聖職者のみに適用されるものであった。彼らは、第一の勅令の発布直後に始まったシリアおよびアルメニアでの反乱の首謀者として、皇帝の前で告発されたのである。これはキリスト教徒にとって不幸な出来事であった。 同年303年には、第3の勅令が続き、第2の勅令に基づいて投獄された者全員に対し、抵抗すれば拷問を受ける恐れがあるとして、犠牲を捧げるよう強制することが命じられた。最後に、304年には最後の第4の勅令が公布され、キリスト教徒に対する全面的な迫害が宣言された。 この勅令によって、最も多くのキリスト教徒の血が流された。この勅令は、311年に皇帝ガレリウスが特別勅令によりキリスト教を「許容された宗教」と宣言するまでの、実に8年間にわたって施行された。ディオクレティアヌスの迫害は最後のものであり、この迫害において、キリスト教は3世紀近くにわたる闘争の末、異教に対して決定的な勝利を収めたのである。

「私たちは聞いたことがあります」と、アキリナの話し相手たちは反論した。「あなたが説くその神は、ユダヤ人たちに十字架に釘付けにされ、死んだと。」

「死は御方に権威を持たないのです」と聖女は答えた。「御方はご自身をよみがえらせただけでなく、御自身の尊い御血によって贖い、死者をよみがえらせたのです。　人間が真の道から迷い出たことをご覧になり、神は御身を人として現わし、悪魔の誘惑を打ち砕き、私たちに真理と共に恵みを与え、堕ちた人類を救いの道へと導き、その道を歩ませるために、人となられたのです。

「でも、十字架にかけられたと言われているその方は、いったい誰なの？」と、アキリナの同年代の少女たちはさらに問い詰めた。

「人類を愛してくださった、すべての者の救い主です」と彼女は答えた。「主は、古い人を水と御霊によって[4345]新しい人とするために、自ら進んで苦しみを受けられました。彼は、地上に生きる者たちを救うだけでなく、ハデスに囚われている者たちをも死の束縛から解放しようと願って、十字架に上られた。そして、三日目の復活によって、彼の再臨の際には、すべての人にとって死からの復活が訪れるという不変の真理を告げ知らせたのである。

「しかしもし――」と、アキリナに問いかけ、首をかしげた者たちは言った。「あなたが語っているその方が、この世にこれほど偉大な恩恵をもたらしたのなら、なぜユダヤ人、すなわちその同胞たちは、その方を神として崇めないのですか？」

「この民は」と、聖なる乙女は説明した。「常に正しい道から逸れてしまいます。その魂は、頑なで、憤りに満ち、悪意に目がくらんでいるため、真に正しく義なるものを往々にして拒絶するのです。だからこそ、ユダヤ人たちは、彼らに恩恵を施してくださった方を拒絶し、ピラトに引き渡して十字架刑に処したのです。」

地方長官の奴隷の一人、ニコディモという名の男は、聖なるアキリナが同年代の少女たちと交わすこうした会話を度々耳にしていた。彼はついに主人に、この町に、自分にとって取るに足らないと考える　「神々」と呼び、王たちが命じた神々の崇拝に従わず、ある「十字架にかけられた神」について説教することで、一部の人々を先祖の信仰から遠ざけていると報告した。これを聞いた地方長官は、使用人を遣わしてその少女を捕らえさせた。　聖なる殉教者アキリーナは、ヴォルシアンが地方を統治して2年目、生後12年目に拷問を受けることになった。彼女が不敬な法廷に連行されると、ヴォルシアンは彼女を一瞥してこう尋ねた。

「お前こそ、王の勅令に背き、他の人々をもそそのかして、我らの神々を崇めず、十字架にかけられた者に拝ませようとしているのではないのか？　イエスの御名を告白する者たちをあらゆる拷問にかけ、最終的に死刑に処すという王たちの命令を、お前は知らないのか？　それゆえ、十字架にかけられた者を否定し、不滅の神々にふさわしい敬意と生贄を捧げよ。そうすれば、我々はお前を拷問にかけることを強いられることはないだろう。

「もしあなた、アンフィパト[4346]よ」と聖アキリーナは答えた。「もしあなたが私を苦痛に満ちた拷問に処すならば、それによって私に朽ちることのない冠をもたらすことになるでしょう。私は、たとえ最も激しい苦痛にあっても決してその御名を否定することのない、私の救い主からその冠を受け取ることを望んでいるのです。」　さあ、躊躇うことなく――私のために、お好きな拷問を考案してください。そうすれば、信仰を盾とする私が、あなたの拷問を恐れないことを、その実情をもって確かめることになるでしょう。

そこでヴォルシアンは、優しい口調で聖なる乙女を諭し始めた。

「お前の若さと美しさを見ると、お前のことが気の毒に思える。なぜなら、もしお前を拷問にさらせば、まだ未熟な肉体はたちまち砕けてしまうだろう。残酷な拷問官たちは、激しい拷問の末、

[4345] すなわち、新しい命へと再生させる洗礼の水と、その命において聖霊の恵みによって強められること（ヨハネ3:5–6参照）。

[4346] すなわち、地方長官。

お前を苦痛に満ちた死に追いやるだろう。そうすれば、お前は若くして命を落とすことになる。しかも、お前が信じるキリスト教の神でさえ、お前を救うことはできないのだ。」

「私はあなたに憐れみを求めてはいません」と、聖アキリーナ・ヴォルシアヌは反論した。「あなたは私に慈悲を示そうとしているつもりかもしれませんが、私を真の神から引き離そうとするその行為こそが、かえって私をさらに傷つけているのです。」　お願いだ、私を憐れむのではなく、最も容赦のない残酷さで私を扱ってほしい。そうすれば、私の忍耐を通して、キリストに希望を置く者は決して打ち負かされないことを、あなたは知るだろう。

アンフィパトは、いかなる説得もキリストのしもべにイエスへの信仰を放棄させることはできないと確信すると、こう言いながら彼女の顔を殴るよう命じた。

「さあ、拷問の始まりだ。これは君にとって甘美で心地よいものか？」

「非人道的な拷問者よ！」とアキリーナは叫んだ。「神の御姿に似せて造られた者の顔を打つなどという無礼を犯したのだから、私がその御姿を宿している御方が、御自身の審判の日に、このことを決して許さないことを知っておきなさい。」

「私はこう考える」と裁判官は言った。「今や全世界の救いをその手に握っている我らの偉大なる神々は、来るべき世においても、すべての者の救いをその支配下に置くであろう。」

そう言い終えると、彼は少女の衣服を脱がせるよう命じ、彼女を地面に押さえつけて二人の兵士に殴打させながら、拷問に次のような言葉を添えた。

「アキリーナよ、お前の話していた神は今どこにいるのだ？　その神は、裁きの日に私を赦さないと言っていたではないか。さあ、その神がここに来て、私の手からお前を救い出してみろ。」

その後、ヴォルシアンは殴打していた者たちに止まるよう命じ、聖アキリナにこう言った。

「お前の幸福を願う私の言葉に耳を傾けよ。その狂気を捨て、苦しみから逃れたいのなら、キリスト教の異端を捨てよ。十字架にかけられた際、自らを救うことさえできなかったあの方を頼りにしていた者の中で、私の手から救われて生き延びた者が、たった一人でもいるか？」　イエスを崇める者たちのうち、わが王たちは誰をこの地上に生き残らせたというのか？

「まさか、容赦なき処刑人よ、私が自分に加えられる拷問を感じているなどと思っているのですか？」と聖アキリーナは答えた。「私の神は、あなたが悪魔である父の唆しによって私に対して企てるあらゆる策略よりも、はるかに大きな強さと忍耐を私に与えてくださることを知っておきなさい。」

この聖なる乙女の勇気ぶりに戸惑いを覚えたヴォルシアンは、彼女にこう言った。

「私は、君に数日間、熟考する時間を与える。そうすれば、健全な判断に基づいて神々にひれ伏し、それによって命を保ち、同時に王たちから相応の報いを受けることができるだろう。」

「一体、何日間、猶予を与えてくれるのですか？」と聖アキリーナは尋ねた。

「いくらでも構わない」とヴォルシアンは答えた。

「それならお願いです」と殉教者は言った。「そのような考えにふける時間を、たとえ一時間たりとも私に与えないでください。幼い頃から、私はただ唯一の神を崇めるよう教えられてきました。天にまします御方が、慈愛に満ちた眼差しで地上の御子らを見守ってくださるのですから。」

少女の神への揺るぎない愛を見て、ヴォルシアンは心の中でこう呟いた。「私の説得も努力も無駄だ！」そして苛立ちのあまり、彼は赤熱した鉄の棒で聖女の頭を耳から貫くよう命じた。赤熱した棒が少女の脳を貫いたとき、脳髄は血と共に彼女の鼻孔から流れ出た。　しかし、そのような甚大な苦しみの中でも、殉教者は神にこう祈った。「わが主、イエス・キリストよ！　幼き日から私を導き、御自身の真理の光で私の心の秘められた思いに光を照らし、御自身の強大で無敵の力によって悪魔との戦いに私を堅く立たせてくださった方、　信じる者たちに真の偉大なる知恵の深淵を啓示してくださったあなたよ、私の業を最後まで成し遂げさせ、私の貞潔の灯を消えることのないものとして

守ってください。そうして、私は賢い乙女たちと共に、あなたの清らかな御殿に入り、そこで私の願いを成就してくださるあなたに栄光を捧げることができますように」。

この祈りの後、聖アキリーナは耐え難い苦痛のあまり、まるで死んだかのように地面に倒れ込んだ。アンフィパトは、彼女が本当に死んだと思い込み、彼女を城の外に放り出して犬に食わせよと命じた。彼は、王の命令に背き、ローマの神々を冒涜した者として、この殉教者に通常の埋葬に値するとは考えていなかったのだ。　こうして聖アキリーナは、道端に倒れたまま丸一日横たわっていた。真夜中、この祝福された乙女の前に主の天使が現れ、彼女に触れてこう言った。「起き上がり、元気になりなさい。行ってヴォルシアーノを非難しなさい。彼自身も、その意図も、神の前では取るに足らないものだからである。」

すると直ちに、聖アキリーナは無傷のまま立ち上がり、神を賛美してこう語った。「わが命の創造主よ、私に健康を取り戻させ、御自分のしもべたちを不義から救い出してくださるあなたに感謝します。主よ、あなたは永遠に存在し、あなた以外に神はおりません。　ただ一つ、謙虚にあなたにお願いします。私がこの苦難の試練を終えたとき、あなたの栄光の冠を私に授けてください。そして、あなたの約束が成就することを喜びながら、あなたの御名を告白するために苦難を受けた聖人たちの群れの中で、あなたを賛美させてください。」

主は天より、その謙虚なしもべの祈りにこうお答えになった。「行きなさい。――あなたが願うことは叶うであろう」。これを聞いて、祝福された乙女は、言葉に尽くせぬ喜びを胸に街へと向かった。彼女が城門にたどり着くと、門は自ずと開いた。　主の天使に導かれて、聖アキリーナはヴォルシアーノの宮殿にたどり着き、何の妨げもなく中に入り、眠っているアンフィパトスの前に立った。アンフィパトスは目を覚ますと、目の前に立つ人物に気づき、恐怖に駆られて自分のクーヴィクラリウスたちを呼び寄せ[4347]、彼らに尋ねた。「私の目の前に立っているこの者は誰か？」

クヴィクラーリウスは灯りを掲げながら、「間違いなく、これはアキリナです。あなたは彼女が苦痛の末に亡くなった後、犬に食わせるよう命じたあの女性です」と答えた。

アンフィパトスはクヴィクラーリウスの言葉を聞いてさらに恐怖に駆られたが、それでも朝までその乙女を拘束しておくよう命じた。

日が明けると、ヴォルシアンは再び聖アキリナを裁判に呼び出した。彼はまず、その乙女に向かってこう尋ねた。

「お前がアキリナか？」

「まさか、お前という不法者よ、父なる悪魔によって心の目が曇らされているが、今や肉眼でも見ることができないというのか？」と、今度はその至福の乙女が問い返した。

「その通り、あなたの前に立つこの主のしもべ、アキリナです。」

強い戸惑いを覚え、目をこすりながら、アンフィパトスは独り言のようにこう考えた。「燃え盛る頭から脳髄が流れ出ているにもかかわらず、彼女が死ななかったのなら、一体どのような拷問が彼女を傷つけることができるというのか？」

そう考えた彼は、その乙女を剣で斬り捨てるという次の判決を下した。　「アキリナは、不敬虔なキリスト教の異端の擁護者であり、若くはあれど偉大な魔女である。不死の神々を崇めず、王の命令にも従わない彼女に対し、我々は長きにわたり熱心に諭してきたが、それでも彼女の狂気を改めさせることはできなかった。　それゆえ、この魔女に何の影響も及ぼさなかった数々の拷問を経て、我々は彼女を城外にて斬首により処刑することを決定する」。

死刑判決の後、聖アキリナは処刑場へと連行された。処刑場に着くと、この祝福された乙女は祈りの時間を求めた。天を仰ぎ、殉教者は次のように祈った。

[4347] すなわち、寝具係のこと。

「全能の主よ、わが神よ！　私をこの苦難の道のりの終着点へと導いてくださったことを感謝いたします。わが神、万物の創造主よ、私がこの苦難の道を実りあるものとして全うできたことを賛美いたします。　万物の創造主よ、あなたが拷問者を恥じさせ、私に朽ちることのない冠を授けてくださったことを祝福します。どうか私の霊を安らかに受け入れてください――この世を去り、天の恵みに至ることができますように」。

この聖女の祈りに応えて、天から声が聞こえた。「来なさい、選ばれた乙女よ。拷問者の激怒を鎮め、その偉業によって悪魔の毒牙を消し去った者よ。あなたのために用意された報いを受け取りなさい」。

そしてその声に続いて、キリストの聖なる殉教者は、処刑人が彼女の頭上に剣を振り上げる前に、死の眠りについた。処刑人はその様子を目の当たりにしたものの、アンフィパトの命令に背くことを敢えてせず、すでに息絶えていた彼女の首を剣で切り落とした。すると、傷口からは血の代わりに乳が流れ出た。　処刑に立ち会ったキリスト教徒たちは、殉教者の聖遺物を、何ものにも代えがたい宝物として受け取った。遺体に高価な香油を塗り、新しい布で包み、ヴィヴロス市内の墓所に尊く葬った。　そして、聖殉教者アキリナの墓からは、私たちの神キリストの栄光のために、父と聖霊と共に永遠に賛美される方の御名において、多くの病人が癒やされた。アーメン[4348]。

コンダク、第2調:

あなたの貞潔の美徳によって魂を清め、殉教の苦難を経て天の高みへと昇られた、至聖なるアキリナよ。あなたの花婿であるキリストの愛に心を貫かれ、今や天使たちと共に喜びながら御前に立たれておられます。彼らと共に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

私たちの聖なる父トリフィリウス、レウクシウス司教の生涯

記念日：6月13日

コンスタンティノープル出身の聖トリフィリウスは、ベリテで世俗の教育を受けた[4349]。また、敬虔さの師として、トリミフントスの聖スピリドン司教に師事した。　聖トリフィリウスは、主ご自身によって司教としてあらかじめ選ばれ、定められていました。まだこの偉大な称号を授かっていないうちに、彼はすでに司教としての姿でコンスタンティウス帝の幻視に現れました。このことについて、聖スピリドンの伝記は次のように伝えています。

[4348] 聖殉教者アキリーナは283年6月13日に亡くなった。 彼女の聖遺骨、あるいはその一部はコンスタンティノープルに移され、彼女にちなんで名付けられた教会でその記念日が盛大に祝われた。この教会は532年、ユスティニアヌス帝の治世中に焼失したが、再建された。この教会に関する言及は、12世紀の韻文プロローグに見られる。

[4349] ベリトは古代、フェニキアの港湾都市であったが、その後エジプト人の手に渡り、アンティオコス3世によってプトレマイオス朝から奪還された。紀元前140年、シリア人のディオトス・トリフォンによって破壊されたが、ローマ皇帝アウグストゥスの治世下で都市は再び再建された。 クラウディウス・カエサルはこの都市を著しく美化し、テオドシウス2世皇帝はここを大司教座に定めた。その後の皇帝たちの治世下、ベリトは修辞学、政治学、とりわけ法学の学校で名声を博した。 現在のベリトはベイルートと呼ばれ、トルコ系アジアのシリア・ヴィライェト（総督府）の主要都市である。

コンスタンティヌス大帝の死後、ギリシャ・ローマ帝国の権力はその息子たちへと移り、領土分割の後、長男のコンスタンティウス[4350]が東方の統治を任された。ある日、彼はアンティオキア[4351]を訪れることになったが、そこで予期せず重篤な病に倒れ、医師たちの尽力も及ばないほどであった。　そこで、医師たちへの期待を捨てた病床の王は、肉体と魂を癒やす神に祈りを捧げた。彼は熱心に癒やしを願い求めたところ、夢の中で天使が現れ、数多くの聖人たちを見せた。その中には、まるで彼らの指導者や長であるかのように、他の者たちから際立って目立つ二人の聖人がいた。　その際、天使は王に、彼らだけが病からの救いをもたらすことができると告げた。　目を覚ましてその幻視について考えを巡らせた王は、自分に現れた司教たちが一体誰なのか見当がつかなかった。実際、名前も出生地も知らない人々を、どうして彼が知る由があっただろうか？　とりわけ、司教の装いで示された人物のうちの一人は、まだ司教ではなく、これから司教になる予定だったという事実を考慮すればなおさらである。　王は長い間困惑していたが、ついに次のような賢明な決断を下した。近隣のすべての都市から司教たちを召集し、その中から幻視で示された二人の司教を見つけようとしたが、見つからなかった。そこで王は、より遠方の国々からも多くの司教を招集したが、その中にも彼が求めていた人物は見つからなかった。　その後、彼は帝国の全領土に勅令を送り、その地に居住する司教たちを自分の元へ集まるよう命じた。そのような勅令、あるいはむしろ王の願いは、キプロスの地にも届いた[4352]　トリミフントスのスピリドンのもとへ。彼には、王に起こったすべてのことが神によって明らかにされていたのである。　集まった後、聖スピリドンは弟子トリフィリウスを伴って皇帝のもとへ向かった。彼は、幻視の中で皇帝に現れた際――すでに述べたように――トリフィリウスはまだ司教ではなかった。アンティオキアに到着すると、一行は皇帝のもとへ向かった。　聖スピリドンは粗末な服を着ており、手にはナツメヤシの杖を持ち、頭にはごく質素で、ほとんど乞食のようなミトラを被っていた。胸には土器の壺を下げており、そこにはエルサレムの住民の慣習に従い、聖十字架の聖油を入れていた。　そのため、彼が王の宮殿に入ったとき、宮廷の召使いの一人が、聖なる司教をただの物乞いと勘違いし、彼を嘲笑して先へ進むことを許さなかったばかりか、頬を平手打ちした。悪意のない聖スピリドンは、主の御心に従い、殴った者にもう一方の頬も差し出した。　その男は、目の前に立っているのが司教であることを悟り、自分の過ちを悟って謙虚に許しを請い、許しを得た。　聖スピリドンが王の元へ入ると、王はかつて見た幻を思い出し、彼だと気づいた。王は席から立ち上がり、神のしもべのもとへ歩み寄って頭を下げ、涙ながらに司教に、病の治癒を主にお祈りくださるよう懇願した。　神の御心に適う者は王の頭に手を置くと、王はたちまち健康を取り戻した。聖人の祈りによって主から授けられたこの癒やしを喜び、王は聖人に深い敬意を表し、その日一日を彼と共に喜びの中で過ごし、、その善良な医師をもてなした。一方、聖トリフィリウスは、王の栄華――宮殿の美しさ、貴族たちが取り囲む中、座している王の威厳ある姿、使用人たちの豪華な衣装、その他、豊かで並外れた宮廷生活の様相――に深く驚嘆した。　それを見て、聖スピリドンは弟子にこう言った。「なぜ驚いているのか、兄弟よ？　王の誇りや栄光が、王を他のキリスト教徒よ

[4350] コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスは、父の死後、東方、アジア、エジプトの統治権を継承した。351年、兄コンスタンスの暗殺者マグネティウスを打ち破り、ローマ帝国全土を自らの支配下に統一した。彼は異教の神殿を破壊するか、キリスト教徒に譲り渡して教会へと改築させた。　異教の礼拝を禁じる法律を、死刑を科すことを条件として数回にわたり公布した。しかし、アリウス派の異端に同情を示したコンスタンティウスは、当時の教会内の分裂を著しく助長した。彼は正統派の司教たちを迫害し、司教座から追放し、さらには投獄さえ行った。彼の治世下では、アリウス派が国家の要職を占めていた。 コンスタンティウスは361年、ガリアで軍によって皇帝と宣言された従兄弟のユリアヌスに対する遠征の最中に死去した。ユリアヌスは、コンスタンティウス自身がガリアの総司令官に任命した人物であった。グレゴリオス・ナジアンゾスは、コンスタンティウスが死の直前に、正統派に対する迫害を悔い改めたと伝えている。

[4351] シリア最古の都市アンティオキアは、レバノン山脈とタウロス山脈の間に流れるオロンテス川のほとりに位置し、紀元前300年に建設された。

[4352] キプロス島は、地中海の北東端、古代フェニキアの海岸近くに位置している。この地へのキリスト教の伝道は、聖使徒パウロが最初の伝道旅行の際に行ったものである。

りも義なる者にするというのか？　王もまた、最下層の乞食と同じように死に、彼と同様に土に還るのではないのか？　王もまた、すべての人と共に、偏見のない恐ろしい審判者の御前に立つのではないのか？　なぜ、あなたは一時的なものを永遠のものとして尊び、取るに足らないものを驚きの対象とするのか。本来なら、非物質的で永遠なるものを追い求め、ただ揺るぎない天の栄光のみを愛すべきであるのに。」

その後、しばらくして、聖トリフィリウスはキプロス島のレフクシアの司教に任命されたが、司教となってからも、彼は父であり師である聖スピリドンとの交わりを絶やすことはなかった。聖トリフィリウスは、自らの霊的成長のために頻繁に彼を訪ねていたが、それは次の出来事からも明らかである。　ある時、聖スピリドンはトリミフントからキリヌスへと向かっており、その道中、聖トリフィリウス司教も同行していた。彼らがペンティダクティル山を越え、パリムナと呼ばれる場所に出たとき、　――その場所は自然の美しさに恵まれ、果樹園やブドウ畑が豊かに広がっていた――聖トリフィリウスは周囲の自然に心を奪われ、自分もパリムナでブドウ畑の所有者になりたいと願い、その願いをどのように実現すべきか、心の中で長い間熟考していた。　このことは、聖スピリドンの鋭い眼差しからは隠せなかった。彼は霊によって弟子の思いを見透かし、こう言った。「トリフィリイよ、なぜあなたは絶えず虚しい事柄について思い巡らし、実際には何の価値もなく、幻のような価値で人々の心を惑わすだけの畑やブドウ畑を手に入れようとするのか？　我々には天に奪われることのない財産、すなわち人の手によらず造られた神殿がある。それを求めよ。それまでの間は、神を想う中で、天の恵みを味わいなさい。それらは人から人へと移り変わることはなく、その所有者となった者の元で永遠に留まるのだ」。

このような教えは、聖トリフィリオスの魂に大きな益をもたらし、その結果、彼は後に、使徒パウロのように、数えきれないほどの神の賜物に満ちた、キリストの選ばれた器となったのである。

ギリシャの歴史家であるニキフォロス[4353] とソゾメノス[4354] は、さらに、聖トリフィリウスと聖スピリドンの両方について、次のようなことも伝えている。　ある時、教会の必要に迫られ、キプロス島で島のすべての司教による集会が開かれた。この集会には、聖スピリドンと聖トリフィリイが出席していた。聖トリフィリイは博識で学識豊かな人物であり、若き日にベリテで長い間学んでいたため、公会議の司教たちは聖トリフィリイに対し、教会で民衆に向けて説教を行うよう依頼した。説教の最中、彼は、麻痺した男に向けられ、聖マルコによる福音書に記されているキリストの言葉を引用する必要があった。*「起き上がり、あなたの寝床を運びなさい」*（マルコ2:11）。ところが、聖トリフィリウスは福音書の文字通りの言葉を改変し、「寝床」を「床」と呼んでしまった。　「起き上がり、あなたの寝台を持ちなさい」。聖スピリドンは、キリストの言葉を改変することを許せず、トリフィリウスにこう言った。「『寝台』と言われた方よりも、あなたが優れているというのか。なぜその御言葉を恥じるのか？」

その後、彼は皆の前で公然と教会を去った。聖スピリドンのこの行動には、何ら非難すべき点はなかった。学識のない人であった彼は、その非難によって、自らの雄弁さを誇っていたトリフィリウスを恥じ入らせ、彼に謙遜と柔和さを教えたのである。

聖トリフィリウスは、教会が彼を称えて作曲した礼拝の聖歌が証言するように、その生涯をもって神に喜ばれた。それらの聖歌には、聖トリフィリウスが慈悲深い魂、清らかな思い、悪意のない心、そして正しい信仰を持ち、　偽りのない愛、卓越した貞潔の業、恵みと悔い改めの涙、そして断食を持ち、その姿は霊的な存在たちをも驚かせた――彼は周辺の国々を巡り、キリストの教えを太陽の光のように、罪によって暗くされた人々を照らした。

[4353] ソフィア修道院の修道士ニキフォロス・カリストは、1350年頃に死去した。

[4354] ソゾメンは、5世紀の教会史家である。

愛と真理をもってその羊の群れを牧し終えた彼は、この世を去り、天において、聖職者たちの群れと共に、私たちの救い主キリストの御前に立つため、彼に永遠の栄光あれ。アーメン[4355]。

コンダク、第8調：

清らかな生活によって処女の純潔を守り抜いたトリフィリアよ、あなたはレウクシアの首席司教となり、人々に福音を告げ知らせる者、また神の知恵の導き手として現れた。それゆえ、私たちは喜びをもってあなたに呼びかけます。「喜びなさい、聖人たちの栄光よ。」

6月27日

6月14日（旧暦）

聖預言者エリセイの生涯と奇跡

記念日：6月14日

聖預言者エリシャは、ルベン族のサファトの子であった[4356]。彼はアベル・メホレの町[4357]（列王記下19:16）で生まれ、偉大な奇跡行者であった。 彼の誕生そのものが、驚くべき現象に彩られていた。エルサレムから遠く離れたシロの町には、金の子牛の像が立っており、偶像崇拝に堕ちたイスラエル人たちは、それを神として崇め、犠牲を捧げていた。 エリシャが生まれたまさにその瞬間、この無生物の雌牛は、その咆哮がエルサレムにまで聞こえるほど大声で鳴き叫んだ。皆がこれに大いに驚いていると、聖霊に満たされたある祭司が言った。「今、神の偉大な預言者が生まれた。彼は偶像を打ち砕き、強者を打ち倒すことになるだろう！」

エリシャが成人し、神にさらに喜ばれるよう、清らかな生活を送っていたとき、神は彼を預言者の務めに召された。 この召命は次のようにして成し遂げられた。ある日、エリシャは十二組の牛を使って畑を耕していた。その時、ホリブ山[4358]で神と対話ししていた聖なる預言者エリヤは、神から、自分の代わりにエリシャを預言者として油を注ぐよう命じられた。 そして、エリシャが野原にいたとき、聖なる預言者エリヤが彼に近づき、自分のマントを彼の上に被せ[4359]、主の御心を伝え、彼を預言者に任命し、自分に従うよう命じました。 エリシャは直ちにすべてを捨て、神の聖なる預言者エリヤに全力を尽くして従う用意ができていたが、ただ、父と母に別れを告げるために、短時間だけ家に立ち寄る許可を彼に求めた。 家に戻ると、彼は自ら耕作に使っていた一組の牛を捕らえて屠り、鋤を薪に切り刻んで火にかけ、その火で肉を焼いて、たまたま通りかかった人々や近所の人々

[4355] レウクシアの司教であった聖トリフィリウスは、母の資金で修道院を建立し、370年頃に高齢でこの世を去った。『サルディキ地方公会議の議事録』（347年）には、彼の署名が残されている。 西教会の父である至福のヒエロニムス（420年没）は、聖トリフィリウスについて次のように述べている。「キプロスの司教トリフィリウスは、その時代で最も雄弁であり、コンスタンティウス帝の治世下で最も名高い人物であった。 私は彼の『雅歌』の注解を読んだが、伝えられるところによれば、彼は他にも多くの著作を残したものの、それらは我々の時代には伝わっていないという。」 聖トリフィリウスは、師である聖スピリドン・トリミフントスの生涯を記した。12世紀初頭、聖地巡礼の旅をしていたロシアの修道院長ダニイルは、キプロス島で聖トリフィリウスの聖遺物を目撃した。

[4356] また、他の伝承によれば、彼はマナセの部族の出身であったという。

[4357] アベル・メホラの町はヨルダン川の近くに位置していた。

[4358] ホリブはアラビア砂漠にある山で、シナイ山がその東部を構成する同じ山脈の西側の高地である。

[4359] ミロト——上着、マント。

に振る舞った。　その後、父と母に口づけをすると、エリシャは直ちにエリヤに従い、彼に仕え、神の奥義を学んだ。神の恵みにより、彼は師であり導き手である聖エリヤに劣らぬ預言者となった。やがて、神が御自分のしもべエリヤを、炎の戦車に乗せ、旋風の中で天に上げ（列王記下2:1–15）、彼を楽園に移すことをお望みになったとき、エリヤはエリシャに、神からどのような賜物を望むか尋ね、自分、エリヤが祈りによってそれを取り成してやろうと申し出た。

「求めなさい」と彼は言った。「私があなたのもとから連れ去られる前に、あなたに何をしてあげようか」。

エリシャは、この世の一時的で儚いものを何も求めなかった。なぜなら、神のためにすべてを捨て、霊において貧しく、すべてのものを無と見なしていた彼にとって、この世の何ものも必要なかったからである。　彼はエリヤに、身体の健康も、長寿も求めなかった。永遠のいのちの相続を待ち望んでいた彼は、　この一時的な人生に長く留まることを望まず、聖なるエリヤに宿っていたものよりもさらに豊かな、聖霊の恵みを自ら求めたのである。

「どうか――と彼は言った――あなたにある預言の賜物と奇跡を行う賜物が、私においては二倍になるように！　そうすれば、バアルの礼拝へと迷い込んだ人々を、預言の言葉をもって教え、その教えを奇跡によって裏付け、それによって彼らを再び唯一の真の神へと立ち返らせることができるでしょう」。

エリヤはエリシャの願いを承諾したが、ある条件を付け加え、彼にこう言った。「もし、私があなたから引き離されるのを見たら、その通りになるだろう」。　そして、二人が道を歩きながら語り合っていると、火の戦車と火の馬が現れ、二人を引き離し、エリヤは旋風に乗って天へと駆け上っていった。エリシャはそれを見送りながら、「父よ、父よ！ イスラエルの戦車、その騎兵よ！」と叫んだ。[4360]

やがて、エリシャは、エリヤと共に高みへと遠ざかり、もはや見えなくなった火の戦車を目にしなくなると、まるで父を失ったかのようにエリヤを悼み、自分の衣を真っ二つに引き裂いて泣き叫んだ。　しかし、その時、彼はエリヤが高みから下ろしたマントを目にし、それが彼を覆った。彼はそれを、エリヤの特別な霊を受け継いだしるしとして受け入れ、エリヤを偲ぶ悲しみの中で慰めを得た。　彼はそれを、偉大な宝物、あるいは貴重な王の紫の衣のように大切に保管し、この衣を用いて、かつてエリヤが行ったのと同じような奇跡を起こした。ヨルダン川を渡ろうとしたとき、彼はその衣で水を叩くと、水は割れ、エリシャは乾いた地を歩いて渡った。　この奇跡を目撃した、エリコに住む預言者の弟子たちは、エリヤの霊がエリシャに宿っていることを確信し、彼のところへ来て、彼にひれ伏した。

聖エリシャはエリコに来て、しばらくの間そこに滞在することになった。町の住民たちは彼のところへ来て言った。「ご覧の通り、私たちの町の立地は良いのですが、水質が悪く、そのせいで土地も不毛なのです！」

エリシャは、新しい水瓶を持ってきて、そこに塩を注ぎ込むよう命じた。それが行われると、彼はその水瓶を持って泉のある場所へ行き、そこに塩をまき散らして言った。

「主はこう言われる。『わたしは、この水を清くした。もはや、この水は死や不毛の原因とはならない。』」

その後、エリシャはエリコからベテルへと向かった。その町の住民であるイスラエル人は、神から離れ、偶像を拝んでいた。　彼が町に近づくと、道で遊んでいた小さな子供たちが彼に出くわし、その禿げた頭を見て、彼を嘲り、「さっさと行け、ハゲ！　さっさと行け、ハゲ！」と叫び始めた。

[4360] 他国の王たちは戦いで馬や戦車を用いていた。それゆえ、エリシャは偉大なエリヤを「イスラエルの戦車」であり「騎手」と呼んだ。なぜなら、彼一人だけで敵を打ち破り、同胞に勝利をもたらすのに十分だったからである（聖テオドール、問8）。

エリシャは通り過ぎながら振り返り、彼らが嘲り続け、叫びながら後を追ってきているのを見て、神の御名によって彼らを呪った。　すると、森から二頭の雌熊が飛び出し、そのうちの四十二人の少年たちを食い殺し、残りの者たちはかろうじて町へ逃げ延びた。この懲罰によって、神の預言者は義なる裁きに基づき、あの子らを冒涜の罪で罰し、彼らの命を絶った。それは、彼らが成人して悪人となることを防ぐためであった。　また、彼らの両親も、自分たちの偶像崇拝のゆえにこの罰を受け、共に、子供たちを神への畏れをもって育て、神の僕たちを敬虔に尊ぶよう教え導くべきだという苦い教訓を得た。ベテルからエリシャはカルメル山へ向かい[4361]、そこからサマリアに戻った。

その頃、イスラエル人たちはモアブ人との戦争を始めようとしていた。その国土に家畜が豊富に生息していたモアブの王は、例年、イスラエルの王に、子羊10万頭と毛の生えた雌羊10万頭からなる貢ぎ物を送っていた[4362]。しかし、イスラエルの王アハアブが死んだ後、モアブの王モサはイスラエル王国から離反し、恒例の貢物の送付を中止した。

そこで、ヨラム、　アハアブの息子で、サマリアでイスラエルを治め、父の不義の道を歩んでいた王は、軍勢を集め、エルサレムの敬虔なユダ王ヨシャファトと、彼に従属するエドムの王を援軍として招き、エドムの荒野を通ってモアブ人に向かって進軍した。　神の御心により、聖なる預言者エリシャも軍勢の中にいた。三人の王は、　それぞれの軍勢を率いて七日間進軍したが、人も家畜も飲む水がなく、皆、渇きで力尽きかけていた。イスラエルの王ヨラムは、ため息をつきながら言った。

「主は、私たち三人の王を集め、モアブ人の手に渡そうとされたのだ。」

すると、ユダの王は尋ねた。

「軍勢の中に、主にお尋ねできる預言者が一人でもいないだろうか。」

イスラエルの王の家来は、軍勢の中にサファトの子エリシャがおり、彼は預言者エリヤに仕えて、その手に水を注いでいたと報告した[4363]。そこで、ヨシャファト王はエリシャについて次のように証言した。

「この人に主の御言葉が宿っている。」

こうして、三人の王は聖なるエリシャのもとを訪れ、主が彼らに待ち受けることを明らかにしてくださるよう、エリシャに主への祈りを依頼した。

しかし、聖なるエリシャはイスラエルの王ヨラムにこう答えた。

「私とあなたに何の関係があるか。あなたの父アハブと母イゼベルの預言者たちのところへ行き、彼らに尋ねて、あなたたちに何が待ち受けているかを告げてもらえ。」

すると、イスラエルの王ヨラムは、謙虚に彼に言った。

「まさか、主は私たち三人の王を集め、モアブ人の手に渡そうとされたのでしょうか。」

エリシャは彼に答えて言った。

「私が仕える万軍の主を証人として誓うが、もし私がユダの敬虔な王ヨシャファトを尊んでいなければ、偶像礼拝者であるあなたに会うことさえ望まなかっただろう。」

その後、エリシャは歌い手を自分のところへ連れてくるよう命じた[4364]。すると、ダビデの詩篇を美しく歌うことのできるレビ人の歌い手が現れて歌い始めると、主の御霊がエリシャに臨み、彼は預言してこう言った。

[4361] カルメル――イッサカル族の領地にある山。預言者エリヤはここにしばしば滞在していた（列王記下18:19）。

[4362] ルノ――羊毛、毛皮。

[4363] 「エリヤの手に水を注いだ」、すなわち、預言者エリヤの常任の侍者であり、それゆえ、ユダ王ヨシャファトがエリシャについて述べたように（列王記下3:12）、完全な信頼に値する預言者である。ヨシャファト王は、おそらくすでにエリシャの評判を耳にしていたようだ。

[4364] 預言者エリシャが、啓示を受け入れるために心を整えるため、あるいはヨラム王に対する怒りを鎮めるため（列王記下3:13–14）、弦楽器の演奏に頼り、その後「主の御手が彼の上にあった」（参照：列王記上18:16；　エレミヤ書1:9）と

「深い堀を掘れ。主はこう言われる。あなたがたは雨も風も見ないが、堀は水で満たされ、あなたがたとあなたがたの家畜はそれを飲むことになる。　さらに、主ご自身がモアブ人をあなたがたの手に渡される。あなたがたは彼らの勢力を打ち破り、彼らのすべての要塞都市を破壊し、実を結ぶ木をすべて切り倒し、あらゆる水源を石と土で塞ぎ、モアブ全土を荒廃させるであろう。」

そして、預言者の言葉はすべて実現した。翌朝、敬虔なエルサレムの王ヨシャファトが、いつもの慣習に従って祭司の手を通じて神に犠牲を捧げていたとき、　人々はエドムの道に沿って流れる水を見た。その水はまずヨシャファトの軍勢が駐屯していた場所に達し、周辺に広がって谷間のすべての堀や渓谷を満たし、全地が水で潤され、湿り気を帯びた。　人々は渇きを癒やし、力を取り戻すと、モアブ人に向かって進軍し、彼らに大打撃を与えた。彼らの国全体を捕虜とし、預言者の命令に従ってその地を荒廃させ、その後、勝利を祝って自国へと帰還した。

ある日、ある預言者の弟子の未亡人が、悲しみに満ちてエリシャにこう言った。「あなたのしもべ、すなわち私の夫が亡くなりました。あなたは、彼が神を畏れる人であったことをよくご存知でしょう。　今、夫が多額の借金をしていた金貸しが来て、私からは取り立てるものが何もないと知っています。私は何も持っていないからです。そのため、彼は私の二人の息子を、自分の下で働かせることを望んでいます。彼らは、未亡人となった私にとって慰めであり、私の瞳の瞳のように大切な存在なのです」。

その未亡人は、このように苦々しく神の預言者に訴えかけた。ある伝承によれば、この未亡人は預言者オビディアの妻であった。オビディアはアハブ王の家の管理人であり、イゼベル王妃の剣から神の預言者百人を隠し　、自らの費用で彼らを養った。そのために全財産を使い果たし、金貸したちに借金を負うことになった[4365]。 死の床に就く際、彼は妻と子供たちを神の御手に委ね、主を堅く信頼するよう彼らに命じた。聖なる預言者エリシャは、その未亡人と子供たちに憐れみを示し、彼女にこう尋ねた。

「私に何をしてほしいのか。今、あなたの家には何があるか、言ってくれ。」

彼女はこう答えました：

「このしもべの家には、少量の油が入った壺以外、何もありません。」

するとエリシャは彼女に言いました。

「行って、ご近所の方々に、できるだけ多くの空の器を借りてきてください。そして、息子たちと一緒に家に閉じこもり、その器に自分の壺から油を注ぎ続けてください。そうすれば、それらは満たされていくでしょう。」

その未亡人は、神の預言者の命じられたとおりにした。彼女は近所の人たちから空の器を集め、それらを家の中に並べ、戸を閉めて、自分の壺から借りた器に油を注ぎ続けた。　息子たちは母を手伝い、器を差し出し、注ぎ入れました。すると、彼女の器の中の油は尽きるどころか、泉のように流れ出ました。すべての器が満たされると、その女性は息子たちに言いました。「もう一つ器を差し出して」。

しかし、子供たちはもう空の器はないと言った。すると、未亡人の器から油が流れ出るのをやめた。未亡人は大いなる喜びをもって神の人のもとへ急ぎ、この奇跡について彼に告げた。エリシャ

いう記述には、第一に、古代に知られていた慣習――精神を外界から遠ざけ、鎮め、また奮い立たせるために音楽を用いること（参照：列王記上16:16）――が見て取れる。　第二に、預言者エリシャが密接な関係を持っていた預言者学校（列王記上10:5）における、賛美歌の歌唱を伴う音楽の使用である。聖テオドリトスの言葉によれば、「モーセの律法に従う祭司たちはラッパを、レビ人たちはハープ、　詩篇、キンヴァル、その他の楽器を用いた。また、彼らはダビデの霊的な甘美な歌も用いていた。預言者は、その歌い手の一人を呼び寄せるよう命じた。そして、その歌い手が歌うと、御霊の恵みが、何をすべきかを示した」（『列王記下』第4巻に関する質問12）。

[4365] 列王記下18章以下。債権者が未亡人の子供たちを奴隷として売り払おうとした意図は、律法の文字（レビ記25:39、出エジプト記21:2）と、現実の過酷な慣行（マタイ18:25）によって正当化されていた。

は彼女に、この油を売って夫の借金を返済し、残った分では息子たちと共に食べていくようにと命じた。

ある時、聖なる預言者エリシャがソナムの町[4366] を通過することになった。そこで、ある裕福な女性が彼を自宅に招いてパンを食べるよう懇願し、心を込めて神の御使いをもてなした。 預言者エリシャは、カルメルからヨルダンへ、あるいはガルガリやエリコへと旅をする際、またそこからカルメルへ戻る際、その町を頻繁に通りかかっていました。その女性の招待を受けてからは、彼女が敬虔で徳の高い人であったため、彼は常に彼女の家を訪れて食事をとるようになりました。 ある日、その女性は夫にこう言いました。「私たちの前を頻繁に通り過ぎる神の人は、聖なる方だと確信しました。彼のために小さな部屋を用意し、そこにベッド、テーブル、椅子、そして燭台を置いて、旅の途中で立ち寄ったときに休めるようにしましょう。」

そして、その通りにした。聖なる預言者は、その町を訪れるたびに、その部屋に立ち寄るようになった。 ある日、神の人は、自分のために用意されたその部屋で休んでいる際、このもてなし上手で徳の高い女性にどうお礼をすればよいかと考え込んでいた。彼は自分の僕であるギエジに、その女性を呼び寄せるよう命じた。彼女が部屋に入ると、神の人は彼女にこう言った。

「あなたはこのように私たちを大切にしてくださいます。これに対し、私はどのようにお礼を申し上げればよいでしょうか。王や領主、あるいは軍司令官に、何かお願いしたいことはございませんか？」

彼女は答えた。

「彼らに願い事などありません。私は自分の民の中に住んでいるからです。」

その女性が去った後、聖人はギエジに目を向け、その女性の善行にどう報いるべきか助言を求めた。ギエジはこう答えた。

「この女性には子供がいませんし、夫も年老いています。神に懇願して、彼女に後継となる息子を授けてくださるようお祈りください。」

神の御使いはそうしました。彼はその女性のために神に熱心に祈りを捧げ、神からの啓示を受けると、彼女を再び自分のところへ呼ぶよう命じました。彼女が部屋に入り、入り口に立ったとき、神の御使いは彼女に、彼女が身ごもって息子を産むだろうと告げました。 女性は彼に頭を下げ、喜びのあまり信じられないかのように、聖人にそのことを確信させてほしいと懇願した。聖人は、その偽りのない言葉を固く信じるよう彼女を説得した。 その女性は確かに身ごもり、時が満ちると息子を産み、自分の胸で育てた。ある日、少年がすでに成長した頃、夏の収穫の時期に、彼は収穫が行われていた畑にいる父のもとへ向かった。そこにしばらくいると、彼は頭痛に襲われ、「頭が痛い、頭が痛い！」と叫んだ。

父は使用人に、病気の息子を家に連れて帰るよう命じた。家に戻ると、病の少年は母の膝の上で正午まで横たわっていたが、やがて息を引き取った[4367] 。母は亡くなった息子を抱き上げ、預言者の部屋へ運び、ベッドに寝かせると、扉を閉めて外に出て、夫を呼び寄せた。 息子の死については何も告げず、彼女は夫に、 召使いとロバを送ってほしいと頼んだ。彼女はカルミルの神の御使いのもとへ行き、すぐに戻ってくるつもりだったからだ。

夫は彼女に尋ねた。「なぜ彼のところへ行くのか？ 今日は新月でも安息日でもないだろう？」

（当時、カルメル山に住んでいた聖なる預言者エリシャのもとには、神を賛美し、教えを受けるために人々が集まっていたのである）。 妻は、今日は安息日でも新月でもないが、行かなければ

[4366] ソナム、あるいはスネムの町は、イッサカル族の領地（ヨシュア記19:18）にあり、ゲルブヤの山々（サムエル記上28:4）の向かい、カルミルの近くに位置していた。

[4367] 敬虔な女性の息子の病気は、おそらく日射病であったと思われる（ユディト記8:2–3；詩篇120:6）。

ならないと答え、急いで聖人のもとへ向かった。彼女がカルメル山に近づくと、神の人は彼女の到来を予見し、自分の僕ギエゼに言った。

「あれはあのソナミの女だ。彼女に駆け寄って、『元気か？　夫は元気か？　息子は元気か？』と尋ねなさい。」彼女は出迎えてくれたギエジーに言った。

「皆、元気です。」

しかし、彼女が山の上の聖人のところに着くと、彼の足元にひれ伏した。ギエジは彼女を聖人から引き離そうとしたが、エリシャは言った。

「彼女を放っておきなさい。今、彼女の心は悲しみに満ちているからだ。主は彼女の悲しみを私から隠し、私に明かされなかったのだ。」

女は言った。

「私が主人に息子を願ったでしょうか。主人であるあなたが、神に私のために息子を願ってくださったのではありませんか。私は『私を欺かないでください』と言わなかったでしょうか。それなのに、今、私の息子は死んでしまいました。」

神の御使いは彼女を憐れみ、自分の杖をギエジヤに渡し、急いで行って、その杖を亡くなった少年の上に置くよう命じた。　しかし、亡くなった少年の母はそれだけでは満足せず、聖なる預言者にすがりついてこう言った。「主が生きておられる限り、あなたの魂が生きておられる限り、私はあなたから離れません」。そこで聖エリシャは立ち上がり、彼女と共に歩み出した。　ギエジは彼より先に到着し、杖を少年の顔の上に置いたが、少年には生命の兆しが見られなかった。そこでギエジは引き返し、神の御使いに出会い、少年がよみがえらなかったことを告げた。ついに、聖なる預言者エリシャ自身が町に到着し、その女性の家に入って、二階の部屋へと向かった。　そこには、死んだ少年が寝台に横たわっていた。聖なるエリシャは扉を閉め、主に祈りを捧げた後、少年の上に身を乗り出し、自分の口を少年の口に、自分の目を少年の目に寄せ、自分の手を少年の手の上に、自分の膝を少年の膝の上に置き、彼に息を吹きかけた。すると、少年の体は温まり始めた。　預言者は立ち上がり、部屋の中を歩き回り、再び少年の上に身を伏せた。そうして七回繰り返した後、少年は目を開けた。エリシャはギエゼイを呼び、少年の母親を呼ぶよう命じた。母親が入ってくると、エリシャは彼女に言った。

「あなたの息子を受け取りなさい！」

その女は神の人の足元にひれ伏し、生き返った息子を抱き上げ、喜びながら神を賛美した[4368]。

その後、神の預言者エリシャはガルガルへと向かった。そこは、古くからイスラエル人が約束の地へ向かう途中にヨルダン川を渡った場所である。ここで預言者エリシャは長い間滞在した。そして、その地に飢饉が訪れた。　預言者には弟子たちもおり、彼らは預言者に倣って、新しい恵みの修道士たちのように、清く貧しい生活を送っていた。神の人の弟子たちとの滞在先は、人里離れた特別な場所であった。エリシャは召使いに、大きな鍋を火にかけ、百人いる預言者の弟子たちのためにスープを煮るよう命じた。　ある弟子が野原へ野菜を摘みに出かけ、ブドウに似た野生の果実を見つけた。それはコロキンキダと呼ばれ、非常に苦いため、「大地の胆汁」とも呼ばれていた。　この果実は健康に極めて有害であり、治療に用いられることもあるが、大量に摂取すると死に至る。それを摘んだ者は、この果実の害を十分に知らなかったため、服いっぱいに摘み取り、煮込むために大鍋に投

[4368] 死んだ子供をよみがえらせた預言者の行いは、本質的に、サレプタの未亡人の息子をよみがえらせた預言者エリヤの行いと非常に似ている（列王記下17:19–23）。預言者エリシャは、「死者の感覚器官に自らの感覚器官を当て、死者が生者の命に参与できるようにした。これは明らかに、命を与える霊的な恵みの働きによるものである」（聖テオドール、問18）。この奇跡は、主イエス・キリストの復活を予表していた。（列王記下4:8–37の物語は、聖大土曜日の晩課において、第12の聖句として読まれる）。

入した。食事が弟子たちに運ばれ、彼らが食べ始めた途端、すぐに苦味を感じ、体調を崩してしまった。

「神の人よ、大釜の中に死が潜んでいる！」と彼らは恐怖のあまりエリシャに向かって叫び、食べるのをやめた。もはや食べることは不可能だったからだ。

エリシャは、大釜に少量の小麦粉を注ぎ入れるよう命じた（それは料理の毒を中和するためではなく、自身の奇跡を隠すためであった）。すると、料理は美味しく無害なものとなり、それを食べた者たちは満腹になり、癒やされた。

その頃、バアル・シャリシの町から一人の敬虔な人が聖なる預言者エリシャのもとを訪れ[4369]、初穂の大麦から作った二十個の小さなパンを持って来た。神の人は、そのパンをそこにいる人々に配るよう命じた。しかし、彼のしもべは、この小さなパンでは百人には足りないと言った。

エリシャは彼にこう答えた。

「皆に配って、食べさせなさい。主はこう言われる。『彼らは皆、満腹になり、なお余りが出る』と。」

そして実際、百人は満腹になり、預言者の口を通して語られた主の言葉通り、多くのパンが残った。

その頃、シリア王の有名な将軍であるネエマン（[4370] ）がハンセン病にかかった。彼はその勇敢さと戦功で知られ、それゆえ王から大いに重用されていた。長い間病に伏していたネエマンは、自分を癒やすことのできる医師を見つけることができなかった。　ある日、シリアの兵士たちがイスラエルの地から捕虜となった少女を連れてきて、ネエマンの妻に仕えさせることにした。その少女は、両親から聖なる預言者エリシャのことや、彼の祈りによって行われた偉大な奇跡について聞いていたため、仕えていた女主人にそのことを話した。

「ああ、もし私の主人が、サマリアにいる神の預言者のところへ行かれたなら、その預言者は主人のらい病を治してくださるでしょう！」と、その少女は言った。

少女のこの言葉を、ネエマンの妻はそのまま夫に伝えた。ネエマンは自分の王のもとへ行き、癒やしを求めてイスラエルの地、サマリアにいる神の預言者のもとへ行くことを許してくれるよう懇願した。　王は彼の行くことを許可しただけでなく、イスラエルの王ヨラム（アハアブの息子）宛ての手紙も彼に託した。　ネエマンは、神の人のための贈り物――銀十タラント、金貨六千枚、そして高価な衣類十着――を携えてイスラエルの地に到着し、ヨラム王に自分の王からの手紙を手渡した。その手紙には次のように書かれていた。

「あなたが受け取るこの手紙によって、私が私の家来ネエマンをあなたのもとに遣わしたのは、あなたが彼をらい病から癒やすためであることを知ってください。」

イスラエルの王ヨラムは、シリアの王からの手紙を読み、深く悲しみ、自分の衣を引き裂いて言った。

「私は、死と生を司る唯一の神であるか。なぜ彼は、私にらい病を治させるために、らい病人を送ってきたのか。彼が私に対して戦争を始める口実を探していることに、気づかないのか。」

聖なる預言者エリシャは、王が深く悲しんで衣服を引き裂いたことを知ると、彼にこう伝えさせた。「なぜ悲しんでいるのか。なぜ衣服を引き裂いたのか。ネエマンを直ちにここへ来させ、イスラエルに神の預言者がいることを知らしめよ。」

[4369] バアル・シャリシャ（参照：列王記上9:4）――推定されるに、エフライム族の領地にある都市。

[4370] ハンセン病は、最も恐ろしく、嫌悪感を抱かせる伝染病であり、主に暑い気候の国々、特にエジプト、パレスチナ、シリア、アラビア、インド、そして東洋全般で蔓延している。　この病気が進行すると、皮膚は白くなり、その後腫れ上がり、乾燥して、不快な臭いを放つかさぶたや潰瘍で覆われる。さらに四肢が脱落し、多くの場合、最終的にこの病に冒された者は恐ろしい苦痛の中で死に至る。

ネエマンは馬と戦車を連れて来て、エリシャの家の門の前に立ち止まった。聖なる預言者は、遣わした僕を通じて彼にこう言った。

「行って、ヨルダン川に七度身を浸せ。そうすれば、あなたの体は以前のようになる。そして、あなたは清められるだろう[4371]。」

ネエマンは預言者のこの言葉に侮辱されたと感じ、こう言い残して立ち去った。「私は、彼が自ら私のところに出てきて、私の前に立ち、その神の御名を呼び、その手で私の体のらい病の患部に触れて、らい病を癒やしてくれるものと期待していたのに、彼は私にヨルダン川へ行くよう命じるだけだ。ダマスコの川、アバナ、ファルファル[4372]は、ヨルダン川やイスラエルのすべての水よりも優れているのではないか？私がそれらで身を洗い、清められることはできなかったのだろうか？」

そこでネエマンは、激しい怒りを抱いてサマリアへ引き返した。しかし、道中、彼の家来たちは、神の預言者の命令に従うよう彼に勧め、こう言った。「もし預言者があなたに、非常に難しいことを命じていたなら、あなたは彼の命令に従わなかったでしょうか？　ところが、預言者はただ『ヨルダン川に身を浸せば清められる』と言っただけなのに、あなたはそれさえも実行しようとしないのです。」

ネエマンは家来たちの助言に従い、ヨルダン川へ向かい、戦車から降りて、神の人の命じたとおりに川に七度身を浸した。すると、たちまちその体は清められ、彼は若者のように元気で健康な姿で川から上がった。　ネエマンは随行者全員を連れて聖なるエリシャのもとに戻り、彼の前に立ち、こう言った。

「今、私は、イスラエル以外に、全地には神がおられないことを知りました。ですから、このしもべがあなたに持ってきたこれらの贈り物を受け取ってください。」

そう言って、彼は神の御使いに金、銀、衣服を差し出した。しかし、聖なるエリシャは彼に言った。

「私が仕える主が生きておられる限り、あなたから何も受け取らない。」

ネエマンは預言者に持参した物を受け取るよう説得し始めたが、預言者は断固として拒み、何も受け取らなかった。

そこでネエマンは聖なる方にこう願い出た。

「どうか、このしもべに、[4373]の土を、二頭のラバで運べるだけ持ち帰らせてください。それを家に持ち帰ったら、イスラエルの神、主のために祭壇を築きます。これからは、このしもべは、唯一の真の神以外のいかなる神にも、いけにえを捧げることはありません」[4374]。

聖なるエリシャは、彼が求めたものを持ち帰ることを許し、平穏のうちに彼を見送った。　ネエマンが神の人エリシャのもとを去ると、その僕ギエジはこう考え始めた。「わが主は、シリア人ネエマンにこれほど大きな喜びを与えたのに、彼は主の手から何の贈り物も受け取らなかった。彼を追いかけて、追いつき、何かを受け取ろう」。

[4371] ネエマンが預言者エリシャの家に到着したとき、「エリシャは、律法の下に生きる者として律法を遵守していたため、ネエマンを（レビ記13章14節の律法に従い）ハンセン病患者として会うことを拒み、代わりにヨルダン川で七回身を清めるよう命じた」（聖テオドール、問19）。

[4372] シリアのアヴァナ川とファルファル川は、一般に、アンティレバノン山脈から湧き出て、ダマスカスに水を供給していたとされている。

[4373] ネエマンが預言者に「イスラエルの地から一定量の土をください」と求めたのは、ネエマンがエホバに対して抱いていた深い畏敬の念によるものである。ネエマンは、エホバを崇めるその国の土そのものを神聖なものと考え、エホバの預言者エリシャの祝福によって聖別された土の一部を受け取ったのである。

[4374] さらに、シリア人のネエマンは神の預言者に、王の家臣としての義務により、主君をレムマンの神殿に付き添い、そこで偶像の前にひれ伏し、王が偶像に寄りかかって地面に伏すのとともに、自分もひれ伏さなければならないと語った。そこでネエマンはエリシャに、レマン神殿でひれ伏したことを主が赦してくださるかどうか尋ねた。エリシャは彼を安心させ、ネエマンは旅立った（列王記下5:18–19）。

そして、立ち上がって、ネエマンの後を急いで追いかけた。ネエマンは、ギエジが急いで追いついてくるのを見て、戦車から降りて、彼に向かって歩み寄った。二人が出会うと、ギエジは挨拶をした後、ネエマンに言った。

「主人が、今、エフライムの山から二人の預言者の弟子が彼のところに来たので、彼らに銀一タラントと着替えの服二着を差し出してほしいと、あなたに伝えるよう私を遣わしました。」

ネエマンは言った。

「二タラントを受け取れ。」

そして直ちに、銀を二つの袋に入れるよう命じ、ギエジに自分の使用人二人を付けてその品々を運ばせ、さらに二着の服も彼に与えた。　ギエジは、夕暮れ時にその使用人たちと共に家に戻ると、彼らから持ち帰った品を受け取り、使用人たちを帰らせた後、その品を家の中に隠し、自ら主人のもとへ現れた。

聖エリシャは彼に尋ねた。

「ギエジヤよ、どこから来たのか。」

ギエジは答えた。

「このしもべはどこにも行ってはおりません。」

すると、聖エリシャは彼に言った。

「私の心は、あなたと共にあり、あの男が戦車から降りてあなたに近づいてくる様子、そしてあなたが彼から銀や衣服を受け取った様子を見ていなかっただろうか。また、あなたがその銀で、オリーブの木やぶどう畑、羊や牛、男奴隷や女奴隷を買うつもりであることを、私が知らないとでも思っているのか。　それゆえ、ネエマンのらい病が、あなたとあなたの子孫に永遠に付きまとうことになる。

そして、ギエジはエリシャのもとを去ったが、その体はらい病に覆われ、雪のように白くなっていた。

ある日、預言者の弟子たちがエリシャに言った。

「私たちがあなたのそばに住んでいるこの住まいは、私たちには手狭です。ヨルダン川へ行き、一人一本の丸太を持ってきて、そこで住まいを建てましょう。」

聖人は彼らを行かせた。弟子の一人が、聖人自身にも彼らと一緒に来るよう、穏やかに誘い、「父よ、あなたもあなたのしもべたちと一緒に来てください」と言った。　神の人は立ち上がり、彼らと共に歩いた。彼らがヨルダン川に着き、丸太を切り始めたとき、切り倒していた者の一人から斧が柄から外れて水の中に落ち、彼は叫んだ。「ああ、主よ！ この斧は友人に預かっていたものです。」

神の人は彼に斧がどこに落ちたのか尋ね、その場所を指し示されると、エリシャは木の断片を切り取り、それを水の中に投げ入れたところ、斧は水面に浮上した。　聖人は木を切り倒していた者にそれを拾うよう命じ、その者は手を伸ばしてそれを拾い上げた。この聖なる人物には、鉄の自然な重さを軽減し、鉄の斧を、木から落ちた葉のように水面に浮かび上がらせるほどの、偉大な力が与えられていたのである。

聖なる預言者エリシャは、遠く離れた場所で起きている出来事を、あたかも目の前で起きているかのように鮮明に見通していた。　イスラエル人と戦っていたシリアの王は、イスラエルの王に待ち伏せを仕掛ける方法を側近たちと何度も協議し、待ち伏せ部隊を配置すべき場所を次々と指定していた。

しかし、聖なるエリシャはこれを予見し、イスラエルの王に警告を送り、「その場所を通るには気をつけなさい。そこにはシリア人が待ち伏せしているからだ」と言った。

王はそれが事実かどうか確かめるために使者を送り、そのことを確認すると、用心深くその場所には近づかず、代わりに自分の兵士たちを送り込み、シリア人を奇襲して打ち破った。このような

ことが何度かあった。　シリアの王はこれを聞いて動揺し、家臣たちを呼び寄せて言った。「なぜ、誰が私の秘密をイスラエルの王に漏らし、私をその手に渡しているのか、私に告げないのか。」すると、その中の一人が答えた。「王様、それは誰の仕業でもなく、私たちによるものでもありません！イスラエル人にはエリシャという預言者がおり、王が寝室で口にする言葉さえも、イスラエルの王に伝えているのです。」

王は言った。

「その預言者がどこにいるか調べよ。兵士を遣わして、彼を捕らえ、ここへ連れて来させる。」

兵士たちは調査した結果、エリシャがドファイム[4375]にいると王に報告した。王はそこへ騎兵、戦車、そして大部隊を派遣し、彼らは夜間に進軍して町を包囲した。　早朝、エリシャの召使いが家から出てくると、馬や戦車を伴ったシリア軍が大量に町を取り囲んでいるのを見て、エリシャのもとへ駆け込み、叫んだ。

「主よ、どうすればよいのでしょうか？」

聖エリシャは答えた。

「恐れるな。我々と共にある者は、彼らよりも多いのだ。」

そしてエリシャは神に向かって祈りを捧げ、こう言った。

「主よ！　あなたのしもべの目を開いて、あなたの御力を見させてください。」

すると、神はエリシャの従者の目を開かれた。彼は、山全体がエリシャを取り囲むように馬と火の戦車で埋め尽くされているのを見た。聖エリシャは従者と共に町を出てシリア人たちのところへ行ったが、彼らもまたエリシャの方へと向かってきた。エリシャは主に祈り、こう言った。

「主よ、この民を盲目にさせてください。」

すると、主はエリシャの願いどおり、彼らを盲目になさった。そこでエリシャは彼らに言った。

「これはあなたがたが行くべき道ではなく、この町もあなたがたが行くべき町ではありません。しかし、私について来なさい。あなたがたが探しているその人のところへ、私が案内しましょう。」

そして、エリシャは彼らをサマリアへと導いた。彼らがサマリアに到着すると、エリシャは神に祈りを捧げ、こう言った。

「主よ。彼らの目を開いて、今どこにいるのかが見えるようにしてください。」

すると、主は彼らの目を開かれた。彼らは自分たちがサマリアにいることに気づいた。イスラエルの王は、彼らの到着を知り、彼らを見て、聖なるエリシャに尋ねた。

「父よ、彼らを滅ぼすべきではないでしょうか。」

しかし、聖人はこう答えた。

「いいえ、滅ぼしてはなりません。彼らをここに連れてきたのはあなたではなく、あなたの武器で彼らを捕らえたのでもありません。むしろ、彼らに饗宴を振る舞い、彼らの君主のもとへ帰らせてあげなさい。」

王は彼らに盛大な饗宴を催し、彼らは食べ、飲み、そして自国の王のもとへ帰された。その後、シリアからのイスラエルへの侵攻は止んだ。

かなりの時間が経過した後、シリアの王ベナダドはイスラエルの王ヨラムと戦争を始めた。彼は全軍を動員して、イスラエルの王たちの首都サマリアを包囲した。当時、聖なる預言者エリシャもそこにいた。街では激しい飢饉が襲い、最も貧しい住民たちは自分の子供を食べるほどになった。

[4375] ドファイム――ガリラヤからエジプトへと続く交易路沿い、サマリアの北に位置する町。かつてヨセフがここで売られた場所である（創世記37:17, 25）。

ある日、イスラエルの王が城壁の上を歩いていると、一人の女性が近づき、叫び声を上げてこう言った。

「どうか助けてください、主よ、わが王よ！」

王は彼女にこう答えた。

「もし主があなたを助けてくださらないなら、私がどうしてあなたを助けることができようか。穀物倉や砥石から、あなたに糧を与えるというのか？　ともあれ、何が必要なのか言ってくれ。」

彼女は別の女性に対する不満を語り始め、こう言った。

「あの女が私にこう言ったのです。『さあ、今日はあなたの息子を食べ、明日は私の息子を食べよう』と。それで私たちは私の息子を煮て食べてしまいました。翌日、私は彼女に『さあ、あなたの息子も食べましょう』と言いましたが、彼女は息子を隠してしまったのです。」

イスラエルの王は、女性のこの恐ろしい話を聞き、自分の衣を引き裂き、神の預言者エリシャに対して激しく怒りを露わにした。エリシャが、シリアの王に従わず、城を明け渡さず、神の助けを待つよう助言したからである。

「もし今日、エリシャの首がまだその身に残っているなら、神が私を罰し、その罰にさらに上乗せしてくださるよう願う！」と、王は怒りを込めて言った。

するとすぐに、預言者の首を刎ねるために処刑人が遣わされた。しかし、神の人は自宅にいて、そこにはイスラエルの長老たちが集まっていた。

「あなたがたはご存知でしょうか」と彼は長老たちに言った。「ナブテヤを無実の罪で殺したアハアブの殺人者の息子、ヨラム王が、今まさに私の首を刎ねるために処刑人を遣わしたのです。しかし、あなたがたは戸をしっかりと閉め、その主人がここに来るまでは、彼を中に入れないでください。その主人の足音が聞こえるからです。彼はすでに彼の後を追って急いで来ているのです。」

聖人がまだその言葉を語り終えないうちに、王が近づいてきて、処刑人を止めました。　というのも、王は自らの邪悪な決断を後悔し、残酷な命令の執行を阻止するために、自ら使者を追って急いでいたからである。王は、預言者エリシャの聖さと無実、そしてイスラエル王国や多くの人々に対する彼の数々の恩恵を知っていたからである。預言者の元へ入ると、王は言った。

「見よ、主から私たちにこれほど大きな災いが下された！　さて、私は主から何を期待すればよいのか？　シリアの王にこの町を明け渡し、彼の前にひれ伏そう。そうすれば、私たち全員が飢えで死ぬことは避けられる。彼に従って皆が生き残る方が、抵抗して飢えで滅びるよりはましだ。」

しかし、聖なるエリシャは王とそこにいたすべての人々に向かってこう言った。

「主の御言葉を聞きなさい。主はこう言われる。明日、この時刻には、サマリアの城門で[4376]、小麦一メーラが一つシケルで、大麦二メーラが一つシケルで売られるようになる。」

王に最も近い高官の一人、王が腕を預けていた者が、これに対しエリシャに言った。

「たとえ主が天を開かれたとしても、あなたが言っているようなことは起こらないでしょう。」

聖エリシャは彼にこう答えた。

「あなたは自分の目でそれを目撃することになるだろうが、そのパンを口にすることはないだろう。」

王は少し落ち着くと、自分の天幕へと戻った。そして夜、聖エリシャが町の解放を主なる神に祈っていたとき、神はシリアの軍勢に大きな混乱をもたらされた。　シリア人たちは、あたかも大軍が集結したかのような武器の騒音や馬のいななきを耳にし、　互いに「これはイスラエルの王に雇われたヘテ人の王とエジプトの王が、軍を率いて救援に駆けつけたに違いない」と決めつけた。

[4376] 預言者は王と民の長老たちに、間もなく起こる異例のパン価格の暴落について、まさに「サマリアの門」――東方の社会生活全般、とりわけ商業が集約されていた門――で起こると告げた。

「ここから逃げよう、逃げよう！」と、彼らは大きな恐怖に駆られて叫んだ。

そして夜になると、彼らは王と共に逃げ帰った。テントや馬、ロバ、そして陣営にあったすべてのものをその場に置き去りにし、ただ命だけを守ろうとしたのである。その同じ夜、城門の近くには四人のハンセン病患者が座っており、互いに話し合いながらこう言っていた。「なぜ我々はここで座り込んで、死を待っているのか？　もし町へ行けば飢え死にするだろうし、ここに留まってもやはり死ぬ。シリアの陣営へ行ってみようではないか。もし彼らが私たちを容赦してくれなければ、飢えによる耐え難い苦しみを味わうよりは、剣で死ぬほうがましだ」。

そして、意を決して立ち上がり、まだ夜の闇に包まれたシリア人の陣営へと向かった。陣営に入ると、そこには誰一人としておらず、陣営の中央まで進んでも誰も見当たらなかったため、彼らはこれに大いに驚いた。　彼らはあるテントに入り、食べたり飲んだりし、そこから銀や金、衣服を持ち出し、その場を離れて隠した。戻ってくると、別のテントに入り、欲しいものや持ち運べる限りのものをすべて持ち出し、再び隠した。　その後、彼らは相談し始め、こう言った。「我々の行いは良くない。今日は喜びの知らせの日であるのに、我々は黙っている。もし夜明けまでここに留まれば、大きな罪を犯すことになる。だから、急いで町へ行き、王宮に知らせよう。」

彼らは急いで町へ向かい、城門に近づくと、衛兵たちにこう言った。「私たちはシリアの陣営へ行ってきましたが、そこには人の姿は一人も見当たらず、人の声さえ聞こえませんでした。ただ、繋ぎ留められた馬やロバが残されているだけで、テントもその場に立ち、財宝で満たされていました」。

このことは直ちに王に報告された。王は夜中に起き上がり、側近たちを集めて協議を始め、疑念を抱きながら彼らに言った。「シリア人が我々に対して企てた狡猾な計画を、お前たちに明かしてやろう。　彼らは、我々が飢えに苦しんでいることを知った。そこで、陣営を出て野原のどこかに身を隠し、飢えに駆られて城から出てきた我々を生きながら捕らえ、城に侵入しようとしているのだ」。

王の家臣たちは、誰かを偵察に派遣するよう進言した。　二人の騎手が派遣され、彼らはシリア人の陣営に到着したが、そこには誰もいなかったため、シリア人の足跡をたどってヨルダン川まで駆け抜けた。道中、大いなる恐怖に駆られて逃げ去ったシリア人たちが捨てた衣服や武器が、道一面に散らばっていた。使者は戻り、そのすべてを王と民に報告した。　人々は町から駆け出し、シリア軍の陣営をすべて略奪した。そして、小麦一メーラと大麦二メーラが、主が預言者を通して告げられたとおり、一シケルで売られていた。前述の高官、すなわち王が頼りにしていた人物は、王から、秩序を維持するために城門に立つよう命じられた。　ところが、彼が民が門に押し寄せないよう取り締まろうとしたとき、群衆に押しつぶされ、押し殺されて死んでしまった。これは、神の人エリシャが予言していた通りであった。この高官は、預言者の口を通して語られたパンの豊かさに関する主の御言葉を信じず、次のように反論したのである。　「たとえ主が天を開かれたとしても、そのようなことはあり得ない」（列王記上6章以下）。

この偉大な神の御使いは、他の驚くべき預言の賜物や行いにおいても栄光に輝いており、それについては『列王記』に詳しく記されている。彼はイスラエルの地に7年間の飢饉が訪れることを予言した（『列王記下』8:10）。シリアの王ベナダドの死を予見し、シリア王国の支配権がアザイルの手に移ることを予言した。イスラエルの諸侯の一人であるイェフーに王の油を注ぎ（列王記下9:3）、神を憎む偶像崇拝者であるアハアブの家系を滅ぼすよう彼を奮い立たせた。　エフーは、偶像崇拝者である二人の王、すなわちイスラエルのヨラムと、敬虔な王ヨシャファトの孫であるユダのオホジアを殺した。オホジアは祖父の行いに倣うことなく、不義の道に迷い込んでいた。　彼は、アハブの不義な妻であり、ヨラムの母であるイゼベルを殺し、バアルの祭司や占い師たちをすべて滅ぼした。これらすべての事において、聖なる預言者エリシャの祝福と祈りが彼に味方した。　イェフの死後、イスラエルではその息子ヨアハズが王となり、その後をイェフの孫ヨアスが継いだ。ヨアスの治世中

、サマリアに住んでいたある神の人が、すでに高齢であったため病に倒れた。　イスラエルの王ヨアシュは彼を見舞いに訪れ、彼のそばで泣きながらこう言った。

「父よ、父よ。イスラエルの戦車、その馬たちよ！」

エリシャは彼に言った。

「弓と矢を取り、シリアのある東側の窓を開け、弓に矢を番えなさい。」

王はその通りにした。すると、神の預言者は王の両手に自分の両手を置き、「シリアに向かって矢を放て」と言った。

王は矢を放った。預言者は言った。

「この矢は主の救いの矢である。あなたはシリアに勝利するだろう。」

そして再び、王に弓と矢を手に取るよう命じた。王は手に取った。預言者は彼に言った。

「その矢で地面を打ちなさい。」

王は三度打ちつけて、そこで止まった。神の人は彼に怒りを露わにし、こう言った。

「もし五回か六回打っていたなら、シリアを完全に打ち負かすことができただろう。しかし今や、あなたはシリアに三度の敗北を与えるだけだ」[4377]。

このように王に預言した後、聖なるエリシャは息を引き取り、栄誉をもって埋葬された[4378]。

預言者エリシャは生前に奇跡を行っただけでなく、死後も奇跡を行う者としてその力を示した。彼の死から一年後、ある死者を町の外へ埋葬するために運んでいた。その時、イスラエルの地に襲撃を仕掛けてきたモアブ人の群れが現れた。　死者を運んでいた人々は、まだ遠くから敵の姿を目撃すると、遺体を近くの洞窟に投げ込んだ。そこは、預言者エリシャの遺骨が安置されていた洞窟であった。死者が預言者の骨に触れた途端、彼は即座に生き返り、洞窟から出て町へと向かった[4379]。

[4377] 「なぜ預言者エリシャは、弓と矢を用いて将来の勝利を予告したのか」（列王記下13:15）という問いに対し、聖テオドリトス（問42）は次のように答えている。「人々は言葉そのものよりも、行いを通じた予言を信じたのである。　この場合、象徴的な行為は、それが意味する戦争と勝利という現実を直接的に表現していた。エリシャが王の両手に手を置いたこと（列王記下13:16）は、預言者による祈りの助け、ひいてはイスラエルの王に対するエホバの助けを、シリア人との今後の戦いで示唆していたのかもしれない。　東へ向けて矢を放ったことは、ヨルダン川東岸の都市やイスラエル王国の領土を占領していたシリア人たちに言及していた（列王記下10:33）。

[4378] 聖なる預言者エリシャは、約100歳という高齢で亡くなった。彼はアハブ王の治世（列王記下19:19）――紀元前900年頃――に預言者としての務めを開始し、ヨアシュ王の治世、すなわち紀元前9世紀の30年代に亡くなった。 聖ヒエロニムスによれば、預言者の墓はサマリアの近くにあるとされていた（参照：列王記下5:9、6:32）。　聖預言者エリシャの聖遺骨は、聖ヒエロニムスの時代、聖預言者オバデヤおよび洗礼者ヨハネの聖遺骨と共に、セバスティアまたはサマリアにおいて悪霊を追い払うために用いられていたが、ユリアヌスの時代に焼却された。しかし、その遺骸の一部は信者たちによって火から守られ、その一部はアレクサンドリアに移された。　コンスタンティノープルにはこの聖預言者に捧げられた教会が建てられ、パレスチナでは聖ヨハネス・ダマスコスによってカノンが執筆された。6月14日の聖預言者エリセイの祝日は、東洋と西洋のすべての民族に共通する最も古い祝日である。

[4379] 聖テオドリトスによれば、この預言者の死後の奇跡には次のような意味があったという。「預言者は死後も、彼の元へ運ばれてきた死者をよみがえらせた。この奇跡もまた、師とは対照的に、彼が受けた格別な恵みを証しするものであった」。　さらに、この奇跡の一時的な目的は、イスラエルを敵との戦いに奮い立たせることだった可能性があり、永遠かつ本質的な目的は、死者の普遍的な復活という真理を証しすることでした。　特に、ここでは、正教会による神の聖人の遺骸の崇敬の正当性が証明されている。すなわち、生前の預言者エリシャに宿っていた神の力が、この奇跡の際に彼の遺骸に注がれたのである。

こうして、死後も神は御自身の義人を栄光に輝かせられた[4380] 。これらすべてについて、私たちの神に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン[4381] 。

トロパリオ、第4調:

肉体に宿った天使、預言者たちの礎、キリストの再来における第二の先駆者、栄光あるエリヤよ。天よりエリセオに恵みを授け、病を追い払い、らい病人を清めた。それゆえ、彼を崇める者たちにも癒やしを注がれる。

コンダク、第2調:

神の預言者として現れ、あなたにふさわしい、まことに尊い特別な恵みを受けた、祝福されたエリセエよ。あなたはエリヤの同胞であった。彼と共に、キリストなる神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

私たちの聖なる父、コンスタンティノープル総主教メフォディオスの生涯。

記念日：6月14日

シチリア島[4382] の出身である、キリストの聖人メフォディオスは、若き頃に修道者の道に入り、徳高い生活を送り、その道を歩み続けた。イコノクラストであるレウ・アルメニアヌス[4383] の治世下、彼はコンスタンティノープル総主教ニキフォロス聖下の下で、使節[4384] の職を務めました。ニキフォロス総主教は、教会に関するある任務を帯びて、聖メフォディオスをローマの教皇[4385] のもとへ派遣しました。 ここで、ローマにおいて、彼は意図的にかなり長い期間滞在した。というのも、不敬虔なレウスが、聖ニキフォロスを総主教の座から追放し、異端者であり偶像破壊派のテオドトス・メリシオス（通称カシテロス）[4386] をその座に就かせたからである。 皇帝レウスと偽総主教テオドトスの死後、聖メフォディオスは「古きローマ」から「新ローマ」へと帰還した[4387] 。 司祭の位におい

[4380] 数多くの予言や奇跡、人々に施された恵みに加え、預言者エリシャは預言者の学校の発展と隆盛に大きく貢献した（列王記下2:1–25、3:1–27、5:1–27など）の発展と高揚に大きく貢献し、王たちの時代に数多く存在した預言者たちの大部分は、間違いなくこれらの学校から輩出されたものであり、彼らは口頭や文書を通じて、民衆の信仰と敬虔さを支えていた。

[4381] シラの子イエスは、預言者エリセイを称える中で次のように述べている。 *「エリヤの霊に満たされたエリシャは、その生涯において君主の前でひるむことはなく、誰も彼に打ち勝つことはできなかった。何ものも彼を打ち負かすことはできず、彼の死後もその遺体は預言を続けた。生前に奇跡を行っていたように、死後もその業は驚くべきものであった」*（シラ書48:12–16）。新約聖書において、主ご自身がエリシャを神の偉大な預言者として言及し、その奇跡や癒やしを通して、神の摂理の英知に満ちた御業を示しておられる。 *「イスラエルには預言者エリシャの時代に多くのらい病人がいた――主は同胞たちの不信仰を非難してこう言われた――しかし、シリア人のネエマンを除いて、そのうちの誰も清められなかった」*（ルカ4:23–27）。

[4382] シチリアは、地中海に浮かぶ大きな島の一つであり、メッシーナ海峡によって本土から隔てられている。

[4383] レウ5世（アルメニア人）は813年から820年まで統治した。

[4384] アポクリシアリウスとは、君主の側近として、主要な教会の司教を代表する一時的または常任の使節のことであり、彼らは自教会およびその代表者と最高権力者との間のあらゆる交渉を統括していた。

[4385] ローマ帝国の中枢都市であるローマは、イタリアの中部に位置し、ティベリス川が海に注ぐ地点の両岸に広がっている。

[4386] テオドール1世・カシテルは、815年から822年にかけて総主教を務めた。

[4387] すなわち、ツァールグラード、あるいはコンスタンティノープルである。

て、彼は真実と敬虔さをもって主に仕え、当時特に勢いを増していた偶像破壊の異端と絶え間なく戦った。レフ・アルメニア人の後を継いで王位に就いたのは、同じく異端の偶像破壊者であるミハイル・ヴァルボス、あるいはトラウロスであった[4388] 。彼の時代、総主教の座には不敬虔な者たちが就いていた。　そして、至福のメフォディオスは、異端者たちと論争を交わし、彼らを恥じ入らせるという偉大な功業を成し遂げた。このような活動のため、不敬虔な皇帝は聖メフォディオスを苦痛と牢獄に苦しめたと、ギリシャ人のゾナラスが伝えている[4389] ：彼は、ミハイル・トラヴロスが在位初期には慈悲深い統治者としての姿を見せたことを伝えている：　イコン崇拝を理由にレオン・アルメニア人によって投獄されていた多くの聖なる教父たちを、彼は束縛と監禁から解放した。しかしその後、かなりの時間が経過すると、ミハイルはこの偽善に駆られた善行を撤回し、その悪意に満ちた不敬虔さを隠すことなく、正教徒に対する迫害を開始した。　彼は怒りに駆られて、聖メフォディオスやサルディスの司教エウフィミオスに矛先を向けた――彼によって多大な苦難を強いられた他の多くの人々については、もはや語るまでもない。　エウフィミオスを、イコンを崇敬したとして追放し、聖メフォディオスをアクリテの牢獄に投獄した[4390] 。ゾナラ自身は、ミハイル・トラヴロスの不敬虔さを次のように記述している。彼によれば、ミハイルはあらゆる点でコプロニムス帝に倣っていた[4391] 。ユダヤ人に好意を抱き、安息日に断食するよう命じた。　死者の復活を信じなかったミハイルは、死後の至福の生活への希望を嘲笑した。また、聖なる預言者たちの予言を嘲笑し、悪魔は存在しないと主張し、卑猥な肉欲の行為を罪とは見なさなかった。裏切り者ユダを聖人として崇め、ミハイルは彼が救われると考えていた。 彼は聖書の教えを憎み、 の親たちが子供たちを正教会の学校に通わせることを妨げた。それは、子供たちが聖書を学んで彼の狂気を暴くことのないよう、無知で無学なままであり続け、彼の異端的な迷信に従うようにするためであった。ゾナラはそう述べている。　聖メフォディオスは、神の聖書、正教の教義、そして聖なる教父たちの伝承に精通した賢明な牧者として、邪信の王に勇敢に立ち向かった。そのために、彼は真理の殉教者として、束縛や牢獄だけでなく、傷さえも耐え忍んだ。

ミハイル・トラヴロスの死後、その息子テオフィロス[4392] が王位に就いた。彼は王位だけでなく、父の異端の信仰も受け継いでいた。テオフィロスは、聖なるイコンを敬虔に崇める者たちを数多く拷問で苦しめたが、一方で学問を愛していたため、かつて荒廃していたコンスタンティノープルの学校を復興させ、そこで再び授業を始めるよう命じた。　また、彼は聖メフォディオスをも監禁から解放した。ギリシャの歴史家ミハイル・グリコスは次のように伝えている。「前代未聞の、――と彼は言う――奇跡的な方法で、神はメフォディオスを陰鬱な牢獄から救い出された。テオフィロスは学問を愛し、しばしば書物を読んで時間を過ごしていたが、　ある日、皇帝の手元に、内容があまり理解できない本が渡った。側近の一人がテオフィロスに、アクリテの牢獄に閉じ込められているメフォディウスが、本の中の理解しにくい箇所を明快に解説する能力で知られていると指摘した。　王は直

[4388] ミカイル2世「口ごもる王」は820年から829年まで在位した。

[4389] ゾナラス・ヨハネスは、ビザンツの歴史家かつ教会法学者であり、アレクセイ・コムネノス皇帝（1080～1118年）の同時代人である。ゾナラスの文学作品の中で最も優れたものは、教会規則の全文に対する彼の注釈である。　ゾナラのもう一つの主要な著作は、『エピトメ・イストリオーン』である。これは、世界の創造から皇帝ヨハネス・コムネノス（1118年）の即位に至るまでの世界史の出来事を年代順にまとめたものである。さらに、ゾナラには書簡、聖人伝、賛美歌などが残されている。

[4390] おそらく、アクリトス岬の近くである。

[4391] コンスタンティノス・コプロニモスは741年から778年まで在位した。

[4392] テオフィロスは829年から842年まで統治した。

ちに、聖メフォディオスを修道院から自分の元へ連れてくるよう命じた。彼と面会し、会話を交わした後、王は聖メフォディオスが賢明な人物であることを理解し、彼への敬意から彼を釈放した。

自由を取り戻した聖メフォディオスは、再び異端者たちとの論争に身を投じ、聖なるイコンにふさわしい敬意と崇拝を捧げるよう説いた。 これにより、彼は再び聖像破壊派の怒りを招いた。正教を守るための聖メフォディオスの活動は皇帝の耳に入り、皇帝はこの神の御使いに対して激しく怒りを抱いたが、より好機が訪れるまでその不満を隠していた。当時、ギリシャ人はサラセン人と戦争を繰り広げていた[4393]、そのため皇帝自らが軍を視察する必要があった。 軍団へ向かう際、皇帝は聖メフォディオスも同行させた。その理由は、ある意味では祈りを捧げるためであり、また聖書に関する対話や、皇帝が確信していたように、聖メフォディオスが巧みに解き明かすことのできる難解な問題の解決のためでもあった。 しかし実際には、皇帝は神の御使いを同行させたのは、聖メフォディオスが首都に残った場合、イコノクラストたちに対する民衆の反乱が起こるのではないかと恐れたからであった。民衆は、聖メフォディオスを、聖なる人物であり、教訓に富み、宗教的な統治だけでなく、世俗的な統治の分野にも精通した人物として愛していた。 それゆえ、王は不在の間、彼を首都に残すことなく、自ら連れ出したのである。 しかし、神の御許しにより、イスマイル人たちはギリシャ軍を打ち破り、王の軍勢のほぼすべてを壊滅させたため、王は自軍のわずかな残存兵を率いてかろうじて逃亡に成功した。その時、不敬虔な王は、これまで心に秘めていた聖メフォディウスへの怒りを露わにした。

「神が敵に勝利を与えられたのは、我々の間に偶像崇拝者がいるからだ」とテオフィロスは言った。

これに対し、聖メフォディオスは反論した。

「主は、その聖なるイコンをキリスト教徒たちに冒涜されたため、彼らに怒りを抱き、敵が我々に対して勝利を収めることを許されたのだ。」

激怒した王は、聖メフォディオスを残酷な鞭打ちの刑に処した後、[4394] ある島へ流刑に処した。そこで王は、彼を二人の強盗と共に、日光さえ差し込まない深い墓の洞窟に閉じ込めるよう命じた。 こうして聖メフォディオスは、イオナが鯨の腹の中にいたように、地底に留まりながら神に感謝を捧げ、生ける屍となった。 ある漁師に、彼に食料を届けるよう命じられたが、その量は飢え死なない程度の、ごくわずかなものだった。迫害者たちは、この神の御使いの命をつなぎ、それとともに、あの墓のような場所での彼の苦しみも続けさせようとしたのである。

聖メフォディオスのこの監禁中、テオフィロス王は、二人の聖なる殉教者テオドロスとテオファンが尊いイコンを崇拝したとして、彼らを拷問にかけた。彼らの顔には、聖なるイコンへの崇拝を証明する文字が、赤熱した鉄で焼き付けられ、その後、王は殉教者たちを流刑に処した。 彼らの道は、棺の洞窟に閉じ込められて苦しんでいた聖メフォディオスがいる島のそばを通っていた。 囚人に食事を与えていた漁師と偶然出会った聖なる殉教者たちは、彼から神の御心にかなう者である聖メフォディオスについて、 の詳細をすべて聞き出した。彼らを流刑地へ連行する者たちが非常に厳しかったため、聖メフォディオスに直接会うことはできなかったが、テオドールとテオファンは彼に次のような挨拶文を書き、その漁師がそれを目的地まで届けることを引き受けた：

「棺の中に横たわる死者のように生きる者へ、天上の国々を巡る地上の者へ、そして束縛を負う者へ――『刻まれた顔』を持つ、鎖に縛られた者たちが書き送る。」

[4393] サラセン人――すなわちアラブ人。

[4394] テオフィロスは聖メフォディオスの頬を殴るよう命じ、その結果、彼の顎は粉砕され、聖メフォディオスには生涯にわたって醜い傷跡が残った。 総主教となった聖メフォディオスは、殉教者への敬意から、傷跡を隠すために修道帽の端を切り取り、それを顎に巻き付けた。これにならって、すべての修道士たちも切り込みの入った修道帽を着用するようになった。

漁師を通じて送られてきたこの挨拶文を読み、聖なる受難者たちの偉業を彼から聞いた聖メフォディオスは、彼らにそのような勇気を授けてくださった神に感謝した。　その後、聖メフォディオスは彼らの挨拶に応えて、次のような手紙を送った。「死の前に葬られ、束縛に縛られた者が、その一人ひとりが『刻まれた顔』を持ち、悲しみをもって命の書に記されている囚人たちに挨拶を送る」。

聖メフォディオスは、その棺に閉じ込められたまま、テオフィロス王の死まで過ごした。そして、（一つの）棺が、真の意味で死者を受け入れたとき（[4395] ）、もう一つの棺は、預言者ヨナをその腹から吐き出した鯨のように、世界に「生ける死者」をもたらした（[4396] ）。 死がテオフィロスの瞳を棺の指で閉じ、その不敬な口を封じ、冒涜的な舌に沈黙を課したとき、その栄光ある殉教者は日の光を見出し、再び口を開いて敬虔を説いた。 テオフィロスの死後、その息子ミハイル3世が即位したが、彼が幼かったため、母テオドラが政務を執った[4397] 。 女王の最初の関心事は、偶像破壊運動によって完全に乱されていた教会の平和の回復であった。最初の偶像破壊王であるレウ・イサウリアヌス[4398]　の時代からテオフィロスの死まで、120年の歳月が経過していた。この間、キリストの聖像はキリスト教徒によって冒涜され続け、これに激怒した神は、キリスト教王国に数多の災厄をもたらしていた。　この数年間、サラセン人は多くのキリスト教国を征服し、その住民の多くを捕虜として自らの領土へ連行した。また、この頃、ギリシャ・ローマ帝国は二つの王国に分裂した。それ以前、新ローマの王、すなわちギリシャの王は古ローマも支配していたため、東と西は一人のギリシャ王の統治下で統一されていたのである。　しかし、多くの敬虔な信仰者たちに対する凄惨で血なまぐさい拷問を伴う偶像排斥の異端が広まった結果、西側はギリシャ王たちの支配から離反し、独自の王を擁立した。　そのため、ギリシャの王はギリシャのみを統治せざるを得なくなったが、それも全域ではなく、聖都エルサレムを含むパレスチナ、シリア、アラビア、さらにはエジプトとその属領も、サラセン人に占領されていたからである。　これらすべては、敬虔さから背き異端に陥り、聖なるイコンを冒涜したキリスト教徒たちの罪ゆえに、神が許されたことである。　この状況を鑑み、敬虔で神に啓示された知恵に満ちたテオドラ女王は、キリスト教王国から呪われた偶像破壊の異端を根絶し、正統信仰を確立するために全力を尽くし、　キリストの花嫁である聖なる教会にとっての貴重な装飾として、尊いイコンへの崇敬を回復することに全力を尽くした。彼女は、敬虔さの殉教者たちをすべて、束縛や監禁から解放し、流刑地から帰還させ、コンスタンティノープルで開催される公会議に出席するよう命じた。その公会議は、聖なるイコンをふさわしい栄誉をもって教会に返還するものであった。　この勅令により、聖メフォディオスも墓のような監禁所から解放された。一方、総主教の座には、聖なる場所に横たわる荒廃の忌まわしさとして、依然として偽総主教ヨハネス――通称アンニウス・[4399] ――が居座っていた。 ――テオフィロス王によって座に就けられた異端者であり魔術師であった。聖なる父たちは彼との交わりを望まなかったため、敬虔なテオドラ女王は、前述の偽パトリアルヒを座から追放し、ブドウ畑から野生のイノシシを追い出すかのように、教会から追放した。　神の御心により、すべての正教徒にとって言い表せないほどの喜びとなるべく、聖なる殉教者メフォディオスが総主教の座に就いた。

この聖メフォディオスの即位は、人間の選択というよりはむしろ神の御心によるものであり、それは以前から尊者ヨアンニキオス・ザ・グレートによって予言されていた。その生涯を記した書物

[4395] すなわち、テオフィロス王のことである。

[4396] すなわち、聖メフォディオス。

[4397] 842～855年。ミカイル3世「酔っ払い」は855～867年に統治した。

[4398] レウ3世・イサウリア人は716年から741年まで在位した。

[4399] 832年から842年まで総主教を務めた。

には、次のように記されている。アガヴロン修道院の修道院長エウストラティオスは、かつて尊者ヨアンニキオスにこう尋ねた。

「父よ、聖なるイコンが踏みにじられ（そしてこのような状況がいつまで続くのでしょうか）、教会が回復せず、迫害者が増え続け、キリストの群れが野獣たちに奪い取られるこの状態は、いつまで続くのでしょうか？」

聖なる父はこれにこう答えました：

「もう少し待て、兄弟よ。そうすれば、神の力の現れを目にするだろう。メフォディウスという名の者が教会の指導を引き受け、神の御霊に照らされて、真理に従って教会を導き、異端を根絶し、正統な教義によって教会を確立し、平穏と一致をもたらすだろう。　反対する者たちは、至高者の右の手によって屈服させられるでしょう。

この聖ヨアンニキオスによる預言は、聖メフォディオスにおいて明らかに成就した。　テオフィロス帝の死後、彼はコンスタンティノープルの総主教に任命された。それは、彼がその偉大な位にふさわしい人物であり、正統信仰の堅固な柱であり、敬虔さの揺るぎない擁護者であり、殉教によって飾られたキリストの戦士であり、神によって予兆され、先見の明ある人物によって大司教としての偉大な奉仕に予め定められていたからである。　聖メフォディオスは、敬虔な皇后テオドラと共に、コンスタンティノープルで地方公会議を招集した。この公会議は、コンスタンティノスとイリナの治世中に、イコノクラストたちに対抗してニカイアで招集された第7回全地公会議の教義上の決定を再確認した[4400]。一方、この全地公会議の教義を受け入れない者たちに対しては、聖メフォディオスの下で召集された地方公会議が、二度目の破門を宣告した。　正教徒たちに喜びをもたらし、教会の混乱を平和へと、嵐と動揺を静寂へと変えた後、公会議の父たちは、聖四旬節の最初の週に、盛大な祝典を執り行い、尊いイコンを主の教会に奉納した。　そして、その大いなる喜びは、コンスタンティノープルだけでなく、天の下にある正教徒のキリスト教徒が暮らすあらゆる場所にも広がった。

至る所で正教徒たちが霊的な祝典を執り行っている間、心の中に偶像排斥の異端が根付いていた者たちの心は嫉妬に苛まれていた。すでに言及した、王座から追放された偽総主教アニイや、上院議員の位を持ち、王宮の評議会に席を置いていたその弟アレアボルもそうであった。　また、高位の貴族や下級官吏の中にも、同様の者たちがいた。どうすべきか分からず、彼らは悪意から、至聖なるメフォディオスをどのように誹謗中傷すべきか画策した。　異端者たちは金銭を対価として、自分たちと志を同じくする高貴な女性――その息子はスミルナでイパト[4401]を務めていた――を雇い、彼らの指示に従って女王や若き王の教育者たちの元へ行き、新しく就任したメフォディオス総主教が彼女と不義の行為に及んだかのように告げさせるよう仕向けた。　中傷者たちは、聖メフォディオスが尊いイコンの崇敬を擁護していたことから、彼を誹謗中傷することで、その教えだけでなくイコンそのものを非難しやすくなると計算していた。すなわち、民衆の間に悪評を広め、その名を汚すことで、総主教の名誉を傷つけることができれば、イコンそのものへの攻撃も容易になると考えたのである。異端者たちに唆されたその女性は、皇后や若き王の教育者たちの元へ赴き、皆の前で公然と聖メフォディオスを誹謗し、何の罪もない夫に対する告発を行った。彼女の誹謗中傷が真実として受け入れられるよう、彼女はあたかも新しく任命された総主教から暴行を受けた被害者であるかのように涙を流した。　人々は、大きな惑わしを生んだこの大司教の行動に驚いた。たちまち噂は街中に広まり、正教徒たちを動揺させ、不信心者たちには喜びと勝利をもたらした。異端者たちは正教徒たちを嘲笑して言った。「これがあなたたちの総主教だ。これがあなたたちが従う人物だ」と。

その誹謗中傷が至聖なるメフォディオス様ご本人の耳に入ったとき、彼はそれが一体どこから生じたのかと首を傾げた。しかし、良心が清らかであったため、彼は不当な災難に心の中で喜びを感

[4400] 787年のことである。

[4401] 執政官の長。

じると同時に、民衆の間にこれほど大きな惑わしがあり、異端者たちが正教徒を嘲笑しているのを見て、悲しみも覚えた。　では、この偉大な聖人、手も汚れず心も清く、母の胎内から体の清らかさを保ってきたこの人は、どのように行動したのだろうか。虚偽の告発から自分自身を潔白にするというよりも、むしろ教会から誘惑を取り除き、異端者たちの偽りの口を封じたいと願って、　総主教は、自らの恥を犠牲にして、それまで誰にも知られていなかった自身の病を公表することを決意した。その病は、彼が肉体的で罪深い交わりを行うことができないことを明白に示していたのである。　パトリアーシュは王の宮殿に使者を送り、自身と前述の妻との間の件を調査する公正な裁判を要請した。そして、高潔な人物たちで構成される法廷の前に立った総主教は、恥知らずな女性と争うことを望まず、自らの無実を疑いようのない形で証明したいと願った。さらに、彼の地位にある者にとって特に厳守が義務付けられていた自然な羞恥心を、その場の必要性に迫られて脇に置くことを決意し、――至聖なるメフォディオスは、病に蝕まれた自身の身体の「秘部」を露わにし、その「肉」はあたかも死んだかのようであった。そして、これほど病に蝕まれた者が肉欲の罪を犯すことは不可能であると皆が目の当たりにしたため、その女性の誹謗中傷がいかに虚偽であったかが明らかになった。そして、正教徒たちは　、教会における誘惑が消滅し、敬虔な者たちへの誹謗が取り除かれたことを喜び祝った。一方、異端者たちは恥に覆われ、その不敬な口は封じられた。彼らの病は彼ら自身の頭上に降りかかり、彼らの嘲笑は彼ら自身に恥辱と破滅をもたらしたのである。

　　さて、裁判官たちが聖メフォディオスに、どのようにして病にかかったのかと尋ねたとき、彼は自身の病を明かし、これまで誰にも語ったことのなかったその原因についても打ち明けた。　「かつて――と彼は言った――私が聖なるニキフォロス総主教によってローマの教皇のもとへ遣わされ、そこで足止めを食らっていた時、その間、肉の悪者、すなわちサタンの天使の仕業により、肉体の器官の興奮を伴う強い肉欲が私を襲った。　私は多くの日と夜、その淫らな情欲と戦い、断食と徹夜で身を疲れさせ、あらゆる種類の労苦で自らを鍛え上げた。しかし、情欲は依然として私を離れず、もはや堕落寸前であるかのように思われたため、私は涙ながらに聖なる最高使徒ペトロの前にひれ伏し、彼の助けに身を委ね、その情欲を和らげてくれるよう懇願した。　私は、神から授かった恵みの力によって、肉欲の戦いの苦しみから私を救い出し、清らかさのために聖別された私の体が穢されることのないよう、彼に懇願した。悲しみに沈み、少しの間眠りに落ちたとき、聖なる使徒ペトロが現れ、その右手で私の体の秘部に触れた。　その触れにより、私は激しい痛みを感じた――まるで誰かが火で患部を焼いたかのように。私は激しくうめき声を上げた。すると、使徒ペトロは私にこう言った。「これからは、もはや肉欲の罪深い戦いに悩まされることはないだろう。」「私はすぐに眠りから覚め、皆さんがすでに目にしたような傷を負っていることに気づいた。」

　　聖メフォディオスのこの語りは、裁判官たちの心を動かした。彼らは彼に罪がないと認め、その女性に対しては、無実で清らかな神の司教を誹謗するよう誰が教えたのかを白状させるため、処罰を下すよう命じた。するとすぐに、彼女を拷問のために連行する執行人が現れた。　彼女は、抜かれた剣、用意された火、鋭い茨の杖を見て激しく恐れ、処刑に至る前に真実を打ち明けた。彼女は、自分を雇い、教えた者たちの名前をすべて挙げ、扇動者たちから受け取った大量の金についても告げ、それが自宅のどこに隠されているかまで指し示した。　裁判官たちは、信頼できる役人をその女性の家へ派遣した。彼らは向かい、確かに女性が指し示した場所で金を見つけ、それを裁判官たちの元へ持ち帰った。裁判官たちは、その女性だけでなく、聖メフォディオスを誹謗するよう彼女を教唆した者たちに対しても、死刑判決を下した。　一方、至聖なる総主教は、その寛容さゆえに主の忠実かつ真の信奉者であり、死刑の執行を許さなかったばかりか、敵たちを差し迫った苦難から解放し、　彼らに課した唯一の罰は、すべての主要な祝祭日に、火のともった蝋燭を手に、ヴラヘルナ[4402]　の聖母マリア教会から聖ソフィア大聖堂へと整然と向かい、そこで教会の門の前で破門宣告を聞くことだっ

[4402] ヴラヘルナは、コンスタンティノープルにある地区である。

た。そして、この命令は実行された。　こうして、冒涜的な異端者の口は封じられ、コンスタンティノープルにおける偶像破壊の異端は、神の恵みと祈り、そして神の御心にかなう者、至聖なる総主教メフォディオスのたゆまぬ尽力によって完全に根絶された。彼は、自らに降りかかった不当な災難を乗り越え、さらに大きな栄光を得たのである。

彼の敵たちには、ダビデが罪を犯す者たちについて神に求めた*「主よ、彼らの顔を恥辱で満たし、彼らがあなたの御名を求めますように」*（詩編82:17）という願いが叶えられなかった。　憎悪に目がくらみ、心が石のように硬くなった彼らは、最初の悪行に、それ以上に悪質な新たな悪行を重ねた。前述の偽総主教ヨハネス、すなわちアニーは、あらゆる悪の元凶であり、ある修道院へ参拝に遣わされた。　そこで滞在中、偶像破壊運動による荒廃の後、敬虔な熱心者たちによって再び修復された、救い主キリストと聖母マリア、そして聖なる天使たちの聖像を目にしたアニーは、自分の助祭に、それらの聖像の目をえぐり出すよう命じた。　助祭はその命令に従った。このことは、敬虔な皇后テオドラに伝えられた。　キリスト・神への熱意に燃えた彼女は、当初、その偽総主教自身の目をえぐり出すよう命じたが、その後、一部の元老院議員たちの懇願に心を動かされ、最初の刑罰を鞭打ち刑に変更した。皇后は、数え切れないほどの苦しみと幾度もの死に値する偽総主教に対し、堅い鞭で二百回の打撃を加えるよう命じた。　というのも、彼は権力の座にあった間、多くの正教徒を拷問の末に死に至らしめ、さらには幽閉中にあっても、聖なるイコンへの冒涜を止めようとしなかったからである。

一方、至聖なるメフォディオス総主教は、一連の教会内の動乱と、キリストのイコンのために被った数々の苦難を経て、 残りの生涯を、平和と な静寂の中で教会の舵取りに捧げ、コンスタンティノープルの総主教座をその天使のような顔立ちと天使のような生き様で飾り、キリストの羊の群れを真理へと導き、神の霊感に満ちた教えの牧草地で彼らを養った。　彼の影響のもと、聖なるイコンへの崇敬が高まり、そこでは、実のところ、そこに描かれた人物そのものが崇められていた。同時に、彼はコンスタンティノープルにおいて、神の御心に適う聖人たちの尊い遺骨が、かつてのようにふさわしい敬意をもって崇められるよう配慮した。　偶像破壊派の支配下では、尊い聖遺物もイコンと同様に冒涜されていた――唾を吐きかけられ、足で踏みつけられ、侮辱されながら街中を引きずり回され、沼地や糞尿の中に投げ捨てられ、時には焼却や水没によって破壊さえされたのである；　ただ、敬虔な者たちが不敬虔な者たちの手から守るべく、急いで地中に隠した聖遺物のみが、無傷のまま保存されたのである。　こうした一連の出来事により、コンスタンティノープルでは、神に愛された聖人たちの聖遺物に関する噂さえも消え失せてしまった。それゆえ、キリストの聖人メフォディオスは、コンスタンティノープルを再び尊い聖遺物で豊かにし、正教徒たちにそれらをふさわしく崇敬するよう教えることに全力を尽くしたのである。　まず第一に、彼は、神のもとへ召されてから十八年が経過してもなお朽ちることなく残っていた、聖テオドロス・ストゥディトスの聖遺骨を、当初の埋葬地から首都へと厳粛に移送した。　続いて、彼は、幽閉の地に残されていたニキフォロス総主教の尊い遺骸をコンスタンティノープルへ移送した。メフォディオス総主教が、かつて自身の使節を務め、ローマへ派遣した主君の遺骸を移送したことについては、3月13日の記述に詳しく記されている。最後に、彼は貴重な宝物として、自らの多難で苦難に満ち、清らかさで聖別された肉体を、朽ちることのない聖遺物としてコンスタンティノープルの教会に捧げる準備をしていた。彼はすでに死期に近づいており、自らもそれを予見していたほか、聖ヨアンニキオスからもその予言を受けていた。　当初、彼に総主教職を予言した同聖人は、後に彼の死も予言した。聖霊から先見の明を授かった二人は、互いの死を予見していた。これは、聖ヨアンニキオスの伝記にも記されている通りである。　ミハイルの治世5年目、聖メフォディオス総主教は、尊者イオアンニキオスがまもなく主のもとへ召されることを予見し、全聖職者を率いて彼の元を訪れ、最後の祝福と祈りを求めた。　聖ヨアンニキオスは、聖メフォディオスと十分に語り合い、彼と共に来た者たちに正教の信仰を説いた後、メフォディ

オス総主教に対し、彼自身も総主教の死後、間もなくこの世の生活から永遠の生活へと移るだろうと予言した。その後、祈りと最後の別れを交わして、二人は別れた。　総主教は宿舎へ戻り、尊者イオアンニキスは自身の修道室に残り、祈りを捧げながら最期を迎える準備をした。総主教の出発から3日後、尊者にして神に愛された我らの父イオアンニキスは主のもとへ召された（11月4日）；　その7ヶ月後の6月14日、至聖なるメフォディオス総主教もまた、主のもとで安らかに眠りについた[4403]　。こうして、総主教が彼の死後間もなく自らも永遠の御国へ旅立つという、聖ヨアンニキオスの預言は成就したのである。

至聖なるメフォディオスの逝去に伴い、これほど偉大な父であり、全世界の灯火を失ったコンスタンティノープル教会全体で、大きな嘆きと泣き声が上がった。彼は、その生涯と奉仕においてこれほど高潔であった大司教にふさわしい栄誉をもって埋葬された。　聖メフォディオスは、キリストの教会を四年間と三ヶ月間牧会し、その後、時が尽きることのない命へと移った。　聖なる主教たちの列に加えられ、彼は牧者の長であり、天に昇られた偉大なる大司教、すなわち私たちの主イエス・キリストの御前に進み出た。すべての聖徒たちによって賛美される神に、私たち罪人からも、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

コンダク、第2調:

メフォディエよ、あなたは地上で無形の者として奮闘し、天を相続した。あなたは、至る所で聖像礼拝を明快に説き明かした。労苦と病苦の中に長く留まりながらも、キリストの聖像を拒む者たちを、大胆に非難し、退けることを決してやめなかった。

6月28日

6月15日（旧暦）

同日、聖人である我らの父イオナ、モスクワおよび全ロシアの大主教、奇跡行者の記念日。

聖預言者アモスの記念日。

6月15日の記念日

聖預言者アモスは、ユダ地方のベツレヘム近郊にあるフェクイという町に生まれ、身分の低い貧しい家庭の出身であった。彼は羊の群れを放牧しながら日々を過ごしていた。　しかし、主は富める者や力ある者ではなく、謙遜な者や貧しい者に目を留められ、モーセやダビデと同様に、彼を羊飼いの仕事から預言者の務めへと召された（出エジプト記3:1–22、列王記上16:1–23参照）。　主は彼に、ユダの地を離れ、イスラエルの地へ行くよう命じ、そこで預言の説教によって、偶像崇拝に堕ちた人々を悔い改めへと導くよう命じられた。なお、ソロモンの死（紀元前954年）後、　、エレボアム（紀元前953～931年）は、イスラエルの十部族を率いて、エルサレムで統治していたソロモンの息子ロボアム（紀元前954～937年）から離反した。　離反した部族たちによって、独立したイスラエル王国が成立し、その初代王がエレボアムであった（列王記下12:1–33）。　このエレボアムの時代から、イスラエル人は真の神への崇拝から離れ、偶像を崇拝するようになった。エレボアムは、イスラエル人

[4403] 847年に逝去。教会を4年3ヶ月余り統率した。聖メフォディオスは、信仰に改宗する者たちのための規則を制定し、それらは教会の指針として採用された。具体的には、結婚に関する3つの儀式、悔悛の規則、およびいくつかの教会賛美歌である。また、聖メフォディオスの死後には、いくつかの牧会的教訓が残された。

に対する自らの権力を強固にしようと努めるとともに、彼らが祭りのためにエルサレムの神殿へ赴く際に、再びユダ王に合流することを恐れて、　彼を廃位し殺害した後、二頭の金の雄牛像を作った。彼は、臣民が偶像崇拝に傾きやすいことを知っていた。彼らの先祖もまた、エジプトから紅海を渡って荒野に入った際、金の耳輪を溶かして雄牛像を鋳造していたのである（出エジプト記32:1–35）。前述の金の雄牛を作ると、エレボアムはそのうちの一頭をダンの町に、もう一頭をベテルの町――いずれも彼の領地内の都市――に設置した。　同時に、彼はイスラエル人に対し、エルサレムへ行ってはならず、金の子牛を礼拝し、犠牲を捧げ、それらを称える盛大な祭りを執り行うよう命じた。その際、王は民にこう語った。*「見よ、イスラエルよ、これこそが、あなたたちをエジプトから導き出したあなたの神々である」*（列王記上12:28）。

こうして、エレボアムはイスラエルの民を堕落させた。主はイスラエルの民を戒め、正しい道へと立ち返らせるために、御自身の聖なる預言者たちを遣わされたが、その中から改心して真の神のもとへ立ち返った者はごくわずかであった。また、中には真の神と金の牛の像の両方を崇拝する者もいた。　主は、こうした預言者たちの中に、恐るべき懲罰を携えて、御自分のしもべである聖なるアモスをも遣わされた。　この神の預言者は、物腰は素朴で言葉遣いも拙かったが、知性においては決してそうではなかった。なぜなら、すべての預言者たちの中で働かれたのと同じ聖霊が、彼の中にも働いて、その口を通して語られたからである。聖アモスは、ユダ王オジヤの治世（紀元前809～758年）に預言者としての務めを果たした。　その首都はエルサレムであり、またイスラエルの王エレボアムの時代にも行われた。エレボアムの首都はサマリアにあったが、これはユダの王権から離反して金の雄牛の像を作ったあのエレボアムではなく、年代的に後続する[4404] である； とはいえ、彼は同名の先代と同様に、金の子牛を崇拝する偶像崇拝者であった。聖アモスは、これらの王たちの治世の頃、パレスチナで起きた恐ろしい大地震の2年前に預言を始めました。その原因については、古代の著述家たちの報告によれば、次のようなものでした： ユダ王オジア（アザリヤとも呼ばれる[4405] ）は、その高慢さゆえに、神殿の聖所に入り込み、祭司の儀式に従って香炉の祭壇で香を捧げることを敢行した。　しかし、祭司たちがこれに反対すると、彼は彼らを死で脅した。そのまさにその時、エルサレムおよびパレスチナ全土で恐ろしい地震が発生し、多くの建物が倒壊しただけでなく、いくつかの山さえもその場所からずれてしまった[4406] 、 また、神殿の屋根が上部で割れ、生じた亀裂から王の顔に太陽の光が差し込んだ。その直後　、王の額と全身がハンセン病に覆われた。このように、主は御自身の祭壇に対する暴行と、御自身の祭司たちに加えられた冒涜を容認されなかった。

聖アモスは、その名を冠した書物に詳述されている預言の言葉の中で、神からイスラエルだけでなく、周辺の国々、都市、そして諸民族にも降りかかるであろう恐ろしい災いを予告した。　シリア、ペリシテ人、ティルス、エドム、アンモン人、モアブ人、そしてとりわけイスラエル人。なぜなら、彼らは神を知ったにもかかわらず、神から背を向けたからである。　主は、御自身を知らない異邦人の罪よりも、御自身を知り、その恵みを享受した人々の罪に対して、はるかに激しく怒られる。そして、主は恩知らずなイスラエルの民に、どれほどの恵みを施されなかったというのか！　エジプトの奴隷状態から解放し、海を乾いた地のように渡らせ、荒野で飢えた者たちにマナを降らせ、渇いた者たちに岩から水を湧き出させ、彼らの前にある諸民族を追い払い、蜜と乳が流れる約束の地へと導かれた。　それなのに彼らは、子牛の形に造られた金の偶像を称え、盛大な祭りを執り行い、「見よ、イスラエルよ、これがあなたの神々だ！」と叫んだ。これらの祭りは、金の子牛が置かれていたベテルという高い山で、とりわけ華やかに、そして頻繁に執り行われた。　そのため、聖アモスはこの場所に最も頻繁に訪れ、民に向かって声を張り上げ、迫り来る神の懲罰を警告し、不敬虔な行いを

[4404] 紀元前789年～737年

[4405] すなわち、ハンセン病患者のこと。

[4406] ユダヤ人の歴史家ヨセフス・フラウィウス（紀元2世紀没）は、ちなみに、神殿の西側で地震により山の半分が崩れ落ち、それが東へ4スタディオンにわたって転がり、その道中で王の庭園を埋め尽くしたと伝えている。

やめるよう懇願し、諭したが、預言者の言葉に耳を傾ける者はほとんどいなかった。当時、ベテルには、前述の金の子牛に仕える祭司がいた。　神の預言者アモスが偶像を冒涜し、子牛に捧げられる生け贄を罵り、崇拝者たちに対する神の恐ろしい裁きを告げて人々を不敬虔な祭事から遠ざけているのを見て、その祭司はイスラエルの王エレボアムに彼を誹謗した。　「アモスは、イスラエルの家の中であなたに対して騒動を引き起こしています。この地は彼のすべての言葉を耐え忍ぶことはできません。なぜなら、アモスはこう言っているからです。『エレボアムは剣によって死ぬ。そしてイスラエルは必ずや、その地から捕囚として連れ去られる』と。」

このような告発によって、祭司アマシアは王に預言者アモスへの怒りを煽ろうとしたが、王は祭司の言葉にほとんど耳を貸さなかった。彼は偶像崇拝者ではあったが、それでも神の預言者を敬っており、彼を苦しめようとはしなかった。　祭司は、王を神の御使いに敵対させることはできないと悟ると、自ら暴力を使って彼を追い出し始めた。　聖なるアモスを何度も殴打し、ベテルから追い払い、黄金の子牛を称える祭りに参加して、民を祭りの犠牲や祝宴から遠ざけることを禁じた。しかし、聖なる預言者は祭司の禁止令や彼から受けた傷をものともせず、　彼は再びベテルを訪れ、預言者としての教えと諭しの言葉を民に語りかけたが、またしても祭司は彼を捕らえて殴打した。ある日、悪辣な祭司は聖アモスに懇願するようにこう言った。「預言者よ！　行って、ユダの地へ逃げなさい。そこでパンを食べ、そこで預言しなさい。ベテルではもう預言してはならない。そこは王の聖所であり、王の宮殿だからだ」。

そこでアモスは答えて、アマシアに言った。「私は預言者でもなく、預言者の子でもない。かつては羊飼いで、イチジクの木の実を摘んでいた者だ[4407]。しかし、主は私を羊の群れから引き離し、こう言われた。『行って、わが民イスラエルに預言せよ。』今、主の御言葉を聞きなさい。　あなたは『イスラエルに対して預言してはならない。イサクの家に対して言葉を語ってはならない』と言う。それに対して、主はこう言われる。アッシリア人がイスラエルの地に来ると、彼らはそれを捕らえ、荒廃させ、その町々を破壊し、この町を攻略する。　その時、あなたの目の前で、恥知らずな兵士たちが淫行によってあなたの妻を汚すであろう。なぜなら、あなたもまた、神のすべてを見通す御目の前でイスラエルの迷いを助長し、これらの人々に、あなたの神である金の牛の汚れた神殿で不浄な行いをなすよう教えたからである。　あなたの息子たちや娘たちは、あなたの目の前で武器によって死ぬことになり、あなた自身も異教の地で息を引き取るだろう。そしてイスラエルは、その地から捕囚として連れ去られるであろう」（アモス書7:12–17参照）。

聖アモスのこの言葉は、祭司に激しい怒りを呼び起こし、彼は神の預言者を容赦なく殴り始めた。ついに、祭司の息子である凶暴なオジアが、激怒のあまり、重い棍棒で聖アモスの眉間を全力で打ち、致命傷を負わせた。しかし、彼はすぐには死ななかった。　かろうじて息のある状態でユダの地へ運ばれ、そこで数日後に[4408]、故郷のフェクアイの町で息を引き取り、その地で先祖たちと共に葬られた。聖アモスの預言を読みたい方は、その書物の中で見つけることができる。我らは、彼に啓示を与えられた神を、今、また常に、そして世々限りなく賛美する。アーメン。

コンダク、第4調:

預言者よ、栄光に満ちたあなたの心を御霊によって清め、栄光あるアモスよ、天より預言の賜物を受け、諸国に大声で叫ばれた。「これこそが我らの神であり、彼に並ぶ者はいない。」

[4407] シコマール、あるいはシコマールはイチジクの木の一種で、その果実から見てイチジク科の中でも低品質な品種に属する。

[4408] 紀元前783年頃

聖殉教者ドゥーラの受難

記念日：6月15日

悪魔の子らが彼に仕え、偶像崇拝の魔術と迷いがますます強まっていた頃、キリキア[4409]の総督マクシムスの治世下において、この統治者の前で、ドゥラ[4410]という名のキリストのしもべ、すなわち同キリキア地方の出身の男が裁かれた。　彼は義にかなった、神を畏れる人であり、人々の証言によれば、徳のある生活を送り、あらゆる面で真実を守るよう努めていた。

ある日、イゲモンに、ドゥラがキリストの信仰を告白している者であるとの報告が入り、その後、そのキリストのしもべは直ちに牢獄に投じられた。その際、書記官[4411]はイゲモンにこう言った。

「総督様、ご命令に従い、貴殿の軍司令官たちはキリキア全土を、ゼフィリトの都市[4412]に至るまで巡回し、その間に不敬虔なキリスト教信仰の信奉者であるある人物を捕らえました。そして今、その者を貴殿の正義に満ちた、輝かしい裁きの前に差し出しました。」

これに対し、イゲモンはこう言った。

「私が自らこれらの都市を巡回する際には、現在牢獄に収容されている囚人たちを連れて行くよう命じ、その道中、そのために特別に設けられた場所で、彼らを拷問するつもりだ。」

そして間もなく、彼はゼフィリト地方にあるプレトリアダ[4413]と呼ばれる都市の一つへと向かった。そこでイゲモンは裁判の席に着くと、まず第一に、祝福されたドゥラを自分の前に連れてくるよう命じた。　キリストのしもべは、拷問の場へ向かう途中、主に向かってこう祈った。「主イエス・キリスト、神の御子、あらゆる憐れみの源よ――あなたはかつて、あなたの預言者ダビデを通してこう言われました。*『あなたの口を開けよ。そうすれば、わたしがそれを満たそう』*（詩編80:11）；　また、御自身の福音書においても、*『何を、どのように語るかを心配してはならない』*（マタイ10:19）と語っておられます。どうか、御自身の聖なる御使いを遣わし、私が語るべき言葉を授けてください。そうすれば、最も不敬虔なマクシムスの前に立たされたとき、私は彼の不敬虔さを暴くことができるでしょう。　もし私が苦難に遭うことになっても、私は拷問を恐れません。なぜなら、私はあなたを目の前に置き、喜んで自分の体を拷問に委ねるからです。もし私が自分の体を火あぶりに委ねなければ、どのような恵みにあずかることができるでしょうか。　どのような冠を受け取れるというのか。そしてその時、私は主よ、あなたにどのような傷跡を見せることができるというのか。あなたがそれを見て、私にあなたの憐れみを示し、私の罪を赦してくださるために。」

ドゥラがこのように祈っていると、兵士たちは彼の上着を剥ぎ取り、縛られたままイゲモンに引き渡した。

すると、イゲモン・マクシムスは彼に言った。

「教えてくれ、お前の名は何か？」

聖人は答えた。

「私はキリストのしもべです。」

それに対し、イゲモンはこう反論した。

4409 キリキア――古代の小アジア南東部の地域で、おそらくセム系のキリク族に由来する名称であり、その肥沃さゆえに早くからギリシャ人入植者を惹きつけた。

4410 ギリシャ語で「奴隷」を意味する。

4411 ノタリオス――役人のことで、その職務には、とりわけ裁判所における法律の正確な執行を監督することが含まれており、下級ノタリオスはこうした案件に関する文書作成を担当していた。

4412 すなわち、キリキアの沿岸都市ゼフィリアの管轄区域そのものまで。

4413 プレトリアダ――厳密にはキリキアの小さな町の一つで、ゼフィリアの町からそう遠くない場所にある。

「キリスト教名ではなく、お前の本当の名前を言え。その名前では、お前を正当化したり、苦しみから救ったりすることはできない。」

すると、至福のドゥラは言った。

「私はあなたの前で自分の名前をはっきりと名乗っていないでしょうか？私の真の名は『キリスト者』です。人々が私を呼ぶ名、すなわち『ドゥラ』もまた私の名であり、私がそう呼ばれるのは、まさにキリストのしもべであるからです。」

これに対し、イゲモンはこう言った。

「お前はまだ裁きの座への恐怖やあらゆる苦痛を経験していないから、これほど大胆に我々に語りかけるのだ。さあ、教えてくれ。お前はどこの国、どこの村、どこの家系の出身なのか？」

聖人は答えた。

「私はこのキリキア地方、ゼフィリトの町プレトリアダ出身です。由緒ある家系に生まれ、幼い頃からすでにキリスト教徒と見なされています。」

すると、イゲモンはこう言った。

「もしお前が名門の出身であるならば、無敵の王たちに従わなければならない。それゆえ、今すぐ神殿へ行き、熱心に神々への生け贄を捧げよ。そうすれば、我らからも称えられ、偉大なる王たちからも、偉大かつ栄光に満ちた栄誉を受けることになるだろう。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「あなた方の栄誉や、王たちが人々に与えるあらゆる権力は、あなた方や、真の神を崇めないすべての人々のものとして残しておいてください。しかし、私からは、主なる私の神がこれらすべてを遠ざけてくださいますように。そうして、私が豊かになるのは、ただ私たちの主イエス・キリストへの信仰においてのみであるように。」

この聖人の言葉を聞いたイゲモンは、彼を地面に倒し、鉄の棒で打つよう命じ、その際、家来たちにこう言った。

「彼に、その狂気をやめるよう説得せよ。」

一方、聖ドゥラは打撃に耐えながら、その間ずっと主に向かってこう叫んでいた。

「キリストよ、あなたの聖なる御名のゆえに、これらすべてに耐えることを私に許してくださったことを感謝します！」

殉教者のその言葉を聞いたマクシムスは、聖ドゥラを責め立て、こう言った。

「全身が傷だらけの今、キリストがどうしてあなたを助けることができるというのか？　それとも、まだそれが理解できないのか、この狂人よ？」

これに対し、殉教者はこう答えた。

– 私たちの信仰の師である聖使徒パウロは、*「もし不正に戦えば*、誰も冠を受けることはできない」（IIテモテ2:5）と語らなかったでしょうか。

すると、イゲモンは彼に尋ねた。

「では、今このように苦しめられているお前は、後に冠を受けることになるのか？」

聖人はこう答えた。

「私は今、あなたの父である悪魔と戦っている。もし私がサタンの軍勢、すなわち、悪魔の僕であるあなたに勝利を収めるならば、天において朽ちることのない冠を受けるだろう。」

拷問官はこれに対し言った：

「なぜ、十字架に釘付けにされた『人』を信じて、そんな狂気じみたことをするのだ？」

これに対し、聖ドゥラはこう答えた。

「人間の手に造られた石や木の偶像を信じるのと、生ける神人であり、ご自身の御心によって私たちのために十字架にかけられた真の主を信じるのと、どちらが優れているだろうか？」

すると、マクシムスは言った。

「おお、不敬な者よ！　偉大なる神アポロン[4414]が、果たして人の手によるものだとでも思っているのか？」

これに対し、聖人は答えた。

「あなたがアポロンをその名で呼んだのは正しい。なぜなら、その名は『滅ぼす者』[4415]を意味するからだ。彼に心を傾けることで、あなたは自分の魂を滅ぼすだけでなく、彼を崇拝するよう強要された人々の魂までも滅ぼしているのだ。　しかし、天にまします真の神は、偶像を崇拝させられて滅ぼされた人々の魂を、お前の手から取り立てられることを知っておきなさい。不義のアポロンがどのような存在であったか――それについて今、お前に語ろう。彼は、今の君と同じように、節制を欠き、ダフネ（ ）という一人の妻への不純な愛に囚われていた（[4416]）；彼は彼女に多くの金を贈ったが、約束された見返りは得られなかった。さて、私はあなたに問う。教えてほしい――肉欲に囚われながら、深く愛したその女性の好意さえ得られなかったというのに、いったいどのような神というのか？　どうしてあなたが彼に何かを期待できるというのか？　まことに、あなたたちの間で語られているこのすべては、笑うに値するものであり、その多くは泣くに値するものでさえある。実際、教えてほしい。あなたが神として崇めているそのアポロンとは、卑劣であらゆる不浄に満ちた娼婦でさえ、無価値だと見なし、その顔に唾を吐きかけたような神のことなのか？　ほら、あなたたちの不敬虔な行いが、どれほど嘆かわしいか、お分かりだろうか！

これを聞いて、マクシムスは殉教者を殴打していた使用人たちに言った。

「彼を仰向けにさせ、腹を殴れ。」

すると、軍警の隊長アファナシウスは聖人に言った。

「統治者に服従せよ。お前の全身が傷だらけになっているのを感じないのか？」

聖人はこれに対し、こう言った。

「むしろ、悪魔の助言者でありその僕であるお前こそ、私に従うべきだ。そして、自分自身と、お前の主君に、　――いかにして娼婦ダフネを早急に説得し、彼女があなた方の神アポロンと淫らに暮らすことに同意させ、その欲望を満たさせ、愛に燃えながら欲望が満たされずに、彼が残酷な死を遂げないようにするか――私にはただ一人の助言者がいる――私たちの主イエス・キリストである。

すると、拷問官は鉄の板を持ってくるよう命じ、使用人たちに言った。

「それを火でさらに激しく焼き熱し、ここに我らの神々を冒涜するこの者を載せよ。」

聖人はこれを聞いて、こう言った。

「ゲヘナにいるお前のアポロンは、今彼が苦しんでいるそのゲヘナの炎を、お前がさらに強めていることを感謝している。彼はその報いとして、お前も彼と共に漆黒の闇へと投げ込まれるだろう。その時、私もお前を嘲笑してやる、不敬虔なアポロンの恩人よ。」

聖人を拷問した者たちは、彼をほぼ焼き尽くすところまで追い詰めたものの、　結局何も成し遂げられず、お世辞めいた助言で神の僕を惑わすことも、拷問でキリストへの信仰を捨てさせることもできなかったとき、イゲモンは兵士たちに、すでにこれほどまでに苦しめられた聖人を別の牢屋へ連行し、そこで完全に一人きりにし、一切の世話もせずに放置するよう命じた――そして彼はこう付け加えた。

[4414] アポロンは、ギリシャ神話において、光、とりわけ太陽の光の神であり、その光がもたらすあらゆる有益な影響と有害な影響を司っている。

[4415]「アポロン」という言葉は、ギリシャ語の動詞……に由来し、その意味は「滅ぼす」「殺す」である。

[4416] ダフネは、ギリシャ神話において、川の神ラドンとガイア（大地）の娘であり、アポロンとレウキッポスの両者から愛されていた。後者は少女に扮して、ダフネの女友達の一人として彼女に付き従っていたが、アポロンによって殺された。そこで、ダフネの母であるガイアは、彼女を月桂樹に変えた。

「不敬虔なキリスト教徒の誰一人として、彼を『至福なる者』と呼んではならない。なぜなら、彼は我々の神々に対して不法に冒涜を働いたため、今や大きな苦痛にさらされているからだ。」

しかし、聖ドゥラはその牢獄に留まり、絶えず神を賛美し、祈りを捧げていた――神が彼に殉教という善き偉業を成し遂げさせてくださるよう。

五日が過ぎると、マクシムスは再び裁判の席に着き、こう尋ねた。

「あの、あらゆる悪意に満ちた、不敬虔なキリスト教の教えの信奉者は、まだ生きているのか？　彼をここに連れて来い！」これに対し、軍司令官アファナシウスは答えた。

「彼は自らの教えを堅く守り、しかも非常に元気で、まるで体に傷一つないかのようです。」

そう言って、彼は殉教者を連れてくるよう命じた。イゲモンは、聖ドゥーリの全身が無傷であり、その顔が輝いているのを見て、兵士たちに言った。

「ああ、忌まわしい衛兵どもよ！　私はお前たちに――彼を治療したり世話をしたりしてはならない、と命じなかったか？」

これに対し、書記官長のピガシウスは答えた。

「陛下、私たちは陛下の命令に従い、彼を牢獄の最も奥深くに閉じ込め、首には常に重さ三百リットル[4417]のヘラクレスの鉄像をぶら下げていたことを誓います[4418]。それなのに、なぜ彼が今、完全に健康であるのか――その理由は私たち誰にも分かりません。」

すると、聖なる殉教者はこう言った。

「狂ったイゲモンよ！　私を癒やし、私の体に健康と強さを与えてくださったのは、私のキリストである。そのおかげで、今あなたが再び私に課そうとしている苦痛さえも耐え抜くことができるのだ。 そして、主がそうされたのは、 あなたが、私たちの神こそが、御自身を信頼する人々を驚くべき方法で癒やす「医者」であることを悟らせるためであり、また、私が殉教の栄冠を授かり、あなたが二重の永遠の苦しみを受けることになるためでもあるのだ。　もしあなたが自分のアポロンに捧げるためにそのような苦しみを受けたとしたら、果たしてそのあなたの神は、私のキリストが私を癒したのと同じように、あなたを癒すことができたでしょうか？

これに対し、イゲモンは激怒してこう答えた。

「この男は悪意をもって我らの神々を冒涜し続けているのだから、その頭に油を注ぎ、焼き殺せ。」

殉教者はこれに対し、こう言った。

「もし私の脳を焼き尽くしたところで、それで何になるというのか？　それなら、もっと別の拷問を思いつくがいい。」

その後、イゲモンは殉教者の鼻孔に大量のマスタードの種を詰め込むよう命じた。

すると、聖ドゥラはこう言った。

「今この瞬間も、お前のあらゆる拷問を嘲笑っているぞ！」

その後、イゲモンは家来たちに、聖人の背骨を鉄の爪で可能な限り激しく打ちつけ、その際、その傷口に濃い酢を注ぎ、鋭い陶器の破片でこすりつけるよう命じた。

マクシムの命令により、これらすべてが行われている間、聖なる殉教者は次のように祈った。

「主イエス・キリストよ！　あなたのしもべである私に御臨在ください。見よ、*『私の背中で耕す者たちが耕し、長い畝を刻んだ』*（詩編128:3）。

すると、イゲモンは彼に言った。

[4417] ヘラクレス、あるいはイラクリオス。ヘラクレス――ギリシャの国民的英雄――は、古代人にとって肉体的な力と威力の理想と見なされていた。

[4418] 1リットルは、現在の72ゾロトニクに相当した。したがって、殉教者の首には5プード以上の重さがぶら下がっていたことになる。

「さあ、今こそ我らの神々を信じ、その信仰を告白せよ！」

聖ドゥラはこれに対し、次のように答えた。

「あなたの神々、とりわけアフロディーテ[4419] とアルテミス[4420] が、あなたとあなたの悪意を助けてくれますように。もし望むなら、あなたの他の女神たちや、彼女たちのあらゆる恥知らずな行いについても話して差し上げましょう。」

その後、イゲモンは家来たちに命じた。

「神々を冒涜しないよう、その顎を砕き、脛を折って、一言も発せぬようにして置きなさい。」

これに対し、聖なる殉教者は言った。

「おお、最も不法なイゲモンよ！　私が、あなたのアフロディーテや他の女神たちが、卑猥な情欲や　淫行に明け暮れ、さらには、誰がより好色であるかを巡る争いの中で、かつてある羊飼いのパリス[4421] を自分たちの審判者に据えたという真実を語っているのに、なぜ私を殴るのか。そして、あなたの忌まわしい女神たちの最も忌まわしい行いについて語られているのに、なぜあなたは怒るのか?

ただ私の神だけが真実である。神は人となることを望み、十字架に架けられ、その後葬られ、三日後に復活し、父なる神の右の座に着かれた。そしてやがて火を携えて来られ、あなたの神々をすべて滅ぼすためである!

これを聞いて、イゲモンは聖人に言った。

「ほら、この呪われた者よ、お前もまた二人の神を信じているのか?」聖人はこれにこう答えた。

「二つの神について語るなど、過ちを犯したり、迷ったりしてはならない。私たちが崇める神性は三位一体である。」

すると、総督は言った。

「では、お前たちには三つの神がいるということか?」

殉教者はこれに対し、こう答えた。

– 私は三位一体を告白し、崇拝する。父を信じ、子を告白し、聖霊を崇める。

その後、イゲモンは言った。

「教えてくれ、どうして一つの神を信じながら、三つを告白するのだ?」

これに対し、聖なる殉教者は次のように答えた。

「あなたは肉に属する者であり、*『神の御霊から来るもの』*（Iコリント2:11）を理解していないが、ここに集まっている人々のために、あなたの問いに答えよう。あなたが人間として言葉と息を持っているように、全能の父なる神もまた、御自身の御言葉と、御自身の至聖なる御霊をお持ちである。　この私たちの神は、初めに人を創造し、御自身の姿に似せて尊び、彼に命の息を吹き込み、楽園に住まわせられた。しかし、今やあなたを通して自らの意志を実行しているサタンが、神の戒めを破るよう人を強いたとき――今まさにあなたを通してそうしているように――　――こうして人間を神の戒めの履行から遠ざけたとき――その時、神は、御自身の御手によって造られた失われた被造物を回復し、真の道へと導こうと望まれ、御子、すなわち「御言葉」を地上に遣わされた。　こうし

4419 アフロディーテ――ギリシャ語で金星を指す――は愛の女神である。彼女を称える祭りは「アフロディシア」と呼ばれ、ギリシャや小アジアの多くの地域で催されていた。

4420 アルテミス――ギリシャ神話においてゼウスとレテの娘――は、光と月の女神であった。そのため、光の女神として弓と矢を、夜の女神として松明を象徴として与えられていた。

4421 ギリシャ神話によれば、パリスの両親は、彼がまだ幼い頃に彼を見捨ててしまった。しかし、彼は羊飼いたちによって育てられた。ある日、アフロディーテ、ヘラ、アテナという三人の女神が彼の元を訪れ、彼女たちのうち誰が最も美しいかという論争の裁定を彼に求めた。パリスは、彼女たちの中で最も美しいのはアフロディーテだと判断した。

て、この神の御言葉は聖母マリアの胎内に宿り、彼女から生まれ出た――まさにこの御言葉を通して、父なる神は世界に救いを授けられたのである。

その後、イゲモンは尋ねた。

「果たして、言葉が人を生み出すというのか？」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「あなたは神の奥義を理解していない。しかし、もしあなたが全能の神の力を知っていたなら、指先から人間を創造し、水の上に大地を築き、天を確立し、すべての被造物を創造された方――まさにその方がキリストであることを悟っただろう。　しかし、人間の性質は神性を直視することができない。それゆえ、慈悲深い主は、人類への愛ゆえに、人となり、人間の性質を身にまとい、――最初のひとりの人間によって死が世に入ったように、唯一の「人」である私たちの主イエス・キリストを通して、死者の復活がもたらされるようにされたのである（ローマ5:13）。

すると、イゲモンは言った。

「何をおっしゃっているのですか？　果たして死者の復活などあるというのですか？」これに対し、聖なる殉教者は答えた。

「はい、あります。もし死者がよみがえらなければ、神はどのようにして世を裁かれるというのですか？」

マクシムスは言った：

「お前にそんな嘘の言葉を聞かされたくはない。だから、信じなさい。死んだら、そのまま死者のまま横たわることになるのだ。」

「その言葉は真実だ」と殉教者は答えた。「あなたがたは死んでいる。なぜなら、死んだ偶像を信じているからだ。それゆえ、あなたがたは決して『復活』には至らず、ただ『裁き』と『永遠の苦しみ』の復活へと入るだけである。　しかし、すべての人間はキリストの裁きの座に立ち、行ったことすべてについて答えなければならないのである（IIコリント5:10）。

そこで拷問官は兵士たちに、殉教者を鉄の足枷で縛り、牢獄に閉じ込めておくよう命じた。

翌日、早朝、マクシムスは再び神の僕ドゥラを裁判に引き出すよう命じ、殉教者が現れると、彼にこう言った。

「おお、不信心者よ、我らの神々を冒涜して、お前には何の益があるというのか？」

それに対し、祝福された者はこう答えた。

「私は、あなたがたの神々を非難するとき、私の神から大きな報いを受ける。しかし、あなたには、まだ生きているうちに神の裁きが下るだろう。」

そこでマクシムスは、聖人を生贄として穢そうと企み、傍らに立っていた家来たちに言った。

「彼の口に供物の肉とワインを詰め込め。」

その後、聖人はこう言った。

「たとえお前が、その神に忌み嫌われる祭壇全体を洗い流し、そのすべてを私の口に注ぎ込んだとしても、それでも神のしもべを少しも汚すことはできない。」

これに対し、拷問者は叫んだ。

「ほら見ろ、この忌まわしい者よ、お前はすでに我らの祭壇からの生贄を味わってしまったのだ！」

聖なる殉教者はこれに対し、こう答えた。

「これらすべては、私を少しも辱めるものではない、忌まわしく狂った支配者よ。」

そこで、イゲモンは聖人を木に吊るし、その体を内臓まで削り取り、顎を顎筋ごと完全に引きちぎるよう命じた。

その後、聖なる殉教者はこう言った。

「狂人よ、お前の父であるサタンが、お前にこうするよう教えたことを知らないのか？」

殉教者の体が骨まで傷つけられ、顎が引きちぎられた後、イゲモンは彼を再び牢獄に閉じ込めるよう命じた。その後、キリキアのタルスス[4422] へ向かう際、マクシムスは囚人を連れて行くよう命じた。 彼らが約二十ポプリス[4423] を進んだとき、聖殉教者ドゥラは十字の印で身を守り、その苦しむ魂を主に委ね、すでに死んだ状態で運ばれた。　タルスから十四ポプリシュの地点に差し掛かったとき、コメンタリシウス[4424] がイゲモンに、神々を不敬に非難していたドゥラがすでに亡くなり、今やその遺体が運ばれていることを報告した。「彼をどうすべきか？」イゲモンは、遺体を深い堀に投げ込み、埋葬されないようにするよう命じた。　一方、兵士たちは聖人の遺体を奪い取り、ゼフィリトの地へと流れる川に投げ込んだ。　そして、遺体がある村――プレトルナダという町からそう遠くない場所――に流れ着き、岸辺に横たわっていたとき、その地の羊飼いの犬たちが聖人の遺体の匂いを嗅ぎつけ、そのうちの1匹が遺体を守り、いかなる鳥も殉教者の遺体に触れることを許さなかった。もう一匹の犬は、羊飼いの服を口にくわえて運び、殉教者の遺骸を覆った。これを見た羊飼いたちは、村や町の人々にこのことを伝え、直ちに多くの信者たちが聖殉教者の遺骸のもとへ駆けつけ、彼らにこれほど貴重な宝物を与えてくださった神に感謝しつつ、敬虔にそれを受け入れた。　彼らは聖殉教者の遺体を敬虔に運び出し、主イエス・キリストを賛美しつつ、父と聖霊と共に永遠に賛美される方を称え、尊厳をもって埋葬した。アーメン。

殉教者ドゥリ聖人の記念日

記念日：6月15日

神の祝福されたしもべドゥラは、エジプトの[4425] にあるキノヴィーの一つで修道士として暮らしていた。彼の眼差しには常に謙遜と柔和さが輝いていたが、その知性は偉大で輝かしいものであった。

この神の御心に適う者は、すべての人から迫害され、中傷されながらも、常に喜び、心は明るく輝いていました。彼を侮辱する者たちを、彼は罪のない者と見なし、彼らのために神に祈りました――主がこれを彼らの罪とみなさないようにと。　すべての罪を悪魔のせいにし――兄弟たちを惑わしているのは悪魔だと――勇気をもって悪魔に立ち向かい、至福のドゥラは忍耐と祈り、そして悪意のなさをもって、悪魔のあらゆる策略に打ち勝った。このような忍耐の中で、この神の修道士は二十年間を過ごし、心の中に柔和さと謙虚さを揺るぎなく育み続けた。

一方、悪魔は、ついに何をすればこの聖人を怒らせることができるか分からず、彼に対してこのような狡猾な嘘を広めた。しかもこの時、悪魔は尊者ドゥラだけでなく、すべての兄弟たちをも攻撃し、こうしてすべての沈黙の修道者たちを悲しませ、動揺させたのである。　すなわち、彼は神を畏れないある兄弟に、密かに教会に忍び込み、そこにあるすべての聖具を盗むよう唆した。これらすべてを成し遂げた後、その修道士は盗んだ品を隠し、まるでそれまで一度も外に出たことがなかったかのように、自分の独房に閉じこもった。

[4422] タルス――小アジアのキリキア地方の主要都市。キリスト教教会では、特に聖使徒パウロの生誕地として知られている（使徒行伝22:3）。

[4423] 現在の単位に換算すると、競技場の長さはおよそ690サジェンに相当する。

[4424] コメンタリシス――刑務所の長。

[4425] キノヴィア――（ギリシャ語の「共通の」と「生活」に由来する）すべての共同生活修道院の総称。すなわち、修道院長の方針に基づき、修道士たちが食事だけでなく生活に必要なあらゆるものを修道院から提供され、その見返りとして自らの労働とその対価を修道院の共同の必要のために捧げる修道院を指す。

さて、朝の礼拝の時間になると、副教会長[4426] が、パンニカディラに火を灯すために教会に入ったところ、教会の器がすべて盗まれていることに気づいた。彼は直ちにアッバ[4427] のもとへ行き、このことを報告した。その後、慣例に従って彼は木槌[4428] を打ち鳴らし、すべての修道士たちが朝の賛美のために教会に集まった。

朝の礼拝が終わると、アッバとパラエクリシアークは兄弟たちに聖具が盗まれたことを告げた。すると、皆はこれに大いに動揺した。ちょうどその時、病のため、至福のドゥラは朝の礼拝に来ていなかった。そこで、兄弟たちの中にはこう言う者もいた。

「ドゥラ兄弟以外に、それらを盗んだ者はいないはずだ。彼こそが、そのせいで教会に来なかったのだろう。もし彼がこの盗みを犯していなければ、いつもの習慣通り、誰よりも早く半夜礼拝にやって来ていたはずだ。」

そこで、彼を教会へ連れてくるよう使いを送った。使いたちは出かけて行き、彼を見つけた。彼は病気ではあったが、それでも祈りを捧げて立っていた。彼らは聖ドゥラを捕まえ、力ずくで教会へ引きずり込んだ。すると、聖ドゥラは彼らに尋ねた。

「兄弟たちよ、これはどういうことか。私が自発的に聖なる父たちのところへ行けるというのに、なぜ無理やり私を引きずり回すのか？」

すると彼らは、冒涜的で不名誉な言葉で彼を非難し、こう言った。

「生きるに値しない神を冒涜する者よ、これほど長い間、我々を惑わせてきただけでは足りないのか。今や、お前は我々の魂までも冒涜したのだ。」

すると彼は彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、もし私があなた方の前で罪を犯したのなら、お許しください。」

その後、彼らは彼をアッバのもとへ、そして断食の生活で老いた父たちの全集会へと連れて行き、こう言った。

「この男こそ、初めから私たちを惑わせ、共同生活の規則を破り続けてきた者だ。」

すると、皆が彼を中傷し始めた。ある者は言った。

「私は彼がこっそりと野菜を食べているのを見た。」

また別の者は言った：

「彼がパンを盗み、修道院の外で配っているのを見た。」

またある者は、こう彼を誹謗した。

「彼がこっそりと高価なワインを飲んでいるのを見た」

また、他の者たちも彼について、何か不道徳なことをでっち上げて中傷した。

これらすべてを耳にしたアッバと、彼と共にいた修道士たちは、その誹謗中傷を信じ込み、無実のドゥラに、「彼について言われていることはすべて本当なのか」と問い詰め、とりわけ盗みの件、すなわち、盗んだ教会の器をどこに隠したのかについて詳しく尋ねた。

聖ドゥラは、弁明として、最初は自分には何の罪もないと主張した。しかし、信じてもらえないと悟ると、黙り込み、ただこう口にした。

「聖なる父たちよ、お許しください。私は罪人です。」

そこでアッバは、彼から修道服を脱がせ、世俗の服を着せるよう命じ、その際こう言った。

「このような行いは、修道者の品位にふさわしくない。」

[4426] パライエクリシアーク――教会で灯を灯す奉仕者。

[4427] アヴァ（アッバ）――「父」の意。東方教会では、共同生活を行う修道院の院長をこのように呼んでいた。

[4428] ビロ（「打つ」という言葉に由来）とは、木製または金属製の板のことで、その音を響かせて信徒を礼拝のために教会へ呼び集めるために叩くものである。我が国ではビロは鐘に取って代わられたが、ギリシャでは今でも存在しており、特にトルコ人が多く、鐘の使用を許さない地域ではなおさらである。

そして、至福のドゥリから修道服が脱がされると、彼は苦々しく泣き崩れ、天を仰ぎ見て、大声でこう叫んだ。

「主イエス・キリスト、神の御子よ、あなたの聖なる御名のゆえに、私はこの姿に身を包みましたが、今や私の罪のゆえに、それは私から剥ぎ取られてしまいました。」

その後、アッバは神の御使いを足枷で縛り、執事に引き渡すよう命じた。執事は彼の体を裸にし、牛の腱で聖人を激しく打ちながら、盗みに関して彼について語られていることがすべて事実かどうかを問い詰めた。

ドゥラは、目に涙を浮かべながらも、自身の無実ゆえに相変わらず微笑みを絶やさず、こう言った。

「お許しください。私は罪を犯しました。」

すると、執事は彼が微笑みながらそのような言葉を口にするのを見て、さらに激しく怒りを募らせた。彼はドゥラを牢屋に閉じ込め、足を足枷で縛り上げた。さらに、市の統治者宛てに、盗難の件とドゥラの兄弟について知らせる手紙を書き、直ちにその手紙を送りつけた。

市当局者はその手紙を読み終えると、直ちに粗暴な使用人たちを遣わし、ドゥーラを泥棒として連行させた。兵士たちは神の僕を捕らえると、鞍のない動物に乗せ、首に鉄の重りをかけ、街中で恥辱にまみれながら引き回した。

至福のドゥルが裁判に引き出されると、市長は彼に尋ねた。

「お前はどこの出身か、名は何か、なぜ修道士になったのか。教会の聖具をどのように盗み、どこに隠したのか？」

しかし、キリストの殉教者は、総督のこれらすべての質問に対して、ただこう答えるだけだった。

「罪を犯しました。お赦しください。」

すると、統治者は激怒し、聖人を裸のまま地面に寝かせ、四人の家来に牛の腱で容赦なく彼を打ち据えるよう命じた。

祝福されたドゥルが長い間、何の憐れみもなくそうして殴打されている間、彼はついに微笑みを浮かべて市の長にこう言った。

「打て、打て――そうすれば、盗まれた私の銀をより清らかなものにしてくれるだろう。」これに対し、統治者は彼に言った。「狂人よ、私はお前の肉体と肋骨の上で、雪よりもなお清らかな銀をお前に与えてやる。」

そして彼は直ちに、その腹の下に燃え盛る炭を敷き詰め、傷口には塩を混ぜた酢を注ぐよう命じた。

その場にいた者たちでさえ、この聖人の並外れた忍耐力に驚き、彼にこう言った。

「聖なる器をどこに隠したのか言え。そうすれば、お前は解放される。」

すると、キリストの殉教者はこう答えた。

「私には銀も、行方不明の器も一切ない。」その後、総督は聖人を拷問から解放し、彼を牢獄へ連行するよう命じた。

翌朝、この都市の長老は修道院へ使者を送り[4429]、すべての修道士たちと共に、その院長も彼のもとへ来るよう命じた。そして翌日、彼らは皆で集まり、総督のもとへ赴いた。

[4429] 「ラヴラ」とは、本来は城壁に囲まれた都市の一区画を指す。しかし、ごく古くから、この名称は信徒が多く集まる重要な修道院を指すようにもなった。　こうした修道院が初めて「ラヴラ」と呼ばれるようになったのはパレスチナで、そこでは修道士たちが、様々な遊牧民、とりわけベドウィンによる襲撃を恐れて、できるだけ大勢で集まり、住居を城壁で囲まざるを得なかった。

そして彼は彼らに言った。「あなたがたが窃盗の罪で告発しているその兄弟を、私は多種多様で過酷な拷問にかけたが、彼には何の悪事も見つからなかった。」

これに対し、修道士たちは彼にこう言った。「総督様、盗みのほかにも、この不信心者は多くの悪事を働いております。しかし、私たちはこれまで、神の御名において彼を忍耐し、彼がその悪習から立ち直ることを期待してきましたが、彼はさらに悪い道へと堕ちてしまいました」。

すると、市長は彼らに言った。「では、この男をどうすべきか？」

修道士たちは答えた。「法律が定める通りに彼を処罰してください。」

「我らの法律では」と、市当局者はそれに答えて言った。「神を冒涜した者には両手を切り落とすよう定めている。」

これに対し、修道士たちはこう言った。「彼には法に従って苦しみを受けさせ、その行いに応じた罰を受けさせよ。」

そこで、統治者は殉教者を連れてくるよう命じ、皆の前で次のように尋問し始めた。

「忌まわしく、凶悪な男よ」と彼は切り出した。「お前が告発されている窃盗について真実を語れ。そうすれば、死を免れることができる。」

これに対し、無実のドゥラはこう答えた。

「総督よ、私がやっていないことを、自分のこととして告白することを望まれるのですか？私は自分自身について嘘をつくつもりはありません。あらゆる嘘は悪魔から来るものだからです。」

そして、彼はこう続けた。

「今、あなたが私に問いただしている件について、私は全く罪はないと自認している。」

そこで総督は、聖人が無罪を主張しているのを見て、一方、修道士たちが法に基づいて裁くよう要求しているのを見て、彼の手を切り落とすよう命じた。

その後、無実の老僧ドゥルは、死刑囚が処刑される場所へと連行された。

その頃、実は盗みの真犯人であり、聖なる器を盗み出したあの修道士は、心を痛め、心の中でこう呟いた。「今、あるいは将来、私が盗んだものがすべて見つかってしまわないだろうか？　たとえ今、この私の悪行が隠れたとしても、神の義なる審判の日にそれは暴かれるだろう。その時、この呪われた私はどうすればよいのか？聖器を盗んだこと、そして無実の兄弟を苦痛にさらしたこと――この二重の罪について、私はどのような答えを返せばよいのか？」

そして彼は急いで修道院の院長のもとへ行き、こう言った。「アッバ、早く町へ行って総督に伝えてください。兄弟の手が切り落とされたり、苦しみで死んだりしないように。聖なる器が見つかったのですから。」

すると、アッバは直ちに総督のもとへ使者を送り、殉教者は処刑が行われる前に釈放された。

彼が修道院に連れ戻されると、彼の無実が明らかになり、盗みは別の修道士によるものであることが皆にわかった。そして、兄弟たちは尊者ドゥレの足元にひれ伏し、こう懇願した。「お許しください。私たちはあなたに対して罪を犯しました。」　すると、彼は泣きながら、こう彼らに答えた。「父たちよ、兄弟たちよ、私を赦してください。あなたがたが私に与えた一時的な苦しみのおかげで、私は永遠の苦しみから解放され、神の憐れみによって偉大な恵みにあずかることができることを、心から感謝します。　また、あなたがたからの不当な非難や責めを聞くたびに、私は心の中で喜び、主が御自身の栄光のうちに来られ、心の内なる御心を明らかにされる時、自分の罪による大きな恥から解放されることを望んでいたのです。　しかし何よりも今、私は無実の罪で苦しめられたことを喜んでいる。なぜなら、神は御自身のために苦難に耐える者たちに、どのような恵みを備えておられるかを知っているからである；　私の唯一の悲しみは、あなた方に対するものです。あなたがたが私に対してこれほど不当な扱いをしたことが、主によって罪とみなされないように。そして今、私は慈悲深き神に、ただあなたがたに赦しをお与えくださるよう祈っているのです」。

その後、聖ドゥラはさらに三日間生き、主のもとへ旅立ったが、彼の死を知る者は誰もいなかった。真夜中の祈りのために修道士たちを起こす役目を任されていた兄弟が、ある日、聖人の独房に近づいたが、扉を叩いても返事がない。　二度、三度と扉を叩いてもやはり返事がなかったため、彼は別の兄弟を呼びに行った。　蝋燭を持って戻ると、二人は扉を開けて部屋に入り、尊者様がひざまずいたまま立っているのを見つけた。まるで礼拝をしているようだったが、その魂はすでに神のもとへ旅立っていた。祈りとひざまずきの中で、尊者様は主のもとへ息を引き取っていたのである。

彼に触れることを敢えてしなかった二人の兄弟は、そのままで彼を置き去りにし、修道院の院長のもとへ赴いて、ドゥラ兄弟が亡くなったことを報告した。朝の賛美が終わると、院長自らがやって来て、聖人が亡くなっているのを見て、遺体を整え、埋葬のために教会へ運ぶよう命じた。

その尊い遺体が埋葬の準備を整えられ、教会へ運ばれると、鐘が鳴らされた――すべての修道士たちが兄弟の死を知るようにするためである。すると皆が集まり、聖人の尊い遺体に、まるで殉教者の遺体であるかのように手を触れた。　その間、修道院長は近隣の修道院へ使者を送り、その修道院のアッバとその修道者たちが来訪し、皆で不当に苦難を強いられた兄弟を栄光のうちに埋葬できるよう手配した。

修道士たちは故人の周りに押し寄せ、互いに邪魔し合い、押し合いへし合いしていた。そのため、修道院長はすぐに、聖人の遺体を聖堂に運び込み、扉を閉ざすよう命じた。そして、もう一つの修道院のアッバが修道士たちを連れて来るのを待ち、こうして両修道院の修道士たちが一堂に会するのを待った。

9時頃、隣の修道院のアッバがすでに修道士たちを連れて到着し、こうして全員が揃ったところで、教会堂の扉を開け、遺体を会衆の中央に安置するよう命じられた。それは、誰もが遺体を見ることができ、ふさわしい賛美歌を歌いながら尊厳ある埋葬を行えるようにするためであった。　しかし、遺体のところへ近づいてみると、遺体は見つからなかった。残されていたのは衣服とサンダルだけだった[4430] ――皆は大変驚き、恐怖に包まれた。 その後、両修道院の院長たちは修道士たちにこう語った。「兄弟たちよ、忍耐強い苦難、柔和さ、悪意のなさ、そして謙遜がどのようなことを成し遂げ得るか、お分かりだろうか。今や、私たちの兄弟は、魂だけでなく肉体までもが、目に見えない形で、　天使の手によって別の場所へと移されたのだ。なぜなら、我々は彼の聖なる遺体に触れるに値しない者であることが判明したからであり、彼は、柔和さと悪意のなさ、そして心の謙遜をもって耐え抜いたその忍耐強い苦難のゆえに、主からこの栄誉を授かったのだ。　私たちは彼を罪人であり、この地上に生きるに値しない者だと考えていましたが、彼は聖人であり、天使たちと共に天の命にふさわしい者であることが明らかになりました。そして今、私たちは恥をかかされ、彼は栄光に包まれ、私たちは今や打ちひしがれていますが、彼は主キリストによって冠を授けられています。　それゆえ、この忍耐強い苦難の模範を眼前に置き、我らもまた、忍耐と謙遜、柔和と悪意のなさを学ぶよう努めよう」。

両修道院の院長たちがこう語ると、すべての修道士たちは痛切に泣き、その場で、聖なる尊い受難者ドゥレを毎年記念することを決めた。それは、自らの魂の益となり、また、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく賛美される私たちの神、キリストの栄光のためである。アーメン。

聖殉教者ヴィタ、モデスタ、クリスケンティアの殉教

記念日：6月15日

[4430] サンダルは、古代ギリシャ人やローマ人が履いていた靴の一種である。フェルト、皮革、コルク、さらには木材などで作られ、現代の靴に似ていたが、その特徴的な点は、足の指の横を横切るように足を包み込む紐の締め具であり、そこに親指と人差し指の間を通る紐が取り付けられていた。

ディオクレティアヌス帝の治世[4431] 、キリスト教徒を迫害したヘゲモン・ヴァレリアヌスの時代、シチリアには、高貴で裕福な市民ヒラスの息子である、ヴィトという名の12歳の少年が住んでいた。このヒラスはギリシャの異教を信仰していたが、 一方、その息子である福者ヴィトは、聖霊の奇跡的な恵みによって天から啓示を受け、少年時代に天と地を創造された唯一の真の神を知り、神を信じるようになると、羊毛の衣を身にまとい、昼夜を問わず絶えず神に祈りを捧げていた。 その若き少年は、天から響く神の御声を聞く恵みにあずかった。「汝の祈りは聞き届けられた! わたしは汝にわが憐れみを示そう!」

その不思議な御声の後、少年には神から奇跡を行う力が授けられた。そして彼は人々の病を癒やし、不信仰者たちに真の神を知るよう諭し、すべての人々に正しい道を教えた。なぜなら、全能の神は、偶像崇拝という不義を恥じ入らせるために、この少年の口と行いを通して御自身を賛美することを望まれたからである。 主はヴィトに並外れた知恵と奇跡を行う賜物を授けられた。それは、この祝福された者がまだ少年時代にあっても、言葉と行いに強い人物となり、それによって、御自身の聖徒たちにおいて驚くべき御方である神が栄光を受けるためであった。

総督ヴァレリアヌスは、多くの異教徒たちの讒言と中傷により、この聖なる少年について知ると、ヴィトの父を呼びつけてこう言った。「これはどういうことか。お前の息子が、キリスト教徒たちが崇めるあの神そのものを礼拝していると聞くが、本当か? しかし、もし彼を健やかで無傷のまま見たいと望むなら、この迷いから彼を遠ざけるよう努めよ。」

ギラスは家に戻ると、息子を諭し始めた——彼の神々に対して行われてきた古来のギリシャの礼拝を捨ててはならない、と。 しかし、祝福された少年ヴィトは父にこう答えた。「私は、太古より存在し、その御霊が水の上を漂い、光と闇とを分けられた（創世記1:2–4）唯一の神以外、他の神を知りません。 私は、天と地を創造されたその神に仕えています。その方は、聖なる主イエス・キリスト、天使たちの王です。この神を、私は告白し、生涯のすべての日に告白し続けます」。

ヴィタの父は、息子のこの言葉に激しく怒り、少年を鞭で打つよう命じながら、こう言った。

「誰が君にそんなことを言うように教えたのか? もしイゲモンがこれを知れば、君は死ぬことになるのだと、知らないのか?」

少年は鞭打ちを受けながらも、こう答えた。

「これを教えてくださったのはキリストです。私はキリストのしもべであり、総督の怒りを少しも恐れてはいません。」

そこでギラスは、モデストという名の息子の家庭教師を呼び寄せ、こう言った。

「この少年が、決して自分の言葉の中でキリストの名を口にしないよう、よく見張れ。」

しかし、聖ヴィトは父の命令を無視し、常に心の中にも口にもキリストの御名を掲げ続け、主キリストから天使の御出現によって慰めを受けた。というのも、幻の中で主の天使が現れ、こう告げたからである。

「恐れるな。イエス・キリストの御名について大胆に語れ。私はお前の守護者として遣わされた。お前の最期に至るまで、お前を守り抜く。この神の恵みを知れ。神に何を願おうとも、すべてが与えられるのだ。」

聖なる少年はこの天使の御出現によって慰められ、喜びに満たされ、さらに熱心に主の御名を告白し、賛美し始めた。

一方、聖人の父は、彼が一人息子であったため、その少年を深く案じていた。そのため、ヴィタの父は、お世辞を並べて彼を悪魔への奉仕へと誘おうとした。しかし、聖ヴィタは父にこう言った。

[4431] ディオクレティアヌス帝は281年から305年まで在位した。

「あなたは私に、どのような神々を崇拝せよと命じているのですか？」

父は答えた。

「わが子よ、ゼウス[4432]、ヘラクレス[4433]、ユノー[4434]、ミネルヴァ[4435]、ヴェスタ[4436]、アポロン[4437]など、王や諸侯たちが崇拝している我らの神々を知らないのか？」

聖人は父にこう答えました：

– あなたが言っているものは、人の手によって造られた魂のない偶像に過ぎない。それらは口はあるが声を出さず、目はあるが何も見えず、手足はあるが動かない。しかし、私は唯一の生ける全能の神を信じる。なぜなら、私たちは*「神によって生き、動き、存在している」*からである（使徒行伝17:28）；　私は、すべての被造物の創造主であり、摂理者である父、子、聖霊を信じます。私は、人類の唯一の贖い主であり救い主である、私たちの罪のために苦しみを受けられた神の御子を告白します。その御血によって、私たちは救いを得たのです。

父は涙ながらに少年に応えた。

「ああ、愛しい我が子よ！　父の有益で賢明な助言に耳を傾け、あの狂った信仰から離れなさい。その信仰によれば、あなたは見知らぬ死者をむやみに崇めているのだ。そこから離れなさい――さもないと、イゲモンが怒り、あなたを滅ぼし、それによって私の心の苦しみをさらに深めてしまうことになるだろう。」

至福のヴィットはこう答えた。

「ああ、父よ、もしあなたも、あなたが侮って『死んだ人間』と呼ぶその方が、いったい誰であり、どのようなお方であるかを知ることができたなら！　ああ、父よ、もしあなたが私と共に、その方にひれ伏すことができたなら！　なぜなら、その方はキリスト、生ける神の御子、世の罪を背負われた神の小羊だからです。」

ギラスは言った：

「あなたが神と呼ぶそのキリストについて、私は知っている。ユダヤを治めていたピラトの命令により、彼は拷問を受け、十字架刑に処され、ユダヤ人たちとピラトの役人たちに十字架に釘付けにされたのだ。」

聖なる少年は答えた。

「はい、父よ、あなたが言われた通りでした。しかし、この出来事には、偉大で、驚くべき、そして聖なる神秘が秘められているのです。」

ギラスは尋ねた。

「真実に照らして言えば、この出来事は『秘儀』というよりは『処刑』と呼ぶほうがふさわしいのではないでしょうか。」

福者は答えた。

「父よ、謙虚な心で私の話を聞き、真理を知ってください。主イエス・キリストが死に委ねられ、十字架にかけられたことは、私たちの救いなのです。そして、主への愛ゆえに、いかなる拷問によっても、誰も私を主から引き離すことは決してできないことを知ってください。」

そこでギラスは会話を打ち切り、心の中で息子を案じて悲しんだ。

[4432] ゼウス、あるいはディオスは、古代ギリシャ宗教の最高神である。

[4433] ヘラクレス、あるいはヘラクレスは、古代ギリシャの国民的英雄である。ヘラクレスには、並外れた肉体的な力が備わっていたとされる。

[4434] ユノーは、古代ギリシャ人やローマ人にとって、家庭生活の守護神とされていた。

[4435] ミネルヴァ、あるいはアテナは、知恵の女神である。

[4436] ヴェスタ、あるいはヘスティアは、家庭の炉と祭壇の火の守護女神である。

[4437] アポロン（ギリシャ語で「破壊者」の意）は、古代ギリシャ人にとって、光明の力の守護者であり、闇の勢力を打ち負かす存在とされていた。

その若者に宿った神の恵みにより、多くの奇跡が起こった。すなわち、盲人は目が見えるようになり、病人は癒やされ、人々から追い出された悪霊たちは、その若者の偉大な聖性を証しした。

これらすべては、総督ヴァレリアヌスの耳に入らないはずがなかった。彼は裁判の席に着くと、皆の面前でヴィトフの父にこう言った。

「高貴なるギラスよ！　今や、お前の息子が、ユダヤで十字架にかけられた、いわゆるキリストを熱心に崇めていることは、私にも確かな事実として知れ渡っている。彼はこのキリストを崇拝し、自国の神々を非難している。それゆえ、彼は我々の裁きを受けるべきである。さあ、彼をここに連れて来い。」

その若者があの不敬虔な法廷に連れて来られると、イゲモンは彼にこう言った。

「なぜ、わが不死の神々に犠牲を捧げないのか？　十字架にかけられた者を崇拝する者すべてを、様々な刑罰の末に死刑に処すという王の勅令を、聞かなかったのか？」

聖霊に満たされたその祝福された少年は、総督を少しも恐れず、十字の印を胸に刻みながら、こう答えた。

「私は悪魔を崇拝するつもりはなく、石や木でできた偶像を崇めることもない。なぜなら、私には生ける神がおられ、私の魂はその神に仕えているからだ。」

一方、聖人の父ギラスは、親族や知人たちに顔を向け、激しく泣きながら叫んだ。

「友よ、私と共に泣き悲しんでくれ。お願いだ。私の唯一の息子が滅びようとしているのが見えるのだから！」

すると、聖ヴィトは父に反論して、大声でこう叫んだ。

「私は滅びるのではなく、義人および神の御心にかなう者たちの列に加えられるにふさわしいのです。」

それに対し、ヴァレリアヌスは聖人にこう言った。

「これまで私は、お前の高貴な家柄と、お前の父に対する私の好意ゆえに、自制してきた。これまで、法に背く者たちに対して発せられた王の命令を、お前に適用することはなかった。しかし今、お前の反抗が執拗なものになったと確信した以上、法に基づきお前を拷問し、罰を受けることでその頑なさを改めさせることにする。

そう言うと、総督は、その祝福された若者を棒で打つよう命じた。

聖人は長い間、棍棒で打ち続けられた。その後、拷問官は聖人にこう言った。

「さあ、私の言うことを聞き、神々に生贄を捧げなさい。」

殉教者は答えた。

「総督よ、私はすでに言った通り、神の子キリストを崇拝しているのです。」

すると、総督はさらに激怒し、聖人を鉄の棒で打つよう命じた。しかし、総督の家来たちがそれを実行しようとした途端、彼らの手は枯れてしまった。同様に、家来たちに指示を出していた総督の手も、突然傷つき、枯れてしまったため、彼は痛みに耐えかねてこう叫んだ。「ああ、私は不幸だ！　私は自分の手を台無しにしてしまい、今、ひどく苦しんでいる」。その後、彼は聖ヴィートの父に言った。「お前には息子がいるのではなく、魔術師がいるのだ」。

すると、聖ヴィトは声を張り上げてこう叫んだ。

「私は魔術師ではなく、全能の主イエス・キリストのしもべである。主は死者をよみがえらせ、水の上を乾いた地のように歩み、荒れ狂う海を静め、人々に降りかかるあらゆる不治の病を癒やされた。今なお、主は御自身の全能の力によって同じことをなしておられる。　私はその方のしもべであり、それゆえ、その方の戒めを守ろうと努めている。一方、あなたが仕えている神々には、いったいどのような力があるのか、教えてほしい。もし治せるというのなら、彼らにあなたの手を癒やさせてみよ。

イゲモンは言った。

「では、お前は私の手を癒やすことができるのか？」

聖人は答えた：

「主イエス・キリストの御名によって、できます。」

「それなら、私を癒やしてくれ」とイゲモンは言った。「そうすれば、お前が魔術師ではなく、お前の言う通り、真の神のしもべであることを確信できるだろう。」

すると、聖なる殉教者は天に向かって目を上げ、こう言った。

–神よ、天の父よ！ ここに集う者たちのために、この不肖のしもべの祈りを聞き入れてください。そうして彼らが、御子であり、真の全能の神であり、聖霊と共に御父と共治なさる、私たちの主イエス・キリストを信じるようにしてください。御子の一人子のお名のために、イゲモンの手が癒やされますように。

聖人がこの祈りを終えるやいなや、ヴァレリアノスの手は癒やされ、以前と同じ状態に戻った。そこでイゲモンは少年をその父に引き渡し、こう言った。「息子を家に連れ帰り、彼が滅びないよう、神々に犠牲を捧げるよう説得しなさい」。

息子を家に連れ帰ると、ギラスは多くの諂いをもって、彼を自分の不敬虔な行いに従わせようと説得し始めた。彼は宴を催し、歌手の合唱団を組織した。ヴィトの前では、調和のとれた楽器が奏でられ、キンヴァルやハープの音が響き渡った。聖人の目の前で美しい乙女たちが踊り、若者たちは楽しそうに騒いだ。 世俗の好色な歌が歌われ、多くの誘惑的な言葉が交わされ、これらすべてを通じて若きヴィトの心を世俗の虚栄へと引き込もうとした。しかし、ダイヤモンドのように堅固な少年の魂は、何ものにも動じなかった。なぜなら、彼の心には、あらゆる世俗の愛に打ち勝つ神への愛があったからである。 彼は目の前で歌われていることなど何一つ気にも留めなかった。同様に、目の前で繰り広げられている光景にも 目を向けようとはしなかった。天に向かって目を向け、心の奥底からため息をつき、こう言った。「主よ、わが神よ、砕かれ、謙虚なこの心を軽んじないでください！」

その後、ギラスは息子のために部屋を用意するよう命じた。彼はその部屋をあらゆる富で満たし、 床には美しい絨毯を敷き詰め、カーテンは真珠で飾られ、寝台も宮殿全体も壮麗な輝きに満ちていた。彼はその部屋に息子を閉じ込め、彼を惑わすために最も美しい乙女たちに仕えさせるよう命じた。 しかし、貞潔で聖なるその若者は、ひざまずいて、次のような言葉で主に祈った。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、あなたの愛する御子、私の主イエス・キリストの神であり父よ！ 私を見守り、憐れんでください。御力によって私を強めてください。そうすれば、邪悪で不法な蛇が、御使いである私にその欲望を成し遂げることはできず、異教徒たちが御使いを嘲り、『彼らの神はどこにいるのか』と言うこともないでしょう。」

聖人がこのように祈っている間、突然、部屋の中に言い表せないほどの光が輝き、ランプのように燃え盛る光に包まれた十二人の姿が見えました。また、それらの姿から漂う言い表せないほどの芳香も感じられました。 その香りは空気に満ちて家全体を満たしたため、聖ヴィトの父は家族全員と共に驚きと畏怖の念に駆られ、こう叫んだ。「これは偉大な奇跡だ。 「この香りはどこから漂ってくるのか。我々の神々の神殿でさえ、かつて嗅いだことのない香りではないか？」と。その後、彼はこう言った。「神々が我が家に来て、わが子の元へ来られたのだ」。そして、その香りがどこから漂ってくるのか、丹念に探し始めた。 息子の部屋の扉に近づき、中に入ると、彼は鷲のような翼を持つ天使たちの顔を見た。それらの顔は言い表せないほどの慈愛に満ち、明るく輝きながら、*「聖なる、聖なる、聖なる主よ」*（イザヤ書6:3）と歌っていた。

その強烈な輝きによって、ギラスはたちまち目を失明してしまった。なぜなら、彼の目は不浄であり、天に隠された天使の光を仰ぎ見るにふさわしくなかったからである。この光は、心の目が清らかな者だけが仰ぎ見ることができるものだからである。

福者ヴィトは、父が失明したのを見て、父に対する自然な愛情を抱き、父が神の憐れみを受けるよう、神に祈り始めた。祈りを締めくくる際、彼はこう付け加えた。「しかし、主よ、私の意志ではなく、御心のままに成されますように。御自身がお望みのとおりにありますように」。

一方、ヒラスは目に激しい痛みを感じ、声高らかに叫んだ。「ああ、私は不幸だ！　私は目の光を失ってしまった。私は重い病に冒されている！」

彼の家来たち、男奴隷も女奴隷も、主人が目に激しい苦痛を訴えているのを見て泣きじゃくり、その泣き声は近隣の家々にも聞こえるほどであった。こうして、ギラスに起こった出来事はすぐに街中に知れ渡った。　その後、多くの市民が彼の家へと押し寄せ始めた。イゲモン・ヴァレリアンも急いで駆けつけた。ギラスが失明し、奴隷たちに支えられながら痛みに叫んでいるのを見て、ヴァレリアンは尋ねた。「どのような事情で失明したのか？」すると彼は答えた。　「私は自室で、翼のある神々を見ました。彼らの目は星のようで、その姿は稲妻のようでした。その輝きに耐えきれず、目を傷めて視力を失ってしまったのです」。

ヴァレリアヌスは言った。「間違いなく、君が見たあの神々は非常に力強い。だから、君は彼らに祈り、癒やしてもらう必要がある」。

その後、ヴァレリアヌスは盲目のギラスを連れて、ゼウスの神殿へと向かった。ギラスはそこで次のように祈った。「おお、全能の神ゼウスよ！　もし私の目を癒してくださるなら、数えきれないほどの供物を捧げ、金色の角を持つ子牛をあなたに捧げましょう。また、ヴェスタ女神よ、もしあなたから助けをいただけるなら、清らかな乙女たちをあなたのもとに連れて参ります」。

こうしてヒラスは、その虚しい神々に祈ったが、彼らから癒やしを得るどころか、かえってさらに激しい痛みを感じた。　一方、聖ヴィトは主に向かってひざまずき、自分の部屋で父のためにこう祈った。「主よ、盲人トビトを照らされた方よ[4438]　、もし父があなたを知れば、父に憐れみをお示しください」。

ついにギラスは、癒されることなく、自分の奴隷たちに連れられて、偶像崇拝の神殿から自宅へと戻った。聖ヴィトが神に賛美の捧げ物を捧げていた部屋に入ると、彼はヴィトの足元にひれ伏して言った。

「愛する息子よ！　私を癒してください！」

すると、聖ヴィトは彼にこう言った。

「父よ、あなたは健康になりたいのですか？」

ギラスは答えた。

「はい、心から願っています。」

聖人は彼に言った。

「もし癒やされたいのなら、ゼウス、ヘラクレス、ユノー、ミネルヴァ、ヴェスタ、そしてアポロンを捨てなさい。」

ギラスは答えた。

「どうすれば彼らを否定できるというのですか？」

聖者ヴィットは言った。

「彼らを神とは呼ばず、悪魔と呼べ。これまで崇めてきた偶像を崇めるな。それらを無価値なもの、魂のない無用の物と見なせ。もし真心からそうすることを誓うなら、お前の目はたちまち癒やされ、明るくなるだろう。」

ヒラスは言った。

「私は神々を否定し、あなたが私に言われたことをすべて行うと誓います。」

[4438] トビト――敬虔なイスラエル人で、アッシリア王センナケリムの治世下、家族と共にニネベで捕囚の身となっていた。彼が失明から癒やされた物語は、聖書の『トビト記』に記されている。

聖人は言った：

「お前の心が頑なであり、その言葉が真実ではないことはわかっている。しかし、これから集まる人々のために、たとえお前がそれに値しないとしても、私の主の力を示して、彼らが信じて、私の主イエス・キリストの御名を賛美するようにするのだ。」

そう言うと、聖人は父の痛む目に手を置き、次のように神に祈った。「主イエス・キリストよ、生まれつき盲目な者の目を照らされた方（ヨハネ9:6–7）、自然の法則に打ち勝たれた方よ、たとえ父が不信仰ゆえにこれに値しないとしても、父の目を照らしてください。　しかし、御名の栄光のために、このことを成し遂げてください。そうすれば、御敵たちはそれを見て恥じ入り、御名を知り、愛する者たちは皆、御名を賛美するでしょう」。

聖人がこのように祈っている間、盲人の目からかさぶたが鱗のように剥がれ落ち、彼は健康を取り戻し、自分の目ではっきりと見えるようになった。　しかし、まもなく彼は、真の神を知り、神から授かった癒やしに対して感謝を捧げるどころか、自分の恩人を冒涜し始め、息子にこう言った。「私を癒やしたのは、お前の神ではなく、私が仕え、犠牲を捧げることを誓った私の神々だ」。

そして、不敬虔な自分の神々を称え、皆の前で声高にこう言った。「私を癒やしてくれた私の神々に感謝する！」　彼は彼らの神殿へと向かい、約束通り、忌まわしい感謝の生け贄を捧げ始めた。その際、彼の心は悪魔によって激しく苛まれ、憎悪に目がくらんでしまったため、息子に対する自然な愛情を憎悪へと変え、聖く罪のないその少年である息子を殺そうと企んだ。　しかし、御自分のしもべたちを守られる主は、彼らを救うために御自分の天使を遣わされた。主の天使は、美しく光に包まれた若者の姿で、夜、キリストを信じるヴィトの養育者であり、すでに高齢となっていたモデストのもとに現れ、彼にこう告げた。

「その少年を連れて海へと向かえ。岸辺に小さな舟がある。それに乗れば、私が示す国へとたどり着くだろう。」

モデストは天使にこう言った。

「主よ！　私はどこへ行くべきか分かりません。」

天使は答えた。「私があなたを導こう！」

すると、モデストはすぐに立ち上がり、自分の少年ヴィトと、キリストの忠実なしもべである乳母クリスケンティアを連れて、彼らを導く天使の後を追って海へと向かった。

彼らが海岸に着くと、主が用意してくださった小舟があった。すると天使は、あたかも試すかのように聖ヴィトに言った。「どの国へ行くつもりか？」聖ヴィトは答えた。「主が私たちを導いてくださる場所へ、私たちは熱意を持って向かいます。」

天使は尋ねた。「旅費はあるか？」少年は答えた。「私たちが仕えるお方が、あなたに報酬をお与えになるでしょう」。その後、小舟に乗り込み、シチリア島を出航した。　しばらく航行した後、イタリアの地方の一つであるルカニアという地、アレクトリアと呼ばれる場所に到着した。岸に着き、舟から降りると、すぐに、彼らと共に舟に乗っていた若者の姿をした主の天使は、見えなくなってしまった。

彼らは旅を続け、ルカニアの地から海に注ぐシラールと呼ばれる川にたどり着いた。その川のほとりで、彼らは美しい枝ぶりの良い木の下に腰を下ろし、休息をとった。　彼らはこの場所を大変気に入り、ここに定住することにした。そして、神が彼らに食物を送ってくださった。かつて、神の御命により、聖エリヤが荒野でカラスに養われたように（列王記下17:4）、これらの聖人たちもまた、毎日食物を運んでくる鷲に養われた。　そして、聖ヴィトの周囲で多くの驚くべき奇跡が起こり始め、神の御力によって御自分のしもべたちを栄光に導かれる神の助けにより、彼の名はあの国中に広まった。ヴィトが神の力によって人々から追い出した悪霊たちは、「ヴィトよ、我々とお前とは何の関係があるのだ！ 私たちを滅ぼすために、時期尚早にここへ来たのか？」と叫んだ。

人々は病人を連れて聖人のもとを訪れた。聖人は祈りと十字架の印によって彼ら全員を癒やし、真の神を知り、その戒めを守るよう導いた。そして多くの異教徒がキリストに回心し、聖なる洗礼を受けた。

その頃、ディオクレティアヌス帝の息子が悪霊に取りつかれていた。悪霊は彼の口を通して、「ルカニアのヴィトがここに来ない限り、私はここを去らない」と叫んでいた。

そこで王は言った。

「その男はどこで見つけられるのか？」

悪魔は答えた。「シララ川のほとりで彼を見つけるだろう。」

王は直ちに武装した兵士たちをルカニアへ派遣し、ヴィトを急いで連れてくるよう命じた。兵士たちは指定された場所に着くと、川のほとりで神への祈りを捧げていたキリストの僕を見つけ、彼に尋ねた。

「お前がヴィトか？」

聖人は答えた。

「はい、私です。」

兵士たちは言った。

「ディオクレティアヌス皇帝が、お前を呼んでいる。」

聖ヴィトは答えた。

「私は無名で身分の低い若者です。皇帝にとって、私に何の役にも立たないでしょう。」

兵士たちは答えた。

「皇帝の息子が悪魔に苦しめられている。そのために、皇帝はあなたを呼んでいるのだ。」

聖ヴィートは言った：

「さあ、主の御名のもとに旅立ちましょう。」

そして兵士たちと共にローマへと旅立った。聖モデストも彼と共に旅立ち、至福のクリスケンティアは遠くから彼らを追って行った。

ローマに到着すると、戦士たちはディオクレティアヌス帝にヴィトの到着を報告した。ディオクレティアヌス帝は彼を自分の元へ連れてくるよう命じた。

聖人が皇帝の前に現れると、皇帝はその少年の美しさに驚嘆した。聖ヴィトは実に美しい青年であり、その顔はまるで天使のようで、目は太陽の光のようであった。それは彼がキリストの恵みに満ちていたからである。そこでディオクレティアヌスは彼に言った。「お前がヴィトか？」

しかし、聖人は彼に答えなかった。

そこで皇帝はモデストに問いかけ始め、彼から聖人について聞き出そうとした。　しかし、モデストは年老いていたため、その素朴さゆえに皇帝に相応しい答えを返すことができなかった。このため、皇帝はモデストを不敬な言葉で罵り、彼を追い払おうとした。その時、聖ヴィトは口を開き、ディオクレティアヌスにこう言った。

「なぜ、老人を若者のように、あのような無礼な態度で問い詰めるのか。せめてその白髪のためだけでも、彼を敬うべきではないか？」

すると皇帝は聖ヴィトにこう答えた。

「お前は一体どこからそんな厚かましさを得たのか。我々の尊厳を傷つけながら、怒りを込めて我々に語りかけるなど、よくもまあそんなことをするものだ。」

聖人はこう答えた。

「我らに怒りなどありません。我らは主キリストから悪意のない御霊を受け、鳩の柔和さを模範としているからです。」　なぜなら、私たちの師は、その本質において慈愛に満ち、権威に満ち、、悪意がなく、謙虚で柔和な方であったからです。それゆえ、その弟子たちもまた、心が柔和で謙虚

であるべきであり、あなたが私たちを呼ぶような、激昂し、怒りに満ちた者であってはならないのです。

聖人がそう語っている最中、突然、悪霊が王の息子の口を通じて叫び、こう言った。

「おお、ヴィトよ！　なぜ時期尚早に、これほど残酷に私を苦しめるのか！」

聖人は悪魔に何も答えなかった。するとディオクレティアヌスは聖人に言った。

「わが子を癒やすことはできるか？」

「あなたの息子は、」と聖人は答えた、「健康になることは可能ですが、私が彼に健康を与えることはできません。神の子キリスト――私はそのしもべです――が、もし望まれるならば、ご自身のしもべである私を通して、彼を悪魔の苦しみの手から容易に救い出すことができます。なぜなら、キリストは全能だからです」。

すると、ディオクレティアヌスは聖人に息子を癒やすよう懇願し始めた。聖人は悪霊に取りつかれた少年のところへ歩み寄り、その頭に手を置いて言った。「我らの主イエス・キリストの御名によって、汚れた霊よ、神の被造物から出て行け！」

するとたちまち、悪霊は皇帝の息子から出て行ったが、そこにいた者たちには被害が及ばなかったわけではない。なぜなら、神の御許しにより、聖ヴィトを言葉や心の中で嘲笑していた多くの不信仰者たちを、悪霊は突然死に至らしめ、彼らの忌まわしい魂を獲物のように地獄へ連れ去ったからである。

皇帝は、息子が元気な姿でいるのを見て、また周囲にいた多くの人々が死んでいるのを見て、大いに驚いた。しかし、イエス・キリストの御名の力を悟り、唯一真の神を賛美する代わりに、彼は心の中で、どうすればヴィトを自分の不敬虔な道に引き込めるかを画策した。ディオクレティアヌスは、聖人の美しさにも魅了されていた。　彼は諂いながら聖人に語りかけ、こう言った。「愛すべきヴィトよ、私の言うことを聞き、私と共に神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、私は私の王国の半分をあなたに与えよう。金、銀、そして貴重な品々であなたを報い、王の衣を身にまとわせ、あなたは私の誠実で最も親しい友となるだろう」。

聖ヴィトはこう答えた。

「私はあなたの王国も、あなたの富も必要としません。私には主、すなわち私の神がおられるからです。もし私が主を忠実に仕えるならば、主は天の御国において、朽ちることのない、まばゆいばかりの不死の衣を私に与えてくださるでしょう。」

「そんなことを言うな、ヴィト」とディオクレティアヌスは言った。「自分の命を憐れめ。神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、様々な拷問の末に苦痛に満ちた死を遂げることはなくなるだろう。」

聖人は答えた。

「私は、あなたが脅かすような拷問を、むしろ喜んで受けたい。そうすれば、主が選ばれた者たちに約束された冠に、より早く到達できるからだ。」

そこでディオクレティアヌスは、聖ヴィトとモデストを薄暗く悪臭のする牢獄に閉じ込めるよう命じ、それぞれに重さ10プードの重い足枷をはめさせ、誰も彼らにパンや水を与えられないよう、扉と窓を自分の王の指輪で封印させた。　――迫害者は、彼らを飢えと渇きで滅ぼそうとしていたのだ。

聖人たちが牢獄に閉じ込められたとき、突然、その中に光が輝いた。その光は、牢の穴に顔を近づけていた看守たちにも見えた。　一方、聖ヴィトは神に向かって大声で叫び、こう言った。「神よ、私たちを助けに来てください。そして、燃える炉から三人の若者を救われたように（ダニエル書3章）、また、不法な偽証者たちからスザンナを救われたように（ダニエル書13:1–64）、私たちをこの束縛から救い出してください。」

聖人がこのように祈っている間、牢屋の土台が揺れ動き、さらに大きな光が輝き、至る所に言葉に尽くせない芳香が漂った。我らの主イエス・キリストが彼の前に現れ、こう言われた。「勇気を出せ、ヴィトよ。気丈に振る舞い、堅く立ちなさい。わたしは常にあなたと共にいるからだ」。

こう告げると、主は姿を消された。その瞬間、聖なる囚人であるヴィトとモデストの足枷が外れ、まるで塵のようになった。聖人たちは立ち上がり、こう歌い始めた。*「イスラエルの神、主を賛美せよ。主は御自分の民を顧み、救いを与えてくださった」*（ルカ1:68）。

それと同時に、彼らに和音する天使たちの声も聞こえてきた。牢屋の看守たちは、言葉に尽くせない光を見て、天使たちの声を聞くと、恐怖と戦慄に襲われ、まるで死人のようになった。その後、我に返ると、彼らは恐れおののきながら王のもとへ急ぎ、自分たちが見聞きしたすべてを報告した。　王は、これらすべてをキリスト教徒を称賛するものと見なし、公の催し物の主催者を呼びつけ、翌朝、囚人たちを野獣に食わせようとする見世物の場を用意するよう命じた。その際、王はこう言った。「キリストが、彼らを私の手から救い出せるかどうか、見てみよう。」

翌朝、キリストの聖なる僕たちは処刑場へと連れ出された。聖ヴィトは、自身の師である至福のモデストを励ました。「恐れるな、父よ。勇気を持ちなさい。悪魔の武器を恐れてはならない。我らの冠が近づいているのだから。」

その光景を見物しようと集まった民衆は五千人にのぼり、女性や子供たちは数え切れないほどいた。

そこでディオクレティアヌスは聖ヴィトにこう言った。

「ヴィートよ！　今、お前はどこにいるのだ？」

聖人は、拷問者に何も答えず、ただ天を仰いだ。

すると、皇帝は再び彼に言った。

「ヴィトよ、今、お前はどこにいるのだ？」

聖人はこう答えた。

「私は自分が処刑場に立っているのを見ている。だが、お前はやるつもりなことを、さっさと実行しろ。」

ディオクレティアヌスは彼に言った。

「ヴィトよ、自分の命を惜しんで、偉大なる神々に生贄を捧げよ。」

聖人は答えた。

「お前に幸いなどあるまい、悪魔よ、貪欲な狼よ、魂を惑わす者よ。お前の狂気には驚かされる。お前は神の御力を目の当たりにしながらも、神を知ろうとせず、その言葉で私を私の神から遠ざけようとして、恥じることもないのだ。　しかし、私はすでに何度も言った通り、お前の神々――いや、むしろ悪魔たち――に犠牲を捧げるつもりはない。それなのに、お前はまた恥知らずにも、私に不敬な助言を押し付けてくる。犬に「出て行け」と言えば、犬は恥じて立ち去るが、お前には恥というものが分からないのだ。　私には、キリスト、すなわち私の神がおられる。私はこれまでその方に仕えてきたし、今なお心から賛美のいけにえを捧げている。私に残された道はただ一つ――私自身を、生けるいけにえとしてその方に捧げることだけである。

すると皇帝は激しい怒りに駆られ、殉教者たちに獣を放つ代わりに、直ちに燃え盛る炉と大きな大釜を用意させ、その中に鉛、硫黄、そして樹脂を溶かすよう命じた。そして、沸騰してぐつぐつと音を立てているその大釜に、ヴィタ一人を投げ込むよう命じ、こう言った。　「さあ、見てみよう――彼の神が彼を助けてくれるかどうか！」

聖ヴィトは、十字架の印を切ってから、海のように沸き立つ大釜の真ん中へと入っていった。すると直ちに、聖人の前に現れた主の天使が、火の力を奪い、大釜の熱と沸き立ちを鎮めた。そして聖なる殉教者は、あたかも洗礼槽の真ん中に立っているかのように、主に賛美の歌を歌いながらこう言った。　「神よ、モーセとアロンを通じてイスラエルの民をエジプトの過酷な奴隷制から救い出さ

れたあなたよ、あなたの聖なる御名の栄光のために、私たちにもあなたの憐れみを示してください。」

それから、王を見据えてこう言った。「ディオクレティアヌスよ、あなたとあなたの家来たちに感謝する。私のために実に快適な洗礼槽を用意してくれたからだ。ここには石鹸もあるべきだったな。」

その様子を見守っていた民衆は皆、声を揃えて叫んだ。「このような奇跡は見たことがない！まことに、この少年の神は真実であり、偉大である！」

そして聖人は、体に何の傷も負うことなく大釜から出てきた。それどころか、雪のように清らかなその体は、さらに白く輝いていた。彼は歌いながらこう言った。「主よ、あなたは私を火で金を試すように試み、私を吟味されたが、何一つ見つからなかった（詩編16:3）。」

それから、聖人は次のような言葉で王を非難し始めた。「悪魔よ、お前の父であるサタンと共に恥を知れ。わが主が、そのしもべであるわたしに対して、いかに偉大な力を示しておられるかを見よ！」

王はさらに激しい怒りに満ち、恐ろしく、巨大で獰猛なライオンを連れてくるよう命じた。その咆哮一つでさえ、人々は耐えられなかった。そして王は聖人に言った。

「まさか、このライオンまでもお前の魔術で打ち負かすつもりか？」

すると、殉教者は答えた。

「愚かで無分別な者よ！　私と共にいるキリストの力を、お前はまだ悟っていないのか。その御使いが、まもなく私を、お前の拷問の手から連れ去ってくれるのだ。」

獅子が聖人のほうへ向かうと、ヴィトは十字の印を掲げた。するとたちまち、獅子は彼の足元に倒れ込み、その足を舐め始めた。そして聖ヴィトは皇帝に言った。

「ほら、この獣でさえ私の神に敬意を表しているのに、あなたは自分の創造主を知ろうとしない。しかし、たとえ今この瞬間であっても、もしあなたが神を信じるなら、救いを得ることができるだろう。」

皇帝は答えた。

「お前と、お前の一族が、その方を信じればいい。」

聖人は微笑みながら、こう言った。

「その通りだ。私と、聖なる洗礼の水によって新たに生まれ変わった私の全一族は、私たちの神の御国において、いのちの冠を受けることを望んでいるのだ。」

その時、多くの民、およそ千人の男たちがキリストを信じた。王は殉教者に言った。

「ヴィトよ、なぜ火も獣も、お前に何の害も与えないのか？　どのような魔術を用いてそれらを従わせ、人々を驚かせ、多くの者がお前の魔術を信じるようになっているのか？」

殉教者は答えた。

「私は、いかなる魔術によっても火も獣も従わせているわけではありません。これらすべては、私の神であるキリストの力によるものです。　火も獣も、神の被造物として、私ではなく、その創造主の御心に従い、その創造主を崇めている。それゆえ、あなたには大きな恥をもたらしているのだ。なぜなら、火は魂を持たない被造物であり、獣は言葉を話さない被造物であるにもかかわらず、それらを創造した神を知っている。　それなのに、理性ある魂を持つあなたは、神を知ろうとせず、その結果、言葉を持たず魂もない被造物よりも劣った存在となってしまっているのだ。

そこで皇帝は、聖殉教者ヴィトとモデストを拷問の木に吊るすよう命じた。彼らと共に、ヴィトの養母である聖クリスケンティアもまた、その場にやって来て自らをキリスト教徒であると告白し、皇帝の不敬虔さと聖人への拷問を非難した。　その後、拷問官は、聖人たちの裸の体を鉄の道具で削るよう命じた。その時、聖ヴィトは王にこう言った。「女を拷問するとは、お前の力は弱く、笑われるに値するものだと示しているのだ」。

そして聖人たちは、慈悲もなく残酷に拷問され、削り取られるうちに肉が剥がれ落ち、骨が露わになり、内臓さえ見えるほどになった。そこで聖ヴィトは主に向かって叫んだ。「神よ、私たちを救い、御力によって私たちを救い出してください」。するとたちまち大地が揺れ動き、雷鳴と稲妻が轟き始めた；　偶像崇拝の神殿は崩れ落ち、そこにいた民のうち多くの異教徒が命を落とした。ある者は倒壊した建物に押しつぶされ、ある者は雷や稲妻に打たれた。王自身も恐怖に駆られ、顔を叩きながら処刑場から逃げ出し、こう叫んだ。　「ああ、私はなんて不幸なのだろう。こんな若き少年によって打ち負かされてしまったのだ！」　一方、主の天使は、聖なる殉教者たちを拷問の木から解放し、ルカニアのシラールと呼ばれる川へと運び、かつてシチリアから来た際に立ち寄ったあの木の下に彼らを座らせた。

聖人たちがその木の下にいる間、その地に住む多くのキリスト教徒たちが彼らの元に集まってきた。その後、聖ヴィトは神に祈りを捧げ、こう言った。「主イエス・キリスト、生ける神の御子よ！　どうか私たちの魂を御許に平安のうちに迎え入れてください。また、御名の栄光のために私たちの苦難を記念しようとする者たちを、この世のあらゆる悪から守り、妨げられることなく御国の天の御国へと導いてください」と。

聖人がこのように祈っていると、天から「あなたの祈りは聞き届けられた！」という声が聞こえた。

その後、聖人はそばに立っていたキリスト教徒たちに向かってこう言った。「兄弟たちよ、私たちの遺体をここに葬ってください。私たちは、この世を去った後、あなたがたが救いのために求めるすべてのものを与えられ、キリストが悪魔の敵意からあなたがたを救い出してくださるよう、主に向かって祈り続けます」。

この言葉を終えると、聖なる殉教者たちは喜びのうちに、一斉に自らの魂を神の御手に委ねた[4439]。信者たちは彼らの尊い遺体を運び出し、香りのよい布で包み、その場所（その場所はマリアネと呼ばれる）に栄誉をもって埋葬した。　聖ヴィトは、聖モデストおよびクリスケンティアと共に、6月の15日、ローマでディオクレティアヌスが統治していた時代に殉教した。私たちキリスト教徒にとっては、主イエス・キリストの御治世の時代であり、主イエス・キリストに永遠の栄光と誉れが帰せられる。アーメン。

至福のヒエロニムスの生涯

記念日：6月15日

至福のヒエロニムスの生誕地は、ダルマチアとパノニアの境界に位置する小さな町ストリドンであった[4440]。この西方教会の偉大な教父の生年は正確には知られていない[4441]。また、彼の世俗名も正確には不明であるが、おそらく父にちなんでエウセビオという名を持っていたと思われる。　至福のヒエロニムスの両親は、おそらく裕福な解放奴隷の階級に属していたと考えられる[4442]。彼らはキリスト教徒であり、長男に厳格なキリスト教教育を施した。　「私は」と、のちに聖ヒエロニムス

[4439] 聖殉教者たちの殉教は、およそ303年に起こった。聖殉教者ヴィトの聖遺骨は、一時期パリ（サン＝ドニ）に安置されていたが、その後ヴェストファーレンのコルヴェイに移され、現在はプラハで公開されている。

[4440] この都市の正確な位置を特定することは困難である。なぜなら、すでに至福のヒエロニムスの時代にはゴート族によって破壊されていたからである。

[4441] この問題の解明に取り組んだ研究者たちは、至福のヒエロニムスの生年について、331年、342年、346年など、さまざまな年代を提示している。

[4442] つまり、彼らはかつて奴隷であったが、後に自由の身となったのである。至福のヒエロニムスの両親が裕福であったことは、彼が選りすぐりの著述家たちの蔵書を携えて、ヨーロッパやシリアを広く旅することができたという事実からもうかがえる。これらすべてには、当然ながら多額の資金が必要であった。

は自らについてこう語った。「揺りかごの頃からカトリックの乳で育てられ、異端者になったことが一度もなかったからこそ、教会に一層献身できたのだ」。　ヒエロニムスは初等教育を自宅で受けたが、その教師は気性が厳しいにもかかわらず、才能ある生徒に学問への愛を植え付けることに成功した。その後、教育を完結させるため、両親は至福のヒエロニムスをローマへ送った。　当時の慣習に従い、学習課程には論理学に加え、主要科目として文法と修辞学が含まれていた。さらに、至福のヒエロニムスは一部の哲学者の教えにも触れたが、とりわけ雄弁術の研究に多くの時間を費やした。彼は、著名な法廷弁論家の演説を聞くために法廷に通った。　ここローマで、若き日のヒエロニムスは自身の図書館の基礎を築き、それはその後の人生を通じて彼にとって大きな慰めとなった。

世界の首都での生活、誘惑や試練に満ちた環境は、ヒエロニムスの心に悲しい傷跡を残した。彼自身、「若き日の迷いやすい放浪の時代」にローマで不品行な生活を送っていたと認めており、このことは後に彼に多くの涙と苦い後悔をもたらすこととなった。　しかし、こうした敬虔な道からの逸脱も、幼い頃から彼の魂に植え付けられていた神の火花を消し去ることはできなかった。彼は信仰の兄弟たちとの祈りの交わりを絶やすことはなかった。　さらに、日曜日には、パマキウスや他の仲間たちと共に、ローマ近郊にある殉教者の墓を訪れるのが常であった。そうした訪問の際に、ヒエロニムスが暗いカタコンベに降りていくとき[4443]、彼は思わず、生きたまま墓に降りていくような気がした。

ここローマで、学業を終える前から、ヒエロニムスには自分の人生を変え、新しく、清く、善良な人生を始めようという決意が固まっていた。　おそらく彼は、その決意を洗礼によって早々に確固たるものにしたのだろう[4444]；福者ヒエロニムスの洗礼の正確な時期は不明だが、真実にかなり近い推測として、彼が20歳前後で洗礼を受け、その秘跡を執り行ったのは教皇リベリウス[4445]あるいはその聖職者の一人であったと推定される。　ローマを離れた後、至福のヒエロニムスは、学校の同級生であり乳兄弟でもあったボノズと共に、ガリアを巡る大旅行に出た。　この旅の途中、ヒエロニムスは自身の言葉によれば、「半野蛮なライン川の岸辺で、初めて神に仕えたいという願望を抱いた」のである。すなわち、貞潔と貧しさの誓いを伴う修道生活への志が、彼の中で目覚め始めたのである。

372年頃、至福のヒエロニムスはガリアへの旅からストリドンに戻った。両親はすでに他界しており、彼には相続した領地や、姉、そして20歳年下の弟パウリキアヌスの世話という重責がのしかかっていた。　おそらくこれらの心配事が、ヒエロニムスが世俗から離れるという意図を完全に実現することを妨げていたのであり、彼は　修道生活への憧れを部分的にしか満たすことができず、時折アクイレイア[4446]に滞在していた。そこでは、互いに親しく、またヒエロニムスと親しい人々による小さな半修道的なサークルが形成されていた。　しかし、このサークルは、ヒエロニムスが曖昧に言及している何らかの理由により、予期せず解散してしまった。そこでヒエロニムスは、主にエルサレムを訪れるとともに、シリアやエジプトの隠者たちにも会うために東方へと旅立った。　この旅では

[4443] カタコンベ（catacumbae）とは、不規則な網目状に広がる地下通路や洞窟のことである。ローマ近郊、ナポリ、シラクーサ、そしてマルタ島にあるカタコンベが知られている。　ローマ近郊のカタコンベはとりわけ広大で、もしそれらを一本の直線上に並べることができたとしたら、その長さはイタリア半島の長さに匹敵するほどである。　カタコンベは、初期のキリスト教徒にとって、礼拝の集会の秘密の場所であり、死者の埋葬の場としても機能していた。キリスト教徒たちは、陶土の採掘の際に形成された古い廃坑を利用したと考えられており、キリスト教徒たちはそれらを単に延長し、拡張したに過ぎない。

[4444] 当時、洗礼を先延ばしにする習慣があった。その多くは、洗礼によって前世の罪を清めたいという願いからであり、また、意志がまだ固まっておらず、人が罪の誘惑に流されやすい幼少期に、洗礼の誓いを破ってしまうことを恐れたためでもあった。

[4445] リベリウスは352年から356年にかけてローマ司教の座に就いていた。

[4446] アクイレイアは、当時、北イタリアにおける大規模かつ著名な都市であり、パノニア、ノリクム、イストリア、ダルマチアへと通じる道路の結節点であった。

、至福のヒエロニムスに、かつてアクイレイアのサークルに所属していた友人たち――インノケンティウス、ニケイ、イリオドール、イヴァ、エヴァグリオス――が同行した。　もっとも、エヴァグリオスは故郷であるアンティオキアまでしか同行しなかった。彼らはフラキア、ビフィニア、ポントス、ガラティア、カッパドキア、キリキアを経由して旅をした。長旅の苦労と禁欲的な修行が相まって、敬虔な巡礼者たちの体力を消耗させてしまった。　彼らがアンティオキアに到着し、エヴァルギウスから温かいもてなしを受けたとき、ヒエロニムスは病に倒れ、インノケンティウスは、聖なる父の深い悲しみの中、さらには亡くなってしまった。イヴァもまた亡くなった。この悲しみはヒエロニムスの病を悪化させ、その病はかなり長い間続き、おそらく374年の春まで続いた。 回復した後、ヒエロニムスは聖書の研究に取り組み始めた。この傾向は、それ以前から彼の中に芽生えていたものだった[4447] 。その目的のために、彼は著名なアポリナリウスによる聖書解釈の講義に耳を傾けた[4448] 。 また、彼は荒野へ退隠するという意図も捨てていなかった。特に親しい人々の死を機に、その思いは強まっていた。とりわけ、イリオドールとニケイがもはや旅を続けることを望まなかったことも、その思いに拍車をかけた。374年、ヒエロニムスは「シリアのフィヴァイデ」――ハルキドン砂漠（シリアの東）――に定住することを決めた。

ここで彼はほぼ5年間を過ごし、おそらくはどの修道院かに住みながら、時折そこを離れて荒野で隠遁生活を送っていた。共同生活を是認し、他の人々にもそれを勧めていたが、至福のヒエロニムスは、彼の『隠者パウロの生涯』が示すように、　同時に、荒野の僻地に一人きりで住み、山中の洞窟に身を寄せ、時には数年間も人の顔を見ることなく、野獣やサソリだけがその孤独を乱すような生活を送る修道者たちに対して、畏敬の念に近い特別な敬意を抱いていた。　前述の著作の中で、聖ヒエロニムスは、とりわけ、自身がハルキドン砂漠で目撃した二人の隠者について言及している。そのうちのひとりは30年間、大麦のパンだけを糧とし、汚れた水を飲んでいた。　もう一人の唯一の食料はナツメヤシの実であり、彼が住んでいた古い池の底に、毎日5粒ずつ投げ込まれていた。 祈り、厳しい断食、苦行、そして肉体労働によって肉体を律し、至福のヒエロニムスは、荒野の孤独の中で、聖書の研究に全身全霊を捧げた。その際、自身の蔵書や、アンティオキア近隣に住む友人たち――主にエヴァグリオス――の蔵書から、研究に必要な書籍を借りて利用した。　同時期に、ある改宗したユダヤ人の指導のもと、彼はヘブライ語の学習を始めた。旧約聖書の書物は主にこの言語で書かれているが、この学習は聖ヒエロニムスにとって謙遜を養う手段ともなった。　この目的には、アルファベットの学習という屈辱的な作業や、ヘブライ語の単語の音楽性の欠如も完全に合致していた。これらは、古典文学の優れた　代表作の研鑽によって文体を磨いてきた至福のヒエロニムスにとっては

[4447] ローマでの学業を終えて間もなく、彼は預言者オディウスの書に対する注解を著した。

[4448] ラオディキアの司教アポリナリウスは、神の子に関する教義におけるアリウス派の主張を否定するにとどまらず（アリウス派については後述）、それとは正反対の立場を確立しようと努めた。この志向こそが、彼を異端へと導いたのである。　すなわち、アリア派が、神の子を被造物として捉える自らの教義に基づき、キリストにおける完全なる人間性の承認に特に重点を置いていたのとは対照的に、アポリナリウスは主イエスにおける人間的人格を否定した。　心理学的観点から見て、キリストにおいて完全な神性と完全な人間性が結合したというニカイア信条の教えは、彼には信じがたいものだった。彼は、二つの実体がそれぞれの特性をすべて保持したまま、決して一つに結合することはあり得ないと論じた。彼にとって、神人合一の思想は教義的な観点からも考えられないものであった。完全な人間性には罪が結びついており、もしキリストの中に罪を――たとえ可能性としてであっても――想定するならば、贖罪という業は彼にとってすでに不可能なものになってしまうからである。　そのため、アポリナリウスは、人間の性質を肉体、動物的あるいは生命的な魂（pykn）、そして霊的な魂、精神（noys）に区分するというギリシャの哲学者プラトンの説に従い、キリストは受肉の際に人間の肉体と魂を受け入れたものの、人間の本質を特徴づける部分、　――すなわち人間の精神――を受け入れなかったと主張した。なぜなら、後者は必然的に自由を前提とし、それとともに罪への傾向も伴うからである。アポリナリウスによれば、キリストにおいて人間の精神は、動物的魂のあらゆる邪悪な衝動を支配する神聖なロゴスに置き換えられていた。 アポリナリウスは390年に死去した。アポリナリウスの異端は、362年のアレクサンドリア公会議で非難された。375年、アポリナリウスが教会から離脱して独自の宗派を形成し始めた際、彼はローマ公会議で非難され、この非難は第2回全地公会議でも繰り返された。

、あまり心地よいものではなかった。至福のヒエロニムスの生涯のこの時期に、おそらく次のような驚くべき夢が見られたものであり、彼はそれを次のように記述している：

「哀れな人間だ」と彼は言う。「私は、キケロを読むつもりだったまさにその直前に断食をしていた。何夜も続く徹夜の祈りの後、かつての罪を思い出し、心の底から涙を流した後、私はたいていプラウトスを手に取っていた。　もし、我に返って預言者たちの書物を読み始めると、その粗野な言葉遣いに身震いした。そして、私の盲目の目には光が見えなかったため、それは私の目のせいではなく、太陽のせいだと考えていた。　その古の蛇がこのように私を誘惑していたとき、断食期間の半ば頃、私の衰弱した体は、体内に潜んでいた熱病に襲われ、その熱病は全く和らぐことなく、私の哀れな肉体を蝕み続け、骨に皮膚がかろうじて張り付いている状態だった。　その間にも、すでに私の埋葬の準備が進められており、私の魂の生命の熱は、胸のわずかな温もりにかろうじて宿っているだけで、全身が冷え切っていた。　すると突然、私は霊において神の審判者の御座の前に引き上げられた。そこには、天使たちの見物人からの光の奔流と栄光の輝きがあまりにも強烈で、私は地面にひれ伏し、目を上げることができなかった。「お前は誰か」という問いに、私は「私はキリスト教徒です」と答えた。

「お前は嘘をついている」と問うた方は答えられた。「お前はキケロ派であり、キリスト教徒ではない。なぜなら、お前の宝のあるところ、そこがお前の心のあるところだからだ」。

――私はたちまち身がすくみ、鞭打ちの痛みに耐えながら（彼は私に鞭打ちの刑を命じたのだ）、あの有名な聖句「陰府において、誰があなたを賛美し得ようか」を思い巡らし、良心の炎にさらに激しく苛まれた。　しかし、私は鞭打たれながらも叫び始め、大声で叫びながらこう言った。「主よ、私を憐れんでください、私を憐れんでください！」

ついに、私のそばに立っていた者たちは、裁判官の足元にひざまずき、私の若さを赦し、過ちを悔い改める機会を与えてくださるよう懇願し、その後、もし私が異教の書物を読むことがあれば、その時に私を懲らしめてくださるよう願った。　この死の危機に瀕し、それ以上のことさえ約束しようとしていた私自身も、悔い改め始め、主の御名を呼び求めながらこう言った。「おお主よ、もし私が今後それらを読むことがあれば、どうかあなたに拒絶されますように！」

この誓いを立てた後、解放された私は大気の最上層へと戻り、皆の驚きをよそに目を開けた。そこには涙が溢れ出ており、その様子は、私の恐怖が不信者たちさえも納得させるほどであった。そして確かに、それは私たちがよく騙されるような夢や単なる眠りではなかった。　私が立ち向かったあの裁きの場、私が恐れていたあの恐ろしい裁判こそが、私の証人である。どうか、二度とこの裁判に引き出されることがありませんように。私は、殴打のせいで肩が青あざだらけになったこと、目覚めた時にその打撃そのものを感じたこと、そしてそれ以来、以前人間の書物を読んでいた時よりも、より熱心に神の書物を読んでいることを告白する。」

ハルキドンの荒野から、至福のヒエロニムスは、親しい人々との交流を手紙を通じて維持していた。彼はその手紙を、禁欲的な行いへの熱烈な呼びかけの手段として用いていた。この点において、至福のヒエロニムスが長老イリオドールに宛てた手紙は特に有名である。　彼は次のような熱烈な言葉で、友人に世を捨てるよう説得している。「懇願も、愛撫も捨て去れ！　私が頼んだとき、あなたは私を無視した。しかし、私があなたを叱責するとき、あなたは私の言うことを聞くかもしれない。甘やかされて軟弱になった戦士よ！　その裏切り者の家で、一体何をしているのか？　見よ、天からラッパの音が響き渡る！　見よ、世界を征服するために、武装した指導者が雲から降りてくる！　見よ、その御口から発せられる両刃の剣が、あらゆる障害を打ち砕く。それなのに、お前は部屋から戦場へ、影から太陽の下へ出るのか？　見よ、お前の胸の奥深くで、敵がキリストを殺そうとしている……　たとえあなたの小さな甥があなたの首にしがみついていたとしても、たとえ髪を振り乱し、服を引き裂かれたあなたの母が、あなたを育てたその胸をあなたに見せていたとしても、たとえあな

たの父が戸口に横たわっていたとしても――涙を流さずに彼の体の上を踏み越え、十字架の旗の下へ駆けよ！ このような事態において、唯一の真の親孝行とは、残酷であることに他ならない」。

4世紀60年代初頭、アンティオキアにはメレティオスとパヴリンという二人の司教が同時に現れた。 358年に正統派とアリウス派の合意の下で選出された[4449] ――双方とも彼を 自分たちの支持者と見なしていた――メレティオスは、実際には正統派の期待に応え、第1回全地公会議の教父たちによって説かれた神の子に関する教義を自らも保持していると公然と宣言した[4450]。 しかし、メレティオスがアリウス派の助力なしには選出されなかったという事実を踏まえ、 正統派の熱心な信徒たちは、アリウス派の陰謀によって不当に罷免されたアンティオキア教会の偉大な主教エウスタフィオスの記憶を愛をもって尊んでいたため、長老パヴリンを指導者としてメレティオスから離反し、パヴリンは362年に司教に叙任された。 事態は、376年に、同じアンティオキアに、さらに3人目のアポリナリウス派の司教[4451] ヴィタリウスが任命されたことで、さらに複雑化した。各派間の対立は、至聖三位一体の位格の尊厳と等位性という問題に焦点を当てた神学論争によって、さらに激化した。 パヴリンは、至聖三位一体に関する教義を表現するために、西方で確立された「至聖三位一体において『一つの位格（イポスタシス）[4452] が三つの位格（イポスタシス）に現れる』」という公式を採用したのに対し、メレティオスは東方の用語法に従い、「一つの力（ウシオス）[4453] 」と「三つの位格（イポスタシス）[4454] 」を認めていた。 本質的に、どちらの定式を支持する者たちも、同じことを理解していたが、同一の考えを異なる言葉で表現していただけである[4455] 。アンティオキアにおけるメレティウス派の分裂とアリウス派の動乱によって引き起こされたこれらの争いは、隣接するハルキドン砂漠にも波及し、そこでは至福のヒエロニムスが修業に励んでいた。 教皇ダマスへの手紙[4456] の中で、彼は次のような言葉で、前述の理由によって引き起こされた荒野での隠遁生活の乱れを嘆いている。「たゆまぬ敵は、私を荒野にまで追いかけてきた。そのため、今や私は隠遁生活において、荒野に定住する以前よりもさらに過酷な闘いを強いられている。 一方では、平和の守護者たちによって支えられたアリウス派の狂気が猛威を振るっている。他方では、三つの派閥に分裂したアンティオキアの

[4449] アリウス――異端者（386年没）――は、私たちの主イエス・キリスト、すなわち神の御子が、父と同質である神ではなく、被造物であり、したがって永遠ではない（もっとも、すべての被造物の中で最も完全な存在ではあるが）と、神を冒涜する主張をした。 キリスト教会の歴史において「アリウス派」として知られるこの異端は、ニカイアで開催された第1回公会議（325年）で非難された。同公会議の教父たちは、神の御子と父なる神との同一本質に関する正統な教義を次のように述べた。「我らは信じる…… 唯一の主イエス・キリスト、神の御子、独り子、父から生まれた、すなわち父の本質から、神から神へ、 光より光、まことの神よりまことの神、生まれ、造られたのではなく、父と同質であり、この御子（子）を通して、天においても地においても、すべてのものが造られた」と。そして、この異端そのものは、公会議の教父たちによって呪われた。 しかし、ニカイア信条は、アリウス主義によって引き起こされた教会の混乱に終止符を打つことはできなかった。公会議に多数出席していたアリウス派の司教たちは、正統派の公会議参加者の信念を支持していた国家権力への恐れから、やむを得ず公会議の信仰宣言に署名したに過ぎなかった。 しかし、公会議終了後まもなく国家権力を味方につけることに成功したアリウス派の指導者たちは、その支援を得て、正統信仰の擁護者たちと熾烈な闘争を繰り広げ、4世紀半ばには、ニカイア信条という神聖な旗印の下に結集した敵対者たちに対して、ほぼ完全な外的な勝利を収めた。

[4450] 前の注を参照。

[4451] すなわち、ラオディキアのアポリナリウスの異端的な誤謬を共有していた者（上記、451ページ参照）。

[4452] なお、この言葉は「本質」――「ウシオス」――の意味で理解されていた。

[4453] すなわち、本質。

[4454] すなわち、位格。

[4455] 「西方の者たちと同様に、私たちもまた、 ――聖グレゴリオス・テオロゴス（彼については後述）はこう述べている――敬虔に、一つの実体と三つの位格が存在することを宣言している。しかし、彼らの言語の貧弱さゆえに、「ウシオス」と「イポスタシス」を区別して表現する言葉がないため、三実体を認めているように見られないよう、「プロソポン（位格）」という語を導入せざるを得ないのだ。 これを論争の的とする以上に、滑稽で哀れなことがあるだろうか」。

[4456] ダマスは366年から384年までローマ司教の座に就いていた。

教会[4457]が、私をもその中に引き込もうとしている」。 時が経つにつれ、アンティオキアでの不和はますます激化し、それに伴い、聖ヒエロニムスに与えられる苦悩も増大していった。ダマスへの手紙から2年後、長老マルコへの手紙の中で、聖なる父は、とりわけ次のように述べている。「私が西方やエジプトと意見が一致しているのに、なぜ彼らは私を異端者と呼ぶのか？　砂漠には、私に許された場所が一つもない。まるで私が信仰を持たずに生まれ変わったかのように、毎日私の信仰について問いただされる。彼らが望む通りに告白しても、彼らは気に入らない。署名しても、彼らは私を信じない。　彼らには、ただ私を追い払いたいという願望しかない。私は去る用意がある」。そして実際、まもなく至福のヒエロニムスは砂漠を離れ、アンティオキアへ――おそらく友人のエヴァグリオスのもとへ――向かった。アンティオキアで、至福のヒエロニムスはパヴリヌスの共同体に加わり、パヴリヌス自身によって長老に叙階された。　この期間、安らぎを求めていた至福の父にとって、アンティオキアでの滞在は心地よいものではなかっただろう。そのため、彼はここに長く留まることはなかった。教会の教師としてのグリゴリオス・ナジアンゾス[4458] の評判に惹かれ、至福のヒエロニムスはコンスタンティノープルへと向かった。当時、その地の司教 は聖グリゴリオスであった。 その後、至福のヒエロニムスは、聖書の研究に専念する中で彼を指導してくれた聖グリゴリウスに、どれほど多大な恩義を負っているかを、幾度となく回想した。　ここコンスタンティノープルで、至福のヒエロニムスは、キリスト教の神学者であり哲学者であるグリゴリオス・ニッサスと出会った。彼は、聖三位一体に関する正統な教義に背いた異端者エウノミオスに対する、自らが書き上げたばかりの論考をヒエロニムスに読み聞かせた。

[4457] すなわち、メレティオス、パヴリノス、ヴィタリオス各司教の支持者たちに対して

[4458] 聖グレゴリオス・テオロゴス――偉大な教父であり、全教会の教師――は、329年頃、アリアンゼ（ナジアンゾスの南に位置する、カッパドキアの小さな町）で生まれた。　幼少期、聖グレゴリウスは、彼を深く感動させ、その後の人生の方向性を示唆する夢を見た。美しい乙女たちの姿をした貞潔と清らかさが彼の前に現れ、自分についてくるよう招いたのである。聖グレゴリウスはカッパドキアのケサリアで中等教育を受け、そこで初めてバシレイオス大司教と出会った。その後、学業を完成させるため、彼はパレスチナのケサリア、アレクサンドリア、そしてアテネへと旅立った。アテネでの滞在は比較的長く、聖グリゴリオスの心に永遠に最高の思い出を残した。　ここで彼はバシレイオス大聖と親交を深め、二人の友は「学校とキリスト教教会への道しか知らなかった」ほどだった。また、ここで彼は、後にキリスト教からの背教によって悲劇的な名声を博すことになる将来の皇帝ユリアヌスとも知り合った。ユリアヌスは聖グリゴリオスに不快な印象を与えた。 357年頃、聖グリゴリウスは悲しみを抱きながら「黄金のアテネ」を去り、コンスタンティノープルを経由して故郷に戻り、そこで洗礼を受けた。359年のキリスト降誕の日、グリゴリウスは予期せぬことに、父であるナジアンゾスの司教グリゴリウス長老によって長老に叙階された。　神学者グレゴリオスの父が、無邪気さから半アリウス派の信条に署名し、それによって正統派の信徒たちの反感を買った際、聖グレゴリオスは彼らと司教との和解を図った。一方、すでにケサリアの司教となっていたバシレイオス大聖人は、友人のグレゴリオスをサシムという小さな町の司教に、強引とも言えるほどに叙任しようとした。　しかし、聖グリゴリウスは司教の位にありながら、高齢の父のもとでその代理兼補佐として、父が373年または374年初頭に亡くなるまでその傍らに留まった。まもなく、聖グリゴリウスの母ノンナも他界した。兄と姉はそれ以前に亡くなっていた。　そこで聖グリゴリウスは、かつて家族への義務によって遠ざけられていた修道生活を目指すため、セレウキアの聖フェクラ修道院へと退いた。セレウキアから、聖グリゴリウスは、アリウス派によって迫害されていた正統信仰を守るため、正統派信者たちによってコンスタンティノープルへ招かれた。 381年5月、テオドシウス帝の命により第二回全地公会議が招集された際、聖グリゴリウスは皇帝と民衆の意向に従い、空席となっていたコンスタンティノープル司教の座に選出され、公会議の参集者たちはこの選出を承認した。　まもなく、公会議の議長であったアンティオキアのメレティオスが死去し、その地位は当然ながら、新たに選出された首都の司教、すなわち聖グリゴリオスが引き継いだ。　彼と公会議の参加者たちとの間の意見の相違――主に、アンティオキアにおけるメレティウス派の分裂をどのように終結させるべきかという点に関する見解の相違――により、聖グリゴリウスは故郷へ退去せざるを得なくなり、そこで隠遁生活を送りながら文学活動に没頭した。 そこで彼は389年にこの世を去った。聖グリゴリウスは、45の説教、243通の手紙、そして詩集など、数多くの著作を残した。聖グリゴリウスの説教や一部の手紙は、至聖なる三位一体および主イエス・キリストの御姿に関する正統な教義の解明に多大な影響を与えた。

381年の終わり頃、至福のヒエロニムスは、彼自身の表現によれば「教会の必要性」に駆られて、もてなしの心にあふれたコンスタンティノープルを後にし、ローマへと向かった。　おそらく、アンティオキア教会においてメレティオスの死後も収まらなかった不運なメレティウス派の分裂問題に関する公会議に出席するため、教皇ダマスが至福のヒエロニムスをローマに招いたのであろう。コンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議（[4459]　）において、メレティオスの死後、その後任としてフラヴィアヌスが選出された。一方、教皇は西方の司教たちと共に、メレティオスの時代にもアンティオキアの司教を務めていたパヴリヌスを支持していた。　この東方教会と西方教会との間の対立[4460] こそが、ダマスコによって招集された公会議の原因であった。福者ヒエロニムスは、ローマへ向かう途中に立ち寄ったコンスタンティノープルで出会ったパヴリヌスとエピファニオスと共にローマに到着した。　ローマに到着すると、至福のヒエロニムスは直ちに教皇および公会議の書記の職に就いた。公会議の父たちは、とりわけ、アポリナリウスの異端的な誤謬に対抗する信仰告白を策定するよう、至福のヒエロニムスに委ねた。　概して、教皇ダマススのもとでの至福のヒエロニムスの立場は、特に当初、非常に影響力のあるものであった。聖書の研究に従事していた教皇は、至福のヒエロニムスの助言を参考にすると同時に、彼に対しても同様の研究を奨励していた。

ローマ滞在の初期、至福のヒエロニムスは、その禁欲的な生活様式、学識、そして雄弁さにより、万人の尊敬を集め、広く知られていた。至福の父が、ローマ教会の教座においてダマス教皇の後継者と公然と呼ばれていたことだけでも、そのことを十分に物語っている。　しかし、ほどなくして、至福のヒエロニムスは激しい憎悪の対象となってしまった。キリスト教の完全性を達成するには、世と肉欲を完全に断ち切らなければならないという彼の執拗な主張は、異教徒だけでなく、多くのキリスト教徒をも彼から遠ざけてしまった。　この状況を利用し、当時の社会にいた一部の堕落した者たちは、この修道士を偽善者だと非難し、 彼に対するあらゆる中傷や告発を広めた。 また、至福のヒエロニムスがオリゲネスに対して抱いていた深い敬意[4461] も、多くの人々を戸惑わせた。このよう

[4459] 381年、テオドシウス大帝の治世下において。

[4460] 西方の司教（サルディニア島のルシフェル司教）によって任命されたパウリヌスは、常に西方と連絡を取り合っていた。　そのため、メレティオスの死後、公会議で後継者について議論が持ち上がった際、公会議の父たちは、西方から支持されていたパヴリンではなく、アンティオキア教会の長老フラヴィアヌスを選出した。彼らは正しくこう述べたのである。「東方教会の事柄においては、西方ではなく、東方が主導権を握るべきである」と。

[4461] オリゲネスは、アレクサンドリア教会の著名な教師であり、その知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡と称された人物である。　多くの傑出した教父たちは、オリゲネスの神学著作と功績に対して深い敬意を払っていた。しかしその後、彼は生前にアレクサンドリアで開催された二つの地方公会議で異端者として非難され、死後は543年のコンスタンティノープル公会議でも同様に非難された。　オリゲネスは、自身の非正統的な見解を不変の真理として表明することはなかったものの、キリスト教教会の信仰教義における多くの真理について誤った考えを抱いており、そのため、主要なキリスト教の教義に対する彼の確固たる信念を疑う者もいた。　魂の先在に関する非正統的な教義を展開する中で、彼はキリストについて誤った考えを抱き、神が、神性を理解し、神に似る能力を持つ、同等の尊厳を持つ一定数の霊的存在を創造したと主張した。　これらの創造された霊のうちの一人が、これほどまでに熱烈な愛をもって神性へと向かったため、神の御言葉と不可分の一体となり、あるいはその受肉した器となった；　オリゲネスによれば、これこそが、神である御言葉が地上に受肉することを可能にした人間の魂である。というのも、彼の誤った見解によれば、神性の直接的な受肉は考えられないからである。神である御言葉の受肉や、世界および人間の創造に関する異端的な見解に固執し、　オリゲネスは、キリストの死についても正統的ではない意味で理解し、それを霊界において霊的に繰り返されるものであり、そこで天使たちの解放に作用するものとして描き、また、救いの業において、私たちの本性に与えられた通常の力に過大な作用を帰していた。　オリゲネスは、復活と来世に関する教義のいくつかの点においても誤った考えを持っていた。例えば、悪魔も救われるという主張や、聖書の解釈において、聖書の歴史的意味を損なうほど、神秘的な意味を過度に誇張して理解していたことなどが挙げられる。　しかし、いずれにせよ、教会に対するオリゲネスの功績はより顕著であり、その誤りを覆い隠している。彼は自身の学校で多くの傑出した教父や教会の教師を育て上げ、その中には、異教からキリスト教への改宗を彼に負っている者もいた。オリゲネスは、知識と哲学をキリスト教の信仰と調和させようとしていたのである。　特に注目すべきは、聖書の研究――解釈、そして何よりも原本の復元と浄化――に関する彼の業績であり、キリス

な敵対的な姿勢は、至福のヒエロニムスの明らかな功績さえも非難の対象とした[4462] が、特にユリア・エウストキアへの貞操保持に関する手紙をきっかけに、一層強まった。 この書簡は383年のものとされている。その中で、至福のヒエロニムスは、同時代のローマ・キリスト教社会、とりわけ聖職者たちの道徳的堕落と宗教的偽善を糾弾し、嘲笑している。 この手紙は、文字通りすべてのローマのキリスト教徒を聖ヒエロニムスに敵対させるきっかけとなった。とりわけ、「すべての異教徒、背教者、そしてキリスト教の名を憎む者たちは、この手紙を熱心に書き写していた。なぜなら、それはキリスト教徒のあらゆる階級、あらゆる地位、 あらゆる職業、そして教会全体を貶め、それらを最も恥ずべき恥辱にさらしていた」[4463] 。

前述の手紙によって巻き起こされたこの激しい非難の嵐の中、福者ヒエロニムスは、彼に好意的で敬意を払ってくれる敬虔な友人たちの輪の中で、ある程度の安らぎを見出していた。 この小さなサークルを構成していたのは、パマキウス、パトリキウス[4464] 、そして至福のヒエロニムスの同級生であり、後に至福のアウグスティヌスの友人となったオケアヌス[4465] 、マルケリン、公証人[4466] 、非常に高貴な人物[4467] 、そして長老ドムニオンであった。 至福のヒエロニムスは、ここに挙げられた友人たちを、ダニエル、アナニア、アザリヤ、ミサイア（ダニエル書1:1–21）に例えていた。 この交友関係には、以下の高貴で敬虔かつ教養ある女性たちも属していた。メラニア、アルビナとその娘マルチェッラ、レア、アセラ、そしてパウラとその娘たち——ブレジラ、エウストキア、パウリナ、ルフィナ——である。特にパウラ一家に対して、至福のヒエロニムスは特別な親近感を抱いていた。 当時の道徳の極度の衰退を考慮すると、至福のヒエロニムスが、彼に親近感を抱くローマの貴族や名門の女性たちに与えた好影響は特に重要であった。彼は、それ自体が雄弁に物語る、最良のキリスト教的生活の模範を示していたのである； 福者ヒエロニムスが彼に忠実な人々を率いたのは、聖書を読み、 彼らに解説し、貞操や寡婦としての生活を守りながら、禁欲的な生活を送る決意を固めさせるよう努めたことにあった。

384年、至福のヒエロニムスの強力な後援者であった教皇ダマスが死去した。その後任にはシリキウスが就いたが、彼はそれほど教養に富んだ人物ではなく、至福のヒエロニムスの活動に否定的な態度をとっていた。 中傷者たちの舌はもはや何ものにも抑えられなくなったため、ダマス教皇の死去から7ヶ月後、ローマに3年間滞在していた聖ヒエロニムスは、やむを得ずローマを去らざるを得なくなった。彼は、弟のパヴリニアヌスと長老ヴィンチェティウスと共に、ローマを去った。 桟橋まで見送りに来てくれた友人たちに別れを告げ、至福のヒエロニムスは胸に悲しみを抱きながら船に乗り込み、「永遠の都」を永遠に去ることとなった。 この悲痛な別れにおいて、福者ヒエロニムスにとって唯一の慰めとなったのは、「たとえ虚偽の告発による恥辱に耐える運命にあったとしても、悪評を通じてこそ天の御国に到達できることを悟った」という考えであった……「そしてキリストの裁きの座の前で、各人がどのように生きたかが明らかになる」と。

ト教をその敵や異端者から守ることを目的としたオリゲネスの著作もまた傑出している。 デキウス帝による迫害の際、オリゲネスはキリストの勇敢な殉教者として名声を博し、254年にティルスで70歳の長老としてこの世を去った。

[4462] このように、 例えば、教皇ダマススの命により聖ヒエロニムスが行った、聖書のラテン語訳に対する必要かつ有益な改訂は、激しい敵意を招いた。なぜなら、それはキリスト教徒から、聖書の原文と比較すれば誤って表現されていたとはいえ、慣れ親しんで愛されていた多くの聖書の言葉を取り去るものであったからである。 長年の使用を通じて親しまれるものとなっていた。

[4463] こうして、かつての友人ルフィンは、後にその不運な手紙について、至福のヒエロニムスを非難した。

[4464] すなわち、高貴な家系の出身者。

[4465] 西方教会の著名な教父（430年に没）。

[4466] 君主の宮廷の秘書。

[4467] その後、ゴノリウス帝の意向により、マルケリンは、ドナティスト派と正統派の和解を図るために410年に招集されたカルタゴ公会議の議長を務めた。

至福のヒエロニムスは、聖地を訪れるつもりでローマを後にした。その道中、彼はとりわけキプロス島に立ち寄り、そこでサラミスの司教である聖エピファニオスのもとに滞在し、またアンティオキアでは、司教パウリヌスの温かいもてなしを受けた。　ここアンティオキアで、敬虔さを求めて故郷のローマとのあらゆる絆を断ち切ったパウラとエウストキアが、至福のヒエロニムスに合流した。　アンティオキアから聖地へ向かう巡礼の旅に、パウロとエウストキアは若い処女たちに付き添われて、またヒエロニムスはヴィンチェティウス、パヴリニアン、そして少数の修道士たちと共に、一団となって出発した。 彼らはサレプタの聖預言者エリヤの塔（列王記上17:9）を訪れ、ティルスで聖使徒パウロがひざまずいた場所（使徒行伝21:3–5）の砂に口づけをした。 カイサリアでは、百人隊長コルニリウスの家（使徒行伝10:1–48）や、「伝道者」フィリッポの家にある小さな部屋を見学した。そこにはかつて、聖使徒たちの時代に、彼の四人の処女の娘たちが住んでいた（使徒行伝21:8–9）。　エルサレムでは、巡礼者たちは畏敬の念をもってキリストの十字架、その墓、鞭打ちの柱に口づけをした。また、主イエス・キリストの記憶によって聖別されたエルサレムのすべての場所を訪れた。エルサレムから、ラケルの墓[4468] を通り過ぎ、巡礼者たちはベツレヘム[4469] に到着した。 ここで、救い主キリストの誕生の地において、パウラは神聖な感動に包まれ、こう叫びました。「私のような哀れな罪人が、幼子であった主が泣かれた飼い葉桶に口づけし、聖母マリアが幼子キリストをお産された洞窟で祈るにふさわしいのでしょうか？　ここは私の主の故郷です。救い主がこの地を選ばれたのですから、私はここで暮らすつもりです」。

ベツレヘムを後にした巡礼者たちは、「羊飼いに福音を告げた天使」の礼拝堂を訪れた後、ガザとヘブロンを経由して死海[4470]

[4468] ヤコブ総主教は、最愛の妻ラケルをエフラタ、すなわちベツレヘムへの道沿いに葬り、その棺の上に記念碑を建てた（創世記35:18–19）。ラケルの墓は、それから何世紀も経った後もよく知られていた（サムエル記上10:2）。 地元のユダヤ人やイスラム教徒は、今なおラケルの墓を深い敬意をもって扱っている。アラブ人たちは、干ばつの際に、ここへ集まって厳粛な祈りを捧げている。

[4469] ベツレヘムは、旧約聖書ではユダヤ人の偉大な王ダビデの生誕地として、新約聖書ではイエス・キリストの生誕地として知られている。　ベツレヘムはエルサレムから南へ2時間の距離にあり、2つの丘の上に位置している。その斜面にはブドウ畑が豊かに広がり、麓には手入れの行き届いた穀物畑が連なっている。この肥沃さから、おそらく「ベツレヘム」という地名も由来しているのだろう。ヘブライ語で「パンの家」を意味する。　古代にはエフレマ（ミカ書5:2）と呼ばれており、ヘブライ語で「実を結ぶ」という意味である。救い主キリストの誕生以来、ベツレヘムはすべてのキリスト教徒にとって聖地となった。　オスマン帝国によるパレスチナ占領（15世紀）以前、ベツレヘムは幾度となく完全に破壊され、その頃には完全に荒廃していましたが、19世紀初頭になってようやく復興を果たしました。　現在は、住民の半数が正教徒、半数がカトリック教徒であるアラブ人が暮らす小さな町となっている。主イエス・キリストが生まれた洞窟、すなわち「ヴェルテプ」の跡地には教会が建っており、その祭壇の下に洞窟がある。洞窟の壁と床は大理石で仕上げられている。 救い主の誕生地として崇められているのは、洞窟の奥にある窪みで、そこには5つの銀製のランプが灯されている。床には銀の星が埋め込まれており、その上にはラテン語で「Hic de Virginie Maria Jesus Christus natus est（ここに聖母マリアよりイエス・キリストが生まれた）」と刻まれている。 この場所からわずか3歩のところに、キリストが寝かされた飼い葉桶があったとされる窪みがある。洞窟の北西には、祭壇や礼拝堂、そして聖ヒエロニムスが埋葬された洞窟がある狭い地下通路が伸びている。

[4470] 死海――パレスチナ南東部に位置する内陸の塩湖。リソン半島によって死海は二つの水域に分かれており、地中海の水面より394メートル低い位置にある。 死海の水は塩分が極めて濃いため、魚は生息できず、水の比重が非常に高いため、水中に落ちた有機物は沈まない。　死海の周囲の広範囲にわたる土地は塩に覆われている。伝承によれば、死海のある場所にはかつてシディムという肥沃な谷があり、そこにはソドムとゴモラという都市があったとされる。

へと向かった。その後、ヨルダン川を訪れ、ベテル、シロ、ナザレ[4471] を経て、ガリラヤ湖[4472] とファボラ山[4473] に到達した。 パレスチナから巡礼者たちはエジプトへと向かった[4474] 。そこで彼らはアレクサンドリアに丸一ヶ月滞在した。ここで、至福のヒエロニムスは、聖書に関する知識で名高い、アレクサンドリアのカテキズム学校の教師であり、オリゲネスの後任である盲目のディディモスの講義に耳を傾けた[4475] 。 巡礼者たちがニトリアの荒野[4476] に到着すると、イシドール司教が「数え切れないほどの修道士たち」を率いて出迎えた。ニトリアの隠者たちと交流した後、巡礼者たちは386年の秋にベツレヘムへ戻った。

ベツレヘムに残ることを決めた巡礼者たちの住居として、パウラは女子修道院と男子修道院の建設に着手した。男子修道院の院長には至福のヒエロニムスが就任し、その後パウラはさらに2つの女子修道院を建設した。建設工事は約3年間続き、 その間ずっと、パウラは処女たちと共に、また至福のヒエロニムスは修道士たちと共に、あまり快適とは言えない住居で暮らしていた。修道院に加え、パウラは巡礼者宿を建設した。そこでは、ベツレヘムを訪れる巡礼者たちが無料で宿泊することができ、ガリア、 ブリタニア、アルメニア、ポントス、エチオピア、インドといったキリスト教世界の遠隔地からも、聖地へ大勢の巡礼者が押し寄せていた。この宿泊施設は、異端者を除き、すべての巡礼者に開放されていた。「もしヨセフとマリアが再びベツレヘムを訪れたとしても、再び宿に困ることはないだろう」と、至福のヒエロニムスは述べている。 広範かつ寛大な慈善活動により、ついにパウラの豊富な私財も底をついてしまったため、至福のヒエロニムスは修道院の運営を支えるために、弟のパウリニアヌスをダルマチアへ派遣し、自身の相続財産を売却するよう命じざるを得なかった。 至福のヒエロニムス自身は、キリストの降誕の洞窟の隣にある洞窟に住んでいた。彼の食事はパンと食用草であり、飲み物は水であった。そして、この質素な食事でさえ、至福の父は断食の日には日没後にしか口にしなかった。 彼は自修道院の修道士たちを指導する一方で、パウラとエウストキアの敬虔な修行や学習にも目を配っていたが、彼女たちが聖書の理解しがたい箇所について執拗に質問してくるため、彼自身も大きな困惑を強いられていた。 聖ヒエロニムスは、一日の労働時間の一部を少年たちへの教育にも充てていた。 しかし、彼の主な活動は、以前と同様に、聖書の研究と

[4471] ナザレ――ヘブライ語で「枝」または「囲まれた場所」を意味する――は、南ガリラヤにある小さな町であり、救い主の到来まではあまり知られていなかったため、旧約聖書には一度も言及されていない。 しかし、新約聖書の時代に入ると、ナザレはガリラヤで最も有名な場所となった。それは、救い主の生涯における多くの出来事がこの地と結びついているからである。ナザレは、神の母の婚約者である義人ヨセフの故郷であり、ここで聖母マリアへの受胎告知が行われた。 また、聖家族がエジプトから帰還した後、救い主の幼少期と青年期がここで過ごされました。さらに、主は人類への公の宣教活動を始められた後も、住民の不信仰を理由にナザレを離れカペナウムに移るまで、この地に留まっておられました。生涯の大部分をナザレで過ごしたイエス・キリストは、「ナザレ人」と呼ばれていました（マタイ2:33）。

[4472] ガリラヤ湖、あるいはゲネサレト湖は、主イエス・キリストが説教を行うのに好んで用いた場所の一つであり、主が何度もこの地を訪れたことで知られています（例えば、マタイ4:13–17、23–25、8:23–24、9:1–8、13:1を参照）。

[4473] ファヴォル山は、パレスチナ北部のガリラヤ地方に位置している。教会の伝承は古くから、ファヴォル山を「変容の山」として認めている。

[4474] エジプトは、地球上で最も古い国家の一つであり、ナイル川の両岸に広がるアフリカの狭い沿岸地帯を占めている。

[4475] 至福のヒエロニムスは、自身の幼少期に起きた出来事について語る中で、ディディムについて次のように伝えている。 アリウス派との闘いのために聖アタナシウスによって招かれた、著名な隠者である聖アントニウスがアレクサンドリアに到着した際、ディディムはこの偉大な修道士を訪ねた。聖アントニウスは、聖書に関するディディムの知性と知識に驚き、彼に「あなたは盲目であることを嘆いているのか」と尋ねた。 ディディムが、盲目であることは自分にとって重い試練であると認めたとき、アントニウスはこう述べた。「ハエやアリさえも持っている能力を失ったことを嘆き、聖人や使徒たちだけが授かったような知識を持っていることを喜ばないとは、奇妙なことだ。」

[4476] ニトリウス砂漠は、エジプトの修道士たちが好んで住んだ場所であり、スキティス砂漠の南に位置している。

書簡のやり取りであった。 スルピキウス・セウェルス[4477] は、至福のヒエロニムスと共にその洞窟で6ヶ月間過ごしたが、彼は、至福の父が常に読書や執筆に没頭しており、昼だけでなく夜もほとんど休息をとらなかったと証言している。　ここで、洞窟の中で、至福のヒエロニムスは、費用を惜しまずに、主にオリゲネス、ディディムス、イリネイ、エウセビオス・ケサリアスの著作からなる膨大な図書館を築き上げた。　聖書研究と解釈という聖ヒエロニムスの主な活動と関連して、彼がベツレヘムでも続けていたヘブライ語の学習が挙げられる。彼は、時にはラビ・ヴァラニナと、時にはリダまたはティベリアス出身のラビと学習を行っていたが、後者は授業料として高額な報酬を要求していた。　至福のヒエロニムスがヘブライ語を学んだ動機には、旧約聖書の原本の言語を習得したいという願望に加え、ユダヤ人によるキリスト教徒への嘲笑を反駁したいという願いもあった。ユダヤ人たちは、キリスト教徒が引用する聖書のテキストは、原本では別の意味を持っていると指摘していたのである。

至福のヒエロニムスがベツレヘムに滞在した期間は、彼の文学活動の黎明期であった。特に最初の10年間については、そう言わざるを得ない。その後、発熱の発作や、フン族の侵攻を待ちわびて震え上がっていた全東方地域を覆った社会的な災厄への恐怖[4478] が、ベツレヘムでの至福のヒエロニムスの平穏な滞在を乱した。　しかし、彼にとりわけ多くの苦悩をもたらしたのは、ベツレヘムという世俗から隔絶された地にあっても断ち切ることができず、彼が熱意を込めて繰り広げた論争であった。　至福のヒエロニムスは、教会の教義に反する見解を述べる者たちを糾弾するか、あるいは、ある有名な教会問題に関して、至福の父の見解と異なる立場をとる者たちから自身の見解が攻撃された際には、それを擁護していた。　こうして、至福のヒエロニムスは、ある自由思想家の修道士ヨヴィニアヌスに対して、三冊の非難書を著した。彼は、後者の教えに含まれる以下の誤りを指摘した。

1)　処女性、寡婦の状態、そして結婚は、それ自体としては等しく無関係であり、神にとって等しく喜ばしいものであるということ;

2) 洗礼の水によって真に再生した者は、罪を犯さないことができるという主張;

3)　断食と、神への感謝を伴って食事を摂ることとは、道徳的な価値において同等である、という主張。399年、至福のヒエロニムスは、約5年間にわたって続いたオリゲネスをめぐる有名な論争に巻き込まれた。　この論争は、聖ヒエロニムスに多大な苦難をもたらし、彼はかつてアレクサンドリアの著名な教師を敬愛していた立場から、その誤りを熱心に糾弾する立場へと転じた。この論争は、かつて友人であった聖ヒエロニムスとルフィヌスの間に決定的な決裂をもたらした。　一方、聖ヒエロニムスに少なからぬ苦悩をもたらしたものの、より実り多いものとなったのが、聖アウグスティヌスとの書簡のやり取りであった。ヒエロニムスは、70人の通訳者による翻訳が存在することを理由に、ヘブライ語からの聖書の翻訳を不要だと考えていたアウグスティヌスの誤った見解を、彼に放棄させることに成功した。 一方、 至福のアウグスティヌスは、至福のヒエロニムスに対し、ガラテヤ人への手紙第2章11〜15節に関する彼の解釈を黙って放棄するよう説得した。そこでは、至福のヒエ

[4477] スルピキウス・セウェルス（410年または429年没）は、アクィタニア出身で、当初は弁護士であったが、妻の死後、392年にベジエ近郊の修道院に隠遁し、そこから409年にマルセイユへ移った。　聖マルティヌス・トゥルスキュスとの親交で知られており、その生涯を詳細に記述したが、必ずしも信憑性が高いとは言えない。　　さらに、彼は『歴史』（Historia）あるいは『聖なる年代記』（Chronica　sacra）を著しており、そこでは2巻にわたって、世界の創造から西暦409年までの出来事が叙述されている。また、2つの対話篇も彼の著作である。

[4478] 395年にオケアヌス宛てに書かれた至福のヒエロニムスの書簡が現存しており、その中で彼は、とりわけ、東方の全域がフン族の侵攻を恐れて戦々恐々としていたことを伝えている。　聖ヒエロニムスは、フン族が聖地を襲撃した場合に備えて、ヨッピアで修道士や修道女たちが逃げるための船を待機させておくことを余儀なくされた。フン族はすでにアンティオキアを包囲しており、彼らが宝物を求めてエルサレムを強襲するつもりだという噂が流れていた。

ロニムスが、最高位の使徒たちの行動を、彼らの高い尊厳を傷つけ、聖書の権威を揺るがす不誠実さという観点から描いていたのである。

聖ヒエロニムスは、何よりも学識者であり、その文学作品という形で豊かな遺産を残した。主題や性格によって、これらの著作は次の4種類に分類できる：

1) 教義論的・論争的なもの；

2) 道徳・禁欲に関する著作；

3) 聖書の解釈に関する著作、および

4) 歴史に関する著作。

教義論・論争文学には、以下の作品が含まれる。「ペラギウスに対する論駁」[4479]（415年末に執筆）、「ヘルウィディウスに対する、聖母マリアの永遠の処女性に関する書」（ローマ、383年）；『ヨヴィニアヌス反駁』（ベツレヘム、392年）および『ヴィギリアンティウス反駁』[4480]。この種の著作の多くは、オリゲネス派をめぐる論争によっても引き起こされた。「アレクサンドリアのテオフィロスへの書簡」、「エルサレムの司教ヨハネに対する反論」[4481]（398–399年）。『ルフィヌスの著作に対する二巻の弁明書[4482]』（402年）、『第三巻、あるいはルフィヌスの書簡に対する最終的な反論』（402年）。アンティオキア教会における分裂に起因する論争に、至福のヒエロニムスがやむを得ず巻き込まれたことが、以下の著作の執筆のきっかけとなった：『正統派とルシフェリアン派との論争』（379年、アンティオキアにて）。純粋に教義的な翻訳著作の中では、至福のヒエロニムスによる以下の翻訳が注目に値する：オリゲネスの著作『原理論』（399年）およびディディモスの著作『聖霊論』。

至福のヒエロニムスの道徳的・禁欲的な活動は、主に彼の書簡に表れており、そのうち紛れもなく真正なものが120通現存している。特に、この至福の父による以下の書簡は教訓的である。イリオドルへの第14書簡（隠遁生活を称賛したもの）；22通目のエウストキアへの手紙（貞潔の誓いを守ることを説いたもの）；52通目のネポティアヌスへの手紙（牧会奉仕の理想像に関連して、修道者の美徳について論じたもの）；58通目のパヴリヌスへの手紙（修道士への訓戒を含むもの）。ここには、至福のヒエロニムスが著した修道者の生涯に関する記述も含まれる：パウロ・フィヴェイオス（376年）、修道士マルハ、聖イラリオン（いずれも379年頃に執筆）；エウストキアへの第103書簡には、ヒエロニムスのベツレヘムの同志であったパウラの伝記が含まれている。

しかし、至福のヒエロニムスがキリスト教世界に対して真に不朽の功績を築いたのは、彼が最も愛した聖書研究の分野に関する著作によるものである。この種の至福のヒエロニムスの著作は、次のように分類することができる：

1) イサゴギックな著作、

2) 文献学的著作、および

3) 釈義的著作。イサゴギックな著作には、至福のヒエロニムスの以下の作品が挙げられる：

[4479] ペラギウス（5世紀の異端者）は、原罪に関する教会の教義を否定し、それを単にアダムが示した最初の悪い手本という意味でしか理解せず、アダムの堕落後の人間の本性が持つ罪への傾向という意味では理解しなかった。同時に、彼は、神から人間に授けられる特別な力としての「恵み」の教義も否定した。彼は恵みを、存在という事実から始まり、キリストを通じた至高の真理の啓示に至るまで、自然や歴史におけるあらゆる善を神が啓示するものとして理解していた。

[4480] 彼は、聖人や殉教者の崇敬、修道生活の過度な称賛、聖遺物の崇拝、善行や断食、施しに過大な重要性が認められることに対して反発した。概して彼は、真偽を区別することなく、当時存在していたあらゆる形態の教会・宗教的生活に反発していた。

[4481] オリゲネスの信奉者。

[4482] アポロギア（апология）——弁明。

1) 『ユダヤ人の名について』――この著作は、ヨセフス、フィロン、オリゲネスらの影響を受けて執筆されたもので、旧約聖書および新約聖書の各書に見られる様々な固有名詞について、神秘的・寓話的な観点から解説しており、アルファベット順に配列されている。 380年、至福のヒエロニムスは『ユダヤの地名の位置と名称に関する書』と題する著作を執筆した。この著作は、パレスチナの地形学および考古学の研究にとって極めて重要なものである。 『創世記に関するユダヤ人の疑問』は、この種の聖ヒエロニムスのもう一つの著作であり、いわゆる「イタリック版」、ヘブライ語版、およびギリシャ語の70人訳のテキストを比較研究した結果に基づいて、創世記の最も難解な箇所に対する批判的考察をまとめたものである。 聖ヒエロニムスによる以下の著作は、文献学的な性格を帯びている。当時存在していた七十人訳（LXX）の校訂、いわゆる「イタリック版」――ラテン教会で広く普及していたが、多くの誤りを含んでいたラテン語訳聖書――の修正である。 至福のヒエロニムスは、教皇ダマスの命により383年にこの作業に着手した。まず彼は四福音書と新約聖書のその他の書物の訂正に取り組み、旧約聖書の書物の中では『詩篇』を訂正した。 詩篇はダマス教皇の指示により直ちに礼拝の慣行に取り入れられ、「ローマ詩篇」[4483] と呼ばれるようになった。至福のヒエロニムスによって訂正された新約聖書の書物は、現在に至るまで、西方カトリック教会全体で使用されている聖書の構成要素となっている。 ベツレヘムに滞在していた当時、至福のヒエロニムスは旧約聖書の「イタリック本文」の校訂を完了させており、この作業もまた、オリゲネスのヘクサプラに基づいて校訂した詩篇集から着手した。 彼が発見したこの写本は、3世紀にオリゲネスが滞在していたケサレアで発見されたものである。[4484] この詩篇集は、「ガリアの詩篇集」として知られている。これは、まずガリア教会で用いられ、その後、西方教会全体に受け入れられたためである。 同じ手順で、聖ヒエロニムスは旧約聖書の他のすべての書物も校訂したが、この作業は、聖ヒエロニムス自身が言うように「ある一人の者の悪意」により、ヨブ記を除いて跡形もなく失われてしまった。

ヘブライ語、カルデア語、ラテン語、ギリシャ語に精通し、オリゲネスの『ヘクサプリー』のような重要な参考書を手にしていた聖ヒエロニムスは、旧約聖書のすべての聖書を原語から独自にラテン語に翻訳する事業に着手した。 彼はイタリック本文の欠点を是正することを望んでいた。 聖ヒエロニムスは390年頃にこの作業に着手し、405年に完了した。この時点で、非正典の書物――バルク書、マカバイ記第1・第2巻、およびシラの子イエスの知恵の書――を除く旧約聖書全体が翻訳されていた。 ほぼすべての書はヘブライ語の原本から翻訳されたが、トビト書とユディト書のみが「カルデア語」から、またエステル記とダニエル書の一部がギリシャ語から翻訳された。 聖ヒエロニムスの翻訳には、極めて急いで行われたため、欠点がないわけではない。例えば、『トビト書』は1日で、『ソロモンの書』は3日で翻訳されたが、その欠点にもかかわらず、聖ヒエロニムスの翻訳は、その美しさ、表現力、そして記述の正確さにおいて、今に至るまで比類のないものである。 したがって、グリゴリウス大教皇の時代[4485] に、この翻訳がラテン教会で広く使用されるようになり、13世紀からは『ウルガタ』、すなわち「民衆全体に広まった翻訳」という名で知られるようになったのも、驚くべきことではない。

至福のヒエロニムスの聖書注解書は、翻訳作品（オリゲネスの説教の翻訳――預言者エレミヤへの説教14篇、エゼキエルへの説教14篇、雅歌への説教2篇、福音書記者ルカへの説教39篇）と、彼自身の著作に分けられる。 後者には、マタイによる福音書（398年）、使徒パウロのガラテヤ人への

[4483] もっとも、この用語が用いられたのは16世紀までであった。

[4484] オリゲネスの『ヘクサプル』は、旧約聖書の書物の目録であり、6つの欄に分かれている（名称の由来）。第1欄にはヘブライ語のテキストがヘブライ文字で記され、 第2列には同じテキストのギリシャ語転写、第3列にはアキラの翻訳、第4列にはシマハの翻訳が掲載され、第5列にはLXXの注釈者たちの解説、第6列にはテオドティオンの解説が掲載されていた。LXXの翻訳には、ヘブライ語のテキストとの相違点を指摘する注釈が添えられていた。

[4485] 590年からローマの司教を務めた。

手紙、エフェソ人への手紙、テトスへの手紙、フィレモンへの手紙、および『ヨハネの黙示録』の注解が含まれる。多くの個別の解釈が、彼の書簡のあちこちに散見される。　至福のヒエロニムスの注解は、その大部分が文献学的な解説であるが、しばしば神秘的・寓話的な性格の考察へと移行している。また、これらの解説の中には、現在失われてしまったオリゲネス、アポリナリウス、ディディモスの著作からの断片が保存されているという点でも、その価値は高い。

至福のヒエロニムスの歴史に関する著作は、次のものに尽きる。「エウセビオス・ケサリアスの年代記」のラテン語訳、およびそのわずかな改訂と378年までの続編、ならびに『著名な人物の目録』である。　古代から伝承されてきた歴史的資料が限られている中、前者の著作は極めて重要な意義を持つ。後者の著作は、主にエウセビオス・ケサリアスの著作に基づいて編纂されたもので、テオドシウス2世の治世14年までを締めくくりとして、キリスト教文学全体について体系的な歴史的概観を提供している。　著作に関する情報に加え、著者自身の伝記も掲載されている。この概説において、至福のヒエロニムスは主に聖書注解書に焦点を当てており、その中には彼自身の著作も含まれている。

至福のヒエロニムスは、アラリックの率いるゴート族の大軍によるローマ陥落（410年）を目の当たりにする時代を生きることとなった。　何世紀にもわたり国家の権力の生きた象徴であった「永遠の都」は、「恐怖、混乱、飢餓と困窮、火災と流血」の場と化した。その「輝かしい教会は、灰と瓦礫と化した」。　この恐ろしい日々、ローマでは、至福のヒエロニムスに親しい人々――マルチェッリーナとパマキウス――が命を落とした。ローマ陥落の報せが至福のヒエロニムスに届いたとき、それは彼にとって予期せぬ雷鳴のように響き、彼を深い悲しみに包んだ。その悲しみは、彼の書簡にも反映されている。　「誰が信じようか――」と彼は問いかけた。「全世界に対する勝利の上に築かれたローマが、破壊にさらされるなどとは？　諸国民の母であるローマが、彼らの墓場と化すなどとは？　東方の諸国、エジプト、アフリカの至る所が、かつて世界の支配者であった者たちの若者や乙女たちの群れで埋め尽くされるとは？　聖なる都ベツレヘムが、かつて豊かさと贅沢に浸っていた男女の輝かしい面々が、日ごとに乞食としてその城壁へと押し寄せる姿を、毎日見続けなければならないというのか？」　聖ヒエロニムスは、彼らを助けることはできなかったが、彼らに降りかかった悲しみを分かち合い、彼らと共に涙を流した。　しかし、それらの涙は、ローマの陥落の報せを初めて受け、それに伴う世界的な惨事を知った際に彼の目から溢れ出た涙に比べれば、まだ軽いものだった。「私の声は――」と、彼はプリンキピアへの手紙の中で、彼女の母マルチェッラの死についてこう述べている。「詰まってしまい、嗚咽のせいで言葉を口述することさえ困難だ。　かつて全世界を征服したこの都市を陥落させること。それだけでなく、この都市は剣に倒れる前に飢餓で滅び、捕虜として連行される者はわずか数人しか見つからなかった。飢えた者たちの怒りは、忌まわしい人食いに転じた。　人々は互いに相手の四肢を引きちぎり合い、母親でさえ乳飲み子を容赦しなかった」。411年、老いた修道士は新たな試練に見舞われた。ベツレヘムそのものが、アラブのベドウィンによる野蛮な襲撃によって引き起こされた恐怖に震え上がり、神の慈悲によってのみ、聖ヒエロニムスの共同体は破滅から救われたのである。　こうして、数々の災難の中、すべての友を先立たれた後、至福のヒエロニムスは悲しみに満ちた孤独の中でその生涯を閉じた。　その外見そのものが、彼が経験した偉業、苦難、そして喪失を物語っていた。深いしわで刻まれた額は、とっくに白髪に縁取られていた。弱々しくくぼんだ目と、青白くやつれた顔には、数え切れないほどの涙の跡が残っていた。至福のヒエロニムスの陰鬱な老後を明るく照らした唯一の光は、ベツレヘムに定住したパウラとアルビナの孫娘であるパウラ・ジュニアと、その娘メラニアの存在であった。おそらく彼女たちが、死の床にある老人の最期を見守ったのだろう。至福のヒエロニムスの没年は正確には不明である。　しかし、プロスペル・アクィタヌスの証言が残っており、それによると、至福のヒエロニムスは420年9月

30日に亡くなったとされる。おそらく、彼はかなり長期にわたる重い病の末にこの世を去ったものと思われる[4486] ；埋葬は、キリストの降誕の地と隣接する洞窟で、パオラとエウストキアの近くに行われた。 642年、至福のヒエロニムスの聖遺骨はベツレヘムからローマへ移され、マッジョーレの聖母教会に安置されたが、現在その行方は不明である。現存しているのは、ローマのファルネーゼ広場近くにある彼の名を冠した教会に保管されている「聖なる右手」のみである。

同日、アナスタシウポリスの司教であった聖テオドロス・シケオトスの聖遺物が移送された（その生涯については4月22日

6月29日

6月16日（旧暦）

同日、5世紀初頭にコンスタンティノープルで殉教した聖殉教者ティグリウス司祭と殉教者エウトロピウス朗読者の記念日。

同日、メディン（カルーガ）の聖ティホンの記念日。

私たちの聖なる父、奇跡行者ティホーン、アマフントの司教の生涯

記念日：6月16日

聖ティホンは、キプロス島のアマフント[4487] で、敬虔なキリスト教徒の両親の間に生まれた。幼い頃から両親によってキリスト教の敬虔さの中で育てられ、聖書の読み方を教えられたため、教会の聖職者団に受け入れられ、教会朗読者の職に就いた。 その清らかな生活ぶりを認められ、その後、アマフントの司教である聖メムノンによって、 助祭に叙任された。やがて司教メムノンが逝去すると、アマフントのキリスト教徒たちの総意により、聖ティホーンがその後任に選出され、キプロスの大司教である聖エピファニオスによって按手を受け、[4488] 叙階された。

当時、キプロス島には、依然として古代の偶像崇拝に固執する多くの異教徒が残っていた。

キリストの聖人ティホンは、アマフントの住民を異教の迷いから遠ざけ、キリスト・神への認識へと導くという偉大な務めを引き受けた。 この偉大な労苦において、主は彼に御加護を授けられた。なぜなら、聖ティホンは悪魔の支配から大いなる羊の群れを救い出し、彼らを正教会のカトリック教会の庇護の下へと導き、山羊たちをキリストの羊へと変えたからである。 聖ティホンはまた、アマフント周辺の偶像を破壊し、それらの偶像の神殿を、悪魔の住処として根絶やしにし、破壊した。

主から託された羊の群れを敬虔に導いた聖ティホンは、大老齢に達してこの世を去った。生前だけでなく死後も数多くの奇跡を起こしたことから、聖ティホンは「奇跡行者」と呼ばれている。

[4486] これは、420年の最後の9ヶ月間に、聖ヒエロニムスの書簡が1通も残されていないという事実に基づいて推測できる。明らかに、病気のために彼は執筆することができなかったのだ。

[4487] アマフント――現在のキプロス島のリミッソ。

[4488] 聖エピファニオス――キプロス島の大司教――は、西暦403年に逝去した。この聖人は、神に導かれた教えの力と、奇跡と預言の賜物によって輝いた。――その記念日は5月12日

聖ティホンの数多くの奇跡のうち、現代まで伝えられているのは、彼の奇跡的な力に関する二つの逸話のみである[4489] 。聖ティホンがまだ少年だった頃に成し遂げた最初の奇跡は、次のようなものであった。パンを焼いて販売することで家族を養っていた聖ティホンの父は、息子をパンの売り出しに送り出した。　しかし、聖ティホンは貧しい人々にパンを無償で配っていた。これを知った父は悲しみ、息子に怒りを覚え、そのことを叱り始めた。すると、敬虔な少年は父にこう言った。

「父よ、なぜ何かを失ったかのように悲しんでいるのですか？私はパンを神に貸し出したのです。聖書には『神に与える者は、百倍の報いを受ける』と書かれています。」

「もしそこに書かれていることを信じないのなら、穀物倉へ行きましょう。そこで、神がご自身の貸し手たちに借りを返してくださる様子を、あなた自身の目で確かめることができます。」

そう言うと、彼は父と共に穀物倉へ向かった。そして扉を開けようとしたとき、以前は空っぽだったその部屋が、すべて清らかな小麦で満たされているのを見た。　この奇跡を目の当たりにして、聖ティホンの父は深く驚嘆し、ひざまずいて神にひれ伏し、感謝を捧げた。それ以来、彼は息子に怒ることをやめ、息子が望むだけ貧しい人々にパンを配ることを妨げなくなった。

聖ティホーンが成し遂げたもう一つの奇跡は、次のようなものでした。

あるブドウ園で、園丁たちはブドウの枯れた枝を切り落とし、役立たずとして捨てていた。しかし、聖ティホンはそれらの枝を集め、自分の庭に植えた。　植えながら、彼は主に向かって、ぶどうの枝に次の四つの特性を与えてくださるよう祈った。第一に、枯れた枝が土に根付き、根を張り、成長すること。第二に、ぶどうの枝が実を豊かに結ぶこと。第三に、その実が甘く、健康に良いものであること。　第四に、そのブドウが他のどのブドウよりも早く実り、熟すこと。翌朝、聖ティホーンが庭に出ると、彼の祈りが聞き届けられたことがわかった。枯れた枝は土に根を下ろし、芽を出していた。　そして、その夏に成長が始まると、極めて異例かつ非自然なほど豊作となり、他のブドウ畑で果実が熟し始めた頃には、聖ティホンのブドウ畑の果実はすでに完全に熟し、味も良く、健康にも非常に有益なものとなっていた。

このブドウは、聖ティホンの存命中にのみならず、彼の死後も豊作であり、毎年、他のブドウ畑よりも早く実が熟したため、6月16日――聖ティホンの記念日――には、このブドウから搾り出されたワインを用いて、聖体礼儀が執り行われた。　これら二つの奇跡だけでも、聖ティホーンが奇跡を行う者であり、神に深く愛された偉大な聖人であったことがわかります。

聖ティホンの礼拝では、さらに、彼が自らの死の時期を預言的に予知し、他の人々に告げたことも語られている[4490] 。

この奇跡行者ティホンのような聖性に対し、今、そして常に、そして世々限りなく、私たちの神に栄光がありますように。アーメン[4491] 。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちに天使、そして奇跡行者として現れた、神を宿す我らの父ティホーンよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに力を与えた方に栄光あれ、あなたを冠した方に栄光あれ、あなたを通してすべての癒やしをなされる方に栄光あれ。

[4489] 聖ディミトリ・ロストフスキーが記しているように、聖ティホンの生涯と奇跡に関する詳細な情報は、今日まで伝わっていない。それは、度重なるイスラム教徒の侵攻と長い歳月の経過により、多くの教会が廃墟と化しただけでなく、そこに保管されていた教会の記録も失われてしまったためである。

[4490] 第7歌第2節および第8歌第1節。

[4491] 聖ティホンは、ギリシャ皇帝アルカディウス（395～408年）およびその息子テオドシウスの治世に生きた。

コンダク、第3調:

聖なる、神に愛される断食の生活を送り、高き所から慰め主の力を授かり、偶像の誘惑を打ち砕き、人々を救い、悪魔を追い払い、病を癒やされました。このゆえに、私たちはあなたを神の友として崇めます、至福のティホーンよ。

私たちの尊き父、ルホフの奇跡行者ティホンの記念日

記念日：6月16日

私たちの尊い父ティホンは、リトアニア領内の小ロシア出身であり、そこで軍務に就いていました。ラテン人による暴力を耐えかねて、彼は帝都モスクワに移り住み、そこで敬虔な生活を送るようになりました。　その後、その極度の謙遜さから、自身の財産を貧しい人々に施し、修道者となり、ルハ川沿いに定住した[4492]。ここで彼はスキート（小修道院）を設立し、多くの弟子を集め、神に喜ばれるよう断食と節制に励んだ。　その深い謙遜ゆえに、彼は最期を迎えるまで司祭の聖職を受け入れなかった。神のもとへ旅立つことをあらかじめ知り、弟子たちの魂の益となるあらゆることを教え導いた後、尊者様は永遠の住処へと旅立たれた[4493]。

尊者のお亡くなりになってから何年も経った後、その聖遺骨が発見され[4494]、そこから多くの癒しがもたらされるようになった。その後、信者たちの熱心な努力により、尊者が修行を積んだ場所に尊い修道院が建立され、神の祝福により今日に至るまで存続している。

6月30日

6月17日（旧暦）

聖殉教者マヌエル、サヴェル、イスマイルの殉教

記念日6月17日

聖殉教者マヌイル、サヴェル、イスマイルは実の兄弟であり、ペルシャの[4495]地方の出身であった。彼らの両親は名士であったが、信仰は一致していなかった。父はペルシャの異教を信仰し、母は敬虔なキリスト教徒であった。　母は幼い頃から子供たちをキリスト教の敬虔さの中で育て上げた――まるで幼少期に母乳で育て、神を畏れる心を持って成長させたかのように。そして、祝福された長老エヴノイクは、聖なる洗礼の水によってこの聖なる兄弟たちを誕生させ、彼らに神の御言葉を教えた。　彼らが成人すると、軍人として登録された。しかし、肉体の力をペルシャ王アラムンダル[4496]に捧げつつも、その精神においては常に天の王、我らの主イエス・キリストに仕え、善行をもってあらゆる面で主に喜ばれるよう努めた。

[4492] クラズマ川の左支流であるルフ川は、現在のコストロマ州とウラジーミル州を流れ、ユリエフ郡に源流を持つ。

[4493] 尊者ティホンの入寂は1503年6月16日であった。

[4494] 1566年頃、コンスタンティン修道院長のもとで、尊者ティホンの聖遺骨が腐敗することなく発見され、それ以来、彼の記念日が祝われるようになった。

[4495] 当時のペルシャ帝国は、ティグリス川、ペルシャ湾、カスピ海に囲まれた広大な地域を占めていた。

[4496] ペルシア王としてのアラムンダルについては、歴史上まったく知られていない。一部の人々は、彼がペルシアの将軍の一人であったと考えている。

ある日、彼らは自国の王から、ギリシャ・ローマ皇帝ユリアヌス・背教者[4497] のもとへ、彼との和平締結のために使者として派遣された。ユリアヌスは当初、彼らを丁重にもてなし、あらゆる面で恩恵を施し、常に友好的に接していたが、　しかしその後、彼らがキリスト教徒であることを知ると、彼らに対して激しい怒りに満ち、すべての民族に共通する慣習や法律に反して、キリストへの信仰ゆえにこの兄弟たちを拷問にかけ、最も過酷な拷問の末に彼らを処刑した。

彼らの殉教の経緯は次の通りである。

ある日、この不法な皇帝は、ビフィニアにあるオルギア・トリゴン[4498] と呼ばれる地へ赴くことを企てた。というのも、そこではまもなく、神に忌み嫌われる異教の祭りの一つが迫っていたからである。 彼が、コンスタンティノープルからハルキドン[4499] へと船で渡り、前述の場所に到着すると、すぐに、そこに集まった大勢の民衆と共に、その忌まわしい祝祭を行い始め、偶像を崇拝し、悪魔たちに数え切れないほどの生贄を捧げた。　――こうして、歌や音楽、ティンパニの演奏を伴う絶え間ない饗宴がここで始まった――そして、この間、破滅をもたらす異教の神々を称えて、ここでは多くの忌まわしい不法行為が行われた。

一方、キリストの僕たちであるマヌエル、サヴェル、イスマイルは、皇帝と共にその場にいたにもかかわらず、この不敬な祝祭を見ることも拒んだ。　ある時、彼らは歓喜に沸く人々から離れ、遠くに立って、これらの人々の惑わされ、迷いについて嗚咽し、涙を流し、主なる神に祈りを捧げた――自分たちが偶像崇拝の犠牲との交わりによって汚されないようにと、また、迷っているすべての人々が主によって真理を知るよう導かれるようにと。

「主よ、どうか」と彼らは祈った。「これらの人々を、これほど甚大な悪の破滅の中に置き去りになさらないでください。また、あなたの知性ある被造物が、このような狂気の中に留まることを許さないでください。　――何しろ彼らは、自分たちが崇める石や木よりも、ここではさらに理性を欠いているのだから。少なくとも、彼らの木製の偶像は、感覚もなく生命もない被造物として、自分たちの目の前で何がなされているのかを知らない。　それに対し、御前にて理性ある魂をもって尊ばれ、御自身の姿と似姿であるこれらの人々は、自分たちが何を行っているのか、また誰に神聖な敬意を捧げているのかを見ず、理解もしていない。彼らは闇の中を歩み、迷い、永遠の滅びへと向かっている。

聖人たちが遠く離れてそのように泣き、祈っている間、皇帝は、犠牲を捧げる者たちや彼らと共に宴を催している者たちを見つめ、自分のそばにペルシャの使節たちの姿が見当たらないのを見て、彼らを探し出し、自分のところへ呼び寄せて、共に楽しもうと命じた。　すると、王の侍従の一人が、彼らが別々に立っているのを見つけ、王の祝宴へと呼び寄せようとした。彼は、彼らもまた偶像崇拝という不敬虔な者たちの一員だと思っていたのである。しかし、キリストの僕たちは、彼らを招いた王の侍従に、口を揃えてこう答えた。

「私たちから離れなさい。私たちは幼い頃から育まれてきたその信仰を捨てはしない。それゆえ、私たちの主を見捨てたり、あなた方の中に宿る悪魔たちにひれ伏したりはしない。また、この明らかな迷いに加担するようなことがあってはならない。 我々は、生ける 神、すなわち我らの創造主を軽んじて、魂なき被造物に拝礼するような、それほど狂気じみて愚かな者ではない。そもそも我々がこれほど長い道のりを経てここへ来たのは、自らの信仰を捨て去るためではなく、ペルシャとギリシャ・ローマ両国との間に平和を築くためである。　そして、あなたの王も、彼と志を同じくする者

[4497] コンスタンティヌス大帝の兄弟コンスタンティウスの息子ユリアヌスは、西暦331年に生まれた。当初はキリスト教の教えを受けていたが、355年にカエサルとなった際、公然とキリスト教から離反したため、「背教者」という異名を得た。

[4498] 一般に、トリゴンはハルキドン近郊にあった、偶像に捧げられた神殿そのものだったと考えられている。

[4499] ハルキドンはビフィニアの都市で、ボスポラス海峡の南端、ビザンティウムの対岸に位置する。

たちも、たとえ私たちを火や拷問にさらし、命そのものを奪ったとしても、私たちを彼らの不敬虔な道へと引き離したり、説得したりすることはできないことをよく知っている。

その後、侍従長は聖徒たちから離れ、これらの言葉をユリアヌスに伝えた。ユリアヌスは直ちに彼らに対して怒りと憤りを燃やしたが、自身の不敬虔な祝宴を妨げないよう、彼らを直ちに拷問にかけることはせず、朝まで延期し、ただ神の僕たちを牢獄に閉じ込めるよう命じた。

一方、彼らは牢獄へ向かう途中、主に向かって次のように歌った。

「*さあ、主を賛美しよう。私たちの救いの砦である神に叫び上げよう。賛美をもって御前に進み出て、歌をもって主を賛美しよう*」（詩編94:1–2）。

そしてまた：

「*わが神ほど偉大な神は、ほかに誰がいようか！*」（詩編76:14）。我らは神の民であり、神の御手の御業である。我らは常に神を呼び求めるであろう。

翌日、ユリアヌスは法廷に上り、ペルシャの使節たちを呼び寄せ、彼らにこう語りかけました。

「諸君、善良な人々よ、君たちの王は、自らに忠実であり、我々に対しても好意を抱く者として、君たちをここに遣わした。それは、両王国間に、誰もが待ち望んでいた平和を回復するためである。　しかし、この平和は、愛に満ちた調和と相互の親愛によってのみ、我々の間に回復されるものである。それにもかかわらず、昨日、あなた方が我々と共に祝宴を催し、あなた方ペルシア人も崇めるのと同じ神々を称えて歓喜に浸ることを拒んだのであれば、一体どのような調和が我々とあなた方の間にあり得ようか。また、あなた方の我々に対する愛はどこにあるというのか。[4500] 何しろペルシア人も、私たちと同様に、太陽、月、星――すなわち、最も輝かしい炎の力――や、その他の私たちの神々を崇拝しているのです。それなのに、なぜあなた方は私たちと共にそれらを崇拝することを拒み、私たちの神々への奉仕に参加しようとしなかったのでしょうか。たとえ、平和締結に関する私たちの条件をより強固で確固たるものにするためだけでもあったとしても。　しかし、もしあなたがたが我々の神々を軽蔑し、貶め、我々と心を一つにしていないのであれば、それは、平和を確立するためではなく、それを破り、敵意と戦争を再開するために我々の元へ来たということになる。

これに対し、聖なる人々は次のように答えた。

「我らは、我らの王の命により、平和条約を締結するために貴殿のもとへ参りました。それは、貴方の軍勢が我らの領土に踏み込まないよう、また我らの軍勢が貴方の領土に踏み込まないよう、互いの国土を荒廃させないためです。また、我らの商人が常に貴方の国へ、貴方の商人が常に我らの国へ自由に往来できるよう、そして双方が何の妨げもなくそれぞれの故郷へ帰れるようにするためです。　――こうした条件について話し合うために、我々は貴殿のもとへ遣わされたのであり、決して神々について論じるためではない。　誰もが、望む神を、望む通りに崇拝すればよい。信仰のせいで王国間の戦争が起こることは決してない。しかし、争いや不和、戦いは常に、都市や地域、そしてそれらの境界や領土をめぐって生じるものである。　それなのに、あなたは、私たちがあなたのもとへ派遣された目的である平和に関するあらゆる交渉を脇に置き、私たちとあなたが語るべきではない別の話題を持ち出そうとしている。あなたは、ご自身の帝国の繁栄について、あるいはあなたの国と国境を接する私たちの国家との平和的な関係について話すのではなく、常に神々について問い詰め、信仰について論じているのだ。　もしあなたがそう望むのであれば、知っておいてほしい。我々は生まれはペルシャ人ではあるが、信仰においてはキリスト教徒であり、母から敬虔さを教えられ、霊的な父である長老エヴノイコスから真の信仰を授けられたのである。　また、わが祖国においても、かつ

[4500] 哲学的・宗教的信念において、ユリアヌスは折衷主義者であり、すなわち、あらゆる宗教的教義の中から、自分が気に入り、かつ自身の世界観に概ね合致するものをすべて選び取っていた。　彼は唯一の至高の神を信じていたが、その神をミトラや東方信仰の太陽神と同一視していた。そして、周知の通り、ペルシア人もまた、太陽を主要な神として崇めていた。

て多くの者が、私たちを主イエス・キリストから遠ざけて偶像崇拝へと導こうとしましたが、その企ては失敗に終わりました。主の恵みにより、私たちは信仰の告白において揺るぎなく堅固であり続けました。　今もなお主の助けを頼りにしております。すなわち、今ここで誰も私たちを聖なる信仰から引き離すことはできず、また誰も、真に虚しく、あらゆる惑わし、迷い、偽りに満ちた悪魔の礼拝へと転向するよう説得することはできないと確信しております。

すると、拷問官は怒りに満ちて、彼らにこう言った。

「お前たちは、素朴で無知な者たちであり、我々の言語さえ知らないというのに、どうしてこれほど厚かましく、これほど狂気じみた言葉で、我々のような教養があり、あらゆる学問を完璧に修めた者たちが信奉する信仰を冒涜する大胆さを見せられるのか？」　我々は、あなた方の教えについても熟知している。あなた方も知っている通り、私はあなた方のキリスト教の書物も研究したが、そこには嘘ばかりで真実が何一つないことを知り、そこに書かれた内容が曖昧であるために何らかの迷いに陥らないよう、直ちにそれらを拒絶したのだ。　そして、あなたの書物を信じ、それに従って行動する人々のうち、誰がこれまで栄光に満ちた完璧な人物として自らを証明し、その生涯において何らかの立派な行いをしたというのでしょうか？　それゆえ、あなたにこう助言する――その幼稚で虚偽に満ちた思索は捨て、古くから優れた哲学者たちが教えてきたことを信じるほうがよい。もしあなたが私の善意ある助言を受け入れようとしないならば、たとえ本意でなくとも、私が直ちにあなたに与える苦痛に従わざるを得なくなるだろう。

これに対し、聖人たちはこう答えた。

「我らは主から、肉体を殺す者を恐れてはならず、我々を苦しめようとする者たちに答えるべきだなどと考えてはならないと教えられました。なぜなら、聖霊ご自身が苦しみの中で我々を強め、答えるための言葉と勇気を与えてくださるからです。それゆえ、我らはあなたに問います。自らをすべての人の中で最も賢い者と自負するあなた、我らの中にどのような狂気を見出すのですか？　そもそも、どちらがより不合理なのでしょうか――真の神であり万物の創造主を知り、敬虔にその方を崇める者か、それとも、生ける神から離れ、魂のない被造物や石、木、あるいはそれらに類するものなどを崇拝する者か？　まことに、神の代わりに死んだものを崇める者は狂っている。一方、生ける神に仕える者は賢明である。　なぜなら、人間の理性の第一の務めとは、自らの創造主であり、あらゆる賜物を与えてくださる方を知り、その方を信じ、熱心にその方に仕えることにあるからだ。しかし、自らの創造主であり恩人であるその方を知らず、自らの敵である、魂を滅ぼす悪魔のために働くこと――これこそが、極度の愚かさである。　そして、そのような有害な迷いの中にあったあなたがたの古代の哲学者たちは、ただ賢いように見えただけであり、実際には最も愚かな人々であった――聖使徒の言葉にあるように、*「自分たちを賢い者と呼びながら、正気を失った」*（ローマ1:22）のであり、彼らの愚かな心は曇ってしまった。　あなたはまさに彼らに似てしまったのです。いや、それ以上に悪いかもしれません。　なぜなら、彼らは真の信仰を知らず、かつて一度もそれを告白したこともないまま、その狂気の中に留まっていたが、あなたは聖なる洗礼によって啓蒙され、キリスト教の中で育てられたにもかかわらず、キリストなる神から背を向けた。そして今や、主を真に信じるすべての人々から、キリスト教徒ではなくギリシャ人と呼ばれ、敬虔な者ではなく不敬虔で無神論者と呼ばれているのだ。

殉教者たちのこうした言葉に激しく憤り、計り知れない怒りに満ちたユリアヌスは、直ちに彼らを残酷に拷問するよう命じた。　まず彼らを裸にし、地面に寝かせ、容赦なく厳しい鞭で背骨や腹を打ち、その後、拷問の場に吊るし、手足を木に高く釘付けにし、鉄の棘で全身を削り取った。　しかし、キリストの殉教者たちは、この激しい苦痛を勇敢に耐え忍び、天を仰ぎ見て主に祈りながら、こう叫び求めた。

「おお、主よ！ かつて御自身も不信仰なユダヤ人たちによって木に釘付けにされ、十字架上の受難と死によって世の罪を消し去られた御方よ、　――今、傷だらけで木に吊るされている私たちに

御目を向けてください。私たちの肉体は弱きものですから、天より御助けをお送りくださり、私たちの苦しみを和らげてください。なぜなら、あなたへの希望があるからこそ、私たちはこの殉教の業に敢えて挑んだのです。　この苦しみがいかに残酷で恐ろしいものであるか――主よ、あなたご自身が知っておられ、ご覧になっておられますが、あなたへの愛ゆえに、おお、最も甘美なるイエスよ、それらは私たちにとって喜びなのです！

聖人たちがこのように祈っていると、突然、主の御使いが彼らの前に現れました。しかし、その御使いを見ることができたのは聖なる殉教者たちだけであり、不義な者たちの曇った目は、それを見るに値しませんでした。　この天使は、苦しむ者たちを慰め、彼らの苦しみの中にこれほどの慰めを与えたため、彼らはまるでもはや傷の痛みを感じなくなっているかのようであり、さらには――これらすべての苦しみなど一度も味わったことさえないかのようにさえ思われた。　その後、ユリアヌスは聖なる殉教者たちを木から降ろすよう命じ、彼らが降ろされると、まるで彼らを嘲笑うかのようにこう言った。

「ほら、私はあなたたちを憐れみ、さらに大きな苦しみにはさらさないのだ。この比較的軽い罰を受けた後、あなたたちは今や私たちと心を一つにしてくれることを期待している。」

しかし、聖なる殉教者たちは、その言葉の虚偽を十分に看破し、さらに大胆にこう答えた。

「キリストの敵よ、我々が主への信仰を裏切るなどとは、決して思うな、期待するな。　さあ、もしさらに私たちを苦しめたいのなら、私たちの肉体を苦しめ続けなさい。私たちはあらゆる苦難に耐える覚悟がある。たとえ傷を負わせようとも、　火や剣、あるいはそれ以上に恐ろしいものにさらそうとも――これらすべてを、私たちは苦しみというよりはむしろ喜びと見なす。私たちを愛してくださったイエスのために、これらすべてを喜びをもって耐え抜くのだ！

すると、不義のユリアヌスは、兄弟たちの長であるマヌエルが他の兄弟たちよりも多く、かつ大胆に語っているのを見て、彼を脇へ連れ去るよう命じ、自ら残りの二人――サヴェルとイスマイル――と会話を始め、狡猾にこう語りかけた。

「お前たちは同じ両親の子供ではあるが、性格は全く異なる。長兄は、頑固で、悪意に満ち、恥知らずで、口数が多く、議論好きであり、その狂気の中で頑なに譲らず、お前たちをも巻き込み、自分たちにとって最善の道を選ぶことを許さない。　一方、君たちは、私の見る限り、善良で温厚、口論を好まず、総じて分別がある。　さあ、今こそ私の善意ある助言に耳を傾けてください。――その兄を、彼の虚しい迷いと狂気じみた抵抗の中に置き去りにし、――私たちの神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、あなた方は神々から大きな慈悲を、そして私たちからは豊かな贈り物と名誉を受けることになるでしょう。

しかし、聖人たちは、こうしたお世辞めいた言葉に耳を貸すことさえ拒み、ユリアヌスの狡猾さを大声で糾弾し、その狂気を激しく非難し始めた。

すると、ユリアヌスは再び怒りに燃え上がり、彼らを拷問場へ連行し、燃えるろうそくで肋骨を焼くよう命じた。しかし、殉教者たちはこの苦痛を勇敢に耐え抜き、終始、主を賛美し、拷問者を非難し続けた。　その後、ユリアヌスは再びマヌイルを連れてくるよう命じ、時には甘言を、時には脅しを用いて、彼に偶像への礼拝を強要し始めた。ついに、彼が岩のようにキリストへの信仰を揺るぎなく守っているのを見て、兄弟たちと同様に彼を拷問し始めた。　彼は、各殉教者の頭に鉄の釘を打ち込み、手足の爪には鋭い杭を打ち込むよう命じ、すでに深く傷つけられた彼らに対し、剣で首を切り落とし、その遺体を焼き払うよう命じた。

こうして、聖なる殉教者たちは処刑場――コンスタンティノヴォと呼ばれる場所――へと連行され、そこで自らの血を流す前に、彼らは最後に主に向かって次のような祈りを捧げた：

「義なる神よ、初めなき方よ、すべてのものを無から有へと導き出し、私たちの救いのために終わりの日に御自身を低くされ、人の姿をとって人々と共に住まわれ、私たちを罪の束縛から解放し、御自身の御国の相続人とするために十字架の苦しみを耐え忍ばれた方よ、　――どうか、御自分の

しもべたちを平安のうちに迎え入れ、古より御心にかなった者たちの列に加え給え。私たちは、御名の聖なるゆえに、この剣による斬り殺しと、現世からの旅立ちを喜んで受け入れるからである。――そして、全き憐れみ深き主よ、　悪魔に支配されたこの民――私たちを取り囲むこの大勢の民を御自身のもとに引き寄せ、彼らに心の啓発と真理を知る知恵をお与えください。そうして、唯一の真の神である御あなたを知り、ただ御あなたのみを礼拝し、御あなたから永遠の救いを受けられるように。

聖なる殉教者たちがこのように祈っていると、上空から声が聞こえてきました：

「さあ、栄光の冠を受け取りに来なさい。あなたがたは勇敢にその偉業を成し遂げたのだから。」

聖なる殉教者たちは、6月の17日に斬首された。

しかし、不義な家来たちが、その不法な王の別の命令――キリストの受難者たちの遺体を焼き払うこと――を遂行しようとしたとき、神の御命令により、瞬く間に　大地が揺れ動き、聖人たちが横たわっていた場所が深く沈み込み、こうしてできた深淵が殉教者たちの遺体を受け入れ、隠した。それは、拷問者たちの邪悪な手が二度と彼らに触れることがなく、また火の力が彼らを灰に変えてしまわないようにするためであった。そして、すべての家来たちは恐怖のあまり逃げ去った。

その時、そこに立っていた民衆の多くは、この奇跡を目撃してキリストを信じ、ギリシャの迷いを捨てて、キリスト教徒の共同体に加わった。

二日が過ぎ、その間、キリスト教徒たちは昼夜を問わず絶えずこの場所で主への祈りを捧げていたが、再び大地が割れ、聖人たちの遺体を地上に現した。すると、至る所から言葉に尽くせないほどの芳香が漂い出した。

その時、信者たちは大きな喜びに満たされ、愛を込めて聖人たちの遺体を受け取り、この驚くべき場所に尊厳をもって埋葬した。その後、聖殉教者たちの棺からは、すべての病める者たちへの癒しが豊かに注がれるようになった。

そして、不敬虔な背教者ユリアヌスは、その直後に、象徴的かつ恐ろしい死を遂げた。

ペルシャの使節たち、すなわち聖殉教者マヌイル、サヴェル、イスマイルを殺害した後、彼は全軍を率いてペルシャへと向かった[4501]　。これは、悪魔たちが、彼に勝利とペルシャ人の征服を予言した魔術師たち――偽預言者たち――を通じて、彼を惑わしたためであった。　一方、ペルシア王は、自国の使節たちが虐殺されたとの報を聞き、深い悲しみと激しい怒りに満たされた。法に背くユリアヌスが自分に向かって進軍していることを知ると、彼もまた全軍を召集し、自国の国境に陣を敷いて、高慢な敵に立ち向かった。　そして両軍が激突すると、壮絶な戦いが始まった。しかし、ペルシア軍はすぐに優勢に立ち、ローマ軍を打ち破り、こうしてユリアヌスの全軍を壊滅させた。

まさにこの戦いの最中、神を背いたユリアヌスに神の怒りが下った。　不敬虔な皇帝は目に見えない御手によって打たれ、激しい苦痛のうちに死に至り、最後には、虚しい希望を抱いて高慢に挑みかかったペルシャ人全員の笑いものとなった――彼が信仰し、これほどまでに頼りにしていた悪魔たちの喜びとなるべくして。

一方、キリスト教徒たちは、このようにして残酷な迫害と苦しみから解放され、彼らの救い主であるキリスト・神を賛美した。父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、キリスト・神に栄光と誉れがありますように。アーメン[4502]。

[4501] 周知の通り、ユリアヌスは363年3月5日、ペルシアに対する遠征に出発した。

[4502] これらの聖人たちを記念する厳粛な祝典は極めて古くから行われていた。彼らの死後30年が経過した395年、テオドシウス大帝は彼らに敬意を表してコンスタンティノープルに教会を建立し、修道士ヘルマン（後に総主教となり、740年に没）は彼らを記念してカノンを著した。

コンダク、第2調:

キリストの信仰によって傷つけられた至福なる方よ、この杯を忠実に飲み干して、ペルシャの支配と横暴を地に打ち倒し、三位一体に等しい方よ、私たちすべてのために祈りを捧げてください。

7月

7月1日

6月18日（旧暦）

聖殉教者レオントス、イパティオス、テオドゥロスの殉教

記念日6月18日

ウェスパシアヌス帝の治世[4503]、ローマにはアドリアヌスという名の元老院議員がいた。彼は残酷で、容赦がなく、あらゆる悪事を企むことに長けた人物であった。 彼は、キリスト教徒たちが偶像への生け贄を忌み嫌い、ローマ人やギリシャ人が崇める神々を冒涜していると耳にした。彼らは唯一の真の神であるキリストのみを認め、多くの人々をその信仰へと導いていたからである。 自らの虚しい神々に対する嫉妬に駆られたアドリアンは、王のもとへ赴き、キリスト教徒に偶像崇拝を強要する権限、および神々を崇拝することを拒む者を拷問し殺害する権利を授けるよう懇願した。 王はアドリアンをフィニキア地方のイゲモン（総督）[4504]に任命し、キリストを信じる者すべてを迫害する権限を与えた。 アドリアヌスがローマを出発し、すでにフィニキアに近づいた頃、トリポリの町[4505]に、先祖代々の掟を乱す軍司令官レオティオスがいることを知った。すなわち、彼は古代の神々を非難し、それらを崇拝したり生贄を捧げたりしてはならないと教え、その言葉に耳を傾けた多くの人々を偶像崇拝から遠ざけていたのである。 ハドリアヌスは直ちに、トリポリ（ ）へ、トリブヌス・イパティアス（[4506] ）を、兵士1,000人（[4507] ）の部隊を率いて派遣し、レオンティウスを捕らえて、自身が到着するまで拘束しておくよう命じた。

キリストの僕であるレオティウスはギリシャ出身であった。背が高く、力強く、男らしい彼は、戦場での勇敢さで際立っており、数多くの勝利を収めていた。そのため、兵士たちの間ではレオティウスは名声と尊敬を集めていた。 さらに、生まれつき聡明で、豊かな人生経験と学識を兼ね備えていたレオティウスは、助言と統治に長けた人物であった。唯一の真の神、主イエス・キリストが存在することを知っていたレオティウスは、言葉だけでなく行いによっても信仰を示し、生涯を主への奉仕に捧げた。 貧しい者たちに慈愛を注ぎ、飢えた者を養い、裸の者に衣を与え、旅人に宿を提供し、一言で言えば、あらゆる善行をもって自らを飾ったため、主から勝利の冠を授けられたのである。

[4503] 在位は70年から79年まで。

[4504] イゲモン——地方総督。

[4505] トリポリ——港を持つフィニキアの沿岸都市。レバノンの最高峰の麓に位置していた。

[4506] トリブーン——1000人の兵士からなる部隊の長。

[4507] スピラ——中隊（使徒行伝10:1）または連隊（使徒行伝21:31）。

軍勢がトリポリに近づいたとき、トリブーンのイパティオスは予期せず突如として熱病に倒れ、その原因を兵士たちに次のように説明した。

「私がこの病に襲われた理由は分かっている。この旅に出る際、神々にふさわしい供物を捧げなかったために、神々が私に怒りを抱いたのだ。だからこそ、神々は病という罰を下したのだ。」

トリブヌスが実際に重い病に倒れたのを見て、兵士たちは彼に同情し、彼の悲しみを共に悲しんだ。三日が過ぎても、病人は何も口にしなかった。病状は刻一刻と悪化し、死の危機に瀕していたからである。三日目から四日目にかけての夜、トリブヌスの前に主の天使が幻として現れ、こう言った。

「もし健康になりたいのなら、兵士たちと共に三度、天に向かって『レオンティオの神よ、私を助けてください！』と叫びなさい。そうすれば、すぐに癒やされるだろう。」

彼は素早く身を起こして目を開くと、内なる熱に苛まれていたトリブーンは、真っ白な衣をまとった美しい若者の姿で自分の前に立っている聖なる天使を目にした。

「私は」と彼は天使に言った。「兵士たちと共に、レオンティウスを連行し、イゲモン・ハドリアヌスの到着まで彼を監視するよう命じられてきた。それなのに、あなたは私にレオンティウスの神に助けを求めるよう命じているのか。」

その言葉を言い終えるやいなや、病床のトリブンの目の前から天使は姿を消した。恐怖に駆られたトリブンは、そばで眠っていた友人たちを起こし、こう言った。

「聞いてくれ、私にこんな幻が見えたのだ。最初の眠りに落ちた途端、私の前にある明るい若者が現れ、君たち全員と共に神レオティオスを呼び求めるよう勧めてきた。そうすれば回復すると約束してくれたのだ。目を覚ましてから、私はその若者をこの目でも見たが、その後すぐに彼は姿を消してしまった。」

「それほど難しいことではない」と友人たちは言った。「君が元気になれば、僕たちは皆、その通りにするよ。」

トリブンの友人たちのうち、テオドゥルスという名の男は、その幻影に特に強い驚きを覚え、現れた若者の容貌がどのようなものだったのかを病人に詳しく尋ねた。トリブンは快く彼の好奇心を満たしてやった。　そして、テオドゥルの心は、彼にとって未知の神レオティウスへの愛で燃え上がった。兵士たちが眠りから覚め、病床のトリブンの周りに集まり、彼からその幻視について聞かされると、例外なく全員が立ち上がり、苦しむトリブンと共に空を見上げながら叫んだ。

「レオンティオス神よ、助けてください！」

するとたちまち、トリブーンはまるで病気だったことなどなかったかのように元気を取り戻した。昼食の時間となり、トリブーンは友人たちと共に食事と酒を楽しみ、賑やかに過ごした。トリブーンに現れたこの奇跡は、テオドゥルにさらなる驚きをもたらした。彼は一人離れた場所に座り、黙って考え込んでいた。

「レオンティウスとは一体誰なのか。そして、レオンティウスの神とは誰なのか？」

その間、友人たちはフェオドゥルに祝宴への参加を勧めたが、彼は空腹を選ぶとして、何も口にしようとはしなかった。そして、酒に酔った兵士たちがイゲモンの命令を忘れてしまっているのを見て、フェオドゥルは彼らにこう言った。

「明日か明後日にはアドリアヌスが追いついてくるだろうに、我々は命令された男を探し出すことなど全く考えていない。もしよければ、私とトリブーンが皆より先に町へ向かい、探しに行くべき人物を探してこよう。」

その後、トリブーンを説得して同行させると、テオドゥルとイパティオスは二人で町へと向かった。

トリポリがある山の頂上に登りきったその瞬間、レオティオスが彼らを迎えに出てきて、次のように挨拶した。

「主を喜びなさい、兄弟たちよ！」

「あなたも喜びなさい、兄弟よ！」と、トリブーンとテオドゥルが答えた。

「誰を探しに来たのですか？」とレオティオスが尋ねた。

「ウェスパシアヌス皇帝陛下は」と彼らは言った。「この町にレオティウスという名の、高潔で、賢明で、徳高く、勇敢な戦士である人物が住んでいると知りました。私たちは彼の居場所を突き止めるために遣わされたのです。私たちの後ろには、皇帝陛下がこのフェニキア全土の統治を任せたイゲモン、アドリアンが従っています。　イゲモン自身も、神々に愛される人物としてレオティウスを直接お目にかかりたいと望んでおり、その後、彼を大いなる栄誉をもって皇帝のもとへ送り出そうとしています。また、ローマ元老院全体もレオティウスに会いたいと願っています。というのも、戦場での彼の勇敢さ、統治の才、敬虔さ、そしてその他多くの輝かしい功績が、皆に知れ渡っているからです。

これを聞いて、至福のレオティウスはこう言った。

「あなたがたはよそ者であり、この街で何が起きているのかご存じないようですね。　私のところへ来なさい。旅の疲れを癒やしてから、あなたがたが『神々の友』と呼ぶレオンティウスをお見せしましょう。実のところ、彼はあなたがたが崇める神々の友などではなく、主イエスを信じるキリスト教徒であることを知っておいてください！」イパティオスとテオドゥルスは互いにこう語り合った。

「レオンティウスをキリスト教徒だと言うこの男は誰だ？　彼の親戚ではないのか？」

それから、彼らは見知らぬ男に尋ねた。

「お名前は？」

「私の名についてですが」と彼は答えた。「書物にはこう記されています。*『あなたはアスピドとバシリスクを踏みつけ、獅子と竜を踏み砕くであろう』*（詩篇90:13）。なぜなら、私は獅子――目に見えない敵である悪魔――と、蛇――目に見える敵である支配者――を踏み砕かなければならないからです。　私は、アスピドやバシリスクのように、また悪魔の熱心な僕であるその助言者たちをも打ち負かさなければならない。そして、私が獅子の全軍勢に勝利を収めたとき、その事柄そのものが私の名を明らかにするだろう。

この言葉は、トリブヌスとテオドゥロスには謎めいて聞こえた。その意味を理解しようと努めつつ、彼らは戸惑いながらも、この驚くべき男の後を追い、彼の家へと向かった。聖レオンティウスは彼らをもてなし、食事を用意した。それを口にした二人は、主人にこう言った。

「親切な人よ、あなたのもてなしに大変満足しました！　どうか最後まで私たちへの恩恵を示してください――私たちが探しているレオティウスを紹介してください。アドリアンが到着した暁には、あなたが私たちのためにどれほど多くのことをしてくれたかを彼に伝えましょう。そうすれば、彼はあなたに大きな栄誉を授け、あなたは王の友人たちと親交を深めることになるでしょう。」

「私が、あなたがたが探しているレオティウスです」と聖人は答えた。「私は、アドリアンが捕らえるようあなたがたを遣わした、イエス・キリストの戦士なのです。」

すると、トリブーンとテオドゥルスはレオンティウスの足元にひれ伏し、こう言った。

「至高の神のしもべよ！　私たちの罪をお赦しください。そして、どうか急いであなたの神に私たちのために取り成し、神が私たちをも偶像崇拝の不義と、凶暴な獣であるハドリアヌスから救い出してくださいますように。私たちはキリスト教徒になりたいのです。」

その後、彼らは、病床の者に天使が現れたことや、レオティウスが神に呼びかけた直後にトリブンの病が癒やされたことを彼に伝えた。

キリストの力の現れを目の当たりにして、聖レオンティウスは喜びに満たされた。地面に十字の形に身を伏せ、涙を流しながら神にこう祈り始めた。

「主なる神よ、　*『すべての人が救われ、真理を知るようになることを望んでおられる方』*（テモテへの手紙一 2:4）よ、この時に私たちに御目を向けてください。あなたは、私が従うべきであった者たちが、私の後に従うようにしてくださったのです。あなたの羊である私を守り、彼らをも私と共に、あなたの憐れみの光で照らしてください。　彼らに御聖霊の恵みを注ぎ、彼らの内に清い心を築き上げ、御聖なるしるしをもって彼らを覆い、彼らを御自身の無敵の戦士となさってください。——敵である悪魔とその僕たちに対して、彼らを武装させ、強めてください。　この御僕らが、目に見えぬ蛇の頭と、目に見える邪悪な獣アドリアノスの頭を打ち砕きますように。

聖レオンティオスの心温まる祈りの後、明るい雲がイパティオスと彼の友人テオドゥロスのいる演壇を覆い、雨を降らせて彼らに洗礼を授けました。その間、聖レオンティオスは洗礼を受ける者たちの上に、至聖なる三位一体、すなわち父と子と聖霊の御名を呼び求めていました。

この奇跡的な洗礼の後、彼は神を賛美してこう言った。

「わが神よ、あなたに栄光あれ！　あなたを愛する者たちの祈りに耳を傾け、あなたを畏れる者たちの願いを叶えてくださる方よ！」

聖レオンティウスは、新しく洗礼を受けた者たちに白い衣を着せ、彼らの前を灯された蝋燭が運ばれるよう命じた。その頃、道中で遅れをとっていた残りの兵士たちも町に到着した。彼らはレオンティウスの行方、そして自分たちのトリブーンやテオドゥレについて尋ね回った。　兵士たちは彼らを見つけると、イパティオスとテオドゥロスが手にした灯ったろうそくと白い衣を見て、極めて驚き、戸惑った。　二人がキリスト教に改宗し、洗礼を受けたことを知ると、兵士たちは最初は戸惑い、やがて憤りを露わにした。その頃、イパティオスとテオドゥロスの洗礼の知らせは、街の市民の一部にも伝わった。市民たちは、「

「我らの神々を冒涜する者どもを、焼き殺せ！」

街には不和と混乱が生じた。ある者はレオンティウスや他のキリスト教徒たちを擁護したが、別の者たちは彼らを殺そうとした。しかし、いずれにせよ、彼らはイゲモンの到着を待ち、独断でキリスト教徒たちに危害を加えることを敢えてしなかった。

二日が過ぎると、イゲモン・ハドリアヌスが街に近づいた。出迎えた市民たちは、レオンティウスや、彼に率いられた他のキリスト教徒たちについて、すべてを彼に報告した。

「ある男がいます」と彼らは語った。「名はレオンティウス、信仰はキリスト教徒ですが、彼だけが知る魔法の策略を用いて、皆を我らの神々から遠ざけています。同時に、彼はユダヤ人たちが告発の末に死刑に処し、ピラトが鞭打ちの末に十字架にかけたある人物を称賛しています。」　ついには、このレオティオスという男は、魔術によって王の兵士たちさえも惑わし、彼らにガリラヤの信仰を受け入れるよう説得してしまった。そして、すでに三日もの間、彼は彼らを白い衣に身を包ませ、自分の家に閉じ込めたまま、かつて十字架にかけられたキリストを共に賛美し、数え切れないほどの冒涜の言葉で我々の神々を侮辱している。

ハドリアヌスは直ちに兵士たちを派遣して、レオティオス、トリブヌスのイパティオス、そしてテオドゥロスを捕らえさせ、彼らを牢獄に閉じ込め、裁判まで拘束するよう命じた。　その後、都市に入ったイゲモンは、その日を休息の日と定めた。牢獄に囚われていた聖レオティオスは、キリストの信仰について仲間たちに絶えず教えを説き、将来の報いを示して、彼らを待ち受ける殉教の業に向けて励ました。そして、その夜一晩中、彼らは祈りと詩篇の詠唱に明け暮れ、神を賛美した。　翌朝、イゲモンは法廷に着席すると、聖なる囚人たちが尋問のために牢獄から連行されてきた。

「お前がレオティオスか？」と、イゲモンは聖レオティオスに問いかけた。

「そうです」と、聖レオティウスは答えた。

「お前は——」とイゲモンは尋問を続けた。「どのような位階にあり、その魔法のような魔術で、かつては我らの王の忠実な臣下であったこれらの兵士たちを惑わし、今や彼らを自分の神に仕えさせるようになったのか？」

「私は」と聖レオティオスは説明した。「私のキリストの戦士であり、*『この世に来るすべての人を照らす』*あの真の光（ヨハネ1:9）の子である。そして、この光のもとに来る者はだれもつまずくことはない（ヨハネ11:9–10）。　イパティオスとテオドゥルスは今や、私が言及したその光の源、働き、そして実現こそが、キリストご自身、すなわち神の子であり、初めから存在する神であり、父と同質であり、光から出た光、神から出た神であることを知っている。　彼を知った彼らは、木や石、あるいは声なき動物の骨から作られたあなたの神々を見捨てた。これらの無力な神々は、容易に破壊されてしまう。

イゲモンは、聖レオティオスの恐れを知らぬ言葉に憤り、家来たちに彼を殴打するよう命じた。しかし、彼は殴打に耐えながら、助けを期待して天を仰ぎ見、その際、イゲモンに向かってこう言った。

「狂った拷問者よ！　お前は私に苦しみを与えようとしているが、その心の中で自責の念に苛まれ、かえって自分自身をより深く苦しめているのだ。」

長い拷問の末、イゲモンは聖レオティオスを再び牢獄へ連行するよう命じた。その後、彼はイパティオスとテオドゥロスに向かってこう言った。

「なぜ、幼い頃から教え込まれた父祖の慣習を拒み、王を悲しませながら、軍人としての栄誉を捨てたのか？」

「私たちは」と聖人たちは答えた。「天の王から、より優れた報いを受けました。主は私たちに*『天から降る神のパン』*（ヨハネ6:33）と、キリストの脇腹から流れ出たぶどう酒の杯を授けてくださったのです。」

「そのような不敬で無意味な言葉は」とハドリアヌスは言った。「不敬虔なレオティオスがあなた方に教えたものだろう。しかし、私はこう言う。王の意志に従え。」　王の命令を知らないのか——神々を崇める戦士たちには偉大な名誉と報奨を与え、神々を拒む者たちには、激しい拷問にさらして殺すことだと。

「我らの軍人としての栄光は天にある」と、聖イパティオスとテオドゥルスは反論した。「それゆえ、我々をどうしようと好きにすればよい。邪悪な神々の擁護者として、お前は罪なき我々に対して敵対している。しかし、まもなくお前の人生も滅びるだろう——お前の命の日はすでに短くなっているのだ。」

激怒したアドリアンは、トリブヌスを裸にして拷問台に吊るし、鉄の爪でその肉体を削り取るよう命じた。一方、テオドゥラについては、地面に寝かせ、容赦なく打ちのめすよう命じた。　聖人たちはこれらすべての苦痛を勇敢に耐え忍び、聖レオンティウスの教えを心に留め、次の祈り以外は何も口にしなかった。*「主よ、[私を]救ってください。義人はいなくなったからです」*（詩編11:1）。

聖人たちがキリストへの信仰において堅固で揺るぎないことを見て、拷問官は彼らを剣による斬首の刑に処した。死へと引きずられていく中、聖イパティオスとテオドゥルスは次のように歌った。

「主よ、あなたは私たちの避難所です！　私たちは魂をあなたの御手に委ねます。」

彼らは喜びをもって、キリストのために剣の下に首を差し出し、斬首された後、主のもとへ旅立ち、主の右の手から彼らのために用意された冠を受け取った。

その後、聖レオティオスは再びイゲモンの法廷に引き出された。

「レオンティウスよ、自分の命を惜しめ」とイゲモンは彼に言った。「そうすれば、お前に惑わされたトリブーンやテオドゥルが味わったような、あの激しい苦痛を経験することはないだろう。」　私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、私だけでなく、王ご自身やローマ元老院からも大きな栄誉を授かるだろう。王や貴族たちは、あなたに会いたがっているのだ。

「私は、私の神に敵対し、忌まわしいあなたの王の顔など見たくはない」と聖レオンティウスは答えた。「もし望むなら、アドリアンよ、むしろ私のキリストの友となれ。そうすれば、永遠の命において、あなたがどのような名誉と富と救いを得るかを、私が示してやろう。」

アドリアンは悪意に満ちた笑い声を上げて尋ねた。

「お前は、どうやら私が、トリブヌスやテオドゥラスと同じような救いを得ることを望んでいるのか？　愚かな者め！　それとも、彼らがどのような刑罰によって死んだのか知らないのか？」

「あの処刑は」と聖人は反論した。「処刑などではなく、最高の生活であり、平和であり、喜びなのです。今や彼らは、天使たちの列に加わり、喜びに満ちています。」

「私の言うことをよく聞いてほしい」と、イゲモンは聖レオティオスに言った。「正気を失っていない人間の中で、この太陽の輝きや、ディオス、アポロン、ネプチューン、ヴィーナスといった偉大な神々を軽んじ、ただ恥辱に満ちた苦痛に満ちた死で生涯を終えることだけを望む者が、いったい誰がいるというのか？」 まことに、君に魅了された者以外には、誰もいない！

「聖書の次の言葉を聞いたことがないのか」と、聖レオティオスはイゲモンに尋ねた。「*『諸国民の神々はすべて偶像である』*（詩篇95:5）、*『それらを作る者や、それらに頼る者は皆、それらに似る』*（詩篇134:18）。 正気の人の中で、誰が、実際にはあなたの神々であるような、声なき石や魂のない物質に似ようなどと思うだろうか。そして、それらに犠牲を捧げることで、永遠の死に陥ろうなどと思うだろうか？

激しい怒りに駆られた迫害者は、地面に横たわった殉教者を、四人の屈強な家来たちに容赦なく殴打するよう命じ、その際、特別な告示役には次のように叫ぶよう命じた。

「我らの神々を侮り、王の命令に従わない者は、このような死を遂げるだろう。」

聖なる殉教者は、殴る者たちが力尽きるまで打ち続けられた。一方、聖レオンティウスは拷問者にこう言った。

「たとえ私の全身を傷だらけにしたとしても、それでもなお、私の精神を打ち負かすことはできず、私の魂の主人になることもできないだろう。」

そこで、イゲモンは聖人を拷問用の木に吊るし、鋭い鉄の道具で全身、肋骨、すねを削るよう命じた。聖なる殉教者は長い間削られ続け、激しい苦しみの中で天を仰ぎ、神に向かって次のように祈った。

「わが神よ、あなたは私の希望です。私を救ってください！」

すると、拷問官は処刑人たちに言った。

「彼を木から降ろせ。彼が天を仰ぎ、我らの神々に苦痛を和らげてくれるよう懇願しようとしているのは分かっている。」

これを聞いた聖レオンティウスは、大声で怒りを込めてイゲモンに向かって叫んだ。

「お前も、お前の神々も共に滅びよ、危険で卑劣な拷問者よ！ 私は私の神に、お前が課すこの過酷な拷問に耐えるための勇気と力を授けてくださるよう祈っているのだ。」

拷問官は再び彼を吊るすよう命じたが、今度は首に重い石を縛り付け、逆さ吊りにした。聖レオティオスは長い間その姿勢のまま、声に出してこう祈り続けた。

「主イエス・キリストよ、御名の聖なる御名を告白する際、御自分のしもべイパティアとテオドゥラを強めてくださった方よ、この謙虚で罪深い御自分のしもべである私をも強めてください。そうして、私がこの苦しみ耐え抜くことができるように。私を見捨てないでください、私の希望よ！」

「レオティウスよ、お前が我らの神々の友になることは分かっている」と、イゲモンは言った。

「私は至高の神のしもべだ」と殉教者は反論した。「だが、お前は自分の神々のしもべであり、お前も兵士たちも、その神々と共に滅びるだろう。」

聖レオンティウスは一日中、そのような拷問に耐え続けた。夕方になり、太陽がすでに西へと傾き始めた頃、イゲモンは聖レオンティウスを拷問の木から降ろし、朝まで牢獄に投獄するよう命じた。　聖レオティオスは一晩中、牢獄の中でこう詠んだ。*「主は私の光、私の救い。私が誰を恐れることがあろうか」*（詩編26:1）。

すると、主の御使いが現れてこう言った。

「勇気を出せ、レオティウスよ！　あなたが忠実に仕える主なる神が、私をあなたの元へ遣わし、絶えずあなたと共にいるようにされたのだ。」

聖人は喜び、主なる神を称えて喜んだ。太陽が昇ると、再びハドリアヌスは裁判の席に着き、聖レオティオスを呼び寄せた。

「レオンティウスよ、どうするつもりだ？」と彼は尋ねた。

「私は」と聖人は答えた。「一つの結論に達しました。あなたの空虚な言葉には耳を貸さない、ということです。　以前にも何度も申し上げましたが、今改めて申し上げます。私は決して、私の神、天と地と海、そしてそれらを満たすすべてのものの創造主である主イエス・キリスト、すなわち私たちの救いのために十字架の苦しみを受けられた神の御子を決して見捨てません。私はただ御方だけに希望を置きます。」

「私の言うことを聞きなさい、レオティウス！」とイゲモンは諭した。「神々に犠牲を捧げなさい。私の神々にかけて誓うが、そうすれば、王から大きな名誉と多くの富が与えられるだろう。」

「この世のどのような栄誉や富が、私を――」と聖レオティオスは尋ねた。「あなたの言うことを聞き、私の神を否定させるというのか？　全世界は、私が心の底から愛し、その愛ゆえに苦しみ、あらゆることを耐え忍ぶ覚悟がある主キリストに及ばない。だが、あなたの神々には犠牲を捧げはしない。」

打ち負かすことのできないキリストの戦士、すなわち彼を異教の不義へと傾かせることは不可能であると最終的に確信したイゲモンは、聖レオティウスに対して次のような死刑判決を下した。

「レオティウスよ、王の命令に従って神々に犠牲を捧げることを拒んだだけでなく、先祖伝来の神々を冒涜した。我々は、彼を拷問用の木に四方に引き伸ばし、苦痛の末に魂を吐き出すまで打ち続けるよう命じる。」

聖レオティウスは、地面に打ち込まれた四本の杭に縛り付けられ、四人の屈強な戦士によって、苦しみの中で聖なる魂を神の御手に委ねるまで、長く残酷に打ち続けられた。その遺体は城外の地に捨てられたが、信者たちによって回収され、トリポリの埠頭近くで尊厳ある埋葬が執り行われた。

この聖殉教者レオティウスの苦難は、その光景をこの目で目撃したキリストの僕「キル・ノタリオス」によって記述された。　彼はそのすべてを錫の板に書き記し、後のキリスト教徒の世代のために、殉教者の遺骨が納められた棺の傍らに置いた。それは、これを読んだり聞いたりする者が皆、天に向かって両手を挙げ、そのしもべをこのような偉業へと導かれた神に栄光を帰すためであった。聖レオンティウスは、ローマでウェスパシアヌスが統治していた6月18日に殉教を果たした。教会においては、私たちの主イエス・キリストの治世下であった。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、永遠に栄光が帰せられる。アーメン[4508]。

[4508] 聖殉教者レオティオスについては、ミネ総主教（636–552年）の時代に開かれたコンスタンティノープル公会議で言及されており、フェニキアのトリポリには彼に捧げられた教会があった。　コンスタンティノープルでは、聖レオティオスの記念日が、彼の名を冠した教会とカマリディア近郊の2か所で盛大に祝われた。

コンダク、第3声：

汝は迫害者たちの狡猾な策略を恥じさせ、ギリシャ人たちの不敬虔な奉仕を糾弾し、すべての人々に神の知恵を輝かせた、敬虔の師である神に賢き殉教者よ。このゆえに、我らは愛をもって汝の記念を尊ぶ、至賢きレオティオよ。

7月2日

6月19日（旧暦）

主の肉親である聖使徒ユダの記念日

記念日6月19日

聖使徒ユダは、主の12人の弟子の一人です。彼はダビデとソロモンの一族の出身でした。聖ユダは、ガリラヤの町ナザレで、後に聖母マリアと婚約することになる義人ヨセフの間に生まれました。 ユダの母が誰であったかは正確には知られていない。ある説によれば、それはサロミア[4509]であり、聖ザカリア（主の聖預言者であり先駆者である聖ヨハネの父）の兄弟であるバラキインの息子アゲイの娘であったとされる。

このユダは、聖使徒ヤコブ・ザディク（義人）――エルサレム教会の長[4510] ――の兄弟であった。聖使徒ユダは通常、「ヤコブの兄弟ユダ」、すなわち使徒ヤコブの兄弟[4511]と呼ばれる。 彼がこの呼称を受け入れたのは、自身の謙遜によるものであった。なぜなら、彼は、肉親として主の兄弟と呼ばれるに値しないと考えていたからである。とりわけ、第一に信仰の薄さ、第二に兄弟愛の欠如によって、主の前で罪を犯していたからである。 ユダが信仰の薄さによって罪を犯したことについては、聖ヨハネ・テオロゴスが、*「なぜなら、彼の兄弟たちでさえ、彼を信じなかったからである」*（ヨハネ7:5）と述べている。

4509 このサロメとは別に、ベツレヘムの住民である老女サロメ（「主の祖母」と呼ばれた）も区別する必要がある。このサロメは、至聖なる聖母マリアと義人ヨセフの親族であった。彼女については、キリストの降誕に関する伝承（12月25日）を参照のこと。

4510 聖使徒ヤコブは、肉親として主の兄弟であり、伝承によれば、エジプトへの逃避行の際、父ヨセフ、永遠の処女マリア、そして幼子イエスに同行したとされる。救い主の昇天後、彼はエルサレム教会の司教に任命され、最初に神聖な典礼を制定した。 西暦61年または62年、ユダヤ人によって教会の塔から突き落とされて殉教した。彼の名を冠した公会議書簡が残されている。この聖使徒の記念日は10月23日である。

4511 なお、一部の人々は、主の兄弟であるユダとは区別して、ヤコブの息子ユダ（ルカ6:16および使徒言行録1:13に言及されている）を別の人物と見なし、福音書に記されている以下の出来事をこの使徒に帰している。 弟子たちとの最後の別れの会話の中で、主は御自身が父なる神のもとへ去られることを告げられた後、彼らを慰めるためにこう言われた。*「わたしはあなたがたを孤児として置き去りにはしない。あなたがたのところに戻ってくる。 もうしばらくすれば、世はわたしを見なくなる。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしは生きているからであり、あなたがたも生きるからだ。その日、あなたがたは、わたしが父の中にあり、あなたがたがわたしの中にあり、わたしがあなたがたの中にあることを知るようになる。 わたしの戒めを受け入れ、それを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛される。そして、わたしもその人を愛し、わたし自身がその人に現れる」*（ヨハネ14:18–21）。すると、ユダは主に言った。*「主よ、どういうことですか。あなたがご自身を私たちには現そうとされながら、世には現そうとされないのですか？」*（ヨハネ14:22）。この問いから、使徒ユダは、メシアを地上の王とするというユダヤ人たちの愛着のある考えをまだ捨てておらず、約束された主の現れを、地上の王や征服者としての栄光に満ちた、目に見える感覚的な現れとして理解していたことが分かる。 主はその答えによって、ご自身が地上の王ではないこと、またご自身の御国における御出現は、目に見える外的な、肉体的なものではなく、内面的で霊的なもの、すなわち信者たちとの神秘的な交わりであることを彼に理解させた（ヨハネ14:23）。

この福音書の箇所を解説するにあたり、聖テオフィラクト[4512] は、ここで「キリストの兄弟たち」とはヨセフの子らを指すと解釈している。すなわち、彼は次のように述べている。

– キリストを侮辱したのは、すなわちキリストを侮辱したのは、ヨセフの子らである兄弟たち（その中にはこのユダもいた）であった。では、なぜ彼らにはキリストに対するそのような不信仰があったのか？――それは彼ら自身の邪悪な意志と嫉妬によるものである。なぜなら、親族は他人よりも身内に対して嫉妬しやすいものだからである。

したがって、ここから、ユダが信仰の薄さによって主に対して罪を犯したことは明らかである。

しかし、ユダはそれだけでなく、神の兄弟ヤコブの伝記に記されているように、キリストに対して兄弟愛を欠く行為も行った。　ヨセフがエジプトから戻り、最初の妻から生まれた子供たち――――の間で自分の土地を分け与えようとしたとき、彼は、聖母マリアから超自然的に、朽ちることなく生まれた主イエス――当時はまだ幼い少年であった――にも、その一部を分け与えたいと願った。しかし、ヨセフの三人の息子は、別の母から生まれた者として、キリストを自分たちの分け前に受け入れることを拒んだ。ただ四番目の息子である聖ヤコブだけが、自分の分け前の一部をキリストと共有することを受け入れ、それゆえ後に「神の兄弟」と呼ばれるようになったのである。　かつての自分の罪――不信仰と兄弟愛の欠如――を自覚していたユダは、自らを「神の兄弟」と呼ぶことを敢えてせず、ただ「ヤコブの兄弟」と名乗った。それは、彼が自身の書簡に次のように記している通りである。*「イエス・キリストのしもべ、ヤコブの兄弟、ユダ」*（ユダの手紙1:1–25）。

「ヤコブのユダ」という呼称のほかに、使徒ユダには他にもいくつかの呼称がある。福音書記者マタイは、彼を「レヴェイ」および「ファデオ」と呼んでいる。これらの呼称が使徒ユダに与えられたのには理由があり、すなわち、「レヴェイ」という言葉は「心優しい」という意味である。　使徒ユダに関して言えば、この呼び名は、彼――ユダ――が、無知のゆえにキリストなる神に対して犯した過ちの後、イエスが真のメシア、すなわちキリストなる神であることを確信したとき、心を尽くしてキリストと結ばれたことを意味する。

使徒ユダは「ファデオ」とも呼ばれており、これは「賛美する者」を意味します。なぜなら、彼はキリスト・神を賛美し、告白し、多くの民に福音を宣べ伝えたからです。

聖使徒ユダの人生と活動については、私たちに知られていることはごくわずかである。知られているのは、ドミティアヌス帝の治世の終わり頃[4513] 、自らの手で農作業に従事していたユダの二人の孫が、異端者たちの讒言により、ダビデの子孫であり主の親族であるとして、この皇帝のもとに連行されたということだけである。　しかし、皇帝は彼らが自分にとって何の政治的脅威にもならないと確信すると、彼らを解放した。

使徒ユダは、他の「主の兄弟」たちと同様に、キリストの福音を広めるために多くの宣教の労苦を背負った。　主イエス・キリストが天に昇られた直後、使徒ユダは、キリストの使徒たち全般と同様に、福音を宣教するために旅立った。教会史家ニキフォロス[4514] の証言によれば、「神聖なるユダ――イスカリオテのユダではなく、ファデウスおよびレヴェイという二つの名を持ち、ヨセフの息子であり、エルサレムの神殿の屋根から突き落とされたヤコブの兄弟――は、まずユダヤ、ガリラヤ、　サマリア、エドムで、その後アラビア、シリア、メソポタミアへと広がり、ついにアヴガル王の

[4512] ブルガリアのアクリダの大司教、聖テオフィラクトは、四福音書の注解で知られており、その中では多くの点で聖ヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）の教えに従っている。1085年頃に没した。

[4513] ローマ皇帝ドミティアヌスは、81年から96年まで在位した。

[4514] ニキフォロス・カリストスは、14世紀のギリシャの歴史家であり、『教会史』を後世に残した。

領地であったエデッサの町にたどり着いた[4515] 。そこでは、彼よりさらに以前に、七十人の使徒の一人である別のファデウスがすでに福音を宣べ伝えていた。　ここで使徒ユダは、あのファデウスが成し遂げられなかったことを完遂し、修正した」[4516] 。

聖使徒ユダがペルシャでもキリスト教を宣教し、そこからギリシャ語でこの公同書簡を執筆したという伝承がある。　この書簡が書かれた動機、あるいはきっかけとなったのは、信徒の共同体に不敬虔な者たちが紛れ込み、神の恵みを不法を行う口実にし、キリスト教の自由を装ってあらゆる忌まわしい行いにふけっていたという状況であった。　この簡潔な書簡には、多くの深遠な思想と教訓に富んだ教えが込められている。そこには、一部、教義的な教え――聖三位一体の神秘、イエス・キリストの受肉、善なる天使と悪なる天使の違い、そして将来の最後の審判について――が含まれており、　また、一部には道徳的な教えも含まれている。すなわち、罪深い不潔さ――肉欲、冒涜、高慢、不従順、嫉妬、憎しみ、狡猾さ、偽り――を避けるよう勧めるものである；　使徒は、すべての人に、自分の務め、信仰、祈り、愛において堅固であるよう勧めています。また、迷い出た者たちの回心を気遣い、異端者たちから身を守るよう勧めています。使徒は、異端者たちの心を蝕む悪しき行いを明確に描き出し、彼らがソドムの住民のように滅びることを宣言しました（ユダの手紙1:7）。

さらに、聖使徒ユダは書簡の中で、異教からキリスト教へと回心しただけでは救いには不十分であり、信仰とともに、キリスト教にふさわしく、救いに値する善行を行うべきであると述べ、神によって罰せられた天使や人々を例に挙げています。　神は、天使たちがその尊厳を守らなかったという理由で、彼らを闇の中に永遠の鎖で縛り、ご自身の最後の審判まで留めておられる（ユダの手紙1:6）。 一方、エジプトから導き出された人々については、神の律法に従わず、 な放蕩に陥ったため、神は荒野で彼らを滅ぼされた（ユダの手紙 1:5）。このように、使徒ユダは、その手紙の中で簡潔な言葉で、私たちに偉大な真理を明らかにしている。

聖使徒ユダは、福音を宣べ伝え、諸民族をキリストの信仰へと導き、彼らを救いの道へと導くために、多くの国々を訪れました。そのような働きの中で、彼はアララト地方に到達し、そこで多くの人々を偶像崇拝から遠ざけ、彼らをキリスト教徒にしました。　このことで、使徒は偶像の祭司たちの激しい敵意を招きました。彼らは彼を捕らえ、様々な拷問を加えた後、十字架に磔にし、矢で貫きました。こうして、聖使徒ユダは自らの功績と生涯を全うし、キリスト・神のもとへ旅立ち、天において神から永遠の報いの冠を受け取ることとなりました[4517] 。

トロパリオ、第1声：

キリストの親族であり、堅固な殉教者であるユダよ、誘惑に打ち勝ち、信仰を守り抜いたあなたを、聖なる賛美をもって称えます。それゆえ、今日、あなたの至聖なる記念を祝うにあたり、あなたの祈りによって罪の赦しを受けます。

[4515] 伝承によれば、イエス・キリストはこのアヴガルに、御自身の「手造りではない像」を送られた。エデッサはメソポタミアにある都市である。

[4516] この聖使徒ファデオスの記念日は、8月21日および1月4日である。

[4517] 聖使徒ユダは、西暦80年頃に亡くなった。– 皇帝バシレイオスの暦によれば、使徒ユダはメソポタミアのエデッサに滞在し、そこでアヴガルを癒やし、その後アラトの町で十字架に架けられ、矢で貫かれた。　スラブの伝承によれば、使徒ユダはアラド島で殉教した。アラドという都市と島は存在するが、それはメソポタミアではなくフェニキアにある。アルメニアの伝承によれば、使徒ユダは紀元60年頃にアルメニアに到着し、アラクス川沿いのアルタシャト市で使徒バルトロマイと出会った。彼は多くの人々を改宗させ、紀元72年に大アルメニアのオルミア（現在のウルミヤ）で十字架に釘付けにされた。　そうだとすれば、アラトはアララト山脈の周辺に位置すると考えられる。（『セルギイ月報』第2巻、6月19日の項）。

コンダク、第2調：

使徒パウロの対話者となり、神の恵みの福音を私たちに宣べ伝えた、秘められた言葉の語り手、祝福されたユダよ。それゆえ、私たちはあなたにこう叫びます。「私たちすべてのために、祈りを絶やさないでください。」

イン・コンダク、第2調：

堅固な精神をもって選ばれた弟子として現れ、キリストの教会の揺るぎない柱となられた。あなたは舌をもってキリストの御言葉を宣べ伝え、唯一の神性を信じると語られた。御方から栄光を受け、癒しの賜物を受け、あなたのもとに駆け寄る人々の病を癒やし、 称賛に値する使徒ユダよ。

尊き父パイスィオス大聖人の生涯

記念日：6月19日

この世の虚しい魅力は、朽ちゆくものであり、つかの間のものですが、 ——それを渇望する人々を惹きつけ、取るに足らない地上の喜びのために、彼らの意図や感情を罪へと導き、心をこの世の情欲に執着させ、しかもその程度は甚だしく、これらの世俗を愛する者たちは、時に彼らに約束された天の命を軽んじるだけでなく、ああ！ – 真の命の創造主ご自身から背を向け、未来の恵みよりも一時的で地上の恵みをより強く求め、それによって自らに苛烈で果てしない死を招くことになるのである； これと同様に、天にある永遠の宝は、それを手に入れることを望む人々の心に、それへの計り知れない憧れを呼び起こし、彼らの心をある種の神聖で言葉に尽くせない甘美さで満たす。 私たちに約束された天の御国は、そのような人々に、永遠の至福、労苦に対する報い、そして修道者たちの輝かしい祝典を思い起こさせる。 この考えは、彼らにこの御国への到達を強く志させるほどであり、彼らは一時的で虚しいものをすべて軽蔑し始めるだけでなく、福音書の言葉（マタイ10:39）に従い、キリストのために、 キリストのために自らの魂を捧げ、この世のあらゆる喜びや快楽よりも死を好む。迫害が終息した際、敬虔な修行者たちが殉教的な 死を遂げることができなかった場合でも、彼らは別の形でそれを経験することを切望した。 彼らは、長期にわたるが、彼らにとって不可欠な、肉体を死に至らしめる苦行を引き受け、その過程で当然ながら絶え間ない病に耐え忍ぶ。日々断食し、多種多様な苦行によって自らを律し、目に見えない悪魔たちと戦い、なお肉体にある間も、絶えず自らを奮い立たせて、これらの無形の敵に立ち向かうのである。

そのような栄光に満ち、神に喜ばれる人々の中に、ある一人の男がいた。私は彼について[4518]しており、今、彼の誕生、青年時代、そして驚くべき生涯について語りたいと思う。その男の名はパイシイであった。 そして、誰もが彼について聞く、この極めて栄光に満ちた、超自然的な物語を信じてほしい。また、私が名誉のために、この聖なる父についての物語に何かを付け加えているなどとは、誰も思わないでほしい。 彼はあらゆる人間の栄光よりもはるかに高く、天上の住処において聖なる天使たちに称えられているため、私たちのような地上の罪深い者たちからの称賛を必要とはしない。しかし、私は、この話を聞く者たちや、彼の美徳に倣おうと願う者たちの益のために、彼について語ることにする。そして、私が自分の目で見、耳で聞いたことを語る。

[4518] すなわち、この伝記の著者であるヨハネス・コロフ（コロフ、すなわち「小柄な者」という意味のあだ名を持つ）は、エジプトで修道生活を送った。430年頃、コルツマ（現在のスエツァ）の近くの荒野にある修道小屋で世を去った。——彼の記念日は11月9日。

それでは、この尊い聖人の称賛に値し、教訓に満ちた生涯について、その幼少期から語り始めよう。

この栄光に満ちた至福の聖人は、かつて預言者の中でも偉大なる神の御使いモーセが生まれたエジプトで生まれ、そこで生涯を過ごした。聖書が伝えるところによれば、モーセは神との親密な関係と偉大な奇跡によって、極めて高く称えられたのである。　しかし、エジプトは二度目に、同地で生まれ、その清らかな名声と多岐にわたる美徳によってこの地を豊かにした、聖パイスイスの生涯によっても、同様に名声を博した。

至福のパイシオスの両親は、真に信仰深く、主を畏れる人々であった。彼らは神の戒めを守り、清らかな生活を送り、あらゆる善行をもって、ただ主のみに喜ばれるよう努めた。

彼らには七人の子供がおり、そのすべてを従順に育て、子供たちがあらゆる面で両親である彼らに倣うよう努めた。

尊者のお両親は、あらゆる面で豊かであり、困窮しているすべての人々に施しを施していました。彼らの手は常に施しへと差し伸べられており、彼らが貧しい人々に与えたものは、神の賜物によって余すところなく彼らに報いられました。

しかし、人は誰しも死を免れることはできないため、聖人の父もこの世を去り、子供たちの世話は誠実な妻に託された。その中では、パイスイという少年が最も年少であり、彼のせいで母はとりわけ多くの悲しみを味わうことになった。

ある夜、少年の母がすでに眠りについていたとき、彼女には次のような幻が見えた。主の天使が現れて、こう言ったのである。

「孤児たちの父である神が、あなたのもとへ私を遣わし、なぜあなたは子供たちのためにこれほど悲しみ、絶えずこれほど大きな心配を抱いているのかと尋ねるよう命じました。　まさか、あなただけが子供たちのことを気にかけていて、神は彼らのことを全く考えておられないというのですか？　それゆえ、これからは悲しみを捨て、あなたの息子の一人を至高の神に捧げなさい。彼を通して、主の至聖にして永遠に賛美される御名が栄光を受けることになるでしょう。」

聖人の母は、これに対し天使にこう答えました。

「私の息子たちは皆、主のものであり、もしそのうちの誰かが主の御心に適うのであれば、主が彼を御自身のもとに迎え入れてくださいますように。」

すると、天使はパイシイの手を取り、こう言いました。

「この子は神に喜ばれる。」

「それなら、もっと年上の誰かを選んでください」と、老女は言った。

しかし、天使は彼女にこう答えた。

「ああ、善良な女性よ！神の力は、たいてい弱い者に現れることを、あなたは知らないのですか？それゆえ、この最年少の者が神に選ばれ、彼は神の御心に適うのです。」

そう言うと、天使は姿を消した。

聖人の母は眠りから覚めると、この神聖な御出現に驚き、主をこう賛美した。

「主よ、どうかあなたのご慈悲が、私たちと、あなたのしもべパイシイの上にありますように！」

その後、かなり長い祈りを捧げた後、彼女は息子を教会へ連れて行き、聖職者候補として登録させた。そして、聖なる少年パイシイは、聖職者候補となるにふさわしい者と認められ、徳高い人々に倣うようになり、歳を重ね、知恵を深めるにつれて、同時に神の恵みも増していった。　日ごとに、彼の心は神への愛によってますます燃え上がり、彼自身も、まるで一日も早く修道者の剃髪に到達したいかのように、焦燥に燃えていた。そして、　――その時が訪れ、彼が叙階の栄誉に浴し、修道者の位においてより完全な生活を始められるようになったとき――彼は、神の恵みに導かれた汚れなき子羊のように、スキトの荒野へと向かい、そこで霊的な指導を受けるため、言葉の羊たちの牧者で

ある至福のパムヴァ[4519]のもとに住むことを望んだ； この師は愛と喜びをもって彼を受け入れ、聖なる修道者の装いを授けた。至福のパムヴァは予知の賜物に恵まれており、天からの啓示によって、パイシイに起こるべきすべてのことを知っていた。それゆえ、彼はパイシイを、あらゆる善行へと導く神の恵みの選ばれた器として見なしていた。

何よりもまず、至福のパイシイは熱心に服従の修行に励み、師に異議を唱えることなく従い、あらゆる面でその意志を全うした。その間、常に最も厳格な生活を送り、段階を踏むようにして、心の中で徳のより高い完成へと登りつめていった。 一方、私たちの尊い父パムヴァは、彼が断食に全身全霊を捧げているのを見て、さらに大きな功徳を成し遂げるよう励ますために、ある日彼にこう言いました。

「パイスイよ、修道生活の初心者は、あらゆる感覚を過ちや誘惑から慎重に守らなければならない。とりわけ、好奇心に駆られた視線から目を遠ざけることが肝要だ。 誰の顔も見ず、常に目を下に向け、心は高みを見据え、内なる目で神の言い表せない慈愛を仰ぎ、全能の主を賛美し、讃歌すべきである。

こうして、このような教訓に満ちた話に導かれた至福のパイシイは、神への愛をさらに燃え上がらせ、自分に告げられたことをすべて忠実に実行しようと決心した。そして実際、 ――丸三年もの間、彼は「他人の顔を見ない」という戒めを丹念に守り、熱心に聖典の読誦に没頭し、絶えず神の御言葉に耳を傾け、その教えを、常に水のように自らの魂に注ぎ込み続けた。 そして彼は、ダビデの言葉通り、水の泉のほとりに植えられたある種の庭のようで、成長し、繁栄し、時が来れば甘い実を結んだ。なぜなら、彼はこの詩篇にある神への言葉――「*あなたの言葉は、私ののどにどれほど甘いか！ 私の口には蜜よりも甘い*」（詩篇118:103）。使徒たちの勧めに従い、絶えず祈り、断食と徹夜によって肉体を鍛え、それを霊に服従させ、心の奥底に、ある種の宝物のように、自らのすべての美徳を大切に守り続けた。

一方、尊者パムヴァは、彼が成長していくのを見て、神におけるそのような徳高い生き方を喜びとした。父のように彼を見守りながら、さらなる功徳へと導き、あらゆる神に喜ばれる行いや知識について敬虔に教え導いた結果、まもなく彼を修道士たちの中で最も熟達した者へと育て上げた。

聖パムヴァが、彼がこれほど切望していた天の御国へと旅立つ時が来ると、この尊い父は、至福のパイシオスを祝福し、彼について多くの預言的な言葉を語った後、永遠の至福の生活へと旅立ち、そこで彼が長い間待ち望んでいた言葉に尽くせぬ恵みを受け取ったのである。

――そして、私、謙虚なヨハネ（この伝記の著者はこう述べる）は、聖パイシオスと共に残った。あらゆる点で互いに似通っていた私たちは、共に生活を送り、 すべての人から離れて暮らし、祈りにおいても生活においても、私たちの父から受け継いだのと同じ規律を守り、ただ私たちの魂の救いだけを心に留めながら、互いに支え合っていた。しかし、しばらくして、至福のパイシオスは、より高き功業と生活を求めるようになり、それゆえに私たちは別れることになった。

ますます厳しい断食へと心を燃やし、彼は一週間もの間、食物に一切触れず、土曜日と日曜日には塩を添えたパンと水だけを口にし、その他の日には、肉体の糧となるパンの代わりに霊的なパンを糧としていました； 彼は神に啓示を受けた預言者エレミヤの書を頻繁に読み、この聖なる預言者が何度も彼に現れて、預言の中で理解できない謎を解き明かし、秘められた思いをもって、約束された恵みを達成するよう彼の心を奮い立たせた。 しかし、ますます先へと進み、より厳しい生活様式へと向かう中で、パイシイは当初の断食の修行を捨て、新たな修行を選んだ。今や彼は丸二週間にわたって断食を行い、その期間が過ぎた後にのみ、 で述べられているように、必要な分だけの塩を添えたパンと水を口にした。 そして、この彼の断食と天使に等しい生活については、人間のあらゆる秘密を知り尽くし、まだ明らかにされていないことさえもすべて明らかにされている唯一の神以外、

[4519] その記念日は1月16日。

誰も知らなかった。さらに彼は、唯一の主キリストに一人きりで祈りを捧げ、さらに彼に近づき、その光によって照らされるために、沈黙の修行も自らに課そうと望んだ。

「彼のその願いを知り、」とヨアン・コロフは続ける、「私は深い悲しみを抱きながら、私たちが互いに離れなければならないことを悟った。しかし、私は、彼のその意図が神からのものであるのか、それとも単なる人間の気まぐれによるものなのかを知りたかったため、彼にこう言った。

「パイシイ兄弟よ、あなたは沈黙の生活という修行を自らに課そうとしているのがわかります。私にも同じ思いがあることを心から信じてください。しかし、この思いが神からのものであるか、そうでないか確信が持てず、疑念を抱いています。　それゆえ、寛大なる神に祈りましょう――主ご自身が御心に従って私たちの生活を導き、私たちに、共に留まるべきか、それとも互いに離れるべきかを明らかにしてくださいますように。

パイシイはこれに対し、私にこう答えました：

「よく言った、愛する者よ。それでは、君が言った通りにしよう。」

そこで、私たちは祈りの姿勢をとって、一晩中熱心に主に祈り続けた。そして、慈悲深い主は、私たちの祈りを無視されることなく、御自身の聖なる天使を私たちのもとへ遣わして知らせを届けてくださった。その天使は、朝になって私たちの前に現れ、こう言った。

「主は、あなた方の生涯において、あなた方を分かつ。　それゆえ、ヨハネよ、あなたはここに留まり、他の人々の救いの導き手となりなさい。そして、キリストの僕パイシイよ、ここから砂漠の西側へ移りなさい。主は、あなたのもとに多くの修道者たちが集まり、主の御命によりそこに修道院が建てられ、あなたを通して主の御名が栄光を受けると仰せられたからである。

そう言い終えると、天使は去っていった。私たち（ヨハネは語る）は感謝を込めて主にひれ伏し、主の御命令に従って別々の道へと進んだ。私は元の場所に残り、至福のパイシオスはさらに西側の荒野へと向かった。　そこで彼は山に洞窟を掘り、そこに住み着いた。そして、この地で、至高の清らかさと多種多様な修行によって、神にこれほどまでに近づいたため、キリストご自身が彼に現れ、教えを授け、徳を説かれた――これらすべてについては、その場で詳しく語られることとなる。

ある日、パイシイが洞窟に座って神聖な賛美歌を歌っていると、救い主が現れてこう言われた。

「平安あれ、わが愛する御心に適う者よ！」

すると彼は、恐れと畏敬の念に包まれながら立ち上がり、こう言った。

「人を愛するキリストよ、救い主よ、私はあなたのしもべです。主よ、なぜこれほど大きな恵みを私に与えてくださるのですか。今、あなたご自身が、私の不甲斐なさにまで降りてきてくださったのですか？」

それに対し、主は彼にこう答えられた。

「この荒野が見えるか――どれほど広大で広々としているか。お前のために、私はこの地を、私の御名を賛美する断食者たちで満たそう。」

すると、神に選ばれた聖人パイシオスは、地にひれ伏してこう言った。

「主よ！　あなたの力強い御手には万物が従い、あなたが望まれることはすべて成就されます。どうかあなたの慈しみに頼り、この荒野で修行に励む者たちに必要なものがどこから与えられるのか、私に悟らせてください。」

主はこれに対し、こう答えられた。

– あなたに真実を語る私を信じてください。もし私が彼らの中に、あらゆる美徳の母である愛を見出し、彼らが私のすべての戒めを守るならば、彼らは何についても心配する必要はありません。私自身が彼らの世話をいたします。

そこで、パイシイは再び主に尋ねた。

「もう一度、御慈悲に尋ねます。彼らはどのようにして敵の罠を難なく乗り越え、悪魔の激しい誘惑を避けることができるのでしょうか？」

これに対し、主はこう答えられた。

– もし彼らが、私があなたに告げたように、柔和さと正義、そして謙虚な心をもって私の戒めを守るならば、私は彼らをあらゆる敵の攻撃や悪意ある策略よりも高い位置に置くだけでなく、天の御国を嗣業として与えるであろう。

そう告げると、救い主は栄光のうちに天に昇られた。

一方、聖パイシイは、心の中に神への畏れをさらに深く抱き、天から救い主が自分に示してくださった慈悲について、絶えず思いを巡らせるようになった。

しかし、嫉妬の父であり、人を憎む者――敵である悪魔は、パイシイが巧みにそのすべての狡猾な罠をかわし、その陰謀に対して無傷であり、あらゆる中傷よりも高みに留まっているのを見て、彼に対する憎悪をさらに燃え上がらせた。　しかし、神から与えられた神聖な力のゆえに彼に近づくことができなかったため、ついにキリストの僕を自らの罠に捕らえるべく、他の策略を練り始めた。貪欲という黄金の釣り針で彼を捕らえようと考えた悪魔は、施しを利用して、神の御心に適う者を金銭愛の罠に嵌めようとした。そうすれば、彼が不貪の道を捨てた後、悪意に満ちた邪悪な霊たちが彼に攻撃を仕掛けやすくなるからである。

そこで、人類の狡猾な敵は、あるエジプトの王のもとへ向かった。その王は神を畏れる者であり、莫大な富を所有していた。悪魔は天使の姿で彼の前に現れ、こう言った。

「愛する者よ、立ち上がって荒野へ行きなさい。そこでは、パイシイという名の男に出会うでしょう。彼は全く貧しいが、美徳に満ち、神の恵みによって選ばれた器です。彼に会ったら、この老人に惜しみなく金を贈り、彼や他の荒野の修道者たちの不足を補えるようにしなさい。」

その公爵は、悪魔の誘惑に気づかず、これが本当に天使だと思い込み、自分の金や銀の一部、そして修道士たちに必要な多くの物を持って、聖人のもとへ向かった。　しかし、パイシイの中に宿っていた神の力は、公爵の施しを装って聖人を貪欲の罠に陥れようとした悪魔の策略を彼に明らかにした。そして、神に愛された聖人パイシイは、直ちに立ち上がり、公爵を迎えに出た。

聖人が彼に出迎えると、公爵は隠遁者のパイシイについて尋ねた。「彼は誰で、どこに住んでいるのか？」パイシイもまた、公爵にこう尋ね返した。

「なぜあなたはパイシイを探しているのですか？　彼に何の用があるのですか？」

公爵は答えた。

「私は彼と金や銀、そして生活に必要なあらゆるものを分かち合いに来たのです。そうすれば、彼がそれを修道士たちに配ってくれるでしょう。」

すると聖人は、公爵にこう答えた。

「おお、キリストを愛する者よ！この荒野で生きようとする者たちにとって、金や銀など必要ないことを知ってください。ここに身を寄せている者たちの誰も、あなたの財産から何かを受け取ろうとは望まないでしょう。ですから、悲しむことなく家へお帰りください。神はあなたの善意を受け入れてくださるでしょう。」　もし、あなたが持ち込んだものを貧しい人々に分け与えたいと望むのなら、エジプトの町々には、困窮している人々、貧しい人々、物乞い、孤児、未亡人が大勢いる。彼らの世話をしなさい。そうすれば、あなたは神から大きな報いを受けるだろう！

公爵は聖人の言葉を信じ、帰還して、聖人が教えた通りに実行した。すなわち、自分の財産を乞食や貧しい人々、困窮している人々に分け与えたのである。

ところが、尊者パイシイが自分の洞窟に入ろうとしたとき、悪魔が現れてこう言った。

「おお、パイシイよ！　今や私はお前をどうすればよいのか。お前は私の狡猾な企みをすべて台無しにしてしまうではないか。これからは他の者たちを攻撃しに行くことにしよう。お前のところには二度と戻らない。なぜなら、私はお前に打ち負かされたからだ。」

その後、この祝福された人は、キリストの力によって不浄な霊を呪い、自分から追い払った。すると悪魔は恥じ入って立ち去り、もはやこれほど厚かましく聖人に近づくことはできなくなった。

まもなく、尊者は荒野の奥深くへと向かったが、肉体はそこに留まりつつも、その霊は天の軍勢と共に万物の主の御前に立っていた。　そこで、無形の存在に倣い、彼はさらに厳格な生活を送り、そのおかげで、まだ地上のうちにありながら天の神秘を仰ぎ見る者となるにふさわしい者とされた。というのも、彼の中に宿る聖霊が、天において尽きることのない義人の祝宴を彼に示すことを御心に留められたからである。

ある日、祈りを捧げていると、パイシイは、まるで翼に乗って舞い上がったかのように、すでに天にいるかのような感覚を覚えた。　まず第一に、彼は言葉に尽くせない光と喜びに満ちた美しい楽園の集落を目にし、また、先立つ者たちや永遠に祝宴を繰り広げる者たちの教会も見た。そして、そこで神聖な秘跡の非物質的な糧を聖体拝領する恵みにあずかったとき、彼は極度の節制と断食の賜物を受け入れたのである。 ある週、すなわち主の復活の日に聖体拝領を受けた彼は、 、次の日曜日まで全く食物を口にしなかった。こうして、神の恵みの力によって、彼の本質は創造主から豊かに満たされたのである。

――「私については（彼の伝記の著者は言う）、神の御言葉を信じる者なら誰でも信じてほしい。なぜなら、私は神の御言葉を確かな証人として持っているからだ。それこそが、すべてが神の御命令に従うと言っているのではないだろうか？そして、それが真実である以上、私が伝えることも、誰もが真実として受け止めてほしい。」－キリストの御体と御血という神聖な秘跡を拝領した後、敬虔なパイシオスは時折、七十日間も肉体の食物を摂らずに過ごした。これには何ら驚くべきことはない。なぜなら、神の恵みには言い表せない力があり、それゆえ、朽ちる食物による滋養よりも、彼（パイシオス）の生命をより良く支えることができたからである。　なぜなら、肉的な本性に従って生きる者たちにとって、肉体は衰弱しないために、その強靭さを保つための栄養を必要とするが、無形の存在に倣って超自然的な生活において卓越した者たちには、　――彼らには、創造の力がこの恵みを豊かに与えており、人間の性質もこれに従い、もはや肉体的な食物というよりは、むしろ霊的な食物によって生きているのである。　全能の創造主、我らの神は、三百年、いやそれ以上の間、地上で七人の眠る少年たちの命をいかにして保つかを御存知であり、まことに、天の住まいでエリヤの命を最後の日まで保っておられるのだ。――しかし、この話はこれくらいにしておこう――「至福のパイシオス」について語ろう。」

この尊い父のもとには、修道士だけでなく、彼と共に生きたいと願う多くの信徒たちも集まってきた。蜂の群れのように彼の周りに集まり、皆、彼の霊的な蜜の甘美さに満たされることを切に望んでいた。　一方、彼は、永遠に存在する神聖な泉から、あらゆる感覚的な蜂蜜や蜂の巣よりもはるかに甘い恵みを汲み取り、言葉では言い表せない甘美さに満ちたこの霊的な飲み物を彼らに注ぎ続けた。そのため、彼の周りに集まり、増え続ける兄弟たちの数は日々著しく増えていった。　彼らは皆、この世の世俗的な誘惑を拒み、福音の教えに従ってキリストの軛を肩に担いだ。これらの兄弟たちの中から、ある者たちを尊い父は沈黙の修行に選び出し、彼らが温かい祈りの中で神と一対一で語り合えるようにした；　また、他の者たちには、他の兄弟たちと共に主に仕え、兄弟たちと心を一つにして従順に過ごし、共同の労苦を担うよう命じました。さらに、三番目の者たちには手仕事の習得を任せて、彼らが自らの労働で生計を立てるだけでなく、飢えた者や貧しい者を養い、他の貧しい兄弟や旅人たちを愛をもって慰めることができるようにしました。　そして、彼の最も重要な戒めは次の通りであった。すなわち、誰も自分の意志で何かを行うことなく、すべては経験豊かな長老たちの命令と裁量に従うことである。　これが、彼のもとに集まる兄弟たちに対する尊者のお戒めであり、彼の教えでもあった。さて、尊者ご自身の沈黙の生活については、詳細に伝えることは不可能だが、多くの出来事の中から、せめて少しばかりは述べておこう。

しばらく時が経つと、尊者様は、訪ねてくる兄弟たちによって自身の沈黙の生活が絶えず乱されているのを見て、これに煩わしさを感じるようになった。というのも、彼自身は沈黙の修行を厳格に守りたかったからである。そこで、彼は以前住んでいた洞窟を離れ、同時に兄弟たちの世話も手放すことを決意した。　こうして、誰にも内緒で、彼はそこを去り、砂漠のさらに人里離れた場所へと向かった。そこである場所に洞窟を見つけ、そこに住み着き、三年間をそこで過ごした。　その間、彼の頭髪は著しく伸び、その長さは、洞窟の天井に立てられた杭に、ある種の技巧を凝らして結びつけるほどであった。それゆえ、彼は一瞬たりとも眠ることなく、徹夜での祈りをすべて捧げることができた。　このように、夜も昼も彼は自らに休息を与えることなく、全力を尽くして労苦に打ち込み、常に包まれていた神の愛ゆえに、その労苦の中にのみ安らぎを見出していた。　それゆえ、主は彼を愛され、尊者パイスイは幾度となく神の御顕現とキリストの御姿を仰ぐ栄誉に浴した。まさに、聖なる福音書において、私たちの救い主ご自身がこう言われた通りである。*「わたしを愛する者は、わたしの父に愛される。そして、わたしもその人を愛し、わたし自身がその人に現れる」*（ヨハネ14:21）。

ある時、聖パイシオスが神へのとりわけ熱烈な愛に燃え、その心全体が神を想う祈りによって主の中に深く沈められていたとき、以前と同様に、救い主キリストが彼に現れた。　しかし、パイシイは、救い主の至聖なる御顔のまばゆい栄光を見るに耐えられず、恐れと戦慄に襲われて地面に倒れ伏した。だが、人を愛する主は彼に御手を差し伸べ、（ああ、キリストよ、王よ、御自分の御心に適う者たちへのあなたの言葉に尽くせぬ愛よ！）、パイシイを地面から起こして、こう言われた。

「平安あれ、わが愛する者よ。恐れるな、あなたの心も震えるな。あなたの行いはわが慈愛を大いに喜ばせ、あなたの功績はわりにとって極めて喜ばしいものだからである。　さあ、喜びなさい。そして、それに見合う報いを受けなさい。見よ、わたしはあなたにこのような賜物を与える。すなわち、あなたがわたしの名によってわたしの父に求めるものは何でも、与えられるであろう。

聖パイシオスは、主のこれほど偉大な慈愛を目の当たりにし、ある種の勇気を奮い立たせて、こう言った。

「人を愛するキリスト、神よ！　もし、あなたの測り知れない慈しみによって、私のような不適格で罪深い者を、このようなあなたの恵みにあずからせてくださるのなら、私は謙虚にあなたにお願いします。誰のために、どのような必要について祈るべきかを、あなたご自身が私を導き、教えてください。私はあなたの御前で自分のすべての罪を自覚しており、自分の欠点については常にあなたの憐れみを願っているからです：　私の数多くの罪を赦し、御慈悲をもって覆い隠してください。そして、残りの生涯を罪なく過ごすことができるよう、私をお導きください。そうして、御助けと御導きのもと、恐れなく救いの道へと歩み出し、妨げられることなく至福の命に到達できますように。まことに、御助けと御導きなしに、誰が善き行いを成し遂げ、御前から恵みを受けることができましょうか。　そして、私たちのどのような善行、どのような労苦や偉業が、あなたのこれほどまでに偉大な憐れみにふさわしいというのでしょうか――たとえ私たちがあなたのために死を受け入れたとしても、私たちを創造し、贖ってくださった、罪深い私たちを深く憐れんで愛してくださったあなたのために、魂を捧げるのが当然であるとしても？　なぜなら、もしあなたが不死の神であり、私たち死すべき人間のために、その至聖なる血を流して、十字架と死と墓を耐え忍び、ご自身の復活によって私たちにも復活を授けてくださったのであれば、私たちはいかなる死を、私たちの救い主であるあなたのために耐え忍ばなければならないのでしょうか。

聖パイシイが深い感動を込めて救い主にそう語りかけていると、主は彼を祝福し、彼から離れ、栄光のうちに天に昇られた。パイシイは主に向かってひれ伏し、自分に対して示された主の慈悲深い寛容を称え、感謝を捧げた。

続く私たちの言葉（この伝記の著者はこう綴っている）は、この尊者による聖なる信仰への並々ならぬ熱意を示すことを目的としている。その熱意は、ある時、次のような形で現れた。

エジプトのある村に、ある長老が住んでいた。――その生活態度から言えば、彼は極めて徳の高い人物であったが、聖書については全く無知であった――そして、その無知ゆえに、彼は次のような異端に陥ってしまった。　聖三位一体について、彼は三位一体としてではなく、二位一体として語った。すなわち、彼は父と子を告白したが、聖霊については沈黙を守り、「聖霊は神ではない」と主張した。　そして、自らこのように誤った信仰を抱いていた彼は、他の人々にもこの異端を教え込んだ。多くの庶民は、彼が神にかなった徳高い生活を送っているのを見て、その冒涜的な思索と教えに従ったのである。　しかし、すべての人々の救いを備えておられるキリスト・神は、その長老の労苦と断食の功徳が無駄になることを望まれず、至福のパイシイに彼について告げ、この聖なる長老が住んでいた村とその場所を彼に示された。　パイシオスは直ちに急いで旅支度を始めた。彼は自らの手で数多くの籠を作り、それぞれに三つの取っ手を取り付け、それらを持ってその長老のもとへ向かった。その際、彼は自分を旅人であり、手作りの品を売る商人であるかのように装った。　しかし、その長老の元にいた修道士たちの多くは、誤った教えと誤った信仰に囚われており、旅人とその籠を見て、それがパイシイであることを知らずに、彼が誰でどこから来たのかと尋ね始めた。彼はそれに対し、荒野から来て、自分の手作りの品を売りに来たのだと答えた。　また、かごについて、「なぜ三つの取っ手がついているのか」と尋ねられた。聖パイシイは、そのたびにこう答えた。

「私は至聖なる三位一体のしもべであり、その愛に熱く満たされている。それゆえ、自分の籠を三位一体の御姿に倣って三つの取っ手付きにしたのだ。それは、心で信じ、口で告白するだけでなく、私の手仕事を通じて、　神の御三位の三位一体を象徴する手仕事を通じて、聖三位一体――父と子と聖霊――を賛美するためです。　というのも、一つの取っ手は父なる神を、もう一つは子なる神を、三つ目は聖霊なる神を象徴しているからである。そして、それぞれの籠には三つの取っ手があるが、それ自体は一つであるように、聖三位一体においても三つの御方がおられるが、神は唯一である。

聖パイシオスが聖三位一体に関するこの奥義を簡潔に説いている間、その男たちは、断食指導者である師と共に、恥じ入り、彼の話に耳を傾ける準備を整えて、こう言った。

「おお、驚くべき方よ、真の信仰について、さらに詳しく、より明確に語ってください。そして、あなたの説き明かしで私たちをさらに教え導いてください。あなたはすでに語られたことだけで、私たちを大いに驚かせました。」

そして、神聖なるパイシイは、聖霊に満たされ、熟練した導き手として、異端の迷いとその魂を滅ぼす害悪を、分別と神の知恵をもって暴き始め、熱心に彼らに聖なる、正統で、魂を救う信仰を教え、真の道へと導き始めた。　そして、尊者パイシイは長い間、聖書や神に霊感を受けた書物に基づいて彼らと語り合い、聖三位一体を信じ、この真理を敬虔に告白するよう教え、その長老と彼と共にいた者全員を、かつての迷いについて悔い改めるように導いた。　こうして彼らを啓発した後、主への感謝の祈りを歌いながら、自らの荒野へと戻っていった。彼が荒野に近づいたとき、突然、彼の目の前で大きな光が輝き、周囲を見回すと、その荒野全体が天使の　大軍で満たされているのを見た。　驚いた彼は、これが一体何なのかと首をかしげ、主に対し、自分が見たすべての光景が何を意味するのかを明らかにしてくださるよう願った。すると直ちに、彼に同行していた聖なる天使が言った。

「これらすべてを神があなたに示されたのは、あなたが、あなたの有無にかかわらず、天使たちが神の御命により、この荒野に住む修道士たちを守っていることを知るためである。それは、主ご自身があなたに約束されたとおりである。」

そしてパイシイは、万物の摂理者である神にこのことへの感謝を捧げた後、自分の小部屋へと戻っていった。

続く物語では、聖パイシイの預言の賜物、すなわち、この神に愛された者がどのような先見の明に満ちていたかについて述べる。

神聖なる聖パイシオスの名声は至る所に広まり、多くの徳高い人々が彼に会い、語り合うために彼を呼び求めた。そうして、当時まだごく若かった至福のピメンもまた、聖パイシオスに会いたいという強い願いに燃えた。　彼は尊者パウロのもとへ赴き、偉大なるパイシオスのもとへ一緒に行ってくれるよう懇願した。パウロは普段から聖パイシオスを頻繁に訪れていたからだ。しかし、この願いに対し、彼はピメンにこう言った。

「君はまだ非常に若く、この聖なる方に君を連れて行くのは気が引ける。なぜなら、彼は偉大な神の御心にかなう者であり、沈黙を愛しているからだ。我々は気軽に彼のもとを訪れるのではなく、分別を持って、しかも常にではなく、魂の益となる適切な時だけ訪れるのである。」

ピメンはこれに対し、こう答えた。

「しかし、父よ、私があなたと共に彼のところへ行けば、私はケリアの外に立ち、あなただけが聖人の元へ入るのです。私にとっては、彼があなたと語り合う声を聞くだけでも、大きな慰めとなります。たとえ彼の声を聞く恵みにあずかれないとしても、それでも、　せめてそのケリアに触れるだけでも、そしてあなたが聖人の元から出てこられる時には、ケリアの中へ踏み入ったあなたの尊い足にも触れ、聖人の足が踏んだ土をひと握り拾うことができれば――それだけでも、私にとっては大きな喜びとなるでしょう。

至福のパウロは、ピメンがこれらすべてを深い謙遜と堅い信仰をもって語っているのを見て、彼を連れて偉大なるパイシオスのもとへ向かった。聖人のケリアに着くと、パウロは一人で中に入り、ピメンは外に残った。

父のように愛をもってパウロを迎えた聖パイシイは、まだ肉眼では見ていなかったものの、霊の目では遠くからすでにその姿を見出していた若きピメンについても尋ね、パウロにこう言った。

「君の同行者である若者はどこにいるのか？」

パウロは答えた。

「父上、彼は修道室の外に残っています。あなたのもとへ入ることを恐れ、恥ずかしがっているからです！」

すると聖人は、ピメンに中に入るよう命じて、こう言いました。

「救い主が天への昇りを容易にしてくださった者たちの、私たちへの訪問を拒むのは良くない。また、聖なる福音書の中で、主は人々にこう言われた。*『もしあなたがたが立ち返って、子どものようにならなければ、決して天の御国に入ることはできない』*（マタイ18:3）。」

そう言うと、聖パイシオスは少年を腕に抱き、顔を自分の方に向けさせて祝福し、パウロにこう言った。

「信じてほしい、愛すべきパウロよ。この少年は多くの人々の魂を救い、彼のおかげで多くの人々が楽園にふさわしい者となるだろう。なぜなら、彼には主の御手が共にあり、彼を守り、神への道へと導いてくださるからだ。」

そう言うと、聖パイシオスはピメナの頭に両手を置き、再び彼を祝福した。そして、魂の救いについてかなり長い会話を交わした後、二人を平安のうちに送り出した。一方、聖パイシオス自身は、沈黙を守りながら、いつもの断食の修行に励み続けた。

しかし、ここで尊者パイシオスの輝かしい奇跡についても語るべき時が来た。

シリアの地には、数多くの美徳に恵まれた一人の偉大な断食者が住んでいた。ある日、この修道士が祈りを捧げていると、思わず自問した。「神に喜ばれる人々の中で、自分は誰に似ているのだろうか？」そう考えた途端、天から声が聞こえてきた。

「エジプトの地へ行きなさい。そこでは、あなたと同じような謙遜さと神への愛を持つ、パイシオスという名の男に出会うだろう。」

これを聞いた敬虔な老僧は、直ちに急いで旅支度を整え、遠い道のりも過酷な労苦も顧みず、即座にシリアからエジプトへと向かった。 ニトリウス山の[4520]にたどり着くと、彼はパイシイについて尋ねた。「彼はどこにいるのか？」　パイシオスの名はすでに至る所で知られていたため、彼はすぐにその居場所を教えられた。また、パイシオスにとっても、長老の到来は知らぬことではなく、神の恵みによって明らかにされていた。そこで、彼は立ち上がり、長老を迎えに出かけた。　荒野で出会うと、二人は親しみを込めて互いに抱き合い、主による聖なる口づけを交わした。その後、パイシイの独房に入り、祈りを捧げた後、二人は腰を下ろして語り合いを始めた。

最初に聖パイシオに語りかけたのは長老であった。彼は通訳を介してシリア語で話した。というのも、彼はエジプト語を話すことができなかったからである。一方、エジプト人であるパイシオは、長老の有益な言葉を一つたりとも聞き逃したくなかったため、シリア語を知らないことを大いに嘆いていた。 そこで、彼は天に目を向け、心を神に向け、心の底からため息をついてこう言った。

「わが子よ、神の御言葉よ、どうかこのあなたのしもべに、この聖なる長老の言葉の力を悟らせてください！」

彼がそう言い終えるやいなや――ああ、神の助けは常に私たちにどれほど近いことか！　――その瞬間、彼は長老のシリア語の会話が理解できるようになり、神の御霊に照らされて、彼と同じシリア語で語りかけ始めた。そして二人は通訳を介さずに、神に霊感を受けた会話を楽しみながら、神から授けられたそれぞれの修業の労苦について語り合い、　また、それぞれがどのような神の賜物に恵まれたかについても語り合った。

こうして彼らは六日間を共に過ごし、霊的な甘美さに満たされ、彼らの救い主である神について喜びを分かち合った。そして、魂を救う彼らの対話が終り、長老がすでに自分の家へ帰ろうとしたとき、聖パイシオスは当時彼と共にいたすべての弟子たちを呼び集め、こう言った。

「愛する子らよ、この尊い方は、徳において完全であり、聖霊の恵みに満ちている。だから、皆、ここに集まり、その祝福を受け、敵のあらゆる中傷からあなた方を守るためのその祈りを受け入れなさい。」

パイシイがそう言うと、弟子たちは皆、シリア出身のこの長老にふさわしい礼拝を捧げ、彼から祝福を受けた。　その後、主に対してパイシイの弟子たちのために祈りを捧げ、キリストにちなむ愛の口づけを彼に贈り、またすべての兄弟たちとも別れを告げた後、この長老はパイシイとその弟子たちに付き添われて、自らの国へと旅立った。

長老が去ってからしばらくして、聖パイシオのもとに、他の人々とは離れて暮らしているある兄弟がやって来た。聖人の弟子たちは彼にこう言った。

「愛する兄弟よ！　ここには、シリアの地から来た、神の人であり、長老たちの中でも偉大な一人の長老がいました。　彼は知性と心の両面で啓発されており、その魂を救う語りかけによって私たちを大いに強めてくれました。彼はつい先ほど故郷へ帰りましたが、もし彼に会いたいのであれば、会えます。まだ遠くへは行っておらず、今この近くにいるはずです。ですから、彼に追いついて、彼から祝福を授かるよう努めてください。」

そして、その兄弟はすぐに長老の後を追おうと決心した。しかし、聖パイシイは彼にこう言った。

「行かないでください。その尊い長老は、すでに八十以上の道程を歩み終えておられます。なぜなら、雲に運ばれているからです。」

聖人がそう言うと、皆は驚き、御自身の聖徒たちにおいて驚くべき御方である主を賛美した。

ある日、聖パイシオに会いたいと願うある兄弟が訪ねてきたが、彼は眠っているところに出くわした。そして、その頭元には守護天使が立っているのを見た。その姿は実に美しく、驚いた兄弟は

[4520] エジプト北部、ナイル川デルタ地帯。

言った。「まことに、神は御自身を愛する者たちを守っておられるのだ！」　その兄弟は、天使の臨在を恐れ、眠っている師のそばに近づくことを敢えてせず、神に感謝を捧げてその場を去った。しかし、尊者のもとで神の天使を目にするという恵みにあずかったことで、彼は大きな益を得たのである。

聖パイシオスの弟子の一人は、師の命令に従い、自分の手仕事を売るためにエジプトへ向かった。道中、彼は偶然、同じくエジプトへ向かうあるユダヤ人と出会い、彼と一緒に旅をするようになった。　道中、そのユダヤ人は彼の純朴さを見て、心の中に潜む邪悪な蛇から湧き出る毒を、その汚れた舌で吐き出し始め、とりわけ修道士にこう言った。

「おお、愛する者よ！　なぜあなたは、あの単純で十字架にかけられた人間をそれほどまでに信じるのですか。彼は、待ち望まれていたメシアなどではなかったではありませんか。来るべきは別の人であり、彼ではないのです。」

ユダヤ人が他にも多くの狡猾で心を傷つける言葉を浴びせた後、修道士は、自身の知性の弱さと心の純真さゆえに、ユダヤ人に惑わされてしまった。彼はその言葉を真理として聞き入れ、さらにはこう口にした。

「お前の言うことは、もしかすると本当かもしれない。」

ああ、なんと誘惑であり、予期せぬ災いだろう！　なぜなら、この修道士（ああ、悲しいかな）は、後述するように、即座に洗礼の恵みを失ってしまったからである。

彼が荒野に戻り、聖パイシオスのもとを訪れたとき、長老は彼に対してまるで近づきがたい存在となってしまった。長老は弟子を見ることを拒んだだけでなく、あらゆる場面で彼から顔を背け、一言も返答しなかった。　師は長い間、このように弟子を避け続け、弟子はこれに深く嘆き、心を痛めた。聖パイシオに対して、自分には何の過ちも罪もないと知っていたからだ。ついに好機を捉え、修道士は尊者のもとへ行き、その足元にひれ伏して言った。

「父よ、なぜあなたは私からその尊い御顔を背け、この惨めな弟子である私を軽蔑されるのですか。そして、以前は決してそのようなことをなさなかったのに、今となっては私に対して、まるで忌まわしい人間であるかのように私を避け、そのような態度を取られるのですか。」

それに対し、長老は彼にこう言った。

「お前は誰だ？　私はお前を知らない。」

修道士は答えた。

「師よ、私に何か奇妙なところを見出したのですか。なぜ私を認識できないのですか。私はあなたの弟子ではありませんか？」と、そう言いながら自分の名を名乗った。

すると、長老は彼にこう言った。

「あの私の弟子はキリスト者であり、洗礼の恵みを身に受けていたが、お前はそうではない。しかし、もしお前が本当に私の弟子であるならば、まことに、洗礼の恵みはお前から離れ、キリスト者としての姿も奪われてしまったのだ。」　さあ、あなたに何が起きたのか話してください。そして、あなたに降りかかった試練について、また、その道のりでどのような魂を蝕む毒を受け入れてしまったのか、語ってください。

「お許しください、父上」と、修道士は答えた。「私は何もしていません。」

すると、聖人はこう言った。

「主を背いた者たち全員と共に、私から遠く離れなさい。私はあなたと語り合うつもりはない。もしあなたが以前のように私の弟子であったなら、私はあなたを以前のままの姿で見ることができたはずだからだ。」

すると、修道士はため息をつきながら、感極まって涙を流し、こう言った。

「私こそがあなたのその弟子であり、他の誰かではありません。自分が何を悪かったのか分かりません。」

その後、偉大なるパイシオスは彼に尋ねた。
「道中で誰と話をしていたのか？」
「ユダヤ人とです」と修道士は答え、「それ以外の人とは話していません。」
すると、聖人は彼にこう言った。
「そのユダヤ人はあなたに何と言ったのか。そして、あなたは彼に何と答えたのか？」
聖人の弟子はこう答えた。
「そのユダヤ人は、あなたがたが拝んでいるキリストは真のキリストではなく、救い主はまだこの世に来るべきである、とだけ言いました。私はそれに対して、『あなたの言うことは、もしかすると正しいのかもしれません』と答えました。」
すると、長老は叫んだ。
「ああ、呪われた者よ！　キリストとその神聖な洗礼を拒絶したこの言葉ほど、悪しきもの、忌まわしいものがあるだろうか。さあ、行って、好きなだけ自分を嘆き悲しめ。もはやお前には私のそばに居場所はない。お前の名は、キリストを拒んだ者たちと共に記されているのだ。彼らと共に、お前も裁きと苦しみを受けることになるだろう。」
長老のこの言葉を聞いた後、その弟子はため息をつき、涙を流しながら天を仰ぎ、懇願して尊者に向かって叫んだ。
「父よ、この罪深い私を憐れみ、私の魂に平安をお与えください！不注意のゆえに神の啓示を失い、悪しき悪魔たちの楽しみと喜びの的となってしまった私は、今、どうすればよいのか分かりません。　しかし、私は神とあなたの聖なる祈りにすがります。この罪深い私を見捨てず、主キリストに私のために懇願してください。そうして、主が再び私に御慈悲を授けてくださいますように！
彼がそう祈ると――言葉よりも涙で長老の心を和らげたため――聖人は彼を見つめて心を動かされ、こう言った。
「辛抱しなさい、わが子よ。今、私たちはあなたのために、人を愛する神の寛大さを懇願しなければならないのです。」
そう言うと、尊者は祈りのために部屋を閉じ、主に対し、不注意と無邪気な不注意によって御前で罪を犯したその弟子を赦してくださるよう願い求めた。そして、決して見捨てることなく、常に御自身の御心に適う者の祈りを聞き入れてくださる主は、憐れみを示し、罪を犯した者を赦された。そして、その赦しのしるしとして、次のような幻が見られた。尊者様は、聖霊の恵みが鳩の姿となってその弟子のもとに戻り、その口の中に入っていくのを見届けた。同時に、罪を犯した修道士から、暗い煙の姿となって出てきて、空中に広がっていく悪霊の姿も目撃した。
これを見て、聖人は主がその兄弟に赦しを授けられたと確信し、彼に向き直って言った。
「おお、わが子よ、私と共にキリスト・神に栄光と感謝を捧げなさい。不浄で冒涜的な悪霊があなたから去り、その代わりに聖霊があなたの中に入り、洗礼の恵みをあなたに返してくれたのだから。　それゆえ、これからは自重し、怠惰や不注意によって再び敵の罠に陥ったり、罪を犯してゲヘナの火を受け継いだりすることのないようにしなさい。
これが聖パイシオスの奇跡の一つであった。しかし、彼の他の輝かしい行いについても語り続けよう。
ある日、聖パイシオのもとに、ヨハネという名の老修道士が訪ねてきました。彼は長年にわたり荒野で過ごし、断食の修行に励んでいました。この兄弟はひどく空腹で、食べ物を必要としていました。聖人は、ヨハネがひどく飢えていることを霊によって悟り、弟子にこう言いました。
「急いで食事を用意し、食べ物を運んで来なさい。そうすれば、私たちもヨハネ父と共に腹を満たすことができる。」
食事が用意されると、聖パイスイはヨハネにそれを味わうよう勧め、こう言いました。
「長期間の断食のため、今、君には食べ物が必要だ。さあ、食べて元気を回復しなさい。」

すると、ヨハネは彼にこう言った。

「お許しください、父上。今は断食の期間であり、数多くの罪のゆえに、私は断食すべき身なのです。」

すると、長老はヨハネの節制ぶりに驚き、すぐに立ち上がり、天を仰ぎ見て、心の底からこう祈った。

「主よ、御名のゆえに労苦し、力尽きかけている御僕ヨハネを憐れんでください！」

パイシイがこのように祈っている間、彼の功績により、彼がこの祈りを捧げていたその人へと、神から偉大で栄光に満ちた啓示が下された。 ——すると、ヨハネはまるで恍惚状態にあるかのように、ある美しい若者を目にしました。その若者は、飢えを癒やすために、手には食べ物と飲み物を持ち、それを彼に差し出していました。正気に返った彼は、あたかも極上の饗宴で完全に満腹になったかのように、大きな甘美さに満たされ、 もはや長老が差し出した食物を必要とせず、天の糧で十分に満たされていた。そこで、神と神の聖人パイシオスに感謝を捧げ、自らの荒野へと戻り、断食の修行をさらに強め、絶えず自分自身にこう言い聞かせた。

「実に甘美な食事をいただいた。それゆえ、熱心に断食を続けよう。」

こうして、この至福のヨハネは、聖パイシオスの祈りに支えられ、断食の修行に励み、成果を上げた。

「私が時折、尊者パイシオスの元を訪れていた頃」と、至福のヨハネス・コロフは記している。「ある修道士たちが彼のもとを訪れ、魂に有益な言葉を聞きたいと願い、その際、しばしば彼にこう尋ねた。

『父よ、私たちの救いについて教えてください。主のために、私たちはどのように生きるべきでしょうか？』

すると、長老は彼らにこう答えられた。

『神の戒めを守り、先人たちの伝承を守り続けなさい。

また別の時、修道士たちは彼にこう頼みました。

「父よ、私たちの魂の益となることを、何かもう一つ教えてください。」

神聖なその方は、その透徹した眼差しで彼らの思いを見抜き、一人ひとりにその人が考えていたことを告げると同時に、彼らの思いのうちどれが善であり、どれが悪であるか、そしてそれらの思いがなぜ彼らの心に浮かんだのかについても説いた。

これらの修道士たちは、長老の洞察力に深く驚嘆し、私（ヨアン・コロフが語る）に密かにこう言った。

「まことに、ヨハネ師よ、アッバ・パイシイは私たちの心のすべての秘密を明らかにしてくださいました。ただ神のみが知っておられたことさえ、彼は私たちの中にはっきりと見抜いていたのです。」

そこで私は彼らにこう言った。

「私たちも何度も、経験を通じて彼のこの洞察力を知ってきました。もしあなたがたが私を信じるなら、真実を話しましょう。なぜなら、彼については真実以外のことは何も語るつもりはないからです。私たちは、聖なる福音書の中で*『自分の言葉によって義とされ、自分の言葉によって罪に定められる』*（マタイ12:37）*と語っておられる、真の裁き主を恐れているのだ。「また、あなたがたに言っておく。人が口にするむなしい言葉の一つひとつについて、裁きの日にその答えを求められることになる」*（マタイ12:36）。 それゆえ、私はあなたに、偽りでもなく、むなしくもない言葉を語ります——私が心の中でしばしば考えていたこと、また他人の目から隠れて密かに行っていたことすべてについて、パイシイ神父は、私が彼を訪ねると、まるで彼が私と同じ修道室にいて、私の行うすべてを見ていたかのように、私に語りかけてくれたのです」。

修道士たちは、私のこの話を聞いて驚き、こう言いました。

「『*主は御自分の民に力と強さをお与えになる*』（詩篇67:36）。

そしてその後、彼らは去り、主のしもべである聖パイシイに与えられたその偉大な恵みを称えて、主を賛美した。

さらに、この尊者様の祈りがいかに力強く、神から背を向けていた大罪人を再び神のもとへ導き、救いの道へと立ち返らせることができたかについても述べておこう。

イサクという名の兄弟が、心の衝動に従い、沈黙を守るという修道者の修行を捨て、町の近くに定住することにした。　彼は手作りの品を売るために頻繁にその町へ出入りしていたため、すぐに破滅的な罠に陥ってしまった。あるユダヤ人の女性が、彼が売っている品物を買おうと彼に近づいてきた。　彼は彼女の顔を一目見てその美しさに気づき、たちまち彼女に対する不純な想いに囚われてしまった。同様に、その女も彼がまだ若き青年であることを見て、彼に視線を注ぎ、二人の間で交わされた会話の後、彼らは互いに悪魔的な愛に燃え上がった。　こうして間もなく、悪魔の働きかけにより、その修道士はあの邪悪な女の罠に陥り、罪を犯して不義を産み出した。修道生活をやめ、彼女と結婚し――ああ、なんと悲惨なことか！　さらに悪いことに、この呪われた男は、修道生活だけでなく、この女性への愛ゆえに信仰までも捨ててしまった。彼はユダヤ教に改宗し、旧約の律法に従ってユダヤ人たちと共に暮らし、彼らと常に語り合い、ユダヤ人たちがそうするように、私たちの救い主キリストを冒涜した。　イサクは、キリストに対する激しい憎悪と、その至聖なる御名への憎悪に囚われていた、邪悪で不浄な妻の意のままにすべてに従っていた。その妻はしばしば、この忌まわしい夫の頭を自分の胸に抱き、彼の口を開かせると、小さな小枝で彼の歯を引き抜きながら、こう言い放った。　「キリスト教の聖体拝領の一部が歯の間に残ることのないように」――というのも、この不敬虔な妻は、キリスト教徒の口の中では神聖な聖体が長く歯の間に残ると考えていたからである。そして夫は彼女の悪意に屈し、まことにキリスト、すなわち私たちの主の敵となってしまった。なんと不敬虔なことか！　「私は知っている」と著者は言う。「この話を聞いた者たちは皆、心を痛めるだろう。しかし、私は神の寛容さ、その偉大なる人間愛、そして計り知れない神の恵みに驚嘆する。その恵みは、義人だけを愛するだけでなく、罪人に対しても憐れみを示し、ひそかに彼らの心に触れ、まるで四方を閉ざされた聖堂の小さな隙間から差し込む一筋の陽光が、その全体を照らし出すかのように。しかし、ここで再び中断していた物語に戻ろう。

その忌まわしい修道士は、修道生活とキリスト教から離れ、破滅的な不信仰によって地獄の深淵へと堕ちていったが、その不義に陥ってからかなり長い時間が経った後、ようやく少しずつ正気を取り戻し始め、良心の呵責に苛まれながら、自らの破滅の全貌を悟り始めた。　その頃、かつてこの背教した修道士イサクが断食の修行に励んでいたあの荒野の修道院の兄弟たち数人が、用事を済ませるために町へ出かける必要が生じた。神の御心により、彼らは、イサクが誘惑に負けてユダヤ人の妻と共に暮らしていた家の前を通り過ぎることになった。　彼らが通り過ぎるのを見て、彼は直ちに心を痛め、かつての自分の生活と、高潔な聖なる兄弟たちの群れを思い出した。家から出て彼らに近づくと、彼は尋ね始めた――どこから来たのか、誰なのか、そしてなぜここに来たのかと。彼らはそれにこう答えた。

「私たちはニトリアの荒野[4521]から来た、偉大なるパイシオスの弟子たちです。用事があり、ここへやって来ました。」

すると彼は深くため息をつき、自分のことをすべて彼らに打ち明け、偉大な長老に自分の願いを伝えてほしいと熱心に懇願し、主が彼のために祈り、その祈りによって敵の罠から救い出してくれ

[4521] ニトリアの荒野における修道生活の始まりは、聖アントニオスの同時代人である聖アモンによってもたらされた。ニトリアの地で聖アモンは修道院を設立し、アントニオスはスキト（隠遁所）の建設の礎を築いた。4世紀末には、聖パコミオスの規則に基づいて設立された修道院が50か所近く存在していた。　ニトリアの南にはスキトス砂漠があり、そこには多くの修道士が暮らしていた。

るよう願った。　修道士たちは、心の中で彼を案じながら、その願いを聖なる長老に伝えると約束し、実際にそうした。家に戻ると、彼らはこのすべてを祝福された父に語った。長老は彼らの話を聞き終えると、心の底からため息をつき、こう言った。

「ああ、愛する子らよ、男たちが女のせいで、どれほど頻繁に神の恵みを失っていることか！そのような男たちについての指摘は、古の教父たちが記した聖書の中にあります。なぜなら、人々に戦いを仕掛ける敵にとって、女ほど堅固な武器はないからです。　この武器を利用することで、敵は偉大な男たちさえも容易に打ち負かしてきた。偉大なるダビデとその曽孫や孫たちのことを思い出してみよ。――だからこそ、私たちも常に用心深くあり、そのような狡猾さから逃れるために、常に主に祈らなければならないのだ。

そう言うと、長老は祈りの小部屋に閉じこもり、祈りの姿勢をとって、主に向かって次のように叫び始めた。

――主イエス・キリストよ、神の御子、御言葉よ！御自身の御業を軽んじることなく、あの修道士が永遠に滅びの深淵に投げ込まれることのないようお守りください。どうか天の御住まいから憐れみ深く見守り、私があなたに捧げる祈りを軽んじないでください：　あなたから背き、今再び悔い改めた者の嘆願をお受けください。あなたの慈しみに頼り、彼を悔い改めへと導いてください。

聖人がかなり長い間このように祈り、絶えず神の寛大さに懇願し続けた後、その嘆願によって神の憐れみは動かされた。なぜなら、救い主は御自身を愛する者たちの祈りを軽んじられることはないからである。聖なる長老のもとに主ご自身が現れ、すべてをご存知なる方は彼にこう尋ねられた：

「あなたは昼も夜も、誰のためにわたしに叫んでいるのか。かつては修道士であったが、今はユダヤ人となり、わたしから背を向け、今や敵の側へ移った、あの呪われた男のことではないか。わが愛する者、パイシイよ、あなたはこの人のために祈っているのか。」

これに対し、長老は主に向かってこう答えました。

「その者のために、私はあなたの慈愛を願っております、人を愛する主よ。すべての人を救いへと招き、罪人の死を望まず、その回心を待ち望まれるあなたの寛大さに目を向け、――私はこのあなたの寛大さゆえに、あえてその者のためにあなたの慈愛を願い求めます。　善き羊飼いよ、迷い出た羊を呼び戻し、再び御自身の囲いの中へ迎え入れ、彼に憐れみをお与えください。

この祈りに対し、主は彼にこう言われました：

「わが愛する者よ！　あなたの敬虔さは偉大である。あなたはわが愛に倣い、罪人の救いを案じているからだ。それゆえ、悲しむな。求めたものはあなたに与えられるであろう。」

こう告げると、主は天に昇られた。しばらくして、その邪悪なユダヤ人の女は、神の怒りに打たれて亡くなった。　イサクは再び荒野に戻り、聖者に面会すると、その尊い御足にひれ伏し、泣きながら自分の罪を告白した。彼の帰還と悔い改めは、聖者およびその荒野のすべての長老たちに大きな喜びをもたらした。　偉大なる父の教えを受けた後、この修道士は再び以前の信仰を取り戻し、再び天使のような姿に身を包んだ。そして、自らの罪を嘆き、悔い改めながら、大きな労苦に励んだ。こうして、悔い改めの中で、徳高く、神に喜ばれる生き方を全うし、主のもとへ旅立った。　そして、このすべては、敬虔なパイシオスの祈りによって、この罪人が得たものであった。彼は悔い改め、救われたのである。そして、この輝かしい御業を聞く我々は、その御使いをこれほどまでに高めてくださったキリスト・神を賛美し、讃えるべきである。

尊者パイシオスの弟子たちの中には、極めて世俗的な習慣や気質を持つある長老がいた。修道士たちが教訓を求めて尊者のもとを訪れ、神に霊感を受けたその言葉を聞くとき、　――その長老も彼らと共に耳を傾けていたが、そこから何の益も得られなかった。なぜなら、彼の中にはよく耕され、潤いのある土壌がなく、その心は石のように硬く、冷たくなっていたからである。それゆえ、神聖な説教という良き種は、彼の中に根を下ろし、芽吹くことができなかった。時には、彼は聖人の言葉

を冒涜することさえあった。　というのも、その老修道士は、尊者から離れると、他の兄弟たちの前で、時折、聖パイシオスの説教を罵倒することさえ許し、その際、世俗的で不敬虔な人々にふさわしい、人を堕落させ、冒涜的な嘘ばかりを語っていたからである。そして、一部の修道士たちは、彼から聞いた冒涜的な言葉に惑わされていた。　かなり長い時間が経過した後、兄弟たちは、もはや彼の心を乱す言葉を聞くことを望まなかったが、自分たちで聖なる父にそのことを告げることも恐れ、ある神を愛し徳高い修行者のもとへ赴き、その悪意に満ちた長老について訴えた。すると、その修行者は彼らと共に偉大なるパイシオスのもとへ向かった。

その時、聖人が一人きりで神への黙想にふけっていたところ、天使の声が聞こえてきた。

「父よ、知っておきなさい。あなたの弟子たちと共にいるあの長老は、誘惑をまき散らし、他の兄弟たちを堕落させている。それゆえ、彼の無法な行いを断ち切り、戒めによって彼を正さなければならない。」

この声に対し、聖パイシオスはこう答えました。

「もし彼を正すことができると知っていたなら、とっくにそうしていたでしょう。」　しかし、悪魔は彼を滅ぼそうと待ち構えており、現れては狡猾な手口で彼を自らの罠へと誘い込んでいる。それゆえ、私は彼に厳しい言葉を投げかけることはできない。そうすれば、彼は私の言葉を苦々しく受け止め、自分への侮辱とみなしてしまうだろう。もしそうなれば、彼は兄弟たちの輪や荒野を離れ、再び世へと戻ってしまうかもしれない。　そうなれば、私は彼の破滅の原因となり、敵に翻弄されている兄弟を忍び忍べなかったとして、神の前で罪を問われることになる。むしろ、主が彼をそのような病から癒してくださるよう、彼のために祈らなければならない。

そう言うと、彼はその長老のために祈り始めた。するとすぐに、長老から冒涜的で恥知らずな霊が立ち上るのを見た。　その後、その神を愛する修道士と共に兄弟たちが父のもとへやって来たが、無作法な長老について語り始める前に、彼もまた彼らの後を追ってやって来て、聖なる父の足元にひれ伏し、涙でその足を洗いながら、悔い改め、許しを請い、自分の生き方を改めることを誓った。それ以来、彼は柔和で従順な人となった。尊い父の口から発せられる神に導かれた教えを喜んで聞き、その教えから得たことを実践に移すようあらゆる努力を尽くした。　そして間もなく、彼は徳において多くの人々を凌駕し、経験豊かな隠者となった――これらすべては、神に彼への大いなる慈悲を請い求めた聖パイシオスの助けと祈りによるものであった。

しかし、この話はこれくらいにしておこう。聖パイシオスの他の輝かしい功績についても、黙って通り過ぎるわけにはいかないからだ。そこで、彼の数多くの奇跡については、これらすべての奇跡的な行いを詳細に記述することは不可能であるため、これ以上触れないことにしよう。すでにそれらについてかなり語ってきたのだから、残りのことについては黙っておこう。

ある日、二人の若い兄弟が荒野の聖パイシオのもとを訪れ、尊者のお命じにより、すでに彼の修道院にいた兄弟たちと共に暮らすようになった。一方、パイシオ自身は弟子と共に、自分の修道院から遠く離れた荒野で別々に暮らしていた。

長い間、その二人の兄弟は従順の修行に励んでいたが、ついに長老のもとを訪れ、荒野で二人きりで隠遁生活を送ることを許してほしいと懇願した。　尊者は、彼らが断食の修行に対する熱烈な志を持っているのを見て、また彼らが特別な荒野の沈黙の生活に適していることを悟ると、彼らの願いを聞き入れ、修道院から荒野の隠遁生活へと移り住むことを祝福した。　そして、この二人の兄弟は、荒野の中で禁欲の修行に適した静寂な場所を見つけ、そこに定住して、悪霊のあらゆる誘惑を巧みに打ち破りながら、神に喜ばれる生活を送った。　しかし、目に見えない敵は、常に善良な人々を妬み、キリストの僕たちに対して多種多様な策略を編み出す術を知っていたため、その狡猾さをこの二人の修道士にも向け、次のように彼らを惑わそうと企てた。　ある砂漠の隠者――彼はまだ修道者としての無所有の境地に達していなかった――の、質素な小部屋の持ち物が盗まれてしまった。この隠者はまだ気弱であったため、盗まれた品々を惜しみ、盗人を探し回ったが、見つけることはできな

かった。　ある透視の能力を持つ長老の話を耳にし、その長老が盗まれた品と犯人を突き止める手助けをしてくれることを期待して、彼はその長老のもとへ向かった。しかし、敬虔なパイシオス修道士のもとへは、彼が自分の貪欲を咎めるのではないかと恐れて、あえて行くことはできなかった。

その予知能力を持つ老人の元へ着くと、修道士は彼に、盗まれた物がどこにあるのか、そして誰が盗んだのかを教えてほしいと懇願した。　しかし、その老人は実際には神の恵みによって透視の賜物を授かっていたわけではなく、悪霊の教えに従い、悪魔の力によってすべてを見通していたため、最近荒野に定住した二人の修道士を名指しして言った。

「この修道士たちだ」と透視者は言った。「彼らが盗みを働いた。この沈黙を守る者たちを捕らえたら、彼らがすべてを返還するまで決して解放してはならない。」

これを聞いた隠者は、直ちに急いでその荒野の修道院へと向かった。修道院長のもとへ行き、強力な警備を頼み込んだ後、さらに先へ進み、あたかも偶然であるかのように、あの沈黙を守る二人の修道士に襲いかかった。彼は彼らを悪党のように捕らえ、殴打しながら引きずり、修道院へと連行した。　そこで彼らは不名誉な形で牢獄に閉じ込められた。一方、修道院長は長老たちと共に、その先見の明を持つ者の言葉を信じ、その修道士たちを泥棒として修道士としての地位を剥奪する判決を下し、盗まれた品々について殴打による拷問を始めた。　一方、聖パイスイは、神の恵みにより、起こったすべてのことを先見の明をもって知り、その時に不当に苦しめられていた二人の兄弟を憐れみ、立ち上がって、自分のケリアからその修道院へと向かった。　彼の到来はたちまち至る所に知れ渡った。なぜなら、隠遁者たちの間では、その神に喜ばれる生き方によって至る所で称賛されていたパイシイの名ほど、栄光に満ちたものはなかったからである。彼を歓迎するために、近隣の修道院や隠遁者のケリアから兄弟たちが集まり、長老たちさえも彼のもとへ駆けつけた。　その中には、悪魔の誘惑によって、自らを透視者だと偽っていたあの長老も来ていた。そして、すべての父たちと兄弟たちが聖人にキリストの愛に満ちた口づけを捧げているとき、私たちの偉大なる父パイシイは彼らに尋ねた。

「二人の若い修道士――荒野の隠者たち――をどこへ連れて行ったのか？」

兄弟たちは沈黙した。その後、そのうちの何人かが答えて言った。

「父よ、彼らは泥棒であり、その悪行のせいで今、牢獄に閉じ込められています。」

聖人はそれに対し、彼らにこう言いました。

「誰が彼らを泥棒だと言ったのか？」

すると、兄弟たちは、先見の明のある長老を指さして答えた。

「この先見の明のある父が、彼らを泥棒だと指さしたのです。」

すると、偉大なるパイシイは、その長老に尋ねた。

「あなたが彼らのことについて言ったことは本当か？」

すると、その老人は答えた。

「私が言ったことは真実です。それは神から私に啓示されたのです。」

その後、聖パイシイはこう言った。

「もしお前のその透視能力が、悪魔の誘惑によるものではなく、神から与えられたものなら、お前の口元には悪魔の姿は見えなかったはずだ。」

これを聞いて、皆は恐怖に包まれた。なぜなら、パイシイの口から発せられる言葉が真実であることは誰の目にも明らかだったからである。そして皆は、惑わされたその透視能力者を責め立て、尊者への許しを請うよう強いた。すると彼は、恥に打ちひしがれ、聖人の尊い足元にひれ伏し、こう言った。

「父よ、私を赦してください。そして、惑わされた私のために祈ってください。」

そして、聖人が彼のために祈りを捧げた途端、皆の目の前で、惑わされた男の口から、虚栄心と偽りに満ちた悪魔が現れ、巨大な野生のイノシシへと姿を変えると、激しい怒りを露わにして聖人

に襲いかかり、まるでその歯で聖人を引き裂こうとするかのように迫った。　しかし、祝福された父は、その不浄な霊を呪い、深淵へと追放した。　そして、かつて悪魔に惑わされていたその長老は、彼から発せられる悪魔的な惑わしの力を感じ取り、さらには目でもそれを見た。大きな恐怖と戦慄に襲われ、彼は地面に倒れ込み、パイシイの足元にひれ伏し、涙ながらに彼から完全な赦しを請うた。また、誘惑に身を任せて罪のない者たちを傷つけた他の兄弟たちも、皆、聖人の足元にひれ伏し、彼に許しを請いました。そして、あの二人の若い修道士が監房から連れ出されると、皆は彼らを見つめながら感動の涙を流し、彼らを傷つけた者たちは、彼らに祈りを捧げてくれるよう懇願しました。
一方、聖パイシイは皆に、このような敵の誘惑を慎重に避け、聖人や先見の明があるように見せかけようとする者たちの偽預言を信じてはならないと教えた。　また、ラヴラ修道院のイグメヌスには、二人きりになった際、盗まれた品々がどこに隠されているかを教えたが、盗んだ者たちについては何も語らなかった。その後、すべての人に赦しを与え、皆のために祈りを捧げた後、彼は自分の独房に戻った。

同じ頃、同じエジプトの砂漠において、もう一人の神の御使いである聖パウロが、禁食の行いにおいて輝かしい功績を挙げた。彼の祈りによって、主は人々にもまた大きな慈悲を示されたのである。

ある時、聖パイシオスは彼を訪ねたいと願い、彼の元へ向かった。そして二人は、まるで二人の神の天使、あるいは二人のキリストの戦士のように出会った。彼らは目に見えない敵を力強く打ち負かし、互いにその において助け合っていた。 そして、二人はまるで要塞のようで、いかなる敵の狡猾さにも打ち勝つことができ、聖霊に満たされた言葉で互いに語り合い、共に沈黙の甘美な実を味わった。　老境にあっても、彼らは日々、まるで若者のような功業を成し遂げ、そのたびにあたかも新たに奮闘し始め、さらに完全な人生を送ろうと決意したかのようであった。

偉大なるパイシイはパウロより年長であったが、至福のパウロは外見は威厳を帯びていたものの、心は善良であった。そこで、尊者パイシイはこう言った。

「我々がこの世にいる限り、主は我々の肉体が衰え、怠惰になることを望んでおられない。もし我々が死を迎える時に怠惰に陥っていたなら、それは我々にとって恥であり、恥ずべきこととなるだろう。」

尊者パイシイがそう言うと、至福のパウロはそれを聞き、こう答えました。

「ああ、牧者の長よ、私はすでに、怠惰に陥らないというあなたの称賛に値する善き助言に従っており、あなたの聖なる祈りによって、主が私の生涯をあなたの御心通りに歩めるよう助けてくださることを神に信頼しております。」

かなり長い間共に暮らし、互いに教えを授け合った後、聖パイスイと至福のパウロは、主を称えて親しく口づけを交わし、肉体は別れたものの、霊は一つであり続けた。聖パウロは以前の場所に留まり、聖パイスイは自身の修道室へと戻った。

この二人の聖なる父たちは、奇跡を行う者であり、情欲を癒やす者であり、魂の救いにおいて経験豊かな導き手であり、すべての人々のために祈りを捧げ、一人ひとりの救いのために執り成し、また導き手でもありました。彼らは行いにおいても言葉においても力強い人々であり、あらゆる人にとって良き模範となっていました。なぜなら、聖パウロの修道生活における労苦は神に大いに喜ばれていただけでなく、　また、至福のパイシオスが行った数多くの超自然的な断食の功業――すべてではなく、その一部に過ぎないものの――は、ほぼすべての人に知られていた。　そして、それらが知られていたのは、まさに、これらの功績を聞く者たちを全能の神への感謝へと導き、また、修業に励む者たちをさらなる熱意へと燃え上がらせるためであった。なぜなら、いかなる人間の言葉も、彼の霊的生活の全高さを十分に伝えることはできないからである；　彼は密かに主に多く仕え、自分の善行が他人に知られることを好まなかった――それはもちろん、彼の偉大な謙遜によるものである。そして、兄弟たちの誰かが彼に「どの美徳が最も高いものか」と尋ねると、彼はこう答えた。「密かに

行われ、誰も知らない美徳である」。　また、彼は次の美徳も高く尊んでいた――あらゆる事において、自分の意志ではなく、他者の意志に従って行動することである。　その徳に満ちた生涯を通じて、尊者様はあらゆる行いにふさわしい時を定め――そしてそれを厳格に守り抜いた。彼には沈黙すべき時、語るべき時――独りになり、自分の小部屋に閉じこもるべき時、兄弟たちのところへ出て、魂に有益なことを語り合うべき時があった。　かくして、静寂の中で、尊者は神を想う心による高みへの歩みを通じて神に近づき、兄弟たちとの交わりにおいては隣人の救いを求めた。そして何よりも驚くべきことは、彼が自らの徳を賢明に隠す術を心得ており、彼と交わりを持つ者すべてにその生涯が知られないようにしていたことである。　そして、兄弟たちが何らかの行いについて彼を称賛し始めると、彼はその行いをやめ、別の功業を成し遂げ始め、皆が彼の最初の行いを一刻も早く忘れるようにした。「そこで、私――聖パイシオスの伝記の著者が言う――が彼に『なぜそのようなことをなさるのですか』と尋ねると、　――と尋ねたところ、彼は喜びながらこう答えた。『それは、私の以前の功績が損なわれないようにするためだ。なぜなら、人間の称賛は大きな災いであり、そのために労苦する者は、自分自身にほとんど益を得られず、そのような人々の中で救われる者はほとんどいない。虚しい人間の栄光は彼らに多くの害をもたらすからだ。そして、私たちの主が言われた通りである：

– *『あなたの左手が、右手のしていることを知ってはならない』*（マタイ 6:3）。

これらの言葉と尊師の教えを思い起こして（ヨハネは続ける）、私はこの物語の結末にたどり着く。

深き老齢に達し――その生涯において偉大であり、美徳に満ちていた――我らの尊い父パイシイは、この世での務めを終え、主は彼を永遠の安息と天の至福へと召された。　その遺体は多くの修道者たちによって尊厳をもって埋葬され、その魂は天上の不滅の命へと昇っていった。

その少し後、至福のパウロもまた、はるか遠くの荒野にて、この世の生活から旅立った。　老いることのない命へと移り、聖パイシオスと共に聖人たちの光の中に安らぎを得た――それは、修道生活において共に奮闘したように、彼らの至福の魂もまた共に、　の尽きることのない安息を享受するためであった。　彼らの尊い遺体は、互いに離れて長く安置されることはなかった。神の御心により、まもなくそれらも共に安置されることとなった――そして、それがどのようにして起こったか。

ペルシオス山にある自身の修道院で断食に励んでいた私たちの尊い父イシドールは、偉大なるパイシオスの帰天の報を耳にすると、船に乗り込み、その聖なる遺体が埋葬されていた場所へと向かった。彼は敬意と畏敬の念をもって遺体を土から掘り起こし、葬送用の布で包むと、　聖棺に納め、あらゆる富よりも尊い偉大な宝物として、自らの修道院を豊かにしようと願った。そして、その聖棺を自らの船に運び込み、主を賛美し称えながら、大いなる喜びをもって旅立った。　ところが、彼が聖パウロの尊い遺体が眠るあの荒野の近くを航行していたとき、突然、船はあたかも何らかの不思議な力に引き止められるかのように止まり、聖パウロの荒野がある方向へと向きを変えた。　船乗りたちは、その場所から離れようと長い間懸命に努力したが、どうすることもできなかった。彼らは二日間もその状態で苦闘し、どうすれば航海を再開できるのか分からず、大きな困惑に陥っていた。一方、聖イシドールは、　この船の停泊が神の摂理によるものであると悟ると、船員たちに、船をその行くままに任せるよう命じた。すると、船は目に見えない手に導かれるかのように、聖パウロの遺体が安置されているあの荒野の岸へと進み、浅瀬に座礁した。

その間、船に乗っていた者たちは皆、この事態を嘆き、戸惑っていたが、その時、荒野からエレミヤという名の老人がその岸辺にやって来た。彼は船に乗っていた者たちに向かってこう言った。

「愛する者たちよ！　なぜ無理をしてまで苦労しているのですか？　尊者パイシオスが、その最愛の弟子である尊者パウロを呼び寄せているのが見えないのですか？　彼は、パウロと共にあなたの国へ移され、同じ場所に葬られることを望んでいるのです。さあ、急いで彼の遺体を引き取りに行きましょう。」

これを聞いた聖イシドールと彼と共にいた者たちは皆、大きな喜びに満たされ、岸に上陸すると、その敬虔な父エレミヤに尋ねた。

「聖パウロの遺体はどこに安置されているのですか？」

すると彼は彼らを遠く離れた荒野へと案内し、聖パウロの棺を見せた。そこからその尊い遺骨――金やあらゆる宝石よりもはるかに貴重なもの――を取り出し、彼らはそれを聖パイシオスの遺骨のもとへ運んだ。そして船に乗り込むやいなや、船はたちまちその場から動き出し、なんと奇跡的に！ 船は本来進むべき航路を猛スピードで進み、たちまちペルシアにあるその埠頭に到着した。 そこで、聖イシドールは、聖パイシオスと聖パウロという二人の聖なる父たちの尊い遺骨を陸に運び上げ、詩篇や霊的な賛美歌を歌いながら、自身の修道院へと運び、自ら建立した教会に安置した。 そこで、輝かしい奇跡が起こった。悪霊に苛まれている者や、何らかの病に冒されている者たちは、その尊い聖遺物箱に触れるやいなや、即座に癒やされた。 悪霊は追い払われ、あらゆる病は、これらの偉大なる神の御使いたちの祈りによって即座に癒やされた。

私、ヨハネ（通称コロフ）は、これを読む者や聞く者のために記した――父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の栄光のために。神にこそ、今、そして常に、世々限りなく、あらゆる栄光と誉れと礼拝がふさわしい。アーメン。

聖殉教者ゾシマ・戦士の受難

記念日：6月19日

当時、ローマ帝国はトラヤヌス皇帝[4522] によって統治されていたが、周知の通り、ギリシア人たちは依然として偶像崇拝と大きな霊的な盲目さに囚われていた。そのため、その治世において、まもなく神の教会に対して激しい迫害が加えられた。

この頃、ギリシャ人の中にドミティアヌスという名の著名な人物がいた。彼はピシディアのアンティオキアの総督であった（[4523] ）。ある日、彼はトラヤヌス帝のもとを訪れ、キリスト教徒に対する権限を授かるよう懇願した。それは、神々に犠牲を捧げることを拒む者すべてを、激しい拷問によってそれに従わせるためであった。 皇帝からそのような権限を与えられ、悪魔の鎧を身にまとった彼は、まるで獅子のように、最後までキリストへの信仰を堅く 守り抜こうとする者たちに対して怒りを燃やした。 ある日、ソゾポル地方を通りかかった際、彼はアポロニアと呼ばれる町[4524] に近づいた。この町には、ゾシマという名のギリシャ人戦士が住んでおり、彼は常にキリストの信仰の信徒となることを切望していた。 イゲモンの接近と迫り来る迫害の噂を耳にすると、彼は武器を脱ぎ捨て、聖なる教会に加わることを決意した。そして、キリストへの信仰を学び、聖なる洗礼を受けた後、キリスト教の美徳を追求し、清さと貞潔、断食と祈りに励むようになった。

数日後、イゲモン・ドミティアヌスがその町に到着すると、ある偶像崇拝者が彼の元へ近づき、こう言った。

「この町には、ゾシマという名の兵士が住んでおり、彼は皇帝とあなたの権威を軽蔑しています。彼はトラヤヌス帝から授けられた軍階を拒み、武器を捨て去りました。彼は自らをキリスト教徒と称し、我々の神々を無に等しいものと見なしています。また、皇帝の法律を忌み嫌い、皇帝の権威をも軽蔑しています。」

[4522] 89年から117年まで在位した。

[4523] ピシディア――小アジア南部の地域で、キリキアに隣接している。

[4524] トラキア、ポントス付近に位置する。ちなみに、この都市にはアポロンを祀る神殿があり、その中には巨大なアポロン像が安置されていた。ビザンツ時代にはソゾポリスという名で知られていた。現在は、シデボリという取るに足らない小さな町となっている。

これを聞いたイゲモンは言った。
「そのゾシマを、ここ、法廷へ連れて来い。」
そこで、王の衛兵たちは、イゲモンの命令に従い、ゾシマの元へ向かい、彼を捕らえて法廷へ連行した。イゲモンは彼を見て、こう尋ねた。
「お前がゾシマか？」
キリストの戦士は答えた。
「私はゾシマ、私の主イエス・キリストのしもべです。」
その後、イゲモンは言った。
「まず、お前の位階を告げよ。それから、誰のしもべであるか言え。」
聖人はこれに対し、こう答えた。
「身分としては、かつてはあなたがたの地上の王の戦士でしたが、あなたがたの破滅をもたらす神々を拒み、天の王、キリスト、まことの神の戦士となりました。」
「おお、不義なる者よ」とドミティアヌスは言った。「キリストの名は君を救わない。むしろ神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、君に軍人としての地位を与えた我らの王トラヤヌスに対する罪は赦されるだろう。」
すると、聖人はこう言った。
「決して、あなたの神々に犠牲を捧げるつもりはない。」
その後、ドミティアヌスはキリストの戦士を牢獄へ連行するよう命じた。
翌朝、聖人は両手を後ろ手に縛られたまま再び法廷に連行され、イゲモンは彼を拷問台に吊るすよう命じた。殉教者が吊るされたとき、ドミティアヌスは彼にこう言った。
「不敬虔なゾシマよ、神々に犠牲を捧げよ。さもなくば、お前の全身が今すぐ残酷な拷問にさらされることになる。」
これに対し、聖人はこう答えた。
「言葉だけでなく、傷さえも、私がお前の神々に犠牲を捧げるよう私を説得することはできない。」
そこでイゲモンは、残忍な兵士たちに聖なる殉教者を容赦なく殴打するよう命じた。聖ゾシマへの拷問が始まると、彼はイゲモンにこう言った。
「お前の家来たちは無駄な労苦をしている。主が私を強めてくださっているから、私は自分に与えられる傷さえ感じないのだ。」
聖人は長く拷問され、やがて大地さえもその血で染まった。ついに殉教者は、声を張り上げて主に向かって叫んだ。
「全能の主なる神よ、御自身の栄光の御座に坐し、天を創造し、地を築き、水を一か所に集められた方、　――私たちの希望であり、御自分のしもべたちの拠り所であられる方よ、あなたに祈る私の声を聞き入れてください。そして、拷問の脅しや拷問そのものに私が打ち負かされることのないようお守りください。そうして、あなたの御名を信じない者たちが皆、私を通して、唯一の真の神であるあなたを知ることができるように！
聖人が祈っていると、突然、天から声が聞こえてきた。
– 勇気を出せ、ゾシマよ。わたしはあなたと共にいる。何ものもあなたを打ち負かすことはできない。
この声をドミティアヌスと彼と共にいた者たちは皆聞き、
中にはこう叫んだ者さえいた。
「この賢者は偉大だ！」
また、他の人々はこう言った。

「これは魔術師ではなく、キリスト、すなわちその神の僕である。今、この声を遣わされたキリスト教の神は、まことに偉大だ！」

そこで、イゲモンは四人の兵士に命じて、聖人を力ずくで十字の形に地面に引き伸ばさせた。しかし、すでに酷い苦しみを味わっていたキリストの受難者は、天を仰ぎ見てこう言った。

「わが主なる神よ、人の思いを知り尽くす方、キリスト教徒の希望、苦難にある者たちの避難所であり安らぎよ！悪魔に仕えるドミティアヌスの破滅的な狡猾さから私を救い出してください。そうすれば、ここに集う者たちが皆、あなたが生ける神であり、すべての世より前に存在し、永遠に存在しておられることを知るでしょう。」

その間、集まった群衆の多くは、殉教者のその並外れた忍耐力に驚き、キリストを信じるようになった。一方、イゲモンは、この様子を見て、皆がキリスト教に改宗してしまうのではないかと恐れ、恥じ入り、激怒し、さらには歯ぎしりさえしながら、キリストの僕をいかに残酷な死で滅ぼすべきか考え始めた。　ついに彼は、銅の床を運ばせ、その下に激しい火を焚かせて、殉教者を焼き殺すよう命じた。　その火床が激しく燃え上がったとき、彼は聖なる殉教者を裸のままその上に載せるよう命じた。しかし、ゾシマが十字の印を切って火床に上がった途端、主は直ちにその火を露に変えられた。主は御自身の天使たちを通して、殉教者を助けに降りてこられたからである。　そして、見物人たちが皆、殉教者が猛烈な炎によって息絶えたと思い込んでいたその時、主の天使たちは聖人を火床から抱き上げ、皆の目の前で、火床のそばに立たせた。聖人は生きており、炎によって微塵も傷ついてはいなかった。　民衆はこの奇跡を目撃し、御自身の聖なる天使たちを遣わして、そのしもべをそのような炎から救い出された真の神を賛美した。そして、そのとき多くの者がキリストの信仰に改宗した。一方、イゲモンは裁判官の席から立ち上がり、恥じ入った様子で家路についたが、殉教者については捕らえて監禁するよう命じた。

その直後、イゲモン・ドミティアヌスは、コノネイの町[4525]へ向かう際、殉教者ゾシマを縛って従わせ、そこで拷問の末に殺害するよう命じた。　その町に到着し、裁判の席に着くと、彼は殉教者に鋭い釘が打ち込まれた鉄のサンダルを履かせ、まだ調教されていない若い馬たちに鉄の鎖で繋ぎ、その馬たちの後を歩かせるよう命じた。　しかし、聖人は、釘の打ち込まれた鉄のサンダルを履かされ、馬たちに縛り付けられたまま、まるで馬たちさえも追い越すかのように速く走った。それは、主が彼と共にいて、彼を助けておられたからである。その時、聖人はこう語った。

「主なる神よ、私の足に鹿のような速さをお与えくださる方よ、最後まで忍耐を授けてください！」

イゲモンは、殉教者のそのような忍耐を見て、彼を牢獄に閉じ込め、飢えと渇きで死に至らせるべく、決して食べ物も飲み物も与えないよう命じた。　三日が過ぎ、その間聖人は食べ物も飲み物も与えられずにいたが、二人の美しい若者が牢屋に入ってきた。そのうちの一人は清らかなパンを、もう一人は器に入った水を携えており、彼らは聖人にこう言った。

「あなたの主なる神から送られたこの尊い贈り物を受け取ってください。」

キリストの殉教者はそれを受け取り、食べ、飲み、体力を取り戻すと、主に向かってこう叫びました。

「主よ、あなたが私に憐れみを示し、私を見捨てず、天のパンと飲み物で満たしてくださったことを感謝します。あなたの威光を永遠に賛美し、称えます。アーメン。」

翌日、イゲモンは再び裁判の席に着くと、キリストの殉教者を自分の前に連れてくるよう命じた。聖人は明るい顔つきで現れたが、その時の彼の心は、すべて主に向けられていた。イゲモンは、あれほどの苦痛を受けたにもかかわらず、殉教者の顔つきが微塵も変わっていないのを見て驚き、彼にこう言った。

[4525] ピシディア、ペルシアへの道中。

「ゾシマよ、どうやらお前は今、正気を取り戻したようだから、これ以上傷を負ったり、残酷な死を遂げたりしないよう、神々に生贄を捧げよ。」

これに対し、聖人はこう答えた。

「お望みなら、あなたのような悪魔たちに犠牲を捧げなさい。私は、以前にも言った通り、ただ私の神のみに仕える。」

その後、激怒したイゲモンは、再び殉教者を木に吊るすよう命じ、こう言った。

「見ろ、この忌まわしい者よ、お前はどれほど多くの苦痛にさらされているか。それでもなお、私の言うことを聞かず、神々に犠牲を捧げないつもりか？」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「生ける神を愛する者は、これらの苦しみなど何とも思わない。」

そこで総督は、鉄の櫛で殉教者の体を削るよう命じた。聖なる殉教者は、これらすべての苦しみに耐えながら、力強い声で神にこう叫んだ。

「今、私はあなたの慈愛の深さを特に悟ります、キリストよ、光の創造主よ。あなたは、私がすべてを勇敢に耐え抜き、言葉一つでさえ苦しみを見せないよう私を強めてくださったからです。そうして、私の苦しみを通して、あなたの神性の力がさらに深く理解されるようにするためです。」

聖人がこう言い終えると、総督は彼を拷問の木から降ろし、再び自分の前に立たせるよう命じた。それが実行されると、総督は彼にこう言った。

「お前はキリストのために多くの苦しみを受けたが、それでも何の安らぎも得られなかった。さあ、今こそ神々に犠牲を捧げよ。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「おお、ドミティアヌスよ、最も残酷で、非人道的であり、あらゆる不義に満ちた拷問者よ！天の神を畏れ、その迷いを捨て、偶像を神と呼んではならない。それらは神ではなく、悪霊に他ならないのだ。」

すると、イゲモンは言った。

「お前という、この法に背く者め、よくも我らの神々を悪霊と呼ぶとは――全世界が定められた日に祝う神々を？」

これに対し、殉教者は言った。

「今、お前の神々に捧げられているその祝祭の歓喜は、地獄において、お前にも、お前の王にも、そしてそれらを信じるすべての人々にも、後に報いられることになるだろう。」

その後、総督は再び聖ゾシマを拷問台に吊るし、火のついた蝋燭でその腹を焼くよう命じた。

すると、殉教者は統治者にこう言った。

「私の腹だけでなく、私の全身を焼き尽くせ。それでもなお、お前は決して私を打ち負かすことはできない。なぜなら、私を強めてくださるキリストが私と共におられるからだ。むしろ、私はお前によって殺されることを望んでいる。なぜなら、キリストのために死ぬことは、キリストの御前で私の栄光となるからだ。」

殉教者にこれ以上どう対処すべきか分からなかった総督は、ついに彼に死刑を宣告した。すなわち、斧で首を刎ねるという刑である。聖ゾシモが処刑場へと連行される際、彼は主に向かってこう祈った。

「主よ、わが神よ！罪深い私を見捨てず、私の魂を、世の初めから御心にかなった者たちと共に受け入れてください。あなたは、今より永遠に、私の栄光であり、賛美だからです。」

殉教者が通常処刑が行われる場所に近づくと、彼は剣で首を刎ねられ、キリストのためにその尊い首を捧げた。 これは6月19日、コノネイスクの町で起こったことである。当時、ローマではトラヤヌスが統治し、私たちキリスト教徒の上には、私たちの主イエス・キリストが君臨しておられた。主には、世々限りなく栄光と権威がある。アーメン。

私たちの尊い父、隠遁者ヨハネの記念日。

6月19日の記念日

私たちの尊い父ヨハネは、世俗を離れ、修道生活に身を捧げ、荒野での隠遁生活を望んで、エルサレムからほど近いパレスチナに定住しました。そこで彼は、生涯のすべての日を、断食と祈りの中で、神に喜ばれるように過ごしました。

彼の聖なる生涯については、『リモナール』[4526] と呼ばれる書物に、次のように記されている。この書物は、周知の通り、私たちの尊い父ヨハネとソフロニオス（後のエルサレム総主教）によって編纂されたものである。

――私たち、ヨハネとソフロニオスに対し、アスカロン[4527] にあった聖なる教会の長老であり、聖器守護者であったアバ・ディオニシオスは、隠遁者アバ・ヨハネについて、この人物はその生涯において偉大であり、神に極めて喜ばれる者であったと語った。　彼は、エルサレムから二十ポプリシュ離れたセフスタ村の周辺に住んでいた。この長老は、自身の洞窟に、私たちの聖なる主の母であり、永遠の処女マリアである聖母マリアの聖像を祀っていた。その聖像には、聖母が御腕に、永遠の幼子である私たちの神、キリストを抱いている姿が描かれていた。　また、この長老がどこかへ出かける際――自らの荒野の奥深くへであれ、エルサレムへ行って尊い十字架やキリストの聖棺に礼拝するためであれ、あるいはエルサレムの聖地を訪れるためであれ――　あるいはシナイ山で祈りを捧げようとしたり、エルサレムから遠く離れた場所に遺骨が安置されている聖なる殉教者たちに祈りを捧げようとしたり――この長老は聖人たちに敬意を表することを愛していたため、時にはエフェソスまで足を延ばし――聖ヨハネ・テオロゴスの墓を訪れたり、時にはエウカイティの聖テオドロスを訪ねたり、 さらには、セレウキア・イサウリアの聖フェクレーのもとへ[4528] ――要するに、彼が巡礼のためにどこへ出かけても、彼は常に自分の小部屋にあるこの聖母マリアのイコンの前に燭台[4529] を置き、慣例に従って火を灯し、祈りの姿勢をとって、神が彼の旅路を祝福してくださるよう祈った。　そして、至聖なる聖母のイコンを見つめながら、彼はいつもこのように彼女に懇願した。

「至聖なる聖母マリアよ、私は遠くへ、そして長い旅に出るのですから、あなたご自身がその灯火を見守り、私の祈りに応えて、私が戻るまでその灯火が消えることのないようお守りください。私は、旅路においてあなたの助けを仰ぎながら、定めた道へと旅立ちます。」

そして、その後に初めて彼は旅立ち、道中を過ごした――一ヶ月、あるいは二ヶ月、三ヶ月、時には五ヶ月、さらには六ヶ月にも及ぶこともあった。そして戻ってみると、彼はいつも、旅立つ時に残したままの状態で、灯油が満タンで燃え続けているのを見つけ、決して消えているのを見たことはなかった。

この敬虔なヨハネ神父について、同じ『リモナール』という書物には、ある時、彼の洞窟があった村の周辺を歩いていた際、大きなライオンに出くわしたという記述もある。　その場所は非常に狭い道で、二つの茨の垣根の間にあった――農民たちは通常、自分の畑をこの茨の垣根で囲っていた

[4526] 『リモナール』（- 牧草地、放牧地）は、ギリシャの修道士ヨハネス・モスカ（622年没）による、非常に広く読まれている聖人伝である。ヨハネスは死の直前に、この著作を友人のソフロニオス（後の総主教）に託し、ソフロニオスがこれを民衆の間に広めた。　本質的には、キリスト教の修道士たちの生涯に関する様々な物語を集めたアンソロジーであった。

[4527] アスカロンは、地中海沿岸に位置するパレスチナ最古の都市の一つである。

[4528] セレウキア・イサウリアはキリキアにあり、セレウコス朝王政の創始者であるセレウコス1世ニカノールによって建設された。

[4529] カンディロとは、オリーブ油を灯してイコンの前に置かれたガラス製の燭台のことである。

のだ。その道は極めて狭く、この茨の垣根のおかげで、荷物を一切持たない徒歩の人がかろうじて一人通れる程度だった。　そして、ヨハネとライオンが互いに近づいてきたとき、老人はライオンに道を譲るつもりはなかった。また、場所が狭かったため、ライオンも道から外れることができず、二人はすれ違うことができなかった。　そこで、獅子は、神の聖人が引き返す気はなく、自らの進むべき道を歩むつもりであることを悟ると、老人の左側に後ろ足で立ち上がり、その体重で生け垣を押し広げて、この義人に道を空けた。こうして、老人は獅子の背骨に背中を触れながらその横を通り過ぎ、その後、長老も獅子もそれぞれの道へと去っていった。

ある日、ある兄弟がこのアッバ・ヨハネのもとを訪れた。彼の洞窟の中に何もないのを見て、彼はこう言った。

「アバよ、生活に必要なものが何もないのに、どうしてここに留まっていられるのですか？」

すると、長老はこう答えた。

「わが子よ、この洞窟は霊的な取引の場である。それは与えもすれば奪いもする。手仕事を授けてくれる一方で、必要なものはすべて奪い去るのだ。」

この神に喜ばれる父は、断食の修行と労苦の中でかなり長い時を過ごした後、主のもとへ帰られ、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神である私たちの神の御前に立つ聖人たちの列に加えられた。神に永遠の栄光あれ、アーメン。

同日、1462年にシェンクルスクの聖ヴァルラアムが帰天した。

7月3日

6月20日（旧暦）

聖人伝：我らの父、レウキオス・殉教者。

聖人伝：私たちの父、レウキオス・殉教者

記念日：6月20日

異教の時代、偶像崇拝者であるローマの皇帝たちが東方と西方[4530]を支配していた頃、アレクサンドリアにエウディキオスという名の気高い人物が住んでいた。彼は学問を修めてはいなかったが、霊的な教えによって知恵に富み、善行に彩られていた。　エウディキオスは、神への畏敬と愛をもって生涯を送り、寛大な施しと断食および祈りの行いを結びつけていた。彼には一人息子がおり、これから語るその子は、両親によってエウトロピオスと名付けられたが、後に神によってレウキオスと改名された。

少年が十歳になる頃、母のエウフロシニアが亡くなった。そこでエウディキオスは息子を連れて、アレクサンドリアの管轄内にあり、聖ニキタ修道院長が統率する聖エルミア修道院へ向かった。そこでエウディキオスは自ら修道服をまとい、息子を学問の修業に委ねた。　機知に富み、特別な努力を要することなくすべてを素早く吸収する少年であったエウトロピウスは、神の御加護により、学問において目覚ましい成果を挙げ、この点において多くの人々を凌駕した。　その上、彼は柔和で、

[4530] 他の伝承では、聖レウキアの誕生を、キリスト教のギリシャ・ローマ帝国の君主たちの時代、具体的にはテオドシウス大帝（379–395）の時代に遡らせています。

謙遜と従順に満ちており、修道院に住むすべての人々に熱心に奉仕した。皆がエウトロピオスを愛していた――ある者は彼の善良な人柄と従順さゆえに、またある者は聖霊から授けられた彼の博識と知識ゆえに。

祝福された修道院長ニキタが主のもとへ召されたとき、エウトロピオスはまだ十七歳に過ぎなかった。それにもかかわらず、修道者たちは互いに相談した末、まだ修道服を着ていないこの若者に、彼らの修道院長となるよう懇願した。　しかし、彼は頑なに断り続けた。さらに、父のエウディキオスも、まだ若く、慣れない重責を背負うことを禁じ、指導を必要とする若者として、自分は指導者としての資格がないと示すべきだとエウトロピオスに助言した。　こうして、エルミアの修道院は七年間、修道院長不在のままであった。兄弟たちは、もはや誰にも自分たちの指導権を委ねることを望まなかったからである。そのため、至福のエウトロピウスがいくら拒もうとも、また彼が修道服を着ていなかったにもかかわらず、兄弟たちは彼の徳高い生活の模範に導かれて、やはり彼を自分たちの間の修道院長として敬っていた。　やがてエウトロピウスが二十五歳になったとき、修道士たちは集まって彼にこう言った。

「なぜあなたは、私たちの困窮も願いも無視するのですか。なぜ私たちの指導者になりたがらないのですか。私たちの祝福された父ニキタが亡くなってから、すでに七年が過ぎ、修道院にはイグメーンがおらず、皆がそれぞれの思いのままに暮らしています。　もし狼が修道院に侵入し、神の群れを荒らしてしまったら、私たちの破滅の責任をあなたが負わされることになるかもしれない。私たちは、あなた以外には誰も、ただあなただけを私たちの父として望んでいる。私たちは皆、あなたの聖なる生き様を見ており、あなたの善良な人柄と、神から与えられた英知を知っているのだ。

これに対し、至福のエウトロピオスは兄弟たちに次のように答えました。

「なぜ、敬愛すべき父たち、兄弟たちよ、あなたがたは、私が到底果たすことのできないことを、執拗に私に懇願されるのですか？　私は修道服を身にまといもせず、いかなる教会の位階も持たない――それなのに、神の神殿であなた方を教え導く権威もないまま、どうしてあなた方の父となれるというのでしょうか？　私自身、まだ若くして、どうしてあなた方の長老たちを諭すことができるというのでしょうか？

そこで彼らは、彼に修道服を着用し、聖職に就くよう強要し始めたが、彼は決して彼らの望みを叶えようとはしなかった。　確かに、エウトロピウスは心の底では修道生活を目指していたが、兄弟たちが彼を無理やり修道院長にさせようとするのではないかと恐れて、それを受け入れることを躊躇していた。こうして、剃髪せずにいることで、彼は真の修道士の手本を示していたのである。

この頃、ローマでは異教徒のコモドゥスが統治していた。彼はアレクサンドリアにエパルヒとしてフィリッポス（[4531]）を派遣した。その娘エウゲニアは、キリスト教に改宗した後、男装して修道生活を送り、殉教の死を遂げた。　フィリッポスは、概してキリスト教徒に寛大ではあったものの、皇帝の命令により、キリスト教徒、聖職者、司祭、修道士たちを都市から追放した。ただし、彼らには郊外に自由に定住すること、またそこに修道院や教会を建設することを許可した。　当時、この地域のキリスト教司教は聖エリオスであり、彼はアレクサンドリアからさほど遠くないエリオポリスという都市に居を構えていた。アレクサンドリアの郊外には、前述の司教によって修道院が設立され、その運営は聖テオドロスに委ねられた。　修道院のほか、同じ地域には、この地方で有名な「無原罪の聖母マリア」に捧げられた教会があり、祝祭日にはアレクサンドリアだけでなく、周辺の都市や国々からもキリスト教徒がここに集まってきた。　そのため、至聖なる聖母マリアの被昇天の祝日が近づくと、多くの人々がその教会へと向かった。そして、至福のエウディキオスも、エルミア修道院を出て、息子エウトロピオスと共に、同様に祝祭に参加した。　ところが、その同じ日、同じ祝祭のために、聖エリオポリスの聖エリオス司教も、聖職者たちや大勢の民衆と共に外へ出ていた。エウデ

[4531] 所長。

ィキオスとエウトロピオスは、司教の後を従う群衆に加わった。　司教は当初、自身が設立し、イグメン・テオドロスが管理する修道院に立ち寄り、祝祭が始まるまでそこで休息を取るつもりだった。修道院に近づいたとき、道中でエパルハの娘である至福のエウゲニアと出会った。彼女は二人の宦官に付き添われ、男装して歩いていた。民衆に囲まれた司教を見て、彼女は司教について誰かに尋ねようと群衆の中に割り込み、至福のエウトロピオスと司教について会話を交わした。　彼は、至福のエウゲニアの伝記にも記されている通り、神の司教についてすべてを彼女に詳しく語り、その後、彼女を司教のもとへ案内した。エウトロピオスは、その清らかな生活と学識の高さから、司教にも知られていた。

至福のエウディキオスが司教によって設けられた修道院で休息していたとき、ある夜、眠りの中で神からの啓示を受けた。それによると、彼はまもなく亡くなり、その息子が司教となり、イタリアのヴルンティシオポリ（[4532] ）で偶像を滅ぼし、聖なる洗礼によってこの国を啓蒙するというものだった。 その時、彼は自分に向けられた声を聞いた。

「エウディキオ、エウディキオ、主の忠実なしもべよ！　これからは、お前の名をエウディキオではなく、エウディクリオ、すなわち『柔和な慰め主』とせよ。そして、お前の息子の名をエウトロピオではなく、レウキオ、すなわち『主の御霊が彼に臨んだ』とせよ。」

目を覚ますと、エウディクリウスはすぐに息子を呼び寄せ、神の御心を明らかにしたその幻について語った。

「見よ、わが子よ、わが旅立ちの時が近づいている。この虚しい世に惑わされてはならない。主は、あなたが司教の務めに就くにふさわしいと私に示された。主はあなたを通して、ヴルンティシオポールの偶像崇拝の聖所を清めたいと望んでおられるからだ。そして、あなたの名はもはやエウトロピオスではなく、レフキオスとせよ。主は、私をエウディキオスからエウディクリオスへと改名されたのと同じように、あなたにも新しい名を授けられたのだ。

これを聞いた聖レフキオス――すなわちエウトロピオス――は、地上で十字架の形に体を伸ばして神にひれ伏し、次のような感謝の祈りを神に捧げた。

「私たちの父たち、アブラハム、　イサク、ヤコブの神よ。あなたは、あなたに希望を置く者を見捨てず、貧しいあなたのしもべたちからあなたの憐れみを取り去ることなく、不適格な私を憐れんでくださるからです。それゆえ、私は天と地の主であるあなたを賛美し、称えます。あなたは人間を愛してくださった主だからです。 あなたに、限りない世々まで栄光がありますように。

この聖人の祈りの最中、教会の頭上にある天から声が聞こえてきた。

「レフキー、レフキー！　魂は明るく、心は清らかな者よ。見よ、あなたの名は天に記され、あなたの記憶は命の書から消えることはない。」

この声を聞いたのは、聖エリー司教と、祈りに明け方まで眠らずに過ごしていた修道士たちの一部であった。しかし、その声が具体的に誰に向けられたものなのか、誰も理解できなかった。

朝になると、エルミエフ修道院の修道士たちが司教のもとを訪れ、こう言った。

「大主教様、ご承知おきください。私たちは七年以上も修道院長不在の状態にあり、その間、私たち一人ひとりが思いのままに暮らしてまいりました。　私たちは何度も、高潔なエウトロピオスに私たちの指導者となってくださるようお願いしてまいりました。彼は当修道院で育ち、その聖なる生活は私たち一人ひとりのそれを凌駕しています。従順の務めにおいて彼に匹敵する者は誰一人いません。彼は常に断食と祈り、聖書の朗読と執筆に励んでおり、要するに、私たちは彼があらゆる善行に励んでいるのを見ています。　それゆえ、私たちは彼を父として迎え、その足跡をたどりたいと願っているのです。しかし、彼は私たちの願いを無視し、これに同意を示そうとしません。どうか、大主教様、たとえ彼の意思に反してでも、彼を私たちの修道院長に任命してください。

[4532] 現在のブリンディジ。

「私もまた」と司教は答えた。「あなたがたが今おっしゃっていることについて考えていました。しかし、少しお待ちください。私が彼を説得し、私たちの意志に従うよう努めてみます。」

その後、聖体礼儀の時刻が迫っていたため、司教は教会へ向かった。彼は大助祭に、説教壇に立ち、民衆に向かって次のように告げるよう命じた。

「ここにいらっしゃる方の中で、レウキアという名の方はいらっしゃいますか？」

民衆の中からこの呼びかけに応じる者はいなかった。そのような名を持つ者が一人もいなかったからだ。大助祭が二度、三度と民衆に呼びかけたとき、聖レウキオスは、自分以外にレウキオスという名の者がいないことを悟り、こう答えた。

「私が罪深いレフキイです！」

皆は彼を見て驚き、首をかしげながらこう言った。

「お前はエウトロピオス、エウディキエフの息子か？」

聖レフキウスはこれにこう答えた。

「私の父に尋ねてください。父なら私よりも、私の名について詳しく話してくれるでしょう。」

そこで、97歳の誠実な長老である至福のエウディクリオスが中央に連れてこられ、こう尋ねられた。

「お前の息子の本当の名前は何だ？」

彼は、自分と息子に関する秘密が明らかにされることが神の御心であると悟り、自分の見た幻のすべてを詳しく語った。その中には、夢の中でも現実の中でも、神の御声が二度、息子をレフキウスと呼んだという話も含まれていた。　これを聞いた者たちは皆、喜びのうちに神に感謝し、聖レフキオスの元へ近づいて、深い敬意をもって彼を迎えた。その後、司教は聖レフキオスに対し、司祭職を伴う修道院長職に就くよう勧めた。彼はそれを拒んだが、人々はこう叫んだ。

「レフキウスは、長老や修道院長だけでなく、司教になるにふさわしい！」

こうして、聖レフキオスの本意に反して、彼は叙階され、修道院長に任命された。その後、皆は聖母マリアの被昇天の祝日を、その教会で明るく祝った。

修道院の運営を引き継いだ聖レフキイは、その功績をさらに高め、彼の中に宿る聖霊の恵みによって奇跡を働かせた。ある日、聖なる洗礼を受ける準備がすでに整っていた、悪霊に取り憑かれたエチオピア人が彼の元へ連れてこられた。その苦しみを見て、聖レフキイは悪霊にこう言った。

「悪魔の霊よ、この人を苦しめるのをやめよ！」

悪霊は震え上がり、泣き叫びながらこう叫びました。

「もし私が彼から出て行ったら、どこへ行けばいいのだ？　これより良い住まいなど私にはない。」

「不浄な霊よ」と聖レフキウスは命令を繰り返した。「神の被造物を放し、二度と彼の中に入ることを敢えてしてはならない。恥辱と屈辱を味わい、これまで人間を憎むかのように、お前の闇の力の鎖で縛りつけて苦しめてきた者から出て行け。」　さあ、我らの主イエス・キリストを信じず、その命を与える十字架を礼拝しない者たちの体に入りなさい。

恐ろしい叫び声を上げて、悪霊は黒い鳥の姿でその人の口から飛び出した。その際、彼はこう叫んだ。

「神の僕レフキーよ、私と君に何の関係があるというのか。なぜ、私が自ら選んだ住まいから私を追い出すのか？私は、顔色が白く、ありふれた風貌の人間には入りたくなかったが、黒く、見るに耐えない肌の色をしたエチオピア人の体に入った。そのような住まいからは、誰も私を追い出さないだろうと期待してのことだ。」

十字架の印で悪魔を追い払った聖レフキーは、その男を地面から立ち上がらせ、その後、彼に洗礼を授けた。一方、悪魔はエジプトへと退き、そこで巨大な蛇の姿をとった。　、ある町の通りを

這い回り、並外れた猛烈な勢いで、出くわした異教徒やユダヤ人――男、女、子供を問わず――を殺戮し、動物さえも容赦しなかった。聖レフキウスは、悪魔のこの人殺しのような悪意を霊的に予見し、急いでエジプトへと向かった。　聖人が街に近づいているのを感じると、悪魔は海へと飛び込み、通りには無数の死体が横たわったままとなった。街に入り、泣きながら死者を悼む大勢の人々を見て、聖レフキウスは尋ねた。

「なぜこれほどまでに泣いているのですか？」

すると、人々は、突然街に現れた大蛇が多くの者を殺し、そして聖人が到着する直前に海へと飛び込み、そこで姿を消したばかりだと語った。聖レフキウスは水を運ばせるよう命じ、それを聖別して死者に振りかけながら、こう語りかけた。

「主サバオトの名によって立ち上がれ。あなたがたは死の束縛に囚われているのではなく、ただ悪魔の毒によって傷つけられているに過ぎない。しかし、あなたがたの不義と心の盲目ゆえに、あなたがた自身では、あなたがたよりも強力な蛇の力の影響から逃れることはできないのだ。」　さあ、わが神の力によって立ち上がり、あなた方を創造された方に栄光を帰しなさい。

この説教の間、聖レウキオスは杖で死体に触れた。するとたちまち、皆がまるで目覚めたかのように起き上がり、聖人の足にすがりながらこう言った。

「拝むにふさわしい神とは、他ならぬ、あなた、神のしもべであり、私たちの父であるあなたが宣べ伝える、父と子と聖霊に他なりません。」

よみがえった者たちは皆、キリストを信じるようになり、彼らと共にさらに三千人近い男たちがキリスト教に改宗した。彼らは皆、妻や子供たちと共に洗礼を受け、御自身の聖レウキオスを通してこれほど驚くべき奇跡を行われた、私たちの主イエス・キリストを賛美した。

数年が経過した後、アレクサンドリアのフィリッポス司教は、聖なる娘エウゲニアの模範に感化され、家族全員とともにキリストを信じるようになった。しばらくして、彼はその地位を辞し、キリスト教の司教となった。　フィリッポス司教が苦難の末に亡くなると、後継者として聖レウキオスが満場一致で選出された。一方、アレクサンドリアでは、フィリッポスの後を継いで、最初はテレンティウス、次いでサトゥルニヌスが教区長を務めた。　キリスト教の敵であったサトゥルニヌスは、偶像崇拝者である側近たちと相談し、まずアレクサンドリアの司教である聖レウキオスを殺害した上で、どのようにしてキリスト教徒への迫害を煽り立てようかと画策していた。サトゥルニヌスは、レウキオスが多くの異教徒をキリスト教へと改宗させていることを知っていたからである。　そこで総督は、その邪悪な企てを実行に移す好機を模索し始めた。一方、アレクサンドリアの信者たちはこのことを知ると、総督を殺害する方法を互いに協議した。その時、聖レウキオスはすべてのキリスト教徒を呼び集め、その反逆的な企てを断念するよう説得し、神から受けた啓示について彼らに語った。

「愛する者たちよ、知っておいてほしい。私の主は、幻の中で私に現れ、あなたがたに別の司教を立てるよう命じられた。それは、私が西のヴルンティシオポリへ赴くことができるようにするためである。なぜなら、その都市はキリスト教の啓蒙を必要としているからだ。」

これを聞いたキリスト教徒たちは、泣きながら聖人の足元にひれ伏し、こう言った。

「聖なる父よ！　私たちを孤児にしないでください。神のために獲得された者たちから離れてはいけません。あなたが亡くなるまで、私たちを見捨てないでください。」

「皆さんもご存じの通り」と聖レフキオスは答えた。「私がまだ若かった頃、主は私の父エウディクリオスに、この聖職の位を不適格な私がどのように受け継ぎ、偶像崇拝の町へ、神を知らない人々の真ん中へと赴くことになるかを、ご好意をもって明かしてくださったのです。　かくして、私たちの主は、この不適格なしもべである私を通して、あの人々を聖なる教会に導き入れることをお望みになられたのです。それゆえ、主は私に、あなた方に別の司祭を立てるよう命じられ、私は自分に定められた務めを果たしに行くのです。　さて、サトゥルニヌス司教については、キリスト教徒を迫害するという彼の不敬虔な企ては成就しないことを知っておいてほしい。なぜなら、彼の余命は短く

、破滅は間近だからである。私がここから去った後、彼の家は崩れ落ち、彼と家族全員が瓦礫の下に埋もれてしまうだろう。

こう語り、泣き悲しむキリスト教徒たちを慰めた後、彼は司教の座にふさわしい人物を選出した。こうして、聖レウキオスの後任として別の司教が任命された。――聖レウキオスは、二人の助祭、エウセビオスとディオニシオス、そして五人の弟子を伴い、街から船着き場へと向かった。　妻や子供たちを除いた五千人のキリスト教徒全員が、泣き叫びながら自分たちの司教を見送った。

「なぜ、父よ、ご自身の子供たちを顧みることなく、私たちを去ろうとするのですか？」と彼らは叫んだ。

振り返って泣いている人々を見ると、聖レフキウス自身も心を動かされ、涙を流し、天に向かって両手を挙げ、こう言った。

「主よ、わが神イエス・キリストよ、もし御心ならば、あなたが私を奉仕のために遣わされたこの御民たちから、私を引き離さないでください！」

彼がこの祈りを終えた直後、天からすべてのキリスト教徒に聞こえる声が響いた。

「レフキーよ！主の御命令を軽んじてはならない。船に乗り込み、命じられた場所へ平安のうちに旅立ちなさい。」

「聞こえたか」と、聖レフキーは同行者たちに語りかけた。「主の御心だ、兄弟たちよ。だから、私が自分の意思であなたたちと別れるのではないことを知っておいてほしい。」

皆に別れを告げると、彼は船に乗り込み、旅立った。一方、アレクサンドリアでは、聖人の予言通り、エパルヒの屋敷が突然崩れ落ち、エパルヒ自身をはじめ、中にいた者全員が命を落とした。

十五日後、船はアドリアノープルに到着した。それはフラキアのアドリアノープルではなく、古代エジプトにある都市である。ここで聖レウキオスは、レオとサヴィンという二人の長老を仲間に迎え入れ、しばらく滞在した。　別の船を見つけると、彼は取り決められた運賃を支払ってそれに乗り込み、ヒドルントに到着した。そこでダルマチアの船に乗り換え、その船でヴルンティシオポリ地方に到達した。船を降りた聖レウキオスは、聖職者たちと共に街へと向かった。　道中、彼らはトリブヌス・[4533]アルマレオンとその兵士たちに出くわした。聖レフキオスは兵士の一人にこう尋ねた。

「この町の支配者は誰か？」

「ご存じないのですか」と兵士は答えた。「この国の支配者である偉大なるアンティオコス様のことを？」

「お前の主であるアンティオコスは、どのような信仰を奉じているのか？」と、聖レフキウスは再び尋ねた。

その質問を耳にしたトリブーンと兵士たちは笑いながら言った。

「宇宙を照らす太陽と月以外に、他にどんな信仰があり、どんな神がいるというのですか？　雲の中で轟く彼らの声を、すべての人の耳は聞いていないのですか？　太陽から放たれる稲妻に勝るものがあるでしょうか？　天候の変化をその姿の変化で予告する月よりも明るいものがあるでしょうか？」

「哀れな無知な者たちよ！」と、聖レフキウスはため息混じりに言った。「あなた方にはまだ神の啓示が及んでいない。だからこそ、太陽と月が神の創造物であり、主の御命令に従って絶え間なくその運行を続けていることを知らないのだ。　そして、それらを神と呼ぶべきではない。それらには神聖なものは何一つなく、一箇所に留まることさえできず、絶えず動き、昇り、沈み、時には雲に、時には夜の闇に覆われ、目に見えることもあれば、目から隠されることもあるのだ。　そして、それらの光は、私たちが崇める神、すなわち永遠に存在する光とは、被造物が創造主と異なるのと同じくらいに異なっている。太陽、月、天と地、そしてそれらを満たすすべてのものを創造された私たち

[4533] トリブーン――戦士部隊の長。

の神こそが、神を信じるすべての人を照らす真の光である。　神は太陽と月の輝きを創造し、天の下に住む人々に仕えるよう命じられた――太陽は昼に、月は夜に輝くように。もしあなたがたが、目に見えない光、すなわち私たちの神を知っていたなら、目に見える天体に対して決してひれ伏すことはなかっただろう。

「それは一体どのような光なのか」と、トリブンのアルマレオンは尋ねた。「あなたが、私たちの目には見えないと言っているその光とは？」

「キリスト、神の子です」と聖レフキオスは説明した。「聖霊によって聖母マリアから生まれた方です。」

そして、キリストについてすべてを彼らに語った――キリストがどのように生まれ、人々の間でどのように生き、自らの意志によってどのように苦しみを受け、死に、三日目に復活し、天に昇り、父なる神の右の座に着き、そして――どのようにして全世界を裁きに来られ、一人ひとりにその行いに応じて報いを与えられるか、と。　兵士たちは聖レフキウスの教えを感銘深く聞き入りました。その言葉を真理として信じ、彼らは彼の前にひれ伏してこう言いました。

「父よ、どうか私たちを永遠の命の仲間にしてください！」

彼は説教の後、彼らに洗礼を授けた。新たに改宗した者は六十七名の男性であった。彼らと聖職者たちに付き添われて、聖レウキオスは街に入った。こうして、ヴルンティシオポリへのキリストの教えの光による啓蒙の幕が開かれたのである。

アンティオコス公は、トリブヌスのアルマレオンが兵士たちと共にキリストを信じたことを知ると、彼を呼び寄せ、こう尋ねた。

「アルマレオンよ、君について耳にしている話は本当なのか？　君は配下の兵士たちと共にキリスト教徒になったというではないか？」

アルマレオンは黙り込んだ。するとアンティオコスは怒りを込めて言った。

「なぜ答えないのだ？」

「私が今やキリスト教徒になったからといって、」とトリブヌスは尋ねた。「私に怒る必要があるのか？」

「私は怒りなど一切なく、ただ尋ねているのだ」とアンティオコスは反論した。「誰が君にキリスト教の信仰を教えたのか、教えてくれ。我々は皆、君を我々の教義において賢明な人物として知っていた。これまでキリスト教を拒んできた君が、今やどのような経緯でキリスト教徒になったのか、我々は驚いているのだ」

「これまで、」とアルマレオンは答えた。「私は盲目であり、死の影の中をさまよっていた。しかし今、神の恵みによって啓発され、目を開かれ、永遠の命への希望に満ちているのだ。」

「『お前が言うその永遠の命とは、いったいどのようなものか？』とアンティオコスは尋ねた。

「もし望むなら、それを知ることができる」と、トリブヌスは提案した。「もし本当にそれを私たちに見せてくれるのなら」とアンティオコスは論じた。「もちろん、見て理解したい。とはいえ、私はこの現世以外に人生があるとは考えておらず、太陽や月以外の光や神が存在するとも信じていない。」

「太陽と月は」とアルマレオンは言った。「神々ではなく、神の被造物であり、主によって天に置かれたのは、誰かを自分への奉仕に引き寄せるためではなく、地を照らし、理性ある被造物、すなわち地上に生きる人間に仕えるためである。」

アンティオコスは、このトリブヌスの言葉を驚きをもって聞き、彼に尋ねた。

「誰があなたにそのような知恵を教えたのですか？」

「私を啓蒙してくれたのは」と彼は言った、「レウキオスという名の、アレクサンドリア出身の男で、つい最近ここへやって来た者です。」

その頃、聖レウキオスは、ヴルンティシオポリの西門の向かいにある市外の見世物の場で、人々にキリストの信仰を教え、主イエスに帰依する者たちに洗礼を授けていた。アンティオコスは彼を呼び寄せ、敬意を込めて自分の元へ来るよう求めた。神の司祭の姿を目にすると、彼はこう言った。

「もし、我々にあなたが説く神を信じさせたいのなら、この二年間も降っていない雨を、私たちの地に降らせてくださるよう、神に懇願してください。干ばつのため、私たちの土地は干からび、かつての肥沃さを失ってしまいました。そのため、民は貧困と困窮の中にあります。」

聖レフキオスは、聖職者たちと新たに洗礼を受けたすべてのキリスト教徒を召集し、主なる神への熱心な共同の祈りを捧げた。するとたちまち、空は雲に覆われ、そこから豊かな雨が降り注ぎ、その国の全土を潤した。　そこで、アンティオコスを筆頭とする町全体がキリストを信じるようになり、二万七千人が洗礼を受け、皆が私たちの神であるキリストを賛美した。　町の中心には、至聖なる神の母であり永遠の処女マリアに捧げられた教会が建てられ、また、人々が洗礼を受けたその場所には、洗礼者ヨハネに捧げられた別の教会が建てられた。こうして、ヴルンティシオポリ全体が聖なる信仰の光に照らされたのである。

新たに改宗した者たちを教え、信仰を確固たるものにしていく中で、聖レフキオスは重病に倒れ、神の啓示によってその病が死に至るものであることを知った。　アンティオコスを呼び寄せ、彼は、自分たちの船が上陸したその場所に自分の遺体を埋葬するよう遺言した。その後、両手を挙げて、自分の信徒たちのために祈りを捧げ、すべての人に最後の祝福を与え、平安を願う別れの挨拶をした。そして、街中の人々に悼まれながら、主のもとへ旅立った[4534]。アンティオキオスは聖人の尊い遺体を運び出し、相応しい敬意を払って、聖人がアレクサンドリアから到着し、船から上陸した場所へと移した。そこで聖レウキオスの名に因む教会を建立し、アンティオキオスはその中に神の御心に適う者の尊い遺骨を安置した。　そして、父と子と聖霊、すなわち三位一体において賛美される神の栄光のために、その棺から多くの奇跡が起こった。すべての被造物から、神に永遠の賛美と感謝と礼拝が捧げられる。アーメン。

聖メフォディオス、パタル司教、聖殉教者の記念日。

記念日：6月20日

神の御心に適う者メフォディオスは、若き頃から自らを主への奉仕に捧げ、聖霊を受け入れた清らかな器となりました。それゆえ、神の御選びにより、彼は司教の位に就くにふさわしい者とされ、リキア地方のパタラ市の「言葉の羊」たちの大牧者となりました[4535]。聖メフォディオスは、神に喜ばれる細心の配慮をもってその言葉の羊の群れを導き、柔和な教えによって彼らを完全さへと向かわせました。聖メフォディオスの司教在任中、オリゲネス派の異端[4536]が台頭し、多くの人々を惑わ

4534 一部の記録では、聖レウキアの没年を5世紀としている。

4535 小アジアにて。

4536 オリゲネス――アレクサンドリア教会の著名な教師であり、その知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡と称された人物である。　多くの傑出した教父たちは、オリゲネスの神学著作と功績に対して深い敬意を払っていた。しかしその後、彼は生前にアレクサンドリアで開催された2つの地方公会議で異端者として非難され、死後は543年のコンスタンティノープル公会議でも同様に非難された。　オリゲネスは、自身の非正統的な見解を不変の真理として主張することはなかったものの、キリスト教教会の信仰教義における多くの真理について誤った考えを抱いており、そのため、主要なキリスト教の教義に対する彼の確固たる信念を疑う者もいた。　魂の先在に関する非正統的な教義を展開する中で、彼はキリストについて誤った考えを抱き、神が、神性を理解し、神に似る能力を持つ、同等の尊厳を持つ一定数の霊的存在を創造したと主張した。　これらの創造された霊のうちの一人が、これほどまでに熱烈な愛をもって神性へと向かったため、神の御言葉と不可分の一体となり、あるいはその被造物としての器となった；　オリゲネスによれば、これこそが、神である御言葉が地上に受肉することを可能にした人間の魂である。というのも、彼の誤った見解によれば、神性の直接的な受肉は考えられないからである。神である御言葉の受肉や、世界および人間の創造に関する異端的な見解に固執し、　オリ

した。その勢力の拡大を目の当たりにした聖メフォディオスは、卓越した牧者として、まるで火のようにその異端を糾弾し、知恵と神の恵みに満ちた教えによって、信徒たちの上に立ち込めていた異端の闇を一掃した。　神に霊感を受けた彼の教えは、稲妻のように全世界を照らし、知恵に満ちたラッパの音のように、その説教の声は全地に響き渡った。それゆえ、目に見えない敵は、聖メフォディオスが敬虔とキリストの教会のために捧げた偉大な働きに注がれた熱意に耐えられず、　彼は聖なる司教に対して、目に見える手下たち――偶像を崇拝する異教徒たち――を動員した。その唆しにより、異教徒たちは、苦難に直面する前からすでに「命をもたらす死」を身にまとっていた神の僕を、苦痛に満ちた死へと追いやろうと企てた。　キリストの聖人を捕らえた異教徒たちは、剣でその尊い首を切り落とした。こうして聖メフォディオスは、より良い生へと移り行った。初めは神の子羊に仕え、後に自らも子羊のように屠られた彼は、生けるいけにえとして神に捧げられたのである。　こうして、異端と戦い、異教徒の前で恐れを知らずにキリストを告白し、血を流して殉教に至るまで、さらにはアウレリアヌス帝の治世に殉教した[4537]　、この善良な敬虔の修道士は、二重の冠を授かった。アーメン[4538]。

トロパリオ、第1声：

あなたの血は、アベルの血が地から神に向かって密かに叫ぶように、地から神に向かって叫び続けています。神に賢明な聖メフォディオよ、あなたは神の受肉を明確に説き明かし、それによってオリゲネスの詭弁を打ち砕き、天の宮殿へと移り住まれました。キリスト・神に、私たちの魂を救ってくださるようお祈りください。

コンダク、第4調：

聖三位一体の聖なる秘儀の守り手であり、神の御心の教えを宣べ伝える者、そして正教の確固たる支えとなられたメフォディオよ、あなたは悪名高い教えを糾弾し、正信のために御自身の血を流して聖殉教者となられました。今やキリストと天使たちの御前に立ち、私たちが救われるようお祈りください。

聖殉教者アリストクリオス、ディミトリアン、アファナシオスの記念日

記念日：6月20日

ゲネスはキリストの死についても正統的ではない意味で理解し、それを霊界において霊的に繰り返されるものであり、そこで天使たちの解放に作用するものとして描き、また救いの業において、私たちの本性に与えられた通常の力に過大な作用を帰していた。　オリゲネスは、復活と来世に関する教義のいくつかの点においても誤った考えを持っていた。例えば、悪魔も救われるという主張や、聖書の解釈において、聖書の歴史的意味を損なうほど、神秘的な意味を過度に誇張して理解していたことなどが挙げられる。　しかし、いずれにせよ、オリゲネスが教会にもたらした功績はより顕著であり、その誤りを覆い隠している。彼は自身の学校で多くの傑出した教父や教会の教師を育て上げ、その中には、異教からキリスト教への改宗を彼に負っている者もいた。オリゲネスは、知識と哲学をキリスト教の信仰と調和させようとしていたのである。　特に注目すべきは、聖書の研究――解釈、そして何よりも――原本の復元と浄化に関する彼の著作であり、キリスト教をその敵や異端者から守ることを目的としたオリゲネスの著作もまた傑出している。　――デキウス帝の迫害の際、オリゲネスはキリストの勇敢な殉教者として名声を博し、254年にティルスで70歳の長老としてこの世を去った。

[4537] 270～275年。しかし、聖メフォディオスの死は310～312年以降であったという説の方がより妥当である。

[4538] 聖メフォディウスには、以下の内容に関する著作が残されている：1）異教に対する聖なる信仰の擁護、2）特にオリゲネスの誤謬に対する信仰の教義の解説、3）道徳的教義、4）聖書の解説。

聖殉教者アリストクリオスは、キプロスのタマスという町出身で、大聖堂の長老であった。マクシミアヌス帝の治世[4539] 、キリスト教徒に対して大迫害が巻き起こった際、聖アリストクリオスは荒野へと退き、ある山中の洞窟に身を隠していた。 そこで祈りを捧げていたある時、太陽の光をも凌ぐ光に包まれ、天から声が聞こえてきた。その声は、キプロス島のサライム大主教区へ行き、そこでキリストの御名を告白するために殉教の業を成し遂げるよう命じた。 光の現れと神の声に勇気づけられた彼は、拷問への恐れを捨て、直ちに命じられた場所へと向かった。森の中を通る道中、彼は聖使徒バルナバの教会に立ち寄り、そこで助祭ディミトリアンと朗読者アファナシウスに出会い、二人は彼を温かく迎えた。 会話の中で、聖アリストクリオスは、サラミンへの旅の理由を彼らに明かし、自分が体験した幻視について語った。ディミトリアンとアファナシオスは、その話を聞いた後、キリストのために死ぬべく、アリストクリオスと共に歩みたいという抑えきれない願いを抱いた。

彼らがサライムに到着すると、人目につく高台に立ち、大声でイエス・キリストについて説教し始め、キリストを賛美するとともに、異教の神々や無感覚な偶像を罵倒した。すると異教徒たちは直ちに説教者たちを捕らえ、尋問のために総督の裁判所に引き渡した。 総督は、彼らがキリスト教徒であることを知り、聖なる信仰に対する彼らの揺るぎない献身を見て、長老アリストクリオスを剣で斬るよう命じた。 聖ディミトリアンと聖アファナシオスについては、多くの拷問を加えた後、火刑に処した。しかし、聖なる人々が火の中にあっても生き続け、無傷であったのを見て、総督は彼らもまた剣で斬首するよう命じた。こうして、キリストの受難の証人たちは、殉教の冠を戴いてこの世を去った。[4540]

聖殉教者インナ、ピンナ、リムマの聖遺骨の移送

記念日：6月20日

これらの聖なる殉教者たちは、北方の国々、すなわち異教徒の地[4541] に由来する。彼女たちは使徒アンデレの弟子であり、多くの異教徒を偶像崇拝からキリストへの信仰へと導いた。 このため、彼女たちは捕らえられ、蛮族の支配者の前に引き出された。支配者は様々な誘惑や甘い約束で彼女たちを惑わそうとしたが、彼女たちは提示された栄誉に屈せず、キリストへの信仰を貫いたため、容赦なく打ちのめされた。 当時は厳しい冬で、川は氷が張り、その上を歩いて渡れるほどであったため、川の中ほどにまっすぐな木を立てて氷の上に固定し、聖なる殉教者たちをその木に縛り付けた。木の重みで氷が沈み始めると、水は彼らの首元まで達し、彼らはその姿勢のまま、聖なる魂を主の御許に委ねた。 当時、一部のキリスト教徒が彼らの遺体を埋葬したが、その後、[4542] という司教が墓から遺体を取り出し、自らの肩に担いで、 自身の教会に安置した。死去から7年後、聖なる殉教者たちはその司教の前に現れ、彼らの聖遺物をアリクスと呼ばれる場所、[4543] という乾燥した安息の地へ移すよう命じた。

[4539] マクシミアヌス・ガレリウスは305年から311年まで統治した。

[4540] 306年頃

[4541] 皇帝バシレイオスの『月暦』によれば、これらの聖なる殉教者たちはスキフィアの北端の出身であったと記されているが、E・ゴルビンスキー教授の見解（『ロシア教会の歴史』第I巻、前半、第2版、 31ページおよび注2）によれば、彼らは現在のクリミア半島にあるバラクラヴァとスダクの間の狭い沿岸地帯を占めていたドーリア系ゴートフィア出身であった。

[4542] スラブ語版のバシレイオス皇帝の暦書では、この司教はゴドラと呼ばれており、ゴドラという名はゴートフィアに由来する。

[4543] アリクスは現在のアルシュタであり、ヤルタの北東42ヴェルスタにある黒海沿岸に位置する。「乾いた停泊地」とは、海の埠頭を意味する。

7月4日

6月21日（旧暦）

聖殉教者ユリアヌス・タルシアニスの記念日

記念日6月21日

聖ユリアヌスは、異教徒の元老院議員を父に、キリスト教徒の母を持ち、キリキアの[4544] アナザルヴェという町で生まれた。　夫の死後、聖ユリアンの母はアナザルヴァから、同じくキリキア地方の都市タルス[4545] へ移り住んだ。そこで彼女は少年ユリアンをキリスト教の信仰に洗礼させ、学問の教えとともに、信仰の真理とキリスト教の敬虔な生活規範を教えながら育て上げた。

ユリアヌスが18歳になった頃、ディオクレティアヌス帝によって激しいキリスト教迫害が引き起こされた[4546] 。他のキリスト教徒たちと共に、聖ユリアヌスも捕らえられ、イゲモン・マルキアヌスの裁判にかけられた[4547] 。しかし、残酷な拷問も、脅迫も、贈り物や栄誉の約束も、この敬虔な若者を異教の生贄を捧げさせたり、キリストを否定させたりすることにはできなかった。　ユリアヌスは丸一年にわたりキリキアのさまざまな都市を連れ回され、至る所で拷問にさらされたが、彼はダイヤモンドのように[4548] 、イエス・キリストへの信仰を告白する姿勢を揺るがすことはなかった。聖ユリアヌスがエゲイの町[4549] に連行されると、そこでは不敬虔な異教徒たちが、聖なる殉教者の口を無理やり開かせ、そこに偶像への生贄の肉や血を詰め込み、不敬虔な生贄によって清く聖なるキリストの僕を汚そうとした。　その後、聖ユリアヌスは牢獄に投じられた。そこへ、ユリアヌスの敬虔な母が訪ねてきた。彼女はユリアヌスの行く先々で常に付き添い、主に対し、苦難の業に励む息子を強めてくださるよう懇願していた。　やがて、拷問者たちが聖ユリアンの母を捕らえて裁判にかけたとき、彼女はイゲモンに対し、息子を偶像に拝ませるよう説得するため、三日間、牢獄にいる息子を訪ねることを許可してほしいと懇願した。　イゲモンは、彼女が妨げられることなく息子のいる牢獄を訪れることを許可した。彼女は牢獄で息子と昼夜を共にし、母の愛を込めて語りかけながら、涙ながらに、殉教者の王国において主から永遠の祝福を受けるために、この一時的な苦しみ最後まで耐え抜くよう彼を諭した。

3日が過ぎると、聖ユリアヌスは母と共にイゲモンの裁判所に連行された。イゲモンは、母がすでに息子を説得して偶像への生贄を捧げさせたのだと思い、その説得を称賛し始めたが、母は大声で、恐れることなくイエス・キリストの御名を告白し、異教の不敬虔を糾弾し始めた。　聖ユリアヌスもまた、恐れを知らず、唯一の真の神であるイエス・キリストを告白し、賛美するとともに、異教の多神教を糾弾した。すると、激怒したイゲモンは、母と息子の両方を拷問するよう命じた。　聖人の母は、数多くの拷問の末、タルソスから息子を追って歩んできたその両足を切り落とされた。一方

[4544] キリキアは、小アジア南東部に位置するローマ属州である。

[4545] タルスとは、キリキア南部のキドネ川沿いにある、人口の多い大都市であり、同川はそこからほど近い場所で地中海に注いでいる。現在でも、タルスは依然としてかなり重要な都市である。

[4546] ディオクレティアヌスは284年から305年まで在位した。

[4547] イゲモン――地方の統治者

[4548] アダマント（ダイヤモンド）――他の石を削り取っても、それによって自らに損傷を受けることのないほど強靭な石。教会文学では、信仰の堅固さで名高い多くの聖人にこの名が与えられている。

[4549] エゲイア――キリキアの沿岸都市の一つ。

、聖殉教者ユリアヌスは、砂や様々な毒蛇で満たされた袋に入れられ、海に投げ込まれた。こうして聖ユリアヌスはその苦しみを終えた。　しばらくして、敬虔な母もまた苦しみの中で息を引き取り、二人は共にキリスト・神から勝利の冠を授かった。

聖ユリアンの遺体は波に運ばれて岸に打ち上げられ、そこでアレクサンドリアの敬虔な未亡人によって発見され、尊厳をもって埋葬された。　その後、聖ユリアンの聖遺骨はアンティオキアに移された[4550]。聖ヨハネス・クラマトルス[4551]は、アンティオキアで司祭を務めていた際、聖殉教者ユリアンの記憶を称賛の言葉を以て称えた。

コンダク、第2調：

敬虔なる不敗の戦士、真理の擁護者にして守護者であるユリアヌスを、今日、我ら皆、ふさわしく称え、彼に向かって叫ぼう。「キリスト・神に、我らすべてのために祈り給え」。

尊者ユリウス司祭とユリアヌス助祭の伝記

記念日：6月21日

聖ユリウスと聖ユリアンの故郷は、ミルミドニアという国であった[4552]。二人は実の兄弟であり、幼少の頃からキリスト教の敬虔さの中で育てられ、書物による教えにおいて良き指導を受けた。成人すると、彼らは清らかな生活を送り、断食と祈りをもって神に仕え、昼夜を問わず主の律法を学びました。このような神に喜ばれる生活を送ったため、彼らは教会の位階を授けられました。　ユリウスは長老に、ユリアヌスは助祭に叙階された。そして彼らはキリストの教会において、まるで二つの灯火のように、善行によって輝き、それによって天の父を賛美した。当時、聖なる信仰という小麦の中には、偶像崇拝という迷いの雑草がまだ多く混じっていた。　当時、東も西もすでにキリスト教の王たちの支配下にあり、敬虔さは至る所で栄えていたものの、ギリシャの不敬虔さはまだ完全に根絶されてはいなかった。特に、人々が理性を欠いた盲目さゆえに、依然として古代の偶像崇拝に固執していた村々においてはなおさらであった。　そこで、神への熱意に満ちたこの二人のキリストのしもべは、コンスタンティノープルに赴き、敬虔なテオドシウス2世王（[4553]）のもとを訪れ、ギリシャ・ローマ地域において妨げられることなく偶像を破壊し、　神殿を破壊し焼き払い、偶像を祀るために植えられた森や庭園を訪れ、その代わりに神の教会を建て、イエス・キリストの御名の栄光を広めることができるようにと懇願した。皇帝はこれに許可を与え、それを勅書で確認した。その勅書には、周辺地域や都市の至る所で、教区のすべての統治者　（地方長官、公爵、各種高官、都市長）が、あらゆる事柄においてユリウスとユリアヌスに従い、神の神殿の建設に必要な物資をすべて彼らに提供するよう命じられていた。彼らはまた、至聖なる総主教から、説教および教会の建設と奉献に関する祝福も受けた。　こうして、この二人のキリストの聖なる戦士は、まるで二人の使徒のように、ギリシャ・ローマ帝国の諸国へと赴き、異教徒たちにイエス・キリストの御名を宣べ伝え、多くの人々を神であるキリストへと導き、言葉だけでなく奇跡によっても彼らの信仰を確固たるものにした。

[4550] アンティオキア――シリア最古の都市で、オロンテス川のほとりに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れている。

[4551] 聖ヨハネス・クラマティオス（金口）――4世紀から5世紀初頭にかけて活躍した著名な教父であり、その記念日は11月13日である。

[4552] すなわち、エシュナ島のことである。

[4553] テオドシウス2世皇帝は、408年から450年まで在位した。

なぜなら、神から病人を癒やし、悪霊を追い出す恵みと力が彼らに与えられていたからであり、彼らは至る所で偶像の神殿を破壊し、偶像を滅ぼした。　一方、ギリシャ人たちが激しい敵意をもって彼らに抵抗した地域においても、聖人たちは王の勅令を統治者や都市の長たちに示し、彼らから援助を得て、その使命を果たした。　彼らは、王室の財源からの援助だけでなく、真に信仰深いキリスト教徒たちの寛大な施しによっても、数多くの教会を建立した。というのも、こうした教師、啓蒙者、そして奇跡を行う者たちを目にした人々は、どこでも、誰であれ、自らの財産を惜しまず、聖なる大義のために捧げたからである。　こうして彼らは東と西を巡り、百もの教会を建立した。彼らが現した奇跡は数え切れないほど多く、そのすべてを詳細に伝えることは不可能であり、せいぜいその一部を思い起こすことしかできない。

ある日、聖なる兄弟たちの尽力によって建設されていたヴィヴラフの教会で、作業員の一人が不注意から鉄の道具で左手の親指を切り落としてしまった。その結果、　大量の血が流れ出し、その男は衰弱と痛みのあまり、まるで死んだかのように倒れてしまった。　聖人たちはこれを見て、切断された指を拾い上げ、その指を元の指に当て、傷口に十字を切ると、指はたちまち元の指に癒着し、傷口も塞がった。聖人たちは、その男を元気な姿で地面から起こし、彼の手には鉄の道具を渡し、こう言った。

「父と子と聖霊の御名において、力を振り絞って働きなさい。」

またある時、聖人たちはメディオラン教区[4554]、ガウディアンと呼ばれる町の近くにいた。そこで彼らは、ある集落から偶像崇拝の神殿を排除した後、自ら教会の建設（彼らが建てた教会の中で99番目となる）に励んでいた。　彼らと共に、多くの信者たちがこの建設に協力し、彼らを助けていた。ある時、何人かの人々がその場所を通りかかった。教会の建設に励む人々を見て、彼らは心の中で、建設者たちが自分たちを足止めし、たとえ望まなくても、作業に参加するよう説得してくるだろうと考えた[4555]。しかし、その場所を素通りすることは不可能だったため、彼らは次のような策を講じた。仲間の一人を馬車に乗せ、まるで死者のように見せかけ、埋葬のために遺体を運んでいるふりをしたのだ。彼らが教会の建設現場に近づいた途端、聖なる兄弟たちは彼らに向かってこう呼びかけた。

「子供たちよ！私たちの仕事を助けてくれ。」

すると彼らはこう答えた。

「私たちは、埋葬のために死者を運んでいるので、立ち止まるわけにはいきません。」

「子供たち、嘘をついているのではないのか？」と聖ユリウスは尋ねた。

「いいえ、神父様」と彼らは答えた。

「それなら、君たちの言う通りにしよう」と、聖ユリアンは彼らに言った。

そして、その人々は自分の道へと向かった。少し離れたところで、彼らは死んだふりをしていた男に起き上がるよう言った。しかし、彼は起き上がらなかった。そこで彼らは、彼が眠っているのだと思い、もっと強く彼を揺さぶり始めた。しかし、すぐに彼らは、彼が本当に死んでいることを確信した。　この奇跡は至る所に知れ渡り、人々は皆、恐れと戦慄に襲われたため、それ以来、誰も聖人たちに嘘を言うことを敢えてしなくなった。

そのしばらく後、聖ユリウス司祭はある日、弟の聖ユリアヌスにこう言った。

「兄弟よ、君はここにこの九十九番目の教会を建て続けていてくれ。私は、百番目の教会を建てられる別の場所を探しに行く。そうして、地上で百の教会が建てられた後、神の恵みによって、私たちが天にある、人の手によらず造られた永遠の教会へと移されるためだ。」

[4554] メディオラン――現在のミラノ――はイタリアにある。

[4555] 当時の慣習によれば、教会の建設には、建設現場の周辺に住む者全員が参加しなければならなかった。この慣習により、通りすがりの者であっても、もし招待されれば、建設者たちの手伝いを断ることはできなかった。

そう言うと、ユリウスは旅立った。約二マイルほど進むと、ムコロスと呼ばれる湖にたどり着いた。その湖は非常に広大で、湖の上には誰も住んでいない、とても美しい大きな島が見えた。遠くからその島を眺めながら、聖人はどうすれば島に渡れるか考え込んだ。　しかし、近くに船がなかったため、彼は祈りを捧げるために立ち上がり、ひざまずいてこう祈った。

「全能の主なる神、イエス・キリストよ！　あなたの全能の力によって、私の上に注がれているこの恵み（[4556]）が、船の代わりとなって、私がその上に立ち、あなたの右の手によって導かれ、水に沈むことなく、あの島へ渡ることができますように。」

このように祈った後、彼はその慈悲を水の上に広げ、十字を切ってその上に乗った――すると、その慈悲は舟のように水に沈むことはなかった。　聖人は杖を手に持ち、まるで櫂で水を漕ぐかのように、その奇跡の苫の舟を操り、その島にたどり着いた。島に上陸すると、彼は島を一周し、その美しさを見て大いに喜んだ。　島の中央で、聖ユリウスは広大な空間を占める巨大な岩を見出した。彼はその上に、十二使徒の名を冠した百番目の教会を建てることを決意した。しかし、その島には蛇やあらゆる毒を持つ爬虫類が大量に生息していたため、誰もその島に近づくことさえ敢えてしなかった。　聖人はその岩の上に登り、小さな木で十字架を作り、岩の小さな裂け目にそれを立てた。その後、神に祈りを捧げると、彼は「　」と、イエス・キリストの名によってすべての蛇や爬虫類を呼び寄せた――すると、膨大な数のそれらが彼の元へ集まってきた。聖人は彼らにこう言った。

「あなたがたはすでにこの地で十分に暮らしてきた。今、至聖なる三位一体、すなわち父と子と聖霊の名において、あなたがたにこの島から立ち去り、この場所を神の家と、ここに住むことを志すキリストの僕たちのために譲るよう命じる。」

聖人がそう言い終えるやいなや、すべての蛇や爬虫類は、まるでその言葉を理解したかのように、即座にその命令に従い、一斉に集まって島の西側へと去っていった。　その後、湖に飛び込み、カムンキンと呼ばれる山のある対岸へと渡り、そこで巣を作って定住したため、島からは爬虫類が完全に駆除された。　聖人は、前回と同様に湖を渡って戻ると、周辺にあるキリスト教徒の集落へ向かい、彼らから援助と必要な物資をすべて受け取った後、労働者たちと共に船で島へ戻った。その後、十二使徒の名を冠した教会を岩の上に築き、その建設に取りかかった。

その頃、聖ユリアンの兄弟である聖ユリアンは、ガウディアナ市の近くにある教会の建設を終えると、その教会内に弟のユリウスのための墓を設けることを考え、その建設を始めた。　一方、聖ユリウスは、その教会の建設が完了したことを知ると、それを視察し、ついでに兄を訪ねるためにそこへ向かった。彼がそこに着くと、兄は次のように言って彼を出迎えた。

「ほら、兄弟よ、神の御加護とあなたの祈りによって、教会の建設は完了しました。ただ、あなたのための墓はまだ建設中です。そうすれば、あなたがこの世を去った後、あなたの遺体がそこに安らかに眠ることができるでしょう。」

しかし、預言の賜物に満ちていた聖ユリウスは、これに対し聖ユリアヌスにこう言った。

「この棺の建設を急いで完成させなさい。やがてあなた自身が、その中に眠ることになるのだから。」

そして、その予言は現実のものとなった。棺が整えられたとき、聖ユリアン・ディアコンは主のもとへ召された。一方、聖ユリウスは兄弟の遺体を尊厳をもって埋葬した後、再び島に戻り、そこで使徒たちに捧げられた教会の建設を続けた。　教会の建設を終えると、彼はすでに高齢であったため、自身の死が近づいていることを予見し、その教会の中に自分のための棺を用意した。その頃、メディオランでは、王によって、その国全体を統治する司教として、アヴデンティウスという名の元老院議員が任命された。彼は高貴な家柄の出身で、徳高く敬虔な人物であった。　聖ユリアヌスのこと

[4556] ミロート――上着、マント、レインコート。

を知った彼は、家族と共にムコロス島を訪れ、神の僕であるユリア長老に会い、彼が建てた教会を見学したいと願った。そこで船に乗り込み、彼らは旅立った。　島に到着すると、アヴデンティウスは聖人から祝福を受ける恵みにあずかり、霊的な事柄について語り合い、また教会の建物も見学した。その後、彼は聖人に向かって次のように言った。

「父よ！もしあなたがまだ何かを建設するおつもりなら、私に告げてください。私は自分の財産からあなたを助けましょう。必要なことなら何でも喜んでお仕えいたしますから。」

聖人はこれに対し、次のように答えました。

「わが子よ！　私たちにこれ以上建てるものは必要ありません。残っているのは、私の棺のそばに、あなたのための棺を一つ建てることだけです。なぜなら、あなたがこの世を去った後、その遺体はこの教会に眠ることになるからです。」

アウデンティウスはこう答えました：

「父よ、あなたの墓はここに置いておいてください。私はすでにメディオランに自分の墓を用意しておきました。」

「信じてくれ、わが子よ」と聖ユリウスは彼に言った。「お前の遺体は、他のどこでもない、私の遺体のそばに葬られることになるのだ。」

聖人と十分に語り合い、彼から祝福を受けた後、アヴデンティウスはメディオランへと戻った。ほどなくして、聖ユリウスは主のもとへ召され、自身の棺に埋葬された。その棺からは、彼の祈りによって多くの病人が癒やされた。聖ユリウスの死後、彼の後任には敬虔な長老イリアが就いた。数年が経過した後、メディオランの司教アヴデンティウスも亡くなり、メディオランにある自身の棺に納められた。しかし、翌日の朝、彼は棺の外に横たわっているのが発見された。誰かに棺から放り出されたわけではなく、あたかも棺から運び出され、丁寧に置かれたかのようであった。　遺体は再び同じ棺に納められたが、二度目も棺の外に横たわっているのが発見された。三度目も同様のことが起きた。　別の場所に埋葬しようとしたが、どこにも彼を葬る場所が見つからなかった。そこで、家族たちは、聖ユリウスがアヴデンティウスに語った言葉――「彼は、自分の遺体の隣以外には、いかなる場所にも埋葬されない」――を思い出し、アヴデンティウスの遺体を　ムコロス島へと運んだ。至福のイリヤは、十字架、香炉、そしてろうそくを携えてエパルハの遺体を出迎え、相応しい礼遇をもって、尊者ユリイの棺の傍らに埋葬した。

こうして、聖人の預言は成就した。これは、父と聖霊と共に永遠に賛美される、私たちの神キリストの栄光のためである。アーメン。

7月5日

6月22日（旧暦）

聖司祭殉教者エウセビオス、サモサタ司教の生涯と受難

記念日6月22日

聖エウセビオスは、アンティオキア総主教の管轄下にあったサモサタ[4557]の司教であった。彼は正統な信仰を持ち、敬虔で、神への熱意に満ち、正統な信仰告白において揺るぎない人物であった

[4557] サモサタ――シリアのコムマゲナ州の主要都市。ユーフラテス川の西岸に位置し、現在はサムサットと呼ばれる。

。それは、アリウス派の異端[4558] が勢力を増し、大きな害をもたらし、神の教会が激しく動揺し、嵐の海に浮かぶ船のように揺れ動いていたまさにその時期のことである。

聖なる大帝コンスタンティヌス（在位：306年～337年）の死後、その王国の東部では、その息子コンスタンティウスが王位に就いた[4559] 。彼はアリウス派信徒として、あらゆる面でアリウス派を支援し、彼らの利益を追求するようになった。 そのため、彼の治世において、正信徒たちはアリウス派から激しい迫害と弾圧を受けることとなり、聖エウセビオスもまた、正統信仰への熱意ゆえに、彼らから少なからぬ苦難を強いられた。

聖エウセビオスのキリストの教会に対する熱意は、次の出来事をきっかけに広く知られるようになった。

アンティオキアの総主教であり、アリウス派であったエウドクシオスが、富を求めてコンスタンティノープルの総主教座に移った際[4560] 、この機会にアンティオキアで、エウドクシオスの後任となる総主教を選出するため、シリア全土の司教たちによる公会議が招集された。 キリスト教徒の間だけでなく、司教たちの間にも正統派は少なく、多くの者が不敬虔な皇帝に従ってアリウス派に傾いていたため、新たに選出される総主教の教義は、正教会にとって極めて重要な意味を持つこととなった。 この点について配慮したのが聖エウセビオスであり、彼は公会議において主席司教たちの間で重要な地位を占めていた。 アルメニアのセバスティアの司教メレティオスが、正統な信仰を持ち、第1回ニカイア公会議の信条を堅く守っていることをよく知っていたエウセビオスは、この司教を総主教に選出するよう皆に勧めた。 アリウス派の者たちは、メレティオスの正統性を知らず、彼が自分たちと同じ考えを持つ者だと考えていたため、エウセビオスの助言に喜んで従った。彼らはメレティオスに関する共同の決議書を作成し、署名してそれを聖エウセビオスに預けた。 その後、この選出について皇帝の承認を得ると、司教団を代表して聖メレティオスに選出の知らせが送られ、彼はアンティオキアへ連れて行かれた。そこでは、彼は大いなる喜びをもって迎えられた。 聖メレティオスは総主教の位につくと、まず何よりも信徒たちに善良で徳高い生活を説き始めた。これにより、彼は頑なな心を持つ者たちにとって、正信仰への道を平らにしようと努めたのである。 聖人は、悪しき風習を正し、茨やアザミを取り除けば、信徒たちの間に正教の種を大いに成功裏に蒔くことができると期待していた。ほどなくして、民衆は、彼らの新しい 総主教がどのような信仰を掲げているのかを確認したいと考え、総主教にそのことを尋ね始めた。 この機会に、聖メレティオスは教会で民衆に向けた説教を行い、ニカイアでの第1回全地公会議で確立された正統信仰を称賛し、御子を父と同質かつ同本質であり、被造物ではなく、すべての被造物の創造主であると告白した。 このような民衆に向けた説教の後、アリウス派は動揺し激しく怒りを露わにしたが、正信徒たちは、使徒の座にこのような正統な司教が就いているのを見て大いに喜んだ。 アリア派は、総主教が就任してから30日目に、激しい怒りを込めて彼を教会から追放し、至る所で彼を「異端者サヴェリウスの信奉者」[4561] と呼んで中傷し始めた。その後、彼らの要請により、メレティオスは王によって流刑を宣告され、夜間にアンティオキアから追放された。 アリウス派は、彼の後任として、アリウス派のエウゾイをアンティオキアの主教に選出した。

4558 アリウスは、神の御子が父なる神と同質であることを否定し、イエス・キリストを被造物として崇め、彼に神聖な完全性を認めなかった。アリウス派の異端は、第1回（325年）および第2回（381年）の全地公会議において断固として非難された。

4559 コンスタンティウス（2世）は337年から361年まで統治した。

4560 エウドクシオスは、357年から358年までアンティオキアで、360年から370年までコンスタンティノープルで総主教を務めた。

4561 3世紀の異端者サヴェリウスは、聖三位一体に関する正統な教義を歪曲し、神は一つの位格しか持たないと主張した。すなわち、父として天に、子として地上に、聖霊として被造物の中に共存しているというのである。

サモサタの聖エウセビオスは、異端者たちがアンティオキア教会にどれほどの動揺をもたらしたか、またアリウス派が新大司教メレティオスに対してどれほど不当な中傷を加えたかを目の当たりにし、誰にも何も告げずにアンティオキアを去り、自身の故郷へと向かった。　メレティオスが去った後、アリウス派の人々は、エウセビオスが司教たちの署名入りでメレティオスの選出を決定した判決書を保管していることを思い出した。これを思い出し、彼らは少なからぬ動揺に陥った。自分たちの意思で大司教を選出したにもかかわらず、すぐに彼を追放してしまったのではないかと恐れたからである。　そこで、アリア派は、当時アンティオキアに滞在していた王に対し、エウセビオスに、彼に託されていた決定書を返還するよう要請するよう懇願した。王は直ちに、決定書を取り戻すため、使者をエウセビオスの元へ派遣した。使者は司教のもとへ到着すると、王の命令を伝えた。それに対し、聖エウセビオスは次のように答えた。

「私に託されたこの共同判決文は、それを私に託した者たちが全員（公会議に）集まるまでは、決して引き渡しません。」

使者は何も得られずに戻ったため、王は激しく怒り、再び使者を遣わした。その際、もし司教が判決を下すことを拒むならば、その右手を切り落とすという厳しい命令を書き添えた。王は聖人を威嚇するためにこの一文を書き加えたが、実際にそれを実行するよう使者に命じることは敢えてしなかった。　王の使者が司教に追いつき、その恐ろしい書簡を見せたとき、聖エウセビオスはそれを読み終えると、直ちに両手を差し出し、次のように言った。

「右の手だけでなく、左の手も切り落としてください。それでもなお、私はアリウス派の悪意と不法を糾弾する判決を下すことはしません。」

再び派遣された使者は判決を得られずに戻り、すべてを皇帝に報告した。皇帝は聖なる司教の返答を聞き、その恐れを知らぬ勇気と不屈の精神に深く感銘を受け、その後、多くの人々の前でエウセビオスを称賛した。

数年が経過すると、不義の王コンスタンティウスが死去し、その後をユリアヌス・アポステート[4562]が継いだ。この王は当初、聖メレティオスを流刑地からアンティオキアの主教座に復帰させたが、その後再び彼を追放した。

ユリアヌスの治世において、キリストの教会はコンスタンティウスの治世時よりもさらに大きな苦難に直面した。全宇宙の正信者たちを惑わすアリウス派の異端に加え、偶像崇拝者たちによる迫害も加わった。皇帝自身も明らかにキリストを否認し、公然と偶像への生贄を捧げるようになった。キリストの教会とキリスト教徒に対しては迫害が繰り広げられ、その矛先は主に聖職者たちに向けられた。　これらの迫害により、（当時）多くの正教会は司祭を失い、主教座は主教不在の状態となった。その中には、コンスタンティウスの治世には殺害された者もいれば、ユリアヌスの治世には偶像崇拝者たちによって追放された者もいた。　状況は極めて深刻であり、もし主がユリアヌスの命と治世を終わらせなかったならば、司祭を擁する教会が一つでも無傷で残っていたことはまずなかっただろう。

そのような過酷な時代において、聖エウセビオスは司教としての身分を隠し、軍服を身にまとい、その姿でシリア、フェニキア、パレスチナを巡り、キリスト教徒たちを正統な信仰に堅く立たせた。　司祭のいない教会を見つけると、そこには司祭や助祭、その他の聖職者を任命し、どこにおいても、アリウス派の異端を拒絶し、正統な信仰を貫く者だけを司教に任命した。 これこそが、 キリストに対する熱意であり、この時代、神の偉大な司教エウセビオスがキリストの教会に対して示した労苦、尽力、そして配慮であったのである！

[4562] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

ユリアヌスの不名誉な死後、敬虔でキリストを愛する王イオビアン[4563] が即位し、その治世下で聖メレティオスは再び司教座に復帰した。この頃、聖エウセビオスをはじめとする正統派の司教たちは、異教徒を恐れず、大胆に自らの信徒たちを導くようになった。　聖エウセビオスの助言に従い、メレティオスはアンティオキアで地方公会議を招集し、そこには27人の司教が参集した。その中では、メレティオスの次に位していたのがエウセビオスであった。この公会議には、ラオディキアの司教ペラギウスも出席していたが、彼の汚れなき聖なる生涯については、次のような話が伝えられている。

若き日、ペラギウスは両親に説得されて結婚することになったが、婚礼の殿堂に導かれた際、花嫁に純潔を保つよう説得した。こうして、夫婦という名目のもと、彼は妻と共に、兄弟姉妹のように不朽の純潔を保ち続けた。　これに加え、彼は他にも多くの美徳に優れており、そのゆえに神と人々から聖職の位をもって尊ばれた。ペラギウスは聖メレティオスと聖エウセビオスに対して深い愛を示し、彼らと志を同じくする友であり、共に敬虔の擁護者であった。　前述のアンティオキア地方公会議において、聖なる父たちは、すべての人々に、御子と御父が同一の本質であることを告白し、正統的に保持すること、また第一回全地公会議で確立された教義を遵守することを命じた。　この決定にはアリウス派も加わり、署名を行ったが、それは偽善的なものであり、一時的なものであった。正統派の皇帝に迎合するためであり、主に、皇帝から大きな尊敬を集めていた正統派の司教たち、すなわち聖メレティオス、聖エウセビオス、聖ペラギオスを恐れていたからである。　敬虔な皇帝は、彼らの正統な信仰と聖なる生活ゆえに、これらの教会の支柱たちを深く愛し、彼らの言うことにはすべて耳を傾けていた。それゆえ、異端者たちは彼らを恐れて教会に加わったのである。

短期間在位した敬虔な皇帝ヨヴィアヌスの死後、ヴァレント[4564] が王位に就くと、異端者たちは再び自らの邪信へと立ち返った。まるで犬が自分の吐いた物に戻るように[4565] 、彼らはまず、アリウス派の妻ドムニカを通じて皇帝をアリウス派へと誘い込んだのである。　正教会は再び迫害を受けることとなり、その司教たちは追放の処分を受けた。聖メレティオスはアルメニアへ、聖ペラギオスはアラビアへ追放され、聖エウセビオスはフラキアへの流刑を宣告された。

エウセビオスの追放に関する不義な王の不義な命令は、夕方までにサモサタに届けられた。聖エウセビオスはこれを知ると、王の使者を呼び寄せ、こう言った。

「今日は黙って、誰にも君がここに来た理由を話してはならない。さもないと、民衆がそれを知り、嫉妬して騒ぎ立て、君を殺してしまうかもしれない。そうなれば、私は君の死の責任を負うことになる。」

そう言うと、聖エウセビオスは夕の祈りを捧げ、夜になってその秘密を忠実な使用人の一人に打ち明けた。皆が眠りにつくとすぐに、聖人はその使用人と共に司教館を出た。使用人は司教の後を歩き、枕と書物を運んでいた。　旅人たちが城壁の近くを流れるユーフラテス川にたどり着くと、彼らは舟に乗り込み、ゼウグムという町へと向かった。　聖人は直ちに漕ぎ手たちに漕ぐよう命じ、彼らは一晩中懸命に漕ぎ続け、翌日には旅人たちをゼウグムへと送り届けた。サモサの住民たちは、聖なる司教が自分たちを去ったことを知ると、激しく泣き叫び、嗚咽に暮れ、同時に、聖人がどこへ行ったのか知っている者はいないかと人々に尋ね始めた。　ある住民は、聖職者が舟に乗り込むのを見かけ、聖職者がゼウグムへ連れて行くよう命じたのを耳にしていたため、そのことを人々に伝えた。するとすぐに、多くの住民が舟に乗り込み、急いで聖職者の後を追ってゼウグムで彼に追いついた。聖人の御前に立つと、彼らは激しく泣き崩れ、聖人に自分たちの町に戻るよう懇願した。しかし聖人はそれを拒んだ。その後、彼らは聖人の御前であらゆる祈りを捧げ、あらゆる言葉を語り、聖人の足元にひれ伏し、涙でその足を濡らしながら、ただ聖人が自らの座に戻ってくれることだけを願った。

[4563] ヨウィアヌスは363年から364年までローマ帝国を統治した。

[4564] 皇帝ヴァレントは364年から378年まで統治した。

[4565] この比較は、ペトロの手紙第二 2:22 に由来する。

聖エウセビオスは、彼らに次の使徒の言葉を引き合いに出した。*「すべての人は、上の権威に従うべきである。神に由来しない権威はないからである。存在する権威はすべて、神によって定められたものである。したがって、権威に逆らう者は、神の定めに対して逆らうことになる。そして、逆らう者は、自ら裁きを招くことになる」*（ローマ13:1–2）。

この使徒の言葉を引用して、聖人は次のように語った。

「私が王の命令に逆らうことはできませんし、あなた方にとっても、王の意志に逆らうことは危険です。」

これを聞いて、訪れた者たちは、聖人を説得して引き返させることはできないと悟り、遠くへ旅立つ彼に、ある者は金、ある者は銀、衣服、またある者は奴隷などを贈り始めた。　聖エウセビオスは、差し出されたものの中からごくわずかなものだけを受け取った。別れの際、聖人は彼らに正教の信仰と使徒の教義を守るよう教え、皆のために神に祈りを捧げ、全員に祝福を与えた後、流刑を宣告されたフラキアへと向かう旅路についた。

聖エウセビオスがイストラに滞在していた頃、ゴート族がフラキアに侵入し、その地を激しく荒らしているという噂が届いた。そのため、聖人はそれ以上先へ進むことをやめ、イストラにとどまり、そこで不義の王ヴァレンティヌスの死まで過ごした。　サモサタでは、エウセビオスの後任として、アリウス派によってアリウス派の司教エウノミオスが任命された。

エウノミオスが信徒たちを統率するためにサモサタの街に入ろうとしたとき、街の住民のうち、金持ちも貧者も、芸術家も農民も、男性も女性も、老人も若者も、誰も彼を出迎えるために出てこなかった。　町全体が正統派であったため、異端の司教を敬うことも、彼からの祝福を受けることも、ましてや彼を見ることも望まなかった。エヴノミオスは王の権威によって司教区の統治を引き継ぎ、大聖堂で礼拝を執り行うようになった。　民衆は、異端の司教を嫌っていたため、その教会にも、また司教の邸宅にも足を運ばなかった。このため、エヴノミオスは、彼と共に来た者たちを除けば、常に独りきりで過ごしていた。彼については、信仰上は異端者であったものの、その人柄は善良で、温厚、穏やか、謙虚であり、誰に対しても親切であったと伝えられている。　その善良な人柄については、次のような逸話が伝えられている。

ある時、彼は共同の浴場に入って体を洗おうとしたが、その国の慣習に従い、使用人たちは、司教が体を洗っている場所に他人が入らないよう、彼の後ろで扉を閉めた。エウノミオスは、多くの人が体を洗いたいと扉の前に立っていることを知ると、使用人たちに扉を開け、一緒に体を洗いたいと望む者全員を中に入れるよう命じた。　風呂屋に入った人々は、温かい浴槽に座っている司教を見て、座ることを望まず、彼の前に立ち、それによって敬意を表した。　司教は彼らに、自分がいるのと同じ浴槽に入るよう勧めたが、訪れた者たちはそれを拒んだ。そこで司教は、訪れた者たちが自分のために立っており、沐浴を望んでいないことを悟った。彼はこれに深く悲しみ、浴槽から出て浴場から立ち去り、自分への敬意を望まなかった。　浴場に残った者たちは、異端者の清めによって穢れたものとして、直ちに洗礼槽の水を捨て、異端者がそこにいたことを忌み嫌って洗礼槽自体をきれいに洗い流し、その後、新しいお湯を沸かして自分たちのための洗礼槽を用意した。　このことを知ったエウノミオスは、サモサタの民を味方につけることはできないと完全に確信し、司教職を辞して街を去った。

エウノミオスの退去後、アリウス派はサモサタに、彼らの邪教に従うルキウスという司教を据えた。彼は紛れもない狼であり、キリストの羊たちの敵であった。　市民たちは、この司教に対しても、最初の司教（エヴノミオス）と同様に敬意を示さず、彼は自分と共に来た者たちとのみ交わりを持って暮らしていた。なぜなら、正統派の者たちは誰もその司教のもとを訪れなかったからである。一方、キリストの羊たちは、たとえ自分たちの牧者（エウセビオス）がいなくても、彼の教えをよく覚えており、聖なる信仰を汚れなく守り続けていた。正信者たちがどれほど異端の司教を嫌悪していたかは、次の出来事からうかがえる。

ある日、多くの少年たちが通りで（子供たちの常として）ボールを投げ合いながら遊んでいた。ちょうどその時、司教がそこを通りかかった。　たまたまボールが司教の馬や馬車の下に落ちてしまった。子供たちはそれを見て、「ボールは異端によって穢された、ボールは異端によって穢された……」と大声で叫び始めた。その叫び声を聞いた司教は、使用人の一人を残して、子供たちが何をしているのか、なぜそんなに大声で叫んでいるのかを調べさせた。　子供たちは火を焚き、その炎の上でボールを投げ渡し、この火によってボールを異端から清めようとしていた。このように、大人だけでなく幼い子供たちまでもが、聖なる場所に立ちはだかる「荒廃の憎むべきもの」（ダニエル書9:27参照）のような司教の異端を忌み嫌っていたのである。　このことを知ったルキウスは、エウノミオスの柔和さに倣うことなく、激怒して多くの聖職者を遠隔地へ追放した。エウセビオスの甥である、至福のアンティオコス――最も立派な司祭であり、神に愛され、神の霊に満たされ、学問の知恵に長けた人物――をアルメニアへ追放し、　主の奉仕者たちの中で最も著名な助祭エヴォルキオスを、オアシムの荒野へ追放した。このため、サモサタの街には計り知れない悲しみと嘆きが降りかかった。

邪悪な王ヴァレンティウスの恐ろしい死の後、敬虔な王グラティアヌス[4566]が即位した。彼は直ちに、正教の信仰のために追放されていたすべての主教やその他の聖職者を解放し、　彼らに以前の座を返還するよう命じた。　そこで、聖メレティオスはアンティオキアへ、聖ペラギオスはラオディキアへ、聖エウセビオスはサモサタへ戻った。　エウセビオスと共にサモサタへ戻ったのは、アリウス派のルキオスによって追放された者たち全員であり、その中にはアルメニア出身の司祭アンティオコスや、オアシム出身の助祭エヴォルキオスも含まれていた。正信者たちにとってはこれは大きな喜びであり、不信心者たちにとっては大きな恥であった。　かつての地に戻ると、エウセビオスは他の司教たちと共に、とりわけ聖メレティオスと協力して、教会の再建に尽力した。まず第一に、彼は、アリウス派の司教たちが追放されたことで空席となっていた司教座に、正統信仰において立派で確固たる人物を選出するよう努めた。　聖人は司教の聖職に叙任し、以下の司教を任命した。高潔なアカキオスをヴィレアに、徳の高いテオドトスをイェラポールに、自身と同じ名を持つエウセビオスをハルキドに、　イシドールをキルに、またエデッサにおいては、聖なる司教バルサの帰天後、殉教者エウロギオスを司教座に就かせた。　アリウス派の都市ドリヒナに選出された敬虔なマリノ司教と共に、聖エウセビオスは自ら（その都市へ）赴き、そこで教会を異端から浄化し、新たに選出された正統派の司教を座に就かせようとした。　エウセビオスがその町に入ったとき、あるアリウス派の女性が屋根から壺を投げつけ、聖人の頭を切り裂いた。この傷により、聖エウセビオスは病に倒れ、主のもとへ召された。臨終の際、彼は共にいた者たちすべてに対し、自分に病をもたらしたその女性に対して、復讐心からいかなる悪事も行わないよう強く懇願した。　この時、聖人は、ご自身を十字架につけた者たちのために*「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのか知らないのです」*（ルカ23:34）と祈られた主を模範とし、また、自分を石で打ち殺そうとする者たちのために祈った聖ステファノ（[4567]）をも模範としたのである。

こうして、[4568]、神の御子――父と同質かつ同本質である方――のために苦難を受け、アリウス派の手によって殉教した偉大なる神の御使いエウセビオスは、その生涯を閉じた。彼の聖なる遺体はサモサタの町へと運ばれ、そこではキリスト教徒の民全体が涙と嗚咽に包まれながら、敬意を込めて埋葬された。　エウセビオスの後任として、前述の至福のアンティオコス――聖エウセビオスの姉妹の息子――が就任した。　サモサタの教会は正教の教えのもとで繁栄し、父と子と聖霊、すなわち三位一体の唯一の神を敬虔に賛美した。神に、私たちからも、今この時、そして永遠に、栄光と賛美と感謝と礼拝が捧げられますように。アーメン。

[4566] グラティアヌスは375年から383年までローマ帝国の西半分を統治した。

[4567] 聖ステファノ大助祭の記念日は12月27日である。

[4568] 聖殉教者エウセビオスの死は、380年頃であった。

コンダク、第4調：

聖職者として敬虔に生き、殉教の道を歩み、偶像への生け贄を絶たれた聖エウセビオよ。しかし、キリスト・神への大胆な信頼をもって、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

聖殉教者ジノンとジナの記念日。

6月22日の記念日

聖殉教者ジノンは、古代にエマナと呼ばれていたアラビアのフィラデルフィア[4569] の出身であった。ジナは彼の召使いであり、キリストへの信仰のために苦難を受けることを切望していた。　マクシミアヌス皇帝の治世下、この地域を統治していたイゲモン・マクシミアヌスの時代、聖ジノン[4570] は全財産を貧しい人々に施し、奴隷たちを解放した。 総督が偶像にどれほど大きな敬意を払っているかを耳にした聖ジノンは、自分の従者を連れて総督のもとを訪れた。これはジナ自身の望みによるものであった。彼は主人のそばを離れたくなく、自ら進んで聖ジノンに同行したのである。　聖ジノンはイゲモンの元へ現れ、彼が実際に偽りの神々の崇拝を非常に重んじ、自らも熱心に偶像への奉仕に没頭しているのを見ると、彼を非難した。するとイゲモンは直ちに、聖人を牛革の鞭で打つよう命じた。　この拷問の最中、ジノンは腕を伸ばして肘で偶像の神殿の壁を打ち、それによって神殿を破壊し、滅ぼしてしまった。このため、彼はまず絞首刑に処され、容赦なく体を削り取られ、傷口には酢と塩を塗り込まれた。その後、4本のくさびで両足を足枷に打ち込まれた。 聖ジノンの拷問の場（　）に、彼の召使いであるジナがやって来て、主人に自分を拒絶したり見捨てたりしないよう懇願した。これを知ったイゲモンは、ジナの足も足枷に打ち込むよう命じた。　やがて、二人の聖なる殉教者が尋問のためにイゲモンのもとに連行され、キリストを否定することを拒んだため、彼らは残酷な拷問にさらされた。さらに、聖ジノンの胸と心臓のある部位は、赤熱した鉄の棒で焼かれた。　その後、聖人たちは木に吊るされ、足には重い石が縛り付けられ、筋肉を火で焼かれた。さらに、火の燃える穴に投げ込まれ、火に油が注がれたが、聖なる殉教者たちは奇跡的に無傷のままであり、火でさえも焼けなかったため、ついに剣で首を刎ねられた[4571] 。 彼らの記念礼拝は、キパリシアの聖ゲオルギオス教会で行われる[4572] 。

この日は、海に沈められて殉教した聖殉教者ガラクティオンと、息子のサトゥルニヌスと共に火刑に処されたユリアニアの記念日が執り行われる。

7月6日

6月23日（旧暦）

[4569] フィラレート大主教の解説（『聖人伝』、6月、165ページ）によると、アラビアのフィラデルフィアとは、パレスチナのペレイア、すなわちヨルダン川東岸地域の北部を指し、デカポリスと呼ばれていた。

[4570] 皇帝バシレイオスの『月暦』およびギリシャのシナクサリオスによれば、ジノンは兵士であった。

[4571] 聖殉教者たちは、304年に、286年から305年までディオクレティアヌスの共同統治者であったマクシミアヌス・ヘルクレス帝の治世中に殉教した。

[4572] キパリシオンまたはキパリスは、コンスタンティノープルにある地域である。

聖殉教者アグリピナの記念日

6月23日の記念日

聖処女アグリッピナは、古代ローマで生まれ、そこで教育を受けました。幼い頃から彼女は神に身を捧げ、使徒の言葉によれば、*「救われる者たちにおけるキリストの芳香」*（IIコリント2:15）でした。　香り高いリンゴや芳しい花のように、彼女は貞潔で徳高い生き方によって、信徒たちの心に甘美さと芳香をもたらし、それによって情欲の悪臭を追い払いました。　彼女は処女の清らかさで自らの魂を飾り、キリストと婚約した。そして、ヴァレリアヌス帝の治世下において[4573]、苦痛を恐れず、大胆かつ勇敢に、花婿であるキリストへの愛ゆえに、自らを多くの傷にさらした。　彼女の体は棒で激しく殴打され、骨が砕けるほどであった。その後、彼女は裸にされ、足枷をかけられた。しかし、主の御使いが不可視の手でその束縛を解き、彼女を力づけた。そして彼女は、あらゆる不義を正し、苦しみの中で神にその霊を委ねた[4574]。キリストのしもべであるヴァッサ、パヴラ、アガフォニカは、聖なる殉教者の遺体を密かに運び出し、それを持ってローマを離れた。　あちこちを転々とし、長い航海を経て、彼女たちはシチリア地方にたどり着き、そこで聖なる遺体を密かに埋葬した。シチリアが聖なる殉教者の尊い遺骨を受け入れる栄誉に浴するやいなや、その地は暗黒の悪魔の悪意から解放され、聖アグリピナの祈りによってアガリア人からの守りを得るようになった。　こうして、アガリア人が聖殉教者の教会がある町に攻め寄せ、それを征服しようと企てたとき、彼らは即座に永遠の滅びに追いやられた。

殉教者の尊い聖棺の前には、信仰をもって訪れるすべての病者やハンセン病患者が、聖殉教者の祈りと、私たちの神であるキリストの恵みによって、あらゆる病から癒やされた。アーメン。

コンダク、第4調:

あなたの輝かしい功績を称える光に満ちた日が訪れた。それゆえ、これらを崇める神聖なる教会は、皆一斉に喜びの声を上げてあなたに呼びかける。「喜びなさい、乙女よ、殉教者よ、至聖なるアグリピノよ。」

テオフィロスの悔い改めの物語

記念日：6月23日

ペルシャ軍がギリシャ領土に侵攻する少し前[4575]、第二キリキア教区のアダナ[4576]という町に、その町の聖大聖堂の執事であるテオフィロスという名の聖人が住んでいた。彼は徳高く聖なる生活を送り、教会の財産を公正かつ賢明に管理し、神の御心に沿って義にかなった方法で諸事を執り行っていた。　司教にとって、彼はすべてを見守る「目」であり、あらゆる事柄や命令を遂行する「右腕」であった。　彼はその美徳ゆえに、司教から深く愛されていただけでなく、教会の聖職者全員や町の住民全員からも愛されていた。彼は孤児たちの父であり、未亡人たちの養い手であり、貧者たちの寛大な避難所であり、虐げられた者たちの擁護者であり、無力な者たちの助け手であったからである。　一言で言えば、彼が言葉と行いで悲しみに沈む者を慰めなかった人は一人もいなかった。このため、人々は皆、テオフィロスを父のように敬い、恩人として愛し、称賛の言葉を惜しまなかった。

[4573] ヴァレリアヌス皇帝は、253年から259年までローマ帝国を統治した。

[4574] 聖殉教者アグリピナの死は、3世紀半ばに起こった。

[4575] 7世紀初頭、ホズロエ王の治世下において。

[4576] アダナは、小アジアのギリシャ系地域であるキリキアにある、さほど重要ではない都市である。

やがて、神の御心によりアダナ司教がこの世を去ったとき、この街の敬虔な住民たちは、あらゆる身分を問わず、　大から小に至るまで、テオフィロスへの真のキリスト教的愛に動かされ、彼の数多くの善行と、その清く汚れなき生涯を知っていたため、満場一致で彼を司教に選出した。その後、彼らは特に尊敬されている数名の市民をキリキア都主教のもとへ派遣し、この件に関する書面による通知を送った。　その書簡を読んだ大主教は、彼らの選出を承認することに同意した。テオフィロスは、高潔で神に喜ばれる人物であり、教区を統治する能力があり、あらゆる面で熟練し経験豊富であるとして、大主教自身にも知られていたからである。大主教は直ちに、彼を自分の元へ呼び寄せ、アダンの教会の司教に叙任するよう命じた。

しかし、テオフィロスは大主教の決定を知ると、大主教のもとへ赴くことを拒み、司教の位を受けることを頑なに拒否した。　市民や聖職者たちは皆、涙ながらに長い間、彼に自分たちの司教になってくれるよう懇願し、哀願したが、無駄だった。そこで彼らは再び大主教のもとへ嘆願書を送り、たとえテオフィロスの意思に反するとしても、彼を司教に任命してほしいと求めた。

ついに、権威ある命令をもって彼を無理やり呼び出した大主教は、喜びと愛をもって彼を受け入れ、直ちに司教に叙階しようとした。しかし、テオフィロスは大主教の足元にひれ伏し、涙ながらに、そのような重荷を背負わせないでほしいと懇願し始めた。

「私は自分の罪を知っています！」と彼は叫んだ。「私は司教の位にふさわしくありません。」

彼が長い間、大主教の足元にひれ伏したまま、泣きながらその重荷から解放してくれるよう懇願し続けた後、聖職者は彼に三日の熟考期間を与えた。それは、状況をよく検討した上で、彼を牧者とすることを切望する多くの人々の願いを無視することなく、司教の位を受け入れることに同意してもらうためであった。

三日が過ぎると、大主教は再びテオフィロスを呼び寄せ、聖職を拒まないよう諭し、懇願し始めた。その際、大主教は彼の清らかな生活と統治の才を称え、彼こそがこの聖職にふさわしいと述べた。しかし、テオフィロスは再び大主教の足元にひれ伏し、あふれんばかりの涙を流しながら、こう叫び続けた。

「私は聖職にふさわしくありません！」

彼が頑なに態度を崩さず、命令にも懇願にも屈しないのを見て、大主教はついに彼を自身の意思に任せることにした。　同じくふさわしいと見なしていた別の者を司教に任命し、彼をアダナへ派遣するとともに、テオフィロスを彼に託して、これまで通り執事の務めを全うするよう命じた。

新しい司教がしばらくの間その座に就いた後、テオフィロスもまたいつもの務めを続けていたが、サタンの嫉妬に駆られた何人かの敵が、司教に執事について悪口を吹き込み始め、密かに彼を中傷し、多くの不適切な行為で告発した。

当初、司教は自らの会計係をあらゆる点で高潔かつ非の打ち所のない人物であると知っていたため、彼らの誹謗中傷に耳を貸さず、それを信じようとはしなかった。　しかし、彼らは嫉妬から中傷を止めず、　、ほぼ毎日のようにテオフィロスに対して様々な屈辱的な告発をでっち上げたため、司教は次第に彼らの言葉に傾き始め、その中傷に耳を傾け、彼らを信じるようになった。

しばらくして、司教はテオフィロスを執事の職から解任し、彼がもはや司教邸でも教会の財産でも何事も管理せず、自宅で静かに、物静かに、労苦から休息して暮らすようにした。執事の職務は別の者に委ねられた。

世話や世俗の喧騒から解放されたテオフィロスは、唯一の神への奉仕に専念し始めた。　しかし、テオフィロスの神に喜ばれる安らかな生活を見過ごすことができず、人類を憎む悪魔は、あらゆる狡猾さを駆使して彼に立ち向かい、時には自身の思惑で、時には他の人々を通じて彼を惑わせ始め、ひそやかにこう囁いた。　「司教は、お前の偉大な功績を忘れ、お前を辱めた。お前に劣り、未熟で、ふさわしくない者を優先して、お前を屈辱にさらし、人々から嘲笑と侮辱の対象にしたのだ」。

そしてテオフィロスは、最初は少しずつ、これらの悪魔的な中傷や考えに耳を傾けるようになり、やがて自分自身や友人たちとこのことについてますます深く語り合い、苦々しく嘆くようになった。　ついに、敵の狡猾な策略により、彼はいつもの神への信頼を忘れ、気弱さと悲しみに打ちひしがれ、絶望に陥った。彼は、誰もが自分を嘲笑し、あざ笑っているように感じ、もはや誰も自分を尊敬していないと思い込み、人前に出ることを恥じるようになった。　彼の心には、かつての権力と教会の財産を管理していた日々への抑えきれない渇望が燃え上がった。彼は昼夜を問わずそのことばかりを考え、邪な思いに苛まれ、敵たちがもはや自分の屈辱を喜ぶことがないように、どうすればかつての地位を取り戻せるかを思案した。

そのような願望や、神に好ましくないその他の考えのために、神の恵みは彼の心から遠ざかり、その恵みを失った彼は、ついには極度の絶望に陥り、魔術や悪霊に助けを求めるようになった。当初は司教の位を受け入れることを拒んでいた彼は、今やはるかに小さな権力さえも求めるようになった。こうして神は、彼が心に邪悪な思いと悪魔の助言を受け入れたことに対して、彼にこのような報いを下されたのである。

その町には、あるユダヤ人、すなわち滅びの子であり、有名な魔術師、呪術師、そして詐欺師が住んでいた。彼はまさに悪魔の僕であり、多くの人々を滅びへと導いていた。テオフィロスは夜、この魔術師のもとへ向かい、彼の家に着くと、門を叩き始めた。　魔術師は誰が叩いているのか見に外へ出て、テオフィロスを見ると恐怖に襲われた。驚いた（彼はテオフィロスのことを知っていたからだ）、彼は家に入るよう誘い、テオフィロスが中に入ると、こう尋ねた。

「主よ、どのような理由で、あなたはわざわざ――夜中に、この貧しく、不適格な私のところへお越しになったのですか？」

するとテオフィロスは、その言葉に答えるやいなや、彼の足元にひれ伏し、懇願してこう言った。

「もしお力添えいただけるなら、どうか私を助けてください。この深い悲しみの中、私を見捨てないでください。」

それから彼は、司教がどのように彼を悲しませ、統治権を奪い、人々からの嘲笑にさらし、自分より劣る者を優先して自分を職務から解任したかを、魔術師に詳しく語った。そして、もし魔術師が彼を助け、かつての名誉を取り戻してくれるなら、豊かな報酬を与えると約束した。すると、神を憎むユダヤ人の魔術師は彼にこう答えた。

「そのことについて嘆く必要はありません、主よ。喜びと希望を持ってご自宅へお帰りください。そして次の夜、この時刻に私のところへお越しください。私があなたを私の主人のもとへ案内します。主人は、あらゆる面であなたを助けてくださるでしょう。」

魔術師からのこの答えを聞いた、（当時）堕落していたテオフィロスは大いに喜び、破滅的な期待に満ちて自分の居所へと戻った。

一日が過ぎ、再び夜が訪れた。真夜中、魔術師の命により、テオフィロスは彼の元へ現れた。魔術師は彼をヒッポドローム――馬の競技が行われる場所――へと連れて行き、こう言った。

「もし何か幻を見たり、声を聞いたりしても、恐れてはならないし、十字を切ってはならない。十字架は人々に何の助けにもならない。それは嘲笑に値するキリスト教の欺瞞に過ぎない。」

テオフィロスは彼の言うことに全面的に同意し、十字架で身を守らないと約束した。すると、魔術師は直ちに、様々な明るい衣装を身にまとい、手に灯った蝋燭を持った、数多くの異様な顔ぶれを幻視として彼に見せた。　それらは悪魔たちであり、彼らは自分たちの君主であるサタンを称賛して叫んでいた。闇の君主は、その真ん中に座り、高慢さと幻のような栄光に包まれていた。すると、その忌まわしいユダヤ人の魔術師はテオフィロスの手を取り、彼をこの破滅的な集まりへと導き入れ、彼と共に闇の君主のそばへと近づいた。

「なぜこの男を我々のところへ連れてきたのか？」闇の君主は魔術師に尋ねた。

「我が主よ」と、神を憎むユダヤ人は答えた。「私が彼をあなたの元へ連れてきたのは、彼が自分の司教からひどく侮辱され、あなたに助けを求めているからです。」

「神の奴隷である者に、どうして私が助けられるというのか？もし彼が本当に私の奴隷となり、私の僕の一員になりたいと望むのなら、私は彼を助けてやる。そうすれば、彼は以前持っていたものよりも大きな権力と名誉を得て、司教自身よりも強大な存在となるだろう。」

「公爵の言葉を聞いているか？」と、その時、魔術師テオフィラが尋ねた。

「聞いている」と彼は答えた。「そして、彼が命じることはすべて実行するつもりだ。」

そう言うと、彼はすぐにひれ伏してサタンに礼拝し、その足に口づけを始めた。

「この男に、いわゆる『マリアの息子』を否定させよ」と悪魔は魔術師に言った。「彼女自身も否定させよ。私はその二人を激しく憎んでいるからだ。その否定の誓約書は、彼自身の筆で書き、私に提出させよ。その後、彼が望むものを私に求めさせれば、その願いは叶うだろう。」

これを聞いたテオフィロスは、こう答えた。

「望みを叶えていただけるなら、主よ、お命じになることは何でもおこないます。」

その言葉を聞いたとき、人類の狡猾な敵である悪魔は、彼に向かって悪魔の手を差し伸べ、テオフィロスを抱きしめると、その顎鬚を撫で、不浄な唇を彼の唇に押し当ててキスをした。

「喜びなさい、わが誠実で忠実な友よ」と彼は言った。

そして、呪われたテオフィロスは、悪魔との友情を確約し、私たちの救い主キリストと、聖母マリアから背を向け、魔術師があらかじめ用意しておいた羊皮紙[4577] にその背信の誓いを書き記し、封印して、それを闇の君主に手渡した。　その後、二人は親しげに抱き合い、口づけを交わして別れた。闇の君主は従者たちと共に姿を消し、自らの居場所である地獄へと去っていった。一方、テオフィロスとユダヤ人は競馬場から戻り、二人とも自らの破滅を喜んでいた。

翌朝、悪魔の仕業というよりは、どうやら神の御手配によるものと思われるが、司教は目を覚ますと、テオフィロスを執事の職から解任したことを悔いた。　使者を遣わして再び彼を司教邸に呼び寄せると、司教は彼を大いなる敬意をもって以前の職位に復帰させ、二倍の栄誉を与え、教会の財産とあらゆる事務に対するさらに大きな権限を授けた。さらに、司教は聖職者や市民たちの面前で、テオフィロスに許しを請うた。

「兄弟よ、許してくれ」と彼は言った。「許してほしい。私は、あなたの聖なる地位を汚し、あなたの代わりにふさわしくない者を据えたことで、あなたに対して罪を犯してしまった。今、私はその者を解任する。どうか、再び会計管理を引き受けてほしい。」

この時から、テオフィロスはかつての名誉と権威を取り戻し、誰よりも尊ばれ、すべての経済管理業務を統括するようになった。　聖職者や市民たちが彼に多大な敬意を払い、畏敬の念を持って従っただけでなく、司教自身も彼に敬意を抱くようになり、かつての敵たちは恥じ入って沈黙し、謙虚に彼の恩恵を請うようになった。

その頃、不敬で狡猾な魔術師が、しばしばテオフィロスを訪ねてきた。

「ご覧なさい、ご主人様」と彼は言った。「私と私の君主が、あなたの望み通りにあなたを助け、あなたがどれほど早く私たちから援助を得たか。」

「まことにそうでした」とテオフィロスは答えた。「心から感謝いたします。」

そのような背教的な生活をしばらく送った後、テオフィロスはまるで眠りから覚めるかのように正気を取り戻し、自らの破滅を自覚し始めた。私たちの創造主であり贖い主である、　キリスト・神は、罪人の死を望まず、むしろ慈悲深く彼らの悔い改めを待ち望んでおられる[4578] 。主は、テオフ

[4577] 紙の製造法が知られていなかった時代、人々は特別に加工された皮、あるいはパピルスと呼ばれるエジプト産の葦の葉に文字を書いていた。こうした皮や葦の葉に書かれた写本は、「ハルティア」と呼ばれていた。

[4578] 参照：エゼキエル書18:21–23

ィロスのかつての徳高い生活と労苦、数多くの慈善活動、貧者や未亡人への配慮、孤児の養育、虐げられた者たちの保護、助けを求めるすべての人への援助、そして彼の数え切れないほどの善行を思い出された。　その言い表せないほどの慈愛によって、御自身の被造物を軽んじることなく、主は彼に御自身の憐れみを示された。なぜなら、主の人愛に打ち勝つ罪などないからである。主は、神秘的かつ神聖な啓示によって、テオフィロスの心に悔い改めと回心の思いを植え付けられた。

正気に戻ったテオフィロスは、一時的で取るに足らない人間の名誉のために、キリストなる神と聖母マリアを否定したことが、いかに偉大かつ恐ろしい悪行であったかを深く考え始めた。　彼は心の中で苦しみ、思いにふけって悔い改め始め、心の底から深く嘆息し、胸を叩き、苦々しく泣きじゃくり、嗚咽した。

その間、ユダヤ人の魔術師はその国の統治者に捕らえられ、数多くの魔術や悪行の罪で正当な裁判により死刑を宣告され、その行いにふさわしい処刑を受けた。すなわち、生きたまま焼かれたのである。

一方、テオフィロスは昼夜を問わず泣きじゃくり、心を痛め、食事も飲み物も口にせず、誰とも話そうとしなかった。一人で部屋に閉じこもり、嘆き悲しんでいた。

「ああ、哀れな私よ！　ああ、滅びた私よ！」と彼は叫んだ。　「私は何をしたのか？　どのような破滅に陥ってしまったのか？　今、救いを得るためにどこへ行けばよいのか？　赦しを得るために誰に頼ればよいのか？　神であるキリストか？　しかし、私は彼を否定してしまった。聖母マリアか？　しかし、私は彼女を拒絶してしまった。私は悪魔の奴隷となり、署名をもってその奴隷関係を確約してしまったのだ。　誰が彼の手から私の署名を引き剥がしてくれるだろうか？　誰が私を助け、その支配から救い出してくれるだろうか？　なぜ私は、この卑劣で神に忌み嫌われる魔術師のもとへ行き、彼を信頼し、彼と共に永遠の炎へと身を投じてしまったのか？　この一時的な名誉から、私は何の益を得たというのか？　この虚しい世の誇りや繁栄など、いったい何なのか？　ああ、私は悲惨だ！　私は滅びてしまった、この忌まわしき者よ！ ああ、私は悲惨だ！私は道に迷い、どう抜け出せばよいのか分からない罠に陥ってしまった！ ああ、私は悲惨だ！私は永遠の光を自ら奪い、闇の中に留まっている！私が家政係の職を解かれた時の方が、まだましではなかっただろうか？私が無憂無慮に、静かに暮らしていた時の方が、まだましではなかっただろうか？　なぜ私は、一時的で虚しい人々の称賛や、空しい名声のために、この哀れな魂を地獄に沈めようとしたのか？　私の破滅の原因は私自身にある！　私が自らを殺したのだ、私がこの呪われた魂の裏切り者なのだ！　ああ、私は悲惨だ！ 私は何を失ったことか！ ああ、私は悲惨だ！ 私はなんと騙されていたことか！ ああ、私は悲惨だ！　今、どうすればよいのか？　ああ、哀れな私よ！審判の日に、すべてが明らかになり、義人が栄冠を授かる一方で、私のような呪われた者は、自ら売り渡したサタンと共に裁かれる時、私は神に何と答えればよいのか！その時、私は誰に助けを請えばよいのか？その時、誰が私を憐れんでくれるのか？まことに、誰もいない！ああ、私の呪われ、不幸な魂よ！　どうしてあなたは地獄の囚われとなったのか？　どうして自らを滅ぼしてしまったのか？　なんと恐ろしい堕落を遂げたことか！　どんな波の中に身を沈めてしまったのか！　今、あなたはどの避難所に頼るのか？　あるいは、どの避難所へと駆け込むのか？　ああ、哀れな私の魂よ！　ああ、哀れな私よ！　なんと大きな災難があなたを襲ったことか！

長い間泣き続け、絶望の中で悲しみと嘆きによって自らの魂を苛み続けた後、テオフィロスは少しずつ神の慈悲への希望を抱き始めた。

「私は、聖母マリアから生まれた私の主イエス・キリストを否定してしまった」と彼は自分に言い聞かせた。「だから、主のもとへ駆け寄る勇気はない。しかし、主を産んだ聖母をも否定してしまったとはいえ、それでも私は聖母にすがり、魂と心を尽くして、その慈悲に身を委ねよう。」　聖母マリアの聖なる教会へ行き、そのイコンの前にひれ伏し、彼女をなだめ、彼女の取り成しによって神の慈悲に与かることができるようになるまで、そこで彼女への祈りを捧げ続けよう。

「しかし、私の汚れた口で彼女を拒んできた私が、いったいどのような口で彼女に祈り始めればよいのでしょうか」と彼は続けた。「どのように懺悔を始めればよいのでしょうか。どのような心で、どのような良心で、どのような希望をもって、この不敬虔な舌を祈りに駆り立てればよいのでしょうか。私にはわかりません。　この計り知れない罪の赦しを、どうやって請えばよいのか？　天から降り注ぐ火が、この呪われた私を焼き尽くしたり、大地が裂けて私を生きたまま飲み込み、地獄の深淵へと突き落としたりしないか、恐ろしい。　しかし、最後まで絶望してはならない、わが魂よ。立ち上がり、あなたを支配する悪から逃れようと努め、キリストの母のもとへ駆け寄れ。そうすれば、恥をかくことはないだろう。

街のひっそりとした一角に、無原罪の聖母に捧げられた小さな教会があり、そこでは祝日のみ礼拝が行われていた。テオフィロスは、家政係としてのあらゆる務めから解放され、あらゆる障害や世俗の心配事を脇に置いて、まさにこの教会に閉じこもり、祈りに専念したいと願った。　この教会に閉じこもり、尊い聖母マリアの聖像の前にひれ伏すと、彼は激しく泣きじゃくりながら、聖母に祈りを捧げ始めた。このことを知っていたのは、テオフィロスの生涯を記した彼の忠実な従者エウティキアノス以外には誰もいなかった。

テオフィロスは四十日四十夜、教会に留まり、断食し、懺悔し、悔い改め、昼夜を問わず絶えず祈りを捧げ、至聖なる聖母マリアのイコンにひれ伏し続けた。　そして四十日が過ぎたある真夜中、彼が祈りを捧げていたとき、私たちの主の至福の母、全世界の真の救い、人類の避難所、そして神に次ぐ私たちの唯一の希望である方が現れた。

「おお、人よ！」と彼女は彼に言った。「なぜあなたは、助けを求めて叫び、懇願して、これほど恥知らずにも私を煩わせるのですか？　あなたは自ら、私の御子と私を拒絶したではありませんか！」　私が、自分の手書きの文書によって悪魔に身を委ねたあなたのような悪魔の僕を、赦してくださるよう、私の御子であり神である方に、どうしてあなたのために祈ることができるというのか？　あなたのために祈ろうとしたとき、私はどのような目で、主のまばゆいばかりの御顔を見つめればよいというのか？　私でさえ、私の御子であり神である方に加えられる不名誉を耐え忍ぶことはできないのだ。　人よ、あなたが私の前で犯した罪については、私はあなたを赦すことができる。なぜなら、私はキリスト教徒の民、とりわけ正しい信仰と温かい愛をもって私の元へ駆け寄り、私の神殿で祈る者たちを深く愛しているからだ。そのような者たちには、あらゆる方法で助けを与え、私の腕の中に迎え入れ、彼らの祈りに耳を傾ける。　しかし、あなたがたがわが子に与える侮辱や苦痛――あなたがたは自らの罪によって、わが子を再び十字架につけているのだ――これについては、私は見ることも聞くこともできない。　あなたがたが御子の慈悲を懇願するには、多くの労苦と功績、そして心の痛悔が必要である。御子は非常に慈悲深い方ではあるが、同時に義なる裁き主であり、各人の行いに応じて報いを下す恐るべき復讐者でもあるのだ。

聖母マリアの御姿を見て喜び、テオフィロスは少し元気を取り戻した。

「おお、わが至福の御母よ！」と彼は叫んだ。「人類の守護者よ、あなたのもとに駆け寄る者たちの避難所であり救い主よ！　私がどれほど残酷に罪を犯し、あなたと、あなたが産み出された神を怒らせたか、私は知っています。まことに知っています。　しかし、私より先に御子であり、私たちの神である方を怒らせた人々の例を数多く目にします。彼らは悔い改めと告白によって、罪の赦しを授けられました。もし悔い改めがなかったなら、御子はどのようにしてニネベの人々を憐れまれたでしょうか？（ヨナ書2:1–11, 3:1–10）　もし悔い改めがなかったなら、主はどのようにして娼婦ラアブを救われたでしょうか。（ヨシュア記6:24）もし悔い改めがなかったなら、姦淫と殺人に陥ったダビデ（列王記下第11章）は、預言者の賜物を受けた後であっても、どのようにして赦しを得ただけでなく、再びその賜物を受け継ぐことができたでしょうか？　もし悔い改めがなかったとしたら、聖なる最高使徒ペトロ――キリストの御言葉の羊たちの牧者として任命されるという最高の栄誉に与る（ヨハネ21:15–17）――は、　神から天の御国の鍵を受け取った教会の柱（マタイ16:19）である聖なる

首席使徒ペトロは、一度や二度ではなく三度も主を否認し、その後、苦々しく泣き崩れた（ルカ22:56–62）にもかかわらず、どうしてそのような栄誉に浴することができたのでしょうか。もし悔い改めがなかったなら、主はどのようにして強盗である徴税人を伝道者にされたのでしょうか？　（マタイ9:9）もし悔い改めがなかったなら、聖パウロはどのようにして迫害者からキリストの選ばれた器となることができたでしょうか？（使徒9:1–20）もし悔い改めがなかったなら、主はどのようにして徴税人の長ザケイ（ルカ19:1–10）を受け入れたでしょうか？　もし悔い改めがなかったなら、父のもとに戻った放蕩息子は、どうして再び父に愛されるようになっただろうか？（ルカ15:11–32）もし悔い改めがなかったなら、キリストの足元で泣いていた娼婦は、どうしてその多くの罪の赦しを得ることができただろうか？　（ルカ7:36–50）もし悔い改めがなかったなら、強盗にどうして天国が開かれたでしょうか。（ルカ23:39–43）もし悔い改めがなかったなら、使徒はコリントの罪人をどうして受け入れるよう命じたでしょうか。（1コリント5; IIコリント2:1–8）もし悔い改めがなかったなら、悪魔そのものとなり、魔術の目的のために妊婦の腹を切り裂いていた魔術師キプリアンは、どうして自らの甚大な悪行の赦しを受けるだけでなく、義人ユスティナによってキリストへと回心させられ、殉教者の冠に与かることができたのだろうか？　これほど多くの偉大な悔い改めの模範があり、彼らを覆った神の計り知れない憐れみを仰ぎ見て、私のような罪人である私も、あえて悔い改めをもって、あなたの憐れみにすがりつきます、全き慈愛に満ちた御母よ：　どうか私に救いの手を差し伸べ、御子であり私たちの神である方から、私の重い罪の赦しを請い願ってください。

テオフィロスがこれらの言葉を口にしたとき、罪人の真の避難所であり、絶望する者の希望であり、彼女に祈る者への速やかな助けである、至聖なる聖母マリアは、彼にこう言われました：

「おお、人よ、あなたが否んだ、わたしが産んだわが子は、まことに生ける神の御子キリストであり、生ける者と死せる者を裁くために来られる方であることを告白しなさい。そうすれば、わたしはあなたのために彼に懇願し、彼はあなたの悔い改めを受け入れてくださるでしょう。」

「おお、至福の御母よ」とテオフィロスは答えた。「私のような不適格で呪われた者が、どうしてこの汚れた不浄な口を開くことができるでしょうか。私は、ささいで虚しい名誉のために、あなたの御子であり私の神である方、そして私の魂の守護者である聖なる十字架を　私の魂の守護者である聖なる十字架、そして聖なる洗礼からも背き、悪魔に捧げた私の自筆の文書をもってその背きを確固たるものにしてしまったのです。

「ただ告白しなさい」と、至聖なる神の母は彼に言われた。「そして、御方の慈悲を疑ってはならない。御方は人を愛し、慈悲深く、真に悔い改める者の涙を受け入れてくださる。人類の救いのために、御方は私から受肉することをお許しになり、神でありながら人となられたのだ。」

そこでテオフィロスは、恐れと恥、謙遜と心の痛みに満ちて口を開き、大声でこう宣言した。

「私は信じ、告白し、賛美します。三位一体から唯一なる、私たちの主イエス・キリスト、生ける神の御子、世の初めから父より言葉に尽くせぬほどに生まれ、世の終わりに天から降りて来られ、私たちの救いのために聖霊と、あなた、至聖なる処女マリア、真の神の母より受肉された方を。」完全なる神であり、完全なる人である御方は、御自身の御心により、私たちの罪のために苦しみを受け、命を与える十字架の木に御自身の至聖なる御手を広げられました。　善き羊飼いとして、御自身の羊たちのために御魂を捧げ、葬られ、復活され、あなた、至聖なるおとめから受けられた肉体を携えて天に昇られ、再び栄光のうちに地上に来られ、生ける者と死せる者を裁かれるでしょう。私はこれらすべてを心と口をもって告白し、私の神である御方に礼拝を捧げます。　主よ、あなたにお願いいたします！この汚れた私を嫌わず、私の罪深い祈りを軽んじず、邪悪な敵に惑わされ、滅びへと突き落とされたこの惨めな私を見捨てないでください！　どうか、あなたが産み出された御子に私のために取り成し、私の大きな罪を赦し、滅びから救い出してくださいますように。そうして、私も赦しを受けたすべての人々と共に、あなたが産み出された私たちの神、そしてあなた、至福の聖母の計り知れない慈悲を讃え、栄光を帰することができますように！

彼からのこの言葉を、あたかも罪に対するある種の償いとして受け止め、慈悲の源であり、滅びゆく者たちの救い主であり、神への私たちのための真の絶え間ない執り成し手であり、私たちの救いの保証である、至聖なる神の母は、次のように彼に答えられた。

「あなたがキリストの御名によって受けた洗礼による悔い改めを信じ、またあなたに憐れみを示して（私はすべての苦しむ者たちに深く憐れみを抱いているからです）、私はわが子であり神である御方に近づき、御方があなたの悔い改めを受け入れてくださるよう祈ります。」

そう言い終えると、聖母マリアは姿を消し、すでに夜が明け始めていた。

罪人にとって、この夜はなんと幸いなものであったことか。その夜、彼は聖母マリアの御姿を拝し、彼女と長い対話を交わすという恵みにあずかることができたのだ！

この御出現の後、悲しみが幾分和らぎ、希望が湧き上がったテオフィロスは、さらに三日間、至聖なる聖母マリアのイコンの前で泣き、祈りを捧げ続けた。彼はイコンを見つめ、それにすがりつき、頭を地面に打ちつけながら、聖母マリアの祈りによって主が彼を救ってくださることを切に願った。　そして三日が過ぎると、再び私たちの希望であり避難所である、汚れなき主の母が彼の前に現れた。今度は、喜びに満ちた顔で、その明るい瞳をテオフィロスに向けながら、彼女はこう言われた。

「神の僕よ！　あなたの悔い改めは、慈悲深き主なる神の御心にかなった。主は私のためにあなたの涙を受け入れ、あなたの祈りを聞き入れてくださった。さあ、これからは、死ぬその日まで、主への正しい信仰を守り抜くよう、自ら心に留めなさい。」

「まことにそういたします、わが至福の御母よ」とテオフィロスは答えた。「あなたの御命令に背くことはありません。神に次いで、あなたは私の守りであり、取り成し手であり、私はすべての信頼と希望をあなたに託します。」　私は知っています、よく知っています、私の至慈愛なる御方よ、人々にはあなた以外に助けも守りも存在しないことを。あなたに信頼を置いた者は誰一人として恥をかかされることはなく、あなたの取り次ぎを通して神に祈った者は誰一人として見捨てられることはありませんでした。それゆえ、罪深い私もまた、私たちの弱さを癒やすあなたの尽きることのない慈愛に祈ります：　迷い、悪の深淵に堕ちた私に、御慈悲の扉を開いてください。そして、私が騙されてサタンに手渡してしまった、忌まわしい写本を私の手に返してくださるよう命じてください。それは私の魂を激しく悩ませ、その写本が悪魔の手にある限り、私はこの大きな悲しみから慰めを得ることができません。

彼がこれらの言葉を口にするやいなや、聖母マリアは姿を消した。テオフィロスは、以前と同様に、さらに三日間、熱心に祈りを捧げ続けた。その後、彼はこれまでの苦労で疲れ果てて眠りにつき、夢の中で、聖母マリアが彼の手稿が書かれた紙を運んでくるのを見た。　喜びで目を覚ますと、聖母マリアの姿は見当たらなかったが、自分の原稿は封印され、無傷のまま胸の上に置かれていた。喜びと恐怖のあまり、彼はさらに激しく肉体を衰えさせ、まるで半死半生の状態になってしまった。その後、正気を取り戻した彼は、慈悲深い主キリストと、彼の助け手であり守護者である慈愛に満ちた聖母マリアに、どれほど大きな感謝を捧げたことか！

翌朝（その日は日曜日だった）、彼は大聖堂へ向かい、そこで司教が聖体礼儀を執り行っていた。　聖福音書の朗読が終わると、彼は民衆に祝福を与えていた司教に近づき、泣きながらその足元にひれ伏し、自分の話を聞いてくれるよう懇願した。彼は、皆の前で自分の悔い改めを告白したかったからである。 それから彼は、自分に起こったすべての出来事を詳しく語った。 の会計係としての職務から解任されたことがいかに彼を悲しませたか、その悲しみからいかにキリスト神と聖母マリアを否定し、自らの手でサタンに身を委ねてしまったか；　その後、断食し、祈り、泣きながら、いかにして聖母マリアを目撃し、彼女と対話し、罪の赦しを受け、そしてついにその手書きの文書が返還されたか。　民衆と司教の面前でこれらすべてを大声で詳細に語った後、テオフィロスは、かつてサタンに自らを委ねるために渡した封印された文書を司教に手渡し、皆が彼の罪を知り、聖母マリアに

よって取り成された神の慈悲を賛美できるよう、それを声に出して読み上げるよう懇願した。　司教は文書を開封すると、それを助祭に手渡した。助祭は説教壇に立ち、その内容を読み上げた。そして、皆はその恐ろしい出来事に驚愕した。

こうして、聖職者一同と民衆、男女、そして幼い子供たちに至るまで、皆がテオフィロスに何が起きたのか、彼がどのように堕ち、立ち直り、その自筆の文書を取り戻したのかを知ることとなった。司教は民衆に向き直り、大声でこう言った。

– すべての信徒よ、集まって、至聖なる真の神、主イエス・キリストを賛美しましょう！敬虔で神を愛する者たちよ、集まって、驚くべき奇跡を目撃しましょう！キリストを愛する者たちよ、集まって、慈悲深き我らの主が罪人の死を望んでおられるのではなく、彼らの悔い改めを待っておられることを悟りましょう！　さあ、正信の者たちよ、心の砕け、嘆き、そして涙がどれほど大きな力を発揮するか、その目でご覧ください！父たち、兄弟たちよ、慈悲深き神の偉大で言葉に尽くせぬ忍耐に、誰が驚かないでしょう！私たち罪人に対して示される、神の計り知れない慈悲と人間愛に、誰が感嘆しないでしょう！　まことに奇跡です！預言者モーセは四十日間の断食の後、神から律法の石板を受け取りました（出エジプト記24:18、31:18）。そして、私たちの兄弟テオフィロスは、四十日間の断食の後、神の力と聖母マリアの執り成しによってサタンから取り戻された、彼の手書きの文書を受け取ったのです！　さあ、子供たちよ、私たちも彼と共に、主への感謝の歌を歌いましょう。主は、無原罪の聖母マリアの執り成しによって、彼の悔い改めを憐れみ深く受け入れてくださいました。聖母マリアは、人々にとって神への架け橋であり、絶望する者の希望であり、苦難にある者の避難所であり、　真の門であり、その門を叩く罪人たちに御慈悲を開き、御自身から生まれた私たちの神へと私たちの祈りを捧げてくださる方です。　私に、他に何を語り、彼女とその御子を賛美するためにどのような歌を歌えばよいのでしょうか。まことに、主よ、あなたの御業は驚くべきものであり、あなたの奇跡を称えるには、いかなる言葉も足りません！まことに、*「主よ、あなたの御業はなんと数多いことでしょう！すべてを、あなたは知恵をもって造られた*」（詩編103:24）。まことに、今こそ福音書の言葉を繰り返すのがふさわしい。*「最良の衣を持ってきて彼に着せ、指には指輪を、足には靴をはかせなさい。そして、肥えた子牛を連れてきて、屠りなさい。さあ、食べて楽しみましょう！この者――すなわち*、私たちの兄弟テオフィロス――は、*死んでいたが生き返り、失われていたが見出されたのだから*」（ルカ15:22–24）。司教がそう語っている間、テオフィロスは司教の足元に横たわって泣いていた。司教は手を伸ばして、彼を地面から起こした。　テオフィロスは立ち上がると、その写本を焼き払ってほしいと懇願したが、司教は彼自身でそうするよう命じ、テオフィロスは皆の前でその通りにした。不敬虔な文書が焼かれるのを見つめながら、民衆は長い間、涙ながらにこう叫び続けた。

「主よ、憐れみたまえ。」

ついに民衆に静まるよう命じた司教は、聖務を続け、その終了後、テオフィロスにキリストの聖なる、命を与える御体と御血の聖餐を授けた。するとたちまち、テオフィロスの顔は太陽のように輝き出した。　その顔の変化を目撃した者たちは皆、悔い改める罪人を赦し、聖別してくださる至聖なる神を賛美した。

これらすべての後、テオフィロスは、かつて悔い改めの涙を流しながら断食し、聖母マリアの聖なる御姿を拝し、自らの罪の赦しを受けたあの聖母マリアの教会へと向かった。そこで彼は、労苦の後に少しの間休息をとった。三日が過ぎ、自らの死が近づいていることを知ると、彼は財産に関する遺言を作成し、そのすべてを貧しい人々に配るよう命じた。　その後、そこにいた兄弟たちに別れを告げ、彼はその義なる魂を神と神の母の御手に委ねた。彼は、悔い改めを捧げたその場所で、聖母マリアの聖像の下に埋葬された。

そして、キリスト・神と聖母マリアの慈悲が、彼において輝かしく現れた。私たち罪人たちは、常に聖母の助けを必要としているが、聖母とその御子に対し、今、そして常に、世々限りなく、敬意と栄光と礼拝と感謝を捧げよう。

「私、謙虚で罪深いエウティキアン（この物語を記した者）は、至福のテオフィロスの家で育てられ、彼の取り成しによって聖カトリック教会の聖職者となる栄誉に浴し、 ——主人の悲しみと苦悩のさなかに仕え、どこへでも彼に従い、この目で彼の悔い改めを目撃し、この耳で彼の口から語られたその話を聞いた者として——敬虔な人々の益となり、また永遠に賛美される我らの神キリストの栄光のために、すべてを真実かつ正しく記述した」。アーメン。

ウラジーミルの奇跡を起こす聖母イコンの祝祭

ウラジーミルの奇跡の聖母イコンの祝祭[4579]

記念日：6月23日

1480年、不信心なアフマート、大オルダのハンは、大公イオアン・ヴァシリエヴィチ[4580] との戦争を開始するため、大軍を率いてウグラ川にやって来た。モスクワは包囲の危機に瀕していた。そこで大公は、全ロシア都主教ゲロンティウス[4581] と、自身の告解司祭であるロストフ大司教ヴァッシアン[4582] の祈りと祝福を糧として、ウグラ川でタタール軍に立ち向かった。両聖人は、正教の信仰を守るため、異教徒と勇敢に戦うよう大公に熱心に懇願した[4583] 。 長い間、両軍は互いに対峙したまま、決定的な行動には移さなかった。ついに、至聖なる聖母マリアの取り成しにより、驚くべき奇跡が起こった。タタール人たちに恐怖が襲い、彼らは互いを恐れ、誰にも追われることなく逃げ去った。 かくして、慈悲深き神は、至聖なる聖母マリアの祈りに応えて、キリスト教徒の喜びとなるよう、血を流すことなく敵に対する類まれな勝利を授け、御自身の所有物であるモスクワの都とロシア全土を救われたのである。 大公イヴァン・ヴァシリエヴィチが、息子の大公イオアン[4584] と全軍を率いてモスクワに戻ると、人々は皆、この栄光ある救いを神と聖母マリアに賛美し[4585] 、並外れた喜びに

[4579] この日（6月23日）、モスクワでは、ウスペンスキー大聖堂からスレテンスキー修道院へと、奇跡を起こすウラジーミル聖像を奉じて、荘厳な聖像行列が行われる。 同様の聖像行列（この慣習が確立された最初のもの）は、1395年のタメルランの侵攻からロシアが救われたことを記念して、8月26日に行われる。恐ろしい聖母マリアの御出現に怯えた タメルランは、大公ヴァシーリー・ドミトリエヴィチの命令によりウラジーミルからモスクワへ運ばれた奇跡の聖母イコンを、クチコヴォの野でひざまずいて迎えるモスクワ市民たちと同じ日、同じ時刻に、ロシアの領土を去った。大公は敵との戦いにおいて、自らの武器よりも神の力に深く信頼を置いていたのである。 聖母の奇跡的な加護を記念して、聖像が出迎えられたその場所に、いわゆるスレテンスキー修道院が建立され、そこで前述の十字架行進が行われている。

[4580] 大公（在位：1462年～1505年）

[4581] 1473年から1489年までモスクワ都主教の座に就いた。

[4582] 1506年1月よりロストフ大司教、1515年没。

[4583] 大主教は、ウグラ川沿いの陣営にいる大公に公会議の書簡を送り、キリストを憎む敵に対して勇敢に立ち向かうよう鼓舞した。 しかし、ロストフの聖人ヴァッシアンは、とりわけ大胆かつ率直に、大公に対し、「ある惑わし者たち」が助言していたようなアハマトとの和平を結ぶのではなく、「不敬虔なアガリア人の異教」に勇敢に立ち向かい、 「賢明な狼ママイに立ち向かった」先祖ディミトリに倣うよう、強く訴えたのである。

[4584] 1498年から大公となり、1509年に幽閉の末に没した。

[4585] 「軽薄な者たちが、自分たちの武器を誇ってはならない——」と、ロシアの年代記作者たちはこの奇跡についてこう記している。「いや、武器でも、人間の知恵でもなく、主ご自身が今、ロシアを救われたのだ」。 **この日は、聖義人アルテミイ・ヴェルコルスキーの帰天の日である（その生涯については10月20日の項を参照）。**この日は、4世紀初頭、ア

満たされた。　この時から、神に守られた都モスクワにおいて、「ウラジーミル」と呼ばれる至聖なる聖母マリアのイコンを称える新たな祝日が定められた。それゆえ、今日である6月23日には、全世界の救い主であるキリスト、我らの神、そしてその至聖なる母への栄光と感謝を捧げるために、十字架の行列が行われるのである。

トロパリオ、第4調:

今日、最も栄光に満ちた都モスクワは、太陽の暁のように、御母なる方、あなたの奇跡を起こすイコンを受け入れたがゆえに、輝かしく飾られている。我らは今、その御前に駆け寄り、あなたに祈りを捧げつつ、こう叫ぶ。「おお、驚くべき御母なる聖母よ！　あなたから受肉された私たちの神、キリストに祈り、この都、そしてすべてのキリスト教の都と国々を、敵のあらゆる中傷から無傷で守り、慈悲深い御方として、私たちの魂を救ってくださいますように。

コンダク、第8調:

選ばれた勝利の将軍よ、御尊き御姿の到来によって悪から救われた、主の母よ、私たちはあなたの出会いの祝祭を輝かしく祝い、いつものようにあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、未婚の花嫁よ。」

7月7日

6月24日（旧暦）

同日、聖殉教者たち、すなわちディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、黒海沿岸で殉教した、血縁上の七兄弟であるオレンティウス、ファルナキウス、エロス、フィルモス、フィルミヌス、キリアコス、ロンギヌス（戦士たち）を記念する。

聖ヨハネ・洗礼者（主の洗礼者）の降誕に関するシナクサール

記念日：6月24日

「沈むことのない正義の太陽」である私たちの救い主が、世に輝きを放とうと望まれ、すでに天を屈服させ、最も清らかな処女の胎内に宿られたその時、まさにその時に、不妊であった女性から、その「暁の星」である聖ヨハネ・洗礼者誕生が成し遂げられることになっていた。　彼には、先駆者として、主の御降臨に先立ち、*「わたしより力ある方が、わたしの後に来られる」*（マルコ1:7）と宣べ伝え、語ることが定められていた。

そして、聖エリザベトの出産の時期が満ちたとき、彼女は老齢にして、すでに衰えた胎内から息子を産んだ。それは、太古の昔、サラがイサクを産んだのと同じであった。　このように、一つの奇跡が別の奇跡に先立つのである。処女がキリストを産む前に、老齢の女性がキリストの先駆者を産む。それは、老いた女性からの超自然的な誕生を目撃した人々が、未婚の処女からの超自然的な誕生を信じ、こう心に思うためである。　「老女の不妊を解消した全能の神の御手は、強大であり、朽ちることのない処女を清らかな母とすることができるのだ」　それゆえ、世界の救い主の奇跡的な誕生に先立って、洗礼者ヨハネの奇跡的な誕生があったのである。これは、一つの奇跡によって、世界がもう一つの奇跡を受け入れる準備を整えるためであった。老いて身が衰えた母を見た人々は、御子を

ンキラでマクシミアヌス帝の治世下で殉教した聖殉教者エウストキオス、ガイオス、ウルヴァンおよびその他の聖人たちの記念日である。

産んだ永遠の処女を仰ぎ見る準備がより整い、　年老いたエリサベトによる驚くべき誕生の証人となることで、彼らは処女によるキリストの「異例の」誕生という知らせを受け入れる準備が整ったのである。なぜなら、あらゆる被造物が従う全能の神の御心により、この二つの出来事において、*「誕生の秩序が自然の法則に打ち勝った」*からである[4586]。

エリサベトがキリストの先駆者を産んだとき、彼女の親族、隣人、知人たちは皆、その誕生を聞き、彼女と共に喜んだ。主が彼女に大きな恵みを与え、「子なしという恥」を取り除いてくださったからである。　こうして、神の使者である大天使ガブリエルがザカリアに語った言葉が成就した。*「あなたの妻エリサベトは、あなたに息子を産む。そして、多くの人がその誕生を喜び祝うだろう」*（ルカ1:13–14）。その時、ザカリアの親族だけでなく、救い主メシアへの熱烈な期待に満ちていた人々もまた、喜びに沸いた。　なぜなら、彼らはすでに成就していた神の御子の受肉の神秘については知らなかったものの、聖霊の働きによって高揚された彼らの心は、洗礼者ヨハネの誕生という出来事そのものによって神秘的に喜びへと導かれ、この出来事の中に、待ち望んでいたメシアを待ち受けることができるという、ある種の確信を見出したからである。

洗礼者ヨハネの誕生から8日目、祭司たちやザカリアの親族たちが、赤ん坊の割礼の儀式に参列するため、彼の家を訪れた。彼らは、その子を父と同じ「ザカリア」という名で名付けようとした。　しかし、赤ん坊の母はそれに同意しなかった。預言者である夫を持ち、預言者である息子を産んだ聖エリサベトは、彼女自身も預言の賜物に満ちており、預言的な啓示に従って、天使が命じたその名で息子を名付けるよう強く主張した。夫からはそのことを聞くことができなかったからである。——なぜなら、　ザカリアは神殿から自宅に戻ったが、まるで舌が縛られているかのように、妻に、息子の受胎を告げ、その名をヨハネと名付けるよう命じた天使を見たことを伝えることができなかったからである。　こうして、聖霊に導かれて、聖母は赤ん坊をヨハネと名付けた——それは預言的な行為であった。以前、彼女が*「主の母が私のところに来られるとは、どうして私にこのようなことが起こるのでしょうか」*（ルカ1:43）と言ったとき、神の母が自分に訪れることを預言的に知っていたのと同じように。

すると、祭司たちや親族たちは、ザカリアに身振りで、その赤ん坊にどのような名前を付けたいのか尋ねた。ザカリアは板を求め、その上に*「その名はヨハネである」*と書いた（ルカ1:63）。するとたちまち、ザカリアの口が開き、その舌は沈黙の束縛から解き放たれ、彼は神を賛美し始めた。皆は、自分たちが目撃したこれほど多くの奇跡に驚嘆した。年老いた女性が赤ん坊を産んだこと、口がきけない父親が母親と同じ名前を息子に付けようと考えたこと、そして、名前を書いたことで口がきけなかった者が話し始め、手で書いた言葉を口で発したこと——　——まるでヨハネという名が、ザカリアの口を開く鍵であったかのように、その名を書き記した後、父の口は神を賛美するために開かれたのである。　ザカリアの言葉を聞いた人々は皆、驚き、さらに畏怖の念を抱き、ユダヤの山地全域、すなわちザカリアの家があった聖なる都ヘブロン[4587]の境界内で、目撃し聞いたすべてのことを語り広めた。

[4586] この表現は、聖母マリアに関する教義書から引用されたものである。

[4587] ヘブロン（現在アラブ人からはエル・ハリールと呼ばれている）は、パレスチナ南部に位置する都市であり、アジアで最も古い都市の一つである。　この都市はアブラハムの時代からすでに古代都市として知られており、フラウィウス（キリスト教紀元初頭に生きたユダヤ人の歴史家）の記述によれば、その時代にはすでに2300年の歴史があるとされていた。　この都市は、アブラハムとサラ、イサクとリベカ、ヤコブとリアの墓があることから、古くからユダヤ人にとって聖地とされてきた。コンスタンティヌス大帝の時代、アブラハムの埋葬洞窟の上に教会が建てられたが、それは後にイスラム教徒によってモスクへと改築された。　街自体はエルサレムより1,000フィート高い場所に位置し、両側が山々に囲まれた深く狭い谷間に広がっている。　谷全体と山の斜面は、オリーブ、イチジク、アプリコット、ザクロ、ブドウの果樹園で覆われている。現在、この町には10,000人ほどの住民がおり、彼らはここでガラス細工、農業、果樹園の経営、そしてワイン醸造に従事している。

この都市とその周辺地域は、ヨシュア・ナヴィンの時代から、アロンの祭司族に割り当てられていた。エルサレムからは8時間の道のりにあり、ベツレヘムより少し離れた高台に位置していた。この町は、その立地する高い山々から「山上の町」と呼ばれていました。また、その周辺地域は「山上の地」と呼ばれており、これは聖母マリアが親族のエリサベトのもとへ旅立ったという福音書の記述にも記されています： 「さて、*マリアはこれらの日*（ガリラヤのナザレから）、*急いで山地*、すなわち*ユダの町*へブロンへと*向かい*、*ザカリアの家に入って*、*エリサベトに挨拶した*」（ルカ1:39–40）。

このように、ここへブロン、すなわちユダ族の山地にある町、山岳地帯の真ん中で、前述したあの驚くべき奇跡的な出来事の数々が起こったのである。そして、これらの出来事を耳にした人々は皆、大いに驚き、不思議に思いながら、*「この幼子は、やがて何者になるのだろうか」*（ルカ1:66）と考えた。

そして、主の御手は生まれたばかりの幼子と共におり、その内に神の恵みの働きを増し加え、ヘロデの剣から彼を守られた。なぜなら、ヨハネの奇跡的な誕生の噂はヘロデの耳にも届き、彼はそれを大いに不思議に思い、心の中で*「この幼子は将来どうなるのだろうか」*と呟いたからである。

さて、私たちの主イエス・キリストがユダヤのベツレヘムで生まれ、東方から東方の三博士がやって来て[4588] 、生まれたばかりのユダヤの王について尋ねたとき、ヘロデは兵士たちをベツレヘムに送り、その地のすべての男児を殺すよう命じたが、 ――ザカリアの息子ヨハネのことを思い出した。彼については多くの奇跡的な話を耳にしていたため、ヘロデは「もしかすると、この子が将来のユダヤの王ではないか」と考え始めた。そこで、憎悪に駆られて、彼をも殺害しようと企み、その目的のために、わざわざ殺し屋たちをヘブロンのザカリアの家へ送り込んだ。 しかし、派遣された者たちは聖ヨハネを見つけられなかった。

ベツレヘムで神を畏れない者たちによる幼児虐殺が始まると、ベツレヘムで響いていた叫び声や悲鳴は、ダビデの町からさほど遠くないヘブロンにまで届いた。それとともに、人々はベツレヘムで泣きの声が上がった理由も知ったのである。 聖エリサベスは、幼子ヨハネを連れて、直ちに急いで荒野の最も高い山々へと向かった（この時、聖ザカリアはエルサレムにいて、巡ってきた奉仕の順番を果たしていた）。 山中に身を隠した聖エリサベトは、涙ながらに神に祈り、 、自分と少年を守ってくださるよう懇願した。そして、山の高みから近づいてくる兵士たちを見たとき、彼女は岩の崖に向かって叫んだ。

「神の山よ！ 母と子を受け入れてください！」

するとたちまち山は割れ、エリサベトと幼子ヨハネをその中に受け入れ、こうして追ってきた殺し屋たちから二人を隠した。こうして兵士たちは、探していた者を見つけられず、手ぶらで彼らを送り出した者のもとへ戻っていった。 そこでヘロデは、ザカリアのもとへ自分の従者を神殿に遣わし、「お前の息子を私に引き渡せ」と告げさせた。

聖ザカリアはこう答えた。

「私は今、イスラエルの神、主に仕えている。しかし、私の息子が今どこにいるかについては、知らない。」

ヘロデは激しく怒り、再びザカリアのもとへ従者を遣わし、もし息子を引き渡さなければ、彼自身も死ぬことになると告げさせた。そして、獣のように獰猛で、不法な王の命令を実行する用意の整った兵士たちが彼の元へやって来て、神の祭司に激昂してこう言った。

[4588] 古代において「ヴォルフ」という名称は、自然の秘力や天体の知識などを備えた賢者を指していた。キリストを礼拝するために訪れたヴォルフたちは、どうやらペルシャ出身であったようだ。彼らは占星術師、すなわち星に仕え、天体の観測に従事していた。 明らかに、彼らは同時に徳の高い人々でもあり、それゆえに神からの特別な啓示に恵まれたのである。

「お前の息子をどこに隠した？　彼を引き渡せ。王は、もし息子を引き渡さなければ、直ちにお前を殺せと命じているのだ。」

ザカリアはこれに勇敢に答えた。

「あなたがたは私の肉体を殺すだろうが、主は私の魂をお受け取りになる。」

すると直ちに、殺し屋たちは不法な命令に従い、聖なる者に猛然と襲いかかり、教会と祭壇の間に彼を殺害した（マタイ23:35）。流された彼の血は大理石に染み込み、石のようになり、ヘロデの罪と彼の永遠の裁きの証となった。

一方、エリサベトは、ヨハネと共に神によって隠され、裂けた山の中に留まっていた。その山の中には、神の御命令により、彼らのための洞窟が形成され、その近くには泉が現れ、実をたわわに実らせたナツメヤシが育った。　食事の時間になるたびに、その木は枝を垂れ下ろし、彼らが果実で満腹になると、再びまっすぐに伸びた。

ザカリアが殺されてから40日が過ぎた後、聖エリサベトは前述の洞窟で息を引き取った。それ以来、聖ヨハネは成人するまで天使によって養われ、イスラエルの民の前に現れるその日まで守られていた。　このように、神の御手は聖ヨハネを守り、覆ってくださった。どうか彼が、エリヤの霊と力によって、主の御前に先立って進み、人類を救うために来られる方の道を整えるように。これらすべてのために、私たちの神であり救い主であるキリストが、父と聖霊とともに、永遠に賛美されますように。アーメン。

トロパリオ、第4調:

キリストの到来の預言者であり先駆者よ、私たちはあなたを愛をもって崇めつつ、いかにしてあなたをふさわしく賛美すべきか、言葉に詰まってしまいます。なぜなら、不妊の母を解き放ち、父の沈黙を破り、あなたの栄光に満ちた尊い誕生によって、神の御子の受肉が世に宣べ伝えられたからです。

コンダク、第3調:

かつて不妊であった者が、今日、キリストの先駆者を産み、それこそがあらゆる預言の成就である。預言者たちは彼について宣べ伝え、ヨルダン川で彼に手を置いたとき、神の御言葉の預言者、宣教者、そして先駆者として現れたのである。

聖ヨハネ・クロマトスによる、主の聖なる預言者、先駆者、洗礼者ヨハネの降誕に関する説教

記念日：6月24日

祝祭と万人の喜びに満ちたこの日、私はガブリエルの奉仕とザカリアの司祭職を思い起こし、不信仰のために沈黙の罰を受けた者について考えている。　あなたがたは、福音記者ルカが語った話を聞いたことがあるでしょう。義人ザカリアが、*「祭司たちの慣例に従ってくじ引きで、主の神殿に入って香を焚く番が回ってきたとき、神の神殿に入ったが、香を焚く間、大勢の民が　外で祈っていた。　すると、主の御使いが、香の祭壇の右側に立って、彼に現れた。ザカリアはそれを見て戸惑い、恐れに襲われた。　すると、御使いは彼に言った。「ザカリアよ、恐れることはない。あなたの祈りは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトはあなたに息子を産む。その子をヨハネと名付けなさい」*（ルカ1:9–13）。

ああ、なんと奇妙で神秘的な奇跡であろうか！ザカリアが天使に異議を唱えたのも当然であった。彼は一つの慰めを求めていたが、別のものを与えられた。民のために祈ったが、ある息子の父と呼ばれることとなった。罪の赦しを求めていたが、不妊の胎が癒されるという約束を受けたのである。ザカリアは、エリサベトの妊娠よりも、罪を犯した人々の魂の癒やしを望んでいたのだ。　ザカリアが戸惑い、恐れおののいたのも当然であり、天使を見るやいなや、心の中でこう言った。「この人の到来は奇妙だ、その約束もまた奇妙だ！　聖なる神殿に大胆に踏み込むこの者は誰か？　香の祭壇の右側に立つこの者は誰か？　異様な姿で輝いているこの者は誰か？　この者は誰か？　私は翼のある人間も、人間の姿をした鳥も見たことがない。一体誰なのか、私の魂を恐怖で満たすこの者は？　この者は――口元には光を宿し、口を閉ざしているのに偉大なことを語る者か？　この者は――私の務めを見守る者か？　私の執り成しを妨げるこの者は誰なのか？　外で祈っている民は、天の王からの答えを携えて私を待っているのに、この者は私を中に引き留めている。彼らは私を通して王に祈りを捧げ、罪の赦しを求めていた。私は、民の願いを叶え、私の使命を果たすために、これについて祈っているのだ。だから、お前が誰であろうと、私を恐れさせるのはやめてくれ！　もしあなたが神に遣わされた天使であるなら、私の行いを助けてください。外で泣いている者たちに憐れみを示し、嘆き悲しむ者たちと共に嘆き悲しんでください。私に息子が生まれたところで、民にとって何の益があるというのか？エリザベスがその子を授乳したところで、何の益があるというのか？私が後継者を残したところで、何の益があるというのか？　去れ、私を恐れさせる者よ、お前が誰であろうと、私から離れよ！　私たちは年老いている。受胎の時期は過ぎ去った。夫婦の情熱は消え失せ、時の流れが熱を冷ました。私たち二人はもはや交わることを望まない。若さは花開かなかった――老いがどうして実を結ぶというのか？

ザカリアはそう考えていた。しかし、天使は、あなたが今聞いたとおり、彼にこう言った。「恐れるな、ザカリアよ」。その思いに惑わされるな。私は闇の天使ではなく、光の天使である。私はガブリエル、天の王のもとで指導者の一人である。私は命令を遂行しているだけであり、自分の権限で命じているのではない。　私はあなたに告げるために遣わされたのであり、あなたに暴力を振るうためではない。私は姿をとって現れているのであり、裸の姿であなたの前に現れているのではない。私を遣わした方は、あなたの命を惜しまれている。恐れるな。私はあなたに福音を伝えるために遣わされたのであり、あなたを驚かせるためではない。　あなたは老い、子なき白髪、そして実を結ばぬ胎を乗り越えるだろう。そして、誰が望むままに子を産むというのか？　それは神の賜物であり、人間の発明ではない。主の御言葉を聞いたことがないのか。*「わたしは人の創造者であり、人の内にその霊を形作った者である」*（ザカリア12:1）。信じないのか、ザカリアよ？ では、アダムはどのように創造され、エバはどのように造られ、イサクはどのように生まれたのか。アブラハムは従順において過ちを犯さなかった。それなのに、あなた、祭司よ、信じないのか！　まさか、神の言葉はすべて無力だというのか、ザカリアよ。あなたは老いを理由に異議を唱えている、老いた者よ――肉体の衰えを、神よりも強いものと見なしているのだ。　もしあなたがアブラハムの模範を見ていなければ、深く疑っていたことでしょう。あなたは自然の助けに頼り、真の神の約束を信じず、疑い、論じているのですか？あなたはわずかなことを求めて、多くのものを受け取っています。　あなたはユダヤの民のためだけに祈っているが、私は、すべての部族を救いに備えさせる方について、あなたに福音を告げているのだ。

ザカリアはこれを聞いて、少し目をそらし、天使に答えて言った。「天使よ、あなたは何を言っているのですか？　私の妻が子を産むというのですか？　まさか――私がそのために祈っていたのでしょうか。それとも、民の前で自分の子宝の多さを誇示するために、自分の番で香を焚いているのでしょうか？　私は罪の赦しを求めているのに、それ以上に不妊の解消を望むというのか？　民のために安らぎを願っているのに、エリサベトに重荷を負わせるというのか？　傷ついた魂を癒やすよう呼びかけているのに、枯れた乳房から乳が出るようになるというのか？　天使よ、あなたは一体何を言

っているのか？　私の妻が子を産むというのか？　それによって、祈りを捧げている者たち以外にとって、いったい何の益があるというのか？　もしこの言葉を聞けば、彼らは私を石で打ち殺すのではないか。「私は彼らのためでも、公共の救いのためでもなく、ただ自分のためだけに大祭司となったのだ。祝福ではなく、息子を受け入れたのだ」と非難するのではないか？　私はもはや子孫を残すことなど考えていない。立ち去れ！　もうそれを望んではいない。私が祈ったことは叶わなかった。それなのに、今になってあなたは別のことを説明しようとしている。まさか、年老いたからといって、老いが止まるというのか？　私たちは杖なしでは歩けないのに、どうして今になって子孫を残せと命じられるというのか？　老いは自然を拒む。これは信仰の域を超えたことだ。棺を目前にしながら、乳母を雇うというのか？　いや、私は今や子孫を残すことなど微塵も考えていない。私が求めているのは、民の救いと部族の幸福、敵の捕縛と都市の繁栄であり、赤ん坊の泣き声やオムツ、授乳などではない。私はそれについて微塵も考えていない。　どうして私が実子の父になれるというのか？老いは信仰を遠ざける。これは自然の理に反する。私は杖を馬のように頼りに歩いているのに、あなたは私に結婚を勧めるのか、　私の全身がすでに棺と化しているというのに？どうすればそれを確信できるのか、教えてくれ、偉大なるガブリエルよ。教えてくれ、どうすればそれを確信できるのか？　見よ、私の手足は震えている。老いのゆえに、私たち二人は共に大地を見つめている。もし一方が若く、もう一方が老いていれば、その言葉に多少の希望はあっただろう。しかし今や、私たち二人の肉体は衰え果てている。　収穫期の熟した麦穂のように、死の鎌以外には何も期待していない。もしあなたの言葉がすべて真実であるなら、主ガブリエルよ、あらかじめ何らかのしるしを示し、約束された奇跡の証を私に手渡してほしい。どうすればこれを確信できるのか？　アロンは、杖が花開かなければ信じなかっただろう。モーセは、その手が白くならなければ確信できなかっただろう。ゲデオンは、羊毛に露が降りなければ理解できなかっただろう。ヒゼキヤは、太陽が後退しなければ認めなかっただろう。私はどうすればこれを確信できるのか？　しるしを示してください。そうすれば、私は若者のように喜びます。エリサベトがサラのように軽率に笑わないよう、しるしを示してください。大天使の使者よ、どうすればこれを確信できるのでしょうか？　あなたが私に語った言葉が、どうして私にとって明白なものとなるのでしょうか？　もし私が第二のアブラハムであり、アブラハムにふさわしいことが私にも起こるのなら、私の家に入ってください。長い旅の後に、私はあなたの足を洗い、神秘に満ちた食事を差し上げます。エリザベスは教会を象徴して、小麦粉三サタをこねます。子牛に尋ねて、あなたに息子を授けてください。　どうすればそれを確信できるのか、おお、天からの素晴らしい福音をこの地上にもたらす者よ？　なぜ、天使よ、あなたは私に息子の名前を告げ、まだ存在しない者の美徳を列挙するのですか？　自然を超えたものを私に示してください。そうすれば、自然の理に反することを信じることができます。もし天が天幕となり、私が生まれ変わるなら；もし海が姿を変え、私の妻エリザベスが母となるなら；もし太陽が留まり、枯れた乳房から乳が湧き出るなら；もし月が落ち、枯れた胎内が潤うなら。　どうすればこれを確信できるのか、*「どうすればそれを知ることができるのか。私は年老いており、妻も高齢だからである」*（ルカ1:18）。

　　すると、天使はザカリアに言った。「あなたは神に保証を求めている。あなたは、自分の無力さを、主の約束よりも強いと考えているのか。あなたに福音を伝える者に、あらかじめあれこれと問い詰めることを恐れないのか。『どうすればそれを確信できるのか』と、あなたは言う。まさか、ファラオを威嚇するために、あなたがエジプトへ遣わされるというのか？」　「どうすればこれを確信できるのか」と、あなたは言う、ザカリアよ。神は超自然的なことを何一つなさらないというのか。あなたは自然の法則を求め、神の驚くべき御業を見ようとしない。教えてほしい、ザカリアよ、大地の柱は何に支えられているのか。天のドームは何によって支えられているのか。雲の貯蔵庫はどこで造られているのか。　雨の滴はどこで生まれるのか？　雪の結晶はどこで造られるのか？　太陽の運行を司るのは誰か？　月の欠けに限りを設けるのは誰か？　星の数えきれないほどを数え尽くせる者はいるか？　嵐のさなかの海は、どうして砂によって抑えられているのか？　暖かい気流はどのよう

に混ざり合うのか？　霧の闇はどのようにして生まれるのか？人は母胎の中でどのようにして形作られるのか？そして、なぜ女性の体は男性よりも弱いのか？これをどう確信すればよいのか――と、あなたは言う、ザカリアよ。あなたは自然の法則を追い求めているが、そこに神の御業はどこにあるのか？不妊の女性が子を産むなど信じられないのか？もし、処女が予想に反して子を産むと聞いたら、どうするつもりか？　かつての不信仰が信仰に変わることはあり得るだろうか？そして今、不妊という状況における不信仰が罰せられるのは、処女という奇跡を疑わないようにするためである。*「あなたは黙り、話すこともできなくなる」*（ルカ1:20）。なんと人間愛に満ちた懲罰であろうか、それはむしろ改心を促すのだ！　天使は揺らいだ声を正し、生意気な舌を制する。*「彼はしるしをもって彼らに説明し、黙り続けていた」*。　福音書記者が*「沈黙した」*と記したのも素晴らしい。沈黙は、生まれようとしている声を待ち望んでいる。ザカリアはヨハネを、老人は息子を、祭司は預言者を。これにより、天使はこう告げているのだ。不信仰者として神からのしるしを求めるなら、自らの体に鞭打たれるようなしるしを受け入れよ。*「あなたは沈黙し、それが実現するその日まで、話すことができないだろう」*。　対立の道具があるところには報復があり、軽率な大胆さがあるところには躾の綱があり、傲慢があったところにはその報いがある。神は、ザカリアよ、あなたがこのような奇跡の宣教者となることを望まれたのだ。すなわち、天の王の軍勢の長であり、世界を罪から解放する準備者となる者が誕生するのだ。　しかし、あなたは自分の体の弱さを、主の約束よりも強くしてしまった。それゆえ、*「このことが実現するその日まで、あなたは黙り、話すこともできなくなる。それは、時が来れば実現する私の言葉を信じなかったからだ」*。信仰がなければ、なすべきことは何一つ成し遂げられないのだ。

ザカリアはこれらの言葉を聞くや否や、不信仰の報いとして沈黙を課され、直ちに神殿から出て行った。なんと驚くべきことか！彼は他者を救うために神殿に入ったが、自ら裁かれた者として出て行ったのである。礼拝の香を捧げにきたのに、追放の印を背負って出て行ったのだ。　民は彼から何か良い言葉を聞くのを待っていたが、彼は身振りでこう伝えていた。「誰も私に尋ねてはならない。私は主の怒りを恐れている」。なんと驚くべき出来事だろう！　ザカリアは言葉を慎み、エリサベスは安らぎを得る。舌は沈黙し、胎は身ごもる。胎内の病は舌へと移り、言葉は抑えられ、生まれようとしている者は解放される。ザカリアは沈黙し、ヨハネは跳ね回る。

不妊の女が処女を見たや否や、明けの明星が太陽を認めたや否や、ヨハネは母の胎内で激しく跳ね回り、自然の遅滞を非難した。「私は、主の宣教者であるのに、なぜ自分の同胞たちのように束縛されているのか？」と。　私は誕生の時期を先取りし、出産を待たない。自分の流れを失わないため、主が囚われた奴隷に先んじないように、自然の順序が秩序の乱れとならないように。私は御臨在を悟り、沈黙に耐えられない。　私は、御自身の御前に道を備えるために、私を御自身の御前に先立たせてくださった方を知った。私は、宣教を急ぐゆえに、自然の束縛を揺るがす。ああ、驚くべき御業と奇跡よ！天の天使たちさえ知らなかったことを、胎内に宿されたヨハネは知り、母に語った。御座の御前では、彼は目立たず、胎内に宿る者に対して、来られる神は先んじられなかった。主権者たちからは、家造りの秘密を隠されたが、胎内に宿る者にはそれを明かされた。そして、大天使が聖母のもとへどれほど喜びの知らせを持って来たか、それは胎内で跳ね回る幼子が内から示したのである。　私たちの民族の救い主は、母胎におられながら、友であるヨハネのもとを訪れた。そこには、創造主が被造物を歓迎し、王が戦士の天幕に留まり、主がしもべの家に入られる様子がはっきりと見て取れた。　ヨハネは、胎内にいる者が胎内から見えるのを見て、自然の限界を超えようと努め、こう言った。「私は、自然によって制限される主を知らない。また、誕生の時を待つこともない。誕生のために九ヶ月の胎内生活など必要ない。この現在の閉じ込めも必要ない。なぜ、私を縛る束縛から抜け出さないのか？」　私は出て行き、この驚くべき出来事の意義を簡潔に告げよう。私は神の到来の印であり、受肉した神の御言葉の胎内である。私はラッパを吹き鳴らし、父の言葉を雄弁なものとし、ラッパを吹き鳴らし、母の死んだ胎内を蘇らせるのだ。　私は出て行き、先駆者として説教し、

そこにいるすべての人々にこう宣言する。*「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」*（ヨハネ1:29）。これこそがヨハネの演じること、いや、むしろその言葉である。

「エリサベトは出産の時を迎え、男の子を産んだ。近所の人々や親族はそれを聞き、……彼女と共に喜んだ」（ルカ1:57–58）。 というのも、高齢で、すでに老いた子宮を持つエリサベトが子を産んだことは奇跡であったからである。これは肉なる父だけでなく、御言葉である神によるものでもあった。これについて、大天使ガブリエル自身がザカリアにこう告げている。「*あなたの妻エリサベトはあなたに息子を産む。その名を『ヨハネと名付けなさい。彼は……母の胎内からすでに聖霊に満たされ、イスラエルの子らの多くを彼らの主なる神のもとへ立ち返らせ、エリヤの霊と力をもって、主の先駆けとなるであろう*」（ルカ1:13, 15–17）。

ああ、この異様で驚くべき性質を持つ息子の誕生よ！ それは驚くべき、そして不自然な出来事であった。なぜなら、通常、産む者は陣痛の助けを借りて産み、産む女性は苦しみの中で産むものだからである。 聖霊が臨在し、未熟な産婆が介在するわけでもなく、これが自然の重荷ではなく恵みの御業であるのに、エリサベトの苦しみとは一体何なのか。よく聞きなさい！この苦しみは、喜びに比べれば取るに足らないものだった。 ——ヨハネは生まれた後に恵みを受けたのではなく、母の胎内から聖別を身にまとい、天使が言ったように、驚くべき先駆者となった。「*彼は母の胎内から聖霊に満たされ……エリヤの霊と力をもって、キリストに先立って行く*」（ルカ1:15,17）。誰が誰に先立つのか？ ヨハネは主キリストに先立つ。それゆえ、彼は「先駆者」と呼ばれるのである。これは、救い主についてヨハネ自身が語った言葉からも明らかである。*「わたしの後から来る方は、わたしより先におられる方である。なぜなら、その方はわたしより先にいたからである」*（ヨハネ1:30）。「**わたしの後から**」とは時系列において、「**わたしより先に**」とは位階においてのことである。

なぜガブリエルは、ヨハネがテスビのエリヤの霊と力において、キリスト王に先立つと語ったのでしょうか？よく聞いてください！ エリヤとは「神」を意味する。ヨハネは自らの内に神を宿していた——母の胎内からすでに聖霊に満たされており、神は御霊そのものである——ため、主ははるか昔、預言者を通して彼についてこう語られたのである。 *「見よ、わたしはわたしの御使いを遣わす。彼はわたしの前に道を整える」*（マラキ3:1、マルコ1:2参照）と、多くの人々を迷いから真理へと立ち返らせる。このために、ヨハネはエリヤの霊と力において主に先立つのである。なぜなら、ヨハネにはエリヤとの多くの類似点があったからである。

もちろん、子が生まれ、話題は父へと戻る。ザカリアは、その子にどのような名前を付けたいかと尋ねられたとき、*「板を求め、そこに『その名はヨハネ』と書いた」*。天使の言葉を信じなかった彼は、今やその出来事を書き記し、文字によって宣教せざるを得なくなった。 かつて耳で聞いた言葉を信じなかった者が、今や手で記録し、起こったことを書き記すようになったのである。そして、彼に名前をつけたことで、言葉を授かった。それゆえ、*「皆が驚いた。すると、たちまち彼の口と舌が解け、神を賛美し始めた」*（ルカ1:63–64）。

なんと驚くべき、奇妙な奇跡であろうか！ 息子の名が記されると、父の沈黙していた口が開かれる。ヨハネと名付けられると、その名を呼ぶ者の舌が整う。ご覧の通り、彼が誤りを犯さなかったように、私たちも適切な説明をしたことで誤りを犯さなかったではないか。見よ、最も義なる者の名こそが、沈黙していた口を開き、動かなかった 舌を動かすのである。 こうして、叫ぶヨハネは、その名そのものが声を呼び起こすものであることが明らかになる。*「わたしは『荒野で叫ぶ者の声。主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』」*（マタイ3:3）。なんと不思議なことか！御言葉は留まり、声がそれを告げ知らせる。主が来られ、しもべが先立って遣わされる。 さあ、喜び、歓喜しよう。エリサベトが子を産み、ザカリアが声を上げたこと。不妊の女が子を産み、老人が叫んだこと。蝋板が求められ、祭司の舌が解け、声が戻ったこと。洗礼者ヨハネが現れ、全世界が喜びに沸いたこと。

ここで説教を締めくくるべきところだが、ザカリアは*「イスラエルの神、主を賛美します。主は御自分の民を顧み、救いを与えてくださったからです」*（ルカ1:68）と叫び、それを許さない。驚くべき御業だ！　ザカリアは何と言っているのか。口が利けなくなった状態から癒やされた後、ザカリアは初めてこう叫んだ。　*「主は祝福された」。これはどういう意味か。ザカリアは死んでいたが、よみがえったのだ。彼は肉体的に死んでいたわけではないが、死に似た状態を経験していた。彼は棺のように沈黙に閉じ込められ、おくるみのように舌の束縛に縛られていた。彼は祭司としての息吹を失ったまま命を取り戻し、民の嘆きと悲しみを背負った。　祭司が職を解かれるとき、彼が執り成していたすべての人々が悲しむ。この比喩的な復活の後、ザカリアは初めて「イスラエルの神、主を賛美せよ」と叫んだ。*ああ、ザカリアよ！もしあなたが霊的な巨像を見ず、霊的な農夫を知らず、賜物を受け取っていなければ、与える者を賛美することはなかっただろう。　しかしザカリアは、その賜物にふさわしい預言的な賛歌をもって神を賛美した。私たちもまた、「キリスト教の神、主を賛美しよう。主は御自分の民を訪れ、救いを与えてくださった」と叫ぼう。主には栄光と権威がある。今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

7月8日

6月25日（旧暦）

聖フェヴロニアの生涯と殉教

記念日：6月25日

不義の王ディオクレティアヌスの治世、ローマにはアンフィム（[4589] ）という地方総督が住んでいました。彼にはリシマコスという息子がおり、その子を、上院議員プロスフォロス（[4590] ）の娘である美しい乙女と婚約させていました。死の病に倒れたアンフィムは、弟のセリンを呼び寄せ、こう言いました。

「兄弟よ！　私は今、この世を去ろうとしている。私の息子を君に託す。私の代わりに彼の父親となってくれ。そして、彼を君の息子のように扱ってほしい。私が死んだら、急いで彼を婚約者であるプロスフォラの娘と結婚させてほしい。」

兄の言葉を聞いたセリンは、彼の願い通りにすべてを行うと約束した。そしてアンフィムは、三日が過ぎた後、息を引き取った。アンフィムの死後、ディオクレティアヌスはリシマコスとその叔父であるセリンを呼び寄せ、二人を個別に接見した後、リシマコスにこう言った。

「お前の父が私に対して抱いていた愛情を思い出し、私は彼に代わってお前をエパルコスに任命したいと考えていた。しかし、お前がキリスト教への傾倒を抱いているという噂が私の耳に入った。そのため、その噂が真実かどうかが明らかになるまで、私の意図は保留とした。　それまでの間、試練として、お前を東方へ派遣し、そこでキリスト教の信仰を根絶させることにした。任務を遂行して我々の元へ戻ってきた暁には、エパルホの位を授けるつもりだ。

このような王の言葉に対し、リシマコスは、生後20歳前後と非常に若かったため、反論する勇気はなかった。しかし、彼の叔父であるセリンは、ディオクレティアヌスの足元にひれ伏して、こう言った。

[4589] エパルヒ――都市の統治者、地方の長。

[4590] 上院議員――元老院、すなわち長老評議会の議員。その後、「上院議員」という呼称は名誉称号となった。

「偉大にして不滅の王よ、どうかリシマコスがここ数日間留まり、プロスフォロスの娘と結婚することをお許しください。彼が結婚を果たせば、私も彼と共に赴き、私たちは共に、あなたの神聖なる権威が命じられるままにすべてを成し遂げましょう。」

王は二人にこう言った。

「まずは、私が命じる場所へ行き、キリスト教徒を殲滅せよ。そして、与えられた任務を遂行したら、ここへ戻ってこい。そうすれば、私もあなたたちと共にリシマコスの婚礼を祝おう。」

これを聞いて、二人はこれ以上一言も口に出すことを敢えてせず、王に素直に従った。勅命と軍勢を受け取り、東方へと向かった。

リシマコスは、母の姉妹の息子である親族のコミタ[4591] プリマを連れ出し、彼に軍隊の指揮を任せた。

東方へ到着すると、彼らはパルミラ[4592] の地方に駐屯し、そこにいたすべてのキリスト教徒を様々な残酷な拷問にかけ始めた。ある者は火あぶりにされ、ある者は野獣の餌にされ、またある者は剣で斬り殺され、その遺体は犬に投げ与えられた。リシマコスの叔父であるセリンは、極めて厳格で非人道的であった。　セリンの残虐行為を目の当たりにして、多くの人々が恐怖に襲われた。一方、リシマコスはキリスト教徒に対して非常に慈悲深かった。というのも、彼の母はキリスト教徒であり、彼も母からキリストについて学んだからである。ある夜、彼は親戚であるコミタ・プリマを呼び寄せ、こう言った。

「尊敬するプリマよ、あなたは私の父が信仰上はギリシャ人[4593] であり、異教徒としてこの世を去ったことを知っているだろう。しかし、私の母はキリスト教徒として亡くなり、生前、私をキリスト教徒にしようと努めていた。だが、父と王を恐れて、私はそれを公然と行うことができず、母に『一人のキリスト教徒も殺さず、キリストの友となるよう努める』と約束したのだ。　ところが今、私の叔父セリンがキリスト教徒たちを残酷に拷問し、殺害しているのを目の当たりにし、私の魂は深く苦しんでいる。というのも、私は密かにキリスト教徒たちを容赦し、束縛されている者たちを解放して、彼らが逃げ出し、できる限りどこかに身を隠せるようにしたいと願っているからだ。

コミットは彼を助けることに同意し、二人は互いにキリスト教徒を容赦するという協定を結んだ。彼らがどこかでキリスト教の教会や修道院を発見するやいなや、直ちにそこへ密告を送り、迫害者たちの襲来を警告し、隠れるよう助言した。　さらに、伯爵は自分たちと志を同じくする兵士たちに、キリスト教徒を捕らえて拷問にかけないよう命じ、捕らえられた者については解放するよう命じた。

パルミラにかなり長い間滞在した後、セリンは多くのキリスト教徒を拷問で苦しめた後、シヴァポール――ローマの支配下にある地域の一部を構成していたアッシリアの領土[4594] に位置する都市――へ向かうことを望んだ。　この町には、50人の修道女からなる女子修道院があり、その修道院長であるヴリエンナは、祝福された修道院長であり、ディアコニッサ[4595] であるプラトニダの弟子であ

[4591] コミット――皇帝、あるいは最高位の官吏の随行者。この名称は、彼らの側近として仕えていた者たちを指した。

[4592] パルミラ――かつてシリアにあった都市で、ダマスカスとユーフラテス川の間のオアシスの一つに位置していた。この都市はソロモン王の時代に築かれた。ネブカドネツァル王の時代に荒廃したが、地中海とユーフラテス川流域の間に位置するという好立地のおかげで、すぐに再建され、重要な交易拠点となった。　ローマ時代、パルミラはその領土とともに一時は独立国家を形成していたが、後にローマ軍に征服された。この際、征服者たちは都市を破壊したが、ディオクレティアヌス帝の時代に再建された。アラブ支配下では、都市は再び破壊され、みすぼらしい村と化してしまった。

[4593] すなわち、ギリシャ・ローマ式の多神教を信仰していた。

[4594] アッシリアはシリアの東、メソポタミア平原の上流部および北部に位置していた。

[4595] ディアコニッサとは、教会の奉仕者の女性のことである。ディアコニッサの務めは以下の通りであった。彼女たちは、女性たちが洗礼を受ける準備を整え、洗礼を授ける者の質問にどう答えるべきか、また洗礼後の振る舞い方を教え、女性の洗礼の際には司教を補佐し、司教に代わって額を除く身体の各部位に聖油を塗った。　女性が教会に入る際の入り口を見守り、女性たちを所定の席に案内して品行方正に振る舞うよう監督し、司教や長老が女性たちと行う面談に立ち会い

り、師の規則を厳格に遵守していた。プラトニダの規則は次のようなものであった。　金曜日には、どの修道女も労働をしてはならず、全員が教会に集まり、朝から夕方まで祈りを捧げたり、聖書を朗読したりした。最初は、ディアコニッサのプラトニダ自身が午前3時まで修道女たちに朗読し、その後、本をヴリエンナに渡し、夕方まで読み続けるよう命じた。　その後、指導者の死後、修道院の統率を引き継いだヴリエンヌも、あらゆる点で彼女に倣い、まったく同じように行動した。

ヴリエンヌ修道院長のもとでは、プロクラとフェヴロニアという二人の少女が育てられ、修道生活への準備を進めていた。　プロクラは25歳、フェヴロニアは20歳だった。フェヴロニアはヴリエンヌの姪、すなわち　、彼女の兄弟の娘であり、その驚くべき美しさは、いかなる画家も彼女の咲き誇るような美貌を完璧に描き出すことなどできないほどであった。　この美しさはヴリエナを大いに悩ませ、彼女はフェヴロニアを世の誘惑から遠ざけ、貞潔を保たせるにはどうすればよいかと深く思案していた。　修道院の修道女たちは皆、毎日一度だけ、夕方になってごく少量のご飯をとっていた。しかし、ヴリエンヌはフェヴロニアに対し、翌日まで断食するよう命じた。つまり、一日中何も食べずに過ごし、翌日の夕方になって初めて食事をとるようにしたのである。彼女は、このような節制によってフェヴロニアの美しさが色あせることを期待していたのだ。　フェヴロニアは、自らの肉体を死に至らしめようと、この極めて厳しい禁欲に全力を尽くし、決して満腹になるまで食べたり飲んだりすることはなく、渇きと飢え、そして多くの労苦と苦行によって、絶えず自らの肉体を消耗させ、さらに睡眠さえも控えていた。 彼女の寝床は、敷物など何もない裸の板一枚だけで、長さは3キュビト、幅は1.5ペディであった。過度な断食によって衰弱したフェヴロニアは、この板の上や裸の地面で、ごく短い間だけ眠りに落ちることがあった。　そして、悪魔が夢の中の幻で彼女を誘惑しようとすると、彼女はすぐに起き上がり、地面にひれ伏して十字架の形に両手を広げ、神に苦々しい涙を流しながら、悪魔から彼女を救い出してくれるよう祈った。その後、聖書を取り出して熱心に読み、そこから霊的な喜びを得ていた。　フェヴロニアは生まれつき非常に好奇心旺盛で聡明であったため、ヴリエンヌ自身でさえ、彼女の知性に深く感嘆していた。

金曜日、すべての修道女たちが神の御言葉を聞くために教会に集まる際、修道院長ヴリエンナはフェヴロニアに聖書を朗読するよう命じていた。　また、修道女たちと共に、世俗の女性たちもしばしば教会にやって来て霊的な教えに耳を傾けていたため、ヴリエンナはフェヴロニアに、これまで一度も見たことのないそれらの女性たちの姿や装飾品を目にしないよう、幕の後ろから朗読するよう命じた。　こうして、至福のフェヴロニアに関する称賛の噂が街中に広まり、至る所で彼女の教養と知性、美しさと善良な人柄が称えられました。彼女は柔和で、謙虚で、貞潔であり、あらゆる美徳に彩られていたからです。

ある上院議員の家系の女性、イエリアという名の人が、この聖なる乙女のあらゆる美徳について耳にし、フェヴロニアに会って話をしたいという強い願望を抱いた。　この女性はギリシャの信仰を奉じており、若くして未亡人となっていた――夫との生活はわずか7ヶ月しか続かなかったのだ。夫の死後、彼女は両親の家で暮らしていたが、両親もまたギリシャの異教を信仰していた。　修道院に着くと、彼女は門番を通じて、フェヴロニアに会いたいという願いをイグメニアのヴリエナに伝えた。ヴリエナが彼女のもとへ出てくると、イエリアは彼女の足元にひれ伏し、その足を抱きしめながら、イグメニアにこう懇願した。

「天と地を創造された神にかけて、これまで偶像や悪霊の遊び道具であったこの不信心な私を、お見捨てにならないでください。私たちの姉妹フェヴロニアとの教訓に満ちた対話を、私から奪わないでください。そうして、彼女が私を救いの道へと導いてくれるように。」　そうすれば、私はキリスト、まことの神のもとで、キリスト教徒に用意されているものを得ることができると信じていま

、女性たちへの慈善活動を担当した。　初期の数世紀において、ディアコニッサは聖職者に数えられていたが、その後、特別な按手礼によってその職に就くようになった。その後、按手礼は禁止され、やがてディアコニッサの奉仕そのものも廃止された。

す。　どうか、この世の虚しさと偶像崇拝の不義から私を救い出してください。両親は私に再婚を強要していますが、私はフェヴロニアとの教訓に満ち、魂に益となる対話を交わしながら、新たな人生を始めたいのです。無知ゆえに不義の中で過ごしてきたこれまでの年月だけで、私には十分なのです。

そう言いながら、イエリアは修道院長の足に涙をこぼし、彼女の慈悲を懇願した。

ヴリエンナは彼女の話を聞き終えると、こう言った。

「主が証人です、イェリア様。少女フェヴロニアは、まだ二歳の頃から私が引き取って世話をしており、今や彼女が修道院に閉じこもって生活して18年目になります。これまで、男性も世俗の女性も、その衣服や装い、そして世俗のいかなるものも目にしたことがありません。　彼女の乳母でさえ、これまで彼女に会うことは許されていませんでした。何度も私に、彼女に会わせてほしい、話をさせてほしいと懇願してきましたが、私はそれを許しませんでした。しかし今、あなたの熱意を見て、あなたの神への愛を理解し、あなたの救いを願って、あなたを彼女の元へ案内しましょう。ただ、世俗の服を修道女の服に着替えてください。

イェリアは直ちに喜びをもってその条件を受け入れ、ヴリエンナは彼女をフェヴロニアのもとへ連れて行った。　修道服を着たイェリアを見て、フェヴロニアは、どこからか巡礼の修道女がやって来たのだと思った。そこで彼女は地面にひれ伏して礼をし、キリストの姉妹であるかのように彼女を抱きしめて口づけをした。一方、ヴリエンナは二人に座るよう命じ、教訓に満ちた聖書の朗読に励むよう促した。　するとフェヴロニアは書物を手に取り、イエリアに読み聞かせ始めた。イエリアは読み聞かせられた内容に深く心を打たれ、一晩中眠らずに過ごした。こうして二人は眠らずに聖書の朗読に励み、　、フェヴロニアは本を読み続け、イエリアはそれを聞き続けても、決して疲れを見せることはなかった。　その間、イエリアはこれほど多くの涙を流したため、大地さえも彼女の涙で濡れてしまった。というのも、彼女は信仰上ギリシャ人であったため、これほどまでに魂に有益な教えを聞いたことがなかったからである。

朝になると、イエリアは修道院長に従って自分の家へ帰ることもままならなかった。涙ながらにフェヴロニアに別れを告げ、彼女は両親のもとへ向かった。一方、フェヴロニアは修道院長の補佐であるトマイドに尋ねた。

「お願いです、お姉様、私の母よ、あの巡礼の修道女は一体誰だったのか、教えてください。まるで神の御言葉を一度も聞いたことがないかのように、あれほど涙を流していたのですから。」

「まさか、あなたが誰と話をしていたのか、ご存じないのですか？」と、トマイダはそれに答えた。

フェヴロニアはこう答えた。

「一度も会ったことのない巡礼の修道女を、どうして私が知っているというのですか？」

すると、フォマイダは彼女にこう言った。

「その姉妹とは、他ならぬイェリア、この町の由緒ある女性なのです。」

「なぜもっと早く教えてくれなかったの？」とフェヴロニアは言った。「私は彼女を姉妹のように扱って話していたのに。」

トマイダは言った：

「それは、私たちのイグメニア様がそう命じられたからです。」

その言葉を聞いて、フェヴロニアは黙り込み、心の奥底からイエリアのために神に祈り始めた。神が彼女を真の道へと導き、選ばれた羊の群れに迎え入れてくださるよう。

一方、イエリアは家に帰ると、フェヴロニアから聞いたことをすべて話し、両親に、ギリシャの迷いを捨て、唯一の真の神――イエス・キリスト――を知るよう説得し始めた。　両親は娘の賢明な助言に従い、キリストを信じ、家族全員で聖なる洗礼を受けた。こうして、聖フェヴロニアの祈りと教えが彼らに実を結んだのである。

その直後、フェヴロニアは重病に倒れた。イエリアは彼女の元を訪れ、病の間、献身的に看病した。　すると突然、セリンとリシマコスがキリスト教徒を迫害するために街に近づいているという知らせが広まった。そこで、聖職者や修道士、さらには司教自身さえも例外なく、すべてのキリスト教徒はすべてを置き去りにして、恐怖に駆られて街から逃げ出し、できる限り隠れ場所を探した。

これを聞いたヴリエナ修道院の修道女たちが彼女の元へやって来て、こう言った。

「私たちの母よ、私たちはどうすればよいのでしょうか。今、凶暴な獣たち――不敬虔な迫害者たちが街に近づいてきており、すべての忠実なキリスト教徒たちは、拷問を恐れて逃げ出しました。」

ヴリエンナは彼女たちにこう尋ねた。

「では、あなたたちはどうお考えですか。どうなさりたいのですか？」

彼女たちは答えた。

「おお、私たちの母よ、私たちの魂を救うために、私たちも身を隠させてください。」

それに対し、ヴリエンナはこう言った。

「まだ戦いを経験もしていないのに、逃げることばかり考えているのか。英雄的な行いの時がまだ来ていないのに、すでに敗北を望んでいるのか。いいえ、子供たちよ、お願いだから、そんなことはしないでください。むしろここに留まり、苦難に耐え、私たちのために死んでくださったキリストのために死に、永遠にキリストと共に生きるべきです。」　この言葉を聞いて、姉妹たちは黙り込んだ。しかし翌日、エフェリアという名の一人の姉妹が、他の者たちにこう言った。

「フェヴロニアのせいで、修道院長が私たちを隠れることを許さないのは分かっているわ。彼女は、おそらく彼女一人を理由に、私たち全員を滅ぼそうとしているのよ。でも、もう一度彼女のところへ行こう。私が皆を代表して、どうすべきかを彼女に伝えるわ。」

これを聞いて、一部の修道女たちはエフェリアに同意したが、他の者たちは彼女に異議を唱えた。しかし結局、皆が合意に達し、修道院長のもとへ向かった。ヴリエナは、彼女たちが何のために来たのかを理解すると、エフェリアに尋ねた。

「どうしたのですか、姉妹？」

すると彼女はこう答えた。

「お願いです、母上。迫り来る災いから逃れさせてください。司教も、聖職者たちも皆、去ってしまいました。母上、私たちの中には若い乙女たちがいることを思い出してください。彼女たちが不敬虔な兵士たちに捕らえられ、貞操を奪われ、神からの報いを失うことのないよう、心配しなければなりません。　さらに、私たちが拷問に耐えきれず、キリストを否認して、自らの魂を滅ぼしてしまうことにも恐れを抱かねばなりません。また、病に伏している私たちの姉妹、フェヴロニアも連れて行き、彼女をここから隠してくださるようお命じください。

これを聞いて、フェヴロニアはこう言いました。

「私のキリストよ、私は御自身の花嫁であると自認し、御身に私の魂を捧げます。この場所から離れることはなく、ここで死に、ここに葬られるでしょう。」

すると、ヴリエンナはエフェリアに向かってこう言った。

「姉妹たちを動揺させるようなことをするな。ほら、あなたが見ている通り、私があなたに思われているようなことはしていないのだ。」

それから、他の者たちに向かってこう言った。

「皆さん、それぞれが自分にとってより良いと思うように決めてください。」

すると、すべての修道女たちは、これから待ち受ける苦しみをおそれ、修道院長とフェヴロニアに別れを告げ、泣き叫び、胸を叩きながら、修道院を去っていった。一方、フェヴロニアの同級生であり、同じ修道院で学んだプロクラは、彼女を抱きしめて口づけをし、泣きながらこう言った。

「私のために祈ってください、女主人であり、私の姉妹よ。」

フェヴロニアは彼女の手を握り、離さないようにしながら、こう説得した。

「神を畏れなさい、私の姉妹プロクラよ、私たちを置いて行かないで。見ての通り、私は病気で、もうすぐ死ぬのです。私たちの母ヴリエナは、私を一人で葬ることはできません――どうか残って、彼女が私を葬るのを手伝ってあげてください。」

すると、プロクラはこう答えた。

「わかりました、私の姉よ。あなたが命じる限り、私はここに留まります。」

しかし、夕暮れになると、プロクラは約束を守らず、こっそりと修道院から逃げ出した。フェヴロニアと共に残ったのは、ヴリエナとフォマイダだけだった。

修道院長ヴリエナは、人影の消えた修道院を見て、悲しみに満ちて教会に入り、地面に倒れ込み、痛切に泣き崩れた。

トマイダは彼女を慰めながら、こう言った。

「おやめください、女主人、そして私の母よ。神は、悲しみや試練の中にあって、『安らぎ』をもたらす力をお持ちだからです（Iコリント10:13）。神は、私たちに降りかかる災難を乗り越える力を与えてくださいます（シラ書2:10）。思い出してください。神を信じ、神を畏れる者が、恥をかかされたり、神の助けなしに放置されたりしたことがあったでしょうか?

ヴリエンナは答えた。

「はい、トマイダ様、その通りです。しかし、フェヴロニアをどうすればよいのでしょうか? 彼女をどこに隠して守ればよいのでしょうか? 野蛮人たちが彼女を捕虜として連れ去る時、私はどんな目をしてそれを見ればよいのでしょうか?」

すると、フォマイダはこう言った：

「死者をもよみがえらせる主は、フェヴロニアをも力づけ、野蛮人たちから無傷で守ってくださるでしょう。お願いです、私の母上よ、もう悲しんだり泣いたりするのはやめてください。さあ、病気のフェヴロニアのところへ行きましょう。彼女を慰め、元気づけてあげましょう。」

彼女たちがフェヴロニアのもとへ着くと、ヴリエンナは再び激しく泣き出した。一方、フェヴロニアはトマイダを見て、こう尋ねた。

「私たちの母、ヴリエナの涙は何を意味するのですか?」

トマイダは彼女の方を向き直して答えた。

「この母の涙は、あなたのためです。あなたは若くて美しいからです。まもなく、残酷な拷問者たちがやって来て、私たちに大きな苦しみをもたらすでしょう。 私たちのような年老いた女たちは即座に殺されるでしょうが、若くて美しい顔立ちのあなたを、彼らはこの世の誘惑で惑わすために生かしておくでしょう――そして私たちは、彼らが甘い言葉や暴力であなたの純潔を奪い、天の花婿があなたのために用意した宮殿からあなたを引き離してしまうのではないかと恐れているのです。

すると、フェヴロニアはこう言いました：

「どうか私のために主にお祈りください。主が私の謙虚さをご覧になり、私の弱さを強め、心を尽くして主を愛するすべてのしもべたちに与えてくださるのと同じように、私に忍耐をお与えくださいますように。」

それに対し、トマイダはこう答えた。

「わが子よ、フェヴロニア! 今こそ、試練の時が訪れようとしている。 もし不敬虔な迫害者たちが、お世辞や金、銀、高価な衣、あるいはこの世の虚しい魅力であなたを誘惑しようとしても――用心深く、自分自身に注意を払いなさい――彼らの説得に耳を貸してはなりません。そうしなければ、これまでの労苦に対する主からの報いを失ってしまうことになります。 悪魔の笑いものや、偶像の遊び道具とならないよう気をつけなさい。貞潔ほど栄光あるものはなく、処女たちを待ち受ける報いは大きいことを忘れないでください 。なぜなら、処女たちの花婿は不死であり、彼を愛するすべての人に不死を与えるからです。それゆえ、 わが夫人よ、あなたが生涯を捧げてきたその目標

を達成するよう努めなさい。わが娘よ、あなたの至福の保証、すなわち洗礼の恵みと修道誓願を失わないよう、身を守りなさい。主は、御自身の栄光の玉座に着き、すべての人を裁き、各人の行いに応じて報いを与えられる時、恐るべきお方となるからです。

この言葉に耳を傾け、フェヴロニアは精神を奮い立たせ、悪魔との勇敢な戦いに臨む準備を力強く整えました。そして彼女はトマイデにこう言いました。

「私の主よ、あなたはよくなさいました。このしもべを信仰に堅く立たせ、私の魂を勇猛な戦いに備えさせてくださったのです。どうか知っておいてください。もし私が私の花婿のために死ぬという願いを持っていなかったなら、他の姉妹たちと共に、この恐ろしい苦難の戦いを避けるために逃げ出していたことでしょう。　しかし、私は心の底から天の婚約者を愛しており、魂を彼に捧げ、体を彼に献身しているのです。ですから、もし彼が、御名のために苦しみ、死ぬことを私に許してくださるなら、私は殉教の道を歩んで彼のもとへ行くことを敢えていたします。

ヴリエンナは、フェヴロニアのそのような言葉を聞き、彼女にこう言いました。

「わが娘よ、フェヴロニア！　私があなたのために費やした労苦と心遣いを思い出してください。あなたが二歳の時、私は乳母の手からあなたを引き取り、世話をしてきたこと――そして今日に至るまで、一般の信徒の誰一人としてあなたの顔さえ見たことがないことを思い出してください。今日まで、私はあなたを瞳の如く大切に守ってきました。しかし、これからあなたをどうすべきか、どう守ればよいのか、私にはもう分かりません。　私の老後を悲しませたり、あなたの霊的な母である私があなたの育成に注いだ労苦を台無しにしたりしないよう、自ら身を守りなさい。あなたより先に、キリストのために勇敢かつ気高く苦しみ、今やキリストから冠を授かった殉教者たちを思い起こしなさい。その中には、男性だけでなく、女性や子供たちもいたのです。　リヴィアとレオニダ――キリストのために勇敢に自らの魂を捧げた、この輝かしい姉妹たちを思い起こしなさい。リヴィアは剣で斬り殺され、レオニダは火の中に投げ込まれたが、二人は共に天の花婿の御許へと旅立ったのである。　十二歳の少女エウトロピアを偲びましょう。彼女は母と共に拷問の末に殉教しました。あなたは、彼女の従順さと忍耐力に、いつも驚かされてはいませんでしたか？　裁判官が彼女を縄から解き放ち、矢で脅して逃げ出すだろうと考えたことを、あなたはご存知でしょう。　しかし、彼女は母の「わが子、エウトロピアよ、立ち止まりなさい」という声を聞き、矢で全身を貫かれるまで、不動の柱のように勇敢に立ち続けた。そして、地の上に倒れ、その魂を主に委ねたのである。　この乙女は素朴で学のない者だったが、あなた自身は神の書を深く学び、多くの人々にとって良き教師であった。それゆえ、あなたの主のために、どれほど勇敢に立ち向かうべきかを考えてみてほしい。

彼らは、夜が明けて日が昇るまで、こうしたことやその他多くのことを語り合った。

太陽が昇ると、街には大混乱が巻き起こった。セリンとリシマコスが街に入城し、彼らの兵士たちはすでに多くのキリスト教徒を捕らえ、牢獄に放り込み始めていたのだ。あるギリシャ人たちが、街にある女子修道院のことをセリンに告げた。セリンは直ちに兵士たちを遣わし、すべての修道女を捕らえさせた。　兵士たちは修道院に到着すると、四方から包囲し、斧で扉を打ち破って、まるで野獣のように中へ押し入った。彼らはヴリエナを捕らえると、その老女を剣で殺そうとした。しかし、フェヴロニアは危険を察知すると、兵士たちの足元にひれ伏し、大声で叫び始めた。

「神にかけて誓います――まず私を殺してください。そうすれば、私は主人の死を目にすることはありません。」

フェヴロニアがそう叫んでいると、プリム伯爵がそこにやって来た。彼は怒りを露わにして兵士たちを追い払い、ヴリエンヌに尋ねた。

「この修道院にいた残りの修道女たちは、どこにいるのだ？」

ヴリエンナは言った：

「皆、恐怖のあまり逃げ出してしまいました。」

すると、伯爵は言った。

「ああ、あなたも彼女たちと一緒に逃げ出していればよかったのに！　しかし、今なら自由にそうして、好きな場所へ逃げてもよい。私がその慈悲を授けてやる。」

そう言うと、彼は修道院を出て、兵士たちを連れて去っていった。彼がリシマコスの元へプレトリアに到着すると、リシマコスは彼に尋ねた。

「この近くにキリスト教の修道院があるというのは、本当だったのか？」

「その通りです」とコミットは答えた。

それから、リシマコスを脇へ連れ出し、二人きりになってこう告げた。

「その修道院の修道女たちはほぼ全員が逃げ去っており、私はそこで二人の老女と一人の若い修道女以外、誰も見つけられませんでした。それに、あの修道院で私が目撃した驚くべきことをお伝えしなければなりません。私は、これまでに見たことのないほど美しい若い修道女を見かけたのです。　神が証人です、私はあなたに真実を語っています。彼女を見たとき、私はその顔の美しさに驚嘆しました。もし彼女が粗末な服を着ていなければ、あなた、私の主君にふさわしい妻になると考えたことでしょう。

これに対し、リシマスはこう答えた。

「もし私が母の戒めを破り、キリスト教徒の血を流すことを望まず、あらゆる手段でキリスト教徒を慈しみたいと願うのであれば、どうして私がキリストの花嫁たちを誘惑する者となり得ようか？　私は決してそのようなことはしない。しかし、主よ、あなたに切に願い出たい。あの年老いた修道女たちと、修道院の若い修道女を連れ出し、私の叔父であるセリヌスの手に渡って拷問を受けることのないよう、どこかに匿ってほしい。

彼女たちがそう語り合っているとき、修道院にいた最も凶悪な兵士の一人がその会話を耳にし、直ちにセリンのもとへ駆けつけ、女子修道院で非常に美しい乙女を見つけたこと、そして伯爵がリシマコスに彼女を妻に迎えるよう勧めていることを告げた。

セリンは怒りに燃え、直ちに兵士たちを派遣して、そこで見つかった修道女たちを監視させ、逃げられないようにさせた。　その後、セリンは最も親しく忠実な家来数人を遣わし、その娘を観察して名前を突き止めるよう命じた。家来たちは出向いて戻ると、セリンにこう報告した。「この世のどこを探しても、私たちが目にしたその娘の美しさに匹敵する女性は、おそらく一人もいないでしょう。」　その言葉を聞いたセリンは、直ちに町中に布告者を遣わし、翌日の朝、男女を問わず、あらゆる年齢の住民全員が、若き乙女フェヴロニアの偉業を見物するために集まるよう呼びかけさせた。

これを聞いた町や周辺の村々に住む人々は皆、聖フェヴロニアの偉業を目撃しようと、大勢でその見物に集まった。　朝になると、迫害者は最も凶暴な兵士たちを修道院へ送り込み、そこから聖なる乙女を裁判の場へ連行するよう命じた。兵士たちは修道院に到着すると、容赦なくフェヴロニアを捕らえ、首に鎖を巻きつけて修道院から引きずり出した。

すると、ヴリエンナとトマイダは、涙ながらに弟子を抱きしめ、苦々しく泣きながら、兵士たちにフェヴロニアと少しばかり話させてほしいと懇願した。兵士たちはそれを承諾した。　そして再び、ヴリエンナとフォマイダは兵士たちに、フェヴロニアがこれから直面しようとしているのと同じ試練に、自分たちも連れて行ってくれるよう懇願した。というのも、二人の老尼は、自分たちの支えがなければ、フェヴロニアが独りで苦痛に怯えてしまうのではないかと恐れていたからである。

しかし、兵士たちはこう言った。

「我々に下された命令は、あなた方を裁きの場に連れて行くことではなく、フェヴロニア一人だけを連れて行くことなのです。」

そこで、ヴリエンナとフォマイダは、フェヴロニアの信仰を励まし始めた。

ヴリエンナは彼女にこう語った。

「さあ、わが娘フェヴロニアよ、今、あなたは殉教の試練へと向かおうとしている。天の花婿があなたの苦しみを注視しておられることを知れ。そして、もしあなたが最後まで勇敢に耐え抜くな

らば、天使の軍勢はすでにあなたのために勝利の冠を用意しているのだ。　苦痛を恐れたり、悪魔たちの嘲笑の的になったりしないよう気をつけなさい。傷で体が引き裂かれようとも、自分の体を惜しんではならない。たとえ私たちが望まなくても、いずれは時が経てば、その体は棺に納められ、塵と化すのだから。　私は今、苦々しい涙を流しながら、あなたからの吉報か悲報かを待ちわびている。どうか、私の娘よ――心から願うのだが、あなたからの吉報を私に聞かせてほしい。ああ、誰が私に、フェヴロニアがキリストのために殉教し、殉教者たちの列に加わったという吉報を届けてくれるだろうか！

これに対し、至福のフェヴロニアはヴリエンヌにこう答えました。

「母よ、私はこれまであなたの戒めを破ったことがなかったように、今も変わらずあなたの教えと命令を守り抜くことを願っています。そして人々はそれを見て驚き、ヴリエンヌの功績を称え、『これこそまさに、あの偉大なる老女ヴリエンヌが植え、育てた芽である』と言うでしょう。　なぜなら、私は女性の肉体の中にあって、男性的な精神の力を示すからです。どうか私のために祈り、これから待ち受ける試練へと進むのを妨げないでください。

すると、トマイダは彼女にこう言った。

「主が生きておられる限り、私の姉妹フェヴロニアよ、私もあなたの後を追って行く。世俗の服を身にまとい、民衆の中に身を置いて、あなたの偉業を見守ろう。」

兵士たちがフェヴロニアを急かし始め、すでに彼女を連れ去ろうとしたとき、彼女は聖なる老女たちにこう言った。

「お願いです、母上たちよ、この旅路に祝福を授けてください。そして、私のために祈ってください。」

すると、ヴリエンナは両手を天へと掲げ、力強い声でこう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、かつてパウロのしもべフェクレーが苦難に遭った際、パウロの姿をとって現れたように、今こそ、この謙虚なしもべフェヴロニアが試練に直面するこの時に、彼女の前に現れ、天より目に見えぬ力で彼女を強めてください。そうして、彼女を通して、あなたの聖なる御名が栄光を受けるように。」

そう祈り終えると、ヴリエンナは涙ながらにフェヴロニアを抱きしめ、彼女に口づけをしてから、手放した。一方、兵士たちは聖なる乙女を連れ去り、拷問官セリヌスの元へと連れて行った。

最愛の霊的な娘を少しの間見送った後、ヴリエナは泣き叫びながら修道院に戻り、教会で地面にひれ伏して、フェヴロニアのために神に祈りを捧げた。　一方、トマイダは、教会で泣き続けるヴリエナを残し、世俗の女性の服を身にまとい、フェヴロニアの後を追って処刑場へと向かった。　そこへ、毎週金曜日に修道院を訪れ、フェヴロニアの口から語られる聖書の教えに耳を傾けていた女性たちも向かった。胸を叩きながら、涙を流して恥辱の場へと急ぎ、師を失うことへの深い悲しみに沈んでいた。　フェヴロニアが公開処刑場へ連行されたという知らせは、イエリアの耳にも届いた。彼女は激しく泣き叫んだため、両親や家にいた者たちは皆、驚愕し、こう尋ねた。

「どうしたの、イエリア？」

「私の姉フェヴロニアが公開処刑場へ連行されたの。私の師が、キリストのために苦しみへと送り出されたの」と、イエリアは泣きじゃくりながら答えた。

イエリアの両親は彼女をなだめようとしたが、彼女はますます激しく泣きじゃくり、こう言った。

「私を放っておいてください。私は姉とフェヴロニア先生のために泣きやむことはできません。」

彼女がそう言うと、両親もまた泣き出し、家中は聖フェヴロニアを悼む泣き声で満たされた。イェリアは両親に、恥辱の場へ行くことを許してほしいと懇願し、両親はそれを拒まなかった。　多くの男奴隷や女奴隷を連れて、彼女は泣きながら処刑場へと向かい、涙を流しながら同じ場所へ急い

でいた多くの女性たちに追いついた。その中には、世俗の服を着て歩いていたトマイダもいた。彼女を認めたイエリアは彼女と共に歩き、二人は共に多くの涙を流しながら、指定された場所へとたどり着いた。　そこには数え切れないほどの人々が集まっており、裁判官たちはすでにそれぞれの席に着いていた。すべての準備が整うと、セリンとリシマコスは聖フェヴロニアを彼らの前に連れてくるよう命じた。　聖女は両手を後ろ手に縛られ、首には鎖を巻かれた姿で彼らの前に現れた。それを見た出席者のほぼ全員が涙を流し、苦々しい泣き声とすすり泣きに身を任せた。拷問官セリンは静粛の合図を送ると、リシマコスにこう言った。

「この女を尋問し、その答えを聞き出せ。」

そしてリシマコスはフェヴロニアへの尋問を始めた。まず彼は彼女にこう尋ねた。

「教えてくれ、お前の身分は何か。奴隷か、それとも自由人か？」

「はい、私は奴隷です」とフェヴロニアは答えた。

「誰の奴隷か？」

「キリストのものです」と、聖なる乙女は勇敢に告白した。

リシマコスは再び彼女に尋ねた。

「お名前は？」

するとフェヴロニアは答えた。

「私は謙虚なキリスト教徒と名乗っています。」

リシマコスは再び尋ねた。

「我々は、お前の名前を知りたいのだ。」

「私はすでにキリスト教徒だと申し上げました」とフェヴロニアは答えた。「しかし、もしあなたが私の生まれた時に与えられた名前を知りたいというのなら、お答えしましょう。母は私をフェヴロニアと名付けました。」

すると、拷問官セリンはリシマコスに尋問を中止するよう命じ、自ら聖なる乙女に向かって語りかけた。

「神々を証人として誓う、フェヴロニアよ、私は本来、お前と話すようなことはしたくなかった。しかし、お前の柔和さとその美しい容姿が、お前に対する私の怒りを打ち消してしまったのだ。だから、もはや　としてではなく、私の娘としてお前に問うことにしよう。よく聞け、我が娘よ。神々が証人となってくれるだろう、私がお前に真実を語っていることを。　私の隣に座っている甥のリシマコスが見えるだろう。私と、すでに亡くなった彼の父アンフィムは、貴族の娘で多くの富を持つ、上院議員プロスフォロスの娘を彼の妻として選び、すでに彼と彼女を婚約させていた。　さて、もしあなたが神々の前で自分の過ちを告白するなら、我々はプロスフォロスの娘との婚約を破棄し、あなたとの新たな婚約を結ぶことにしよう。そうすれば、あなたはリシマコスの妻となり、妻として、今私が座しているように、彼の右手に座ることになるだろう。　彼もあなたと同じように美しいことがお分かりだろう。どうか、あなたの父としての私の助言に耳を傾けてほしい。その見返りとして、私はあなたを高貴で裕福な身にしてあげよう。そうすれば、あなたは決して貧しさを知ることはないだろう。　私には妻も子供もいない――私が持っているものはすべて君に贈る。君を私の全財産の女主人とするのだ。これらすべてを、君の持参金として私の主であるリシマコスに差し出し、私は二人の父代わりとなる。　そうすれば、あなたがどれほど大きな名誉に浴したかを見て、すべての女性たちがあなたを称え、喜ばせるだろう。我らが勇敢な王もまた、あなたを喜び、彼自身も多くの報いを与えるだろう。なぜなら、王はリシマコスをローマ総督に任命すると約束していたからだ。さて、私があなたに語ったことはすべて聞いたはずだ。　さあ、私たちの神々から背を向けないと私に言ってくれ。そうすれば、私の魂は大きな喜びに満たされるだろう。もし私の忠告に従わないなら、神々に誓って、三時間も生き延びることはできないだろう。さあ、望むものを選び、私たちに告げなさい。

これに対し、聖フェヴロニアはセリヌスにこう答えた。

「裁判官よ！私には天に、人の手によらず造られた宮殿があり、そこでは永遠に解けることのない結婚が結ばれている。そして私の持参金は、天の王国そのものである。不死の花婿を持つ私は、死すべき朽ちゆく人間と結ばれることを望まない。そして、あなたが私に約束していることについては、聞くことさえしたくない。」　いいえ、無駄な努力はしないでください、裁判官！　甘言や誘惑で何かを成し遂げることはできず、脅しで私を怖がらせることもできません。

その答えを聞いて、セリンは激しく激怒し、兵士たちに彼女の衣服を引き裂くよう命じた。その後、薄くて短いぼろ布を腰に巻きつけさせ、ほぼ裸の状態で皆の面前で恥さらしにするよう命じた。彼は、聖なる乙女がこのような不名誉な姿を見ることで、その恥を恥じ、頑なな態度を悔い改めることを期待していたのである。　兵士たちは直ちにセリンの命令を実行し、殉教者をほぼ全裸のまま皆の前に立たせた。

すると、セリンは彼女にこう言った。

「さて、フェヴロニア、今、私に何と言うつもりだ？　お前は、自分がどれほどの不名誉な境遇に置かれたか見ているだろう。それなのに、本来なら偉大な恩恵を享受できたはずだったのだ。

それに対し、フェヴロニアは拷問者にこう言った。

「裁判官よ、知っておきなさい。もしあなたが私の服だけでなく、このぼろさえも剥ぎ取り、私を完全に裸にしてしまったとしても、私はこの恥を何とも思わない。　なぜなら、夫と妻を創造された方はただお一人だからです。その方のために、私は裸の恥辱に耐えるだけでなく、剣で斬られ、火で焼かれることさえ望みます。ああ、私のために数え切れないほどの苦しみを自ら進んで耐えてくださった方が、私を御自身のために苦しむ者にさせてくださるなら！

「ああ、恥知らずで、あらゆる不名誉に値する女よ！」とセリンは叫んだ。「お前は自分の美しさを誇りに思っているから、裸であることの不名誉を恥とは感じていないのだ。民衆の真ん中で裸で立ち、その美しさによって名声を博そうとしているのだ。」

聖女は彼にこう答えた。

「キリストが証人です。今日に至るまで、私は男性の顔さえ見たことがありません。同様に、私の顔も、世俗の人々の誰一人として見たことがありません。　まさか今、あなたの支配下にあるからといって、私が恥知らずになるというのか？　いいえ、皆の前で乙女の体をさらけ出しているのは、あなた自身こそが恥知らずなのです。しかし、狂った裁判官よ、教えてほしい。もしレスラーがオリンピックの競技場[4596]に出場するなら、敵に勝つまでは裸で戦うのではないのか？ それと同じように、私もここに敵と戦うために現れ、この肉体に傷や火が降りかかるのを待っているのだから、服を着たままどうやってそれらに耐えられようか？傷を受けるのは、裸の肉体ではないのか？だからこそ、私は裸でここに出て、苦痛をものともせず、あなたの父であるサタンを打ち負かすのだ。

すると、セリンは使用人たちに言った。

「この女は自ら苦痛を求め、火や傷を恐れないと言っているのだから、彼女を地面に寝かせ、その下に火を焚き、四人の戦士に棒で背骨を叩かせよ。」

直ちに戦士たちは、命じられた通りに聖女を拷問し始めた。長い間聖女を打ち続けたため、彼女の体からは血が小川のように流れ出た。　そして、彼女の足元で燃え盛る火が消えないよう、拷問者たちはその上に油を注ぎ、炎をさらに大きくして、殉教者をより激しく焼きつけるようにした。聖女がこのように苦しめられていると、民衆の中から多くの者がセリーナに向かって叫び始めた。

「慈悲深い裁判官よ、この若い乙女を憐れんでください！」

[4596] 言うまでもなく、ギリシャ南部の都市オリンピアで4年ごとに開催されていた、レスリングや走りの競技のことである。これらの競技は、ギリシャの国民的祝祭としての性格を持っていた。

しかし、彼はその嘆願に耳を貸さず、聖なる乙女への拷問をさらに激しくするよう命じた。その後、怒りが少し収まると、拷問を止めるよう命じた。兵士たちはフェヴロニアを放し、すでに死んだものと考えて、焚き火の外に投げ捨てた。

トマイダは、フェヴロニアがこれほど激しい苦しみを受けているのを見て、心身ともに力尽き、イェリアの足元に倒れ込んだ。それを見たイェリアは、大声で叫んだ。

「ああ、悲しい、悲しいことよ、私の姉妹フェヴロニアよ！ 悲しいことよ、私の師よ！ もう二度とあなたの教えを聞くことはできない。そして、あなたを失うだけでなく、トマイダも失ってしまう。彼女もまた、あなたを思う悲しみの中で、死に瀕しているのだから。」

地面に横たわっていたフェヴロニアは、イエリヤのこの言葉を聞き、そばに立っていた人々に、力尽きたトマイダの顔に水を注いでくれるよう懇願した。彼らはその願いを聞き入れ、トマイダは意識を取り戻して立ち上がった。

フェヴロニアがまだ生きているのを見て、セリンは彼女に向かって次のような嘲笑を込めて言った。

「どうだ、フェヴロニア？　初めての苦難の試練は、どれほど甘美に感じられたか？」

「ほら、見てごらん」とフェヴロニアは答えた。「あなたの懸命な努力にもかかわらず、私は依然として打ち負かされなかった。なぜなら、私はあらゆる苦痛を軽蔑しているからだ。」

そこでセリーヌは使用人たちに命じた。

「彼女を木に吊るし、鉄の櫛で脇腹を削ぎ、その傷口を火で焼いて、骨まで焼け焦がせ。」

拷問人たちは直ちにその命令を実行し始めた。そのような苦しみの中、フェヴロニアは天を仰ぎ、主に向かってこう祈り始めた。

「どうか私を助けに来てください。この時、あなたのしもべを見捨てないでください。」

そして、その言葉を言い終えると、彼女は黙り込んだ。

彼女の体が容赦なく削られ、火で焼かれている間、処刑場に集まった人々の多くは、その恐ろしい苦痛を見るに耐えられず、その場を離れた。一方、他の者たちは裁判官に向かって、若く、何の罪もないこの乙女を憐れんでほしいと叫び始めた。そこでセリンは、従者たちに拷問を止めるよう命じた。　その後、彼は木に吊るされたフェヴロニアにいくつかの質問を投げかけたが、彼女は黙り込んだ。再び怒りに燃えた拷問官は、彼女を木から降ろし、地面に打ち立てられた杭に縛り付けるよう命じ、こう言った。

「この忌々しい女が私に答えようとしないのだから、彼女の舌を切り落とし、火の中に投げ込め。」

これを聞いた聖なる殉教者は、即座に口から舌を突き出し、兵士に命令を実行するよう合図を送った。しかし、兵士が舌を切り落とそうと触れた途端、そこに立っていた民衆は大声で叫び始め、裁判官に自分たちの神々の名を呼びかけ、命令を取り消すよう懇願した。　民衆の嘆願を受け入れ、セリンは舌を切らないよう命じ、その代わりに歯を引き抜くよう命じた。　するとすぐに、拷問係の一人が鉄の器具を手に取り、殉教者の歯を一つずつ引き抜き始めた。彼が17本の歯を引き抜いたとき、セリンはこの拷問を止めるよう命じた。その間、聖女の口からは血が川のように流れ出し、激しい苦痛によって彼女の体はすっかり衰弱していた。医者が呼ばれ、出血を止めた。

その後、セリンは再び聖女に問いかけ、次のように語りかけた。

「せめて今こそ、フェヴロニアよ、裁判所の要求に従い、神々への信仰を告白してはどうか。」

聖女はこう答えた。

「[4597] 、呪われよ、不義のうちに老いぼれた悪魔の僕よ！　あなたはいつまで私の道を阻み、私の花婿であるキリストへの入り口を塞ぎ続けるつもりなのか？　私の花婿はすでに私を待っておられるのだから、早くこの朽ちゆく肉体から私を解放してくれ。」

これに対し、セリンはフェヴロニアにこう言った。

「さあ、お前の肉体を剣と火に委ね、徹底的に引き裂いてやる。お前は恥知らずにも、その若さを誇りに思っているのが見えるからだ。だが、それでお前に何の益があるというのか。お前のその高慢は、さらなる災いと、最も過酷な苦痛をもたらすだけだ。」

過酷な拷問に疲れ果てた聖なる殉教者は、もはや何も話すことができなかったが、その沈黙は拷問者の怒りをさらに煽った。残忍なセリンは、フェヴロニアの処女の乳房を切り落とすよう命じた。　民衆は叫び、裁判官に少女を憐れみ、その命令を取り消すよう懇願した。しかし、セリンは拷問を行う下僕に怒りをぶつけ、こう言った。

「なぜ躊躇しているのだ、我らの神々に対する忌まわしき敵よ？　なぜ命じられたことを実行しないのだ？」

すると、従者は剃刀を手に取り、聖なる殉教者の右の乳首を切り始めた。彼女は天を仰ぎ、力強い声で神に祈りを捧げ、こう言った。

「主よ、わが神よ、私が耐えているこの苦しみをご覧になり、私の魂を御手にお迎えください。」

そう言うと、彼女は黙り込み、それ以上何も語らなかった。両方の乳房が切り落とされ、地面に投げ捨てられると、セリンは火を持ってくるよう命じ、切り落とされた乳房の跡にできた傷口に火を当てさせた。　同様に、彼は殉教者の子宮を焼くよう命じ、その結果、彼女の内臓はすべて焼き尽くされた。この際、民衆の多くは、そのような拷問を見るに耐えられず、処刑場から離れ、ディオクレティアヌスとその神々を大声で呪った。

その頃、トマイダとイエリアは、起こったすべてのことをヴリエンナに知らせるため、女奴隷を修道院へ遣わした。遣わされた者の話を聞いたヴリエンナは、霊的な喜びと歓喜に満たされ、涙ながらに神に向かってこう叫び始めた。

「主イエス・キリスト、私たちの神よ、あなたのしもべフェヴロニアを助けてください！」

そして、地面にひれ伏すと、泣き叫びながらこう語った。

「フェヴロニアよ、今どこにいるのか？　私の柔和な娘よ、どこにいるのか？　キリストのしもべよ、どこにいるのか？　修道会の誉れよ、どこにいるのか？」

ついに、地面から立ち上がり、天に向かって両手を挙げ、こう叫んだ。

「主よ！　この謙虚なあなたのしもべに御目を留め、彼女の苦行を助けてください！　彼女が殉教者として息を引き取り、聖なる殉教者たちの列に加えられるのを見られるよう、私に恵みをお与えください。」

その頃、処刑場では次のようなことが起きていた。拷問官セリンは、フェヴロニアを縛り付けていた杭から解き放つよう命じた。聖女は解き放たれたが、立ち上がる力もなく、たちまち地面に倒れ込んだ。それを見たプリム伯爵は、リシマコスに静かにこう言った。

「なぜこの若き乙女は、これほど残酷な拷問に耐えなければならないのか？　もう拷問を止めるべきではないか？」

リシマコスはこれにこう答えた。

「待て、兄弟よ。彼女を見守る多くの人々にとって、その苦しみは益となるだろう。そして、この苦しみは私にとっても救いとなるはずだ。」　母から何度も聞いたことがある。殉教者たちがそ

[4597] アナフェマとは、破門を意味する。これは、破門された者を神の裁きに委ねることである。

の勇気によって、多くの人々を救いの道へと導いたと。さあ、この乙女も、私や他の多くの人々を救うために、最後までその殉教の業を耐え抜くようにしよう。

その時、イエリアは地面に倒れ込んだフェヴロニアを見て、セリヌスに向かって大声で叫んだ。

「ああ、非人道的な拷問者よ！　この罪なき乙女に課した最初の拷問だけで、お前の残虐さはまだ足りなかったのか？　お前もまた女性の肉体を持っていたお前の母のことを、覚えていないのか？　お前自身、今まさに切り落とせと命じたのと同じような乳房から乳を飲んだのではないのか？　まさか、女の乳房で育てられたのは、女性に対してこれほど凄まじい残虐さを振るうためだったというのか？　何一つとして、お前の残酷で非人道的な気性を和らげることができないとは、驚きだ。だが、よく覚えておきなさい。お前がこの乙女を容赦しなかったように、天の王もまたお前を容赦しないだろう。

そう叫んだのはイェリアであった。　セリンは彼女の言葉を聞くと、再び怒りに満ち、兵士たちに群衆の中からイェリアを捕らえるよう命じ、直ちに彼女を拷問にかけようとした。その命令を聞くと、イェリアは喜びながら自ら兵士たちの方へと歩み寄り、群がる人々の間を縫って進みながら、こう繰り返した。

「主よ、あなたのしもべフェヴロニアの神よ！　彼女と共に、この謙虚なあなたのしもべである私をも、お受け入れください。」

しかし、彼女が裁判の場に着く前に、セリナの友人たちは、イェリアの気高い家柄を考慮して、人々の前で彼女を拷問にかけないよう彼に忠告し始めた。

「私たちは恐れているのです」と彼らは言った。「集まった大勢の民衆が、彼女の苦しみを目にして、彼女と共に苦しみたいと願うかもしれない。そうなれば、街全体を相手にしなければならないことになるでしょう。」

セリンは彼らの助言に従い、イエリアに拷問を加えるよう命じることはせず、ただ彼女に向かって怒りを込めて叫んだ。

「よく聞け、イエリア！神々に誓って言うが、お前のその厚かましい、恥知らずな言葉が、フェヴロニアにさらに大きな苦しみをもたらしているのだ。」

そう言うと、彼は直ちに聖フェヴロニアの両手を切り落とすよう命じた。従者は、殉教者の右手の下に木を敷き、斧でそれを打ち下ろして切り落とした。同じ方法で、フェヴロニアの左手も切り落とした。　これだけでは満足しなかった残酷な拷問者は、殉教者の右足を切り落とすよう命じた。聖人の足の下に木を敷き、斧を手に取った従者は、膝の上を力いっぱい斧で打ち下ろしたが、殉教者の足を切り落とすことはできなかった。そこで彼は二度目に打ち下ろしたが、これもまた失敗に終わった。　これを見た民衆の間では、悲鳴と騒然とした混乱が広がり、皆が拷問者の残虐さに憤慨した。しかし、兵士は三度目に足を打ち下ろし、ようやくかろうじて足を切り落とすことに成功した。フェヴロニアは、これほど激しい拷問に全身を震わせ、すでに死の淵に立っていたにもかかわらず、残された力を振り絞ってもう一方の足も差し出し、木の上に置いて、それも切り落とされるようにした。これを見たセリンは言った。

「見よ、この恥知らずな女がいかに偉大な力を持っているか。」

そして、従者に振り向くと、激しい怒りを込めてこう言い放った。

「もう片方の足も切り落とせ。」

その従者は直ちにその命令を実行した。

すると、リシマコスは席から立ち上がり、セリンに言った。

「まさか、まだこの哀れな乙女を苦しめようというのか？　ここを離れよう。昼食の時間が来たのだから。」

しかし、不敬なセリンはこう答えた。

「神々に誓って、私は彼女を生かしておかない。彼女が死ぬまで、ここに留まるつもりだ。」

しかし、殉教者の魂は、何時間も経ってもその体から抜け出そうとしなかった。そこでセリンは従者たちに尋ねた。

「この恥知らずな女は、まだ生きているのか？」

「はい、まだ生きています」と彼らは答えた。「魂はまだ彼女の中に留まっています。」

そこでセリンは、殉教者の聖なる首を切り落とすよう命じた。

ある戦士は、片手に剣を握り、もう一方の手で殉教者の髪をつかむと、羊を屠るように彼女の首を横に斬りつけ、続いて頭部を切り落とした。その直後、セリンは立ち上がって昼食をとりに向かった。リシマコスも彼に付き添い、涙を流しながら歩いていた。

聖フェヴロニアが殉教して亡くなった後、民衆の中にいた信者たちは、彼女の尊い遺骸を持ち去ろうとした。しかし、リシマコスは兵士たちを彼らに付け、殉教者の遺体のいかなる部分も盗まれないよう見張るよう命じた。　一方、リシマコスは深い悲しみと嘆きから、セリンと共に食事をとる気になれず、寝室に閉じこもり、フェヴロニアの殺害を嘆き悲しんで激しく泣き崩れた。

セリンは、リシマコスの嘆きを見て悲しみに打ちひしがれ、自分も食事を口にする気になれなかったが、立ち上がって宮殿の部屋を歩き回り、極度の動揺を覚えた。ところが、ふと天を仰いだとき、突然、大きな恐怖と戦慄に襲われ、言葉を失ってしまった。　その後、大きな声を上げて雄牛のように唸り声を上げると、その部屋にあった大理石の柱に頭を打ちつけ、頭を打ち砕いて床に倒れ、息絶えた。　セリナの家来や兵士たちの間で悲鳴が上がり、騒然となった。その叫び声を聞いて、リシマコスが寝室から駆けつけ、地面に横たわって死んでいる叔父の姿を見て、驚きと恐怖に襲われた。我に返ると、彼は悲鳴を止めるよう命じ、こう尋ねた。

「一体、何が起きたのか？」

傍にいた者たちは、目撃したことを彼に語った。

リシマコスは驚きながら首を振り、こう言った。

「キリスト教の神は偉大なり！　神はまことに崇拝に値する。無実の血の復讐を果たされたのだから！」

そう言うと、彼はセリナの遺体を街の外へ運び出し、ギリシャの慣習に従って埋葬するよう命じた。その後、リシマコスはコミタスのプリマを呼び寄せ、こう言った。

「キリスト教の神にかけて誓う――私が与えるこの命令に背いてはならない。フェヴロニアの遺体のために、腐らない木でできた棺を早急に用意し、使者を遣わして、聖なる殉教者の葬儀にキリスト教徒たちを招集せよ。セリンはすでに死んでいるのだから、彼らは恐れることなく集まることができるはずだ。」　ほら、愛するプリムよ、これが私の願いだ。さあ、兵士たちを率いて、フェヴロニアの切断された身体のすべての部位を集め、それらを修道院へ運びなさい。その際、聖人の身体のどの部分も失われたり、行方不明になったりしないよう注意しなさい。　また、殉教者の血が流れた地面を犬たちが舐めないように――そのために、その血を拭き取り、聖遺物と共に修道院へ運び去るよう命じてほしい。

コミットは直ちに兵士たちを呼び寄せ、リシマコスの望みに従って、殉教者の遺体を修道院へ運ぶよう命じた。そして自身は、彼女の切断された身体の一部――頭、手、足、乳首、歯――を集め、自分のハミダに包んで、大勢の民衆に囲まれながら、兵士たちの後を追って行った。　修道院に着くと、コミットはトマイダとイエリア以外の誰をも中に入らせなかった。

修道院の修道院長である敬虔な老女ヴリエナは、息絶え、傷だらけになったフェヴロニアの遺体と、切り落とされた四肢を目にした途端、深い悲しみと憐れみのあまり、体が耐えきれず、まるで死んだかのように地面に倒れ込んだ。一方、コミットは修道院に兵士を警備として配置すると、リシマコスのもとへ戻っていった。

数時間が経過してようやく、ヴリエナは正気を取り戻した。そして地面から立ち上がると、殉教者の遺体にすがりつき、それを抱きしめながら叫んだ。

「ああ、哀れな私よ、わが娘フェヴロニアよ。今やあなたは、母の目の前から奪われてしまった。今や、誰が姉妹たちに神の聖書を読み聞かせるというのか？　あなたが手にしていたその書物を、誰の手が開くというのか？」

その頃、エフェリアと共に去っていた修道女たちは皆、修道院に戻り、涙を流しながら聖殉教者フェヴロニアの遺体に地面にひれ伏して礼拝した。

聖なる殉教者の聖遺物の前では、至福のイエリアも激しく泣きながら、こう叫んだ。

「蛇の頭を踏み砕かれた聖なる御足に拝礼し、私の魂に恵み深い癒やしの流れを注いでくださる聖なる傷跡に口づけし、その偉大な功績によって女性という種族全体を栄光で飾った方の頭に、称賛の冠を授けましょう。」

そして、すべての修道女たちは殉教者の聖遺物の前で涙を流した。　その後、遺骸を清めた彼女たちは、聖女が生前、束の間の休息をとっていた際に横たわっていた板の上に遺骸を安置した。――その板の上に殉教者の遺体を載せ、切断された四肢をすべて元の傷跡の場所に合わせ、詩篇を唱えながら尊い遺骸を教会へと運んだ。

夕暮れが近づくと、ヴリエンナは修道院の門を開くよう命じた。そうすれば、望む者は誰でも教会に入り、殉教者を見て、苦しみの中で彼女にこれほど偉大な勇気と忍耐を与えた神を賛美できるからである。そして、大勢の人々が集まった。リシマコスもコミット・プリムと共にそこへやって来た。彼はコミットにこう言ったのである。

「私は父祖の慣習や偶像崇拝をすべて捨て、すべての富を放棄し、キリストと一つになるために旅立つ。」これに対し、コミットは彼にこう答えた。

「私もあなたと共に同じことをする。ディオクレティアヌスとその統治が滅びようとも――もはや彼に仕えることはせず、すべてを捨ててキリストに仕える。」

こうして二人は互いに意を合わせ、プレトリア宮殿を後にし[4598]、聖フェヴロニアの聖遺物が安置されている修道院へと向かった。

さらに、その町の司教も司祭や聖職者たち、そして多くの修道士たちを率いてそこへやって来た。そして彼らは、涙と霊的な喜びをもって、神への徹夜礼拝を執り行った。

そして日が明けると、殉教者の遺体のために美しく整えられた棺が運ばれ、その尊い遺体が敬虔な心をもってその中に納められた。その後、切り落とされた各部位が一つずつ遺体に添えられ、歯は殉教者の胸の上に置かれた。　その後、聖遺体に聖油と香油を塗り、主を賛美し感謝しつつ、教会に埋葬した。そして、聖人の棺からは病める者たちへの癒しがもたらされ、その結果、多くのギリシャ人がキリストを信じ、洗礼を受けた。リシマコスとプリムスもまた、聖なる洗礼を受けた。　その際、彼らは聖職を辞し、不義なディオクレティアヌスのもとに戻ることを望まず、世俗を捨ててアルヒマンドリト・マルケルのもとへ赴き、修道生活に入った。神に喜ばれるように、苦行と断食の労苦の中で生き、二人は安らかに生涯を閉じ、キリストのもとへ旅立った。

同様に、ボヤリーニャのイエリアも、自身の全財産をヴリエナの修道院に寄付し、次のような願いを込めて最期の時を迎えた。

「お願いです、母上」と彼女は言った。「聖フェヴロニアの代わりに、私を娘としてお迎えください。そうすれば、フェヴロニアが母上に仕えたように、私もあらゆることに従順に奉仕いたします。」

そう言うと、彼女は身に着けていたすべての貴重な女性用の衣服を脱ぎ、それらを教会の装飾として捧げた。そして自ら世俗を捨て、修道女となった。

[4598] プレトリア宮殿――州知事、すなわち州長官の宮殿。

聖殉教者フェヴロニアを称える祝祭は、彼女が殉教して以来、毎年6月25日――聖女がキリストのためにその勇敢な偉業を成し遂げた日――に、ヴリエナ修道院長が率いる修道院で行われていた。　そして祝日の日には、毎年、驚くべき奇跡が起こった。徹夜礼拝の歌声の中、歌っている修道女たちの間に聖なる殉教者が現れ、かつての定位置についたのである。これが初めて起こった時、すべての修道女たちは自分たちの間に聖人が現れたのを見て恐れおののいたが、ヴリエナは声を高らかに叫んだ。

「ほら、私の娘、フェヴロニアが私たちのところへ来てくれた！」

そう言いながら、彼女は喜びのあまり聖女のもとへ駆け寄り、母のような抱擁で彼女を抱きしめようとした。しかし、聖女はたちまち姿を消してしまった。それ以来、現れた聖女に触れたり、たとえ一言でも言葉をかけたりしようとする者は誰もいなくなった。　しかし、人々は毎回、恐怖と驚きをもって彼女を見つめ、聖女の姿を見るたびに心の中に大きな喜びを感じ、胸を打たれ、思わず涙を流した。聖女は三時間にわたり、歌う人々の真ん中に立ち、誰の目にも見える状態でいたが、その後再び見えなくなった。

その町の司教は、聖フェヴロニアの名を深く崇敬していた。彼は殉教者の名にちなんで教会を建立し、その建設に6年を費やした。教会の建設を終え、内装を飾り立てた後、聖フェヴロニアの記念日に、周辺の司教たちを招いて教会の奉献式を行い、殉教者の尊い遺骨をその教会に移そうとした。　徹夜礼拝が終わると、司教たちは聖職者全員を率いて修道院を訪れ、祈りを捧げた後、聖人の棺を開けた。そこには、まるで太陽の光のように、この世のものとは思えない美しさで輝く聖遺物が横たわっていた。　その時、修道女たちは皆、涙を流し、嗚咽しながら、これほど貴重な宝物が自分たちから奪われることを嘆いた。ところが、司教が聖遺物箱を取り出そうと手を伸ばした瞬間、空から雷鳴が轟き、その音は極めて激しく、皆が恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。　一時間が過ぎた後、司教は再び聖櫃に触れようと試みたが、突然、街全体が揺れるほどの激しい地震が起こった。その時、皆は聖なる殉教者が、自分の遺骨を埋葬地から持ち去られることを望んでいないのだと悟った。　司教は深い悲しみに打ちひしがれ、もはや聖櫃に触れることを敢えてせず、ヴリエンヌにこう懇願した。

「私の言葉に耳を傾けてほしい、私の姉妹よ。あなたが知っている通り、私はこの聖なる殉教者の栄光と名誉のために、6年もの歳月をかけて熱心にこの教会を建て上げたのだ。 ところが、聖なる殉教者は私の祈りに耳を傾けることを拒み、彼女に敬意を表して建てられた教会へ移ることを望んでいない。それゆえ、私はあなたに懇願する。彼女から切り落とされた手足のうち、せめて一つでもあなた自身の手で取り、私たちに与えてほしい。そうすれば、私の労苦が無駄にはならないだろう。」

ヴリエンナは手を伸ばし、聖人の片手に触れ、それを司教に差し出そうとしましたが、修道院長のその手は目に見えない力に引き止められ、まるで死んだかのようになりました。するとヴリエンナは涙を流しながら、聖人を生きているかのように呼びかけ、こう語りかけました。

「お願いです、私の娘よ、聖なる殉教者フェヴロニアよ、私、あなたの母を怒らないでください。あなたのために私が尽くした労苦を思い出して、私の老いを辱めないでください。」

彼女がそう言うと、彼女の手は自由を取り戻した。

その後、ヴリエンナは再び涙ながらに殉教者にこう言った。

「どうか、私たちに御加護を授けてください、私たちの御方よ。そして、私たちがあなたに願うことに応えてください。」

そう言うと、彼女は再び手を伸ばし、胸の上に置かれていた殉教者の歯を一本取り、司教に渡し、すぐに聖櫃を閉じた。

司教はその歯を喜びをもって受け入れ、それを金の器に納め、他の司教たちや聖職者たち、そして民衆全員と共に、新しく建てられた教会へと戻った。彼らは、讃美歌を歌いながら、ろうそくと

香炉に囲まれ、民衆の歓喜に包まれて、受け取った贈り物を運んだ。　この贈り物を聖堂の内部に運び込むと、司教たちはそれを聖別した。その日、新しく聖別された聖堂では、聖なる殉教者の祈りによって、多くの病人が癒やされた。足の不自由な者は足の力を取り戻して歩けるようになり、盲人は目が見えるようになり、悪霊に取りつかれた者は悪霊から解放された。　いかなる病に冒されていた者であれ、殉教者の聖遺物から取り分けられた小さな一片　に唇をわずかに触れ、それを口に含んだ者は、即座に癒やされ、喜びながら神を賛美し、健やかな体で自宅へと帰っていった。

聖フェヴロニアの名を冠した新しい聖堂の奉献式の後、尊者ヴリエナ修道院長はさらに2年間生き、至福の死が近づくと、後任の修道院長としてトマイダを任命し、その後、主のもとへ召された。

「私、この伝記の著者である修道院長トマイダは、母ヴリエンナが天に召された後、聖殉教者フェヴロニアの生涯と受難を、私自身の目で見たままに記しました。また、リシマコスについては、彼自身の口から聞いたことを記しました。　これらすべてを、私は、この書物を読む者や朗読を聞く者の益となり、また、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく賛美される、私たちの神キリストの栄光のために記したのです」。アーメン。

コンダク、第6調：

「わが最愛の花婿キリストよ」とフェヴロニアは叫んだ。「あなたに従ってこの世を去ることは、私にとって難しくありません。　あなたの愛の甘美さが、私の魂を希望で満たし、あなたの慈しみの美しさが、私の心を甘くし、あなたのために苦難の杯を飲み干すことを可能にしてください。そうして、修道院で賢い乙女たちと共に、あなたを讃えるにふさわしい者と認めてください。　それゆえ、敬虔なる殉教者よ、あなたの労苦の功績を尊びつつ、私たちはあなたに願います。私たちにも、修道院の扉が閉ざされないよう、どうかお祈りください。

聖なる信仰深い公爵ペトロと公爵夫人フェヴロニア（修道名ダヴィドとエウフロシニア）、ムロムの奇跡行者の記念日

記念日：6月25日

この敬虔なペトル公[4599]は、敬虔で聖なる家系[4600]に生まれ、ムロム市[4601]で正教の信仰と貞潔の精神のもとで育てられ、あらゆる面で厳格な正義を貫きながら自らの公国を統治しました。　時が満ちると、彼は敬虔な家系に生まれ[4602]、敬虔さについて入念に教え込まれた敬虔な公妃フェヴロニアと結婚した。このように、二人とも聖なる義人であったため、聖ペトルと聖フェヴロニアは清らかさと貞節を愛し、常に慈悲深く、公正で、柔和であった。　彼らは、不当な扱いを受けている人々を迫害者たちの支配から救い出し、修道者や司祭を尊び、彼らに物質的な援助を提供し、貧しい人々に対して深い慈悲を示し、断食と節制に熱心に励みました。　主の御言葉に従い、柔和な者たちの地を

4599 聖ペトロ――ムロムの公ダヴィドは、ムロムの公ユーリ・ヴラディミロヴィチの次男であった。彼は兄のヴラディミール・ユーリエヴィチに続き、1203年12月18日に公国の統治を引き継ぎ、ムロムの公となった。

4600 ムロム公爵家の始祖であるコンスタンチン・スヴィャトスラヴィチ公は聖人として列聖されており、その記念日は5月21日である。

4601 ムロムは古代、ロストフ・スーズダリ地方北部の中心地であり、現在はウラジーミル州の県都である。

4602 ある伝承によれば、聖女フェヴロニア公妃は、その出自において単なる村娘であり、リャザン州ラスコヴァ村の「樹木登り職人（ボルトニク）」の娘であったという。

相続し[4603] 、義人の永遠の至福を得ることを願って、彼らはさらに、あらゆる点において、その善行によってキリストに大いに喜ばれた。　その後、高齢に達した聖ペトロは、肉体の病に倒れ、修道誓願を立て、修道名としてダビデという名を授かりました。その後、しばらく病床に伏した後、彼は揺るぎない信仰をもって、天の御国へ神のもとへ召されました。　同様に、聖なる公妃フェヴロニアも、自身の切なる願いを叶えるべく修道生活に入り、修道名としてエウフロシニアという名を与えられ、夫と同様に揺るぎない信仰と清らかな良心をもって、自らの魂を神の御手に委ねてこの世を去った。[4604] 。このようにして、聖なる夫婦は二人とも、若い頃から切望していた「柔和な者たちの地」を相続した。至福のペトル公の死後、貴族やボヤールたちは彼を父のように、市民たちは自分たちの擁護者であり守護者として、貧しい未亡人や生計の立てられない人々は、自分たちの養い手であり助け手として、それぞれ彼を悼んだ。　聖なる公爵夫妻の遺体は、町の全住民によって盛大に送り出され、ムロームの町で一つの棺に納められて埋葬された。聖人たちは今日に至るまで、その聖遺物を通じて、信仰をもって彼らに祈りを捧げる者たちのために、神の栄光のために奇跡を行なっている[4605] 。

トロパリオ、第8調：

あなたは敬虔な根から生えた尊き枝であり、敬虔に善き生涯を送られた、祝福されたペトロよ；　また、あなたの賢明な妻フェヴロニアも、この世において神に喜ばれ、聖人のような生涯を送ることができました。彼らと共に、主なる神に祈り、あなたの祖国を無傷で守ってくださるよう、そして私たちが絶えずあなた方を崇敬できるようお祈りください。

コンダク、第8調：

この世の支配と、一時的な栄光を心に留めつつ、そのために、ペトロよ、あなたは世の中で敬虔に生き、また、あなたの賢明な妻フェヴロニアも、施しと祈りによって神に喜ばれました。　それゆえ、死後も墓の中で離れず横たわり、目に見えぬ癒やしを授けておられます。今、キリストに祈り、あなた方を称えるこの都と人々を守ってくださるよう願ってください。

7月9日

6月26日（旧暦）

同日は、1384年に逝去した、我らの聖なる父、スーズダリの大司教ディオニシウスの記念日である。

[4603] Mf.5

[4604] 聖ペトル公と聖フェヴロニア公妃は、1228年6月25日に同じ日に亡くなりましたが、フィラレート大主教の見解によれば、彼らの死は1228年4月25日にあたるとされています。なお、4月25日は彼らの死の日として、6月25日は聖遺骨が発見された日として認められています。　彼らの列聖は16世紀初頭に始まり、1547年のモスクワ公会議において、その記念日を地域ごとに祝うことが定められた。その後（おそらく1552年から）、この祝日は広く普及するようになった。

[4605] 「福者ダヴィドとエウフロシニアは」とフィラレート大主教は述べています。「その生涯においてキリスト教的な夫婦関係の模範であり、福音の『不壊の絆』という戒めのためにあらゆる苦難を甘受する覚悟を持っていました。　そして今なお、彼らはその祈りによって、結婚する者たちに天の祝福をもたらしています。彼らの死後の生活に関する多くの証言が、そのことを示しています。」

「ティフヴィンスカヤ」と呼ばれる、奇跡を行う聖母マリアのイコンの顕現

記念日：6月26日

世界の創造から6891年目、神の御言葉の受肉から1382年目、　大公ディミトリ・イオアンノヴィチの治世中[4606]　、全ロシアの至聖なミトロポリス・ピメン[4607]　およびノヴゴロド大司教アレクシイの在任中に、ロシアにおいて、その左手に幼子、すなわち永遠の主イエス・キリストが描かれた、至聖なる聖母マリアの尊いイコンが現れました。 この顕現は、次のような状況下で起こった。

ヴェリキー・ノヴゴロドの境内、ヴァリャーガ海[4608]　からほど近い場所にある、広大なネヴォ湖[4609]　の水上で、漁師たちが魚を捕っていた。そして、漁の最中、突然、天から輝く光線が彼らを照らした……　上を見上げると、彼らは驚くべき奇跡を目にした。水面の上の空を、目に見えない手に支えられて、太陽のように輝く聖母マリアのイコンが漂っていたのである。漁師たちは、この驚くべき現象を目にして、 最初は恐怖に襲われたが、やがて喜びに満たされた。 彼らは仕事を中断し、目の前で繰り広げられるこの驚くべき奇跡に目を釘付けにし、聖なるイコンがどこへ向かい、どこで止まるのかを見届けようと願った。しかし、神はその願いを叶えることをお許しにならなかった――そして聖なるイコンはすぐに彼らの視界から消え去り、見えなくなってしまった。

その後、至聖なる聖母マリアのイコンは、同じノヴゴロドの領内、ヴィモチェニツェという集落、オヤティ川[4610]　のほとり、ティフヴィン[4611]　から百ポプリシュ[4612]　離れた場所に現れた。そこで、イコンは地元の住民たちの前に、空中に浮かび、言葉では言い表せない光を放ちながら姿を現した。この驚くべき現象を目撃した村人たちは皆一堂に会し、恐怖と驚きをもって目の前の奇跡を仰ぎ見ました。その後、彼らは聖母マリアに熱心に祈りを捧げ始めました。すると、天の女王の奇跡のイコンが、空の高みから人々のいる地上へと降りてきました。　ヴィモチェニツァの住民たちは、天の女王のイコンを大いなる喜びをもって迎え入れ、直ちにその栄光を称えるために熱心に礼拝堂を建立し、そこに天から授かった聖像を安置した。その後、この礼拝堂の跡地に、至聖なる聖母マリアの栄光ある降誕を記念する教会が建てられた。　ここで、ヴィモチェニツァの村に、そのイコンはしばらくの間留まり、信仰をもって駆けつけた多くの病人に癒やしをもたらした。

しかし、ほどなくして、そのイコンは目に見えない手によってそこから持ち去られ、空を飛んで、ティフヴィンから二十ポプリシュ離れた、パシ[4613]　と呼ばれる川のほとりのコジェラという町に現れた――その様子は、前述の村で現れた時と全く同じであった。　不思議な光を放つその姿を見たその町の住民たちは皆、驚きと畏怖に満ちて集まり、聖母マリアに、彼らに慈悲を授け、そのイコンを授けてくださるよう熱心に祈った。そして、彼らの願いは叶えられた。　イコンは高みから地上へと降りてきて、地元の人々はそれに敬意を表して礼拝堂を建てた。その場所には後に、聖母マリアの庇護を記念する教会が建てられた。

しかし、聖母マリアは、この場所にもそのイコンを長く留まらせることをお許しにならなかった。しばらく時が経つと、イコンは再び目に見えない形でそこから持ち去られ、その恵み深い御出現

[4606] ディミトリ3世・イオアニッチは、1363年から1389年まで大公の称号をもってモスクワを統治した。

[4607] ピメンは1382年から1389年まで（1385年から1388年までの間を挟んで）ロシア都主教区を統治した。

[4608] 当時、バルト海は「ヴァリャーグ海」と呼ばれていた。「ヴァリャーグ」という名称は、現在のスウェーデンの沿岸に居住していた古代のヴァリャーグ人から借用されたものである。

[4609] ネヴォ湖は、現在のラドガ湖である。

[4610] オヤート川は、オネジ湖から流れ出し、ラドガ湖の東側から同湖に注ぐスヴィリ川の左岸にある南側の支流である。

[4611] ティフヴィン – ノヴゴロド州の都市。

[4612] ポプリシュチェは距離の単位である。古代ルーシでは、ポプリシュチェは現在のサジェン約656本に相当した。

[4613] パシャは、スヴィリ川の河口付近でラドガ湖に注ぐ川である。この川は、サンクトペテルブルク州とノヴゴロド州を流れ、オヤト川とティフヴィンスカヤ川のほぼ中間に位置している。

をもってさらにいくつかの場所を訪れたのである。　奇跡を起こす聖像の御臨在によって印され、聖別されたこれらすべての場所で、信者たちの熱意により、最初は礼拝堂が、その後、神の聖堂が建てられた。

こうして聖なるイコンは、まるで軽やかな雲が空を漂うかのように、場所から場所へと奇跡的に移動し続け、ついにティフヴィンカ川沿いのティフヴィン市の近くで、ついにその姿を留めた。[4614]

この最後の顕現は、最初の顕現とまったく同じ様相を呈していた。尊い聖像は、まるで雲のように空を駆け巡り、やがて静止し、不思議なことに空中に浮かんだままとなった。これこそが、聖母マリアの聖像による奇跡的かつ超自然的な巡行であったのである！　ティフヴィン市や周辺の村々から、その偉大な奇跡に惹かれた大勢の人々が、顕現の場所に集まった。彼らと共に、十字架やイコンを携えた司祭たちもやって来た。彼らは奇跡のイコンの前で、詩篇や聖歌を歌いながら長く祈りを捧げた。その後、人々と共にこう叫び始めた。

「女王よ、我らのもとへおいでください。主よ、我らのもとへおいでください。あなたの不肖の僕たちを見守り、あなたの慈愛の恵みを惜しみなく注ぎ、天より我らを訪れ、罪によって曇った我らを、あなたの輝かしい御降臨によって照らしてください。」

彼らがこのように熱心に祈り、多くの涙を流していると、聖なるイコンが天から彼らの手の上に降りてきて、畏敬と喜びをもって受け入れられた。イコンに熱心に口づけをし、その前で多くの祈りを捧げた後、近隣の村の住民たちは直ちに礼拝堂建設のための木材を切り出し始めた。　その日、彼らは礼拝堂の骨組み用に三つの輪を作り、それらを聖像の周囲に置いた。夜になると、集まっていた人々はそれぞれの家へと帰っていったが、奇跡を起こす聖像のそばには数人が残され、一晩中、休むことなく祈りを捧げ続けた。

残された者たちは、確かに一晩中祈り続けたが、朝になる頃には、徹夜の祈りに疲れ果ててうたた寝してしまった。そして彼らが眠っている間に、驚くべき奇跡が起こった。奇跡を起こす聖像は、礼拝堂の土台とともに、まるで神の御心によって導かれるかのように、元の場所から別の場所へと移動した。 それとともに、 、礼拝堂の建設用に用意されていたすべての丸太も別の場所へ移動した。丸太だけでなく、木屑に至るまで、最も小さなものに至るまで、目に見えない手によってすべてが移動されたため、見張っていた者たちの誰もそれを見たり聞いたりすることはなかった。　彼らが目を覚ますと、元の場所には聖母マリアの聖像も、礼拝堂の土台も、その建設用の木材も何一つ残っておらず、彼らは深い悲しみと恐怖に襲われた。

翌朝、近隣の住民たちは再び集まり、尊い聖母マリアのイコンを礼拝し、その栄光を称えて礼拝堂を建てることにした。しかし、イコンを置いて礼拝堂の建設を始めたその場所に何も見つからなかったため、彼らは恐怖に駆られ、イコンのそばで夜を明かした人々にこう尋ねた。

「これはどういうことなのか？」

彼らは、一晩中祈りを捧げ続け、明け方になって少しの間だけ眠りにつき、目を覚ますと、聖像も木々も、さらには集めた木片さえも、どこへともなく消え失せていたことを語った。すると、皆は深い悲しみに包まれ、これほど貴重な霊的な宝を失ってしまったことを嘆いた。　泣き叫び、すすり泣きながら神に祈りを捧げ、彼らはこう叫び始めました：

「おお、人を愛する主よ！　ロシアの地に慈愛と栄光をもって送ってくださったあなたの神聖な賜物を、再び私たちに授けてください。私たちの魂の貧しさを豊かにしてくれると期待している、この計り知れない宝を、私たちから隠さないでください。おお、御母よ、慈悲深い母よ！　あなたは、あなたの不肖の子らである私たちから、どこへ去ってしまわれたのですか？昨日、私たちのもとへおいでになったことで、あなたは私たちの心を大きな喜びで満たしてくださいましたが、今、お去り

[4614] ティフヴィンカ川は、ラドガ湖の南東側から流れ込むサース川の支流である。

になることで、私たちを尽きることのない悲しみに陥らせ、涙と嗚咽にさらしてくださいました。しかし、私たちの光よ、再び私たちのもとに現れ、私たちの悲しみを喜びに変えてください。

このように祈りを捧げた後、彼らはその山や周辺の広葉樹林のあちこちへと散らばり、空を見上げたり地面を見下ろしたりしながら、聖像を見つけようと努めた。そして、彼らの熱心な捜索は無駄にはならなかった。　まもなく、彼らは東の方、ティフヴィンカ川の対岸、山からほぼ二スタディオンの距離にある湿地帯の森の荒野から放たれる不思議な光を目にした。　その光を見るやいなや、人々は直ちにその方向へと駆け寄り、そこで聖母マリアのイコンを発見した。そこには礼拝堂の土台や、そこから出た丸太や木片もすべて残されていた。　山の上に建てられた丸太小屋は、以前建てられた時と全く同じ状態で無傷のままであり、聖なるイコンは小屋の東側にあり、壁に固定されていなかったため、宙に浮いた状態で吊り下がっていた。これを見た人々は、イコンを見つけるとそれにひれ伏し、喜びの涙を流しながら、神とその清き母を賛美した。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ」と彼らは叫びました。「神の聖母よ、あなたに栄光あれ。あなたが私たち、あなたのしもべたちを見捨てなかったことを感謝します！お願いいたします。最後まで私たちを見捨てず、常に私たちと共にいて、御子の言葉の群れを救い、守ってください。」

祈りを捧げた後、民衆は皆で礼拝堂の建設を完成させ、　その後、最もふさわしい者たちを選び出し、彼らを偉大なるノヴゴロドへ、アレクシイ大司教閣下とノヴゴロドの市長のもとへ遣わした。天使たちに空を運ばれ、どこから来たのか分からないまま彼らの元へ現れた、その栄光に満ちたイコンの出現の知らせを伝えるためであった。

ティフヴィンで起きたこの大いなる奇跡の話を聞いた大司教と都市統治者は驚き、霊的な喜びに満たされ、神と聖母マリアを賛美した。彼らは直ちに、この奇跡的な出来事をモスクワ大公ディミトリ・イオアンノヴィチに報告し、彼をも霊的な喜びで満たした。　その後、アレクシイ大主教はティフヴィンのために数名の司祭と助祭を叙階し、彼らを、自分のもとに訪れた者たちと共に送り出した。その際、ティフヴィンカ川沿いに「至聖なる聖母マリアの被昇天」の名を冠した教会を建立し、奉献するためのアンティミンと自身の祝福を与えた。　彼らはティフヴィンカ川に到着し、奇跡を起こすイコンの前で祈りを捧げた後、熱心に教会の建設に取り掛かった。聖母マリアの被昇天の祝日が近づく頃、彼らは教会の建設を完了させた。　この祝日に教会の奉献式を執り行うことを決意した彼らは、周辺の二十以上の集落に助祭を派遣し、キリスト教徒たちに教会の奉献の日を告げるとともに、断食と祈りによって迫り来る祝典に備えるよう促した。

その助祭はゲオルギーという名で、義にかなった生活を送り、敬虔で神に喜ばれる人物であった。彼が聖母被昇天祭の前日に教会へ戻る途中、教会から三ポプリシュの距離を過ぎた森の荒野にいたとき、まるで大量の香や芳香物質から漂うかのような、並外れた芳香を感じた。　それは、聖霊の恵みが、聖母マリアご自身が現れることになっていたその場所を香りで満たしていたからである。

ゲオルギーは驚き、人里離れた人影もない荒野で、なぜこれほど異様な芳香が漂っているのかと考え込んだ。すると突然、彼は倒れた松の木の上に座り、右手に真紅の杖を持ち、まるでそれに寄りかかっているかのようにしている聖母マリアを目にした。　その御前には、明るい衣をまとい、その姿がミルリキアの聖ニコラオスを彷彿とさせる、明るい肌の男性が立っていた。この不思議な光景を目にした聖職助手は、恐怖と戦慄に襲われ、まるで死んだかのように地面に倒れ込んだ。すると、聖母マリアの御前に立っていた聖人が近づき、彼に触れてこう言った。

「立ちなさい。恐れることはない！」

ゲオルギーは畏れと喜びの念を抱きながら立ち上がり、ひざまずいて胸の前で手を合わせ、その驚くべき幻影をじっと見つめた。

すると、松の木の上に座っていた聖母マリアが彼にこう言った。

「ゲオルギイよ！　私の教会へ行き、司祭たちや民衆全員に、彼らが立てようとしている鉄の十字架をそこに立てないように伝えなさい。その代わりに木製の十字架を立てるようにしなさい。それが私の御心である。」

教会係は勇気を振り絞り、恐れおののきながら聖母にこう言った。

「お方よ、わが主よ！　彼らは私を信じないでしょう！」

しかし、聖母の御前にいた聖人は彼にこう言った。

「もし彼らがあなたを信じないなら、彼らを納得させるためのしるしが与えられるだろう。」

その言葉を聞いた後、聖母マリアと彼女の傍らに立っていた聖人は姿を消した。その時、聖職補助者は、聖母マリアと偉大なる聖ニコライ・奇跡行者の奇跡的な御姿を拝む栄誉に浴したことを、ついに確信した。彼は直ちに地面にひれ伏し、このような栄光に満ちた御姿を拝むことを許してくださった神に感謝を捧げた。

教会に戻った聖職補助者は、司祭たちや民衆全員に、自分が見聞きしたことを語ったが、彼らは彼を信じず、労働者たちに教会の屋根に鉄の十字架を取り付けるよう命じた。　しかし、ある作業員が司祭たちの命令に従って十字架を手に取り、教会の屋根に登って設置を始めると、突然、大嵐と激しい風が吹き荒れた。　突風によって、その鉄の十字架を持った男は、まるで手に掴まれたかのように空中に持ち上げられ、地面に降ろされた。彼には微塵の怪我もなく、まるで高所から落ちたのではなく、自ら地上に降りてきたかのようであった。　この恐ろしい奇跡を目撃した司祭たちとそこにいた人々全員が深く恐れ、教会の執事の言葉を信じて、神と御母マリアを賛美し、聖ニコラオスにも祈りを捧げた。　その後、直ちに木製の十字架を造り、それを教会の上に掲げ、大きな喜びと歓喜のうちに教会の奉献式を執り行い、同時に至聖なる聖母マリアの被昇天を記念した。　その際、聖母マリアのイコンからは数多くの奇跡が起こり、様々な病に苦しむ人々に癒しがもたらされた。これは、その祝典の間だけでなく、その後も続いた。

ティフヴィンカ川沿いの教会の奉献式が終わると、民衆は皆、ゲオルギーが奇跡的な幻視を受けた場所へと向かった。そこで祈りを捧げた後、彼らはこの地に聖ニコラオスに捧げる礼拝堂を建立し、ゲオルギーに聖母マリアが現れた倒れた松の木から十字架を作り、民衆が礼拝し崇敬できるよう、その礼拝堂に安置した。　この礼拝堂では、前述の聖母マリアに捧げられた教会と同様に、その後数多くの奇跡が起こった。

それから7年が過ぎたある日、教会の奉仕者たちの不注意により、神の御許しのもと、消し忘れられたろうそくが原因で、ティフヴィンの聖母マリア教会で火災が発生した。　教会全体は灰と化したが、奇跡を起こす聖母マリアのイコンは無傷のまま残った。目に見えない神の力によって、それは炎の中から運び出され、その場所から半ポプリシュチャ[4615] の距離にある、ジュニパーの木立の中に立っていた。　同時に、荒野にあった礼拝堂でも火災が発生し、そこもまた炎に包まれて焼失した。しかし、倒れた松の木で作られ、礼拝堂に立てられていた十字架も、目に見えない力で炎の中から運び出され、礼拝堂から少し離れた場所、ジュニパーの茂みの中に立っているのが発見された。

焼失した教会の跡地には、同じく木造の教会が建てられ、その後、砂漠の元の場所に新しい礼拝堂も建設された。その後、教会には聖母マリアの聖像が、　の礼拝堂には松の十字架が安置された。しかし、5年が経過した後、教会は再び夜間に火災に見舞われ、基礎まで焼け落ちた。一方、奇跡を起こす聖母マリアのイコンは、燃え尽きることのない藪[4616] のように、灰の中から無傷で、少しも損傷を受けていない状態で発見された。　また、砂漠にある礼拝堂も、どういうわけか焼失したが、そこに立てられていた奇跡の十字架も、やはり無傷のまま残っていた。人々はこのような並外れた奇

[4615] すなわち、328サジェーニ（656:2）の距離にある。

[4616] 燃えているが燃え尽きることのない「クピナ（茂み）」を、モーセはホリブ山で、ユダヤ民族の指導者として召される前に目撃した。それは、御子をお産みになった後も処女性を失わなかった聖母マリアを象徴していた。

跡を目の当たりにして皆驚き、神とその聖母マリアを賛美した。　その後、人々は熱意をもって、焼失した二つの教会の跡地に、三度目の教会を建設することに急いだ。これも木造であったが、最初の二つに比べてより広大で荘厳なものであった。この新しく建てられた教会は、敬虔な全ロシア大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチ[4617]の治世に至るまで、100年以上存続した。

聖母マリアへの深い熱意と愛に駆られ、ヴァシリー大公は、ティフヴィンカに木造の教会の代わりに石造りの教会を建設するよう命じた。　彼から送られた資金により、まもなく石造りの玄関が整備されたが、建設作業員たちがその白塗りを始めたその時、神の不可解な御心により、建物が崩れ落ち、20人の建設作業員を石の下敷きにしてしまった。　司祭たちや作業を見守っていた者たち、そして民衆の皆は、石に埋もれた建設作業員たちを深く悼んだ。彼らは、全員が石の下敷きになって死んでしまったのだと考えたからである。　彼らは悲しみと泣き声の中、犠牲者の遺体を見つけ出そうと、石を片づけ始めた。しかし、三日間の作業の末、すべての石を取り除いたところ、彼らは全員が生き延びており、何の傷も負っていないことを発見した。こうして彼らは、神の慈悲と聖母マリアの取り成しによって守られていたのである。　この驚くべき奇跡を目の当たりにした者たちの心は大きな喜びで満たされ、皆、キリスト神とその聖母マリアに感謝を捧げた。その後、彼らは再び作業に取りかかり、間もなく教会のための美しい玄関を建設した。

新しい教会の建設が完了すると、大公の希望により、ノヴゴロドの大司教セラピオン閣下がその奉献式のために到着した。大司教は教会を奉献した後、奇跡を起こす聖母マリアのイコンを、栄光のうちに教会へと運び入れた。

しばらくして、大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチもティフヴィンカに到着した。聖母マリアへの愛に駆られ、彼は奇跡を起こす聖母マリアのイコンを拝観し、それに口づけを捧げ、その前で祈りを捧げ、新しく建てられた教会を見学したいと願っていた。　当時、ヴェリキー・ノヴゴロドの大司教はマカリイ大司教であり、神の御心により、後にモスクワ都主教座に就くこととなった[4618]。彼はこの旅で大公に同行し、共にティフヴィンカに到着した。　そこで彼らは、聖母マリアのイコンの前で熱心に祈りを捧げ、多くの礼拝と祈りを執り行った後、大司教はノヴゴロドへ、大公はモスクワへとそれぞれ帰路についた。

ヴァシーリー・イオアンノヴィチの推挙により、その息子であるイオアン・ヴァシーリエヴィチ[4619]がモスクワの大公の座に就き、彼は初めて皇帝の戴冠式を受けた。 父と同様に、彼はティフヴィンカにある聖母マリアの奇跡を起こすイコンに対して深い敬意を抱いており、かつての敬虔なヴァシリー・イオアンノヴィチ大公と同様に、そこへ参拝に訪れた。　この地の教会が世俗の司祭や助祭によって管理されており、その周囲には数多くの集落が点在しているのを見たツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチは、これを不適切であると判断し、ここに修道院を設立することを決意した。　モスクワのマカリー大主教、ノヴゴロドのピメン大司教、そして自身の公爵やボヤールたちと協議した後、彼は周辺のすべての集落と教会に所属する聖職者たちを、教会から遠く離れた別の場所へ移すよう命じ、教会には修道士たちを住まわせ、修道院の建設を開始させた。　こうして、ほどなくして、王の支援により、ティフヴィンカに修道院が建立された。その修道院はすべて石造りで、石の壁で囲まれていた。また、他の偉大で栄光ある修道院と同様に、共同生活のための施設も設けられた。　新しく設立された修道院の初代イグメンはキリルであった。彼の治世下で、至聖なる聖母マリアのイコ

[4617] イオアン・グロズヌイの父であるヴァシーリー4世イオアンノヴィチは、1505年から1533年まで公爵を務めた。

[4618] 彼は1542年から1564年までモスクワ都主教の座に就いていた。

[4619] ツァーリ・イオアン4世ヴァシリエヴィチ（通称「グロズヌイ」）は、初めて戴冠式を行いツァーリの称号を名乗った人物であり、1533年から1584年まで統治した。

ンの奇跡に惹かれた多くの修道士たちが、それぞれの隠遁の住処を離れ、ティフヴィンスキー修道院へとやって来るようになった。

修道院の建設中、いち早くここにやってきた修道士の一人がアブラアムであった。彼は以前、ヴェリキエ・ルキにあるセルギエフ修道院で修行しており、その場所はティフヴィン修道院から約500ポプリシュの距離にあった。彼自身の語るところによれば、彼は長い間病に伏しており、すでに死の準備を始めていたという。　その時、彼の指導者であるマルティリイ――神に愛された人物――は、奇跡を起こすティフヴィンの聖母マリアのイコンや、それを通じて病人に与えられる数多くの癒やしについて多くを耳にしていたため、アブラアムに、聖母マリアにティフヴィンへ赴き、その奇跡のイコンの前で祈りを捧げるという誓いを立てるよう助言した。　病人は直ちにその誓いを立て、瞬く間に重い病から癒やされた。こうして死の淵から生還した彼は、すぐに病床から立ち上がり、完全に健康を取り戻し、喜びながら神を賛美した。　彼の指導者であるマルティリウスも、弟子の迅速な回復を目の当たりにし、聖母マリアの驚くべき奇跡に感嘆して大いに喜んだ。そこで彼は、アブラアムに対し、その決意を先延ばしにせず、聖母マリアへの誓いを果たすために直ちにティフヴィンカへ向かうよう勧めた。

アブラミイは直ちに旅立ち、ティフヴィンスキー修道院に到着すると、敬虔に誓いを果たした。喜びの涙を流しながら、彼は聖母マリアの尊いイコンにひれ伏し、その唇に口づけをし、心を込めて崇拝を捧げた。　聖母マリアに感謝の祈りを捧げた後、彼はそこにいたすべての人々に、天の女王が彼に示してくださった慈悲について語った。その頃、ノヴゴロドの大司教ピメンはティフヴィンカ川に滞在し、修道院の建設工事を監督していたが、アブラアミーの奇跡的な治癒の噂は彼の耳にも届いた。 聖人は喜びに満たされ、主と、主を産み出された聖母マリアを賛美した。 彼はアブラアミアを師であるマルティリイのもとへ戻すことを望まず、代わりに教会の鍵を彼に授けた。それは、神の母から受けた言い表せないほどの慈悲への感謝として、彼が彼女の聖堂に一番乗りで訪れ、最後に去り、礼拝の開始前に扉を開け、終了後に閉めるようにするためであった。

一方、長老マルティリイはアヴラアミアを見送った後、自分自身が彼と共に聖母マリアの聖像を拝むために行かなかったことを悔やみ始め、ついに、弟子が戻り次第、ティフヴィンカへ向かうことを決心した。長い間彼を待ち続けた長老は、彼の安否を案じ始めた――その時、夢の中で次のような幻視を見た。　ティフヴィンがある方向から、マルティリイの目の前に大きな火の柱が立ち上り、その頂上には、太陽のように輝き、ティフヴィン修道院にあったものと同じ姿をした至聖なる聖母マリアの聖像が鎮座していた。その時、マルティリイは、その聖像に口づけをしたいという強い願望を抱いた。　そのような心境で目を覚ますと、ティフヴィン近郊にある聖母マリアの奇跡を起こすイコンを、この目で見、口づけしたいという願いがさらに強まった。　彼は直ちに旅支度を整え、すべてを置いて急いでティフヴィンへと向かった。修道院に到着し、聖母マリアの聖像を目にすると、マルティリイは畏敬の念を抱いてその前にひれ伏し、喜びの涙を流した。　その際、彼は自分の弟子が完全に健康になっているのを見出し、それ以来、自分の修道院に戻ることを望まず、聖母マリアの奇跡的な聖像を毎日仰ぎ見ることができるよう、ティフヴィンの修道院にとどまった。

しかし、しばらく時が経つと、マルティリイは神の御心により、ティフヴィンから四十ポプリシュ離れた別の荒野へと移された。その場所では、前述のアヴラアミイがかつて、星々で構成され、一帯全体を照らす十字架を空に目撃していたのである。　そこへ移り住む際、至福のマルティリイは、奇跡を起こす聖母マリアのイコンの写しを携え、昼夜を問わず神に仕えながら、沈黙の中で過ごした。彼が持ち出した聖母マリアの奇跡のイコンの写しは、どこへ行くにせよ、常に身に着けていた。そしてある日、彼はトヴェリという町を訪れることになった。そこでは、敬虔な王であり大公である

イオアン・ヴァシリエヴィチの命により、当時カザンの王シメオン[4620] が住んでいた。この町に滞在中、シメオンの息子イオアンが亡くなった。彼はそれ以前から長い間病に伏していたのである。　その時、尊者マルティリイは、自身が携えていた聖母マリアのイコンを亡き少年の胸に当てると、少年は即座に蘇生した。シメオンは大きな喜びに満たされ、主なる神とその聖なる母に賛美を捧げた。その後、聖マルティリウスに感謝の意を表したいと願ったシメオンは、荒野に彼のために石造りの教会を建て、その隣に修道院を設立した。

しかし、ここではティフヴィン修道院と、ティフヴィンカに現れた奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンに話を戻し、その他の奇跡について語りたいと思います。

ティフヴィンカ川に尊いイコンが現れてから修道院が建立されるまで177年の歳月が流れ、その間、教会は世俗の司祭たちによって管理されていた。　この間、聖なるイコンからは多くの奇跡が起こり、信仰をもってその前に駆け寄るすべての人々に数多くの癒しがもたらされた――しかし、それらの奇跡について、同時代の人々の誰も、後世の教訓となるよう記録に残さなかった。そのため、我々はこれらの奇跡について何も知る術がないのである。　しかし、修道院が設立された後も、聖像から生じた奇跡のうち記録されたものは多くなく、それは一部は素朴さゆえに、一部は不注意によるものであった。そして、私たちに伝わってきたこのわずかな記録を、私たちは、収穫後に残された穂や、ブドウの収穫後に偶然その場に置き忘れられたわずかな房のように、集めているのである。

テオフィロスという名の男は、4年6ヶ月の間盲目であったが、至聖なる聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げたところ、癒やされ、目が見えるようになった。これは1581年のことである。

同年、ハラランピイという名の少年が、悪霊に取りつかれていたが、聖母マリアの聖像の前に連れて行かれると、不浄な霊から解放された。

5年間光を見ることができなかった盲人のザカリアも、聖なるイコンの前に連れて行かれるやいなや、癒やされた。

モスクワの都に住んでいたクリメンタという男には、パラスケヴァという名の妻がいたが、彼女は病に倒れた。彼女はすでに丸一年も床に伏せ、起き上がることができなかった。全身を襲う激しい痛みのため、目は見えなくなり、正気も失いかけていた。　夫は病人のためにあらゆる手段を試したが、もはや妻の回復を諦めかけていた。しかし、ティフヴィンには聖母マリアの奇跡を起こすイコンがあり、信仰を持ってそこに頼る者すべてに癒しがもたらされると聞いた。　希望が湧いた彼は、妻に「ティフヴィンの聖母イコンに参拝に行く」という誓いを聖母マリアに立てるよう説得し始めた。妻は夫の言うことを聞き入れ、その誓いを立てた。　そして、彼女が誓いの言葉を口にした途端、まるで眠りから覚めたかのように病床から立ち上がり、重い病から癒やされた。その際、彼女の体のすべての部位が力強くなり、健康を取り戻したが、ただ、目の視力だけは回復しなかった。

そこで、夫と癒やされた妻は、聖母マリアに立てた誓いを共に果たすため、直ちにティフヴィンへと向かった。大斎の最初の土曜日にティフヴィンの修道院に到着すると、彼らは道中そのまま教会へ直行し、聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げ、祈りの賛美を唱えた。　日曜日の徹夜祈祷の間、二人が教会で立ち続け祈りを捧げていると、妻の上に新たな奇跡が起こった。聖母マリアの恵みにより、彼女は視力を取り戻し、こうして完全に健康を取り戻したのである。　教会にいた者たちは皆、この奇跡を目撃し、感動の涙を流しながら神と聖母マリアを賛美した。そして、癒やされた女性とその夫は、聖なるイコンの前で何度も感謝の祈りを捧げた後、喜びに満ちて住まいの地へと戻っていった。これは1583年のことである。

[4620] 言うまでもなく、カザン・ハンのシメオン・ベクブラトヴィチは、洗礼を受けたタタール人である。一時期（1574年）、グロズヌイは自身の代わりに彼をツァーリの座に就かせたが、もちろんシメオンは名目上のツァーリに過ぎなかった。4年後、彼はモスクワから追放され、トヴェリとトルジョクの統治を任された。

1586年、ティフヴィンの聖母マリアの聖像の前に、ゲオルギーという名の盲人が連れてこられた。聖母マリアの庇護の祝日に、彼が奇跡を起こす聖像の前で祈りを捧げると、右目が見えるようになった。　そして、誰の助けも借りずに自宅へと歩き、片目の視力を取り戻し、癒やしてくださったことに対し、キリスト神とその聖母マリアを賛美した。

数日後、アンドレイという名の男が、修道院の奇跡を起こす聖母のイコンの前に連れてこられた。彼は痲痺を患っており、同時に耳が聞こえず、口も利けず、その病に十五年間苦しんでいた。聖母のイコンの前で彼の癒やしを祈ると、たちまち彼は完全な健康を取り戻した。聴力は回復し、口が利けるようになり、全身の関節に力と強さが戻ったため、彼はまるで完全に健康な人のように立ち上がることができた。

同様の奇跡は、ウスティエ川[4621] に住んでいたマヴラという女性にも起こった。彼女は盲目で、17年もの間、全く光を見ることができなかった。しかし、聖母マリアの奇跡を起こす聖像の前に連れて行かれると、彼女は即座に視力を取り戻した。これは1587年のことである。

同年3月4日、ヴェリキー・ノヴゴロドから、ゲオルギーという名の少年がティフヴィン修道院に連れてこられた。彼は6年間にわたり邪悪な霊に取り憑かれており、そのせいでひどく苦しんでいた。 彼が聖母マリアの聖像の前に連れて行かれると、その邪悪な霊は、 の奇跡を起こす聖像から放たれる恵みの光を耐えられず、患者から離れ、太陽の前の闇のように消え去り、少年は完全に健康を取り戻した。

ユリアニアという名の未亡人が、目に重篤な病を患い、失明してしまい、二年間もの間、神の光を見ることはできなかった。　ティフヴィン近郊にある聖母マリアの奇跡のイコンと、それを通じて人々に与えられる言葉に尽くせぬ癒やしの話を耳にしたユリアニアは、聖母マリアへの燃えるような信仰に満たされ、そのイコンを拝むために参拝することを誓った。　するとその瞬間、天の御母は彼女の自宅で、彼女の目に視力を取り戻させてくださった。　直ちに、聖母マリアに一刻も早く感謝の意を表したいと願った彼女は、視力を取り戻したばかりでありながら、誰の助けも借りずにティフヴィンの聖母マリア修道院へと向かい、そこで誓いを果たした後、自分に示された神の慈悲について皆に告げ知らしめた。これは1589年のことである。

これとほぼ同時期に、アキンディンという名の足の不自由な男が、足が曲がってしまい、すでに2年間全く歩くことができなかったが、膝をついて這うようにして、聖母マリアの奇跡のイコンの前にやって来た。そして、その御前で祈りを捧げた途端、彼の足はたちまちまっすぐに伸び、健康を取り戻した。 皆の目の前で立ち上がり、キリスト神とその聖母マリアに感謝しつつ歩き始めた。

その年の8月10日、ヴェリキー・ノヴゴロドから聖なる修道院に連れてこられた、イオナという名の盲目の青年が、至聖なる聖母マリアの聖像の前で視力を取り戻した。

マクシムという名の別の青年は、邪悪な霊に取りつかれていたが、両親に連れられて聖母マリアの像を拝みに行く途中、すでに天からの助けを聖母マリアから受けた。　神の力によって、彼から不浄な霊が追い出され、彼はティフヴィン修道院に到着すると、自分に起こった奇跡について皆に語った。すると、皆は神と聖母マリアに感謝を捧げた。これは1591年のことである。

エレナという名の女性は、2年6ヶ月の間、完全に失明しており、光さえ見ることができなかったが、ある日曜日の聖体礼儀において、「ふさわしいことなり…」と歌われている最中、聖母マリアの奇跡の聖像の前で視力を取り戻した。

1593年には、マリアという名の別の女性も視力を取り戻した。彼女は聖母マリアの被昇天の祝日に、奇跡を起こす聖母マリアの聖像の前に連れてこられたのである。

[4621] ヤロスラヴリ州のヤロスラヴ川河口は、ヴェクサ川とともに、ヴォルガ川の左支流であるコトロスティ川の上流を形成しており、同川はヤロスラヴリ市内でヴォルガ川に合流している。

同様に、クリメントという名の男性――銀細工を営んでいたが、目の病にかかり視力を失っていた――も、至聖なる聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げた後、癒やされた。

また、フィリッポという名の別の盲人は、5年間光を見ることができなかったが、正教会の週にティフヴィン修道院に連れて行かれ、そこで聖母マリアのイコンの前で立ちながら祈ったところ、完全に視力を取り戻し、すべてをはっきりと見るようになった。　これは1596年、聖体礼儀の最中、聖なる供え物を祭壇から聖座へと移す際に起こった出来事である。

同年、モスクワからキリルという名の、片目が不自由な男がやって来て、聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げている最中に視力を取り戻した。　彼がその際、自身の体験について次のように語った。重い病に罹り、絶えず頭痛に苦しんでいた彼は、両目を失明し、半年間光を見ることもできず、身近な人々が彼のためにあらゆる手当てを尽くしたにもかかわらず、病状は全く改善しなかった。彼がもはや癒やしを得ることを完全に絶望し始めたその時、突然、妻が夢の中で幻視を見、その中で次のような言葉を聞いた。

「あなたの夫をティフヴィンへ、奇跡を起こす聖母マリアの聖像のもとへ連れて行きなさい。そこで彼は癒やしを得るでしょう。もし行かなければ、さらに大きな苦しみを味わうことになるでしょう。」

妻は夢から覚めると、すぐにその幻視のことを夫に話した。　夫は直ちに聖母マリアに熱心に祈りを捧げ始め、その際、天の女王である聖母マリアに対し、ティフヴィンへ赴き、その聖像に礼拝することを誓願した。すると、彼は病の苦しみから解放され、自分の目で光が見えるようになり、ついには完全に健康を取り戻した。　しかし、誓いの履行を日々先延ばしにするうちに、彼は次第にそのことを忘れ、結局、約束を果たさなかった。この怠慢に対し、再び神の懲罰が彼に下った。しばらく経つと病気が再発し、彼は二度目に両目を失明してしまったのである。　その時、果たされなかった誓いを思い出し、自らの罪を悟った病人は、泣きじゃくり、嗚咽し、悔い改め、再び至聖なる聖母マリアに祈りを捧げ、以前立てた誓いを必ず果たすと誓った。　天の女王の慈悲により、彼は二度目の癒やしを受けたが、その際、片目だけが視力を取り戻し、もう片方の目は　依然として見えないままだった。　誓願の履行を長く先延ばしにすることなく、彼は直ちにティフヴィンへと向かい、そこで片目で無原罪の聖母のイコンを拝見した後、その前で祈りを捧げたところ、もう片方の目も見えるようになった。

同年1596年12月9日、23人の人々が修道院を訪れた。彼らの指導者はグリゴリーとミハイルの二人であった。奇跡を起こす聖母マリアのイコンの前で感謝の祈りを捧げた後、彼らは次のように自らのことを語った。　彼らは北洋の遥か彼方で海獣の捕獲を行っていた。ある人里離れた場所に船を寄せたところ、突如として起きた荒波のため、非常に長い間そこに足止めを食らってしまった。　食糧は底をつき、飢えに苦しむ中、長期間の絶食のせいで、彼らは皆、死の淵に立たされていた。そこで、死を待つ一人ひとりが神に祈りを捧げ、自らの罪の赦しを請うた。その際、彼らはティフヴィンカにある聖母マリアの奇跡のイコンを思い出し、そのイコンに向かって熱心に祈り始めた。　その後訪れた夜、祈りの最中に少しうたた寝してしまった一人の前に、迅速な助け手である至聖なる聖母マリアが現れ、彼にこう命じた。「仲間全員に、そこに生えているある草を食べるよう伝えなさい。そして、海を渡って故郷へ帰るのに適した時が来るまで、それを食べ続けなさい。」　その男は、共にいた全員にその幻視について語った。そして、彼らが指示された草を口にすると、そこにはパンのような豊かな味わいと満腹感があった。その草は、かつて荒野でイスラエルの民に与えられたマナのように彼らにとっての糧となり、彼らは波が収まるまでの二十日間、それを食べて過ごした。

しばらくして、ティフヴィンにエレナという名の女性がやって来て、次のように自身の体験を語った。 彼女は3年間盲目だったが、ある日、聖母マリアへの信仰に駆られて、ティフヴィンの聖母マリアのイコンのもとへ連れて行ってもらうよう頼んだ。道中、突然目が見えるようになり、誰の助

けも借りずに修道院までたどり着き、そこで彼らは奇跡を起こす聖母マリアのイコンの前で、感謝の祈りを捧げた。

同様に、ママントという名の男が、ベロゼルスク地方から[4622] を訪れ、長い間盲目であったが、ティフヴィンへ赴き、聖母マリアの奇跡を起こす聖像に礼拝することを誓願した途端、即座に完全に視力を取り戻したと語った。これは1597年のことである。

別の男性、ディオミドという名の者が、同じ地域から同年、聖母マリアの修道院を訪れ、自身について次のように語った。彼は丸一年間、半身不随の状態にあったが、その後、ティフヴィンの奇跡を起こす聖母マリアのイコンを思い出し、心の中で彼女に祈りを捧げ、その聖なる像に参拝するという誓いを立てた。　するとすぐに彼は健康を取り戻し、少しも躊躇することなく、その誓いを果たした。

その同じ年、凶暴な悪魔に取り憑かれたピメンという男が、親族によって鎖で縛られたままティフヴィンへと送られた。道半ばに差し掛かった頃、彼は聖母の慈悲によって癒やされた。悪魔は彼から去り、彼は完全に健康な状態で目的地にたどり着き、敬虔な心で自身の癒やし主に礼拝を捧げた。それは12月9日のことだった。

コドラトという名の男は、頭痛に苦しみ、両目を失明し、丸一年半もの間、光を見ることができなかった。しかし、ティフヴィン近郊にある聖母の奇跡のイコンについて耳にすると、熱心に祈りを捧げ、そのイコンに参拝に行くという誓いを立てた。　そして、彼が誓いの言葉を口にしたその瞬間、たちまち視力を取り戻した。しかし、旅を後回しにした彼は、やがてその約束をすっかり忘れてしまい、自身の癒やし手である至聖なる聖母マリアに感謝を捧げに行くことはなかった。視力を取り戻してから10年が経過した頃、彼は以前と全く同じように再び失明してしまった。　しかし、それにもかかわらず、彼は夢の中の啓示を受けるまで、その誓いを思い出さなかった。というのも、夢の中で、ある男が現れて彼にこう告げたからである。

「ティフヴィンへ行き、聖母マリアの聖像に礼拝せよ。もし行かず、誓いを果たさなければ、視力を取り戻すことはできない。」

眠りから覚めると、彼は自分の誓いを思い出し、自らの罪を悟った。そして直ちに、案内人を伴ってティフヴィンの聖母修道院へ向かった。そして、奇跡を起こす聖母マリアの聖像の前に導かれ、心から祈りを捧げると、聖母マリアの慈悲によって瞬く間に癒やされた。

ヨハネという名の男は、長い間重い病に苦しみ、すでに死の淵に近づいていたが、夢の中でキリストの聖人ニコライが現れ、彼にこう言った。

「もし健康を取り戻したいのなら、至聖なる聖母マリアに、ティフヴィンカにある御奇跡の聖像を参拝するという誓いを立てなさい。」

その男は目を覚ますと、直ちに涙ながらに聖母マリアに祈りを捧げ、その聖像に拝礼することを誓願した。その瞬間、彼は完全に健康を取り戻し、誓いを果たすために修道院へと向かった。これは1596年のことである。

同年、10年間光を見ていなかったマリアという名の盲目の女性が修道院に連れてこられた。彼女は至聖なる聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げると、視力を取り戻した。

また、オネジ湖の周辺[4623] に住んでいたエウドキアという名の別の女性は、悪霊に取り憑かれ、半身不随であり、さらに片腕が麻痺していたが、聖母マリアの聖像を拝むと誓った途端、自宅において悪霊と半身不随から即座に癒やされた。　不浄な霊は彼女から去り、以前は麻痺していた手足は力と健康を取り戻した。ただ、彼女が誓いを忘れないようにと、手だけは癒やされなかったままだっ

[4622] ベロゼルスカヤ地方は、現在のノヴゴロド州の北東端に位置するベロエ湖のほとりにあった。ここには独自の公国があり、14世紀半ばからはモスクワ公の支配下にあった。

[4623] オネジ湖は、現在のオロネツ州の域内、ラドガ湖の北東に位置している。

た。彼女がティフヴィンの修道院を訪れ、聖母マリアの聖像の前で祈りを捧げたとき、その手もようやく健康を取り戻した。これは1603年のことだった。

ヨアンという名の足の不自由で目の見えない男が、聖母マリアの聖像を拝むと誓いを立て、自宅で癒やしを受けた。目は開かれ、足もまっすぐになった。そこで彼は、1606年3月1日、聖母マリアに感謝を捧げるためにティフヴィン修道院を訪れた。

同様に、様々な病に苦しむ多くの人々も、ティフヴィンカ川沿いにある聖母マリアの奇跡を起こす聖像を拝むと誓いを立てるとすぐに、癒やしを受けた。「我々は知っている――とティフヴィンの年代記作者は述べている――この聖なる聖像からは、驚くべき奇跡が絶えることなく起こり続け、信仰を持って訪れる者たちには、まるで泉から湧き出る生ける水のように、常に恵みが注がれてきたのだ。こうして、多くの盲人が視力を取り戻し、悪霊に取り憑かれた者たちは悪魔の苦しみに解放され、耳の聞こえない者たちは聴力を授かって慰められ、麻痺した者たちは体の力が回復し、口がきけない者たちは舌を縛る束縛から解き放たれ、足の不自由な者たちは鹿のように跳び上がり、頭痛に苦しむ者たちは癒やされた。遠く離れた国々でさえ、様々な病に苦しむ人々は、この奇跡のイコンの前で誓いを立てるとすぐに、そこから速やかな助けを得ることができた。要するに、誰もがそれぞれの必要に応じて、信仰をもって聖母マリアの御許に駆け寄るやいなや、速やかな助けを受けたのである。

敬虔なツァーリであり大公であるヴァシーリー・イオアンノヴィチ・シュイスキーの治世[4624]、私たちの罪ゆえに、ロシアの地には大きな混乱が生じていた。その一部は内部の内紛によるものであり、一部は外部の敵による攻撃によるものであった。ロシア人の血が至る所で流されていた。都モスクワは国境地帯の異教徒の手に落ち、ヴェリキー・ノヴゴロドとその全領土はヴァリャーギに支配されていた[4625]。この頃、ティフヴィン修道院もまたヴァリャーギの支配下にあり、彼らから多くの迫害を受けていた。しかし、神の慈悲と天の王の全能の助けにより、分散していたロシア軍は一つの民兵隊として結集し、異教徒たちから首都モスクワを奪還し、そこに敬虔な王であり大公であるミハイル・フェオドロヴィチが即位した[4626]。彼はまた、ヴァリャーグ軍に対抗するため、大ノヴゴロドの境内に軍を派遣した。そこで、ウスティエ川沿いにおいて、ロシア軍とヴァリャーグ軍の先鋒部隊との間で戦いが起こった。ヴァリャーグの戦士たちは敗北し、逃げ出した。ツァーリの軍勢はティフヴィンカ川で彼らを追い詰め、一部を討ち取り、一部を捕虜とした。

ヴァリャーガの戦士たちがこのような敗北を喫したと聞き、ヴェリキー・ノヴゴロドに駐留し、同地に多数のヴァリャーガ軍団を擁していたヴァリャーガの軍司令官は、激しい怒りと憤りに満ちた。この敗北に対する復讐をロシア人に果たそうと、彼はノヴゴロドに駐屯していた自軍の部隊をティフヴィン修道院へと送り込み、修道院とその周辺の集落をすべて徹底的に荒らし尽くし、破壊させた。これを聞いた周辺の住民たちは、妻や子供たちを連れて修道院の庇護の下に集まり、修道士たちや少数の王の兵士たちと共に、その堅固な石の壁の陰に身を隠し、ヴァリャーグたちから身を閉ざした。その際、彼ら全員が 壁の堅固さというよりは、むしろ「打ち破ることのできない壁」であり、彼女に希望を寄せるすべての人々の「守護者」である、至聖なる聖母マリアの助けと庇護を頼りにしていた。

[4624] ヴァシーリー・シュイスキーは、偽ディミトリ1世の打倒後にボヤールたちによって選出され、1606年から1610年まで統治した。

[4625] ここで「ヴァリャーガ」とはスウェーデン人を指す。

[4626] 全ルーシを代表するゼムスキー・ソボルによってツァーリに選出されたミハイル・フェドロヴィチ・ロマノフは、1613年に即位し、1645年まで在位した。

ヴァリャーグたちはすぐに現れた。修道院の城壁に近づくと、彼らは四方から包囲し、攻撃を開始した。修道院に閉じこもった者たちは強い恐怖に襲われ、　――ある者たちは城壁の上でヴァリャーグと戦っている間、他の者たちは修道士たちと共に教会に集まり、涙ながらに神と、その奇跡を起こすイコンの前にある至聖なる聖母マリアに熱心に祈りを捧げ、徹夜祷を行い、正教会のキリスト教徒たちのために至聖なる聖母マリアの助けを懇願した。　そして、その助けはすぐに彼らのもとに現れた。

その夜、マリアという名の女性の一人が、祈りの最中にうたた寝をした際、夢の中で至福の聖母マリアを目撃した。聖母は彼女に現れて、こう言われた。

「修道院にいるすべての人々に伝えなさい。私のイコンを取り、それを持って修道院を取り囲む城壁を一周させなさい。そうすれば、彼らは頭上に神の御慈悲を見るでしょう。」

彼女はすぐに眠りから覚め、教会にいた全員にその幻視について語った。　人々は喜びに満たされ、天からの助けへの希望を抱き、祈りを込めて聖母マリアの奇跡を起こす聖像を手に取り、それを修道院の城壁へと掲げた。そして、礼拝の儀式を行いながら修道院の周囲を巡り、涙ながらに聖母マリアにこう呼びかけた。

「天の女王よ、あなたのしもべたちの苦難をご覧になってください。私たちを取り巻く敵から救い出し、あなたの御力を現してください。そうすれば、私たちのすべての敵が、あなたが私たちの守護者であり、私たちと共にいてくださることを悟るでしょう。」

その瞬間、敵を大いなる恐怖が襲った。彼らは混乱に陥り、誰も追いかけていないにもかかわらず、皆修道院から逃げ去った。

しかし、しばらくすると、ヴァリャーグたちはさらに大きな勢力を率いて修道院に迫り、それを包囲して再び包囲戦を展開し、修道院に対して度重なる攻撃を加えた。　包囲中、修道院には男女を問わず多くの人々がいた。狭い生活環境と男女の共同生活の中で、聖なる場所にふさわしい清らかさを皆が守っていたわけではなく、火の粉が干し草に燃え移るように、情欲に燃え上がった。このため、修道院は神の怒りに見舞われ、主はそこを御自身の助けから取り去られた。　すると、修道院を取り囲んでいた敵は、神の許しにより、ますます勢力を増して押し寄せてきた。一方、修道院の守り手たちは、絶え間ない戦闘に疲れ果てていた。すでに絶望が修道院にいたすべての人々を覆い、彼らは包囲軍による間近な破滅を待つばかりとなっていた。　そこで皆は、苦々しい嗚咽を漏らしながら、聖母マリアの奇跡を起こす御像のもとに駆け寄り、心を打たれてその御前でこう叫び始めた。

「聖母マリアよ、私たちの謙虚さをお見逃しください！　私たちは涙を流しながら、あなたの聖なる御像のもとへ駆け寄り、謙虚に懇願いたします。聖母よ、あなたご自身が、この地に奇跡のイコンを現すことで築かれたあなたの修道院を見捨てないでください！」　御母よ、あなたは、敵たちによる私たちへの激しい攻撃をご覧になっています。どうか、私たち、あなたのしもべたちを、御加護なしに見捨てないでください。私たちは、唯一のあなた以外からは、どこからも助けを期待していないのですから。

その頃、修道院にはソロヴェツキー修道院の奉仕者マルティニアンが滞在していました。彼は敬虔で神を畏れる人物でした。聖母マリアは、聖ニコライ・チュドトヴォルツ、聖ヴァラアム・フティンスキー、聖ゾシマ・ソロヴェツキーといった聖人たちに囲まれて、彼に幻として現れ、こう言われました。

「多くの者が不浄な行いでこの場所を穢したため、私の助けはここから遠ざかってしまったのだ。」

マルティニアンは恐怖に駆られて眠りから覚め、涙ながらにその幻視を修道院の指導者たちに語った。ソロヴェツの修道士の話を聞いた指導者たちは、直ちに不浄な情欲の虜となって修道院を穢していた者たちをすべて探し出し、彼らを追い出した。　その後、教会の玄関を清め、多くの熱心な

祈りを捧げて神と至聖なる聖母をなだめ、あふれんばかりの涙を流し、敵の手に渡されないよう、至聖なる聖母に赦しと執り成しを懇願した。　そして、人を愛する主は、御自身の聖母マリアの取り成しにより、その義なる怒りを滅びゆく者たちへの慈悲へと変えられ、それ以来、包囲されていた者たちは次第に力を取り戻し、勢いを増していった一方で、敵たちは弱まり始めた。　ついに、力を振り絞り、聖母の助けを頼りに、包囲されていた者たちは予期せず修道院の城壁の外へ飛び出し、敵へと突進して、勇敢に戦いを挑んだ。 至聖なる聖母マリアの祈りによる神の御加護が彼らに味方し、 、主は彼らに敵に対する勝利を授けられた。なぜなら、彼らの数は少なかったにもかかわらず、数千もの敵を敗走させ、そのうちの何人かを捕虜としたからである。

しかし、その後もヴァリャーギたちは聖なる修道院を放っておかなかった。　その屈辱を晴らそうと、彼らはさらに大軍を集めて再び修道院に迫った。修道院を取り囲むと、彼らは頻繁に壁に向かって猛烈な攻撃を仕掛け、壁の下に地下の堀を掘り始めた。その時、聖母マリアは夜の幻視の中で、前述のマルティニアヌスに再び現れ、彼にこう告げた。

「指導者たちに、私の家から豚を追い払うよう伝えなさい。彼らは周囲をくまなく掘り起こし、すでに修道院へと通じる扉の敷居の下まで掘り進んでいるのだから。」

聖母マリアの同様の御出現は、修道院にいた別の男、グリゴリウスという者にもあった。そして、マルティニアンとグリゴリウスの二人は、聖母マリアの言葉を修道院にいた全員に告げた。

その同じ夜、主は敵たちに恐ろしい幻を見せた。彼らは、モスクワから多くの武装した兵士たちが、多くの明るい十字架の旗を掲げてやってくるのを見たのである。　これは修道院に籠城している者たちを助けにやってくる王の軍隊だと考えたヴァリャーギたちは恐怖に駆られ、逃げ出そうとした。しかし、自分たちが掘ったトンネルを通じて修道院とその城壁に損害を与えられると期待して、彼らはしばらくその場に留まった。

その間、包囲されていた者たちは、マルティニアンとグリゴリウスが受けた幻視に勇気づけられ、奇跡を起こす聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げた後、以前と同様に武装して修道院から出て、敵に向かって突進した。　目に見えない天からの助けが、以前と同様に彼らに味方した。正教徒を助けるため、主は敵の軍勢を混乱に陥れ、彼らに大きな恐怖と戦慄が襲いかかった。　混乱の中、彼らは逃げ出し、恐怖に駆られて互いにぶつかり合い、その際、彼らを追っていたのは、目に見える少数の戦士というよりは、数え切れないほどの目に見えない戦士たちであった。　そこで正教の戦士たちは、敵が逃げ去るのを見て、さらに大胆になり、新たな勢いで彼らを追い詰め、藁の茎のように切り倒し、一部を捕虜とした。また、堀の中にいた敵については、修道院から出てきた軍勢が、一部を剣で斬り倒し、一部を土に埋めてしまった。　戦いが終わると、捕虜となったヴァリャーグたちは、昨夜、修道院を助けにやって来た大勢の軍勢を見たと語り、その軍勢がその後、修道院の壁の外に出てきて、大いなる力で彼らを追い払ったと述べた。　ヴァリャーグたちのこの話を聞いた正教徒たちは、涙を流しながら神と聖母マリアに感謝を捧げた。この輝かしい勝利は、1614年、主の尊き生ける十字架の挙揚の祝日その日に起こった。

翌年、ヴェリキー・ノヴゴロドに駐留していたヴァリャーグの軍司令官は、これほど多くの兵士を失ったティフヴィン修道院に対して激しい怒りに燃え、再び強力な民兵を召集し、それをティフヴィンへ送り込み、一切の情け容赦なく修道院を根こそぎ破壊し、　また、至聖なる聖母マリアのイコンを粉々に切り裂き、その教会を石一つ残らず打ち砕くよう命じた。この命令の知らせはティフヴィン修道院にも届いた。当時そこにいた者たちは皆、大きな恐怖に襲われ、奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンを手に取り、それを持ってモスクワへ逃げ出そうとした。　しかし、奇跡を起こす聖像は動かないままその場に留まり、司祭たちが祈りの歌を歌いながらそれを持ち上げようとしても、どうにもできなかった。この奇跡は臆病な者たちを悟らせ、彼らは、聖母マリアが自分たちが修道院を去ろうとする意図を快く思っていないことを理解した。　全能なる天の女王の助けにすべての希望を託し、そこにいた者たちは皆、修道院に立てこもり、敵の到来を待ち構えた。しかし、正教徒の

迅速な守護者であり、自らの修道院の絶え間ない守護者である聖母は、ヴァリャーグたちが修道院に近づくことさえ許さず、驚くべき幻影をもって彼らの行く手を阻んだ。　ヴァリャーグたちの眼前には、数も多く、よく武装した軍勢が、戦いに臨む準備を整えて猛然と彼らに向かってくる姿が浮かび上がった。そのような無敵の力に立ち向かうことを諦め、恐怖に駆られた彼らは、互いに押し合い、踏みつけ合いながら逃げ出した。それ以来、ヴァリャーグたちはもはやティフヴィン修道院に近づくことを敢えてしなくなった[4627]。このように、聖なる聖母マリアは、栄光のうちに何度も御自身の修道院を敵から守り、御自身の修道院を敵の手から救い出しただけでなく、ヴェリキー・ノヴゴロドとその全領土をも、まもなくヴァリャーグの支配から解放し、ロシアの正教のツァーリに委ねたのである。そして、彼女の祈りによって、ロシア王国全体に平和と静寂が訪れた。

上述の災難が終息し、修道院がロシア全土と共に訪れた平和を享受していた時、神は、ヴァリャーグの襲撃や火災から守られていたこの修道院を訪れ、その住人たちを戒め、あらゆる汚れから清めることをお望みになった。　この恐ろしい神の御訪れは、不思議な形で修道院の修道士たちに予言されていた。その経緯は次の通りである。

ティフヴィンには、ニキータという名の物乞いが住んでおり、神に喜ばれるために聖なる狂人の行いを実践していた。そして、彼のもとに、夢ではなく現実の中で、マカリイ・ジェルトヴォドスキー尊者が現れ、こう言った。

「行って、修道院長と修道者たちに伝えなさい。彼らが厳格に節制を守り、とりわけ修道院内に酒類を一切置かないようにと。なぜなら、酩酊はあらゆる悪の根源だからだ。さらに、教会の礼拝の時を除いて、修道者たちに誘惑を煽りかねない人々、とりわけ女性を修道院内に立ち入らせないようにしなさい。　また、修道院に神の恐ろしい火の懲罰が降りかかるのを防ぐため、神と聖母マリアに熱心に祈るよう、彼らに伝えてくれ。

すると、その聖人を知らなかったニキータは、彼が誰なのかと尋ねた。

現れた聖人は答えた。

「私はマカリイ・ジェルトヴォドスキーだ。奇跡を起こす聖母マリアの聖像を拝むためにここへ来たのだ。」

そう言うと、彼は姿を消した。ニキータは修道院長と修道士たちのところへ行き、自分に起こった幻視について語った。しかし、彼らは彼を信じず、狂人であるかのように彼を嘲笑した。　数日が過ぎたある日、些細なきっかけで一つの独房に火が燃え上がり、炎は瞬く間に広がってすべての建物を包み込み、修道院全体が炎に包まれた。火災は極めて激しく、木造の建物が灰と化しただけでなく、多くの石造りの建物も炎によって崩れ落ちた。　その時、修道士たちは、尊者マカリイ・ジェルトヴォドスキーこそが、正真正銘、聖なる狂人ニキータその人であり、彼を通じて迫り来る神の怒りから彼らを戒めていたことを悟った。悔い改めた彼らは、尊者が語ったことをすべて守るようになり、聖母マリアに熱心に祈りを捧げ、自らの罪の赦しを請い求めた。　そして、天の女王の慈悲により、しばらく時が経つと、修道院は再び見事に再建され、今日に至るまで無傷のまま存続し、ユリの花のように繁栄し、聖母マリアの奇跡を起こすイコンによって行われる奇跡によって称えられている。

[4627] この奇跡的な勝利から約1年後、スウェーデンとの和平を締結するため、ツァーリの使節団がティフヴィン修道院に到着した。使節団は、奇跡を起こす聖母マリアのイコンの写しを取り下ろすと、修道院から50ヴェーニャ離れた、ラドガの町からほど近いストルボヴォ村へと向かった。そこへスウェーデンの使節団も到着した。 ここで、1617年2月10日、ストルボヴォの和平が締結され、ロシア側による和平の主な保証として、彼らが持ち込んだ奇跡を起こすティフヴィン聖母イコンの写し画が提示された。　この複製画はその後、モスクワに移され、ウスペンスキー大聖堂に安置されたが、スウェーデンとの戦争に参加したノヴゴロド市民からの強い要望により、ノヴゴロドへ送られ、ソフィイ大聖堂に安置され、現在もそこに安置されている。

というのも、今もなお、信仰をもって修道院に駆けつける人々は、そのイコンの前で願いを叶えられ、病の奇跡的な治癒を受けているからである。[4628] 。

これらすべての奇跡について語る必要はありません。それらは、主なる神と、その至福の御母を称えるために、聖母マリア修道院に記録されています。

奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンが、どこからティフヴィンにもたらされたのかについては、確かな記録は残っていません。　古くからの写本には、神の御心により、ギリシャのコンスタンティノープルから、ギリシャ皇帝ヨハネス・パレオロゴスの治世[4629] 、トルコによるコンスタンティノープル陥落[4630] の70年前に、ロシアへもたらされたと記されている。これは以下の事情から明らかであった。

当時、ティフヴィンにおいて、至聖なる聖母マリアの奇跡を起こすイコンが、数多くの偉大な奇跡によって称賛され始めていた頃、ノヴゴロドの商人たちのうち、敬虔な数名が、帝都コンスタンティノープルに滞在する機会があった。　彼らと談話する中で、コンスタンティノープルの至聖なる総主教　は、かつて彼らが所有していたが、どこかに姿を消し、帝都から去ってしまった奇跡のイコンのことを思い出し、彼らにこう尋ねた。

「そのようなイコンについて何か聞いたことはないか？」

すると彼らは、語ったことのすべてが真実であることを誓いをもって裏付けながら、次のように語った。

「ある奇跡を起こす聖母マリアのイコンが」と彼らは言った。「空を飛んで偉大なるルーシにやって来た――どこから来たのかは神のみぞ知る――そして、ヴェリキー・ノヴゴロドの境界内、そこから百八十ポプリシュの距離にある様々な場所に現れ、場所から場所へと移り歩いた。　ついに、そのイコンは栄光のうちにティフヴィン川に現れ、そこで驚くべき、言葉に尽くせない奇跡を起こした――そして今なお、そのイコンは現地の教会に安置されている。

そのような話を聞き、ティフヴィン川に現れたこのイコンこそが、自分が尋ねていたまさにそれであると悟ると、総主教は心の底からため息をつき、ティフヴィンのイコンについてさらに詳しく尋ね始めた。　その後、彼自身も、かつてその同じイコンが、神の御心に適う場所へと向かうため、海路を経て帝都から栄光のうちに旅立ったこと、そしてしばらく時が経った後、　再び帝都へと戻ってきたこと、そのイコンから信者たちへの多くの奇跡と恩恵がもたらされ、また、力強い助け手としてその前で祈りを捧げることで、敵に対する勝利や打ち負かしが与えられたことについても語った。

「しかし今や」と彼は言った。「我々の高慢や兄弟への憎しみ、その他の不正のせいで、彼女は当然ながら再び我々から離れ、もはや戻ってはこないだろう。」

これらを感慨深げに語り終えると、総主教はノヴゴロドの商人たちと共に教会へと向かい、聖母マリアのイコンが安置されていた場所と聖櫃を彼らに示した。　その場所は――教会の西側の扉から入ると――聖堂の右側の柱のそばにあった。そこにはすでに別のイコンが安置されていたが、それは一つ分小さく、消えることのない灯が灯されていた。

これを聞き、その光景を目の当たりにしたノヴゴロドの男たちは大いに驚き、主なる神とその聖母マリアを賛美した。聖母マリアは、その聖なる御像を通じて、さまざまな国で数多くの奇跡を行

[4628] ティフヴィンの聖母イコンは、ロシアにおいて最も有名で崇敬されている聖母イコンの一つである。毎年、何千人もの人々がこの奇跡を起こすイコンに参拝するため、ティフヴィンに集まってくる。ロシアの公爵や皇帝たちは、自らの寄進によって修道院を豊かにし、自らもイコンへの参拝の旅に出た。　両首都をはじめ、多くの都市や修道院、さらには農村の教区教会に至るまで、このイコンの複製が奇跡によって称えられています。ティフヴィン修道院では、年に24回、奇跡を起こすイコンを携えて修道院周辺を巡行する行事が執り行われています。 イコンに施された宝石類の価値は7万ルーブルにも及ぶ。

[4629] ここで言及されているのは、当然ながら1379年から1391年まで在位したヨハネス5世パレオロゴスである。

[4630] トルコ軍によるコンスタンティノープルの陥落は1453年に起こった。

っていたのである。　彼らは長い間、総主教と至聖なる聖母マリアのイコンについて語り合い、神の母によって行われた奇跡について互いに語り合った。総主教はギリシャの地で起こった奇跡について語り、彼らはロシアの地を驚嘆させた奇跡について語った。　そして、ロシアの男たちは、その奇跡を起こす聖母マリアのイコンに関する知らせを耳にして、大いに喜んだ。

彼らがコンスタンティノープルを後にし、ロシアの地にたどり着くと、ツァールグラードで耳にした話はロシア全土に広まり、全地総主教による聖母マリアの奇跡のイコンに関する質問や、　また、コンスタンティノープルに滞在中、聖像が置かれていた場所についての指示も記録された。それ以来、人々は皆、この聖像が他ならぬツァールグラードから持ち出されたものであると確信するようになった。　そのため、ツァーグラードに倣い、ティフヴィン修道院では、西側の扉から教会に入った際の右側最初の柱のそばに、至聖なる聖母マリアの奇跡のイコンを安置する場所が設けられた。そこでは、今日に至るまで、このイコンが多くの計り知れない奇跡を起こし続けている。

また、ティフヴィンにあるこの奇跡を起こす聖母マリアのイコンは、一部の人々からは「オディギトリア」とも、「ローマのイコン」あるいは「リドのイコン」とも呼ばれているため、ここでコンスタンティノープルには、特に奇跡によって称賛された二つのイコンがあり、そのうちの一つは「オディギトリア」、もう一つは「ローマのイコン」、あるいは「リドのイコン」と呼ばれていたことを述べておくのが適切だろう。　つまり、「オディギトリア」は一つのイコンであり、ローマのイコンは別のイコンである。ここでは、誰もがこれらについて理解できるよう、この二つのイコンについて簡潔に述べておく。

「オディギトリア」と呼ばれる、奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンについて

記念日：6月26日

聖母マリアのイコン一覧（図版付き）は、「オディギトリア」と呼ばれる至聖なる聖母マリアの奇跡のイコンを参照のこと

聖霊が使徒たちの上に降臨してからしばらく経った後、聖使徒であり福音記者であるルカは、熟練したイコン画家として、板に私たちの主の母である至聖　の御姿を描き、それを至聖なるおとめご自身のもとに捧げました。　イコンに描かれたご自身の御顔を仰ぎ見て、至聖なるお方は、かつてご自身についてなされた預言を思い起こし、こう言われました。「今より後、すべての世代が私を幸いと呼ぶであろう」（ルカ1:48）。その後、イコンを指さしてこう宣言されました。「このイコンに私の恵みがあるように。」　そして、この至聖なる神の母の言葉は現実のものとなった。至福の聖母の恵みにより、そのイコンからは実に多種多様で言葉に尽くせない奇跡が溢れ出し、病める者たちに癒しがもたらされたのである。

その後、福音記者ルカはこのイコンをアンティオキア[4631]　の権威あるテオフィロスのもとへ送った。テオフィロスはキリストを信じる者の一人であり、ルカは彼のために自身の福音書と『使徒言行録』を著したのである。　アンティオキアでは、このイコンはテオフィロスだけでなく、そこにいたすべてのキリスト教徒からも深く崇敬された。

それから長い年月が経ち、この聖なるイコンはアンティオキアから持ち出され、まずエルサレムへ、そしてコンスタンティノープルへと移された。ギリシャ王国のこの首都への移送は、次のような経緯で成し遂げられた。

[4631] アンティオキアは、シリアのオロンテス川沿いにある都市である。

ビザンツ皇帝テオドシウス2世[4632]　の妃であるエウドキア皇后は、聖地を訪れて現地の聖所を礼拝した後、福音書記者ルカによって描かれた至聖なる聖母マリアのイコンを受け取り、皇后の姉である至福のプルケリアへの贈り物として送った。これは、プルケリアの伝記にも記されている。　プルケリアは喜びと愛をもってこの奇跡を起こすイコンを受け入れ、自身がヴラケルネに建立した聖母マリア教会[4633]　に安置した。それ以来、このイコンは帝都にとって大きな誇りとなった。なぜなら、そこから数多くの奇跡や病人の癒しがもたらされたからである。　しばらくして、このイコンは「オディギトリア」と呼ばれるようになった。これは「道しるべ」を意味する。この名称が定着したのは、聖母マリアご自身が二人の盲人の前に現れ、彼らを自身のヴラヘルナの教会にある奇跡を起こすイコンのもとへ導き、そこで彼らが祈りを捧げた後、視力を取り戻したからである。

イラクリウス帝の治世[4634]　、ギリシャ王国はペルシアとスキタイの両方から同時に攻撃を受けた。ペルシア王ホズロイ[4635]　の将軍サルヴァルとスキタイの君主は、大軍を率いてコンスタンティノープルそのものに迫り、都市を包囲して外界から切り離し、決定的な打撃を与える準備を整えた。そこで、コンスタンティノープル総主教セルギオスは、奇跡を起こすイコン「オディギトリア」と、聖母マリアの聖衣を特別な敬虔さをもって手に取り、それらや他の聖なるイコンを携えて城壁を巡り、主なる神とその聖なる母への祈りの歌を捧げた。　そして、神の御慈悲と至聖なる聖母の取り成しにより、ギリシャ人たちは、彼らの都を野蛮人からの脅威から奇跡的に救われるという恵みを授かった。　総主教と聖職者たちが、聖母マリアのイコンの前で熱心に祈りを捧げた後、聖母マリアの聖衣を湾の水中に沈めたとき、海に波乱が起こり、迫り来る敵の船を沈めた。　同時に、陸上にいた攻撃者たちも混乱に陥り、そのためギリシャ軍によって難なく撃退された。この都に対して示された聖母の驚くべき御加護を記念して、大斎の第五土曜日には毎年、感謝のアカフィストを唱えることが定められた。

やがて、偶像排斥の異端が勢力を伸ばし、偶像やその崇拝者たちに対して不敬虔な王たちによる迫害が加えられるようになると、正教会の聖職者たちの一部は、夜陰に乗じてヴラヘルナ教会から「オディギトリア」の聖像を密かに持ち出し、パントクラトール修道院（[4636]）へと運びました。そこで彼らは、そのイコンを教会の壁の中に隠した。その後、祈りを捧げた上で、イコンの前にランプを灯し、偶像破壊者たちによって冒涜されないよう、それを覆い隠した。

こうして、この奇跡を起こすイコンは、異端を支持する者たちが皆亡くなるまで、長年にわたりその場所に留まっていた。そして、教会に再び平和が訪れ、聖なるイコンに対する敵対的な争いが収まると、福音書記者ルカによって描かれ、後にオディギトリアと名付けられた、尊き聖母マリアのイコンがどこにあるのか、長い間探し求められた。　ついに、神の啓示により、そのイコンはパントクラトール修道院の教会の壁の中に隠されていたのが発見され、その前に灯されていたランプが消えていないことが確認された。　この奇跡のイコンの発見を知ったすべての信徒たちは、大きな喜びに満たされ、祈りと賛美歌を捧げながら、それをヴラヘルナ教会のかつての場所へと厳かに移した。

[4632] テオドシウス2世（若き）皇帝は、408年から450年まで在位した。

[4633] ヴラケルナは、コンスタンティノープルの西端にある地区である。ビザンツ帝国の全盛期には、その聖地によって東方全土で名声を博していた。 特にブラケラは、レオ大帝（457–474年）によって建設された聖母マリア教会で知られていた。彼の治世中に、パレスチナから移送された聖母マリアの尊い衣がこの教会に安置され、また、金細工の聖櫃の中に、彼女のオモフォールと腰帯の一部がここに保管されていた。

[4634] 皇帝ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

[4635] 言うまでもなく、ソッサーニド朝のホズロ2世のことである。在位は590年から621年まで。

[4636] すなわち、全能の主のことである。修道院は都市の郊外に位置していた。

リドの、あるいはローマの聖母マリアの奇跡を起こすイコンについて

記念日：6月26日

聖なる首席使徒ペトロと聖使徒ヨハネ・テオロゴスは、他の使徒たちと同様に、福音宣教のために世界各地へと旅立つ前に、まずエルサレムに最も近い周辺の町々でキリストを宣べ伝えました。そして、彼らがリッダ[4637]という町（後にディオスポリスと呼ばれるようになった）に滞在し、そこで多くの人々をキリストへと導いたとき、彼らはそこに聖母マリアの名を冠した教会を設立した。状況は教会の建設に好都合であった。　当時、キリストの教会には平和と安寧が訪れていました。というのも、最初の殉教者ステファノが殺害された直後、ユダヤにおけるキリスト教徒への迫害が終息したからです。これに一役買ったのは、私たちの主キリストについて多くを耳にしていたローマ皇帝ティベリウス[4638]が、キリスト教徒を迫害しないよう命じたという事情でした。キリスト教会にとってこの平穏な時代について、『使徒言行録』には次のように記されている。「*ユダヤ全土、ガリラヤ、サマリアの諸教会は、平安のうちにあり、主を畏れて信仰を深め、歩んでいた*」（使徒言行録9:31）。　リドに教会を設立した後、使徒ペトロとヨハネはエルサレムへ向かい、聖母マリアに、御名によって建てられた教会を見にリドへお越しになり、その教会を祝福し、御来臨によって聖別してくださるよう懇願しました。そうすれば、その教会で聖母から生まれた神への祈りが、神の御座に届くようになるからです。　使徒たちのこのような願いに対し、聖母マリアはこうおっしゃいました。「喜んでリダへ戻りなさい。私はそこであなた方と共にいるでしょう」。　再びリッダに戻ると、彼らは教会の中で、建物を支える石柱の一つに、人の手によって描かれたものではなく、神の御心によって現れた聖母マリアの御像を見出した。そこには、聖母の美しい御顔と、彼女が普段身に着けていたすべての尊い衣が、見事に描かれていた。　これを見た使徒たちは、この奇跡的な、人の手によるものではない御像にひれ伏し、永遠の処女から受肉された神の御言葉に感謝を捧げた。　その後、至聖なる聖母マリアもリダにやって来られました。ご自身の聖像、そしてキリスト・イエスへの信仰によって集まった多くの崇敬者たちをご覧になり、御心は喜びに満たされ、ご自身の聖像に恵みと奇跡を行う力を授けられました。

それから長い年月が経ち、ローマ皇帝の座にユリアヌス・アポステート（[4639]）が就き、キリストの教会に対して激しい迫害を繰り広げた。リダに聖母マリアの奇跡を起こす聖像が存在することを知った彼は、同じくユリアヌスという名の親族をそこに派遣し、その聖像を消し去るよう命じた。そしてその時、驚くべき奇跡が起こった。　石工たちが石切り道具を使って聖像を削り取ろうとすればするほど、絵の具や筆跡は石柱の奥深くへと染み込み、石工たちの懸命な努力にもかかわらず、聖像は無傷のままであった。長い間苦労したものの何の成果も得られず、彼らは聖なる聖像を消し去ることができないまま、その場を去った。　この驚くべき奇跡の噂は宇宙の隅々まで広まり、それ以来、多くの信者たちが、奇跡を起こす聖母マリアの像を拝むためにリッダに集まるようになった。

さらに多くの年月が経過した後、のちにコンスタンティノープル総主教となる聖ヘルマン（[4640]）が、現地の聖地を参拝するためにパレスチナへと向かった。エルサレム（ ）を訪れ、そこで主の聖墳墓やその他の聖地を参拝した後、彼はリドにも到着した。　そこで、奇跡を起こす聖母マリアの聖像に礼拝を捧げた後、彼はあるイコン画家に対し、板にそのイコンの正確な複製を描くよう依頼した。画家が依頼を遂行すると、ヘルマンはその複製を受け取り、そのイコンをコンスタンティノープルへ持ち帰り、常にかけがえのない宝物として手元に置き、毎日このイコンの前で祈りを捧げた。

[4637] パレスチナの都市で、エルサレムの北西、ヤッファへの道沿いに位置していた。

[4638] ティベリウス皇帝は、西暦14年から37年まで在位した。

[4639] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

[4640] 聖ヘルマンは、715年から730年までコンスタンティノープルの総主教の座に就いていた。

その後、アナスタシウス[4641] と名付けられたアルテミオスの治世において、彼は神の御心により、帝都の総主教に選出された。

しかし、アナスタシウスの後に王位に就き、熱心な聖像破壊者であることを公言したレウ・イサウリア人[4642] は、正教徒に対する迫害を開始し、至聖なるゲルマン総主教を不名誉な形で総主教の座から追放した。　教会と自身の総主教邸から追放される際、聖ヘルマンは二つの聖なるイコンを持ち出した。一つは救世主キリストのイコン、もう一つは、リッダにある自筆のイコンを模してイコン画家によって彼のために描かれた、あの聖母マリアのイコンであった。　その後、船に乗り込んで追放の地へ向かう前に、彼はローマ教皇、聖グリゴリウス[4643] 宛てに書簡を書き、自身が不当に追放されたこと、そして聖像破壊主義の皇帝による正教徒への迫害について告げた。　この書簡を書き終えると、彼は堅い板に描かれた救世主のイコンに穴を開け、そこに封印した書簡を、執筆の日時を明記して封入した。その後、穴を塞ぎ、涙ながらにイコンそのものに口づけをし、その際、二度こう言った。

「師よ！　師よ！　御自身と私たちを救ってください！」

そう言うと、彼はそのイコンを海に沈め、イコンは海を漂い、たった一日のうちに古代ローマにたどり着いた。　その夜、教皇陛下は、救い主の聖像がまもなくローマに到来するという神からの啓示を受けた。そこで翌日、太陽が昇るやいなや、教皇は聖職者たちを伴い、ろうそくと香炉を携えてティブロ川を海へと下り、主イエスの聖像を出迎えるために向かった。　彼らが川が海に注ぐ河口にたどり着くと、まるで水の上を歩んでいるかのように聖像が見えた。畏敬の念と霊的な喜びに満たされた彼らは、その聖像にひれ伏した。その時、教皇グレゴリウスは尊い聖像に向かってこう述べた。

「主よ、もしあなたが私たちのような不適格な者たちのところへ来られたのなら、お願いいたします。あなたが水の上を栄光のうちに歩まれたように、どうか私たちの腕の上にも昇ってください。私たちは、自らの不適格さを恐れ、あなたに触れることをためらっているのですから。」

彼がそう言い終えるやいなや、聖像はたちまち上空へと浮かび上がり、鳥のように空を飛び、聖人の両手の上へと降りてきた。　聖人は涙ながらに聖像に口づけし、相応の敬意を捧げた後、聖職者たちに付き添われ、詩篇を歌いながらそれをローマへと運び、誰もがその神聖な聖像を見られるよう、街中を練り歩いた。その後、彼はそれを聖ペトロ第一使徒の大聖堂に安置した。　そこで彼は、水に全く濡れていない総主教の書簡を聖像から取り出し、それを読んで、コンスタンティノープルで邪悪な聖像破壊派の皇帝によってなされたすべてのことを知った。　また、教皇は書簡から、その聖像がコンスタンティノープルから海路でわずか一日のうちに彼らの元へ運ばれてきたことも知り、神を賛美して、そのことを出席者全員に告げた。すると、皆は神の計り知れない力を称え始めた。　東方の全域に偶像破壊の異端がはびこり、聖なるヘルマンが追放されたことを嘆き、教皇は不敬虔な皇帝に大胆な書簡を送り、その悪行を糾弾した。一方、聖像はローマに残され、そこから多くの奇跡が溢れ出し、病者や弱者たちに癒しがもたらされた。

一方、聖ヘルマンは、聖像破壊者たちが聖像を冒涜し、侮辱し、粉々に切り刻み、火の中に投げ込み、不浄な場所に投げ捨てるようになったのを見て、また一方で、　死が近づいていることを感じ取り、追放先の地からローマ教皇へ第二の手紙を書き、その手紙の中で、東方で行われているあらゆる不法行為について彼に知らせた。　その後、リッダで描かれた至聖なる聖母マリアのイコンが収められた板に穴を開け、そこに自身の書簡を差し込み、執筆の日時を記した。イコンに口づけをした聖人は、苦々しい涙を流しながらこう述べた。

[4641] 言うまでもなく、713年から715年まで在位したアナスタシウス2世皇帝。

[4642] レウ3世・イサウリア人は、716年から741年まで在位した。

[4643] 聖グリゴリウスは、715年から731年までローマ教皇の座に就いていた。

「行け、御母よ。エジプトへ[4644] 、ヘロデから逃れるのではなく、獣のような偶像破壊者たちからローマへ逃れよ。そこでは正教徒たちがあなたの御像を守り、不敬虔な者たちの手に渡して冒涜されることのないようにするだろう。

さあ、あなたの尊い聖像が、あなたの助けと恵みによって支えられ、この広大な海を渡ることができますように。あなたは、天と地と海を創造された方を、ご自身の腕に抱いておられたのですから。　そして、聖なるイコンのために苦難に遭っている私たち――そのイコンを通して、私たちはあなたとあなたの神聖な御子に栄光と崇拝を捧げているのです――を、義人の住む場所、アブラハムの懐において安らかに休ませてください」。

そう言いながら、聖なるヘルマンは愛を込めてイコンに口づけをし、それを海に沈めた。

そして、そのイコンは鷲の飛翔よりも速く漂流し、たった一日のうちにローマに到達した。その夜、ローマの首席司教は、天の女王のイコンがローマに到来するという神からの啓示を受けた。そこで、眠りから覚めると、彼は聖職者一同を率いて、かつて救い主のイコンを出迎えるためにティブロ川をろうそくと香炉を携えて下ったのと同じように、そのイコンを迎えに出かけた。　彼らがティブロ川の河口にたどり着くと、至聖なる聖母マリアのイコンが、横たわった状態ではなく、まるで立っているかのように、そこに描かれた姿通りに、まっすぐに自分たちに向かって流れてくるのが見えた。　教皇が聖像に向かって両手を差し伸べると、聖像は自ら空中に浮かび上がり、教皇の手に降りてきた。教皇は大きな喜びをもって聖像を受け取り、それに口づけをしてから、神の驚くべき奇跡に感嘆しつつローマへと戻った。　その後、教皇は総主教ゲルマンが開けた穴を開け、そこで見つかった手紙を読み、そのイコンがわずか前日に海に投げ込まれ、こうしてたった一日のうちに彼らの元へ漂着したことを理解した。正教会の偉大な導き手であり、流刑の地でその生涯を閉じようとしていた聖ゲルマンを悼んだ後、　教皇は、尊き聖母マリアの聖像を、救世主の聖像と同様に、街中を巡る荘厳な行列で運び、その後、聖使徒ペトロ教会に運び込み、祭壇に安置した。それ以来、この聖像からはローマで様々な奇跡が起こり、病める者たちに癒しがもたらされた。

その後、さらに数年が経過し、その間、コンスタンティノープルでは偶像破壊派の王や総主教たちが猛威を振るっていた。　しかし、やがて彼らは皆、不名誉な最期を遂げた。そして、ビザンツ帝国の王位には敬虔な皇帝ミカエル[4645] が即位した。彼は幼少であったため、当初は敬虔な母である皇后テオドラ[4646] が国政を執った。彼らの治世下で、偶像排斥の異端は完全に根絶され、正教の勝利が訪れた。

この頃、至聖なる総主教ゲルマンによって流刑の地へ持ち込まれ、その後そこからローマへ運ばれ、聖使徒ペトロ大聖堂の祭壇に安置された至聖なる聖母マリアのイコンが、大聖堂にいたすべての人の目の前で、誰も触れていないにもかかわらず、動き出し、揺れ始めた。　この現象は、夕方の礼拝の時も、朝の礼拝の時も、時には聖体礼儀の最中にも、何度も繰り返された。ローマの住民たちは皆、恐怖に駆られ、この奇妙な奇跡に大いに驚嘆した。 当時、ローマ教皇は聖セルギウス[4647] であった。ある日、彼が多くの聖職者と共に聖ペトロ大聖堂で共同礼拝を執り行っていた際、至聖なる聖母マリアのイコンが突然、再び激しく動き出し、揺れ始めた。　これを見た出席者たちは皆、恐怖に襲われ、大声で激しく叫び始めました。「主よ、憐れみたまえ！」

こうして、神の御慈悲を招き寄せた彼らは、聖像の揺れが止まるという結果を得た。しかしその後、聖像は再び動き出し、置かれていた場所から浮き上がり、空へと舞い上がった。　すると、教

[4644] 言うまでもなく、キリスト降誕の年にユダヤの王であった「大」と称されるヘロデのことである。新生したユダヤの王を殺害しようとする彼の企みから逃れるため、聖母マリアは御子イエスと婚約者ヨセフと共にエジプトへ逃れた。

[4645] ミカエル3世皇帝は842年に即位したが、855年から独自に国家の統治を開始し、867年まで在位した。

[4646] テオフィルス皇帝（824年～842年）の妻テオドラは、息子のミカエルが幼かったため、842年から855年まで国政を執った。

[4647] 言うまでもなく、教皇セルギウス2世（844年から847年まで）。

会にいた人々は皆、叫び声を上げながら祭壇の周りに集まり、聖像が地面に落ちて粉々になってしまうのではないかと恐れて、それを受け止めようと手を差し伸べた。しかし、聖像は空高く舞い上がっていたため、その願いは叶わなかった。　まるで教会の中を通り抜けるかのようにゆっくりと、聖像は目に見えない天使の手によって運ばれ、教会の出口へと向かっていった。教皇陛下は、聖職者全員と民衆と共に、畏敬と戦慄の念を抱きながら聖像の後を追い、この驚くべき奇跡を仰ぎ見た。ティブレ川に到達すると、聖像は川面へと降り立ち、流れに乗って海へと漂っていった。　民衆も教皇も皆、川岸を歩きながら、聖像が去っていくのを見つめ、涙を流して見送った。その時、教皇セルギウスはこう叫んだ。「ああ、我らよ、我らの女王であり主よ、ああ、我らよ！　神聖なる聖櫃よ、あなたはどこへ私たちから去って行かれるのですか？かつてあなたの聖なるイコンが水の上を歩いて私たちのもとへ来られたように、今や同じ道を通って私たちから遠ざかっていきます。このあなたの驚くべき去り様は、私たちを恐れと戦慄に陥らせます：　私たちは、コンスタンティノープルで起きたような、　な偶像破壊者やその他の不法者たちによる迫害が、私たちにも降りかからないかと恐れている。その迫害のせいで、あなたの聖なるイコンはそこから船出せざるを得なかったのだ。いつまで、至聖なる方よ、キリストの教会を揺るがす嵐や異端の動乱は続くのだろうか？」

教皇は、民衆と共に奇跡を起こす聖像を見送る間、こうした言葉やその他多くのことを語り続け、やがて聖像は速い海流にさらわれて彼らの視界から消え去った。その後、教皇は、この奇跡を後世のすべての人々に記憶に残すため、年代記に記録するよう命じた。

一方、聖なるイコンは海を漂い、コンスタンティノープルに到達し、王宮の近くにある港に流れ着いた。そこにいた敬虔な男たちがそれを拾い上げ、敬虔な皇后テオドラのもとへ運んだ。　聖なるイコンを受け取り、それが海の埠頭で発見されたことを知ったテオドラは、これはおそらく、イコン破壊派が石に縛り付けて海に投げ込んだイコンの一つだろう、と述べた。今や、それを縛っていた縄がほどけたか、あるいは朽ち果てたため、イコンが水面に浮上したのだという。　女王と同様に、他の人々もそう考えた。

その直後、敬虔なミハイル皇帝と至聖なるメフォディオス総主教は、聖職者や世俗の要人からなる特使団をローマへ派遣した。特使団は教皇宛ての書簡を携えており、その中で教皇は、偶像破壊の異端を検討し断罪するための公会議に出席するため、コンスタンティノープルへ招かれていた。ローマに到着し、教皇に書簡を手渡すと、使節たちはローマの首席司教とすべての正教徒を大いなる喜びに包んだ。なぜなら、彼らは偶像破壊の異端の支配が終わりを告げたことを目の当たりにしたからである。その後、使節たち自身も、ここで救い主と聖母マリアのイコンから生じた偉大な奇跡を知り、慰めを受けた。　聖なる教皇グリゴリウスの治世の頃、聖なる総主教ゲルマンによって派遣された聖像が、最初は一つ、次にもう一つと、海路を経てローマに漂着したこと、またつい最近、至聖なる聖母マリアの聖像が、設置されていた場所から自ら立ち上がり、再びローマから海へと去っていったことなどである。　これらすべての奇跡的な出来事を記録した後、彼らは聖母マリアのイコンがローマを去った日を記念し、その後コンスタンティノープルに到着すると、聞いたことをすべて皇帝、皇后、そしてメフォディオス総主教に語った。　彼らはその時、埠頭で発見された聖像のことを思い出し、「この聖像は、もしかするとローマから私たちのところへ漂着してきたのではないか」と考えた。

まもなく、ローマ教皇からの特別使節がコンスタンティノープルに到着し、公会議においてローマ司教の代表を務めるよう命じられていた。彼らは海岸で発見された聖母マリアのイコンを見せられると、それがつい先日自分たちの元を去ったあの奇跡を起こすイコンそのものであることを即座に見抜いた。　このことを民衆全員に告げると、人々は皆、大きな喜びと驚きに包まれた。その後、イコンがローマを出発した日の記録を確認したところ、イコンがたった一日のうちにコンスタンティノープルに到着したことが判明した。　そこで、総主教は聖職者一同を率い、皇帝とシンクリトスの面

前で、その奇跡のイコンを受け取り、民衆に囲まれながら、それをハルコプラティア（[4648] ）へと厳かに移送し、そこで聖母マリア教会に安置し、神から授かったこの奇跡の賜物を喜び祝った。　それ以来、この奇跡を起こす聖母のイコンは、ローマからコンスタンティノープルへと運ばれてきたことから、「ローマの」と呼ばれるようになった。

ティフヴィン聖母イコンに捧げる聖母トロパリオ、声調

今日、まばゆい太陽のごとく、空にあなたの至聖なるイコンが私たちの上に輝き、その慈悲の光線で世界を照らし、　偉大なるロシアは、あたかも神からの賜物であるかのように、天より畏敬の念をもってこれを受け入れ、すべての主の御母であるあなたを賛美し、あなたから生まれた私たちの神、キリストを喜びをもって称えます。　主よ、女王なる聖母マリアよ、彼に祈り、すべてのキリスト教の都市と国々が、敵のあらゆる中傷から無傷で守られ、その神聖なる御姿と、あなたの至純なる御像に信仰をもって礼拝する者たちを救ってくださいますように、貞潔な乙女よ。

コンダク、第8調：

人々は、キリスト・神に感謝しつつ、聖母マリア、女王のもとへ駆け寄り、その奇跡を起こす聖像を心からの敬意をもって仰ぎ見ながらひれ伏し、彼女にこう叫びます：　おお、主の母マリアよ、この地に御子イエス・キリスト（　）の尊き御像を奇跡的に現してくださったあなたよ、平和と繁栄のうちに、私たちの忠実な皇帝と、天の命を受け継ぐすべてのキリスト者を救い給え。私たちはあなたに誠実に呼びかけます。「喜びなさい、おとめよ、世界の救いよ。」

私たちの尊い父、テッサロニキのダビデの記念日

記念日：6月26日

至福のダビデは東方の地に生まれ、光を放つ星のように全世界を照らしました。幼い頃から節制を修め、まるで肉となった天使のように人々の前に現れました。テッサロニキ[4649] の町から三ヴェルスタ離れた場所に定住した聖ダビデは、アーモンドの木の下に天幕を張りました。　そこで、美しい歌声の鳥のように、彼のもとに駆け寄るすべての人々を、大いに益となる言葉で慰めた。彼の心は常に神聖な高みへと向けられていた。そのおかげで、彼は奇跡を行う賜物に恵まれ、その驚くべきしるしによってすべての人を照らす、教会における輝かしい柱となった。　寒さや激しい暑さを勇敢に耐え忍び、彼はまるで無情な者のようになった。そして、彼は自分の中の肉欲の炎を消し去ったため、物質的な火にも焼かれることはなかった。　ある時、彼は燃え盛る炭を手に取り、その上に乳香を載せて王の前に進み出て、王に香を焚いた。その際、彼の手は火によって微塵も傷つくことはなかった。これを見た王は驚き、神の御使いの足元にひれ伏した。　概して、聖ダビデは自らの生涯と行なった奇跡によって人々を大いに驚かせ、人々は聖人を見つめながら、御自身の聖徒たちにおいて驚く

[4648] ハルコプラティア――コンスタンティノープルにある地域。

[4649] ソロウン、あるいはテッサロニキは、マケドニアの極めて重要な古代都市であり、エーゲ海（群島）の一部をなす、広大なソロウン湾（あるいはフェルメイ湾）の奥深くに位置している。　使徒パウロはソロンでキリスト教を説き、この都市のために二通の手紙を記した。貿易高と富の点で、ここはビザンツ帝国で最も重要な都市の一つであった。現在、この都市はテッサロニキという名で、コンスタンティノープルに次ぐヨーロッパ・トルコ第一の商業都市であり、非常に多くの人口を擁している。

べき御業をなされる神を賛美した。長く輝かしい生涯を送った後、聖ダビデは安らかに神のもとへ旅立った[4650]。彼は幼い頃から神を愛していたのである。

コンダク、第1声：

常に花咲く園よ、美徳の実を結ぶ者よ、あなたは園の木の上に、歌声の美しい鳥のように現れた。さらに、楽園よりも、主の命の木をあなたの心に受け入れた。神の知恵を育み、その恵みをもって私たちを養う者よ。常に私たちのために祈ってください、至福のダビデよ。

7月10日

6月27日（旧暦）

私たちの尊き父、旅人を受け入れたサンプソンの聖伝。

記念日6月27日

その名声が至る所に広まった偉大なるサンプソンは、栄光ある都市――古代ローマ――に生まれた。彼の両親は裕福で高貴な人々であり、王家の血筋を引いていた。世俗の知恵をすべて見事に学んだ後、　サンプソンは医術も習得したが、それは必要に迫られてでも、利欲のためでもなかった――彼は自身の富に十分に満足していたからである――。その理由は、一部には暇を持て余さないためであり、また一部には、医術の知恵を通じて、神の助けを借りて貧しい人々に奉仕するという目的があったからである。　サムソンは、不治の病に苦しむ多くの人々を、その医術の力で癒した。その際、彼の医術には、癒やしをもたらす神の恵みも加わっていた。それは、彼の徳高い生活と神への信仰ゆえに、彼に授けられたものだった。　世俗的な知恵に加え、サンプソンは聖書の理解にも優れ、聖書の読解に多くを費やし、信仰と希望に駆られて、キリストの愛に堅く立っていた。

聖サムソンの両親が他界し、彼が広大な財産を相続したとき、聖人は貧しい人々を無償で治療するという慈善活動を続けるだけでなく、福音書の言葉（マタイ6:20）に従い、一時的で朽ちゆく富を朽ちることのない永遠の富へと変え始めました。その際、神の戒めに従って貧しい人々に惜しみなく施しを行い、両手で自らの富を使い果たし、貧しい人々や困窮者のあらゆる必要を満たそうと努め、彼らの朽ちる腹を満たすことによって、自らに朽ちない宝を築こうとしたのである。　彼は生涯を通じてこのように行動した。なぜなら、慈悲深さは生まれつき彼に備わっていたものであり、教育を通じてその心の中にさらに深く根付いていたからである。より質素で簡素な生活を送りたいと願ったサムソンは、多くの奴隷を自由の身として解放し、必要な奉仕のためにただ一人だけを残した。　実際、彼自身が真に誠実な主のしもべとなった以上、なぜこれほど多くの奴隷が必要だったのだろうか。こうして彼は、ある種の束縛のように彼を縛っていたすべての富を手放し、一着の衣服と、腰に巻く一本の紐だけで満足した。　そして、自らの魂を霊的な富で豊かにしたいと願って、彼はこの世と世にあるすべてのものを軽んじ、キリストに倣って放浪者となった。親族や知人を残して、彼は古代ローマを去り、かつて預言者エリヤがそうであったように、ある荒野に身を寄せた。

しかし、多くの人々の益となるよう、神は御自身の忠実なしもべを新しいローマ、すなわちコンスタンティノープルへと導かれた。　そこで、ある小さな教会を見つけると、聖サムソンはそこに住み着き、旅人や乞食たちを慰め、あらゆる方法で彼らに仕えた。その際、聖サムソンは自らの医術

[4650] 聖ダビデは、ユスティニアヌスとテオドラの治世下、540年頃に亡くなった。

を用いて彼らを治療するだけでなく、食事や寝床を提供して彼らを喜ばせようと努めた。　彼はこれらすべてをこれほど熱心に実践したため、慈悲という美徳は、誰の目にも彼にとって生まれつきのもののように映った。太陽が光を放つのが当然であり、火が触れるものすべてを焼き尽くすのが自然であるように、サンプソンの貧者、病人、旅人に対する熱意と愛も、まるで生まれつき彼に備わっていたかのようであった。　そして、神は、御自身のために為される隣人への慈愛の行いを御自身の祝福なしには見捨てず、隣人への施しを御自身への捧げ物として受け入れてくださる方である。神は、病人のために聖サムソンの献身と労苦に特別な力を与えられた。　彼が自宅に迎え入れた、不治の病に苦しむ者たちは皆、奇跡的な癒やしを受けた。しかし、聖人は神から授かった奇跡を行う賜物を、医術という形の下に隠していた。それは、彼が謙虚さを重んじ、人々から栄光や称賛を受けることを望まなかったからである。　しかし、灯火が隠されることはなく、山の上に立つ町が隠されることもないのと同様に、善行の光を放ち、神に完全に喜ばれる高みに登った聖サムソンも、やがて万人に知られるようになった。　コンスタンティノープルの総主教も彼の噂を聞きつけ、彼を呼び寄せ、聖人がそれを望まなかったにもかかわらず、司祭に叙階した。

聖人の美徳と並外れた治療の技量に関する評判は、王宮にまで届いた。それは次のような経緯で起こったことである。

ユスティニアヌス皇帝[4651] は重病に陥り、治る見込みのない激しい病にひどく苦しめられた。医師たちが呼び寄せられたが、彼らは皇帝を診察すると、いつものように互いに議論を始め、長い間、その言葉によって皇帝にむなしい希望を抱かせるだけであり、実際には皇帝の病を治すことも、その苦しみを和らげることもできなかった。　ギリシャ・ローマ帝国のあらゆる地域から熟練した医師たちが呼び寄せられたが、その残酷な病から王を癒やすことのできた者は一人もいなかった。　王は彼らに怒りを覚え、全員を目の前から追い出すよう命じた。そして自ら、あらゆる癒やしの源であり、すべての被造物の創造主である主なる神に心を向けた。王はただ神のみに自らの命を委ね、ただ神のみに涙ながらに助けを求め始めた。　そして、神は王の熱心で涙に満ちた祈りを軽んじられることはなかった。王はしばらく眠りにつくと、幻の中で、明るい衣をまとった多くの医師たちが自分の前に立っているのを見た。すると、ある光り輝く若者が王のそばに歩み寄り、医師たち一人ひとりを指し示しながら、誰がどのような位階にあり、何歳であるかを語り始めた。　その中の一人として、王に、謙虚な表情で白髪交じり、司祭の衣をまとった人物を指し示した。その人物を指さしながら、光を放つ若者は王にこう言った。「この人こそが、他の誰でもない、王よ、あなたの死に至る病からあなたを癒やすのです。」

眠りから飛び起きた王は、大いに喜び、回復への希望を与えてくださった神に感謝した。そして、夢の中で見た男の姿を思い出し、再びすべての医師を呼び寄せるよう命じた。　彼らが王の前に現れると、王は長い間彼らを見つめ、夢の中で見た男がいないか探したが、見当たらず、再び悲しみに沈み、嘆き始めた。　その後も、神の助けへの希望を捨てることなく、王は再び、夢の幻で見たような医師を探すよう命じた。その際、王は夢で見た男の顔立ちを詳しく説明し、その男を見つけ出す手助けをしてくれた者には惜しみなく報いると約束した。多くの人々が王が説明した通りの医師を探したが、見つけることはできなかった。　ついに、王自身にも知られ、聖サムソンと親交のあった王の家臣の一人が、聖サムソンを思い出した。彼は病人の治療を行う医師であり、その顔立ちが王が説明した治療者にそっくりだったのだ。彼はそのことを王に告げると、王は聖サムソンを敬意を込めて自分の元へ連れてくるよう命じた。

聖人が王の御前に進み出ると、王は彼を見るやいなや、この人物こそが、まさに夢の中で見た人物であると直ちに悟った。喜びに満ち溢れた王は、すぐに玉座から立ち上がり、聖人の元へ歩み寄ると、彼を抱きしめ、老人の口元だけでなく、頭や手にも口づけをした。その際、王はこう言った。

[4651] ギリシャ・ローマ皇帝ユスティニアヌスは、527年から565年まで在位した。

「父よ、あなたはまことに、主なる神が夢の中で私に示し、あなたを通して私に健康を授けると約束してくださった方その人です。」

そう言うと、彼は聖人を自分の寝室へ案内し、その隣に座って、聖人の姿を見つめることに喜びを見出していた。その際、聖人の手を自分の目に当て、涙を流しながらその手を口づけし、そこから癒やしを得られることを願っていた。

至福のサムソンは、王のこれほどまでの謙遜ぶりを見て心を痛め、穏やかにこう言った。

「王よ、そのようなことはなさらないでください。私を傲慢という罪に陥らせないよう、計り知れない謙遜をもってご自身を卑しめるのはやめてください。そうすれば、義なる裁き主による私の裁きの罪が、あなたに負わされることになります。私は貧しく罪深く、自らの罪の癒やしを主の慈悲深い寛容に頼らなければならない身であるのに、一体どこで人々に勝っているというのでしょうか?」　ただ、主に向けられたあなたの偉大なる信仰と、主の慈悲への温かい信頼こそが、天の王キリストを憐れみに導き、主はあなたを癒やしてくださるでしょう。なぜなら、主は御自身の望むことはすべて成し遂げられるからです。

そう言うと、サムソンは王の体の患部に手を触れ、薬を塗っているふりをした。それは、神から授かった奇跡的な癒しの賜物を隠そうとしたからである。彼が患部に手を触れた途端、王は病の軽快を感じ、やがて完全な癒やしを得た。

完全な健康を取り戻した王は、自身の回復だけでなく、これほど偉大で神に愛される人物に会うことができたことにも大いに喜んだ。その後、聖人にふさわしい感謝の意を表そうと、王は彼に多くの金や銀を差し出した。しかし、聖人は王にこう言った。

「王よ、私はかつて多くの金や銀、財産を持っていましたが、永遠の天の恵みを得るために、これらすべてをキリストのために捨てました。　しかし、もし私に好意を示したいのであれば、神とあなたの救いのために、こうしてください。私の小屋の隣に家を建て、私がこれまで奉仕してきた病弱な人々や旅人たちを慰めることができるようにしてください。そうすることで、あなたは神から永遠の報いを請い求め、私の老後を慰めてくれることになるでしょう。」

聖人のこの言葉を聞いた王は、その願いを単なる懇願というよりはむしろ自分への贈り物と捉え、聖人が望んだ通り、旅人宿と病院を建設するよう命じた。建物が完成すると、王はそこで安らぎを得る旅人や治療を受ける病人のために、様々な領地をその施設に割り当てた。

その後、長年にわたり、聖サムソンは旅人への奉仕と病人の治療に専心した。そうした活動の中で、彼は深き老齢に達した。体が衰え、少し病に倒れ、死が近づいた。　しかし、その魂が肉体から離れようとしたとき、彼の顔は依然として輝きを失わず、死を前にして少しも悲しむことはなかった。それは、肉欲や世俗の悲しみに満ち、多くの罪に囚われ、それゆえに死を恐れる他の魂たちが通常悲しむのとは対照的であった。

聖人は、誰が自分を呼び寄せているのか、どのような労苦から解放され、どのような安らかな安息の地へと導かれるのか、そしてそこで彼の至福の魂をどのような慰めが待っているのかを知っていた。なぜなら、「働く者は皆、その報酬を受けるにふさわしい」からである（ルカ10:7）。かくして、神に喜ばれる聖サムソンの魂は、天の山の国へと旅立った[4652]　。一方、その遺体は、聖殉教者モキアの教会に　、栄誉をもって埋葬された。この偉大な神の御使いは、肉体の生まれにおいてモキア族の出身であり、聖殉教者の徳の霊的な後継者であったのである。

偉大な神の御使いとして、聖人は生前だけでなく死後も奇跡を起こしたことで名声を博した。ここでは、その死後の奇跡のいくつかを振り返ってみたい。

[4652] それは530年のことだった。

ある時、コンスタンティノープルで、聖ソフィア大聖堂[4653] を起点とする火災が発生した。火災は極めて激しく、人々は誰もそれを消し止める手立てを持っていなかった。炎は急速に広がり、街を彩っていた豪華な宮殿や建物のほとんどがすでに燃え上がっていた。　火は聖サンプソンの宿舎にも達しました。しかし、四方を炎に囲まれながらも、宿舎には全く火が及ばず、まるで燃え尽きることのない藪のように、炎の中にそびえ立っていました。　その際、多くの人々が、聖サムソンが宿屋の塀を素早く回り、怒りを込めて炎を宿屋から払い除けているのを目撃した。そして、火はまるで聖人の顔に恐れをなしたかのように、その命令に従って宿屋から離れ、別の場所へと退いた。　その後、突然雷鳴が轟き、空に雲が現れた。その直後、激しい雨が降り注ぎ、聖人の祈りによって、火事はすべて消し止められた。

聖人は、生前にそうであったように、死後もあらゆる病の治癒をもたらした。

ある時、テオドリトという高貴な人物がいた。彼はスパファリオス（[4654] ）という官職に就いていたが、ある用事で自宅の階段を急いで降りていたところ、足を滑らせて足の関節を傷めてしまった。足は突然激しく痛み出し、彼は床に伏すことになった。　三日間、激しい苦痛のせいで、彼は食事も飲み物も口にできず、眠りにつくことも、何かを話すこともできず、まるで口がきけないかのようだった。しかし、苦しみの中でも正気を保ち、心の中で熱心に神と、神の御心に適う聖人である聖サンプソンに祈りを捧げ、助けを求めた。　三日が過ぎ、夜が更ける頃、スパファリオス・テオドリトスは、自分の足元に立っている聖サンプソンを目にした。聖人は彼の傷ついた足に触れながら、こう言った。

「立ちなさい。もう二度と病むことはないのだから。」

そう言うと、聖人は姿を消した。

テオドリトスはたちまち完全に健康になったのを感じ、喜びながら大声で神に感謝し、こう言い始めた。

「まことに、聖サムソンは神の偉大な御使いである！」

その後、自分の足を触って、それが完全に治っていることを確かめると、立ち上がって歩き始めた。そして朝になると、聖人の棺のもとへ行き、その前で感謝の礼拝を捧げた後、そこにいたすべての人々に、自分に与えられた癒やしについて語った。

コンスタンティノープルに住む別の貴族、レフという名の男は、馬に乗っている最中に石の壁に足を擦りむいてしまった。傷口から膿が出て、彼は重病に陥り、日ごとに病状は悪化していった。家族は病人に、医師を呼んで瀉血をしてもらうよう勧めた。そして、医師が病人のもとを訪れる予定だった4日目が近づいたある夜、先に述べたテオドリトス――彼はその前に自身の病から癒やされていた――に幻視が現れた。　彼は、病に伏している貴族の家に入ってくる三人の男を見ました。そのうちのひとりを、自分が病気のときに目にした聖サンプソンだと見分け、他の二人は、無償で治療を行う医師コスマスとダミアンだろうと考えました。テオドリトスは彼らに尋ねました。

「どこへお出かけですか？」

すると彼らは、愛を込めて彼を見つめながら、こう答えた。

「貴族のレウのところへ。」

これに対し、テオドリトスは彼らにこう言った。

「諸君、彼は重い病に苦しんでいることをご存知か。明日、医師たちが彼の傷ついた足を治療するために訪れるのだ。」

すると、聖人たちはテオドリトにこう言った。

[4653] コンスタンティノープルの大聖堂。ユスティニアヌス帝の治世下で再建された。その見事な建築様式と豪華な装飾により、世界でも屈指の建造物の一つに数えられている。

[4654] スパファリオスとは、武器持ちの侍従を指す宮廷の官位である。

「そんなことはあってはなりません。金曜日に私たちが再び彼の元へ行き、彼を癒やして差し上げます。」

眠りから覚めると、テオドリトスは直ちに病人のもとへ行き、自分の見た幻について語った。レフはその言葉を信じ、医師を受け入れなかったが、すべての希望を神に託し、絶えず祈りを捧げながら金曜日を待ち続けた。　そして、案の定、金曜日になると、彼の患っていた足は突然癒やされ、もう一方の足と同じように健康になり、いかなる治療も全く必要としなくなった。健康を取り戻したと感じたレフは、直ちに聖サムソンの棺のもとへ行き、同行者たちと共に彼に感謝の祈りを捧げた。

数多くの奇跡を通じて御自分の聖人サンプソンを称え、神はまた、聖人の棺から流れ出る癒しの油によっても彼を栄光に輝かせられた。あらゆる病に苦しむ人々は、この油を塗ることで健康を取り戻した。　この聖油の治癒効果を、前述の高官レフ自身も体験した。彼は、ある病気から回復した後、再び全身を病に冒され、まるで麻痺したかのように病床に横たわり、体のあらゆる部位が動かせなくなっていた。　しかし、聖人の棺から流れ出る聖油を全身に塗られたとき、彼は即座に癒やされた。また別の時には、目に病を患ったが、聖サンプソンの棺から取り出した聖油を目に塗ったところ、再び健康を取り戻した。

聖人が彼に幾度も施した癒やしへの感謝の印として、貴族レフは、当時やや資金が乏しくなっていた聖人の宿舎の運営を引き受け、自身の領地から十分な資金を拠出し、その様々な必要を満たした。

ここで、当時の宿舎の責任者がエネシウスという人物であったことにも触れておくのは不適切ではないだろう。彼は怠惰で職務に無頓着な男であり、病人や旅人のあらゆる必要を疎かにしていた。　ある夜、聖サムソンが夢の中ではなく、まるで現実のように彼の前に現れ、杖で彼を打ちながら、怒りを込めてこう言った。「なぜお前は職務を怠り、旅人や病人の必要を顧みないのか？」

その打撃により、エネシウスはひどく病に倒れ、声を失って口がきけなくなった。また、聖人の杖によって負った傷のため、その体は青ざめてしまった。　翌朝、多くの人が彼を訪ねてきたが、エネシオスは彼らに何も話すことができず、ただ殴打で青ざめた自分の体を指さすばかりだった。その後、紙と杖を取り、自分の怠惰と不注意のせいで聖人からどのように罰せられたかを紙に書き記した。この出来事を知った貴族レウスは、病床の彼を見舞いに訪れた。　しかし、彼の体が殴打によってすっかり青あざだらけになっているのを見て、彼は涙ながらに聖サムソンに祈り始めた。

「神に愛された聖人よ――と彼は祈った――あなたは私の信仰と、あなたへの熱意をご存知です。どうか今、私の祈りを聞き入れてください。ここに、あなたが懲らしめたエネシウスがいます。彼は自分に起きた出来事を羊皮紙に書き記し、自らの罪と、あなたが彼に与えた戒めを自ら告白しました。　どうか彼を病から癒やし、あなたの奇跡が広く知れ渡り、神の御名が賛美されますように。」

貴族レフがこのように祈ると、エネシオの舌が解け、口が開き、彼は自分に起こったすべてのことを詳しく語り、それ以来、完全に改心した。

その後、敬虔な男たちが互いに相談し合い、総主教のもとを訪れて、宿屋と教会を聖別するよう願い出た。そして、実際にその通りに行われた。また、旅人の安らぎと病人の受け入れのために、新しく建てられた教会のそばに、別の家と病院が設けられた。

しばらくして、[4655] の旅人宿の建設責任者となったエウストラティオスは、病人や旅人の世話を怠り、さらに吝嗇家でもあった。ある日、彼は何日も病人に聖油を与えなかったため、神の罰として目に病を患うことになった。　彼の友人の一人、レフという名の男――先ほど話した人物ではなく、同じくその名を持ち、宿屋で働いていた別の男――が彼にこう言った。

[4655] 建築監督――修道院の責任者。

「病人と旅人たちに、相応の量の聖油を与えなさい。そうすれば、あなたの目は癒やされるでしょう。もし私の言葉を信じないなら、私が言ったことの証拠として、領収書をお渡ししましょう。」

そう言うと、彼はエウストラティオスに次のように書き送った。

「私、レフは、聖なる奇跡行者サムソンを頼みとし、彼への揺るぎない信仰に支えられて、あなたに保証人となる。もしあなたが貧者や旅人たちに十分な量の聖油を与えるならば、あなたの目は病から癒されるだろう。なぜなら、聖サムソンがあなたに健康を授けてくれるからだ。」

このような誓約書を受け取り、病人と旅人に対して必要な量の聖油を与えることを約束したエウストラティオスは、その日のうちに目の病が癒やされた。しかし、彼は生来けちだったため、再び聖油を与えることを拒んだ。するとある夜、尊者サンプソンが現れ、怒りを込めて彼にこう言った。

「なぜ私の忠告を無視して、私を試すのか？」

この幻影に恐怖を覚えたエウストラティオスは、朝になると友人のレフを呼び寄せ、大量の聖油を渡して、聖サムソンに彼のために祈り、神の御心にかなう聖人に自分の罪の赦しを請うよう頼んだ。

王の顧問の一人、バルダという名の貴族が、癰（よう）を患い、そのせいで胸に大きく治癒不可能な潰瘍ができた。彼は長い間、その病による激しい苦痛に耐えていた。　その間、聖殉教者モキアの記念日が訪れた。病人のそばにいた医師たちや家来たちは皆、聖殉教者の教会へ徹夜祈祷に出かけた。　一方、病人は寝台に横たわり、祝日に教会へ行き、その聖殉教者の教会にある尊者サンプソンの奇跡を起こす聖棺に拝礼できないことを深く嘆いていた。その時、ある威厳ある老人が彼の前に現れ、こう言った。

「起きなさい！」

すると、病人はこう言った。

「どうして私が立ち上がれるでしょうか？　重い病気のせいで、体のすべての部位が衰弱してしまっているのです。」

しかし、長老は再びこう言った。

「言っておく。立ち上がって、今祝祭が行われている聖殉教者モキアの教会へ行きなさい。そこで聖サンプソンの棺の前で祈りなさい。」

そう言うと、老人は姿を消した。

すると病人は、突然、体の各部に力がみなぎるのを感じ、少しずつ寝台から起き上がり始めた。その瞬間、彼は潰瘍の痛みが消えていることに気づいた。　そして、傷口から包帯や絆創膏を外してみると、潰瘍が完全に治っているのがわかった。喜びに満ちたその貴族は、祝祭用の服を着て教会へ向かった。彼が予期せず癒やされているのを見て、教会にいた人々は皆驚き、神を賛美した。　当時、誰かが何らかの病に倒れると、聖サンプソンの病院へ運ばせるよう命じ、そこで自らの信仰によって健康を取り戻すのが慣習となっていた。ある長老の奴隷が水腫を患った際も、長老は彼を聖サンプソンの病院へ送り出した。　そこで数日間過ごしたが、病状に改善が見られなかったため、その奴隷は主人の家に戻った。　長老は彼を見て、その不信仰を激しく怒り、再び彼を病院へ送り、聖人の棺から流れ出る聖油を求め、それに塗るよう命じた。奴隷はそこへ向かい、聖サンプソンの病院で一晩を過ごし、そこから健康な姿で戻ってきた。　彼がどのようにして回復したかについて、その奴隷は次のように語った。「その夜、私は夢の中で聖サンプソンが現れるのを見た。彼は私の腹に手を触れながら、『ここから立ち去れ、お前はもう元気だ』と言った。私はすぐに目を覚まし、体が元気になったのを感じた」。

教会の奉仕者の妻イリーナも、同じ病に苦しんでいた。彼女は眠りの中で、聖サムソンが聖コスマスとダミアノスと共に彼女の元を訪れ、彼女に触れる姿を幻視した。その後、彼女は健康を取り戻した。

これらをはじめ、他にも多くの奇跡が起こり、聖サムソンの祈りによって癒しがもたらされた。それによって、その聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神は栄光を受けられ、私たちからも、今、そして常に、世々限りなく、神に誉れと栄光、礼拝と感謝が捧げられるのである。

トロパリオ、第8調:

あなたの忍耐によって、尊き父よ、あなたは報いを得られました。絶え間なく祈りを捧げ、貧しい者を愛し、彼らを慰めた方よ。しかし、慈悲深き祝福されたサンプソンよ、キリスト・神に祈り、私たちの魂が救われますように。

コンダク、第8調:

万全の医者であり、祈りの聞き手として、あなたの神聖な御手へと駆け寄る者たちよ、神に賢き尊きサムソンよ、愛をもって集い、詩篇と賛美歌に喜びつつ、キリストを賛美します。あなたにこのような癒しの恵みをお与えになる方を。

聖セヴィルの記念日[4656]

記念日：6月27日

トゥデラ地方（[4657] ）の二つの山の間、インテロクレアと呼ばれる谷に、私たちの至聖なる主の母、神の母であり永遠の処女マリアの教会がありました。その教会の司祭はセヴィルで、彼は驚くべき、神に喜ばれる生活を送る人物でした。　ある地元の住民が病に倒れ、死が近づくと、急いで使者をその司祭のもとへ送り、一刻も早く自分のもとに来て、犯した罪の告白を聞き、死を迎える前にその罪を赦してほしいと伝えた。その時、セヴィルはそのぶどう畑にいて、房の剪定をしていた。使者の願いを聞いた彼は、こう言った。

「まずお前たちだけで行ってくれ。私はすぐに追いつくから。」

しかしその後、まだ収穫すべき房がたくさん残っているのを見て、残りを収穫するために少し待とうと思った。仕事を終えると、彼は病人のもとへ向かった。道中、病人の元から帰ってきた人々に会い、彼らは彼にこう言った。

「神父様、なぜ遅れたのですか？　もう苦労する必要はありません。その人はすでに亡くなってしまいましたから。」

これを聞いて、長老は恐怖に震え、自らを死者の殺し屋だと責めながら、苦々しく泣き出した。泣き止むことなく、彼は死者の遺体が横たわる家にたどり着き、涙を流しながら寝台の前にひれ伏し、嗚咽しながら頭を地面に打ちつけた。　その際、そこにいた者全員の耳に聞こえるように、彼はその男の死について自らを責めた。彼がそうして泣きじゃくっていると、死者は突然生き返った。これを見た周囲の人々は、起こった奇跡に深く驚き、死者の復活を喜び、喜びのあまり涙を流した。それから彼らは尋ねた。

「あなたはどこにいたのですか？　そして、肉体から離れてしまったあなたの魂は、どのようにして再び肉体に戻ったのですか？」

彼はこう答えた。

[4656] この物語は、聖グリゴリウス・デュオスロスの著書『対話集』（第12章）から引用されたものである。

[4657] この地域は、イタリア中部、ヴァレリア州のレアテ山とアメテリウム山の間に位置していた。

「あるエチオピア人[4658] ——彼らは非常に恐ろしく高慢で、鼻の穴や耳から炎を噴き出していた——が、私を捕らえて、恐怖と戦慄に満ちたある暗い場所へと引きずり込んだのだ。　しかし、突然、まばゆいばかりの若者が現れ、他の光を放つ者たちと共に私たちに向かって歩いてきた。彼は私を引きずっていた者たちに向き直り、威厳をもってこう言った。「彼を返せ。長老セヴィルが彼のために泣いているからだ。この男の涙ゆえに、主はこの死者に再び肉体における命をお与えになるのだ。」

この話を聞いたセヴィルは、言葉に尽くせない喜びをもって地面から立ち上がり、神に感謝を捧げた。　その後、復活した者に、いかにして神に悔い改めを捧げるべきかを教え、その告白に耳を傾けて罪を赦し、キリストの聖体と聖血を授けた。その後、復活した者はさらに七日間、絶えず神に祈りを捧げながら生き、八日目に喜びをもって主のもとへ帰った。

さて、神が御自身の長老セヴィルをいかに愛されたかを知ろう。神は彼を悲しませることを望まれず、すぐに聖人の祈りを聞き入れ、その願い通りに成し遂げられたからである。ここから、長老セヴィルもまた、心から主なる神を愛し、生涯を通じて熱心に神に仕えたことが明らかになる。　主に仕えた後、彼はこの世での務めを終え、父と子と聖霊、すなわち三位一体の唯一の神を賛美する聖人たちの群れと共に、神の栄光の御座の前に立ちました。その神に、私たちからも永遠の栄光がありますように。アーメン。

7月11日

6月28日（旧暦）

この日は、1353年頃に帰天した、ヴァラームの奇跡行者である聖セルギイと聖ゲルマンの記念日である。

聖殉教者キュロスとヨハネの尊い遺骸の移送

記念日：6月28日

これらの聖なる殉教者、キルとヨハネは、ディオクレティアヌス帝の治世[4659]　、1月31日に、大都市アレクサンドリアから12ポプリシュ離れたコノペの町で、キリストの御名のために殉教した。彼らの苦難に満ちた死後、キリスト教徒たちは密かに彼らの聖なる遺体を運び出し、尊厳をもって埋葬した。　これらの聖なる殉教者たちの癒しの聖遺物は、（彼らの殉教の日から）長い時が経過した後に発見された。それはまさに、正統なキリスト教徒たちがギリシャ人の偶像崇拝者たちに勝利し、恐れずに至る所で教会を建て始めた時期のことであった。

とりわけ、キリスト教徒たちはテオドシウス大帝の時代から、恐れずに教会を建て始めた。テオドシウス大帝[4660] は、エジプトの砂漠で修業に励んでいた聖なる父たちの祈りによって、西方の王マクシムス[4661] とその全軍を打ち破り、これらの父たちに援助を求める使者を派遣した。 エジプトで修行に励んでいた聖なる父たちの中でも、セヌフィウスという名の、奇跡によって名声を博し、スキト（隠遁所）に滞在していた人物について言及すべきである。　この聖父について、皇帝はアレクサンドリア総主教テオフィロスに書簡を送り、敵との戦いで彼の祝福と祈りによって力を得るため、セヌフィオスをコンスタンティノープルへ派遣するよう要請した。　テオフィロスは皇帝の願いを叶え

[4658] 聖書では、明るい天使の力に対立する、邪悪で陰鬱な悪霊をしばしば「エチオピア人」と呼んでいます。

[4659] 284年から305年まで、ローマ帝国の東部を統治した。

[4660] 379年から395年まで在位した。

[4661] 厳密には王位継承者。

るため、自らその隠修院を訪れ、尊いセヌフィウス神父に、コンスタンティノープルのテオドシウス皇帝のもとへ赴くよう懇願した。しかし、セヌフィウスは決して自分の小部屋から出ることを望まなかった。　ついに、総主教の執拗な懇願の末、セヌフィオスは自分のハミドと杖を手に取り、東の方角に向かってそれらを天へと掲げた。そして、天を仰ぎ見て、こう言った。

「主なる全能の神よ！　謙虚にあなたに祈ります。もし私がそこへ行っていたならば、あなたの憐れみによって私に与えてくださったであろうその力を、このクラミデスとこの杖に与えてください。」

このように祈りを捧げた後、セヌフィウスはマントと杖を総主教に手渡し、こう言った。

「私の代わりにこれを王のもとへ送り、戦いの際にはこのマントを身にまとい、杖を手に取り、大胆に自軍の先頭に立って敵に向かって進み出れば、神の御力を目にするだろう、と王に書き送ってください。」

総主教はマントと杖を王のもとへ送り、聖人の言葉を伝えた。

王は、送られてきたものを信仰をもって受け入れ、聖人の言葉通りにすべてを行った結果、敵に対して輝かしい勝利を収めた。この勝利を記念し、また聖セヌフィオスを偲ぶため、アレクサンドリアの住民たちは、高い台座の上に立つ王の像を建立した。　その像では、王は修道士のハミドゥを身にまとい、手に杖を持っていた。そして毎年、アレクサンドリアの住民たちは、神に感謝を捧げながら、その勝利の日を盛大に祝った。

まさにこの時から、キリスト教の広がりがますます進むにつれて、信者たちはアレクサンドリアやエジプト全土に教会を建て始めた。　そして、総主教テオフィロスがコノペに聖使徒たちの名に因む大教会を建設しようと望んだ際、奇跡を行う聖人キルとヨハネの聖遺骨が発見された。これはテオドシウスの死後、その息子アルカディウスの治世中に起こったことである。その聖遺骨の移送については、キリルの伝記に記されている。

「コノパから二ポプリシュの距離にある場所に、マヌフィンと呼ばれる場所があった（かつては集落であった）。ここには、かつて悪魔の住処であった古代の神殿があり、多くの不浄な霊が棲みついており、この場所はすべての人々に恐怖を与えていた。　総主教テオフィロスは、存命の頃、その　場所を悪魔から清め、神の栄光を讃えるために聖別したいと考えていたが、他の用事に気を取られ、すでに生涯の終わりが近づいていたため、聖人はその意図を実行に移すことができなかった。聖キリルは、テオフィロスの後を継いでアレクサンドリアの主教座に就くと、テオフィロスの意図を実行に移すことを決意し、神に熱心に祈り、天からの助けと、マヌフィンから不浄な霊を打ち負かし、追い出すための力を与えてくださるよう願った。　すると、主の天使が幻の中で彼に現れ、悪魔の力をそこから追い払うために、聖殉教者キュロスとヨハネの尊い遺骨をマヌフィンへ移すよう命じた。聖キリルはその通りにし、聖[4662]　の遺骨をマヌフィンへ移し、彼らの名に因んでそこに教会を建てた。　その直後、邪悪な霊たちはその地から永遠に去り、その場所は殉教者の聖遺物から与えられる癒しの源となった。

ここで、聖なる奇跡行者であるキロスとヨハネによって成し遂げられた奇跡についても、簡潔に言及しておく必要がある。

アレクサンドリア総主教エウロギオス聖下[4663]　の時代、都市長官ユリアヌスの息子アモニオスは、首に内側に広がっていく痛みを伴う腫れ物を患っていた。医師たちはこれをスクロフルスまたはストルマ[4664]　と呼んでいた。日ごとに大きくなり、膿んでいくこれらの腫れ物は、彼の首に多大な負担をかけ、死の危機をもたらしていた。　多くの熟練した医師が呼ばれたが、患者は彼らから何の緩和も得られなかった。父と息子は深く悲しみに沈み、それらの医師を見限って、聖なる奇跡行者であ

[4662] 神の聖人キルとヨハネの聖遺骨の移送は、412年頃に実施された。

[4663] エウロギオスは579年から607年まで総主教を務めた。

[4664] おそらく、皮膚にできたカルブンクルスや病的な腫瘍のようなものだったと思われる。

るキルとヨハネに助けを求めた。彼は彼らの尊い聖遺物の前で涙ながらに祈りを捧げ、息子に健康を授けてくれるよう懇願した。　すると聖人たちは幻の中で現れ、若者にまず富や名声への執着を捨て、謙遜のしるしとして彼らの聖堂の塵を掃き出すよう命じた。その後、蝋とパンを混ぜて湿布を作り、それをもって病人の首と喉頭に貼るよう命じた。　そして、これらすべてが行われるやいなや、すぐに吹き出物は治まり、アモニウスは、この無償の医師たる聖人たちの祈りによって健康を取り戻した。

しばらくして、その同じアモニウスは、聖人たちの忠告を忘れ、高慢になり、再び別の病に罹った。それは、彼の不従順に対する罰であった。　彼は胃の病に苦しみ始め、その病は極めて重く、そのせいで食事も飲み物も全く摂取できず、口に入れたものはすべて吐き出されてしまった。そこで彼は再び、よく知る医師である聖殉教者キルとヨハネに助けを求め、涙ながらに彼らに祈り始めた。すると、これらの聖人たちは幻の中で彼に現れ、まず彼の傲慢さを戒め、次に高価な衣服を脱ぎ捨て、麻の衣を身にまとうよう命じた。そして、水瓶を手に取り、病に伏している兄弟たちや貧しい人々の渇きを癒やすために、冷たい水を運ぶよう命じた。　アモニウスがこれらすべてを誠実に実行すると、直ちに聖人たちが現れ、彼らのランプの油と、聖遺物箱のそばで灯されていたろうそくの蝋を取って、湿布を作り、それを自分の腹に当てるよう命じた。これらすべてを行った後、アモニウスは健康を取り戻した。

アレクサンドリア出身のテオドールという男は、以前から両目を失明していたが、マヌフィンの教会と、聖なる殉教者たちの多大な治癒力を持つ聖遺物の前に連れてこられた。彼はそこで、自分の失明が癒やされるよう熱心に祈りを捧げた。　すると、聖人たちが幻として彼に現れ、教会近くを流れる泉で顔を洗うよう命じた。　彼はその場所へ行き、顔を洗い、タオルで顔を拭いた途端、視力が回復し、まるで鱗のようなものが目から剥がれ落ちてタオルに付着したのを感じた。フェオドールは喜びながら教会へ戻り、皆にそのタオルに付いた失明の痕跡を見せた。

もう一人の男、カロスという名の者は、その名にふさわしく、その生き様も美しい[4665]であり、偶然階段から転落し、すねを粉々に砕いてしまい、ひどく苦しんでいた。　この男は多くの医師に助けを求めたが、彼らからは何の助けも得られなかった。そこで彼は、揺るぎない信仰をもって、無償で治療を行う医師であるキルとヨハネに助けを求めた。彼らのランプの油を足に塗ると、患者は即座に癒やされた。

マイユマ出身のイシドールという人物[4666]は、肝臓の病に苦しんでいた。その肝臓は腐り始め、血へと変わり、炎症を起こし、血と共に吐き出されていた。その男は、いかなる　医師からも安らぎを得ることができなかったため、これらの聖なる殉教者たちの多大な治癒力を持つ聖遺物に助けを求めた。　聖人たちは彼のもとに現れ、もはや夢の中の幻影ではなく、はっきりと姿を現し、レモンの一部を味わわせてくれた。彼らの手からレモンを受け取った彼は、誰から受け取ったのか分からなかった。彼は、それが殉教者の尊い聖遺物を拝むために集まった人々の一人だと思っていたのである。　病人が与えられたものを口にした途端、彼の胃はまるで反乱を起こしたかのように荒れ狂い、肝臓を食い荒らしていた大きな虫を吐き出した。そして、無償の医師であった聖人たちは姿を消した。イシドールはその時から健康を取り戻し、神とその聖なる御使いたちに感謝を捧げた。

フィロポン市の長官であるミナという人物[4667]は、激しい高熱に苦しんでいた。この病に加え、胃が硬直してしまい、排泄機能が停止してしまった。病人が口から摂取したあらゆる薬は、彼に何の安らぎも与えなかったばかりか、胃の中に留まることで、さらに胃の負担を増大させていた。　この男は二週間も苦しんだ。病状は極めて深刻で、もはや医師の助けを絶望していた。そこで、無償の

4665 「カロス」はギリシャ語で「美しい」を意味する。

4666 マイユマは、パレスチナの港湾都市であり、エルサレムからほど近い同国の古代都市ガザの港として機能していた。聖コスマの司教としての活動が行われた場所として知られている。

4667 エジプトの都市の一つ。

聖なる医師であるキレとヨハネのことを思い出し、ミナは寝台ごとマヌフィンにある彼らの多効な聖遺物の元へ運ばれるよう命じた。　その時、彼は聖遺物の前で涙を流しながら祈りを捧げた後、うとうとして眠りについたところ、聖人たちが現れてイチジクを口にさせてくれた。眠りから覚めると、彼は自分のすぐそばの寝台の上にイチジクがあるのを見つけた。それを食べると、たちまち胃の病は治り、彼は健康を取り戻した。

もう一人のミナは、かつてのアサイール[4668] のように軽やかで足が速く、*「野のヤギのように」*（列王記下2:18）であったが、足がひどく病んでしまい、全く歩くことができなくなり、長い間床に伏していた。というのも、彼の足はひどく腫れ上がっていたからである。　このミナは、寝台ごと自分を聖なる奇跡行者であるキルとヨハネのもとへ運ぶよう命じた。　そして、聖人たちの尊い遺骨のそばで灯っていたランプの油を足に塗ると、たちまち元気になって歩くことができるようになった。彼の足は完全に癒やされたのである。このすべてに対して、彼は神と神の聖なる御使いたちに感謝を捧げた。

テオドラという名の女性が、ある時水を飲んだ際、気づかずに小さなヒキガエルを飲み込んでしまった。そのヒキガエルは彼女の腹の中で成長し始めた。　当初、そのヒキガエルは小さかったため、テオドラに与える苦痛もさほどではなかった。しかし、そのヒキガエルが成長して大きくなると、非常に激しい痛みを引き起こすようになり、その激しい苦痛のせいで、彼女は昼夜を問わず全く安らぎを得られなくなった。　彼女は激しく叫び、地面に倒れ込んだが、誰も彼女を助けることはできず、彼女の病気が何であるかさえ誰も見当がつかなかった。多くの人は、彼女が悪魔に苦しめられているのだと考えた。ついに、彼女は聖なる奇跡行者であるキルとヨハネのもとへ連れて行かれた。二人は夜、彼女の前に現れ、食事を摂る前に大量の水を飲むよう命じた。　女性はその通りにした。するとすぐに胃が波打つように動き、大きなヒキガエルを吐き出し、健康を取り戻した。これを見た者たちは皆驚き、神と神の聖なる御使いたちを賛美した。

テオドラという女性の後、あるテオドールという名の男性も聖人たちに助けを求めた。このテオドールは、悪意ある者たちから与えられた毒を誤って飲み込み、医師の助けも得られず、ひどく苦しんでいた。　このテオドロスが涙ながらに自身の癒やしを祈っていると、聖人たちが幻視の中に現れ、ギリシャ語で「スコペンドラ」[4669] と呼ばれるある動物を食べるよう命じた。 幻視から目覚めたテオドールは、それが悪魔の幻影だと思い、十字の印を切って身を守った。その後、再び聖人たちに祈りを捧げ、癒やしを懇願した。　次の夜、再び聖人たちがテオドールに現れ、同じことを行うよう命じた。しかし、彼は今回も聖人たちを信じようとはしなかった。なぜなら、その動物は薬効があるのではなく、有毒であるとされていたからである。三度目も聖人たちの現れは同じであったが、テオドールは今回も、それが悪魔の惑わしだと考えて、彼らの言葉に従わなかった。　ついに四日目の夜、聖人たちはもはや夢の中の幻影としてではなく、現実の世界でテオドールに現れた。聖人たちはテオドールに哀悼の意を表し、こう言った。

「なぜ我々の言葉を信じないのか？　さあ、急いで起き上がり、我々の泉へ行きなさい。そこで、食べられるものを見つけたらそれを食べなさい。それがあなたにとって真の薬となるだろう。」

テオドールは、聖人たちの出現が真実であると信じ、夜明けとともに泉へと向かい、そこで地面に転がっていた小さなキュウリを見つけた。　テオドールはそれを手に取り、美味しそうに味わった。そして、キュウリの最後のひと口を口に入れようとしたとき、その中に「スコペンドル」と呼ばれる動物の残骸があることに気づいた――というのも、彼はすでにそのキュウリの中にあったその動物をほとんどすべて食べてしまっていたからである。 ひどく恐怖を感じた彼は、 と叫びながらキュウリの残りを地面に投げ捨て、その後、吐き気を催し、キュウリとあの動物とともに、体内にあった

[4668] アサイール――ダビデの妹サルイの息子であり、軍司令官ヨアブの兄弟。ダビデの主要な将軍の一人。
[4669] トカゲのような生き物。

毒をすべて吐き出した。その後、フェオドールは完全に健康を取り戻し、教会へ赴くと、自分を癒やしてくれた聖人たちの聖遺物に感謝の意を込めて頭を下げた。

マリアという名の女性が、バビロンからマヌフィンへ、聖なる奇跡行者たちの聖遺物を訪ねてやって来た。彼女は8歳の息子を連れていたが、その子は悪魔の悪巧みによって、口から舌を引き抜かれてしまっていた。 その少年の舌の長さは一ペイ[4670] あり、通常の人間の舌よりもはるかに大きく、非常に奇妙な姿をしていた。太く、黒く、悪臭を放ち、それを見る者すべてにとって不快なものであり、常に黒い唾液を垂らしていた。　この少年は、聖人の棺の前で偶然地面に転び、そこにあった大理石に舌を打ち付けた。すると直ちに、その舌は悪魔の狡猾さから解放され、元の位置に戻り、通常の大きさを回復し、こうして少年は癒やされた。

聖人の遺骨の前には、エジプト出身の水腫を患っていたエウゲニウスという男が連れてこられた。この病のため、彼の全身はむくみ、腹部はひどく膨れ上がっていた。聖人たちはこのエウゲニウスに幻視の中で現れ、その腹に手を触れ、こう言った。

「エウゲニウスよ！ 立ち上がり、健やかな身で家へ帰りなさい。」

エウゲニオスは立ち上がると、たちまち浮腫の重苦しさから解放され、完全な健康を取り戻した。数ある奇跡のうち、これらわずかな聖キルと聖ヨハネの無償の奇跡を思い起こし、彼らにこのような恵みを授けてくださった、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を賛美しよう。アーメン。

トロパリオ、第5調:

御自身の聖なる殉教者たちの奇跡によって、私たちに破れぬ防壁を授けてくださったキリスト神よ、彼らの祈りによって異邦人の陰謀を打ち砕き、王国の笏を強め給え。まことに、唯一の善き方、人を愛する方よ。

コンダク、第3調:

神聖なる恵みの賜物である奇跡を受け入れた聖人たちは、この世で絶えず奇跡を行われ、目に見えぬ御業によって私たちのあらゆる情欲を癒やしてくださいます。神智のキレよ、栄光あるヨハネと共に、あなた方はまさに神聖なる医師なのです。

聖パウロの記念日

記念日：6月28日

聖パウロはコリントの町[4671] 出身で、両親はキリスト教徒であった。敬虔に育てられ、若き頃から神を愛した彼は、ある修道院に入り、そこで修道衣をまとい、修道生活に入った。彼は断食の修行に多大な労力を注ぎ、熟練した修行者であった。　このパウロに、淫行の悪魔が襲いかかった。ある夜、聖パウロが祈りを捧げていると、悪魔が現れてこう言った。

「もし、たとえ一度だけでも、その肉欲を満たさなければ、私は容赦なくお前を襲うぞ！」

しかし、パウロはイエス・キリストの名によって悪魔を戒め、十字架の印で追い払った。

[4670] 1パディは4または5ヴェルシュクに相当した。

[4671] ギリシャ最古の都市であるコリントは、古代アルゴリス地方の北部、コリント湾の岸辺に位置していた。

その後、悪魔はある娼婦に、彼女が最近産んだ赤ん坊を聖人に連れてくるよう仕向けた。その女は赤ん坊を聖人の寝台に寝かせると、彼にこう言った。

「私はあなた自身から身ごもり、この子を産んだのです。」

長老は喜びをもってその赤ん坊を受け入れた。一方、異端者たちは長老のもとへやって来て、彼の手を後ろ手に縛り、赤ん坊を長老の寝台に縛り付け、嘲笑しながら町中を引き回した。人々の真ん中に立ち、手で合図を送ると、パヴェルは言った。

「兄弟たちよ、よく聞いてください！この赤ん坊に尋ねてみましょう。彼の父親が誰なのか、彼に語らせてみましょう。」

（その赤ん坊は生まれてまだ数日しか経っていなかった）。そしてパウロは赤ん坊に言った。

「教えてくれ、お前の父親は誰だ？」

赤ん坊は、おむつを引き裂くと、ある鍛冶屋を指さして言った。

「あの人こそが私の父であり、修道士パウロではない。」

これを聞いた人々は、長老に頭を下げ、許しを請いました。

この時から、神は尊者パウロに癒しの賜物を授けられた。パウロは病人に手を置くと、彼らは健康を取り戻した。

七十余年を生き、尊者様は、献身的に仕えてきた主[4672] のもとへ召され、聖人の列に加えられた。聖人たちと共に、彼は三位一体の唯一の神を賛美しており、私たちからも、その神に永遠の栄光が捧げられる。アーメン。

7月12日

6月29日（旧暦）

同日は、聖ペトロ、オルディン公の王子、ロストフの奇跡行者（1290年6月29日没）の記念日である。

栄光に満ち、万人に称えられる至高の使徒ペトロの聖人伝、功績、および受難

記念日：6月29日

最初に召された使徒アンデレの兄弟である聖使徒ペトロは、主イエス・キリストに召されるまではシモンという名を持ち、シメオンの部族に属するユダヤ人イオナの息子であり、パレスチナのガリラヤ地方にある、取るに足らずあまり知られていない小さな町ベツサイダ出身であった。　彼は、聖使徒バルナバの兄弟であるアリストヴロスの娘を妻に迎え、彼女との間に一人の息子と一人の娘をもうけた。シモンは純朴で学識のない人であったが、神への畏れに満ちており、主のすべての戒めを守り、「すべての行いにおいて、主の御前で非の打ち所のない生活を送っていた」。　シモンの生業は漁業であった。貧しい身でありながら、この手作業によって家族を養い、妻や子供たち、義母、そして年老いた父イオナを養っていた。

一方、シモンの兄弟であるアンデレは、この世の虚しさを軽んじ、独身生活の道を歩み始めた。彼は、悔い改めを説いていた聖ヨハネ・バプテスマのもとへヨルダン川へ赴き（マタイ3:1–17）、その弟子となった。　師がキリスト――メシア――について証しするのを聞き、とりわけ、主を指さ

[4672] 聖パウロの没年については、正確には分かっていない。

して*「見よ、神の小羊だ」*（ヨハネ1:29–36）と語った言葉を耳にすると、アンデレはヨハネのもとを離れ、洗礼者ヨハネのもう一人の弟子と共に主の後を追って行き、主に向かってこう尋ねた。

「ラビ、どこにお住まいですか？」

「行って、見てごらん」と、救い主は彼らに答えられた。

彼らは行って、主がどこにお住まいになるかを見、その日一日、主のもとにとどまった（ヨハネ1:38–39）。

翌朝、アンデレは兄弟のシモンのもとへ行き、彼にこう言った。

「私たちはメシア、キリストを見つけました。

そして、彼をイエスのところへ連れて行った。イエスは彼を見て、こう言われた。

「あなたはヨナの子シモン。あなたはキファと呼ばれることになる。それは『岩』（ペトロ）という意味だ。」[4673]（ヨハネ1:41–42）。するとたちまち、聖ペトロは主への愛に燃え上がり、世界を救うために神から遣わされた真のキリストとして、主を信じるようになった。　しかし、彼は依然として家を離れず、生計を立てるための仕事を続け、家族に必要なものを提供していた。この点において、年老いた父のために、時折、シモンの兄弟であるアンデレが彼を手伝っていた。こうして彼らは、主から使徒としての奉仕に召される時まで暮らしていた。

ある日、洗礼者ヨハネが投獄された後、主イエス・キリストはガリラヤ湖（ティベリアス湖、あるいはゲネサレト湖としても知られる）のほとりを通りかかると、海に網を投げ入れているペトロとアンデレを見て、彼らにこう言われた。

「わたしについて来なさい。そうすれば、あなた方を人の漁師にする」（マタイ4:18–20）。

主が彼らをどのような漁師にしたいと願っておられたのか――そのことについて、主は奇跡的な漁によってあらかじめ示された。シモン――ペテロ――の舟に乗り込んだキリストは、彼に網を投げるよう命じられた。それに対し、ペテロはこう答えた。

「先生！　私たちは一晩中働きましたが、何も捕れませんでした。しかし、あなたの言葉に従って網を投げます。」

そうすると、彼らは非常に多くの魚を捕らえ、網が破れそうになるほどでした。これは、使徒たちの霊的な漁の予型であり、使徒たちは神の言葉という網を用いて、多くの民を救いへと導くことになっていたのです。この奇跡を目撃したシモン・ペテロは、イエスの膝元にひれ伏してこう言いました。

「主よ、私から離れてください。私は罪深い者ですから。」

彼と、その漁に同行していた者たちは皆、彼らが捕らえた魚の数に恐怖を覚えた。主から離れてほしいと願うペテロに対し、救い主は逆に、自分に従うよう呼びかけた。

「わたしに従いなさい。これからは、かつて死のために魚を捕っていたように、命のために人を捕えるようになるのだ。」

この時から、聖使徒ペトロは、弟のアンドレイや、その他、まさに召されたばかりの弟子たちと同様に、キリストに従うようになった。主は、その純真さゆえに使徒ペトロを愛しておられた。主はシモンの貧しい家を訪れ、そこで、熱にうなされていたシモンの義母に手を触れて癒やされた。そして朝、主が目を覚まして祈りのために人里離れた場所へ去られたとき、ペトロと彼と共にいた者たちは、主のいない時間を一時間たりとも耐えられず、愛する師を懸命に探し求めて後を追った。そして主を見つけると、こう言った。

「主よ、皆があなたをお探しです」（マルコ1:30–37）。

[4673] キファはシリア語で「石」を意味する言葉であり、ギリシャ語のペトロス（「ペトラ」＝岩、石）も同様の意味を持つ。

聖使徒ペトロは主から離れることなく、絶えず主のそばに留まり、主の御姿と、「蜜よりも甘い」主の御言葉を喜びとしていました。彼は、キリストが神の子であることをはっきりと示す、主の多くの偉大な奇跡を目の当たりにし、疑いなくキリストを信じました。　そして、心で「真理」を信じたように、口でも「救い」を告白した。主がケサレア・フィリッポの地方[4674]　に来られたとき、弟子たちにこう尋ねられた。

「人々は、わたし、すなわち人の子を、誰だと思っているか。」

彼らは答えた。

「ある者は洗礼者ヨハネだと言い、ある者はエリヤだと言い、またある者はエレミヤか、あるいは預言者の一人だと言っています。」

主は彼らに言われた。

「では、あなたがたはわたしを誰だと思っているのか。」

シモン・ペテロが答えた。

「あなたは、生ける神の御子、キリストです。」

この使徒の真実な告白に対し、主は祝福と約束を授けられた。主は聖ペトロに言われた。

「シモン、ヨナの子よ、あなたは幸いである。これは、肉と血があなたにこれを明らかにしたのではなく、天におられるわたしの父が明らかにされたからである。　また、わたしはあなたに言う。あなたはペトロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を築く。地獄の門もそれを打ち破ることはできない。そして、天の御国の鍵をあなたに与える。あなたが地上で縛るものは、天でも縛られ、あなたが地上で解くものは、天でも解かれる[4675]。

主への熱い愛に燃えていた聖使徒ペトロは、いかなる悪も主を襲わないことを願っていた。それゆえ、主がご自身の受難を予告されたとき、彼は無知ゆえに主の言葉を遮り、こう言った。

「主よ、どうかご自身を憐れんでください。そのようなことがあなたに起こりませんように！」

使徒のこの言葉は、ご自身の苦難によって人類を滅びから贖うためにこの世に来られた主イエスには喜ばれるものではなかったが、それにもかかわらず、それらは主への熱烈な　愛から発せられたものであった。　さらに、そこには使徒の悪意のなさも表れていました。主から「私から離れよ、サタンよ！[4676]　「あなたはわたしにつまずきとなる」という主の叱責を聞いたとき、使徒は怒りや苛立ちを感じることなく、救い主キリストから離れることもなく、愛をもってその叱責に耳を傾け、さらに熱心に主に従った（マタイ16:13–23）。ある時、主の言葉を理解できなかった多くの弟子たちは[4677]、それについてこう言った。

「なんて奇妙な言葉だろう！　誰がこんなことを聞けるだろうか？」

そして、彼らは救い主から離れ、もはや主と共に歩まなくなった。そこで、主イエスは十二人に言われた。

「あなたたちも去りたいのか。」

シモン・ペテロは主にお答えしました：

[4674] この都市はヨルダン川の源流近くに位置しており、ヘロデの息子フィリッポスによって、ティベリウス皇帝を称えて建設された――その名もこれに由来する。

[4675] ここで「岩」とは、もちろん使徒ペトロその人ではなく、彼が告白した信仰、あるいは主ご自身を指す。天の御国の鍵を授けるという約束は、その後、主がご復活の後、すべての使徒たちに対しても繰り返された（ヨハネ20:21–23）。

[4676] サタン――これはシリア語で、「敵対者」を意味する言葉である。狭義では、聖書において悪霊の首領を指す（Iテサロニケ2:18）。より広い意味では、「サタン」という言葉は、たとえそれが単なる単純さや無知によるものであっても、神の御心に反する者を一般的に指します。今回の聖使徒ペトロの事例に見られるように。

[4677] キリストの御体と御血の聖餐について。（ヨハネ6:53–58）。

「主よ！　私たちは誰のところへ行きましょうか。あなたは永遠のいのちの言葉を持っておられます。私たちは、あなたが『生ける神の御子、キリスト』であることを信じ、知りました」（ヨハネ6:53–58）。

このような信仰と主への熱意を持っていた聖使徒ペトロは、水の上を歩いて主のもとへ行くことを許してくださるよう、あえて主にお願いしました[4678] 。主はこれを禁じられませんでした。そこで聖使徒ペトロは舟から降り、「イエスのところへ行くために、水の上を歩きました」。　しかし、聖霊を受けるまでは信仰において完全な確固たる心を持っていなかったため、彼は「激しい風を見て恐れ、溺れ始め、叫びました：

『主よ！　私を救ってください。』

イエスはすぐに手を伸ばして彼を支え、こう言われた。

『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』」（マタイ14:28–31）。

聖なる使徒を溺れ死ぬことから救われた主は、彼に「[4679] 」と告げられたとき、その信仰の薄さからも彼を救われたのである。

– わたしは、あなたの信仰が失われないように、あなたのために祈ったのだ（ルカ22:31–32）。

他の二人の弟子、ヤコブとヨハネと共に、聖使徒ペトロはファヴォレ山で、主の変容の栄光を目の当たりにし、天から主イエスに下った父なる神の声を自らの耳で聞くという栄誉に浴した。これについて、聖使徒は自身の書簡の中で次のように述べている：

「私たちは、巧妙にでっち上げられた伝説に従うのではなく、その偉大さをこの目で目撃した者として、私たちの主イエス・キリストの力と再臨をあなたがたに告げ知らせたのです。　なぜなら、主は父なる神から栄光と誉れを受けられたからです。そのとき、壮麗な栄光の中から、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である」という声が主のもとへ響き渡ったのです。そして、この天から響き渡った声を、私たちは聖なる山で主と共にいたときに耳にしました。[4680]

主がご自身の自発的な苦難と十字架の死に近づかれたとき、聖なる使徒ペテロは、主に対する熱意を言葉だけで示しただけでなく、こう言ったのです。

「主よ。あなたと共になら、牢獄にも死にも行きます」（ルカ22:33）と語っただけでなく、行動によっても示し、剣を抜いて、大祭司マルコスの僕マルコの耳を切り落とした（ヨハネ18:10）。　神は御自身の御心により、使徒ペトロが救い主キリスト、すなわち私たちの主を三度否認するに至ったことを許されましたが、彼は立ち上がり、苦々しい涙を伴う真の悔い改めによって心を正しました（マタイ26:69–75）。すべての使徒の中で第一である聖ペトロは、復活された主イエス・キリストを目にする恵みにあずかりました。聖ルカ福音書には次のように記されています：　「主はまことに復活され、シモンに現れた」（ルカ24:34）。聖使徒パウロも同様に記している。キリストは「聖書の言葉どおり、三日目に復活され、ケファに、そして十二使徒に現れた」（Iコリント15:4–5）。主を目にした聖ペトロは、言葉に尽くせない喜びに満たされ、主から自らの罪に対する慈愛に満ちた赦しを受けました。主を三度否認した過ちを、彼は救い主への愛を三度告白することで完全に消し去り、主が三度繰り返して尋ねられた問いにこう答えました：

「シモン・ヨナの子よ、あなたはわたしを愛していますか？」

「主よ！あなたはすべてをご存じです。私があなたを愛していることも、ご存じです。」

そして、救い主キリストはペトロを使徒としての地位に復帰させ、御言葉の羊たちの牧者とし、天の御国の鍵を彼に授けられました（ヨハネ21:15–17）。

[4678] 主ご自身が、ゲネサレト湖の荒れ狂う波を越えて弟子たちの元へ近づかれたのと同様に（マタイ14:22–27）。

[4679] ご自身の受難に先立ち、弟子たちと共にした最後の晩餐について。

[4680] IIペトロ1:16–18；マタイ17:1–27、マルコ9章以降、ルカ9章以降を参照。

私たちの主イエス・キリストの昇天後、聖ペトロは使徒たちの筆頭として、神の御言葉の最初の教師であり宣教者となり、たった一時間でキリストの教会に三千人もの信者をもたらした（使徒行伝2:14–41）。その際、彼は偉大な奇跡を行う力も示した。 聖ヨハネと共に祈りのために神殿に入った聖ペトロは、神殿の「赤い門」と呼ばれる入り口のそばに、生まれつき足の不自由な一人の男が座っているのを見かけました。その男はペトロとヨハネを見て、彼らに施しを求めました。ペトロとヨハネは彼をじっと見つめ、こう言いました。

「私たちを見てください。」

そして彼は、彼らから何かを得られることを期待して、じっと彼らを見つめていた。しかし、ペテロは言った。

「私には銀も金もない。しかし、持っているものをあなたに与える。ナザレのイエス・キリストの名によって、立ち上がって歩きなさい。」

そして、その男の右手を握って引き起こすと、たちまちその足の裏と膝が強くなり、彼はぴょんと跳び上がって立ち上がり、歩き始めた。そして、歩き、跳ね回り、神を賛美しながら、彼らと共に神殿に入った。

この奇跡と聖使徒ペトロの説教によって、約五千人がキリストを信じるようになった（使徒行伝3:1–26; 4:4）。聖ペトロは、エルサレムの住民アナニアとその妻サフィラが聖霊を冒涜し、偽りを述べたとして、言葉によって彼らを死に至らしめた（使徒行伝5:1–10）。 リダ[4681] では、八年間も寝台に横たわっていた麻痺者のエネーを、聖ペトロは次のように告げて癒した。

「エネアよ、イエス・キリストがあなたを癒やしてくださる！」（使徒行伝9:32–34）

ヨッピエでは[4682] 、彼は亡くなった少女タフィスをよみがえらせた（使徒行伝9:36–42）。そして、彼の手や言葉だけが奇跡を起こしたのではなく、彼の影そのものが癒やしをもたらした。 「そこで、人々は病人を通りに運び出し、寝台やベッドの上に寝かせ、通り過ぎるペトロの影が、そのうちの誰か一人にでもかかるようにした」（使徒行伝5:15）。– しかし、ヘロデ王が（エルサレムの）教会に属する者たちの一部に手を下し、「彼らに害を加えよう」としたとき 、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺害し[4683] 、聖ペトロを捕らえて牢獄に閉じ込め、二本の鎖で縛り上げたとき、主の御使いが夜、その束縛を解き、監禁から解放した（使徒行伝12:1–10）。 最高使徒ペトロは、異邦人への信仰の扉を最初に開いた人物であり、カイサリア[4684] で、天から降りてきた布に四足動物や爬虫類が満ちているという幻と、ペトロに「これらすべてを殺して食べ、神が清めたものを不浄と見なしてはならない」と命じる声を聞いた後、ローマの百人隊長コルニリウスに洗礼を授けた。 この幻は、異邦人がキリストに回心するしるしであった（使徒行伝 10:1–48）。聖使徒ペトロは、サマリア人の魔術師シモンを非難した。彼は偽善的に洗礼を受け、金で聖霊の賜物を買おうとしていた。

「お前の銀は、お前と共に滅びよ」と使徒は魔術師に言った。「お前は、神の賜物を金で得ようと考えたからだ。お前には、このことにおいて分け前も分け前もない。お前の心は神の前で正しくないからだ。 それゆえ、この罪を悔い改め、神に祈りなさい。そうすれば、あなたの心の思いが赦

[4681] リダ――パレスチナの都市で、現在のラムラ（かつてのアリマタヤ）の近くにある。

[4682] ヨッピア――地中海北西岸、ケサレアとガザの間に位置する、アジア最古の都市の一つ。

[4683] ヤコブ・ゼベダイの子、十二使徒の一人であり、福音書記者ヨハネの実の兄弟。聖ヤコブは、キリスト降誕後44年、ユダヤの王ヘロデ・アグリッパによる迫害の中で、使徒の中で最初に殉教した。その記念日は4月30日である。

[4684] 言うまでもなく、地中海沿岸に位置していたのはパレスチナのケサリアである。この都市はヘロデ大王によって再建され、彼はカエサル・アウグストゥスに敬意を表して、この地に「ケサリア」という名を付けた。使徒パウロはここを訪れたことがある（使徒言行録9:29–30、18:28、21:8）； ここで2年間、囚人として過ごした（使徒行伝23:33、24:27、25:4）；使徒フィリポもここに住んでいた（使徒行伝21:8）；ヘロデ・アグリッパは、天使に打たれ、虫に食われてここで亡くなった（使徒行伝12:19–33）。

されるかもしれない。私は、あなたが苦い胆汁に満ち、不義の束縛に縛られているのを見るからだ（使徒行伝8:18–23）。

ここで言及されている聖使徒ペトロのその他の行いは、聖福音書および『使徒言行録』にさらに詳しく記されており、これらは教会で信徒たちの耳に届くよう絶えず朗読されている。 したがって、簡潔さを期すため、これらの聖書から聖使徒ペトロに関するすべてを詳細に引用する必要はなかった。これらの書物は、正教会のキリスト教徒 にとってよく知られているはずである。一方、ほとんど知られていない聖使徒ペトロのさらなる福音を広めるための偉業と働きについて、聖シメオン・メタフラスト[4685]は次のように述べている。

聖ペトロはエルサレム[4686] からストラトニオスのケサレア[4687] へと向かい、そこで自身に従った長老たちの中から司教を任命した。シドン[4688] で多くの人々を癒やし、ここに司教を任命した後、ベリト[4689]に到着し、ここでも司教を任命した。 その後、彼はヴィヴリへ行き、そこからフィニキアのトリポリ[4690] へと向かい、そこで賢明な人物マルソンの家に滞在し、彼をこの町の信徒たちの司教として按手した。トリポリから彼はオルフォシアへ、次にアントラダへ、その後アラドス島へ、さらにヴァラネア、パント、そしてラオディキア[4691]へと向かった； 同地で彼は多くの病人を癒やし、悪霊に取り憑かれた者たちから悪霊を追い出し、信徒たちの教会を組織して、彼らに司教を任命した。ラオディキアから聖ペトロはシリアの都市アンティオキアへ[4692] へ向かった。そこでは、魔術師シモンが、ローマ皇帝クラウディウス[4693] によって彼を捕らえるために派遣された兵士たちから身を隠していた。 聖使徒ペトロの到来を知ると、シモンはユダヤの諸都市へと逃亡した。アンティオキアで聖ペトロは多くの病人を癒やし、三位一体の唯一の神についての説教を行った後、シチリアのシラクーサにはマルキアヌス[4694] を、タウロメニアにはパンクラティウス[4695] を、それぞれ司教として任命した。 アンティオキアから、聖ペトロはカッパドキアのティニアンへ赴き[4696]、そこからガラティアのアンキラを訪れ[4697] 、そこで死者をよみがえらせ、教会を設立し、多くの人々に福音を宣べ伝え、洗礼を授け、彼らに司教を任命した。 アンキラを後にし、彼はポンテウス地方のシノプス[4698] へ向かい、そこからポンテウス地方の中央に位置するアマシアへと向かった。その後、パフラゴニアのガン

[4685] 10世紀の教会作家。

[4686] パレスチナの主要都市であり、現在はシリア（オスマン帝国）のダマスカス・ヴィライェト（総督府）に属する地方都市で、ケドロン川沿いの、ユダヤの山々であるアクラ、シオン、モリヤの三つの支峰の斜面に位置している。 エルサレムは、旧約聖書および新約聖書の歴史における偉大な出来事の中心地として、また、福音の御言葉が全宇宙に広まった「諸教会の母」として、すべてのキリスト教徒にとって尊い場所である。

[4687] ストラトニオスのケサリアは、パレスチナのケサリアと同一の都市である。

[4688] シドン――地中海沿岸にあるフェニキアの都市であり、その沿岸にはフェニキアも位置している。

[4689] ベリトまたはベリト――古代、啓蒙と教養の温床として名高かったフェニキアの都市。現在、ベリトはベイルートという名で、シリアのアジア・トルコ管区（総督府）の主要都市であり、重要な商業の中心地となっている。

[4690] ビブロス、トリポリはフェニキアの都市である。

[4691] ラオディキアは、小アジアのフリギア地方の主要都市である。

[4692] シリア――地中海東岸に位置するアジア・トルコの一地域。

[4693] クラウディウス――在位41年～54年の皇帝。

[4694] シチリア – 地中海に浮かぶ大きな島の一つで、現在はイタリア王国の一部を構成している。

[4695] タウロメニア – シチリア島の東岸、タウラ山付近にある重要な都市。その名もこの山に由来する。

[4696] カッパドキア――アルメニアとキリキアの国境に位置する小アジアの地域。

[4697] ガラティア――小アジアにある独自の国で、西はフリギア、南はリカオニアとカッパドキア、東はポントス、北はビフィニアとパフラゴニアと国境を接していた。

[4698] ポントス――小アジア北東部の地域。

グラ[4699] 、ゴノリアディスのクラウディオポリス、ビフィニアのクラウディオポリス[4700] 、ニコメディアを訪れた後、聖使徒はニカイア[4701] に滞在した。 復活祭の祝典のためにエルサレムへ向かうつもりだったが、ニカイアから引き返し、ピッシヌントを経て、カッパドキア、そしてシリアへと向かった。再びアンティオキアを訪れた後、ついにエルサレムに到達した。　彼がここに滞在していた頃、キリストに回心してから3年目に、聖使徒パウロが彼を訪ねてきました。パウロ自身、ガラテヤ人への手紙の中で次のように述べています：

「三年の後、私はペトロに会うためにエルサレムへ上り、十五日間彼のもとにとどまった」（ガラテヤ人への手紙 1:18）。

この間に教会の規則を定めた聖パウロは、自分が召された務めへと戻っていった。　一方、聖使徒ペトロは再びアンティオキアを訪れ、そこでエヴォディオスを司教に任命した。その後、フリギアの都市シナド[4702] に到着すると、そこからニコミディア[4703] へと移動し、そこでプロホロスを司教に任命した。 プロホロスは司教職に就いた後も、聖ヨハネ・テオロゴスに従った。 ニコミディアからヘレスポントスの都市イリオン[4704] に到着すると、聖使徒はここで百人隊長コルニリウスを司教に任命し、エルサレムへと戻った。そこで、主イエス・キリストが聖ペトロに幻の中で現れ、こう言われた。

「ペトロよ、立ち上がって西へ行きなさい。今こそ、あなたの説教によって彼らが聖なる光に照らされる時が来た。わたしもあなたと共にいる。」

この頃、魔術師シモン（[4705] ）は、すでに彼を追っていた兵士たちに捕らえられ、その行いに対する罰を受けるためローマ（[4706] ）へ連行されていた。しかし彼は、魔術的な狡猾さで多くの人々の心を曇らせ、彼らを惑わしたため、罰を受けるどころか、多くの人々から神として崇められるようになったのである。　このサタンの先駆者は、その魔術によってクラウディウス皇帝自身をも深く驚嘆させ、魔術師の像が彫られ、ティベリス川の二つの橋の間に、「聖なる神シモンへ」という銘文とともに設置された。このことについては、ユスティヌスとイリネイが詳しく記している。　さて（シメオン・メタフラストは言う）、我々はこれから語るべき言葉に戻ろう。偉大なるペトロは、兄弟たちに自身の見た幻について告げた後、彼らと別れを告げ、諸教会を巡訪して再びアンティオキアに到

4699 パフラゴニア――小アジア北部にある険しい山岳地帯。

4700 ビフィニア――小アジアの地域で、北は黒海に面している。

4701 ニカイアはビフィニア（前注参照）に位置し、アスカニア湖の東端にある。かつては繁栄した商業都市であり、王たちの居城でもあった。　キリスト教会の歴史において、ここで第1回（325年）および第7回（787年）の全地公会議が開催されたことで著名である。

4702 フリギアは、北はガラティア、南はピシディアおよびパンフィリアに挟まれた小アジアの地域である。聖使徒パウロによって福音が伝えられた。

4703 ニコメディアは、ビフィニアにある都市である。

4704 ヘレスポントスとは、フラキアのヘルソネスとアジア（トロア、小フリギア）を隔てる海峡の名称である。

4705 殉教者聖ユスティヌスの証言によれば、サマリアの村ギッタまたはティットン出身のシモン・ヴォルフは、アレクサンドリアで哲学を学び、その後、神の偉大な力であると偽って、魔術師として名声を博した。　「当時、ローマやギリシャの記録によれば、ギリシャ・ローマ世界のさまざまな国々には、魔術師、カルデア人、数学者、呪文使いといった名で知られる多くの人々が現れていた。彼らは、当時まだその性質が十分に解明されていなかった神秘的な力に関するある程度の知識を身につけており、自らを非凡な人物であると称し、特定の病気の治癒や呪文、　占い、予言、魔術、ペテンめいた神秘性、そして様々な策略を用いて、無知な大衆に影響を与え、多くの人々を惹きつけ、非凡な存在として名声を博していた」。シモン・ヴォルフもまた、こうした人々の部類に属する。

4706 ローマ――ローマ帝国の首都は、イタリア中部、ラツィオ地方に位置し、ティブレ川の両岸、同川が海に注ぐ地点にある。

着し、そこで聖使徒パウロと出会った。 そこで彼は、タルソスのウルバン[4707]、アドリア海のレウキアのエパフロディトス、ポリカルポスの兄弟であるアペリウス（スミルナ）、そしてエフェソスのフィゲロス[4708] を司教に任命した。後者については、正しい道から逸れてシモンと交わったと言われている。 アンティオキアから聖ペトロはマケドニアへ赴き[4709]、そこでも司教を任命した。すなわち、フィリッピのオリンポス[4710]、テッサロニキのヤソン[4711]、そしてコリントのシル[4712] である。シルは、聖使徒パウロの元に滞在しているところを発見された人物である。 パトラにヘロディオンを司教として任命した後、聖ペトロはシチリアへと船出し、タウロメニアに到着すると、雄弁な人物であるパンクラティオスの元に短期間滞在した。そこでマクシムという人物に福音を宣べ伝え、洗礼を授け、彼を司教に任命した後、ローマへと向かった。

ローマにおいて、聖使徒ペトロは広場や家々で、日々、唯一の神――全能の父、唯一の主イエス・キリスト、神の御子、真の神から出た真の神、そして唯一の聖霊、命を与える主――について説教し、 そして彼は多くの人々をキリストの信仰へと導き、聖なる洗礼によって偶像崇拝の惑わしから救い出した。これらすべてを目の当たりにした魔術師シモンは、聖ペトロに対する憎悪を黙って隠しておくことを拒んだ。彼は、自身の栄光を打ち砕く使徒の説教を、自分への恥辱とみなした。 そこで魔術師は、偽りの言葉と行いによって、使徒の真の教えを公然と妨害し始め、恥じることなく街中で聖ペトロに反論した。魔術師は民衆を惑わし、彼らの中に奇妙な幻想をかき立てた。彼は、自分の前後に現れる幻影を見せ、それについて民衆に「これらは死者の魂である」と語った。 また、死から蘇った者たちを現し、彼らが神であるかのように彼に拝ませた。足の不自由な者を癒やし、彼らに歩き、跳ね回る能力を取り戻させた。しかし、これらすべては
現実ではなく、伝説のプロテウス[4713] のように、様々な姿に変容する幻影に過ぎなかった。 ある時は二つの顔を見せ、また少し経てば山羊や蛇、鳥に変身し、あるいは火の如く現れ、要するに、狂信者たちを惑わすためにあらゆる姿をとっていたのである。 しかし、偉大なる主の使徒がシモンの行いを一瞥するだけで、シモンの魔術はたちまち消え去った。

聖使徒ペトロと魔術師シモンとの戦いについては、メタフラストのほか、『プロローグ』および『大ミネイ・チェティイ』も次のように伝えている。

4707 タルス――かつては小アジア南東部に位置し、キリキア州の主要都市であった、かつては大きく人口の多い都市で、キドネ川のほとり、地中海からほど近い場所にあった。現在でも、4万人の住民を擁する重要な商業都市である。

4708 エフェソス――小アジアのイオッピア州の主要な沿岸貿易都市であり、後に使徒ヨハネ（神学者）の活動の中心地となった。431年にはここで第3回全地公会議が開催された。現在、エフェソスはトルコの貧しい村、アヤサルクとなっている。

4709 トロアス――海に面した都市で、ここから海を渡ってヨーロッパへ行くにはそれほど遠くなかった。――マケドニア――北西から群島に隣接していた沿岸地域。

4710 使徒パウロがキリスト教徒たちに手紙を書いたフィリッポの町は、マケドニアのストリモン川沿い、エーゲ海からほど近い場所に位置していた。この地方で最も有名な都市の一つであったため、『使徒行伝』の著者は、この町を「この地方で最も著名な都市の第一」と呼んでいる（使徒行伝16:12）。 フィリピの教会は、聖使徒パウロが第二回伝道旅行の際に設立したものである。

4711 マケドニアの都市。

4712 コリント――アテネの西、地峡に位置し、古代にはその広範な貿易で最も有名であり、当時はローマ総督の居城であった。

4713 プロテウス――予言の力を持つ海の老翁。海の神ポセイドンに服従するギリシャ神話の神々の一人で、女神アンフィトリテのアザラシの群れを飼っていた。 彼の居場所とされていたのはフォロス島、あるいはコルパフォス島であり、彼はそこで水から上がり、海岸の岩陰で休息をとっていた。彼から予言を得るには、力や策略で彼を捕らえて拘束しなければならなかった。というのも、彼は様々な姿に変身し、そのようにして予言を待ち望む者たちの元からしばしば逃れ去っていたからである。

聖ペトロがローマに到着し、シモンが自らをキリストと称して民衆の目の前で偉大な奇跡を行っていると知ったとき、真の神への熱意に燃え、シモンの家へ向かった。その門の前には大勢の群衆がいて、彼らは使徒が家の中に入るのを阻んでいた。そこで聖ペトロはこう言った。

「なぜ、あの偽りの魔術師のもとへ行くのを妨げるのか？」

「彼は魔術師ではありません」と群衆の中から声が返ってきた。「強力な神なのです。彼は門のそばに、人の心を読む番人を置いています。」

そう言いながら、聖使徒に門口に横たわっている黒い犬を指さし、こう付け加えた。

「この犬は、シモンについて偽りのことを考える者をすべて殺してしまうのだ。」

「私は彼について真実を語っている」と聖ペテロは断言した。「シモンは悪魔の者だ。」

それから、犬に近づき、使徒は言った。

「行って、シモンに伝えなさい。キリストの使徒ペトロが、お前のところに入りたいと望んでいると。」

犬は行って、人間の言葉で聖使徒ペトロの命じたことをシモンに伝えた。犬の言葉を聞いた者たちは皆、恐怖に震えた。シモンは、その犬を再び送り出し、こう命じた。

「ペトロをここへ通せ。」

聖なる使徒が家に入ると、シモンは聖ペトロの目の前で、人々の前で魔術の術を披露し始めた。一方、聖なる使徒はキリストの力によって、大きな奇跡を現した。　具体的にはどのようなものだったのか。数ある奇跡の中でも、使徒たちの時代頃に生きた古代ギリシャの教会史家エゲジッポスは、次の偉大な奇跡を記している[4714]。ローマのある高貴な未亡人――王家の出身――の息子が若くして亡くなり、その母は彼を嘆き悲しんで泣き止まなかった。　彼女を憐れんだ人々は、ローマに現れたペトロと魔術師シモンという、死者をよみがえらせる力を持つ二人の男のことを思い出した。そこで、ある者たちはペトロを、また別の者たちはシモンを、亡くなった少年の元へ呼び寄せた。　若者の葬儀には、多くの貴族や庶民が集まった。そして、聖ペトロは、人々の前で自らの力を誇示していた魔術師シモンにこう言った。

「我々のうち、この死者をよみがえらせる者がいれば、その教えこそが真実であると認められなければならない。」

民衆は使徒の決定に賛同した。一方、シモンは自らの魔術的な狡猾さに頼り、民衆に向かってこう言った。

「もし私がこの死者を蘇らせたら、あなたがたはペトロを殺すか？」

「生きている者を、お前の目の前で焼き殺してやる！」と民衆は叫んだ。

死者の寝台に近づくと、シモンは魔術を始め、悪霊の助けを借りて、死者が頭を動かすように仕向けた。するとたちまち、民衆は「若者は生きている、よみがえった」と叫び始めた。そして聖ペテロを直ちに火刑に処そうとした。　しかし、使徒は手で合図をして静粛を求め、静寂が訪れたとき、こう言った。

「もしその若者が本当に生きているのなら、立ち上がり、話し、歩き回ってみせなさい。それが見られない限り、シモンが魔術であなた方を惑わせていることに疑いを抱いてはならない。」

シモンは長い間、寝台をぐるぐると回りながら悪魔の力を呼び出そうとしたが、無駄だった。そこで彼は恥じて逃げ出そうとしたが、群衆に引き止められた。一方、タヴィフを復活させ、他にも

[4714] エゲシッポスは、『名所紀行』の著者である。これは5巻からなる著作だが、現存していない。彼の生涯と著作に関する情報は極めて断片的であり、教会史の父と呼ばれるエウセビオス（ケサリアの司教）が伝えている。　エウセビウスは、エゲジッポスが2世紀に生きたユダヤ系キリスト教徒であり、コリントとローマへ旅をし、そこで非常に長い期間を過ごし、多くの司教たちと会い、教義上の問題について彼らと議論を交わしたと伝えている。　エゲジッポスはコモドゥス帝の治世（180–192年）に死去した。エゲジッポスの著作の内容や性格について、明確なことはほとんど言えないが、おそらくそれはグノーシス派の異端を批判する歴史的・告発的な性格を帯びていたと推測される。

多くの輝かしい奇跡を行った真の奇跡行者である聖ペトロは、少し離れた場所に立ち、天に向かって目と両手を上げ、祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、御名によって死者をよみがえらせるよう私たちに命じられた方よ、どうかこの若者を生き返らせてください。ここに集う者たちが、あなたが真の神であり、父と聖霊と共に永遠に生き、支配しておられるあなた以外に神はいないことを知ることができますように。アーメン。」

この祈りの後、彼は死者に呼びかけた。

– 若者よ！立ちなさい。私の主イエス・キリストが、あなたを癒やし、よみがえらせてくださる。

すると、たちまち死者は目を開き、起き上がって歩き始め、話し始めた。

このエゲジッポスの記述を補足するのが、マルケル・ローマ人である。彼は当初、魔術師シモンの弟子であったが、後に使徒ペトロによって聖なる信仰と聖なる洗礼によって啓蒙された。聖なる殉教者ネロとアルキリウスへの書簡の中で、マルケルは聖なる使徒によってよみがえらされた若者について次のように述べている：

その若者は、聖ペトロの足元にひれ伏して、こう叫んだ。

「私は主イエスがお見かけになり、あなたの祈りによって、私を未亡人となった母のもとへ戻すよう天使たちに命じられるのを見ました。」

すると、民衆全員が声を揃えて叫んだ：

「神はただひとり、ペトロが告白する神以外にない！」

一方、魔術師シモンは、悪魔の力によって自分の頭を犬の姿に変えて逃げ去った。それにもかかわらず、民衆は彼を捕らえ、ある者は石で打ち殺そうとし、またある者は焼き殺そうとした。しかし、聖使徒ペトロはこれに反対し、こう言った。

「我らの主であり師である方は、悪に対して悪で報いるよう命じられなかった。彼を放してやれ。行きたいところへ行かせよ。彼には、恥と侮辱、そして自身の魔術の無力さを悟ったことだけで十分だ。」

解放されたシモンは――マルケルが伝えるところによると――私がその奇跡的な出来事について何も知らないだろうと思い込み、私のところへやって来た。シモンは私の家の門に巨大な犬を鉄の鎖で繋ぎ止め、私にこう言った。

「ペトロがいつものように君のところに来るかどうか、見てみよう。」

そして一時間後、聖ペテロが門に近づき、犬を解き放ちながらこう言った。

「行って、魔術師シモンにこう伝えろ。キリストが御血を流された人々を、悪魔の力で惑わすのをやめろ、と。」

犬は人のように歩いて行き、使徒の言葉をシモンに伝えた。これを聞いて（マルケルは言う）、私は急いで聖ペトロを迎えに行き、彼を我が家に丁重にもてなした。一方、シモンと犬は追い出した。　その犬は、他の誰にも危害を加えることなく、シモン自身に飛びかかり、歯で彼を噛みつき、地面に倒した。窓からこれを見た聖ペトロは、キリストの名によって、犬にシモンの体に触れることを禁じた。　犬は、魔術師の体には触れずに、彼の衣服をすべて引き裂き、彼を完全に裸にしてしまった。これを見た民衆は、シモンを嘲笑し、罵声を浴びせながら叫び立て、その後、彼を犬と共に街から追い出した。　このような恥と屈辱のため、シモンは丸一年、ローマに姿を現さなかった――クラウディウスの後継者であるネロ[4715] 、不敬虔な王が、悪人らからその悪意に満ちた魔術師を称賛す

[4715] 54～68年の皇帝。

る言葉を耳にするまでは。ネロはシモンを探し出し、彼を大いに気に入り、友人として身近に置いた。

また、プロローグや『大ミネイ』には、魔術師シモンについてさらに次のような記述がある。

魔術師シモンは、三日目に復活すると約束して、自らを剣で斬るよう命じた。しかし、自分の代わりに、人間のように見えるように仕立てた雄羊を剣の下に置いた。こうして、魔術師の代わりに雄羊が斬り殺されたのである。　聖ペトロは、悪魔の惑わしを退け、シモンの嘘を暴いた。皆が、首を切られたのはシモンではなく、雄羊であることを目撃したのである。

そして、聖ペトロが魔術師に対して最終的な勝利を収め、魔術師を滅ぼした件については、すべての伝承が次のように一致して伝えている。

聖使徒ペトロに何一つ勝つことができず、もはや恥と屈辱に耐えきれなくなった魔術師は、天に昇ると約束した。　彼に仕えていたすべての悪魔たちを集め、シモンは頭に月桂冠を戴いて、ローマ市の中心にあるある高い建物へと向かった。その建物に登ると、彼は建物の高みから民衆に向かって怒りを込めて語り始めた。

「ローマ人よ、お前たちは今なおその狂気に囚われ、私を見捨ててペトロに従っている。それゆえ、私もお前たちを去る。　もはやこの街を守ることはせず、私の天使たちに命じて、あなたがたの目の前で私をその腕に抱かせ、天にいる私の父のもとへ昇る。そして、あなたがたが私の言葉に従わず、私の行いを信じなかったことに対する報いとして、天からあなたがたに大きな懲罰を下すのだ。

そう言うと、魔術師は手を叩き、空へと飛び出した。悪霊たちに支えられ、彼は空を飛び回りながら上へと昇っていった。一方、人々は強い驚きの中で互いにこう語り合った。

「肉体をまとったまま空を飛ぶとは、まさに神の御業だ！」

一方、偉大なる使徒ペテロは、皆に聞こえるよう大声で神に祈り始めた。

「主イエス・キリスト、わが神よ！この魔術師の欺瞞を暴き、あなたを信じる者たちが惑わされないようにしてください！」

そして彼はこう叫んだ：

「お前たち、悪霊どもよ！　わが神の御名によって命じる。もはや彼を運ぶな。今、空中にいるその場所に彼を置き去りにせよ。」

するとたちまち、悪魔たちは使徒の禁令に従い、空中にいたシモンを離れ去った。そして、その忌まわしい魔術師は、かつて天から地上へ追放された悪魔のように、地上へと飛び降り、墜落して粉々になった。その場に居合わせた人々は、長い間こう叫び続けた。

「ペトロが宣べ伝える神は偉大であり、まことに、神以外に神はいない！」

一方、転落した魔術師は、激しく打ち砕かれたものの、神の御計画により、なおも息を吹き返していた。それは、呪われた悪魔たちの無力さと自身の無力さを悟り、恥辱に打ちひしがれ、全能の神の力を理解するためであった。　彼は四肢を砕かれたまま地面に横たわり、言葉に尽くせない苦痛に苛まれていたが、翌朝、苦しみの中でその不浄な魂を吐き出し、それを悪魔たちの手に委ね、彼らの父であるサタンのもと、地獄へと連れ去らせた。　一方、聖ペトロはシモンの転落の後、高台に立ち、手で沈黙の合図を送ると、民衆に真の神を知るよう教え始めた。そして、その長きにわたる説教によって、多くの人々をキリスト教の信仰へと導いた。

ネロ皇帝は、友人の不名誉な最期を知ると、聖ペテロに対して激しく怒り、彼を殺そうとした。しかし、聖メタフラストの記述によれば、この激怒した皇帝は、聖使徒ペテロに対するその悪意に満ちた企てを、直ちには実行せず、数年を経てようやく実行に移したのである。　魔術師シモンの死後、聖ペトロはローマに長く留まることはなかった。多くの人々を改宗させ洗礼を授け、教会を確立

し、リヌスを司教に任命した後、彼はローマからタルラキナ[4716] へと向かい、そこでエパフロディトス（前述の人物とは別の人物）を司教に任命した。

スペインの都市シルミアに到着し、そこでエペネトを司教に叙任した後、アフリカのカルタゴへと向かい、そこでクリスケントを司教に叙任した。エジプトに到達すると、彼はそこで司教を任命した。すなわち、七門のテーベにはルフを、アレクサンドリアには福音記者マルコを任命した。 その後、啓示に従い、聖母マリアの被昇天の日にエルサレムに滞在し、再びエジプトへ戻った。アフリカを横断してローマに到達し、そこからメディオラン（[4717] ）へ、そしてフォティキンへと向かい、そこで司教や長老を任命した。ブリタニアへ赴き[4718] 、彼はそこで長い間暮らし、多くの民をキリストの信仰へと導いた。ブリタニアにおいて、聖使徒ペトロの前に天使が現れ、こう告げた。

「ペトロよ！ あなたがこの世を去る時が近づいた。あなたはローマへ行くべきである。そこで十字架の死を遂げた後、主キリストからふさわしい報いを受けるだろう。」

神に感謝を捧げた聖ペトロは、この啓示の後も数日間ブリタニアに留まり、教会を確立し、司教、長老、助祭を任命した。 ネロの治世12年目、彼はローマに到着し、教会の運営における助手としてクレメントを司教に任命した。しかし、クレメントは、そのような重荷を背負うことを望まず、これを拒んでいた。 使徒の説得に応じ、クリメントは従順な息子として、キリストの軛の下に首を垂れ、師や他の聖なる人々と共に、神の御言葉の戦車を引いた。そして、ローマの多くの高貴で名門の男女が、信仰と聖なる洗礼によって啓発された。 ネロ皇帝には、並外れた美しさを持つ二人の妻がおり、皇帝は他のどの側室よりも彼女たちを愛していた。聖なる信仰を受け入れた彼女たちは、貞潔な生活を送ることを決意し、皇帝の好色な欲望に従うことを拒んだ。 しかし、この最も恥知らずで飽くことのない好色漢である皇帝は、このことに激怒し、信徒の教会全体、とりわけ使徒ペトロ——前述の女性たちがキリストに改宗し、貞潔な生活を送るようになった原因となった人物——を恨み（皇帝は、愛する友人シモン・ヴォルフの死も思い出した）、聖ペトロを捜し出して死刑に処そうとし始めた。 前述の教会史家エゲジッポスは、聖ペトロが殺害のために捜索されていた際、信者たちが多くの者のためを思って、彼に身を隠し——ローマを離れるよう懇願したと伝えている。 使徒は、むしろキリストのために苦しみ、死ぬことを望んで、これに決して同意しなかった。一方、信者たちは泣きながら、不信仰者たちの間で災いの波に翻弄されている聖なる教会にとって、これほど必要不可欠な使徒の命を、どうか守ってほしいと懇願した。 全教会の涙ぐましい懇願に心を動かされ、聖ペトロは都から身を隠すことを約束し、その翌夜、共同の祈りの後、皆に別れを告げて、一人で都を後にした。そして、彼が都の門に差し掛かったとき、主イエス・キリストが都に向かって彼に会いに来られるのを見た。聖ペトロは主に向かってひれ伏し、こう尋ねた。

「主よ、どこへお出かけになるのですか？」

「再び十字架にかけられるために、ローマへ向かっているのだ」と主は答え、姿を消された。

驚愕した使徒は、キリストが御自身のしもべたち——すなわち御自身の真の肢体——の中で苦しみを受けられているように、ローマで彼の肉体においても苦しみを受けようとしておられることを悟った。そこで彼は再び信徒たちの元へ戻り、兵士たちに捕らえられて処刑された。 聖メタフラストによれば、聖ペトロは単独で捕らえられたのではなく、多くの信徒たちと共に捕らえられた。その中には、クリメント、ヘロディオン、オリンポスがいた。彼らの拷問官は、彼らを剣による斬首刑に

[4716] タルラキナまたはタルラコン——スペイン東岸、ピレネー山脈とイベル川の間、トゥルシス川のほとりにあった古代イベリアの集落。

[4717] おそらくガリアに位置していた。

[4718] 古代の人々は当初、「ブリタニア」という名称で、ガリアの北、ドイツ海と大西洋の間に位置するすべての島々を指していた。ブリタニアとは、主にそれらの島々の中で最も大きな島を指し、その島は現地で「アルビオナ」と呼ばれていた。

、そして聖使徒ペトロを磔刑に処した。兵士たちは死刑囚たちを捕らえ、処刑場へと連行した。　クレメントは王族の親族であったため、彼らは彼を赦し、自由の身とした。一方、使徒ペトロと共にローマへ来たヘロディオンとオリンポスは、多くの信者たちと共に剣で殺害された。　聖ペトロは、自分を十字架につける者たちに、頭を下にして十字架につけるよう懇願した。それは、自らの意志で十字架にかかられた主を敬うためであった。彼は、十字架の死に際して主と同じ姿になることを望まず、むしろ主の足元に自分の頭を伏せたいと願ったのである。　こうして、主の偉大な使徒である聖ペトロは、十字架上の死によって神を賛美し、この世を去った。手と足に打ち込まれた釘による激しい苦痛に耐えながら、彼は6月29日、[4719] 、その汚れなき魂を神の御手に委ねた。　その弟子である聖クリメントは、使徒の遺体を求め、十字架から降ろして隠し、残された信徒や聖職者たちを呼び集め、尊厳をもって埋葬した。　また、彼と共に苦難を共にしたヘロディオン、オリンポス、その他の信徒たちの遺体も、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を賛美しつつ、尊厳をもって埋葬された。アーメン。

聖なる、栄光に満ち、万人に称えられる最高使徒パウロの生涯、功績、および受難

記念日　6月29日

聖使徒パウロは、使徒となる前はサウロと呼ばれていた[4720] 。出身はユダヤ人で、ベニヤミン族の出身であった。　彼はキリキアのタルソスで生まれた。両親はかつてローマに住んでいたが、後にキリキアのタルソスに移住した[4721] 。両親はローマ市民の尊称を持っていたため、パウロもローマ市民と呼ばれていた。　彼は聖なる初殉教者ステファノの親族であり、（おそらく彼と共に）モーセの律法を学ぶために両親によってエルサレムへ送られた。そこで彼は、エルサレムで名高い教師ガマリエルの弟子の一人となった。　彼の学友であり友人であったのは、後にキリストの使徒となったバルナバであった。サウロは先祖伝来の律法を徹底的に学び、その熱心な信奉者となり、パリサイ派（祖国のあらゆる伝統を厳格に守り、外見上は敬虔を装う者たち）に加わった。

当時、エルサレムや周辺の都市、そして各地で、聖なる使徒たちはキリストの福音を広めていた。　その際、彼らはしばしば、ファリサイ派やサドカイ派（伝承を拒絶し、魂の不死を信じなかった者たち）や、キリストの宣教者たちを絶えず憎み迫害していたユダヤ人のすべての律法学者や教師たちと、長時間にわたる論争を繰り広げていた。　サウロも聖なる使徒たちを憎み、キリストに関する説教を聞くことさえ拒み、バルナバ（すでにキリストの使徒となっていた）を嘲笑し、主キリスト

[4719] 聖使徒ペトロは、キリスト降誕後67年に、聖使徒パウロと同時にこの世を去った。聖使徒ペトロはバチカンの丘に、聖使徒パウロはローマからほど近いオスティア街道の近くに埋葬された。　ローマ教会の伝承によれば、両使徒の頭蓋骨はローマのラテラノ大聖堂に保管されており、聖ペトロの遺体はバチカン大聖堂に、聖パウロの遺体はオスティア街道沿いの郊外の教会に安置されている。– 聖使徒ペトロから、聖教会は貴重な遺産として、彼の二通の公書を受け継いでいる。そのうち第一通は紀元65年頃にバビロンで書かれ、第二通はローマでの死の直前に書かれたものである。　これらの書簡の中で、聖使徒ペトロは、キリスト教徒に対し、彼らの高貴な身分にふさわしい、厳格で聖く、節制に満ちた生活を送るよう説き、異教の誘惑や、将来現れる偽教師たちの教えに惑わされないよう警告している。

[4720] サウロはユダヤ系の名前で、「望まれた者」、「祈り求めて得られた者」を意味する。パウロはローマ系の名前で、「小さな者」を意味する。一部の学者は、彼が待望の長男であり、ローマ市民として父の名に倣い、出生時に両方の名前を授けられたと考えている。　一方、聖ディミトリ・ロストフスキーは、聖金口ヨハネスや聖アンブロシウスらの見解に従い、サウロが洗礼を受けた際にパウロと改名されたと考えている。しかし、『使徒言行録』には、この改名がいつ、どのような理由でなされたかについての記述は一切ない。

[4721] タルススは、かつて小アジア南東部に位置し、キリキア州の主要都市であった、かつては大きく人口の多い都市で、キドネ川のほとり、地中海からほど近い場所にあった。現在でも、4万人の住民を擁する重要な商業都市である。

を冒涜した。　そして、聖なる第一殉教者ステファノがユダヤ人たちによって石打ちにされたとき、サウロは、無実の血が流されている同族を憐れむどころか、その殺害を是認し、ステファノを石打ちにするユダヤ人たちの衣服を見張っていた。　その後、ユダヤ人の祭司長や長老たちから権限を求め、彼はさらに激しい怒りで教会（信徒の集い）を迫害し、家々に押し入り、男女を捕らえて牢獄に送り込んだ。　エルサレムでの信徒への迫害に満足せず、主の弟子たちに対して脅迫と殺害の意を露わにし続けた彼は、ダマスカス[4722]へと向かい、大祭司からの手紙を携えて各シナゴーグを訪れ、そこでもキリストを信じる者、男女を問わず見つけ次第、縛ってエルサレムへ連行するよう命じた。これはティベリウスの治世[4723]に起こったことである。

サウロがダマスカスに近づいたとき、突然、天からの光が彼を照らした（その光は突然で、強烈で、まばゆいばかりであったため、彼は地面に倒れ込んだ）。その瞬間、彼は「サウロ、サウロ！なぜわたしを迫害するのか」と言う声を聞いた。　サウロは驚きを隠せず、「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねた。すると主は言われた。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。棒に逆らって進むのは難しいことだ」[4724]。サウロは恐れおののき、恐怖に駆られて、「主よ、私に何をなさるようお命じになりますか」と尋ねた。　すると主は言われた。「立ち上がって町へ行きなさい。そこで、あなたがすべきことが告げられるであろう」（使徒9:4–6）。

サウロと共に歩いていた兵士たちも恐怖に襲われ、異様な光に打たれて呆然と立ち尽くしていた。彼らはサウロに語りかける声を聞いたが、誰の姿も見えなかった。

主の命じられたとおり、サウロは地面から立ち上がったが、目を開いても誰も見えなかった。彼の肉体の目は盲目となっていたが、霊の目は見え始めていたのだ。

サウロの同行者たちは彼の手を取り、ダマスカスへと連れて行った。そこで彼は三日間、何も見えず、悔い改めの心を抱いて飲食を絶ち、ただ主が御心を明らかにしてくださるよう絶えず祈り続けた。

ダマスカスには、聖使徒アナニア[4725]がいた。主は彼に幻の中で現れ、ユダという名の男の家に住むサウロを探し出し、触れることによって彼の肉体の目を開かせ、聖なる洗礼によって霊的な目を開かせるよう命じられた。

使徒は答えて言った。「主よ。私は多くの人から、この人がエルサレムであなたの聖徒たち[4726]にどれほどの悪事を働いたかを聞いています。また、ここでも大祭司たちから、あなたの御名を呼び求める者たちをすべて捕らえる権限を与えられています。」　しかし、主は彼に言われた。「行きなさい。彼は、諸国民や王たち、そしてイスラエルの子らの前で、わたしの名を宣べ伝えるために

4722 ダマスカスは、世界でも最も古い都市の一つである。ダビデ王の時代にはすでに独立国家の首都であり、キリスト降誕以前からローマの支配下にあった。キリストの信仰は、ステパノの殉教後に各地へ散らばった主の弟子たちによって、この地で確立された。　ダマスカスのシナゴーグはエルサレムの大祭司の管轄下にあり、ユダヤ人の宗教的事柄には世俗の権力が干渉しなかった。ダマスカスでは、今もなお、使徒パウロが洗礼を受けた家や、彼が城壁から降ろされた場所が指し示されている。　1516年、ダマスカスはオスマン帝国に併合され、現在では人口20万人を擁する、非常に商業が盛んで豊かな都市となっている。エルサレムからは北東方向に約200ヴェルスト離れた、シリアのアンティレバンの麓に位置している。

4723 ティベリウスは、紀元14年から37年まで在位したローマ皇帝である。イエス・キリストが十字架にかけられたのは、彼の治世下であった。

4724 「火の粉に逆らう」とは、抗し難い力、ましてや全能の神の力に抗おうとする努力の無益さを表す民間の諺である。

4725 アナニア――ユダヤ人出身のキリスト教徒であり、後にダマスカスの司教に任命され、エレウフェロポリス（エルサレムとガザの間）で石打ちの刑に処され、殉教した。――記念日は10月1日。

4726 「あなたの聖徒たち」――これは、キリストにあって聖別され、清らかな生活と互いへの愛を持つことから、初期のキリスト教徒がそう呼ばれていた。

、わたしが選んだ器だからである。そして、わたしが彼に、わたしの名のためにどれほど苦しみを受けなければならないかを示そう」[4727]。

聖アナニアは、主の命に従ってサウロを探し出し、彼に手を置いた。すると、たちまち、あたかも目から鱗が落ちたかのように、彼は突然目が見えるようになり、立ち上がって洗礼を受け、使徒としての奉仕に彼を聖別する聖霊に満たされ、 サウロからパウロへと改名され、直ちに会堂でイエスについて、すなわちイエスが神の子であることを宣べ伝え始めた[4728]。

それを聞いた者たちは皆、（キリストの教会を迫害していた者の考えがこれほど変わったことに）驚き、こう言った。

「この人こそ、エルサレムでこの御名を呼び求める者たちを迫害していた者ではないか。しかも、ここへも彼らを捕らえて大祭司たちのところへ連行するために来たのではないか。」（使徒9:21）

しかし、サウロはますます信仰を強め、ダマスカスに住むユダヤ人たちを困惑させ、この方がキリスト（すなわち、約束されたメシア）であることを彼らに証明した。 ついにユダヤ人たちは彼に対して激しい怒りを燃やし、彼を殺すことに合意し、彼が逃げ出さないよう、昼夜を問わず城門で張り込みをした。 一方、ダマスカスにアナニアと共にいたキリストの弟子たちは、パウロを殺そうと決議したユダヤ人たちの計画を聞きつけ、彼を連れて、夜、城壁に面した家の窓から籠に入れて下ろした。 パウロはダマスカスを出た後、すぐにエルサレムへ向かうのではなく、まずアラビアへ行った[4729]。これは、彼自身がガラテヤ人への手紙の中で次のように記している通りである。*「私はそのとき、肉と血とに相談することもなく、また、私より先にいた使徒たちのところへエルサレムへ行くこともなく、アラビアへ行き、再びダマスカスに戻った。それから三年後、私はペトロに会うためにエルサレムへ行った」*（ガラテヤ1:16–18）。

エルサレムに到着した聖パウロは、主の弟子たちに加わろうと努めましたが、弟子たちは、彼もすでに主の弟子であるとは信じず、これを恐れていました。 しかし、聖使徒バルナバは彼を見て、彼がキリストに回心したことを確信すると、喜び、彼の手を取って使徒たちのところへ連れて行った。そしてパウロは、道中で主をどのように見たか、主が彼に何を言われたか、そして自分――パウロ――がダマスカスでイエスの御名によって大胆に宣教したことを彼らに語った。 そして、聖なる使徒たちは喜びに満たされ、主キリストを賛美した。また、聖パウロはエルサレムにおいても、主イエスの御名についてユダヤ人やギリシャ系ユダヤ人と論争し[4730]、イエスが預言者たちによって予告されたキリストであることを彼らに証明した。

[4727] 「異邦人の前で」――彼らが前面に挙げられているのは、パウロが主に彼らの間で宣教者となることを示すためである。「彼に告げよう」――これはアナニアを安心させるための主の言葉であり、その意味は「行け、恐れるな。今や、キリスト者たちはサウロによって害を受けることはない。それどころか、彼自身がわたしの御名のために苦難を受けることになる」ということである。

[4728] 「手を置いた」――これは、洗礼を受ける前から彼に主の恵みが与えられていることを示すしるしである。パウロに関するすべてのことは、たとえ人を通して行われたとしても、すべてを成し遂げられたのは神ご自身であった。「目からうろこが落ちた」――これはあくまでパウロの内的な感覚に過ぎなかった。彼には、あたかも目からうろこが落ちたかのように感じられたのである。 その直後にダマスカスで行われた彼の説教は、彼の燃えるような熱意と、キリストへの信仰を全身全霊で受け入れたことを示している。

[4729] アラビアでの滞在の詳細は全く知られていない。おそらく、彼は聖書の研究に没頭し、主から示された新たな活動に向けて準備を進めていたのであろう。

[4730] 「エリンニスト」とは、異教世界のさまざまな国々に住み、当時広く使われていたギリシャ語を話していたユダヤ人たちを指す。

ある日、教会に立って祈っていたパウロは、予期せず、また自発的ではないまま恍惚状態に陥り[4731]、主を仰ぎ見た。主は彼に言われた。*「急いで、エルサレムから速やかに立ち去りなさい。なぜなら、[ここでは]私についてのあなたの証しを受け入れないからである。」*するとパウロは言った。*「主よ！　彼らは、私があなたを信じる者たちを牢に閉じ込め、会堂で殴打していたことを知っています。また、あなたの証人であるステパノの血が流されたとき、私はそこに　立っており、彼の殺害を是認し、彼を殴打した者たちの衣服を見張っていました」*。すると主は彼に言われた。*「行きなさい。私はあなたを遠くの異邦人のところへ遣わす」*（使徒行伝22:18–20）。この幻を見た後、聖パウロは、使徒たちとの再会や会話を楽しみ、あと数日間はエルサレムに留まりたいと願ったが、それは叶わなかった。キリストについて彼と論争していたユダヤ人たちが激怒し、彼を殺そうとしたからである。 このことを知ったエルサレムのキリスト者たちは、彼をケサレアまで見送った[4732]、そしてそこから海路でタルスス（彼の故郷）へ送り出した。そこで彼はしばらくの間滞在し、同胞たちに神の言葉を宣べ伝えた。

その後、聖霊の導きにより、バルナバもこの地を訪れ、パウロが異邦人の使徒となるという召命を知っていたため、彼を連れてシリアのアンティオキアへ向かった。そこで一年にわたり会堂で宣教し、多くの人々をキリストへと導き、彼らを「キリスト者」と呼んだ[4733]。 一年が過ぎると、二人の聖なる使徒、バルナバとパウロはエルサレムに戻り、アンティオキアで神の恵みがもたらしたことを聖なる使徒たちに語り、エルサレムのキリストの教会を大いに喜ばせた[4734]。 その際、彼らはアンティオキアの心ある献金者たちから集めた豊富な施しを、ユダヤに住む貧しい兄弟たちのために持ち帰った[4735]。というのも、当時、クラウディウス帝の治世下[4736]において、聖霊の特別な啓示により、70人の使徒の一人である聖アガボによって予言されていた大飢饉が起きていたからである[4737]。

エルサレムを出たバルナバとパウロは、再びアンティオキアに戻った。彼らがここでしばらくの間、断食と祈り、聖体礼儀の奉仕、そして神の御言葉の宣教に専念していたとき、聖霊は彼らを異邦人のもとに遣わして宣教させることを良しとされた[4738]。 聖霊はアンティオキアの集会の長老たち

4731 「恍惚状態」（別名：エクスタシー）とは、人の意志とは無関係に生じる異常な状態であり、覚醒しているにもかかわらず、外界が肉体の感覚から遮断され、内なる感覚には、神が幻として与えようとされる目に見えない霊的な世界の現象が開かれる状態を指す。 使徒ペトロもまた、そのような状態にあった。

4732 ケサリア――古代において、ローマ帝国の多くの都市の名称であった。 ここではもちろん、パレスチナのケサリアを指す。この都市は、地中海沿岸、エルサレムから北西へ約100ヴェルストの地点に、ストラトンによって、カエサル・オクタヴィウス・アウグストゥスに敬意を表して建設され、かつてはユダヤのローマ総督の居城であった。　この都市はヘロデ王によって要塞化され、装飾され、かつては優れた港を備えていたが、現在は廃墟の山となっている。　パレスチナにはもう一つのケサリアがあり、レバノン山の麓に位置し、ガリラヤのテトラルコス・フィリッポスによって皇帝ティベリウスの名誉を称えて建設され、ケサリア・フィリッポスと呼ばれていた（古代にはヴァンセイと呼ばれていた）。

4733 「キリスト者」という名称は、互いに「兄弟」「弟子」「信者」と呼び合っていた主の信徒たちの間では生まれなかった。　この呼称は当初、教会の外で用いられ、おそらくはアンティオキアの異教徒たちによって主の信徒たちに与えられたものである。彼らは、非常に多くの信者に出会うにつれ、彼らをユダヤ教の一派とは見なさなくなり、キリスト教に独自の意義を認めるようになったのである。

4734 「エルサレムの教会」とは、すなわち、キリスト教徒による共同の礼拝の集まりを指す。一方、建物としての教会は、それより後に現れたものである。　聖使徒イアソンとソシパトルは、ケルキレイ島（現在のコルフ島、アルバニアに近いイオニア諸島の一つ）に、聖第一殉教者ステファノの名を冠した美しい教会を、おそらく最初に建立した。

4735 これは、異邦人によるキリストの教会とユダヤ人による教会との初めての合一であり、そこには兄弟愛が厳かに表れていた。同時に、これは異邦人の教会において働いている神の偉大な恵みの証しでもあった。

4736 カリグラの後継者であるクラウディウス・カエサルは、西暦41年から54年までローマ皇帝の座に就いていました。この期間中、ローマ帝国の各地で度々飢饉が猛威を振るいました。

4737 聖アガヴァの記念日は4月8日である。

4738 「聖霊の御心にかなった」、すなわち、アンティオキア教会の総会において、聖体礼儀を伴う礼拝が行われていた際、礼拝に参加していた一人または数人の預言者が、聖霊の啓示として、バルナバとサウロを異邦人への宣教のために派遣

にこう言われた。*「わたしが彼らを召した働きのために、バルナバとサウロをわたしのもとに差し出せ」*（使徒13:2）。そこで長老は、断食と祈りを捧げ、彼らに手を置いて送り出した[4739]。

聖霊の導きにより、バルナバとパウロはセレウキア[4740]へ行き、そこからキプロス島（使徒バルナバの故郷）へと船出した。そこで、サラミス[4741]に滞在し、のユダヤ人の会堂で神の御言葉を宣べ伝え、島全体を巡り、パフォス[4742]にまで至った。そこで彼らは、あるエリム（魔術師）であるユダヤ人の偽預言者エリムに出会った。その名はヴァリシウスといい、彼はその地のプロコンスルであるセルギウス・パウロの側近にいて、賢明な人物であり、明らかに彼に影響力を持っていた。プロコンスルはバルナバとサウロを呼び寄せ、彼らから神の御言葉を聞きたいと願い、その説教に耳を傾けた。 しかし、魔術師エリマは彼らに反対し、総督を信仰から遠ざけようと努めた。そこで聖パウロは、聖霊に満たされ、その魔術師をじっと見つめて言った。*「ああ、あらゆる悪巧みとあらゆる悪行に満ちた者よ、悪魔の子、あらゆる真理の敵よ！ 主の正しい道から人々をそらそうとするのをやめるのか。今、主の御手があなたの上に下る。あなたは盲目となり、しばらくの間、太陽を見ることはできなくなる。」すると、たちまち暗闇と闇が彼を襲い、彼はあちこちと振り向きながら、案内人を探した」*（使徒言行録13:10–11）。

すると、突然、その魔術師に暗闇と闇が襲いかかり、彼はあちこちきょろきょろと見回して、案内人を探した。

そこで、総督はこの出来事を見て、主の教えに驚き、心から信じた。彼と共に多くの民も信じ、信者の集まりはますます増え続けた。

パフォスを出航したパウロとその一行は、パンフィリアのペルギアに到着し、そこからピシディアのアンティオキアへと向かった[4743]。 そこで彼らはキリストについて宣教し、すでに多くの人々を信仰へと導いたところ、嫉妬深いユダヤ人たちが、異教に傾倒していた町の有力者たちを扇動し、彼らの助けを借りて、聖なる使徒たちを町とその周辺から追放した。

すべきであると表明した。 あるいは、使徒バルナバとパウロ自身が集会に自分たちの召命を説明し、集会が彼らを送り出したのかもしれない。こうして、ここにおいて聖パウロの最初の使徒的旅が始まる。彼は、第三の天へと引き上げられるという並外れた啓示（IIコリント12:1–5）によって、その旅に備えられていた。 神の全能にとって、一時的にパウロの魂を肉体から完全に引き上げることなど、もちろん何の意味もなかった。しかし（聖金口ヨハネスは指摘するように）、最も聖なる人々にとっても前例のない、生ける人間の魂と肉体の分離に、どのような必要性を見出すのは難しい。 「パウロが引き上げられた霊的な世界は、空間に属さないため、至る所に存在する。したがって、人の霊の中にその世界と交わる能力が開かれることさえあれば、その人は、場所を一切変えることなく肉体の中に留まりつつ、天――天使や至福の魂たちの交わりの場――に居ることができるのである（インノケンティ・ヘルソンスキー）。

4739 この際に行われた特別な断食と祈りは、エルサレム教会が、異邦人への宣教のためのパウロとバルナバの使節団を、極めて重要な事柄として認めていたことを示していた。

4740 セレウキアは、オロンテス川が海に注ぐ河口にある小さな港町である。

4741 サラミス――使徒たちが上陸した海辺の町。

4742 パフ――キプロス島の主要都市であり、統治者の居城があった。サラミンの対岸に位置していた。明らかに、使徒たちは島全体を横断し、当然ながらキリストについて宣教した。

4743 ピシディアのアンティオキアは、ローマの植民地であり、そこでパウロとバルナバは初めて異邦人に福音を宣べ伝えた。この都市は、シリアのアンティオキアやセレウコスのアンティオキアとは区別する必要がある。 後者は紀元前300年、オロンテス川沿い、海から30ヴェルスタの地点に、セレウコス朝を築いたセレウコス・ニカトールによって、数多くのギリシャ植民地の一つとして設立された。この都市は急速にシリアで最も広大かつ著名な都市の一つとなり、その首都となった。 キリスト教教会においては、エルサレムに次ぐ第二の地位を占めており、その指導者たちは「総主教」の称号を授けられたが、現在では彼らの居所はダマスカスにある。一方、アンティオキア自体は、現在ではトルコの貧しい都市、アンタキヤとなっている。

使徒たちはそこで足のほこりを払い落とし、イコニウムへ赴いた[4744] 。そして、そこにしばらく滞在し、大胆に宣教を行い、説教だけでなく、彼らの手によってなされたしるしや奇跡によっても、多くのユダヤ人や異教徒を信仰へと導いた。 そこで彼らは聖なる乙女テクラをも改宗させ、彼女をキリストに捧げた。しかし、不信仰なユダヤ人たちは、異邦人やその指導者たちを扇動して使徒たちに反抗させ、彼らを石打ちにしようとした。これを知った使徒たちは、リカオニアの町々――リストラとデルベ――およびその周辺へと退いた[4745] 。

リストラで福音を宣べ伝える中、彼らは、母の胎内から足が不自由で、一度も歩いたことのないある男を癒した。彼らはキリストの名によって彼を立ち上がらせると、彼はたちまち立ち上がり、歩き始めた。民はこの奇跡を見て、声を高らかに上げ、リカオニア語で言った。*「人間の姿をした神々が私たちのところへ降りてきた」* （使徒14:11）。そして、バルナバをゼウス、パウロをヘルミオス[4746] と呼び、牛を連れてきて花輪を捧げ、使徒たちに犠牲を捧げようとした。しかし、バルナバとパウロは（これを聞いて）自分の衣を引き裂き、民衆に近づいて大声で言った。*「諸君！ 何をしているのか。私たちも、あなたがたと同じ人間なのだ」*（使徒14:15）。そして、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造し、天から雨と実りの季節を送り、人々の心を食物と喜びで満たしてくださる唯一の神について、彼らに説いた。 こうして語りながら、彼らはかろうじて民に自分たちへの犠牲の捧げ物をやめるよう説得した。彼らがリストラに滞在して教えている間、アンティオキアやイコニアから何人かのユダヤ人がやって来て、民に使徒たちから離れるよう説得し、彼らは真実を何も語っておらず、すべてが嘘だと大胆に言い放ち、 さらに悪いことに、彼らは軽信的な人々を扇動し、主要な説教者である聖パウロを石打ちにし、すでに死んだものとして町の外へ引きずり出した。

しかし、パウロは（信者たちの助けを借りて）立ち上がり、再び町に戻った。そして翌日、バルナバと共にデルベへと向かった。その町で福音を宣べ伝え、かなりの数の弟子を得た後、彼らはリストラ、イコニア、アンティオキアを再び巡り、弟子たちの心を強め、信仰にとどまるよう懇願した。 各教会に長老たちを任命すると、彼らは断食を伴って祈りを捧げ、彼らが信じた主の御手に彼らを委ねた。

その後、ピシディアを通過してパンフィリアに到着した[4747] 。ペルギアで主の御言葉を宣べ伝えた後、アッタリアへと下り[4748] 、そこからシリアのアンティオキアへと船出した。彼らはもともと、聖霊によって異邦人に主の御言葉を宣べ伝えるよう遣わされていた場所である。 そしてアンティオキアに到着すると、信者たちを集め、神が彼らを通してなされたこと、またどれほど多くの異邦人がキリストのもとへ導かれたかを皆に語った。

しばらくして、アンティオキアの信者たちの中で、ユダヤ人とヘレニストの間で割礼をめぐる論争が生じた。ある者たちは、割礼なしには救われることはできないと主張し、他の者たちは割礼を自分たちにとって重荷であると考えていた。 そのため、使徒パウロとバルナバはエルサレムへ赴き、年長の使徒たちや長老たちに会い、割礼に関する意見を尋ねるとともに、神が異邦人たちに信仰の門を開かれたことを伝える必要が生じた。この最後の知らせに、エルサレムの兄弟たちは大いに喜んだ。

[4744] イコニア――ピシディアのアンティオキアの南東、小アジアのタウロス山麓に位置する都市で、かつてはリカオニア教区の中心地であった。

[4745] リカオニア――小アジアの地域で、ピシディアに隣接している。リストラとデルビアは、その地域にある小さな町で、イコニアの南東に位置する。

[4746] ゼウスとヘルミウス（あるいはユピテルとメルクリウス）――主神とその意志の伝達者、時に主神に随行した、商業の守護神、人間と神々の間の仲介者である異教の神々の名。

[4747] ピシディアとパンフィリア――リカオニアの南西に位置する小アジアの地域。

[4748] 現在のアダリアは、ペルギアから南東に位置するパンフィリアの沿岸都市である。

エルサレムでの総会において、聖なる使徒たちと長老たちは、新しい恵みの下では不要であるとして、旧約聖書の割礼を完全に廃止し、ただ、偶像に捧げられた食物や不品行を避け、隣人を何事においても傷つけないようにすることだけを命じ、　この決定とともに、パウロとバルナバ、そして彼らと共にいたユダとシラを、エルサレムからアンティオキアへと送り出した。

アンティオキアに到着した使徒たちは、しばらくそこに滞在した後、再び異邦人のもとへ向かい、互いに別れた。ユダはエルサレムへ戻り、　バルナバは、親族のマルコを連れてキプロスへ向かった。一方、パウロはシラを選び、シリアとキリキアへ行き、その地の町々を巡りながら、信者たちを励ました。　デルベとリストラに着くと、彼はリストラで弟子であるテモテに割礼を施した。これは、ユダヤ主義のキリスト者たちの不平を鎮めるためだけであった[4749]。そして彼を連れて行った。そこからフリギアとガラティア地方へ赴き、その後ミシアに到着し、ビフィニアへ行くつもりであった[4750]。しかし、それは聖霊の御心に適わなかった[4751]。というのも、パウロが同行者たちと共にトロアスにいたとき[4752]、夜、次のような幻を見たからである。ある男、見たところマケドニア人のようだった者が、彼の前に立ち、こう懇願した。*「マケドニアに来て、私たちを助けてください」*（使徒16:9）。この幻から、パウロは主が自分をマケドニアでの宣教へと招いておられることを悟った。そしてトロアから船出し、サモフラキ島に到着し、翌日にはネアポリス[4753]へ、そこからマケドニアに最も近い都市であり、かつてローマの植民地であったフィリッピへと向かった。　フィリピで、彼はまずキリストの信仰を教え、紫色の布（紫色や赤色の織物や衣服）を商売にしていたリディアという女性に洗礼を授けた。彼女はパウロに、弟子たちと共に自分の家に滞在するよう懇願した。

ある日、パウロが弟子たちと共に祈りの集会へ向かっていたところ、ある女中が彼に近づいてきた。彼女は占いの悪霊に取りつかれており、その占いで主人に多額の収入をもたらしていた。　彼女はパウロとその一行の後をついて歩きながら、*「この人たちは、至高の神のしもべであり、私たちに救いの道を告げているのです」*と叫び続けた（使徒行伝 16:17）。

彼女はこれを何日も繰り返した。

パウロは憤り[4754]、彼女に語りかけ、イエス・キリストの名によってその霊を戒め、彼女から追い出した。

すると、彼女の主人たちは、収入の望みが絶たれたのを見て、パウロとシラを捕らえ、市の役人たちのところへ連れて行き、*「この者たちはユダヤ人であり、私たちの街を騒がせ、私たちローマ人が受け入れるべきでも、守るべきでもない慣習を説いている」*と言った（使徒行伝16:20–21）。

総督たちは使徒たちの衣服を剥ぎ取り、棒で打つよう命じ、何度も激しく打ちつけた後、彼らを牢屋に投げ込んだ。そこで、真夜中頃、パウロとシラが祈っていると、牢屋が揺れ動き、すべての扉が開き、束縛が緩んだ。　これを見た牢屋の看守はキリストを信じ、使徒たちを自分の家に連れて行き、そこで彼らの傷を洗い、直ちに自分と家族全員で洗礼を受け、彼らに食事を振る舞った。そして使徒たちは再び牢屋に戻った。

4749 テモテは、ユダヤ人（キリスト教に改宗した）の女性と異教徒の間の息子であり、自身も誠実なキリスト教徒として兄弟たちから認められていた。彼の同意を得て、パウロは「ユダヤ人のため」に彼に割礼を施した。というのも、ユダヤ人たちは、割礼を受けておらず、しかも父親が異教徒である者から神の御言葉を聞くことなど、決して受け入れようとしなかったからである。

4750 フリギアとガラティアは小アジアの内陸部であり、ミシアとビフィニアは小アジアの北西部に位置する。

4751 聖霊の働きが外的なものか内的なものかについては、著者は明記していないが、使徒たちはそれを聖霊の直接的な働きとして明確に認識していた。

4752 トロアス——海に面した都市で、そこから海を渡ってヨーロッパへ行くにはそれほど遠くなかった。——マケドニア——北西から群島に隣接する沿岸地域。

4753 トラキアの沿岸都市であり、ヨーロッパで最初の都市とされる。現在のカヴァナ。

4754 パウロはこの汚れた霊の告白に憤り、神と人々の敵による説教の根拠となることを望まなかった。主ご自身も悪魔の告白を受け入れなかったのと同様に（マルコ1:24–25, 34；マルコ3:11–12など）。

翌日、市の役人たちは、無実の人々を残酷に処罰してしまったと気づき、役人を牢屋に遣わして、使徒たちを解放し、彼らが望む場所へ行かせるよう命じた。

しかし、パウロは彼らに言った。*「私たちローマ市民は、裁判もなしに人々の前で殴られ、牢に投げ込まれたのに、今になってこっそりと釈放するというのか。いや、彼ら自身が来て、私たちを連れ出させなさい」*（使徒行伝16:37）。

遣わされた者たちは戻って、パウロの言葉を百人隊長たちに伝えた。百人隊長たちは、自分たちが殴打した囚人たちがローマ市民であったことを知り、恐れをなした。そして彼らのところへ行き、牢屋から出て、町を去るよう懇願した。　彼らは牢屋を出ると、まず以前住んでいたリディアの家へ行き、そこに集まっていた信者たちを喜ばせた。彼らと別れを告げると、アンフィポリスとアポロニアへ、そしてそこからテッサロニケへと向かった[4755]。

テッサロニケで、彼らがすでに多くの者を福音によって導いていたとき、嫉妬深いユダヤ人たちは、数人の悪党たちを集めて、キリストの使徒たちが滞在していたヤソンの家へと押し寄せた。しかし、そこで使徒たちを見つけられなかったため、彼らはヤソンと数人の兄弟たちを捕らえ、彼らを市の役人たちのところへ引きずり出し、彼らを「カエサルの敵であり、イエスを王と認めている者たち」だと誹謗中傷した。ヤソンはかろうじてこの災難から逃れることができた。

一方、聖なる使徒たちは、これらの敵対的な人々から身を隠すことに成功し、夜間にテッサロニケを出てベレアへと向かった[4756]; しかし、そこでもユダヤ人たちの悪意に満ちた嫉妬は、聖パウロに安らぎを与えなかった。テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベリアでも神の御言葉を宣べ伝えていることを知ると、そこへもやって来て、民衆を煽動し、騒ぎ立て、パウロに対して敵意を抱かせるよう仕向けた。　聖なる使徒は、個人的な死への恐れからではなく、多くの者の救いのために自らの命を守るよう兄弟たちが強く求めたため、そこから立ち去らざるを得ず、兄弟たちは彼を海辺へと送り出した。　一方、使徒は同行者のシルワノとテモテをベレアに残し、新しく信仰に入った者たちを信仰に堅く立たせるよう命じた。ユダヤ人たちが彼一人だけを標的にしていることを知っていたからである。そして、彼自身は船に乗り込み、アテネへと向かった[4757]。

アテネで、パウロはこの街に溢れる偶像を見て心を憤らせ、これほど多くの魂が滅びていくことを嘆いた。彼はシナゴーグでユダヤ人たちに説き、また毎日、広場ではギリシャ人やその哲学者たちに語りかけた。　聴衆たちは彼をアレオパゴス（偶像の神殿のそばで公の裁判が行われていた場所）へ連れて行った。　彼をそこに連れて行ったのは、かつての集会で彼から何か新しい話を聞くためでもあったが、一方で（聖金口ヨハネが考えるように）、もし処刑に値するようなことを聞けば、彼を裁判にかけ、拷問し、死に至らしめるためでもあった。

しかし、聖パウロは、その前に街中で「未知の神」と刻まれた祭壇を目にして、この件について語り始め、それまで彼らには知られていなかった真の神を宣べ伝え、こう言った。　*「あなたがたが知らずに礼拝しているこの方こそ、私があなたがたに宣べ伝えるのです」*（使徒17:23）。

そして、全世界の創造主である神について、また悔い改め、裁き、そして死者の復活について語り始めた。

死者の復活について聞いたとき、聴衆の中には嘲笑する者もいれば、それについてさらに詳しく聞きたいと願う者もいた。そして、パウロは、何の罪も犯していない者として、非難されることな

[4755] アンフィポリス――マケドニア第1地区の主要都市で、フィリッポスの南西に位置する； アポロニア――（現在のエリッソという小さな町）は、アンフィポロの南西、アトス半島の北部に位置する；テッサロニキ――マケドニア第2管区の主要都市で、エーゲ海に面しており、現在はトルコの重要な商業都市であり、マケドニア貿易の集散地となっている。

[4756] ベリア – テッサロニキの南西に位置する都市。

[4757] アテネ――ギリシャの首都であり、当時のギリシャの科学、芸術、貿易の中心地であった。　伝承によれば、紀元前1550年頃に建都され、その長い歴史の中で王国、共和国、公国の首都となった。15世紀にトルコに征服されたが、19世紀にトルコから解放され、ギリシャ王国の首都となった。

く彼らの集まりから去った。 また、彼らに宣べ伝えられた神の御言葉（ ）は、魂を救う上で無益なものではなかった。というのも、ある人々が彼に付き従い、キリストを信じたからである。その中には、アレオパゴスのディオニシオスや、ダマールという名の貴婦人、そして他にも多くの者がおり、彼らは洗礼を受けた。

アテネを後にしたパウロは、コリント[4758] へ行き、アキラという名のユダヤ人の家に滞在した。そこへマケドニアからシラとテモテもやって来て、共にキリストを宣べ伝えた。アキラとその妻プリスキラは天幕職を営んでいた。 パウロはこの職業に精通しており、彼らと共に働き、その労働によって自分と同行者たちの糧を得ていた。これは、テサロニケ人への手紙の中で、彼自身が次のように述べている通りである。*「だれからもパンをただで食べたことはなく、あなたがたに負担をかけないよう、昼も夜も労苦し、働いた」*（2テサロニケ3:8）。また、*「私自身の必要や、私と共にいた者たちの必要は、この私の両手によって賄われた」*（使徒20:34）とも述べている。

そして毎週の安息日には、ユダヤ人の会堂で説教し、イエスがキリストであることを証明した。しかし、彼らが頑なに反対し、悪口を言ったため、彼は自分の衣を振り払い、彼らに言った。*「あなたがたの血は、あなたがた自身の頭の上にある。私は清い。これからは異邦人のところへ行く」*（使徒18:6）。

そして、彼がコリントを去ろうと決心したとき、主は夜、幻の中で彼に現れ、こう言われた。*「恐れてはならない。語り続け、黙ってはならない。わたしがあなたと共にあるからである。この町には、わたしに属する民が数多くいるから、だれもあなたに害を加えることはない」*（使徒18:9–10）。

パウロはコリントに一年六ヶ月留まり、ユダヤ人やギリシャ人に神の御言葉を教え続けた。その結果、多くの人が信仰を持ち、バプテスマを受けた。会堂の長であるクリスプも、家族全員とともに主を信じ、バプテスマを受けた。 しかし、信じなかったユダヤ人の中には、大群となってパウロに襲いかかり、彼をプロコンスル・ガリオンの法廷に引きずり出した者もいた（ガリオンは哲学者セネカの兄弟であった[4759] ）。しかし、ガリオンはパウロを裁くことを拒み、こう言った。「もし彼に何らかの不当な行為や悪意があったなら、私はあなた方の主張を聞く根拠があり、彼を裁いただろう。しかし、教えやあなた方の律法をめぐる論争については、私は裁き人になりたくない」

そして、彼らを法廷から追い出した。その後、聖パウロはさらに数日間その地にとどまり、兄弟たちに別れを告げて、同行者たちと共にシリアへと船出した。アキラとプリスキラも彼に従い、道中、一行は皆エフェソに立ち寄った[4760] 。 そこで、主の御言葉を宣べ伝える中、聖使徒パウロは多くの奇跡を行った。彼の手は奇跡を起こす力があり、触れるだけであらゆる病を癒やしただけでなく、彼の汗が染み込んだ手ぬぐいや頭巾にも、同じ奇跡の力が宿っていた。 というのも、それらが病人の上に置かれると、たちまち彼らを癒やし、人々から汚れた霊を追い出したからである。これを見た、放浪するユダヤ人の呪術師たちの中には、悪霊に取りつかれた者たちに対して、あえて主イエスの御名を呼び、「パウロが宣べ伝えているイエスの名によって、お前たちを呪う」と言う者もいた。しかし、悪霊は彼らにこう答えた。「イエスも知っているし、パウロも知っている。だが、お前たちは誰だ？」

[4758] コリントはアテネの西、地峡に位置し、古代にはその広範な貿易で最も有名であり、当時はローマ総督の居城であった。

[4759] セネカはスペインで生まれ、紀元後まもなくローマに渡り、そこで哲学者として名声を博し、ネロ皇帝の師となったが、後に同皇帝によって死刑判決を受けた。セネカは自ら喉を切り、それによって死刑判決を遂行した。

[4760] エフェソスは、小アジアのイオニア州における海辺の商業都市であり主要都市であった。のちに、使徒ヨハネ（神学者）の活動の中心地となった。431年にはここで第3回全地公会議が開かれた。現在、エフェソスはトルコの貧しい村、アヤサルクとなっている。

すると、悪霊に取りつかれた男が彼らに襲いかかり、打ち負かして、彼らを殴り、傷つけるほどの力を振るったため、彼らはほとんど裸同然の状態で、その悪霊に取りつかれた男の手に追われて逃げ去らざるを得なかった。　この出来事はエフェソスのユダヤ人やギリシア人全員に知れ渡り、彼ら全員に恐れが襲いかかった。そして、主イエスの御名が賛美され、多くの人々が主を信じるようになった。　さらに、魔術を営んでいた者たちのうちにも、聖なる信仰を受け入れた者が非常に多く、彼らは自分の魔術の書物を集め、その価値を計算したところ、5万ドラクマ[4761]　に相当することが分かり、すべての書物を人々の目の前で焼き払った。このように、主の御言葉はますます広がり、力強くなっていった。

一方、パウロはエルサレムへ向かう準備を進め、「*そこを訪れた後、ローマにも行かなければならない*」と語っていた（使徒言行録19:21）。

しかし、その頃、エフェソスでは、アルテミス神殿の模型を作っていた銀細工師たちによる、少なからぬ騒動が起こった。騒動が鎮圧されると、聖パウロはエフェソスに3年間滞在した後、マケドニアへ向かい、そこからトロアスへやって来て、そこで7日間を過ごした。

週の初日、信徒たちがパンを裂くために集まったとき、パウロは翌日彼らのもとを去るつもりだったため、長い説教を行い、多くの灯火で照らされた部屋で真夜中まで語り続けた。　聴衆の中に、エウティコスという名の若者がいたが、彼は窓辺に座ったまま深い眠りに落ち、眠気でよろめいて三階から下に転落し、意識を失った状態で拾い上げられた。　聖パウロは階を下りて彼の上に倒れ込み、抱きしめて言った。*「心配しないでください。彼の魂は彼の中にあります」*（使徒言行録20:10）。

そして再びパウロは上階の部屋へ上がった。若者が生きて連れて来られ、皆大いに慰められた。パウロは夜明けまでかなり長く語り合い、信者たちに別れを告げて、その場を去った。

ミリト[4762]　に到着すると、パウロはエフェソへ使者を送り、教会の長老たちを自分のところへ呼び寄せさせた。なぜなら、彼は五旬節の日にエルサレムに到着できるよう急いでいたため、旅の足を遅らせないよう、自らエフェソへ立ち寄ることを避けたからである。

そして、エフェソの長老たちが使徒のもとに集まると、彼は彼らに教訓の言葉を語り、その中でこう言った。*「だから、あなたがた自身と、聖霊があなたがたを牧者として立てられたすべての群れに心を配り、主であり神である方の教会を牧しなさい。その教会は、主ご自身がご自身の血をもって買い取られたものである」*（使徒20:28）。　そして、自分が去った後、群れを容赦なく襲う凶暴な狼たちが彼らの間に入り込むだろうと予言した。　また、これから始まる旅について、こう語った。*「見よ、今、私は御霊に導かれてエルサレムへ向かっている。そこで何が待ち受けているのかは分からない。ただ、すべての町で聖霊が、私に束縛と苦難が待ち受けていると証ししておられる。　しかし、私は何にも目を留めず、自分の命も惜しまない。ただ、主イエスから受けた私の使命と奉仕を、喜びをもって全うしたいだけである」*（使徒20:22–24）。その後、彼はこう語った。*「さて、今、私は、あなたがた全員がもう二度と私の顔を見ることはないことを知っている」*　（使徒20:25）。すると、彼らは大いに泣き崩れた。パウロの足元にひれ伏して彼に口づけをし、特に「もう二度と私の顔を見ることはない」という彼の言葉に深く悲しんだ。そして、彼らは彼を船まで見送った。パウロは皆に最後の口づけをして、旅立った。

[4761] ドラクマはおよそ20コペイカに相当するため、焼却された書籍の総額は銀貨で1万ルーブルに達したことになる。

[4762] ミリティは、エフェソスの南に位置する海辺の都市で、かつては繁栄し、数多くの植民地を設立したが、現在はごく平凡な村となっている。

そして、海沿いの町や島々など、多くの町や地方を巡り、至る所で信徒たちを訪ねて励ました後、プトレマイデ[4763] に上陸した。そこからストラトノスのケサレア[4764] へ行き、聖使徒フィリッポの家に身を寄せた。

ある日、アガブという名の預言者が聖パウロのもとを訪れ、パウロの帯を取り、自分の手足を縛って言った。*「聖霊はこう言われます。『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人たちにこのように縛られ、異邦人の手に引き渡されるでしょう』」*（使徒21:11）。

兄弟たちはこれを聞くと、涙ながらにパウロに、エルサレムへ行かないよう懇願した。しかし、パウロは彼らにこう答えた。*「何をしているのか。なぜ泣いて、私の心を痛めるのか。私は囚人となるだけでなく、主イエスの御名のためにエルサレムで死ぬ覚悟さえあるのだ」*（使徒21:13）。

そこで兄弟たちは、「主の御心が行われますように」と言って黙った。

その後、聖使徒パウロは弟子たち（その中には、異邦人からキリストに回心したエフェソ人のトロフィモスもいた）と共にエルサレムへ向かい、聖ヤコブと信徒たちの全会衆から温かく迎えられた[4765] 。

その頃、ペンテコステの祭りのために、アジアから[4766] エルサレムに、パウロの宿敵であり、至る所で彼に対する反乱を扇動していたユダヤ人たちがやって来た。　彼らは、都の中でパウロと、彼と共にいたエフェソ出身のトロフィモを見かけると、ユダヤ人の大祭司や律法学者、長老たちに、パウロがモーセの律法を破り、割礼を受けることを命じず、至る所で十字架につけられたイエスを宣べ伝えていると告発し、互いに パウロを捕らえるよう煽り立てた。 そして、祝祭の日、ソロモンの神殿で聖パウロを見かけると、彼らは突然、彼に対する誹謗中傷をでっち上げ、民全体を扇動し、叫びながら彼に手をかけようとした。「イスラエルの人々よ、助けてくれ！　この男は、至る所で、民や律法、そしてこの場所（神殿）に反して教えを説き、ついには異邦人を神殿に連れ込み、この聖なる場所を汚したのだ」（彼らは、パウロとトロフィモが神殿に連れ込んだのだと思っていた）。

この叫び声に、街中が騒然となり、人々が押し寄せた。暴徒たちはパウロを捕らえて神殿の外へ引きずり出し、急いで扉を閉ざした。彼らはパウロを殺そうとしていたが、聖なる場所を汚さないよう、神殿内では殺そうとはしなかった。

その頃、千人隊長のもとに、エルサレム全体が騒然としているという知らせが届いた。彼は直ちに兵士たちと百人隊長たちを集め、神殿へと急いだ。暴徒たちは千人隊長と兵士たちを見ると、パウロを殴るのをやめた。　そこで千人隊長はパウロを捕らえ、二本の鉄の鎖で縛るよう命じた。そして、彼が誰であり、何をしたのかと尋問し始めた。

一方、群衆は千人隊長に向かって、パウロを死刑に処すよう叫んでいた。しかし、騒ぎと群衆の雑多な声のため、千人隊長はパウロが具体的にどのような罪を犯したのか全く把握できず、彼を要塞へ連行するよう命じた。　大勢の群衆は、千人隊長と兵士たちを追いかけて、「パウロを殺せ」と叫び続けた。要塞へと続く最上段の階段にたどり着いたとき、パウロは千人隊長に、群衆に向けて一言二言語らせてほしいと頼んだ。千人隊長はそれを許した。　そこでパウロは階段に立ち止まり、民

4763 プトレマイダ――フェニキア南部、パレスチナ領内にある古代の沿岸都市。現在はサン＝ジャン＝ダクルと呼ばれ、1799年にはボナパルトの包囲戦を無事に乗り切った。

4764 ケサリア、上記参照。

4765 ヤコブ、主の兄弟。ヨセフ（婚約者）の長男で、ヨセフの最初の妻との間に生まれた。彼は、ヨセフと聖母マリア、そして幼子イエスがエジプトへ逃れる際に同行した。復活後、主は彼に特別な御自身の御姿を現された（Iコリント15:7）。　キリストの昇天後、彼は最高位の使徒たちによってエルサレム教会の初代司教に任命された。これは主ご自身によって定められたものであり、その霊的な生き方によって使徒たちからも高い尊敬を集め、使徒公会議の議長を務め、生涯をエルサレムで過ごしたことから、不信者たちからも　「義人」という称号さえ得た。――その記念日は10月23日である。

4766 アシア――これは小アジアの西部諸州、すなわちミシア、リディア、カリア、つまり地中海沿岸の西部全域を指し、プロコンスルの統治下にあった。

衆に向かって、ヘブライ語で大声で語りかけ、「*兄弟たち、父たちよ。今、私があなたがたの前で弁明することを聞いてください*」（使徒22:1）と言った。

そして、かつてモーセの律法に対して抱いていた熱意や、ダマスコへの道中で天の光に照らされたこと、異邦人への使者として遣わした主を目撃したことについて語り始めた。

しかし、民はもはや彼の話を聞く気もなく、千人隊長に向かって叫び始めた。「このような者をこの地から根絶やしにせよ。彼は生きるべきではない！」

そう叫びながら、彼らは怒りに駆られて衣服を振り回し、土埃を空中にまき散らし、パウロを殺せと執拗に要求した。　千人隊長は彼を要塞に連行するよう命じ、民衆がなぜこれほどまでに彼に敵意を抱いているのか、その理由を聞き出すために鞭打つよう指示した。しかし、パウロが革紐で柱に縛り付けられたとき、彼はそばに立っていた百人隊長に言った。

「*ローマ市民を、しかも裁判もなしに鞭打つことが許されるのでしょうか。*」（使徒22:25）

これを聞いた百人隊長は近づき、千人隊長に報告して言った。

「よく考えてから行動してください。この人はローマ市民です。」

そこで、千人隊長はパウロのところへ近づき、尋ねた。

「教えてくれ、あなたはローマ市民なのか？」

彼は言った。

「はい。」

千人隊長は気まずそうにこう言った。

「私は多額の金を払ってこの国籍を手に入れたのだ。」

そして直ちに、彼の手錠を外した。

翌日、千人隊長は大祭司たちとシネドリオの全員を呼び寄せ、彼らの前に聖パウロを立たせた。

パウロはサンヘドリンに視線を向け、こう言った。

「兄弟たちよ。私は今日に至るまで、神の前で良心に従って生きてきました」（使徒行伝23:1）。

すると、大祭司アナニアは、この言葉を聞いて、自分の前に立っていた者たちに、パウロの口を打つよう命じた……

すると、パウロは彼にこう言った。

「神があなたを打たれるだろう、白く塗られた壁よ！　あなたは律法に従って裁くために座っているくせに、律法に反して、私を打つよう命じているのだ[4767]（使徒23:3）。

[4767] 使徒パウロの厳しい非難は、視力の衰えから大祭司を認識できなかったか、あるいは彼の前にいたのが、かつて彼が知っていた以前の大祭司ではなかったことによるものである。　明白かつ根拠のない厚かましさを糾弾したパウロは、かつて自分を打った者の不当な非難を同様に糾弾されたイエス・キリストの模範に従ったのである。　先ほど、使徒パウロの視力の弱さについて触れましたが、確かにそれは彼がしばしば訴えていた病であり、まさに彼が苦しんでいた「肉体のとげ」（IIコリント12:7）そのものでした。 主は、ダマスコへの道中で使徒に示された御自身の奇跡的な現れの消えないしるしとして、この目の炎症を彼に残されたのである。パウロ自身、その光の突然の輝きによって視力を失ったと語っており、目を開けていても誰の姿も見えなかった。その後、視力が回復したとしても、その弱さは残っていた可能性がある。　灼熱のシリアの太陽の下での真昼の旅、その真昼の光さえも凌ぐ光の輝き、そして使徒を襲った失明――これらが彼の目に炎症や衰弱を引き起こした可能性があります。また、多くの人が目の病に苦しむ砂漠やダマスカスでの滞在が、この視力の弱さを維持し、時にはそれを悪化させたのかもしれません。　ガラテヤ人への手紙におけるパウロの言葉、「あなたがたは、私の肉における試練を軽んじたり、それを嫌ったりはしなかった……私はあなたがたについて証言する。もし可能であったなら、あなたがたは自分の目をえぐり出して、私に与えただろう」　（ガラテヤ4:14–15）という言葉は、時折発作を起こし、頭痛を伴う視力障害をかなり明確に示唆している。だからこそ、自分を侮辱した大祭司に対して非難の言葉を投げかけた後、パウロは、その侮辱者である大祭司が誰であるかを見分けられなかったと弁明する正当な理由があったのである。

また、会衆の中にはサドカイ派の人々もいれば、パリサイ派の人々もいることに気づくと、パウロは声を高めてこう言った。

「兄弟たちよ。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子である。死者の復活を信じているという理由で、私は裁かれているのだ」（使徒23:6）。

彼がこう言うと、パリサイ派とサドカイ派の間で論争が起こり、集会は二分された。サドカイ派は、復活も天使も霊も存在しないと主張するが、パリサイ派はそれらをすべて認めているからである。大きな騒ぎが起こった。パリサイ派の人々は言った。

「この人に何の悪も見当たらない。」

一方、サドカイ派は反対の主張をし、激しい論争が続いた。

千人隊長は、集まった人々がパウロを引き裂いてしまうことを恐れ、兵士たちに命じて、彼を群衆の中から連れ出し、要塞へ連れて行かせた。

その翌夜、聖パウロのもとに主が現れ、こう言われた。

「勇気を出しなさい、パウロ。あなたがエルサレムでわたしについて証ししたように、ローマでも証ししなければならないからです」（使徒23:11）。

日が明けると、激昂したユダヤ人たちのうち数人が集まって協議し、パウロを殺すまでは飲食を絶つと誓った。そして、そのような誓いを立てた者は四十人以上にのぼった。　これを知った千人隊長は、パウロを、武装した兵士の大部隊を伴わせて、ケサレアにいる総督フィリポのもとへ送り出した。

このことを知った大祭司アナニアは、シネドリオンの長老たちと共に自らケサリアへ赴き、総督に対してパウロを誹謗し、総督の前で彼を中傷し、その死を強く求めたが、何一つ成し遂げられなかった。なぜなら、彼には死に値する罪が一切見出されなかったからである。　しかし、総督はユダヤ人たちを喜ばせたいと考え、パウロを拘束したままにした。

それから二年が過ぎた。フィリッポの後任として、ポルキウス・フェストが総督に就任した。祭司長たちは、パウロをエルサレムへ送り返すよう彼に求めた。しかし、これは彼らが悪意を持って企てたことであり、道中でキリストの使徒を殺害しようとしていたのだ。　そこでフェストがパウロに、エルサレムへ行って裁判を受けるつもりがあるかと尋ねると、パウロはこう答えた。「*私はカエサルの法廷の前に立っている。そこで裁かれるのがふさわしいのだ。　ユダヤ人たちに何の害も与えてはいない。あなたもよくご存じの通りだ。もし私が間違っており、死に値する何かをしたのなら、死ぬことを拒まない。しかし、彼らが私を告発しているような事実は何もないのだから、誰も私を彼らに引き渡すことはできない。私はカエサルの裁判を求める*」（使徒行伝25:10–11）。

そこでフェストは、顧問たちと相談した後、パウロにこう答えた。

「あなたはカイザルの裁きを求められた。それゆえ、カイザルのところへ送られることになる。」

数日後、アグリッパ王がフェストを祝うためにカイサリアを訪れた[4768]。そしてパウロのことを知ると、彼に会いたいと望んだ。パウロがアグリッパ王とフェスト総督の前に進み出て、主キリストについて、また自分がどのようにしてキリストを信じるようになったかを詳しく語ったとき、アグリッパ王は彼にこう言った。

「君の話では、私がキリスト教徒になる気にはなれないな。」

するとパウロはこう答えた。

「神に願いたい。その数が少なかろうと多かろうと、あなただけでなく、今日私の話を聞いているすべての人々が、この鎖を除いて、私と同じようになることを」（使徒26:29）。

[4768] アグリッパ王とは、ヘロデ・アグリッパ1世の息子であるアグリッパ2世のことであり、ヘロデ家最後の王であり、シリアの一部の地域を統治していた。

この言葉を聞いた後、王と役人、そして彼らと共にいた者たちは立ち上がり、脇へ退いて互いに相談し、次のように決めた。

「この男は、死や束縛に値するようなことは何もしていない。」

アグリッパはフェストに言った。

「もし彼がカエサルの裁きを求めなければ、彼を釈放することもできたはずだ。」

こうして、パウロをローマのカエサルの元へ送ることに決め、彼と他の数人の囚人を、ユリウスという名の王の軍団の百人隊長に引き渡した。百人隊長は囚人たちとパウロを受け取り、彼らを船に乗せ、一行は出航した。

逆風のため、彼らの航海は極めて危険なものとなった。彼らがクレタ島に近づき、「良い港」と呼ばれる場所に入ったとき、聖パウロは将来を見通して、そこで船と共に越冬するよう勧めた。しかし、百人隊長はパウロの言葉よりも、舵手や船長の判断を信頼していた。 彼らが海の真ん中まで出航すると、激しい逆風が吹き荒れ、大波が立ち、濃い霧が立ち込めた。その結果、14日間もの間、昼は太陽も、夜は星も見えず、波に翻弄されて自分がどこにいるのかさえ分からなくなった。彼らは絶望のあまり、その間ずっと何も食べず、もはや死を覚悟していた。 船には276人が乗っていた。パウロは彼らの真ん中に立ち、こう言って彼らを慰めた。

「*諸君！ 私の言うことを聞き、クレタ島を離れないべきだった。そうすれば、このような困難や災難を免れたはずだ。しかし今、私は諸君に勇気を奮い立たせるよう説得する。なぜなら、諸君のうち一人として死ぬ者はなく、船だけが沈むからだ。私が仕え、属している神の御使いが、今夜私に現れてこう言ったのだ。 『恐れるな、パウロよ。あなたはカエサルの前に立つことになっている。見よ、神はあなたと共に航海する者たちすべてをあなたに与えてくださった』。だから、諸君、勇気を出しなさい。私は神を信じている。私に告げられたとおりになるのだ*」」（使徒27:21–25）。

そしてパウロは、皆に食事をとるよう勧め、こう言った。

「*これはあなたがたの命を守るためである。あなたがたのうち、誰一人として頭の毛一本も失われることはないからだ*」（使徒27:36）。

そう言ってパンを取り、皆の前で神に感謝をささげ、それを裂いて食べ始めた。すると、皆は勇気づけられ、同様に食事をとった。

日が明けると、陸地が見えたが、それがどこの土地か分からなかったため、船を岸に向かって進めた。岸に近づくと、船は砂州に乗り上げ、座礁してしまった。船首は砂に埋もれて動けなくなり、船尾は波の勢いで打ち砕かれていた。 兵士たちは、誰かが泳いで逃げ出さないよう、捕虜全員を殺すべきか互いに相談した。しかし、百人隊長はパウロを救おうと、彼らのその企てを思いとどまらせ、泳げる者たちに真っ先に飛び込んで岸に上がるよう命じた。 彼らを見て、他の者たちも泳ぎ始めた。ある者は板の上で、ある者は船の荷物のうち手近なものに乗って、皆が無事陸に上がり、海から救われた。

そこで、この島がメリト[4769] と呼ばれることを知った。その島の住民である異邦人たちは、彼らに多大な人道的な配慮を示した。というのも、雨と寒さのため、海でずぶ濡れになった者たちが暖まれるよう、彼らは火を焚いてくれたからである。

その間、パウロはたくさんの小枝を集めて火に投げ入れていた。その時、熱を避けて出てきたエヒドナが、彼の腕にぶら下がった。異邦人たちは、彼の腕にぶら下がっている蛇を見て、互いにこう言った。

「この男は確かに殺人者だ。海から救われたにもかかわらず、神の裁きによって生き延びることを許されていないのだから。」

[4769] メリト――現在のマルタ、シチリア島の南に位置する島。マルタには、今もなお使徒パウロがそこに滞在したという伝承が残っている。

しかし、パウロはその蛇を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。彼らは、彼が腫れ物を起こすか、あるいは突然死んで倒れるだろうと予想していたが、長い間待っても彼に何の災いも起こらないのを見て、考えを変え、彼は神であると語り合った。

その島の長であるプブリウスという男は、海から救われた者たちを自分の家に迎え入れ、三日間、親切にもてなした。その頃、彼の父親は高熱と腹痛に苦しんで寝込んでいた。　パウロは彼の元へ行き、主に祈りを捧げ、病人に手を置いて癒した。この出来事の後、島内の他の病人たちも聖なる使徒のもとを訪れ、癒やされた。

三ヶ月後、海難から救われた者たちは皆、使徒と共に、今度は別の船でここを出航し、シラクーサ[4770] に到着した。そこからリギアへ、次にプテオラ[4771] へと向かい、ついにローマにたどり着いた。そして、ローマにいた兄弟たち（ ）がパウロの到着を知ると、アッピア広場や三つの宿屋[4772] まで出迎えた。彼らを見て、パウロは心を慰められ、神に感謝した。

ローマでは、エルサレムから囚人たちを護送してきた百人隊長が、彼らを軍司令官に引き渡した。そしてパウロについては、彼を監視する兵士と共に別々に暮らすことを許した。

そして、パウロはローマに丸二年も住み、訪ねてくる者すべてを受け入れ、神の御国を宣べ伝え、私たちの主イエス・キリストについて、あらゆる大胆さをもって、何の妨げもなく教えた。

ここまでが、聖ルカが記した『使徒言行録』に記されているパウロの生涯と働きについてである。一方、彼のその他の働きや苦難については、彼自身が『コリントの信徒への第二の手紙』の中で次のように語っている（他の人々と比べて、彼は）「*労苦においてはより多く、傷においては計り知れないほど、投獄においてはより多く、死の危機に瀕したことも幾度もあった。　ユダヤ人たちからは、四十打に一打足りない懲罰を五回受け、三回は棒で打たれ、一度は石で打ちのめされ、三回は難破に遭い、昼夜を問わず海の深みに沈み、何度も旅をした*」（IIコリント11:23–26）。

徒歩で地の緯度と経度を、航海で海の広さを測り尽くした使徒パウロは、第三の天にまで引き上げられることで、天の高みをも体験した。　なぜなら、主は、御自身の聖なる御名のために耐え忍ばれた多くの苦難の中で御使徒を慰め、目が見たことのない天の至福を彼に示され、そこで彼は、人が語り尽くすことのできない言い表せない御言葉を聞いたからである。

さて、この聖なる使徒が、その生涯と活動において他にどのような偉業を成し遂げたかについては、パレスチナ・ケサリアの司教であり、教会史家であるエウセビオス・パムフィルスが『[4773] 』の中で語っている。

ローマでの2年間の投獄の後、聖パウロは何の罪もない者として釈放され、ローマやその他の西方の国々で神の言葉を宣べ伝えた。

また、聖シメオン・メタフラスト[4774] は、ローマでの囚われの身から解放された後、使徒がさらに数年間、キリストの福音を宣べ伝える働きに励んだと記している。ローマを出た彼は、スペイン、ガリア、そしてイタリア全土を巡り、異教徒たちを信仰の光で啓発し、偶像崇拝の惑わしから救い出してキリストへと導いた。　彼がスペインにいたとき、ある高貴で裕福な女性が、キリストに関する使徒の説教を耳にし、使徒パウロ本人にお目にかかりたいと願い、夫のプロバに懇願して、聖なる

4770 シラクーサ――シチリア島の南東岸にある海辺の都市で、マルタから18マイルの距離にある。

4771 リギア――現在のレジョ、イタリア南部、メッシーナ対岸、シチリア島の北東岸に位置する。

4772 プテオラ――現在のプッツォーロ。ナポリ近郊の海辺の都市。アッピア広場――ローマから約60ヴェルスタ離れた小さな町。三つの宿――ローマから15ヴェルスタ離れた小さな集落。

4773 エウセビオス・パンフィルス――パレスチナのケサリアの司教（268～340年）、当時の多くの重大な出来事に深く関わった教会史家。

4774 シメオン・メタフラスト――聖人伝の収集者・編纂者であり、コンスタンティノス7世皇帝の秘書官を務めた。940年頃に没した。

使徒に彼らの家へ来ていただき、心から歓待できるように頼んだ。　そして、聖パウロが彼らの家に入ると、彼女は彼の顔を見つめ、額に金で書かれた「キリストの使徒パウロ」という文字を見た。この光景（他の誰にも見えなかったもの）を目にした彼女は、喜びと畏れをもって使徒の足元にひれ伏し、キリストを真の神として告白し、聖なる洗礼を請うた。　そして、彼女が最初に洗礼を受けた（彼女の名はクサンティッパ）。その後、夫のプロブ、一家全員、そして町の長フィロフェイ、その他多くの者たちもそこで洗礼を受けた。

西方のこれらすべての国々を巡り、聖なる信仰の光でそれらを照らし、迫り来る苦難に満ちた死を予感した聖使徒は、再びローマに戻り、そこから弟子である聖ティモテオに手紙を書き、こう述べた。*「私はすでに犠牲となりつつあり、私の旅立ちの時が来た。　私は善き戦いを戦い抜き、歩みを全うし、信仰を守り通した。今や、その日、義なる審判者である主が私に与えてくださる義の冠が、私のために用意されている」*（IIテモテ9:6–8）。

聖使徒パウロの殉教の時期については、教会史家たちの記述に一貫性がない。　ニキフォロス・カリスト[4775]　は、その歴史書の第2巻第36章において、聖パウロが聖使徒ペトロと同じ年、同じ日に、ペトロが打ち負かすのを助けた魔術師シモンの件で殉教したと記している。　一方、他の伝承では、ペトロの死から丸1年が経過した後、パウロは、1年前に聖ペトロが磔にされたのと同じ6月29日に殉教したとされている。パウロの死因としては、キリストの教えを説き、乙女や女性たちに貞潔で清らかな生活を送るよう諭したことが挙げられている。とはいえ、これらの記述には大きな相違はない。　というのも、聖ペトロの伝記（シメオン・メタフラストによる）には、聖ペトロが魔術師シモンの死の直後ではなく、数年が経過した後に殉教したと記されているからである。その理由は、　ネロが寵愛していた二人の側室を、使徒ペトロがキリストへと改宗させ、貞潔な生き方を教えたことによる。　また、聖パウロも聖ペトロと同じ時期にローマやその周辺地域に住んでいたため、両方の出来事が起こった可能性は十分にある。すなわち、聖パウロは、ローマに初めて滞在していた際に聖ペトロを助け、シモン・マゴに対処し、また二度目にローマを訪れた際も、　再び聖ペトロと心を一つにして人々の救いに奉仕し、男女を問わず貞潔で清らかな生活を送るよう導いた。こうして聖なる使徒たちは、不敬虔で放蕩な生活を送っていたネロ皇帝の怒りを買った[4776]　。ネロは二人を死刑に処し、ペトロを外国人として十字架刑に処し、　一方、パウロはローマ市民（不名誉な死に処すことは許されなかった）として、首を斬られて処刑された。それが同じ年ではなかったとしても、少なくとも同じ日であった。パウロの尊い首が斬られたとき、その傷口からは血と乳が流れ出た。信徒たちは彼の聖なる遺体を受け取り、聖ペトロと同じ場所に葬った。

かくして、キリストの選ばれた器、諸国民の教師、全世界の宣教者、天の高みと楽園の恵みをこの目で見た者、天使と人々の驚嘆の的、偉大な苦行者であり殉教者、自らの肉体に主の傷跡を刻まれた、聖なる最高使徒パウロは、　そして再び、すでに肉体を離れて、第三の天へと昇天し、友であり協力者である聖なる至高の使徒ペトロと共に、三位一体の御前に現れ、[4777]　、戦いの教会から勝利

[4775] ニキフォロス・カリスト――ギリシャの教会史家。特に注目すべきは、全23巻からなる『教会史』であり、そのうち最初の18巻が現在まで伝わり、残りは断片のみである。1350年に没した。

[4776] ネロ――ローマ皇帝（54～68年）。最も身内である家族に対しても、とりわけキリスト教徒に対しては、その残虐さによって汚名を着せられた。一方で、彼は学者、詩人、歌手の庇護者であり、自らもオリンピック競技大会に参加した。虚栄心が強く、放蕩で、自制心を欠いていた彼は、自身に対する陰謀を招き、自ら命を絶つことを余儀なくされた。

[4777] 聖使徒パウロは、その書簡の中で、他の協力者たちの名前も私たちに残している。彼らは深い愛をもって彼を助け、彼自身も彼らを大変気に入っていたため、彼の生涯を記す際には、彼自身が感謝の念を込めて回想している者たちの中から、少なくとも数名については言及すべきである。　例えば、彼はルカを挙げています。ルカはすべての教会で福音の働きによって称賛され、さらに教会からパウロに同行して慈善活動を行うよう選ばれた人物です（IIコリント8:18–19）。また、ティモテオについては、使徒と同様に主の御業のために労苦し、パウロにとってこれほど熱心な者は他にいなかったと述べています。　テモテは、父に対する息子のように、福音宣教において彼に仕えている（Iコリント16:10；ピリピ

の教会へと移り、　祝う者たちの喜びに満ちた感謝と歌声と歓声の中、今や彼らは父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しており、私たち罪人からも、その神に栄光と誉れと礼拝と感謝が捧げられます。今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

トロパリオ、第4調：

使徒たちの筆頭であり、全宇宙の教師である方よ、全宇宙に平和を授け、私たちの魂に偉大な憐れみをお与えくださるよう、すべての主なる方にお祈りください。

コンダク、第2調：

堅固にして神に導かれた宣教者たちよ、主よ、あなたは御自身の使徒たちの頂点として、彼らを御自身の祝福と安息の喜びの中に迎え入れられました。彼らの病と死を、あらゆる苦難よりも尊いものとして受け入れられたのは、ただ御心のみが知っておられるからです。

7月13日

6月30日（旧暦）

7月

栄光に満ち、万人に称えられる十二使徒の祝日：ヤコブ・ゼベダイの子（4月30日）、ヨハネ（9月26日）、フィリポ（11月14日）、バルトロマイ（6月11日）、 トマス（10月6日）、マタイ（11月16日）、ヤコブ・アルフェオ（10月9日）、ユダ（タダイ）（6月19日）、シモン・ゼロテ（5月10日）、マティア（8月9日）の祝日

記念日6月30日

ペトロ（6月29日）、ゼベダイの子（4月30日）、バルトロマイ（6月11日）、ヤコブ・アルフェイ（10月9日）、5月10日

非常に古い祝日である。これに関する記録は4世紀にはすでにみられる。

2:19–22）。また、ティキコを、愛する兄弟であり、主において忠実な奉仕者であり、心の慰めをもたらすことのできる人物として挙げている（エペソ6:21–22）；　プリスキラとアキラを、キリスト・イエスにおける協力者と呼んでいる（ローマ16:3）；エパフラスを、愛する協力者であり、キリストの忠実な奉仕者と呼んでいる（コロサイ1:7）；　アリスタルコス、マルコ、ユスタス、神の御国のための協力者であり、パウロ自身の慰めである者たち（コロサイ4:10–11）；ティトス、共通の信仰による真の息子であり、パウロがクレタで未完の仕事を成し遂げるよう託した者で、その到来と喜び、そして信者たちへの親しみをもってパウロを慰めた者：　「この人は私の仲間であり、協力者である」（テトス1:4–5；IIコリント7:6, 13, 15, 8:23）；ソスフェン、後にコロフォンの司教となった者（Iコリント1:1）。　最後に、使徒パウロの願いに従い、兄弟たちを信仰に堅く立たせるためだけに、あらゆる危険を冒してテモテと共にベレアに残ったシロを思い出そう（使徒17:13–15）。また、名前は挙げられていないが、その愛の行いによってのみ記憶されている者たちも大勢いた。

7月14日

7月1日（旧暦）

聖殉教者コスマスとダミアンの殉教

記念日7月1日

地上でキリスト・神の栄光が現れた後、キリストの聖殉教者たちの偉業は、極めて驚くべき出来事として至る所で知られるようになりました。なぜなら、彼らの中に救い主の力が現れたからです。聖人たちが拷問者たちに対して示した勇敢な抵抗と、打ち勝つことのできない忍耐は、すべての人にとって驚嘆すべきものでした。　そのような殉教者たちの中には、古代ローマで同じ父と母の間に生まれ、キリスト教の敬虔な教えに従って育てられた、血のつながった兄弟である聖コスマとダミアンの二人も含まれており、これから彼らについて語ることとなる。

医術を学んだこの聖なる兄弟たちは、あらゆる病を巧みに癒やし、そのすべてにおいて神ご自身の恵みに支えられていました。　彼らがどのような病人や家畜に手を置こうとも、それらは即座に完全に健康を取り戻しました。これらの熟練した治療者たちは、治癒の対価として誰からも報酬を受け取らなかったため、「無償の医師」と呼ばれました。　彼らが癒やされた者たちに求めたのは、ただ一つの最も尊い報酬――キリストへの信仰――だけでした。そして実際、ローマ市内だけでなく、病人を癒やすために巡回した周辺の町や村々でも、彼らは多くの人々をキリストへと導きました。癒やしの恵みに加え、彼らは寛大な施しによって人々に恩恵をもたらしました。　彼らには、先祖が築き上げ、両親から受け継いだ莫大な財産があり、それを売り払い、貧しい者や困窮している人々に配った。彼らは飢えた者を養い、裸の者に衣服を与えた。一言で言えば、彼らはすべての貧しい者や無一文の人々に慈悲を示したのである。彼らが病人を癒やす際、通常は次のように語った。

「私たちはただあなたに手を置くだけであり、私たち自身の力では何もできません。すべては、唯一の真の神であり主であるイエス・キリストの全能の力によって成し遂げられるのです。もしあなたがたが彼を信じ、疑わなければ、すぐに癒やされるでしょう。」

そして実際、信じた者たちは癒やされた。

このようにして、日々多くの人々が、偶像崇拝という不義から背を向け、キリストに帰依していった。

これらの聖なる医師たちの住まいは、あるローマの村（彼らの両親の領地があった場所）にありました。彼らはここに拠点を置き、聖なる信仰をもって周辺一帯の人々を啓蒙しました。

一方、悪魔は、美徳に満ち溢れた聖人たちの生活に嫉妬し、手下の何人かに王のもとへ赴き、罪のない者たちを王の前で誹謗中傷するようそそのかした。 当時、ローマではカリン[4778]が統治していた。彼は中傷者たちの言葉を信じ、直ちに兵士たちを聖人たちが住む村へと派遣し、無償で診療を行っていた医師コスマスとダミアンを捕らえ、尋問のために自分の元へ連行するよう命じた。

王の兵士たちが聖人たちが住む村に到着し、そこでコスマスとダミアノについて尋ね始めたとき、信者たちは聖人たちの元へ集まり、王の怒りが収まるまでの間、しばらくどこかに身を隠すよう懇願した。　しかし、聖人たちはこの助言に従うどころか、むしろ自ら進んで自分たちを探しに来た兵士たちの元へ出ようとし、キリストの御名のために喜んで苦難を受けることを望んだ。　やがて多

[4778] カリン皇帝は283年から284年まで在位した。

くの信者たちが聖人たちの元へ集まり、自分たちのためではなく他者の救いのために命を保つよう、涙ながらに懇願すると、聖人たちは――本心とは裏腹に――彼らの言葉に従った。そこで信者たちは聖人たちを連れ出し、ある洞窟に隠した。

一方、兵士たちは至る所で聖人たちを徹底的に捜し回ったが見つからず、怒りと悔しさのあまり、その村の敬虔な男たち数人を捕らえ、手錠をかけてローマへと連行した。

このことを知った聖コスマとダミアンは、直ちに洞窟から出て、急いで兵士たちの後を追った。道で兵士たちに追いつくと、彼らはこう言った。

「無実の人々を解放し、私たちを連れて行ってください。私たちこそ、あなたがたに捕らえるよう命じられた者たちなのですから。」

こうして兵士たちは、あの男たちを解放し、聖コスマとダミアンに足枷をはめてローマへと連行した。そこで聖人たちは足枷をはめられたまま牢獄に閉じ込められ、朝までそこに留められた。朝になると、王は民衆の前で、見世物のために設けられた場所にある通常の法廷に腰を下ろした。聖なる囚人であるコスマスとダミアヌスを自分の前に連れてくるよう命じると、王は彼らに向かって大声でこう言った。

「お前たちは、我らの先祖の神々に敵対し、何らかの魔術的な策略を用いて、人々と家畜の病を無償で治し、庶民を誘惑して、先祖の神々や法律から背かせているのか？　しかし、今こそその迷いを捨て、私の善意ある助言に従いなさい。さあ、これまで長い間あなたたちを忍耐強く見守ってきた神々に、犠牲を捧げなさい。神々はあなたたちに恨みを抱きながらも、悪に対して悪で報いることはしなかった――報いることはできたにもかかわらず――、ただ忍耐強く、あなたたちが神々に立ち返るのを待っていたのだ。

一方、キリストの聖なる信徒たちは、まるで口を揃えて王にこう答えた。

「私たちは誰一人として惑わしたことはありません。いかなる魔術的な策略も知りませんし、誰に対しても悪を行いません。ただ、救い主であり私たちの主であるイエス・キリストの力によって病を癒しているのです。主ご自身が*『病人を癒し、らい病人を清めなさい』*（マタイ10:8）と命じられたとおりです。」　私たちがこれを無償で行っているのは、救い主が*『ただで受けたから、ただで与えなさい』*（マタイ10:8）と遺言されたからである。なぜなら、私たちは財産を求めるのではなく、人々の魂の救いを求め、貧しい者や弱き者たちに、まるでキリストご自身に仕えるかのように奉仕しているからです。キリストは、彼らのためになされるこれらの奉仕を御自身のものであるとされ、善行を行う者たちにこう告げられたからです。*「わたしは飢えていたとき、あなたがたはわたしに食べ物を与えてくれた。渇いていたとき、あなたがたはわたしに飲み物を与えてくれた。　旅人であったとき、あなたがたはわたしを受け入れ、裸であったとき、あなたがたはわたしに着せ、病んでいたとき、あなたがたはわたしを看病し、牢屋にいたとき、あなたがたはわたしを訪ねてくれた」*（マタイ25:35–36）。私たちは、天の御国の永遠の命において、主から報いを受けることを望みながら、これらの主の戒めを遵守するよう努めています。　しかし、あなたが神と認める者たちを崇拝することには、私たちは決して同意しません。あなたと、あなたに同調する者たちが、彼らを崇拝すればよいのです！　私たちには、それらが神ではないことがよく分かっている。もし王よ、あなたが望まれるなら、私たちはあなたに良き助言を申し上げよう。そうすれば、あなたは唯一の真の神、万物の創造主を知ることができるだろう。*「主は御自分の太陽を、悪人にも善人にも昇らせ、義人にも不義な者にも雨を降らせられる」*（マタイ5:45）――御自身の偉大なる御名の栄光のために、私たちの必要を満たしてくださるのです。無感覚で魂のない偶像から離れ、御方に仕えなさい！

カリン皇帝は聖人に次のように答えた。

「私はあなたがたに雄弁を振るうよう求めたのではなく、神々に犠牲を捧げるよう求めたのだ。」

――我らは、――聖人たちは答えた――血を流さないいけにえ、すなわち我らの魂を、悪魔の罠から我らを救い出し、全世界の救いのために御独り子をお与えになった、我らの唯一の神に捧げている。　この私たちの神は被造物ではなく、万物の創造主である。しかし、あなたの神々は人間の作り出した虚構であり、　の職人たちの手による作品に過ぎない。もし人々の間に、あなた方の神々を作り出す職人という職業が存在しなかったなら、あなた方には崇拝すべき対象などなかっただろう！

「永遠の神々を怒らせないでください」とカリンは言った。「もし、すでにあなた方のために用意されている苦しみを受けたくないのなら、むしろ犠牲を捧げて、彼らを礼拝したほうがよいでしょう。」

「カリンよ、お前とその神々こそ恥を知れ」と、聖霊に満たされたキリストの僕たちは言った。　「お前の心は、常に存在し、永遠に生きる神から背を向け、無感覚でかつて存在したことさえない偶像へと向かっている。それゆえ、お前を恥じさせ、そしてお前自身の経験によって、我らの神が全能であることを悟らせるために――お前の体の顔が変わり、その場から丸まってしまえ！」

聖人たちがこれらの言葉を口にしている最中、突然カリーナの顔が変わり、首がねじれて、顔が肩の上に乗り上げてしまった。彼は首を回すことができず、誰も彼を助けることはできなかった。こうして彼は、首と顔が歪んだまま玉座に座っていた。　一方、この光景を見守っていた民衆は、声を張り上げて叫んだ。

「キリストの神は偉大なり。神は御方以外にいない！」

その時、多くの人々がキリストを信じ、聖なる医師たちに王を癒やすよう懇願した。王自身もまた、彼らに同じことを懇願し、こう言った。

「今、私はあなたがたが真の神の僕であることを心から知りました。ですから、お願いです――あなたがたはすでに多くの人々を癒やしてこられたのですから――私をも癒やしてください。そうすれば、私も、あなたがたが宣べ伝える、天と地を創造された神以外に神はいないと信じるようになります。」

「もしあなたが」と聖人たちは彼に言った。「あなたに命と王国を授けてくださった神を知り、心を尽くしてその方を信じるなら、神はあなたを癒してくださるでしょう。」

「私はあなたを信じます」と王は大声で宣言した。「主イエス・キリストよ、まことの神よ、私を憐れみ、私のかつての無知を赦してください！」

王がこれらの言葉を口にしている間、彼の首はまっすぐになり、顔は元通りの位置に戻った。そして彼は席から立ち上がり、天を仰ぎ、両手を挙げて、民全員と共に神に感謝を捧げ、こう言った。

「キリストよ、まことの神よ、あなたはこの聖なる僕たちを通して、私を闇から光へと導いてくださいました。あなたを賛美します。」

このようにして癒やしを受けた王は、聖なる僕たちコスマスとダミアンに贈り物を捧げて敬意を表し、彼らを平穏のうちに送り出した。

ローマを後にした聖人たちは、自分たちの村へと向かった。その村の住民も、周辺の村々の住民も、ローマで聖人たちが成し遂げたすべてのことを聞き及ぶと、神の御使いたちを出迎え、喜びをもって彼らを迎え入れ、喜び踊りながら主キリストを賛美した。　一方、聖人たちはいつものように再び周辺の町や村を巡り、病を癒やし、すべての人々に聖なる信仰を説き、その後、再び自分たちの村へと戻っていった。　しかし、人類を憎む者――悪魔は、最初の策略で聖人たちを傷つけることができず、また彼らをこの世から根絶やしにすることもできなかったため、別の手段を思いついた。その国には、非常に有名な医師が一人おり、聖コスマスとダミアンも当初、その医師のもとで医術を学んでいたのである。　神の御心にかなう者たちの栄光を耐えられなかった人類の敵は、まさにその医師に、聖人たちに嫉妬するよう仕向けたのである。彼は諂いをもって聖人たちを呼び寄せ、まるで薬草を採集する目的であるかのように彼らを山へと誘い出したが、その実、心の中にはカインのような

悪意を秘めていた[4779]。聖人たちを遠くへ連れ出すと、彼は一人ひとりが別々に薬草を採集するように仕向けた。そして、まず一人に襲いかかり、石で打ち殺し、その後、同じ方法でもう一人も殺害した。最後に、聖人たちの遺体を持ち去り、そこにあった井戸のそばに隠した[4780]。

このようにして、キリストの聖殉教者であり、無償の医師であるコスマとダミアンは、その生涯を終え、私たちの救い主である主キリストから殉教の冠を授かった。主キリストには、父と聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、栄光と誉れが帰せられる。アーメン。

尊い父ペトロの記念日

記念日：7月1日

尊者ペトロはコンスタンティノープルで生まれ、そこで育ちました。彼は名門かつ裕福な家庭の出身でした。父のコンスタンティノスは、パトリキウス（[4781]）の位にあり、軍司令官の職に就いていました。若き頃から学問に熱心に取り組み、このペトロはとりわけ哲学を深く学び、またあらゆる世俗の学問も修めました。　その後、成人すると結婚し、父の死後、その名誉あるパトリキウスの位を継承した。彼は、敬虔なイリーナ皇后とその息子コンスタンティノス[4782]の治世中にパトリキウスに任命された。その後、ニキフォロス[4783]が皇帝の座に就き、ギリシャ人とブルガリア人の間で戦争が勃発すると、ペトロスは全軍団の最高司令官として任命され、兵士たちを率いてブルガリア軍と戦った。　その後繰り広げられた大戦争において、当初はギリシャ軍がブルガリア軍に勝利したが、その後、神の御許しにより、敗北から立ち直ったブルガリア軍はギリシャ軍を激しく打ち破り、彼らの皇帝ニキフォロス自身をも殺害した。

ちょうどその頃、聖ペトロは50人のギリシャの諸侯たちと共にブルガリア人に捕らえられ、拷問と死刑を宣告されて牢獄に閉じ込められていた。　そして、彼が救いを求めて神に熱心に祈っていたところ、真夜中に、キリストの胸に寄り添う聖ヨハネ・テオロゴスが現れ、彼を監禁から解放し、ローマへと連れて行った。　それ以来、ペトロは全身全霊を神への奉仕に捧げた。この世のすべてのものの無意味さを悟り、オリンポス山へ退隠した[4784]。そこで天使のような姿となり、ヨアンニキオス大聖人と共に修行に励み、あらゆる美徳において卓越した。

ここで34年間を過ごした後、ペトロスは妻と息子がすでに亡くなっていたため、コンスタンティノープルへと向かった。そこで彼はまず、自ら建立した「エヴァンドリウス教会」と呼ばれる教会のそばでしばらく暮らした。その後、人里離れた静寂な場所へ退き、そこに小さな修道室を設けて8年間を過ごした。その間、体に棘のついた毛皮の衣をまとい、断食生活を送る間ずっと、足に靴を履くことはなかった。彼は断食、徹夜祈祷、その他の修道的な行いによって、身をひどく衰弱させた。

[4779] カイン――アダムとエバの長子の名である。罪深い状態における最初の子として生まれたカインは、不機嫌で悪意に満ちており、嫉妬から柔和な弟アベルを殺害した（創世記4:1–16）。この出来事が、この聖人伝で言及されているものである。

[4780] 無償の医師である聖コスマスとダミアノの死は284年に訪れた。

[4781] ローマ人において「パトリキウス」とは、生来のローマ市民である親から生まれた、完全な権利を持つ自由民の子孫を指した。ローマには約100のパトリキウス家系が存在したとされている。通常、パトリキウスは国家の最高職に就いていた。

[4782] コンスタンティノス6世（7世）ポルフィロゲネトスは、780年から797年まで在位した。その母イリナは、797年から802年まで在位した。

[4783] ニキフォロス1世は802年から811年まで在位した。

[4784] オリンピア山は小アジアのフリギアとビフィニアの境界に位置していた。

このように徳高く、神に喜ばれる行いを重ねた聖ペトロは、主のもとで安らかに息を引き取り、父と子と聖霊を永遠に賛美する聖人たちの列に加えられた。アーメン。[4785]

聖殉教者ポティトの受難

記念日：7月1日

アントニヌス帝の治世[4786]、至る所でキリスト教徒への迫害が激化していた頃、サルディニア島[4787]には、ギラスという名の、偶像崇拝という不敬虔な行いに従う男が住んでいた。彼には、ポティトという名の13歳の少年、一人息子がいた。ポティトは、*「幼子の口から」*（詩篇8:3）御自身を賛美される神の知恵によって導かれ、聖霊の恵みによって啓発され、自らの創造主を知り、ただその方だけに祈りと礼拝を捧げ、魂のない偶像を嫌悪するようになった。本を読むことができたポティトは、キリスト教の聖書を見つけ、それを読み通すことで、霊的な知恵と分別を身につけた。父から密かに離れてキリスト教徒のもとへ行き、聖なる洗礼を受け、忌まわしい偶像への生け贄を拒んだ。ポティトの父ギラスは、息子が偶像に礼拝を捧げていないことに気づき、深く悲しみ、優しく説得して、自分と共に神々に生け贄を捧げるよう促し始めた。

「父よ」と、聖なる少年はヒラスのこの説得に応えて言った。「あなたは、悪魔たちに犠牲を捧げよと命じるなど、私にとって良い言葉ではありません！もしあなたが、あなたの息子である私を真に父として愛しているのなら、魂を救うことを勧めてください。魂を滅ぼすようなことはしないでください。私もまた、あなたが真理を知り、邪悪な迷いから離れ、天にまじり、万物を支える唯一の神――すべての被造物の創造主――に仕えるようになることを願っています！」

父は激怒し、彼を別の部屋に閉じ込め、家中の誰も、その若者にパンも水も与えることを敢えてしてはならないと命じた。

「さあ、見てみよう」と彼は脅した。「お前が崇めるその神が、果たしてお前に食べ物や飲み物を与えてくれるかどうか！」

その間、聖なる少年ポティトはひざまずき、神にこう祈った。

「*主よ、わたしと争う者たちと戦ってください。わたしと戦う者たちを打ち負かしてください*」（詩編34:1）。わたしは、人類の救いのために天から地へ降りてこられた、わたしの主イエス・キリストに仕えたいと願っています。あなたの謙遜なしもべの祈りに目を留め、飢え渇く私を強めてください。かつて、獅子の穴に投げ込まれたあなたの預言者ダニエルを強められたように。あなたは聖なる福音書の中でこう言われました。*「義に飢え渇く者は幸いである。彼らは満たされるから……義のために迫害される者は幸いである。天の御国は彼らのものだからである」*（マタイ5:6,10）。どうか、ここに閉じ込められ、あなたの義のために飢えと渇きに苦しむ私をも、見捨てないでください！

聖人はその監禁の中で多くの日を過ごし、父からは飢えと渇きに苦しめられつつも、神からは霊的な糧によって強められ、聖霊の恵みによって潤されたため、その顔は太陽のように輝いていた。主を喜びながら、彼はこう語りました。「主よ、感謝いたします。あなたが、この不肖のしもべである私を、あなたの霊的な恵みで満たしてくださったことを。その恵みは、受け取るほどに、ますます強く渇望されるものです。」また、慈愛に満ち、憐れみ深い神よ、天使と大天使の神よ、罪人の死を望まず、むしろ彼が悔い改めて生き続けることを願われる方よ――私の父について、心を尽くしてあなたに叫ぶ私の声を聞いてください。彼にあなたの真理を知る知恵と、信仰を理解する力を与えて

[4785] 聖ペトロの死は865年頃であった。

[4786] アントニヌス・ピウス皇帝は138年から161年まで在位した。

[4787] サルデーニャは地中海に浮かぶ島の一つであり、現在はイタリア王国の領土となっている。

ください。　彼の心を解き放ち、彼自身の創造主であるあなたを知り、ギリシャの多神教ではなく、あなたのみを礼拝できるようにしてください。キリスト教の敵である悪魔が彼を喜ぶことのないようにし、迷える者を救いへと導くあなたの全能の力が、彼を通して栄光を受けるようにしてください。

聖人がこのように祈っていると、主の御使いが現れ、彼を励ましてこう言いました。

「あなたは求めているものを得るでしょう！　あなたが心を尽くして信じている神は、常にあなたと共にあり、あなたが神に求めるものは与えられるでしょう。しかし、人間の魂を滅ぼす者――悪魔が、あなたに対してどのような策略を企てているかについても知っておきなさい。」　それゆえ、あなたは*「神の全武装」*（エフェソ6:11）を身にまとう必要がある。そうしてこそ、その策略に立ち向かうことができるのだ。

こう言い終えると、光の天使は去っていった。

その間も、聖人は神に祈り続け、こう言った。

「*主よ、私の叫びの声を聞いてください。私を憐れみ、私の声に耳を傾けてください*」（詩篇26:11）。

しばらくすると、偽りの光の輝きの中に、闇の天使がポティトの前に突然現れ、彼にこう言った。

「見よ、私はあなたのところに来た、悪意のない若者よ。あなたが飢えと渇きによって肉体も魂も衰えぬように、そして父の言うことを聞き、彼と共にご馳走を満喫するように。私は――あなたに憐れみを示したキリストである。あなたの涙を見て、あなたを訪ねてきたのだ。」

「*『私から離れよ、サタン』*（マタイ16:23）、真理の敵よ」と、聖なる少年ポティトは誘惑者に答えた。「あなたは神の僕を欺くことはできない。あなたはキリストではなく、反キリストなのだ。」

そう言うと、聖人は祈りを捧げ、こう言った。

「主イエス・キリストよ！この邪悪な敵を私から追い払い、彼とその手下たちが裁かれた深淵へと投げ込んでください！」

すると、悪魔は偽りの天使の姿を変え、身長十五肘もの巨大な巨人となり、さらに再び巨大な雄牛へと姿を変え、恐ろしい声で咆哮した。聖人は十字架の印で身を守り、彼にこう言った。

「やめよ、邪悪な霊よ、キリストの戦士たちを誘惑することを！　十字架の力によって贖われた者を、お前は脅かすことなどできない！」

すると悪魔はたちまち姿を消したが、遠くからその声が聞こえてきた。

「なんと若き少年が、私を打ち負かすことか！　ああ、今や私はどこで休めばよいのか？　誰に私の矢を放てばよいのか？　老人に近づいたとしても、この少年ほどには容易に打ち負かされることはない。だが、私は皇帝アントニヌスの唯一の娘のもとへ向かい、彼女に私の力を示してやる！」そしてポティトよ、お前に対しては王を扇動し、恐ろしい拷問でお前を滅ぼすよう仕向けてやる！

「敵よ」と聖ポティトは答えた。「どんな苦しみを受けようとも、私は至る所で君に勝利を収めるだろう。勝利を収めるのは私ではなく、私の主イエス・キリストである！」

その後、悪魔は叫びながら逃げ去った。

「ああ、私は悲惨だ。少年によって打ち負かされてしまった！」

その後、ポティトの父ギラスは、彼を監禁から連れ出し、こう言った。

「子よ、神々に生け贄を捧げなさい。皇帝は、神々に生け贄を捧げない者は皆、恐ろしい拷問の末に死刑に処されるか、あるいは野獣の餌にされるよう命じたのだ。お前は私の唯一の息子だから、私はお前のために心を痛めている。私は自分の後継者を失いたくないのだ。」

「どの神々に、――」と聖人は尋ねた。「犠牲を捧げればよいのでしょうか。そうすれば、その神々の名前を知ることができますから。」

「まさか知らないというのか」と父は言った。「ゼウス神[4788] 、アレス神[4789] 、そしてミネルヴァ神[4790] のことだ。」

「私が生まれてから一度も、彼らが神であるとは聞いたことがありません。ただ、偶像だとしか聞いていません」と少年は答えた。　父よ、もしあなたが、自らを低くして私たちを救ってくださったキリスト教の神がいかに偉大であるかを知っていたなら――あなたはきっとその神を信じるでしょう。なぜなら、その神こそが天と地を創造された唯一の真の神であり、他のすべての神々は異教の悪魔に過ぎないからです。

「その言葉は、どこから来たのですか？」とギラスは尋ねた。

「私が仕える方が、私の口を通して語っておられるのです」と聖人は答えた。「なぜなら、主はご自身の福音書の中でこう言われているからです。*『何を、どのように話すべきか、心配してはならない。その時には、何を話すべきかが与えられるからである』*（マタイ10:19）。」

「我が子よ、拷問を恐れないのか？」とギラスは尋ねた。「お前を激しい拷問にかける総督のもとに連行されたとき、どうするつもりだ？」

「ああ、父よ」と、聖なる少年は微笑みながら答えた。「あなたはとんでもないことをおっしゃいましたね！」　私たちの魂の贖い主、わが主イエス・キリスト――主は、そのしもべである私を強めてくださいます。父よ、あなたは知らないのですか。主の御名によって、無防備な若者ダビデが、強大なゴリアテを石で打ち倒し[4791] 、その剣を抜き取り、首を刎ねたことを。

「あなたの神への希望をもって、あらゆる苦難に耐える覚悟はありますか？」とギラスは尋ねた。

聖人はこう答えた。

「私の創造主である父と子と聖霊、三位一体の唯一の神が、私にすべての苦しみをかたく耐え抜く力だけでなく、恐れることなく神のために死ぬ力も与えてくださると信じています。　そして、父よ、私があなたに語っている神を信じなさい。そうすれば、あなたは救われるでしょう。なぜなら、あなたが今拝んでいるあの神々は、無に等しく、これまで誰一人として救ったこともなく、何一つ成し遂げることもできなかったからです。　そもそも、魂のない銅や石、木に拝むことに、いったい何の益があるというのか。それらは地面に落ちれば立ち上がることもできず、粉々に砕け散るばかりか、砕かれても声一つ上げない。なぜなら、それらは無言であり、感覚を持たないからだ。　あなたがたが偶像に付けているそれらの名は、古代において、悪魔的な魔術にふけり、あらゆる種類の悪行に耽った、最も卑劣で無法な者たちの呼び名であった――彼らはあらゆる罰に値する者たちである。国家の法律は、そのような者たちを現在でも非難し、死刑に処している。あなたがたの神々の呪われた魂は、今この瞬間も、永遠に消えることのない地獄の炎の中で絶え間なく苦しんでいる。その同じ炎の中で、今、それらの神々の偶像に仕える者たちもまた、果てしなく苦しむことになるだろう。一方、私たちの神――永遠に生きられる神――は、すべてを善き目的へと導き、目に見えるものも見えないものもすべてを統べ治め、天と地を支配しておられます。神はまことに、御自身の天の御国において、神を信じる者たち（ ）と、神に忠実に仕える者たちを栄光に輝かせてくださいます。　もっとも、地の上においても、主は彼らの名を栄光に輝かせ、彼らを驚くべき恵みで豊かにし、その力によって彼らはしるしと奇跡を行うのである。　なぜなら、主はこう言われているからだ。*「信じる者たちには、次のようなしるしが伴う。わたしの名によって悪霊を追い出し、新しい舌で語り、蛇を手*

[4788] ゼウス――古代ギリシャの宗教における最高神であり、他の神々や人間の始祖とされていた。

[4789] アレス、あるいはマルス――戦いの神。

[4790] ミネルヴァ、あるいはアテナ――知恵の女神。

[4791] これは、ダビデがペリシテ人の巨人ゴリアテと一対一で戦った有名な武勇伝を指している（詳細については『列王記上』17:32–51を参照）。

に取り、たとえ死に至るものを飲んでも害を受けず、病人に手を置けば、彼らは癒される」（マルコ16:17–18）。

このような言葉を聞いて、ギラスは驚き、こう言った。

「今、私は悟った。この少年の口を通して語られる、かつて聞いたことのないキリスト教の神こそが、真の神である。もしこの少年に何らかの神聖な力が宿っていなければ、彼は心からこのような言葉を口にすることはできなかっただろう。しかし、私の目には、私の息子の口を通して神ご自身が語っておられるように見える。」

ため息をつき、泣き崩れながら、ギラスは言った。

– 罪深い私よ、なんと哀れなことか！この幼い少年、私の息子は、老いた私よりもはるかに賢明だ。彼はまだ幼い頃から真の神を知っていたのに、私は長年の歳月を経て、今に至るまで神を知らなかった。しかし今、私は心から信じ、口をもって告白する。キリスト教の神以外に神は存在せず、神に匹敵する者もいないのだ！

こうしてギラスは、キリストを信じ、息子の聖なる少年ポティトの導きのもと、聖なる洗礼を受けた。　聖ポティトは、使徒たちの働きに倣い、父の洗礼の後、故郷であるサルディニアを離れ、エピロスと呼ばれる地域[4792] へと赴き、そこでキリストの御名を宣べ伝えた。そこから彼はさらにヴァレリアという町へと向かった。　そこには、上院議員アガフォンの妻であるキリアキアという女性がおり、彼女は重度のハンセン病に苦しんでおり、どの医師もその病を治すことができませんでした。聖ポティトは彼女の家の門前にやって来ると、物乞いのようにそこに座りました。　たまたまその家から宦官が出てきたので、聖ポティトは彼に水を飲ませてほしいと頼んだ。

「水を求めてここに来たのか？」と宦官は聖人に尋ねた。

「私は渇いているのです」と聖人は答えた。「この家からの水というよりは、むしろ魂の救いを求めているのです。そうして、この家に私の主イエス・キリストの恵みが現れるようにと。」

宦官は聖人の言葉に驚き、彼に尋ねた。

「少年よ、お前はどこの者か。そして、お前の名は何か？」

「私もあなたと同じように」と聖人ポティトは答えた。「この地から生まれた者です。私の名はポティト。私は、私の主イエス・キリストのしもべであり、主を信じる人々の魂の救い主、そして肉体の病を癒す方です。」　彼はハンセン病患者を清め、寝たきりの者を床から立ち上がらせ、盲人の目を開き、一言で死者をよみがえらせた。

「もしあなたがそのしもべであるなら」と宦官は尋ねた。「あなたはらい病人を癒すことができるのか？」

「信仰があるところには、癒しもそこにあるでしょう」と聖人は答えた。「なぜなら、私の主であるキリスト・主は、信仰によって、御自分に求める者すべてに恵みを与えてくださるからです。」

「私たちの女主人のハンセン病を治すことはできますか？」と宦官は尋ねた。

「もし彼女が私の神であるキリストを信じるなら、彼女は癒やされるでしょう」と聖人は答えた。

「もし彼女を癒やしてくださるなら」と宦官は言った。「あなたは彼女の全財産の主人となるでしょう。」

「私は望みません」と聖人はこれに応えた。「銀も金も、彼女の財産も望みません。ただ、彼女の魂を私の神であるキリストへと導くことだけを望みます。」

[4792] 古代ギリシャ人にとって、「エピロス」という言葉は、当初は島々とは対照的に、大陸全般を指す言葉であった。その後、ギリシャ人は「エピロス」という名称で、北はイリュリア、東はテッサリア、南はエトリアおよびアカルナニアと国境を接する地域を指すようになった。現在、エピロスはトルコ領となっている。

その後、宦官はすべてを女主人に伝え、聖人ポティトは彼女の元へ案内された。寝室に入ると、聖人はこう言った。

「この家に、わが主イエス・キリストの平安がありますように！」

「お願いです、私を癒してください」と、キリアキアは聖人に言った。「もし癒すことができるのなら。」

「私が宣べ伝える神を信じ、聖なる洗礼を受けなさい」と聖人は答えました。「そうすれば、あなたは癒やされるでしょう。」

「どのように信じればよいのか、教えてください」と、その女性は言った。

その後、聖人は彼女にキリストなる神について教え始め、救いへの真の道を示した。その話を聞き終えた女性は、聖人にこう言った。

「私は、あなたが私に語ってくださるお方以外に神はいないと信じ、その方が私を癒してくださることを願っています。あなたは、お望みのままになさってください。」

すると、聖ポティトはひざまずき、涙を流しながらこう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、天使たちの王、人の魂の救い主よ！ あなたは弟子たちに『*らい病人を清め、死者をよみがえらせなさい*』（マタイ10:8）と仰せになりました。主よ、どうかこのあなたのしもべの祈りも聞き入れ、この女性を癒してください。彼女にあなたの恵みが現れ、異教の人々が、あなたが真の神であり、あなた以外に神はいないことを知るようになさってください。

このように祈った後、聖人は洗礼の日を定めた。

すると、その女性が洗礼槽に入り、洗礼を受けたとき、彼女はたちまちハンセン病から清められ、まるで若者のような体つきで、完全に健康な状態で洗礼槽から出てきた[4793]。これを見たキリアキアの夫アガフォンとその家族全員がキリストを信じ、洗礼を受けた。 そして、多くの市民、ほぼ町の半数に及ぶ人々が、彼らを見て、聖なる信仰を受け入れ、神を賛美してこう言った。

「まことに、偶像崇拝という闇から私たちを導き出したこの若者を介して、私たちは偉大な光を見出したのです。」

「ほら、あなたがたは神の偉大さを目の当たりにしたのです」と、聖ポティトは彼らにこう語った。「ですから、今こそ神の戒めを守りなさい。そうすれば、永遠の救いを得られるでしょう！」

その後、その町を後にした聖ポティトは、ガルガラと呼ばれる人里離れた山へと向かい、そこで獣たちを羊のように扱って暮らした。というのも、神の御心により、獣たちは彼に従い、彼についてきたからである。

その頃、アントニヌス皇帝の娘アグニアに悪霊が取り憑き、彼女をひどく苦しめていた。皇帝は深く悲しみ、娘のために自らの神々に祈りを捧げ、誓いを立てながらこう言った。

「神々よ、アポロン[4794]、ゼウス、アルファンよ、わが娘を癒やしてください。そうすれば、私は金箔を施した角を持つ雄牛を、あなた方に生け贄として捧げましょう！」

一方、悪魔は乙女の口を通じてこう叫んだ。

「ガルガラ山に住むポティスがここに来るまで、私はここから去らない。」

そこで皇帝は直ちに、ゲラシアという名の高官を四十人の兵士を率いてその山へ送り、ポティトを探し出させた。

[4793] なお、聖ポティトスによってキリアキアが治癒されたハンセン病は、極めて悪性度の高い病気であることに留意すべきである。 この病気は暑い気候の地域、特にエジプト、パレスチナ、シリア、アラビア、インドなどで広く見られ、患者の全身が悪性腫瘍に覆われ、それが日ごとに大きくなっていくという症状が現れる。その過程で、患者の体は感覚を失い、崩壊していく。 ハンセン病は不治の病とされている。旧約聖書の義人ヨブは、神の御許しにより、この病に苦しんだ。彼の記念日は、聖教会において5月6日に祝われる。

[4794] アポロンは、古代ギリシャ人にとって、未来を予言する者、運命の神、神託と詩歌の神とみなされていた。

そこへ向かい、ガルガラの荒野に到着すると、使者たちは山の上に座っているキリストの僕を見つけ、聖人を囲む多くの獣たちを目にした。兵士たちは大きな恐怖に襲われ、逃げ出そうとした。獣たちが彼らの方を向き、襲いかかろうとしていたからである。しかし、聖人は獣たちにこう命じて制止した。

「それぞれの場所へ戻りなさい。誰にも害を与えてはならない。」

すると、たちまち獣たちは散っていった。

すると、聖人はゲラシウスにこう言った。

「なぜ、これほどの大軍を率いて私のところへ来たのか?

「あなたはポティトですか?」とゲラシウスは聖人に尋ねた。

「私は、私の主イエス・キリストの罪深いしもべです」と聖人は答えた。

「アントニヌス皇帝が君を呼んでいる」とゲラシウスは続けた。「我々と共に皇帝のもとへ行きなさい。」

「なぜ、不信心な皇帝がキリスト教徒を必要とするというのか?」と聖人は反論した。

しかし、兵士たちは聖人を捕らえ、ローマの皇帝のもとへ連行した。皇帝は彼に尋ねた。

「お前はどの家系か?」

「私はキリスト教徒です」と聖人は答えた。「私の両親もキリスト教徒です。」

「わが帝国の勅令を知らないのか」とアントニヌスは尋ねた。「それによれば、わが神々を崇拝しない者はすべて死刑に処されるのだぞ」

「はい、私はまさに、私の神であるキリストのために死ぬことを望んでいるのです」と聖人は答えた。

「お前の噂は私の耳にも届いている」と皇帝は続けた。「お前は私の娘を癒すことができるという。もしそれができれば、私はお前に多くの栄誉を与えるつもりだ。」

「なぜ、あなたの神々は彼女を癒やさないのですか?」と聖人は皇帝に反論した。

「よくもまあ、そんな厚かましいことを私に言うとは」と皇帝は尋ねた。

「もし私があなたの娘を治すことができれば」とポティトはアントニヌスに答えた。「あなたは、私が信じている神を信じるようになるだろうか?」

皇帝は信じることを約束した。

「私は知っている」と聖人は言った。「あなたの心は不義に染まりきっており、信仰を持つことはないだろう。しかし、私は、そこに集まっている民の前で、私の神の力によってこの奇跡を行う。そうすれば、彼らはそれを見て、信じ、主イエス・キリストの御名を賛美するだろう。」

その後、皇帝の娘が連れてこられ、聖人の前に立たされた。

「どうだ、ポティトよ」と、悪魔は憑かれた娘の口を通して聖人に言った。「お前が、たとえ本意でなくとも皇帝のもとへ来るだろうと、私が言わなかったか?」

聖人は、乙女の顔に息を吹きかけ、悪霊にこう言った。

「わが主イエス・キリスト、生ける神の御子、天と地と黄泉のあらゆる被造物が従う御方が、お前、不浄な霊よ、これを禁じ、この御方の被造物から出て行けと命じられる。もはやお前には彼女に対する権威はない。」

そう言いながら、聖人は右手で少女の顔を叩いた。すると、たちまち、彼女の口から恐ろしい大蛇が這い出るのを皆が目撃した。彼女から出てきた大蛇は姿を消した。これを見た周囲の人々は恐怖に襲われ、こう言った。

「まことに、この若者の神は偉大だ!」

そして、そこにいた多くの人々がキリストを信じるようになった。皇帝自身もそれを見て驚き、こう言った。

「キリスト教の魔術とは、なんと偉大な力を持っていることか！」

「狂った王よ」と聖人はそれに答えて言った。「お前は不幸だ。神の偉大さを目の当たりにしながら、神を信じないのだから！」

「私は感謝を捧げる」と皇帝は言った。「私の娘を癒やしてくれた私の神々に。」

「皇帝よ、あなたは嘘をついている」と聖人は答えた。「あなたの神々ではなく、私の主イエス・キリストがあなたの娘を癒したのだ！」

「そんな話はよせ」と皇帝は続けた。「私の神々に生贄を捧げよ。そうすれば、私はお前を私の臣下の中で重要かつ尊敬される地位に就かせてやる。金や銀、そして富を授けてやる。」

聖ポティトはこれにこう答えた。

「皇帝よ、あなたに幸福は訪れないだろう。あなたは私に、私がこの世の塵とみなすものばかりを約束している。私には、天に朽ちることのない、言葉では言い表せない富がある。それは、私の主イエス・キリストが、主を愛するすべての人々のために用意してくださったものだ。それに対し、あなたの金や銀、そしてすべての富は、火によって焼き尽くされるだろう！」

「また、私に生意気な口調で話しかけてくるのか？」と皇帝は反論した。

「はい、私はあなたを恐れてはいません」と聖人は答えた。「私の主イエス・キリストは、あなたの手から私を解放する力をお持ちだからです。」

「お前は私を侮辱し、恥をかかせている」と皇帝は続けた。「しかし、お前の若さを憐れんで、このことは許してやろう。そして、私が直ちに拷問に及ばぬよう、神々に犠牲を捧げることを勧める。」

「あなた自身を憐れみなさい」と聖人は答えた。「恐ろしい地獄があなたのために用意されており、あなたは自分の王国とともに滅びるでしょう。あなたは、あなたの父である悪魔とともに、消えることのない炎の中で焼かれることになるのです。」

その後、皇帝は怒りと憤りに満ち、聖ポティトの衣服を剥ぎ取り、棒で残酷に打ち据えるよう命じた。

聖人は、殴打に耐えながら、こう言った。

「主よ、御名のために苦難を受けることをお許しくださったことを感謝いたします！」

「ポティトよ、お前は何を望むのか」と皇帝は殉教者に尋ねた。「死ぬことか、それとも神々に犠牲を捧げて、無傷で生き残ることか？」

「どの神々に、犠牲を捧げればよいとお命じになりますか」とポティトは尋ねた。

すると皇帝は、拷問を止めるよう命じ、ポティトに尋ねた。

「偉大なる神ゼウス、アルファン、そしてミネルヴァを知らないのか？」

聖ポティトは微笑んで言った。

「それがどのような神々か見てみよう。そうすれば、お前の言う通りにする。」

そこで皇帝は喜びながら聖人を偶像の神殿へと連れて行った。しかし、聖人がそこで至高の神に祈りを捧げた途端、偶像たちは倒れ、粉々に砕け散った。すると聖人は言った。

「もし彼らが真の神々であるなら、なぜ倒れたのか。なぜ倒れた後に起き上がらず、自らを助けようともしないのか……。皇帝よ、わが神の力がどれほど偉大であるか、よく知れ！」

皇帝は恥と怒りに満ち、殉教者を重い鉄の枷で縛り、牢獄に投じるよう命じた。

聖人が牢獄に閉じ込められ、神に祈りを捧げていると、彼を力づけ、慰める光に満ちた天使が現れた。彼に掛けられていた重く重い鉄の足枷は、蝋のように溶けてしまった。真夜中になると、牢獄は光に満ち、そこには言葉に尽くせない芳香が漂った。　その香りを嗅ぎつけた看守たちは、大いに驚き、互いにその香りがどこから漂ってくるのかと尋ね合った。　その後、牢屋の窓を覗き込むと、彼らは不思議な光に気づいた。聖人が足枷から解放され、喜び、神を賛美し、天使と語り合ってい

るのを見て、彼らは恐怖と戦慄に襲われた。夜が明けると、彼らは皇帝のもとへ赴き、このことをすべて報告した。　そこで皇帝は、見世物の場を設けるよう命じ、また、告示係にその場所へ民衆を集めるよう布告させた。こうして大勢の民衆が集まると、皇帝が現れ、いつもの裁判の席に着くと、殉教者を牢獄から連れ出し、自分の前に引き出して裁くよう命じた。　その場に連れてこられた殉教者は、十字の印で身を守り、明るい眼差しで皇帝の前に立った。一方、アントニヌスは怒りに燃え、聖人を威圧的な眼差しで見つめながら、こう尋ねた。

「ポティトよ、お前の考えでは、今、お前はどこにいるというのだ？」

「私は私の神の地におります」とポティットは答えた。

「今こそお前の破滅の時だ」と皇帝は続けた。「一体どの神がお前を私の手から救い出せるというのか？」

「皇帝よ、お前の顔は恥にまみれるだろう。犬の方がまだ分別があるからだ。犬は誰かからパンをもらえば、その人に甘えるが、お前は私の神から娘の癒やしを受けたにもかかわらず、神を冒涜しているではないか！」

そこで皇帝は、聖人を裸のまま木に吊るし、ろうそくの火で焼かせ、さらに鉄の爪でその体を削るよう命じた。まるで自分の体が苦しみを受けているのではないかのように、平然と苦痛に耐えながら、聖人は皇帝を罵り、こう言った。

「皇帝よ、お前の脅しはどこへ行ったのか？　拷問で私を打ち負かすと自慢していたが、私はこの苦しみの中で何の苦痛も感じていない。」　さあ、よく見て理解せよ。これらの拷問が苦しみをもたらしているのは、私の肉体ではなく、あなたの心なのだ。なぜなら、私は忍耐をもってそれらに打ち勝ち、そのおかげでさらに喜びを感じているのだから。

恥をかかされた皇帝は、さらに激しい怒りに燃え上がり、殉教者を木から降ろして、獣に食わせよと命じた。しかし、聖人のところに放たれた獣たちは、彼に近づくと、彼の前にひれ伏してその足を舐め、聖人は王に向かって叫んだ。

「今、お前は何を言うつもりだ、卑劣な迫害者よ？　今に至るまで、私の神であるキリストの力をまだ見ないのか？」

すると皇帝は、獣たちを引き戻すよう命じ、処刑人たちに言った。

「この忌まわしい者をバラバラに切り刻み、その断片を犬たちの餌として撒き散らせ！」

すると、処刑人たちが斧を手に取り、聖人を切り刻もうとしたその時、神の奇跡の力によって、聖人の肉体は堅い石や鉄のように強靭になり、斧は彼に何の傷も与えることができず、かえって処刑人たちは自らを傷つけてしまった。　この光景を目撃していた民衆は、起こっていることに驚きを隠せず、そのうちの多く――およそ二千人ほど――が、その時、主キリストを信じ、こう叫び求めた。

「まことに、この若者の内には、かつてこの町で苦難に遭ったペトロとパウロの内に働いていたのと同じ神が働いているのだ！」

これを見て、民衆の声を耳にした拷問官は身震いし、心の底から嘆きながらこう言った。

「この忌まわしいキリスト教徒の魔術は、なんと偉大なことか！」

その後、彼は鉄のフライパンを用意させ、その上で油を溶かし、殉教者をフライパンの上に載せて焼くよう命じた。また、鉛を溶かして殉教者の体に注ぐよう命じた。しかし、聖人はあたかも涼しい場所にいるかのように、喜び、神を賛美し、皇帝にこう言った。

「汝の王としての名誉にかけて懇願する。この溶かした鉛をさらに注いでくれ。なぜなら、私はそこから非常に大きな涼しさを感じているからだ！」

皇帝は、ポティトにこれ以上どのような凄惨な拷問を加えればよいのか、途方に暮れた。　そこで、聖人をフライパンから降ろすと、長い鉄の釘を持ってくるよう命じ、それを赤熱させて殉教者の頭に打ち込むよう命じた。この命令が実行されている最中、神の力によって、頭に赤熱した釘を打

ち込まれた殉教者は、生き続け、健康で、痛みも感じないままだった。　一方、殉教者が感じるはずだったその苦しみは、皇帝の頭上に降りかかり、皇帝は激しい頭痛に襲われて、殉教者にこう叫び求めた。

「キリストのしもべよ、私を憐れみ、この病から救い出してください。今、私はあなたの神の力を知りました！」

「お前の神々が、お前を癒やしてくださいますように」と聖人は答えた。

その間も、皇帝は殉教者に自分の癒やしを懇願し続けた。

「あなたの娘がここに来るまでは、あなたは癒やされないでしょう」と殉教者は言った。「私のキリストが、その娘を健やかにしてくださったのです。」

皇帝の娘は直ちに呼び出された。殉教者の足元にひれ伏し、彼女は言った。

「お願いです、神のしもべよ。あなたが宣べ伝えている、全能の神の御名によって、私を洗礼してください！」

聖人は直ちに洗礼槽を用意するよう命じ、民衆全員の面前で自ら皇帝の娘に洗礼を授けた。当時、迫害のため司祭たちは身を隠しており、司祭を見つけるのが困難だったからである。　その後、皇女の洗礼が終わると、殉教者は両手を天に掲げ、皇帝の癒やしを神に祈り、皇帝はたちまち健康を取り戻した。　しかし――なんと盲目であり、偶像崇拝の狂気であろうか！――真の神を知り、その神に感謝すべきところ、不敬虔な皇帝は、自らの邪悪な神々に感謝を捧げ、こう言った。

「アポロン神、マルス神、そしてミネルヴァ女神よ、私を癒してくださったことに感謝します！」

そこで聖人は、悪魔の惑わしに完全に身を委ね、狂気と激怒に駆られた皇帝を激しく非難し、その罪を暴いた。すると皇帝は、まるで悪霊に取り憑かれたかのように激怒し、聖人の舌を切り落とし、両目をえぐり出すよう命じた。　しかし、キリストの殉教者は、舌を切り取られた後も語り続け、神を賛美した。

「*わたしは常に主を賛美し、わたしの口には絶えず主への賛美がある*」（詩編33:2）。わたしの口に新しい歌を授けてくださった方を賛美し、「*わたしに恵みを与えてくださった主を*、喜びと楽しみをもって*歌おう*」（詩編12:6）。

その一方で、彼は皇帝にこう言った。

「不義なる者よ、私の舌を切り取ったことで、お前は何を成し遂げたというのか。お前は、私の舌を奪うことで私の口から言葉を奪い取れると期待していたが、見よ、聞け。私は、私の神であるキリストの恵みによって語っているのだ。キリストは、かつてファラオを打ち破ったように（出エジプト記14:1–32）、お前をも打ち破られるだろう。」

そこで皇帝は、自分が打ち負かされ、恥をかかされたことを悟り、この殉教者にこれ以上どうすべきか途方に暮れた。民衆からの非難を免れたいと願った彼は、ついに剣で殉教者の首を刎ねるよう命じた。

このようにして、キリストの聖殉教者ポティトは、若き日にキリストのためにその魂を捧げ[4795]、今や天において、キリストと共に不死の命の中で君臨している。 聖殉教者ポティトの祈りにより、私たちもまた、私たちの主イエス・キリストの恵みによって、この至福の命に与かることができますように。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして永遠に栄光がありますように。アーメン。

[4795] 聖殉教者ポティトスの死は、2世紀半ばに起こった。

7月15日

7月2日（旧暦）

同日、1431年にキエフおよび全ロシアの総主教フォティオス聖人が帰天された。

ヴラヘルナ教会における聖母マリアの尊い衣の安置に関する伝承[4796]

7月2日の記念日

敬虔なビザンツ皇帝レオ大帝[4797] とその妃ヴェリーナの治世下、コンスタンティノープルには、上院議員の地位にある敬虔な二人の男、実の兄弟であるガルヴィンとカンディッドが住んでいた。二人は互いに相談した上で、聖地を巡礼するためにエルサレムへ行くことを皇帝に願い出、許可を得て旅立った。 パレスチナに到着すると、彼らはガリラヤへ向かい、ナザレ[4798] を訪れ、聖母マリアの聖なる家を見たいと願った。そこでは、大天使の受胎告知と聖霊の導きにより、聖母が言葉の神を言い表せないほどに身ごもったのである。　そこに着いて礼拝を捧げた後、すでに日が暮れかけていたため、彼らはその近くにある小さな村で一晩を過ごすことにした。神の御摂理により、彼らは、ユダヤ人であり、清らかな生活を送っていた、年老いた未婚の女性の家に泊まることになった。　そこで夕食の支度がされている間、彼らは家の中に、たくさんのろうそくが灯され、香が焚かれ、芳しい香りが漂っている別の部屋があることに気づいた（そこには、聖母マリアの尊い衣が秘められていたからである）。　その部屋の周りには、多くの病人も横たわっていた。これを見て、ガルヴィンとカンディードはこの奇妙な光景に驚き、そこで旧約聖書の儀式の一つが行われているのではないかと推測した。　その後、彼らはその敬虔な女性に、夕飯を共にさせてほしいと頼み、ろうそくの明かりに照らされ、香炉の香りが漂うその部屋の中に何があるのか、そしてなぜその部屋の周りに病人が横たわっているのかと尋ねた。　当初、その女性は隠していた物そのものについては沈黙を守っていたが、その物から生じる奇跡については黙っていられず、尋ねてきた者たちにこう言った。

「誠実な紳士たちよ！　ほら、ここに横たわっているのをご覧の、これらすべての病人は、病の治癒を待っているのです。なぜなら、この場所では、盲人は目が見えるようになり、足の不自由な人は歩けるようになり、人から悪霊が追い出され、耳の聞こえない人は聴力を取り戻し、口のきけない人は言葉を話すようになり、あらゆる不治の病もここではすぐに治癒するからです。」

これを聞いて、ガルヴィンとカンディードは、なぜこの場所にそのような恵みと奇跡を起こす力が与えられたのか、その理由について女性にさらに詳しく尋ね始めた。女性は、依然として真実を隠し続けながら、こう答えた。

「私たちのユダヤ人の一族の間には、この場所で神が私たちの古代の先祖の一人に現れたという伝承が伝わっています。それ以来、この場所は神の恵みに満ち、ここで奇跡が起こるようになったのです。」

その女性の言葉に耳を傾け、ガルヴィンとカンディードは、真理を知りたいという心の願いをさらに強く燃え上がらせた。それは、かつて「私たちの心は燃え上がっていたではないか」（ルカ24:32）と語った古代のルカとクレオパのように、二人は女性にこう言った。

[4796] ヴラヘルナは、コンスタンティノープルの海辺、船着場のそばにある場所である。その名は、ヴラヘルナというあだ名で知られたあるスキタイ人の軍司令官に由来しており、彼は後に聖母マリアに捧げられた最も美しい教会が建てられたその場所で殺害された。

[4797] レウ1世（大帝）は457年から474年まで在位した。

[4798] ナザレは、ガリラヤにある小さな町で、聖なる思い出からキリスト教徒にとって大切な場所である（この町で、我らの主イエス・キリストは幼少期を過ごされた）。

「敬虔な婦人よ！ 生ける神の名にかけて、私たちに真実を明かしてください！ 私たちは、コンスタンティノープルからここまで遥かな道のりを旅してきたのは、パレスチナにあるすべての聖地を訪れ、そこで神への祈りを捧げるため以外の何のためでもありません。」 そして、 、あなたの家にも聖なる奇跡の起こる場所があると聞いていますので、それがどのようにして聖別されたのか、またどのような理由でそこで奇跡が起こるのか、その詳細を知りたいのです。

すると、神の御名によって呼びかけられたその女性は、心の底からため息をつき、目から涙を流しながら、ガルヴィンとカンディドにこう言いました。

「尊きお二人よ！ 今、あなたがたに語らざるを得なくなったその神聖な秘密は、今日に至るまで誰にも知られていませんでした。しかし、あなたがたが敬虔で神を愛する人々であると見受けられますので、この秘められた秘密をお伝えしましょう。私が話すことを、誰にも漏らさず、心の中に秘めておいてくださることを願って。 ここには、キリストを産み出された神聖なる聖母マリアの衣が、私によって保管されている。彼女が地から天へと召された際、その埋葬の場に私の先祖の一人である未亡人が立ち会っていた。彼女には、聖母マリアご自身の遺言により、その尊い衣が授けられた。 彼女はその衣を受け取ると、生涯を通じて畏敬の念を持って大切に保管し続けました。そして臨終の際、彼女は一族の若い娘にその衣を託し、聖母マリアご自身の名誉のために、その尊い衣だけでなく、自身の処女性までも清らかに保つよう、誓いを立てて命じました。 この乙女もまた、生涯を通じてその衣を大いなる敬意をもって守り続けた。そして、彼女が死期を迎えたとき、その衣を、一族の別の清く高潔な乙女に託した。 このようにして、長年にわたり、その聖なる衣は一人の乙女から別の乙女へと受け継がれ、ついに私の謙虚な手にも届き、未婚の生活の中で清らかに老いてきた私のもとに受け継がれたのです。 そして、私の一族にはもはや、その秘密を託せるような乙女がいないため、私はこのことをあなた方に語ります。私の内室に大切に保管されているその清らかな衣のおかげで、この地で奇跡が起こっていることを、あなた方に知っていただきたいからです。 どうか、エルサレムにおいても、またあなたがたがどこにいようとも、この秘密を誰にも話さないでくださるよう、切にお願いいたします。

聖母マリアの衣について聞いたガルヴィンとカンディードは、恐怖と筆舌に尽くしがたい喜びに満たされ、涙ながらに、その衣に関する秘密を守ることを誓い合った。 その後、二人はその女性に、聖なる衣のあるその部屋で一晩中祈りを捧げさせてほしいと懇願し、女性はそれを拒まなかった。

すると、部屋の中に入ると、彼らは、聖なる衣が収められた聖櫃が最も尊い場所に置かれているのに気づき、その周囲で灯る小さなランプも見つけ、強い芳香を感じ取った。その後、彼らは熱心に礼拝しながら、涙を流して神と聖母マリアに切実な祈りを捧げ始めた。 二人の心には、この計り知れない宝が王都の手に渡ることを願うという一つの思いがあった。その後、二人は相談して聖櫃の幅、長さ、高さを測り、その全体像を記憶に刻み込んだ――また、それがどのような木で造られていたかについても同様に記憶に留めた。 夜が明けると、彼らは祈りを捧げ、その聖なる神殿を出て、一晩中聖なる衣のそばに留まることを許してくれた女性に感謝の意を表した。彼らはそこにいた貧しい人々に惜しみない施しを分け与え、その女性に送られながら、エルサレムへの旅路へと向かった。彼らはその女性に、帰路についた際に再び彼女の元を訪れ、至聖なる聖母マリアの聖衣を拝むことを約束した。

その後、エルサレムを訪れ、命を与える聖十字架と主の聖墓に礼拝を捧げ、エルサレム近郊にあるすべての聖地を巡礼した後、ガルヴィンとカンディッドは大工を呼び寄せ、古い木を使って、彼らが指定した通りの形と大きさの聖櫃を作るよう命じた。 聖櫃が完成すると、ガルヴィンとカンディッドはそのために金糸で織られた覆いを購入し、その女性のもとへ向かう道へと戻った。

彼女たちの家に着くと、二人は金糸で織られた覆いを見せ、聖母マリアの尊い衣を収めた聖櫃をその覆いで覆ってほしいと懇願した。その後、二人は再び、前回と同様に、聖櫃の前で徹夜祈祷を

行うことを許可してほしいと彼女に願い出た。　許可を得ると、彼らは聖櫃の前で顔を地面につけてひれ伏し、涙で地面を濡らしながら、聖母マリアに熱心に祈りを捧げた。すなわち、聖衣を納めた聖櫃に触れ、それを持ち帰ることができるよう、聖母がそれを禁じないよう願ったのである。　真夜中になり、皆が眠りにつくと、彼らは恐る恐る聖櫃を持ち出し、家から運び出して自分の馬車の中に隠した。その代わりに、彼らはエルサレムで古い木を使って最初の聖櫃に似せて作った聖櫃を部屋の中に運び込み、　それを同じ場所に置き、金糸で織られた覆いをかぶせ、夜明けまで祈りを捧げた。日が明けると、彼らはその敬虔な女性に感謝を述べ、別れを告げ、貧しい人々に施しをして、旅立った。

帰路につく彼らは、言葉に尽くせない喜びを抱きながら急ぎ足で歩いた。コンスタンティノープルに到着すると、彼らはまず、持ち帰った聖母マリアの衣について誰にも話さなかった。その計り知れない宝物を自分たちだけの秘密にしておきたかったからである。　その後、自宅に聖使徒ペトロとマルコに捧げる小さな教会を設け、その中に――人目につかない隠れた場所に――聖母の衣を納めた聖櫃を安置した。　しかし、聖母の衣から起こる奇跡のゆえに、それを隠し通すことはできないと気づいたとき、彼らは皇帝レウス大帝とその妃ヴェリナのもとへ赴き、またコンスタンティノープル総主教ゲナディオス[4799]に対しても、起こったすべてのことを報告した。

これらの人々は、言葉に尽くせないほどの喜びに満たされ、ガルヴィヌスとカンディダスの家、そして彼らの教会へと向かった。　そこで、その尊い聖櫃を開けると、その中に、長年にわたり朽ちることなく残っていた聖母マリアの聖衣を目にし、畏敬の念と畏怖の心をもってそれに触れ、口と心で愛おしく口づけをした。　その後、そこから聖衣を取り出し、民衆の盛大な祝賀の中、栄光に包まれてヴラヘルナ聖母教会へと運び、金、銀、宝石で飾られた聖櫃の中に安置した。　その後、彼らは、至聖なる聖母マリアと、彼女から生まれた私たちの神キリスト――父と聖霊と共に永遠に賛美される方――の栄光と誉れを称え、毎年7月の2日に「聖母マリアの衣の安置」を祝うことを定めた。アーメン[4800]。

トロパリオ、第8調：

永遠の処女である聖母よ、人々の守りよ、あなたの至清なる御体の衣と帯は、あなたの無原罪の御生誕により、朽ちることなく、あなたの御城に威厳ある装いを授け給うた。まことに、あなたに

[4799] ゲナディオスは468年から471年まで総主教を務めた。

[4800] ビザンツの歴史家ニキフォロス（1295年から1360年まで生きた）の証言によれば、ヴラケルナ教会には、金細工の聖櫃の中に聖母マリアの衣が一つだけでなく、オモフォールや聖母の帯の一部も共に収められていた。　このことについては、ロシアの巡礼者たちも証言している。14世紀に生きたノヴゴロド出身のステファンは、次のように述べている。「我らはヴラヘルンへ赴いた。そこには（聖母マリアの）衣と帯、そして頭にかぶったスコーフィアが安置されており、それらは祭壇の玉座にある聖櫃の中に封印されて収められている」。　このことは、14世紀後半に生きた助祭アレクサンドルと助祭イグナティウスによっても裏付けられている。ヴラヘルナ教会は1434年1月19日に焼失した。現在、その痕跡はわずかに残るのみである。　聖母の衣の一部は現在、さまざまな場所に所蔵されている。例えば、モスクワの聖母被昇天大聖堂には一部が収められており（この部分はヴァシーリー・ゴリツィン公によって寄贈された）、もう一部は14世紀にスーズダリの大司教ディオニシウスによって購入されたもので、聖母受胎告知教会に所蔵されている。　スーズダリの大司教ディオニシウスによって取得されたものである。さらに、聖母マリアの衣の一部は、ローマのラテラノ大聖堂で公開されている。 ヴラヘルナにおける至聖なる聖母マリアの衣の安置を記念する祝祭は、伝承にある通り、皇帝レオ1世の時代、すなわち5世紀半ばに制定されたが、860年に総主教フォティオス（857–867年；　877–886年）とミカエル3世皇帝（855–867年）の治世下、アスコルドとディルとの和平締結およびルーシ人のコンスタンティノープルからの撤退を機に、さらに盛大に行われるようになった。 彼らは6月25日にコンスタンティノープルから撤退し、7月2日（火曜日）、ヴラヘルナでの荘厳な礼拝の後、総主教と皇帝はこの日を「聖母マリアの衣の安置」を記念する厳粛な祝祭日と定めた。　その際、聖母マリアの尊い衣は、マルキアヌス帝によって建設され、レオ1世帝によって修復された教会から、いわゆる「大聖堂」へと移された。

よって、万物の本質も、時さえも刷新されるからである。　それゆえ、私たちはあなたに祈ります。あなたの都に平和を授け、私たちの魂に偉大な憐れみを授けてください。

コンダク、第4調:

すべての信徒に朽ちることなき衣を、神の恵みに満ちた清きお方よ、あなたは御自身の聖なる衣を授け給いました。それをもって、あなたは御自身の聖なる御体を覆い、すべての人々の覆いとなられました。その御衣の安置を愛をもって祝い、畏れをもってあなたに叫びます、清きお方よ。喜びなさい、処女よ、キリスト教徒の誉れよ。

私たちの聖なる父、エルサレム総主教ユヴェナリウスの記念日

記念日：7月2日

聖ユヴェナリウスは、敬虔なテオドシウス2世の治世下で、エルサレム総主教の座に就きました[4801]。彼の総主教在任中、パレスチナでは、エウフィミオス、テオドシオス、ライオンに仕えたゲラシモス・ヨルダン人といった偉大な光であり、聖なる父たちが活躍し、他にも多くの聖人がいました。しかし、当時、異端者たちによって教会には混乱が生じていました。　そこで、聖母マリアを冒涜するネストリウス派の異端[4802]が発生し、エフェソス[4803]にて聖なる父たちによる第三回全地公会議が招集された。この会議において、ユウェナリウスは、聖キリロス（アレクサンドリア総主教[4804]）および他の聖なる父たちと共に、ネストリウスとその異端を破門した。　その後、テオドシウス皇帝の死去後、マルキアヌスとプルケリア[4805]が即位すると、新たな異端――ディオスコーロスとエウティキオス[4806]――が現れ、キリストには単一の本性しか存在しないという冒涜的な虚偽を唱えた。そこで、ハルキドン市[4807]にて、聖なる教父たちによる第4回全地公会議[4808]が開催され、聖ユヴェナリウスはこの公会議において、教父たちの間で、まるで星々の間に輝く明けの明星のように、敬虔さを放ち、異端の邪説の闇を追い払った。　さて、公会議の終了後、ユヴェナリウスが自身の総主教座のあるパレスチナへ戻ろうとしていた時、エウティキオスの不敬な教えに固執する異端者、テオドシウスという名の、極めて狡猾な性格の男が、修道士を装って現れた。　この男は、聖ハルキドン公会議において、正統信仰の教義が拒絶され、ネストリウスの教えが復活したかのように非難し、教会に

[4801] テオドシウス2世（若き）は408年から450年まで在位した。

[4802] ネストリウス派の異端は、コンスタンティノープル司教ネストリウスによって提唱されたもので、彼は「聖母マリアから生まれたのは神ではなく、人間イエスであり、その地上の生涯において、人間性と神性が恵みによって結びついた」と不当に説いた。　そのため、彼は神の母を「キリストの母」と呼び、「神の母」とは呼ばなかった。ネストリウスの異端は、431年にエフェソスで招集された第3回全地公会議において非難された。

[4803] エフェソスは、スミルナとミレトスの間に位置していた小アジアの都市である。キリスト教会の歴史において、エフェソスは、使徒パウロが第三回伝道旅行の際、宣教活動を行った場所として知られている。

[4804] キリル（第1世）は、412年から444年まで総主教を務めた。

[4805] マルキアヌス皇帝は450年から457年まで在位した。

[4806] コンスタンティノープルのアルヒマンドリト、エウティキオスは、エウティキウス派、すなわち単性論の創始者として知られている。　イエス・キリストの御顔における神性と人性の分離を説いたネストリウス派とは対照的に、エウティキオスは、イエス・キリストにおける人性は神性に完全に吸収されたものであり、したがって、キリストにおいては神性という単一の性質のみを認めるべきであると教えた。

[4807] ハルキドン（またはカルケドン）は、もともとプロポンティス（大理石の海）の岸辺にあったメガラの植民地であり、後に小アジアの属州ビフィニアの首都となった。

[4808] 第4回全地公会議は451年に開催された。

対して他にも多くの虚偽を吹聴した。 エヴァグリオス[4809]の記述によれば、この異端者は、その不信仰と悪行のため、アレクサンドリアの修道院[4810] から追放された後、不敬虔なディオスコロスに加わった。 しかし、その狡猾さと悪意のゆえに、テオドシウスは激しい殴打による懲罰を受け、その後、反逆者としてラクダに乗せられ、侮辱を受けながら街中を引き回された。 その後、パレスチナにやって来た彼は、神を冒涜する異端を広め、教会を騒がせるようになった。当時、パレスチナには、敬虔なテオドシウス2世皇帝の妃であるエウドキア皇后が滞在しており、彼女は夫の死後、聖地巡礼の旅に出ていた。

この異端者テオドシウスは、まず皇后エウドキアを説得してハルキドン公会議を否定させ、その後、自らの異端によって多くの経験の浅い修道士たちを害し、彼らを同調者に引き込んだ。 彼に惑わされた多くの修道士たちを率いて、彼はユウェナリウス総主教に対して反乱を起こし、ハルキドン公会議を非難するよう要求した。しかし、ユウェナリウスがこれに屈しなかったため、彼は総主教の座から追放され、コンスタンティノープルへ退き、マルキアヌス皇帝のもとへ身を寄せた。 一方、異端者テオドシウスは、皇后エウドキアを後援者にし、また異端に惑わされた修道士たちの支持も得て、総主教の座に就き、正教徒たちに多くの災いをもたらした[4811] 。 また、彼との交わりを拒んだ司教や聖職者たちに対しては、ある者は罷免し、ある者は拷問や死に追いやるとともに、彼らの財産を略奪し、家を荒らした。

彼は、自身の異端の教えを受け入れることを拒んだスキフォポリスの司教セウェリアンに対しても、同様の措置を講じた。セウェリアンを司教の座から追放した後、テオドシウスは彼を死刑に処した。

この結果、パレスチナ全土は恐ろしい混乱に陥り、聖都エルサレムは、まるで野蛮人に占領され、荒廃させられているかのようであった。 そこで、パレスチナの聖なる父たちは、このような迫害と教会の荒廃を嘆き、さらに迫害者の手を恐れて、最も人里離れた荒野に身を隠し、異端の根絶と教会の平和の早期到来を神に涙ながらに祈った。

当時、エルサレム教会の聖職者の中には、言葉に極めて長け、敬虔さを熱心に守るアファナシイという名の助祭がいた。 教会において、総主教の座に、聖なる場所に立つ荒廃の忌まわしきもの（マタイ24:15）である異端者、偽総主教テオドシウスが立っているのを見て、アファナシウスは彼の元へ行き、大声で叫んでこう言った。

「テオドシウスよ、これほど多くの殺戮で聖なる都を埋め尽くすのをやめよ！ キリストに敵対し、神の囲いからその羊の群れを強盗のように追い出すのをやめよ！」

アファナシウスがこの言葉を口にした途端、彼は直ちにテオドシウスの従者たちに捕らえられ、教会から引きずり出され、様々な拷問と数え切れないほどの殴打を受けた後、斧で殺害され、その生涯を閉じた。 その遺体は、足に縛られた縄で街中を引きずり回され、ついには犬たちに引き裂かれるために投げ捨てられた。

一方、皇帝によってパレスチナの統治に任命された総督ドロフェイは、当時モアブ人との戦争中であったため、エルサレムにはいなかった[4812] 。しかし、聖都で起きているすべての出来事を知る

[4809] エヴァグリオスは、アンティオキアの法学者であり、『教会史』（431年から494年までの時代を網羅）の著者である。537年から594年まで生きた。

[4810] アレクサンドリア——古代に名高い都市で、アレクサンドロス大王によって地中海沿岸、ナイル川の河口に築かれた。古代のアレクサンドリアはローマに次ぐ世界第二の都市であり、商業、工業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教初期においてはキリスト教教育の温床となった。–現在、アレクサンドリアは地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられている。

[4811] テオドシウスは（非合法ながら）20ヶ月間（451年12月から453年8月まで）、総主教の座に就いていた。

[4812] モアブ人は、死海の東、アルノン川の両岸にまたがるパレスチナ地方に住んでいた。この名称は、ロトの長女にちなんで名付けられた、ロトの息子モアブの名に由来する（創世記19:30–37）。

と、ドロフェイは軍を率いて急いでエルサレムに戻った。　しかし、偽パトリアルヒ・テオドシオスと皇后エウドキアの従者たちは、二人の命令により、総督の目の前で城門を閉ざし、彼が市内に入ることを許さなかった。彼らは、総督が信仰において彼らと志を同じくすることを約束するまでは、決して彼を通さなかった。　このようにして、この偽パトリアルヒ・テオドシオスは教会を混乱させながら、エルサレム総主教の座に二十ヶ月間留まった。やがて皇帝から軍司令官に対し、彼を捕らえ、反逆者かつ殺人者としてコンスタンティノープルへ送って裁判にかけるよう命令が下るまでであった。しかし、皇帝のこの命令を事前に知っていたテオドシウスは、密かにシナイ山へ逃亡し[4813]、そこで身元を隠して潜伏していた。

当時、コンスタンティノープルにおいて、皇帝マルキアヌス、プルケリア、そしてコンスタンティノープル総主教からその徳の高さゆえに深く尊敬されていた聖ユウェナリウス総主教は、皇帝の許可を得てエルサレムへと向かい、再び総主教の座に就くと、乱れていたあらゆる事柄を整理し、是正し始めた。　荒野の修道士たちは、彼の帰還を知ると大いに喜び、それぞれが自分の修道院へと戻っていった。一方、前述のテオドシウスによってエウティキウス派の異端に誘惑されていたエウドキア皇后は、どの信仰を貫くべきか分からず、心の中で迷っていた。　そこで彼女は、アンティオキアの聖シメオン・柱上者に使者を送り、有益な助言と指導を求めた。聖シメオンは皇后に手紙を書き、至聖なる正教会のユウェナリウス総主教と和解し、その敬虔な教えに従うよう命じた。　皇后は直ちにその通りにし、国民の前で異端を公に放棄して、カトリック教会の共同体の一員となった。これを見て、以前は異端者テオドシウスに惑わされていた数え切れないほどの人々、すなわち一般信徒や修道者たちが、皇后の模範に倣って正教に回心した。

その後、聖ユヴェナリウスは残りの生涯を平穏に過ごし、言葉と生活、そして牧者としての献身をもって聖なる教会を輝かせた。『プロローグ』には、彼について次のような記述もある。

マルキアヌスとプルケリアがヴラケルネに聖母マリアの名を冠した教会を建立した際、彼らは聖ユヴェナリウスに手紙を送り、聖母マリアの遺体がどこに安置されたか知っているかと尋ねた。総主教は、知らないと答えたが、　しかし、聖母マリアの遺体がどのように埋葬されたか、聖使徒たちが三日間、天使の歌声を聞いたこと、そして　、埋葬に立ち会わなかった一人の弟子のために三日後に聖母マリアの棺を開けたところ、聖母マリアの遺体は見つからず、棺の布だけが見つかったという、古くからの真実の伝承を思い出させた。

これを聞いた皇帝と皇后は、再び総主教に書簡を送り、せめて聖母の封印された墓と埋葬用の布だけでも送ってほしいと懇願した。総主教はこれに応じた。

聖ユヴェナリウスは、聖職者として計三十八年間奉仕し[4814]、安らかに永眠し、今や天上の聖職者たちと共に、私たちの主イエス・キリストという偉大なる大司教の栄光の御座の前に立っておられる。主イエス・キリストに、世々限りなく栄光があるように。アーメン。

7月16日

7月3日（旧暦）

[4813] シナイ山は、岩だらけのアラビアの砂漠に位置していた。イスラエル人はエジプトを出た後の第3月に、この地へ到着した。ここで神は、十戒として示された律法を授けた。– キリスト教時代には、この山で多くの修道士たちが修行に励んだ。5世紀には、シナイの荒涼とした地域全体が、その自然環境の貧しさにもかかわらず、スキテス（隠遁者）たちで埋め尽くされていた。シナイ山は現在、アラブ人によってジェベル・トゥール・シナと呼ばれている。

[4814] ユウェナリウスは420年から458年まで総主教を務めた。

同日は、12世紀の聖アナトリオス・ペチェルスキーの記念日である。

同日は、458年に逝去されたコンスタンティノープル総主教、聖父アントニオスの記念日である。

同日、13世紀のヤロスラヴリの敬虔な公爵ヴァシリーとコンスタンティンの記念日。

同日、2世紀のトラヤヌス帝の時代に殉教した聖殉教者ディオミデス、エウランピオス、アスクレピオドトス、ゴリンドゥヒの記念日。

この日、ヤレンクの奇跡行者である聖ヨハネと聖ロンギヌスの記念日でもあります。二人は白海で溺死し、1544年から1545年頃に海辺で遺体が発見されました。

同日、1589年に帰天したモスクワの聖ヨハネ（聖なる狂人）の記念日。

同日、1640年に逝去したコジェオゼルスク（ホズユグ）の聖ニコディモスの帰天を記念する。

同日は、モスクワ都主教フィリッポス聖人の聖遺骨の移送の日である。

聖殉教者ヤキンフの受難

7月3日の記念日

トラヤヌス帝の治世[4815] 、ローマではキリスト教徒に対する激しい迫害が行われていた。当時、ローマ皇帝の支配下にある者はすべて神々に犠牲を捧げることを義務付ける勅令が発布され、これを拒む者は拷問にさらされた。

この頃、宮殿には、カッパドキアのケサレア[4816] 出身の、ヤキンフという名の極めて優れた青年が住んでおり、彼は二十歳であった。　皇帝の寝具係を務めていたヤキンフは、常に皇帝のそばにいた。信仰と貞潔な生活において真のキリスト教徒であったヤキンフは、清らかさ、節制、柔和さ、そしてあらゆる善行をもって身を飾り、密かにキリスト・神に仕えていた。

ある日、不敬虔な偶像を称えるある祭りが行われた。この機会に、トラヤヌス皇帝は国民を動員して偶像に犠牲を捧げていた。　しかし、極めて美しい青年ヤキンフは、皇帝と共に偶像の神殿へは行かず、宮殿に残り、人目につかない小さな部屋へ退いて、そこで唯一の真の神に熱心に祈りを捧げていた。　これを目撃したのが、イアキンフと同い年で、同じく王室の寝殿係を務めていたウリヴィキという名の青年であった。イアキンフの祈りを盗み聞きしたウリヴィキは、皇帝のもとへ行き、イアキンフが皇帝の勅令に背いて、あるイエス・キリストという者に祈りを捧げ、彼を神と呼んでいると告発した。

その時、トラヤヌス皇帝は、民衆全員の面前で行われていた忌まわしい祝宴で食事をとっていた。彼はヤキンフを自分の元へ連れてくるよう命じ、偶像に捧げられた肉を彼に与え、それを食べるよう命じた。

キリストの勇敢な戦士ヤキンフは、十字の印で身を守りながら、皇帝にこう言った。

「私のようなキリスト教徒にとって、汚されたものを口にするのはふさわしくありません。あなたもまた、偶像崇拝や悪魔的な祝宴、そしてその不浄な生け贄を捨て、真の神を知り、ただその神のみに仕えることを心から願います。」

皇帝と共に饗宴を口にしていた者たち、そして皇帝の傍らにいた者たちは皆、若きヤキンフのその大胆不敵さに驚き、彼に対して怒りを燃やした。すると皇帝は彼にこう言った。

[4815] トラヤヌス皇帝は98年から117年まで在位した。

[4816] カッパドキアは小アジアの地域である。

「ヤキンフよ、お前の若さが傲慢さを生んでいる。お前は、その資格もないくせに、私に『先祖の神々を崇拝せず、我々も知らず、先祖たちも知らなかった、あるキリストを崇拝せよ』と説教するとは、なんと厚かましいことか！」

「お前が彼を知らないのは、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造し、人々に天の光を与え、自らの姿に似せて人間を造られた、真の神である彼を知るに値しないからだ。お前の父祖たちもまた、怒りの子らであったゆえに彼を知らなかったのだから、お前が彼を知らないと言うのは正しい。　しかし、私は敬虔でキリストを愛する両親のもとで生まれ育ち、私の神を崇め、仕えるよう教えられてきたのだ。

皇帝は聖人のこの答えに激怒し、家来たちに彼の口を打つよう命じた。

急いでキリストの殉教者に飛びかかった家来たちは、口だけでなく頬までも残酷に殴りつけた。そして彼が地面に倒れると、激しく踏みつけながらこう言った。

「よくも皇帝に生意気な返答を返したな！」

その後、皇帝は殉教者への殴打を止めるよう命じた。聖人は、激しい殴打と踏みつけのせいで立ち上がる力もなく、地面に横たわっていた。　その間、トラヤヌスは聖人の口に犠牲の供物を無理やり押し込むよう命じた。しかし、キリストの聖なる殉教者は、口と歯を固く閉ざし、偶像への犠牲による汚れを受け入れなかった。そこで皇帝は、聖人を鉄の足枷で縛り、足を足枷に嵌め、牢獄に閉じ込めるよう命じた。

翌日の朝、皇帝は民衆と共に相変わらずその忌まわしい祭りを執り行いながら、あらゆる拷問器具を人目につく場所に並べさせ、尋問のために牢獄から殉教者ヤキンフを連れてくるよう命じた。ヤキンフが連れて来られると、トラヤヌスは彼に尋ねた。

「若者よ！　我らの命令に従うのか、それともなおも頑なに抵抗し続けるのか？　お前の高慢な心は、お前を最も残酷な拷問へと追い込むだろうと予見している。残酷な拷問で死ぬことを望まないのなら、私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げるがよい！」

しかし、キリストのしもべは、心身ともにダイヤモンドのように堅固であり、神の助けに支えられて、トラヤヌスにこう言った。

「私はキリスト教徒であり、キリストを尊び、キリストに礼拝を捧げ、キリストに生きた生け贄――すなわち私自身を捧げます。　だが、お前の悪魔たちには犠牲を捧げるつもりはない。お前の脅しなど恐れない。なぜなら、私は苦痛など意に介さないからだ。そして、お前は私――キリストのしもべ――に、お前たちの不敬虔を受け入れさせることはできない。お前は、この束の間の命のために、私が永遠の命を捨てるよう、私を誘惑することはできない！　私を好きに扱え！

すると皇帝は怒りに満ち、まず、地面に横たわった聖なる若者を長い間容赦なく殴打するよう命じ、その後、拷問の場に彼を吊るし、鉄の爪でその肉体を引き裂くよう命じた。殉教者は、勇敢に苦痛に耐えながら、皇帝に向かって叫んだ。

「私はキリスト教徒であり、キリストの僕です。決してキリストから背を向けません。あなたがキリストのために私に拷問を加えることは、私にとって恵みなのです。　さらに残酷な拷問を考案してください。私は、私の主であるキリストのために、より一層苦しみたいのです。そして、その御名を呼び求めるすべての人を助けてくださる私の主キリストの御力によって、私の忍耐をもってあなたの残虐さに打ち勝つその日まで！

その間、第七時が訪れた。見物していた民衆は、殉教者の忍耐に深く驚嘆した。　そこで皇帝は、聖人を恥辱の柱から降ろし、縛って再び牢獄へ連れ戻すよう命じ、看守たちには、偶像への生贄として捧げられたもの以外の食べ物や飲み物を一切与えないよう厳命した。それは、飢えと渇きに追い詰められた聖人が、それらを口にするようにするためであった。　看守たちは皇帝の命令を厳格に実行した。毎日、偶像への生贄から得た食べ物と飲み物を持ち込み、牢獄にいる聖人に差し出した。しかし、翌朝そこを訪れると、すべてが無傷のまま残されていた。聖なる殉教者は、それらの偶像の

犠牲の供え物を忌まわしいものとして、　見ることも拒み、長い間、飲食を絶ち、絶えず神に祈りを捧げていたからである。　聖人は、あたかもある豊かな饗宴に身を置いているかのように、霊において喜びに満たされていた。なぜなら、彼は聖霊の恵みによって養われていたからである。

一方、トラヤヌスは使用人を遣わして、見張りの者たちに尋ねた。「ヤキンフは、犠牲から持ち込まれた食べ物や飲み物を口にしているのか、いないのか？」見張りの者たちは答えた：

「彼は、差し出されたものには指一本触れることもないが、飲食を絶ったまま、喜び、自らの神に祈りを捧げている。」

これを聞いて、トラヤヌスは看守たちに激怒した。誰かがヤキンフに別の食べ物を持ち込み、看守たちに死を脅したのではないかと疑ったのである。しかし、看守たちは、聖人のところには部外者が誰も入っていないと誓って証言した。彼らは、牢獄を厳重に警備し、誰にも近づかせなかったと断言した。

殉教者が牢獄に収容されてから38日目が訪れたとき、看守の一人がいつものように牢獄に入り、殉教者に捧げるために偶像への生贄を携えていた。　すると彼は、牢獄の中に言葉では言い表せないほどの光と、聖なる殉教者のそばに立っている二人の天使を見ました。そのうちの一人は、聖人の体をまばゆいばかりの衣で覆い、もう一人はその頭に素晴らしい冠を戴かせていました。　これを見た看守はひどく恐れをなして、持っていたものを放り投げ、皇帝のもとへ駆け寄り、見たことを報告した。皇帝はその話を信じず、すべてが魔法による何らかの幻覚に違いないと推測し、キリストの殉教者をさらに残酷な拷問にかけることに決めた。

二日が過ぎた後、トラヤヌスは公の法廷に腰を下ろし、拷問のために囚人を牢獄から連れ出すよう命じ、こう言った。

「キリストが彼をどのように助けるか、私の手から彼を解放できるかどうか、見てやろう。」

しかし、皇帝の従者たちが牢屋に入ると、その若者は主のもとで息を引き取っていた[4817]。また、若者の姿をとって遺体の周りに立っている、まばゆいばかりの天使たちも目にした。彼らは手にろうそくを掲げており、その間、牢屋は言葉では言い表せないほどの光と芳香に満ち溢れていた。恐怖に駆られた家来たちは牢屋から駆け出し、その光景を皇帝に報告した。

恥と怒りに駆られた皇帝は、多くの使用人を派遣して、死者の遺体を牢屋から運び出させた。使用人たちは牢屋に入ったが、そこには死体以外には何も見当たらず、彼らはその死体を牢屋から運び出した。　そこで皇帝は、殉教者の尊い遺体を城の外へ運び出し、人里離れた場所に捨てて、獣や犬、鳥に食わせよと命じた。その際、聖人の遺体がキリスト教徒によって密かに持ち去られることのないよう、見張りを近くに配置するよう命じた。

こうして、聖なる殉教者の遺体は長い間その場に横たわっていたが、神の天使に守られていたため、何の害も受けなかった。

ある夜、殉教者の親族であるティモフェイという名の敬虔な長老のもとに天使が現れ、殉教者の遺体を回収するよう命じた。彼は、自宅の信者数名と共に、夜が更けるのを待ってその人里離れた場所へ向かった。　誰も彼を妨げる者はいなかったため、彼は殉教者の聖なる遺体を運び出し、香りのよい清らかな布で包んで、自宅の奥の部屋に安置した。その後、長老は毎日、聖人の遺体が納められた聖櫃の前でランプに火を灯し、乳香を焚いた。

その後、ティモテイ長老は数年を過ごし、死期が近づくと、聖殉教者の聖遺骨を、ある高潔で、生前も聖なる生活を送り、年齢も尊い未亡人に託した。その未亡人は、その計り知れない宝を喜びをもって受け入れ、それを尊く自宅に保管し、同様に毎日香炉に火を灯して香を焚いた。　聖なる遺骨からは強い芳香が漂い、その家全体を満たしていた。この女性は、街全体が偶像崇拝にふけってい

[4817] 聖殉教者ヤキンフの死は、2世紀初頭に起こった。

たため、聖人の遺骨について誰にも何も語らなかった。ただ彼女一人だけが、キリストの殉教者の遺骨の前で、昼夜を問わず涙を流しながら祈りを捧げていた。

それから長い時が経ち、その未亡人が死期を迎えようとしていた頃、ある高貴な身分の男が頭痛をきっかけに視力を失うという出来事があった。その病人は丸一年もの間、光を見ることができず、医師たちからも何の助けも得られなかった。聖殉教者ヤキンフは、彼の夢に現れてこう言った。

「人よ！　あなたは自分の病を治し、失明から癒されたいと願うか？」

「私にこう語りかけるあなたは、いったい誰ですか？」と、病人は現れた者に尋ねた。

「私は」と聖人は答えた。「あらゆる病の医者、キリストの僕ヤキンフである。」

「お願いだ」と病人は続けた。「私が所有するすべての財産を奪ってくれても構わない。ただ、光が見えるようにしてくれ。暗闇の中にいると、私はひどく悲しみ、苦しんでいるのだ。」

「私の神が、あなたを無償で癒してくださるでしょう」と聖ヤキンフは答えた。「ただ、私が命じることを行ってください。すなわち、私の故郷であるカッパドキアの都市ケサリアへ、あなたの近くに住むあの未亡人の墓に葬られた私の遺体を移し、　そして、私の棺のそばで灯っているランプの油を、自分の目に塗れ――そうすれば、あなたは目が見えるようになるだろう。

その男は、夢で見たことを信じ、寝台から起き上がり、付き添いと共に未亡人の家へ向かい、殉教者の御出現と御命令について彼女に伝えた。　すると、その未亡人は、その男を聖人の遺体が安置されている奥の部屋へと案内し、灯台の油を与えた。男がその油で失明していた目を塗ると、たちまち目が見えるようになったが、聖人の命令を実行に移すのを遅らせてしまった。

しばらくすると、再び闇が彼の目を覆い、彼は失明してしまった。そこで彼は再び付き添いと共に聖殉教者の聖遺物の元へ赴き、癒やしを請うた。聖遺物が安置されている聖堂に入ると、彼は上からこう告げる声を聞いた。

「冒涜した者は、今や自ら冒涜された。」

そこで彼は、聖人の遺骨の前にひれ伏して、こう言った。

「神に愛された方よ、今、私に視力を授けてください。そうすれば、あなたが命じられたことを直ちに果たします！」

その後、立ち上がると、彼は再びランプの聖油で自分の目を塗ったところ、完全に、そして完全に視力を取り戻した。なぜなら、彼の肉体の目だけでなく、心の目も開かれたからである。キリストを信じることで、彼は聖なる洗礼によって啓発されたのである。

その未亡人は、その頃にはすでに他界していた。　そこで、新たに啓蒙されたそのキリスト教徒は、聖人の遺骨を納めた聖櫃を取り、それを封印した上で、信頼できる者たちを伴わせてカッパドキアのケサリアへと送り出した。その際、彼は聖櫃を運ぶ者たちに、街に近づいたら（聖櫃を運ぶ）ラバだけを先に行かせるよう命じた。　「彼らが立ち止まった場所に、聖遺物を安置しなければならない。聖人がそう命じたからである。」

聖遺物を携えて派遣された忠実な人々がケサリアの街に近づき、セバスティアンの門と呼ばれる門の近くに来たとき、彼らは付き添いなしでラバを放した。誰にも導かれることなく、ラバたちは殉教者が生まれた家へと近づいていった。　しかし、その頃にはすでに彼の両親は他界していた。そこで、その町にいたすべての信者たちは集まり、殉教者の聖遺物が彼らのもとに運ばれてきたことを機に、大きな喜びに満たされた。その後、彼らはその家で、聖遺物を大理石の聖櫃に尊く納め、我らの主イエス・キリストを賛美した。　キリストの殉教者ヤキンフは、7月の3日、飢えと渇きに苛まれながらも、信仰と祈り、そして聖霊の恵みによって満たされ、ローマで息を引き取った。その当時、不信心者たちはトラヤヌスの支配下にあったが、　一方、キリスト教徒たちの上には、私たちの主イエス・キリストが君臨しておられました。主には、父と聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、栄光が帰されます。アーメン

コンダク、第6調:

御自身の魂のただ中に命の木、すなわちキリストよ、あなたの信仰を築き上げたあなたの殉教者は、エデムの楽園にふさわしい者となり、大胆な精神をもって蛇の誘惑の木を滅ぼし、慈悲深き御方よ、あなたの栄光に冠された。

不眠の修道院の初代院長、私たちの尊い父アレクサンドルの生涯

記念日：7月3日

聖なる尊者アレクサンドル父は、アジアで生まれた。まだ若き頃、学問を修めるためにコンスタンティノープルへ赴き、そこで十分に学び、学問において相当な知識を身につけた。　そして成人すると、軍務に就き、後に　の軍司令官となりました。彼は公務の合間を縫って、聖書の書物を読むことを好んでいました。それは、彼が徳高く、誠実で、堅実であり、神を畏れ、貞潔と節制に飾られていたからです。　旧約聖書と新約聖書を読み終えると、彼はキリストの清らかな御口から語られた福音の言葉に思いを深く沈めた。*「もし完全になりたいのなら、行って、あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい。そうすれば、天に宝を持つことになる。そして、来て、わたしに従いなさい」*（マタイ19:21）。このことを深く考え、キリストの言葉を固く信じて、彼は、高い官職に就いていたため十分に持っていた財産を売り始め、その代金を貧しい人々や困窮者に施し、自らもすでに、この世とすべての世俗的なものから離れ、キリストの模範となるという揺るぎない決意を抱いた。　彼は、シリアにキノヴィアで神に喜ばれる生活を送る聖なる人々が住んでいると聞き、そこへ行きたいと願った。　軍司令官の地位を捨て、友人や自宅、奴隷たちを後にし、世俗的な心配事をすべて脇に置いて、シリアへと向かった。聖イリヤがアバ（長老）を務めるキノヴィアに到着すると、彼はこの長老に、修道兄弟の一員として受け入れてくれるよう懇願した。　修道者の列に加えられてから、彼はこのキノヴィアで四年間を過ごし、課せられたすべての務めを熱心に果たすとともに、断食、昼夜を問わずの祈り、そして書物の読解に励んだ。　何よりも彼は、ダビデの詩篇の真意を深く理解し、詩篇の各節が持つ力を悟りたいと願っていた。　疑問が生じると、彼は経験豊富な者たちに理解できない点を尋ね、神に熱心に祈り、神の聖書を理解できるようその知恵を照らしてくださるよう願った。そして聖霊の恵みによってその願いが叶えられ、その後、神の御言葉を朗読する際、彼はすでに心の中に完全な喜びと感動を見出していた。　すべての修道院で兄弟たちが食物や衣服について過度な心配をしているのを見て、彼は、食物や飲み物、衣服への過度な心配を禁じ、さらには明日のことさえ心配してはならないと説く、福音書にあるキリストの言葉を思い出した。　彼は、鳥に餌を与え、野の草に衣を着せる主が、なおさら、御自身のために働く人々を御自身の御手から放っておくはずがないと、確固として揺るぎない確信を持っていた。主は、彼らがまず神の御国と御義を求めさえすれば、彼らを養い、着せる力をお持ちだからである。　そのような思いに駆られて、聖アレクサンドルは手元にあった福音書を取り、それを携えてアッバ・イリヤのもとへ行き、彼にこう言った。

「父よ、福音書に書かれていることはすべて真実なのでしょうか？」

その問いを耳にした聖イリヤは驚き、困惑しながら、質問した者が悪魔による何らかの不信仰に惑わされているのではないかと考えた。質問には何も答えず、彼は座って頭を垂れた。そのとき、兄弟たちが彼のところへやって来た。

「兄弟たちよ」と聖イリヤは彼らに言った。「敵の罠に陥ってしまった私たちの兄弟アレクサンドルのために祈りましょう。」

そして立ち上がり、涙を流しながら祈りを捧げ、その後、アレクサンドルの方を向いてこう言った。

「聖なる福音書に書かれていることを信じないという、そのような疑わしい思いは、一体どこからあなたの中に生じたのですか？」

「いいえ、父上、私は信じていないわけではありません」とアレクサンドルは答えた。「ただ、聖なる福音書に書かれていることがすべて真実なのか、と尋ねているだけです。」

「まことに、すべてが真実です」と、兄弟たちは皆答えた。「それについて、いかなる疑いも持ち得ません。」

すると、アレクサンドルは彼らにこう言った。

「もし書かれていることがすべて真実であるなら、なぜ私たちはそれを実行しないのですか？」

「弱き人間には、すべてを実践することは不可能です」と、兄弟たちは答えた。

その答えを聞いたアレクサンドルは、心に火がつき、福音の言葉に完全に従って過ごしてこなかったこれまでの生活を何とも思わなくなり、福音の言葉に従ってより適切に生活できるよう、荒野へ去ることを決意した。　聖イリヤに祝福を請い、兄弟たちに愛を込めて別れを告げると、彼は主への信頼を胸に、聖なる福音書以外は何も持たずに旅立った。　彼は七年間、この世のいかなる事柄にも心を留めることなく、荒野に留まった。神の御摂理によって、彼が荒野でどのように養われていたかは、後の物語で明らかになるだろう。

荒野での7年間の滞在を終えた後、聖アレクサンドルは、自分がいた場所からそう遠くないところに、悪魔に仕える偶像崇拝者たちが住む一つの集落があることを知った。　神への熱意に燃え、彼はその集落へ向かい、そこで偶像の神殿に火を放った。これを見た住民たちは、燃え盛る神殿へと駆けつけ、そこで聖アレクサンドルを発見した。 彼は、 によって燃やされた神殿から離れようとはせず、むしろ、偶像崇拝者である住民たちがここに集まってくるのをわざと待っていた。なぜなら、自分がしたことを彼らから隠したくなかったからである。彼らが神殿を燃やしたことについて問い詰めると、彼はそれを認め、自分が燃やしたと告げた。　これを聞いた人々は彼に襲いかかり、殺そうとしたが、神は御自分のしもべを守られた。　住民の中には、アレクサンドロスを殺すことに反対する者もおり、彼らは彼に襲いかかろうとする者たちを制止し、放火の犯人を市の裁判所に引き渡すよう強く求めた。その後、皆の激情が収まると、聖人は声を張り上げてこう言った。

「おお、人々よ！　あなたがたの迷いを悟り、真理を知り、永遠の裁きから自らを救い出せ。私はあなたがたに天の御国を告げ知らせる。」

そして、使徒のように、彼らに救いの言葉を説き始めた。　ある者はその教えに耳を傾けたが、他の者はその言葉に耳を貸そうとせず、彼を市裁判所へ連行した。当時、その町の長官はラウルであった。彼は、聖人の口から語られる神の教えを聞きながら、長い間それに反論し、異教の書物に基づいてその教えを否定しようと努め、聖人を拷問の脅しで威嚇した。　ついに、尊者アレクサンドルが気立てが穏やかで、その答えも極めて賢明であり、また彼が説く教えが抗いがたいものであることを確信したラウルは、彼に何の不快な扱いも加えなかった。　それどころか、主はこう導かれた。この都市の統治者は、アレクサンドロスを一人だけ呼び寄せ、彼と二人きりで語り合うようにし、まず最初にこう尋ねた。

「正直に答えてほしい。あなた方キリスト教徒は、どのような根拠に基づいて、自らの命をこれほど軽んじているのか？」

この問いに対し、聖人はラヴルにこう答えた。

「あなたの言う通りではありません。私たちは自分の命を軽んじているのではなく、永遠に不死の身であり続けるよう努めているのです。真の命とは、永遠に生きることにあるのであり、一時的に生きるだけのこと――それは命ではなく、死なのです。」　私たちはこの一時的で死すべき命を、

将来の永遠の不死の命のために軽んじているのです。なぜなら、私たちにはこう記されているからです。「この世で*自分の魂を失う者は*、永遠の命において*それを保つ*」（マタイ10:39）。

これに対し、ラヴルは彼にこう言った。

「では、この地上の命が終わった後、あなたはどこにいると期待しているのですか？」

聖人は彼に天の御国と、義人たちに用意された永遠の祝福について説き始めた。不信仰な異教徒にとって、聖人の語りはまるで寓話のように思えたが、それにもかかわらず、彼は自分にとって新しい教えをさらに聞きたくなり、聖なる信仰の始まりについても尋ねた。　そこで聖人は、彼に神の知識を教え、人に対する神の慈愛を明らかにしつつ、世界の創造から、十字架とキリストの自発的な死、そして復活と栄光に満ちた天への昇天に至るまでの、主の御業について語り始めた。　その対話は昼夜を問わず続いた。二人は食事も飲み物も口にせず、眠気さえ感じなかった。　預言者エリヤの話――彼の言葉によって天が閉ざされ、彼の祈りによって、バアルの祭司たちが自分たちの偶像に祈っても得られなかったような火が犠牲の上に降り注いだ――に及ぶと、ラヴルはそれを聞いて笑いながらこう言った。

「お前たちの語るキリスト教の物語など、すべて作り話だ。有益な助言をしよう。我々と共に、我らの神々に犠牲を捧げよ。神々は慈悲深く、無知のゆえに神殿を焼き払い、神々を怒らせ、侮辱してしまったことを許してくださるだろう。」

聖人は言った。

「もし、あなたが神と呼ぶ者たちが本当に神であるなら、なぜ預言者エリヤの時代に、祭司たちが一日中彼らに呼び求めたにもかかわらず、彼らはその声に耳を傾けず、天から火を降らせて犠牲を焼き尽くさなかったのか？」　しかし、神のしもべエリヤは、ただ一度だけ、天におられる私たちの唯一の神に祈った（列王記上18:23–39）。するとたちまち天から火が降り、薪やいけにえだけでなく、水や石、さらには大地までも焼き尽くし、その後、預言者を捕らえようとした五十人の兵士たちの上にも火が降り、彼らとその兵士たちを焼き尽くした（列王記下1:1–18）。

ラヴルは笑いながら言った。

「もしそれが本当にあったことなら、自分自身の神の僕と称するあなたも、同じことをしてみなさい。ほら、私たちの目の前には藁や小枝がたくさんある。エリヤのようにあなたの神に祈り、天から火が降りてこれを焼き尽くすようにしなさい。そうすれば、私も『キリスト教徒が信じる神以外に、神はいない』と言うだろう。」

聖人は言った。

「まずお前が自分の神々に祈り、彼らにこれをやらせなさい。」

ラウルはこれに対し、こう答えた。

「私には、自分の神々の前で力もなく、大胆さもない。あなたが自分の神に祈りなさい。」

そこで聖アレクサンドルは、福音書の言葉によれば、信じる者にはすべてが可能である（マルコ9:23）ことを思い出し、神への確固たる信仰と希望をもって祈りの姿勢をとった。そして両手を挙げて祈り始めた途端、天から火が藁の敷物と小枝の上に降り注ぎ、それらを焼き尽くした。　これを見たラヴルは、大きな恐怖に襲われ、エリヤ預言者の時の五十人の兵士たちのように、自分にも火が降りかかり、焼き尽くされてしまうのではないかと恐れた。そしてラヴルは大きな声で叫び、こう言った。

「まことに、キリスト教の神は偉大なり！」

そして、この奇跡を人々に伝えようとしたが、聖人は誰にも話さないよう厳しく禁じた。そこでラヴルは、尊者アレクサンドルが生きている間は、このことを胸に秘めて黙っていた。しかし、彼が亡くなった後、ラヴルは司教や修道士たちの前でこの奇跡を公表し、神の御名によってその話の真実性を裏付けた。

尊者アレクサンドルによる奇跡の後、都市長ラヴルは、信仰の真理を学び、真の救いの道について教えを受けるため、丸一週間、聖アレクサンドルと常に共に過ごした。そして、輝かしい聖なる復活祭の日が近づいていたため、聖なる洗礼によって自らを照らしてほしいと願い出た。　しかし、人間の救いを憎む悪魔は、この聖なる行いの成就を妨げようと企み、ラヴルに「街の中でではなく、街の外にある教会で聖なる洗礼を受けるべきだ」という考えを吹き込んだ。　多くの市民とその妻や子供たちに付き添われて、彼らはそこへ向かった。その教会に着くと、そこで恐ろしく暴れ狂う少女を目にした。ラヴルは恐れをなして言った。

「私はキリスト教徒になりたくない。この娘はキリスト教の信仰を受け入れたために、神々から罰を受けているのだ。私にも同じようなことが起きるのではないかと恐れている。」

そう言うと、彼は教会から離れ、引き返そうとした。しかし、聖人は彼を引き止め、こう言った。

「なぜ悪魔の誘惑に屈するのだ？この娘は、神の御許しのもと、自らの罪の報いを受けているのだ。彼女は神の前で処女の清さを守ることを誓ったが、その誓いを守らなかった。そのために悪魔に苦しめられ、魂が救われるよう、サタンに引き渡されているのだ。」　これが真実であるかどうかは、お前自身がその乙女のもとへ行って、彼女に尋ねてみよ。

ラヴルは取り憑かれた少女に近づき、彼女自身から、神がサタンの侵入を許し、彼女を苦しめる原因となった罪について、大声で告白するのを聞いた。その後、ラヴルはあらゆる疑いを捨て、聖人から洗礼を授かるよう懇願した。　彼が洗礼を受け、聖なる洗礼槽から上がると、キリスト教の慣習に従って洗礼のために用意されていた白い衣は、上から下まで、まるで辰砂で描かれたかのような赤い円の中に十字架が刻まれていた。　皆はこの奇跡に驚き、ラヴールを探しにやって来た男たちや女たちも、自分たちにも聖なる洗礼を授けてほしいと願った。聖アレクサンドルは、彼らが真にキリストを信じていることを確かめようと、彼らにこう言った。

「あなたがたは信仰を証明しなければならない。町へ行こう。もしあなたがたのうち、家に偶像を持っている者がいれば、それを町の真ん中に運び出し、自分の手で粉々に砕き、それから聖なる洗礼を受けるように。」

皆はこれに従うことに同意し、町へやって来て、各自の家から数え切れないほどの偶像を持ち出し、町の真ん中でそれらを打ち砕いた。その後、町全体が聖なる洗礼によって救われたのである。聖人はしばらくの間その町に留まり、新しく洗礼を受けた者たちを聖なる信仰に堅く立たせた。そして、彼らが敬虔な生活に根ざし、そのことを神に感謝しているのを見ると、ラヴルにこう言った。

「これまであなたがたは乳で養われてきたが、これからは固い食物で自らを養わなければならない。もしあなたがたのうち、キリスト教の生活において完全でありたいと願う者がいるなら、キリストの御言葉に耳を傾けるがよい。キリストはこう言われている。*『あなたがたの財産を売り払い、施しをせよ。　天に朽ちることのない宝を蓄えなさい」*（ルカ12:33）、*「まず神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる」*（ルカ12:31、マタイ6:33）。

ラウルはこれを聞いて、こう言った。

「私は、それほど完璧なクリスチャンにはなれません。もし私がすべての財産を売り払って施しにしてしまったら、私の多くの家族を誰が養うのでしょうか。また、心配することなく、生活に必要なものをどうやって手に入れればよいのでしょうか。もしあなたが私にそれを確信させたいのなら、私たち自身が何も心配することなく、私と私の家族全員をたった一日でも養えることを、実際に示してください。」　あなた自身が乞食であり、自分自身の生計を立てるためのものさえ一日分もないのに、どうやってそれを成し遂げられるのか、私には分かりません。もしあなたが街でさえそれを成し遂げられないのなら、私たちがすべてを捨ててあなたに従うことになったとき、荒野で一体どうするつもりなのですか？

聖人は、神への揺るぎない信頼を持って、断固としてこう言った。

「家族を連れて行き、もし望むなら、あなたが知っている友人たちも連れて、一日分、人里離れたどんな砂漠へでも連れて行ってください。私もあなたたちと一緒に行きます。あなたたちの誰一人として、パンを、たとえほんの小さな一片でさえも、また他の食べ物も一切持たないようにしてください。　もし神が、かつて荒野でイスラエルの民を養われたように、あなた方を満たしてくださらないなら、その時は私の言葉を信じないことになるだろう。

ラヴールは同意した。朝になると、彼は家族や友人を連れて、聖アレクサンドロスと共に、その言葉が実際に実現するのをこの目で確かめようと、人跡未踏の荒野へと向かった。　一日中歩き続け、すでに十一時になった頃、彼らはどこからも道筋が見えない二つの山の間の場所に立ち止まった。聖アレクサンドルはいつものように夕べの賛美を唱え始めたが、ラヴールとその一行は、すでに飢えに苛まれていたため、これから食事ができるのだと思っていた。　聖人が祈りを終えると、彼らは自分たちの方へ歩いてくる一人の男を見かけた。それはごく普通の農民で、家畜を連れており、その家畜の両脇には大きな袋が重く積まれてぶら下がっていた。その袋の中には、焼きたてで温かいパンや、果樹園や菜園で採れた果物が入っていた。そして、聖人はラヴルにこう言った。

「この食糧を受け取りなさい。不誠実になるのではなく、誠実でありなさい。」

彼らは喜んで持ち込まれた物を受け取り、ラヴルは仲間たちと共に驚きながら言った。

「この荒野に、どうしてこんな食糧を持った人が現れたのか？　我々は丸一日歩いて、かろうじてここへたどり着いたのに、この人は真夜中に家を出れば、ちょうどこの時間にこの場所に到着できるはずだ。もし真夜中に出発したとしても、なぜこのパンは、まるで今オーブンから取り出したばかりのように、まだ温かいのか？」

そう不思議に思いながら、彼らはやって来た男に尋ねた。

「どこから来たのか？　誰があなたをここに遣わしたのか？」

「私がここに来たのは、あなたがたが空腹にならないようにと、私の主人が遣わしたからです」と、その男は答えた。

彼らがその男にさらに何かを言おうとしたとき、彼はたちまち、彼と共にやってきたすべての動物たちと共に姿を消してしまった。というのも、彼はただの人の姿をした神の天使だったからである。　皆は恐怖に襲われ、その時、皆は聖人の言葉、そしてさらにキリストの御言葉――主に仕える者は何事も心配せず、すべてを神の摂理に委ねるべきである――を信じるようになった。　その後、神に感謝を捧げ、そこで食事をとり、一晩を過ごした後、翌日、街へと戻った。この奇跡によって、聖アレクサンドルが荒野に滞在していた七年間、世俗的な事柄を一切気にかけることなく、何を食べて生きていたのかが理解できたのである。　この奇跡によって、都市の長ラヴルは深く心を動かされ、もはや何の迷いもなく、神への黙想に励みたいと願うようになった。彼はまずその職を辞し、その後、自分の財産を売り払い、妻と娘たち（彼には息子がいなかった）の同意を得て、生活費の一部だけを残して、残りを貧しい人々に施した。　彼の妻と娘たちは修道院を設立し、そこで心を尽くして神に仕え、神の御心に適った。一方、ラヴルは全財産を施し、奴隷たちを解放した後、荒野へと去った。数年後、彼はそこから呼び戻され、エデッサの司教に任命された[4818]。彼は司教の位に長くあり、光のようにその信徒たちを照らし続けた。しかし、ここで再び聖アレクサンドロスに関する物語に戻ろう。

聖アレクサンドロスは、自らが聖なる信仰によって啓蒙したその都市が、主の恵みによって繁栄し、栄えているのを見て、心の中で喜びを感じたが、その心は再び荒野へと彼を引き寄せた。　市民たちは彼を自分たちの司教として迎えたいと願い、懇願した。しかし、彼が承諾せず、密かに彼らのもとを離れようとしたとき、市民たちは昼夜を問わず城門で待ち構え、自分たちの父であり師である彼を見逃さないようにした。　しかし、尊者（聖人）は、かつての聖使徒パウロのように、弟子た

[4818] メソポタミア北部のユーフラテス川沿いにある都市。

ち数人に籠に入れて城壁の外へ降ろされ（参照：コリントの信徒への手紙二 11:32）、彼が愛する静寂を求めて荒野へと去っていった。彼は二日間荒野を歩き続けたが、道中で盗賊の隠れ家に遭遇した。 山賊たちは彼を捕らえ、首領のもとへ連れて行った。 しかし、聖人は神に霊感を受けた言葉によって、凶暴で獣のような山賊一味の首領をなだめただけでなく、その残酷な心を感動させ、彼をキリストへの信仰へと導き、数日後には聖なる洗礼によって彼を救いに導いた。彼に洗礼を授けた後、聖人は彼に尋ねた。

「洗礼を受ける前に、心の中で神に何を願ったのか？」

「私は」と、洗礼を受けた者は答えた。「主が、洗礼の浴槽で私の罪を清めてくださった後、一刻も早く私の魂を召し上げてくださるよう願いました。」

「お前の願いは叶うだろう」と聖人は彼に言った。

八日目のこと、新しく洗礼を受けたその男は、聖なる洗礼槽で清められた後、真の悔い改めの涙をさらに多く流して罪を洗い流し、主のもとへ召された。 これを見た他の強盗たちも聖なる信仰に帰依し、洗礼を受けて、深く悔い改めた生活を送り始めた。そして間もなく、強盗たちの住処そのものが修道院へと変えられ、そこで強盗たちは世俗を捨て、熱心な修道士となって修行に励んだ。聖人はしばらくの間彼らと共に暮らし、修道規則を定め、経験豊富な指導者を任命した後、人々の魂の救いを喜びつつ、最も奥深い荒野へと去っていった。 二日間歩き続け、彼はユーフラテス川にたどり着いた。川を渡ると、内部に非常に広い空洞のある木を見つけ、その木の空洞を自分の住まいとして選んだ。 日中は山々や荒野を歩き回り、夜になると住処へと戻った。彼が何を食べて生きていたかなど、問う必要はない。砂漠でラヴルが同行者たちと共に、聖書に記されている通り、神にパンを乞うたのだから。彼はこの場所に長い間住み続けた。 神の導きにより、兄弟たちが彼のもとに集まり始め、彼の天使のような生活に倣おうと、彼のそばに定住した。尊者によるこの地での滞在は二十年に及んだ。この間、ユーフラテス川沿いの地に大規模な修道院が設立され、そこには多くの兄弟たちが集まった。 ここには、ギリシャ、ローマ、シリア、エジプトなど、さまざまな国から来た四百人もの兄弟たちが集まっていた。神はそのような群れを集め、それを善良な羊飼いである尊者アレクサンドロスに託された。しかし、さらに驚くべきことは何だろうか。これほど多くの兄弟たちが、食料や衣服の世話がわずかなにもかかわらず、毎日、あらゆる面で満ち足りていたことである。 そして彼らは翌日のために何も残さず、訪ねてくる貧しい人々や旅人たちにすべてを分け与えた。神の摂理は、毎日、御自分のしもべたちに糧を送ってくださったのである。この修道院、すなわち最初の修道院には、それまでどこにもなかった新しい「不眠の修道団」が設立された。 聖アレクサンドルはまず、預言者の言葉「*一日に七度、あなたの正義の裁きを称えます*」（詩編118:164）に従い、兄弟たちが一日に七回、*神を*賛美するために教会へ行くよう定めました。 その後、同預言者の別の言葉、「*幸いな人よ、……その律法を昼も夜も黙想する者！*」（詩編1:1–2）に注目し、聖人は、昼も夜も休むことなく神の賛美の律法を学ぶという預言者の言葉を、人間が実際に果たすことは可能なのかと熟考した。 もし、と彼は自問した、それが不可能であるならば、聖霊は預言者の口を通してこれを語られることはなかっただろう。そこで彼は、自分の修道院に、教会において昼も夜も絶え間なく、休むことなく詩篇を詠むという慣例を確立したいと願った。 「もし、肉体の弱さゆえに、独房で一人の人間がこれを行うことが不可能だとしても、教会では多くの人が時間ごとに交代してこれを行うことは可能だろう」と彼は語った。彼はこのように自問自答していたが、神からの啓示なしにそのような事業を始める決心がつかなかった。そして、キリストの御言葉、「*求めなさい。そうすれば与えられます。門をたたきなさい。そうすれば開かれます*」（マタイ7:7）というキリストの言葉を思い出し、主が彼に啓示を授けてくださるよう熱心に祈り始めた。すなわち、彼の意図が主の御心に適うか、また、天の天使たちと同様に、地上の彼の修道院にあって修道者の天使の位に身を置く人々が、地上の天である教会において、 ——昼も夜も詩篇を唱えて神を賛美できるようになることを。このことについて、尊者は三年間、毎夜、自らに幾度も苦行を課しながら祈り続けた。

ついに、主は御姿を現して彼にこう言われた。

「お前の望むことを始めなさい。それはわたしにとって喜ばしいことである。」

そして、尊者様は主の御出現について、兄弟たちの中でも最も霊的な数名に語ったが、彼らに対しても自分の名前で告げることはせず、この点において、聖使徒パウロに倣ったのである。パウロは自分自身についてこう語っていた。*「私はキリストにあるある人を知っている。その人は……第三の天にまで引き上げられた」*（IIコリント12:2）。 その後、尊者様は、神に望まれ、祝福された儀式を制定し始められた。尊者様は、昼夜の時間数に応じて、兄弟たちを二十四の番に分け、各人が自分の番の時間を把握し、その時間に歌の場所に集まるようにされた。 賛美にはダビデの詩篇が定められ、通常の教会礼拝が行われる時間を除き、詩節ごとに二声で、慌てずに歌うことが定められていた。 これらの礼拝が行われている間は、新しく制定された詩篇詠唱の儀式は中断された。このようにして、キノヴィアの教会では昼夜を問わず絶えず神を賛美し、それゆえにこのキノヴィアそのものが「眠らぬ修道院」と呼ばれるようになった。 尊者様は、詩篇詠唱の際、毎日行う礼拝の回数についても定められました。それは、主が罪を犯した者を赦すよう命じられた回数――七十回を七回繰り返す、すなわち四百九十回――に基づいたものでした。 さらに、彼は、教会や修道院での礼拝の終了時、およびあらゆる務めを終えた後に、*「天には神に栄光、地には　に平和、人々に御好意」*と唱えることを定めました。自らの修道院にこのような規律を定めた後、尊者様は、神に喜ばれるためにはさらに何が必要かを思索しました。 そして、詩篇の言葉「*私は不義な者たちにあなたの道を教え、不敬虔な者たちもあなたに立ち返るでしょう」*（詩篇50:15）を思い起こし、自分の救いだけでなく、他者、とりわけ不敬虔な状態にある者たちの救いにも心を配るべきだと決意した。 当時、それらの国々では偶像崇拝が盛んであったため、彼は兄弟たちのうち数人を、キリストの福音を宣べ伝えるために派遣しようと企てた。彼はこの任務のために、聖なる信仰に対して最も博識で、とりわけ熱心な七十人を選んだ。これは、聖福音記者ルカが次のように記しているキリストの弟子たちの数に倣ったものである。*「主はさらに七十人の[弟子]を選び、ご自身が訪れようとしておられたあらゆる町や場所に、二人ずつご自身の先立って遣わされた」*（ルカ10:1）。キリストの宣教のためにこの数の弟子たちを選び、彼らのために祈りを捧げた後、キリストの模範者であるアレクサンドルは、彼らを二人一組にして、周辺の偶像崇拝の村々へと送り出した。神の恵みは、尊い父の祈りによって彼らに味方した。彼らの労苦は無駄にはならなかった。彼らは多くの異教徒をキリストへと改宗させたのである。

ユーフラテス川畔での二十年間の滞在を終えた際、聖アレクサンドルは、自身の修道院が完全に整い、そこで絶え間なく祈りを捧げる修道者たちの規律、そして断食の生活に関するあらゆる規則が確立されているのを見て、心を大いに喜び、主を深く感謝した。 その後、人間の魂の救いに対する強い熱意に駆られ、彼は異教の不義が深く根付いていたペルシャの地へ向かうことを望んだ。 兄弟たちの中から百五十人を旅の同行者として選び、残りの者たちは経験豊富な長老トロフィムに託し、彼を修道院長に任命して兄弟たちに平安と祝福を授けた後、選り抜きの兄弟たちと共にユーフラテス川を渡り、聖書以外の何も持たずに荒野を通ってペルシャの国境へと向かった。 そして、旅の途中でも、教会と同様に、昼夜を問わず時間ごとに交代しながら、兄弟たちと共に絶え間ない二声の詩篇詠唱を一度も絶やすことはなかった。 同行する兄弟たちの忍耐を試そうと、彼は彼らを砂漠へと導いた。そこでは、森の果実以外には何の糧も得られず、彼は定められた時間にのみ、その果実を食べることを許した。一部のせっかちな者たちは、かつてイスラエルの民がモーセに対してそうであったように、不平を言い始めた。彼らは尊者に向かってこう言った。

「あなたは私たちをこの荒野に連れ出し、飢え死にならせようとしているのだ。」

そして、すでに密かに修道院へ戻ることを企てていた。そのような者は三十人にのぼった。神の啓示によって彼らの思いを見抜いた聖人は、彼らを不信仰であると非難し、引き返すよう命じ、残りの者たちには力強い声でこう言った。

「兄弟たちよ、信じてほしい。今日、主は私たちに豊かな糧を授け、不信仰を恥じ入らせてくださるだろう。」　やがて彼らはペルシャの国境に近づいた。そこには、ギリシャ・ローマの王たちによって築かれた、規模こそ大きくないものの堅固な城塞都市があり、異教徒から守るための軍隊も駐屯していた。それらの都市からそう遠くない場所で、聖人と兄弟たちが荒野を歩いていると、突然、　神の御命により、それらの都市の軍司令官たち――トリブーンと呼ばれる者たち――が、十分な量のパンやその他の様々な食料を携えて彼を迎えに出てきた。そして、彼らの中には悪魔に仕える者たちが多く住んでいたため、聖人に彼らの都市を訪れ、彼らを啓蒙してほしいと懇願した。　持ち寄られた食物に感謝して口をつけた後、信仰が薄く忍耐に欠ける者たちを修道院へ送り戻すと、聖人はそれらの都市へ向かい、神の恵みの助けにより、短期間のうちに福音の説教によってすべての人々をキリストへと導いた。　そのうちのひとつの町では、特に施しや寛大な寄付に関する教えを耳にしたとき、人々は彼の教えを受け入れようとしなかった。そこで、裕福な者たちは彼にこう言った。

「お前は、私たちを貧乏人にしようとして来たのだ。」

そこで聖人は彼らのもとを去り、神は彼らに干ばつという罰を下された。　彼らが自らの罪を悟るまで、三年間も雨は降らなかった。彼らは聖人を探し始め、すでにアンティオキアにいた彼を見つけると、自分たちの罪を赦してくれるよう懇願した。この悔い改めの後、四年目には激しい雨が大地を潤し、大地の実りが豊かに実り、人々の魂が主へと立ち返った。　さらに砂漠を旅を続けた聖人は、かつてソロモンによってこの砂漠に築かれたパルミラという町にたどり着いた。この町の住民たちは、キリスト教徒と名乗ってはいたものの、ユダヤ人であり、依然として旧約の律法を守っていた。彼らは、アレクサンドロスと修道士たちが近づいてくるのを見て、町の門を閉ざしてしまった。

「一体誰が、これほど大勢の修道士たちを養えるというのか？」と彼らは言い、彼らを中に入れようとはしなかった。

しかし、尊師は神に感謝を捧げ、こう言いました。

「『*人に頼るよりも、主に望みを置くほうがよい*』（詩篇117:8）。兄弟たちよ、気弱になってはならない！ 思いがけず、神が私たちを訪ねてくださったのだ。」

そして実際、彼らが町から少し離れたところまで進むと、この近くに住んでいた異教徒たちが、主が彼らの心に働きかけられたおかげで、パンやあらゆる地上の恵みを持って彼らを迎えに出てきて、もてなし、満足させてくれた。　そこから、尊者（聖人）はアンティオキアへと向かった。こうして神は、多くの人々の益となるよう、彼の道を導かれたのである。そして彼がアンティオキアに近づき、いつものように絶え間なく詩篇を詠みながら歩んでいると、この町の司教テオドトスが彼の到着を知った。その頃、アレクサンドロスの名はすでに至る所で称えられ、敬われていた。　しかし、悪魔は、ある悪意に満ちた嫉妬深い人々を煽り立て、彼らは司教に対し、聖人とその兄弟たちについて、彼らが守っている断食や祈りといったすべての行いが、虚栄心や人前での見せびらかしのために、偽善的に行われているかのように誹謗中傷した。　司教は、その虚偽の中傷を見抜くことなく、多くの家来を、その誹謗者たちと共に、アレクサンドルと彼と共にいる者たちを不名誉な形でアレクサンドルの町から追放するよう送り出した。しかし、聖アレクサンドルに導かれた、地上の天使たちの尊い姿は、すでにいつもの賛美歌を歌いながら町に入っていたため、司教が送り出した者たちは、町の中で彼らに出くわしてしまった。　彼らはまるで強盗のように彼らに襲いかかり、一人ひとりを捕らえて激しく殴打し、街の外へ引きずり出した。そして、指導者である聖アレクサンドロスには、さらに傷と屈辱を加えた。しかし、聖アレクサンドロスとその兄弟たちは、無実の罪で苦難を受けることを許されたことを喜びとした。　聖人は、これが悪魔の唆しによって起こったものであり、善き行いと、それによって多くの人々に与えられる恩恵を妨げようとするものであることを知っていた。彼は気力を奮い立たせ、再び夜陰に乗じて兄弟たちと共に密かに町に入り、そこで荒れ果てた空き風呂を見つけ、そこで詩篇を唱えた。　翌日、司教はこのことを知った。彼の怒りはまだ収まっていなかったが、神だけでなく民衆をも恐れていたため、すでに慈悲に傾き始めていた。　というのも、アン

ティオキアの市民たちは皆、アレクサンドルの到来を喜び、彼を偉大な預言者として崇め、また、その尊い父と兄弟たちに与えられた不名誉と傷について、司教に対して激しく怒っていたからである。司教自身も、ついに心を動かされ、アレクサンドロスとその兄弟たちが街に留まることを祝福した。そして、使われていない浴場が彼らの住居となった。しかし、しばらくして市民たちは、司教の祝福と許可を得て、聖なる方のために教会を建て、修道院を設立した。　その後、多くの民衆が自分の通う教会へ行くのをやめ、聖アレクサンドロスのところへ礼拝の歌声を聴きに集まるようになった。彼から、訪れる人々を教え導く、蜜のように甘美な訓戒を聞くためであった。人々の心は皆、聖人への愛に燃えていた。　彼と彼の兄弟たちに必要なものはすべて、毎日運ばれてきた。しかし、彼らは一日に一度、第九時（午前9時）を過ぎてから食事をとるだけで、残りはすべて貧しい人々に配り、翌日のために何も残さなかった。　神は、慈悲深い貧者愛好者たちを通じて、絶えず彼らに食物や必要なものを送ってくださった。しばらくして、聖人は自分の修道院に病院と旅人宿を設けたいと願い、司教に祝福を求めた後、自らの望み通りにそれを実現させた。　彼自身は貧者であり、何も持っていなかったが、富裕な人々は皆、自らの財宝から彼にすべてを提供した。彼が必要とするものは何でも喜んで与え、彼が指示するあらゆることを常に熱心に実行した。　尊者は自ら病人の世話をし、旅人たちをも自らもてなして、神を愛する人々――神によって慈善の心に導かれた人々――から寄せられた施しの中から、彼らに必要なものをすべて与えた。病人には、大いなる力を示す自らの手を置くことによって癒やしを与えた。そして人々は、彼を通して奇跡を行われる神を賛美した。　聖人は、司教がその職務においてその地位にふさわしくない振る舞いをしていることに気づいていた。また、市の総督や他の重要な高官たちも、正義にかなわない行動をとっているのを見て、エリヤの熱意に感化され、同時に柔和さに満ちていた彼は、恐れを知らず勇敢に彼らを糾弾し、神の言葉に基づいて真理を教えた。　彼はすべての人にとって師であり、導き手であった。しかし、彼のそのような熱意を快く思う者は皆ではなく、とりわけ権力者たちはそうではなかった。聖職者の中にも、彼の徳高い生き方に感嘆しつつも、彼を激しく憎み、司教に彼に対する敵意を煽る者たちがいた。　そこで、司教は最も悪意に満ちた副助祭であるマルクを、多くの使用人を伴わせて聖人のもとへ遣わし、彼を町から追い出そうとした。マルクは到着すると、激怒して聖人の顔を強く殴りつけ、こう言った。

「この町から出て行け、不信心者め！」

しかし、聖人は、悪意のない子羊のように、福音書の言葉だけを用いて、穏やかにこう答えた。

「*そのしもべの名はマルクであった*」（ヨハネ18:10）。

そして、副助祭マルクと彼と共にやってきた家来たちが、聖人にさらに大きな侮辱を加え、彼を町から追放しようとしたその時、民衆が駆けつけ、大混乱が生じた。　皆が聖なる父とその兄弟たちを守ろうとしたため、マルクと彼と共にいた者たちは、民衆の騒動からかろうじて逃れるのがやっとだった。　司教はさらに怒りに燃え上がり、聖人に対して同様に怒りを抱いていた軍司令官と相談した。その後、人々に知られぬよう、夜陰に乗じて修道院から聖人を連れ出し、ハルキドへ追放した。また、彼の兄弟たちも追い散らされ、皆、それぞれ逃げられる場所へと散っていった。　しかし、しばらく時が経つと、聖アレクサンドロスは再びアンティオキアに戻された。アンティオキアの市民全員が彼を案じ、司教や総督に対して不満を漏らしていたからである。しかし、聖人は自分の兄弟たちを見つけられず、自らもここに住むことを望まず、去ろうとしていた。　これを知った市民たちは、彼が外に出ないよう門のそばで見張りを立てた。彼らは彼に深い愛情を抱いており、彼に自分たちのそばに留まってほしいと願っていたからである。しかし、聖人はアンティオキアを去ることを決意し、修道服を脱ぎ捨て、ぼろ服を身にまとい、物乞いに扮して、夜中に街を抜け出した。　数日間歩き続け、キリンフィニオスの修道院に到着した。この修道院で、彼はエウフラテス川沿いの自分の修道院で定めたのと同じ規律がすべて守られているのを見つけ、驚くとともに、この規律を自分の弟子たちの誰かがここに持ち込んだのだろうと推測し、この地でも自分の労苦の成果を示してくださった

神に感謝した。　兄弟たちは、それがアレクサンドロスであることを知ると、彼が自分たちのところへ来てくれたことを大いに喜んだ。なぜなら、至る所で彼の名が称えられており、彼らはかねてより彼に会いたいと願っていたからである。

このキノヴィアにしばらく滞在した後、尊者はそこからコンスタンティノープルへと向かった。神は多くの人々を救うために、彼をそこへ招いておられたのである。このキノヴィアからは、二十四人の兄弟が彼に同行した。　コンスタンティノープルに到着すると、彼は聖ミナの教会のそばに居を構え、兄弟たちが彼の元へ集まり始めた。数年で、ギリシャ人、ローマ人、シリア人など、さまざまな民族から三百人もの兄弟が集まった。こうしてここに広大な修道院が設立され、その中で「不眠の修道会」が創設された。　神の御摂理により、修道院に必要なものはすべて供給されていた。そのことは、以下で明らかになるだろう。一部の貴族たちは、この修道士たちの、貧しいながらも何の心配もない生活――　昼夜を問わずただ神を賛美することに専念し、この世の何事にも、明日のことさえも気にかけない修道士たちの姿を目の当たりにし、わざわざ使者をこの修道院に送り込み、数日間滞在させて、修道士たちが日々の糧をどこから得ているのかを観察させた。　聖アレクサンドルは、そのような意図を見抜くと、送り込まれた男たちの面前で、弟子の一人にこう言った。

「行って、修道院の門の前に立っている男を連れて来なさい。」

その兄弟は行って、清潔で温かいパンで満たされた大きな籠を持った男を見つけ、その男をパンごと師のもとへ連れて行った。　聖人は皆の前で、その男に「あなたは誰で、どこからパンを持って来たのか」と尋ね始めた。聖人が尋ねたのは、自分自身が知らなかったからではない――聖人にとって、神から隠されたことは何一つなかったからだ。それは、修道院の生活や糧について探りに来た、信仰の薄い者たちを恥じ入らせるためであった。尋ねられた男はこう語り始めた。

「私はパン屋です。今日、窯からパンを取り出していたところ、ある光に満ちた男が現れました。背が高く、見目麗しく、威厳ある口調でこう言いました。『このパンをすべて、至高者のしもべたちに届けなさい』と。」　私は恐怖のあまり、「どこへ運べばよいのか分かりません」と彼に言った。すると彼は、「私について来なさい」と言ったので、私は彼の後をついて行った。この修道院の門まで連れて行かれると、彼は姿を消した。

尊者は立ち上がり、神に感謝を捧げました。そして、彼の神への信仰と、神による彼への偉大な御摂理が、すべての人に知られるようになりました。尊者は非常に洞察力に富んでおり、兄弟たちが何をしているか、さらには彼らの思いさえもすべて知っていました。機会があれば、二人きりの場で彼らの罪を指摘し、父のように罪を犯した者たちを正しました。　彼は病人の世話にも心を配り、彼らに仕えるために兄弟たちの中から四人を任命し、病気のせいでそれを必要とする人々のために、毎日温かい飲み物を用意するよう命じた。そして、奉仕者たちはその命令を忠実に実行していた。ある日、あるいは神の御心により、尊者様の神への揺るぎない信仰を示すためであったのか、奉仕者たちは病人のための温かい飲み物を用意するのを忘れてしまった。　これに気づいた聖人は、奉仕者の一人を呼び寄せ、なぜ飲み物を温めなかったのかと尋ねた。しかし、その奉仕者は、洞察力に富む聖人に自分の行いを隠そうとして、薪がないと答えた。すると聖人は彼にこう言った。

「なぜ今朝、薪のことは教えてくれなかったんだ？まさか、私を試しているのか？まあ、いいさ。行っておいで。飲み物ももう温まっているから。」

病院に着くと、兄弟は確かに、火を焚かずに満杯の釜が煮え立ち、ぐつぐつと音を立てているのを見つけた。そして、皆はこの奇跡と聖人の信仰に驚嘆した。

当時、キリストの教会はネストリウスの異端に揺さぶられていた[4819]。敵は、敬虔さを異端と見なし、異端を敬虔さだと見なしていたため、聖アレクサンドルが異端者であるという噂を民衆の間

[4819] ネストリウス派の異端は、至聖なる聖母マリアが神ではなく、ただの人間を産んだと主張するものであった。その人間には、聖母とは別に、父から永遠に生まれ出た神の御言葉が結合したものであり、しかもその結合は道徳的なものに過ぎないというものであった。 ネストリウス派の異端は、431年にエフェソスで開催された全地公会議で非難され、そこで

に広めた。当時、多くの人々が異端を唱えており、ネストリウス総主教自身もその一人であったからである。　聖アレクサンドルは異端者たちの裁判にかけられ、無実である異端について問われた際、詩篇の言葉をもってこう答えた。

「*君主たちは座して、わたしに対して陰謀を企てているが、あなたのしもべはあなたの掟を思索している。あなたの啓示は、わたしの慰めであり、わたしの助言者である*」（詩編118:23–24）。

彼がそう語ったとき、悪霊が現れて叫んだ。「なぜ、時期尚早に私を苦しめるのか」――そして、その直後に姿を消した。聖人は詩篇の言葉を述べた後、彼を試そうとする者たちにはそれ以上何も答えず、ただ視線を下に向け、毛を刈られる小羊のように、無言のまま立ち尽くしていた。　裁判官たちは激怒し、彼を追い出した。やがて、民衆の中にいたサタンの僕たちが彼に手をかけ、害を加えようとしたとき、彼は神の御加護に守られ、無傷のまま彼らの間を通り抜け、修道院へとたどり着いた。そこでは、兄弟たちによって彼のために多くの祈りが捧げられていた。　その後、敵は再び彼に対して攻勢を強め、異端者たちを彼に立ち向かわせた。彼らは彼自身だけでなく、多くの兄弟たちをも、束縛や投獄、殴打によって苦しめたが、これらすべてが、尊者には栄光に満ちた冠を、敵には恥辱をもたらすこととなった。　異端の嵐が過ぎ去ると、尊者は残りの生涯を平穏に過ごし、神に喜ばれ、多くの人々の魂を救いへと導いた後、[4820]　、極めて高齢のうちに主のもとへ帰った。修道生活は50年に及び、名誉をもって埋葬された。　その棺の周りでは奇跡が起こった。あらゆる病気において、聖アレクサンドルの祈りによって人々に癒しがもたらされた。これは、私たちの主イエス・キリストの恵みによるものであり、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、主への栄光、賛美、感謝、そして礼拝が捧げられる。アーメン。

聖殉教者モキアとマルコの殉教

記念日：7月3日

これらの聖なる殉教者たちは捕らえられ、[4821]　のマクシミアン司教に引き渡された。司教はまず彼らに偶像への生贄を捧げるよう説得したが、やがて死を脅かすようになった。彼らが祭壇へと連行される際、幼い子供が彼らの前を歩き、進むのを妨げた。　それに対し、異教徒たちはその子を肩に担ぎ上げ、馬具の革紐[4822]　で打ち始め、110回もの残酷な打撃を加えた。すると、その子はエパルフにこう言った。

「総督よ！　あなたは私に悪いことを教えている。」

聖なる殉教者たちは、キリストへの信仰とそれを告白することに揺るぎない姿勢を貫き、偶像への生贄を捧げることを拒んだため、剣で首を刎ねられた。　聖モキイに続いて、その妻と子供たちが処刑場へと向かい、泣き崩れたが、彼は彼らに泣かないよう命じた。一方、聖マルコは処刑場に立ち、首を斬られた際、その妻が彼の首を受け取った[4823]。

キリスト・イエスにおける二つの本性の結合に関する問題は次のように決定された。「神性という本性と人性という本性は、キリストにおいて不可分かつ非混合的に結合している」。

[4820] 430年頃。

[4821] ギリシャ・ローマ帝国では、各地域の統治者が「エパルホス」という称号を名乗っていた。

[4822] 「ポドプルガ」とは、鞍を引き締めるためのベルトまたは紐のことである。

[4823] 聖殉教者モキアとマルコの没年は不明である。

7月17日

7月4日（旧暦）

同日は、1174年に殺害された敬虔なる大公アンドレイ・ボゴリュブスキーの記念日である。

聖なる父アンドレイ、クレタの大司教の記念日[4824]

7月4日の記念日

聖アンドレイはダマスカス[4825]　で生まれ、生後7歳まで口がきけなかった。ある時、両親と共に教会でキリストの御体と御血の聖なる秘跡を拝領した際、聖体拝領の最中にその口がきけない状態が解け、彼は話すことができるようになった。　真の神の子であるキリストは、かつて口が利けなかったこの少年の口を通して御自身を賛美させ、至聖なる秘跡にどれほど偉大な力が秘められているかを示された。　聖体拝領によって言葉の賜物を受けた聖アンドレイは、神の書物の教育を受けるために預けられ、14歳の時に神に仕えるために聖都エルサレムへと連れて行かれた。　彼を受け入れたエルサレムの至聖なる総主教は、彼を聖職者の一員に加え、やがてその聡明さを認め、公証人として任命した[4826]。聖アンドレイは、貞潔、節制、柔和に励み、極めて徳高い生活を送ったため、総主教自身でさえ彼を称賛し、彼は神に喜ばれ、すべての人から愛された。

それから何年か後、コンスタンティノープルにおいて、皇帝コンスタンティノス・ブラダトの治世下[4827]、邪悪な「単意論者（モノフェリテス）[4828]」の異端に対抗するため、聖なる父たちによる第6回全地公会議[4829]　が招集された。この異端に関する詳細は、聖マクシムス・殉教者の伝記を参照されたい。　この公会議には、当時のエルサレム総主教テオドールによって、当時大助祭の位にあったこの至福のアンドレイも派遣された。というのも、エルサレムは当時イスラム教徒の支配下にあったため、総主教自らがコンスタンティノープルでの公会議に出席することはできなかったからである。　至福のアンドレイは、彼を満たしていた聖霊の恵みにより、この頃、聖なる教父たちや皇帝自身にもその名を知られるようになった。彼らは彼の中に、書物による博識や正教会の教義に対する深い知識だけでなく、神に喜ばれる聖なる生活も認めたのである。　また、異端者たちに対しては、キリストの勇敢な戦士としての姿を示し、敬虔さを熱心に擁護することで、聖なる教父たちの公会議を大いに支えた。

公会議終了後、聖アンドレイはエルサレムに戻り、そこでいつものように神に奉仕する活動に専念し、総主教の命により孤児の世話をし、旅人に食事を提供し、病人の世話をした。これらすべてにおいて、彼はあたかもキリストご自身に仕えているかのように、極めて熱心かつ献身的に取り組ん

4824　クレタ（またはカンディア）――地中海最大の島。地中海の東部、エーゲ海の南に位置する。現在はトルコに属している。

4825 ダマスカス――シリア最古の都市であり、聖書ではすでにアブラハムの物語（創世記14:15）の中で言及されている。パレスチナの北東、アンチレバノン山脈の東麓に位置する美しく肥沃な平野に位置していた。– キリスト教会の歴史において、ダマスカスはサウロがキリストへと奇跡的に回心した場所として注目される（使徒行伝9:1–22）。634年にアラブ人に征服され、1516年からはオスマン帝国に編入された。

4826 秘書。

4827 コンスタンティノス4世（ポゴナトス）は668年から685年まで在位した。

4828　モノフェリテ派の異端は、イエス・キリストに二つの本性を認めていたものの、彼にはただ一つの意志しか存在しないと主張していた点にあった。

4829 680年、

だ。 その後、ユスティニアヌス2世の治世下[4830] 、アンドレイはクレタの大司教に任命された。そこで彼は、神の霊に導かれた教えと自らの徳高い生活によって、キリストの教会を照らす、世の灯火となった。 悪魔たちが恐れる（彼は悪魔を追い払っていたからである）不屈の修行者として、アンドレイは異端者たちにとっての脅威であった。目に見えない敵だけでなく、目に見える敵さえも、彼の祈りによって追い払われた。

ある時、船でやって来たサラセン人がクレタ島を襲撃し、ドルメオスと呼ばれる町を包囲した。そこでは、キリスト教徒たちが彼らの牧者である聖アンドレイと共に籠城していた。 しかし、サラセン人たちの戦いは実を結ばず、彼らは恥をさらして撤退した。彼らを追い払ったのは武器ではなく、あらゆる武器よりもはるかに強力な聖人の祈りであった。聖人は涙を流しながら神に祈りを捧げ、その祈りを矢のように放って敵を打ち負かしたのだ。 彼の祈りは大きな力を持っており、それによって彼は、雨の降らない干ばつの時期に雨を降らせ、その雨がクレタ地方を潤し、その地に豊穣をもたらした。

キリストの聖人アンドレイは、神の霊感を受けた多くの著作や、大斎の第5週の木曜日に歌われる「大カノン」、その他のカノンを著した。 彼は教会を聖歌で彩り、聖母マリアを数多くの賛美をもって称えた[4831] 。ある教会の必要に迫られ、彼はある時コンスタンティノープルへと向かい、そこで多くの人々にとって有益な存在となった。 誰もが彼の姿と蜜のように甘美な言葉に心を癒やされ、魂を磨き上げた。それゆえ、自らの魂の救いを求める者たちは皆、彼のもとに集まってきたのである。コンスタンティノープルからクレタへ戻ろうとした際、聖人は自らの死を予見し、親しい友人たちに、もはやクレタを見ることはないだろうと語った。 彼らに最後の口づけで別れを告げると、彼は船に乗り込み、旅立った。ミティリーネ島にたどり着いたとき、彼は病に倒れ、イエリスという名の地で、その魂を神の御手に委ねた[4832] 。

祝福されたアンドレイは、彼に託された「言葉の羊」の群れを名誉をもって牧し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の御座の前に立つ聖なる司教たちの列に加えられた。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

コンダク、第2調:

神聖なる甘美な賛美を明瞭に響かせ、あなたは世の最も輝かしい灯火として現れ、三位一体の光を放たれた、尊きアンドレイよ。それゆえ、我らは皆、あなたにこう叫びます。「私たちすべてのために、祈りを絶やさないでください。」

聖なる義人マルタの生涯[4833]

記念日：7月4日

聖なる義人マルファは、アンティオキアの町で生まれた。彼女の両親は敬虔なキリスト教徒であった。両親は彼女に結婚するよう説得したが、彼女は処女の生活を送りたいと願い、これに同意し

4830 ユスティニアヌス2世は685年から695年まで在位した。

4831 クレタの大司教聖アンドレイには、教会的な教訓を目的とした20編に及ぶ著作が残されている。 彼が著した教会聖歌のうち、最も重要なものは「大悔悛カノン」とされ、これは大斎の第1週の晩課で部分ごとに歌われ、第5週の木曜日の早課で全文が歌われる。

4832 クレタの大主教聖アンドレイの逝去は712年にあった。

4833 なお、聖シメオン・ディヴノゴルツの母である聖なる義人マルファは、今月の5日に帰天したが、ミネイアでは彼女への礼拝が今月の4日に定められており、またプロローグにおいても同日のシナクサールが読まれるため、この理由により、彼女の伝記は7月の4日に掲載されている。

なかった。しかし、聖洗者ヨハネの教会で見たある神聖な幻視により、彼女は両親の意向に従い、結婚することになった。　彼女が事前に知らされていた神からの賜物（シメオン・ディヴノゴルツの伝記に詳述されている通り）、すなわち聖ヨハネ・洗礼者による顕現により、マルタは息子である聖シメオンを身ごもった。　夫と数年間を過ごした後、彼女は未亡人となり、聖洗者ヨハネの命じるところに従って、息子の教育を厳格に管理しつつ、細心の注意を払って彼を育て上げた。マルファは常に、かつて預言者アンナからサムエルを受け入れたように、神が息子を御自身の奉仕のために受け入れてくださるよう、神に祈り続けた。

ある日、マルファがその少年が成長した時に何が待ち受けているのかを考えていたところ、夢の中で次のような幻を見ました。まるで自分が翼を生やして空高く舞い上がり、その子を両手で抱きかかえ、「主よ、この子を捧げます」と告げながら、主への捧げ物として天へと捧げているかのようでした。

「わが子よ、まさにこのようなあなたの昇天を、私は見たいと願っていたのだ！」

私の創造主よ、どうか私を安らかに見送ってください。私は、この胎内の実を主に捧げる恵みにあずかり、主の御恵みを得たのですから！

この幻視も、以前受けた啓示と同様に、聖マルファは心に留め、神に感謝した。彼女は常に神の神殿に留まり、教会の規律を決して破らなかった――それゆえ、教会の近くに住んでいたのである――。彼女は誰よりも早く教会に来て賛美歌に耳を傾け、誰よりも遅く帰っていた。　彼女は、祝日の礼拝がどこで行われようとも、聖なる教会に参列するという敬虔な習慣を持っていた。徹夜の祈りの間、彼女は深い注意と心の痛む思いをもって立ち、涙を流し、しばしばキリストの御体と御血という神聖な秘跡を拝領した。　彼女がどれほど尊厳をもって聖体拝領を行っていたか――その証しとなったのは、神の　聖体拝領を受けた後、かつてのモーセの顔のように、彼女の顔が何とも不思議な光に照らされていたことである。　毎晩、自宅にて、真夜中を告げる鐘が鳴る前に、マルファは祈りのために起き上がり、心の温もりを込めて、涙で顔を濡らしながら祈りを捧げた。彼女の心はすべて、魂の全力を尽くして愛した神に深く没頭していた。彼女は貧しい人々に対して言葉に尽くせないほど慈悲深く、飢えた者たちに食事を与え、裸の者たちに衣服を授けた。　頻繁に病院を訪れ、自らの手で病人の世話をし、死を待つ人々には、自分の手仕事で作った埋葬に必要な衣服を贈った。　同様に、彼女は自ら手編みした白い衣を、洗礼を受ける人々にも与えた。彼女は極めて柔和で、謙虚で、悪意のない人であり、誰も彼女が怒ったり、誰かと口論したり、悲しんでいるのを見たことがなかった。　さらに、彼女は口を軽々しく動かすことを控え、必要なことだけしか語りませんでした。彼女は沈黙を深く愛していました。なぜなら、沈黙は心を神への思索へと導くからです。彼女の口からは、無駄な言葉や嘘、あるいは神に喜ばれない言葉は一切聞かれず、心の善き宝庫から、善き言葉を口にしていました。　聖マルタはまた、怒り合う者たちの間の調停者であり、不品行な者たちへの諭し手であり、すべての人々――女性だけでなく男性にとっても――にとって、貞潔で敬虔、神に喜ばれる生活の模範でもあった。彼女には他にも多くの美徳が備わっていたが、それらを詳細に語り尽くすことはできない。　彼女の義なる生涯を十分に証明しているのは、彼女が産んだ聖シメオンの偉大な聖性であり、まさにそのような女性こそが、そのような息子の母となるにふさわしかったのである。

すでに聖シメオンがディヴノゴルスクの柱の上で修行に励んでいた頃[4834]、マルファは深夜の祈りの後、軽くうたた寝をしている間に次のような幻を見ました。　聖使徒ティモテオと共に、聖ヨハネ・バプティストが彼女の前に現れた。マルファは、神と聖母マリアに次いで、この聖人に特別な

[4834] 聖シメオン・ストルプニクが修行に励んだディヴナヤ山は、シリアのアンティオキアとセレウキアの近くに位置していた。

敬意を抱き、毎日信仰をもって祈りを捧げていた。そして聖ヨハネ・バプティストは彼女にこう言った。

「私は常に神の御前であなたのために執り成し、決してあなたを見捨てはしない。」

するとマルファは、恐怖と喜びに満たされ、この幻から目覚めると、畏敬の念をもって神を賛美し、時折訪ねてきていた息子である聖シメオンにそのことを語った。　訪れてみると、聖人の柱の周りには、癒やしを願って集まったあらゆる病に苦しむ人々が大勢おり、聖人の祈りによって多くの奇跡が起こっていた。マルファは慢心することなく、むしろ特別な畏敬の念を持ってこの光景を見つめていた。それは、私たちの救いの敵が、何らかの形で彼女の息子の前に罠を仕掛けないようにするためであった。　それゆえ、彼女は涙ながらに神に祈り、神が彼女の息子を敵の狡猾さから救い出してくださるよう願った。同時に、彼女は聖人にこう言った。

「わが子よ！　これらすべてについて、あなたを通して働かれる神を賛美すべきです。あなたは自分の弱さを忘れず、心を細心の注意を払って守りなさい！」

聖人は喜びをもって母の諭しを聞き入れ、母の神に喜ばれる生き方に心から喜びを感じながら、神に感謝を捧げた。

至福のマルファは、多くの徳を積んで長きにわたり生き、ついに神に喜ばれるに至った。そして、亡くなる一年前、真夜中の温かい祈りの最中に、彼女は恍惚とした状態に入り、手にろうそくを掲げ、彼女に向かってこう語りかける、歓喜に満ちた数多くの天の御使いたちを見た。

「一年が過ぎれば、私たちは、肉体を脱ぎ捨てたあなたを、主があなたのために用意された安息の場所へと迎え入れるでしょう。」

同じことが、聖シメオンにも啓示された。また、彼の兄弟の一人には、次のような幻が見られた。

彼は、栄光に包まれて玉座に座す神の母、至聖なる処女マリアを見ました。その傍らには、彼女に向かって十字架のように両手を挙げ、黄金の十字架へと変容し、太陽の光のような輝きを放ちながら、彼女の御前に立っている至福のマルタがいました。　彼女は全身がまばゆいばかりの十字架そのものに見え、十字架の上にある彼女の顔だけが識別できた。この幻視はシメオン尊者に伝えられた。彼は、これが彼の聖なる母の死が近づいているしるしであると語った。

聖マルタの神に捧げられた生涯の最後の年が尽きようとしていた時、彼女は息子であるシメオン聖人を訪ねてきた。シメオンは彼女にこう言った。

「母よ、アブラハムがイサクを祝福したように、私を祝福してください！」

「それゆえに、私はここへ来たのです」と聖女は答えました。「あなたの祝福と祈りをいただくためです。私の命はあと三ヶ月しか残されておらず、私はあなたを私の胎から導き出された私の主なる神のもとへ旅立つのです。」　主があなたに御自身の祝福と恵みをお与えになり、あなたが始めたこの立派な業を無事に成し遂げられるよう、また神があなたを御国に迎え入れてくださいますように。

こう語りながら、祝福されたマルタは心の感動に涙を流しました。そこに集まっていた兄弟たちもまた泣きました。なぜなら、あと三ヶ月もすればもうマルタの顔を見られなくなるという言葉を聞いて、彼らは深く悲しんだからです。兄弟たちはこう言いました。

「あなたの魂が生き続け、主を賛美しますように！」

彼女は自らの言葉を裏付けるように、こう繰り返した。

「もし私が言った通りにならなければ、私を、あなた方のしもべである私を、嘘つきだと思ってください。」

「今、私たちはあなたの祝福を請う」と、シメオン聖人は彼女に言った。「あなたのその言葉は、私たちの心に痛みを与えるのだ。」

「あなたがたは主から祝福されています」と聖女は答えた。「あなたがたを祝福する者たちもまた祝福されています。」

この言葉を聞いて、そこにいた者たちは皆、彼女に頭を下げた。彼女もまた、彼らに頭を下げた後、アンティオキアの自分の家へと戻っていった。

翌日、母が去った後、シメオン聖人は、兄弟たちの中でも最も経験豊富な者たちを呼び寄せ、こう言った。

「まことに、私の夫人であり母である方の、この世を去る時が近づいている。昨夜、私は幻の中で、私の前に設けられた玉座と、その上に座しておられる私の母を見ました。その時、私たちは皆、母の周りに立っており、母は私たちに教訓を込めて、詩篇の冒頭の言葉*『不義の者の助言に従わない人は幸いである』*（詩編1:1）と、その詩編の他の箇所を語られました。その際、彼女は母親が子供たちに語りかけるように、他にも多くの諭しの言葉を述べられました。その後、彼女は立ち上がり、手に輝く十字架を掲げて私たちの先頭に立って教会へと向かい、私たちは心を打つ詩編を歌いながら、彼女の後を追いました。

その後、亡くなるわずか数日前に、マルファは最後の別れを告げるため、再び聖シメオンのもとを訪れた。その際、彼女は生涯にわたって受けたすべての神の啓示について彼に語り、また、神の御名を賛美するために密かに行った自身の労苦と功績についても告げた。彼女はその夜をそこで過ごした。　眠りの中での幻視の中で、彼女はまるで天の高みへと引き上げられ、その美しさを誰も言葉に表すことのできない、驚くほど輝かしい宮殿を目にしているかのように感じた。　彼女はその宮殿の中を歩き回り、人の手によらずして造られたその建物に驚嘆していると、聖母マリアが二人のまばゆいばかりの天使を伴って現れ、彼女にこう尋ねた。

「なぜ驚いているのですか？」

彼女は、畏敬の念を抱きつつ、恐れと喜びをもって神の母に深く頭を下げ、こう答えました。

「御母よ、私は、この世でこれまでの人生において、これほど素晴らしい宮殿を見たことがなかったことに驚いているのです。」

「その宮殿は、誰のために用意されたものだと思うのか？」と聖母は尋ねた。

「わかりません、御母様」とマルタは答えた。

すると、神の母は彼女にこう言われた。

「あなたの息子が整え、これからあなたが永遠に留まることになるこの安息の場所が、あなたのために用意されたものであることを、あなたは知らないのですか？」

そう言うと、聖母は天使たちに命じ、天使たちは広間の真ん中に素晴らしい玉座を設置した。それから、聖母は聖女にこう言った。

「この栄光は、あなたが主を畏れ、神に喜ばれる生き方をしたからこそ与えられるのです。さらに栄光に満ちたものを見たいと願いますか？」と、その後、聖母はマルファに尋ねた。

そう言いながら、御母は彼女に自分の後についてくるよう命じられた。天の最も高い所へと昇ると、御母は彼女に、天の栄光に満ち、人間の知恵では理解しきれず、言葉では表現しきれないほど美しく、比類なき輝きを放つ最初の宮殿を見せた。

「そして、この宮殿は」と聖母は言われた。「あなたの息子が築き上げたものであり、彼自身、すでに第三の宮殿の建設に着手しているのです。」

そう言いながら、聖母は彼女を日の出の方角へと導き、高みから楽園の集落、そしてそこで喜びに満ちて歌う多くの男女の合唱団を見せた。

「これらの場所は」と、その際、聖母は言われた。「わが子が、主の戒めを守り、貞潔かつ義にかなった生活を送り、熱心に豊かな施しを行った者たちに授けたものです。それゆえ、彼ら自身も主の憐れみにあずかることができたのです。*『憐れみ深い者は幸いである。彼らは憐れみを受けるからである』*（マタイ5:7）。

これが聖マルファの見た幻であり、彼女はそれを息子に語ったのである。

その日は日曜日であり、マルファはキリストの聖なる御体と御血の聖餐を受け、自らの死と救いについての知らせを受けたことで満たされた神の恵みと、言葉に尽くせぬ霊的な喜びにより、その顔は輝きを放っていた。　その日一日と、その後訪れた夜の間、至福のマルファは、その一部を、神に導かれた多くの心温まる会話や、敬虔な息子との対話に費やし、また一部を、神への熱く涙に満ちた祈りに捧げた。　月曜日、彼女は息子と彼のすべての弟子たちに平安と祝福、そして最後の別れを告げ、彼らの切ない泣き声の中、彼らと別れ、ディヴナヤ山から三ポプリシュの距離にあるティヴィリントという村へと向かった。その村には聖ヨハネ・バプティスタの教会があった。　そこで彼女は熱心に祈りを捧げたが、その後、体の力が衰え始めた。この村の住民たちは、至福のマルファを深く敬っていたため、彼女に自分の労苦から解放され、村で休むよう懇願した。そして彼女は、その日と続く夜を実際に村で過ごし、その間に体の衰えはさらに進んだ。　その後、火曜日には、彼女は馬車に乗せられ、アンティオキアの郊外ダフネにある自宅へと運ばれた。心の中で神に熱心に祈り、涙を流しながら、自らの救いに対する揺るぎない希望を抱き、彼女は7月5日[4835]　に、その聖なる魂を神の御手に委ねた。　臨終の際、彼女は自らの遺体を、旅人や乞食が葬られる場所に埋葬するよう遺言した。しかし、彼女の敬虔な息子シメオンは、母の死について神からの啓示を受け、弟子たち数人を遣わして、その遺体を自身の住む「ディヴナ山」へと運び、自身の柱のそばに埋葬した。　聖マルファについては、彼女の聖なる魂が主のもとへ旅立った際、その尊い遺体のそばにいた者たちが、彼女の顔が喜びに満ちて微笑んでいるのを見、その口から次のような言葉が聞こえたとも伝えられている。

「私は神から大きな恵みを受け、言葉に尽くせない光と喜びの中にいます。」

彼女を取り囲んでいた人々は恐怖に駆られ、聖女が息子のために主から恵みを受けたのだと考えた。　しかし、こうした推測に対し、聖女は、自分が息子のためというよりは、むしろ自身の徳高い生涯によって栄光を受けたのだと語った。なぜなら、主のために禁欲と断食の行いにおいて大いなる忍耐を示し、熱心に主の戒めの道を歩み、主を産み出された聖母を心から愛したからである。

聖マルタの尊い遺体は、金曜日、アンティオキアの郊外ダフネからディヴナ山へと、大いなる栄誉をもって運ばれた。アンティオキアの多くの民衆や、香炉や蝋燭を手にし、詩篇を詠みながら列をなす聖職者たちが、彼女を偉大なる神の御心に適う者として見送った。　彼女の遺体を納めた聖櫃を運んだ者たちは、運んでいる間、重さを感じなかったと証言した。死者の遺体には本来あるべき重さがあるにもかかわらず、この尊い遺体はなぜか異様に軽く、まるで空を飛んでいるかのようであった。　一方、群衆の中にいた、名誉市民アントニウスの息子セルギウスという名の若者は、この栄光に満ちた送別行列と、棺の周りに押し寄せる人々――ある者は熱心に棺を支え、またある者は聖なる遺体に触れようと願っている――を見て、心の中で笑いながらこう考えた。

「死体に触れて、いったい何の益があるというのか？」

そして、その場を立ち去った。すると彼は直ちに重い病に倒れ、舌さえも失うほどになった。この病は三十日間も続いたが、聖人の棺の前でようやく癒やされた――これについては後述する。

その尊い遺体が、シメオン尊者の柱のそばにある修道院に運ばれると、徹夜礼拝が執り行われた。その夜、シメオンの弟子である二人の修道士のもとに、マルファが明るい衣をまとい、輝くような顔をして現れた。弟子たちは、彼女が亡くなったことを知っていたため、大いに驚いた。すると彼女は彼らにこう言った。

「恐れることはありません。主は私を死者の仲間に数えられたのではなく、生ける者の仲間に数えられたからです。私は、あなたがたが悪魔に打ち勝って永遠の命を得られるよう、悪魔に対抗してあなたがたを助けるためにやって来ました。」

[4835] 聖マルファの逝去は551年のことでした。

そう言い終えると、彼女は姿を消した。安息日になると、聖女の埋葬のために、周辺の村や集落から大勢の人々が、司祭や聖職者たちと共に集まった。彼らは、棺の中の聖女の顔が死者のような色あせを帯びておらず、まるで若者のように美しさに満ち、恵みに輝いていることに気づいた。　また、彼女の死後すでに4日が経過していたにもかかわらず、遺体からは死者にありがちな腐敗臭が微塵も漂っていなかった。　定められた聖歌を歌いながら、聖シメオンの指示に従い、彼の柱の前にその遺体を丁重に埋葬した。それは、彼がいつでも母の棺を見ることができるようにするためであった。そして、安息日が過ぎ、日曜日の礼拝が行われようとしたとき、群衆の中にいたヨハネという名の、教会で朗読係を務める男が、　うたた寝をした際、顔を輝かせながら聖シメオンの柱へと続く階段を登っていく聖マルタを見、また彼女の棺の上には、六つの翼を持つ生き物たちに引かれたケルビムの戦車が見えた。彼は後に、この幻視について誓いを立てて聖シメオンに報告した。

「わが子よ、」と聖シメオンはヨハネに答えた。「ケルビムの戦車の幻を見させてくださった神に栄光を帰せ。私の母も私も、罪の中に受胎し、罪の中に生まれた者であり、神の憐れみを必要としているのだ。」

その後、前述のセルギイの父と母がシメオン聖人のもとを訪れた。セルギイは聖マルタの遺体の送別を嘲笑し、そのために突如として病に倒れたのである。彼らは泣きながら祈りを捧げ、聖人が他の多くの人々の病を癒やしているのと同様に、彼らの息子も癒やしてくださるよう懇願した。

「行って、息子に病気の原因を尋ねなさい」と聖人は彼らに言った。「彼はもう話すことができる。今、彼の体調は良くなっているのだから。」

両親はその後、家に戻り、息子に病気の理由を尋ねた。

息子はこう答えた。

「この重い病が私を襲ったのは、聖マルタの遺体の尊い送別式を軽んじ、彼女から目を背け、自分の肩で彼女の棺を担ぐことを拒んだからです。」

そこで両親は息子を馬車に乗せ、ディヴナヤ山にいる聖者に連れて行った。聖者は彼らに、自分の母の棺の前で癒やしを求めるよう命じた。そして、彼らが涙ながらに彼女の尊い棺の前で祈ると、病人はたちまち完全に健康な姿で立ち上がり、まるで一度も病気になったことがなかったかのようだった。

聖女の埋葬後、修道者たちは、聖女への敬意を表して、その墓の上でランプを昼夜絶え間なく灯し続けるという慣習を定めた。　しばらくして、修道士たちは不注意からランプを灯すのをやめてしまった。一方、このことに気づいた聖シメオンは、弟子たちが「彼は死後の母を過度に崇めている」と誤解しないよう、ランプについて何も命じることなく、黙っていた。

その頃、修道院の会計係が重病にかかり、死の淵に立たされていた。真夜中、病人の前に聖マルタが現れ、こう言った。

「なぜ私の灯を灯さないのですか？　知っておいてください。私は天の父なる神から永遠の光を与えられているため、ろうそくを灯してもらう必要はありません。しかし、それでもあなたがたが私の墓のそばで灯を灯すのは、あなた自身の救いのためなのです。なぜなら、そうすることで、私が主の御前であなたたちのために執り成しをするよう促されるからです。」

そう言いながら、聖女は右手に、まるでまばゆいばかりの真珠のような、命を与えるキリストの御体の断片を握りしめていた。その断片を病人に触れさせながら、彼女は言った。

「これによって、生き、健やかであれ。」

そう言い終えると、彼女は姿を消した。病人はたちまち元気を取り戻して立ち上がり、聖女の墓へと向かった。墓にひれ伏し、地面に涙をこぼしながら、一方では自分の怠慢を詫び、他方では癒やしを感謝した。その後、彼は聖女の墓の前で、決して消えることのない灯が灯り続けるよう手配した。　聖女の墓の前では、他にも多くの奇跡が起こった。　盲人が目を開き、人々から悪霊が追い出され、聖なる義人マルタの祈りと、私たちの主イエス・キリストの恵みによって、あらゆる病から速や

かな癒しがもたらされた。主イエス・キリストには、父と聖霊と共に、今、そして永遠に栄光が帰せられる。アーメン。

コンダク、第2調:

主の御前に立ち、至聖なる神の母マリアに賛美と称賛を捧げる、尊きマルタよ、あなたは聖なる幼子、驚くべきシメオン、全世界の灯火を産み出されました。彼と共に、常に私たちすべてのために祈ってください。

聖殉教者テオドトスとテオドティアの殉教。

記念日：7月4日

キリストの聖殉教者テオドトスとテオドティアは、キリストを告白したため、不敬虔な皇帝トラヤヌスの命により捕らえられました[4836] 。彼らは真の神を否定し、偶像に犠牲を捧げるよう強要されましたが、従いませんでした。 このため、彼らは様々な拷問にさらされた後、キリストの聖殉教者ヤキンフが投獄されていたのと同じ牢獄に閉じ込められた。聖ヤキンフは彼らをキリストの信仰において導き、強めるようになったが、牢獄の看守たちはこのことをトラヤヌス皇帝に密告した。 聖ヤキンフが息を引き取ると、聖テオドトスと聖テオドティアは牢獄から連れ出され、皇帝の前に引き出された。皇帝は彼らに偶像への生贄の肉を食べるよう強要したが、彼らはその要求に従う代わりに、不敬虔な偶像崇拝の誤りを糾弾した。 その後、彼らは絞首刑に処され、その遺体は蝋燭で焼かれた。そして、木から降ろされた後、剣で首を刎ねられた。殉教の後、聖なる殉教者たちは永遠の命と至福の安息を得、その尊い遺体は、彼らが殉教したその場所に埋葬された[4837] 。

聖テオドール、キリネの司教、聖殉教者の受難

記念日：7月4日

聖殉教者テオドールは、ディオクレティアヌス帝の治世[4838] 、リビア[4839] に位置するキリネ[4840] という町に住んでおり、この町はキリネのシモン[4841] の出身地でもあった。彼は文章を書くことに長けており、その技芸において高い境地に達したため、教会に自ら執筆した多くの書物を残した。 そのため、実の息子レイは、イゲモンであるディヴィリアヌス（[4842] ）に対し、父が書物を持っていることで、多くの人々を神々への奉仕からキリストへの信仰へと引き離していると告発した。 この告発の結果、聖テオドロスはイゲモンのもとに連行され、その後を多くのキリスト教徒が追った。その中には聖ルキアと聖イエロヤも含まれていた。彼は自分の書物を引き渡すよう要求されたが、この要

[4836] トラヤヌス皇帝は、98年から117年までローマ帝国を統治した。

[4837] 聖殉教者テオドトスとテオドティアの没年は不明であるが、彼らが殉教したのはローマの街であった。

[4838] ディオクレティアヌス皇帝は、284年から305年までローマ帝国を統治した。

[4839] リビアは、エジプトの西に位置していたアフリカの国である。

[4840] キリネア、あるいはキレネという都市は、古代ローマのアフリカ属州キラナケにあり、地中海北岸の近くに位置していた。

[4841] シモン・キレネ人は、福音書に記された救い主の受難の物語で知られている。イエス・キリストがゴルゴタへの道中、疲れ果てて十字架の重みに耐えきれず倒れたとき、その十字架はシモンに担がせられ、彼はそれを磔の場まで運んだ（マタイ27:32； マルコ15:21； ルカ23:26）。

[4842] イゲモンとは、その地域の統治者のことである。

求に応じず、キリストを否定するよう命じられても従わなかった。そのため、彼は錫の棒で激しく殴打された。　その後、彼は出かけて行って異教の祭壇を破壊した。そこで彼は木に吊るされ、全身を削り取られ、その際、傷口に酢や塩、鋭い陶器の破片をすり込まれ、ついに剃刀で舌を切り落とされた後、牢獄へと連行された。 敬虔な修道女たちから[4843] 自分の切り取られた舌を受け取ると、聖テオドールはそれを自分の胸に当てた。すると、皆が、鳩が牢屋の窓から飛び込んできて、　聖人に触れているのを目撃した。　これを見たある異教徒のルキウスはキリストを信じるようになり、聖なる殉教者は健康を取り戻したが、その後しばらくして亡くなった[4844] 。その際、彼の魂は鳩と共に体から飛び出した。

一方、イゲモンはルキウスがキリストを信じたことを知ると、聖人ルキウス、イエロ、キプリル、そして聖テオドールによって洗礼を受けた者たち全員を処刑するよう命じた。その後、ルキウスは洗礼を受け、イゲモン・ディグニアヌス自身をもキリストへの信仰へと導いた。　そこで二人は共にクレタ島からキプロス島へと船出し、キリスト教徒を拷問していた別のイゲモンのもとへ向かったが、ルキウスはディグニアンの知らないところで自ら拷問者たちの元へ身を投じた。彼は出向いて異教の祭壇を破壊したため、剣で首を刎ねられた。　ディグニアンは彼の遺体を受け取り、埋葬した。これらの聖なる殉教者たちの記念日は、ペルギアにある聖テオドール教会で祝われている[4845] 。

聖殉教者キプリラは、聖テオドロスが住んでいたのと同じ町出身であった。結婚後、彼女は夫と約2年間を共に過ごし、夫の死後は28年間未亡人として暮らした。 激しい頭痛に苦しみ、両親を案じた彼女は、その病を癒やすために、キリストへの信仰を告白したためにすでに牢獄に投獄されていた聖テオドロス司教のもとを訪れました。　彼から癒やしを受けた彼女は、前述のルキアとイエロエという女性たちと共に、聖テオドールが亡くなるまで彼に仕えた。しかし、彼が亡くなると、彼女に対する告発がイゲモン（地方長官）に持ち込まれた。イゲモンの前に出頭した彼女は、キリストを告白し、偶像への生贄を捧げるよう強要された際も屈服せず、こう言った。

「そのような犠牲は、私の意志による犠牲とはならない。」

すると、処刑人たちは彼女の手を火の上に掲げて焼き、その後、木に吊るして体を削り始めた。その際、傷口からは血が流れ、乳首からは乳が流れ出た。こうした拷問の最中、聖なる殉教者は神に息を引き取った。

尊者エウフィミオス、スーズダリの奇跡行者、我らの父の聖遺骨発見の日

記念日：7月4日

尊者エウフィミオス・奇跡行者および他の多くの修道院長が逝去した後、スーズダリにある「我らの主イエス・キリストの神聖なる変容」に捧げられた修道院（[4846] ）には、同修道院の修道士であるコンスタンティンという名の修道院長がいた。　彼の在任中の1501年、神の御許しにより火災が発生し、修道院は焼失してしまった。　その後、コンスタンティンは、自分が聖エウフィミオスを何かで侮辱してしまったのではないか、あるいは彼の戒律や修道院で定められた慣習に背いたのではな

[4843] ここで「敬虔な女性たち」とは、聖殉教者ルキアとイエロヤのことを指す。

[4844] 『聖人行伝』によれば、聖殉教者テオドロスの死は310年に訪れた。

[4845] ギリシャ語のプロローグによれば、聖殉教者たちの記念日はペルギアではなく、レギアで行われる。レギア、あるいはレギウム（現在のレドニオ）は、イタリアのアペニン半島の南西端、メッシーナ海峡の沿岸に位置している。

[4846] ここで言及されているのは、当然ながら、スーズダリのボリス・コンスタンティノヴィチ公の希望と資金により、1352年頃に尊者エウフィミオスによって、スーズダリ市の近く、カメンニツァ川またはカメンニ川のほとりに設立されたスパソ＝エウフィミエフ修道院のことである。この修道院の設立については、4月1日に記載されている尊者エウフィミオスの行伝に記されている。

いか、そしてそれが原因で修道院に火災が起きたのではないか、と心を悩ませるようになった。しかし、聖エウフィミオスは夢の中で一人の修道士に現れ、こう言った。

「兄弟よ！　アルヒマンドリトのコンスタンティンに、私は彼に対して何の恨みも抱いていないと伝えてくれ。」

眠りから覚めたその修道士は、コンスタンティン大修道院長のもとへ赴き、夢で見たことを話した。その話を聞いたコンスタンティンは、赦しを得たことを喜び、御自分の聖人である尊者エウフィミオスを通して驚くべき御業をなされる神を賛美した。　それからしばらくして、ある敬虔な人々が、焼失した修道室の再建に必要な資材を修道院に寄付し、コンスタンティン修道院長は、以前と同じ設計図に従ってそれらを再建した。

アルヒマンドリト・コンスタンティンが亡くなると、修道院での彼の後任には、同修道院の修道士であったキリルという名のアルヒマンドリトが就き、彼は後にロストフ市の大司教となった。キリルは、霊的な事柄においても世俗的な事柄においても賢明な人物であり、修道院の共同生活規則や慣習が一切乱されないよう、可能な限りあらゆる手段を講じて配慮した。　彼には、教会に関する善き考えが心に浮かびました（　）。そこで、彼は修道院の兄弟たちに相談し、以前のものよりも大きな新しい教会を建設しようとしました。というのも、修道院には石造りの教会はあったものの、それは小さく、しかもすでに老朽化していたからです。その教会は、かつて至福のエウフィミオス自身によって建てられたものでした（[4847]）。これらすべては、全能の神の摂理によるものであり、福音書に記されている*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）という言葉や、*「だれも、灯をともして、それを器で覆ったり、ベッドの下に置いたりすることはない」*（ルカ8:16；マタイ5:15）。それゆえ、この灯火である尊者エウフィミオスも、これほど長い間、地中に隠されたままであることはあり得なかった。大きな教会の建設工事がすでに始まっており、作業員たちが教会の右側で堀を掘っていたところ、三つの石で囲まれ[4848]、板で覆われた棺が見つかった。この発見に戸惑った作業員たちは、アルヒマンドリト・キリルのもとへ行き、そのことを報告した。するとキリルは、鐘を鳴らすよう命じた[4849]。直ちに修道士たちが棺の周りに集まり、非常に大きな喜びに包まれた。　その後、アルヒマンドリトは修道士たちの中から数名を連れて、シメオン司教のもとへ赴き、この驚くべき奇跡について語った。その話を聞いたシメオン司教は、この奇跡を神に賛美し、次のように述べた。

「*『主よ！あなたはこれを賢い者や知恵ある者からは隠し、幼子たちに現わされた』*（マタイ11:25）。」

その直後、彼はすべての聖職者たちを率いて修道院を訪れ、神の聖なる者たちを称える神に感謝しつつ、至福のエウフィミオスの棺に拝礼した。その後、棺を開けてみると、聖人の顔は輝き、身に着けていた衣はまるで昨日着たばかりのように見えた。なんと驚くべき奇跡であろうか！　これほど長い年月が経過したにもかかわらず[4850]、聖人の遺体は朽ちていないばかりか、その衣服さえも腐敗の兆しを見せない！　敬虔な父の聖遺みに口づけをし、墓前の詩篇や賛美歌を歌いながら、それらを主であり救い主であるイエス・キリストの栄光ある変容を称える教会の壁に安置し、そこでは今日に至るまで安置されている。これは1507年7月4日に起こった出来事である。今、常に、そして永遠に、私たちの神に栄光あれ。

[4847] この教会は1352年頃に奉献されたため、その建設から150年以上が経過していた。

[4848] プレオブラジェンスキー教会の基礎部分にあるこれら3つの石を、聖エウフィミイは自ら削り出し、将来の祭壇の北側の扉のそば、聖なる祭壇の近くに、自身の棺を安置する場所を設け、後にそこで埋葬された。

[4849] 修道院では、「ビル」とは、修道士たちを教会や食事の場に召集するために叩く板のことを指していた。

[4850] 聖エウフィミオスは1405年4月1日に逝去した。したがって、彼の死去から聖遺骨が発見されるまで、100年以上が経過していた。

7月18日

7月5日（旧暦）

同日は、イリノポリスの奇跡行者、聖ランパドの記念日である。

同日、1422年にラドネジの修道院長であり、奇跡行者である聖セルギイの聖遺骨が発見された。

我らの尊き父、アフォンのアファナシイの生涯

記念日：7月5日

不朽の称賛に値する聖アファナシオス[4851] は、トラペズント[4852] という都市で、この世の生を全うした。彼はビザンティウム（コンスタンティノープル[4853] ）で学問を修め、キメノス修道院 、キメンスカ修道院[4854] 、そしてアトス山[4855] は、彼を神に喜ばれる実として育んだ。 アファナシイの両親は高潔で敬虔な人々であった。父はアンティオキア[4856] 出身で、母はコルキス[4857] 出身であった。二人はトラブゾンに住んでいた。 アファナシイの父は、彼が生まれる前に亡くなり、母はアファナシイを産み、聖なる洗礼によって彼を新たに生み出した後、夫に続いて神のもとへ旅立った。幼子は聖なる洗礼において、アヴラミイという名を授けられた。 両親の死後、まだおむつを履いている幼い頃から完全な孤児となったこの子は、ある高貴な修道女に引き取られ、育てられた。 アヴラミアは少年時代から、成人した後の生き方を予感させる兆しを見せていた。幼い頃から、彼は分別があり品行方正な大人のような振る舞いをしていたため、同年代の子供たちと遊ぶ際でさえ、彼らはアヴラ

4851 アファナシイ——ギリシャ語から訳すと「不死」を意味する。

4852 小アジア北東部のポンテ地方、ギッサ川の西側の海岸沿いに位置していた。

4853 ビザンティウムは、紀元前658年にボスポラス海峡のヨーロッパ側に設立されたメガラの植民地である。その利便性に優れた「黄金の角」の湾と、黒海とマルマラ海を結ぶ狭い海峡における支配的な位置により、同地は重要な貿易・産業の拠点としての地位を確立していた。 コンスタンティヌス大帝は、ビザンティウムの立地がもたらす利点を評価し、西暦330年にローマ帝国の首都をここに移した。これにより、ビザンティウムは世界史的な重要性を獲得し、過去とのつながりを断ち切り、コンスタンティノープル、すなわち「新ローマ」と呼ばれるようになった。

4854 以下、聖ミカイル・マレイナの伝記を参照のこと。

4855 アトス山（アフォン）は、ギリシャ語でアギオン・オロス（聖なる山）と呼ばれ、エーゲ海に突き出た細長い山岳半島であり、ギリシャ正教圏における修道生活の中心地として知られている。この地での修道生活は古代に始まったが、シリアやパレスチナよりは若干遅かった。 ロシア正教会にとって、ルーシにキリスト教が伝来して間もない頃から17世紀に至るまで、アフォンは極めて重要な意義を持っていた。ここには、ロシア修道生活の父である聖アントニーが修道誓願を立てたからである。 また、アフォンに赴いたロシアの修道士たち（例えば、聖ニール・ソースキー†1508年）は、ここにある大規模な修道院図書館で、当時としては最も幅広い宗教教育を受けた。 ここには専門の翻訳者や写本者がおり、彼らを通じて正教のルーシへ、教会的な教訓を説く翻訳写本が供給されていた。– 正教会の東方において最も崇敬される聖地の一つであるアフォン山には、ロシア、バルカン半島、およびトルコのアジア領から、毎年数千人の巡礼者（女性のみ修道院への立ち入りが禁じられているため、全員が男性）が訪れている。 深い峡谷や岩場を除いて、山のほぼ全域が豊かな植生に覆われている。ここには、レモン、オレンジ、ナシの木が、クルミ、オリーブ、栗の木と混ざり合って生えている。 広大な畑には多種多様な品種のブドウが植えられており、20か所もの豊かな修道院、いくつかのスキート、そして数多くの（数百もの）独立した修道室——ギリシャ人、ロシア人、モルドバ人、ブルガリア人など——が点在している。

4856 おそらく、この都市が位置していた小アジアのピシディア地方にちなんで名付けられた、ピシディアのアンティオキアからのものと思われる。

4857 コルキダ——エウクシノス海（黒海）の南、コーカサス、イベリア、アルメニアの間に位置していた国。

ミアを王や将軍ではなく、修道院長に任命していた。　そして実際、彼は幼少期から修道生活に慣れ親しんでいた。彼を育てた修道女が絶えず祈りと断食に励む姿を見て、少年として可能な限り、彼女に倣って断食し、祈りを捧げるよう努めたのである。　当時の初等学校に通う際も、彼は同年代の子供たちよりも優れた成績を収めていた。こうして体も知性も成長し、アヴラミイは少年期を脱した。――その頃、彼にとって母代わりだった修道女が亡くなった。二度目の孤児となった少年アヴラミイは、彼女をまるで実の母が亡くなったかのように悼んだ。　その後、彼はさらなる教育を受けるためにビザンティウムへ赴きたいと願った。孤児たちを慈しむ神は、次のようにして彼の願いを叶えた。当時、ギリシャには敬虔な皇帝ロマン[4858] が治めていた。皇帝は、貿易税を徴収するために、宮廷の宦官の一人[4859] をトラブゾンへ派遣した。この宦官は、端正で聡明な少年アヴラミオスと知り合い、彼をビザンティウムへ連れ帰り、そこでアファナシオスという名の傑出した教師に、彼の哲学教育を任せた。　その弟子は、やがて学識において師に並ぶほどになった。当時、ビザンティウムにはゼフィナゼルという名の地方総督が住んでおり、彼はアヴラミイの親戚を自分の息子に嫁がせていた。アヴラミイと知り合った彼は、彼を自分の家に迎え入れた。　若きアヴラミイは、豪華な邸宅に身を置き、精緻な料理がふんだんに振る舞われていたにもかかわらず、自分を育ててくれた修道女のもとで慣れ親しんだ断食の節制を貫き通した。　酒の快楽を避けていたアブラミイは、総督の食卓で食事をすることを拒み、必要に迫られた時だけ、生野菜や草で空腹を満たしていた。　彼は常に活力を保つよう努めていた。そのため、自然な眠気を克服し、うたた寝を払拭しようと、桶に水を満たし、そこに顔を浸した。あらゆる手段で自らを酷使し、アヴラミイは肉体を死に至らしめ、それを精神に服従させた。　このような徳高い生活、そして卓越した知性ゆえに、アヴラミイは万人に愛され、人々、さらには皇帝自身にもその名を知られるようになった。　最終的に、アヴラミイは、かつての師であるアファナシイと同等の権利をもって、国立学校の教師に任命された。しかし、アヴラミイの教えはアファナシイのそれよりも好まれ、そのためアファナシイよりも多くの生徒が集まった。そこでアファナシイは、 かつての教え子に嫉妬し、彼を憎むようになった。 このことを知った聖アヴラミイは、師を悲しませたくないと考え、まもなく教職を辞した。彼は前述のヴォエヴォダの屋敷に住み、いつものように修行に励んでいた。その後、皇帝からヴォエヴォダに対し、国家の必要性に基づきエーゲ海[4860] へ向かうよう命令が下った。 アヴラミイを深く愛していた総督は、皇帝の命令に従って出航する際、彼も一緒に連れて行った。彼らはアヴィダまで航海し、そこからリメニアに到達した。ここでアヴラミイはアトス山を目にし、その山を深く愛するようになり、そこに定住することを考えた。彼らが皇帝の命を果たして帰郷したとき、神の御心により、アフォン山に近いキメンスキー修道院から、マレインという通称を持つ聖ミハイルがコンスタンティノープルにやって来た。　聖なる父の神に喜ばれる生活について聞いていたアヴラミイは、このことを知ると、大いに喜び、彼の元へ向かった。彼は長老との対話から大きな喜びを得た。そして、神に導かれた長老の教えを聞いた後、アヴラミイは、世俗を捨てて修道者として神に仕えたいという、さらに熱い願望に駆られた。　彼はその決意と願いを尊者ミハイルに打ち明け、同時に自身の出自――出身地、両親、受けた教育、そしてなぜ軍司令官の家に住んでいるのか――についても語った。　アブラミイが聖霊の器となることを見抜いた聖ミカエルは、彼を深く愛し、救いについて長く教えを説き、肥沃な土壌のように彼の心に神の言葉の種を蒔き、彼が美徳の百倍の果実を結ぶようにした。　彼らが霊的な対話を交わしている最中、聖ミハイルを訪ねて、その甥である東方の軍司令官ニキフォロス（後にギリシャ皇帝となる人物[4861]

[4858] ロマン2世 957年～963年

[4859] 古代において、「宦官」とは、王宮で宝物や王室の財宝の守護者として、また特に王、王妃、王女の寝室の警護役として仕えた者たちを指した。その大半は去勢された者であった。ビザンツ宮廷において、宦官の地位は非常に名誉あるものであった。

[4860] あるいはアルキペラゴス。

[4861] ニキフォロス2世フォカス――963年から969年までの皇帝。

）がやって来た。聖なる叔父との会話の最中、彼は青年アヴラミイに気づき、長老に彼が何者なのか尋ねた。　聖人はアヴラミオスに関するすべてを彼に伝え、さらに彼が修道士になりたいと願っていることについても語った。この時から、アヴラミオスはニキフォロスに知られるようになった。　数日後、聖ミカイルはコンスタンティノープルから自身の修道院へと戻った。一方、アヴラミイはもはや世俗の喧騒の中に留まることを耐えられず、この世のすべてを軽蔑し、修道生活への憧れと聖人への愛に駆られて、急いで彼の元へと向かった。　キメンスキー修道院に到着すると、彼は聖なる長老ミハイルの足元にひれ伏し、涙ながらに修道服を授けてもらい、それによってキリストの御言葉の羊である選ばれた群れに加わらせてほしいと懇願した。　聖ミハイルはアヴラミイを温かく迎え入れた。彼の願いを先延ばしにすることも、試練期間に回すこともなく、聖ミハイルは直ちにアヴラミイを、すでに熟練した修行者であるかのように「アファナシイ」という名で剃髪した。それは、彼の中に神への熱烈な愛を見出したからである。　その修道院では、剃髪後に修道士が毛皮の衣を身にまとう習慣はなかったが、至福のミハイルはそれでもアファナシウスにそれを着せた――まるで、キリストの勇敢な戦士を敵に対する鎧で武装させるかのように。　アファナシイは聖なる長老に、一週間を通して食事をたった一度だけとるという戒律を課してほしいと懇願した。しかし、英知に満ちた師は弟子の願いを退け、三日ごとに食事をとるよう命じた。　アファナシイは、自分に課せられたすべての修道院や教会の務めを熱心にこなし、修道生活における修行においても倦むことなく取り組んだ。また、修道院の作業から解放された時間は、霊的指導者の指示に従い、聖書の写本に捧げた。　その勤勉さゆえに、アファナシイは修道院の兄弟たち全員から愛されていた。こうして、4年間にわたり、彼は修道生活において完璧な姿を見せた。――その後、尊師は彼に、修道院から一ポプリシェ（[4862]）離れた砂漠にある独房で、沈黙のうちに生活するよう命じた。　これに伴い、長老は断食に関して次のような戒めを与えた。これまで彼が習慣としていたように3日目に食事をとるのではなく、2日目に乾いたパンを食べ、少量の水を飲むこと。　しかし、主の祝日や聖母マリアの祝日、そして日曜日には、夕方から昼の第三時（午後3時）まで、眠らずに祈りと神への賛美に専念するよう命じた。

しばらくして、前述の東方の軍司令官ニキフォロス――聖ミカエルの甥――が、王の命を受けて任務を遂行中に修道院の前を通りかかり、聖なる叔父ミカエルの元を訪ねた。彼との会話の中で、彼はアヴラミイのことを思い出し、こう尋ねた。

「師よ、私が都であなたのもとにおった少年アヴラミイは、今どこにおられるのですか？」

「彼はあなたの救いを神に祈っている」と長老は答えた。「現在、彼はすでに修道士となっており、アブラミイからアファナシイへと改名している。」

たまたま、ニキフォロスには、彼の兄弟である貴族の[4863] レフが同行していた。二人はアファナシイの徳高い生活について聞き、彼に会わせてほしいと願い出た。長老がこれに反対しなかったため、彼らはアファナシイが沈黙を守っている場所へと向かった。　彼らを出迎えたアファナシイは、霊的な知恵に満ちた会話を交わした。彼の口は聖霊の恵みに満ちていたからである。彼らはその言葉に深く心を打たれ、もし職務や世俗の心配事から解放されることができれば、永遠に彼と共にいたいと願った。その後、彼らは尊者ミハイルのもとへ戻り、こう言った。

「父よ、あなたが牧会の地で秘めておられた宝を私たちに示してくださったことに感謝します。」

一方、長老はアファナシイを呼び寄せ、再び訪れた者たちに魂の救いに関する教訓の言葉を説くよう命じた。そして、聖人の口を通して主の恵みが働いたため、その言葉を聞く者たちは心を打たれ、心を痛め、涙を流した。　そして、長老自身も、アファナシイの口から発せられる教えの恵みに

[4862] ポプリシュチェ――約690サジェンに相当する距離の単位。

[4863] コンスタンティヌス大帝の時代までは、主に元老院議員の子孫といった高貴な家系の者だけがこの地位に就くことが許されていた。　パトリキは、その出自ゆえに、公有地の利用や私法上の関係において様々な特権を享受していたが、コンスタンティヌス帝はパトリキアを、高官に授与される個人的な称号とし、世襲されないものとした。

驚嘆した。この時から、軍司令官ニキフォロスと貴族レウスは、至福のアファナシイを深く愛するようになった。そして、彼と二人きりになると、ニキフォロスは自分の意図を明かし、こう言った。

「父よ、私は世俗の嵐から身を退き、世の煩わしさを避けて、修道者の静寂の中で神に仕えたいと願っております。」　この願いと決意は、主にあなたの神に霊感を受けた言葉の影響によって私の中で強まったものであり、私はあなたの聖なる祈りの助けを借りて、望みを叶えられることを願っております。」すると、至福のアファナシイは彼にこう答えた。

– ご主人よ！　神に希望を託しなさい。そうすれば、神はあなたの望む通りにしてくださるでしょう。

こうして、長い対話を経て、ニキフォロスとレウスは、自らの魂にとって大いに益となるものを得て、それぞれの道へと戻っていった。

聖ミハイルは、自らもすでに老いて死が近づいていたため、アファナシウスを後継の修道院長に据えるつもりであった。　このことを知ったアファナシイは、愛する父と別れたくはなかったものの、指導者としての重責を恐れ、また自らを牧者の位にふさわしくないと考えて、そこから逃げ出した。彼はアトス山を放浪し、隠遁の父たちを訪ね、彼らの徳高い生活の模範に触発されて、より高き功業へと励まされた。　岩の裂け目に、互いに近接して暮らす数人の兄弟たちを見つけると、彼は彼らの間に身を寄せ、その厳格な生活様式を模倣するようになった。彼らには肉体の心配など一切なく、住む家も、食べ物も、財産もなかったが、神のために、彼らは進んで、そして喜びをもって、寒さも、暑さも、飢えも耐え忍んだ。

飢えは、その荒野に自生する野生の野菜で満たし、定められた時間にほんの少しだけ口にしていた。　その頃、聖ミカエル・マレインが世を去った。その訃報を聞いたアファナシオスは、まるで息子が父を悼むかのように彼のために泣いた。また、軍司令官ニキフォロスと、その兄弟である貴族レオが再びその場所を通りかかることになるという情報も耳にし、彼らがまた自分を捜し出そうとするのではないかと恐れた。　そこで彼は隠者たちの元を去った。彼らは他の修道者たちに知られており、頻繁に訪問されていたからである。彼らを訪ねてくる者たちに正体を見破られることを恐れたアファナシイは、ギリシャ語で「トゥジガ」と呼ばれる遠く離れた修道院へと向かった。　そこで、修道院の外で沈黙を守りながら暮らすある老僧を見つけ、彼に自分を受け入れてくれるよう頼んだ。そして、名前で正体がバレないよう、アファナシイという名からヴァルナヴァへと改名した。

その間、老人は彼にこう尋ねた。

「兄弟よ、あなたは誰なのか。どこから来て、どのような理由でここに来たのか？」

「私はかつて船乗りでした」とアファナシイは答えた。「そして、苦境に陥った際、この世を捨て、自分の罪を悔い改めることを神に誓いました。　「そのために、私は聖なる修道者の装いを身にまとい、　神の導きにより、あなたの聖下のもとへ参りました。あなたと共に過ごし、救いの道においてあなたから導きを受けたいと願っているのです。私の名はバルナバです。」

アファナシイの話を信じた長老は彼を受け入れ、それ以来、バルナバは長老と共に暮らし、あらゆる面で父のように彼に従いました。しばらく時が経つと、彼は長老にこう言いました。

「父よ、どうか私に読み書きを教えてください。そうすれば、せめて少しは詩篇を読むことができるようになります。世俗にいた頃、私は船乗り以外のことは何も知りませんでした。」

その後、至福のアファナシイは、自分を捜しに来る者たちに正体がバレないように、読み書きができないふりをした。そこで長老は彼のためにアルファベットを書き、これまで一度も学んだことのない素朴な人のように彼に教えた。　一方、バルナバは、アルファベットを理解できないふりをしていた。彼は長い間そのように振る舞っていたが、長老は彼を気の毒に思い、時には腹を立てて、怒りながら彼を追い払うこともあった。しかし、そのバルナバは謙虚にこう言った。

「父よ、この愚かで不器用な私を追い払わないでください。神の御名のために、どうか忍耐して、あなたの祈りによって私を助けてください。そうすれば、主が私に理解力を与えてくださいますように。」

その後、その弟子は次第に文字の読み方を理解し始め、将来、書物からの知識を習得できるのではないかという希望を長老に抱かせた。　その頃、東方の最も著名な軍司令官ニキフォルは、アファナシイがキメンスキー修道院から逃亡したことを知り、深く悲しみ、どうすれば彼を見つけ出せるか考えを巡らせていた。彼はテッサロニキの裁判官[4864] に書簡を送り、アフォン山まで赴いてアファナシイの行方を正確に調査するよう命じた。　その手紙を読んだ判事は、直ちに急いで聖山へと向かい、アトス山修道院のすべてのイグメーンを統括するプロトを呼び出し、ニキフォロスから伝えられたアファナシイの顔立ちや年齢、そして学識の特徴を説明しながら、その修道士について尋ねた。プロトは確信を持って次のように断言した。

「あなたがたが探しているような人物は、この山には来ていません。とはいえ」と彼は付け加えた、「確かなことは私にはわかりません。」　まもなく、この山に住む者たちが全員出席すべき公会議が我々の元で開催される。もし、あなたがたが探している修道士がこの山のどこかにいるのであれば、彼は当然、他の者たちと共に公会議に出席するだろう。その時に、我々は彼を見分けることができるだろう。

判事はテッサロニキに戻った。

当時、アトス山には、修道者たちが年に三度、いわゆるカリアス修道院に集まり、キリストの降誕、復活祭、そして聖母マリアの被昇天という三つの主要な祝祭日を祝うという慣習があった。この時期に集まる修道士たちは共に祝宴を催し、キリストの御体と御血の聖なる秘跡に与り、共同の食事を分かち合った。　キリストの降誕の祝日が訪れ、修道院や隠遁者の住居から司祭や修道士たちが集まったとき、バルナバと名乗る師匠とその弟子が現れた。　プロトは修道士たちをじっと見つめ、ニキフォロスが記述した特徴に合致する修道士を探していた。そのような人物を見つけると、彼はその名を尋ねた。そして、その名がバルナバであると聞くと、疑念を抱いた――探していた修道士の名前はアファナシイだったからだ。　しかし、プロトは修道士の書物の読み書きの腕前によってその正体を確かめることにした。そして、朗読の時間となり、一冊の本が差し出されると、プロトはバルナバと名乗る修道士に、集会前で定められた朗読を行うよう命じた。　しかし、バルナバは、自分は無知で読み書きができないと主張して、これを拒んだ。これを見た長老は微笑み、静かに笑いながら、命じた者にこう言った。

「アヴォ、[4865] 、放っておいてくれ。この兄弟は不慣れで、今はまだ第一の詩篇の文字と音節をつなぐことだけを学んでいるのだ。」

しかし、プロトは自分の主張を譲らず、脅しをかけて読ませようとした。そこで、至福のアファナシイは、これ以上隠れられないと悟り、さらに脅しにも迫られて、神によって定められた権威に従い、できる限り読み始めた――すると、響き渡る声と並外れた表現力を発揮し、それを聞いていた者たちは皆、驚嘆した。　長老もまた、予想外のことを見て聞き、自分の教えを恥じつつも驚くと同時に戦慄を覚えたが、同時に喜びも感じ、これほど教訓に富んだ人物の師となれたことを神に涙ながらに感謝した。 そこでアファナシイの正体が明らかになると、 の者たちは皆、彼を敬意をもって接した。そして、キシロポタム地方出身の、パヴェルという名の最も尊敬される長老の一人が、兄弟たちに向かってアファナシイについて預言的にこう語った。

[4864] ソロン、あるいはテッサロニキは、マケドニアの都市である。

[4865] アッバ――父。

「この、我々に続いてこの山にやってきた兄弟は、徳において我々を凌駕しており、天の御国において栄光の点で我々よりも最上位となるだろう。彼は多くの人々にとって、救いの道における父であり導き手となるだろう。」

その後、プロトはアファナシイに、ニキフォロスとその弟レフが彼を探していることを伝えた。アファナシイは、聖なる山を追放されないよう、プロトに自分のことを告げないよう懇願した。そこでプロトは、そのような人物を失うことがアフォンにとって大きな損失となることを悟り、彼を探している者たちにその居場所を明かさないことを約束した。そしてアファナシウスには、修道院から三ポプリシュの距離にある人里離れた荒野のケリアで、沈黙を守りながら隠遁生活を送るよう命じた。[4866] そこで、神のために独りで勤勉に励む聖アファナシイは、自らの手で生計を立てていた。彼は書道家であり速筆家であったため、書物の写し書きを行い、六日間かけて、通常の修道規則を怠ることなく、詩篇全巻を書き写した。書物の写し書きの対価として、修道士たちは彼にパンを与えた。

聖アファナシオスが沈黙の生活を送っていた頃、前述のレウ、 ニキフォロスの兄弟であり、すでに西方で軍司令官を務めていたが、神の御加護と聖母マリアの助けにより野蛮なスキタイ人に対して勝利を収め、戦場から帰還する途中、敵に対する勝利をキリスト神とその聖母に感謝するため、アトス山に立ち寄った。 感謝の祈りを捧げた後、レウスはアファナシイの消息を熱心に尋ね、その居場所を知ると、彼の沈黙の修道室へと向かった。 アファナシイの姿を目にしたレフは、大いに喜び、親しみを込めて彼を抱きしめ、喜びのあまり涙さえ流した。彼は昼夜を問わずアファナシイと語り合い、その神に導かれた賢明な言葉に心を満たされた。 軍司令官のアファナシイに対する深い愛情に気づいた修道士たちは、アファナシイに、カレイ修道院の修道士たちのために、新しい広々とした教会を建設するようレフに頼んでほしいと懇願した。古い教会は狭く、修道士全員を収容できなかったからである。アファナシイはこれを軍司令官に伝えた。 キリストを愛する軍司令官は、直ちに喜びをもって、教会建設のために多量の銀と金を彼らに与えた。 その後、アファナシイや他の修道士たちに別れを告げ、レフはコンスタンティノープルへと向かい、そこで弟のニキフォロスにアファナシイのことを伝えた。この時から、アトス山の修道士たちはアファナシイを特に尊敬し、彼を称賛するようになった。また、多くの者が心の安らぎを求めて彼の元を訪れるようになった。

一方、聖人は沈黙を愛し、あらゆる場所から世間の名声を避けて、自らの住処を離れ、山岳砂漠の奥地を巡り歩いた。 神の導きにより、彼はアトス山の最果て、メラーナと呼ばれる地域にたどり着いた。そこは広大な荒野が広がり、他の修道者たちの住居からは遠く離れていた。頂上に平らな場所がある丘の上に小屋を建て、アファナシオスはそこで修行を始め、より高次の功業を目指した。当初、狡猾な敵である悪魔は、尊者アファナシイを追い出そうと、この新しい居住地を彼にとって忌まわしい場所にし、彼の中に、立ち去りたいという執拗で、抑えがたい思いをかき立てた。しかし、善良な修行者は、次のような考えによって自らの疑念に打ち勝った。

「この一年間、ここで耐え忍び、一年が終わったら、神の御心に従って行動しよう。」

そして、その定められた期間が過ぎたとき、年の最後の日に、修道士はそこから立ち去らせようとする思いに特に強く駆られ、彼は自分自身にこう言い聞かせた。

「明朝、ここを去ってカレイ修道院に戻ろう。」

[4866] ラヴラ――ギリシャ語で「町の区域」を意味し、小路――厳密には、修道院長の住居を取り囲むように小路のように配置された一連の独房のことで、柵や壁で囲まれている。 ラヴラの修道士たちは隠遁的な生活を送り、それぞれ自分の独房で修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のために集まる以外は、残りの日は厳格な沈黙を守っていた。ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに厳しいものであった。 太古の昔から、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士が住み、その意義において重要な修道院を指して用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられるようになった。現在、ロシアでは「ラヴラ」という名称は、もっぱら名誉称号としての意味で使用されている。

その後、彼は祈りのために立ち上がり、第三時の聖歌を唱えていたところ、突然現れた天の光が彼を包み込み、思いの雲はたちまち晴れ去った。言い表せないほどの喜びと歓喜の念に満たされ、聖人は神の愛で溢れかえる心から、喜びの涙を流した。　それ以来、尊者アファナシオスは感極まる賜物を受け、望む時には涙を流すようになった。かつては憎んでいたその場所を、彼は以前とは打って変わって深く愛するようになり、そこで神を賛美しながら暮らした。この頃、軍司令官ニキフォロス（Никифор）は、当時ムスリム（ ）に占領されていたクレタ島（[4867] ）へ、皇帝の命により軍を率いて派遣された。　ギリシャ軍の力に頼るのではなく、聖なる父たちの祈りの助けを求めて、ニキフォロス帝は信頼する部下の一人を船でアトス山へ送り、アトス山の修道士たちの総会に対し、イスラム教徒に対する天からの助けが与えられるよう、神への祈りを捧げてほしいという要請の手紙を書いた。　さらに彼は、兄のレフから聞いたところによるとアトス山に住んでいるというアファナシオスを、自分のもとへ送ってほしいと頼んだ。　アトス山の修道士たちは、軍司令官の手紙を読み終えると、彼のために熱心に祈りを捧げた。その後、荒野でアファナシウスを探し出し、総会に呼び寄せ、軍司令官のもとへ行くよう命じた。　当初、アファナシオスは行くことを全く望まず、長老たちの脅しによってようやく従ったほどであった。彼と共に、アファナシオスが師として敬い、弟子として従っていた尊敬すべき長老の一人も派遣された。　船に乗り込み、彼らはクレタ島へと向かった。敬虔な軍司令官ニキフォロスのもとを訪れたとき、ニキフォロスはアファナシイを見るやいなや駆け寄り、彼の首に抱きつき、顔を舐め回し、喜びのあまり涙を流した。彼はアファナシイを自分の霊的な父として崇めていたのである。　一方、ニキフォロスは、アファナシオスが同行する長老に対して、まるで弟子が師に対して接するように敬意を払っていることに気づき、その謙虚さに感嘆した。そして、世俗の務めをすべて手放し、尊者アファナシオスとの霊的な対話を楽しむ日々を送った。　その際、彼はかつて世を捨てて修道士になるという古くからの誓いを思い出し、尊者に対し、まずは自身が住むその荒野に、沈黙を守る者たちのための修道室を設けてくれるよう懇願した。　ニキフォロス王は、これらのケリイを建設するためにアファナシオスに銀と金を贈ったが、アファナシオスは、気楽で静寂な生活を愛していたため、ケリイ建設の煩わしさを拒み、銀も金も受け取らなかった。このことで、軍司令官は深く悲しんだ。　わずか数日間を共に過ごし、互いの顔を拝み、親しい会話を楽しんだ後、二人は別れた。アファナシオスはアトス山に戻り、軍司令官は戦場へと向かい、聖なる父たちの祈りによってイスラム教徒に勝利し、クレタ島を再びギリシャに編入した。　その直後、軍司令官ニキフォロスはいずれアフォンのキメン修道院のイグメンとなるメフォディオスという名の側近を、修道室の整備のために金を持って聖アファナシオスのもとへ再び派遣した。送られた金の量は、リトル[4868] で6リトルであった。

福者アファナシイは、ニキフォロスが神に対して抱く温かい愛と彼の善意を目の当たりにし、それが神の御心によるものであると悟ると、金を受け取り、建設に取り掛かった。　その場所を清めた後、彼はまずニキフォールのための黙想用の小部屋を設け、聖ヨハネ・洗礼者への献堂の教会を建立し、その後、山のふもとに聖母マリアへの献堂の、極めて美しい教会を建て上げた。　教会の建設が始まると、嫉妬深い敵がそれを妨害し始めた。教会を建設していた人々の手は硬直して全く動かせなくなり、口元に持っていくことさえできなくなってしまった。　これが悪魔の仕業であると悟った聖人は、神に熱心に祈りを捧げ、悪しき者の策略を退け、それによって労働者たちの手のこわばりを解いた。これが、偉大なる聖父の奇跡の始まりであった。至聖なる聖母マリアに捧げる教会を完成させると、聖人はその周囲に修道室を整備し始め――つまり、美しい修道院を築き上げたのである。彼は食堂や病院、旅人宿を建設し、続いて病人や旅人のための浴場を築き、修道院に必要なその他のすべての建物を賢明に整備した。その後、彼は多くの修道士たちを集め、最も古くからのパレスチナ

[4867] クレタ島、あるいはカンディアは、地中海東部、エーゲ海の南に位置するギリシャ諸島の中で最大の島である。
[4868] リトラ――72ゾロトニクに相当する重量単位（1ゾロトニク≈4.265グラム）。

の修道院を模して作成された厳格な共同生活規則を指導の指針として与えた。　新たに集められた神の羊の群れのために、聖アファナシオスは修道院長となった。彼は神に喜ばれ、至聖なる聖母マリアにも愛された人物であった。ある修道士が、聖アファナシオスが築いた修道院と自身の教会を聖母マリアが訪れているのを目撃したのである；　この幻視に恵まれた修道士マタイは、修道生活の道を非の打ち所なく歩み、それゆえに清く、啓発された心の目を持っていた。　朝の聖歌の際、教会の集いの中に立ち、畏敬の念と畏怖の心をもって注意深く耳を傾けていた彼は、二人のまばゆいばかりの天使を伴って教会に入ってくる至聖なるおとめを目撃した。そのうちのひとりはろうそくを手に彼女の先頭を歩き、もうひとりは後ろを歩いていた。彼女ご自身は、修道者たちの間を回りながら、贈り物を配っていた。　聖歌隊席で歌っている兄弟たちには、一人につき金貨一枚を、教会内の他の場所に立っている者たちには十二ツァットずつを、そして玄関に立っている者たちには六ツァットずつを配った。この光景を目撃したマタイもまた、その清らかな御手から六ツァットを受け取る恵みにあずかった。　この御出現の後、マタイは尊い父のもとを訪れ、聖歌隊の一員として加わらせてほしいと懇願し、同時に聖人に自分が見たことを語った。それが聖母マリアの御訪問であったことを悟ると、尊い父は大きな霊的な喜びに満たされた。 また、兄弟たちに金貨が配られたことについては、彼は 、これらは聖母が各人の徳に応じて授けた様々な祝福であると結論づけた。すなわち、賛美歌の間に熱心な祈りと注意を払って立っていた者にはより大きな報いが与えられ、あまり注意を払わなかった者にはそれに見合った分しか与えられなかったのである。　また、その幻を見た者が、より身分の低い者たちと同列に扱われたのは、一方では、より大きな報いを受けられなかったことに悲しみを抱き、その幻について語るよう促すためであり、他方では、最もふさわしい者たちと対等であることに驕ることなく、謙遜の心をもって身分の低い者たちと共にいるためであった。　この出来事を通じて、聖母マリアが聖アファナシオスとその修道院に対してどれほど好意を抱いていたかが、はっきりと明らかになった。聖アファナシオスの修道院の体制、そこでの秩序、規則、法規がどのようなものであったかについては、彼の伝記『[4869] 』という別の書物に詳しく記されている。興味のある方は、そちらを読んでいただきたい。　ここでは、要約して、特に際立った行い（それらはすべて並外れたものであるが）をまとめることにする。

聖アファナシオスは、ローマ皇帝の死後[4870] 、イスラム教徒に対して度重なる勝利を収めた功績により、軍司令官ニキフォロスがギリシャの皇帝に任命されたと聞き、深く悲しんだ。というのも、彼は修道士となることを誓っていたため、修道院の運営を引き受けていたからである。　（なお、この皇帝ニキフォスはフォカとも呼ばれていたことを知っておくべきである。しかし、これは皇帝マウリキオスを殺害したフォカでも、皇后イリナの後に即位し、ブルガリアとの戦争で殺害されたニキフォスでもなく、それとは別の、より後の時代のニキフォス・フォカである）。　尊者（聖人）は、ニキフォロスによる誓いの不履行を嘆き、すべてを捨てて逃亡しようと考えていた。　逃亡の準備を整えながら、彼は修道院の諸事を整えるために皇帝のもとへ行きたいと兄弟たちに告げた。兄弟たちの中から数人を連れて、彼は実際に旅立ち、アヴィダにたどり着くと、三人の兄弟を自分のそばに残し、残りの者たちを修道院へ戻しながら、こう言った。

「この3人だけでコンスタンティノープルへ行くには十分だ。」

彼らが去ると、アファナシオスは皇帝に手紙を書き、神への約束を思い出させ、最も立派な意図を軽率に変えたことを非難し、自身の悲しみ――すなわち、皇帝のせいでこれほど多くの心配を背負わされたこと――を伝えた。手紙の最後に、彼は次のように記した。

[4869] ギリシャ語には、聖アファナシオスの詳細な伝記が存在する。また、偉大な『ミネイ・チェティ』にも、彼の生涯が詳しく記されている。

[4870] ロマン2世 957年～963年。

「私は、主キリストの前において、あなたの欺瞞に対して何の罪もない。新たに集められた神の群れをあなたに委ねる。それを、あなたが望む者に引き渡せばよい。私としては、生活と教えにおいて傑出した修道士であるエウフィミオスが、その指導者となるにふさわしいと考える。」

このように書き終えたアファナシイは、自分が書いたことを弟子たちに告げることなく、手紙を封印し、三人の兄弟のうち一人を選び、その者に手紙を託して皇帝のもとへ送り出した。　それから間もなく、彼はテオドトという名のもう一人の弟子を、兄弟たちを訪ね、修道院の秩序を確認するという口実で、修道院へと送り出した。　彼自身はアントニウスという名の弟子一人と残った。アファナシオスは彼と共にキプロスへ向かい、そこで「聖なる者たち」の修道院と呼ばれるある修道院を訪れた後、その修道院のイグメノスに、その修道院に最も近い荒野で暮らすことを許可するよう懇願した。　願いが叶うと、彼は神のために沈黙の生活を送り、以前と同様に書物を写経するという自らの労働によって生計を立てた。一方、手紙を携えてコンスタンティノープルへ派遣されたその兄弟が、その手紙を皇帝の手に渡すと、皇帝はそれを受け取り、大いに喜んだ。　しかし、封を開けて手紙を読み終えると、皇帝は、一方では神に対する自身の不義のゆえに、また他方では、尊者アファナシオスが修道院を去り、行方不明になってしまったことに、深く悲しんだ。そして、その兄弟は手紙の内容を知ると、自分の父を失ったと泣き叫び、嗚咽した。　皇帝は直ちに修道院へ返書を送り、当面の間、エウフィミオスがその統率を引き受けるよう命じた。同時に、皇帝は領土内のすべての国々へ、聖アファナシオスの捜索命令を発した。この皇帝の命令はキプロス島にも届き、実行されようとしていた。　しかし、聖人はそのことを知ると、直ちに弟子を連れて海岸へと退き、そこで神の御心により船に出会い、それに乗り込み、順風の助けを借りてすぐに対岸に上陸した。　尊者である老僧は、どちらへ向かうべきか途方に暮れていた。彼はエルサレムの聖地へ向かうことを考えていたが、イスラム教徒の侵攻のため、そこへの道は困難であった。また、皇帝による追跡を避けるため、　ギリシャ方面へ迂回することも望まなかった。こうして、彼はどこへ向かうべきか分からなくなっていた。　夜が更けると、聖人は祈りを捧げ、神に助言と導きを請い求めた。すると、彼には神からの啓示と命令が下り、アトス山の自身の修道院に戻るよう命じられた。なぜなら、彼の労苦によって、その修道院は外見的にも内面的にも最終的な完成に至ることになっており、また、彼の教えによって多くの人々が救われるからであった。　神からそのような啓示を受けた聖人は、それをアントニオに伝え、二人は直ちに旅立ち、陸路で以前の場所へと戻った。数日にも及ぶ長い道のりのため、アントニオの足は痛んで腫れ上がってしまった。足は激しく焼けるように痛み、彼は全く歩くことができなかった。　そこで聖人は、周囲に生えている草を少し摘み、手のひらで揉み砕いてから、弟子の足に当て、木の葉で包み、自分の頭巾で包帯を巻いた。そして、病人の手を取って立ち上がらせると、アントニウスは直ちにこう叫んだ。

「キリストなる神よ、私の病を和らげてくださったことを、あなたに栄光あれ！」

その後、彼は以前と変わらず、健やかな足で歩み続けた。前述のテオドトス兄弟は、尊い父から兄弟たちを訪ねるよう遣わされていたが、修道院に戻ると、父の不在により皆が動揺しているのを見て、心から嘆いた。　師の不在に耐えかねた彼は、キプロスへと向かい、至る所で師を探し求めた。アッタリア[4871] に滞在中、神の御心により道中で師と出会った。互いの姿を見るや、二人は大いに喜んだ。　父は、修道院の兄弟たちの間に混乱が生じているという話を聞き、喜びが悲しみに変わった。彼は直ちにテオドトスをラヴラへ送り出し、自分の到着を兄弟たちに知らせるよう命じ、自身は祈りのためにランピディアにある修道院へ向かった。　そこで、正気を失って狂乱状態にある一人の修道士を見かけたアファナシオスは、彼に手を置いて癒した。そこでしばらく説教をした後、彼はアフォンへ向かい、自分の修道院に到着した。修道士たちは彼を見るや、まるで太陽を見ているかのように思い、喜びのあまりこう叫んだ。

[4871] アッタリア――パンフィリアの都市。リキアとキリキアの間にある小アジアの狭い沿岸地帯に位置する。

「神よ、あなたに栄光あれ！」

皆が近づき、ある者はその手を、ある者は足を、またある者はそのぼろ服に口づけをした。その後、尊者アファナシイは以前と同様に、修道院の建設のために再び修道院の運営を統括するようになった。

時が経つにつれ、修道院の諸事について皇帝に直接請願するため、尊者ご自身が皇帝のもとへ赴く必要が生じた。　こうして、彼は旅立ち、コンスタンティノープルに到着した。これを知った皇帝は喜び、同時に恥じ入った。喜んだのは、聖なる父に会いたかったからであり、恥じ入ったのは、皇帝としての威厳を帯びて彼の前に現れなければならないからであった。そのため、彼は皇帝としてではなく、ごく普通の庶民の一人として彼を出迎えた。　皇帝は修道士の右手を握り、その手に口づけをすると、宮殿の奥の部屋へと案内した。二人は二人きりで座り、喜びの涙を流しながら、親しく語り合った。

「父上、私は知っています」と皇帝は言った。「私が神への畏れを軽んじ、約束を果たさなかったために、父上のすべての労苦と悲しみの原因となっていることを。しかし、お願いです――私が悔い改めるのを待ち、神が私に『約束を果たす』機会を与えてくださるまで、どうか私を忍耐強く見守ってください。」

その間、聖人は皇帝に対し、神を愛し、敬虔であり、高慢にならず、慈悲深く、寛大であるよう諭し、永遠の命における将来の報いを思い起こさせながら、キリスト教徒である皇帝にふさわしいあらゆる善行について教えを説いた。　聖人はコンスタンティノープルに多くの日数を過ごし、皇帝と親しく語り合うことも多かった。彼を見送る際、皇帝は修道院に必要な物資をすべて与えた。　その後、皇帝は勅令により、リムノス島から毎年244ズラトニクを修道院に支給することを定めた。聖人は、皇帝の寛大な恩恵を受けて兄弟たちの元へ戻った。

聖者が救いの道において多くの兄弟たちを導き、その修行を立派に全うしていたその頃、善を憎む悪魔は全力を挙げて彼に立ち向かい、勇敢なキリストの戦士に対する戦いに備えて武装した。このことは、ある修道者の長老の一人に明らかにされた。彼は恍惚状態に陥り、アトス山へと迫る悪魔の軍勢を目撃した。その軍勢の中には、まるで千人隊長のような一人の指揮官がおり、恐ろしく威圧的で、大きな権威を誇示していた。　彼はその軍団を二手に分け、百体の悪魔には山全体を巡回して修道士たちを捕らえるよう命じ、自身は九百体の悪魔を率いて、恐ろしい憎悪を胸にアファナシイ修道院へと向かった。　この幻視が尊者にお伝えされる前に、彼はある病に襲われた。いつものように、他の労働者たちと共に海辺の　埠頭で働いていたところ、偶然にも巨大な木が彼の足に倒れかかり、関節と脛骨を骨折させてしまったため、聖人は三年間、病床に伏すこととなった。　しかし、彼は病気の間も無為に過ごすことを望まず、書物を執筆し、40日間で『パテリク』を完成させた。そして寝たきりの状態でありながら、目に見えない敵に対して武装し、勝利を収めてその陰謀を退けた。そこで敵は、ラヴラで成功を収められなかったため、聖山の他の修道院に住み、隠遁生活を送っていた年老いた素朴な修道士たちを扇動し、尊者アファナシイの行動について次のような非難すべき考えを植え付けた。

「なぜアファナシイは聖なる山に暴力を加え、古来の掟を破壊するのだ？彼は高価な建物を建て、新しい埠頭を作り、新しい貯水池を掘り、牛を買い入れ、畑に種を蒔き、ブドウ園を開墾した。要するに、この山を世俗的な集落にしてしまったのだ。」

互いに相談し合った後、これらの長老たちは、亡くなったニキフォロス[4872]　の後継者である皇帝ヨハネスのもとへ、コンスタンティノープルへと向かった。彼らはアファナシウスを誹謗中傷し、皇帝に彼をアトス山から追放するよう懇願した。　皇帝は使者を通じて、すでに病から回復していたアファナシオスを呼び寄せた。彼を見て、彼に宿る神の恵みを悟ると、皇帝は修道士に怒りをぶつけ

[4872] ヨハネス・ツィミスケス 969–976年。

るどころか、むしろ好意を抱くようになった。　神に導かれたこの長老を深く愛し、敬意を表し、王室の恩恵を惜しみなく与えた。また、ニキフォロス皇帝が以前発した、リムノス島から修道院へ244ズラトニクを貢ぎ物として納めるという勅令を再確認し、アファナシオスを敬意をもって帰した。
すると、あの古の純朴な長老たちは、恥に打ちひしがれ、自らの企てを悔い改め、尊者のもとを訪れて許しを請うた。　敵対者である悪魔もまた恥じ入り、怒りをさらに燃え上がらせ、再びその軍勢を率いて聖なる父の修道院を襲撃した。この襲撃を、清らかな心の目を持つ高潔な長老トマスが目撃した。　彼は第三時の祈りを終えた後、恍惚状態に陥り、すべての山や丘、木々や枯れ枝が小さなエチオピア人たちに溢れかえっているのを見た。彼らは怒りと敵意に燃え、互いに戦争と戦いを煽り立て、悪意に満ちた獰猛な声でこう叫んでいた。

「友よ、いつまで我々は我慢し続けるというのか？　なぜ、ここに居着いた者たちを歯で引き裂かないのか？　なぜ、彼らを直ちにここから根絶やしにしないのか？　それに、いつまで我々の敵である彼らの首領を我慢し続けるというのか？　彼が我々をここから追い出し、我々の土地を乗っ取ったのが見えないのか！？」

彼らがそう話しているとき、聖アファナシオスが修道室から出てきた。彼を見るや、エチオピア人たちは身震いし、動揺した。聖アファナシオスは彼らに襲いかかり、殴り、傷つけ、追い払った。彼は、全員をラヴラから遠くまで追い払うまで、彼らへの暴行を止めなかった。　長老トマスがその幻視を聖者に伝えると、聖者は直ちに祈りを捧げ、涙ながらに神に、敵の牙から自分の羊の群れを守ってくださるよう懇願した。そしてまことに、聖者はその祈りによって、あたかも鉄の杖で目に見えない獣たちを打ちのめし、追い払ったかのようであった。　しかし、悪魔たちは逃げ去ったものの、少しずつ再び戻ってきては、その策略によって敵意を煽り立て続けた。　ある修道士の中には、聖人に対する憎しみが植え付けられ、彼を見るのも嫌がるほどになった者がいた。そして、悪魔の働きによってその心の中の悪意が激しく高まり、ついに殺害さえ企てた。剣を準備し、研ぎ澄ませた彼は、聖なる父を殺すための好機を伺っていた。　ある夜、皆が眠りについている中、聖師が自分の独房で祈りを捧げながら徹夜していた時、その殺人者は――まるで聖師にどうしても伝えなければならない話があるかのような口実を装って――聖師の独房に近づいた。その間も、彼は手元に抜刀した剣を隠していた。彼は恐れを知らずに扉を叩き、こう言った。

「父よ、祝福を！」

その声はヤコブの声であったが、その手はエサウの手であった[4873]。しかし、アベルのように義なる聖なる父は、外にはカインが立っており、殺害のために自分を呼び出していることを知らなかった[4874]――彼は小部屋から尋ねた：

「あなたは誰ですか？」

そして、扉を少し開けた。

すると、殺人者は師の声を聞いて恐れおののき、震えながら地面に倒れ込んだ。神は、御自身の忠実なしもべを守り、殺人者に突然の恐怖を襲わせた。彼の手は力尽き、剣は地面に落ち、彼自身は 、師の足元に死人のように地面に横たわっていた。 これを見た聖人は驚き、戦慄し、地面に横たわる者を起こそうとした。ようやく我に返った殺人者は、感動に満ちた声で父にこう言った。

「父よ、どうか私、あなたの殺害者である私を憐れんでください！　私があなたに対して企てた悪意を赦し、私の心の不敬を赦してください！」

ろうそくに火を灯し、地面に置かれた剃刀のように研がれた剣を見たアファナシイは、その修道士の企みを悟った。

[4873] すなわち、この修道士は偽善的な振る舞いをした。創世記27:21–23を参照。
[4874] 創世記4:8を参照。

「子よ」と彼は言った。「この剣を持って、まるで強盗のように私に襲いかかってきたのか?! しかし、泣き止みなさい。口を閉じて、この物を隠し、この出来事を誰にも話さず、私のところへ来なさい。私はあなたに口づけをしてあげよう。そして、神があなたの罪をお赦しくださいますように!」

これほどまでに、その尊い父は寛容であったのだ! それ以来、彼はその兄弟に対して深い愛を示すようになった。一方、その兄弟は、常に自分の罪を思い返し、父の寛容さと自分への愛を目の当たりにするたび、絶えず泣きじゃくり、起きた出来事を隠し通すことができず、自らの罪を告白しつつ、尊い父の美徳を称え続けた。 彼は心からの悔い改めをもって息を引き取り、聖なる父は他の誰のためよりも彼のために深く泣いた。また、最初の兄弟と同様に父を憎んでいたもう一人の兄弟が、この世から父を抹殺する機会を伺っていた。 しかし、その方法を思いつかなかった彼は、悪魔的な魔術や呪術に身を委ねた。父に多くの致命的な魔術や呪術をかけたが、驚くべきことに、何の結果も得られなかった。ある時、彼はたまたまある兄弟に尋ねた。

「魔術や呪術で人を死に至らしめることはできるのか?」

その兄弟は、敬虔で神に従って生きる人間には、いかなる呪術や魔術も害を及ぼすことはできないと答えた。これを聞いて、魔術師は良心の呵責に苛まれた。 その後、父が自分を殺そうとした兄弟を赦したことを知ると、彼はその寛大さに驚き、心を打たれ、神への畏れを抱き、父のもとへ赴いてその足元にひれ伏し、激しく泣きながら自分の罪を告白し、赦しを請うた。そして、寛大な父から赦しを得たのである。 これこそが、聖アファナシオスが、自身の前で罪を犯す者たちに対して示した態度であった。このため、神は彼を至る所で称賛された。 彼の信徒の群れには、ギリシャだけでなく、イタリア、古きローマ、カラブリア[4875]、アマルフィ[4876]、イベリア[4877]など、さまざまな国から多くの兄弟たちが集まった。しかも、彼らは単なる庶民だけでなく、富裕層や貴族たちも含まれていた。 多くの修道院の修道院長でさえ、自らの指導の座を捨てて、この尊者のもとへ来てその指導下に身を置いた。修道院長だけでなく、司教たちもまた、自らの教区と信徒たちを離れ、聖なる父の信徒の群れに加わり、その導きを受けることを望んだ。 その中には、総主教の中でも偉大なるニコライ（別名ハリトン）、アンドレイ・クリソポリトス、そして長年にわたり断食の修行に励んだアカキイなどがいた。 同様に、人跡未踏の荒野で老いゆく修道者たちも、神の御計画に従って父のもとを訪れ、その修道院に身を置き、聖父の徳高い生活の模範から教訓を得ようと願った。 後者のうちの一人が、聖ファンティンと共にカラブリアの山々で修行に励んだ尊者ニキフォロスであった。彼らには神からの啓示があり、ファンティンにはテッサロニキへ、ニキフォロスにはアトス山にいる尊者アファナシオスのもとへ行くよう命じられた。ニキフォロスはアファナシオスのもとで長い間過ごし、そこで息を引き取り、埋葬された。 それからしばらくして、ある機会に彼の聖遺骨が地中から掘り出され、別の場所へ移された際、その乾いた骨から、この世のいかなる香りと比べても比類のない、極めて芳醇な香りの泉が湧き出た。 このように、聖なる父たちは神によって尊者アファナシオスの指導の下に遣わされたのであり、このことから、彼の生涯が他の者たちと比べていかに神に喜ばれるものであったかがはっきりと分かる。枝から根が、実から木が分かるのと同様に、成功した弟子たちから熟練した師が、そして彼らの善良な羊たちから善良な羊飼いが分かるのである。 さて、アファナシイの奇跡について簡潔に振り返ったところで、彼に関する話を締めくくろう。奇跡によって御自身の聖人たちを称える神は、この偉大な御心にかなう者からも、奇跡を行う賜物を奪うことはなかった。まず第一に、彼の先見の明について述べよう。

[4875] カラブリア――ターラントからヤピグ岬まで広がる低地の半島。中世、ビザンツの著述家たちによって、カラブリアという名称は、かつてのブルッティアであった南イタリア西部の半島に転用された。

[4876] アマルフィ――イタリアのサレルノ県、サレルノ湾に面した港湾都市。おそらく4世紀にコンスタンティヌス大帝によって建設された。

[4877] イベリア――スペイン。

ある日、厳しい寒波が襲った。尊者はテオドロという名の修道見習いの一人を呼び寄せ、こう言った。

「兄弟よ、食糧を持って、ケサリイ（アトス山にある地名）へ急いで行きなさい。海の方へ向かって歩いていると、トロハルの向かい側に、寒さと飢えで力尽き、死の淵にある三人の男に出会うだろう。そのうちのひとりは修道士だ。　彼らにパンを与えて力を取り戻させ、体を温めさせ、そしてここへ連れて来なさい。

出かけていったテオドールは、父が予言した通りであることに気づき、皆、聖人の先見の明に驚嘆した。　ある時、尊者には修道院の用事で、兄弟の一人と共に船に乗って島へ渡る必要が生じた。しかし、神の御許しにより、目に見えない敵が父と兄弟たちを溺れさせようと、恐ろしい風と嵐と高波を巻き起こし、船を深淵の真ん中で転覆させ、たちまち全員が水に飲み込まれそうになった。しかし、その瞬間、神の御手は御自分の愛する者に降りかかった災いから速やかに救い出し、船を元の位置に戻し、嵐を鎮めた。すると、聖人は船尾に座り、兄弟たちを呼び寄せていることに気づいた。水は、まるで両手で抱きかかえるかのように、彼らを船へと運んできた。　尊い父は、彼らを一人ずつ水から引き上げ、全員を無事にかき集めた。ただ一人、ペトル・キプリアニンだけが姿を見せなかった。彼が見当たらないのを見て、父は心を騒がせ、大声で呼びかけた。

「わが子ペトルよ！　どこにいるのだ？」

その叫び声と同時に、ペトルは深みから浮上し、水に運ばれて船へと近づき、そこで聖人の手によって迎え入れられた。　こうして、聖父ご自身とその兄弟たちは溺死から救われた。そして、悪意に満ちた敵は喜ぶどころか、さらに恥をかかされたのである。祝福された聖父は至る所で敵を恥じさせ、彼に勝利を収め、追い払った。彼は、不浄な霊によって残酷に苦しめられていた修道士マタイから悪霊を追い出した。　聖人の祈りによって、目に見えない苦しめる者たちも追い払われ、破滅的な苦しみを受けていた他の者たちも救われた。尊者には癒しの力も備わっており、病人の世話をしながら、自らの手で多くの人々に奇跡的な助けを与えた。彼はハンセン病を患う兄弟を癒やし、潰瘍に苦しむ別の者も健康に戻した。　また、がんの潰瘍を患っていた第三の人物については、その潰瘍の上に手で三度十字の印を描くことで治癒させた。彼は祈りによって、島に襲来し、例外なくすべての草木を食い荒らしていたイナゴを追い払った。　ある時、彼が兄弟たちと共に船で海を航行していた際、飲料水が不足し、兄弟たちは渇きで衰弱しかけていた。聖アファナシオスは海水を汲み上げるよう命じ、それを祝福して真水に変え、兄弟たちはそれで渇きを癒した。　ゲラシムという名の兄弟が、ぶどう畑で太くて背の高いつるを扱っていた際、彼は並外れた体力を誇っていたため、そのつるを素手で地面から引き抜こうと試みた。手でつるを二、三回揺さぶったが、それでも引き抜くことはできず、かえって自分自身をひどく傷つけてしまった。　腹部が裂けて内臓が飛び出し、彼は激しい痛みに苦しんだ。しかし、祈りと、尊い父による聖十字架の印によって、彼は癒やされた。その同じゲラシムは、神を証人として、次の奇跡についても語った。

「私が」とゲラシムは語った。「パンを切る務めを果たしていた時、ある用件について父に尋ねに行く必要が生じた。ちょうどその時、父は聖使徒たちの教会で一人、祈りを捧げていた。　私は教会へ向かい、窓から中を覗くと、尊い父が祈りを捧げており、その顔はまるで炎のようであった。私は恐怖に駆られ、少し後ずさった。しばらく待ってから再び覗き込むと、炎のようなものに包まれたその顔は、まるで天使の顔のように輝いていた。恐怖のあまり、私は声を上げてこう叫んだ。

「おお、神父様！」

すると、神父様は私が怯えていることに気づき、その理由も悟ると、この光景を誰にも話してはならないと私に命じました。

ゲラシムは、尊者のお亡くなりになった後、このことを修道院の兄弟たちに伝えました。ある兄弟が、修道院長から世俗の村へ奉仕に遣わされた際、敵の誘惑に惑わされ、肉欲の罪に陥り、不貞を犯してしまいました。　その後、罪の重さを悟った彼は、絶望の思いに駆られ、修道院に戻ると、

涙と嗚咽を流しながら聖人の足元にひれ伏し、自分の罪と絶望を告白した。　聖人は、彼に多くの有益な教えを授け、神の慈愛を信じて絶望してはならないと説得した後、彼に兄弟たちの間に留まり、当初の奉仕を続けるよう命じた。一方、パウロという名の長老の一人は、その兄弟の堕落と、父が示した哀れみ深い慈悲を知ると、その二人に対して不平を漏らした。 彼は、その兄弟が清浄の誓い を破り、あのような忌まわしい行いを敢えて犯したことを非難し、また父の面前で、そのような罪人を赦すのは不当であり、彼には数多くの厳しい罰を受けるべきだと述べた。すると、柔和な父は、不平を言う者を厳しく見つめ、こう言った。

「パウロよ！　自分の行いをよく見よ！　兄弟たちの罪を詮索するのではなく、自分自身を省みよ。なぜなら、*『立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい』*（Iコリント10:12）と書かれているからだ。」

それ以来、神の許しにより、目に見えない誘惑者が邪悪な思いの矢でパウロの心を傷つけ、肉欲の炎で彼の肉体を燃え上がらせた。パウロは三日三晩、肉欲の罪への渇望に全身を焼き尽くされ、安らぎを得られず、ついには自分の救いさえ絶望するようになった。　そして何よりも悲惨だったのは、彼がその葛藤を師に打ち明けることさえ恥ずかしく思っていたことである。これを霊的に察した師は、パウロを呼び寄せ、二人きりで修道院の諸事について語り合った。　その会話を通じて、師は少しずつパウロを、自身の肉欲の情念を告白するように導いた。そこでパウロは、師の足元にひれ伏し、自分の苦境を打ち明け、救いを求めた。聖人は、罪を犯した兄弟を非難してはならないとパウロに教え、彼を本来の務めへと送り出した。彼は食糧管理係であった。　一方、師自身は祈りの姿勢をとると、涙を流しながら熱心に神に彼のために祈り、その瞬間、パウロは情欲から解放された。彼は、頭から全身を駆け抜け、足先まで達するある種の冷たさを感じ、それによって肉体の情欲的な衝動が消え去ったのである。　もう一人の兄弟、マルコという名のランプサキア出身の者は、同じような罪深い肉欲に激しく苛まれていた。彼は父のもとを訪れ、自分の情欲を告白し、祈りの助けを求めた。それから数日後、彼は夢の中で父の姿を見、父がこう尋ねてくるのを聞いた。

「兄弟よ、気分はどうだ？」

「ひどく苦しんでいます、父上」と彼は答えた。

「地面にうつ伏せになって横たわれ」と父は言った。

彼が地面にうつ伏せになると、父は自分の足で彼の股間を踏んだ。彼は足の重みで身を起こすと、情欲から癒やされたのを感じ、その時から安らぎを得て、もはや肉欲の動揺を感じることはなかった。　私たちの尊い父が、生前に成し遂げた数多くの奇跡のうち、これらわずかなものを簡潔に述べたところで、次は彼の帰天について語ろう。

すでに前述したように、至聖なる父のもとには至る所から多くの修道士たちが集まっていたため、すべての修道士たちを収容するには教会を拡張する必要が生じた。そのため、教会の壁に沿って玄関や付属礼拝堂が建てられた。　ある付属祭壇の建設がまだ完了していない頃、師自身、コンスタンティノープルへの旅に出る前に、その場所へ上って工事の様子を確認する必要が生じました。師は修道院の用件で皇帝のもとへ向かう予定だったのです。　そこで、まず修道士たちを呼び集め、聖テオドロス・ストゥディトスの説教[4878] を彼らに読み聞かせ、自らの口から有益な訓示を添えた。その

[4878] 聖テオドロス・ストゥディテスは、若くして修道生活の道を歩み始め、当初は叔父である聖プラトン（記念日は4月5日）の指導の下で修行に励んだ。聖プラトンは、第7回全地公会議において聖像崇敬の擁護者であった。 その後、聖テオドロスはコンスタンティノープルのストゥディオス修道院の院長となり、彼の指導の下、同修道院はかつてないほどの高みに達した。　聖テオドロスは、妻マリアと不法に離婚し、さらにテオドータとの不法な結婚によってその罪を重くした皇帝コンスタンティノス・バグリアノロドスを糾弾したため、コンスタンティノープルから二度追放された。　流刑先からストゥディオス修道院に戻った後、聖像に対する迫害が激化した際、聖テオドロスは聖像破壊派の脅迫を意に介さず、公然と十字架行進を行った。　そこで、皇帝レウ・アルメニア人は彼を流刑に処し、彼は湿気と蒸し暑さに満ちた牢獄に

後、独房に閉じこもり、長い間祈りを捧げた。　その後、彼はマントを身にまとい、頭には聖なる父ミハイル・マレイナの聖なるクコール（修道帽）を被って独房から出てきた。このクコールは、彼が大きな祝祭日や、神のキリストの聖体拝領の時だけに被る習慣があったものであった。　その日、彼はまさに祝祭を執り行っているかのようで、その顔は神の天使のように輝いていた。その後、六人の兄弟を連れて、彼らと共に作業に向かった。彼らが　建物の最上部に到達した時、神の不可解な御心により、最上部の床が崩れ落ち、全員を下へ転落させ、土や石に埋もれてしまった。　五人は即座に神に魂を捧げたが、父と、彼と共にいたダニエルという名の大工一人は、石の間に生き残った。その時、皆は三時間、あるいはそれ以上も叫び続けた尊い父の声を聞いた。

「主イエス・キリストよ、私をお助けください！神よ、あなたに栄光あれ！」

逃げ出した兄弟たちは、泣き叫びながら、手近な道具や、時には手足を使って、石や土を掘り起こした。彼らは、すでに主のもとで息を引き取っていた父を掘り出したが、その体は傷ついておらず、ただ右足に傷を負っていただけであった。　その傍らからは、全身を打ち砕かれた大工のダニエルが生き返った状態で掘り出され、二人はそこから運び出された。これが、私たちの尊い父アファナシオスの最期であった。おそらく誰かにとっては不名誉に思えるかもしれない。なぜなら、彼は病床で息を引き取ったのではなく、*「主の御目には、聖徒たちの死は尊い道である」*からである。　（詩編115:6）神の御心にかなう者にとって、彼自身も予見していたその最期は、殉教の冠を得るきっかけとなった。霊によってその最期を予見していた彼は、しばらくして最も親しい弟子アントニウスにこう告げた。

「お願いだ」と彼は言った。「修道院の必要に迫られて、我々がコンスタンティノープルへ赴くその旅を、どうか成し遂げてほしい。神の御心により、私はもはやこの世の王を見ることはないだろう。」

逝去後、[4879]　、尊者は三日間埋葬されずに安置されていた。その間、聖山のすべての修道院から修道士たちが集まり、彼にふさわしい栄誉ある葬儀を執り行ったのである。　その尊い御遺体は変質も腫れも黒ずみもなく、その顔はまるで眠っている生者のかのようであり、死体に通常伴う臭いも感じられなかった。皆が彼のために深く嘆き悲しんだ。そして、彼の前で葬儀の聖歌が歌われていると、足にあった傷口から、自然の理に反して血が流れ出した。　三日も経った死者の傷口から血が流れ出るのを、誰がいつ見たことがあるだろうか。これに気づいた高名な長老たちの中には、この血を布に集め、祝福の偉大な聖物として自らの身に塗った者もいた。こうして、尊い父の尊い遺体は埋葬された。　一方、崩れ落ちた岩の間に発見された五人の兄弟たちの遺体は、それより前に尊厳をもって埋葬されていた。重傷を負ったダニエルは数日間生き延び、ため息交じりに、尊師が亡くなる前夜に彼が見た幻についてこう語った。

「私は見たのです」とダニエルは語った。「まるで、皇帝のもとからある光り輝く使者が現れ、父をその元へと呼び寄せているかのようでした。そして実際、父は修道院を出て、私を含む六人の兄弟たちと共に、その使者の後を追いました。　そして、私たちが最も美しい王宮に到着し、扉に近

閉じ込められ、度重なる残酷な拷問にさらされた。ミハイル・コスノヤズニイの治世下、聖テオドールは流刑から解放されたが、監禁生活で衰弱していたため、長くは生きられなかった。 826年11月11日、67歳で死去した（この日は彼の記念日とされている）。聖テオドロスが息を引き取る瞬間、聖イラリオン・ダルマテウス（ダルマテアのイラリオン）は、天から降りてくる天使の群れを目にし、次のような声を聞いた。　「これこそ、ストゥディオス修道院のイグメノス、テオドールの魂が、祝賀のうちに天へと昇り、天の軍勢がそれを出迎えているのだ」。――聖テオドールは、説教、布告、書簡、カノン、スティヒル、エピグラム、伝記など、数多くの著作を残した。　ロシア語による聖テオドール著作の最も完全な版は、雑誌『キリスト教の読書』の編集部によって、1907年およびその後の年の同誌の付録として刊行された。

[4879] 1000～1001年に続いた

づいたとき、尊者様と五人の兄弟は王の御殿に入られましたが、私は外に置き去りにされ、激しく泣いていました。その時、中から誰かが私にこう言うのが聞こえました：

「人よ、無駄に泣いてはならない。あなたを連れてきた父が許さない限り、中に入ることはできないのだ。」

私はこれを聞いて、さらに激しく泣きじゃくり、哀れみを誘うような声で父を呼び求めた。しばらくすると、父が外に出てきて、私の右手を握り、宮殿の中へ連れて行ってくれた。そして私は王にお目にかかり、王に頭を下げた。

こうしてダニエルは、その言葉を残して、自らの魂を神の御手に委ねた。

また、聖アファナシオスの死後に起こったいくつかの奇跡についても触れておこう。前述のアントニオス――聖人の長年の弟子――は、修道院の用事で、兄弟たちの数人と共にガグルの地方へ赴くことになった。　そこで旅をしていると、夕方になって、羊の番をしていた羊飼いに遭遇した。その羊飼いには一人息子がいたが、獣に噛まれてすでに瀕死の状態にあった。　父親は息子を思うあまり激しく泣き崩れていた。通りかかった巡礼の修道士たちを見かけると、彼は彼らに立ち寄るよう懇願し、もてなしとして手持ちの食料――パンと牛乳――を差し出した。　修道士たちは、あれほど深い悲しみに沈んでいるにもかかわらず、旅人への親切心を忘れなかった彼の美徳に感銘を受け、その悲しみに寄り添った。修道士たちの中には、シメオンという名の兄弟が一人おり、彼は聖なる父の血で濡れた布を携えていた。　シメオンはこの布で子供の傷を包むと、子供はすぐに深い眠りに落ち、朝までぐっすり眠り続けた。修道士たちもその場で一夜を明かした。朝になると、子供は傷が癒えて元気になり、食べ物を求めた。そこで皆は神を賛美した。　またある時、兄弟の一人が修道院の奉仕のために再び遣わされた際、彼は　にあるあるキリストを愛する人の家に入った。そこには、長い間出血に苦しんでいた女性が病床に横たわっていた。家の者たちは皆、彼女のことを心配していた。彼らの悲しみの原因を知った修道士は言った。

「私には聖アファナシオスの血が染み込んだ布があります。もしよろしければ、その血のついた布を水に浸し、絞ったその水を病人に飲ませてください。そうすれば、彼女は元気になるでしょう。」

病の女性は、修道士の言葉を聞くと、涙ながらに、一刻も早くその提案を実行してほしいと懇願した。そこで修道士は、聖人の血を混ぜた水を用意して、彼女に差し出した。女性は水を受け取ると、こう言った。

「聖アファナシイよ、私を助けてください！」

そして、その水をすべて飲み干した。その直後、彼女の出血は止まり、彼女は元気になった。また別の時、ある時、シメオン修道士とゲオルギー修道士が、修道院の用務を遂行するために船で送り出された。　彼らはペフキイの埠頭に到着すると、そこで瀕死の船頭を見つけました。彼はすでに八日間も言葉を失い、友人たちに弔われ、回復を絶望していたのです。二人は、聖人の血で染まったタオルを彼の体に当てました。　病に伏していた船頭は、まるで眠りから覚めたかのように、たちまち元気を取り戻して立ち上がった。また、聖人の棺の周りでも様々な奇跡が起こった。具体的には、人々から悪霊が追い出され、信仰を持って訪れ、聖人の棺のそばで灯るランプの油を塗られた者たちは、様々な病から癒やされたのである。　また、高潔な修道士エウストラティオスに起こった次の出来事も思い出しておこう。彼はある理由で内臓を傷めてしまい、本来必要な尿が水ではなく血として排出されるようになってしまった。　彼はこの病に七年間苦しみ、多くの医師を訪ねたものの、彼らは彼を助けることができなかった。医師を諦めた彼は、神に身を委ね、尊い父アファナシオスに神への執り成しを祈った。　この癒やしを与える医師に助けを求めた途端、彼は次のような形で癒やしを受けた。――夢の中で、彼は食事の席にいるような気がし、いつもの修道院長席に尊い父が座り、その前に水で満たされたグラスとブドウの盛り合わせがあるのを見た。　聖父はブドウを数粒取り、それを水に入れ、エウストラティオスに飲ませようとした。しかしエウストラティオスは、これが（自

分が拒絶していた）ありふれた治療薬だと思い込み、受け取ることを拒んだ。すると聖父は彼にこう言った。

「恐れることはない。飲んでごらん。これこそが、あなたの健康につながるのだ。」

そこでエウストラティウスはそれを受け取って飲み干すと、夢から覚め、その瞬間からこの病から完全に癒されたのを感じた。

さて、この聖人について詳述した書物に基づき、要約して記した、その生涯、功績、そして奇跡に関する記述を、ここで一旦締めくくることにしよう。

聖アファナシイに対してその驚くべき慈悲と力を示された、聖徒たちにおいて驚くべき御方である神に、今、そして常に、そして世々限りなく、果てしない栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第3調:

御肉においてのあなたの生涯に、天使の軍勢は驚嘆した。あなたは、肉体を持ちながらも目に見えぬ世界へと昇り、常に栄光ある方よ、悪魔の軍勢を打ち砕かれた。それゆえ、アファナシイよ、キリストはあなたに豊かな賜物を授けられた。このゆえに、父よ、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第8調:

非物質的な存在たちの見事な観察者であり、真実を語る力強い伝道者として、あなたの羊の群れは、神の御言葉を語るあなたにこう呼びかけます。「あなたの僕たちが災いや試練から救われるよう、私たちのために祈りを惜しまないでください。」そして、あなたにこう叫びます。「喜びなさい、アファナシイ父よ。」

7月19日

7月6日（旧暦）

同日、聖殉教者イサウロス（助祭）、イノケンティウス、フェリクス、エルミア、ヴァシレイオス、ペレグリンの記念日である。彼らはアテネの出身であり、ヌメリアヌス帝（283–284年）の治世下、マケドニアのアポロニアにおいて、軍司令官トリポンティオスの手によってキリストの御名のために殉教した。 彼らと共に、2人の都市長であるルフとルフィンも斬首された。

同日、オルシャナ公国の王女である聖ユリアニアの尊い遺骨が発見された。

尊者シソイ・ザ・グレートの記念日

記念日：7月6日

幼少の頃から神を愛した尊者シソイは、十字架の重荷を自ら背負い、熱心にキリストに従い、エジプトの荒野で断食の修行に励みました。彼は天使に等しい生活を送り、謙遜と祈りによって目に見えない敵の軍勢に打ち勝ちました。　彼の修行の場は、聖アントニオス大聖人が修行に励んだ荒涼とした山であり、聖シソイ自身もアントニオスの生涯を模範としていました。その謙遜と知恵により

、彼は神から死者をよみがえらせるほどの恵みを受けました。これは『パテリコン』[4880] にも明記されており、そこには聖シソイについて次のように記されています。

ある信徒が、幼い息子を連れて、祝福を求めてアントニオスの山にいるアッバ・シソイのもとへ向かった。ところが、道中でその少年が病に倒れ、亡くなってしまった。しかし、父親は動揺することなく、信仰をもって死体を長老のもとへ運んだ。　聖者の住居に入ると、彼は聖者の足元にひれ伏し、まるでその子が聖者から祝福と祈りを求めているかのように、亡くなった息子を聖者の足元に横たえた。　長老が祈りを捧げ、祝福を与えた後、その信徒は、死んだままの長老の足元に横たわっている子供を残したまま、外へ出て行った。長老は子供が死んでいることに気づかず、彼が祝福を待っているのだと思い、こう言った。

「立ちなさい、子よ。ここから立ち去りなさい。」

すると、死んでいた少年はたちまち蘇り、父親の後を追って去っていった。

すると、その男は息子が生きているのを見て、彼を連れて長老のもとへ戻り、頭を下げて感謝の意を表した。長老は、死者を蘇らせたことを悟ると、深く悲しんだ。彼は奇跡を行う者として名声を望んでいなかったからである。そして、その男に対し、自分がこの世を去るまで、この出来事を誰にも話さないよう命じた。

ある時、兄弟たちはこの神に導かれた父に尋ねた。

「もし兄弟が罪を犯した場合、悔い改めには一年で十分でしょうか？」

「その言葉は酷いものだ」と、長老はこの問いに答えた。

すると、兄弟たちは言った。

「では、罪を犯した者は、たった六ヶ月間悔い改めればよいのですか？」

「長すぎる」と、長老は答えた。

「もしかすると」と兄弟たちは再び尋ねた。「彼の悔い改めには四十日あれば十分なのでしょうか？」

「長すぎる」と、老僧は再び答えた。

それから彼はこう言った。

– 私は、人を愛する神の慈悲を信じています。もし人が魂の底から悔い改めれば、神はその悔い改めを三日以内に受け入れてくださるでしょう。

ある兄弟が再び長老に尋ねて言った。

「父よ、私は罪を犯してしまいました。どうすればよいでしょうか？」

「改めなさい、わが子よ」と長老は答えた。「そうすれば、救われるだろう。」

「しかし、改心した後、また罪を犯してしまいました」と、その兄弟は答えた。

「もう一度改めなさい」と長老は言った。

「一体いつまで――」と兄弟は尋ねた。「私の堕落と立ち直りが続くのでしょうか？」

「お前の最期が訪れ、善の状態にあろうとも悪の状態にあろうとも、その時が訪れるまでだ。それゆえ、最期が訪れるその時も改心の状態にあるよう、常に改心を続けなければならないのだ。」

この尊い父には、アポロスという弟子がいた。敵の狡猾さゆえに、他の様々な願望や誘惑の中でも、彼には司祭の位への願望が芽生えた。夢の中で、聖人の姿をした悪魔たちが現れ、彼を司教に叙階した。　眠りから覚めると、彼は長老に懇願し、都市の主教のもとへ行き、司祭の叙階を受けるよう命じてほしいと頼んだ。しかし、長老はこれを禁じ、彼を諭して、自分の品位を超える聖職を求めないよう説いた。　長老の絶え間ない教えと諭しに憤りを感じたアポロスは、密かに長老のもとか

[4880] パテリク、あるいはオテチクとは、「教父たちに関する書」または「教父たちについて」という意味である。これは、修道者の生涯に関する簡潔な物語や、彼らの教訓的な言葉から成る集成書の総称である。

ら逃げ出し、アレクサンドリアの親族のもとへ身を寄せ、彼らの助力によって一刻も早く長老の位を得ようとした。

アポロスが道を歩いていると、計り知れないほど背の高い人間の姿をした悪魔に出くわした。その悪魔は裸で黒く、醜悪な顔立ちに、分厚い唇と鉄の爪を持っていた。獣のような姿でありながら、同時に男性にも女性にも似ていた。　悪臭を放ちながら、その悪魔はアポロスの目の前で、文字に書き表すことさえできないほどの恥知らずな振る舞いをさらけ出した。アポロスの首に飛びつき、悪魔は両腕で彼を抱きしめ、何度も口づけをした。アポロスは十字を切って身を守り、その手から逃れようとした。しかし、悪魔は彼にこう言った。

「なぜ私から逃げようとするのか？　お前は私のものだ。そして私はお前を愛している。お前は私の欲望を満たしてくれるからだ。だからこそ私はお前のところへ来たのだ。お前のすべての欲望を成就させるまで、お前を付き添うために。」

その悪臭と恥知らずさに耐えきれず、アポロスは天を仰ぎ、大声で叫んだ。

「神よ、私の父シソイの祈りによって、私を助け、この災いから救い出してください！」

すると、悪魔は彼から少し距離を置き、美しい裸の女性へと姿を変え、彼にこう言った。

「近づいて、お前の欲望を満たしなさい。お前の心の中の思いが、私を大いに慰めてくれたのだから。」

「私はあなたを――」と悪魔は続けて言った。「司祭や司教にしようと思っていたが、快楽を愛する長老シソイの祈りが、私をあなたから遠ざけているのだ。」

そう言い終えると、悪魔は姿を消した。

強い恐怖に襲われたアポロスは、長老のもとへ戻り、その足元にひれ伏して、起こったことをすべて告白し、許しを請いました。また、彼は兄弟たちにも、悪魔の誘惑によってどのような苦しみを受けたか、そしてシソイ神父の祈りがいかに彼を助けてくれたかを語りました。

まことに、彼の祈りは悪霊を追い払うのに強力なものであった。その祈りは、シソイ長老のもう一人の弟子であるアブラハムという名の者からも、彼を苦しめていた不浄な霊を追い払った。すべての悪霊は、勇敢で無敵のキリストの戦士に近づくことを恐れ、彼から逃げ去った。

シソイ聖人は荒野で六十年間を過ごした。彼がすでに死の床に就いていた時（その際、彼のそばには兄弟たちがいた）、彼の顔は光のように輝き、彼は兄弟たちにこう言った。

「ほら、アバ・アントニオが来た。」

それから、少し間を置いて、彼は再びこう言った。

「見よ、預言者たちの御姿が来られた。」

そして再び、彼はさらに輝きを増してこう言った。

「見よ、使徒たちの御姿が来られた。」

すると、彼の顔はさらに二倍に輝き、彼は目に見えない人々と語り合った。

兄弟たちは彼に尋ねて言った。

「父よ、教えてください。あなたは誰と語り合っているのですか？」

すると彼は彼らにこう言った。

「私を迎えに来たのは天使たちだ。だが、私は彼らに、悔い改めることができるよう、しばらくの間だけ私を置いていってほしいと祈っているのだ。」

「父よ、あなたに悔い改める必要などありません」と、兄弟たちは彼に言った。

これに対し、老人はこう答えた。

「実のところ、私が悔い改めの第一歩を踏み出したかどうかさえ、自分では分かりません。

しかし、兄弟たちは皆、彼が徳において完全であることを知っていた。その後、彼は再びさらに強く輝き、その顔は太陽のようになったため、皆がこれを恐れた。その時、老人は言った。

「見よ、主がおいでになる。皆、見よ。主はこう言われる。『荒野から、わたしに選ばれた器を連れて来い！』」

こう言い終えると、尊者シソイは主のもとへ息を引き取った[4881] 。その瞬間、稲妻が走り、聖堂は芳香に満たされた。

このように至福に満ちた最期をもってこの世の生涯を終えた聖シソイは、永遠の命へと移り住んだ。そして今、彼はキリストと共にあり、臨終の際に見出した聖人たちの御姿と共に、キリストの御顔を仰ぎ見る喜びに浸っている。

私たちの尊い父シソイの祈りによって、私たちもまた、私たちの主イエス・キリストの恵みにより、この喜びに与かることができますように。主には永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体の天使、そして奇跡を行う者よ、神を宿す我らの父シソイよ、断食と徹夜祈祷と祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに強さを与えた方に栄光あれ。あなたを冠した方に栄光あれ。あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第4調：

あなたは地上で天使のように現れ、敬虔なる者よ、常に神のしるしをもって信徒たちの心を照らされました。それゆえ、シソエよ、私たちは信仰をもってあなたを崇めます。

聖女ルキアと、彼女と共に殉教したリクサおよびその他の聖女たちの殉教。

記念日：7月6日

聖殉教者ルキアは、シチリア[4882] 、カッパドキア地方[4883]の出身であった。彼女は代官リクス[4884] に捕らえられ、偶像への生贄を捧げるよう強要されたが、これに同意せず、キリストの僕であり続けるという断固たる意志を示した。　副司教は彼女の不屈の精神に心を打たれ、彼女と侍女たちを解放し、特別な部屋を与え、人目を避けて祈りに専念することを許した。　ある時、戦争に出征する際、彼は彼女に神に自分のために祈ってほしいと頼み、彼女の祈りのおかげで戦勝者として帰還した。それから20年後、聖ルキアは、キリストのために殉教するため、カンパニアへ行くことを許可してほしいと副司教に懇願した。　しかし、司教は彼女を一人で行かせることを望まず、自らの王国、富、妻、子供たちを捨てて、自ら彼女と共に旅立った。彼らがカン

[4881] シソイ・ザ・グレート聖人の没年は429年頃とされる。

[4882] 聖殉教者ルキアは、12月13日に記念される別のルキアと混同されたため、ここではシチリア出身とされている。皇帝バシレイオスの月暦における最初のルキアに関する記述は、次のように始まる。「キリストの殉教者ルキアは、シチリアのルキアとは異なっていた」など。

[4883] シチリアにはそのような地域は存在しない。明らかに、ここではカンパニアの代わりにカッパドキアという地名が用いられている。カンパニアは、サムニウムの南西、アペニン半島に位置し、ラツィオとルカニアの間にあり、ティレニア海の沿岸に広がっていた。

[4884] 『聖人行伝』によれば、この人物は蛮族の王アヴツェイであった。ギリシャ語のプロローグでは、我々のスラブ語版と同様に、彼はラテン語の *「rex*（王）」に由来する「リクス」と呼ばれている。一般名詞である「rex」が固有名詞の「リクス」へと変化したと考えられている。

パニアに到着すると、当時のイゲモンであった[4885] に捕らえられ、その命令により首を刎ねられた。彼らと共に、　、他の聖なる殉教者たち、すなわちアントニウス、ルキアヌス、イシドール、ディオン、ディオル、クトニウス、アロノス、パピクス、サトゥルヌス[4886] も拷問にさらされ、これらの拷問の末に[4887] が息を引き取った。

聖殉教者コイントの受難。

記念日：7月6日

この聖なる殉教者はフリギアで生まれ[4888] 、そこでキリスト教の敬虔さを教え込まれた。その後、ネオリドへ移り住むと[4889] 、貧しい人々に施しを行い、悪霊に取り憑かれた人々を癒やした。 地方長官ルフは、彼に偶像への生け贄を捧げるよう強要したが、その直後に自身が悪霊に取り憑かれてしまったため、聖人は彼を癒した。この功績により、ルフは彼に贈り物を授け、栄誉をもって彼を見送った。 その後、ペルガモへの道[4890] を進んでいた聖コイントは、キム[4891] の異教徒たちに捕らえられ、拷問を受けた。しかしその時、突然地震が起こり、偶像崇拝の神殿が崩れ落ち、偶像が地面に転がり落ちた。 そこで拷問者たちは拷問を止め、聖人を縛り上げ、その状態で放置した。 その直後、新たにキムの統治者に任命されたクレアルコスという人物が同地に到着し、聖コイントを捕らえてその脛骨を砕くよう命じたが、聖人は回復し、その後さらに10年間生き、数多くの奇跡を行って、主のもとへ帰った[4892] 。

聖殉教者マリーナ、マルファ、アヴディファクス、アヴヴァクム、キリク、長老ヴァレンティン、アステリウス、およびその他多くの聖人たちの殉教

記念日：7月6日

ローマ皇帝クラウディウスの治世[4893] 、ペルシャからローマへ、マリンという名の、高貴な家柄で裕福、かつキリスト教徒であるある男が、妻のマルファと二人の息子、アヴディファクスとアヴヴァクムを連れて、聖使徒たち[4894] やその他の聖人たちの墓に参拝するためにやって来た。 ローマに滞在中、彼らは鎖につながれたキリスト教徒たちを訪ね、キリストへの信仰のために処刑された者た

[4885] この人物は、ローマ市の行政官エライオス・ディオニシオスであった。聖ルキアとリクスの殉教の地は、聖人行伝に記されている通り、ローマであった。

[4886] 『聖人行伝』には、ルキアとリクスの後に斬首された以下の聖殉教者たちが挙げられている：アントニウス、イリネイ、テオドール、ディオニシウス、アポロニウス、アポミウス、プロニクス、　コテイ、オリオン、パピク、サトゥル、ヴィクトル、そして9名の無名者であり、ルキアとリクスを除く殉教者は計21名となる。一方、ニコディモスの聖人暦では、ルキアと共に殉教した者として、リクスを除く15名の名前が挙げられている。

[4887] これらの聖なる殉教者たちは、301年のディオクレティアヌス帝の治世中に殉教した。

[4888] フリギアとは、小アジアにあったローマの属州の名称である。北はビフィニア、東はガラティアとリカオニア、南はピシディアとカリア、西はリディアとミシアと国境を接していた。

[4889] ネオライド、より正確にはエオライドとは、小アジアのイオニアとミシアの間に位置し、東はリディアと接していた地域の名称である。

[4890] ペルガムは、小アジア北西部のミジア州にあるカイケ川沿い、エーゲ海沿岸近くに位置していた。

[4891] キミの都市は、小アジアのリディア州北部の海岸沿いに位置していた。

[4892] 聖殉教者コイントは、アウレリアヌス帝の治世（270～275年）に殉教し、283年頃に安らかに息を引き取った。

[4893] ここでいうのは、もちろん268年から284年までローマで統治したクラウディウス2世皇帝のことである。

[4894] ローマでは、聖使徒ペトロとパウロも殉教して亡くなり、そこに埋葬された。

ちの遺体を埋葬するようになった。ティブルス川を渡ると[4895] 、彼らは別の町で、牢獄に閉じ込められ、それ以前にもキリストのために多くの苦難を耐え抜いていた聖殉教者キリコを見つけた。　彼の元へやって来ると、彼らは彼の足元にひれ伏し、主のために彼らのために祈ってくださるよう懇願した。その後、彼らは自分たちの財産を捧げて、彼や彼と共に囚われていたキリストの捕虜たちに奉仕し、彼らの足を洗い、その水で自分たちの身を清めた。このように聖人たちに奉仕しながら、彼らはそこで八日間を過ごした。

その頃、クラウディウス皇帝は、キリスト教の信仰に属することが判明した者全員を、裁判を経ずに処刑するよう命じた。 その少し前、260人のキリスト教徒が捕らえられ、皇帝の判決により土を掘る刑に処されることとなった。彼らの収監場所は、 の町の外れ、サラリウス街道[4896] 沿いにあり、そこは陶器作りが行われていた場所であった。　皇帝は、これらのキリスト教徒全員を、民衆の観覧が行われる場所で兵士たちに矢で射殺させ、その遺体を火で焼くよう命じた。マリンとマルファが息子たちと共にこのことを知ると、彼らは深く悲しみ、聖ヨハネ司祭と共に聖殉教者たちの処刑場へ向かい、　火の中から取り出せる限りの遺体を密かに取り出し、清らかな布に包んで、サラリウス街道沿いのケクメルと呼ばれる山の斜面にある洞窟[4897] に埋葬した。 彼らは、これらの聖なる殉教者たちの遺体とともに、キリストのために殺された皇帝のトリブーン[4898] であるヴラスタの遺体も埋葬し、長老ヨハネと共に、断食と祈りに専念しながら、その地で多くの日を過ごした。　このことを知ったクラウディウス皇帝は、マリーナとその仲間たちを捜索するよう命じたが、彼らは身を隠していたため見つからなかった。

その後、彼らはその洞窟から戻り、聖殉教者キリクが投獄されていた牢獄へと向かったが、そこには彼の姿はなかった。というのも、彼らが到着する前の夜、キリクは剣で殺害され、テヴェレ川に投げ込まれていたからである。　聖人の遺体が投げ込まれた場所を突き止めた彼らは、夜を待ち、暗闇が訪れると遺体を探し始め、見つけ出すと、ポンティアヌスの墓所[4899] にある洞窟に埋葬した。

その後、彼らがティブル川の向こう岸を通りかかると、まだ夜闇が晴れていない中、ある家の部屋から歌声が聞こえてきた。それは、カリスト司教と共に集まり、神を賛美しながら徹夜礼拝を行っていたキリスト教徒たちであった。　歌うキリスト教徒たちの声を聞いたマリンとその一行は大変喜び、その家の扉に近づいてノックしたが、家の中にいたキリスト教徒たちは、異教徒たちが襲いかかってくるのではないかと恐れて、扉を開こうとはしなかった。　そこで、聖カリスト司教は同行者たちに向かってこう言った。

4895 ティブルス川は、イタリア中部で最も重要な河川の一つであり、その河口からほど近い川岸には、ローマ帝国の古都であるローマ市が位置している。

4896 サラリウム街道はローマ市の北東部に位置し、イタリア北部へと通じていた。

4897 ここでいう「洞窟」とは、カタコンベと呼ばれるローマの地下墓地を指します。これらは地中に掘られた通路であり、その壁にはくぼみが設けられていました。そこには棺なしで故人の遺体が安置され、その後、石で塞がれ、大理石の板で覆われていました。　通路を照らすために、棺のそばにランプが吊るされ、通路には換気口も設けられ、空気の入れ替えにも役立っていた。　迫害の時代、迫害を受けたキリスト教徒たちはここで聖なる殉教者たちを埋葬し、彼らの記念日を祝うためにここに集まった。また、彼らはここで礼拝、とりわけ聖体拝領を行うためにも集まり、その際、聖なる殉教者たちの棺の上にある大理石の板が祭壇として用いられた。

4898 「トリブーン」という呼称は、当初はローマ市民の部族（トリブス）の長を指していたが、後に多くの公職者、とりわけ軍部隊の長を指すようになった。その地位は、現代の「大佐」と「中隊長」の中間的なものに相当する。ここで言及されている聖殉教者ヴラストは、そのような指揮官の一人であった。　彼が「皇帝の」と呼ばれるのは、おそらく、皇帝自身に仕える義務を負っていた、いわゆるプレトリアン軍に所属していたためである。

4899 ここで「洞窟の中の墓」とは、おそらくカタコンベ内の部屋を指しているのだろう。 通常、ローマ人は地下の通路沿いの壁の中に死者を埋葬していたが、ここで言及されているポンティアヌスのように裕福な人々は、時には通路から離れた場所に、一族全員が埋葬される、しばしば非常に広大な部屋を設けることがあった。　キリスト教に改宗した富裕層は、迫害の際、キリストのために殉教した聖なる殉教者たちの遺体を、こうした一族の墓所に埋葬することが多く、それを自分たちにとって大きな名誉であり幸福であると考えていた。

「勇気を出しなさい、恐れることはありません。キリストが私たちの扉を叩いておられます。主がそうされるよう私たちに呼びかけておられるのですから、扉を開けましょう。」

そう言うと、司教は自ら立ち上がり、扉を開けた。マリン、マルファ、そして二人の息子が司教の姿を見ると、その足元にひれ伏し、祝福を求めた。　司教とすべてのキリスト教徒たちは彼らを喜んで迎え、上階の部屋へ案内して愛情を込めて歓迎し、その後、彼らと共に祈りを捧げ始めた。マリンは妻と息子たちと共にこの場所に二ヶ月間滞在し、昼間は身を隠し、夜になると集まって祈りを捧げていた。

その頃、クラウディウス皇帝は、キリストを告白したとして捕らえられ、重い足枷を嵌められた、長老という聖職にあるある高名な男性、ヴァレンティヌスを、民衆の娯楽施設の近くにある宮殿へ連行し、自身の前で裁判と尋問を行うよう命じた。そして皇帝は彼にこう言った。

「なぜお前は、我々の民の中に暮らしながら、我々との調和を保たないのか？　私は、お前たちのキリスト教の教えについて十分に耳にしている。賢明な人間であるお前が、なぜお前たちの信仰の空虚な作り話に惑わされているのか、不思議でならない。」

「もしあなたが、私たちの信仰に宿る神の賜物を知っていたなら」と、至福の長老ヴァレンティンはこう答えた。「あなた自身も、そしてあなたの民も、喜んで私たちの信仰を受け入れ、偽りの神々や　、人の手によって造られた偶像を捨て去り、唯一の全能の神である父と、イエス・キリスト、　御子、すなわち、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された、万物の創造主を告白するでしょう。

その後、皇帝のそばにいた法執行官の一人が、聖なる長老に向かって大声で言った。

「ディイ神[4900]やメルクリウス神[4901]については、どう思うのか？」

「他に何も考えてはいない」と聖ヴァレンティヌスは言った。「ただ、彼らは哀れで不敬虔な人間であり、その生涯を不敬虔に、悪徳と快楽の中で過ごしたということだけだ。もし彼らの出自や行いについて語ってくれれば、彼らがいかに不敬虔であったか、あなた自身も理解するだろう。」

この聖人の言葉に、法の守護者は大声で叫んだ。

「この男は、神々やローマ帝国の統治者たちを非難している！」

クラウディウス皇帝は、この会話を辛抱強く聞き終えると、その後ヴァレンティヌスにこう言った。

「もしキリストが神であるなら、なぜ彼に関する真実のすべてを私に語らないのか？」

これに対し、聖なる長老は皇帝にこう言った。

「おお、王よ！　私の言葉に耳を傾けてください。そうすれば、あなたの魂は救われ、あなたの王国は広がり、敵は消え去るでしょう。　あなたはすべてに打ち勝ち、この世では一時的な、来世

4900 ギリシャ神話によれば、ディオス、あるいはゼウス、別名ユピテルは、当初クレタ島を統治し、後に全世界の支配権を掌握した末っ子のタイタン、サトゥルヌスと、その姉レイアの息子であった。　サトゥルヌスはレイアとの間に数人の息子と娘をもうけたが、母であるガイアから「自分の子供たちに王位を奪われる」という予言を受けていたため、彼らは生まれた直後に飲み込んでしまった。　サトゥルヌスとレイアの子供たちの中で、この運命からレイアによって救われたのはゼウスだけであり、彼は後に実際にサトゥルヌスを王位から追放した。ゼウスはギリシャ人やローマ人から、神々と人間の父、天と全宇宙を支配する強大で威厳ある統治者として崇められ、雷や稲妻を地上に降らせる存在として、彼らの主神とされていた。　ギリシャ神話では、彼に多くの二流の女神たち、さらには人間の妻たちとの肉体的関係があったとされ、他の神々や女神たちと同様に、様々な人間の情熱や悪徳が彼に帰せられている。

4901 メルクリウス、別名エルミウスまたはヘルメスは、ユピテルとその妹ヘラの息子である。ギリシャ人やローマ人からは、神々の使者、ゼウスの意志を実行する者、神々と人間との仲介者、雄弁の神、そして多様な発見、発明、工芸の神として崇められ、　産業と商業の神でもあり、これらは狡猾さ、欺瞞、さらには窃盗と結びついたときにのみ富をもたらすと言われていた――このことから、ヘルメスは窃盗と欺瞞の守護神となり、あらゆる種類の嘘や誓約違反を容認していた。

では永遠の王国を享受することになるでしょう。ただ次のことを行ってください。あなたが聖人たちの血を流したことについて悔い改め、キリストを信じ、聖なる洗礼を受けなさい。

この言葉を聞いたクラウディウスは、そこにいた人々にこう言った。

「聞け、ローマ市民よ、そしてすべての人々よ。この男が、いかに健全な教えを我々に説いていることか。」

しかし、カルプルニウスという名の地方総督[4902]は、これに対し大声でこう言った。

「王よ、あなたはこ人の空虚な教えに惑わされている。私たちが幼い頃から崇拝するように教えられてきた神々を見捨てるのが、果たして正しいことなのか、ご自身で判断なさってください。」

地方総督がこう言い終えると、皇帝の心は変わり、聖ヴァレンティヌス司祭をカルプルニウスに引き渡し、悲しげにこう言った。

「辛抱強く彼の話を聞いてくれ。もし彼が説く教えに根拠がないことが判明したなら、聖なる品を盗んだ者たちを裁く法律に従って彼を処罰せよ。しかし、もし彼の助言に根拠があり真実であると分かったなら、なぜ我々は彼の言うことを聞かないのか？」

カルプルニウス司教は聖ヴァレンティヌスを連れて行き、かつて自分の配下にあった高位の聖職者の一人、アステリウスという、その知性で知られる人物に彼を託し、こう言った。

「もし君の言葉で、この男を我々と同じ考えに導くことができれば、私は皇帝に君の才知を報告し、君は皇帝の友となるだろう。」

その後、アステリウスは長老ヴァレンティヌスを連れ出し、自分の家へと連れて行った。聖ヴァレンティヌスがアステリウスの家に入ると、ひざまずいて祈りを捧げ、次のように祈った。

「目に見えるもの、目に見えないものすべての被造物の神よ、人類の創造主よ。私たちを悪魔の惑わしから救い、闇から光へと導くために、御子、私たちの主　イエス・キリストを遣わされた方よ。御子はこう言って私たちを御自身のもとに招かれました：　*『疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう』*（マタイ11:28）。どうか、この家を御自身のもとに引き寄せ、闇の後に光を与えてください。この家が、聖霊と一体となられた神でありキリストである御方を、永遠に知ることができますように。アーメン。

聖人がこの祈りを終えると、その言葉を聞いていたアステリウスは彼にこう言いました。

「あなたがたがキリストを『光』と呼んでいることに、私は驚いています。」

「その通りです」と聖ヴァレンティヌスは答えた。「聖霊と清きおとめマリアから生まれた私たちの主イエス・キリストは、この世に来るすべての人を照らすまことの光なのです（ヨハネ1:9）。」

「もし彼がすべての人を照らすのなら」と、アステリウスはそう言うと、「今すぐ、あなたの言うことが真実かどうか試してみよう。私には、二歳になる前に失明した娘がいる。もしあなたが、あなたのキリストの名によって彼女の視力を取り戻してくれるなら、私はあなたが命じることは何でもする。」

「彼女を私のところへ連れて来なさい」と、聖なる長老は言った。

アステリウスは急いで行き、盲目の少女を連れてきた。すると聖ヴァレンティヌスは、両手を挙げ、天を仰ぎ見て、涙を流しながら長く祈りを捧げた。そして、盲目の少女の目に手を置き、こう言った。

「主イエス・キリストよ！　あなたはまことの光であられるゆえ、あなたのしもべに光をお与えください。」

[4902] ギリシャ・ローマ帝国において「エパルハ」とは本来、地方の統治者を指したが、時には都市の長もこの称号を名乗ることがあった。

この言葉を聞いた途端、少女はたちまち目が見えるようになった。それを見たアステリウスとその妻は、聖人の足元にひれ伏して言った。

「お願いです。どうか私たちに御心のままに扱ってください。そうして私たちがキリストのしもべとなり、私たちの魂が救われますように。」

「それでは、私が命じることを実行しなさい」と聖ヴァレンティンは彼らに言った。「もしあなたがたが心からキリストを信じるなら、家にあるすべての偶像を滅ぼし、断食を行い、借金のある者全員の借金を赦し、聖なる洗礼を受けなさい。そうすれば、あなたがたは救われるでしょう。」

アステリウスとその妻は喜んでこれらすべてを行うことに同意し、聖ヴァレンティンは彼らに三日間の断食を課し、聖なる信仰の真理を教え始めた。また、アステリウスの支配下には多くの囚人がいたため、彼は彼ら全員の足枷を外し、牢獄から解放して自由の身とした。　三日間の断食の後、日曜日が訪れ、アステリウスは家族全員――男女合わせて46人――と共に洗礼を受け、その後、聖カリスト司教を自宅に招き、彼から祝福を受けた。

アステリウスの洗礼の知らせを聞いた、至福のマリン、その妻マルファ、そして息子たちのアヴディファクスとアヴヴァクムは、大いなる喜びをもって彼の家を訪れ、神に感謝を捧げ、そこで32日間を過ごした。

一方、皇帝は、アステリウスが長老ヴァレンティヌスの教えによってキリストへの信仰に改宗し、家族全員とともに洗礼を受けたことを知ると、直ちに兵士たちを派遣して彼自身と家族全員を捕らえさせた。兵士たちは不意に現れ、アステリウスの家の中にいた者全員を捕らえ、　その中には聖マリンとその妻、息子たちも含まれており、彼らを皇帝のもとに連行した。皇帝は、長老ヴァレンティヌス、マリン、その妻と息子たちを他の者たちから隔離するよう命じ、アステリウスとその家族を縛ったまま、オスティアと呼ばれる都市[4903]へ送り、そこで裁判と処罰を受けるようにした。

聖アステリウスと彼と共にいた者たちはすべてオスティアの町へ連行され、ゲラシウスという名の裁判官に引き渡された。裁判官は彼らを見るやいなや、全員を牢獄に投獄するよう命じた。二十日が経過した後、彼は彼らを法廷へ連れてくるよう命じ、こう言った。

「皇帝と、そのすべての顧問たち[4904]が命じたことを、お前たちは知っているか？」

「存じ上げません」と聖人たちは答えた。

「命じられたのは」と裁判官は言った。「神々を崇拝する者は生き延び、自由であり、崇拝を拒む者は、様々な拷問を受けた後、処刑されるということだ。」

これに対し、聖アステリウスは裁判官にこう言った。

「神々に似た者たちは神々に拝ませ、彼らと共に滅びさせよ。我々は、天にまします唯一の真の全能の神にひれ伏し、自らをその神への生贄として捧げるのだ。」

この言葉を聞いて、裁判官は激怒し、直ちに聖アステリウスを絞首刑に処し、拷問を加えるよう命じ、他の者たちには容赦なく棒で打ち据えるよう命じた。その日、聖なる殉教者たちにこのような拷問を加えた後、裁判官は彼らを再び牢獄に投獄するよう命じ、その際にこう言った。

「彼らには、さらに残酷な拷問を用意すべきだ。」

その後、彼は翌日、公開処刑を行うよう命じ、民衆をすべて集めるよう指示した。朝になると、ゲラシウスは公開処刑の場に到着し、裁判用の特設席に着くと、聖アステリウスと他の殉教者たちを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼にこう言った。

「その虚しい狂気を捨て、神々に犠牲を捧げることを誓え。そうすれば、お前も、お前の仲間たちも、拷問で死ぬことはなくなるだろう。」

[4903] オスティアの町は、ローマの南西、テヴェレ川の河口、ティレニア海の岸辺に位置していた。ここには、クラウディウス1世皇帝によって建設された、最大かつ最も堅固な港があった。

[4904] 皇帝のこれらの顧問は、上院議員、より一般的にはシンクリティクスと呼ばれた。彼らは最も著名な王室の高官であり、シンクリト、すなわち王室評議会を構成していた。

「我らは皆、キリストのために死ぬことを望んでいる」と聖アステリウスは答えた。「キリストが我ら罪人のために死なれたように、この世の汚れから清められ、我らが切望する天の御国へと移るにふさわしい者とされるためである。」

この答えにゲラシウスは激怒し、アステリウスと彼と共にいた者全員を野獣に引き裂かせるよう命じた。その後、聖なる殉教者たちは、黄金の神殿の近くにある「獣の場所」と呼ばれる場所へ連行された。そこは野獣が飼われていたため、そう呼ばれていた。　聖人たちが穴に入ると、獣たちが閉じ込められていた仕切りが開かれ、獣たちが彼らに向かって放たれた。その時、聖アステリウスは大声で叫び、こう言った。

– 全能の主なる神よ、獅子の穴から御自分のしもべダニエルを救い出し、預言者ハバククを通して彼を訪れ、彼を強めてくださった方よ[4905] 、どうか御自分の聖なる天使を通して、私たち、御自分のしもべたちをも訪れてください。

仕切りから出てきた獣たちは、聖なる殉教者たちの誰にも害を加えることはなく、むしろ聖アステリウスとその仲間たちに頭を下げた。これを見たゲラシウスは民衆に向かってこう言った。

「ご覧なさい、この人々がその魔法の術で獣たちをなだめたのです。」

しかし、民衆の多くはこう言った。

「彼らが仕える神が、彼らを守っておられるのだ。」

その後、裁判官は聖なる殉教者たちを穴から引きずり出し、大きな焚き火を用意して、彼らをそこに投げ込み、焼き殺すよう命じた。巨大な焚き火に火がつけられると、聖アステリウスは他の聖なる殉教者たちにこう言った。

「勇気を出しなさい、恐れてはなりません。バビロンの炉の中に三人の若者と共におられた方が、今、私たちの間に立っておられるのですから。」

そして、聖なる殉教者たちが火の中に投げ込まれると、炎はたちまち消え、熱は涼しさへと変わり、聖者たちは無傷のままであった。　そこで裁判官は、自分が打ち負かされ、恥をかかされたことを悟り、聖なる殉教者たちを城外へ連れ出し、そこで特別な処刑に処すよう命じた。ある者は斬首され、ある者は石打ちにされた。こうして、これらの聖なる殉教者たちの殉教の偉業は幕を閉じた。

一方、ローマに残された、至福の司祭ヴァレンティヌスと共にいた聖殉教者マリーナ、マルファ、アヴディファクス、アヴヴァクムについては、クラウディウス皇帝は彼らを自身の元へ引き出して裁判にかけるよう命じた。　まず彼は、聖ヴァレンティンを容赦なく棒で打ちのめし、その後剣で首を刎ねるよう命じ、それから聖マリーナと彼と共にいた者たちに向き直り、こう言った。

「お前たちはどこから来たのか？」

「ペルシアからです」と聖人たちは答えた。

「では、なぜ」と皇帝は尋ねた。「故郷を離れて、ここへ来たのか？」

「私たちは、聖なる使徒たちの墓に参拝し、その墓の前で主への祈りを捧げたいと願ったのです」と聖人たちは答えた。

その後、皇帝はこう言った。

「金や銀はどこで手に入れたのか。あなたがたは裕福だと聞いていたが。」

「私たちは」と聖人マリンとマルファは答えた。「ペルシャに大量に所有していた財産を売却して手に入れました。売却益の一部は貧しい人々に施し、残りをここに持ち込みましたが、それも自分たちのためではなく、聖人たちに奉仕するためです。」 そして、私たちがペルシアでどれほど に裕福であったかは、私たちの気高い家柄を見ればお分かりいただけるでしょう。私の父マロメイは、

[4905] ダニエルが獅子の穴に6日間留まったという伝説はダニエル書14:28–42に記載されており、預言者ハバククが彼を訪ねた話は、12月の2日に掲載されているハバククの伝記に記されている。

ペルシア王に次ぐ地位にありました。そして、この私の妻は、ペルシアで名高いクシニト公の娘なのです。

「なぜあなた方は」と皇帝は尋ねた。「ペルシアで崇められている自国の神々を捨て、死んだ人々を探しにここへ来たのですか？」

「我らはキリストの僕です」とマリンは答えた。「聖なる使徒たちに礼拝するために参りました。彼らの不滅の魂は神と共にあり、彼らが我らのために、我らの神であるキリストの御前で執り成しをしてくださるよう願うためです。」

「では、ペルシアから持ち込んだ金や銀はどこにあるのか？」とクラウディウスは尋ねた。

「私たちはそれを神に捧げました」と聖マリンは答えた。「神は、それを一時的に私たちに与えてくださったのです。」

皇帝はこの言葉を聞いて激怒し、聖なる殉教者たちをムスキアヌという名の総督に引き渡し、こう命じた。

「もし彼らが神々に犠牲を捧げないなら、様々な拷問の末、彼らを死に追いやれ。」

ムスキアヌスは聖人たちを連行し、ローマの女神テルルダ（[4906] ）の神殿にある裁判の席に着くと、彼らに拷問を宣告し、目の前にあらゆる拷問器具を並べさせ、残酷な苦痛で脅し、それによって偶像への生贄を強要しようとした。　しかし、聖人たちは彼の意志に従わなかったため、彼は拷問を開始した。まず、聖マリーナを地面に寝かせ、長い間棒で殴打するよう命じた。殴打されながら、聖殉教者は大声で、ただ次の言葉だけを繰り返し叫んだ。

「主イエス・キリストよ、あなたに栄光あれ！」

その後、アヴディファクスとアヴヴァクムもまた棒で打たれた。その時、母である聖マルファは、子供たちの苦しみを見つめながら、私たちのために大きな苦しみを耐え忍ばれたキリストのために、彼らが勇敢に苦難に耐えられるよう、母としての励ましで彼らを力づけた。　その後、拷問官は、この三人の殉教者――父と息子たち――を拷問台に吊るし、鉄の爪で彼らの肉を剥ぎ取り、火で肋骨を焼くよう命じた。その際、聖なる殉教者たちは喜びに満ちた顔でこう叫んだ。

「私たちの神、キリストよ、御名のゆえにこれらの苦しみを耐え忍ぶことを私たちに許してくださったことを感謝いたします。」

その後、ムスキアンは聖人たちを拷問器具から降ろし、両手を切り落とすよう命じた――その際、マルファは彼らの血を集め、喜びをもってその血を自らの身に塗った――そして、切り落とされた両手を彼らの首に吊るし、ローマ全市を練り歩かせた。聖なる殉教者たちが街中を練り歩かされている間、布告者は彼らに向かって叫びながらこう言った。

「神々を冒涜してはならない。そうすれば、その報いを受けることになるのだ。」

これに対し、聖人たちは大声でこう答えた。

「彼らは神々などではない。あなたたちと王を滅ぼす悪魔たちだ。」

このような苦難の後、聖なる殉教者たちは、街から十三ポプリシュ離れた「ニンファ・カタヴァッシ」と呼ばれる場所へと連行された。そして、聖マリン、アヴディファクス、アヴヴァクムは首

[4906] テルーダまたはテルス――古代イタリアの「大地の母」を象徴する神であり、セレーネと共に祈りの対象とされていた。大地の代表として、テルスは天空の神ユピテルと対比されていた。　種を受け入れ、新たな命を与える大地の母なる胎を体現するテルスは、万物の創造主と見なされ、他の女神たちよりも優先して「母」として呼び求められた。　さらに、テルスは、ギリシャのデメテルと同様に、世界秩序の調和者、繁栄の授与者、そして結婚の守護神とも見なされていた。大地の神として、テルスは地震の際にも呼び出された。 ピケンティ族との戦争中の168年、戦いの最中に地震が発生したことを受け、コンスルP・センプロニウスはテッルスに捧げる神殿を建立することを誓願し、その神殿はエスクイリーノの丘の西斜面に建設された。一方、エレウシスの三神、デメテル（テッルス）、 ディオニソス、コレーに捧げられた神殿は、キリスト降誕前486年に、ギリシャ様式に基づき、ギリシャ人芸術家たちの手によってローマに建立されていた。

を刎ねられ、聖マルファは川に沈められて溺死させられた。[4907] あるクリスチャンの女性、フィリキタという名の者が、首を切られた聖なる殉教者たちの遺体を密かに持ち出し、さらに水の中から聖マルタの遺体も見つけ出し、それらを自分の畑に埋葬し、父と聖霊と共に世々限りなく賛美される我らの主イエス・キリストを賛美した。アーメン。

7月20日

7月7日（旧暦）

同日、1407年にモスクワの大公妃エウドキア（世名）である聖エウフロシニアが帰天した。

尊い父トマ・マレインの記念日

7月7日の記念日

聖トマスは、修道者となる前は軍務に就いており、その富と勇敢さで知られていた。並外れた体力を持ち、戦いで数多くの武勲を立て、彼のおかげで同胞たちは何度も敵に勝利を収めた。　しかし、キリストへの愛ゆえに、トマスは世俗と世の喧騒を捨て、キリストの軽い軛（[4908] ）――すなわち修道生活――を受け入れた。　彼は、主であるキリストに倣おうと努め、自らを貧しさに身を委ね、謙遜を養った。そのために、断食の生活で知られ、様々な修道院で暮らす神に奉仕する修行者たちから教えを請うた。　やがて、断食の修行に専念するための静寂を切望したトマスは、荒野へ赴くことを決意した。するとある夜、彼の目の前の空に火の柱が輝き、聖預言者エリヤ自身が現れて、荒野の奥深くへと続く道を示してくれた。

そのような導き手たちの指導のもと、トマスは「マレア」[4909] と呼ばれる山にたどり着いた。この山は、エリヤにとってのカルメル山[4910] と同じような存在となった。ここで彼は孤独な生活を送り、神とのみ交わり、神聖な啓示や幻視に恵まれた。

かつて世俗に暮らしていた頃、目に見える敵を勇敢に打ち負かしていたように、今や世俗から離れ、荒野に身を置く彼は、絶え間ない祈りによって、あたかも鋭い剣で斬りつけるかのように、目に見えない悪霊の群れを打ち倒し、追い払っていた。　山の上に立つ町や、天の穹蒼に輝く星が人々の視線から隠れることができないのと同様に、聖トマスもまた、マレーの荒野の山において人々から身を隠すことはできなかった。彼はそこで、輝く星のようにその聖性を放ち、大地を照らし出していたのである。

人々がこの修行者の存在を知るようになると、彼は、真理を見失った者たちの導き手となり、助けを必要とする者たちの支えとなった。なぜなら、彼は神から奇跡を行う力と癒しの恵みを与えられていたからである。　彼はあらゆる病を奇跡的に癒やし、盲人に視力を与え、足の不自由な者に正

[4907] 聖殉教者マリン、マルタ、およびその息子たちは269年に殉教した。彼らの聖遺骨は現在、ローマの聖ヨハネ・クシュニク教会に、聖バレンタインの聖遺骨はプラクセダ教会に安置されている。

[4908] マタイ11:30。

[4909] 聖トマスが修行に励み、その名前の由来となったマレア山がどこにあったのかは、正確には分かっていない。 ペロポネソス半島のラコニア地方にあるマレア岬をその場所とする説もあれば、アトス山の東側にあったマレオン山を指すとする説もある。また、レスボス島にあるマレア岬をその場所とする説もある。

[4910] カルメル山はアシェル族とマナセ族の領土内に位置していた。その北端は地中海に突き出ており、南端はサマリアの山々に接していた。　この山は、預言者エリヤとエリシャの居場所となっていた（列王記下18:1–46；列王記下2:25、4:25）。

しく軽やかに歩く能力を取り戻させ、ある時には、彼の祈りによって、水のない場所に泉が湧き出た。　しかし、トマスが数多くの奇跡を行ったのは、この世での生涯の間だけにとどまらず、彼が神のもとへ召された後も、その尊い遺骸の前で奇跡が起こり続けた。　信者たちは、あらゆる病や不治の病、さらには悪霊に取りつかれた状態からも、聖人の祈りと、私たちの神であるキリストの恵みによって、驚くほど速やかに癒やされたのである。[4911] 。

コンダク、第4調:

あなたは神聖な愛に燃え上がり、偉大な勝利を勇敢に示し、朽ちゆく王とすべての栄華を打ち破り、小さな山に修道院を築き上げました。そこからあなたは天へと昇り、王の王のもとへ至りました。フォマよ、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

聖殉教者ペレグリン、ルキアノス、ポンペイオス、イシキオス、パピオス、サトルニヌス、およびゲルマヌスの殉教

記念日：7月7日

これらの聖殉教者たちはイタリア出身であり、トラヤヌス帝の治世[4912] に殉教した。キリスト教徒への迫害が始まると、彼らは船に乗り込み、ディルラキオン[4913] という都市に到着した。 この町に滞在中、聖アスティウス司教[4914] が十字架に磔にされ、蜂蜜を塗られ、スズメバチやハエに刺されている姿を目撃し、彼らはキリストを告白した聖人を称賛した。そのため、彼らがキリスト教徒であることが露見し、兵士たちは直ちに彼らを捕らえた。　尋問の際、彼らはキリストへの信仰を告白し、アンフィパトス・[4915] ・アグリコラの命令により、船に乗せられ、海の深い場所に沈められました。こうして、聖なる殉教者たち[4916] は息を引き取りました。彼らの遺体はその後、波によって岸に打ち上げられ、その場にある砂の中に埋葬されました。　それから90年後、聖なる殉教者たちはアレクサンドリアの司教の前に現れ、彼にこう告げた。「私たちの遺体を受け取ってくれ」。

そこで司教は聖人たちの遺体を丁重に埋葬し、その埋葬地に小さな教会を建てた。

聖エピクテト司祭と聖アスティオン修道士、両聖殉教者の生涯と受難。

記念日：7月7日

不義なローマ皇帝ディオクレティアヌス[4917] の治世中、ローマ帝国の東部地方の一つに、エピクテトという名の、修道生活を送る高潔な男が住んでいた。彼は長老であり、若き頃からキリストに仕え始めていた。　彼は、その清らかな生活ゆえに神から授けられた奇跡を行う賜物を持っていた。

[4911] 聖トマス・マレイナの生没時期は正確には不明である。彼は遅くとも10世紀には生きていたと考えられている。

[4912] トラヤヌスは98年から117年までローマ帝国を統治した。99年、彼は秘密結社を禁止する法律を復活させた。 異教徒の間では、キリスト教徒は秘密結社に属する人々であるという見方がすでに定着しており、またキリスト教徒の礼拝集会は夜間に密かに行われていたため、トラヤヌスは彼らを前述の法律の違反者として迫害した。

[4913] ディラキオン（別名エピファムン、現在のドゥラッツォ）は、現在のアルバニアにあるアドリア海沿岸の都市であった。

[4914] 聖殉教者アスティアの記念日は6月4日である。

[4915] ローマ帝国において、「アンフィパタ」とは地方の統治者を指す呼称であった。

[4916] これらの聖殉教者たちの没年については、正確には知られていない。

[4917] ディオクレティアヌス帝は、284年から305年までローマ帝国の東部を統治した。

彼はあらゆる病を癒やし、盲人の視力を取り戻し、ハンセン病患者を治し、病床に伏す麻痺者を立ち上がらせ、悪霊を追い出した。彼の聖性を証明するこれらの奇跡のうち、以下のものは特に注目に値する。

ある日、エピクテトがある村の近くにある自分の庵に滞在し、祈りと敬虔な瞑想にふけっていたとき、ある郡守[4918]が、完全に麻痺した15歳の娘を連れてやって来た。娘の癒やしを願って、そのコメットはエピクテトの足元にひれ伏し、こう懇願した。

「神の人よ！　私を憐れんでください。私を拒まないでください。あなたが仕える慈悲深い神でさえ、御許にやって来る者を誰一人として拒まれることはありません[4919]。私の唯一の娘は、すでに3年間も病気で、体のどの部分も動かすことができません。彼女はかろうじて息をしているだけですが、私は、十二年間も出血に苦しんでいた女性を癒やされた方[4920]が、私の娘をも癒やしてくださることを固く信じています。どうか私たちのために祈り、憐れんでください。私たちはキリストの教会の子供であり、聖なる洗礼によって照らされているのですから。

そこで、神の僕エピクテトは、神に熱心に祈りを捧げた後、麻痺していた少女に聖油を塗りました。すると、少女はたちまち回復して自分の足で立ち上がり、周囲の人々は皆、神に感謝を捧げました。聖人はコミトにこう言いました。

「愛する者よ！もしあなたの家で誰も病気にならないようにしたいのなら、毎週日曜日、家族全員と共に、あらかじめ心を清めた上で、キリストの御体と御血の聖なる秘跡を拝領しなさい。」

その後、聖人は彼らを平安のうちに送り出した。

またある時、悪霊に取り憑かれた者が彼のところに連れてこられた。聖人は三日間その者を自分のそばに留め置き、自らの祈りによって悪霊に恐ろしい苦痛を与え続けた。すると、悪霊は次のように自分の状態を訴えた。

「ああ、悲しみよ！　ああ、苦しみよ！　なぜ私はこれを耐えなければならないのか？　フリギア[4921]の偶像の神殿に留まり、無知な人々から日々崇拝と供物を捧げてもらっていた方が、私にとってはましではなかっただろうか？　それなのに今、ここでは何の罪もないのに、この一人の男から苦しみを受けなければならないのだ。」

聖なる長老は三日目に、悪霊に禁制を課し、その男から追い出した。

また別の時、ある高貴で裕福な異教徒の女性が聖人のもとへ連れてこられた。彼女は視力を失い、さまざまな医師のもとで治癒を求めても無駄だった。　彼女は、神の御使いに、その右手で自分の失明した目に触れてくださるよう懇願した。というのも、彼の清らかな手によって多くの奇跡が行われ、病人に癒しが与えられていると聞いていたからである。　聖人は、彼女の信仰が表れたその熱心な懇願に心を動かされ、主イエス・キリストの御名を呼びながら、その右手を彼女の目に置いた。すると、その女性はたちまち目が見えるようになり、こう叫んだ。

「キリスト教の神よ、あなたに栄光あれ！」

それ以来、彼女は家族全員と共にキリストに帰依した。しかし、この神の御使いの奇跡について語り尽くすにはあまりにも長くなるだろう。とはいえ、彼の聖性をうかがい知るには、これだけの記述でも十分である。それゆえ、他の伝承へと話を移すことにしよう。

近隣の町から、どうやら偶然にも、使用人たちと散歩しながら、聖者が住んでいた場所へ、アスティオンという名の18歳ほどの若者がやって来た。彼は裕福な貴族の息子であり、異教徒であった

[4918] 古代ローマにおいて、「コミタス」とは、当初は属州の最高位官吏の随行者を指し、後に皇帝の側近として最も身近な随行団を構成する者たちを指すようになった。　コンスタンティヌス大帝（306～337年）の時代以降、この呼称は、たとえ皇帝の側近に属していなくても、すべての宮廷人および政府高官の称号となった。

[4919] マタイ7

[4920] マタイ9:20–22

[4921] フリギア――小アジアの地域。

。　実のところ、神の摂理が彼をその聖人の小部屋へと導いたのである。彼はここに誰が住んでいるのか知りたくなり、小部屋に入ると、威厳のある風貌の男がいた。その男は彼を親切にも迎え入れ、自分のそばに座らせると、こう尋ねた。

「子よ、どこから来たのか？　そして、両親は誰なのか？」

若者はこう答えた。

「父は都市の長であり、母はユリアヌス上院議員の娘です。

私は一人っ子で、両親は私を最も貴重な真珠のように大切にしています。

すると、聖人は彼にこう言った。

– よく言った、わが子よ。両親が君を最も貴重な真珠のように慈しんでいると。そう、彼らはただ見ているだけで、君を真に持っているわけではないのだ。何しろ、君の祝福された魂はあらゆる真珠よりも尊く、私たちの救い主キリストにも喜ばれている。キリストは、私の見る限り、その魂を御自身の奉仕のために選ばれたのだ。　だから、愛する子よ、私の言葉に耳を傾けなさい！この目に見える、一時的で虚しい世のあらゆるものを捨て去り、すべての聖人たちと共に、来世において目に見えない永遠の恵みを受け取れるようにしなさい。　なぜなら、この世で私たちが見るものはすべて過ぎ去り、すぐに終わってしまうが、神を愛し、神に仕える者たちのために神が備えてくださったものは、神ご自身が永遠であるように、永遠に存続するからです。私たちが見ることができる金や銀は、真の価値を持つものではなく、ただ人々を惑わすものに過ぎません。　そこで、私があなたに、手に入れる価値のある真の金とはどのようなものかをお話ししましょう。私たちのキリスト教の書物には、次のような言葉があります。「火によって精錬された金を、私から買って豊かになり、また白い衣を買って身に着けるように」と、あなたが裸で現れることのないようにと[4922]。この純金とは、神の愛をもって人々の心を燃え立たせる、私たちの主キリストのことである。もしあなたが、わが子よ、御心をあなたの心に迎え入れたいと願うなら、たちまち天の富があなたのために用意され、あなたは白い衣を身にまとうことになる。この衣とは、信仰、希望、そして愛である。　それらを鎧のように身にまとい、あなたはこの目に見える世界を超えるだけでなく、あなたがたが神として崇めている悪魔とそのすべての僕たちをも打ち負かすことになるでしょう。さらに、愛する者よ、あなたはこれを知らなければなりません。すなわち、　肉によってあなたを産んだあなたの父は、あなたの真の父ではないのです。なぜなら、彼はあなたに、朽ち果て、やがて死ぬ肉体を授けたに過ぎないからです。　あなたの真の父は、全能の神である。神は、あなたの不滅の魂を創造し、御自身の御心によって受胎されたあなたの肉体の中に、その魂を送り込まれたのである。　つまり、あなたには二人の父がいる――目に見える父と、もう一人の目に見えない父である。目に見えるあなたの父は死すべき存在であり、時の流れや災難、苦しみには無力である。一方、目に見えないあなたの父は不死であり、永遠であり、いかなる苦しみにもさらされることはない。　全能であり、すべてを御手の中に握っておられる。御方がおっしゃった――そうしてあなたは母の胎内で造られた。御方が命じられた――そうしてあなたは母の胎から出てきた。御方の御心によって、あなたは青年期を迎えた。　もし子供たちがこの世の親を敬うべきであるならば、なおさら、私たちを御自身の姿と似姿に創造し、私たちに知性と理性を与え、御自身の御手の創造物の上に支配権を授けてくださった方を、敬わなければならない。御方は、御自身の慈しみによって、私たちを奴隷から御自身の息子、兄弟、そして友へと変えてくださった。　それゆえ、私たちにこれほど多くの恵みを与えてくださった、私たちの真の父である御方を、私たちは知り、愛し、敬い、常に礼拝しなければならない。同様に、私たちの真の母とは、この世のために私たちを肉によって産む者ではなく、霊的に私たちを永遠の命へと産み出してくれる方である。　彼女は私たちの救い主と婚約し、天使たちに敬われ、預言者たちによって飾られ、使徒たちや殉教者たちによって賛美され、信仰の証人たちによって称えられており、主キリストは彼女の

[4922] 黙示録3

ために天の宮殿を用意されました。この聖なる母は、人々から「教会」と呼ばれています。　その声は、雛を慈しむ鳩の声であり、その口からは使徒の教えの香油が流れ出し、その目は神への真の信仰と揺るぎない希望であり、その手からは、憐れみと愛から生み出される善行の没薬が滴り落ち、その二つの器は二つの契約である。　預言者たちが教えた「古い契約」と、使徒たちが宣べ伝えた「新しい契約」である。そして、聖なる洗礼を通して、彼女は子らを不死の命へと生み出す。　さあ、愛する子よ、来なさい！この真の母の乳房から養われなさい。私の助言に従いなさい――あなたの両親の一時的な富を軽んじ、神の子たちのために用意された永遠の宝の相続人となるのです。あなたの真の父が、私を通してあなたにこう語っているのを聞きなさい：　*「あなたの地、あなたの親族、あなたの父の家を離れ、わたしが示す地へ行きなさい」*（創世記12:1）、*「乳と蜜の流れる地へ」*（出エジプト記3:8,17）――預言者たち、使徒たち、そして聖なる父たちの教えによって。 そして、あなたが命じられたことをすべて果たしたとき、あなたには楽園の嗣業が与えられ、天の宝庫が開かれ、天の御国の栄光が与えられ、天使の位階とすべての聖人たちの御姿を見ることになり、彼らと共に、愛し愛される兄弟として生き、同時に息子として神に近づくことになるでしょう。

分別のある若者は、この神の人の高邁な言葉を聞き、その真実性を信じて心を動かされたが、今回は何も言わなかった。彼に付き添っていた使用人たちが、その言葉を両親に伝えるかもしれないと恐れたからである。そこで、彼はその尊い方に一礼してその場を離れた。

翌朝、非常に早い時間に、若きアスティオンは、まるで前日に甘い蜜を集めた場所へ再び飛んでいく賢いミツバチのように、一人でその尊い長老のもとへ急いで向かった。主の司祭の修道室に入ると、彼は次のような言葉で挨拶をした。

「こんにちは、キリストの使徒、新約の奉仕者よ！」

すると、聖人は彼にこう答えた。

「あなたもこんにちは、美しい若者よ。あなたは殉教者の衣をまとい、高価な宝石の冠を戴いているのが見えます。」

二人が座って語り合いを始めると、長老はこう言った。

「どうだ、わが子よ。昨日、神の御慈悲によって我々が汝の心に蒔いた種は、枯れてしまったのか？　それとも実を結ぶだろうか？　それとも、汝の心は依然として不信仰の闇の中に留まっているのか？」

アスティオンは言った。

「昨日も申し上げましたが、聖なる父よ、私は両親のひとり息子であり、彼らから深く愛されています。　私は両親を悲しませることを恐れています。もし私が公然とキリスト教の信仰を受け入れたら、彼らは過度の悲しみから、海に身を投じたり、正気を失ったり、あるいは他の何らかの方法で自ら命を絶ったりするでしょう。しかし、私を救うものが、両親にとって死と永遠の滅びの原因となるようなことは望みません。　ですから、もしあなたが私の助言を受け入れてくださるなら、神父様――私を密かにキリスト教徒にしてください。そして今、私が洗礼を受ける準備を整えてください。キリスト教の儀式に従って、私に対してなすべきことをすべて終えられたら、どうか私に慈悲を示してください。　主が道を示してくださるどこか遠い国へ、私を連れて行ってください。そうすれば、私の目が両親の涙を見ることもなく、彼らの悲しみを目の当たりにして私の良心が揺らぐこともなく、彼らへの愛ゆえに、私の救いの道を損なうこともないでしょう。

若者のその言葉を聞いた聖なる長老は、心から喜び、彼に毎日断食し、偶像に捧げられた食物によって汚されることのないよう戒めると同時に、救い主キリスト、まことの神に祈りを捧げるよう命じました。若きアスティオンは熱心にこれらの命令に従いました。　家族に内緒で、彼は毎日長老のもとを訪れ、聖なる信仰を学んだ。そして、キリストをよく知り、彼を固く信じるようになったとき、聖なる長老は彼に洗礼を授けた。

しばらくして、ある夜、二人はその地を去った。その際、アスティオンは旅費として少額の金銭を携えていた。港に着くと、彼らはスキタイの国々へ向かう船を見つけ、その船の席を確保して乗り込んだ。　かなり長い間航海を続けた後、彼らは上陸し、スキタイの領土内、ドナウ川沿いに位置するアルミリス[4923]と呼ばれる町に入った。彼らはその町の近くに、住むのに適した人里離れた場所を見つけ、そこで小さな家を建てて定住した。

アスティオンの両親は、愛しい息子の姿が見えないと、あちこちを探し回ったが、見つからず、息子の名を呼び続けながら、むなしく涙を流し、泣きじゃくった。父はこう叫んだ。

「アスティオンよ、我が愛しい子よ、今どこにいるのか？　アスティオンよ、最も愛しい、我が唯一の息子よ！　君に何が起きたのか？　何かの獣が突然君を食い尽くしたのか、それとも水の深淵が君を飲み込んだのか？　ああ、我が老後の支え、我が目の光よ！　今、どこで君を探せばいいのかわからないし、どの国へ私の奴隷たちを君を探しに送ればいいのか――途方に暮れているのだ！

アスティオンの母もまた、衣服を引き裂き、胸を叩きながら、泣きじゃくり、こう言った。

「誰が私をあなたから引き離したのか、私の愛しい子よ、アスティオン！　キリスト教の神が、誰かを送り込み、誘惑によってあなたを私たちから遠ざけたのではないかと思う。ああ、不幸な私よ！　ああ、私よ――私は果てしない悲しみに満ちている。　あなたの誕生と育ての過程で私が耐えてきたすべての苦労と病苦は、すべて無駄になってしまった！　私の胎内の実が失われ、私の希望と栄光も失われてしまった！　私はまるで荒廃した街のように座っている。これまでは母であったが、今やもはや母ではない。なぜなら、私の唯一の愛する子を失ってしまったからだ！

こうして、アスティオンの両親は絶えず悲しみに暮れて泣いていた。一方、エピクテトスとアスティオンというキリストの僕たちは、アルミリスという町の近くで、禁食の修行に励みながら生活を送っていた。彼らの聖なる、徳高い生活は秘密にはならなかった。聖なる長老エピクテトスによって多くの癒しがなされたため、人々は病人を連れて彼らの元へ集まり始めたのである。

ある日、ある高貴な女性が息子を連れて彼らの元を訪れた。その息子は、口が利けず、耳が聞こえず、体が不自由であったため、使用人たちに抱えられてきた。彼は生後15歳ほどであった。女性は息子を聖なる老人の足元に寝かせ、こう言った。

「あなたがどこから来られたのかは存じ上げませんが、もしお望みなら、私の息子を癒やしてくださることを信じています。どうやらあなたはナザレ人の弟子であるようですね。その方については、多くの奇跡や驚くべき話を耳にしています。もしあなたが本当にその方の弟子であるなら、私たちを助けてください。そして、その方を知るよう導いてください。そうすれば、私たちもその方のしもべとなることができますから。」

すると、聖人は彼女にこう言った。

「女よ、もしあなたが心から、天と地、そして目に見えるすべてのものを私たちのために創造された唯一の真の神がおられると信じるなら、あなたの願いは叶えられるでしょう。」

そう言うと、彼は少年を地面から持ち上げさせ、その声の出ない口に三度唾を吐きかけ、尋ねた。

「教えてくれ、子よ。どの神を信じるべきなのか？　人々が造った偶像か、それとも今、お前を癒やしてくださっている、十字架にかけられたイエス・キリストか？」

少年は力強い声で叫んだ。

「誠実な父よ、常に人々にこれほど偉大な恵みを示してくださるイエス・キリストを信じなければなりません！」

[4923] 現在のラムジン、ドナウ川の南支流沿い。

この奇跡を目撃したアルミリスの市民たちは神を賛美し、その日、男女合わせて千人以上が、私たちの救い主であるキリストを信じるようになった。そして、神の恵みは聖エピクテトを通じてだけでなく、聖アスティオンを通じても奇跡を成し遂げた。

ある時、彼が水を汲みにドナウ川へ出かけたところ、悪霊に取りつかれた男に出くわした。アスティオンがその男に十字の印を施すと、悪霊は即座にその人から逃げ出し、こう叫んだ。

「おお、アスティオンよ！　あなたの信仰と心の清らかさが、神の御心により、私たちに対して偉大な力を発揮したのだ！」

またある時、長老からどこかに遣わされたアスティオンは、旅の途中で、高い建物から地面に転落し、まるで死んだかのように地面に横たわっている男を見かけました。その傍らでは、両親が彼のために泣いていました。彼らに憐れみを抱いた聖アスティオンは、密かに次のように祈りました。

「主イエス・キリストよ！　かつてあなたは、使徒パウロを通して、三階の窓から転落したエウティコスを死の門から生へとよみがえらせ（使徒20:9–12）、　また、使徒ペトロを通して、八年間も麻痺していたエネアを立ち上がらせ（使徒行伝9:33–34）、さらに同じ聖ペトロを通して、生まれつき足の不自由な人の足とすねを強め、歩く力を与えてくださいました！　（使徒行伝3:2–8）今、この人を、あなたの不肖のしもべである私を通して、生き生きと健やかにしてください！

このように祈った後、アスティオンは横たわっている人のところへ近づき、使徒の言葉を告げました。

「*ナザレのイエス・キリストの名によって、立ち上がって歩め！*」（使徒行伝3:6）

そして、その男の右手を握り、彼を生き生きと健やかに立たせた。癒やされた男は、両親と共に、すぐに聖徒たちの住居へと向かい、叫びながらこう言った。

「神はただひとり――エピクテトとアスティオンの神です！　まことに、神はただひとり――キリスト教の神です！　私はここから離れません。さあ、今すぐ私と私の両親をキリスト教徒にしてください。」

主の司祭エピクテトは、彼らに説教し教えた後、断食してその聖なる賜物を受ける準備をするよう命じ、しばらくして聖なる洗礼によって彼らを救いに導いた。　一方、悪魔は、自分を見下しているのは長老だけでなく若者までもがおり、かつて自分の獲物であった人々の魂を奪われているのを見て、嫉妬に苛まれ、あらゆる手段を尽くして狡猾な策略で彼らに立ち向かったが、その試みは実を結ばなかった。しかし、彼はついにその若者に害を及ぼす機会を見出した。

ある日、アスティオンは長老の祝福を得ずに、水を汲むために川へと出かけた。敵は、長老の祝福によって守られていないアスティオンを見ると、直ちに、神の許しを得て、彼にいくつかの罪深い思いを抱かせ、若者の魂を惑わせた。　アスティオンは小部屋に戻ると、これらの思いを一人の霊的父に告白することを恥じ、三日間、それらに打ち勝つことができず、その思いに支配されていた。彼は断食し、涙ながらに祈り、労苦によって肉体を疲れ果てさせたが、不浄な思いはそれでもなお彼から離れず、まるで目に見えない射手がいわば矢のようにそれらで彼を傷つけているかのようであった。一方、長老は彼の動揺し、悲しげな様子に気づき、彼にこう言った。

「これはどういうことか、わが子よ。なぜ君がいつもとは違って動揺しているのか。私が君の中に見るその悲しみは、自らの救いを案じ、それゆえに顔に内なる嘆きを映し出す聖人たちの悲しみではないからだ。」　私には、これは死を招くような悲しみであるように思われる。それは、アベサロムの顧問アヒトフェル[4924]や、キリストの裏切り者ユダを滅ぼしたような悲しみだ。

[4924] アヒトフェル――当初はダビデの親しい友人であり顧問であったが、しかし、アベサロムの反乱の際、彼の側につき、ダビデを直ちに追撃して殺害するよう助言した。しかし、この助言の結果、アベサロムが滅びたため、アヒトフェルは軍を離れ、故郷の町に戻り、そこで首を吊って自殺した（列王記下17:1–20）。 – 主をユダヤ人たちに裏切ったユダ・イスカリオテも、同様に不名誉な最期を遂げた（マタイ27:3–5）。

すると、アスティオンは長老の前で次のように告白した。

「三日ほど前、あなたが尊い方々と天の神秘について語り合っておられた時、私は水を汲みに行かなければなりませんでした。あの方々の前であなたから祝福を受けるのは恥ずかしかったし、何より、お二人の会話を中断したくなかったのです。　そこで、あなたの知らぬ間に、あなたの祝福も得ずに水を汲みに出かけたのですが、その道中、邪悪な思いという暗い雲に包まれてしまいました。それらと闘い始めてからすでに三日が経ちますが、どうしても自分の中から追い払うことができません――だからこそ、私は今、困惑しているのです。

聖なる長老は彼を厳しい眼差しで見つめ、こう言いました。

「なぜ、私の命じもなしに、ケリアの扉から外へ出たのか？　なぜ、キリストの司祭の祝福も受けずに歩き回ったのか？　若き者たちにとって、指導者の祝福こそが、悪魔に対する打ち破ることのできない壁であり、強固な鎧であり、無敵の武器であることを、お前は知らないのか？」

そう言うと、老人はアスティオンに、祈りを捧げるために十字の形に地面に伏せるよう命じ、自身も同様にし、二人は共に涙を流しながら神に祈りを捧げた。　十分に祈り終えると、二人は地面から立ち上がった。その時、アスティオンは、燃えるろうそくを持ったある黒人の若者が、次のように言いながら自分から逃げ去るのを見た。

「アスティオンよ、お前の告白は今、わが偉大なる力を恥じ入らせ、お前の祈りは私を無力にした。」

こうして、尊い父たちはその地で暮らし、多くの人々を偶像崇拝の惑わしから救い出し、キリスト・神へと導いた。

その頃、アルミリスという町に、ラトロニアンという名のその国の統治者がやって来た。彼が様々な国政や民衆の事柄を裁いている最中、偶像崇拝者たちは、この二人の聖なる人々がまるで魔術師であるかのように、その魔術で多くの人々を惑わせ、神々への生贄を捧げることを妨げていると告発した。　統治者は直ちに彼らを捕らえ、牢獄に投じるよう命じた。束縛された状態にあっても、聖人たちは絶えず祈りを捧げ、ダビデの詩篇を歌い続けた。

ある日、長老は弟子にこう言った。

「わが愛する子よ！もし我々が尋問のために連れ出され、名や家系、故郷について問われたとしても、我々は『我らはキリスト者であり、それが我らの名であり、家系であり、故郷であり、我らは真の神のしもべである』ということ以外、何も答えてはならない。」

翌朝、総督は町の真ん中に裁判を行う場所を用意させ、布告役を通じて人々をそこに集めるよう命じた。彼自身は昼の第三時にその場へやって来て、玉座に着くと、聖者たちを牢獄から呼び出させた。　彼らが彼の前に現れると、彼は彼らを一目見て恐怖に襲われた。なぜなら、彼らの顔を照らす神の恵みの不思議な光を見たからであり、また、二人の外見そのものが畏敬の念を抱かせるものだったからである。聖エピクテトはその時、六十歳であった。彼は背が高く、白髪交じりの長い髭を生やしていた。　同様に、聖アスティオンも背が高く、顔立ちが美しく、とりわけ貞潔の美しさに輝いていた。彼は生後三十五歳であった。彼らを見つめながら、統治者は何を言えばよいか分からず、ほぼ一時間もの間黙り込んでいたが、やがてようやく彼らに尋ねた。

「お二人の名前、ご出身、そしてどの国からここへ来られたのか、教えてください。」

聖人たちは答えた。

「私たちはキリスト教徒です！」

しかし、統治者は言った。

「お前たちが呪われたキリスト教の信仰に属していることは知っている。さあ、お前たちの家柄と故郷について話してみよ。」

聖人たちは再びこう答えた。

「我らはキリスト者だ！唯一の神、我らの主イエス・キリストを知り、ただ御方のみを礼拝する。偶像の忌まわしいものを憎み、それらにひれ伏す者たちからは遠ざかる。詩篇の作者と共にこう言うのだ。『*それらを行う者たち、そしてそれらに望みを置く者たちは、彼らと同じようになるように！*』」（詩編113:16）。

これを聞いた総督は激しく怒り、彼らを裸にし、容赦なく長い間打ち据えるよう命じた。聖人たちは、殴打に耐えながら、こう言った。

「主イエス・キリスト、私たちの師よ！ どうか、私たちの上に御心が行われますように！」

総督は彼らの揺るぎない姿勢を見て、さらに激怒し、こう言った。

「お前たちが絶えず呼び求めているキリストはどこにいるのか？　さあ、今こそ彼を呼んで、お前たちを助けさせよ。私の手からお前たちを引き離させてみろ！」

しかし、聖徒たちは繰り返した。

「我らはキリスト者である！ 我らの上に、我らの神の御心が行われますように！」

すると、総督はさらに激しい怒りに燃え上がり、彼らを拷問していた台の上に吊るすよう命じ、鉄の爪で彼らの体を削り取り、同時に火で焼くよう命じた。しかし、彼らはただこう叫んだ。

「我らはキリスト者だ！ 我らの神の御心がなされますように！」

聖人たちはこのようにして午後7時になるまで拷問を受け続け、やがて総督は彼らを拷問台から降ろし、再び牢獄へ連れ戻すよう命じた。　一方、処刑人の下僕の一人、ヴィギランティウスという者は、聖人たちが拷問の最中に絶えず繰り返していたその言葉を耳にし、その言葉には拷問中の肉体の痛みを消し去る特別な魔力が秘められていると考え、その言葉を正確に記憶し、昼夜を問わずそれについて深く思索にふけった。 三日後、彼は皆の前で大声で叫び始めた。

「私はキリスト教徒だ。我らの神の御心がなされますように！」

その後、彼は牢獄にいる聖人たちの元へ行き、彼らから聖なる信仰を学び、数日後には家族全員と共に聖なる洗礼を受ける栄誉に浴した。一方、聖人たちは最初の拷問の後、牢獄で五日間を過ごし、その後再び尋問に呼び出された。総督は今回も、いかなる説得をしても彼らを自分の不敬虔な信仰へと改宗させることはできず、そのため再び彼らを拷問し始めた。　まず、彼は以前の傷跡を酢と塩でこすりつけるよう命じ、その後、殉教者たちを沸騰した樹脂で満たされた大きな大釜に投げ込んだ。しかし、聖人たちはその沸騰する樹脂の大釜の中に、あたかも洗礼槽の中にいるかのように無傷のままで留まり、以前と同じ言葉を繰り返した。

「我らはキリスト者なり！ 我らの神の御心が我らの上に成らんことを！」

統治者は、彼らが沸騰する大釜の中で生き続け、無傷のままであるのを見て驚き、こう言った。

「おお、キリスト教の魔術の力はなんと偉大なことか！」

その後、彼は彼らを釜から引き上げ、再び牢獄に投獄するよう命じた。さらに、彼らが飢えと渇きで死ぬように、誰にも面会を許さず、パンや水の供給も一切禁じた。聖人たちは三十日間、神の御言葉だけを糧とし、聖霊の恵みによって力を得て、牢獄に留まった。

聖なる殉教者たちが、公開処刑の場で、民衆全員の面前で尋問され、裁かれていた時、神の御計画により、東方の国々から一人の男が偶然その町を訪れた。彼はアスティオンの両親をよく知っていたため、アスティオンを認識した。そして、故郷に戻ると、アスティオンの両親のもとを訪れ、こう言った。

「私は、スキタイの町アルミリスで、あなた方の息子を、エピクテトという一人の老人と共に目撃しました。その時、二人はキリストのために拷問を受けていました。」

両親はこれを聞いて、涙ながらにその男に真実を語るよう懇願し、男はすでに誓いを立ててその話を裏付けた。すると、アスティオンの父は言った。

「もし私が愛する息子に会えることが許されるなら、彼が私に命じ、教えてくれることはすべて、直ちに実行いたします！」

また、母親もこう言った。

「もしこの世で愛しい我が子に会えるなら、すべてを捨てて彼に従う。もし彼が私にキリスト教徒になるよう命じるなら、断るつもりはない。そして彼と共に、キリストのために受けるいかなる苦しみも、死さえも恐れない！」

その後、彼らは家と財産を忠実な友人たちに託し、自らも数人の男奴隷と女奴隷を連れてスキフィアへと船出した。しかし、彼らがアルミリスという町に到着する前に、聖なる殉教者エピクテトスとアスティオンは、その苦難に満ちた功業をこのように終えたのである。

三十日間、彼らは牢獄で飢えと渇きに苛まれていたが、その期間を経て、総督は再び彼らを裁判に呼び出し、こう言った。

「私は何度も、あなた方の名前や家系、出身地について尋ねたが、あなた方は真実を語らなかった。　お前たちは、まさに化身の悪魔に他ならないと思う――何しろ、悪魔たちにも名前も家系もないのだから。さあ、答えよ、化身の悪魔どもよ！――そう呼んでやる――我らの神々に生贄を捧げるのか、それとも捧げないのか？もし捧げないというなら、今すぐお前たちの首を刎ねてやる。

聖人たちは答えた。

「我らはキリスト教徒であり、悪霊などではない。キリストの御名によって、人々の体から悪霊を追い出しているのだ。ああ、もしあなたも、自分の中に宿る悪霊から解放されたいと願うなら！我らは、我らの神であるキリストの力によって、あなたからその悪霊を追い出してやるだろう！」

すると、総督は激怒し、聖なる殉教者たちの口を石で打ちつけるよう命じ、その後、棍棒による拷問を加えた上で、剣による斬首を宣告した。

聖人たちが処刑場へと街の外へ連れ出されると、彼らは処刑執行者たちに祈りの時間を求めた。そして東を向き、天に向かって両手を挙げ、目を天に上げ、長い間神に祈りを捧げた。その後、聖エピクテトは、まずアスティオンを処刑するよう求めたが、アスティオンは彼にこう言った。

「父よ、まずあなたがこの栄誉――殉教の冠を戴くべきです。あなたは主の長老であり、私の父であり師ですから。私はその後、あなたに従って行きます！」

聖エピクテトはこう答えた。

「わが子よ、神の恵みにより、私は十七年間、あなたを清く、汚れのないまま守ってきた。今になって、これほど長い年月をかけて築き上げた努力を台無しにし、あなたを私なしで一人残すなど、どうして私が決心できようか？敵の策略は極めて狡猾で、一見して見分けがつかないことを、あなたは知らないのか？　私は、あなたが私の死を目にして恐怖に駆られ、敵の嘲笑の的になってしまうことを恐れているのだ。いや、わが子よ！　たとえ私が、イサクを犠牲に捧げたアブラハムのような者となろうとも構わない。あなたは私の先を行き、真っ先に殉教の冠を受け取れ。　私は、聖ミカエルをはじめとする天使たち、アベルと預言者たち、ペトロと使徒たち、ダニエルと殉教者たちが、君を迎えに出て、君を受け入れ、荘厳な賛美歌を歌いながら、私たちの救い主キリストの御座へと導くのを待っていると信じている。

聖アスティオンは言った：

「聖なる父よ、主の御心とあなたの御心が成りますように！」

その後、彼は十字の印を切って身を守り、こう言いました。

「主よ、あなたは私の守り手です！私の霊をあなたの御手に委ねます！」

こうした苦難の末、彼は剣の下に頭を垂れて息を引き取った[4925]。一方、聖エピクテトスは、弟子の遺体に寄り添いながら、処刑人たちに、この姿勢のまま自分を殺してくれるよう懇願した。そ

[4925] 聖アスティオン（およびエピクテトス）の死は、およそ290年に起こった。

して、剣の一撃を受けて、キリストのために殉教した。　しかし、そこにいた異教徒やキリスト教徒たちは、彼らの尊い遺体がまるで太陽の光のように輝き出し、その場に並外れた芳香が漂っているのを目撃した。

夜遅く、前述のヴィギランティウスは、家来たちや他のキリスト教徒たちと共に、密かに殉教者たちの遺体を運び出し、清らかな死装束で包み、香油を塗って、選んだ場所に尊厳をもって埋葬した。

その同じ夜、ラトロニアヌス総督の体に邪悪な悪魔が取り憑いた。総督は早朝に起き上がり、いつものように国政を審議する議場に出向くと、狂人のように様々な支離滅裂な言葉を口にし始めた。そして、剣を掴むと、そこにいた者たちに襲いかかり、彼らを切りつけ、傷を負わせ始めた。　彼らもまた、彼がそのような狂乱状態にあるのを見て、彼を取り押さえ、その手から剣を奪い取り、彼を殴りつけた。その後、彼の手足を縛り、小さな部屋に閉じ込めたが、そこで彼は二日後に、悪魔に窒息させられて恐ろしい死を遂げた。

聖なる殉教者たちが亡くなった後、アスティオンの両親は水路を通ってアルミリスという町に近づいた。その時、聖アスティオンがヴィギリアンティウスの前に現れ、こう言った。

「父と母が今、私を探しにここへやって来る。兄弟よ、私に愛を示してくれ。埠頭へ出て、彼らをあなたの家に迎え入れ、安心させ、慰めてほしい。彼らは私のことで深い悲しみに苛まれているのだ。さらに、彼らに救いの信仰を教え、真の神の偉大さを明らかにしてやってほしい。」

ヴィギランティウスはすぐに埠頭へ向かい、そこで岸に接岸した船を見かけ、そこからアスティオンの両親が降りてきた。彼らはそこで出会った人々に、アスティオンという名の若者を誰か見かけなかったかと尋ねていた。ヴィギランティウスは彼らのところへ近づき、こう言った。

「私は彼を見かけましたし、よく知っています。まずは私の家へお越しください。そこで一休みしていただき、彼についてお話ししましょう。」

アスティオンの両親は大きな喜びをもって、彼らを招いてくれたヴィギランツィオのもとへ向かった。ヴィギランツィオはあらゆる手段を尽くして、両親を安心させようとした。　そして、彼らが息子について話してほしいと懇願すると、ヴィギランティウスは、アスティオンが最近この街にいて、ほんの数日前、ある高名な老人の案内で、非常に遠い国へと旅立ったと告げた。彼は、最も栄光に満ちた王から、その輝かしい統治に参加するよう名誉ある招きを受けたのだという。　こうして、ヴィギランティウスは徐々に、彼らに、別の永遠の命、楽園の住まい、天の御国、そして不死の王である主キリスト、さらにキリストと共に統治する天使たちや聖人たちの教えを明かしていった。彼らの息子アスティオンも今や、その聖人たちの仲間入りを果たしているのだ。　一方、アスティオンの両親は、これまで一度も耳にしたことのない言葉を聞き、驚き、心を打たれ、胸の中に何らかの霊的な喜びを感じ、愛する息子がどこへ行ったのかを知りたいという想いを一層強く抱いた。　そこでヴィギランティウスは、まず彼らを聖なる殉教者たちの聖堂へと案内し、彼らが残した聖なる十字架と福音書を見せた。その後、福音の教えについて語り始め、彼らをキリストへの信仰へと導いた。　その後、彼は聖殉教者エピクテトスとアスティオンの受難について語り、彼らがキリストのためにどのように命を捧げたかを説明し、聖人たちの遺体が埋葬されている場所へ彼らを案内した。彼らがそこでかなりの時間涙を流した後、　彼は彼らに、夕方から祈りの姿勢を取り、一晩中彼と共にキリスト神に祈るよう命じた。　すでに真夜中を過ぎ、夜明けの光が差し始めようとしたとき、突然、稲妻のように明るい光が彼らの眼前で輝き、空気に不思議な芳香が漂った――それは、言い表せないほどの美しさをまとった聖なる殉教者たちが彼らの前に現れたのである。聖アスティオンは母を抱きしめ、愛情を込めて彼女の頬に口づけをし、こう言った。

「キリストの弟子であり、私の母であるマルケリーナよ、ここに来てくれてよかった！（それが彼女の名前だった）。

また、聖エピクテトも、アスティオンの父の頭を抱きしめ、彼に口づけをしながらこう言った。

「主を喜びなさい、愛する兄弟アレクサンドルよ（それが彼の名前であった）――あなたは信者の列に加えられるにふさわしい者とされ、永遠の至福に値する者となったのだ。」

その後、二人はヴィギリアンツにこう言った。

「愛する兄弟よ、あなたも喜びなさい。あなたの上に聖書の言葉が成就したからです。*『罪人をその誤った道から立ち返らせた者は、その魂を死から救い、多くの罪を覆うことになる』*（ヤコブ5:20）。

彼らは他にも多くの慰めの言葉を彼らに語りかけ、そのすべてが霊的な甘美さに満ちており、しばらくして彼らは見えなくなった。　アスティオンの両親は、この幻視と聖人たちとの甘美な対話に大きな喜びを感じ、その思いを祈りに注ぎ出し、長い間心を痛めながら探し求めていた息子を、天の栄光の中に拝見する恵みにあずかったことを神に感謝した。

当時、スキタイの国にはエヴァンゲルというキリスト教の司教がいた。迫害の間は身を隠していたが、ラトロニアヌス統治者の没落を知ると、もはや恐れずにアルミリスという町を訪れ、キリスト教徒たちを慰め、信仰を確固たるものにした。　ヴィギランティウスは、この聖人のもとへアスティオンの両親を連れて行き、彼らや聖なる殉教者たちについて詳しく語った。司教は聖なる殉教者たちに賛美を捧げた後、キリストに帰依したアスティオンの両親を喜びをもって受け入れ、父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けた。　その後、アレクサンドルとマルケリーナは、殉教者たちの墓のそばでかなり長い間、断食と祈りに専念し、その後、家に戻って広大な財産をすべて売り払い、生活費としてわずかな分を残して、残りの金を貧しい人々に施した。彼らはこのように、この世を去るその日まで、神に喜ばれる生活を送り続けた。

こうして、聖エピクテト司祭と修道士アスティオンという聖なる殉教者たちは、天において殉教の冠を授かった。　この地を去ったアレクサンドロスとマルケリーナが彼らに加わったとき、彼らもまた、私たちの主イエス・キリストの恵みにより、聖人たちの至福に与ることを許された。主イエス・キリストには、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがある。アーメン。

聖殉教者キリアキアの殉教

記念日：7月7日

ディオクレティアヌス帝の治世[4926]、ドロフェイという名のキリスト教徒とその妻エウセビアは、子供に恵まれなかったため、神に子供を授けてくださるよう祈り、もし子供が生まれたらその子を神に捧げることを誓った。　彼らの祈りに応えて、ある日曜日に女児が生まれ、彼らはその子にキリアキアという名を与え[4927]、聖なる洗礼を授けた。娘をキリスト教の教えと善き訓戒のもとで育て、自らの決意に従って神への奉仕に捧げるため、彼女を清らかなままに守り続けた。　その頃、キリスト教徒に対する迫害が勃発した[4928]。敬虔な両親と娘はディオクレティアヌス帝に引き渡され、帝

[4926] ディオクレティアヌスは284年から305年までローマ帝国を統治した。

[4927] キリアキアとは、ギリシャ語で「主の」、すなわち「主に属する」という意味である。

[4928] この迫害は303年に始まった。これを煽ったのは、ディオクレティアヌスの共同統治者であったカエサル・ガレリウスであり、彼はディオクレティアヌスを説得して、キリスト教徒に対する一般法を公布させた。この法律は、キリスト教の礼拝堂を破壊し、聖書を焼き払い、キリスト教徒からすべての市民権と公職を剥奪することを命じていた。　ディオクレティアヌス帝時代の迫害は、第一に拷問の残虐さ、第二に殉教者の数の多さによって特徴づけられ、一日に10人から1000人以上もの人々が処刑された。

は彼らに対して裁判を行った後、まず長期間にわたり鞭打ちの刑を命じ、その後、ドロフェイとエウセビイ をミティレネ地方[4929]の統治者ユストのもとへ、 また、キリアキアをニコミディア[4930]の皇帝マクシミアヌス[4931] の元へ送った。マクシミアヌスは聖女を取り調べ、彼女が信仰において堅固で揺るぎないことを見ると、彼女を地面に寝かせ、長い間容赦なく鞭打つよう命じた。　この拷問の間、キリアキアは祈りに没頭していたが、それを見たマクシミアヌスは激しい怒りに駆られた。しかし、聖なる殉教者は彼にこう言った。

「マクシミアンよ、うぬぼれてはならない！　神が私を助けておられるのだから、あなたが私の意志を屈服させることは決してできない。」

その後、マクシミアンは聖キリアキアをビフィニアの総督イラリオンのもとへ送った。イラリオンは彼女を取り調べた後、偶像の神殿へ連れて行くよう命じたが、聖女は祈りを捧げると、その祈りによって激しい地震が起こり、神殿にあったすべての偶像が地面に落ち、塵と化して散り散りになった。　神殿に旋風が吹き込み、その塵を空中に舞い上げ、続いて火の稲妻が閃き、総督イラリオン氏の顔を焦がした。その後、彼は座から転げ落ち、その場で息を引き取った。すると、その地域のもう一人の公爵、すなわち最初の総督の共同統治者がやって来て、一連の出来事を知ると、キリアキアを火刑に処す判決を下した。　彼の命令により、大きな鉄板が熱く焼かれ、聖女はその上に投げ込まれた。そこで彼女は、祈りを込めて両手を挙げ、長く祈りを捧げた。その間、澄み渡った夏の空から雲が降りてきて、炎の熱をすべて消し去ったため、キリアキアは全く無傷のままだった。　その後、総督は聖キリアキアを法廷へ連行し、彼女に様々な獣を放つよう命じたが、ここでも彼女は無傷のままであった。獣たちは彼女に襲いかかるどころか、彼女の足元で転げ回っていたからである。これを見た多くの異教徒たちは、私たちの主イエス・キリストを信じるようになり、聖女は牢獄に投じられた。　それからしばらくして、総督は裁判の場へやって来て、裁判官の席に着くと、彼女に死刑を宣告した。聖キリアキアは彼に祈る許可を求め、長く祈りを捧げた後、彼女に付き添っていたキリスト教徒たちに訓示を与え、地面にひれ伏して安らかに息を引き取った。　兵士たちが判決を執行するためにやって来たとき、彼女はすでに亡くなっていたのを見つけ、これに驚いた。その時、天から声が聞こえ、彼らにこう告げた。

「兄弟たちよ！行って、神の偉大な御業のすべてを語り広めなさい。」

その後、兵士たちは神を賛美しながら帰っていった。

7月21日

7月8日（旧暦）

同日は、ウスティヤンスクの義人プロコピオスの記念日である。

同日、1303年に、キリストのために聖なる狂人となった義人プロコピオス・ウスティユジスキーが帰天した。

4929　ここで「ミティレネ地方」とは、エーゲ海に浮かび、小アジアのミシア地方西岸に近いレスボス島を指し、その主要都市にちなんで後にミティレネと名付けられた。

4930　ニコメディアは、東ローマ帝国の首都であり、ディオクレティアヌス帝の居城であった。小アジア北東部のプロポンティス（大理石の海）の岸辺、ビフィニア地方に位置する壮麗な都市である。

4931　聖殉教者キリアキアの没年については、ある説では303年とされるが、フィラレート大主教（『聖人伝』、7月号60ページ）の見解によれば、彼女は289年に亡くなったとされる。 しかし、聖キリアキアの裁判官がマクシミアヌス・ガレリウスであり、彼女の殉教がニコメディアで起こったことを考慮すると、むしろ彼女は303年、ディオクレティアヌスによって引き起こされた迫害のまさに初期に殉教したと考えられる。

聖大殉教者プロコピオスの殉教

記念日：7月8日

聖都エルサレムは、栄光に満ちた大殉教者プロコピオスを育んだ。彼は両親からプロコピオスではなくネアニオスという名を与えられていたが、プロコピオスという名は、後述するように、洗礼の際に主キリストご自身から授かったものである。また、当時のエルサレムは、不敬虔な異教徒たちによって「」と呼ばれ、エルサレムではなくエリアと呼ばれていた。ティトゥス[4932]（ウェスパシアヌス[4933]の息子）によるエルサレムの破壊からかなりの年月が経過した後、ローマ皇帝ハドリアヌス[4934] ——彼は出生時にエリウスという名を授かっていた——は、破壊されたエルサレムの跡地に再び都市を築き上げたいと願い、その都市を自身の名にちなんで「エリア」と命名し、このエリアをエルサレムと呼ぶことを禁じた。　彼はキリスト教に対して極めて敵対的であり、キリストの聖なる御名をこの地上から根絶やしにするだけでなく、キリストが受難されたその場所さえも完全に忘れ去られることを望んでいた。それゆえ、彼はエルサレムをエリアと名付けたのである。

その街には、クリストフォロスという名の、元老院議員の家系に属するある立派な男が住んでいた。彼自身はキリスト教徒だったが、妻のテオドシアは異教徒であった。二人の間にネアニスが生まれ、その誕生後まもなく、クリストフォロスは主のもとへ召された。

未亡人となったテオドシアは、少年を異教の信仰のもとで育て、自らも熱心な悪魔の奉仕者であったため、彼に偶像を崇拝するよう教えた。少年は頭の回転が早く、母によってギリシャ人の教師たちに預けられると、すぐにすべての世俗の学問を修めた。

彼が青年期に達し、すでに成人へと移行しつつあった頃、母は彼を皇帝のもとへ送り、軍務に就かせようと考えた。ちょうどその頃、不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌス[4935] が、オロンテス川沿いのシリアのアンティオキアに到着した。　テオドシアはこれを知ると、息子を連れてアンティオキアへ赴き、彼を王の配下に差し出した。皇帝は、その若者が容姿端麗で背が高く、さらに彼が受けた教育についても知ると、彼を大いに気に入り、他の同類の若者たちと共に、自分の側近として王宮に留まるよう命じた。　その後まもなく、皇帝は彼を軍司令官に任命し、軍を率いてエジプトの都市アレクサンドリア[4936] へ派遣した。その目的は、そこでキリスト教徒を迫害し、拷問し、打ちのめし、彼らの財産を王室の財源として没収することにあった。ネアニオスは皇帝にこう言った。

「陛下、私はあの人々について聞いております。彼らはキリストという名の、ある『神の子』を崇拝しており、精神が非常に堅固で、反抗的かつ傲慢であり、最後まで自らの信仰を貫く覚悟があるとのことです。彼らは、自らのキリストを見捨てるよりはむしろ死を選ぶでしょうし、いかなる理由があっても、私たちの神々に生贄を捧げることは決してないでしょう。　したがって、彼らを我々の信仰に改宗させることはできないと存じます。

すると、皇帝は極度に激怒し、救い主キリストを次のように冒涜し始めました。

「彼らの神は、彼ら自身が主張するように、妻を持たなかった。では、どうしてその神が息子を産むことができたというのか？　そして、キリスト教徒が信じるその方は、女から生まれ、ユダヤ人によって犯罪者として死刑を宣告され、鞭打たれ、茨の冠を被せられ、侮辱され、十字架に釘付け

[4932] ティトゥス皇帝は79年から81年まで在位した。

[4933] ウェスパシアヌスは70年から79年までローマ帝国を統治した。

[4934] ハドリアヌスは117年から138年まで在位した。

[4935] ディオクレティアヌスは284年から305年まで統治した。

[4936] アレクサンドリアは、古代に名高い都市であり、アレクサンドロス大王（紀元前336年～323年）によってエジプトの地中海沿岸に建設された。 キリスト教以前の時代には、科学と貿易の中心地として名声を博し、4世紀初頭からはキリスト教生活の最重要拠点の一つとなり、総主教の居城となった。

にされ、酢と胆汁を飲まされ、恐ろしい苦しみの中で死んだ。　もし彼が神であったなら、なぜユダヤ人の手から自らを救わなかったのか？　そして、苦難の中で自らを助けられなかったのなら、他者を助けることなどできるだろうか？

滅びの子は、このような、さらにはそれ以上にひどい冒涜の言葉を吐き散らしたのだ！「*なぜなら、十字架の言葉*は――神聖なるパウロが書いているように――*滅びゆく者たちにとっては愚かさに過ぎないが、救われる私たちにとっては神の力である*」（Iコリント1:18）。　一方、ネアニウスは皇帝の言葉に納得し、二隊の兵士を率いて、指示された道へと旅立った。しかし、当時は日差しが極めて強く、兵士たちも馬たちも暑さで疲れ果ててしまったため、夜間に移動し、昼間は休息をとらざるを得なかった。 彼らがシリアの都市アパメア[4937] を通り過ぎたとき、夜中の三時に地震が起こり、稲妻が走り、激しい雷鳴が轟き、兵士たちは恐怖のあまりまるで死人のようになった。すると、軍司令官は天からこう告げる声を聞いた。

「ネアニウスよ！　お前もわたしに敵対するつもりか？」

ネアニウスはこう答えた。

「あなたはどなたですか、主よ？ 私はあなたを認識できません！」

彼がそう言い終えるや否や、空に水晶のように輝く十字架が現れ、その十字架から声が聞こえてきた。

「私は、十字架にかけられたイエス、神の子だ！」

ネアニウスは震えながら言った。

「皇帝は、キリスト教徒が崇めるその神には妻がいなかったと私に語りました。それなのに、どうしてあなたは神の子なのですか？ もしあなたが本当に神の子であるなら、どうしてユダヤ人たちはあなたを侮辱し、十字架にかけ、殺すようなことをしたのですか？」

すると、十字架の上から声が彼に答えた。

「私は人々のために、自ら進んでこれを耐え忍んだ。それは、罪人を悪魔の支配から救い出し、迷える者たちを導き、死者を生き返らせるためである。もし私が神の子でなかったなら、死んだ後、どうして生き続け、あなたと語り合うことができようか？」

その後、十字架は天へと昇り、直ちに天から声が聞こえてきた。

「あなたが見たこのしるしによって、あなたの敵に打ち勝ちなさい。そうすれば、わたしの平和があなたと共にありますように！」

こうしてネアニオスは、かつてのサウロ[4938] が旅の途中で主の御出現を受けたように、迫害者から主イエス・キリストの選ばれた器へと変えられ、その驚くべき幻と、主ご自身との甘美な対話によって、彼は心の中に言い表せない喜びと霊的な歓びを感じた。

その後、ネアニオスは自らの軍勢を率いてスキフォポリス[4939] に到着し、金細工師を呼び寄せ、夜に見たものと同じような十字架を作るよう命じた。しかし、その職人は次のように言って断った。

「私はそれを作ることはできません。それは『キリスト教徒』と呼ばれるガリラヤ人たちのためのしるしだからです。もし皇帝がこのことを知れば、私は恐ろしい死を遂げることになります。」

ネアニウスは、皇帝にも他の誰にもこのことを口外しないと誓わせ、密かに十字架を作るよう要求した。そこで金細工師は、総督からその目的のために十分な量の金と銀を受け取り、総督の指示通りに形と大きさの十字架を密かに作り上げた。　十字架が完成するやいなや、突然、目に見えない

[4937] アパメアはシリア南西部、オロンテス川のほとりに位置していた。

[4938] サウロ（後に偉大な使徒パウロとなる）の回心の物語は、『使徒行伝』9:1–20に記されている。– 聖使徒パウロの記念日は6月29日である

[4939] スキフォポリスという都市は小アジアに位置していました。

手によって描かれた三人の人物の像がそこに現れ、ヘブライ語の銘文が添えられていた。上部には「エマヌエル」[4940] 、両側面には「ミカエル」と「ガブリエル」[4941] と記されていた。これを見た職人は、自分以外にその部屋には誰もいなかったため、誰がこれを描いたのかと首をかしげた。　彼は特別な道具を使ってその絵を消そうとしたが、手が動かない、まるで乾いて固まったかのようだったため、それを実行できなかった。一方、地方長官は十字架を見て、職人に対し、これらは誰の顔なのか、なぜ描かれたのかと尋ねた。職人は誓いを立ててこう断言した。

「私が仕事を終えたとき、これらの顔は自然に現れたもので、誰のものかは分かりません。消そうとしたのですが、できませんでした――私の手は麻痺してしまっていたのです。」

そこでネアニウスは、その十字架に何らかの神聖な力が宿っていることを悟った。彼は十字架にひれ伏し、口づけをし、紫の布で包んで手元に置き、畏敬の念を持って大切に保管した。　もはや彼はキリスト教徒に対してではなく、野蛮人に対して武器を執り、キリストの力によって彼らを打ち破り、その国々を征服した。目に見えない敵である悪魔そのものに対しても、彼は戦いに臨み、キリストのために受け入れた自らの勇敢な苦難によって、悪魔を打ち負かした。

彼の苦難は次のように始まった。彼がエルサレム――当時はエリアと呼ばれていた――という自分の街にいたとき、市民たちは、アガリア人[4942] が引き起こした被害に対して復讐するよう彼に求めた。　これらのアガリア人はその国を襲撃し、町の周囲をうろつきながら、たまたま町の外にいた人々を拉致し、とりわけ女性たちを虐げ、自分たちの妻として連れ去った。彼らは周辺の村々でも同じことをしていた。　聖なる十字架の力を武器としたキリストの勇敢な戦士は、自らの軍勢を率いて果敢に前進し、アガリア人を追撃しながら、心の中でこう祈った。

「わが希望なるキリストよ、神よ、私を助けてください！」

すると、天から彼に声が響いた。

「希望を持ちなさい、ネアニウスよ。わたし、あなたの主なる神が、あなたと共にあるからだ！」

この声を聞いた軍司令官はさらに勇気を奮い起こし、敵に痛烈な打撃を与え、捕虜をすべて奪い返した。その戦いで六千人のアガリア人が倒れたが、ネアニウスの軍には負傷者も戦死者も一人も出なかった。　ネアニオスは敵に対する勝利の知らせを伝える使者を母のもとへ先遣し、その知らせに母は大いに喜んだ。彼が戦利品を携えて凱旋して街に戻ると、母は喜びをもって彼を出迎え、彼が家に入ると、こう言った。

「ああ、私の愛しい子よ！ あなたが戦場へ出かけた時、私は香炉と乳香を手に取り、神々の御前に進み出て、神々があなたを助けてくださるよう祈りました。そして今、あなたは神々の助けにより、勝利を収めたのです！ ですから、神々の御前に進み出て、感謝を捧げなさい。そうすれば、これからも神々があなたを助けてくださるでしょう。」

ネアニウスは彼女にこう答えた。

「私のために祈ってくれたのは、母上、よくしてくださったことですが、私を助けてくださったのは私の神です。」

すると母は言った：

「子よ、ただ一人の神について語るな。そうしなければ、他の神々が怒り、あなたから背を向けてしまうだろう。」

ネアニウスは彼女にこう言った。

[4940] エマヌエルはヘブライ語で「神は我らと共におられる」という意味である。この名は、聖預言者イザヤによって主イエス・キリストに与えられた（イザヤ書7:14）。

[4941] ミカエルとガブリエルは、大天使です。

[4942] アガリア人――ムスリム、アラブ人。アブラハムの側室であり、イシュマエルの母であるアガリの名に由来し、そこからアラブ人の部族が生まれた。

「母よ、偶像による多神教に惑わされてはなりません。彼ら自身が息も絶え絶えであるのに、どうして私に助けを与えられるというのですか？もし彼らが私を助けてくれたのなら、彼らに尋ねましょう――そのことを語らせて、そうすれば私たちは彼らの力を確信できるでしょう。」

そう言うと、彼は母の寝室に入り、そこには金や銀の偶像が置かれていた。彼はそれらに向かってこう言った。

「偽りの神々よ、言ってみよ。戦いで私を助けたのは誰か？」

しかし、偶像たちは沈黙していた。声も出せない者たちが、どうして答えられようか。そこでネアニオスは母に言った。

「ほら、母上、あなたの神々がどんなものかお分かりでしょう。一言も発することさえできないのに、どうして誰かを助けることができるというのですか？」

すると、母は言った。

「神々があなたに答えないのは、あなたが嘲笑を込めて尋ねているからだ。」

しかし、ネアニオスは言った。

「それなら、あなた自身が彼らに尋ねてみなさい。彼らは、熱心な奉仕者であるあなたには答えるべきでしょう。」

母は、深い畏敬の念を抱いて神々の前に進み出て、ひざまずき、こう言った。

「全能の神々よ！偉大なるゼウスよ[4943]、そして女王ヘラよ[4944]、海の支配者ポセイドンよ、太陽のようなアポロンよ[4945]、そして都市の守護者パラスよ[4946]、そしてその他の神々よ！お願いです、戦いの最中に、あなた方のしもべである私の息子を助けたのは、あなた方だったのでしょうか？」

しかし、彼らからは何の答えも返ってこなかった。

そこで、至福のネアニオスは、手に十字架を握りしめ、神聖な熱意に満たされると、上着を脱ぎ捨て、母を偶像から引き離し、それらを地面に叩きつけ、足で踏みつけながら打ち砕き始め、そして粉々に砕いた後、その金や銀を貧しい人々に配った。　一方、母親はこれを見て激しく怒り、息子への自然な愛情さえ忘れ、急いでアンティオキアへ赴き、ディオクレティアヌス皇帝のもとへ駆けつけ、涙ながらに息子を訴えた。息子は神々を打ち砕き、彼女を神々から引き離すことで、彼女に相応しい敬意を示さなかったのだと。　皇帝は彼女をなだめ、優しさか脅しによって、息子を以前の神々への信仰へと立ち返らせることができるだろうという希望を彼女に抱かせた。

「もし――」と皇帝は言った。「彼が改心しなければ、その罪により惨めな死を遂げるだろう。そしてお前は、私の側近の中から、好きな者を息子として選ぶことができる。」

そして直ちに、皇帝はパレスチナの総督、　イタリア出身の残忍な人物であるユストに、近隣の都市の貴族たちの面前で、キリスト教に改宗したテオドシウスの息子ネアニウス総督に対し、時には友好的に、時には威嚇的に説得し、再び神々を崇めるよう促すよう命じた。　もし彼が従わないならば、容赦なく拷問にかけるよう命じた。この書簡には、キリストに対する冒涜的な言葉が含まれていた。

総督ユストスは王の勅令を受け取ると、パレスチナの各都市から選ばれた者たちを集め、自らエリヤへ赴き、総督のもとを訪れた。挨拶を交わした後、彼は王の手紙を手渡した。　一方、総督は

[4943] ゼウス――古代ギリシャ宗教の最高神であり、他の神々や人間の始祖とみなされていた。

[4944] ヘラ――クロノスとレーアの長女であり、古代ギリシャ神話の主要な登場人物の一人。ゼウスの妻であり、神々の女王とみなされていた。

[4945] アポロン（ギリシャ語で「破壊者」の意）。この神は、ギリシャ人によって通常、弓、矢筒、矢を携えた姿で描かれ、闇の力の敵であり、それを打ち負かす存在とされた。

[4946] パッラダ、あるいはアテナは、古代ギリシャ人にとって、結婚と家庭の幸福の守護神とされていた。

、その手紙とそこに記された我らの主に対する冒涜の言葉を読んだとき、我慢できずに手紙を細かく引き裂き、それを空中に投げ捨てながらこう言った。

「私はキリスト教徒だ。お前は命じられたことを果たせ。」

すると総督はこう言った。

「私も皇帝を恐れているが、友人として君に助言し、君を憐れんでいるのだ！　どうすればよいのか分からない！　だが、私とこの高名な諸君の言葉を聞き入れ、我々の目の前で神々に生贄を捧げよ。もしそうしなければ、私はやむを得ず命令を執行せざるを得ない。」

すると、ネアニウスは統治者にこう言った。

「あなたは犠牲について言及されたが、私は今、自分自身を私の神であるキリストに捧げる。」

そう言い放つと、彼はその地位にふさわしい帯を解き、総督の顔に投げつけた。それは、天の王の戦士となるために王の奉仕を拒絶し、異教の不信仰を糾弾するためであった。一方、総督と彼と共に来た者たちは、 怒りに駆られて彼を捕らえ、パレスチナのケサリア[4947] ――フィリッポスとも呼ばれ、またパネアダのセバスティアとも呼ばれる地――へ連行した。その地にはかつて、主の衣に触れて癒やされた出血の病の女の願いに応じて造られた、キリストを象った彫像が安置されていた[4948]。　そこで総督は、民衆の誰もが眺められる場所に座り、ネアニアを尋問にかけた。彼を見た市民たちは、異教の不敬によって心が曇らされていたため、まるで酔っ払いや悪霊に取り憑かれたかのように、総督に向かって叫び始めた。

「こいつは、我らの神々の敵であり、神々を滅ぼす者だ。皇帝の命令を軽んじている！」

一方、もともと極めて残忍な人物であった総督は、民衆の叫び声によってさらに残酷さを増した。彼は直ちに、ネアニアを裸にし、拷問の場で絞首刑に処し、その後、鉄の爪でその肉体を削り取るよう命じた。　これにより、ネアニアの肉体は塊ごとに剥がれ落ち、むき出しの骨が見えるようになった。見物人のうちには、そのような苦しみを見て、殉教者の若さを憐れみ、彼のために泣く者もいた。しかし、殉教者は彼らの涙を見て、こう言った。

「私のために泣くのではなく、あなたがたの魂の滅びのために泣いてください。なぜなら、地獄で永遠に苦しむことになる者こそ、嘆き悲しむべき対象だからです。」

それから、天を仰ぎ見て、彼はこう祈った。

「神よ！　敵を恥じさせ、あなたの至聖なる御名の栄光のために、あなたのしもべである私を強めてください！」

処刑人たちが疲れ果てると、総督の命令により、殉教者は拷問から解放され、牢獄に投げ込まれた。しかし、テレンティウスという名の看守は、かつてネアニオスから受けた恩恵を思い出し、彼を憐れんで、藁を敷き、タオルで覆ってやった。こうして、殉教者はかろうじて息のある状態で牢獄に横たわっていた。

真夜中、街で地震が起こった――それは、神が御自身の天使たちを伴って、御自分のしもべを訪ねて来られたのである。牢屋の中に異様な光が輝き、牢の扉が開き、そこにいたすべての囚人の足枷が外れた。その時、二人の天使が美しい若者の姿で現れ、殉教者にこう言った。

「私たちを見よ。」

殉教者は彼らに視線を向け、こう言った。

「あなた方はどなたですか？」

彼らは答えた。

「我らは、主からあなたのもとへ遣わされた天使である。」

[4947] このケサリアはヨルダン川の源流に位置していた。同じくパレスチナにあるが、地中海の沿岸に位置する別のケサリアとは区別すべきである。

[4948] マタイ9:20–22。

すると、殉教者は彼らに言った。

「もしあなたがたが主の天使であるなら、私の前で主にひれ伏し、十字架の印で身を守ってください。そうすれば、私はあなたがたを信じます。」

天使たちは直ちに彼の願いを叶え、こう言った。

「さあ、主が私たちをあなたのところへ遣わされたことを信じてください。」

殉教者は言った。

「三人の若者がバビロンの炉に投げ込まれたとき、主から天使が遣わされ[4949] 、火の熱を和らげたことを私は知っています。しかし、私は一体何をしたというのでしょうか。それとも、私が火の中に投げ込まれたから、天使の訪問に値すると認められたのでしょうか？」

殉教者が謙虚にこう語っていると、突然、主イエス・キリストご自身が言い表せないほどの栄光のうちに現れ、殉教者に触れ、その傷を癒やし、完全に健康な状態で立ち上がらせた。その後、主は彼に水で洗礼を授け、こう言われた。

「これからは、もはやネアニオスとは呼ばず、プロコピオス[4950] と呼ばれることになる。勇気を出し、力を奮い立たせなさい。あなたは偉大な業を成し遂げ、多くの羊の群れをわたしの父のもとへ導くことになるからだ。」

プロコピオスは喜びと畏怖の念に駆られ、地にひれ伏して主に礼拝し、激しい拷問を恐れないよう、苦難の中で自分を強めてくださるよう祈った。主は彼にこう言われた。

「恐れるな。わたしがあなたと共にある。」

そう告げると、主は天に昇られた。

聖プロコピオスは、主が彼に現れたその日から、心に言葉に尽くせない霊的な喜びを抱き、天の歓喜に満ちていた。　そして、その肉体は極めて健やかになり、かつての傷跡は微塵も残らなかった。彼は主に*「信頼」*し、*主は*彼を*「助け」*、彼の*「心は喜びに満ち」*（*「*その肉体は*栄えた」*）（詩篇27:7）。

その御出現の翌日、早朝、総督は殉教者が生きているかどうか確かめるため、兵士の一人を牢獄へ遣わした。総督は、彼が昨日の激しい拷問で既に死んでいるものと考えていた。　牢屋の看守テレンティウスは兵士に、一晩中眠れなかったこと、そして真夜中に牢屋で極めて恐ろしい出来事が起きたと語った。すなわち、地震が起こり、不思議な光が輝き、扉が開き、囚人たちの足枷が外れ、ネアニウスには、異様な光を放つ何人かの男たちが話しかけていた。兵士は牢屋に身を乗り出し、殉教者に叫んだ。

「ネアニウスよ、お前は生きているか？」

聖人は答えた。

「私の神の恵みにより、健在です。」

兵士は言った：

「お前が見えないぞ。」

聖人は答えた：

「神の光から逃げ、悪魔に仕える者は皆、盲目であり、暗闇の中を歩き、どこへ向かっているのかもわからないのだ。」

戦士は統治者のもとへ行き、聞いたことを報告した。統治者は裁判の席に着き、再びキリストの殉教者を尋問のために呼び出した。　皆が彼を見つめると、その明るい顔と、まるで傷を負ったことなど一度もないかのような、健康で白い体が見えた。法廷に居合わせた多くの人々は驚きながら、こう叫んだ。

[4949] ダニエル書3:1–100

[4950] プロコピオス――ギリシャ語で「成功する者」の意

「ネアニアの神よ！　私たちをお助けください！」

一方、総督は裁判官の席から立ち上がり、民衆に静粛を命じる合図を送ると、力強い声で叫んだ。

「兄弟たちよ！　なぜネアニアが健在であるのを見て驚いているのか？　神々は彼に憐れみを示し、そのしもべを癒やしてくださったのだ。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「私が神の慈悲によって癒やされたというのは、よく言った。しかし、もしこの奇跡的な癒やしが、お前の神々の力によって成されたものだと考えるのなら、神殿へ行って、一体どの神が私を癒やしたのか確かめよう。」

総督は、殉教者が神々に礼拝しようとしているのだと思い、大いに喜び、裁判所から神殿までの道を花で飾り、道沿いに美しい幕を張るよう命じた。そして、告示役は高台からこう叫んだ。

「高貴な女性テオドシアの息子、ネアニウスは悔い改め、神々に帰依し、彼らに犠牲を捧げにやって来る。」

異教徒たちはこれを聞いて喜んだが、密かにキリストを信仰していた者たちは悲しんだ。妻や子供連れの多くの人々が、この光景を見ようと集まった。

統治者は聖プロコピオスやすべての貴族たちと共に、異教の神殿へと厳かに歩みを進めた。そこに入ると、聖人は密かにキリスト・神に祈りを捧げ、偶像の前で空中に十字の印を描き、こう言った。

「言っておく、不浄な偶像たちよ、わが神の御名と聖なる十字架の力を恐れよ。その場所から立ち去り、砕け散り、水のように流れ去れ！」

すると、偶像はたちまちすべて倒れ、その倒れる音で大きな騒ぎが起こった。それらは粉々に砕け散り、さらに驚くべきことに、それらが作られていた素材のすべてが、神の御心により、ただの水へと変わり、神殿全体が水で満たされ、その水は一筋の奔流となって神殿の扉へと流れ出した。

この奇跡に皆は大いに驚き、多くの人がこう叫んだ。

「キリストの神よ！　私たちを助けてください！」

一方、この出来事に驚愕した総督は、恐怖のあまりどうすべきか分からなかったが、やがて我に返ると、殉教者を牢獄へ連行するよう命じ、自身は深い悲しみを抱えて家路についた。

夜遅く、聖人が閉じ込められていた牢獄に、二隊の兵士たちが、その指揮官であるニコストラトスとアンティオコスを伴ってやって来て、聖人に、彼らを天の王であるキリストの軍勢に加え入れてくれるよう懇願した。そこで聖プロコピオスは、牢獄の看守に、　テレンティウスに、しばらくの間、牢屋から出ることを許可してほしいと頼んだ。看守は、キリストのために自ら苦難を受けようとする者が逃げ出すことはないことをよく知っていたため、これを許可した。聖人は外に出ると、その兵士たちを、迫害を恐れてある場所に身を隠していたその町の司教レオントスのもとへ連れて行った。　彼を見つけると、プロコピオスは兵士たちに洗礼を授けるよう頼み、自身は再び牢獄へと戻った。司教はその夜、その兵士たちに対して宣教[4951]を行い、彼らに洗礼を授け、キリストの御体と御血

[4951] カテキズム――古代教会において、聖なる洗礼の秘跡を受けようとするすべての人々に授けられた、キリスト教信仰の真理に関する口頭による教え。　聖書や教訓を聞くために教会に入る権利を持ち、さらには典礼の第一部と第二部（「プロスコミディア」と「求道者の典礼」）に立ち会うことも許されていたが、　洗礼志願者は、典礼の第三部、すなわち最も重要な部分（「信徒の典礼」）が始まる前に、直ちに教会から退出しなければならなかった。このことは、助祭による呼びかけによって告げられ、今日でも正教会における典礼の執行中に受け継がれている。　求道期間の長さは一律ではなく、多くの人は生涯を通じて求道者のままであった。必要に応じて、求道期間は数日間、あるいは数時間にまで短縮されることもあった。――求道者の儀式は、現在も正教会で執り行われている。　これは、洗礼を受ける者の前で定められた祈りを朗読し、悪魔に対する呪文を唱えることから成る。その際、洗礼を受ける者はサタンを拒絶し、キリストと結ばれ、使徒信条の朗読によって自らの信仰を告白する（幼児洗礼の場合、これは代父・代母によって行われる）。

という神聖な秘跡を授けた。　その後、彼らが牢獄に近づくと、聖なる殉教者は彼らに聖なる信仰の真理とイエス・キリストの御名の告白を教え、彼らが恐れず勇敢に苦難に耐えられるよう、彼らの信仰を確固たるものにした。

その日が来ると、総督は慣例に従って公開裁判が行われる場所へやって来たが、その前にあの兵士たちが現れた。彼らは大声でキリストを賛美し、自分たちがキリスト教徒であることを宣言し、キリストのために苦難と死を甘受する覚悟があることを表明した。　一方、統治者は、これほど多くの兵士たちがキリストのために勇敢に死へと向かう姿を見て、驚きと恐怖に打ちのめされ、長い間、彼らにキリストから離れ、再び神々へと立ち返るよう説得を試みた。　しかし、彼らが断固として譲らないのを見ると、剣による斬首刑を宣告した。そして彼らは街から処刑場へと連れ出され、そこで判決を執行するために大勢の処刑人が集められていた。　聖プロコピオスもまた、手錠をかけられたままその場へ連行された。これは、これほど多くの戦士たちが処刑される光景を彼に見せることで、を威嚇するためであった。しかし彼は、彼らの偉業を目の当たりにして心を喜び、キリスト神に彼らのために祈りを捧げた。神が最後まで彼らを支え、その魂を御自身の天の御国に迎え入れてくださるよう願ったのである。　すると、処刑人たちは他の不信心な兵士たちと共に、キリストを信じたその二つの部隊を取り囲み、剣で切り刻んだ。その際、両部隊の指揮官であるニコストラトスとアンティオコスも命を落とした。こうして、キリスト王の新たな兵士たちは、主のために自らの命を捧げ、栄光のうちに地から天へと移っていった。　一方、エウラリウスという名の某高貴な慈善家は、夜、多くの信者たちと共に殉教者たちの遺体を回収し、埋葬した。聖プロコピオスは、相変わらず鎖につながれたままだった。

キリストの殉教者が牢獄に留まっていると、十二人の高貴な女性たちが彼のもとを訪れ、窓越しに聖人にこう言った。

「私たちはキリストのしもべです！」

このことが統治者に報告されると、統治者は直ちに彼女たちを牢獄に投獄するよう命じた。牢獄に入った彼女たちは、喜びながらこう言った。

「主よ、私たちを御自身の天の御殿にお迎えください！」

牢屋の中に入ると、彼女たちは聖プロコピオスに頭を下げた。聖プロコピオスは、聖なる信仰、キリストへの神聖な愛、そして神への心温まる祈りについて彼女たちに教え始めた。

しばらくして、統治者は裁判を行ういつもの場所に座り、あの高潔な女性たちを牢獄から連れ出し、裁判にかけるよう命じた。尋問の場には、プロコピオスの母テオドシアも現れ、あの女性たちが尋問でどのように振る舞うかを見届けようとした。彼女たちが裁判にかけられると、統治者はこう言った。

「我々の敬意を得るために、神々に犠牲を捧げることに同意するか。それとも、頑なに自分の信念を貫き、残酷な死を自ら招くつもりか？」

聖なる女性たちはこう答えた。

「あなたが約束するその栄誉は、あなた自身を滅ぼすものであれ。私たちは、私たちを滅びから救い出してくださった、十字架につけられたキリストのしもべです。キリストこそが私たちの誉れであり、栄光です！」

激怒した総督は、これらの女性たち一人ひとりを地面に引きずり出し、容赦なく棒で打ち据えるよう命じた。その後、彼女たちは拷問の現場で裸のまま吊るされ、肋骨を火で焼かれたが、その間もキリスト・神に祈りを捧げ、助けを求めていた。それから総督は、彼女たちの乳首を切り落とすよう命じ、こう言った。

「あなたがたが頼りにしている、あの十字架にかけられた方は、あなたたちを助けてくれるのか？」

女性たちはこう答えた。

「ご覧の通り、彼はすでに私たちを助けてくださいました、人間を憎む拷問者よ！　私たち女性こそが、あなたが課した拷問をものともせず、あなたという強大な統治者に打ち勝っているのです。」

拷問官はさらに激しく怒りを燃やし、真っ赤に熱した鉄で彼女たちの股間を焼くよう命じた。彼は言った。

「火の焼ける感覚がわかるか、それともわからないか？」

聖なる女性たちは答えた。

「火の痛みを感じるべきは、あなたの方です。あなたは消えることのない地獄の炎に投げ込まれるのですから。私たちには、ここにいる助け主――主がおられます。あなたは、太陽を見ることのできない盲人のように、その主を見ることができないのです。」

聖なる女性たちがこのように苦しんでいる間、聖プロコピオスの母テオドシアは、人々の真ん中に立ち、彼女たちの勇気と忍耐を見つめながら、苦々しく泣いていた。その後、彼女の魂に真の悟りの光が輝くと、彼女は神への熱意に満たされ、統治者のところへ歩み寄って叫んだ。

「私も、十字架につけられたキリスト・神のしもべです！」

このような変容が彼女に起こったのは、常にその神のために祈り続けていた聖大殉教者プロコピオスの祈りによるものであった。

統治者とその側近たち、そして民衆のすべては、ネアニアの母である高貴なテオドシアが、大胆にもキリストを公に告白するのを耳にし、彼女に起きたこの変化に極めて驚いた。どうして彼女は、自らの高い地位や富、名門としての身分を顧みず、恐れを知らずに拷問へと向かうことができたのか。統治者は彼女にこう言った。

「テオドシア夫人よ！　誰があなたを惑わし、先祖代々の神々を捨て、そのような言葉を語らせたのか？」

すると彼女はこう答えた。

「私は決して惑わされたり、騙されたりしているとは感じておりません。以前、私は確かに迷いの中にいました。悪魔に惑わされ、天と地を創造された真の神の代わりに、人間の手に作られた忌まわしい偶像にひれ伏していたのです。」

統治者は、拷問を受けている女性たちを指さしながら、テオドシアに言った。

「どうやら、これらの詐欺師たちが、あなたを惑わしたようですね？」

すると彼女はこう答えた。

「彼女たちは私を惑わしたのではなく、自らの苦しみを通じて真理を知るよう教えてくれたのです。もし彼女たちを支えているお方が真の神でなかったなら、どうして彼女たちはこれほどの苦痛の中でも気高くあり続けられたでしょうか？　ですから、欺く者たちは彼女たちではなく、あなた自身こそが、人々を闇と迷いへと導き、破滅へと突き落とす欺く者なのです！」

統治者は言った：

「テオドシアよ、正気を取り戻し、神々に許しを請え。そうすれば、我々も神々に祈り、この罪を赦してくださるよう願おう。」

すると彼女はこう答えた。

「私は、かつての自分の愚かさと、私が犯した悪行について、十字架にかけられたキリストに許しを請う。」

激怒した統治者は、彼女を拷問を受けた女性たちと共に牢獄に投獄するよう命じた。

テオドシアが牢屋に入ると、彼女の息子である聖プロコピオスが彼女を見て大いに喜び――彼はすでに霊的な啓示によって、彼女がキリストに帰依したことを知っていた――そして喜びながら彼女に言った。

「母上、私の母よ！　なぜここに来られたのですか。そして、なぜあなたの神々を見捨てたのですか？」

すると彼女は彼にこう答えました。

「愛しい我が子よ！私は今、真理を知りました。私は殉教した聖なる女性たちを見つめ、こう考えました。『もし彼女たちが、そのために苦しんでいるキリストに支えられていなければ、弱い女性たちがこれほど過酷な拷問に耐え抜くことなど、どうして可能だったでしょうか？』と。」　もしキリストが全能の神でなかったなら、どうして御自身のゆえに苦しむ者たちを支えることができようか？　そう考えを巡らせていると、私の心は深い感動に満たされ、ある光が私の心に輝いたのです。私は神々の無力さを悟り、真の神は、あなたや聖なる女性たち、そして他の殉教者たちが信仰を告白する、ただお一人の方であると信じるようになった。

その時、聖プロコピオスは彼女にこう言いました。

「あなたは幸いな方です、夫人よ、私の母よ。神からこのような啓示を授かり、そのためにこの牢獄へと来られたのですから！」

そして聖テオドシアは牢獄に留まり、聖なる女性たちの世話をした。彼女は清潔な布で彼女たちの血まみれの傷を拭き、その潰瘍に薬用湿布を当てた。というのも、彼女は医療の術を学んでいたからである。　そして、聖プロコピオスは母に聖なる信仰を教えた。その夜、彼は母を連れて司教レオティオスのもとへ行き、司教は彼女を父と子と聖霊の名によって洗礼を授けた。その後、彼は再び牢獄に戻り、母の啓蒙を喜び、神を賛美した。

その後、聖なる女性たちはテオドシアと共に牢獄から連れ出され、不敬虔な法廷に引き出された。総督はテオドシアにこう言った。

「高貴な女性よ、私はお前を憐れみ、恥や苦痛にさらすつもりはない。だから、考えを改め、慈悲深い神々に祈り、彼らからは赦しを、我々からはより大きな名誉を得られるようにせよ！」

聖女はこう答えた。

「愚かで分別のない人よ！　彫像の偶像を神と呼ぶことを、恥じないのですか？　もし、人が自分の力の及ぶ限り、善行によって神に似ようとすることに大きな尊厳があるというのなら、あなたたちもまた、あなたたちの神々――すなわち偶像――に似るべきだ。つまり、あなたたちの神々がそうであるように、目が見えず、耳が聞こえず、口が利けず、手も足も動かせない者となるべきなのだ。

この言葉を聞いて、彼女の統治者は激怒し、彼女の口を打つよう命じ、その後、地面に引きずり下ろして棒で打ち、さらに鉄の爪で彼女の体を削るよう命じた。　一方、他の聖なる女性たちは、彼女の苦しみを見つめながら、神が彼女を強めてくださるよう祈り、聖プロコピオスが教えた次の詩篇の節を歌った。

「*さあ、主を賛美しよう。私たちの救いの砦に向かって叫ぼう*」（詩編94:1）、「*神は私たちの避難所であり、力であり、苦難の時の速やかな助け手である*」（詩編45:2）。

これ聞いた統治者は、聖なる女性たちの顎を錫の棒で打ち砕くよう命じ、その後、それらの殉教者たちを聖テオドシアと共に一つの鉄の鎖で縛り上げ、街の外へ連れ出し、剣で斬首させた。

妻たちは、婚礼の宴に向かうかのように喜びと歓びをもって死へと向かい、キリスト・神のために自らの命を捧げ、天の宮殿に迎え入れられた。

彼女たちの死後、聖プロコピオスは再び裁判にかけられ、統治者は獅子のように咆哮しながら殉教者にこう言った。

「この不信心者よ、これほど多くの魂が滅びたことに満足か？」

聖人はこう答えた。

「私は彼らを滅ぼしたのではなく、滅びから救い出し、死から生へと導いたのだ。」

そこで総督は、鉄の手袋で彼の口を殴り、鉄の爪で顔を引っ掻くよう命じた。その結果、彼の血が流れ出し、大地を赤く染めた。その後、殉教者は鉛の棒で頬を殴打されたが、彼はそのような拷問にもかかわらず、柱のように動じずに立ち続けた。

その後、統治者は殉教者を牢獄に投じるよう命じ、落胆して家路についた。キリストの殉教者を打ち負かすことができなかったことを、彼は恥じ、悔やんでいたのである。　悲しみのあまり、彼はその日、誰とも一言も交わさず、その後、高熱に襲われて床に伏し、その夜、自分がこれほど熱心に仕えていた悪魔たちに魂を委ねて亡くなった。

一方、キリストに関する説教はますます広まり、聖プロコピオスの教えと奇跡のおかげで、日々多くの男女がキリストの信仰に加わっていった。　彼が牢獄に囚われていたとき、多くの人々が病人を彼のもとに連れてきた。彼はキリストの恵みによって彼らを癒やし、人々から不浄な霊を追い払った。それによって、異教徒たちは真のキリスト教の信仰へと改宗していった。

統治者ユストの死後、ディオクレティアヌス帝から、同じくイタリア出身だが、前任者よりもさらに残忍なフラヴィアヌスという名の別の統治者がパレスチナに派遣された。　パレスチナのケサレアに到着し、殉教者プロコピウスの存在を知ると、彼は直ちに彼を裁判にかけるよう命じ、その名前、家系、信仰について尋問した。私たちの神であるキリストを冒涜しながら、この不信心者は殉教者にこう言った。

「あなたがたキリスト教徒は、自分たちの神が女から生まれ、人々に十字架にかけられたと認めながら、なぜその神を崇拝するのか、私には不思議でならない。これは狂気ではないのか？」

キリストの殉教者はこう答えた：

「もしあなたが辛抱強く私の話を聞いてくださるなら、統治者よ、あなた方の書物そのものが、私たちの神について証言していることをお見せしましょう。　まず第一に申し上げたいのは、真の神はただひとりであり、その本質は不変で、無情であり、太古より存在し、永遠であるということです。一方、数多くの神々と呼ばれるものは、苦しみや変化にさらされ、ある特定の時期に現れ、そのうちのいくつかは、すでにその哀れな存在を終えていると言っても過言ではありません。　あなたも、トリスメギストス、すなわち「三度偉大なる者」と呼ばれる、あなた方のヘルミウス[4952]や、ソクラテス[4953]をご存じでしょうか。彼らは、神は唯一であり、多くの神々など存在しないと主張しています。まず、ヘルミウスが医師アスクレピアドス[4954]に宛てた手紙の一節に耳を傾けてください：「万物の主であり創造主である――私たちが神と呼ぶお方は、この目に見える感覚的な世界を創造されました。そして、神によって創造されたこの最初にして唯一の世界が、神の目には美しく、あらゆる恵みに満ちたものとして映ったため、神はその世界を愛で、ご自身の御業として愛されたのです」。――ご覧なさい、統治者よ、あなた方のエルミオスは、多くの神々ではなく、ただ唯一の神の存在のみを認めているのです！もし神々が多数存在したならば、唯一の永遠の神性など存在せず、特定の時期に現れる多くの神性が存在することになるでしょう。　なぜなら、あなた方はある神々については「それらは以前から存在していた」と言い、他の神々については「それらは後から現れた」と言うからだ。あなた方にとって、ある者は天の神、別の者は海の神であり、そもそも目に見えるすべてのものには、それぞれ守護神がいるのだ。　あなたのソクラテスが、多くの神々を否定したために、アテネ人によって毒を飲むよう判決を下されたのは、まさにそのせいではないのか？　そして、あなた方のこれらの不死の神々――とりわけ、神々の父であり、父殺しであり、実の妹である　の夫であるゼウスだが、彼はかつてクレタ島[4955]に住んでいたのではないのか？　今でも、そこで彼の墓が示されているのではないのか？　そして、あなた方のポセイドンは、盗賊の首領であり、略奪者であり、破

[4952] ヘルミオス・トリスメギストスは、古代ギリシャの歴史における半神話上の人物である。

[4953] ソクラテス――紀元前5世紀に生きた、最も著名な古代ギリシャの哲学者。

[4954] アスクレピアデス――古代ギリシャの著名な医師。

[4955] クレタ島（またはカンディア）は、地中海の中央部、エーゲ海の南に位置している。

壊者ではなかったのか？　そして、この者の墓は、果たしてカラブリアにあるのではないのか[4956] ？彼らが普通の人間のように死に、その墓が示され、彼らのすべての悪行がローマやギリシャの著述家たちによく知られているというのに、どうしてあなた方は自分たちの神々を不死と呼ぶことができるのか？　これこそが、キリスト教徒だけでなく、彼らを崇拝する者たちさえも非難し、冒涜している、あなた方の神々なのです！もしあなたが、救い主キリスト、すなわち私たちの神について、彼が女性から生まれ、その後十字架にかけられたと述べたのなら、あなた方の書物の中に彼について記されている、あの神秘的な啓示について聞いてください。　何しろ、シヴィラと呼ばれるあなた方の予言者[4957] （ローマ王タルクィニウスが[4958] 高額で買い取ったあの予言者のことである）は、その第二巻において、キリストの受肉について次のように明確に記しているのだ：　「処女が神の御言葉を産み、真昼に東から星が現れ、人間たちへの大いなる奇跡の使者として現れるとき、大いなる神の御子が、人間のような肉体をまとって彼らの元に来られる。東方の三賢者は、金、没薬、乳香という贈り物を彼に捧げ、それは彼を喜ばせるであろう」。　また、キリストの十字架についても、同じシヴィラは次のように語っている。「ああ、キリストが架けられる、なんと幸いな木よ！　あなたは地の上ではなく、天にふさわしい。」そして、再臨についてもこう語っている。「天から、すべての時代を支配する偉大なる王が来られ、すべての人々と全世界を裁かれる。信者も非信者も、真の神である彼が高き玉座に座し、各人にその行いに応じて報いを与えられるのを見るだろう。」　――もし、さらにピフィアのアポロン[4959] 、リビアのアモニウス[4960] 、ドドナ[4961] 、ペルガモン[4962] の予言を聞きたいと思うなら、彼らの書を注意深く読み、彼らが予言し、人類の救いと刷新のために来られることになっていた、至高の神であるキリストを知ることになるだろう。 アルゴナウタイの指導者イアソン[4963] が

4956 カラブリアは、イタリア南西部に位置していた荒々しい山岳地帯である。

4957 古代ギリシャにおいて「シヴィラ」とは、未来を占い、運命を予言することを希望する者なら誰にでもそのサービスを提供していた、放浪の予言者たちのことを指した。シヴィラの活動は、ギリシャが文化的に大いに隆盛を極めた紀元前8世紀から7世紀にかけて、特に盛んになった。　ギリシャの歴史家たちは、エルフラのシヴィラ、フリギアのシヴィラ、ヘレスポントスのシヴィラなどを言及している。中でも最も多くの記録が残されているのはクムのシヴィラであり、古代ギリシャの伝承によれば、彼女は千年間生き、タルクィニウス・スーパーブス（紀元前6世紀に生きた人物）の同時代人であったとされる。　このシヴィラこそが、この伝記で言及されている人物である。古代ギリシャの伝承によれば、クムのシヴィラはタルクィニウスに、9冊ある自分の書物を買うよう提案した。そのうち3冊は王によって購入され、神聖な書物としてカピトリーノ神殿に安置された。

4958 前の注を参照。

4959 この『伝記』が言及しているのは、デルフォイにあったアポロンの神託所である（この都市はフォキスの南西部、パルナス山の麓に位置していた）。　ギリシャ神話の伝承によれば、アポロンは、そこに棲んでいた竜ピフォンを事前に退治した上で、自らデルフォイを聖域の地として選んだとされる。ここでの占いは、いわゆる「ピフィア」たちによって行われていた。

4960 リビアは、アフリカの最も古い名称である。リビアは、本来、マルマリキとケレナイキの2つの主要な地域から構成されていた。前者のシヴァス・オアシスには、テベスの神アモンを称えて、聖伝に言及されている神託所（予言所）が建設されていた。

4961 ドドナは、ゼウスの最も古い聖域であり、神託所と神聖な樫の木があった。それはギリシャのテッサリア地方内、スコトゥザの町の近くに位置していた。　古代ギリシャの著述家たちの伝承によれば、ここでは年老いた女性たちが、樫の木の葉のざわめき、樫の木の下から湧き出る小川のせせらぎ、そして風に揺れる針金が当たる青銅の器の音などを、架空の神の声として解釈していたという。 この神託所は、神聖な樫の木が伐採された紀元前3世紀まで存在していた。

4962 ペルガムの都市は、小アジアのミシア地方、セリノス川とケテイオス川（現在のベルガマ・チャイ）のほとりに位置していた。 この『聖人伝』が言及しているのは、ここにあった巨大な祭壇であり、エウメネス2世（紀元前196年～157年）によって建造され、同皇帝がガリア人に対して勝ち取った勝利を記念してゼウスに奉献されたものである。　19世紀の70年代末、ドイツ政府による発掘調査が行われ、そのおかげで祭壇は修復（復元）された。発掘調査の結果から判断すると、この祭壇は広大な正方形の建造物であり、各辺の長さは最大30サジェーンに達していた。

4963 古代ギリシャ神話の伝承によれば、アルゴナウタイとは、船「アルゴ」に乗って異国の地への初の航海に出た航海者たちのことである。

、アテネで最も古いとされていた神殿についてデルフォイのアポロンに尋ねたとき、「預言者よ、太陽のようなアポロンよ、この神殿は最後の時代に誰のものとなるのか、教えてほしい」と。するとアポロンはこう答えた。　「あなたがたは、神々への敬意を表すための儀式を執り行えばよい。しかし、私は天に君臨する唯一の神を信仰する。その神の永遠の御言葉は、清らかな処女から宿るだろう。そして、炎の弓から放たれた矢のように、それは全宇宙を駆け巡り、すべてを包み込み、父への捧げ物として導いていく。　この神殿は御母に属するものであり、その名はマリアである。」――そして再び、ヴァットス[4964]が同じアポロンに神について尋ねたとき、アポロンは こう答えた。「ただ一人、私に悲しみをもたらす者がいる。それは天から来られる御方である。その方は神でありながら、神性自体は苦しまないにもかかわらず、御自身は苦しみを受けることになる。　神性および人性において、彼は父から不死と命と力を授かり、母からは死と十字架と墓を授かる。彼の目からは温かい涙が流れ、彼は五つのパンで五千人の人々を満腹させるだろう。　誰もが彼についてこう言うだろう。「キリストは私の神であり、十字架にかけられ、死に、墓から復活し、天に昇られた方である」と。

聖人がギリシャの書物からキリスト・神に関する証言を引用したとき、統治者は、真理を聞こうとも理解しようともしない、耳の聞こえない毒蛇のように座っていた。彼は嘲笑を込めて聖人にこう言った。

「お前は、まるで天の鍵と封印を持っているかのように、神の御業を我々に見事に説明しているな！しかし、私がお前を拷問し始める前に、その空虚な言葉を止めることを勧める。そして、馬鹿げたキリスト教を捨て、皇帝の命じられた通り、我々と共に古来の信仰に従うがよい。　もしそれに従う気がないなら、その頑なさへの罰として、お前は凄惨な拷問にさらされることになる。そうなれば、否応なしに命じられたことを実行することになるだろう！

聖なる殉教者はこう答えた。

「もしあなたが、霊の目で見ることができる真の神を知ることを望まないのなら、人間の体を殺し、滅ぼし、私たちをあなたの神々のために切り刻み、バラバラにしてしまえ。そうすれば、私は私の神に賛美のいけにえを捧げるだろう。　あなたは、唯一の、生ける真の神を知る私たちを狂人と呼ぶ。しかし、死者に犠牲を捧げ、無感覚な石を崇拝するあなたこそ、むしろ狂人ではないのか？もし、あなたが神として崇める石が善なるものであるなら、なぜそれを切り刻み、分割し、多くの部分に分けた後、その中から人間に多少似た一部分だけを神と呼び、そこに犠牲を捧げるのか。　その石の他の部分は、何らかの卑しい用途に使ったり、沼地に投げ捨てて足で踏みつけたりしているではないか。木に対しても同じことをしている。　その一部を切り取り、そこから偶像を彫り出して崇拝する一方で、残りの部分は何かより卑しい用途に回したり、あるいは火の中に投げ込んだりする。もし石や木が神であるならば、あらゆる石や木を神として崇めるべきである。　もし木も石も神ではないのなら、なぜあなたは腐った木や感覚のない石に健康や救いを求めるのか。もし鉄を神と呼ぶとしても、鉄は火の力に支配されており、熱せられると本来の硬さを失い、柔らかくなるため、ハンマーで叩かれることになる。　神をハンマーで打つことなどできるだろうか？　火を神と呼ぶだろうか？しかし、火は燃やすものがあれば強いだけであり、薪をくべなければその力も失われ、水をかければ完全に消えてしまう。互いに破壊し合うようなものが、どうして神であり得ようか？

一方、統治者は聖人の言葉を聞き入れず、傍らにいたあるアルケラオという者に、殉教者の首を剣で斬るよう命じた。すると聖人は、主のために死ぬ覚悟を決め、即座に首を剣の下に差し出した。　ところが、アルケライが両手で剣を高く掲げ、聖人の首に強烈な一撃を加えようとしたその時――突然、手も全身も力尽き、地面に倒れ込んで息を引き取った。

[4964] おそらく古代ギリシャの軍司令官であった。

これを見た総督は恐怖に駆られ、殉教者を鉄の鎖で縛って牢獄へ連行するよう命じた。　その六日後、総督は再び殉教者を法廷に引き出し、牛の腱で全力を込めて打ち据え、赤熱した鉄の釘でその肉体を苛み、傷口に火を当て、酢と塩をすり込むよう命じた。

その後、燃えさかる炭を載せた銅製の祭壇が運ばれてきた。聖人の右手に香を握らせ、それを燃えさかる炭の上に差し出した。彼らは、聖人が痛みのあまり手をひねり、香が火の中に落ちるだろうと考えていた。そうなれば、聖人が香を火の中に投げ入れて神々に生贄を捧げたと言えるはずだった。　聖人の手はその状態で約二時間保たれたが、聖人は神への思索に深く没頭し、燃える手には全く気を留めず、火の燃える祭壇は無駄にそこに置かれたままとなった。　見物人たちはこれに驚き、キリストを賛美したが、支配者とその主である悪魔は、恥をかかされたと感じた。聖人は天を仰ぎ見て、こう語った。

「あなたは私の右の手を握り、あなたの御計らいをもって私を導いてくださる」（詩編72:23–24）。主よ、あなたの右の手は力強さで栄え、主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕き、主の右の手は力を現し、主の右の手は私を高めた！

その後、拷問官は殉教者の両手を縛って吊るし、両足には二つの重い石を縛り付けるよう命じた。聖人はその状態で長い間吊るされていた。石の重みにより、彼の体の関節は　から外れてしまった。　その後、拷問官は殉教者を拷問台から降ろし、石を取り外して、この受難者を火の炉、最も激しい炎の中に投げ込むよう命じた。聖人は炉に入る際、十字の印で身を守り、神に祈りを捧げた。すると直ちに、炉から炎が噴き出し、その場にいた不信心者たち全員を焦がしたが、聖人は無傷のままであった。彼にとって、その火は涼しさへと変わったのである。

この驚くべき奇跡に皆は深く感銘を受け、総督は恐怖に駆られてプレトリアへと逃げ去った。すると、市民の一部が総督に向かって叫び始めた。

「この魔術師を早急に処刑せよ。そうしなければ、街全体が彼の魔術に惑わされてしまうだろう。」

そこで総督は、聖人の首を剣で切り落とすよう命じる最終的な死刑判決を下した。　処刑場へと連れ出されたとき、聖人は祈りの時間を求め、東を向いて両手を天に掲げ、目を天に向け、この街と人々、苦難にある者たち、病人、孤児、未亡人のために、すべての人々が神の摂理によって守られるよう祈った。　とりわけ、異教の不敬虔が一日も早くキリスト教の敬虔さに取って代わられ、キリストの聖なる教会が、世の終わりまで正しい信仰をもって成長し、増え広がり、輝き続けるよう祈った。　彼が祈りを終えたとき、天から声が聞こえ、その願いを叶えることを約束するとともに、殉教者自身を天国の御国へ招いた。そこで聖殉教者プロコピオスは喜びをもって、その尊い頭を剣の下に差し出し、7月8日[4965] に、主のために自らの命を捧げて剣によって首を刎ねられた。 一方、一部のキリスト教徒たちは、夜になってその尊い遺体を運び出し、清らかな布で包み、香油を塗って、選ばれた場所に尊厳をもって埋葬し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美した。その神には、今この時も、そして永遠に、あらゆる栄光と誉れがふさわしい。 アーメン。

コンダク、第2調:

キリストへの神聖な熱意に燃え、十字架の力に守られ、プロコピエよ、あなたは敵の動揺と傲慢を打ち砕き、信仰に励み、私たちを啓発しつつ、尊い教会を高めた。

[4965] 大殉教者プロコピオスの死は303年に訪れた。

カザン聖母像の顕現を記念する、至聖なる神の母マリアの祝日

記念日：7月8日

1579年、神の御加護によりタタール王国の首都カザンを征服したイオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイの治世下、この街に住む少女マトローナに、夢の中で聖母マリアが現れた。　聖母は、彼女たちの家がある場所に、自分のイコンが地中に隠されていると告げ、このことを市内の宗教的・世俗的権威者たちに知らせるよう命じました。この幻視は一度だけでなく、何度も繰り返されました。　マトローナはこれを母親に話した。しかし、母親は幼い娘の言葉を聞き流してしまった。ついに、少女は炎の光に包まれた聖母マリアのイコンを目撃し、その際、恐ろしい声が聞こえた。「もしあなたが私の言葉を伝えなければ、私は別の場所に現れる。しかし、あなたは滅びるだろう！」　今回、母親は最後の幻視に恐怖を覚えた娘の願いに従い、彼女と共に大司教や地方長官のもとへ向かった。しかし、彼らは彼女たちの話を信じようとはしなかった。そこで、家に戻った母親は自ら指定された場所で土を掘り始めた。他の人々も加わったが、何も見つけることはできなかった。　ついに、少女マトローナ自身が掘り始めたとき、聖母マリアの像が見つかり、地中から取り出された。そのイコンは盛大な礼典をもって教会へ運ばれ、奇跡を起こすことで名声を博した[4966]。

トロパリオ、第4声：

熱心な執り成し手よ、至高の主の母よ、すべての者のために御子キリスト、我らの神に祈り、あなたの力強い庇護に身を寄せる者すべてを救い給え。　私たちすべてを、主の御母、女王、そして支配者よ、災いや悲しみ、病に苦しむ者たち、多くの罪に重くのしかかられ、あなたに立ち向かい、憐れみ深い魂と砕かれた心をもって、　御身の至聖なる御像の前で涙を流し、御身に揺るぎない希望を置く者たちを、あらゆる悪からの救い、すべての人にとって有益なものを授け、すべてを救い給え、神の母、聖母よ。まことに、御身は御身のしもべたちにとって神聖な庇護者であられるからです。

コンダク、第8調：

人々は、この静かで良き避難所、迅速な助け手、常に用意され温かい救い、聖母の庇護へと駆け寄り、祈りに励み、悔い改めに努めます。　まことに、至聖なる神の母は、私たちに尽きることのない慈しみを注ぎ、助けを先んじて与え、高潔で神を畏れる御自分のしもべたちを、大きな災いと悪から救い出される。

7月22日

7月9日（旧暦）

同日は、聖司祭殉教者キリルの記念日（彼については9月6日を参照

聖司祭殉教者パンクラティオス、タウロメニオス司教の記念日

記念日：7月9日

[4966] このイコンに関する詳細については、書籍『聖母マリアの栄光』（モスクワ、1907年）を参照のこと。

聖パンクラティオスはアンティオキア出身であった。彼は、私たちの主イエス・キリストが「*地上に現れ、人々の間を歩まれた*」（バルク3:38）時代、エルサレムおよび周辺のすべての国や都市で奇跡を行っておられた時期に生まれた。

アンティオキアに住んでいたパンクラティオスの父は、主の輝かしい奇跡の話を耳にし、主にお目にかかろうと、数人の友人と息子の若きパンクラティオスを連れてエルサレムへ向かった。　主が民を教え、あらゆる病を癒やし、数多くのしるしと奇跡を行われるのを見て、彼は主を神の子として信じ、キリストの聖なる使徒たち、とりわけ最高使徒である聖ペトロと親交を深めました。　この時から、若きパンクラティウスも聖ペトロに知られるようになった。

エルサレムにかなり長い間滞在し、キリストを直に拝見し、その甘美な御言葉を聞く喜びに浸った後、パンクラティウスの父は友人たちと共にアンティオキアへ戻った。　その後、救い主キリストの自発的な受難と死、そしてそれに続く復活と昇天を経て、使徒の一人がアンティオキアを訪れた。それは、聖ペトロがそこに到着し、パンクラティウスの父とその家族全員に洗礼を授けるよりも前のことだった。　しばらくして、パンクラティウスの父と母は主のもとへ召され、パンクラティウス自身は、両親から相続した財産を放棄し、ポンティウス山脈へと向かった[4967]。

そこで、ある洞窟に身を隠し、パンクラティウスは孤独と断食と祈りに専念し、自己探求に没頭し、ただ神とのみ交わりを保っていた。　その後、聖使徒ペトロがエルサレムを出て、キリストの福音を宣べ伝えるためにその地方を巡っていた際、ポンテでパンクラティウスに出会い、彼だと気づくと、アンティオキアへ連れ帰り、その後、彼と共にキリキアへ向かい、そこで聖使徒パウロと出会った。　そこで 、ペトロとパウロの両使徒は、互いの合意のもと、司教を任命した。クリスケンティウスをガラティアに、マルキアヌスをシラクーサに[4968] 、そしてパンクラティウスをシチリアの都市タウロメニアに[4969]。

奉仕の地へ向かう途中、福者パンクラティウスはシチリア行きの船に乗り込んだ。　この船には、パンクラティウスと共に、リカオニドとロミルという二人の船長も乗っており、彼は彼らに神の御言葉を伝え、神の御国と私たちの救いの奥義について説教した。彼は彼らをキリストへの信仰へと導き、聖なる洗礼によって彼らを救いに導いた。

彼らがタウロメニアの町に到着すると、その地の偶像に宿っていた悪霊たちは大混乱に陥り、パンクラティウスの到来に衝撃を受けた偶像たちは倒れ始め、粉々に砕け散った。　そこには、ギリシャ人たちに深く崇められていた神々――ファルコン、リシッポス、スカマンドロン[4970] ――があおり、海の岸辺にある高い丘の上に、彼らに捧げられた神殿が建っていた。

聖パンクラティウスがこの神殿に近づいた途端、神殿はたちまちひび割れ、まるで激しい揺れに襲われたかのように、すべての偶像ごと海へと崩れ落ちた。すると、民衆の間には大きな動揺が走った。

そこに、この町の統治者ボニファティウスも駆けつけ、聖パンクラティウスを見てその教えを聞いた後、キリストを信じ、洗礼を受けた。　キリストの御名の栄光のために彼が尽力した結果、一ヶ月のうちに教会が建てられ、そこで神の司教が奉仕を行うようになった。彼は、病人を連れて集まってくる民衆を教え、啓蒙した。聖人は、あらゆる病を癒やし、悪霊を追い出すというしるしと奇跡によって、自らの教えを裏付けた。

[4967] ポントスは、古代に小アジアの北東部を占めていた国である。現在、古代ポントスの地には、トラブゾンとシヴァスという2つのトルコのヴィラヤート（県）がある。

[4968] シラクーサ――シチリア島東岸に位置する、古代ギリシャの最初の植民地の一つ。伝承によれば、紀元前753年頃にコリント人によって設立され、後に同島で最大かつ最も豊かな都市となった。

[4969] シチリアは、地中海に浮かぶ大きな島の一つであり、現在はイタリア王国の一部を構成している。

[4970] ファルコン、リシッポス（またはリッス）、スカマンドロンは、古代ギリシャの宗教における二級神々である。

日ごとに信者の数はますます増え、もはや町のほぼ全体が聖なる信仰によって啓発され、キリストの御名の栄光がその国全体に広まり始めた頃、悪魔はキリスト教徒に対して、ある不敬虔な迫害者アクイリーヌを扇動した。　キリストとキリスト教徒への敵意から、彼は大勢の兵を率いてタウロメニアへと向かい、その町を破壊し、そこに住むすべてのキリスト教徒を虐殺しようとしました。

市民たちがこの知らせに恐怖に襲われたとき、神の聖人は彼らを慰め、敵から何の害も被らないと説き伏せた。　そして敵が都市に近づくと、聖パンクラティウスは、霊的な戦士として、聖職者たちを率いて敵に立ち向かい、無敵の武器――キリストの尊い十字架と、救い主キリストおよびその聖母マリアの二つの聖像――を携えていた。　するとたちまち、敵を強い恐怖が襲った。彼らはまるで闇に包まれたかのようであり、神の力によって混乱に陥り、その心は曇り、互いに斬り合い、殺し合いを始めた。中には自ら剣で身を貫く者さえいた。　その後、彼らが正気を取り戻し、包み込んでいた闇から抜け出し、互いに殺し合っているのを見ると、キリスト教の都市に対する敵対行為の報いとして、神がこのように彼らを罰しておられるのだと悟った。　この同胞殺しの戦いを生き延びた者たちは、武器を捨て、無敵の勇敢なキリストの戦士、聖パンクラティオスの元へ駆け寄った。彼らは聖人の尊い足元にひれ伏し、許しを請い、自分たちをキリスト教徒にしてくれるよう懇願した。　そして、市民たちには二重の喜びがあった。第一に、彼らは恐ろしい敵の侵攻から解放されたこと、第二に、かつての敵が信仰の友となったことである。それゆえ、この時から聖人の言葉はさらに大きな敬意をもって受け入れられるようになり、彼の命令はすべて実行されるようになった。そして、この都市だけでなく、周辺の他の都市もまた、聖なる信仰によって啓蒙されたのである。

しかし、聖パンクラティオスが新たに信仰に導かれたキリストの羊の群れを導いて過ごした長い年月が過ぎた後、そこに残っていた異教徒のうち、特に悪意に満ち、迷いから抜け出そうとしない者たちが、彼らの首領アルタガストと共謀し、好機を伺って密かに神の僕に襲いかかり、石で打ち殺してしまった。　こうして、キリストの目撃者であり、使徒たちの後継者である聖パンクラティオスは、善き業に励み、殉教者としてその生涯を閉じ[4971]、聖なる使徒たちと共に、主であるキリストの御前に進み出て、果てしない永遠の歳月にわたり、主と顔を合わせて仰ぎ見るようになった。

コンダク、第4声：

輝かしいタウロメニオンの星よ、パンクラティオよ、あなたは星として現れ、キリストのために聖なる殉教者となった。今や御前に立つあなたは、あなたを崇める者たちのために祈り給え、祝福された方よ。

尊者パテルムフィオスとコプリオス、および彼らと共にいた平信徒アレクサンドロスの生涯と殉教

記念日：7月9日

皇帝ユリアヌス[4972]は、当初はキリストを信じていたが、後に悪魔の働きによって再び異教へと背き、サタンの子となった後、ペルシャとの戦争へと出陣した。　ペルシアへの道中、彼は多くの聖人の血を流し、アンティオキアに滞在中に、同地の二人の長老、エウゲニオスとマカリオスを捕らえた。彼らは長期間にわたる拷問を受けた後、彼によってモーリタニアへ流刑に処された。　当時、エジプトの砂漠には、パテルムフィウスとコプリウスという二人の敬虔な修道士が住んでいた。彼ら

[4971] 聖殉教者パンクラティオスの死は、1世紀末か2世紀初頭に起こった。その聖遺骨は現在、ローマにある、聖パンクラティオスに捧げられて建てられた郊外の教会に安置されている（西方の教会では5月12日にその記念日が祝われる）。
[4972] ユリアヌス「背教者」皇帝は、361年から363年まで在位した。

は完全に心を一つにし、共に神に仕えていた。　パテルムフィウスは年長であり、修道生活における功績もより豊富で、徳も堅固であった。一方、コプリウスは彼より年下であり、修道生活においてまだ完全に定着しておらず、パテルムフィウスを師であり霊的指導者として仰いでいた。　彼らが拷問を受ける前に、コプリイはパテルムフィイに、ある夜、夢の中で見た次の幻視について語った。

「私は見たのだ」と彼は言った。「天が開き、杖を手にしたある光り輝く男が、私に向かって歩いてくるのを。それから、反対側から彼に向かって、火を灯し、周囲に煙をまき散らす黒い人物が近づいてくるのを見た。その黒い人物は手を伸ばして私を掴んだ。　煙の中に身を置いた私は、極めて悲惨な状態にあり、四方八方から危険が迫っていたが、あの光り輝く男は私から遠く離れていった。その時、天から声が響いた。「この人の実りは引き裂かれるが、その後、再び善い行いに用いられるだろう」。この幻視の後、私は戸惑いながら目を覚ました。

「この夢は良くないぞ！」とパテルムフィウスは言った。「お前が、生ける神から背を向けてしまわないか、心配だ。」　ほら、罪深い皇帝ユリアヌスはキリストを否み、神の教会に対する迫害を始めた。私たちもまた、苦難にさらされることになるだろう。だから、わが子よ、苦難を恐れて、あるいは報いの約束に惑わされて、キリストを否んではならない。神を畏れ、その戒めを心に留め、勇敢であれ。

この幻視からしばらくして、ユリアヌス皇帝は大軍を率いてエジプトにやって来た。エジプトの砂漠には多くの隠者が住んでいると聞きつけ、彼は兵士たちを派遣し、見つけた者をすべて捕らえるよう命じた。　そこで、前述のパテルムフィウスとコプリウスという二人の長老が捕らえられ、拷問官のもとへ連行されて尋問を受けた。ユリアヌスは尊者パテルムフィウスにこう尋ねた。

「お前はいくつだ、老僧よ？」

すると、彼はこう答えた。

「この地上の仮の生涯は、すでに七十五年になります。」

コプリウスに目を向けて、皇帝は言った。

「さて、若い方、君はいくつだ？」

コプリヤは答えた：– 私は生まれつき四十五歳です。

そこで皇帝は、老人のパテルムフィウスを牢獄へ連行するよう命じ、コプリヤを残してこう語りかけた。

「おい、人間よ、お前を待ち受ける苦痛を免れるために、神々に生贄を捧げよ。お前には何の益ももたらさない、欺瞞に満ちたキリスト教の信仰を捨てよ。」　私もかつてはキリストを信じていたが、そこから何の益も得られなかった。しかし今、不死の神々を信じることで、彼らから多くの偉大な恩恵を受けることができた。君もキリストを捨て、神々に犠牲を捧げることを勧める。そうすれば、私は君を私のそばに引き寄せ、多くの恩恵を与えるだろう。

コプリイは息を殺して皇帝の言葉を聞いていた。彼は我を忘れ、その破滅的な約束に心を奪われ、ユリアヌスにこう言った。

「陛下、あなたは私に素晴らしい教えを授けてくださいます！　あなたのような師であり、良き導き手に出会えたことは、この上ない幸いである。」

そして、彼は声を高らかに叫んだ。

「これからは私はユリアヌスの弟子であり、キリスト教徒ではない。かつて、欺瞞に満ちたキリスト教の信仰に囚われて誤っていたように、今こそすべてを正そう。私は神々に拝礼し、生贄を捧げるつもりだ。」

この言葉を聞いて、皇帝は大変喜び、こう言った。

「この男は、世界に永遠の命を与える古来の先祖の神々を知ったという点で、他の誰よりも幸せだ！」

この言葉を聞いた後、コプリイは頭を下げてアポロンという偶像に犠牲を捧げ、神から背を向け、悪魔を受け入れた。

聖なる天使たちは彼から離れ、悪魔たちは彼を取り囲んで喜び狂った。

コプリイがキリストから背いたことを知った聖パテルムフィウスは、深く悲しみ、彼のために泣き、嗚咽し、ひざまずいてこう祈った。

「主よ、力の神よ！　御自身の戒めを破ったこの罪人を滅ぼさないでください！　彼が若き日に、あなたへの愛から成し遂げた労苦を思い出してください。彼が律法を破る者の言葉に惑わされたからといって、御前から彼を拒絶しないでください。あなたの被造物を憐れみ、御手による御業を顧みてください！」

翌朝、皇帝は玉座に着き、コプリイは皇帝の右側に立っていた。彼は紫の外套をまとっていた。皇帝の命によりパテルムフィウスが尋問のために連れて来られたとき、コプリイは彼を見てこう言った。

「ほら、私の幸せを奪ったあの詐欺師がやってくる。」

そして、老人が法廷に近づくと、コプリウスは彼に向かって叫んだ。

「どうだ、パテルムフィウス？　見ろ、私は喜んでいるのに、お前は泣かざるを得ない。私はもはやキリスト教徒ではなく、ユリアヌスの信奉者だ。」

パテルムフィウスはこう答えた。

「ああ、お前が喜んでいるのはわかる。だからこそ、私はお前のことを思って泣いているのだ。」

すると皇帝は長老に言った。

「泣くのはやめろ。神々に犠牲を捧げ、彼と共に喜びなさい。」

パテルムフィウスは答えた。

「彼の喜びは一時的なものだ。今は喜んでいるが、悔い改めなければ来世では泣くことになるだろう。私は今泣いているが、来世では喜ぶことになる。彼はここでは紫の衣をまとって威張っているが、あちらでは裸になるだろう。今は満腹しているが、来世では飢えることになる。　私は今、飢えているが、来世では、私の神の栄光が現れる時に満ち足りるだろう。今、彼は地上の王であるあなたのもとで、栄光のうちにあなたの家臣の一人として仕えているが、あちらでは天の王の御前から追放され、悪魔たちのいる火のゲヘナに投げ込まれるだろう。

そう言い終えると、老人はコプリウスの顔を見つめ、こう言い放った。

「今や、お前は悪魔たちが喜び躍る膿と化している。天使たちはすでにあなたから背を向けたのだ。あなたは神を遠ざけ、悪魔を身にまとった。真の永遠の命を憎み、一時的で偽りの命を愛したのだ。　しかし、若き日の行いを思い出し、正気に戻り、不幸にものめり込んでしまった迷いを捨て、私のところへ来なさい、わが子よ！　再び神を愛し、あなたが罪を犯した御方の御前で悔い改めなさい。そうすれば、神は御自身の慈悲によって、あなたを受け入れ、あなたの罪を赦してくださるだろう。

長老がこう語り終えると、コプリイは心を打たれ、悔い改めて大声で叫んだ。

「ああ、私は不幸だ、不幸だ、不幸だ！」

それから、彼は右へ左へと揺れ動いた。やがて、気力を取り戻して空を見上げ、こう言った。

「今や私はもはやユリアノフではなく、再びキリストの者となった！私は神の戒めを破って罪を犯し、私の主から背を向けて不法を働いた。しかし、主よ、これほど重い罪を犯した私を憐れんでくださることにこそ、あなたの恵みが現れるのです。　人愛する主よ、どうか私に憐れみをお与えください。私は今や、実もなく、葉も枯れ果てた枯れ木のようなものです。不義な者たちの言葉が私を迷わせ、悪魔の嵐が私を飲み込みました。　蛇は私を嘲り、悪霊たちは私のことを喜び祝っています。天の星々は混乱に陥り、太陽と月は、私が神を悲しませたこの大いなる罪のゆえに、その光を隠し

てしまいました。　しかし、神の御使いたちよ、義人たちの御霊よ、そして全世界の住人よ、皆で集まり、私の堕落と、私の心の曇りを悼んでください。私は、義の太陽であるキリストを失い、私の中の信仰の光は消え、すべての霊的な美しさは私から奪われてしまったのです。

その後、コプリイは皇帝に向き直って言った。

「なぜ、悪魔よ、私を惑わしたのか？　なぜ、律法を犯す者よ、私をもお前の破滅へと引きずり込んだのか？」

そして、紫の衣を脱ぎ捨て、皇帝の足元に投げ捨てながら、こう言った。

「お前は、私に与えたその栄光を自分で受け取れ。私は、失ったものを取り戻す。私の神は、たとえ御自身の『雇い人』の一人としてであっても、私を再び造り変えてくださるだろう（ルカ15:19）。」

皇帝は、コプリイが再びキリストに帰依したのを見て激怒し、直ちに大きな鉄のフライパンを熱く焼くよう命じた。コプリイは、その命令を聞くと、こう言った。

「よくもそんなことをなさったものですね、皇帝よ！　私を焼き、四つ裂きにして、数多くの苦しみによって私の堕落を贖わせてください。しかし何よりもまず、私の舌を処刑してください。なぜなら、キリストを拒んだことで、私の舌が真っ先に罪を犯したからです。」

そこで皇帝は、小さな鉄のスプーンを熱し、それをコプリイの舌の上に載せるよう命じた。コプリイは、炭のように赤く熱されたスプーンを見て、聖パテルムフィウスにこう言った。

「父よ、私のために神に祈ってください。私を待ち受ける苦しみを考えるだけで、恐怖に襲われます。」

長老は彼にこう言った。

「耐えなさい、わが子よ、喜びをもって。そうすれば、主があなたを助けてくださいます！」

すると、スプーンがコプリウスの舌に触れたとき、それは彼には氷のように冷たく感じられ、コプリウスの舌には火傷は一切なかった。そこで皇帝は言った。

「この者たちは魔術師だ。彼らを熱した鉄板の上へ連れて行け。」

彼らが連行される際、コプリイは長老にこう言った。

「先生、私のために祈ってください。私はこの拷問を大変恐れているのです。」

老人は言った。

「恐れるな、わが子よ！　勇気を持ちなさい。幼い頃から荒野で自ら背負ってきた、神の栄光のために勇敢に成し遂げた断食の業や労苦を思い出せ。」　三十五日間、何も食べずに過ごしたことを覚えているか？　また、キリストに十字架につけられて（ガラテヤ2:19）、十字架の形に両手を広げたまま、十二日間も微動だにせずに立っていたことを覚えているか？　硬い岩や鋭い陶器の破片の上に横たわったことを、まさか忘れてしまったのですか？もしあなたが生涯を通じて、キリストのためにこれらすべてを喜んで耐えてきたのなら、なぜ今、たった一時間続くこの苦しみだけを恐れるのですか？

コプリイは、その言葉に勇気づけられ、安らぎに満ちた表情で、恐れもせず、老僧と共にフライパンの上へと向かった。彼らがその上に登り始めたとき、パテルムフィイは言った。

「コプリイ兄弟よ、目を天に向けなさい！」

コプリイは空を見上げ、こう言った。

「頭頂に露をまとった天使たちが近づいてくるのが見えます。父よ、お願いです。私がキリストを否定したからといって、彼らに私を怒らせないように伝えてください。」

こうして二人は鉄板の上に入り、まるで草原を歩くかのように歩き回り、拷問者を嘲笑った。というのも、鉄板はたちまち完全に冷めてしまったからである。これを見た拷問者はさらに激しい怒りに駆られ、殉教者たちを焼き殺すために、炉を可能な限り激しく燃え上がらせるよう命じた。　炉

が熱せられている最中、アレクサンドルという名の王の兵士の一人がコプリイに近づき、こう言った。

「コプリイよ！　当初は神々に生贄を捧げていたくせに、今はそうしようとしない。火による死を免れるためにも、再び我々に帰依せよ。」

聖コプリイは彼にこう答えた。

「ああ、もし私がキリストの前に犯した最初の罪が、神の御前で忘れ去られていれば！　たとえ海のすべての水と、すべての川、泉、そして天から落ちるすべての水滴を集めたとしても、それだけでは私の罪の汚れを洗い流すには不十分だろう。しかし、私は、人を愛する私の主の慈悲を絶望することはない。

コプリイの言葉に心を動かされたアレクサンドルは、こう言った。

「私も、あなたが仕えるあの王の戦士になりたいのです！」

そこでコプリイは彼に真の信仰を教え、キリストへと導いた。

炉が燃え盛るほどに熱せられ、敬虔な殉教者たちがその中へと入っていったとき、アレクサンドルは彼らに続いてこう言った。

「私もあなた方と一緒に行きます、祝福された父たちよ！キリストのために、私を炉に入れてください！」

彼らは彼を両脇から支え、共に歩み始めたが、やがてアレクサンドルは彼らの手から抜け出し、一人で先へ進んだ。彼らが炉の入り口に近づくと、炉の中から大きな炎の塊がアレクサンドルに向かって噴き出したが、彼を焼くことはなかった。アレクサンドルはその炎に向かってこう言った。

「もしあなたが神の御命により、私を焼き尽くすために現れたのなら、この罪人を焼き尽くせ！」

その言葉を聞いた炎は二つに分かれ、かつて紅海で水が分かれたように（出エジプト記第14章）、彼の進む道を真ん中で開いた。そしてアレクサンドルは炎に傷つけられることなく炉の中に入り、そこで神の天使たちを見て、彼らにこう言った。

「お願いです、主よ、この罪深い私を救ってください！」

天使たちは答えた。

「我らは、あなたを救うために、神からここに遣わされたのです。」

そして彼らは彼の魂を主のもとへ導き、その死体は火の中にあっても全く無傷のまま残った。彼の後に、尊い父たちパテルムフィウスとコプリウスもまた、火の害を受けることなく炉の中に入り、アレクサンドルの遺体のそばに留まりながら、神を賛美した。

炉の火が消えると、聖人たちは火による被害を全く受けず、生きたまま無傷で皇帝のもとへ連れ出され、聖アレクサンドルの遺体もまた火による損傷を受けることなく運び出され、そこから素晴らしい香りが漂っていた。皇帝は驚きながらこう言った。

「我らの神々は偉大だが、キリストなど取るに足らない！」

その後、皇帝は再び聖人たちに偶像への礼拝を強要し始めた。すると、尊者パテルムフィウスは彼にこう言った。

「あなたは神の御名を栄光させるためではなく戦いに赴くのだから、生還することはなく、致命傷を負い、恐ろしい死を遂げるだろう。」

すると皇帝は激しく怒り、彼らを剣で斬り殺すよう命じた。

そして聖人たちは、都市から処刑場へと連れ出された。そこで彼らは、最期の瞬間を迎えようとして神に祈りを捧げた。すると、天から声が響き渡り、その声はパテルムフィウスを称え、コプリウスを赦し、二人を永遠の安息へと招いた。

そこで彼らは喜びをもって剣の下に頭を差し出し、主のために自らの命を捧げて息を引き取った。

一方、ペルシャとの戦争に出陣した不信心なユリアヌスは、ペルシャ軍に敗北し、聖パテルムフィウスが予言した通り、自国へは戻らなかった。

聖なる殉教者パテルムフィウスとコプリウス、そして彼らと共にいた聖アレクサンドロスの死は、6月の9日に訪れた[4973]。 当時、ローマ人たちの支配者であったのは法に背く者ユリアヌスであり、キリスト教徒たちの支配者であったのは、私たちの主イエス・キリストであった。主には、父と聖霊と共に、今、そして常に、そして世々限りなく、栄光と誉れと権威がある。アーメン。

聖パテルムフィオスの記念日

記念日：7月9日

コプリウスが伝えるところによれば、パテルムフィウスは当初、偶像崇拝者であった。彼は盗賊団の首領として、盗みを働き、さらには埋葬された者から衣服を剥ぎ取るなど、あらゆる悪行や忌まわしい行いを犯し、その悪行の噂はエジプト全土に広まっていた。　彼が神に立ち返ったのは、次のような理由によるものであった。

ある夜、彼は神に捧げられた処女が住む家の屋根に登った。屋根を壊してそこから家に入り、企んでいた悪行を成し遂げようとしたのである。しかし、どんなに頑張っても屋根を壊すことはできず、疲れ果ててそこで眠り込んでしまった。

夢の中で、彼は王の衣装を身にまとった、ある光り輝く男性を見かけ、その人物は彼にこう言った。

「これからは悪行を止めよ。人の血を流すのをやめ、盗みを働き、その他の不法行為を犯すのをやめよ！ 悔い改め、神に喜ばれる行いを始めよ。天使の奉仕を引き受け、残りの人生を徳をもって過ごせ。そうすれば、私はお前を我が軍団の指導者、そして君主とする。」

パテルムフィウスは、直ちに熱意を持ってこれらの命令を実行すると約束した。すると、現れた者は彼に修道士たちからなる一隊を見せ、彼らを率いるよう命じた。

この夢が続いている間に、夜が明け、日の光が差し込んだ。ある乙女が家の屋根に上がると、そこで眠っている人を見て、大いに恐れた。一方、パテルムフィウスは眠りから飛び起き、目の前に立っている乙女を見て、ある種の呆然とした状態と狂乱に陥った。　乙女が彼に「あなたは誰で、どこから来て、どのような目的でここに来たのか」と尋ね始めたが、彼は彼女の質問には何も答えず、ただキリスト教の教会がどこにあるか教えてほしいと頼んだだけだった。乙女は、目の前で起こっていることが神の御業であると悟り、彼を教会へ連れて行き、長老たちに紹介した。

長老たちを見ると、彼は彼らの足元にひれ伏し、涙ながらに、自分をキリスト教徒にしてくれ、悔い改めの道へと導いてほしいと懇願した。しかし、長老たちは彼を知っていたため、その言葉に驚き、信じようとはせず、彼の願いには狡猾さと欺瞞しか見出せなかった。　しかし、彼が泣き出し、執拗に懇願し続けたため、長老たちは彼にこう言った。

「もしお前が完全に悪行を捨て、善き生活を送り、善行を積むなら、我々はあなたをキリスト教の共同体へ受け入れる。」

彼は、彼らが命じることは何でも果たすと約束し、そこで長老たちは彼に「[4974] 」の宣教を行い、数日後に彼に洗礼を授けた。　洗礼を受けた後、パテルムフィウスは長老たちに、救いへの道を歩み続けるために守るべき戒めを何か与えてほしいと願い出た。そこで長老たちは、詩篇第1篇の最初の3節を暗唱するように彼に教えた。彼はその節を深く噛みしめ、こう言った。

「これだけで、私の救いには十分だ。」

[4973] 聖パテルムフィウスおよび聖コプリイの両聖殉教者の殉教は、4世紀後半に起こった。

[4974] 宣教に関する注記については、7月8日の大殉教者プロコピオスの伝記を参照のこと。

洗礼を受けてから3日後、彼は荒野へと向かい、そこで長い時間を過ごし、昼夜を問わず祈りと涙に明け暮れ、そこに生えている草の根を糧として過ごした。その後、彼は教会に戻り、その3節を暗唱するだけでなく、実際に実践するようにもなっていた。　一方、長老たちは、彼に起こったこの好転と、その並外れた節制ぶりに驚き、　彼を自分たちのそばに留めて読み方を教えようとしたが、彼は彼らと一週間過ごした後、再び荒野へと去り、そこで七年間を過ごした。その間、もはや根や草ではなく、週に一度神から送られてくるパンを糧としていた。　毎週日曜日になると、彼は目に見えない手によって届けられた清らかなパンを目の前に見出し、感謝の念を込めてそのパンを口にすると、次の日曜日までは再び何も食べずに過ごしたが、飢えによる衰弱を感じることはなかった。神は彼に書物を理解する賜物も授けられ、彼はすべての聖書を暗記していた。

七年が経ち、神の御心により、尊者パテルムフィウスは再び荒野から人里へと戻り、多くの人々の益となり、その禁欲的な生活によって多くの人々を惹きつけた。彼の弟子たちは、あらゆる点で彼の美徳を模範とした。

ある青年が、彼の弟子になりたいと願って彼の元を訪れた。聖人は彼を受け入れ、羊毛の粗衣、ククーリャ、そして修道士の間で通常「ミロート」または「ミロタール」と呼ばれる山羊の皮でできた修道服を彼に着せ、神に喜ばれる修道生活について教えた。

また、パテルムフィオス聖人は、病人を訪ね、その最期に立ち会い、亡くなった者を埋葬することを習慣としており、自らその遺体に葬送の衣を着せることを怠らなかった。聖人が死者の埋葬にこれほど熱心に取り組んでいるのを見て、あの若者は彼にこう言った。

「父よ！私が死んだ時、あなたに私を着せてもらい、葬ってほしいのです。」

父はこう答えました。

「そうしよう、我が子よ。お前が『もういい』と言うまで、私はお前を着せ続けるつもりだ。」

まもなく、その若い修道士は息を引き取った。老僧は、慣例に従って彼に葬送の衣をまとわせ、顔を覆うと、こう言った。

「子よ、これだけで埋葬には十分か、それとも何か追加すべきものがあるか？」

すると、亡者は皆の耳に聞こえるように答えた。

「これで十分です、師よ！」

その場に居合わせた者たちは皆、この奇跡に驚き、長老を奇跡を行う者として称賛し始めた。しかし、長老は彼らの称賛に耐えきれず、死者の埋葬が終わるとすぐに、誰にも知られぬよう密かに荒野へと去っていった。

しかし、しばらくして、長老は再び、修道生活において指導者であった兄弟たちを訪ねるために戻ってきた。その時、神から、ある村の近くにある特別な隠遁者のケリアに住む一人の兄弟が死の病に倒れていることが啓示され、尊者は急いで彼を訪ねた。　そこへの道のりはかなり遠かったため、聖人は道中で遅れてしまった。すでに日が沈みかけており、聖人はこの時間帯、つまり夜間にその村へ入ることを望まなかった。それは、*「光があるうちに歩みなさい。そうすれば、闇に包まれることがない」*（ヨハネ12:35）という主の御言葉、そして　*「昼間歩く者は、つまずくことはない」*（ヨハネ11:9）。そこで、信仰の力に導かれて、聖人はすでに半分ほど沈みかけていた太陽に向かって、次のように語りかけた。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、太陽よ、その道に留まり、私がその村に入るまで待て。」

すると、すでに半分ほど沈みかけていた太陽は止まり、聖人が集落に入るのを待つ間、半分だけ光を放ち続けた。その集落の住民たちは、太陽がこれほど長く沈まないのを見て驚き、集落の中央に集まってその奇跡を見つめていた。　しばらくすると、彼らは砂漠から村へと歩いてくる聖パテルムフィウスを見かけ、彼に出迎え、太陽が奇跡的に止まった理由を尋ねた。彼は彼らにこう言った。

「あなたがたは、福音書に記され、信仰を持つよう教えている主の言葉を覚えていないのか。*『もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば』*、山をも動かすことができる（マタイ17:20）。信仰によって山を動かすことができる者は、その同じ信仰によって、太陽の運行を止めることもできるのだ。」

彼がそう言うと、皆は、彼が村に入ったまさにその瞬間に太陽が隠れたのは、彼のために太陽が止まったのだと悟った。そこで皆は畏敬の念を抱いて長老にひれ伏し、彼が病の兄弟のもとへ向かうと、その後をついていった。　彼の小部屋に入ると、尊者は彼がすでに主のもとで息を引き取っているのを見つけた。尊者は祈りを捧げ、彼のそばに歩み寄り、その体を口づけして言った。

「兄弟よ、どちらがあなたにとってより喜ばしいか。私たちのもとを去ってキリストと共に生きるか、それともまだ肉体を持って私たちと共にいるか。」

すると、死者はたちまち生き返り、目を開き、寝台から起き上がって言った。

「なぜ私を生き返らせたのですか、父よ？　私にとっては、キリストのもとへ去り、彼と共にいるほうがよいのです。もはやこの肉体に生きることは望みません！」

すると、長老は彼にこう言った。

「それでは、安らかに眠り、私のために祈ってください。」

そして、その人は横になり、再び息を引き取った。

その場に居合わせた者たちは皆、恐怖に襲われ、こう言った。

– まことに、この方は神の人である。

一方、尊者は、亡くなった者の遺体を埋葬の準備を整えると、一晩中詩篇を歌い続け、朝になってその遺体を尊厳をもって大地に委ね、その場を去った。

またある時、聖人は、同じく死の床にある別の兄弟を訪ねた。病人が自分の罪のゆえに死を恐れているのを見て、聖人は彼に言った。

「なぜ、わが子よ、あなたは旅立ちの準備ができていないのか。私には、あなたの良心、すなわちあなたを責める声が、あなたと共にそこへ行こうとしているように思える。」

病人は言った。

「お願いです、父よ、私のために神に祈ってください。悔い改めるための少しの時間を与えてくださるよう。」

すると、長老はこう答えた。

「今になって悔い改める時間を求めているが、過ぎ去った日々はどうだったのか？ 修道生活の中で、お前は何を成し遂げたというのか？ かつての傷を癒やすどころか、そこに次々と新たな傷を加えてきたではないか。」

しかし、病人は涙ながらに、長老に主のために祈ってほしいと懇願し続けた。そこで長老は言った。

「もしこれから、悪を次々と重ねることをやめれば、我々はあなたのために祈ろう。人を愛する主は慈愛深く、忍耐強く、あなたの罪を清めるための一定の期間を与えてくださるだろう。」

そう言うと、彼は祈りを捧げるためにひざまずき、祈りが終わると立ち上がって病人に言った。

「主は、あなたがこの地であと三年生きられるよう許してくださる――ただ、真の悔い改めを捧げなさい！」

そして、その手を握ると、聖人は彼を健やかな姿で立ち上がらせ、共に荒野へと連れ去った。

そして三年後、彼は再びその病人と共に兄弟たちの元へ戻り、彼を「神の天使」として紹介した。　多くの修道士たちが、聖人の甘美な言葉を聞くために集まり、そこで聖人は悔い改めの実りについて説いた。その語り合いは早課の時間まで続き、その最中、三年間の悔い改めを終えたその兄弟

は、まるでうたた寝をしたかのように、病気も恐れもなく、あたかも甘い眠りに落ちたかのように、その魂を神の御手に委ねた。

また、尊者パテルムフィイについては、何度もナイル川の水面を歩いて渡ったとも伝えられている。ある時、数人の兄弟たちが一つのケリヤに集まり、扉を閉めて魂の救いについて語り合っていたところ、聖人はかつて主キリストが使徒たちの真ん中に立たれたように、彼らの真ん中に現れた。このように、神の恵みに満ちた尊者パテルムフィウスは、奇跡を行うことに極めて優れていた。彼は、長年にわたり神に奉仕した後、主のもとへ召された[4975]。

尊者コプリイの記念日。

記念日：7月9日

聖コプリイは、聖パテルムフィウスの生前の目撃者であり、その奇跡を語り継いだ人物であり、長老の位にあり、また神から奇跡を行う恵みも授かっていた。彼は同じエジプトの地に暮らし、人々の様々な病を癒やし、悪霊を追い出していた。　ある日、彼は集まった兄弟たちの魂の益となるよう、聖パテルムフィオスの生涯や他の聖人たちについて語っていたが、ある兄弟は彼の話を信じず、耳を傾けずにうたた寝をしてしまった。　ところが、眠りの中で、彼は聖コプリオスの手に、金色の文字で書かれた本があるのを見た。聖コプリオスはその本から、兄弟たちに何かを語っていたのだ。その傍らには、白髪に彩られた、威厳ある風貌の、光に包まれた男が立っていた。その男は、うたた寝している兄弟を威圧的な眼差しで見つめ、こう言った。

「なぜ、語られていることを信じず、耳を傾けもせずにうたた寝をしているのだ！」

その兄弟は、夢に恐怖を覚え飛び起きると、すぐに他の者たちにその夢の内容を語り、それ以来、聖コプリオのすべての説教を信仰と注意を込めて聞くようになった。

ある日、聖人のところには、魂の救いに関する説教を聞くために訪れた巡礼の修道士たちがいた。その時、ある村人が砂で満たされた器を持ってケリアの扉に近づき、長老が説教を終えるのを待ち始めた。兄弟たちはその男と砂を見て、長老に尋ねた。

「この砂は、何のために持ってきたのですか？」

長老はこう答えました。

「わが子らよ、神の御業を自慢しているように見られず、また自らの労苦に対する報いを失わないためにも、本来ならこのことについて語るべきではないのだが。　しかし、あなたがたが私たちのもとへ、長く困難な旅路を敢行されたことがわかるので、それを隠すことはせず、あなたがたのためを思って、神が私たち罪人を通して成し遂げようと御心になさった御業を語ろう。　私たちの近くにあるその村の土地は、非常に不毛であり、畑に蒔いた穀物からは、蒔いた分さえもかろうじて収穫できる程度でした。ある種の虫が若芽を食い荒らし、穂が熟す前にかじり取っていたのです。　その村の住民は皆、偶像崇拝者でしたが、神の恵みにより、私たちは彼ら全員を聖なる信仰へと導き、洗礼を授けました。キリスト教徒となった彼らは私たちの元を訪れ、キリストなる神に彼らのために祈り、その土地に豊穣をもたらしてくださるよう懇願し始めました。私たちは彼らにこう言いました。

「私たちは祈りますが、あなた方は神に対して揺るぎない信仰を持たなければなりません。」

すると彼らは、揺るぎない信仰を保つと約束し、私たちの罪深い足が踏むその土地の砂を懐に詰め、主の御名によってこの砂を種として祝福してほしいと私に懇願し始めました。私は彼らにこう言いました：

「あなたがたの信仰どおりになりますように！」

[4975] 聖パテルムフィウスの殉教は4世紀に起こった。

彼らは家に帰ると、その砂を穀物の種と混ぜ合わせ、すべてを畑に蒔いた。すると、エジプトのどの地域でも得られないほどの量の穀物が実った。それ以来、毎年、農民たちが私たちのもとを訪れ、祝福を求めて砂を持ってくる。彼らの信仰は裏切られることなく、彼らは常に豊作に恵まれている。

聖コプリイは、ある時、人々の前でマニ教の異端者[4976]と信仰をめぐって論争を繰り広げた。しかし、謙虚で穏やかな言葉だけでは、口達者で高慢な相手を説得できないと悟ると、自らの信仰の正しさを行動で示そうと決意した。　彼は大きな火を焚くよう命じ、異端者をその場へ呼び寄せ、どちらの信仰が正しいかを明らかにしようとした。「燃え尽きない者が、正しい信仰を持っているのだ」と聖人は言った。するとマニ教徒は彼にこう言った。

「まずお前が入ってみろ！」

聖人は火の中に入ったが、炎は彼の前で両側に分かれ、彼は30分もの間、まるで草の上にいるかのように炭火の上に立ち、何の害も受けなかった。彼は無傷で炎の中から出てきた――火は彼の衣服さえも焦がさなかった。　これを見た民衆は大変驚き、キリスト神を賛美した。一方、異端者は中に入ることを拒んだが、民衆は彼を炎の中に投げ込み、彼はたちまちそこで燃え始めた。しかし、全身が焼け焦げた状態ながらも、彼はなんとか火の中から飛び出し、逃げ出した。民衆は彼を捕まえると、叫んだ。

「異端者を焼き殺せ！」

聖コプリイは民衆の動揺を鎮め、炭のように焼け焦げた異端者を、生きたまま解放した。

長老は自分の庵の近くに小さな庭を持っており、その庭で穀物や果物を育て、訪ねてくる旅人の糧としていた。　ある偶像崇拝者が、夜中にこの庭に忍び込み、持ち運べる限りの果物を盗み、その一部を家に持ち帰ると、かまどで火にかけて煮始めた。しかし、三時間以上が経過し、多くの薪が燃え尽きたにもかかわらず、果物は煮えるどころか、かまどの水さえも温まらなかった。　この異常な出来事に強盗は深く驚愕し、自らの罪を自覚するとともに、キリスト教徒の中に働くキリストの力を悟った。彼は盗んだ果物すべて、さらには鍋の中身までも持ち出し、長老の足元に運び、自分が犯した窃盗を告白した。　その際、彼は長老に許しを請い、自分をキリスト教徒にしてくれるよう懇願した。ちょうどその頃、長老のもとには多くの巡礼者が滞在していたが、彼らは皆、その男がキリストへと奇跡的に回心したことを喜び、その恵みを味わい、神に感謝を捧げた。　これらの奇跡に加え、尊者コプリイはキリストの恵みにより、他にも多くの奇跡を行い、安らかに息を引き取った[4977]。彼は、私たちの主イエス・キリストの御国において、尊者パテルムフィイと同等の地位に与るにふさわしい者とされ、主イエス・キリストには、父と聖霊と共に、永遠に栄光と誉れがある。アーメン。

我らの聖なる父、エデスの主教テオドロスの行伝

記念日：7月9日

[4976] マニ教――キリスト教とペルシャのゾロアスター教の原理が混ざり合った異端の偽教義。マニ教の創始者は、ペルシャの魔術師マネスであった。マネスは、太古の昔から「善」と「悪」という二つの独立した王国が存在し、それらが絶えず互いに争っている、と説いた。　また、マネスの教えによれば、人間もまた「光」と「闇」という二つの要素の結合から成り立ち、いわば「善の魂」と「悪の魂」という二つの魂を持ち、それらが絶えず互いに争っているという。――マニ教徒たちは生活において極めて禁欲的であり、独身生活と絶え間ない断食を説いた。――マニ教は3世紀から4世紀にかけてかなり広く普及していた。

[4977] 聖コプリウスの没は4世紀のことである。

エデッサの町[4978]には、シメオンという名の男がおり、妻のマリアがいた。 二人はともに敬虔で、神を畏れ、その戒めを聖なる心をもって守っていた。彼らは裕福であったため、多額の施しを行っていた。彼らには娘が一人しかおらず、男の子を授かりたいと切に願っていた。そこで、彼らは神の教会を巡り、断食し、祈りを捧げ、神に息子を授けてくださるよう懇願した。

ある日、聖なる四旬節、すなわち大斎の第一週の土曜日――聖大殉教者テオドロス・ティロンの記念日が祝われる日――に、二人は供物を携えて聖使徒教会の早課に参列した。 礼拝の最中、二人は同時に何らかのうたた寝に襲われ、それぞれ別々に、ある幻視を授かった。彼らは、聖使徒パウロが聖大殉教者テオドロス・ティロンの傍らに立っているのを見た。聖大殉教者は、シメオンとマリアを指さしながら、聖使徒にこう語った。

「主の弟子よ、この人々は、男の子を授かるよう神に熱心に祈っている。どうか神に彼らの願いが叶うよう取り成し、また、教会への献金や施しが報いを受けるよう祈ってほしい。」

すると、彼らは使徒が彼らの腕に男児を預けながら、こう言うのを見た。

「ほら、もうあなたたちには息子がいます！」

すると、大殉教者はこう言いました。

「その名をテオドールと名付けよ。まことに、この赤ん坊は神からの賜物となるであろう[4979]。」

この幻視の後、早課が終わると、二人は互いに自分の見た幻を語り合い、二人とも全く同じものを見たことに驚嘆した。彼らは、この出来事を息子の受胎の前兆と見なし、神に感謝を捧げ、喜びながら家路についた。 マリアが身ごもったとき、彼女は、聖霊の器となるべき者を胎内に宿している者として、完全な節制を守った。

時が満ちると、彼らには息子が生まれ、大殉教者の意志に従ってテオドールと名付けられ、聖なる洗礼によって聖なる者となった。 子供は成長し、両親は少年を学校へ通わせた。しかし、その少年は学習に向いていないことが判明した――記憶力が弱く、授業の内容をなかなか覚えられなかったのだ。しかし、これには神の摂理の特別な働きがあった。神は、その少年に知恵が人間によってではなく、主の恵みによって授けられることを望んでおられたのである。 少年は両親や教師から頻繁に叱られ、同級生たちからも嘲笑されていた。やがて彼は、神に導きを求めるべきだと考えるようになった。彼は頻繁に教会に通い、熱心に祈るようになった。

ある日、神の啓示により、日曜日の聖体礼儀の前に彼は教会へ行き、祭壇に入って聖座の下に身を隠した。誰もそれに気づかなかった。司教が聖なる礼拝を執り行い始めたが、少年テオドールはその場所で眠りにつき、礼儀が終わるまで眠り続けた。 そして、彼は夢の中である幻を見ました。彼は、どうやら自分と同年代と思われる、太陽のように輝いている少年を見ました。その少年は彼に蜂蜜の汁を飲ませ、牧者の杖を手に渡して、彼を祝福しました。この幻を見た後、テオドールは眠りから飛び起き、祭壇の下から出てきました。 司教と祭壇にいた者たちは、彼を見て驚き、どうしてそこにいるのかと尋ねた。彼は自分のこと、そしてどのような幻を見たかをすべて彼らに語った。司教は畏敬の念を抱き、直ちにその少年を自身の聖職者団に加え、朗読者としての職に就かせた。それ以来、テオドールは聡明になり、学業に秀で、知性において同年代の者だけでなく、年長者をも凌駕するようになった。

[4978] エデッサ（現在のウルファ）は、メソポタミア北部のユーフラテス川沿いに位置していた。――4世紀、聖エフレム・シリンによって、ここに神学学校が設立された。641年、 エデッサはアラブ人に征服された。1098年にはバルドゥイン伯爵がこれを占領し、エデッサ公国の首都とした。1144年にはトルコ人に征服され、それ以降、支配者が次々と変わり、1637年にようやくトルコの支配下に入った。

[4979] テオドロスはギリシャ語で「神から賜られた」という意味である。

彼は神学と世俗の学問の両方で優れた成績を収め、当時エデッサで著名な哲学者ソフロニオスから教えを受け、短期間のうちにすべての学問を習得した。

テオドールが十八歳になった時、父シメオンは主のもとへ召され、その一年後には母マリアもまた主のもとへ旅立った。テオドールは両親から受け継いだ莫大な財産を貧しい人々に施し、既婚の姉にその一部だけを分け与えた。 この姉にはヴァシリーという息子がおり、彼はエメッサの町で司教の位に就き、この聖テオドールの伝記の著者となった。

両親の死後、二十歳の時、至福のテオドロスはエルサレムへと向かった。主の聖墓に礼拝を捧げ、すべての聖地を巡った後、 彼は当時アッバ・ヨハネスが統率していた聖サヴァの修道院に到着し、そこで天使のような生活を送り、断食の修行に励み、修道者の服従に伴うあらゆる労苦に耐え、12年間にわたり倦むことなくあらゆる修道院の奉仕に参加した。 その後、彼は修道院長に懇願し、別室のケリヤで一人きりで沈黙を守りながら過ごすことを許してもらった。そのケリヤを与えられると、彼は沈黙の中で神に仕えながら時を過ごした。彼の食事は、日没後に与えられる小さなパンの切れ端と、わずかな水だけであり、それも毎日ではない。 時には二、三日も食事を摂らず、何度も長い期間、ヨルダンの荒野へと赴き、そこでパンも水もなしに昼夜を過ごし、まるで肉体を持たないかのようにひたすら祈り続け、その後また自分の独房へと戻ってきた。 彼は24年間、このような断食の修行に身を捧げた。そして、その苦行の生活について、ある親戚――エデッサの町出身のミハイルという名の青年――が耳にし、テオドールの美徳に倣いたいと願い、彼のもとを訪れた。 テオドールは彼を受け入れ、修道服を着せ、弟子、断食の仲間、そして同志として傍らに置いた。 ミハイルは籠や皿、その他の品々を編むことを学び、師の指示に従ってそれらを聖地エルサレムへ持ち込んで販売し、その売り上げを自分の霊的父であるフェオドールに持参した。フェオドールは、修道院から無償で食事をいただくことのないよう、その金を修道院へ送金していた。

当時、パレスチナとフェニキアは、もはやギリシャの王たちの支配下にはなく、サラセン人の支配下にあった[4980] 。というのも、その地の住民たちの罪に対する神の許しにより、彼らはサラセン人の王たちに服従させられていたからである。キリスト教徒たちは、多額の貢ぎ物を納めることによってのみ、命と信仰の自由を守っていた。 しかし、主は同時に信者たちを慰められ、聖なる墓の場所でしるしと奇跡を行われ、それによってキリストを冒涜するアガリアンたちの口を封じられた。多くのアラブの長老たちが、キリストの聖墓を見るために遠くからエルサレムを訪れ、そこでキリスト教の総主教やその他の聖職者たちに敬意を表し、エルサレムの住民たちには様々な恩恵を与えた。その頃、サラセン王アドラメレクは、妻のセイダと共に、バビロン[4981] からエルサレムへと向かい、キリストの聖棺と、その周囲で起こっていた奇跡を目撃しようとした。 アドラメレクは温厚な人物であり、キリスト教徒を傷つけることを望んでいなかった――彼らから貢ぎ物を徴収してはいたものの。――彼は学識ある人々と信仰について語り合うことを好み、その際、自らの民の考え方に沿って語っていた。 彼がまだ聖都に滞在していた頃、聖テオドロスの弟子であり親族でもある至福のミカエルは、彼の命により、手作りの品を売るために聖都を訪れ、市内にあった聖サヴァ修道院の宿舎に滞在していた。 まず彼は、キリストの聖棺と聖ゴルゴタ[4982] に参拝し、その後、手作りの品を売りに

[4980] サラセン人――アラビアの住民。当初、この名称は遊牧する盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの名称をイスラム教徒全般に転用した。

[4981] バビロン――世界最古の都市の一つで、クシュの息子であり、ハムの末裔であるニムロドによって建設された（創世記10:6–10）。 バビロンは、ペルシャ湾からほど近いユーフラテス川の両岸に位置していた。バビロンはインドとフェニキアを結ぶ主要な交易路上にあり、そのため、海路・陸路を問わず極めて広範な貿易を行っていた。

[4982] ゴルゴタは、エルサレムからほど近い場所（その北西）にあった山である。この山で、我らの主イエス・キリストは十字架にかけられた。「ゴルゴタ」はヘブライ語であり、我々の言語に訳すと「頭蓋骨」、「額」を意味する。 この山にそのような名称が付けられたのは、その形状が頭蓋骨に似ていたからか、あるいはユダヤ人にとって処刑の場として用いられていたからか。現在、この場所には聖墳墓教会が建っている。

市場へ出かけた。そこで、セイダ王妃の宦官に出くわした。その宦官は、美しい籠や皿を見て、その見事な出来栄えに驚き、彼にこう言った。

「若者よ、私について来い。お前の品々すべてに、良い値段をつけてやる。」

ミハイルは、無邪気な子羊のように彼の後を追い、あるエジプト人女性の家の玄関までたどり着いた[4983] 。宦官は女王に、ある修道士が非常に美しい品々を売っていると報告し、女王は直ちにその修道士を自分の元へ連れてくるよう命じた。　至福のミハイルが彼女の元に入ると、その邪悪な女は、若き修道士に対して不純な情欲を抱いた。彼は確かに顔立ちが美しく、堂々とした風貌をしていた。顎鬚がわずかに生え始め、絶え間ない断食のせいで痩せて青白かったが、それだけでなく、その端正な外見には、高潔な魂が持つ内面の美しさが映し出されていた。　彼をじっと見つめながら、女王は情熱に燃え上がり、彼が誰で、どこから来たのかと尋ね始めた。すると彼はこう答えた。

「私は聖サヴァ修道院の貧しい修道士です。」

女王は彼に言った。

「若き人よ、あなたが青白く痩せ細っているのがわかります。あなたを不憫に思い、何か良いことをしてあげたいのです。もし誰かの奴隷なら、あなたを解放して差し上げます。もし捕虜なら、身代金を払って買い戻します。もし病気なら、治して差し上げます。もし貧しいなら、あなたを豊かにして差し上げます。」

貞潔なミハイルは、彼女の媚びた言葉を聞いて、その悪意ある意図を見抜き、心を神に向け、霊の目を神へと向け、心の中で次のように祈った。

「おお、人を愛する主よ、捕らわれ人の救い主、絶望する者の希望よ！　あなたは、あなたの預言者ダニエルを獅子の口から救い出された（ダニエル書14:37–52）。どうか今この時、私の魂を飲み込み、生きたまま地獄へ引きずり込もうとするこの邪悪な雌獅子から、私をも救い出してください！」

それから彼は女王にこう言った：

「かつて私はこの世への愛に囚われていましたが、私の主キリストがその御恵みによって私をそこから救い出してくださいました。私は罪の奴隷でしたが、奴隷の姿をとられた私の主が、私を解放してくださいました。主は病んでいる私を見つけ、私の弱さを取り除き、私を完全に健やかにしてくださいました。　私は貧しくみすぼらしかったが、計り知れない富を持つ神の御子は、私のために貧しくなり、私に言い表せないほどの富を与えてくださった。それゆえ、私は今や何一つ欠けることがなく、あなたのものを求める必要もない。私には富と健康と自由があり、私の救い主の恵みによって、あらゆる恵みが豊かに与えられている。

「若者よ、もしあなたが私の友となれば、多くの恵みを享受し、多くの人々があなたを羨み、あなたは多くの人々を支配することになるだろう。」

聖ミカエルはこう答えました。

「私は、私を愛し、私のために御自身の命を捧げてくださった私の主キリストを愛しており、全霊を尽くして主を愛したいのです。私の友は、天の天使たちの位階と、地上で天使に等しい生涯を送ったすべての聖人たちです。彼らは言葉に尽くせない美しさと威光に輝いており、私はあなたと交わりを持つつもりはありません。」

すると、セイダ女王は彼を脅し始めた。

「もし私の望みを叶えなければ、お前の肉体を拷問にかけ、傷だらけにさせるつもりだ。」

修道士はこう答えた。

「私は主の御心に従おうと努めておりますが、あなたの意志には決して従うつもりはありません。もしあなたが私の肉体を苦しみや拷問にさらすとしても、それはかえって私の魂に永遠の至福を

[4983] 聖書の物語にも、同様の出来事への言及が見られる（創世記39:1–23）。

もたらすだけでしょう。知っておきなさい。約束で私をあなたの望みに従わせることなどできず、苦しみで私を脅かすこともできないのです。」

女王は言った。

「忌まわしい者よ！　あなたはどれほどの幸福を自ら手放しているのか！　なぜ私の望みを叶えてくれないのか？　私は美しくないのか？　私はあなたにとって愛らしくなく、情熱を掻き立てないというのか？」

聖人は答えた：

「お前は美しいどころか、極めて嫌悪すべき存在であり、醜く、卑劣だ。お前は愛されるに値するどころか、憎まれるべき存在だ！」

すると、不敬虔な女王は、並外れた怒りに満ちて、貞潔な修道士を地面に引きずり出し、容赦なく棒で打ち据えるよう命じた。彼女は長い間彼を苦しめた後、彼を縛り上げて王のもとへ送り、次のような手紙を添えた。

「この忌まわしい修道士は、下品な罵倒で私を侮辱する大胆さを見せた。もし彼を生かしておけば、私は死んでいるのを見ることになるだろう。」

王は手紙を読み、彼女を悲しませないためにその願いを叶えることに決めたが、まずは自らその修道士に会いたいと思い、彼を自分の元へ連れてくるよう命じた。

その高僧が王のもとに連れて来られたとき、彼は王や貴族たちに謁見する際の慣例通り、王の前にひれ伏そうとはせず、まっすぐに立ち、内なる気高さと敵への不服従を堂々と示した。王は怒りを込めて彼を見つめ、こう言った。

「傲慢な修道士め！　お前が犯したこの厚かましさについて、何か言うことはあるか？　だが、お前には言うことなど何もないだろう！」

殉教者はこう答えた。

「王には何よりもまず、三つの美徳が必要です。それは、神への畏れ、正義、そして罪人に対する慈悲深い寛容さです。」

その言葉を聞いて、王は落ち着きを取り戻し、ミハイルの縄を解くよう命じ、彼がどこから来たのか尋ねた。すると彼は言った。

「私はエデッサの町出身ですが、今は聖サヴァ修道院の修道士です。」

王が、どのような罪で告発されたのかと尋ねると、聖人はこう答えました：

「私には、ある有名な寓話が現実のものとなりました。ある人が、偶然、一瞥するだけで人を死に至らしめるバシリスクという蛇に出くわしました。そこから逃げようとしたところ、ライオンに出会い、一瞥だけで人を死に至らしめる毒蛇バシリスクといるよりは、ライオンと一緒にいたほうがましだと思ったのです。」

王はその寓話の真意と、彼の無実を理解した。王は、その若者の美しさと賢明さに好感を抱き、彼を説得してキリスト教の信仰を捨て、自分の信仰に改宗させようと考えた。

王には、学識豊かで雄弁なユダヤ人が一人いた。王は彼を呼び寄せ、その前で修道士に次のように語りかけた。

「お前の知性を見て、私はお前を憐れみ、その若さを慈しんでいる。だから、私の助言、いや命令に従え――キリストの教えから離れ、キリスト教の信仰を捨て、私の信仰に帰依せよ。そうすれば、お前は私の息子同然となり、私はお前をすべての公爵や支配者よりも高い地位に置き、私の全財産の管理者に任命してやる。」

聖ミハイルは、天を仰ぎ、心の底からため息をついて、こう言った。

「おお、キリストよ、わが王よ。たとえ数え切れないほどの苦しみを受けることになろうとも、私がわが神であるあなたから背くことなど決してあってはなりません。」

そして、アドラメレクにはこう言った。

「王よ！私は、父と子と聖霊、唯一不可分の神性のしもべです。私はそう告白し、その告白から決して離れることはなく、常にその中に留まり続けます！」

王は彼に言った。

「どうしたのだ？　つまり、お前は今のその取るに足らない身分にとどまることを好むというのか？」

聖人は答えた。

「この修道服は、陛下の王の衣装よりも、はるかに私を美しく飾ってくれます。」

王は言った：

「私は自分の書物をよく研究し、あなたがたが『福音書』と呼ぶキリスト教の聖書も読んだ。しかし、あちらにもこちらにも、結婚や肉食を忌み嫌うよう命じる戒めは見当たらなかった。」

聖人は答えた：

「キリスト教徒の生活には二種類あります――修道者の生活と平信徒の生活です。平信徒は結婚し、肉を食べることが許されています。彼らがキリストの他の戒めを聖なる心で守り抜く限り、そこには罪はありません。　しかし、この世を捨て、貞潔を保つことを誓った私たちにとって、結婚することはふさわしくありません。なぜなら、異邦人の師である使徒パウロはこう言ったからです。「*未婚の者は、主にどのように仕えればよいかを心に留めています。しかし、既婚の者は、この世のことに心を留め、妻にどのように仕えればよいかを考えています*」（Iコリント7:32–33）と語っています。また、結婚する者は「*よくしている*」が、結婚しない者は「*さらによくしている*」とも述べています（Iコリント7:38）。したがって、私たちは、唯一の主であるイエス・キリストに喜ばれたいと願って、独身という最善の生き方を選んだのです。　また、私たちは肉も口にしないが、それは肉を不浄だと考えるからではなく、自制のためである。パウロはこう言っている。「*神の国は、飲食ではなく、義と平和である*」（ローマ14:17）と、そして聖なる断食のような他の善行も同様である。

王は言った：

「パウロはあなた方を欺いたのだ！」

しかし、聖人はこう答えました：

「欺いたのではなく、迷いから解放し、*『神が御自身を愛する者たちのために備えておられるものは、人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない』*（Iコリント2:9）という恵みへの道を指し示したのです。」　もし王よ、あなたが本当に欺き手であり、反キリストの先駆者である者を知りたいと望むのなら、その欺き手とはムハンマドである。彼はサラセン族全体を迷わせ、さらにはペルシャにまでその不義の毒をまき散らしたのだ。

すると、王のそばに立っていたユダヤ人が聖ミカエルに言った。

「ところで、あなたのパウロは、ユダヤ人ではなかったのですか？」

聖人は答えた：

「彼は確かにユダヤ人でしたが、主の御命により、旧約の幕屋を廃止し、旧約の預言者たちが予言していた真の恵みを宣べ伝えたのです。」

ユダヤ人は言った。

「お前が一度も会ったことのないパウロから、どうして教えを受けることができたのだ？　むしろ私から学んだほうがいい。お前は私を見て、私の声を聞いているのだから。」

ミハイルは言った。

「もしあなたが彼と同じように教えるなら、私はあなたの言うことを聞く。しかし、もしあなたが彼の教えに反することを説くなら、私は蛇のようにあなたから逃げ去る。なぜなら、パウロは*『あなたがたが受け入れたこととは異なることを宣べ伝える者は、のろわれよ』*（ガラテヤ1:9）と言ったからだ。」

王は言った。

「なぜ預言者ムハンマドを認めようとしないのか？　彼はサラセン人、アラブ人、ペルシャ人たちに神について説教したのではないのか？　偶像を打ち砕き、徳のある生き方を教えたのではないのか？」

聖人はこう答えた。

「もし誰かが人を牢獄から連れ出し、別の暗い牢獄に閉じ込めたとしたら、それでその人に恩恵を与えたことになるだろうか？　ある闇から別の闇へと移すことで、その人を欺いたのではないのか？　あなた方のムハンマドも、まさにそうあなた方に振る舞ったのだ。しかし我々は知っている。光へと導くのは、ただ一つの真の、確かな道だけであることを――私が言うのは、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神への正しい信仰のことである。

王は言った。

「お前は自分こそ賢明で雄弁だと自負しているようだが、我々は二人、お前は一人だ。勝利は当然、我々の方にあるだろう。」

聖人は答えた：

「陛下たちは二人ではなく三人です。そして、キリストの力によって、あなた方全員がたった一人に打ち負かされるでしょう。」

王は尋ねた。

「我々は二人――私とユダヤ人――で君と語り合っている。どうして二人を三人と呼ぶのか？我々の三番目とは誰のことだ？」

聖人は答えた：

「あなた方の真ん中には、目には見えないが、あなた方の師である悪魔がいるのだ。」

王はその言葉に激怒したが、それでも怒りを抑え、言葉でキリストの戦士を打ち負かすことを望み、彼に言った。

「無駄口を叩くのはやめて、私に服従せよ。ムハンマドが神の預言者であり使徒であることを告白すれば、お前は私の息子代わりとなり、様々な快楽を享受できるだろう。」

聖人は言った。

「王よ、あなたは神と神の御言葉を認めるか？」

王は答えた。

「はい、認めます！」

聖人はユダヤ人に言った：

「*『主の御言葉によって天は造られ、その口の息によってそのすべての軍勢は造られた』*（詩篇32:6）ということを認めるか。」

ユダヤ人は答えた：

「はい、その通りです！」

すると、キリストの御霊に満たされたキリストの宣教者は、彼らにこう言った。

「見よ、あなたがたは、本来あるべきように信じてはいないものの、自ら真理を証ししている。しかし、私はいかなる場合でも偽りの教えに耳を傾けることはなく、以前述べた通り、ムハンマドは預言者でも神の使者でもなく、欺瞞者であり、偽り者であり、反キリストの先駆者であると断言する。　そして、ユダヤ人よ、キリストはすでに、聖母マリアによる無原罪の御降誕によってこの世に来られたことをしっかりと知れ。それゆえ、あなたはもはやキリストの肉による誕生を待つ必要はない。あなたが待ち望んでいるその者は、全宇宙を混乱に陥れる忌まわしい反キリストであり、ムハンマドという欺瞞者は、この反キリストの先駆者なのだ！

この論争に立ち会っていたペルシャ人やサラセン人たちは、聖人の言葉に激怒したが、キリスト教徒たちは喜び、互いにこう言い合った。

「キリストの恵みにより、修道士が勝利した！」

王はユダヤ人に怒りを覚え、こう言った。

「お前を側近に迎えたのは無駄だった。お前からは何の助けも得られなかった！」

王は彼を追い払い、こう言った。

「私一人でもその修道士を打ち負かし、味方につけてやる。」

すると、聖ミカエルは喜びに満ちてこう言った。

「ほら、もう一人が、わがキリストの力によって打ち負かされ、恥じて逃げ去った。まだ二人が残っているが、まもなく彼らも打ち負かされるだろう。なぜなら、わが守護者は誰にも打ち負かされず、不敗だからだ！」

その後、王は殉教者にこう言った。

「修道士よ、君には二つの選択肢がある。私に服従して我々の信仰を受け入れるか、あるいは若くして恐ろしい死を遂げるかだ。」

聖人は言った。

「王よ！　三つのうちいずれか一つを願う。私を私の師のもとへ帰すか、あるいは、お望みのいかなる死をもって私を打ち倒し、私のキリストのもとへ送るか、あるいは、キリスト教徒となり、私たちと共に歩むか！」

王は、その大胆不敵な言葉に耐えきれず、激しく怒り、殉教者を裸足で熱い炭火の上に立たせるよう命じた。　しかし、殉教者は、誰にも支えられずに熱い炭火の上にじっと立ち続け、キリストへの愛ゆえに火の熱を勇敢に耐え忍び、さらにはダビデの詩篇を歌いさえした。彼は長い間その姿勢を保ち、ついに王は彼を炭火から降ろし、毒の入った杯を差し出すよう命じた。　殉教者はその杯を受け取り、「私は唯一の神を信じる」という信仰告白を最後まで読み上げ、十字の印で身を守ると、何の害も受けずに毒を飲み干した。王は驚き、牢獄から死刑判決を受けた犯罪者の一人を連れて来させ、彼にも同じ毒を飲ませるよう命じた。　その犯罪者が毒の入った杯を飲み干すと、恐ろしい叫び声を上げて即座に息を引き取り、その遺体はたちまち腐敗し始めたが、聖ミカエルは傷一つなく無事でいた。すると、そこにいたすべてのキリスト教徒は大きな喜びに満たされ、声を揃えて神を賛美した。

一方、サラセン人たちは深い恥を感じ、起こったすべてを自分たちの信仰に対する冒涜だと考え、王に向かって、その修道士を殺すか、あるいはすべてのキリスト教徒を根絶やしにするよう命じるよう叫んだ。王はサラセン人たちをなだめるために、殉教者を城の外へ連れ出し、剣で首を刎ねるよう命じた。　こうして殉教者は処刑場へと連れ出され、サラセン人とキリスト教徒の大群が処刑場まで彼に続いた。指定された場所に到着すると、殉教者は東を向き、天に向かって目と両手を上げ、次のように祈った。

「全能の主よ、至高なる方、初めなき方、永遠に存在される方、あらゆる被造物の創造主、王たちの王、主たちの主よ！　私がこの偉業を成し遂げることができたことを感謝いたします。そして今、私はあなたの慈愛に懇願いたします。悪魔の手が私に及ばぬよう、また、悪魔が私を滅びの深淵へと突き落とさぬよう、どうかあなたの聖なる天使たちを通して私の魂をお受け取りになり、安らぎの住まいに導いてください。　主よ、私はあなたを愛し、あなたを讃え、父と子と聖霊、唯一の神性と御国を称えます。なぜなら、栄光は永遠にあなたに属するからです。アーメン。

このように祈り、信者たちに別れを告げた後、彼は剣の下に頭を垂れ、[4984]　、剣によって斬られて息を引き取った。一方、キリスト教徒たちは、その殉教者を支えてくださった神に栄光を帰した。

エルサレムの聖サヴァ修道院の宿舎に住んでいた修道士たちは、殉教者の遺体を回収して修道院へ運びたいと望んだが、エルサレムに住むキリスト教徒たちはこれに反対し、こう言った。　「彼

[4984] 聖ミカエルの死は8世紀初頭に起こった。

はここで苦難に遭ったのだから、ここへ葬り、その遺体が聖地となり、信者たちに祝福をもたらすようにすべきだ」。一方、修道士たちは、彼が荒野で教育を受け、尊い父サヴァの弟子であり、修道院以外の場所に埋葬すべきではないと主張した。　彼らは長い間互いに議論を交わし、その争いの噂は王の耳にまで届いた。王は、殉教者の遺体を修道士たちが引き取るよう裁定を下し、修道士たちはその後、遺体を運び出し、宿屋へと運んだ。

その同じ日、聖テオドールは聖ミカエルに関する啓示を受け、教会に来て、アッバと兄弟たちにこう言った。

「今、我らの兄弟ミカエルが、この町で殉教の偉業を成し遂げた。」

アッバは直ちに兄弟たちを遣わし、殉教者の遺体を敬意を込めて修道院へ移送させた。彼らは、サラセン人が殉教者の遺体に何らかの冒涜を加えないよう、夜間にそこへ赴き、遺体を運び出した。 主は 、御自分のしもべの遺骸の上に奇跡を示された。天から火の柱が降りてきて、殉教者の遺体を運ぶ者たちの前を歩み、彼らを照らし出したのである。その夜、眠っていなかった市民たちの中にも、その火の柱が修道院の方へと向かい、その一帯を照らしているのを見た者がいた。

聖テオドールは、悲しみと喜びが入り混じった豊かな涙を流しながら、殉教者を迎えに出た。彼は、聖ミカエルを弟子であり親族であるかのように悼み、愛する同住者が殉教の冠に恵まれたことを喜んだ。　また、修道院の院長も修道士たち全員と共に、ろうそくと香炉を手に、殉教者たちを称える聖歌を歌いながら出迎えた。こうして彼らは聖ミハイルの遺体を教会へと運び込んだ。

その頃、修道院にはゲオルギーという名の病床にある修道士が一人いた。彼は三年間も病に伏しており、聖ミカエルは頻繁に彼を見舞っていた。この麻痺した修道士は、ミカエルの死を聞き、教会へ向かう兄弟たちに、自分もそこへ運んでほしいと懇願し始めた。そうすれば、彼にとって最愛の兄弟であった殉教者を見ることができるからだ。　しかし、誰も彼に気にかける者はおらず、皆は彼のそばを通り過ぎていった。すると、病人は深い悲しみに打ちひしがれて涙を流し、こう言った。

「ミハイル兄弟よ！もしあなたが神の恵みを得て、キリストの前で執り成す勇気を授かったのなら、あなたの友である私のことも思い出してください。そして、この麻痺した私に力を与えてくださるよう願い出てください。そうすれば、私もそこへ行ってあなたに会い、主の御名においてあなたに口づけを捧げることができるでしょう。」

彼がそう言い終えるや否や、たちまち突然、体が強くなったのを感じ、寝台に横たわって身動きもできなかったその人は、健康な体で寝台から立ち上がった。彼は教会へやって来て、殉教者の遺体にひれ伏し、涙を流しながらその遺体に口づけをし、こう言った。

「まことに、愛する兄弟よ、あなたはキリストの前で大きな大胆さをお持ちです。まことに、あなたは苦しむ私に対して完全な愛を示してくださいました。あなたは生前、私のような不適格な者に大いに尽くしてくださり、キリストのもとへ旅立たれた後も、突然、私に予期せぬ健康を授けてくださったのです。」

兄弟たちは、慣例通りの葬送の賛美歌を歌い上げ、殉教者を、かつて殉教した聖なる先人たちの墓所に葬った。

こうして、聖なる殉教者ミハイルは7月の9日にその生涯を閉じた。その後、彼はしばしば聖テオドールに夜の幻の中で現れ、殉教者の衣と冠を身にまとい、言葉では言い表せない光に包まれていた。彼はこう語った。

「父よ、私のことを悲しまないでください。私は、私の神であるキリストから恵みを受けたのです。そのキリストは、あなたが私に与えてくださった教えに対して、あなたにも報いを用意しておられます。」

ここで聖殉教者ミカエルの話は終わり、私たちは再び聖テオドロスの生涯に目を向けます。

万事を主の御心にかなうように整えられる主は、聖テオドロスのような灯火が荒野に隠れていることを、もはや隠しておきたくなかった。彼はその徳高い生涯によって多くの人々に益をもたらし、光として世を照らすことができたからである。それゆえ、主は彼を高い司教の職に就かせられた。

聖なる大四旬節の期間中、アンティオキアの至聖なる総主教が、命を与えるキリストの聖棺に礼拝を捧げ、また自身の教会の務めを果たすために、エルサレムを訪れた。　この時、エルサレムには二人の総主教が滞在しており、彼ら以外にもエルサレムおよびアンティオキア教区から多くの司教が訪れていた。さらに、エデッサの町からも、聖職者や信徒の尊敬される代表者数名がエルサレムにやって来て、同地の司教が死去したため、エデッサの町に新たな司教を任命してほしいと懇願した。その聖職と座にふさわしい人物を探し始めたところ、エルサレムの至聖なる総主教は、神の御霊に導かれて、福者テオドロスを思い出し、こう言った。

「私の見解では、聖サヴァ修道院の修道士であり、沈黙の修道士たちの中でも傑出したテオドールほど、天使に等しい生活を送り、かつ教会の事務を統括する能力に長けた者はいない。」

パレスチナの修道者たちは、聖テオドールに関する総主教のこの評価に全面的に同意した。というのも、パレスチナの誰もがテオドールの苦行の生活をよく知っていたからである。公会議全体が歓喜に沸き、総主教たちは直ちにテオドールを呼び寄せ、彼を司教に任命した。しかし、彼は涙ながらにその聖職を拒んだ。　彼らはテオドールに、通常の教会における段階を経て、司祭の叙階を受けるよう命じた。エデッサからの使節たちも、自分たちのために選ばれた司教を喜び迎えた。彼らはテオドールの神に喜ばれる生き様を耳にしており、彼が自分たちの街の出身であることを知っていたからである。

「聖木曜日」――キリストの最後の晩餐の日――が訪れると、両パトリアルカは多くの司教たちと共に礼拝を執り行い、その際に聖テオドロスを司教として按手した。　その叙任式の最中、すべての人の目の前で大きな奇跡が起こった。雪よりも白い鳩が教会の天井付近を舞い、やがて叙任される司教の頭上に降り立った。これを見た総主教、司教、司祭たちは驚き、神を賛美し、こう言った。

「まことに、この人は聖職の位にふさわしい！」

叙階式が終わると、聖テオドールは神の天使のように恵みに満ちて輝き、その姿のすべてが、彼こそが最も完全な神の使者であることを示していた。　聖なる大土曜日、そしてキリストの復活という輝かしい祝日にも、彼は両方の総主教と共に礼拝を執り行い、復活週の月曜日には、聖なる父たちに別れを告げるために修道院へと向かった。　聖父たちは喜びと涙に包まれていた。兄弟が聖職の位に就くことを喜ぶ一方で、これほど偉大な父との親密な交わりを失うことを嘆いていたのである。聖テオドロスもまた、愛する友人たちや、隠遁者の小部屋、そして彼が切望していた静寂を後にし、皆に別れを告げて涙を流しながら、聖都へと戻った。その後、トマス週が終わると、エデッサの人々の要請に応じて、彼はためらうことなくエデッサへと向かった。　彼には、その伝記の著者であり、姉の息子にあたるヴァシリーも同行していた。彼らがユーフラテス川に到達し、川岸に設営されたテントで夜を明かすことになったとき、聖人は聖都と聖ラヴラを離れなければならないことを嘆き、詩篇の作者の言葉を口にした。

「*バビロンの川辺で、私たちは座り、シオンを思い起こして泣いた*」（詩編136:1）。

こう言い終えると、彼は涙を流し、逃げ出そうと考えたが、エデッサの人々は彼の意図を察し、自分たちの牧者を失わないよう見張りを置いた。そしてその夜、聖人は幻を見た。ある人物が現れて、こう言った。

「主から与えられたタラントを地中に隠した怠惰な僕（マタイ25:18）のようにならず、五タラントを受け取って十タラントを稼ぎ出し、それゆえに十の町を治める権威を与えられた僕（ルカ19:16–17）のようになれ。あなたに課せられたキリストのくびきを負うことを拒んではならない！

この幻を見た後、聖テオドロスはこう言いました。

「主の御心が成されますように！」

そして、エデッサの人々と共に旅立ち、もはや新たな務めを放棄せず、自分に与えられた運命を嘆くこともやめた。

彼らがエデッサに近づくと、街中の人々が新しい司教を出迎えに駆けつけ、正教徒たちは言葉に尽くせない喜びをもって彼を迎えた。　聖テオドロスもまた、エデッサの大聖堂の建物を見て心を躍らせた。その規模と美しさは、エルサレムのキリスト復活教会にわずかに及ばない程度であった。すべての人々に祝福を与えた後、彼は聖殉教者グリア、サモン、アビブの聖遺物箱にひれ伏し、涙を流した。 こうして、キリストの聖人はその座に就いた――（当時、ギリシャ帝国ではミカエル[4985]が母テオドラと共に統治していた）――そして、神から託された羊の群れを、言葉と行いをもって熱心に牧し、一方では神の霊に導かれた教えで彼らを養い、他方では自身の徳高い生活の模範によって、救いの道へと導いた。その都市には、ネストリウス派[4986]、セヴェロス派[4987]、エウティケス派[4988]、マニ教[4989]といった異端が少なくなかったため、彼はこれを憂い、異端者たちを猛獣と見なして、彼らとの闘いに多大な労力を注いだ。　そして、正教徒たちにはキリストの聖人が喜びをもたらし、異端者たちには憤りを抱かせた。正教徒たちは、自分たちにこれほど神に賢明な牧者であり教師がいることを喜び、異端者たちは嘆き、彼に対して悪を企てた。しかし、彼はダイヤモンドのように堅固であり、いかなる攻撃も彼の勇気を奪うことはできなかった。　真の信仰を捨てた罪人たちを見るのは彼にとって苦痛であったが、一方で、徳高く敬虔に堅く立つ人々を見ることを喜びとし、しばしば彼らと二人きりで親しく語り合うことを好んだ。

当時、エデッサの近く、聖大殉教者ゲオルギオスの修道院の周辺には、修道女たちも断食の生活を送っていたが、そこにテオドシウスという名の、すべての人から尊敬される柱上者が住んでいた。彼は高潔な生活を送る老人（すでに百歳を超えていた）であり、神から特別な透視の賜物を受けていた。　敬虔なテオドール司教は頻繁に彼を訪ね、誠実な友として語り合う中で、彼に慰めを見出していた。柱上者は彼にこう言った。

「主の僕よ、その労苦を怠ってはならない。また、主の軛が重く感じられることのないように。あなたにとってすべては無事に終わるだろう。たとえ多くの異端者たちがあなたに対して悪を企て

[4985] テオドラ皇后は842年から855年までギリシャ帝国を統治し、その息子ミカエル（3世）は855年から867年まで在位した。

[4986] ネストリウス派は、コンスタンティノープル司教ネストリウス（428年から431年まで在任）によって設立された。イエス・キリストは真の神ではなく、単にヨセフとマリアの息子である人間に過ぎず、その聖なる生涯によって神の特別な恵みを授かり、自らの贖いの功績によってではなく、教えと生涯の模範によってのみ私たちを救うと説いた。　ネストリウス派は、エフェソスで開催された第3回全地公会議（431年）で非難された。公会議による非難にもかかわらず、ネストリウス派の異端は、特にペルシャ、インド、中国など一部の地域で8世紀まで存続した。

[4987] アンティオキア総主教セウェル（在位：512年～518年）は、セウェリアン派の創始者である。セウェリアン派は、変形された単性論の異端である（次の脚注参照）。　セウェリア派は、モノフィシテ派の異端者たちと同様に、イエス・キリストには神性というただ一つの本性しか認めなかったが、その中に神的な属性と人間的な属性の違いを認めていた。したがって、彼らは、復活前のキリストの肉体は、私たちと同様に朽ちるものであったと主張した。

[4988] コンスタンティノープルのアルヒマンドリト、エウティキオスによって提唱されたエウティキウス派の異端は、イエス・キリストには神性という単一の本性しかないと誤って教えたが、正教会は常に、イエス・キリストにおいて、融合せず、かつ分離しない二つの本性――神性と人性――を認めてきたし、現在も認めている。　エウティキウス派は、モノフィシテ派（あるいは「単性論者」）とも呼ばれた。この異端は、451年にハルキドンで開催された第4回全地公会議で非難されたが、公会議による非難後も、弱まった形でさらに数世紀にわたって存続した。

[4989] マニ教は、キリスト教とペルシャのゾロアスター教の原理が混ざり合った異端の偽教義である。マニ教の創始者は、ペルシャの魔術師マネスであった。マネスは、太古の昔から善と悪という二つの独立した王国が存在し、それらが互いに絶えず争っている、と説いた。　また、マネスの教えによれば、人間もまた「光」と「闇」という二つの要素の結合から成り立ち、いわば「善の魂」と「悪の魂」という二つの魂を持ち、それらが絶えず互いに争っているという。――マニ教徒たちは生活において極めて禁欲的であり、独身生活と絶え間ない断食を説いた。――マニ教は3世紀から4世紀にかけてかなり広く普及していた。

ようとも、彼らの企ては成功しないだろう。　主は彼らの計画を打ち砕き、彼らは打ち負かされ、恥をかかされ、教会の庭から追放されるだろう。この柱頭修道士の言葉は、やがて現実のものとなった――これについては後ほど述べる。ここでさらに、司教と柱頭修道士との頻繁な霊的な対話について触れておく必要がある。その対話の中で、柱頭修道士は司教に多くの有益なことを伝えた。ある時、彼は次のように語った。

「この町には、」と柱頭は語った、「何年も前に、アデルという名の男がいた。彼は高貴で名門の出身であり、古代の義人ヨブのように非常に裕福だった。彼は誰に対しても慈愛深く、貧しい者たちには惜しみなく施しをし、修道院にも寄付を行い、しばしば私のところへ来て、霊的な事柄について語り合った。　彼には妻と三人の子供がおり、義にかなった、悪意のない、柔和で謙虚な人物であり、若く、健康も丈夫だった。ある時、彼はいつものように私のところへやって来たが、私は彼がひどく悲しんでいるのを見た。私は彼にこう言った。

「なぜ悲しんでいるのですか、私の霊の子よ？」

すると彼は、涙を流しながらこう答えました。

「私は母の胎から裸で生まれ、裸のまま墓へと去らねばなりません。この世の富や虚しい栄光など、何一つ持ち去ることはできません。ダビデはこう言いました。*『蓄えても、それが誰の手に渡るのか知らない』*（詩編38:7）、*『その栄光は彼に付き従わない』*　（詩篇48:18）。人は自分の富を他人のものとして残すものであり、それ以外にあり得ない。また、使徒はこう言っている。*「この世の様相は過ぎ去る」*（Iコリント7:31）。　私たちの救い主キリストがこう叫ばれるのが聞こえます。*「自分の持っているすべてのものを捨てない者は、わたしの弟子になることはできない」*（ルカ14:33）、そしてまた、*「自分の十字架を負ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」*（マタイ10:38）。　それゆえ、父よ、私は神への愛ゆえに、妻も、子供たちも、財産もすべて捨て、私を無から有へと導いてくださった唯一の主のために生きたいのです。どうか、父としての祝福と、あなたの修道室にあるパンを一つだけ与えてください。そして、私のために祈ってください！

私は彼の言葉に驚き、こう言いました。

「あなたの志は立派だとわかりますが、あなたは大きな試練を背負おうとしています。『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』（マタイ24:13）のですから、わが子よ、最後になって後悔することのないよう、よく考えてください。　誓いを立てずに済む方が、誓いを立ててそれを果たせないよりはましだ。しかし、もし果たすことができるなら、一時的なものを永遠のものへと変えることで、確かにあなたは幸いとなるだろう。

主はこう言われた：

「主の御心が行われますように！」

その後、私は彼のために祈り、パンを一つ与えて、彼を見送った。　そして彼は、反逆的な世を牢獄から逃れるかのように離れ、エルサレムに到着し、キリストの聖墓で熱心に祈りを捧げ、すべての聖地を巡った後、聖サヴァの修道院へと赴き、修道士としての戒律を受け、アデラからアファナシイへと改名された。　彼は真の修道士としての生涯を送り、神に喜ばれ、神のもとへ旅立った。一方、徳の高い妻は、彼が去った後、長い間孤独を嘆き、その際、まるで彼の姿を目の前に見ているかのように、しばしば彼に語りかけた。

「ああ、主よ」と彼女は言った。「あなたは自分の魂を救うことに努め、子供たちの世話は私一人に押し付けたのです。全知の神がこれをご覧になり、私とあなたの間を裁いてくださいますように！」

しばらくして、ある夜、彼女の夢の中に、白い輝く衣をまとい、顔に光が宿った夫が現れ、こう言った。

「もう泣いたり、私を責めたりするのはやめなさい。さあ、私は子供たちを連れて行くから、あなたは自分の魂を救うことに努めなさい。」そして、その同じ姿で、ある男が現れてこう言った。

「お前の近くにある修道院で、最年長の沈黙の修道女が三日後に主のもとへ旅立つ。その代わりに、私の妻をそこに送り込み、彼女がその独房で断食し、完全な孤独の中で暮らせるようにしなさい。　末っ子も、成長するまでは彼女のそばに留まらせておきなさい。その子は私の足跡をたどり、エルサレムで使徒の座に就くことになるだろう。

この啓示から三日後、その修道院で年老いた沈黙の修道女が世を去り、その後、アデロ家の二人の子供たちも亡くなった。残ったのはただ一人、最年少の子供だけであり、その子もまた死の床に就いていた。　母親は、夫を失い、二人の子供を亡くした悲しみに打ちひしがれ、最後の一人の子も死の淵にあるのを見て、深い悲しみの中で激しく泣き崩れた。そして、赤ん坊を抱き上げると、私のような不肖の者のもとへ駆け寄ってきた。道の半ばで、母親の腕の中の赤ん坊は息を引き取り、母親はこのような悲惨な状況でどうすればよいか分からなかった。　偶然か、あるいはむしろ神の摂理によって、ある娼婦が彼女に出くわした。母はすぐに死んだ子をその娼婦の腕に預けると、自ら彼女の足元にひれ伏し、涙ながらに、この子のために神に祈ってほしいと懇願した。　娼婦は、そのような願いに驚きを隠せず、自分は明らかな罪人であり、多くの犯罪や悪行を犯しているため、神に願いを捧げることはできず、ましてや天を仰いで祈りの口を開くことさえできない、と答えた。　一方、悲しみのあまり正気を失ったかのような母親は、彼女の足を抱きしめながら、懇願し続けた。すると、娼婦は東の方角に向き直り、心の底からため息をつき、胸を打ち、涙を流しながら、次のように祈り始めた。

「主よ、私は多くの罪を犯したゆえに、天の高みを見上げたり、この汚れた口であなたの聖なる御名を呼ぶに値しません。しかし、かつてあなたの御足元で泣いたあの昔の娼婦（ルカ7:36–50）のように、　あなたの慈愛に懇願します――今、あなたの慈愛から、私たちにあなたの憐れみを注いでください！　あの罪人は自らの罪の赦しを請いましたが、私は、数え切れないほどの不義の赦しを請う勇気すら持てず、この清らかな幼子のために祈ります。この貞淑な御使いが、執拗に私に求めていることなのです。命の与え主、万人の救い主よ！　この幼子に命をお与えください。私のような、冷酷で情け知らずな心を持つ女でさえ、この子を憐れんでいるのですから、その性質そのものが慈悲深く、人を愛する御方であるあなたが、ご自身の被造物をどれほど深く憐れんでくださるでしょうか！

ああ、言葉に尽くせぬ神の慈愛よ！罪深い女がこのように祈ると、その子は生き返った。心から悔い改め、謙虚に自分の罪を告白したこの罪深い女を、神は聞き入れ、彼女の祈りによって死者をよみがえらせたのである。それは、彼女の将来の回心と、未来における聖なる　な生活を予見してのことだった。　母親は、子供が生きているのを見て、この上なく喜び、神を賛美した。一方、その罪深い女は、このような奇跡を目の当たりにして恐怖に襲われ、一言も発することができず、地面にひれ伏して涙を流した。　神の御業はなんと驚くべきことか！神は子供を蘇らせ、悲しみに暮れる母を慰め、娼婦を心からの悔い改めへと導き、聖職の務めを果たすにふさわしい僕を御自身のために備えられた。――この蘇生した子供は、後にエルサレムの総主教となった。

これらすべてが道中で起こっている間、私は柱の上からそれを見下ろしていたが、神の啓示により、天から降りてきて、祈る罪人、亡くなった子供、そして泣く母親を照らすまばゆい光を見た。私は弟子を呼び寄せ、その二人の女性のところへ遣わした。彼女たちはやって来て、私の問いに応じて、主が私に啓示された通り、すべてを詳細に語ってくれた。一方、アデロフの妻はこう言った。

「誠実な父よ、私と私の夫、すなわちあなたの霊の子との間を裁いてください。　私は清らかな身で彼と結婚し、三人の子供の母となりましたが、私の側に何の過ちもないにもかかわらず、彼は行方知れずになってしまいました。私が長い間涙に暮れていた時、ある日、彼は明るい衣をまとって私の夢に現れ、こう言いました。

「さあ、私はこの赤ん坊たちを私の元へ連れて行く。お前は、もし望むなら、自分の魂を救いなさい！」

その幻視の後、私の子供のうち二人が亡くなり、今や彼は最後の一人までも連れ去ろうとしており、私を悲しみと後悔の中で死なせようとしているのです。もし彼があなたの命令に従ってそうしているのなら、神があなたと私の間を裁いてくださいますように！

そこで私は彼女にこう言いました。

「娘よ、悲しむな。あなたの息子は死なず、生き残り、偉大な栄光に浴することになるだろう。」　あなたは、夫の助言に従い、自分の魂の救いを考えなさい。ここに、私の近くにある修道院に、あなたのためだけに用意された静かな独房がある。断食の生活の中で老いて逝った、神に愛されたキリストの女奴隷がいた——彼女の後を継ぎ、その生き様に倣いなさい。

私の提案に、その女性は即座に同意し、その後、罪深い女性も涙ながらに、自分も悔い改めた者として受け入れられ、聖なる断食修道女たちの仲間に加えられるよう懇願し始めた。

しばらくして、その二人の女性は、全財産を貧しい人々に施し、聖なる断食修道女たちの修道院に入り、非常に熱心な修道女となり、その功徳によって神に喜ばれた。　一方、蘇生したその子は、成長するとパレスチナへと向かい、聖サヴァの修道院を訪れた際、そこで父が修道生活を送っていたことを知った。彼自身もそこで修道士となり、父の独房を譲り受けた後、長きにわたる断食の修行によって、パレスチナの修道院長たちの間で尊敬を集めるようになった。　神の御心により、彼はエルサレム総主教の座に就き、七年間にわたりキリストの教会を賢明に統治し、その後、汚れのない生涯を全うして、永遠の住まいへと旅立った。

この驚くべき柱上者の物語は、キリストの聖人テオドロスに大きな慰めをもたらし、彼は柱上者にこう尋ねた。

「教えてください、霊的な父よ。あなたはこの柱の上でどれほど長く暮らしているのですか。そして、どうか、主のために、何も隠さずに、あなたの人生についてすべてをお話しください。」

すると、長老は心の底からため息をつき、涙を浮かべてこう言った。

「主の御名と真の愛のために、私はすべてをあなたに話しましょう、キリストの御言葉の群れを導く善良な羊飼いよ。しかし、主が私をこの世から召されるまで、このことを秘密にしておいてください。私が若かった頃、私は兄のヨハネと共に、この世を捨てました。　三年間、私たちは修道院で勤め、その後、荒野で隠遁生活を送りたいという願いが私たちの中に芽生えました。霊的指導者の助言に従い、私たちはバビロンの近くにある荒野へと向かい、そこで互いにほど近い場所に位置する二つの洞窟を見つけ、それぞれが自分の洞窟で、隠遁生活を送るようになりました。　私たちの食事は、砂漠で見つかる草や木の実で賄われ、土曜日と日曜日には共に祈りを捧げ、詩篇を歌った。砂漠の修道士たちの定番の食事を共に味わった後、私たちは再びそれぞれの洞窟へと戻り、一人きりで祈りを捧げ、神について思索にふけった。　砂漠を歩き回る際も、私たちは互いに会わないよう心がけていたが、主の天使だけが頻繁に訪れ、私たちの孤独の中で私たちを慰めてくれた。　ある日、私たちが別々に荒野を歩き、植物を採集していたとき、私は遠くに自分の兄弟の姿を見かけた。彼は歩きながら、突然驚いたように立ち止まり、しばらくその場に立ち尽くした後、十字を切って身を守ると、目の前にあった場所をあたかも網を飛び越えるかのように飛び越え、素早く自分の洞窟へと逃げ去った。　私も兄のその行動に驚き、何が兄を逃げ出させたのか見に行きました。その場所に近づくと、大量の金が散らばっているのが見えました。私は祈りを捧げ、マントを脱いで、その中に散らばった金を集め、兄には何も言わずに、かろうじて洞窟まで運びました。　その後、私は町へ向かい、広々とした部屋と清らかな水の泉を備えた、立派で堅固な家を購入した。そこで教会と修道院を設立し、四十人の修道士を集め、旅人や病人の安らぎのために宿屋と病院を設け、修道院のために十分な量の土地を購入した。　すべてを整えた後、私は賢明な人物を見つけ、その人をその修道院の院長に任命した。修道院の設立にかかるすべての費用を賄った後、私にはまだ二千ズラトニツが残っていた。そのうち千ズラトニツを修道院の必要経費として院長に渡し、残りの千ズラトニツは貧しい人々に配り、自分には一ズラトニツも残さなかった。　その後、修道院長や修道者たちと別れの挨拶を交わし

、私は再び荒野へと戻り、兄弟を探しに出た。荒野へ向かう途中、私の心には高慢な考えが浮かんだ。「私の兄弟は、見つけた金を善行に役立てることもできなかったが、私は偉大で神に喜ばれる行いを成し遂げたのだ」と。　そう考えながら、私は兄が住んでいた場所に近づいたが、兄に対する私の優越感という高慢な思いは、私から離れることはなかった。すると、以前にも私を訪ねてくれた主の天使が私を迎えに出てきて、威圧的な眼差しで私を見つめ、怒りを込めてこう言った。

「なぜ、あなたは兄弟の前で虚栄にふけり、自分を誇り高ぶるのか。真実を言おう。あなたの長年にわたる労苦も、修道院の建設に向けたあらゆる配慮も、あなたの兄弟が、見つけた金の山を飛び越えたという行いに比べれば、及ばないのだ。」　彼は金の上を飛び越えたのではなく、金持ちとラザロの間に生じた大きな溝（ルカ16:26–31）を、軽やかな翼で飛び越え、今やアブラハムの懐が彼を待っている。彼は神に喜ばれるよう努めたが、お前は人々に喜ばれるよう努めたのだ。　それゆえ、神の前において、あなたの兄は間違いなくあなたより優れており、たとえあなたが自分の方が彼より優れていると考えていても、決して彼には及ばない。この虚栄心ゆえに、あなたはこの生涯において、彼にも私にも会うことはなく、神をなだめるために多くの涙を流さなければならないだろう。

そう言い終えると、天使は私の目の前から姿を消し、私は急いで兄が住んでいた洞窟へと向かったが、そこにはもう彼の姿はなかった。私は力尽きるまで大声で泣き続け、それから七日後、遠くから天使の声が聞こえてきた。天使は私にこう言った。

「あなたはエデッサの町へ行き、そこで聖ゲオルギオス教会の近くにある柱の上に登り、主があなたに憐れみをお示しになるまで、悔い改めのうちに過ごさなければならない。」

そこで、私は泣きながら荒野を後にし、ここに来てこの柱に登った。ここで私は四十九年間を過ごし、暗い雲のように私を取り巻く様々な思いと戦い、慰めようのない悲しみが私の心を満たしていた。　五十歳の年、ある安息日の夜遅く、私は心の奥底に何とも甘美な悟りを感じ、それとともに、私を重く圧迫していた思いという暗い雲も晴れ去った。　その夜、私は一睡もせず、心からの感動を込めて神に祈りを捧げ、慰めの涙で顔を濡らしていた。日曜日になり、私がいつもの第三時の詩篇を歌っていると、突然、聖なる天使が私の前に現れ、こう言った。

「あなたに平安と救いあれ！」

私はその御出現に慰められ、地にひれ伏して、涙ながらにこう言った。

「なぜあなたは私を御前から追い払い、私の兄弟から引き離されたのですか？今、私は多くの試練にさらされています！」

天使は私の手を取り、私を立ち上がらせると、こう言いました。

「あなたが心の中で兄弟を軽んじたその高慢のゆえに、私はあなたの目から身を隠しましたが、あなたを完全に見捨てたわけではなく、神が私に命じられたとおり、目に見えない形であなたと共に留まり、あなたを守り続けていたのです。　今や、あなたの謙遜さゆえに、主はあなたを顧みられ、私を遣わされた。それは、私が公然とあなたのそばにいて、この世でも来世でもあなたと共にいるためである。　今、主からあなたに、義人と罪人を見分けるという恵みの賜物が与えられています。それは、義人を喜び、罪人のために祈り、彼らが罪深い生活から悔い改めへと立ち返るよう導くためです。そして、あなたの兄弟は生きており、常に主に向かってあなたのために祈っていますが、あなたが彼に会うのは来世になってからです。

「神の司教よ、私の人生について、あなたに話せることはこれだけです！」

すると、聖テオドールは彼に、どのようにして義人と罪人を見分けるのかと尋ねた。柱上者はこう答えた。

– もしこの場所を、義人で神を畏れる人が通り過ぎるなら、私はその人の上に輝く神の恵みを見ます。その人の両脇には聖なる、まばゆいばかりの天使たちが列をなして歩み、遠くには、彼に近づくことを恐れて後ずさりする悪魔たちがいます。　もし罪人が私のそばを通り過ぎるなら、その周

囲には歓喜する悪魔の大群が見え、遠くには、その罪人の滅びを嘆き悲しむ天使が歩んでいる。そして、悪魔たちがその人を完全に滅ぼそうとすると、天使は炎の武器を手に、彼らを追い払うのだ。

聖テオドールは、この敬虔な柱守による魂に益となるような対話に大いに慰められ、自分の牧会する人々の間に、このような人物――神に霊感を受けた主の御心にかなう者であり、先見の明のある父――を見出すことができたことを神に感謝した。それ以来、彼は頻繁に彼を訪ね、霊的な対話を交わした。

こうして聖テオドロスは、増え続けた異端を根絶しようと努めながら、キリストの羊の群れを賢明に牧した。一方、異端者たちは怒りに満ち、聖なる牧者に対して公然と襲撃を企て始めた。 彼らは武装した大群を率いて、礼拝の最中に教会に乱入し、牧者を殺害して羊たちを追い散らそうと企てたが、その企ては失敗に終わり、彼らには聖書の言葉*「彼らは計略を練ったが、それを成し遂げることはできなかった」*（詩篇20:12）が成就した。 彼らが教会に近づくたびに、神の力が彼らの侵入を阻んだ。時には彼らの手が麻痺し、時には教会の中から突然彼らに向かって噴き出した炎が、彼らを追い払った。 彼らは長い間、どうすべきか途方に暮れていたが、やがて別の手段を講じることに決めた。彼らは、その地域の支配者たちを、神の教会と聖職者に対して扇動し、 （エデッサはサラセン人の支配下にあった）、彼らに多額の贈り物を贈り、その許可と協力を得て、教会から多くの領地、集落、農地、果樹園、その他すべてを奪い取った。それらは、司教の邸宅やその他の聖職者たちが生計を立てるための財源となっていたものである。 彼ら、とりわけ裕福なマニ教徒たちは、他の正教徒たちに対しても多くの不当な扱いと暴行を働いた。

聖テオドロスは、アドラメレクの後継者であるマヴィイという名のサラセン王のもとへバビロンへ赴き、教会に加えられている不当な扱いについて訴え、これらの不当行為の停止と、全件の公正な調査を請うことを余儀なくされた。 まず、聖テオドロスは助言を求めて、ある尊者である柱上修道士のもとへ向かった。柱上修道士は彼の意図を称賛し、彼にこれから起こるべきすべてのことを予言した。彼は、聖テオドロスが自らに課した任務を成功裏に果たし、教会のあらゆる必要が満たされるだけでなく、王自身をもキリストの信仰へと回心させると語った。 柱頭修道士は、バビロンの少し北の砂漠のどこかにいるはずの彼の兄弟ヨハネを探し出すよう助言し、その兄弟宛ての手紙まで書いた。 聖人は柱頭修道士と別れを告げて司教区に戻り、数日後に旅の準備を整え、自分の羊の群れと自分自身のために神に祈りを捧げた後、自ら定めた道へと旅立った。

バビロンに到着すると、聖テオドロスはキリスト教の教会を訪れ、その地の総主教のもとへ赴いた。総主教は喜んで聖テオドロスを迎え入れ、彼に宿を提供した。 メトロポリタンがテオドールに旅の目的を尋ねると、テオドールは異端者たちによる教会へのあらゆる攻撃、教会の財産の略奪、そして正教徒たちの苦難について、詳細に語った。 当時、大主教のもとにはたまたま二人の宮廷人がおり、そのうちのひとりは皇帝の書記官長、もうひとりは医師長であった。二人とも正教徒であった。 司教の話に耳を傾け、彼らは心の底から同情の意を表した。そこで大主教は、その二人の宮廷人に、エデッサから司教が到着したことを皇帝に伝えるよう頼んだが、彼らはこう答えた。

「今はその時期ではありません。王は重病で、病気のせいで視力が衰え、目には腫れ物があります。さらに肝臓も炎症を起こしており、私たちの見解では、これは不治の病です。今、王に何か用件を申し入れることなどできるでしょうか？」

すると、聖テオドロスは彼らにこう言った。

「どうでしょうか、諸君。もしかすると、私の謙遜のゆえに、主が彼を癒してくださるかもしれません。」

彼らは彼にこう答えた。

「もしあなたが医療に長けていたり、神から癒しの恵みを受けているのなら、今こそあなたにとって有利な決定を得るのにふさわしい時です。」

朝、医官長が王のもとへ現れ、いつものように医療の世話をしようとすると、エデッサからやってきた司教が病気を非常にうまく治していると王に告げた。　王は直ちに彼を呼び出すよう命じ、司教は、心の中でダビデの詩篇*「いと高き方の御陰に住む者」*（詩篇90:1–16）を祈り、詠みながら王のもとへ向かった。彼が王の寝室に入ると、病に伏す王はかろうじて聞こえるほどの声で言った。

「司教よ！　もしできるなら、私を助けてくれ。私はひどく苦しんでおり、すでに死が近づいている。」

キリストの聖人は、心の目を神に向け、揺るぎない信仰をもって、速やかな癒し主である主キリストに助けを求め、清らかな器と清らかな水を持ってくるよう命じた。　キリストの命を与える聖棺から少しの土を持参していた聖テオドールは、その土を水に溶かし、その水の一部を王に飲ませ、残りで王の頭、額、まぶた、目、心臓、そして肩に塗った。その後、彼は王が安らかに眠れるよう願い、自身は宿屋へと戻っていった。　病に伏していた王は深く眠りにつき、眠っている間にあらゆる病が癒え、キリストの恵みと聖テオドロス司教の祈りによって、死の淵から生還した。目を覚ますと、王は完全に健康を取り戻しており、その目は澄み切っていた。　王は、これほど迅速かつ予期せぬ完全な治癒に深く驚き、喜びのあまり、直ちにこの医術に長けた聖なる司教を呼び寄せ、長く感謝と称賛の言葉を捧げた。聖人は王に食事を摂るよう命じ、王は完全に健康な人のように食べ、飲んだ。

翌日、朝になると、王はすべての高官を召集し、高い玉座に着いて、自分が回復したことを皆にはっきりと示した。皆は王の回復を喜び、王はその日、すべての高官、都市の長、軍隊、そして民衆全員のために盛大な宴を催した。　賑やかな宴が始まると、王は聖テオドロス司教を、集まった全員の前で称え、豪華な贈り物を授け、「わが目の光」と呼んだ。三日目に、王は彼を呼び寄せ、聖テオドロスに特別な敬意を表した上で、こう言った。

「神の御使いよ、わが目の光よ！　教えてほしい、どのような理由でここへ来たのか？　あなたが私に求めることは何でも、叶えてあげよう。」

そこで、キリストの聖人は、聖なる教会や正教徒たちに加えられているあらゆる不当な扱い、教会の財産の略奪、そしてあらゆる種類の迫害や攻撃について、王に詳細に語り始めた。　これを受けて王は、直ちにキリキア、シリア、メソポタミアの統治者たちへ書簡を送るよう命じた[4990]。彼らに対し、エデスの教会にそのすべての領地を速やかに返還させ、またキリスト教徒に与えられた不当な扱いについては、責任者を裁判にかけるよう求めたのである。　さらに王は、異端者たちが正統教会に加わるよう命じた。もし彼らがこの命令に従わない場合は、マニ教徒の舌を切り落とし、ネストリウス派、セウェリウス派、エウティケス派を都市から追放し、彼らの集会所を破壊するよう命じた。この王の命令が書き記されると、王は聖人にこう言った。

「父よ、あなたはしばらくの間、私たちと一緒にここに残ってください。私は総督に私の勅令を携えさせ、それを正確に実行させるつもりです。あなたの弟子の中から誰かを彼に同行させ、それ以外は何も心配しないでください。すべてはあなたの望む通りに実行されるでしょう！」

こうして、王からは総督が、司教からは三人の聖職者が派遣され、まもなくエデッサから、そこですべてが整えられたという知らせが届いた。　異端者たちの多くは、王の脅しに怯えて正教会に加わったが、不敬虔な行いを頑なに続けた者たちは、体罰に処されたり、追放されたりした。

バビロンに滞在中、聖テオドール司教は医師としてしばしば王に招かれ、その際に少しずつキリストの教えの種を蒔いた。　その教えの種は王の心の肥沃な土壌に落ち、王はすでに真の知恵の光によって部分的に啓発され始めていた。その後、聖人は王に、柱上修道士から教えられた隠遁者を探すため、短期間だけ荒野へ赴く許可を求めた。　許可が下りると、彼は二人の弟子を連れて、街からおよそ百ポプリシュほど離れた場所へ赴き、神の御加護により、柱の修道士の実弟である聖ヨハネを

[4990] メソポタミアは、ティグリス川とユーフラテス川の間に位置し、北はアルメニアから南はペルシャ湾まで広がる、岩だらけで砂の多い土地である。

、人里離れた暗い洞窟の中で見つけた。　聖人は自ら司教を迎えに出て、聖人とその弟子たちの名を呼んだ。祈りを捧げ、互いに挨拶を交わした後、彼らは腰を下ろし、霊的な対話を交わした。　聖ヨハネは、柱上修行者であった兄テオドシウスに非常によく似ていた。彼は聖職者に、自分の洞窟で神聖な典礼を執り行い、キリストの御体と御血という至聖なる秘跡を授けてくれるよう願い、司教はその願いを叶え、典礼を執り行い、彼に聖体拝領を授けた。　聖体拝領を終えると、隠者は全身が霊的な喜びで満たされ、客たちに荒野の食事を振る舞った。　それは彼らにとって、並外れて美味しく感じられた。味わった後、彼らは神に感謝を捧げ、再び霊的な対話を交わした。長老は司教にこう言った。

「父よ！　私の兄弟である柱上修行者が私に書いた手紙はどこにあるのでしょうか？」

司教は、長老の洞察力に驚きながら、こう尋ねた。

「アッバよ、私のところにあなたの兄弟からの手紙があることを、誰があなたに教えたのですか？」

尊い長老はこう答えた。

「その手紙が書かれたまさにその瞬間、私はその内容を読み知らされ、直ちに手紙の裏面に、私から兄への返事を書き添えました。」

司教は袋から封印された手紙を取り出し、それを隠遁者に渡そうとしたが、隠遁者は司教に封を開けて読んでほしいと頼んだ。司教がその願いを叶えると、手紙の裏面に次のような言葉が書かれていた。

「バビロンの洞窟に住む修道士たちの末席にあるヨハネより、シリアの柱上者テオドシウス、すなわち私の実の兄弟へ。主において喜びを分かち合いたいと願う！」　私は、その手紙が書かれたその時にそれを読み、直ちにあなたに返事を書いた。なぜなら、私たちは肉体的には遠く離れていても、私の魂は絶えずあなたと共にあり、神があなたに啓示されることは、私にも知られているからだ。あなたが聖なる司教について書いたことはすべて、神の摂理の助けにより成就しつつある。　聖なる教会は強められ、異端者たちは恥をかかされ、追放されるでしょう。不信仰な王は、肉体の目が開かれるとともに、霊的な目も開かれるのです。主において健やかでありますように、兄弟よ。そして、私たちが来世で互いに会い、決して離れることなく共にいられるよう、主キリストに私のために祈ってください。

この驚くべき素晴らしい返事を読み終えた司教は、天使によってユダヤからバビロンのダニエルのもとへ連れて行かれ、その同じ時刻に再びユダヤへ戻された預言者ハバククを思い出し、心の中でこう言った。

「古にこのような奇跡をなされた全能の神は、今なお同様のことをなすことができる。主は御自身の聖徒たちにおいて驚くべき方である（詩編67:36）。」

聖なる司教は、敬虔な隠者のもとで一日一夜を過ごした。翌朝、祈りを捧げた後、彼に別れを告げて、バビロンの王のもとへ戻った。王は彼にこう言った。

「親愛なる父よ、この世でも来世でも、あなたと決して別れたくありません。私の魂は、あなたとの愛の絆によってこれほどまでに深く結ばれているのですから！」

司教はこう答えた。

「私とあなたとの間の扉が開かれているのがわかります。私が外へ出る必要はなく、あなたが私のもとへ入る必要もありません。しかし、その扉が閉ざされたとき、私たちは互いに引き離されてしまうでしょう。そのことを、私は心から深く嘆いています。」

王はこう言った。

「その扉とは何のことか。また、それが閉ざされるということはどういう意味なのか。どうか教えてほしい。そうすれば、私もそれを理解できるだろう！」

そこで聖人は、胸元から聖なる福音書を取り出し、王が理解できる言葉でその意味を解説した。王は注意深く耳を傾け、心を打たれ、キリストへの愛に燃え上がった。

その時、王のそばにはアラビア出身の最も忠実な三人の家臣だけがいて、彼らもまた感動しながら聖なる福音書を聞いていた。司教はその朗読を夕方まで続けた。　翌朝、王は公務を終えると、再び聖人を呼び寄せた。表向きは医師として助言を求めるためであったが、実のところ、彼を通じて自らの魂の癒やしを得ようとしたのである。　そして再び一日中、福音書の物語と救い主の教えに熱心に耳を傾け、その後、自身とその三人の家臣もキリストを信じるようになった。　聖人は彼らに、聖なる洗礼を受ける準備をするよう告げた。彼は彼らに断食の期間を定め、神への祈りを教え、彼らの言語で「三聖句」、「主の祈り」その他の祈り、そして「唯一の神を信じる」という信仰告白を書き記して与えた。　これらすべては、王が恐れていたサラセン人に知られないよう、秘密裏に行われた。司教は毎日、医師として王のもとを訪れ、王と二人きりで、やがては王の三人の家臣たちにも、聖なる信仰の秘跡を教えた。しばらくして、彼は王と三人の家臣たちに密かに洗礼を授け、王に「ヨハネ」という名を授けた。　彼は王の寝室で聖なる典礼を執り行い、新しく洗礼を受けた者たちにキリストの御体と御血という神聖な秘跡を授け、彼ら全員が共に大きな喜びに包まれた。罪人たちの回心を喜び祝ったのは聖なる天使たちでもあり、王の私室では、目に見えない天の力の加護のもと、歓喜の祝宴が繰り広げられた。

新たに信仰に目覚めたヨハネ王は、人類の贖い主であり、十字架上で苦難に遭われたイエス・キリストへの愛から、私たちの主が釘付けにされた尊き命を与える主の十字架の木片を、強く手に入れたいと願っていた。　しかし、当時、十字架の木はエルサレムにはなく、ギリシャの王たちによってコンスタンティノープル（[4991]）に移されていたため、キリストの聖人テオドロスは、次のような内容の手紙を携えてコンスタンティノープルへ向かわざるを得なかった。

――ギリシャ王国の至高にして敬虔なる独裁者、ミカエル王と、敬虔にして神の知恵に満ちた母テオドラ殿下へ、サラセン王ヨハネスは、主を讃え祝いたく存じます！　私を迷いから救い出し、聖なる福音の真理を知らしめ、キリスト教の信仰を告白させてくださった至聖なる神に感謝するとともに、貴殿の敬虔なる御身より、私のキリストが十字架にかけられた、命を与える尊き十字架の木の一部を授けてくださるようお願い申し上げます。私はそれを、私の守護者として身辺に置きたいと願っております。

このような書簡と多額の贈り物を携え、サラセン王は聖テオドール司教をギリシャ王のもとへ遣わした。聖テオドールはコンスタンティノープルに到着し、王に書簡と贈り物を手渡すと、王および至聖なる総主教から栄誉をもって迎えられた。

ちょうどその頃、皇帝の母テオドラが目の病を患い、視界を曇らせる白内障が現れ始めていた。そこで、キリストの聖人は、主の聖墳墓の土を取り、清らかな水と混ぜ合わせて、彼女の目に塗ると、彼女を癒やした。　また、皇后だけでなく、他の病める人々に対しても、彼はしばしば癒やしをもたらした。

王は、宝石と真珠で飾られた金の小箱を作らせ、その中に主の命を与える聖十字架の尊い木片を納めた。その際、彼はサラセン人の王に次のような手紙を書いた。

「キリスト・神を敬虔に信じるミハイル、すべてのギリシャ人の君主は、我らの柔和さを愛する者、サラセン王ヨハネに対し、主を喜び祝うことを願う！　我らは、あらゆる敬虔に満ちた汝の手紙を受け取り、大いに喜び、また、*「闇から御自身の驚くべき光の中へ」*（Iペテロ2:9）と汝を導き出し、永遠の命と果てしない御国を相続するよう召された神に感謝を捧げた。　今やあなたは、イシ

[4991] 主の聖なる十字架の木は、614年、ギリシャ皇帝フォコスとの戦争中に、ペルシア王ホズロイ2世パルヴェズ（在位590年～628年）によってエルサレムから奪われた。 この十字架の木は、628年にホズロイ2世の後継者シロエスが、ギリシャ皇帝ヘラクレイオスとの和平を締結した際、ギリシャ人に返還された。

ュマエルではなくアブラハムの子となり、ハガルではなくサラの子となったのです[4992] 。あなたが真の王を知ったことを、私たちは称賛します。どうか最後まで、キリストへの信仰と、私たちの救い主の戒めの中に留まり続けてください。そして、あなたの願いを喜んで叶えます。　主の命を与える聖なる十字架の尊き木が、目に見える敵も目に見えない敵もすべてからあなたを守り、来世への至福の希望となりますように！

ギリシャ王は、この手紙をサラセン王への使者として、エデッサの司教聖テオドロスに託し、命を与える十字架の木の一部に加え、さらに救い主のイコンも授け、聖人に贈り物を与えた後、彼を平穏のうちに送り出した。　バビロンへ向かう途中、聖人は自身の都であるエデッサに立ち寄り、信徒たちに大きな慰めを与えたほか、心から敬愛する柱上修行者、聖テオドシオスにも面会した。　エデッサにしばらく滞在した後、彼はバビロンへと向かい、道中至る所で、命を与える十字架の木や主の聖墳墓の土を当てること、あるいは自身の聖なる祈りによって、様々な病を癒していった。　そして、彼がヨハネス王のもとへ到着すると、王は最大の喜びをもって彼を迎え、十字架と救い主のイコンに地までひれ伏し、喜びの涙を流しながらそれらに口づけをし、自分の寝室に安置し、この聖なる御前に自らの手で消えることのない灯を灯した。　また、ギリシャの王からの手紙を、深い愛を込めて読み上げた。

聖テオドロスはバビロンに滞在し、多くの癒やしを行い、人々から悪霊を追い出した。これに対し、キリスト教徒たちは大いに喜んだが、サラセン人やユダヤ人たちは激しい嫉妬に苛まれた。後者の中には、ユダヤ人社会の指導者であり律法の教師である一人のユダヤ人がいた。彼はペルシャとサラセン人の高官たちに働きかけ、王に対し、キリスト教徒とユダヤ人の間で信仰に関する公開討論を行うよう勅令を出すよう提案させた。　王は、キリストの僕たちが決して敗れることはないことを知っていたため、彼らの提案に同意した。論争の日が定められ、大勢のペルシャ人、サラセン人、ユダヤ人、そして のキリスト教徒が集まった。その後、王自身も全顧問を伴って集会に現れた。 王が高い席に着くと、ユダヤ人の律法学者が、すべてのユダヤ人を代表して、キリスト教の教師たちや聖職者たち、すなわちバビロンの大司教とエデスの司教に対し、たった一人で立ち向かった。そのユダヤ人は実に雄弁であり、自らの知識をこれほどまでに誇っていたのである！　しかし、彼が聖書に基づかずに、さまざまな荒唐無稽なことをでっち上げ、私たちの主キリストを冒涜し始めたとき、聖テオドロスは神聖な熱意に満たされ、手で沈黙の合図を送ると、そのユダヤ人にこう言った。

「もしあなたがモーセの律法や他の聖なる預言者たちの言葉から何かを我々の注意に提示したならば、我々はあなたに答えたであろう。　しかし、あなたは冒涜と偽りのためにその口を開き、聖なる預言者たちによって告げられたことではなく、あなたの父であるサタンから吹き込まれたことを語っている。*「ああ、あらゆる狡猾さとあらゆる悪行に満ちた者よ、悪魔の子よ、あらゆる真理の敵よ」*（使徒13:10）、あなたのすべての冒涜的で虚偽に満ちた言葉に対して、私はただ一つのダビデの言葉をあなたに告げよう。*「義人に対して、高慢と軽蔑をもって悪を語る偽りの口は、黙らせられるように」*（詩篇30:19）。

するとたちまち、その口達者なユダヤ人は黙り込み、その冒涜的な舌は麻痺して、何も言うことができなくなった。そこでユダヤ人たちは恥をかき、キリスト教徒たちは喜び、ペルシャ人やサラセン人たちは驚き、王もまた、キリスト教徒たちが勝利し、イエス・キリストの力が称えられていることを心から喜んだ。

その後、王は、神によって失語の罰を受けたそのユダヤ人の律法学者に対し、牛の腱で容赦なく鞭打つよう命じ、その後、牢獄に投獄させた。また、他のユダヤ人の指導者たちも同様に罰せられ、恥辱と共に集会から追放された。　それから三日後、牢獄に投じられていたそのユダヤ人は、話す

[4992] サラはアブラハムの妻であり、ハガルは彼の側室である。サラからイサクを経て神の民が生まれ、イシュマエルからはイシュマエル人（サラセン人やハガル人とも呼ばれた）が生まれた。

ことができないまま、聖テオドロス司教に書面による嘆願を送り、慈悲を請い、キリスト教を受け入れることを誓った。　聖人はこのことを王に報告し、そのユダヤ人を牢獄から解放した。すると、その男は聖人の足元にひれ伏し、舌がまだ不自由なまま、身振り手振りで洗礼を請うた。そこで司教は彼に「[4993] 」という洗礼の宣言を行い、その後、彼を聖なる洗礼の浴槽に導き入れ、至聖なる三位一体の御名を呼びかけたところ、　その舌はたちまち口がきけない状態から解放され、彼は大きな声で父と子と聖霊を賛美し始め、イエス・キリストこそが、律法と預言者たちによって告げられた、まことに生ける神の御子であることを告白した。

こうして、そのユダヤ人はキリスト教徒となり、聖なる洗礼によって以前の名前から「サモン」という新しい名を与えられ、彼の例に倣って、他の何人かのユダヤ人も聖なる信仰を受け入れ、洗礼を受けた。　また、ペルシャ人やサラセン人の多くもキリストを信じるようになったが、自国の当局による迫害や処刑に遭うことを恐れて、信仰を秘密にしていた。

その後、数日を経て、聖テオドールは隠者である尊者ヨハネのもとへ向かう準備を整え、そのことを王に告げた。王は、自分もその神の御心にかなう者を拝見し、その教えを聞きたいと述べた。聖人はこれに対し、次のように答えた。

「その願いを支持する。なぜなら、もし彼に会えば、そこから大きな恩恵を受けるだろうから。彼は高潔な魂の持ち主であり、先見の明の賜物を持っているため、未来のことをあたかも現在のことのように語ることができるのだ。」

こうして、彼らは共にその隠者のもとへ向かうことに合意した。王は、狩りに出かけるふりをし、数日間、荒野で野獣を狩って過ごしたいと装った。そこで、彼は大勢の従者や兵士を従え、常任の医師である司教も同行させて出発した。

彼らは山々や人里離れた谷間を歩き回り、多くの獲物を捕らえた。やがて、隠者が洞窟に滞在している場所に近づくと、王は家来たちを散らして、わずかな随行者だけを残してその場に残った。その後、洞窟にさらに近づくと、王はこの随行者たちも残し、キリスト教に改宗した最も忠実な三人の従者だけを連れて先へ進んだ（　）。一方、聖人は、後に彼の伝記を著すことになる弟子ヴァシリーを伴った。　一方、聖ヨハネは、王と司教が自分に向かって来ていることを霊感で察知すると、手に火と香を携えて彼らを迎えに出た。そして、一礼して彼らを歓迎し、自分のいる洞窟へと案内した。そこで彼らは皆、魂に有益なことについて語り合った。そして、隠者は王にこう言った。

「あなたは幸いである。なぜなら、虚しく偽りのものを捨て去り、あなたを命へと導く真理を愛したからである。あなたは幸いである。なぜなら、殉教の冠を戴き、一時的な地上の王国に代わって、キリストと共に天において永遠に統治することになるからである。　三位一体の唯一なる神に栄光あれ。神はあなたを情欲の深淵と汚れの底から引き上げ、あなたの足を岩の上に据え、あなたの口に新しい歌を授けてくださったのだから！

その後、尊い長老は訪れた人々に、砂漠で見つけられた食べ物と飲み水を振る舞い、彼らはそれを味わい、神に感謝を捧げた。王は言った。

[4993] 説教――古代教会において、聖なる洗礼の秘跡を受けようとするすべての人々に授けられていた、キリスト教の信仰の真理に関する口頭による教え。　聖書や教訓を聞くため、さらには典礼の第一部および第二部（「プロスコミディア」と「求道者の典礼」）に立ち会うために教会に入る権利を与えられていた　カテキズム受講者は、典礼の第三部、すなわち最も重要な部分（「信徒の典礼」）が始まる前に、直ちに教会から退出しなければならなかった。このことは、助祭による呼びかけによって告げられ、今日でも正教会における典礼の執行中に受け継がれている。　求道期間の長さは一律ではなく、多くの人は生涯を通じて求道者のままであった。必要に応じて、求道期間は数日間、あるいは数時間にまで短縮されることもあった。――求道者の儀式は、現在も正教会で執り行われている。　その内容は、洗礼を受ける者の前で定められた祈りを朗読し、悪魔に対する呪文を唱えることである。その際、洗礼を受ける者はサタンを拒絶し、キリストと結ばれ、使徒信条の朗読によって自らの信仰を告白する（幼児洗礼の場合、これは代父・代母によって行われる）。

「正直に申し上げて、私の治世の全期間を通じて、今日ほど喜びをもって食事や飲み物を味わったことは一度もありません！まことに、霊的な父よ、あなたこそが王であり、私は貧しくみすぼらしい者です！」

すると、長老はこう言った。

「主は、この貧しい私を訪ねてきてくださったお礼として、まもなくあなたに真の王国を授けてくださるでしょう。」

王は長老に多くの金を差し出したが、長老はそれを受け取らず、こう言った。

「荒野に住む者には金は必要ありません。それを町に住む貧しい人々に配りなさい。そうすれば、天国で百倍の報いを受けるでしょう！」

王は、天使に等しい生活を送るその敬虔な老人の生き様に感嘆し、その後、長い対話を交わした後、皆は老人と別れの挨拶を交わした。老人は祝福と祈りを捧げて彼らを見送り、一行は立ち去り、従者や兵士たちと合流して街へと戻った。王は聖テオドロスにこう言った。

「最も敬虔なる父よ、この世の誰よりも高き、真に天に属する人を私に拝見する機会を与えてくださったことに対し、いかに感謝すればよいのでしょうか！」

その間、慈愛に満ちた羊飼いは、自分の群れのもとへ戻ることを考えていた。彼は、自分がいない間に、異端者たち――あの邪悪な狼たち――が群れを襲い、霊的な羊たちに害を及ぼすのではないかと恐れていた。そこで彼は、王にエデッサへ帰らせてほしいと懇願した。王は涙を浮かべてこう言った。

「父よ、あなたが去られた後、私はもう長くは生きられないような気がします。私は、神を密かに崇める者であり続け、ひそかにキリスト教徒の名を名乗ることを望みません。どうか安らかに故郷へ帰ってください。そして、主の尊き、命を与える聖十字架の断片を携えて行ってください。そうすれば、私の死後、それが不信仰者たちの足で踏み躙られることはないでしょう。　もし一年後に私がまだ生きているという話を聞いたら、また私を訪ねてきて、この聖遺物を持ち帰ってください。もし私の死を聞いたら、私の魂の安息のために祈ってください。

王は聖テオドロス司教に、神の聖堂を飾るため、また貧者や困窮者に施すために、大量の金や銀、あらゆる貴重な品々を授け、別れを告げて、二人は涙ながらに別れた。　聖テオドロスは去る際、バビロンに自分の従者の一人を残し、自分が去った後にそこで何が起こるかを監視させた。そしてバビロンを後にし、無事にエデッサへ戻り、自分の霊的な羊たちの元へ帰った。

聖テオドロスの去ってしばらくして、バビロンに留まっていた敬虔な王ヨハネは、もはやキリストへの信仰と愛を秘密にしておくことを望まず、むしろ皆の前で実際にキリスト教徒であることを明らかにしようと決意し、すべての公爵、軍司令官、都市長たちを呼び寄せ、こう告げた。

「私はあなたがたに偉大な秘密を明かそうと思う。誰も私の言葉を疑ってはならない！神から啓示を受けたのだが、私の死は間近であり、数日後にはこの世を去ることになる。それゆえ、私はあなたがたおよび民全体に対し、明日の朝、あの野原（王は特定の野原を指し示した）に集まるよう命じる。私はあなたがたに私の遺言を告げたいのだ。」

そう告げると、王は彼らを帰し、彼らは悲しみに暮れて去っていった。その後、王は布告役たちに、朝にはすべての民がその野原に集まるよう、街中で大声で告げさせるよう命じ、自身はその夜を徹して祈りに費やした。　早朝、王は総主教を呼び寄せ、自身の意図を告げるとともに、内殿の祈りの部屋で神聖な聖体礼儀を執り行うよう依頼した。聖体礼儀の終わりに、王は感動のうちに聖職者の手からキリストの御体と御血の聖なる秘跡を拝領し、聖職者に貴重な　の贈り物を手渡して、彼を帰した。　その後、彼は明るい色の王の衣装を身にまとい、馬に乗り、大勢の随行員を伴って指定された場所へと向かった。そこにはすでに、ペルシャ人、イスマイル派、ユダヤ人、キリスト教徒、そしてすべての首長や支配者たちといった、数え切れないほどの民衆が集まっていた。　高い壇が設けられ、その上に高い王座が置かれていた。それは、誰もが王を見ることができるようにするためであ

った。　人々は皆、王がなぜ自分たちを集めたのか不思議に思い、王が何を語るのか互いに尋ね合っていた。王はその場所に到着すると、玉座に着き、しばらくして静粛を求める合図を送ると、玉座から立ち上がり、大声で語り始めた。

「ペルシャ人、アガリア人、ユダヤ人、そして尊いキリスト教徒の皆さん、よく聞きなさい！私はキリスト教徒であり、名はヨハネである。私は父と子と聖霊、すなわち三つの位格でありながら一つの神性をなす神を信じている。この世には、キリスト教以外の正しい信仰は存在しない。　そして、わが主イエス・キリストが福音書の中でこう言われたように、*「人々の前でわたしを公に認める者は、わたしも天の父の前でその者を公に認める*」（マタイ10:32）と。それゆえ、今、私は天と地の前で、天使と人々の前で、主を公に認める！

そう言いながら、彼は胸元から宝石で飾られた金の十字架を取り出し、皆に見えるように両手でそれを高く掲げた。それから、十字の印で身を守り、東に向かって地面にひれ伏して礼拝した後、尊い十字架に口づけをしてこう言った。

「キリストよ、あなたの尊い十字架に拝礼し、あなたを私の神であり救い主であると認め、始まりなき御父と、至聖にして善き、命を与える御霊とともに、永遠にあなたを賛美します。アーメン！」

これを聞いて、皆は驚き、まるで呆気にとられたかのように立ち尽くした。すると、公爵や軍司令官たちは他の指導者たちと共に、激怒して叫んだ。

「我らの信仰を冒涜する者を殺せ！」

そして彼らは王に襲いかかり、剣と槍で彼を刺し殺した。また、キリストの御名を告白した三人の信仰深い奉仕者たちも、王と共に殺害された[4994]。

こうして、5月の3日、バビロンにおいて、敬虔な王ヨハネは三人の家来と共に殉教の死を遂げた。その時、この出来事を目撃したすべてのキリスト教徒は、アガリア人の激怒を恐れて極度の恐怖に陥り、その場から逃げ出して身を隠した。王の遺体は、埋葬されることなくその場に放置された。

その日の夜、聖なる殉教者は威厳ある姿で長老たちや支配者たちの前に現れ、こう言った。

「速やかに私の遺体をキリスト教の総主教に引き渡し、彼が埋葬できるようにせよ。もしそうしなければ、私はあなた方を即座に皆殺しにしてしまう。」

彼らが眠りから覚めると、早朝に集まり、互いに見た夢について語り合い、恐怖に襲われた。彼らは直ちにキリスト教の大司教に命令を送り、王の遺体を引き取って埋葬するよう命じた。大司教は直ちに赴き、聖殉教者ヨハネ王の遺体と、彼の三人の聖なる従者の遺体を引き取り、教会へ運び、そこで尊厳ある埋葬を行った。　彼らの共同墓からは様々な奇跡が起こり、キリスト教徒だけでなく、アガリア人に対してもあらゆる病気の治癒が頻繁にもたらされ、その結果、アガリア人たちはキリスト教を受け入れる方向に傾き始めた。

亡くなってから一晩後、聖ヨハネ王は夢の中で、エデスの司教である聖テオドロスの前に現れた。彼は極めて輝かしい白い衣を身にまとい、頭には言葉では表現しきれないほど美しい冠を戴いていた。彼は司教にこう言った。

「ほら、敬虔なる父よ、主キリストは私を大いなる栄光をもって称え、殉教者の列に加えられました！昨日、私は万人の前で御名の聖さを告白し、そのためにペルシャ人とサラセン人に殺されましたが、私の魂は肉体の牢獄から解き放たれ、あなたが私に語ってくださったような恵みを受けました。　あなたが私の救いの仲介者となってくださったことに対し、神があなたを祝福されますように。そして私は、私たちの共通の主なる神に、あなたも一日も早く私のところに来られるようお命じくださるよう祈ります。そうすれば、至聖なる三位一体の恵みによって、共に至福の生涯を享受することができるでしょう。

[4994] 聖テオドロスの死は、その伝記に記されている他の聖人たちと同様、9世紀に訪れた。

眠りから覚めた聖テオドール司教は、柱上の聖テオドシオスのもとへ行き、自分に現れた幻について語った。柱上の聖人は、それは確かに幻であったと彼に告げた。というのも、彼自身も神から同じことについての啓示を受けていたからである。 数日後、バビロンから、 そこに残されていた使用人がやって来て、敬虔な王ヨハネと三人の少年たちがキリストのためにどのように殉教したかを、細部に至るまで報告した。聖テオドールは心の底から喜び、自分の労苦が無駄にならず、天の御国においてこれほど素晴らしい実を結んだことを神に感謝した。

そのしばらく後、柱上者は幻の中で、弟である敬虔なヨハネ隠者が主のもとへ旅立ったのを見、その後、短期間の病の末、柱上者である敬虔なテオドシウス自身もこの世を去った。 聖人は、聖大殉教者ゲオルギオスの教会、すなわち聖なる断食修道女たちの修道院に彼を葬った。聖なる王ヨハネが殺害されてから三年が経過した頃、この殉教者は再び聖テオドロスの前に、最初と同じ姿で現れ、こう言った。

「進みなさい、愛する父よ。キリストがあなたを召しておられる！ 主は、私たちがあなたと共に御国に住み、その驚くべき光の中で喜びを分かち合うことをお許しになったのだ。」

この幻視から、キリストの聖人テオドロスは、自らの神への帰天が近づいていると悟った。そこで彼は、エデッサの教会の事務について必要な手配を整え、霊的な羊たちへ祝福と平安を授けた後、その群れを離れ、エルサレムへと向かった。 キリストの聖なる命を与える聖棺に礼拝を捧げた後、彼は修道生活が始まった聖サヴァの修道院を訪れ、かつての修道室に身を寄せた。ここで三週間を過ごした後、彼は「人の手によらずして造られた」天の住処へと移り、7月の9日にその聖なる魂を神の御手に委ねた。 エルサレム総主教は司教たちと共に、この神の御心に適う者が、父と子と聖霊を賛美し、 三位一体の唯一の神に、私たち罪人からも、今、そして常に、世々限りなく、栄光と賛美と礼拝と感謝が捧げられますように。アーメン。

7月23日

7月10日（旧暦）

尊き父アントニー・ペチェルスキーの記念日

7月10日の記念日

敬虔にして聖なるウラジーミル大公の時代（[4995] ）、主は御自身の教会に灯火を、また修道者たちに導き手として、永遠に記憶される人物、尊者にして神を宿す私たちの父アントニーを遣わすことをお許しになりました。

聖アントニオはリュベチェという町で生まれた[4996] 。幼い頃から神への畏敬の念に満たされていた彼は、修道者の道に進むことを望んでいた。 人愛に満ちた神が、ギリシャの地へ赴き、そこで修道誓願を立てるという志を彼の心に植え付けると、アントニオスは直ちにそれを実行に移し、私た

[4995] 言うまでもなく、聖ウラジーミル・ラヴノアポストル（使徒に等しい者）は、ルーシの布教者であり洗礼者であり、978年から1015年まで大公を務めた。その記念日は7月15日である。

[4996] チェルニヒウ州にあったリュベチは、ヴァリャーグの到来以前から存在していた古代ルーシの先史時代の都市の一つである。オレグの時代、ここは彼の「大公」たちが居を構えていた主要都市の一つであったが、その後、リュベチはその重要な政治的意義を失った。 歴史上、リュベチは1）1016年のヤロスラフとスヴィャトポルクの戦い、および2）1097年に両者の間の「和平の締結」のために開かれた大規模な公爵会議で知られている。 現在、リュベチはチェルニヒウ州の地方都市あるいは小都市であり、ドニエプル川のモスクワ側（左岸）に位置し、キエフから120ヴェルスタの距離にある。

ちの救いのために巡り歩き、労苦された主の模範に倣って旅をした。コンスタンティノープル[4997] に到着すると、聖アントニオスはそこから聖アトス山[4998] へと向かった。 その修道院を巡りながら、彼は　、そこに暮らす聖なる父たちの生活に驚嘆した。彼らは肉体を持ちながらも、人間の性質を超越し、無形の天使たちの偉業に倣っていたのである。そして、アントニオの心には、以前よりもさらに強くキリストへの愛が燃え上がった。　その聖なる父たちの生き様に倣いたいと願った彼は、アトス山の修道院の一つを訪れ、修道院長に、修道服の天使のような装いを授けてくれるよう懇願した。修道院長はその尊者による将来の修道生活を見通し、彼の願いを拒むことなく、[4999] で彼に剃髪を行い、完全な修道生活のための戒律を授けた。　新たに剃髪した修道士は、あらゆる面で神に喜ばれるよう努め、徳の道を歩んでいました。とりわけ、聖アントニオは従順と服従において際立った成果を挙げ、その生き様を見る者たちは皆、喜びに満たされました。　聖アントニオは、出家した聖なる山で、すでにかなりの時を過ごし、多くの人々にとって救いへの導き手となり、自らも高い境地に達していた頃、修道院長は神から、聖アントニオをロシアの地へ送り出すよう啓示を受けた。修道院長は彼を呼び寄せ、こう言った。

「アントニーよ！　ロシアの地へ戻りなさい。――そこに住む者たちも、あなたを通してキリスト教の信仰において繁栄し、確固たるものとなるように。聖なる山の祝福があなたと共にありますように！」

この祝福を、あたかも神の御口から発せられたものとして受け入れた聖アントニーは、ロシアの地へと向かった。キエフの街に到着すると[5000] 、彼はどこに定住すべきか考えを巡らせ、ロシアの洗礼のためにミハイル大主教と共にやってきたギリシャ人修道士たちによって設立され始めた修道院を巡り始めた。　しかし、これらの修道院には、完全な共同生活の規律や規則が整っていなかった。神の御心により、どの修道院も聖アントニウスが住むには適していなかった。そこで彼はキエフの周辺――森や山々を歩き回り、ついにはベレストヴァにまでたどり着いた。　そこで、かつてヴァリャーギによって掘られた洞窟[5001] を見つけた聖アントニーは、祈りを捧げた後、そこに住み着き、厳格な禁欲生活を送った。

[4997] コンスタンティノープル。

[4998] アフォン山（アフォン）は、ギリシャ語でアギオン・オロス（聖なる山）と呼ばれ、エーゲ海に突き出た細長い山岳半島であり、ギリシャ正教世界における修道生活の中心地として知られている。この地での修道生活は古代に始まったが、シリアやパレスチナよりは若干遅かった。　ロシア正教会にとって、ルーシにキリスト教が伝来して間もなくから17世紀に至るまで、アフォンは極めて重要な意義を持っていた。ここには、ロシア修道生活の父である聖アントニオが修道誓願を立てた。 また、アフォンに赴いたロシアの修道士たち（例えば、聖ニール・ソースキー†1508年）は、ここにある大規模な修道院図書館で、当時としては最も幅広い宗教教育を受けた。　ここには専門の翻訳者や写本者がおり、彼らを通じて正教のルーシへ、教会的な教訓を説く翻訳された手書きの著作が供給されていた。– 正教会の東方において最も崇敬される聖地の一つであるアフォン山には、ロシア、バルカン半島、そしてトルコのアジア領から、毎年数千人の巡礼者（女性のみ修道院への立ち入りが禁じられているため、全員が男性）が訪れている。

[4999] アントニーという名は、おそらく、東方の修道生活の父であるアントニー大聖人がエジプトにとってそうであったように、アントニーがルーシにとっても同様の存在となることを願って付けられたものかもしれない。尊者アントニーの世俗名は不明である。　もっとも、聖アントニウスが俗世ではアンティパという名を持っていたという、必ずしも確かなとは言えない伝承が残っている。

[5000] 聖アントニーはキエフに留まり、故郷のリュベチへは戻らなかった。おそらく、キエフは「キリスト教が最も発展し、すでに修道士もいた」ため、隠遁生活の修行において競い合う相手を見つけやすかったからであろう。

[5001] 大公たちは、自らの村であるベレストヴェにヴァリャーグの部隊を駐留させていたと考えられる。そして、そのヴァリャーグたちが、戦利品を安全な場所に保管するために洞窟を掘ったのである。

敬虔なウラジーミル公の逝去後、不信心で呪われたスヴィャトポルク[5002] が権力を掌握し、キエフの大公の玉座に就いた。 自らの兄弟たちをこの世から根絶やしにしようと望んだ彼は[5003] 、ボリスとグレブを殺害し、二人はこうして殉教の死を遂げた[5004] 。このような流血の惨事を目の当たりにした聖アントニーは、再び聖なる山へと身を引いた。

しかし、やがて敬虔なヤロスラフ公がスヴィャトポルクを打ち破り、キエフに即位した[5005] 。ヤロスラフは、聖使徒たちに捧げられた教会のあるベレストヴォ[5006] を愛していた。その教会には、イラリオンという名の司祭がいた。彼は敬虔な人物であり、厳格な断食者であり、聖書に精通していた。（それから何年も経って、聖職者たちを身近に置くことを好んだヤロスラフ[5007] ）は、神の御心と、彼が召集した司教たちの合意により、イラリオンを大主教に選出し、彼はキエフの聖ソフィア大聖堂[5008] でその職に就いた。 の司祭イラリオンは、時折ベレストフを離れてドニエプル川沿いの、今や修道院の「遠方の洞窟」あるいは「フェオドシイの洞窟」がある、樹齢数百年の森に覆われた丘へと向かった。 この丘でイラリオンは、サジェニ2つ分の広さの洞窟を自ら掘り、そこでひっそりと神に祈りを捧げ、詩篇を詠み、礼拝を行っていた。

一方、聖アントニオはこの頃、聖なる山にある、自身が修道誓願を立てた修道院に滞在していたが、再びイグメヌスに神からの啓示が下った。

「行け」と主は言われた。「アントニーを再びロシアの地へ送りなさい。彼はそこで私が必要としているからだ。」

修道院長は聖人を呼び寄せ、こう告げた。

「アントニーよ！ 神の御心により、再びロシアの地へ行きなさい。聖なる山の祝福があなたと共にありますように！」

これと同時に、修道院長は尊者に対し、ロシアの地で彼が多くの修道士たちの父となるだろうと予言した。そして、アントニーに祝福を与えた後、修道院長は彼を見送り、こう言い送った。

「平安のうちに去れ！」

この祝福を受けて、聖アントニーは再びキエフへと向かった。イラリオンが前述の小さな洞窟を掘った丘に登ると、聖アントニーはこの場所を深く愛するようになった。涙を流しながら神に祈りを捧げた後、彼はこう言った。

「主よ！ この場所に、聖アフォン山の祝福と、私を修道士として剃髪してくださった父の祈りが宿りますように。神よ、私がここに定住することをお認めください！」

[5002] 聖ウラジーミルの三男。

[5003] 年代記の著者は、この罪深い公の口に次のような言葉を託している。「兄弟たちを皆殺しにし、ルーシの全権力を独り占めする」

[5004] 聖殉教者たちである諸公の記念日は、正教会のロシア教会によって5月2日と7月24日の年2回、祝われている。

[5005] 1019年より大公。

[5006] 現在のキエフのペチェール地区において、ベレストヴォ村が正確にどこにあったかを特定するのは困難である。ペチェール修道院から西方向に少なくとも1ヴェルスタは離れていたと推測される。

[5007] 年代記の証言によれば、ヤロスラフは教会の規則を重んじ、司祭たち、とりわけ修道士たちを愛していた。彼は昼夜を問わず書物を読み、すでに完成していたスラブ語訳を書き写す多くの筆写士を集めたほか、ギリシャ語からスラブ語へ書物を翻訳する翻訳者たちも見出した。 ヤロスラフのこの教会・啓蒙活動について、年代記の著者は次のように記している。「ある者が土地を耕し、別の者が種を蒔くように、この者（ヤロスラフ）もまた、父ヴォロディミールが洗礼によって人々の目を開かせ、心を和らげたのに対し、彼は書物の言葉によって信者たちの心に種を蒔いた」。

[5008] 1051年、イラリオン大司教による一編の著作が伝存しており、それは文字通りの意味で、輝かしい雄弁な作品である。この作品の題名は次の通りである。「モーセによって与えられた律法、およびイエス・キリストによる恵みと真理について、また、律法が去り、恵みと真理が全地を満たし、信仰があらゆる言語へと広がり、我らのロシア語にまで至ったこと、そして、我らに洗礼を授けてくださった我らのカガン・ウラジーミルへの賛美、ならびに我らの全地からの神への祈り」。

その後、彼はその洞窟を住処と定めた。　そして、聖人はここで絶え間ない祈りのうちに暮らし、乾いたパンを口にし、適量の水で渇きを癒やしていた。それも一日おき、時には二日おきに。また、時には一週間何も口にせず、昼夜を問わず祈りの徹夜を続け、自らの手で懸命に大きな洞窟を掘り進めていた。

聖者が洞窟に居を構えていることを知ると、キリストを愛する者たちがここを訪れ、肉体を支えるために必要な物資を携えてきて、祝福を請うた。また、聖者と共に暮らしたいと願う者たちもいた。その中には、至福のニコン（[5009]）もいた。

まさにその頃、20歳の青年であった聖テオドシウス（[5010]）が聖アントニオのもとを訪れた。聖アントニオは、司祭であり経験豊富な修道士である至福のニコーンに、テオドシウスの修道衣を着せるよう命じた。

長い年月が経ち、敬虔なヤロスラフ公[5011]が世を去ると、その長男イジャスラフが権力を引き継ぎ、キエフの大公の座に就いた[5012]。一方、この頃、ペチェールスクの聖アントニーは、その高潔な生活によって、古代エジプトで名声を博した聖アントニウス大聖人のように、すでにロシア全土でその名を知られるようになっていた。　聖アントニーの修道生活を知った、キリストを愛する公イジアスラフは、自身の従者たちを連れて彼の元を訪れ、祈りと祝福を求めた。こうして、万人に敬愛される聖アントニーの名声はさらに高まった。そして、修道入りを望むキリスト愛好者たちが彼のもとに集まり始めた。聖アントニーは彼らを受け入れ、修道衣を授けた。

こうしたキリストを愛する者たちのうち、最初に聖アントニオのもとを訪れたのは、キエフの名門ボヤリン、ヨハネの息子である至福のバルラアム[5013]であり、続いて公爵の宦官エフレム[5014]であった。　彼らの希望に従い、聖アントニオは至福のニコーンに二人を修道者に剃髪するよう命じたが、それは聖アントニオと兄弟たちに多くの厄介事を招いた。　激怒したボヤリン・イオアンは、大勢の従者を連れて洞窟に押し入り、神に選ばれた私たちの尊者アントニイの信徒たちを追い散らした後、洞窟から自分の息子　である至福のヴァルラアムを引きずり出し、彼の修道服を華やかなボヤリンの衣装に着替えさせ、無理やり自宅へ連れ帰った。　しかし、大公イジアスラフ自身も、ボヤールの息子であり、自身の寵愛する宦官が修道者となったことを知ると、キリストの名のもとに聖アントニオによって集められた修道者たちに対して激しく怒りを露わにした。彼は、修道者たちを剃髪させた至福のニコンを捕らえるよう命じ、この件に関して彼に対して特別な嫌悪感を抱いていた；　彼はニコンに対し、ヴァルラアムとエフレムに再び平和に暮らすよう説得するよう命じ、従わなければ彼と彼の師であるアントニー、そして洞窟にいる者全員を投獄すると脅した。また、大公は洞窟そのものを掘り崩すつもりであった。

「闇の君主」の陰謀によって煽られた公のこの激しい怒りにより、聖アントニオは残りの兄弟たちと共に、洞窟を離れて別の国へ去らざるを得なくなった。　しかし、このことを知った公妃は、公に対し、神の僕たちを怒りに任せて領地から追放しないよう熱心に懇願した。それは、修道士たちの追放によって彼女の故郷であるリャホフの地を襲ったのと同じ神の怒りを招かないためであった。

[5009] すでに司祭として聖アントニオのもとを訪れ、洞窟に残っていた者たちを、聖人と共に暮らすために修道衣を着せた。その後、至福のニコンは、聖テオドシオスに次いで、洞窟修道院の修道院長となった。

[5010] およそ1055年から1056年頃。

[5011] 1054年

[5012] 1054年から1068年までの大公。

[5013] 後にペチェールスク修道院の初代イグメンとなった。

[5014] スコペツのエフレムは、大公イジャスラフの首席家政官であった。その後、彼はペチェールスク修道院を離れ、コンスタンティノープルへ移り、そこである修道院に暮らしていたが、そこからペレヤスラフの主教座に任命された。　いつ亡くなったかは不明である。年代記における彼に関する最後の言及は1091年のものである。司教として、エフレムは教会建築によって名声を博した。

（この公妃は、ポーランド王ボレスワフ・勇敢王の娘であり、ポーランド出身であった。彼女は公に、自身の父の生涯における次の出来事を思い起こさせた。すなわち、聖モーセ・ウグリンの修道入りを理由に、ボレスワフが修道士たちをポーランドから追放した件である。　主はその王の行いに怒りを覚えられた。王は突然この世を去り、その後勃発した内乱で多くの司教や貴族が殺害された）。公妃の懇願にようやく耳を傾けた公は、ついに正気を取り戻し、神を畏れるようになった。彼は長老のもとへ、去った場所へ戻ってほしいという願いを送った。三日間の捜索の末、かろうじて聖アントニオを発見し、戻るよう懇願した。

こうして、私たちの尊い父アントニオは再び自分の洞窟へと戻った。彼は絶えず神に懇願した――主よ、善を憎む敵から加えられる試練を勇敢に耐え抜く力を私に与えてください。また、御名を告白する者たちの魂を獣に引き渡さず、御自身の貧しい者たちを永遠に忘れ去らないでください[5015]。　主は聖人の祈りを聞き入れられた。散らされていた羊たちが再び平穏のうちに羊飼いの元へ戻ってきただけでなく、他にも大勢の人々が彼の洞窟を訪れ、滅びへと導く道の闇から救い出し、救いの光の道へと導いてくださるよう懇願した。　聖アントニオは皆を愛をもって迎え入れました。キリストにどのように従うべきかという教えを授けた後、彼は至福のニコーンに、志願者たちの修道服を着せるよう命じました。こうして聖人のもとには十二人の兄弟が集まり、皆の協力によって大きな洞窟が掘り出され、その中に教会と修道室が設けられました。それらは現在もなお存在しています。

ある時、聖アントニオは、自身の指導の下に結集した兄弟たちにこう語った。

「兄弟たちよ、神があなた方を集めてくださった。そして私は、聖なる山の祝福のもとで、あなた方に修道衣を授けた。私自身も、その山の修道院長から同じ祝福を受けて修道衣を授かったのだ。何よりもまず、神と至聖なる聖母マリアからの祝福、そして聖なる山からの祝福が、あなた方の上にとどまりますように。」

その後、尊者である父は兄弟たちにこう告げました。

「皆は別々に暮らしてください。私が修道院長を任命します。私は、かつての年月のように、一人で暮らしたいのです。」

そして、彼らに修道院長として至福のヴァルラアムを任命した。一方、聖アントニオ自身は、騒動や噂を避けるため、最初はここ、この洞窟内のひとつのケリアに籠もり、その後、別の丘に移り住み、現在の偉大なペチェルスク修道院の下にある新しい洞窟を掘り始めたのである[5016]。

至福の修道院長ヴァルラアムと修道士たちは、聖アントニオの祝福を受け、以前の洞窟に留まることにした。しかし、修道士たちの数が増え、共同の祈りの際に洞窟が全員を収容できなくなったため、洞窟の外に小さな礼拝堂を建てることを計画した。　修道院長と修道士たちは、聖アントニオの新しい洞窟を訪れ、彼にこう言った。

「父よ！兄弟たちの数は増え続け、共同の祈りの際にはもはや洞窟に全員が入りきれません。主と至聖なる聖母マリアの御心、そしてあなたの聖なる祈りによって、洞窟の外に小さな教会を建てることをお許しください。」

聖人は祝福を与えた。彼らは聖人に地面まで頭を下げて礼を捧げ、その場を去ると、洞窟の上に「至聖なる聖母マリアの被昇天」に捧げる小さな礼拝堂の建設を始めた。

洞窟の上に小さな教会が完成した後、イジャスラフ公（洗礼名ディミトリイ）は、自身がそのキリスト教名を持つ聖人、すなわち大殉教者ディミトリイに敬意を表して石造りの教会を建立し、そ

[5015] 参照：詩篇73:19。

[5016] 聖アントニオの第二の洞窟は、現在の「近洞窟」あるいは「アントニオの洞窟」と呼ばれるものである。この洞窟のある丘は、深い渓谷によって第一の洞窟のある丘から隔てられており、現在、近洞窟から遠洞窟までは、前述の渓谷に架けられた通路を通って91サジェンある。　聖アントニオは、厳格な隠遁生活に身を捧げたいと願う少数の弟子たちを連れて第二の洞窟へと退き、その後、彼と共に修行を志す者たちを受け入れた。

の教会の傍らに修道院を設けた。　この修道院の修道院長には、イジアスラフ公は、洞窟に住む修道者たちの長であった至福のヴァルラアムを任命した。富を頼りに、彼は自らの修道院をペチェルスク修道院よりも優位に立たせようとしたのである。　しかし、王やボヤールたちの富によって建立された修道院は数多く存在するものの、それらは聖人たちの祈り、涙、苦行、そして徹夜祷によって築かれた修道院には及ばない。同様に、尊者アントニーも金を持っていなかったが、自らの涙によって、他のどの修道院とも比べものにならないほどの修道院を築き上げたのである。　ところで、至福のバルラアムは、ペチェルスク修道院がまだ設立されたばかりの頃、聖大殉教者ディミトリイの修道院に迎え入れられていた。修道院長が去った後、総会議を経て、洞窟にいた修道士たちは、尊者アントニーのもとへ向かうことを決めた。

「師よ」と修道士たちは彼に言った。「私たちにイグメンを任命してください。」

「誰を望まれるのですか？」と尊者様は尋ねた。

「神と、至聖なる聖母、そして尊き父であるあなたが望まれる方です」と、訪れた者たちは答えました。

「あなた方のうち、――」と聖アントニオは決断した。「従順と柔和さと謙遜に優れた者が、あなた方のイグメンとなるように[5017]。」

すると、兄弟たちは聖アントニウスに、彼と志を同じくし、あらゆる善行に熟達している聖テオドシウスを修道院長として祝福するよう懇願し始めた。そして、聖アントニウスは彼を修道院長として祝福した。　一方、十二人の修道者たちは皆、尊者アントニウスに地面に額を付けて拝礼し、このような導き手を得たことを喜びました。

修道院長となった聖テオドシオスは、一層の熱意をもって修道院の運営に尽力し、その務めに深い敬虔さと涙を流すような祈りを添えた。また、人知れず沈黙を守り続ける彼の師、聖アントニオスによる祈りと祝福が、彼に大きな助けとなった。　そして主は修道者の数を増やし始め、やがて聖テオドシオスの指導の下、百人にも達した。聖テオドシオスは、兄弟たちの数がこれほど増えたのを見て、彼らと相談した上で、修道院を建立しようという決意に至った。そして再び皆は聖アントニオスのもとへ行き、こう言った。

「父よ！兄弟たちの数はますます増えております。私たちは修道院を建立したいのです。」

聖アントニオは大変喜びました。

「神に感謝します」と彼は叫んだ。「すべてに感謝します！　至聖なる聖母マリアと聖山の聖なる父たちの祈りが、あなた方と共にあり、あなた方を助けてくださいますように。」

その後、彼は兄弟の一人を遣わして、イジャスラフ公にこう伝えさせた。

「キリストを愛する公爵よ！神は修道士たちを増やしておられますが、私たちが住んでいる場所は手狭です。どうか、洞窟の上にある山を私たちに譲ってくださるよう、お願いいたします。」

イジアスラフ公はこれを聞いて大いに喜び、自分のボヤリンを遣わして、洞窟の上にある山を修道士たちの所有地として譲り渡させた。聖テオドシウスと修道士たちは、その地に大きな[5018]木造の教会を建設し、完成させると、イコンで飾り立てた。　また、修道室も設け、修道院そのものを柱で囲い、洞窟からここへ移り住んだ。この時から、聖なる山の祝福によって始まったこの修道院は、「ペチェルスキー（洞窟の）」と呼ばれるようになった。というのも、修道士たちは以前は洞窟に住んでいたからである[5019]。

[5017] 年代記作者の正確な言葉からは、少し異なる意味が読み取れる。聖アントニオスは、イグメーンの任命を求めた兄弟団に対し、聖テオドシオスを明確に指し示す次のような答えを与えた。「あなたがたの中で、従順で、柔和で、謙虚なテオドシオスほど優れた者がいるなら、その者をあなたがたのイグメーンとせよ」。

[5018] 以前の教会堂に比べて大きいが、実際にはそれほど大きな規模ではない。

[5019] 年代記作者の証言によれば、この修道院は聖テオドシウスによってではなく、彼に先立って修道院長を務めたヴァルラアムによって建設された。　いずれにせよ、この修道院は遅くとも1062年までに建立されたと言える。修道院の建立か

その後、尊者テオドシオス修道院長は、自らの修道院を「精神的な囲い」、すなわち、隠遁生活ではなく修道院内での修道者の生活を規定する規則によっても確立しようと決意し、その目的に適した修道院規則を探し始めた。　そしてこの件において、彼には私たちの尊い父アントニオスの祈りと祝福が助けとなった。まさにその祝福と祈りによって、主はこう導かれたのである。ちょうどその頃、ギリシャからゲオルギオス都主教と共にやってきた、ミハイルという名の、ストゥディオス修道院に所属する誠実な修道士がいたのだ[5020]。彼はスタディオス修道院の規則書を持っていた[5021]。この規則を、もちろんギリシャ語からの翻訳として書き写した後、聖テオドシウスはこれを自身の修道院に導入することを決意し、礼拝の「一連の儀式」――礼拝の詠唱や朗読、それに続く礼拝の仕方をどう行うか、教会での立ち方、食事の時間の過ごし方、食事で何を食べるか、そして具体的にどの日に食べるか――をすべて定めました。　ペチェールスク修道院から、他のすべての修道院もスタウディオス規律を取り入れた。このおかげで、ペチェールスク修道院は他のすべてのロシアの修道院に対して、先駆者としての優位性と名誉を誇っている。

新しい規則を通じて、また私たちの尊い父アントニオの祈りと祝福の助けを借りて、ペチェルスク修道院の生活を徳の道へと導いた尊者テオドシオスのイグメン（修道院長）在任中、17歳の若者としてこの修道院にやって来たのが、私たちの尊い父ネストルでした。彼は、尊者テオドシオスや他の聖人たちの伝記を著した人物であり、　訪ねてくる人々を愛をもって迎え入れていた聖テオドシウスは、聖アントニウスの助言と祝福に従い、彼をも快く受け入れた。　なぜこの修道院がペチェルスカと名付けられたのかを究明するため、ネストルは信者たちの教訓となるよう、自身の年代記の中で、修道院の初代院長である聖アントニウスの偉業について簡潔に記した[5022]。

さて、奇跡について――すべてではないにせよ――そして聖アントニオの尊い最期についても少し述べておこう。その情報は、至福のシモン司教と、彼に親しいペチェルスクの修道士ポリカルプから得たものである[5023]。当面は、尊者アントニオが経験した数々の功績や苦難に関する年代記作者の証言については、ひとまず置いておくことにする。

ら11年か12年後、聖フェオドシイは洞窟の上で、最初の修道院から渓谷を挟んだ向かい側、聖アントニイの第二の洞窟の近くに、新たな広大な修道院の建設に着手した。　1073年、聖テオドシウスは新しい修道院の建設を完成させることはできなかったが、その後を継いだイグメノス（修道院長）であるステファン、ニコン、ヨハネらがこれを成し遂げた。　ペチェルスキー修道院は現在に至るまで、この第二の場所に位置しており、そのためアントニオの洞窟（第二の洞窟）は修道院に近接している。古い、あるいは老朽化した修道院は、修道士たちが新しい修道院に移った後も取り壊されることはなかった。その修道院があった洞窟は、修道士たちの納骨堂として転用され、　古い修道院には、埋葬のために数人の修道士が残されており、その中には、修道院の教会で「亡き修道士たちのために」毎日追悼の典礼を執り行う司祭と助祭も含まれていた。

[5020] 年代記は1072年から1073年にかけてこの修道院について言及している。

[5021] この規則は厳格な共同生活規則であり、修道士が針一本でさえ私物を所有することを許さない。聖ネストルは、聖テオドシオスの伝記の中で、後者がストゥディオス派の規則を入手した別の出典についても指摘している。　「テオドシオスは」と彼は記している、「兄弟たちの中から一人をコンスタンティノープルの去勢者エフレム（上記、注21参照）のもとへ遣わし、（コンスタンティノープルにあった）ストゥディオス修道院の規則全文を書き写して送るよう命じた。　その使者は直ちに私たちの聖なる父の命令に従い、修道院の規則全体を書き写して、私たちの祝福された父テオドシオスに送った。

[5022] 近年の学術的研究により、「初期年代記」の著者は聖ネストルではなく、ペチェールスク修道院の別の修道士、おそらくは後にキエフの聖ミカエル修道院のイグメンとなったシルヴェストルであったと、疑いなく推測されるようになった。

[5023] シモンはペチェールスク修道院の修道見習いであった。そこから、大公ヴセヴォロド・ユリエヴィチによって、彼がウラジーミルに創設したロズデストヴェンスキー修道院のイグメンに任命された。その後、シモンは1214年にロストフ教区から分離されたウラジーミル教区の初代司教に任命された。シモンは12年間の在任期間を経て、1226年に死去した。ポリカルプもまたペチェールスク修道院の修道士であり、同修道院のイグメンに二度任命され、その職を離れてペチェールスク修道院へ二度戻った。その後、彼はペチェールスク修道院のイグメンとなった。（今月24日の彼の伝記を参照のこと）。　ウラジーミル司教シモンからポリカルプへの書簡、およびポリカルプからペチェルスクのアルヒマンドリト・ア

別の洞窟に隠遁していた我らの尊い父アントニオは、選ばれた信徒たちの数が増え、秩序が保たれているのを見て、神に感謝を捧げ、自身も徳においてますます高みへと至っていった。　それゆえ、主は彼を栄光に輝かせられた――尊者アントニーの名は、様々な奇跡、とりわけ癒やしと預言の賜物によって、ロシアの地に輝きを放ったのである。

聖アントニウスは、奇跡的な癒しの賜物を次のような形で示した。長老は自ら病人の世話をし、自らの祈りによって彼らを癒やした。しかし、祈りによるこれらの癒やしを謙遜をもって隠しつつ、彼は祝福を込めて、自分が食べていた草を薬として病人に与えた。　病人はそれを口にすると、どのような病に冒されていようとも、健康を取り戻した。その後、至福のアガピトが聖アントニオに倣い、同様の方法で病を癒やすようになった[5024]。

また、聖アントニオの予知の賜物については、他の例に加え、次のこともそれを裏付けている。

ヤロスラヴィチ家の三人の公――キエフ公イジャスラフ、チェルニヒウ公スヴィャトスラフ、ペリャスラフ公ヴセヴォロド――は、ポロヴェツ族との戦いに赴く際[5025]、聖アントニウスのもとを訪れ、祝福を求めた。聖アントニウスは、彼らに降りかかるであろう神の怒りを予見し、こう告げた。

「あなたがたの罪ゆえに、野蛮人に打ち負かされ、敗走することになる。その際、兵士の多くは川で溺れ死に、他は捕虜となり、残りは剣に倒れるだろう。」

そして、アルテ川での戦い[5026]の後、この予言は現実のものとなった。諸公はかろうじて一命を取り留めて逃げ去った。イジアスラフとヴセヴォロドはキエフへ、スヴィャトスラフはチェルニヒウへと逃げた。一方、ポロヴェツ人はルーシの地の南東の辺境に散らばり、その住民を捕らえ、殺戮した。

この予言とともに、聖アントニーは諸公爵に対し、ヴァリャーガの公アフリカンの息子シモンについて、シモンが神の恵みにより、前述の戦いで死体の山の中にいながらも死を免れるだけでなく、何年も経ってから、　ペチェルスクの石造りの教会に最初に安置されることになると予言した。その教会についても、聖アントニーは奇跡的な形で建立されるとあらかじめ告げていた。戦場から戻ったシモン自身は、聖アントニーにこう語った。

「私は、」と彼は語った、「負傷して戦死者の間に横たわっていたが、ある神聖な力が私をその中から救い出し、傷を癒やしてくれた。私の親しい者たちや戦士たちも、皆無傷でいた。」　「これから建てられる教会――それが私の安息の地となる――の姿を、私は空中で二度見た。一度はアルテ川のほとりで、戦死者の間にいた時、もう一度はそれより前に海の上で、私をヴァリャーガ公国から追放した叔父ヤクンから逃れ、ロシアの地へヤロスラフ公のもとへ逃げている最中のことだった。」

その後、シモンは、聖アントニオが予言した教会の設立について、神から与えられた御加護が自分に現れたという自身の言葉を、具体的な行動をもって裏付けた。シモンは彼に帯と金の冠を手渡し、次のように言った。

キンディンへの書簡には、ペチェルスクの奇跡行者たちや、大聖堂の建設時に修道院内で起こった奇跡に関する一連の伝承が記されており、これらをもとに、有名な『ペチェルスク・パテリク』が編纂された　（オテチク、オテチェスカヤ・クニガ、すなわち「教父たちの書」または「教父たちに関する書」）が編纂された。

[5024] 1095年に逝去した「無償の医師」である至福のアガピトスの記念日は、6月1日に祝われる

[5025] ポロヴェツ人、あるいはクマニ人は、10〜13世紀にロシア南部に住み、そこからルーシの辺境の都市や集落へ襲撃を仕掛けていたテュルク系の遊牧民族である。

[5026] この戦いは1066年、アルタ川で起こった。アルタ川はトゥルベジャ川の支流であり、トゥルベジャ川はキエフの下流で、左岸（モスクワ側）からドニエプル川に合流している。

「これは、私が故郷を去る際、救い主キリストの磔像のイコンから外したものです。」　あなたは、私がここに埋葬されると予言しました。そして私には、神の御声が聞こえ、この帯で、私が葬られる教会の基礎を測るよう命じられました。その教会の姿は、空中に示されました。また、その冠は、同じ神の御命令により、祭壇の上に固定されなければなりません。

こうして、聖アントニオの予言が神の御心と完全に一致していることが明らかになった。その後、現実そのものがこれを裏付けた。今語った出来事から何年も経って、シモンは神によって築かれたペチェルスクの石造りの教会に、最初に埋葬されたのである。

さて、再び年代記作者の記述に戻り、聖アントニウスが経験した次の大きな試練について述べよう。　闇の君主である悪魔は、善行の光を耐えられず、再びイジャスラフ公を通じて、首都キーエフから、暗い洞窟の中で、まるで隠されたかのように、奇跡と徳をもって輝いていた偉大な灯火、すなわち私たちの尊者アントニオを奪い去ろうと試みた。

聖アントニウスの予言通り、前述の戦いでポロヴェツ人が勝利を収めた後、キエフの人々はイジアスラフ公に対し、ルーシの地に散らばった敵に対して再び彼らと共に戦場へ出るよう迫った。しかし、公はこれに同意しなかった。[5027] 騒動が起こり、その最中に、キエフで捕虜となっていたポロツク公ヴセスラフが牢獄から解放された[5028] 。反乱を起こした民衆はヴセスラフをキエフ公と宣言し、イジアスラフはポーランドへ逃れることを余儀なくされた。7ヶ月後、彼はボレスラフ・勇敢王と共にそこからキエフへ戻った。　ヴェスラフもまた、軍を率いて出迎えていたが、その後、密かにポロツクへと逃亡した。 そこでイジャスラフはキエフに入った[5029] 。彼は悪魔の唆しにより、ある者が彼の前で誹謗中傷した聖アントニーに対して怒りを抱き始めた。その誹謗中傷とは、アントニーがヴェスラフを寵愛し、彼に助言を与えていたこと、さらにはキエフで起きた 一連の騒乱[5030] の主たる原因であるかのように思わせたものだった。　一方、聖アントニウスはこの時、洞窟で病に伏す隠遁者イサアクの世話をしていた。イサアクは、イエス・キリストの姿をとって現れた悪魔に惑わされ、悪魔たちとの踊りに引きずり込まれ、かろうじて息があるだけの状態にされていたのである[5031] 。 この聖アントニオの奉仕は、誘惑者にとってとりわけ憎むべきものであった。彼は、イサアクがまもなくサタンの誘惑から心身ともに癒やされてしまうのではないかと恐れていたからである。そのため、悪魔はあらゆる手段を講じてイジアスラフ公の怒りを煽り、聖アントニオをキエフの領地から追放させようとした。　そして、しばらくの間、悪魔はその目的を達成した。チェルニヒフ公スヴィャトスラフは、弟のイジアスラフが聖アントニウスに激しく怒っていることを知ると、夜中に使者を送り、密かに[5032] 彼をチェルニヒフへ連れ去った。 聖アントニウスは、チェルニヒフ近郊のボルディンスキー山脈にある一か所を気に入った。そこで彼は自ら洞窟を掘り、その中で暮らした。その後、この場所に修道院が建立された[5033] 。まもなく、イジャスラフ公は事態をじっくりと公平に検討した結果、聖人の悪意のなさを確信し、誘惑者の策略を見抜いた。　起きた出来事を悔やみ、彼はチェルニヒフの領内にある尊者アントニーのもとへ使者を送り、キエフ地方の神に選ばれた信徒たちの元へ再び戻る

[5027] 1068年

[5028] 1067年から

[5029] 1069年5月初旬

[5030] ヴェスラフは、十字の口づけの誓いを破ったことを理由に捕虜となった。おそらく聖アントニーはこの件についてイジャスラフを公然と非難しており、イジャスラフはこうした非難こそがキエフ市民の動揺の原因であると見なしていたのかもしれない。

[5031] 聖イサアクの記念日は2月14日

[5032] イジャスラフが聖アントニイの引き渡しを要求する恐れがあったため、その居場所を隠すために。

[5033] ボルディン山にあるウスペンスキー修道院、あるいはボルディンスキー修道院（現在はウスペンスキー・エレツキー修道院）。年代記の著者は、この修道院の創設者として聖アントニーを直接名指ししておらず、同聖人の弟子たちが彼の洞窟の近くにこの修道院を建立したものと推測される。

よう懇願した。　心優しく謙虚な修行者である聖アントニーは、この願いを受け入れた。彼は、羊飼いのいない羊のように混乱と忘却の中にあったペチェールシクの修道者たちの元へと戻った。　神は、このような灯火であり、ルーシの地の輝かしい太陽である、私たちの尊者アントニーが、神に救われた首都キエフ以外の都市で、敬虔な修道生活を始めることなど望まれなかった。　しかし、敬虔なウラジーミル公を通じて正教の信仰の光がロシア全土に輝き渡ったその地から、主は尊者アントニーを通じて、修道者の完全なる律法の光を輝かせることを御心に留められたのである。

そして、そのような試練の後も、私たちの尊い父アントニーは挫けることなく、ますます高みへと至る功徳の階段を登りながら、洞窟で精進を続け、彼の前では無力な悪魔の力に対して完全な勝利を収めるまで努力を続けた。　福音書の言葉に従い、彼は祈りと断食によって惑わす者たちを追い払い[5034]、また、徹夜祷、立ち祷り、そして祈りにおける数え切れないほどのひざまずきといった、勤勉な修行によっても彼らを退けた。そして死ぬまで、彼はその暗い洞窟を離れることはなかった。たとえそこでの生活が、この世の闇の支配者たちとの絶え間ない戦いであったとしても。

再び洞窟に身を寄せた聖アントニオは、奇跡を行う賜物を再び発揮し始め、その力は以前よりもさらに強まった。彼は、石造りの洞窟教会を細心の注意を払って世話するようになった。この教会の建設については、彼自身が予言していたものであり、さらにシモンから、この事業に対する神の御加護の証しを受けていたのである。　聖アントニオは、聖テオドシオス修道院長と協議を重ねる一方で、熱心に至高の建築主（[5035]）に祈りを捧げ、御自身がその至聖なる御手をもって祝福し、御自身の至聖なる母、　私たちの主の母である聖母マリアの家の建設を、御自身で祝福し、助けてくださるよう祈った。なぜなら、聖アントニオはダビデの言葉を引用してこう言ったからである。*「主が家を建ててくださらなければ、それを建てる者たちの労苦はむなしい」*（詩編126:1）。　尊者アントニーがそのような祈りに励んでいたとき、驚くべき奇跡が起こりました。かつての栄光ある奇跡行者、ミールの聖ニコライのようにペチェルスク修道院を離れることなく、彼は志を同じくする友である尊者テオドシウスと共にコンスタンティノープルに現れ、天の女王、至聖なる聖母マリアの前に参上しました。　彼女から聖テオドシウスと共に金を受け取ると、彼はそれを石工の職人たちに与え、天の女王の命により、彼らがペチェルスクの教会を建設するためにルーシの地へ向かうようにした。

石工たちはギリシャからやって来て、この奇跡を告げ広めた。また、私たちの尊い父アントニオスは、古代の預言者ゲデオンやエリヤに見られたような、さらに他の驚くべき奇跡も現した。

石工たちが、至聖なる聖母マリアの命じられた教会を建立したい場所について、聖アントニーに尋ね始めたとき、聖父は三日間、三位一体の主ご自身が天からのしるしによって、天の女王　の住まいとしてふさわしい場所を示してくださるよう祈りました。　その場所を選定するために人々が集まったとき、神の導きにより、スヴィャトスラフ公がやって来て、洞窟に隣接する自身の所有地を教会の敷地として寄進した。しかし、それだけでは不十分であった。栄光の王、主イエス・キリストご自身が、聖アントニオが最初の夜、前述の祈りを捧げていたときに、彼の前に現れたのである。

「アントニーよ！」と主は言われた。「あなたはわたしの御前で恵みを得た。」

これを聞いた聖アントニオは、その夜、大地全体に露が降り、教会建設予定地だけは乾いたままであるよう主に願い出ました。そして次の夜には、大地全体が乾いたままであり、主が教会建設に適するとお認めになった場所だけに露が降るよう主に願い出ました[5036]。 三日目に、聖なる父はその示された場所を祝福し、救い主のイコンから取り外され、シモンから受け取った金の帯でその場所を測量するよう命じた。その寸法は、天からシモンに命じられた通り、長さ三十帯、幅二十帯であった

[5034] マルコ9:29。

[5035] すなわち、創造主である神。

[5036] この聖アントニオの祈りは、イスラエルの士師ゲデオンの祈りに似ていた（士師記6:36–40）。

。 その後、聖アントニーは祈りによって火を降らせ[5037]、その場所の雑草を焼き払った。その場所は堀で囲まれた後、すでに完全に整地されていた。ここに、その伝承の表現によれば「天に似た」奇跡を起こすペチェルスクの教会が建てられた[5038]。

このように、私たちの尊い父アントニーは、これほど偉大な奇跡によって、自身の修道院の聖堂のための場所を整え、その建設の始まりを祝福した。その後、彼は天の住まいにあり、人の手によって造られたものではない永遠の教会へと旅立つための準備を始めた。この教会について、聖使徒ヨハネは『ヨハネの黙示録』の中で次のように記している。 *「しかし、私はその中に神殿は見なかった」*[5039] 、なぜなら、全能の主ご自身がその神殿だからである」（黙示録21:10,22）。天の女王もまた、ヴラヘルナでの御出現の際[5040]、教会の建設者たちに次のように告げ、こう予言された：

「このアントニオスは、この事業のためにあなた方を祝福するだけである。彼自身は永遠の安息へと旅立つからだ。彼の後、二番目の夏にはテオドシウスも続くであろう[5041]。」

しかし、洞窟で徳高い生活を送り、使徒と共に「私は毎日死んでいる」（Iコリント15:31）と語ることができた尊者アントニオスには、どのような尊厳ある最期への備えが必要だったのだろうか。 彼は、預言者の言葉を日々、偽りなく自らに当てはめていた。「（私は）あなたの戒めを守るために、急ぎ、遅れることなく努めた」（詩編118:50）。聖アントニオは心の中で（永遠の命への移行に）備えており、自分自身のことではなく、神に選ばれた羊の群れを、混乱の中に置き去りにしないかという心配に心を痛めていた。 こうして、聖人において使徒の言葉が成就した。「私は、どちらを選ぶべきか迷っている。*『キリストと共にいること、すなわち、この世を去ってキリストのもとに行くこと』を望んでいる。それは*（使徒自身にとって）*比べものにならないほど良いことだからである。しかし、あなたがたのためには、私がこの世に残るほうがより必要である」*（フィリピ1:23–24）。

そして、すでにこの世を去り、肉体を脱ぎ捨てる時が近づいていることを悟ると、聖アントニオは、自分の子供たちを、こう約束して慰めた。すなわち、自分がこの世を去った後も、自分が修行に励んできたその聖なる場所を離れることはなく、修道院を気遣い、常にそこを訪れて見守り、そこに住む者たちや、信仰をもってそこへやって来る者たちを助け続けると。 しかし、あらゆる遺産を遥かに凌ぐほどに特に尊いのは、聖アントニオが自身の修行の地について語った次の慈愛に満ちた約束である。 彼は、自らの祈りによって、自分自身が悔い改めと赦しへの確信をもってこの世を去るように、ここにいる彼を愛する者たちもまた、悔い改めの中で死に、赦しを得られるよう取り成すと約束した。

第二の洞窟に移った後、聖アントニオはそこで14〜16年間を過ごした。 そこで彼はこの世の生涯を終え、永遠の命へと移り変わった。それは7月10日のことであり、世界の創造から6581年、キリストの降誕から1073年、そして彼の生誕から90年目のことだった。当時はスヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチの治世[5042] であり、ギリシャ皇帝ロマノス・ディオゲネスの治世[5043] であった。 その際、尊者であり教会の創始者である彼の聖遺骨は、彼が息を引き取ったその洞窟、すなわち偉大なる 修道院の下にある洞窟に安置された。 しかし、尊い父自身が、生前、人々の目から遠ざかり、人里離れた場所でひっそりと神に祈りを捧げていたように、彼は自身の聖遺物に対しても同じ恵みを願い求

[5037] かつての聖預言者エリヤのように（列王記下18:36–39）。

[5038] この伝承は、『ミネイ・チェティ』の14日に掲載されている

[5039] すなわち、聖なるエルサレム、天から降りてきた偉大な都（黙示録21:10）のことである。

[5040] ヴラヘルナは、コンスタンティノープルにある地域である。

[5041] この聖母マリアの御出現に関する詳細は、14番の「ペチェールスク教会の建立に関する伝承」を参照のこと。

[5042] 1073年から1075年にかけてのキエフ大公。

[5043] おそらくは、1074〜1078年に在位した後継者のミハイル7世ドゥカの時代のことである。

めた――すなわち、それらが人々の視線から遠ざけられるように、と。わがロシアの立法者が、イスラエルの立法者と同じ運命に恵まれるのは、ふさわしいことだった。　イスラエルの民は、モーセがシナイ山から律法をもたらして以来、彼から放たれる大いなる輝きのゆえに、その顔を見ることができなかった[5044]。同様に、アフォン山からロシアの地に律法をもたらした後、善行の光の中で洞窟に暮らしていた私たちの尊い父アントニーも、人々の目には映らなかった。　イスラエルの律法者モーセの遺体は人々の目から隠されていた[5045]、そしてロシアの律法者である聖アントニオの遺体についても、聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神は、今に至るまで奇跡的に私たちが見ることを禁じられている。　聖アントニウスの尊い遺骨が安置されている場所を掘り起こそうと敢えてした多くの人々は、火の懲罰に遭いました。彼らは、自らの無謀さを悔い改めるまで、火傷による激しい苦痛に苛まれました。　しかし、尊者アントニウスの聖遺物は私たちの目からは遠ざけられているものの、その助けは常に私たちと共にあり、神の御使いを熱心に呼び求めるすべての人々のそばにあります。聖遺物は尽きることなく奇跡を起こし、信仰をもって尊者の尊い棺に駆け寄るすべての人々を助けています。

暗い棺の中で輝く光のように、聖遺物は人々の心から悪魔の闇を特別な力で追い払います。この闇はその光に打ち勝つことはできず、たいていはその輝きによって消え去ります。私たちの尊い父アントニオの聖遺物は、肉体だけでなく魂をも襲う様々な病からも私たちを救い出してくれます。

このことを、聖ヨハネ・多苦は完全に悟っていました。不浄な情欲との三年にわたる闘い――それは肉欲の燃え上がりによって彼に多くの苦しみをもたらした――の末、彼は聖アントニオの墓を訪れ、そこで昼夜を問わず祈りを捧げ続けました。すると、彼は聖人の声が自分に向けられているのを耳にしました。

「ヨハネよ！　ヨハネよ！　あなたは、この洞窟に籠もるべきだ。そうすれば、神の御助けにより、孤独と沈黙によって、その戦いは終息するだろう。」

ヨハネはそのままその通りにした。そして、神の恵みと、我らの聖なる父アントニオの祈りによって、彼は救われた。不浄な肉欲は、不浄な霊たちと共に、30年近くも彼に襲いかかっていたが、彼の伝記からも分かるように、結局彼に勝利を収めることはなかった[5046]。

聖アントニオは、約束通り、自身の聖地も残した。　その場所を気遣い、彼はこの世を去った後、生前と同様に、コンスタンティノープルで聖テオドシオスと共に現れ、そこでギリシャのイコン画家たちと、ペチェールスクの教会のために尊いイコンを制作することについて取り決めました。その際、彼は以前、同じ聖テオドシオスと共に教会の建設者たちに渡したのと同様に、彼らに相当量の金を手渡しました。　聖アントニオは、当時イグメンであった至福のニコンのもとへ、キエフのペチェールシク修道院にイコン画家たちを派遣した。これは、ペチェールシク教会の装飾に関する伝承『[5047]』に記されている。

私たちの尊い父アントニオは、この世を去った後も、彼を愛する者たちが、彼の聖なる地で過ごした生涯を悔い改めの中で終え、主の憐れみにあずかることができるよう支援するという、その慈愛に満ちた誓約においても、決して偽りではなかった。　この誓いの言葉は、ペチェルスクの修道士エラスムスにおいて、奇跡的に現実のものとなった。彼は、ペチェルスクの教会の装飾に費やした金の浪費を嘆き悲しむあまり、[5048]、激しい病に倒れた。七日間、彼は意識を失ったまま横たわり、一

[5044] 出エジプト記34:29–35

[5045] 申命記34:6。

[5046] 教会では7月18日に彼の記念日が祝われる

[5047] この伝承については、『ミネイ・チェティ』の14日の項を参照のこと

[5048] 至福のエラスムスは、その金を貧しい人々に配ったほうがよかったのではないかと考えていた。そのような疑念に苛まれた彼は絶望に陥り、無頓着な生活を送るようになった。そのような生活を送っているうちに、彼は激しい死の病に襲われた。

見するとすでに死の淵に近づいていたようでしたが、どうしても息を引き取ることができませんでした。それは、主が、彼が悔い改めずにその聖なる地で息を引き取ることを望まれなかったからです。そして八日目に、聖エラズムの前に聖アントニオと聖テオドシオが現れ、こう言いました。

「我らは神にあなたのために祈り、神はあなたに悔い改める時間を与えてくださった。」

エラスムスは即座に回復し、罪を悔い改め、神の赦しを受けて三日目に息を引き取った。彼の伝記に記されている通り、彼は聖人の列に加えられる栄誉に浴した[5049]。

さあ、この偉大なる奇跡行者である尊者アントニー――我がロシアの地における修道生活の先駆者――を授けてくださった、万物を恵む慈愛に満ちた御方を賛美しよう。彼のすべての行い、とりわけこの世を去る前に成し遂げたものを、いかなる人間も語り尽くすことはできない。なぜなら、彼は洞窟の隠遁生活において、秘密と沈黙の中で生涯を過ごしたからである。　これは、知られざるものや秘められたことを御存知である「心を知り尽くす方」のみが御存知のことである。「その方の舌は、速筆の書記の杖である」（詩篇44:2）と詠まれたその方ご自身が、永遠の命の書の中に、私たちの尊い父アントニイの詳細な生涯を記されたのである。　しかし、数々の戦乱の中で失われた多くの書物を見出すことができなかった私たち――わずかな情報しか集めることができなかった私たちは、この奇跡を行う先駆者に熱心に祈るべきである。そうして私たちも、彼の確かな約束の分け前を授かり、彼の執り成しによって、悔い改めと神の憐れみの中で生涯を終えることができるよう、　――そして、私たちの救いの至高の主である主イエス・キリストの恵みと人愛により、敬虔なるアントニオの名と共に、子と父の名として、私たちの名前が永遠の命の書に記されているのを見出せるように。主イエス・キリストに、その始まりなき父と、同質なる聖霊と共に、　栄光、賛美、そして御国が、今、常に、そして限りない世々にわたってありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

世の騒乱から離れ、世を拒んで福音に従いキリストに従い、天使に等しい生活を送り、聖アトス山の静かな安息の地に至り：　そこから、長老たちの祝福を受けてキエフの山へ赴き、そこで勤勉に生涯を全うし、故郷を啓蒙し、多くの修道者たちに天の御国へと導く道を示し、彼らをキリストのもとへ導かれた。尊きアントニオよ、キリストに祈り、私たちの魂を救ってくださるよう願ってください。

コンダク、第8調：

若き日から、何よりも神を愛し、神に身を捧げた尊き方よ、あなたは全霊を込めて神に従われました。この世の儚いものを何とも思わず、地中に洞窟を築き、そこで目に見えぬ敵の策略に勇敢に立ち向かい、輝かしい太陽のように地の果てまで光を放たれました。　その喜びに満ちて、あなたは天の宮殿へと旅立ち、今や天使たちと共に主の御座の前に立ち、あなたの記憶を称える私たちを覚えてください。そうして、私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、アントニオ、私たちの父よ。」

聖殉教者アポロニオスの受難

記念日：7月10日

[5049] 2月24日は、至福のエラズムの記念日である

キリストの聖殉教者アポロニウスは、リディア地方[5050] に位置するサルド[5051] の出身であった。ある日、彼がイコニウム[5052] へ向かう途中、捕らえられ、その都市の統治者ペレンニウスのもとに連行された。　尋問の際、彼は自らをキリスト教徒であると明かし、総督は彼に皇帝の名にかけて誓うよう強要した。これに対し、聖アポロニウスは彼にこう言った。

「死すべき皇帝の名によって誓うべきではなく、あらゆる被造物の創造主である神の名によってのみ誓うべきである。」

聖人のその言葉に恥をかかされたペレンニウスは激怒し、彼を木に縛り付けるよう命じた。その後、彼は長時間にわたる拷問にさらされたが、その中で、信者たちのために熱心に祈り、すべての人々の救いを懇願しつつ、自らの魂を神の御手に委ねた[5053] 。

聖殉教者ヴィアノールとシルアノの受難。

記念日：7月10日

聖殉教者ヴィアノルは、ピシディア地方の出身であった[5054] 。 キリストへの信仰を告白したため、彼はイサヴリアの都市の統治者[5055] セヴィリアヌスの命令により捕らえられ、キリストを否定するよう強要されたが、彼はその要求に従わなかった。そのため、まずナイフで残酷に刺し殺され、次に絞首刑に処され、さらに熱した鉄のハンマーで削られ、焼かれた。　さらに歯を打ち砕かれ、その後に耳を切り落とされた。この拷問の場に、あるシルアヌスという人物が立ち会っていたが、聖殉教者の忍耐を見てキリストを信じるようになったため、即座に舌を切り落とされ、その後、首を刎ねられた。　聖ヴィアノルについては、さらに足裏に穴を開けられ、右目をえぐり出され、頭部の皮膚を剥ぎ取られた末、ついに首を刎ねられた。聖殉教者ヴィアノルとシルアンは共に息を引き取り、その魂を神の御手に委ねた[5056] 。

アルメニアのニコポリスで殉教した聖45人の殉教者たちの受難。

記念日：7月10日

コンスタンティヌス大帝に迎え入れられ、東方諸国を統治していた不敬虔な王リキニウス[5057] は、自身の領土全域において、偶像を崇拝することを拒むキリスト教徒を様々な拷問にかけ、処刑するとともに、彼らの財産を没収して都市の再建に充てるよう命じた。　この勅令がアルメニアのニコ

[5050] リディアは、小アジアにあるローマの属州で、エーゲ海沿岸に位置し、東はフリギア、北はミシア、南はカリアと国境を接していた。

[5051] サルディス（またはサルディ）という都市は、リディアのヘルモス川の左岸に位置していた。この都市は『黙示録』において、エフェソスに居住していた聖使徒ヨハネ・テオロゴスが特に配慮を寄せた小アジアの七つの都市の一つとして言及されている。

[5052] イコニアの都市は、小アジアのローマ属州リカオニアに位置していた。

[5053] ミュラーによれば、聖殉教者アポロニオスの没年は、253年から259年までローマ帝国を統治した皇帝ヴァレリアヌスの治世中とされている。

[5054] ピシディアのローマ属州は小アジアの南部に位置し、北はフリギア、東はリカオニア、南はパンフィリアとリキア、西はカリアと接していた。　この地域は、聖使徒パウロが最初の伝道旅行の際に説教を行い、いくつかの都市で小アジア初のキリスト教教会を設立したことで知られている。

[5055] イサウリアという都市は、小アジアのローマ属州リカオニアにあり、ピシディアとの州境近く、カリカダナ川の上流に位置していた。

[5056] ミュラーとセルギイ大主教によれば、聖殉教者ヴィアノールとシルアンは、4世紀初頭のディオクレティアヌス帝によるキリスト教迫害の最中に殉教したと推定されている。

[5057] リキニウス皇帝は、307年から324年までローマ帝国の東部を統治した。

ポリスに届くと、異教徒たちはキリスト教徒に対する拷問や様々な拷問器具の準備を始め、多くの信徒を捕らえて拷問の場へと連行し始めた。　そこで、四十名以上のキリストの僕たちが集まり、不信心者たちに捕らえられるのを待たずに、自らの意志で裁きを受け、キリストの御名を告白し、拷問に身を委ねることを決意した。その中でも最も著名な者たちは、レオティウス、マウリキウス、ダニエル、　アントニウス、アレクサンドロスであり、彼らは家柄も教養も著名で、高潔な生活で際立っていた。彼らは皆でアルメニア地方のイゲモンのもとへ赴き、自分たちがキリスト教徒であることを宣言した。イゲモンは、これほど多くの人々が一致団結していること、そして自らの意志で拷問へと向かうその勇気に驚き、彼らに尋ねた。

「あなた方はどこから来たのか？　そして、誰があなた方に、我々の神々を崇拝しないよう教えたのか？」

聖アレクサンドロスはこう答えた。

「私たちはここの者です。ある者は町から、ある者は村から来ています。この地が私たちの故郷であり、私たちの父は天のキリストです。キリストこそが、耳も目も聞こえず、人の手で作られた偽りの神々に拝んではならないと、私たちに教えてくださったのです。」総督は言った。

「では、あなたたちのキリストはどこにいるのか？　彼は十字架にかけられて死んだのではないか？」

聖レオティオスはこう答えた。

「キリストが死んだことを知っているのか？　それなら、キリストが死者の中から復活し、天に昇られたことも知れ。キリストはご自身の御心により、私たちのために死なれたが、神の御子として再び復活されたのだ。」

イゲモンは言った：

「キリストは今、生きておられるのか？」

レオティウスは答えた：

「イゲモンよ！　あなたの神々は死後は生き続けませんが、私たちの主は永遠に生きておられます。たとえ私たちの救いのために一時的に死なれたとしても。主はその死によって、私たちを永遠の死から救い出し、命を与えてくださり、主のために死ぬことを教えてくださったのです。そうして、主と共に終わりのない命を生かすためです。」

すると、イゲモンはゼウス、アポロン、アスクレピオス[5058]、その他の自らの神々を称え始めた。これに対し、レオティオスは言った。

「ゼウスは偉大な神なのか？」

「彼は天を支配している」とイゲモンは答えた。「彼はすべての神々の父である。」

レオンティウスは反論した。

「神とは、正義に満ち、清く、罪のない存在であるべきだ。では、お前の神ゼウスについてはどう思う？」

「私は彼を正義に満ち、清く、罪のない者と呼んでいる」と、イゲモンは言った。

それに対し、聖レオンティウスは言った。

「ゼウスは正義である――しかし、彼は自分の父クロノスを王座から追放したのではないのか？　彼は清く、罪がない――しかし、彼は実の妹イラを妻とし、多くの他人の妻を汚したのではないのか？ 彼は女性だけでなく男性をも滅ぼし、最も忌まわしい不法行為を働いたのだ[5059]。そんな罪人

[5058] アスクレピオスは、医療の神である。

[5059] なお、古代ギリシャ人は神々に肯定的な性質だけでなく、否定的な性質も与えていたことに留意すべきである。古代ギリシャ神話では、多くの神々に、とりわけ道徳に反する様々な種類の犯罪への執着が賦与されていた。聖レオティオスがイゲモンと議論する際、まさにこの点を念頭に置いているのである。

である彼が、どうして神であり得るというのか？もしあなたの神が罪人であるなら、彼を正すためには、罪のない別の神が必要だ。

イゲモン・リシウスは激怒し、猛烈な口調で言った。

「誰がお前に、我らの神々を裁く権利を与えたのだ、邪悪な者よ！　彼らは私にとって神々だ。お前たちを容赦せず、皆を容赦なく滅ぼしてやる！」

聖レオンティウスは言った。

「怒らないでください、イゲモン。真実を聞くのですから。人々に、『他人の妻を奪ってはならない』『姉妹を妻にしてはならない』『誰をも傷つけたり殺したりしてはならない』という法律が与えられてはいないでしょうか？　そして、もし誰かが何らかの形で法律に背くことを敢えてすれば、その者は犯罪者と呼ばれ、裁判にかけられ、死刑に処されるのです。　しかし、あなた方の神々は人間であり、あらゆる悪と不法に満ちています。彼らは淫行者であり、姦通者であり、殺人者であり、法に背く者として、どれほど恐ろしい裁きを受け、何度死刑に処されるべきだったことでしょう！それゆえ、あなた方の不法な神々は人間の法律に従い、法律を厳格に遵守する人間に倣わなければならない。そしてあなた方は、彼らを改心させるまで、あなた方の神々の裁判官となり、神となり、処刑人となれ。

イゲモンは言った。

「おお、狂人よ！　悪党として十字架にかけられたのは、あなた方の神ではなかったか？　私たちの神々のうち、誰が十字架にかけられたというのか？」

聖レオティオスは答えた：

「私たちの神であるキリストは、私たちのために十字架にかかられた。私たちは彼の十字架を誇りとするが、あなた方の神々は震え上がり、私たちの十字架にかけられた神を恐れ、十字架の力から遠く逃げていく。私たちの神はご自身の御心によって十字架上で苦難を受けられたが、あなた方の神々は不本意ながら苦痛に満ちた死を遂げたのだ。　私たちの神は人類の救い主であるが、あなた方の神々は人々の破滅者である。私たちの神は真実の神であるが、あなた方の神々は偽りの神であり、神などではなく、悪霊であり、破滅をもたらす誘惑者である。彼ら自身は滅びており、彼らを崇拝する者たちを永遠の滅びへと導いている。

聖レオティオスのこの言葉に激怒したイゲモンは、キリストのすべての殉教者たちの口を石で打つよう命じた。

「彼らを打ちのめせ」と彼は言った。「我らの神々を冒涜するその口を。」

聖人たちは打たれながらも、こう言った。

「神があなたを打たれますように、サタンの僕よ！　あなたは真理を聞きながら不当な裁きを下し、我を忘れてしまった、不敬虔な者よ！」

その後、拷問官は彼ら全員に鉄の鎖をはめさせ、牢獄に投げ込むよう命じた。聖人たちは牢獄の中で、まるで宮殿にいるかのように、彼らの救い主である神を喜び、ダビデの詩篇を歌った。彼らの中には、幼い頃から多くの書物を読み込んでいた者もいた。そして聖レオンティウスは、次のような言葉で皆を励ました。

「誠実な兄弟たち、キリストの僕たちよ！　すべてを忍耐強く耐え忍ぼう！　聖書から、義人ヨブがどれほど多くの苦難に耐えたか、また、我らの主の苦しみがいかなるものであったか、そして他の 聖なる主の僕たちがどのようにこの世を去ったか、あなたがたは知っているはずだ。 洗礼者ヨハネは斬首され、ステファノは石打ちに遭い、ペトロは逆さ磔にされ、トマスは槍で貫かれ、他の者たちもまた、主のために様々な殉教の死を遂げました。ハドリアヌス[5060]、デキウス、 マクシミアヌ

[5060] 彼が言及した皇帝たちの在位期間は、ハドリアヌス帝が117年から138年、デキウス帝が249年から251年、そしてマクシミアヌス（ガレリウス）帝が305年から311年である。これらの皇帝は皆、キリスト教に対して極めて残酷な迫害を行っ

ス、およびその他のかつての不義な皇帝たちの治世下で、どれほどの聖人が苦難に遭ったことか。男性だけでなく女性も同様であり、例えば、聖テクレ、エウフィミア、カピトリナ、ユリッタ、その他の聖なる殉教者たちについて耳にする通り、彼女たちの名は天の命の書に記されている。彼女たちはなんと勇敢に戦い、悪魔に打ち勝ったことか！　そして、女性たちがこれほど勇敢であったならば、私たち男性は、さらに強靭で、誰にも打ち勝てない存在となり、十字架上で私たちのために御自身の魂を捧げられた、私たちの神キリストのために、自らの魂を捧げなければならない。

このような言葉でレオティオスは聖なる兄弟たちを励まし、皆はキリストのためにあらゆる苦難に耐えることを喜んで望んだ。　猛暑が続き、聖人たちは激しい渇きに苦しんでいた。そこへ、ヴラシアナという名の気高く敬虔な女性が牢獄を訪ねてきて、近くにあった泉から冷たい水を何の支障もなく運び込み、彼らに飲ませた。

その夜、聖人たちは祈りと詩篇の詠唱に明け暮れた。リシウス総督もその夜は眠らなかった。彼は、牢獄に収容されているキリストの僕たちにどのような拷問を加えるべきか、考えを巡らせていた。夜明け前、彼は眠りに落ちると、夢の中に悪魔が現れてこう言った。

「気丈に振る舞え、リシウスよ。私は神アスクレピオスだ。我々を冒涜するキリスト教徒たちを容赦なく苦しめよ。彼らは牢獄の中で、我々について多くの荒唐無稽なことを口走った。一刻も早く、あらゆる拷問で彼らを滅ぼせ。」

イゲモンは目を覚まし、日が昇ると裁判を始め、縛られた聖徒たちを自分の前に立たせて、こう言った。

「神々にひれ伏せば、君主たちや我々の友となれる。そうすれば、一人あたり二百ズラトニクと、新しくて立派な服、帯が与えられる。少年たちも連れてこられ、我々は生け贄を捧げ、宴を開き、共に楽しむだろう。しかし、もし私の言うことを聞かなければ、お前たちは残酷に苦しめられることになる。」　お願いだ。この快適な生活を失うことのないよう、妻や子供、友人たちと別れることのないよう、せめて我々の神々のうちの一柱にでも犠牲を捧げよ。

聖者たちはまるで声を揃えたかのように答えた。

「お前も、その神々も、呪われよ、拷問者よ。我々は不浄な悪魔たちに犠牲を捧げるつもりはない。お前の金も、衣服も、宴も、友情も、我々に必要ない。キリストこそが我々の父であり、最も愛すべき友であり、彼のために我々はあらゆる苦難に耐え、死をも厭わない。」

そこで拷問官は、彼ら全員を裸のまま吊るし、鉄のフックで肉を削ぎ落とすよう命じた。そして、太陽が激しく照りつけるようになるまで、正午まで長い間、聖なる殉教者たちの肉を削ぎ続けた。やがてイゲモンはこの光景から立ち去り、家路についた。一方、骨まで削ぎ落とされた聖人たちは、拷問官の命令により再び牢獄に閉じ込められた。　前述の敬虔な女性ヴラシアナが再び彼らを見舞いに訪れ、窓越しに、傷と暑さで衰弱していた彼らに水を飲ませた。聖人たちは涼を得て、この女性を祝福し、彼女とその子供たちのために祈り、神のために苦難に遭うことを許されたことを神に感謝した。

聖人たちが牢獄に囚われている間、聖レオンティオスは、兄弟たちのうち数人が傷のせいでひどく苦しんでいるのを見て、彼らが極度の衰弱のあまり信仰から離れてしまわないかと深く心配した。そのため、彼は神に、彼らにこの苦難の終わりを一刻も早く与えてくださるよう祈った。

その町には、ヘロデという名の有名な市民がいた。彼は異教徒であり、イゲモンから顧問として重用されていた。この市民にはフィリンという秘書がおり、その善良な人柄ゆえに聖レオティオスに好かれていた。聖人は彼を呼び寄せ、彼が牢屋の窓に近づくと、こう言った。

た。　このほかにも、特に残酷なキリスト教迫害によって歴史に汚名を刻んだ皇帝として、ネロ（54～68年）、トラヤヌス（98～117年）、ディオクレティアヌス（284～305年）が挙げられる。

「フィリン兄弟よ、あなたの主人であるヘロデにこう伝えてくれ。もし彼が何か用事で総督のもとに行くことがあれば、私たちのことを思い出し、明日、私たちに死刑判決を下すよう勧めてほしいと。」

フィリンは去り、その言葉をヘロデに伝えた。ちょうどその時、ヘロデはイゲモンからの夕食の招きを受けたが、すぐには行かず、イゲモンは彼を待っていた。再び使者が送られたが、彼は遅れてやって来て、こう言った。

「私は食べられません。死刑囚たちが拷問を受ける様子や、大量の血が流れるのを見てしまい、気分が悪くなってしまいました。胃が受け付けず、吐き気がします。」

イゲモンは尋ねた。

「彼らをどうすべきか、お前の助言を聞きたい。」

ヘロデは答えた：

「明日、死なせてやれ。彼らは王の命令に背いた犯罪者であり、死に値するのだ。それなら、なぜ今すぐ処刑しないのか？」

これに対し、イゲモンは翌日彼らを処刑することを誓約した。　直ちにフィリンは牢獄へと急ぎ、聞いたことを聖レオンティオスに伝えた。このことを知ったすべての兄弟たちは、明日キリストのために死ぬことを喜び、フィリンの尽力に感謝し、死に備えて祈りを捧げ始めた。彼らは祈りの中でこう言った。

「主よ、私たちの先祖の神よ、私たちを通してあなたの聖なる御名を栄光に輝かせてください。砕かれた心と謙遜な霊をもって、あなたに祈ります。　私たち自身を、羊や子羊の全焼のいけにえのように、また肥えた子羊の群れのように、生けるいけにえとしてあなたに捧げる私たちを受け入れてください。今、私たちのいけにえがあなたの御前にあり、それがあなたに喜ばれるものとなりますように。あなたに希望を置く者には恥はありません！　主よ、あなたがご存知の通り、私たちはあなたを愛し、あなたのために死を覚悟しました。どうか私たち全員を強めてください。この仲間から一人も取り残されることなく、敵が私たちを嘲笑ったり、そのことを喜んだりすることがないように。

こうして聖人たちは祈りを捧げ、互いに励まし合った。そして真夜中になると、彼らは自らの葬送のために偉大な詩篇を歌い始めた。すなわち、「清き者は幸いである」などという詩篇である（詩篇118篇）。詩篇が終わると、主の御使いが現れ、牢獄を光で満たし、彼らにこう言った。

「喜びなさい、キリストの僕たちよ。あなたがたの死は近い。あなたがたの御名は天に記されている。希望を持ちなさい。神はあなたがたと共におられる。」

こう告げると、天使は去っていった。彼らはひれ伏して、神に感謝を捧げた。その時、エジプト出身の二人の看守、メネイとヴィリラドは眠っておらず、牢獄に輝いた光を見、天使の声を聞いたが、天使そのものは見ることができなかった。そこでメネイはヴィリラドに言った。

「兄弟よ、この兵士たちは一体どこの王のものであろうか？　私は最初からキリスト教徒たちに共感していた。彼らは不法な道ではなく、正しい道を歩み、自分たちの神への信仰を守り、昼も夜も誰にも害を与えず、他人の財産を求めず、むしろ自分の持ち物さえ分け与え、すべての人を愛し、すべての人に恩恵を施している。　お前自身もそれを知っているはずだ。では、エジプトの砂漠をさまよう者たちの生活はどのようなものか？　それは奇妙で驚くべきものではないか？　彼らは奇跡を起こしている。私は彼らの牢獄を訪ね、私を受け入れてくれるよう頼もうと思っている。兄弟よ、お前はどう思うか？

ヴィリラドは答えた：

「君と同じ考えだ。ほら、私たちのような不肖の者でさえ、神が彼らを照らした光を見る恵みにあずかることができた。彼らはその神のために喜んで死んでいくのだ。もし誰かがイゲモンに、ゼウスやアポロン、アスクレピオス、あるいは他の神々のために死ぬよう強要したとしたら、彼は死のうとするだろうか？　決してそうはしないだろう。彼にとって命は大切だからだ。しかし、彼らは自

らを惜しまず、恐れずに自らの神のために死へと向かい、神から、神々を崇拝する者たちの誰に対しても決して示したことのないような栄光に浴している。なぜ我々も、これらの義人たちに、そして真の神に帰依しないのか?

このように相談した後、二人の看守は牢屋の中に入り、聖人たちにひれ伏してこう言った。

「主よ、真の神であるキリストのしもべたちよ、私たちもあなた方の仲間に加えてください。私たちも、あなた方を愛してくださった主イエス・キリストを信じます。どうか主にお祈りください。私たちもあなた方と同じ運命に恵まれるよう。」

聖人たちは、彼らが神に立ち返ったことを喜び、こう言って彼らを迎えた。

「あなたがたは私たちの兄弟です。私たちの主は、あなたがたを御自身の至聖なる御名を告白するよう召され、十一時に主のぶどう園に来た者たちと同様に、私たちと同じ報いを与えてくださるからです。[5061]。」

翌朝、イゲモン・リシウスは兵士たちを率いて、リコスと呼ばれる川の近く、聖なる殉教者たちを処刑する予定の場所へと城の外へ出た。そこで彼は法廷を設け、聖なる殉教者たちを連れてきて自分の前に立たせるよう命じた。　二人の牢番が聖なる囚人たちに加わっているのを見て、彼は首席顧問のアピアンにこう言った。

「ほら、この狂人たちも死にたがっている! 死よりも生の方がましではないか?」

これに対し、アピアヌスは言った。

「彼らに最も残酷な拷問を加えよ。」

「いや」とイゲモンは反論した。「彼らは拷問を恐れて再び神々に帰依し、生き延びてしまうだろう。だが、私は彼らを生かしておきたくない。死なせてしまえ。全員に一斉に死刑を宣告する。」

そして、聖なる殉教者たちが彼の前に引き出されて裁きを受けることになると、彼は彼らに信仰について問いただすことも、いかなる拷問を命じることもなく、即座に彼らに死刑を宣告し、次のような判決文を書いた。

「私の裁きに引き出されたこの45人のキリスト教徒は、王の命令に背き、先祖の神々を冒涜した。彼らの行いにふさわしい刑罰を科す。まず斧で手足を切り落とし、次に火に投げ込んで焼き殺し、焼けた後の骨は川に投げ捨てること。」

直ちに、使用人たちは殉教者たちを地面に座らせ、彼らの手足を切り落とし始めた。強い日差しが照りつけ、聖なる殉教者たちは渇きに苦しんでいた。ある者は傷の痛みから、ある者は日差しによる暑さからであった。その苦しみの中で亡くなった者もいれば、かろうじて息をしている者もいれば、勇敢に耐え抜いた者もいた。　その中の一人、イアニキットという名の者は、自分の切り落とされた手足を見つめながら微笑み、こう言った。

「ご覧なさい、刈り取りの鎌が、まるで麦の穂のように私の手足を刈り取ったのです!」

また、聖シシニウスは、自らの血の中に横たわりながら、その近くにあった岩にもたれかかり、口を開いて神にこう祈った。

「主よ、すべての恵みの与え主よ、かつて荒野で岩から水を湧き出させ、渇きに苦しむイスラエルを潤してくださった方（出エジプト記17:1–7）、今、この岩を開き、水を湧き出させて、私に少しばかり飲ませてください。あなたは、私たちが死に瀕しているほどの渇きをご覧になっています。」

その祈りに応えて、石は突然動き出し、音を立てて湧き水の流れを噴き出した。聖シシニウスはその水を飲み、主を賛美してこう言った。

[5061] ぶどう園の労働者に関するたとえ話（マタイ20:1–16）を参照のこと。

「渇きに苦しむ私を、母が乳児に乳を与えるように潤してくださったことを、わが神よ、あなたを賛美します。あなたのしもべである私を見捨てなかったことを、わが王よ、あなたを称えます！しかし、お願いいたします。私の愛する兄弟たち、すなわちあなたのしもべたちをも軽んじることなく、渇きに苦しむ彼らを、目に見えぬあなたの恵みの露を注いで癒やしてください。そして、私たち全員が、あなたの希望のうちに共に息を引き取る強さを与えてください。　また、御力によって蘇らせられたこの泉――御方が古の奇跡を再び現されたこの泉――が、世の終わりまで流れ続けるよう命じ、この水に癒しの恵みと力を与えてください。キリストよ、御父と聖霊の栄光のために、御方のために苦難を受けた私たち四十人の殉教者、御方のしもべたちの記憶に。

その時、役人たちは用意されていた巨大な焚き火に火をつけ、殉教者たちの遺体を運び出して火の中に投げ込み始めた。聖人の中にはまだ生きている者もいれば、すでに亡くなっている者もいた。そして、死者と生者を共に焼き殺そうとした。殉教者たちを火の中に投げ込みながら、役人たちはその数を数えたが、一人足りないことに気づいた。彼らは驚き、探し始めた。　すると、水を湧き出させていた石のそばに横たわっていた聖シシニウスが声を上げた。

「ここにいる！　私を捕まえ、火の中へ連れて行け！」

彼らは聖シシニウスを捕らえ、火の中へ運び込んだ。聖なる殉教者たちは焼き尽くされ、火が消えると、役人たちは灰の中に残った殉教者の遺骨を探し始め、見つけたものはすべて布に包んで運び出し、リコス川に撒き散らした[5062]。川は聖人たちの遺骨を貴重な宝物として受け入れ、水流でそれらをすべて一か所に集め、岸辺近くの浅い場所に保存した。　その後、敬虔な人々がそれらを探しに来て、難なく見つけ出した。彼らはそれらを一つ残らず集め、尊い場所に保管していた。やがて、コンスタンティヌス帝の共同統治者であり、王国の東半分を統治していた不敬虔なリキニウス帝が没し、コンスタンティヌス帝が単独で即位するまで、その状態が続いた。　全宇宙においてキリストの教会に自由が与えられたとき、これらの聖なる殉教者たちの遺骨はすべての人々に公開され、彼らの名に因んで教会が建てられた。彼らの聖なる遺骨からは癒しがもたらされ、また、聖シシニウスが祈りによって湧き出させた泉からも癒しがもたらされた。　聖なる四十五人の殉教者たちは、7月10日、リキニウス総督の治世下、アルメニアのニコポリスにて殉教した。当時、リキニウスは東方地域を統治していたが、今や私たちを統治するのは、私たちの主イエス・キリストである。主には、父と聖霊と共に、今この時も、そして永遠に、栄光と誉れが捧げられる。アーメン。

コンダク、第8調：

キリストのために、殉教者たちは多くの苦難に耐え、多神教のあらゆる偶像を打ち倒し、あらゆる誘惑による不敬虔を、キリストの力によって打ち砕きました。そして、私たちすべてに、心から「ハレルヤ」と叫ぶよう、真に教えてくださいます。

ペルシャから帝都モスクワへ、我らの主イエス・キリストの尊い衣が移された物語

記念日：7月10日

[5062] 聖殉教者たちの殉教は、およそ319年に起こった。

敬虔なるツァーリであり、全ロシアの独裁者であるミハイル・フェオドロヴィチ[5063] の治世、そしてツァーリの肉親かつ精神的父である至聖なるフィラレート[5064] の総主教在任中、ペルシャではシャー・アッバース[5065] が統治していた。 アッバスは、敬虔なミハイル皇帝への愛と好意を抱き、しばしば使節を贈り物と共に彼のもとへ派遣した[5066] 。同様に、ロシア皇帝もまた、使節を贈り物と共に彼のもとへ送った。 世界の創造から7133年（キリストの降誕から1625年）の3月、シャハからウルサムベクという名の立派な使節が、敬虔なツァーリ・ミハイルのもとへモスクワに到着した。この使節は、前述のシャハ・アッバスによって派遣されたものであった。 ウルサムベックは、敬虔なるツァーリ・ミハイルへの書簡と多くの貴重な贈り物を携えてきた。さらに、彼は至聖なる総主教フィラレートへの書簡と貴重な贈り物も持参した。それは、宝石で飾られた金の聖櫃に納められた、我らの主イエス・キリストの衣であった。 この書簡の中で、ペルシャのシャーは、イヴェル地方の征服の際[5067] 、大司教の聖衣庫において、ある十字架の中に封印されていたキリストの衣が発見されたことを伝えた。シャーはこの衣を受け取り、モスクワの至聖なる総主教への贈り物として送ったのである。 その同じ書簡の中で、ペルシャのシャーは、主なる神および我らの救い主イエス・キリストの偉大なる御名を、次のような言葉で賛美した。

「主イエス・キリストを神として崇めない者は、いかなる慈悲もなく火で焼き尽くされよ。そして、そのような神を冒涜する者のために火を燃やす者は、あらゆる栄誉に値し、称賛されるべきである。」

至聖なるフィラレート総主教は、この偉大な贈り物を喜びをもって受け入れた。それは、この世のいかなる最も高価な贈り物よりも尊いものであった。その後、フィラレート総主教は、当時モスクワに滞在していた経験豊かなギリシャの長老たちを呼び寄せた。 その長老たちの中には、エルサレムからモスクワにやって来た者もいれば、ギリシャ諸国から来た者もいた。その中には、とりわけ、後にヴォロゴダおよびヴェリコペルミの大司教となるネクタリオスや、その少し前にエルサレム総主教テオファン聖下と共にモスクワに到着したイオアンニキオスもいた。 フィラレート総主教は、これらのギリシャの長老たちに、「主の衣について何か知っているか、またギリシャ諸国ではそれについてどう言われているか」と尋ねた。長老たちはそれぞれ、主の衣について知っていることを語った。その中で、ネクタリオス大司教は次のように述べた。

[5063] ミハイル・フェオドロヴィチは1613年から1645年まで在位した。

[5064] 1619年から1633年まで総主教を務めた。

[5065] シャー・アッバース1世（通称「大帝」）は、1586年から1628年までペルシャを統治した。アッバース1世は、ペルシャ史上最も傑出した君主の一人であった。 彼は国にとって有益な多くの改革を行い、国の軍事体制を再編し、道路や橋を建設し、都市の復興と美化に尽力し、インドやヨーロッパとの貿易を活性化しようと努めた。キリスト教徒に対しては寛大であった。

[5066] シャー・アッバースは、貿易および政治的目的から、ミハイル・フェオドロヴィチと友好関係を維持していた。また、フランス、イギリス、スペイン、オランダといった他のヨーロッパ諸国にも頻繁に使者を派遣していた。

[5067] イベリアは、現在のジョージアにあたる。1613年、シャー・アッバースによって（全土ではなく、その大部分が）征服された。ジョージアにおけるキリスト教の始まりは、4世紀初頭に聖ニナ（使徒に等しい）による布教にさかのぼる。（彼女の記念日は1月14日（323–340年））は、イヴェリアの主要都市ムツヘテに大司教区を設立し、これは当初アンティオキア総主教区に、その後コンスタンティノープル総主教区に属していた。 アンティオキア総主教ペトロス（493–495年）の時代に、イヴェリア教会を自治（独立）教会とするという公会議の決定がなされた。 1783年、グルジア王イラクリオスがロシアの最高権威を認めた際、イヴェリアの首座司教たちは皇帝より聖シノドのメンバーの称号を賜り、1811年にはグルジア教会の統治のためにグルジア・エクザルハトが設立された。

「私がコンスタンティノープル総主教の下で大助祭を務めていた頃、ある教会の用務のため、総主教からイヴェリアへ派遣されることがありました。　ある時、私はたまたま『イレタ』と呼ばれる教会に立ち寄りました。そこで、右側の聖所にある最初の柱の周りに、多くの灯された蝋燭があるのに気づきました。私はそこにいた司祭たちに尋ねました：

「これは何ですか？」

彼らは、ここにキリストの衣が安置されていると答え、主の磔刑の際、エルサレムにいた自国の兵士の一人がそれを持ち帰ったのだと語った。また、このキリストの衣によって多くの奇跡が起こったとも話してくれた。

また、他のギリシャ人たちは、聖なる総主教に対し、パレスチナでもギリシャ諸国でも、正信者たちは皆、主の衣がイベリアにあると口を揃えて主張していると伝えました。　この兵士はくじ引きによって主の衣を受け取り[5068]、その後、それを故郷であるイベリアへ持ち帰り、そこで、当時処女であった実の妹に貴重な贈り物として手渡した。その後、この兵士は、エルサレムで主イエス・キリストに何が起きたかを皆に語った。　その乙女は、戦士の話を聞いて主の衣を深く愛し、畏敬の念を持ってそれを大切に保管した。それから間もなく、その乙女は亡くなった。臨終の際、彼女は、通常の葬送服の代わりに、主の衣を身にまとって埋葬されるよう遺言した。その通りに行われた。　しばらくして、その乙女の墓の上に、大きく、とても美しい木が生え始めた。　偉大なるコンスタンティヌス、ギリシャ・ローマ皇帝の治世[5069]（イベリアが聖なる洗礼によって啓蒙された頃）、この木から芳香を放ち、癒しの力を持つ聖油が滲み出るようになった。この聖油を、何らかの病気や病に冒された者たちが塗ると、癒やされたのである。　正教を信じるイヴェリアの王たちは、このような輝かしい奇跡を目の当たりにし、その木の上に美しい教会を建て、その教会に司教を任命した。長い年月が経ち、神の御許しによりペルシャ人が初めてイベリアを征服した際、彼らはその聖油を滴らせる木があった教会も破壊してしまった。　その後、イベリアはペルシャの支配から解放されたが、その場所にはもはやその木はなく、多効の聖油もその場所からは流れ出ていなかった。ただ、柱がその場所を示していた。主の衣については、皆が口を揃えて、それがイベリアにあると断言していた。　多くの人々は、神の御心により、ペルシャによる捕囚の際、信者たちがその棺から聖衣を取り出し、無傷のまま保存したのだと考えていた。しかし、その後、それがどのようにして大主教座の教会に収められたのかについては、いかなる記録も残されていない。

至聖なるフィラレート総主教は、主の衣に関するすべての報告に耳を傾けた。その後、ロシアの司教たち（当時は聖四旬節の時期であった）と協議し、彼らの助言に従って、厳格な断食と祈りが宣言された。　その後、十字架礼拝の週に徹夜祈祷を執り行った後、至聖なる総主教は、救い主であり我らの神であるキリストの衣を、病人に掛けさせるよう命じられた。これは、古くして敬虔なヘレナ皇后が、その真偽を万人に証明するために、死者にキリストの十字架を掛けたのと同様である[5070]。　当時、死者が復活した力によってキリストの十字架が真のものとして認められたように、今や同様の方法で、人々は皆、主の衣の真実性を確信した。なぜなら、その衣がかけられたすべての病人は、そこから癒やしと速やかな回復を得たからである。

そして、敬虔な王と至聖なる総主教は、このような恵みに対して大きな喜びに満たされ、その後、至聖なる聖母マリアの被昇天大聖堂の西側、右隅に、キリストの命を与える棺の像が安置される、栄誉ある特別に装飾された場所を設けるよう命じました。　ここに、主の尊い衣が安置された。この衣は今もなお人々の目に留まり、すべての人から畏敬の念をもって崇められている。そして今日に

[5068] ヨハネ19:23–24

[5069] 306年から337年までローマ帝国を統治した。

[5070] これに関する詳細は14番を参照のこと

至るまで、信仰をもってここに駆けつけるすべての病める者たちに、この衣から癒しがもたらされている[5071]。

そして、7月10日[5072]　に、主の尊い衣が安置されたことを記念する祝祭が定められた。これは、父と聖霊と共に永遠に賛美される、私たちの神キリストの栄光のためである。アーメン。

トロパリオ、第4調:

今日、私たちは忠実な者として、この肉体を身にまとい、十字架上で御自身の聖なる血を流してくださった、私たちの救い主なる神の、神聖かつ癒しの力ある衣のもとへ駆け寄ります。その衣によって、私たちを敵の支配から贖ってください。　それゆえ、感謝を込めて彼に叫びます。「私たちの正教の皇帝、ニコライ・アレクサンドロヴィチを救い、聖人たちのほか、都とすべての民を、あなたの尊い衣をもって守り、人愛に満ちた方よ、私たちの魂を救ってください。」

[5071] 現在、主の衣の2つの断片はサンクトペテルブルクに所蔵されている。1つは宮廷大聖堂に、もう1つはペトロパヴロフスク要塞にある。

[5072] 主の聖衣の移送は、大斎期間中の3月に実施されたが、大斎の時期を考慮して、その祝典は7月10日に延期された。この日は、ミハイル・フェオドロヴィチ皇帝の戴冠式の前夜であった。　主の衣の安置の日の礼拝は、クルチツキー都主教キプリアンによって制定された。　この礼拝において、信徒たちに救い主の神聖かつ癒しの衣への礼拝を呼びかけながら、教会は、この衣が、その癒しの力において尊いキトンであり、また、神人である方の聖なる、命を与える肉体がこれを身にまとっていたからであると宣言する。　この衣をまとい、「本質において完全な神であり、人としても完全であることが現された。神人としての姿を確証し、御自身の神聖な肉体の衣を、私たちに壁と覆いとして授けてくださった。御身の神聖な衣に近づくことによって、私たちを聖別してくださった」。　主の聖衣の祝日には、司祭が十字架を模して、礼拝のためにその聖衣を頭上に載せて聖堂の中央へと運び出しました。そのため、教会の聖歌には次のような呼びかけが聞かれます。「あなたの尊い十字架と聖なる聖衣に、至福なる方よ、私たちは礼拝し、愛をもって口づけいたします」。この祝日の制定については、皇帝および総主教の勅書によって公布された。これは、トヴェリ大司教からカリアジン修道院のイグメン（院長）エフフィミイ宛ての書簡からも明らかである。「本年1626年、――大司教はこう記している――1月24日、大公ミハイル・フェオドロヴィチ陛下ならびに全ロシアのツァーリ、そして我らの大君主であり父である、モスクワおよび全ロシアの至聖なる総主教フィラレート・ニキティチ陛下より、我らに勅書が送られてきた。　そこには次のように記されていた。去る1625年3月11日、キジル・バシュからアッバス・シャー大君主の使節である グルジア人のウルサムベクが、ツァーリと至聖なる総主教に拝礼した後、後者に、宝石で飾られた金の聖櫃に収められたイエス・キリストのサラキツェ、すなわちキトンを献上した。　その日、宮廷にて、大君主であり我らの父である至聖なるフィラレート総主教は、共同司祭たち――サルスクおよびポドンスクのキプリアン都主教、ギリシャ人ネクタリオス大司教、アルヒマンドリトたち、　修道院長、大司祭、そして聖職者全員と共に聖櫃を検分し、その中に赤みを帯びた古びた麻織りの衣が収められているのを確認した。 3月18日、至聖なるフィラレート総主教は、息子の皇帝兼大公ミハイル・フェオドロヴィチに対し、「キリストの聖衣」と呼ばれるこの聖遺物は、異教徒の王アッバス・シャーから送られてきたものであり、真の証言なしにはこれを受け入れることはできないと語った。　異教徒の言葉は、検証なしには証拠として受け入れられない。　そのため、3月26日の公会議において、総主教、大司教、大修道院長、修道院長、および各修道院の長老たちは、7日間の断食と祈りを定めた。また、他の教会の聖職者たちには、主なる神がその聖遺物について御意志を示してくださるよう、聖体礼儀を執り行い、祈りを捧げるよう命じた。　主なる神、そして我らの救い主イエス・キリストの恵みと慈愛、そして言い表せないほどの憐れみにより、一週間が満ちるまでに、主の衣から多くの癒しがもたらされた。　具体的に誰が、どの日に、どのような病から癒やされたかについては、大君主フィラレート・ニキティチ、すなわちモスクワおよび全ロシアの至聖なる総主教の印章が押された真正な記録が、我らトヴェリへ送られてきた。　それゆえ、修道院長よ、修道司祭たちおよび兄弟たちと共に大聖堂に集まり、そこで主任助祭に命じて、この我らの書簡をすべての民が聞き取れるように読み上げさせ、読み上げが終わった後、鐘を鳴らして主への祈りを捧げよ」。

コンダク、第4声：

朽ちることなき衣、すべての人々にとって救いとなる癒やし主よ、あなたは御自身の神聖な宝である尊い衣、すなわちキトンを授けられ、それをもって、あなたの受肉による命に満ちた聖なる御体を覆うことをお許しになりました。　この衣を願いをもって受け入れ、喜びをもって祝うとともに、畏れと愛をもって、恩人であるあなたを讃え、キリストよ、こう呼び求めます。あなたの偉大なる憐れみにより、私たちの敬虔な皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチ、聖人、そしてすべての人々を、この世において守り給え。

7月24日

7月11日（旧暦）

聖大殉教者エウフィミア・オール・グローリーの奇跡の記念日

記念日7月11日

聖大殉教者エウフィミアは、ハルキドンで生まれ、育ち、殉教の栄冠を戴きました。　ビティニアの都市ハルキドンで生まれ、育ち、殉教の栄冠を戴きました。この都市は黒海湾に面し、コンスタンティノープル（ツァーグラード）の対岸、両者を隔てるボスポラス海峡の向こう側に位置しています。彼女はディオクレティアヌス帝の治世[5073]　、9月16日に殉教し、その日が彼女の記念日として祝われています。 今日、ハルキドンで開催された第4回全地公会議において、彼女の尊い遺骸から現れた奇跡が記念されている。この公会議では、正教の信仰告白が明らかにされ、確立されたのである。この奇跡は、聖なる教父たちに対し、異端者たちとの交わりを避けるべきであるというしるしとなり、次のようにして起こった。

アレクサンドリア総主教ディオスコーロスとコンスタンティノープル大修道院長エウティキオスは、正信の王テオドシウスが存命中の頃[5074]　、私たちの主イエス・キリストに対する冒涜的な異端を唱え、その神性と人性という二つの本性を一つの本性に融合させ[5075]； 彼らはその邪説によって多くの聖職者や信徒を惑わし、多くの高位の宮廷人を自らの異端へと引きずり込み、彼らの強力な支持を大いに利用した。

エフェソスで地方公会議[5076]　（同地で以前開催された第三回全地公会議[5077]　から数年後）――あるいは、むしろ「強盗の集まり」と呼ぶべきその集まり――が開かれた際、コンスタンティノープル総主教フラヴィアヌス[5078]　、すなわち敬虔の殉教者が、ディオスコーロスとエウティキオスの同調

[5073] 284年から305年まで、ローマ帝国の東部を統治した。

[5074] テオドシウス2世は408年から450年まで統治した。

[5075]　ここで言及されているのは、モノフィシテ派またはエウティキウス派の異端である。これは、イエス・キリストの御顔における神性と人性の分離を説いたネストリウス派とは対照的に、イエス・キリストにおける人性は神性に完全に吸収されたものであり、したがってイエス・キリストの御顔においては、神性という単一の性質のみを認めるべきであると教えた。 この異端は、後述するように、第4回全地公会議において非難された。

[5076] 449年、

[5077]　431年にエフェソスで開催された第3回全地公会議は、コンスタンティノープル総主教ネストリウスの誤った教えを巡り、テオドシウス2世皇帝によって招集された。ネストリウスは、神の御言葉の受肉とは、単に神が人間であるキリストの中に宿ったことに過ぎず、一つの御顔における神性と人性の結合ではないと説いていた。

[5078] フラウィアヌス（第1世）は447年から449年まで総主教を務めた。聖人として列聖されている。――記念日は2月18日

者たちによって殺害されたとき、 ――それにより、その異端はさらに強固なものとなり、正統信仰として受け入れられるようになった一方で、真の正教の信仰は、あたかも迷信であるかのように拒絶されるようになった。この異端を根絶し、正教の信仰を確立するためには、聖なる教父たちによる第4回全地公会議を招集する必要があった。

その頃、敬虔なテオドシウス王はこの世を去り、主のもとへ旅立った。その後、高潔で神に愛されたマルキアヌス[5079]が、聖プルケリアと共に王位を継いだ。これらの正統信仰と敬虔の擁護者たちは、異端が教会を混乱させ、その中にどのような不和がはびこっているかを目の当たりにし、信仰に関する諸問題をここで検討し議論するため、全世界の聖なる父たちに、栄光ある都市ハルキドンに集まるよう命じた。

六百三十名の聖なる父たち[5080]が集まり、その中にはコンスタンティノープル総主教アナトリアス聖下、ユヴェナリウス聖下、そしてローマ教皇レオ聖下の使節たちが含まれていた。 また、アレクサンドリア総主教ディオスコロスを筆頭とする異端者たち、ディオスコロスが解任されたドムヌスの後任として総主教の座に就けたアンティオキア総主教マクシムス、および彼らに同調する他の司教たち、さらにエウティキオスとその同志たちも出席したため、多くの異端者が集まった。 彼らは皆、聖なる教父たちと共に、ボスポラス海峡近くの郊外にある聖大殉教者エウフィミアの教会に集まり、会議を開いた。 そこはハルキドン都主教区の主教座教会であり、非常に広々としていて、大勢の人々を収容することができた。その中には、この大殉教者の聖遺骨も安置されており、そこから驚くべき輝かしい奇跡が起こっていた。その中から、いくつかだけ紹介しよう。 彼女がキリストのために殉教した聖記念の日には、毎年、尊い聖遺物から、あたかも傷口から今まさに流れ出たかのような血が滲み出ていた。その血は次のようにして集められていた。棺は大きな大理石製で、大理石の板で覆われており、その内部には聖人の聖遺物が入った木製の聖櫃が収められていた。 この大理石の棺の左側には、手が通る小さな穴があり、それはしっかりと閉められていましたが、必要な時には開けられました。徹夜祷が終わり、聖体礼儀の前に、司教自らがその穴を通して、長い鉄の柄に結びつけられたスポンジを使ってその血を汲み取りました； 司教はそこに乾いたスポンジを差し込み、血で満たされたスポンジを取り出し、その血を、このために特別に用意された の器に絞り出した。民衆はこの光景を目にして、神と神の聖なる殉教者に大いなる栄光を捧げ、祝福と病の癒やしを求めてその血を身に塗った。 この血は、まるで貴重な香油と混ぜ合わされたかのように非常に芳香を放っていたが、地上のいかなる香油もこれに匹敵することはできなかった。この血はあらゆる香りを比類なく凌駕し、あらゆる病を癒やした。 そして、聖なる大殉教者は、毎年行われる自身の祝祭の期間中だけでなく、時にはそれ以外の時期にも、特にその教会の聖職者がその徳高い生活によって神に喜ばれていた場合には、尊い遺骸から、香油のように芳香を放ち、癒しの力を持つその血を滲み出させていた。 また、多くの奇跡も起こった。聖女は、信仰をもって彼女に祈る者、病に伏している者、教会に彼女の聖棺を訪ねてくる者、あるいは様々な苦難に遭い、彼女の助けを求める者たちの前に、しばしば姿を現した。 そして、人々は深い信仰をもって、あらゆる場所、あらゆる都市から、とりわけ近隣のコンスタンティノープルから、ハルキドンに彼女を礼拝するために集まってきた。そこでは、皇帝の命により、聖なる父たちによる全地公会議が開かれることになっていた。

その公会議では、正信者たちと異端者たちの間で、多くの議論や論争、意見の相違が生じた。というのも、異端者たちは正教の教えにどうしても同意しようとしなかったからである。そこで、至聖なるアナトリアスは、他の聖なる教父たちと相談した上で、異端者たちにこう言った。

「あなたがたの信仰告白を巻物に書き記しなさい。私たちも同様に私たちの信仰告白を書き記し、その二つの巻物を封印した上で、聖大殉教者エウフィミアの尊い聖遺物が納められた棺の中に納

[5079] マルキアヌス皇帝は450年から457年まで東方帝国を統治した。

[5080] 451年――第4回全地公会議が開催された。

めよう。そして、断食を行い、公会議として神に祈りを捧げ、神がこの御心に適う御使いを通じて、どちらの信仰告白が正しいかを私たちに明らかにしてくださるよう願おう。」

聖アナトリアスのこの言葉に、皆はその助言に賛同し、二つの巻物を書き上げた。正信者たちは自分たちのものを、異端者たちは自分たちのものを書き、それぞれの印章で封印した。そして聖女の棺を開け、両方の巻物を彼女の胸の上に置き、再び棺を閉じて王の印章を押した。警備を配置し、三日間断食と祈りを捧げた。　四日目が明けると、皇帝と全聖公会が聖女の尊い棺の前に参集し、皇帝の印章を外して棺を開けたところ、正信者たちの巻物は聖女大殉教者が右手に握りしめており、異端者たちの巻物は彼女の足元に置かれているのが見えた。　しかし、何よりも驚くべきことは、彼女がまるで生きているかのように手を伸ばし、王と総主教に正統な信仰を記した巻物を手渡したことだった。その時、皆は言葉に尽くせないほど喜び、神を賛美し、聖なる大殉教者への感謝を込めて賛美の歌を歌い、温かい愛を込めて彼女の奇跡を起こす聖遺物に礼拝を捧げた。　そして直ちに、正教の信仰を、神によって確立され、聖なる大殉教者によって奇跡的に告げられたものとして宣言し、異端の邪教を呪いとした。異端者たちの多くは、この奇跡を目撃して正教に改宗したが、頑なに改宗を拒んだ者たちは聖職を剥奪され、流刑に処された。　この時から、イコン画家たちは、公会議の間に起きたこの輝かしい奇跡を忘れぬよう、聖大殉教者エウフィミアを右手に巻物を持った姿でイコンに描き始めた。当時もその後も、聖殉教者は奇跡を起こし続け、その尊い遺骸からはミルラの香りを放つ血が滲み出ていた。

長い年月が流れ、敬虔な皇帝マウリキウス[5081]が王位についたが、彼は信仰心が薄かったため、聖人の奇跡を疑うことを敢えてし、聖遺物から流れ出る血を偽物であり、真実のものではないと見なすようになった。真実を確かめ、明らかにしたいと願った彼は、次のようなことを行った。　聖大殉教者の年次記念日のずっと前に、彼は棺とその開口部を王の印章で封印した。彼女の祝祭日が近づくと、彼は自らコンスタンティノープルからハルキドンへ赴き、印章を外して開口部を開けた。するとたちまち、素晴らしい芳香が漂い、教会全体を満たした。　血、あるいは、むしろ血に似た平和の液が、聖人の尊い遺骸から例年以上に流れ出た。これほど多くの量が流れ出た年はかつてなく、それは王の信仰の薄さを恥じさせ、あらゆる超自然的なことが成し遂げられる神の力への信仰を確固たるものにするためであった。 かつて、動物の骨、すなわちロバの顎骨から、サムソンのために[5082]の泉を湧き出させた主（士師記15:18–19）が、その後、御自身の愛する聖女の朽ちることのない聖遺物から血と香油を湧き出させることができなかったはずがないではないか。　そこで王は、自らの罪を悟り、悔い改め、それ以来、その聖女を深く信じるようになった。

その後、ヘラクレイオス帝の治世[5083]において、神の御許しにより、ペルシャ軍がビフィニア地方およびハルキドンの周辺に侵攻し、その結果、その郊外一帯は野蛮な慣習に従って荒廃してしまった。　敵は聖大殉教者の教会にも侵入し、見つけたものはすべて奪い去った。彼らは聖人の棺を開けようとしたが、どうしてもそれができず、いくら努力しても何の成果も得られなかった。上部の大理石の蓋が動かないだけでなく、棺に小さな穴一つ開けることさえできなかったのだ。　そこでペルシャ人は大量の薪や小枝を持ち込み、棺を取り囲み、その上に山のような可燃物を積み上げ、激しい熱で大理石が割れることを期待して火をつけた。しかし、この方法でも彼らは何の成果も得られなかった。積み上げられたものはすべて灰と化したが、聖女の棺は微塵も傷つくことはなかった。　神は、この御心に適う聖女をこれほどまでに驚くべき存在にされたのである！ペルシャ軍が去った後、皇帝は総主教と聖大殉教者エウフィミアの聖遺骨について協議し、ハルキドンへの野蛮人による再侵攻を恐れて、それらをハルキドンからコンスタンティノープルへ移すことを決めた。　コンスタンティ

[5081] マウリキウス皇帝は582年から602年まで東ローマ帝国を統治した。

[5082] サムソン――イスラエルの士師。神から並外れた力を授かり、ペリシテ人に対する神の道具となった。その生涯と活動は『士師記』13章16節に記されている。

[5083] ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

ノープルでは、ヒッポドロム[5084] の近くに、ハルキドンの教会に倣った、大きく美しい聖女に捧げる教会が建てられ、石棺に入った聖遺物が栄誉をもってそこへ移された。聖遺物へのより大きな敬意を表すため、ハルキドンの大司教がその場所に留まることが定められた。　棺は聖壇の神聖な祭壇の代わりに安置され、その上で「無血の犠牲」が執り行われた。内部には大殉教者の尊い聖遺物が収められており、ハルキドンと同様にコンスタンティノープルでも聖遺物から奇跡が起こり、ミロの香りを放ち、治癒の力を持つ血が定時に滲み出ていた。

長い年月が流れ、多くの王が交代し、聖なる父たちによる全地公会議――第五および第六公会議[5085] ――が過ぎ去った後、さらに長い時を経て、その名もその性情もまさに「獣」と呼ぶにふさわしい、エサウリア人のレウ王[5086] が即位した。 彼は、聖なるイコンを偶像と呼び、同調者たちに対して次のように論じ、神の教会を偶像排斥の異端によって混乱させ始めた最初の人物であった。

「これこそ、預言者が『*彼らには口があるが語らず、目があるが見ず、耳があるが聞かない*』（詩篇113:13–14）と語っている者たちである。」

これに反対したのは、至聖なるゲルマン総主教であった[5087] 。皇帝は彼を不名誉な形で総主教の座から追放し、その代わりに、自身の同調者である異端者を据えた。同様に、彼の異端に反対した他の正統な司教たちも、不名誉な形で追放した。　彼は聖なるイコンだけでなく、聖人の遺骨までもが、犬のように歯止めのない言葉で冒涜し、あらゆる手段で貶めた。聖大殉教者エウフィミアの尊い遺骨から起こる奇跡を目撃し、耳にするたび、彼は嫉妬に心を苛まれたが、民衆の反乱や騒乱を恐れて、それらに悪事を働くことを敢えてしなかった。　そこで彼は、ある狡猾な策を思いついた。ある夜、彼は志を同じくする者たちと共に密かに聖エウフィミアの教会へ赴き、ペルシャ人ですら開けることができなかった彼女の棺を開けた。キリスト神は、不信仰な異教徒たちから無傷のまま守り抜いてきた御自身の花嫁の尊い遺骨に、邪信のキリスト教徒の手が触れることを許されたのである。　ペルシャ人は無知ゆえに罪を犯したが、キリスト教徒たちは自らの行いを承知の上で悪行に踏み切った。神は、彼らをより一層非難されるように、聖女への冒涜を犯させることを許されたのである。　不敬虔な王は棺を開け、木製の聖櫃に入った聖エウフィミアの奇跡を起こす朽ちない聖遺骨を取り出し、その代わりに、このためにわざわざ用意しておいた腐った悪臭を放つ骨を置き、　再び板で覆うと、その尊い聖遺物を盗人のように持ち去り、王宮の部屋の一つに安置した。一方、王の姉妹や娘たちは密かに聖遺物の元を訪れ、香を焚き、蝋燭の灯を灯して、それらを敬い、愛を込めて礼拝していた。　しかし、まもなくそのことを悪辣な王が知り、直ちに聖遺物が入った聖櫃を取り上げ、夜中にそれを海に投げ捨てた。翌朝、不信心な群衆を集めると、彼は正教徒たちを目の前で嘲笑し、聖大殉教者の聖遺物を嘲り、非難してこう言った。

「さあ、愚か者どもよ、行ってみよ。栄光あるエウフィミアの遺骨を『朽ちず、奇跡を起こす』と称して、お前たちを惑わしているこの欺瞞を、この目で確かめよ。棺を開けて、それが真実かどうか見てみよ。」

そして直ちに、側近たちを民衆と共に棺を開けるよう命じた。彼らは行って棺を開けると、そこには腐りきった、悪臭を放つ骨ばかりが横たわっていた。異端者たちはそこで、正信者たちを「腐った骨の崇拝者」と呼んで嘲笑し、侮辱し始めた。一方、正信者たちはこの予期せぬ事態に驚き、戸

[5084] ヒッポドローム――競走を行う場所。

[5085] 第5回全地公会議は553年にコンスタンティノープルで開催され、3人の司教―― テオドール・モプスエウスの、テオドリトス・キルスの、およびイヴァ・エデスのの3人の司教であり、彼らはそれぞれの著作においてネストリウス派的な見解を表明していた。 – 第6回全地公会議は680年、コンスタンティノープルにおいて、コンスタンティノス4世ポゴナトス皇帝（668–685年）の治世下で開かれた。その最優先の課題は、キリストにおいてただ一つの（神聖な）意志のみを認めるモノフェリテ派の異端を糾弾し、断罪することであった。

[5086] レオン3世・イサウリア人は、716年から741年まで在位した。

[5087] ヘルマンは715年から730年まで総主教を務めた。

惑い、恥じ入り、嘆き悲しんだ。　そこで多くの人々は、聖人の行ってきた数々の奇跡がすべて欺瞞であったと考え、その腐った骨を唾を吐きかけ、投げ捨てた。さらに、その大理石の棺も教会から引きずり出し、神の聖堂を荒廃と忌まわしさの場へと変えてしまった。　教会は甚だしい冒涜にさらされ、その教会はまるで空っぽの馬小屋、あるいは家畜の飼葉桶、いやそれ以上にひどい場所となってしまった。なぜなら、そこにはあらゆる不潔さと汚れがはびこる余地があったからである。　その後、教会の中に鍛冶職人たちが鍛冶炉を設置し、そこで職に就くようになった。かつて神への賛美の歌声が響いていた場所からは、金床の上の鉄を打つハンマーの音が鳴り響き、下品な罵声や人々の無秩序なざわめきが聞こえるようになった。　これらの職人たちは、妻や子供たちと共に空き教会に住み着き、聖なる祭壇を、まるで隠れ家のようにして、自分たちの用を足す場所としてしまった。　神は、人々のこのような行い、御自身の聖所に対するこのような冒涜を長い間耐え忍ばれたが、やがて悪を悪をもって滅ぼし、正教を再び興し、御自身の場所を清め、聖別して、再び御自身の栄光の住まいとされたのである。

称賛に値する殉教者の聖遺物が海の深淵に投げ込まれたとき、神の御心により、「ソフィイナ」と呼ばれる埠頭から一隻の船が出航していた。その船には、セルギイとセルゴンという二人の兄弟が乗っていた。　彼らは、自船の近くで波に運ばれてくる聖櫃を目撃すると、その中に何らかの地上の宝物があると思い、それを水から船に引き上げ、帆を張ってさらに航海を続けた。アヴィドヴァと呼ばれる埠頭に到着すると、彼らは聖櫃を開け、そこに朽ちることのない聖遺物があるのを見た。そこから素晴らしい香りが漂ってきて、彼らはこの霊的な宝に喜びを感じた。とりわけ、幻視の中でその聖遺物の聖性を知った時にはなおさらであった。すなわち、その夜、彼らは幻視の中で、聖遺物の上に輝く栄光、燃え盛る灯火や蝋燭、そして神を賛美し歌い上げる光り輝く人々を見たのである。この幻視を受けた彼らは、この聖遺物がどの聖人のものなのかを明らかにしてくださるよう、神に祈り始めた。そしてさらに航海を続け、リムノスと呼ばれる島にたどり着いた。　この島にも、聖殉教者グリケリアの奇跡を起こし、聖油を流す聖遺骨があった。彼らはこの島の近くで一夜を明かしていると、幻視の中で、聖殉教者グリケリアが彼らの船に向かって歩いてくるのを見、また船から彼女を迎えに出てきた美しい乙女の姿も見た。二人は優しく抱き合った。　そして、船から降りてきた乙女のもとへやって来た乙女は、こう言った。

「ご安らかでありますように、キリストの殉教者、万人に称えられるエウフィミアよ！」

すると、彼女はこう答えた。

「ご安らかでありますように、キリストの殉教者、至福のグリケリアよ！」

そして、互いに挨拶を交わした後、別れた。聖グリケリアは自分の居場所へ戻り、聖エウフィミアは船へと戻った。　この幻視は二人の兄弟に同じように現れた。彼らは、それが誰の聖遺物であるかを知り、大いに喜び、心からの祈りを捧げながら、聖大殉教者エウフィミアに熱心にひれ伏し、聖櫃を抱きしめ、それに口づけをし、喜びの涙を流した。　彼らはこの計り知れない宝を故郷へ持ち帰ろうとしたが、神とその聖なる御心に適う者にとっては、それは望ましくないことだった。船乗りたちは帆を張り、帰路についた。彼らがすでにその島から遠く離れたとき、突然嵐と激しい波が巻き起こり、船は波に打ち寄せられて再び同じ島へと押し戻された。　船乗りたちは、海が静まるとまた航海を再開したが、再び神の御心により、突如として波が立ち、船を島へと押し戻した。これは二度、三度となく、何度も繰り返され、船上の者たちは皆、大きな戸惑いに包まれた。

夜が更けると、キリストの殉教者が彼らの前に現れ、こう言った。

「なぜ私をあちこちと運ぼうとするのですか？私はここから離れません。あなたがたが私を連れて行こうとしている場所へは行きたくありません。」

そして彼女はこう付け加えた。

「ハルキドンからビザンティウム（ツァールグラード）へ移され、海に投げ込まれ、ここに連れてこられたことだけで、まだ足りないというのですか？　なぜさらに遠い国へ連れて行こうとする

のですか？　あなたたちには無理なことです。もう苦労しないで、この島に私のために小さな家を建ててくれれば、私はここで安らかに休むでしょう。」

そう言い終えると、彼女は姿を消した。誠実な兄弟セルギイとセルゴンは、直ちに聖女の命令に喜んで従い、埠頭に留まり、船から陸に降りて、その島の司教　のもとへ行き、称賛すべきエウフィミアの聖遺物と彼女の命令について告げた。　司教はこれを喜びつつも、その島にも邪悪な王から、聖なるイコンや聖人の尊い遺骨を海に投げ捨て、火に焼くようという恐ろしい命令が下されていたため、聖なる遺骨を密かに保管するよう彼らに命じた。　この邪悪な命令のため、聖殉教者グリケリアの聖遺体は、人知れず隠されていた。その後、適切な場所を見極めた司教は、海辺の近くにあるキリストの殉教者エウフィミアの小さな教会を建設するよう、セルギウスとセルゴンに祝福を与えた。まもなく建設が完了すると、司教が到着し、教会を聖別した後、聖なる祭壇の地下に尊い聖遺骨を隠して納めた。これは、聖像破壊者たちにその存在が知られないようにするためであった。これら一連の出来事の後、二人の兄弟は聖なる殉教者に対して次のような誓いを立てるという善意を抱いた。

「私たちは」と彼らは言った。「称えられし聖大殉教者エウフィミアよ、あなたを見捨てず、あなたの尊い聖遺物から離れることもなく、ここで生涯の終わりまであなたに仕えます。」

そのような誓いを立てた後、彼らは船で運んでいた品物をすべて売り払い、世俗を捨て、その教会のそばで断食と祈りに専念して暮らすようになった。そして間もなく、神に喜ばれ、熱心に奉仕した聖なる称賛に値する殉教者エウフィミアの取り成しにより、不滅の命へと旅立った。　彼らは臨終の前に、この極めて豊かな宝を秘める場所が決して忘れ去られないよう、聖殉教者の墓の上に石板を置き、その板に次のように記した。

「我々、セルギイとセルゴン、実の兄弟は、ヘレスポント（ツァレグラードの海）を航行中に、波に運ばれてきた、称賛に値するキリストの聖殉教者エウフィミアの尊い遺骨を海から拾い上げ、彼女の命に従って、ここに安置した。」

その後、その島の司教が美しい教会を建て、聖エウフィミアの聖遺骨をそこへ移そうとした。兄弟たちが建てたその小さな教会を訪れ、彼は徹夜祈祷を捧げていた。彼がうたた寝をしていると、聖女が現れてこう言った。

「尊い父よ、あなたが企てていることを始めないでください！私はこの件に関してはあなたの言うことを聞き入れません。しかし、私の姉である聖殉教者グリケリアのもとへ行き、彼女に祈ってください。そうすれば私が彼女に懇願します。彼女は自分の遺骸をあなたの教会へ移すことを許してくれるでしょう。私については、私が元の場所へ戻るまで、この場所で安らかに眠らせておいてください。」

司教は恐怖のあまり目を覚まし、自分の企てを実行に移すことを敢えてしなかった。一方、別の場所に安置されていた聖殉教者グリケリアについては、教会で祈りを捧げた後、自分の教会へ移し、密かに安置した。　こうして、聖人の遺骸は、彼らに敵対する邪悪な偶像破壊者たちから守られた。たとえ隠されていたとはいえ、正信者たちはその遺骸のもとに集まり、その祝祭を尊厳をもって執り行った。なぜなら、それらの神の御心にかなう聖女たちによって、あらゆる病の癒やしがもたらされていたからである。

ある日、聖大殉教者エウフィミアの記念日に、彼女の教会で祝祭が行われている最中、ある軍司令官――偶像破壊の異端の支持者であり熱心な信奉者――が、軍隊を乗せた船でその島のそばを通りかかった。彼は公務でどこかへ派遣されていたのである。　桟橋に近づくと、彼は上陸し、桟橋の近くにある教会の周りに大勢の人々が集まっているのを見た。　祝祭の理由を尋ねて知ると――すなわち、人々がそこに眠る聖殉教者エウフィミアの聖遺物を称えて祝祭を行っているということだった――、この不敬虔な男は激怒し、軍を率いてその教会に突撃し、叫び声を上げながら群衆を追い散らした。

「王たちがこんなことを許すと思うか？　お前たちは偶像崇拝者だ、死んだ骨に仕える者どもめ！」

このような罵声を正教徒たちに向けて浴びせながら、この忌まわしい王はその教会をほぼ根こそぎ破壊した。しかし、聖遺物は地下に隠されたまま無傷で残った。そして、その場所は長い間、人影が絶えることとなった。

不義の王レウ・イサウリアヌスの死後、その息子コンスタンティン――通称コプロニム[5088]――が王位に就いたが、彼は邪悪な親の血を引く、さらに邪悪な子孫であった。　彼はイコンの崇拝を拒んだだけでなく、密かにキリスト・神そのものを否定し、この忌まわしき者は、その汚れた舌で聖母マリアさえも冒涜し、神の聖なる御使いたちをも罵倒した。　若き頃からあらゆる悪事や堕落した生活に慣れ親しみ、魔術や呪術を習得し、容赦なく人々の血を流した。彼はその残虐さにおいて父をも凌ぎ、多くの罪なき義人を殺害し、修道士たちをコンスタンティノープルから完全に追放した。しかし、彼は人々の罪に対する神の許しにより長く統治し、数え切れないほどの悪事を働いた末、苦痛に満ちた死を遂げた。彼は王位を息子のレオに譲ったが、レオもまた偶像破壊者であったものの、父や祖父ほどの残虐さは示さなかった。 レオの死後、その息子コンスタンティン（ ）が即位し、母イリナ（[5089] ）――この名は（ギリシャ語で）「平和」を意味する――と共に統治した。彼女はまさにキリストの教会に平和をもたらした。　息子が幼い間、彼女は独力でギリシャ王国を統治し、善く、また神に喜ばれる統治を行った。彼女は、偶像破壊派の王たちによって荒らされ、荒廃させられたすべてを修復し、尊いイコンを崇敬したために迫害され、追放されていた聖なる父たちを、再び迎え入れた。　まことに、彼女は敬虔で神を愛する女性であり、コンスタンティノープルの至聖なる総主教タラシオス（[5090] ）を議長として、第七回全地公会議（[5091] ）を招集した。こうして、聖なる教会にはその威厳――すなわち聖像――が回復され、聖像破壊の異端は聖なる教父たちによって呪われたのである。　その時、前述の通り、コンスタンティノープルのヒッポドロム近くにある聖大殉教者エウフィミアの教会――それはレオン・イサウリアヌスによって荒廃させられていた――が、敬虔な皇后イリナによって再建された。　彼女は教会から不浄なものを一掃し、荒らされたものをすべて修復するよう命じ、あらゆる方法で壮麗なイコンで飾り立て、聖職者の衣や貴重な聖器を備えさせた。教会は聖別され、かつてのように再び神聖な礼拝が執り行われるようになり、ハルキドン都主教も再びその教会に居住するようになった。　キリストを愛するイリーナ女王は、称賛に値する殉教者エウフィミアの聖遺骨を懸命に探し求めた。　レウ・イサウリア人が密かに聖遺物を奪い、海に投げ捨てて以来、この王の秘密の悪行に関する噂が正教徒の間で広まり、聖遺物はどこかで発見され、信者たちによって大切に保管されていると語られていた。皇后は、その所在を突き止めようと努めた。　しかし、主は御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださる方であり、聖なる殉教者の聖遺骨について、次のように皇后に知らせてくださった。前述の通り、聖遺骨が密かに保管されていたリムノス島には、アナスタシウスという名の著名な人物が住んでおり、彼はコミトの位にあった[5092]；　彼には、前述の二人の兄弟、セルギイとセルゴンが、聖大殉教者エウフィミアの栄光を称えて教会を建て、その尊い遺骸を地中に隠し、棺の上に碑文を刻んだ石板を置いた場所が、相続によって所有権として与えら

[5088] コンスタンティノス5世・コプロニモスは714年から775年まで在位した。

[5089] コンスタンティノス6世（ポルフィロゲネトス）は780年から797年まで在位し、イリナは797年から802年まで在位した。

[5090] タラシオスは784年から806年まで総主教を務めた。

[5091] 787年、

[5092] コミタスとは、当初は地方の高官の随行者を指したが、後に皇帝の側近として最も身近な随行団を構成する者たちを指すようになった。 コンスタンティヌス大帝（306–337年）の時代以降、この呼称は、たとえ皇帝の側近に属していなくても、すべての宮廷人および国家高官の称号となった。

れていた。　このアナスタシイ・コミットは、自身の土地にある称賛すべき殉教者の教会がすっかり荒廃しているのを見て、かつての基礎の上に再び教会を建て直し、ふさわしい威厳をもって装飾した。その後、嫉妬深い者たちによる不当な誹謗中傷により災難に見舞われ、彼は無実にもかかわらずその聖職を剥奪されてしまった。　そこで彼は、虚偽の中傷から身を守り、再び聖職の地位を取り戻すために、ツァールグラードへと向かった。そこで皇后への取り成し役や仲介者を探していたところ、ある人物から、ハルキドン大主教なら助けてくれるだろうと言われた。なぜなら、彼は他の誰よりも、不当な扱いを受けた者たちのために立ち上がる権利を持っているからである。　アナスタシウスは大司教を探し始め、宮殿で彼を見つけた。大司教にすがりつき、来訪の目的を語り、助けてもらい、自分のために取り成してほしいと頼んだ。しかし、大司教は次のように言って断った。

「私にはそれができません。この件は私の力ではどうにもなりません。」

そう言うと、大主教は宮殿を出て自宅へと向かい、アナスタシウスは彼の後を司教邸まで追いかけた。鍵が開いている教会を見つけると、彼は中に入って祈りを捧げた。　長い間ひざまずいて祈った後、彼はどこかに腰を下ろした。その時は礼拝が行われていなかった。その週当番の聖職者の一人が彼に近づき、誰でどこから来たのかと尋ねた。アナスタシウスは自分のことをすべて話し、自分の悲しみを打ち明けた後、その聖職者に尋ねた。

「この教会はどの聖人の教会ですか？」

すると、その人はこう答えた。

「この教会は、万人に称えられる聖大殉教者エウフィミアの教会です。」

アナスタシウスはそれを聞くと、すぐに両手を胸に押し当て、愛を込めてこう叫んだ。

「おお、わが聖エウフィミアよ！」

「なぜ彼女を『自分の』と呼ぶのですか？」と聖職者が尋ねた。

アナスタシイはこう答えた。

「私の教会、私の家には、彼女の尊い聖遺物がある。だからこそ、私はあえて彼女を『私の』と呼ぶのです。」

聖職者は言った。

「そんなことがあり得るのか？　本当のことを言っているのか？　よく聞け、嘘をついてはならない。さもないと、お前に災いが降りかかるぞ。女王は聖エウフィミアの聖遺物を探し出すために大いに尽力しており、大主教に対し、神がその殉教者の聖遺物がどこにあるかを明らかにしてくださるよう祈るよう命じたのだ。」

アナスタシウスは言った。

「信じてください、誠実な方よ。私には、かつてハルキドンにあった、称賛に値するエウフィミアの聖遺物があるのです。」

これを聞いた聖職者は、彼にそこで少し待っていてもらうよう頼むと、自ら喜び勇んで、このことを大主教である聖アンドレイに急いで報告しに行った。　大主教は喜び、直ちにアナスタシウスを呼び寄せ、聖人の聖遺物について詳しく尋ねた。アナスタシウスは、その島の住民たちの間で、称賛すべき聖エウフィミアの聖遺物についてどのように語られているか、また、海からその聖遺物を持ち出した二人の兄弟が石板に何を記していたかについて、すべてを詳細に語った。　尊い大主教は直ちに至聖なるタラシウス総主教のもとへ赴き、このことを報告した。そして、その聖なる総主教は大主教と共に、アナスタシウスを連れて王とその母のもとへ行き、キリストの殉教者の尊い遺骨について彼女に語った。　皆が喜び、神に感謝した。アナスタシアは惜しみない恩恵を受け、かつての位を再び授かった。　直ちに豪華な船が準備され、聖職者や王室の廷臣たち、そしてアナスタシウス・コミトを乗せて、リムノス島へと向かった。目的は、そこから聖人の遺骸をコンスタンティノープルへ移送することだった。順調な航海の末、彼らはその島に到着した。　地元の住民たちは、コンスタン

ティノープルからの使節団が到着し、称賛に値するエウフィミアの聖遺物を持ち去ろうとしていることを知ると、非常に敵意に満ちた大勢の人々が集まった。彼らは王室の使節団に抵抗し、その島からこの計り知れない価値のある霊的な宝を持ち去らせまいとした。とりわけ、アナスタシオス・コミトを「裏切り者」と呼んで激しく非難した。　そして、民衆の間ですでに不満の声が上がり始めていたため、リムノス島の司教は、次のように言ってかろうじて民衆をなだめることができた。

「人々よ、このような神の御心に逆らわず、王の怒りを煽ってはならない。*『王の怒りは獅子の咆哮のようだ』*（箴言19:12）。」

民衆の不満の声が静まると、聖人の棺が開かれ、地中からキリストの花嫁の尊い聖遺物が、まるで美しい花のように取り出された。空気が芳香に満たされ、聖遺物は詩篇の詠唱とともに、ろうそくと香炉を携えて船へと運ばれた。　一方、民衆は涙を流して見送り、これほど貴重な宝を失うことを嘆き、海辺に立ち、船が視界から消えるまで、航海する船をじっと見送った。船がコンスタンティノープルに到着すると、王とその母、そして至聖なる総主教を筆頭に、街の全住民が外に出て、　キリストの殉教者の尊い聖遺物を出迎え、喜びと祝賀のうちにそれを受け入れ、かつて異端者たちによって密かに奪われたあの教会へと、栄誉をもって運び、以前横たわっていたのと同じ場所、同じ石棺に安置した。

こうして、称賛に値する聖大殉教者エウフィミアは、再びコンスタンティノープルにおけるその尊い場所に安置され、人々は彼女の奇跡によって、聖人たちに現れる神を賛美した。神には、私たちからも、今この時、そして永遠に、栄光と賛美が捧げられる。アーメン。

トロパリオ、第4調：

あなたの花婿であるキリストを愛し、あなたの灯を明るく整え、美徳をもって輝いた、称えられしエウフィミアよ、それゆえにあなたは彼と共に婚礼の席に上り、彼から苦難の冠を受け取った。しかし、信仰をもってあなたの記憶を尊ぶ私たちを、災いから救い出してください。

コンダク、第6調：

あなたは、あなたの花婿であるキリストのために、苦難における功績、信仰における功績を熱心に捧げられました。しかし今なお、異端や敵の動揺が、正教の王たちの足元に打ち砕かれるよう、聖母マリアに祈ってください。聖母マリアは、六百三十人の神を崇める教父たちから受け継いだ教義を守り、すべての人から称賛されるお方です。

聖なる洗礼名エレナである、祝福された公妃オルガの帰天

記念日：7月11日

ロシアの地を覆っていた偶像崇拝という暗黒の夜の終わりに、至福のオルガは、キリストへの聖なる信仰――「正義の太陽」――の明るい日が訪れる前の夜明けのように現れました。

至福のオルガは名門の家系に生まれました。彼女はゴストミスルの曽孫であり、そのゴストミスルとは、ヴェリキー・ノヴゴロドを統治していたあの名高い人物で、彼自身の助言により、ヴァリャーグからリュリクとその兄弟たちがルーシの公位に招かれるまでその地位にありました[5093]。 オル

[5093] その根拠は、1）「至福のオルガ」という名前が、男性名の「オレグ」に由来するヴァリャーグ系の名前であること、2) いくつかの聖人伝における直接的な証言、および 3) オルガがイゴール公の妻であったという事実（ヴァリャーグであるイゴール公にとって、自族から妻を娶ることが最も自然であった）に基づき、聖女オルガがヴァリャーグの女性であっ

ガの故郷は、現在のプスコフ市の近くにあるヴィブツカヤ一帯であり、当時はまだその都市は存在していなかった[5094]。至福のオルガの両親は、自分たちが偶像崇拝を行っていたにもかかわらず、自ら守っていた誠実で賢明な生活の規範を娘に植え付けることに成功した。オルガは貞節と明晰な知性を備えており、それは後ほど明らかになるだろう。

リュリクは臨終の際[5095]、まだ幼い息子イゴリを残した。そのため、リュリクはイゴリ自身と、息子が成人するまでの公国統治を、親族であるオレグの世話に委ねた。オレグは相当な軍勢を率い、幼い後継者イゴリを伴ってキエフへと向かった。 そこでアスコルドとディルを討ち取ったオレグは、キエフを従わせ、ヴァリャーガ・ルーシの領土の唯一の支配者となったが、甥のイゴリのために公位は維持した。統治の務めのため、オレグはキエフやヴェリキー・ノヴゴロドを行き来しなければならなかった。 一方、イゴール公は青年期を迎えると、狩猟に興じるようになった。ある時、ノヴゴロド近郊で狩りをしていた際、彼はプスコフの領内へと足を踏み入れた。前述のヴィブツカヤ村付近で獲物を追跡していたところ、川の対岸に狩りに適した場所を見つけたが、舟がなかったためそこへ渡ることができなかった。 しばらくして、イゴールはある若者が舟で漕いでいるのに気づいた。彼を岸に呼び寄せ、川向こうへ渡してくれるよう頼んだ。 船で渡っている最中、イゴールは漕ぎ手の顔を注意深く見つめると、その相手が若者ではなく少女であることに気づいた。それは、その美しさで際立っていた聖なるオルガその人であった。オルガの美しさはイゴールの心を射抜き、 彼の中に情欲が燃え上がり、彼は言葉を弄して彼女を誘惑し、不浄な肉欲の交わりに誘おうとした。しかし、聖なるオルガは、情欲に駆られたイゴールの思惑を見抜き、まるで賢明な老人のように彼に語りかけ、次のように諭して会話を断ち切った。

「なぜ、公爵よ、実現不可能なことを企んで戸惑っているのですか? あなたの言葉は、私を辱めようとするあなたの恥知らずな欲望を露わにしています。そんなことはあってはなりません! 私はそんな話は聞くのも嫌です。 お願いです——私の言うことを聞き、この馬鹿げていて恥ずべき、恥じるべき思いを抑えてください。あなたは公爵であることを思い出し、考えてみてください。公爵とは、人々にとって統治者であり裁判官として、善行の輝かしい模範でなければならないのです。それなのに、あなたは今、どのような不法行為に近づこうとしているのですか? ! もしあなた自身が、不純な欲望に打ち負かされて悪行を犯すようなことがあれば、どうして他者をその悪行から遠ざけ、臣民を公正に裁くことができるというのか? 誠実な人々が嫌悪するような、そのような恥知らずな欲望は捨てなさい。たとえあなたが公爵であっても、民衆はあなたを憎み、恥辱に満ちた嘲笑の的とするかもしれない。 そして、知っておいてほしい。私はここに一人きりで、あなたに比べれば無力ではあるが、それでもあなたは私を打ち負かすことはできない。たとえあなたが私を打ち負かすことができたとしても、この川の深さが即座に私の盾となるだろう。私の貞操を汚されるよりは、この水の中に身を沈めて清らかに死ぬほうがましだ。

聖女オルガがイゴールに向けて語ったこのような貞操への説得は、彼の良心を呼び覚まし、恥の感情を掻き立てた。彼は返す言葉が見つからず、黙り込んでいた。こうして二人は川を渡り、その後別れた。そして、公は、この若き乙女の並外れた知性と貞操に驚嘆した。 実に、至福のオルガのこのような行いは驚くべきものである。真の神とその戒めを知らないにもかかわらず、彼女は貞節を

たとする説の方がより信憑性が高いと考えられる。–ヴァリャーグ人、あるいはノルマン人はスカンジナビア半島に居住しており、彼らとノヴゴロドのスラブ人を隔てていたのはフィン人だけだった。年代記ではヴァリャーグ人の招来を862年としているが、852年とする方がより正確である。

[5094] そう伝えているのが後世の伝承である。ヴィブツカヤ一帯——現在はヴィブティノまたはラブティノと呼ばれる——は、プスコフからヴェリカヤ川を遡って12ヴェルスタの地点にある。 一方、『初期年代記』（903年の項）によれば、聖なるオルガの故郷はプスコフであり、オレグが彼女をイゴールのもとへ連れてきたのもこの地であり、おそらく彼女はそこでの総督またはボヤールの娘であったことがわかる。

[5095] 879年に没した。

守るためにそのような偉業を成し遂げた。処女の清らかさを丹念に守りながら、彼女は若き公を正気に戻し、男の知性にふさわしい知恵の言葉で彼の情欲を鎮めたのである。

上述の出来事から間もなく、イゴール公は親族のオレグと共に、キエフで公位を確立する意図を持って同地へ向かった。その目的は達成され、彼らはキエフで統治を開始し、ヴェリキー・ノヴゴロドをはじめ、彼らの支配下に入ったルーシの他の都市にも、それぞれの総督を任命した。 イゴール公の婚礼の時が訪れると、公の宮殿にふさわしい女性を見つけるために多くの美しい乙女たちが選ばれたが、公の心を動かす者は一人もいなかった。 貞淑で美しいオルガのことを思い出したイゴールは、直ちに親族のオレグを彼女のもとへ遣わした。オレグはオルガを大いなる栄誉をもってキエフへ連れ帰った[5096] 、そしてイゴールは彼女と結婚した。その後、イゴールの親族であり後見人であったオレグも亡くなり[5097] 、イゴールは単独で統治を行うようになった。 独立して公爵となった当初、イゴールは周辺の諸民族と激しい戦争を繰り広げた。彼はツァーリグラードにまで遠征し、ギリシャ領の多くの国々を征服して、戦利品と栄光を手にこの遠征から帰還した[5098] 。その後、彼は国境地帯と平和を保ちながら、静かな日々を過ごした。 この頃、イゴールには聖なるオルガとの間に息子スヴィャトスラフが生まれた。彼は後に、聖人であり使徒同等の大公ウラジーミルの父となる人物である。イゴールはキエフの大公の座に就き、平穏に統治を続けた。多くの地域から富が豊かに流れ込み、遠く離れた国々からも数多くの贈り物や貢ぎ物が送られてきたのである。

イゴリの死は次のように訪れた。数々の戦争の後に訪れた平和に乗じて、イゴリは通常の貢ぎ物を徴収するため、各都市や地域を巡り始めた。 ドレヴリャ人の地[5099] に到着すると、彼は、彼らが自身の公位就任当初に自分から離反し、戦争が終わって初めて再び服従したことを思い出した。このため、イゴールはドレヴリャ人への貢納を倍増させ、彼らに多大な負担を強いた。彼らは悲嘆に暮れ、自らの公マロと相談し始めた。

「狼が羊の群れに目をつけると、殺さなければ一匹ずつ連れ去って、やがて群れ全体を食い尽くしてしまう。我々も同様だ――イゴリを殺さなければ、彼は我々全員を滅ぼしてしまうだろう。」

この協議の後、彼らは好機を窺い始めた。そして、イゴールがドレヴリャン人から受け取った貢ぎ物をキエフへ送り、自身は少数のドリュジナを率いて彼らの地に残っていた時、ドレヴリャン人はこの機会を好機と見なした。彼らは自国の都市コロステニの郊外でイゴールを不意打ちし、 公のドリュジナと公自身を殺害し、その場に埋葬した。「これこそが、ルーシの諸地方を治め、周辺の諸民族に畏怖を植え付けた善良な統治者、イゴール公の最期であった。後見人であったオレグの死後、イゴールは三十二年間を生き抜いた[5100] 。」

イゴリの暗殺の知らせがキエフに届くと、息子のスヴィャトスラフと共に夫の死を悼んでいたオルガは激しく涙を流し、キエフの住民たちも皆、涙を流した。 一方、ドレヴリャ人は、イゴリの殺害を受けて、次のような大胆な計画を立てた。彼らは、オルガを自国の公マルの妻に迎え、イゴリの後継者である幼いスヴィャトスラフを密かに殺害しようとしたのである。 こうしてドレヴリャ人は、自国の公の権力を強めようと考えていた。彼らは直ちに船で二十人の精鋭をオルガのもとへ送り

[5096] 注2を参照。オレグがイゴールにプスコフからオルガを連れてきたという事実は、彼女の美貌と優れた知性に関する伝承によって裏付けられている。すなわち、オレグはキエフのボヤールの娘たちの中に、オルガに匹敵する資質を持つ者を見つけることができなかったのである。

[5097] 912年

[5098] 941年と944年の2度にわたるイゴリのギリシャ遠征が知られているが、そのうち最初の遠征は失敗に終わった。この伝記の箇所で言及されているのは、当然ながら2度目の遠征であり、その際、ギリシャ皇帝はイゴリに多額の貢ぎ物を送り、ギリシャへの侵攻を控えるよう懇願した。多額の貢ぎ物を受け取ったイゴリは、ドナウ川の河岸からキエフへと引き返した。

[5099] 東スラブ人の定住の際、ドレヴリャ人はドニエプル川中流域の森林地帯を占め、その支流であるプリピャチ川沿いに定住した。ドレヴリャという名称は、このことに由来している。

[5100] 945年に殺害された。

、彼女に公の妻となるよう請うよう命じた。もし彼女が拒否した場合は、脅迫を用いて、たとえ無理やりであっても、彼女を彼らの主君の妻にさせよと命じられていた。　派遣された使節たちは水路でキエフに到達し、岸に上陸した。使節団の到着を耳にしたオルガ公妃は、ドレヴリャ人の使節たちを自分の元へ呼び寄せ、こう尋ねた。

「誠実な客人たちよ、あなた方は善意をもってやって来たのですか？」

「善意です」と彼らは答えた。

「では、教えてください」とオルガは尋ねた。「一体、どのような目的でここへ来られたのですか？」

男たちは答えた。

「我々をあなたのもとへ遣わしたのはドレヴリャ人の国であり、次のような言葉を託されました。『我々があなたの夫を殺したことを怒らないでください。彼は狼のように略奪し、強奪していたからです。　我らの公爵たちは、ドレヴリャの地を広めた善良な統治者たちだ。現在の我らの公爵は、イゴールとは比べものにならないほど優れている。若く美しく、しかも温厚で、慈愛に満ち、すべての人に対して慈悲深い。さあ、我らの公爵と結婚してくれ――そうすれば、あなたは我らの女主人となり、ドレヴリャの地の支配者となるだろう。

公妃オルガは、夫に対する悲しみと心の病を隠し、偽りの喜びを装って使節団にこう言った。

「あなた方の言葉は私の心に響きます。夫を生き返らせることはできませんし、未亡人として過ごすことは私にとって安らかではありません。女性である私は、このような公国を適切に統治する能力がありません。それに、私の息子はまだ幼い少年なのですから。」　それゆえ、私は喜んで貴方の若き公爵と結婚いたします。それに、私自身もまだ年老いてはいません。さあ、行って、船の中で休んでください。明朝、私は貴方を栄誉ある宴に招きます。その宴で、貴方の来訪の理由と、私が貴方の提案に同意したことを皆に知らせるつもりです。そしてその後、私は貴方の公爵のもとへ向かいます。　さて、明朝、使者が宴への招待にやって来た際には、あなた方を派遣した公爵の威信と、あなた方自身の威信を、どのように守らなければならないかを知っておいてください。　宴には、キエフに到着した時と同じ方法、すなわち、キエフの人々が頭の上に載せて運ぶ船に乗って参ってください。そうすれば、皆があなた方の高貴さと、私があなた方の公爵に対して抱く愛情を目の当たりにするでしょう。その愛情ゆえに、私はあなた方を私の民の前でこれほど大きな栄誉をもって敬っているのです。

ドレヴリャ人は喜びながら、自分たちの舟へと引き上げた。一方、夫の殺害への復讐を誓った公妃オルガは、彼らをどのような死に追いやるべきか、思案にふけっていた。　彼女はその夜、公爵の郊外の宮殿の中庭に深い穴を掘るよう命じた。その宮殿には、宴会のために用意された美しい広間もあった。翌朝、公妃は信頼できる家臣たちを遣わして、婚約者の親族たちを宴に招かせた。しかし、彼らはまるで狂ったかのように、船に座ったままこう言った。

「我々は徒歩でも行かず、馬にも乗らず、戦車にも乗らない。我々の公から船で遣わされたのだから、そのまま頭の上に載せて、貴女の公妃のもとへ運んでくれ。」

キエフの人々は、彼らの狂気ぶりを笑いながら、こう答えた。

「我らの公は殺され、我らの公妃は貴方の公のもとへ嫁ぐのだ。我らは今、まるで奴隷のように、命じられたことを行っているのだ。」

そして、彼らを小さな舟に一人ずつ乗せると、キエフの人々は、空虚な誇りに満ちた彼らを運んでいった。ドレヴリャン人を前述の公爵の宮廷に連れて来ると、宮殿からそれを見ていたオルガは、そのために用意された深い穴に彼らを投げ込むよう命じた。その後、自ら穴に近づき、その上に身を乗り出して、彼女は尋ねた。

「このような栄誉は、お気に召しますか？」

すると彼らは叫んだ。

「ああ、我らよ！我らはイゴリを殺したが、それによって何の得もなかったばかりか、さらに悲惨な死を遂げることになったのだ。」

そこでオルガは、彼らを生きたままその穴に埋め尽くすよう命じた。

そうすると、オルガ公妃は直ちに使者をドレヴリャ人へ送り、次のように伝えた。

「もしあなたがたが本当に、私があなたがたの公の元に赴くことを望むのなら、前回よりもさらに人数が多く、身分の高い使節団を派遣してください。その使節団が、私をあなたがたの公のもとへ名誉をもって案内するように。キエフの人々に私を引き留められる前に、できるだけ早く使節たちを派遣してください。」

ドレヴリャ人は大いなる喜びと急ぎをもって、オルガのもとへ、ドレヴリャの地において公に次ぐ最も高貴な五十人の長老たちを遣わした。　彼らがキエフに到着すると、オルガは彼らのために風呂を用意するよう命じ、次のような依頼を伝えた。「使節たちは、疲れる旅の後に風呂で体を洗い、休息をとってから、私のところへ来てください」。彼らは喜んで風呂へ向かった。　ドレヴリャン人が体を洗い始めると、すぐにあらかじめ仕組まれていた使用人たちが外から扉をしっかりと閉め切り、サウナを藁や小枝で囲んで火をつけた。こうして、ドレヴリャンの長老たちは使用人たちと共にサウナごと焼死してしまった。　そこでオルガは再びドレヴリャン族に使者を送り、彼らの公爵との結婚のためにまもなく到着することを伝え、彼女の　夫が殺されたその場所で、蜂蜜やあらゆる飲み物、食べ物を用意するよう命じた。それは、彼らの元へ到着した際、最初の夫の死を悼む追悼の宴を執り行い、　すなわち、異教の慣習による追悼の宴を執り行い、その後に結婚を行うよう命じた。ドレヴリャ人は喜びのあまり、あらゆるものを豊かに用意した。一方、公妃オルガは約束通り、まるで結婚のためではなく戦争に備えるかのように、大軍を率いてドレヴリャ人の元へ向かった。　オルガがドレヴリャ人の首都コロステニに近づくと、彼らは祝祭の衣装を身にまとい、ある者は徒歩で、ある者は馬に乗って出迎え、歓喜と喜びをもって彼女を迎えた。　一方、オルガはまず夫の墓へと向かい、そこで夫を偲んで激しく泣いた。その後、異教の慣習に従って追悼の儀式を執り行った後、墓の上に大きな古墳を築くよう命じた。すると、ドレヴリャン人は彼女にこう言った。

「公妃様！　私たちは、あなたの夫が貪欲な狼のように私たちに冷酷だったため、彼を殺しました。しかし、あなたは私たちの公様と同じように慈悲深いです。これからは、私たちは平穏に暮らせるでしょう！」

オルガはこう答えた。

「私はすでに最初の夫を悼んではいません。彼の墓の前でなすべきことをすべて果たしました。今こそ、喜びをもって、あなた方の公との二度目の結婚の準備をする時が来たのです。」

一方、ドレヴリャ一人はオルガに、自分たちの最初の使節と二番目の使節について尋ねた。

「彼らは私の全財産を携え、別の道を通って私たちの後を追ってきている」と公妃は答えた。

その後、オルガは喪服を脱ぎ、公妃にふさわしい明るい婚礼の衣装を身にまとい、同時に喜びに満ちた表情を見せた。彼女はドレヴリャン人に、食べ、飲み、楽しむよう命じ、自分の家来たちには、ドレヴリャン人に仕え、彼らと共に食事を摂るが、酔い潰れてはならないと命じた。　やがてドレヴリャン人が酔いしれたとき、公妃は家来たちに、あらかじめ用意しておいた武器――剣、短剣、槍――でドレヴリャン人を打ちのめすよう命じた。殺された者は五千人以上にのぼった。こうしてオルガは、ドレヴリャン人の歓びを血で染め上げ、夫の殺害への復讐を果たして、キエフへと戻った。

翌年、オルガは軍勢を集め、息子のスヴィャトスラフ・イゴレヴィチを連れてドレヴリャン族へと進軍し、父の死に対する復讐に彼を巻き込んだ。　ドレヴリャン人は相当な兵力を率いて出撃し

た。両軍が[5101] で激突すると、キエフ軍がドレヴリャン人を打ち負かすまで、激しい戦いが繰り広げられた。そしてキエフ軍はドレヴリャン人を首都コロステニまで追撃し、次々と殺害していった。ドレヴリャ人は城内に立てこもり、オルガは丸一年、執拗に包囲を続けた。しかし、強攻で城を陥落させるのが困難だと悟ると、賢明な公妃は次のような策略を思いついた。彼女は城内に立てこもるドレヴリャ人に対し、次のように伝言を送らせた。

「なぜ、愚かな者たちよ、私に服従しようとせず、自らを飢え死にさせようとするのか？　あなたの他のすべての都市はすでに私に服従を表明しているではないか。その住民たちは貢ぎ物を納め、都市や村で平穏に暮らし、自分の畑を耕しているのだ。」

「我々も、あなたに服従したいのは山々だが、あなたがまた自分の公爵の仇を討つのではないかと恐れているのだ」と、城に閉じこもった者たちは答えた。

そこでオルガは、彼らのもとへ第二の使者を遣わし、こう告げた。

「私はすでに、長老たちやあなた方の他の者たちに対して何度も復讐を行ってきた。今、私が望むのは復讐ではなく、あなた方からの貢ぎ物と服従である。」

ドレヴリャ人は、彼女が望む通りの貢ぎ物を支払うことに同意した。オルガは彼らにこう提案した。

「あなたがたが今、戦争で貧しくなり、蜂蜜でも、蜜蝋でも、皮革でも、その他の交易に適した品物でも、私に貢ぎ物を納めることができないことは承知している。私自身も、過大な貢ぎ物であなたがたに負担をかけたくはない。　従順の証として、ささやかな貢ぎ物をください。たとえ各家から鳩を3羽、スズメを3羽ずつでも構いません。あなたの従順さを確信するには、それだけで十分です。

ドレヴリャ人にとって、この貢ぎ物はあまりにも取るに足らないものに見えたため、彼らはオルガの女性らしい知恵を嘲笑さえした。彼らは直ちに各家から鳩とスズメをそれぞれ3羽ずつ集め、頭を下げて彼女に送った。オルガは町からやって来た男たちにこう言った。

「さあ、あなたたちは今や私と私の息子に服従した。どうか平和に暮らしてください。明日、私はあなたたちの町を離れ、故郷へ帰るつもりです。」

そう言って、彼女は先述の男たちを帰した。街の住民たちは皆、公妃の言葉を聞いて大いに喜んだ。　一方、オルガは鳥たちを自分の兵士たちに配り、夜遅くには、それぞれの鳩とスズメに硫黄を染み込ませた布切れを結びつけ、それを燃やしてすべての鳥を一斉に空へ放つよう命じた。　兵士たちはこの命令を実行した。鳥たちは、捕らえられた町へと飛び立ち、それぞれの鳩は自分の巣へ、それぞれのスズメは自分の居場所へと飛び込んだ。するとたちまち、町の至る所で火が燃え上がり、その間、オルガは軍に、町を四方から包囲し、攻撃を開始するよう命じた。　町の住民たちは火から逃れようと城壁の外へ駆け出したが、敵の手に落ち、こうしてコロステンは陥落した。ドレヴリャ人の多くは剣によって命を落とし、妻や子供たちと共に火に焼かれた者もいれば、町の地下を流れる川で溺死した者もいた。その際、ドレヴリャ人の公も命を落とした。　生き残った者の多くは捕虜として連行され、他は公妃によって居住地に残されたが、公妃は彼らに重い貢納を課した[5102] 。こうして、オルガ公妃は夫の殺害に対する復讐を果たし、ドレヴリャ人の全領土を服従させ、栄光と祝賀に包まれてキエフへと帰還した。

そして、オルガ公妃は、自身の支配下にあるルーシの領土を、女性としてではなく、強くて賢明な男性として統治し、権力をしっかりと掌握し、敵から勇敢に身を守った。　彼女は敵にとっては恐るべき存在であったが、自国民からは、慈悲深く敬虔な統治者として、また公正で誰をも傷つけず

[5101] 両軍が激突したとき、幼いスヴィャトスラフはドレヴリャン族の方へ槍を投げつけた。子供の手に投げられたその槍は、馬の耳の間をすり抜け、その脚に命中した。すると、キエフのドリュジナの将たちは「公が先陣を切った。我らも公に従って進もう」と言い、戦いが激化した。

[5102] この貢ぎ物の3分の2はキエフへ、3分の1はオルガが所有するヴィシュゴロドへと送られた。

、慈悲をもって罰を下し、善人を報いる裁判官として愛されていた。彼女は悪人たちに恐怖を植え付け、それぞれの行いの価値に見合った報いを与え、　あらゆる統治の事柄において、彼女は先見の明と英知を示した。その一方で、心根の優しいオルガは、乞食や貧しい人々、困窮者に対して寛大であった。正当な願い事はすぐに彼女の心に届き、彼女は速やかにそれを実現させた。　彼女が異教徒であったにもかかわらず、そのすべての行いは、キリスト教の恵みにふさわしいものとして、神に喜ばれるものであった。これらすべてに加え、オルガは節制と貞潔な生活を送っていた。彼女は再婚を望まず、清らかな未亡人としての生活を守りつつ、息子が成人する日まで、彼のために公爵の権威を代行していた。　やがて息子が成人すると、彼女は統治のすべての務めを彼に引き継ぎ、自身は世間の噂や煩わしさから身を引いて、統治の心配事から離れた生活を送り、慈善活動に専念した。

やがて、主が不信仰によって目がくらんでいたスラブ人を、聖なる信仰の光で照らし、真理を知らしめ、救いの道へと導こうと望まれた、好機が訪れた。　主はこの啓蒙の始まりを、冷酷な男たちを恥じ入らせるために、弱き女性の器、すなわち至福のオルガを通して現すことをお許しになった。なぜなら、かつて主はご自身の復活の宣教者として香油を携えた女性たちを立てられた（マタイ28:9–10）ように、　また、御自身が十字架にかかられた尊い御十字架を、地底から女王エレナという女性を通して世に示されたように、その後、ルーシの地においても、聖なる信仰を植え付けるために、驚くべき女性、新たなエレナ――オルガ公妃――をお選びになったのである。　主は、御自身の至聖なる御名のための尊い器として彼女を選び、ロシアの地にその御名を広めるようお命じになった。主は彼女の心に、御自身の目に見えぬ恵みの曙光を灯し、彼女がまだ知らなかった真の神を知るために、彼女の知性ある目を開かれた。　彼女はすでに、異教の不敬虔さによる惑わしと迷いを悟っており、狂った人々が崇める偶像は神ではなく、魂のない人間の手による造作物であるということを、自明の真理として確信していた。それゆえ、彼女はそれらを崇めるどころか、むしろ嫌悪していた。商人が高価な真珠を求めるように、オルガは心の底から正しい神への崇拝を求め、次のようにしてそれを見出した。神の御導きにより、彼女はある人々から、唯一の真の神、すなわち天と地とすべての被造物の創造主がおられ、ギリシャ人もその神を信じていること、そしてその神以外に神はいない[5103]ことを聞いた。真の神への認識を求め、生まれつき怠惰ではなかったオルガは、自らの目でキリスト教の礼拝を見、真の神に関する彼らの教えを完全に確信するために、自らギリシャ人たちのところへ行きたいと願った。　特に高貴な男性たちを伴い、彼女は多額の財産を携えて海路でコンスタンティノープルへと向かった。そこで彼女は皇帝と総主教から大いなる栄誉をもって迎えられ、オルガは彼らに、その地位にふさわしい多くの贈り物を手渡した。　コンスタンティノープルで、オルガはキリスト教の信仰について学び、日々熱心に神の御言葉に耳を傾け、壮麗な礼拝の儀式やキリスト教生活の他の側面をじっくりと観察した。彼女の心は、疑いなく信仰を捧げた神への愛に燃え上がり、それゆえ、オルガは聖なる洗礼を受けたいという願いを表明した。一方、当時未亡人であったギリシャの王は、オルガを自分の妻にしたいと考えていた。彼は、彼女の美しい容姿、賢明さ、勇敢さ、名声、そして広大なロシアの領土に惹かれていたのだ。皇帝はオルガにこう言った。

[5103] ヴァリャーグ――イゴール公のドリュジナの中に多くいたキリスト教徒――は、まさにそのような人々でなければならなかった。「非常に聡明な女性として」――著名な歴史家E.E.ゴルビンスキーはこう述べている――「オルガは、この新しい信仰を持つヴァリャーグたちに注目せざるを得なかった。　一方、ヴァリャーグたち自身も、オルガのその知性を頼りに、当然ながら彼女を改宗させようと夢見ていたに違いない。キリスト教徒であるヴァリャーグたちの布教活動こそが、オルガがキリスト教徒になる決意を固める結果をもたらしたのである。　我々は、彼女が単に知性豊かな女性であるだけでなく、まさに国家的な知性を備えた女性であったことを知っている。この事情は、キリスト教の真実性を彼女に説得する任務を引き受けた者たちにとって、その労苦を半分ほど軽減する役割を果たしたに違いない。キリスト教がヨーロッパのほぼすべての民族の信仰となり、いずれにせよ、それらの民族の中でも最も優れた民族の信仰であるという指摘、――すなわち、他の民族の例に倣って、彼女自身の同族（ヴァリャーグ）の間でもキリスト教への強い動きが始まっているという指摘は、オルガの知性に確実に影響を与え、優れた人々には優れた信仰があるに違いないという結論を彼女に導かせざるを得なかった（『ロシア教会の歴史』第1巻、第1半期、 第2版、75頁）。

「おお、オルガ公妃よ！　あなたはキリスト教の女王となるにふさわしく、わが王国のこの都で我々と共に暮らすにふさわしい。」

そして皇帝は、オルガに自分との結婚について語り始めた。彼女は皇帝の提案を拒んでいるようには見せなかったが、まず洗礼を受けることを願い出て、こう言った。

「私は結婚のためではなく、聖なる洗礼を受けるためにここへ参りました。私が洗礼を受けた後であれば、結婚の話も可能です。なぜなら、不信心で洗礼を受けていない妻が、キリスト教徒の夫と結ばれることは許されていないからです。」　王は洗礼を急がせ始めた。総主教は、聖なる信仰の真理についてオルガに十分に教えを説いた後、次のようにして彼女の洗礼を宣言した。　そして、洗礼用の洗盤の準備が整うと、オルガは皇帝自らが彼女の洗礼の代父となるよう願い始めた。「私、」と彼女は言った。「皇帝ご自身が私の代父になってくださらないなら、洗礼を受けるつもりはありません。洗礼を受けずにここを去ります。私の魂については、あなたがたが神に答えを申し上げることになるでしょう。」　ツァーリは彼女の願いを受け入れ、オルガは総主教によって洗礼を受け、ツァーリは聖なる洗礼槽から彼女を受け入れ、彼女の洗礼の代父となった。　オルガはヘレナと名付けられた。これは、コンスタンティヌス大帝の母であり、最初のキリスト教徒の女王であったヘレナと同じ名である。洗礼の後、総主教は聖体礼儀の中で、キリストの至聖なる御体と御血という神聖な秘跡をオルガに授け、次のように言って彼女を祝福した。

「汝はロシアの女性たちの中で祝福された者である。なぜなら、汝は闇を捨てて真の光を求めたからである。偶像崇拝の多神教を憎み、唯一の真の神を愛したからである。汝は不死の命と結ばれ、永遠の死を免れた。これからは、ロシアの地の息子たちが汝を称え奉るであろう！」

こうして総主教は彼女を祝福した。オルガと共にやってきた人々の中でも、多くの男女が同様に洗礼を受け、コンスタンティノープルではオルガ公妃の洗礼を祝って喜びに包まれた。また、皇帝はその日、盛大な宴を催し、皆がキリスト神を賛美しながら喜び祝った。　その後、皇帝は再び、聖なる洗礼によってエレナと名付けられたオルガとの結婚について語り始めた。しかし、至福のエレナはこれにこう答えた。

「どうしてあなたは、自分の洗礼の娘である私を妻に迎えることができるのですか？　キリスト教の律法だけでなく、異教の慣習においても、父親が娘を妻にすることは忌まわしく、許されないこととして敬遠されているのですから。」

「お前は私を出し抜いたな、オルガ！」と王は叫んだ。

「以前にも言った通りです」と、聖女オルガは反論した。　「私がここに来たのは、あなたと共に統治するためではない――私と息子にとって、ルーシの地での権力は十分だ――不死の王、キリスト・神に嫁ぐためなのだ。私は全霊を込めてその方を愛し、その永遠の御国にふさわしい者とされたいと願っている。」

そこで王は、叶わぬ野望と肉欲的な愛を捨て、聖なるオルガを娘のように霊的な愛で慈しみ、惜しみなく贈り物を与えて、平穏に帰らせた。コンスタンティノープルを去る際、聖なるオルガは総主教のもとへ赴き、旅立ちの祝福を請いながら、こう言った。

「聖なる父よ、私のために神に祈ってください。私は、息子が異教の迷いの中にあり、すべての人々が古来の不敬虔さにおいて石のように頑なである、私の国へと帰ります。どうか、あなたの聖なる祈りによって、主がそこで私をあらゆる悪から救ってくださいますように。」

総主教は彼女にこう答えた。

「聖霊について語る、私の忠実で祝福された娘よ。聖なる洗礼によってあなたが身を包んだキリストご自身が、あらゆる悪からあなたを守ってくださいますように。主がノアを大洪水から、　ロトをソドムから、モーセとイスラエルの民をファラオから、ダビデをサウルから、ダニエルを獅子の口から、三人の若者を炉から守られたように。そうして、主があなたを　災いから救い出されますように。あなたはあなたの民の中で祝福され、孫やひ孫たちから最期の年まで愛され続けるでしょう。

この総主教の祝福を、至福のオルガは、最も高価な贈り物よりも貴重な宝物として受け入れた。これと共に、彼女は清らかさと祈り、断食と節制、そして神に喜ばれるキリスト教徒の生活にふさわしいあらゆる善行についての教えも受け入れた。　その後、聖なるオルガは総主教から聖なる十字架、聖なるイコン、書物、そして礼拝に必要なその他の品々を受け取りました。また、総主教から司祭や聖職者たちも引き受けました。そして、聖なるオルガは大きな喜びをもって、コンスタンティノープルから故郷へと帰りました[5104]。

伝えられるところによると、彼女が総主教の手から受け取った聖なる十字架には、次のような銘文が刻まれていたという。「ロシアの地は、至福のオルガが受けた聖なる洗礼によって、神におけるいのちのために新たにされた」。至福のオルガの死後、信徒たちはこの十字架を大公ヤロスラフ・ヴラディミロヴィチの時代まで保管していた。　同大公はキエフに偉大で美しい聖ソフィア大聖堂を建立し、その祭壇の右側に、前述の十字架を安置した。現在、この十字架はすでに存在しない。というのも、キエフが幾度も荒廃する中で、聖なる教会もまた破壊されたからである。しかし、至福のオルガに関する物語に戻ろう。

キエフに戻った「新たなヘレナ」――オルガ公妃は、まるで太陽のように、偶像崇拝という不義の闇を追い払い、心が曇った人々を照らし始めた。彼女はアスコルドの墓に聖ニコライに捧げる最初の教会を建立し、多くのキエフ市民を救い主キリストへと導いた。　しかし、彼女は息子のスヴィャトスラフを、いかなる手段を用いても真の悟り――すなわち神を知る道――へと導くことはできなかった。軍事活動に全身全霊を捧げていた彼は、母の言葉に耳を貸そうとしなかった。彼は勇敢で戦いを愛する男であり、その生涯のほとんどを、家よりも軍団や兵士たちの間で過ごしていた。　彼に諭しをかけた母に対し、スヴィャトスラフはこう言った。

「もし私がキリスト教の信仰を受け入れ、洗礼を受ければ、ボヤールや軍司令官、そしてすべての兵士たちが私から離れていく。そうなれば、敵と戦い、我が祖国を守る仲間がいなくなってしまう。」

[5104] 一般に、聖女オルガは957年、コンスタンティノス・バグリアノロドス帝の治世下でコンスタンティノープルにて洗礼を受けたと考えられている。しかし、この説を受け入れるのは難しい。　というのも、コンスタンティノス・バグリアノロドス皇帝は『ビザンツ宮廷の儀礼または儀式について』という著作を残しているからである。　この著作の中で、彼は957年に聖女オルガがコンスタンティノープルを訪問した際、宮廷でどのように迎えられたかを詳細に記述しているが、皇帝は、オルガが洗礼を受けるためにコンスタンティノープルを訪れ、実際に洗礼を受けたことについて、ほのめかすことさえしていない。　それどころか、彼はオルガがすでに洗礼を受けた状態でコンスタンティノープルに到着したことを明確に示している。オルガが宮殿で初めて迎えられた際、彼女の司祭がすでに同席していたからだ。では、彼女はいつ洗礼を受けたのだろうか？　「イゴリの死後、オルガは幼いスヴィャトスラフの代わりに国家の統治者であり、国家において公式な立場に留まっていた間は洗礼を受けていなかったと考えられる。そして、公式な摂政の地位を退く機会を得て、少なくとも形式上は　私生活へと退いた後、つまり国民がもはや彼女の行いを問う権利を持たなくなった後に洗礼を受けたと考えられる」（E.E. ゴルビンスキー『ロシア教会の歴史』第1巻、第1半期、第20版、78ページ）。　後者は、スヴィャトスラフが民事上の成年年齢に達して初めて起こり得たことであり、当時、それはいかなる場合でも10歳より前に始まることはなかった。スヴィャトスラフは942年に生まれ、957年にはオルガはすでに洗礼を受けていた。　スヴィャトスラフの民事上の成年を10歳とみなすと、聖女オルガは952年（スヴィャトスラフが10歳になった年）から957年の間のどこかで洗礼を受けたと推定される。そして、聖女オルガの洗礼が、この期間のいずれかの年にあったことを示す明確な証拠が存在する。　ヤロスラフの治世末期からイジャスラフの統治初期にかけて執筆し、わが国における私的歴史学の創始者かつ先駆者である修道士ヤコブ――信頼に足る著述家である――は、オルガとウラジーミルの洗礼に関する伝承の中で、オルガが洗礼を受けてから15年間生きたと述べている。 したがって、年代記作者と同様にオルガの死を969年と推定するヤコブによれば、 オルガが洗礼を受けたのは954年（969－15954）であり、当時ギリシャの皇帝はコンスタンティノス・バグリアノロドス（912－957年）、総主教はテオフィラクトス（933－956年）であった。 – 957年に聖オルガがツァールグラードへ旅をした際、総主教はすでに聖ポリエウクトスであった。

こうしてスヴィャトスラフ公は答えた。とはいえ、彼は洗礼を受けたいと望む者を禁じることはしなかった。しかし、聖なる洗礼を受ける貴族は多くなく、それどころか、貴族たちはそのような人々を軽蔑していた。なぜなら、不信仰者にとってキリスト教は狂気であるからである（参照：コリントの信徒への手紙一 1:18）。 一方、庶民の間からは、聖なる教会に多くの人が集まった。聖オルガはヴェリキー・ノヴゴロドや周辺の町々を訪れ、可能な限りあらゆる場所で人々をキリストの信仰へと導いた。その際、彼女は偶像を打ち砕き、その場所に聖なる十字架を立てた。その十字架からは、異教徒たちを確信させるために、多くのしるしと奇跡が現れた。 故郷のヴィブツカヤに戻ると、至福のオルガはここでも、身近な人々にキリスト教の福音を広めた。 この地での滞在中、彼女は南から北へ流れるヴェリカヤ川の岸辺に到達し、東から流れるプスコヴァ川がヴェリカヤ川に合流する地点の対岸に立ち止まった（当時、 これらの場所には広大な原生林が広がっていた）； すると、聖オルガはその川の対岸から、東の方角から先ほど述べた場所へと、その地を照らし出しながら、三本のまばゆい光線が天から降り注ぐのを見た。この光線から放たれる不思議な光は、聖オルガ自身だけでなく、彼女の同行者たちにも見えた。 聖女オルガは大いに喜び、その国の神の恵みによる啓蒙を予示するこの幻視に対して、神に感謝を捧げた。同行者たちに向き直り、聖女オルガは預言的にこう語った。

「神の御心により、この三つの光に照らされた場所に、至聖にして命の源である三位一体の名を冠した教会が建てられ、あらゆるものに満ち溢れた偉大で栄光ある都市が築かれることを、あなたがたは知っておくがよい。」

これらの言葉とかなり長い祈りの後、聖女オルガは十字架を立てた。そして今日に至るまで、その祈りの聖堂は、聖女オルガがそれを立てた場所に建ち続けている。ロシアの多くの都市を巡った後、キリストの宣教者はキエフに戻り、そこで神のために善行を成し遂げた。 異教の時代に善行を積んでいたのであれば、ましてや今や聖なる信仰に目覚めた聖女オルガは、新たに知った神、すなわち自らの創造主であり啓蒙者である神に喜ばれようと努め、あらゆる美徳を身にまといました。 プスコヴァ川での幻視を思い起こし、彼女は聖三位一体の名を冠した教会の建設のために多くの金と銀を送り、同時にその地に人々を定住させるよう命じた。こうして、プスコヴァ川にちなんで名付けられたプスコフの町は、短期間のうちに大都市へと発展し、その地では至聖なる三位一体の名が賛美されるようになった。

この頃、スヴィアトスラフ公は、キエフに母と、自身の子供たちであるヤロポルク、オレグ、ウラジーミールを残して、ブルガリアへ出陣した[5105] 。彼らとの戦争中、彼は80もの都市を攻略し、とりわけ首都ペリャスラヴェツ[5106] を気に入り、そこで暮らし始めた。 一方、キエフに残った聖女オルガは、スヴィャトスラフの子供たちである孫たちに、子供たちの理解力に合わせてキリスト教の信仰を教えた。しかし、息子からの反発を恐れて彼らを洗礼に与えることを躊躇し、神の御心に委ねた。 スヴィャトスラフがブルガリアの地に留まっている間に、ペチェネグ族[5107] が予期せずキエフの領内に侵入し、キエフを包囲して攻城戦を開始した。聖オルガは孫たちと共に城内に籠城したが、ペチ

[5105] 967年

[5106] ドナウ川沿い。

[5107] ペチェネグ族——トルコ系民族のロシア名である。かつてペチェネグ族は中央アジアの草原を遊牧しており、いつ正確にここからヨーロッパへ移住したかは定かではない。9世紀にはすでにヴォルガ川とヤイク川（ウラル山脈）の間に居住しており、10世紀60年代までは、ペチェネグ族はルーシを脅かすことはなかった。 聖人の伝記に記されているペチェネグ族によるキエフへの襲撃こそが、『年代記』（968年の項）におけるペチェネグ族の襲撃に関する最初の言及である。この時から半世紀以上にわたり、ルーシとペチェネグ族との戦いは絶え間なく続いた。ルーシは要塞や都市によって彼らから身を守ろうとした。 これが、現在のキエフ州にあるズミエフの土塁の由来である。聖ウラジーミルはストゥグネ川沿いに、ヤロスラフ・ムードリーはロシ川（その南）沿いに要塞を築いた。ペチェネグ族によるルーシへの最後の襲撃（キエフ包囲戦）は1034年に起こり、この時彼らは完全に撃破された。

ェネグ族は城を陥落させることができなかった。主は、御自身の忠実なしもべを守り、彼女の祈りによって城をも守られた。　ペチェネグ族がキエフに侵攻したという知らせがスヴィャトスラフの耳に入った。彼はブルガリアの地から軍を率いて急行し、ペチェネグ族を不意打ちして撃退し、彼らを敗走させた。キエフに入ると、彼はすでに病に伏していた母を慰め、再びブルガリアの地へ向かうために彼女のもとを離れようとした。 すると、至福のオルガは涙ながらに彼にこう言った。

「なぜ私を置いていくの、わが子よ。どこへ行くの？　他人を求めて、自分のことを誰に託そうというの？　あなたの子供たちはまだ幼く、私はもう年老いて、しかも病気なの――私は間もなく訪れる死、すなわち私が信じる最愛のキリストのもとへの旅立ちを待っている。　今、私が心配しているのはあなたのことだけです。私はあなたに多くのことを教え、偶像崇拝の不義を捨て、私が知った真の神を信じるよう説得してきましたが、あなたはそれを無視しました。　そして私は知っているのです。私への不従順のゆえに、この世では悲惨な最期が、死後には異教徒のために用意された永遠の苦しみがお前を待っていることを。どうか今、せめてこの私の願いだけは叶えてください。私が息を引き取り、埋葬されるまでは、どこにも行かないでください。その後なら、どこへでも行って構いません。　私の死後、そのような場合に異教の慣習で求められるようなことは一切行わないでほしい。私の長老と聖職者たちが、キリスト教の慣習に従って私の罪深い遺体を葬るようにしなさい。　私の上に墓の塚を築いたり、追悼の儀式を行ったりしてはならない。その代わりに、コンスタンティノープルへ金を送り、至聖なる総主教に、私の魂のために神への祈りと捧げ物を捧げてもらい、貧しい人々に施しを配ってもらうようにしなさい。

これを聞いて、スヴィャトスラフは痛切に泣き、彼女が遺言したすべてを履行することを約束したが、聖なる信仰を受け入れることだけは拒んだ。　三日が過ぎると、至福のオルガは極度の衰弱に陥った。彼女は、私たちの救い主キリストの至聖なる御体と命を与える御血による神聖な秘跡を拝領した。その間ずっと、彼女は神と、常に神に次ぐ助け手として仰いでいた至聖なる聖母マリアへと熱心に祈りを捧げ続け、すべての聖人たちにも呼びかけた。　特に熱心に、聖女オルガは自身の死後のルーシの地の啓蒙について祈った。未来を見通して、彼女は生前、神がルーシの地の人々を啓蒙し、その多くが偉大な聖人となることを、幾度となく預言的に予言していた。聖女オルガは、この預言が一日も早く成就するよう、臨終の際にも祈りを捧げた。　そして、彼女の清らかな魂が肉体から解き放たれ、義人として神の御手に迎え入れられたときも、なお祈りが彼女の唇にありました。こうして彼女は地上の世界から天上の世界へと移り住み、不死の王――キリスト・神の宮殿に入るにふさわしい者とされ、ロシアの地から生まれた最初の聖人として聖人の列に加えられました。　至福のオルガ（洗礼名エレナ）は、[5108]　年7月11日にこの世を去った。彼女は42年間結婚生活を送り、結婚した当時は、成熟した年齢と健やかな体力を備えた乙女であり、当時20歳前後であった。　夫の死から10年目に、彼女は聖なる洗礼を受けるにふさわしい者とされ、洗礼を受けた後は、神に喜ばれる生き方を15年間送りました。このように、彼女の生涯は合計で約90年に及びました。そして、彼女の息子であるスヴィャトスラフ公、ボヤール、高官、そして民衆のすべてが、至福のオルガを悼みました。至福のオルガは、キリスト教の儀式に従って、栄誉をもって埋葬されました。

聖オルガの帰天後、息子の悲惨な最期と、ルーシの地における良き啓蒙についての彼女の予言は実現した。　彼女の息子スヴィアトスラフは（年代記作者の記述によれば）、数年後、ペチェネジの公クレイ[5109]　との戦いで殺害された。クレイはスヴィアトスラフの首を切り落とし、その頭蓋骨を杯にして、金で縁取り、次のように刻んだ。

「他人のものを求める者は、自らのものを滅ぼす」。ペチェネジの公は、家臣たちとの宴の席で、この杯から酒を飲んだ。かくして、勇敢でこれまで戦いに無敗であった大公スヴィャトスラフ・

[5108] 969年
[5109] 972年

イゴレヴィチは、母の予言通り、彼女の言葉に従わなかったために悲惨な最期を遂げたのである。至福のオルガの予言は、ルーシの地についても成就した。彼女の死から二十年後、孫のウラジーミルは聖なる洗礼を受け、聖なる信仰によってルーシの地を啓蒙した[5110]。 至聖なる聖母マリアの名を冠した石造りの教会（ウラジーミルがその維持費として自身の領地の十分の一を捧げていたことから「十分の一教会」と呼ばれた）を建立し、キエフ都主教レオンティウスと相談した上で、聖ウラジーミルは、祖母の尊い遺骨――朽ちることなく、腐敗せず、芳香に満ちたもの――を地中から掘り起こし、 彼はそれらを大いなる敬意をもって前述の至聖なる聖母マリア教会へ移し、隠すことなく公然と安置した。それは、信仰をもってそこへ駆けつけ、祈りの成就を受ける人々のためであった。この尊い聖遺物からは、様々な病の多くの治癒がもたらされた[5111]。

次の点も忘れてはならない。至福のオルガの墓の上にある教会の壁には小さな窓があり、 もし誰かが確固たる信仰を持って尊い聖遺物の前に来ると、その小窓は自ずと開き、外にいる者は小窓越しに、中に安置された尊い奇跡を起こす聖遺物をはっきりと見ることができた。特に信仰深い者たちは、そこから発せられるある種の不思議な輝きさえも目にした； また、信仰を持つ者であれば、いかなる病に冒されていようとも、即座に癒やされた。しかし、信仰が薄い者が訪れても、その小窓は開かず、たとえ教会の中に入ったとしても、尊い聖遺物を見ることはできなかった。その者は棺しか見ることができず、癒やされることもなかった。 しかし、信者たちは、聖なる洗礼においてヘレナと名付けられた聖オルガの祈りと、我らの主イエス・キリストの恵みによって、肉体と魂の両方に益を受けるのであった。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

神の知恵の翼に心を向け、あなたは目に見える被造物よりも高く舞い上がった。万物の神であり創造主である方を求め、その方を見いだして、洗礼による新生を受けた。命の木の実を味わい、永遠に朽ちることなく留まる、永遠に賛美されるオルガよ。

コンダク、第4調：

今日、すべての者の恩人である神を讃えよう。ロシアにおいて「神の知恵を持つ」オルガを栄光に輝かせた神よ。彼女の祈りによって、私たちの魂に罪の赦しを授けてください。

聖殉教者キンデイの記念日

記念日：7月11日

聖キンデイは、パンフィリア地方のシダ村の長老であった。ディオクレティアヌス帝の治世中、イゲモン・ストラトニクスの命令により捕らえられ、火刑に処せられた。彼は釘の打ち込まれた鉄の靴を履かされ、拷問の場へと連行された。 彼を連行していた兵士たちは、道中で薪割り職人に遭遇し、火刑用の薪を無理やり奪い取ったが、聖キンデイは薪割り職人に代金を支払い、自ら薪を背負って殉教の場まで運んだ。炎の中に置かれても、殉教者は無傷のままであり、人々にキリストの力を

[5110] その記念日は7月15日である。

[5111] モンゴル軍の侵攻の際、聖遺物は教会内に密かに隠されたが、17世紀には、あまり明確ではない理由により、再び不明な場所に隠された。

知るよう呼びかけた。　突然、雷雨が降り出し、激しい雨が焚き火を打ち消した。雷雨が止むと、聖人は主に向かって祈りを捧げ、息を引き取った。

7月25日

7月12日（旧暦）

同日、アルセニイ・ノヴゴロドスキー（1570年）とシモン・ヴォロムスキー（1641年）の両尊者の帰天を記念する。

同日は、983年にキエフで殺害された聖殉教者テオドール・ヴァリャーグとその息子ヨハネの記念日である。

聖殉教者プロクルスとイラリウスの殉教。

7月12日の記念日

聖殉教者プロクルスとイラリウスは、アンキラ近郊のカリプタ（[5112] ）の町[5113] の出身であり、トラヤヌス帝の治世[5114] に、総督マクシムスによって殉教した。最初に聖プロクルスが捕らえられ、当時その国に滞在していた皇帝自身の前に引き出された。その後、彼は鉄の鎖で縛られ、牢獄に投じられた。 王はプロクルの件を検討し、彼が不敬虔な命令に従わないことを知ると[5115] 、彼をイゲモン・マクシムに引き渡し、拷問に処させた。マクシムは裁判の席に着くと、キリストの囚人に答弁を求め、こう尋ねた。

「お前の出自は？」

「私の家系はキリストに属する」と聖プロクルスは答え、「私の希望は私の神にある」と続けた。

「神々に誓って、お前を容赦はしない！」

イゲモンはそう言うと、再び尋ねた。

「すべてのキリスト教徒が神々に犠牲を捧げるよう、至る所で布告された王の命令を知っているか？」

– 聞いたことがある――と聖人は答えた――あの不法者たちの命令について。彼らは多くの人々を惑わすために、そして自らを滅びへと導くために、その命令を下したのだ。

「よくもそんなことを言うものだ」と、イゲモンは憤りと驚きを込めて言った。「王を非難し、その法律を冒涜するとは？！　その代償として、お前にどのような苦痛が待ち受けているか、わからないのか、この忌まわしい者よ？」

「好きにしろ」と殉教者は反論した。「私はお前の神々に犠牲を捧げるつもりはないし、魂ではなく肉体だけを殺す苦痛など恐れない。人よりも神を畏れるほうがましだ。」

「選べ」と総督は提案した。「生か死か。ほら、お前のために用意された拷問台と拷問器具が見えるだろう。答えを待っている。どちらを選ぶ？」

聖プロクルスはこう答えた。

[5112] 正確には村です。

[5113] アンキラという名の都市は2つあり、1つはガラティアに、もう1つはフリギアにあった。カリプタの村がどちらの近くにあったのかは、正確には分かっていない。

[5114] トラヤヌス――98年から117年まで在位したローマ皇帝。

[5115] 偶像崇拝について。

「もしあなたがたが、一時的な苦痛を受けることを避けるために王の命令に背くことを恐れるのなら、ましてや私たちキリスト教徒は、　神の戒めを破ることを恐れる。神から背き、あなたがたの偽りの神々にひれ伏す者たちのために、神が用意された永遠の苦しみにはまり込むことのないように。それらの偽りの神々もまた、来るべき審判の日に、彼らに犠牲を捧げる者たちと共に、果てしない滅びへと投げ込まれるのだ。

「まさか」とイゲモンは驚いた。「お前は我々の神々までも非難するつもりか？　言っておくが、お前の意思に反しても、我々の神々の威力を認めさせるつもりだ。」

「しかし私は」と殉教者は反論した。「私の神に望みを託している。お前が私にあなた方の神々を告白させようとする前に、私は、すべての兵士や家来たちの前で、お前の意に反して、私の主を認めさせ、自らの手でこう書き記させるだろう。『罪人プロクラスの神は真実であり、彼以外に神はいない』と。」

激怒したイゲモンは、殉教者を裸のまま木に吊るし、足に重い石を縛り付け、鉄の鉤でその体を削るよう命じた。聖プロクルスは長い間そのように拷問を受けたが、彼は何も言わず、ただ空を見つめながら、すべてを勇敢に耐え抜いた。その後、彼は木から降ろされ、足枷をかけられた。

その後、イゲモンはカリプトの町へと向かい、殉教者を従わせるよう命じた。殉教者は徒歩でありながら、速い馬のペースに遅れを取らないよう強要された。道のりのほぼ半分を過ぎた頃、殉教者は祈りを捧げ始め、神に向かって大声でこう叫んだ。

「わが神、イエス・キリストよ、あなたのために、私は兵士たちに侮辱されながら連行され、苦しんでいるのです！　今日、あなたのしもべの祈りに耳を傾けてください。そうすれば、あなたの御名は永遠に栄光を受けるでしょう。あなたの全能の手を伸ばし、この不法なイゲモンを制し、彼がすべての人の前で『あなた以外に神はいない』と告白するまで、旅を続けさせないでください！

聖人がこのように祈ると、突然、総督はまるで縛られたかのように道中で立ち止まった。目に見えない神の力に抑えられ、馬も彼自身も動くことができなかった。兵士たちも皆、この驚くべき出来事に驚嘆して立ち止まった。　彼らは長い間、戦車を動かそうと試みた。馬を駆り立て、さらに他の馬を繋ぎ足し、自分たちで引こうともしたが、どうにもならなかった。イゲモン自身を戦車から降ろすことさえできなかった。戦車は山のように動じず、その上のイゲモンはまるで釘付けにされたかのようだった。そこでイゲモンは同行者たちに言った。

「この狡猾なキリスト教徒の驚くべき魔法の力を見よ――彼が私たちに何をしたというのか、その場から動けず、後退しているではないか！」

そこでイゲモンは、エルミアという名の家来の一人を、はるか後方にいた殉教者のところへ遣わし、こう言わせた。

「お前は何をしたのだ？　道中で魔法を使って我々を立ち往生させたのは。どうやら、街で待ち受ける拷問を恐れて、そこへ連れて行かれないようにと、このような策略に訴えたのだろう。」

しかし、聖プロクルスは総督の従者にこう言った。

「主なる神に誓って言うが、私が以前彼に告げた通り、総督が私の主イエス・キリストの御名を告白するまでは、お前たちはここから一歩も動けないだろう。」

「もし――」とエルミオスは尋ねた。「総督が道の真ん中であなたの神の御名を告白したとしても、彼から遠く離れた場所にあなたがいる以上、どうしてそれを聞きつけたり、知ったりできるというのですか？」

殉教者は言った：

「彼がその告白を羊皮紙に書き記して私に送ってくれれば、その直後に、あなた方はカリプトの町へと向かうことができるでしょう。」

戻ったエルミイは、殉教者の言葉をイゲモンに伝えた。イゲモンは望んではいなかったが、降りかかった不幸ゆえに、紙を受け取り、次のように書き記さざるを得なかった。

「唯一の真の神は、プロクルスが崇める御方であり、その御方以外に神はいない。」

そう書き記すと、彼はその文書を殉教者に送り、直ちに馬と兵士たちは動き出し、旅立った。

カリプタの町に到着すると、イゲモンは裁判の席に着き、聖プロクルスを呼び寄せてこう言った。

「お前は道中、我々にその魔術の全力を示した。だが、ここで私はお前に私の権力の力を示してやる。お前が私に、お前の神を認めるよう強いたように、私もお前を、我々の神々を認め、彼らに犠牲を捧げさせるのだ。」

そう言うと、彼は燃え盛る蝋燭を持ってくるよう命じ、それを使って聖プロクルの腹と肋骨を焼かせた。殉教者は全身が焼け焦げるほど焼かれたが、彼は何の苛立ちも見せず、まるで自分の体ではなく他人の体をまとっているかのように黙り込んでいた。そこでイゲモンは彼に言った。

「お前は苦痛を軽んじているのか？」

聖人は答えた。

「私はこれらの苦しみは軽んじますが、永遠の苦しみだけは恐れています。」

イゲモンは再びこう言った。

「我らの神々に服従するつもりか？」

「私は従います」と答えが聞こえた。「永遠に存するキリストに。彼は私の希望です！」

イゲモンは尋ねた：

「苦しみの中で死にたいのか？」

「たとえ死んだとしても」と聖プロクルスは反論した。「私は再び生きるのだ！」

そこでイゲモンは兵士たちに、聖プロクルスを街の外へ連れ出し、木に磔にして弓で射るよう命じた。兵士たちは殉教者を捕らえ、彼に言った。

「我々の言うことを聞き、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、熟練した医師たちがすぐに君の傷を癒やし、君は高位の地位に就くことになるだろう。」

「私は」と殉教者は答えた。「天に位を持っており、私の神であるキリストがその位をもって私を尊んでくださる。だから、私を惑わすのはやめて、命じられたことを行いなさい。」

彼らが歩きながらそのことを話していると、道中で、ちょうど青年期を過ぎたばかりの、イラリウスという名の男に出会った。彼は聖プロクルの甥、すなわち実の兄弟の息子であった。彼は近づき、叔父に頭を下げ、彼に口づけをして叫んだ。

「私もキリスト教徒です！」

兵士たちはイラリウスを捕らえて牢獄に閉じ込め、聖プロクルスを処刑場へ連行し、木に磔にして、弓を引き絞って彼に向かって矢を放ち始めた。全身を矢で貫かれた殉教者は、神に祈りを捧げながらこう言った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます。まことの神よ、私を救ってください！」

そして、そう言い終えると、頭を垂れて息を引き取った。聖殉教者プロクルスは、7月の12日にこの世を去った。信者たちは密かに彼の遺骸を運び出し、埋葬した。

一方、ヒラリウスは牢獄に囚われながら、次のように歌った。

「*『主よ、わが砦よ、あなたを愛します。主はわが要塞、わが避難所』*」など、詩篇第17篇の言葉を詠んだ。

彼が眠りにつくと、主の御使いが幻として現れ、こう言った。

「勇気を出し、強くあれ。私はあなたと共にいる。私は神から、あなたを力づけるために遣わされたのだ。」

プロクルスの死から三日後、聖ヒラリウスは拷問を受けるために連行された。そこで、イゲモンは彼に尋ねた。

「お前はキリスト教徒か？」

殉教者は答えた。

「はい、キリスト教徒です。私の一族は皆キリスト教徒であり、皆、キリストを崇めながら亡くなりました。」

すると、イゲモンは激怒し、殉教者を裸のまま木に吊るし、長く残酷に打ち据えるよう命じた。その後、彼に死刑を宣告し、街から三ポプリシュの距離まで連れ出し、そこで首を刎ねるよう命じた。　兵士たちは殉教者の両手を縛り、地面に押し倒すと、足に縄をかけて引きずり回した。その間、殉教者は　こう歌っていた。「*その基は聖なる山々にある。主はシオンの門を、ヤコブのすべての町々よりも愛しておられる*」（詩編86:2）

地面を引きずられていく殉教者の体は引き裂かれ、大地は血で染まった。彼らが町から三ポプリシュの距離まで離れたとき、処刑人は剣を抜き放ち、聖人は神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ、私の霊をお受けください！」

そして、殉教者の首は切り落とされた。聖ヒラリウスは、7月の15日、聖プロクルスの死から3日目に息を引き取った。　聖ヒラリウスの遺体は、首を切られたその場に放置された。信者たちは夜になってやって来て、その遺体を運び出し、聖プロクルの遺骨と共に地中に葬り、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を賛美した。アーメン。

コンダク、第4調：

殉教者プロクルスとヒラリウスの尊い苦難は、夜明けの星のように輝き、奇跡の光で私たちを照らし出しています。それゆえ、私たちはあなた方の記念を祝います。キリスト・神に祈り、私たちの魂を救ってくださいますように。

尊き父ミハイル・マレイナの記念日

記念日：7月12日

尊者ミハイルは、カッパドキアのハルシアン地方の由緒ある家系に生まれ、世俗名ではマヌイルと呼ばれていた。彼と親族関係にあった皇帝レウス・ザ・ワイズ（912年没）は、彼に候補官の称号を授け、彼はコンスタンティノープルで仕えた。　この皇帝の死後、マヌイルはビフィニア地方へ去った[5116] ；18歳の時、彼はキミン山で長老ヨハネス・エラディトの指導の下に入り、そこでミハイルという名で出家した。修道生活における偉大な功績の後、ミハイルはビフィニア南西部のガッラ川

[5116] ビフィニア――小アジア北西部に位置し、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に広がる地域である。この地は古くから知られており、その名はフラキアから移住してきたビフィニ族に由来する。ビフィニアは風光明媚で、肥沃であり、家畜も豊富だった。　紀元前546年、ビフィノイ族はペルシアの支配下に入ったが、紀元前327年からビフィニアは再び独立国家となった。紀元前75年、王ニコミデス3世の遺言により、ビフィニアはローマに譲渡され、特別なプロコンスルによって統治される独立した属州としての地位を得た。　ビフィニアにおけるキリスト教は、使徒たちの時代に現れた（Iペテロ1:1）。ビフィニアを統治したプリニウス・ザ・ヤングとトラヤヌス皇帝（98–117年）の時代には、都市だけでなく、村や集落にも非常に多くのキリスト教徒がいた。 ディオクレティアヌス帝（284–305年）の治世下、ビフィニアではキリスト教徒に対する凄まじい迫害が行われた。4世紀から5世紀にかけて、ビフィニアは教会的な観点から特に注目すべき存在であった。ここでは、様々な異端をめぐって多くの教会公会議が開かれた。

近くのキミン山に修道院を設立した。 953年頃、アヴラアミイ（修道名アファナシイ）が彼の指導の下に入門し、後にアトス山に有名な修道院を設立した[5117] 。彼はここで約6年間を過ごした。聖ミハイルは、962年、50年にわたる修道生活の功績を残した後、自身の修道院で逝去した。 主は、彼が存命中に多くのしるしと奇跡をもって彼を栄光に輝かせた。彼は家系の姓から「マレイン」と呼ばれている。彼の姉は、ニキフォロスとレウという二人の著名な軍司令官の母であった。ニキフォロス・フォカスは、聖人の死後まもなく（963年）、皇帝となった。 この皇帝の資金により、聖アファナシイはアトス山に有名な修道院を建立した。聖ミハイル（マレイーン）の名にちなんで、ロシアの王朝の始祖である初代皇帝、ミハイル・フェオドロヴィチが名付けられた[5118] 。

コンダク、第2声調：

ミハイルよ、あなたは肉体の重荷を業によって和らげ、魂の軽やかさを啓蒙によって確固たるものとし、三位一体の住まいとなられた。その至福は明らかである。どうか、私たちすべてのために絶えず祈り給え。

聖殉教者ゴリンドゥーヒの受難。

記念日：7月12日

ペルシャの地[5119] において、ホズロイ・ザ・エルダー[5120] の治世の頃、ゴリンドゥヒというペルシャ名の、若く美しい女性が一人暮らしていた。彼女は高貴な家系の出身であり、結婚後は、著名な魔術師の長[5121] の妻となっていた。 結婚して3年後、彼女は神からの啓示によって悟りを開き、ペルシャの不敬虔な信仰の誤りを理解し始めると、どの信仰が真実なのかを探求するようになった。キリスト教という、清く汚れのない信仰について耳にすると、彼女は心の中でこう考えた。「この信仰こそが真実なのだろうか、それとも他にも何か別の信仰が存在するのだろうか？」そして、ゴリンドゥハは、その信仰について教えを受け、真理を知るに至りたいと願った。 彼女はかなり長い間そのような思索にふけっていたが、ある夜、夢の中で次のような幻を見ました。彼女は、神の輝く天使を見ました。その天使は彼女を連れて、大きな恐怖と戦慄に満ちた、暗く炎に包まれた場所へと導き

[5117] 今月の5日の項にある彼の伝記を参照のこと。

[5118] イパチェフスコイ・コストロム修道院のトロイツキー大聖堂には、聖ミハイル・マレインに捧げられた小聖堂がある。これは、同名のミハイル・フェオドロヴィチ皇帝にちなんで設けられたもので、同皇帝は（1613年に）イパチェフスコイ修道院から皇位に就いた人物である。 その名にちなむ小聖堂に安置されている聖ミハイルのイコンは、19世紀初頭に奇跡を起こしたことで有名になった。

[5119] ペルシャはイラン高地の西部を占めている。現在の国境は、西がトルコ、東がアフガニスタンとバルチスタン、南がインド洋、北がカスピ海沿岸地域である。 ペルシア王朝の創始者は、紀元前558年から529年まで在位し、その征服（彼は西アジアのほぼ全域を征服した）で知られるキュロスである。

[5120] 「ホズロイ」（より正確には「ホスロー」）は、ペルシア語で「王」を意味する。この称号は通常、各王の固有名前に付け加えられた。この場合は、当然ながら、紀元前531年から579年まで統治したホズロイ1世アヌシルヴァンを指す。

[5121] 古代において「ヴォルフ」という名称は、自然の秘力や天体について広範な知識を持つ賢者を指していた。彼らは自然現象を観察し、夢を解き明かし、未来を予言した。その多くは同時に祭司でもあり、王宮や民衆の間で大きな尊敬を集めていた。 魔術師たちはアッシリア・バビロニア人からペルシア人へと伝わったが、ペルシアでは当初、現地の祭司たちから強い反発を受けた。しかしその後、魔術はペルシアに定着し、現地の祭司制度と融合していった。その結果、ペルシアにおいて「魔術師」という言葉そのものが、「祭司」や「神官」という意味を持つようになったのである。 古代イランの住民の宗教の創始者であるゾロアスターは、多くの古代文献において、魔術師やヴォルフの階級の指導者であり改革者として描かれている。

ました。そこには、多くの人が拷問を受けていました。ゴリンドゥハは、彼女を導く天使に尋ねました。

「ここは一体どんな恐ろしい場所なのですか？ここで苦しんでいるのは誰なのですか？」

天使は彼女にこう言った。

「ここは罪人と不信仰者の処刑の場だ。偶像や偽りのペルシャの神々を崇拝していた、あなたの先祖たちもここで苦しんでいるのだ。」

ゴリンドゥハは先祖たちの滅びを嘆き、深くため息をついた。その後、天使は彼女を別の場所へと導いた。そこは神の楽園であり、義人たちの住まいであった。天使は小さな扉越しに、そこに満ちる偉大な光と、その光の中で言葉に尽くせない喜びに満ちて楽しんでいる多くの男女を見せた。それを見せ終えると、天使はその扉の中へ入っていった。彼女もまた天使の後を追おうとしたが、天使は彼女を中に入れず、こう言った。

「あなたはキリスト教徒でない以上、ここに入ることはできない。キリストの聖なる洗礼を受けていない者は、誰もここに入ることは許されないのだ。」

その瞬間、ゴリンドゥハは恐怖に駆られて目を覚まし、見た光景に驚き、ペルシャの不敬虔さと夫の魔術に憤りを感じ、キリスト教徒になりたいと強く願った。どうすれば聖なる洗礼を受けることができるかという考えに心を奪われ、彼女は涙ながらに真のキリスト教の神に祈りを捧げ、すぐに願いが叶った。　主の天使に導かれ、助言を受けながら、彼女は密かに家を出て、人目につかない場所にいたある司祭のもとへ行った。こうしてゴリンドゥハは、無形の天使によって、肉体の天使のもとへと導かれ、その司祭から信仰の教えを受け、洗礼を授かった。洗礼の際、彼女にはマリアという名が与えられた。

洗礼を受けた後、彼女は再び家に戻ったが、もはや自然な夫婦の義務には従わなかった。不敬虔な夫によって穢されることを望まなかったからである。彼女はキリストの花嫁として婚約していたのだ。彼女に洗礼を授けた霊的指導者の助言に従い、ゴリンドゥハは断食と祈りに専念し、夜を徹してそれらに捧げた。　彼女は日中は沈黙を守り、不信仰者たちと会話することを拒み、夫には自分に触れることさえ許さなかった。夫は彼女に起きた予期せぬ変化と、その異様な振る舞いに驚き、一体何が起きたのかと首をかしげ、彼女のことを心配していた。　しかし、彼はとりわけ、彼女との肉体的結合を奪われたことを嘆いていた　。というのも、彼女は彼との交わりを全く望まなかったからである。彼は長い間、時には優しさや懇願で、時には暴力や殴打で、彼女の頑なさを打ち砕こうと努めたが、目的を達成することはできなかった。なぜなら、キリストの花嫁は目に見えない神の力によって強められており、夫には彼女を打ち負かす力がなかったからである。　ついに妻がキリスト教徒になったことを知った夫は、彼女を亡き者のように嘆き、涙ながらにあらゆる手段で彼女を説得し、キリストを捨てて以前のように夫婦の交わりを続けるよう懇願した。しかし、揺るぎない柱のようにキリストへの信仰と愛に確固として立っていた彼女を、動揺させることはできなかった。　彼はさらに、悪魔の力を呼び寄せて彼女に魔術を働かせようとしたが、それも全く成功しなかった。なぜなら、悪魔たちは、彼女がキリストの恵みに照らされているのを見て、遠くからでも彼女に近づくことさえ恐れおののいたからである。　そこで彼はホズラ王のもとへ赴き、深い嘆きを込めて、妻がキリスト教徒となり、自分との結びつきを忌み嫌っていることを告げた。　王は側近の一人を遣わして彼女を説得させたが、その高官もまた何も成果を得られずに戻ってきた。そして、これは一度や二度ではなく、何度も繰り返された。王は、彼女がかつての信仰に戻り、夫との同居を再開するよう、高貴な男性や気高い女性たちを、愛想よく、お世辞を交えて彼女のもとへ送り込んだが、彼らの努力はすべて無駄に終わった。　ある日、王はゴリンダフに、もし彼女がキリスト教を捨てて再びペルシャの信仰に戻れば、彼女を妻として迎え、王妃にすると伝えさせた。しかし、聖女は彼女を訪ねてきた使者にこう言った。

「一つだけお尋ねしたいことがあります。教えてください。王が私を妻に迎えるとのことですが、王は死ぬことはないのでしょうか――永遠に生き続けるのでしょうか？もし不死であるなら、私は王の言うことを聞きます。」

「人間が不死であることはあり得ません」と、訪れた者たちは答えた。「王も人間であり、間違いなく死ぬでしょう。」

すると、聖女はこう言った。

「私は、死すべき、短命な王とは結ばれたくありません。なぜなら、私は不死の王、永遠に生きられる王、私の神であるキリストと結ばれているからです。その方のために、私は苦しみも死も厭いません。」

使者たちは戻ると、彼女の言葉を王に伝えた。王は激怒し、彼女を全身鉄の足枷で縛り上げ、牢獄に投げ込むよう命じた。それは、まるで死んだ者のように、誰もが彼女を忘れるようにするためであった。そして、殉教者は18年間、牢獄に留められた。　その間、ペルシャ王ホズローが死去し、その後を息子のオルミスダスが継いだ。一方、ギリシャでは王が交代し、ユスティヌス2世[5122]　、ティベリウス2世[5123]、そしてその後を聖マウリキウス[5124]が継いだ。この頃、ギリシャからアリストヴルという名の使節がペルシアにやって来た。彼は誠実で、神を愛し、神に喜ばれる人物であった。彼は、マリア――ゴリンドゥハが牢獄に囚われていると聞き、彼女に会って祝福を受けたいと願った。彼はペルシア王に、妨げられることなく牢獄を訪れることを特別に許可するよう懇願した。許可を得ると、聖女のもとへ赴き、キリストのために彼女が縛られていた鎖に口づけをし、その一部を祝福として持ち帰った。　この男はペルシアに滞在中、頻繁に聖女のもとを訪れ、彼女にダビデの詩篇を教えた。それゆえ、キリストの花嫁である彼女は、牢獄にいながらもまるで宮殿にいるかのように、それらを歌い、神に感謝を捧げた。

アリストヴロスが去った後、オルミスダスは聖女ゴリンダを、魔術師たちの要望に応じて拷問に委ねた。彼らは毎日彼女を牢獄から引き出し、無数の傷を負わせ、容赦なく拷問を加えたが、朝になると彼女は無傷で健やかな姿で発見された。　ある時、彼女の乳首は傷のために完全に崩れ落ちてしまった。というのも、腹や胸も激しく殴打されていたからである。しかし、朝になって再び拷問のために連れ出されると、乳首も全身も無傷であることが判明した。これを見たペルシャ人たちは驚き、キリストの力を称え、そのうちの多くはキリスト教に改宗した。　一方、魔術師たちは、キリストの羊である彼女に対して獣のように激怒し、次々と新たな拷問を考案した。彼らは彼女の頭を火で焼いた。その後、ゴリンドゥフを皮袋に入れ、口を縛って封印し、深い堀に投げ込み、そこで死なせようとした。　しかし、彼女の命を守り続ける神の全能の手により、彼女は生き延びた。何日も飲食を絶った状態であったにもかかわらず――あるいは、目に見えない食物と飲み物を与えられていたのかもしれない。神は、御心のままに、自然の摂理に打ち勝たれるのである。　超自然的な力の働きによって殉教者が何日も生き延びていたとき、恥知らずな者たちに彼女を汚すよう命じられた。　そのために彼女は特別な部屋へと連れて行かれたが、彼らがその部屋に入ってみると、彼女はそこにいなかった。神が彼女を目に見えないようにされたからである。彼らの汚れた目には、清らかなキリストの花嫁を見ることはできなかった。彼らが去ると、彼女は再び　拷問者の手下たちに見えるようになり、再び様々な苦しみを受けるために連れ出された。　その後、彼女は、ある深い淵に閉じ込められ、そこで餌を与えられていた巨大で恐ろしい蛇に食われるために放り込まれた。　しかし、かつて穴に投げ込まれたダニエルを獅子が食べないようにその口を塞いだ方[5125]　は、御自身の天使を遣わし、その天使は蛇の口を塞いで、聖なる殉教者の多くの苦しみを負った体に害を与えたり触れたりしないよ

[5122] ユスティヌス2世 – 565～578年の皇帝。
[5123] 578～582年の皇帝。
[5124] 582～602年の皇帝。
[5125] ダニエル書 2:1–49。

うにした。　蛇の凶暴さは抑えられ、蛇は彼女の前で子羊のように柔和になり、彼女の足元に横たわって休んでいた。聖女は蛇と共に四ヶ月間、その淵に留まった。蛇には毎日、用意された食糧が投げ込まれていたが、殉教者は食べ物も飲み物もなしに、以前と同様に生きていた。それは、彼女の命を奇跡的に守り続けていた神の力によるものであった。　それから多くの日が過ぎた後、彼女は食べたいと願った。すると、神の天使が現れ、十字の印を結びながら彼女の唇に触れ、こう言った。

「これからは、あなたは飢えも渇きも感じなくなる。もしまだ肉体を持つ者として何か味わいたいと願うなら、それはあなたの自由だ。」

そう言うと、天使は彼女をその洞窟から連れ出した。　彼女を見た不信心者たちは再び彼女を捕らえ、彼女がなぜ蛇に食べられずに済んだのか、またどうやって洞窟から出てきたのかと、極めて驚いた。そして、彼女はキリスト教の魔術で蛇を呪い、自分を食わせないようにし、同じく魔術によって堀から脱出したのだと語った。そして再びこう断言した。

「キリスト教の魔術とはなんと強力なことか――それはペルシャの魔術さえも凌駕している！」

王は、彼女が生きていることを知ると、剣で首を刎ねるよう命じたが、彼女が処刑場へ連行されたとき、主の天使が彼女を護送する兵士たちの手から連れ去り、生かしておいた。　その殉教者は、迫害者たちには正体を知られぬまま、当時ペルシアに少数しかいなかったキリスト教徒たちの間に身を寄せた。彼らは、異教徒たちにも知られていたにもかかわらず、まるで身を隠すかのように目立たない場所で暮らしていた。　天使の言葉により、聖女は飢えも渇きも感じなかった。ただ、自分が幽霊ではなく肉体を持っていることを示すために、時折、小さなパンの切れ端を手に取り、水に浸して食べることはあった。しかし、それは頻繁ではなく、稀なことであり、時には10日ごと、あるいはそれ以上の間隔を置いて行われた。　殉教者が死から救われてから間もなく、不義なペルシャ王オルミスダスは騒動の末に、側近たちによって殺害された。その後、長老ホズロイの孫であるその息子ホズロイ[5126]が王位に就いたが、貴族たちが彼に対しても反乱を起こしたため、彼はペルシャから逃亡した。　彼は、どこへ向かうべきか思案した。すでにサラセン人がいたアラビアか、それともキリスト教徒のいるギリシャ諸国か。どちらへ進むべきか迷っていたが、ついに、馬の手綱を緩め、馬がどちらへ進むかを見極めて、その方向へ進むことに決めた。　アラビアへと続く道とギリシャ諸国へと続く道の分かれ道に差し掛かったとき、馬はギリシャ方面へと進み、ホズロイは側近全員を率いてギリシャ地方へと向かった。そこで彼は、ギリシャ王マウリキオスから栄誉と歓待をもって迎えられた。　マウリキウスはホズロに自軍の主力部隊を授けた。ホズロはこれと共にペルシアへ進軍し、敵を打ち破り、再び王位に就いた。ペルシアに住むキリスト教徒たちにとって、安らぎと自由にあふれた日々が訪れた。というのも、ホズロはマウリキウスを自分の父とみなしており、そのためマウリキウスの死までキリスト教徒に害を及ぼすことはなかったからである。　ホズロアと共に、マウリキオスから派遣されたメリティオスの司教、聖ドメティアヌスもペルシアへやって来た。彼は、かつてのアリストヴロスと同様に、ペルシア語でゴリンドゥハと呼ばれる聖なる殉教者マリアをこの目で見た。しかし、彼女はもはや鎖につながれてはいなかった。自由の身となり、ペルシア人たちにキリストを説いていたのである。　彼は彼女と語り合い、その苦難について、彼女自身の口から直接、あるいは他者を通じて聞き、ギリシャに戻ると、多くの人々に彼女のことを語った。　マリアの説教により、ペルシアでは彼女の親族や他の著名な人々、そして多くの民衆が聖なる信仰を受け入れた。というのも、多くの人が彼女が行う奇跡、とりわけ未来に関する数多くの予言とその成就を目撃したからである。彼女は透視の賜物を持っており、秘密や隠された事柄を見抜くことができたからである。　これらすべてのおかげで、それらの国々においてキリストの栄光はますます広まっていった。その後、聖

[5126] ホズロイ2世パルヴェズは590年から628年まで統治した。彼は614年、ギリシャ皇帝フォコスとの戦争中に、エルサレムから「命を与える主の十字架」を奪い取った。　この十字架は、628年にホズロイ2世の後継者シロエスによって、ギリシャ皇帝ヘラクレイオスとの和平締結に伴い返還された。

女はギリシャ領内のキルキシアやダリヤへと旅立ち、エルサレムを訪れて、そこで命を与える聖なる十字架、主の聖墓、その他の聖遺物を礼拝した。　彼女はとりわけ、ある修道院を訪れた。そこでは、神性の受難を主張し、それゆえに「聖なる三位一体」の祈りに「私たちのために十字架にかかられた方よ、私たちを憐れんでください。父と聖霊よ、御子と共に　の十字架上で苦しまれた方よ」という言葉を付け加えた、邪悪なセウィロスの異端がはびこっていた。　聖女は神に祈り、これらのセウィリア派の人々について、彼らの聖体拝領を受け入れるべきか否かを明らかにしてくださるよう願い、すると、二つの聖杯を手に持つ天使を見ました[5127]、――一方は闇に満ち、もう一方は光に満ちており、天使は彼女に、闇に満ちた聖杯は異端の聖体拝領であり、光に満ちた聖杯は聖公会カトリック教会[5128]の聖体拝領であることを明かした。そのため、聖女は異端者たちとの交わりを拒み、そこから急いで立ち去った。　神の天使に導かれて、彼女は他の国や都市を巡り、シリアのイェラポリスを訪れ、そこで後に彼女の伝記を著したステファノ司教に会った。　彼女の至福の死が近づいたとき、彼女はニジヴィアとダラと呼ばれる町の間にあった聖殉教者セルギイの教会で少し体調を崩し、全世界の救いのために祈りを捧げ、神の偉大な慈悲に感謝し、　その御慈悲が彼女に示されたことに対して感謝を捧げ、深く愛し、その御名のために多くの苦難を耐え抜いた主の御手に、喜びをもってその聖なる魂を委ねた。彼女は天の御国において、聖なる殉教者たちの列に加えられた。　こうして、聖なる殉教者マリア、すなわちゴリンドゥハは、私たちの主キリスト・イエスにおいて、この地上の生涯を閉じました。主には永遠の栄光がありますように、アーメン[5129]。

7月26日

7月13日（旧暦）

聖大天使ガブリエルの祝日

記念日 7月13日

私たちの救いの吉報をもたらした者、神の偉大な僕であり、聖母マリア（ルカ1:26）への喜びの使者である大天使ガブリエルを、私たちは賛美の歌をもって称え、彼のために二度目の祝祭の公会議を執り行います。 彼の最初の祝祭は、至聖なる神の母の受胎告知の翌日である3月26日に祝われますが、今またこの祝祭が聖なる教会で祝われ、神の御命によりなされた彼の驚くべき御出現が再び思い起こされ、賛美されています。　彼は、ファラオの手を逃れたモーセに、荒野で聖書の教えを授け、世界の始まり、最初の人間であるアダムの創造、その生涯、そして彼に続く族長たち、その後の時代――大洪水や言語の分裂――について伝え、　天体の配置や四元素について説明し、算術、幾何学、そしてあらゆる知恵を教えた。　彼は預言者ダニエルに、後に現れる王たちや王国について、さまざまな獣の姿として示された不思議な幻を解き明かし、神の民がバビロンの捕囚から解放される時期、そして至聖なる処女による受肉を通じてキリストが初めてこの世に来られる時期についても告げた（ダニエル書 8:1–27、9:1–27）。彼は、自分の庭で不妊を嘆き、涙ながらに神に祈っていた聖なる義人アンナのもとに現れ、彼女にこう言いました。

[5127] ポティル――聖杯。

[5128] すなわち、全地的な。

[5129] 聖殉教者ゴリンドゥハは591年に逝去した。9～10世紀のコンスタンティノープル典礼書によれば、彼女の行伝は、聖エウティキオス総主教の同時代人である、コンスタンティノープル大聖堂の長老エウストラティオスによって記された。

「アンナ、アンナ！　あなたの祈りは聞き届けられ、あなたの嘆きは雲を越え、あなたの涙は神の御前に届きました。あなたは身ごもり、祝福された娘を産むでしょう。その娘によって地上のすべての民族は祝福され、彼女によって世界に救いがもたらされ、その名はマリアと名付けられるでしょう。」

また、聖ガブリエルは、荒野で断食していた義人ヨアキムのもとに現れ、聖アンナに告げたのと同じことを彼にも告げ、彼らが、人類の救いのために来られるメシアの母として、古くから選ばれた娘を授かることを告げた。　この偉大なる大天使は、神によって、不妊であった神の御子マリアの守護者として任命され、彼女が神殿に奉献された際には、毎日食物を捧げて彼女を養った。　また、彼は香の祭壇の右側に立っていた聖なる司祭ザカリアの前に現れ、年老いた妻エリサベトの不妊が癒やされ、主の洗礼者聖ヨハネが生まれることを告げました。しかし、ザカリアがそれを信じなかったため、その言葉が成就する日まで、彼の舌を縛って口がきけないようにしました（ルカ1:25）。この同じ神の使者は、神によってナザレに遣わされ、　で義人ヨセフと婚約していた至聖なるおとめのもとに現れ、聖霊の臨在と働きによって神の子が彼女の中に宿ることを告げた。　また、彼は夢の中でヨセフにも現れ、その乙女が清く保たれていること、すなわち彼女の中に宿ったものは聖霊によるものであることを彼に説明した（マタイ1:18–21）。そして、私たちの主がベツレヘムで生まれたとき、この主の御使いガブリエルは、夜、羊の群れを見守っていた羊飼いたちに現れ、こう言った。

「すべての人々に与えられる大きな喜びを、あなたがたに告げ知らせます。今、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。その方は、主キリストです。」

そして直ちに、多くの天の軍勢と共に、「*天には神に栄光、地には平和、人々に神の御好意がある*」（ルカ2:10–14）と歌い上げた。

この天使は、キリスト・救い主が受難の前に園で祈っておられた時に、天から現れたと考えられている。なぜなら、「ガブリエル」という名は「神の力」を意味するからである。　現れたガブリエルは、キリストを力づけた。というのも、他の奉仕の中でも、この「偉業における力づけ」という役割を担っていたからであり、当時、私たちの主は熱心な祈りに励んでおられたからである（ルカ22:43；　ヘブライ5:7）。この同じ天使は、墓のそばの石の上に座っていた香油を携えた女性たちの前に現れ、主の復活を告げ知らせた（マタイ28:1–20；マルコ16:1–20；ルカ24:1–53；ヨハネ20:1–31）：　このように、主の受胎と降誕の使者として現れた彼は、主の復活の使者としても現れたのである。また、彼は、オリーブ山で熱心に祈っていた至聖なる聖母マリアにも現れ、彼女の尊い眠りと、地から天への移り住みを告げ、彼女に明るい楽園の枝を授けた。　聖なる教会は、旧約聖書および新約聖書における彼の度重なる御出現を記念し、またキリスト教徒の民のために神の御前で絶えず執り成しを捧げていることを知っており、今や彼のために公会議による祝祭を執り行っています。それは、神の民が常に熱心に、この執り成し手であり人類の恩人である彼の庇護と助けにすがり、　また、その祈りによって、私たちの主であり救い主であるキリストから罪の赦しを受けられるようにするためです。[5130] 。

トロパリオ、第4調：

天の軍勢の総司令官よ、私たちは常に不適格な者ですが、あなたに祈ります。あなたの祈りによって、あなたの栄光の非物質的な翼の覆いで私たちを守り、熱心にひれ伏し、「天の軍勢の統率者よ、災いから私たちを救い出してください」と叫ぶ私たちを、どうか守ってください。

[5130] この祝日は遅くとも9世紀にはすでに存在しており、その制定のきっかけとなったのは、おそらく大天使ガブリエルに捧げられて建設されたツァールグラードの教会の奉献であったと考えられる。

コンダク、第2調：

天において神の栄光を仰ぎ、地には高き所から恵みを授ける、賢き天使たちの長ガブリエルよ、神の栄光の奉仕者、そして世界の神聖な守護者よ、あなたに叫び求める者たちを救い、守ってください。あなたご自身が助け手となり、誰も私たちに敵対することのないように。

イン・コンダク、第2声調：

神の総司令官よ、神の栄光の奉仕者よ、天使たちの長であり、人々の導き手よ、私たちのために有益なことを願い、大いなる憐れみを、無形の総司令官としてお与えください。

聖ステファノス・サヴァイオスの記念日

記念日：7月13日

尊き父ステファノは725年に生まれた。10歳の少年として聖サヴァの修道院に入り、794年に逝去するまで、聖ステファノはこの修道院か、あるいは近隣の荒野で生涯を過ごした。そのため、彼はサヴァイトと呼ばれている。　聖ステファノは多くの奇跡を行い、とりわけ自身の死期をも予知しました。彼は、10月28日に記念されるステファノ・サヴァイトとは別人です。

聖セラピオンの記念日

記念日：7月13日

聖セラピオンは、セウェルス王の時代[5131] に生き、敬虔で徳の高い人物であった。アキラ公に捕らえられ、信仰について問われた際、セラピオンは自らをキリスト教徒であると告白し、真の神を勇敢に賛美した。そのため、様々な拷問にさらされた後、火の中に投げ込まれ、こうしてその生涯を閉じた[5132] 。

聖なる父ユリアヌスの生涯

記念日：7月13日

聖ユリアヌス（福音書（マタイ26:6）に言及されている「らい病のシモン」であり、洗礼の際にシモンからユリアヌスへと改名したと一部で認められている）は、最高使徒ペトロによって司教に任命され、神の言葉を宣教するためにガリアへ派遣された。 ケオマニアの町（[5133] ）に到着すると、彼はその地にとって最初の使徒となった。これは、聖ディオニシオス・アレオパゴスがパリの人々に

[5131] 在位193～211年

[5132] ヴァシレイオスの『月暦』によれば、聖セラピオンはキリストの御名を告白した後、残酷に鞭打たれ、全身を削られ、その後、牢獄で飢えに苦しめられた。しかし、牢獄の中でキリストによって癒やされ、完全に健康な状態でそこから連れ出されたため、人々を驚かせた。 その死は205年とされているが、場所は不明である。

[5133] ケノマニア――現在のフランスのル・マン。

とってそうであったのと同様である（[5134] ）。というのも、同じ年に、両者ともそれぞれの地で聖なる信仰の礎を築き、キリストの教会を設立し、使徒としての働きをもって福音を宣べ伝え、人々の魂の救いに尽力したからである。　当初、異教徒であるケノマニアンたちにとって、聖ユリアヌスの口から説かれた新しい教えは、ある者にとっては誘惑の対象となり、またある者にとっては嘲笑や侮辱の対象となっていた。しかし、ケノマニアンたちが、全能なるキリストの御名によって行われる奇跡を目撃すると、次第にその教えを信じ始めたのである。　というのも、真の神を説く説教者の手によって、多くの奇跡が行われたからである。　悪霊が追い出され、ハンセン病患者が清められ、盲人の目が開かれ、あらゆる病が癒やされた――聖ユリアヌスは、病める者たちにキリストの御名を呼びかけ、十字の印を施すことで、神に関する自らの教えを奇跡的な行いによって立証したのである。　このように彼らの体を癒やすとともに、キリスト・イエスについて説き、聖なる洗礼によって彼らを啓蒙することで、彼らの魂をも癒やしていたのである。　当初、聖人は町の郊外にある小さな家に住んでいましたが、そこへ多くの人々が訪れ始めました。改宗した人々は教えを求めて、また不信者たちは病の癒やしを求めてやって来たのです。そして、後者たちはここで、信仰者となることで二重の癒やしを受けました。　聖人が住んでいた場所は水源がなく、彼を訪ねてきて滞在する人々は、遠くから運ばれてくる水を切実に必要としていました。そこで、神の人は、彼と共にいた人々と共に、ある日、近くの小さな森へ出かけ、そこで自分の杖を地面に突き立て、皆が聞こえるように神にこう祈りました。

「主なる私たちの神よ、かつて荒野で渇きに苦しむ御民のために、堅い岩から水を湧き出させてくださった方（民数記 20:1–29）、　どうか私たち、あなたのしもべたちにも目を留め、あなたの慈しみの宝を開き、この乾いた大地から生ける（湧き出る）水の泉を湧き出させてください。そうすれば、ここに集う者たちは皆、あなたが真の神であり、　世の終わりに御子をこの世に遣わし、御あなたを信じる者たちを、約束された真の地へと導いてくださったことを、

聖人が祈りを終え、信者たちが「アーメン」と唱えると、たちまち杖が突き刺さっていた大地から水の泉が湧き出し、人々に神の全能の力と、この神に愛された聖人の神に対する偉大な信仰と大胆さを示した。　そこで、信者たちは信仰を強め、不信者たちは神の人の足元にひれ伏し、洗礼を請い求めた。聖なる神の御使いは、この泉の水をもって彼らに洗礼を授けた。こうして、キリストの教会は日ごとに成長し、増え続けていった。　聖ユリアン司教がその奇跡によって名声を博すと、その町の　であるデフェンソルという名の公爵は、彼に会いたいと願い、栄誉をもって彼を招く使者を送った。聖人は公爵のもとへ向かった。公爵の屋敷に近づいたとき、門のそばで施しを乞う盲人の姿に気づいた。　彼に憐れみを感じた聖人は、イエス・キリストの御名を呼び、その目に十字の印を施して、視力を取り戻させた。視力を取り戻した男の喜びは大きく、奇跡の現場に居合わせた者たちの驚きもまた大きかった。この出来事は直ちに公爵に伝えられた。　公爵は、視力を取り戻した男の様子を見たいと願い、急いで聖人の出迎えに出た。盲人と聖人の両者を見届けると、彼は神の宣教者に頭を下げ、彼を屋敷に招き入れ、その足元にひれ伏して、謙虚に「永遠の命を得るにはどうすればよいか」と教えを請うた。　神の聖人は、使徒的な説教によって、公爵とその家族を聖なる信仰、すなわち真の神への認識へと十分に導き、断食を命じて彼らを洗礼に備えさせた。　数日後、公爵は一族全員と共に洗礼を受け、都の中心にある自分の家を聖人に譲り渡し、そこに教会を建立するよう手配するとともに、教会そのものにも相応の資金を寄付して支援した。公爵の模範に倣い、多くの有力な市民も聖なる信仰を受け入れ、洗礼を受け、また神の聖人に多額の寄付を行った。　聖ユリアヌスは壮

[5134] 聖ディオニシオス・アレオパゴイテスは、アテネのアレオパゴスの議員であったが、使徒パウロの説教によってキリストに改宗した。　その後、90年に長老ルスティクスおよび助祭エレフテリオスと共にガリアへ宣教に派遣され、96年にドミティアヌス帝の治世下で彼らと共に殉教した。聖ディオニシオス・アレオパゴイテスの記念日は10月3日である。

麗な教会を建立し、惜しみなく装飾を施した。そこへ、彼から信仰を教えられ、聖なる洗礼によって啓発され、奇跡によって確信を深めた民衆が集まるようになった。というのも、聖ユリアヌスは神から奇跡を行う力を授かっており、死者をよみがえらせることさえできたからである。

その町には、アナスタシウスという名の貴族が一人いた。彼はまだ聖なる信仰を受け入れておらず、偶像崇拝に固執していた。彼には愛する息子がいたが、その息子は重病にかかり、亡くなってしまった。失った息子への深い哀れみと悲しみに満ちた父は、聖人のもとへやって来て、泣きながらこう訴えた。

「神の僕ユリアンよ、キリストを真の神として教える者よ。あなたが宣教するキリスト・神の名にかけて、私の息子を返してください！」

聖人はこう言った：

「アナスタシウスよ、もしあなたが私が宣べ伝える方を信じるなら、生ける子を得るとともに、あなた自身も永遠の命を受け継ぐことになるだろう。」

アナスタシウスは誓いを立ててこう言った。

「もし生きている息子を授かるなら、真の神であるキリストを信じ、偶像を完全に捨て去る。」

その後、聖人は司祭団に付き添われてアナスタシウスと共に彼の家へ向かった。そこには少年の死体が横たわっていた。聖人は、多くの人が泣き叫び、声をあげて嗚咽しているのを見て、彼らに静まるよう命じた。皆は聖人を見つめ、心の中で「彼は死体で何をするつもりなのか」と考えた。すると、奇跡を行う聖人は、寝台に近づき、死者の手を取り、天を仰ぎ見て、涙を流しながらこう祈った。

「主イエス・キリストよ、ナインの町から埋葬のために運び出されていた未亡人の息子（ルカ7:11–16）をよみがえらせ、また、死後四日が経ち、すでに腐り始めていた ラザロを御力の御言葉によって呼び起こされた（ヨハネ11:43–44）主よ、この少年もまた死からよみがえるようお命じください。彼が肉体をもってよみがえるとき、多くの人々があなたを信じることで、魂をもってよみがえるからです。 今ここに集う者たちが、あなたが、御父の御命令によって世界の救いを成し遂げられた、生ける神の御子キリストであることを知ることができますように。私たちは、あなたを通して、御父に限りない世々限りなくふさわしい感謝を捧げます！

聖職者が「アーメン」と唱えると、たちまちその少年は、まるで眠りから覚めたかのように、生き生きと元気な姿で立ち上がった。これを見た者たちは皆、恐れおののき、極めて驚いた。アナスタシウスの家には言葉に尽くせない喜びが満ち、万人の口を通じて、唯一真の神イエス・キリストが賛美された。 そして、キリストを信じたアナスタシウスは家族全員とともに、またこの出来事を目撃し耳にした者たちも皆、洗礼を受けた。しばらくして、主キリストは御自身の聖なる御名の栄光のために、御自分の聖人ユリアヌスを通して、もう一つの同様の奇跡を行われた。 ある日、ケノマニオスの地方を巡り、滅びゆく人々の魂を救いに導くため、聖職者たちと共に町を出たとき、彼は、異教の墓地へ埋葬のために運ばれていく一人の亡くなった青年――イオヴィニアヌスという名の某貴族の唯一の息子――と、その遺体を追う大勢の群衆を目にした。 聖なる司教は彼らのところへ近づくと、遺体を運ぶ者たちに立ち止まるよう命じ、群衆に手で静まるよう合図を送った後、亡くなった少年の父親に向かって大声でこう言った。

「ヨヴィニアヌスよ、私が宣べ伝えているキリストは、人々のために人となられ、死者をよみがえらせ、言葉で悪霊を追い出し、ご自身の神性の力を示すために人々と共に暮らしながら、望むことはすべて成し遂げられた。 もしあなたが、この神を信じ、偶像を捨て、心を尽くして信仰し、聖なる洗礼によって清められることを誓うならば、あなたは自身の救いと、息子の復活の両方に喜びを見出すことになるでしょう！

すると、ヨヴィニアヌスと民衆全員が、聖人の足元にひれ伏し、死者をよみがえらせるよう慈悲を請い始めた。ヨヴィニアヌスは涙ながらに聖人にこう言った。

「偉大なる神の僕ユリアンよ、私の人生の慰めであり喜びであった唯一の息子を生き返らせてくださるなら、私だけでなく、この民全体も、自分たちの神々を捨てて、あなたが説く信仰を熱心に受け入れるでしょう！」

奇跡の恵みに満たされた神の聖人は、ひざまずき、天を仰ぎ、両手を上げ、皆が聞こえるように神に向かって次のように祈った。

――全能の主よ、私たちの救いのために人となられ、人々と共に生き、御十字架のしるしによって人類から死を追い払われた方よ、この若者がよみがえるようお命じください。そうして、あなたのこの偉大なる力の現れによって、あなたを信じる者たちの信仰が確固たるものとなり、また、信じない者たちの心もあなたに服従するようになさってください。　生ける神の独り子、すなわち、私たちが父と聖霊と共に、世々限りなく御支配される方を告白する御方よ！

参列者たちは「アーメン」と唱えると、たちまち死者は、彼を運んでいた寝台から起き上がり、皆はこの新たな奇跡に驚き、戦慄した。そして、よみがえった若者は大声で叫び始めた。

「まことに、そのしもべユリアヌスが宣べ伝えるキリストの神は偉大である！」

そして、自分の父にこう言った。

「確かに、私たちはこれまで真の神を知らず、迷い続けていました。私たちが崇めていた神々は、実は悪魔なのです。私は地獄で彼らを目撃し、彼らが安らぎを得られず、絶え間なく激しい苦しみの中で苦しんでいるのを見ました。」

すると、皆が声を揃えて真の神であるキリストを賛美し始め、キリストを信じ、聖なる司教の教えを受けて、ヨヴィニアヌスとその息子と共に洗礼を受けた。　こうして、善き羊飼いは迷い出た羊たちを見出し、神の霊に導かれた御言葉に耳を傾け、その奇跡を目撃したいと願う大勢の人々に囲まれながら、定められた道へと向かった。

聖ユリアンがある「プロイライアク」と呼ばれる村に近づいたとき、日はすでに傾いており、彼らはそこで休息をとろうと、夜遅くに村に入った。ちょうどその時、その村の主人の幼い息子が亡くなっていた。聖人はその家から泣き声を聞きつけ、コヘレトの言葉を思い起こして中に入った。*「死者を悼む家に行く方が、宴会の家に行くよりもよい」*（伝道の書7:2）。彼には寝るための特別な部屋が用意されていたが、彼は死んだ少年を連れてくるよう命じ、少年と二人きりで部屋を閉じ、日の出まで祈りを捧げた。　彼の祈りによって少年はよみがえり、生き生きと健康な姿で両親のもとへ返され、両親の嘆きは喜びへと変わった。日が明けると、この奇跡の噂は村中に広まり、人々は皆、よみがえらせた者とよみがえった者を見るためにここに集まった。　奇跡を行う者を見た多くの人々が、病人を連れて彼のもとへやって来た。彼は皆のために祈り、皆を祝福しながら、彼らを癒した。村全体がその領主と共に、キリストへの聖なる信仰を受け入れ、洗礼によって救われた。　一方、両親は神に、よみがえった少年を神に捧げ、彼が相続人であった村全体を教会に寄付することを誓った。そうすれば、少年が成人した際に聖職者となり、村は教会の財産に組み込まれることになるからである。　聖人がそこから立ち去り、リダ川の上流にあるルイリアックと呼ばれる別の集落に近づいたとき、　その村の領主から遣わされた使者たちが彼を出迎え、一刻も早く彼らのところへ来てほしいと懇願した。というのも、領主の唯一の娘が悪霊に取り憑かれており、不浄な霊によってひどく苦しめられ、両親や親族に大きな悲しみをもたらしていたからである。　キリストの聖人は急ぎ足でそこへ向かい、その少女から悪霊を追い出した後、そこにいた彼女の両親をキリストの信仰へと導き、その場にあった偶像を破壊して教会を建立し、村全体とその周辺の人々が聖なる洗礼によって神のもとへ導かれるまで、そこに留まった。　その後、彼はそこから「アルティン」と呼ばれる村へと向かった。そこには大きな偶像崇拝の神殿があり、ユピテルと呼ばれる悪名高い異教の神の像が安置されていた。その偶像の中には悪霊が宿り、迷える人々を様々な惑わしで誘惑していた。　この村とその

周辺の住民たちは、悪魔の熱心な僕たちであり、キリスト教の司教が自分たちのところへやってくると聞くと、大勢で集まり、彼を村の中へ入れようとしなかった。彼らは、彼が他の村々で行ったように、自分たちの偶像を粉々に砕いてしまうのではないかと恐れていたからである。　しかし、神の聖人が彼らのところに来ると、彼らは激怒して叫び始めた。ある者は、彼を「古来の先祖伝来の慣習を破壊する者」として殺すべきだと主張し、またある者は、彼を「魔術師であり、欺瞞者であり、彼らの神々の敵」として焼き殺すべきだと叫んだ。　彼らは彼に対して激しい憎悪を抱いていたが、至高者の御手が彼を守っていたため、彼に何の害も与えることはできなかった。

目に見えない神の力の鎧と武器を身にまとった彼は、勇敢な戦士のように民衆の騒動の中を果敢に通り抜け、偶像の神殿に入り、全能なるキリストの御名を呼び求めて、偶像に倒れよと命じ、悪霊にはそこから出て行けと命じた。　するとたちまち、偶像は地面に倒れ、粉々に砕け散り、悪霊は口から火を噴く巨大で恐ろしい大蛇の姿となって明らかにそこから現れ、その配下たちへと襲いかかった。というのも、多くの不信仰な民が神殿に入っていたからである。大蛇は猛烈な勢いで人々を食い尽くし、滅ぼし始めた。　人々は、大蛇の猛威と毒から逃れる術がなく、聖ユリアヌスに助けを求め、この災いから救い出してくれるよう懇願した。　神の僕である聖ユリアヌスは、蛇に向かって手を伸ばし、十字の印を、あたかも鉄の杖のように用いて、蛇を打ち払い、追い払おうとし、目に見える悪魔に対し、人々に害を及ぼすのをやめ、滅びの深淵へ去るよう命じた。蛇は神殿から飛び出し、姿を消した。その後、民は自らの過ちに気づき、聖人にこう叫んだ。

「真の神のしもべよ、滅びゆく私たちを救ってください！」

聖人は彼らを十分に教え導き、すべての人をキリストのもとに導いた。なぜなら、その人々は熱心に信仰を受け入れ、洗礼を受け、　その神殿を破壊し、その代わりに聖人の命により、キリスト・神の栄光のために教会を建てた。また、偶像があった他の場所でもそれらを破壊し、偶像の惑わしから解放されたことを機に、その国には大きな喜びが訪れた。　かくして、この熱心な牧者は、自分の羊の群れの境界を巡り、言葉の羊たちを霊的な畑へと導き、狼の口から救い出したのである。ただ、所々で、かつての惑わしを捨てきれず、滅びてしまった者たちがわずかに残っていたに過ぎない。前述のデフェンソル公は、神の聖人がキリストの恵みによって多くの奇跡を行い、ケノマニアの国を照らしたことを聞き、大いに喜び、神を賛美した。その後、公は自ら聖人のもとへ赴き、親しみを込めた挨拶を交わした後、自分の居城へ来てほしいと頼み始めた。　公爵には立派な屋敷と広大な領地があった。公爵は、根絶された偶像崇拝への勝利を記念して、聖人がそこで霊的な祝典を執り行い、祝宴に臨席することを望んでいた――神の栄光のために、主の人を愛する恵みに感謝し、皆が喜びに満ちるよう。　至る所で人々の魂の救いを求める聖人は、公爵の願いを拒むことなく、その村へ向かった。道中、彼らは地面に倒れている一人の少年を見つけた。巨大な蛇がすでにその少年の足を縄のように絡め取り、全身をぐるりと巻きついていた。これを見た者たちは皆、恐怖に震えた。　しかし、神の僕ユリアンは、近づいて神に祈りを捧げ、こう言った。

「主イエス・キリストよ、蛇の誘惑によって楽園を追われた人類を、御自身の十字架によって救われた主よ、この御自身の被造物をも、彼を縛りつけているこの恐ろしいものから救い出してください。そうすれば、ここに集う者たちは、あなたが御自身に希望を置くすべての者の救い主であることを悟るでしょう！」　すると、その悪霊はたちまち真っ二つに裂けて死んでしまい、少年は無傷で解放された。人々は皆、神を賛美した。彼らが向かっていた村に近づくと、大勢の人々が迎えに出てきた。その中には二人の悪霊に取りつかれた者がおり、聖人に助けを求めて叫んだ。　キリストの御名を呼び求めると、聖人は即座に汚れた霊を追い出した。癒やされた者たちやそこにいた者たちは皆、キリストを信じるようになり、神の聖人は大きな栄誉と愛をもって、その村の公爵の屋敷に迎え入れられ、肉体のためだけでなく、霊のためにも盛大な祝宴が催された。　なぜなら、そこにいた者たちの会話はすべて、キリストの栄光と力、そして偶像の中で打ち負かされ、恥をかかされた悪魔たち

の滅びについてだったからである。　神の栄光のために執り行われた祝宴の終わりに、公爵は司教に自身のすべての財宝を見せ、好きなものを持ち帰るよう頼んだが、聖人は何も受け取ろうとはしなかった。なぜなら、彼にとって最も貴重な宝は、金や銀ではなく、人々の魂の救いだったからである。神の聖人は、神の霊に導かれた言葉で公爵とその家臣全員、そして村人全員に十分な時間をかけて教えを説き、まだ洗礼を受けていない者たちに洗礼を授け、彼らの信仰を確固たるものにした後、自らの街へと戻っていった。　彼が町に入ろうとしたとき、町の門の近くにある牢獄に囚われていた者たちは、小さな窓から聖人を見かけると、大声で叫び、鎖から解き放ってほしいと懇願した。　慈悲深く、子らを愛する父である彼は彼らを憐れみ、自宅へ帰る前に、町の統治を任されていた裁判官たちのところへ行き、自分の帰還を機に囚人たちを解放するよう懇願した。しかし、彼らは冷酷な心ゆえに司教の願いを聞き入れず、彼は悲しみに暮れてその場を去った。　まず聖人は教会へ赴き、これほど多くの魂を救いに導くのを助けてくださった神に感謝の祈りを捧げた。その後、彼は家に入り、そこで食事が振る舞われたが、囚人たちの運命を案じて悲しみに沈んでいたため、何も口にすることを望まなかった。　しかし、主を畏れる者たちの願いを叶えてくださる主は、御自身の天使を遣わされた。その天使は牢屋の扉を開き、すべての鎖を砕き、囚人たちを自由の身とした。　彼らは牢獄から出て、街中を通り抜け、司教の邸宅へと向かった。誰も彼らを妨げたり、何かを言ったりすることはなかった。なぜなら、彼らが人間の手ではなく、　神の力によって束縛から解放され、牢獄から放たれたことを、誰もが目の当たりにしていたからである。　神の聖人は、自分に向かって歩いてくる彼らを見て喜びに満たされ、彼らを食事に招き、肉体的にも精神的にも十分に満たした後、一人ひとりをそれぞれの家へ帰らせた。

聖ユリアン司教は、新たに光を受けた教会を統率し、言葉の羊たちからなる新しく集められた群れを霊的な糧で養いながら、　その座に相当な期間留まり、キリストの福音を宣べ伝える使徒的な働きに励み、すでに高齢の長老となっていた彼は、ケノマニウス地方における偶像崇拝と悪魔崇拝を完全に根絶し、尊厳ある最期を迎えようとしていた。　死去の数日前、聖人は街を離れ、教会が所有するある村へと向かい、そこで病に倒れた。街では彼の病が知れ渡り、聖職者たち、敬虔な市民、そして彼への愛に燃えるすべての人々が聖人のもとへ集まった。　聖人は彼らにしばらく説教をした後、自身の死後、人間の魂の救いのために共に尽力してきた長老トゥリヴィウスを後継者に選ぶよう命じた。その後、最後の口づけを交わし、平和の祝福を与えた後、その聖なる魂を神の御手に委ねた。聖人が息を引き取る際、公爵は同席していなかった――その頃、公爵は街にはおらず、遠く離れた村に滞在していたが、この出来事は次のようにして公爵の耳に入った。　聖人が世を去ったその日、公爵は自宅で友人たちと昼食をとっていたところ、突然、霊的な目が開かれ、聖ユリアヌスが司教の法衣を身にまとい、燭台を掲げる三人の助祭を従えて彼の元に入ってきて祝福を授けたのを見た。　そして助祭たちは燭台を食卓に置くと、皆たちまち姿を消した。これを見た公爵は、共に座っていた者たちにこう言った。

「私が見ているあの栄光、あなた方も見えますか？」

しかし、彼らは何も見ていないと答えた。そこで公爵はこう説明した。

「私たちの父ユリアヌスを見なかったのか。彼は私たちに多くの恵みを与え、数多くの奇跡を行ってくれたではないか。今、彼は三人の助祭と三つの燭台を伴ってここに入り、明るく喜びに満ちた顔で私たちを祝福し、燭台を置いて去っていった。彼はすでに天に召されたのだろう。彼が病気になったと聞いていたからだ。」

そう言うと、公爵はすぐに立ち上がり、急いで町へと、そして聖人が召されたその村へと向かった。そこで彼が主の御許で亡くなられているのを見つけると、公爵は痛切に泣き、民衆もまた皆、自分たちの父であり牧者である彼のために涙を流した。そして、その尊い遺骸を戦車に乗せ、町へと運んだ。　街の近くを流れる、サルタと呼ばれる非常に深い川に差し掛かったとき、そこを渡るには渡し船を利用しなければならなかったが、　聖人の遺体を載せた戦車を引いていたが、渡し船に乗る

代わりに、まっすぐ川へと駆け込み、目に見えない手に導かれるかのように、深い川をまるで橋の上を歩くかのように進み、膝まで足を濡らすこともなかった。　こうして彼らは対岸へと渡り、人々は皆、その輝かしい奇跡に驚き、畏敬の念を抱いた。偉大なる奇跡の行者、聖ユリアヌスは、生前だけでなく、死後もなお奇跡を起こし続けていたのだ。　彼の遺体が厳かに町へと運ばれ、人々がこぞって出迎える中、ある女性が銅の洗面器で赤ん坊を洗っていた。彼女は水を温めるために、その下に小さな火を焚いていたのだが、　聖人の遺体と、ろうそくや香炉を手にした大勢の人々、そして聖歌の声を目にした彼女は、自分の赤ん坊のことを忘れてしまい、赤ん坊を置き去りにして、神に愛された聖人の尊い遺体の荘厳な行列を見に出た。彼女は家々が通り過ぎるまで立ち止まって見入っていた。その後、赤ん坊のことを思い出し、急いで戻ると、火が激しく燃え上がり、盆の中の水が沸騰していた。恐怖のあまり叫び声を上げ、彼女は素早く盆を火から下ろし、熱湯を捨てたが、赤ん坊は生きており、元気で、熱湯による傷一つなかった。　この奇跡を、そこに居合わせた多くの人々が目撃し、その赤ん坊が聖なる敬虔な人の祈りによって守られたのだと悟った。キリストの聖人ユリアンは、かつて聖人に寄贈された公爵の屋敷があった場所に、自ら建てた教会に埋葬され、その棺の周りでは多くの奇跡が起こった。　あらゆる病気において、この聖人の祈りによって癒しがもたらされた。これは、私たちの主イエス・キリストの恵みによるものであり、父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、世々限りなく栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖殉教者マルキアノスの受難

記念日：7月13日

聖殉教者マルキアヌスは、まだ若き頃、イコニアの町で捕らえられ、拷問を受けた後、（カッパドキアへ）総督ペレンニウスのもとに連行された。彼は勇敢にもペレンニウスを異教の不敬を犯していると非難し、キリストを神であり主であると告白した。　このため、彼は骨や頬を削られる拷問を受けた。その後、拷問者は、殉教者の非難の言葉に苛立ち、これらの拷問だけでは満足せず、さらに彼を赤熱した鉄板の上に載せるよう命じ、その後に舌を切り落とすよう命じた。　これらすべてが実行された後も、聖なる殉教者は信仰を揺るがすことなく、キリストを告白し続けたため、総督は彼に剣による斬首を宣告した。その後、兵士たちは聖マルキアヌスを連れ出し、彼が祈りを捧げ、神に感謝している最中に、その首を切り落とした[5135]。

7月27日

7月14日（旧暦）

同日は、ディオクレティアヌス帝の時代に苦難を受け、小アジアのマグネシアで殉教した聖オニシモス・奇跡行者の記念日である。

同日、聖ステファン・マフリシュスキー（1406年）の帰天を記念する。彼は、ウラジーミル州アレクサンドロフ市から12ヴェルスタ離れたマフリシュの地に修道院を設立した。

聖使徒アキラの記念日

記念日：7月14日

[5135] 聖殉教者マルキアノスの死は、258年頃、カッパドキアで訪れた。

聖使徒アキラは、七十人使徒の一人であり、聖使徒パウロの弟子であり、彼によって司教に叙任された。 彼はポンテウス地方[5136]出身のユダヤ人であり、キリスト教に改宗する前は、妻プリスキラと共にイタリアに住んでいた。しかし、クラウディウス皇帝[5137]がユダヤ人に対しローマからの追放を命じた際[5138]、アキラは妻と共にコリントへ移った[5139]。 ユダヤ人がローマから追放された理由は次の通りである。ローマでキリストの福音が宣べ伝えられ始め、聖なる首席使徒ペトロがここに到着したとき、ローマに住むユダヤ人の多くはキリストへの聖なる信仰を受け入れたが、多くは依然として不信仰のままであった。 そのため、ユダヤ人の間で大きな論争が生じた。ある者はキリストを真のメシアと認めたが、他の者はキリストを拒絶し、冒涜した。 エルサレムや他の国々と同様に、ローマにおいても、不信仰なユダヤ人たちは憎悪に駆られて信者たちに反旗を翻した。彼らはイエス・キリストの名さえも耐えられず、キリストを信じるギリシャ人を扇動し、至る所で信者たちに対する迫害を煽った。 キリストに改宗したギリシャ人たちは、信仰を持つユダヤ人たちを不信仰者たちから守ったが、その間で激しい論争と敵意が生じ、そのことはクラウディウス皇帝にも報告された。信者たちは主キリストを「神の子」かつ「イスラエルの王」と呼んでいたため、皇帝は民衆の間に何らかの動揺が生じたり、自らの権力を奪おうとする新たな王が現れたりするのではないかと懸念した。 そのため、ユダヤ人全員――キリストを信じる者も信じない者も――をローマおよびイタリア全土から追放するよう命じられた。この追放にはもう一つの理由があった。すなわち、信仰を持たないユダヤ人たちが、クラウディウスの妻であるアグリッピナ王妃をユダヤ教に引き込んだのである。追放されたユダヤ人たちと共に、ユダヤ人であるアキラも追放された。彼はコリントに定住し、天幕作りやテント作りの技術を活かして、自らの労働で生計を立てていた。 その頃、聖使徒パウロは異邦人の間でキリストを宣べ伝えており、アテネからアカイアの主要都市コリントへとやって来た。そこでアキラとプリスキラを見つけ、彼らの家に滞在した。二人は同じ職人技を心得ていたため、共にその仕事に励んだ。 アキラスとプリスキラにキリストへの信仰を教え、パウロは彼らに洗礼を授けた（使徒行伝18:1–3）。 コリントに一年と六 ヶ月間滞在し、神の御言葉を教え、キリストの助けによってユダヤ人や異邦人を説得して勝利を収めた後、パウロはシリアへと船出した。アキラとプリスキラは、彼を師であり救いの源として、霊的な愛をもって深く彼に惹かれ、彼に従った。 彼らや他の弟子たちと共に、パウロはエフェソに上陸した[5140]。その後、近づきつつある過越の祭りにエルサレムにいたいと願った彼は、アキラとプリスキラをエフェソに残し、エフェソの人々にキリストの聖なる信仰を教えるよう託し、自身はエルサレムへと向かった[5141]。その際、再びエフェソに戻ることを約束した。 パウロが去った後、アレクサンドリア出身のユダヤ人アポロがエフェソに到着した。彼は雄弁で、聖書の学問に長けていた。彼は主の道について教えを受け、熱心に主について説教し、教えていたが、聖三位一体による洗礼はまだ受けておらず、ヨハネの洗礼しか知らなかった。 アキラとプリスキラは、集会でアポロの大胆な説教を耳にすると、彼を自宅に招き、主の道をより明確に

[5136] ポンティウス地方、あるいはポントスは、黒海に面した小アジア北東部の地域である。

[5137] 在位：41～54年。

[5138] イタリアの首都は、ティブレ川の河口付近、川の両岸に位置している。

[5139] ギリシャのアカイア地方にある、最も古く、著名な商業都市。この地におけるキリスト教の始まりは、使徒パウロが第2回使徒旅行の際にもたらしたものである（使徒言行録18:1–28）。使徒パウロがコリントの信徒たちに宛てた2通の手紙が残されている。

[5140] 小アジアのイオニア州の沿岸にある商業都市であり、同州の主要都市であった。エフェソスは後に聖ヨハネ・テオロゴスの活動の中心地となり、431年にはここで第3回全地公会議が開かれた。現在、エフェソスはトルコの貧しい村アヤサルクとなっている。（使徒行伝18:18–21）。

[5141] パレスチナの主要都市で、ケドロン川沿い、ユダヤの山々であるアクラ、シオン、モリヤの三つの支峰の斜面に位置する。 エルサレムは、旧約聖書と新約聖書の歴史における偉大な出来事の中心地として、また、福音の御言葉が全宇宙に広まった「諸教会の母」として、すべてのキリスト教徒にとって大切な場所である。

説明した（使徒行伝18:24–28）。 その後、聖パウロはエルサレムからエフェソに戻り、そこからキリストを信じるコリントの信徒たちへ最初の書簡を書き、次のような言葉で締めくくった。

「アキラとプリスキラ、そして彼らの家の教会（第一コリント16:19）――すなわち、彼らの家来たち――が、心からあなたがたに挨拶を送ります。」

その後、クラウディウス皇帝が亡くなり、ユダヤ人たちは再びローマで暮らす自由を取り戻した。彼らはそれぞれ、かつての住処や所有地があるイタリアへと戻っていった。その時、アキラとプリスキラもローマに戻った。 聖パウロが再びコリントを訪れ、そこからローマの信徒への手紙を書いた際、彼はその手紙の中で、愛する弟子たちへの挨拶を忘れず、最後の章で次のように述べています。

「キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスキラとアクイラに挨拶を伝えてください。彼らは私の命のために身を捧げました。彼らに感謝しているのは私だけではなく、異邦人のすべての教会も同様です」（ローマ16:3–4）。

聖アキラはローマに長く留まることはなく、妻と共に再びアジアへと向かいました[5142] 。彼は、師である使徒パウロによって司教に任命され、神の御言葉を宣べ伝えるためにその地へ遣わされたのです。 エフェソに到着すると、彼は使徒パウロの弟子である聖使徒テモテ[5143] の働きを助けました。テモテは彼をエフェソ人のための司教に任命し、ラオディキアから彼に宛てて書いた第一の手紙の中で述べているように、彼をそこに残していきました：

「マケドニアへ旅立つ際、私はあなたにエフェソに留まるよう頼んだ」（Iテモテ1:3）。

その後、聖使徒パウロがエルサレムのユダヤ人たちから迫害を受け、足枷を嵌められたままローマに連行され、そこからエフェソにいるテモテへの第二の手紙を書いた際、彼は再びこれらの愛する弟子たちのことを思い出し、次のように語った。

「プリスキラとアキラに挨拶を伝えてください（IIテモテ4:19）。」

聖アキラは、アジア、アケイア、ヘラクレイアでキリストを宣教し、異教徒たちを偶像崇拝から立ち返らせ、洗礼を授けることで、数え切れないほど多くの人々を救いに導いた。 彼は他の国々も巡り、至る所で神の御国を宣べ伝え、聖なる信仰によって人々を啓蒙し、偶像を打ち砕き、教会を建て、司祭を任命しました。 数多くの苦難に耐えた後、彼は異教徒たちによって殺害され[5144] 、主イエス・キリストの恵みにより、他の聖なる使徒たちと共に天の安息を得た。主イエス・キリストに、世々限りなく栄光が帰せられる。アーメン。

コンダク、第4声：

偉大なる太陽のごとく、教会を築き上げた栄光あるアキロよ、主の使徒よ、あなたの教えの輝きをもって、あなたを真摯に崇める者たちを照らし出しています。

5142 すなわち、小アジアの西部を指す。

5143 聖ティモセオは、ユダヤ人女性（キリスト教に改宗した）と異教徒の息子であり、彼自身も兄弟たちから認められた誠実なキリスト教徒であった。彼の同意を得て、使徒聖パウロは パウロは「ユダヤ人のために」彼に割礼を施した。なぜなら、ユダヤ人たちは、割礼を受けておらず、しかも父親が異教徒である者から神の御言葉を聞くことなど、決して受け入れようとしなかったからである（使徒言行録16:1–2）。

5144 伝承によれば、彼は、使徒的奉仕の労苦を共にし、神の言葉を宣べ伝えることに尽力した妻と共に生きた。聖アキラとプリスキラの聖遺物の大部分は、ローマの聖殉教者プリスカ教会に安置されている。聖プリスキラの記念日は2月13日である。

聖エリヤの記念日

記念日：7月14日

聖エリヤは、エジプトの荒野において、修道士たちの間で断食の功績によって名声を博し、徳高い生活をもって神に喜ばれた。　幼少の頃から主への奉仕のために修道院に預けられ、節制と貞潔の中で育てられ、柔和と謙遜を教えられ、若き頃から奇跡を行う賜物を受け、神の恵みにあずかった。　ある時、まだ少年だった彼が火を取りに行くよう命じられた際、燃える炭を衣に包んで長老のもとへ運んだが、衣は焦げることなく無傷のままであった。これを見た修道者たちは、その奇跡に驚き、聖性において年長者たちをも凌ぐ少年の素晴らしい生き方に倣いたいと願った。　ある日、至福のエリーは、一人で荒野を歩いていると、蜂蜜を食べたいと思い、岩の上に置かれた蜂蜜で満たされた蜂の巣を見かけました。それが敵の罠であると察した彼は、自らを戒め、こう言いました。

「誘惑的な欲望よ、私から離れよ。なぜなら、*『御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことはない』*（ガラテヤ5:16）と書かれているからだ。」

彼は直ちにその場を離れ、人里離れた荒野へと退き、断食に励み、自制を欠いた自分の肉体を、食物を断つことで疲れさせ、まるで罰を与えるかのようにした。断食の三週目、彼は荒野の地面に美しいリンゴやその他の果実を見かけたが、これもまた敵の誘惑であると悟り、こう言った。

「私はこれらを一切口にせず、触れることさえしない。そうして、私の兄弟、すなわち私の魂を誘惑しないためである。なぜなら、*『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる』*と書かれているからだ」（申命記8:3；マタイ4:4）。

四週間にわたって断食を続けた後、彼は少し眠りにつき、幻の中で神の御使いが現れ、こう告げるのを見た。

「起きなさい。そして、あなたに差し出されたものの中から見つけたものを、何の疑いもなく味わい、力を取り戻しなさい！」

目を覚ますと、彼は湧き水の泉と、その周囲に良い香りを放ち、食べても非常に美味しいある種の緑の草を見ました。彼はその草を食べ、泉の水を飲み、体を癒しました。その後、彼は兄弟たちに、生涯を通じてこれほど甘美な食べ物を味わったことは一度もなかったと語りました。　その場所から少し歩くと、彼は洞窟を見つけ、そこに住み着き、しばらくの間そこに滞在した。そして、肉体が食物を欲すると、彼は岩の上で神に祈った。するとすぐに、目に見えない手によって、清らかで新鮮なパン、オリーブの実、そして様々な野菜が彼のもとに運ばれてきた。

ある時、聖人は、生活必需品に困っていた荒野の兄弟たちを訪ねるために出掛け、神から与えられた食物を彼らに届けた。道中、荷物の重さに疲れを感じていた彼は、荒野を歩き回ったり草を食んだりしているロバたちを見かけ、彼らに向かってこう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、一頭だけここに来て、私の荷を運んでくれ！」

するとすぐに、群れの中で最も力強い一頭のロバが、おとなしく彼のところへ近づいてきた。聖人はそのロバに荷を載せ、自らもまたがり、まもなく砂漠に住む兄弟たちの住居にたどり着いた。持ち帰った食料で彼らを喜ばせた後、ロバを砂漠へと解放した。　またある時、彼は日曜日の早朝に、ある砂漠の修道院を訪れた。そこで教会で礼拝が行われていないことを知ると、なぜ主の日が礼拝なしのままになっているのかと尋ねた。　修道士たちは、川の対岸に住む司祭が、川に現れてすでに多くの人々を食い殺したワニを恐れて来なかったと答えた。聖人は彼らにこう言った。

「もし望むなら、私が行って司祭を呼びましょう。」

しかし、修道士たちはこう答えた。

「いいえ！それに、誰があなたを向こう岸まで渡してくれるというのですか。皆、ワニのせいで渡し場へ近づくことさえ恐れているのですから！」

しかし、聖エリイは神を信頼して出向き、川の岸辺に立ったとき、主の御名を呼び求めると、たちまちワニが現れた。かつて人々を滅ぼすことに慣れていたそのワニは、神の御命令により、　の義人である聖人の渡し手となった。謙虚さと畏敬の念をもって、聖人を背中に乗せ、川を渡して対岸に降ろした。　聖人は司祭の住居に着くと、兄弟たちのところへ来てほしいと頼んだが、司祭は彼を知らなかったため、こう尋ねた。

「あなたはどなたで、どこから来たのですか？」

彼は、つい最近修道院に来たばかりだと答えた。長老は、その聖人の古びて継ぎはぎだらけの服を見ていたものの、その言葉と品行から、彼を神の人であると見抜き、こう言った。

「兄弟よ、あなたの肉体の衣は粗末だが、その代わりに魂の衣は立派だ！」

それから彼は立ち上がり、修道院へと向かった。川に着いたが、川を渡る手段が見つからなかったため、聖人は長老に言った。

「心配なさらないでください、父よ！神が私たちのために舟を用意してくださいます！」

そして、大きな声でワニを呼び寄せた。ワニは聖人の声を聞くと、すぐに彼らの元へ現れ、彼らが乗れるよう、おとなしく背を差し出した。まず聖者がワニの背に乗り、それから長老を招き入れ、こう言った。

「お上がりください、神父様。恐れることはありません！」

しかし、長老はワニを見て恐怖に駆られ、後ずさりして逃げ出した。一方、兄弟たちは対岸に立ち、神の人がワニに乗って川を渡るという奇跡を目の当たりにし、畏敬の念を抱きつつその光景に驚嘆していた。 聖人は川を渡り終え、岸に上がると、ワニを引きずり出し、こう言った。

「人を殺して食い尽くすよりは、お前自身が死んだほうがましだ！」

すると、その瞬間、ワニは倒れて息絶えた。

聖エレイは三日間修道院に留まり、神の霊に導かれた言葉で兄弟たちに教えを説いた。彼自身、透視の力を持っていたため、一人ひとりの思いや良心を知っており、誰がどのような誘惑にさらされているかを、一人ひとりに個別に語りかけた。　ある者には、不浄の霊に駆られていると告げ、別の者には怒りに駆られていると告げ、またある者には美食に囚われていると告げ、さらに別の者には何らかの情欲に翻弄されていると告げた。　また、すべての人の益となるよう、他の修道士たちの美徳を明らかにし、ある者を柔和だと称え、ある者を義人だとし、ある者を忍耐強いと、ある者を従順だと、またある者を何らかの美徳を持つ者と評した。すべての者の生活や、善悪を問わずあらゆる秘められた行いは、神によって彼に明らかにされていたのである。　情欲に苛まれている者たちは皆、エリーが告げたことが真実であると自ら認め、皆、心を打たれて、自らの生き方を改めた。ある時、霊的な対話の最中に、尊い父はこう言った。

「食事を用意しなさい。旅の兄弟たちが今、ここへやって来るからだ！」

そして実際、聖人が言った通り、食事が用意されると、遠くから旅をしてきた兄弟たちが修道院にやって来た。聖エリーは彼らを丁重にもてなした後、荒野へと去っていった。若い兄弟の一人が、自分も一緒に荒野へ行かせてほしいと懇願すると、聖人はこう言った。

「それは厳しい道だ、兄弟よ。多大な労力を要する。悪魔の誘惑にしっかりと立ち向かい、多くの苦難に耐えなければならないからだ。」

しかし、その兄弟はすべてを耐え抜くと約束し、聖人は彼を受け入れ、別の洞窟で暮らすよう命じた。そしてその夜、悪魔たちが彼に襲いかかった。最初は目に見えない形で、邪悪な考えで彼の心を惑わせ、その後、恐ろしい幻影となって彼に襲いかかり、押しつぶして殺そうとした。　彼は洞窟から飛び出し、急いで聖人のもとへ駆けつけ、自分の不幸な出来事を語った。　長老は、わずかな言葉で兄弟を慰め、忍耐と信仰を確固たるものにした後、再び彼を同じ洞窟へと連れ戻し、指で住む場所を示し、十字の印でその場所を守り、主の御名をもって身を守り、恐れるなと命じた。　こうして、その兄弟は、もはや悪魔の襲撃に悩まされることなく、その荒野で暮らし、神ご自身が養われた

その尊い師のように、目に見えない手によってもたらされる糧に恵まれるようになった。　聖エリイは長寿を全うし、多くの奇跡を行い、神のもとへ帰った。彼は神に喜ばれ、天において父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の御座に侍る聖人たちの列に加えられた。今、常に、そして世々限りなく、神に栄光あれ。アーメン[5145]。

聖殉教者ユスタの記念日

記念日：7月14日

聖ユストは、ローマ出身の戦士であった。彼には不思議な幻視があり、空中に水晶のような十字架が現れた。ユストはキリストを信じ、全財産を貧しい人々に施した。　イゲモン・マグネンティウスの命令により捕らえられ、多くの拷問に耐えた後、火刑に処されましたが、髪の毛一本傷つけることなく息を引き取りました。

7月28日

7月15日（旧暦）

同日、キエフの大公であり、使徒に等しい聖人ウラジーミル（1015年、洗礼名ヴァシリー）の帰天。

同日、ディオクレティアヌス帝の時代に殉教した聖殉教者アヴディムの記念日。

聖殉教者キリコスとユリッタの受難

記念日：7月15日

リカオン地方のイコニアという町に、かつてのローマ王家の血を引く高貴な家柄の若い女性、ユリッタという名のキリスト教徒が住んでいた。彼女は[5146]で合法的な結婚生活をしばらく送った後、男の子を出産した直後に夫を亡くした。彼女は赤ん坊に洗礼を授け、キリカという名をつけた。その頃、不信心なディオクレティアヌス[5147]は、ローマ帝国の王権を握り、その支配下にあるすべて

[5145] 聖エレイは4世紀に亡くなった。

[5146] イコニアは、小アジア内陸部の高く肥沃な平原に位置し、タウロス山脈の麓、リストラやデルヴィアからほど近い都市である。かつてイコニアはリカオニア諸都市の中心地であった。　キリスト教会の歴史において、イコニアは、使徒パウロが宣教の旅の途中でこの地を訪れたことで知られている（使徒言行録13:51、14:1–3；テモテへの手紙第二3:11）。その後、ここに司教座が置かれ、451年からはイコニアの司教たちはリカオニア管区の総主教と呼ばれるようになった。

[5147] ディオクレティアヌス帝の治世（284–305年）には、キリスト教徒に対する4つの勅令が発布された。　最初の勅令は303年2月に公布された。この勅令により、教会の破壊と聖書の焼却が命じられたほか、キリスト教徒は市民権、法の保護、および公職を剥奪された。また、キリスト教徒の奴隷は、何らかの事情で自由の身となった後もキリスト教を信仰し続ける場合、自由の権利を失うこととなった。　まもなく第二の勅令が発布され、すべての教会の司祭やその他の聖職者を牢獄に投獄するよう命じられた。このように、この勅令は聖職者のみに適用されるものであった。彼らは、第一の勅令の発布直後に始まったシリアとアルメニアでの反乱の首謀者として、皇帝の前で告発されたのである。これはキリスト教徒にとって不幸な出来事であった。　同年303年には、3番目の勅令が続き、この新しい勅令に基づき投獄された者全員に対し、抵抗すれば拷問を受ける恐れがあるとして、犠牲を捧げるよう強制することが命じられた。ついに304年、最後の4番目の勅令が公布され、キリスト教徒に対する全面的な迫害が宣言された。　この勅令によって、キリスト教徒の血が最も多く流された。この勅令は、311年に皇帝ガレリウスが特別勅令によりキリスト教を公認の宗教と宣言するまでの、実に8年間にわたって施行された。ディオクレティアヌスの迫害は最後のものであり、この迫害において、キリスト教は3世紀近くにわたる闘争の末、異教に対して勝利を収めたのである。

の国々でキリスト教徒に対する激しい迫害を開始した。ディオクレティアヌスによってリカオン地方の統治者に任命されたドメティアヌスは、厳格で非人道的、獣のような性質の持ち主であり、キリスト教徒の血が流されることを喜ぶ男であった。　イコニアに到着すると、ドメティアヌスはキリストを信じる者たちを激しく拷問し始め、密かにキリスト教を信仰している者たちを執拗に捜し回った。キリストの忠実なしもべユリッタは、この様子を目の当たりにし、自身の敬虔さゆえに迫害者たちから身を隠すことは不可能だと悟ると、逃亡を決意した。彼女は、残酷な拷問に耐えきれず、キリストから背いてしまうことを恐れたからである。　そこで彼女は、キリストへの愛のために、所有していた多くの財産、自宅、親族、奴隷、この世のあらゆる魅力、栄光、そして快楽をすべて捨て去り、三歳の息子キリクと二人の忠実な女奴隷を連れて、夜陰に乗じてイコニウムの街を抜け出し、旅に出た。彼女は聖書に記された次の言葉を心に留めていた。　*「私たちには、ここに恒久的な都はなく、未来の都を求めているのです」*（ヘブライ人への手紙13:14）。

彼女はセレウキア[5148] に、旅人であり乞食として、自身の高貴な身分を隠して到着したが、ここでもキリスト教徒に対する同様の迫害に遭遇した。というのも、王から権力を委ねられたあるアレクサンドロスがセレウキアにやって来て、イエス・キリストの御名を告白する者たちを容赦なく殺害していたからである。 祝福されたユリッタは、「怒りに道を譲れ」、すなわち怒りから逃げよ[5149] 、という聖書の言葉や、*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい」*（マタイ10:23）という教えを心に留め、セレウキアを去ってキリキアの町タルスへと向かい、そこで貧しい人々の間で暮らした。しばらくして、同じ長官アレクサンドロスがタルスにもやって来て[5150] 、キリスト教徒を迫害した。聖ユリッタは一部の人々に認識され、そのことが長官に報告された。長官は直ちに彼女を連行するよう命じ、自ら民衆に公開された法廷の席に着いた。兵士たちが彼女と息子を連行したとき、彼女の二人の女奴隷は逃げ出した。　彼女たちは遠くから彼女を監視し、その苦しみと最期を見届けようとした。そして、殉教者は三歳の幼子である聖キリクを抱きかかえたまま、長官の前に引き出された。長官から名前、家系、出身地を問われると、彼女は勇敢に我らの主イエス・キリストの御名を告白し、自らをキリスト教徒であると名乗った。

「私の名前、出自、そして故郷――それらはすべて、私のキリストの天の御国なのです！」と彼女は語った。

長官は激怒し、彼女から少年を奪い取り、裸にして、硬い縄で容赦なく打ち据えるよう命じた。殉教者が打たれている間、その様子を見ていた子供は泣きじゃくり、自分を抱いている者たちの手から抜け出そうとして、母親のもとへ駆け寄ろうとした。　長官は、その子の愛らしさを見て、自分のところへ連れてくるよう命じた。そして、その子を抱き上げ、膝の上に座らせ、泣かないようにと慰め、　頭を撫で、口づけをし、あらゆる優しい言葉をかけましたが、子供は抵抗し、手から逃れ、長官から顔を背け、その汚れた口で撫でられたり口づけされたりすることを拒みました。子供は、殴打されている母親をじっと見つめ、泣き叫びました。

「僕はクリスチャンだ！　お母さんのところに行かせて！」

上司から両手を振りほどくと、爪でその顔を引っ掻いた。すると上司は激怒し、子供を床に投げ捨て、足で脇腹を蹴り、高い座から突き落とした；　子供は石段を転がり落ち、鋭い角に頭を打ち

[5148] セレウキアは、地中海沿岸にあるシリアの都市である。おそらく紀元前300年頃、シリア王セレウコス・ニカトルによって築かれたものと考えられる。使徒パウロは最初の伝道旅行の際、ここで説教のために立ち寄り、ここからキプロスへと船出した（使徒行伝13:4）。 西暦6世紀にこの都市は破壊された。

[5149] 実際、ローマ人への手紙（ローマ12:19）にあるこの箇所は、別の意味を持っている。「愛する者たちよ、自分で復讐してはならない」と使徒は述べ、「神の怒りに任せるがよい」と続けている。

[5150] 小アジアのキリキア地方にあるタルソスは、聖使徒パウロがここで生まれたことで知られている（使徒行伝22:3）。また、彼はここでキリストの福音を宣べ伝える準備をし、ここから使徒バルナバによって福音宣教のために招かれた（使徒行伝9:11、30、11:25）。そのため、タルスでは早くからキリスト教が広まった（使徒行伝15:23、41）。

つけながら、その場所一帯を自らの血で染め上げ、その聖なる汚れなき魂を神の御手に委ねた。こうして、聖なる少年キリクは殉教の栄冠を戴いた。

一方、その母である至福のユリッタは、残酷かつ長きにわたって拷問を受け、まるで他人の体の中にいるかのように苦しみ、魂のない柱のように何も感じないまま、ただ次の言葉だけを繰り返し口にした。

「私はキリスト教徒であり、悪魔たちに生贄を捧げることはしない！」

彼女への殴打が止み、地面から引き上げられたとき、彼女は法廷の前に、血まみれで息絶えた最愛の子の姿を見た。喜びに満たされたユリッタはこう言った。

「主よ、感謝いたします。あなたが私の息子にこのような恵みをお与えになり、彼が私より先に、あなたの聖なる御名のゆえに殉教の死を遂げ、あなたの栄光の中で朽ちることのない冠を受け取ることができたのです。」

その後、長官は彼女を絞首刑に処し、鉄の歯でその肉体を削り取るよう命じた。そして、釜で沸騰している樹脂を取り出し、その傷に注ぎかけるよう命じた。聖ユリッタがこのように拷問を受けている間、告示役は叫んだ。

「ユリッタよ、自分を憐れめ。若さを惜しんで、神々にひれ伏せ。そうすれば苦しみから解放され、息子のように残酷な死を遂げることもないだろう。」

殉教者はこう答えた。

「私は悪魔たちや、彼らの耳も口も利かない偶像には拝まない。私は、天の父がすべてを創造された（コロサイ1:12–16）、神の独り子イエス・キリストを拝む。 神の独り子、天の父がすべてを創造された方（コロサイ1:12–16）に拝礼し、息子のもとへ行き、彼と共に天の御国に与かることを願っている。殉教者の揺るぎない忍耐と偉大な勇気を目の当たりにした長官は、彼女を剣による斬首刑に処した。 役人たちは彼女を連れ出し、町から 、死刑囚が処刑される場所へと向かわせた。聖女は、まるで婚礼の冠に向かうかのように歩み、その場所に到着すると、祈りのための少しの時間を求め、それからひざまずいてこう祈った。

「主なる私の神、イエス・キリストよ、あなたが私の息子を私より先に召し、御名のゆえに苦難を受ける恵みを彼に与えてくださったこと、また、聖なる者たちと共にこの空しい世を捨てた彼を、 この不適格なしもべである私をも受け入れ、御前にて恵みを受け、賢い乙女たち（マタイ25:1–13参照）に数え入れられ、御方の朽ちることのない宮殿に入り、私の霊が、 私の創造主であり、あなたの初めなき父、そして永遠に同質なる御霊を、アーメン。

聖ユリッタのこのような祈りの後、処刑人は剣を研ぎ澄まし、その首筋を斬りつけ、尊い首を切り落とした。そして、遺体はその場に埋葬されることなく、犬や野獣の餌食となるままに放置された。同様に、聖キリクの遺体も街の外へ引きずり出され、母の遺体のそばに投げ捨てられて、処刑人は立ち去った。 夜が更けると、前述の二人の女奴隷がここへやって来て、女主人の遺体とその息子の遺体を運び出し、遠くへ連れて行って地中に埋葬した。その女奴隷の一人は、キリスト教初の王であるコンスタンティヌス大帝[5151] の時代まで生き延びた。その時代、キリストの恵みによって真理が輝き、神の教会が支配的となった。 その時、その女奴隷は、忠実なキリスト教徒たちに、聖殉教者キリコスとユリッタの尊い聖遺骨が埋葬された場所を示し、彼らの苦難について語った。 彼らの聖遺体は、朽ちることなく、芳香に満ち、病人に癒やしをもたらす状態で、地底から掘り出された。彼らの苦難は、聖なる殉教者たちを記念し、称えるために、信徒たちの益となり、また、父と聖霊と共に永遠に賛美される、私たちの神キリストの栄光のために記された[5152] 。アーメン。

[5151] 324年から337年までの皇帝

[5152] 聖殉教者キリコスとユリッタの殉教は、305年頃のこととされる。――コンスタンティノープルにはキリコスの修道院があり、ユダヤのエリコ近郊には教会があったと、ヨハネス・モスクスは証言している。 12〜15世紀のロシア人巡礼者

コンダク、第4声調:

キリストの殉教者ユリッタ・キリカは、キリストの懐に抱かれながら、勇敢な戦いを喜びつつこう叫んだ。「キリストこそは殉教者たちの誉れである。」

7月29日

7月16日（旧暦）

聖司祭殉教者アフィノゲノスとその十人の弟子たちの殉教

記念日 7月16日

不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌスの時代[5153] 、キリスト教徒に対する残酷な迫害が行われ、神に喜ばれる生き方をしていた者たちは皆、苦難に直面し、至る所で不安が広がり、多くの者が皇帝への恐怖から、互いに死へと引き渡した。父は息子を、兄弟は兄弟を、親族は親族を――。あるイゲモン、フィロマルコスという名の者が、アルメニアの都市セバスティアにやって来た。彼は多くの偶像崇拝の祭司たちを集め、頭に花冠を戴かせ、ラッパやキンヴァルの音色、ハープや笛の演奏に合わせて、喜びと祝賀のうちに邪悪な神々に生贄を捧げるよう命じた。　一方、彼自身は民衆の目の届く裁判の席に着き、説教者に次のように大声で叫ぶよう命じた。

「市民の皆さん、そしてすべての著名な方たちよ、王の命令に従い、行って神々に生贄を捧げなさい！」

そして、どれほど大勢の民衆がいようとも、皆一斉に叫んだ。

「我らはキリスト教徒であり、偶像には拝まない！」

すると、拷問官は兵士たちに民衆を殴打するよう命じ、多くの人々がキリストのために殉教し、天の冠を受けた。その後、兵士の部隊長であるニコライが拷問官のもとへ歩み寄り、こう言った。

「イゲモン様！ここにアフィノゲンという名のキリスト教の司教がおり、皆を自分の信仰へと誘惑しています。彼はピダフフォネという村に住んでいます。」

イゲモンは直ちに兵士たちを遣わして彼を捕らえさせた。聖アフィノゲンは、その村の近くにある人里離れた場所に小さな修道院を構えており、そこで十人の弟子たちと共に断食と祈りに励んでいた。　兵士たちはその修道院にやって来たが、聖なる司教本人は見つからなかった。彼はどこかへ出かけていたのだ。そこで兵士たちは弟子たちを縛り上げ、セバスティアへと連行した。イゲモンは彼らを見て、牢獄に収容し、足枷をはめ、厳重に監視するよう命じた。そして兵士たちにこう言った。

「彼らの師を探し出せ。」

戦士たちは至る所でアフィノゲンを探し回った。一方、神の僕アフィノゲンは、修道院にやって来て同胞たちを見つけられなかったため、礼拝堂に入り、そこに掲げられた聖なる十字架を涙ながらに見つめながら、こう言った。

の証言によれば、キリクの聖遺骨はコンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂に安置されていた。オセール司教アマトル（388～418年）はその一部をオセールに持ち帰った。

[5153] 284年から305年まで、ローマ帝国の東部を統治した。

「私があなたに託した私の兄弟たちはどこにいるのか？　誰が私と共に、神への日課の祈りを捧げるのか？　あの美しいオリーブの枝はどこへ行ったのか？　彼らに何が起きたのか？　わからない！」

そして聖人は深く嘆いた。修道院を出て、その周囲を歩き回り、兄弟たちがどこへ行ってしまったのかと驚き、戸惑っていた。すると、つい先日、彼自身の手で育てた鹿が駆け寄ってきて、彼にすり寄り、その手を舐め始めた。その後、彼は知人に出会い、その人物は彼に尋ねた。

「聖なる司教様、あなたの弟子たちが連行された時、あなたはどこにおられたのですか？　イゲモンは兵士たちを遣わして彼らを捕らえ、縛り上げて街へ連行し、拷問にかけるよう命じたのですから。」

これを聞いて、聖人は喜び、天を見上げてこう言った。

「主イエス・キリストよ、御自身のふさわしいしもべたちを天の御国へ召してくださったことを感謝いたします！」

鹿を荒野へ送り出した後、彼は自らセバスティアの町へ、弟子たちの元へと急いだ。町の裁判官のもとへ着くと、彼は大声で叫び始めた。

「なぜ私から盗んだのか、この迫害者よ。私の教会を略奪したのか？　神が、お前の犯した悪行をご覧になり、その怒りをあなたに下されますように！」

するとすぐに兵士たちが聖人を捕らえ、イゲモン（総督）のもとへ連れて行き、こう言った。

「これが、あなたが捜すよう命じたアフィノゲンスです。彼は閣下をひどく侮辱しています！」

総督は直ちに、キリストのために投獄されていた兄弟たちがいる牢獄に彼を放り込むよう命じた。兄弟たちを見た聖人は大いに喜び、彼らにこう言った。

「平安あれ！キリストの恵みがあなた方と共にありますように、わが子らよ。あなた方は神に喜ばれたゆえに、神はあなた方を天の宴へと招かれたのです！」　堅く立ちなさい。拷問者の誘惑を恐れてはなりません。明日、神があなたがたの偉業を成し遂げるのを助けてくださいます。そして、あなたがたは天使たちや聖人たちの列に加わり、楽園の喜びに入り、喜びのうちに天の主を永遠に賛美することになるでしょう！

翌日、拷問官は裁判の席に着き、アフィノゲネスとその十人の弟子たちを自分の前に連れてくるよう命じた。彼は彼らにこう言った。

「王の命令に従い、神々に生贄を捧げよ。もし従わぬならば、私はお前たちを凄惨な拷問で苦しめ、命を取り上げる。かつてお前たちより先に頑なだった者たちを滅ぼしたように――悪しき者は悪によって滅びたのだ。」

すると、聖アフィノゲンは彼にこう答えた。

「拷問者よ、あなたが『滅びた』と呼ぶ者たちは、決して滅びたのではなく、天使たちと共に天国で喜び歌っているのだ。」

イゲモンは言った。

「アフィノゲンよ、私を待たせるな。一刻も早く私の言うことを聞き、仲間たちと共に神々に生贄を捧げよ。そうしなければ、お前たちは悲惨な死を遂げることになるだろう。」

これに対し、聖人はイゲモンにこう言った。

「不法な拷問者よ、卑劣で恥知らずな犬め！　お前の脅しなど私たちを怖がらせることはできない。好きにしろ。私たちは、私たちの神のために、どんなことでも耐える覚悟がある。」

すると、拷問官は激怒し、アフィノゲンの十人の弟子たちを裸にして樫の木に吊るし、残酷に殴打し、鉄の櫛で彼らの体を削るよう命じた。彼らは苦しみながらも、こう言った。

「私たちは、不死のキリストのために傷を負う覚悟があります。私たちの主なる神よ、あなたを否定することはありません！」

拷問官は、いかなる苦痛にも屈しない彼らの勇気と忍耐を見て、剣で彼らを斬り殺すよう命じた。こうして聖人たちは、信仰を堅く守り通してこの世を去り、栄光のうちに天国の住まいに移った。十人の聖なる殉教者たちが殺害された後、イゲモンは聖アフィノゲノス司教に向かってこう言った。

「お前の言う『神』であるキリストはどこにいるのか？　なぜ彼はここに来て、私の手から弟子たちを救わなかったのか？」

そう言い放つと、イゲモンは彼もまた裸のまま木に吊るし、鞭打つよう命じた。聖人は鞭打たれながら、こう語った。

「神よ、御名のゆえに私に苦難を許してくださったことを、あなたに栄光がありますように！」

イゲモンは彼に言った。

「では、なぜあなたの神は、あなたを私の手から救い出さないのか？」

殉教者は答えた。

「救ってくださったし、これからもあなたの邪悪な策略から救ってくださるでしょう、不法者よ！」

すると、イゲモンは彼を木から降ろし、再び肋骨を激しく殴打するよう命じた。聖人は神に向かって叫んだ。

「主よ、私はあなたに信頼を置いています。あなたの憐れみによって私を救ってください！」

すると、天から神の御声が聞こえた：

「勇気を持ちなさい、わが選ばれし者よ！　わたしはあなたと共にいる――あなたを守り抜くあなたの神である！」

この声を聞いたのは聖人だけでなく、彼を拷問していた手下たちも同様であった。彼らは恐怖に襲われ、手が麻痺してしまったため、もはや神の僕を拷問することができなかった。イゲモンの友人の一人、フィリップという名の男が、彼と一緒に座っていたが、こう言った。

「以前、キリスト教徒は魔術師だと言っただろう？　彼を見ている者たちが惑わされないよう、この男も早く始末しろ。」

イゲモンは直ちに、殉教者を剣で殺すよう命じたが、聖人は拷問者にこう言った。

「お願いです、イゲモン。私を私の修道院へ連れて行き、そこで処刑するように命じてください。」

そしてイゲモンはその願いを聞き入れた。

聖人が修道院へと連れて行かれる途中、彼はダビデの詩篇からいくつかの節を歌い、まもなく肉体から離れ、主のもとへ旅立つことを喜びとした。修道院に近づいたとき、前述の鹿が荒野から聖人の迎えに出てきて、その足元にひれ伏した。すると聖人は彼にこう言った。

「あなたは兄弟たちを失ったが、今度はあなたを育ててくれた者までも失おうとしているのだ！　しかし、永遠なる神が、あなたとあなたの子孫を狩人の手に渡すことのないようお守りくださいますように。そして、私たちを偲ぶためにここを訪れる者たちのために、神の栄光として、あなたの子孫が犠牲として、また糧としてここに駆け寄ることをお許しください。」

鹿は涙を流しながら聖人の足元にひれ伏し、聖人は彼に十字の印を授けて、こう言った。

「平安のうちに荒野へ行きなさい！」

自分の修道院に戻ると、聖アフィノゲンは神にこう祈った。

「主よ、わが神よ！　私の魂を平安のうちに受け入れ、私が兄弟たちと共にいられるようお許しください。そうして私たちが共に、あなたの至聖なる御名を永遠に賛美できますように！」　主よ、私の記憶を愛をもって尊ぶすべての人々、私の名を唱えてあなたに祈るすべての人々に、あなたの

永遠の祝福をお与えください。あなたの恵みを現し、彼らのあらゆる必要において速やかな助けをお与えください。

彼が祈っている最中、天から声が聞こえてきた。

「今日、あなたはわたしとわたしの弟子たちと共に楽園にあり、あなたの願いはすべて叶えられる！」

殉教者はこの声を聞いて大いに喜び、嬉々として剣の下に首を差し出した。そして首を刎ねられ、こうして主のもとで息を引き取った。信者たちはその尊い遺体をその場に埋葬し、毎年、彼の命日に集まって、その記憶を荘厳に祝った[5154]。 そして、驚くべき奇跡が起こった。聖人が育て上げ、祝福を授けて荒野へと送り出したあの鹿が、聖人の命に従って祝祭日に訪れ、子鹿たちを連れてくるようになったのである。子鹿たちをそこに残して、鹿は荒野へと去っていったが、誰もそれを　妨げる者はいなかった。　この鹿は毎年そうしていた。祝日にやって来て、自分の子鹿を連れてくるのだ。その子鹿は、聖殉教者アフィノゲノス司教とその十人の弟子たちを記念し、称えるために、また、父と聖霊と共に今この時も、そして永遠に賛美される私たちの神キリストの栄光のために、屠られて食されたのである。アーメン。

コンダク、第4調：

主の御言葉に従い、立派な羊飼いとして、キリストの羊たちのために御自身の魂を捧げられた、聖殉教者アフィノゲンよ。このゆえに、我らはあなたを賛美し、また、あなたと共に殉教した十人の弟子たちをも賛美する。彼らは、神の畏れとあなたの教えによって導かれていた。　主は、これら主に喜ばれた者たちを、命の源である御右の手をもって冠せられました。どうか、私たちすべてのために、彼らに祈ってください。

聖女ユリアの殉教

記念日：7月16日

ペルシャ人がアフリカで名高い都市カルタゴ[5155] を攻略し、多くの住民を捕虜として連行した際、この都市からの他の捕虜たちと共に、これから語るあの小さな少女、すなわち、ある著名な人物アナルソンの娘である聖ユリアも捕らえられた。　彼女はパレスチナ・シリアへと連行され、不信心な異教徒であるある商人に奴隷として売られてしまった。少女は、たとえ不信仰な主人のもとにあっても、生まれながらに持っていたキリストへの聖なる信仰と、幼少期から身につけていたキリスト教の善き習慣を堅く守り続け、頻繁に祈りを捧げ、断食を行った。　少女になると、彼女は清らかさを厳守し、貞潔に、そして厳格な節制のうちに暮らし、使徒の言葉に従って主人に忠実に仕えた。　「*心の純真さをもって、ただ人に見せるための奉仕ではなく、人を喜ばせようとする者たちのように*」（エフェソ6:5–6）と、あたかも神の御目の前でそうしているかのように、神や彼女の貞潔な生活に反しない限り、委ねられたすべての務めを分別をもって果たした。そして、それに反する事柄については、誰も彼女を強制することはできなかった。　彼女の主人は、彼女にキリストを否定するよう執拗に強要し、異教の慣習に従って不道徳な生活を送るよう説得したが、いかなる脅しでも彼女をその気にさせることはできなかった。なぜなら、彼女はキリストから背くことや、自身の貞潔を失うことよりも、むしろ死ぬことを選ぶ覚悟があったからである。　主人は彼女を殺そうとしたが、彼女が忠実に仕え、熱心に働いているのを見て、彼女を容赦し、その善良な人柄、柔和さ、謙虚さ、そして厳

[5154] 聖殉教者アティノゲンの死は、311年頃に起こった。

[5155] 625年頃

格な断食に驚嘆した。　彼は、彼女が土曜日と日曜日を除いて毎日断食しており、仕事のない時間を怠惰や安息に費やすのではなく、神への熱心な祈り、あるいは幼少期に学んだ読書に費やしているのを見ていた。夜、彼女が就寝することはめったになかった。　見た目はいつも青白く、痩せこけており、労働と節制によって衰弱していた。　彼女の主人はこれに大いに驚き、彼女が相変わらず同じように振る舞っているのを見て、彼女を憐れみ、愛し、尊敬するようになった。これは、神が、御自身の御心に適う者である聖ユリアを父のように守り、不信仰な人間の冷酷な心を彼女への慈悲へと傾かせたからである。　彼女がすでに二十歳を過ぎた頃、彼女の主人――彼は商人であった――は、多くの商品を積んでガリアへ航海することを企てた。彼は、自分の財産が彼女の管理の下で増えているのを見て、忠実な女奴隷ユリアも連れて行った。　神は彼女のおかげで、その商人の家を祝福された（かつてエジプトで、ヨセフのおかげでペンテフルの家が祝福されたように（創世記39:5））。それゆえ、彼は豊富な商品とともに、あらゆる商品よりも尊い、自分の――いや、むしろキリストの――奴隷を連れて、航海に出た。 彼は、通りかかったコルシカ島[5156] に上陸した。この島にはキリスト教徒の町もあったが、異教徒も少なくなかった。その商人が島に上陸すると、埠頭の近くで、同じ異教徒の信者たちが集まり、祝宴を開き、悪霊に生贄を捧げているのを見た。　彼はすべての使用人を連れて彼らのところへ行き、肥えた雄牛を買い、異教徒たちと共に不浄な生け贄を捧げ、皆で食べ、飲み、楽しみ始めた。一方、聖ユリアは船に残り、心の奥底でため息をつき、泣きながら、これらの人々の迷いと滅びを嘆いていた。

その集まりの一人が船にやって来て、泣き、ため息をついている乙女ユリアを見かけ、彼女がキリスト教徒であることを知ると、その集まりの首領であり、生け贄の儀式を司っていた者に密かに告げた。

「停泊している船に、我々の神々を冒涜し、我々が神々に生贄を捧げていることを非難している娘がいる。」

すると、その不敬な集まりの首領は、パレスチナの商人にこう尋ねた。

「なぜ、お前の部下たちは全員、船から降りて、我々の祭りと生贄の儀式に参加しなかったのか？」

商人が「全員来た」と答えると、首領は反論した。

「お前の船には、我々の神々を罵り、冒涜するある娘がいると聞くが。」

商人はこう答えた。

「お前は私の奴隷の娘のことを言っているのか？　しかし、私はいかなる手段を用いても――甘言であれ脅しであれ――彼女をキリスト教の迷いから引き離し、我々の信仰へと導くことはできなかった。もし彼女が私に忠実でなく、これほど勤勉に働いていなければ、とっくに様々な拷問で彼女を滅ぼしていたはずだ。」

首長は彼に言った。

「今すぐ彼女を、我々と共に神々に拝ませ、生贄の儀式に参加させよ。そうすれば、代わりに私の奴隷を四人与えるか、あるいは彼女の代金を金で支払う。とにかく彼女を私に引き渡せば、私が彼女を我々の神々に拝ませる。」

商人は答えた。

「彼女をそうさせることは不可能だと、すでに言っただろう。彼女は信仰を捨てるくらいなら、むしろ死を選ぶからだ。彼女を君に売ることもできない。たとえ君が全財産を差し出しても、彼女の働きには及ばない。実に彼女は非常に忠実で、彼女の手にかかれば私の財産は増え続ける。だから、私はすべてを彼女に任せてあるのだ。」

[5156] コルシカ島は地中海に位置していた。

一方、その一味の首領は、部下たちと密かに相談した後、客たちのためにさらに盛大な宴を催し、商人であるユリアの主人を酒でひどく酔わせた。　酔い潰れた彼はぐっすりと眠りにつき、彼と共にいた者たちも皆、酒のせいで眠り込んでしまった。すると、あの島に住む不敬な異教徒たちは急いで船に乗り込み、聖ユリアを陸に引きずり下ろし、自分たちの首領のもとへ連れて行った。そして首領は彼女に言った。

「娘よ、神々に生贄を捧げなさい。そうすれば、私はあなたの主人が要求する身代金を支払って、あなたを自由の身にしてやる。」

聖女はこう答えた。

「私の自由とは、キリストに仕えることにあります。私は毎日、清らかな良心をもってキリストに仕えています。しかし、あなた方の迷いには嫌悪感を抱きます！」

すると、長官は彼女の頬を打つよう命じた。そこで殉教者は言った。

「もし私の主イエス・キリストが、私のために頬を打たれ、顔に唾を吐きかけられたのなら、私も主のために同じことを耐え忍ばなければならないではありませんか！主のために私の頬を打たせてください。そして、唾の代わりに、私の顔には涙が流れ落ちるようにしてください！」

拷問官は、彼女の髪を引っ張って苦しめ、全裸にし、全身を激しく殴打するよう命じた。そして殉教者は、殴打されている間も、大声でこう叫んだ。

「私は、私のために打たれた御方を告白します！私の主は、いばらの冠と十字架上の磔に耐えられました。それならば、私も、御方のしもべとして、御方の苦しみに参与し、それを模倣し、御方の御国において御方と共に栄光を受ける者とならせてください！」

その後、拷問官は彼女の処女の胸を切り落とすよう命じたが、彼女はキリストへの愛のために、これらすべての凄惨な苦痛を勇敢に耐え抜いた。　拷問官は、彼女の主人が目を覚ます前に一刻も早く彼女を滅ぼそうと、急いで十字架を作らせ、かつてユダヤ人がキリストを磔にしたように、その殉教者をそこに磔にするよう命じた。こうして聖ユリアは、キリストのために受けた苦しみにおいて、自ら磔にされた主キリストに似せられ、主のために十字架に磔にされる栄誉に浴した。

彼女が十字架に吊るされ、すでに死の淵に近づいていたとき、主人が目を覚まし、彼女が十字架に磔にされているのを見た途端――なんと大きな憐れみが彼の心を満たしたことか！　しかし、もはや手遅れだった。キリストの花嫁は、すでに最期の息を引き取ろうとしていた。そして、彼女の聖なる魂が肉体の束縛から解き放たれたとき、皆は彼女の口から雪よりも白い鳩が飛び出し、天へと舞い上がっていくのを目撃した。　さらに、彼女を苦しめていた者たちは天使たちを目撃した。そして、皆に大きな恐怖が襲いかかり、皆そこから逃げ去った。ただ、聖女の息絶えた体だけが、十字架[5157]にかかったまま残された。しかし、主キリストはそれを放置しなかった。主は、彼女にふさわしい埋葬の手配が整うまで、御自身の天使たちにその体を守るよう命じられた。その経緯は次の通りである。

コルシカ島の近くには、かつてマルガリータと呼ばれ、現在はゴルゴナと呼ばれる小さな島がある。そこには男子修道院があった。　そこで主の天使が修道士たちの前に現れ、聖殉教者ユリアに起こったすべてのことを告げ、彼らに急いで船でその島へ向かい、十字架から聖殉教者の苦難に満ちた遺体を降ろし、埋葬のために自分たちの修道院へ運ぶよう命じた。　修道士たちは船に乗り込み、帆を張って出航した。埠頭に到着すると、主の天使が告げた通りの光景が目に飛び込んできた。　十字架から聖なる遺体を降ろすと、彼らはそれを清らかな布で包んだ。また、少し離れた場所、石のそばに捨てられていた彼女の切り取られた乳房も見つけ、それを拾い上げて遺体の元の位置に付け直した。その後、遺体を船に運び、無事に自分たちの修道院へと戻った。　そこで、彼らは教会でその遺体を尊厳をもって埋葬し、そのしもべをこのような殉教の偉業へと導かれたキリスト・神を賛美した

[5157] 聖殉教者ユリアの殉教は、640年頃であった。

。彼女の棺の周りでは奇跡が起こり、あらゆる病の癒やしがもたらされた。また、彼女が殉教したその場所でも奇跡が起こった。　その島の住民であるキリスト教徒たちも、聖女の受難を知り、彼女が磔にされたまさにその場所に、彼女の御名に因んで小さな教会を建てた。その場所は急な丘であったため、スペースが限られていたからである。　そして、彼女の切り落とされた乳房が投げ捨てられた場所では、岩の下から治癒の力を持つ泉が湧き出た。その水を飲んだり、その水で体を洗ったりしたすべての病人は、癒やされた。　さらに別の奇跡も起こった。聖女の乳房が触れたあの石（その下から泉が湧き出た石）は、当時、毎年彼女の記念日には、まるで汗のように、　乳白色の滴と血の混じった滴を放ち、聖ユリアの処女性と殉教を象徴していた。彼女は、まるで乳のように処女の清らかさで白く輝き、キリストのために流した血で染まっていたのである。そのような滴は、朝から夕方まで一日中滴り落ち続け、人々はそれに塗られて癒やされた。

それから長い年月が経つと、聖殉教者の名に因んで、彼女の受難の地に建てられたその教会は老朽化し、一部が崩壊してしまった。そこで人々は、元の場所が非常に狭かったため、別の場所――とはいえすぐ近く――に、聖人の名に因む、より広々とした新しい教会を建てようと決めた。　石やレンガ、石灰、そして建設に必要なすべてのものを準備し、翌日には基礎を築こうとしていたところ、翌朝、石やレンガ、その他すべての資材が、古い教会があった元の場所に戻っているのが見つかり、建設者たちは困惑した。　しかし、しばらくして、彼らは再びすべてを新しい場所へ運び直し、そこで新しい教会を建てるつもりだった。ところが、夜になると、またしてもすべての資材が元の場所に戻されていた。　その夜、見張り番たちは、明るい肌の少女が、一対の白い牛が引く荷車に、建設用に用意された資材をすべて積み込み、元の場所へ運んでいるのを目撃した。彼らは、聖人が教会を元の場所に再建することを望んでいると理解し、その願い通りにした。　コルシカ島とゴルゴナ島の両島では、聖人の尊い遺骨がそこから取り出され、ブレシアへ移されるまで、他にも多くの奇跡が起こった[5158]。聖遺物が移された後も、コルシカ島の住民たちは信仰をもって聖女の教会を訪れ、彼女の助けを失うことなく、彼女の聖なる揺るぎない祈りと、私たちの主イエス・キリストの慈悲によって、敵の攻撃から守られています。主イエス・キリストには、父と聖霊とともに、　今この時も、そして永遠に。アーメン。

聖殉教者アンティオコスの受難

記念日：7月16日

キリストの聖殉教者アンティオキオスは、セバスティアの町[5159]の出身であった。医師を本業としていた彼は、自国のあらゆる町を巡り、その技を駆使して様々な病に苦しむ人々を癒やしていた。　地方総督アドリアヌスの命により、彼は捕らえられ、様々な拷問に耐えた後、ついに大釜に投げ込まれたが、無傷のままであった。　その後、彼は野獣との闘いを命じられたが、　、獣たちは彼を見るやいなや喜び、彼の足元に横たわり、その足を舐めた。そして、ある一頭の獣が人間の声で語り、彼を苦しめる者を非難した。　その後、聖なる殉教者は神に祈りを捧げ、その祈りによってすべての偶像が砂のように崩れ落ちた。そこで彼は首を刎ねられたが、その傷口からは血と乳が流れ出た。聖アンティオコスの首を切り落とした兵士、キリアクという名の者は、聖人の処刑直後に勇敢にも自

[5158] 763年頃。

[5159] セバスティア（現在のシヴァス）は、小アジアのローマ属州ポンテにあり、アンティタウロス山脈の西側の支脈の麓、ガリサ川（現在のキジル・イルマク川）の右岸、その源流付近に位置していた。

らをキリスト教徒であると公言し、偶像たちに対して呪いをかけました。このため、ハドリアヌスの命により彼もまた首を刎ねられ、聖殉教者アンティオコスと共に埋葬されました[5160]。

聖殉教者パウロおよび彼と共に殉教した聖女アレフティナとヒオニアの殉教

記念日：7月16日

これらの聖殉教者たちはエジプトの出身であった。捕らえられた彼らはケサリアの町へ連行され、総督の面前で尋問を受けた際、キリストを真の神であると告白した。　このため、彼らはまず左足を焼かれ、次に右目をナイフでえぐり出され、最後に、同じくキリストを信じた他の男女たちと共に火刑に処され、そのために息を引き取った。これに先立ち、聖ヒオニアは木に吊るされ、体を削り取られ、　彼女の妹アレフティナは、裁判官を威嚇して足で祭壇を破壊したため、容赦ない拷問にさらされた。一方、聖殉教者パウロは祈りを捧げ、まずキリスト教徒のために、そして次にすべての異教徒のために、彼らが真の神を知るようになり、キリストを信じる者たちへの迫害をやめるよう祈った。 この祈りによって、彼は立ち会っていた者たちの涙を誘ったが、その後、首を刎ねられた。

7月30日

7月17日（旧暦）

同日、ガリシアの山で断食を行っていた尊者ラザロの聖遺骨が移送された（彼の記念日は11月7日

同日、ソロヴェツキー修道院のイグメン、聖イリナルクの帰天。

聖大殉教者マリーナの殉教

記念日：7月17日

聖マリーナは、ピシディアのアンティオキア（[5161]）で、高貴な両親の間に生まれたが、両親は信仰深くはなく、異教の不敬虔さに染まっていた。　彼女の父エデシオスは偶像崇拝の祭司であり、生後間もなく母を亡くした娘マリナを、町から15ヴェルスト離れた村に住む乳母に預けた。　養育されていた少女が成長する頃になると、彼女は肉体も美しく、魂はさらに美しく、分別と善良な品性にも優れていることが明らかになった。当時、キリスト教徒への迫害が激化していたため、司祭や聖職者たち、　神の御言葉を教える者たちは、迫害者たちを恐れて、ある者は荒野や山中の洞窟に、ある者は村々の庶民の中に身を隠していた――乞食を装って隠れていたが、それでも可能な限り、たとえ密かにであっても聖なる信仰を教え、多くの人々を異教の迷いからキリストへと導いた。

12歳の少女マリーナもまた、ある人から、キリスト・イエス、すなわち真の神について、神の御言葉を聞くことになった。すなわち、キリストが聖霊によって聖母マリアの胎内に受肉し、彼女の処女性を損なうことなく彼女から生まれ、いかに多くの奇跡を行われたか、　人々の救いのために自ら　で苦難を受け入れ、死に、復活し、天に昇り、御自身を信じ、愛する者たちに、終わりのない命と栄光、そして永遠の御国を用意してくださったこと。　これを聞いた賢明な少女マリーナはキリス

[5160] 聖殉教者アンティオキオスは、ディオクレティアヌス帝の治世中に亡くなった。その没年は不明である。6世紀にはすでに7月16日に彼の記念日が祝われていたことが、4月22日に教会で記念される聖テオドロス・シケオスの『聖人伝』から明らかである――この日付の下に、彼の『聖人伝』も掲載されている。

[5161] ピシディアは小アジアの地域である。

トを信じ、その心は神の愛に燃え上がり、もはやキリスト・イエス以外の何事についても語らず、考えもしなかった。あるいは、真の神についての話を耳にするたび、彼女の注意はすべてそこに注がれた。　そして、心からキリストを信じた彼女は、まだ彼女に洗礼を授けることのできるキリスト教の司祭がいなかったため、洗礼を受けてはいなかったにもかかわらず、口をもってキリストを告白することを恥じなかった。　また、マリーナはキリストのために自らの血を流し、それを洗礼の浴槽として用いて洗礼を受けたいと願っていた。彼女は、主のために命を捧げた多くの男女の聖なる殉教者たちが、自らの血によって洗礼を受けたという話を聞いていたからである。彼女は彼らに倣おうとしたのである。

エデシオスは、娘のマリーナがキリストを信じたことを知ると、彼女を憎み、もはや娘とは見なさず、他人のように扱うようになった。しかし、その娘は天の父にすべての希望を託していた。十五歳になり、ある時、彼女は父の羊が放牧されている野原を見に外へ出た。　その時、ピシディアのアンティオキアへ向かっていたキリスト教徒迫害者が彼女と偶然出会った。その美しい娘を見て、総督は彼女の並外れた美しさに驚嘆し、たちまち彼女に心を奪われ、妻にしようと考えた。彼は馬を止め、娘に尋ね始めた。

「お嬢さん、あなたはどこの家系で、誰の娘なのか、そしてお名前は？　自分について真実を話してくれ。君は実に美しい。もし両親が自由の身なら、私は君と合法的な結婚をする。もし誰かの奴隷なら、私は君を買い取って、私の元へ連れて行くつもりだ。」

その娘は、美しさ以上に貞節に優れており、自分が誰の娘で、名前が何であるかを穏やかに答えた。また、自分がキリストのしもべであり、天と地を創造された唯一の神を信じ、心からの愛をもって神と結ばれており、他の花婿を望んでいないことさえ隠さなかった。　彼女がキリスト教徒であると聞くと、キリスト教徒を拷問する許可を与えられていた総督は、兵士たちに彼女を捕らえて街へ連行するよう命じたが、それは敬意を込めてのことだった。彼女の処女らしい分別ある言葉に、彼は彼女をますます愛するようになり、拷問の脅しで彼女をキリストから遠ざけ、自分との結婚を説得できると期待したのだ。　一方、乙女は兵士たちに連行されながら、皆が聞こえるように神に祈り、こう言った。

「主イエス・キリスト、わが神よ！私を見捨てず、私の魂を滅びに委ねないでください！私の敵に打ち負かされませんように、彼らの狡猾な言葉によって私の耳が汚されませんように、私の心が彼らの邪悪な誘惑に屈しませんように、私の心が彼らの恐ろしい脅しに怯えませんように！　私の信仰が泥や泥沼に投げ込まれることのないよう、善を憎む悪魔が私を喜ぶことのないよう、どうか御座の高みから助けを送り、知恵を与え、私の口を開かせてください。そうして、御力に支えられ、御恵みによって知恵を与えられた私が、恐れることなく拷問者の問いに答えられますように！　ああ、わが主よ、この時、憐れみをもって私を見守ってください。今、私は狼の中にいる羊のようであり、猟師の中にいる鳥のようであり、網にかかった魚のようなのです。どうか来てください。そして、敵の策略から私を救い出してください！

聖女は、ピシディアのアンティオキアの町に着くまで、道中ずっとこのように祈り続けました。

街に到着すると、総督は、その不敬虔な慣習に従い、まず邪悪な神々に犠牲を捧げ、王たちへの荘厳な賛美を捧げた。そして、見つけたキリスト教徒たちを捕らえ、拷問までの間、彼らを監視させるために牢獄に投獄した。一方、乙女マリーナについては、ある高貴な女性たちにその身を守るよう命じた。　翌日、厳粛な裁判を開き、まず聖マリナを尋問に連れてくるよう命じた。彼の頭の中は彼女のことばかりだった。少女が連れて来られると、彼はその並外れた美しさを貪欲な眼差しで見つめ、彼女への肉欲的な愛がますます燃え上がっていった。そして、彼は狡猾に彼女に語りかけた。

「美しい乙女よ、すべての神々が知っている通り、私はお前の若さを惜しみ、美しさに満ち溢れたお前の若々しい体を慈しんでいるのだ。　だからお願いだ、私の言うことを聞いてほしい――神々に生贄を捧げれば、お前は幸せになれる。すぐに多くの財産を手に入れ、裕福になり、同年代の誰よりも幸せになり、この街のどの女性よりも尊敬されるようになるだろう。

すると、聖マリーナはこう答えました。

「私は、天の父と、その独り子、そして至聖なる御霊、三位一体の唯一の真の生ける神を信じることを学び、神を礼拝し、常に賛美の捧げ物を捧げることに慣れています。ですから、私が知らない神々には礼拝せず、彼らに捧げ物も捧げません。　彼らは魂もなく、感覚もなく、自らを認識することさえできない。自分たちが崇められているのか、冒涜されているのかさえ知らないのだ。私は、私の創造主にふさわしい敬意を、彼らには捧げない！」

エパルクは言った：

「マリーナよ、もう一度お願いだ。私、すなわちほぼ無敵の神々の言葉に耳を傾けてほしい。彼らはよく知っている。もしあなたが私の助言に従えば、すぐにすべての市民の目の前で大きな名誉に浴することになるのだ。私はあなたを妻として迎え、皆が私の最愛の配偶者としてあなたを尊敬し、私はあなたに名誉と栄光を与え、あなたは私に喜びをもたらし、私の人生を甘美なものにしてくれるだろう！　しかし、もしあなたが私の言うことを聞かず、私からの愛を拒むならば、多くの災難に見舞われることになることを知っておきなさい。あなたは、私が望んでいないにもかかわらず、私にあなたを苦しめ、その美しさや健康、そして甘美な人生を台無しにさせることになるでしょう。あなたは残酷で耐え難い苦痛にさらされ、火と鉄によって滅びてしまうのです！

聖女はこう答えた。

「司教よ、私のキリストへの信仰を、あなたの不信仰に変えようと期待してはならない――甘言でも脅しでも。私は、私のために自ら進んで苦しみを受けた主の忠実なしもべである。　もし主が、聖母マリアから授かったご自身の至聖なる御体を惜しまず、私のために十字架上の磔刑と死を耐え忍ばれたのなら、私もまた、主のためにあらゆる苦しみを受け入れ、死ぬべきであり、自分の罪深い肉体や健康を少しも惜しむことはない。あなたの脅しで私を怖がらせようなどと考えてはならない。私はあらゆる苦しみと死に備えている。　私が希望を寄せる御方が、私を強めてくださるでしょう！　あなたが私に語る結婚や名誉、栄光、富といったものは、私にとってはすべて嫌悪すべき、忌まわしいものです。まさか私が、不死の婚約者であるキリスト、天の王を見捨てて、魂の死んだ、悪臭を放つ犬と結婚するなどということがあるでしょうか？　決してありえません！

聖マリーナのこのような大胆な言葉を耳にした司教は、腹を立て、侮辱されたと感じ、激しく怒り、たちまち愛を敵意と憎悪に変え、キリストの花嫁から衣服を剥ぎ取り、彼女を地面に寝かせ、容赦なく鞭で打つよう命じた。　聖女は長い間、容赦なく打ち続けられた。彼女の乙女の体は傷で引き裂かれ、傷口からは血が小川のように流れ出し、大地を赤く染めた。それを見て、民衆は、これほど美しい乙女がこれほど残酷に苦しめられていることに同情を覚え、多くの人が涙を流した。一方、告示役は叫んだ。

「マリーナよ、神々に生贄を捧げよ。その美しさを無駄に滅ぼすことなく、この甘美な命を早々に失うことのないように！」

しかし、殉教者は神へと霊的な目を向け、天からの助けと、この苦難の業を貫くための強さを求めて祈った。彼女はキリストの恵みに支えられ、拷問の痛みを感じなかった。まるで傷が彼女自身ではなく、他人の体に刻まれているかのようだった。民衆の中には、彼女にこう言う者もいた。

「お嬢さん、なぜ自らその美しさを台無しにするのですか？　なぜ従わないのですか？　見てください、裁判官はどれほど残酷か。彼はあなたを滅ぼし、あなたの記憶はこの地上から消え去ってしまうでしょう。私たちはあなたを気の毒に思います！」

すると、聖女は彼らを叱責するように大声で答えた。

「悪辣な助言者たちょ、邪悪な手先たちょ、お前たちは私を誘惑しょうとしている！　かつて楽園で古の蛇がエバに悪辣な助言を与えたように、今お前たちは私に、私の神から背くよう勧めている。私から離れょ、不法者どもょ。お前たちは私を誘惑することはできない。なぜなら、私は魂のすべてをキリストに捧げているからだ！」

その後、処刑人たちが彼女への殴打をやめると、拷問官は苦しむ彼女にこう言った。

「これはお前の苦しみのはじまりに過ぎない、マリーナ。もしお前が反抗を続けるなら、さらに大きな苦しみを味わうことになるだろう。」

聖女はこう答えた。

「あなたや、あなたの父である悪魔が望むことは何でもしなさい。私は苦しみなど気にも留めない。キリストが私を助けてくださるからだ。キリストはまもなく、あなたたちのあらゆる策略を恥じ入らせるだろう。」

司教はさらに激怒し、彼女を釘で板に打ち付け、鉄の三叉の棘でその体を削るよう命じた。しかし彼女は天を仰ぎ見て、こう語った。

「敵たちが私を取り囲み、私に対して悪を企てています。しかし、わが主ょ、私を見守り、憐れんでください。命を与える御霊の助けを私に送ってください。　どうか御霊が、私が最後の息を引き取るまで、あなたの至聖なる御名を告白する知恵を授けてくださいますように。また、悪魔とその手下たちに勇敢に立ち向かう強さを与えて、私が彼らに打ち勝ち、恥をかかせてやれるようにしてください。　あなたを愛し、あなたのために処女性を守る者たちの模範となるにふさわしい者とさせてください。そうして、あなたの義の裁きの時、私が彼らと共に右の座に立つことができますように！

聖女はそう祈り続けましたが、残酷な拷問者の残忍な手下たちは、まるで人喰い人のように、三叉の矛で聖女の体をますます激しく引き裂き、血まみれの肉片が地面に落ち、　の骨がむき出しになるほどでした。　司教はそのような拷問を見るに耐えられず、顔を覆って背を向けた。一方、その場にいた者たちは皆、聖女のその忍耐力に驚嘆していた。すると、拷問者が再び彼女に語りかけた。

「いつまで頑なに抵抗するつもりだ、マリーナょ？　お前の体はすでに引き裂かれてしまった。せめて今こそ、神々に生贄を捧げることに同意しなさい。そうすれば、完全に滅びることは免れるだろう。」

殉教者はこう答えた。

「忌まわしい犬め！豚め！お前は人間の肉を貪りながら、まるで私を憐れんでいるかのように、慈悲深いふりをしているのだ！」　私は、ご自身を惜しまず、私のために大きな苦しみを受けられたキリストのために、自分自身を憐れんではいない。もし私がお前の狂った助言に従い、この肉体を惜しんだとしたら、私の魂は天の御国で、いったいどのような栄冠を授かるというのか?

その後、地方総督は殉教者を釘から降ろし、深く陰鬱で、あらゆる悪魔的な恐怖に満ちた特別な牢獄に閉じ込めるよう命じた。そこは死刑判決を受けた者たちが収監される場所であった。

その牢獄に一人きりで座り（当時、そこには他の死刑囚はいなかった）、聖なる殉教者は心の温もりを込めて神に祈り、心の奥底からこう叫んだ。

「至高なる神ょ、すべての天の軍勢は畏れおののきながら御前に立ち、すべての原理と権威は御顔の前で震え、あらゆる被造物は御全能の力によって保たれ、変容し、新たにされるのです！　主ょ、天の高みから、御自身の栄光の御座から、この謙虚で、不品行で、不適格な御僕である私を見下ろしてください。私はあなたに希望を置き、あなたのもとに逃げ込み、あなたの御名のゆえに苦しんでいます。　慈愛に満ちた御方ょ、裂かれた衣のように傷ついた私の体を癒やし、私の魂を新たにし、御国のためにそれを守ってください。　私の敵を打ち負かし、砂が足で踏みつけられるように踏み潰させてください。そうして、あなたの無敵の助けによってその力を消し去り、私の中であなたの至聖なる御名が永遠に栄光を受けるようにしてください。

夜が更けても、聖女は神への祈りを絶やすことがなかった。その時、悪魔は夢の中の恐ろしい幻影をもって殉教者を脅かそうと大胆にも企てた。神は御自身の御心に適う者を大いに栄光に輝かせるために、これを許されたのである。突然、牢獄が揺れ動き、まるで煙の中の炎のような、ある種の陰鬱な光が現れた。　続いて、悪魔が色とりどりの、巨大で恐ろしい大蛇の姿で現れた。その体は、見える限り、無数の小さな蛇やトゲヘビに囲まれ、巻きつかれていた。大蛇は恐ろしい音を立て、巨大で貪欲な口を大きく開けて、耐え難い悪臭を放った；　それは殉教者の周りを回り、彼女に恐怖と戦慄を植え付けた。そして、その忌まわしい口を開き、聖女に襲いかかってその頭をつかみ、飲み込もうとした。まるでかつて預言者ヨナが鯨に飲み込まれたように（ヨナ書2:1）、殉教者もまた蛇に飲み込まれたかのようだった。　しかし、彼女は絶望も疑いもせず、全精神を神に注ぎ、十字架の印を自らに刻むと、たちまち蛇の腹が裂け、彼女自身は蛇から解放され、無傷で無事であることがわかった；　同時に、あの恐ろしい悪魔の幻影はすべて滅び去った。大地が裂けて、蛇とそれに従うすべての蛇を飲み込み、地獄へと投げ込んだ。一方、聖なる殉教者には天の光が降り注いだ。　上を見上げると、牢屋の天井が開き、まるで太陽の光のようものが上から降り注いでいるのが見えた。また、言葉では言い表せないほどの光を放つ大きな十字架も見え、その十字架の上には雪のように白い鳩がいて、人間の声で彼女にこう語りかけた。

「喜びなさい、マリーナよ、キリストの賢き鳩よ。あなたは邪悪な敵に打ち勝ったのだ！喜び、楽しみなさい、天のシオンの娘よ。あなたの喜びの日が訪れたのだ。あなたは賢き乙女たちと共に、朽ちることのない、不死の花婿、天の王の宮殿に入るのだ！」

鳩のその言葉を聞いたとき、マリーナは言葉に尽くせない喜びと甘美さに包まれ、引き裂かれた彼女の体は癒え始め、彼女自身も、傷が塞がり、潰瘍が皮膚で覆われ、痛みと衰弱が消え去り、かつてのように全身が健康で美しくなったのを感じた。彼女は喜びながら神に感謝した：

「主よ、あなたを祝福し、私の神よ、あなたを賛美します。　御名を賛美します。あなたは私に憐れみを示し、私を訪れ、私の体を癒やし、私の魂を強め、私を敵の手に渡さず、むしろ彼らの恐ろしい姿を私に示し、彼らを最も深い深淵に投げ込み、その恐怖を私から遠ざけてくださいました；今、私の救い主なる神よ、あなたを喜び、楽しみながら、慈愛に満ちた人愛の主よ、私を聖なる洗礼の浴に与えてください。そうして、血と水で清められた私が、聖なる乙女たち、すなわちあなたの花嫁たちと共に、あなたの天の宮殿に入るにふさわしい者となれますように。あなたは永遠に祝福された方です！

聖マリナは、このような幻視や啓示、そしてこのような祝賀と喜びの中で、夜が明けて彼女の最後の偉業の時が来るまで、その夜を過ごした。

朝が明けると、オリンブリウス司教は再び、不義で不敬虔な裁判の席に着いた。民衆は皆、その光景を見物するために集まった。　拷問のために、牢獄から殉教者を連れてくるよう命じられた。彼女の顔は明るく　、全く健康で無傷であり、昨日の傷跡さえも残っていないのを見て、エパルヒは大変驚き、呆気にとられて黙り込んだ。昨日傷を負った殉教者が、たった一晩で完全に回復したことに、どうしたことか理解できなかったのだ。　民衆もこの奇跡的な治癒に驚嘆した。ある者はキリストの力を称え、またある者はこれを魔術の仕業だと考えた。その後、司教はようやく口を開き、聖女にこう語りかけた。

「ほら、マリーナ、我らの神々がどれほどあなたを慈しんでいるか、わかるだろう！　彼らはあなたの若さと美しさに憐れみを抱き、あなたの傷を癒やしてくれたのだ。　あなたも、彼らから受けた恩恵への感謝として、彼らに供物を捧げるべきだ。それ以上に、あなたは父の模範に従い、その後継者となるべきだ。父は司祭として神々に仕えているのだから、あなたも巫女となり、生涯をかけて神々に仕えなければならない。

聖女はこう答えた。

「私が、私の真の、生ける神を捨てて、あなた方の偽りの、死んだ神々に仕えるなど、ふさわしくありません。それどころか、あなたは天の唯一の神を知り、その力を私に見るがままに、神を信じるべきです。あなたは昨日、私をバラバラに引き裂きましたが、神は今、たちまち私を健康で無傷の状態に戻してくださったのですから！」神こそ、人間の魂と肉体の全能の医者である！

激昂した地方総督は、再び聖女を拷問するよう命じた。彼女は再び木に吊るされ、火のついたろうそくが持ち込まれ、胸や脇腹を焼かれた。　しかし彼女は、内面へと深く入り込み、心の奥底で神に祈りを捧げ、黙って耐え忍んだ。彼女は炭のように焼け焦げ、まるで食用の肉のように引き裂かれた。そして、かろうじて息のある状態で木から降ろされたとき、彼女は大声でこう言った。

「主よ！　あなたは御名のゆえに、私に火を通ることを許してくださいました。どうか聖なる洗礼の水を通ることも許し、罪から清められた私を、あなたの安息へと導いてください。」

すると、拷問者は、殉教者が「水」に言及したのを聞いて、こう言った。

「この忌々しい女、喉が渇いているようだ。水を飲ませてやれ！」

そして彼は、巨大な水の樽を持ってくるよう命じ、縛られた殉教者をその中に投げ込み、水に沈めて溺死させようとした。使用人たちが彼女を水に投げ込もうとしたとき、彼女は声を張り上げて言った。

「主イエス・キリストよ、束縛から解き放ち、死と地獄の絆を断ち切り、御自身の神聖な力によって墓からよみがえらせてくださる方よ！　あなたのしもべに目を留め、私の束縛を解き放ってください！そして、この水が、永遠の命への誕生のための、私が切望する聖なる洗礼となりますように。そうして、古い人を脱ぎ捨て、新しい人をまとい、婚礼の衣を身にまとって、あなたの宮殿へと参り上ることができますように！

殉教者がこのように祈っている間、使用人たちは彼女を水の入った樽に放り込み、水の中に沈めて溺れさせようとした。しかし、突然大地が揺れ動き、殉教者を縛っていた縄がほどけ、使用人たちは恐怖に駆られて樽から逃げ去った。　殉教者の頭上には、言葉に尽くせない光の輝きが放たれ、以前彼女が見たあの白い鳩が再び現れた。その鳩は、口に金の冠をくわえた太陽のように、上空から降りてきて、殉教者の頭上を漂い、その足で彼女に触れてから、再び高みへと飛び去っていった。この幻視は、聖女だけでなく、そのような幻視を見るにふさわしい、その場に居合わせた者たちの一部にも見えた。民衆の中には多くの秘密のキリスト教徒がおり、彼らはこの光景を目にする恵みにあずかった。一方、聖女は水の中に立っていたが、水に沈むことはなく、至聖なる三位一体、すなわち父と子と聖霊の偉大なる御名を賛美し、祝福しながら歌っていた。　その後、聖女の上に天に届くような火の柱が現れ、その柱の上には、まるで水晶のような十字架が輝き、明るい光線を放っていた。一羽の鳩が舞い上がり、十字架の頂上に止まった。そして上空から声が聞こえ、皆がその声を聞いた。

「平安あれ、キリストの花嫁、マリーナよ！今、あなたは主の御手から、決して枯れることのない徳の冠を受け取り、聖人たちと共に天の御国で安らぐであろう。」

その声を聞き、殉教者が火傷の痕ひとつなく、無傷で美しく水から上がってくるのを見た途端、大勢の男女がキリストを信じ、公然と自分たちをキリスト教徒であると認め、キリストのために死をも厭わない覚悟であるかのように見えた。　イゲモンは、これほど多くの人々がキリストに帰依したのを見て恐怖に駆られ、どうすべきか途方に暮れた。その後、激怒した彼は、手元にいた剣で武装した軍隊を民衆の前に引き出し、キリストの御名を賛美する者すべてを斬り殺すよう命じた。　すると、民衆の中の不信仰者や臆病者たちは皆逃げ去ったが、真に信仰する者たちは自ら剣の下へと歩み出た。こうして、男女合わせて一万五千人もの人々が殺され、自らの血によって洗礼を受け、すべての罪から清められて、殉教の冠を戴き、主の喜びの中へと入っていった。　その後、司教は殉教者をも剣で斬るよう命じた。聖女が処刑場へと連れ出されると、彼女は護送する者たちに少し待ってほしいと頼み、その後を従う民衆に向かって、　、唯一の真の神、万物の創造主を知るよう、また悪魔の

欺瞞や偶像崇拝という破滅から遠ざかるよう諭した。　その後、彼女は祈りを捧げ始め、すべての人のために長く祈り続けた。すると突然、大地が揺れ動き、皆に恐怖が襲いかかり、多くの人が恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。処刑人も倒れた。　これは、私たちの主イエス・キリストが、聖なる天使たちと共に天から御自身の花嫁のもとに現れ、彼女を御自身の安息へと招き、その魂を受け入れるために両手を差し伸べられたのである。　彼女は言葉に尽くせないほどの喜びに満たされ、処刑人に命じられたことを一刻も早く実行するよう促した。彼女は自らの尊い頭を剣の下に差し出し、斬首された[5162]；そして彼女の魂は主の御手によって受け入れられ、天の住まいへと連れ去られた。こうして、聖大殉教者マリーナは7月17日、その殉教の業を全うした。 彼女の受難については、そのすべての拷問を目撃し、聖女に示された幻視を拝見する恵みにあずかった、神の僕テオティムという目撃者が記述しており、　彼はこれを、愛すべきキリストの花嫁マリーナの栄光と記憶を称え、また、人愛に満ちた私たちの救い主キリストの栄光のために、信徒たちに伝えました。父と聖霊と共に、私たちからも、今この時、そして永遠に、主への栄光と賛美がありますように。アーメン。

トロパリオ、第3調:

貞潔の美徳に満ちた乙女よ、朽ちることなき冠を戴いたマリーナよ。殉教の血に染まり、癒しの奇跡を現して、敬虔なる殉教者として、汝の苦難の勝利の栄誉を受けられた。

7月31日

7月18日（旧暦）

聖殉教者エミリアンの殉教

記念日 7月18日

不敬虔な背教者ユリアヌスの治世[5163]、キリスト教徒に対する残酷な迫害が引き起こされ、それは旋風や嵐のように全宇宙を混乱に陥れた。　ローマ帝国全土、あらゆる地方や都市に、キリスト教徒は、いかなる部族や民族に属していようとも、男女を問わず、あらゆる年齢を問わず、容赦なく様々な拷問と残酷な死に処せられるという命令が下された。　このような不義な命令によって、この神を憎む皇帝は正義の法を破り、キリストとその僕たちに対する怒りと敵意に燃え、東から西に至るまで、容赦なく流されたキリスト教徒の血で染め上げた。　また、キリスト教徒を苦しめるために各地や都市に派遣した他の残忍な総督たちの中でも、彼はミシア地方のドロストルという都市に、カピトリナという名の容赦のない拷問者――人々の破滅者であり、偶像の奉仕者――を任命した。　その都市に到着すると、彼はまず偶像の神殿に現れ、悪霊たちに生贄を捧げ、魂のない偶像にひれ伏した。　翌日、彼は広場に設けられた法廷へと出向き、高い玉座に腰を下ろし、キリスト教徒を威嚇するかのように高慢かつ威圧的な態度で、皇帝の勅令を読み上げた後、この街に神々に敵対する者はいないか、キリスト教徒を名乗る者はいないかと、入念に尋問し始めた。　市民たちは誓いを立てて、こ

[5162] 聖殉教者マリーナの逝去は、3世紀末か4世紀初頭のことである。彼女の尊い遺骸は、1204年に十字軍がコンスタンティノープルを占領するまで、同市のパンテポンタ（全知のキリスト）修道院に安置されていた。　別の伝承によれば、彼女の聖遺骨は908年にアンティオキアから西へ移され、トスカーナのモンテ・フィアスコネに安置された。現在、聖遺骨の一部（右手）はアトス山のヴァトペド修道院に安置されている。

[5163] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

の街にはそのような者は一人もおらず、皆が神々を崇拝し、毎日犠牲を捧げていると断言した。これを聞いたカピトリンのイゲモンは大変喜び、名士たち全員を自分の邸宅に昼食に招き、こう言った。

「あなたがたが先祖代々の神々を熱心に崇めていることがわかるので、今日は皆で一緒に食事をし、酒を酌み交わし、楽しもうではないか。」

その町には、エミリアヌスという名の秘密のキリスト教徒が一人いた。彼は、異教徒であるある高位の役人の奴隷であった。彼は、イゲモンと高官たちによる宴の最中、好機を捉えて（誰にも見られずに）一人で偶像の神殿に入り、鉄のハンマーを持ち込んで偶像を打ち壊し始めた。　彼は偶像を粉々に砕き、祭壇を倒し、供物を散乱させ、偶像の前に置かれていた巨大な燭台を壊して粉々にし、すべてを荒らした後、勇敢な戦士のように、心の中で喜びと勝利を噛みしめながらその場を去った。　彼の後に、異教徒の一人が神殿に入った。すべてが荒らされているのを見て、彼は恐怖に駆られ、急いでイゲモンと、彼と共に食事をしていた市民たちにそのことを報告した。　たちまち皆が動揺し、イゲモンは激怒して、誰がやったのかを突き止めるよう命じた。派遣された者たちは急いで向かい、まもなく畑から神殿の前を通りかかっていたある村人を見つけた。　彼らはその男を捕らえてイゲモンの元へ引きずり出し、悪党であるかのように殴打した。そして、多くの民衆が祭司たちと共に彼らの後を追い、皆、自分たちの神々への冒涜について語り合い、激怒していた。一方、祝福されたエミリアヌスは、この光景を見て、心の中でこう考えた。

「もし私が自分の行いを隠したとしても、そこから何の益があるだろうか。ただ自分の良心をさらに重くするだけか、あるいは私のせいで罪のない人が殺され、私は神の前で殺人者となってしまうだろう。」

そう考えた彼は、その村人を引きずり回して殴打していた者たちに向き直り、大声で叫びながら彼らを止めようとした。

「この罪のない人を放して、私を捕らえよ。あなたがたの無情な神々を打ち砕き、踏み躙ったのは私だ！」

彼らは村人を放すと、聖エミリアヌスを激しく捕らえ、殴打と侮辱を加えながらイゲモンのもとへ連行した。イゲモンは、民衆全員の前でいつもの裁判の席に着き、連れてこられたエミリアヌスを見て、市民たちに尋ねた。

「この者は誰？」

市民たちは答えた。

「これは、神々を打ち砕き、生贄を踏み躙った悪党です。」

イゲモンは怒りに満ち、市民たちを叱責して言った。

「以前、あなたたちはこの街には神々に敵対する者は一人もいないと言っていたではないか。ところが、あなたたちの怠慢のせいで、このような者が現れてしまった。この過ちの代償として、王室の金庫に1リトラの金を納めよ[5164]。」

市民たちにそう告げると、彼はエミリアヌスに向き直り、怒りを込めて問い詰めた。

「答えよ、不信心者よ、お前の名は何か！」

キリストの勇敢な戦士は答えた。

「私はキリスト教徒だ。」

イゲモンはさらに激怒して言った。

「お前の名前を言え、忌まわしい者よ！」

殉教者は答えた。

「私の両親は私をエミリアンと呼んでいましたが、真の神であるキリストは、私にキリスト教徒となる恵みを与え、その名で呼ばれるようにしてくださいました。」

[5164] リトラは、72ゾルトニクに相当する重量単位である。銀では約40ルーブル、金では最大500ルーブルの価値があった。

イゲモンは尋ねた。

「言え、不敬な者よ、誰が君に、不死の神々に対してそのような侮辱を投げかけるよう教えたのか？」

すると、キリストのしもべは答えた。

「神と私の魂が、あなたがたが神と呼ぶ魂なき偶像を打ち砕くよう私に命じられたのです。それは、それらが魂もなく、耳も口もなく、理性を持たず、ただ感じることのない石や木に過ぎないことを、すべての人に見せるためです。　知っておけ、万物を創造された真の神に対しては、私は冒涜などしていない。私が冒涜したのは、何も創造せず、むしろあなたがた自身によって造られた偽りの神々であり、私はそれらを永遠に滅びるよう、地面に投げ捨てたのだ！

これに対し、イゲモンは言った。

「神々を打ち砕いたのはお前一人か、それとも誰かがお前と共にいたのか？」

聖人はこう答えた：

「私一人、私のキリストの助けを借りて、あなた方の偶像を塵に打ち砕き、その供え物や燭台を足で踏みつけました。そして、それらの中には、この侮辱に対して私に復讐できるものは一つもなく、私の手から逃れることさえできませんでした。なぜなら、それらは無力で、感覚を持たないからです。それらを作る者たちよ、そしてそれらに希望を置く者たちよ、あなた方もそうあるべきです。」

イゲモンは激怒し、キリストの僕を裸にして殴打するよう命じた。殉教者の衣服が脱がされると、イゲモンは彼に言った。

「この忌まわしい者よ、誰が君に神々を打ち砕くことを教えたのか、言ってみよ。」

聖人はこう答えた。

「私はすでに前に言った通り、神と私の魂こそが私にそうするよう命じたのであり、他に誰もいないと、改めて言っておく。」

すると、イゲモンは家来たちに命じた。

「彼を裸にし、さらに激しく打ちつけよ。そうすれば、彼の傲慢さが何の役にも立たず、誰も私の手から彼を救い出せないことを悟らせるのだ！」

そして、彼らは残酷に彼を打ち始めた。

殉教者が激しく打ちのめされ、地面が彼の血で赤く染まるほどになったとき、イゲモンは聖人に尋ねた。

「言え、この忌まわしき者よ、誰が君にこの悪行を教えたのだ？」

すると、殉教者は殴打されながらもこう答えた。

「神と私の魂がこれを行うよう命じたと、すでに言ったではないか。それなのに、お前は依然として私を信じようとしない。しかし、私は悪を行ったのではなく、善を行ったのだ。なぜなら、私は悪魔を恥じさせ、神を賛美したからである。」

イゲモンは家来たちに言った：

「彼をひっくり返して、腹と胸を殴れ。この傲慢な男は、王の法律に背く者だ！」

そして、殉教者は長い間容赦なく殴打された。その後、イゲモンは聖人への殴打を止めるよう命じ、彼に尋ねた。

「お前は奴隷か、それとも自由人か？」

「私は市長の下僕です」と聖人は答えた。

そこで総督は、神々の敵であり王の命令に背くような奴隷を雇っているとして、エミリアンの主人である都市長を激しく非難し、彼に王庫へ銀一リトラの罰金を納めるよう命じ、殉教者には火刑を宣告した。　直ちに家来たちと大勢の民衆が聖人を捕らえ、街の外へ連れ出した。そしてドナウ川の岸辺で巨大な焚き火を焚き、そこに殉教者を投げ込んだ。　炎は聖人を包み込んだが、彼には触れ

なかった。その後、炎は周囲に遠くまで広がり、その届く範囲にいるすべての異教徒を焼き尽くし、ある者はひどく火傷を負い、他の者たちはかろうじて逃げ延びた。　一方、群衆の中にいた秘密のキリスト教徒たちは、炎が彼らにまで達していたにもかかわらず、火によるいかなる害も受けなかった。聖人は火の中に立ち、東を向いて、十字架の印で身を守り、神を賛美していた。そして、思う存分祈りを捧げた後、こう言った。

「主イエス・キリストよ、私の霊をお受けください[5165]！」

そう言い終えると、彼は横たわり、火がすでに消えかけていたその時、主のもとで息を引き取った。その遺体は火によって微塵も傷つけられておらず、髪の毛一本さえも焦げてはいなかった。そして、密かにキリスト教を信仰していた市民たちは、同じく密かにキリスト教を信仰していたイゲモンの妻のもとへ行き、聖人についてすべてを語り、火に奇跡的に無傷のまま残された殉教者の遺体を埋葬するために、夫に懇願するよう彼女を説得した。　彼女は夫に懇願し、夫は聖人の遺体を支障なく持ち帰ることを許可した。そして信者たちは遺体を運び出し、香りのよい布で包み、都市から三ポプリス離れた「ギジディナ」と呼ばれる場所で、栄誉をもって埋葬した。[5166]　。キリストのために殉教した聖エミリアヌスは、7月18日、 金曜日、カピトリヌス・イゲモンによって、ローマ人とギリシャ人を治めたユリアヌス・背教者の治世下、そして私たちを治める主イエス・キリストの治世下で、キリストと共に父と聖霊に、今そして永遠に、栄光と誉れが捧げられます。アーメン。

コンダク、第3調:

神聖な熱意に燃え上がり、共に燃える火を恐れず、恐れを知らず御意志に従って昇り、燃え盛る火によってすべてを焼き尽くされ、主へのいけにえとして捧げられた殉教者、栄光あるエミリアヌスよ。キリスト・神に祈り、私たちに偉大な憐れみを授けてくださるよう願ってください。

私たちの尊き父パムヴァの生涯

記念日：7月18日

尊者パムヴァは、エジプトのニトリウス山近くの荒野で、老齢に至るまで断食者としての生活を送りました[5167]　。彼の徳高く、神に喜ばれる聖なる生涯については、様々な出典から集められた以下の記述からも明らかなように、多くの偉大な教父たちが語っています。　まず第一に、聖アントニオス大聖人[5168]　は、パムヴァが神への畏れ（パムヴァはこれに満ち溢れていた）によって、自らに神の御霊を宿したと語っています。聖ピメンは次のように述べました。

「私たちはパムヴァ神父に三つの行いを見ました。それは、毎日の断食、沈黙、そして手仕事です。」

[5165] 聖殉教者エミリアンの死は363年に訪れた。

[5166] その後、コンスタンティノープルに聖殉教者エミリアヌスを称える教会が建立され、殉教者の尊い遺骨はそこへ移された。　コンスタンティノープルでこの教会が建てられた地域は、ラヴダと呼ばれていた（ギリシャ語の「杖」に由来する。すなわち、コンスタンティヌス大帝の時代にコンスタンティノープルへ持ち込まれ、聖母マリア教会に安置されたモーセの杖を指し、エミリアンの教会はその近くに位置していた）。

[5167] エジプトは、多くの修道士たちが住む一般的な場所であった。修道院は中エジプトにも下エジプトにもあった。特にエジプトで名高かったのは、下エジプトにあり、ナイル川を越えて内陸深くに位置するニトリアの砂漠であった。

[5168] 聖教会では、1月17日に彼の記念日が祝われる。

聖テオドール・ストゥディトス[5169] は、この同じ至福の父について次のように証言している。「パムヴァは、行いにおいても言葉においても、高き者としてのふさわしい称賛を受けるに値する」[5170] 。 一方、ソクラテス・スコラスティクス[5171] は、彼について次のように記している。修道生活を始めた当初、彼は読み書きができなかったため、ダビデの詩篇を学ぶためにある兄弟のもとを訪れた。 冒頭で第38篇の最初の節、すなわち「*わたしは自分の道を注意深く見守り、自分の舌で罪を犯さないようにする*」という言葉を聞いた彼は、他の節を聞くことを拒み、次のように言って立ち去った。

「この一節さえ、実際に実践できるようになれば、それだけで十分だ。」

それ以来、彼はもう師のもとを訪れることはなかった。

六ヶ月後、師はある場所で彼を見かけ、こう尋ねた。

「なぜ、これほど長い間、私のところに来なかったのか？」

パムヴァは答えた。

「その詩を実際に実践する術を、まだ身につけていないからです。」

それから何年も経った後、知人の司祭の一人が彼に尋ねた。

「兄弟よ、その詩の教えはもう身につけたか？」

パムワは答えた。

「十九年間、休むことなく学び続け、ようやくその教えを実践できるようになったばかりだ。」

当初、聖パムワは文盲だったが、後に神から知恵を授かり、聖書を深く理解するようになった。彼は他者にとっても優れた教師であった （パラディオスが彼について記している通り[5172]；エジプトで名高い次の四人の兄弟、ディオスコーロス、アモニオス、エウセビオス、エウフィミオスは彼の弟子であり、彼らは「偉大なる者たち」と呼ばれ、聖ヨハネス・クロイソストモスの伝記[5173] にも言及されている。 その筆頭であるディオスコーロスは、後にエルモポリスの司教となった。これは、第四回全地公会議において異端者とされ、聖なる教父たちによって破門されたディオスコーロス[5174] とは別人であり、それより以前に生きた同名の別の人物である。 さらに、聖イラリオン大聖人の伝記に言及されている、アリウス派から追放されたキリストの司教であり殉教者である、高潔なドラコンティウス も、若き日に至福のパムヴァの弟子であった。これらの弟子たちの師はパムヴァであった。

この聖人は、他の多くの偉大な美徳の中でも、金や銀に対する完全な軽蔑によって特に際立っていた。 ローマ出身の聖メラニアが、キリストの御名のために自らの豊かな財産をすべて貧しい人々に配りながら各地を巡り、アレクサンドリアに到着したとき、聖パムヴァの評判を耳にし、旅人を

[5169] その記念日は11月11日および1月26日です。

[5170] 乳食の土曜日のカノン、第5歌（このカノンは聖テオドール・ストゥディトスによって書かれた）。

[5171] ソクラテス・スコラスティコス——5世紀に生きたギリシャの教会史家。彼は、テオドシウス2世の治世までを網羅した『教会史』を著した。 – 以下に引用するソクラテス・スコラスティクスの著作の一節は、彼の『教会史』第4巻（第18章）にある。

[5172] その記念日は、聖教会において「チーズの土曜日」に祝われる。

[5173] その記念日は11月13日である。

[5174] 第4回全地公会議は451年にハルキドンで開催され、エウティキオス派の異端を非難するためにテオドシウス2世皇帝によって招集された。 この異端の創始者はコンスタンティノープルのアルヒマンドリトス・エウティキオスであり、彼はイエス・キリストにおいて、位格的結合の下で人間性が神性に完全に吸収されたと主張した。公会議はこの偽教師を非難した。 この公会議では、エウティキオスの誤った教えに同調していたアレクサンドリア総主教ディオスコーロスもまた、非難された。

受け入れる司祭であるアレクサンドリアのイシドールと共に彼の元を訪れた。　彼女は三百リットルの銀を携えてきて、パムヴェに、持ってきた銀の中から好きなだけ受け取ってほしいと頼んだ。しかし、彼はそれを見ることさえせず、手仕事を続ける――彼は藁マットを編んでいた――ただ彼女にこう答えただけだった。

「主が、あなたが主に対して示しているその熱心さに対して、あなたに報いてくださいますように。」

それでも彼女が執拗に「少しでも受け取ってほしい」と頼み続けると、聖人は仕える兄弟にこう言った。

「与えられたものは慎重に受け取り、リビアの[5175] や諸島の兄弟たちに届けて配りなさい。彼らの土地は不毛であるため、彼らは非常に貧しい。しかし、エジプトの修道院の兄弟たちには何も与えてはならない。彼らの土地は肥沃であり、自らの労働によって豊かさを得ることができるからだ。」

そこで、聖女メラニアは、持ち込まれた銀のすべてを、貧しい人々に配るようその兄弟に渡し、尊者パムヴェにこう言った。

「父上、私が銀をどれだけ差し上げているか、ご確認ください。三百リトラです。」

すると、彼は彼女にこう答えました。

「娘よ、あなたが銀を捧げた神は、あなたがどれだけの量を持ってきたかなどとは尋ねられません。果たして、*『誰が手のひらで水を掬い、指一本で天を測り、地の塵を量り器に収め、山々を天秤にかけたのか』*（イザヤ40:12）と語られた方が、あなたの銀の量を知らないというのか？ もしあなたが私に銀を渡すのなら、当然、いくら渡すか教えてくれるだろう。しかし、あなたはそれを神に捧げているのだ。神は未亡人の二レプタさえも軽んじることなく、多くの富よりも喜んでそれを受け入れられた（マルコ12:42）。だから黙っていなさい。人前で自慢してはいけない！（マタイ6:2）

ある時、ピオル神父が尊者パムヴェのもとを訪れ、小さな硬くなったパンの切れ端を持参しました。パムヴェが「

「父よ、なぜパンを持って来たのですか？」

ピオル神父はこう答えました：

「あなたを気まずくさせないためです。（つまり、パンであなたを不快にさせないため、自分のものを食べるためです）。」

数日後、聖パムヴァはピオル神父のもとへ赴き、自分の乾いたパンを水に浸して持参した。それを見たピオルは尋ねた。

「父よ、なぜ水に浸したパンを持って来たのですか？」

彼はこう答えた。

– パンだけでなく、水においても、あなたに気兼ねをさせないためです。

ある日、聖アファナシオス・アレクサンドリアスは、パムヴァ神父にアレクサンドリアへ来てほしいと頼んだ。道中、長老は数人の兄弟たちと共に、通り過ぎる修道士たちに全く注意を払わないで座っている信徒たちを見かけた。パムヴァはそれらの信徒たちにこう言った。

「立ち上がって、僧侶たちに敬意を表して挨拶し、彼らから祝福を受けなさい。彼らはしばしば神と語り合い、その口は神聖なものだからだ。」

その後、町に着くと、彼は人々を誘惑するような身なりをした娼婦を目にして、老僧は涙を流した。すると、兄弟たちは彼に尋ねた。

「なぜ泣いておられるのですか、父上？」

彼は答えた。

[5175] リビアは北アフリカに位置していた。

「私が泣くのには二つの理由がある。この女性の魂の滅びについて、そして、私が自分の魂に対して、彼女が自分の肉体に対して持っているような熱意を持っていないということだ。彼女は人々に好かれるために身なりを整えたが、私は神に喜ばれるように自分の魂を美しく飾ることを気にかけていないのだ。」

常に深い感銘に満たされていた聖パムヴァは、決して笑うことはなく、顔に微笑みさえ浮かべたことはなかった。ある時、悪霊たちは彼を笑わせようと企んだ。彼らは羽根に紐を結びつけ、まるで重い荷物を引きずるかのように彼の目の前で引きずりながら、互いに叫び合った。

「助けて！　助けて！」

それを見たパムヴァ神父は笑ってしまった。すると悪魔たちは喜び、叫んだ。

「ほら、ついにパムワが笑ったぞ！」

すると彼はこう言い返した。

「私は笑ったのではなく、お前たちの無力さを嘲笑ったのだ。羽一本すら持ち上げられないではないか！」

悪魔たちは恥じ入って逃げ去った。

彼の弟子たちはさらに、彼が会話において非常に慎重で、答えも思慮深かったと語っている。聖書について、あるいは何らかの事柄について尋ねられたとき、彼は即座に答えることはなく、まず長い間黙って一人で考え込み、それからよくこう言ったという。

「この質問にどう答えればよいか分かりません。」

そして、3日後、あるいは3週間後、時には3ヶ月経ってからようやくその質問に答えた。彼の答えは常に公正で、極めて有益なものだった。それは、神の恵みが彼の知性に注がれていたからである。それゆえ、人々は皆、彼の口から発せられる言葉を、あたかも神の口から発せられたかのように畏敬の念を持って受け止めた。神が彼の口を通して語っておられたのである。

この聖人の時代、同じエジプトの地方に、パイシイとイザヤという実の兄弟がいた。彼らは裕福な両親の子供であり、父親は高価な商品を積んでスペインまで旅をする有名な商人だった。両親の死後、彼らに相続された莫大な財産を分け合った後、二人は互いにこう言った。

「私たちはどのような人生を選ぶべきだろうか？もし父のように商売を続けるなら、私たちの死後、その労苦の果実が誰の手に渡るのか、誰にも分からない。それに、強盗や難破といった災難に遭わないかと、常に恐れなければならないだろう。　それならば、修道生活を選び、父の財産を天の宝庫に捧げよう。そうすれば、我々の魂も救われるだろう。

このように相談した末、二人は世俗の生活を捨てた。一人は直ちに自分の相続分を貧者や教会、修道院に施し、自分には何も残さず、荒野へと去り、そこでささやかな手仕事を身につけ、その手仕事によって生計を立てた。そして、彼は一人で神に喜ばれるように、熱心に断食し、勤勉に働きながら暮らした。　もう一人は、世俗の住居からほど近い場所に小さな修道院を建て、少数の兄弟たちを受け入れ、旅人に宿を提供し、貧しい人々に食事を振る舞った。　彼は旅人用の宿と病院を建て、訪れるすべての人に宿を提供し、病人の世話に熱心に励んだ。また、土曜日と日曜日には、貧しい人々のために二回、三回、あるいは四回もの食事を用意した。　このように数年間過ごした後、二人の兄弟は主のもとへ召された。彼らの死後、多くの兄弟たちがその二人の兄弟について語り合った。ある者は、財産をすぐにすべて施し、砂漠で沈黙の生活を送った方をより称賛し、またある者は、自分の財産を用いて長い間、旅人、貧者、病人に奉仕し続けたもう一方を好んだ。　この論争で長い間互いに譲らなかった兄弟たちは、どちらの兄弟の生き方が神に喜ばれるか、またどちらがより大きな報いを受けるのかを知りたくて、尊い父パムヴァに尋ねに行った。すると、尊いパムヴァは彼らの質問に次のように答えた。

「両者とも神の前で完全である。旅人を迎え入れた者は義人アブラハムに、隠遁者は聖なる預言者エリヤに喩えられ、両者とも等しく神に喜ばれたのである。」

しかし、兄弟たちは依然として意見が合わず、互いに反論し合った。ある者たちは、隠遁者をより称賛してこう言った。

「彼は福音書の戒め、『あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えよ』を全うし、十字架を背負ってキリストに従い、毎日渇きと飢えに耐えた。一方、旅人を迎える者は、確かに貧しい人々に仕えたが、それでも自らも財産を享受し、旅人と共に飲食し、病人と共に食事をとっていた。」

一方、反対派は、旅人愛好家もまた、福音書に記されたキリストの御言葉「*仕えられるためではなく、仕えるために来た*」（マタイ20:28）を成就したと反論した。 何しろ彼は、毎日人通りの多い道に出て、旅人、乞食、病人、貧しい人々を探し求め、そうした人々を自分の家へ連れて行き、そこで皆に安らぎを与えていたのだから。 もし、渇いている者に冷たい水を一杯差し出しただけで、神から報いが約束されているのなら、旅人を受け入れ、数え切れないほどの渇きと飢えに苦しむ人々を満足させ、あらゆる病人をキリストのように仕えたこの兄弟は、いったいどのような報いを受けるのだろうか。

兄弟たちの間にこのような意見の相違があるのを見て、聖パムヴァは彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、私が神から啓示を受けるまで、少し待ってください。その時に、私はあなた方に告げましょう。」

数日後、兄弟たちは再び答えを求めて彼の元を訪れた。すると、長老は彼らにこう言った。

「神の前で言いますが、あの二人の兄弟（パイシオスとイリヤ）が、楽園で共に立っているのを見ました。」

これを聞いて、兄弟たちは皆、心を落ち着かせ、神を賛美した。

この二人の兄弟に関する啓示を受けて、彼が死に至る前に楽園の至福を目にするという栄誉に浴したことから、彼が神からどれほど大きな恵みを受けているかが皆に明らかになった。そして彼自身も、彼らを見たという事実によって、さらには彼の中に宿る神の豊かな恵みによって、楽園の住人たちに似ていた。 まだ朽ちるべき肉体をまとって人々の間に暮らしていたにもかかわらず、彼はすでにその顔に楽園の朽ちることなき印を帯びており、魂だけでなく肉体も輝き、かつて聖なる預言者モーセの顔がそうであったように、その顔は栄光に満ちて輝いていた。このことについては、聖なる父たちの伝記に次のように記されている。三年間、尊者様は神にこう祈り続けた。

「主よ、お願いです。どうかこの地上で私を栄光に包まないでください！」

しかし、御自身の御心に適う者たちを栄光に包む神は、彼をこれほどまでに栄光に包まれたため、兄弟たちは彼が放つその栄光のゆえに、彼の顔を見ることを敢えてできなかった。かくして、聖人は天において栄光を受ける前に、地上でその肉体をもって栄光に包まれたのである。そして、七十年の生涯を経て、彼の至福の死の時が訪れたとき、彼は傍らに立っていた兄弟たちにこう言った。

「私がこの荒野に定住し、小部屋を建ててそこに住み始めて以来、自分の手で疲れ果てるまで何かしらの労働をせずに過ごした日は一日たりともありませんでした。 また、誰かから与えられたパンを食べたことは一度もなく、常に自分の手の労働で得たものを食べてきた。そして、今になって恥じて悔い改めなければならないような言葉は、私の口から出たことはない。それにもかかわらず、私はまるで神に喜ばれる修道者の生活を始めさえしなかったかのように、主のもとへ旅立つのである。

これらの言葉を残して、彼はいかなる肉体の病にも冒されることなく、その誠実で聖なる魂を神の御手に委ねた[5176]。 これこそが、この神の御心に適う者の生涯と最期であった。その聖なる祈りが、私たちも神に喜ばれる生き方を学び、主イエス・キリストの憐れみによって善き最期を迎えられるよう助けてくれることを願う。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れが捧げられる。アーメン。

[5176] 聖パムヴァの死は4世紀末に起こった。

私たちの尊き父、ヨハネ・多苦の聖人の生涯

記念日：7月18日

「多くの苦難を経て、私たちは神の御国に入らなければならない」（使徒言行録14:22）と、使徒パウロは語った。

これに倣い、イエスの愛する弟子である処女ヨハネもこう語った。

「*わたし、ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難を共にする者である*」（黙示録1:9）。

彼らに同意するのは、ペチェールスク修道院の至聖なる神の母の愛する弟子であり、私たちのロシアの処女ヨハネ、すなわち「多苦のヨハネ」と呼ばれる人物である。彼は、天の花婿に誓った貞潔の誓いのために、実に多くの苦難を耐え抜いた。彼は死の直前に、次のような機会を通じて、自らの生涯についてこう語っていた。　この聖人は、聖アントニオの洞窟という狭い一か所に籠もり、そこで生涯を全うしていたが、そこに、肉欲に駆り立てられていたある兄弟が頻繁に訪れていた。その兄弟は、自分の情欲が和らぐよう、聖人に主への祈りを頼んだ。すると、聖ヨハネは彼にこう言った。

「兄弟よ、勇気を奮い起こし、心を強く持ちなさい。主の御名によって耐え忍び、主の道を歩み続けなさい。そうすれば、主はあなたを敵の手に委ねたり、敵に捕らえさせたりはなさらないでしょう。」

情欲に苛まれていた兄弟は、こう答えた。

「信じてください、父よ。もし私に安らぎを与えてくださらなければ、私は安らぎを知ることなく、あちこちをさまようことになるでしょう。」

すると、聖ヨハネは彼に言った。

「なぜ、敵に引き裂かれるために身を捧げようとするのか。あなたは、断崖の端に立っている人のようになるだろう。　敵がやって来て、突然彼を突き落とすだろう。その転落は恐ろしいもので、その後もう立ち上がることはできない。しかし、もしあなたがここ、聖なる修道院にとどまるなら、あなたは断崖から遠く離れた場所に立っている人のようになる。敵がどんなに引きずり下ろそうと、あなたを落とすことはできない。　そうして主は、あなたの忍耐によって、情欲という深淵や、はかない不浄からあなたを救い出してくださるでしょう。聞いてください、兄弟よ。私が若い頃に経験したことをお話ししましょう。

そして彼は、自分の生涯のすべてを詳しく語り始めた。

「私が（彼はこう語った）この聖なるペチェルスク修道院に来て、聖アンゲルの修道規則に従って修行を始めたとき――私は、欲望に激しく駆り立てられながら――自らの救いのために、実に多くの苦難に耐え抜いたのだ！　二日、時には三日も食事を摂らず、しばしば一週間もの間、一切の食物を口にせず、渇きで自らを苦しめた。夜通し眠ることもなかった。そのような苦しみの中で約三年を過ごしたが、それでもなお安らぎを見出すことはできなかった。　そこで私は、尊い父アントニオが眠る洞窟へと向かい、その棺の前で昼夜を問わず祈りを捧げた。すると、尊い父の声が私に語りかけてきた。

「ヨハネよ、ヨハネよ、あなたはここで洞窟に閉じこもり、何ものも見ず、沈黙を守りながら、情欲に打ち勝たなければならない。主は、御自身の聖なる人々の祈りによって、あなたを助けてくださるだろう。」

それゆえ（彼は続けた）、私はそれ以来、この狭く寂しい場所に閉じこもり、ここですでに十三年を過ごしている。しかし、安らぎを得るまでには長い時間がかかった。　何年もの間、私は情欲や肉欲と戦い、厳しい生活を送り、長い年月、最初は断食と不眠によってのみ肉体を苦しめた。その

後、どうすればよいか分からず、肉欲を克服することもできなかったため、裸で暮らすことを決意した。　私は自分の体に重い鎖を巻きつけ、それ以来今日に至るまで、寒さと鉄の重みで自分を消耗させ続けている。しかし、それだけでは不十分だと感じたとき、私は別の方法を思いついた。肩まで届くほど深い穴を掘ったのだ。　聖なる大斎の日々が訪れると、私は穴に入り、全身を土で埋め尽くした。手と頭だけが露出した状態で、私は大斎の間ずっと土の重みのもとで過ごし、どの関節も動かすことができなかった。しかし、それにもかかわらず、私の燃えるような肉欲は収まらなかった。　さらに、敵である悪魔が私をそこから追い出そうと脅かし、私はその狡猾さを実感した。穴の底で私の足が燃え上がり、足の筋が引きつり、骨が震え、炎はすでに腹部に達し、私の肢体が燃え始めたのである。　しかし、私はその激しい痛みに気を取られることなく、魂の底から喜びを感じていた。私の魂が汚れから清く保たれていることを喜び、　私は、悪魔に冒涜されて穴から出るよりは、主のためにその炎の中で焼かれることを選んだのだ。そのまさにその時、私は恐ろしく獰猛な蛇を目にした。その蛇は炎を吐き、火花で私を焼き、私を飲み込もうとしていた。そうして数日間、私を追い出そうとしていたのだ。　キリストの復活の輝かしい夜が明けるやいなや、あの凶暴な蛇が突然私に襲いかかり、私の頭と両手をその口の中に捕らえた。頭と顎鬚の毛は、今あなたが見ているように焼け落ちた。そして、すでにその蛇の口の中にいた私は、心の底から叫んだ：

「主なる神よ、わが救い主よ、なぜ私を見捨てられたのですか？　主よ、私を憐れんでください。あなたこそ唯一、人を愛するお方だからです！　罪深い私を救ってください。あなたこそ唯一、罪なきお方だからです！　私の忌まわしい不義から私を救い出し、私が悪者の罠に永遠に囚われて滅びることのないように、この敵から私を救ってください。ほら、あいつは私を飲み込もうと、獅子のように唸っています。あなたの力を示し、私を救いに来てください！ あなたの稲妻を閃かせて、あいつを追い払い、あなたの御前から消え去らせてください！

私が祈りを終えると、たちまち神の光が稲妻のように閃き、あの凶暴な蛇は姿を消した。そして、神の御慈悲により、私はそれ以来、その蛇を一度も見ていない。その時、私は主が私に語りかける声を聞いた。

「ヨハネ、ヨハネ！　これで助けは与えられた。これからは、来世で二度と苦しむことのないよう、自ら気をつけなさい。」

そこで私は（彼は言った）、ひれ伏してこう言った。

「主よ、なぜ私をこの残酷な苦しみの中に置き去りにされたのですか？」

すると、その声は私にこう答えました：

「これは、お前の忍耐の度合いに応じてお前に与えられたものだ。火によって試練を受け、金のように清くなるためである。神は、人が力尽きず、悪意ある　蛇に辱められないよう、その力を超える試練を人間に与えはしない。」　しかし、賢明な主人が、たくましく力強い僕には大きく重い仕事を任せ、虚弱で弱い僕には粗末で軽い仕事を任せるように、あなたもまた、あなたが自分自身のために祈っている肉欲との戦いについて、そのように理解すべきである。　しかし、あなたのそばにいるあの死者に、あなたが淫らな情欲から癒やされるよう祈りなさい。彼はヨセフ[5177]よりも多くのことを成し遂げ、この情欲に苦しむ者たちを助けることができるのだ。

そして私は（彼は続けた）、その故人の名前を知らずに、こう叫び始めた。

「主よ、この聖人の祈りによって、私を憐れんでください！」

その後、その人がハンガリー出身のモーセであったことを知った。　その時、言い表せない光が私を照らし、私は今もその光の中にあり、昼も夜も光を必要としない。そして、私のところに来る

[5177] ヨセフは、族長ヤコブの十二人の息子のひとりである。純真さと素朴さで知られていた。兄弟たちにエジプトへ売られた際、滞在していたポティファルの妻の誘惑に屈しなかった（創世記39:1–23）。 – それゆえ、『多くの苦難に遭ったヨハネ』の生涯に関する記述においても、淫らな情欲に苛まれ、彼に助けを求めた者たちに対するヨセフの特別な取り次ぎが言及されているのである。

すべてのふさわしい人々は、この光に満足し、復活の夜に私を照らし、未来の光への希望を与えてくれた私の慰めを、この目で見て取っているのだ。

自らの苦難に満ちた生涯についてのこの語り終えた後、私たちの尊い父ヨハネは、肉欲に囚われた男に向き直り、こう言った。

「兄弟よ、私たち自身が心の中で肉欲のことを考えているからこそ、神は御自身の正しい裁きによって私たちに苦難をお許しになるのです。それは、私たちが悔い改めのふさわしい実を結んでいないからです。しかし、兄弟よ、あなたに言っておきましょう。この尊いモーセに祈りましょう。そうすれば、彼はあなたを助けてくれるでしょう。」

その後、彼はその情欲に囚われた者と共にお祈りし、それから聖モイセイの聖遺物から一本の骨を取り出して彼に渡し、こう言った。

「これをあなたの体に当てなさい。」

そうすると、その兄弟はたちまち、体の熱が冷めていくのを感じた。淫らな情欲はもはや兄弟を悩ませることをやめ、その体の中で静まり返った。それ以来、彼はそれによる苦しみを受けることはなくなった。　そこで、聖人と情欲に囚われていたその兄弟は共に、生前に清らかな生き様をもって神を賛美した者たちを、死後もまた、人々を罪から清める奇跡によって神が栄光をお与えになることを、神に賛美を捧げた。

自らの大きな苦難について語った直後、多くの苦難に耐えた隠遁者、我らの尊き父ヨハネは、7月18日にその霊を主の御手に委ね[5178]　、共に苦難を耐え抜いた御方と共に御国に君臨することとなった。　そして、尽きることのない癒やしをもたらし、敵の顔から守る守護の柱となるその聖なる遺骸は、彼が修業に励んでいた当初、肩まで土に埋まった場所、そして後に自らの死期を知った際にも、今もなお揺るぎなくそこに立っている。　この多き苦難に耐えた隠遁者、私たちの尊い父ヨハネ（その尊い御体は、多くの苦難によって肉体の情欲に打ち勝った者として、神の家の柱となった）の祈りによって、私たちもまた、モーセの前に現れた柱の光のように、　――乳と蜜の流れるあの約束された天の地へと導かれますように。そこは、母乳を飲む乳児たちが享受するものであり、また、この処女ヨハネも、キリストの親友ヨハネと同様に、三位一体において賛美される神の恵みと栄光によって、今この時も、そして永遠に栄光が帰せられる方へと導かれますように。 アーメン。

聖殉教者ヤキンフの受難

記念日：7月18日

この聖なる殉教者は、敬虔な両親テオクリトスとテオフィラの子として生まれた。彼は、アマストリデの教会[5179]　をヒラリウス司教が統率していた時代に生まれ、現れた天使からその名を与えられた。　三歳の時、彼はキリストの名を呼び、亡くなった少年を復活させました。その少年はその後、彼と共に修行に励み、徳を磨きました。老齢に達し、数多くの奇跡を成し遂げたある日、彼は、愚かな偶像崇拝者たちが、中が空洞のニレの木を崇拝しているのを目撃しました。　彼はその木を切り倒しに行った。このため、彼は捕らえられ、アマストリドの町へ連れて行かれ、カウストリシオ地方の統治者　のもとへ引き渡された。統治者の命令により、彼はまず残酷に殴打され、歯を打ち抜かれた。その後、縄で縛られて地面を引きずられ、ついに牢獄に投獄され、そこで彼は神に息を引き取った[5180] 。

[5178] 聖ヨハネの死は12世紀半ばに訪れた。

[5179] アマストリダ（現在のアマストラ）という都市は、ローマ帝国の小アジア属州パフラゴニアの北部、エウクシノス海（現在の黒海）の海岸沿いに位置していた。

[5180] 聖殉教者ヤキンフの没年は不明である。

8月

8月1日

7月19日（旧暦）

同日、1270年にオルダで殉教した、リャザン公聖ロマン・オレゴヴィチの没日。

聖母マクリナの生涯

記念日：7月19日

聖マクリナは、コンスタンティヌス大帝の治世[5181]にカッパドキアで生まれた。両親はヴァシリーとエミリアであり、彼女は長女として生まれ、ヴァシリー大帝、グリゴリー・ニッサス、その他の兄弟姉妹の姉であった。　この敬虔な両親には、計10人の子供――4人の息子と6人の娘――がいました。この長女には、誕生前に、母が夢の中で受けた神の啓示により、「テクラ」という名が与えられました。すなわち、出産直前に母が眠りにつくと、夢の中で、まだ生まれていない子供を腕に抱いているのを見たのです。　すると、まるである明るく誠実な男性が近づいてきて、その子を優しく見つめ、三度「フェクラ」と呼び、この子が聖なる第一殉教者フェクラの貞潔な生き方を模範とし、血を流さない自由な殉教者となることを告げたのである。

この幻視の後、エミリアは目を覚まし、その子を産んでフェクラと名付けた。　しかし、家族や親戚たちは、父方の祖母である聖マクリナの名前にならって、彼女をマクリナと呼ぶほうがよいと考えた。聖マクリナは、マクシミアヌス・ガレリウスの治世[5182]に、夫と共にキリストのために迫害を受け、迫害が収まるまで七年間、極度の困窮に耐えながら荒野を放浪したのである。　かくして、この新生児には二つの名前があった。啓示による「テクラ」、そして通称としての「マクリナ」である。それは決して無駄なことではなかった。彼女は、その二人の神の御心にかなう女性たちから、神に喜ばれる生き方を継承し、彼女たちと同様に、心の中に神への燃えるような愛を燃やしていたからである。　彼女をマクリナと呼ぶ習慣は人々の間であまりにも定着していたため、彼女の本来の名前を知らない者さえおり、誰もが彼女を別の名前で呼んでいた。私たちは、このキリストの花嫁が、天の「いのちの書」に、その両方の名前で記されていると信じている。

少女は育てられ、子供が成長するにつれて、母親は彼女の教育を始め、読み書きを教え始めた。その際、他の母親たちが通常行っていたような異教の寓話や、清らかな少女の耳にはふさわしくない内容が多く含まれる詩人の作品から始めるのではなく、彼女はソロモンの知恵の書『[5183]』やダビデの詩篇、あるいはその他の聖書の中から、適切な節を選び出した。それは、神への祈りや賛美、あるいは善良な道徳的教訓を内包しているものに限られていた。少女は才能に恵まれており、順調に学んでいった；　一日中、いつでも聖書の言葉や祈りの歌が彼女の口をついて出ていた。ベッドから起

[5181] 306年から337年まで在位した。

[5182] マクシムス・ガレリウスは、305年から311年までローマ帝国の東部を統治した。

[5183] 『ソロモンの知恵の書』は、旧約聖書に含まれる書物の一つであるが、正典には含まれていない。その内容は、神の知恵を称えるものである。

き上がる時も、何らかの仕事に取り掛かる時も、昼食の席に着く時も、食卓から立ち上がる時も、正午や夕方には必ず詩篇を 、そして就寝する際には定められた祈りを捧げていた。 彼女は母親から、乙女にふさわしい手仕事も教えられており、怠惰や子供じみた遊びに時間を費やすことは許されず、常に読書か手仕事に励んでいた。

少女が十二歳になると、彼女はその国中で比類のないほどの美しさを備えるようになり、画家たちでさえその美貌を描き表すことはできなかった。そのため、多くの富豪や貴族たちが彼女の父に懇願し、それぞれが自分の息子と彼女を結婚させたいと願った。

一方、マクリナの父は、分別ある人として、数ある若者の中から、高貴な家柄であるだけでなく、知性と善良な人柄でも他を凌ぐ一人の青年を選び出し、その美しい娘マクリナと婚約させた。しかし、結婚式は、娘が成長して結婚適齢期に達するまで延期された。 その若者は待ち続け、学問に励んで成果を上げていた。しかし、万事を英知をもって整える神は、御自身の御心により、彼のこの世の生涯を終わらせ、永遠の命へと移された。 そこで、若くして老女のような知恵を備えていたこの祝福された乙女は、誰とも結婚せず、生涯を通じて処女の清らかさを守り抜くことを固く決意した。 多くの若者がマクリナに結婚を懇願し、両親や親族までもが彼女に結婚するよう説得したが、彼女は年齢の割に分別があり、まるで若くはなく、むしろ老女のようであり、その賢明さと分別をもって、こう答えた。

「一人の婚約者に約束された娘が、別の男性と結婚し、一度結ばれた婚約を不法に破ることは、よくないことです。 何しろ自然の法則によれば、結婚は、一つの誕生と一つの死のように、ただ一つであるべきものです。そして、私が婚約していた、いわゆる『亡くなった』と言われるその人は、死んではいません――私は復活を信じています――ただ、万人の復活の時が来るまで、遠く離れた国へ旅立っただけなのです； 夫がどこかへ去った後、妻が夫婦の貞節を守らず、他の者と結ばれるならば、その妻の罪と恥は決して小さなものではない。

このように、賢明な乙女マクリナは、結婚について語り、嫁ぐよう勧める者すべてに答えて、清らかな処女性を守り通した。 彼女は常に母のそばにいて、まるで母の命を守る見張り人のように、謙虚に熱心に母に仕え、女中たちがこなす仕事さえも恥じることなく、あたかも女中の一人であるかのように、彼女たちと共にすべての仕事をこなした。 とりわけ、父が主のもとへ召された後は、彼女は未亡人となった母にとって、あらゆる悲しみや苦しみにおいて、常に寄り添う侍女であり、慰め手となった。 彼女は家中のことを熱心に世話し、他の兄弟姉妹たちに対しては、長女として、また第二の母として、教師であり導き手となった。とりわけ、父が亡くなる時に生まれた末の弟ペトロに対しては、彼が母の胎からこの世に生まれた時、父はこの世を去っていた。 この末の弟に、聖マクリナ自らが読み書きを教え、分別と善良な品性を育み、貞潔な生き方を授けた。そして彼は後に聖人となり、神の御心にかなう者たちの中でも決して劣らない存在となった。

彼女より後に生まれた弟ヴァシリーが、長年にわたり様々な国で学問を修めた後、故郷に戻り、若さゆえにその学識を誇り始めたとき、聖マクリナは穏やかで神に導かれた言葉によって、やがて彼を深い謙遜へと導き、彼はまもなく世俗のすべてを軽んじ、修道生活を選んだ。 この真のキリストのしもべは、ネウクラティオスという名のもう一人の、まだ若かった兄弟をも、魂に益となる語りかけによって、神への愛と清らかな生活へと導いた。ネウクラティオスはすべてを捨てて荒野へと赴き、そこで年老いた隠者たちに仕えながら、まだ若くしてその生涯を閉じた。

この賢明な乙女の勧めにより、彼女の母である至福のエミリアもまた、 残りの娘たちを嫁がせ、男奴隷や女奴隷を解放した後、この虚しい世の心配事や世話を捨てて女子修道院に入った。こうして母も娘も、修道者の生活を受け入れ、キリストの花嫁となったのである。 女奴隷たちの中にも、彼女たちと共に世俗を捨てて修道院に入りたいと願う者がおり、彼女たちはすべてを共有していた。一つの独房、一つの食卓、一つの衣服。 生活に必要なものはすべて均等に分け合い、謙遜と柔和と愛をもって心を一つにして主に仕え、怒りも、嫉妬も、憎しみも、軽蔑も、神の御心に適わないも

のは何一つなかった。彼女たちは、虚しい欲望や虚栄とは全く無縁であった。　彼らの栄光は、誰にも知られていないこと、富は貧しさの中に、糧は節制の中にあった。肉体からすべての地上のものを塵のように振り払い、彼らは昼も夜も詩篇を歌い、聖書を読み続けた。　彼らにとって、仕事も労苦からの休息も、ただ一つ変わらぬもの――神への思索と祈り――であり、肉体の必要のための世話や労苦は、取るに足らない雑用であって、真の務めではないと考えていた。

どのような言葉をもって、彼らが天使に倣うような断食の行いの中で送った、神に喜ばれる生涯を語り尽くすことができようか。　彼らはまるで天使と人間との間の架け橋のようで、肉体を持ちながら、清らかさと節制において人間を超越し、天使に匹敵していた。彼らが天使と等しくなかったのは、天使が無形であるのに対し、彼らには肉体があったという点だけである。　もし誰かが彼らを天使たちになぞらえたとしても、それは間違いではないだろう。実際、彼らは肉体をまといながらも、無形の存在に倣い、神を愛する心をもって天の御前で天使たちと共に神の前に立っていたのだ。彼らは、老いと死を迎えるまで、長い間そのような生活を送り続けた。

尊者エミリアがすでに高齢となり、至福の最期が近づき、体が衰弱したとき、神に喜ばれる生活を送っていた末子のペトロが彼女の元を訪れ、聖マクリナと共に、病床にある母の看病にあたった。　彼女が肉体を離れるその瞬間、死の床の両側には子供たちであるマクリナとペトロが座り、残りの兄弟姉妹の名前を一人ずつ呼び上げると、彼女は皆に、まるで宝物のように、母としての祝福を残した。その後、片手をマクリナに、もう片方をペトロに置いて、彼女は主に向かってこう言った。

「主よ、私はあなたに、私の胎の実りの初穂と十分の一を捧げます。初穂とはこの長女であり、十分の一とはこの末の息子です！あなたは旧約聖書において、初穂を[5184]、そして実りの十分の一を[5185]、あなたに捧げるよう命じられました。どうかこれらをあなたにとって喜ばしい捧げ物とし、あなたの聖なる御加護が彼らに降り注ぎますように！」

こう言い残して、彼女は聖なる魂を神の御手に委ねた。そして子供たちは、母の遺体を父の棺に納め、夫の聖遺物の傍らに葬り、母を尊厳をもって弔った。それは彼女が死の前に遺した遺言であった。　それからしばらくして、聖バシレイオス大主教はカッパドキアのケサリアの大司教に任命され、弟のグリゴリオス（ニッサのグリゴリオスと呼ばれる）を司祭に叙階したほか、もう一人の弟ペトロスを呼び寄せ、教会の聖職者の一員とした。このことを知った聖マクリナは、心の中で喜びを覚えた。 9年後、彼女は再び聖バシレイオスについて、彼が主のもとへ召されたという知らせを耳にし、深く悲しんだ。その悲しみは、実の兄弟の死そのものというよりも、教会のそのような輝きが消え、敬虔のそのような支柱が倒れたことに対するものだった。　その後、聖マクリナ自身も神のもとへ旅立つ時が近づいた。彼女の尊い帰天について、彼女の兄弟であるニッサの聖グリゴリオス司教は次のように記している。

ヴァシレイオスの死から九ヶ月後[5186]、アンティオキアで司教会議が招集され、私もその場に同席した（とグリゴリオスは述べている）。会議の後、私は私たちの姉妹マクリナを訪ね、会おうと決心した。彼女とは長い間会っていなかった――至る所でアリウス派に迫害され、私が直面した多くの災難や不運がそれを妨げていたからである。　そこで、私は彼女の元へ向かった。すでにかなりの距離を旅し、目的地に近づいていた頃、姉のもとへ到着する前日の夜、夢の中で次のような幻視を見

[5184] 初物とは、収穫の最初の果実、新しい小麦から焼かれた最初のパン、最初の羊の毛などを指す。これらはすべて、旧約聖書において、幕屋に仕える者たち――すなわち祭司やレビ人――の生活費として幕屋に捧げられていた（出エジプト記23:19； 民数記15:19–21）。初穂の量はモーセの律法には明記されていないが、少なくとも地の産物の16分の1であったと考えられている。

[5185] 十分の一、すなわち10分の1。旧約聖書（創世記14:20）では、この名称で、土地の産物や家畜などの10分の1を神への捧げ物として献げることを指していた。十分の一は、土地の割当を持たず、したがって生計の手段を必要としていたレビ人のために捧げられた。レビ人は、その十分の一の十分の一を、大祭司の維持費として納めていた（民数記18:21–32）。

[5186] この公会議は341年に開催され、コンスタンティヌス帝（306年～337年）によって着工されたが、その息子コンスタンティウス帝の治世下で完成した神殿の奉献を機に招集された。公会議では、教会運営に関する25の規則が制定された。

た。　まるで殉教者の聖遺物を両手で抱えているかのようだった。そこから、太陽に面して置かれた明るい鏡のように、明るい光線が放たれており、そのまばゆい輝きに私の目は直視できなかった。この幻視は一夜のうちに三度繰り返されたが、私はその意味を理解できなかった。　心には何とも言えない悲しみが湧き上がり、この夢がどのように実現するのかを期待しながら旅立った。至福のマクリナが天使のような天上の生活を送っていた場所に近づいたとき、多くの人が道で私を迎えに出てきて丁重に挨拶をしてくれた。そこで、知人の一人に姉のマクリナのことを尋ねると、　彼女は重病だと告げられた。私は心を痛めつつ急いで向かい、修道院に到着すると、まず教会へ向かった。そこにはすべての修道女たちが私たちを待っていた。祈りと祝福の後、修道女たちの中に、彼女たちの修道院長である私の姉マクリナの姿がないことに気づき、胸が締め付けられる思いがした。　私は彼女の独房へ向かい、重病の彼女がベッドではなく、地面に敷かれたぼろ布で覆われた板の上で横たわっているのを見つけた。木製の頭板もまた、ぼろ布で覆われていた。　私がドアから入ってくるのを見て、彼女は頭を下げ、私の腕の中に倒れ込んできた。立ち上がることはできなかったが、寝床から　できる限り、私に頭を下げた。私は急いで彼女を抱き起こし、同じ場所に寝かせ、涙ながらに彼女に口づけをした。すると彼女は神に向かって両手を差し伸べ、こう言った。

「わが主なる神よ、あなたに感謝します。この恵みをも私に与えてくださり、私の願いを叶え、あなたのしもべを遣わして、あなたのしもべを訪ねてくださったことを。」

それから彼女は、病を隠しながら私と話し始めた。私の心を悲しませたくなかったため、時折かすかにうめき声を上げ、頻繁なため息を何とか抑えようと努め、穏やかな表情で私たちを見つめていた。　彼女は重々しい話をしながら、バシレイオス大帝のことを思い出していました。それを見て、私の心は悲しみに満ち、涙をこらえることができませんでした。彼女は私の苦々しい涙を見て、すぐにバシレイオスの話をやめて、別の話題に移りました。　神の驚くべき摂理と御配慮について、来世について、人間がなぜ創造され、いかにして死すべき存在となったのか、いかにして一時的な死を経て永遠の命へと移るのか――といったことを語り始め、他にも神に霊感を受けた言葉を紡ぎ、私たちに大きな益を与え、彼女自身の魂にも喜びをもたらした。　彼女は聖霊に満たされていた。まるで泉から湧き出るかのように、彼女の口からは恵みが溢れ出し、その心はすべて天上のことに占められていた。話を終えると、彼女は私にこう言った。

「神父様、長い旅路の疲れを少し癒やし、食事で体を養う時が来ました。」

彼女のもとを離れ、私の魂に真の安らぎをもたらしてくれたこの心地よい会話を終わらせたくはなかったが、彼女がそう望まれた以上、あえてその言葉に逆らうことはできず、私は彼女のもとを後にした。　近くの、木々の木陰にあるとても美しい庭に、私たちのために休息の場が用意されていたが、私には何一つ喜びを感じられなかった。私の心は痛んでいた。私は、姉が死の淵に近づいているのを見ており、自分の夢がどのように実現するかを待っていた。その夢は――私はすでに理解していたが――すでに成就し始めており、私はそれを次のように解釈していた。　殉教者の聖遺物――それはマクリナ姉妹のことである。彼女は、神への愛のために長年にわたり断食の修行に身を捧げ、殉教者のように肉体を死に至らしめ、罪に対しては完全に死んでいたのだ。聖遺物から放たれる明るい光は、彼女の中に宿っていた聖霊の恵みを意味していた。

私がこのように悲しみに沈んで思い巡らしている最中、聖女は霊によってそれを察知し、病状が和らぎ、楽になったと伝えてくるよう使者を送ってくれた。　彼女がそうしたのは、私が悲しんだり、彼女の回復への希望を失ったりしないようにするためでしたが、それによって彼女は、肉体的な健康ではなく、魂の健康について比喩的に語ることで、私を慰めてくれたのです。そこで私は、この吉報に喜び、食事を摂り、少し眠りました。　その後、私は再び彼女の元を訪ねると、彼女はまた魂に益となる会話を始め、彼女自身や私たちの家族全員に施されたすべての恩恵を振り返り、そのことに対して神に深い感謝を捧げていました。私はその言葉に耳を傾け、心ゆくまでその言葉を味わいながら、心の中でこう思いました。「もしこの日がもっと長く続けば、彼女の言葉をさらに長く味わえ

るのに！」　日はすでに夕暮れに差し掛かり、教会での夕方の礼拝の時間が迫っていた。病床の彼女は私たちを見送り、自ら神に熱心に祈りを捧げ始めた。

翌日、私が彼女の元を訪れたとき（聖グリゴリウスはこう語っている）、私はすでに彼女が間もなく息を引き取ろうとしているのを見て取った。彼女の体からすべての力が失われているのがわかり、私は深く悲しみに沈んだ。　彼女は私の悲しみを察し、神から啓示を受けた様々な言葉や魂に益となる話で私を慰めてくれたが、彼女自身は霊的な喜びに満ちていた。彼女の中には死への恐れも、いかなる動揺さえもなく、ただ神への希望だけがあった。　正午頃になると、彼女はさらに力尽き、私たちとの会話をやめて、両手を神に向かって上げながら、祈りの中で神と語り合うようになった。彼女の祈りの声は、私たちにはかろうじて聞こえるほど静かだった。その祈りには、次のような言葉が含まれていた。

「主よ、あなたは私たちから死の恐怖を取り除き、この一時的な人生の終わりが、私たちにとって永遠の、より良い人生の始まりとなるよう整えてくださいました。あなたは私たちの体を、死の眠りによってしばらくの間安らかにし、最後のラッパの音で再び目覚めさせてくださいます。あなたは、御手によって造られた私たちの朽ちゆく体を、宝物として大地に委ねてくださいます。　そして、大地に与えたものは、再び大地から取り戻し、死すべきもの、栄えのないものを、不死のもの、栄光あるものへと変容させてくださいます。あなたは私たちを呪いと罪から救い出し、蛇の頭を打ち砕き[5187]、その口から飲み込まれた人間を引き抜いてくださいました。 あなたは地獄の門を打ち砕き、死を支配していた者の力を打ち負かし、私たちに復活への道を開いてくださいました。あなたは、あなたを畏れる者たちに、私たちの命を確固たるものとし、守るためのしるし、すなわちあなたの聖なる十字架を与えてくださいました。　永遠の神よ、私は母の胎内からあなたに身を委ね、魂の全力を尽くしてあなたを愛し、若き日から私の魂と体をあなたに捧げてきました！　光の天使を私のそばに遣わし、 私を、安らぎの水[5188] と聖なる父たちの懐[5189] がある、明るく涼しい場所へと導かせてください！　あなたは、あなたと共に十字架にかけられ、あなたの慈悲に身を委ねた強盗から、楽園への入り口を塞ぐ炎の武器を取り除かれました。どうか、あなたの王国において、あなたのしもべである私をも覚えてください。　私もまた、あなたと共に自らを十字架につけ、あなたの畏れをもってこの肉体を縛り、常にあなたの御命令を果たしてきたのです。　あの恐ろしい深淵が、私を御選びになった者たちから引き離すことのないように。また、妬む者が私の道を阻むことのないように。私たちの生来の弱さゆえに、言葉、行い、あるいは思いによって、御前で犯してしまった私の罪が、御目の前になくありますように！　私を赦してください。あなたは罪を赦す力をお持ちだからです！私の魂が、肉体から解放されたとき、罪や汚れのない清らかな姿であなたの御前に現れるよう、どうか導いてください。私の魂が、あなたの御前で香炉の如きものとなりますように。

そう言い終えると、聖女は自らの目、口、心に十字を切ると、祈りを込めてその魂を神の御手に委ねました[5190] 。まるで普通の眠りに落ちたかのようでした。目は閉じられ、口は閉ざされ、両手はきちんと胸の上に置かれ、全身はこれほど美しく包まれていたため、人の手による覆いは一切必要としませんでした。　私は彼女を見つめ、苦々しく泣いた。また、それまで、泣き声で霊的な母を煩わせることへの恐れから涙をこらえ、心の痛みを内に秘めていた修道女たちも、彼女がすでに息を引き取っているのを見ると、たちまち大声で泣き出し、苦々しく嗚咽した。　彼女たちに泣き止んで、いつもの賛美歌と祈りを始めさせるのは、一苦労だった。

[5187] すなわち、悪魔のことである（創世記3:15参照）。

[5188] 比喩的な表現である。灼熱の砂漠を歩く旅人にとって、水が力を回復させる貴重な飲み物であるように、天の御国へ向かう旅人にとっても、天の住まいに言い表せないほどの恵みが用意されている。

[5189] 「懐」とは胸のことである。これは比喩的な表現である（ルカ16:23参照）。

[5190] 聖マクリナの死は、およそ380年に起こった。

その後、私は彼女たちにしばらくその部屋から出ていくよう頼み、生前彼女に最も親しく仕えていた数人の人々と共に、亡くなった修道女のそばに残った。その中には、ヴェスティアナという名の女性がいた。彼女は元老院議員の家系に生まれ、結婚したが、夫とは長くは暮らさなかった。夫はすぐにこの世を去ってしまったためである。　彼女は未亡人となった後、再婚を望まず、この世の名声、富、美、快楽を軽んじて、至福のマクリナのもとへ移り、彼女に未亡人としての生活を優しく支えてくれる守護者を見出し、長年にわたり彼女と共に過ごし、修道生活において立派に精進していた。私はこのヴェスティアナに言った。

「さあ、この亡くなった乙女の遺体に、清らかな衣を着せなければなりません。」

すると、ヴェスティアナは別の修道女、ランパディアにこう尋ねた。

「私たちの霊的母は、ご自身の葬儀についてどのような指示をしておられましたか？」

すると、ランパディアは涙を浮かべて、私にこう言った。

「この尊い私たちの母の最期は、清らかな生涯によって飾られました。そして、この世での生活において、彼女は決して肉体の装いを求めなかったように、自身の埋葬のためにも何も用意しませんでした。ここに粗い毛皮の衣があり、　これが質素な修道服、これが古びたマントと頭巾、これが粗末なサンダル――これらが彼女の全財産であり、どこにも隠されたものはなく、宝箱にも聖具室にもありません。彼女にはただ一つの聖具室と宝物――天の住まい――があり、そこにすべてのものを置き、地上には何も残さなかったのです。

そこで私は（聖グリゴリウスはこう語る）、その修道女たちにこう言った。

「私には、自分の埋葬のために用意しておいた新しい衣があります。もしよろしければ、この私の衣を彼女に着せてあげてもよろしいでしょうか？」

修道女たちは私にこう答えました：

「たとえ彼女が生きているとしても、あなたの贈り物を拒むことはなかったでしょう。なぜなら、彼女はあなたを敬い、愛していたからです。聖人として敬い、親族として愛し、そもそも兄弟姉妹の間には疎遠な関係などないのですから。」

そこで私は、その埋葬用の衣を取りに行かせ、ヴェスティアナとランパディアに、故人をその衣で着せるよう命じた。

ヴェスティアナは、聖マクリナの尊い遺体に葬送の衣を着せながら、彼女の首から鉄の十字架と、同じく鉄製の、十字架が刻まれた指輪を外し、私にこう言った。

「ほら、キリストの花嫁が首にかけていた装飾品がこれです！」

そこで私はその指輪を自分のものとし、ヴェスティアナには十字架を渡した。その時、彼女は私にこう言った。

「あなたは良い方を選びましたね、神父様。この指輪には、主の尊き十字架という命を与える木の聖片が宿っているのです。」

それから彼女はさらに私にこう言った。

「さあ、父よ、この素晴らしいものを見てください！」

そして、亡くなった人の胸元を少し開くと、かつての傷跡が体に残っているのを見せてくれ、彼女自身から直接聞いた話を私に語ってくれた。

「まだ聖女が母のもとで暮らしていた頃、この場所に激痛を伴う治らない腫れ物ができました。それを切開する必要があり、そのためには熟練した医師の助けを借りなければなりませんでした。さもないと、腫れ物は全身に広がり、心臓にまで達して死を招くことになっていたでしょう。」　母は、医療の術は人々を癒やすために神から与えられたものだと説き、医師にその腫れ物を診てもらい、治療を受けるよう彼女を説得しました。しかし、彼女にとって、男性に裸の胸を見られ、触られることを許すのは非常に耐え難いことであり、医師の診察を受けるよりは、激しい痛みに耐え、たとえ死に至るとしても、その方がましだと決心したのです。

ある晩、いつものように自分の手で母の世話を終えた後、彼女は祈りの部屋へ行き、扉を閉めて一晩中祈りを捧げた。地面にひれ伏し、涙で大地を濡らしながら、魂と体の真の医者である神ご自身に癒やしを懇願した。　その後、自分の涙で濡れた土を一握り取り、それを患部に当てた。翌日、母は彼女のことを案じて、再び医師にその腫れ物を診てもらうよう強く頼んだ。しかし彼女はこう反論した。

「お母さん、その腫れ物に手を置いて、十字を切ってくれれば、それで十分です。」

そして、母が彼女のドレスの下に手を差し入れ、十字を切ると同時に患部を触診したが、腫れ物は見つからなかった。神の力によって彼女は回復し、傷も痛みも消え去り、神の奇跡の記念として、その腫れ物があった場所に小さな痕だけが残った。

ヴェスティアナはそう語り、聖グリゴリウスがそれを記録した。彼は彼女の埋葬についても詳細に記述しているが、ここでは簡潔にするため、次のことだけを述べる。聖マクリナの死後の顔は、まるで不思議な光に照らされているかのように美しく輝いていた。　彼女の葬儀には、誰にも招かれることなく、神によって集められた大勢の人々が押し寄せた。　集まった人々は皆、声をあげて泣き、聖人の遺骨が納められた棺に触れようと押し合いへし合いし、その混雑のせいで、棺を墓まで運ぶのに苦労した。彼女は両親の棺の中に、母の遺骨の隣に安置された。それは、共に人生を歩んだ者たちの遺体が共に眠るよう、彼女自身がそう命じていたからである。　彼女の奇跡について、彼女の兄弟であり、その伝記の著者である聖グリゴリウスは、ただ一つだけ言及している。それは、聖女が生前に、片目が盲目（白内障を患っていた）だった少女に、患った目に口づけをすることで癒やしを与えたという出来事である。彼女の聖なる唇からの口づけによって白内障は消え、その目はよく見えるようになった。 彼女のその他の奇跡について、同じ聖グリゴリウスは次のように述べている。

「彼女と共に暮らした修道女たちや、彼女の行いをよく知る人々から聞いた他の多くの事柄については、この物語には書き留めなかった。なぜなら、多くの人は話を聞かされても、自分たちにもできることだけを信じ、自分たちの力を超えることについては信じず、嘘だと考えるからだ。」　それゆえ、飢饉のさなかに、彼女が自らの手で困窮者に配った小麦が尽きることなく、飢えた人々に配られたパンも尽きなかったこと、そしてその他の並大抵ではない彼女の奇跡――病気の迅速な治癒、悪霊の追放、預言的な予知、未来の予言――についても、私は語らないことにする。　これらすべてが実際に起こったことであり、すべて真実ではあるが、私はこれらについて沈黙を守ることにする。それは、肉欲に囚われ、神が信仰の度合いに応じて賜物を与え、信仰の薄い者には少ない賜物を、より信仰深い者にはより多くの賜物を与えられることを知らない、弱い人々の不信仰の罪に加担しないためである。

私たちこそ、神の全能の力を信じ、父と子と聖霊を、今、常に、そして世々限りなく賛美します。アーメン。

コンダク、第4調:

マクリノ聖女よ、あなたは全き心をもって慈愛に満ちた神を愛し、この尊き十字架を肩に担いで、熱心に御方に従いました。それゆえ、あなたは罪の赦しを得たのです。

私たちの尊い父ディイの生涯

記念日：7月19日

聖ディヤの出身地はシリアのアンティオキアであった。　彼はキリスト教徒の両親の間に生まれ、敬虔な家庭で育てられ、若き頃から断食の修行に励み、神に導かれた賢者たちから徳ある修道生活について教えを受け、目に見えない敵である悪魔や、魂を誘惑に導くより身近な敵である自らの肉

欲と激しく戦った。　彼は絶え間ない祈りによって悪魔に打ち勝ち、断食と不眠によって自らの肉体を制し、その他多くの苦行を通じてあらゆる方法でこの地上の肉体を死に至らしめ、肉体を霊に服従させた。彼はごく少量しか食べず、それも毎日ではなく、一日おきか二日おきに食べる程度で、しばしば一週間丸ごと、食事も睡眠も取らずに過ごした。　このような節制によって自らを征服し、霊的な敵に打ち勝った彼は、無情な生活の高度な境地に達し、聖霊の清らかな住まいとなった。神の恵みが彼の中に宿り、彼は行いにおいても言葉においても力強い人となり、奇跡を行い、多くの人々を救いへと導き、それによって天の父は栄光を受けた。　彼はアンティオキアでかなり長い間暮らしたが、その後、神は幻の中で、人々にさらに多くの益をもたらすためにコンスタンティノープルへ行くよう彼に命じられた。　当初、彼はその幻を信じず、そこに悪魔の罠が潜んでいないかと恐れた。というのも、悪魔もまた*「光の天使」*に変装し得ることを知っていたからである（IIコリント11:14）。しかし、二度目に同じ主の御出現と御命令があり、さらに、彼が一度も訪れたことのないその都市そのものが示されたとき――すなわち、幻の中で彼はツァールグラードの全貌をありのままに見たとき――彼は、すべてを益となるように働かれる神の御心に従い、アンティオキアを後にしてツァールグラードへと向かった。　都に入り、神の聖なる教会や宮殿、そして美しい都市の建造物を見たとき、彼は驚嘆した。これらすべてを、神から示された啓示の中ですでに目にしていて、そこで彼は、アンティオキアにいた時に見た幻が真実であったことを確信した。　街中だけでなく周辺も歩き回った彼は、街の外れにある人里離れた場所を見つけた。そこには古代の異教の墓があり、多くの悪霊が棲みついており、　通行人たちは、悪霊の幽霊や恐怖のせいでその場所を非常に恐れていた。しかし、彼はその場所を気に入り、十字架の力と祈りを、まるで悪霊に対する武器のように携えて、そこに小さな小屋を建てて住み着いた。悪霊たちが昼夜を問わず彼に与えたあらゆる苦悩を、すべて語り尽くすことはできない。　悪魔たちは、彼を怖がらせてその場所から追い出そうと、様々な奇妙な幻影を次々と現して絶え間なく襲いかかってきた。しかし、彼は天の王の勇敢な戦士として、悪魔たちにとって恐ろしいキリストの御名を呼び求め、恐れを感じることなく勇敢に抵抗し、彼らに打ち勝った。主がこの場所で暮らすことを祝福してくださるかどうかを知りたかった彼は、三位一体の唯一の神に三度そのことを祈り、乾いた杖を手に取り、次のように言いながらそれを地面に突き刺した。

「父と子と聖霊の御名によって！もしこの杖がここで芽を出し、根を張るなら、私もここに留まる。」

神は、御自身を畏れる者たちの願いを叶え、その祈りを受け入れてくださる方である。神は御自身の聖人の祈りを聞き入れ、その願いを叶えられた。神は乾いた杖に潤いを与えて命を吹き込まれた。　杖は根を下ろし、枝を伸ばし、少しずつ成長し始め、数年を経て大きな樫の木へと成長した。その木は、のちに聖人が亡くなった後も、キリスト教の正統信仰が栄える間、百年どころか、はるかに長い年月をその地に立ち続けた。　聖ディイは、枯れた杖が根付いたのを見て、主の御心は自分がこの地で暮らすことにあるのだと悟った。彼は悪魔たちに対してさらに強固な備えを整え、この地から彼らの邪悪な亡霊や恐怖を祓い去った。　悪魔たちは長い間彼と戦ったが、彼を打ち負かしてその場所から追い出すことはできず、敗北し、逃げ惑うように自らそこから逃げ去った。このように祈りによってその場所を悪魔から清めた聖人は、天使のようにそこで暮らし、昼夜を問わず神を賛美し、神の摂理によって糧を得ていた。　やがて、人々は彼のことを知るようになった。近隣の住民たちは、老修道士が、通り過ぎることさえ危険なほど恐ろしい場所に身を寄せているのを見て、最初は驚いたが、やがて彼のもとを訪れるようになった。　彼の修道室には何もないのを見て、人々は必要な物を持ってくるようになった。彼は訪ねてくる人々に救いの道を教え、神に霊感を受けた言葉で彼らを励まし、持ち込まれた物で持ち主をもてなすとともに、貧しい人々や通りすがりの旅人にも食事を与えた。　特に、彼の中に宿る神の恵みによって、人々の病を癒やし始めたとき、彼の評判は広まり、多くの病人が彼のもとに集まるようになった。そして彼は、すぐに彼らに肉体的な健康だけでなく、

精神的な健康も与えた。 ： 肉体の病には、治療用の絆創膏のように祈りを当て、心の傷には有益な教えで包帯を巻き、人々の心を和らげ、悔い改めるよう説得した。

当時、敬虔でキリストを愛するテオドシウス・ザ・ヤング王[5191] が統治していた。彼はテオドシウス大帝の孫であった。尊者ディイの噂を耳にした王は、自ら彼を訪ねて行った。王は彼の生活様式と無欲さに驚き、彼の口から発せられる魂に有益な教えの恵みに心を打たれた。 さらに彼は、枯れた杖が根付き、そこから木が生え出したことにも驚嘆した。そこで彼は、王の財を投じてそこに教会を建て、修道院を建設するよう命じた。それは、尊い父がそこで多くの人々を統率し、救いへの道へと導くためであった。また、至聖なるアッティクス総主教は、尊者に対し司祭の位を受けるよう説得した。 こうして、神の御心に適う者ディイは、彼のもとに集まった修道者たちの修道院長となり、彼を訪れるすべての人々の立派な師となり、魂と肉体の奇跡的な癒やし手となり、首都全体に恩恵をもたらした。そして、彼の修道院は、身を寄せる場所のない者たちにとって安らぎの場となった。その場所は水源がなく、水は遠くから運ばれていたため、修道院には水が不足していた。そこで修道士たちは、修道院の需要だけでなく、そこを訪れる人々のためにも、修道院内に井戸を掘らせてほしいと尊者にお願いした。 聖人は彼らの願いを聞き入れた。長い間井戸を掘り続け、すでに深くまで掘り進んだが、水は一向に湧いてこなかった。その場所は丘陵地帯で、岩だらけだったからだ。修道士たちは絶望し、作業員たちはもう水を待つことを諦め、仕事をやめようとしていた。 その時、尊者様が作業現場にやって来られ、鍬を手に取り、自分を井戸の中に下ろすよう命じられました。井戸の半分ほどまで下ろされたところで、尊者様は自分を下ろしていた籠を止めるよう命じ、至聖なる三位一体の御名を唱えながら、鍬で土壁を三度打ちました。すると、たちまちそこから豊かな泉が湧き出しました。 井戸の底で働いていた労働者たちをようやく引き上げ終えたかと思うと、水は急速に流れ込み、井戸を満たしていった。皆はこの奇跡に驚き、神を賛美した。 上方に立っていた作業員の一人は、土の壁から水が流れ出ているのを見て信じられず、別の作業員にひそかにこう言った。「あの老人は何か魔法を使って水を流したに違いない」。彼は心の中でこう考えていたのだ――「井戸の底に水があるはずがないのに、どうして突然、上方の壁からこれほど豊かに水が流れ出すことがあり得るのか？」と。 その言葉を口にした瞬間、彼には突然、神の裁きが下った。彼は足を滑らせ、水の中に落ちて溺死してしまった。このことを知った彼の妻は、大声で泣き叫びながら駆けつけ、聖人に怒鳴りつけ、次のような罵詈雑言を浴びせた。

「ここに来るべきじゃなかったわ、老いぼれ、魔術師、誘惑者、破滅者め！ あなたは私の夫を破滅させた。だから私も自ら命を絶って、私たち二人の罪をあなたの魂に負わせてやる！」

彼女は悲鳴と叫び声の中で、さらに多くの侮辱的な言葉を浴びせた。一方、修道士は穏やかな声で彼女を慰め、こう言った。

「少し待ってください、奥さん。希望を持ってください。そうすれば、ここからご主人をお連れ帰りになれますよ！」

女性はさらに怒りを募らせ、叫んだ。

「嘘つきの修道士め！ どこから私の夫を連れてくるというの？ まさか死者を蘇らせるつもりか？」

そして、修道士に飛びかかり、彼の服をつかんで引き裂こうとした。すると、修道院の兄弟たちが割って入り、彼女を捕まえて修道院の門の外へ追い出した。聖人は兄弟たちにこう言った。

「彼女を放っておきなさい。私たちを侮辱しているのは彼女ではなく、彼女を操る悪魔なのだ。その悪魔は、まもなく私たちを助ける神の恵みによって恥をかかされるだろう。」

そう言うと、彼は水中で溺れた人を探すよう命じた。その人は見つかり、引き上げられた。彼は死んでいるように横たわっていたが、奇跡を行う者、神の御心に適う者であるディイは彼の元へ歩

[5191] テオドシウス2世（若き）は、408年から450年までローマ帝国の東部を統治した。

み寄り、神に熱心に祈りを捧げ、死者の手を取り、彼を生き返らせて地面から起こした。そして妻を呼び寄せ、彼女に夫を返した。　妻は夫が生きているのを見て恐怖に震え、この奇跡に皆が恐れおののいた。妻は夫と共に家路についた。道中、家に着く前に、突然、蘇生したばかりの夫の膝ががくっと折れ、彼は地面に倒れ、再び息を引き取った。　これを見た妻は恐怖に震えた。彼女もまた、神の怒りによって罰せられ、自分も倒れて死んでしまうのではないかと恐れたのである。彼女は泣き叫びながら修道院に戻り、聖人の足元にひれ伏して許しを請うた。

「敬虔な父よ！私の夫は――」と彼女は言った。「あなたの祈りによって神がよみがえらせてくださったのに、私の罪のせいで、神は彼を再び死なせてしまったのです！」

そして、神の不思議で計り知れない御業に、皆はさらに大きな恐怖に包まれた。聖人はその女性に、残りの人生を悔い改めに捧げ、自らの罪を嘆き悲しむよう説得し、修道士たちには、彼女の夫を通常の儀式に従って埋葬するよう命じた。

聖人は、全能の神の力と御加護によって、他にも多くの奇跡を成し遂げた（しかし、それらは私たちには知られていない。なぜなら、太古の昔のことである上に、教会に対する度重なる迫害やコンスタンティノープルの荒廃により、多くの書物が失われ、私たちが聖ディイについて語っているわずかなことしか、現代まで伝わってこなかったからである）。　この奇跡行者は長生きしたが、すでに高齢の頃、病に倒れ、死の淵に立たされた。兄弟たちを呼び集めて教えを説き、神の聖餐を受けた後、まるで死んだかのように、身動きもせず、呼吸も止まった。皆は彼が亡くなったと思い、彼を悼み、埋葬の準備を始めた。　コンスタンティノープル総主教アッティクス聖下や、たまたまその時に街に滞在していたアンティオキア総主教アレクサンドロスも駆けつけ、聖人を栄誉をもって葬り送りたいと願う、多くの著名な聖職者や世俗の人々が集まった。すると彼は、まるで目を覚ましてベッドから起き上がったかのように、こう言った。

「神は私に、あと十五年の命を与えてくださった。」

そして彼は元気な姿で立ち上がり、皆は彼が死の門から生還したことを喜びました。なぜなら、彼はすべての人にとって有益な存在だったからです。　聖職者たちとは霊的かつ神にかなった対話を交わし、王たちにとっては祈りの仲介者であり神への執り成し役となり、救いを求める者たちにとっては徳ある生活の模範となり、罪人たちを悔い改めへと導き、病人を癒やし、旅人に宿を提供し、貧しい者たちに食事を与え、あらゆる困窮にある者一人ひとりを助けたのである。　尊者ディイは、すべての人にとって「すべて」であり、言葉と行いの両方で一人ひとりを助け、誰にとってもまるで実の父のような存在であった。

神から与えられた十五年間を、通常の断食の労苦の中で過ごし、多くの人々の魂を救い、世の光となって、彼はこの世での人生の終わりに近づいた。ある日、彼は聖なる祭壇で祈るために教会に入ると、ある明るい姿の男性が司祭の衣を身にまとって現れ、彼にこう言った。

「汝の生涯の時は満ち、今や汝が果てなき命へと移る時が来た。肉体を離れ、主のもとへ旅立つ準備をせよ。」

聖人は現れたその男性に頭を下げ、死の時刻を知らせてくれたことに対し、神に心から感謝した。その後、修道士たちを呼び集め、彼らに最後の教訓を語り、自身の埋葬については、たとえ誰かが望んだとしても遺体を街へ運ぶことを許さず、自分の修道院に埋葬するよう遺言した。　その後、キリスト教徒として安らかに息を引き取るために必要な準備を整え、すべての人々と自分自身のために十分に祈り、皆と最後のお別れを告げたとき、彼は目の前に神の天使を見出し、喜びをもってその清らかな魂を天使に委ねた[5192]。こうして、私たちの尊い父ディイは主のもとへ旅立った。皇帝と総主教は、都市の守護として彼の尊い遺体を都市へ移そうと望んだが、修道士たちは、修道院の墓所以外には遺体を安置してはならないという彼の遺言を伝えた。　長老の遺言に背くことを恐れ、彼らは

[5192] 聖ディイの死は、およそ430年頃であった。

その意志を尊重し、修道院で彼を尊厳をもって埋葬した。聖なる者たちの中で驚くべき神、三位一体の唯一なる神、父と子と聖霊を賛美し、彼に、私たちからも、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人であり、御体に天使を宿し、奇跡を行う者、神を宿す我らの父ディエよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって天の賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに力を授けられた方に栄光あれ、あなたを冠された方に栄光あれ、あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第2調：

魂の清らかさを神聖な武具とし、絶え間ない祈りを槍として力強く掲げ、悪魔の軍勢を切り裂かれた、奇跡を行われる我らの父ディエよ。絶えず我らすべてのために祈り給え。

8月2日

7月20日（旧暦）

同日、聖殉教者アファナシイ・ブレストの尊い遺骨が発見された。

聖預言者エリヤの生涯と奇跡

記念日7月20日

聖エリヤの生涯を述べるにあたり、神に等しい者であり、神に対する熱心な擁護者、不法な王たちを糾弾し、神から背いた人々を懲らしめ、偽預言者たちを処刑し、自然の要素に服従させ、天が耳を傾けた驚くべき奇跡行者、神の偉大な御心にかなう者、　今なお肉体に留まり、キリストの再臨の前に地上に来られる方――その主なる神への熱意、すなわち主なる神に嫉妬するほどの熱意をより明確かつ力強く証明するため、彼より以前に起こった出来事を簡潔に述べておこう。

古来より、神に選ばれた人々、　イスラエルの十二人の息子たちから「部族」と呼ばれる十二の部族へと増え広がり、モーセやヨシュア、その他のイスラエルの士師たちから、ダビデ王やソロモン王に至るまで、[5193]　、一人の指導者によって不可分かつ独裁的に統治される一つの王国を成していた。　ところが、ソロモンの死後、その息子ロバムが王位を継承し、若さゆえに経験豊富な長老たちの助言に従わず、　自分と同じような若者たちの言葉に耳を傾けたため、臣民にとって重荷となってしまった。彼は過度な税や労働を課し、残酷に罰し、流刑に処することも珍しくなかった。そこで、

[5193] 主は、神への真の信仰を人々の間に守り、広めるために、アブラハムとその子孫を選び出し、他の諸民族から区別された。　神がアブラハムとその子孫に与えられたパレスチナは、神の民の使命に最もふさわしい地であった。そこは北をレバノン山脈、東をシリア・アラビア砂漠、南を岩だらけのアラビア砂漠、西を地中海に囲まれている。　このような強固な囲いによって、神の民は異教徒の影響から隔てられ、守られ、神に仕え、妨げられることなく自由にその使命を果たすことができた。また、アジア、アフリカ、ヨーロッパの境界に位置し、古代の諸民族の真ん中にあったという点でも、パレスチナは神の民の使命にふさわしい場所であった（エゼキエル5:5）。　神の民は、古代のあらゆる強大で教養ある民族と交わり、彼らに神の啓示を伝えることができた。神の教えの光によって諸国民を啓蒙する時が来ると、パレスチナからのその宣教者たちにとって、世界のあらゆる民族への道は開かれ、身近なものとなっていた。

十部族は彼から離反し、エレボアムという名の者を王に選んだ。エレボアムはかつてソロモンの奴隷であった。　ある時、ソロモンは彼の犯したある過ちを理由に彼を処刑しようとしたが、エレボアムはエジプトへ逃れ、そこでソロモンの死まで滞在した[5194]。ソロモンの死後、彼はイスラエルの地に戻り、ロボアムから離反したイスラエルの部族たちによって王に選ばれた。　ソロモンの子ロヴォアムは、エルサレムにおいてユダとベニヤミンの二つの部族のみを治めた。　一方、ソロモンの家臣であったエレボアムは、イスラエルの十部族を統治し、シケム[5195]に居住した。この町は、それまで荒廃していたが、彼によって再建され、復興されたのである。　ソロモンの息子に忠実であり続けた二つの部族は、ユダ王国と呼ばれた。一方、ソロモンのしもべの元に加わった十の部族は、イスラエル王国を構成した。

しかし、イスラエルの部族たちは、二つの王国に分かれたとはいえ、天と地を創造された唯一の神に共に仕えていた。なぜなら、ソロモンが建てたエルサレムの神殿以外に神殿を持つことはできず、神によって任命された祭司以外に祭司を持つこともできなかったからである。　そのため、いつでもイスラエル王国からは大勢の人々が、主なる神を礼拝し、犠牲を捧げるためにエルサレムへと向かっていた。これを見て、イスラエルの王エレボアムは不安になり、こう言った。

「もしこの人々が、神を礼拝するためにいつもこのようにエルサレムへ行き続けるなら、彼らは再び最初の王、すなわちソロモンの息子のもとへ戻ろうとし、私を殺してしまうだろう。」

これを考え抜いた彼は、イスラエル人をエルサレムから遠ざけ、エルサレムへ行かせないようにする方法を模索し始めた。そして、まず第一に、彼らを神から遠ざけることを思いついた。

「まず彼らが神を見捨てない限り、エルサレムを彼らに任せておくことはできない」と彼は言った。

イスラエルの民が偶像崇拝やあらゆる不浄な不法行為に容易に傾くことを知っていたエレボアムは、彼らを神から離反させるために、次のような狡猾な策略を思いついた。　彼は金で二頭の若い雌牛の像を鋳造した。これは、かつて古代のイスラエル人がエジプトから脱出した際、荒野で金の子牛の像を造り、真の神の代わりにそれを崇拝したのと同じであった（出エジプト記32章）。　イスラエルの民全員を呼び集め、集まった者たちにその二頭の雌牛を指さして、エレボアムはこう言った。

「イスラエルよ！　これこそが、あなたたちをエジプトの地から導き出したあなたたちの神々である。もはやエルサレムへ行ってはならない。これらの神々に礼拝せよ。」

そして彼は、それらの雌牛像をさまざまな場所に設置した。一頭はベテルに、もう一頭はダンに[5196]。それらのために美しい神殿を建て、それらを称える祭りと多くの犠牲を定め、祭司を任命した。さらには、彼自身が祭司の務めを果たした。　罪を愛する人々をさらに誘惑するため、エレボアムは、それらの金で鋳造された雌牛の形をした偶像の前で、それらに捧げる祭りの日に、あらゆる不法な行いがなされるよう命じた。

こうして、不義な王は、一時的な統治のために、自らも神から離れ、イスラエルの十部族すべてを神から遠ざけてしまった。この王の後、他のイスラエルの王たちも、すべての臣民とともに、エレボアムの時代に学び、慣れ親しんだのと同じ不義な偶像崇拝に固執した。

しかし、あわれみ深い主は、御自身を見捨てた人々をも見捨てず、その慈しみによって彼らの回心を待ち望まれ、イスラエルの民に御自身の聖なる預言者たちを遣わされました。それは、彼らがイスラエルの民の迷いを糾し、悪魔の罠から解き放たれて、再び真の神を敬虔に崇めるようにと諭す

[5194] エレボアムはエフライム族の出身で、エルサレムの神殿建設の際、労働者を監督する者の一人であり、ソロモンから大変寵愛されていた。　イスラエルの地で、税金の増税に不満を抱き、ソロモンに反旗を翻した者たちが大勢現れたとき、彼らの指導者となったのがイエロアモだった。これを知ったソロモンはイエロアモを処刑するよう命じたが、彼はエジプトへ逃れた。

[5195] シキム、あるいはシェケムは、後にサマリアとなるパレスチナ西部の中心部に位置していた。

[5196] ベテルという町はサマリアの南部、エルサレムの北に位置し、ダンという町はガリラヤの北部に位置していた。

ためでした。　神がさまざまな時代にイスラエルへ遣わされた預言者たちの中には、預言者たちのうちでも偉大な一人である聖エリヤもおり、その生涯についてこれから語ることとなる。

信頼できる伝承によれば、神の聖なる預言者エリヤの故郷は、ヨルダン川の向こう側にあるガリラヤ地方[5197]であり、アラビアとの国境に接していた。彼が生まれた町はテスビと呼ばれており、そのためエリヤは「テスビ人」とも呼ばれた[5198]。エリヤはアロンの家系に生まれ、父の名はサバハであった。　エリヤの誕生は、父が受けた幻によって告げられた。エリヤの母が彼を出産しているまさにその時、サヴァハは、白い姿をした男たちが赤ん坊と語り合い、火で彼を包み込み、その口に炎を注ぎ込んで養っているのを見た。　その幻に恐怖を覚えたサヴァフは、エルサレムへ赴き、その幻について祭司たちに語った。すると、その中の一人、先見の明のある男がサヴァフにこう言った。

「あなたの息子に関するその幻を恐れるな。その赤ん坊は神の恵みの器となることを知れ。彼の言葉は火のようで、力強く、実りあるものとなる。主に対する彼の熱意は大きく、その生涯は神に喜ばれるものであり、彼は剣と火をもってイスラエルを裁くであろう。」

これが、エリヤの誕生時のしるしであり、彼が成長した際にどのような人物になるかを示す予言であった。

エリヤは、祭司の家系に生まれた者として、祭司たちの間で教育と訓練を受けた。幼い頃から自らを神に捧げ、処女の清らかさを愛し、神の御使いのように、神の前で汚れなく、魂も体も清らかな状態で過ごした。　また、神について思索することを愛した彼は、しばしば静寂を求めて荒野へと赴き、そこで神との温かい祈りの中で、神と二人きりで長く語り合い、セラフィム[5199]のように、神への燃えるような愛を燃やしていた。そしてエリヤ自身も神に愛されていた。なぜなら、神は御自身を愛する者を愛されるからである。 エリヤは神との慈愛に満ちた対話を許され、その な、天使に等しい生活の結果として、神に対して大きな大胆さを得た。エリヤが神に求めたことはすべて、神の御前で好意を得た者として、与えられたのである。一方で、堕落したイスラエルで起こっている不法行為を耳にし、目にして、　王たちは神に背く不義の中にあり、裁判官や長老たちは正義に従わず、民は偶像の忌まわしい行いに従事し、神への恐れや畏れもなくあらゆる霊的・肉体的堕落に耽り、自分の息子や娘を悪魔への生贄として捧げていたこと；　他方では、真の神を熱心に崇める者たちが、死に至るまであらゆる迫害と弾圧に耐えていること――これらすべてについて、神の預言者は心を深く痛めていた。彼は、数え切れないほど多くの人間の魂の滅びを嘆き、また義人に対する残酷な迫害を嘆いた。　とりわけ、彼は不義な人々によって真の神に与えられている冒涜について深く悲しみ、魂を痛め、神の栄光に対する熱意をますます強めていった。何よりもまず、エリヤは神に、罪人たちを悔い改めへと導いてくださるよう祈った。　しかし、神は罪深い人々に対して自発的な回心を求めておられ、心が頑なになったイスラエル人にはそのような善への志がなかったため、預言者エリヤは、神の栄光と人々の救いに対して強い熱意を抱き、たとえそのような手段であっても彼らを不義から遠ざけるために、一時的にイスラエル人を懲らしめてくださるよう神に願った。　しかし同時に、主は御自身の慈愛と寛容さゆえに、罰を下すことを急がれないことを知っていたエリヤは、主に対する深い熱意から、あえて神に、自分であるエリヤに律法を破った者たちを罰するよう命じてくださるよう願い出た。それは、人間によって罰せられれば、彼らが悔い改めに立ち返るのではないか、という考えからであった。　そしてエリヤは、寛大なる主から願いを聞き入れていただくまで、執拗に神に懇願し続けた。慈悲深き主は、子を愛する父のように、御自身に忠実に仕え、その最も小さな戒めさえ

[5197] ヨルダン川東岸の地、すなわちパレスチナの東半分に位置していた。

[5198] テスヴィト、あるいはテスワという町は、エルモン山からアルノン川まで広がるガリラヤ地方の東部に位置し、ヨルダン川の東側、ガリラヤ山脈の近くにあった。

[5199] セラフィム（ヘブライ語で「炎のような、火のような存在」の意）とは、神に最も近く、最も高次の霊的存在であり、栄光の主の御座を取り囲み、絶え間なく「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主（すなわち、軍勢の主）。全地は主の栄光に満ちている」と叫んでいる。（イザヤ書 6:1–13）と絶え間なく叫び続けている。

も破ることのなかった愛するしもべを悲しませようとはされなかった。　しかし、エリヤはあらゆる点で主に従順であり、決して主を怒らせるようなことはしなかったため、主は忠実なしもべの願いと祈りに耳を傾け、それらを聞き入れないことで彼を悲しませることはなかった。

当時、イスラエルには不義の王アハブが君臨しており、その都はサマリアであった　（この都市は、すでにイスラエル王国の三番目の首都であった。最初の首都はエフライム族のシケム、二番目はマナセ族のフェルス、三番目は再びエフライム族のサマリアであった）。アハブは、シドンの王エフヴァアルの娘イゼベルと結婚した。　イゼベルは異教徒として、新しい故郷にシドンの神バアルの偶像を連れてきた[5200]　。アハブはサマリアにバアルのための神殿を建て、そこに祭壇を設け、自らもバアルを神として崇拝し、すべてのイスラエル人にこの偶像にひれ伏すよう強要した。　このため、彼はまもなく、自分の王国において偶像崇拝を極限まで広め、それによって、彼以前にイスラエルを治めたどの王よりも、至高の神、主を激しく怒らせた。　そこで、神への熱意に満ちた神の預言者エリヤがこの王のもとを訪れ、彼がイスラエルの神を見捨て、自ら悪魔にひれ伏し、民全体を破滅へと導いているという過ちを糾弾した。　しかし、王が彼の諭しに耳を貸さないのを見て、聖なる預言者は言葉だけでなく行動も伴わせ、神に敵対する王とその臣民たちを罰した。彼はこう言った。

「全能の主なる神、イスラエルの神、私が今その御前に立っている[5201]　、生きておられる神に誓って、この数年間、地上に露や雨が降ることは、私の言葉による以外には決してない。」

こう言った後、エリヤはアハブの元を去った。そして、預言者の言葉通り、天は閉ざされ、干ばつが訪れた。一滴の雨も露も地上に降らなかった。干ばつの結果、穀物の収穫は全滅し、飢饉が訪れた。なぜなら、一人の王が罪を犯すとき、神の怒りはすべての民に及ぶからである　（かつてダビデ一人の堕落によって、王国全体が苦しんだのと同様に[5202]　）。神の預言者エリヤは、イスラエルの王アハブが罰を受けて自らの過ちに気づき、悔い改めて神に立ち返り、そして彼自身とともに、彼が堕落させてしまった民をも正しい道へと導くことを期待していた。　しかし、聖エリヤは、アハブがファラオのように頑ななままであり、不義を改めるどころか、かえってますます悪の深淵へと沈み込み、　な生活をもって神に喜ばれる人々を迫害し、さらには殺害さえしているのを見て、2年目、3年目と懲らしめを続けた。　この時、最初の神の御使いである聖なる預言者モーセがイスラエルに語った言葉が成就した。

「あなたの頭上の天は銅のようになり、あなたの足元の地は鉄のようになる」（申命記28:23）。なぜなら、天が閉ざされたため、地には湿り気がなく[5203]　、何の果実も実らなかったからである。

空気は常に蒸し暑く、毎日、灼熱の太陽によって猛烈な暑さが続いたため、すべての木々、花、草は枯れ果て、果実は失われ、果樹園、農地、野原は完全に荒れ果て、そこには耕す者も種を蒔く者もいなかった。　泉の水は枯れ、小さな川や小川は完全に干上がり、大きな川の水量も減り、全地は水がなく乾ききってしまい、人々も家畜も鳥も飢えで死んでいった。このような懲罰は、イスラエル王国だけでなく、周辺の国々にも降りかかった。　というのも、町で一軒の家が火事になれば、火は隣の家にも燃え広がるからだ。天の下でも同じことが起きた。イスラエルという一つの民が神の怒りを招いたが、苦しんだのは全宇宙であった。しかし、これらすべては、神の怒りというよりは、預

[5200] バアルは、カナン諸民族の間で主神とみなされていた。彼らはバアルという名のもと、自然界における豊穣の力の源として太陽を神格化していた。

[5201] 「あなたの神、主は生きておられる。あなたの魂も生きておられる」という言葉は、私たちの「神にかけて誓う」という誓いに相当する。古代のユダヤ人は、自分の言葉の真実性を保証したいとき、通常、まさにこの言葉を誓いとして用いた。

[5202] 誇りに駆られたダビデは、自分の民を数えようとした。そのような罪に対し、主は彼の王国に疫病を送り、それによって三日間で七万人が亡くなった。

[5203] パレスチナでは、他の暑い国々と同様、雨が降るのは秋と春だけですが、その代わり、露が非常に豊富に大地を潤します。特に夏にはその量が非常に多いため、大地は激しい雨が降った後のように湿ります。

言者エリヤが神の栄光を熱心に守ろうとしたことによるものであった。　なぜなら、限りなく慈悲深く、人を愛する主は、その計り知れない慈しみにより、人々の苦難やあらゆる生き物の滅びを見て、すでに地上に雨を降らせようとしておられたが、エリヤの決断を成就させ、預言者の言葉が偽りとならないようにするために、それを差し控えたからである。

「主は生きておられる。今より、私の言葉による場合を除き、雨も露も地上に降ることはない。」

こう語ったエリヤは、神への熱意にこれほどまでに燃えていたため、自分自身をも顧みなかった。なぜなら、地上の食糧が尽きれば、彼もまたすべての人々と同様に飢えに苦しむことになることを知っていたからである。　しかし、彼はそれを顧みなかった。神に敵対する悔い改めない罪人たちを赦すよりは、飢え死にすることを選んだからである。

では、全善なる神は何をなさるのか。神は預言者エリヤを、人々の住まいの遠く離れた人里離れた場所へ遣わし、こう言われた。

「東へ行き、ヨルダン川の対岸にあるホラファの川[5204] のほとりに身を隠せ。その川から水を飲み、そこでカラスにあなたを養うよう、わたしが命じた」（列王記下17:3–4）。

主がこのようにされたのは、エリヤをイゼベルによる殺害から救い、エリヤが飢えで死ぬことのないようにするためであり、また、カラスとホラファの小川を通じて、飢えと渇きに苦しみ、死んでいく人々に対するエリヤの憐れみの心を呼び起こすためであった。　カラスは他の鳥に比べて特別な性質を持っている（詩篇146:9）。彼らは非常に貪欲であり、自分の雛に対しても何の憐れみも持たない。なぜなら、カラスは雛を育て上げるとすぐに、巣に置き去りにして別の場所へ飛び去り、雛を飢え死にながらにさらしてしまうからである。　すべての生き物を慈しむ神の摂理のみが、彼らを死から救うのである。ハエが自ずと彼らの口元に飛んできて、雛たちはそれを飲み込むのである。そして、神の御命令により、カラスたちが毎日預言者のもとへ飛来して、朝はパン、夕方は肉という食物を運んでくるたびに、エリヤの良心――すなわち、人の内なる神の声――は、彼の心にこう呼びかけた。

「見よ、カラスは本来、野性的で、貪欲で、食いしん坊であり、自分の雛を愛さない生き物であるにもかかわらず、いかにしてあなたの糧を気遣っているか。自分たちは空腹であるにもかかわらず、あなたに食物をもたらしている。それなのに、あなた自身は人間でありながら、人々に同情の心を持たず、人々だけでなく、家畜や鳥たちまでも飢え死にさせようとしているではないか。」

また、しばらくして預言者が川が干上がっているのを見たとき、神は彼にこう言われた：

「今こそ、苦しむ生き物を憐れみ、雨を降らせてやるべき時だ。そうしなければ、お前自身も渇きで死んでしまうだろう。」

しかし、神の熱心な奉仕者は、むしろ、まだ罰を受けていない者たちが罰を受け、地上の神の敵がすべて滅びるまでは雨が降らないよう、神に祈り続けた。　そこで主は再び、御自分のしもべを慈しみに導くために、イスラエルの王の支配下にはないシドンのサレプタ[5205] にいる貧しい未亡人のもとへ彼を遣わし、彼自身の中で深く考えさせようとした。　自分が、裕福な人々や夫婦だけでなく、貧しい未亡人たちにもどのような災いをもたらしたかを自省させるためであった。彼女たちは、飢饉の時だけでなく、穀物が豊作で地上のあらゆるものが豊かに実る年であっても、しばしばその日の糧さえ持たないのだ。　預言者は、その町の門に着くと、薪を運んでいる未亡人を見かけた。その薪は二本にも満たなかった。というのも、彼女の甕には一握りの小麦粉しかなく、水差しにはわずかな油しかなかったからである。エリヤは飢えに苦しんでいたため、未亡人にパンをひと切れ求めた。しかし、その未亡人は、ここ最近の極度の貧困について彼に語り、残っている小麦粉で自分と息子の

[5204] シリア、ダマスカス近郊。

[5205] サレプタの町は、フェニキア西部の地中海沿岸、シドン近くに位置していた。

ために最後の食事を用意し、その後は飢えで死ぬしかないのだと告げた。　神の御使いは、この話に心を動かされ、飢えに苦しむすべての貧しい未亡人たちに憐れみを抱くこともできたはずである。しかし、神に対する偉大な熱意がすべてに打ち勝ち、彼は滅びゆく被造物に対して何の憐れみも示さず、ただ創造主を賛美し、全宇宙に神の全能の力を示そうとしたのである。　そして、信仰によって神から奇跡を行う賜物を受けたエリヤは、未亡人の家にある小麦粉と油が尽きることのないようにし、飢饉が終わるまで、その未亡人から養われた。　また、預言者は、神の御言葉に記されている通り、死んだ寡婦の息子を、死者に三度息を吹きかけるという祈りと共に、祈りによってよみがえらせた。この復活した未亡人の息子については、その名はヨナであり、成長して預言の賜物を受け、ニネベへ悔い改めを説くために遣わされたという伝承がある。　しかし、海でクジラに飲み込まれ、三日後に吐き出されたことで、預言書の記述や彼の伝記『[5206]』に詳述されているように、キリストの三日目の復活を予表した。

三年間、雨が降らず飢饉が続いた後、全善なる神は、地上の被造物が飢餓によって完全に滅びつつあるのをご覧になり、憐れみ深く、御自分のしもべエリヤにこう言われた。

「行け、アハブのもとへ現れよ。わたしは自分の被造物を憐れみ、お前の言葉によって、乾ききった地に雨を降らせ、それを潤し、実り豊かなものにするつもりだ。アハブはすでに悔い改めようとしており、お前を探しており、お前が命じることは何でも従う用意がある。」

預言者は直ちに、シドンのサレプタから、イスラエル王国の都サマリアへと向かった。　当時、アハブ王のもとには、アブディという家政官がいた。彼は王の忠実な家臣であり、神を畏れる人であった。彼は、イゼベルによる殺害から主の預言者百人を守り、二つの洞窟に、それぞれ五十人ずつ隠して、パンと水で養っていた。　アハブ王は（エリヤが自分のもとに来る前に）、この家政官を呼び寄せ、干上がった小川のほとりで草を探して、生き残ったわずかな馬やその他の家畜を養うための餌を確保するよう命じた。　アブディヤが町を出た途端、聖なる預言者エリヤに出会い、地にひれ伏して礼拝し、アハブが全王国をくまなく彼を探していたと告げた。聖なるエリヤはアブディヤにこう答えた。

「行って、あなたの主人にこう伝えなさい。『見よ、わたし、エリヤが、今、彼のもとへ向かっている』と。」

アブディヤはこう言って拒んだ。

「恐ろしいことです。もし私があなたのもとを離れると、主の御霊があなたを別の国へ移してしまわれるかもしれません。そうなれば、私は主君の前で嘘つきとなってしまい、主君は私に怒りを燃やして、私を殺してしまうでしょう。」エリヤは答えた。

「私が仕える力ある主の御名にかけて！今日こそ、私はアハブ王の前に現れる！」

アビディヤは引き返し、王に告げた。アハブは急いで神の人の出迎えに出た。しかし、エリヤを見ると、預言者に対する心に秘めた憎しみから、辛辣な言葉を抑えきれず、エリヤに言った。

「お前こそ、イスラエルを惑わしている者か？」

しかし、神の預言者は恐れることなくアハブに答えた。

「イスラエルを惑わしているのは私ではなく、あなたとあなたの父の家系だ。あなたがたは、主なる神を見捨て、忌まわしいバアルを崇めているのだ。」

その後、神の預言者は、神の助けの力を内に宿している者として、権威をもって王に命じ始めた。

[5206] 9月22日

「直ちに、カルメル山[5207]　へ、イスラエルの十部族すべてを集めよ。また、高い山々や森[5208]、　で他の偶像に仕え、イゼベルの食卓から糧を得ている四百五十人の不義な預言者たちを連れて来い。　彼らに、神についてわたしと論争させよ。そうすれば、どちらが真の神であるかが分かるだろう。

すると王は直ちに、イスラエルの全土に使者を送り、数えきれないほどの大勢の民を集め、すべての不義な預言者と祭司たちをカルメル山に召集し、自らもそこへ赴いた。

そこで、神の熱心な奉仕者エリヤは、集まった人々の前に立ち、王とイスラエルの民すべてに向かって、次のように語った。

「いつまで、あなたがたは両膝を震わせて迷い続けるつもりか。もし、力強い御手をもってあなたがたをエジプトから導き出された主なる神が神であるなら、なぜ主に従わないのか。もしバアルがあなたがたの神であるなら、彼に従えばよい。」

民は黙り込み、何も答えることができなかった。なぜなら、イスラエルの者一人ひとりが、自らの良心によって迷いの中にいることを責められていたからである。そこでエリヤは続けた：

「さて、あなたがたが今、真の神を知るためには、私が命じることを行いなさい。ご覧の通り、イスラエル全土で主の預言者として残っているのは私ただ一人です。他の預言者たちは皆、あなたがたが殺してしまったのです。また、ここにはバアルの預言者がどれほど大勢いるかも、お分かりでしょう。　さあ、犠牲として二頭の子牛を私たちに与えてください。一頭は私に、もう一頭はバアルの祭司たちに。ただし、火は用意する必要はありません。どちらの犠牲の上に天から火が降りてそれを焼き尽くすか、その神こそが真の神であり、すべての人はその神を礼拝しなければなりません。もしその神を認めない者がいれば、その者は死刑に処せられるべきです。

この言葉を聞いた民は皆、神の預言者の決定に賛同し、こう言った。

「その通りになろう。あなたの言葉は正しい。」

そして、集会の真ん中に子牛たちが連れて来られると、聖なるエリヤは不敬虔なバアルの預言者たちに言った。

「あなたがたは子牛を一頭選び、先に犠牲を準備しなさい。あなたがたは大勢いるが、私は一人だから、私はその後に準備する。子牛を薪の上に置いたら、火をつけてはならない。あなたがたの神バアルに祈り、天から火を降らせて、あなたがたの犠牲を焼き尽くしてもらうようにしなさい。」

恥知らずな預言者たちは、その通りにした。くじを引いて一頭の子牛を選び、それを切り分け、薪の上に載せた祭壇に置き、自分たちの神バアルに、そのいけにえに火を降らせてくれるよう祈り始めた。彼らは朝から正午まで、その名を呼び求め、こう叫んだ。

「バアルよ、私たちに耳を傾けてください、聞いてください！」

しかし、声も返事もなかった。彼らは祭壇の周りを飛び回り始めたが、すべて無駄だった。正午になると、神の預言者は彼らを嘲笑して言った。

[5207] カルメル山はサマリアの北西、地中海に近い場所にあります。エリヤがこの山を集会の場所として選んだのは、そこがイスラエル王国におけるバアル崇拝の中心地であったからです。

[5208] バアルと並んで崇められていたのがアスタルテ、あるいはアシェラである。彼女は天の女神（エレミヤ7:18）、月の女神であり、幸福、愛、豊穣、戦争、狩猟の女神でもあった。女性の頭部を持ち、その頭には三日月や二本の角が飾られている姿で描かれていた。　バアルへの礼拝は高地で行われ、アスタルテへの礼拝は谷間や緑豊かな樫の森（林）で行われた。丘や山に建てられたバアルの神殿は、常にアスタルテを称える樫の森に囲まれており、その中、丘のふもとにはアスタルテの祭壇が設けられていた。　アスタルテの祭司たちは「樫の森の者たち」と呼ばれていた。バアルは太陽神としての意味に加え、バアル・ゼブル（ハエの神）とも呼ばれていた。これは、海沿いの低地に居住し、大量のハエやその他の昆虫に悩まされていたペリシテ人が、ハエからの救済を彼に祈願していたためである。　また、彼は病を癒す者、そして予言者とも見なされていた。バアル・ヴェリフは、誓い、契約、同盟の神である。バアル・フェゴルは、戦争の神である。　イスラエル人は偶像崇拝に容易に夢中になった。なぜなら、真の神への奉仕には徳、祈り、罪の悔い改め、断食が求められるのに対し、偶像崇拝には踊り、饗宴、酩酊、その他の官能的な快楽が伴っていたからである。

「もっと大声で叫べ」と彼は言った。「そうすれば、あなたがたの神があなたたちの声を聞いてくれるだろう。おそらく、今、その神は手が離せないのだろう。何かで忙しかったり、誰かと話していたり、宴会を開いていたり、あるいは眠ってしまっているのかもしれない[5209] 。彼を起こすために、できるだけ大声で叫べ。」

偽預言者たちは大声でバアルを呼び、彼らの慣習に従ってナイフで自分の体を刺し、他の者たちは血が出るまで鞭で自分を打ち続けた。夕暮れが迫る頃、テシュベの聖エリヤは彼らにこう言った。

「黙れ、やめなさい。もう私のいけにえを捧げる時だ。」

バアルの崇拝者たちはやめた。そこでエリヤは民に向かって言った。

「私のところに来なさい！」

皆が彼のところへ集まった。 預言者はイスラエルの十二部族の数に合わせ十二個の石を取り、それらで主への祭壇を築いた。そして、祭壇の上に薪を積み、子牛を解体してその肉を薪の上に載せ、祭壇の周囲に溝を掘り、人々に四つの桶を持ってきて、犠牲と薪の上に水を注ぐよう命じた。人々はその通りにした。 エリヤはそれを繰り返すよう命じ、人々は繰り返した。三度目も 同じことをするよう命じ、人々はそうした。水が祭壇の周囲に注がれ、堀は水で満たされた。エリヤは天を見上げ、神に向かって叫び、こう言った。

「主よ、アブラハム、イサク、ヤコブの神よ！ 今、あなたのしもべである私の声を聞き、天から火を降らせてこのいけにえに下してください。そうすれば、このすべての民が、あなたがイスラエルの唯一の神であり、私があなたのしもべであり、あなたにこのいけにえをささげた者であることを知るでしょう。主よ、私の声を聞き、火をもって答えてください。そうすれば、この人々の心があなたに向くでしょう。

すると、主から天より火が降りてきて[5210] 、燃えるべきものすべて――薪も、石も、灰も、さらには堀にあった水までも――を焼き尽くし、火はすべてを滅ぼした。これを見た民は皆、顔を地面につけてひれ伏し[5211] 、「

「まことに、主こそ唯一の神であり、主以外に神はいない！」

エリヤは民に言った。

「バアルの預言者たちを捕らえ、一人も逃げられないようにしなさい。」

民はその命令に従い、エリヤは彼らをキッソン川へと連れて行った。その川は、その水を大海へと注いでいる[5212] 。そこで彼は自らの手で彼らを刺し殺し[5213] 、その不義な死体を水の中に投げ込んだ。それは、大地が彼らによって汚されることのないように、また空気が彼らの悪臭によって汚染されることのないようにするためであった。 その後、聖エリヤはアハブ王に、急いで食事と飲み物を済ませ、馬を戦車に繋いで旅立つよう命じた。まもなく、すべてを濡らすような大雨が降るからである。アハブが食事と飲み物をとっている間、エリヤはカルメル山に登った。 地面にひれ伏し、両膝の間に顔を埋めて、神に地上に雨を降らせてくださるよう祈った。その祈りが終わるとすぐに、まるで鍵が開いたかのように天が開き、大雨が降り注ぎ、人々を濡らし、渇ききった大地をたっぷりと潤した。 その時、アハブは自らの過ちに気づき、サマリアへの道中で自分の罪を嘆き悲しんだ。一方、聖なるエリヤは腰に帯を締め、徒歩で彼の前を歩きながら、主なる神の栄光を喜び祝った。

[5209] ユダヤ人には、一日の最も暑い時間帯、午前10時か11時から午後3時まで眠る習慣があった。

[5210] 天から火が降り注ぐことは、神が捧げられたいけにえを憐れみをもって受け入れてくださることを表していた。

[5211] ユダヤ人は祈りの際、顔を地面に伏せてひれ伏した。これにより、彼らは神の前での自らの堕落や、神の偉大さの前での自らの無力さを自覚し、また罪に対する悔恨の念を表していた。

[5212] キッソン川はカルミルの山の近く、その北側を流れ、当時「大いなる海」と呼ばれていた地中海に注いでいた。

[5213] モーセの律法によれば、公然と偶像崇拝を行う者、とりわけ他人を偶像崇拝に引き込む者は、死刑に処されることになっていた（申命記 13:1–18）。

不義な王妃、アハブの妻イゼベルは、起こったすべてのことを知ると、自分の恥知らずな預言者たちを滅ぼしたとしてエリヤに激しく怒り、自分の神々を誓いとして、明日、エリヤがバアルの預言者たちを殺したのと同じ時刻に、彼を殺すと告げさせた。　聖エリヤは死を恐れた。彼は人間であり、人間に特有の弱さをすべて備えていたからである。彼について「エリヤは私たちと同じような人間であった」（ヤコブ5:17）と記されている通りである。イゼベルの脅迫から逃れるため、彼はユダ王国のベエル・シェバ[5214]へと逃げ、一人で荒野へと向かった。荒野を一日歩いた後、彼は休息のためにジュニパーの茂みの下に腰を下ろした。悲しみに苛まれながら、彼は神に自分の死を願い求め、こう言った。

「主よ！　私がこれまでこの地上に生きてきたことは、もう十分です。どうか今、私の魂をお取りください。まさか、私が先祖たちよりも優れているというのでしょうか！」

預言者がこのように語ったのは、迫害による苦しみゆえではなく、人間の悪意や神への冒涜、そして主の至聖なる御名の誹謗を許さない、神の熱心な擁護者としての立場からであった。彼にとって、自分の神を軽蔑し、拒絶する不法者たちの言葉を聞き、その姿を見るよりは、死ぬほうがましだったのだ。　そのような祈りを口にしながら、エリヤは木の下に横たわり、眠りについた。すると、主の御使いが彼に触れて、こう言った。

「起きなさい。食べて、飲みなさい。」

起き上がると、エリヤは自分の枕元に温かい無発酵のパンと水の瓶があるのを見て、立ち上がり、食べ、水を飲み、再び眠りについた。主の御使いが再び彼に触れ、こう言った。

「起きなさい。食べて、飲みなさい。あなたには長い道のりが待っているからだ。」

エリヤは起き上がって、さらに食べ、水を飲み、この食事で力を得て、四十日四十夜歩いて、神の山ホリバ[5215]へと向かい、そこで洞窟に住み着いた。ここで彼と語り合ったのは、主なる神ご自身であり、清らかな空気の中を静かに吹く微風の中に現れた。　主が彼に近づかれるとき、その御出現を告げる恐ろしいしるしが先立って現れた。まず、山々を破壊し、岩を砕く激しい嵐があり、次に火が燃え上がったが、その火の中には主はいなかった。火の後に、そよ風が吹いた。そこにこそ、主がおられたのである[5216]。 エリヤは主が通り過ぎる音を聞くと、マントで顔を覆い、洞窟から出て、その入り口のそばに立った。すると、主が彼にこう語りかけるのが聞こえた。

「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

エリヤは答えた。

「主なる全能者よ、私はあなたのために熱心に嫉妬しました。イスラエルの子らはあなたの契約を捨て、あなたの祭壇を破壊し、あなたの預言者たちを剣で殺したからです。私一人だけが残されましたが、彼らは私の命を狙っています。」

主は、悲しみに沈むエリヤを慰め、イスラエルの民のすべてが御自身から背いたわけではないこと、御自身の前にひざまずかなかった七千人の隠れたしもべたちがいることを彼に明らかにされた。　同時に、主はエリヤに、間もなくアハブとイゼベル、そして彼らの家系全体が滅びることを告げ、エリヤに、イスラエルの王位に「イェフー」という名のふさわしい人物を立てるよう命じられた。そのイェフーこそがアハブの家系を根絶やしにし、エリシャを預言者として油注ぐこととなるのであ

[5214] ベエル・シェバの町は、ユダ南部に位置していた。

[5215] ホリブ山は、アラビア半島の南西部、紅海の北、シナイ山の近く、その少し北西に位置している。

[5216] エリヤは、すべての不義な人々が滅びるべきだと考えていた。しかし、主はエリヤの前に、嵐の中でも、地震の中でも、火の中でも現れず、静かな風の中で現れた。これは、主が、たとえ恐ろしい自然現象によって不義な者たちを滅ぼすこともできたにもかかわらず、柔和さと忍耐をもって人々を導くことをより良いと認めておられることを示すためであった。

る[5217]。こうして、主は御自分のしもべを慰め、彼のもとを去られた。神に愛されたこの人は、主の御命に従ってホリブを去り、道中でサファトの子エリシャに出会った。彼は十二組の牛で畑を耕していた。聖なるエリヤは自分のマントを彼の上に掛け、主の御心を告げ、彼を預言者と定め、自分の後についてくるよう命じた。するとエリシャはエリヤに言った。

「どうか、少しの間だけ、父と母に別れを告げるために私を許してください。そうすれば、あなたに従います。」

聖エリヤはこれを拒まなかった。エリセイは家に帰ると、自ら耕していた一組の牛を屠り、隣人や親族をもてなした後、両親に別れを告げてエリヤのもとへ行き、彼の従者であり弟子として、どこへでも彼に従った。

その頃、アハブ王は、不義な妻イゼベルの影響を受けて、これまでの不法行為に加え、次のような新たな悪行を犯した。

ナブテヤという名のイスラエル人の男が、サマリアにあるアハブ王の領地の近くにぶどう畑を持っていた。アハブはナブテヤにこう申し出た。

「そのぶどう畑を私に譲ってほしい。私の宮殿の近くにあるのだから、私の庭として使いたいのだ。その代わり、これよりはるかに良い別のぶどう畑を君に与える。もしそれが気に入らなければ、そのぶどう畑の代金を支払う。」

ナブフェイはこう答えた。

「主よ、どうか私を守ってください。先祖から受け継いだこの土地をあなたに譲るなど、とんでもないことです。[5218]。」

アハブは、ナブテの返答に当惑し、侮辱された思いで家に戻り、悔しさのあまりパンも口にできなかった。イゼベルは、彼の悲しみの原因を知ると、彼を嘲ってこう言った。

「イスラエルの王よ、あなたの権威とは、たった一人の人間に対してさえ、ご自身の意志を通すことができないほど弱いものなのでしょうか？　しかし、もう悲しむのはやめて、パンを食べて、少しの間待ってください。私が自ら、ナブテオのぶどう園をあなたの手に渡して差し上げます。」

そう言うと、彼女は王の名においてイスラエルの長老たちへの命令書を作成し、そこに王の印章を押した。 その文書には、ナブフェイに対して、 神と王を冒涜したという虚偽の告発を立て、偽証人を引き立て、町の外で石打ちの刑に処すよう命じていた。そして、その不法な命令により、不当な殺害が実行された。何の罪もないナブフェイが処刑された後、イゼベルはアハブに言った。

「さあ、今こそ、一銭も払わずにそのぶどう園を相続しなさい。ナブテヤはもうこの世にいないのだから。」

アハブはナブテヤの殺害を聞いて少し悲しんだが、その後、そのぶどう園を自分の所有とするためにそこへ向かった[5219]。道中、神の御命により、聖なる預言者エリヤが彼に出会い、こう言った。

「あなたは無実のナブテヤを不当に殺し、そのぶどう園を不法に奪った。それゆえ、主はこう言われる。犬たちがナブテヤの血を舐めたまさにその場所で、犬たちはあなたの血も舐めるだろう。また、あなたの妻イゼベルも犬たちに食い尽くされ、あなたの家系はすべて滅ぼされるだろう。」

アハブはこの言葉を聞くと、泣き崩れ、王の衣を脱ぎ捨て、粗布を身にまとい、断食を行った[5220]。そして、主の前で行われたアハブのこのささやかな悔い改めは、これほどの力を発揮し、彼の

[5217] このことから、王や預言者への油注ぎを通じて、彼らに聖霊が与えられ、聖霊が彼らを他の人々よりも計り知れないほど高め、人々に対する神の権威の代表者および道具とするということが分かる。

[5218] モーセの律法は、相続財産を売却することを禁じていた（民数記36:7）。

[5219] 王に対する罪で処刑された者の財産は、王の所有となった。

[5220] 古代の人々は悲しみを表すために、自分の衣服を引き裂いた。すなわち、胸の前で衣服を引き裂き、頭に灰や土をまき、粗布を身にまとった。粗布とは、フェルト生地で作られた、硬く、細身で、袖のない、袋のような衣服である。また

家全体に下された罰の執行は、アハブの死後まで延期されることとなった。　主は御自分の預言者エリヤにこう言われた。

「アハブが心を改めたのだから、彼の存命中にはその家に災いを下すことはしない。しかし、その子の代には下す。」

その後、アハブは三年間生き、戦いで殺された[5221]　。戦場から彼は戦車に乗せられてサマリアへ運ばれ、戦車から流れ出る彼の血を、神の預言者が予言した通り、犬たちが舐めた。　また、イゼベルとアハブの家全体について預言されたことはすべて、聖エリヤが天に上げられた後、やがてその時期が来て成就した（列王記下9:1–37）。

アハブの死後、彼の息子オホジアが王位を継いだが、彼は王位だけでなく、父の不義も受け継いでしまった。というのも、不義な母イゼベルの言うことを聞き、バアルを礼拝し、犠牲を捧げたため、イスラエルの神を大いに怒らせたからである。　ある日、不注意のせいで、オホジアは自宅の窓から転落し、重病に陥った。彼は偽りの神バアル、すなわちバアルの偶像の中に住み、問いかけられた者に偽りの答えを与える悪魔のもとへ使者を送った。　オホジアは、自分の健康状態や、この病気から回復できるかどうかを尋ねるために、その悪霊のもとへ使者を遣わした。オホジアの使者たちがバアルのもとへ向かう途中、神の御命により、預言者エリヤが彼らの前に現れ、こう言った。

「イスラエルには神がおられないというのか。なぜバアルに尋ねに行くのか。引き返して、あなた方を遣わした王にこう告げよ。『主はこう言われる。あなたが横たわっている床から起き上がることはなく、その上で死ぬであろう』」

使節たちは戻ると、病床にある王にこの言葉を伝えた。王は彼らに尋ねた。

「あなたたちにその言葉を告げた男は、どんな風貌だったか。」

彼らは答えた。

「その人は全身が毛に覆われており、腰には革の帯を締めていました。」

王は言った。

「それはテシュベのエリヤだ。」

そこで王は、五十人隊長の長老と、彼に従う五十人の兵を遣わし、エリヤを捕らえて自分のところへ連れてくるよう命じた。彼らは出かけて行き、カルミルの山でエリヤを見つけた。彼は普段から主にこの山に滞在していたからである。山の頂上に座っているエリヤを見て、五十人隊長は彼に言った。

「神の人よ。ここへ下りて来なさい。王が、あなたに自分のところへ来るよう命じておられます。」

聖エリヤは五十人の隊長に答えた。

「もし私が神の人であるなら、天から火が降りてきて、あなたとあなたの五十人の部下を焼き尽くすように。」

するとたちまち、天から火が降り注ぎ、彼らを焼き尽くした。王は別の五十人隊長を、同じ数の兵士を率いて遣わしたが、彼らにも同じことが起こった。天から降り注いだ火が、彼らをも焼き尽くしたのである。 王は三番目の 五十人隊長を五十人の兵士と共に遣わした。この五十人隊長は、先に遣わされた者たちに何が起きたかを知ると、恐れと謙遜の心をもって聖エリヤのもとへやって来て、彼の前にひざまずき、こう言って懇願した。

、断食をし、体を洗わなかった。　衣服を洗ったり着替えたりせず、あらゆる装飾品、さらには靴やサンダル（紐で靴底に固定する板）までも外し、裸足で歩き、頭髪や髭を刈り落とした。　深い悲しみに沈み、塵や灰の積もった地面に座り込んだり横たわったりし、顎、すなわち鼻より下の顔を覆って、話したくないという意思を示し、さらには顔全体や頭まで覆った。

[5221] シリアの王ベナダドとの戦争の際。

「神の人よ！　私と、私と共に来たこれらのあなたのしもべたちは、今、あなたの御前に立っています。どうか私たちを憐れんでください。私たちは自らの意志で来たのではなく、あなたのもとへ遣わされたのです。私たちの前に遣わされた者たちを滅ぼしたように、私たちを火で滅ぼさないでください。」

そして預言者は、謙虚な心で来た者たちを憐れんだ。しかし、先にやって来た者たちについては、彼らが傲慢と権力をもってやって来て、預言者を捕虜として連れ去り、不名誉な扱いを受けさせようとしたため、憐れみを与えなかった。　主は聖なるエリヤに、この三番目の者たちと共に恐れることなく行き、以前と同じ言葉を王に告げるよう命じられた。そこで、神の人は山を下り、五十人の隊長とその部下たちと共に歩んだ。そして王のもとに着くと、エリヤは彼にこう言った。

「主はこう言われる。あなたは、あたかもイスラエルに尋ねるべき神がおられないかのように、自分の命についてバアルに尋ねる使者を送った。それゆえ、あなたは今横たわっている寝台から起き上がることはなく、死ぬであろう。」

こうして、預言者の口を通して語られた神の言葉のとおり、オホジアは死んだ。　オホジアの後を継いで、その兄弟ヨラムが王位についた。オホジアには息子がいなかったからである。こうして、ヨラムの代をもってアハブ家の系譜は絶えた。それは、聖なる預言者エリシャの時代に、神の怒りによって滅ぼされたからであり、そのことはエリシャの伝記にも記されている。

さて、主がエリヤを肉体のまま生きたまま御許に召し上げられると定められた時が近づくと、エリヤとエリシャはガルガラの町からベテルの町へと向かっていた。　神の啓示によって、自分がまもなく天に召されることを知っていたエリヤは、エリセイをガルガラに残そうとし、神から与えられる栄光について、彼には謙虚に隠そうとした。　彼はエリシャに言った。「あなたはここに留まりなさい。主がわたしをベテルへ遣わされたからです。」しかし、聖なるエリシャもまた、神の啓示によってこれから起こることを知っていたため、こう答えた。

「主が生きておられる限り、またあなたの魂が生きておられる限り、私はあなたを離れません」――こうして二人はベテルへと向かった。ベテルに住んでいた預言者の弟子たち[5222]は、エリシャに二人きりで近づき、こう言った。

「主が、あなたの主君をあなたの目の前から取り去られることを、あなたはご存知ですか。」

エリシャは答えて言った。

「私も知っている。しかし、黙っておいてくれ。」

その後、エリヤはエリシャに言った。

「あなたはここに留まりなさい。主はわたしをエリコへ遣わされたのです。」

エリシャは彼に答えて言った。

「主が生きておられる限り、またあなたの魂が生きておられる限り、私はあなたを離れません」――こうして二人は共にエリコへ行った。エリコにいた預言者の弟子たちは、エリシャに近づいて言った。

「今日、主があなたの主を、あなたの目の前から取り去られることを、あなたはご存知ですか。」

エリシャは答えた。

[5222] イスラエル人において「預言者の息子たち」とは、預言者の弟子たちを指した。彼らは学校や共同体を形成し、預言者たちの直接的な指導の下で教育を受けていた。　預言者の弟子たちは、祈り、教訓的な対話、敬虔な賛美歌や音楽に励み、時には神の霊感の高みに達することもあった。「預言する」とは、聖書によれば、必ずしも神の啓示による「未来の予言」を意味するわけではないが、　この言葉は時に、「神の御霊の影響を受けて霊感に満ちた言葉を語り、教訓に富み、聖霊に満たされた説教を行い、神の御言葉を解釈し（Iコリント14:3–6）、神への祈りや賛美歌を創作し、音楽に合わせてそれらを唱え、歌うこと」を意味することもある。　これらすべてが、預言者学校の目的であり課題であった。そのような学校は、ラマ、ベテル、エリコ、ガルガル、その他の場所にあった。

「もう知っている。黙っていなさい。」

聖エリヤは再びエリシャに言った。

「ここに留まりなさい。主がわたしをヨルダン川へ遣わされたからです。」

エリシャは言った。

「主が生きておられる限り、またあなたの魂が生きておられる限り、私はあなたから離れません」と言い、二人は共に歩み出した。　その後を、少し離れたところから、預言者の弟子たち五十人がついて行った。二人の聖なる預言者がヨルダン川にたどり着くと、エリヤは自分のマントを取り、それを丸めて水に打ちつけた。すると、水は両側に分かれ、二人は乾いた足でヨルダン川を渡った。ヨルダン川を渡り終えると、エリヤはエリシャに言った。

「わたしがあなたのもとから連れ去られる前に、あなたのために何をしてあげようか、私に願いなさい。」

エリシャは答えて言った：

「どうか、あなたの中にある霊が、私の中にも、あなたの二倍になるように願います。[5223] 。」

エリヤは言った。

「それは難しい願いだ。しかし、もし私があなたのもとから連れ去られるのを見たら、あなたの願いは叶うだろう。もし見なければ、叶わない。」

彼らが歩きながらそう話していると、突然、火の戦車と馬が現れ[5224] 、二人を引き離し、エリヤは旋風に乗って天に上げられた。エリシャはそれを見て叫んだ。

「父よ、父よ！　イスラエルの戦車と騎兵だ！（この言葉で、彼はまるでこう言っているかのようだった。「父よ、あなたはイスラエルにとってすべての力そのものでした。あなたの祈りと熱意によって、あなたはイスラエル王国を、数多くの戦車や武装した騎兵たちが助けたよりもはるかに大きく支えてきたのです。」）エリシャはもはやエリヤの姿を見ることができなかった[5225] 。 そこで彼は自分の衣をつかみ、悲しみのあまりそれを引き裂いた。まもなく、天から投げ落とされたエリヤの外套が彼の足元に落ちた。それを拾い上げ、エリシャはヨルダン川の岸辺に立ち止まり、エリヤと同様にその外套で水を両側に分けて、乾いたまま川を渡り、師に働いていた恵みの後継者となった。

一方、神の聖なる預言者エリヤは、肉体を伴って火の戦車に乗って天に上げられ、今なお肉体を保ったまま、神によって楽園の住処に守られている。　主のファヴォレ山での変容の際、三人の聖なる使徒たちは彼を目撃した（ルカ9:30）が、主が再び地上に来られる際、普通の凡人である人々もまた彼を目にするだろう。　イゼベルの剣による死を免れた彼は、その時には反キリストの剣によって苦難を受けることになる（黙示録11:3–12）。そして、もはや預言者としてだけでなく、殉教者として、義なる報い主である神――三位一体の唯一なる神、　父と子と聖霊の御名において、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン[5226] 。

[5223] 預言者エリシャは、偉大な道徳的気概と預言の賜物を持っていた預言者エリヤでさえ、イスラエル人の中にいる頑なな不信心者たちを真の神へと立ち返らせることはできなかったことを見ていた。　そこで、神の栄光を熱心に守り、自らの無力さを自覚していた彼は、エリヤが持っていた預言的かつ奇跡を行う霊を、倍増して自分に与えてくれるよう求めたのである。

[5224] エリヤを天に迎え入れた神の力は、炎の戦車と炎の馬の姿をとって現れた。それは、エリヤの燃えるような精神と言葉を証しし、彼を神の栄光を熱心に守り抜いた勝利者であり、イスラエルの民の守護者として称え、また、　彼が、神への愛に燃え、まるで炎のような霊たちが住む場所へと引き上げられたことを示すためであった。

[5225] 『歴代誌下』第21章では、聖エリヤが天に上げられた後にユダを統治していたヨラム王について、「預言者エリヤから彼に手紙が届いた」と記されており、その手紙の中で預言者は彼の不法を糾弾し、悲惨な最期を予言していた。

[5226] 聖預言者エリヤの生涯に関する記述は、『列王記下』17章1～24節、18章1～46節、19章1～21節、21章1～29節、および『列王記下』1章1～18節、2章1～25節、3章1～27節に記されている。

トロパリオ、第4調:

肉体に宿った天使、預言者たちの礎、キリストの再臨の第二の先駆者、栄光あるエリヤよ。天よりエリセオに遣わされ、病を追い払い、ハンセン病患者を清める恵みを与えた。それゆえ、彼を崇める者たちにも、癒やしを注がれる。

コンダク、第2調:

預言者にして、我らの神の偉大な御業を見通す者、名高きエリヤよ、汝の御言葉によって雨を降らせる雲を定めた者よ、唯一の愛人なる御方の御前で、我らのために祈り給え。

私たちの尊い父、チュフロムスクの、ガリチの大奇跡行者アブラアミオスの記念日

記念日：7月20日

この尊い父は、若き頃から神への愛に燃え、偉大なる奇跡行者セルギイのもとを訪れ、彼から修道者の剃髪を受けました。その徳高い生涯により、司祭の位を授けられ、その後、さらに熱心に修道者の業に専念するようになりました。　並外れた謙遜さを備えていた彼は、聖セルギイの修道院を離れ、ガリチ地方の荒野 へと退き[5227] 、そこで多くの修道院を設立した[5228] 。彼はある山に近い場所を訪れ、涙を流しながら祈りに没頭した。その時、山から声が聞こえ、こう告げた。

「アブラミイよ！ 山に登りなさい。ここにはわが母のイコンが立っている。」

聖人は山に登ると、そこに生えていた木の一つに、永遠の御子を抱いた聖母マリアのイコンが掲げられているのを見た。ひれ伏して涙ながらに祈りを捧げていると、再び声が聞こえてきた。

「立ちなさい、アブラミイ！」

彼は立ち上がると、そのイコンは誰にも支えられずに、自ら彼の腕へと降りてきた。この場所で彼はまず自分の修道室を建て、長い間ここで隠遁生活を送った。そして、多くの年月が経った後、この人里離れた場所に修道院を設立し、多くの弟子を集め、衰えることのない熱意をもって断食と禁欲に励んだ。　神のもとへ旅立つ時をあらかじめ知っていた聖人は、修道院の兄弟たちを呼び集め、彼らの魂の益となるよう教えを授け、キリストの御体と御血を拝領し、1375年7月20日、永遠の住まいへと旅立った[5229] 。今、常に、そして永遠に、私たちの神に栄光あれ。

[5227] ここでいう「チュド」とは、当然ながら、現在のコストロマ県にあるガリチとチュフロマの両都市周辺に居住していたチュド族を指す。後者の地名に由来して、聖アヴラアミイは「チュフロマの」という称号を得たのである。

[5228] 聖アヴラアムによって設立された修道院は以下の通りである。ガリチ近郊、チュフロム湖（またはチュド湖）のほとりにあるウスペンスカヤ修道院、ウスペンスカヤ修道院から30ヴェルスタ離れた小さな湖のほとりにある「アヴラアムの偉大なる荒野」、ヴォチ川のほとりにあるヴォチスカヤ修道院、そしてポクロフスカヤ修道院（ヴォチスカヤ修道院から13ヴェルスタ離れた場所にある）。　これらの修道院は、周辺の住民に極めて有益な影響を与えた。住民たちは洗礼を受けてキリスト教徒ではあったものの、キリスト教信仰の基本的な真理についてはほとんど知らず、極めて粗野な風習や習慣を持ち、多くの古代チュド地方の迷信を保持していた。

[5229] 聖アブラアムは、自ら設立したポクロフスキー修道院でこの世を去った。その聖遺骨は、彼の名に捧げられた教会の付属礼拝堂の地下に安置されている。

8月3日

7月21日（旧暦）

同日は、12世紀に修道生活を送ったペチェールスの沈黙の聖オヌフリオの記念日である。

聖預言者エゼキエルの生涯

記念日：7月21日

聖預言者エゼキエルは、サリラという名のユダヤ人の町に生まれました。彼はレビ族のブジヤの息子であり、至高の神の祭司でした。 第二のエルサレム捕囚の際、彼はネブカドネツァル[5230]によって、イェホニア2世（4列王記24:1）と呼ばれるユダ王ヨアキムと共に、バビロン[5231]へ捕囚として連行された。 エルサレムはバビロンの王ネブカドネツァルによって三度陥落した。最初の陥落は、ユダ王ヨアキム（聖書ではエリヤキムとも呼ばれる（列王記下23:34））の治世のことであり、彼はヨシヤの息子であり、ヨアハズとゼデキヤの兄弟、そしてもう一人のエホニアの父であった。 彼は最初にネブカドネツァルによって鎖につながれ、バビロンへ連行された。その際、聖なる預言者ダニエルも、アナニア、アザリヤ、ミサイヤという三人の若者と共につれて行かれた。しかし間もなく、ネブカドネツァルはヨアキムを解放し、彼を自分の属国として、再びエルサレムで統治させた。 ネブカドネツァルの支配下でエルサレムに3年間統治した後、ヨアキムは、この3年が満了すると、彼への貢納を拒んで離反した。そのため、バビロンの軍勢が再びエルサレムに侵攻し、聖なる都は陥落し、 ヨアキム王は殺害され、城の外に捨てられて犬に食わせられた。そして、ネブカドネツァルの命令により、彼の後を継いで王位に就いたのは、同じくヨアキムという名の息子であった。彼は父のもう一つの名であるエホニアとも呼ばれ、第二のエホニアとして、かつての父と同様にバビロンの王の属国とされた。 しかし、このもう一人のエホニアもまた、主なる神の御目には悪を行う者として映ったため、神の許しにより、ほどなくしてネブカドネツァルは再びエルサレムに攻め入り、エホニアとその一家全員を捕虜とし、多くの貴族や勇敢な戦士、武器を携えることのできる者すべてを連れ去り、 様々な芸術家たちを連れ去り、神殿の金の器も奪い去った。これが第二のエルサレム捕囚であった。この捕囚の際には、聖なる預言者エゼキエル、マルドヘイ、そして後にゾロバベルと共に荒廃したエルサレム神殿を再建したイエスの父ヨセデクも連れ去られた。 一方、ネブカドネツァルによるエルサレムの第三次かつ最後の破壊と荒廃は、セデキヤ王の治世[5232]に起こった。セデキヤは、ネブカドネツァルがエホニアの代わりに王位に就かせ、貢納を課した人物である。 しかし、セデキヤもまたネブカドネツァルの支配から脱却すると、ネブカドネツァル自身はカルデア軍を率いて再び攻め込み、エルサレムを完全に破壊し、火と剣によって住民を皆殺しにし、生き残った民を捕虜として連れ去った。 それ以来、ユダ王国も、イスラエル王国全体も、その存在を終えた。このネブカドネツァルによるエルサレムの第三の破壊については、聖預言者エレミヤの生涯に詳しく記されている。

[5230] ネブカドネザル――これは数人のバビロニア王の名前である。 ここでは当然、ナボパラッサルの息子であるネブカドネツァル2世を指す。彼はシリア、ペルシア、エジプトを征服し、ユダヤ人を捕虜として連れ去った偉大な東方の征服者であり、紀元前605年から562年まで在位した。

[5231] バビロン――カルデアの首都――は、世界で最も古く、最も豊かな都市の一つであり、フシャまたはクシュの息子であり、ハモクの子孫であるニムロドによって建設された。ユーフラテス川の両岸に位置するバビロンは、その形状が広大な平原に築かれた四角形を彷彿とさせた。 都市の周囲は400ヴェルスタに及び、城壁の厚さは30アルシンもあったため、その上を6台の戦車が並んで走ることができた。城壁の上には250の塔がそびえ立ち、銅で造られた100の門があった。 都の中心部では、川を横切る巨大な橋が架かっており、その東側には王宮と異教の神ベルの神殿が聳え立っていた。その後、バビロンはペルシアの王キュロス、ダレイオス、クセルクセス、そしてマケドニアのアレクサンドロスによって征服され、完全に荒廃した。

[5232] ゼデキヤは紀元前599年から588年まで在位した。

バビロン捕囚の身であった神の祭司エゼキエルは、ホヴァルと呼ばれる川のほとりに住んでいた。そして、彼が三十歳になった年、エホニアが捕囚となってから五年目、第四の月[5233]、その月の五日目に、彼には驚くべき幻が現れた。彼は天が開くのを見た。　北から強い風が吹き、そこから巨大でまばゆいばかりの雲がやって来た。その中心には炎が揺らめき、周囲には輝く光に包まれていた。その雲の中から、四つの生き物の姿が現れた。その姿は、火で焼かれた純銅のようであった。　それぞれの生き物には四つの顔があった。人の顔、獅子の顔、子牛の顔、そして鷲の顔である。さらに、それぞれに四つの翼があり、翼の下には人の手があった。二つの翼は飛ぶために広げられ、残りの二つの翼で体を覆っていた。生き物たちの間では火が渦巻き、その火から稲妻が放たれていた。　また、四つの大きな車輪も見え、それぞれの生き物のそばに一つずつあった。これらの車輪は、海のように紺碧色のファルシス石のようで、太陽の光が反射して金色の輝きを放っていた。　これらの車輪の中には、あたかも別の車輪があるかのように見えた。これらすべての車輪は、まるで生命を宿しているかのように、生命の力を持ち、至る所に目が満ちていた。そして、四匹の獣は、まるで戦車のように、これらの車輪に繋ぎ止められているようであった。獣たちが動くとき、車輪も共に動き、獣たちが止まると、車輪も止まった。　行進の間、その翼からは、あたかも多くの水の音、あるいは大勢の人が集まる陣営のざわめきのような音が聞こえてきた。しかし、彼らが立ち止まると、その翼も静まり返った。彼らがそうして立ち止まり、静まり返っているとき、高みから神の御声が響いてきた。というのも、この四つの生き物と車輪の上には、水晶のような天のドームが見え、そのドームの上には、まるでサファイアのような玉座があり、その玉座の上には、まばゆいばかりの人間の姿があり、その周囲には、雨の日に雲の中に輝く虹のような輝きがあったからである。

聖なる預言者エゼキエルは、このように主の栄光の幻を見たのである。　神に賢く、神に霊感を受けた人々の解釈によれば、この幻において、サファイアのような玉座に坐すまばゆいばかりの人間の姿は、聖母マリアの胎内における神の御子の受肉を予表していた。聖母マリアは、彼女から人となった神のための生ける玉座であり、このサファイアのような玉座によって予表されていたのである。　なぜなら、その明るい色が天に似ており、天のように星や金色の微粒をその内に秘めている宝石サファイアは、天の性質と同様に、いかなる欠点も持たない至聖なる聖母マリアの象徴となっているからである；　その御胎は、収めきれないお方をその内に収め、天よりも広大であり、また、星々のように、神の恵みの数多くの賜物で飾られている。　四つの顔を持つ四つの獣は、四人の聖なる福音記者を象徴しており、彼ら一人ひとりは、地上の民とのキリストの生涯を描きながら、これらの獣に人間の顔として表されたキリストの人間性を描き出した；　キリストの神性は獅子の顔によって表され、キリストの受難は牡牛の顔によって示され、　キリストの復活と昇天は鷲の顔によって描かれている[5234]。無数の目を持つ四つの車輪、その中に他の車輪も見えるものは、様々な民族を内包する宇宙の四つの部分を象徴していた；　そこに浸透した使徒たちの宣教は、多くの民族の霊的な目を開き、神を知り、神を仰ぎ見るようにした。また、その啓示の真ん中を動き回る火と、その周囲を包む大いなる輝きは、近づきがたい神の栄光の威厳を表していた。　また、他の霊的な奥義も、その驚くべき、そして恐ろしい幻の中に象徴的に示されていた。聖エゼキエルはその幻を仰ぎ見たとき、恐怖のあまり地面にひれ伏し、上の方から、人の姿をした御座に坐しておられる方から、彼にこう語りかける声を聞いた。

「人の子よ、立ち上がれ。そうすれば、わたしはあなたに語りかける。」

すると、ある目に見えない力が彼に入り込み、彼を地面から持ち上げ、立ち上がらせた。

預言者が、御前に現れた主の栄光の前に畏れおののきながら立ったとき、主は彼にこう言われた。

[5233] つまり、3月から数えて6月ということになる。

[5234] これに応じて、絵画では聖なる福音書記者たちが象徴的に描かれている——マタイは人の姿で、マルコは獅子の姿で、ルカは子牛の姿で、ヨハネは鷲の姿で。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家、すなわち、わたしを悲しませ、わたしを侮った民のもとへ遣わす。　彼らも、その先祖たちも、今日に至るまでわたしを拒み続けてきた。彼らは心が頑なで、心は冷酷な者たちである。わたしはあなたを彼らのところへ遣わす。あなたは彼らにわたしの言葉を告げよ。たとえ彼らが激昂して、サソリのようにあなたを取り囲んだとしても、彼らの顔を恐れてはならない（エゼキエル2:3–4）。

主がこう語られたとき、エゼキエルは、自分に向かって差し伸べられた手と、その手にある巻物を見た。その手は彼の前でその巻物を広げ、その内側と外側には、「嘆き、うめき、悲しみ」と書かれていた。

主は彼に言われた。

「人の子よ。この巻物を食べ、行って、わたしがあなたに命じることをイスラエルの子らに告げなさい」（エゼキエル3:1）。

エゼキエルは口を開き、その巻物を食べた。すると、それは彼の口の中で蜜のように甘かった。その時から、エゼキエルは預言の霊と恵みに満たされ、その後、神が彼に語られたことはすべて、彼は心に受け入れた。　そして、この驚くべき幻が彼の目の前から消え去ろうとしたとき、彼は、まるで大勢の群衆の声のような声がこう言うのを聞いた。

「主の御座から発する主の栄光は、ほかに類を見ないほど祝福されている！」

その際、空を舞う生き物たちの翼の音や、動く車輪の音は、大地震の轟きに似ていた。こうして、神の栄光のこの恐るべき戦車は、彼の目の前から上へと去り、幻は終わった。この幻の後、預言者は七日間、沈黙を守り、見たことや聞いたことを深く思索した。　そして再び、主の御言葉が彼に臨み、こう言われた。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとして立てた。あなたはわたしの口から出る言葉を聞き、わたしに代わって彼らを戒めなければならない。　わたしが不義の者に『あなたは死によって死ぬ』と言ったとき、もしあなたが彼を戒めず、不義の者をその不義の道から遠ざけて生かそうと語らなければ、その不義の者は自分の不義のうちに死ぬことになり、わたしは彼の血をあなたの手に求めて問いただす。　しかし、もしあなたがその不義の者に戒めを告げ、それでも彼が自分の不義と不義の道から立ち返らなかったなら、彼は自分の不義のうちに死ぬが、あなたは自分の魂を救うことになる。

その後、霊によって野原に連れ出されたエゼキエルは、以前と同様に主の栄光を再び見、主が彼に口を開いて神の言葉を語り、宣べ伝えるよう命じられるまで、自分の家に閉じこもり、沈黙を守り続けるよう命じられた。　この沈黙の期間中、数年後に起こるエルサレムのカルデア人による最後の包囲と荒廃、そして民の滅亡が彼に啓示された。それは、彼が単に言葉で人々にこれを告げるだけでなく、行動によってもそれを表すためであった。主は彼に、頭と顎ひげを剃り、髪を秤で三等分するよう命じられた。　そのうちの1部を、彼と共に捕囚となっていた人々の目の前で火で焼き、別の1部を剣で切り刻み、3番目の1部を風に散らすことで、　（これにより）、真の悔い改めに立ち返ろうとせず、偶像崇拝という忌まわしい行いを捨てようとしないイスラエルの民を、エルサレムおよびパレスチナ全土において懲らしめようとする神の怒りが、その義なる裁きによって彼らを三つの部分に分け、それぞれの部分がそれぞれの罰を受けるようにしたことを示したのである。　すなわち、エルサレム包囲の際、ある一団は飢餓と疫病によって死に、別の集団はカルデア人の剣によって倒れ、そして三つ目の集団は世界中に散らばることになる。　これらすべては後に実現した。ユダヤの民が神を大いに怒らせたからである。というのも、当時、ユダヤ人は　、力強い御手と高き御腕をもって彼らの先祖をエジプトから導き出した天の神に仕えていたものの、ソロモンの時代から偶像にひれ伏すことに慣れ、　彼らはそれらを捨て去ることはなく、神に忌み嫌われる祭りに惑わされていた。その祭りの間、誰からも禁じられることなく、彼らは卑劣な宴を催し、恥ずべき不法な行いを犯していた。というのも、王たち自身、諸侯、裁判官、長老たちまでもが、この不敬虔の先導者となっていたか

らである。　それゆえ、ユダヤ人たちは天の神を崇拝しつつも、偶像崇拝という不義に固執し、神の神殿に偶像を安置した。かつて唯一の至高の神ご自身に犠牲が捧げられていたその場所で、　その後、同時に悪魔への忌まわしい生け贄も捧げられるようになった。これは主にとって極めて不快なことであった。なぜなら、それはこの民を、真の夫への忠実さを守らず、他の者とも姦淫を犯す姦婦に例えるものだったからである。　それゆえ、福音書において主はこの民について、*「悪しき、姦淫の民」*（マタイ12:39）と述べられたのである。また、それ以前にもエレミヤの預言（エレミヤ3:1）において、神はこの民を姦淫の妻に例え、長い間、聖なる預言者たちを通じて悔い改めるよう戒め続けてこられた。　しかし、彼らが悔い改めなかったため、神は彼らをカルデア人の手に委ねて完全に滅ぼし、その地を七十年間荒れ果てた状態に置かれた。とはいえ、七十年の経過後、エルサレムと神殿はゾロバベルによって再建されたものの、もはやかつての美しさ、富、栄光は失われていた。　また、バビロンの捕囚から解放されたユダヤ人たちは再び自分たちの地に移り住んだものの、もはや自分たちの王によって統治されることはなく、異邦人の重苦しい支配下に置かれ、最初はバビロンの王、次にエジプトの王、そしてローマの王に仕え、最終的に彼らによって滅ぼされてしまった。　このエルサレムの最終的な荒廃について、主ご自身が次のように預言された。*「ここには石が石の上に残されることなく、すべてが破壊される」*（マタイ24:2）。また、カルデア人による以前の荒廃については、聖なる預言者エゼキエル（他の聖なる預言者たちと共に）が予告していた。

バビロニア、すなわちカルデアの地に捕囚となっていた聖預言者エゼキエルの時代、エルサレムには聖預言者エレミヤが住んでいた。　この二人の預言者は互いに遠く離れていましたが、それにもかかわらず、彼らは口を揃えてエルサレムの荒廃や、彼らの書物に記されている他の多くの事柄を予言しました。それは、両方の預言者の中に神の御霊が働いていたからです。　また、エルサレムの人々の何人かによって、エレミヤの預言の言葉がバビロンの捕囚となった同胞たちへと送られ、バビロンからはエゼキエルの言葉がエルサレムへと送られた。　また、エゼキエルはバビロンで自国民の前で、エレミヤの預言が真実であることを証しし、エルサレムではエレミヤがエゼキエルの預言の真実を証ししたが、　しかし、堕落し、信仰心の薄いユダヤ人たちは、どちらの預言者にも信頼を寄せようとはしなかった。彼らは偶像崇拝に惑わされ、偽預言者たちを全面的に信頼し、真に神の御霊によって預言していた聖なる預言者たちを、偽者だと見なしていたのである。　それゆえ、エレミヤはエルサレムの人々に迫害され、エゼキエルはバビロン捕囚の身であった者たちによって、苦痛を伴う鎖で縛られていた。これは、主が彼に*「見よ、彼らはあなたに束縛を課し、それをもってあなたを縛るであろう」*（エゼキエル3:25）と予告されたとおりであった。聖エゼキエルは極めて洞察力に富んでおり、遠く離れた場所で起きている出来事を、あたかも目の前で起こっているかのように見ることができた。バビロンに居ながらにして、エルサレムで起きていることを見（エゼキエル8:11, 16）、共に捕囚となっていた民にそのことを語った。　ある時、彼は天使によってバビロンからエルサレムへと移され、ソロモンの神殿に立たされた。そこで、聖なる場所に荒廃をもたらす忌まわしいものとして、外にも内にも立っている偶像や、それらを称えて行われている不敬な礼拝を目撃した。　イスラエルの長老たちが偶像の前で香を焚く様子、祭司たちが神の御座から顔を背け、太陽を礼拝している様子、 また、女性たちは座ってファムムズ――ギリシャ人が作り出したアドニス[5235] ――を悼んで泣いていた。彼は不貞なヴィーナス[5236] と姦淫を犯し、野生のイノシシに倒されたが、異教徒たちからは神々の列に加えられ、堕落したユダヤ人たちからは神として受け入れられていた。　彼はまた、かつてホヴァレ川で見たのと同様の神の栄光を見た。その栄光は怒りに満ち、神殿を空っぽにして出て行こうとしていた。そして彼は、主が彼にこう語られるのを聞いた。

[5235] アドニスは、古代ギリシャ人にとって、作物の神、ひいては自然そのものの神とみなされていた。
[5236] ヴィーナスは愛と美の女神である。

「人の子よ！　あなたが目にするように、この人々が犯している不義は、もはや甚だしいものではないか？　彼らは地を不義で満たし、わたしを深く怒らせている（まるで、わたしを怒らせ、苛立たせるために共謀しているかのようだ）。それゆえ、わたしもまた、わたしの激怒をもって彼らに報復し、わたしの目は彼らを容赦せず、憐れみも示さない。たとえ彼らが大声でわたしの耳に叫んだとしても、わたしは彼らの声を聞かない。

その後、さらに力強い神の声が聞こえてきた。それは威厳と恐怖に満ちて叫び、預言者にこう告げた。

「この町への報復と滅びが近づいた。皆、その手に滅びをもたらす武器を握れ。」

主がこう言われると、剣を抜き放った六人の恐ろしい武装した男たちが現れた。その中には、白い祭司の衣をまとい、インク壺と書記の杖を携えた男がいた。主はその男にこう言われた。

「エルサレムの町の真ん中を通り抜け、心の中で嘆き、この町でなされている不法な行いを嘆き、泣いているわたしのしもべたちの額に印をつけなさい。わたしの選んだ者たちを、わたしは懲罰から救い出す。」

そこで、この立派な姿の男は祭司の衣を身にまとい、真の神に忠実に仕える人々の額に印をつけた。その印は、ギリシャ文字の「タウ」と呼ばれるもので、正直な十字架に似ており、まるで我々のアルファベットで「T」の大文字が書かれるのと同じようであった。 一方、この威厳ある司祭の装いをした男が街を歩き回り、神の僕たちに印をつけている間、その後に、カルデア軍の六人の将軍を象徴する恐ろしい六人の男たちが送り込まれた。彼らは、エルサレムを滅ぼすためにネブカドネツァルと共にやって来るはずだった者たちであった。　この六人の男たちに、怒りに燃える主はこう言われた。

「行け、打ち倒せ。容赦するな。老人も若者も、妻も乙女も、赤子も、誰一人として見逃すな。聖別された祭司や長老たちから始めて、すべてを死に至らしめよ。ただし、わが印を持つ者には手を触れるな。」

そして、聖なる預言者はこの幻の中で、エルサレムの民のあらゆる身分や年齢、男女を問わず皆が打ち殺されるのを見た。それは後に実際に起こるべきことだった。預言者は主の御前にひれ伏し、こう叫んだ。

「ああ、悲しや、悲しや！　主アドナイよ、私はいかに苦しむことか。あなたはイスラエルの残りの者を滅ぼし、エルサレムに御怒りを注がれるからです！」

その後、彼は再び、祭司の衣をまとったその立派な姿の男を見ました。その男は主のもとに戻ると、こう言いました。

「主よ、私はあなたが命じられたとおりにしました。」

そして再び主は彼に命じ、ケルビムの車輪の間から燃える炭を両手にすくい取り、それをエルサレム全土にまき散らすよう命じられた。それは、エルサレムがカルデア人によって剣だけでなく火によっても滅ぼされるというしるしであった。　この天への引き上げと幻視の後、預言者は再びカルデアの自分の居場所に戻り、彼が見たことはまもなく現実のものとなった。

また、聖エゼキエルは、神によって懲らしめられているエルサレムを嘲笑った近隣の異教徒たち、すなわちアンモン人、モアブ人、エドム人、　ペリシテ人、エドム、ティルス、エジプトについても預言し、彼らがエルサレムの荒廃と破壊を喜んだことに対する報いとして、カルデア人を通じて彼らにも同じ神の懲罰が下ることを告げた。　これらすべてが成就した後、彼は、ユダヤ人に対する神の怒りの終息、バビロンからの故郷への帰還、そして都市と神殿の再建と刷新について預言した。というのも、彼はエルサレムが荒廃し、廃墟と化した後、二度目に主の御手によってユダヤの地へと連れ去られ（エゼキエル40:5）、そこで受けた啓示の中で、神の御命令により、かつてエルサレムが立っていた場所が測量され、　都と主の神殿が築かれ、神の栄光がその神殿を満たしていく様子を目撃したのである。これについては、彼の預言書に詳しく記されている。

この幻のすべては、敵の支配からの解放とキリストの教会の設立を予表する神秘的なものであった。それは、この預言者が「閉ざされた門」と呼び、神ご自身以外の誰にも通ることのできない、聖母マリアから生まれた神の受肉によって成就されるべきものであった（エゼキエル44:2）。 また、彼には神から死者の復活に関する啓示も与えられていた（エゼキエル37:1）。 彼は、あたかも神の御手によって引き上げられ、無数の人間の骨――それらは極めて乾ききっていた――で満たされた野原の真ん中に置かれたのを見た。そして、それらの骨はすべて、神の御言葉によって肉をまとい、霊がそれらに入ると、生き返って自らの足で立ち上がり、その数は極めて多かった。主は言われた。

「わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から連れ出す。」

さらに、終わりの時に完全に明らかに成就されるべき、神の他の多くの奥義についても、神の預言者に啓示が与えられた。彼はそれらすべてを予告し、自らの書物に記した。望む者は、そこで読んでみればよい。 さて、我々は物語を簡潔にするため、彼について信頼できる伝承者たちの証言に基づき、彼が偉大な奇跡行者でもあったことのみを述べておく。モーセのように、彼は水を分け隔てたのである。すなわち、ある時、ホヴァレ川で多くのユダヤ人が彼のもとに集まっていたところ、カルデア人たちが強盗のように彼らを襲った。 しかし、彼は祈りによって川の水を分け、追われている人々が対岸へ逃げられるよう、乾いた道を開いた。こうしてユダヤの民は陸地を歩いて渡ったが、同じ道を通って後を追おうとしたカルデア人たちは水に飲み込まれ、滅びた。 バビロニアにおいてダンの部族とガドの部族の裁判官を務めていた彼は、彼らが主を敬わず、主の律法を守る者たちを迫害しているのを見て、彼らの集落に蛇や毒蛇を送り込み、それらが彼らの乳児や家畜を食い尽くした。その後、彼らを憐れんで、彼は祈りによってそれらの蛇や毒蛇を彼らから追い払った。 飢饉の際、彼は神への祈りによって人々の食糧を豊かに増やし、飢えで死の淵に立たされていた者たちを生き返らせたが、その後、自ら殉教の死を遂げた[5237]。 彼と共に捕囚となっていたユダヤの民が、カルデア人と結託して偶像崇拝にふけり、彼らのあらゆる不義な行いに染まっているのを見て、彼は彼らを糾弾し、これらの不法な行いをやめるよう諭し、神の怒りが下ると警告した。 その結果、カルデアの不義に染まっていたユダヤ人の長老は、怒りに駆られて彼を殺害し、馬に引き裂かせた。 民は、引き裂かれた彼の遺体を集め、モーア野にある、アブラハムの先祖であるシムとアルパクシャドの墓所に彼を葬った。そして、多くのユダヤ人が彼の墓に集まり、そこで、世々限りなく栄光が帰される神サバオトに祈りを捧げた。アーメン。

コンダク、第4調:

神の預言者よ、驚くべきエゼキエルよ、あなたはすべての人に主の受肉を宣べ伝え、この小羊であり、神の御子の創造主である御方を、永遠に現わされた。

[5237] 預言者エゼキエルの生涯に関するその他の詳細としては、彼がテル・アビブにある自分の家に住んでいたこと（エゼキエル書3:24、8:1）、結婚しており妻を深く愛していたこと、そして妻が突然亡くなったこと（エゼキエル書24:16–18）が知られている。 彼の預言者としての奉仕は22年間続いた。古代バビロンの近隣にある彼の墓は、今日に至るまで巡礼者の注目を集め続けている。この墓の建設は、ヨヤキン王によるものとされている。――預言書『エゼキエル書』は48章から成り立っており、 その内容は、素材の多様性において非常に豊かである。そこには、幻、比喩、たとえ話、寓話、預言、そして象徴的な行為が含まれている。預言者エゼキエルの書の一部の箇所が持つ象徴的かつ神秘的な性質ゆえに、ユダヤ人たちはこれを秘伝の書に数え、30歳に達していない者には読むことを許さなかった。

キリストのために聖なる狂人となったシメオンと、その同伴者ヨハネ、尊き父たちの生涯

記念日：7月21日

敬虔なユスティニアヌス帝の治世[5238] 、キリストを愛する人々が主の尊き命を与える十字架の挙揚の祭日[5239] を祝うために聖都エルサレム[5240] に集まっていた時、神の御摂理により、シリア[5241] から二人の若者が、尊き十字架の木に礼拝を捧げるためにエルサレムへとやって来た。 一人はヨハネ、もう一人はシメオンという名で、二人とも名門の出身で裕福であった。

当時、ヨハネは24歳前後で、若い妻を持ち、年老いた父のもとで暮らしていたが、母はすでに亡くなっていた。一方、シメオンはまだ独身で[5242] 、80歳の未亡人の老母だけがいた。 同じ国出身で、キリストの愛によって親しくなったこの二人の若者は、エルサレムでかなりの期間を共に過ごし、聖地を巡り、礼拝を捧げた。 ――彼らが帰路につき、イェリフン渓谷へと下り、山の麓を通り抜けて町を過ぎたとき、聖なるヨルダン川の岸辺に[5243] 修道院が見えた。そこでヨハネはシメオンに向き直り、こう尋ねた。

「あの修道院には誰が住んでいるか、知っているか？」

「では、そこに誰が住んでいるのですか？」とシメオンは尋ねた。

「神の天使たちがそこに住んでいるのだ」とヨハネは答えた。

シメオンは驚き、ため息をつくと、こう尋ねた。

「私たちも彼らを見ることができるのでしょうか？」

「もし私たちが彼らと同じような生活を送ろうと望むなら」とヨハネは答えた。「そうすれば、間違いなく、彼らの姿を仰ぎ見たり、彼らと語り合ったりする喜びを味わえるでしょう。」

二人は馬に乗っていたが、今、馬から降りて、使用人たちに馬を預け、こう命じた。

「さあ、急がずに、私たちの先を行ってくれ。」

こうして、使用人たちは馬を先導し、二人は少し離れたところから後をついて歩きながら、どうすれば自分の魂を救えるかについて語り合った。 少しずつ進んでいくと、彼らは分かれ道に差し掛かった。一方の道は人通りが多く、シリアへと続いており、彼らもそこへ向かうべき場所であった。もう一方の道はヨルダン川へと続いており、そこには修道院が見えていた。ヨハネはシメオンに指を差し、ヨルダン川へと続く道を指し示しながら言った。

「ほら、これが命へと続く道だ。」

そして、シリア方面へと続く道を指さしながら、こう付け加えた。

「この道は滅びへと通じる。さあ、兄弟よ、この分かれ道に立ち止まり、神に祈ろう。どの道を進むべきか、神が私たちに示してくださるよう。」

そして、ひざまずいて、彼らは熱心に祈り始めた。

「神よ！ 神よ！ 神よ！ 全世界の救いを願われる方よ！ 御自分のしもべたちに御心を示し、私たちが歩むべき道を教えてください！」

[5238] 聖ユスティニアヌス1世――527年から565年まで皇帝を務めた。

[5239] 9月14日。

[5240] エルサレム――約束の地で最も古く、最も著名な都市――は、そのほぼ中央、ヨルダン川の西岸に位置し、地中海からは12時間、ヨルダン川からは8時間の距離にあり、ユダヤの三つの山、アクラ、シオン、モリヤの支脈の上に建っている。

[5241] シリア（高地）は、ヘブライ語のテキストでは「アラト」という言葉で表されており、これはシリアとメソポタミアを合わせて指すもので、ユーフラテス川から地中海まで、またタウロス山脈からアラビアに至る全域を指す。

[5242] シメオンとヨハネが聖地を巡るこの旅の間、シメオンは31歳だった。

[5243] ヨルダン川は、パレスチナで唯一、水量が豊富で干上がることのない川である。

しばらく祈りを捧げた後、ヨハネとシメオンはくじを引いたところ、ヨルダン川へと続く道を進むという結果が出た。すると、彼らは大きな霊的な喜びに満たされ、謙虚に神に感謝した。　そしてたちまち、一人は父と妻を、もう一人は母を、それぞれの家族のことを忘れ、富を軽んじ、この世のあらゆる魅力的で快楽をもたらすものを、まるで夢のように見なした。　そして互いに抱き合い、聖なる口づけを交わし、ヨルダン川へと続く道を歩み出した。その道を通って、彼らは確かに永遠の命に到達した。そして、ペトロとヨハネがキリストの命ある墓へと向かったように（ヨハネ20:1–10）、喜びをもって突き進み、互いに励まし合い、固く決意を新たにした。　ヨハネは、年老いた母への思いやりが、シメオンの善意を妨げることのないか心配していた。一方、シメオンもまた、ヨハネが若い妻への愛に、まるで磁石が鉄を引き寄せるように、歩み始めた道から逸れてしまうことのないか、同様に心配していた。　――それゆえ、彼らは互いに霊的な教えと慰めの言葉を交わした。ヨハネはシメオンにこう言った。

「落胆したり、気力を失ったりしてはならない、愛する兄弟よ！　なぜなら、私は今日、私たちを新たに生かしてくださった主を信頼しているからだ。そもそも、この世の虚栄に私たちに何の益があるというのか？　あるいは、最後の審判の日に、富からどのような助けが得られるというのか？　それらはむしろ、私たちを害することになるのではないだろうか？　同様に、私たちの若さや肉体の美しさ――それらはいつまでも私たちと共にあり続けるだろうか？　老いによって変わったり、死によって失われたりすることはないだろうか？　そもそも、私たちが老いまで生きられるかどうかさえ分からない。死を予期していない若者でさえ、死んでしまうのだから。

一方、シメオンはヨハネをこう説得した。

「兄弟よ、私には父も、兄弟も、姉妹もいません。ただ一人、すでに高齢の母がいますが、母のことを悲しむというよりは、むしろ心の中であなたのことを心配しているのです。つい最近結婚した、美しく愛らしい妻のことを思うあまり、あなたがこの善き道から逸れてしまうのではないかと恐れているのです。」

こうして、互いに語り合いながら、彼らは歩みを進めた。そして、どの修道院で修道衣をまとうべきか、神が御心を示してくださるよう祈った。そして、彼らは次のようなしるしを決めた。どの修道院の門が 開かれているか、そこが神が彼らに入るよう命じている場所である、と。 やがて彼らは、聖ゲラシモスの修道院にたどり着いた。そこでは、神に導かれたニコンという名の修道院長が務めていた。神は、神聖な愛に燃えるこの二人の若者の到来を、彼に告げておられたのである。というのも、その日、ニコンは夢の中で主がこう語られるのを見たからである。

「起きよ。塀の門を開き、わが羊たちがここに入ってくるようにせよ。」

修道院長は起き上がり、修道院の門を開けて、キリストの羊たちの到来を待ちながらそのそばに座った。一方、ヨハネとシメオンは修道院に近づき、開かれた門と、その門のそばに座っている長老を見るや、大いなる喜びに満たされた。そこでヨハネはシメオンにこう言った。

「これは良い前兆だ、兄弟よ。修道院の門が開いていて、門番がまるでわざとでも私たちの到着を待っているかのように座っているではないか。」

彼らが門に近づくと、修道院長は立ち上がり、こう言った。

「キリストの羊たちよ、来てくれてよかった。」

そして彼らを温かく迎え入れ、修道院へと案内し、肉体的にも精神的にも食事を振る舞った。その夜、彼は旅人であるシメオンとヨハネを安らかに休ませた。翌朝、修道院長は彼らにこう語りかけた。

――子供たちよ、あなたがたが心を一つにして神に対して抱いているその愛は、美しく、神の御心にかなうものです。しかし、あなたがたの救いの敵によって、その愛が消え失せてしまわないよう、細心の注意を払わなければなりません。　あなたがたの歩む道は素晴らしいが、栄冠を授かるまでは、その歩みを緩めてはならない。あなたがたの志は称賛に値するが、心の中の霊的な温もりが冷

めないよう、油断してはならない。あなたがたが一時的なものよりも永遠のものを重んじたことは、素晴らしいことだ。もちろん、肉親の両親に仕えることは善い行いだが、天の父に仕えることには比べものにならないほど高い価値がある。　血のつながった兄弟たちは愛すべき存在ですが、霊的な兄弟たちははるかに救いをもたらします。この世に持つ友人たちは有益ですが、神の聖なる御使いたちの間で友を得ることは、それよりもはるかに優れています。君主たちの前で君たちのために取り成し、擁護してくれる者たちは力強いですが、それでもなお、神の前で私たちのために取り成してくださる天使たちほどではありません。　神のために貧しい人々に施しをすることは良く、また慈愛に満ちたことですが、自分の魂と意志を神に完全に委ねることほど、神に喜ばれる捧げ物はありません。この世の喜びは心地よいものですが、天国の喜びに比べれば取るに足らないものです。富は素晴らしく、誰もが愛するものですが、*「人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*ような宝物には到底及ばないのです（Iコリント2:9）。

若さの美しさも心地よいものだが、すべての人間の息子たちの中で最も美しい方[5244]の尊厳に比べれば、取るに足らない。地上の王の戦士となることは素晴らしいが、その奉仕は短命で危険を伴う。しかし、天の王の戦士となることは、すべての敵の勢力に勝利することを意味する。

尊い修道院長はこのようないくつかの教えを彼らに語りかけ、彼らの目から溢れ出る涙を見て、シメオンにこう言った。

「お前の母上の白髪を嘆いたり、泣いたりしてはならない。お前の労苦に対して、神は、お前が彼女のそばにいるよりも、彼女をより良く慰めてくださるからだ。たとえお前が絶えず彼女のそばにいて、それでも確実に知ることはできなかったとしても――お前が彼女を先に葬るのか、それとも彼女がお前を先に葬るのか、どちらになるか分からなかっただろう。　そして、あなたは神に喜ばれることなく死んでしまい、死後の未来の災いからあなたを救うものは何一つ持たずに終わっていただろう。なぜなら、母の涙も、父の愛も、富や名声も、結婚の絆も、子供への愛も、恐ろしい審判者をなだめることはできず、ただ――神のために捧げられた徳ある生活、功績、そして労苦だけが、それを成し遂げることができるのだ！

それから、ヨハネに向き直って言った。

「そして、お前もだ、わが子よ！　敵が、お前の心に『私がいなければ、誰が年老いた父を支え、養ってくれるのか』といった考えを植え付け、そう思わせることのないように。　『誰が私の妻の泣き声を慰めてくれるのか？』と。実のところ、もしあなたがたが両親を神に委ねて、自分たちは別の仕事に向かったとしたら、正義の観点から、彼らのことを深く嘆くことになるだろう。しかし、あなたがたが両親を託し、神への愛ゆえに彼らを置いていったのは、唯一の神である以上、神ご自身が彼らのことを顧みてくださることを知らなければならない。　また、あなたがたが世にいて、この世の生活のために働いていたとき、主の恵みがあなたがたを顧み、あなたがたの家を豊かに満たしてくださったことを考えてみてください。それならばなおさら、今、あなたがたが心を尽くして主に仕え、より完全に主に喜ばれたいと願ってここに来た今、主はあなたがたの家を顧みてくださるでしょう。思い出してください、子供たちよ！　主に従おうとして、*「主よ、まず行って、私の父を葬らせてください」*と言った人への、主の答え。　主は言われた。*「わたしに従いなさい。死者を葬るのは、死者に任せておきなさい」*（マタイ8:21–22）。それゆえ、あなた方も、　、揺るぎない意志と堅い心をもって、キリストの後に従いなさい。　なぜなら、もしこの世の死すべき王が、あなた方を侍従や顧問にしようとして呼び寄せたなら、あなた方は家族を顧みず、速やかに王のもとへ赴き、栄光と名誉のうちに王に仕え、その御姿と慈しみを仰ぎ見て喜びを覚えるのではないでしょうか。　そして、それは、王が自分の重臣たちの前であなた方を称えようとする、その短い期間のためだけに、あなた方がそうしたことでしょう。

[5244] すなわち、受肉された神の御子、救い主キリストのことである。参照：詩篇44:1–18。

ヨハネとシメオンは答えて言った。

「その通りです、父上！」

そして、修道院長は続けた：

「それゆえ、子供たちよ！　私たちは、天の王の呼びかけに、急ぎ、熱心に答えるべきである。王は私たちを、この世のいかなる最高の栄誉とも比べることも、それに匹敵することもできないような栄光へと招いておられるのだ。　私たちは、御自身のもとへ招いてくださる神に聞き従わなければならない。神が私たちを御自身の御子とするために、御独り子を惜しまず、私たちのために血の死へと引き渡された、その私たちへの愛を心に留めつつ。　たとえそのために私たちが全血を流したとしても、神が示してくださった恵みと愛に比べれば、その価値に到底及ばないでしょう。なぜなら、王の血と奴隷の血とを同列に扱うことはできないからです。

これらすべてを彼らに語り、シメオンとヨハネが豪華な服を着て、困窮を知らずに育ったことを察した神に導かれた修道院長は、彼らが神に対して燃えるような熱意を持っているのを見ていながらも、すぐに修道者の装いを身につけるのではなく、しばらく待つよう助言した。　自分たち自身で試してみよ――苦行の生活の重荷に耐えられるかどうかを。しかし、彼らは老修道院長の足元にひれ伏し、涙ながらに、一刻も早く彼らを剃髪し、聖なる修道服を授けてくれるよう懇願した。

その後、長老は彼らを試そうと、ヨハネを別室に呼び出し、こう言った。

「私はすでに、お前の友人に、あと一年は俗世にとどまるよう説得した。」

「もし彼が望むなら」とヨハネは反論した。「彼には残ってもらえばよい。しかし、私はこれほど長く剃髪式を待つことはできない。父よ、どうか私の魂が切望していることを、今すぐ私に行なってくださるよう懇願する。」

シメオンは、二人が二人きりで話しているのを見て、長老に言った。

「父上、ヨハネの言い分を聞いて躊躇しないでください。彼が今年結婚した、裕福で美しい妻のことを思い、彼女のために神への愛から逸れてしまうのではないかと、私の心は彼のために震えています。」

ヨハネもまた、涙を流しながら（彼は非常に涙もろかった）長老にこう訴えた。

「父よ、どうか私たちを直ちに修道者に叙任してください。そうしなければ、私にとってかけがえのない兄弟を滅ぼしてしまうことになります。」　彼には、彼を深く愛し、彼に会わなければ生きていけないほどである母がいます。私は、彼が母の愛を思い出し、神への愛から背を向けてしまうのではないかと心配しています。ですから、彼が修道服を身にまとった姿を見るまでは、この悲しみを断ち切ることはできません。

一方、長老は、二人が互いに気遣い合う姿を見て、また、神は全霊と確固たる信仰をもって御自身にすがり求める者を恥じたり拒んだりされないことを経験から知っていたため、もはや躊躇することなく、二人を教会に導き入れ、初級の修道者の姿へと剃髪させた。　彼らの剃髪式が行われている間、ヨハネは激しく泣いていたが、シメオンは彼をこっそりと突き、黙るよう合図を送った――彼は、ヨハネが父親や妻のことを思って泣いているのだと思っていたのだ。しかし、ヨハネは神への熱烈な心の愛から涙を流していたのである。

剃髪式と聖なる典礼が終わった後、修道院長は再び彼らに向けて長い教訓の言葉を述べた。彼はその透徹した霊によって、彼らが自分の修道院に長く留まることはないことを知っていた。神が彼らを、さらに完全な生活へと召されるからである。

その日は土曜日であり、修道院長は翌日の日曜日、彼らに「天使の儀礼」という完全な儀式を授けようとしていた。

すると、兄弟たちの一部がヨハネとシメオンにこう語りかけた。

「あなたがたは幸いである。明日、新たに生まれ変わり、まるで今生まれたばかりのように清くなるからだ。あなたがたは、まるで今日洗礼を受けたかのように、罪から清められるのだ。」

しかし、二人はその言葉の意味を理解できず、驚きと恐怖に駆られ、土曜日の夕方に聖なるイグメーンのもとへ行き、次のように懇願した。

「父よ、私たちに洗礼を授けないでください。私たちはキリスト教徒であり、キリスト教徒の両親の子供であり、聖なる洗礼の浸礼によってすでに新たに生まれ変わっているのですから。」

しかし、修道院長は彼らの言葉を理解できず、こう尋ねた。

「子供たちよ、誰があなたたちを洗礼しようとしているのか？」

彼らは答えた。

「兄弟たちから、明日の朝、私たちが洗礼を受けると聞いたのです。」

そこでイグメンは、兄弟たちが彼らに「聖なる天使の装い」について話していたことを理解し、こう言った。

「父上たちはよく説明してくれた。なぜなら、明日、我々はあなた方を『天使の儀礼』の完全な位階に就かせたいからだ。それは、まるで第二の洗礼のように、この世で犯したすべての罪からあなた方を解放してくれるのだ。」

しかし、ヨハネとシメオンは、その「天使の儀式の完全な位階」とは何なのかを知らなかった。そこでイグメンは、先週その完全な位階に叙任された兄弟を呼び寄せるよう命じた。叙任からまだ7日も経っておらず、その兄弟は修道院の規則に従い、聖なる位階のすべての衣を常に身に着けていた。　その兄弟がやって来ると、ヨハネとシメオンは彼を見て、修道院長の足元にひれ伏し、今すぐ、まだ夕方のうちに、彼らをその位階に叙任してくれるよう懇願した。

「私たちは人間です」と彼らは言った。「今夜を生き延び、明日の朝を迎えることができるかどうかも分かりません。もし、この兄弟が身に着けているような冠、喜び、栄光を得ることなく、突然この世を去ってしまうかもしれません。」

修道院長は、彼らが何らかの幻視を目撃していることを悟り、呼び出されていた兄弟を独房へ戻した。その兄弟が去ると、ヨハネとシメオンは再び修道院長に熱心に懇願し始めた。

「父よ、神の御名にかけて、どうか今すぐ、あの兄弟が着ていたような衣を私たちに着せてください。まことに、あなたの修道院で、あの兄弟ほどの栄光に包まれた者は一人も見たことがありません。」

「子供たちよ、その兄弟に何を見たのか？」と修道院長は尋ねた。

彼らは答えた。

「その兄弟の頭にはまばゆいばかりの冠があり、その周囲には光が輝いていました。そして、手にろうそくを持った、光り輝くような御顔の者たちが、驚くべき歌声を上げながら彼を取り囲んでいました。」

イグメンは、子供たちの心の清らかさに感嘆し、こう言った。

「明日、聖霊の恵みにより、あなたたちも聖なる天使の位階と共に、同じ冠と栄光を受けることになるだろう。」

日曜日になると、修道院長は彼らのためにその聖なる儀式を執り行い、二人は互いの頭上で輝く冠を見ることができた。また、夜になっても互いの顔を昼間のようにはっきりと見ることができた。そして、彼らの魂はこれほどの喜びで満たされ、食事も飲み物も口にする気にならなかった。

最も完全な戒律を受けた2日後、彼らは以前、栄光に包まれて見かけたあの兄弟と偶然出会った。その兄弟は麻の衣を身にまとい、修道院の務めを果たしていたが、彼らはかつての栄光や冠が彼の上に見当たらず、驚いた。そこでシメオンはヨハネに言った。

「兄弟よ、信じてほしい。7日が過ぎれば、私たちも今のように、互いの頭上に輝く冠や光を見ることができなくなるだろう。」

ヨハネは尋ねた。

「では、兄弟よ、あなたはまだ何を望んでいるのですか？」

「よく聞いてくれ」とシメオンは答えた。「私は、この世から抜け出したのと同じように、ここからさらに静寂に満ちた荒野の生活へと旅立ちたいのだ。　というのも、高潔な修道院長が私たちにこの聖なる姿を与えて以来、私の心はある不思議な渇望に燃え上がり、私の魂は誰にも会いたくなく、話したくもなく、誰かの声も聞きたくなく、ただすべてから完全に隔絶され、深い沈黙の中に留まりたいと願っているからだ。

「荒野で暮らすなら、何を食べればよいのでしょうか？」とヨハネは反論した。

シメオンは答えた。

「私たちを指導してくださるイグメンの口から聞いた、他の荒野の修道者たちは何を食べているのか？彼らを養ってくださる方が、私たちも養ってくださるだろう。そして、イグメンが荒野の修道者たちについてあれほど多く語ったのは、私たちにも荒野での生活を選んでもらいたいという願いからだったのだと思う。」

ヨハネは再び反論した。

「しかし、私たちはまだ修道院の規則に従って詩篇を歌うことを学んでいないではないか？」

「かつて御心にかなったダビデを救われた主は、私たちをも救ってくださるでしょう」とシメオンは彼をなだめた。「主が、荒野で羊を飼っていたダビデに詩篇を詠むことを教えられたように、私たちにも教えてくださるはずです。兄弟よ、私の言うことを聞き入れなさい。私たちが共に神に身を捧げたように、共に神のために労苦しましょう。」

ヨハネは同意して、こう言った。

「お前の望む通りにしよう。だが、夜になると扉が閉ざされるこの修道院から、どうやって外に出るというのだ？」

ヨハネは答えた。

「昼間に私たちのために門を開けてくださった方が、夜にも開けてくださるだろう。」

彼らがこのように合意し、決心したとき、夜が更けると、修道院長は夢の中で、聖人のような風貌をしたある高貴な老人が、修道院の門を開きながらこう言うのを見た。

「キリストの羊たちよ、汝らの牧場へ出て行きなさい。」

彼はすぐに起き上がり、門へと急いだ。門が開いているのを見つけ、ヨハネとシメオンがすでに外に出たのだと思い、悲しげに座り込み、ため息をつきながらこう考えた。

「私は先達たちの祈りを受けるに値しなかった。なぜなら、父であり師であったのは私ではなく、彼らだったからだ。ああ、（聖書に記されているように）どれほど貴重な宝石が、地の上に置かれたまま、多くの人々の目に留まりながらも、その価値を認める者はほとんどいないことか！」

修道院長がこのように心の中で思索にふけり、嘆き悲しんでいると、ちょうどその時、キリストの僕たちが修道院を去るために、自分の部屋から門へと出てきた。すると修道院長は、彼らの先頭を、明るく燃えるろうそくを手にした美しい若者たちが歩いているのを見た。　一方、ヨハネとシメオンは、その若者たちには気づかなかったが、門が開いているのを見て、自分たちの希望が失われていないことに大いに喜んだ。しかし、門のところに長老の姿を見ると、それが修道院長だとは気づかず、怖くなって引き返そうとした。すると、修道院長は彼らを呼び止めてこう言った。

「恐れるな、子らよ。主の御名によって進め！」

彼らは、それが修道院長であることを知ると、さらに喜び、神が彼らの到来をあらかじめ彼に告げ、彼らの去り際も示してくださったのだと悟り、長老にひれ伏してこう言った。

「父よ、感謝いたします。しかし、神と尊きあなたに、いかにしてふさわしく感謝を捧げればよいのか、私たちにはわかりません。私たちのうち、誰がこのような恵みにあずかれると期待できたでしょうか？　どの王が、私たちをこれほどの高位で栄誉に浴させてくれるでしょうか？　どのような宝物が、これほど早く私たちを豊かにしてくれるでしょうか？　どの浴場の水が、これほどまでに私たちの魂を清めてくれるでしょうか？　いったいどのような両親が、あなたのように、尊い父よ、私

たちをこれほど愛し、救ってくださるでしょうか？！キリストにおいて、あなたは私たちにとって父であり母であり、主であり、羊飼いであり、導き手であり、指導者です！あなたを通して、私たちは奪われることのない宝を受け取り、救いの計り知れない真珠を見出しました。先人たちが語ってくれた通り、私たちはまことに、第二の洗礼の力を知りました。　どうか、父よ、あなたの至福の御力により、私たちのために祈り、神が示される場所へ、あなたのしもべたちを行かせてください。私たちは心から神に仕えたいと願っているのです。そして父よ、神に捧げられたあなたの羊たちを覚えていてください。

彼らはこれらすべてを、大いなる涙を流しながら語った。修道院長もまた、彼らが神に仕えようとするその偉大な願いを見て、心の底からの喜びのあまり泣いた。ついに、シメオンを右に、ヨハネを左に立たせ、天に向かって両手を挙げ、次のように祈りを捧げた。

「義なる、栄光に満ちた神よ！偉大で力強い神よ！永遠の、古よりおられる神よ！この時、罪深い私に耳を傾けてください！主よ、あなたに真に奉仕する者たちの声に耳を傾けると約束された方よ、私の声を聞いてください！あなたのこれらのしもべたちの歩みを導き、彼らの足を平和の道に立たせてください。　この悪意のない若者たちの助け手となり、鳩のように彼らを無傷で守ってください。すべての不浄な霊に、彼らに近づかないよう命じ、彼らの顔から遠くへ逃げ去らせてください。盾と鎧を手に取り、彼らの助けとして立ち上がってください。剣を抜き放ち、彼らを追う者たちの[行く手を]遮ってください。彼らの魂にこう告げてください：　「わたしはあなたの救いである！」（詩編34:3参照）。彼らの思いからあらゆる臆病と恐怖が遠ざかり、あらゆる高慢と自惚れ、そしてあらゆる悪意が消え去るようにしてください。また、生来の性質や悪魔の誘惑から生じる肉欲のあらゆる燃え上がりが鎮まるようにしてください。　彼らの体と魂が聖別され、その霊が御恵みの光によって照らされ、霊的に成長して完全な成熟の段階に至り、御前に喜ばれる者たちの仲間入りを許され、聖なる天使たちと共に御名を賛美し、常に御父、　御子、聖霊、三位一体の唯一の神に、世々限りなく、アーメン！

その後、キリストの僕たちに向き直り、涙を流しながらこう語った。

「あなたがたが選んだ神よ、愛すべき子らよ！　あなたがたが頼りとしたその方が、あなたがたの前に御使いを遣わし、あなたがたに恐れのない道を備え、あなたがたの前を歩み、敵の勢力からあなたがたを救い出されますように。ヤコブをラバンやエサウから救ったように（創世記31:1–55、32:1–32、33:1–20）、そしてダニエルを獅子の口から救ったように！（ダニエル書6:1–28）

そして、二人を抱きしめると、再び神に向かって祈りを捧げました：

「神よ、心を尽くしてあなたを愛する者たちを救ってください。主よ、あなたは義なる方だからです。あなたのためにすべての虚しいものを捨てた者たちを見捨てないでください！」

それから再び彼らに向かって言った：

「気をつけなさい、子らよ！　あなたがたは恐ろしい戦いに臨もうとしているが、恐れてはならない！　神は強大であり、あなたがたに耐えられないほどの試練をお与えにはならない。奮い立ちなさい、子らよ。敵に打ち負かされないように。天使の姿を模した聖なる修道服という鎧を身にまとい、勇敢に立ち向かいなさい。しかし、こう言われた方を覚えておきなさい：　*「鋤に手をかけながら後ろを振り返る者は、神の御国に入る資格がない」*（ルカ9:62）。主のこの道を歩み始めるにあたり、怠惰になったり気落ちしたりしてはならない。そうすれば、柱を建て始めた人のたとえ――*「この人は建て始めたが、完成させることができなかった」（ルカ14:30）*――が、あなたたちにも当てはまることのないように。（ルカ14:30）。子供たちよ、戦いがどれほど取るに足らないものであり、冠がどれほど偉大であるか、労苦がどれほど短く、安息が永遠であることを知って、勇気を出しなさい。

彼らがそのような会話を交わしているうちに、早課の鐘を鳴らす時刻となり、彼らは修道院の門を出なければならなくなりました。シメオンはイグメナを別室に連れ出し、こう言いました。

「お願いです、父上。主の御名において、私の兄弟ヨハネのために熱心に祈ってください。敵の誘惑によって彼が私を捨て、私が彼との別れを嘆いて衰え果てることのないよう、彼の心から妻の記憶が消え去りますように。　また、彼を産んだ父のためにも祈ってください。主が彼を慰めてくださり、息子に去られたことを悲しまずに済むように。

また、ヨハネも長老を脇へ連れて行き、懇願した。

「神の御名にかけて、父よ、あなたの聖なる祈りの中で、私の兄弟シメオンを忘れないでください。彼が母への愛に駆られて、私のもとを離れて母のもとへ行かないように。さもないと、この岸辺が私たちにとって溺死の場となってしまいます。」

長老は、二人の間にこれほどの愛があることに驚き、彼らのために祈ると約束して、十字の印で彼らを護り、祝福し、平安のうちに送り出した。

尊い修道院長のもとを離れた後、キリストの僕であるシメオンとヨハネは、こう祈った。

「神よ！　御使いである私たちの父ニコンの祈りによって、御心に適う場所へ私たちを導いてください。私たちは旅人であり、どこへ向かえばよいのか、場所も国も知りません。しかし、たとえ砂漠の奥深くで死が待ち受けていたとしても、私たちはあなたのもとへと向かいます。」

その後、ヨハネはシメオンにこう尋ねた。

「さて、兄弟よ、これからどうしましょうか。どこへ行きましょうか？」

シメオンは答えた。

「右へ行こう。右にあるものはすべて良いものだからだ。」

そして彼らは右側へと進んだ。それは神の御計画であった。主は御自分のしもべたちを見捨てられないからである。しばらく歩くと、彼らは死海[5245] にたどり着き、海と、その海に注ぐヨルダン川の近くで、居心地の良い場所と、数日前、主のもとへ召された一人の隠者が住んでいた小部屋を見つけた。　そこには小さな器や、野菜が植えられた菜園もあり、それはすでに主のもとに召された長老が食べていたものでした。これを見たキリストの僕たちは、大きな宝を見つけた者が喜ぶのと同じくらい大いに喜び、神に感謝し、そこに定住して暮らし始めました。　しばらくして、私たちの魂の敵である悪魔は、キリストの僕たちの神に喜ばれる生き方に耐えかね、彼らに対して戦いを仕掛け始めた。ヨハネには妻と父の思い出を、シメオンには母への愛を植え付けたのである。しかし、彼らは互いに悲しんでいる姿を見ると、すぐにこう言い合った。

「立ちなさい、兄弟よ。共に私たちの主イエス・キリストに祈りましょう。聖なる長老ニコンの祈りによって、主が私たちを敵の策略から守ってくださいますように。」

そして彼らが祈ると、すぐに神の助けが訪れ、敵の誹謗中傷を彼らから払い除けてくれた。時には、誘惑者が彼らに肉を味わい、ワインを飲みたいという欲望を植え付けたり、時には夢の中で両親や親族を現したりした。彼らは、彼らのことを嘆き悲しんでいるか、あるいは宴を催しているかのどちらかであった。　時には彼らを落胆と怠惰に陥らせ、時には幽霊で彼らを恐怖に陥れようとして、まるで修道院での生活が　耐え難いほど孤独であるかのように、再び修道院に戻るよう思わせた。そして、その色とりどりの蛇は、様々な手段を用いて、あの称賛に値する修道者たちの義なる生活を断ち切ろうとした。　しかし、彼らは自らの誓いと、当初互いの頭上に見た輝かしい冠、そして師の教えと涙を思い出し、主への奉仕に打ち勝ち、しばしば心の中にある種の霊的な甘美さを感じながら慰めを得ていた。　敵の誘惑に勇敢に抵抗した後、聖ニコンが彼らの夢に現れ、時には彼らを諭し、時には神に彼らのために祈りを捧げ、時には詩篇や祈りを教えた。そして、目覚めると、彼らは夢の

[5245] 死海――パレスチナ南東部に位置する内陸の塩湖。北から南への長さは76km、幅は約3.5～16km。リサン半島によって二つの水域に分かれており、北側の水域は南側よりも深い。　死海の水は塩分（約25％）が極めて高いため、魚は生息できない。　水の比重が非常に高いため、水中に落ちた有機物は沈まない。死海の周囲の広範囲にわたって、大地は塩に覆われている。死海の場所にはかつて、ソドムやゴモラといった都市がある肥沃なシディム平野が広がっていた。

中で彼から学んだことを現実の世界でも覚えており、それによって大きな喜びを得た。　同様に、家族を思い出すことから生じた悲しみも、主は二年後、このような啓示によって彼らを和らげてくださった。シメオンは夜の夢の中で、実家にいる母親を訪ね、シリア語の方言でこう語りかける幻を見た。

「ラドホレリヘム、つまり、心配しないでください、母上。私たちは元気です。私とヨハネ様は健やかで、王宮に身を置いています。そして、王が私たちに授けてくださった冠を戴き、輝く衣を身にまとっています。　また、ヨハネの父にも伝えてほしい。息子を案じるな、と。とにかく、私たちのことを心配しないでほしい。

この幻はシメオンに何度も繰り返され、それによって彼は、母が神に慰められ、もはや自分のことを悲しんでいないことを理解した。同様に、ヨハネの夢の中にも、あるまばゆいばかりの御顔が現れ、次のように語った。

「見よ、わたしはあなたの父を憂いから解き放ち、彼に平安と喜びを与えた。そして、あなたの妻も、まもなくわたしの王国へと迎え入れる。」

互いにそのような幻について語り合う中で、ヨハネとシメオンは心の中で喜び、彼らの救い主である神を称えて喜んだ。それ以来、前者は父と妻について、後者は母について、もはや何の悲しみも知らなかった。しかし、彼らにはただ一つの心遣いがあった。それは、昼も夜も神を賛美することだった。　彼らにとって、絶えず祈りを捧げることは、疲れることのない労苦であり、悲しみのない務めであった。そして、ほどなくして、彼らは聖霊にふさわしい器となり、神の啓示を仰ぎ見る恵みにあずかるようになった。　時折、彼らは互いに離れて暮らしていたが、距離は遠くなく、石を投げれば届く程度の場所だった。もしどちらかに敵の思いが浮かんだなら、その人は直ちに動揺してもう一方のもとへ駆け寄った。なぜなら、彼らは互いに自分の考えを打ち明け合い、共に祈ることで、敵のささやきを追い払っていたからである。

しばらくして、至福のシメオンは、人里離れた場所に座っていたところ、恍惚状態に陥り、故郷のエデッサの街[5246]で、病床の母を訪ね、「

「お母さん、お元気ですか？」

すると母はこう答えた。

「元気よ、息子よ！」

すると彼は再び母にこう言った。

「恐れることなく、王のもとへ行きなさい。私はあなたのために王に懇願し、あなたのために良い場所を用意しておいた。王が望まれる時、私もあなたのところへ行くから。」

この幻から我に返ったシメオンは、その瞬間に母が亡くなったことを悟り、急いでヨハネのもとへ駆けつけ、母の魂のために祈ってほしいと頼んだ。そして自らもひざまずき、涙ながらにこう祈った。

「神よ、アブラハムのいけにえを快く受け入れられ （創世記 22:1–24）、エフタのいけにえを拒まれず（士師記 11:1–40）、アベルの捧げ物を軽んじられず（創世記 4:1–26）、御子サムエルのために、その母アンナを預言者として現された方よ （サムエル記上 1:1–28, 2:1–36）を現してくださったあなた、わが主よ、主よ！　あなたのしもべである私のために、私の慈愛深い母の魂をお受け入れ

[5246] エデッサ――現在のウルファ――は、メソポタミア北部のユーフラテス川沿いに位置する都市であり、キリスト降誕前137年からは、新たに成立したオズロエス王国（あるいはエデッサ王国）の首都となった。西暦217年、エデッサはローマ人によって東方植民地へと改編された。 エデッサには早くからキリスト教が広まった。4世紀には聖エフレム・シリア人がここに神学校を設立したが、5世紀にはネストリウス派に傾倒し、エデッサ神学校の教師であった長老イヴァがその普及に尽力した。641年、エデッサはアラブのカリフたちに征服された； 1098年にはバルドゥイン伯爵がこれを占領し、エデッサ公国の首都とした。1144年、エデッサはトルコ人に征服され、それ以降、支配者が次々と変わり、1637年にようやくトルコの支配下に入った。

ください。私のために耐えてくださった彼女の病と苦労を覚えてください。私が彼女から逃れてあなたの御許に身を寄せたとき、彼女が流した悲しみと涙を覚えてください。　彼女が私を育ててくれたその胸を、どうか覚えてください。彼女は私から助けと慰めを得られると期待していましたが、期待したものは得られませんでした。主よ、私があなたのために彼女を去ったとき、私が引き起こした彼女の心の底からの嗚咽を、どうか忘れないでください。彼女が自分の孤児であることや私の幼さを絶えず思い巡らせ、　、どれほど多くの夜、眠りにつくことができなかったかを、どうか思い出してください。　ああ、彼女は、もはや彼女の尊い宝が身に着けていない私の服を見つめながら、どれほど心を痛めたことでしょう！私が、彼女と私の主であり神であるあなたに仕えるために彼女のもとを離れたことで、どれほどの喜びと楽しさを彼女から奪ってしまったか、どうか思い出してください！　彼女に、あなたの力強い守護天使をお与えください。その天使が、すべての人を滅ぼそうとする狡猾で容赦のない空中の霊たちから、彼女の魂を救い出してくれるように。[5247]　。わが神よ、病や恐れなく、彼女の魂が肉体から離れるようお導きください。そして、慈愛に満ちたお方として、彼女がこの生涯で犯したすべての罪を赦してください。正義の神よ！　彼女を悲しみから悲しみへ、災いから災いへ、そして苦悩から苦悩へと移すことのないよう、どうかお導きください。むしろ、彼女が唯一の息子である私を嘆き悲しんだその悲しみの代わりに、喜びを、そして嘆きの代わりに、わが神よ、御自身の聖徒たちのために備えられた喜びを与えてください。

ヨハネもまた、彼と共に、この世を去った母の魂のために祈った。そして、祈りを終えて立ち上がったヨハネは、シメオンを慰めて言った。

[5247] つまり、彼の母の魂を、試練の道中で無傷のまま導くということである。試練とは、天の審判者の御座へと昇っていく死者の魂が、その道中で遭遇する、一種の検問所や関税のようなものである。　その場所には悪意の精霊たちが立ち、特定の罪を犯したあらゆる魂から、その罪とは正反対の善行を提示させるという、一種の関税や身代金を徴収する。試練や徴税人という名称は、ユダヤの歴史に由来する。　ユダヤ人社会において「ミタリ」とは、ローマ人によって税の徴収のために任命された者たちのことを指した。彼らは通常、これらの税金の徴収権を請け負い、自分たちに最大の利益をもたらすために、拷問さえも厭わないなど、あらゆる手段を講じた。　徴税人は特別な税関や検問所に立ち、運ばれてくる商品から関税を徴収していた。これらの検問所は「税関」や「徴税所」と呼ばれていた。　キリスト教の著述家たちは、この名称を「空中の拷問の場」にも転用した。そこでは、天の審判者の御座へと昇ろうとする魂が、悪霊たちによって足止めされ、あらゆる罪を立証され、それによって地獄へと落とされようとしていた。　「ミタールスタヴァ」に関する教義の本質は、通常『慣習詩篇集』に収録されている、聖キリロス・アレクサンドリアス（444年没）による魂の旅路に関する言葉に集約されている。　――「魂が肉体から離れるとき」とそこには記されている。「一方には天の軍勢と力、他方には闇の権勢、空中の税吏長たち、すなわち我々の行いを告発する者たちが、我々の前に現れる。　それらを目にした魂は戦慄し、身震いし、混乱と恐怖の中で神の天使たちに保護を求めるだろう。　しかし、天使たちに受け入れられ、彼らの庇護の下で空の空間を通り抜け、高みへと昇っていくにつれ、彼女は様々な試練に遭遇する。それらは天の御国への道を阻み、そこへの彼女の志を止め、引き留めるだろう。これらの試練のそれぞれにおいて、特定の罪についての説明が求められることになる……　あらゆる情欲、あらゆる罪には、それぞれ独自の徴税人や拷問者がいる。その場には、神聖な力と不浄な霊の群れも立ち会う。前者が魂の美徳を指摘する一方で、後者はその罪を糾弾する……　もし彼女が敬虔で神に喜ばれる生涯を送ったことで（報いを受けるに）ふさわしいと認められれば、天使たちが彼女を迎え入れ、そうして彼女はもはや恐れずに御国へと向かうことになる。　逆に、もしその魂が怠惰と節制の欠如の中で人生を送っていたことが判明すれば、恐ろしい声を耳にすることになる。「不義な者は取り除かれ、主の栄光を見ることはない（イザヤ26:10）」；　その時、神の天使たちはその魂を見捨て、恐ろしい悪魔たちがそれを引き取り、解きほぐすことのできない絆で縛られた魂は、地獄の牢獄へと投げ込まれる」。このように、ミタールは他ならぬ、主ご自身が天使たちを介して人間の魂に対して行われる個別の裁きであり、そこには*「私たちの兄弟たちを中傷する者たち」*（黙示録12:10）、すなわち悪霊たちをもその場に立ち会わせながら、主ご自身が御使いたちを通じて行われる個別の審判である。この審判では、魂のすべての行いが思い起こされ、公平に評価され、その結果としてその魂の運命が決定される。この審判は、世界の終わりに神の御子が再び、今度は御自身の栄光のうちに地上に来られる際に、すべての人々に対して行われる「普遍的な審判」とは対照的に、「個別の審判」と呼ばれる。

「さあ、兄弟よ、神はあなたの祈りを聞き入れ、あなたの母を御許に召されました。どうか、もう少し私と共に労を惜しまず、二人で主にお祈りしましょう。主が私の元妻にも御慈悲を示してくださり、彼女を修道生活へと導くか、あるいはこの世から御許に召してくださるよう。」

そして二人はそのことを祈った。

ほどなくして、ヨハネは喜びに満ちて、自分の家で座っている妻の姿を見た。シメオンの母が彼女のところへやって来て、その手を握り、こう言った。

「立ちなさい、私の姉妹よ。私のもとへ行きましょう。私の息子とあなたの夫を御自身の戦士として召された王が、私に美しい家を授けてくださったのです。服を着替えて、清らかな服を着てください。」

すると彼女はすぐに立ち上がり、服を着替えて、彼女の後を追った。この幻視によって、ヨハネは妻が亡くなり、シメオンの母と共に義人の住む場所に定住したことを悟り、大いに喜んだ。　それ以来、二人は何の心配もなく、荒野で共に暮らし、あらゆる苦難に耐えながら、29年間、目に見えない敵と勇敢に戦い、神の恵みによって彼らに打ち勝ち、追い払った。　とりわけシメオンは、これほどまでに偉大な無情の境地に達し、その体はまるで感覚のない木のように、いかなる強い欲望も感じなくなっていた。それは、彼のすべての肢体が死滅していたからである。

ある日、シメオンはヨハネにこう言いました。

「兄弟よ、もはや私たちが荒野にとどまる必要はない。私の言うことを聞いてほしい。さあ、行って、他の人々の救いに奉仕しよう。ここでは私たちは自分自身を助けているだけであり、他者を助けたことに対する報いはないのだ。使徒はこう言っているではないか。*『だれも自分の利益を求めず、互いに他者の利益を求めなさい』*と。また、　*『私はすべてのことにおいてすべての人に喜ばれようとし、自分の利益を求めず、多くの人の利益を求め、彼らが救われるようにしている』*（Iコリント10:24, 33）。さらに、*「私はすべての人にとって、すべての人となった。それは、せめて何人かでも救うためである」*（Iコリント9:22）。

これに対し、ヨハネは彼にこう言った。

「兄弟よ、サタンは私たちの隠遁生活を憎み、あなたにそのような考えを吹き込んだのだと思う。しかし、彼に抵抗してここに留まりなさい。そうすれば、私たちがここで始め、神から召されたこの務めを、この荒野で完遂することができるだろう。」

シメオンはこれに反論して言った。

「兄弟よ、信じてほしい。私はもうここには留まらない。キリストの力によって進み、この世を嘲笑してやるのだ。」

ヨハネは彼にこう語りかけた。

「私はまだ、この世を嘲笑できるほどの完成度に達していない。この世に恥をかかされ、神の恵みを奪われてしまうのではないかと恐れているのだ。」　お願いだ、私の愛する兄弟よ、私たちを結びつけてくださった主のために、この謙虚な私を見捨てないでほしい。兄弟から離れて行ってはならない。あなたは知っているだろう、神の次に、私にはあなた以外には誰もいないのだ、私の兄弟よ。私はすべての人を捨て、あなた一人に心を寄せている。それなのに、あなたは今、まるで海の上のように、この荒野で私を一人残そうとしているのだ。　私たちがくじを引き、共に主に仕えるために旅立ち、決して互いに離れないと誓い合ったあの日を思い出してください。私たちの尊い父ニコンが、私たちに聖なる偉大な天使の姿を授けてくださったあの時を思い出してください。私たちは二人とも、まるで一つの魂のようであり、誰もが私たちの愛に驚嘆していました。　私たちが修道院を出た夜、偉大なる長老が私たちを慰め、諭してくれた言葉を忘れないでほしい。兄弟よ、どうか私を見捨てないでほしい。お願いだ。そうでなければ、私はあなたなしで一人で滅びてしまい、神は私の魂の責任をあなたに問うことになるだろう。

シメオンは彼を諭した。

「私を、すでに死んだ者だと思ってくれ。実際、もし私が死んだら、あなたは一人残されるのではないか？　信じてほしい、もし私と共に行くなら、それは正しい選択だ。行かないなら、それはあなたの自由だ。私はいずれにせよここには留まらず、神が命じられるところへ行くのだから。」

ヨハネは、これが神から弟への啓示であり、荒野から世へと出て行くよう促すものであると悟り、もはや彼に逆らうことはしなかった。しかし、弟との別れを嘆きつつ、こう言った。

「愛するシメオンよ、荒野で積み上げたものが世俗によって散らされないよう気をつけなさい。沈黙のおかげで成し遂げたことが、世俗の噂によって損なわれないようにしなさい。徹夜の祈りの眠りがそれを台無しにせず、世俗の快楽が修道者の瞑想を散らさないようにしなさい。」　神が今日まであなたを守ってこられた女性たちの姿によって、あなたの貞潔が損なわれることのないよう、また財産を蓄えることへの情熱によって、あなたの荒野における無欲さが奪われることのないよう、注意しなさい――あなたの断食が、多種多様な食事の誘惑によって破られることのないよう、そしてあなたの嘆きが笑いによって、　祈りが怠惰によって損なわれないように。愛する者よ、たとえあなたが神から、救いのために世の中に、人々の間に無傷で留まることができるような力を授かったとしても、それでもなお、人々の前で肉体で行うことに対して、あなたの心を慎重に守りなさい。　そのことに意志が加担することなく、手が触れるものに魂が触れることなく、口が味わうものに心が喜びを見出さず、足を踏み出すことで内なる平安が乱されることなく、外で起こるすべてのことが内側に感じられず、あなたの心が穏やかであり続けますように。　私はあなたの救いを喜んでいる。ただ、あなたも私のために神に祈ってほしい。来世において、神が私たちを互いに引き離さないように。

「恐れるな、愛する兄弟ヨハネよ」とシメオンは彼に答えた。「私がしようとしていることは、私の意志によるものではなく、神の御心によるのだ。私の行いが神に喜ばれるものであることは、私が死ぬ前にあなたのところへ行き、あなたに挨拶し、あなたを私と共に招き、数日後にはあなたが私の後を追うことになるという事実から、あなたは知るだろう。」

そう語り合った後、二人は祈りを捧げ、涙を流しながら長い間祈りを続けた。それから、何度か互いに抱き合い、口や胸にキスを交わした後、ヨハネはシメオンを見送った。彼を遠くまで見送ったのは、彼と別れたくなかったからだ。そして、シメオンが彼にこう言うたびに：

「もう戻ってきてください、ヨハネ兄弟」――その言葉は、彼にとって、魂を肉体から切り離す鋭い剣のようだった。ついに、互いに口づけを交わして別れた。シメオンは世へと去り、ヨハネは涙を流しながら荒野へと戻っていった。

荒野を出た後、至福のシメオンは聖都エルサレムへと向かった。何年も見ていなかった聖地を強く見たいと願っていたからである。そして、聖なるゴルゴタ[5248] にたどり着くと、三日間そこに留まり、尊く命を与える十字架と主の聖なる墓を参拝し、礼拝を捧げた。　彼は神に熱心に祈り、この世を去るまで、主が人々の前で自分の行いを隠してくださるよう願った。それは、天使たちさえも天から滅ぼし、追放してしまった空しい栄光や高慢を避けるためであり、むしろ皆に自分を狂人であり

[5248] ゴルゴタ――主イエス・キリストが十字架につけられた場所、すなわち「額」を意味する場所、あるいは丘のことである。ヘブライ語の動詞「レト」（これが私たちの「ゴルゴタ」の語源である）は、「額」「頭蓋骨」を意味し、おそらくその丘が額のような形をしていたことからそう呼ばれたのだろう。　古くから伝わる、極めて意義深い伝承によれば、この名称の由来は、ここにアダムが埋葬されていたことにあり、それゆえキリストの十字架は、人類の始祖であるアダムの頭上に立てられたとされています。主イエスが亡くなられた当時、この丘はまだエルサレムの外れにありました（マタイ27:33、28:11；ヘブライ人への手紙13章など）。破壊後に再建されたエルサレムは、主に北および北西へと拡大したため、ゴルゴタは新しいエルサレムの西側のほぼ中央に位置することとなった。　そして現在、いわゆるゴルゴタの丘にある岩の裂け目が、救い主キリストの死の瞬間に起きた地震によって生じたものとして示されている（マタイ27:51）。　聖キリロス・エルサレムスは（約350年）次のように語っている。「この聖なるゴルゴタは、今もなおそびえ立っているように見え、主が亡くなられた瞬間に岩が裂けたという事実を、今日に至るまで証ししている。

愚か者であると見なされ、そうして願いが叶うようにと願ったのである。　主は御自身の真の僕たちの祈りに耳を傾け、彼らの願いに聞き入れてくださる。

その後、この神に愛された者は、どれほど多くの奇跡を行ったことか。悪霊を追い出し、未来を予言し、あらゆる病を癒やし、突然の死から救い出し、不信仰者を信仰へと導き、罪人を悔い改めへと説得した。　それにもかかわらず、人々は彼の聖性のすべてを知ることはできませんでした。神がそれを彼らから隠しておられたからです。人々は、彼が死ぬその瞬間まで、彼を狂人であり、悪霊に取り憑かれた者と見なしていました。彼自身も、神の恵みによってなされた自身の奇跡的な行いを、外見上の狂人ぶりで隠す術を知っていました。これについては、後の物語で明らかになるでしょう。　聖シメオンが、空虚で高慢な世を嘲笑うために、ふりした愚者のふりをして行った、いくつかの奇妙で笑いを誘うような行いを読んで、誰も惑わされないように願う。むしろ、誰もが使徒の言葉について熟考すべきである。*「あなたがたのうち、この世で賢い者と思いたい人は、愚かな者になりなさい」*（Iコリント3:18–19）。また、*「私たちはキリストのために狂っている。なぜなら、神の愚かさは、人々の知恵よりも賢いからである」*（Iコリント4:10、1:25）ともある。　エルサレムから、シメオン聖人はエメッサの町へと向かい、そこでキリストのために狂人のふりを始めました。町に近づくと、ゴミの山の上に死んだ犬が横たわっているのを見かけました。彼は自分の帯を外し、その犬の足を縛り付けて町へと引きずり込み、門を素早く通り抜け、通りを引きずり回しました。　大勢の子供たちが集まり、叫び声を上げながら彼の後を走っていった。

「聖なる狂人よ、聖なる狂人よ！」

そして、彼に石を投げつけ、棒で殴りつけた。そして日曜日の朝、彼は胸元にナッツを隠し持ち、典礼の始まりに教会に入った。　まずシメオンはろうそくを消し始め、彼を追い出そうとしたとき、説教壇に飛び乗って女性たちにナッツを投げつけ、ようやくのことで彼を教会から追い出すことができた。彼は逃げ出す際、売られていたパンを倒してしまい、パン屋たちに激しく殴打され、かろうじて一命を取り留めた。　その後、ある食堂の主人で、食料品やソチヴォを売る商人であり、セヴィロスの異端を信奉していた不信心な男[5249]　が、その至福の老僧を見て、彼が聖なる狂人であることを疑わず、こう声をかけた。

「何をしてうろついているんだ、長老よ？　私のところに来て、ソチヴォや豆、穀物、その他の食料を売ってくれ。」

彼は即座に承諾し、その男の小さな部屋に座り、やってくる乞食たちに食料をただで配り始め、自身もそれを食べた。というのも、彼は丸一週間も食事を口にしていなかったからである。　そして、すべてを配り終え、一銭も集められなかったとき、その男は彼を激しく殴りつけ、髭を引きちぎり、家から追い出した。しかし、老人は立ち去らず、門のそばに座り込んだ。　一時間後、宿屋の主人の妻が香を焚くために熱い炭を要求したのを耳にした老人は、ストーブへと駆け寄り、ひしゃくが見つからなかったため、両手で熱い炭を掴んで、妻が香を焚けるようにと彼女のもとへ持っていった。それを見た妻は恐怖に駆られて悲鳴を上げ、老人にこう叫んだ。

「何をしているの？　なぜ自分の手を焼くの？」

すると彼は、火を自分の服に移しながら言った。

「もし私が手で香を焚くのがお気に召さないのなら、服を使って焚きましょう。」

そして、香を載せ、炭が消えるまで燻し続けた。彼の手や服が火の被害を受けていないのを見て、夫婦は深く驚嘆し、その後カトリック教会に改宗した。また、その老人は聖人として崇められる

[5249] セヴェロス――アンティオキア総主教（512～518年）――は、主イエス・キリストが二つの本性から生まれたとはいえ、二つの本性の中に存在しているわけではないと主張する単性論の異端の、著名かつ熱烈な信奉者であった。なぜなら、神の御子の受肉において、人間の性質は、　神の御言葉によって受け入れられた人間性は、単に神性の付属物となり、その実在性を失い、概念上のみ神性から分離し得るものである。

ようになった。しかし、彼はその家から逃げ出し、その奇跡が人々の記憶から消えるまで戻らなかった。

彼が町で聖人ぶりを演じていた頃、ある酒場の主人が彼を引き取り、奴隷のように扱った。その主人は気性が荒く、情け知らずで、町の人々が嘲るようにこう言っていたにもかかわらず——彼のおかげで多額の利益を得ていたにもかかわらず——長老に食事を与えることはめったになかった。

「あの聖人のいる酒場へ飲みに行こう」

老人はその奇行で、酒を飲む者たちを楽しませていた。　ある日、蛇が這い寄ってきて、器からワインを飲み、そこに毒を吐き出しては、また這って去っていった。その時、部屋には誰もいなくて、聖なる狂人は家の外にいて、人々の間で身振り手振りを交え、タンバリンの調べに合わせて踊っていた。しばらくして、彼が家に入ると、器の上に誰の目にも見えない「死」という文字が浮かんでいるのを見た。

何が起きたかを悟った老人は、棒を手に取り、ワインで満たされた器を打ち砕き、ワインはこぼれ落ちた。その瞬間、酒場の主人がやって来て、老人が器を割ったのを見ると、その棒を奪い取り、自分が疲れるまで容赦なく彼を殴りつけ、家から追い出した。　翌朝、老人は再び酒場へやって来て、まるで店主から身を隠すかのようにしていた。するとまた蛇が這い寄り、別の器からワインを飲み始めた。それを見た酒場の主人は杖を掴み、蛇を殺そうとして器を叩いた。　蛇は逃げ去り、器は割れてワインがこぼれた。その器だけでなく、その近くに置いてあったグラスもすべて割れてしまった。後ろに立っていた老人は叫んだ。

「見ろ、器を割ったのは私一人だけではない。お前もまた同じことをしているのだ。」

そこで酒場の主人は、シメオンが昨日なぜワインの入った壺を割ったのかを理解し、罪のないシメオンを残酷に殴ったことを悔い改め、彼を聖人として崇めるようになった。　一方、老僧は自らを崇められることを望まず、むしろ侮辱や冒涜を望み、肉体に宿った天使のような生き様を、愚者のふりをして巧みに隠していた。そして、次のようなことを行った。　ある日、酒場の女主人が一人で自室で休んでいる間、夫がワインを売っていたところへ、老修道士がやって来て、彼女と寝ようとしているふりをして服を脱ぎ始めた。それを見た彼女は悲鳴を上げ、酒場の主人が駆けつけ、妻は彼にこう言った。

「この忌々しい聖人を追い出してください。彼は私に暴行を加えようとしているのです。」

夫は老人に耳を引っ張り、寒さの中へ追い出した。その日は激しい寒さと雨が降っており、老人は家の外に座り込み、ぼろぼろで破れた服一枚で寒さに耐えていた。それ以来、酒場の主人自身は彼を聖人とは見なさなくなっただけでなく、他の人々が「シメオンはキリストのために狂人ぶっている」と口にすれば、彼は誓いを立ててこう断言した。

「まことに、彼は悪霊に取り憑かれた狂人であり、しかも淫乱者だ。私の妻を強姦しようとした上、肉を食べ、神を知らない者らしく、その他にもふさわしくない行いをしている。」

というのも、その聖人は、七日間の断食の後、何度も人々の前で肉を食べていたからである。それは、人々が彼を単なる狂人だけでなく、罪人としても見なすようにと、わざとそうしていたのだ。さらに、その見せかけの狂気をより一層際立たせるため、人間の羞恥心を捨て去り、まるで肉体を持たないかのように、真の「無肉体者」の模範として、何度も裸で市場を歩き回った。　その町の教会で奉仕していたヨハネという名の助祭は、　徳高く神に喜ばれる人物であったが、キリストのためにシメオンが演じている偽りの聖人ぶりをよく知っていた。ある日、その長老が、断食のせいか、あるいは聖人ぶりを演じる上で伴う苦労のせいか、体がひどく衰弱しているのを見て、冗談半分で彼を洗ってあげようと思い、こう尋ねた。

「風呂に行って体を洗ってくるか、聖なる狂人よ？」

すると、その老人は笑いながら言った。

「行くよ、行くよ。」

そしてすぐにぼろ服を脱ぎ、それを丸めて自分の頭の上に載せた。すると、助祭は彼に言った。

「服を着なさい、兄弟。もし裸で行くなら、私は一緒には行かないから。」

老人は彼に答えた。

「私は本題に入る前に、まずやるべきことを済ませておいた。もし私と一緒に行きたくないのなら、あらかじめ言っておくが」

そう言うと、彼は先へ駆け出した。そこには二つの風呂があった。一つは男用、もう一つは女用だった。彼は男用を横目に、女用の方へ向かった。すると、助祭が彼に追いつき、叫んだ。

「待て、聖なる狂人よ、そこへ行ってはならない。そこは女湯だからだ。」

シメオンは彼に向き直って言った。

「あそこにもここにも、熱いお湯と冷たいお湯があるだけだ。あちらもこちらにも、それ以外に特別なものは何もない。」

そう言うと、彼は前へ駆け出し、裸のまま風呂に入り、女性たちの真ん中に座った。すると女性たちはたちまち一斉に彼に飛びかかり、殴りつけ、追い出した。その後、助祭は特に聖人を一人きりにして尋ねた。

「父よ、あなたが裸のまま、裸の女性たちのところに入ったとき、あなたの肉体はどのような感覚でしたか？」

長老はこう答えた。

「信じてほしい、兄弟よ。まるで木々の間の木のように、私も彼女たちの間にいた。肉体を持っていることすら感じず、肉体の存在たちの中にいるとも思わなかった。ただ、私のすべての思いは神の御業に向けられていたのだ。」

聖シメオンは、その死んだような肉体の無情さを、自らの生涯のすべてを隠すことなく打ち明けていたその助祭に明かした。彼はその助祭を、真の神の僕と見なしていたからである。こうして二人の間には、キリストを巡る友愛が生まれ、互いの神に喜ばれる行いを知り合うようになった。

聖シメオンは、狂人として振る舞いながら、自分自身だけでなく他の人々をも救った。多くの罪人を、言葉と行いによって導き、悔い改めへと至らせたのである。　ある若者が姦淫の罪を犯し、直ちに神の懲らしめとして、サタンに身を委ねられ（Iコリント5:5）、不浄な霊に苦しめられていた。これを見た長老は、その若者の頬を叩き、耳元でこう言った。

「姦淫してはならない。」

すると、たちまち悪霊が彼から出て行き、青年は健康を取り戻した。どのようにして癒やされたのかと尋ねる人々に、彼はこう語った。

「私は、木製の十字架を手にした老人が、その十字架で私から恐ろしい黒い犬を追い払うのを見ました。そして、私は元気になりました。

シメオンという聖なる狂人が彼を癒したことは、シメオンが死ぬその日まで、神が彼の舌を封じていたため、彼は明かすことができなかった。　プシファスという名の道化師がいた。彼は広場を巡り、滑稽な芝居を演じていた。彼が大衆の前でいつもの芸を披露していた時、シメオンがそこへやって来て、その道化師を見て、彼の生き方に何らかの美徳を見出した。　明らかに神に喜ばれない行いから彼を遠ざけたいと願い、ごく小さな石を拾い上げ、十字を切って彼に投げつけた。石は彼の右手に命中し、その手はたちまち萎えてしまった。誰が石を投げたのか、誰も見当がつかなかった。そして道化師は病に伏し、意気消沈してその場を去った。 夢の中で、ある聖人が現れてこう言った。

「私が石を投げつけたのだ。もし悔い改めず、二度とあの滑稽な芸には手を出さないと私に誓わなければ、治ることはないだろう。」

彼は聖母マリアに誓い、もう二度とあの芝居を演じないと約束した。そして起き上がると、体が健康になったのを感じ、手も治っていた。しかし、自分を癒した人物の名を挙げることができず、

ただ「頭の上にナツメヤシの枝の冠を戴いたある修道士が自分を癒してくれた」と繰り返し語った。また、その尊者は未来を見通し、他の人々には隠してそれを予言していた。　マウリキウス帝の治世下で[5250]、大地震が起こる数日前に、その地震（ ）によってアンティオキアが倒壊し[5251]、エメッサの多くの石造りの建物が破壊されたが、その老修道士は狂人のふりをして、学校から編んだ革の鞭を奪い取り、街中を走り回りながら石柱を叩いた。　建物を支えていたそれらの柱の前で、ある柱に向かってこう言い放った。

「主は、お前にしっかりと立っていよと命じている。」

そしてある柱の前では：

「お前は立ってもいけないし、倒れてもいけない。」そして、地震が起きたとき、聖人が叩きながら「立っていなさい」と命じた柱はすべて無傷のまま残った。他の柱は倒れ、それに支えられていた家屋も共に崩れ落ち、粉々に砕け散った。　一方、聖人が「立ってもいけないし、倒れてもいけない」と言った柱は、上から下まで真っ二つに割れ、 、少し傾いたまま立っていた。 聖人が柱を叩きながら「立っていよ」と命じたとき、多くの人は彼が狂乱のあまりそうしているのだと思ったが、地震の後も柱が無傷で立っているのを見ると、多くの人は、それが地震に関する聖人の預言的な前兆であったことを理解した。　また、疫病が流行しようとしていた時、聖人は学校を訪れ、まるで笑っているかのように子供たちに口づけをし、一人ひとりにこう言った。

「行け、わが愛しき者よ！　行け、わが美しい者よ！」

すべての子供たちに口づけをしたわけではなく、神の恵みが指し示した子供たちにだけ口づけをした。そして、教師にはこう言った。

「さあ、兄弟よ、神の御名にかけて、私が口づけした子供たちを殴らないでくれ。彼らには遠い旅路を歩まなければならないのだから。」

しかし、教師は彼を侮辱し、自ら彼を殴ったり、子供たちに彼を殴るよう命じたりした。そして、老人は柱に縛り付けられて殴打された。やがて、神の御許しにより、その町に疫病が蔓延したとき、聖人が口づけをした子供たちは一人として生き残らず、皆死んでしまった。その時、人々は彼の預言を理解したのである。

その老人は、裕福な家の屋敷に入り、狂人のふりをして遊ぶのが常で、その際、人々の目の前で何度もその家の女奴隷たちに口づけをしていた。　ある時、著名な市民の女奴隷が、ある青年と不義を犯し、彼の子を身ごもってしまった。彼女が妊娠していることが発覚し、女主人が誰と不義を犯したのかと尋ねたところ、女奴隷は誘惑した相手の名前を明かすことを拒み、代わりに「狂信者の修道士に強姦された」と述べた。　ある時、その老修道士がいつものようにその家を訪れると、女主人は彼にこう言った。

「シメオンよ、私の女奴隷を強姦し、彼女を妊娠させてしまったなんて、よくもそんなことをしたわね？」

すると、長老は彼女を嘲るように笑って言った。

「心配するな、心配するな。彼女が出産するまでは。そうすれば、小さなシメオンが君のところにやってくるだろう。」

[5250] 聖マウリキウス――582年から602年まで皇帝を務めた。

[5251] アンティオキアという都市は、キリスト教教会にとって、エルサレムに次ぐキリスト教の第二の中心地として、また異教徒から生まれた最初のキリスト教会として、特に重要な意味を持っています。　アンティオキアは、キリスト降誕の300年前に、シリアの王セレウコス・ニカトルによって建設されました。彼は、父アンティオコスの名を後世に伝えることを願って、アンティオキアという名の都市をさらに10以上も設立しました。　そして、この首都アンティオキアは、他の都市と区別するために「アンティオキア・エピダフナ」、すなわちダフナの神殿と森の近くという意味で呼ばれていました。また、地中海に注ぐ河口から10ヴェルスタほど離れた、オロンテ川のほとりに位置していたことから、「オロンテ川のアンティオキア」とも呼ばれていました。

その日から、長老はその女中を自分の妻と呼ぶようになり、絶えず彼女の元を訪れ、焼きたてのパンや肉、魚を持ってきては、こう言い添えた。

「食べなさい、私の妻よ、食べなさい。」

やがて出産の時が訪れ、その女性は陣痛に苦しみ、三日間も産めずに死の淵に近づいた。彼女の女主人は聖人に懇願して言った。

「長老よ、神に祈ってください。あなたの妻が産めないのですから。」

すると彼は、手を叩きながらこう付け加えた。

「イエスの名にかけて、イエスの名にかけて、その子が誰の子供か白状するまでは、彼女から子供は生まれない。」

これを聞いて、陣痛に苦しんでいた女性は、無実の修道士を誣告していたという真実を明かし、自分が罪を犯した誘惑者の名を挙げた。すると彼女は子供を産み、人々は老修道士を聖人だと見なすようになった。しかし、他の人々は、彼がサタンの仕業で魔術を行っていると主張した。というのも、彼は狂人であり、悪霊に取り憑かれていたからである。

また、聖人は人々の心の奥底にある秘密の思いまでも見抜いていた。それは次の出来事からも明らかである。町の近くにある修道院で、二人の司祭がオリゲネスについて議論し、なぜそのような賢者が異端に走ったのかを探求していた[5252]。一人は、オリゲネスの知恵は神からのものではなく、多くの書物　の学習と読解によるものだと主張し、もう一人は、神の恵みなしに、今なお正教徒によって受け入れられているようなことを、人が語ったり書いたりすることは不可能だと主張した。こうして、長い議論と意見の相違の末、彼らは互いに次のように決めた。

「ヨルダン川沿いの荒野には、神によって知恵を与えられた偉大な聖なる父たちがいると聞く。それならば、そこへ行こう。そこで、我々の疑いを解き明かしてくれる者を見つけられるかもしれない。」

そう決心して、彼らはまず聖都エルサレムへ向かい、聖地を参拝した後、死海の荒野へと向かった。そして、彼らの労苦を軽んじなかった神の御手配により、シメオンの友人であり同志であった聖ヨハネに出会った。

[5252] オリゲネスは、アレクサンドリア教会の著名な教師であり、その知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡と称された人物である。　多くの傑出した教父たちは、オリゲネスの神学著作と功績に対して深い敬意を払っていた。しかしその後、彼は生前にアレクサンドリアで開催された2つの地方公会議で異端者として非難され、死後は543年のコンスタンティノープル公会議でも同様に非難された。　オリゲネスは、自身の非正統的な見解を不変の真理として主張することはなかったものの、キリスト教教会の信仰教義における多くの真理について誤った考えを抱いており、そのため、主要なキリスト教の教義に対する彼の確固たる信念を疑う者もいた。　魂の先在に関する非正統的な教義を展開する中で、彼はキリストについて誤った考えを抱き、神が、神性を理解し、神に似る能力を持つ、同等の尊厳を持つ一定数の霊的存在を創造したと主張した。　これらの被造された霊のうちの一人が、神性に対してこれほどまでに熱烈な愛を注いだため、神の御言葉と不可分の一体となり、あるいはその被造物としての器となった；　オリゲネスによれば、これこそが、神である御言葉が地上で受肉することを可能にした人間魂であり、なぜなら、神である御言葉の直接的な受肉や、世界および人間の創造は、　オリゲネスは、キリストの死についても正統派とは異なる意味で理解しており、それを霊界において霊的に繰り返されるものであり、それによって天使たちの解放に作用するものとして捉え、また、救いの業において、私たちの本性に与えられた通常の力の働きに過大な役割を帰していた。　オリゲネスは、復活と来世に関する教義のいくつかの点においても誤った考えを持っていた。例えば、悪魔も救われるという主張や、聖書の解釈において、歴史的な意味を損なうほど神秘的な意味を過度に強調して理解していたことなどが挙げられる。　しかし、いずれにせよ、教会に対するオリゲネスの功績はより顕著であり、その誤りを覆い隠している。彼は自身の学校で多くの傑出した教父や教会の教師を育て上げ、その中には、異教からキリスト教への改宗を彼に負っている者もおり、彼は知識と哲学をキリスト教の信仰と調和させようとしていた。　特に注目すべきは、聖書の研究――解釈、そして何よりも――原本の復元と浄化に関する彼の著作であり、キリスト教をその敵や異端者から守ることを目的としたオリゲネスの著作もまた傑出している。　デキウス帝の迫害の際、オリゲネスはキリストの勇敢な殉教者として名声を博し、254年にティルスで70歳の長老としてこの世を去った。

その頃、ヨハネはすでに完全な聖性に達しており、予知の賜物を持っていた。彼は、自分に向かって歩いてくる修道士たちを見るやいなや、こう言った。

「海を離れて、乾いた湖から水を汲みに来られたとは、よくなさったことです。」

彼らとの長い霊的な対話が続き、オリゲネスをめぐる論争の話にも及んだとき、聖ヨハネは訪れた者たちにこう語った。

「父たちよ、私は神から、未知の事柄について論じる賜物を受けてはいない。だから、あなたがたの町にいる聖なる狂人シメオンのところへ行ってほしい。彼なら、あなたがたが何を尋ねても、すべて答えてくれるだろう。」

彼らは帰路につき、エメッサの町に到着すると、こう尋ねた。

「聖なる狂人シメオンはどこにいるのか？」

ある者たちは笑いながら、彼らにこう言った。

「皆を惑わし、何事にも嘲笑を浴びせ、とりわけ修道士たちを悩ませているあの狂人から、一体何を聞きたいというのか？」

しかし、彼らはそのような言葉を意に介さず、老人を探し求め、ある野菜農家の家で、彼が豆の上に横たわり、まるで熊のように豆を食べているのを見つけた。するとすぐに、そのうちのひとりが誘惑に駆られ、心の中で笑いながらこう思った。

「まさに偉大な賢者を見に来たものだ！彼から多くのことを学べるだろう！」

そして彼に近づき、こう言った。

「父よ、祝福をください！」

すると、彼は彼らを一瞥し、怒りを込めてこう言った。

「無駄足だ。お前たちを私のところへ送った者は愚か者だ。」

そして立ち上がると、誘惑された者の頬を強く叩き、叫んだ。

「なぜ豆を罵るのか。豆は四十日間も水に浸されているのだ。オリゲネスはそんなものは食べなかった。しかし海に入り、そこから出られずに深みで溺れ死んだのだ。ここから立ち去れ、立ち去れ。さもないと殴られるぞ！」

彼らは、長老の洞察力に驚いて立ち去った。なぜなら、彼らが尋ねることもないのに、オリゲネスについて語り、彼らを送り込んだ者をも思い出し、心の内を暴いたからである。しかし、彼らはそのことを誰にも話すことはできなかった。　また、四十日間水に浸されていたという豆の話は、彼がそれだけの日数、食事を摂らずに過ごしていたことを意味していた。これは、後に彼自身が友である助祭ヨハネに語ったことである。

ある日、聖人は野菜入れから笛を取り出し、通りに出て、近くの場所へ向かった。そこには空き家に邪悪な霊が住み着いており、夜遅く通りかかる多くの人々を怖がらせ、中には害を及ぼす者さえいた。　そこで座り込んだ聖人は、師であるニコン神父から教わった祈りの曲を笛で奏で、それによってその場所から悪霊を追い払った。　一方、悪魔は小さな恐ろしいエチオピア人の姿をとって、野菜売りの店へ駆け込み、そこにいた全員を恐怖に陥れ、食器をすべて割ってしまった。シメオンが戻ると、野菜売りの妻が怯えて落ち込んでいるのを見た。彼女は彼にこう語った。

「背の低い、恐ろしく凶暴な黒人が、あっという間に中に入ってきて、私たち全員を恐怖に陥れ、食器をすべて割ってしまいました。」

すると聖人は彼女にこう言った。

「あなたがたが聖なる教会に加わらない報いとして、私が彼を遣わしたのだ（彼らはセウィロスの異端を信じていた）。」

その女性は、聖人を捕まえて殴ろうとしたが、聖人は身をかがめて一握りの土を掴み、彼女の顔に投げつけ、土で彼女の目を塞ぎながら叫んだ。

「まことに、あなたが私の教会に加わるまでは、私を捕まえることはできない。もし加わりたくなければ、また黒人があなたたちのところに来るだろう。」

そう言い残して、その家から逃げ出した。翌日、また同じ時刻に、悪霊は前日と同様にエチオピア人の姿をとって、同じ野菜貯蔵庫に入り、最初と同じことを行った。すると、その家に住む者たちは皆、ためらうことなく正教会に改宗した。　また、イエス・キリストの名を冒涜していたあるユダヤ人も、シメオン聖人によってキリストへと導かれた。　そのユダヤ人（神が彼に救いへの道を示されたため）は、ある時、身を清めている長老と、彼と語り合っている二人の天使を目撃し、彼が神に愛される者であることを悟って、そのことを（見たことを）人々に知らせようとした。しかし、聖人は夢の中に現れて、見たことを誰にも話してはならないと禁じた。　しかし、そのユダヤ人は翌朝、広場に出ると、その秘密を守り通すことができなかった。ところが、彼がシメオンについて人々に語りかけようとした瞬間、聖人が現れて彼の口に触れ、そこに十字架の印を描くと、彼を口がきけないようにした。聖人はそこから逃げ去り、人々の間を跳ね回りながら戯れていたが、そのユダヤ人は口がきけないままだった。　そこで彼は聖人のもとへ行き、頭を下げて、首を振って、自分が洗礼を受けなければならないことを示した。その後、夢の中で長老が現れ、こう言った。

「洗礼を受けるか、それとも口がきけないままでいるか。」

こうして、そのユダヤ人は洗礼を受け、聖なる洗礼槽から出た途端、言葉を話すことができるようになり、神を賛美し始めた。その後、彼は家族全員を聖なる洗礼へと導いた。

聖人はこれほどまでに清らかさと無欲の境地に達していたため、女性たちの間で戯れていても、まるで火の中の純金のように清らかであり、度々、恥知らずな女性たちが彼の秘部に手を入れ、恥ずべきようにくすぐったが、　しかし、彼はまるで死人のように、感覚のない木のように、神の恵みによってあらゆる肉欲から解放されていた。彼は、先に述べた助祭ヨハネに、自身のことをこう語った。

「私が荒野にいた頃、当初は肉欲に悩まされ、この戦いを和らげてくださるよう神に祈っていたところ、聖ニコーンが現れてこう尋ねたのです。

「兄弟よ、どう過ごしているか？」

すると私はこう答えました：

「ひどく苦しんでいます、父よ。もしあなたが助けてくださらなければ、どうすればよいのか分かりません。肉体が激しく私に反抗してくるからです。」

長老は微笑みながら聖ヨルダン川から水を汲み、私の腹に注ぎかけ、十字を切ってこう言いました：

「さあ、これで元気になったぞ。」

それ以来、私は夢の中でも現実の中でも、肉欲を感じることはなくなった。

これが、その助祭に、至福の者が自らについて語った話である。情欲に囚われていなかった彼は、恐れることなく女性たちに近づいた。そして、かつてシナイ山で燃えながらも焼けない荊棘（出エジプト記第3章）が火の中にあったように、彼もまた、女性の触れから免れていた。 聖シメオンは、彼女たちの救いを願って、その輪の中に身を置いた。時折、彼はある娼婦にこう言った。

「もし望むなら、君を私の友人にしよう。100の金貨をあげよう。ただ、誰とも罪を犯さないでくれ。」

そう言いながら、神が彼の望むだけ目に見えない形で与えてくれた金を、その娼婦に見せた。娼婦たちは彼を嘲笑し、誰とも罪を犯さないと約束した。しかし、彼は彼女たちに誓いを立てさせた。　そして、残りの人生を清く過ごすことを誓った女には、金を与えた。しかし、もし誓いを守らず罪を犯したならば、聖人は即座にそれを察知し、彼女を糾弾して、真に悔い改めたという確かな証拠を示すまで、彼女を苦しめるために、猛烈な病気か悪霊を送り込んだ。　しかし、人々が彼を聖人だと見なし始めると、彼は直ちに、聖性ではなく狂気の明白な証拠となるような行為を行った。時には

足を引きずって歩き、時には跳ねるように歩き、時には地面を這いずり回り、通りすがりの人の足にぶつかり、また時には地面に横たわり、足をバタバタと蹴り上げた。　新月の日には、悪霊に取り憑かれたふりをして、まるで悪霊に憑かれたかのように倒れ込んだ。そして、人間の目には不快で、滑稽な行為を数多く行い、誰にも聖人だと思われないよう、皆の前で狂人のように振る舞った。　ある時、彼は聖なる四旬節の間、食事を絶っていたが、聖木曜日の朝、市場広場に座って食事をしていた。それを見た通行人たちはこう言った。

「あの狂人を見てごらん。聖木曜日さえも尊ばず、朝早くから食事をしている。」

彼を見た助祭ヨハネは尋ねた。

「今食べているものは、いくらで買ったのですか？」

彼は答えた。

「40銅貨で。」

40日間何も食べていなかったことを、遠回しに示していたのである。シメオンのこのような生き様を耳にした、エメッサ近郊に住むある高官は、心の中でこう考えた。

「行ってみよう。彼を見て、キリストのために聖なる狂人として振る舞っているのか、それとも本当に正気を失っているのか確かめてみよう。」

彼が町に到着し、娼婦たちの住まいの近くに来たとき、一人の娼婦が老人を肩に担ぎ、もう一人が革ベルトで叩いているのを見て、彼は心の中で誘惑に駆られた。

「この偽善的な修道士が、これらの不潔な女たちと淫行にふけっていないと、誰が信じるだろうか？」

彼がそう心の中で考えているとき、彼はその聖なる狂人から石を投げられるほどの距離にいた。老僧は女たちを置き去りにして貴族のもとへ駆け寄り、彼の顔を殴ると、衣服をまくり上げ、恥じることなく自らの死んだような肉体をさらけ出した。そして彼の前にひざまずき、こう問いかけた。

「この堕落者よ、ここで情欲が湧き起こり得るとでも思っているのか？」

貴族は、遠くからでも長老が自分の思念を見抜いたことに驚き、彼がキリストのために自らの意志で聖なる狂人となっている神の僕であることを確信したが、たとえ望んだとしても、そのことを誰にも話すことはできなかった。というのも、ある力によって（他の者たちと同様に）、聖人が亡くなるまで彼の舌は封じられていたからである。

悪魔は再び、町のある通りの別の空き家に潜み込んだ。その空き家に近づくと、シメオン聖人は、通りかかる人を待ち構えて襲おうとしている悪魔を見かけた。　そこで長老は小さな石を胸元に詰め込み、反対側に立ち、その道を通ろうとする者すべてに石を投げつけ、誰一人として通らせなかった。ただ一匹の犬だけがそこをすり抜けたが、すぐに悪魔に襲われ、泡を吹き始めた。

そこで聖人は人々にこう言った。

「さあ、通りなさい。人の代わりに、犬が襲われたのだから。」

その後、老僧はある場所を通り過ぎなければならなかったが、そこでは多くの乙女たちが賑やかに騒いでいた。彼を見るや、乙女たちは彼を嘲り始め、こう叫んだ。

「修道士！　修道士！」

そして、自分たちの集まりに誘い込んだ。しかし、彼は彼女たちの無礼を懲らしめ、より貞潔にさせようと、心の中でひそかに神に祈り、彼女たち全員の目を歪ませた。その結果、一人残らず斜視になり、老僧はそのまま先へ進んだ。　一方、娘たちは自分の目が歪んでいることに気づき、それが聖なる狂人の仕業だと悟ると、彼の後を追いかけ、泣き叫びながらこう訴えた。

「直して、聖者よ、私たちの目を直して！」

彼女たちは、彼が魔法でそうしたのだと思っていた。老人に追いつくと、彼女たちは彼を捕まえ、無理やりこう迫った。

「解いてくれ」と彼女たちは言った。「縛ったものを。」

すると彼は冗談めかして言った。

「もしあなたがたのうち、誰かが癒されたいなら、斜視の目を私にキスさせてくれ。そうすれば癒されるだろう。」

神が癒やそうとされた者たちのうち、何人かは、長老に目をキスしてもらうことに同意し、そのキスによって彼らは即座に癒やされ、彼らの目は以前と同じようになった。　しかし、長老を忌み嫌って、彼に目をキスされることを拒んだ者たちは、癒やされることなく、泣き続けた。長老が彼女たちからそれほど遠くないところまで去ったとき、彼女たちは叫びながら彼の後を追いかけた。

「待って、聖者よ、待って、神様の御名にかけて、待って！私たちに口づけをして！」

しかし、老人は彼らの言うことを聞き入れなかった。こうして老人は走り去り、娘たちは彼の後を追いかけた。その光景を見た人々の中には、こう言う者もいた。

「娘たちが彼と遊んでいるのだ」

また、他の人々は彼女たちを正気を失った者と見なした。聖人は、見物人のうちのある者たちにこう言った。

「もし神が彼女たちの目を曇らせなかったなら、彼女たちは淫行においてシリアのすべての女性を凌駕していたであろう。しかし今や、彼女たちはそうはならないだろう。」

ある日、エメサの町民数人が、過越の祭りのためにエルサレムへ向かった。祭りが終わり、彼らが家路についたとき、そのうちのひとりが群れから離れ、聖なる父たちを訪ねるために荒野へと向かった。　彼らの祈りと祝福を受けるためである。彼は贈り物を携えて聖父たちの修道院を巡り、自分の財産から施しを配った。　神の御計画により、彼は死海とヨルダン川の近くに住み、聖シメオンの弟子であった尊者ヨハネに出会うことになった。その町人は彼に頭を下げ、祝福と祈りを求めた。すると、尊者ヨハネは彼にこう言った。

「町には『狂人』と呼ばれる神の御使いシメオンがいるのに、なぜ私のような貧しい者に祈りを求めるのか。彼の祈りには、私だけでなく、全世界が頼っているのだ。」

そして、その男を連れて自分の修道室へと案内すると、そこには、神から遣わされた見えない手によって用意された、砂漠では珍しい食事が並んでいた。そこには、焼きたての白いパン、新鮮な魚、ワイン、そして器があった。二人は席に着いて食事をし、満腹になると、神に感謝を捧げた。食事が終わると、聖ヨハネは、やはり神から送られた三つのプロスフォラを取り、その男に手渡しながらこう言った。

「これを私の兄弟、聖シメオンに届けて、『兄弟のヨハネのために祈ってくれ』と伝えてくれ。」

その男が戻り、エメスに入ろうとしたとき、門で聖シメオンに出迎えられ、こう言われた。

「私の兄弟ヨハネは元気か？　彼が祝福として私に送ってくれた三つのプロスフォラを、君は食べてしまったのではないか？」

そして、帰路についた男はそのような洞察力に驚嘆した。一方、老人は彼を自分の質素な住まいに招き入れ、聖ヨハネが荒野で彼に与えてくれたのと同じ、神から授かった食事を振る舞った。その際、シメオンは、あの荒野でヨハネと交わした会話や、何を食べ、何を飲んだかについて、すべてを彼に語った。　長老のもとを後にしたその男は、長老の洞察力に恐怖と驚きを覚え、誰にもそのことを話すことを敢えてしなかった。それは、一部は神によって禁じられていたからであり、一部は人々を恥じていたからである。なぜなら、彼を信じてもらえないと知っていたからだ。というのも、すべての人々は、誰よりも賢明であったシメオンを、狂人だと見なしていたからである。

前述の助祭ヨハネには、ある時、神の御許しにより、次のような災難が降りかかった。悪党たちが夜、町で殺人を犯し、殺された者の遺体を持ち去って、助祭の庭に投げ込んだのである。　日が明けて、助祭の家で死体が発見されると、大きな騒ぎとなった。裁判官は助祭を捕らえ、殺人犯として裁いたが、彼の無実を証明する証人は見つからず、彼は無実を証明することができなかった。　無

実の助祭は死刑――木に吊るされる――を宣告された。処刑場へと連行される際、彼はただこう言うばかりだった。

「聖なる狂人の神よ、私を助けてください！シメオンの神よ、この時に私を救ってください！」

その頃、シメオンは別の場所で聖なる狂人の行いを続けていた。主は、無実の助祭をそのような無意味で恥ずべき死から救おうと望まれた――すると、ある男が長老のもとに来てこう言った。

「聖なる狂人よ！　あなたの友であり恩人である助祭ヨハネが死刑を宣告されました。もし彼が死ねば、あなたは飢え死にしてしまいます。もはやあなたを世話してくれる者は誰もいないのですから。」

そう言いながら、その男は彼がなぜ死刑判決を受けたのかを語った。聖人は直ちに、人里離れた場所で祈る習慣があり、この助祭以外には誰も知らなかった秘密の場所へと向かった。そこで膝を折り、助祭を死から救うよう神に熱心に祈り始めた。　するとすぐに、殺人犯たちが特定され、裁判官は、無実の者を救うために、助祭を処刑場へと連行する者たちの後を追うよう、騎馬隊を急いで派遣した。そして、彼らはすでに助祭が絞首刑に処されるはずだったその場所で、犯人たちを発見した。　解放された助祭は自分の家へは戻らず、聖シメオンが祈っていた場所へ直行し、まだ祈りを終えず、両手を天に向かって上げたままで立っている聖シメオンに出くわした。助祭は恐怖に駆られ、聖シメオンのすぐ後ろの少し離れた場所に立ち止まった。　というのも、彼は（後に誓いを立てて証言したように）聖人の口から剣のような炎が噴き出し、その周囲を炎のような光が包んでいるのを見たからであり、聖人が祈りを終え、その炎のような光が天へと昇り去るまで、助祭は聖人に近づくことを敢えてしなかった。振り返って、聖人は助祭にこう言った。

「どうした、ヨハネ兄弟よ。死の杯を飲みそうになったのではないか？　行って、救い主である神に祈り、感謝しなさい。この試練があなたに降りかかったのは、二人の物乞いがあなたのところに来たのに、与えるものがあったにもかかわらず与えず、彼らに背を向けて、何も与えずに帰してしまったからだ。」 あなたが施すものは、果たしてあなた自身のものなのか？ それとも、「神のために貧しい者に施す者は、この世で百倍の報いを受け、来世では永遠の命を得る」と仰せになった方を信じていないのか。もし信じるなら施しなさい。もし施さないなら、明らかに主を信じていないということだ。

これこそが、聖なる愚者、いや、むしろ聖なる高潔な人の言葉であった。　というのも、彼がその助祭と二人きりになると、狂人のような振る舞いは一切せず、柔和さと心の痛切さをもって有益なことを語り合ったからである。そして、その助祭は、聖人の魂に益となる言葉を聞くたび、彼の口から漂う素晴らしい香りを何度も感じていた。

ある日曜日の朝、七日間の断食の後、聖シメオンは、　聖人は、狂人ぶりを演じながら、右手にギリシャ語で「エラダ」、ラテン語で「ルカニカ」、つまりソーセージと呼ばれる肉を取り、それを助祭の肩掛けのように肩にかけ、左手にはマスタードを持ち、エラダをマスタードに浸して食べていた。　彼を訪ねて遊びに来た者たちには、その唇にマスタードを塗って楽しませていた。そこへ、目の悪い粗野な農民が一人、片方の目に白内障を患って近づいてきた。聖シメオンは突然、その男の目にマスタードを塗りつけた。男は、刺激の強いマスタードによる激しい目の痛みに叫び声を上げた。すると、聖シメオンは彼にこう言った。

「行け、愚か者よ。ニンニク入りの酢で顔を洗えば、すぐに治るだろう。」

しかし、その男は聖人の言葉に従わず、医者のところへ行き、さらに視力を失い、病状も悪化した。　その後、後悔した彼は心に誓った。「たとえ目が飛び出そうとも、長老の命じることは何でも果たそう」と。そして、ニンニク入りの酢で目を洗うと、その瞬間、目は完全に治った。その後、聖人は道中で彼に出会い、こう言った。

「さあ、もう元気になったのだから、隣人の山羊を盗んではいけないぞ。」

こうして聖人は、人間の秘められた行いを知りつつ、盗人を懲らしめたのである。ある町人のところから500ズラティツが盗まれており、その男は失った金に嘆き、懸命にその行方を探していた。彼は自分の奴隷たちに厳しく、容赦なく殴打していた。ある日、聖なる老人が通りで彼に出くわし、こう言った。

「お前の金貨が見つかるようにしてほしいか？」

「ああ、もちろん！ 見つけてほしい」と男は答えた。

「では、私にいくら払ってくれる？」と聖人は尋ねた。「もしすぐに金貨が見つかったらな。」

男は10枚の金貨を約束した。

「金は要らない。だが、盗んだ者を殴らないと誓ってくれ」と聖人は要求した。「そして、他の誰に対しても殴らないと誓ってくれ。」

そして、町人は彼に誓った。すると、聖人は彼にこう明かした。

「お前のパン職人が金貨を盗んだ。だが、気をつけろ。彼も、他の誰をも殴ってはならない。」

その男は家に戻り、聖人が言った通りすべてを見つけ出し、パン職人の使用人から金を無傷のまま取り戻し、彼を殴らなかった。その後、何らかの過ちを犯した使用人を殴ろうとしたとき、彼の手は痛みを伴って木のように硬直し、殴ることができなかった。誓いを思い出し、彼は聖者に会いに行き、こう頼んだ。

「聖者よ、この誓いを解いてください。私の手が自由に動くようにしてください。」

しかし、その聖人は、まるで理解していないかのように、狂人のふりをした。王は何度も彼の元を訪れ、誓いを解いてくれるようしつこく頼み続けた。すると、ある時、聖人が夢の幻として現れ、こう言った。

「お前の誓いを解いてやろう。だが、その代償として、お前の金も奪い、すべての財産を滅ぼしてやる。来世で、お前より先に天国へ行くことになる使用人たちを、なぜ殴ろうとするのだ？」

その幻視の後、その男は神への畏れを抱き、すべての人に対して柔和になった。

人々が聖人のこのような奇跡を知らないようにするため、彼は悪霊に取り憑かれたふりをし、あたかも悪霊の働きによって、人々の内面で密かに行われていることを知っているかのように振る舞った。そのために、彼は悪霊に取り憑かれた者たちの中に混じり、彼らの一人であるかのように振る舞い、彼らを憐れみながら、自らの祈りによって多くの者から悪霊を追い出した。　しかし、他の悪霊に取りつかれた者たち――いや、おそらくは人々に宿った悪霊そのもの――は、彼に対してこう不平を漏らした。

「おお、狂人よ！　この世のすべてを軽んじる者よ、なぜ我々を苦しめに来たのか？　ここから去れ。お前は我々の一員ではない。なぜ一晩中、我々を苦しめ、焼き尽くすのか？」

しかし、聖人は、ふりをして悪霊に取り憑かれたふりをしながら（聖霊によってすべてを知っていたからである）、非常に多くの人々の隠された罪を暴いた。ある者は不潔な行い、ある者は窃盗、またある者は誓いを破った罪――一人ひとりのあらゆる罪を暴いたのである。　また、ある者には個別に、ある者には人々の前でその罪を暴き、さらに別の者にはたとえ話を用いてその悪行を指摘し、自らの良心に目を向けさせた。また、ある者たちに対しては、彼らが犯している不法行為を公然と非難した。こうして、彼は人々を自覚と悔い改めへと導き、街全体を死に至る罪から遠ざけたのである。　しかし、多くの人々は、彼が神からではなく、悪魔を通じて彼らの秘密を知っているのだと考え、彼自身をも悪霊に取り憑かれた者と見なした。そのため、悔い改めない罪人の中には、彼のもとを訪れたり、彼と顔を合わせたりすることを恐れ、非難されないよう彼から逃げ回った者もいた。

当時、その町には一人の魔女が住んでおり、彼女は人々の間に多くの不幸をもたらしていた。その魔女の魔術を打ち破ろうと、聖人はまるで彼女と親しいかのように頻繁に訪れ、自分に差し出された食べ物や銅貨、衣服を彼女に贈った。ある時、彼は彼女にこう言った。

「君のために、あるものを作ってあげようか。それを身につけていれば、誰も君を非難することはできず、いかなる悪も君に近づかないだろう。」

彼女は、その聖者が悪魔の力を借りて何かを知っているのだと思い、

「欲しいわ」と言い、「作って」と頼んだ。

彼は小さな板を取り、その上にシリア語で次のように書いた。

–神が、あなたがこれ以上人々を神から遠ざけることを禁じられますように。

これを書き終えると、彼はその板を妻に渡し、首に掛けるように命じた。彼女がそうすると、たちまち彼女の中にあった魔力が消え去り、魔女はもはや誰に対しても害を及ぼしたり助けたりすることはなくなった。

一方、老聖人は貧しい兄弟たちと共に歩き、ガラスを製造している炉のそばに近づいた。そこではユダヤ人が働いていた。炉のそばに座って、聖人は暖を取り、ユダヤ人はガラス瓶を作っていた。聖人は貧しい仲間たちに言った。

「君たちを笑わせてやろうか？」

彼らは聖人の方へ目を向け、彼が何をするのか見ようとした。そして、ユダヤ人が一つのガラス瓶を作り終えると、聖人は遠くから右手でその瓶に十字を切った。すると、その瓶はたちまち粉々に砕け散った。　ユダヤ人が別の瓶を作ると、それもシメオンの十字の印によって砕け散った。三つ目、四つ目、そして七つ目まで次々と砕け散り、乞食たちは大笑いして、ユダヤ人に事情を説明した。　ユダヤ人は怒り狂い、燃えさしを掴んで、その聖人を追い払い、殴りつけ、火傷を負わせた。聖人は立ち去りながら、彼に向かって叫んだ。

「おお、不浄なる者よ！　お前の額に十字を刻むまでは、お前の瓶はすべて割れ続けるだろう。」

ユダヤ人が再び瓶を作り始めると、さらに十三個が次々と割れてしまった。彼は自分の努力が無駄だと悟り、本意ではなかったが、額に十字を切ると、瓶が割れるのは止んだ。　聖なる十字架の力を知ったユダヤ人は、その後、聖なる教会を訪れ、聖なる洗礼を受けてキリスト教徒となった。

その頃、ある有力な市民が病気になった。その家のには、聖なる愚者がよく訪れて遊んでいた。その市民は、病状がひどく悪化したとき、ある幻視を見た。まるで恐ろしいムリンという存在とサイコロを振っているようで、二人の間には賭けが交わされていた。もし病人が3回連続で6の目を出さなければ、勝利はムリンのものとなるというものだった。　病人は大きな疑念と恐怖に苛まれていた。そこへ、聖なる狂人シメオンが病人の前に現れ、こう言った。

「確かに今回は、あの黒い者がお前を打ち負かすだろう。だが、これからは妻の寝床を姦淫によって汚さないという誓いを立てよ。そうすれば、私が代わりにサイコロを振り、あの者に打ち負かされることはない。」

そして病人は、幻視の中で聖人に、姦淫を犯さないと誓った。聖人はサイコロを取り、投げると、三回とも六の目がでた。すると、ムリンは病人の元から去っていった。病人は目を覚ますと、病の苦しみから解放されたのを感じた。聖人は、いつものように彼の家を訪れ、こう脅した：

「お前は三度、幸運にもサイコロを振ったが、信じてくれ、もし誓いを破れば、あの黒人がお前を絞め殺すだろう」。そう言い放ち、皆を狂人のふりをして非難すると、彼はさっさとその場を立ち去った。

その聖人は、安らぎのため、とりわけ夜の祈りのために、自分専用の小さな部屋を持っていたが、そこには一抱えの薪以外には何もなかった。　そこで毎晩、早課が始まるまで祈りを捧げ、涙で

大地を濡らし、日が昇ると、オリーブや草で花冠を編み、それを頭に載せ、枝を手に持って街を歩き回り、こう叫んだ。

「勝利の王とその都に栄光あれ！」

この言葉において、聖人は「町」を魂、「王」を情欲を支配する知性と呼んでいた。彼は、しばしば密かに訪ねては、自分の言葉や行動を詳しく説明し、自分の死まで誰にも何も話さないよう厳重に誓わせていた友人、助祭ヨハネにそう説明していた。　死の二日前、彼はこのヨハネのもとを訪れ、次のように語った。

「今日、私は愛する兄弟である隠遁者ヨハネのもとを訪れた。彼とは当初から世を捨てて修道生活に入り、共に修道誓願を立てた者である。彼は徳において大いに進歩し、神に完全に喜ばれる者となっていたのを見て、私は彼を心から喜んだ。というのも、彼の頭には『　『隠遁者の忍耐の冠』と刻まれていた。

その後、シメオン聖人はこう付け加えた。

「ある栄光に満ちた方が私にこう言われたのを見ました。『行け、聖なる愚者よ、私のところへ来なさい。そうすれば、多くの人間の魂を救うために、一つではなく、多くの冠を受けることになるだろう。』」

そう言うと、聖人はため息をつき、再び語り始めた。

「私には、天の報いに値するような行いは何一つ見当たらない。私は狂人であり、理性を失っているのだから、どのような報いを受けられるというのか。ただ、主の御恵みによって、主が私を憐れんでくださるだけではないだろうか？」　しかし、兄弟よ、お願いだ。乞食、とりわけ修道士たちを、誰一人として軽蔑したり非難したりしてはならない。あなたの愛が知るように、彼らの多くは苦難によって清められ、太陽のように神の御前で輝いているのだ。　同様に、村に住み、土地を耕し、悪意なく、心の正しさをもって生活し、誰をも罵らず、傷つけず、自らの労苦と額に汗して得たパンを食べている一般の人々の間にも、多くの偉大な聖人がいます。　私は、彼らが町に来て、キリストの御体と御血を拝領し、純金のように輝いているのを見たからだ。私があなたに語ることはすべて、主よ、決して虚栄心から語っているのだとは思わないでほしい。ただ、あなたの愛が、私の惨めな生活の怠惰をあなたから隠さないよう迫ったのだ。　主がまもなくあなたをもここから連れ去られることを知ってください。ですから、力の及ぶ限り、ご自身の魂のことに心を配り、遅滞なく空中の霊たちの領域を通り抜け、闇の君主の苛烈な手から逃れることができるようにしてください。　私の主なる神は、私もまた、すべての人間の行いや言葉が詳細に裁かれるこの恐ろしい場所を通り抜けるまでは、深く悲しみ、大きな恐れを抱いていることをご存知です。　それゆえ、わが子であり兄弟であるヨハネよ、どうかあらゆる方法で慈悲深くなるよう努めてほしい。あの恐ろしい時、慈悲こそが他のいかなる美徳よりも私たちを助けてくれるからだ。*「貧しい者を思いやる者は幸いである。災いの日に、主は彼を救い出される」*（詩編40:2）と書かれている通りである。また、次のことも守ってください。誰かに対して怒りを抱いたまま、神の礼拝に臨んではなりません。そうしなければ、あなたの罪が聖霊の降臨を妨げることはないでしょう。

このこと、そして他にも多くのことについて、敬虔な助祭と語り合った後、シメオン聖人は、二日後に自分の隠れ家へ立ち寄るよう彼に頼んだ。そして、彼のもとを去ると、二度と町には姿を見せず、最期の瞬間まで人里離れた場所で過ごした。　彼の最期がどのようなものであったかは、神と天使たち以外には誰も知らない。なぜなら、天使たちは通常、人々から見捨てられた貧しい者たちの最期に立ち会うからである。それは、福音書に記されているように、ラザロが死んだ時に、彼らがその死の床に立ち会ったのと同じである。*「その貧しい人は死んで、天使たちに連れられてアブラハムの懐に運ばれた」*（ルカ16:22）。したがって、疑いなく、それらの聖なる天使たちは、霊において貧しく、真に敬虔であったこのシメオンが至福の最期を迎えるその時にも現れ、その義なる魂を清らかな肉体から静かに解き放ち、喜びの歌を歌いながら天の住まいへと運び上げたのである。

二日が過ぎると、聖シメオンと親交のあった物乞いたちのうち数人は、その間彼を見かけなかったため、「あの聖なる狂人は病気になったのではないか」と考えた。そして彼の隠れ家へやって来て、枯れ枝の下で死んでいる彼を見つけ、こう言った。

「生前は聖なる狂人として振る舞っていたが、死後もそのままである。なぜなら、枯れ枝の上に横たわったのではなく、枯れ枝の下で息を引き取ったからだ。」

すると、二人の男が、遺体を清めもせず、慣例通りの賛美歌も歌わず、ろうそくも乳香も用いないまま、その遺体を運び出し、異邦人が埋葬される場所に葬ろうとした。　聖人が埋葬のために運ばれる途中、かつてユダヤ人でガラス瓶を作っていた、新しく洗礼を受けたキリスト教徒の家の前を通りかかった。彼は、言葉では言い表せない歌を、心地よい声で歌う大勢の声を聞き、小さな窓に身を乗り出したが、聖人の遺体を埋葬のために運ぶ二人の男以外には誰も見当たらなかった。　しかし、声は目に見えないまま歌い続けていた。それは神の天使たちが歌っていたものであり、そのキリスト教徒は、空気を満たす並外れた芳香を感じ取った。

「ああ、聖なる狂人よ、あなたは幸いである」と彼は言った。「あなたのために葬送の歌を歌う人々がいなくとも、天の力たちが歌をもってあなたを称え、天国の香りであなたを包んでくれているのだから。」　そして彼はすぐにその二人の男たちと共に歩き出し、尊い遺体を運び、自らの手で旅人や乞食たちの墓の間に葬り、死者の上で天使たちの歌声を聞き、言葉に尽くせない芳香を嗅いだことを皆に語った。　一方、助祭ヨハネはその部屋に来て、聖人を見つけられず、至る所を懸命に探し回り、聖シメオンが亡くなり、埋葬されたことを知ると、痛切に泣いた。　そして、聖人の遺体をそこから取り出し、栄誉ある場所に丁重に埋葬しようと、その棺へと向かった。しかし、棺を開けてみると、聖人の遺体は見つからなかった。主が御自身の聖なる天使たちと共に、それを人々に知られぬ場所へと移されたからである。　すると、エメシスの町の住民たちは皆、まるで目覚めたかのように、神の御心に適う者の奇跡的な行いや預言、そして苦難に満ちた生涯を思い出し、互いに語り合い始めた。　そこで人々は、この聖なる狂人が狂人ではなく、現代のあらゆる賢者よりも賢明であり、の罪人と見なされていたが、実は義人であり敬虔な者であったことを悟った。彼は、聖なる狂気と罪深さを装うことで、人々の前で、神に賢明で神に喜ばれるその生涯を隠していたのである。　これこそが、キリストのために聖なる狂人として生きた、この驚くべきシメオンの生涯であり、その偉業であった。彼は、かつてソドムの民の中にいながら、彼らの罪に染まらなかったロト（創世記19:1–38）のように、この世の中にいながら、世俗の情欲に染まることはなかった。　尊者シメオンは7月21日に永眠し、その後、ヨルダン砂漠で共に修道生活を送った尊者ヨハネも、至福の死を迎えた[5253]。二人が共に主に仕え始めたように、天においても共に神の御座の前に現れたのである。　両者の生涯は、シメオンの義なる口から、エメシア教会の助祭ヨハネに語られた。そして、この助祭によって、教父たちの間で偉大なる聖レオティオス、キプロス・ネアポリスの司教に、忠実に、かつ公正に伝えられた。　そして彼は、読む者と聞く者の益となるよう、また、父と聖霊と共に今、常に、そして世々限りなく賛美される、私たちの神キリストの栄光のために、この書簡を記した。アーメン。

8月4日

7月22日（旧暦）

[5253] 聖人たちの没年は、およそ590年とされている。

使徒に等しい聖なる香油を携えたマリア・マグダレナの伝記

記念日 7月22日

偉大なる使徒に等しい[5254] 聖女[5255] 香油を携えた聖女[5256] マリア・マグダレナ[5257] は、主イエス・キリストに対するその熱烈で揺るぎない献身的な愛によって、キリスト教会において特に称賛された。彼女は当時繁栄していたマグダラ[5258] の町出身であり、その町は ガリラヤ[5259] のパレスチナ地方

[5254] 正教会のキリスト教において、「使徒に等しい者」とは、キリストの使徒たちの協力者たち、そして使徒たちと同様に、とりわけ熱心にキリスト教の信仰を宣教し、確立した義なるキリスト教徒たちを指す。こうした特別な功績により、彼らは使徒たちと同等の敬意をもって崇敬されている。 「使徒」という言葉は、「使者」を意味し、特定の使命を遂行するよう任命された者を指します。 イエス・キリストは、ご自身の弟子たちの中から十二人を選び出し、彼らを「使徒」と呼び（ルカ6:13）、宣教に遣わし（マルコ3:14）、あらゆる病気やあらゆる弱さを癒やすためでした（マタイ10:1–42）。

[5255] キリスト教教会において、「聖人」とは当初、すべてのキリスト教徒、すなわちキリストを信じるすべての人々を指す言葉として用いられていました。例えば、使徒パウロの手紙にもそのように記されています。しかし、個々の義人について言及する際、古代のキリスト教徒たちは「聖人」という呼称を用いることを避けていました。なぜなら、この言葉は異教の碑文で頻繁に使われており、キリスト教徒たちはそれを模倣したくなかったからです。 また、古代の暦においても、教会によって崇敬される義人の名前の前に「聖人」という言葉が使われるようになったのは、3世紀以降のことである。 一方、福音書においては、聖性はキリスト教徒のあらゆる側面における特性として描かれている。「御名が聖とされますように…」、「聖なる父よ…」、「御自身の真理をもって彼らを聖別してください…」

[5256] マリア・マグダレナが「香油を携えた女」と呼ばれるのは、福音書記者たちが彼女を、当時のユダヤ人の敬虔な慣習に従い、キリストの遺体に香油を塗るためにキリストの墓を訪れた敬虔な女性たちの筆頭として挙げているからである。これらの香油は、ナルドの没薬、すなわちスミルナ、乳香、アロエ、その他の芳香植物といった樹脂質の物質を、純粋なオリーブオイルと混ぜ合わせて作られていました。故人の遺体にこのような芳香のある香油を塗ったり、振りかけたりすることで、故人への愛と敬意を表したのです。

[5257] 「マリア」という名は、ヘブライ語の「マリアム」に由来し、「高貴な、崇高な、堅固な、卓越した、高揚した」という意味を持つ。 また、このマリアは、マグダラという町出身であることから「マグダラのマリア」と呼ばれています。これは、シネドリオンの敬虔な一員であったヨセフが、パレスチナの町アリマタヤ出身であることから「アリマタヤのヨセフ」と呼ばれるのと同様です。 そして、「マグダラの」という呼称は、イエス・キリストに仕え（ルカ8:3）、彼女と同様に「マリア」という同じ名前を持つ他の敬虔な女性たち――例えば、ラザロの姉妹マリアやクレオパの妻マリアなど――と区別するために、このマリアの名前に付け加えられている。

[5258] 「マグダラ」は、塔を意味するヘブライ語の「マグデライア」に由来し、ゲネサレト湖の西岸、カペナウムやティベリアスの町からほど近い場所にあった都市である。 マグダラは染色業と上質な羊毛織物の生産で知られていた。さらに、清めのいけにえ用の鳩やハトの盛んな取引も行われていた。伝承によれば、マグダラには300軒の鳩の店があり、その近くには「鳩の谷」と呼ばれる一帯があったという。 当時のマグダラの富は極めて膨大で、この町から納められる貢納金については、その額があまりにも多いため、荷馬車一台分丸ごとエルサレムへ送られていたと記されている。住民の道徳的堕落もまた甚だしいものであった。 ゲネサレト湖の湖岸に点在していた数多くの町や村は、マグダラを除いてすべて消え去ってしまった。現在「メッジェル」と呼ばれるマグダラは、湖岸の石で積み上げられた汚い小屋群に過ぎず、家屋の平らな屋根の上には、葦や小枝でできた小屋のような上階が設けられている。 しかし、古代の望楼の遺構は今も残っており、その立地は今日でも素晴らしい。自然の美しさも荘厳であり、ゲネサレト湖、あるいはガリラヤ湖というこの素晴らしい湖畔で、キリストの奇跡と説教に対する神聖な感銘を呼び起こす。

[5259] パレスチナ北部のガリラヤ地方、すなわちガリラヤ（ヘブライ語の「ガリル」＝「地方」に由来する 「地区」）は、マグダラのマリアが生きていた当時、パレスチナの3番目の地域を構成しており、ガリラヤ自体は北部の「上ガリラヤ」（「異教徒の地域」）と南部の「下ガリラヤ」に分けられていた。ガリラヤは、救い主キリストの生誕地であり、説教の地として、世界史において重要な位置を占めている。 ガリラヤは、東西に約120ヴェルスト、南北に40ヴェルストの広さがあった。北はシリアとレバノン山脈に接し、西はフェニキア、南はサマリア、そして東はヨルダン川を境界としていた。 ガリラヤには200以上の都市や大きな集落があり、人口は400万人に達した。その住民はユダヤ人だけでなく、イスラエル人とシリア人、フェニキア人、アラブ人、その他の異民族が混在しており、その多くはユダヤ教を信仰していた。その素晴らしい気候、肥沃さ、そして豊かさにより、ガリラヤはパレスチナで最も優れた地域であった。穏やかで活力を与える気候、実に多様で素晴らしい自然の美しさ、尽きることのない肥沃な土壌――これらすべてがガリラヤには備わっ

にあり、　　ゲネサレト湖、すなわちガリラヤ湖[5260]　　のほとりに位置し、カペナウム[5261]とティベリアダ[5262]の間の地域でした。マグダラの町出身であることから、聖 使徒同等のマリアは、

ていた。　また、地理的な位置や数多くの交通路もガリラヤに有利に働いていた。ガリラヤには、東から西へとダマスカス、フェニキアの海岸、地中海、エジプト、アッシリアへと続くいくつかのローマの交易路が通っており、他の道路は南から北へとガリラヤを横断していた。　ガリラヤでは産業と生活が活気に満ち溢れていた……福音書の多くの箇所が、ガリラヤの自然や生活を映し出している。　救い主キリストの故郷であるナザレの町、その幼少期、青年期、そして主にそこで行われた説教を考えると、ガリラヤはキリスト教信仰の発祥の地であった。そして、イエス・キリストのたとえ話、奇跡、この世での日常の出来事――これらすべてが、ガリラヤの自然の豊かさと美しさ、そして生活様式を映し出すイメージなのである。　空、大地、海、麦畑、果樹園、花、ブドウ畑、牧草地の草、魚や鳥――これらすべてが、そこで救い主にとって、その神聖な説教における驚くべき教えの基盤であり、象徴となっていた……しかし現代のガリラヤには、町や村の廃墟と、完全な荒廃しか残されていない……

[5260] ガリラヤ海、ゲネサレト湖、ティベリアス海は、パレスチナのガリラヤにある同じ広大な湖の別名である。『民数記』（民数記 34:11）および『ヨシュア記』（ヨシュア記 12:3）では、その楕円形の形状からキネレフ湖と呼ばれている。ティベリア湖という名は、その湖岸にあるティベリアという町に由来し、ゲニサレト湖という名は、同じく湖岸にあるゲニサール、あるいはゲニサレタという町の名に由来し、周囲の自然の美しさにちなんでいる。この湖は、長さ30ヴェルスト、幅8ヴェルストに及んでいた。　その北端にはヨルダン川が流れ込み、南端からは流れ出ている。この湖の周囲には、パレスチナの豊かな産業の中心地が集中しており、湖岸沿いには、非常に多くの人口を抱える町や村が、ほぼ途切れることなく連なっていた。湖の水は透き通っており、味も良く、ひんやりとしている。　そこには最大で4,000隻もの様々な種類の船が行き交っていた。ローマ軍の軍艦、ベツサイダの漁師たちの粗末な舟、そしてヘロデ王の金箔を施した小舟などである。普段は静かで穏やかなゲネサレト湖も、山からの風が吹くと、時に荒れ狂い、危険な状態になることもあった。この湖はあらゆる種類の魚が極めて豊富であることで知られており、誰もが魚を捕ることを許されていた。魚はそこで最も好まれる料理であり、ある偉大なラビの昼食会では、300種類もの魚が供されたほどであった。　魚は生、塩漬け、干物として食べられ、珍味も作られていた。その調理法や、どのような時期にどのように食べるかについては、ラビたちまでもが助言を行い、魚を洗う際にはビールやワインを使うのが良いと説いていた。　魚の捕獲や販売に携わる者は非常に多く、エルサレムの門の一つは「魚の門」と呼ばれていた。そこにはガリラヤから大量の魚が運ばれてきていたからであり、サンヘドリンのメンバーでさえ魚の取引に従事し、船一隻分を魚で満載していたほどである。　漁業に従事することは、非常に利益をもたらすだけでなく、名誉あることでもあった……湖の西岸には「ゲネサレトの地」（マタイ 14:34、マルコ 6:53）があり、そこは救い主キリストの説教の最初かつ主要な場所であった。「ゲネサレト」という言葉そのものが「豊穣の園」を意味しており、「ゲネサレトの地」ほど、自然の美しさや、様々な気候に由来するあらゆる植物や果実の豊かさに恵まれた場所は他にありませんでした。木々の果実は10ヶ月間も実り続けていました。　当時のユダヤ人歴史家ヨセフス・フラウィウスは、ゲネサレト湖の美しさ、素晴らしい気候、ヤシの木、ブドウ畑、イチジク、オレンジ、アーモンドの木、ザクロなどを熱狂的に描写し、そこでは四季が、この楽園のような土地を支配する栄誉をめぐって争っているかのようだと述べている……　また、ユダヤ教のタルムードは、待ち望まれるメシアがかつてこのティベリア湖、すなわちゲネサレト湖から現れると教えている……

[5261] カペナウムは、ヘブライ語で「ナウムの集落」を意味し、ゲネサレト湖の西岸に位置していた都市である。 旧約聖書にその名が記されていないのは、比較的後世に成立した町であり、商業・産業活動の隆盛により、漁村から都市へと発展したためである。その立地は非常に美しいものであった。ヘロデ王はそこに宮殿を構え、ローマ人は駐屯地と税関を置いていた。　福音書では、カペナウムは、救い主キリストがナザレを去った後の主な滞在地として語られており、そのためカペナウムは「キリストの町」と呼ばれるようになった（マタイ 9:7）。　カペナウムとその周辺で、キリストは数多くの奇跡を行い、多くのたとえ話や教えを説かれたが、そのすべての諭しにもかかわらず、住民たちは、自分たちの商業・産業の喧騒とは相容れない新しい福音に耳を貸さず、信仰を持たなかった。そこでキリストはカペナウムに対して、恐ろしい裁きの言葉を宣告された。　「カペナウムよ、天にまで高ぶったお前は、地獄にまで落とされるだろう」（マタイ 11:23）。そして今、カペナウムには何の痕跡も残っていない……

[5262] ティベリアダは、ゲネサレト湖の西岸、カペナウムの少し南に位置する都市である。西暦17年、ガリラヤの統治者ヘロデ・アンティポスによって建設され、当時のローマ皇帝ティベリウスにちなんで名付けられた。　ヘロデはティベリアダを自身の首都とし、壮麗な宮殿、神殿、シナゴーグ、円形劇場を建設し、街を城壁で囲んだ。街の近くには、癒しの力を持つ温かい山間の小川が流れていた。　ティベリアダの建設に伴い古代の墓が破壊されたため、ユダヤ人たちはこの街を不浄と見なし、そこに定住することを恐れた。そのため、当初はこの街は完全に異教的な性格を帯びていた。ティベリアダの周辺で、救い主キリストは説教を行い、五つのパンで五千人の聴衆を満腹させた（ヨハネ 6:1–71）。西暦70年にローマ軍によってエルサレムが破壊された後、ユダヤ人たちはティベリアに13のシナゴーグと高等学校を設立し、ティベリ

福音書に「マリア」という名で登場する他の敬虔な女性たちと区別するために、「マグダラのマリア」とも呼ばれています。

使徒に等しい聖マリア・マグダレナは、生粋のガリラヤ人でした。そして、キリスト教の説教や確立において、「ガリラヤ人」であるということは、非常に特別な意味を持っています。　救い主キリストご自身も「ガリラヤ人」と呼ばれていました（マタイ26:69）。それは、キリストが幼少期からガリラヤで育ち、生活し、その後もガリラヤで多くの説教をされたからです。さらには、4世紀には、ギリシャ・ローマ帝国の皇帝ユリアヌス・アポステートが（363年に）亡くなる際、キリストに向かって次のように語りました。

「お前は私を打ち負かした、ガリラヤ人よ！」

キリストの最初の使徒たちは、救い主に最も近い存在であり続けましたが、裏切り者であるユダ・イスカリオテ（彼はガリラヤ人ではありませんでした）を除き、全員がガリラヤ人でした。復活後の出現の際、 救い主キリストがガリラヤの山で、500人を超える大勢の信者たちに現れた際、その大半は、主がガリラヤで説教をなさっていた時期に主に従い、その教えに耳を傾け、奇跡を目の当たりにし、慈悲深い癒やしの主イエスの慈愛を身をもって体験したガリラヤ人であった[5263]。 そもそも、ガリラヤの人々は、パレスチナの他の地域のユダヤ人よりも熱心にキリストの教えを受け入れ、広めていたため、当初、救い主キリストのすべての信徒は「ガリラヤ人」と呼ばれていた（使徒行伝1:11）。 また、ガリラヤの人々は、パレスチナの他の地域のユダヤ人たちとは大きく、かつ際立って異なっていた。それは、ガリラヤの自然がパレスチナ南部とは対照的に異なっていたのと同じである。ガリラヤの自然は生命力に満ち、住民は活気にあふれ、素朴であった。一方、パレスチナ南部は不毛の砂漠であり、人々は規則の文字や形式以外を認めようとしない人々であった。　ガリラヤの住民たちは、律法の精神という考えを喜んで受け入れたが、エルサレムのユダヤ人たちの間では、単調な形式主義だけが支配的だった。ガリラヤはキリスト教の故郷であり揺りかごとなったが、ユダヤは偏狭なパリサイ主義と近視眼的なサドカイ主義によって枯れ果ててしまっていた。　ガリラヤの人々は情熱的で、思いやりがあり、行動力があり、感謝の心があり、誠実で、勇敢であり――熱狂的な信仰心を持ち、信仰や神についての教えを聞くことを愛し――率直で、勤勉で、詩的であり、ギリシャの賢明な教養を愛していた[5264]： そして、救い主キリストによって癒やされたマグダラのマリアも、その生涯において、最初の、そして最も熱心なキリスト教徒であった同郷のガリラヤ人たちの、多くの素晴らしい特徴を体現していた。

アのサンヘドリンは最高の宗教的権威となった。　ギリシャの女帝ヘレナはティベリアに12の祭壇を備えた神殿を建立した。また、5世紀半ばから6世紀半ばにかけて、この地には司教座が置かれていたが、その後、第1回十字軍の際に復活した。　ティベリアの廃墟の上にタバリヤという小さな町が建設されたが、1837年に地震で破壊され、現在では粗末な小屋しか見られない。しかし、ユダヤ人たちはこの地をエルサレムと同様に深く敬っている。

[5263] 復活後の主イエス・キリストの御出現。『聖人伝』第8巻（4月）、514ページ。

[5264] エルサレム・タルムードでさえ、ガリラヤの人々は栄光を、ユダヤの住民は金銭をより重視していたと証言している。ガリラヤでは、未亡人は亡き夫の家に留まることが許されていたが、ユダヤでは相続人たちが彼女を追い出していた。他人の困窮に対するガリラヤ人の思いやりは、例えば、貧しくなった老人に、村人たちが毎日、彼が裕福だった頃に常食としていた食材を気遣って提供し続けるほどであった。　しかし、ガリラヤ人は学問の学校を設立しなかったため、高慢な律法学者やファリサイ派のユダヤ人たちは、ガリラヤ人を無学で愚かな者たちと呼んだ。　ガリラヤ人による、いくつかのヘブライ語の喉音文字の不明瞭で曖昧な発音や区別を理由に、ユダヤ人のラビたちは、彼らが会衆を代表して祈りを声に出して読むことを許さず、彼らを嘲笑した……

聖使徒同等のマリア・マグダレナの生涯の初期については、彼女が重く不治の病に冒され、福音書の言葉によれば*「七つの悪霊」*[5265]（ルカ8:2）に取りつかれていたことしか知られていない。この不幸が生じた原因や経緯は不明である。 しかし、 、聖福音書およびキリスト教会の教父たちは、このような特別で重い苦しみは、神の摂理によって、「神の御業が現れる」ために許されていると教えている。 すなわち、人々に対する神の特別な御業、そして神がメシアであるキリストを通して行われる特別な御業――本件における悪霊からの癒やしのように――が、神とキリストの栄光のため、また霊的な啓発のため、そしてマグダラのマリアの救いのために現れるためであると教えている。 救い主キリストの教えによれば、このような状況について、マリア・マグダレナが悪霊に取りつかれたのは、彼女自身の罪や両親の罪によるものではなく、 神の摂理がこれを許されたのは、主イエス・キリストが神の栄光の御業を現し、マリア・マグダレナの癒やしという偉大な奇跡を現し、彼女の心を啓発し、彼女を救い主キリストへの信仰へと導き、永遠の救いへと招くためであった。 また、マリア・マグダレナが悪霊によって受けた激しい苦しみは、人間にとって不可解で理解しがたい、神による人々への他の御業や御許しと同様に、神の知恵の深遠な奥義に由来するものであり、それは人間には到底理解できないものである。 これほど重く、かつ不治の苦しみを味わわなければ、マリア・マグダレナは、救い主キリストの御業から完全に距離を置くか、あるいは神人キリストの奇跡に対して好奇心や驚きを抱きつつも、生きた救いの信仰を持たず、 そして、彼女は主に対する、何ものにも揺るがされない至高の愛にまで高まることはなかったでしょう。その愛ゆえに、彼女は、最も親

[5265] 「悪霊」という言葉は、ギリシャ語の「デーモン」、すなわち「悪魔」の訳語である。新約聖書において、「悪霊」は通常、悪霊や悪魔を意味する。悪霊たちは、イエス・キリストを神の子であると信じ、恐れおののき、認めているものの、その本質はサタンの僕である。 救い主キリストの奇跡の中でも、悪霊に取りつかれた者たちの癒やしは特に驚くべきものでした。悪霊の支配下にある人々は、「悪霊に取りつかれた者」、すなわち不浄な霊に苦しむ者と呼ばれます（マタイ4:24； ルカ6:18）。悪霊に取りつかれた人々の癒やしは、悪霊との関係においては「追い出し」（マタイ8:16）と呼ばれ、苦しむ人々自身との関係においては「癒やし」と呼ばれる。悪霊が取りつかれた人々に及ぼす影響は、常に身体への影響を通じて現れる。 その際、人の魂は身体に対する支配力を失い、身体と魂の間に何らかの異質な力が侵入し、それが魂の身体的器官に有害な作用を及ぼす。悪霊はまず身体の神経系を侵し、それを通じて作用することで、身体の正常な機能を乱す他の影響によって引き起こされるのと同じ症状を引き起こす。 悪魔の力は、霊的・道徳的な性質を通じてではなく、肉体的・知的な性質を通じて作用する。裏切り者イスカリオテのユダには悪魔が入り込んだ、すなわち裏切りへと駆り立てたが、ユダは悪魔に取り憑かれてはいなかった。 悪霊に取り憑かれた状態は、悪霊に取り憑かれた者たちがキリストを神の子と認めた透視能力（ルカ4:34）において、また、狂気、てんかん、失語症、体のこわばり、失明（マルコ5:3、ルカ8:27、マタイ9など）においても現れる。 このことから、合理主義者たちは、悪霊憑きは単なる身体的な病に過ぎないと主張する口実を得た。しかし、悪霊憑きが病を伴うという事実は、その恐ろしく不自然で、物理的ではない特徴を全く説明していない。例えば、身体的に弱い人が鉄の鎖を引き裂いたり、予言をしたりするといった現象が、悪霊憑きに見られるのである（マルコ5:4）。 悪霊に取り憑かれた状態のいくつかの徴候が、身体の自然な病気と似ているのは、あくまで表面的なものであり、それは生命の一般的な法則に起因するに過ぎない。その法則の乱れは、原因がどれほど異なっていても、常に同じように現れるものである。 そして、このような福音書における悪霊憑きの教えは、生理学や心理学の知見と全く矛盾しない。人間の魂は、身体を通じて物質的な力の影響さえ受ける可能性があるのだから、魂がそのような影響に抵抗できない場合、霊的な力の影響下に置かれる可能性はさらに高くなる。これは、催眠術に関する数多くの事実によって明確に裏付けられている。 そして、催眠術において、より強い意志を持つ一人が、暗示を通じて他者に影響を与え、その人を完全に支配し、自己決定能力を奪うことができるのと同様に、 同じ心理学的法則により、悪霊もまた、自身の罪深さやその他の理由によって恐ろしい悪霊の影響の犠牲となる弱い人間の魂を完全に支配しうるのである。そして注目すべきは、救い主キリストの到来を目前に控えた時期に、とりつかれた者が特に多かったということである。 これはその時代の特徴であり、その理由の一部は、まさにその頃、霊的な不満と、この耐え難いほど過酷な状況からの変化に対する焦燥に満ちた不安な期待の結果として生じた、精神的な動揺と弱さが最高潮に達していたことにある。 当時、このような精神状態は、東方のユダヤ人だけでなく異教徒の民にも広がっていた。そして、悪霊たちの闇の勢力は、救い主キリストによる自らの近いうちの敗北を予見し、予感していたため、その悪意に満ちた破壊的な支配の網を急いで張り巡らせようとしていた。

しい使徒たちよりも先に、復活された救い主キリストの御出現によって慰められたのです（マルコ16:9、ヨハネ20:16）。　しかし、苦しみの中で無力だったガリラヤのマリア・マグダレナは、「人々のあらゆる病気やあらゆる弱さを癒やす」（マタイ9:35）という奇跡を行う方についての噂に、無関心ではいられなかった。　そこで彼女は、この奇跡を行う方を探し求め、自らその目撃者となった。「彼は多くの者を病気や患いから、また悪霊から、さらに耳の聞こえない者、目の見えない者、足の不自由な者、らい病の者から癒やし、死者をもよみがえらせた」（ルカ7:21–22；　マタイ11章など）——マリアは彼の全能を熱烈に信じ、その神聖な力にすがり、自身の癒やしを願い求め、信仰によってその願いを叶えられます：悪霊の苦しめる力が彼女を離れ、彼女は悪霊の支配から解放され[5266]、その人生は、彼女の癒し主である神の輝きによって聖別される。マリア・マグダレナは、熱烈で感謝の心にあふれたガリラヤの女として、その癒し主に自らを完全に捧げたのである。

それ以来、マリア・マグダレナの魂は、彼女の救い主キリストに対する最も感謝に満ちた献身的な愛に燃え上がり、彼女はすでに永遠に自分の救い主に身を委ね、至る所で彼に従い、彼の救いの教えを受け入れ、神聖な癒し主に仕えるあらゆる機会を活かそうとした。　そして、当時、キリストが「人の子」として自ら置かれたこの世の状況において、キリストご自身とキリストの御業のために、奉仕と物質的な支援が必要とされていたのである。　何しろ、キリストはベツレヘムの、家畜が入れられていた洞窟という貧しい場所で生まれ、そこでの揺りかごは単なる飼葉桶に過ぎなかった（ルカ2:7,12,16）。御母は、新生児のために定められた供え物として、家族の貧しさゆえに、神の神殿に若い鳩二羽しか捧げることができませんでした（ルカ2:24）。ガリラヤの小さな町ナザレ[5267]で、キリストは29歳になるまで、質素な大工の家族の一員として、同様に貧しく暮らしていました。　また、神の国の福音を宣べ伝える際、神人としての偉大な使命を果たす上で障害をできるだけ少なくする

[5266] 聖書の注釈者や聖人伝の著者、さらには西方の教会の教父たちの中には、マグダラのマリアを、パリサイ人シモンの家で悔い改め、罪の赦しを受けたあの有名な罪人と同一視する者たちがおり、　——彼らは、福音書記者ルカとマルコが、「キリストがマリア・マグダレナから悪霊を追い出した」と述べた際、マリア・マグダレナの状況を正確に表現していなかったと考えている。　こうした著述家たちは、マグダラのマリアが悪霊に取り憑かれていたわけではなく、単に罪人であったに過ぎず、福音書記者たちの「七つの悪霊」という言葉は、多くの罪や悪徳を意味すると解釈している（例えば、聖ヒエロニムス、アウグスティヌス、グレゴリウス大教皇などがそう考えている）。　しかし、二人の福音書記者の明確な言葉をこのように再解釈できるのは、ユダヤ教の悪魔学に基づいてのみであり、それによれば、ごくありふれた人間の情欲やあらゆる病気さえも、ラビたちは悪霊の仕業であると見なしている。　また、ユダヤ教のタルムードも、多くの恥知らずな悪徳を帰属させ、マグダラのマリアの並外れた美しさや髪の編み方、そして彼女の富について論じている……しかし、正教会の東方教会は、ファリサイ派のシモンの家で赦された名もなき罪人をマグダラのマリアと混同することはなく、マグダラのマリアからまさに悪霊を追い出したという二人の福音書作者の明確な言葉を再解釈することもない。また、聖ディミトリイ・ロストフ大主教は、次のように確固として記している。「もしマグダラのマリアがあの娼婦であったならば、キリストとその弟子たちの後を、明らかに罪人として長い間ついて回っていたことになる。それは、キリストを憎むユダヤ人たちが、彼に何らかの罪を見出し、彼を中傷し、非難するために言っていたことである。　もしキリストの弟子たちが、主がサマリアの女と語り合っているのを一度でも目撃したならば、主が女と話をしていることに驚いたはずである。ましてや、明らかに罪人である女性が、その後も日々主に従い、仕えているのを見たら、敵対者たちはなおさら黙っていられなかっただろう……」

[5267] ナザレ（この言葉は「子」を意味し、別の説では「守護者」「守り手」を意味する）はガリラヤにある小さな町で、カペナウムとファヴォル山の南西に位置していた。海抜600フィートの高さにそびえる山の上にあった。　山頂からの眺めは、その美しさと多様性において、谷や山々、そして地中海を見渡す素晴らしいものでした。　住民は貧しく、人数も少なく、ユダヤ人からは敬われていなかった（ヨハネ1:46）。ナザレは、世界の救い主である神の御子の誕生について、聖母マリアに告げられた場所として、世界的に知られるようになった。　ナザレでは、イエス・キリストの幼少期、青年期、そして人々の救いのための公の宣教活動を始めるまでの生涯が過ごされた（ルカ2:39–51）。このことから、彼は「ナザレ人」「ナゾレ人」（ヨハネ19:19）と呼ばれ、東方の地域では長い間、キリスト教徒までもが「ナザレ人」と呼ばれていた。

ため、キリストは養父ヨセフの家族との関係を完全に脇に置いた（マタイ12:46–50； マルコ3:31–35；ルカ8:19–21）、そして自身の物質的な安寧や私有財産に関するあらゆる配慮を完全に脇に置いた。 それゆえ、キリストは、ガリラヤを巡回する信仰の教師が身に着ける衣服以外、何の財産も持たなかった。その結果、3年間の公の奉仕を終えた後、キリストの価値はわずか30シェケル、すなわち約30ルーブルと評価されたに過ぎなかった。これは当時のパレスチナにおいて、最も貧しく無一物の奴隷の価格に相当するものであった（マタイ26:15）。 キリストは、救うために来られたこの地において、一寸の土地も、一軒の家も所有していなかった。

「きつねには巣があり、鳥には巣があるが、人の子には頭を横たえる場所さえない（マタイ8:20）」と、キリストご自身が語られた。

住まいも財産も持たない救い主の普段の食事は、最も質素な貧しいガリラヤ人の食事と同様に、大麦のパン[5268] 、ガリラヤ湖で捕まえ、その湖畔で熱湯で茹でた魚、そして時折、住民たちが自由に採集していた野生の蜂蜜の一片で構成されていた。 一方、悪賢いパリサイ人たちが、「人の子は『食べたりワインを飲んだりするのが好きだ』」 （マタイ11:19）という非難は、キリストが、社会の教師として自分を招いてくれた人々の食卓を共にすることを拒まなかったことに対するものであった。当時、教師たちはその地でもてなしを受けていたからである（ルカ5:1–39、7:1–50、10:1–42）。また、使徒たちやキリストの信者の中には少額の財産を所有していた者もいた——使徒ペテロはカペナウムに家を持ち、ヨハネはエルサレムに家を持っていたし、他のキリストの信者たちはいくつかの生業に従事しており、彼らには共同の金庫があった（ヨハネ12:6、13:29）があり、生活必需品の費用や、他の貧しい人々への援助、そして乞食への施しに充てられていたが、緊急に必要なわずかな金額でさえ、常に手元にあるとは限らなかった。そのため、ユダヤ人の神殿税徴収人が使徒ペテロのもとに来てこう言ったとき——

「あなたの師は、ディドラクマ（わずか40コペイカほど）を払ってくださらないでしょうか」と尋ねたとき、キリストである師にも、その弟子たちにも、そのような微々たる金額さえ持ち合わせていなかったのだ！…（マタイ17:24–27）

その一方で、キリストとその奇跡についての噂はシリア全土に広まっていた[5269] ；人々は、あらゆる病に苦しむ者、発作に襲われる者、悪霊に取りつかれた者、月光病の者、麻痺した者などをキリストのもとに連れて行き、 、キリストは彼らを癒やされた。 そして、ガリラヤ、十都市、エルサレム、ユダヤ、そしてヨルダン川の向こう側から、大勢の民が彼に従った」（マタイ4:25； ルカ6:17；マルコ3:7–8）。そして、遠く離れた様々な地域から集まったこの大勢の人々の間には、食べ物だけでなく、衣服さえも必要としている多くの貧しい人々がいた……

そこで、こうした状況ゆえに、キリストによって重い病から癒やされ、財産に恵まれていた多くの敬虔な女性たちは、福音宣教の旅路で救い主に同行し、「自分の財産をもって主に仕えた」 （ルカ8:3）、すなわち、必要な時には、救い主に同行する貧しい人々の生活必需品の費用を負担し、また、主の指示に従って、物質的な援助を必要とする人々に必要な支援を行ったのである。 そのような感謝の心を持つ女性たちの中で、福音記者ルカはマリア・マグダレナを第一に挙げている（ルカ8:2）。それは、彼女が神人（神であり人である方）の御業に対するこのような感謝の奉仕の模範を他の人々に最初に示したからであり、あるいは、この聖なる業における熱心さにおいて、他の誰より

[5268] 大麦のパンは貧しい人々のパンであり、ローマ兵には、例えば軍旗を紛失した際の罰としてのみ与えられていた。ユダヤ人は大麦を馬やロバの餌と見なしていた。

[5269] 「シリア（高き）」という言葉は、ヘブライ語のテキストでは「アラム」という言葉で表されており、これにはシリアとメソポタミアの両方が含まれている。ユーフラテス川から地中海まで、またタウロス山脈からアラビアに至るまでの全域がシリアを構成していた。 シリアの谷間は非常に肥沃で、小麦、ブドウ、タバコ、オリーブ、オレンジ、ナツメヤシなどが豊富に実る。気候は非常に健康的で快適である。古代において、シリアほどその文明でさえも広く知られていた国は他にない。

も優れていたからである。　そして、「頭を横たえる場所さえなかった」当時、大多数の人々から冷淡さや驚き、あるいは敵意を向けられていたにもかかわらず、彼女たちがキリスト・救い主に対して示した無私で熱心な奉仕は、主イエスにとって慰めとなり、絶え間ない労苦と度重なる侮辱の中、彼を大いに励ましたのである。

とりわけ注目すべきは、聖マリア・マグダレナが救い主に対して示した並外れた不屈の精神と並外れた勇気であった。　そして、あらゆる障害や恐ろしい危険にもかかわらず、キリストが激しい苦しみを受けた過酷な日々や時間においても、マグダラのマリアは使徒たちよりもさらに勇敢で献身的な姿を見せました。それは、主と共に死ぬと約束していた使徒たちでさえ、主の敵たちへの恐怖に打ち負かされ、「逃げ去った」　（マタイ26:56）して身を隠した――マリア・マグダレナは愛をもって恐怖に打ち勝ち、苦しむ主への揺るぎない献身をもって、主が世界の救いのために歩まれた茨の道を和らげようと努めた。 十字架に架けられた救い主の残酷な苦しみ[5270]は、ユダヤ人の大祭司たちや律法学者や長老たちによる、挑発的で厚かましい嘲笑によってさらに悪化させられた。彼らは、忌まわしい復讐を果たしただけでは満足せず、十字架に架けられたキリストのそばに立ち、無実の受難者に、良心の呵責も感じない大胆不敵な非難を嘲笑混じりに浴びせ、こう言った。

「他人を（死から）救ったくせに、自分だけは救えないのか。もし彼がキリスト、イスラエルの王であるなら、自分を救ってみよ。今すぐ十字架から降りて、私たちが見て、彼を信じるようにせよ」（マタイ27:41–43；マルコ15:31–32；ルカ23:35）……

また、ローマの兵士たちも彼をののしり、近づいてこう言った。

「もしあなたがユダヤ人の王なら、自分を救ってみよ」（ルカ23:36–37）……

また、イエスと共に十字架につけられた強盗たちも、イエスをののしり、悪口を言いながら、そのうちのひとりが言った。

「もしあなたがキリストなら、自分と私たちを救ってみなさい」（マタイ27:44；ルカ23:39）……

また、群衆の中から通り過ぎる者たちは、頭を振って彼をののしり、こう言った。

「おい、神殿を壊して三日で建て直すという者よ。もしあなたが神の子なら、十字架から降りてみよ」（マタイ27:39–40；マルコ15:29–30）……

こうして、群衆の愚かさと野蛮さ、そしてユダヤの長老たちの卑劣な悪意が、十字架にかけられたキリストを取り囲んでいたその時――その殉教者のようなまなざしは、慰めを込めて敬虔な女性たちの涙に気づいていた。その中には、マリア・マグダレナが「真っ先に」いた（マタイ27:55–56；

[5270] 十字架への磔、すなわち十字架刑は、古代からローマ人にとっても、奴隷に課される、最も恥ずべき、最も残酷な刑罰であり、裏切り者、殺人者、そして最大の悪党のみがこれに処せられた。　ユダヤ人にとって、この刑罰は「呪われた」ものと見なされていた（申命記21:22–23；コリントの信徒への手紙一1:23）。ローマの慣習によれば、磔にされた者の罪状は、十字架の上部に固定された小さな板に簡潔に記されていた。　十字架上の死には、意識や感覚を失うことなく受ける拷問や死において、最も恐ろしく、最も苦痛に満ちたあらゆる要素が凝縮されていた。釘に体を吊るされるという不自然な姿勢は、わずかな動きさえも苦痛なものにし、釘の周囲の炎症を起こした傷口は絶えずさらに裂け、壊疽に蝕まれていった。 特に頭部や腹部の動脈は腫れ上がり、血が充満して、恐ろしい熱と耐え難い渇きを引き起こした。 十字架にかけられた者たちの苦しみは極めて大きく恐ろしいものであり、時には数日間も続いたため、ローマ人は通常、殴打や槍で刺すことによって死を早めていた。一方、ユダヤ人については、モーセの律法（申命記21:1–23）に基づき、日没前に十字架にかけられた者の苦しみを終わらせることを許されており、十字架にかけられた者に、スミルナを混ぜたワイン（マルコ15:23）あるいは胆汁（マタイ27:34）を飲ませる習慣があった。これは意識を朦朧とさせ、苦しみを多少和らげるためであったが、 しかし、イエス・キリストは、その苦しみを和らげるような飲み物を受け入れず、飲まなかった。 エルサレムの裕福な女性たちは、十字架にかけられる者の身元を問わず、自費でそのような意識を朦朧とさせる飲み物を届けていた。ローマ帝国において、この憤慨すべき十字架刑を廃止したのはコンスタンティヌス大帝のみであったが、ローマ共和国では子供たちまでもが十字架にかけられていた……

マルコ15:40； ルカ23:27）。この憐れみに満ちた涙の中に、まるで罪の暗い王国の中で、人の子のために一筋の光がきらめいたかのようであり、感謝に満ちた女性たちからのこの一筋の光は、まだ完全に堕落してはいない人間の本性を証しすることで、無実の受難者を慰めたのである。

神人による堕落した人類の偉大な贖いの日は、晴れ渡っていた。時刻はすでに正午近くであり、ユダヤ式の時刻表記によれば、第六時であった（ルカ23:44； マタイ27:45；マルコ15:43）。しかし、この晴れ渡った正午に、「太陽が暗くなり、闇となった[5271] 、第九時、すなわち現代の時刻表記で言えば午後三時まで続いた（マタイ27:45； マルコ15:33；ルカ23:44）。恐ろしく、荘厳で、威圧的な天のしるし――太陽の光が消え、真昼の明るい光の中にあらゆる地上のものを包み込んだ闇――は、無実のキリストを冒涜する者たちを重く圧迫し、彼らを恐怖と沈黙へと追い込んだ。 一方、十字架につけられた方を敬う親しい人々は、最初は遠くに立って見守っていたが（ルカ23:49；マタイ27:55；マルコ15:40）、苦しむ方のそばに近づき、その十字架を取り囲んだ。その中で、福音書記者は再びマリア・マグダレナを第一に挙げている（マタイ27:56； マルコ15:40）。このように、マグダラのマリアは、救い主キリストの足元にいた。彼女は、幼子たちに賛美され、讃えられている奇跡を行う方だけでなく、辱められ、名誉を傷つけられ、恥辱のうちに十字架にかけられ、さらには使徒たちさえも見捨ててしまったナザレのイエスの足元にもいたのだ！...

そして、彼女の癒やし主が亡くなられた後も、マリア・マグダレナは彼から離れませんでした。彼女は、ヨセフ・アリマタヤ[5272] とニコデモ[5273] が、十字架から墓[5274] へと彼の遺体を運ぶのに同行し、彼の埋葬に立ち会い、キリストがどこに葬られたかを見守りました（マタイ27:61； マルコ15:47）そして、神の律法に従い、間もなく訪れる大いなる過越の祭りに敬意を表すため、葬られた御体を後にしたとき、深い悲しみの中にあったマグダラのマリアの燃えるような感謝の愛が、彼女に慰めの源を開いた。 その愛は、ユダヤ人たちに辱められた彼女の救い主に対して、彼女自身も可能な限りの最後の敬意を表したいという願いを彼女に抱かせた。彼女は香油と香料を購入し（ルカ23:56）、

[5271] この暗闇は、太陽と月の動きに関する既知の自然法則に基づく、通常の日食ではなかった。これは超自然的な現象であり、その後続いた自然界の特別な兆候と相まって、贖罪という出来事の極めて偉大な意義を証明していた。 この暗闇の異例さと信憑性は、当時の3人の異教の著述家――ローマの歴史家兼天文学者フレゴン、ユリウス・アフリカヌス、歴史家ファルス、そして歴史家エウセビオスが名指ししていない4人目の異教の歴史家――によって証言されている。 彼らの記録によれば、この暗闇が生じた時刻は、天の星が見えたという使徒たちの記述と完全に一致している。 聖ヨハネス・クロイソストモス、テオフィラクトス、エウフィミオスは、この暗闇は、人々の不義に対する神の怒りのしるしとして、超自然的な力の働きによって、大地と太陽の間に雲が大量に集まったことによって引き起こされたものだと考えている。一日は、夕方6時から翌日の夕方6時までとされていた。 厳密には、昼の光は午前6時からとされていた。午前6時から9時までは一日の第一部とされ、「第三時」と呼ばれた。9時から12時までは一日の第二部で、「第六時」と呼ばれた。正午から午後3時までは一日の第三部で、「第九時」と呼ばれた。 午後3時から6時までは第4の時間帯とされ、これは「第12時」と呼ばれた。夜も同様に4つの番に分けられ、それぞれ3時間ずつであった。

[5272] アリマタヤ、あるいはラマファイマという町のヨセフは、裕福で、気骨があり、非の打ち所のない生活を送る人物であり、エルサレムのサンヘドリンの名誉会員であった。彼は臆病な性格のため、以前はキリストの信奉者であることを公言することをためらっていたが、イエスに対する有罪判決には加担しなかった。 キリストの磔刑に憤りを感じた彼は、殉教者であり、悪意の犠牲者であるキリストに対し、尊厳ある埋葬を行うことで自らの忠誠を表明しようとしたのである。

[5273] ニコデモは著名なパリサイ人であり、シネドリオンの一員であった。彼は、キリストの教えをより詳しく、より自由に知るために、夜間にエルサレムで救い主キリストを訪ね、主は彼に福音の教えの主要な基礎を明らかにされた（ヨハネ3:1–36）。彼は非常に裕福であり、キリストの遺体を埋葬する際、キリストの御体に塗るために、スミルナとアロエを混ぜた香油100ポンドを捧げて、キリストを敬った。その後、使徒たちから洗礼を受けた。

[5274] 当時、「棺」とは、ユダヤ人の墓、すなわち岩だらけの丘に掘られたり彫り出されたりした洞窟を指し、その内部には埋葬される者のための寝台が設けられていた。 彼が自身のために用意していた墓の近くで。ユダヤ人たちは自分たちの墓を畏敬の念をもって扱っていたが、ヨセフは躊躇することなく、その墓を無実の受難者に譲り、過越の安息日が迫っていたため、埋葬を急いで終えようとした。

埋葬されたキリストの遺体に香油を塗ることで、ユダヤの慣習に従い、可能な限りの敬意を捧げようとしたのである。

この行いは、マリア・マグダレナに「香油を携えた女」という称号も与えたが、それは彼女にふさわしいものであった。なぜなら、二人の福音書作家は、彼女に続いて来た他の数人の女性たちの中でも、再び彼女を筆頭に挙げているのに対し、三番目の福音書作家は彼女だけを挙げているからである（マタイ28:1； マルコ16:1；ヨハネ20:1）をこの高貴な行いの主体として挙げている。

そして、悲しみに満ちた安息日の後の週の初日、まだ夜の闇が残る中（ヨハネ20:1）、キリストの弟子たちに手を出そうとすでに企んでいた激昂したユダヤ人たちからの危険にさらされ、十字架にかけられた方の使徒たちが打ちひしがれた心で部屋に閉じこもっていたその時、 ——マグダラのマリアは、数人の敬虔な女性たちと共に、迫り来る危険をものともせず、恐れを知らずに救い主の墓へと向かった。彼女は、キリストの遺体に塗るために用意された香料と香油[5275] （ルカ23:56、マルコ16:1）を携え、眠りにつかれた方に愛と敬意の最後の捧げ物を捧げようとしていた。 ユダヤ人たちがキリストの墓の洞窟に配置した警備兵や、大祭司たちがその入り口を封印したことについて、マリア・マグダレナは知らなかった。というのも、これらすべては、ヨセフ・アリマタヤの園からイエスを崇める者たちが全員立ち去った後（マタイ27:62–66）に起こったことだったからである。 しかし今、エルサレムからキリストの墓の洞窟へ向かう道中、マグダラのマリアは、その洞窟の入り口がヨセフとニコデモによって、彼女も同行者たちも入り口からどかすことのできないほど大きく重い石で塞がれていたことを思い出した。そして、この障害に戸惑いながら、香油を携えた女性たちは互いにこう語り合った。

「誰が私たちのために、墓の入り口の石をどけてくれるのだろう……」（マルコ16:3）

これを考えながら、マリア・マグダレナは他の香油を携えた女性たちより先回りして墓の洞窟に近づき、見渡すと、突然、彼女を悩ませていた石がすでに洞窟の入り口からどかされているのを見た……（ヨハネ20:1；マルコ16:4）。

当時のユダヤ人にとって、死者の墓への入り口を塞いでいた石は、いわば聖別されたものとして、不可侵とみなされていた。そして、キリストの墓の入り口から石が取り除かれていたことは、そこに葬られていた遺体に何か特別なことが起こったことを示していた。 具体的には何だったのか？ ——最も単純で、まず最初に浮かんだ考えは、イエスの遺体がヨセフ・アリマタヤのこの洞窟から誰かによって持ち出され、別の場所に安置されたのではないか、というものでした。 そして、イエスに最後の敬意を捧げる機会を失ってしまうというこの考えは、マグダラのマリアを深く動揺させ、彼女は洞窟に入ることもなく、直ちにエルサレムへと駆け戻り、キリストの墓で起きた出来事を使徒ペ

[5275] ミルラ、すなわちスミルナとは、アラビア、エジプト、アビシニアに自生するバルサム樹から採れる芳香のある樹脂である。 この樹脂は、一部は木から自然に滲み出るもので、一部は樹皮に切り込みを入れて採取されたものでした。油分が多く、凝固すると白みがかった黄色を帯び、固まると赤みを帯びます。この樹脂の味は鋭い苦味があり、香りは特に芳醇で、頭がくらくらして意識を失うほどでした。 ミルラ、すなわちこの樹脂は、あらゆる腐敗に耐える性質から、ユダヤ人やエジプト人によって、死者の遺体の塗布や防腐処理に用いられていた（ヨハネ19:39）。旧約聖書において、聖なる塗油のための香油は、ミルラと油から調合されていた（出エジプト記30:23–25）。このミロによって、神の御命により、まず契約の幕屋が、次に神への聖なる奉仕のためにアロンとその子らが油注ぎを受け、その後、王や預言者たちもミロによる油注ぎを受けた。ミロによる油注ぎは、対象を聖別し、油注ぎを受ける者に神の御霊の賜物と力を授ける、外的な、目に見えるしるしである。 また、正教会のキリスト教会においても、使徒たちの時代から「聖油の秘跡」が存在しており、この秘跡を通じて、信者の頭、額、目、耳、唇、手、足に聖別された聖油を塗る際、聖霊の御名によって、霊的生活において再生させ、強める聖霊の賜物が授けられるのである。 聖油は、キリスト教の聖堂や、偉大なる王としての務めへの戴冠式における王たちにも塗られる……– ミルラに加え、ユダヤ人は死者の埋葬の際、香りのよい粉末も用いており、それをもって死装束や、遺体が安置される寝台そのものに振りかけた。このような粉末状の香料は、ミルラ以外にも、キリストの棺のために、また香油を携えた女性たちによっても用意されていた。

トロとヨハネに知らせようとした。　彼女は、自分から知らせを受けた使徒たちが、イエスの遺体の捜索に最も積極的に加わってくれると確信していた。

「主が墓から運び去られ、どこに置かれたのか分かりません」と、彼女は使徒たちに告げた（ヨハネ20:2）。

そして実際、最も熱心な使徒であるペトロとヨハネは、直ちに墓へと向かった[5276]。二人は共に走ったが、ヨハネはペトロよりも速く走り、先に墓に到着した。身をかがめて見ると、　布が置かれているのを見たが、墓の洞窟の中までは入らなかった。　その後、シモン・ペトロがやって来て、墓の中に入ると、布が置かれているのを見、また、イエスの頭に巻かれていた布が、他の布とは別に別の場所に置かれており、すべてが整然と折り畳まれているのを見た。そこでヨハネも中に入り、それを見て、黙って、キリストが復活されたことを信じた。　というのも、もし誰かがイエスの遺体を別の場所に移したのなら、遺体を露わにすることなくそうしたはずであり、また、もし誰かが遺体を盗んだのなら、布を取り外して巻き直し、別の場所に置くような手間はかけず、そのままの状態で遺体を持ち去ったはずだからである；　さらに、ニコデモがキリストの埋葬の際に用いた没薬とアロエは、布を体に非常にしっかりと貼り付けている――と聖ヨハネ・クロソストモスは説明している（ヨハネ20:3–9）：――しかし、使徒たちは、師の空になった墓から、皆同じ心境で立ち去ったわけではなかった。ペトロは、信仰の代わりに、ただ驚きをもって「引き返し、自分の中で起こったことに驚いていた」（ルカ24:12）……

そのような、まだ混乱し、弱々しい心持ちのまま、使徒たちがキリストの空になった墓を後にしたとき、マグダラのマリアが再びそこへ戻ってきた。　墓の洞窟に着くと、彼女は泣き出し、慰めようのない悲しみに暮れながら、洞窟の低い入り口に身を屈め（ヨハネ20:11）、救い主が葬られた場所をもう一度覗き込もうとした。 するとそこには、白い衣をまとった二人の天使[5277]が、イエスの

[5276] 西暦70年に、当時ローマ皇帝に即位したティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌスによるエルサレム包囲戦の記述において、ヨセフ・アリマタヤの墓が言及されており、それは一般的なユダヤ人の単一の洞窟式墓と同じ様式で造られていた。 これは、キリストが埋葬された墓が、低い丘の内部にある天然の岩盤に、入口と実際の埋葬室という2つの部屋または部分に分かれて彫り出されていたことを、別の側面からも裏付けている。　洞窟の入り口は、慣例通り東向きに設けられ、大きな石で塞がれていた。洞窟の第二部分にある埋葬場所は、入り口の右側に、寝台、あるいは壁に接した台、あるいは横たわるための場所として切り出されていた。　納骨堂の高さは人の身長よりわずかに高く、入り口の高さは人の身長の約3分の1であった。ヨセフの墓からゴルゴタまでの距離は約17サジェーン（または120フィート）であった……2世紀半ば頃、ローマ皇帝ハドリアヌスはユダヤ人をギリシャ化しようと決意し、エルサレムの起伏や丘をすべて埋め立てるよう命じた。その後、キリスト教の聖地の跡地には、ユピテルとヴェーナスのための異教の神殿が建てられた。　しかし、333年、コンスタンティヌス大帝の命により、これらの神殿は取り壊され、盛土は撤去され、そのとき、キリストの聖墳墓のある洞窟が、その神聖さを保ったまま発見された。　このキリスト教の聖地を、壮麗で豪華な教会が取り囲むようになったが、聖墳墓の洞窟の外観は変更された。教会内に収めやすくするため、墓室そのものが岩盤から切り離され、入口（玄関）部分のみが残され、洞窟の埋葬部分のみが保存されることとなった…… その後、7世紀以降、ペルシャ人、ユダヤ人、アラブ人、トルコ人がギリシャ人を打ち負かすたびに、神人（キリスト）の埋葬の床を地上から消し去るためにあらゆる手段を講じた。洞窟の壁の大部分と天井は破壊されたものの、　しかし、その寝台そのものと洞窟の壁の下部は、救い主キリストがそこに滞在されたことで聖別された、真に疑いようのない記念碑として、今日に至るまで揺るぎなく残っている。　そして、罪深いこの世が終わりを迎えるその日まで、この聖別された石の寝台は信者たちを惹きつけ、彼らに慰めと安らぎを与え、そこにひれ伏す者たちを和解した魂をもって送り出していくことでしょう……

[5277] 「天使」という言葉は、「使者」「伝令」を意味し、聖書では多種多様な意味で用いられています。 しかし、厳密な意味において、聖書における「天使」という言葉は、人間よりもはるかに完全で、神によって創造された個人的かつ霊的な存在を指し、人々に神の御心を告げ、地上で神の御命令を遂行するものである。　天使たちは、目に見える世界が創造される以前に神によって創造されたものであり、霊的な存在です。無形ではないにせよ、ある種の特に軽やかでエーテル的な体を持っています。天使たちにとって、人間的な空間的制約は存在しませんが、彼らは遍在するわけではありません。彼らの完全性には限界があり、その理解の速さと深さにもかかわらず、全知ではありません。　その清らかさと聖さにもかかわらず、天使たちは誘惑にさらされることがある。なぜなら、彼らは自由な存在として創造されたからであり、そ

遺体が横たわっていた場所の頭と足元にそれぞれ座っているのが見えた。そして彼らは彼女に言った。

「女よ、なぜ泣いているのですか？」

マリアは彼らに答えた。

「私の主が連れ去られてしまい、どこに置かれたのか分かりません！」

マリアの悲しみはあまりにも大きかったため、彼女に話しかけているのが人間ではなく、キリストの悲しみに満ちた埋葬の場で、その明るく荘厳で祝祭的な姿によって彼女の悲しみを和らげようと人間の姿をとった天使たちであることに気づかず、彼女は、キリストの遺体が墓から消えたことについて使徒たちに語ったのと同じ言葉で彼らに答えた。 そして天使たちは、その荘厳で輝かしい御姿によって、マグダラのマリアをキリストの驚くべき復活の知らせを受け入れる準備を整えていたが、 しかし、他の香油を携えた女性たちとは異なり、彼女がこれほど熱心に探し求めている方が栄光のうちに復活されたことを彼女には告げなかった。それは、主がマリア・マグダレナ自身を、キリストの復活の直接の伝達者の一人に数えることを望まれたからである。

そして、マリア・マグダレナが天使たちへの返答の中で、泣いている理由を語ったまさにその時、救い主キリストが突然マリアの背後に現れたため、天使たちはキリストに対して特に敬意を表する姿勢をとった。 一方、マグダラのマリアは天使たちの様子の変化に気づき、振り返ると、「イエスが立っておられるのを見たが、それがイエスであるとは分からなかった」（ヨハネ20:14）。 ——悲しみに満ちた思いの重さと、溢れる涙が、彼女の背後に立っておられる方をはっきりと見分けるのを妨げていた。そう、明らかに、救い主キリストご自身も、彼女がすぐにご自身を認識することを望まれていなかったのだ。まるでエマオへの旅人たちに突然ご自身を現されたように（ルカ24:13–32）、 こうして、マリア・マグダレナは、聖墳墓の洞窟があったヨセフ・アリマタヤの庭の園丁だと彼を勘違いしてしまった（ヨハネ20:15）。

マリア・マグダレナに正体を見破られなかったキリストは、彼女にこう言われました。

「女よ、なぜ泣いているのか。誰を探しているのか。」

この言葉に、自分の悲しみへの思いやりのある気遣いを感じ取ったマリアは、信頼を込めてこう頼んだ。

「主よ、もしあなたが彼を運び出されたのなら、どこに置かれたのか教えてください。私がお連れします」（ヨハネ20:15）。

マリア・マグダレナは、この簡潔で素朴な言葉の中に、どれほど多くの自己犠牲的な愛と、最も深い献身を表したことでしょう！彼女は、イエス・キリストを園丁だと勘違いしたその人に、彼の名前を呼ぶことなく、ただ「あの方」とだけ言いました…… 彼女自身、師をこれほどまでに崇敬していたため、他の人々も主を知り、主に関心を持つべきだと考えていたのです。彼女は、その庭の園丁なら、ヨセフの墓から遺体が消えたという秘密を知っているはずだと考え、その園丁に、イエスの遺体がどこへ運ばれたのか教えてくれるよう懇願したのです。 この庭の管理を任されていた彼に知

れゆえに、光の天使として善にしっかりと立ち続けることもできれば、邪悪な霊としての天使として堕落することもできたのである。天使たちは神の御前に立ち、絶えず神を賛美し、神の御心を行い、至福を享受している。 天使の数は計り知れず、その間には様々な位階と完全さの段階がある……人類と神の民の全歴史は、天使たちの奉仕のもとで成し遂げられており、彼らは旧約と新約の歴史における重要な瞬間に現れ、イエス・キリストとその教会に仕えている。そのために、天使たちは人間にとって目に見える、親しみやすい姿をとる。 そのため、福音書記者マルコとルカは、香油を携えた女性たちへの天使の出現を語る際、彼女たちがその姿を目撃した時の姿や現れ方に基づき、天使たちを「男たち」（ルカ24:4）や「若者」（マルコ16:5）と呼んでいる。 正教会において、天使たちは神に近き僕であり、神の御心を遂行する者として崇められている。

られずに、遺体の持ち去りが行われることはあり得なかった。また、もし庭の所有者であるヨセフ自身が遺体を別の場所に移したとしても、それは庭師の知らぬ間には行われ得なかったはずだ。そこで、マグダラのマリアはこの庭師に、キリストの遺体の在りかを教えてもらい、それを持ち帰りたいと頼む。

「私がお連れします」と彼女は言います。

主への計り知れない愛ゆえに、マリアは自分の力の弱さをすっかり忘れ、救い主の遺体を自分一人で運び出せるだろうと期待している。彼女の熱意と愛はあまりにも大きく、燃え盛っているため、彼女は自分を過度に強い存在だと錯覚しているのだ。　そして、その切実な問いかけにすぐには答えが得られなかったため、マグダラのマリアは、非常に心配している人によくあるように、再び天使たちの方へと向き直った。おそらく、彼らからイエスについて何かを聞きたいと願っていたか、あるいは、天使たちが特に敬虔な姿勢をとっている理由を知りたかったのだろう。　主は、彼女の愛の高さと力に心を動かされ、マリアにはすでに馴染み深い恵み深い声で、彼女の名前を呼んだ。

「マリア！」（ヨハネ20:16）

今、マグダラのマリアは、生涯忘れられない救い主の声を聞いた。その力によって、主は彼女の中から悪霊の群れを追い払われた――あらゆる魂に浸透し、命を吹き込むあの天の御声――聞き手の魂を天の至福で満たす、あの驚くべき御声である。　そしてマリアは今、神聖なる師の身近な臨在を感じた。その御身に、彼女のすべての恵み、すべての幸福が宿っており、言い表せない喜びがマリアの魂全体を満たした。　幸福の極みで言葉を失った彼女は、再び主の方を向き、清らかな眼差しで主を認めるや、歓喜のあまりただ一言、「先生！」（ヨハネ20:16）と叫び、救い主キリストの足元に駆け寄った……

喜びと感嘆に満ちたマリア・マグダレナは、まだ復活されたキリストの偉大さをすべて想像し、理解することはできなかった。そこで主は、彼女の思いを開き、復活によって御自身の肉体さえも変容したことを教えるために、優しくこう言われた。

「わたしに触れてはならない。[5278]（ヨハネ20:17）。わたしはまだわたしの父のもとには上っていないからである。」

マリア・マグダレナは、自分自身と救い主であり師である方の人性に対して熱烈な崇敬の念を表したが、　一方、キリストは、彼女に触れることを禁じることで、彼女の思いを高め、聖別し、より敬虔な接し方を教え、マリア・マグダレナに、彼との最も親密な霊的交わりの時は、彼が弟子たちの肉眼から完全に姿を隠し、天に昇って御父なる神のもとへ帰られる時に訪れるのだと悟らせた。また、キリストの他の弟子たちも、キリストの復活の知らせを聞いた際、今やキリストが永遠に地上で彼らと共にあり、おそらくは偉大なユダヤの地上王国という民衆の夢を実現させるだろうと考えたかもしれない。そこで、救い主キリストは、マリア・マグダレナを遣わし、そのような考えや　な夢

[5278] その日、マグダラのマリアへの最初の出現から間もなく、救い主キリストは、彼女、すなわちマグダラのマリアが他の香油を携えた女性たちと共に、救い主キリストの足にすがりつくことを禁じなかった（マタイ28:9; ルカ24:10）；また、その日の夕方、キリストは弟子たちに御自身を触れてみるよう勧め、御自身の手と足の傷跡を見せられた（ルカ24:39）。　これらの状況から、教会の教父たちや聖書注解者たちは、マリアへの最初の御出現の際に触れられることを禁じられたのは、彼女が主のもとへ駆け寄った当時の、彼女の純真な思いに起因していたと結論づけている。　他の弟子たちと同様、彼女もまた、救い主キリストの復活を予期しておらず、理解もしていなかったが、突然、目の前に生けるキリストを目にしたのである。　死んだはずの人が生きているというこの顕現に際し、彼女の心にはどれほどの混乱と動揺が生じたことか――そして彼女は、自分の目に見えていることを触れて確かめ、これほど熱烈に探し求めていたキリストを留めようと、キリストのもとへ駆け寄ったのである……　キリストは、そのときマグダラのマリアの心と魂の中で何が起こっているかを悟り、彼女の真摯ではあるが不適切な思いをやさしく静め、一方で「目の前にいるのが本当にキリストなのか」という彼女の正当な確認の願いには、言葉でそれを保証し、使徒たちに復活を告げ知らせるよう命じることで応えた……

想から彼らを戒めさせるのである。　復活されたキリストを彼女自身の明確な目撃とキリストご自身の言葉によって使徒たちに証明した後、彼女は主によって遣わされ、キリストがもはや長くこの地上に留まることはなく、最も栄光に満ちた御体をもってまもなく父なる神のもとへ昇られることを彼らに告げ知らせるよう命じられた。　しかし、この離別に関する知らせが彼らを動揺や悲しみに陥らせないよう、主はマグダラのマリアに、御自身が昇って行かれる御父こそが、彼らにとっても御父であることを弟子たちに伝えるよう命じ、その際、彼らを慈しみを込めて「私の兄弟たち」と呼びかけられました。

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへ上って行く』と……[5279]（ヨハネ20:17）

そう言うと、キリストは姿を消した。そして、喜びと幸福に満ちたマグダラのマリアは、自分に起こったことをすべて（ヨハネ20:18）、キリストの使徒たちに伝えに行き、歓喜のうちに、素晴らしい言葉で彼らの悲しみを慰めた：

「キリストはよみがえられました！」

だからこそ、主ご自身から遣わされた、キリストの復活が成し遂げられたことを告げる最初の伝道者として、マグダラのマリアはキリスト教会によって「使徒に等しい」と認められているのである。

ここに、キリストの教会におけるマグダラのマリアの驚くべき奉仕の、最も輝かしい特徴がある。　キリストの復活の朝、彼女は、主の弟子たちの中で誰よりも先に復活された主を拝する栄誉に浴し[5280]　（マルコ16:9；ヨハネ20:14–17）、また主の直接の命により、彼らに対する復活の知らせを伝える使者、宣教者となったのです。　使徒たちはキリストの復活を全世界に宣べ伝えましたが、マリア・マグダレナはキリストの復活を、使徒たち自身に宣べ伝えたのです――彼女は使徒たちのための使徒であったのです！…教会の聖なる教父たちは、この出来事の中に、神の摂理の特別な神秘と深遠な知恵を見出しています。

――「女よ」と聖グレゴリオス・テオロゴスは教えている。「女は蛇の口から最初の嘘を受け入れたが、その女こそが、復活された主ご自身の口から、喜びに満ちた真理を最初に聞いたのである。死の飲み物を溶かしたその御手こそが、命の杯をも差し出したのである……」

死に打ち勝ち、勝利を収めた復活のキリストを仰ぎ見ることで聖別された、情熱的なマリア・マグダレナは、言葉なくしてさえ、キリストの復活の完全かつ断固たる証人であった。　しかし、イエス・キリストの復活に関する彼女の恵み深い知らせを、使徒たちや、神学者ヨハネの家に共にいた者たち[5281]は信じなかった。彼らは「悲しみ、泣き、キリストが生きていること、そして彼女がキリ

[5279] 復活された方のこうした言葉から、弟子たちは、イエス・キリストの御国がこの世のものではないこと、それを地上の王国とは区別すべきであり、復活されたキリストを地上の王ではなく、天の王として見なければならないことを理解すべきであった。　しかし、使徒たちは、この説明や主の警告を受けた後もなお、民衆的な空しい希望を捨てきれず、昇天の前でさえ、主に向かって「主よ、今こそ、イスラエルの王国を再建なさるのですか」（使徒言行録1:6）と尋ねたのである。

[5280] 聖福音書記者たちは、復活された方が聖母マリアに現れたことについては言及していませんが、教会はその伝承の中に、キリストの復活について、香油を携えた女性たちよりも先に天使によって聖母マリアに告げられ、また、墓からよみがえられたキリストが、すべての人々よりも先に聖母マリアに現れたという信仰を保持しています。　この教会の信仰は、復活祭の礼拝賛美歌に表れている。

[5281] エルサレムでは、使徒ヨハネ（神学者）がシオン山に自宅を構えていた。そこには他のすべての使徒たちも滞在していた。そして、救い主の昇天後、そこは新たなキリスト教生活の中心地となった。すべてのキリスト教徒は、自らの疑問を解き明かすために、この新しいシオンへと向かった……

ストを見たという話を聞いても、信じなかった」（マルコ16:10–11；ヨハネ20:18）。――なぜだろうか……

マリア・マグダレナは、使徒たちから疑いようのない完全な信頼を寄せられていた。さらに、他の香油を携えた女性たちの中でも、彼女たちは主の墓で天使たちから告げられた、師の復活の知らせをキリストの弟子たちに伝えた者たちであった（ルカ24:9–11, 4–8; マタイ28:5–7; マルコ16:1–20）――には、使徒ヨハネ（神学者）の母、使徒ヤコブの母、ラザロの姉妹マルタとマリア、そして他の敬虔な女性たちが含まれており、彼女たちも皆、使徒たちから完全な信頼を寄せられていた。しかし、使徒たちは「彼女たちの話を夢物語だと見なし、信じようとしなかった」 （ルカ24:9–11；マルコ16:11； マタイ28:17）――当時、キリストの弟子たちという小さな共同体の落胆は、それほどまでに大きかった。ユダヤ人の大祭司たちが彼らの師であるイエスを捕らえて十字架につけ、使徒たちが散り散りになって身を隠した後、彼らは突然、すべてのもの、すなわち個人的な希望も民としての希望もすべて失ってしまった。 彼らの中で、イエス・メシアへの信仰、その力と栄光への信仰が曇ってしまった。信仰を失うとともに、精神の勇気をも失った。また、主イエスという師に対する義務を果たせなかったという自覚も彼らを苦しめた。彼らは臆病にも、主を敵の手に一人残して逃げ去ってしまったのである（マタイ28:56； マルコ14:50）。そして、自分自身にも外部にも何の支えも持たない彼らは、「ユダヤ人たちを恐れて」（ヨハネ20:19） 、もはや自分自身の安全を守ることを第一に考えるようになっていた。 キリストの死までは、彼らは皆、「自分たちの師であるキリストこそが、イスラエルを救い出すメシアであり」（ルカ24:21）、栄光に満ちたイスラエルの地上の王国を打ち立てるだろうと「期待」していたが、十字架上のその恥ずべき死は、彼らのこうした希望や夢を完全に打ち砕いてしまった。 当時の人々の目には、十字架刑は最も恐ろしく、恥ずべき死に方であり、モーセの律法によれば恐ろしい「呪い」のしるしであった（申命記21:23； Iコリント1:23）であり、イエスの十字架刑の後、弟子たちの心には、イエスを「神とすべての民の前で、行いと言において力強い方……」（ （ルカ24:19）――深く打ちひしがれたキリストの弟子たちの意識には、真のメシア、キリスト、神の御子が、人間として、しかもイエスが実際に十字架上で死んだような形で死ぬなどという考えは、到底受け入れられなかった。彼らは、イエスがヤイロの娘（マルコ5:41）、ナインの未亡人の息子（ルカ5:11–17）、そしてラザロ（ヨハネ11:44）を奇跡的によみがえらせたのを見ていたにもかかわらず、 ――しかし、イエスご自身が他の預言者たちと同様に死なれたのであれば、イエスもまた、最後の日にすべての人々と共に復活されるに過ぎない。それ以前に、奇跡を行う預言者たちが自ら復活した例は、かつて一度もなかった……– キリストの墓を見たペトロとヨハネは、それが空だったということ以外、何も報告できなかった。天使や復活された方の御姿について報告したのは、女性たちだけだった……もどかしく、深く重い状況…… そこで、より情熱的な使徒ペトロは、再び聖なる墓へと向かった。自分でもなぜそこへ向かうのか分からず、キリストが葬られた場所が空っぽであることはすでに自分の目で見ていたにもかかわらず、その理由も分からずに。しかし、彼はすぐに戻ってきて、喜びに満ちて弟子たちに告げた。

「まことに、キリストは復活された！……私自身が彼を見たのだ。道中で、彼は私にも現れたのだ」（ルカ24:33–34；Iコリント15:5）。

これで、キリストの復活という真理を確信させるには、復活された方の目撃者が十分であるように思われ、多くの弟子たちは喜びをもって信じたが、それでもなお、全員が信じたわけではなかった[5282] 。しかし、マグダラのマリアや他の香油を携えた女性たちは、幸福に満ち溢れ、イエス・キリ

[5282] 復活されたキリストがエマオに現れたこと――これはさらに二人の弟子によっても証言されていたにもかかわらず――多くの者は「信じなかった」 。しかし、その同じ晩、弟子たちが集まっていた使徒ヨハネの家において、扉が閉ざされていたにもかかわらず、キリストが現れ、復活した御自身を見たにもかかわらず信じなかったという彼らの不信仰と冷酷さを責められたのである（マルコ16:13–14）。 この事実は、主の復活に関する記述において、まさにその復活の真実

ストの狂信的な敵たちからのあらゆる危険をものともせず、一か所にじっと留まることはできず、家から家へと、キリストの弟子たちのもとから別の弟子たちのもとへと、清らかさと素朴さ、　深みと、自らの癒し手であり師であるキリストへの揺るぎない愛をもって、家から家へと、ある弟子たちから別の弟子たちへと移りながら、数え切れないほど熱狂的に、この喜びに満ちた福音を繰り返し告げました：

「キリストは復活された！まことに復活された！...」

そして、あらゆる穀物の種の中で最も小さな種から、キリストの教会という巨大な木が、恵み深く、急速に成長していったのです[5283]　。キリスト・救い主に心から献身したごく少数の弟子たち――その中でも最も熱心だったのは、聖なる使徒同等の香油を携えたマリア・マグダレナであった――は、　高慢な異教の虚妄に打ち勝ち、王たちを擁する王国全体を支配し、キリストの神聖な教えを地の果てから果てへと――全宇宙へと（使徒言行録1:8）広め、聖マリア・マグダレナによる最初の福音宣教の荘厳な言葉を繰り返しました：

「キリストは復活された！　まことに復活された！...」

ほら、キリスト教徒の皆さん、これこそが、聖なる使徒同等の香油を携えたマリア・マグダレナの生涯における最も重要な特徴であり、聖なる福音書における神の御言葉そのものが証ししている以上、いかなる疑いも許されないものである。――では、なぜそれらは保存され、教会によって提示され、なぜ読まれるのか？――聖マリア・マグダレナを称えるためではないのか？　――いいえ、違います！天の栄光、すなわち神の高き永遠の栄光の中に生きる聖人たちは、地上の栄光や、人間からの取るに足らない栄光を必要とはしません。しかし、彼らの地上の生涯、功績、そして美徳をこのように思い起こすことによって、私たち自身に、神に喜ばれる生活と、魂を救うための功績へと向かうための教訓と励みが与えられるのです。　キリストの聖使徒パウロを通して、主は私たちにこう命じておられます：

「あなたがたに神の御言葉を宣べ伝えた指導者たちを思い起こしなさい。そして、彼らの生涯の終わりに目を向け、彼らの信仰に倣いなさい」（ヘブライ人への手紙13:7）。

性を示す反駁できない証拠として、極めて重要な意味を持つ。　使徒たちがこの真理について誤っていなかったこと、欺かれることがなかったこと、そしてこれが彼らの夢でも、熱狂の産物でも、混乱した想像の産物でもないことが明らかである。使徒たちは信じておらず、この不信仰を克服するために、復活された御方ご自身からの叱責と、御自身に触れさせ、共に食事をさせてくださる許可が必要であった。　そしてその後、使徒たちが信じ、彼らの師であり主である方の真の復活を宣べ伝えたのであれば、その復活は疑いようのない真実であり、もはや誰も弟子たちを軽信だと非難することはできない……

[5283] 救い主キリストはこう言われた。「天の御国（神の御国）は、蒔かれたからしの種のようなものである。それはすべての種の中で最も小さいが、育つと木となり、鳥たちが飛んできて、その枝の陰に身を隠すようになる……」（マタイ13:31–32；マルコ4:31；　ルカ13:19）。ここでキリストが語られたのは、普通の、草本性の、あるいは私たちの一年草（シナピス）のからし種ではなく、パレスチナに豊富に自生する、植物学上「フィトラッカ・ドデカンドラ」と呼ばれる、東洋特有の多年草のからし種についてであり、　その種子は極めて小さく、化学成分は一年生のからしと同じであり、普通の草本性のからしと同様に様々な用途に用いられる。北米では、この木本性の多年生からしであるフィトラッカは「森のからし」と呼ばれている……　ユダヤ人は、何かごく小さなものを指す際、それが「からしの種ほどの大きさ」だと表現した。　前述の簡潔なたとえ話を通して、主は福音の宣教が広まっていく様子を示された。主の弟子たちは、誰よりも無力で、誰よりも卑しい者たちであったが、彼らの中に秘められた力が大きかったため、彼らの宣教は全宇宙へと広まった。　そして、キリストの教会も、初めは小さく、世には目立たなかったが、地上に広がり、多くの民が、まるでからし木の枝に止まる鳥のように、その木陰に身を寄せている。　神の御国もまた、人の魂において同様である。初めはかろうじてしか感じられない神の恵みの息吹が、人の勤勉さによって、ますますその魂を包み込み、やがてその魂は神の宮となり、様々な美徳の宝庫となるのである……

そして、キリストの聖なる教会は、私たちがこれらの神の聖人たちの信仰と精神に倣うことによって、自己省察、自己研鑽、そして救いを得られるよう、聖人たちの生涯の概略を保存し、私たちの注意に委ねておられます。それは、私たちが怠けることなく、信仰と忍耐をもって神の約束を受け継ぐ者たちに倣うためです……（ヘブライ人への手紙6:12）――聖なる使徒同等の香油を携えたマリア・マグダレナは、救い主キリストの第一かつ最も重要な戒めを献身的に果たしました。「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛すること」（マルコによる福音書12:30–33； マタイ22:37–40）。聖マリア・マグダレナが、いかなる状況においても主に対するこのような真に全き愛を実践したことは、私たち一人ひとりのキリスト教徒が、救い主なる神に対して抱くべき愛の生き様となっています。　そして、聖マリア・マグダレナの模範に倣い、私たちキリスト教徒は皆、神に対する献身的な愛を持ち、それを示さなければなりません。心を尽くし、願いと志と魂の力を尽くし、知性を尽くし、認識能力のすべてを尽くして、私たちの救い主である主に全身全霊で寄り添わなければなりません。　神に対する私たちの愛の力は、いかなる者も、いかなるものも、私たちをこの愛から引き離すことができないほど強くなければなりません。*「いのちも、死も、高きものも、深いものも、いかなる被造物も、御使いたちも、支配者たちも、力ある者たちも、現在も、未来も」*（ローマ8:38–39）。

聖なる福音書記者たちが記述した、復活されたキリスト・救い主の御出現、およびそれによって引き起こされた聖マリア・マグダレナによる復活に関する熱烈な説教以来、現存する新約聖書の書物には、使徒に等しい聖マリア・マグダレナの活動に関する詳細な記述はこれ以上見られず、彼女のその後の生涯に関する情報は、現在では伝承の題材となっている[5284]。一方、彼女のその後の生涯に関するいくつかの地方のキリスト教教会の伝承は、その起源となった地域によって大きく異なっている。しかし本質的には、これらの伝承はいずれも、聖マリア・マグダレナの熱心な「使徒に等しい」活動について伝えている。　そして、これらの伝承の相違は、各教会が「使徒に等しい聖マリア・マグダレナ」という名の下に、福音書に登場する聖なる女性たちのうち、具体的に誰、あるいはどの女性たちを指しているかによって生じているのである。　西方のいくつかのキリスト教教会や、教父たち、そして神学の学者たちは、福音書に登場する三人の女性――ファリサイ派のシモンの家で悔い改め、救い主キリストの足に涙を流し、自分の髪で拭い、高価な香油を注いだ罪人（ルカ7:37–38； マルコ14:1–72； マタイ26:1–75）――さらに、ラザロの妹であるベタニアのマリア（ルカ10:39； ヨハネ11:28）、――さらに、救い主キリストによって七つの悪霊[5285]から解放されたマグダラのマリア（

[5284] 「伝承」という言葉は、先祖から子孫へと口頭で伝えられてきた物語、叙述、出来事への記憶を意味する。また、ある世代から次の世代へと伝えられる教訓、訓戒、生活上の規則――すなわち、古代の声、古の伝承――をも指す。――律法学者やパリサイ人たちはイエスにこう言った。　*「なぜ、あなたの弟子たちは、先人たちの伝承に背くのですか？」*（マタイ15:2）。――*「ですから、兄弟たちよ、あなたがたが、私たちの言葉や手紙によって教えられた伝承に堅く立ち、それを守り続けなさい」*と、使徒パウロは教えている（テサロニケの信徒への手紙第二2:15）。そして、モスクワの聖フィラレートは、聖書と同様に伝承を活用できるのは、使徒たちの直接の弟子たちのように、私たちの目の前に直接的な使徒の真の伝承がある場合に限られる、と説いている……しかし、キリスト教の伝承もすでに多くの国、民族、言語、そして多くの世紀を経てきた。　当初の使徒的伝承に、古さの程度が異なる教父たちの伝承が加わり、矛盾が生じるほどの多様性が生じてしまった。したがって、伝承を源泉として活用するためには、その真正性と価値を検証し、誤った改変や異質な混入を取り除く必要がある……　そして、正教会は、伝承を独立したものではなく、キリスト教の教義における補助的な資料として認めている。

[5285] 一部の教父や学者たちは、聖なる福音書記者たちが、前述の三人の女性に関するすべての記述において、実際にはただ一人の人物を指していると見なし、そう教えている。その人物は、若い頃に恐らく放蕩にふけり、その堕落した生活のために七つの悪霊に取りつかれていたという。　キリストの奇跡を耳にした彼女は、ファリサイ派のシモンの家へキリストのもとを訪れます。自分の罪に対する深い悔い改めの心により、彼女は救い主から赦しを授かり、その結果、彼女を苦

ヨハネ11:1–57、12:1–50、19:1–42、20:1–31；マルコ16:3；マタイ27:7）。しかし、東方ギリシャ・ロシア正教会は現在も、かつてと同様に、福音書に様々な特徴をもって言及されているこれら三つの御姿を、それぞれ異なる、独自の御方として認めており、歴史的記録を恣意的で、あくまで推論に過ぎない解釈に基づいて確立することを望んでいない。　このため、東方ギリシャ・ロシア正教会の伝承によれば、復活されたキリストの福音書に記された御出現の後、その昇天の前およびその後も、　聖なる使徒同等のマリア・マグダレナは、至聖なる神の母と使徒たちと共に過ごし、まずエルサレムにおいて、キリスト教信仰の普及における初期の成功に積極的に貢献した。　しかし、熱意と燃えるような信仰、そして神の福音を伝えることへの熱心な愛に満ちた彼女は、その後、他の国々でも説教を行い、至る所で、世界の救い主である復活されたキリストを信じるすべての人々に、天の恵み、喜び、そして救いを宣べ伝えました。

とりわけイタリアを訪れた際[5286]、聖使徒同等のマリア・マグダレナは、当時在位していたティベリウス1世皇帝[5287]　に謁見する機会を得て、東方の慣習に従い、赤く染められた卵を献上し、次のように述べた。

「キリストは復活された！」

初めて彼の前に現れた聖マリア・マグダレナの献げ物が質素であったことに、皇帝は驚かなかった。なぜなら、彼は、　東洋全般、またユダヤ人においても、初めて高官のもとを訪れた際、あるいは祝賀の席で知人や後援者に会う際、敬意の印として、何らかの既知の、あるいは特別な、象徴的な意味を持つ贈り物を捧げるという古くからの慣習を彼は知っていたからである。　その例は、ユダ

しめていた七つの悪霊から解放されました。　その後、彼女は親族であるラザロやマルタと共にガリラヤを離れ、イエスが頻繁に彼らの家を訪れてくださったベタニアを住処として選ぶことができた。このような見解を唱えていたのは、例えば、アレクサンドリアのクレメンス、聖アウグスティヌス、聖グレゴリウス大司教などである。　これまでは、西ローマ・カトリック教会も同様の見解をとっていた。しかし、近代の西洋の学者や著述家の大部分は、すでにマグダラのマリアと、ラザロの姉妹であるマリアとを区別している。　彼らは、マグダラのマリアはイエスの生涯の最後の数年間、イエスから離れず、イエスが最後のユダヤの過越の祭りのためにエルサレムへ来られた際、ガリラヤからエルサレムまでイエスに従ったのに対し、ラザロの姉である　マリアは、その間、兄とマルタと共にベタニアに残っていた。なぜなら、当時イエスに従い、イエスと共にエルサレムに到着した女性たちを列挙する際、どの福音書記者も彼女の名前を言及していないからである。　実際、この二人の敬虔な女性は、聖書において全く異なる特徴を帯びて描かれている。一人は常にマグダラのマリアと呼ばれ、ガリラヤからキリストに従った女性たちの一人として数えられている。他方、もう一人は、ベタニヤのラザロの姉妹という名で呼ばれている。　このように、彼女たちの呼称に一貫して見られるこの違いは、聖福音書記者たちにとって無意味なものではあり得ず、必然的に、彼女たちを混同してはならないという考えへと導く。　聖イレネウス、著名なオリゲネス、聖ヨハネ・クロイソストモス、そして他の多くの教父や学者たちは、聖マリア・マグダレナと、ラザロの姉妹である聖マリアとを区別しているが、聖ルカによる福音書第7章の終わりに言及されている悔い改めた罪人を、聖マグダレナと同一人物であると認めている。　しかし、この見解も確固たる証拠によって裏付けられているわけではない……一方、聖グレゴリオス大教皇や、聖書注解者の中には、聖マリア・マグダレナを、ファリサイ派のシモンの家（ナイン）にいた悔い改めた罪人と同一人物であると認める者もおり、　キリストによってマグダラのマリアから追い出された「七つの悪霊」を、彼女が不品行な生活によって自ら招いた様々な罪と解釈し、救い主の前での悔い改めの後、それらの罪は彼女から離れたかのように考えている。　しかし、聖福音書の言葉に対するこのような解釈は全く恣意的であり、福音書においてこれらの表現が用いられる一般的な意味に反している。福音書では、これらの表現は常に、神の許しによって不幸な人々の体に侵入した不浄な霊が、一人だけでなく、さらには一軍団もの数で宿ることを、明確かつ断定的に指しているからである。　多くの後世の西洋の聖書注解者たちも、東方正教会と同様に、ルカとマルコの福音書にある「七つの悪霊の追い出し」に関する記述を文字通りに受け入れている。

[5286] イタリア（使徒行伝 18:1–28、27:28；ヘブライ人への手紙 13:1–25）――ローマを首都とする、広く知られたヨーロッパの国である。

[5287] ティベリウス・カエサル――紀元14年から37年まで在位したローマ皇帝。

ヤ人の旧約聖書の歴史に見られる[5288]（創世記43:11；列王記下10:2）であり、また、ユダヤのベツレヘム[5289]で生まれたイエス・キリスト[5290]に、裕福な東方の三博士が捧げた贈り物も同様である。一方、貧しい人々は、同様の状況において、その土地の様々な果物や鳥の卵を献げ物として捧げていた。このように、この古代の慣習に一部倣い、赤い色の卵と、それまで聞いたことのない言葉「キリストは復活された！」によって――という、それまで聞いたことのない言葉で、疑心深いティベリウス皇帝の好奇心を掻き立てるため、使徒同等の聖マリア・マグダレナは、その献げ物の意味を説明することから始め、復活と救い主キリストの教えについて熱のこもった説教を始めた。　彼女は大きな熱意と確信をもって、イエス・キリストの生涯、奇跡、磔刑、そして復活について皇帝に語り、率直で　率直な語り口で、イエス・キリストに対する極めて不公正で偏った裁判――エルサレムのシネドリオンの悪意に満ちたメンバーたちによるもの[5291]――および、その際に臆病なユダヤ総督ポンティウス・ピラト[5292]が黙認した事実を語り、イエス・キリストが十字架刑に処せられたことを告発した。これにより、彼女たちは皇帝の怒りを買ってしまった。　ティベリウスは彼らを裁判にかけ、その結果、ピラトは権力を剥奪され、ガリアのヴィエンヌ[5293]へ追放された。ある伝承によれば、彼は良心の呵責と絶望に苛まれ、自ら命を絶ったという。　一方、別の伝承によれば、裁判で死刑を宣告されたピラトは悔い改め、キリストに祈りを捧げ、救い主から赦しを受けた。その証として、彼の首が切り落とされた後、その首は天使によって受け取られたとされる[5294]。

[5288] 古代、さらには現代の東方においても、支配者に対する、あるいは一般的に下位者が上位者に対して、贈り物なしに接することは、無礼、さらには不敬の表れとみなされる。例えば、サウルが選ばれた際、「不適格な者たちだけが彼を軽蔑し、贈り物を捧げなかった……」（サムエル記上10:27）と記されている。

[5289] ユダヤのベツレヘムは、エルサレムから南へ約10ヴェルスト離れた小さな町であった。「ベツレヘム」という言葉は「パンの家」を意味し、この地は周囲の土壌が並外れて肥沃であったことから、この名が付けられた。　古代には「エフラタのベツレヘム」と呼ばれていましたが、ガリラヤのベツレヘムとは区別して「ユダヤのベツレヘム」とも呼ばれていました。また、預言者であり王であるダビデがそこで生まれたことから、「ダビデの町」とも称されていました（ルカ2:4）。

[5290] 「ヴォルフ」はペルシャ語に由来する言葉で、ヴォルフとは、特に天文学や医学において、高度で広範、さらには秘伝的な知識を持つ賢者を指した。彼らは大きな尊敬を集めており、その大半は宗教の奉仕者、すなわち祭司であった。

[5291] エルサレムのサンヘドリンはユダヤ人の最高裁判所であり、主にパリサイ派とサドカイ派からなる72名の議員で構成され、議員は投票および一部はくじ引きによって選出されていた。　サンヘドリンはエルサレムの神殿で集会を開いたが、特別な場合には、その議長である大祭司の家でも開かれた（マタイ26:3、ヨハネ18:24）。サンヘドリンの決定には、すべての者が無条件に従わなければならなかった。　ユダヤがローマに征服された後、シネドリオンの権限は制限され、同議会が下した死刑判決の執行にはローマ総督の同意が必要となった。エルサレムの破壊後、シネドリオンはもはや裁判機関ではなく、ユダヤの律法を教える学校に過ぎなくなった。

[5292] ピラトは、かつて総督を務めていたイタリアの湿地帯であるポンテウス州にちなんで、「ポンテウス」と呼ばれている。　西暦27年から、ピラトはユダヤの総督を務めたが、ユダヤ人の自由、慣習、宗教を憎んでいた。彼は正義を売り渡すことを躊躇せず、裁判を経ずに無実の人々を拷問や死に追いやったため、彼の10年にわたる統治はユダヤ人にとって極めて敵対的なものであり、民衆の反乱を招いた。　ある時、彼はエルサレムの神殿内で、しかも犠牲の捧げ物がなされている最中に、ガリラヤ人たちの群衆を躊躇なく殺害し、彼らの血が捧げ物と混ざり合ったほどであった（ルカ13:1）。

[5293] ガリアは、ローマ人に征服されたガリア人あるいはフランク人の国であり、現在のフランスにあたる。ローヌ川沿い、マルセイユへの道沿いにあるヴィエンヌは、現在のフランス、イゼール県の県庁所在地である。　伝承によれば、ラザロとその姉妹であるマルタとマリアは、ユダヤ人によって舟に乗せられ、波と風のなすがままに海へ放り出された。この舟は南ガリアの海岸に打ち上げられ、それに乗って到着した人々は、マルセイユやエクスなどの都市の住民をキリスト教の信仰へと改宗させた。

[5294] これは、外典であるいわゆる ニコデモの福音書」の一部を構成する『ピラトからティベリウス・カエサルへの書簡』の改訂版の一つにそう記されており、さらに、イエス・キリストを裁いた大祭司アンナは、ピラトによって首を切られた後、牛の皮に縫い込まれて吊るされ、カイアファは心臓に矢を射られて殺されたと付け加えられている……

伝承によれば、聖マリア・マグダレナ（使徒同等の聖女）と共に、ラザロの姉妹であるマルタとマリアがイタリアへ向かったとされる[5295]；一方、ピラトはこれを知り、キリスト教徒によって自身の違法な行為が暴露されることを恐れて、自ら皇帝ティベリウスにイエス・キリストに関する報告書を送った[5296] 。その中で彼は、キリストの善行に満ちた生涯、あらゆる病気や障害の癒やし、さらには 死者の復活、そしてその他の偉大な奇跡について証言した。 ピラトは、ユダヤ人たちの告発を調査した結果、イエス・キリストに何の罪も見出せなかったと主張した。彼は、反逆的なユダヤ人たちの手からイエスを救おうと多大な努力を払ったが、救い出すことはできず、民衆の叫びと、ユダヤ人たちによるピラト自身への反逆の告発ゆえに、イエスを彼らの意のままに委ねてしまった..... そして、ユダヤ人によってイエスが十字架につけられた後、自然界に恐ろしい兆しが現れ、 イエスが三日目に復活された際、多くの死者がよみがえり、ピラトは証人として、大きな恐怖に駆られ、神として信仰の対象となったイエス・キリストに施されたすべてのことを、権威あるカエサルに報告した。[5297]：

ユダヤのローマ総督および救い主キリストの信者たちからのこうした証言を受けて、伝承によれば、ティベリウス皇帝は自らも救い主キリストを信じるようになり、イエス・キリストをローマの神々の列に加えることを提案した。しかし、ローマ元老院[5298] が彼のこの提案を却下した際でさえ、ティベリウスは勅令により、イエス・キリストを信じる者たちを侮辱しようとする者すべてを処罰すると脅した。

このように、救い主キリストについての熱心で恐れを知らない宣教により、聖使徒同等のマリア・マグダレナは、他の敬虔なキリスト教徒たちと共に、異教徒であるユダヤの統治者さえも、異教世界および当時世界帝国であった ローマ帝国を統治していた異教の皇帝に対し、キリストの復活という世界的な出来事を文書で証言させ、救い主キリストの偉大さと神聖な力を認めさせた。これにより、キリスト教の普及が促進されたのである。

[5295] マルタとマリアは、ベタニヤのオリーブ山の麓で、未婚の弟ラザロと共に暮らしていた二人の姉妹である。 これは敬虔な一家であり、救い主キリストは彼らと親交があり、エルサレムを訪れる際には彼らの家に立ち寄って休息をとっていた（ルカ10:1–42；ヨハネ11:1–57、12:1–50；マタイ26:1–75；マルコ14:1–72）。 ラザロが亡くなったとき、救い主キリストは四日目に彼を復活させ、死に対するご自身の完全な力を示された。その後、シネドリオンのメンバーたちはラザロをも殺害しようと企てた。しかし、伝承によれば、彼はさらに30年間生き、キプロス島の司教となり、そこで息を引き取った。彼の記念日は10月17日に教会によって祝われる。

[5296] 「上奏、あるいはピラトからティベリウス・カエサルへの書簡」という題名のもと、この報告は、いわゆる「ニコディモの福音書」のスラブ語版において、同福音書の第一部の直後に置かれ、その結語を成している。 しかしそれだけでなく、この報告は独立した、より詳細な記事として、『ニコディモの福音書』本体よりもさらに頻繁に写本に見られる。また、この報告は『キリストの受難』あるいは『主の受難』と呼ばれる書物に完全に組み込まれており、この書物は数多くの写本として広まり、彩色された挿絵が添えられている.....

[5297] キリスト・救い主の奇跡、死、そして復活についてピラトがティベリウス皇帝に宛てた書簡は、疑いようのないものであり、かつて異教徒であった2世紀初頭の哲学者ユスティヌス、2世紀のローマの法務官テルトゥリアヌス、そして歴史家エウセビオス・パンフィルスといった最古の著述家たちによっても証言されている。 彼らには国家の公文書アーカイブへのアクセス権があった。

[5298] ローマ元老院は、ローマ国家の建国者ロムルス自身によって設立されたものと認められていた。元老院は国民の知恵の担い手であり、国家の伝統の守護者と見なされていたが、元老院議員の任命は王に依存していた。 ローマ史における共和政期および王政期において、民衆によるあらゆる決定は、その決定が国家の主要な宗教的・政治的基盤に合致していることを証明する、元老院による権威ある承認を必要としていた。

当時のキリスト教徒たちは、聖マリア・マグダレナがティベリウス皇帝に「キリストは復活された！」という言葉と共に赤い卵を捧げたことがもたらした意義と強い印象を知り、彼女に倣って、キリストの復活を記念する際、赤い卵を贈り、こう言うようになった。

「キリストは復活された！…まことに復活された！…」

こうして、この習慣は徐々に至る所に広まり、世界中のキリスト教徒の間で普遍的なものとなった[5299] 。そして、この際、卵はキリストの復活、死者の復活、そして来世における私たちの再生の象徴、すなわち目に見えるしるしとして機能する。その保証こそが、キリストの復活にあるのである。　卵から雛が生まれ、殻から解放されて充実した人生を送り始め、広大な生命の輪が開かれるように、　――それと同様に、私たちも、キリストが再び地上に来られる際、この地上の肉体とともに地上のあらゆる朽ちるものを脱ぎ捨て、キリストの復活の力によってよみがえり、別の、より高き、永遠の、不死のいのちへと生まれ変わるのです。　また、イースターエッグの赤い色は、人類の贖いと私たちの将来の新しい命が、十字架上で流された救い主キリストの清らかな血によって勝ち取られたことを私たちに思い出させてくれます。このように、赤い卵は、私たちの神聖な信仰における最も重要な教義の一つを、その存在そのもので私たちに思い出させる役割を果たしています。

聖マリア・マグダレナ（使徒に等しい聖女）は、イタリアおよびローマ市において、復活されたキリストの福音を長く宣教し続けました。[5300] 、使徒パウロが初めてローマを訪れた際も、 、彼が2年後にそこから去った後も、その宣教は続きました。 伝承に加え、このことに関する証言は、ギリシャの商業都市コリントから当時のローマにいたキリスト教徒たちへの手紙の中で、使徒パウロが聖マリアに送った特徴的な挨拶にも見ることができます（ローマ16:6）。 聖ヨハネ・クロマティスは、このことについて、各信者にふさわしい称賛を捧げつつ、使徒パウロが、すでに多大な労苦を払い、使徒的業に身を捧げてきた聖マリア（使徒同等の聖女）を称えていると説いている。　ここで使徒によって言及されている彼女の働きは、使徒や福音記者たちの偉業であり、したがって使徒に等しいものであった。　聖金口ヨハネは次のように付け加えています。「彼女は金銭をもって奉仕し、恐れを知らずに危険に身をさらし、過酷な旅を敢行し、使徒たちと共に宣教のあらゆる労苦を分かち合ったのです。」

教会の伝承によれば、使徒に等しい聖マリア・マグダレナはローマから、当時小アジアで特に名高かったエフェソス[5301] へと到着した。 エフェソスにおいて、多くの聖なる教父や教会著述家たち

[5299] この慣習が、聖使徒同等のマリア・マグダレナによるティベリウスへの奉献に由来するものであることは、すべてのキリスト教教会で伝承が一致していることに加え、　例えば、テッサロニキ近郊の聖アナスタシア修道院の図書館に所蔵されている、古代の羊皮紙に書かれたギリシャ語の規則書には、聖復活祭の日の祈りの後に、次のように記されている。「また、卵とチーズの祝福のための祈りが唱えられ、修道院長は兄弟たちに口づけをして卵を配り、こう言う。　『キリストは復活された』……このように、私たちは聖なる先人たちから受け継いだのである。彼らは使徒の時代からこの慣習を守り続けてきた。なぜなら、聖なる使徒同等のマリア・マグダレナが、信者たちにこの喜びに満ちた捧げ物の模範を最初に示したからである……」

[5300] ローマ――当時は偉大だったローマ帝国の首都であり、テヴェレ川のほとりに位置する都市である。伝承によれば、紀元前750年にロムルスによって建国された。当初は一つの丘のみを占めていたが、その後七つの丘、さらに十五の丘へと広がっていった。　人口は150万人に達し、その半数は奴隷であった。異教の神殿は420あり、住民は非常に迷信深く、最も熱心な偶像崇拝者であったが、芸術や戦争においては、彼らは断固として全世界を支配していた。ローマ帝国の住民数は1億人に達していた。

[5301] エフェソスは小アジアのカンストレ川（現在のクチュク・メンデレツ川）沿いに位置する最も有名な都市であり、貿易の中心地として機能していた。特に、異教の女神アルテミス・ディアナの名高い神殿で知られており、その礼拝は宦官たちによって格別な華やかさと壮麗さをもって執り行われていた。

の伝承と証言によれば、聖使徒同等のマリア・マグダレナは、聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネの宣教活動を助け、そこで安らかに息を引き取るまで滞在し、エフェソスに埋葬されました。

聖使徒同等のマリア・マグダレナの朽ちることのない栄光に満ちた聖遺骨は、9世紀、皇帝レオ6世「哲人」[5302] の治世下で、エフェソスからコンスタンティノープル[5303] へと厳粛に移され、聖ラザロ修道院の教会に安置された。これが正教会の東方キリスト教会の伝承である。

しかし、使徒に等しい聖マリア・マグダレナの聖遺物が、永遠に完全にコンスタンティノープルに残ったと断言することはできない。それらは、トルコ軍による勝利を収めた攻撃を恐れた信者たち自身によって、別の場所へ移された可能性もある。 13世紀初頭、第4回十字軍のイタリア人たちがコンスタンティノープルを占領した際（[5304] ）、聖遺物はそこから西方のローマへと容易に持ち去られた可能性もある。当時、南東部の多くの地域にある聖人の聖遺物は、西ヨーロッパ諸国のさまざまな都市へと持ち去られ、分散されていたからである。

ローマ・カトリック教会は、使徒同等の聖マリア・マグダレナの聖遺物（頭部を除く[5305] ）が、ローマのラテラノ宮殿近くの聖ヨハネ・ラテラノ大聖堂[5306] の祭壇の下に安置されていると主張している。この祭壇は、教皇[5307] ゴノリウス3世[5308] が、 自らその遺骸を埋葬した祭壇の下に安置されており、使徒に等しい聖マリア・マグダレナに敬意を表して奉献されたものです。 さらに、ローマ・カトリック教会は1280年以来、この聖人の公開された聖遺物として、フランス のプロヴァンス地方、マルセイユ[5309] 近郊に分散して安置されている聖遺物を崇敬しており、そこでは人里離れた谷間、険しい山々の麓に、聖マリア・マグダレナ[5310] に捧げられた荘厳な教会が建てられている。

[5302] レウ6世――ギリシャの皇帝（在位886年から912年）――は、学問と占星術への造詣の深さから「哲人」あるいは「賢者」と呼ばれ、総主教フォティオスの弟子であった。

[5303] コンスタンティノープル、すなわち古代ビザンティウム（ロシアやスラブの民間伝承では「ツァレグラード」と呼ばれる）は、紀元前658年に、ギリシャ中部の商業都市メガラのギリシャ人によって、海峡のヨーロッパ側岸辺に「ビザンティウム」という名で建設された。 コンスタンティヌス大帝は西暦330年、寺院、宮殿、芸術作品を伴って首都をビザンティウムに移した。彼は新たな首都に多くの人々を呼び寄せ、この地をギリシャ・ローマ世界の市民生活および教会生活の強力な中心地とした。

[5304] 十字軍とは、11世紀末から13世紀末にかけて、西ヨーロッパのキリスト教諸民族が、イスラム教徒からキリストの聖墳墓とパレスチナを奪還するために敢行した軍事遠征のことである。

[5305] 聖教会において「聖遺物」という名称は、広義には亡くなったすべてのキリスト教徒の遺体を指す。したがって、故人の埋葬式典では、「故人の聖遺物を受け取り、（それを携えて）教会へと向かう」と述べられている。 しかし、本来「聖遺物」とは、「神に愛された聖人たちの尊い遺骸」を指す。とはいえ、ここでも「聖遺物」という言葉には様々な意味がある。聖遺物とは、まず第一に、聖人たちの「骨」を指す。

[5306] ローマのラテラノ宮殿近くにある、聖ヨハネ・イン・ラテラノ（San Giovanni in Laterani）という名の古代の教会は、コンスタンティヌス大帝の時代から存在しており、「すべての教会（もちろんローマの教会）の母であり、頭である」と呼ばれている。

[5307] 「パパ」（ギリシャ語の「父」に由来）とは、5世紀末までは司教に対する敬称として用いられていた称号であり、その後、主にローマの大司教を指すようになった。

[5308] 13世紀のローマ教皇ゴノリウス3世。

[5309] マルセイユは、フランス南西部の広大な古代プロヴァンス地方にある海辺の都市である。リヨン湾の東側の入り江に位置している。古代、マルセイユはマシリアと呼ばれ、ギリシャの共和制植民地であったが、後にローマ人に征服された。ここからキリスト教は、南ガリア（現在のフランス）全土へと広まった。

[5310] また、西方のキリスト教徒たちは、聖マリア・マグダレナの聖遺骨がブルゴーニュのヴェーズル修道院に安置されていると主張し、そこで崇敬を行っていたが、後にその見解を改め、南フランス、 プロヴァンスで発見された、ある聖人の遺骸を聖マリア・マグダレナの聖遺骸であると見なすようになった。プロヴァンスの伝承や、ベタニアのマリア（ラザロの姉）やファリサイ派の家のナインの罪人を聖マリア・マグダレナと同一視する一部の教会著述家たちは、この遺骸を

正教会のギリシャ・ロシア東方キリスト教会や、西方のローマ・カトリック教会、そして英国国教会は、7月22日に使徒に等しい聖マリア・マグダレナの記念日を祝う。一部の地方教会では、これが最も重要な祝日となっている。

聖使徒に等しい香油を携えたマリア・マグダレナについて、現時点で知られていることは、聖福音書によって私たちに伝えられた疑いようのない真実、および各地のキリスト教教会の伝承に基づく推定に過ぎません。これらの教会にとって、またすべての人々にとって、聖使徒に等しいマリア・マグダレナは、救い主キリストの直接の命により、　人間の中で最初に、キリストの救いをもたらす復活を宣べ伝えた者であった。

――キリストの復活は、私たちすべてにとって――教会の偉大な聖人[5311]　はこう説く――思索、瞑想、驚嘆、喜び、感謝、希望の源であり、そこからどれほど昔に、どれほど頻繁に汲み取ろうとも、常に満ち溢れ、常に新しいものである。それは永遠の新しい知らせである！…　そして、信仰を築き、希望を喚起し、愛に火を灯し、知恵を照らし、祈りに翼を与え、恵みを降らせ、災い、死、悪を滅ぼし、人生に活力を与え、至福が夢ではなく実体となり、　栄光が幻影ではなく、すべてを照らし、誰をも傷つけない永遠の光の永遠の稲妻となるように……？――これらすべてに対して、一つの奇跡的な言葉「キリストは復活された！」に十分な力があるのです。

さあ、私たちキリスト教徒も、私たちの救い主ご自身が遣わされた偉大な使徒、聖マリア・マグダレナによるこの奇跡的な福音を、熱狂をもって応答しよう。「まことに、まことに、キリストは復活された！」

トロパリオ、第1声：

キリストが私たちのために聖母から御生まれになったとき、尊きマグダラのマリアはキリストに従い、その義と律法を堅く守り抜きました。それゆえ、今日、あなたの至聖なる記念を祝うにあたり、あなたの祈りによって罪の赦しを受けます。

コンダク、第3調：

救い主の十字架の御前に、他の多くの者たちと共に立ち、主の母に共感し、涙を流しながら、これを称賛してこう語った。「これはなんと不思議な奇跡であろうか。あなたはすべての被造物が苦難に耐えることを許された。あなたの御力に栄光あれ。」

- 同日、聖殉教者フォキスの聖遺骨が、404年にポンタからコンスタンティノープルへ移送された。（その記念日は9月22日

8月5日

7月23日（旧暦）

聖マリア・マグダレナの聖遺骸であると主張していたのである。　しかし、聖マリア・マグダレナの生涯や遺骸の安置に関する、西ローマ・カトリック教会のこうした情報や類似の記述、およびこれらの西方教会の伝承に含まれる真実かつ確かな事柄は、おそらく、聖福音書に言及されている他のマリアという名の聖人の一人にこそ関係しているものであり、キリストの昇天後の活動については、東方教会には確かな記録が一切残されていない。

[5311] モスクワ都主教フィラレートの『言葉と演説』、1848年、第1部、35、36、44ページ。

聖司祭殉教者アポリナリオスの殉教。

記念日：7月23日

クラウディウス皇帝の治世中[5312] 、イエス・キリストの使徒である聖ペトロ[5313] は、多くの同行するキリスト教徒たちと共に、アンティオキアからローマへ[5314] やって来た。そこで彼はまずユダヤ人の集会に入り、自らをユダヤ人であると名乗った。 そして、イエス・キリストに関する教えを宣べ伝え始め、預言書の証しをもって、キリストこそが人類の救いのために来られた真の神の子であることを立証した。また、主イエスがイスラエルの民の間でなされたすべての奇跡についても語った。 聖使徒ペトロがこのように毎日、ユダヤ人の集まりで説教すると、多くのユダヤ人がキリストを信じるようになった。そして、ユダヤ人だけでなく、ローマ人の中にも、使徒の説教を聞いて喜びをもってその言葉を受け入れ、「

「神は人類を憐れみ、この世を新たにするために御子を遣わされた。」

そして、キリストを信じた彼らは、洗礼を受けた。それからかなりの時間が経った後、聖使徒ペトロは、アンティオキアから共にやって来た弟子アポリナリウスに、次のように語りかけた。

「見よ、あなたは神の御子キリストについての知識においてよく教えられ、そのすべての神聖な御業を十分に悟った。それゆえ、聖霊の聖別を受け、人々の多い都市ラヴェンナへ行きなさい[5315] 、そして何事も恐れることなく、そこでイエス・キリストの御名を宣べ伝えなさい！」

そう言い終えると、使徒ペトロは祈りを捧げ、アポリナリオの頭に手を置いて、彼をラヴェンナ市の司教に任命した。

「主イエス・キリストが、旅路においてあなたを守り、あなたの願いを叶えてくださる御使いをお遣わしくださいますように。」

使徒はこのような別れの言葉を残し、アポリナリウスに口づけをして送り出した。前述の都市に近づくと、アポリナリウスは旅人として休息を求め、イリネイという名の兵士の家に入った。 彼との会話の中で、聖なる司教はイリネイに、自分が誰であり、どこから来て、何のために彼らの町へ向かっているのかを明かし、キリスト・イエスとその神聖な力について語った。するとイリネイは彼にこう言った。

[5312] クラウディウス――41～54年の皇帝。

[5313] 6月29日、聖使徒ペトロの記念日

[5314] ローマ帝国の首都は、イタリア中部、ティブレ川の両岸、同川が海に注ぐ地点に位置している。

[5315] ラヴェンナ――同名のイタリアの州にある都市。ラヴェンナはテッサリア人によって建設され、家屋は杭の上に建てられ、運河が部分的に通りの代わりとなっていた。紀元前254年、ローマ人の支配下にはなかったが、後にローマ人はラヴェンナに自治権と様々な特権・優遇措置を与えた。 ローマ帝国時代、ラヴェンナはローマ艦隊の重要な停泊地の一つであり、アウグストゥスによって港が整備された。 44年以降、ラヴェンナは司教の座所となり、432年からは大司教の座所となった。402年、アラリクから逃れるため、ホノリウス皇帝はラヴェンナを首都に選んだ。西ローマ帝国の崩壊後、ラヴェンナはレグルス王朝のオドアクルによって占領された。 493年、長期にわたる包囲戦の末、テオドリック大王がラヴェンナを制圧した。555年以降、ラヴェンナではビザンツ帝国の支配が始まり、約2世紀にわたって続いた。752年にはランゴバルド族の支配下に入り、754年にはピピン3世がこれを教皇に献上した。 1275年以降、ラヴェンナは、以前は教皇の臣下であった名門ポレンタ家の所有となった。1441年、ヴェネツィア人がラヴェンナを制圧したが、1509年に再び教皇の手に戻った。 1860年、ラヴェンナはイタリア王国に編入された。――ローマ、コンスタンティノープル、テッサロニキと並び、ラヴェンナは、古代キリスト教美術がビザンチン美術へと移行した時代の記念碑的な作品群で際立っている。

「父よ、旅人よ！私には盲目の息子がいます。もしあなたの説教に力があるのなら、彼を癒して目を開かせてください。そうすれば、私はあなたの神を信じ、その御後に従います。」

そこで聖人は、その盲人を自分のところへ連れてくるよう命じた。盲人が連れて来られると、家族全員が、旅人が盲人に何をするのか見ようと集まった。すると聖人は、盲人の目に十字の印を結びながら、こう宣言した。

「遍在なる神よ！この町に御子の御名を知らしめ、これらの人々の肉眼だけでなく、霊的な目も開かれ、あなたが世を救うために遣わされた、唯一の真の神であり、私たちの主イエス・キリストを、彼らが知ることができますように（ヨハネ17:3参照）。」

聖人がこう言い終えるやいなや、盲人の目はたちまち開かれ、彼は視力を取り戻し、両親と共に神の人の足元にひれ伏した。こうして、その家族全員がキリストを信じ、ラヴェンナからほど近い川で洗礼を受け、聖人はそのイリネイの家に住むようになった。

一方、その町には、トリブヌス・[5316] の妻で、テクラという名の病弱な女性がおり、長年にわたり病床に伏していた。多くの熟練した医師たちが治療にあたったが、彼女は治癒することができなかった。　ある時、洗礼を受けたばかりの戦士イリネイがトリブンの元を訪れ、彼が妻の不治の病に深く心を痛めているのを見て、次のように語りかけた。

「私のところには、薬を使わずに私の盲目の息子を治した旅人が住んでいます。もしその者をあなたのところへ呼ぶよう命じられれば、彼はすぐにあなたの奥様も癒やすでしょう。」

トリブヌスは尋ねた。

「その人はどこからここへ来たのですか？」

「ローマからです」とイリネイは答えた。

「では、彼はローマ人なのか？」とトリブヌスは尋ね直した。

「分かりません。ただ、私の見るところ、彼はローマ人ではなく、ギリシャ人のようです。」

「彼を密かに私の家へ連れて来い！」と、トリブヌスは会話を締めくくった。

聖アポリナリウスがイリネイと共にラヴェンナ市に入城したとき、十字を切ってこう祈った。

「神よ、わが師ペトロを助けてくださったように、私をも助けてください。この都において、あなたの聖なる御名が賛美され、あなたの御心がここで行われますように！」

聖人がトリブンの家に入ると、トリブンは彼を歓迎して言った。

「お越しいただき、ありがとうございます、医師よ！　渇きを覚える者にとって、冷たい水ほど心地よいものがあるでしょうか？」

「安らかに眠れ」と聖アポリナリウスは言った。「主イエス・キリストの祝福があなた方の上にありますように。」

「あなたが名指ししたその方は、いったいどなたですか？」と、トリブーンが尋ねた。

「その方は、生ける神の御子（ヨハネ6:69参照）であり、滅びゆくこの世全体を新たになさった方です」と、アポリナリウスは答えた。

「お前はガリラヤ人[5317]だ、とわかる」と、トリブーンは言った。

「その通りです」と聖人は認めた。

「お前は治療ができるか？」と、トリブーンが尋ねた。

[5316] 軍事指揮官。

[5317] ガリラヤ――パレスチナ北部の地域。主イエス・キリストはここで幼少期と青年期を過ごした。また、ガリラヤは主に主の説教の場でもあった。それゆえ、主イエスは「ガリラヤ人」と呼ばれたのである（マタイ26:69）。4世紀、ギリシャ・ローマ帝国の皇帝ユリアヌス・アポステートは（363年に）死の床で、キリストに向かって次のように語った。「お前は私を打ち負かした、ガリラヤ人よ！」――このことから、主イエスの信奉者たちは「ガリラヤ人」と呼ばれるようになった。

「いいえ」と聖人は答えた。「私はイエスの御名以外は何も知りません。」

「では、イエスの名にはどのような力があるのだ？」と、トリブーンは言った。

「さあ」と聖人は答えた。「あなたの支配下にある兵士たちをここに呼び寄せなさい。そうすれば、皆の目の前で、私の主イエス・キリストの力を知ることになるでしょう！」

総督は直ちに使いを送ってすべての兵士を呼び集め、それから聖人にこう言った。

「私の妻は長年にわたり病床に伏しており、薬は効くどころか、かえって害を及ぼしている。それゆえ、もしあなたに何らかの癒しの力が宿っているのなら、その病める者の上にその力を現してくれ！」

「神が、あなた方の心の目を開いてくださいますように」と聖人は祈るように願い、「そうすれば、神の奇跡を見て、皆が神を信じるようになるでしょう！」

そして、病床に近づき、病人の手を握ると、こう言い放った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、起き上がり、主を信じなさい。そして、主のような方は他にいないと心に留めなさい。」

すると、その妻はたちまち健康を取り戻し、寝台から立ち上がって、大声でこう証しした。

「あなたが宣べ伝えているイエス・キリスト以外に、神はいない。」

これを見たトリブーンとその兵士たちは皆、驚きながら叫んだ。

「まことに、このようなことをなされるのはこの神だけだ！もし私たちが神を愛すれば、戦いの際にも助けてくださるに違いない！」

こうして、トリブーンとその妻、子供たち、そして家来たちは皆、キリストを信じるようになった。また、そこにいた異教徒の多くも信仰を抱き、洗礼を受けた。この時から、聖アポリナリウスはトリブーンの家に滞在するようになり、日々多くの人々が彼のもとに訪れ、彼は密かに彼らにキリストへの信仰を教え、洗礼を授けた。　また、信仰を持った人々は、子供たちを聖人に預けて、書物による教育を受けさせた。そして、神の聖人は、トリブンの家の一室を教会として整え、そこで聖体礼儀を執り行い、信者たちにキリストの御体と御血という神聖な秘跡を授けた。　そこで12年間滞在し、アデレトとカロキラという二人の長老を按手し、高貴な家柄のマルキアヌスと哲学者レウカディオスを助祭に、さらに六人を聖職者に任命し、彼らと共に昼夜を問わず祈りを捧げ、神を賛美した。やがてキリスト教徒の数が増え、イエス・キリストとその宣教者の名と力に関する噂が民衆の間に広まると、この神の人はもはや隠れたままでいることはできず、そのことは都市の統治者サトゥルニヌスに報告された。

彼を捕らえるために使者が遣わされ、彼が連行されると、総督は彼をラヴェンナのカピトリウムの最高祭司たちの前に引き出し、彼らの面前で彼にこう問いかけた。

「お前は一体何者か？」

「私はキリスト教徒です」と、聖人は力強い声で答えた。

「では、キリストとは誰か？」と総督は尋ねた。

「キリストは生ける神の御子であり、天と地と海にあるすべてのものを動かしておられる方です」と聖人は答えた。

「彼こそが、お前を――我々の神々への崇拝を覆すために――我々の元へ遣わしたのか？」と裁判官は問い詰めた。「この都市のカピトリウムに鎮座する偉大なる神ゼウスのことを知らないのか？　お前もまた、その神に拝礼すべきではないか？」

「その方が誰なのかは知らず、その神殿についても私は知らない」と聖人は答えた。

すると、偶像の祭司たちは聖人にこう提案した。

「それなら、行って、見事に装飾されたその偉大な神殿を見てこい。そこでは無敵のゼウスの像を見ることができ、彼に拝むことになるだろう。」

そして、彼らは聖アポリナリウスをその神殿へと連れて行った。彼が中に入り、豪華な装飾を目にしたとき、彼は笑いながら祭司たちにこう言った。

「ここにこれほど多くの金や銀が無駄に集められている。それを悪魔たちの前に無駄に飾るよりも、貧しい人々に配ったほうがよくなかっただろうか？」

すると、不信心者たちは怒りと憤りに満ち、聖人を激しく殴打し、その後、足に縄を結びつけて城外へ引きずり出し、死んだように海辺に投げ捨てた。　かろうじて息のある聖アポリナリウスを、弟子たちが引き取り、キリストを信じるある未亡人の家に匿い、世話をした。

六ヶ月後、ヴォニファティウスという名の貴族が突然、言葉を失ってしまった。多くの医師が呼ばれたが、彼らにはどうすることもできなかった。その頃、彼の家では、神の僕アポリナリウスが生きており、ある未亡人の家に身を隠していることが知れ渡った。　その口がきけない男の妻は、急いで神の人のもとへ駆けつけ、彼の足元にひれ伏して、自分の家に来て夫を癒やしてほしいと懇願した。　キリストの聖人は立ち上がってそこへ向かい、ヴォニファティウスの家に入ったとき、使用人の一人の少女が、汚れた霊に取りつかれてその霊に支配されていたため、こう叫んだ。

「生ける神のしもべよ、ここから立ち去れ！もし立ち去らなければ、私はお前を足に縛りをかけられて、再び町から引きずり出させるぞ！」

聖人は、汚れた霊を戒め、その女から追い出した。そして、病に伏し、口が利けないヴォニファティオのもとへ入り、彼のために神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ、この人が悪魔を助けに呼び寄せないよう、その口を閉ざされた方よ。今、その口を開いてください。そうすれば、彼はあなたの至福の御名を呼び求め、あなたが永遠に生きられる神であることを信じるでしょう。」

聖人がこのように祈り、傍らにいたキリスト教徒たちが「アーメン」と唱えたその瞬間、その口がきけない人の舌が解け、唯一の神を賛美するために口が開かれ、彼は大声で叫んだ。

「アポロナリウスが説く神以外に、神はいない！」

その日、500人以上の男たちがキリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。　それから数日後、悪霊に煽られて怒りに燃えた不信心者たちは、再び聖アポリナリウスを捕らえ、棒で激しく打ち据えながら、イエスについて説教すること、さらにはその御名にさえ言及することを禁じた。しかし、聖人は地面に横たわりながら、こう叫んだ。

「まことに、神はイエス・キリストであり、人々のために御自身の御心により苦難を受けられた方である。」

異教徒たちは、キリストに関する彼の証言に耐えかね、彼の裸足を熱い炭火の上に置き、苦しめながら火で焼いた。しかし、彼はなおさら力強く、大声でキリストを宣べ伝えた。その後、聖アポリナリウスの足を縛り付けた拷問者たちは、彼を街の外へ引きずり出し、こう叫んだ。

「お前は癒しの業を行っているが、生き延びたいのなら、決して町の中に入ってはいけない。」

そして聖人は町の近くに横たわり、絶えずイエス・キリストの御名について説き続けた。　多くの敬虔な人々が彼の元を訪れ、彼に仕えた。聖人の説教によってその数が増え続けた信者たちは、町の近く、海辺に小さな教会を建て、そこで神の司教が聖なる典礼を執り行い、キリスト・神に帰依する者たちを海で洗礼を授けた。

数年後、聖人は異教徒たちによって追放され、イタリアのエミリア地方へと向かい、そこで説教によって、できる限り多くの人々を聖なる信仰へと導いた。この間、彼の命により、長老カロキルが教会を統率していたが、彼もまた、イエス・キリストの御名の力によって偉大な奇跡を示した。エミリアで十分な時間を過ごし、多くの人々をキリストへと導いた後、聖アポリナリウスは再びラヴ

ェンナに戻り、そこで信者たちは彼を喜びをもって迎え入れた。当時、ラヴェンナにはすでにルフィナという名の別の統治者がおり、彼にはたった一人の娘がいたが、その娘は重病を患っており、もはや死が迫っていると見られていた。　聖アポリナリウスのことを耳にした統治者は、娘を助けてもらうため、彼を栄誉をもって自分の邸宅へ連れてくるよう命じた。聖なる司教が聖職者たちと共に公爵の邸宅に入ったその時、病人は息を引き取った。すると、両親はもちろん、家中の者たちが皆、泣き叫び、声をあげて嘆き始めた。聖人を見て、ルフィナスは彼にこう言った。

「お前が我が家に来なければよかった。お前のせいで偉大なる神々が私に怒りを向け、私の娘が死から救われることを許さなかったのだ。」

「あなたの皇帝の健康を誓ってくれ」と聖人は反論した。「あなたが娘が救い主に従うことを妨げないことを。そうすれば、あなたは私が宣べ伝える我らの主イエス・キリストの御力を目にするだろう。」

「私は知っている」とルフィンは答えた。「私の娘が死んだことは。しかし、もし彼女がよみがえり、話しているのを見れば、私はあなたの神の力を称え、彼女が救い主に従うことを妨げはしない。」

そこで聖人は、故人のそばに近づき、こう祈った。

「主イエス・キリスト、わが神よ。あなたの使徒ペトロ、すなわち私の師のあらゆる願いを叶えてくださる方よ、私の願いも叶えてください。この少女はあなたの被造物であるゆえに、彼女をよみがえらせてください。そして、ここに集う者たちがあなたの御力を目の当たりにし、あなた以外に神はいないことを悟らせてください！」

それから、死者に手を触れ、こう叫んだ。

「起き上がり、あなたの創造主を告白せよ！」

すると、その少女はたちまち蘇り、立ち上がって、大声で叫びながらこう叫んだ。

「アポリナリウスが宣べ伝える神は偉大であり、その神以外に神はいない！」

その少女の両親は喜び、すべてのキリスト教徒もまた、主イエスの御名がこのように栄光を受けたことを喜びました。少女は母や家族全員と共に洗礼を受け、男女を合わせて洗礼を受けた者は三百二十四人にのぼり、その他にも多くの異教徒がキリストを信じ、洗礼を受けました。　一方、統治者ルフィンは、キリストを信じたものの、皇帝への恐れから洗礼を受けなかったが、密かに神の聖人を敬愛し、彼に仕えていた。また、彼の娘はイエス・キリストに身を捧げ、花嫁として彼と婚約し、生涯を通じて処女のままであった。

そこで、異教徒たちから皇帝に、アンティオキアから来たある男が、魔術や呪術を用いて、ユダヤ人イエスの名をラヴェンナ市に持ち込み、多くの民衆が彼の説くことに耳を傾けており、さらにはルフィンの家族や家臣たちまでもが彼の信仰に引き込まれたと報告された。　そこで皇帝は直ちに、メッサリーナという名の総督をラヴェンナへ派遣し、ルフィナの権力を剥奪させるとともに、アポッリナリウスに対しては、異教の神々への崇拝を強要するか、あるいは最も遠い国へ追放するよう命じた。 メッサリヌスは、 皇帝の意志を遂行するため、アポリナリウスをプレトリアに呼び出し、カピトリーノの祭司たちの面前で、彼が誰であり、どこから来て、何をしているのかを尋ねた。　聖人は、自分はキリスト教徒であり、アンティオキア出身の使徒の弟子であると述べた。そして、自分の務めは、天と地、海、そしてそれらの上や中に存在するすべてのものを創造した、生ける神の御子イエス・キリストを宣教することにあると語った。

「あなたが宣教しているのは、数年前に自らを神の子と名乗り、ユダヤ人たちに殺されたあのキリストのことではないか？」とメッサリンは尋ねた。　「もし彼が神であったなら、死ぬことも、侮辱を受けることもなかったでしょう。しかし、彼は高慢であったため、拷問にさらされ、死刑によって命を落としたのです。それなのに、なぜ彼を神々の仲間に入れるのか、私にはわかりません。」

「このイエス・キリスト――」と聖アポリナリウスは彼に言った。「あなたが語っているその方は、神であり、今も神であり、永遠に神であり続けるのです。　人類を敵の支配から解放しようと望まれたため、御自身を低くされ、聖霊によって、夫を知らぬ清らかな処女の胎内に受肉し、彼女から言葉に尽くせぬ御業によって生まれられたのである。

「その話は我々も聞いたことがある」とメッサリンは反論した。「だが、それはあり得ない話だ。」

「聞いてください、裁判官よ！　そして耳を傾けてください」と聖人は呼びかけた。「神は清らかな肉体に宿り、驚くべき奇跡としるしを行われた。そしてユダヤ人たちに捕らえられ、十字架につけられたとき、至聖なる処女から受け継いだその肉体は苦しみを受けたが、神性は苦しみとは無縁であり、不死であった。　この神性によって、肉体は三日目に死からよみがえり、主は多くの人々の前に現れてから、天に昇られ、またそこから降りてこられた。　主は、ご自身を信じる者たちにこれほど偉大な力と権威をお与えになったので、彼らは主の御名によって悪霊を追い出し、あらゆる不治の病を癒やし、死者をよみがえらせることができるのである（マルコ16:17–18）。

「私を説得することはできない」とメッサリンは反論した。「カエサルも元老院議員たちも認めていない、見知らぬ神の信者になるなど、私には到底できない。　だが、市のカピトリーウムに入り、自らの手で偉大で恐ろしく轟く神ゼウスに香を捧げよ。もしそれを拒むなら、お前を様々な拷問にかけ、追放するつもりだ。

「たとえカピトリーノ神殿に入ったとしても、悪魔たちに香を捧げることは決してせず、私の主イエス・キリストに賛美の捧げ物を捧げるつもりだ」と聖人は答えた。

すると、偶像崇拝の祭司たちは叫んだ。

「アポリーナリウスを苦しめよ！」

そしてメッサリヌスは、殉教者の服を脱がせ、容赦なく棒で打ち据えるよう命じ、こう言った。

「神々に犠牲を捧げよ！」

しかし、聖人はこの拷問の最中、こう叫んだ。

「私はキリスト教徒だ！」

「その場で彼を引きずり回せ」と、ある祭司が激昂して叫んだ。「不死の神々に賛美を捧げるまで、さらに残酷に拷問を加えよ。」

しかし、こうしたさらに残酷な拷問の中でも、聖アポリナリウスはこう叫び続けた。

「私は、生ける神である主イエス・キリストを告白し、他の誰をも認めない！」

一時間後、メッサリヌスは拷問を和らげるよう命じ、殉教者にこう語りかけた。

「言え、この忌まわしき者よ、この苦しみを受けた見返りに、どのような報いを期待しているのか？」

「私たちの書物には」と殉教者は答えた。「『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』（マタイ24:13）と記されており、キリストのために死ぬ者は、生き続けることになる。これこそがキリスト教徒への報いである。」

聖人の苦しみを見守っていたのは、信者や異教徒を含む大勢の人々であり、信者たちは彼の勇気と忍耐を見て、天の神を賛美した。　その時、メッサリヌスは再び家来たちに、キリストのしもべを拷問し、その傷口に沸騰した湯を注ぐよう命じた。その間、彼は船の準備を命じ、鉄の枷をはめられた殉教者をイリュリクへ流刑に送るつもりであった[5318]。聖人を拷問していた下僕の一人、とりわ

[5318] イリュリク、あるいはイリュリアとは、ローマの属州であり、使徒パウロは『ローマ人への手紙』の中で、自身の使徒活動の境界としてこの地を言及している（15:19）。ギリシャ人は、マケドニアの西、ドナウ川とアドリア海の間に位

け殉教者に対して猛烈に暴れていた者が、突然、凶暴な悪魔に憑りつかれ、地面に倒れて死んでしまった。悪魔が彼からその呪われた魂を引きずり出したからである。そして、拷問場から連れ出された聖アポリナリウスは、メッサリヌスに向かってこう言った。

「不信心者よ、なぜあなたは神の御子を信じないのか？　そうすれば、ゲヘナでの永遠の苦しみ[5319]を免れることができたはずだ。」

拷問官は激怒し、聖人の口を石で打つよう命じた。キリスト教徒たちは、拷問官のそのような残虐さを目の当たりにして、もはや耐えられなくなった（彼らは非常に大勢いた）。怒りに駆られて民衆の反乱を起こし、　異教徒たちに襲いかかり、数人を殺害した。メッサリーナも殺そうとしたが、彼は騒ぎと民衆の暴動が始まったことに気づくと恐怖に駆られ、即座にその場から飛び出して逃げ出し、どこかの要塞化された建物の中に身を隠した。　彼は兵士たちに、アポッリナリウスを捕らえ、牢獄に閉じ込め、足に足枷をはめ、飢えと渇きで衰弱して死ぬまで、食べ物も飲み物も与えないよう命じた。　しかし、すべての人を満ち足りさせられる神は、御自分のしもべを見捨てず、聖人が空腹になったとき、彼を力づけるために天使を遣わされた。神の天使は、看守たちの目の前で、はっきりと見える形で牢屋に現れ、キリストの囚人に食べ物と飲み物を運んだ。聖人はそれを受け取り、一口味わって力を取り戻し、神に感謝した。　四日後、メッサリヌスは、キリスト教の教師アポリナリウスがまだ牢獄で生きていることを知ると、彼を重い鉄の足枷で縛り、密かに船に乗せ、流刑地へ送るよう命じた。彼と共に、父であり師である彼と別れたくないと願った三人の聖職者も同行し、航海に出た。

数日後、予期せぬ激しい嵐が吹き荒れ、海は荒れ狂った。船は波の猛威に耐えきれず砕け散り、乗組員は全員溺死した。生き残ったのは、聖アポリナリウスと3人の聖職者、そして彼らに同行していた2人の戦士だけだった。　神に守られ、彼らは無傷で岸にたどり着いた。一方、聖人が縛られていた鉄の足枷は、船が沈み始めたその瞬間、目に見えない手によって砕かれ、彼から外れていた。死の危機から救われた者たちは岸に上がった。そして、前述の二人の戦士が聖人に尋ねた。

「ご主人様！　父上！　私たちはどこへ行けばよいのでしょうか？　これからどうすればよいのでしょうか？」

「信じなさい」と聖人は答えた。「私たちの主イエス・キリストを信じ、聖なる洗礼を受けなさい。そうすれば、あなたは生き延びるでしょう。」

彼らは直ちに偶像を呪い、父と子と聖霊の名によって洗礼を受けた。そして聖人は、三人の聖職者と二人の新たに改宗した戦士を連れて、あちこちを巡り歩き、ミジア[5320]にまでたどり着いたが、そこでは誰も彼らを受け入れようとしなかった。　そこで聖人は、額にハンセン病を患ったある高貴な人物を見かけ、こう尋ねた。

「健康になりたいか？」

「はい」と、その人は答えた。

「我らの主イエス・キリストを信じなさい」と聖人は言った。

置する全域をイリュリアと呼んでいた。　ローマ人は、「イリュリア・バルバラ（illyria　barbara）」――北部の山岳地帯――と、「イリュリア・グラエカ（illyria　graeca）」――ギリシャ人入植者が住む沿岸地帯――を区別していた。イリュリアでは、70人の使徒のうち数人が宣教を行った。

[5319] ゲヘナ――永遠の苦しみを受ける場所（マタイ10:28）。この名称は、エルサレム近郊のエンノムの谷を指すヘブライ語に由来する。そこではモロク神を称えて子供たちが生贄として焼かれていた（列王記上11:7；列王記下16:3–4）。 ヨシヤ王は、このような生贄の捧げ物という恐ろしく神に対する冒涜的な慣習を廃止した。その後、エンノムの谷には、処刑された悪党の死体や腐肉、あらゆる不浄物が捨てられるようになった。悪臭や疫病を根絶するため、これらすべてが火に投げ込まれた。 ここから、「火のゲヘナ」（マタイ5:22, 29, 10:28, 23:33；マルコ9:47）や、「消えることのない火のゲヘナ」（マルコ9:43, 45）という表現が生まれた。

[5320] ミジア――マケドニアの北に位置し、トラキアと隣接する国。

「私を癒やしてくれる者が、私の神となるでしょう」と、病人は答えた。

聖アポリナリウスは、主イエスの御名を呼び、その男のハンセン病に触れると、彼はたちまち癒やされ、偶像を捨て、キリストを信じ、洗礼を受けた。　聖人はその地で長い間暮らし、異教徒たちに真の神を知らしめ、聖なる洗礼によって彼らを啓蒙した。また、そこからドナウ川の岸辺を歩いていく際にも、御言葉を宣べ伝えることで、多くの異教徒をキリストへと導いた。　その後、彼はフラキアへ赴き、ある異教の神殿の近くに滞在した。そこには、不浄な異教の神セラピスの偶像が立っており、その偶像は崇拝者たちと会話していた。というのも、偶像の中に宿っていた悪霊が、犠牲を捧げる者やあらゆる事柄について尋ねる者たちに答えを与えていたからである。　聖人がそこに到着すると、偶像は黙り込んでしまった。不敬虔な祭司たちや、その国の異教徒たちは皆、自分たちの神が声を失ったことに深く悲しんだ。彼らが再び神に話しかけてもらえるよう、長い間犠牲を捧げてなだめた後、神はかろうじてこう口を開いた。

「ローマから使徒ペトロの弟子がここに来て、彼が宣べ伝えているイエスの御名によって、私を縛ったことを、あなたがたは知らないのか。彼がここから追い出されるまでは、私はあなたがたの問いには答えられない！」

すると、異教徒たちは直ちにキリストの宣教師を懸命に探し回り、見つけ出すと容赦なく打ちのめした。その後、彼を海辺へ連れて行き、そこでイタリアへ向かう船を見つけ出した。そして、その船を出航させた自国の統治者に懇願し、神の聖人をその船に乗せ、こう言った。

「どこから来たのか、そこへ戻れ！」

そして順風に乗ってイタリアにたどり着いた。弟子たちと共に陸に上がった神の人は、ラヴェンナの街へ、自らの信徒たちの元へ向かった。三年間の追放の末にラヴェンナに現れた彼は、信者たちから大いなる喜びをもって迎えられた。　一方、異教徒たちは、キリスト教の司教が追放先から戻ってきたことを知ると激しく怒り、悪巧みを企て、その企てを実行するのに都合の良い時機を窺っていた。

十分な時間が経過した後、神の聖人がキリネヤという名の著名な人物の村にある教会で聖なる典礼を執り行っていた際、大勢の異教徒たちが教会に襲いかかり、キリストの信徒たちを追い散らした後、　牧者である聖アポリナリウス自身を捕らえ、殴打しながら縛られたまま街へ連行し、ゼウス神殿の最高位のカピトリーノの祭司たちに引き渡した。祭司たちは彼を見るや、怒りを込めて叫んだ。

「彼は、幾度となく冒涜してきた偉大なる神ゼウスの御前に出るに値しない。さあ、彼をアポロンのもとへ連れて行け！」

聖人がアポロンの神殿に連行されると、彼は主に向かって祈りを捧げた。すると、その偶像はたちまち地面に倒れ、塵と化してしまった。そして間もなく、その不敬な神殿も崩壊した。　それを見たキリスト教徒たちは、全能の神を賛美したが、異教徒たちは聖アポリナリウスを捕らえ、タヴルスという名の領主のもとへ連行し、その殉教者を死刑判決を受けるために引き渡した。　一方、統治者は、すべての顧問である市民たちをプレトリアに召集し、彼らの面前でキリストの囚人にこう尋ねた。「彼は、病人を癒やし、このような奇跡を行うのに、誰の力を使っているのか？」

聖人は、すべてをキリストの力によって行っている、と語った。なぜなら、キリストこそが唯一の真の全能の神だからである。

「私には」と裁判官は言った。「生まれつき目の見えない息子がいる。もしあなたが、あなたのキリストの力によって、彼に目が見えるようにするならば、我々もキリストこそが真の神であると信じるだろう。しかし、もしそれができないならば、あなたを火に投げ込み、その罪にふさわしい報いを受けて滅びるがよい。」

キリストの聖人は、生まれつき目の見えない者を連れてくるよう命じ、その者が連れて来られると、神の人はその盲目の目に十字の印を結び、こう宣言した。

「十字架につけられたイエス・キリストの御名によって、あなたの目を開き、見えるようにせよ。」

するとたちまち、生まれつき目の見えないその人は目を開き、見えるようになった。人々は皆驚き、こう叫んだ。

「このような奇跡を行う方こそ、まことに神である。」

こうして、多くの人々がキリストを信じるようになった。一方、総督は聖人を不信仰者たちの手から解放し、夜陰に乗じて、街から六ミリアリオン[5321] 離れた自身の領地へ送り出した。そこでは彼を鎖で縛り付けておくという口実であった。　しかし、聖人はその村に四年間も滞在したが、足枷を嵌められることなく自由の身であり、すべての信者たちが彼のもとに集まり、異教徒の中からも多くの者が彼を訪ねてきた。彼は福音の説教によって彼らをも聖なる信仰へと導き、洗礼を授けた。また、彼の元へ連れてこられたすべての病人を癒した。

その頃、ローマではウェスパシアヌスが皇帝に選出された[5322] 。ラヴェンナの司祭長たちは、皇帝に次のような書簡を送った。

「もしあなたが、あなたの王国に害を及ぼす魔術師アポリナリウスを滅ぼさなければ、神々への崇拝は失われ、ローマの栄光は衰えるでしょう。なぜなら、彼は日々、その魔術によって多くの民を惑わし、不死の神々を冒涜し、その神殿を破壊しているからです。　もし彼一人をこの世から滅ぼすことができれば、ローマの栄光は永遠に保たれるであろう。

カエサル・ウェスパシアヌスはこれを検討した上で、ラヴェンナへ次のように返信した。

「もし誰かが神々に不名誉や冒涜を加えたならば、その者は供物を捧げて償わなければならない。さもなければ、その者は都市から追放されるべきである。なぜなら、神々のために誰かに復讐することは不適切であり、神々は怒れば自ら敵に報復することができるからである。」

皇帝からのこの返答がラヴェンナに届くと、当時市の統治を任されていたパトリキウス、[5323] デモフェンは、すでに高齢であり、数々の拷問によって肉体が衰弱していた神の聖人アポリナリウスを捕らえた。　異教徒の群衆はデモスフェンに対し、アポリナリウスを拷問にかけるか、あるいは健康を脅かすような遠く離れた危険な場所へ追放し、行方不明になって死に至らしめるよう要求した。デモスフェンは、聖人をある百人隊長に預けて監視させ、その百人隊長がどのような拷問を施し、どのような過酷な場所へ追放すべきかを考え出すまで待った。　しかし、その百人隊長は密かにキリスト教徒であり、神の僕を受け入れると、彼を牢獄ではなく自分の家へ連れて行き、安らかに休ませた。数日後、彼は聖アポリナリウスに次のように語りかけた。

「ああ、主よ、父よ、急いで死ぬのはやめてください。あなたの命は、私たちの益のために非常に必要とされているのです。どうか夜になって、病人が集まる集落へ出て、民衆の動揺が収まるまでそこに留まってください。」

そう言って、百人隊長は真夜中に聖人を密かに町から送り出した。しかし、聖人が外に出ると、偶像崇拝者たちの一部がそれを知り、急いで後を追った。そして道中で彼に追いつくと、彼が死んだと思われるまで殴りつけ、剣で切りつけた。その後、彼らは彼を置き去りにして立ち去った。

日が明けると、弟子たちがやって来て、かろうじて息をしている聖人を見つけ、彼を連れて病人のいる集落へ運び、そこで彼は七日間を過ごした。　臨終に際し、信徒たちが皆彼の元に集まると、彼は長い間、キリストの聖なる信仰から離れることなく、異教の淫らな行いを忌み嫌うよう彼らに教え、キリストの教会に対する数多くの迫害が訪れることを預言的に予告し、　また、あらゆる厳し

[5321] ミリアリウス、すなわち（ローマの）1マイルは8スタディオンに相当し、1スタディオンは現在のサジェン約88本に相当する。

[5322] ウェスパシアヌス――70年から79年まで在位した皇帝。

[5323] その出自ゆえに高貴な人物。

い災難の後、至る所で偶像が根絶され、敬虔の光が全宇宙に輝き、キリスト教徒の王たちが現れ、キリスト教徒たちは妨げられることなく生ける神に犠牲を捧げるようになるだろうと予言した。彼はその言葉に次のように付け加えた。

「もし誰かが、私たちの主イエス・キリストへの信仰を揺るぎなく保ち続けるならば、その人は死ぬことなく、永遠に生きるであろう。」

このように、そして他にも多くのことを語った後、この聖人でありキリストの殉教者は主のもとへ帰った。そして、すべての信者たちは彼を悼み、その尊い遺体を石棺に納め、不信心者たちが遺体を掘り起こして冒涜することを恐れて、地深くに埋葬した。　神の聖人アポリナリウスは、キリストの教会を二十八年と一ヶ月と四日間牧会した。　聖人は、ローマではウェスパシアヌス帝の治世下、8月の第10日（すなわち7月23日）に殉教した。私たち（キリスト教徒）にとっては、父と聖霊と共に、世々限りなく主イエス・キリストが治められる。アーメン[5324]。

聖殉教者トロフィモスとテオフィロスの記念日

7月23日の記念日

聖殉教者トロフィムとテオフィロスは、ディオクレティアヌスの治世中に殉教した[5325]。彼らと共に、さらにキリストの忠実な僕たち、真のしもべたち――計十三名が殉教した。　彼らは不義な迫害者の命令に従うことを拒み――無機質な偶像への忌まわしい生贄を捧げず――キリストを否定することも望まなかったため、拷問用の木に吊るされた。その後、異教徒たちは鋭い鉄の刃で彼らの肉体を切り刻み、また殉教者たちに石を投げつけた。　ついに、彼らの脛骨を砕き、火刑台に投げ込んだ。しかし、全能なる神の力によって、聖人たちは炎の中にあっても無傷で守られ、何の害も受けずに火の中から出てきた。すると、拷問官は、ゲヘナの火のように激しい怒りに燃え上がり、彼ら全員を剣で殺すよう命じた。　こうして、聖人たちの尊い頭は、全教会の頭である、我らの主イエス・キリストの栄光と誉れのために切り落とされた。[5326]。

8月6日

7月24日（旧暦）

聖女クリスティーナの殉教。

記念日7月24日

[5324] 聖アポリナリウスは西暦75年頃に死去した。その遺体はラヴェンナの同名の教会に安置されており、聖なる右手はローマの彼に捧げられた神殿に安置されている。

[5325] 284年から305年まで在位した。

[5326] 聖殉教者トロフィモスとテオフィロス、および彼らと共に殉教した他の13名の聖殉教者たちの功績と受難の地は、正確には不明である。　小アジアのリキア州であると指摘する者もいるが、聖アンドレイ・クリテンス（記念日は7月4日、同日付の項目でその生涯を参照）が彼らに捧げるカノンを著したという事実に基づき、聖殉教者たちの故郷はクレタ島であると考える方がより妥当である。 – 聖人たちの殉教の時期は、ディオクレティアヌス帝による迫害の時代（4世紀初頭）にあたる。

ティルス[5327] という町に、ウルヴァンという名の高貴な家柄の男がいた。彼はイゲモンの権力を握っており、その娘である若い乙女は、まだ若さの初期の頃から、自らの創造主である神を信じるようになっていた。彼女は数多くの激しい拷問を勇敢に耐え抜き、神のために自らの魂をも捧げた。

彼女が生まれた時、父と母は彼女にクリスティーナという名を与えた。それは彼らの異教的な思惑によるものではなく、神の予見によるものであった。この名こそが、ある種の預言のように、この少女が成長してキリスト教徒となり、キリストのしもべであり花嫁であり、そして殉教者となることを予兆していたのである。　彼女が十一歳を過ぎた頃、その並外れた美しさが際立ち、少女たちの中で彼女に匹敵する者は一人もいなかった。　そこで父は、彼女を世間の目から守ろうと、極めて高い部屋を用意し、最良の女奴隷たちを彼女の世話を任せた。さらに、その部屋に金や銀で造られた自分たちの神々の像を安置し、彼女に毎日それらに香を焚き、礼拝するよう命じた。　多くの貴族や富裕層の人々が、その乙女の美しさを聞きつけ、それぞれ自分の息子と結婚させたいと願った。彼らがクリスティーナの父に懇願すると、ウルヴァンはこう答えた。

「誰にも娘を嫁がせるつもりはない。彼女を私の神々に捧げるのだ。慈悲深い神々は彼女をこの上なく愛しておられる。だから、彼女を神々のために処女のままに保ち、常に神々に仕えさせよう！」

少女クリスティーナは、年を重ね、知恵を深めるにつれ、神が御自身の恵みによって彼女を啓発し、導いてくださったおかげで、真理を知るようになった。　こうして、小さな窓から空や天の星々を眺めながら、被造物を通して創造主を知り、魂のない偶像の無感覚さと空虚さを確信すると、それらに香を捧げたり拝んだりすることを拒み、代わりに東の空、高みを見上げながら、ため息をつき、涙を流して、心の中でこう語った。

「いつまで人々の心は暗く曇り続けるのか。いつまで、天と地を創造し、目に見えるほど美しいものでそれらを飾られた主なる神に向かわない、彼らの愚かな知性は曇り続けるのか？」

そう心の中で考えながら、彼女は天にまじり住まわれる唯一の、生ける真の神を礼拝し始め、涙ながらに神に祈り、自分の心が愛に燃え上がったその方を確かに知ることができるよう、神が御自身を彼女に現してくださるよう願った。　そして、彼女が祈りと断食に十分な日数を費やしたとき、神の御慈悲により、ある恵みにあずかることになった。　主の御使いが現れ、彼女に十字の印を授け、キリストの花嫁と名付け、神を知る道を完全に教え導き、苦難の試練について告げた。すなわち、三位一体の唯一の神のために、彼女は三人の拷問者によって拷問を受けることになるということである。　その試練に耐えるよう彼女を励ました後、断食で空腹になっていた彼女に、清らかなパンを味わわせた。　この天使の御出現の後、乙女は心を慰められ、救い主なる神を喜び、聖なる天使を通してお使いを遣わしてくださった神に感謝した。それ以来、彼女はさらに熱心に主に祈りを捧げ、主への愛に慰めを見出すようになった。　神への熱意に満たされた彼女は、金や銀の偶像を一つずつ取り出して砕き始め、それらを粉々に砕いた後、夜遅くに窓から通りへ投げ捨てた。すると翌朝、通りかかった人々がその砕けた金や銀を拾い集めた。

ある日、イゲモン・ウルヴァンは娘を訪ね、自分の神々に礼拝を捧げようと、その高い宮殿に入ったが、偶像が見当たらないのを見て、クリスティーナに尋ねた。

「神々はどこにいるのか？」

彼女は黙り込んだ。そこで彼は女奴隷たちを呼び寄せ、神々の行方について尋ねた。すると彼女たちは、娘が偶像に何をしたかを彼に話した。激怒した彼は、娘の頬を叩きながらこう言い放った。

[5327] ヴォルセナ島（現在のトスカーナ公国）にあるティルという町は、伝承によれば、後に水没したと言われている。また、東方の有名な都市ティルを指すとする説もあるが、聖クリスティーナの記念日は古くから特に東方において深く崇敬されてきたことに留意すべきである。

「神々はどこへ行ったのだ？」

しかし、彼女は彼に答える気はなかった。その後、しばらくしてようやくその正直な口を開き、天にまします唯一の真の神、万物の創造主を告白した。そして、いわゆる金や銀の神々を悪魔――偶像――と呼び、自分の手でそれらを打ち砕いたことを語った。　すると、激しい怒りに駆られたウルヴァンは、剣で女奴隷たちを皆殺しにし、娘には様々な拷問を加えた。まず容赦なく枝や鞭で打ち据え、その後、縛り上げたまま牢獄に放り込んだ。　このことを知った母は、泣き叫びながら娘のもとへ駆けつけ、キリストから背を向け、先祖の神々のもとへ戻るよう説得した。しかし、キリストの殉教者は母の言葉を聞くどころか、次のように言って母自身を拒絶した。

「私をあなたの娘などと呼ぶな。私がキリストの名を帯びていることを、あなたは知らないのか。私たちの家系の中で、その名にふさわしい者は誰もいなかったではないか。名においても行いにおいても、私はもはやあなた方の家系に属する者ではなく、キリストに属する者だ。私は天の王であるキリストの親族となり、そのしもべであり、娘となった。キリストこそが、私にとって父であり、母であり、主なのだ！」

母は長い間そのように泣き続け、何も成し遂げられないまま、悲しみに暮れて去っていった。夜が明けて日が昇ると、悪霊に駆られて凶暴さへと突き動かされたウルヴァンは、娘に対する自然な愛情を忘れ、法廷の座に着いた。彼は聖クリスティーナを、実の娘としてではなく、見知らぬ他人であり、大悪党として苦しめようとしたのである。　聖女が牢獄から法廷へと連行されると、彼女を見た多くの女性たちはこう言った。

「神よ、あなたのしもべクリスティーナを！彼女があなたに救いを求めたのですから、どうか彼女をお助けください！」

こうして、キリストの羊はウルヴァンの前に立った。それは父としてではなく、拷問者であり、肉食の獣としてであった。そして、その父は狡猾な言葉で彼女を誘惑し始めた。

「お前のことが気の毒だ、わが子よ。どうか我らの偉大なる神々に近づき、私と共に彼らに犠牲を捧げてほしい。そうすれば、神々は汝を憐れみ、汝が神々に対して犯した罪を赦してくださるだろう。もしそうしなければ、お前は私の娘ではなく、私はお前を憐れまない。」

「私をあなたの娘と呼ばなければ、あなたは私に大きな喜びを与えてくれるでしょう」と聖女は答えた。「なぜなら、あなたはサタンの僕であり、私はキリストの僕だからです。私は決してあなたの娘ではありません。私の父は、私の創造主だからです。」

激しい怒りに燃えたウルヴァンは、その乙女を裸のまま拷問台に吊るし、鋭い鉄で彼女の清らかな乙女の体を削り、砕くよう命じた。そして、その体は骨がむき出しになるほどに削り取られた。彼女が絞首台から解き放たれ、拷問の最中に落ちた自分の体の断片が地面に転がっているのを見ると、それらを拾い集めて父の顔に投げつけ、こう言った。

「娘の肉を食らえ。」

父はさらに激しく激怒し、聖クリスティーナを拷問場の鉄の車輪に縛り付け、その下に火を点けさせ、熱した油を彼女の体に注ぐよう命じた。火の上で車輪に回される聖クリスティーナの体は、まるで魚や食用の肉のように焼かれた。　人間、とりわけ女性にとって、このような拷問から生き延びることは不可能であったが、神は御自身のしもべの命を守り、御自身の聖なる御名を賛美し、異教徒たちを屈辱に陥れるために、彼女を強め給うた。このように拷問を受ける聖クリスティーナは、神を賛美し、神に祈りを捧げた。　聖なる天使たちは目に見えない形で彼女のそばに立ち、その苦しみを和らげていた。そのとき、神の御命令により、突然、炎の中から巨大な火柱が分離し、周囲に立っていた不信心者たちへと襲いかかり、千人もの人々を焼き尽くした。ウルヴァンは、殉教者にこれ以上どう対処すべきか分からず、彼女を牢獄に投じるよう命じた。　そこで、祈りの最中に主の天使が彼女に現れ、その傷を癒やし、彼女を完全に健康な状態に戻した。天使は持参した食物も与えた。殉教者は力を取り戻し、神を賛美した。その後、司祭は彼女を海に投げ込むよう命じた。　家来たちは

、キリストのしもべである彼女を船に乗せ、岸から遠く離れた場所まで運び、首に大きな石を縛り付けて深淵に投げ込んだ。神の天使が彼女を受け入れ、首から石を解いた。石は沈んでいったが、聖女は形なき者の手に支えられ、まるで陸を歩くかのように水の上を歩いた；　こうして海は、彼女が切望していた聖なる洗礼の洗盤となった。明るい雲が彼女を覆い、上空からは、聖なる洗礼の儀式に定められている通り、聖三位一体の御名が彼女の上に告げられた。そして聖クリスティーナは、御前に現れ、 を喜びで満たす言葉を彼女に語りかけた主を目にした。 陸に上がると、彼女は父親の前に姿を現し、彼を恐怖に陥れた。実際、不信心な父親は、海から生きて現れた聖なる乙女を見て、驚きと恐怖に襲われた。　しかし、彼はそのような奇跡の中にも神の力を認めず、それを魔術の仕業だと見なした。彼は再び殉教者を牢獄に投じ、翌朝、剣で彼女を処刑するつもりだった。しかしその夜、彼自身が予期せず死の鎌に刈り取られ、永遠に滅びてしまった。一方、聖女は生き残り、神を賛美し、感謝を捧げた。

ウルヴァンの予期せぬ死後、王から彼の後任としてディオンという名の別の（イゲモン）が派遣され、彼は牢獄に閉じ込められているクリスティーナについて知らされた。　彼は彼女を牢獄から連れ出し、自身の裁判にかけた。最初は甘言で殉教者を背教へと誘おうとしたが、彼女が聖なる信仰において揺るぎないことを知ると、鞭打ち、鉄の爪で引っ掻き、火で焼くなどして、長く彼女を拷問した。　彼は鉄のフライパンを激しく熱するよう命じ、その上に裸の聖女を横たえて回転させ、沸騰した油と樹脂を注ぎかけながら、近くに立っていたアポロンの偶像に拝むよう強要した。　しかし、殉教者はダイヤモンドのように[5328] 、イエス・キリストの至聖なる御名を告白する揺るぎない信念を貫いた。そして彼女は祈りによってアポロンの偶像を破壊し、偶像が倒れて塵と化したその時、統治者ディオンもまた地面に倒れ、息絶えた。　偶像の中に宿っていた悪魔は、その住処が破壊されると、熱心な僕であるその魂を連れ去り、自らと共に地獄へと連れ去った。一方、聖なる殉教者は再び鎖と牢獄に囚われた。　しかし、キリストの乙女の苦難は決して無駄ではなかった。なぜなら、民衆の多くがそのような奇跡を目撃し、唯一の神イエス・キリストを賛美し、三千人もの人々が彼を信じるようになったからである。また、長い間牢獄に閉じ込められていた聖女のもとへ、改宗を望む人々が訪れ、　彼女は、ユリアヌスという名の別の総督がティルスに赴任するまで、彼らに教えを説き続けた。

彼は聖女を法廷に召喚し、彼女に様々な拷問を加えた。　まず巨大な炉に火を点け、三日間それを赤熱させた。その後、殉教者をそこに投げ込み、蓋を閉めた。聖女クリスティーナは五日間、その炉の中に留まったが、火に焼かれることなく、まるで古代のバビロンの若者たちのように（ダニエル書 3:1–100）；　まるで宮殿に座っているかのように、彼女は神を賛美して歌った。というのも、主の天使たちが彼女と共にいて、炉に水を注ぎ、涼しく保ち、彼女の歌声に自分たちの歌声を合わせていたため、炉の番をしていた兵士たちは、歌う人々の声を耳にしたのである。　五日後、炉が開けられたとき、聖女は傷ひとつなく無事で、火に全く焼かれておらず、キリスト教の神は賛美され、異教の不義は恥辱にさらされた。しかし、サタンの悪意に目がくらんでいたイゲモンは、この出来事に神の力を見出さず、このような驚くべき奇跡を魔術だと呼んだ。　何としてもこの克服不可能な相手を打ち負かそうと、彼はあらゆる毒蛇を操る術を持つ魔術師や呪術師を呼び寄せ、呪文で数多くの蛇、マムシ、サソリを集め、それらすべてを殉教者に放ち、その毒牙で彼女を死に至らしめるよう命じた。　しかし、爬虫類たちが聖女に放たれたとき、それらは彼女の周りを這い回り、さらには彼女の体に巻き付いたにもかかわらず、一匹として彼女に害を及ぼすことはなかった。　その傍らには、魔術師たちの首領が立っており、囁きや策略を用いて、毒蛇たちに少女を噛み殺すよう煽っていた。しかし、毒蛇たちは神の御心により、その魔術師に向かって猛然と襲いかかり、たちまちその噛みつきで彼を死に至らしめた。そして聖女は毒蛇たちにこう言った。

[5328] すなわち、ダイヤモンド。

「イエス・キリストの御名によって、這う蛇たち、マムシたち、サソリたちよ、命じる。誰も傷つけずに、それぞれ自分の場所へ戻れ！」

すると、蛇たちはたちまち四方八方に散っていった。しばらくして、彼女は蛇に噛まれて亡くなった男を憐れみ、主に祈りを捧げて彼を復活させ、その結果、彼はキリスト教徒となった。彼だけでなく、多くの人々がこのような驚くべき奇跡を目撃し、主を信じるようになった。　一方、公爵は激怒し、彼女の処女の乳房を切り落とすよう命じたが、傷口からは血の代わりに乳が流れ出た。そこで、キリスト・神を賛美していた彼女の舌を切り落とした。しかし、殉教者は舌を切り落とされた後もはっきりと話し、切り落とされた舌を掴んで公爵の顔に投げつけ、彼の目に直撃させた。

「食らえ、不信心者よ、私の体の一部を！」と彼女は言った。

この舌が目に触れたことで、公爵は失明したが、聖女はさらに強い力で神を賛美し、偶像や偶像崇拝者たちを罵倒した。　一方、イゲモンは、聖クリスティーナの侮辱的な言葉をこれ以上耐えられず、自らの失明に怒りを覚え、彼女を死刑に処すよう命じた。そこで聖女は兵士たちの鉄の槍で貫かれ、汚れなき乙女であり、キリストの偉大な殉教者である聖クリスティーナは、その清らかで聖なる魂を主の御手に委ねた。　主は彼女の姿を通してこれほど偉大な力を示されたため、三 の凶暴な拷問者たちでさえ、一人の乙女を打ち負かすことはできなかった。聖クリスティーナの親族の一人で、キリストを信じる者が、彼女の苦難に満ちた遺体を受け取り、尊厳をもって埋葬した。　これらすべては、ローマ人とギリシャ人にとっては不敬虔なセヴェルスの治世において、キリスト教徒にとっては主イエス・キリストの偉大なる治世において起こった。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン[5329]。

コンダク、第4声：

光に満ちた鳩として現れ、黄金の翼を持ち、天の高みへと舞い上がった、尊きクリスティーナよ。それゆえ、私たちはあなたの栄光に満ちた祝祭を祝う。信仰をもって、あなたの聖遺物が収められた聖櫃に礼拝を捧げ、そこから、魂と肉体のすべてに、神の豊かな癒しが豊かに注がれるのである。

我らの尊き父ポリカルプ、ペチェルスクのアルヒマンドリトの生涯

記念日：7月24日

祝福され、称賛に値するポリカルプ――その名は「実り多い」を意味する[5330]――は、善行においても実り豊かであり、天の創造主がこう語られたその豊かな実を結んだ。　*「もし小麦の一粒が地に落ちて死ななければ、ただ一粒のままである。しかし、もし死ねば、多くの実を結ぶ」*（ヨハネ12:24）、また、*「わたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまる者は、多くの実を結ぶ」*（ヨハネ15:5）。この祝福された方は、はかない栄光とこの世の姿を塵に帰し、洞窟で名高い修道院において聖なる天使のような修道者の姿を受け入れ、まるで耕された土地に蒔かれた一粒の麦のように、あらゆる断食の修行によって自らの肉体を死に至らしめつつ、霊においては常に神の中に留まっていた。　このようにして、彼は悔い改めにふさわしい多くの実を結び、御自身において御霊のすべての実を現した。すなわち、神と兄弟たちに対する偽りのない*愛*、清い良心による*喜び*、あらゆる情欲に対する勝利の*平安*、不幸や悲しみにおける*忍耐*、すべての人への従順における*慈愛*、　貧しい人々へ

[5329] 他の、より信憑性の高い伝承によれば、聖クリスティーナはディオクレティアヌス帝の治世下、300年頃に殉教した。
[5330] ポリカルプは、ギリシャ語から訳すと「多産な」という意味である。

の心からの思いやりによる憐れみ、戒めを守る揺るぎない*信仰*、誓いを果たす真摯さ、怒りを知らない*柔和*さ、豊かで美味しい飲食、そしてあらゆる肉欲からの*節制*（ガラテヤ5:22–23参照）。 これらすべての実を、神は至福のポリカルプの中に育まれましたが、それを植え付けたのは、ウラジーミルおよびスーズダリの司教である聖シモンでした[5331] 。後者は彼と血縁関係にあり、ポリカルプが霊的にも自分から離れていくことを望まず、良き根として、良き枝を育てようと努めたのです。 そのため、シモン自身がペチェルスクの聖修道院からウラジーミルおよびスーズダリの司教座に任命された際、彼は至福のポリカルプをその地へ連れ出した。 そこで彼はポリカルプに徳ある生活を奨励し、そのために、かつてのペチェルスクの聖なる修道士たちについて、自身が読んだことや目撃者たちの会話から聞いたこと、彼らがどのような過酷な労苦を背負ったか、 また、彼らがいかに神に喜ばれたか、さらには、天において朽ちることのない冠を受けた証しとして、この地においても聖遺物が奇跡的に朽ちることなく輝いていることなどについて語った。そして、至福のポリカルプは、従順によって自らの心の土を耕し、そこに父なる教訓の種を蒔き、百倍の果実を結んだ。 彼は自ら徳において実り豊かであっただけでなく、すべての正信者にも同様の実り深さを根付かせようと願った。それゆえ、至福のシモン司教から聞いた、洞窟の尊い父たちの神に喜ばれる功績について、彼はこれらすべてを、他の救いを求める者たちのためにも に書き記すことに尽力した。 こうして、その至福の司教のもとで生活する中で、彼はペチェルスクのアルヒマンドリトである至福のアキンディンへの書簡において、多くの聖人たちの驚くべき生涯を記した。これらの生涯は、『キエフ・ペチェルスク聖人伝』の第2部に収められている。 その後、至福のポリカルプは、肉親として父であり師であるシモンとは別れたものの、彼の司教区から再びペチェルスク修道院に戻った後も、その徳によってその聖なる人物から離れることはなかった。彼は、かつての教えを心にしっかりと根付かせ、それを守り、実践するよう努めたのである。 また、聖シモンもまた、神の霊感に満ちた訓戒や、洞窟の聖人たちの徳ある生活を描いた記述で満ちた書簡を通じて、ここでも彼を教え続けることをやめなかった。この書簡を常に眼前に置き、至福のポリカープは父の言葉をすべて心の石板に刻み込み、心で読み解き、実践に移した。 このように厳格に修行を重ねた結果、彼は高い徳の境地に達した。

ペチェルスクのアルヒマンドリトである至福のアクインディンが、キリストの群れを慈愛と神に喜ばれる方法で牧し、深き老齢に達し、長年の労苦の末に主のもとへ移り、永遠の安息を得たとき、神に選ばれた聖なる兄弟たちのうち、ポリカルプ以外に、これほど年長で、修道生活の修行においてこれほど経験豊かな者はいなかった。 それゆえ、キリストの善き戦士たちからなる全軍は、満場一致かつ心を一つにして、この至福の者を指導者および導き手として選んだ。彼は、至聖なる神の母およびペチェルスクの尊者アントニオスとテオドシオスに捧げられた聖なる大修道院の舵取りを執るにふさわしく、またその能力を備えた人物であったからである。 これは、キエフ大公ロスティスラフ・ムスティスラヴィチ[5332] の治世下、また、同名の第四代ミトロポリスであるヨアン[5333] 、聖クリ

[5331] シモンはペチェールスク修道院の修道士であった。そこから、大公ヴセヴォロド・ユリエヴィチによって、彼がウラジーミルに設立したロズデストヴェンスキー修道院のイグメンに任命された。その後、シモンは1214年にロストフ教区から分離されたウラジーミル教区の初代司教に任命された。 シモンは12年間の在任を経て、1226年に死去した。ポリカルプもまたペチェールスク修道院の修道士であり、同修道院から2度にわたりイグメーンの座に就き、2度ともその職を辞してペチェールスク修道院に戻った。その後、彼はペチェールスク修道院のイグメーンとなった。 ウラジーミル司教シモンからポリカルプへの書簡、およびポリカルプからペチェールスクのアルヒマンドリトであるアキンディンへの書簡には、ペチェールスクの奇跡行者たちや、大聖堂の建設時に修道院内で起こった奇跡に関する一連の伝承が記されており、これらをもとに有名な『ペチェールスク・パテリク』が編纂された （オテチク、オテチェスカヤ・クニガ、すなわち「教父たちの書」または「教父たちに関する書」）が編纂された。

[5332] ロスティスラフ・ムスティスラヴィチ――1154年に大公（在位1週間）；1158年から1167年にかけて2度目の大公在位。

[5333] イオアン4世は、1164年から1166年までキエフ都主教を務めた。

メント[5334] によって聖別されたミトロポリス・クリムに次ぐ第三代ミトロポリス在任中の時期であった。 聖ペチェールスカ・ラヴラ修道院[5335] の指導者となった後、至福のポリカルプは、尊者テオドシウス[5336] が定めたすべての修道院規則を、何一つ（余計なものを）加えることなく守り抜くよう熱心に努めた。彼は救いの事業において熟練した指導者であり、まさにそのような人物こそが、奇跡を行うこのラヴラに求められていたものであり、同修道院はその彼によって名声を博した。　至福のポリカルプの指導の下でのその規律正しさの評判は、至る所に広まった。多くの貴族や支配者たちは彼の教えを仰ぎ、徳のある生活を志したため、彼と共に暮らしたいという願いから自らの栄光ある王座を捨てた。その顕著な例が、永遠に記憶されるキエフの公ロスティスラフ・ムスティスラヴィチである。　このキリストを愛する人は、常に聖ポリカルプの生き方を模範とし、次のような善き習慣を自らに定めた。　四旬節の間、毎週土曜日と日曜日には、ペチェールシクの修道士十二人と、十三人目となる至福のアルヒマンドリト・ポリカルプを昼食に招き、食事を振る舞った後、手ぶらで帰すことは決してなかった。　そして彼自身は毎週日曜日、神聖な秘跡を受け、涙と心の底からの嘆息、そしてうめき声を上げて祈ったため、その深い感銘に満ちた姿を見た者は誰一人として、涙をこらえることができなかった。　そして、聖なる大斎が終わると、ラザロの土曜日に、キリストを愛する公爵は、断食の功徳によって輝きを放つペチェールスクのすべての至福の長老たちを招集し、彼ら全員を温かくもてなし、施しを贈り、敬意を込めて送り出した。　彼は他の修道院の修道者たちに対しても同様に招いてもてなしたが、とりわけペチェルスクの修道者たちを重んじた。それは、彼ら全員の徳高い生活、とりわけ、ペチェルスクの初代指導者であるアントニウスとテオドシウスにあらゆる点で倣った、彼らの至福の師ポリカルプを深く愛していたからである。　そのため、公爵はしばしば、その聖なる指導者に、ペチェールスク修道院の修道士の一員として自分を受け入れてくれるよう懇願した。しかし、聖なるポリカルプは彼にこう答えた。

「敬虔な公爵よ！ 神はあなたに、別の生き方――すなわち統治し、正義の裁きを行い、十字架への接吻を厳格に守ることを命じられたのです。」

すると、ロスティスラフ公はこう反論した。

「聖なる父よ！ この世の君主としての地位は罪なしにはあり得ません。私はすでにそれに嫌気がさし、日々の心配事に疲れ果てています。ですから、老後だけでも少しでも神に仕え、狭く困難な道を歩み、天の御国に到達した諸侯や王たちに倣いたいのです。」

この言葉に、聖ポリカルプはこう言った。

「キリストを愛する公爵よ！ もしあなたが心からそう望むのであれば、神の御心に従いましょう。」

[5334] 通常、モンゴル侵攻以前の時期、キエフのミトロポリトはコンスタンティノープルで選出・叙任されていたが、ミトロポリトがギリシャ人ではなく、生粋のルーシ人で、ルーシ国内で選出・叙任された事例は2件しか知られていない。1051年には、ミトロポリト・イラリオンがこのように就任した；　1147年には、クリムあるいはクリメント大主教が任命された。大主教の選出と叙任のために招集された司教会議（1147年）において、チェルニヒウの司教は、コンスタンティノープル総主教の承認とは別に、ロシア人大主教の任命を正当化して、次のように述べた。　「私は、司教たちが公会議を構成するにあたり、大主教を任命する権利を有していることを知っている。さらに、我々の手元には聖クリメントの頭蓋骨（聖遺物）がある。ギリシャ人が聖ヨハネの御手によって（総主教を）任命するように、（我々も大主教を任命する）のである」。

[5335] 1164年、至福のポリカルプは選出され、キエフ・ペチェール修道院のアルヒマンドリトに叙任された。

[5336] 『ペチェルスクのアンソニーの行状録』参照

公爵はこの決意を実行に移すことは叶わなかったものの、以下のことから、それが彼にとって真に熱烈な心の願いであり、聖ポリカルプの善き模範に触発されて生まれたものであることがはっきりと見て取れる。

スモレンスクで公が重病に陥り、キエフへ運ばれるよう命じたとき、妹のログネダは、兄がこれほど衰弱しているのを見て、こう懇願した。

「ここスモレンスクに残ってください。ここで私たちの教会にあなたを葬りましょう。」

すると、彼は彼女にこう答えた。

「どうかそうはしないでほしい。たとえ私が非常に弱っているとしても、やはりキエフへ運ばせてほしい。　もし神が旅の途中で私をお召しになるなら、私の遺体を父が建てた聖テオドール修道院に安置してください。もし神がこの病から私を救ってくださるなら、聖ペチェールスク修道院で、至福のポリカルプのもとで修道士になることを誓います。

その後、病状が悪化し、死の淵に立たされたとき、彼は自分の霊的指導者であるシメオン神父にこう言った。

「ペチェールスク修道院のあの聖なる人物のもとで出家することを許さなかったことについて、あなたは神に答えなければならない。私はそれを切に望んでいたのだ。主よ、私が誓いを果たせなかった罪をお赦しください！」

こうして彼は安らかな最期を迎えた。この永遠に記憶される公爵の、かくも徳高い生涯の始まりであり、その原動力となったのは、他ならぬ、私たちの尊い父ポリカルプの苦行に満ちた生き方の模範と、神に霊感を受けた言葉であった。ポリカルプは、公爵の治世において、聖なる奇跡を行うペチェールスク・ラヴラの立派な長を務めていた。　修道者たちだけでなく、敬虔な信徒たちをもその徳高い模範で導き、彼らを悔い改めと救いの道へと導いた。こうして彼は、神から託された羊の群れを慈愛をもって牧した。　彼は長寿を全うし、深き老齢に達して、世界の創造から6690年、キリストの降誕から1182年の7月24日、聖殉教者であるルーシの君主ボリスとグレブの祝日に、主のもとへ召された。その遺体は聖衣をまとわせられ、聖なる父たちと共に栄誉をもって埋葬された。

彼の死後、修道院には大きな困難が生じた。修道者たちは新たなイグメーンを選ぶことができなかったのである。多くの祝福された長老たちがその位にふさわしかったにもかかわらず、謙遜と沈黙の誓いゆえに、誰もその職を受け入れようとはしなかった。　彼らにとっては、従順の道を歩み、隠遁の生活を送るほうが、たゆまぬ努力によって築き上げた美徳という宝を、指導者としての職務に付き物の心配事や悲しみによって浪費しないため、より望ましいことだと考えていた。修道者たちは深く嘆き、悲しんだ。これほど大きな群れが、たった一時間たりとも牧者なしでいることは許されなかったからである。　火曜日、鐘が鳴らされた。兄弟たちは皆、教会に集まり、自分たちの窮状について聖母マリアと聖アントニオ、聖テオドシオに祈りを捧げ始めた。また、修道士――新しく天に召された福者ポリカルプ――の助けを呼び求め、彼に、神に懇願して、自分の代わりにイグメーンを指し示していただき、　それによって、彼が主に喜ばれたかどうかが示されるようにと願った。すると奇跡が起こった。まるで一つの口から多くの者が同時にこう言ったかのようだった。

「シェコヴィツァの敬虔な司祭ヴァシリーのもとへ行こう[5337]　、彼を我らのイグメンとし、ペチェルスク修道院の修道士たちを統率させよう。」

皆はヴァシリー神父の前に進み出て、頭を下げてこう言った。

「私たち、ペチェルスク修道院の兄弟たちは皆、あなたに頭を下げ、あなたを私たちの父であり、イグメンとしてお迎えしたいのです！」

司祭ヴァシリーは大変驚いたが、彼らに深々と頭を下げて礼を返し、こう言った。

[5337] キエフの聖地。

「聖なる父たちよ！私はただ修道生活のことしか考えていませんでした。私のような不適格者が、どうしてイグメンになれるでしょうか。」

彼は長い間断り続けたが、ついに彼らの執拗な懇願に折れた。そこで兄弟たちは彼を修道院へと連れ帰った。

金曜日、神に選ばれたこのヴァシリーの剃髪式には、キエフのニキフォール大主教[5338] と、神を愛する司教たち――トゥロフのラヴレンティイとポロツクのニコライ――、そしてすべての尊い修道院長たちが参列し、ニキフォール大主教自らが彼に剃髪を行った。 こうして彼は、聖ペチェルスク修道院の修道士たちの長であり、良き牧者となった。彼の祈りによって、彼はすべての人にとって徳の模範となり、天の導き手であり牧者たちの長である、主なる神、そして私たちの救い主イエス・キリストの栄光と誉れのために、 御方こそ、初めなき父と、至聖にして善き、命を与える御霊と共に、すべての被造物から絶え間ない賛美と礼拝を受けるにふさわしい方であり、今、常に、そして世々限りなく。アーメン。

- 同日は、ロシアの聖殉教者であるボリス（ロマン）公とグレブ（ダビデ）公の記念日である。（5月2日参照

8月7日

7月25日（旧暦）

同日、1444年に聖マカリア・ジェルトヴォドスキーが帰天した。

聖女エウプラクシアの生涯

記念日：7月25日

敬虔なテオドシウス大帝の治世[5339] 、コンスタンティノープル[5340] には、王の親族であるある高位の重臣アンティゴノスという人物がいた。彼は言葉にも行いにも理知に富み、助言においても賢明であった。 彼は常に国政に関して良き有益な助言を与え、さらに人に対して親切で思いやりがあり、貧しい者には慈悲深く、助けを求める者すべてを喜んで助けていた。皇帝は彼を、単なる親族としてだけでなく、敬虔なキリスト愛好者であり、優れた助言者として愛していた。 アンティゴノスはまた非常に裕福であり、王に次いで彼ほど裕福な者は誰もいなかったほどであった。 彼は、同じく王族出身の美しい娘、エウプラクシアを妻に迎えた。彼女は敬虔で神を畏れ、聖なる教会を訪れることを好み、涙を流して神に祈りを捧げ、主の聖所を飾るために神の教会に惜しみなく寄進した。アンティゴンとエウプラクシア――この高貴で神に愛される夫婦は、心身ともに結ばれ、王と王妃からも愛されていた――の間に、一人の女児が生まれた。彼女には母の名にちなんでエウプラクシアと名付けられた。ある時、その子の誕生後、アンティゴンは妻のエウプラクシアにこう言った。

[5338] ニキフォロス2世。年代記には1182年から1197年にかけて言及されている。

[5339] テオドシウス大帝――379年から395年までの皇帝。

[5340] ビザンティウム――紀元前658年にボスポラス海峡のヨーロッパ側に設立されたメガラの植民地。その利便性に優れた「黄金の角」湾と、黒海とマルマラ海を結ぶ狭い海峡における支配的な位置により、同地は重要な貿易・産業上の地位を確保していた。 コンスタンティヌス大帝は、ビザンティウムの立地がもたらす利点を評価し、西暦330年にローマ帝国の首都をここに移した。これにより、ビザンティウムは世界史的な重要性を獲得し、過去とのつながりを断ち切り、「コンスタンティノープル」、すなわち「新ローマ」と呼ばれるようになった。

「妻よ、この世の命は短く、この虚しい世の富など何の意味もないことを、あなたは知っているだろう。人の命はかろうじて八十歳まで続くに過ぎないが、神を畏れる者たちのために天に用意された富は、果てしない永遠に存続するのだ。」　それなのに、私たちは世俗の心配事に縛られ、一時的な富に惑わされ、魂に何の益ももたらさないまま、虚しい日々を過ごしているのだ。

これを聞いて、エウプラクシアはアンティゴノスに尋ねた。

「では、私たちは何をすべきでしょうか、ご主人様？」

アンティゴンは答えた。

「私たちは神の御名のもとに一人の娘をもうけた。一人いれば十分だ。肉欲的な夫婦の結びつきを断ち切り、それなしに生きていこう。」

すると、エウプラクシアは両手を天に掲げ、目を天に向け、ため息をつきながら夫に言った。

「主なる神を賛美します。あなたを御自身の畏れへと導き、真の知恵を授けてくださったのですから。」　正直に申し上げます、夫よ。私は何度も神に、あなたの心を照らし、そのような善き考えをあなたの心に授けてくださるよう祈ってまいりましたが、その願いをあなたに打ち明ける勇気は決してありませんでした。あなたが自らこのことを口にされたのですから、私も少しばかり申し上げさせてください。

「どうぞ、おっしゃってください、ご夫人。何を望まれるのですか」とアンティゴンは承諾した。

「ご主人様、ご存知でしょう」とエウプラクシアは続けた。「使徒がこう言っているのです。*『時はすでに短い。だから、妻を持つ者は、持たない者のようにあり、泣く者は、泣かない者のようにあり、喜ぶ者は、喜ばない者のようにあり、買う者は、買わない者のようにあり、この世のものを楽しむ者は、楽しまない者のようにありなさい。　この世の様相は過ぎ去っていくからです」*（Iコリント7:29–31）。ですから、この儚い人生を、あなたが望むように、肉欲的な交わりなしに過ごし、共に永遠に朽ちることのない命を得ましょう。　今、私たちが持っているほどの富や財産――それらが私たちに何の役に立つというのか。それらを棺桶の中に持ち込むことなどできるだろうか。それゆえ、あなたの善意をもって、これらも貧しい人々に分け与えなさい。そうすれば、私たちが下した決断が無駄になることはないだろう。

妻のこの言葉を聞いたアンティゴノスは、神を賛美し、自分の財産を貧しい人々に惜しみなく分け与え始めた。そして妻とは、兄弟姉妹のように、肉体的関係を持たずに、互いに霊的な愛を分かち合い、心を一つにして神に奉仕して暮らした。　このような徳ある生活規範を自らに課したアンティゴンは、妻との交わりを持たずにわずか一年を過ごした後、主のもとへ召された。王と王妃は、彼を親族として、また義にかなった敬虔な人として悼んだ。　また、彼らはまだ非常に若くして未亡人となったエウプラクシアに対しても哀悼の意を表した。彼女は夫との夫婦の交わりをわずか2年3ヶ月間過ごし、その後は1年間、交わりなく暮らしていたのである。 アンティゴノスの埋葬後、王と王妃は熱心にエウプラクシアを慰めた。彼女は娘を抱き上げ、王と王妃に託すと、彼らの足元にひれ伏し、泣きじゃくりながらこう言った。

「この孤児を、神とあなた方の御手に委ねます。あなた方の親族であったアンティゴノスの思い出として彼女を受け入れ、彼女にとって父と母の代わりとなってください。」

その場に居合わせた多くの人々が涙を流し、王と王妃自身も泣いた。それから4年後、エウプラクシアの娘が5歳になったとき、王は彼女の母親と相談した上で、その子をある上院議員の息子――娘が成長するまで待つと約束した高貴な青年――と婚約させた。　これを確定すると、王はエウプラクシアに、その青年から誓約と保証を受け取るよう命じた。しばらくして、ある上院議員が、アンティゴノスの未亡人であるエウプラクシアと結婚したいと考え、王妃に対し、王に内緒で、数人の高貴な女性たちを通じてエウプラクシアを説得し、自分との結婚に同意させるよう頼んだ。　王妃は

、宮廷の女性たちをエウプラクシアの未亡人のもとへ遣わし、前述の元老院議員と結婚するよう彼女に勧めた。これを聞いたエウプラクシアは泣き出し、訪ねてきた女性たちにこう言った。

「神に、未亡人として清らかに生きることを誓った私に、そのような助言をするとは、来世であなたたちは悲惨な目に遭うでしょう。私の前から立ち去ってください。あなたの助言は私の望みに反しています！」

そのような叱責を受けた彼女たちは、恥じ入ってその場を去り、このことを王妃に報告した。このことを知った王は、王妃に対して激しく怒り、彼女を責めた。

「お前は」と王は言った、「お前にとって全くふさわしくないことをしてしまった！　果たしてそれはキリスト教の王妃にふさわしいことか？　お前は神に、敬虔に統治すると誓ったはずではないか？　私たちにとって親しい親族であり、有益な助言者であったアンティゴノスのことを、そうやって覚えているのか？」　彼の妻は、彼とわずかな間しか共に暮らさず、彼の望みに従い、神のために清らかな生活を選んだというのに、お前は彼女を説得して、再び世俗の生活に戻らせようとしているのだ！お前は神を恐れていないのか！お前のような愚かな者には、誰もが嘲笑するだろう！

この言葉を聞いて、女王はひどく恥じ入り、まるで石のように二時間ほど黙り込んでしまった。そして、エウプラクシアをめぐって、王と女王の間にはかなりの争いが生じた。　それを聞いたエウプラクシアは深く悲しみ、死を思わせるほど嘆き、顔色も蒼白になった。彼女は密かにコンスタンティノープルを去ることを決意し、苦々しい涙を流しながら娘のエウプラクシアにこう言った。

「私の子よ、私たちにはエジプトに広大な領地があるの。そこへ行きましょう。あなたは、お父様と私の財産を見てくるのよ。だって、それはすべてあなたのものだから。」

娘と少数の男奴隷や女奴隷を連れて、彼女は皇帝に内緒で都を離れ、エジプトに到着すると、自分の領地の管理に取りかかった。　彼女は時折、使用人や家政係を連れて内陸のフィヴァイダへ赴き、教会や修道院――男子用も女子用も――を巡り、金や銀を惜しみなく配って、多くの寄付を行った。

町の近くには、タヴェンヌの女子修道院があり、そこには130人の修道女がいた。彼女たちの神への奉仕については、民衆の間で多くの称賛の声が聞かれていた。彼女たちのうち、誰一人としてワインを飲んだり、油やブドウ、あるいはいかなる果物も口にしたりすることはなかった。　幼い頃から修道院に入った者の中には、果物などを見たことさえない者もいた。彼女たちの食事は、パンと水、ソチヴォ（大麦の粥）、そして野菜だけで、それも油は一切使わなかった。食事は一日に一度、夕方にとった。中には一日おきに、あるいは二日おきにわずかな食事をとる者もいた。彼女たちは決して休息をとらず、体を洗うこともなかった。　風呂など言うまでもない。彼女たちは裸になることなど聞いたこともなく、「風呂」という言葉そのものが、彼女たちにとっては非難や恥、嘲笑の対象となっていた。寝床は、地面に敷かれた長さ三肘、幅一肘の羊毛のぼろ布だけであり、その上で、それもほんの少しだけ眠っていた。　彼女たちの衣服は、足まで覆うほど長く、地面に届くほどの毛皮の衣だった。そして、一人ひとりが自分の力の限り、できる限り働いた。もし誰かが病気になったとしても、薬は一切受け取らず、あたかも神からの大きな祝福を受け入れるかのように、感謝の念を持って病に耐え、神のみに助けを待った。　彼女たちのうち、修道院の塀の外に出たり、訪ねてくる人々と話したりする者は誰もおらず、すべてのやり取りは一人の門番を通じて行われていた。彼女たちの熱意はすべて、祈りの中で神と対話し、神に喜ばれることに注がれていた。　それゆえ、神は彼女たちの祈りを受け入れ、彼女たちのために多くの奇跡を起こし、そこに集まってくるあらゆる病人に癒やしを与えられた。至福の未亡人エウプラクシアは、この修道院と、そこで暮らす修道女たちの驚くべき生活に深く感銘を受けた。彼女はしばしば娘を連れてそこを訪れ、教会に蝋燭や乳香を捧げた。 ある日、彼女は修道院長や他の年長の修道女たちにこう言いました。

「この修道院に、20リットルか30リットル[5341] の金というささやかな献げ物を捧げたいと思います。どうか、私と娘、そして亡くなった娘の父アンティゴノスのために、神に祈ってください。」

一方、修道院長は――彼女はディアコニッサ[5342] であり、テオドゥラという名だった――こう答えた。

「お嬢様、このあなたのしもべたちは、金も財産も全く必要としません。彼女たちは、永遠の恵みを享受できるよう、この世のすべてを捨て去りました。ですから、天の富を失わないよう、私たちはこの地上に何も持ちたくありません。」　とはいえ、あなたを悲しませないために――教会のランプ用の油を少し、ろうそくと乳香を持ってきてください。そうすれば、主から報いを受けるでしょう。

エウプラキアはそのまま実行し、修道院長とすべての修道女たちに、夫のアンティゴノスと娘のために祈ってほしいと頼みました。

ある日、エウプラクシアがいつものようにこの修道院を訪れると、修道院長はまるで神の御霊の導きを受けたかのように、エウプラクシアの幼い娘にこう言った。

「エウプラクシア様、あなたはこの修道院と、ここにいるシスターたちを愛していますか？」

「はい、修道院長様」と彼女は答えた。「私はあなた方を愛しています。」

「もし私たちを愛しているのなら」と修道院長は続けた。「修道女として、私たちと一緒にいてください。」

少女はこう答えました。

「本当に、母が悲しまなければ、私はここから離れません。」

すると、修道院長は彼女に尋ねた。

「正直に言ってごらんなさい。あなたがもっと愛しているのは、私たちですか、それとも婚約者ですか？」

「彼のことなんて知りません」と少女は答えた。「でも、あなたたちのことは知っていますし、愛しています。それなら、あなたたちも教えてください。私と、あなたがたが『婚約者』と呼ぶあの方、どちらをもっと愛しているのですか？」

修道院長はこう答えた。

「私たちはあなたと、私たちのキリストを愛しています。」

それに対し、少女はこう打ち明けた。

「私もあなたたちと、あなたたちのキリストを愛しています。」

そして、彼女の母エウプラクシアは座って、娘の賢明な言葉を聞きながら、目から涙が溢れ出ていた。　修道院長も、小さな少女の言葉を感動しながら聞き入り、まだ子供――まだ七歳にもなっ

[5341] リトラは、約1ポンドに相当する重量単位である。

[5342] ディアコニッサは使徒たちの時代からすでに存在していた。使徒パウロは『ローマ人への手紙』（ローマ16:1）において、かつて「ケンクレアの教会の奉仕者」であったフィベについて言及している。 使徒時代以降、教会会議（第1全地公会議、決議19；第4全地公会議、規則15；第6全地公会議、規則14）において、また教父や教会の教師たち、さらには皇帝たちが法令（ユスティニアヌス、ノヴェラ3、6、123）の中で、ディアコニッサについて頻繁に言及している。 当初、ディアコニッサには主に処女が選出され、未亡人からは「忠実で敬虔であり、一度しか結婚したことがない者」のみが選ばれていた（『使徒憲章』第VI巻、18）；　しかし、ユスティニアヌス帝の時代には、どちらのグループからも選出することが許可され、しかも40歳未満でも選出可能となったが、実際の奉仕は40歳に達してから任されることとなっていた。（第4回全教会会議、規定15；ユスティニアヌス・ノヴェラ　123）；ただ、敬虔な生活で際立っていた女性のみは、いかなる試練を経ることなく、直ちにディアコニッサに任命された。 ディアコニッサの職務は以下の通りであった：1）女性の洗礼の準備を行うこと、2）女性の洗礼式において教会の奉仕者を補助すること、3）女性に関する司教からの様々な指示を遂行すること――病者や不幸に見舞われた人々を訪問すること、4）教会堂内における女性や子供たちの規律を監督すること。

ていない――が、これほど賢く答えることに驚いていた。やがて、娘を不憫に思った母親は、彼女にこう言った。

「さあ、私の子よ、もう夕方だから家に帰ろう。」

しかし、少女はこう答えた。

「私はここに残って、修道院長様と一緒にいます。」

それに対し、修道院長はこう言った。

「お母さんと一緒に家に帰りなさい。あなたはここにいてはいけません。ここに住めるのは、キリストに身を捧げた少女だけなのですから。」

「キリストはどこにいるの？」と少女は尋ねた。修道院長は喜び、指でキリストの聖像を指し示した。少女は駆け寄り、救い主のイコンに口づけをし、修道院長に向き直って言った。

「本当に、私もキリストに誓います。母と一緒にここを離れることはせず、あなた方と一緒にここに留まります。」

「お嬢さん」と修道院長は反論した。「寝る場所がないでしょう。ここに留まることはできませんよ。」

「あなたがたが何の上で寝ているのか、私もその上で寝ます」と少女は答えた。

すでに夕暮れが夜へと移り変わろうとしていたが、母と修道院長はあらゆる手段を尽くして少女に修道院を出て家に帰るよう説得し続けた。しかし、少女はそこから離れることを全く望まなかったため、どうすることもできなかった。ついに、修道院長は彼女にこう言った。

「子よ、もしここで暮らしたいのなら、読み書きや詩篇を学ばなければならないし、他の修道女たちと同じように夕方まで断食もしなければならないわ。」

「断食もしますし、何でも学びます。ただ、私をここに置いておいてください」と少女は承諾した。

すると、修道院長は母親にこう言った。

「奥様、彼女をここに残してください。彼女の中に神の恵みが輝いているのがわかります。彼女の父の義なる行いと、あなたの清らかな生き方、そしてお二人の親としての祈りと祝福が、彼女を永遠の命へと導いているのです。」

そこで、高貴なエウプラクシアは、娘を救い主のイコンの前に連れて行き、両手を天に掲げて、涙ながらにこう言った。

「主イエス・キリストよ、どうかこの子をお守りください。彼女はあなたを慕い、あなたに身を委ねたのです！」

それから、少女に向かってこう言った。

「エウプラクシア、わが娘よ！　山々を揺るぎなく据えられた神が、あなたを御自身の畏れの中に堅く据えてくださいますように。」

そう言いながら、彼女は少女を修道院長に託し、自身は泣きながら胸を叩き、修道女たちは皆、彼女と共に泣いた。こうして、彼女は娘を神に委ねて修道院を後にした。

翌朝早く、彼女は再び修道院を訪れた。修道院長は少女エウプラクシアを連れ出し、教会へと導き、祈りを捧げた後、母親の立ち会いのもと、彼女に天使の修道服を着せた。母親は、天使の修道服を身にまとった娘を見て、両手を天へと掲げ、神にこう祈り始めた：

「永遠の王よ、彼女の中に善き業を始められたあなた、どうかそれを完成させてください。彼女にあなたの聖なる御心を行わせてください。幼い頃からあなたに身を委ねたこの孤児が、創造主であるあなたから恵みを受けられますように。」

それから、母は娘に尋ねた。

「わが子よ、この修道服は気に入ったか。」

「はい、大好きです」と少女は答えた。「修道院長様や他の修道女たちから、この服はキリストが、御自身を愛する者たちへの婚約の証として与えてくださるものだと聞いたからです。」

母はそれに対してこう言った。

「娘よ、あなたが婚約しているキリストが、どうかあなたを御自身の宮殿に迎え入れてくださいますように。」

そう言うと、彼女は娘に口づけをし、修道院長やすべての修道女たちに別れを告げて、修道院を後にした。いつものように、彼女はエジプトの他の修道院――荒野にあるものも都市にあるものも――や、乞食たちの住処を訪ね歩き、自分の財産をもって、すべての貧しい人々や困窮している人々を助けた。　至福の未亡人エウプラクシアの誉れ、その善行と数え切れないほどの慈愛の行いは至る所に広まり、その噂はテオドシウス大帝自身やその高官たちの耳にも届いた。皆、彼女のそのような生き方に驚き、彼女を支えてくださった神を賛美した。　彼女については、魚も食べず、ワインも飲まず、毎日夕方まで断食し、夜遅くにごく少量の断食食――クティ　や野菜――を摂るという話が広まっていた。莫大な財産を持ちながら、これほど節制していることに、誰もが驚嘆した。　数年後、前述の修道院の修道院長は、高潔な未亡人エウプラクシアを招き、密かにこう告げた。

「奥様、重要なことをお伝えしたいのですが、お怖がらないでください。」

「どうぞ、お話しください、奥様、何であれ」と彼女は答えた。修道院長は次のように言った。

「もし娘さんのことを決めたいのなら、一刻も早くそうしてください。私は夢の中で、あなたの夫アンティゴノスを見ました。彼は偉大な栄光に包まれて、主キリストの御前に立ち、あなたにこの肉体を捨てて、彼と共にあり、彼がその徳ある生涯によって授かったのと同じ栄光を享受するよう、主にお祈りしていたのです。」

これを聞いた敬虔な女性は、動揺するどころか、むしろ大いに喜んだ。彼女は肉体を離れ、キリストのもとへ行きたいと願っていたのだ。彼女は直ちに、すでに十二歳ほどになっていた娘を呼び寄せ、こう言った。

「わが子よ、エウプラクシア！修道院長様がおっしゃったように、キリストがすでに私を召しておられる。私の最期の日も近い。だから、あなたのお父さんと私の全財産をあなたに託す。天の御国を相続できるよう、それを誠実に管理しなさい。」

乙女エウプラクシアは泣きながら言った。

「ああ、なんてこと！　私は一人ぼっちの孤児になってしまった！」

「子よ」と母は彼女に言った。「あなたには、婚約したキリストという父がおられる。あなたは孤独な孤児になるわけではない。母の代わりに修道院長様があなたを見守ってくださる。ただ、キリストに約束したことを果たすよう努めなさい。　神を畏れ、姉妹たちを敬い、謙虚に彼女たちに従いなさい。決して心の中で、自分が王家の出身だなどと考えてはならない。また、「彼女たちが私のために働くべきであって、私が彼女たちのために働くべきではない」などと言ってはならない。謙虚でありなさい。そうすれば、主はあなたを愛してくださる。この地上で貧しい者でありなさい。そうすれば、天国で富む者となるだろう。　さあ、すべてはあなたの手に委ねられている。もし修道院がお金を必要とするなら、必要なだけ与えなさい。そして、私とあなたの父のために祈り、私たちが神の憐れみを受け、永遠の苦しみから解放されるように願ってほしい。

至福のエウプラクシアは、このように娘に遺言を残した。三日後、彼女は主のもとへ召され、その修道院に埋葬された。

王は、アンティゴノスの妻エウプラクシアが亡くなったと聞き、かつて少女エウプラクシアが婚約していた上院議員を呼び寄せ、彼女が世俗を捨てて修道院に入ったことを告げた。　その上院議員は、王に対し、彼女を至急呼び戻し、直ちにコンスタンティノープルへ婚約者のもとへ来させ、二人の結婚を成立させるよう、切に懇願した。王はこれを急いで実行に移した。しかし、キリストの花

嫁であるエウプラクシアは、王の手紙を受け取り、それを読み終えると、笑いながら腰を下ろし、王に直接次のような手紙を書いた。

「陛下！まさか、このあなたのしもべである私に、キリストを見捨て、今日生きていても明日には虫に食われるような、朽ちゆく死すべき人間と結ばれるよう命じられるおつもりでしょうか？どうか私にそのようなことを強要なさらないでください。そして、その男が私のせいで陛下を煩わせることのないようお願いたします。私はすでにキリストの花嫁であり、主を裏切ることはできませんから。」　しかし、陛下にお願い申し上げます。私の両親の追悼として、彼らの全財産を聖なる教会や修道院、貧者、未亡人、孤児たちに分配してください。　そして、男奴隷と女奴隷を自由の身とし、両親の領地の管理人たちに、債務者たちの借金をすべて免除するよう命じてください。私の主よ、すべてを適切に実行してください。そうすれば、私は心配や妨げなく、魂のすべてを託した私のキリストに仕えることができます。　王様、そして王妃様、あなた方のしもべである私のために、主にお祈りください。主が私に、御自身に仕えるにふさわしい者と認めてくださいますように。

このように自らの手で返事を書き終えると、エウプラクシアはそれを封印して使者に手渡した。使者はコンスタンティノープルへと戻った。エウプラクシアの手紙を受け取った王は、王妃と二人きりでそれを読み、感動のあまり多くの涙を流し、エウプラクシアのために神に祈りを捧げた。　翌日、皇帝はすべての貴族たち、そしてその中にはエウプラクシアと婚約していた若者の父も含まれていたが、を召集し、皆の前で彼女の手紙を読み上げるよう命じた。それを聞いた者たちは皆、涙ながらにこう言った。

「王よ、まことにこの乙女は王家の血を引く者であり、アンティゴノスとエウプラクシアという素晴らしい両親の美しい子、聖なる血筋から生まれた聖なる子です！」

そして皆、心を一つにして、彼女のために神を賛美した。婚約者の父もまた、エウプラクシアについて王に何も言うことを敢えてしなかった。王は、当然のこととして、両親から受け継いだ彼女の全財産を教会や貧しい人々に分配し、こうして彼女の願いを叶えた。その後しばらくして、王は主のもとへ旅立った。　そしてエウプラクシアは、神に喜ばれるよう、さらに熱心に修業に励み、身の限界を超えて断食を行った。　彼女が最も過酷な生活様式を選んだ時、彼女は十二歳だった。最初は一日に一度、それも夕方に食事をとっていたが、やがて翌日まで、そしてついには三日目まで断食するようになった。　彼女は、あらゆる熱意をもって姉妹たちに仕え、謙虚に最も過酷な仕事もこなした。食堂や他の独房を掃除し、姉妹たちの寝床を整え、台所に水や薪を運び、食事を調理し、食器を洗い、修道院のあらゆる奉仕において、彼女ほど熱心な者はいなかった。　その修道院には、ある慣習があった。もし修道女が眠りの中で悪魔の誘惑にさらされた場合、直ちに修道院長に報告しなければならなかった。　修道院長は涙ながらに神に祈り、そのシスターから悪魔を追い払ってくださるよう願い、そのシスターに石を集めて、毛布の敷く床の下に敷き詰め、その上で眠るように命じ、さらにその上に灰を敷き、その状態で十日間眠るように指示した。　ある日、エウプラクシアもまた、眠りの中で誘惑者からいくつかの誘惑を受けた。そこで彼女は、自分の毛皮の寝床の下に石を集め、その上に灰をまいた。それを見た修道院長は微笑んで、年長の修道女の一人にこう言った。

「ほら、この娘も悪魔に苦しめられ始めたわ！」

そして、彼女のために祈り始めた。

「神よ、御自身の御姿に似せて彼女を創造し、この修道生活を選ぶよう命じられた方よ、どうか彼女を御自身の畏れの中に堅く立たせ、悪魔の誘惑から守ってください！」

それから、彼女はエウプラクシアを呼び寄せ、尋ねた。

「なぜ、悪魔からの誘惑があったことを私に告げず、隠していたのですか？」

すると、彼女は修道院長のもとにひれ伏し、こう言った。

「お許しください、修道院長様。お話しするのが恥ずかしくて……」

「わが娘よ」と修道院長は彼女を励ました。「これが敵との戦いの始まりです。彼に打ち勝ち、冠を得るために、強くありなさい！」

しばらくして、エウプラクシアは再び悪魔の誘惑にさらされ、彼女を深く愛し、修行において導いてくれていたユリアという修道女にそのことを打ち明けた。するとユリアは彼女にこう言った。

「エウプラクシア様、これを修道院長に隠さず、きちんと話して、あなたのために祈ってもらってください。修道院長ご自身も、若い頃、悪魔からの誘惑を多く経験されたそうですから。」　伝えられるところによると、ある夜、激しい誘惑にさらされた彼女は、独房を出て、星空の下に立ち、両手を天へと掲げ、食事も水も睡眠も取らずに、立ち続け、神に祈り続け、悪魔に打ち勝つまで、四十日四十晩そのままでいたそうです。　私たちも皆、敵から誘惑を受けることがありますが、キリストの助けによって、その誘惑者を打ち負かすことができると信じています。ですから、姉妹よ、このことに驚いたり、戸惑ったりしないでください。そして、あなたに起こったことを一刻も早く修道院長に話してください。恥ずかしがらないで!

これを聞いて、エウプラクシアはユリアに感謝して言った。

「姉妹よ、私を導き、私の魂を強めてくださったことに対し、神があなたを助けてくださいますように。私は行って、大修道院長様に私に起きたことをお話しします。」

「ただ話すだけでなく」とユリアは付け加えた。「あなたのために祈っていただき、あなたの信仰の行いをさらに深めていただけるよう、お願いしてください。」

エウプラクシアは行って、修道院長に悪魔の誘惑について話した。修道院長は彼女に言った。

「これを不思議に思うな、わが娘よ。悪魔はあらゆる武器を用いて私たちを襲ってくるが、恐れるな。彼があなたを打ち負かさないよう、勇敢に、揺るぎなく立ち向かいなさい。　あなたにはまだ多くの誘惑が待ち受けている。しかし、悪魔に打ち勝ち、あなたの花婿であるキリストから勝利の冠を受け取るために、精進しなさい。できる限り断食を厳しくしなさい。苦行によって栄誉が与えられるのだから。教えてくれ、娘よ、どのように断食しているのか?

「私は二日に一度食事をとっています」とエウプラクシアは答えた。

「断食の日をもう一日増やしなさい」と修道院長は言った。「そして、4日目の日没後に食事をとるようにしなさい。」

エウプラクシアはこの指示を喜んで受け入れた。

エウプラクシアは二十歳になり、体は成熟し、美しく、その高貴な家柄を物語っていた。再び誘惑にさらされた彼女は、そのことを修道院長に告げると、修道院長は彼女にこう言った。

「さあ、娘よ、その石をここに運んで、かまどのそばに積み上げなさい。」

エウプラクシアは直ちにそれらの石を運び始めた。その中には、二人の力強い修道女でも持ち上げるのがやっとという大きな石も混じっていた。　しかし彼女はそれらを一人で持ち上げ、肩に担いで運んだ。彼女は　肉体も強かったが、従順さにおいてはさらに強く、石が重いから、あるいは空腹で力尽きたからという理由で、誰にも助けを求めず、熱心に命令を遂行した。　彼女がすべての石を運び終えると、数日後、修道院長は再び彼女にこう言った。

「いいえ、これらの石がストーブのそばに置かれているのは良くない。また元の場所に戻しなさい。」

彼女は微塵も逆らうことなく、再び作業に取りかかり、命じられたことを丹念に実行した。修道女たちは彼女のそのような従順さ、忍耐力、勤勉さに驚嘆したが、若い者の中には笑う者もいれば、こう言う者もいた。

「頑張れ、エウプラクシア姉妹、強くあれ！」

しかし、彼女は陽気で、働きながら歌を歌っていた。その労働は三十日間続き、その後、修道院長は彼女にその仕事をやめるよう命じ、パン屋での奉仕に送り出した。　彼女はあらゆる命令を大きな喜びをもって果たした。時にはパン屋で小麦粉をふるい、生地をこね、パンを焼き、時には台所

で食事を調理し、薪を割ったり、時には食堂で姉妹たちの世話をしたりした。そして、いかなる仕事においても、彼女は決して怠けたり、命令に背いたり、不注意に扱ったり、不平を言ったりすることはなく、　あらゆる奉仕において、親切で、従順で、丁寧で、忍耐強かった。それにもかかわらず、彼女は真夜中の定例の祈りの規則も、朝の賛美歌も、第一、第三、第六、第九の祈りも決して欠かすことはなかった。そして、夕方の賛美歌の後には、断食中の修道女たちに食事を配った。

悪魔は、夜の誘惑によって再び彼女を惑わそうとした。　ある夜、悪魔は、かつて彼女が婚約していた若者の姿で夢の中に現れた。まるで大勢の兵士を率いて彼女をさらいに来たかのように、無理やり修道院から引きずり出そうとした。彼女は寝床に横たわり、夢の中で叫び声を上げ、誘拐犯の手から逃れるのを助けてくれるよう修道女たちに助けを求めた。　彼女の叫び声で修道女たちは目を覚まし、彼女の元へ駆けつけ、彼女を起こして、なぜ叫んでいたのかと尋ねた。彼女は夢の中で見た悪魔の誘惑について語り、皆が彼女のために祈り始めた。誘惑者が再び彼女を悩ませていたため、修道院長は彼女にこう言った。

「よく聞きなさい、わが子エウプラクシアよ。悪魔があなたの心を惑わしたり、あなたの努力が無駄になったりしないように。もう少しだけ耐え忍び、勇敢に悪魔と戦いなさい。そうすれば、悪魔はあなたから逃げ去るでしょう。」

また、ユリアもエウプラクシアにこう言った。

「姉妹よ、私たちが今、若く力があるうちに、敵と戦い、打ち負かさなければ、年老いてからどうやって彼に打ち勝つことができるというのか？」

エウプラクシアは彼女にこう答えた。

「主が生きておられる限り、私の姉妹ユリアよ、もし修道院長が命じられるなら、私は主の助けによって、私を誘惑する敵に勝利するまで、丸一週間、食事を摂らないつもりです。」

「本当に、私の姉よ」とユリアは反論した。「私にはそんなに長く断食することはできません。でも、あなたができるのなら、それは立派なことです。修道院全体を見渡しても、私たちの母である修道院長を除いて、一週間も食事を摂らないでいられる人は誰もいません。」

そこでエウプラクシアは修道院長のもとへ行き、一週間何も食べないという断食を行う許可を求めた。修道院長は彼女にこう言った。

「できる限りのことをしなさい、わが子よ。あなたの創造主である神があなたを強め、悪魔に打ち勝つ力を与えてくださいますように！」

こうしてエウプラクシアは一週間の断食を始め、日曜日にのみ食事を摂りながらも、修道院の務めも姉妹たちへの奉仕も一切怠らなかったため、皆は彼女のその偉大な功績に驚嘆した。　「もう一年もエウプラクシアを見守ってきたけれど」と、修道女たちの中にはこう言う者もいた。「彼女が座っているところ、たとえ食事のときでさえ、見たことがあるだろうか？　いいえ、見たことはないわ。夜、ベッドで休むときくらいしか。それさえも、立食しているのよ。」

そして、すべての修道女たちは、彼女が王家の出身でありながら、あれほど勤勉で謙虚であったことを愛し、神に彼女のために祈り、神が彼女に強さと救いを授けてくださるよう願った。

修道女たちの中には、ヘルマナという名の女性が一人いた。彼女は、噂によると、身分の低い貧しい奴隷の娘だったという。彼女だけは、皆に愛されていたエウプラクシアを好きになれなかった。悪魔が彼女の中に嫉妬を煽っていたのだ。ある日、ヘルマナは台所で一人で働いているエウプラクシアを見つけ、こう言い放った。

「エウプラクシアは一週間ずっと断食しているのに、私たちはできない。もし修道院長が私たちにも同じように断食しろと言ったら、どうすればいいの？」

エウプラクシアは彼女にこう反論した。

「ごめんなさい、姉さん。私たちの偉大なお方様は、一人ひとりが自分の力の範囲内で精進するようお命じになりました。私にこの仕事を無理やり押し付けたわけではありません。」

ヘルマナは怒りを露わにして言った。

「偽り者め、お前は実に狡猾な手口ばかりだ！　お前が、皆に目立ち、称賛されたいという虚栄心から、わざとそうしていることは誰の目にも明らかだ。修道院長が亡くなれば、その地位がお前に引き継がれることを望んでいるのだ。だが、神に誓って、お前が私たちを統率することなど決してない、と私は確信している！」

エウプラクシアは謙虚に彼女の足元にひれ伏した。

「お許しください、女主人様」と彼女は言った。「私は神とあなたに対して罪を犯してしまいました！」

修道院長がこれを知ると、ゲルマナを呼び寄せ、すべての修道女たちの前で彼女を叱責し始めた。

「邪悪で不敬虔な女よ！　エウプラクシアがあなたに何の悪事を働いたというのか、なぜ彼女の神に喜ばれる行いを妨げるのか？　あなたは不適格者として、教会の礼拝や姉妹たちとの食事から追放されることになる！」

エウプラクシアは涙ながらに長い間、イグメニアにゲルマナを許すよう懇願したが、三十日間は聞き入れられなかった。三十日目に、エウプラクシアはユリアを連れて行き、年長のシスターたちに、イグメニアにゲルマナの許しを請うよう頼んだ。イグメニアはゲルマナを呼び出し、こう言った。

「この忌まわしい者よ、善行を妨げることがどれほど大きな悪であるか、まだ理解していないのか？　彼女は上院議員の娘であり、王家の血を引いているにもかかわらず、これほど謙虚で、神に身を捧げ、あなたのような不適格な者に仕えているのだということを、少しも考えなかったのか。」

すると、修道女たちは皆、ゲルマナのために修道院長に懇願し始め、ようやく彼女を説得して、ゲルマナは許された。こうして、目に見える敵は一時的にその悪意を収めたが、目に見えない敵である悪魔は、エウプラクシアの謙虚さによって打ち負かされたことを恨み、彼女との戦いをやめようとはしなかった。　ある夜、悪魔は彼女に邪悪な世俗的な妄想を抱かせ、彼女を深く動揺させた。彼女は、自分に対して武装した敵の激しい攻撃を察知すると、ベッドから飛び起き、十字を切ってから自分の独房を出て、　中庭の特別な場所に立ち、両手を天へと伸ばし、目と心を天に向け、その場に立ち尽くして昼夜を問わず祈り続け、まるで地面に埋め込まれたかのように、40日間、微動だにしなかった。その間、彼女は水も飲まず、食事もせず、誰とも話さず、眠らず、両手を下ろすこともなかった。　彼女が立ち続けて間もない頃、修道院長はこのことを知ると、彼女のところへやって来てこう言った。

「神があなたを祝福し、忍耐を授けてくださいますように、娘よ！」

当時、エウプラクシアは二十五歳だった。彼女が二週間立ち続けたとき、修道院長と修道女たちは、彼女のその忍耐を微笑みながら見守り、彼女を喜んで見守っていた。三十日が過ぎると、修道女たちは驚き、修道院長にこう言った。

「母上、どうやらエウプラクシアは、かつてあなたがそうされていたように、あなたの40日間の修行を成し遂げたいようです。」

「神が彼女を御加護くださいますように」と修道院長は答え、「皆で彼女のために祈りましょう！」

四十日が過ぎても、彼女はさらに五日間立ち続け、やがて力尽きて地面に倒れ込み、まるで死んだかのように横たわった。修道女たちが集まり、彼女を部屋へ運び込んだが、彼女の腕を曲げることはできなかった。彼女は全身が木のように硬直しており、一言も発することができなかった。修道院長は彼女に食事を持ち込み、その口元に差し出し、こう言った。

「わが子エウプラクシアよ！　我らの主イエス・キリストの御名によって、これを食べなさい！」

すると彼女はすぐにその食べ物を口に運び、食べ終えると話し始め、少し体力が回復して立ち上がった。彼女を教会へ連れて行き、このような偉業を成し遂げさせた神キリストに感謝を捧げた。その後、エウプラクシアは少しずつ食事を摂るようになり、回復していった。

この時から、悪魔はもはや邪悪な妄想や肉欲の煽動によってエウプラクシアを惑わすことはできなくなった。キリストの花嫁は、悪魔の誘惑に対して決定的な勝利を収めたのである。そこで悪魔は、古来よりの殺人者（ヨハネ8:44）として、彼女に対して別の策略を練り始めた。彼は次のようにして、彼女の命を完全に奪おうとしたのである。　ある日、聖女エウプラキアは水を汲むために水瓶を持って井戸へやって来た。すると悪魔は、神の許しを得て、彼女を捕らえて井戸に投げ込んだ。彼女は、後に自ら語ったところによると、頭が井戸の底に届くところまで沈んだが、水面に浮上すると、バケツから井戸の中に垂れ下がっていたロープにしがみつき、こう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、私をお助けください！」

エウプラクシアが井戸に落ちたという叫び声が上がり、修道女たちと修道院長が集まって彼女を引き上げた。彼女は十字を切って、微笑みながらこう言った。

「私のキリストは生きておられる！　悪魔よ、お前は私を打ち負かすことはできない。私はお前には屈しない。今日までは一つの器で水を運んでいたが、これからは二つの器で運ぶことにする。」

そして、彼女はそうするようになった。その後、彼女は台所用の薪を割ることになった。薪を割ろうと斧を振り下ろしたとき、悪魔が彼女の両手を狂わせた。彼女は斧で自分の足を打ち、すねを切り裂いてしまった。傷は深く、大量の血が流れた。彼女は力尽きて地面に倒れ込み、まるで死んだかのように横たわっていた。　それを見たユリアは、恐怖に駆られて叫び声を上げ、姉妹たちのところへ駆け寄って、エウプラクシアが斧で足を傷つけ、死んでしまったと告げた。姉妹たちが集まり、泣きながら彼女の周りに取り囲んだ。修道院長がやって来て、彼女の顔に冷たい水をかけ、十字を切ってこう言った。

「わが子エウプラクシアよ！　なぜ息絶えてしまったのか？　目を覚まして、姉妹たちに何か言ってあげなさい。彼女たちはあなたを案じているのだから。」

彼女は目を開き、修道院長にこう言った。

「泣かないでください、母上様。私の魂は健在です。」

すると、修道院長は主に向かってこう祈った。

「主イエス・キリストよ！　あなたのしもべを癒してください。彼女はあなたのためにこれほどまでに苦しんでいるのです。」

その後、修道院長は彼女の足に羊毛の布を巻きつけ、エウプラクシアを助け起こして、独房へ連れて行こうとした。しかし彼女は、横たわっている薪を見てこう言った。

「私の主よ、生きておられますように！薪を集めて台所に運ぶまでは、ここから離れません。」

「私が集めるから」とユリアは言った。「あなたは行って、横になってなさい。」

しかし、エウプラクシアはユリアに薪を集めさせず、自ら薪を両腕いっぱいに抱えて運んだ。台所へは階段を登らなければならなかった。エウプラクシアが最上段に足を踏み出したとき、悪魔が彼女の足を絡ませて邪魔をした。彼女は服の裾を踏んでしまい、手に持っていた薪の上に顔から転んでしまった。薪の端が目のそばの顔に突き刺さった。　ユリアは悲鳴を上げて彼女の元へ駆け寄り、こう言い始めた。

「薪は運べないって言ったでしょう、横になってなさいって。でもあなたは私の言うことを聞かなかったのよ。」

「悲しまないで、姉さん」とエウプラクシアは反論した。「私の顔から木片を慎重に抜いてください。神の御加護により、私の目は無事です。」

とげは取り除かれた。傷口からは大量の血が流れていた。修道院長は油と塩を取り出し、祈りを捧げた後、傷口に塗った。一方、ユリアはエウプラクシアをなだめ始めた。

「さあ、お嬢様、ベッドに横になってお休みください。私が姉妹たちのお世話をいたします。」

しかし、エウプラクシアはこう答えた。

「私の主よ、姉妹たちへの奉仕を終えるまでは、休むつもりはありません。」

姉妹たちは皆、彼女の傷が痛んでいるため、休むよう強く懇願したが、彼女は休むことを拒んだ。彼女は立ちっぱなしで食事を調理し、両方の傷口からは血が流れ出していた。姉妹たちへの奉仕と食事の支度を終えるまで、彼女は横にならなかった。奉仕をすべて終えて、夜遅くになってようやく自分の寝床に戻ったのである。　神は彼女のそのような忍耐をご覧になり、すぐに傷を癒やし、彼女は回復した。しかし、悪魔は嫉妬のあまり身もだえし、再び彼女を滅ぼそうとした。ある日、彼女は何らかの用事で修道女たちと共に高い建物に登ったが、悪魔は彼女を頂上から突き落とした。　彼女と一緒にいた修道女たちは、急いで階段を駆け下りていった。彼女たちは、エウプラクシアがあれほどの高さから落ちれば、間違いなく死んでしまっただろうと思っていたのだ。しかし、彼女は無傷で地面から立ち上がり、彼女たちの方へと歩いてきた。彼女たちが「怪我はなかったか」と尋ねると、彼女はこう答えた。

「どうやって落ちたのか、どうやって立ち上がったのか、自分でも分かりません。」

そして皆、御自分のしもべを死から守ってくださった神を賛美した。

またある時、彼女が姉妹たちのために大鍋で野菜を煮ており、沸騰している鍋を火から下ろそうとしたとき、悪魔が彼女の足をすくった。彼女は後ろに倒れ、沸騰した料理が入った鍋が顔の上にひっくり返った。　彼女の助手であるユリアが「エウプラクシアが熱湯を浴びた！」と叫ぶと、近くにいた修道女たちが一斉に駆けつけた。しかし、エウプラクシアは素早く地面から立ち上がり、ユリアに微笑みながら言った。

「何をしたの、姉妹よ？　修道女たちや修道院長を無駄に騒がせてしまったわね！」

そして、誰もが彼女の顔が無傷で、少しも火傷をしていないのを見た。修道院長は釜の中をのぞき込み、底に残った熱湯がまだぐつぐつと煮立っているのを見て、エウプラクシアに尋ねた。

「あなたには熱湯がかからなかったの？」

「主が生きておられる限り」と彼女は答えた。「顔に感じたのは、熱湯ではなく、まるで冷たい水のような感覚でした。」

修道院長は驚き、こう言った。

「神が最後まであなたをお守りくださいますように、わが子よ！」

その後、彼女は年長の修道女たちに二人きりでこう言った。

– ご覧なさい、エウプラクシアは神の恵みにあずかったのです。屋根から落ちても怪我をせず、顔に熱湯を浴びても無傷で済んだのです。

「そうね」と修道女たちは答えた。「エウプラクシアは真の神のしもべであり、主が彼女を守っておられるのね。これほど多くの試練から、主は彼女を救ってくださったのだから。」

この修道院には、近隣の町や周辺の村々から、一般の女性たちが訪れ、病気の子供たちを連れてくるほか、悪霊に取りつかれた人々も連れてきました。前述の通り、主は、神に献身する修道院長と、神の御心に従って生きる修道女たちの祈りによって、病人に癒やしを与え、悪霊を追い出されたのです。　彼女たちは教会に集まり、さまざまな病人のために共に祈りを捧げ、病人は癒やされ、健康な姿で家路についた。　その修道院には、幼い頃から、彼女の中に住み着いた凶暴な悪魔――他の不浄な霊たちの首領――に苦しめられてきた、一人の悪霊に取り憑かれた女性がいた。この女性は手

足に鎖で縛られており、歯ぎしりをし、口笛を吹き、泡を吹き、大声で叫んでいたため、誰もがその叫び声に怯えていた。　修道院長は年配の修道女たちと共に、この苦しむ女性から悪魔を追い払ってくださるよう、教会で何度も神に祈ったが、彼女たちの祈りは聞き入れられなかった。神の御心により、これは大きな奇跡と、キリストの花嫁エウプラクシアの聖性を示すためのものとして残されていたのである。これについては後述する。　この女性には非常に凶暴な悪魔が取り憑いており、誰も彼女に近づくことができなかった。　彼女は地下室の一室で柱に縛り付けられており、食事や飲み物は遠くから差し出されていた。食器を長い棒の先に結びつけ、そこにパンや豆、何かの野菜を入れて彼女の方へ差し出すのだが、彼女はしばしば、棒付きの食器を掴むと、それを差し出した人々の顔に投げつけていた。　こうして、彼女は長い間、修道院でそのような扱いを受けていた。ある日、門番が修道院長のもとへやって来て、ある女性が修道院に現れて泣いていると告げた。彼女には、麻痺を患い、耳が聞こえず口もきけない八歳の子供がいて、その子の癒やしのために祈ってほしいと懇願していたのである。　修道院長は、神からの啓示によって、エウプラクシアにすでに癒しの恵みと悪霊に対する権威が与えられていることを知っていたため、彼女を呼び寄せ、こう言った。

「行って、門のそばに立っている母親からその子を受け取り、ここへ連れてきなさい。」

彼女は行って、全身が麻痺し、耳も口も不自由なその子を見て、憐れみに駆られ、ため息をつくと、その子に十字を切ってこう言った。

「あなたを創造された神が、あなたを癒してくださいますように、子よ！」

そう言うと、彼女は子供を抱き上げ、修道院長のもとへ向かった。彼女が子供を抱いて歩いている間に、子供はたちまち癒され、話し始め、母親を呼んだ。エウプラクシアは、子供が話し始めたのを聞いて恐怖に駆られ、子供を地面に下ろした。すると子供は立ち上がり、母親を呼びながら門の方へ走り去った。　門番が駆けつけて、このことを修道院長に報告した。すると修道院長は、その子の母親を呼び寄せ、こう言った。

「一体どういうことでしょうか、姉妹よ。健やかな子供を連れて、私たちを試そうと来たのですか？」

「主キリストが私の証人です、修道院長様」と母親は答えた。「今まで私の子供は、話すことも、聞くことも、手を使うこともできず、足で歩くこともできませんでした。しかし、この敬虔なお嬢様が彼を抱き上げた途端、彼は話し始め、回復し、歩き始めたのです。」

すると、修道院長はその女性にこう言いました。

「キリストの御恵みによって、あなたの子供は回復しました。平安のうちに帰り、神に感謝しなさい。」

女性が癒やされた子供を連れて去ると、修道院長はエウプラクシアにこう言いました。

「娘よ、もし彼女を恐れないのなら、この修道院にいる、悪霊に取りつかれた姉妹に、あなたの手から食事を与えてほしい。」

「恐れません、修道院長様」とエウプラクシアは答えました。「お命じになれば、そういたします。」

その後、エウプラクシアは器にパンと煮物を盛り、悪霊に取り憑かれた女性のところへ持っていった。すると、その女性はたちまち歯をぎしぎしと鳴らし、彼女に飛びかかり、器を奪い取って割ろうとした。しかし、エウプラクシアは彼女の手を掴んで、こう言った。

「主が生きておられる限り、私はあなたを地面に倒し、修道院長様の杖を手に取り、二度と暴れ回らないよう、容赦なく叩いてやる！」

憑かれた女は、エウプラクシアが自分よりはるかに強いこと――主がそのしもべを強めてくださったのだ――に気づき、恐れをなして黙り込んだ。すると聖女は、優しく彼女を諭し始めた。

「座りなさい、私の姉妹よ」と彼女は言った。「食べて、飲んで、気兼ねしないで。」

彼女は座り、食べ、飲み、そして眠りについた。それ以来、遠くから棒の先に食べ物を吊るして差し出すことはなくなり、彼女はエウプラクシアの手から直接それを受け取るようになった。姉妹たちは皆、その様子に驚嘆した。もしあの憑かれた女が動揺し始め、暴れ出し、叫び出そうとすると、姉妹たちは彼女にこう言った。

「黙りなさい。さあ、エウプラクシアが杖を持ってあなたのところへ来て、あなたを打ちのめすわよ！」

すると、すぐに憑かれた女は落ち着き、黙り込んだ。前述のヘルマナは、再び心に嫉妬を募らせ、他の修道女たちにこう言った。

「エウプラクシア以外に、あの憑かれた女に食事を運ぶ修道女はいないの？　私にパンをくれれば、私もエウプラクシアと同じように、あの憑かれた女に仕えるわ。」

彼女はパンとクチャを手に取り、取り憑かれた女のそばへ近づいて言った。

「これを受け取って、姉妹よ、食べて！」

すると、憑かれた女は彼女を力強く掴み、服を引き裂いて裸にし、歯をぎしぎしと鳴らして彼女を地面に押し倒し、その上にまたがり、体重をかけて肩や首の肉を噛みちぎり、食べ始めた。　恐ろしい悲鳴が上がったが、誰も彼女に近づく勇気はなかった。そこでユリアは台所へ駆け込み、エウプラクシアに言った。

「ヘルマナが、あの取り憑かれた女に殺されそうよ！」

エウプラクシアが駆けつけ、憑依された女の両手と首を掴み、傷だらけで血まみれになったゲルマナを救い出した。

「よくもそんなことをしたわね」とエウプラクシアは憑依された女に言い放った。「妹をこんなに傷つけるとは」

すると、彼女は歯を食いしばり、泡を吹いて立っていた。

「主が生きておられる限り」とエウプラクシアは付け加えた。「これからは、もしあなたがどの姉妹にも悪事を働いたら、私はあなたを容赦せず、修道院長から杖を受け取り、情け容赦なくあなたを打ちのめすわ。」

すると、その女は横になり、黙り込んだ。

翌朝早く、エウプラクシアは病人を訪ねてきた。すると、彼女は自分の着ていた服をすべて引き裂き、裸のまま地面に座り込み、自分の膿を集めて食べていた。　聖女エウプラクシアは彼女を憐れみ、涙を流した。それから、彼女に別の服を着せ、パンと水を持ってきて、食べさせ、飲ませた。自分の独房に戻ると、彼女は修道女たちに内緒で一日中泣き続け、主がその苦しむ女性を癒してくださるよう祈った。そして一晩中祈りを捧げ続けたところ、神はその祈りを修道院長に知らしめられた。翌朝、修道院長は彼女を呼び寄せ、こう尋ねた。

「わが子エウプラクシアよ、なぜ苦しむ人への祈りを私から隠したのか。もし私に話してくれていれば、私もあなたと共に尽力したのに。」

「お許しください、修道院長様」とエウプラクシアは答えました。「私は彼女がそのような忌まわしい姿にあるのを見て、彼女を憐れんでしまったのです。」

「わが娘よ」と修道院長は言った。「あなたに伝えなければならないことがある。しかし、決して驕ってはならない。見よ、キリストはあなたにその悪霊を追い出す権能を与え、他のすべての悪霊に対しても力を与えてくださったのだ。」

これを聞いて、エウプラクシアは地面にひれ伏し、頭に土をまき散らしながら、こう叫んだ。

「私のような罪深く、これほど卑しい者が、どうして悪霊を追い出せるというのでしょうか。あなた方はこれほど長い間祈り続けてきたのに、今まで一度もそれを成し遂げられなかったのですから。」

修道院長は言った。

「わが子よ、このことはあなたを待っていたのです。天において、あなたのためにどれほど偉大な報いが用意されているかを知るために。逆らわず、命じられたことを果たしなさい。」

エウプラクシアはまず教会へ向かい、我らの主イエス・キリストの聖像の前で地面にひれ伏し、天からの助けを乞いながら、涙で地面を濡らした。それから、修道院長の命令を心に留め、悪霊に取りつかれた女性の元へ向かった。その様子を見ようと、すべての修道女たちが彼女の後をついていった。病人のそばに近づくと、エウプラクシアはこう言った。

「あなたを創造された私たちの主イエス・キリストが、あなたを癒やしてくださいますように。」

そして、彼女に十字を切った。すると、悪霊は恐ろしい声で叫んだ。「この嘘つきで卑劣な修道女め！　私はこの女の中に何年も住んでいるが、誰も私を追い出せなかったのに、この不浄な女が追い出そうというのか！

「あなたを追い出すのは私ではない」とエウプラクシアは言った。「私の神であり、私の花婿であるキリストが追い出すのだ！」

すると、悪魔は叫んだ：

「出て行かないぞ、不浄な女よ。お前には私を追い出す力などない！」

「私は不浄な者よ」と聖女は答えた。「あなたが言うように、私の中にはあらゆる汚れがたくさんある。だが、そこから出て行きなさい。私の神であるキリストがあなたに命じているのだ！もし出て行きたくないのなら、私は修道院長様の杖を借りて、あなたを叩いてやるわ。」

悪魔は長い間反論し、どうしても出て行こうとしなかった。そこでエウプラクシアは修道院長から杖を受け取り、彼を威嚇してこう言った。

「出て行け。さもないと、お前を叩くぞ。」

「どうして彼女から出られようか」と悪魔は反論した。「彼女と約束を結んでしまったのだから、それを破るわけにはいかないではないか」

聖女は杖で三度打ちつけながら、こう言った。

「神の被造物から出て行け、不浄な霊よ――主キリストが命じているのだ。」

悪魔は泣き叫んだ。

「どこへ行けばいいんだ？」と彼は言った。

「漆黒の闇へ行きなさい」と聖女は答えた。「そして、永遠の炎の中へ、あなたとあなたの父であるサタン、そしてあなたたちの意志に従う者たちすべてのために用意された、果てしない苦しみの中へ。」

修道女たちは皆、近づくことを恐れ、遠くから立ち尽くしてその様子を見守っていた。悪魔は出て行こうとせず、ひたすら反論し続けたため、聖エウプラクシアは天を仰ぎ、こう叫んだ。

「主イエス・キリストよ！この時、私を恥じ入らせないでください。私のせいで、不浄な悪魔が喜ぶことのないように！」

すると、すぐに悪霊は大きな声で叫んで出て行き、その女性はそれ以来すっかり元気になった。エウプラクシアは彼女を連れて行き、体を洗い、きれいな服を着せ、教会へと連れて行った。そこで皆で共に、キリスト・神を賛美し、感謝を捧げた。　そしてエウプラクシアは、その日からさらに深い謙遜さを示し、すべての姉妹たちに、まるで奴隷のように仕えた。母親たちが病の子供たちを修道院に連れてくると、修道院長は彼らを聖エウプラクシアのもとへ送り、彼女は本心では望まなかったものの、上長の命令に従い、キリストの恵みによって彼らを癒やした。

聖エウプラクシアの祝福された臨終の時が近づくと、修道院長は夢の中で神からの啓示を受け、キリストの花嫁がすでに天の宮殿へと召されていることを知った。修道院長はこの幻に深く動揺した――愛するエウプラクシアと別れるのが名残惜しかったのだ。彼女は泣き出し、その幻について誰

にも話そうとはしなかった。　年配の修道女たちは、彼女が毎日嘆き悲しんでいるのを見て、最初はなぜそんなに悲しんでいるのか尋ねる勇気がなかった。しかし、やがて彼女たちの悲しみに心を痛め、ついにこう尋ねた。

「おっしゃってください、私たちの主よ、母上よ、なぜそれほど悲しんでおられるのですか？あなたの悲しみと涙を見るだけで、私たちの心は張り裂けそうです。」

「明日まで、そのことを明かさないでいてください」と修道院長は答えた。

「主が生きておられる限り」と年配の修道女たちは言った。「もしあなたが私たちに話してくださらないなら、母上、私たちは大変悲しんでしまいます。」

すると、修道院長はこう言った。

「朝までお話ししたくはなかったのですが、そこまでお願いされるのなら、聞いてください。エウプラクシアが私たちのもとを去ります――明日、彼女はこの世を去るのです。しかし、彼女を動揺させないよう、今日、このことを彼女に話してはいけません。彼女の時が来るまでは、この秘密を知らないでいてください。」

修道院長のこの言葉を聞いて、修道女たちは悲しみのあまり泣き崩れた。皆、エウプラクシアを深く愛し、敬っていた。彼女を神の偉大な御使いであり、キリストの真のしもべであり花嫁であると知っていたからだ。彼女を失うことは、彼女たちにとって大きな損失であった。　ある修道女が、年配の修道女たちが泣いているのを耳にし、その理由を確かめると、すぐにパン焼き場へ駆けつけ、そこでエウプラクシアがユリアと共にパンを焼いているところに出くわした。

「ご存じですか、奥様」と彼女は言った。「修道院長と年配の修道女たちが、あなたのことを思って泣いておられます。」

エウプラクシアとユリアはその言葉に驚き、黙って立ち尽くした。それからユリアはエウプラクシアに言った。

「まさか、あなたの元婚約者である王が、あなたを修道院から無理やり連れ出すよう懇願したのでは？　修道院長と年配の修道女たちが悲しんでいるのは、そのことではないでしょうか？」

「私の主イエス・キリストが生きておられる限り」と聖女は答えた。「たとえ地上のすべての王国が集まったとしても、私を私のキリストから引き離すことはできないでしょう。しかし、ユリア様、行って、彼女たちが一体何について泣いているのか、確かめてきてください。私の心はひどく落ち着かないのです。」

ユリアは立ち去り、扉のそばに立って彼らの会話を耳を澄ませた。その間、修道院長は年配の修道女たちに自分の幻視について語っていた。

「私は見たのです」と彼女は言った。「明るい衣をまとった二人の高潔な男性を。彼らは修道院に入ってきて、私にこう言いました。『エウプラクシアを放せ、王が彼女を求めている』。その後、さらに明るい衣をまとった別の二人がやって来て、こう言いました。『エウプラクシアを連れて行き、王のもとへ導け』と。」　私はすぐに彼女を連れて行きました。ある不思議な門――その美しさは言葉では言い表せません――にたどり着くと、門は自然に開き、私たちは中に入りました。そこには、人の手によるものではない、言葉に尽くせない輝きに満ちた広間と、高い玉座がありました。その玉座には、輝きに満ちた王が座っておられました。　私は中に入ることができませんでしたが、エウプラクシアは連れて行かれ、王のもとへ導かれました。彼女は王の足元にひれ伏し、その清らかな御足に口づけをしました。　私はそこで、数え切れないほどの天使や聖人たちを見ました。皆、立ち尽くしてエウプラクシアを見つめていました。それから、私は神の母、至聖なる処女マリア、私たちの御母様を見ました。御母様はエウプラクシアを連れ出し、彼女に美しい宮殿と、栄光と誉れに輝く用意された冠を見せてくださいました。そして、彼女にこう語りかける声が聞こえました。

「エウプラクシアよ！これがあなたへの報いと安らぎです。しかし今は行ってください。十日後に戻ってくれば、このすべてを果てしない永遠に楽しむことになるでしょう。」

修道院長は年配の修道女たちにその幻視についてそう語りながら、自らも涙を流し、ついにこう言った。

「あの幻視を見てから今日で十日目。明日、エウプラクシアはこの世を去るでしょう。」

これを聞いたユリアは胸を叩き、泣き叫びながらパン屋へと向かった。泣いている彼女を見たエウプラクシアは言った。

「神の御子に誓って、なぜそんなに泣いているのか、何を聞いたのか教えてくれ。」

「泣いているのは」と彼女は答えた。「今日、あなたと別れることになるからです。私たちの偉大なお方から、明日あなたが亡くなると聞いたのです。」

エウプラクシアはそれを聞くと、たちまち力を失い、まるで死んだかのように地面に倒れ込んだ。ユリアは彼女を見下ろして座り、泣いていた。

それからエウプラクシアはユリアに言った。

「私の手を取って、姉よ。私を起こして、薪小屋へ連れて行って。そこで私を寝かせて。」

ユリアはそのまま従った。エウプラクシアは地面に横たわり、泣きながら主に向かってこう言った。

「主よ、なぜあなたは、この旅人であり孤児である私を忌み嫌われたのですか？　なぜ私を見下すのですか？　今こそ私が労苦し、悪魔と戦うべき時なのに、あなたは今、私の魂を奪おうとしているのですか！　主よ、あなたのしもべである私に憐れみをおかけください。せめてこの一年だけは私を残しておいてください。そうすれば、私は自分の罪を悔い改めることができます。私はまだ悔い改めておらず、善行もなく、救いの希望もありませんから。　死者に悔い改めも涙もなく、主よ、あなたを賛美するのは死者でも、地獄へ落ちない者でもなく、生きている者たちがあなたの聖なる御名を賛美するのです。実を結ばないイチジクの木のように、私に一年だけお与えください。

彼女がそうして泣きじゃくっていると、ある修道女がそれを聞きつけ、イグメニアと年配の修道女たちのところへ行ってこう言いました。

「誰が彼女に、私たちの会話を話して、彼女の心を動揺させたのか？」と修道院長は尋ねた。「彼女の時が来るまで、この秘密を彼女に伝えるなと言ったはずではないか？　何てことをしたのだ！　時期尚早に彼女を動揺させてしまった！　さあ、彼女をここに連れて来なさい！」

聖女が連れて来られると、彼女は修道院長の足元にひれ伏し、こう言った。

「なぜ、母上、私の死が近いことを教えてくれなかったのですか。そうすれば、私は自分の罪を嘆き泣いたでしょうに！　そして今、私は救いの望みもなくこの世を去ろうとしています。私には善行がありませんから。」　どうか私を憐れんでください、私の主よ。神に私のために祈り、あと一年だけ生きさせてください。そうすれば、私は罪を悔い改めることができます。私は悔い改めずにこの世を去ることになり、どのような闇が私を包み込み、どのような苦しみ待ち受けているのか、見当もつきません。

修道院長はこれに対し、彼女にこう言いました。

「主は生きておられます、わが娘エウプラクシアよ。朽ちることのないあなたの花婿であるキリストは、あなたを天の御国にふさわしい者とされ、あなたのために美しい宮殿と永遠の栄光の冠を用意しておられます。」

そして修道院長は、彼女について見た幻のすべてを語り始め、彼女の魂に希望を吹き込みながら、そのように彼女を慰めた。さらに、エウプラクシアに、神が自分にも同じ運命を授けてくださるよう、神に祈ってほしいと頼んだ。エウプラクシアは修道院長の足元に横たわっていたが、体調を崩した。最初は悪寒に襲われ、その後、高熱に襲われた。

「彼女を連れて行きなさい」と、修道院長は修道女たちに言い、「礼拝堂へ運んでください。彼女の最期の時が来ました。」

彼女たちはエウプラクシアを運び出し、礼拝堂に寝かせ、夕暮れまで彼女のそばに座り、悲しみに暮れて泣き続けた。夕方、修道院長は修道女たちに食事を取るよう命じ、エウプラクシアのそばにはユリア一人だけを残した。ユリアは彼女と共に部屋に閉じこもり、早課の時間までそこに留まった。彼女はエウプラクシアにこう頼んだ。

「姉妹よ、主の前で私のことを忘れないでください！私があなたと離れなかったことを思い出してください。私があなたに読み書きを教えたことも、あなたが聖業に励むよう促したことも思い出してください。キリストに懇願して、私をあなたと共に天に召してくださるようお祈りください！」

朝になると、修道院長はエウプラクシアがすでに最期の息を引き取ろうとしているのを見て、ユリアを姉妹たちのところへ遣わし、こう告げさせた。

「さあ、行って、エウプラクシアに最後のお別れを言いなさい。彼女はもう間もなく息を引き取ろうとしている。」

修道女たちは集まり、泣きながら彼女に別れを告げ、こう言った。

「姉妹よ、キリストの御国で私たちのことを覚えていてください！」

しかし、彼女は話すことができず、黙ったままだった。皆が去った後、エウプラクシアによって苦しめていた悪霊から解放された女性もやって来た。彼女は涙を流しながらエウプラクシアの手に口づけをし、こう言った。

「この聖なる御手は、神のために、私のような不肖の者にも大いに役立ってくれました。その御手によって、私を苦しめていた悪魔が追い払われたのです。」

しかしエウプラクシアは彼女に何も答えなかった。そこで修道院長は言った。

「エウプラクシアよ、この姉妹がこれほど泣いているのに、何も言ってやらないのは気の毒ではないのか？」

エウプラクシアはその姉妹を一瞥して、こう言った。

「なぜ私を煩わせるのですか、姉妹よ。私を放っておいてください。私はもう死の床にいます。しかし、神を畏れなさい。そうすれば、神があなたを守ってくださいます！」

それから、修道院長の方を見て、彼女は言った。

「私のために祈ってください、母上。今この瞬間、私の魂は苦しんでいるのですから。」

すると、修道院長をはじめとするすべての修道女たちが彼女のために祈り始め、祈りを終えて「アーメン」と言ったとき、聖なるキリストの花嫁エウプラクシアは、その清く聖なる魂を神の御手に委ねた。彼女は三十年間を過ごした[5343]。修道女たちは彼女のために大いに泣き、母のそばに彼女を葬り、自分たちの仲間にこれほど神に喜ばれる姉妹を授かり、彼女を神のもとへ送り出すことができたことを神に賛美した。一方、ユリアは三日間、泣きじゃくりながら彼女の棺から離れず、四日目に明るく喜びに満ちた様子で修道院長のもとへやって来て、こう言った。

「母上、私のために祈ってください。キリストがすでに私を呼んでおられます。エウプラクシア夫人が、私を彼女と共にいられるよう、キリストに懇願してくださったのです。」

そう言うと、彼女はすべての修道女たちに別れを告げ、五日目に息を引き取った。彼女は聖エウプラクシアの棺のそばに埋葬された。それから三十日後、敬虔な修道院長であり助祭であるテオドゥラは、修道女たちを呼び集めてこう言った。

– 私の代わりに、あなた方を導いてくれる母を選んでください。主が私を召しておられます。エウプラクシア夫人は、私を彼女やユリアと共に主の御許へ導いてくださるよう、主に対して熱心に祈ってくれました。ユリアもエウプラクシアと共に天の御殿に迎え入れられました。私も今、彼女たちの元へと旅立とうとしています。

[5343] 聖エウプラクシアは413年頃に亡くなった。エウプラクシアが王に結婚の解消を告げる手紙を書き、以前よりもさらに厳しい修行の道を選んだ時、彼女は12歳であった。王はそれより少し前の395年に亡くなっていた。 エウプラクシアは30歳で亡くなり、その後さらに18年間修業を続けた。ここから、18†395を計算すると413年となる。

姉妹たちは皆、エウプラクシアとユリアが主の喜びの中に入ったことを喜び、主が自分たちにも同じ恵みを与えてくださるよう祈りました。一方、自分たちを去っていく母については涙を流し、姉妹の中からテオグニアという名の者を長として選びました。修道院長は臨終の前に彼女を呼び寄せ、こう言いました。

「あなたは修道院生活のあらゆる規則と規律をよく知っている。　至聖なる同質なる三位一体の名において、あなたに誓わせる。修道院のためにいかなる土地も富も取得してはならない。そうすれば、姉妹たちの心が地上の心配事に占められず、地上のもののために天の恵みを失うこともない。むしろ、彼女たちがすべての儚いものを顧みず、永遠のものを得ることができるように。」

そして、修道女たちにはこう言った。

「聖エウプラクシアの生涯をご存じでしょう。彼女に倣い、彼女と共に天の宮殿にふさわしい者となれるようにしなさい。」

その後、彼女は皆に最後のお別れを告げ、礼拝堂へ連れて行かせ、扉を閉めさせ、明日まで誰も入らないよう命じた。　翌朝早く、修道女たちが彼女の元に入ると、彼女は主のもとで息を引き取っていた。彼女たちは泣きながら、聖エウプラクシアの隣に彼女を葬った。それ以来、その場所には誰も埋葬されなくなった。そして、これらの神に愛された聖女たちの尊い遺骸からは、多くの奇跡が起こった。あらゆる病が癒やされ、悪霊が追い出された。悪霊たちは大声で叫んだ。

「おお、エウプラクシアよ！　死後もなお、あなたは私たちに打ち勝ち、追い払うのだ！」

これこそが、天の栄光に与ることを許された聖女エウプラクシアの生涯と功績であった。私たちも彼女に倣うよう努めよう。謙遜、従順、柔和、　勤勉、忍耐、清らかさと貞潔を身につけ、彼女の祈りによって、私たちもまた永遠の恵みと喜び、そして天使たちと共に過ごすことにふさわしい者とされ、――私たちの主イエス・キリストの天の御国において、すべての聖人たちと共に、果てしない永遠にわたり、主の栄光を享受するにふさわしい者とされますように、アーメン。

聖オリンピア・ディアコニッサの伝記。

記念日：7月25日

聖オリンピア（母の名にちなんで名付けられた）の生まれ故郷はコンスタンティノープルであり、そこには彼女の著名で高貴な両親が住んでいた。　彼女の父アニシウス・セコンドゥスは、最も尊敬される元老院議員の一人であり、母は、聖ニコラオスの奇跡の物語にも言及されているあの有名なエパルヒ・エウラヴィオスの娘であり、コンスタンティヌス大帝の治世において、皇帝に次ぐ第一人者であった。　エウラヴィオスの娘であるオリンピアダは、当初、コンスタンティヌスの次男コンストと婚約していた。コンストは父の後を継いで古代ローマを統治したが、結婚前に殺害されてしまった。そこで彼女はアルメニア王アルサカに嫁がされたが、彼との生活は長く続かず、未亡人となった。　その後、オリンピアダは前述のセナトル、アニシウス・セコンダと結婚し、聖オリンピアダを産んだ。彼女はまだ成人年齢に達していなかったが、両親はすでに彼女をエパルフ・ネヴリディウスの息子である高貴な青年と婚約させていた。しかし、結婚そのものは延期されていた。　しかし、二十ヶ月が経過すると、婚約者が亡くなり、オリンピアは処女でありながら未亡人となってしまった。彼女は成人していたにもかかわらず、他の男性と再婚することを望まず、生涯を通じて処女性と貞節を守り抜くことを願った。

両親の死後、オリンピアダは莫大な富と数え切れないほどの財産を相続した。彼女はこれらすべてを神に捧げ、教会、修道院、隠遁者、病院、貧者や旅人のための宿舎、孤児や未亡人、そして極貧に陥った人々など、困窮している人々に惜しみなく施しを始めた。　また、彼女は獄中に囚われた

者や流刑に処された者たちにも惜しみない施しを送り、こうして彼女の寛大さは多くの場所に広まっていった。彼女自身は絶えず祈りと断食に励み、あらゆる方法で肉体を律し、それを霊に従わせた。

当時、アルカディウスとホノリウスの父であるテオドシウス大帝[5344] が統治していた。彼にはエルピディウスという名の親族がおり、王は若く美しい聖オリンピアダを彼に嫁がせたいと望んでいたが、彼女はそれを拒んだ。 王は彼女に懇願し、あらゆる手段を尽くして、その親族であるエルピディウスとの結婚を説得しようとしたが、彼女は脅され、王が怒っていることを知っていたにもかかわらず、どうしても承諾しなかった。彼女は王に次のような返答を送った。

「陛下！もし神が私に結婚することを望んでおられたなら、私の最初の夫を私から奪うことはなかったでしょう。 しかし、神は、この世で私が結婚することが私のためにならないことを知っておられたため、夫を私との共同生活から解放し、私を夫の権威という重苦しいくびきから解き放ち、御自身の良いくびき（マタイ11:30参照）を私の心に負わせてくださったのです。

王は激怒し、市の長官に、彼女の全財産を没収し、オリンピアが三十歳になるまで保管するよう命じた。長官は、王の命令というよりはエルピディウスの唆しにより、彼女をひどく虐げ、束縛したため、彼女は自分の財産だけでなく、自分自身さえも 支配することができなかった。 彼は、彼女が敬虔な聖職者たちと語り合うことも、教会に通うことも許さず、彼女が憂鬱のあまり結婚するよう仕向けたが、オリンピアは喜び、神に感謝した。しばらくして、彼女は王に次のような手紙を書いた：

「陛下、あなたは私に王としての慈悲を示し、真に司教らしい振る舞いをなさってくださいました[5345] 。私が自ら担っていた重荷を、他の人に世話し守らせるよう命じてくださったのです。 さらに大きな恩恵を私に与えてくださるでしょう。もし、あなたの役人に、私の全財産を教会や貧しい人々、困窮している人々に分配するよう命じてくださるなら、私は自ら分配することなく、虚しい名声から逃れることができ、そうすれば、この世の富やすぐに朽ちてしまうものへの心配から解放され、私の真の富[5346] を軽んじることもなくなるでしょう。

王は彼女の手紙を読み、心の中で熟考した末、再び彼女に財産を所有することを許した。彼は、彼女の徳高く神に喜ばれる生き方、その並外れた節制、そして肉体を厳しく鍛え上げる生活について、すでに耳にしていたからである。 実際、彼女は肉を一切口にせず、風呂にも入らなかった。もし病気のためやむを得ず体を洗わなければならない場合でも、彼女はシャツ一枚のまま温かいお湯の入った浴槽に入り、服を脱がずに体を洗った。それは、彼女が侍女たちだけでなく自分自身をも恥じ、自分の裸体を見ることを望まなかったからである。

このように貞潔で誠実な生活を送った聖オリンピアは、その美徳に聖職者たちさえも感嘆し、教会の奉仕に招かれた。すなわち、至聖なるネクタリオス総主教によって[5347] 、彼女はディアコニッサに任命された[5348] 。 そして彼女は、福音書に登場する未亡人である聖アンナのように、*「神殿を離*

[5344] 379～395年の皇帝。

[5345] ちなみに、ビザンツ皇帝は「教会の対外事務担当司教」という称号を冠していた。「司教」という言葉は、ギリシャ語から訳すと「監督者」「監視者」「監督官」を意味する。

[5346] すなわち、魂の救済を司る者である。

[5347] 381～397年のコンスタンティノープル総主教。

[5348] ディアコニッサは使徒たちの時代からすでに存在していた。使徒パウロは『ローマ人への手紙』（ローマ16:1）の中で、かつて「ケンクレアの教会の奉仕者」であったフィベについて言及している。 使徒たちの後の時代には、教会会議（第1全地公会議、決議19；第4全地公会議、規則15；第6全地公会議、規則14）でディアコニッサについて頻繁に言及されているほか、教父や教会の教師たち、さらには皇帝たちも自らの法令の中で言及している（ユスティニアヌス、ノヴェラ3、6、123）。 当初、ディアコニッサには主に処女が選出され、未亡人からは「忠実で敬虔であり、一度しか結婚したことがない者」のみが選ばれていた（『使徒憲章』第VI巻、18）； しかし、ユスティニアヌス帝の時代には、どちらのグループからも選出することが許可され、しかも40歳未満でも選出可能となったが、実際の奉仕は40歳に達してから任されることとなっていた。（第4回全教会会議、規定15；ユスティニアヌス・ノヴェル、123）；敬虔な生活を送っていた女

れず、断食と祈りをもって昼も夜も神に仕えていた」（ルカ2:37）他のディアコニッサたちと共に、誠実かつ義にかなった形で主に仕えた。　祝福されたオリンピアの生涯は、あまりにも非の打ち所がなく、敵でさえも彼女の中に非難すべき点を見つけることができませんでした。　ネクタリオスの後に総主教を務めた聖ヨハネス・クロイスストモスと対立していた者たちは、この罪のないキリストのしもべに対しても敵意を抱いており、中でもアレクサンドリア総主教テオフィロスは、　彼は、自分がエジプトの砂漠から追放した敬虔な修道士たち（彼らについては『金口ヨハネの伝』に詳しく記されている）がコンスタンティノープルに現れた際、彼女が彼らを受け入れ、キリストの御名のために食事を提供したことに怒りを抱いていた。　彼女はそもそも、街を訪れる旅人、修道士、司教たちに非常に温かく宿と安らぎを与え、自身の財産から彼らに分け与えていた。テオフィロス自身も以前は、しばしば彼女のもてなしと寛大さに恩恵を受けていた。　しかしその後、彼は前述の修道士たちや聖ヨハネス・クラマトリオス（金口）の件を理由に彼女に対して敵意を抱き、不当な告発によって彼女の評判を貶めようと試みたが、誰も彼の悪意に満ちた嘘や中傷を信じなかった――誰もが彼女の清く聖なる生涯を知っていたからである。　この真のキリストのしもべの誉れは、すべての教会に広まっていった。　彼女は、福音書に記されているサマリア人のように振る舞った。そのサマリア人は、強盗に傷つけられ、通りすがりの人々全員に見捨てられた男を、自分のロバに乗せ、宿屋へ連れて行き、彼の回復に心を配った（ルカ10:30–37）。実に、彼女は、頭を休める場所のないすべての人々に宿を提供した。路上に捨てられ、誰からも見捨てられた貧者や病人、腫れ物に冒された者たちを、彼女は熱心に世話し、決して偽りなく、全身全霊で慈善の業に身を捧げていた。　彼女は、善行のために、金や銀、衣服、そして貧しい人々や用事でコンスタンティノープルを訪れた人々への日々の食糧配給にどれほど多くの費用を費やし、あらゆる方法で彼らの必要を満たしたか。こうして、彼女は自身の財産を投じて助けの手を差し伸べ、多くの金、　銀、そして教会の装飾品を、イコニアの司教聖アンフィロキオスやポンティスのオニシモス（それ以前には、コンスタンティノープルでネクタリオスの前に　で聖職に就いていた聖グレゴリオス・テオロゴス）、セバスティアのペトロ（バシレイオス大帝の兄弟）、そしてキプロスのエピファニオスに捧げた。　コンスタンティノープルで亡くなったオプティムスには、彼女自身が自らの手で最期の瞬間に寄り添った。彼女は聖人や徳高い人々だけでなく、反逆者や敵対者たち――例えば、プトレマイスの司教アンティオコス、ヴェリイのアカキオス、ガヴァリのセヴェリアヌス、そして彼らに類する人々――に対しても善行を施した。　彼女は悪意がなく、全身全霊を神に捧げたため、自分の財産を自分のものではなく、神のものだと考えていた。聖ヨハネス・クラマトルスは、彼女を偉大な神のしもべとして尊敬し、かつて聖使徒パウロがペルシダについて記したように、霊的な愛をもって彼女を愛した。パウロは次のように書いている。　*「愛すべきペルシダに挨拶を。彼女は主のために大いに労苦した」*（ローマ16:12）。そして聖オリンピアダも、ペルシダに劣らず、主のために大いに労苦し、偉大で温かい愛をもって聖人たちに仕えた。

何の罪もない聖ヨハネス・クロイソストモスが不当に司教の座から追放されたとき、至福のオリンピアは他のディアコニッサたちと共に、そのことを深く嘆き悲しんだ。　教会を最後に後にしようとしたとき、ヨハネス・クロソストモスは洗礼堂に入り、至福のオリンピアと、ディアコニッサのペンタディエ、プロクリエ、そして徳高い未亡人サルヴィナを呼び寄せ、こう言いました。

性のみが、いかなる試練も経ずに直ちにディアコニッサに任命された。 ディアコニッサの職務は以下の通りであった：1）女性の洗礼の準備を行うこと、2）女性の洗礼式において教会の奉仕者を補助すること、3）女性に関する司教からの様々な指示を遂行すること――病人や不幸に見舞われた人々を訪問すること、4）教会堂内における女性や子供たちの規律を監督すること。

「さあ、ここへ来なさい、わが子らよ。そして私の話を聞きなさい。私に対して行われていることは、もう終わりに近づいていると私は見ています。私は自分の務めを果たしました。もう二度と、あなたがたが私の姿を見ることはないでしょう。　それゆえ、お願いだ。私の後任として、強制であれ、総会の決定であれ、任命される司教のせいで教会を離れてはならない。ヨハネに従ったように、彼にも従いなさい。教会は司教なしでは成り立たないのだ。さて、神の恵みがあなた方と共にありますように。祈りの中で私を覚えていてほしい！

人々は涙を流しながら、彼の前にひれ伏した。そして、聖人は流刑の地へと旅立った。

彼の追放後、大聖堂が炎上し、町のかなりの部分が焼失した。そのため、聖ヨハネの支持者たちは、罪がないにもかかわらず、この火災について町の長官から尋問を受けた。彼らが教会に放火したと疑われたのである。その時、聖オリンピアもまた、あたかも彼女もその放火に関与していたかのように扱われ、　彼女は裁判に引き出され、厳しく尋問された（その長官は残酷で冷酷な人物だった）。彼女に何の罪もなかったにもかかわらず、長官は不当にも、彼女が関与していない放火の罪として、オリンピアに多額の金を支払うよう命じた。

その後、聖女はコンスタンティノープルを離れ、キジクへと向かった[5349]。しかし、敵はそこでも彼女を放っておかず、追放の判決を下し、ニコミディアに幽閉した[5350]。このことを知った聖ヨハネス・クラマトルスは、自身の幽閉先から彼女に手紙を書き、その悲しみを慰めた[5351]。長い間監禁され、多くの苦難に耐えた後、この祝福された女性は[5352]、主のもとへ召された。死後、その尊い遺体がまだ埋葬されていないうちに、聖女は夢の中でニコミディアの司教の前に現れ、こう言った。

「私の遺体を木製の棺に入れ、海に投げ入れてください。波がそれを岸に打ち上げる場所こそ、そこに埋葬されるべき場所です。」

司教はその通りにした。棺は波に運ばれて、ツァーグラード近郊のヴロフティと呼ばれる土地の陸地に打ち上げられた。そこには聖使徒トマスの教会があった。　地元の人々は、聖オリンピアの遺体について神からの啓示を受け、海岸へ出て棺を見つけ、それを使徒の教会に安置した。すると、あらゆる病気の癒やしが起こり始めた。　それから何年も経って、野蛮人たちがこの場所を襲撃し、教会を焼き払った。聖櫃は焼けてしまったものの、聖遺物は火の被害を免れていたが、彼らはそれを海に投げ捨てた。すると、聖遺物が投げ込まれた場所の水が血のように赤くなった。こうして神は、御自身のしもべの受難を告げ知らせておられたのである。　しかし、奇跡を起こす聖遺骨は、信者たちによって再び海から引き上げられた。このことを知ったコンスタンティノープル総主教セルギウス[5353]は、長老ヨハネを派遣し、聖遺骨を敬意を込めてコンスタンティノープルへ持ち帰るよう命じた。　長老がその場所に到着し、聖遺骨を拾い上げると、そこから大量の血が流れ出た。人々は皆、二百年も経った乾いた骨から、まるで生きた体からであるかのように血が流れ出る様子に、深く驚嘆した。こうして、この聖なる奇跡の聖遺骨は帝都へと運ばれ、聖オリンピアダが設立した女子修道院に安置された。　、その聖遺物からは多くの奇跡が起こった。あらゆる病が癒やされ、聖オリンピアダの祈りと、我らの主イエス・キリストの恵みによって悪霊が追い出された。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

- 同日、至聖なる神の母の母である義人アンナの永眠。（彼女と義人ヨアキムの生涯については、9月9日を参照

[5349] キジクは、プロポンティス（マーブル海）のアルクトニッセ半島に位置していた。

[5350] ニコメディアは、小アジア北西部、マルマラ海沿岸のビフィニア地方にある都市である。聖オリンピアダは405年にニコメディアに投獄された。

[5351] 聖ヨハネス・クラマトルスからオリンピアダへの17通の手紙が現存している。

[5352] 409年頃、7月25日。

[5353] セルギイ――610年から638年にかけて、コンスタンティノープルでこの名を持つ最初の総主教。

8月

7月26日（旧暦）

尊き父モーセ・ウグリンの生涯

記念日：7月26日

不義なる敵は、とりわけ不純で淫らな情欲をもって人々に戦いを仕掛けることを好む。それゆえ、この不純な汚れに覆われた人は、あらゆる行いにおいて神に目を向けることをやめてしまう。なぜなら、「*心の清い者だけが神を見る*」からである（マタイ5:8）。 私たちの祝福された父モーセは、この戦いにおいて他の誰よりも多くの功績を挙げ、真のキリストの戦士として苦難に遭い、ついに不浄な敵の力を打ち破り、私たちに模範を残しました。彼については次のように伝えられています。

福者モーセについては、彼がウグリン[5354] の出身であり、敬虔な聖公爵でありロシアの殉教者であるボリス公の寵愛を受けていたことが知られている。 彼は弟のゲオルギーと共に公に仕えていたが、ゲオルギーは主君を自らの身をもって守ろうとしてその上に身を投げ出した際、アルテ川[5355] で、聖ボリス[5356] と共に、不信心なスヴィャトポルクの兵士たちによって殺害された。彼らは、聖ボリスが彼に授けた金のグリヴナ[5357] を奪うために、彼の首をも切り落とした。

幸いなモーセは、ただ一人死を免れ、キエフにいるヤロスラフの妹プレディスラヴァのもとへやって来て、そこでスヴィャトポルクから身を隠しながら滞在し、敬虔な公ヤロスラフが、殺された兄弟たちへの憐れみに駆られて到着し、不信心なスヴィャトポルクを打ち負かすまで、熱心に神に祈り続けた[5358] 。 その後、スヴィャトポルクはポーランド人のもとへ逃亡[5359] した後、ボレスラフを連れて戻り、ヤロスラフを追放し、 自らキエフで公の座に就いた[5360] 。その時、ボレスラフは自身の公国へ戻る際、ヤロスラフの二人の姉妹と多くのボヤールたちを捕虜として連れ帰った。その中には、祝福されたモーセも含まれていた。彼は手足を重い鉄の足枷で縛られ、厳重に監視されていた。というのも、彼はがっしりとした体格と美しい顔立ちで際立っていたからである。

リャシュの地で、ある女性が彼を見かけた。彼女は高貴で美しく若く、莫大な富と大きな権力を有していた。彼女の夫はボレスワフに従軍したが、戦いで戦死したため、戻ってこなかった。 この女性は、修道士の美しさに気づくと、彼に対して肉欲に燃え上がり、次のような言葉で彼を誘惑し始めた。

「ああ、人よ！ 鎖と苦しみから解放される道があるというのに、なぜそんな苦しみを受け続けるのですか？！」

[5354] すなわち、ハンガリー出身である。「ウグリ・ヴェンゲリ」という呼称は、ロシア・スラブ人が初めてマジャール人と接触した9世紀初頭頃に、ロシア語に登場した可能性がある。当時、ロシア語にはまだ鼻音が存在しており、この言葉は「ングル」と発音されていたことが明らかである。ここから、現在の「ヴェンゲル」という呼称も説明がつく。

[5355] アルタ川は、キエフの下流でドニエプル川に左岸（モスクワ側）から合流するトゥルベジ川の支流である。

[5356] 1015年。

[5357] グリヴナ（サンスクリット語の「グリヴァ」＝首に由来）は、本来は首飾りやチェーンを指し、通常は金製で、装飾品として首に身につけられていた。その後、グリヴナという名称は、貨幣として流通していた一定量の金塊（72～96ゾロトニク）を指すようになった。

[5358] 1017年。

[5359] すなわち、ポーランドへ。

[5360] 1018年から。

「それは神の御心だからです」とモーセは答えた。

「もし私に身を委ねてくれるなら」と女は続けた。「私はあなたを解放し、全ポーランドにあなたの名を轟かせ、あなたは私と私のすべての所有物を手に入れることになるでしょう。」

しかし、聖なるモーセは、彼女の不純な欲望を見抜き、こう反論した。

「妻の言うことを聞いて、自分の境遇を良くした男が、いったい誰がいるというのか？　初代のアダムは、妻の言うことを聞いて楽園から追放された。力において誰にも劣らず、軍隊全体をも打ち破ったサムソンでさえ、女によって異邦人に裏切られたのだ。」　知恵の深みを極めたソロモンでさえ、女に従って偶像にひれ伏した。数々の勝利を収めたヘロデでさえ、妻に迎合して洗礼者ヨハネの首を刎ねた。それなのに、生まれてから一度も交わったことのない女の奴隷となって、どうして私が自由になれるというのか？[5361]

「私があなたを買い取りましょう」と彼女は言った。「あなたを有名にし、私の家のすべてを統べる主人にし、あなたを夫にしたいのです。ただ、私の意志に従ってください。あなたの美しさが無意味に失われていくのを見るのは耐えられませんから。」

「確信していい」と、至福のモーセは彼女に語りかけた。「私はあなたの望みを叶えるつもりはないし、あなたに対する支配権も富も望まない。私にとって、これらすべてよりも大切なのは、心と体の清らかさだ。　五年にわたる苦行、すなわち、主が私に不当に耐えるよう定められた苦痛に満ちた束縛を、決して無駄にはしない。そのおかげで、永遠の苦しみから解放されることを願っているのだ。

すると、その女は、そのような美しさを失うかもしれないと悟り、別の悪魔的な決断を下した。彼を身代金で買い戻せば、たとえ力ずくであっても、あらゆる手段で彼を自分に従わせることができると考えたのである。　そこで彼女は、聖人が囚われていたその所有者のもとへ使いを送り、いくらでも要求してよいから、ただモーセを売ってほしいと頼んだ。その所有者は、富を得る好機と見て、彼女から金貨をほぼ1000枚受け取り、モーセを彼女に引き渡した。　その妻は、彼に対する支配権を手に入れると、恥じることなく、彼を不道徳な行いに引きずり込んだ。鎖を解き放つと、彼女は彼に高価な服を着せ、珍味で養い、そして欲情に駆られて彼を抱きしめ、性交を強要した。　しかし、祝福されたモーセは、その女の狂乱ぶりを見て、なお一層祈りと断食に励み、神に喜ばれることを選び、高価なご馳走やワインを伴う不潔さよりも、清らかな状態で食べる乾いたパンと水を好んだ。そして直ちに美しい衣を脱ぎ捨て、ヨセフのように罪を避け（創世記39:1–23）、この世の快楽を何とも思わなかった。恥をかかされた女は激しい怒りに駆られ、彼を牢獄に閉じ込めて飢え死にさせようと企んだ。　しかし、あらゆる被造物に糧を与え、かつて荒野でエリヤを養われた神　（列王記下17:1–29）、またパウロ・フィヴェイスクや、神に信頼を置く他の多くのしもべたちをも養われた神は、この聖なる者をも見捨てられませんでした。実際、その女性のしもべの一人が、神によって憐れみに導かれ、密かにモーセに食物を届けました。そして、他の者たちは彼にこう説得しました。

「モーセよ、なぜ結婚しないのか。君はまだ若いし、この未亡人は夫とたった一年しか暮らしておらず、他の女性たちよりも美しく、その富は計り知れない。」　彼女はこのリトアニアの地で非常に高い地位にある。もし彼女が望めば、公爵でさえ彼女を拒むことはないだろう。それなのに、お前という捕虜であり奴隷が、彼女の主人になることを望まないのか？！もし「キリストの戒めを破りたくない」と言うなら、キリストは福音書の中でこう言っておられるではないか：　*『それゆえ、人は父と母を離れて、妻と結ばれ、二人は一体となる』*（マタイ19:5）。また、使徒もこう言っている。*「情欲に燃えるよりは、結婚したほうがよい」*（1コリント7:9）。彼はまた、未亡人についてもこう述べている。*「若い未亡人たちは再婚することを望む」*（テモテへの手紙第一5:14）。あなたは修道誓願を立てていないのだから、その束縛から自由である。それなのに、なぜ悪しき重苦しい苦しみ

[5361] つまり、誕生の日から、その処女性を堅く守り抜いた。

の中に身を投じ、これほどまでに苦しむのか。もしあなたがそのような悲惨な状況の中で死を迎えたとしても、いったいどのような称賛を得られるというのか。　実のところ、アブラハム、イサク、ヤコブといった初期の義人たちのうち、誰が妻を忌み嫌ったというのか。今の修道士たち以外には誰もいない。ヨセフは妻から逃げたが、その後、彼もまた妻を娶った（創世記41:45）。　それに、もしあなたがこの妻から生きて逃げ出せたとしても、その後（我々が思うに）あなた自身もまた妻を見つけることになるだろう。そして、誰があなたの愚かさを嘲笑わないというのか？　むしろ、この妻に従い、自由の身となり、彼女の家全体を支配する主となるほうがよい。

すると、祝福されたモーセは彼らにこう答えた。

――まことに、兄弟たちよ、そして私の親愛なる友人たちよ、あなた方は私に良き助言をくださっている。私が理解するところでは、あなた方は、楽園で蛇がエバに囁いた言葉の中でも最も邪悪なものを、私に提案しているのだ。　あなたがたは私にこの妻に従うよう強要しているが、いかなる場合でも私はその助言を受け入れることはない。たとえ私がこの鎖と激しい苦しみの中で死ぬことになっても、　、私はそのことに対して神から多大な慈悲を期待している。そして、多くの義人が妻と共に救われたとしても、私という一人の罪人は妻と共に救われることはできないのだ。　そう、もしヨセフが当初、ペンテフリアの妻に従っていたなら、後に妻を娶った際、エジプトで王となることはなかっただろう。しかし、神は彼の以前の忍耐をご覧になり、彼にエジプトの王国を授けられた。それゆえ、彼は子孫の代々にわたり、たとえ子供をもうけたとしても、貞潔な者として称賛されたのである。　しかし、私はエジプトの王位を望まず、ましてやリトアニアの地で支配者となり高位に就き、ロシア全土で広く名誉を享受することなどなおさら望まない。これらすべてを、天の御国のために軽んじたのである。それゆえ、もし私がこの女の手から生還することができれば、他の妻を探すことは決してせず、（神の御心ならば）修道士となるつもりである。　キリストは福音書の中でこう言われました。*「わたしの名のために、家や兄弟や姉妹や父や母や妻や子供や土地を捨てた者は、百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ」*（マタイ19:29）。キリストの言葉を聞くべきか、それともあなた方の言葉を聞くべきか？　使徒はさらにこう言っています。*「未婚の人は、主にどう仕えればよいか、主のことに心を配る。しかし、既婚の人は、この世のことに心を配り、妻にどう仕えればよいかを考える」*（Iコリント7:32–33）。さて、あなた方に問います。誰のためにより多く働くべきでしょうか――主のためか、それとも妻のためか？　また、使徒が次のように書いていることも知っています。*「しもべたちよ、自分の主人に従いなさい」*（エフェソ6:5）。しかし、それは善のためであり、悪のためではありません。ですから、私を拘束しているあなた方に知っておいていただきたいのは、女性の美しさに私が惑わされることは決してなく、ましてやキリストへの愛から私を引き離すことなどあり得ないということです。

これを聞いたその妻は、心の中で別の狡猾な企みを巡らせた。彼女は、多くの使用人に付き添わせて、その聖人を馬に乗せ、自分の領内の町や村を巡らせ、こう付け加えた。

「気に入れば、これらはすべてあなたのものよ。好きなように扱っていいわ。」

また、彼女自身も人々にこう言った。

「この方はあなた方の主であり、私の夫です。彼に出会う者は皆、頭を下げなさい。」

彼はその妻の無意味な言動を嘲笑し、彼女にこう言った。

「無駄な努力だ！　お前は、この世の朽ちゆく物で私を惑わすことも、私の朽ちることのない富を奪うこともできないのだ。それを理解し、無駄な努力はやめなさい。」

すると、その女は激怒して彼にこう言い返した。

「あなたが私に売られたこと、そして誰が私の手からあなたを解放できるか、知らないの？　決してあなたを生かして放すつもりはない。多くの苦しみを味わわせた後、あなたを死に追いやるわ。」

しかし、その聖人は勇敢に彼女にこう言った。

「私はいかなる苦しみも恐れない。主が私と共におられるからだ。この瞬間から（主の御心により）、修道生活において主に仕えたいと願う。」

その時、神の導きにより、聖なる山から一人の修道士――聖職者である――が聖なるモーセのもとを訪れ、彼を聖なる天使の修道様式に従って剃髪した。彼は（モーセに）霊的な清らかさを多く教え、敵に身を委ねず、あの不浄な妻を恐れないようにと諭し、そうして去っていった。　人々は至る所でこの修道士を探したが、見つからなかった。そこで、その夫人は希望を絶望し、敬虔な修道士モーセに激しい拷問を加えた。彼を地面に寝かせ、棒で打ち据えるよう命じたため、地面は血で染まった。モーセを拷問していた者たちは、彼にこう言い聞かせた。

「女主人に従い、その意を汲め。もし逆らえば、お前の体をバラバラに砕いてやる。この苦痛を逃れられるなどと思うな。多くの拷問の末、さらに酷い苦しみの中で息を引き取ることになるだろう。自分のことを憐れめ。　この修道士のぼろ服を脱ぎ捨て、高価な貴族の衣装を身にまといなさい。そうすれば、君を脅かす拷問から逃れられるだろう。

勇敢なモーセはこれにこう答えた。

「兄弟たちよ！　命じられたことを、いささかの遅れもなく実行せよ。しかし、私はいかなる場合でも、修道生活と神への愛を捨て去ることはできない。火による拷問であれ、剣によるものであれ、傷を負わされることであれ、いかなる拷問も、私を神と偉大なる天使の姿から離れさせることはできないのだ。」　そして、羞恥心を失い、正気を失ったこの女――神への畏れだけでなく、人に対する羞恥心さえもあらゆる点で軽んじ、恥知らずにも私に肉体の穢れと姦淫を強要している――には、決して屈服せず、その忌まわしい命令に従うこともない。

この女は、自らの恥辱をどう報復すべきか深く悩んだ末、ついにボレスラフに次のような手紙を書いた。

「ご存知の通り、私の夫はあなたが仕掛けた戦争で殺されました。そしてあなたは、私が望む誰とでも結婚することを許してくれました。　私はあなたの捕虜の一人、美しい若者に恋をし、身代金を支払って　彼を我が家へ連れ帰った。彼のために多額の金を払い、家にある金銀すべてと権力をすべて彼に譲り渡した。ただ彼が私の夫になってくれることさえ望んだのだ。しかし彼は、これらすべてを何とも思わなかった。　私は何度も飢えや殴打で彼を苦しめたが、まったく成果は得られなかった。　以前の所有者の元で5年間も鎖につながれていただけでは足りず、今や私の元で6年目を迎え、その不従順のせいで私から多くの苦痛を強いられてきた。これらすべては、彼自身の冷酷さによって自ら招いたものだ。そして今や、彼はある修道士によって修道服を着せられてしまった。さて、彼に対して私にどう対処するようお命じになるか?

ボレスラフは、その女性に自分の元へ来て、モーセを連れてくるよう命じた。その命令は彼の指示通りに実行された。聖職者を見た彼は、長い間、彼女を妻に迎えるよう強要したが、説得することはできなかった。最後に、彼はこう言った。

「お前ほど無情な人間が他にいるだろうか。お前は多くの恩恵と名誉を失い、激しい苦しみを受けることになるのだぞ！」　今日から、お前の生と死はお前の手の中にあることを知れ。すなわち、お前の主人の意志に従えば、我々から敬われ、偉大な権力を手にするだろう。しかし、もし従わなければ、多くの苦しみを経た後、凄惨な死を遂げることになるのだ。

公爵は妻に対しても、次のように語りかけた。

「お前が買い取った捕虜を、いかなる場合でも自由にしてはならない。しかし、女主人として、その奴隷を自分の望むままに扱え。そうすれば、他の者たちも主人の命令に背こうとはしないだろう。」

それに対し、私たちの尊い父モーセは、次のように答えた。

「『*人が全世界を得ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるか*』と主は言われる。*あるいは、人は自分の魂と引き換えに、どのような代価を払うことができるだろうか？*」　（マタイ16:26）

それなのに、あなたは――まもなく自らも失うことになる誉れと栄光を私に約束し、もはや何も持たないまま墓に葬られるというのか？　同様に、この不浄な妻もまた、残酷に殺されることになるだろう。

これらすべては、尊者様の予言どおりになった。　しかしその前に、その妻は彼に対する絶対的な支配権を握ると、さらに恥知らずな方法で彼を罪へと誘い込んだ。すなわち、彼女はモーセを無理やり自分の寝床に寝かせ、そこで彼に口づけをし、抱きしめた。しかし、それをもってしても、彼を自分の欲望に従わせることはできなかった。なぜなら、聖人は彼女にこう言ったからである。

「お前の努力は無駄だ、女よ。私がこの罪を犯さないのは、狂人のように振る舞っているからでも、できないからでもない。ただ、神への畏れゆえに、不浄なあなたを忌み嫌っているだけだ。」

これを聞いた女は、彼に毎日百回の鞭打ちを命じた。最後には、彼を去勢するよう命じた。聖人モーセは、失血のため死人のように横たわり、かろうじて微かな生命の兆しを保っているだけだった。　ボレスワフはこれを阻止することもなく、さらに修道士たちに対して激しい迫害を行い、彼ら全員を自分の領地から追放した。それは、モイセイの妻を、高貴で彼に愛された女性として喜ばせようとしたからである。しかし、神はまもなく御自分のしもべたちのために報復を下された。　ある夜、ボレスラフは突然この世を去り[5362] 、リトアニア全土で大規模な反乱が勃発した。反乱を起こした民衆は、司教や貴族たちを打ちのめし、その中には、恥をさらしたあの女性も殺害されていた。

この神の怒りは、尊者モーセの剃髪に抗して修道士たちが追放された後に起こったものであったが、そのことを何年も後に、キエフの大公イジアスラフに対し、その妃――ポーランド人出身でボレスラフの娘――が、　彼女は、至福のヴァルラアムと宦官エフレムを剃髪させたことを理由に、聖アントニウスとその兄弟たちを領地から追放しないよう、懇願した[5363] 。しかし、ここでは現在の話に焦点を当てよう。　私たちの尊い父モーセは、わずかな安らぎを得ると、キリストの勇敢な戦士のように殉教の痕を身に帯びて、洞窟にいる尊者アントニオのもとへやって来た。そして、神に喜ばれるように生き、　祈り、断食、不眠、そしてあらゆる修道者の美徳に励み、それによって不浄なる敵のあらゆる策略を最後まで打ち破ったのである。

この聖人に立ち向かった不浄で淫らな情欲に対する数多くの勝利ゆえに、主は彼に、他の人々にも立ち向かう同じ情欲を打ち負かす力を授けられた。こうして、兄弟の一人が淫らな情欲に苛まれていた際、この聖人のもとを訪れ、助けてくれるよう懇願した。

「私ですが」と彼は言った。「もし何かお命じになれば、死ぬまで守るとお約束します。」

聖人は彼にこう命じました。

「生涯を通じて、決して女性に一言も話してはならない。」

その者は心から誓いを立てた。すると聖人は、杖で奇跡を起こした最初のモーセに倣い、自らの杖でその兄弟の体の股間に触れた。というのも、以前受けた傷の痛みにより、杖なしでは自力で歩くことができなかったからである。　すると、その兄弟のすべての不浄な情欲はたちまち消え去り、それ以来、彼にはもはや誘惑はなかった。

こうして、この善良なキリストの戦士は、苦難と神に喜ばれる功績の中で、16年間を過ごした。捕らえた者に5年間、不当に鎖で縛られて苦しめられたが、ヨブのように神への感謝の念を込めた忍耐を示した。　六年目には、貞潔を守るために、ヨセフ以上に勇敢に苦難に耐えた。その後、聖アトス山から伝えられた洞窟での十年にわたる天使のような沈黙の生活を通じて、聖シナイ山から天使の秩序に従って「十の掟」を授かった最初のモーセのように、他の誰よりも先に輝きを放った。　その後、我らが尊者モーセもまた、まことに神を仰ぐ者に選ばれた。　彼は、心清き者たちの至福に値

[5362] 1025年4月3日。

[5363] 7月10日の「聖アントニオ・ペチェルスキーの伝」を参照

する者と認められ、神と顔を合わせて会うために、7月26日[5364]　、敬虔なアントニオスがまだ存命であった頃、その洞窟へと移り住んだ。その洞窟には、今もなお、清らかさを損なうことのなかったこの聖なる人の、朽ちることのない奇跡を行う聖遺骨が安置されている。

聖モーセは、その聖遺物によって、死後もなお不浄な情欲に打ち勝っている。これは、多くの苦難に遭った聖ヨハネが体験した通りである。というのも、彼は洞窟に身を隠し、聖モーセの聖遺物に肩まで身を埋めて、長い間苦しみながら肉欲に打ち勝ち、ついに主の御声を聞いたからである。

「彼の前にいる死者、この尊者モーセ・ウグリンに祈れ！」

この多難な聖人がその言葉に従うと、直ちに不浄な病から解放された。　また、同じ忌まわしい苦しみから苦しんでいた別の兄弟も、同じ聖ヨハネによって救われた。聖ヨハネは、聖モイセイの聖遺物の一片を、情欲に囚われた者に与え、それを自身の体に当てるよう命じたのである。このことは、『多苦の聖ヨハネの行伝』に記されている。　そして、あらゆる不浄から解放された私たちにとっても、尊者モーセが、その祈りによって救いの道へと導く導き手となりますように。彼と共に、三位一体として崇められる神を礼拝しましょう。神に、今、そして常に、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

聖殉教者エルモライの記念日

記念日：7月26日

敬虔な長老エルモライと、彼と共に殉教した聖殉教者エルミッポスおよびエルモクラトスは、聖ニコミディア教会の司祭であった。彼らは、12月28日に記念される、マクシミアヌスによって教会内で焼かれた2万人の殉教者たちの残存者であった。　この三人の主の僕たちは、異教徒を恐れて各地に身を隠していたが、その一方で、好機が訪れるたびに異教徒たちに聖なる信仰を教え、キリストへと導いた。こうして聖エルモライは、医師パンテレイモンを見かけ、神の霊に導かれた対話を通じて彼をキリスト教へと改宗させた。　その後、パンテレイモンが不義の王マクシミアヌスによって拷問にかけられ、「誰からキリスト教の信仰を学んだのか」と問われたとき、聖人は嘘をつくことができず、キリスト教の聖なる長老エルモライの名を明かしました。　すると直ちに、聖エルモライと、彼の同僚であるキリストの僕エルミッポスおよびエルモクラトスが捕らえられ、不敬虔な法廷へと連行された。　尋問の際、彼らは勇敢に真の神であるキリストを告白し、邪悪な偶像とその崇拝者たちを罵倒した。このため、拷問者たちによって死刑を宣告され、彼らは剣による斬首によってこの世を去った。彼らの受難についてより詳細な記述は、聖大殉教者パンテレイモンの伝記の27日に記されている。

コンダク、第4声：

聖なる方は敬虔に生き、聖なる殉教の冠を受けられました。偶像への生贄を断ち切り、キリストの群れの良き牧者であり、至賢なる方、そしてパンテレイモンの真の師であられました。　このゆえに、我らは歌をもって叫びながらあなたを崇め奉る。あなたの絶え間ない祈りによって、我らを災いから救い出してください、我らの父エルモラエよ。

[5364] 1043年。

聖女殉教者パラスケヴァの受難

記念日：7月26日

聖なる敬虔な殉教者パラスケヴァは、アントニヌス帝の治世[5365] に、古代ローマの近郊で暮らしていました。彼女は両親の唯一の娘であり、聖書の研究に励んでいました。　両親が亡くなると、彼女は自分の財産を貧しい人々に分け与え、修道生活に入り、聖使徒たちに倣って、キリストを宣べ伝えながら巡り歩き、多くの異教徒を真の信仰へと導いた。　そのため、ユダヤ人たちは皇帝の前で彼女を誹謗中傷した。皇帝は彼女を自分の元へ連れてくるよう命じ、説得や脅迫にもかかわらず、彼女がキリストを否定することを拒んだため、まず彼女の頭に赤熱した兜をかぶせ、次に激しく沸騰した油と樹脂で満たされた銅の釜に投げ込むよう命じた。　しかし、聖女は奇跡的にこれらすべてから無傷で済み、[5366] という奇跡を起こして、アントニヌス皇帝とその側近たちをキリストへの信仰へと導いた。その後、ローマから解放された聖パラスケヴァは、他の都市へと向かい、至る所でキリストについて説教した。　ある都市にたどり着くと、そこにはアスクレピオスという者が支配しており、彼女は彼の元へ連れて行かれた。　彼女が自分の信念を曲げないことを確信した王は、彼女を町の外にある洞窟に住み、人々を恐怖に陥れていた大蛇のもとへ連れて行き、その蛇に彼女を食い殺させようと命じました。しかし、彼女は蛇に向かって十字の印を結び、それによって蛇は真っ二つに裂けました。　その後、アスクレピオスとその側近たちはキリストを信じるようになった。再び解放された聖女は、あらゆる都市や国々を巡り、キリストの信仰を宣教するようになった。　タラシイという名の別の王が統治する町にたどり着くと、彼女は王の裁判にかけられ、そこでキリストについて説き始めた。すると王は彼女に数多くの残酷な拷問を加えたが、それでも彼女をキリストからの背信に追い込むことはできなかったため、剣で彼女の尊い首を切り落とすよう命じた[5367] 。

8月9日

7月27日（旧暦）

同日、1392年にヴェリキー・ノヴゴロドにて、キリストのために聖なる狂人となったコチャノフの聖ニコライが帰天した。

聖大殉教者パンテレイモンの殉教。

記念日：7月27日

不義なマクシミアヌス[5368] が統治し、キリスト教徒を苛烈に迫害していた時代、そして宇宙のほぼ全域が偶像崇拝の不義の闇に覆われていた頃、　至る所でキリストを信じる者たちに対して大いなる迫害が繰り広げられ、至聖なる御名イエス・キリスト　の多くの告白者たちが殉教してこの世を

[5365] ローマ皇帝アントニヌス・ピウスは、138年から161年まで在位した。

[5366] 聖人暦の著者ニコディモスによる、聖殉教者パラスケヴェに関する記述が詳述されている書物では、この奇跡について次のように記されている。　沸騰する油と樹脂が入った大釜に投げ込まれながらも無傷でいた聖女は、好奇心旺盛なアントニヌス皇帝の目にその灼熱の液体を投げつけ、彼を盲目にしたが、その後、皇帝の願いに応じて、失われた視力を彼に返した。

[5367] 聖殉教者パラスケヴェの没年は不明である。1200年、巡礼者アントニオスはコンスタンティノープルで彼女の聖遺物を目撃しており、彼女の教会は現在も同地に現存している。その教会は、金角湾の左岸、ハス・キオイ地区に位置している。

[5368] 305年～311年

去ったその時、ビフィニア地方[5369] のニコメディア市[5370] において、聖大殉教者パンテレイモンもまたキリストのために殉教した。

殉教者たちの中でも特に栄光に満ちたこのキリストの受難の証人は、同じニコメディアの町で、エウストルギオスという名の高貴で裕福な父と、エヴヴーラという名の母の間に生まれた。　父は信仰上異教徒であり、偶像崇拝に熱心に没頭していた。母はキリスト教徒で、先祖から聖なる信仰を教えられ、熱心にキリストに仕えていた。　かくして、肉体的には結びついていた二人は、霊的には分かれていた。父は偽りの神々に犠牲を捧げ、母は真の神に「賛美の捧げ物」を捧げていた。そして、二人の間に生まれた少年――本稿で取り上げるその少年――は、パントレオーンと名付けられた。これは「すべてにおいて獅子」という意味であり、その勇気が獅子のように強靭であると期待されていたからである。　しかし、その後、その少年はパンテレイモン、すなわち「全き慈悲深い者」と改名された。それは、彼が病人を無償で治療したり、貧しい人々に施しを与えたり、父の財産を惜しみなく困窮者に分け与えたりして、すべての人に慈悲を示したからである。

幼い頃から、母は少年をキリスト教の敬虔さの中で育て、天にまします唯一の真の神、我らの主イエス・キリストについて教え、彼が主を信じ、善行をもって主に喜ばれ、異教の多神教を遠ざけるように導いた。　少年は母の教えに耳を傾け、その幼い年齢の許す限り、それを心に刻んでいった。しかし、なんと大きな喪失であり、喪失感であろうか！　彼の慈愛に満ちた母であり、幼少期の導き手であった彼女は、少年がまだ完全な知性と年齢に達していないうちに、主のもとへ旅立ってしまった。彼女の死後、少年は容易に父の迷いの道をたどるようになった。父はしばしば彼を偶像崇拝に連れ出し、異教の不敬虔さを強要した。

その後、少年は文法学校へ通わされ、外面的で異教的な学問の課程をすべて無事に修了すると、父は彼をある名高い医師エウフロシノスの医学学校へ預け、医療の技術を習得させた。　その少年は聡明な頭脳の持ち主であり、教えられたことを容易に吸収し、まもなく同年代の者たちを凌駕し、師自身にもほとんど引けを取らないほどになった。さらに、彼は品行、雄弁さ、美貌に優れ、誰からも好印象を与えていた。彼はマクシミアヌス帝自身にも知られていた。　というのも、当時マクシミアヌスはニコメディアに居住しており、キリスト教徒を拷問にかけ、2万人を教会で焼き殺し、キリストの降誕の日にアンフィム司教を処刑し、多くの人々を様々な拷問の末、様々な方法で処刑したからである。　医師エウフロシンは、しばしば薬を持って、この迫害者の王宮を訪れ、皇帝本人やその側近たちの元へ赴いた。というのも、この医師は王宮の者全員に病気の治療薬を提供していたからである。　エウフロシンが王宮へ王のもとを訪れる際、師に付き従う少年パントレオンも同行していた。人々は皆、その少年の美しさと聡明さに驚嘆した。王も彼を見て、こう尋ねた。

「彼はどこから来たのか。誰の息子なのか？」

答えを聞いた王は、その若者に医療の技術をすべて、できるだけ早く、そして最善の方法で教えるよう師に命じ、王の前に立ち、王に仕えるにふさわしい者として、常に自分のそばに置いておきたいという意向を示した。その頃、その若者はすでに成人する年齢に達していた。

[5369] ビフィニアは、小アジア北西部に位置し、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に広がる地域である。この国は古くから知られており、その名はフラキアから移住してきたビフィニ族に由来する。ビフィニアは風光明媚で、肥沃であり、家畜も豊富であった。　紀元前546年、ビフィニ族はペルシアの支配下に入ったが、紀元前327年からビフィニアは再び独立国家となった。紀元前75年、王ニコミデス3世の遺言により、ビフィニアはローマに譲渡され、特別なプロコンスルによって統治される独立した属州としての地位を得た。　ビフィニアにおけるキリスト教は、使徒の時代に現れた（使徒ペトロの手紙第一 1章1節）。ビフィニアを統治したプリニウス・ザ・ヤングとトラヤヌス皇帝（98–117年）の時代には、都市だけでなく、村や集落にも非常に多くのキリスト教徒がいた。 ディオクレティアヌス帝（284–305年）の治世下、ビフィニアではキリスト教徒に対する凄惨な迫害が行われた。4世紀から5世紀にかけて、ビフィニアは教会的な観点から特に注目すべき地域であった。ここでは、様々な異端をめぐって多くの教会公会議が開かれた。

[5370] ニコメディアは、プロポンティス湖、すなわちマルマラ海のほとりに位置する、古代において壮麗な都市であった。

その頃、ニコメディアにはエルモライという名の年老いた長老がおり、不信心者たちを恐れて、少数のキリスト教徒たちと共に、小さく目立たない家に身を隠していた。パンテレイモンが自宅から師のもとへ行き来する道は、エルモライが身を隠していた住居のそばを通っていた。　小さな窓から、頻繁に通り過ぎるその若者の姿を見て、エルモライは彼の顔つきや眼差しから、その善良な人柄を見抜いた。その若者が神に選ばれた器となることを霊的に悟ったエルモライは、ある日、若者の出迎えに出て、ほんの少しの間だけでも自分の家に入ってくるよう懇願した。　穏やかで従順な若者は、老人の家に入った。　老人は彼を自分のそばに座らせ、その出自や両親、信仰、そして生活全般について尋ねた。　青年はすべてを詳しく語り、母親はキリスト教徒だったが亡くなり、父親は健在で、異教の掟に従って多くの悪魔を崇めていると告げた。すると聖エルモライは彼にこう尋ねた。

「さて、善良な子よ！　あなたはどちらの側、どちらの信仰に属したいのか。父の側か、それとも母の側か？」

青年はこう答えた。

「母は生前、私に自分の信仰を教えてくれ、私はその信仰を愛するようになりました。しかし、父は力のある者として、私に異教の掟に従うよう強要し、王宮に私を住まわせ、王の側近や高位の武官、家臣たちと同じ地位に就かせようとしています。」

聖エルモライは再び尋ねた。

「では、あなたの師はどのような教えを授けているのですか？」

青年は次のように答えた。

「アスクレピアデス、ヒポクラテス、そしてガレノスの教えです[5371]；まさに、それが私の父の望みであり、師もまた、もし私が彼らの教えを身につければ、人々のあらゆる病気を容易に治すことができると言っています。」

この最後の言葉に、聖エルモライは有益な会話のきっかけを見出し、若者の心という肥沃な土壌に、神の言葉という良き種を蒔き始めた。

「私を信じてくれ」と彼は語りかけた。「おお、善良な若者よ！　私はあなたに一つの真実を告げる。アスクレピアデス、ヒポクラテス、ガレノスの教えや技法など、取るに足らないものであり、それらに頼る者たちを助ける力は微々たるものだ。　それに、マクシミアヌス王や君の父、その他の異教徒たちが崇める神々も、虚しいものであり、愚かな者たちに対する単なる作り話や欺瞞に過ぎない。　しかし、真の全能の神はただひとり――イエス・キリストである。もしあなたがこの方を信じるならば、その聖なる御名をただ呼び求めるだけで、あらゆる病を癒やすことができるだろう。なぜなら、主は盲人の目を開き、ハンセン病患者を清め、死者をよみがえらせたからである。　異教徒たちが崇める悪霊を、一言で人々から追い出された。御自身だけでなく、御衣さえも癒やしをもたらした。十二年間も出血に苦しんでいた女は、御衣の端にほんの少し触れただけで、たちまち癒やされたのである。　しかし、誰がそのすべての奇跡的な御業を詳しく語り尽くすことができようか。海の砂や天の星、水の一滴一滴を数え切ることができないのと同じように、奇跡を数え上げたり、神の偉大さを測り知ったりすることはできない。　そして今、主は御自分のしもべたちにとって力強い助け手であり、悲しむ者を慰め、病人を癒やし、災いから救い出し、あらゆる敵の悪から解放してくださる。誰かに懇願されるのを待つことなく、むしろ祈りや心の動きに先立って、自ら行動してくださるのだ。　主を愛する者たちには、これらすべてを行う力を与え、さらに大きな奇跡を行う賜物を授け、ついには、天の御国の永遠の栄光における終わりのない命を与えてくださる。

パントレオンは、聖エルモライのこれらの教えを真実として信じ、心の中に受け入れた。彼は喜びをもって知性を働かせてそれらを深く掘り下げ、聖なる長老にこう言った。

[5371] 古代の著名な医師たち。

「私は母から何度もこれを聞いてきましたし、母が祈り、あなたが私に語ってくださるその神を呼び求めている姿を、よく目にしてきました。」

その日から、パントレオンは毎日長老のもとを訪れ、神の霊に導かれたその語りかけに心を満たされ、真の神への認識を深めていった。そして、師であるエウフロシノスの元から帰る際も、長老を訪ね、魂に益となる教えを受けるまでは決して家に帰らなかった。

ある日、師のもとからの帰り道で少し道を外れたところ、巨大なエヒドナに噛まれて死んだ子供と、そのすぐそばに横たわっているエヒドナそのものを見つけた。これを見て、パントレオンは最初、怖くなって少し後ずさったが、その後、心の中でこう考えた。

「今こそ、エルモライ老人が語ったことがすべて真実であるかどうかを、自ら試して確かめる時が来たのだ。」

空を見上げながら、彼はこう唱えた。

「主イエス・キリストよ、私はあなたを呼び求めるに値しない者ですが、もしあなたが私をあなたのしもべとしたいとお望みなら、あなたの力を現し、あなたの御名によって、この少年を生き返らせ、エヒドナを死なせてください。」

するとたちまち、少年はまるで眠りから覚めたかのように生き返り、マムシは真っ二つに裂けた。その時、パントレオンはキリストを心から信じ、肉体の目と霊の目を天に向け、神が彼を闇から御自身の知識の光へと導いてくださったことを喜びと涙をもって神を賛美した。　彼は急いで聖エルモラエ司祭のもとへ行き、その尊い足元にひれ伏して、洗礼を請うた。そして、起こった出来事――――すなわち、死んでいた少年がイエス・キリストの御名の力によって蘇り、死をもたらしたエヒドナが滅びた様子を彼に語った。　聖エルモライは家を出て、彼と共に死んだエヒドナを見に行き、それを見て、神がパントレオーンを御自身の知識へと導かれたこの奇跡を神に感謝した。　家に戻ると、彼はその若者を父と子と聖霊の御名によって洗礼を授け、自室で聖体礼儀を執り行い、キリストの御体と御血という神聖な秘跡を彼に授けた。

洗礼を受けた後、パントレオンは長老エルモライのもとで七日間を過ごし、長老の口から伝えられる神の言葉とキリストの恵みによって教えを受けた。まるで生ける水の泉から水を飲むかのように、彼は自分の魂を潤し、霊的な実りを豊かに実らせた。八日目に彼は実家へ戻り、父親が彼に尋ねた。

「わが子よ、この数日間、どこにいたのか。私は君のことを心配していたのだ。」

聖人は答えた。

「王の宮殿で師と共にいました。王が大変愛しておられる病人を治療し、その方が健康を取り戻すまで、七日間、その傍らを離れませんでした。」

聖人はそう語ったが、それは嘘ではなく、たとえ話を装って、神秘的かつ寓意的に真理を伝えているのである。　彼は心の中で、聖エルモライ長老を「師」と呼び、王の宮殿とは、神聖な秘儀が執り行われていた内なる平安を意味し、病人は天の王に愛され、七日間霊的な治療を受けていた自身の魂を指していたのである。

翌朝、彼が師であるエウフロシノスのもとを訪れると、師は彼に尋ねた。

「ここ数日、どこへ消えていたのか？」

「父が土地を購入し、それを引き取るよう私を遣わしましたが、私はそこにあったものをすべて注意深く見回していたため、遅れてしまいました。というのも、それは高価な代金で購入されたものだからです。」

これは、彼が受けた聖なる洗礼や、彼が知ったキリスト教信仰のその他の秘跡について、比喩的に語ったものであった。それらはすべて、あらゆる富を超える並外れた価値を持つものであり、キリストの血によって獲得されたものだからである。これを聞いて、エウフロシンは問いかけを止めた

。　一方、聖パントレオンは、神の恵みに満ち溢れ、その内に聖なる信仰という宝を秘めていた。彼は父を深く案じ、まるで父を偶像崇拝の闇から救い出し、キリストを知る光へと導こうとするかのように、毎日、知恵に満ちたたとえ話や問いかけを用いて父と語り合い、こう言った。

「父よ！　立っている姿で造られた神々は、当初置かれたまま今日に至るまで立ち続け、決して座ることはありません。一方、座っている姿で造られた神々は、今日に至るまで座り続け、決して立ち上がることはありません。なぜでしょうか？」

「お前の問いは、私にもあまりはっきりとは分からない」と父は答えた。「私自身、これにどう答えればよいのか分からないのだ。」

聖人は、これに似た他の問いを絶えず父に投げかけ、父に自らの神々への疑いを抱かせ、偶像崇拝の虚偽と誤りを少しずつ理解させた。　父はもはや、かつてのように偶像を崇め、毎日数多くの生け贄を捧げ、礼拝を捧げることはやめ、むしろそれらを軽蔑し、崇拝しなくなった。これを見て、パントレオンは、父を偶像から完全に遠ざけることはできなかったにせよ、少なくとも偶像に対する疑念を父の中に植え付けることができたことを喜んだ。　パントレオンは、家の中に数多くあった父の偶像を打ち砕きたいと何度も思ったが、自制していた。その理由の一つは、神の戒めに従って敬うべきである父を怒らせないためであり、もう一つは、父が自ら真の神を知った時、自らの手でそれらを打ち砕きたいと望むようになるのを待っていたからである。

その頃、ある盲人がパントレオンのもとに連れてこられ、次のように癒やしを懇願した。

「お願いです、私を憐れんでください。私は目を失い、尊い光さえも奪われてしまいました。この街にいるあらゆる医師たちが私を治療しましたが、彼らからは何の恩恵も受けられませんでした。それどころか、私がかろうじて見ることができた最後の光さえも、私の全財産とともに失ってしまいました。なぜなら、彼らに報酬を支払うために多額の費用を費やしたにもかかわらず、癒やしを得るどころか、害と時間の浪費しか得られなかったからです。

聖人は彼にこう反論した。

「もし、何の役にも立たなかったあの医師たちに全財産を配ってしまったのなら、もし治癒して目が見えるようになったら、私にどのような報酬をくれるつもりなのか？」

「私に残されたわずかなもの――」と盲人は叫んだ。「それを喜んであなたに差し上げます。」

聖人はこう言った。

「あなたに光をもたらす視力の賜物は、光の父、まことの神が、私という不適格なしもべを通して与えてくださる。だから、約束したものを私に渡すのではなく、貧しい人々に分け与えなさい。」

これを聞いて、パントレオンの父エウストルギオスは彼に言った。

「わが子よ！　自分にはできないようなことに手を出すのはやめなさい。さもないと、嘲笑されることになる。実際、彼を治療しても治せなかった、あなたより優れた医師たちよりも、あなたに何ができるというのか？」

「誰も」と聖人は反論した。「あの医者たちの誰一人として、この場合にどのような治療法を用いるべきかを知らない。私ほど知っている者はいない。彼らと、この治療法を教えてくれた私の師との間には、大きな違いがあるのだ。」

彼の父親は、聖人がエウフロシネという師のことを言っているのだと思い、こう言った。

「君の師もこの盲人の治療にあたったが、どうすることもできなかったと聞いたぞ。」

「少しお待ちください、父上！」とパントレオンは答えた。「そうすれば、私の治療の力をご覧いただけます。」

そう言うと、彼は指で盲人の目に触れながら言った。

「盲人の目を開かれるわが主イエス・キリストの名によって、目を開けなさい。」

するとたちまち、盲人の目が開かれ、彼は見えるようになった。その瞬間、パントレオン神父の父エウストルギオスも、目が見えるようになった男と共にキリストを信じ、聖なる長老エルモライによって洗礼を受け、キリストの恵みと力に対する大きな霊的な喜びに満たされた。

そこでエウストルギウスは、自宅にあるすべての偶像を打ち砕き始めた。その作業には、息子の聖パントレオンも協力した。偶像を粉々に砕いた後、彼らはその破片を深い堀に投げ込み、土で埋め戻した。　その後、しばらくして、エウストルギウスは主のもとへ召された。一方、パントレオンは、非常に豊かな父の遺産を相続すると、直ちに奴隷たちを解放し、彼らに惜しみなく報いた。そして、その財産を、貧しい人々、物乞い、未亡人、孤児といった困窮している人々に配り始めた。　彼は牢獄を巡り、鎖に縛られて苦しむ者たち一人ひとりを訪ね、治療と、彼らが必要とする物資の施しによって慰めた。このようにして、彼は傷だけでなく、人間の貧しさをも癒やす医者であった。なぜなら、誰もが彼から尽きることのない施しを受けたからである。　乞食たちは彼の寛大さによって豊かになり、治療においては神の恵みが彼を助けていた。なぜなら、彼には天から癒しの賜物が与えられており、彼は薬による治療というよりは、イエス・キリストの御名を呼び求めることによって、あらゆる病を無償で癒していたからである。　その時こそ、パントレオンは、まさに「パントレイモン」、すなわち「全き慈悲深い者」として現れた。その名は名にふさわしく、実際にもすべての人に慈悲を示し、施しを受けず、あるいは慰められずに去る者を一人も許さなかった。なぜなら、貧しい者には十分な援助を与え、病人を無償で治療したからである。　街中の人々が他の医師たちをすべて見捨てて、病人を連れて彼のもとに駆けつけた。なぜなら、パンテレイモンほど迅速かつ完全な治癒をもたらす者は誰もおらず、彼は治療を成功させながらも、誰からも報酬を受け取らなかったからである。　こうして、慈悲深く無償で治療を行う医師の名は民衆の間に広く知れ渡り、他の医師たちは非難され、嘲笑されるようになった。その結果、医師たちの間では聖人に対する少なからぬ嫉妬と敵意が生まれた。それは、前述の盲人が視力を取り戻した時からすでに始まっていた。その経緯は次の通りである。

ある日、聖パンテレイモンのおかげで目が見えるようになったその盲人が街を歩いていると、医師たちは彼を見かけ、互いにこう囁き合った。

「あれは、かつて盲目だったあの男ではないか。私たちに治療を求めてきたが、治せなかったあの男だ。どうして今、目が見えるのか？　誰が、どのような手段で彼を癒やし、目を開かせたのか？」

そして、彼自身に、どうやって目が見えるようになったのかと尋ねた。すると、その男は、自分の治療をしたのがパンテレイモンであることを隠さなかった。彼らが、彼がエウフロシノスの弟子であることを知ると、こう言った。

「偉大な師にふさわしい偉大な弟子だ。」

彼らは、パンテレイモンを通じてキリストの力が働いていたことを知らず、気づかぬうちに、パンテレイモンこそが偉大な師――イエス・キリスト――の偉大な弟子であるという真実を認めてしまったのである。　しかし、彼らは口先では偽善的に聖人を称賛していたものの、その実、心の中では嫉妬から悪意を抱き、聖人を監視し、彼を滅ぼすための何らかの罪状を探していた。そして、彼が牢獄を訪れ、そこでキリストのために苦しむ弟子たちの傷を癒していることに気づくと、拷問官マクシミアンにこう告げた。

「王よ！　あなたが御自身の宮殿に置いておきたいと願い、医術を学ばせるよう命じたその若者は、あなたからのあのような明らかな恩恵を軽んじ、牢獄を巡り、我らの神々を冒涜する囚人たちを治療し、彼らと同様に我らの神々について不敬な言葉を語り、他の人々をもその悪しき不敬へと誘っているのです。　もしあなたが早急に彼を滅ぼさなければ、少なからぬ悩みの種となるでしょう。なぜなら、彼の魅惑的な教えによって、多くの者が神々から背を向けるのを目にすることになるから

です。実のところ、パントレオンが治療に用いる医術を、彼はアスクレピオス[5372]や他の神々ではなく、ある「キリスト」の功績だと主張しており、彼が治療した者たちは皆、そのキリストを信じているのです。

中傷者たちはそう語り、自分たちの言葉の正当性を証明し、確かな証言とするために、パントレオンによって癒やされた盲人を呼び出すよう王に懇願した。王は直ちに、視力を取り戻したその盲人を探し出すよう命じ、彼が連れて来られると、こう尋ねた。

「言ってみよ、この人よ。パントレオンはどのようにしてお前の目を癒したのか？」

すると、その男はこう答えた。

「キリストの御名を呼び、私の目に触れたところ、私はたちまち目が見えるようになりました。」

「さて、お前はどう思う？」と王は彼に問いかけた。「キリストがお前を癒したのか、それとも神々か？」

「王よ！」と彼は答えた。「王の周りにいるこれらの医師たちは、長い間、私の治療に多大な労力を費やしました。彼らは私の全財産を奪い、何の役にも立たなかったばかりか、私が持っていたわずかな視力さえも奪い、私を完全に盲目にしてしまったのです。」　しかし、パンテレイモンは、キリストの御名をただ一度呼び求めただけで、私を目が見えるようにしてくれたのです。さあ、王よ、あなたご自身で判断し、決めてください。誰がより優れた、真の医者なのか。長い間呼び求められながら、少しも助けにならなかったアスクレピオスや他の神々か、それとも、パンテレイモンによってたった一度呼び求められ、即座に私に癒やしを与えてくださったキリストか。

これに対しどう答えるべきか分からなかった王は、すべての拷問者たちの常套手段に従い、彼を不敬な行いに駆り立てようとした。

「愚かなことを言うな、人間よ。キリストのことは口にするな。神々が君に光を見る力を与えたのは明らかだ。」

しかし、癒やされた男は、王の権威を意に介さず、拷問者の脅しをも恐れず、かつてファリサイ派の人々の尋問に引き出された福音書の盲人（ヨハネ9:27）よりも大胆に、マクシミアヌスにこう答えた。

「王よ、狂っているのはあなた自身です！　あなたの盲目の神々を『視力を与える者』と呼びながら、あなた自身も彼らと同じで、真理を見ようとはしないのです。」

怒りに満ちた王は、直ちに剣で彼を処刑するよう命じた。こうして、イエス・キリストの名を告白したこの善良な殉教者の首は切り落とされ、彼はこの世を去り、肉眼の視力を得て地上で告白した御方を、揺らぐことのない天の光の中で、顔と顔を合わせて見るために旅立ったのである。　聖パンテレイモンは、殺害者たちからその遺体を購入し、父の遺体のそばに葬った。

その後、王はパントレオーンを自分の元へ呼び出すよう命じた。兵士たちが聖人を王のもとへ連行している間、彼はダビデの詩篇の言葉を歌っていた。*「わが賛美の神よ！　沈黙しないでください。不義な者たちと、陰険な者たちの口が、私に向かって開かれているからです*」（詩編108:1–2）と、その詩編の続きを歌った。こうして彼は、肉体をもって地上の王の前に、霊をもって天の王の前に現れた。

マクシミアヌス王は、彼を怒りの色ひとつ見せずに見つめ、穏やかにこう説得し始めた。

「パントレオンよ、私は君について良くない話を耳にしている。君はエスクラープや他の神々をあらゆる手段で非難し、侮辱している一方で、惨めな死を遂げたキリストを賛美し、彼に希望を置き、彼だけを神と呼んでいると、人々は私に告げている。　君も、私がどれほど君に目を留め、どれほど大きな慈悲を注いできたか、よく知っているはずだ。私の宮殿に迎え入れ、師であるエウフロシ

[5372] 医療の神。

ノスに、君が常に私のそばにいられるよう、速やかに医術を教えるよう命じたほどなのだ。　それにもかかわらず、あなたはこれらすべてを軽んじ、私の敵の側に身を寄せた。しかし、とはいえ、あなたについて語られていることを信じたくはない。なぜなら、人々は多くの虚偽を語ることに慣れているからだ。だからこそ、私はあなたを呼び出したのだ。あなたが自ら真実を語り、嫉妬深い者たちによるあなたへの虚偽の中傷を、皆の面前で、偉大なる神々への捧げ物を相応に捧げた上で、暴き出してもらうためである。

聖人はこう答えた。

「王よ、言葉よりも行いを信じるべきです。なぜなら、真実は言葉よりも行いからはるかに明確に知ることができるからです。ですから、私についての噂を信じてください。私はアスクレピオスやあなた方の他の神々を拒絶し、キリストを賛美しています。なぜなら、キリストの行いを通して、彼が唯一の真の神であることを知ったからです。」　さあ、せめて手短にキリストの御業を聞いてください。キリストは天を創造し、地を確立し、死者をよみがえらせ、盲人の視力を回復させ、ハンセン病患者を清め、一言で言えば、痲痺者を寝台から立ち上がらせました。あなたがたが崇める神々が、これと同様のことを成し遂げたことがあるか――私にはわかりません――そして、果たして成し遂げることができるのでしょうか?　もし今、キリストの全能の力を知りたいというのなら、その働きをすぐに現実の目で確かめることができるだろう。　死の床に横たわり、医師たちもすでに絶望しているような人をここに連れてくるよう命じてください。そして、あなたの祭司たちに来させ、彼らの神々を呼び求めさせ、私も私の神を呼び求めましょう。そして、どの神がその病人を癒やすかによって、その神こそが唯一の真の神であると認められ、他の神々は拒絶されるべきです。

王はこの聖人の助言を気に入り、直ちにそのような病人を探すよう命じた。

すると、長年にわたり麻痺し、体のどの部位も動かすことができず、まるで感覚のない木のような状態にある男が、寝台に乗せられて連れてこられた。そこで、偶像を崇拝し、医療の術に長けた祭司たちもやって来て、聖人に、まず自分のキリストを呼び出すよう提案した。

聖人は彼らにこう反論した。

「もし私が私の神を呼び求め、私の神がこの麻痺した者を癒やすなら、あなた方の神々は誰を癒やすというのか?　しかし、まずあなた方が先にあなた方の神々を呼び求めなさい。もし彼らが病人を癒やすなら、私の神を呼び求める必要などないだろう。」

そこで、祭司たちはそれぞれの神々を呼び始めた。ある者はアスクレピオスを、別の者はゼウスを、またある者はディアナを、他の者たちは様々な悪霊を呼び求めたが、声も反応も全く見られなかった。彼らは長い間、神に背く祈りを繰り返したが、何の成果も得られなかった。　聖人は、彼らの無駄な努力を見て、笑った。彼が笑っているのを見て、王はパントレオンにこう言った。

「パントレオンよ、もしできるなら、お前の神を呼び求めて、この男を健康にしてやれ。」

「祭司たちを退かせなさい」と聖人は言い、彼らは退いた。

すると聖人は、寝台に近づき、天を仰ぎ見て、次のような祈りを捧げた。

「*主よ！　私の祈りを聞き入れ、私の叫びが御前に届きますように。　御顔を私から隠さないでください。私の苦難の日に、御耳を私に向け、[私があなたに呼びかける]その日に、速やかに私をお聞きください*」（詩編101:2–3）。そして、あなたを知らない者たちの前で、あなたの全能の力を現してください。何事でもあなたには可能だからです、力ある王よ！

この祈りを唱え終えると、聖人は麻痺した人の手を握り、こう言いました。

「主イエス・キリストの御名によって、立ち上がり、癒されなさい！」

すると、たちまちその麻痺した人は立ち上がり、全身に力が入るのを感じ、喜びながら歩き回り、自分の寝床を背負って家へと持ち帰った。

この奇跡を目撃した集まっていた人々の多くは、キリストを信じるようになった。しかし、偶像に仕えていた祭司たちは、キリストのしもべを憎み、歯ぎしりしながら王にこう訴えた。

「もし彼が生き残れば、神々への生贄は廃れてしまい、我々はキリスト教徒たちに嘲笑されることになる。王よ、彼を滅ぼせ！　一刻も早く。」

そこで王はパントレオンにこう言った。

「パントレオンよ、無駄に命を落とさないためにも、神々に生贄を捧げなさい。私たちの神々を否定し、私たちの命令に背いたために、どれほど多くの人々が命を落としたか、君も知っているはずだ。老人アンフィムがどれほど残酷に苦しめられたか、知らないのか？

– キリストのために死んだ者たちは皆――と聖人は答えた――滅びたのではなく、永遠の命を得たのだ。　そして、アンフィムが年老いて体が弱っていたにもかかわらず、我らの主のために残酷な拷問に耐えることができたのなら、ましてや若く体も強い私なら、あなたが私に課すあらゆる苦痛を恐れることなく耐え抜かなければならない。なぜなら、キリストのために死ななければ、私はこの人生を空しいものと見なすし、もし死ぬならば、それを得たものと考えるからだ。

王は、裸の殉教者を拷問用の木に吊るし、鉄の爪でその体を削り、燃えるろうそくで肋骨を焼くよう命じた。彼はこれらの苦しみを受けながら、天を仰ぎ見てこう言った。

「主イエス・キリストよ！　この瞬間に私のそばに立ち、私が最後までこの苦しみ耐え抜くことができるよう、忍耐をお与えください。」

すると、主は長老エルモライの姿で彼の前に現れ、こう言われた。

「恐れるな、わたしはあなたと共にいる。」

するとたちまち、拷問者たちの手の力が抜け、まるで死んだかのように固まり、その結果、拷問器具が彼らの手から落ち、ろうそくの火も消えてしまった。これを見た王は、殉教者を拷問台から降ろすよう命じ、彼にこう言った。

「お前の魔術の力は一体何なのか。家来たちまで力尽き、ろうそくの火まで消えてしまったではないか。」

殉教者はこう答えた。

「私の魔法とは、キリストそのものです。その全能の力が、すべてのことを成し遂げるのです。」

王は反論した。

「もし私がさらに過酷な拷問を命じたなら、お前はどうするつもりだ？！」

– 大きな苦しみの中で――と殉教者は答えた――私のキリストは、あなたを恥じ入らせるために、私にさらなる忍耐を授けてくださり、その大きな力を示してくださるでしょう。そして私は、キリストのためにより重い苦しみを受け入れることで、キリストから大きな報いを受けるのです。

そこで拷問官は、大きな釜で鉛を溶かし、そこに殉教者を投げ込むよう命じた。鉛が沸騰すると、殉教者は釜のそばに連れて行かれたが、彼は天を仰ぎ、こう祈った。

「*神よ、私の祈りの声を聞いてください。敵の恐怖から私の命を守り、悪意ある者たちの計略や、悪人たちの反逆から私をお守りください*」（詩編63:2–3）。

彼がそう祈っていると、再び主がエルモライの姿で現れ、彼の手を取って共に大釜の中に入った。するとたちまち火は消え、鉛は冷め、殉教者は詩篇の言葉を歌った。*「わたしは神に呼び求め、主はわたしを救ってくださる。　夕べも、朝も、昼も、私は懇願し、叫び求めよう。主は私の声を聞いてくださる」*（詩篇54:17–18）。その場にいた者たちはこの奇跡に驚嘆し、王は叫んだ。

「さて、結局どうなるというのか――火も消え、鉛も冷めてしまったというのに？　この魔術師を、いったいどのような拷問にかければよいのか？」

傍らにいた者たちはこう進言した。

「彼を海の深みに投げ込ませよ。彼は海全体を魔法で支配することなどできないのだから、たちまち死んでしまうだろう。」

拷問官は、その通りにするよう命じた。

使用人たちは殉教者を捕らえ、海へと連れて行き、首に大きな石を縛り付けて舟に乗せた。岸から遠く離れたところで、彼らは彼を海に投げ込み、自分たちは岸に戻った。　聖人が海に投げ込まれたとき、最初と同じように、キリストがエルモライの姿で再び現れ、殉教者の首に縛られた石は葉のように軽くなり、パンテレイモンは沈むことなく海面に浮かび続け、　まるで陸を歩くかのように、かつて使徒ペトロがそうであったように、キリストの右手に導かれて水面を歩いた。彼は神を賛美し、栄光を称えながら岸に上がり、王の前に現れた。王はこの奇跡に言葉に尽くせないほど驚嘆し、こう叫んだ。

「パントレオンよ、お前の魔法の力はなんと強大なのか。海までもその力に従わせたとは？」

「海もまた」と聖人は説明した。「その主の御言葉に従い、御意志を遂行するのです。」

「では、お前も海を支配しているのか？」と王は尋ねた。

「私ではありません」と殉教者は答えた。「私のキリスト、目に見えるものも見えないものもすべてを創造し、支配される主がそうなさるのです。主は天と地を支配されるのと同様に、海をも支配しておられます。*『あなたの道は海にあり、あなたの道は大きな水の中にあります』*（詩編76:20）。」

その後、拷問官は、殉教者を獣に食わせようと、城の外に獣の闘技場を準備するよう命じた。街中の人々がこの見世物に集まり、美しく、罪のない若者が獣たちに蹂躙される様子を見ようと待ちわびていた。王もここに現れ、殉教者を連れてくると、指で獣たちを指し示しながら、こう言った。

「これらは君のために用意されたものだ。さあ、私の言うことを聞きなさい。若さを守り、その美しい体を惜しみ、神々に生贄を捧げなさい。さもないと、獣の牙に蹂躙され、残酷な死を遂げることになるだろう。」

しかし、聖人は、そのような悪意に満ちた助言や命令に従うよりは、むしろ獣に引き裂かれることを望んだ。そして、彼は獣たちの前に放り出された。　しかし、主はここでも、長老エルモライの姿をとって聖人の前に現れ、獣たちの口を塞ぎ、羊のように従順にされた。そのため、獣たちは聖人の足元に這い寄り、その足を舐めた。聖人は手で獣たちを撫でると、どの獣も聖人の手に触れようと、互いに押し合いながら競い合った。 これを見た民衆は驚き、声を高らかに叫んだ。

「キリストの神は偉大なり！ 罪なき義なる若者を釈放せよ！」

すると、王は怒りに満ち、剣を抜き放った兵士たちを、キリスト・神を賛美する者たちに向かわせた。その結果、キリストを信じた民衆の多くが殺され、王はすべての獣をも殺すよう命じた。これを見た殉教者は、こう叫んだ。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。人だけでなく、獣までもがあなたのために死ぬのですから！」

王は悲しみと怒りを抱きながらその場から立ち去り、殉教者を牢獄に投げ込んだ。殺された人々は、その身内によって引き取られ、埋葬されたが、獣たちは犬や肉食の鳥に食われるままに放置された。　しかし、そこでも大きな奇跡が起こった。これらの獣の死骸は、何日も、犬だけでなく鳥たちにも一切触れられることなく横たわっていたばかりか、それだけでなく、その死骸からは悪臭さえも漂わなかった。これを知った王は、それらを深い堀に投げ込み、土で埋め尽くすよう命じた。　一方、殉教者に対しては、鋭い棘がびっしりと刺さった恐ろしい車輪を用意するよう命じた。聖人がその車輪に縛り付けられ、車輪が回転し始めた途端、目に見えない力の働きによって車輪は粉々に砕け散り、近くに立っていた多くの人々を致命傷を負わせたが、殉教者は無傷のまま車輪から降りた。そして、神がその聖人の姿を通して栄光を現されたこのような奇跡を目の当たりにして、皆に恐怖が襲いかかった。王は深く驚嘆し、殉教者に尋ねた。

「誰が、あなたにこれほど偉大な魔法のような業を行うことを教えたのか？」

「魔法ではなく、真のキリスト教の敬虔さを、聖なる長老エルモライから教えられました」と殉教者は答えた。

「その師であるエルモライはどこにいるのか」と王は尋ねた。「彼に会いたいのだ。」

殉教者は、エルモライにとって殉教の冠を受ける時が近づいていることを霊的に悟り、王にこう答えた。

「お命じになれば、彼をあなたの元へ呼び寄せましょう。」

そして、聖人は、彼を見張る三人の兵士に付き添われて、長老エルモライを呼びに行くために解放された。

殉教者が長老が住む家へ着くと、長老は彼を見て尋ねた。

「何のご用で来たのか、わが子よ？」

「ご主人様、父よ、王様があなたをお呼びです。」

「私を呼びに来るにはちょうど良いタイミングだ」と長老は言った。「なぜなら、私の苦しみと死の時が訪れたからだ。今夜、主が私に現れてこう告げられたのだ。『エルモライよ、あなたは私のしもべパンテレイモンと同様に、私のために多くの苦しみを受けることになる』と。」

そう言うと、老人は喜びながら殉教者と共に歩み、王の前に進み出た。王は長老を見て、その名を尋ねた。聖人は自分の名を告げると、信仰も隠さず、声を張り上げて自らをキリスト教徒だと名乗った。王は再びこう尋ねた。

「君と同じ信仰を持つ者は、他に誰かいるか？」

長老はこう答えた。

「私には二人の同僚、キリストの真の僕であるエルミッパとエルモクラトがいます。」

そこで王は、彼らも自分の前に連れてくるよう命じ、その三人のキリストの僕たちにこう言った。

「お前たちがパントレオーンを我らの神々から遠ざけたのか？」

– キリストご自身が――と彼らは反論した――私たちの神は、ふさわしいと認められた者たちを御自身のもとに招き、偶像崇拝という闇から、御自身の知恵の光へと導き出されるのです。

「さあ、今こそ」と王は提案した。「その偽りの言葉を捨て、パントレオーンを再び神々へと立ち返らせなさい。そうすれば、最初の罪は赦され、私からこれほどの栄誉を授かるだろう。私の宮殿で、私の最も親しい友となるほどに。」

「私たち自身が、私たちの神であるキリストのために彼と共に死ぬ覚悟をしているのに、どうしてそんなことができるでしょうか？」と聖人たちは断固として問いかけた。「私たちも彼も、キリストを否定することはありません。ましてや、耳も心もない偶像に犠牲を捧げるなど、到底ありえません。」

そう言うと、彼らは心を神に向け、天を仰いで祈り始めた。すると、上から救い主が現れ、たちまち地震が起こり、その一帯が揺れ動いた。

「ほら、神々があなたたちに怒っているのだ」と王は宣言した。「神々が大地を揺さぶっている！」

「その通りだ」と聖者たちは同意した。「あなたがたの神々のせいで大地が揺れたのだ。なぜなら、あなたがたに怒りを向けた我らの神の力によって、神々はそれぞれの場所から地面に落ち、粉々に砕け散ったのだから！」

彼らがそう語っているとき、神殿から使者が王のもとへ駆けつけ、彼らの偶像がすべて地面に倒れ、塵と化してしまったという知らせをもたらした。しかし、狂気の支配者は、この一連の出来事を神の力ではなく、キリスト教徒の魔術だと見なし、こう叫んだ。

「まことに、もしこの魔術師たちを直ちに滅ぼさなければ、彼らのせいで街全体が滅びてしまうだろう。」

彼はパンテレイモンを牢獄へ連行するよう命じ、長老エルモライと彼と共にいた二人の友人を、数々の拷問にさらした後、剣による斬首刑に処した。　こうして、三人の聖なる殉教者――長老エ

ルモライと、彼と共に奉仕したエルミッポス、エルモクラト――は、殉教の偉業を成し遂げ、共に天の栄光のうちに聖三位一体の前に現れた。

三人の聖なる殉教者が殺害された後、王は聖パンテレイモンを自分の前に連れてくるよう命じ、彼に向かって次のように語りかけた。

「私は多くの人々をキリストから我らの神々へと改宗させたが、お前だけは私の言うことを聞こうとしない。お前の師であるエルモライも、二人の友と共に神々にひれ伏し、彼らに犠牲を捧げた。私は彼らを宮殿で名誉ある地位に就かせた。お前も同様に振る舞い、彼らと同じ栄誉を得よ。」

しかし、殉教者は、聖人たちが亡くなったことを霊によって知ると、王にこう頼んだ。

「彼らをここへ呼び寄せてください。王様の御前で彼らに会いたいのです。」

「彼らは今ここにはいない」と王は嘘をついた。「私が彼らを別の町へ送り出したからだ。そこで彼らは莫大な富を得るだろう。」

「ほら、あなたは本意に反して真実を口にしてしまった」と聖人は彼に説明した。「あなたは彼らをここから追い出し、死に追いやったのだ。そして彼らは確かに、目には見えない富を得るために、キリストの天の都へと去っていったのだ。」

王は、殉教者をいかなる手段を用いても不義へと屈服させることはできないと悟ると、彼を激しく殴打するよう命じ、ひどい傷を負わせた上で、剣で首を刎ね、その遺体を火に投げ込むという死刑を宣告した。そして兵士たちは彼を連れ出し、城の外で斬首した。

聖人は死へと向かう途中、ダビデの詩篇を歌った。*「若き日から、多くの者がわたしを苦しめたが、わたしを打ち負かすことはできなかった。耕す者たちが、わたしの背中で耕した」*（詩篇128:2–3）。そして、その詩篇の言葉の最後まで歌い続けた。

兵士たちが殉教者を城の外へ、競技場一つ分以上の距離まで連れ出したとき、主がそのしもべが息を引き取ることをお望みになった場所に到着した。　彼らはパンテレイモンをオリーブの木に縛り付け、近づいてきた処刑人が聖人の首を剣で斬りつけようとしたが、刃は蝋のように曲がり、聖人の体は一撃も受けなかった。それは、彼がまだ祈りを終えていなかったからである。

兵士たちは恐怖のあまり叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

そして、聖人の足元にひれ伏して、こう懇願した。

「お願いです、神のしもべよ！私たちのために祈ってください。王の命令に従ってあなたに犯した罪が赦されますように。」

聖人が祈っていると、天から彼に向けた声が聞こえ、その改名を認めるものだった。主は、パントレオーンという名に代わって彼をパンテレイモンと名付け、あらゆる苦難や悲しみのうちに彼に助けを求めるすべての人を憐れむという恵みを明らかに示し、そして主は彼を天へと召されたのである。　喜びに満ちた聖人は、兵士たちに剣で自分を斬り殺すよう命じましたが、兵士たちは恐れて身がすくみ、その命令に従おうとしませんでした。そこで聖人は彼らにこう語りかけました。

「もしあなたがたが、与えられた使命を果たさなければ、私のキリストからの慈悲を受けることはできないだろう。」

兵士たちは近づき、まず聖人の全身に口づけをした。その後、一人の兵士に命じると、彼は殉教者の首を切り落としたが、血の代わりに乳が流れ出た。そのオリーブの木は、その瞬間から根元から梢まで実で覆われた。これを見た、斬首の場にいた民衆の多くは、キリストを信じるようになった。

ここで現れた奇跡について王に報告されると、王は直ちにそのオリーブの木を細かく切り刻み、殉教者の遺体と共に焼き払うよう命じた。

火が消えると、信者たちは灰の中から、火にも傷つけられていない聖人の遺体を回収し、近くにあるスコラティスト・アダマンティアの土地に、栄誉をもって埋葬した。

殉教者の家で仕えていたラウレンティウス、ヴァッソイ、プロヴィアン、　遠くから彼に従い、そのすべての殉教の苦しみを目の当たりにし、天から彼に語りかけた声を聞いた者たちは、彼の生涯と殉教の物語を記し、殉教者を記念して聖なる教会に伝えた。これは、読む者や聞く者の益となり、父と聖霊と共に今、そして常に、世々限りなく賛美される、私たちの神キリストの栄光のためである。アーメン[5373]。

トロパリオ、第3調：

聖なる受難者であり、癒やしの御方であるパンテレイモンよ、慈悲深き神に祈り、私たちの魂に罪の赦しを授けてくださいますように。

コンダク、第5調：

この慈悲深き方の模範者よ、御方から癒しの恵みを受け、キリスト・神の受難者にして殉教者よ、あなたの祈りによって私たちの魂の病を癒し、常に私たちを襲う誘惑を追い払い、誠実に叫ぶ者たちよ：「主よ、私たちを救いたまえ」。

尊者アンフィサ修道院長を記念して

記念日：7月27日

聖アンフィサ（正確にはアンフサ）は、8世紀、アジアのマンティネア地方で修業に励みました。　実家を離れて、彼女は当初、洞窟の中で孤独に修行に励みました。長老シシニオスと出会った後、彼女は彼の教えに従って修行を続け、霊的生活においてこれほどまでに優れた成果を上げたため、90人の乙女たちが彼女の指導に身を委ねました。　聖アンフィサは、聖なるイコンを崇敬したために迫害を受けた。迫害者コンスタンティノス・コプロニモスの妻に対し、彼女は男の子と女の子が生まれると予言した。後者の娘はアンフサという名で、その聖性によって名声を博し、教会では4月12日に記念されている。

8月10日

7月28日（旧暦）

[5373] 聖パンテレイモンは305年7月27日に斬首された。バシレイオスの月暦には、聖人の斬首の際に流れた血と乳が10世紀まで保存され、信者たちに癒やしをもたらしたと記されている。このことは、12世紀のギリシャ語の韻文によるプロローグにも言及されている。　聖パンテレイモンの記念日は、古くから特に東方で崇敬されてきた。アルメニアのセバスティアやコンスタンティノープルに彼の名にちなんで建てられた教会は、4世紀に遡る。彼の聖遺骨はツァールグラード（コンスタンティノープル）に移されたが、 そこからその大部分はパリのサン＝ドニへ移され、頭部は802年にリヨンへ移されたとされるが、1200年にロシアの巡礼者アントニーはコンスタンティノープルのソフィア大聖堂でその頭部を目撃しており、ステファン・ノヴゴロドツの証言によれば　（1350年）の証言によれば、14世紀には聖パンテレイモンの聖遺物はコンスタンティノープルのヴラヘルナ教会に安置されていた。聖遺物の一部は現在、アトス山のパンテレイモン修道院にある。

七十人の使徒のうち、プロホル、ニカノール、ティモン、パルメンの聖使徒たち

記念日：7月28日

主の昇天後、聖霊が使徒たちに降臨すると、エルサレムにおける信者の数は著しく増加した。そのため、当時エルサレムに滞在していた使徒たちの助言に基づき、聖霊と知恵に満ちた七人の男性（使徒行伝6:5）が、助祭の務めを果たすために選ばれた。 これらの人々の名は、ステパノ、フィリポ、プロホロス、ニカノル、ティモン、パルメノス、そしてアンティオキア出身のニコラスであった。彼らの選出について、『使徒行伝』は次のように記している。

「その頃、弟子たちの数が増え続けたため、ギリシャ系ユダヤ人たちの間で、日々の配給において未亡人たちが軽んじられているとして、ユダヤ人に対する不満の声が上がった。そこで十二人［使徒］は、多くの弟子たちを呼び集めて言った。『私たちが神の言葉をほったらかしにして、食事の配給に気を取られるのは良くない。 それゆえ、兄弟たちよ、あなたがたの中から、信頼でき、聖霊と知恵に満ちた七人の人を選び出してください。彼らをこの務めに任命し、私たちは絶えず祈りと御言葉の奉仕に専念しましょう。 この提案は全会衆に受け入れられ、彼らは、信仰と聖霊に満ちたステパノ、フィリッポ、 プロホロス、ニカノール、ティモン、パルメノス、そして異邦人から改宗したアンティオキアのニコライを選出した。 彼らを使徒たちの前に連れて行き、使徒たちは祈りをささげて、彼らに按手した。こうして、神の言葉は広がり、エルサレムでは弟子たちの数が大いに増えた」（使徒言行録6:1–7）。

これら選ばれた者たちのうち、聖第一殉教者ステファノの記念日は12月27日に、聖フィリッポの記念日は10月11日に祝われる。 ニコライ（聖人として列聖されていない[5374]）を除く他の執事たちの記念日は、彼らがキリストの御名を宣べ伝え、殉教の死をもってその説教を確かなものとしたものの、異なる時期や場所で亡くなったにもかかわらず、聖なる教会は本日、彼らをまとめて記念している。

聖プロホルは当初、他の弟子たちと共に、至高の使徒ペトロに付き従っていた（聖母マリアの被昇天以前のことである）； この使徒ペトロによって、聖プロホルはビフィニアの都市ニコメディアの司教に任命されました。このことは、至福のシメオン・メタフラスト[5375] が、聖使徒ペトロの生涯と功績に関する伝記（6月29日の項）の中で語っています。 その後、神の母の御眠りの後、プロホルは聖使徒ヨハネ・テオロゴスの同伴者であり協力者となった。彼と共に、プロホルは多くの国々を

[5374] 一部の教会著述家（聖イレネウス・リオン、エピファニオス・キプロス、福者ヒエロニムスなど）は、助祭ニコライをニコライ派の創始者かつ指導者と見なしており、この派は聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスによって『黙示録』（2:6,15）で非難されている。彼らは、助祭ニコライがキリストの愛とキリスト教の自由に関する教えを誤って理解し、節度のない肉欲的な愛を説いたと推測している。しかし、アレクサンドリアのクレメンスは、助祭ニコライが厳格で敬虔な生活を送り、妻と子供を持ち、その娘たちは処女のまま老い去ったと証言している。 彼の「肉は悪に用いるべきである」、すなわち肉を軽んじ、それを大切にはせず――抑制すべきである――という言葉は、分派者たちによって誤って解釈された。しかし、ニコライ自身は厳格な禁欲者として、そのような誤った考えとは無縁であった」。

[5375] シメオン・メタフラスト――10世紀の最も著名な教会作家。コンスタンティノープル生まれ。皇帝レオン・フィロソフォスおよびコンスタンティノス7世の秘書を務め、重要な外交任務を遂行した。 904年にアラブ人によって脅かされていたソロン（テッサロニキ）を、その首領を説得して金銭による身代金を受け取るよう促すことで、壊滅から救った。晩年にはパトリキウスおよびマギストルとなった。 その敬虔な生涯により、正教会によって聖人の列に加えられた（その記念日は11月27日）。シメオン・メタフラストは、教会史に関する著作によって非常に名声を博した； 彼は『聖人伝』を編纂（あるいは、より正確には収集）したが、聖シメオンは単に聖人たちの生涯、功績、苦難に関する古代の伝承を収集するにとどまらず、それらを語り直したり、改作したりした。ここから、彼の異名「メタフラスト」（ギリシャ語で「語り直す」「改作する」の意）が生まれたのである。

巡り、キリストの御名を宣べ伝えるために至る所で異教徒たちから迫害を受けた。また、ヨハネ・テオロゴスと共に、プロホルはパトモス島に流刑に処された。　そこで彼は、神の啓示によって語られた聖ヨハネ・神学者の言葉をすべて書き留めました[5376]；その後、聖プロホルは再びニコメディアで働き、そこで初代司教となりました。そこで彼は異教徒をキリストへと改宗させ、新しく設立された教会を拡大させました。　聖プロホルは、アンティオキアの町でキリストの御名を宣べ伝えたために異教徒たちに殺害され、殉教してこの世を去った[5377]。

聖ニカノールは、聖第一殉教者ステファノスが石打ちに遭ったのと同じ日に殉教した。当時、エルサレムの教会に対して激しい迫害が繰り広げられていた。聖ニカノールは、第一殉教者ステファノスと同様に、キリストを信じた二千人の人々と共に殺害された。　その殉教の様子について、カノンには、彼が神に捧げられた子羊のようであったと記されている[5378]。

聖ティモンは、聖使徒たちによって、アラビアにあったボストリアの司教に任命された。キリストの御名を宣べ伝えたため、ユダヤ人からも異教徒からも多くの迫害を受けた。ついに、激しく燃え盛る炉に投げ込まれたが、火による被害を全く受けず、無傷のまま炉から出てきた。　ローマ教会の伝承によれば、聖ティモンは炉から無傷で出てきた後、十字架刑に処されたという[5379]。

聖パルメンは、聖使徒たちから託された務めを熱心に果たした。彼は使徒たちの目の前で息を引き取り、彼らの手によって埋葬され、彼らによって弔われた。しかし、一部の人々は、彼が死の前に殉教の苦しみを味わい、殉教者の冠を授かったと主張している[5380]。

コンダク、第1声：

尊き助祭たちよ、御言葉の目撃者たちよ、信仰の選ばれた器たちよ、ニカノール、プロホール、パルメン、そしてティモンよ、栄光ある者たちよ。それゆえ、今日、私たちはあなたがたの聖なる記念を祝い、心から喜びをもってあなたがたを称える。

聖殉教者エウスタフィオスの記念日

記念日：7月28日

キリストの聖殉教者エウスタフィオスは軍隊に奉仕していた。彼はキリスト教徒であったため、捕らえられ、アンキラの総督コルニリウス（[5381]）のもとに連行された。尋問の際、彼は勇敢にキ

[5376] 伝承によれば、聖プロホルは聖ヨハネ・テオロゴスの口述に基づいて福音書を記した。

[5377] 一部の研究者の見解によれば、「プロホール」という名を持つ2人の人物を区別すべきである。1) プロホール・ディアコノス――聖使徒ペトロの同行者であり、後にニコメディアの司教となった人物。このプロホールは、8月9日にアンティオキアでキリストの御名を告白したために殉教した。 2) 後に生きたプロホール。聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの弟子であり、同行者であった。このプロホールは、聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの生涯と奇跡に関する伝記の編纂者とされており、その内容は聖母マリアの被昇天から彼の死に至るまでを網羅している。　古代のイコンに描かれている「書き手（福音書の写本者）」こそ、このプロホロスであるとされている。　しかし、プロホールという名を持つ二人の人物を区別すべきであると断定することはできません。おそらく、助祭プロホールと、聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの随行者プロホールは同一人物であり、聖ディミトリ・ロストフスキーもそのように受け入れています。

[5378] 第4、6、7の賛歌。

[5379] 聖使徒ティモンの記念日は、聖教会において12月30日と1月4日にも祝われている。

[5380] 一部の研究者の見解によれば、聖使徒パルメンはマケドニアで福音を宣教した。聖使徒パルメンの殉教は、トラヤヌス帝（98～117年）の治世、とりわけその治世の末期にさかのぼるとされている。

[5381] アンキラという都市は、小アジアのローマ属州ガラティアに位置している。

リストを告白したため、まず容赦なく殴打され、次に足裏に穴を開けられ、さらに縄で縛られてアンキラの街からサグキ川[5382] まで引きずり回された。その間、総督は彼の後を追いながらその様子を見守り、ついに彼を箱に詰め、川に投げ込んだ。　しかしその時、神の御心により、主の天使が現れ、その箱を川から陸地へと運び出した。　聖人は生きており、箱の中にいながら、*「至高者の御陰に住む者」*（詩編90:1）などと歌っていた。これを見た統治者は恥じ入り、剣を抜いて自ら命を絶った。一方、聖なる殉教者は神に祈りを捧げ、現れた天使の手から、鳩によって天から運ばれてきた聖体を受け、その後、主の御手に息を引き取った[5383]。その尊い遺骸はアンキラの町に埋葬された。

聖殉教者アカキオスの記念日

記念日：7月28日

キリストの聖殉教者アカキオスは、リキニウス帝の治世下で殉教した[5384]。彼はリキニウス帝の裁判にかけられた。キリストを告白したため、リキニウス帝は彼を絞首刑にし、体を削るよう命じ、その後、テレンティウス[5385]という地方総督のもとへ送った。テレントゥスは、彼を樹脂と獣脂で満たされた大釜に投げ込むよう命じたが、聖アカキウスは全く無傷のままであった。エパルフがアパメアとアポロニア[5386]へ赴くことになった際、彼は聖アカキウスに同行するよう命じた。これらの都市の一つで、彼は異教の神殿に連れ込まれたが、祈りの力によって、その神殿にあったすべての偶像を倒した。その後、総督は彼を裁判のためにトリブーンに引き渡した[5387]。トリブーンの命令により、彼はまず激しく殴打され、次に猛獣と戦わされ、ついに　炉に投げ込まれたが、無傷のままであった。　トリブーンは、炉が冷めていると思い、それを確かめようと近づいたが、自ら焼死し、その遺体は灰と化した。　トリブンの死後、聖人はポシドニオスの裁きに委ねられ、ポシドニオスは彼に重い足枷をはめさせ、ミレトスへ連行するよう命じた[5388]。そこで彼は再び偶像を打ち倒した。このため、彼は首を刎ねられた[5389]。その際、傷口からは血と乳が流れ出た。ある長老レオティオスが、シンナデの町で彼の遺体を埋葬した[5390]。

聖殉教者ユリアヌスの受難

記念日：7月28日

5382 ここで「サクギ」と呼ばれるのは、当然ながらサンガリ川を指す。この川は、ガラティアに隣接するフリギア属州を源流とし、ガラティアとビフィニアを流れ、エウクシノス・ポントス（現在の黒海）に注いでいる。

5383 聖殉教者エウスタフィオスは、316年頃に亡くなった。

5384 311年からローマ帝国の東部を統治していたリキニウスは、キリスト教徒を激しく迫害したマクシミアヌス・ガレリウスの後継者であった。311年、彼はコンスタンティヌス大帝と共にキリスト教徒に有利な法律を公布したが、その後、帝国内に統治者が二人いるべきか一人であるべきかという問題を巡り、彼とコンスタンティヌスの間に不和が生じると、キリスト教徒がコンスタンティヌスに同情していると疑い、最初は弾圧し、やがて迫害するようになった。この状況は323年まで続き、コンスタンティヌスとの戦争中にリキニウスは殺害された。

5385 ギリシャ・ローマ地域における「エパルヒ」とは、各地域の統治者を指した。

5386 アパメアとアポロニアの二つの都市は、小アジアのローマ属州フリギアにあり、ピシディアとの南東の境界付近に位置していた。

5387 ローマ帝国において「トリブーン」とは、さまざまな公職者を指したが、特に千人隊を率いる軍事指揮官を指すことが多かった。

5388 ミレトスは、小アジアのローマ属州カリアにある海辺の都市である。

5389 聖殉教者アカキオスは、321年頃に亡くなった。

5390 シンナダの都市は、小アジアのローマ属州フリギアに位置していた。

アントニヌス皇帝の治世中[5391] 、異教徒たちはキリスト教徒に神々への生贄を捧げるよう強要し、従わなければ激しい拷問や死そのものを脅しとして用いた。当時、カンパニア州[5392] のイゲモン（総督）はフラヴィアヌスという極めて残忍な人物であり、このイゲモンはキリストの御名を憎んでいた。

総督フラヴィアヌスは、カンパニア州全域に自分の不敬虔な家来たちを派遣し、出会ったすべてのキリスト教徒を捕らえ、当時彼自身が滞在していたアティナという町へ連行するよう命じた。

その頃、ダルマチアから[5393] 、ある若者がカンパニアにやって来た。彼は年齢こそ若かったが、その振る舞いとキリスト教の知恵においては老成していた。肉体も美しく、しかし恵みと聖さにおいてはさらに美しく、出自も高潔であったが、信仰においてはさらに高潔であった。　その男の名はユリアヌスであった。ユリアヌスがアナグニアの町の近くを通っていたとき、偶然、イゲモノスの兵士たちに出くわした。ユリアヌスは彼らにキリスト教式の挨拶を捧げ、こう言った。

「平安あれ、兄弟たちよ！」

兵士たちは、その言葉と聖人の穏やかな振る舞いから、彼がキリスト教徒であることを察し、彼に「あなたは誰で、どこから来たのか？　名前は何か、どのような信仰を告白しているのか」と尋ね始めた。

神の僕ユリアンは、キリストの御名のために苦難を受け、死ぬことを望んでいたため、恐れずにこう答えた。

「私はキリスト教徒です。名はユリアン。ダルマチア出身です。私はこの地へ向かう途中ですが、至る所で人々に、偶像崇拝を捨て、唯一の真の神とその御子である主イエス・キリストを信じるよう説いています。　私は、私が宣べ伝える方、そしてその方のために自分の命を捧げる覚悟がある方を、人々に崇めるよう勧めているのです。

兵士たちは、聖人のこの極めて勇敢な答えに大いに驚いたが、それでも彼を捕らえ、しっかりと縛り上げ、棍棒や武器で殴りながら、こう言い放った。

「十字架にかけられた方のために死のうというお前の言葉が、どれほど正しいか見てみよう！」

殴打に耐えながら、聖人は神に祈り、その聖なる御名のために苦難を最後まで耐え抜く力を与えてくださるよう願った。そして、聖ユリアヌスの祈りは神に聞き届けられた。なぜなら、聖人を力づけ、こう告げる声が降りてきたからである。

「恐れるな、ユリアヌスよ！　私はあなたと共にあり、あなたに力と勇気を与える。」

そこで、聖なる若者は慈悲深い神に感謝を捧げた。その後、彼はイゲモンのもとへ連行され、その命令により、「冷たい堀」と呼ばれる恐ろしい牢獄に閉じ込められた。この牢獄で、聖人は七日間、食事も水も与えられず、飢えと渇きで死に至らしめられようとした。

しかし、神は御自分のしもべを見捨てられず、聖なる天使を彼のもとに遣わされた。キリストの囚人は、その天使の姿を仰ぎ見、語り合いを楽しみながら、その手から天の糧を受け取った。

[5391] アントニヌス・ピウスは、138年から161年までローマ帝国を統治した。

[5392] カンパニアは、古代イタリアの州であり、西はラツィオ、北はサムニウム、東はルカニア、南および南西はティレニア海に接していた。 古代の著述家たちは、その恵まれた気候と、年に3回も種まきと収穫を可能にした肥沃な土壌を称賛している。ここには多くのブドウ畑、オリーブ畑、そして建築用木材の森林があった。カンパニアの住民（異教徒）は、その甘やかされた生活と贅沢を愛する性質で知られていた。

[5393] ダルマチアは、古代にはローマの属州であった。ダルマチアは地中海沿岸に細長い帯状に位置し、北はクロアチア、東はボスニア・ヘルツェゴビナ、南はモンテネグロと国境を接している。 ダルマチアは紀元6年にローマの支配下に入り、それ以来、イリュリアとともに皇帝直轄の属州となった。ダルマチアの住民はイリュリア族に属し、狩猟、農業、牧畜に従事していた。

7日後、イゲモンは公の法廷（後にこの場所に無原罪の聖母マリアに捧げられた教会が建てられた）に出向き、大勢の集まった民衆の前で裁判席に着いた。そして、尋問のために殉教者を連れてくるよう命じた。聖人がイゲモンの前に連れて来られると、イゲモンは彼にこう尋ねた。

「これほど美しく、誠実な若者が、十字架にかけられた、名もなきナザレ人を崇拝するなど、恥ずかしくないのか？　この邪悪な信仰を捨てたほうが、よほど良いのではないか？　我々の神々を崇拝せよ。そうすれば、王はあなたに慈悲を授けてくださるだろう。」

殉教者はこう答えた。

「私の栄光と誉れは、十字架にかけられたキリスト、私の神です。私は、私の主の十字架以外には、何ものも誇りとするつもりはありません。そして、あなたが『邪悪な』と呼ぶこの聖なる信仰のために、私は死ぬ覚悟があります。しかし、あなたの神々はまことに忌まわしいものです。彼らは悪魔に他なりません。彼らを崇拝する者たちは皆、恥じるべきです。」

聖人のこの言葉に、イゲモンは激怒し、聖人の口を殴打させ、さらに拷問台に縛り付けて苦しめるよう命じた。

聖人は、殴打を受けながらも、神にこう祈った。

「主よ、私はあなたに信頼を置きます。あなたの力によって私を救ってください。あなたは私の神、私の助け手、私の避難所、そして私の救い主です。偶像を崇拝し、私に悪をなそうと企む者たちは皆、恥をかくように。主よ、私はあなたに叫びます。私を敵の手に渡さないでください。」

すると再び、天から聖人の元へ声が下り、聖人を励まし、こう告げた。

「恐れるな！ 勇気をもって奮闘せよ！」

そこで、キリストの殉教者は民に向かってこう言った。

「聞け、呪われた者たちよ！　あなたがたが自らの手で造り出した神々に頼ってはならない。無から天と地を創造されたその神を知れ。」

このような言葉で民を諭した聖ユリアヌスは、三十人以上の者をキリストへと導いた。その後、再び牢獄へと連れ戻された。

翌朝、聖人は再び裁判の場に引き出された。イゲモンは彼にこう言った。

「私は、自らを顧みず、打ち負かすことのできない神々にひれ伏そうともしないあなたを、赦してやりたいと思う。」

この言葉に対し、聖なる殉教者はこう答えた。

「私にそんなことを言っても無駄だ。もはや私の考えを変えることはできない。私は、すべての者が崇めるべきその神を崇めている。その神こそが、天と地を創造されたのだ。」

イゲモン・フラヴィアヌスは聖人のこの言葉に激怒し、ユリアヌスを拷問の木に吊るし、殴打や鉄の削り棒による拷問で聖人を苦しめるよう命じた。　しかし、聖徒たちにおいて驚くべき御力を示される神の御力により、拷問者たちの手は力尽きて痛みを覚え、聖人に触れることさえできないばかりか、拷問の道具を手に持つことさえできず、まったく何もできなくなってしまった。

イゲモンがこれに大いに驚いていると、使者が到着し、セラピスと呼ばれる彼らの神の神殿[5394]が倒壊し、その神の偶像が他の偶像たちと共に灰と化したと告げた。

[5394] セラピスは、本来エジプトの神である。エジプト人にとってセラピスは、ギリシャ人やローマ人にとってゼウスが主神と見なされていたのと同様に、至高の神と見なされていた。セラピスへの崇拝はエジプトに限定されず、紀元前2世紀には、セラピスの崇拝がギリシャやローマにも広まった。　セラピス崇拝は、特にネロ皇帝と、その伝記に言及されているアントニヌス・ピウスによって後援された。ローマにはセラピスに捧げられた神殿がいくつか存在し、この神の名を刻んだ碑文や記念碑も数多くあった。

イゲモンとその悪魔のような家来たちは、この知らせに大いに驚き、恥に打ちひしがれた。一方、民衆の中に混じり、密かに聖なる信仰を告白していたキリスト教徒たちは、心から喜び、キリスト神を賛美した。

その後、その場所の近くに立っていた異教徒たちは、皆が聞こえるように叫んだ。

「この魔術師を、一刻も早く滅ぼせ！」

イゲモンは怒りと憎悪に満ち、直ちに民衆の要求に同意し、殉教者を死に追いやった。彼はその決定を次のように述べた。

「キリスト教徒から魔術的な狡猾さを教え込まれたユリアヌス、神々を冒涜し、王の命令に背いた者を、剣で首を刎ねよ。そして、我らの神々に加えられた不名誉への報復として、神殿が破壊されたその場所で、彼を斬首せよ。」

そして、聖人はその場所へと連行された。

その場所に到着すると、聖人はひざまずき、次のように神に祈りを捧げた。

「ああ、限りなき神の慈しみよ！　神よ、私のような不適格な者に、あなたの聖なる御名のために死ぬという、これほど名誉ある死を授けてくださったことを感謝いたします。　どうか、この私の血の流血によって私を清め、私の罪を洗い流し、祝福された御国へと導いてください。私の霊を平安のうちに受け入れてください。また、御自身の憐れみをもって、あなたの至聖なる御名の栄光のために、私の苦難の記憶を尊びたいと願うすべての人々をも、お忘れにならないでください。

聖人がこのように祈り終えると、天から声が聞こえ、その祈りが聞き届けられたことを告げ、聖人を天上の御国へと招きました。 こうして、聖殉教者ユリアヌスは首を刎ねられた[5395] 。その聖なる魂は、肉体を脱ぎ捨て、天に昇り、父と聖霊と共に君臨される私たちの神、キリストのもとへ至った。その御方に、今、常に、そして永遠に栄光が帰せられる。アーメン。

8月11日

7月29日（旧暦）

聖女セラフィマの殉教

7月29日の記念日

不敬虔なローマ皇帝たちによって引き起こされた恐ろしい迫害の時代、多くの信徒たちがキリストのために様々な拷問に耐え、苦しんだ。　その頃、ヴィンデネの村で、名門の家系に生まれたサヴィナという女性の家に、アンティオキアの市民である処女セラフィマが住んでいた。彼女は教えを通じて、サヴィナをもキリストの信仰へと導いた。

イゲモン・ベリルは、サヴィナの家に家来たちを送り込み、聖なる乙女セラフィマを連行して、自身の裁きに引き渡すよう命じた。祝福されたサヴィナはこれに反対し、送られた者たちが乙女を連れ去るのを阻止しようと全力を尽くした。しかし、聖なるセラフィマは彼女にこう言った。

「私の女主人であり、母よ！私を彼らと共に送り出してください。あなたはただ、私のために神に熱心に祈ってください。私は私の主イエス・キリストを頼みとし、たとえ私の罪ゆえにそのに値しない者であっても、主が私のところに来て、主に忠実に仕える力を与えてくださると信じています。」

[5395] ユリアヌスの正確な没年は不明である。この聖人の没年は、2世紀半ばと見なすべきである。

しかし、至福のサヴィナは、聖なる乙女をイゲモンの不敬虔な家来たちと共に送り出す決心がつかず、彼女と共に自らイゲモンのもとへ向かった。　彼女は生まれながらにして名門の元老院議員の家系に属していたため、イゲモンは彼女の姿を目の当たりにして動揺し、聖セラフィマと共に彼女を急いで家に帰すことにした。

三日が過ぎた。イゲモンは、通常裁判が行われる場所で公判を開くよう命じ、都市の統治者たちにセラフィマを連行するよう命じた。　不敬虔な支配者たちは聖なる乙女を捕らえ、裁判へと連行した。至福のサヴィナは再び彼女の後を追った。敵の手からセラフィマを救い出す術がないと悟ると、彼女はイゲモンに向かって叫んだ。

「凶暴なアジアの犬め！　神の聖なる乙女に悪事を働くなど、決して許さない。お前自身も滅びるだろう。なぜなら、私たちには私たちの神、キリストがおられるからだ。そして主は、お前と、お前の不敬虔な王たちを、生ける神の僕たちに課した数多くの苦しみに対して、永遠の苦しみをもって罰されるだろう。」

そう言うと、サヴィナは泣きながら自分の家へと戻っていった。

その時、イゲモンはセラフィムに向かってこう言った。

「わが王たちも崇拝する不死の神々に、生け贄を捧げよ。」

セラフィマはこう答えた。

「私は、天と地、そしてそこに存在するすべてのものを創造された全能の神を畏敬し、仕えています。あなたが崇拝するよう命じている者たちは、神ではなく悪霊です。私はキリスト教徒ですから、彼らを崇めることはふさわしくありません。」

イゲモンは彼女に言った。

「それなら、ここに来て、我々の神々に捧げられるのと同じ供物を、お前のキリストに捧げなさい。」

セラフィマはこう答えた。

「私は毎日、キリストに捧げ物をし、昼も夜もキリストを礼拝し、祈りを捧げています。」

すると、イゲモンは尋ねた。

「お前のキリストの神殿はどこにあるのか？　彼にどのような供え物を捧げているのか？」

セラフィマは答えた。

「キリストに喜ばれる捧げ物とは、私が処女の清らかさを汚れなく守り抜き、キリストの全能の助けによって、他の人々もこの偉業へと導くことです。」

イゲモンは言った。

「それがあなた方の教会であり、捧げ物なのか？」

セラフィマは答えた：

「真の神を知り、ただ唯一の神にのみ敬虔な生活をもって仕えること以上に尊いものはありません。」

イゲモンは言った：

「まさか、あなた自身が、ご自身の言う通り、あなたの神のための教会であるというのか？」

セラフィマは答えた：

「私は、私の神の全能の助けによって、自らを清く保っているゆえに、まさに神の教会そのものです。聖書にはこう記されています。*『あなたがたは、生ける神の神殿である』*（IIコリント6:16）。」

イゲモンは尋ねた。

– しかし、もしあなたが強姦され、処女性が汚されたとしても、それでもなお、あなたは神の教会であり続けるのでしょうか？

セラフィマはこれに対し、聖書の言葉をもって答えた。

「*もしだれかが神の神殿を破壊するなら、神はその者を罰される*」（Iコリント3:16–17）。

しかし、イゲモンはこの言葉を理解せず、セラフィマをエジプト出身の二人の恥知らずな若者たちの手に委ね、彼らに一晩中彼女と共に過ごさせるよう命じた。これらの不敬虔な若者たちは彼女を連れ去り、暗い神殿へと連れて行った。聖なる処女は、心を込めて主に祈った。

「主イエス・キリストよ、私の貞操の真の守り手であり、守護者よ、あなたに助けを求めます！ 永遠の光であり喜びであるあなたに、私は叫びます！ 牢獄に閉じ込められたあなたの使徒パウロを訪れ、彼を強めてくださったあなたよ、私にも目を留め、この謙虚なあなたのしもべを憐れんでください。 これらの若者たちの不義な情欲から、私をお救いください。お願いいたします、彼らの目を曇らせ、あなたに信頼を寄せるこのしもべに触れさせないでください！あなたの聖なる印が刻まれた私の体を、彼らが汚すことのないようにしてください。 彼らの恥知らずさを恥じ入らせ、私の堕落を許さず、速やかに私を御許へ召してください。善きイエスよ、あなたのしもべサヴィナにも御目を留め、あなたの力によって彼女を強め、凶悪な敵である悪魔が勝利を収めないようにしてください。彼女もまた、私のために多くの苦難を耐え忍んできたからです。 主イエス・キリストよ、父と聖霊と共に、永遠に祝福され、栄光に満ち、称えられし方よ、私の祈りを聞き入れてください。アーメン。

すると、夜の一時、不義な若者たちがその恥ずべき行いを成し遂げようとしたその時、突然大きな騒音が起こり、恐ろしい地震が始まった。その音は周辺の住民全員にも聞こえた。 若者たちは息も絶えたかのように地面に倒れ、全身の力が抜けてしまった。このような神の迅速な助けを目の当たりにし、清らかな乙女は天に向かって両手を挙げ、涙ながらに主に感謝し、一晩中 祈りを捧げた。 早朝、イゲモンから遣わされた使者が現れ、若者たちがその願いを果たしたかどうかを尋ねた。聖堂に入ると、彼らは聖なる乙女が祈りを捧げているのを見、若者たちはまるで死人のように横たわり、立ち上がる力も、何かを話す力さえもなかった。ただ、開いたま目のみが、彼らがまだ生きていることを物語っていた。 この奇跡を見ようと、大勢の人々が集まった。この出来事を耳にしたイゲモンは、再び神の僕セラフィムを自分の前に連れてきて裁くよう命じ、彼女にこう言った。

「セラフィマよ、お前の肉欲は満たされたのか、それとも今もなお情欲に燃えているのか？」

聖セラフィマはこう答えた。

「あなたには、私の見る限り、堕落した心があり、そこに悪魔が宿っている。だからこそ、あなたはあのように冒涜的な言葉を吐くのです。しかし、私はあなたが言っている若者たちのことを知りませんし、彼らが私のそばにいたかどうかさえ感じませんでした。」

イゲモンは言った：

「では、彼らは一晩中あなたと一緒に過ごしていなかったと主張するのですか？」

セラフィマは答えた：

私と一緒にいたのは、私が奴隷として仕える方であり、その方がご自身の血によって私を贖ってくださった方です。

イゲモンは尋ねた：

「それは一体誰のことだ？」

セラフィマは答えた。

「私の守り手であり、守護者である、主イエス・キリストです。」

イゲモンは言った：

「なぜそんなに無意味なことを口にするのだ？ むしろ、どのような魔術を使って、あの若者たちを麻痺状態に陥らせたのか、話してみろ。」

聖セラフィマは答えた。

「私たちキリスト教徒は、魔術を学ぶべきではありません。しかし、あなたがたが悪辣な魔術で殺した者たちも、助けを求めて主イエス・キリストに呼びかければ、主であり万物の支配者であるイエス・キリストが彼らを蘇らせてくださいます。」

イゲモンは言った。

「もしお前のキリストが、あらゆる魔術の狡猾さを打ち破ることができるのなら、彼を呼び出して、あの若者たちに以前の肉体の力を取り戻させてみよ。そうすれば、彼ら自身から、一晩中お前のところで何をしていたのかを聞き出すことができるだろう。」　私自身、おまえが何らかの邪悪な魔術で彼らの正気を奪い、おまえの不潔さを告発できないようにしたのだと、ほぼ確信している。

セラフィマはこう答えた。

「私が仕える神は全能であり、神にとって不可能なことは何一つありません。」

イゲモンは言った。

「それなら、若者たちが正気を取り戻し、健康を回復して、話せるようにしてくれ。」

セラフィマは答えた：

「あなたはまだ、私が魔女だと思っているのですね。しかし、私は魔法の術など全く知りません。私は私の神に祈りを捧げ、その祈りによって、神は私だけでなく、心を尽くして神を呼び求めるすべての人々に、願いを叶えてくださるのです。」

イゲモンは言った。

「好きにすればいい。ただ、若者たちが話す能力を取り戻せば、君が処女を保っているかどうかを確かめてやる。」

セラフィマは答えた：

「すでに申し上げた通り、私は魔術など知りません。ただ、神が御慈悲を示してくださるよう祈ることしかできません。」

イゲモンは言った。

「さあ、若者たちがいる場所へ行き、彼らのためにあなたの神に祈りなさい。」

セラフィマは答えた：

「私がそこへ行くのはふさわしくありません。そうすれば、他の人々はあの奇跡を目にする機会を失い、彼らの不信仰ゆえに、あなたと同じように、私を魔女だと思い込んでしまうでしょう。むしろ、息絶えた若者たちをここに連れてくるよう命じてください。」

イゲモンは若者たちを裁判の場へ連れてくるよう命じた。彼らが連れて来られると、皆は彼らを見て驚嘆した。彼らはひどく衰弱しており、まるで舌も手も足もないかのようだった。

イゲモンは言った。

「セラフィマよ！　さあ、若者たちが回復するよう、あなたの神に祈ってくれ。」

すると、聖セラフィマは両手を天に掲げ、心を込めて祈り始めた。

「全能の主なる神よ！あなたは天と地と海、そしてそれらにあるすべてのものを創造されました。あなたは、御弟子たちや使徒たちを通して、死者をよみがえらせ、ハンセン病患者を癒やし、口がきけない者に言葉を、耳の聞こえない者に聴力を与えられました。今、あなたに信頼を寄せるあなたのしもべである私の声を聞いてください。　私の祈りを軽んじず、この不幸な統治者の不信仰のゆえに私から背を向けず、この奇跡を待ち望むすべての人々の目の前で、これらの若者たちに癒やしをお与えください。　狂気にとらわれ、あなたを信じる者たちへの迫害を始めたその愚か者を、恥じ入らせてください。主よ、どうか速やかにあなたの御力を現し、あなたが奇跡を行う唯一の神であり、あなた以外に神はいないことを、彼らに知らしめてください。

このように祈った後、聖セラフィマは若者たちのところへ歩み寄り、彼らに触れながらこう叫びました。

「我らの主イエス・キリストの御名によって命じる。立ち上がれ！」

若者たちはたちまち立ち上がり、話し始めた。それを見た人々は皆、恐怖に襲われ、驚嘆した。

しかし、イゲモンは言った。

「彼女が若者たちに手を触れるまでは、その魔法のような策略を成し遂げられなかったことに、気づかなかったのか？」

その後、彼は若者たちに向き直り、こう尋ねた。

「この女は、どうして君たちの正気と体力を奪うことができたのか？」

若者たちは答えた。

「イゲモン様！　あなたの命令に従って彼女の元へ入ったとき、突然、ある若者が現れました。その若者は美しく、全身が太陽のように輝いていました。彼は私たちと少女の間に立ちはだかりました。その並外れた輝きに、私たちは恐怖と戦慄、そして闇に襲われ、全身の力が完全に抜け落ちてしまいました。　その時から今に至るまで、私たちはそんな状態のままでした。さて、彼女が魔女なのか、それとも彼女の神が実に偉大なのか、ご自身で判断してください。

イゲモンはセラフィマに向き直って言った。

「セラフィマよ、どんな策略でこれを成し遂げたのか説明してくれ。そうすれば、すぐに君を解放してやる。」

セラフィマは答えた。

「私は邪悪な教えを憎みました。そして、すべてのキリスト教徒は、主の御名を呼び求めるだけで、あらゆる魔術や呪術を追い払い、それらから何の害も受けることはありません。」

イゲモンは彼女に言った。

「お前の魔術でどれほど多くのことができるか、よくわかった。しかし、こう言っておく。もし私の神々に生贄を捧げなければ、お前の首を刎ねるよう命じるぞ。」

セラフィマはこう答えた。

「好きにすればいい。でも、私はあなたの悪魔たちに生贄を捧げるつもりはないし、あなたの父であるサタンの意志に従うつもりもない。私はキリスト教徒だから。」

すると、イゲモンは二本のろうそくで彼女の体を焼くよう命じた。しかし、ろうそくは突然消え、彼女を焼こうとしていた者たちは地面に倒れ込んだ。聖セラフィマは天を仰ぎ見て、こう言った。

「主イエス・キリストよ、私の敵すべてが恥じ入り、辱めを受けますように。」

イゲモンは彼女に言った。

「苦しみの中で死なずに済むよう、神々に生贄を捧げなさい。」

セラフィマはこう答えた。

「私があなた方の悪魔たちに犠牲を捧げないのは、永遠の死に陥らないためなのです。」

イゲモンは彼女に言った。

「狂った女め！　王の命令に従い、不死の神々にひれ伏せば、苦しみと死から解放されるだろう。」

セラフィマはこう答えた。

「あなたたちこそ悪魔に取り憑かれ、正気を失っているのです。なぜなら、生ける真の神を否定し、悪魔を崇拝しているからです。あなたたちはその悪魔たちと共に滅びるでしょう。私は、たとえ罪深い者であっても、真のキリスト教徒である私を、不死の神が受け入れてくださるよう、自らを犠牲として捧げているのです。」

すると、イゲモンは彼女を棒で打つよう命じた。それが実行されると、突然、大地震が起こった。聖女を打っていた棒の一つから破片が飛び散り、イゲモンの右目に当たり、三日後に彼は失明した。

すると、イゲモンは激しい怒りに駆られ、次のような命令を下した。

「セラフィマは、王の掟を軽んじただけでなく、重大な悪行にも手を染めている。彼女を剣で斬首せよ。」

こうして、聖女セラフィマは斬首された。

高貴なサヴィナは、深い敬虔の念をもって彼女の聖なる遺体を受け取り、そのような処女でありキリストの殉教者にふさわしい栄誉をもって埋葬を行い、偉大な宝物であり最も貴重な真珠として、自身の新しい棺に納め、キリストに賛美を捧げ、　父と聖霊と共に、永遠に賛美される真の神に。アーメン。

聖殉教者カリニコスの受難

記念日：7月29日

聖殉教者カリニクスはキリキアで生まれ、キリスト教の敬虔さの中で育てられた。成人するにつれ、カリニクスは多くの人々が異教の不義に囚われているのを目の当たりにした。悪魔の惑わしに心を曇らされた彼らは、主キリストから遠く離れ、魂のない石を信じ、偶像に犠牲を捧げていた。カリニクは、こうした人々の滅びを深く嘆き、彼らが迷いから立ち返り、キリストなる神を信じるようになるよう、公然と真理を教えることを決意した。　使徒たちのように神の言葉を宣べ伝えながら、カリニクは多くの都市や村々を巡り、ついにガラティアの都市アンキラに到着した。彼はこの都市にかなり長い間滞在した。人々の魂の救いを思い、キリストの福音を宣べ伝えることに尽力した結果、多くの人々をキリストへと導いた。　そのため、彼は異教徒たちに捕らえられ、サケルドン公の裁判にかけられた。サケルドンは、熱心な偶像崇拝者であり、キリストの敵であり、キリスト教徒に対する激しい迫害者であった。カリニコスを彼の前に引き立てると、不信心者たちは叫んだ。

「ここに、異邦人のカリニクがいる。彼は人々に、神々に犠牲を捧げたり、彼らを崇拝したりしてはならないと教え、すでに多くの人々を惑わしている。」

聖人を激しく睨みつけると、公爵は威圧的な口調で尋問を始めた。

「この愚か者め、よそ者としてここにいるくせに、どうして民を惑わし、世界を創造し、王やすべての権力者、そして全宇宙が崇める神々を見捨てるよう教え込むなど、よくもそんなことをしたものだ。お前は彼らの威力を知らないのか？」

聖人は穏やかにこう答えた。

「私はキリストの僕です。人々が滅びへと向かっているのを見て、心から彼らを案じています。そして、できる限り、善き教えによって彼らを闇から光へ、滅びから救いへと導こうと努めています。なぜなら、私たちの書物にはこう記されているからです。*『罪人をその誤った道から立ち返らせた者は、その魂を死から救い、多くの罪を覆うであろう』*（ヤコブ5:20）。私もまた、あなたを、あなたを縛りつけている悪魔の闇から光へと導き、真の道へと導きたいのです。

怒りに満ちた公爵は言った。

「まさか、私が神々を捨て、お前の狂った言葉に従って、至福の生活よりも苦い死を選ぶとでも思っているのか。　いや、決してそんなことはない！　それどころか、たとえお前の意志に反してでも、我が神々に拝ませるつもりだ。なぜなら、お前を凄惨な拷問にかけ、その時こそ、お前の神が私の支配からお前を救い出すためにやって来るかどうか見てやるからだ。お前が神々の力と権威を悟り、彼らに犠牲を捧げるまでは、お前の体を容赦しない。

聖人はサケルドンに勇敢にこう答えた。

「わが主のために受けるいかなる苦しみも、飢えた者にとっての糧のように、私にとっては望ましいものです。ですから、躊躇せず、脅しに時間を費やすことなく、さっさと拷問を始めなさい。ほら、これが私の体です――苦しみを受ける準備はできています。そして私の心の中には、神ご自身がいます。神は私に救いを、あなたには滅びをもたらしてくださるでしょう。」

さらに激怒した公爵は言った。

「この愚か者め！　よくもまあ、そのような言葉で私を苛立たせるなどという不遜な真似ができるものだ。神々に誓って、私はお前を容赦せず、骨から肉を剥ぎ取り、あらゆる拷問を考案して、お前が凄惨な死を遂げるまで苦しめ続けるぞ。」

聖人はこう答えた。

「すべての不信心者の中で最も卑劣な者よ！　いつまでその怒りに時間を無駄に費やし、本題に入らないつもりか。私を拷問にかけよ。そうすれば、救い主から勝利の冠を受けることを待ち望む、キリストの修道者の勇気と寛大さを知ることになるだろう。」

すると、拷問官は殉教者の服を脱がせ、牛の腱で容赦なく打ち据えるよう命じた。聖人は長く打ち続けられ、その間、告示役は叫んだ。

「カリニクよ、神々を知り、彼らを呼び求めよ。そうすれば、彼らはあなたを苦しみから救い出してくれるだろう！」

しかし、聖なる殉教者は拷問官と苦痛を嘲り、大声でこう言った。

「お前は私に大いなる拷問を脅かしておきながら、最も弱い苦痛しか与えていない。私に大きな傷を負わせ、最も苛烈な拷問にさらせ。私は火も恐れないし、剣にも怯えない。死を嘲笑う。なぜなら、私の神から永遠の命を待ち望んでいるからだ。」

そこで、公爵は殉教者を木に吊るし、その体を鉄の釘で打ち付けるよう命じた。こうして、彼の肉体は骨まで削り取られるほどに痛めつけられた。

しかし、聖人は、あたかもその苦しみを受けているのが自分ではなく他人の体であるかのように、この拷問を笑い続け、公爵にこう言った。

「もっと激しく私を削れと命じなさい。私の体を削れば削るほど、私の魂は満たされるのだから。キリストが私を助けてくださる。その恵みによって強められている私は、拷問の痛みを感じないのだ。」

その後、拷問官は、キリストの殉教者を木から降ろし、内部に鋭い釘が打ち込まれた鉄のブーツを履かせ、アンキラから八十ポプリシュ離れたガングラという町へ連行し、そこで焼き殺すよう命じた。彼がそう決めたのは、この町でカリニクスが非常に多くの人々をキリストへと改宗させていたからである。　彼は、カリニクスの殉教の最期を目撃すれば、これらの新改宗者たちは恐怖に駆られ、以前の信仰に戻ると考えていた。　そこで、凶暴な公はキリストの戦士を自分の残忍な兵士たちの手に委ね、彼らに命令を下した――自分たちは速足の馬に乗って進み、殉教者をその前を走らせ、殴打して急がせるようにと。　釘の打たれた鉄のブーツを履かされた殉教者は、まるで釘の痛みを感じないかのように歩きながら、ダビデの詩篇を詠んだ。*「わたしは主を堅く信頼した。主はわたしに耳を傾け、わたしの叫びを聞いてくださった。　恐ろしい穴、ぬかるんだ沼から私を引き上げ、私の足を岩の上に置き、私の歩みを確かなものにしてくださった」*（詩篇39:2–3）。

こうして彼は定められた道へと旅立ち、何の強制も受けずに、騎兵たちの先頭を速やかに進んだ。

彼らが六十ポプリシュを通り過ぎ、マトリカと呼ばれる場所にたどり着くと、兵士たちは激しい日差し――その時は七月であった――のために、喉の渇きに苦しむようになった。　道中にはどこにも水がなく、兵士たちは疲れ果て、馬たちもかろうじて息をしている状態だった。そこで彼らは涙ながらに聖人に叫んだ。

「真の神のしもべよ、命そのものに絶望した私たちを憐れんでください。あなたの神に懇願し、私たちに水を授けて、死なずに済むようにしてください。あなたの神は全能であると聞いています。私たちがあなたに苦しみを与えたことは忘れてください。それは私たちの意志ではなく、公爵の命令によってあなたを苦しめたのです。」

彼らが渇きで死にそうになっているのを見て、聖カリニクは彼らを憐れみ、敵に善を行おうと願って、道端にあった岩のそばに立ち、天を仰いで祈り始めた：

「天と地、海、そしてすべての被造物の主よ！　あなたは昔、荒野を旅するモーセと彼と共にいた民に、岩から水を湧き出させて飲ませてくださいました。　今こそ、あなたの御業をお示しください。あなたの御命令により、この岩から水が湧き出て、渇きに苦しむ者たちを潤してください。そうすれば、あなたを知らない者たちにも、あなたの栄光に満ちた御業が明らかとなり、あなたの聖なる御名が賛美されるでしょう。

彼が祈りを終えるやいなや、たちまち岩から生ける水の泉が湧き出ました。皆が水を飲み、渇きを癒やし、声を高らかに叫びました。

「キリストの神は偉大であり、すべてのものよりも栄光に満ちている！」

その時から、この泉は、殉教者の祈りによって成し遂げられた神の奇跡を忘れがたい記憶として、絶えることなく水を注ぎ続けている。

十分に涼をとった後、戦士たちとその馬たちは、残りの道のりを難なく進み、ガングリに到着した。彼らは、旅の途中で　の死から救ってくれた恩人カリニカを死に追いやることを望んでいなかった。しかし、公爵が怒って自分たちを処刑してしまうのではないかと恐れたため、彼らは公爵の命令に従った。　炉に火を燃やし、彼らは殉教者を炎のすぐそばに立たせた。殉教者は喜び、歓喜しながら、十字を切って祈り始めた。

「天の父よ！　御名のゆえに死ぬことを私に許してくださったことを感謝いたします。全能の神よ、私の霊を安らかに受け入れ、御敵を恥じさせてください！」

そう言いながら、彼は炎が燃え盛る炉の真ん中へと歩み入り、横たわってその聖なる魂を神の御手に委ねた。炉の火が消えたとき、彼の尊い遺体は無傷のままであった。　信者たちはその遺体を受け取り、ふさわしい敬意をもって埋葬し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美した。今、そして常に、そして世々限りなく、私たちからも神に栄光と誉れがありますように。アーメン。

コンダク、第2調：

今や、あなたは天の栄光をふさわしく受け継がれた。キリストへの深い愛に燃え上がり、カリニケスの火に勇敢に身を投じたからである。今なお御前に立ち、私たちすべてのために祈りを絶やさないでください。

8月12日

7月30日（旧暦）

聖使徒シラ、シルワノ、クリスケントおよび彼らと共にいた者たち

記念日7月30日

聖使徒シラは、年長の使徒たちによって神の御言葉を宣教する務めに選ばれ、最初は聖なる首席使徒パウロと共に、その後は彼を離れて単独で、キリストの教えを宣教するために多大な労苦を捧

げました。　エルサレム公会議において、キリストの聖なる信仰を受け入れる異邦人に割礼を施してはならないという書簡がアンティオキア教会に送られた際、聖シラは他の功績ある人々と共にそこへ派遣されました。これについては、聖ルカが『使徒言行録』の中で次のように記しています：

「*そこで、使徒たちと長老たちは、教会全体と協議して、自分たちのうちから数人の者を選び出し、パウロとバルナバと共にアンティオキアへ遣わすことにした。すなわち、バルサバと呼ばれるユダとシラ、兄弟たちの間で指導的な立場にある者たちである*」（使徒行伝15:22）。

アンティオキアに到着すると、彼らは人々を集めて書簡を手渡した。それを読んだ人々は皆、与えられた教えに大いに喜んだ。ユダとシラは預言の賜物を持っていたため、信者たちを熱心に教え導き、慰め、信仰を強めた。　シラはアンティオキアに残ることを望み、ユダはエルサレムに戻った。その後、使徒パウロは宣教のために他の国々へ行くことを決意し、同行者として聖シラを選んだ。兄弟たちから神の恵みを託された彼らは旅立ち、シリアとキリキアを巡り、そこで教会を堅く立てた。デルベとリストラを通過した際、そこでテモテと出会い、彼と共にマケドニアへ向かった。　彼らがフィリッポスにいたとき、ある女中の中から悪霊を追い出した。その女中は、占いによって主人たちに多額の収入をもたらしていたのである。主人たちは、収入の望みが絶たれたと見るや、パウロとシラを捕らえ、広場に引きずり出し、市民を扇動しているとして、役人たちの前に引き渡した。　大勢の群衆が集まり、役人たちはパウロとシラから衣服を剥ぎ取り、棒で打つよう命じた。　何度も殴打した後、彼らは聖なる使徒たちを牢屋に閉じ込め、足に足枷をはめた。真夜中、パウロとシラが賛美を歌いながら神に祈っていると、突然、激しい地震が起こり、牢屋が揺れ、扉が自然に開き、足枷が緩んだ。　牢屋の看守は目を覚まし、牢屋の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げ出したと思い込み、ナイフを手に取って自殺しようとしたが、使徒パウロが彼に声をかけ、自殺を思いとどまらせた。　看守は畏敬の念を抱きながらパウロとシラにひれ伏し、その後、彼らを牢屋から連れ出し、自分の家へ連れて行った。そこで彼らの傷を洗い、自身と家族全員が洗礼を受けた。そこから、聖なる使徒パウロとシラは、 アンフィポリス、アポロニア、そしてテッサロニキへと向かった。 多くのギリシャ人や、少なからぬ高貴な女性たちが彼らに加わった。一方、ユダヤ人たちは、嫉妬と反抗心から、一部の悪党たちを招き入れ、民衆を使徒たちに対して扇動し、彼らを滅ぼそうとした。　兄弟たちは夜、パウロとシラをベリアへ送り出したが、ここでもテサロニケからやって来たユダヤ人たちが、神の御言葉を宣べ伝える者たちに対して民衆を扇動した。そのため、パウロは沿岸の地方へ去り、シラとテモテはそこに留まった。数日後、彼らがそこを去ると、コリントで聖パウロと合流した（使徒行伝 16:1–40, 17:1–34、18:1–28）。ここで聖シラは司教となった。神の御言葉を宣べ伝えることに相当な時間を費やし、生涯を通じていくつかのしるしと奇跡を行なった後、彼は主のもとへ帰った。

聖使徒シルワンは、最高位の使徒であるペトロとパウロと共に、神の御言葉を宣べ伝える働きに励みました。両使徒はそれぞれの書簡の中で彼について言及しています。聖ペトロは第一ペトロの手紙の中で次のように記しています。

「*私は、あなたがたの兄弟であり、忠実な者であると私が思うシルワンを通して、このことを簡潔に書き送りました*」（Iペトロ5:12）。

聖使徒パウロも、コリントの信徒への第二の手紙の中で次のように述べています：

– 「*私たち、すなわち私とシルワノが、あなたがたのところで宣べ伝えた神の子イエス・キリスト*」（IIコリント1:19）。

ここから、聖シルワノが、各々の主要な使徒たちと共にキリストの教えを宣教する働きに励み、彼らの労苦や病に参与していたことが明らかです。また、テサロニケでは司教を務め、信仰のために多くの苦難を耐え忍び、そこで、あらゆる功績を冠するキリストのもとへ旅立ちました。

聖使徒パウロは、テモテへの第二の手紙の中で、聖使徒クリスケントについて次のように言及している。「*ガラティアにいるクリスケント*」（IIテモテ4:10）、すなわち、彼は宣教のために派遣

されたのである。　彼はガラティアで司教を務め、その後、ガリアでキリストを宣教し、ヴィエンヌの町で弟子ザカリアを司教に任命した後、再びガラティアに戻り、トラヤヌス帝の治世中に殉教してこの世を去りました[5396]。

聖使徒エペネトスについても、使徒パウロはローマ人への手紙の中で次のように言及している。*「私の愛するエペネトスに挨拶を伝えてください。彼はキリストのためにアカイアの先駆者です」*（ローマ16:5）。エペネトスはカルタゴの司教であった。

同じローマ人への手紙の中で、使徒パウロは使徒アンドロニコについても言及している。*「私の親族であり、私と共に囚われの身となっているアンドロニコとユニヤに挨拶を伝えてください。彼らは使徒たちの間で名声を博し、私よりも先にキリストを信じた人々です」*（ローマ16:7）[5397]。

コンダク、第4声：

あなたがたはキリストのぶどうの木となり、徳において知恵をもたらす房となり、私たちに救いのぶどう酒を注いでくださる。それを受け入れるとき、私たちは喜びに満たされ、あなたがたの尊い記念を祝う。主の使徒たちよ、この記念の日に、私たちの罪の赦しを祈ってください。

聖殉教者ヴァレンティンの受難。

記念日：7月30日

イタリアのオムブリア地方、インタラマナと呼ばれる町に、神から癒しの賜物を受けた聖ヴァレンティンという司教がおられました。　彼は、祈りとイエス・キリストの至聖なる御名の呼び求めによって、人々のあらゆる病気や病苦を癒やし、異教徒たちを偶像崇拝から神への信仰へと導きました（当時、異教の多神教は依然として世界に支配的であり、西と東を支配していた不義な王たちは、キリスト教徒を迫害していました）。 その頃、アテネ出身[5398]、異教の信仰を奉じる[5399]、プロクルス、エフィブ、アポロニウスという名の三人のスコラ学者　が、言語とローマの学問をより深く学ぶために、学びを求めてローマへやって来た。　彼らは、ラテン語とギリシャ語の両方に精通したクラトナという名の学識ある師を見つけ、その師のもとで学び始め、彼の家に住み込んだ。　ある日、クラトナの息子の一人、ヘリモンという者が重病にかかった。その病気は、背骨が曲がり、頭が膝の間に挟まってしまい、どうしても体をまっすぐに伸ばすことができないというものであった。　多くの医師を呼び寄せたが、彼らは患者に何の助けも与えることができなかった。彼はその状態で約3年間

[5396] 98～117年の皇帝。

[5397] 福者テオドリトスは、聖使徒パウロの書簡（IIコリント1:19；IIテサロニケ1:1）の注解において、ここで言及されている使徒シルアヌスは、使徒シロと同一人物であると見なしている。　この見解を裏付けるものとして、シラは使徒書簡には全く言及されていないのに対し、彼は聖使徒たちの最も熱心な協力者の一人であったのに対し、シルワノは使徒たちによって、シラにふさわしいような場面で言及されているという事実が挙げられる。　西欧の注釈者たち（ヴィーゼラー、マイヤーら）は、使徒ペトロが第一の手紙（Iペトロ5:12）で言及しているシルワノを、シロと同一人物であると見なしている。　ギリシャのミネイアにあるカノンの第6歌によれば、ガリアで説教を行い、カルキドンの大司教であったクリスケントは、ギリシャのミネイアにある注記によると、ガリアに隣接するスペインのニュー・カルキドンの司教であった。スラブ語のミネイアでは、カルキドンの代わりにハルキドンと記されており、「ガリアにおいて」という言葉は「喜びの塗油」に置き換えられている。

[5398] 弟子。

[5399] ギリシャにて。

苦しみ、治癒への希望をすっかり失っていた。ある日、フロントンという名のトリブーン[5400] がクラトナの家を訪れた。彼は患者を見て、こう言った。

「私の実の兄弟も同様の病を患っていましたが、インタラムネという町に住む、ヴァレンティヌスという名のキリスト教の司教によって癒やされました。」

そう告げた後、トリブーンはクラトンに、病の息子をその司教のもとへ送るよう勧めた。また、彼は実の兄について、癒やされた後も司教のもとを去ることを望まず、その優しさに惹かれて深い愛情を注いでいたとも語った。 これを聞いたクラトンは、病の少年をそのような旅路に送り出すことは不可能であったため、司教のもとへ、彼を尊敬し、忠実で献身的な数人の男たちを遣わし、司教が自分のもとへ来てくれるよう依頼した。 神の御使いは、主の栄光のために、自分の街からローマへ、自分を招いたその男の元へ行くことを厭わず、彼から大いなる敬意をもって迎えられた。クラトンは聖人に病のヘリモンを見せると、トリブヌスの兄弟を癒したように、自分の息子も癒してほしいと懇願した。聖ヴァレンティヌスは言った。

「もし望むなら、あなたの息子は癒やされるだろう。」

「もし私の息子を治すことができるのなら、私の財産の半分を惜しみなくあなたに差し出そう」とクラトンは答えた。

「驚くべきことだ」と聖人は反論した。「賢明な師であるあなたが、私の言葉を理解していないとは。もう一度言うが、もしあなたが望むなら、その病人は回復するだろう。なぜなら、私のキリストを信じるならば、信じる者にとってはすべてが可能だからだ。」 信じる者は、世俗的で取るに足らないものに希望を置き、かつて生きていた邪悪な人々の像――木や石、あるいは何らかの物質で作られたものを――神として崇める不信仰者よりも、はるかに神に喜ばれる存在である。 悪事に深く染まり、残酷な拷問にふけり、忌まわしい不法行為から解放される時間が一時間たりともない者たちを、どうして神とみなすことができるだろうか。 もし、私があなたに提案する信仰を受け入れ、異教の不義を捨て、目に見えず全能なる唯一の神に希望を置くならば、あなたの望む通り、あなたの息子には健康が与えられるでしょう。あなたが私に差し出そうとしている財産の半分は、貧しい人々に分け与えてください。そうすれば、彼らがあなたとあなたの息子のために神に祈ってくれるでしょう。 しかし、あなたの息子の癒やしの見返りとして、私があなたから何かを受け取るよう説得することは、決してできない。私が求めるのは、ただ一つの信仰だけである。それゆえ、神の御子イエス・キリストを、真の神であると信じ、すべての偶像を捨て去りなさい。そうすれば、あなたは息子が健康になっているのを見ることになるだろう。

クラトンはこれに対し、こう言った。

「あなたの信仰が具体的にどのようなものかは知りませんが、人は皆、自分の信仰によって救われると聞いています。ある人の信仰が他の人を助けることはできず、その逆もまた然りであり、ある人の不信仰が他の人に害を及ぼすこともありません。」

聖なる司教はこう答えた。

「人間の生活には、他者に助けにも害にもならないものがある。父親の不信仰が息子の信仰を損なうことはないが、困窮の時や病人の癒やしにおいては、ある者の信仰が別の者の助けとなることがある。例えば、信仰によって、父は息子を、姉妹は兄弟を、主人は奴隷を助けることができるのだ。」 聖書には、百人隊長が信仰によって死にかけていたしもべを癒やされたと記されている（マタイ8:5–13）。 会堂の長は、死にかけていた娘が生き返るのを見ました（マタイ9:23–25）。また、亡くなって葬られた兄ラザロを嘆き悲しんでいた姉妹たちは、四日目に主の御言葉によって彼がよみがえったのを見て、大いに喜びました（ヨハネ11:1–44）。 旧約聖書や新約聖書には他にも数多くの例があり、ある人の信仰が他の人を助けることができることをはっきりと示している。また、ある人の

[5400] 軍階。

不信仰　が他の人に害をもたらすこともある。例えば、ファラオという一人の人の不信仰は、エジプト全土に様々な災いをもたらし、さらには彼自身とその全軍を滅ぼしてしまった。

司教のこうした言葉やそれに類する説教を聞き、教師クラトンは司教の足元にひれ伏してこう言った。

「私は、あなたが宣べ伝える方を信じます。その方は真の神であり、病や死に『去れ』と命じれば去り、命に『戻れ』と命じれば戻る、その方以外に神はいないのです。」

聖ヴァレント司教はこれに対し、彼にこう言った。

「キリスト教の信仰は、言葉だけでなく、行いによっても示されるべきである。」

「では、」と教師は尋ねた、「信仰を示すことのできる行いとは、どのようなものでしょうか？」

「人の手によって造られた偶像を捨て、聖なる洗礼を受け、神の子らの一員となりなさい」と司教は教えた。

「では、いったいどのようにして――」とクラトンは尋ねた。「ただ肉体の汚れを洗い流すだけの水が、罪を清めることができるというのですか？」

「水は」と聖人は彼の疑問に答えた。「その上に至聖なる三位一体の御名が呼びかけられるとき、神秘的に聖霊を受け、その聖霊こそが、この水の中で洗礼を受ける者のすべての罪を清めるのである。」

「私たちの会話は延々と続いているが」とクラトンは言った。「私の息子ヘリモンの命は刻一刻と短くなっているのだ。」

聖ヴァレンティンはこれに対し、こう言った。

「もしあなたが、これまで一度も耳にしたことも、目にしたこともないことを信じないならば、あなたの息子は健康になることはできません。」

「それは一体何のことだ」とクラトンは首をかしげた。「私が目にも耳にもしたことがないものとは？」

「あなたは」と聖人は説明した。「無原罪の受胎を経て子を産み、出産後もなお処女であり続けた乙女について、かつて聞いたことがあるか？　海の上を陸地のように歩いていく者を、見たことがあるか？　また、たった一言で海の嵐を鎮め、やがて十字架にかけられ、死に、葬られ、三日目に死からよみがえり、多くの人々の目の前で天に昇り、さらに人々にはっきりと現れた天使たちが、彼が再び天から降りてきて生者と死者を裁くと証言した、という話を聞いたことはあるか？　もし、これらすべてが実際に起こったことだと信じるなら、さあ、洗礼を受けなさい。そうすれば、あなたの息子も健康を取り戻し、あなた自身も永遠の命に与かることになるでしょう。

「おっしゃることは何でもいたします」と教師は承諾した。「ただ、私の息子が健康でいられるようにしてください。」

それに対し、聖なる司教はこう言いました。

「あなたが教師として重んじているこの世のあらゆる知恵は、神の前では無に等しく、あなたは信仰そのものが求めるような完全な信仰を持つことはできません。ですから、あなたの息子が私の信仰によって癒やされた後、あなたとあなたの家族全員がキリストに帰依し、洗礼を受けると約束してください！」

そこで、教師クラトンは妻と家族全員を呼び寄せ、聖人の足元にひれ伏し、皆、ヘリモンが癒やされればキリスト教徒になると約束した。そこには前述の若者たち――プロクルス、エフィブ、アポロニウス――もおり、彼らもまた、師の息子の回復を願い、キリスト教徒になることを約束した。その後、聖なる司教は、別の部屋を用意させ、その日と翌晩は沈黙を守るよう命じた。そして自ら、病人をその部屋へ連れて行き、彼と二人きりで閉じこもった。　病人は、まるで丸い玉のように体を丸めていた。頭は膝の間にあり、足は肩や背中に乗っていた。体のどの部分も自由に動かすことがで

きず、舌を動かすことさえできず、ただうめき声を上げるだけだった。どの医師も、この病気を理解することも、治すこともできなかった。　聖ヴァレント司教は、普段祈りを捧げる際に用いていた羊毛の衣を取り出し、それを床に敷き、その上に半死半生の少年を寝かせ、自ら一晩中祈りを捧げ、神を賛美した。　真夜中、その部屋は天の光に照らされ、外にいる者たちには、まるで部屋の中で火が燃え上がったかのように見えた。そして真夜中を過ぎると、少年は元気を取り戻して立ち上がり、大きな声で神を賛美し始めた。　両親や家の中にいた者たちは、ヘリモンの声と彼が口にする言葉を聞いて大いに喜んだ。というのも、過去3年間、彼らが耳にしていたのは彼のうめき声だけだったからだ。　彼らは扉に近づき、聖人に扉を開けてヘリモンに会わせてほしいと叩きながら懇願した。しかし聖人は、いつもの祈りを終えるまでは扉を開けないと答えた。彼らはこの出来事を喜びながら、朝まで待った。　日が明けると、聖なる司教は扉を開け、まるで病気だったことなどなかったかのように完全に健康な少年を連れ出し、両親に引き渡した。そこで、教師クラトンは家族全員とともにキリストを信じ、洗礼を受けた。皆、自分たちの救い主である神を心から喜び祝った。

癒やされた少年ヘリモンは、洗礼を受けた後も、自分の医師である聖ヴァレンタスを離れることを望まなかった。　同様に、前述の三人の青年たちも、洗礼を受けた後、世俗の知恵を捨て、神の司教である霊的な師に全き熱意をもって寄り添い、その弟子となり、その聖なる生涯を模範とし、自らの救いを求める者となった。　また、彼らと同年代の他のスコラ学者たちや若者たちも、彼らの説得や、誠実で貞潔な生活の模範に促され、キリストの信仰と聖なる洗礼へと向かい、　その結果、多くの学生たちが彼らの元へ集まり始め、神に霊感を受けた教えに耳を傾けて天の知恵を学び、真の道へと歩み出した。　やがて、アヴンディウスという名の都市の長の息子が、キリストを信じ洗礼を受けた後、神聖な熱意に燃え上がり、皆の前で公然と自らをキリストの僕であると告白した。すると、彼の父や他の役人たちは激しく怒り、キリスト教信仰の最初の教師である聖ヴァレンタス司教を捕らえ、容赦なく殴打した。　彼らは彼に偶像崇拝を強要したが、彼は彼らの意に従おうとはしなかった。そのため、彼は再びさらに激しく拷問され、その後、牢獄の鎖に縛り付けられた。しかし聖人は、主であるキリストのために苦難を受けることを許されたことを喜び、使徒たちと同様に受けた傷を貴重な装飾のように身にまとい、それを誇りとしてこう語った。

「私は、自分の体に主イエスの傷跡を背負っている（ガラテヤ6:17）。また、キリストの苦しみの不足分を、自分の肉において補っている（コロサイ1:24）。」

その一方で、牢獄に訪ねてくる弟子たちを、聖なる信仰において励まし続けた。これを知った長官は激しく激怒し、夜中に彼を呼び出させ、牢獄から引きずり出し、首を刎ねた。こうして、聖ヴァレンティン司教は、その苦難に満ちた生涯を閉じた。　聖プロクルスの弟子たち、エフィブとアポロニウスは、その尊い遺体を受け取り、インタラマナという町へ運び、郊外に小さな土地を購入して、尊厳をもって埋葬した。そして、棺のそばで数日間、断食と祈り、そして主への賛美に明け暮れた。　彼らのもとに、町に住む信者たちや多くの異教徒が集まった。後者たちは、彼らの魂を救う言葉やキリストの説教に耳を傾け、信仰によって啓発された。　しばらくして、このことが都市長レオントイオスの耳に入り、彼はこの三人の少年たちを捕らえて牢獄に投獄した。しかし、民衆が動揺し、彼らを憐れんでいるのを見て――皆が彼らを愛していたからである――夜間に彼らを殺害するよう命じた。昼間に死刑を宣告すれば、動揺した民衆が彼らを連れ去ってしまうのではないかと恐れたからである。　こうして、聖なる殉教者たちは夜、剣によって斬り殺され、天国の揺らぐことのない光へと旅立った。前述の聖アヴンディウス、すなわちローマの役人の息子は、愛する友人たちの元を訪れ、彼らが殺害されたことを知ると、深く悲しんだ。　その尊い遺体を受け取り、師である聖ヴァレンティヌスの墓のそばに尊厳をもって埋葬し、父と聖霊と共に、永遠の世々限りなく生きて支配しておられる主イエス・キリストを賛美した。アーメン。

聖殉教者ポリクロニオスの受難

記念日：7月30日

不敬虔なローマ皇帝デキウス[5401] は、多くのキリスト教徒を拷問の末に殺害した後、全軍を率いてペルシアへと向かった。ペルシア軍を打ち破り、その国を征服すると、彼はバビロニア、バクトリア、イルカニア、アッシリアの各地域を支配下に置いた。　これらの土地で多くのキリスト教徒を発見すると、皇帝は彼らを迫害し、あらゆる手段で苦しめ始めた。　当時、バビロンにはポリクロニオス司教がおり、彼と共にパルメニオス、エリマ、クリソテロスという三人の長老と、ルカ、ムコという二人の助祭がいた。デキウスは彼らを捕らえると、直ちに偶像への生贄として捧げるために連行するよう命じた。しかし、聖ポリクロニオスは勇敢にこう言った。

「我らは自らを、我らの主イエス・キリストへの生け贄として捧げる。しかし、悪魔や、人の手によって造られた取るに足らない偶像には、決して拝することはない。」

デキウスは、司教と長老たち、そして助祭たちを牢獄に閉じ込めるよう命じ、自身はバビロン市に、その忌まわしい神サトゥルヌスのために神殿を建設し始め、その神のために金箔を施した偶像も造らせた。　彼はローマの総督ヴァレリアヌスに、ペルシャ軍に対する自身の輝かしい勝利について書簡を送った。彼は、この勝利が神々から与えられたものだと考えていた（　）ため、ローマで神々を称える盛大な祝祭を催すよう命じ、キリスト教徒を拷問し、殺害するよう命じた。

ヴァレリアヌスは、この皇帝の命令に従ってローマで行動した。バビロンで忌まわしいサトゥルヌスの神殿が完成すると、不敬虔なデキウスは、ポリクロニオス司教を長老や助祭たちと共に法廷に呼び出し、こう言った。

「お前は、神々をも崇めず、王の命令にも従わない、あの神を冒涜する者か？」

聖なる司教は、一言も答えず、黙って立っていた。すると王は長老たちと助祭たちに向かって言った。

「お前たちの指導者は口を閉ざしてしまったな！」

しかし、長老パルメニオスは言った。

「我らの父は言葉を失ったのではなく、我らの主イエス・キリストの御命令に従い、その清く聖なる口を汚すことを望まないのです。主はこう言われました。*『聖なるものを犬たちに与えてはならない。また、真珠を豚の前に投げてはならない。彼らがそれを足で踏みつけ、振り返ってあなた方を引き裂くことのないように』*　（マタイ7:6）。清らかな口を糞で汚すことが、果たして良いことでしょうか？

激怒したデキウスは言った。

「では、我々は膿なのか？」

そして直ちに、長老に舌を切り落とすよう命じた。聖パルメニオスの舌が切り落とされたとき、彼はそれにもかかわらず、聖ポリクロニオスに向かってはっきりとこう言った。

「聖なる父よ、私のために祈ってください。私はあなたの上に、あなたの口を閉ざし、私の口には銅の蜜の巣を授ける王――聖霊をお見受けするからです。」

かくして、神は御自身の聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる。舌を持つ者には沈黙を命じ、舌を切り落とされた者には言葉の賜物を与え、御自身の全能の力を示されるのである。そしてデキウスは司教に言った。

「ポリクロニオスよ、神々に犠牲を捧げれば、お前は私の友となる。そして、新しいサトゥルヌスの神殿を、お前に任せる。」

[5401] デキウス – 249年から251年までの皇帝。

司教は彼に何も答えなかった。デキウスは激怒し、石で彼の口を打つよう命じた。聖人は打たれている間、両手を天に掲げ、目を上げると、息を引き取った。　デキウスは殉教者の遺体をサトゥルヌスの神殿の前に倒れたまま放置した。その翌夜、ペルシアの貴族であるアヴドンとセンニスという名の二人の高貴な男――彼らは密かにキリスト教を信仰していた――が、聖ポリクロニオス司教の遺体を密かに運び出し、城壁の近くに埋葬した。　一方、デキウスはペルシアの地にあるコルドゥヴァという都市へ向かい、捕虜となった長老や助祭たちを、鉄の枷をはめられたまま従わせるよう命じた。

聖人たちが連行される際、鉄の足枷が彼らの首や手から外れていった。コルドゥヴァの町に到着すると、デキウスは連行されてきた囚人たちを裁判にかけるよう命じ、彼らにこう言った。

「愚かな者たちよ、お前たちも死を望むのか。さあ、不死の神々に犠牲を捧げることを提案しよう！」

しかし、舌を切り落とされていた長老パルメニオスは、大声でこう答えた。

「ああ、呪われた者よ。人の手で作られた偶像に拝むよう、我らを説得しようとするのか！むしろ、あなたが我らの主イエス・キリストを拝むべきだ。もし彼を拝まなければ、あなたはあなたの神々と共に滅びるだろう。」

デキウスは、彼ら全員を拷問のために絞首刑にするよう命じた。しかし、聖人たちはそのような状況にあっても神に感謝し、パルメニオス長老にこう言った。

「父よ、私たちのために祈ってください！」

すると、彼はこう言った。

「私たちの主イエス・キリストの父なる神が、永遠に君臨される聖霊を、私たちの慰めとして与えてくださいますように。」

すると、皆が答えた。

「アーメン！」

すると、デキオは激怒して叫んだ。

「これは魔術だ！ 舌のない者が話すなど、これこそが魔術の明白な証拠ではないか？」

これに対し、長老パルメニオスは答えた。

「かつて口がきけない者に舌を与えられた我らの主イエス・キリストは、舌を切り落とされた罪人である私にも、話す能力を与えてくださった。それなのに、あなたは舌を持ち、話すことができるにもかかわらず、真の神を賛美しないゆえに、口がきけない者と同じなのだ！」

デキウスは、彼らを火で焼くよう命じ、赤熱した鉄板を脇腹に押し当て、鉄の鉤でその肉体を引き裂くよう命じた。聖人たちがこのように苦しめられていると、天から声が聞こえ、こう言った。

「心謙虚な者たちよ、わたしのもとに来なさい！」

デキウスはこの声を聞くと、それも魔術の仕業だと決めつけ、殉教者たちを降ろして首を切り落とし、その遺体を町の外の道端に投げ捨て、誰かが遺体を持ち去って埋葬しないよう、見張りを置くよう命じた。こうして、キリストのために殉教を終えた聖なる殉教者たち、三人の長老――　パルメニオス、エリマ、クリソテル、そして二人の助祭、ルカとムコである。捨てられた彼らの遺体は、王と共にここへやって来た前述の二人の公爵によって、夜間に密かに持ち去られ、コルドゥヴァ近郊の彼らの村に埋葬された。ちょうどその頃、デキウス王はペルシア全土に使いを送り、キリスト教徒を探し出して拷問するよう命じた。すると、王の家来たちの一部が彼にこう言った。

「王よ、あなたが赦し、命と自由を与えたあの捕虜たちはキリスト教徒です。彼らはキリスト教徒の遺体を集め、自分たちの村に埋葬しており、神々に拝礼せず、あなたの命令さえも従いません。」

「あの不敬虔な者たちは誰だ？」と王は怒りを込めて尋ねた。家臣たちはアウドンとセンニスの名を挙げた。王は直ちに二人を呼び出すよう命じ、彼らが現れるとこう言った。

「お前たちは、神々への不敬のゆえに、ローマの支配下に置かれたのだということを、理解できないほど愚かなのか？」

それに対し、彼らはこう答えた。

「キリストが私たちを悪魔に打ち勝たせてくださったのは、私たちがあなた方の神々を軽蔑しているからなのです。」

デキウスは怒りを込めて彼らに言った。

「お前たちの命が私の手の中にあることを、知らないのか？」

「私たちの命は」と聖人たちは答えた。「私たちの神の御手の中にあり、私たちは、私たちの救いのために天から地上に降りてこられた御方にひれ伏します。」

デキウスは彼らを鉄の鎖で縛り、狭い牢獄に閉じ込めるよう命じた。聖人たちは、鎖で縛られたとき、こう言った。

「これこそが、我々が主から授かることを常に望んでいた栄光である！」

その同じ日、他の二人の高貴な男、オリンピウスとマクシムスが、キリスト教徒であるとして王の前で告発された。王は直ちに彼らを捕らえ、尋問もせずに棒で打つよう命じ、こう言った。

「彼らは神々を崇拝しないのだから、その言葉を聞く価値などない。死んだ人間を神とみなしているのだから、死に値するのだ。」

聖マクシムスはこれに反論して言った。

「『死んだ』と言うのは正しいが、なぜ『復活した』とも言わなかったのか？」

「お前たちの秘蔵の宝物を名指しせよ」とデキウスは言った。

聖オリンピオスはこう答えた。

「私たちの宝、すなわち金、銀、あらゆる富とは、私たちの主イエス・キリストその人である。その方のために、私たちは自らの健康をも惜しまず、この世のあらゆる富を軽んじているのだ！」

聖人たちが残酷に殴打されたとき、彼らはこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたが私たちを御自分のしもべの一員に加えてくださったことを、あなたに栄光がありますように！」

デキウスはますます激怒し、殉教者たちを錫の棒で打つよう命じた。その後、彼らを自分の代理であるアニシウスという者に引き渡した。アニシウスは彼らへの拷問を続け、ついに斧で首を切り落とし、その遺体を犬に食わせるために投げ捨てた。　遺体は五日間、埋葬されずに放置されていたが、何者にも触れられることはなかった。六日目の夜、キリスト教徒たちは尊い遺骸を運び出し、尊厳をもって埋葬した。

その後、不敬虔なデキウスはローマへ向かい、彼と共に、ペルシア出身の聖なる殉教者アウドンとセンニスが鎖でつながれて連行された。デキウスは自らの栄光のために、ローマ人たちに見せ物を見せるべく、彼らを従えていたのである。　その頃、ローマの総督ヴァレリアヌスは、聖シクスト教皇とその聖職者たち、そして多くのキリスト教徒を捕らえ、牢獄に閉じ込めた。教皇は長い間牢獄に囚われていたが、そこへ秘密のキリスト教徒たちが訪れ、自分の子供たちを連れてきたほか、偶像崇拝の不義からキリストへと回心した親族や知人たちも連れてきた。　彼らは牢獄で教皇によって洗礼を受けた。その頃、デキウスは、捕虜としてペルシャの二人の王子、アウドンとセンニスを従えて、栄光と盛大な祝典のうちにローマに入城した。　その後、デキウスはヴァレリアヌス長官と共にローマ元老院全体を召集し、ペルシアから連行されてきた、鎖で縛られながらも貴族らしい装いをした二人の王子を 彼らに紹介した。 彼らは道中で様々な拷問により衰弱していたが、デキウスの栄光の

ために、金や銀、宝石をあしらった高価な装身具で飾られていた。デキウスは彼らを指さしながら、こう言った。

「神々や女神たちが我々の手に引き渡した敵たちを見よ。これこそがローマ帝国の敵である！」

彼らを見たローマ元老院全体は、その気高い姿に驚き、彼らへの憐れみに包まれて心を動かされた。主は御自分のしもべたちにそのような恵みを与えられたので、彼らを見つめる者たちは怒りよりもむしろ心を動かされるようになったのである。　デキウスは、クラウディアという名のカピトリーノ神殿の最高祭司を呼び出すよう命じた。彼は偶像と三脚の祭壇を携えて現れ、デキウスは聖徒たちにこう言った。

「神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、あなた方は自由なローマの貴族となり、すべての財産を所有し、さらに他の富も手に入れ、我々から大きな栄誉を受けることになるだろう！」

しかし、聖徒たちはこう答えた。

「私たちはただ、私たちの主イエス・キリストなる神に、自分自身を捧げるだけです。あなたの神々には、あなた自身が捧げ物をしなさい！」

その後、王は朝までに見世物を準備するよう命じ、そこでペルシャの貴族アヴドンとセンニスを野獣の餌食にしようとしました。　朝になり、見世物の準備がすべて整ったとき、デキウス王は現れず、代わりに長官ヴァレリアヌスを遣わした。ヴァレリアヌスはやって来て殉教者たちを連れ出すと、まず彼らに偶像礼拝を勧めてこう言った。

「貴方の高貴な身の上を憐れみ、神々の祭壇に香を捧げなさい。そうしなければ、獣の牙によって滅びてしまうだろう。」

「すでに申し上げた通りです」と聖人たちは答えた。「私たちは主イエス・キリストにのみ、賛美のいけにえと祈りの香を捧げ、主のみにひれ伏します。人の手で作られた偶像を崇めることは決してありません。」

そこには太陽の神像が立っており、ヴァレリアヌスは兵士たちに、殉教者たちをその神像のところに連れて行き、強制的に拝ませるよう命じた。しかし、聖人たちは神像に近づくと、その上に唾を吐きかけた。　するとヴァレリアヌスは激怒し、聖なる殉教者たちを錫の棒で打ち、その後、裸のまま特別に設けられた場所へ連行するよう命じた。そこでは、高台からその様子を見下ろす民衆の目の前で、獣たちに食い殺されることになっていた。　聖人たちは肉体は裸であったが、キリストの御霊に包まれ、十字架の印を胸に刻んだ。まず二頭のライオンが放たれ、続いて四頭の熊が放たれたが、獣たちは彼らに危害を加えることなく、まるで守護者のように彼らの足元に横たわっていた。するとヴァレリアヌスは言った。

「これは明らかにキリスト教の魔術だ！」

そして、獣たちを連れ去るよう命じ、武器持ちたちに中に入って殉教者たちを殺すよう命じた。聖人たちは剣で刺し殺され、足に引っ掛けられて遺体が引きずり出され、拷問者の命令通り、キリスト教徒を威嚇するために太陽の神像の前に投げ捨てられた。彼らはそこで三日間横たわっていた。キリンという名の、ヒポディアコンの位にあるある秘密のキリスト教徒が、その場所の近くに住んでいたため、夜間に殉教者たちの遺体を盗み出し、自分の家の錫の棺に葬った。こうして、ペルシャの王子たちである聖殉教者アヴドンとセンニスの生涯は幕を閉じた。　聖シクスト教皇は聖職者たちと共に、彼らの後に殉教した。彼と大助祭ラウレンティウスの殉教は、8月10日に記念される。二人の聖殉教者アヴドンとセンニスの尊い遺骸は、コンスタンティヌス大帝の即位まで地中に埋もれていた

が、　その治世の頃、神の啓示により、信者たちによって発見され、父と聖霊と共に永遠に賛美される私たちの神、キリストの栄光と誉れのために、ポンティアヌスの墓所へ移された。アーメン[5402]。

聖ヨハネ・ヴォイナ（戦士）の記念日

記念日：7月30日

この聖ヨハネは、皇帝ユリアヌス・背教者の治世下で軍務に就き[5403] [5404]、他の兵士たちと共にキリスト教徒を殺害するよう命じられた。彼がその任務を遂行しているのを見た者たちには、彼はキリスト教徒の迫害者のように見えたが、密かに彼らに少なからぬ援助を与えていた。　例えば、ある者たちには捕らえられる前に知らせを送り、逃げられるようにし、また別の者たちには、すでに捕らえられた後に解放した。彼は迫害されているキリスト教徒だけでなく、助けを求めてきた人々に対しても慈悲を示し、彼らが必要とするものをすべて与えた。　祈りと断食に励み、病人を訪ね、悲しむ人々を慰めることで、聖ヨハネは自らの生涯を輝かせ、徳を磨いた。　このように神に喜ばれる生涯を送った後、彼は主のもとへ旅立ち、旅人たちが埋葬されていた場所（[5405]）に葬られた。その後、ある女性に啓示を通じて、生前に行ったすべての行いについて語り、また自身が名乗っていた名前も明かした。　伝えられるところによれば、聖ヨハネはこの他にも数々の奇跡を行ったという。とりわけ、彼は奴隷の逃亡を阻止し、窃盗を暴き、盗まれた品物を見つけ出すことで知られている。神は、聖ヨハネの徳高い生涯に対し、こうした奇跡の力によって彼を豊かに祝福されたのである。

8月13日

7月31日（旧暦）

8月

聖義人エウドキム

記念日 7月31日

[5402] ローマの殉教者録では、聖なる殉教者たちの記念日はそれぞれ異なる日に指定されているが、聖ディミトリイ・ロストフスキーは、彼ら全員が同じデキウス帝によって迫害を受け、かつ同じ国々出身であるとして、彼らをひとつの集団としてまとめた。 アヴドンとセンニスの聖遺物は、9世紀以来、ローマの聖マルコ教会に安置されている。彼らは聖人たちの死後、当初からここ（ローマ）に安置されていた。

[5403] アンブロシアン図書館の序文およびニコディモスの記述によれば、聖ヨハネは、スキタイの部族であるタイファル族の兵士たちで構成された連隊の戦士であったとされています。　セルギウス大司教は『東方暦全書』（第II巻、220ページ）において、聖ヨハネのスラブ系出身であるという仮説を提示している。

[5404] ユリアヌスは、コンスタンティヌス大帝の実の甥であり、361年から363年まで在位した。彼が「背教者」と呼ばれるのは、幼少期からキリスト教徒であったにもかかわらず、即位後にキリスト教の信仰を捨て、熱心な異教徒となったためである。　キリスト教を弱体化させ、ローマ帝国で衰退しつつあった異教を復活させようと、彼は当初、キリスト教徒に対して狡猾な手段を用いていたが、やがて暴力的な手段にも及んだ。しかし、キリスト教徒に対する全面的な迫害は行わず、個別の迫害事例にとどまった。

[5405] 聖ヨハネの没年は不明である。彼がコンスタンティノープルで亡くなり、同地に埋葬されたことだけが知られている。

聖なる義人エウドキムは、カッパドキア[5406] の出身で、敬虔な両親ヴァシレイオスとエウドキアの息子であった。テオフィロス[5407] の治世下、彼は軍務に就き、神のすべての戒めを熱心に守り、断食と節制、そして祈りと罪の悔い改めに専心するなど、徳高い生活を送っていた。　聖書の読解と研究に熱心に励む傍ら、彼は貧者、困窮者、孤児、未亡人たちに惜しみない施しを行い、教会や修道院に寄付をし、すべての人々に豊かな慈愛を示しつつ、その貞潔を汚れなく守り抜いた。　彼は極めて貞潔であったため、女性と会話することも、彼女たちを見ることも決して許さなかった。母以外の女性を自分のそばに近づけることさえ許さなかったが、母だけは息子として敬い、彼女とは会話を交わしていた。　あらゆる会話において、彼は無駄話や空虚な言葉を避け、多弁よりも沈黙を重んじた。無為に話したり愚かなことを口にする者たちからは距離を置き、嘘、中傷、あらゆる非難については、口にするどころか、聞くことさえ望まず、あらゆる美徳をもって自らの魂を飾り立てた。　世間の騒ぎや混乱、喧騒の中でも、彼はまるで茨の中の百合、あるいは火の中の金のように見ることができ、世俗の誘惑や情欲に微塵も汚されることはなかった。　その美徳ゆえに、彼は万人に愛され尊敬され、王の耳にもその名は届いていた。王は彼をカッパドキア連隊の長に任命し、ハルシア地方[5408] へ民を統治するために派遣した。権力を用いて、彼は慈愛と完全な　正義をもって統治を行い、その生涯において、神の前でも人々の前でも義人であった。　しかし、彼の秘められた徳の高き行いについては、私たちの心と思いを試みられる全知の神以外、誰も知ることも語ることもできない。この至福で義なる人は、全き心と魂をもって神に仕え、神に完全に喜ばれた後、若くして安らかに天に召された。彼は生後わずか33年であった。　彼には、聖書の次の言葉が成就した。*「短期間で完全さを極め、長い生涯を全うした。彼の魂は主の御心にかなっていたからである」*（箴言4:13–14）。　彼は白髪になるまで生き延びることはなかったが、徳ある生活の完全さにおいて多くの長老たちを上回った。なぜなら、神に喜ばれる老いは年数で測られるものではないからである。神に喜ばれる白髪とは知恵であり、老いとは徳ある人の清らかな生活である。　もし誰かがそのような年齢に達したならば、その者には、虚しく取るに足らないこの世に長く留まる必要はなく、彼は*「この世から解き放たれ、キリストと共にいること」*を願うのである（フィリピ1:23）。そのような年齢に達した聖エウドキムは、年齢的には若かったにもかかわらず、この世を去った。　彼は神に喜ばれ、神は彼を愛された。それゆえ、悪意が彼の理性を歪めたり、諂いが彼の魂を誘惑したりすることがないよう、彼は罪人たちの間から連れ去られ、天に迎え入れられたのである（箴言4:1–20参照）。彼の最期がどのように訪れたかについては、その場に立ち会った者たちが次のように伝えている。　病床に伏し、死の刻が近づくと、彼は家族を呼び集め、誓いを立てて遺言を残した。すなわち、彼の魂が去った後、遺体を検視したり洗ったりせず、着ていたままの服と履いていたままのブーツで、そのまま棺に納めるようにと命じたのである。　その後、皆に部屋から出て行き、扉を閉めるよう命じると、彼は祈りを捧げた。その祈りの声は、扉の向こう側にいる数人に聞こえていた。祈りの中で、彼は、自分の死が誰にも見られないように、また、秘められた功績に満ちた自分の生涯が誰にも知られないようにと願った。すべてのことについて神に感謝を捧げた後、彼はついに「*主よ、私の霊を御手に委ねます*」と口にし、肉体を離れ、主のもとへ旅立った。家族たちは、彼が遺言した通りに彼を埋葬した。

主は、御自身の御心に適う者を称え、その死を通じて、その生涯がいかに聖なるものであったかを示そうと望まれ、その栄光に満ちた聖遺物に奇跡的な恵みを与えられた。それにより、あらゆる病が癒やされるようになったのである。　まず、イリヤという名の男がいた。彼は不浄な霊に取り憑かれており、そのせいでひどく苦しんでいた。聖エウドキムが亡くなり、埋葬されてから間もなく、悪魔に追い立てられ、苦しめられながら、この義人の棺の前にやって来た。　彼の足が棺に触れるやいなや、まるで火に焼かれたかのように、悪霊は大きな叫び声を上げ、その男を棺の上に投げ出すと

[5406] カッパドキア――小アジアの地域。
[5407] テオフィロス――829年から842年まで在位したビザンツ皇帝。
[5408] 小アジアのカッパドキア西部にあるハルシアン地方。

、義人の祈りに追い立てられて、彼から出て逃げ去った。これを見た人々は、自分たちの病人を連れてきて棺の上に寝かせ始めた。そして、皆が速やかに癒やされた。　この功績により、聖エウドキムは、棺の上に天蓋を建てられ、ランプが灯されるという栄誉を授かった。彼の奇跡の評判は至る所に広まり、多くの人々が彼のもとに集まるようになった。様々な病に苦しむ人々は、ランプの油による塗油、あるいは棺から取った土を患部に当てることによって、癒やしを得た。　ある女性が、まるで死んでいるかのように動かない、麻痺した手を持つ自分の子供を連れてきた。彼女が聖人のランプの油で子供の手に塗ると、その子は即座に癒やされ、手を正常に動かすようになった。　同様に、足が麻痺して歩くことも立つこともできない少年が連れてこられた。その麻痺した足に、同じ聖灯の油を塗ると、少年はたちまち回復し、神を賛美しながら歩き回り、跳ね回り始めた。　ある女性は、体に激しい腫れ物を患っていたが、聖人の棺から土を取り、それを水――というよりむしろ涙――と混ぜ合わせ、治癒の湿布のように腫れ物に当てたところ、その日のうちに完全に癒やされた。　聖エウドキムの奇跡の評判は、カッパドキアから移り住んでいた彼の両親がまだ住んでいたコンスタンティノープルにも届いた。　彼の母はビザンティウムからハルシア地方を訪れ、息子の棺と、癒やしを求めて集まってきた大勢の人々を見て、棺にひれ伏し、それを抱きしめながら涙ながらにこう語った。

「ああ、私の愛しい子よ！　私の目の光よ！　この偉大で奇跡的な力は、どこから来たのかしら？　このような癒しの恵みは、どこから来たのかしら？　まことに、これはあなたが主を喜ばせるために密かに行った徳ある行いのゆえに、神から与えられたものなのね！」　私は、このような息子を産む恵みにあずかった母として、この上なく幸いである。もはや、亡き息子のようにあなたのために泣き悲しむことはなく、神と共に生きる神の友として、霊的な賛美を捧げているのだ。

喜びの涙を流しながらさらに言葉を述べた後、母は石を取り除き、土を掘り起こして棺を開けるよう命じた。それが行われると、聖人の遺体が、少しも朽ちておらず、顔はまるで生きているかのように明るく、口元は本来の美しさを保っているのが見えた。　聖人はすでに18ヶ月も地中に埋もれていたにもかかわらず、少しも変化しておらず、まるで生きているかのように、ただ眠っているかのようであった。聖人の体からは素晴らしい香りが漂っており、聖遺物が入った棺　は地中から地上へと運び出された。　母が息子に新しい服を着せようと願ったとき、たまたまヨセフという名の、徳の高い、長老の位にある一人の巡礼の修道士がそこにいた。彼は聖人の遺体を、まるで生きているかのように聖櫃から取り出した――その手足は自由に曲がるほどだった；　修道士は聖人の遺体から以前の衣服を脱がせ、足からブーツも何の苦労もなく脱がせた。というのも、手も足も自ら脱がせるように動いたからである。遺体に新しい衣服を着せると、再び丁重に棺に納めた。

母は、最愛の息子の奇跡の遺体を持ち帰り、ビザンティウムへ連れて行きたいと願った。

「この輝く星は」と彼女は言った。「私の胎内から輝き出したのだから、どうか私の元、私の家へと戻ってきてほしい！」

しかし、その国の住民たちは集まり、彼女に遺体を引き渡さず、こう言った。

「この星はあなたの胎内から昇ったとはいえ、私たちの間でその沈みを見届け、奇跡によって再びより明るく輝いたのです。この良きぶどうの木はあなたから育ったとはいえ、私たちの間で癒しの恵みの甘い実を結んだのです。　もし神が、この聖人の奇跡的な遺骨を別の場所に置きたいと望まれたのなら、彼が私たちのもとへ来た場所へ、生きて戻ることはできなかったというのか？！ああ、慈愛に満ちた母よ！神の御意志に逆らわず、私たちに与えられたこの賜物を妬んではならない。あなたがそのような聖人を産んだという栄光だけで、あなたには十分である！

その言葉を聞いて、母は黙り込み、数日間息子の棺のそばに留まった後、皆に別れを告げて家路についた。　前述の修道士ヨセフは、この聖人の遺骨の守護者となり、しばらくの間その傍らに留まっていたが、やがて好機を見計らって、夜陰に乗じて密かに義人の遺骨を持ち出し、それを持ってコンスタンティノープルへと向かった。　そして旅の途中、奇跡が起こった。盗まれた香油は、たとえ隠されていても、その強い芳香のせいで隠しきれないのと同様に、密かに持ち出された聖エウドキ

ムの聖遺物も、そこから発せられる癒しの恵みのせいで隠すことができなかった。旅の途中で病人に遭遇すると、その人は癒やされたのである。　ある悪霊に取りつかれた女性が、その名高い聖遺物箱に近づくと、彼女の中にいた悪霊が叫び声を上げ、運ばれている義人を非難し、彼を冒涜する言葉を吐いた。しかし、直ちに目に見えない力に打ちのめされ、悪霊は女性を放り出して逃げ去った。　マンティニオス修道院の修道院長は、体の秘所にある病気と大きな潰瘍を患っていた。彼女はそれからはどうやっても治らず、ひどく苦しんでいた。聖人の遺骨に出会うと、彼女は尊い聖遺箱に触れ、聖人の遺体に頬を寄せ、まるで生きているかのようにささやきながら自分の病を告げると、たちまち癒やされた。　ヨセフは聖エウドキムの聖遺骨をビザンティウムまで運び、両親に手渡した。両親は言葉に尽くせないほど喜び、彼らだけでなく、街全体も、奇跡を起こす聖遺骨が持ち込まれたことを大いに喜んだ[5409]。 両親は、聖なる息子の尊い聖遺骨をまもなく銀で覆い、自ら建てた聖母マリア教会に安置し、三位一体において賛美される神、父と子と聖霊を賛美し、感謝を捧げた。その御方に、私たちからも、今、常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調:

地より天の住まいに呼び上げられた聖エウドキモよ、汝の御体は死後も無傷のままで守られている。汝は貞潔と清らかな生活の中で、肉体を汚すことなく至福の生活を送ったからである。それゆえ、大胆にキリスト・神に祈り、我らを救い給わんことを。

コンダク、第2調:

高きものを求め、高きものと交わり、火の戦車を駆り、神聖な徳の登りによって御魂を完成させられた、至福のエウドキモよ。地上でまるで無形であるかのように生き、万物の創造主に喜ばれた。

聖殉教者ユリッタの記念日

記念日：7月31日

聖ユリッタは、財産を無理やり奪われた際、裁判官に正義を訴えたところ、キリストを否定することによってのみ財産を取り戻せるという答えを受けました。　キリストの御名を恐れることなく告白した彼女は、信仰を捨てることよりも死を選ばれました。財産と命を捨て、聖ユリッタは恐れを知らず殉教の道へと歩み出しました。彼女の殉教は、ディオクレティアヌス帝の治世下、304年または305年に成し遂げられました。

8月14日

8月1日（旧暦）

[5409] ギリシャ語のプロローグの記述に基づき、聖エウドキムの没日は7月31日、遺骨の移送は7月6日であったと推定されている。　1200年にコンスタンティノープルを訪れたロシアの巡礼者アントニーは、次のように述べている。「聖母マリア修道院の脇にある柱のそばに、新しいエウドキムが銀の棺の中に、まるで生きているかのように横たわっている」。聖エウドキムの伝記は、ギリシャ語の原本に基づき、1893年にロパレフによって刊行された。

主の尊き、命を与える十字架の由来

8月1日の記念日

尊き十字架の搬出の祝日は、ギリシャではコンスタンティノープル総主教ルーカス[5410] によって、マヌイル皇帝[5411] の治世下で8月1日に制定され、ロシアではキエフ都主教コンスタンティン[5412] とロストフ司教ネストル[5413] によって、アンドレイ・ユリエヴィチ大公[5414] の治世下で制定された。その制定の理由は以下の通りである。 互いに平和と兄弟愛を保っていたツァール・マヌイルとアンドレイ大公は、偶然にも同じ日に戦場へと出陣することとなった。前者はコンスタンティノープルからサラセン人に対して[5415] 、後者はロストフからブルガリア人に対して出陣した。（当時、大公はロストフに居住していた。なお、「ブルガリア人」とは、ヴォルガ川下流に居住していた異教徒を指し、そこからその名称が付けられたのである）。 主なる神は彼らに敵に対する完全な勝利を授けられた。ギリシャの王はサラセン人を打ち破り[5416] 、アンドレイ・ボゴリュブスキー公はブルガリア人を打ち負かし、彼らを服従させて自らの臣下とした。– アンドレイが戦場へ向かう際、彼は常に、永遠の御子、我らの主イエス・キリストを腕に抱く至聖なる聖母マリアのイコンと、キリストの尊い十字架の像を携えていく習慣があった。この十字架は、二人の司祭によって軍勢の中で運ばれていた。出陣直前、彼はキリストと聖母マリアに熱心で涙に満ちた祈りを捧げ、キリストの聖なる秘跡に与った。 彼は剣や槍よりも、この無敵の武器を身に着け、自らの軍勢の勇敢さや数よりも、至高者の助けを頼りにしていた。ダビデの次の言葉をよく知っていたからである。 *「主は馬の力を見ず、人の足の速さ を喜ばれない。主は、御自分を畏れる者、御慈悲を仰ぐ者を喜ばれる」*（詩編146:10–11）。 大公はまた、自らの敬虔な祈りの模範と直接の命令によって、兵士たちを祈りに駆り立てた。そして、全員がひざまずき、涙を流しながら、聖母マリアのイコンとキリストの尊い十字架の前で祈りを捧げた。大公はイコンを見つめながら、祈りの中でこう語った。

「おお、我らの神キリストを産み出された御母よ！ あなたに希望を置く者は誰も滅びることはありません。そして、私もまた、神の御慈悲により、あなたを盾とし、覆いとし、また、あなたの

[5410] ルーカ・クリソヴェルゴス – 1156年から1169年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[5411] マヌイル・コムネノス – ギリシャ皇帝（1143年～1180年）。

[5412] コンスタンティノス2世、キエフ都主教は、1167年にギリシャからキエフに到着した。年代記には1169年の項でも言及されている。

[5413] ネストル――ロストフ教区の第6代司教。年代記の1149年の項に記載されている。 1156年、ネストルは、大司教の前で家臣たちから誹謗中傷され、禁職処分を受けた。1157年、彼は大司教の前で無実を証明したが、同年、水曜日と金曜日の断食をめぐる論争のため、アンドレイ・ボゴリュブスキーによって司教座から追放された。

[5414] 聖アンドレイ・ボゴリュブスキーは、大公ユーリー・ヴラディミロヴィチの息子であり、名高いヴラディミール・モノマフの孫で、おそらく1111年に生まれた。1175年6月30日に殺害された。

[5415] サラセン人とは、イスラム教徒のことである。

[5416] マヌイル皇帝によるサラセン人への勝利を記念して、「慈悲深き救い主」および「清き聖母」に捧げられた祝祭日について、ギリシャの歴史家による明確な記述も、ギリシャの礼拝書にも見当たらない。 しかし、様々な民族と数多くの戦争を繰り広げたマヌイル皇帝の歴史には、戦争の成功裏の終結と危険からの救済に対し、皇帝が神に特別な感謝を捧げるきっかけとなったであろう出来事がいくつか見受けられる。 ここで注目されるのは、マヌイル王とトルコのスルタン、あるいはサラセン人との間の熾烈な戦争である。王自らが軍を指揮し、幾度となく極度の危険にさらされた。 確かに勝利は敵の手に渡ったが、王自身の救出はまさに神の慈悲による奇跡であった。これは9月のことだったが、遠征自体は当然ながらそれより前の8月に始まっていた。この戦争の後、ギリシャ軍はサラセン人との間で2度の勝利を収め、そのうち1度は王自らが指揮を執った戦いであった。 これらの出来事に加え、ロシアからブルガリアとの戦争における神の御加護に関する知らせが届いたことが相まって、マヌイル王は「救世主」をキリスト教共通の祝日として制定する意向を抱くようになった。その始まりは、すでに8月1日のコンスタンティノープルにおける水の聖別によって定まっていた。しかし、ギリシャの聖人伝に関する文献において、「救世主」を祝う礼拝の記録は、これまで発見されていない。

御子の十字架を、敵に対する両刃の剣として持っています。　御自身の御腕に抱いておられる世界の救い主に、十字架の力が、私たちと戦おうとする敵を焼き尽くす火の如くあるよう、また、御自身の全能の執り成しによって、私たちが彼らを打ち負かすことができるよう、お祈りください。

熱心な祈りの後、皆は聖なるイコンと尊い十字架に口づけをし、恐れずに敵へと向かった。主は十字架の力によって彼らを助け、至聖なる神の母は神の前で彼らのために執り成し、助けを与えられた。　戦いのたびにこの慣習を欠かさず守ってきた大公は、ブルガリアとの戦いにおいてもこの慣習を変えなかった。彼は、古代のコンスタンティヌス帝のように、軍隊の先頭に主の十字架を掲げて出陣した。　戦場に繰り出し、ブルガリア軍との戦いの末、ロシア軍は敵を敗走させ、追撃の末に五つの都市を占領した。その中には、カメ川沿いのブリャヒモフの町も含まれていた。　異教徒との戦いの後、陣営に戻ると、幼子キリストを抱く聖母マリアのイコンから、炎のような明るい光線が放たれ、全軍を照らしているのが見えた。それは8月の初めの日のことだった。 この驚くべき光景は、大公の勇気と希望をさらに奮い立たせ、彼は再び軍勢を率いてブルガリア人を追撃した。彼は彼らの都市の大部分を焼き払い、生き残った都市には貢納を課し、その土地全体を荒廃させた。この勝利の後、大公は凱旋して帰還した。　――サラセン人に対して軍を率いて出陣したギリシャ王マヌイルも、まさにその同じ日に同様の奇跡を目撃した。すなわち、軍の中央に安置されていた聖なる十字架と共にあった「救い主を伴う聖母マリア」のイコンから光が放たれ、その光が全軍を包み込んだのである。そしてその日、彼はサラセン人を打ち破った。

王と公爵は、神に栄光を帰しつつ、神の御加護による勝利と、救い主のイコンから放たれた奇跡的な輝きについて、互いに特別な書簡で知らせ合った。　長老司教たちと協議した末、救い主キリストとその聖母マリアへの感謝のしるしとして、彼らは8月1日を祝日と定めた。　また、十字架の力を記念し――その力によって敵に勝利した――司祭に命じて祭壇から尊い十字架を運び出し、教会の中央に安置し、キリスト教徒が礼拝し、その十字架に口づけを行い、十字架に架けられた主イエス・キリストを賛美できるようにした。　さらに、司教たちはこの日に水の聖別を行うよう命じました。そのため、この祝日は「尊い十字架の搬出」という名称が付けられました。これは、尊い十字架が他の聖なるイコンと共に、川や井戸、泉へと厳かに運び出されるからです。　――兄弟たちよ、私たちは、全能の神と私たちの救い主イエス・キリスト、そしてその聖母マリア、神の母を賛美し、感謝を捧げつつ、キリストの尊い十字架を畏敬の念をもって崇め、　しかし、私たちは神に喜ばれるよう、互いに平和と愛のうちにあり、慈善の行いを行い、神への畏れを心に留めて罪から遠ざかりながら、敬虔に祝います。それは、私たちの創造主であり主である方に喜ばれ、天に「人の子のしるし」が現れるその日以降、すべての聖人たちと共に永遠の祝賀に与かることができるためです （マタイ24:30）――すなわち、生ける者と死せる者の審判者であるキリストの到来に先立ち、大いなる力と栄光をもって来られる、尊きキリストの十字架が、すべての義人を明るく喜びに満ちた光線で照らすのです。　裁きが終わると、キリストはすべての聖徒たちの先頭に立ち、彼らを天の御国へと導き、すべての聖徒たちは、果てしない永遠の歳月を喜びながら至福を享受するであろう。私たちの聖なる御母、神の母の祈りによって、全き慈悲に満ちた私たちの救い主キリストが、私たち罪人をも彼らに加え給わんことを[5417]。アーメン。

[5417] 厳密に定義された歴史的根拠に立脚して言えば、8月1日には正教会において、その起源が異なる二つの祝典が執り行われていることに留意すべきである。すなわち、1）主の尊き命を与える十字架の起源、および2）全き慈悲の救い主と至聖なる神の母の祝祭である。　1897年版のギリシャ語時課書では、最初の祝日の由来について次のように説明されている。「8月には病気が非常に頻繁に発生したため、古くからコンスタンティノープルでは、場所を聖別し、病気を退けるために、尊き十字架の木を道や通りに持ち出す習慣が定着していた。 前日（7月31日）、王室の宝物庫から聖なる十字架を運び出し、大聖堂（すなわち聖ソフィア大聖堂）の聖餐台に安置した。この日から聖母マリアの被昇天の日まで、街中で礼拝行進を行い、その後、民衆に礼拝のために聖なる十字架を捧げた。これこそが　（*プロドス*）『尊き十字架』の由来である」。8月14日、十字架は再び王宮へと戻された。「この慣習は、コンスタンティノープルの別の慣習――宮廷のコ

トロパリオ、第1声：

主よ、御自分の民を救い、御自分の御国を祝福してください。そして、私たちの敬虔な皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチに敵に対する勝利を授け、御自分の十字架によってこの地を守り続けてください。

コンダク、第4声：

御自身の御意志により十字架に昇られたキリストなる神よ、御名と同じ名を持つこの新たな住まいに、御慈愛を豊かに注ぎ給え。御力によって、我らの敬虔なる皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチを喜ばせ、敵対者たちに対する勝利を彼に与え、御自身の平和の武器によって彼を助け、無敵の勝利を授け給え。

トロパリオ、第8調：

高きところから私たちを見守り、貧しい者たちを受け入れ、罪に苛まれる私たちを訪れてください、全き慈愛の主よ。聖母マリアの祈りによって、私たちの魂に偉大な慈悲をお与えください。

コンダク、第4調：

あらゆる汚れの作者となり、絶望の深淵に落ちた者ですが、心から嘆き、御言葉であるあなたに叫びます。寛大なる方よ、速やかに、そして慈悲深き者として、私たちの助けに駆けつけてください。

旧約聖書の殉教者たち、祭司エレアザル、マカベオ家の七兄弟、その母ソロモニア、および彼らと共に殉教した者たちの受難

記念日：8月1日

聖なる殉教者たちの受難について語り始める前に、その名はこの地上において『マカバイ記』に記され、　天においては永遠の命の書に記されている聖なる殉教者たちの受難について語り始める前に、簡潔な序文として、当時エルサレムで起こった動乱[5418]　や、神の律法を遵守していた敬虔なユ

ンスタンティノープル教会において、毎月1日（1月は6日、　9月は14日に行われた）を聖別する）と結びつき、聖なる命を与える十字架を称える祝祭および8月1日に行われる泉での水の厳粛な聖別式の基礎となった」。すでに9世紀には、8月1日に先立ち、王宮から聖ソフィア大聖堂へ聖なる木を運ぶというこの慣習が存在していた。　また、7月31日の聖十字架前夜祭のためにこの機会に合わせて書かれたカノン（「神聖なる十字架よ、まもなく到来する」という言葉で始まる）は、8世紀に生き、コンスタンティノープルを二度訪れたアマストリドのゲオルギオス司教によるものとされている。 コンスタンティノス・ポルフィロゲネトス皇帝（912–959）の『典礼書』には、8月1日前に十字架を宮殿から運び出す際の詳細な規則が記載されているが、当時は十字架に関する礼拝は存在せず、これは14～15世紀にエルサレム規律が導入されてから現れたものである。　「全き慈悲の救い主と至聖なる神の母」の祝日は、ギリシャとロシアにおいて1168年頃に制定された。これは、ギリシャ王マヌイル　（1143～1180年）と、1164年にロシアの公アンドレイ・ボゴリュブスキーがブルガリア軍と戦った際の、救世主と聖母マリアの尊いイコンから現れた奇跡を記念して制定された。

[5418] エルサレム――古代パレスチナの主要都市。

ダヤ人たちに対する迫害について、あらかじめ述べておくのが適切である。　これらはいずれも、当初、偽りの律法学者たちと権力に飢えたエルサレムの大祭司たち自身によって引き起こされたものであった。そして、怒れる主の許しにより、ユダヤ人たちが異教の諸民族の支配下に入ったとき、これらの動乱と迫害は激しさを増し、聖なる都は血に染まり、神の聖所は忌まわしきもので満たされるに至った。

バビロンの王ネブカドネツァルによってもたらされた、エルサレムの最初の偉大かつ恐ろしい破壊は、ユダ王ゼデキヤの時代に起こったものであり、これについては聖預言者エレミヤの生涯　および聖預言者エゼキエルの生涯に記されている。　この荒廃から七十年後、ユダヤ人たちは神の憐れみにより捕囚から解放され、エルサレムへと帰還した。　聖都には再び美しい建物が立ち並び、再建された神の神殿は、かつてのものと同様に壮麗に装飾された。この捕囚からの帰還、エルサレムと神殿の復興の歴史は、『エズラ記』と『ネヘミヤ記』に詳細に記されている。　神の民の数は急速に増え、彼らはまもなく、以前とほぼ同じ順序と人数でパレスチナ各地に定住した。神の律法に忠実な聖都は、大祭司である諸侯たちの統治の下、平穏を享受しつつ、長い間敬虔さの中で繁栄した。　たとえ異教の王たちの支配下にあったとしても、エルサレムはすべての人々から称賛と尊敬を集めていた。多くの異教の王や君主たちは、偶像崇拝者でありながらも、イスラエルの神を崇め、エルサレムの主の神殿に献げ物を送った（マカバイ記第二3:2）；　彼らは大祭司たちに対しても特別な敬意を払っていた。例えば、マケドニア王アレクサンドロスは、出迎えてきた大祭司アドゥを見て、地にひれ伏して礼拝した。そしてエルサレムに入り、神の神殿に足を踏み入れると、主サバオトに献げ物と犠牲を捧げた。他の異教の王たちも同様に振る舞った。　エジプト王プトレマイオス・フィラデルフォスは、エルサレムの主の神殿に多くの贈り物を送り、大祭司エレアザルに手紙を書き、聖書の書物と、それらをヘブライ語からギリシャ語に翻訳できる有識者たちを送ってほしいと依頼した；　プトレマイオス・フィラデルフォスの後継者であるプトレマイオス・フィロパトルは、シリアの王アンティオコス大王を打ち破り、ユダヤにやって来て、エルサレムの主の神殿で、唯一の真の神に感謝のいけにえを捧げた。　また、アンティオコス大王も、今度はエジプト人を打ち破り、真の神を礼拝するためにエルサレムを訪れた。聖なる神殿で、彼は感謝の祈りを捧げながら数多くの犠牲を捧げ、大祭司やその他のユダヤ人の指導者たちに惜しみなく贈り物を授けた。　このように、エルサレムと神の神殿は異教徒たちからも深く敬われていた。聖書もまた、王たち自身がその場所を尊び、多大な贈り物をもって教会を称えたと記している（参照：マカバイ記第二3:2）。　異教徒によるエルサレムへのこのような態度は、その指導者たちが神を畏れ、主の律法を遵守し、神に喜ばれる生活を送っていた限り続いた。しかし、彼らが神の律法を忘れたとき、以前と同様に、数多くの災いが彼らに降りかかった。その端緒となったのは、次のような出来事であった。

義なる大祭司シモン（『シラ書』50:1で称賛されている）の時代、アジアとシリアをアンティオコス大王の息子セレウコスが統治していた頃、エルサレムにはベニヤミン族出身のシモンという男がいた。　彼は神殿の財宝の管理、教会奉仕者の統率、そして教会警備隊を構成する兵士たちの指揮を任されていた。高慢と憎悪から、彼は常に大祭司に抵抗し、民衆の間に混乱を引き起こしていた。大祭司がしばしばせざるを得なかった脅しや諭しにも耳を貸さず、シモンは大祭司だけでなく教会全体に対しても悪事を働くことを企てた。その目的のために、彼はシリアとフェニキアの軍司令官アポロニオスを訪ね、教会の財宝について次のように告げた。　シモンは、神殿の宝物庫には数え切れないほどの富があり、そこには教会の財宝とともに、民全体に属する計り知れない財宝が保管されていると語り、さらに、これらすべての富が王の手に渡る可能性があると付け加えた（マカバイ記第二3:5–6）。　アポロニオスは、貪欲さで知られていた王にシモンの伝言を伝えた。王は直ちに、王室の財宝管理官イリオドロスを軍隊を率いてエルサレムへ派遣し、前述の財宝を王室の貯蔵庫へ運び出させた。　イリオドールがエルサレムに到着すると、教会の財宝を没収し、貧者や旅人、未亡人や孤児

の生活のために集められ保管されていた金銭を略奪し始めたが、『マカバイ記第二』第3章に詳述されているように、彼には神の懲罰が下った。　彼は天使たちから極めて残酷な鞭打ちを受け、死にかけたため、王の命令を遂行できずに王のもとへ戻らざるを得なかった。その直後、セレウコス王は側近たちによって殺害され、実弟のアンティオコス――エピファノス、すなわち「光り輝く者」と呼ばれた――が後を継いだ。　彼は前任者よりもさらに堕落していた。一部の人々はアンティオコスを「エピミノス」、すなわち「狂人」と呼ぶことが多かった。彼は真の神とその神殿に対して狂ったように反旗を翻し、将来の反キリストの型を示していた[5419]。エルサレムでは大きな騒乱が起きた。 大祭司オニアの兄弟　であるイアソンは、祭司長職を得たいと願い、王のもとへ赴き、多額の金銭を支払って大祭司の地位を買った。　王に気に入られたいと願ったこの不適格な権力欲の強い男は、王の前でギリシャの[5420] 市民法や風俗、慣習への愛着を表明し、それらをユダヤ人の間に導入することを約束した。　金と約束と引き換えに大祭司の権力を手に入れたイアソンは、その地位を弟である聖オニアから奪い、ユダヤ人に存在していた良き市民法に代わって、異教の不法な慣習を導入し始めた。シオン山の麓には、娯楽施設やギリシャ哲学が教えられる学校を設立し、若者たちの競技のためのパレストラも設けた。　さらにイアソンは、律法の明確な禁止に反して、聖都に売春宿まで設け、そこで姦淫が罰せられることなく行われていた。これらの不道徳な場所は、主にギリシャの芸術を学んでいた若者たちによって利用されていた。　エルサレムにギリシャの不敬虔な風習を持ち込んだイアソンは、多くの人々を真の神への崇拝から遠ざけたため、祭司たちでさえ神の神殿を離れ、見世物や競走、相撲、その他の異教的な遊戯や放蕩に興じるようになった。　さらに、若く、律法に不確かな人

[5419] 紀元前176～164年にシリアの王であったアンティオコス4世エピファネスは、兄の死後に王位を奪取し、度を越した傲慢さを特徴としていた（マカバイ記第二5:21、9:8）。　彼は自らを神と称し、オリンポスのゼウスという称号を名乗った。彼は、すべての臣民に対し、ただ一人の神――すなわち、自らと同一視していたオリンポスのゼウス――のみを崇拝するよう命じた。つまり、アンティオコスは実際には、自分自身を神として崇拝するよう命じたのである（マカバイ記第二6:7）。　ユダヤ人の中には、ギリシャ式の異教に傾倒する人々もいた。彼らはエルサレムにおいて独自の派閥を形成しており、アンティオコスから支持を得ていた（マカバイ記第一1:11–15）。紀元前175年、敬虔な大祭司オニヤは、その弟イエスによって追放された。イエスは名をギリシャ風のヤソンと改め、アンティオコスから大祭司の地位を買い取り、ギリシャ式の祭典を導入する許可を得た。これにより、真の宗教を裏切る者の数はさらに増えた。 3年後、イアソンはメネラオスによって追放された。メネラオスは大祭司の地位に多額の報酬を提示し、最も卑劣な手段を用いてその地位にしがみついた。こうしてメネラオスはオニアを殺害した（マカバイ記第二4:23–50）。 – アンティオコスはエジプト遠征に乗り出し、すでにその完全な征服を目論んでいたが、ローマ軍による攻撃の噂（紀元前168年）によってその動きを止められた。　エジプトへの第1次遠征と第2次遠征の間に、アンティオコスはエルサレムの神殿を略奪した（マカバイ記第1巻1:21）。そしてエジプトからの最終的な帰還の際、彼はエホバへの礼拝、割礼、安息日の遵守、および清いものと汚れたものの区別を廃止するよう命じた。　聖書は焼き払うよう命じ、祭壇を築かせ、そこで死の脅威の下、誰もがオリンピアのゼウスに犠牲を捧げなければならないとした（『マカバイ記第一』1:41；『マカバイ記第二』5:24）；　紀元前168年のキスレウ月15日、神殿にオリンポスのゼウスへの祭壇が設置され（2マカバイ記6:2；1マカバイ記1:54）、同月25日には最初の犠牲が捧げられ、ガリラヤ山ではゼウス・クセニオスへの崇拝が確立された（2マカバイ記6:2）。しかし、多くの人々は、凄惨な拷問にもかかわらず、自らの信仰に忠実であり続けた（マカバイ記上52:64；マカバイ記下6:7）。信者たちの指導者となったのは、祭司マッタフィアであった。ヨッピア近郊のモディンにおいて、彼は異教の祭壇の前でシリア人の指揮官を殺害し、ユダヤ人による武装蜂起が始まった。　アンティオコスは軍事力によってこれを鎮圧しようと決心したが、資金不足のため軍を二分せざるを得なかった。彼はその半数を率いて自ら東部の属州へ赴き、貢ぎ物を徴収した（『マカバイ記第二』8:10;　マカバイ記第一3:34）、残りの部隊は、かつてユダ・マカバイに完敗していたリサニオの指揮下に置かれた。ユダヤ人たちは神殿を占拠した。　紀元前165年キスレヴァ月25日、最初の異教の犠牲が捧げられてから3年後、神殿は盛大な式典をもって清められ、聖別された。その際、この栄光の日を記念して毎年祭りを執り行うことが定められ（1マカバイ記4:59）、この祭りは「再生の祭り」　（ヨハネ10:22）。一方、アンティオコスは東方ではほとんど成果を上げられなかった。彼はエリマイデにあるナネイの豊かな神殿を略奪しようとしたが、住民たちに追い払われ、ユダヤから不吉な知らせを受け取った直後の164年にタベで死去した（第1マカバイ記6:4）。　旧約聖書において、アンティオコスは主、その民、そして契約の敵として描かれており（第1マカバイ記1:10）、新約聖書では反キリストの予型として描かれている（黙示録13:5）。

[5420] エリンスキー――ギリシャの。

々は、それらにますます夢中になった。彼らはギリシャの法律や慣習を称賛し、神の律法を忘れ、容易に不敬虔へと傾いていった。　一方、律法に堅く立ち、真に敬虔な人々は、エルサレムでなされている不法を見て、主の契約の破棄と聖なる都の冒涜について嘆かずにはいられなかった。　彼らはまた、盲目の指導者ヤソンの後を追う同胞たちをも嘆き悲しんだ。ヤソンは気まぐれから神とその律法を捨て、先祖代々の信仰を売り渡し、神の民の間に誘惑と堕落の種を数多く持ち込んだのである。

イアソンは、不法に獲得した権力を三年間行使したが、その後、彼と同様に権力に執着し、ギリシャの不敬虔に傾倒していたメネラオスによって追放された。こうしてイアソンは、かつて義人である弟オニアに与えたのと同じ苦しみを、自ら味わうこととなった。　メネラオスは王に多額の金銭を献上し、その見返りとして大祭司の地位を得た。彼はイアソンを追放した後、不敬虔な王の重臣に働きかけ、かつての大祭司であり、義人であったオニアを暴力によって殺害させた。　しかし、メネラオスも大祭司の座に長く留まることはなかった。彼の兄弟リシマコスが、王にさらに多額の金銭を献上して大祭司の権力を奪い取ったのである。メネラオスは、イアソンと同様に追放された。リシマコスは、教会の器や金銭を盗んだとして民衆によって殺害された。　メネラオスは、兄の死を復讐しようと、王からエルサレムの人々を死刑に処する権利を買い取り、その中には全く無実の人々も多く含まれていたが、彼らを殺害した。同時に、彼は再び王から大祭司の権限を授かった（マカバイ記第二4:23–50）。　エルサレムにおけるこのような混乱と動乱、日増しに高まる異教の不義、そして公然と行われる不法行為は、主の怒りを買い、行いに応じて裁きを下す主の義の裁きが近づいた。　神の怒りがこの都に下ることを予告する驚くべきしるしが現れた。空には兵士の隊列が見え、黄金の衣をまとい、頭に兜をかぶった兵士たちが馬に乗り、手に抜刀した剣や槍を握りしめて互いに戦いを繰り広げていた。　ある者は剣で互いを斬りつけ、ある者は槍や盾を掲げ、またある者は互いに矢を放ち――要するに、戦いの際に通常行われるあらゆることを行っていた。戦士たちの鎧や武器からは、炎のような輝きが放たれていた（マカバイ記第二5:2–3）。　この恐ろしく、戦慄を誘う光景は四十日間も続いた。エルサレムの住民たちは大きな恐怖と困惑に陥り、一人ひとりが思わず自問した。「これは一体どういうことなのか？」　その頃、エルサレムには、王がエジプト軍との戦いで亡くなったという偽りの知らせが届いた。実際、王はその時エジプトへの遠征に出ていたのだ。エルサレムの住民の中でも最も敬虔な者たちは、邪悪で不敬虔な王が本当に死んだと思い込み、喜び、祝賀し、歓喜した。　しかし、王が死んでおらず、生きてエジプトからシリアへ戻ってきていることが判明すると、彼らはもはや王に従わず、貢ぎ物も支払わないと決心し、王との戦いに備えた。これを知った王は激しい怒りに燃え、軍を率いてエルサレムへ向かった。　エルサレムの住民たちは王に対して城門を閉ざしたが、包囲された者たちの間で意見の相違が生じていたため、十分な抵抗をすることができなかった。ギリシャ式の不敬虔な信仰に傾いていた者たち、とりわけ偽大祭司メネラオスは、王に好意を抱いていたのである。　軍隊の力を借りて都市を陥落させると、王は、街頭で出会う者すべてを容赦なく打ち殺すだけでなく、家々に入り込んで、男、女、老人、若者、そして乳児までも殺害するよう命じた。三日間で殺害された者の数は八万人に達した。 縛られて牢獄に投げ込まれた者は4万人に上り、ほぼ同数が捕虜として兵士たちに分配された。王は、祖国と律法を裏切った裏切り者メネラオスの先導のもと、その傲慢さゆえに、あえて神の神殿に踏み込んだ。　そこで彼は、黄金の祭壇、黄金の燭台、黄金の香炉、そして神殿を飾るために王たちから寄進されたすべての貴重な器を奪い取った。また、幕や冠、その他の黄金の装飾品、そして見つけた隠された金や銀も奪い取った。　神の神殿を荒らし、汚し、街を破壊して血と泣き声で満たした後、王はアンティオキアへ戻った。そして、エルサレムおよびユダヤ全土において、アンティオコスはイスラエル人を拷問するために、自分以上に残酷な拷問者たちを （マカバイ記第二5:5–22）。

しばらくして、アンティオコスは王国全土に勅令を下し、部族の区別なくすべての臣民が、彼と共に同じギリシャの神々を崇拝し、同じギリシャの法律に従うよう命じた。　異教徒たちは皆、この勅令に従うことに同意しただけでなく、ユダヤ人の間でも多くの者がこれに従った。彼らは偶像に

犠牲を捧げ、安息日を冒涜した。　勅令が発布されてから数日後、王はアンティオキアからエルサレムへ、自身の顧問の一人であるアテネ出身の老人を派遣し、すべてのユダヤ人に先祖代々の律法を捨て、偶像を崇拝し、偶像に捧げられた肉を食べるよう強制するよう命じた。　彼は、律法で禁じられている豚肉をユダヤ人に食べさせるよう、特別な命令を下した。同時に、アンティオコスは主の神殿を偶像崇拝の神殿に変えるよう命じた。すなわち、そこにユピテルの偶像を安置し、それを「オリンピアのユピテル神殿」と呼ぶようにした。　王から派遣された長老は、軍隊を率いてエルサレムに到着し、王の命令の執行に着手した。彼は主の神殿を汚し、そこに偶像を安置して忌まわしい生け贄を捧げ、さらに神の民にもそれを強要した。　心の強さを持ち合わせていなかった多くのユダヤ人は、急いで偶像に犠牲を捧げた。一方、信仰に堅固な者たちは山や荒野へ逃げ、そこで苦痛から逃れ、異教の礼拝による汚れから身を守るため、洞窟や深淵に身を隠した。　一方、都に残った者たちは捕らえられ、心に悲しみを抱きつつ、暴力に屈して、王の誕生日やその他の異教の祭日に偶像への犠牲を捧げるために出向かざるを得なかった。これを拒んだ者は拷問にさらされた（マカバイ記第二6:1–9）。　エルサレムの住民は皆、大きな恐怖に包まれ、誰も公然とユダヤ人であると名乗ったり、安息日を祝ったり、子供たちに割礼を施したり、そもそもモーセの律法の規定に従ったりすることを敢えてしなかった。すべての人の目の前には、将来の苦しみと死が迫っていたからである。　その頃、王から派遣された拷問官のもとに、二人のユダヤ人女性が、自らの律法に従って生まれた乳児に割礼を施したという通報が入った。そこで拷問官は、これらの女性を捕らえ、乳児を首から乳首に吊るして街中を辱め回すよう命じた。その後、彼女たちは城壁から頭から下へ突き落とされ、　こうして、母たちは赤ん坊たちと共に殉教の死を遂げた。また、一部のユダヤ人たちが安息日を祝うために、町に最も近い洞窟に集まっていることを知った拷問官は、彼ら全員を火あぶりにするよう命じた（マカバイ記第二6:10–11）。

その後、最初の律法学者の一人であるエレアザルという名の祭司が捕らえられた。彼はすでに高齢で、白髪に彩られ、非常に端正な風貌をしており、その知恵と敬虔さで知られていた。　彼は、エルサレムで最も初期の律法学者の一人として皆に知られていた。彼は、聖書をヘブライ語からギリシャ語へと翻訳し、エジプト王プトレマイオス・フィラデルフォスに献上した七十二人の翻訳者の一人であった。この高潔な老人の苦難について、聖書には次のように記されている。　エレアザルが拷問官の前に引き出され、食べさせられるよう強制され、口の中に豚肉を無理やり押し込まれようとしたとき、彼は、神の律法を破って不名誉で神を怒らせるような生き方を続けるよりは、神の律法のために栄光ある殉教の死を遂げることを選んだ。こうしてエレアザルは自らの意志で拷問の場へと向かった。　その道中、彼は不浄な肉に口が触れることを強いられたため、唾を吐き出していた。彼は、神の律法を遵守したために死の脅威にさらされていた他の敬虔なユダヤ人たちに模範を示し、この世の命を守るために罪を犯してはならないこと、また、この世への執着から律法を破って神を怒らせてはならないことを、自らの行いによって彼らに教えたのである。　以前からエレアザルを知っていた異邦人の中には、彼を憐れんで、豚肉の代わりに、律法で禁じられていない別の肉を密かに持ち込み、耳元でこう囁いた者もいた。

「これを受け取って、皆の前で豚肉の代わりに食べなさい。皆があなたが肉を食べているのを見れば、それを王が食べるよう命じた豚肉だとみなすだろう。そうすれば、あなたは拷問や死を免れることができる。」

しかし、賢明で敬虔な老人は、ためらうことなく彼らにこう答えた。

「私は、主の聖なる律法を破って主を怒らせるよりは、むしろ地獄へ行くことを選ぶ。これほど高齢に達した私が、多くの若者たちを惑わすような偽善を働くべきではない。もし彼らが、私があなたがたの助言通りにしているのを見れば、こう言うだろう。　『見よ、エレアザルはすでに老齢に達し、先祖たちの古き律法を捨てて異教徒の律法に従った』と言うだろう。そして、私の偽善的な行いのせいで、彼らは私の例を見て真の神から背き、滅びてしまうだろう。　この世の命への愛ゆえに

、彼らは神の律法を軽んじ始め、ギリシャの不敬虔へと迷い込むでしょう。そして私は、これほど多くの魂の滅びの原因となって、自らの老いを辱めることになるのです。　もし私が人間による拷問を免れたとしても、神の懲罰の御手からは、この地上での生涯においても、死後の墓の中においても逃れることはできない。今、死ぬほうがましだ。聖なる律法のために苦しみを受ける際、気力を失うことなく毅然として死に、その白髪に勇気を輝かせ、若者たちに模範となる善き手本を残そう。

聖エレアザルのこの言葉を聞いた後、彼は拷問へと引きずり出された。当初は彼に同情を示していた人々も、この演説を聞いて、今や彼に対して怒りと憤りを燃やしていた。激しい拷問の最中、激しい傷によって神の司祭がすでに死の淵に近づいていた時、彼はうめき声の合間を縫って主に向かってこう祈った。

「全知にして万物に憐れみ深い主よ、あなたは、私が死を免れることもできたにもかかわらず、喜びと愛をもって喜んで残酷な傷を受け入れ、この身を激しい拷問にさらしていることをご存知です。なぜなら、私はあなたの聖なる御名を賛美するために苦しんでいるからです。」

そう言い終えると、彼は息を引き取り、若者たちだけでなく、すべてのユダヤ人に対して、その死によって勇気の模範を残した（マカバイ記第二6:18–31）。聖書に記された聖エレアザルの苦難に関する記述は、さらに次の伝承によって補完されている。　激しい殴打を受けた後、彼は鼻孔に強烈な酢を注がれ、その悪臭に耐えかねたが、その後、火の中に投げ込まれた。彼は神に祈り、主が彼の苦しみと死を、ユダヤ民族全体のための犠牲として受け入れてくださるよう願い、息を引き取った。

聖エレアザルの殉教の後、七人の兄弟たちが母と共に捕らえられた。彼らは名門の家系に属していたため、試練としてアンティオキアの王のもとへ送られた。　そこで、律法の明確な禁止に反して、王は彼らに豚肉を食べるよう強要した。これは、ユダヤ人が信じる主サバオトからの明らかな背きであり、苦痛を恐れるユダヤ人たちが傾倒していたギリシャ人の不敬虔への同化とみなされていた。　前述の七人の兄弟たちは、殉教したエルサレムの祭司であり教師であるエレアザルの弟子たちであり、彼の教えをよく心に留め、その敬虔さを揺るぎなく保っていた。彼らは王に従わず、いかなる理由があっても律法を破ることに同意しなかった。このため、彼らは長期間にわたる拷問、鞭打ち、そして牛の腱による拷問にさらされた。　彼らの苦難と、拷問者に対する恐れを知らぬ勇敢さについて、聖書『マカバイ記第二』は次のように記している。兄弟のうち、年長のひとりが答弁の役を引き受け、王にこう言った。

「何をお尋ねになりたいのか、あるいは私たちから何を知りたいのか。私たちは、父祖の律法を破るよりは、むしろ死ぬことを選ぶ。」

すると王は激怒し、鉄鍋と大釜に火をつけるよう命じた。それが実行されると、王は直ちに、答弁を引き受けた若者の舌を切り落とし、皮を剥ぎ、四肢を切り落とすよう命じた。その様子は、他の兄弟たちや母親の目の前でなされた。　すべての四肢を奪われながらもまだ息のある殉教者を、王は火刑台へ運び、鉄鍋で焼くよう命じた。鉄鍋から激しい蒸気が立ち上ると、兄弟たちは母と共に、互いに勇気を奮い立たせて死を受け入れるよう励まし合い、こう言った。

「主なる神はご覧になっておられ、まことに私たちに憐れみをお示しになるでしょう。モーセが民の面前で歌ったように、『しもべたちにも憐れみをお示しになる』のです。」

最初の者が死ぬと、彼らは二人目を侮辱のために引き出し、頭から髪ごと皮を剥ぎ取り、その体を部位ごとに切り刻んで拷問を始める前に、彼が（豚肉を）食べるかどうか尋ねた。彼は母国語で答え、「いいえ」と言った。　それゆえ、彼もまた最初の者と同じ方法で拷問を受け、最期の息を引き取る際にこう言った。

「拷問者よ、お前は我々からこの世の命を奪うが、世界の王は、御自身の律法のために死んだ我々を、永遠の命へとよみがえらせてくださる。」

その後、三番目の兄弟も侮辱にさらされ、舌を出すよう要求されると、即座に舌を突き出し、恐れることなく両手を差し伸べ、勇敢にこう言った。

「私はこれらを天から授かった。その掟のために惜しむことはなく、また天から再びそれらを授かることを望んでいる。」

王自身も、彼と共にいた者たちも、少年が苦しみなど何とも思っていないかのようなその勇気に驚嘆した。この者も息を引き取ると、第四の者も同様に拷問され、苦しめられた。死の淵に立たされた彼は、こう語った。

「人々の手によって死にゆく者にとって、神が再び生かしてくださるという希望を置くことは望ましいことだが、お前には復活という命はないだろう。」

その後、五人目が連れて来られ、拷問が始まった。彼は王を見つめながら、こう言った。

「人々に権力を振るうあなたは、自らも朽ちる身でありながら、思いのままに行動している。しかし、我らの民が神に見捨てられたなどと考えてはならない。待てば、神があなたとあなたの子孫をいかに罰されるか、その偉大な御力を目にするだろう。」

その後、六人目が連れてこられ、死に備えながらこう言った。

「無駄に惑わされてはならない。我々は、我らの神の前で罪を犯したゆえに、この苦難を自ら受け入れているのだ。それゆえ、驚くべき[5421]が起こったのである。しかし、神に逆らうことを敢えてしたお前が、罰を受けずに済むなどと考えてはならない。」

とりわけ驚嘆に値し、称賛に値するのは、たった一日のうちに七人の息子たちが殺されるのを目の当たりにしつつも、主への希望をもってこれを穏やかに耐え忍んだその母である。高潔な心情に満ち、女性としての理性を男らしい気概で強めながら、彼女はそれぞれの息子を母国語で励まし、こう語った。

「あなたがたがどのようにして私の胎内に現れたのか、私にはわかりません。私があなたがたに息と命を与えたのではありません。あなたがた一人ひとりの姿を形作ったのも私ではありません。人間の性質を形作り、すべての者の起源を定めた世界の創造主が、あなたがたが御自身の律法のために自らを惜しまなかったゆえに、再び憐れみをもって息と命を与えてくださるでしょう。」

一方、アンティオコスは、自分が軽蔑されていると思い、この言葉を自分への侮辱と受け止め、まだ残っていた末っ子に対し、言葉だけでなく誓いを立てて、もし父の掟から背けば、彼を豊かにし、幸せにすると説得した。また、彼を友とし、名誉ある地位を任せるだろうとも約束した。　しかし、若者は全く耳を貸さなかったため、王は母を呼び寄せ、息子に身を守るよう説得するよう頼んだ。何度も説得された末、彼女は息子を説得することに同意した。そして、彼に身を乗り出し、残酷な拷問者を嘲笑しながら、母国語でこう語った。

「息子よ！　九ヶ月間、あなたを胎内に宿し、三年間母乳で育て、養い、育て上げ、教育した私を憐れんでください。お願いです、わが子よ、天と地を見上げ、そこに存在するすべてのものを見て、神がすべてを無から創造されたこと、そして人類もまたそのようにして生まれたことを悟ってください。　この殺し手を恐れるな。兄弟たちにふさわしい者となり、死を受け入れなさい。そうすれば、神の御慈悲により、私は再びあなたとあなたの兄弟たちを取り戻すことができるのだ。

彼女がまだ話し続けていると、若者は言った。

「何を期待しているのですか。私は王の命令には従いませんが、モーセを通じて私たちの先祖に与えられた律法の命令には従います。　あなたこそ、ユダヤ人に対するあらゆる災いの元凶であり、神の御手から逃れることはできない。我々は自らの罪のために苦しんでいるのだ。もし、我々を戒め、懲らしめるために、生ける主がしばらくの間、我々に怒りを向けておられるとしても、主は再び御自分のしもべたちを憐れんでくださるだろう。　しかし、お前という、すべての人の中で最も不義

[5421] すなわち、ユダヤ人に対する迫害と拷問のこと。

で罪深い者よ、偽りの希望に驕って、神のしもべたちに手を下そうなどと、むなしく高ぶってはならない。なぜなら、お前は全能にして全知なる神の裁きから、まだ逃れてはいないのだから。　私たちの兄弟たちは、今、短い苦難に耐え抜いて永遠の命を得たが、あなたは、神の裁きにより、その高慢さに対して正当な罰を受けることになる。　私は、兄弟たちと同様に、父祖の律法のために魂も体も捧げ、神に、この民に速やかに憐れみを示してくださるよう、また、あなたが苦しみと懲罰の中で、神こそ唯一の神であることを告白し、全能者の怒りが、私たちの全一族を正しく襲ったその怒りが、私と兄弟たちの上で終わりを告げるよう、祈り求めている。

すると、激怒した王は、その嘲笑に憤り、他の者たちよりもさらに残酷に彼を扱った。こうして、この者もまた、主を全き信頼を置いて、清らかなまま生涯を閉じた（マカバイ記第二7:2–40）。これを見た、ソロモニアという名の祝福された母は、自分の子供たちを汚れのないまま主に送り出したことに、言葉に尽くせない喜びに満たされた。彼女は子供たちの遺体のそばに立ち、両手を天に差し伸べ、温かく喜びに満ちた涙を流しながら祈りを捧げ、その霊を神の御手に委ねた。　こうして、母は子供たちと共に、全能の主の律法のために魂を捧げて息を引き取った[5422]。

御自分のしもべたちの流された血を見て、主はユダヤの民に憐れみを示された。主は彼らの間に、祭司の家系に生まれ、マカベウスと呼ばれたユダを立てられた。　ユダは軍勢を率いて、不義なアンティオコスに勇敢に抵抗し、勝利の後、その将軍たちを退去させた。その後、彼はギリシャ式の不義に傾いた者たちをすべて処刑し、神殿から偶像を排除した。このことについては、『マカバイ記』に詳しく記されている。

一方、アンティオコス王は、この世に生きている間に、神の義なる裁きを受けた。彼は恐ろしい病に襲われ、内臓が腐り始め、蛆虫で満たされ、耐え難い悪臭を放つようになった。　その時、殉教者たちの中で最も若かった者の預言（マカバイ記第二7:34–35）に従い、不敬虔なアンティオコスは、かつて冒涜していた真の神の全能性を否応なく認めざるを得なくなり、迫害の後、神に祈りを捧げた。しかし、主は、自ら他者に慈悲を示さなかった者に慈悲を授けられなかった。　アンティオコスは、心からの悔い改めを示さずに、惨めな最期を遂げ、すべての人々に神の公正な裁きについて考えさせました。すべての人が全能の神を賛美しました。今この時も、すべての世代から神は賛美されており、永遠の世々限りなく賛美され続けるでしょう。アーメン。

トロパリオ、第1声：

主よ、あなたのために苦難を受けた聖人たちの病によって、懇願なさってください。そして、私たちのすべての病を癒してください、人を愛する方よ、私たちは祈ります。

コンダク、第2調：

神の知恵の七つの柱、神聖なる光の七つの燭台、全知のマカベオ家、偉大なる殉教者たちの先駆者たる殉教者たちよ、彼らと共に、あなた方を崇める者たちが救われるよう、神に祈り給え。

聖殉教者レオティン、アッタ、アレクサンドル、キンデイ、ミンシフェイ、キリアク、ミネイ（ミネオン）、カトゥン、エウクレアの殉教

記念日：8月1日

[5422] 聖なる殉教者たちの殉教は、紀元前166年にさかのぼる。

これらの聖なる殉教者たちは、ディオクレティアヌス帝の治世下、パンフィリアの都市ペルギアに暮らしていました。当時、パンフィリアはイゲモン・フラウィアヌスによって統治されており、彼らは皆、キリスト教徒の家系に生まれました。　ミネオンは大工を職業としており、他の者たちは農業に従事していた。彼らは皆、同じ志を持ち、一つの善き決断を下し、殉教の業に身を捧げることを決意した。そこで、日常の仕事を捨て、夜間にアルテミス神殿（[5423] ）に侵入し、その中の崇拝対象となる品々をすべて破壊した。　このため、彼らは捕らえられて尋問を受け、その後容赦なく殴打され、その傷口を火で焼かれた。さらに、鉄の爪で肉を骨の髄まで剥ぎ取られ、火のついた蝋燭で肩を焼かれ、釘で両目をえぐり出された。　これらすべての拷問の後、彼らは牢獄に投げ込まれ、そこでは拷問者の命令により、食事も水も与えられなかった。その後、彼らは野獣に食わせられたが、聖なる殉教者たちは野獣たちをなだめたため、その場にいた者たちは皆、恐怖に襲われ、大声で叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

その直後、雷鳴と稲妻を伴う嵐が吹き荒れ、火と雹を伴った雨が地上に降り注いだ。　その瞬間、聖人たちを呼び寄せるある声が聞こえ、彼らはその甘美な声を聞いて大いなる喜びに満たされた。そこで、イゲモンの命令により、彼らは剣で首を刎ねられた[5424] 。こうして彼らの殉教は幕を閉じた。

8月15日

8月2日（旧暦）

同日は、257年8月2日、ヴァレリアヌス帝の治世中に殉教したローマ教皇聖ステファノの記念日である。

同日は、ヴォロゴダ県クベンスキー島のスパソカメンヌイ修道院で修道生活を送った、福者ヴァシリーの記念日である。

聖第一殉教者兼大助祭ステファノの聖遺骨の移送

8月2日の記念日

ユダヤ人によって聖大助祭ステファノが石打ちに遭った後（使徒言行録7:55–60）、その尊い遺体は一日一夜、埋葬されることなく放置されていた。それは犬や獣、鳥に食われるために投げ出されていたが、主がその遺体を守っておられたため、何者もそれに手を触れることはなかった。　二日目の夜、使徒行伝（使徒行伝5:34、22:3）に言及されている、エルサレムの高名な律法学者ガマリエール[5425] は、キリストの信仰に傾き始め、聖なる使徒たちの密かな友となっていたが、敬虔な人々を遣わして、初殉教者の遺体を人知れず運び出させた。　彼はそれを、所有者の名にちなんでカファルガマラ、すなわちガマリエルの屋敷へと運びました。その屋敷は、エルサレムから二十ポプリシュ

[5423] アルテミス、あるいはディアナは、ゼウスとラトナの娘であり、ギリシャ人からは処女の女神、乙女や女性の守護神、そして月の女神として崇められていた。　この女神はエフェソスで特に崇敬されており、そこには壮麗な神殿が建てられ、ローマ帝国の各地から大勢の人々が彼女を崇拝するために集まってきた。女神への崇拝には様々な異教の迷信が集中しており、彼女を称えるために多くの不道徳な儀式や儀礼が行われていた。

[5424] これらの聖なる殉教者たちが亡くなった年は不明である。

[5425] ガマリエルは、エルサレムのシネドリオで高い地位を占め、民衆全員から尊敬されていた有名なユダヤ人の律法学者であり、その名声から「律法の栄光」と呼ばれていた。伝承によれば、彼は息子のアヴィヴと共に、使徒ペトロと使徒ヨハネによって洗礼を受けたという。

[5426] の距離にありました。そこでガマリエルは、聖ステファノの遺体を新しい棺に納め、洞窟に安置して、尊厳ある埋葬を行いました。　その後、「ユダヤ人の指導者」であり、夜にイエス・キリストのもとを訪れたニコデモ（ヨハネ3:1–2）が、聖ステファノの棺の前で涙を流しながらこの世を去り、彼もまた、同じガマリエルによって、最初の殉教者の棺の近くに埋葬された。　その後、ガマリエールも、　、息子のアヴィヴと共に聖なる洗礼を受け、キリスト教の敬虔さの中で神に喜ばれる生活をしばらく送った後、この世を去った。二人は共に、ステファノとニコディモの墓のそばにある同じ洞窟に埋葬された。

長い年月が経ち、長い間神の教会を迫害し続けていた迫害者たちが滅び、コンスタンティヌス大帝の改宗を機にキリスト教王たちの時代――教会の平穏と至る所で輝きを放つ敬虔さが広がる時代――が到来すると、　――その時、神の啓示により、聖なる第一殉教者ステファノスと、彼と共に埋葬された神に愛された人々、すなわちニコディモス、ガマリエリス、アビブの尊い聖遺骨が発見された。

それらは、前述の町の長老ルキアノスによって、ある幻視の後で発見された。　木曜日から金曜日にかけての夜、第三時に、ルキアンの夢の中に、ある聖なる老人が現れた。その老人は背が高く、白髪に覆われ、細長い髭を蓄え、金色の十字架の模様が施された白い衣を身にまとっていた。　その老人は手に金の杖を持っていた。その杖で長老の脇腹を突くと、彼は三度、その名を呼んだ。

「ルキアヌス！　ルキアヌス、ルキアヌス！」

そして、こう語り始めた。

「エルサレムへ行き、聖なる大司教ヨハネにこう告げよ。『いつまで我々は閉じ込められているのか――なぜ我々を解放しないのか？　あなたの聖職在任のこの日に、我々は世に現れるべきである。遅れることなく、我々の聖遺骨が放置され、時には雨に打たれ、時には不信仰者たちの足に踏みにじられているこの棺を開けてくれ。　私が心配しているのは、自分自身というよりは、私と共に眠る、偉大な栄誉に値する聖人たちのことである。あなたに示された聖遺物を開けてください――そうすれば、多くの災いに見舞われているこの世に、神が御慈悲の扉を開いてくださるでしょう。

ルキアノス司祭は恐怖に駆られ、目の前に現れた男に尋ねた。

「あなたはどなたですか、ご主人様？　そして、あなたと共にいるとは、誰のことを指しているのですか？」

「私は」と現れた者は答えた。「ガマリエール、使徒パウロの養育者であり師である。そして私と共に眠っているのは、ステファノ大助祭である。彼はキリストへの信仰ゆえに、ユダヤ人たちやエルサレムの大祭司たちによって石打ちにされた。　その遺体は、犬や獣、鳥に食われるままに放置されていたが、私は夜中にそれを回収し、この場所まで運び、私の洞窟にある、自ら用意しておいた墓に安置した。それは、復活と主の恵みにおいて、彼と同じ運命を分かち合いたいと願ったからである。　また、同じ洞窟内の別の墓には、主キリストご自身から聖なる信仰を教えられ、（主の昇天後）使徒たちから聖なる洗礼を受けたニコディモ氏が葬られている。　ユダヤ人たちは、彼がキリストを信じ、洗礼を受けたことを知ると、怒りに満ち、ステパノのように彼を殺そうとしましたが、ニコディモは私の親族であったため、私への敬意からそれを実行しませんでした。　ユダヤ人たちは彼から指導者の地位を剥奪し、その財産を教会のものとした。その後、彼を呪い、多くの侮辱と非難を浴びせながら町から追放した。そこで私は彼を我が家に迎え入れ、最期まで世話をした。彼が亡くなると、私は彼を最初の殉教者ステファノの聖遺物の近くに埋葬した。　また、その洞窟の壁に掘られた三つ目の墓には、二十歳で亡くなった私の最愛の息子アビヴァを葬った。彼は私と共に、キリストの使徒たちから聖なる洗礼を受けた者である。私は死ぬ際、自分の遺体も彼らと共にそこに葬るよう遺言した。

[5426] 距離の単位は、現在のサジェン約690に相当する。

「では、私たちはどこであなた方を探せばよいのでしょうか？」と長老が尋ねた。

「私たちを探してください」とガマリエルは答えた。「南側の、デラガヴリ（すなわち、神の僕たちの畑）の全域で。」

眠りから覚めた長老は、神を賛美し、次のように祈った。

「主イエス・キリストよ！もしこの幻があなたからのものであり、惑わしではないのなら、それを三度繰り返すよう命じてください。」

そしてルキアノスは、次の金曜日まで、乾いたパンだけを口にし、断食を始め、祈りに専念し、その幻視を誰にも明かさなかった。

翌週の金曜日、深夜3時に、ガマリエルが前回と同じように、長老ルキアンの前に再び現れた。

「なぜ」と彼は尋ねた。「私の命令を無視して、大司教ヨハネのもとへ行き、あなたに告げられたことをすべて伝えることをしなかったのか？」

「お許しください、主よ」と長老は答えた。「最初の幻を見た直後に、まるで嘘つきになってしまうのではないかと恐れ、すぐに行って告げることを躊躇してしまったのです。ですから、主があなたを二度、三度と私のところに遣わしてくださり、私がその真実を確信できるようにと祈っていたのです。」

ガマリエルは手を差し伸べて言った。

「平安あれ、長老よ。安らかに休みなさい。」

そして、彼はまるで祭司の目の前から立ち去るかのように見えた。

その後、再び彼に向き直って言った。

「ルキアンよ！　あなたは、私たち一人ひとりの聖遺物をどのようにして手に入れ、見分けるかを考えている。さあ、よく見て、あなたに示されるものを理解しなさい。」

そう言うと、彼は長老のもとに四つの籠を運んできた。そのうち三つは見たところ金製で、四つ目は銀製であった。金の籠の一つには赤い花が、もう一つには芳香のあるサフランが詰められていた。　ガマリエルは、赤い花が入った最初の金の籠を、長老の右側、つまり東側に置き、白い花が入ったもう一つの金の籠を北側に置き、三つ目と四つ目の籠を一緒に西側に、東側にある最初の籠の向かい側に置いた。

「これはどういう意味でしょうか、先生？」と、ガマリエルが籠を見せているのを見て、長老は尋ねた。

彼はこう答えた。

「これらは、私たちが眠る墓です。つまり、東側に置かれた赤い花が入った最初の金の籠は、キリストのために殉教の血を流した聖ステファノの墓です。北側に置かれた白い花が入ったもう一つの金の籠は、ニコディモスの墓です。　三つ目も白い花が入った、西側に置かれた金の籠――それは私の墓である。四つ目の銀の籠は、芳香あるサフランで満たされ、私の墓の隣に置かれているが、それは私の息子アビブの墓である。彼は母の胎内から肉体も魂も罪から清く、汚れなき処女のままこの世を去ったのだ。

この言葉を言い終えると、ガマリエルは姿を消し、かごたちもまた見えなくなった。

この幻を見た後、長老は神に感謝を捧げ、三番目の金曜日に至るまで断食と祈りをさらに深め、三度目の御出現に恵まれることを待ち望んだ。そして再び、三番目の金曜日の夜、あの誠実で聖なるガマリエルが長老の前に現れ、威嚇するようにこう言った。

「なぜ今に至るまで、大司教のもとへ赴き、あなたに現れ、語られたことを彼に明かすことを怠ってきたのか。この世にどれほどの干ばつと苦難があるか、お前は見ていないのか。お前は助言を怠っている。砂漠には、生活においてお前より優れ、この啓示にふさわしい聖なる人々がいないというのか。　しかし、我々は彼らを飛び越えて、お前を通して現れようとしているのだ。さあ、立ち上

がって、大司教のもとへ行き、我々が眠る場所を明らかにし、そこに教会を建てさせよ。そうすれば、我々の祈りによって、主がご自分の民に憐れみをお示しになるだろう。

長老は立ち上がり、神に感謝を捧げた後、急いでエルサレムへと向かい、そこで大司教ヨハネに、三度見た幻と受けた命令について報告した。大司教は喜びのあまり涙を流し、こう言った。

「人を愛する主なる神は祝福されます。御自身の聖徒たちの啓示によって、私たちに御慈悲を示そうとしておられます。　そして、もし私たちが彼らの聖遺物を発見する恵みにあずかるならば、私は第一殉教者ステファノの聖遺物を、彼がユダヤ人に対して戦ったこの街、天が開かれ、栄光のうちに立たれるキリスト・神を目撃したこの場所へ移さなければならない（使徒行伝7:1–60）。「さて、わが子よ」と彼は長老に語りかけた。「あの畑へ行き、聖人たちが眠る場所を見つけ出せ。彼らの墓まで掘り進んだら、私に知らせよ。」

長老は町から自分の屋敷に戻ると、敬虔な人々を呼び集め、彼らと共にデラグヴリの畑へ向かった。　その畑の真ん中に小高い丘があった。彼は、ここに聖人の遺骨が眠っていると思い、掘り起こそうとしたが、まずその丘の上で一晩中祈りを捧げた。その夜、聖ガマリエルは、その付近に住んでいた修道士ヌゲティウスに現れ、こう言った。

「行って、ルキアノ長老にこう伝えなさい。あの小高い丘を掘り起こそうとする労を惜しむように、と。なぜなら、我々はそこには眠っていないからだ。むしろ、南向きの藪のそばで我々を探させなさい。我々はそこに埋葬されている。　あの丘の上は、私たちが埋葬のために運ばれた際に一時的に安置された場所であり、ここでは古来の慣習に従って、私たちの上で嘆き悲しみが捧げられた。その嘆きの証として、私たちの上に土が盛られて丘となったのである。

立ち上がった修道士は、指示通りに向かい、その丘でルキアノ長老と多くの男たちを見つけた。彼らはすでに発掘を始めていた。そこで修道士は、自分が見聞きしたことをルキアノに語った。長老は、啓示のもう一人の証人を現してくださった神を賛美した。　そして彼らは藪の中へと向かい、その付近で、「ヘリイル」、すなわち「神の僕ら」というヘブライ語の刻まれた石を見つけた。石の周囲を掘り起こし、その場からどかしてみると、洞窟への狭い入り口が見つかった。ろうそくを手に洞窟の中に入ると、壁に掘られた棺と、その中に収められた聖人の遺骨が見えた。　洞窟の入り口は南側にあった。そのため、入り口の向かい側、東側の右側には聖ステファノの棺があり、入り口の反対側、北側には聖ニコディモの棺があった。また、西側、聖ステファノの向かい側には、以前、長老が「籠」の幻視で示された通り、聖ガマリエールとその息子が眠っていた。　直ちに、その長老は聖遺物の発見を[5427]、エルサレムの大司教ヨハネに報告した。

大司教は、たまたまそこにいたセバスティアのエレウフェリウス司教とエリコのエレウフェリウス司教の二人を連れて、聖遺物が発見された場所へと急ぎ、洞窟の入り口を広げると、彼らは中に入った。　聖なる第一殉教者の棺が開かれるやいなや、たちまち大地が揺れ動き、生前徳高き人々は、上空から天使たちが歌う声を聞いた。「天には神に栄光、地には平和あれ！」　また、聖人の遺骸からは、これまで誰も経験したことのないような芳香が漂っていた。この言葉では言い表せないほどの芳香は、十ポプリスの距離にわたって空気に満ちて広がり、そこにいた者たちは皆、まるで楽園にいるかのように感じた。　エルサレムや周辺の村々から、大司教と共に大勢の人々がやって来た。その中には、様々な病に苦しむ多くの病人がいた——盲人、足の不自由な者、内臓の病や悪霊に苦しむ者、腫れ物や潰瘍に覆われた者たち——彼ら全員が癒やされた。　癒やされた者の数は七十三人にのぼった。そこで、四人の神の聖人の遺骨を運び出し、詩篇やその他の聖なる賛美歌を歌いながら丘へと運んだ。人々はそれらに触れ、畏敬の念を込めて口づけをした。　まもなく、大司教はその丘に、発見された聖人たちの名に因んで教会を建立し、そこにニコディモス、ガマリエル、アビブの聖遺骨

[5427] この聖遺物の発見は415年に起こった。

を安置した。一方、聖大助祭ステファノの聖遺骨は、厳かにエルサレムへ移され、聖シオンにある教会に安置された。

ちょうどその頃、ある高貴な人物であるアレクサンドロス上院議員が、妻のユリアニアと共に、聖地を巡礼するためにコンスタンティノープルからエルサレムを訪れた。聖なる第一殉教者ステファノスの棺の周りで起こっている奇跡を目撃した彼は、　アレクサンドロスは、その聖人の名に因んで市内に石造りの教会を建立し、司教に対し、聖ステファノの聖遺骨をそこへ移すよう熱心に懇願した。司教はその熱心な願いに心を動かされ、その願いを聞き入れた。　しばらくして、アレクサンドルはエルサレムで不治の病に倒れ、妻に誓いを立てて遺言を残した。すなわち、妻には初殉教者の聖棺に似た聖棺を用意させ、その中に彼を聖ステファノの聖遺物の傍らに安置するよう命じた。そう遺言を残して、彼は息を引き取った。　妻は夫の臨終の遺志を遂げた。彼女は聖ステファノの聖棺に似た聖棺を用意し、最初の殉教者の聖棺の隣で、夫を厳粛に埋葬した。　そして彼女は、亡き夫と離れることを望まず、前述の教会のそばのエルサレムで暮らした。彼女は、夫が神のために生きていると信じていたからである。

アレクサンドルの妻はまだ若く、美しく、しかも裕福であったため、多くの貴族たちが彼女に再婚を勧めた。　しかし、彼女は貞淑な女性として、決して再婚しようとはしなかった。彼女は最初の夫への忠誠を守り抜くことを固く決意し、復活の日に義人たちに用意された同じ運命を夫と分かち合えることを望んでいたのである（マタイ25:34）。　ある高位の役人が彼女と結婚しようと執拗に迫ってきたとき、ユリアニアは彼を振り払おうと、次のような計画を立てた。夫の遺体を引き取り、夫の死からすでに8年が経過していたにもかかわらず、故郷のコンスタンティノープルへ戻るというのである。　彼女は大司教に対し、夫の遺体を持ち帰ることを禁じないでほしいと懇願したが、大司教は同意しなかった。そこでユリアニアは直ちに、コンスタンティノープルに住む父に手紙を書き、夫の遺体を支障なく持ち帰ってコンスタンティノープルへ来られるよう、皇帝に勅令を下してもらうよう取り成してほしいと頼んだ。　ほどなくして、皇帝から望んでいた許可が下り、彼女たちはそれを大司教に見せた。皇帝の手紙を見た大司教は、もはや反対できず、ユリアニアの願い通りになるよう祝福した。　ユリアニアは、祝福を受けて、聖第一殉教者ステファノスと夫アレクサンドルの両方の聖遺物箱が安置されていた場所を掘り起こし、夫の聖遺物箱の代わりに聖人の聖遺物が入った聖遺物箱を持ち出した。ユリアニアは、あたかも騙されたかのように振る舞ったが、実際には神の御心と第一殉教者の願いによるものだったのである。　聖遺物箱をラバが引く戦車に載せ、ユリアニアは旅立った。 彼女がエルサレムを出発したのは夕方だった。その夜、運ばれている聖遺物の上空で、 、天使たちが神を賛美する歌声が聞こえ、聖遺物箱からは、大量の香油を注いだかのような素晴らしい香りが漂っていた。また、遠くから悪魔たちが叫ぶ声も聞こえた。

「ああ、我らに災いあれ！ ステファノが来て、我々を打ちのめすのだ。」

ユリアニアの侍女たちは、これらすべてを耳にして恐れおののき、女主人にこう言った。

「奥様、これはどういうことでしょうか。ステファンの名を呼ぶ様々な声が聞こえますが。もしかして、私たちは主アレクサンドルの聖櫃の代わりに、第一殉教者ステファンの聖櫃を運んでいるのではないでしょうか？」

すると彼女は喜びの涙を流しながら答えた：

「黙りなさい、子供たち。すべては神と、その聖なるしもべの御心通りに進んでいるのです。」

海辺の町アスカロンに到着すると、彼らはツァールグラード行きの船を見つけた。船主に所定の運賃を支払うと、聖人の遺骨を乗せた船に乗り込み、航海を始めた。　船が海の真ん中にいたとき、恐ろしい嵐が吹き荒れ、船は傾いてしまった。皆、立ち上る巨大な波を見て恐怖に襲われた。しかしその時、聖なる第一殉教者ステファノスが船乗りたちの前に現れ、こう言った。

「私はあなた方と共にいる。恐れるな！」

そう言うと、彼は姿を消し、たちまち海は静まり、その後の航海はすべて順調に進んだ。夜になると、聖人の遺骨の上に光が現れ、聖櫃からは強い芳香が漂い、空には天使たちの歌声が響いていた。ハルキドンに上陸すると、彼らはここで五日間滞在することに決めた。　聖ステファノの聖遺物の存在が町の住民に知れ渡ると、彼らは病人を連れて船へと駆けつけた。そして、町にいたすべての病人は、最初の殉教者の到来のおかげで癒やされた。また、人々から悪霊も追い払われ、悪霊たちはその際、こう叫んでいた。

「ユダヤ人たちに石打ちにされたステファノがやって来て、私たちを激しく苦しめ、至る所――陸でも海でも――から追い払っている。」

ハルキドンを出航した船は、無事にコンスタンティノープルに到着した。敬虔なユリアニアは父のもとへ行き、聖大助祭ステファノスの聖遺物についてすべてを詳しく報告した。その後、彼女たちは父と共に皇帝と総主教のもとへ赴き、同じことを伝えた。すると、皆が大きな喜びに満たされた。　総主教は聖職者たちや民衆全員を率いて、第一殉教者の聖遺物を出迎えるため埠頭へと向かった。船から聖遺物箱を取り出し、それを皇帝の馬車に乗せ、賛美歌を歌いながら皇帝の宮殿へと運んだ。これは皇帝の命によるものであった。　この時、聖遺物の周囲でどれほど多くの奇跡が起こったか、言葉では言い表せないほどであった。要するに、どのような病や不調に苦しんでいようとも、すべての人が癒やされたのである。 荘厳な行列が「コンスタンティノスの浴場」[5428] に到達したとき、聖遺物を載せた王の馬車を引いていたラバたちが立ち止まってしまった。使用人たちがさらに進むよう鞭打っても、ラバたちはどうしてもその場から動こうとしなかった。すると、ある一頭のラバが、神の御心により言葉を話す能力を与えられ、こう言った。

「なぜむやみに私たちを打つのですか？ まさにこの場所に、聖なる第一殉教者ステファノが安置されることをお許しになったのです。」

これを聞いた者たちは皆、強い驚きと畏怖に満たされ、神を賛美した。王は直ちに、その場所に石造りの教会を建設するよう命じた。そして間もなく、聖なる第一殉教者であり大助祭であるステファノの名を冠した美しい教会が建てられ、　その中に、主であり救い主であるイエス・キリストの栄光と賛美のために、その尊い聖遺骨が安置された。父と聖霊と共に賛美される[5429] 、罪深い私たちからも、今、常に、そして世々限りなく、主への栄光と賛美、礼拝と感謝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

キリストなる神において耐え忍ばれた苦難により、汝の頭は王の冠で飾られた、殉教者たちの先駆者ステファノよ。汝はユダヤ人の狂気を糾弾し、御父の右に坐す汝の救い主を仰ぎ見た。それゆえ、汝は我らの魂のために彼に祈り給え。

コンダク、第6調：

天の御業を行う者として、地上で最初に蒔かれた者よ、万人に称えられるステファノよ。キリストのために地上で最初に血を流した者よ、祝福された者よ。キリストから勝利の冠を授かり、天に登った最初の者よ、殉教者たちの先駆け、殉教者たちの冠を戴く最初の者よ。

[5428] これらの浴場はコンスタンティヌス大帝によって建設が始められ、その息子コンスタンティウスによって引き継がれ、427年にテオドシウス2世によって完成した。現在はテウクル・ハマムと呼ばれ、4つの丘の上に位置している。

[5429] 1200年、この教会にはロシアの巡礼者アントニーが訪れ、彼はそこで、石で打ちのめされ、縫合された初殉教者の額を目撃した。

聖なる義人、モスクワの奇跡行者、祝福されたヴァシリーの永眠

記念日：8月2日

この至福のヴァシリーは、敬虔なるツァーリにして大公ヨハン・ヴァシリエヴィチ[5430]の治世、およびモスクワおよび全ロシアの総主教マカリーの在任中に生きた。　父の名はヤコブ、母の名はアンナであった。彼らの祈りによって神から授かり、その信仰ゆえに彼らのもとに与えられたのである。幼い頃から神への愛に燃え、神の戒めに従って生きるようになった。　その後、実家と親族を後にし、至福のヴァシリーは、将来の恵みを望んで、朽ちるべき財産を霊的なものに置き換えた。というのも、彼にとって父の代わりには罪の重荷からの解放があり、母の代わりには清らかさがあり、兄弟の代わりには天のエルサレムを目指す願いがあり、子供たちの代わりには心の嘆きがあったからである。　そして、これらすべてを得るために、彼は多種多様な過酷な修行によって自らを酷使した。この聖人は極めて貧しく、自分用の小さな洞窟さえ持たず、衣服も身にまといませんでした。常に住処を持たず、夏も冬も裸で歩き回り、冬は寒さで凍え、夏は酷暑に苦しんだ。　絶えず喧騒や叫び声に囲まれながらも、その魂は情欲から解放されており、彼は常にキリストのために「聖なる狂人」としての生活を送っていた。彼は何も語らず、あたかも言葉を失ったかのように振る舞い、それによって人々から自身の美徳を隠し、神のみに導かれることを望んでいた。しかし、*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）。この聖人の清らかな生活と揺るぎない忍耐の結果、その名声は、全ロシアの独裁者である敬虔な王にして大公ヨハン・ヴァシリエヴィチの耳にも届き、マカリイ大主教がその生涯について彼に語ったのである。　二人はその忍耐に深く感嘆し、彼らの時代にこのような聖なる人物を授けてくださった神を賛美した。

このように、絶えず労苦と忍耐に励み、飢えと渇きに耐え、日々死の危険に身をさらしながら、至福のヴァシリーは生涯を全うした。　やがて病に倒れ、ついに床に伏した。敬虔なツァーリであり大公であるイオアン・ヴァシリエヴィチ――全ロシアの独裁者――は、聖人がまもなく神のもとへ旅立つことを聞き、敬虔なツァリーツァであり大公妃であるアナスタシア、そして高貴な皇子たち、イオアンとフェオドールと共に彼の元を訪れ、祝福を受けようとした。至福の聖人は、死を目前にし、すでに最期の息を引き取ろうとしていたが、王太子フェオドールに預言的にこう告げた。

「お前の先祖が所有していたものはすべてお前のものとなり、お前は彼らの後継者となるだろう。」

この言葉を残して、聖人はその魂を神の御手に委ねた。その遺体からは芳香が立ち込め、街中の住民が葬儀に駆けつけた。そこには感動的な光景が広がっていた。　ツァーリと諸公爵たちは、聖堂まで自ら聖人の遺体を肩に担ぎ、司教や司祭たちは聖職者一同と共に、彼を称えながら詩篇や聖歌を歌い、民衆は涙を流しながらこう叫んだ。

「至福のヴァシリーよ！　私たちの都モスクワと、すべてのロシアの都市や村々、キリストを愛する私たちのツァーリ、その敬虔なツァリーツァ、そして彼らの高貴な子供たちのために、私たちの神キリストに熱心に祈ってください。また、ツァーリの軍勢が敵を打ち破り、勝利を収めるよう、その助け手となってください。」

[5430] 福者ヴァシリーは、モスクワ大公イオアン・ヴァシリエヴィチ3世（1462–1505年）の治世初期、当時モスクワ近郊にあったエラホヴェ村（現在のエラホフスカヤ通りとバスマンナヤ通りの位置）で生まれた。　16歳の若さで彼は聖なる狂人の道を歩み始め、72年間にわたりその道を貫いた。彼が名声を博したのは、イオアン4世・ヴァシリエヴィチ（グロズヌイ）の治世のことであり、彼にその名が知れ渡ったのは、この福者を深く敬っていたマカリー大主教（1543–1564年）を通じてであった。

至福者の葬儀に参列したツァーリとツァリーツァは、喜びと悲しみの涙を流した。喜びの涙は、聖人のこのような最期に、その完全さと聖人への列聖の証拠を見出したからであり、悲しみの涙は、これほど勇敢な修行者を失ったからであった。　そして当時からすでに、多くの人々がこの福者の聖遺に触れることで癒やしを受けていた。マカリイ大主教閣下は聖職者会議と共に、聖人の遺体の前で詩篇と葬送の賛美歌を唱え、1552年8月2日、[5431] に、彼を栄誉をもって埋葬した。 彼の生涯は計88年であり、そのうち72年間を聖なる狂人として過ごした。主は、1588年の彼の死後も、奇跡によってこの福者を栄光に輝かせられた。我らの神に、今、常に、そして永遠に栄光あれ。

トロパリオ、第8調:

ヴァシリーよ、あなたの生涯は偽りなく、その清らかさは汚れを知らず、　キリストのために、あなたは断食と徹夜、寒さと太陽の熱、暑さと雨雲によって御身を消耗させ、御顔は太陽のように輝きました。今や、ロシアの民、王や公爵、そしてすべての人々があなたの元を訪れ、あなたの聖なる永眠を称えています。　それゆえ、キリストなる神に祈り、我らを野蛮な捕囚と内乱から救い出し、世に平和を与え、我らの魂に大いなる憐れみを授けてくださいますように。

コンダク、第4調:

神の御霊に導かれて、至福のバシレイオスよ、あなたは世俗の騒乱を振り払い、この世の動揺を嫌悪し、　朽ちる衣を脱ぎ捨て、無情の衣をまとい、詭弁を弄するこの世の支配者の罠から逃れ、異邦の地で異邦人として暮らし、地上の富よりも天の富を選び、忍耐の冠を戴きました。　そして今、至福のバシレイオスよ、あなたの聖なる記念を祝う者たちのために、キリスト・神に祈り、私たちがあなたにこう呼びかけられますように。「喜びなさい、至福のバシレイオスよ。」

8月16日

8月3日（旧暦）

1147年、ノヴゴロドにて、尊者アントニオス・ローマ人が帰天した日。

私たちの尊い父たち、イサアク、ダルマート、ファウスト

8月3日の記念日

[5431] 至福のヴァシリーの遺体は、聖三位一体教会（ルヴァ）の近くに埋葬された。この地では、1554年にイオアン・グロズヌイがカザン征服を記念してポクロフスキー大聖堂の建設を命じており、この大聖堂は聖ヴァシリー・ブラジェヌイ教会としてより広く知られている。　1586年、福者ヴァシリーの聖遺物から多くの癒しの力が現れ始め、同年、ツァーリ・フェオドール・イオアンノヴィチの命により、福者の埋葬地の上に彼の名を冠した教会（現在のポクロフスキー大聖堂内のヴァシリエフスキー小聖堂）が建設され、　銀製で金メッキを施し、真珠や宝石で装飾された聖遺物箱が造られ、8月2日に彼の記念日を祝うことが定められた。至福のヴァシリーの聖遺物は、現在に至るまでこの教会の地下に安置されている。

聖ダルマートは、テオドシウス大帝の治世[5432] に生き、軍務に就き[5433] 、皇帝から敬愛されていた。 その後、神のためにこの世のすべてを捨て去り、妻と子供たちを後にした[5434] 。ただ一人の息子ファウストだけを連れて、コンスタンティノープル近郊に修道院を構えていた聖イサアクのもとへ向かった。そこで彼らは聖イサアクによって修道士として剃髪され、二人とも神に喜ばれる 生活を送り、常に厳しい断食を守り続けた。 すでに高齢に達していた聖イサアク[5435] が死の訪れを感じると、修道者たちを呼び集めた。彼らに最後の訓示を与えた後、自身の後任として聖ダルマートを修道院長に任命し、その名にちなんで、この修道院自体も後に「ダルマート修道院」[5436] と呼ばれるようになった。

コンスタンティノープル総主教アッティコスにより、尊者ダルマートは司祭に叙階された[5437] 。彼は禁欲に満ちた生活を送り、ある年の大斎期間中には40日間も食事を口にしなかった[5438] ；断食と祈りによって、尊者ダルマートは悪魔の力を打ち負かした。彼はまた、目に見える悪魔の僕たち――ネストリウス派の異端者たちや、 聖母マリアを冒涜した者たち[5439] ：尊者ダルマートは、テオドシウス2世の治世下でエフェソスで開催された第三回全地公会議において、聖なる父たちの精力的な補佐役を務めました[5440] 。これにより、尊者ダルマートは皇帝と聖なる父たちの愛を勝ち取り、彼らは彼をダルマート修道院のアルヒマンドリトに任命しました。 このように、その生涯のほとんどを神への奉仕に捧げた聖ダルマートは、深き老齢に達して永遠の安息へと旅立った[5441] 。 – 聖ファウストは、父と同様に偉大な修道士であり、修道戒律を厳格に守り、中でも特に断食を重んじた[5442] 。この世の生涯を終えると、彼は永遠の住処へと移り、不滅の命において聖なる父たちの列に加えられた。

[5432] フェオドシウス大帝――379年から395年までの皇帝。

[5433] 当時「スコラリア」と呼ばれていた第2近衛連隊に所属していた。

[5434] 娘たち。

[5435] 聖イサアクの神に喜ばれる生涯と、信仰に対する並外れた熱意――それにより、彼は不敬虔なヴァレンティヌス王を恐れずに糾弾し、その滅亡を予言した――ならびに彼の至福の死については、5月30日の項で十分に記されている。興味のある方はそちらを参照されたい。

[5436] 聖イサアクは383年に亡くなった。

[5437] 他の、より信頼性の高い情報によれば、彼はアッティコス（408–425）ではなく、ネクタリオス総主教（381–397）によって修道院の院長に任命された。

[5438] その後、食事を済ませた後、キリストの昇天祭の43日前、彼は恍惚（エクスタシー）の状態にあり、その間に神聖な幻視を授かり、祝祭日にマカベオ教会の礼拝に参列していた同修道院の兄弟のうち3人がどの場所に立っていたかを語り、それによって広く称賛された。 – 聖プロクルス総主教（434–446）は、聖ダルマートの存命中に、アンティオキアのヨハネ宛ての手紙の中で、彼を極めて高く称賛している。

[5439] ネストリウス派の異端者たちは、聖母マリアを「神の母」と呼ぶべきではないと主張した。なぜなら、彼女は神ではなく、ただの人間を産んだに過ぎず、その人間に、彼女とは別に、父から永遠に生まれ出た神の御言葉が結ばれたからである。 マリアから生まれた人間イエスは、単に神性の住まいであり、私たちの救いの道具に過ぎなかった。この人間は、聖霊の感化によってキリスト、すなわち油注がれた者となり、神の御言葉は彼と特別な道徳的、あるいは相対的な結びつきの中で共におられた。ネストリウス派の異端は、第3回全地公会議で非難された。

[5440] エフェソス公会議において正統信仰が迫害の脅威にさらされていることを知った聖ダルマートは、修道院長、修道士、そして正統信仰を信じるキリスト教徒たちの先頭に立ち、皇帝の宮殿へと向かい、皇帝の前で勇気をもって真理を訴えた； その一方で、それまでの48年間、彼は修道院から一歩も外に出たことがなかった。皇帝は、この偉大な修道士に、地震からの救済を求める共同の祈りに参加してほしいと懇願していたにもかかわらずである。

[5441] 彼の没年については正確には知られていないが、コンスタンティノープル総主教聖プロクルスの在任中にまだ存命であったことだけは言える。 聖ディミトリ・ロストフスキーによれば、未刊行のイサアク、ダルマート、ファウストの伝記によると、聖ダルマートは生後90年以上を経て8月2日に死去し、8月3日にプロクルス総主教の治世下で埋葬された。これは434年以降、おそらく440年頃のことである。

[5442] 彼の生涯については、詳細な記録は残されていない。

コンダク、第2声調:

苦行によって星のように輝き、信仰をもって異端を打ち砕いた御二人を、イサアキオスの賛歌をもって讃え、ダルマトスとファウストと共に、キリストの御心に適う者として、私たちすべてのために御方に祈りを捧げましょう。

敬虔なるコスマ、去勢された隠者の生涯

記念日：8月3日

『リモナール』[5443] には、ヴィカンティウス修道院の長老アッバ・ヴァシレイオスによる、聖コスマに関する次の物語が伝えられている。

「私がアンティオキアに滞在していた頃」と長老は語った。「エルサレムから、ファランの『[5444] 』修道院に属する去勢された隠者アッバ・コスマが、至聖なる総主教グリゴリオスのもとを訪れました。彼は厳格な断食者であり、信仰の熱心な擁護者であり、教会の教義を堅く守る者であり、聖書を深く熟知していました。　アンティオキアに到着して数日後、その長老は主のもとに召された。総主教は、ある司教が埋葬されていた自身の修道院に、その尊い遺体を安置するよう命じた。　ある日、私は聖なる長老の墓を訪れ、その遺骨に礼拝を捧げようとしたところ、教会に入る人々に施しを乞うている物乞いを目にしました。彼は私に気づくと、墓の前で三度頭を下げ、亡き人の安息を祈る司祭の祈りを捧げた後、私にこう言いました。

「アッバ様、[5445]、二ヶ月前にここに埋葬されたその長老は、偉大なお方です。」

「どうしてそれを知っているのですか？」と私は尋ねた。

彼はこう答えた。

「私は十二年間、麻痺に苦しんでいました――これは真実であり、嘘ではありません――そして、この長老を通して、主は私に癒やしを授けてくださいました。私が悲しみに沈んでいるとき、彼はやって来て私を慰め、安らぎを与えてくれます。」　彼に関するもう一つの奇跡も、あなたに隠すつもりはない。あなたがたが彼を埋葬して以来、私は毎晩、彼が司教に向かってこう言うのを聞いている。「私に触れるな、近づくな、異端者よ。お前は聖なるカトリック教会の敵だ」と。

これを聞いて、私は総主教のもとへ行き、その乞食との会話を伝えた。同時に、総主教に長老の遺体を別の場所に移すよう頼んだ。しかし、至聖なる総主教はこう言われた。

「わが子よ、信じてほしい。異端者が聖コスマに害を及ぼすことなどあり得ない。君が語ったことはすべて、私たちから信仰への熱意と長老の徳が隠されることのないように、そして司教の不敬虔が露見し、彼が正教徒として崇められることがないようにするために起きたのだ。」

[5443] 『リモナール』（ギリシャ語の「リモン」＝牧草地、草地より）は、ギリシャの修道士ヨハネス・モスクス（622年没）による、非常に広く知られた聖人伝である。　パレスチナ、シリア、エジプト、キプロス、コンスタンティノープル、ローマの修道院を巡り歩いたモスクスは、キリスト教の修道士たちの生涯に関する数多くの物語を集め、彼らの格言や教訓も数多く収集した。彼はこれらすべての情報を自身の『リモナール』にまとめた。–『リモナール』のロシア語訳として知られているものには、1)　チェルニゴフ大司教フィラレートによる『霊の牧場』（モスクワ、1848年、1850年、1853年刊）と、2）匿名出版者による『牧場、すなわち花畑』（モスクワ、1859年刊）である。

[5444] ラヴラ――ギリシャ語で「都市の一部」、小路――本来は、修道院長の住居を取り囲むように小路状に配置され、柵や壁で囲まれた一連の独房を指す。　ラヴラの修道士たちは隠遁的な生活を送り、それぞれが自分の独房で修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のために集まる以外は、残りの日は厳格な沈黙を守っていた。　ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに過酷であった。太古の昔から、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士を擁し、その意義において重要な修道院を指して用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられるようになった。現在、ロシアでは「ラヴラ」という名称は、もっぱら名誉称号としての意味で使用されている。

[5445] すなわち、父。

この同じ司祭ヴァシリーは、尊者コスマについて別の話も伝えている。

「私は修道院で彼を訪ねたところ、長老は自身の体験についてこう語ってくれた。ある時、彼はある考えが頭に浮かんだという――主が弟子たちに語られた言葉、『*今、袋を持っている者はそれを持ち、袋を持たない者は、自分の服を売って剣を買え*』（ルカ22:36）とは何を意味するのか、そして主が『　『*それでよい*』と、弟子たちが『*ここに剣が二本あります*』と言った時のこと（ルカ22:38）です。長老は主のこれらの言葉について長い間熟考しましたが、何の結論にも至らず、正午にピルガの修道院へアッバ・テオフィロスを訪ね、彼に説明を求めたのです。　砂漠を横切る道の途中、カラモンに近づいたとき、彼はカラモン山から降りてくる巨大な蛇を目にした。その蛇はあまりにも巨大で、その重みで地面に深い跡を残し、体のうねりは大きな弧を描いており、ちょうど長老の行く手を塞いでいた。　修道士にその決意を諦めさせようとする悪魔の策略を見抜いた老人は、祈りを武器に恐れを知らずに旅を続けた。神の力に守られ、彼は何の害も受けず、まるで門をくぐるかのように、大蛇の体のうねりを通り抜けた。　アッバ・テオドロスの元へ着くと、彼は自分の疑問を投げかけ、彼から次のような答えを聞いた。

「二本のナイフは、神に喜ばれる二つの生き方を表している――活動あるいは労働、そして観想、すなわち心を神への思索や祈りに没頭させることである。この二つの美徳を兼ね備えた者こそ、完全な人間である」。

尊者コスマに関する記述に、司祭ヴァシリーはさらに次のように付け加えた。

「私が修道生活のはじめに訪ねた尊者コスマのもとで、ファラン修道院に10年間滞在していた間、彼は常に　神に霊感を受けた語りかけで私を導いてくれた。ある時、魂の救いについて私と語り合っていた際、彼は聖アタナシオス大主教の言葉からある一節を引用し、次のように付け加えた。

「聖アタナシウスの言葉を耳にしたり、本で見つけたりしたときは、もし紙がなければ、自分の衣服に書き留めておきなさい」。

これほどまでに、尊者コスマは教会の偉大な教父たちや教師たちを敬っていた。そして彼もまた、この地上で神に喜ばれる生涯を終えた後、主イエス・キリストの恵みにより、彼らと共に永遠の命に与ることを得た。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、そして永遠に栄光がありますように。

8月17日

8月4日（旧暦）

同日は、サポーレの治世下のペルシアで殉教した聖殉教女エウドキアの記念日である（約362～364年）。

同日、聖殉教者エレウフェリオスの記念日。彼はマクシミアヌスの宮廷で寝殿係（クヴィクラリウス）を務め、その命により、キリストのために剣で斬り殺された。

エフェソスの七人の少年聖人

8月4日の記念日

不義なローマ皇帝デキウス[5446]　の治世下、キリストの教会は迫害を受け、多くのキリストの僕たち――聖職者、教会奉仕者、その他の信徒たち――は、容赦ない迫害者を恐れ、それぞれできる限

[5446] デキウス――249年から251年まで在位した皇帝。

り隠れざるを得なかった。　　キリスト教徒への憎悪に燃えるデキウスが、カルタゴ[5447]からエフェソス[5448] に到着すると、まず第一に、近隣の住民を集めて偶像への生贄を捧げるよう命じた。　傲慢に目がくらんだ王は、街の中心に偶像を据え、その前に祭壇を設けた。王の命令により、まず市の役人たちが王と共に、その祭壇で生贄を捧げなければならなかった。この国民的な祝祭的な生贄の儀式において、大地は血で染まり、空気は悪臭と煙で満たされた。それほど多くの動物が屠られ、焼かれたのである。　二日後、王から、すべてのキリスト教徒を集め、偶像への生け贄を捧げさせるという命令が出された。キリスト教徒たちは至る所で捜し出され、家や洞窟から引きずり出され、一つの群衆にまとめられ、恥辱にまみれて、生け贄を捧げる民衆が集まる広場へと連行された。キリストの信徒の中には、精神的な強さを持ち合わせておらず、これから待ち受ける苦痛を恐れて信仰から離れ、皆の目の前で偶像を拝む者もいた。　一方、そのような信仰の兄弟たちの行いを目撃した者や、その話を耳にした他のキリスト教徒たちは、心の中で深く嘆き、彼らがキリストから離れ、偶像崇拝に陥ったことを悲しんだ。　一方、信仰に堅固で精神の強い者たちは、恐れを知らずに拷問の場へと向かい、様々な拷問の末に息を引き取る際も、勇敢に主のために自らの魂を捧げた。　拷問を受ける者たちはあまりにも多く、傷を負わされ、骨を砕かれた際に流れ出る彼らの血は、まるで水のように地面に溢れ出していた。殉教者たちの遺体は、道端のゴミのように投げ捨てられたり、城壁の周囲に吊るされたりし、頭部は特別な杭に刺されて城門の前に掲げられた。　カラスやタカ、その他の肉食鳥たちが城壁に群がり、信仰のために死んだ者たちの遺体を食い荒らした。　隠遁し、身を潜めていたキリスト教徒たちにとって、鳥に食われる兄弟たちの遺体を回収して埋葬できないことは、大きな悲しみであった。彼らは天に向かって両手を挙げ、嗚咽しながら主に向かって、御自身の教会をこのような苦難から救い出してくださるよう祈った。

この頃、エフェソスには七人の少年たちがいた。彼らは町の高官たちの息子であり、軍に奉仕していた。彼らの名は、マクシミリアン、イアムヴリヒ、マルティニアン、ヨハネ、ディオニシウス、 エクサクストディアン、そしてアントニンである。 血の絆で結ばれてはいなかったが、彼らは霊的な絆――すなわち、信仰とキリストの愛――によって結ばれていた。彼らは共に祈り、断食し、肉を死なせ、厳格な貞潔を守ることで、キリストと共に十字架につけられたのである。　キリスト教徒に対する絶え間ない迫害と残酷な処刑を目の当たりにし、彼らは心の底から悲しみ、涙と嘆きを禁じ得なかった。　――異教徒たちが王と共に犠牲を捧げに出かけたとき、聖なる少年たちは彼らを避け、キリスト教の教会にやって来て、主の御前で地にひれ伏し、頭に灰を振りかけ、涙ながらの祈りを主へと捧げた。　彼らのこうした振る舞いは、一部の人々の目に留まらなかったわけではない（当時、誰もが互いに、相手がどの神に祈っているかを監視しており、兄弟が兄弟を、父が息子を、息子が父を死に追いやっていた。キリストに祈っているのを見かけたら、誰も隣人を隠そうとはしなかった）。彼らは直ちに王のもとへ行き、こう言った。

「王よ、永遠に生き給え！　あなたは遠くからキリスト教徒を呼び寄せ、生け贄を捧げるよう説得しておられますが、その一方で、あなたの身近にいる者たちはあなたの王権を軽んじ、あなたの命令に耳を貸さず、キリスト教の信仰に固執して命令に背いています。」

激怒した王は、具体的に誰が自分の命令に背いているのかと尋ねた。密告者たちはこう答えた。

「都市の統治者の息子であるマクシミリアンと、エフェソスの名門市民の息子である他の六人の少年たちです。彼らは皆、すでに相当な軍階を持っています。」

[5447] カルタゴ――アフリカ北岸の都市。同地は、同地で設立された西フェニキアの偉大な国家にその名を冠した。この国家は、紀元前146年にローマの属州となるまで、長きにわたりローマのライバルであった。

[5448] エフェソス――小アジアのイコニア地方の主要都市で、カイストル川の河口近くに位置し、古代において前アジア全域の貿易の中心地であった。アルテミス（ディアナ）神殿で有名であった。

王は直ちに彼らを捕らえ、鎖で縛り、自分の元へ連れてくるよう命じた。聖なる少年たちは、涙でまだ濡れたままの目をし、頭には土の跡を残したまま、すぐに王のもとに連れてこられた。彼らを一瞥すると、拷問官は言った。

「なぜ、全宇宙が崇める神々を称える祭りに、我々と共に出席しなかったのか？さあ、今すぐ行って、他の者たちと同様に、神々に相応しい供物を捧げよ。」

聖マクシミリアンはこう答えた。

「我らは、天と地を御自身の栄光で満たされた唯一の神、天の王を信仰しており、毎時、信仰と祈りという霊的な捧げ物を神に捧げております。しかし、我らの魂を穢すことのないよう、貴方の偶像に対しては、悪臭と煙を伴う動物の焼却による捧げ物は決して行いません。」

この答えを聞いた王は、若者たちから軍用ベルト――彼らが占める高い地位の象徴――を取り上げるよう命じた。

「お前たちは、王の軍隊に仕えるに値しない」と彼は言った。「お前たちは王にも神々にも従わないのだから。」

しかし、彼らの美しさと若さを見て、王は彼らを憐れみ、こう言った。

「これほど若い者たちを今すぐ苦痛にさらすのは無慈悲だ。それゆえ、美しい若者たちよ、私は君たちに熟考する時間を与える。君たちが正気に戻り、神々に生贄を捧げ、そうして命を救うことができるように。」

その後、王は彼らから鎖を外し、定められた時間まで解放するよう命じ、自らもエフェソスへ再び戻るつもりで別の町へと去っていった。

一方、聖なる少年たちは、キリストの教えに従い、王から与えられた自由な時間を善行に費やした。彼らは実家の金や銀を取り出し、それを密かに、あるいは公然と貧しい人々に配った。同時に、彼らは互いに相談し合い、こう言った。

「王が戻ってくるまで、しばらくの間、この街を離れよう。街の東にある山の中にあるあの大きな洞窟へ行き、　そこで沈黙を守りながら、主の聖なる御名を告白する際に私たちに強さを与えてくださるよう、主に向かって熱心に祈ろう。そうすれば、恐れることなく拷問者に立ち向かい、勇敢に苦難に耐え抜き、私たちの主キリストから、忠実な僕たちに用意された朽ちることのない栄光の冠を受け取ることができるだろう。」

こうして互いに合意すると、彼らはオクロンという名の東の山へと向かい、数日分の食糧を購入するのに必要なだけの銀を携えて行った。山の中にある洞窟に着くと、彼らはかなり長い間そこに留まり、絶えず神を賛美し、自分たちの魂の救いを祈り続けた。　必要な物資を買いに町へ行く役目は、最年少であった聖イアムヴリヒに任された。聖イアムヴリヒは、非常に聡明な少年であり、町へ向かう際、誰にも気づかれないよう、身なりをぼろ服に着替えた。持ち出した金の一部を貧しい人々に施し、残りで食料を購入した。 そうした街への訪問の際、聖イアムヴリヒは、 、自分の名前を隠して、王がいつ、まもなく戻ってくるのかを尋ね回った。　十分な時間が経過した後、聖イアムヴリヒは乞食に扮して再び街を訪れ、旅から戻った王の入城をこの目で確かめ、街中に告げられた王の命令――すべての都市長官と軍司令官が翌朝、神々への生贄を捧げる準備をするよう命じられた――を耳にした。王はそれほど熱心な異教徒であったのである。　さらにイアムヴリコスは、王が一時的に釈放されていた彼らをも探し出し、他の市民たちと共に王の面前で偶像への生贄を捧げさせるよう命じたという話を耳にした。恐怖に駆られたイアムヴリコスは、わずかなパンを手に取り、洞窟にいる兄弟たちの元へ急いだ。　そこで彼は、自分が見聞きしたすべてを彼らに語り、また、彼らを犠牲の捧げ物のためにすでに捜索していることについても伝えた。この知らせに彼らは恐怖に襲われ、泣き叫びながら地面にひれ伏し、神に祈りを捧げ、神の庇護と慈悲に身を委ねた。　祈りを終えて立ち上がった聖イアムヴリクスは、持ち帰ったわずかなパンで食事を用意した。すでに夕方となり、太陽は沈みかけていた。席に着いた聖なる少年たちは、これから待ち受ける苦難に備えて、その食事で腹を

満たした。　質素な食事を終えると、彼らは互いに語り合い、キリストのために苦難を勇敢に耐え抜くよう、互いに励まし合い、勇気づけ合った。この魂を救う会話の最中、彼らは眠気に襲われた。心の悲しみによって、彼らの目は重くなっていたのである。　しかし、慈悲深く、人を愛する主は、常に御自身の教会と忠実な僕たちを顧みておられ、七人の聖なる少年たちに、驚くべき、並外れた眠りにつくよう命じられた。それは、将来、驚くべき奇跡を現し、死者の復活について疑う者たちを確信させるためであった。　聖者たちは死の眠りについたが、彼らの魂は神の御手の中に守られ、その体は眠っている者のように朽ちることなく、変わることなく横たわっていた。

朝、王は七人の高貴な少年たちを探し出すよう命じ、捜索が実を結ばなかった後、高官たちにこう言った。

「私は若者たちを憐れむ。彼らは名門の出身であり、美貌にも恵まれていたからだ。おそらく、我々の怒りを恐れてどこかへ逃げ出し、隠れているのだろう。とはいえ、我々の慈悲により、悔い改めて再び神々に立ち返る者たちには、容赦する用意がある。」

これに対し、貴族たちはこう答えた。

「王よ、あなたや神々に反抗したあの若者たちのことを悲しまれる必要はありません。彼らは悔い改めるどころか、かえって神々を冒涜する者となり、街の貧しい人々に大量の金銀を配った後、跡形もなく姿を消したとの報告を受けています。」　もしお許しいただければ、彼らの両親を呼び出し、拷問をかけて息子たちの居場所を白状させることができます。

王はためらうことなく、聖なる若者たちの両親を呼び出すよう命じ、彼らにこう言った。

「わが王国を辱めた息子たちの行方を、隠さず告げよ。彼らの代わりに、お前たちを処刑するつもりだ。お前たちは彼らに金や銀を与え、我々の前に現れないようどこかへ送り出したのだから。」

両親はこう答えた。

「王よ、あなたの慈悲にすがります！怒らずに私たちの話を聞いてください。私たちはあなたの王国に対して陰謀を企てたことはなく、あなたの命令に背いたことも一度もなく、常に神々に犠牲を捧げてきました。それなのに、なぜ私たちに死を脅かすのですか？」　もし息子たちが堕落したとしても、それを教えたのは私たちではありません。私たちは彼らに金や銀を与えたこともありません。彼らは自ら密かにそれを持ち出し、貧しい人々に分け与えた後、逃げ出し、私たちに届いた噂によれば、オクロン山の大きな洞窟に身を隠しているとのことです。すでに何日も経ちますが、彼らはまだ戻ってきません。彼らがそこで生きているのか、それとも死んでいるのか、私たちには分かりません。

王は話を聞き終えると、両親を帰し、その後、洞窟の入り口を石で塞ぐよう命じ、こう言った。

「彼らは悔い改めず、神々に帰依せず、私の元にも現れなかったのだから、これからは二度と人の顔を見ることもなく、石で塞がれた洞窟の中で飢えと渇きに苦しみながら死んでいくがよい。」

王とエフェソスの住民たちは、少年たちがまだ生きていると思い込んでいたが、彼らがすでに主のもとへ旅立ったことを知らなかった。洞窟の入り口を塞いでいたその時、　王の侍従であるテオドールとルフィン――彼らは密かにキリスト教を信仰していた――は、二つの錫の板に七人の聖なる少年たちの苦難を記し、その名前も添えた。そして、彼らはこれらの板を銅の箱に入れ、洞窟の通路に積み上げられた石の真ん中に置いた。　もし、主がご自身の栄光ある再臨の前に御自分のしもべたちを訪ねられ、いつかこの洞窟が開かれ、聖人たちの遺体が発見されたならば、私たちの記述によって彼らの名前と行いを知り、これらの遺体が、キリストを告白するために封鎖された洞窟の中で亡くなった殉教者たちの遺体であることを理解するだろう、と彼らは考えたのである。　こうして洞窟の入り口は塞がれ、その上に封印が施された。

その直後、不敬虔なデキウスが亡くなった。彼の後にも、神の教会を迫害した多くの不敬虔な王たちが続いたが、コンスタンティヌス大帝の時代になって、ようやくキリスト教の王たちの時代が訪れた。 敬虔なテオドシウス2世の治世[5449] 、すなわちコンスタンティヌス大帝の死からすでにかなりの時間が経過していた頃、主イエス・キリストが御自身の教会に、あらゆる疑いを打ち砕く明確な教えを授けておられたにもかかわらず、死者の復活を否定する異端者たちが現れた。 それにもかかわらず、多くの者が疑いを抱き、信徒だけでなく、一部の司教さえも異端の信奉者となってしまった。異端に傾いた貴族や司教たち――特に後者の中ではエギノスのテオドロス司教が際立っていた――によって、正信者たちに対する激しい迫害が引き起こされた。 異端者の中には、死後、人々は報いを期待することはできないと主張する者もいた。なぜなら、死によって肉体だけでなく魂も消滅するからである。一方、魂は報いを受けるが、肉体は朽ち果てて滅びてしまうと主張する者もいた。

「どうして――」と彼らは言った。「その遺灰さえも残っていないのに、何千年も経ってから、これらの肉体がよみがえることができるだろうか？」

異端者たちはこのように論じ、その不敬虔さゆえに、福音書にあるキリストの御言葉――*「死者は神の御子の声を聞き、それを聞いて生き返る」*（ヨハネ5:25）――を忘れ、預言者ダニエルに記された次の言葉も忘れていた。 *「地の塵の中で眠っている者の多くが目を覚ます。ある者は永遠のいのちのために、またある者は永遠の侮辱と恥辱のために」*（ダニエル12:2）、――そして、神の御名によって語られた預言者エゼキエルの言葉：*「見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、わたしの民よ、あなたがたをあなたがたの墓から導き出す」* （エゼキエル37:12）。聖書のこの教えを忘れていた異端者たちは、神の教会に大きな混乱をもたらした。彼らはテオドシウス王に深い悲しみを与えた。王は断食と涙をもって熱心に神に祈り、万物の創造主である神が、その教会を破滅的な異端から救い出してくださるよう願った。 慈悲深き主は、信仰の真理から迷い出て滅びる者が一人でもいることを望まれないため、王の祈りと多くの信徒たちの涙に満ちた嘆きを聞き入れ、待ち望まれる死者の復活と永遠のいのちの神秘を明らかに示された。 神の摂理により、次のような出来事が起こった。アドリウスという名の男がいた。彼は、眠りについた少年たちが閉じ込められていたオクロン山の支配者であったが、山に空き地があったため、そこに羊の囲いを作ろうと考えた。 その建設の際、奴隷たちは洞窟の入り口を塞いでいた石を取り除いた。彼らは山の中に洞窟があるとは全く予想しておらず、その石が山の自然な一部であると考えていた。 石を切り出し、作業現場へ運び出すうちに、彼らは洞窟の入り口に、人が自由に通れるほどの隙間を作ってしまった。その時、かつて四日間死んでいたラザロをよみがえらせた（ヨハネ11:39、43–44）をよみがえらせた方である、主イエス・キリストは、すでに長年にわたり（約二百年）眠り続けていた七人の聖なる少年たちをよみがえらせた。主の神聖な御命令により、聖なる殉教者たちは、あたかも眠りから覚めたかのようによみがえった。よみがえった彼らは、まず第一に主への朝の賛美を捧げ、その後、慣例に従って互いに挨拶を交わした。 彼らには、まるで普通の夜の眠りから目覚めたかのように思えた。なぜなら、死からの復活を示唆するものは何一つなかったからだ。彼らの衣服は全く傷んでおらず、外見も少しも変わっておらず、相変わらず健康と美しさに満ち溢れていた。 そのすべてが、聖なる若者たちを思わず「昨日は眠りにつき、今朝目覚めたのだ」という考えへと導いた。互いに会話を交わす中で、彼らはキリスト教徒への迫害や、偶像への生贄を捧げるよう命じた王の命令に従って街へ向かわなければならないことを悲しげに振り返った； 彼らは、デキウスが自分たちを拷問するために探しているのだと確信していた。聖ヤムブリコスに目を向け、彼らは彼に、街で聞いたことをもう一度話してほしいと頼んだ。聖ヤムブリコスはこう答えた。

[5449] テオドシウス2世――408年から450年まで在位した皇帝。

「昨日あなた方に言ったことと同じことを、今日も言います。王は本日、すべての市民に犠牲の捧げ物の準備をするよう命じ、同時に私たちも探し出し、皆と共に王の目の前で偶像を拝ませようとしています。もしそうしなければ、王は私たちを拷問にかけるでしょう。」

すると、聖マクシミリアンは皆に向かってこう言った。

「兄弟たちよ、外に出て、恐れずにデキウス王の前に現れよう。いつまでここに、臆病者のように座り続けているつもりか？　出て行って、この世の王の前で恐れずに、天の王、まことの神、我らの主イエス・キリストを告白しよう。そして、その聖なる御名の栄光のために、我々は血を流し、魂を捧げよう。拷問者や死の苦しみなど恐れることはない。それらは、我々がキリスト・イエスへの信仰によって待ち望む永遠の命を、我々から奪うことはできないのだ。　さて、兄弟イアムヴリクよ、いつもの時間に私たちのために食事を用意するよう心掛けてほしい。銀貨一枚を持って町へ行き、そこで昨日よりも多くのパンを買ってこい――昨日、　持ってきた量は少なかったため、私たちは今、空腹なのだ。　デキウスが私たちについてどのような命令を下したか確かめ、一刻も早く戻ってきてほしい。そうすれば、食事をとって力を取り戻し、自らの意志でここを出て、自ら苦難に身を投じることができるのだから。

聖イアムヴリコスは銀貨を受け取り、町へと向かった。まだ夜も明けきらず、夜明けの光が差し始めたばかりの頃だった。

洞窟を出ると、聖イアムヴリコスは驚いたことに石が置かれているのを見た。「これはどういうことだろう」と彼は思った。「いつ置かれたのか？　昨日まではここになかったのに」。山を下りながら、彼は恐怖を抱きつつ歩いた。街に入れば、誰かに見知られ、王のもとへ引き渡されてしまうのではないかと恐れていたのだ。　町の門に近づくと、聖イアムヴリヒは大きな驚きをもって、その門に美しい芸術的造作の尊い十字架が掲げられているのを見つけた。そして、どこを見渡しても、同じ驚きをもって、他の建物や住居、城壁に同様の装飾が施されていることに気づいた。　聖イアムヴリヒは町の別の門へと向かい、そこで壁に掲げられた尊い十字架の像を不思議そうに眺めた。彼は町のすべての門を巡り、至る所で聖なる十字架を目にした。その不可解さに、聖イアムヴリヒは正気を失いそうになった。 再び最初の門に戻ると、彼は考えた。「これは一体どういうことだろうか？ 昨日までは、信者たちが密かに保管していたもの以外、どこにも尊い十字架の像はなかったのに、今やそれらは町の門や城壁に公然と掲げられている。私は本当にそれを見ているのか、それとも気のせいなのか？ もしかして、私は夢を見ているのだろうか？」 気を取り直して、彼は町の中に入った。 少し進むと、聖イアムヴリクスは、多くの人がキリストの御名によって誓いを立てているのを耳にした。　彼は恐怖に襲われ、こう考えた。「昨日までは誰も公然とキリストの御名を口にすることを敢えてしなかったのに、今や多くの人の口からその名を聞く。どうやらここはエフェソスではなく、別の都市のようだ。建物も異なり、人々の服装も全く違う。」道を進みながら、彼はある男に尋ねた。

「この町の名前は何ですか？」

「エフェソスです」と、その男は答えた。

聖ヤムブリコスはそれを信じず、相変わらずこう考えていた。「間違いなく、私は別の街に迷い込んでしまった。早くパンを買って、この街から急いで出なければ、完全に道に迷ってしまうだろう。」　パン売りのところへ近づくと、彼は銀貨を取り出してパンの代金として渡し、購入と釣り銭を待つために立ち止まった。その銀貨は非常に大きく、古代の王たちの銘文と肖像が刻まれていた。売り手は銀貨を受け取ると、それを別の人に示し、その人は三人目に渡し、その人は四人目に渡した。そこに居合わせた他の人々も近づいてきた。皆、銀貨を見てその古さに驚き、聖イアムブリコスをじっと見つめながら、互いに耳打ちしてこう言った。

「きっとこの少年は、遥か昔に隠された何らかの財宝を見つけたに違いない。」

聖イアムブリコスは、彼らのささやきに気づき、自分が正体を見破られ、捕らえてデキウス王に引き渡すよう共謀しているのではないかと恐れた。

「お願いです」と彼は言った。「この銀貨を受け取ってください。お釣りはいりません。」

しかし、周囲の人々は聖イアムヴリコスを捕らえ、押さえつけながら言った。

「どこから来たのか、そしてどのようにして古代の王たちの時代の宝を見つけたのか、私たちに明かしてください。その一部を私たちに分け与えてくれれば、あなたのことは誰にも言いません。もし私たちと分け合うことに同意しなければ、あなたを裁判官に引き渡します。」

これを聞いて、聖イアムヴリコスは驚き、戸惑いながら黙り込んだ。彼らはさらに続けた。

「もうこの宝を隠し通すことはできない。どこにあるのか、拷問で白状させられる前に、自発的に話したほうがいい。」

聖ヤムヴリヒは何を言えばよいか分からず、口がきけない者のように黙り込んでいた。すると、男たちは彼の腰帯を外し、それを首にかけ、市場の中央に立たせた。人々の間には、宝物を見つけた少年が捕らえられたという噂が広まった。　聖イアムヴリヒは大きな群衆に囲まれた。皆が彼の顔を見つめながら、「こいつはここら辺の人間じゃない、今まで一度も見たことがない」と言っていた。聖イアムヴリヒは、宝物など見つけていないと伝えたいと願っていたが、強い驚きから一言も発することができなかった。　彼は群衆を見つめ、知り合いや家族――父、母、あるいは使用人――の誰かを見つけようと努めた。しかし、誰も見つけられず、誰一人として彼を認識しないことに、彼はさらに大きな驚きを覚えた。昨日までは誰もが彼を名家の息子として知っていたのに、今日となっては誰も彼を認識しないばかりか、彼自身も知り合いを一人も見つけられないのだ。　聖イアムヴリコスが捕らえられたという噂が街中に広まり、それは都市の長とステファノス司教（　）の耳にも届いた（[5450]）。神の御摂理により、二人はその時共にいて、互いに会話を交わしていた。二人は共に、銀貨を持ったまま捕らえられたその若者を自分の元へ連れてくるよう命じた。

道中、聖イアムブリコスは、自分がデキウス王のもとへ連れて行かれるのだと思い、知り合いの姿を見出せることを期待して、人混みをさらに注意深く見渡したが、その期待はすべて裏切られた。　彼が都市の長と司教の前に連れて行かれると、二人は銀貨を取り上げ、それをじっくりと眺めながら、それが非常に古の王たちの時代のものだと知り、驚嘆した。その後、都市の長は聖イアムヴリコスに尋ねた。

「お前が見つけた宝はどこにある？　きっと、そこからこの銀貨を盗んだのだろう。」

「宝物など知りません」と聖イアムヴリヒは答えた。「私が知っているのは、これを両親から受け取ったということだけであり、この町で普段使われている銀貨と何ら変わりはありません。私に何が起きているのか、驚きと困惑を禁じ得ません。」

「あなたはどこから来たのですか？」と、市長は尋ねた。

聖人はこう答えた。

「この町からだと思います。」

これに対し、市長は言った。

「お前は誰の息子だ？　ここにお前を知っている者はいるか？　もしいるなら、その者にここに来て、お前の言葉が真実であることを証言させよ。そうすれば、お前を解放してやる。」

聖イアムヴリコスは、父、母、祖父、兄弟、その他の親族の名前を挙げたが、誰も彼らを知らなかった。

「お前は嘘をついている」と市長は反論した。「我々が聞いたこともないような、奇妙で風変わりな名前を挙げているではないか。」

[5450] 他の、より信頼性の高い情報によれば、ここで述べられている出来事は、ステファノスの前任者である聖メムノン（その記念日は12月16日）の時代に起きたものである。

聖なる少年は戸惑いながら黙り込み、うつむいていた。その場にいた者たちのうち、ある者たちはこう言った。

「あいつはふざけているんだ。」

–いいえ、彼は災いを避けるためにそう装っているだけだ――と他の人々は答えた。

市長は怒りを露わにし、聖イアムヴリコスを脅し始めた。

「お前の両親が使っていた他の銀貨の中から、この銀貨を一つ取ったと言うが、どうしてそれを信じられようか？　この銀貨には、すでに何年も前に亡くなった古代の王デキアの肖像と銘文が刻まれている。しかも、この銀貨は現在流通しているものとは全く似ても似つかないではないか。」まさか、お前の両親は、デキウス王を覚えているほど年老いていて、その銀貨を持っているというのか？お前はまだ若く、三十歳にもなっていないくせに、その狡猾さでエフェソスの長老たちや賢者たちを騙そうとしているのだ。　私はお前を牢獄に放り込み、懲罰に処し、真実を語り、お前が見つけた財宝の場所を明かすまでは決して釈放しない。

総督のこの演説を聞く中、聖ヤムブリコスは、その脅しに恐れをなす一方で、デキウス王が古代の人物であったという言及に驚きを覚えた。彼はひざまずき、こう言った。

「お願いいたします、諸君。私が尋ねることに答えてください。そうすれば、私は強制されることなくすべてを話します。デキウス王はこの街におられますか。彼は生きておられますか、それとも亡くなられましたか？」

司教は彼にこう答えた。

「現在、わが子よ、この国にはデキアという名の王はいない。かつて、遠い昔には、確かにそのような王がいた。今は敬虔なテオドシウスが統治している。」

すると、聖イアムヴリコスは言った。

「どうか、私と共においでください。オクロン山の洞窟で私の友人たちをお見せしましょう。彼らを見れば、私の言葉が真実であることを確信していただけるでしょう。」　私たちは確かに、デキアから逃れるために、数日前ここに身を隠し、あの洞窟に潜んでいたのです。デキアについては、昨日エフェソスに入城するところを目撃しましたが、今ここがエフェソスなのか、それとも別の都市なのかは分かりません。

司教は考え込みながら、心の中でこう呟いた。

「神はこの若者を介して、何らかの秘密を明らかにしようとしているのだ。」

「彼と一緒にいこう」と、司教は市長に語りかけた。「何か奇跡的なことが起こるはずだ。」

立ち上がると、司教と市長は若者と共に出発し、その後を市の役人全員と大勢の民衆が従った。　行列が山にたどり着くと、聖イアムヴリクが真っ先に洞窟に入り、司教は他の者たちと共に彼の後を追った。すると、洞窟の入り口にある二つの岩の間に、二つの銀の封印がかけられた小さな銅の箱を見つけた。　皆の前でその箱を開けると、司教と市長はその中に二つの錫の板を見つけ、そこには七人の聖なる少年たち――市長の息子マクシミリアン、イアムヴリヒ、マルティニアン、ヨハネ、ディオニシウス、　エクサクストディアン、アントニン――の七人の聖なる少年たちが、デキウス王から逃れ、この洞窟に身を隠したことが記されていた。デキウスの命令により、洞窟の入り口は石で塞がれ、聖なる少年たちはその洞窟の中でキリストのために殉教の死を遂げた。この読み上げを聞いた後、皆は驚きに包まれ、声を高らかに神を賛美した。

洞窟に入ると、彼らは美しさに満ち溢れた聖なる少年たちを見つけた。彼らの顔には喜びが表れており、神の恵みの光に輝いていた。司教、都市長、そして民衆は聖なる少年たちの足元にひれ伏し、これほど栄光に満ちた奇跡を目にすることを許してくださった神を賛美した。　聖なる少年たちは、自分たちのこと、そしてデキウス帝のもとでキリスト教徒への迫害がどのようなものであったかについて、すべてを彼らに語った。直ちに司教と都市長は、敬虔なテオドシウス王に手紙を送り、彼の治世において主が示された奇跡を目撃するために、高潔な人々を派遣するよう求めた。

「なぜなら」と彼らは記した。「このたび、主は聖なる少年たちの肉体の復活において、魂だけでなく肉体をも含む、将来の普遍的な復活の姿を示されたからである。」

テオドシウス皇帝はこの知らせを受け、大いに喜び、直ちに高官や大勢の民衆を従えて、コンスタンティノープルからエフェソスへと急行した。そこでは、その高貴な地位にふさわしく、盛大に出迎えられた。　司教、市長、その他の市当局者たちは、皇帝を洞窟へと案内した。テオドシウスが洞窟の中に入り、天使の如き聖なる少年たちを目にしたとき、彼は彼らの足元にひれ伏した。すると少年たちは両手を差し伸べ、彼を地面から起こした。　立ち上がった王は、聖なる少年たちを愛情を込めて抱きしめ、彼らの額に口づけをしながら涙を禁じ得なかった。その後、彼らの向かい側に地面に座り、感極まって彼らを見つめながら、神を賛美した。

「わが主よ」と彼は言った。「あなた方の顔に、かつてラザロを墓からよみがえらせた、わが王であり主であるキリストご自身を見ます。　今や、主は御自身の全能の御言葉によって、あなた方をよみがえらせ、来るべき死者の復活を私たちに明らかに告げ知らせてくださったのです。その時、墓の中にいる者たちは、神の御子の声を聞いて生き返り、朽ちることなくそこから出て来るでしょう。

聖マクシミリアンは王にこう言いました：

「今より、あなたの信仰の堅固さゆえに、あなたの王国は揺るぎないものとなるでしょう。そして、生ける神の御子イエス・キリスト（マタイ16:16参照）は、御自身の聖なる御名によって、あらゆる悪からそれを守ってくださいます。主が、あなたのために、万人の復活の日よりも先に私たちをよみがえらせてくださったことを信じてください。」

かなり長い会話の中で、聖なる少年たちは王に、他にも多くの魂を救う真理を語り、王は司教や貴族たち、そして民衆と共に、霊的な喜びをもって彼らの言葉に耳を傾けた（ギリシャの教会史家ニキフォロス・カリストは、王が一週間の間、毎日彼らと食事を共にし、彼らに仕えたと付け加えている）。　これらの対話のあと、聖なる少年たちは、その姿に心を奪われて見守る人々の目の前で、再び頭を地面に伏せ、神の御心により、この世の眠りについた。王は彼らの前で激しく泣き、出席者全員が涙を禁じ得なかった。

王は、聖なる少年たちの遺体を納めるために、銀と金で七つの墓を造るよう命じた。その夜、少年たちは王の夢に現れ、自分たちに手を触れないで、以前と同じように地上で安らかに眠らせておくよう命じた。　聖なる少年たちが息を引き取った場所には、多くの聖人たちが集まり、輝かしい祝祭を執り行い、聖なる殉教者たちを尊く称えた。　王は、その国の貧者や困窮者たちに惜しみない施しを行い、牢獄に囚われていた者たちを解放し、その後、喜びをもってコンスタンティノープルへ戻り、私たちの神キリストを賛美した。罪深い私たちからも、父と聖霊とともに、今、常に、そして世々限りなく、キリストに栄光と誉れがありますように。アーメン[5451]。

[5451] この奇跡的な物語には、その信憑性を裏付ける極めて強力で反駁できない証拠がある。同時代人でこの出来事を記述した聖ヨハネス・コロヴ（5世紀）は、パイスィオス大聖人の伝記の中でこの出来事について言及しており、シリアの著述家であり、メソポタミアのサルーゲン正教会の司教であったヤコブも、この出来事の記述を残している。　その翻訳は、グリゴリオス・トゥルスキュス（594年没）にも知られていた。7世紀に正教会から分離したシリア人マロン派は、礼拝の中で聖少年たちを崇敬している。彼らはエチオピア暦や古代ローマの殉教者名簿にも記載されている。　彼らの物語はムハンマドや多くのアラブの著述家にも知られていた。少年たちの洞窟は、現在でもエフェソスの近く、プリオン山の山腹にあるとされている。彼らの聖遺物に関する最後の記録は12世紀のもので、聖地巡礼の旅をした修道院長ダニエルがそれを見たという。この尊い聖遺物のその後の行方は不明である。

トロパリオ、第4調：

信仰の偉大な奇跡よ、洞窟をまるで王の宮殿のようにして、七人の聖なる少年たちはそこに留まり、朽ちることなく眠りについた。そして長い時を経て、まるで眠りから覚めるかのように蘇り、すべての人間の復活の証しとなった。彼らの祈りによって、キリストよ、神よ、私たちを憐れんでください。

コンダク、第4調：

この世の朽ちるものを軽んじ、朽ちることなき賜物を受け、死してもなお朽ちることなく留まった。それゆえ、長い年月を経て、彼らは起き上がり、激しい不信仰をすべて葬り去った。今日、信者たちはこれを称え、キリストを賛美して歌おう。

8月18日

8月5日（旧暦）

同日、聖殉教者カンティディアとカンティディアナ（エジプトで石打ちに遭って殉教）およびシヴェラ（同じくエジプトで矢によって殉教）の記念日。

同日、聖なる義人ノンナ、聖

聖グレゴリオス・テオロゴスの母である聖なる義人ノンナの記念日。

聖殉教者ポンティウスの生涯と受難

記念日：8月5日

主が御自身に引き寄せてくださらなければ、誰が信じることができるだろうか。主が助けてくださらなければ、誰が偉業を成し遂げることができるだろうか。キリストが与えてくださらなければ、誰が殉教の冠に値することができるだろうか。　そして、私のような不適格者――と、この伝記の著者であるヴァレリウスは語る。彼は聖殉教者ポンティウスと共に育ち、学んだが――彼と共にキリストのために死ぬほどの恵みは受けられなかった。しかし、彼の偉業と殉教ゆえに、主からの憐れみを望んでいる。　私が彼について語ることはすべて――キリストとその御使いたちを証人として呼び求めますが――自分の目で見て、自分の耳で聞き、さらには一部を彼と共に体験したものです。　それゆえ、あなた方もこの真実の物語を信じてください。そうすれば、あなた方の信仰によって、死者の復活の日に、聖なる殉教者と共に主からの報いを受けることになるでしょう。

ローマには、[5452] という高名な元老院議員マルクスが住んでいた。彼には子供がなく、それは彼自身にとっても、妻のユリアにとっても大きな悲しみであった。　結婚二十二年目、ユリアは大きな喜びをもって妊娠したことを知った。妊娠五ヶ月目、彼女は夫と共に偶像の神殿を巡っていた――二人はともに異教徒であった――「偉大なる」と呼ばれたディヤの神殿にたどり着いた。　そこでユリアは、頭に冠を戴いて偶像の前で生贄を捧げていた祭司に目を向けた。すると突然、祭司は激しい興奮状態に陥り、冠を脱ぎ捨ててそれを粉々に砕きながら、涙を流して叫んだ。

「この女は、この偉大なる神殿を根こそぎ破壊し、その神々を滅ぼす者を胎内に宿しているのだ！」

[5452] 以下、聖ファヴィウスの伝記を参照のこと

動揺した司祭は、この言葉を大きな声で何度か繰り返した。その声に、そこにいた者たちは皆恐怖に襲われ、とりわけマルクスとユリアは震え上がり、神殿から逃げ出して、神殿の近くにある自宅へと駆け込んだ。ユリアは石を手に取り、腹や脇腹を叩きながらこう叫んだ。

「ああ、もし私が、神殿を滅ぼし、神々を打ち砕くその子を身ごもっていなければよかったのに。彼を産むくらいなら、私自身が彼と共に死んだほうがましだ！」

出産の時が近づくと、彼女は全く健康な赤ん坊を産んだ。しかし、母親が自らに石で激しく打ちつけていたことを思い出し、誰もがその子は死んでいるだろうと予想していたのだ。ユリアは生まれたばかりの赤ん坊を殺そうとしたが、父親はこれに反対し、こう言った。

「ディイが望むなら、自ら敵に復讐するだろう。我々は自分の子を殺すようなことはしない。」

こうして少年は生き延び、ポンティウスと名付けられた。息子が成長すると、両親は彼を学校へ通わせ、決して神殿へ連れて行くことはなかった。　少年は年齢だけでなく知性も日増しに高まり、すでに若き頃には、まさに哲学者と呼ぶにふさわしい存在となっていた。同時に、彼は優れた記憶力と幅広い読書量に恵まれていたため、他の学問においても非常に博識であり、真の知識を求める熱意において、ポンティウスは同世代の誰よりも優れていた。

ある早朝、彼はある師のもとへ向かう途中、あるキリスト教徒の家の前を通りかかった。ちょうどその時、ポンティアン神父と共に集まっていた信者たちが、[5453] で朝の詩篇を歌っていた。 その歌声に耳を傾けると、ポンティウスは次の言葉を聞き取った。*「私たちの神は天におられ、御心のままにすべてをなされる。しかし、彼らの偶像は銀や金、人の手による造り物である。彼らには口があるが、語らない。目があるが、見ない。耳があるが、聞かない。　鼻はあるが、匂いを嗅ぐことはできない。手はあるが、触れることはできない。足はあるが、歩くことはできない。そして、彼らは喉で声を上げることさえできない。彼らを造った者たちも、彼らに望みを置く者たちも、彼らと同じようになるように」*（詩篇113:11–16）。

立ち止まると、彼はため息をつき、思わずこの言葉の意味について考え込んでしまった。そして、聖霊の恵みに心を打たれ、ポンティウスは涙を流し、両手を天に掲げて叫んだ。

「神よ、今、あなたへの賛美が捧げられているのを耳にしています。どうか、あなたを知ることができますように！」

それから彼は家の扉に近づき、丁寧にノックし始めた。窓の上から顔をのぞかせた人々が教皇に言った。

「ある少年が扉を叩いています。」

聖霊の啓示によってすでにすべてを知っていた父は、こう言った。

「行って、彼に扉を開けて、ここへ来させてください。*『神の国は、このような者たちのものである』からです*（ルカ18:16）。」

誠実な少年は、同年代の学びの仲間であるヴァレリウス――後に聖ポンティウスの伝記を著した人物――ただ一人を連れて家に入った。自分の奴隷たちは通りに残した。　部屋に入って礼拝が行われているのを見ると、少年は隅に退き、礼拝が終わるまでそこに留まり、注意深く耳を傾け、心を打たれていた。その後、彼は聖なる教皇のもとへ歩み寄り、涙を流しながらその足元にひれ伏して、こう言った。

「お願いです、父よ、今あなたがたが歌われた言葉の意味を教えてください。異教徒の偶像は目が見えず、耳も聞こえず、匂いも嗅げず、手で触れることもできません。とりわけ、*『それらを作る者や、それらに頼る者たちは、それらに似ている』*という言葉に深く心を打たれました。」

教皇は愛情を込めてポンティウスをそばに引き寄せ、こう言った。

[5453] 聖ポンティアン――230～235年のローマ教皇。

「わが子よ、神があなたの心を照らし、神へと向かわせたことがわかる。　考えてみてほしい――偶像のすべてが、金や銀、あるいは銅、あるいは何らかの物質から作られているのではないだろうか？　石の偶像が山から切り出され、そこから杭に刺されて市場へ運ばれ、売られていることを知らない者はいないだろう。　土から造られたこれらの偶像は、将来、破壊され、土に還ることになるのに、果たして神であると言えるだろうか。一方、私たちが信じる私たちの神は天におられ、その御姿は肉眼ではなく心の目によってのみ見ることができ、信仰によってのみ知ることができるのである。

これに対し、至福のポンティウスは次のように答えた。

「わが父であり主よ、あなたの仰ることは全くその通りです。偶像には魂がなく、動かないものであること、そしてそれらが市場やカピトリーオ、神殿だけでなく、あらゆる通りに溢れていることを、果たして誰が本当に見ないというのでしょうか。その数は数え切れないほど多く、　それらは実に多様な姿形をしており、人間の知性が到達しうる限り、極めて高度な技術によって作られている。　また、それらが風で倒れないよう、鉄や錫でその場所に固定されており、それでも壊れないことも、誰の目にも明らかではないか。さらに、泥棒や強盗が金や銀の偶像を頻繁に盗み出すことも周知の事実である。それらが、他の人々から盗まれないよう、ある人々による保護を自ら必要としているのに、どうして人々を悪から守ることができるというのか？

聖ポンティアン教皇はその少年の知恵に感心し、彼の手を取って自分のそばに座らせようとしたが、至福のポンティウスはこう言った。

「取るに足らないことを教える先生たちの前ですら、私は座ることを敢えてしないのに、迷いの道ではなく真理の道を、闇ではなく光を私に示してくださる父の御前に、どうして私が座れるでしょうか。」

教皇はこう答えました。

「主であり、私たちの師であるイエス・キリストは、すべての者が御内にあって一つとなり（ヨハネ15:4–5参照）、互いに有益なことを教え合うようにと、私たちにそのような戒めを与えてくださいました。」

それから父は、その祝福された少年に向かって尋ねました。

「両親はいるか？」

「もう一年ほど前になります」とポンティウスは答えた。「母は亡くなりました。父だけがまだ生きていますが、すでに高齢で、私こそが父にとって唯一の慰めとなっています。」

「お父様はキリスト教徒ですか、それとも異教徒ですか？」と教皇は尋ねた。

「私の父は、大多数の人々と同様、熱心な異教徒です」とポンティウスは答えた。

「人間からの教えを一切受けずにあなたを啓蒙された神は、――」と教皇は語った。「あなたの父をも啓蒙し、この死すべき世にあなたを産んだ父が、あなたを通して不死の命を知るようになさるでしょう。そして、わが子よ、私の言うことを聞きなさい。キリストを信じ、永遠の苦しみから救い出す聖なる洗礼を受けなさい。」

教皇はこのような言葉で、約三時間にわたりポンティウスを教え導き、神の御国についての教えを説明した。彼と、彼と共にやってきた少年ヴァレリウスを洗礼に備えさせ、こうして聖なる洗礼を受ける準備を整えた後、教皇は二人を平安のうちに送り出した。　二人は外へ出て、豊かな牧草地を離れた子羊のように、自らの魂の救いを得たことを喜び合った。それ以来、彼らは毎日、神の聖者に訪ねては、彼から教えを受けていた。

ある日、マルクス上院議員がポンティウスに尋ねた。

「わが子よ、この数日間、師たちから何か新しいことを学んだか？」

「学び始めて以来、」とポンティウスは答えた。「今学んだこと以上に素晴らしいことを、彼らから聞いたことはありません。」

父は、息子が異教の学校で学んでいる学問から新しい知識を得たのだと思い、喜んだ。しかし、至福のポンティウスは、父をも自分と共にキリストへの信仰へと導く好機を窺い、ある日こう言った。

「父よ、私は多くの人々から、私たちが崇拝している神々は虚しく、その中に神聖なものは何一つないと聞いている。私自身もその点についてはある程度確信している。彼らは人間の器官に似たものを持っているだけで、全く無力である。　家に神々を祀りたいと願う者は誰でも、職人を雇い、その手を借りて、金や銀、あるいはその他の手頃な材料で神像を作らせているのです。父よ、お願いです。私たちの家に置かれている神々が、ここにいる間、何かしらの力を行使したのを、あなたは聞いたことがあったり、見たことがあったりするでしょうか?

「そのようなことは一度もありませんでした」とマルクスは答えた。

「それなら、なぜ彼らを崇め、生贄を捧げ、香を焚き、頭を下げる必要があるのか?」とポンティウスは尋ねた。

この言葉を聞いて、マルクは激しい怒りに駆られ、息子を剣で斬りつけようとしつつ、こう言った。

「お前は私の神々を冒涜している!」

その後、落ち着きを取り戻すと、彼は言った。

「まさか、わが子よ、我々だけが神々を認めず、彼らに供物を捧げないというのか?」

至福のポンティウスはこれに反論した。

「この街には、真の神に真の捧げ物を捧げている人々が大勢いるではないか。」

「彼らはどこにいるのか?」とマルクスは尋ねた。

「もしよければ、私が行って、すべてを詳しく説明してくれる男を連れてきますよ」とポンティウスは提案した。

父は承諾した。ポンティウスはヴァレリウスに語りかけ、こう言った。

「これこそ、至高者の御手によってもたらされた変化です」と述べ、直ちに聖なる教皇ポンティアンのもとへ赴き、彼を父のもとへ連れてきた。

教皇はマークと長い間語り合い、真の神を知ることを教え、聖なる信仰の奥義を彼に明かした。マークは心から我らの主イエス・キリストを信じ、教皇と息子と共に、家の中に立っていた偶像を打ち砕き始めた。その後、彼は息子や家族全員と共に聖なる洗礼を受けた。　洗礼を受けた後、マルコは長くは生きられず、すでに非常に高名な長老となって主のもとへ帰った。この時、祝福されたポンティウスは二十歳であった。父の死から六ヶ月後、彼はアレクサンドロス王の宮廷に召され、父の後を継いで元老院議員に任命された。　これは、神の摂理による意図的な御業であり、その後、定められた時に、ポンティウスを通じて、民のみならず王たちまでもがキリストを知るようになるためであった。真の敬虔に満ちた聖ポンティウスは、宮廷の者たち全員から自然と愛され、尊敬されていた。　この頃、聖ポンティアヌス教皇は、アレクサンドルの後継者マクシミアヌスの命令により、キリストへの信仰を告白したために殉教し、その地位は聖アンフィルが引き継いだ。しかし、彼もまた、ローマ総主教の座に就いてわずか一ヶ月で、同じマクシミアヌスの下でキリストのために殉教した。聖アンフィルの後、教皇に選出されたのは聖ファヴィウスであった。彼は聖ポンティウスを、実の父が実の息子を愛するように愛していた。　聖ポンティウスは、貧しい人々、とりわけ同じ信仰を持つ者たちに配るため、自身の全財産を彼に譲り渡した。しかし、ここで、キリストの真の僕である聖ポンティウスが、いかにして王たちをキリストへと導き、悪魔との戦いにおいて勝利を収め、殉教の冠を勝ち取ったかについて語る時が来た。

迫害者マクシミアヌスの死後、ゴルディアヌスが王となり、その後を継いだフィリップは、同じくフィリップと名付けた息子を共同統治者に任命した。二人はともに、聖ポンティウスを、賢明で敬虔であり、その助言によって統治に大いに役立つ人物として深く愛していた。 在位3年目、すなわ

ちローマ建国から1000年目の年に、彼らは神々に感謝の捧げ物を捧げるため神殿へ向かう際、愛する元老院議員ポンティウスも同行するよう招いた。

「さあ、ローマの千年記念をこの都で祝う機会を与えてくださった偉大なる神々に、感謝を捧げに行こう。」

聖ポンティウスは、異教の神殿に行くことを避けるため、あらゆる手段を尽くして彼らの招待を断ろうとしたが、王たちは友人として、執拗に彼を同行するよう呼びかけた。そこで聖ポンティウスは、王たちに唯一の真の神、すなわち我らの主イエス・キリストを啓示する好機が訪れたと悟り、こう言った。

「ああ、善良な王たちよ、神によって人々の上に立てられたお方たちよ、なぜあなたがたは、王としての栄光と権威を授けてくださったお方に礼拝を捧げないのですか。なぜ、その唯一なるお方に、賛美のいけにえを捧げないのですか？」

これに対し、フィリップ長老王はこう答えた。

「私は、偉大なるディウスに、まさに彼が私に王の権威を授けてくださったからこそ、捧げ物をしたいのです。」

聖ポンティウスは微笑みながら彼に反論した。

「王よ、ディウスを崇拝して自分を欺いてはなりません。天にはただ一人の神がおられ、その唯一の言葉によって万物を創造し、聖霊の恵みによって万物に命を与えられたのです。」

「なぜそんなことをおっしゃるのか、私たちには分かりません」と、二人の王は答えた。

「ディウスは太古の昔から存在しているのか？」と聖ポンティウスは尋ねた。

「いいえ」と王たちは言った。「かつてディウスの父であるクロノスがいた。彼はイタリアで統治し、その治世の下、イタリアの民は繁栄を享受していたのだ。」

「では、クロノスがクレタで統治していた頃、そして彼が息子のディオスに追放されてイタリアに来るまでの間、イタリアには民や統治者がいなかったというのか？」と、聖ポンティウスは再び尋ねた。

「いいえ」と彼は続けた。「あなた方の詩人たちが紡ぐ虚偽の神話に惑わされてはなりません。天にはただひとりの神がおられます――父なる神です。その神は、御子と聖霊と共に、ご自身が創造されたすべてのものを統べ治め、ご自身の力によって存在するすべてのものを支えておられます。また、神は天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された。その後に、神はご自身の像と似姿に従って不死の人間を創造し、地と海と空にあるすべてのものをその支配下に置かれた。　神が人間に授けたその偉大な栄光を見て、天から追放された悪魔は嫉妬に駆られ、人間に神の戒めを破るよう誘惑する考えを吹き込み、それによって人間が創造主であり恩人である神に対して不感謝で不従順な者となるように仕向けた。　人間は誘惑者の狡猾な助言に従い、それによって自らの不死を失い、その不従順によって自分自身だけでなく、全人類にも死をもたらした。　しかし、悪魔は　、人間を惑わしただけで満足せず、あなたがたが神と呼ぶ偶像を考案し、人類を創造主からさらに遠ざけようとしました。一方、慈悲深き主は、御自身の姿に似せて創造された人間が完全に滅びることを望まず、天の御座から御独り子である御言葉[5454] を地上に遣わすことをお許しになりました：

[5454] これは、至聖三者における第二の位格、神の御子、救い主キリストを指す名称である。この呼称はヨハネによる福音書（1:1–14）に由来する。――では、なぜ神の御子は「御言葉」と呼ばれるのか？ a) 御子の誕生を、私たち人間の言葉の起源と比較して：私たちの言葉が、無情に、目に見えず、霊的に私たちの心や思考から生まれるように、神の御子もまた、無情に、霊的に父から生まれ出る。b)　私たちの言葉が私たちの思考を明らかにしたり表現したりするように、神の御子もまた、その本質と完全性において、父なる神の最も正確な反映であり、それゆえ、御子の「栄光の輝き」であり、御子の位格の「像（写し）」と呼ばれるのである（ヘブライ人への手紙1:3）。c)　私たちが言葉を通じて他者に自分の考えを伝えるように、預言者たちを通して人々に幾度も語られた神は、ついに御子を通して語られた（ヘブライ人への手紙

神の御言葉は、聖霊の働きによって、無原罪の聖母の胎内に宿り、彼女から不可思議にも肉を受け、彼女から言い表せないほどに生まれ、御言葉は人間となり、堕落した人間を刷新し、悪魔の権勢を打ち砕くためでした。神人（神であり人である方）は、人々の前で数多くの奇跡を示されました：　彼は、生まれつき目の見えない者、麻痺した者、長年にわたり病床に縛られていた者たちを言葉によって癒やし、ハンセン病患者を清め、死者をよみがえらせ——墓に四日間横たわっていたラザロを呼び起こし、彼に命を与えた。全能の神として、彼は数えきれないほどの他の奇跡も成し遂げた。　しかし、ユダヤ人たちは、彼を信じず、また彼を妬んだため、ポンティウス・ピラト総督に彼を引き渡し、彼らを救うために来られた方を十字架に釘付けにした。しかし、彼は神として、三日目に死からよみがえり、復活後、多くの日々にわたり弟子たちの前に現れた。　御自身は、悪魔によって人間にもたらされた死を打ち砕き、御自身の死と復活によって私たちに永遠の命を与えられました。そして、御自身が死からよみがえり、もはや死ぬことがないのと同様に、私たちも、この短くも苦難に満ちた人生を終えた後、墓からよみがえり、御方と共に永遠に生きるのです。　救いの道を示された後、主は天に昇られました。もし誰かがこの救いを軽んじるならば、その者は悪魔と共に永遠の裁きを受けることになります。しかし、信仰を持ち、救いの道を歩む者は、永遠に天の御国でキリストと共にいることになるでしょう。

聖ポンティウスは長い間、王たちに教えを説いた。彼はキリストについて、信仰の奥義について、そして来世について、すべてを詳細に語った。聖霊の恵みに満ちたその言葉は、王たちの心を解き放った。彼らはその言葉の真実性をすべて理解し、心を打たれて、私たちの主イエス・キリストを信じたのである。　王たちは聖ポンティウスに、翌日には救いの神秘をさらに詳しく説明してほしいと懇願した。そうすれば、彼らは消えることのない火を避け、来世の不死の命において聖徒たちと共にその分け前を得ることができるからである。その日、そしてその後も、王たちは偶像に犠牲を捧げるためにカピトリーノの丘へは行かなかった。　ただ、ローマ建国千年の日を民衆の祭典で祝うよう命じただけだった。一方、聖ポンティウスは直ちに教皇ファヴィウスのもとへ赴き、すべてを報告した。教皇は限りない喜びに満たされ、ひざまずいてこう言った。

「主イエス・キリストよ、御自分のしもべポンティウスを通して、ローマの王たちを御名の聖なる御名を知るよう導いてくださったことを、感謝いたします！」

翌日、教皇とポンティウスは共に皇帝たちの元へ赴き、唯一の真の神と救いの道について長く語り合った。　王たちの信仰を見届けた教皇は、彼らに聖なる洗礼を授けることを宣言し、その後まもなくして実際に洗礼を授けた。王たちと共に、他の者たちも洗礼を受けた。王たちの模範に倣い、非常に多くの人々がキリストを信じたからである。この時のキリスト教徒たちの喜びを、いったい誰が語り尽くせようか。　その時、聖ポンティウスがまだ母の胎内にいた頃、神の御心により悪魔が憑かれた司祭を通じて語った予言も成就した。王たちの許可を得て、聖ポンティウスは聖ファヴィウス教皇と共に、前述の予言が語られたディヤ神殿へと向かった；　そこで彼らはまず偶像を打ち砕き、その後、神殿そのものを根こそぎ破壊した。他にもいくつかの異教の神殿が破壊され、その場所には神の聖なる教会が建てられた。この頃、非常に多くの人々がキリストに帰依し、洗礼を受けた。　しかし、彼らはローマの全住民を網羅していたわけではない。それはほんの一部に過ぎず、偶像で満たされたすべての神殿が、キリストの教会にとって好都合であったとされる、神の御心によるわずか数年の間に破壊されたわけではなかった。 教会がこの自由を享受できたのはわずか4年間であった。主イエス・キリストは、ご自身の教会を炉の中の金のように試練にかけようと望まれ、新たな迫害が始

1:2）。御子はこのために受肉し、御父の御心をこれほど完全に明らかにされたので、御子を見た者は御父を見たのである（ヨハネによる福音書14:9）。

まることを許された―― 不敬虔なデキウス[5455] は、異教徒たちの指導者として、反乱を起こし、キリストへの信仰ゆえに敬虔な王たちを殺害した。　そして、心の強さを備えていなかった多くの新改宗者たちは、迫害を恐れて再び異教へと戻った。また、ある者たちは逃げ出し、できる限り身を隠したが、勇敢な者たちはキリストのために自らの魂を捧げると信じて、果敢に拷問へと向かった。　この猛烈で、嵐のように突如として巻き起こった迫害の中、聖ポンティウスはローマ市内のとある場所に身を隠したが、異教の祭司たちは彼をとりわけ執拗に捜し求めていた。彼は偶像や神殿を破壊したことで、彼らに自分に対する激しい憎悪を煽り立て、彼らは彼を拷問にかけることを切望していた。この状況により、聖ポンティウスはある夜、ローマから逃れることを決意した。それは、福音書の中で主ご自身が語られた*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい」*（マタイ10:23）という言葉に従ったからである。 彼は、ガリアの国境、アルプス山脈の近くにあるキメルという町[5456] にたどり着いた。そこで彼は、旅人であり異邦人として暮らした。デキウス帝はまもなく亡くなり、ガッルスとヴォルウジアンによる短期間の統治の後、ヴァレリアヌス[5457] とその息子ガリアヌスがローマ帝国の王位についた。　これらの皇帝たちは、ローマだけでなくそのすべての領土において、キリスト教徒という名そのものを根絶やしにしようと望んでいた。その目的のために、彼らは至る所にキリスト教徒を拷問するための特別の役人を派遣した。そのような拷問官のうちの二人、クラウディウスとアナウィウスは、とりわけガリア地方にも派遣された。彼らはまずキメルの町を訪れた。　神々に犠牲を捧げ、町の真ん中に裁判の場を設けると、彼らは、キリスト教徒を捕らえて拷問のために自分たちの前に引き出すよう命じる布告を出した。聖ポンティウスは、著名で高貴な人物であったため、真っ先に捕らえられ、この不法な裁判の場に引き出された。彼を見たイゲモン・クラウディウスは怒りを込めて言った。

「お前こそ、どういう魔術か知らぬが、ローマに混乱を引き起こし、王たちを神々から遠ざけたあのポンティウスか？」

「私は誰をも惑わしたり、いかなる騒動を引き起こしたりはしていません」と聖ポンティウスは答えた。「ただ、できる限り多くの人々を異教から真の神へと導いただけです。」

イゲモンは言った。

「我らの王たちは、お前が高貴な家柄の人間であることを知っており、神々に生贄を捧げるよう命じた。さもなければ、お前は身寄りのない者や貧民たちと共に、様々な拷問に処されることになるだろう。」

聖ポンティウスはこれに反論して言った。

「私の王であり慰め主であるキリスト。もしキリストのためにこの世の故郷を失うとしても、私は永遠の故郷を相続する者となる。また、はかない恵みを失うとしても、聖なる天使たちと共に天の栄光に与る者となるのだ。」

「なぜ、まったく理解できない言葉を口にして、救いを求めようとするのか？」とクラウディウスは尋ねた。「お前にはただ一つの道がある。神々に犠牲を捧げることだ。もしそうしなければ、お前の肉体は拷問で引き裂かれることになる。」

「私はキリスト教徒であり、決して神々に犠牲を捧げることはない、とすでに言ったではないか」と聖ポンティウスは答えた。

イゲモンは、聖ポンティウスを鎖で縛った上で牢獄に投獄し、王たちにそのことを報告するまでそこに留めるよう命じた。その後、クラウディウスは王たちへ次のような手紙を送った。

[5455] 皇帝在位：240年～251年

[5456] 現在のニース付近。

[5457] ヴァレリアヌス――252～259年の皇帝。

「宇宙の支配者、強大な征服者、ローマ皇帝ヴァレリアヌスとガリエヌス殿下へ。貴殿らの臣下クラウディウスとアナヴィウスより。ガリアの地に入り、かつてローマを混乱させ、神々を打ち砕き、その神殿を荒廃させたポンティウスを発見した。　現在は貴殿らの権威から身を隠し、貴殿らの命令に従わない者を発見しました。彼は最も高貴な元老院議員の一人であるため、我々は彼に拷問を加えることを敢えてせず、ただ鎖で縛って牢獄に閉じ込め、貴殿らがこの件を検討し、我々が彼をどう扱うべきかを命じられるまで待機させております。

王たちは次のような返答を送ってきた。

「我らの支配は、あなた方に次のように命じる。もしポンティウスが神々への生贄を捧げることを拒むならば、あなた方は彼に対して完全な権限を与えられ、いかなる方法であれ彼を処刑してもよい。」

王たちの命令を受け、総督クラウディウスとアナウィウスは法廷へと向かい、キリストの囚人を連れてくるよう命じた。クラウディウスは聖ポンティウスにこう言った。

「汝の君主たちの公正な命令に耳を傾けよ。彼らは汝に神々への生贄を捧げるよう命じている。もしこれに従わなければ、有罪判決を受けた者たちと共に拷問に処されることになる。」

聖ポンティウスはこう答えた。

「私には、唯一の主であるイエス・キリスト以外に、いかなる主もおりません。主こそが、あなたがたが私に脅かすような苦しみから、いつでも私を救い出してくださるのです。」

「不思議だ」とクラウディウスは言った。「あなたのような高貴な身分の者が、自らの意思でこれほどまでの貧困と不名誉に陥ったとは。あなたは、あなた方自身が語るように、貧しく質素な人であったというその主に仕えている。その主は、どのような罪だったのかは知らないが、ピラト――彼もまた我々と同様の総督――によって殺されたのだ。」　ローマ帝国全体を穏やかに統治している主君たちに従うほうが、あなたにとっては良いのではないか？

「私も驚いている」と聖ポンティウスは反論した。「あなたのような理知ある人間が、どうしてこれほどまでの狂気に陥り、天と地の創造主――あなたの救いのために貧しさを耐え忍ばれた方――を知ろうとせず、あえてその方を不名誉な者と呼ぶのか。　天において天使たちに崇められ、強制されることなく、自らの意志によって、私たちの救いのためにユダヤ人やピラトによる十字架刑に耐えることをお選びになった方を、恥辱にまみれた者と呼ぶなど、　ああ、もしあなたが、その謙遜においてこれほど偉大なる神の前にひれ伏そうと願うなら、たちまちあなたの心は啓発され、あなたは、自らの迷いの中で、自分の神々、いや、むしろ悪魔たちと共に、暗い深淵に横たわっていることを悟るだろう。　一方、あなたがローマの支配者と呼ぶ者たちは、木や石を崇拝することで、自ら破滅へと向かうだけでなく、彼らに従う民をも引きずり込んでいる。知っておきなさい。もしあなたがたが不信仰のままでいるならば、凄惨な死を遂げ、最後の審判の日に、あなたがたの神々と共に永遠の苦しみへと裁かれることになるのだ。

この言葉に、総督は激怒した。怒りに任せて、彼は家来たちに叫んだ。

「熊手、鉄の串、火、そして拷問に必要なものはすべて用意せよ。彼の狂気を皆の前で暴き出せ！」

「すべて準備は整っております」と家来たちは答えた。

「彼を拷問台に縛り付けろ」とイゲモンは命じた。「全身で苦痛を味わわせてやる。神が我々の手から彼を救い出せるかどうか、見てみよう。」

聖ポンティウスは、縛り台に引きずり出されている最中、イゲモンにこう語った。

「あなたは不信仰ゆえに、私の神を無力だと言うが、私は固く信じている。あなたが私に与えようとする苦しみも、私の主イエス・キリストの力によって、私の体には及ばず、苦しみから逃れるだろう。」

するとすぐに、拷問器具は大きな轟音とともに崩れ落ち、塵と化した。使用人たちは恐怖のあまり、まるで死人のように地面に倒れ込んだが、聖ポンティウスは喜びに満ちて、イゲモンにこう言った。

「今こそ、信仰の薄い者よ、私の主には*『敬虔な者を試練から救い出し、不義な者を裁きの日に至るまで留めておき、罰するために』*（IIペテロ2:9）という権威があることを、確信しなさい。」

クラウディウス・イゲモンは怒りのあまり、どうすべきか分からなかった。彼の仲間であるアナヴィウスは彼にこう言った。

「賢明な方よ、我々がここに来た時、ダルマチアの山々で捕らえられた二頭の巨大な熊が、我々と同時に連れてこられました。見世物を催すよう命じ、ポンティウスをこれらの獣に食わせてください。」

総督の命令により、すぐに見世物が用意され、聖なる殉教者はその真ん中に立たされた。二人の看守が熊を連れてきて、聖人を引き裂かせようとした。しかし、熊たちは予期せず看守たちに襲いかかり、彼らを食い殺してしまった。一方、聖ポンティウスには近づくことさえ恐れていた。　その場に居合わせた民衆からは、思わず叫び声が上がった。

「神はただひとり――ポンティウスが信じるキリスト教の神である！」

その誇りを傷つけられ、さらに激怒したイゲモンは、家来たちにできるだけ早く薪や小枝を持ってくるよう叫んだ。彼は聖なる殉教者を焼き殺そうとしたのである。聖ポンティウスは彼にこう言った。

「私を何の罪で告発するのだ？　どうして私を火に投げ込むなどということができるのか？お前自身が消えぬ炎の中で滅びるだろう。しかし、私の主は、もしお望みならば、いつでも私を火の中でも無傷のまま守ってくださる。かつてバビロンの炉の中で三人の若者を守られたように（ダニエル書第3章）。」

薪やその他の燃えやすい物が集められると、聖ポンティウスは縛られたまま、見世物が執り行われる場所の中央に立たされた。その後、彼の周囲を薪や小枝で囲み、火を放った。皆は、殉教者からは灰だけが残るだろうと思っていた。 しかし、すべてが燃え尽きたとき、 、聖ポンティウスが生きており、全く無傷であることが見えた。火は彼の衣服さえも焦がしていなかった。そして再び民は叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

自らの敗北を目の当たりにしたイゲモンは、強い恥を感じ、聖なる殉教者にこう言った。

「なぜ、まるで既にすべての拷問に打ち勝ったかのように誇り高ぶっているのか。さらに過酷な拷問を免れることなどできると思うのか。ほら、すぐ近くにアポロンの神殿がある。そこへ行って、犠牲を捧げよ。」

聖ポンティウスはこう答えた。

「私は、これまで異教の忌まわしいものから清く保ってきたこの身を、私の主イエス・キリストへの捧げ物とします。そして、あなたがたやあなたがたの王たちには、無実のキリストの僕たちを不当に迫害した罪に対し、まもなく神の公正な裁きが下るでしょう。」

そこでイゲモンは、偽善的に彼を説得し始めた。

「実のところ、あなたが私たちの裁判官となるべきであり、私たちがあなたの裁判官となるべきではない。あなたは上院議員の中でも屈指の人物なのだから。私たちは、あなたがどのような無駄な希望を抱いて、自ら名誉と富を捨て去ろうとしているのか、理解に苦しんでいる。」

「この世の名誉と富は」と聖ポンティウスは答えた。「人の目から大地も山も海も隠してしまう朝の霧のようなものです。風が吹けば、それはたちまち消え去り、まるで最初から存在しなかったかのようになります。しかし、私が求める名誉、富、そして栄光は、永遠に続くのです。」

聖人のこの演説の最中、民衆の群衆の中に大勢いたユダヤ人たちは、イゲモンに向かって叫び始めた。

「殺せ、この魔術師を早く殺せ！」

すると、聖ポンティウスは天に向かって両手を挙げ、こう語った。

「わが神よ、感謝いたします。ユダヤ人たちもまた、キリストに対してピラトに『十字架につけよ、十字架につけよ！』と叫んだ先祖たちにならって、私に対して叫んでいるのですから。（参照：ヨハネ19:6, 15）」

その後、イゲモンは聖ポンティウスに死刑判決を下した：

「彼を町の外へ連れ出し、そこで沼に投げ込め。」

すべては、拷問官の命令通りに実行された。そして聖なる殉教者ポンティウスは、首を刎ねられるというこの最後の苦しみをもって、キリストのための苦難を終えた。聖人の尊い遺体は、その苦難を記録した同世代のヴァレリウスによって、首が刎ねられたまさにその場所で埋葬された[5458]。

聖ポンティウスの死から間もなくして、彼の予言は現実のものとなった。　不敬虔なローマ皇帝ヴァレリアヌスは、ペルシャ王サポルとの戦争中に捕虜となり、そこで絶えずあらゆる種類の虐待にさらされた。サポルが馬に乗るたびに、まるで踏み台のようにヴァレリアヌスの首を足で踏みつけていた。　また、別のローマ皇帝ガリアヌスは、メディオランへ向かう道中で自らの兵士たちに殺害された。　また、イゲモン・クラウディウスとその友人アナウィウスは、聖殉教者が斬首されたまさにその瞬間に、悪霊に取り憑かれた。クラウディウスは自らの歯で舌を噛み切り、口から吐き出し、アナウィウスは目が眼窩から飛び出し、頬に沿って垂れ下がった。そして、悪霊による短いが激しい苦しみを受けた後、二人は共にこの世を去った。　異教徒やユダヤ人たちは、聖ポンティウスの言葉が実現したのを見て恐れを抱き、多くの人々が聖殉教者の墓を崇めるようになった。一方、ヴァレリウスは聖人の生涯と苦難を記し、迫害が収まる気配がないのを見て、迫害者たちを恐れ、船に乗ってリビアへと旅立った。　そして、聖殉教者ポンティウスの清らかな魂は、主であり我らの主イエス・キリストの御喜びの中へと入った。父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖殉教者エウシグニオスの記念日

記念日：8月5日

聖エウシグニオスはアンティオキア出身であった。ディオクレティアヌス、マクシミアヌス、コンスタンティウス・クロルス、コンスタンティヌス大帝およびその息子たちの治世を通じて、彼は軍務に就いていた。彼はとりわけ、聖殉教者ヴァシリスコスの対話者であり、マクシミアヌスの治世下で彼が被った苦難を記録した人物として知られている。　聖ヴァシリスカの首が斬り落とされた際、聖エウシグニオスは彼と共に、天に星々で描かれた十字架を目撃し、十字架の力に支えられて、敵と勇敢に戦った。60年間軍務に就いた後、すでに高齢であったため、コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスのもとで軍を去った。　故郷のアンティオキアに戻ると、彼は生涯を神に捧げ、常に祈りと断食に励み、絶えず神の宮を訪れ続けた。こうして彼は、キリスト教徒を迫害したユリアヌス背教王の時代まで生き延びた[5459]。この不敬虔な王がアンティオキアに到着した際、聖エウシグ

[5458] 5世紀、キメルスの司教ヴァレリアヌス（約460年）は、その説教の中で聴衆に殉教者ポンティウスに倣うよう促し、キリスト教徒たちの熱意によって飾られた彼の聖遺物について語っている。　その後、おそらくキメラがランゴバルド族によって荒廃し、その住民がニッツァへ移住した際、聖殉教者ポンティウスの聖遺骨もここへ移された。

[5459] 聖エウシグニウスは362年に剣で斬殺された。

ニウスは次のような事情により拷問にかけられた。　ある日、彼が教会へ向かう途中、二人の異教徒に出くわした。彼らは互いに何らかの論争を繰り広げており、それが口論へと発展していた。聖エウシグニオスが彼らのそばを通りかかると、彼らは彼を止め、こう言った。

「勇敢な方よ、あなたが長い間戦士であったことは我々の知るところであり、それゆえに法律にも精通しているはずです。どうか私たちの論争を裁き、公正な判決を下してください。」

聖エウシグニウスは彼らの願いを聞き入れ、正義が求める通りにその件を裁いた。一方は正しいとされ、もう一方はそうでなかった。後者は腹を立て、王のもとへ行き、エウシグニウスがキリスト教徒であると告発した。　王は聖人を捕らえ、自分の元へ連れてきて裁くよう命じた。拷問官の前に引き出された聖エウシグニウスは、恐れることなく、彼がコンスタンティヌス大帝の模範に従わず、キリストを否定して異教に転じ、真の神への崇拝を偶像崇拝に置き換えたことを非難した。　聖エウシグニオスは、その際、コンスタンティヌス大帝の信仰と敬虔さを称え、彼が天に十字架を目撃し、その力によって敵を打ち破ったこと、また異教を捨てて　心を尽くして主イエス・キリストにすがりつき、信仰と聖なる洗礼によって自分自身だけでなく、全宇宙をも照らしたかを、順を追って語った。このようにコンスタンティヌス大帝を称賛する一方で、聖エウシグニオスは神を裏切った者を非難し、その不敬虔さを責めた。　これらの非難に耳を貸そうとしなかったユリアヌスは、このキリストの戦士を斬首するよう命じた。こうして聖エウシグニオスは、生涯110年目にキリストのために殉教し、時間の概念のない永遠の命へと移り住んだ。

ローマ教皇ファヴィウスの殉教を偲ぶ日

記念日：8月5日

聖ファヴィウスはローマ[5460]の出身であり、不敬虔なローマ皇帝の治世、とりわけ異教に深く傾倒し、それゆえに神の教会を迫害していた時代に、司祭を務めていました。　当初、聖ファヴィウスはローマ近郊のある村に住んでいましたが、その後、ローマ市内に移り住み、そこで殉教者たちの遺体の埋葬に熱心に取り組みました。当時、多くのキリスト教徒が信仰のために拷問を受け、殺害されており、その遺体は城門の外に投げ捨てられ、犬や獣、鳥に食われていました。　聖ファヴィウスは夜陰に乗じて密かに殉教者たちの遺体を運び出し、尊厳をもって土に葬った。　マクシミアヌス帝の治世下、キリストへの信仰を告白したために至聖なる教皇アンフィロス（[5461]）が殺害された後（[5462]）、迫害から身を隠し、信仰を秘めていた信者たちは、新しい教皇を選出するために、司教や長老たちと共に、迫害者たちには知られていないある教会に集まった。　このキリスト教徒にとって不安な時代、目立たない一軒の家が彼らにとっての教会として機能していた。　この集会には、聖ファヴィウスも出席していた。ローマ司教という極めて高い地位にふさわしい人物を誰に選ぶべきか検討が始まると、多くの人々は、キリストの律法に従ってその羊の群れを牧することができる、誠実で傑出した人物たちを思い起こしたが、聖ファヴィウスについては誰も考えさえしなかった。　彼は、つい最近村からやって来たばかりで、地位の低い長老の一人に過ぎなかったからである。選出の過程で意見の相違が生じたその時、突然、頭上には雪のように白い鳩が現れた。その鳩は降りてきて、長老ファヴィウスの頭の上に止まり、その後再び上空へと舞い上がり、見えなくなってしまった。　その時、皆は、主ご自身が御聖霊を通じてファヴィウスを御自身の教会の指導者および牧者として選ばれたことを悟り、大いなる喜びをもって彼を総主教の座に就かせた。こうして聖ファヴィウスはローマ教皇となり、キリストの教会には平穏が訪れた。　迫害者マクシミンは自らの兵

[5460] ローマ――ローマ帝国の首都。

[5461] マクシミアヌス1世は235年から238年まで皇帝を務めた。

[5462] 236年

士たちによって殺害され、その後を継いでゴルディアヌスが即位した[5463] 。彼の治世下で迫害は終息した。この皇帝は異教徒ではあったが、穏やかで善良な性格で知られ、キリスト教徒への迫害を禁じた。彼らは彼の治世下で平和を享受し、至る所に教会を建てた。 聖ファヴィウスは、埋葬用の洞窟内に殉教者たちの棺の上へ、多くの広々とした礼拝堂を設け、そこで信者たちが祈りのために集まるようにした。また、迫害の際の避難所となっていた洞窟そのものの上には、礼拝堂を建設した。異教徒たちが日々、不信仰からキリスト教へと改宗したおかげで、教会は成長していった。 ゴルディアヌスの死後、その地位を継いだフィリッポス[5464] が、同じくフィリッポスという名の息子と共に統治を分担したことで、教会は特に繁栄を極めた。二人は、ある敬虔で高貴な人物ポンティウスから教えを受け、キリスト教に改宗し、聖ファヴィウス教皇によって洗礼を受けた。 この頃、信徒の数は特に増加した。王とその息子の模範に倣って、多くの人が洗礼を受け、キリストへの信仰を自由かつ恐れることなく告白することができた。聖ファウィウス教皇は、キリストの真の僕であるポンティウス上院議員の協力のもと、教会を建設すると同時に、偶像崇拝の神殿や偶像を破壊した。 しかし、教会がそのような平穏と自由を享受できたのは長くは続かず――わずか4年ほどであった。その頭であるキリストは、御自身の血を流して贖われた花嫁が、この地上で、炉で精錬された金のように、また茨の中の花のようにあることを望まれつつも、 再び彼女を苦難と苦しみの中に置かれることを許され、迫害が始まった。それは地獄の竜によって引き起こされたもので、主が神学者ヨハネに幻の中で明かされたように、天の威光に輝く「妻」を追いかけ、口から川のような水を吐き出して彼女を溺れさせようとしたのである[5465] 。この古来より善を憎む者は、キリストの栄光が高まることを耐えられず、キリスト教を受け入れた敬虔な王たちに対して立ち上がった。 キリストとキリスト教徒を憎む異教徒たちは、不義なデキウス[5466] の指揮下で結集し、フィリッポス王とその息子を殺害した。その理由は、彼らがキリストを信じ、キリスト教の信仰の自由を認めたからに他ならない。王たちの殺害後、彼らはキリスト教徒へと矛先を向けた。この時、キリスト教徒の血は川のように流れた。 聖ファビウス教皇は誰よりも先に捕らえられた。彼はキリスト教徒の代表者であり教師であったため、異教徒たちからとりわけ激しく憎まれていた。 敬虔なポンティウス上院議員も捜索されたが、見つからなかった。彼は多くの信徒たちと同様に身を隠し、その後ローマから逃亡した。一方、聖ファヴィウス教皇は[5467] で斬首され、彼と同時に殺害された多くの羊たち、すなわち彼の牧会の民と共に、戦いの教会から勝利の教会へと移った。 そして、聖ポンティウスはその後捕らえられ、主イエス・キリストのために殉教の死を遂げた。主イエス・キリストに、父と聖霊とともに、永遠の栄光があるように。アーメン。

8月19日

8月6日（旧暦）

同日は、アルハンゲリスク州ウシェリェ村に修道院を設立し、1628年8月5日に強盗に殺害され、6日に埋葬された聖ヨブ・ウシェリェスキーの記念日である。

[5463] ゴルディアヌス――238年から皇帝。

[5464] フィリッポス・アラビウス――244年から249年まで皇帝。

[5465] 黙示録 12:15–16

[5466] デキウス – 249–251年の皇帝。

[5467] 250年

『シナクサール』[5468]　主の変容の日

8月6日の記念日

私たちの救いのために自発的に苦難に臨もうとしていたとき、私たちの主イエス・キリストは弟子たちに、「*エルサレムに行かなければならず、長老たちや大祭司たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺されなければならない*」と語り始められた（マタイ16:21）。　主は、使徒ペトロが「*あなたはキリスト、生ける神の御子です*」（マタイ16:16）と告白した後、ケサレア・フィリッポの地[5469]でこう語られました。イエス・キリストの三年にわたる宣教の最後の年、また聖母マリアから生まれたキリストの誕生から三十三年目に入っていた。キリストのこの言葉は弟子たち、とりわけ使徒ペトロを深く悲しませ、彼は主に対してこう言い返した。「*主よ、どうかご自身を憐れんでください！　どうか、そのようなことがあなたに起こりませんように！*」（マタイ16:22）と、主に対して反論し始めました。　弟子たちの悲しみに気づき、それを和らげようと、イエス・キリストは、彼らの一部に、ご自身が去られた後にまとう御栄光をお見せすると約束された。「*ここに立っている者の中には、*」と主は言われた、「*死ぬことなく、人の子がその御国に来られるのを見る者がいる*」　（マタイ16:28）。これらの出来事から六日後、主は弟子たちと大勢の群衆を伴い、ケサレア・フィリッポの地方からガリラヤの境へと向かわれた[5470]；日がすでに暮れかけていた頃、主はガリラヤのファヴォル山に到着された[5471]。夜になると弟子たちから離れて、父なる神にひっそりと祈ることを常としていたイエス・キリストは、今回もまた、群衆を山のふもとに残し、弟子たちの中からペトロ、ヤコブとヨハネだけを連れて、彼らと共に山の頂上へ登り、そこで彼らから少し離れた高台へ移動して、祈りにふけった。　一方、三人の使徒たちは、山登りの疲れと長時間の祈りのせいで、眠り込んでしまった。聖ルカによる福音書には次のように記されている。「*ペトロと彼と共にいた者たちは、眠気に襲われていた*」（ルカ9:32）。彼らが眠っている間、夜明けが近づいた頃、主イエス・キリストは変容され、御自身の神性の栄光を放たれた。主の御命により、二人の預言者――死者の世界からモーセと、天国からエリヤ――が主の前に現れた。彼らは、エルサレムで主が直面しようとしている苦難と死について語り合った。　この会話と、神の力の特別な現れによって、使徒たちは目を覚まし

[5468] シナクサールはギリシャ語で、「シナクシス」（祝祭のために教会に集まる信者たちの集まり）に由来し、「祝祭日一覧」を意味し、後に祝祭日や聖人に関する歴史的情報の集大成を指すようになった。

[5469] パレスチナ北部の都市で、エルモン山の麓に位置していた。ヘロデ大王の息子であるテトラルコス・フィリッポスによって建設され、彼はこの都市を美しく整え、ローマ皇帝ティベリウスにちなんで「ケサレア」と名付けた。パレスチナのケサレアやストラトノのケサレアとは区別され、この都市は「フィリッポスのケサレア」と呼ばれる。

[5470] パレスチナ北部のガリラヤ地方、すなわちガリラヤ（ヘブライ語の「ガリル」＝地域、郡に由来）は、救い主キリストの時代、パレスチナの第三の地域を構成しており、北部の「上ガリラヤ」（異教徒の地域）と南部の「下ガリラヤ」に分けられていた。　ガリラヤは、主イエスの生誕地であり、宣教の地として、世界史において重要な位置を占めている。ガリラヤは、東西に約120ヴェルスト、南北に40ヴェルストの広さがあった。北はシリアとレバノン山脈に接し、西はフェニキア、南はサマリア、そして東はヨルダン川を境界としていた……　救い主キリストの故郷であるナザレの町、その幼少期、青年期、そして主にそこで行われた説教を考えると、ガリラヤはキリスト教信仰の発祥の地であった。そして、イエス・キリストのたとえ話は、すべてがガリラヤの自然の豊かさと美しさ、そして生活様式を映し出すイメージである。　空、大地、海、麦畑、果樹園、花、ブドウ畑、草原の草、魚や鳥――これらすべてが、救い主にとって、その神聖な説教における驚くべき教えの基盤であり、象徴となっていた。

[5471] ファヴォル――ナザレから7ヴェルスタ離れた、標高約500サジェンある人里離れた山である。ここでバラクはシサラに立ち向かうために軍勢を集め（士師記4:6）、その麓で敵を打ち破った（士師記6:33）。ここで、私たちの主イエス・キリストは変容された（マタイ17:1、マルコ9:2、　ルカ9:28）。このファヴォルの栄光に満ちた使命を、ダビデはあらかじめ見通していた（詩篇88:13）：「ファヴォルとヘルモンは、あなたの御名を喜び祝う」。この詩篇の作者は、約束の地全体を指し示していたのである。なぜなら、これらは約束の地の山々だからである。

た。主イエスの言い表せないほどの栄光――太陽のように輝く御顔、雪のように白く輝く衣、そしてその栄光の中に立ち、主と語り合っている二人の男――を目にした使徒たちは、恐怖に襲われた。聖霊の啓示により、彼らは直ちにその二人の男がモーセとエリヤであることを見分け、その会話がキリストの自発的な受難についてのものであることを理解した。その会話に耳を傾けながら、使徒たちは畏敬の念を抱いて立ち尽くし、同時に、彼らの肉眼で可能な限り、神の栄光を仰ぎ見ていた。　そして主ご自身が、地上の人が視力を失うことなく見ることができる範囲内で、御自身の栄光を彼らに現された。死すべき人間にとって、目に見えない不死の神性を直視することは不可能なことだからである。かつてモーセは、主が御自身の神聖な栄光を顔と顔を合わせて見せてくださるよう祈ったことがあったが、　主はこれに対し、*「人はわたしを見て、生きていられることはない」*（出エジプト記33:20）と答えられた。キリストとモーセ、エリヤとの対話が終焉を迎え、使徒たちが聖霊の導きによって彼らの間もなくの去りゆくことを知ったとき、　使徒ペトロは、預言者たちが彼らの目の前から姿を消そうとしていることに悲しみを覚えた。彼は、キリストの栄光と高潔な預言者たちの驚くべき光景を絶えず楽しみたいと願っていた。そこで、大胆にもこう言った。　*「先生！　ここにいるのは良いことです。三つの小屋を建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、そして一つはエリヤのために」*（ルカ9:33）。使徒ペトロがこう語っている最中、キリストに二人の預言者を現した明るい雲が、使徒たちを覆い、　山の頂上を取り囲み、再び神の御心により預言者たちを連れ去り、それぞれをその場所へ戻そうとした。使徒たちは、キリストに近づき、その雲の中に入り、そこから聞こえてくる声を聞いたとき、さらに恐れおののいた。　*「これはわたしの愛する子である。彼に聞き従え」*（ルカ9:35）。天からのこの言葉を聞いた使徒たちは、大きな恐怖のあまりついに正気を失い、激しい恐れの中で地面にひれ伏した。　彼らが倒れ伏している間、主の栄光、そしてそれに伴って預言者たちも、彼らの前から姿を消した。主は地に伏していた弟子たちのところへ近づき、「起きなさい。恐れることはない」と言われた。目を上げると、使徒たちは主イエス以外には誰も見当たらなかった。　夜が明け始め、彼らは山を下り始めた。道中、主は彼らに、ご自身が苦難と死を経て三日目に墓から復活されるまでは、この幻について誰にも話してはならないと命じられた。そこで彼らは黙り込み、その間、自分たちが目にする栄誉に浴した事柄について、誰にも何も語らなかった。

主の変容の日の説教

8月6日の記念日

主の変容に関する記述は、福音書記者たちだけに見られるものではありません。教会の教師たちも、この祝日に捧げられた数多くの説教の中で、その意義を明らかにし、敬虔な思索にふけることを好むキリスト教徒たちに、豊かな霊的な糧を提供しています。　そして、キリストの変容の意味を完全に解き明かした、これらの教訓や教父たちの言葉を手にしている私たちにとって、　すでに用意された教えに耳を傾け、高尚な思索に満ちた霊的な饗宴を味わうほかありません。そして、教会の教師たちの言葉を活用し、そこに含まれる解釈を、まるで饗宴の席で料理を盛り付けるように一つにまとめ、この祝祭の解説を望む人々のために役立てることが、決して無駄にはならないでしょう。

「六日が過ぎた後、イエスはペトロ、ヤコブ、そしてその兄弟ヨハネを連れて、彼らだけを高い山に導き上げ、彼らの前で姿を変えられた」（マタイ17:1–2）。

なぜ、救い主キリストは、自発的な苦難と死を前にして、弟子たちに、彼らにとって可能な限りご自身の栄光を現そうと望みながら、ファヴォル山にすべての弟子を連れて行かなかったのでしょうか。それは、彼らの間に、この神聖な御姿を見るにふさわしくないユダがいたからです。　ブルガリアの大司教聖テオフィラクトは、このことについて次のように述べています。「主キリストは十二人の弟子たちを山に連れて行かれなかった。なぜなら、ユダは、その裏切り者の目をもって、キリス

トの変容の栄光を見るにふさわしくなかったからである」。　聖ダマスキノスもまた、次のように美しく謳っています。「不義なる者たちは、キリストなる神よ、あなたの栄光を見ることはない」。

しかし、ユダを不適格者として山のふもとに一人残し、他の使徒たちだけを山に連れて行くことはできなかったのだろうか。もちろん、主にとってはそれは十分に可能であった。しかし、すべての人の罪を覆ってくださる忍耐深い我らの主は、ユダの不適格さを暴くことも、彼にさらなる堕落のきっかけを与えることも望まれなかった。聖書がこう述べているように：　*「冒涜者を責めてはならない。さもないと、彼はあなたを憎むようになる」*（箴言9:8）。もし主がすべての使徒たちを連れて行き、ユダだけを置き去りにしていたなら、ユダはイエス・キリストに対してだけでなく、すべての使徒たちに対しても怒りと憎しみに満ちていただろう。　彼はキリストに対する裏切りの悪意について、ある種の言い訳を持つことになり、『私はイエスに軽蔑されていたから、イエスを裏切ったのだ』と言うことができたでしょう。　至福のテオフィラクトは次のように述べている。「もしキリストが山のふもとにユダ一人を残し、他の者たちを御自身と共に連れて行かれたならば、ある人々は、まさにこの状況がユダの心を傷つけ、主を裏切るという考えへと彼を駆り立てたのだと言うかもしれない」。

しかし、ユダは山に連れて行かれた三人の使徒たちを羨ましく思ったのだろうか？　そうではなかった。彼は、彼らが一晩中続くはずの祈りのために向かっていることを知っていたのだ。聖ルカ福音書にはこう記されている。*「ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた」*　（ルカ9:28）。一方、ユダは怠惰で、一晩中山のふもとで眠り続けたいと願っていた。怠惰で眠たがりな者は、敬虔な行いに熱心ではないのだ。

では、なぜ主は三人の使徒だけを山に連れて行かれたのでしょうか。それは、申命記にある*「二人の証人の言葉、あるいは三人の証人の言葉によって、その事案は確定する」*（申命記19:15）という聖書の言葉を実現するためでした。　三人の使徒を伴った主イエス・キリストは、さらに二人の預言者をも連れて行こうと望まれました。それは、生ける者と死せる者のために、主が神の御子であり、神の父によって世の救いのために遣わされ、天からの声によって証しされたことを証しする者たちがいるようにするためでした。しかし、証しには二人で十分であるならば、なぜ　に三人の使徒が同席しているのでしょうか？　モーセは、ハデスに閉じ込められた死者たちにキリストのこの世への到来を証しするために、死者の中から召された。エリヤは、楽園にいるエノクに告げるために召された。一方、三人の使徒は、後に変容において見られたキリストの栄光を宣べ伝えるために召されたのである。彼らはこう語っている。　*「彼は恵みと真理に満ちて、私たちとともに住まわれた。私たちは、御父から独り子として来られた方の栄光、すなわち御父の栄光を見た」*（ヨハネ1:14）。また、*「巧妙に編み出された神話に従うのではなく、彼の偉大さをこの目で見た証人として」*とも述べている。　*なぜなら、彼は父なる神から栄光と誉れを受けられたからである。すなわち、壮麗な栄光の中から、彼に向かって『これは、わたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が聞こえたのである。そして、この天から聞こえてきた声を、私たちは聖なる山で彼と共にいたときに聞いたのである*」（IIペテロ1:16–18）。

御変容において天使や人々の畏敬の念を抱かせる対象として現れた主にとって、地上で生きる者たちのうち、ただ三人がその栄光を見て、その証人となれば十分であった。主の御目の前で、三人の使徒はすべての民族や部族よりもふさわしい者たちであったからである。　一人の義人が、多くの罪人よりも神の前で比類なきほど高い価値を持つこと――このことは、主ご自身が旧約聖書の中で明確に示された。主は、御自身の威力をもってエジプトのファラオを震え上がらせようとされ、モーセにファラオのもとへ行き、彼を遣わした神は三人の神、すなわち　アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。しかし、これほど多くの都市と、エジプトの民のような偉大な民族を治めるファラオが、自らをたった三人の主と称する神を恐れることなどできただろうか？　これほど広大な土地の

王の前で、モーセを遣わした神がたった三人の人間しか支配していないと宣言するのは、恥ずべきことではなかっただろうか？ファラオの頑なな心を和らげるために、モーセが「私を遣わした方は、天の下のすべての国々を治め、宇宙のすべての王国を支配する神である」と語った方が、事態にふさわしかったのではないか？　しかし、主はそうすることを良しとされず、ファラオの前で、ただ御自身の三人のしもべの主としてのみ栄光を受けることを望まれた。なぜだろうか。間違いなく、この三人が神に喜ばれ、天の恵みだけを重んじていたため、神の目には、あらゆる王国や部族よりも尊い存在と見なされていたからに他ならない。　「*それゆえ、*――使徒は*言う*――*神は彼らを恥じることなく、ご自身を彼らの神と呼んでおられる*」（ヘブライ人への手紙11:16）。それはまるでこう言っているかのようだ。「ファラオよ、お前はなぜ、自分の王国の偉大さや、自分に服従する多くの都市や民を誇っているのか？　私には三人のしもべがおり、そのいずれとも、お前の王国は比べものにならない――私はアブラハム、イサク、ヤコブの神であり、それを恥じることはないのだ。　聖金口ヨハネもまた、次のように論じています。「宇宙の神は、三人の（人間）の神と呼ばれることを恥じてはいません。それは当然のことです。なぜなら、聖徒たちはその尊厳においてすべての人々を凌駕しており、神の御心を行う一人の者が、数万人の不法者たちよりも優れているからです」。　三人の使徒は、神の栄光を目の当たりにするためにファヴォル山に招かれたのであり、それ以上は必要なかった。なぜなら、この世は彼らにふさわしくなかったからである（ヘブライ人への手紙11:38参照）。

なぜ主は、他のどの使徒でもなく、まさにペトロ、ヤコブ、ヨハネを御自身と共に連れて行かれたのか。聖金口ヨハネや他の教父たちは、この問いに対して十分な答えを与えている。　私たちもまた、救いに不可欠であり、聖書において特に明確に強調されている三つの美徳――信仰、希望、愛――を心に留めつつ、こう言おう。主がこれら三人の使徒を御自身と共に連れて行かれたのは、彼らの中に、最初からすでに、後に特に鮮明に現れた前述の三つの美徳が認められていたからである。ペトロには信仰があった。彼は誰よりも先に、キリストを「生ける神の御子」であると告白した（マタイ16:16）。その後、主ご自身が彼にこう言われた。*「わたしは、あなたの信仰が失われないように、あなたのために祈った」*（ルカ22:32）と告げられた。ヤコブには希望がある。彼は十二使徒の中で最初に、イスラエルの希望のために自らの首を剣の下に差し出さなければならなかった。ヨハネには愛がある。彼は主の最も愛された弟子であり、聖母マリアの息子と名付けられた（ヨハネ19:26–27）。　このため、後に聖使徒ペトロ、ヤコブ、ヨハネは、使徒パウロによって「柱」と呼ばれた（ガラテヤ2:9）。　聖金口ヨハネは、使徒たちを称えるにあたり、この呼称を次のように説明している。「偉大で驚くべき（柱）たち、すべての人々が称賛する者たち。彼らは信仰、希望、愛において先駆者となり、柱として、初期の教会を確固たるものにしたのである」。

さらに、この三人の使徒たちには、他の誰よりもキリストの天の栄光を見るにふさわしい、神に選ばれた三つの聖人の階級――神を愛する者たちの階級、殉教者たちの階級、そして処女たちの階級――への予兆が見出されます。　聖使徒ペトロには、神を愛する者たちの姿が見て取れる。聖金口ヨハネの証言によれば、彼は主イエス・キリストをとりわけ深く愛しており、この世の生涯においてキリストへの愛の強さに応じて、誰もがあの世の永遠の命において主から愛され、主の御顔を仰ぎ見る喜びを味わうことになる。主ご自身がこう言われた通りである。　*「わたしを愛する者を、わたしも愛する」*（箴言8:17）。また、*「わたしを愛する者は、わたしの父に愛される。そして、わたしもその人を愛し、わたし自身がその人に現れる」*（ヨハネ14:21）。　聖使徒ヤコブには、キリストのために自らの血を流さなければならなかった殉教者たちだけでなく、　、自らの血を流すことなく、キリストのために日々罪に対して死に、情欲や欲望に駆られる肉を十字架につけている者たちの姿も見出されます（ガラテヤ5:24）。ヤコブとは、「踏みとどまる者」、「闘士」、「勝利者」を意味する。これらの資質は、苦しみなしには得られない。目に見えない敵から来る誘惑と戦い、日々の死によって自らの情欲を克服し、打ち勝つ者は、たとえ自らの血を流さなくとも、ヤコブと同様に殉教者であり、強き闘士である。　闘いの最中に耐え抜いた苦しみの度合いや、誘惑を撃退し打ち負かすため

の努力のほどに応じて、その人は勝利者キリストと共に栄光を受けることになる。　聖ヨハネ・ザ・ヴァージンにおいては、肉体と霊の清さを守る者たちの位階が示されている。彼らには、栄光のうちに神を見るという特別な約束が与えられている。*「心清き者は幸いである*、と主は言われた。*彼らは神を見るからである」*（マタイ5:8）。　主は、変容の栄光を彼らに示すために、ペトロ、ヤコブ、ヨハネをファヴォル山に連れて行かれたが、それによって、天の御国で主と共に住み、主の御顔を仰ぎ見ることを望む者は、愛においてはペトロに、殉教においてはヤコブに、清さにおいてはヨハネに倣わなければならないことを教えている。　総じて、そのようなキリスト教徒は、自分の力の及ぶ限り、神への熱い愛に燃え、血を流すことなく、絶え間ない肉の死を通じて日々の殉教者として自らを現した神の聖徒たちに倣い、真の悔い改めによって自らを清め、肉と霊のあらゆる汚れから身を守らなければならない。

主は、どのような目的で弟子たちを祈りのために高い山へと導き、彼らと共に平らな場所へは行かれないのでしょうか。　それは、彼らを地上の低みから天の高みへと近づけることで、神からの啓示に与り、その栄光を見ることを望む者は、地上の下界的な執着を捨て、天上の恵みを願い、それを求めなければならないという教訓を、神秘的な形ですべての人に授けるためである。　「主は彼らを高い山へと導かれる」と、至福のテオフィラクトは語っています。「それは、もし誰かが地上の執着を超越しなければ、そのような啓示を見るに値しないということを示しているのです。　聖使徒パウロは、次のように語ることで、見事に教えている。「*天上のことを求めなさい。キリストは神の右の座におられる。天上のことを思い巡らし、地上のことを思い巡らしてはならない。あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたの命はキリストとともに神のうちに隠されているからである」*（コロサイ3:1–3）。　低地を歩む者は遠くを見通すことはできませんが、高い山に登った者は難なく遠くの広大な景色を一望できます。また、現世の生活ばかりを気にかけている者が、どうして未来の天の恵みの甘美さを理解できるでしょうか。　しかし、神を思う山の頂に登れば、人は目で見るように心で、天よりも高いところさえも知り、見ることができる。地を這う爬虫類や、地に住む動物たちは太陽の光を見ることができないのと同様に、地上の虚栄に没頭している人の心も、キリストの栄光を見ることはできず、その恵みの光に照らされることもない。　それゆえ、キリスト者よ、あなたの心を地から天へ、現在から未来へ、地上の執着から天上の願いへと高めなさい。そうすれば、イスラエルの神がいかに恵み深く、最も甘美なイエスがいかにも甘美であり、その愛がいかに喜びに満ちているかを悟り、神の啓示を味わうことができるでしょう。

主は御自分の弟子たちを、低い山ではなく、高い山へと導かれます。なぜでしょうか。彼らに神への思索と、同時に勤勉さを教えるためです。労苦なくして高みへ登ることはできません。山の高さは神への思索の象徴であり、山への登攀は労苦を指し示しています。　心を神へと向けることは良いことですが、勤勉さを疎かにしてはなりません。善行は勤勉によって成し遂げられるからです。心は神を見ますが、勤勉は神を直視することへと導きます。心はキリストの戒めに従い、キリストに服従しますが、勤勉はキリストの軛を負い、キリストの足跡をたどるのです。　神への思索は、キリストを内面的に見る喜びを味わうものであり、勤勉さはキリストの視線を自らに引き寄せるものである。「*私の苦しみと、私の衰えとを見てください」*と詩篇の作者は言った（詩篇24:18）。キリストに認められることは、キリストを見ることに劣らない恵みである。　これら二つの美徳――神への思索と勤勉――は、天の恵みと喜びを望む者にとって、鳥にとっての翼と同じくらい不可欠である。片翼の鳥は空を飛ぶことができないように、これらの美徳のうちの一つしか持たない人は、完全な救いの高みへと昇ることはできない。　勤勉な生活のない神への思索は真実ではなく、神への思索のない勤勉さは何の益ももたらさない。　二つの翼があれば、あらゆる鳥は自由に飛ぶことができる。二つの美徳――神への思索と勤勉さ――によって、誰もが心のファヴォル山に登り、永遠に神の栄光を仰ぎ見ることができる。その登り始めは勤勉さによるものであり、それは神への思索と神への知への先駆者だからである。　聖なる使徒たちは、主の変容の栄光を見るために高い山に登る労苦を厭わなかっ

た。では、労苦なしに神を直視する喜びに到達できると期待できる者が、いったい誰がいるだろうか。

なぜ主は、ペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを山に導き上げ、彼らに従う民や他の使徒たちを連れて行かなかったのか。それは、神への思索に励み、知性による神の御姿の観照を味わいたいと願う者たちに、孤独と静寂を求めることを教えるためである。

ただ三人の使徒だけが、静寂な場所――山の高みはまるで荒野のようで、そこには人が住んでいなかった――へと導かれたのは、その孤独と静寂の中で、主の栄光が彼らにより鮮明に現れるためであった。　生活の雑多さや喧騒の中では、主は孤独な静寂の中ほどには現れない。預言者エリヤは、イスラエルの王アハブの前に立ち、彼と議論しながらこう言ったとき、その心で神を見た。*「イスラエルの神、主は生きておられる。私は今、その御前に立っている！」*（列王記下17:1）。すなわち、「肉体はあなたの前にあるが、心は私の神の御前にある。肉眼ではあなたを見ているが、心では神を見ている」ということである。しかし、預言者エリヤは、カルメル山の荒野における孤独と静寂の中で、比類なきほど鮮明に主を仰ぎ見ている（列王記下19章）：　そこで彼は、内面的にだけでなく、目に見える形でも、神との甘美な対話と神の啓示に恵まれている。確かに、世俗の喧騒の中でも時折、心を神へと向けることは可能だが、静寂に包まれた孤独の中ほどには容易ではない。あちらには多くの障害があるが、こちらには静寂と安らぎがあるのだ！　主ご自身が、「*立ち止まりなさい*（すなわち、世の喧騒から解放されなさい）、*そして、わたしが神であることを知れ*」（詩篇45:11）と仰せられたのは、決して無駄なことではない。敬虔な思索にふける中で、私がいかに慈愛に満ち、憐れみ深く、私を愛する者をいかに愛し、私を求めるすべての人にいかに近くおられるかを悟れ、と主は言われているのだ。虚飾を捨て、余分な世俗の心配事から離れさえすれば、私を知り、やがて私を見出すだろう。　これを悟った多くの人々は、騒がしい世から静寂な荒野へと逃げ出し、山々や地の深淵をさまよった（ヘブライ人への手紙11:38）。それは、神との交わりの恵みを味わいながら、神に全身全霊を捧げるためであった。　聖ダマスキノスはこう謳う。「荒野においてこそ、この世の虚しいものから離れたところに、絶え間ない神の渇望があるのだ。」

ここにも神秘を探ってみよう――なぜ主は、昼ではなく夜が訪れる時に、使徒たちを山に導かれたのか？　それは、夜の方が昼よりも集中した祈りに適しているからです。夜には全宇宙が静まり返り、星々に彩られた空以外には何も見えず、その壮麗さは知らず知らずのうちに私たちの目と心を惹きつけます。　主が夜に弟子たちをファヴォル山へ導かれたのは、祈りの際、私たち全員が地上の事柄を一切考えず、心を天へと向けるよう教えるためでもある。かつてダビデ王は、神の神秘への理解がどのようにして人に啓示されるかを示し、預言的に謳った。　この師を探し求めながら、彼の言葉に耳を傾けよう。「*夜――*」と彼は言う。「*夜は知識を開く*」（詩編18:3）。夜こそがまさに、この短き生涯の間、夜の闇や死の影の中に座している人々に、神の知恵を教える師なのである。　「もし（夜に）空を見上げれば――聖キリルは言う――数えきれないほどの星々がろうそくのように輝いている。そして、一日中慌ただしく動き回っていた人々が、今や夜の間（眠りに身を委ねて）死者と何ら変わらないのだと考えると、その時、あなたは人間の罪に嫌悪感を抱くようになるだろう」。かくして、夜が教えてくれる教訓とは、この世の煩わしさや、神を怒らせる行いの虚しさを悟らせ、それらを避けるよう説得するものである。夜には、地上で生きる者すべてが死者のようだ。昼に見えていたものはすべて、夜になると闇に覆われ、あたかも闇に葬られたかのようになる。　驚くべき宮殿や美しい建物は棺のようになり、見事な木々や庭園、森はかかしを思わせる。金、銀、宝石は、夜の闇の中では銅や鉄、ただの石と何ら変わりがない。　その美しさも価値も目立たなくなる。地上にあるものは、夜にはその美しさによって人に喜びを与えることはできず、すべてが闇に覆われ、見えるのはただ、真珠のように星々で飾られ、それを見る者に喜びを与える空だけである。　ここには神の御心が表れている。夜とは、神秘的に私たちに神への奉仕を教えているのだ。もしあなたが、勤勉な行いと結びついた祈りのために、静寂の中に身を置き、心をもって神を想う山へと登り始めようと

するなら、あなたの目には、すべての地上の物事が、夜にそれらがそうであるように映るようにせよ；　一時的な快楽しかもたらさないこの世のあらゆる恵みを、あなたは軽蔑し、キリスト教徒にふさわしくないものとして、また真のものを何も含まず、死の影に覆われたものとして、それらから背を向けるがよい。　あなたの心が天の恵みのみを仰ぎ見るならば、その時、神の恵みの光があなたに現れ、神の啓示を仰ぎ見る甘美さから、あなたは霊的な喜びに満たされるであろう。

なぜ主は、使徒たちに御自身の変容の栄光を現すために、他の山ではなくファヴォル山に彼らを導かれたのでしょうか。ファヴォルはヘブライ語から訳すと、「清さと光の宮殿」を意味します。それゆえ、主は使徒たちを他の場所ではなくファヴォル山に導かれたのである。それは、使徒たちが山の名称そのものから、神の栄光の現れに立ち会おうとする者は、何よりもまず、神の恵みの光を受け入れるにふさわしい、清らかさの宮殿のような良心を持たなければならないという教訓を得るためである。ここで、ファヴォル山で起こった古代の出来事も思い起こそう。　カナン軍の司令官シサラがイスラエル人を殲滅するためにやって来たとき、イスラエル人の指導者バラクはファヴォル山に登り、そこで　イスラエル軍を集結させ、そこから敵へと突撃し、カナン軍全体を完全に打ち破り、シサラ自身も命を落としたのである（士師記第4章）。 主はこの古代の出来事を、ご自身の変容において神秘的に繰り返された。地獄のシサラに対して決定的な勝利を収めようと決意された主は、まずファヴォル山に登り、そこで神の力の顕現を鎧として身にまとい、悪魔に襲いかかって打ち負かそうとされたのである。ファヴォル山での会話はまさにこのことについて語られていた：　*「彼の去りゆくことについて語り合った」*（ルカ9:31）。ここには、目に見えない敵と、それがもたらす罪の力を克服しようとするキリスト教徒への指針も示されている。　――まず何よりも、心の清らかさというファヴォル山に登り、真の悔い改めによって良心を清め、邪悪な生活から徳のある生活へと変容し、――義の鎧を身にまとい、*「神の全武装」*（エフェソ6:13）*を*身につけるべきである。そうすれば、さほど苦労することなく、敵の力に勝利を収めることができるだろう。

主は弟子たちと共に山に登られ、*「彼らの前で変容された」*（マタイ17:1–2）。この*「彼らの前で」*という言葉は、福音書記者たちが、キリストがご自身のために変容されたのではないことを明らかにするために記したものです。キリストは、太陽のように御顔を輝かせましたが、光*であるキリストは、「栄光の輝き」*（ヘブライ1:3）*であり*、ご自身の中にいかなる闇も持たず、輝きを必要とされないからです。　キリストは私たちのために変容されたのです。それは、私たちの闇を照らし、私たちを罪の奴隷から御自身の真の僕へと、また怒りの子らから神の愛される子らへと変えるためでした。キリストの来臨の目的、すなわちキリストが成し遂げられたことは、私たちを神の子とすることにありました。　このために、御子は至聖なる処女と聖霊によって受肉され、このために*「人の姿をとられ」*（フィリピ2:7）、このためにしもべの姿をとり、御子である私たちの中に、失われてしまった父の御姿を新たにするために、いかなる労苦も厭われなかったのです！　かつてモーセは主にこう言いました。*「主よ、あなたの御手によって造られた聖所」*（出エジプト記15:17参照）。ここに注目しましょう――「あなたの御手によって造られた」とあります。「あなたの命令によって人の手が造った」とは言わず、「あなたご自身が御手をもって働かれた」と述べているのです。　モーセはこう語ることで、人間に対する主の計り知れない慈しみを指し示したのです。主は人間のために、何をしてこなかったことがあり、今何をしていないことがあるでしょうか。主は人間のために、天と地、海、川――そしてそれらの中にあり、その上に存在するすべてのものを創造されました。人間のために、昼も夜も天体を輝かせて天を照らしておられます。人間のために、雨や露、雪を降らせておられます。　人のために、主は農夫や園丁のように種を蒔き、実らせ、人が何一つ欠けることがないようにしてくださる。このことについて、聖キリロス・エルサレムスは次のように述べている。「救い主は、それぞれの心の在り方に応じて現れる。すなわち、（神に）祈りを捧げることを求める者にとっては、執り成し手であり、大祭司である。　あるいは、「罪を持つ者にとっては、彼は私たちのために犠牲となる小羊となり、すべての人にとってすべてとなりつつ、ご自身の本質において不変で

あり続ける」。このように、私たちの主は実に多様な形で私たちに仕えてくださり、こう言われます。*「人の子は、仕えられるために来たのではなく、仕えるために来たのである」*（マタイ20:28）。そして主は、ご自身の益ではなく、私たちの益を求めてすべてを行われます。それは、私たちが主の絶え間ない恵みを悟り、感謝の念に満たされ、罪人から義人へ、世を愛する者から神を愛する者へと変容するためです。　また、ファボルの山で、主は私たちのために変容されました。それは、私たちに用意された天の栄光を知らせるためです。主は*「私たちの卑しい体を、栄光の体に変えてくださる」*（フィリピ3:21）のです。そうして、普遍的な復活の際、その体が、「*世界の創造以来*」（マタイ25:34）備えられている、御自身を愛する者たちのために。彼らと共に、私たちもまた、御自身の憐れみによって、御顔を仰ぐ恵みにあずかることができますように。私たちの神であり主である、人を愛するキリストよ。御父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、御栄えと栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第7調：

キリストなる神よ、山の上で変容され、御弟子たちに御自身の栄光を、彼らの理解できる限り示されました。光の与え主よ、聖母マリアの祈りによって、私たち罪人にも、御自身の永遠の光が輝きますように。御栄えあれ。

コンダク、第7調：

山の上であなたは変容され、あなたの弟子たちは、その理解力の及ぶ限り、あなたの栄光を仰ぎ見ました、キリストなる神よ。彼らがあなたが十字架にかけられるのを見たとき、その苦難が自発的なものであることを悟り、世の人々に、あなたがまことに父の輝きであることを宣べ伝えるように。

8月20日

8月7日（旧暦）

私たちの尊き父ピメノス・多病の聖人の生涯

記念日8月7日

至福のピメーンについての物語を始めるにあたり、苦難における彼の偉大な勇気に注目し、そこから、病は忍耐強く耐え忍ぶべきであり、また、神の力は弱さの中でこそ現れるということを学びましょう。　――至福のピメンは、生まれながらにして病を患っていた。その病は生涯を通じて彼を離れることはなかったが、この肉体の病は、彼の中に魂の病を育むことはなかった。彼は悪徳から清く、母の胎内から貞潔を守り通した。　彼は度々両親に、修道院へ赴き修道者の戒律を受けることを許してほしいと懇願しましたが、両親は彼への深い愛情から、自分たちの死後の後継者として彼を残しておきたいと願い、その願いを聞き入れようとはしませんでした。　ある日、万事を最善へと導く神の摂理により、至福のピメンは特に重篤な病に倒れ、もはや回復の望みさえ持てないほどとなった。やむを得ず、両親は彼をペチェルスク修道院（[5472] ）へ連れて行き、そこに住む尊い修道士たちに

[5472] キエフ・ペチェール修道院は、聖アントニオ（1054年～1068年）によって設立された。

、息子の病が癒やされるよう祈ってほしいと懇願した。　しかし、修道士たちの熱心な祈りも、病める少年の癒やしにはつながらなかった。至福のピメンの祈りは、彼ら全員の祈りよりも強かったのだ――彼は、回復すれば両親が再び彼を修道院から連れ出し、それによって修道衣を授かる機会を奪われてしまうことを恐れたため、主に対してさらに重い病を自らに与えるよう願っていたのである。そのため、父と母が彼のそばに座り、[5473] の剃髪を受け入れようとしない中、福者ピメンは深く嘆き、神がどのような御心であれ、彼の願いを叶えてくださるよう祈り続けた。　そしてある夜、両親と使用人たちが深い眠りに落ちていた時、光り輝く天使たちが彼の元へやって来た。ある者は美しい若者の姿で、またある者は修道院長や修道士たちの姿で現れた。彼らは手に聖福音書、ろうそく、羊毛の衣、マント、修道帽、そして剃髪に必要なその他の品々を携えていた。

「我々に剃髪させてほしいか？」と彼らは尊者にお尋ねした。

彼は喜びながら答えた。

「はい、そう願います。主があなた方を遣わされたのです、私の主よ。私の心の願いを叶えてください。」

彼らは直ちに問答を始め、修道入会の規定に定められたすべてを完全に履行した。こうして彼らは彼を偉大なる天使の姿に剃髪し、マントと修道服を着せ、ピメンと名付けた。慣例に従って、燃え続ける蝋燭を彼に手渡すと、彼らは言った。

「四十日四十夜のあいだ、このろうそくは消えることはないだろう。」

そして同時に、彼に絶え間ない病が訪れると予言し、その病から解放されることが、彼にとって死が間近に迫っているしるしになると告げた。彼らは聖ピメンに口づけをすると、教会へと引き上げ、そこで聖テオドシオスの棺の上に、布に包んだ彼の髪を供えた。

すぐ近くのケリアにいた修道士たちは、歌声を聞いて他の者たちを起こした。彼らは、修道院長が数人の兄弟たちと共に病人の剃髪式を行っているか、あるいは彼が亡くなったのかと思ったのである。彼らは皆で、聖者が横たわっているケリアへと向かった。　そこでは、父、母、奴隷たち全員が眠っているのを見つけた。修道士たちは彼らを起こすと、その小部屋が芳香に満ちており、病床にある聖人は喜びと楽しさに満ち、修道服を身にまとっていることに気づいた。

「誰に剃髪を受けたのか。また、ここで私たちが聞いたあの歌は、一体何だったのか。しかし、あなたの両親には聞こえなかったようだが」と、彼らは聖者に尋ねた。

「私は、修道院長が兄弟たちと共にここへ来て、私をピメーンと名付けて出家させてくれたのだと思っていました。あなたがたが聞いたのは、彼らが歌っていた声です。また、あなたがたが見ているこの蝋燭も彼らが私にくれたもので、40日間、昼夜を問わず絶え間なく燃え続けると言っていました。　その後、私の髪を布に包んで、彼らはそれを持って教会へと去っていったのです。」これを聞いて、修道士たちはすぐに教会へと駆けつけたが、教会は施錠されていた。彼らは教会係を起こし、夕の祈りの後に誰かが教会に入ったかどうか尋ねた。　彼らは、鍵そのものがエクレシアーク（[5474]）の手にあり、誰も入っていないと答えた。エクレシアークを起こすと（彼は誰にも鍵を渡しておらず、自身も誰とも教会に入っていなかった）、修道士たちは鍵を受け取って教会に入り、そこで聖テオドシオスの棺の上で、確かに布に包まれた髪が見つかった。　その後、このことをすべてイグメーンに報告した。イグメーンは極めて驚き、誰が聖ピメンの剃髪を行ったのかを入念に調べたが、すべての調査は徒労に終わった。そこで、その剃髪が神の御心により、聖なる天使たちによって行われた

[5473] 修道入会の儀式は、古来より、正教会において、苦行の道を歩み、祈りと悔い改めを通じて自らを神に完全に捧げることを選んだ者たちに対して、特別な儀式に従って執り行われてきた。　この道を歩むことを決意した者には、それが自由意志による選択であるかどうかが問われ、その後、貞潔、節制、貧しさの三つの誓いを立てなければなりません。その後、聖三位一体の名において、十字架の形に髪を剃り、修道服を身にまとう儀式が行われます。　新しく剃髪した者には、十字架と灯された蝋燭が手渡される。

[5474] 教会の財産の管理を任され、教会の礼拝規程の遵守を監督する義務を負う、教会の管理人。

ことが、皆にとって明らかになった。　イグメンと修道者たちは、この奇跡的な剃髪式を、規則に従って行われた通常のものとみなすべきかどうかについて長く議論を重ねた末、至福のピメンに対する剃髪式を繰り返さないという結論に達した。なぜなら、彼に対して行われた剃髪式の真実性を示す明確な証拠があったからである。　修道士たちは、至福のピメンが語った通り、聖テオドシオスの棺の上で彼の髪を発見したほか、本来なら一晩で燃え尽きるはずの蝋燭が、四十日四十夜にわたって消えることなく燃え続けていたからである[5475]　。このことについても、聖人は剃髪直後に指摘していた。こうした事情を踏まえ、彼らはただこう言った。

「ピメン兄弟よ、神から授かった姿と名だけで十分だ。」

「それでも、教えてほしい」と、修道院長が剃髪式の手引書を持ってやって来て言った。「一体誰があなたを剃髪したのか、そして彼らはこの書物に記されていることを何か省略していないか。」

至福のピメンはイグメンにこう言った。

「なぜ私を試すのですか、父上？」　あなたご自身が、すべての兄弟たちを連れてここに来て、この書物に定められていることをすべて私に対して行いました。その際、あなたは、私が生涯にわたって病の苦しみを味わわなければならず、死の直前になって初めてその苦しみから解放され、自らの死の床を担ぐことができるようになるとおっしゃいました。聖なる父よ、主が私に忍耐を授けてくださるよう、私のために祈ってください。」

これを聞き終えると、皆は彼のもとを去った。

一方、祝福されたピメンは、彼に修道衣を授けた者たちの予言通り、長年にわたり、重く、嫌悪感を催させる病に臥していた。彼に仕える者たちは皆、その病を忌み嫌い、しばしば三日間も彼に食事も飲み物も与えなかったが、彼は神に感謝しつつ、すべてを喜びをもって耐え抜いた。

ある時、聖ピメンと同じ病を患っていた一人の病人が、ペチェルスク修道院に運ばれ、修道士としての剃髪を受けた。　病人の世話をする義務を負っていた修道士たちは、二人を同時に、かつ均等に世話をするために、その病人を聖ピメンの元へ連れて行った。しかし、彼らは自分の義務を疎かにしていたため、しばしばそれを忘れてしまい、その結果、病人たちは時折、喉の渇きで衰弱してしまうことがあった。そこで、聖ピメンは自分と一緒に横たわっていた病人にこう言った。

「私たちに仕える者たちは、私たちから発する悪臭を理由に私たちを嫌っている。もし主があなたをその役目に立てられたなら、兄弟よ、彼らの務めを担ってみたいと思わないか？」

病人は、死ぬまで熱心に奉仕することを聖人に約束した。それに対し、至福のピメンはこう言った。

「見よ、主があなたの病を取り除いてくださる。あなたが健康を取り戻したら、その誓いを果たしなさい――私や私のような者たちに仕えなさい。そして、怠慢に職務を遂行していた者たちには、主が激しい病を降らせ、彼らが懲らしめを受けて救いを得るようにされるだろう。」

病人はたちまち立ち上がり、尊者に仕え始めた。一方、怠慢な奉仕者たちは、その言葉通り、病に襲われた。

病から解放されたその兄弟は、敬虔なピメンに長く仕えることはなかった。悪臭に耐えきれず、彼は立ち去り、ピメンを飢えと渇きに苦しむままに放置した。去った後、彼は別のケリアに身を寄

[5475] 「40」という数字には重要な象徴的な意味がある。それは、ある状態から別の状態への移行、更新、変化を意味する。生後40日が経過すると、乳児は神に奉献されるために教会へ連れて行かれる。　正教会の信仰によれば、死後40日目に、亡くなったキリスト教徒の魂は神への礼拝のために天に昇るとされている。　同様に、修道入会の際も、新しく修道者となった者は40日間、特に祈りの修行に専念しなければなりません。それは、彼があたかも新しい命のために生まれ変わり、この世の儚いものからは死んだかのような状態にあるからです。これは、天使たちが聖ピメンに授け、40日間40晩燃え続けた灯火が意味していたことでもあります。

せた。　すると突然、彼を火のように激しい熱が襲った。起き上がる力もなく、三日間も渇きに苦しみ、ついに叫び出した。

「神の御名にかけて、私を憐れんでください。私は喉の渇きで死にそうです！」

その声を聞いた、すぐ隣のケリアにいた修道士たちが彼の元へ駆けつけた。彼の病状を見て、彼らは聖ピメンにこう報告した。

「師に仕えていた兄弟が、死にそうです。」

「人は何を蒔くか――」と尊者ピメンは答えた。「その収穫を受けるのだ（ガラテヤ6:7参照）。彼は私を飢えと渇きの中に置き去りにし、神に嘘をつき、私の不甲斐なさを軽んじたために、自らも同じ苦しみを味わったのだ。」　しかし、私たちは悪に対して悪で報いてはならないと教えられている。だから、行って彼にこう伝えなさい。『ピメンがあなたを呼んでいる。起き上がって、彼のところへ行きなさい』と。」

病人にこの言葉が伝えられると、彼はたちまち元気を取り戻し、立ち上がって、誰の助けも借りずに聖者にやって来た。聖ピメンは長い間彼を諭し、こう言った。

「信仰の薄い者よ、今やあなたは健康になった。見よ、二度と罪を犯してはならない！　病める者も、その者に仕える者も、同じ報いを受けることを、あなたは知らないのか。謙遜な者たちの忍耐は実を結ばないままにはならない。ここで一時的な苦しみや重荷を経験する者たちは、病気も悲しみも嘆きもなく、ただ永遠の命があるその場所で、喜びと楽しみを味わうことになるのだ。　このために、私はすべてに耐えているのだ。私を通してあなたを病から救ってくださった神は、私をもこの病床から立ち上がらせ、私の弱さを癒やすこともできるが、私はそれを望まない。*「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」*（マタイ10:22）と、主は言われた。　この世で死体となる方が、あの世で私の体が朽ちないものとなるにはましです。ここで悪臭に耐える方が、あそこで言い表せないほどの芳香を享受するにはましです。　兄弟よ、明るく、清く、聖なる場所での教会の奉仕は実に威厳に満ちている。そこでは、目に見えない天使の力と共に、神に喜ばれ、甘美に神への祈りを捧げることができる。だからこそ、教会は「地上の天」と呼ばれ、そこに立つ者たちは天に立つ者と見なされるのだ。　この暗く悪臭漂う修道室こそ、裁きに先立つ試練ではないのか。果てしない苦しみへの前兆ではないのか。　しかし、これらすべてを感謝をもって耐え忍ぶ者は、正当にこう言うことができる。*「わたしは主を堅く信頼した。主はわたしに耳を傾け、わたしの叫びを聞いてくださった」*（詩篇39:2）。このような苦難に遭う者たちを慰めながら、使徒はこう言っている。*「もしあなたがたが懲らしめを受けているなら、神はあなたがたを子として扱っておられるのだ……もし、すべての人に共通する懲らしめを受けないなら、あなたがたは非嫡出の子であり、子ではない」*（ヘブライ人への手紙12:7–8）。そして、主ご自身が、兄弟よ、こう言って私たちを戒めておられます。*「あなたがたの忍耐によって、あなたがたの魂を救いなさい」*（ルカによる福音書21:19）。

この尊師の教えを心に深く刻んだ兄弟は、彼のもとを離れず、仕え続けました。そして、勇敢な苦難の担い手であり、義人ヨブの真の模範である聖ピメンは、二十年間病床に伏しながら、絶えず神に感謝し続けました。　そして、彼の召天の時が近づくと、ペチェルスク修道院に御徴が現れた。夜、食堂の上に三本の火の柱が現れ、その後、教会の屋根へと移っていったのである。　このしるしの真の意味を知っていたのは主のみであったが、それを通じて、*「御自身の御使いたちによって霊を、御自身のしもべたちによって燃えさかる火を造られる」*（詩編103:4）が、すでに多くの病に苦しむピメンの魂を、ラザロの魂を救ったように、御自身の天使たちを遣わされたことを示していたのだと推測しても、決して不当ではないだろう。その日、彼は突然回復し、自分を修道者に叙任した者たちの予言を思い出し、自らの死が迫っていることを悟った。　彼は立ち上がり、すべての修道室を巡り、皆に頭を下げて許しを請いました。そして、病に伏している修道士たちにはこう言いました。

「兄弟たち、友よ、立ち上がって、私を見送ってください！」

その言葉と同時に、彼らの病は去り、彼らは健康を取り戻して彼の後を追った。一方、聖ピメンは教会に入り、聖体拝領を行った後、自らの死の床を手に取り、何の指示もなく、生まれてから一度も訪れたことのない、見たこともない洞窟へとそれを運んでいった。　洞窟に入ると、彼は聖アントニオの棺に頭を下げ[5476]、自分が埋葬されたい場所を指し示した。死を前にして、彼は近くにある兄弟たちの棺を指さしながら、驚くべき秘密を明かした。

「ここには」と彼は言った。「今年、あなたがたは二人の兄弟を葬った。一人はスキーマを身につけておらず、もう一人はスキーマを身につけていた[5477]。スキーマを身につけていない状態で葬られた最初の兄弟は、死後、スキーマを身につけている姿で見つかるだろう。彼は何度もスキーマを受けたいと願っていたが、いつも先延ばしにしていた。しかし、彼はその装いにふさわしい行いを見せたため、主は死後に彼にスキーマを授けられたのだ。　一方、修道服を着て埋葬されたもう一人の兄弟は、実際には修道服を着ていません。彼は生前、修道服を望まず、それにふさわしい行いも示さなかったのです。ただ、「私がこの世を去るのを目撃したら、その時に私を修道服に剃り上げてくれ」と言っていただけで、　彼は、*「死者は主を賛美せず、墓に下る者も皆、主を賛美しない。しかし、私たちは主を賛美する」*（詩編113:25–26）と語った者の言葉を忘れていたのです。　それゆえ、彼からはスキマの尊厳が奪われ、それにふさわしい行いを見せた者に与えられた。*「なぜなら、持っている者には」*（善行を）*「さらに与えられ、増し加えられるが、持たない者からは」*（善行を）*「持っているものまでも取り去られる」からである*（マタイ25:29）。　「三番目の兄弟は」と彼は続けた、「何年も前にここに葬られ、その肉体はすっかり朽ち果てたが、彼の修道服だけは朽ちることなく残っている。それは彼の裁きと非難のためにとっておかれているのだ。なぜなら、彼はこの装いにふさわしくない行いを行い、生涯を怠惰と罪の中で過ごし、主の*『多く与えられた者には、多くが求められる』*（ルカ12:48）という主の言葉を忘れていた。スキマへの剃髪は、永遠の苦しみから救い出す善行を行わない者たちには、何の益ももたらさない。

その秘密を明かした後、聖ピメンは兄弟たちにこう言った。

「ほら、私の魂を迎えに来るために、私を剃髪した者たちがやって来た。」

この言葉を述べた直後、彼は横たわり、主のもとへ召された[5478]。修道士たちは、彼を指定された場所に大いなる敬意をもって葬った。　――尊者がお話しになった墓を掘り起こすと、その言葉通り、三人の修道士が見つかった。そのうち、最近亡くなった二人のうち、スキマを着たまま埋葬されていた一人は、そのスキマを剥ぎ取られていた――それは、スキマを持っていなかったもう一人の修道士に掛けられていたのだ。　三番目の兄弟は、すでに長く前に亡くなっていたが、体はすっかり朽ち果てていた。ただ、彼のスキマだけが無傷であった。そして皆は、各人の行いに応じて報いる、言葉に尽くせぬ神の裁きに、長く驚嘆した。神に栄光と誉れと権威が、今、そして常に、そして世々限りなくあるように。アーメン。

修道士オラの帰天

記念日：8月7日

[5476] 聖アントニオ（1073年没）の聖遺骨は、彼が修行に励んだ洞窟（いわゆる「近洞窟」）の地下に安置されている。

[5477] スキマとは、修道生活の最高位を示す衣であり、「大天使の装い」と呼ばれる。スキマの授戒の際、修道士にはいくつかの特別な衣、すなわちクコールとアナラヴが着せられる。　クコールとは、頭と肩を四方から包み込む衣である。上部はやや尖っており、赤い紐で刺繍された五つの十字架で飾られている。これらの十字架は、額、胸、両肩、そして背中に配置されている。アナラヴとは、四隅に紐が縫い付けられた四角形の布である。　アナラヴは、首の上部から紐で垂れ下がり、両側に分かれて脇の下の筋肉を包み込み、胸と肩で十字形に交差して、同じ紐で衣服を巻きつけ、締め付ける。クコールもアナラヴも、いずれも神聖な意味を持つ。

[5478] 1110年2月11日。

エジプトのフィヴァイダ[5479] 、エチオピア[5480] に隣接するこの地において、修道者たちの間に、オラという名の驚くべき人物がいた。彼は数多くの修道院を設立し、その修道士たちは千人にのぼり、彼の指導下にあった。　彼は90歳の、白髪に彩られたスキモナフの長老であり、極めて威厳ある風貌を備えていた。その顔にはこれほどまでに霊的な気品が表れており、まるで肉体を持たない存在であるかのような印象を与えた。　尊者オルは、遠く離れた荒野で修道生活を始め、そこで長年にわたり完全な孤独の中で、最も厳しい断食を守りながら暮らした。その後、神の御心により、彼はそこから移り住み、ある町の近くに修道院を建立した。兄弟たちが薪を求めて遠くまで行く必要がないよう、彼は自らの手でその周辺に果樹園を植えた。　彼がやって来るまでは、そこには一本の木さえなかった。このように、尊者オルは兄弟たちの魂の救いだけでなく、肉体の生活に必要なものにも心を配り、修道士たちが何一つ不足することのないよう努めた。一方、彼自身が遠い荒野に住んでいた頃は、そこで草や根菜だけを糧としていたが、それらは彼にとって非常に美味しい食事に思えた。　水は見つけた時だけ飲み、一日の大半と夜の間、聖人オルは熱心な　祈りに捧げていた。彼はこのような生活様式を高齢に至るまで続け、ある日、主の天使が夢の中に現れてこう言った。

「あなたは多くの者の父となるだろう。なぜなら、多くの人々があなたに託され、あなたは数千もの人々を救いの道へと導くからである。　来世において、あなたは救いのために獲得した功績に応じた報いを受けるだろう。これほど多くの人々の肉体的欲求を満たすためにどれほどの物資が必要になるかと心配して疑うことはない。あなたには何一つ不足することはない――神に願うものはすべて与えられるだろう。」

その幻視の後、長老は集落に近づいた。まず、彼は自分用の小さな小部屋を建て、野菜を植えた。そしてここでは、かつて遠く離れた荒野でそうしていたように、聖者オルは野菜だけを糧とし、それもごく少量しか口にしなかった。週に一度しか食事をとらないこともよくあった。　以前は読み書きができなかったが、遠い荒野から移り住んだ後、主は彼に聖書を理解する賜物を授けられた。ある兄弟が彼に一冊の本を持ってくると、彼はそれを開いて、まるで昔から読み書きを習得していたかのように読み始めた。　同時に、聖人オルは神から悪霊を制する力を授かった。悪霊に取り憑かれた者たちが力ずくで彼の元へ連れて来られ、彼が行っていた秘密の神に喜ばれる行いを、皆が聞こえるように語り明かした。聖人は、天から授かったキリストの恵みによって、他にも多くの癒やしを成し遂げた。　聖オールの元には、彼の指導の下で修行を志す人々が次々と集まり始め、やがて相当数の修道者たちの共同体が形成され、聖オールはその指導者兼監督者となった。　彼は、まず霊的な糧を味わい、それから初めて肉体の糧に手を付けるのが常であった。神聖な秘跡に与った後で初めて食卓につき、兄弟たちに神から霊感を受けた教えを説いたり、魂に益となる物語を語ったりした。ある時、兄弟たちを啓発するために、彼は次のように語った。

「私は荒野で、三年間も地上の食物を口にしなかった一人の男を見ました。主の天使が二日おきに天の食物をもたらし、それは同時に水代わりにもなっていたのです。」

「知っている」と、尊者オルは別の機会に語った。「ある修道士に、天の軍勢や天使の位階の姿をとった悪霊たちが現れたことがある。彼らは、まるで栄光に包まれた王が座しているかのような、炎の戦車を彼に指し示した。その王は修道士にこう言った。

「お前はあらゆる美徳を備えている。あとは私にひれ伏すだけだ。そうすれば、私はエリヤ（列王記下2:1–25）のように、お前を火の戦車に乗せ、ここから天へと連れ去ってやる。」

この言葉を聞いて、修道士は思案にふけった。

[5479] フィヴァイダ――古代に名高い都市テーベの地域。この名称は、その主要都市の名にちなんで、上エジプト（南エジプト）全体を指すこともあった。この地域には修道院が点在する砂漠が数多く存在した。

[5480] エチオピア――エジプトの南に位置する国――ヌビアおよびアビシニア。

「これはどういうことだろうか？」と彼は考えた。「私は常に、私の救い主である王に礼拝を捧げている。もし私の目の前にいるこの方がその救い主ご自身であるなら、私が常に彼に礼拝を捧げていることを知っておられるのだから、私に礼拝を要求されるはずがない。」

そう考えた後、修道士は言った。

「私には、絶えず礼拝を捧げている王がおられる。お前は私の王ではない。」

するとたちまち、悪霊たちはその王も戦車も共に姿を消した。

聖者オルはこれらすべてを、あたかも他人のことであるかのように兄弟たちに語ったが、兄弟たちの多くは、語られたことがすべて彼自身に起こったことであることをよく知っていた。　尊者オルは誰に対しても非常に親しみやすく、慈悲深かった。兄弟が彼のもとを訪れ、共に暮らしたいと願うと、彼はたった一日でその兄弟のために独房を建て上げた。作業に取り掛かると、尊者オルは兄弟たち全員を呼び集め、皆が熱心に彼を手伝った。　ある者は石を運び、ある者は砂を運び、またある者は水を運び、さらに別の者は木材を運んだ。こうして夕方までには独居室が完成し、聖オルはそれを訪れた兄弟に引き渡す際、生活に必要なあらゆるものを十分に備えて与えた。　神は、御自分の御心に適う者に、彼が求めたすべてのものを豊かに与えられた。この尊い父については、まだ弟子が一人しかいなかった頃の生活に関する次のような話も伝わっている。ある時、キリストの復活という輝かしい祝日が近づいた際、その弟子は師にこう言った。

「父上、今が復活祭であることをご存知ですか。皆が祝っているように、私たちも祝わなければなりません。」

「ああ、わが子よ」と長老は答えた。「今が復活祭だということを忘れていた。」

そして、ケリアから出て、尊者オルは青空の下に立ち、両手を天へと差し伸べた。その姿勢を崩すことなく、彼は三日間その場に立ち続け、神について深く思索にふけった。三日後、彼はケリアに戻り、こう言った。

「ほら、わが子よ、私の力の及ぶ限り、こうして復活祭を祝ったのだ。」

「師よ、一体何をしていらっしゃったのですか？」と弟子が尋ねた。

「修道士にとって――」と長老は答えた。「祝日や復活祭とは、イスラエルの民が海を乾いた足で渡ったように（出エジプト記第14章）、この世の雑音から心を遠ざけ、神に近づくことにあるのだ。　「修道士は」と彼は続けた。「目に見える世界から遠ざかることで、目に見えない神に近づく。逆に、地上の物事に執着すれば、それによって非物質的な神から自らを遠ざけてしまうのだ。」

多くの兄弟たちの父である聖人は、一人ひとりの生活や行い、さらには彼らが密かに行うことさえも知っていた。

ある時、嘘をつく悪癖のあるある巡礼の修道士が、尊者のもとへ向かう途中、自分の衣服を隠しておいた。半裸の状態で彼の前に現れ、衣服を乞うと、尊者オルは直ちに皆の前で、隠しておいた衣服を取り出して、その修道士の嘘を暴いた。　洞察力に富んだ師が、他者から隠された秘密や隠された事柄さえも知っているのを見て、修道者たちは皆、畏怖の念に打たれた。そして、誰も彼から何かを隠そうとはせず、また彼の目の届かない場所で違法な行為を行うことも敢えてしなかった。なぜなら、神は彼にすべてを明らかにしておられたからである。　修道士たちだけでなく、世俗の人々をも数多く救いの道へと導いた尊者オルは、[5481] 、天の住まいに主のもとへ召され、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神の御座の前に立つ偉大な尊者たちの列に加えられた。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

[5481] 生誕から90年、約390年。

聖ドメティオス尊者殉教者の記念日

記念日：8月7日

聖ドメティウスは、コンスタンティヌス大帝の治世に生きた。彼の故郷はペルシャであり、そこであるウアールという人物によって異教からキリスト教へと改宗した。　親族や、異教の不義に満ちた故郷を後にし、聖ドメティオスはギリシャ王国の辺境、ニジビアの町[5482]　へと赴いた。そこである修道院に入り、聖なる洗礼を受け、その後、修道者の衣をまとい、断食の生活という修行を非の打ち所なく実践した。　しかし、嫉妬深く狡猾な悪魔の讒言により、その修道院に住む修道士たちから憎まれることとなり、聖ドメティオスはそこから逃れ、テオドシオポリの聖殉教者セルギウスとバッカスの修道院へ[5483] へ避難せざるを得なくなった。 そこで彼は、アルヒマンドリト・ヌルヴェルの生涯に倣った。ヌルヴェルについては、60年間にわたり煮たものを一切口にせず、睡眠も極めて少なく、しかも横になったり座ったりすることなく、杖に寄りかかって立ったまま眠っていたと伝えられている。　アルヒマンドリト・ヌルヴェルは尊者ドメティオスを助祭に叙階したが、聖人がアルヒマンドリトが彼に司祭になるよう強要しようとしていることを知ると、彼はそこから立ち去った[5484]　。ある人里離れた山[5485]　に隠遁し、聖ドメティオスはそこで、酷暑や厳寒、あらゆる天候の変化に耐えながら、神にかなう生活を送った。　その後、ある洞窟に入り、そこで暮らし、キリストの御名によって数多くの奇跡を行なった。彼のもとに訪れる多くの人々を病から癒やし、偶像崇拝からキリストへの信仰へと導いた。ところが、この地をユリアヌス・アポステート[5486]　が訪れた際、聖ドメティオスについてすべてを知ると、彼を石打ちの刑に処すよう命じた。　この悪行を遂行するために派遣された者たちは出向き、昼の第三時に、聖なる父が二人の弟子と共に　にふさわしい賛美を捧げているところを発見した。彼らは彼らに襲いかかり、石で打ち殺した。こうして、尊者ドメティオスは二人の弟子と共に[5487]、神に喜ばれる生涯を全うしたのである。

トロパリオ、第4声：

山上で断食の修行に励み、知恵をもって敵の軍勢を十字架の武具をもって打ち破り給うた、至福なる方よ。また、勇敢に苦難を身にまとい、二人のために神から冠を授かり給うた、尊き殉教者、永遠に記憶されるドメティオよ。

[5482] メソポタミアにて。

[5483] ユーフラテス川の東岸。

[5484] 二人の弟子と共に。

[5485] シリアのキルラ地方にて。

[5486] ユリアヌス・アポステート（背教者）は、コンスタンティヌス大帝の甥であり、その弟ユリウス・コンスタンティウスの息子で、331年に生まれた。345年、兄のガッルスと共にコンスタンティウスによってカッパドキアへ追放され、そこで厳重な監視の下で6年間を過ごした。　351年、彼は流刑地を離れ、ニコメディアで数年間を過ごし、そこで哲学の研究に没頭した。355年、コンスタンティウスによってガリアの軍司令官に任命され、そこで軍隊の支持を勝ち取り、361年に軍によって皇帝として擁立された。　異教徒の師の指導の下での哲学の研鑽、アリウス派の動乱に起因するキリスト教徒間の不和、そしてコンスタンティウスへの憎悪が、ユリアヌスの中に、彼を迫害した宗教――キリスト教――への憎悪を掻き立てた。彼は異教を復活させ、キリスト教を根絶することを目標とした。しかし、彼の試みはすべて完全な失敗に終わった。 ユリアヌスは363年、ペルシア遠征中に死去した。彼の最期の言葉はキリストに向けられたものであった。「お前は私を打ち負かした、ガリラヤ人よ！」

[5487] 363年3月23日。

コンダク、第6調：

朽ちゆくものや、人を低みへと引きずり下ろす思惑を退け、尊き殉教者ドメティエよ、あなたは修道士たちにとって偉大な導き手として現れました。真の神であるキリストを崇めることを拒む王の猛威をも恐れませんでした。そのゆえに、あなたは「神は私と共におられ、私たちに敵う者は誰もいない」という賛歌を歌いながら、この世を去りました。

聖殉教者マリーナとアステリアの殉教

記念日：8月7日

異教の王ヴァレリアヌスとその息子ガリアヌスの時代[5488]、ローマには、キリストの信仰を公言する、高潔で徳の高い貴族アステリウスという人物が住んでいました。彼は名門の出身で裕福であり、王たちの寵愛を受けていました。　当時、キリストの教会を襲った迫害の中でも、アステリウスは敬虔さを厳格に守り、主イエスへの信仰を微塵も隠そうとはしませんでした。

ある日、パレスチナ地方に滞在していた聖アステリウスは、フェニキア人からはパネアデスとして知られるケサレア・フィリッポス[5489]という町を訪れた。多くの偶像崇拝者が住むこの町では、パネアス山から湧き出る泉の近くで、ある異教の祭りを執り行う習慣があった。　ここから、ヨルダン川が源を発しているとされている。この祭りの際、悪魔に捧げられた生贄は目に見えなくなっていた。そこに棲む悪魔が生贄をさらい、人々の目から隠していたため、迷信に惑わされた異教徒たちは、この悪魔による欺瞞を偉大な奇跡として称賛していた。　キリストの僕アステリウスは、その悪魔の祭りに立ち会った際、惑わされた民の迷いと心の盲目さに心を痛まずにはいられなかった。彼は天を仰ぎ、両手を挙げて、民を惑わす悪魔をそこから追い出してくれるよう、信仰をもってキリスト・神に祈った。　するとたちまち、悪魔は神の力によって追い払われ、悪魔の奇跡は止んだ――皆が自分の目でその犠牲を目撃したのだ。それはもはや以前のように隠れることも、見えなくなることもなかった。　その奇跡が収まると、異教徒たちが泉の周りに集まることもなくなったため、祝祭も終わりを告げた。こうして、信仰に裏打ちされた聖アステリウスの祈りが、その場所を悪魔の穢れから清めたのである。

キリストのために彼が受けた苦難は、神の御心により、次のようにして起こった。パレスチナのもう一つのケサレア[5490]には、マリンという名の高貴で裕福な戦士が住んでいたが、彼はキリストへの信仰においてさらに誠実であり、善行に富んでいた。　連隊の仲間たちは、その職に就いていた兵士の死により空席となった百人隊長のポストに、彼を推挙した。マリンがその職に就こうと準備を進めていたところ、別の兵士が嫉妬し、自らも百人隊長になりたいと願って、裁判官アケオスのもとへ赴き、　彼は、マリンがキリスト教徒であるため、神々や王たちの像への生贄を捧げることを拒んでいると告発し、さらに――密告者は付け加えた――「　」というローマ法の規定により、そのよう

[5488] ヴァレリアヌス――在位253～259年；ガリアヌス――在位260～268年。

[5489] この都市はヘロデの息子フィリッポスによって建設され、彼はティベリウス皇帝に敬意を表して、この都市をケサレアと名付けた。ヨルダン川の源流に位置していた。

[5490] ケサレア・パレスティナ――遥か昔にはストラトンの町、あるいはストラトンの塔と呼ばれていた。この町はヘロデ大王によって再建され、彼は皇帝アウグストゥスに敬意を表してケサレアと名付けた。地中海沿岸に位置していた。　聖使徒パウロは、宣教の旅の途中でこの地に何度も立ち寄った（使徒言行録9:29–30、18:28、21:8）ほか、2年間この地で囚人として過ごした（使徒言行録23:23、24:27、25:4–6）。この町には百人隊長コルネリウスが住んでおり、聖使徒ペトロによってキリストに改宗させられ、洗礼を受けた（使徒行伝10:1–48）。また、聖使徒フィリポもここに住んでいた（使徒行伝21:8）。また、天使に打たれ、虫に食われて亡くなったアグリッパも、この地で息を引き取った（使徒行伝 12:20–23）。福音書には、パレスチナのケサリアについての言及はない。

な人物を百人隊長に任命することはできないと主張した。　裁判官は直ちにマリンを呼び出し、彼が信奉する信仰について尋ねた。マリン本人からキリスト教徒であると告げられると、裁判官は彼に三時間の猶予を与え、生きるか死ぬかを選ぶよう命じた。聖マリンには二つの選択肢しかなかった。異教の生贄を捧げて生き延びるか、キリストへの信仰を告白して死ぬかである。

その時、パレスチナのケサリアの司教フェテイックがキリストの殉教者の元へやって来て、彼の手を取り、教会へと導き入れながら、魂に有益な教えを説いた。　その後、聖なる祭壇へと彼を連れて行くと、司教は手で聖福音書と、マリンが腰に帯びていた軍用剣を指し示しながら、こう言った。

「この二つのものの中から、立派な男よ、どちらか一つを選びなさい。この剣を帯びて、一時的に地上の王に仕え、死後に永遠の滅びを受けるか、あるいは天の王の戦士となり、この書物に記された御名のゆえに魂を捧げ、主と共に果てしない永遠に統治するか。」

聖マリンは、右手を聖福音書へと伸ばし、熱烈な愛をもってそれを口づけし、キリストのために死を厭わない覚悟を示した。すると、司教は彼にこう言った。

「あなたの魂のすべてを神に委ね、神の力に支えられて、自ら選んだ道を受け入れなさい。」

その後、司教は聖マリンにこう告げて彼を見送った。

「平安のうちに去れ。」

聖マリンが教会から出てくると、すでに裁判所の門の前には告示係が立っており、三時間が経過していたため、大声でマリンの名前を呼んでいた。法廷に入ると、聖マリンは以前よりもなお恐れを知らず、自らをキリスト教徒であると告白し、万人の前でキリストの御名を賛美し、異教の不義を非難した。　裁判官は彼に死刑を宣告し、聖殉教者マリンは城外へ連れ出され、そこで斬首された。彼の殉教の最期には、神の御計画によりその時にちょうど街を訪れていた聖アステリウスが立ち会っていた。　聖マリンの苦難に満ちた死の後、彼は自身の上着である高価な衣を脱ぎ、それを地面に広げ、殉教者の尊い遺体と首をその衣で包み、自らの肩に担いで墓まで運び、尊厳をもって埋葬した。この功績により、彼自身も殉教の冠に浴することとなった。不敬虔な異教徒たちが彼を捕らえ、首を切り落とした[5491]。こうして聖アステリウスは、聖マリーナと共に、聖なる殉教者の一人として、天の王であるキリストの前に現れたのである。

これは、父ヴァレリアヌスの死後、王位を継いだガリアヌスの治世のことだった。多くのキリスト教徒の血を流したことで、彼は神の怒りによって罰せられた。戦いの最中、ペルシア軍がローマ軍に勝利し、ヴァレリアヌスは生け捕りにされてペルシア王サヴォリウスの手に落ちた。　彼はペルシアへ連行され、そこでサヴォリウスが馬に乗る際、その足台代わりとして使われた。しかも、ヴァレリアヌスをこの不名誉な捕虜生活から身代金で買い戻すことはできなかった。サヴォリウスは、ローマ皇帝を屈服させることができるという栄光を重んじ、彼に対するいかなる財宝も受け取ろうとしなかったからである。　ヴァレリアヌスに対する長きにわたる虐待の末、ペルシア王はついに、民衆の目の前で彼の皮を剥ぎ、塩を振りかけるよう命じた。こうして、悪人はこの世で永遠の苦しみを受け始め、その生涯を惨めな最期で終えたのである。　父のこのような最期にガリアヌスは恐怖を覚えた。彼は、その死を、キリスト教徒の血を容赦なく流したことに対する神の懲罰であると悟ったのである。そのため、ガリアヌスはローマ帝国の全領土に対し、キリスト教徒への迫害を中止し、司教たちが自由に教会を統治することを許可するよう命じる勅令を発した。　しかし、その勅令がパレスチナのケサレアに届く前に、聖マリンと聖アステリウスはキリストのために殉教の死を遂げ、父と聖霊と共に君臨される、彼らの主であり私たちの主であるイエス・キリストの喜びの中へと入っていった。

[5491] 250年

8月21日

8月8日（旧暦）

同日、12世紀のペチェールスクの聖画師、アントニオの洞窟に眠る聖グリゴリオスの記念日。

同日、イエス・キリストを告白したために火の中に投げ込まれた聖殉教者エレウフェリウスとレオニドの記念日。

同日、ギリシャ王ミカエル9世パレオロゴスおよびアンドロニコスの治世に生き、多くの霊的益となる著書を著し、14世紀前半に没した聖グリゴリオス・シナイテスの記念日。

「トルグの」と呼ばれる、その尊く奇跡を起こすイコンの顕現を記念して、聖母マリアを祝う日

8月8日の記念日

世界の創造から6822年[5492] 、キエフおよび全ロシアのミトロポリット・ペトロの時代、敬虔なヤロスラヴリ公ダヴィド・フェオドロヴィチのもとで、ロストフおよびヤロスラヴリの司教プロホール（別の伝承によればトリフォン）は、管区を巡回する中でキリロ＝ベロゼルスキー修道院を訪れた。 そこから彼は舟で水路を進み、最初はヴォルガ川の支流シェクセン川を、その後ヴォルガ川本流を遡ってヤロスラヴリへと向かった。旅人たちがヤロスラヴリから6ポプリシュ[5493] の距離に差し掛かった頃、日は暮れ始めていた。そこで彼らは、街のあるヴォルガ川の対岸にそびえる山に泊まることにした； 山に登ると、彼らは天幕を張った。その宿営地は、ちょうどヴォルガ川の支流であるトルガ川が合流する地点の真向かいにあり、その一帯は広大な森に覆われていた。 宿泊中、司教は真夜中に目を覚まし、ある光に気づいた。急いで起き上がり、テントから外を覗くと、同行者たち――司祭、聖職者、使用人、さらには見張り番までもが皆眠っていた。その間も、強烈な光がその一帯全体を照らし出していた。 川の方を振り返ると、司教は対岸に極めて明るく、異様なほどに輝く光の柱を目にした。同時に、ヴォルガ川を渡ってそこへ続く橋も見えた。この神秘的な現象は、司教に驚きと恐怖が入り混じった感情を抱かせた。 しかし、神に祈りを捧げた後、彼は司教の杖を手に取り、天幕を出て、誰にも気づかれないように川へと向かい、目に見える橋へと歩みを進めた。実際には、司教はまるで木の上を歩くかのように水面を歩いていた――その場所にはかつて橋などなかったが、神の御心により、 水が固まって、まるで彼の足元に橋ができたかのようだった。対岸にたどり着くと、司教は、幼子、すなわち我らの主イエス・キリストを腕に抱く至聖なる聖母マリアの聖像を目にした。その聖像は木の上に立っていたのではなく、不思議なことに五キュビトの高さで空中に浮かんでおり、地上からは手を伸ばしても届かないほどだった。 司教は聖母マリアのイコンにひれ伏し、涙を流しながら聖母に心からの祈りを捧げた。かなり長い祈りを終えた後、彼はその場所に戻ったが、その際に自分の杖を置き忘れてしまった。 同じ橋を渡って川を越えると、司教は自分の天幕に戻った。皆が眠っていたため、彼の旅のことは誰にも知られることはなかった。司教は朝まで安らかに眠り続けた。夜が明けると、皆が起き上がり、いつものように早朝の礼拝が行われた。 舟へ向かう時間となり、従者たちは聖人の杖を探し始めたが、いくら探しても見つからなかった。そこで彼らは司教に、夕方にはテントの中に置いてあったはずの杖が、どこへ消えてしまったのか分からないと

[5492] キリスト降誕後1314年

[5493] およそ6ヴェルストの距離にある。

伝えた。　司教は、杖を川の向こう岸に置き忘れていたことを思い出し、主がその奇跡的な出来事を世に知らしめようとしておられるのだと悟った。　涙で言葉も出ない中、彼は指でヴォルガ川の向こうを指し示し始めた。その後、動揺のあまりか、聖人はヴォルガ川の対岸にたどり着いた経緯やそこで見たものを順を追って語った。そして、彼が指し示したヴォルガ川の向こうへ行き、杖を持ち帰るよう命じた。　従者たちはその場所へ向かい、杖を探している最中に森の中で聖母マリアのイコンを発見したが、それはもはや空中に浮かんでいるのではなく、木々の間に地面に立っていた。そのそばには杖も置かれていた。聖なるイコンに礼拝を捧げ、杖を手に取ると、彼らは聖人のもとへ戻り、聖母マリアのイコンを目撃したことを報告した。　そこで司教は、ヤロスラヴリへの旅を一時中断し、随行者全員を連れてヴォルガ川を渡った。至聖なる聖母マリアのイコンを目にしたとき、彼はそれがまさに、夜間に光の柱に囲まれて空中に浮かんでいたあのイコンそのものであると即座に悟った。聖人は喜びと霊的な歓喜に満ちてひざまずき、至聖なる聖母マリアに心からの祈りを捧げ、その聖なるイコンに敬虔に口づけをした。そして、そこにいた者たちも皆、喜びの涙をこらえきれず、尊い御像にひれ伏しながら、神の母に熱心に祈りを捧げた。

この至聖なる聖母マリアのイコンの奇跡的な顕現は、キジケスの聖エミリアン司教の記念日が祝われる8月8日に起こった。

聖プロホールは、少しも躊躇することなく、直ちに自らの手で聖なるイコンが現れた場所を清め、木を切り倒し、教会建設のための木材を準備し始めた。彼と共にいた者たちもその模範に熱心に倣い、その日のうちに小さな教会の礎を据え、正午までにその建設を完了させた。　この奇跡的な顕現とそれにまつわる出来事の噂はヤロスラヴリにまで届き、大勢の人々が司教のいる場所へと駆けつけた。訪れた人々の中には、聖職者も信徒も、老若男女、富める者も貧しい者も、健常者も病人もいた。　至聖なる聖母マリアのイコンを目の当たりにすると、人々は言葉に尽くせない喜びに満たされ、熱心に祈りを捧げた。誰もが教会の建設を手伝おうと努め、ある者は木を切り倒し、ある者は教会の建設を始めた人々と共に働いた。　教会が完成すると、司教はその日の夕方、教会を聖別し、奇跡を起こす聖像を安置した。その後、新しく建てられた教会で礼拝を執り行った聖人は、その教会を「聖母マリアの尊き入堂」の名で命名し、8月8日を聖母の聖像の顕現を祝う日と定めた。　その場に居合わせたすべての病人は、至聖なる聖母の恵みにより、癒やされた。そこで司教は、教会に付属する修道院を設立するよう命じ、その日のうちに修道院長を任命した。　この時から、奇跡の聖像が現れた場所に修道院が設けられました。当初はごく小規模なものでしたが、その名声が広まるにつれて、規模も拡大していきました。この修道院は、神の御加護のもと、今日まで存続しており、この場所でヴォルガ川に合流する支流「トルガ」にちなんで、「トルガ修道院」として知られています。

至聖なる聖母マリアの奇跡の聖像が現れて以来、数多くの奇跡が起こり始めましたが、ここではその中でも特に際立ったものをいくつかのみ挙げておきます。6900年9月16日、[5494]　、イグメン・ゲルマンの在任中、司祭が早課の第九歌の後に次のように唱えたときのことでした。　「聖母マリア、光の母を賛美の歌で讃えよう！」と叫んだ瞬間、聖母マリアの右手から突然聖油が流れ出し、教会は不思議な香りに満たされた。この奇跡を目撃した教会に居合わせた者たちは皆、驚きと畏怖の念を抑えきれず、同時に神とその清き母を賛美した。　早課の後、至聖なる聖母への祈祷会が執り行われ、その終了時に「御母よ、御自分のしもべたちの祈りをお受けください」と歌われている最中、聖母が腕に抱いていた清き幼子キリストの左足から聖油が流れ出た。　こうして、その時に教会にいた信者たちの目の前には、至聖なる聖母の右手とキリストの左足という二つの源から、一つのイコンから奇跡的に聖油が湧き出ている光景が映し出された。　この驚くべき奇跡は、修道院長と修道士たちの心に霊的な喜びを呼び起こさずにはいられなかった。彼らは涙を流しながら聖母マリアの前にひざまずき、偉大な治癒の力を持つ聖油で自分の額に塗った。　病める者――どのような病に苦しんでいよ

[5494] キリスト降誕後1392年

うとも――この奇跡の聖油を額に塗られるや、たちまち健康を取り戻した。　この奇跡的な出来事からしばらくして、ニキータという名のボヤリンが、大公によってモスクワからベロゼルスク地方へ派遣された。彼が妻や使用人たちと共にヤロスラヴリに到着すると、川を遡って旅を続けるため、舟に乗り込んだ。　このボヤリンには一人息子がいたが、まだ幼い男の子――4歳にも満たなかった――で、旅の途中で病に倒れて亡くなってしまった。その遺体は、ここで埋葬されるために、トルグの聖母マリア修道院まで運ばれた。　亡くなった少年の両親は、他に子供がいなかったため、至聖なる聖母マリアのイコンの前で悲しみに暮れて泣いていた。遺体を整えた後、棺や埋葬に必要なその他の準備に取り掛かった。こうした悲しみに満ちた準備作業に、昼の1時から夜の10時までが費やされた。　そして、いつもの祈祷の後、墓前の賛美歌が始まったその時、少年は突然生き返り、声を上げた。皆は驚愕すると同時に喜び、とりわけ両親は喜びに満ちていた。彼らは、息子が再び生き生きと元気な姿で目の前に現れたことに、主とその聖母マリアにどのように感謝してよいか分からなかった。　――ある時、神の御許しにより、修道院で大規模な火災が発生した。その際、教会も瞬く間に燃え上がり、修道士たちは教会の扉を開けて、何かを聖堂から運び出すことさえできなかった。教会全体と、その中にあったすべてのものが焼き尽くされてしまった。　皆は悲しみに暮れ、その奇跡を起こす聖像もまた同じ運命をたどったのではないかと考えていた。しかし、火災の後、修道院近くの森で、聖像が全く無傷で、輝きに包まれた状態で予期せず発見された。もちろん、人間の力ではなく、天使の手によってのみ、あの聖像は激しい炎の中から救い出されたに違いない。　修道者たちは喜びをもって聖なるイコンを受け入れ、遅れることなく、　、より広々とした規模で、装飾も豪華な新しい教会の建設に取り掛かった。　そして今なお、その美しい教会堂や修道院の建物を見ることができる。また、無原罪の聖母マリアの恵みは、今もなお、その聖なるイコンという泉から、病の癒やしを注ぎ出し、人々から悪霊を追い払うという奇跡を絶えず行い続けている。

これらの奇跡は、修道院そのものに詳しく記されている。　私たちは、ほんのわずかなことだけを、それも簡潔に述べるにとどめます――より詳細な物語を語るには時間が足りませんから――神と、その聖母マリアを賛美し、すべてのキリスト教徒が常に、今この時も、そして永遠に崇めるべき、彼女の尊い聖像にふさわしい礼拝を捧げましょう。アーメン。

聖なる父、奇跡行者ミロン、クレタ島の司教の記念日。

記念日：8月8日

聖ミロンはクレタ島[5495]で生まれ、同地で育ちました。彼はかなり若いうちに結婚し、主な生業は農業でした。聖ミロンは「自らの額に流す汗」によって、自分自身だけでなく、収穫物を貧しい人々に分け与えることで他の人々をも養いました。　主は、聖ミロンのこうした労苦を祝福されました。施しの量に比例して、収穫の量も豊かになったのです。　聖ミロンは、その土地に住む誰よりも慈悲深かった。ある時、彼は自分の脱穀場で、すでに袋を小麦でいっぱいにし、持ち上げられなくなっていた泥棒たちを捕まえた。聖ミロンは、彼らに体罰やその他の罰を与える代わりに、彼らのところへ歩み寄り、自らの手で袋を肩に担ぐのを手伝った。　その際、聖ミロンは盗人たちに、自分のこの行いを誰にも話さないよう厳しく禁じた。その徳高い生涯により、聖ミロンは司祭に叙階された。この聖職において、彼は信徒たちにキリスト教の聖なる生き方を熱心に教え導き、不義な王デキウスによる迫害の時期には[5496]、彼らに苦難を堅く耐え抜くよう熱心に説いた。デキウス王の没[5497]により迫害が終結すると、聖ミロンは司教の座に就いた。司教として、彼はキリストのために迫害を受け

[5495] クレタ島――地中海東部に位置するギリシャ諸島の中で最大の島。
[5496] デキウス――249年から251年まで皇帝を務めた。
[5497] 251年

た聖殉教者たちの記念日を定め、また神の力によって多くの奇跡やその他の驚くべき業を成し遂げた。　例えば、聖ミロンは川の流れを止めたことがある。洪水の際、トリトンという名の貴族が川を渡らなければならなかった[5498]。聖なる司教は、その貴族が川を渡り、再び戻ってくるまで川の流れを止めた。その後、聖ミロンは杖を送り、川に元の流れを再開するよう命じた。　聖ミロンの使者が川にたどり着き、聖人の杖で川の水をかき混ぜながらその命令を繰り返すと、川は並外れた速さと勢いで、以前の方向へと川床を流れ下った。　神に愛されたこの聖人は、今述べたような偉大な奇跡を数多く行いました。聖ミロンは、生涯を神の聖なる戒めを遵守することに捧げ、百歳の長老となって主のもとへ旅立ちました[5499]。

私たちの聖なる父、キジケの司教エミリアン・殉教者の記念日

記念日：8月8日

キジケスの司教エミリアン[5500]は、偶像破壊者レウ・アルメニアヌスの治世下において、キリストへの信仰告白のために苦難に耐えました[5501]。聖エミリアンは、尊厳ある聖なるイコンへの礼拝をやめるよう繰り返し強要されましたが、聖なる教父たちの教えに揺るぎなく従い、従いませんでした。
この正教への忠実さゆえに、彼は異端者たちから多くの苦難、さらには投獄さえも強いられた[5502]。しかし、聖エミリアンは、一時的な苦しみを通じて永遠の至福を得られるという希望を抱き、すべてを喜びをもって耐え抜いた。　このような純粋にキリスト教的な心構えをもって、悲しみと苦難の中を人生の道を歩み、聖エミリアンは、主を信頼し、殉教者の冠を戴いて、監禁の地で息を引き取りました。

コンダク、第3声：

三位一体の擁護者として現れたあなたを、教会は賛美の歌を歌って称える、エミリアンよ。あなたは教会のために苦難に遭われた。それゆえ、私たちはあなたの記憶を尊び、異教の侵略からあなたの僕たちを救い出してください。

[5498] ニコディモスの『聖人伝』および『シナクサリスト』には別の記述がある。そこでは、トリトンという名の川が洪水の際に聖ミロンによって止められ、彼はその川を陸地を歩いて渡った後、杖を投げ入れて再び流れ始めるよう命じたと伝えられている。クレタ島では、ディオドロス・シシリアヌスの時代にもトリトン川は知られていた。

[5499] 聖ミロンは350年頃に亡くなった。

[5500] キジクは、プロポンティス（マーブル海）のアルクトニッサ半島に位置する。この都市は、紀元前5世紀にミレトス人によって建設された。

[5501] レウ5世（アルメニア人）は、813年から820年まで皇帝を務めた。

[5502] こうして815年、彼は他の司教たちと共に幽閉された。聖エミリアンを筆頭とする司教団が、聖像破壊派の皇帝のもとで開かれた会議において、司教たちの筆頭である彼は、教会の権利を断固として擁護し、レオン・アルメニア人に対して勇敢に語りかけた。聖像破壊を推し進めようとする皇帝の説得に対し、彼は次のように述べた。　「皇帝よ、もしこの問題が、あなたご自身が言われたように教会の問題であるならば、慣例に従って教会内で審議されるべきです。古来より、創世の初めから、教会の問題は教会内で審議されるものであり、皇帝の宮殿で審議されるものではありません」。4月3日の聖ニキタの伝記を参照のこと

8月22日

8月9日（旧暦）

同日、4世紀にエジプトで修業に励んだ、パホミオス大聖人の弟子である聖プソイの記念日。

聖使徒マティアの殉教

記念日：8月9日

ユダ族の出身である聖使徒マタイは、ベツレヘムで生まれた。幼少の頃から、エルサレムで聖シメオン・ボゴプリイムツの指導のもと、聖書と神の律法を学び始めた。　聖マタイは彼から徳ある生き方を教えられ、神の戒めに記された道を厳格に歩み、神に喜ばれる生活を送りました。　主が、聖母マリアから誕生して三十年が過ぎ、ヨハネから洗礼を受けた後、世に御自身を現された時が来た。弟子たちを集め、主は神の御国の到来を宣べ伝え、同時に数えきれないほどの奇跡としるしを行われた。　聖マタイは、キリストの教えに耳を傾け、その奇跡を目の当たりにして、主への愛に満たされました。世俗の心配事を捨て、他の弟子たちや民衆と共に主に従い、受肉された神を直に仰ぎ見る喜びと、その教えがもたらす言葉に尽くせぬ喜びを味わいました。　人間の心の最も秘められた動きさえも御存知である主は、聖マタイの熱意と心の清らかさをご覧になり、彼を御自身の弟子の一人としてだけでなく、使徒としての奉仕にも選ばれました。　当初、聖マタイは七十人の小使徒の一人であり、福音書には次のように記されている。「*主はさらに七十人（の弟子）を選び、二組ずつに分けて御自身の先頭に立たせて遣わされた*」（ルカ10:1）と記されています。その後、主イエス・キリストの自発的な受難、復活、そして天への昇天を経て、聖マタイは十二使徒の列に加えられました。ユダが十二使徒の列から離脱した後、ユダの代わりに誰も選ばれなかったため、十二使徒の列はその完全性を失い、それとともに「十二」と呼ばれる権利も失われました。そのため、使徒たちの筆頭である　聖ペトロは、初期のキリスト教徒たちの集まりの真ん中に立ち、信者たちに向かって、離反して滅びた　ユダに代わる者として、主イエスが使徒たちと共に過ごされていた全期間を通じて、使徒たちと共にいた者の中から誰かを選ばなければならないと語った。そうすることで、主が選ばれた最も親しい十二使徒の集団が、完全かつ不変のものとなるためである。　「*そこで、二人を指名した。すなわち、バルサバと呼ばれるヨセフ……とマティアである。そして、祈って言った。『主よ、すべての人の心を知っておられる方よ。この二人の中から、ユダが離反したこの奉仕と使徒職の務めを引き受ける者として、あなたが選ばれた一人を示してください…… そこで、二人をくじにかけたところ、マティアに当たり、彼は十一人の使徒に加えられた*」（使徒行伝1:23–26）、十二人目として。　この選出はまもなく、炎の舌のような姿で聖霊が降臨した際に、主によって承認された。すなわち、聖霊は他の聖なる使徒たちと同様に、聖マタイの上にも臨み、彼に主の弟子たちと同等の恵みを授けたのである。　聖霊の降臨後、使徒たちは、誰がどの国へ行って福音を宣べ伝えるかをくじ引きで決めた。　聖マタイはくじ引きの結果、ユダヤ地方に割り当てられ、そこで彼は町や村を巡りながら、キリスト・イエスにおいて世に救いが現れたことを宣べ伝え、働き続けました。しかも、ユダヤ人だけでなく、異邦人の間でもキリストの御名を宣べ伝えました。　伝承によれば、聖マタイはエチオピアの住民たちにもキリストの福音を伝え[5503]、そこで数多くの様々な拷問に耐えたという。彼は地面を引きずられ、殴打され、柱に縛り付けられ、脇腹を鉄で削られ、火で焼かれたが、　しかし、キリストに支えられて、聖マタイは勇敢に、そして喜びをもってこれらの苦難に耐え抜いた。　また、ある

[5503] 「エチオピア」とは、ポンティウス・エチオピア、すなわちコルキス、現在のミングレリアおよびイメレティアを指す。

伝承によれば、聖マタイはマケドニアでも福音を宣教した[5504] 。そこでは、不信心なギリシャ人たちが、聖使徒が宣べ伝える教えの力を試そうとして、彼を捕らえ、人の視力を奪う毒薬を飲ませようとした。それを飲んだ者は皆、盲目になってしまうものだった。　しかし、聖マタイはキリストの御名によってその毒を飲み干しても、何の害も受けず、むしろその毒によって盲目となった者たち――その数は二百五十人以上にも上った――に、手を置いてキリストの御名を呼び求め、彼らを癒やした。悪魔は、このような冒涜を許さず、異教徒たちの前に少年の姿で現れ、マティアスが悪魔への崇拝を破壊しているとして、彼を殺すよう命じた。しかし、彼らが聖使徒を捕らえようとしたとき、三日間も彼を探し回ったが、結局見つけることはできなかった。聖マティアスは、彼らの間を歩き回っていたにもかかわらず、彼らには見えなかったからである。　その後、聖なる使徒は自分を捜していた異教徒たちの前に現れ、自ら進んで彼らの手に身を委ねた。彼らは彼を縛り、牢獄に閉じ込めた。そこでは悪霊たちが現れ、怒りに満ちて彼に向かって歯ぎしりしたが、その翌夜、主がまばゆい光の中に現れた。　聖マティアスを励まし、束縛から解き放つと、主は牢屋の扉を開き、彼を自由の身とした。　日が明けると、使徒は再び民衆の中に立ち、以前にも増して恐れを知らずにキリストの御名を宣べ伝えた。すると、心をかたくなにし、その説教を信じず、激怒して自らの手で彼を殺そうとした者たちがいたが、突然、大地が裂けて彼らを飲み込んだ。　残された者たちは恐怖に襲われ、キリストに立ち返り、洗礼を受けた。

その後、キリストの使徒は再び自分の使命の地であるユダヤへと戻り、イスラエルの子らの多くを主イエス・キリストへと導いた。彼は彼らに神の御言葉を宣べ伝え、しるしと奇跡をもってそれを裏付けた。　聖マタイはキリストの御名によって、盲人の視力を回復させ、耳の聞こえない者に聴力を与え、死にかけている者に命を与え、足の不自由な者を直し、らい病人を清め、悪霊を追い出した。モーセを聖人と呼び、　神が石板に記して与えられた律法を遵守するよう促しつつ、聖マタイは同時に、キリストへの信仰を説きました。すなわち、モーセ自身が予告し、預言者たちが予言し、神の父によって世界の救いのために遣わされ、至聖にして無原罪の聖母から受肉された方の、しるしと象徴を信じるよう教えたのです。　その際、聖マタイはキリストに関するすべての預言を、すでに到来したメシアにおいて成就したものとして解釈した。

当時、ユダヤ人の大祭司はアナンであり、彼はキリストを憎み、その御名を冒涜した。彼はキリスト教徒を迫害し、聖使徒であり神の兄弟であるヤコブを教会の屋根から突き落とすよう命じ、それによって彼を殺害した。　そして、聖マタイがガリラヤを巡り、この地のシナゴーグで神の御子キリストを宣教していたとき、不信仰と悪意に目がくらんだユダヤ人たちは、激しい怒りに満ちて聖使徒を捕らえ、エルサレムにある前述の大祭司アナンの元へ連行した。　大祭司は、サンヘドリンを召集し、聖なる使徒を裁判にかけた後、良心を失ったその集団に向かって、次のように語った。

「全宇宙も、またこの集まりも、わが民がどのような非難を招いたかを知っている。これは我々の過ちによるものではなく、我々の中から出た者たちの堕落、そしてローマの支配者たちの飽くことのない利欲――むしろ拷問――によるものである。　これほど多くの民を惑わした、新たな異端を吹き込んだ者たちについては、そもそも言及すべきではない。ローマの兵士たちによってどれほど多くの者が殺されたか、あなた方自身も知っているはずだ。こうして、惑わした者も惑わされた者も共に滅び、我々の民族に恥をもたらしたのだ；　これらが異端の始祖たちである。ユダ・ガリラヤ人とフェウダ・ヴォルフ。彼らの滅亡とともに、彼らに関する記憶そのものも消え去った。しかし、そのような異端者たちの中で、異端の首領イエス・ナザレ人が立ち上がった。　彼は自らを「神の子」であり「神」であると称し、その魔法のようなしるしや奇跡によって多くの人々を驚かせ、人々の心を惹きつけ、律法の廃止を説いた。そのため、彼が冒涜した律法に従って裁きを受けたのである。さて

[5504] マケドニアとは、バルカン半島に位置し、エーゲ海（テッサロニキ湾）の北西端に隣接する国である。

、何と言えばよいだろうか？　律法がモーセに神ご自身によって与えられたこと、そして、神からイエスには成し得なかったような奇跡を行う力を授けられた先祖たちや預言者たちが、その律法を遵守していたことを、我々は知らないというのか。神と人間として語り合ったモーセを知らない者がいるだろうか。火の戦車に乗って天に上げられたエリヤを知らない者がいるだろうか。　エリシャの死骸の上に投げ出された死者が生き返ったという話を、誰が聞いたことがないだろうか？また、他の神の御心に適う者たちも数多くの奇跡を行ったが、しかし、その誰一人として、イエスのような行い――すなわち、神の栄光を自分に帰し、新しい律法を定めてしまうこと――に踏み込む者はいなかった。聖霊に導かれた預言者たちは謙遜に満ちて語ったが、彼は高慢に自らの思い込みを語り、大祭司や指導者たちを痛烈に非難し、律法学者やパリサイ人を偽善者と呼ぶという狂気さえも犯した。預言者たちのうち、誰かがそのようなことをしただろうか？　そして、その高慢ゆえに、彼は相応の末路をたどり、自らの行いによって報いを受けた。ああ、もし彼の記憶が彼と共に滅び、彼と共に死んだ教えを誰も復活させなかったなら！　とりわけ悲しいのは、神の神殿、聖なる都、そして先祖の律法がローマ人の支配下にあり、憐れむ者も、哀悼する者も、救い出す者もいないことだ。我々は罪もないのに法廷に引きずり回され、それでも耐えている。我々は惑わされ、それでも黙って同意している。私たちは略奪されているが、声一つ上げない。そして――何よりも悲しいことに――ガリラヤ人たちは、私たちと私たちの民を、罪のないイエスを殺したとして恥知らずにも非難し、ローマ人の手に引き渡しているのだ。　この少数のガリラヤ人たちが滅びる方が、この聖地と我々の民全体がローマ人による絶滅にさらされるよりはましだ。二つの悪のうち――もし両方を避けることができないのなら――より小さく、より耐えやすい方を選ぶべきである。そして、今我々の前に立っているこのイエスの弟子は、死に値する者だ；　しかし、まずは彼自身で熟考すべきだ――我々は熟考の時間を奪うつもりはない。なぜなら、我々が望むのは彼の滅びではなく、改心だからだ――そして二つの選択肢から一つを選ばせよう。すなわち、神がモーセを通じて与えた律法に従い、それによって命を保つか、あるいはキリスト教徒と名乗り、死ぬか、のいずれかである。

これに対し、聖マタイは両手を挙げてこう言った。

「諸君、兄弟たちよ！　あなたがたが私に突きつけるその告発について、多くを語るつもりはない。私にとって、キリスト者という名は罪ではなく、栄光である。主ご自身が預言者を通して、終わりの日には*『御自分のしもべたちに新しい名を与える』*と語っておられるからだ（イザヤ65:15）。

大祭司アナンは反論した。

「聖なる律法を無に等しいものと見なし、神を敬わず、魔術に関する空虚な話に耳を傾けることこそ、罪ではないのか？」

「もし私の話に耳を傾けてくださるなら」と聖マタイは答えた。「私たちが説く教えは、寓話や魔術などではなく、すでに古くから律法によって証しされている真実そのものであることを、ご説明いたします。」

大祭司が承諾すると、聖マタイは口を開き、旧約聖書におけるイエス・キリストに関する予型や預言を解説し始めた。すなわち、神が先祖であるアブラハム、　イサク、ヤコブといった先祖たちに、彼らの子孫の中から、その方を通して地上のすべての部族が祝福されるような御方を立てると約束されたことについて、またダビデが詩篇の中でこう語っていることについても説明しました。*「彼によって[部族は]祝福され、すべての民は彼を賛美する」*　（詩篇71:17）と。また、燃え尽きない荊の茂みは、聖母マリアによるキリストの受肉を予表しており（出エジプト記3:2）、イザヤは彼女について次のように預言しました。*「見よ、処女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」*（イザヤ7:14）、すなわち「神は我らと共におられる」。モーセもまた、キリストについて次のように語って、これをはっきりと予告した。「*あなたのうちから、あなたの兄弟たちの中から、わたしのように、あなたの神、主があなたのために立てられる預言者があれば、その者に聞き従い*

なさい」（申命記18:15）。　また、モーセは蛇を木に掲げることで、救い主の自発的な苦難をあらかじめ示しており、これについてはイザヤも次のように語っている。*「羊のように、屠られるために連れて行かれた」*（イザヤ53:7）および*「悪人たちに数え入れられた」*　（イザヤ53:12）；また、クジラの腹から無傷で出てきた預言者ヨナは、主の三日目の復活の予型であった。

キリスト・イエスについて語る旧約聖書の書物に関するこれらの詳細な解説は、アナンを激怒させ、彼は我慢できずに聖マタイにこう言った。

「お前は、そうしてあえて律法に逆らおうというのか？　聖書の言葉を知らないのか。「もし、あなたのうちから預言者や夢見る者が現れ、あなたにしるしや奇跡を示し、そのしるしや奇跡が実現したとしても、もし彼が*『あなたが知らない他の神々の後を追って、彼らに仕えよう』と言うなら……『その預言者や夢を見る者は、必ず死刑に処さなければならない』」*（申命記13:1, 2, 5）。

聖マタイは次のように答えた：

「私が語っているお方は、単なる預言者ではなく、預言者たちの主であり、神であり、神の子です。そのことは、お方の真の奇跡が証明しています。だからこそ、私はお方を信じ、その至聖なる御名を告白する上で揺るぎないままであることを願っています。」

「もし熟考する時間を与えられたら、悔い改めるか？」と大祭司は尋ねた。

「私がすでに得た真理から背くことなど、決してありえません」と、聖なる使徒は答えた。「私は心を尽くして信じ、公然と告白します。あなたがたに拒絶され、死に渡されたナザレのイエスは、父と同質であり、父と同一の時代から存在する神の子であり、私はそのしもべです。」

すると、大祭司は耳を塞ぎ、歯ぎしりしながら叫んだ。

「冒涜だ！　冒涜だ！　律法を聞かせよ！」

直ちに律法の書が開かれ、次のように記された箇所が読み上げられた。　「自分の神を冒涜する者は、その罪を負わなければならない。主の御名を冒涜する者は死ななければならない。全会衆は石で彼を打ち殺さなければならない。あなたがたの目は彼を憐れんではならない。そうして、イスラエルの行いから悪を取り除かなければならない」（レビ記24:15–16参照）。

この箇所が読み上げられると、大祭司はキリストの使徒に言った。

「あなたの言葉はあなた自身を告発している。あなたの血はあなた自身の頭の上に降りかかるだろう。」

その後、大祭司は聖マティアスを石打ちの刑に処すことを宣告し、使徒は処刑場へと連行された。ベフラスキラ、すなわち「石打ちの家」と呼ばれる場所に到着すると、聖マティアスは彼を連行していたユダヤ人たちにこう言った。

「偽善者たちよ、預言者ダビデはあなたたちのような者たちについて正しくこう語った。*『群衆は義人の魂に襲いかかり、無実の血を裁く』*　（詩篇93:21）。預言者エゼキエルもまた、この種の人々について、死ぬべきではない魂を死に至らせると語っている（エゼキエル13:19）。

キリストの使徒のこの言葉の後、二人の証人が――律法の定め通り――彼の頭に手を置き、彼が神と律法とモーセを冒涜したと証言した。そして、彼らこそが最初に聖マティアスに石を投げつけた者たちであり、聖マティアスは、キリストのために受けた苦難の証人として、この最初の二個の石を自分と共に葬ってほしいと願った。　その後、残りの者たちも石を投げ始め、聖なる使徒を打ちのめした。そして彼は両手を上げ、主のもとへ息を引き取った。　しかし、不法なユダヤ人たちは、拷問に加え、さらに侮辱を加えた。殉教者の死後、彼らはローマ人に迎合して、ローマの慣習に従い、剣で彼の首を切り落とした――まるでキリストの使徒がカエサルの敵であるかのように。　こうして、善き業に励み、聖使徒マタイはその生涯を全うした。　信者たちは使徒の遺体を受け取り、尊厳を

もって埋葬し、私たちの主イエス・キリストに賛美を捧げた。父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン[5505]。

コンダク、第4調:

太陽のように輝き、全世界に広がったあなたの教えは、異教の教会を恵みで照らし出します、奇跡を行う使徒マタイよ。

聖殉教者アントニオの受難

記念日：8月9日

聖殉教者アントニオはアレクサンドリアの出身であり[5506]、キリストを信じ、神を畏れる生活を送っていました。彼は捕らえられ、市の長官のもとに連行されました。尋問の際、彼は自らをキリスト教徒であると宣言し、キリストを真の神として勇敢に説き始めました。　このため、彼は木に吊るされ、鉄の道具で体を削られましたが、キリストを否定することはなく、拷問者たちに抵抗し、苦痛を忍耐強く耐え抜いたため、火刑に処せられました。火刑台の上に立ち、彼は見守る人々に向かって次のように説きました。

「愛する兄弟たちよ！　肉体にばかり仕えるのではなく、むしろ魂にこそ仕えなさい。魂は神から与えられたものであり、知性ある神聖な力に由来するものであることを忘れないでください[5507]。そして、その魂を清らかなまま主のもとに捧げられるよう、心を配りなさい。」

聖殉教者[5508]の死後、その遺体は全く傷一つない状態で発見された。

聖殉教者ユリアヌス、マルキアヌス、および彼らと共にイコンのために苦難を受けた他の聖人たちの記念日。

8月9日の記念日

ギリシャ王国の王位に、獣と同じ名を持つレウ・イサウリア人[5509]（通称コノン）が即位すると、彼は神の教会に対して迫害を開始し、その中に新たな聖像破壊の異端を煽り立てた。それによれば、聖なる聖像は偶像と見なされ、敬虔にそれらを崇拝する者たちは偶像崇拝者と見なされたのである。　レフ・イサヴリアニンは、教会や家屋、さらにはあらゆる住居から聖なるイコンを追い出し、それらを火か水に投げ込んで破壊するよう命じた。また、彼の異端的な誤りを認めない者たちに対しては、国家の辺境へ追放するか、様々な拷問にさらし、さらには殺害さえした。　迫害の初期、彼は、自身の命令に反対したとして、コンスタンティノープルの至聖なる総主教ゲルマヌス[5510]を不名誉な形で罷免し、暴行を加えた。罷免された総主教の後任には、皇帝と志を同じくする異端者アナスタ

[5505] ギリシャの聖人暦によれば、聖マタイは十字架上で殉教したとされている。ロシアの巡礼者アントニーが証言しているように、1200年、聖マタイの頭部はコンスタンティノープルの聖使徒教会に安置されていた。現在、頭部と聖遺物の一部はローマで公開されており、残りの部分はトリールとパヴィアにある。

[5506] アレクサンドリアの都市は、エジプトの地中海沿岸に位置していた。

[5507] ここでいう「神の力」とは、天使たちを指すものと理解すべきである。

[5508] 聖殉教者アントニオの没年は不明である。

[5509] レウ3世・イサウリア人――716年から741年まで皇帝を務めた。

[5510] 聖ヘルマン――715年から730年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

シウス[5511] が就任した。 この頃、多くの敬虔なキリスト教徒が異端に反旗を翻し、そのために殉教の冠を受けた。これから語る人々もその一人である。彼らの苦難は、次のような出来事をきっかけに始まった。コンスタンティノープルには、コンスタンティヌス大帝の時代から「銅の門」として知られる門が存在していた。　古くからこの門の上には、同じく銅製の救世主の像が掲げられていた。不敬虔な皇帝と総主教はこの像を取り外すよう命じ、はしごを設置した。すると、スパファリオスという位階の兵士の一人がそのはしごを登り始めた。この光景に、門に集まった大勢の民衆の敬虔な感情が憤慨し、　その中から数人が梯子を掴み、そこにいた兵士ごと地面に投げ落とし、その兵士を死に至らしめた。民衆のこのような行為を知った王は、正教徒たちに対して、剣を抜き放った兵士たちを送り込んだ。彼らは多くの男女、老若を殺害した。その数は主のみがご存知である。　一方、民衆の中にいた最も身分の高い聖像崇拝者たちは生け捕りにされた。彼らの名は以下の通りである：ユリアン、マルキアン、ヨハネ、ヤコブ、アレクシオス、ディミトリオス、フォカス、ペトロス、レオントス。　激しい棍棒による拷問を受けた後、彼らは牢獄に投じられ、そこで八十日間も鎖につながれたまま、容赦ない殴打に耐え続けた。一人ひとりに毎日五百回の打撃が課されていたのである。しかし、キリストの力に支えられて、聖なる殉教者たちは肉体の力を失うことなく、すべてを勇敢に耐え抜いた。　これを見た拷問官は、まず彼らの顔を赤熱した鉄で焼かせ、その後、広場に引き出して剣で斬り殺すよう命じた。こうして聖人たちはその苦難を終えた。彼らと共に、イコンを敬虔に崇拝したとして、マリア パトリキアという名の貴婦人も斬首された。 聖殉教者たちの遺体は海の深淵に投げ込まれた。聖殉教者たちが捕らえられた際、同じ罪で告発された修道女テオドシアも彼らと共に連行された。彼女は他の者たちと共に、はしごを倒す行為に加担していたのである。　聖テオドシアは、先に挙げた聖人たちよりも先に殉教の冠を受けました。彼女の記念日は5月29日であり、この日付の下に彼女の伝記も掲載されています。

救い主の聖なるイコンのために苦難を受けたすべての聖なる殉教者たちは、共に主キリスト、私たちの神の御前に立ち、彼に永遠の栄光がありますように。アーメン[5512] 。

8月23日

8月10日（旧暦）

同日、1515年にキリストのために聖なる狂人として生きたカルーガのラウレンティウス福者の帰天。

聖殉教者ラウレンティウス大助祭、教皇シクスト、および彼らと共に殉教した者たちの殉教

8月10日の記念日

[5511] 730年から754年まで総主教を務めた。

[5512] 『聖人行伝』に収録されたこれらの殉教者たちの記録から、以下のことが分かる：1) 皇帝の命により、銅の門から救世主のイコンを撤去しようとした兵士を殺害するにあたり、主要な役割を果たしたのは、名門出身のマリア・パトリキアであったこと；　2) 兵士を倒す際、マリアの第一の協力者はプロトスパファリオスである聖グリゴリオスであり、彼はその功績のために殉教した；3) この出来事は1月19日に起きた；4) 殉教者フォコスについては、記念碑の大部分がフォティオスと呼んでいる。 – 730年8月9日に殉教した後、殉教者たちはコンスタンティノープルの「ペラギエフ」地区、聖殉教者テオドロス教会の近くに埋葬された。彼らの聖遺体は、地中に139年間埋もれていたにもかかわらず、腐敗することなく発見された。 彼らの聖遺骨の発見は、イグナティオス総主教の時代に、彼が眠りの中で3度にわたり受けた啓示によって行われた。

聖ローマ教皇シクスト[5513] は、その聖職者たちと共に、ローマ総督ヴァレリアヌスによって民衆の牢獄に投獄された。それは、デキウス皇帝[5514] がペルシャ軍に勝利した後、凱旋してローマ[5515] へ戻ってきた時のことである。 聖シクストはギリシャのアテネで生まれた。当初は哲学者であったが、後にキリストの弟子となった。ローマにやってくると、彼は賢明で敬虔な人物として、キリストの教会にとって極めて有益な一員となった。ここで、多かれ少なかれ長い期間にわたり、彼は様々な聖職の位を歴任した。 キリストへの信仰を告白したために聖ステファノ教皇が殺害された後[5516] 、その地位に、死を覚悟して聖シクストが就任した。当時、苦難の杯を免れた教皇など一人もいなかった。 聖シクスト教皇が聖職者や他のキリスト教徒たちと共に牢獄に囚われていた頃、ローマではキリストのために二人のペルシャの王子、アウドンとセニッソスが拷問を受けていた。彼らは捕虜として、デキウスによって手錠をかけられたまま連れてこられたのである。 彼らの殉教的な死の後[5517] 、デキウス王とワレリアヌスは、夜間に聖シクスト教皇を「テルルダ」の名で知られる神殿へ連れてくるよう命じた。使者が牢獄へ教皇を迎えに来たとき、彼は共に鎖でつながれていたキリスト教徒たちにこう言った：

– 兄弟たち、そして愛する皆さん、一時的な苦しみをおそれないでください。永遠のいのちの冠を得るために、私たちより先に聖人たちが耐え抜いたあの偉大な苦難を思い起こしてください。キリストご自身が私たちの救いのために苦難を受け、私たちに模範を残してくださいました（参照：ペトロの手紙一 2:21）。キリストのために苦難を受けることを恐れてはなりません。そうしてこそ、キリストと共に王座に就くことができるのです。教皇と共に、フェリシシムとアガピットという二人の助祭が連行され、デキウスとヴァレリアヌスの前に引き出されました。

「お前は知っているか」とデキウスは教皇に問いかけた。「なぜお前が連行され、我々の前に引き出されたのか、その理由を。」

「それは私にもよく分かっています」と教皇は答えた。

「知っているのなら」と皇帝は言った。「他の者たちがあなたの立場ならそうするように振る舞いなさい。そうすれば、あなたは自分の命を救い、聖職者の数を増やすことができるだろう。」

「その通りです」と教皇は認めた。「私は常に聖職者の数を増やすことを心掛けています。」

「それなら、神々に生贄を捧げなさい。そうすれば、すべての司祭たちを統率する権威が与えられるだろう」と王は提案した。

聖シクストはこれに反論した。

「私は常に、全能の父なる神、その御子、我らの主イエス・キリスト、そして聖霊に、清く汚れなき捧げ物を捧げております。」

「我々はあなたの老いを憐れんでいる」と、王は教皇を説得し続けた。「あなたも自分自身とあなたの聖職者たちを憐れみ、彼らを死から救い出してください。」

「これまで、そして今もなお、私は自分自身と同様に、私の聖職者たちのことも気にかけています。彼らを私と共に救い出し、永遠の死から免れさせるためです」と聖シクストは答えた。

「彼を連れて行け」とデキウスは兵士たちに命じた。「マルスの神殿へ連れて行き、そこで生贄を捧げさせよ。もしそうしなければ、マメルティヌスの特別な牢獄に閉じ込めよ。」

[5513] シクスト（あるいはキシスト）という名は、「*キシストス*（滑らかに磨かれた、磨き上げられた）」または「*キシストン*（槍）」に由来するとされる。また、ラテン語の「sisto（しっかりと立っている、しっかりと据え付けられた）」に由来するという説もある。

[5514] デキウス――249年から251年までの皇帝。

[5515] ローマ――ローマ帝国の首都で、イタリア中部に位置する。

[5516] その記念日は8月2日。

[5517] 彼らの記念日は7月30日。

聖なる教皇は助祭たちと共にマルスの神殿へ連行され、生け贄を捧げるよう説得され始めた。それに対し、彼は兵士たちにこう言った。

「ああ、悪魔に目をくらまされ、あらゆる哀れみを招くべき人々よ。なぜ、自分自身にも他者にも助けを与えることのできない、声も聞こえず、耳も聞こえない偶像を崇拝するのですか？　私の言うことを聞きなさい、わが子らよ。悔い改めなさい。そうすれば、あなた方の魂を永遠の苦しみから救うことができるのです。」

しかし、彼らは王の命令に従い、教皇と助祭たちをマメルティヌスの牢獄へと連行した。

聖なる大助祭[5518] ラウレンティウスは、教皇が牢獄へ連行されるのを見て、彼に向かってこう叫んだ。

「父よ、なぜ息子を伴わずにそこへ行くのですか？聖なる司教よ、なぜあなたの大助祭を伴わずに急いでいるのですか？あなたは、私の奉仕なしに無血の犠牲を執り行ったことは一度もありませんでした。一体、私は今、あなたの慈悲をどのように怒らせてしまったというのですか？私はもはや、あなたと共にいるに値しない者になってしまったのでしょうか？　あなたは、いつもあなたに服従してきた僕である私を知らないのですか？もし私があなたと共に神聖な秘儀を執り行ってきたのなら、なぜキリストのために自分の血を流すことにも、あなたと共に加わることができないのでしょうか？　どうか、父よ、あなたの息子をあなたと共に連れて行ってください。師よ、あなたの弟子を見捨てないでください。アブラハムが息子イサクを　（創世記第22章）や、最高使徒ペトロが最初の執事ステファノを（使徒行伝第6～7章）捧げたように、私を神への生け贄として捧げてください。そして、私が殉教の冠を戴くのをご覧になった後、あなたご自身もそれに従ってください。

聖シクストは彼にこう答えた。

「わが子よ、私はあなたを見捨てるわけではない。むしろ、より大きな苦難のためにあなたを温存しているのだ。あなたには、キリストへの信仰のために、偉大な功業が待ち受けている。私はすでに老いているため、より軽い戦いに臨む。しかし、あなたは迫害者に対して、より栄光に満ちた勝利と栄光を示さなければならないのだ。」　泣いてはならない。私の死から三日後、あなた、レビ人よ、あなたは自分の司祭の後を追うことになるのだ。あなたを支えるために、私の存在は必要ない。エリヤはエリシャを去ったが、彼から奇跡を行う力を奪うことはなかった（列王記下2章）。　さあ、この時を活かして、教会の財宝を、自分の判断で貧しい者や困窮している人々に配りなさい。聖ラウレンティウスはその言葉に従った。教会の財宝を、祭具も例外なくすべて持ち出し、街を歩き回り、身を隠している聖職者や貧しいキリスト教徒を探し出し、彼らの必要に応じて助けを与えた。　そうして彼はヘリオン山にたどり着き、そこで一人の未亡人の住まいを見つけた。その未亡人の夫が亡くなってからすでに三十二年が経っていた。キリアキアという名のこの未亡人は、多くのキリスト教徒たちを、彼らの長老や聖職者たちと共に、自分の家に匿っていた。　聖ラウレンティウスは夜、銀や衣服、その他の必需品をここに持ち込み、聖職者たちだけでなく、他のキリスト教徒たちの足も洗い始めた。すると、未亡人のキリアキアは彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「お願いです、キリストのしもべよ、ひどく痛む私の頭に、あなたの両手を置いてください。」

聖ラウレンティウスは、足を拭っていたタオルを彼女に渡し、十字の印を結びながら彼女の頭に手を置き、こう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、癒やされなさい！」

するとたちまち、その未亡人は病から解放された。その夜、聖ラウレンティウスはカナリヤとして知られる街の一角へ赴き、そこでナルキサという名のキリスト教徒の家で多くの信者たちと出会

[5518] 当時、大助祭の職務は、教会での奉仕だけでなく、教会の財産の管理、貧者への援助、ホームレスの支援にも及んでいた。

った。彼は彼らの足も洗い、教会の財宝から彼らの必要に充てる分を与えた。　そこには一人の盲目のキリスト教徒がいた。彼は泣きながら聖人にこう訴えた。

「あなたの御手を私の目の上に置いてください。そうすれば、あなたの御顔を見ることができます。」

聖ラウレンティウスはこう言った。

「盲人の目を開かれた我らの主イエス・キリストが、あなたを照らしてくださいますように！」

そう言いながら、彼は盲人の目の前で十字を切った。すると、盲人はたちまち目が見えるようになり、聖ラウレンティウスの顔を見て大いに喜んだ。そこから出て行った後、聖人はネポティアノの洞窟に多くのキリスト教徒が隠れていることを知った。彼は彼らの必要に充てる銀を携えて、そこへ向かった。　そこで彼は、男女合わせて七十三人ものキリスト教徒を見つけた。そこには聖ユスティン司祭も同席していた。聖ラウレンティウスはキリスト教徒たちの足を洗い、手持ちの最後のお金を配り終えると、その場を去った。　聖シクスト教皇が二人の助祭と共にテリュダの神殿へ裁判のために連行されたと聞き、聖ラウレンティウスはそこで何が起こるのかを見届けようと、急いでその場へ向かった。

教皇がデキウスとヴァレリアヌスの前にある法廷に現れると、皇帝は彼にこう言った。

「お前の老いを憐れみ、我々は汝の幸福を願っている。我々の言うことを聞き、神々に生贄を捧げよ。」

「むしろ、あなた方自身を憐れんでください」と聖シクストは答えた。「天の神を冒涜せず、聖人たちの血を流したことを悔い改めなさい。そうしなければ、完全に滅びてしまうでしょう。」

この言葉を聞いて、デキウスは激しい怒りに駆られ、ヴァレリアヌスに言った。

「もし彼をこの世から抹殺しなければ、誰も権威に従わず、その言葉に耳を傾ける者などいなくなるだろう。」

「彼を死刑に処せ！」とヴァレリアヌスは答えた。

すると、助祭たちは拷問者たちに向かって叫んだ。

「ああ、もしあなたがた、不適格な者たちが、我らの父の諭しに耳を傾けていたなら、そうすれば、あなたがたを待ち受ける永遠の苦しみから逃れることができたはずだ！」

「彼らはいつまで生き続け、我々に苦しみで脅し続けるつもりだ？」とヴァレリアヌスは言った。「彼らをマルスの神殿へ連れて行け。犠牲を捧げさせよ。もし従わなければ、首を刎ねよ。」

マルスの神殿は、城壁の外、アッピア門の前にあった。聖人たちがここに連れて来られると、聖シクストは神殿を見つめながらこう言った。

「生ける神の御子、キリストが、お前を打ち砕くように！」

その場に居合わせたキリスト教徒たちが「アーメン！」と言う間もなく、地震が起こり、神殿の一部が崩れ落ち、その中にあった偶像が粉々に砕け散った。聖ラウレンティウスは聖教皇に向かって叫んだ。

「私を見捨てないでください、父よ。私はすでに、あなたが私に託した宝物を配り終えてしまいました！」

兵士たちはその宝物の話を耳にすると、聖ラウレンティウスを捕らえて放そうとせず、聖なる教皇と助祭たちを神殿前の小高い丘で処刑し、遺体を埋葬せずに放置した。　夜になると、司祭たちや助祭たち、そして他のキリスト教徒たちがやって来て、尊い遺体を運び出した。教皇はカリクストの霊廟にある墓に、助祭たちはプレテクスタトゥスの霊廟に葬られた。　聖シクスト教皇と、その助

祭フェリシシムスおよびアガピトは、8月の6日[5519] に、キリストのために殉教の死を遂げた。聖シクストが殺害された後、兵士たちは聖ラウレンティウスを皇帝のもとへ連行し、こう告げた。

「我々は大助祭シクストを捕らえた。彼は司教から財宝を受け取り、どこかに隠したのだ。」

その財宝の話を聞いた王は大変喜び、聖ラウレンティウスを呼び寄せ、こう言った。

「お前が隠した教会の財宝はどこにある？」

聖ラウレンティウスはこれに対し、何も答えなかった。

そこでデキウスは彼をヴァレリアヌス司教に引き渡し、こう命じた。

「彼から教会の財宝について聞き出し、神々に拝ませよ。もし彼が財宝を明かさず、神々に拝まないならば、苦痛の中で死なせよ！」

ヴァレリアヌスは聖ラウレンティウスを連行し、当時刑務所の看守も兼任していた軍司令官イッポリトに、彼を投獄するよう命じた。　ヒッポリトスは聖ラウレンティウスを、すでに他の囚人たちが収容されていた牢獄に閉じ込めた。その中にはルツィリウスという名のギリシャ人が一人いた。彼は非常に長い間牢獄に収容されており、絶え間ない泣き声のせいで盲目になっていた。

「神の御子、我らの主イエス・キリストを信じ、洗礼を受けなさい。そうすれば、主はあなたの視力を取り戻してくださるでしょう」と、聖ラウレンティウスは彼に言った。

「私はずっと前から、キリストの御名によって洗礼を受けたいと願っていたのです」と、盲人は答えた。

「心から信じているか？」と聖ラウレンティウスは尋ねた。

盲人は泣きながら答えた。

「私は主イエス・キリストを信じ、虚しい偶像を否定し、それらを軽蔑します。」

ヒッポリトスは、聖ラウレンティウスと盲人との会話を辛抱強く聞き入り、盲人の目が本当に開かれるのか、そしてこの奇跡的な出来事がどのように起こるのかを確認しようとしていた。　聖ラウレンティウスは、ルツィリウスの名を告げ、水を祝福して彼に洗礼を授けた。すると、たちまち盲人の目が開かれ、彼は大きな声で叫んだ。

「私に視力を授けてくださった、永遠の神、主イエス・キリストに賛美あれ！」

この奇跡を耳にした他の盲人たちも、聖ラウレンティウスのいる牢獄へとやって来るようになった。聖ラウレンティウスは、彼らの目に十字の印を刻みながら手を置き、キリストの御名を呼び求めて、彼らの視力を回復させた。これらすべてが、ヒッポリトゥスに思わず驚嘆を抱かせた。しばらくして、彼は聖人にこう言った。

「教会の宝を見せてくれ。」

「もしあなたが、全能の父なる神と、その御子である主イエス・キリストを信じるなら」と聖ラウレンティウスは答えた。「そのとき、宝があなたに明らかにされ、永遠の命が与えられるでしょう。」

「もし本当にあなたの言うことが実現するなら、私はあなたの命じることは何でも従います」とイポリトスは言った。

「私の言うことを聞きなさい」と聖ラウレンティウスは続けた。「そして、私が助言することを一刻も早く実行しなさい。耳も口も利かない偶像を捨て、洗礼を受けなさい。」

[5519] 258年。聖シクストの殉教と、殉教者としての崇敬に関する最も古い記録は、聖キプリアヌスがスクセスに宛てた書簡（80年代または82年）に見られる。聖キプリアヌスは、シクストの殉教から5週間半後（9月14日）に殉教した。　聖シクストは、11ヶ月余り、あるいは1年足らずの間、ローマ司教を務めた。聖教皇シクスト2世の聖遺骨は、ローマにある同名の教会に安置されており、殉教者フェリシッシマとアガピタの聖遺骨は、同じくローマの「慈悲の聖母」教会に安置されている。

イッポリトは同意し、聖ラウレンティウスを牢獄から連れ出し、自分の家へ連れて行った。聖ラウレンティウスはイッポリトに聖なる信仰について教えを授け、彼に洗礼の宣教を行った後、彼に聖なる洗礼を授けた。

「私は見た」と、洗礼の後、イッポリトは言った。「罪のない魂たちが、大きな喜びに包まれているのを。（これこそが、聖ラウレンティウスが彼に予言していた、彼のために明らかにされるという『宝』そのものであった。洗礼の最中、主は驚くべき幻の中で、彼に天国の至福を示されたのである）。

「お願いだ」と、その後イポリトスは聖ラウレンティウスに懇願した。「主イエス・キリストの名によって、私の家の人々全員に洗礼を授けてほしい。」

そして聖ラウレンティウスは、ヒッポリトスの家で、男女合わせて十九人に洗礼を授けた。その頃、ヒッポリトスに、聖ラウレンティウスをヴァレリアヌスの元へ連れて行くよう命じる命令が伝えられた。ヒッポリトスがこれを聖ラウレンティウスに伝えると、彼は言った。

「行こう。私にも、あなたにも、殉教の冠が待っているのだ。」

二人がヴァレリアヌスの前に現れると、ヴァレリアヌスは聖ラウレンティウスにこう言った。

「その頑なさを捨てて、噂されているお前の宝物を我々に見せよ。」

「二、三日の猶予をくれれば、その宝物をお見せしよう」と聖ラウレンティウスは申し出た。

「三日間、彼を君に任せる」と、ヴァレリアヌスはイッポリトに言い、聖ラウレンティウスを解放した。　聖ラウレンティウスは、この三日間で、イッポリトの家に多くの乞食、未亡人、孤児、盲人、足の不自由な者、病人を集めた。そして三日が過ぎると、彼は彼ら全員を、サリュスティウスの宮殿にいたデキウスとヴァレリアヌスの元へ連れて行き、こう言った。

「ほら、今あなたがたが見ている彼らの中に――まるで器の中に封じ込められたかのように――永遠の宝が宿っているのです。そして、この器に自分の財産を注ぎ込む者は、天の御国でそれを何倍にもして受け取るのです。」

聖ラウレンティウスのこの行いに恥じ入ったデキウスとヴァレリアヌスは激しく怒ったが、もはや宝物について彼に問い詰めることはせず、代わりに偶像崇拝を強要し始めた。

「なぜそんな策略を弄するのだ」とヴァレリアヌスは言った。「神々に犠牲を捧げ、お前が頼りにしているその魔術を捨てよ。」

「なぜ、悪魔に操られて、キリスト教徒に悪霊への崇拝を強いるようなことをするのですか？」と聖ラウレンティウスは問いかけた。「ご自身で考えてみてください。目に見えるもの、見えないものすべてを創造された天の神を忘れ、その中に悪霊が宿る人間が作った偶像を崇拝することが、果たして正しいことでしょうか。」

激怒した王は、聖人を裸にし、地面に寝かせ、サソリで打つよう命じた（サソリとは拷問器具のことで、鋭い歯がついた細い鉄の棒のことである）。　聖なる殉教者は、その血で地面が赤く染まるほど残酷に打ちのめされた。その間、デキウス自身はこう言っていた。

「神々を冒涜するな、冒涜するな！」

聖ラウレンティウスは、打撃に耐えながら、こう答えた。

「私は、私の神に感謝します。神が、御自分のしもべである聖なる殉教者たちが耐え忍んだあの苦難に、私も加わることを許してくださったからです。しかし、お前という哀れな者は、狂気と怒りに目がくらんでいるのだ。」

そこでデキウスは拷問を止め、聖ラウレンティウスを地面から起こすよう命じた。その後、彼は鉄の寝台、板、錫の棒、その他の拷問器具を運ばせて自分の前に置かせ、それらを指差しながらこう言った。

「もし神々に生贄を捧げなければ、これらすべてが、お前の拷問に用いられるだろう。」

「私はかねてより、このような拷問を祝宴のように望んでいた」と聖ラウレンティウスは答えた。「これらはあなたたちにとっては拷問だが、私たちにとっては栄光なのだ。」

「もしこの拷問が――」とデキウスは嘲笑した。「お前にとって饗宴であり栄光であるのなら、お前に似た他のキリスト教徒たちがどこに隠れているのか、我々に教えよ。彼らをここに連れてきて、お前と共に饗宴を催させよう。」

「お前たちは不信心者だ」と聖ラウレンティウスは答えた。「天にその名が記されている者たちを見るに値しない。」

その後、王は縛られた殉教者をティベリウスの宮殿へ連行するよう命じ、自身もそこへ向かった。宮殿に着くと、彼はディヤ神殿に座り、聖ラウレンティウスを自分の元へ連れてくるよう命じた。

「言え」と彼は言った。「不敬虔なキリスト教徒たちがどこに隠れているのか。そうすれば、我々は街から彼らを一掃することができる。そしてお前自身は、神々にひれ伏し、隠している財宝を頼りにしてはならない。」

「私はキリストの僕たちの居場所をあなたに明かすつもりはない」と聖人は答えた。「しかし、宝物については、無駄に期待しているわけではない。それらは私によく分かっているのだ。」

「金や銀で苦しみから逃れようなどとは思っていないのか？」と王は尋ねた。

「私はキリストのしもべだ」と殉教者は答えた。「そして、私のすべての希望をキリストに託している。私の神であるキリストが、私とすべてのしもべたちのために用意してくださった天の宝についても、私は知っているのだ。」

激怒した王は、聖人を棍棒で打ち、赤熱した鉄の板で脇腹を焼くよう命じた。こうした拷問の最中、聖ラウレンティウスは神にこう祈った。

「主イエス・キリストよ、神より出でた神よ、あなたのしもべである私を憐れんでください。私は中傷されましたが、あなたを否定しませんでした。問われましたが、私はあなたの至聖なる御名を告白しました。」

その後、デキウスは殉教者を錫の棒で打つよう命じ、聖ラウレンティウスはその際にこう叫んだ：

「主イエス・キリストよ、私の霊をお受けください！」

すると、天から声が響いた。

「お前には、まだ多くの苦難が待ち受けているのだ！」

その声を皆が聞いた。デキウスは狂乱し、大声で叫んだ。

「ローマの男たちよ、民衆の集いよ！　お前たちは、この魔術師であり神を冒涜する者を慰める悪魔たちの声を聞いているのか。彼は我らの神々を崇めず、王である私の言葉にも耳を貸さず、苦痛をも恐れないのだ！」

そして彼は再び聖ラウレンティウスを引きずり出し、サソリで拷問するよう命じた。しかし、聖なる殉教者はその苦痛を嘲笑し、デキウスを恥じ入らせながら、こう祈った。

「主なる神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ、あなたは祝福されます！　私たちのような不適格な者たちに御慈悲を注いでくださることに感謝いたします。どうか、ここに立ち会い、私を見つめている者たちが、あなたが御自分のしもべたちを慰めてくださる方であることを悟ることができるよう、私にあなたの恵みをお与えください。」

この祈りの最中、拷問の場に立ち会っていた兵士の一人、ロマンという者がキリストを信じ、大声で叫んだ。

「聖ラウレンティウスよ、あなたのそばに立って、あなたの傷や全身を拭いてくれている、まばゆいばかりの若者が見えます。あなたに御使いを遣わされた主キリストにかけて誓います。どうか私を見捨てないでください！」

デキウスはヴァレリアヌスに言った。

「我々は、この魔術師に打ち負かされた！」と言い、拷問台から殉教者を解き放つよう命じ、彼をイッポリトの監獄に送った。　一方、兵士ロマンは、水で満たされた水瓶を聖ラウレンティウスのもとに運び、その足元にひれ伏し、涙ながらに洗礼を授けてくれるよう懇願した。彼が洗礼を受けたとき、突然他の兵士たちがやって来て、彼を捕らえて王のもとへ連行した。しかし彼は、尋問が始まる前から、こう叫んだ。

「私はキリスト教徒だ！」

王は直ちに彼を斬首するよう命じた。そこでロマンはサラリウム門を通って城外へ連れ出され、首を刎ねられた。それは8月の9日のことだった。彼の遺体は、前述の長老ユスティンが夜間に回収し、尊厳をもって埋葬した。

その同じ夜、デキウスとワレリアヌスは、サルスティウスの宮殿からほど近いオリンピアード浴場に滞在しながら、聖ラウレンティウスを最後の試練にさらすための法廷を準備するよう命じた。同時に、彼らは拷問用の器具もすべて用意するよう命じた。これを知ったヒッポリトスは泣き出した。すると、聖ラウレンティウスは彼を慰めながらこう言った。

「私のことを泣かないでください。むしろ喜んでください。私は栄光ある殉教の冠を受け取るために向かっているのですから。」

「なぜ、あなたの前で『私はキリスト教徒だ！』と叫んで、あなたと共に死ぬことができないのですか？」とイポリトは尋ねた。

「今は、その信仰告白を心に秘めておきなさい」と聖ラウレンティウスは言った。「しばらくして、私があなたを呼ぶでしょう。その声を聞いて、私のところへ来てください。」

王がヴァレリアヌスと共に裁判の席に着くと、聖殉教者ラウレンティウスが彼の前に連れてこられた。

「その魔術はよせ」とデキウスは彼に言った。「そして、お前はどのような身分の者なのか、我々に明かせよ。」

「私は」と聖人は答えた。「スペインで生まれ、ローマで教育を受け、幼い頃からキリスト教徒であり、子供の頃からすでに神の律法を教えられてきました。」

「それが、お前が『神の律法』と呼んでいるものか」と王は尋ねた。「神々を崇めず、苦痛を恐れないようにするためか？」

「私が教えられた律法は」と聖人は答えた。「私に私の神、主イエス・キリストを明らかにし、その方を崇めるよう導いてくれました。私は主の御名によって強められています。あなたが脅かすような拷問など、私は決して恐れてはいません。」

「神々に犠牲を捧げよ」と王は言った。「もしそうしなければ、一晩中、お前を拷問するぞ。」

聖ラウレンティウスはこれに対し、こう言った。

「私の夜は暗くはなく、すべてが光に満ちている。」

拷問官は、聖ラウレンティウスの口を石で打つよう命じた。しかし、聖なる殉教者は、王を恥じ入らせながら、なおさら精神を強め、神に感謝した。

「鉄の寝台を持って来い」とデキウスは言った。「今夜、その高慢なラウレンティウスをそこに寝かせておけ。」

そして、鉄の格子でできた寝台が運ばれてきた。それはデキウスとヴァレリアヌスの前に置かれ、その後、裸にされた聖殉教者がその上に横たえられ、寝台の下には熱い炭が敷かれた。その際、

使用人たちは聖ラウレンティウスを上から鉄の槍で押し付け、まるでそれが食べられる肉であるかのように、彼を焼き炙った。

「神々に生贄を捧げよ」と王は言った。

「私自身を」と殉教者は答えた。「砕かれた心をもって、私の神への香ばしい香として捧げたのだ。」

その間も、家来たちはさらに火を煽り、寝台をますます激しく焼き熱くしていった。

「よく聞け、哀れな者よ、　――殉教者は王に向かって言った――この燃え盛る炭は、私に涼しさをもたらし、お前には永遠の苦しみをもたらすのだ。私の主はご存知だ。私は、主の聖なる御名を告白したことで誹謗中傷されたが、主から背を向けず、問われた時には「私はキリスト教徒だ」と答え、今こうして火の中にありながら、主への感謝を捧げているのだ。

「お前が我々を脅したあの火はどこにある？」とヴァレリアヌスは尋ねた。

「ああ、狂おしく、目が見えなくなった者たちよ！」と聖人は答えた。「知っておきなさい。あなたがたが私を焼いているこの炭は、私の魂には涼しさをもたらすが、あなたがたの魂には消えることのない火を用意しているのだ。」

生きた人間を焼き殺すよう命じた王の残虐さに、その場にいた者たちは皆驚いた。一方、聖ラウレンティウスは、清らかな表情でこう語った。

「主イエス・キリストよ、私を強めてくださったことを感謝します！」そして、デキウスとヴァレリアヌスに目を向けて言った。

「ほら、この忌まわしき者たちよ、お前たちはすでに私の体の片面を焼き上げた。もう片面もひっくり返して、焼けた部分を食らえ。」

それから、神を賛美してこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたが私に御門に入ることを許してくださったことを感謝します！」

そう言い終えると、彼は息を引き取った。デキウスとヴァレリアヌスは、殉教者が息を引き取ったのを見て、恥じ入り、遺体を寝台に残したまま立ち去った。　一方、ヒッポリトスは、日の出までに聖なる殉教者の尊厳に満ち、多くの苦難を経た遺体を密かに持ち去り、香をまぶした死装束で包むと、聖なる司祭ユスティヌスに知らせた。ユスティヌスは直ちにヒッポリトスの元へ駆けつけ、二人は遺体を前述の未亡人キリアキアの元へ運んだ。　遺体は夕方までそこに安置され、彼らはその日一日、涙を流しながら断食を続けた。夜遅く、大勢のキリスト教徒が集まる中、涙を流しながら遺体を、その未亡人の所有地にある洞窟へと運び、そこで徹夜の祈りを捧げた後、殉教者を尊厳をもって埋葬した。　聖司祭ユスティンは神聖な聖体礼儀を執り行い、皆がキリストの聖なる御体と御血の秘跡に与った。聖殉教者ラウレンティウスは、8月の10日にその苦難に満ちた生涯を閉じた。 また、聖ヒッポリュトスは、聖ラウレンティウスの死から3日後に、他の者たちと共に苦難に耐えたが、これについては後ほど詳しく述べる。これらすべてについて、今、また常に、そして世々限りなく、聖三位一体において賛美される我らの神に栄光あれ。アーメン[5520]。

[5520] 聖ラウレンティウスは258年に殉教した。彼の埋葬地は、ローマの東側、市街から1ヴェルスタ離れたティブルティヌス街道沿いにあった。　この場所には、図書館長アナスタシウスの証言によれば、コンスタンティヌス大帝によって聖人のために壮麗な教会が建てられた。聖ラウレンティウスの聖遺骨、あるいは正確にはその一部は、テオドシウス2世の治世下、9月27日にコンスタンティノープルにある同名の教会に安置された。 現在、聖ラウレンティウスの聖遺骨はローマのティブルティヌス街道沿いにある、彼に捧げられた郊外の教会に安置されており、頭部はクイリナーレ宮殿の聖具係が所有する、同名の私設教会に安置されている。

コンダク、第2調:

神の御火をもって汝の心を燃え立たせ、情欲の炎を完全に焼き尽くした、苦難に耐える者たちの支え、神を宿した殉教者ラウレンティウスよ。汝は苦難のさなかに、真実をもってこう叫んだ。「何ものも、わたしをキリストの愛から引き離すことはできない。」

8月24日

8月11日（旧暦）

キエフ・ペチェルスク修道院の修道士、私たちの尊い父テオドールとヴァシリーの生涯。

記念日8月11日

「あらゆる悪の根源は金銭への愛である」（テモテへの手紙一6:10）と、聖使徒パウロは語っている。この言葉の具現化を、我々は聖テオドールと聖ヴァシリーのこの生涯に見出すことができる。　悪の敵であり元凶である悪魔は、聖テオドールの魂の中に、他ならぬ金銭への愛によって罪深い思いと意図をかき立てた。悪魔は金銭への愛を通じて、この尊者だけでなく、その助言者である至福のヴァシリーにも、肉体的苦痛と死をもたらしたのである。これらの聖なる父たちについては、次のように伝えられている。

聖テオドロスは、世俗に生きていた頃、非常に莫大な財産を所有していた。ある日、福音書にある主の御言葉――*「あなたがたのうち、自分の持っているすべてのものを捨てない者は、わたしの弟子になることはできない」*　（ルカ14:33）という主の言葉を耳にすると、彼はその言葉に従った。世俗を捨て、富を貧しい人々に施した後、聖テオドールはペチェールスク修道院の修道士となり、功徳に満ちた生活を送った。　修道院長の命により、彼は「ヴァリャーグの洞窟」として知られる洞窟に身を寄せ、そこで長年にわたり、厳格な禁欲を守りながら暮らした。　聖テオドールがこの洞窟に滞在している間、悪魔は彼の中に、貧しい人々に分け与えた財産に対する悲しみと後悔を植え付け、老い、衰えた健康、そして修道院の粗末な食事のことを思い起こさせた。聖テオドールは、そのような考えが悪魔の誘惑であることに気づかなかった。　*「あなたがたの魂のために、何を食べ、何を飲むかを心配してはならない。また、あなたがたの体のために、何を着るかを心配してはならない。魂は食べ物よりも大切ではないか。体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥たちを見よ。彼らは種を蒔かず、刈り取らず、倉に集めもしない。それでも、あなたがたの天の父は彼らを養ってくださる」*（マタイ6:25–26）という主の言葉を忘れ、自らの貧しさを目の当たりにして、彼は悲しみから絶望へと陥り、日ごとにますます誘惑の虜となっていった。ある日、彼は何も隠すことなく、その悲しみを友人たちに打ち明けた。

ペチェルスク修道院の修道士たちの中には、ヴァシリーという人物がいた。彼は生活において最も徳の高い一人であった。尊者テオドールを絶望の淵から救い出し、慰めたいと願った彼は、こう言った。

「お願いだ、テオドール兄弟よ、自分の報いを台無しにしないでほしい。もし、貧しい人々に配ってしまった財産を後悔しているのなら、私はそれを同じ額であなたに返そうと努める。ただ、主の前で、あなたの施しが私に帰せられるようにと告げさえすれば、すぐに悲しみから解放され、私を通じて再びその財産を取り戻すことができるだろう。」　とはいえ、主がこれを許されるかどうか、よく考えてみてほしい。コンスタンティノープルでも、ある者が貧しい人々に配った金を惜しみ、神

の前でその施しを他人に帰属させ、配った額と同額の金をその人から受け取った。彼がこう言ったとき、　「主よ、施しをしたのは私ではなく、この人によるものです」と言った途端、教会の真ん中で倒れて死んでしまい、こうして金も命も失ってしまった。

これを聞いて、聖テオドロスは我に返り、自らの過ちを悔い改め、この極めて危険な心の病から彼を癒やしてくれた兄弟を称え始めた。主はこのような人々についてこう言われた。*「もしあなたが、無価値なものから貴重なものを引き出すなら、あなたはわたしの口となるであろう」*（エレミヤ書15:19）。　この時から、テオドールとヴァシリーの間の互いへの愛はさらに深まった。それ以来、聖テオドールは神の戒めにおいてたゆまず精進し、義にかなった、神に喜ばれる、聖なる、そして汚れのない生活を送るために必要なすべてを成し遂げようと努めた。　一方、悪魔は、聖テオドールを金銭への愛によって完全に惑わすことができなかったため、大きな恥辱を味わった。悪魔は再び聖テオドールを標的にし、彼の中に貪欲の情を煽るために新たな策略を練った。　ある日、修道院長は聖ヴァシリーを修道院からある奉仕の任務に送り出した。その任務の遂行には三ヶ月を要した。悪魔はこの期間を自らの策略に好都合だと見なし、ヴァシリーの姿を装って、あたかも魂を救うための対話をするかのように、聖テオドールの洞窟を訪れた。

「君は」と悪魔は言った。「徳のある生活において、順調に進んでいるか？　悪魔の誘惑との戦いは終わったのか、それとも今も続いており、貧しい人々に施した財産を思い出すことで、君の中に貪欲を掻き立てているのか？」

聖テオドールは、悪魔だと気づかず、兄弟のヴァシリーが話しかけていると思い込み、こう答えた。

「父上、あなたの祈りのおかげで、私は悪魔との戦いに打ち勝ち、悪魔が煽る考えには耳を貸していません。今、あなたが私に命じることは何でも、喜んで従います。あなたの教えは、私の魂にとって大きな益となっています。」

一方、偽りの兄弟は、聖テオドールの口から神の御名が語られるのを聞かなかったため、さらに大胆になった：

「君に新たな助言をしよう」と彼は言った。「これを実行すれば、君は安らぎを見出し、やがて神から、君が施した財産と同額の報いを受けるだろう。主なる神に、金と銀をたくさん送ってくださるよう願い求めよ。そして、誰にも洞窟に入らせず、自分からも決して外に出ないようにしなさい。」

聖テオドールは、これらすべてを実行することを約束した。すると、悪巧みに満ちた悪魔は彼から離れた。悪魔は、聖人に宝を手に入れるという考えをさりげなく植え付け、それについて祈るように仕向けた。聖テオドールは、主が宝を送ってくださるよう祈り、その宝をすべて貧しい人々に分け与えると約束した。　祈りを終えて眠りにつくと、彼は夢の中で、明るい天使の姿をとった悪魔が、洞窟の中の財宝を指し示しているのを見た。この幻視は一度だけでなく、何度も繰り返された。しばらくして、聖テオドールは夢で示された場所へ赴き、掘り始めたところ、確かに金、銀、そして貴重な器類からなる宝を発見した。その後、悪魔はヴァシリーの姿を装って再び彼の元を訪れ、こう言った。

「お前に与えられた宝はどこにある？　お前に現れた天使は、お前の祈りによって、お前が大量の金と銀を得たことを、私にも明かしたのだ。」

至福のテオドールは、その宝を見せることを拒んだ。すると直ちに、狡猾な悪魔は、彼に密かな考えを植え付けながら、宝を手に取り、それを持って別の国へ逃げるよう露骨に勧めるようになった。まず、悪魔は尊者に向かってこう言った。

「テオドール兄弟よ、あなたが分配した財産に対して、まもなく神から報いを受けると、私は言わなかったか。神ご自身がこう言われたではないか。　*『わたしの名のために、家や兄弟、姉妹、*

父、母、妻、子供、あるいは土地を捨てた者は、百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ』（マタイ19:29）。そして今、その富はあなたの手にあります。それを好きに使いなさい！』

「そこで私は神に、私に与えられたすべてを貧しい人々に分け与えることを願いました」と、聖人は答えた。「それこそが、この富が私に授けられた目的だと考えています。」

「よく聞いてくれ、テオドール兄弟よ」と敵は反論した。「以前のように、この施しによって悪魔が再びあなたに苦しみをもたらすことのないように。　この財宝は、あなたが配ったものの代わりとして与えられたのだ。だから、私の助言を聞いてほしい。それを受け取って別の場所へ行き、そこで土地を手に入れなさい。そうすれば、その場所で救われ、悪魔の策略を避けられるだろう。そして死の時が来れば、誰もあなたが望む者に財産を配ることを禁じる者はいない。それによって、あなたへの感謝の記憶が後世に残るだろう。

聖テオドールはこう答えた。

「この世の恵みを捨て、この洞窟で生涯を終えると誓った私が、逃亡者となり、世俗の人になってしまうのは恥ずかしいことです。」

「お前は」と悪魔は説得した。「ここに財宝を隠しておくことはできない。その存在が知られれば、お前から奪い取られてしまうだろう。　むしろ私の言うことを聞き、私が助言することを速やかに実行したほうがいい。もし神が、お前が財産を所有することを望んでいなかったなら、神はお前に宝物を送ったり、私がお前を導くよう私に知らせたりはしなかっただろう。

そこで、聖テオドールは、　悪魔を兄弟のように信じて、宝を収められる荷車や器を密かに用意し始めた。それを使って洞窟を出て、悪魔が導くところへ赴こうとしたのである。悪魔は、その狡猾さによって、聖人を聖アントニオや聖テオドシオスのいる場所から、至聖なる神の母から、そして何よりも神ご自身から遠ざけようとしていたのだ。　しかし、*「すべての人が救われることを望まれる」*（テモテへの手紙一　2:4）人愛に満ちた主*は*、御自身の聖なる者たちと、御自分のしもべテオドロスの祈りによって、彼を救われた。

その頃、以前、至福のテオドールから邪悪な思いを取り除いてくれた聖ヴァシリーが旅から戻ってきた。彼に会いたいと願い、彼は洞窟を訪れ、こう言った。

「テオドール兄弟よ、今、あなたは神に従ってどのように生活しているのか。久しくあなたに会っていなかった。」

聖テオドールはそのような挨拶に驚き、こう言った。

「何をおっしゃるのですか、長い間お会いしていないなんて。昨日も、三日前も、それ以前も、あなたは絶えず私のところへ来て、私を教え導いてくださいました。そして今、私はあなたの仰せ通りに旅立とうとしているところです。」

それに対し、聖ヴァシリーはその答えにさらに驚いて言った。

「教えてくれ」と彼は尋ねた。「私が昨日も、三日前も、それ以前も、絶えず君のところへ来て、教えを授けていたという君の言葉は、どういう意味なのか？　そして、君はどこへ行くつもりなのか？　私は今日、旅から戻ったばかりで何も知らない。もしかすると、悪魔に誘惑されていたのではないか？　お願いだ、神の名にかけて、私から隠れないでくれ。」

聖テオドールは怒りを込めて彼に言った。

「なぜ私を誘惑するのだ？　なぜ、ある時はこう言い、またある時はそうと言うことで、私の魂を惑わすのか？　私は何を信じればよいのだ？」

このように不満をぶつけた後、彼はその男を追い払った。

これを聞いた聖ヴァシリーは修道院へと引き上げた。すると、悪魔は再びヴァシリーの姿を借りて聖テオドールのもとへ現れた。

「私はこの忌まわしい正気を失ってしまった」と彼は言った。「あなたに言うべきでないことを口にしてしまったのだ。それゆえ、あなたが私に向けた侮辱は覚えていない。だからもう一度言う。今夜中に、あなたの宝物を持ち出して、ここから急いで立ち去りなさい。」

そう言い残して、彼は立ち去った。

一方、聖ヴァシリーは数人の長老たちを連れて、再びテオドールのもとを訪れた。

「神が証人だ」と彼はテオドロスに語りかけた。「私があなたに会わなくなってから三ヶ月が過ぎた。私は修道院長から修道院の用事で派遣されていたのだ。今日で戻ってきて三日目だが、私が部屋に入った途端、あなたは、私が不在の間ずっと、私が頻繁に訪れていたと私に言った。」　おそらく、私の姿をした悪魔が君のもとを訪れていたのでしょう。確かめたいのなら、こうしてください。君のもとを訪れる者が、イエスの祈りを唱えるまでは、誰にも君と会話を始めさせないでください。もし入ってきた者がそれを拒むなら、その者が悪魔であることがわかるでしょう。

その後、聖ヴァシレイは聖人たちの助けを求め、追放の祈りを捧げ、テオドロスに教えを授けた後、修道院の自分の独房へと戻りました。悪魔は再び聖テオドロスの前に現れることを敢えてせず、テオドロスにとって、その誘惑者の狡猾さが明らかになりました。　それ以来、彼は自分のもとを訪れる者全員に、まず最初にイエスの祈りを捧げさせ、それから初めてその者と語り合うようにした。こうして、聖テオドロスは敵に打ち勝ち、神の助けによって、獲物を狙う獅子の口から救い出されたのである（参照：ペトロの手紙一 5:8）。 主は、荒野や深淵をさまよい、隠遁所で独り沈黙を守る多くの選ばれた者たちに対しても、同様の救いを与え、今も与え続けておられる。彼らには、闘いの最中に、魂を滅ぼす獣に打ち負かされたり飲み込まれたりしないために、偉大な道徳的力と神の助けが必要なのである。

滅びの溝から救い出された聖テオドロスは、人類の敵そのものがその穴に落ち込むよう配慮し始めた。まず第一に、彼は、自分を見失わせ、神から離れさせそうになった宝物を、地の深くに埋めた。　同時に、聖テオドールは、宝が埋められた場所を忘れさせてくださり、貪欲の情を彼から取り除いてくださるよう、絶えず主に祈り続けた。　主は御自分のしもべの祈りを聞き入れられた。聖テオドールは、宝がどこに隠されていたかを完全に忘れ、富を得ることを決して考えなくなった。彼にとって、金や銀は泥よりも価値のないものとなった。

その後、怠惰を生み、それとともに不注意を招くような無為な生活に陥らないよう――悪魔が再びその隙を突いて誘惑を仕掛けてくるのを防ぐため――聖テオドールは自らに多大な労苦を課した。彼は自分の洞窟に石臼を設置し、修道院の兄弟たちのために働き始めた。しかも、自ら小麦を挽くだけでなく、修道院から小麦を運んでくるのも自ら行い、　夜はほとんど眠らずに過ごし、その大部分を祈りと手動の石臼での作業に捧げ、昼間は小麦粉を運び出し、再び小麦を運んできた。聖テオドールは長年にわたり、自らの労苦によって修道院の労働者たちの負担を大いに軽減し、彼らの労苦を分かち合うことを恥じなかった。

ある日、修道院の物資管理係は、聖テオドールが自らに課したその重く苦痛に満ちた行いを目の当たりにして、心を打たれた。修道院の村々から小麦が運ばれてきた際、彼はそのうちの五台分を聖テオドールのもとへ送り、彼が余計な労力を省けるように――修道院まで取りに行く手間を省けるように――したのだ。　聖テオドールは小麦を降ろすと、詩篇を唱えながら作業に取りかかった。疲れ果て、少し休もうとしたその時、まるで雷鳴のような音が響き、石臼が勝手に回り始めた。悪魔の策略を見抜いた聖テオドールは立ち上がり、熱心に祈りを捧げた後、大きな声でこう言った。

「主は汝を禁じ給う、邪悪な悪魔よ！」

しかし、悪魔は石臼で粉を挽くのをやめなかった。そこで聖人は再びこう言った。

「父と子と聖霊の御名によって――聖霊はあなたを天から追放し、御自身の聖徒たちの支配下に置かれた――この罪深い私が命じる。すべての麦を挽き終えるまで、その仕事をやめてはならない。聖なる兄弟たちのために、あなたも労苦せよ。」

そう言うと、彼は祈りを続けた。悪魔は敢えて逆らうことができず、一晩で小麦をすべて挽き終えた。　朝、聖テオドールはケラールに、小麦粉を取りに来るよう知らせた。ケラールは、一晩で五台分の小麦を挽き終えるなどという前代未聞の出来事に驚き、自ら洞窟へ向かい、そこから小麦粉を持ち出そうとしたところ、さらなる奇跡が起こった。すなわち、その同じ小麦から、さらに五台分の小麦粉が得られたのである。　こうして、ここで語られた聖テオドールの生涯における出来事において、かつてイエス・キリストに*「主よ、御名によって、悪霊たちさえも私たちに従います」*（ルカ10:17）と語った使徒たちの言葉が、、また神の御言葉そのものの約束、すなわち*「見よ、わたしはあなたがたに、蛇やサソリ、また敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を与える」*（ルカ10:19）。狡猾な悪霊たちは、聖テオドロスを脅かし、かつて彼が惑わされていた時のように、再び自分たちに服従させようとしたが、その代わりに、彼ら自身が奴隷の束縛を自らに課すこととなり、こう叫ばざるを得なくなった。

「我々はもうここには現れない。」

聖テオドールと聖ヴァシリーは、互いの考えを決して隠さず、それがどれほど神に喜ばれるものであるかを確認するために、二人で話し合うという敬虔な習慣を定めた。　互いに相談した末、ヴァシリーは沈黙を守るために洞窟へと引きこもり、一方、すでに老齢に達していた聖テオドールは、その洞窟を出て、古くからの修道院に身を寄せることにした。

その頃、修道院は焼失していた。教会や修道室の建設用に、ドニエプル川を筏で運ばれてきた木材が川岸に積まれており、それらを山の上まで運ぶために労働者が雇われていたが、聖テオドールは自ら修道室を建てたいと願い、誰にも代わって働かせることを許さず、自ら川岸から山の上まで丸太を運ぶ作業を始めた。　偽りの悪魔たちは、強制労働によって「聖人に決して近づかない」と約束したことを忘れ、再び悪巧みを始めた。聖テオドールが一日かけて苦労して山へ運び上げた丸太を、悪魔たちは夜になるとすべて山の下へ投げ落とし、それによって彼を追い出そうとしたのである。悪魔たちの策略を見抜いた聖人は、彼らにこう言った。

「あなたがたに豚の中に入るよう命じられた（マタイ8:32）我らの主イエス・キリストの名において、　私、その罪深いしもべは、あなたがたに、岸辺にあるすべての丸太を山の上へ運ぶよう命じる。そうすれば、神に仕える兄弟たちが労働を中断することなく、あなたがたの策略に邪魔されることなく、至聖なる聖母マリアへの聖堂と自分たちの修道室を建て上げることができるだろう。そうすれば、あなたがたも、主がこの場所に臨在しておられることを知るだろう。

その夜、悪霊たちは修道院の建設用に用意されていたすべての丸太を、岸から山へと運び上げた。　朝、運搬のために雇われた人々が岸辺に到着すると、丸太は一本も見つからなかった。周囲を見回すと、丸太はすでに山の上にあり、山積みになっているのではなく、整然と並べられていた。屋根用、床用、そして特に長く極めて重い梁が、それぞれ別々に分けられていたのである。　これらすべては、人間の力をはるかに超えた出来事として、人々に驚きをもたらした。こうして、主は御自身の聖人テオドールとその助言者ヴァシリーを通して栄光を現された。彼らの功績ゆえに、主はこの奇跡を示されたのである。　しかし、この精神を同じくする神の僕たちは、悪霊たちが自分たちに服従しているのを見て高ぶることはなく、キリストの教えに従った。*「悪霊たちがあなたがたに従うからといって喜んではならない。むしろ、あなたがたの名前が天に記されていることを喜べ」*（ルカ10:20）。　一方、聖テオドールと聖ヴァシリーによってその悪巧みがこれほど露わに暴かれた悪魔たちは、その侮辱に耐えられなかった。かつては神々のように異教徒たちから崇敬と礼拝を受けていた彼らは、　今や、神に忠実な聖者たちから軽蔑と屈辱、不名誉を耐え忍ばねばならず、まるで買い取られた奴隷のように、彼らのために穀物を挽いたり、丸太を運んだりして働かされなければならなかった。さらに、それらの聖者たちの禁令に従い、人間から遠ざからなければならなかった。だからこそ、丸太を運んでいる最中、彼らは、ある人々が聞いたように、こう叫んだのである。

「おお、我らの邪悪で凶暴な敵、テオドールとヴァシリーよ！　我らは、お前たちを死に追いやるまで、戦い続けるぞ！」

この時から、狡猾な悪魔たちは――それが聖人たちの栄光をさらに高めることになるとは知らずに――あらゆる手段を用いて、悪意ある人々を聖テオドールと聖ヴァシリーに対して扇動し始めた。丸太が奇跡的に運ばれた直後、運搬のために雇われた労働者たちは騒動を起こした。

「さあ、我々に――」と彼らは至福のテオドロスに言った。「――賃金を払え。我々が運ぶ準備ができていたのに、お前がヴァシリーと共にどんな策略で丸太を運んだのか、知るものか。」

さらに、金で買収された不誠実な裁判官も、裁く者が不正を働けば自らも裁かれるという主の警告を忘れ、恐れることなく尊者テオドロスにこう言い放った。

「運搬を手伝ったあの悪魔たちが、お前の支払いを助けてくれるだろう。」

この悪魔による新たな誘惑は、無欲なテオドールと彼の顧問ヴァシリーに大きな苦悩をもたらした。聖人たちの死を待ちきれなかった悪魔は、至福のテオドールに対する最初の勝利を思い出し、再び死をもたらす嵐を巻き起こした。　当時ヴァリャーガの洞窟で沈黙を守っていた聖ヴァシリーの姿を装い、悪魔は公爵に最も近いボヤールの一人のもとへ訪れた。その男は残酷で不信心な人物であり、聖ヴァシリーを個人的に知っていた。

「私より先に洞窟に住んでいたテオドールは」と誘惑者は彼に言った。「金や銀、貴重な器類からなる大いなる財宝を見つけ、それを持ち逃げしようとしたが、私が彼を引き止めた。　今や彼は聖人ぶったふりをし、悪魔たちと交わり、彼らに小麦を挽かせたり、川岸から山へ丸太を運ばせたりしている。その一方で、彼は見つけた財宝を慎重に隠しており、より好機が訪れたら、それを持ち出して私から密かにどこかへ逃げ去るつもりだ。そうなれば、当然ながら公には何も残らないだろう。」

これを聞いたボヤリンは、偽のヴァシリーをムスティスラフ・スヴィャトポルコヴィチ公のもとへ連れて行った。悪魔は彼にも同じことを語り、さらに次のような助言を加えた。

「彼が逃げる前に、できるだけ早く捕らえなさい。そうすれば宝を手に入れられる。もし彼が自発的に手放そうとしないなら、殴打に訴えなさい。しかし、それでも渡すことを承諾しないなら、容赦なく拷問にかけ、私を呼んでくれ。私は皆の前で彼を暴き、宝が隠されている正確な場所を教える。」

こうして公爵を惑わすと、悪魔は姿を消した。

翌朝、公爵はまるで狩りや敵との戦いに赴くかのように、大勢の戦士を従えて修道院へと向かった。そして、聖テオドロスを連れ出し、自分の屋敷へ連れて行くと、最初は優しくこう尋ねた。

「教えてくれ、神父よ。私が聞いたところによると、あなたは宝を見つけたというが、本当か？」

「はい」と聖人は答えた。「確かに見つけました。今は洞窟に隠してあります。」

「誰が隠したのか、また、そこにどれほどの金や銀、器類があるのか、何か心当たりはないか？」と、公爵は再び尋ねた。

「私たちの父アントニウスがまだ生きていた頃」と、至福のテオドールは言った。「この洞窟にヴァリャーグ人によって隠された宝物について語られていました。そのため、この洞窟は今でも『ヴァリャーグの洞窟』と呼ばれているのです。私はその宝物を見ました。そこには大量の金、銀、そして器類がありますが、すべてラテン式のものです。」

「では、父上、なぜそれを私に譲ってくれないのですか？」と公爵は尋ねた。「私はそれをあなたと分け合います。必要な分だけ持って行ってください。そうすれば、あなたは父に代わって、私にとっても、私の父にとっても（父はこの時トゥロフにいました）父のような存在になってくれるでしょう。」

これに対し、聖テオドールはこう答えました。

「私には何の役にも立たないものからは、自分用に何も求めず、すべてあなた方に差し上げたいのです。あなた方には、私が全く自由であるような重責がのしかかっています。しかし、主は、私が宝を埋めた場所についての記憶をすべて私から取り去ってしまわれたのです。」

すると、公爵は怒りを露わにして家来たちに命じた。

「この修道士の手足を鎖で縛り、三日間はパンも水も与えてはならない。彼は私の恩恵を大切に思っていないのだ。」

聖テオドールが鎖で縛られた後、再び「宝をどこに隠したのか」と問われた。

聖テオドールは以前と同じ答えを返した。

「すでに言った通り、それがどこにあるのかは知らない。」

この答えを聞いた公は、彼を殴打するよう命じた。その結果、聖人が身に着けていた羊毛の衣は血で濡れてしまった。その後、同じ公の命令により、彼は濃い煙の中に吊るされ、背中を縛られた状態で、その下で火が焚かれた。　多くの人々が聖テオドールの忍耐力に驚嘆した。彼は炎の中にいながら、まるで露の中にいるかのように平然としていた。火は羊毛の衣にさえ触れることはなかった。その光景を目撃した者の一人が公爵にそのことを伝えた。公爵は恐怖に駆られ、再び長老を説得し始めた。

「なぜ、我々のものとなるべき宝を明かさないまま、自らを滅ぼそうとするのか？」

「真実を申し上げましょう。私がその財宝を見つけた時、兄弟であるヴァシリーの祈りによって、金銭への執着から解放されました。そして今――繰り返しますが――主は、それがどこに埋められているかという記憶を私から取り去られたのです」と、聖テオドールは答えた。

この答えを聞いた公爵は、直ちに聖ヴァシリーを呼び寄せさせた。彼は洞窟から出ることを拒んでいたため、力ずくで連れてこられた。

「この邪悪な老人のことについて、あなたが私に助言したことはすべて実行しましたが、何の成果も得られませんでした。私はあなたを、父の代わりにしたいと願っている証人として呼び出します」と、公爵は聖ヴァシリーに語りかけた。

「私があなたに何を助言したのですか？」と、聖ヴァシリーは首をかしげて尋ねた。

「彼は、拷問を受けてもなお、あなたが私に教えてくれた、彼が発見したという宝がどこに隠されているかを明かそうとしません」と、公爵は答えた。

「悪しき悪魔の策略がわかる」と聖ヴァシリーは言った。「その悪魔は、あなたを惑わせ、私とこの誠実な男を誹謗中傷したのだ。私はもう十五年も、この洞窟から一歩も外に出ていないのだ。」

「あなたは私たち全員の前で公爵にそうおっしゃいました」と、悪魔と公爵の会話に立ち会っていた者たちが反論した。

「あなた方全員が悪魔に惑わされたのだ」と聖人は答えた。「私はあなた方も、公爵も見ていない。」

激怒した公爵は、聖テオドールと同様に、彼にも残酷な拷問を加えるよう命じた。非難に耐えきれず、激しい怒りに駆られ、その怒りが狂乱へと変わった公爵は、矢を手に取り、聖ヴァシリーを傷つけた。聖人は自分の体から矢を引き抜くと、それを公爵に投げつけ、こう言った。

「この矢で、まもなくあなた自身も傷つけられるだろう」――そして、聖人の預言通り、その言葉は現実のものとなった。その後、公爵は、拷問のせいでかろうじて息をしているだけの二人の聖人を別の牢獄に閉じ込め、翌朝、さらに残酷な拷問を加えるよう命じた。その夜、二人の聖人は主のもとへ召された（1098年）。　主は、御自身の至聖なる御名を永遠の光の中で賛美するために、彼らの魂を牢獄から導き出された。彼らの死を知った兄弟たちは駆けつけ、聖なる殉教者たちの遺体を引き取り、彼らが神に喜ばれる行いに満ちた生涯を送ったヴァリャーガの洞窟に、尊厳をもって埋葬し

た。　その後、彼らの遺体は聖アントニオの洞窟に移され、そこでは今もなお、血に染まった衣と、同じく朽ちることのない羊毛の衣を身にまとったまま、朽ちることなく眠っている。

彼らの至福の死から間もなく、聖ヴァシリーの予言が実現した。ムスティスラフ・スヴィャトポルコヴィチ公は、ウラジーミルの町でダヴィド・イゴレヴィチ公との戦いの最中に矢で負傷した。聖ヴァシリーを傷つけたあの矢だと気づくと、彼はこう言った。

「さあ、私は死にゆく。聖テオドールと聖ヴァシリーへの罪の報いとして。」

こうして、邪悪な殺人者はその罪の報いを受けた。　一方、聖なる殉教者たちは、金銭への執着によって人々を惑わす悪魔に打ち勝った者として、朽ちることのない銀や金ではなく、永遠の栄光と名誉を授けられた。彼らは、尊い御石――キリスト――から冠を授かった。キリストに、父なる神と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。 アーメン。

聖女ソサナと彼女と共に殉教した者たちの殉教

記念日：8月11日

ディオクレティアヌス[5521] と、ヘルキュラスという異名を持つマクシミアヌス[5522] の治世下、ローマにはガヴィニウスという長老が住んでいた。彼はローマ教皇ガイウス[5523] の実の兄弟であった。異教の哲学者たちについて深い知識を持ち、聖書も熟読していたガヴィニウスは、兄弟の助言と強い勧めにより、異教の誤りを論破する多くの著書を執筆した。　二人はともに名門の出身であり、ディオクレティアヌス帝とは血縁関係にあった。しかし、同帝は彼らとの血縁関係を認めようとはせず、彼らがキリスト教の信仰を告白していることを理由に軽蔑していた。ディオクレティアヌスはキリスト教を憎悪していたため、キリスト教徒である親族たちを拒絶したのである。

長老ガヴィニウスにはソサナという名の娘がいた。彼は彼女を真にキリスト教的な精神で育て上げ、幼い頃から神への畏敬の念を植え付けると同時に、優れた世俗的な教育も与えた。　ソサナは知性と肉体的な美しさを兼ね備えていたが、その美しさは内面の美しさには及ばなかった。彼女は心から主イエス・キリストを愛し、主の忠実で貞潔なしもべであった。ソサナの知性と美しさを耳にしたディオクレティアヌスは、彼女を自分の息子マクシミアヌスの妻にしたいと考えた。　（他の人々は彼をマクシミヌスと呼ぶが、実際には彼はディオクレティアヌスの実子ではなく、近親者の子として養子に迎えられたのである。当初、ディオクレティアヌスは自分の娘ヴァレリアを彼に嫁がせたが、彼女の死後、マクシミアヌスを自分の親族であるソサナと結婚させようと考えた。　このマクシミアンには、　ガレリウスという別の名前があり、前述の「ヘルクレス」と呼ばれたマクシミアンとは区別する必要がある）。　ディオクレティアヌスは、ガヴィニウスのもとへ、自身の従兄弟であるクラウディウスという高貴な人物を遣わし、娘のソサナを自分の息子マクシミアヌスに嫁がせるよう交渉させた。この使命を帯びてガヴィニウスの元を訪れたクラウディウスは、次のように言った。

「我らが輝かしい皇帝ディオクレティアヌスは、大いなる慈悲と喜びをもって私をあなたのもとへ遣わしました。皇帝は、あなたの娘との結婚を通じて、あなたとの親族関係を再構築したいとお考えです。王家との血縁関係を通じて、あなたの家系が新たに栄光に輝くことほど、あなたにとってこれ以上の恩恵があるでしょうか！」

「我らは貧しく、謙虚な身です」とガヴィニウスは言った。「この不甲斐なさを抱えながら、どうして皇帝の親族などと呼べるでしょうか？」

[5521] ディオクレティアヌス – 284年から305年までの皇帝。

[5522] マクシミアヌス――285年から305年までディオクレティアヌスの共同統治者であった皇帝。

[5523] ガイウスは283年から296年4月22日まで教皇を務めた。

クラウディウスは答えた。

「あなたと、あなたの兄弟であるガイウス司教は、かつて我らの叔父であり、我らの主であるディオクレティアヌス帝の兄弟でもあったマクシミアヌス元老院議員の息子ではないのか？」

「その通りです」とガヴィニウスは認めた。「しかし、近年の情勢を鑑みると、我々は皇帝の親族と呼ばれるに値しないと言わざるを得ません。」

「その血縁関係を否定してはならない」とクラウディウスは反論した。「ほら、我らの主であり皇帝である方が、その息子マクシミアヌスと結婚させるために、娘を君に嫁がせるよう命じている。その娘については、学問において広範な知識を備えているという評判が立っている。一つの根から生えた枝が分かれるべきではないのは当然のことだ。我々、君の親族もそれを望んでいる。　これは君にとっても喜びとなるはずだ。

ガヴィニウスは言った。

「あなたの提案について、娘本人の意見を聞くための時間をください。」

そこで二人は別れた。

クラウディウスが去った後、ガヴィニウスは、近くに住んでいた兄ガイウスを自宅に呼び寄せた。ガイウスが来ると、ガヴィニウスは、クラウディウスが王からの使者としてどのような依頼を持って訪れたかを彼に語った。その後、彼らはソサナを呼び寄せ、涙を浮かべてこう言った。

「ディオクレティアヌス皇帝が、私たちの親族であるクラウディウスを遣わし、彼を通じて、あなたを息子のマクシミアヌスの妻にしたいという皇帝の意向を伝えてきた。」

聖女ソサナは、父と叔父にこう答えた。

「今、あなた方の知恵はどこへ消えてしまったのですか？　まことに、私はあなた方にその知恵を見いだせません。もし私が、あなた方の教えのおかげで今のようないいクリスチャンになっていなければ、確かに今あなた方が語っているようなことを私と話し合うこともできたでしょう。　今、なぜあなた方は、不敬虔な言葉を聞き、それを私に伝え、私が不敬虔な迫害者と結婚するよう仕向けることで、ご自身の耳と口を汚すのですか？　あなた方自身、彼が持つ不敬虔さ――それはあなた方が信奉する聖なるキリスト教の信仰と相容れないもの――ゆえに、彼とのあらゆる血縁関係を恐れることなく断ち切ったではありませんか。　しかし、全能の神に栄光あれ。神は私に、御自身の聖徒たちにふさわしい霊を授けてくださった。主イエス・キリストへの信仰によって、この不敬虔な者との忌まわしい結婚を拒むことで、私は殉教の冠にふさわしい者となるのだ！

「よく聞きなさい、わが娘よ」とガヴィニウスはこれに応えて言った。「今あなたが抱いている信仰を堅く保ち、主の御前で恥じることのないようにしなさい。そうすれば、私たちは、あなたの信仰が主キリストにもたらす実を見ることを喜びとするでしょう。」

「父上、叔父様」とソサンナは父と叔父に答えた。「お二人は、主イエス・キリストのために貞潔を守るよう、たびたび私に教えられてきました。今や、主への愛と畏れによって、私はこれほどまでに確固たる信念を持つようになりました。肉欲的な結婚など、考えることさえできません。　父よ、私は、あなたご自身が永遠に私を託されたお方だけを愛し、そのお方のために生き、そのお方にのみ希望を置きます。主は、私の心の誠実さをご存知です！

「あなたは天の花婿であるキリスト・神に委ねられているのだから、常に主の愛の中に留まり、主の戒めを守りなさい」と、聖ガイウス教皇は言った。

こうして、主の二人の聖なる僕たちは、ソサナの善意を知ると、彼女の敬虔な願いを長く励まし、同時に大きな喜びに満たされ、感動の涙が思わず目からこぼれ落ちた。

三日後、クラウディウスは大勢の従者を伴って再びガヴィニウスの元を訪れた。従者たちを家の近くに待たせ、彼自身は中へ入り、そこで教皇ガイウスと対面した。慣例通りの挨拶を交わした後、クラウディウスはこう言った。

「敬愛すべき父上方、私をここへ導いたその喜ばしい理由については、ご存知のことでしょう。」

「たとえ――」とガイウス司教は答えた。「そのような理由がなかったとしても、私たちは互いに親族である以上、あなたを歓迎します。この親族としての再会と、互いの会話を楽しみ、慰め合えることを嬉しく思います。」

「親愛なる兄弟たちよ、ご存知の通り――」とクラウディウスは続けた。「我らの主、ディオクレティアヌス皇帝は、あなた方とより緊密な絆を結ぶことを強く望んでおられます。そこで私は、あなた方に助言し、お願いいたします。全宇宙を治める御方の御意志を叶え、それによって皇帝を喜ばせてください。」

「その皇帝の願いを、私の主であり兄弟であるガイウス司教に伝えてください」とガヴィニウスは答えた。

「我らが慈悲深い皇帝は」とクラウディウスはガイウスに語りかけた。「御子に、貴殿の娘、すなわち私の孫娘を妻として迎えたいと望んでおられます。皇帝は彼女の美しさ、知性、そして才能を熟知しておられます。　私たち親族としては、我々の家系が王家の血筋から離れることなく、むしろさらに密接に結びつくことほど名誉なことはないと考えております。それによって、我々の家系はさらに高まり、栄光に輝くことになるでしょう。

司教が黙っていたため、クラウディウスの言葉にガウィニウスが答えた。

「お嬢様をお呼びして、ご本人に直接お尋ねしましょう。」

そこで、聖ソサナが彼らの元へ呼ばれた。部屋には部外者は誰もおらず、ただ三人が座っていた。ソサナを見るや、クラウディウスは愛と喜びのあまり涙を流し、彼女を抱きしめて口づけで歓迎しようとした。しかし、彼女はこれに抵抗し、彼から顔を背けてこう言った。

「私の主イエス・キリストは、このしもべの唇が男性の唇に触れたことは一度もないことをご存知です。どうかそれを汚さないでください。」

「私は親族として君にキスしたかったのだ。君は私にとって孫娘なのだから」とクラウディウスは答えた。

聖ソサナはこれに対し、こう言った。

「私があなたの口づけを嫌悪するのは、他の理由ではなく、あなたの口が偶像への生け贄によって穢れているという事実のためです。」

聖ソサナのこの言葉を聞いて、クラウディウスは、まるで神の御手が自分の心に触れたかのように感じ、心を打たれてこう言った。

「私の口を汚れから清めるには、どうすればよいのか？」

「悔い改め、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けなさい」と、聖ソサナは答えた。

するとクラウディウスは司教に向かってこう言った。

「私を清めてください。キリストへの信仰によって清められた者は、神々に仕える者よりも優れているからです。私は彼らに数多くの犠牲を捧げましたが、王たちさえも彼らにひれ伏しているにもかかわらず、彼らからは何一つ得られませんでした。」

清らかな乙女の言葉を通じて神の恵みがクラウディウスにもたらした、驚くべき急速な変化を目の当たりにして、ガイウス司教は喜びをもってこう言った。

「私の言葉を聞いてほしい、兄弟よ！　私はあなたに良き助言をしようと思う。あなたは主人の息子に花嫁を見つけるために私たちのところへ来たが、神はあなたを探しておられ、この乙女の祈りによってあなたを救い、私たちの家系からも神の御国にふさわしい者が現れるように望んでおられるのだ。それゆえ、神を信じ、聖なる殉教者たちの流された血のために悔い改め、聖なる洗礼を受けることを躊躇してはならない。

「もし私が――」とクラウディウスは尋ねた。「聖なる洗礼を受ければ、私の心のすべての罪の汚れは清められるのでしょうか？」

「疑いようもありません。ただ、心を尽くして信じなさい」と、聖なる教皇は答えた。

これを聞いて、聖ソサナは叔父である聖ガイウスの足元にひれ伏し、こう言った。

「お願いです、主よ。キリストのために、クラウディウスの洗礼を先延ばしにしないでください。彼の魂を救ってください。」

「まずは、彼がキリスト・神を真に信じているかどうかを確認しましょう」と、聖なる司教は言った。

「私は心から信じています」とクラウディウスは叫んだ。「あなたが約束してくださったように、私の罪が赦されることさえあれば。」

「全能の主イエス・キリストの名において、あなたのすべての罪は赦される」とガイウスは答えた。

クラウディウスは聖人の足元にひれ伏し、頭に土を振りかけながらこう叫んだ。

「主なる神よ、永遠の光よ、無知と不信仰のうちに犯した私の罪をお赦しください。私を御恵みで満たし、妻と子供たちが、あなたを頼る者を救うのはあなただけであることを悟らせてください！」

そこで聖ガイウスは、クラウディウスに説教し、教えを授けた後、彼を家に帰した。その後、クラウディウスは夜、妻と二人の息子を連れて聖ガイウスのもとを訪れ、聖なる洗礼を請うた。　をこれ以上遅らせることなく、司教は彼らに洗礼を授けた。長老ガヴィニウスが彼らの代父となった。クラウディウスが聖なる洗礼槽から上がると、こう言った。

「私は、洗礼の最中に、太陽の光をも凌ぐ光が私を照らすのを見た。」

聖なる洗礼と堅信式の後、司教は聖なる典礼を執り行い、洗礼を受けた者たちにキリストの御体と御血という神聖な秘跡を授けた。そして、皆が自分たちの救い主である神を喜び祝った。　クラウディウスの妻の名はプレペディグナであり、息子たちは一人がアレクサンドロス、もう一人がクフィと呼ばれていた。洗礼の後、クラウディウスは自分の財産を売り払い、それを貧しい人々に配り始めた。そのために、彼は様々な隠れ場所に身を潜めていたキリスト教徒を探し出し、夜には密かに牢獄を訪ね歩いた。　見つけた者全員の足を洗い、それに口づけをし、寛大な贈り物で彼らの必要を満たし、毎日衣服と食料を供給した。その一方で、彼は前世で犯した罪を絶えず悔い改めていた。

しばらくして、ディオクレティアヌスはクラウディウスについて問い詰め始めた。ソサナが自分の息子との結婚に同意したかどうかを確認するために、わざわざガヴィニウスのもとへ派遣されたにもかかわらず、なぜ何の知らせも持ち帰らなかったのかと。王には、クラウディウスが病気であると報告された。　そこで王は、病人を訪ね、ソサナについて尋ねるよう、宮廷で名誉ある地位に就いていた弟のマクシムスを彼のもとへ遣わした。マクシムスは、兄が毛皮の衣を身にまとい、神に祈りを捧げているのを見つけた。彼は恐怖に駆られ、こう言った。

「愛する兄よ、幼い頃から私を育ててくれた兄よ、一体何があなたをこれほどまでに変えてしまったのか――あなたはこれほど青ざめ、痩せ細ってしまったのか！」

「もし私の話を聞いてくれるなら、私が変わった理由を話そう」とクラウディウスは答えた。

「主よ、あなたの病について教えてください！」とマクシムは叫んだ。

「私は悔い改めています」とクラウディウスは語り始めた。「王たちに従い、その命令を遂行する中で、キリスト教徒を殺し、無実の血を流してしまったのです。王の命令に従った無知ゆえの行為ではありましたが、今となっては深く嘆き、これを悔い改めています。」

「兄弟よ、一体何を言っているのだ？」とマクシムは反論した。「我らの主君、ディオクレティアヌス皇帝は、君を我らの兄弟ガヴィニウスのもとへ遣わし、彼の娘を我らの息子に嫁がせるよう

取り計らわせたのだ。その件を確認するために、私は君のもとへ遣わされたのだが、君は全く別のことを言っているではないか。」

「私はまさにそのために出向いたのだ」とクラウディウスは言った。「私たちの愛する孫娘のもとへ行き、彼女に会った。彼女は肉体も魂も美しく、聖く、英知に満ちており、すでに天の王キリストの花嫁となっている。彼女のおかげで、私も自分の罪から解放されたのだ。　しかし、すべての人を救おうとされる神の慈悲について、あなたにも知っていただくために、今夜、私たちの兄弟である長老ガヴィニウスのところへ行きましょう。そうすれば、あなたは永遠の光を見るでしょう。

「おっしゃることは何でもいたします」とマクシムスは答えた。

その夜、彼らはサラリウム門として知られる、サルスティウスの宮殿のそばにある町の門へと向かった。ガヴィニウスに、彼の兄弟であるクラウディウスとマクシムスが家のそばに立っており、中に入りたいと望んでいると伝えられると、彼はすぐに彼らを迎えに出かけ、喜びをもって彼らを自宅へと招き入れた。　彼らとの会話を始める前に、ガヴィニウスは祈りを捧げた。彼はひざまずき、頭を垂れた。クラウディウスとマクシムも彼の例に倣った。

「主なる神よ」と、ガヴィニウスは祈りながら言った。「散らされた者たちを集め、集められた者たちを見守られる方よ、御手の業に御目を留め、あなたを信じるすべての人々を照らしてください。あなたは永遠に真の光です。」

皆が応えて言った：

「アーメン！」

立ち上がると、彼らは互いに抱き合い、口づけを交わした。クラウディウスは長老の足元にひれ伏し、その足に口づけをした。それを見たマクシムスは驚き、ソサナに会わせてほしいと頼んだ。ガヴィニウスは彼女を呼ぶよう命じた。部屋に入ってきた彼女は、まず神に礼拝を捧げ、それから父のもとへ歩み寄って言った。

「父よ、私を祝福してください。」

長老は、ソサナの到来を祝して再び祈りを捧げた。

「私たちの主イエス・キリストから平安が私たちに与えられますように。主は、全能の父なる神と共に、世々限りなく生きておられ、支配しておられます」と彼は言った。

「アーメン！」と皆が声を揃えて叫んだ。

謙遜と貞潔に満ちた聖ソサナを見て、マクシムスは彼女の手に口づけをしようとしたが、彼女はそれを許さなかった。　そして、皆が親愛の情から湧き上がる涙を長い間抑えきれないでいる間、彼が建てた教会の近くに住んでいた聖ガイオスに、彼の兄弟たち　が一同に集まったと伝えられた。彼は、彼らが拷問を受けることになると考え、彼らの中で真っ先に殉教者の運命を味わおうと、ガヴィニウスの家へと急いだ。　彼を見た者たちは皆、その予期せぬ姿に驚き、恐れを抱き、地にひれ伏して彼に礼拝した。

「平安あれ！」と聖ガイウスは彼らに言った。「主の御名において勇気を奮い起こし、共に祈りましょう！」

そして、次のように祈り始めた。

「主なる神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ、すべての者の救いのために御子を遣わし、私たちをこの世の闇から救い出し、永遠の命へと導こうと願われる方よ。あなたのしもべたちを、あなたの信仰に堅く立たせてください。あなたは世々限りなく王としておられます。」

「アーメン」と、出席者たちは言った。

席に着くと、司教は神に霊感を受けた説教を始めた。皆は彼が語る神の言葉を注意深く聞いていた。一方、聖ソサナは彼らと一緒に座ることを望まず、立ったまま聞いていた。その間、彼女は密かに祈っていた。説教が終わると、司教はマクシムに言った。

「兄弟よ、私たちを訪ねてくださり、感謝します。」

「私は不肖の身ながら、あなたの聖なる足に口づけを捧げるために参りました。そもそも私がここへ来るきっかけとなったことについては、あなたご自身もよくご存じでしょう」とマクシムスは答えた。

「あなた自身で話したほうがいい」と聖ガイウスは提案した。

「ディオクレティアヌス帝が」とマクシムスは言った。「ソサナを、その息子マクシミアヌスに嫁がせるよう求めているのです。」

「その乙女には、すでに父なる神から与えられた天の花婿、キリストがおられます。彼女がもはや結婚することはできないということを、よく心得ておいてください」と、司教はその申し出に答えた。

「神が与えてくださるものはすべて永遠です」とマクシムスは言った。

「あなたも永遠の命を受け入れなさい」と教皇は彼に提案した。

「永遠の命とは何ですか？」と彼は尋ねた。

「それは、私が知った永遠の命のことだ」とクラウディウスが会話に加わった。

「あなたが知ったその方を、私も知りたいのです」とマクシムは彼に語りかけた。「しかし、それでもやはり、私たちは王との絆を断つべきではありません。」

「我々はあなたに、我らの主イエス・キリスト、永遠の神の御子を信じるよう説得しているのだ」と聖ガイウスは反論した。「この世の王の目に見える栄光や名誉は一時的なものであり、彼との絆は何の益ももたらさない。これらすべては、はかない人生と共に過ぎ去り、滅びてしまうのだ。」それに対し、天の王、私たちの神であるキリストが私たちに約束してくださるものは、永遠であり、不可欠であり、それに向かって努力するに値するものです。

これを聞いて、マクシムは心を打たれ、喜びをもって聖なる信仰を受け入れることに同意した。

「兄弟よ、ご存じの通り」と司教は言った。「私たちはすべての財産を捨て、今や、私たちの主イエス・キリスト以外には何も求めていません。私たちは主によって生き、主を誇りとしているのです。」

「お待たせしないでください、主よ」とマクシムは叫んだ。「私の救いのために必要だとお考えになることは、すべてお急ぎください。」

司教は彼に断食を命じ、家へ帰した。その場を離れたマクシムスは、最初はキリストへの信仰を隠していた。ガヴィニウスやガイウス、そしてとりわけ主イエス・キリストご自身への愛に燃えていたにもかかわらずである。しかしその後、神への愛が深まるにつれ、彼は死を恐れず、公然とキリストの御名を告白し始めた。　しかし、司教と長老は、彼が財産を売り払い、貧しい人々に施し終えるまでの五日間、信仰を隠しておくよう助言した。マクシムスは彼らの言葉に従った。五日後、彼は聖ガイウスのもとへ行き、その足元にひれ伏してこう言った。

「主よ、キリストの御名によって懇願します。あなたが私の兄弟クラウディウスを照らしたように、聖なる洗礼によって私をも照らしてください。あなたが主イエス・キリストの教えを私に授けてくださったその時から、私の心は深く感動し、聖なる洗礼を受けるまでは安らぐことができません。」

司教は彼に洗礼を授け、聖なる典礼を執り行った後、聖体と聖血を授けた。マクシムスはキリスト教徒の親戚の家に身を寄せ、彼らと共に神を賛美し、神を讃えた。　その間、彼は五日間では売り払うことも分配することもできなかった財産を完全に売却し、秘密のキリスト教徒であり、後にこれらの聖なる殉教者たちの苦難を記述した忠実な友人ファルソンを通じて、貧しい人々に施しを与えた。なぜなら、すべてが彼の目の前でなされていたからである。

マクシムスがクラウディウスを訪ねてから15日が経過した頃、ディオクレティアヌスは、彼ら二人――そしてクラウディウスは家族全員とともに――がキリスト教徒になったことを知った。これは彼を大いに憤らせた。　しかし、彼はその悲しみを隠し、妻であるイリーナ皇后には、ガヴィニウスに使いを送り、その娘ソサナを自分の息子マクシミアヌスと結婚させたいと伝えただけだと語った。これを聞いたイリーナは神を賛美した。彼女は密かなキリスト教徒であり、皇帝にこう言った。

「神があなたに示すままに行いなさい。」

女王に自分の悲しみを打ち明けることなく、ディオクレティアヌスは、異教徒であり残忍な人物である軍司令官ユリウスを呼び寄せ、愛する親族たちが、息子マクシミアヌスの婚約者を選ぶために派遣されたにもかかわらず、自分の禁止令を無視してキリスト教に改宗してしまったことを、悲しげに語った。

「王の命令を無視する者はすべて――たとえその命令が不当であったとしても――死刑に処されなければならない。あなたの命令は正当であったのだから、彼らがそれを破ったのであれば、なおさら死に値する。」とユリウスは言った。

王は直ちにユリウスに、ガイウス司教を除く全員を捕らえるよう兵士を派遣するよう命じ、その命令は実行された。　ガヴィニウス長老とその娘については、監禁下に置くよう命じ、マクシムスとクラウディウスは妻や子供たちと共に追放した。その後、王は彼らをオスティア[5524]で火刑に処し、その遺灰を海に投げ捨てさせた。こうして聖人たちは、栄光ある殉教の冠を授かってこの世を去った。

それから五十五日後、ディオクレティアヌスは、妻にソサナを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼女を自分の息子との結婚に説得させようとした。しかし、監禁されていた聖ソサナは、自分を迎えに来る者たちを見ると、心の底から深い嘆息と涙を流しながら、神に向かってこう言った。

「主よ、あなたのしもべを見捨てないでください！」

ソサナが王妃のもとへ連れて行かれると、王妃は彼女より先に頭を下げた。王妃は、彼女の中にキリストの恵みと貞潔を尊んでいたのである。聖ソサナは王妃の前で地面にひれ伏したが、王妃は優しく彼女を助け起こし、こう言った。

「私たちの救い主キリストは、あなたを喜ばれておられます。」

女王の口からキリストの御名を聞いて、聖ソサナは喜び、こう言った。

「あらゆる場所に君臨される、私の神、キリストに感謝します！」

そして、女王イリーナと聖ソサナは二人とも、主なる神を喜び、愛を込めて神について語り合った。二人は神に熱烈な祈りを捧げたが、とりわけ聖ソサナは、父の教えに従い、昼も夜も絶え間なく神を賛美し、神を祝福していた。　一方、ディオクレティアヌスはこの間、ソサナが結婚に同意してくれることを期待して待っていた。長い待ち時間の末、彼は女王を呼び寄せ、こう尋ねた。

「ソサナを、私の息子との結婚に説得できたか？　彼女はマクシミアヌスへの愛を受け入れる気はあるか？」

「不可能な目標を追い求めるのは無駄な労力であり、同意が得られないことに期待すべきではありません」と女王は答えた。「ソサナには、誰かが何らかの形で彼女をこれに強いることができるとさえ思わせるような、そのような考えや意図の痕跡すら見当たりません。」

これを聞いたディオクレティアヌスは激しい怒りに駆られ、息子のマクシミアンに、ソサナを辱め、彼女に対して卑劣な暴行を加えることを許した。ただし、宮殿内ではなく――彼女を父の家に連れ去り、そこで自らの恥ずべき情欲に従って彼女を汚すように命じたのである。　聖ソサナは宮殿を離れ、実家へ向かうことを余儀なくされた。聖ソサナを見送る際、王妃は泣きながら彼女にこう言った。

[5524] ローマ近郊にあった埠頭の名称。

「昔、御自分のしもべソサナ（ダニエル書13章）を救われた方が、あなたをも救い、助け、栄光に満ちた安息を授けてくださるでしょう。」

別れを告げ、二人は泣きながら別れた。聖ソサナが二人の女に連れられて自宅に戻ると、彼女は自分の部屋で地面に倒れ込み、そこで嗚咽と涙を流しながら、救い主であるキリストに、一刻も早く助けに来てくださるよう祈った。その夜、邪悪な情欲に駆られたマクシミアヌス王の息子がやって来た。　聖ソサナが祈っていた部屋にそっと入ると、彼は彼女の上に、大きな輝きを放つ神の天使を見出した。マクシミアヌスは激しい恐怖に襲われ、聖ソサナに近づく勇気もなく、急いで宮殿へと戻り、そこで父にすべてを話した。

「これはキリスト教徒の魔術に過ぎない」とディオクレティアヌスは言った。

そして、側近の一人であるクルティウスを遣わし、ソサナの家で何が起きているのかを探らせた。しかし、クルティウスも家に入った途端、強い恐怖を感じ、恐怖のあまり王のもとへ駆け戻った。　その頃、ディオクレティアヌスは、キリストの降臨と神々の崇拝をめぐって王妃と論争を繰り広げていた。王妃に論破された彼は、ソサナのことを思い出し、こう言った。

「彼女の美しさと知性を見て、なぜ私の息子との結婚に同意するよう説得しなかったのか？」

「彼女は自分にとって最善の道を選んだのです」と王妃は答えた。「何しろ、あなたの息子自身も、彼女の頭上に近づきがたい光を見たと言っていたではありませんか。」

王は激しく怒り、熱心な異教徒であり、残虐さで知られていたあるマケドニウスという者に、ソサナのもとへ行き、脅迫だけでなく拷問をも用いて彼女を偶像崇拝に強制するよう命じた。　同時に、ディオクレティアヌスは、王が「自分の親族さえも容赦しない」と言って拷問の罪で非難されないよう、これを秘密裏に行うよう命じた。マケドニウスは、神ディヤを象った小さな金の偶像を携えて聖ソサナの元へやって来た。聖女にそれを見せながら、彼は彼女にそれへ拝むよう命じた。　聖ソサナは偶像に向かって息を吹きかけ、こう言った。

「わが主、キリスト・イエスよ、私の目がこの悪魔の道具を見ることを許さないでください。」

するとたちまち、マケドニオスの手の中にあった偶像は、まるで誰かがそれを奪い取ったかのように、見えなくなってしまった。マケドニオスは驚き、聖ソサナが何らかの方法で偶像を奪い取り、隠したのだと考えた。

「なるほど」と彼は言った。「お前は金を好むようだ。私の手から偶像を盗んだのだから。そのことについては称賛せざるを得ない。もし偶像を好んでいなければ、盗むことはなかっただろう。」

「私の主なる神が」と聖ソサナは答えた。「御自身の天使を遣わし、その天使が私の目の前から偶像を取り除き、家から外に放り出したのです。」

その言葉を話している最中、使用人のマケドニオスが入ってきて、偶像が家から道端に投げ捨てられたと報告した。激しい怒りに駆られたマケドニオスは、自らの手で聖ソサナの衣服を引き裂き、容赦なく棒で彼女を打ち始めた。一方、聖ソサナはその間、こう叫んでいた。

「主よ、あなたに栄光あれ！」

「神々に生贄を捧げよ」とマケドニウスは言った。

「私は自分自身を、私の主への生け贄として捧げます」と聖女は答えた。

マケドニオスは、ソサナが揺るぎなく堅く信仰を守り、偶像を冒涜したことを王に報告した。王はその場で、その家の中で彼女を剣で殺すよう命じた。こうして、キリストの花嫁である聖殉教者ソサナの首は切り落とされた。　彼女は喜びと歓喜に満ちて、天の婚約者の輝く宮殿へと旅立った。聖ソサナの殺害を知った王妃は、夜中に聖殉教者の尊い遺体を運び出し、地面に流れた彼女の血を自身の頭巾で拭い集めた。　香油を塗った布で包み、女王は彼女の遺体を、多くの殉教者が埋葬されていた聖アレクサンドルの霊廟に安置し、頭巾に集めた血を銀の聖櫃に入れ、日夜ひそかに祈りを捧げ

ていた自分の部屋に隠した。　一方、聖ガイウス教皇は、聖殉教者ソサナの血が流されたその場所を教会として聖別し、そこで神聖な礼拝を執り行った[5525]。――しばらくして、聖ガヴィニウス司祭も殉教し、その後、聖ガイウスも殉教の死を遂げた。　彼ら全員が殉教者として神の御座の前に立ち、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美した。神に、私たちからも、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように[5526]。アーメン。

聖殉教者エウプラ・ディアコンの記念日

記念日：8月11日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世において、キリスト教徒への迫害は全宇宙に広がった。　この頃、前述の不敬虔な皇帝たちによって、キリスト教徒の捜索と拷問を行うため、その残虐さで知られるペンタグールという名の公爵がシチリアに派遣された。カターニアの街に到着すると、　拷問官は、カルヴィシアーノという市の長に対し、市内だけでなく周辺地域に住む人々も含め、すべての民を広場に集めるよう命じた。　アキッリエ広場には見世物のための場が設けられ、ラッパや太鼓の音に誘われて、男女を問わず、あらゆる年齢層の多くの人々が集まった。そこへペンタグール公もカルヴィシアーノを伴ってやって来た。群衆を見て、彼はカルヴィシアーノにこう尋ねた。

「皆、我らの神々に敬意と崇拝を捧げ、犠牲を捧げているか？」

カルヴィシアンは答えた。

「まことに、尊き公よ、あなたがご覧になっている者たちは皆、偉大なる神々に熱心に奉仕し、数多くの生贄を捧げております。その中には、不敬な者は一人もおりません。」

この答えにペンタグールは深く喜び、民衆と都市の長官の両方に称賛の意を表した。その後、王たちの勅令を公布し、皆の前でカルヴィシアンに権限を与えた――もし自らをキリスト教徒と名乗る者がいれば、その者を拷問にかけ、処刑してもよいと。　その後、ペンタグルは他の都市へと去っていった。一方、カルヴィシアンはプレトールの下僕たちを呼び寄せ、都市内やその周辺のどこかに、たとえ密かにキリスト教の信仰を告白している者であっても、そのような人物がいなければないか徹底的に捜索するよう命じた。そのような人物を見つけたら、拷問にかけるようにと。すると、下僕の一人が近づいてきて、こう言った。

「この町にエウプルという男がいます。彼はある本を携えており、家々や通りを巡りながら、キリスト教の神を偉大であると称して人々に説教しています。」

（聖エウプルは助祭であり、福音書を携えていた。そこからキリストの奇跡について人々に読み聞かせ、救い主を信じるよう教えていたのである）。

これを聞いたカルヴィシアンは、直ちに彼を捕らえて縛ったまま自分の元へ連行するよう命じた。兵士たちは街中をくまなく捜索して聖エウプルを探し回り、ついに、ある貧しい小屋で聖エウプルを見つけた。彼はそこで聖福音書を読み上げ、聞き手たちに教えを説いていた。　兵士たちは彼を捕らえ、両手を後ろ手に縛り、福音書も押収した上で、市長の元へ裁判のために連行した。聖エウプラスを見るや、カルヴィシアンは言った。

「お前こそ、神々を冒涜し、王の命令に背いた罪人か？」

聖エウプルは答えた。

「あなたの神々とは一体何者なのか。私がなぜ彼らを崇める必要があるのか？」

[5525] 教皇セルギウスの伝記には、682年にソサナの実家の中に教会があったことが記されている。

[5526] ソサナと共に記念される聖殉教者たちは、295年から296年にかけて殉教した。殉教者ソサナの聖遺骨は、彼女の父ガヴィニウスの聖遺骨と共に、ローマの彼女の名を冠した教会に安置されている。教皇ガイウスの聖遺骨もまた、ローマの彼の名を冠した教会にある。

「我らの神々は、ユピテル、アスクレピオス、そしてディアナである」とカルヴィシアンは言った。

「お前は」と聖人は反論した。「天と地を創造し、土から人間を造り出し、私たちキリスト教徒に、聖なる洗礼という、計り知れないほど尊く輝かしい不死の衣を授けてくださった、唯一の真の神を知らず、盲目なのだ。」

「お前は、まだ苦しみを知らないから、そんな高慢なことを言うのだ」とカルヴィシアンは言った。

「私にとって、この苦しみは輝かしい冠であるが、あなたにとっては闇と破滅に他ならない」と、聖エウプルは反論した。

するとカルヴィシアンは激しく怒り、聖エウプルスを絞首刑に処し、鉄の櫛で彼の体を削るよう命じた。これらの拷問の最中、聖エウプルは天を仰ぎ、祈りながらこう言った。

「主イエス・キリストよ、今、衣のように肉体が剥ぎ取られようとしている私を、来世における不死で包んでください。この時、苦しみによって打ち負かされないよう、私に強さをお与えください。」すると、天から声が響いた。

「勇気を奮い起こし、強くあれ、エウプルよ！　あなたにはすでに真の衣が用意されている。」

聖なる殉教者は長い間、鞭打たれ続け、その間、カルヴィシアンは彼にこう言った。

「まさか、お前は自分の迷いを捨てないというのか？　なぜ神々の神殿に入り、彼らに犠牲を捧げて、罪の赦しを受け、王たちからは名誉と富を、我々からは友好の申し出を得ようとしないのか？　そうすれば、お前は多くの金や銀を手に入れることができるのだぞ。」

「おお、滅びの子よ、悪魔の僕であり共犯者よ！」と聖エウプルは答えた。「神の恐るべき審判の日に、今、金や銀で偶像崇拝へと誘い込んでいる者たち全員の罪の代償として、お前がいかに恐ろしい罰を受けることになるか、知らないのか？」

さらに激怒した拷問官は、聖人の顎を鉄のハンマーで打ち、太ももやすねを砕くよう命じた。この拷問の最中、聖エウプルは拷問官を非難し、こう言った。

「愚かな者よ、憎悪に目がくらんだ人間よ！　なぜ私にこのような苦痛を与えるのか。私の神に支えられている私は、これを蜘蛛の巣のようなものだと見なしているのだ。もしできるなら、さらに苛烈なものを考え出してみよ。私にとって、これらは単なる遊びに過ぎない。」

その後、カルヴィシアンは聖エウプルを縛り解くよう命じ、彼の首に福音書を掛けさせて牢獄へ連行させた。その際、彼は特に厳重に牢の扉を閉め、自身の指輪で封印するよう命じ、さらに誰も聖エウプルのもとへ近づいてパンや水を持ち込めないよう、見張りを配置させた。　カルヴィシアンは、聖エウプルが渇きと飢えに苛まれて死ぬことを望んでいた。聖エウプルは牢獄に七日七晩留まり、激しい渇きを感じた。そこで彼は主に向かってこう祈った。

「主イエス・キリストよ、私たちの真の神よ、すべての生きとし生けるものに糧を授ける方よ。昔、モーセに導かれて荒野を旅する御民に、岩から生ける水を湧き出させて（出エジプト記17:6）彼らに飲ませられた方よ、　サムソンのために、乾いたロバの顎骨から水を湧き出させ（士師記15:19）、聖なる洗礼の水で私たちを清めてくださった方よ、　どうか私にも、懇願いたします、涼しさをお与えください。私は渇きで力尽きかけております。命じてください。この牢獄に泉が湧き出て、私の渇きを癒やし、すべての人々が、あなたこそが唯一の神であり、あなたに匹敵する者は他にいないことを知るようになさってください。

聖エウプルスがこの祈りを終えると、突然、牢獄の中に泉が現れました。彼はその水を飲み、それによって渇きを癒しただけでなく、まるで食物であるかのように飢えも満たしました。聖エウプルスは、神を賛美し感謝して歌を歌いました。　七日が過ぎたとき、カルヴィシアンは、もし殉教者

がまだ生きているなら、彼を牢屋から連れ出すよう命じた。彼は、聖エウプルスが傷と飢えと渇きによってすでに死んでいると考えていたからである。兵士たちがやって来て牢屋の扉を開けると、牢屋全体が水で満たされているのを見て、恐怖に襲われた。　しかし、聖エウプルはまるで命じるかのように両手を水の上に差し伸べると、水はたちまち見えなくなった。兵士たちは互いにこう言い合った。

「まことに、この人が仕える神は偉大だ！」

そして、聖なる殉教者を連れ出し、彼らは彼を市長の屋敷へと連れて行った。市長は、聖エウプルスの肉体が微塵も衰えておらず、まるで祝宴から帰ってきたかのように陽気な様子であるのを見て、大いに驚き、こう言った。

「さあ、今こそ神々にひれ伏せ。さもないと、お前の首を刎ねてしまうぞ。」

聖エウプルはこう答えた。

「狡猾で、悪魔に惑わされた者よ！　誰が、光を残して闇の中を歩こうなどと思うだろうか？」

激怒した都市の統治者は、鉄のフックで彼の耳を引きちぎるよう命じ、縛られた聖人を裁判のためにプレトリアへ連行させた。　そこへ拷問官自身も現れ、定位置に座ると、長い間聖人に不敬な生贄を捧げるよう強要したが、聖エウプルスが断固として屈しないのを見て、カルヴィシアンは彼を剣による斬首に処す判決を下した。　死刑判決を聞いた聖エウプルは、首長に対し、斬首の前に祈りの時間を与えてほしいと懇願し、カルヴィシアンはその願いを聞き入れた。　兵士たちが聖なる殉教者を処刑場へと連行すると、大勢の群衆がそれに付き従った。その中には、密かに信仰を守り続けていたキリスト教徒も少なからずいた。　処刑場に着くと、聖エウプルは立ち止まった。そして、民衆に向き直ると、常に携えていた福音書を取り出し、ページを開いてキリストの奇跡について読み上げ、真の神を知るよう説き始めた。すると、多くの異教徒がキリストの真理の光に照らされた。　その後、聖エウプルは神に祈りを捧げ始めると、天から声が聞こえてきた。

「幸いな者よ、エウプルよ、わが善良で忠実なしもべよ。来たりて、あなたの主の喜びに入り、世の初めからわたしに喜ばれた者たちすべてと共に安らぎを享受せよ！」

この声が響き渡った後、聖エウプルは頭を垂れ、首を斬られた後、主のもとへ旅立った。彼の苦難は、8月11日に終焉を迎えた[5527]。　敬虔なキリスト教徒たちは、その尊い御遺体と御頭を運び出し、特別に用意された場所に埋葬した。そして、聖殉教者の墓の前での祈りによって、多くの癒しが起こり、そこには我らの主イエス・キリストの恵みが働いていた。主と父と聖霊に、永遠の栄光と誉れあれ。アーメン。

コンダク、第1声調:

キリストの律法を手に掲げ、敵に対して叫び声を上げつつ戦いに臨まれた。私は自ら進んで、最も厳しい苦難に耐えることを選んだ。それゆえ、喜びをもって首を差し出し、剣による斬首を受け入れ、その生涯を閉じた。

[5527] 他の、より信頼性の高い伝承によれば、聖エウプルは304年8月12日に斬首された。その聖遺物はナポリ近郊のトリヴィコ（現在のヴィコ・デッラ・バロニア）にある。カターニアからいつここに移されたかは不明であるが、1656年に聖遺物の一部がここからカターニアへ戻された。

8月25日

8月12日（旧暦）

同日は、聖殉教者パンフィロスとカピトンの記念日。

聖殉教者フォティオスとアニキタ

記念日：8月12日

ビフィニア地方の都市ニコメディア[5528] において、不敬虔な皇帝ディオクレティアヌス（284–305）は、キリスト教徒に対する公然たる迫害を開始した。 彼の命令により、街中には拷問器具が並べられた。剣、鉈、串、鉄の爪、鉄板、車輪、大釜、その他同種の非人道的な発明品などである。また、猛獣も用意された。ディオクレティアヌスはこれらすべてを用いて、キリストの御名を呼び求める者たちを威嚇しようとしたのである。 彼はローマ帝国の隅々まで恐ろしい勅令を送り、至る所でキリスト教徒を迫害し、拷問し、殺害するよう命じた。その際、神の独り子に対して多くの冒涜の言葉が浴びせられた。

その頃、ニコメディアには、アニキタという名の高貴で名門のコメットが住んでいた。 神への熱意に満たされた彼は、皇帝の前に現れ、恐れを知らずに主イエス・キリスト、すなわち真の神の御子を告白した。聖アニキタは、神の御子の始まりなき誕生と、私たちの救いのために定められた時が満ちてからの御子の受肉について、雄弁に皇帝に語った。 同時に、彼は偶像崇拝者たちの迷いを非難し、異教の神々を「耳が聞こえず、感覚のない者たち」と呼びました。そして最後に、王に向かって次のように語りかけました。

「王よ、あなたがキリスト教徒のために用意し、彼らに告げた拷問など、私たちを少しも恐れさせません。私たちにとって苦しみなど何の意味もありません。私たちは決して、魂のない偶像を拝むことはありません。」

怒りと激怒に満ちた王は、聖アニキタの神に導かれた説教を聞くに耐えられず、直ちに彼の舌を切り落とすよう命じたが、彼はその後もはっきりと語り続け、キリスト神を賛美した。その後、彼は牛の腱で、骨がむき出しになるほど残酷かつ長時間にわたり鞭打たれた。 しかし、聖アニキタは――まるで自分ではなく、他の誰かが拷問を受けているかのように――勇敢に苦痛に耐え、彼を見つめる民衆に向かって、キリストこそが唯一の真の神であると大声で説教した。 その後、王は聖アニキタを野獣の餌食にするよう命じた。巨大なライオンが放たれ、恐ろしい咆哮を上げて殉教者に近づいたが、突然、子羊のようにおとなしくなった。ライオンは聖人に寄り添い、拷問で額や頬に滲んだ汗を、まるで唇のように前足で拭ってやった。 そして聖アニキタは声を張り上げて叫んだ。

「主イエス・キリストよ、この獣の牙から私を救ってくださったことを感謝いたします！主よ、どうか、これから私が直面する試練においても、御右の手を差し伸べて御僕を助けてください。そうして、私が迫害者の猛威に打ち勝ち、あなたから殉教者の冠を授かることができますように。」

この聖人の祈りの後、地震が起こり、ヘラクレスの神殿はその偶像とともに、また城壁の一部も崩れ落ち、多くの異教徒がその瓦礫の下で命を落とした。 そこでディオクレティアヌスは、聖殉教者の首を剣で切り落とすよう命じた。しかし、兵士が王の命令を実行しようと剣を振り上げた瞬間、その手は力尽き、彼は地面に倒れ込み、まるで意識を失ったかのように動かなくなってしまった。これを見たディオクレティアヌスは、聖アニキタを鋭い鉄の棒が立ち並ぶ車輪に縛り付け、火をくべ

[5528] 小アジアにて。

、車輪を回すよう命じた。彼は、聖殉教者が鉄で切り裂かれ、火で焼かれて死ぬことを望んでいたのである。しかし、車輪に縛り付けられた聖アニキタは、次のように祈った。

「主イエス・キリストよ、御前に立つ者たちのために、私をこの苦しみから解放してください。そうすれば、私を見つめる者たちが、あなたの速やかな助けを目撃し、拷問者に勇敢に立ち向かい、あなたから殉教の冠を受け取ることができるでしょう。」

するとたちまち、聖アニキタの縄は解け、車輪は止まり、火は消えた。そこで拷問官は、大釜に錫を満たし、それを溶かして、そこに聖殉教者を投げ込むよう命じた。　皆が、聖アニキタと共に大釜の中に入っていく主の御使いを目撃した。そして、殉教者が大釜に触れた途端、鉛は冷め、氷のようになった。

聖アニキタの親族であるフォティオスは、彼の偉業と、御自分のしもべを守られるキリストの力を目の当たりにし、あらゆる恐れを捨て去った。　群衆の中から抜け出し、処刑場へと向かった彼は、聖なる殉教者の元へ歩み寄り、愛を込めて彼を抱きしめ、口づけをし、彼を「父」であり、自身の救いの「取り成し手」と呼んだ。この行動によって、フォティオスはキリストのためにいかなる苦しみも耐え忍ぶ覚悟があることをはっきりと示した。そして王に向き直り、フォティオスはこう言った。

「恥を知れ、偶像崇拝者よ！　お前の神々など何者でもない。」

すると、ディオクレティアヌスは怒りを込めて兵士たちに叫んだ。

「剣で彼を斬り殺せ！」

しかし、兵士の一人が剣を抜き、殉教者を斬りつけようとしたとき、神の力によってその手は自分自身に向けられ、膝を斬りつけて地面に倒れ、死んでしまった。その後、聖アニキトスとフォティオスは鉄の鎖で縛られ、二人は共に牢獄に投げ込まれた。　三日後、ディオクレティアヌスは二人を呼びつけ、こう言った。

「もし私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げれば、私はあなたたちを栄誉に浴せ、富を与える。」

「あなたの名誉も富も」と聖人たちは答えた。「あなたの破滅のために、あなたのもとに残っておけ。」

激怒した拷問官は、まず彼らを拷問台に吊るし、鉄の爪で肉を削ぎ、火で傷口を焼いた後、石で打ちつけるよう命じた。しかし、聖人たちはこれらの苦痛をすべて喜びをもって耐え、神に感謝した。彼らは何の痛みも感じなかったからである。主は御自身の聖なる御名の栄光のために、彼らを無傷のまま守ってくださったのだ。　その後、彼らは足を野生の馬に縛り付けられ、馬に引きずり回された。しかし、このような拷問をもってしても、ディオクレティアヌスは何の成果も得られなかった。主は再び彼らを無傷で守ってくださったのである。聖なる殉教者たちは、引きずられながらもまるで戦車に乗っているかのように、主の無敵の力を賛美し、互いに励まし合った。　すると、野生の馬たちは突然立ち止まった。聖人たちの足は縛りから解かれ、彼らは全く無傷で立ち上がった。拷問官は再び、塩を混ぜた酢を傷口に注ぎながら、彼らに残酷な殴打を加えるよう命じた。その後、彼らは再び牢獄に投げ込まれ、そこで三年間を過ごした。　その後、聖人たちは新たな拷問を受けるために連れ出された。ディオクレティアヌスの命令により、三日間、民衆用の石造りの浴場を燃やし続け、その後、聖なる殉教者たちをその中に閉じ込めた。しかし、聖アニキタと聖フォティオスが神に祈ると、浴場は崩れ落ち、彼らに涼をもたらしていた泉の水が湧き出た。 3日目に看守たちが浴場を開けると、聖人たちが無傷で歩き回り、神を賛美しているのを目撃し、そのことが皇帝に報告された。皇帝はその知らせを信じがたいかのように、自らその真実を確認しに行った。聖人たちは皇帝を見ると、こう言った。

「ほら、拷問者よ、我々はあらゆる苦しみの中で勝利者となったが、お前は敗北し、恥をかいたのだ。」

王は恥をさらして宮殿へ戻り、殉教者たちを捕らえ、彼らを滅ぼす方法を思いつくまで、鎖で縛り付けておくよう命じた。王の命令により、四本の鉄の柱で支えられた巨大な炉が設けられた。そこには大勢の人間が入り込むことができた。 かつてのネブカドネツァル（ダニエル書第3章）のように、彼はこの炉を赤熱させるよう命じ、二人の聖なる殉教者だけでなく、見つけられる限りのすべてのキリスト教徒をその中に焼き殺そうと企んだ。 しかし、キリスト教徒たちは、異教徒たちが自分たちを炉に投げ込むのを待つことなく、自ら妻や子供たちと共に炉へと向かい、こう叫んだ。

「我らはキリスト者であり、唯一の神を崇める！」

最初に聖殉教者アニキタとフォティオスが炉に入り、その後を、祈りを捧げ、天に向かって両手を挙げた大勢の集まったキリスト教徒たちが、火の中へと向かった。炎の中から、キリスト教徒たちはこう叫んだ。

「全能の父なる神よ、御独り子であり我らの主イエス・キリストへの信仰によって、私たちを殉教の冠を受けるために集めてくださったことを感謝いたします。慈悲深き神よ、高きところから御手を伸ばし、御自身の信仰の証人たちに備えてくださった永遠の安息へと、私たちの魂をお迎えください。」

この祈りの最中、彼らは主のもとで息を引き取った。一方、聖アニキタと聖フォティオスは、その炉の中で三時間生き続け、その後、祈りを捧げて、自らの魂を神の御手に委ねた。 の僕たちが鉄の道具で聖アニキタとフォティオスの遺体を取り出したとき、彼らは火による損傷を全く受けておらず、髪の毛さえも無傷であるのを見た。そして、多くの異教徒たちが、私たちの神キリストを信じるようになった。キリストに、父と聖霊と共に、永遠の栄光がありますように。アーメン[5529]。

聖アレクサンドロス司教（コマン司教）、聖殉教者の記念日

記念日：8月12日

ネオケサリア近郊のコマン市[5530] には、当時聖グリゴリオス・テオロゴスが司教を務めていたが、そこにアレクサンドロスという名の男が、自ら進んで貧しさを選びながら暮らしていた。彼の神に喜ばれる生活は人々の目から隠され、ただ神のみが知っておられた。 聖アレクサンドルは、優れた教養を備えていたため、莫大な富を築き、万人の尊敬を集めることもできたはずだが、神のために自発的な貧しさを選んだ。世を軽蔑し、自らの知識を何とも思わず、無学で無知な人間であるかのように振る舞い、使徒の言葉を体現していた。*「あなたがたのうち、この世で知恵ある者と見なされたいと思う者は、知恵ある者となるために、愚か者となりなさい」*（コリントの信徒への手紙一 3:18）。自らの労働で生計を立てたいと願った聖アレクサンドルは、極度の謙遜のうちに、おそらく最も卑しい奉仕の道を選んだ。彼は炭を作り、それを売って日々の糧を得たのである。 このため、聖アレクサンドルは子供たちの嘲笑や遊びの的となってしまった。仕事のため、彼の顔や衣服は炭の粉で真っ黒になり、その姿で市場に現れると、まるでエチオピア人のようだった。街中では、聖アレクサンドルは「炭売り」として知られていた。 しかし、高き所に住まわれ、謙遜な者を見下ろし、彼らを高めてくださる主は、この地上の生涯のうちに、謙遜な御僕アレクサンドルを栄光に輝かせ、彼を通して御自身の教会に支柱と装飾を授けることを御心に留められた。そのために、主は彼を司教の位に就かせられたのである。 コマン司教が亡くなると、町の住民たちはネオケサリアにいる聖グリゴリオス・テオロゴス（奇跡行者）のもとへ使節団を派遣し、彼に訪れて司教を任命してほしいと懇願した。聖グリゴリオスはまもなく到着した。公会議で司教の座にふさわしい人物を選出しようとしたと

[5529] ここで言及されている殉教者たちは、305年または306年に殉教した。

[5530] イリス川沿いのポンテ・ポレモニアクスにあった場所。

き、意見の相違が生じた。　ある者は高貴な家柄の人物を、ある者は裕福な者を、またある者は雄弁な者を、さらに別の者は威厳ある風貌と年齢を備えた者を推挙し、これらすべての候補者を、称賛に値し、司教職にふさわしい人物として聖グリゴリオス・テオドロス（奇跡行者）のもとに連れて行った。　しかし、聖グリゴリオス・テオドールは、主ご自身がふさわしい人物を現わされるのを待ち、司教の選出と叙任を急ぐことはなかった。　彼は公会議に語りかけ、神がダビデを選び、彼にイスラエルを治めさせたことを思い出させた。すなわち、イッサイが長男のエリヤブを聖サムエルのもとに連れて行ったとき、預言者は主に「この者が御自身の油注がれた者ではないのか」と尋ねたのである。　しかし、主はサムエルにこう言われた。「その外見や背の高さを見てはならない」（サムエル記上16:6–7）。

「そして我々もまた」と聖グリゴリウスは語った、「この町の牧師を選ぶにあたり、外見で判断してはならず、神によって定められた者を探すべきである。なぜなら、人は顔を見るが、神は心を見るからであり、その価値を測る尺度は外見ではなく、主のみがご存知の心の内なる在り方だからである。」

聖グリゴリオスのこの言葉は、一部の人々には不快に映り、彼らは嘲笑を交えて互いにこう語り合った。「もし外見や高貴な家柄を見ないというのなら、炭焼きのアレクサンドルでさえも選ばれ、司教に任命されるかもしれない。」　石炭売りの話に、公会議に出席していた他の者たちも笑いをこらえきれなかった。しかし、聖グリゴリウスはしばらく考え込んだ後、こう言った。

「今や嘲笑の的となっているこの人物が言及されたのは、神の摂理によるものであり、決して偶然ではない。」

そして、こう尋ね始めた。

「あなたがたが言及しているこのアレクサンドルとは、いったい誰のことか？　私は彼に会いたい。」

その頃、聖アレクサンドルは公会議が開かれていた建物のそばに立ち、選出のためにやって来た人々の所有するラバの世話をしていた。数人が外に出て、聖アレクサンドルを公会議の場へ連れてきた。彼が　の集まりの中に立つと、皆が彼を見つめ、笑い出した。彼自身も、着ているみすぼらしいぼろ服も、石炭のせいで真っ黒になっていたからである。　皆が笑っている間も、彼は聖人の前に敬意を込めて立ち、内省にふけり、笑っている者たちには目もくれなかった。　一方、透視の賜物を持つ聖グリゴリオス・テオロゴスは、至福のアレクサンドロスの中に宿る神の恵みを見抜き、それが彼を聖座に就くにふさわしい者と認めた。席から立ち上がると、彼は聖アレクサンドロスと二人きりになり、神の御名にかけて真実を語るよう誓わせながら、彼が誰なのかを尋ね始めた。　聖アレクサンドルは、自分の正体を隠したいと願っていたものの、これほど尊敬される聖主教の前で嘘をつくことはできず、また誓いを恐れたため、自分の人生についてすべてを語った。すなわち、博識な人物である彼が、神のためにいかに自らを謙遜にし、自発的な貧しさを身にまとったかということである。彼との会話を通じて、聖グリゴリウスは、彼が学問だけでなく聖書についても深く精通していることを確信した。その後、聖人は側近たちに命じて、聖アレクサンドルを自分の元へ連れて行かせ、そこで体を洗い、きちんとした服を着せ、再び公会議の場へ連れてくるよう指示した。　聖グレゴリウスは再び自分の席に着き、その間、神に導かれた対話を続けていた。しばらくして、聖アレクサンドルが、身を清め、明るい服を身にまとい、極めて威厳ある面持ちで公会議に連れてこられた。以前この聖なる人物を見たことのある者たちは、彼だと気づくと、驚きを隠せなかった。　聖グリゴリウスは彼と会話を始め、聖書からの問いを投げかけた。聖アレクサンドルは極めて賢明に答えたため、出席者たちは彼を学識豊かで知性ある人物であると認めざるを得ず、さらにこう驚いた。なぜ、これほどの知識を持つ人物が、まるで最下層の無学者のように彼らの間で暮らしながら、自らの知恵を隠していたのか？　同時に、彼らは、神のために自らを低くしたこれほど賢明な人物を、狂人だと見なして

嘲笑していたことを自らを責めた。そこで、公会議に出席していた者たちは皆、喜びをもって満場一致で聖アレクサンドルを司教に選出した。これは、聖書に記された主の御言葉、「　「人は外見を見るが、主は心を見る」（サムエル記上16:7）。聖グリゴリウスは、聖アレクサンドロスを教会の階位へと昇進させ、まず司祭に叙階し、その後、司教に叙階した。司教叙階の後、彼は聖アレクサンドロスに、民衆に向けて教訓的な言葉を語るよう命じた。　聖人が説教を行うと、その口からは聖霊の恵みがまさに川のように溢れ出し、人々の心を感動させた。そして、このような教訓に富んだ牧者を得たことで、街全体が喜び、神を賛美した。　聖グリゴリウスはネオケサリアへと去り、聖アレクサンドルはコマナでキリストの羊の群れを牧し、言葉と生き様をもって信者たちに模範を示した。その頃、あるアッティカ出身の若い哲学者がたまたまコマナに滞在していた。　聖人が民衆に説教するのを聞いて、彼は雄弁な修辞を排したその素朴な言葉遣いを嘲笑した。しかし、聖アレクサンドロスは説教において言葉の美しさではなく、その教訓性を重んじていた。聴衆の素朴さに合わせて、彼の言葉は簡潔でありながら、同時に人々の魂を救う力に満ちていた。　ところが、ある日、前述のアッティカの哲学者に次のような幻が見えた。彼の目の前に、非常に美しい白い鳩の群れが現れ、詩篇の歌い手が言うように、「翼は銀に覆われ、羽は純金である」（詩篇67:14）と、輝く光を放っていた。そして、その時に声が聞こえた。

「これは、あなたが嘲笑したアレクサンドロス司教の言葉だ。」

幻から覚めた哲学者は、自分の行いを恥じ、司教のもとへ赴き、許しを請いました。

まもなく、ディオクレティアヌス帝の治世下で[5531]　、キリスト教徒に対する迫害が始まり、コマンの聖アレクサンドロス司教は不敬虔な異教徒たちに捕らえられた。　偶像崇拝を強要されたが、キリストを否定することはなく、そのために拷問を受けた後、火の中に投げ込まれ、そこで聖なる司教は、私たちの神キリストのために殉教した。

8月26日

8月13日（旧暦）

同日、1月21日に記念される、私たちの尊い父マクシム・殉教者の聖遺骨の移送が行われた。

同日、キリストのために聖なる狂人となったモスクワの至福のマクシム聖人の聖遺骨が発見された。

同日、聖父ティホーン（ヴォロネジの司教、ザドンの奇跡行者）の帰天（1783年）および聖遺骨の発見（1861年）。

聖殉教者イポリト

記念日：8月13日

聖大助祭ラウレンティウスの殉教の死後、軍司令官であり獄吏でもあった福者イッポリトは、当初は彼の囚人であったが後に師となったこの殉教者の、苦難に満ちた遺骸を尊厳をもって埋葬した。福者イッポリトが自宅に戻ったのは、埋葬から3日後になってからであった。　彼の家族全員――男女合わせて19人――はキリスト教徒であり、彼らはキリスト教信仰の真理を教えられ、その後、聖ラウレンティウスによって洗礼を受けた。　祝福されたイポリトは、家族全員と共に、家庭での共同の祈りを終えた後、キリストの御体と御血の聖なる秘跡を拝領し、霊的な糧を受け取った後、肉体を養

[5531] 284～305年の皇帝。

うための食事が用意された。　しかし、食事を始める前に、兵士たちがやって来て、至福のイポリトを捕らえ、デキウス王のもとへ連行した[5532]。王は彼を見て笑いながら言った。

「まさか、お前もラウレンティウスの遺体を盗んだからといって、魔術師になったのか？」

「私は魔術師ではなく、キリスト教徒です」と、聖ヒッポリトは答えた。

すると、激怒した王は、彼の口を石で打つよう命じ、続いて、キリスト教徒の通常の装いである衣服を脱がせるよう命じた。

「あなたは私を裸にしたのではなく、より高価な衣を身にまとわせてくれたのだ」と、至福のイポリトスはそう言った。

「これほど狂気じみた振る舞いをして、自分の裸を恥じもしないというのに、もはや神々を崇拝していないというのか？」と王は尋ねた。

「私は賢明であり、裸ではありません」と、至福のイポリトスは反論した。「なぜなら、私はキリストに身を包んでいるからです。かつてあなたのように悪魔に仕えていた時こそ、私は狂っていたのです。そして、キリストの恵みを持っていなかった時こそ、私は裸でした。しかし今、私はキリスト教徒なのです。」

「神々に生贄を捧げよ」と王は提案した。「そうすれば、ラウレンティウスのように、拷問で死ぬことはなくなるだろう。」

「ああ、もし私が聖ラウレンティウスのような運命に恵まれることがあれば！　お前のような呪われた者が、その汚れた口でその名すら口にするべきではないのだ！」と、至福のイポリトは叫んだ。

王は彼を地面に引きずり下ろし、容赦なく棒で打つよう命じた。その間、聖なる殉教者は大声で叫んでいた。

「私はキリスト教徒だ！」

すると、拷問官は殴打を止め、至福のイポリトを地面から起こし、通常の軍服を着せるよう命じた。その際、彼は聖なる殉教者にこう語りかけた。

「お前の軍人としての身分を思い出し、これまで通り我々の友であり続け、これまで通り我々と共に犠牲を捧げよ。」

「私は、私の救い主であるキリストの戦士であり、キリストのために死のうとしている」と、福者ヒッポリトスは答えた。

その後、デキウスはヴァレリアヌス司教にこう言った。

「彼の全財産を没収し、彼自身を拷問して死に至らしめよ。」

その日、ヴァレリアヌスが派遣した者たちが、福者イッポリトスの財産を略奪した。イッポリトスの家からキリストを信じる者たちが発見されたことを知ると、ヴァレリアヌスは彼らを自分の元へ連れてくるよう命じた。連行された者の中には、イッポリトスの乳母であるコンコルディアもいた。彼らを一瞥して、ヴァレリアヌスは言った。

「自分の命を惜しめ。そうすれば、主人のイポリトスと共に滅びることはないだろう。」

「私たちは、キリストへの信仰を失って、あなた方のような不信心者たちの間で生きるよりも、主君と共にキリストの信仰のために名誉をもって死ぬことを望みます」とコンコルディアは答えた。

「奴隷どもは、傷を負わされる以外に改心する道はない」とヴァレリアヌスは言い、コンコルディアを鍚の棒で打つよう命じた。拷問の最中、聖なる殉教者は主のもとへ魂を捧げた。　ここには、兵士たちに監視されていた至福のイッポリトスもいた。彼は、自分を育ててくれた乳母の殉教の最期を目撃すると、喜びの声を上げて叫んだ。

[5532] 249～251年の皇帝。

「主よ、私を育ててくださった方を、御国の聖人たちの元へ先立たせてくださったことを感謝いたします！」

エパルヒは言った。

「お前は今なお、魔術的な策略に頼っているのか。神々を崇めず、王の命令に従わないのか？」

そして怒りを露わにしたヴァレリアヌスは、イッポリトスを含む全員をティヴルティン門から城外へ連れ出し、そこで処刑するよう命じた。聖イッポリトスは道中、彼らを励まして言った。

「恐れるな。私にもあなたたちにも、ただ一人の主がおられるのだ。」

処刑場に着くと、聖イポリトスの目の前で、全員が兵士たちによって斬り殺された。この殉教の死を遂げた者たちは、性別や年齢を問わず計18名に上ったが、これには街で殺害された聖コンコルディアは含まれていない。　聖イポリト自身は、エパルハの命令により、野生の馬に縛り付けられ、主のもとへ旅立つまで、岩だらけの道をひきずり回された。　聖殉教者ヒッポリトは、その家族と共に、8月13日、聖ラウレンティウスの殉教から3日目に、キリストのために殉教した。

夜が更ける頃、聖ユスティン司祭が信者たちと共に処刑現場にやって来て、聖殉教者たちの遺体を集め、その場で埋葬した。しかし、聖コンコルディアの遺体は、街中で徹底的に捜索したにもかかわらず、どうしても見つからなかった。このことに聖ユスティンは深く悲しみ、涙を流した。　聖コンコルディアの尊い遺体は、迫害者の命令により、不浄な場所に投げ捨てられた。　あるキリスト教徒イリネイは、聖ヒッポリトの殉教からすでに三週間が経過した頃、ある兵士からこのことを知った。彼は別のキリスト教徒アヴンディウスを伴い、夜中に聖殉教者の遺体を、不浄な場所の影響を全く受けていない状態で取り出し、長老ユスティヌスの元へ持ち帰った。　長老は大変喜び、その尊い遺骸を聖ヒッポリトや他の殉教者たちの遺体の隣に埋葬した。翌朝、このことがヴァレリアヌスの耳に入り、彼はイリネイとアヴンディウスを捕らえ、聖コンコルディアの遺体を運び出した場所へ放り込み、汚物の中に生きたまま溺れ死なせるよう命じた。　こうして、二人の聖人は8月26日にそこで息を引き取った。聖ユリアヌスは夜間に彼らの遺体を引き上げ、聖ラウレンティウスの聖遺物の傍らに埋葬し、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を讃えた。[5533] 。アーメン。

8月27日

8月14日（旧暦）

同日、エフレム・ノヴォトルジスキーの弟子である聖アルカディウスの記念日。

同日、聖殉教者マルケルス（アパミア司教）の記念日。彼は、異教の神殿を破壊したとして、389年頃に偶像崇拝者たちによって焼殺された。

キエフ・ペチェール修道院における聖母マリアの尊き御昇天教会の建立について

8月14日の記念日

[5533] 聖殉教者ヒッポリュトスと聖殉教者コンコルディアは、258年8月13日に殉教した。

ロシアで最初かつ最も偉大な修道院である[5534] の聖アントニオスおよび聖テオドシオス・ペチェルスキーの修道院において、その壮麗さが天に匹敵する美しい聖母マリアの　石造教会が、主の御心と御摂理、そして御母マリアの祈りの取り成しによって建立され、装飾され、奉献されたことは、誰しも疑う余地がない。 至福のシモン司教[5535] と共に、まず第一に、奇跡に彩られたその建設の始まりについて語ろう。

ヴァリャーガの地には、盲目のヤクンの兄弟であるアフリカン公がいました。ヤクンとは、ヤロスラフのために自らの部隊を率いて、その獰猛な兄弟ムスティスラフと戦った際、金糸で織られた衣を身にまとうことを拒んだあの男その人です。アフリカンには、フリアンドとシモンという二人の息子がいました。　アフリカンの死後、ヤクーンは二人の息子をそれぞれの領地から追放した。シモンはロシアへやって来て、敬虔なヤロスラフ公のもとを訪れた。ヤロスラフ公は彼を受け入れ、厚遇した。そして、息子のヴセヴォロドのもとでシモンを最年長のボヤリンに任命し、実際、ヴセヴォロドのもとでシモンは非常に大きな権力を握っていた。

ある事情により、シモンは聖ペチェールスク修道院に対して非常に強い愛着を抱いていた。キエフでイジャスラフ・ヤロスラヴィチが統治していた頃、遊牧民のポロヴェツ族がロシアの地に侵攻してきた[5536] 。これに対抗して、ヤロスラヴィチ家の三人の公――イジャスラフ、スヴィャトスラフ、そしてヴェセヴォロド――が出陣し、シモンもヴェセヴォロドの配下にいた。　彼らは皆、尊者アントニーのもとを訪れ、戦いのための祈りと祝福を求めた。老修道士は、その真実を語る口を開き、彼らに破滅を明確に予言した。シモンは老修道士の足元にひれ伏し、主が彼をそのような災いから守ってくださるよう懇願した。尊者は彼にこう答えた。

「わが子よ、あなた方の多くは剣によって倒れ、他の人々は敵から逃げる途中で踏みつけられ、傷つき、水の中で溺れ死ぬだろう。しかし、あなたは生き延びて、ここに建てられることになる教会に葬られるだろう。」 両軍の部隊がアルテ川で激突したとき[5537] 、神の助けを失ったキリスト教徒たちは敗北した。諸侯たちは逃げ去り、多くの将軍たちは兵士たちと共に殺された。その真ん中には、負傷したシモンも横たわっていた。　空を見上げると、彼はかつて海上で見たのと同じように、壮大な教会を目にし、かつて救い主が彼に語った言葉を思い出した[5538] 。その時、シモンはこう叫んだ。

[5534] ラヴラ（修道院）――ギリシャ語で「都市の一部」、小路――厳密には、修道院長の住居を取り囲むように、都市の小路のように配置され、柵や壁で囲まれた一連の独房のこと。　ラヴラに暮らす修道士たちは隠遁生活を送り、それぞれ自分の独房で修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のために集まる以外は、沈黙を守っていた。ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに厳しいものであった。　太古の昔から、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士を擁し、その意義において重要な修道院を指して用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられた。現在、ロシアでは「ラヴラ」という名称は、もっぱら名誉称号としての意味で使用されている。

[5535] シモンはペチェルスク修道院の修道士であった。そこから、大公ヴセヴォロド・ユリエヴィチによって、彼がウラジーミルに設立したロズデストヴェンスキー修道院のイグメンに任命された。その後、シモンは1214年にロストフ教区から分離されたウラジーミル教区の初代司教に任命された。　シモンは12年間の在任を経て、1226年に死去した。ウラジーミル司教シモンから、同じくペチェールスク修道院の修道士であり、後に同修道院のイグメンとなったポリカルプへの書簡、およびポリカルプからペチェールスク修道院のアルヒマンドリトであるアキンディンへの書簡には、　ペチェルスクのアルヒマンドリトであるアキンディンへの書簡には、ペチェルスクの奇跡行者たちや、大聖堂の建設時に修道院内で起こった奇跡に関する一連の伝承が記されており、これらをもとに有名な『ペチェルスク・パテリク』が編纂された。

[5536] ポロヴェツ人、あるいはクマニ人は、10～13世紀にロシア南部に住み、そこからロシア領の辺境の都市や集落へ襲撃を繰り返していたテュルク系の遊牧民族である。

[5537] それは1066年のことだった。アルタ川は、キエフの下流でドニエプル川に左岸（モスクワ側）から合流するトゥルベジ川の支流である。

[5538] これらの用語の説明については、以下を参照のこと。

「御母マリアと、聖アントニオ、聖テオドシオの祈りによって、主よ、この苦い死から私を救い出してください。」

すると突然、ある力が死者の群れの中から彼を引き抜き、彼は瞬く間に傷を癒やされ、再び完全に健康を取り戻した。その後、再び聖アントニオのもとへ戻ったシモンは、すべてを彼に語り、さらに次のように付け加えた。

「私の父アフリカンは、キリストの御姿が描かれた、約10エルトほどの大きな十字架を作りました。 主の御像を崇め、その腰には重さ約50グリヴナの金の帯[5539] を、頭には冠を戴かせました。ところが、叔父のヤクンが私を領地から追放したとき、私はその帯と冠を持ち去りましたが、その時、私の方を向いた救世主の御像から声が聞こえてきました：

「人間よ、決してこの冠を自分の頭に戴いてはならない。むしろ、この冠のために用意された場所――そこで聖者がわが母の教会を建てる場所――へ運び、彼の手渡し、わが祭壇の上に掲げさせよ。」

「私は」とシモンは語った。「恐怖のあまり倒れ込み、呆然として死人のように横たわっていたが、やがて立ち上がり、船に乗り込んだ。航海の最中に激しい嵐に見舞われ、私たちは生き延びることを絶望した。その時、すっかり忘れていたその帯のことを思い出し、大声で祈り始めた。

『主よ、私をお赦しください。今、私はあなたの聖なる御像から取ったこの帯のせいで死に瀕しているのです』――すると突然、上方に教会が見え、私は『これは一体どんな教会だろう？』と思った。すると上から声が聞こえた：

「（それはまさにあの教会だ）。それは聖者が聖母マリアの名において建立するものであり、今あなたが見ているように、威厳に満ち、高くそびえ立つだろう。その大きさは、聖者があの金の帯を用いて測定する――幅二十帯、長さ三十帯、高さ五十帯。あなたはこの教会に葬られることになる。」

その後、海は静まり返った。私たちは皆、神を賛美し、苦い死から逃れられたことを悟って、大いに喜んだ。

これらすべてを語り終えると、シモンは聖アントニウスにこう言った。

「父よ、あなたから、私がここに建てられる予定の教会に葬られると聞くまでは、私に示された教会がどこに建てられるのか、私は知りませんでした。

そして、金の帯を取り、聖アントニオに手渡しながらこう言った。

「これが、その教会の基礎となる寸法です」と。また、冠を手渡しながらこう言った。

「この冠は、聖なる祭壇の上に掲げられるべきものです。」

長老は神を賛美し、こう答えました。

「わが子よ、これからはお前の名はシモンではなく、シモンとなるのだ。」

聖アントニオは、至福のテオドシオを呼び寄せ、こう言った。

「シモンよ、この人が教会を建て上げるのだ。」

そしてその後、尊者テオドシオスに帯と冠を手渡した。この時から、シモンは聖なる建築家テオドシオスに対して強い愛を抱くようになった。彼は、神に示された教会の建設のために、自身の財産から多くを彼に与え、頻繁に彼を訪ねた。ある日、シモンは至福のテオドシオスのもとを訪れ、いつもの会話を交わした後、こう言った。

「父よ、ただ一つだけお願いがあります。」

「何であれ――」と聖テオドシオスは答えた。「わが子よ、高貴なる人よ、この謙虚な者に何を願うのですか？」

[5539] グリヴナ――一定の重量（72～96ゾロトニク）を持つ古銭で、多くの場合、金や銀のインゴットの形をしていた。

「私は、私の力をはるかに超える、非常に大きな恵みをあなたにお願いしたいのです」とシモンは反論した。

「わが子よ、あなたは知っているだろう」と、聖テオドシウスは再び答えた。「我々の貧しさを――日々の糧となるパンさえも、しばしば手に入らないのだ。私に一体何があるというのか、私には分からない。」

シモンは言った。

「もし望まれるなら、あなたを『尊者』と名付けられた主から与えられた恵みによって、私に授けてください。というのも、私がキリストの頭から冠を取り外したとき、主は私にこう言われたからです。

『その冠を、彼のために用意された場所へ運び、わが母の教会を築く聖者に手渡せ』と仰せになった。

――だから、あなたにお願いする――私の生前も死後も、そしてあなたの生前も死後も、私を祝福してくれると約束してほしい。

聖テオドシウスは答えた。

「おお、シモンよ、あなたの願いは私の力を超えている！しかし、もしあなたが私のこの世からの旅立ちを目撃し、私の死後、ここに建てられた教会で、そこに捧げられた規則が揺るぎなく守られているのを見たら、私が神に対して大胆に祈ることができることを知ってください。ただ今この時点では、私の祈りが神に受け入れられるかどうかは分かりません。」

「あなたの義は」とシモンは答えた。「主ご自身が証しなさっています。私は、主の聖なる御姿である方のご清らかな御口から、あなたのことを伺いました。それゆえ、お願いいたします。ご自身の修道士たちのために祈られるのと同じように、罪深い私や、私の息子ゲオルギー、そして私のすべての親族のためにもお祈りください。」

聖テオドシウスは、まるで約束をするかのように、こう言った。

「私は彼らだけでなく、この聖なる場所を愛するすべての人々のためにも祈ります。」

すると、シモンは地面にひれ伏して、こう懇願した。

「父よ、あなたがその言葉を手紙で確約してくださるまでは、私はここを離れません。」

シモンの愛に動かされ、聖テオドシウスは次のように記した。

「父と子と聖霊の御名において、私たちの至聖なる主の母、神の母であり永遠の処女マリアの祈りと、無形の聖なる力によって……」。そして、その他の許しの祈りの言葉を述べ、次のように締めくくった。

– 義なる審判者が生者と死者を裁きに来られる時、今世においても来世においても、汝が赦されますように。

それ以来、初代シモンが自身について遺言した通り、この祈りを死者の手に握らせるようになった。また、その祈りと併せて、聖テオドシウスはシモンに次のように記した。

– 主よ、御国に来られ、各人にその行いに応じて報いを与えられる時、私を覚えてください。そのとき、主よ、御自分のしもべであるシモンとゲオルギウスが、御栄光の御右に座し、御喜びの御声を聞くことができるよう、お許しください。　*『来なさい、わが父の祝福された者たちよ。世の初めからあなたがたのために用意された御国を受け継ぎなさい』*（マタイ25:34）。

その後、シモンは再びこう願い出ました。

「父よ、私の両親と親族の罪が赦されますよう、お祈りください。」

聖テオドシウスは両手を挙げて、こう言った。

「主がシオンからあなたがたを祝福し、あなたがたの生涯のすべての日々、あなたがたの家系が絶えるその日まで、エルサレムの幸いを見ることができますように（詩編127:6参照）。」

シモンは聖人の祈りと祝福を、手放すことのできない最も貴重な真珠のように受け止め、墓に入るまでそれを大切にしていた。そして、その後、まさにその通りになったのである。　それまで彼はヴァリャーグ（ラテン系）であったが、この出来事を機に、聖テオドシオスに教えられ、神の恵みによってラテン教会の誤りを捨て、心から正教の信仰に改宗した。彼と共に、その家門の者たち――その数は三千人にのぼり、その中には司祭たちも含まれていた――も皆、改宗した。　これらすべては、ペチェルスクの聖アントニオスと聖テオドシオスの奇跡によって成し遂げられたのである。――かなり長い時間が経過し、ペチェルスクの教会がすでに建立された後、天からの啓示と聖アントニオスの預言に従い、シモンが最初にその教会に安置された。

称賛に値するシモンと、彼に与えられた神の啓示に関する物語は、ペチェルスクの聖なる教会の姿が、地上に建設される以前に天上であらかじめ描かれていたことをはっきりと示しており、それによって、詩篇の作者の言葉「至高者ご自身がそれを築かれた」（詩篇86:5参照）がここで成就したのである。　その後、天の女王の取り成しにより、このことはさらに明確に明らかになった。その詳細は、以下の記述から見て取れる。

シモンが聖アントニオに帯と冠を授けてからすでに数年が経っていたが、ある日、コンスタンティノープルから四人の教会建築職人――石造りの教会を建てる、非常に裕福な人々――が聖アントニオとテオドシオのもとを訪れた。

「どこで教会の建設を始めたいとお考えですか？」と彼らは尋ねた。

「主が示される場所です」と、聖人たちは答えた。

「驚くべきことです」と建築家たちは言った。「あなたはご自身の死の時期をご存知でありながら、同時に教会の場所を指定することができないのです。にもかかわらず、雇用の際にこれほど大量の金を私たちに手渡されたのですから。」

修道士たちは兄弟たち全員を呼び集めると、ギリシャ人たちに尋ね始めた。

「隠し事なく、何について話していたのか教えてくれ。」

建築者たちは言った。

「ある朝、私たちがそれぞれの家で眠っていた時――太陽が昇ったばかりの早朝――私たち一人ひとりのところに、端正な若者が現れてこう言ったのです。

「[5540] 女王が、あなた方をヴラヘルヌへお呼びになっています。」

私たちは友人や親族を連れて、皆一斉にヴラヘルヌへ赴き、話し合ううちに、同じ使者たちから同じ言葉で女王陛下に召されたことを知った。そこで私たちは、大勢の戦士たちに囲まれた女王陛下を目にした。私たちは陛下に拝礼すると、陛下はこうおっしゃった：

「私はロシアのキエフに、自分専用の教会を建てたい。それゆえ、あなた方に命じる――三年分の金を持ち、教会の建設に向かいなさい。」

私たちは頭を下げて、こう答えました。

「おお、女王陛下、あなたは私たちを異国の地へ送り出そうとしておられますが、そこで私たちは誰のもとへ行くのでしょうか？」

「ほら、ここにいる者たち――アントニアとフェオドシア――を、私も一緒に遣わすのだ」と、御方は言われました。

「なぜ、御方よ」と私たちは尋ねた。「三年間分の金を私たちに与えてくださるのですか？ただ、私たちが食料や必要なものを得られるよう彼らに伝えてください。私たちにどのような報いを与えるかは、御自身でお分かりでしょう。」

[5540] ヴラヘルナ――ツァールグラード（コンスタンティノープル）にある地域。

「アントニウスは」と女王は答えられた。「彼は永遠の安息へと旅立つ[5541] 。二番目の夏には、フェオドシウスも彼の後を追ってそこへ行くでしょう。ですから、できるだけ多くの金を受け取り、行きなさい。あなた方を報いることのできる者は、私以外に誰もいません。私はあなた方に、『*人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない*』（Iコリント2:9）。そして私自身が　訪れ、私が住みたいと願う教会を見届ける。その後、彼女は私たちに聖なる殉教者たち――アルテミオス、ポリエウクトス、レオントス、アカキオス、アレフォス、ヤコブ、テオドロス――の聖遺物を授け、「これらを教会の基礎に納めなさい」と告げた。　私たちは聖遺物と、必要以上に多くの金を受け取り、女王に教会の大きさについて尋ねました。

「寸法を測るために」と御方は答えられた。「私は、御子の命により、御子の帯を送った。それでも、外に出て、その大きさを確かめてみなさい。」

私たちは外に出て、空中に浮かぶ教会を目にした。戻ると、再び女王陛下に拝礼し、こう尋ねた。「陛下、この教会の名前は何になるのでしょうか？」

「私はこの教会に私の名を付けたい」と、彼女は答えられた。

私たちは、御方の御名についてお尋ねする勇気はなかったが、女王ご自身がこうおっしゃった。

「この教会は聖母マリアの名に捧げられるでしょう」と、御手からこの聖なるイコンを私たちに授けてくださいました。

これを聞いて、皆が神とその至聖なる御母を賛美した。そして聖アントニオは職人たちにこう言った。

「子らよ、我々は決してこの場所から出て、あなた方のところへ行ったことはないのだ。」

しかし、ギリシャ人たちは誓いを立ててこう主張した。

「多くの証人の前で、我々は女王陛下の金をまさにあなた方の手から受け取り、その手と共にあなた方を船まで見送り、一ヶ月後、あなた方が出航した後に、我々自身も旅立った。今や、我々がコンスタンティノープルを出てから十日目になる。」

聖アントニオはこれに対し、次のように答えた。

「キリストはあなた方に大いなる恵みを授けられた。あなた方は主の御心の実行者だからである。あなた方を呼び寄せたあの端正な若者たちは、輝かしい天使たちであり、ヴラヘルナの女王は、まさに私たちの至聖なる御母、神の母であり、永遠の処女マリアご自身である。　また、彼女の周囲に立っていた戦士たちは、無形の天使の軍勢であった。そして、あなたがたが我々の手から直接金を受け取ったことは、主がご自身のしもべたちの上に、主のみが知っておられる道によって、御心により成し遂げられた神の奇跡である。　あなた方の来訪は祝福されています。そして、あなた方には良き伴侶――この聖なる聖母マリアのイコンがおられます。聖母は、約束されたとおり、『*人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない*』*ものを*、あなた方に授けてくださいます。　これを授けることのできるのは、聖母マリアとその御子、主なる神であり、私たちの救い主イエス・キリスト以外には誰もいません。　その帯と冠は、ヴァリャーグの地からここに持ち込まれたものである。その尊い教会の幅、長さ、高さは、天からの壮麗な栄光の御声によって示され、その声はヴァリャーグのシモンに向けられたものであり、彼が私たちに帯と冠をもたらしたのである。

ギリシャ人たちは畏敬の念を抱きながら聖人たちにひれ伏し、以前と同様にこう尋ねた。

「教会を建てる場所はどこですか？　お示しください。」

聖アントニウスはこう答えた。

「三日間祈り続けよう。そうすれば、主がその場所を私たちに示してくださるだろう。」

[5541] 聖アントニー

そして、神の導きにより、教会を建てる場所を探すために、誰も呼び集めたわけではないのに大勢の民が集まった。ある者はある場所を、別の者は別の場所を指し示したが、適切な場所は見つからなかった。その近くには公爵の畑があり、神の御計画により、ちょうどその時、スヴィャトスラフ公爵自身が通りかかることになった。　民衆を見て、彼は「一体何が起きているのか」と尋ねた。事情を知ると、馬を向きを変え、民衆に近づいた。そして、まるで神に導かれるかのように、公爵は自分の畑の中の場所を指し示し、そこに教会を建てるよう命じた。

聖者たちは三日間祈りを捧げた。そして祈りの最初の夜、聖アントニーに主が現れ、こう言われた。

「アントニーよ！　あなたはわたしの御前で恵みを得た。」

聖アントニウスはこう答えた。

「主よ、もし私が御前に恵みを得たのであれば、全地に露が降り、あなたが聖別してくださる場所には、乾いた地が現れますように。」

そして朝、全地に露が降りていた中、今教会が建っているその場所には、乾いた大地が見つかった。別の夜、祈りを捧げた後、聖アントニオはこう言った。

– 主よ、全地には乾いた地があり、聖なる場所には露がありますように。

そして朝になると、聖なる場所には露が見られたが、その一方で全地は乾いていた（士師記6:37–40参照）。三日目に、彼らはその場所で祈りを捧げた。聖アントニオはその場所を祝福し、　その場所の幅と長さを、シモンがヴァリャーギの地から持ち帰ったキリストの金の帯で測った。その際、　は、シモンが海上にいた時に天からの声によって示された寸法を基準とした。その後、聖アントニオは両手を天に掲げ、古の預言者エリヤのように大声で祈った：

「主よ、私の声に耳を傾けてください。今日、火をもって私の声に耳を傾けてください。そうすれば、このすべての民が、あなたがこれを望んでおられることを悟るでしょう（参照：列王記下18:37）。」

するとたちまち、天から火が降り注いだ。その火は小枝や茨を焼き尽くし、露を消し去り、整然とした場所に堀のような窪みを形成した。その時、聖人を取り囲んでいた人々は恐怖のあまり、まるで死人のように倒れ伏した。　――こうして、神の恵みと、聖アントニオを筆頭とする信者たちの熱心な祈りによって、神が選ばれたその場所が明らかになったのである。　さらにそれ以前にも、聖テオドシオスの祈りによって――その伝記が語るように――神の恵みがこの場所を予示していた。ある時は、かつての教会から弧を描いてこちらへと傾く炎の幻として、またある時は、聖なるイコンを運ぶ天使たちの幻として現れたのである。

この奇跡的な場所の示しを受けて、聖アントニオスと聖テオドシオスによって、至聖なる神の母に捧げられた石造りの教会が建立された。　それは、世界の創造から6581年、西暦1073年のことであり、神を愛するミハイル司教の治世下――当時、ゲオルギー大主教はギリシャに滞在していた――、敬虔なスヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ公の治世の頃であった[5542]。同公は自らの手で教会の基礎となる堀を掘り始め、建設をより円滑に進めるため、尊者テオドシウスに金100グリヴナを贈った。

壁の基礎には、ヴラヘルナで至聖なる聖母マリアが職人たちにお与えになった聖殉教者たちの聖遺骨も納められた。聖母の予言通り、聖アントニーは教会の礎石が据えられてから長くは生きられず、その同じ年に永遠の安息へと旅立った。　聖テオドシオスは教会の建設を深く気にかけていたが、彼もまた間もなく、聖アントニオスの死から2年目、基礎工事がすでに完了していた頃に、永遠の住処へと旅立った。教会の建設は、聖テオドシオスの後継者である至福のステファノスの治世の3年目に完成した。　至福のステファノスは、先ほど述べた輝かしい奇跡の目撃者であった。彼は、コン

[5542] スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ――1073年から1075年にかけてのキエフ大公。

スタンティノープルから聖母マリアのイコンを携えて職人たちが来た様子を目撃し、彼らがヴラヘルナで皇后に雇われたという話を耳にしたのである。　これらの奇跡を記念して、彼はチェルケス修道院を去った後、ヴラヘルナの聖母に捧げる教会をクロヴェ[5543]に建立した。また、敬虔なウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフ公――当時はまだ少年だった――は、天から火が降り注ぎ、教会の基礎となる場所を黄金の帯で測量した場所に穴を焼き開けるのを目撃した。

この驚くべき奇跡の噂は、ロシア全土に広まった。その噂を聞き、ヴセヴォロド公も息子のウラジーミルを連れて、ペレヤスラヴリからキエフへとやって来た。当時、ウラジーミルは病に伏していたが、前述の金の帯を腰に巻くと、聖なる父たちであるアントニウスとテオドシウスの祈りにより、たちまち回復した。　そこで、キリストを深く愛するウラジーミル公は、神ご自身が示されたペチェールスクの教会の寸法を採り、自身の領地であるロストフの町に、高さ、長さ、幅のすべてにおいて全く同じ教会を建設した。また、自身の教会の指針とするため、ペチェールスクの教会で定められたすべての祝祭日を特別な文書に記した。　一方、ウラジーミルの息子であるゲオルギー公は、父からペチェールスクの教会の建設に伴う奇跡的な出来事について聞くと、自身の領地であるスーズダリの町にも、同じ大きさの教会を建立した。さて、ここでペチェールスクの教会が聖なるイコンで飾られた話に移ろう。

コンスタンティノープルから建築の職人がやって来てから10年後、同地から聖像画の職人たちも当時のペチェールスク修道院のイグメンである至福のニコンのもとを訪れ、こう言った。

「私たちを雇った者たち――」と彼らはイグメンに言った。「私たちに彼らと話し合いたいのです。多くの証人の面前で、私たちは彼らと小さな教会をイコンで飾ることに合意しました。しかし、この聖堂は非常に大きいです。もしそうしないのであれば、金を受け取って、私たちはコンスタンティノープルへ戻ります。」

この言葉に修道院長は困惑し、イコン画家たちにこう言った。

「あなたたちと取り決めをした者たちは、どのような人たちだったのか？」

イコン画家たちは彼らの容貌を説明し、名前を伝えた――一人はアントニオ、もう一人はテオドシオという。すると修道院長は叫んだ。

「おお、わが子らよ！　我々は彼らをあなた方に紹介することはできない。彼らはすでに十年も前に主のもとへ旅立ち、そこで絶えず我々のために祈り、この教会を守り、自らの修道院とそこに住む者たちのために尽くしているのだ。」

その答えを聞いて、イコン画家たちは恐怖に襲われた。彼らは、同じくコンスタンティノープルから来た多くの商人たちを修道院長のもとに連れてきて、こう言った。

「ほら、彼らの目の前で我々は彼らと取り引きをし、その手から金を受け取った。それなのに、あなたは彼らを見せてくれない。もし彼らが亡くなったのなら、その肖像を見せてくれ。そうすれば、彼らも『これがあの人たちか』と確認できるだろう。」

すると、修道院長は皆の前で、聖アントニオスと聖テオドシオスのイコンを持ち出した。その像を見たギリシャ人たちは、こう言いながら頭を下げた。

「まことに、これこそが彼らその人である。我々は、彼らが死後もなお生きており、慈悲を施し、彼らに助けを求める者を救うことができると信じる。」

また、商人たちは、もともと販売のために持ち込んだモザイクを寄進した。その後、それによって聖なる祭壇が飾られた。その後、イコン画家たちは自らの罪を悔い改め、次のように語った。

– 私たちが船でキエフに到着したとき、山の上にこの壮大な教会を見かけ、「これはどの教会ですか？」と尋ねました。「ペチェールスカヤ教会です。あなた方はその装飾を任されているのです」と答えられました。

[5543] クロフ――キエフ近郊の地名。

教会の大きさを目の当たりにして、私たちは憤り、引き返そうとした。しかし夜、恐ろしい嵐が吹き荒れ、朝起きてみると、私たちはトリポリの近くにいることに気づき、船はまるで何らかの力に引き寄せられるかのように、自ら流れに逆らって上流へと進んでいった。　私たちは必死で船を止め、一日中立ち止まって、これからどうなるのかと考え込んだ。他の人々が三日かけてもやっとのことで進むような距離を、私たちは一晩で、櫂の助けもなく、どうやって進んだのだろうか？次の夜、私たちには幻が見えた。私たちはその教会と、そこに安置された奇跡を起こす聖母マリアのイコンを目にし、聖母は私たちにこう語られた。

「なぜ、わが子と私の御心に服従せず、むなしくもがくのか。もし私に服従せず、引き返そうとするなら、私はあなたたち全員とあなたの舟を、私の教会の近くに留めておく。そして、あなたたちはそこから出られず、私の修道院で修道者となり、そこで生涯を終えることになるのだと知っておきなさい。」　私は、建設者たち――アントニウスとテオドシウス――の祈りによって、来世においてあなたがたに慈悲が与えられるよう取り成してあげる。

朝起きて、私たちは再び逃げ帰ろうとした。しかし、全力を尽くして櫂で流れに逆らって漕いでも、船はやはり上流へと進んでいった。そこで私たちはその意図を捨て、神の御心に身を委ねたところ、船はすぐに修道院の近くに自力で着岸した。

この話を聞いた後、修道士たちもギリシャ人たちも――建設者たちもイコン画家たちも――神と、その至聖なる御母、その奇跡を起こすイコン、そして聖アントニオと聖テオドシオを賛美した。

その後、イコン画家たちは教会の装飾に取り掛かったが、その際、主は御自身のしるしをもって彼らを助けてくださった。イコン画家たちが祭壇をモザイクで飾っていた時、祭壇の中に聖母マリアの御姿が自然に現れた。その時、すべてのイコン画家たちがその場に立ち会っており、その中には彼らに師事し、手伝っていた聖アリピオスもいた。　神は、彼らをこれほど驚くべき、そして恐ろしい奇跡の証人とすることをお望みになったのである。彼らがその像を見つめていると、それは突然、太陽よりも強く輝き出し、イコン画家たちはそれを見つめることができず、恐怖のあまりひれ伏してしまった。　少し体を起こし、彼らは再びその奇跡的な聖像を見ようとした。すると突然、聖母マリアの口から白い鳩が飛び出した。教会にいた人々は、その鳩が教会から飛び出していないか見守った。　すると、皆の目の前で、鳩は再び救い主の口から飛び出し、教会中を飛び回った。聖人の像に近づき、ある聖人の手の上に、また別の聖人の頭の上に止まった。その後、下へ降りてきて、その場所にある奇跡を起こす聖母マリアのイコンの後ろに止まった。　教会にいた人々は鳩を捕まえようとした。はしごを立てかけたが、イコンの後ろにも、幕の後ろにも鳩は見当たらなかった。あちこち探したが、鳩がどこに隠れたのか見当がつかなかった。　そして皆は、祭壇に現れた聖像を見つめながら立ち尽くしていた。すると、再び彼らの目の前で、聖母の口から鳩が飛び出し、救い主の御姿へと天高く舞い上がった。下で立っていた人々は、上で作業していた人々に叫んだ。

「捕まえろ！」

彼らは手を伸ばしたが、鳩は再び救い主の口の中へと飛び込んだ。再び、太陽の光をも凌ぐ光が皆を照らし、目を閉ざさざるを得なくなった。彼らはひれ伏して主を礼拝し、ペチェルスクの教会に宿る至聖なる御霊の御業を目撃させてくださったことに感謝を捧げた。　奇跡によって力を与えられたイコン画家たちは、天の如きペチェルスクの教会を飾り立てる一方で、自らも様々な美徳をもって身を飾った。　神に喜ばれる修道生活を送った彼らは、そのペチェルスク修道院で生涯を閉じた。建築の匠たちも同様であり、彼らは皆、聖アントニオの洞窟にある　の玄関ホールに葬られ、今なおその遺体は朽ちることなく眠っている。　こうして、至福のイコン画家たちが、コンスタンティノープルへ戻ろうとしていた際にペチェルスクの教会が彼らに現れた際、尊き聖母マリアのイコンから聞いた予言が成就したのである。聖母は彼らにこう告げた。「あなた方はそこから出ることはなく、修道衣をまとい、そこで死ぬことになるだろう。」

ここで、同じ時期に、ペチェールスの石造りの「聖母の被昇天」教会にある、尊き奇跡を起こす聖母マリアのイコンを通じて、神によって示されたもう一つの驚くべき奇跡についても触れておくのがふさわしいだろう。

キエフには、互いに親しい友人である二人の高貴な男、ヨハネとセルギイが住んでいた。ある日、彼らがペチェールスカの教会を訪れると、聖母マリアの奇跡のイコンから太陽の光をも凌ぐ光が放たれているのを見、その前で彼らは誓いを立てて霊的な兄弟の絆を確かなものにした。　長い年月が経ち、ヨハネは死の床に就き、5歳の息子ザカリアを残した。彼はペチェールスの修道院長である至福のニコンを呼び寄せ、その面前で自分の財産を貧しい人々に施し、息子の取り分である銀千グリヴナと金百グリヴナをセルギイに託した。　さらに、友であり忠実な兄弟であるセルギイに息子を託し、息子が成長した際には銀と金を渡すよう遺言した。この手配を終えると、彼はまもなくこの世を去った。

ザカリアが十五歳になったとき、彼はセルギイから自分の銀と金を受け取りたいと思った。しかし、悪魔に誘惑されたセルギイは、富を得るために自分の命を犠牲にしようとした。彼はその若者にこう答えた。

「お前の父は全財産を神に捧げたのだ。金や銀は神に求めよ。神はお前への借主であり、もしかするとお前に憐れみをかけてくれるかもしれない。しかし、私はお前の父にも、お前にも何も借りはない。お前の父は、その狂気ゆえに全財産を貧しい人々に配り尽くし、お前を無一文にしてしまったのだ。」

それを聞いた若者は、自分の貧しさを嘆き始めた。そして、セルギウスに次のような願いを送った。

「私の相続財産の半分だけでも返してくれ。残りの半分は、あなた自身が同等の分として受け取ってください。」

しかし、セルギイは厳しい言葉で、ザカリアの父も、彼自身も激しく非難した。ザカリアはその後、3分の1、あるいはせめて10分の1だけでもと懇願したが、何も得られないと悟ると、セルギイにこう言った。

「もし何も受け取っていないのなら、ペチェルスク教会の奇跡を起こす聖母マリアのイコンの前で、私に誓ってくれ。そのイコンの前で、お前は私の父と兄弟の盟約を結んだのだ。」

セルギイは動じることなく教会へ行き、至聖なる聖母マリアのイコンの前に立ち、銀千グリヴナも金百グリヴナも受け取っていないと誓った。しかし、イコンに口づけをしようとしたとき、それに近づくことができなかった。そして、教会から出てくると、彼は叫び始めた。

「尊きアントニウスとテオドシウスよ、私を滅ぼそうとするこの容赦なき天使から私を守ってください。至聖なる聖母マリアに祈り、私が囚われている多くの悪魔を私から追い払ってくださるように願ってください――私の納屋に封印され、隠されている銀と金を、彼らに奪わせてほしいのです。」

皆は大きな恐怖に襲われ、それ以来、聖母マリアの聖像の前で誓いを立てることは誰にも許されなくなった。人々が派遣されて調べたところ、確かに封印された壺が見つかり、その中には銀二千グリヴナと金二百グリヴナが入っていた。　かくして、主――慈愛深い方――は、その遺産を増やしてくださったのである。ザカリアは全財産をイグメン・ヨハネに渡し、彼が望むように使うよう託した。そして自身はペチェールスク修道院で出家し、そこで生涯を閉じた。　この銀と金によって、ペチェルスク教会の最上階に、聖ヨハネ・洗礼者への敬意を表して教会が建立された。これは、その銀と金の所有者であったボヤリンのヨハネとその息子ザカリアを偲ぶためであった。

ペチェルスク教会のイコン装飾にまつわる奇跡について述べたところで、次に、至高なる方が御母の住まう村をいかにして聖別されたかについて語ろう。

同名の聖ヨハネ修道院長が就任した最初の年、同じく同名の総主教のもとで、奇跡的に建設・装飾されたペチェールスカヤ教会が奉献された。その奉献は、神の恵みにより、次のような奇跡に彩られた。　――教会の聖別準備を進めていたところ、聖壇用の石板がないことに気づいた。あらゆる努力を尽くしたにもかかわらず、それを製作できる職人は見つからなかった。そのため、石板の代わりに木製の板を用いることを余儀なくされた。　しかし、イオアン大主教は、これほど偉大な教会の聖壇に、石の板ではなく木の板が置かれることを望まなかった。このため、修道院長と修道士たちは深い悲しみに沈んだ。教会の奉献式をしばらく延期せざるを得なくなったからである。 8月13日、修道士たちは慣例に従って晩課を執り行うために教会へ向かったところ、突然　、祭壇の仕切り板のそばに、聖なる祭壇を設置するための石板と支柱があるのを発見した。このことを直ちに大主教に報告すると、大主教は神を賛美し、聖別を兼ねた晩課を執り行うよう命じた。　その石板がどこから、誰によって、水路か陸路か、運ばれてきたのか、また鍵のかかっていない教会にどのように持ち込まれたのか、人々は長く丹念に調べたが、すべての努力は徒労に終わった。　そこで、この種の品を製作する場所へ、職人が作った石の板の代金として銀三グリヴナを送った。しかし、あちこち探したものの、そのような職人は見つからなかった。なぜなら、その石の板は、あらゆる善の創造主であり摂理者である御方ご自身が、御母の家にある食卓に授けられたものであり、　まさにその石板の上で、主ご自身が、全世界のために、日々、犠牲となられることを望まれたのである。しかし、奇跡はこれで終わりではなかった。　翌日朝、前述の石板が奇跡的に発見された後、ミトロポリト・ヨアンは、ペチェルスクの教会の奉献式が迫っているにもかかわらず、彼のもとには一人の司教もいないことに深く嘆いていた。彼らの司教座はキエフから遠く離れていたからである。しかし、突如として、神を愛する司教たちが現れた。　チェルニゴフのヨアン、ロストフのイザヤ、ユリエフのアントニー、ベルゴロドのルカが、誰も彼らを招いていないにもかかわらず現れたのである。こうして、主教たちと共に教会の奉献式を執り行いたいという大主教の願いは叶った。大主教は、誰一人として主教たちを呼びに行くよう命じていなかったため、極めて驚き、彼らに尋ねた。

「呼ばれてもいないのに、なぜここへ来たのですか？」

司教たちはこう答えた。

「大主教様、あなたから若者たちが私たちのもとに遣わされ、8月14日にペチェールスカヤ教会が奉献されること、そしてあなたと共に聖体礼儀を執り行う準備をしておくよう伝えられました。そこで、あなたの言葉に従い、私たちはここに参りました。」一方、ユリエフスキーのアントニーはこう付け加えた。

「私は病気でしたが、その夜、修道士が私のところに来て、『明日、ペチェールスカヤ教会が聖別される。あなたはそこにいなければならない』と言いました。それを聞いた途端、私は元気になり、こうしてあなたの命に従ってここに参りました。」

大主教は、彼らを呼び寄せた人々を探し出そうとしていたが、突然、声が響いた。

「*試練に遭う者たちは消え去った*」（詩篇63:7）。

そこで彼は天に向かって両手を広げ、こう言った。

「おお、至聖なる聖母マリアよ！　御自身の御逝去の際、御埋葬の栄光をさらに高めるために宇宙の果てから使徒たちを集められたように、今、御自身の教会の奉献のために、私たちの同僚司祭や代理司祭たちを集めてくださいました。この業のために私たちを祝福し、御子と御自身の栄光のために、私たちをお助けください。」

皆、このような奇跡に恐怖を覚えたが、それにはまだ終わりではなかった。

聖別式の際、教会を三回巡り、その扉に近づいて「諸君、門を開けよ」と歌い始めたとき、教会の中に誰も残されていなかったため、教会の中から「この栄光の王は誰か」と応える声は上がらなかった。　しかし、長い沈黙の後、突然、教会の内側から天使のような歌声が響き渡った。「この栄

光の王は誰か？」人々は、一体どんな歌い手なのか、どこから来たのか、そして扉が閉ざされていたのにどうやって教会に入ったのかと調べ始めたが、教会の中には誰一人として見つからなかった。そして、これらすべてが神の摂理によってなされていることが、誰の目にも明らかになった。人々は皆、ペチェルスクの教会が建てられた際の奇跡を思い起こし、使徒と共にこう叫んだ。

「*ああ、神の富と知恵と知識の深淵よ！　神の御計画はなんと測り知れず、その道はなんと探り知れないことか！　だれが主の御心を悟り得ようか。また、だれが主の助言者となり得ようか。*」（ローマ11:33–34）。――こうして、世界の創造から6597年、西暦1089年、キエフの敬虔な公ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチ統治の時代、主ご自身の聖母マリアと、私たちの尊い父たちであるアントニウスとテオドシウスの祈りによる奇跡的な御加護のもと、洞窟教会の奉献が成し遂げられたのである。

兄弟たちよ、ペチェールスクの教会に関する物語は、実に奇跡に満ちている。主は、その建設に先立ち御自身を現してこの教会を示され、ヴァリャーギの地からは御自身の尊い御姿の冠と帯を送り、ギリシャの地では、聖母マリア御自身が教会の姿を現し、御自身のイコンと聖殉教者たちの聖遺物を送られたのである。　その建立の歴史――教会の建物の建設、その装飾、そして奉献という三つの部分に分かれる――には、聖三位一体の御業が現れています。　神である父ご自身が、古き日々の御方として、教会が建てられるべき場所を、古さや老いの象徴である大地によって示された。「*羊毛の上に露のように降りてこられた*」御子（*キリスト*）は露を降らせ、炎の舌となって降臨された聖霊は、天から火を降らせた。　また、教会の装飾の際にも、御自身の姿に似せて人を創造された父は、人間の力なしに――すなわち、イコン画家の手を借りずに――祭壇にモザイクで至聖なる神の母の像を描き出されました。　「真理の太陽」である御子は、その時、教会を輝きで満たし、鳩の姿で現れた聖霊は、その像の口から飛び立つ鳩の幻を現しました。　最後に、聖別式の際、かつて石の板に律法を授けた父は、聖なる祭壇のための石を授け、天の彼方に座す大祭司である御子は、奇跡的な方法で司祭たちを集め、　聖霊――全地に語りかけた声――は、教会の中に人が誰もいない時に、教会の中心から答えを発した。　もし、三位一体として崇められる神が、このような驚くべきしるしをもって、御自身が愛される天の女王の名に因んで、この尊きペチェルスクの教会を建てられることを御心に適わせられたのであれば、当然、神は愛をもってここに留まっておられるのです。　御方の右に座す女王、すべてのキリスト教徒の守護者であり避難所である、至聖なる神の母もまた、御自身と共にここに留まっておられる。それは、彼女ご自身がヴラヘルナで職人たちに対し、次のように約束された通りである。

「私も自らこの教会を見に参り、この教会に住みたいのです。」

同様に、教会の壁に沿って、揺るぎない土台として安置されている聖人の遺骸も、ペチェルスクの教会に絶えず留まっている。この教会について、何と言おうか？　まことに、この教会は聖なるものであり、驚くべきものであり、天に似ています。それゆえ、私たちは、すでにこの世を去った敬虔な公爵たち、キリストを愛するボヤールたち、誠実な修道士たち、そして聖ペチェルスク教会に熱意を注いだすべての正教徒たちに、感謝と賛美を捧げなければなりません。　私たちの尊い父たち、アントニウスとテオドシウスの祈りによって、教会の頭であるキリストが、彼らと同様に、私たち――正教会の子ら――にも、その恵みと憐れみをお与えくださいますように。キリスト・神に、その初めなき父と、至聖にして善き、命を与える聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

ペチェルスクの修道院長、尊い父テオドシオスの聖遺骨の移送

記念日：8月14日

私たちの尊い父テオドシオスが、その魂を地から天へと移されてから18年が経った頃[5544] 、主は、その遺体をも洞窟から、聖なる、天に似たペチェルスクの教会へと移すことをお許しになった。その移送は次のように行われた。

聖なる、偉大で奇跡を行うペチェルスク・ラヴラの修道者たちは皆、指導者であるイグメン・ヨハネと共に集まり、協議の末、一致して、洞窟から偉大な石造りの教会へと、至福の、神に愛されたテオドシウスの尊い遺骸を移すという決定に至った。 この聖なる人物は、高潔な生涯を送り、徳に富み、奇跡によって称えられる方であった。修道者たちは互いにこう語り合った。

「我々は、なぜ無駄に父であり師である方を失わなければならないのか？ 牧者を失うことは我々にふさわしくない。また、牧者にとっても、神から託された羊を置き去りにし、野獣がキリストの御言葉の群れを略奪するのを許すことは、相応しくない。」 兄弟たちよ、私たちは常に父の尊い遺骸を目の前に置き、常にふさわしい礼拝を捧げるべきである。彼が修道院や自身の教会の外に留まるのはふさわしくない。なぜなら、彼はその基礎を築き、修道者たちを一つにまとめたからである。

その後、皆が一口でこう言った。

「私たちの愛する父の尊い聖遺骨を、洞窟からここへ移しましょう。『主は言われる、「*灯をともして、それを器の下に置くのではなく、燭台の上に置けば、家中の者すべてを照らす*」』（マタイ5:15）。」

この決定の後、修道者たちは直ちに尊い遺骨を安置する場所を整え、石の聖骸箱を設置した。聖母マリアの被昇天の祝日が近づいていた。 祝日の3日前、修道院長は洞窟へ行き、私たちの尊い父テオドシオスの聖遺骨が安置されていた場所を掘り起こすよう命じた。この任務を最初に遂行し、聖遺骨を最初に目撃したのは、この物語を記した至福のネストルであった。彼は自らについて次のように証言している。

「私は真実と正しさに基づいてあなた方に語ろう――なぜなら、私は他者から聞いたのではなく[5545] 、自らその第一の当事者であったからだ。イグメンが私のところに来て言った。『さあ、わが子よ、我らの尊き父テオドシオスのもとへ行こう』そして、私たちは誰にも気づかれることなく洞窟へと向かった。 周囲を見回した後、私たちは発掘すべき場所を定め、その場を離れた。その後、イグメンは私にこう言った。「兄弟たちの中から、誰を助手に選んでもよい。 、選ばれた者たち以外には誰にも話すな――尊い聖遺骨を洞窟前の場所へ運び出すまでは、兄弟たちの誰にも知られてはならない」。

私はその日のうちに、掘るための道具を準備した。火曜日だった。夜も更けてから、私は二人の兄弟――敬虔な生活を送る者たち――を連れて行った。それ以外には誰も知らなかった。洞窟に着くと、礼拝を兼ねた祈りを捧げた後、ためらうことなく、詩篇の歌を歌いながら作業に取りかかった。 私が掘り始め、長い労苦の末、シャベルをもう一人の兄弟に手渡した。こうして真夜中まで掘り続けたが、聖人の遺骨を見つけることはできなかった。そこで私たちは嘆き、泣き出した。最初は、聖人が自ら姿を現すことを快く思っていないのだと考えたが、その考えは別の考えに変わった――もしかすると、私たちは間違った場所を掘っているのではないか？ そこで私は再び鍬を手に取り、さらに熱心に掘り始めた。私と共にいて洞窟の前にいた兄弟の一人が、早課を呼びかける教会の鐘[5546] が鳴る音を聞き、すでに教会の鐘が鳴ったと私に告げた。 その間、私は聖なる遺骨の上の土を掘り起こし、その兄弟にこう答えた。「兄弟よ、もう土を掘り抜いたよ。」そう言い終えた瞬間、私は大きな恐怖に襲われ、こう叫び始めた。

[5544] 聖テオドシオス・ペチェルスキーは1074年に帰天した。

[5545] 聖テオドシイの聖遺骨の発見について。

[5546] 木製または金属製の板で、鐘が導入される以前は、棒やハンマーでこれを叩くことで、信者たちを教会での礼拝に招集していた。

「尊きテオドシオスの御名によって、主よ、私を憐れんでください！」

その後、私は修道院長にこう伝えた。

「父上、おいでください。尊者様の聖遺骨を掘り出しましょう。」

イグメンは二人の兄弟を連れてやって来た。私はさらに掘り進めた。　そして身をかがめてみると、聖遺体が神聖な姿で横たわっているのが見えた。すべての部位は完全なままで、腐敗の兆しは微塵もなかった。顔は明るく、目は閉じられ、口は閉ざされ、髪は頭部に乾きついており、聖遺体を寝台に載せ、洞窟の外へと運び出した。

聖ネストルは、自身の（尊い遺骨の発見への）関与についてこのように語っている。また、彼はその際に起こった神の驚くべき御業についても証言している。

その夜、洞窟修道院では二人の兄弟が番人として徹夜していた。イグメンが、彼らには知らされていないある兄弟と共に、尊い遺骸を密かに運び出すためであった。　彼らは洞窟の方角を注意深く見守っていた。早課の鐘が鳴り響いたとき、彼らは、聖テオドシオスの洞窟の上に、まるで光り輝く弧のような三本の柱が立ち、聖人が移されることになっていた大聖堂の頂上へと移動したことに気づいた。　この光景は、早課のために教会へ向かう他の修道士たちにも目撃され、町の中でも多くの敬虔な市民たちによって目撃された。

聖テオドシオスの後を継いでペチェルスクの修道院長となり、その後クロヴェに修道院を設立し、さらに神の御心によりウラジーミル市の司教となった尊いステファンは、当時クロヴェの自身の修道院に滞在していた。その夜、彼は野原の向こうに、洞窟の上空に広がる壮大な夜明けの光を見た。　これは聖テオドシオスの尊い遺骨が移送されているのだと考え（その出来事については前日に告げられていた）、彼は自分がいないところで移送が行われていることを深く残念に思った。彼は直ちに馬にまたがり、自分が後任としてクロヴェの修道院長に任命したクリメントを伴い、急いで洞窟へと向かった。　道中、遠くから彼らは大きな光を見かけ、近づき始めると、洞窟の上に多くのろうそくが灯っているのに気づいた。しかし、洞窟に着いてみると、何も見えなかった。　その時、彼らが目にした神聖な光は、聖テオドシオスの尊い遺骸から発せられていたのだと悟った。洞窟の入り口に近づくと、ステファンとクリメントは、聖ネストルと修道士たちが尊い遺骸を取り囲んでいるのを見た。

尊い聖遺物が発見された翌日、神の御心により、神を愛する司教たち――エフレム・ペレヤスラフスキー、ステファン・ウラジーミルスキー、ヨハネ・チェルニゴフスキー、マリン・ユリエフスキー、　アントニー・ポロズキー――が集まり、キエフのすべての修道院のイグメンたちも、多くの修道士たちと共に集まった。また、街からは多くの敬虔な人々が、ろうそくと香を手にして押し寄せた。そして、聖テオドシウスの尊い遺骨を運び出し、神によって築かれた至聖なる教会へと移した。その尊き教会は、自らの灯火を迎え入れて大いに喜び、昼の光さえもろうそくの光に覆われるほどであった。その後、聖主教たちは聖遺物に手を触れ、司祭たちはひれ伏し、修道士たちは民衆と共に愛を込めて駆け寄り、聖人の聖遺物に口づけを捧げ、神に霊的な賛美の歌を捧げるとともに、尊者に対して感謝の賛美を捧げた。　こうして、尊い聖遺骨は、聖テオドシオスによって建立された聖母マリアの被昇天教会内の右側に安置された。それは8月14日、木曜日の午前1時のことである。そして、この日を盛大に祝った。 ここで、 、私たちの尊い父テオドシオスの聖遺骨が移された3日目に、彼の次の預言が成就したという事実を黙って通り過ぎるわけにはいかない。

修道院長在任中、聖テオドシオス様の唯一の関心事は、自分に託された羊の群れをいかに最善の方法で導くかということでした。その際、彼は修道者たちだけでなく、世俗の人々、とりわけ自分の霊的な子供たちの救いにも心を配り、彼のもとを訪れる人々を慰め、導きました。　時には彼らの家を訪ね、祝福を与えた。貴族たちの中には、聖テオドシオスの霊の子であるヨハネという人物がいた。彼の妻マリアも彼自身も敬虔な人々であり、貞潔な生活を送っていた。　ある時、祝福された父

は彼らの家を訪れました（彼は、彼らが主の戒めに従い、互いに愛し合って暮らしていたため、彼らを愛していました）。そこで、貧しい人々への施し、義人に用意された天の御国、そして罪人への苦しみについて、　さらに聖書から多くのことを語り、やがて話は遺体の埋葬について及んだ。この聖人の言葉に耳を傾けたヨハネの敬虔な妻は、彼にこう言った。

「尊い父よ！　私の遺体がどこに葬られるか、誰が知るでしょうか？」

神に啓示を受けたテオドシウスは、預言の賜物に満たされ、彼女にこう答えた。

「真実を告げよう。私の遺体が安置される場所こそ、数年後、あなたも安らぐ場所となるのだ。」

そして、聖人の帰天から18年目に、その尊い遺骨が移された際、まさにその時に、ヨハネの妻マリアもこの世を去った。 聖テオドシオスの聖遺骨は8月14日に移され、彼女は同年同月16日に、同じペチェルスクの教会で、聖テオドシオスの棺の向かい側、左側に安置された。　その後、聖テオドシオスの聖遺骨が移された15年目に、マリアの夫である大ボヤリンのヨハネもこの世を去った。彼はすでに90歳という高齢の老賢者であり、勇敢な軍司令官ヴィシャタの息子、軍司令官オストロミールの孫であり、自身もかなり長い間軍司令官を務めていた。　ヨハンは義人であり、善良で、柔和で、謙虚であり、悪から遠ざかる人として、先祖たちに劣らない人物であった。彼は妻の頭元に、あの聖テオドシオスと同じ棺の向かい側に葬られた。こうして、彼の遺体が横たわる場所と同じ場所に葬られるという、聖なる父の預言も彼において成就したのである。

ここで、次のことも思い起こしておくのがふさわしい。主は、御自身を賛美する者を賛美し、聖テオドシオスの遺骸を、その帰天から18年目に、暗い洞窟から聖なる洞窟教会へと移すことを御許しになった。そして、御自身の御心に適う者をさらに称えようと、　その御名と崇敬をもって、暗闇の無知からすべての正教会へと移されることを御許しになった。これもまた、洞窟からの移送から18年目のことである。――この灯が全世界を照らすように。

心の洞察者である主は、ペチェルスクの修道院長である至福のテオクティストの心に、尊者テオドシウスの名が教会記録（シノディク）または教会会議録に記され、正教会が至る所で祝祭を行う古の尊い教父たちおよびすべての聖人の列に加えられるよう配慮することを託された。　至福のテオクティストは、敬虔な大公ミハイル・スヴィャトポルク・イジャスラヴィチ[5547] に対し、この件について繰り返し訴え始めた：彼は、尊厳なるニキフォロス大主教[5548] に、司教、修道院長、および教会聖職者全員による聖公会を招集し、その集会の理由を伝えるよう命じるよう大公に懇願した。そして、神の御心にかなうままにすべてが成し遂げられるようにと。　大主教は喜んで公爵の申し出を受け入れ、司教、修道院長、そして教会の聖職者全員を集め、聖テオドシオスの列聖が予定されていることを彼らに伝えた。　一方、大公は公会議のすべての司祭たちに、聖テオドシウスの生涯について語った。そこで、全員が一心同体となり、満場一致で、聖テオドシウスを、すでに至る所で崇敬されている聖人たちと同等の者として、正教会（ロシア教会）において崇敬されるべきであるとする決定を採択した。　大主教は司教たちに、各自が管轄する教区内のすべての教会において、聖フェオドシウスの名を聖人名簿に追加するよう命じた。　司教たちは喜んでこれに従い、聖フェオドシウスの名を記し、すべての教会で彼を偲び、彼に祈りを捧げ、毎年、万物を授ける神と、その御心にかなう者、すなわち聖フェオドシウスの栄光のために、賛美を込めて彼の祝祭日を祝うようになった。

一方、父である聖テオドシオスに仕えることに熱心に努め、その名を聖人名鑑に載せるよう尽力した至福のテオクティストには、主はその労苦に応えて報いを与えられた。　ほどなくして、彼は神に救われた都市チェルニゴフの司教に選出され、その同じ尊厳なるニキフォロス大主教によって叙階された。　彼が司教座に就いたとき、キリストを愛するダヴィド公、公妃、ボヤールたち、そして

[5547] キエフ大公（1093年～1114年）。

[5548] ニキフォール――この名を持つ最初のミトロポリット（1103年～1121年）。

民衆のすべてが、聖テオドシウスの名を聖公会名簿に記すことで教会に計り知れない喜びをもたらした者として、計り知れない喜びをもって彼を迎えた。　彼の祈りによって、私たちも、至福のテオクティストと共に、*「あなたがたの名前が天に記されていることを喜びなさい」*（ルカ10:20）という喜びの呼びかけを聞くことを待ち望んでいる。

ここで、至福のシモン司教[5549]による、私たちの尊い父テオドシオスの聖遺骸箱が金と銀で奇跡的に飾られたという伝承も記しておこう。彼は、その尊い聖遺骸を移すことによって、あたかも朽ちることのない金と銀で聖ペチェルスク教会を飾り立て、　また、他の正教会の教会を、その尊い御名の崇敬によって飾ったのである。その経緯は次の通りである。　聖テオドシオスの聖遺骨が移送されてからかなり長い時間が経った後、ヴァリャーガの公シモンの息子であり、公アフリカンの孫であるゲオルギー千人隊長は、ゲオルギー・ウラジーミロヴィチ・モノマホヴィチ公からスーズダリ地方の統治を任されていたが、聖テオドシオスへの深い敬愛の証として、その尊い聖遺骨箱を装飾したいと考えた。　彼はスーズダリからキエフのペチェールシク修道院へ、ヴァシリーという名の家臣の一人を遣わし、聖人の聖遺物箱を金具で固定するために、銀500グリヴナ[5550]　と金50グリヴナを彼に手渡した。銀と金を受け取ったヴァシリーは、しぶしぶ旅立ち、自分の人生と生まれた日を呪いながら:

「一体どういうことか」と彼は言った。「我が主は、なぜこれほどの富を滅ぼそうと企てたのか？　死者の棺に税を課すことで、彼にどんな報いがあるというのか？　どうやら彼は、苦労もせずに集めた富を、無駄に浪費しているようだ。　しかし、主人の命令に逆らう勇気がなかった私こそが、まさに悲しむべきだ――なぜ私は家を離れ、誰のためにこの苦難の道を歩んでいるのか？　誰から名誉を得られるというのか？　私は公爵のもとへも、いかなる高官のもとへも遣わされたわけではないのだから。あの石の塊のような連中に、私は何を言えばよいのか？　そして、誰が私に答えてくれるというのか？　誰が私のこの狂気じみた到来を嘲笑わないというのか？」こうして、ヴァシリーは同行者たちに多くのことを語った。すると、聖テオドシウスが夢の中に現れ、穏やかにこう言った。

「おお、わが子よ！　私はお前の労苦に報いようとした。しかし、もし悔い改めなければ、多くの苦難に遭うことになるだろう。」

しかし、ヴァシリーは不平を言い続け、主は彼の罪ゆえに彼に大きな災いをもたらされた。すべての馬が死に、送られてきた宝物以外の財産は盗賊に奪われてしまった。　そこでヴァシリーは、聖人の聖棺を覆うために送られた金銀の財宝の五分の一を取り出し、それを自分と馬たちの生活費に費やした。その際、冒涜の罪によって自分に下された罰には全く気づいていなかった。　チェルニヒフにいたとき、彼は馬から転落し、ひどく打ち身を負って、手さえ動かすことができなかった。ヴァシリーに同行していた者たちは彼を戦車に乗せ、その晩にはすでにキエフの郊外まで運び着けた。そしてその夜、聖テオドシウスがヴァシリーの前に現れ、こう言った。

「ヴァシリーよ！　主の御言葉を聞かなかったのか。*『不義の富をもって友を買い求めよ。そうすれば、あなたがたが貧しくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいへ迎え入れてくれるだろう』*（ルカ16:9）。また、*『義人を義人の名において迎える者は、義人の報いを受ける』*（マタイ

[5549] シモン――ペチェールスク修道院の修道士。そこから、大公ヴセヴォロド・ユリエヴィチによって、彼がウラジーミールに設立したロズデストヴェンスキー修道院のイグメンに任命された。その後、シモンは1214年にロストフ教区から分離されたウラジーミール教区の初代司教に任命された。　シモンは12年間の在任を経て、1226年に死去した。ウラジーミル司教シモンから、同じくペチェールスク修道院の修道士であり、後に同修道院のイグメンとなったポリカルプへの書簡、およびポリカルプからアキンディンへの書簡には、　ペチェルスクのアルヒマンドリトであるアキンディンへの書簡から、ペチェルスクの奇跡行者たちや、大聖堂の建設時に修道院内で起こった奇跡に関する一連の伝承がまとめられ、有名な『ペチェルスク・パテリク』が編纂された。

[5550] グリヴナとは、一定の重量（72～96ゾロトニク）を持つ古銭のことで、多くの場合、金や銀のインゴットの形をしていた。

10:41）。　わが子ゲオルギーは善き行いを企てた。彼と共に、君もまた、その労苦の報いとして栄光に輝くはずだった。ゲオルギーと共謀者となるという、君が得るはずだったような栄光は、誰にでも得られるものではないのだ。　今や、あなたはすべてを失ってしまった。しかし、それでもなお、自分の人生に絶望してはならない。たとえ、自分の罪を悔い改める以外に癒やされる道がないとしても。　ペチェルスク修道院の聖母マリア教会に身を寄せ、私の聖遺骨の棺の上に横たわらせれば、あなたは健康を取り戻すだろう。そして、あなたが浪費した金や銀は、無傷のまま見つかるだろう。

これは、聖テオドシウスが夢の中ではなく、はっきりと姿を現してヴァシリーに告げた言葉である。翌朝、ゲオルギー・ウラジーミロヴィチ公がすべてのボヤールたちを連れてヴァシリーのもとを訪れた。彼が重病であるのを見て、公は悲しみに満ちてその場を去った。一方、ヴァシリーは聖人の幻視を信じ、ペチェルスク修道院へ連れて行かせるよう命じた。　彼らが岸辺に着いたとき、見知らぬ人物がペチェルスクの修道院長のもとへやって来て、こう言った。

「急いで岸へ行き、ヴァシリーを連れてきて、尊者テオドシオスの棺の上に寝かせておきなさい。彼があなたに宝物を手渡したら、皆の前で、彼がその五分の一を横領したことを告発しなさい。もし悔い改めれば、彼を許しなさい。」そう言い終えると、その男は姿を消した。　ティモフェイ修道院長は、自分に現れたその人物について調べようとしたが、誰もその人物が入ってくるのや出ていくのを見ていなかった。修道院長はドニエプル川へ行き、ヴァシリーを連れてきて、聖テオドシオスの棺の上に寝かせた。すると、ヴァシリーは傷ひとつなく元気な姿で蘇った。彼は修道院長に、託された宝物を手渡しながら、こう言った。

「ほら、ここには銀四百グリヴナと金四十グリヴナがあるだろう。」

すると、修道院長は彼に言った。

「子よ！　残りの銀400グリヴナと金10グリヴナはどこにあるのだ？」

ヴァシリーは悔い改め始め、こう告白した。

「これは私が持ち出して使い果たしてしまいました。どうかお許しください、父上。すべてお返しいたします。全知の神からこれを隠せると思っていたのです。」

そこで、封印されていた器から金と銀をすべて取り出し、皆の前で数えてみると、無傷のまま、銀500グリヴナと金50グリヴナが見つかった。そして、皆が神と聖テオドシオスを賛美した。その後、ヴァシリーは、聖人が彼に現れたことや、聖人が彼のために成し遂げた行いについて、順を追って語り始めた。　朝、公爵は医師たちを連れて、病床のヴァシリーを見舞おうと彼がいた場所へ行ったが、彼を見つけられなかった。ヴァシリーがペチェルスク修道院へ運ばれたことを知り、すでに亡くなったと思い込んだ公爵は、急いで修道院へ向かい、そこでヴァシリーを見つけた――まるで病気などなかったかのように。　彼から驚くべき奇跡の話を聞いた公は、畏怖の念を抱くと同時に、霊的な喜びに満たされた。そして、私たちの尊い父テオドシオスの奇跡を起こす棺に拝礼し、その場を去った。　この話を聞いた千人隊長ゲオルギー・シモノヴィチは、至聖なる聖母マリアと聖テオドシウスへの愛をさらに燃え上がらせた。彼は自らの多大な献金に加え、自ら身に着けていた「グリヴナ」[5551] ――その中には金貨百グリヴナが入っていた――を寄付し、次のように記した。

「私、ゲオルギー、シモンの子、至聖なる聖母マリアと聖テオドシウスのしもべであり、その聖なる御手によって祝福された者は、かつて三年間、目の病に苦しみ、太陽の光さえ見ることができなかったが、尊者のお言葉によって癒やされた。というのも、私はその口から『目を開けよ』と聞き、目が見えるようになったからである。　このため、私はこの書簡（すなわち手紙）を私の末裔たちに書き送る。だれも、至聖なる主の母マリアと、ペチェルスクの聖アントニオスおよび聖テオドシオスという尊い父たちの修道院から自らを遠ざけることがないように。　彼らの祈りは、修道院周辺の

[5551] すなわち、装飾品として首に身につけていた鎖のこと。

村々にも守護をもたらす。かつて我々がポロヴェツ人と共に[5552]、イジャスラフ・ムスティスラヴィチを討つために向かった際、遠くから高い城壁の町を目撃し、直ちにそこから引き返した。しかし、それがどのような町なのか、誰も知らなかった。その町の近くにいたポロヴェツ人のうち、多くの負傷者が出たため、我々はそこから逃げ出したのである。　その後、それがペチェールスク修道院の村であったことを知った。そこにはそもそも城など存在したことはなかったのだ。その村に住む人々自身も、何が起きたのか知らなかった。朝外に出てみると、流血の跡があり、彼らは大いに驚いた。それゆえ、私はあなた方にこう書き送る。あなた方全員が聖テオドシウスの祈りに名を連ねているのだ。　彼は私の父シモンに対し、自らの修道士たちのために祈るのと同じように、私たちのために祈ると約束しました。そして、父が棺に納められる際、その約束が果たされることを期待して、自分の手に握らせるよう命じた祈りの言葉を書き残しました。その約束について、彼は神に愛された父の一人に現れて、次のように語ったのです：

「わが子ゲオルギウスにこう伝えよ。私は聖人の祈りによって恵みを受けた。そして、わが子よ、善行をもって私の後を歩め。」

――聖テオドシオスの祝福と祈りを望まず、彼から背を向ける者は、呪いを愛することになる――そして、その呪いが彼に降りかかるように。

以上が、前述のキリストを愛するゲオルギオスの書簡の結語である。そして、この物語を締めくくる我々は、彼から学ぶべきである――すなわち、私たちの尊い父テオドシオスの祝福と、大いに助けとなる　祈りから背を向けることなく、善行をもって彼に近づけば、彼もまた我々に近づいてくださるだろう。　こうして、誓いを恐れることなく、私たちの主イエス・キリストによって世界の創造以来備えられてきた御国の相続人として、祝福を受けましょう。主イエス・キリストを通して、また主イエス・キリストと共に、父と聖霊に、今、常に、そして世々限りなく、栄光、権威、誉れ、そして礼拝がありますように。アーメン。

聖預言者ミカの記念日。

記念日：8月14日

聖ミカは、この名を持つ最初の預言者であり、エフライムの部族の出身で、イェムブライの息子であった。彼は聖預言者エリヤの時代に生きており、その頃、サマリアのイスラエル人たちはアハブとイゼベルに、エルサレムのユダ人たちはヨシャファトに統治されていた。　この頃、ヤコブの十二人の息子たちの子孫は二つの王国に分かれていた。一つはユダ王国と呼ばれ、ユダ族とベニヤミン族で構成され、首都はエルサレムであった。もう一つはイスラエル王国と呼ばれ、ユダヤ民族の残りの十部族を含んでいた。　この王国の首都はサマリアであった。イスラエル王国にはエフライム族も含まれており、聖なる預言者ミカもその出身であった。　彼はしばしば、聖なる預言者エリヤと同じ罪、すなわち、神から離れて偶像崇拝に走ったこと、あるいは彼が犯した不正について、イスラエルの王アハブを非難した。　王はこの告発者である預言者を憎んでいたが、彼を殺すことは敢えてしなかった。王を躊躇させたのは、神の罰への恐れ、義人の無垢さに対する恥、そして彼の預言的な予言が実現してしまうのではないかという恐怖であった。　とはいえ、預言者は王の不当な怒りに屈して都を離れ、しばしば山中で暮らしていた。それは、何度も王のもとへ現れて彼を非難することで、王の中に何ものにも止められない怒りを煽ってしまうことを恐れていたからである。

[5552] ポロヴェツ人、あるいはクマニ人は、10～13世紀にロシア南部に住み、そこからルーシの辺境の都市や集落へ襲撃を仕掛けていたテュルク系の遊牧民族である。

この頃、イスラエルの王アハブとユダの王ヨシャファトの家系との間に親族関係が結ばれた。ヨシャファトはアハブからその娘アファリヤを、長男ヨラムに嫁がせたのである。親族愛に駆られたヨシャファトは、エルサレムからサマリアのアハブのもとを訪れた。　客人を歓迎する祝宴の席で、アハブはヨシャファトに、アッシリアの王との戦いを助け、ラモト・ガリラヤを奪還してほしいと頼んだ。この町は古くからイスラエルの領地であったが、アッシリアの王が武力によって奪い取っていたのである。ヨシャファトは、自らもアハブと共に戦いに赴くことを約束し、こう言った。

「あなたも私も、あなたの民も私の民も、皆同じです。私はあなたと共に戦いに赴きます。しかし、まず主なる神に尋ねましょう。この戦いは私たちにとって幸いとなるでしょうか。」

するとすぐに、アハブは不義で偽りの預言者たち、その数は400人を集めた。これらの偽預言者たちの首領は、カナンの子ゼデキヤであった。彼らは皆、アハブを励まし、勝利の希望を抱かせながら言った。

「行け。神はラモフの町だけでなく、アッシリアの王そのものまでも、あなたの手に渡してくださる。」

しかし、ユダの王ヨシャファトは、敬虔で神に忠実な人であったため、これらの預言者の中に真の預言者は一人もおらず、皆が諂い者や迎合者であることを悟った。そこでヨシャファトはアハブに言った。

「ここに、主の預言者が一人でもいないだろうか。彼に尋ねれば、真実を答えてくれるような者が。」

アハブは答えた。

「主にお尋ねして、私たちに真実を明らかにしてくれる男が一人います。それはイェムブライの子ミカですが、彼はいつも私に悪いことばかり予言するので、私は彼を憎んでいます。」

「そんなことを言うな」とヨシャファトはアハブに反論した。「彼を呼び寄せ、その言葉に耳を傾け、その非難に怒ってはならない。」

すると、アハブは直ちに預言者ミカを呼び寄せた。ミカはちょうどその頃、荒野の山々からイスラエルへやって来ていた。二人の王は、サマリアの城門のそばの玉座に、その威厳をまといて座しており、偽預言者たちは彼らの前で予言を述べていた。その指導者ゼデキヤは鉄の角を作り、それを吹き鳴らしてアハブに言った。

「主はこう言われる。この角によって、あなたはシリアを滅ぼし、殲滅するであろう。」

他の偽預言者たちも同様にこう言った。

「ガリラヤのラモフへ行きなさい。そうすれば、アッシリアの王に勝利する。主は彼をあなたの手に渡してくださる。」

一方、預言者ミカのもとへ遣わされた使者は、彼にこう告げた。

「すべての預言者たちが王に良いことを予言しています。どうかあなたも彼らと同じことをおっしゃってください。そうすれば、あなたの言葉と彼らの言葉に食い違いが生じませんから。」

「主は生きておられる！」と預言者ミカは答えた。「私の神、主ご自身が私に告げられることを、私はそのまま王に告げよう。」

こうして、聖なるミカはイスラエルの王アハブの前に進み出た。王は彼に尋ねた。

「聞いてくれ、ミカよ。私はラモト・ガリラヤへ出陣すべきか、それとも控えるべきか？」

預言者は、王の質問にすぐには答えず、王にもっと真剣な問いかけをさせるために、こう言った。

「行かれなさい。そうすれば、あなたは勝利を得、彼らはあなたの手に渡されるでしょう。」

アハブは、預言者が大胆に語っていないのを見て、彼にこう言った。

「強く誓わせてほしい。主の御前で、真実を告げよ。」

すると、聖なるミカは断固としてこう言った。

「私は、羊飼いのいない羊のように、山々に散らばっているイスラエルの子ら全員を見ました。」

この言葉によって、預言者は、戦いの最中にイスラエルの軍勢がその牧者、すなわち王を失うことを予言していた。王は殺され、民は皆、羊が狼に襲われるように、アッシリア軍によって山々や荒野へと追い散らされることになるのだ。そしてアハブはヨシャファト王に言った。

「彼（預言者）が私について良いことではなく、悪いことばかりを預言するだろうと、私はあなたに言わなかったか？」

聖ミカは続けた。

「それでは、主の御言葉を聞いてください。私は、御座に坐しておられる主を見ました。そして、天の軍勢がすべて、主の右と左に立っていました。」　主は言われた。「イスラエルの王アハブを、ラモト・ガリラヤへ行って倒れるように誘い出す者は誰か。」すると、（御前に立っていた者たちのうち）ある者はこう言い、別の者はまた違ったことを言った。そこで、ある霊が立ち上がり、主の御前に進み出て言った。「私が彼を誘い出します。」　主は彼に言われた。「どのようにしてか。」すると、その霊は答えた。「私は出て行き、彼のすべての預言者たちの口に偽りの霊となるでしょう。」主は言われた。「あなたは彼を誘い出し、成功するだろう。行って、そのようにせよ。」預言者は言った。「王よ、あなたの預言者たちの口には偽りの霊があり、主はあなたについて悪いことを告げられたことを知ってください。」

預言者がこう語っている最中、偽預言者ゼデキヤが近づき、聖なるミカの頬を叩きながら言った。

「一体、どの主の霊が、お前にこれらすべてを告げたのだ。」

「その日、お前もそれを目の当たりにするだろう」と聖ミカヤは答えた。「アッシリア人を恐れて、たとえ自分の家の中であっても、隠れるために部屋から部屋へと逃げ回るその日に。」

怒りに満ちた　アハブは預言者ミカを捕らえて牢獄に閉じ込め、そこで「悲しみのパン」を食べさせ、「悲しみの水」を飲ませるよう命じた。すなわち、預言者が飢えと渇きで死ぬことなく、彼を拷問にかけようとしていた王が戻るまで生き延びられるだけの、ごくわずかな量のパンと水を与えるように命じたのである。 王はこう言った。

「私が無事に帰ってくるまで、彼を拘束しておけ。」

聖ミカヤは王にこう答えた。

「もしあなたが無事に帰還するならば、主は私を通して語られたのではないということになる。」

その後、聖ミカは民に向き直り、大声でこう言った。

「すべての民よ、よく聞け！」

聖なる預言者は、イスラエル王国の首都サマリアにある牢獄に投獄された。　一方、アハブ王は戦いに赴き、聖ミカヤの預言通りそこで殺された。このことについては、『列王記第三』第22章および『歴代誌第二』第18章に詳しく記されている。アハブの死後、その息子オホジアが王位を継いだ。

聖なる預言者ミカの死については、聖書には何も記されていない。序文においてのみ、彼がアハブの息子ヨラムによって殺されたかのように述べられているが、すでに前述したように、ヨラムはアハブの娘婿であり、息子ではなかった。　しかし、聖なる預言者ミカが、迫害者たちの誰かによって殉教的な死を遂げた可能性は極めて高い。　というのも、夫の死後に未亡人となったアハブの妻イゼベル、父の後を継いで王位についた息子オホジア、そして娘婿であるエルサレムの王ヨラム――彼ら全員が、アハブの滅亡を予言したミカに対して好意を抱くはずがなかったからである。　『大ミネ

ア・チェティイ』およびキエフの月別聖人暦において、預言者ミカの記念日は1月5日に定められている。　また、『ミネー・チェティイ』には、彼が不法を糾弾したために殺害され、深淵に投げ込まれたと記されている。聖ミカヤの近親者たちは、そこから彼の尊い　遺体を引き上げ、自分たちの土地にある、ある放浪の預言者の墓の近くに埋葬した。 最初の預言者ミカから150年、あるいはそれ以上が経過した後（紀元前8世紀）、同じ名を持つ別の聖なる預言者が現れ、その記念日が今日祝われている。

彼はユダ族の出身であり、エレウフェロポリスの町に近いモラスフィという小さな村が故郷であった。ここから、この聖なる預言者は「モラスフィ人」という異名を得た。彼は、ユダ王国のヨアファム、アハズ、ヒゼキヤの治世の間にエルサレムで預言を行った。この時代には、聖なる預言者イザヤも生きていた。　聖ミカは、同胞たちが偶像崇拝に走って真の神を忘れ、異教徒の不敬虔な慣習を取り入れてしまったことを非難した。預言者は心を痛めながら、神の御名において彼らにこう語りかけた。

「わが民よ、わたしがあなたがたに何をしたというのか。何をもってあなたがたを侮辱したのか。何をもってあなたがたを悩ませたのか。答えてみよ。それとも、わたしがあなたがたをエジプトの地から導き出し、奴隷の状態から救い出したにもかかわらず、あなたがたはわたしを見捨て、異教の偶像を自分たちの神として崇めたからなのか。」

また、貴族や裁判官、長老たちが貧しい者や困窮者に加えている抑圧、不正、略奪、そして不当な扱いも糾弾し、聖ミカはこう語った。

「ヤコブの家の指導者たちよ、善を憎み、悪を求める者たちよ、あなたがたこそ、正しい裁きを行うために全力を尽くすべきではないか。　あなたがたは、全く罪のない貧しい者や困窮者を不当に虐げ、彼らの皮を剥ぎ、骨を砕き、体を粉々にしている――まるで彼らを鍋に入れて料理しようとしているかのようだ。　さあ、これを聞きなさい、ヤコブの家の指導者たちよ。正義を嫌悪し、すべての正しいことを歪め、シオンを血で、エルサレムを不義で築き上げている者たちよ！

こうして預言者は罪人たちを糾弾し、彼らが改心しないのを見て、彼らの滅びを嘆き、嘆き悲しんでこう叫んだ。

「ああ、私は悲しむ！　今や私の状況は、夏の果実の収穫の時や、ぶどうの収穫の時のようなものだ。食べるための果実が一つもない（神に喜ばれる者が一人もいないのだ！）。　ああ、わが魂よ！地上には憐れみ深い者がいなくなり、人々の間には義人がいない。皆、血を流すために策略を練り、誰もが兄弟に罠を仕掛ける。彼らの手は悪を行うことに向けられ、役人は賄賂を要求し、裁判官は賄賂を受けて裁きを行う。

不義な者たちの不悔改めを糾弾しつつ嘆き悲しむ預言者は、彼らに降りかかる神の怒りを予言した。それはまず、イスラエル王国の首都サマリアを襲うだろう。なぜなら、偶像崇拝や神の律法の違反、異教的な不義がここから始まったからである。　その後、同様の懲罰がエルサレムにも下される――神の正義は、サマリアをアッシリア人によって、エルサレムをカルデア人によって滅ぼすことを定めていた。そして預言者は再び泣き叫びながら言った：

「ああ、ああ、私は悲しむ！ 神の裁きが迫っている！」

しかし、こうした悲痛な予言の合間に、神の預言者は、私たちの魂の牧者であり救い主である主イエス・キリストがベツレヘムで誕生するという喜びの知らせも告げた。「ベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの千の町の中でも小さい町か。　あなたから、イスラエルの支配者となるべき方が、わたしのもとに出るであろう。」（第5章2節）。

この神の聖なる預言者のその他の預言は、彼の名を冠した預言書に記されている。

聖ミカが預言者としての務めを果たした後、どのように生涯を終えたかについては明確な情報はないが、殉教的な死を遂げたとは考えにくい。　聖なる預言者エレミヤの書には、祭司たちが偽預

言者たちや大勢の民と共に聖なるエレミヤを殺そうとした際、長老たちの一部が彼を擁護し、集まりに向かって次のように語ったと記されている。

「モラスフィテ人のミカは、ユダの王ヒゼキヤの時代に預言し、ユダの民全体にこう告げた。『万軍の主はこう言われる。シオンは畑のように耕され、エルサレムは廃墟の山となり、この神殿の丘は森に覆われた丘となる。』　ユダ王ヒゼキヤやユダ全土は、このために彼を殺しただろうか。彼は主を恐れ、主に懇願しなかっただろうか。そして主は、彼らに宣告された災いを撤回されたのに、私たちは自分たちの魂に大きな害を加えようとしているのだ。」

これらの言葉から、聖なる預言者ミカは殺されなかったことがわかります。彼は、神に喜ばれる生涯を終え、安らかに息を引き取りました。彼は故郷のモラスフェで亡くなり、そこに埋葬されました。　それから非常に長い年月が経った後、神の啓示を受けたエレウフェロポリの司教ゼヴィンによって、テオドシウス大帝の治世中に、彼の尊い遺骨が預言者ハバククの遺骨と共に発見された。これらすべてについて、私たちの神に、今、そして常に、そして永遠に、栄光がありますように。アーメン。

8月28日

8月15日（旧暦）

至聖なる我らの主の母、神の母にして永遠の処女マリアの御眠り

記念日8月15日

主が人類の救いを成し遂げ、天に昇られた後、至清にして至福の聖母マリア、神の母であり、私たちの救いの執り成し手である方は、初期のキリスト教徒たちの中でかなり長い間暮らされました。　彼女は、全宇宙にキリストの教会が広まり、御子であり御自身である神の栄光が地の果てまで及ぶのを見て、大きな霊的な喜びに満たされていました。　キリスト教会の誕生の初期において、至聖なる神の母は、「すべての民族が私を幸いとする」（ルカ1:48）というご自身の言葉が成就するのをこの目で目撃されました。すなわち、至る所でキリスト・神を賛美していたキリスト教徒たちは、当時まだ地上に暮らしておられたその至聖なる母をも、同様に幸いとしたのです。

至聖なる神の母は、すでにその生涯を全うし[5553]、尊く栄光に満ちた御眠りに近づいておられました。御自身、一刻も早く肉体を離れ、神のもとへ入ることを望んでおられました。御魂は常に、天において父の右に座しておられる御子（ヘブライ人への手紙1:3）の愛らしい御顔を見たいという

[5553] 2世紀の教父であるサルディスのメリトン司教は、聖母マリアの永眠を、彼女の生後69年目、キリスト降誕から55年目、主の昇天から22年目と定めている。　ローマの司教ヒッポリュトス（3世紀）は、神の母の永眠の年を、キリスト降誕後43年、彼女の誕生後57年としている。　「教会史の父」と呼ばれるエウセビオス・パンフィルス（パレスチナ・ケサリアの司教、340年没）は、永遠の処女の永眠の年を、彼女の生涯の63年目、キリスト降誕後48年目、救い主の昇天後15年目であったと記している。　エピファニオス・キプロス（403年没）は、聖母マリアの聖なる生涯の年数を72年と数えており、彼の見解によれば、その年はキリスト降誕後57年目であった。　11世紀末から12世紀初頭のビザンツの著述家ゲオルギオス・ケドリンも同様の見解を示している。教会史家（14世紀）のニキフォロス・カリストスは、七十人の使徒の一人である聖エヴォドスの言葉を引用しており、彼は聖母マリアの永眠の年を、彼女の生涯の59年目、キリスト降誕から44年目としている。　聖アンドレイ・クリツキー（712年没）と聖シメオン・メタフラスト（10世紀）は、聖母マリアの生きた年数を正確には定めておらず、ただ彼女が「十分な老齢に達して」この世を去ったと述べている。

、絶え間ない願いに満たされていました； セラフィムたち[5554] よりもはるかに大きな愛をもって、御子に心を寄せられていました。神の母は、聖なる御目から涙の川を流し、主が彼女をこの涙の谷から、天上の[5555] 至福の住まいへと連れ去ってくださるよう、熱心に祈られました。 シオンの聖ヨハネ・テオロゴスの家[5556] に住んでいた彼女は、しばしばそこからオリーブ山[5557] ——御子であり主である方が天に昇られた場所——へと足を運び、そこで独り、主に向かって熱心な祈りを捧げていた。 そしてある日、オリーブ山で聖母が、主が一日も早く彼女に死を授け、天へと迎え入れてくださるよう祈りを捧げていたその時、彼女の前に大天使ガブリエル[5558] が現れた。彼は聖母の幼少期から仕えてきた者であり、 彼は至聖所において彼女を養い、彼女から神の御子が生まれるという吉報を伝え（ルカ1:27–38）、この世での彼女の生涯を通じて、絶えず彼女を守り続けていた。 天の使者は、明るい表情で、至聖なる聖母マリアに、彼女にとって喜ばしい主の言葉を伝えました。それは、まもなく——三日が過ぎた後——彼女がキリスト・神のもとへ旅立つというものでした。 至聖なるおとめ様に死の刻を告げながら、大天使は、彼女が動揺することなく（ ）、喜びをもってその言葉を受け入れるよう語りかけました。なぜなら、その言葉は、彼女を不死の命へと、永遠の栄光の王のもとへと招くものだったからです。

「あなたの御子であり、私たちの神である方」と大天使は語った。「大天使や天使たち、ケルビムやセラフィム、すべての天の霊たち、そして義人の魂たちと共に、御母であるあなたを天の御国へ迎え入れ、あなたが御子と共に永遠に生き、統治されるようにされるのです。」

聖母マリアが死に勝利したことのしるしとして、すなわち、霊的な死が彼女を支配しなかったのと同様に、肉体の死も彼女に対して権威を持たないこと、そして——彼女がまるで眠りに落ちたかのように、ほんの短い間だけ死によって眠りについたものの、まもなく目覚めたかのようによみがえり、まどろみから目を覚ますように死を追い払い、 主の御顔の光の中で不死の栄光と命を見出し、喜びの叫びと共に霊的な歓喜をもってそこへ去って行く——これらすべてのしるしとして、大天使は至聖なる乙女に楽園の枝を授けた。それは、天の恵みの光に輝く、ナツメヤシの枝であった。 大天使が言ったように、聖母の尊い御床の前を、その尊く清らかな御体が埋葬のために運ばれる際に、この枝を先導して運ぶことになっていた。 至福の神の母は、言葉に尽くせない喜びと霊的な歓喜に満たされた。なぜなら、御子であり神である方と共に天に宿り、その甘美な御顔を仰ぎ見る至福に勝る、彼女にとってこれほど喜びに満ち、心地よいことが他にあるだろうか。彼女はひざまずき、創造主に対して熱心に感謝を捧げ始めた。

「私は、主よ、あなたを私の胎内に迎え入れるにふさわしい者ではありませんでした。もしあなたが、あなたのしもべである私を憐れんでくださらなかったならば」と、至聖なる神の母は祈りました。 私は、私に託された宝を守り抜きました。それゆえ、栄光の王よ、あなたが私をゲヘナの領域から守ってくださるよう、あえてお願いいたします[5559] ： もし天と天使たちがあなたの御前に震え

[5554] セラフィムとは、ヘブライ語で「炎のような、火のような存在」を意味する。 聖預言者イザヤは、イザヤ書6章1〜3節で彼らについて記述している。この預言者の幻視は、セラフィムが神に最も近く、至高の霊的存在であることを示している。聖ディオニシオス・アレオパゴスの『天上の階層』において、彼らは天使の位階の中で第一位を占めている。

[5555] 「ゴルニー」とは、高い、天上のという意味である（エゼキエル書41:7；コロサイ人への手紙3:3）。

[5556] シオンは、ヘブライ語からの翻訳において、ある説では「日当たりの良い、太陽に照らされた場所」を意味し、別の説では「高く著名な場所、あるいは要塞」を意味する。シオンはエルサレムの南西に位置する山であり、その上にエルサレム要塞が聳え立っている。

[5557] エレオン山、あるいはオリーブ山は、その山に大量に生えているオリーブの木にちなんで名付けられました。この山はエルサレムの東に位置し、聖書、特に新約聖書で頻繁に言及されています。

[5558] 大天使とは、天使たちの長のことである（Iテサロニケ4:16、ユダ1:9）。

[5559] ゲヘナとは、ヘンノムの谷、あるいは「ヘンノムの子ら」を意味するヘブライ語の転写である。この谷とは、かつて王の時代にユダヤ人がモロクへの生贄として子供たちを捧げていた、深く狭い峡谷を指す（列王記下23:10； エレミヤ書

るのであれば、なおさら、あなたの慈しみによって与えられたもの以外に何の功績もない、塵から造られた人間である私が、主であり神であるあなた、永遠に祝福された方よ。

至聖なる御母は、この世を去る際、すでに福音の宣教のために全世界へと散らばっていた聖なる使徒たちを見たいと願われました； また、御自身の最期の時、闇の君主やその恐ろしい僕たちを見ることなく、御自身の御子であり神ご自身が、御約束を果たして来られ、聖なる御手の中に御魂をお迎えくださるよう、主に祈られました。 私たちの御母が、エルサレムのオリーブ山でひざまずき、創造主に向かって祈りと感謝を捧げていたとき、その祈りには次のような不思議な現象が伴った。オリーブ山に立つオリーブの木々が、まるで魂が宿っているかのように、聖母と共に頭を下げていた。聖母がひざまずくと、木々も下へ身を屈め、聖母が立ち上がると、木々も再びまっすぐに伸びた。木々はまるでしもべのように、聖母を崇め奉り、聖母に仕えていた。

祈りが終わると、至聖なる聖母は家に戻られたが、その瞬間、聖母を取り巻く目に見えない神の力と、聖母を照らし出していた主の栄光によって、すべてが震え上がった。 かつてシナイ山で神と語り合ったモーセ（出エジプト記34:30）の顔よりも、常に神の恵みによって輝いていた御顔は、言葉に尽くせない栄光によって、さらに一層輝きを増した。――至福の御母は、ご自身の最期に備え始めた。 まず、御自身が養子として迎え入れた、愛するキリストの弟子ヨハネにそのことを告げ、輝きを放つ楽園の枝を見せ、まさにそれを御自身の死の床の前に置くよう遺言として託した。その後、至聖なるおとめは、御自身に仕えていた他の家来たちにも同じことを告げた。 その後、御方はご自身の部屋を香りで満たし、可能な限り多くの灯火を用意して灯し、部屋そのものとそこに置かれた寝台を飾り立てるよう命じられました。つまり、埋葬に必要なすべての準備を整えるよう指示されたのです。 聖ヨハネ・テオロゴスは直ちに、主の兄弟でありエルサレム初代司教である聖ヤコブ、ならびにすべての親族や近親者たちのもとへ使者を送り、神の母のまもなくの――正確な日付を明記して――御帰天を伝えた。 聖ヤコブは、エルサレムだけでなく、周辺の都市や村々に住むすべてのキリスト教徒にも速やかに知らせたため、エルサレム司教と共に、聖母マリアのもとにすべての親族と、男女を問わず大勢の信者たちが集まった。 至聖なる御母は、集まった人々の前で、大天使から告げられた、 天への御昇天に関する言葉を公に語り、その証として、御自身の使者から受け取った楽園の枝を示された。その枝は、まるで太陽の光のように、天の栄光の光を放っていた。 聖母ご自身の口から、まもなく訪れるご逝去の知らせを耳にした周囲の信者たちは、涙をこらえることができませんでした。家中は泣き声とすすり泣きで満たされ、皆、慈悲深い御母なる方を、すべての者の母として、自分たちを孤児にしないでくださるよう懇願しました。 しかし、神の母は泣くのではなく、ご自身の死を喜ぶよう求めた。なぜなら、神の御座に近づき、御子であり神である方と顔を合わせて見つめ合い、口と口を合わせて語り合うことで、死後、より大胆に御子の慈悲と慈愛を懇願することができるからである。 さらに、至福の聖母は、ご自身の御逝去後も、彼らだけでなく全世界を孤児にしないことを約束された。聖母は全世界を巡り、その必要に耳を傾け、苦しむ人々を助けてくださるのだ。聖母の慰めの言葉は、泣いていた人々の涙を拭い、その悲しみを和らげた。 その後、至聖なる御母は、ご自身の二着の衣について、熱心に御母から糧を受け取り、御母に仕えてきた二人の貧しい未亡人にそれらを譲るよう遺言を残された。 御自身の至聖なる御体については、神の母は、エルサレムからほど近いオリーブ山に隣接するゲッセマネの園[5560] に埋葬されるよう遺言されました。

7:31）。後世には、あらゆる種類の不浄物の投棄場として用いられ、それらを焼却するためにここでは常に火が燃やされていた。そのため、エンノムの谷は永遠の苦しみを受ける場所の象徴となった。 まさにこの意味、すなわち「地獄」という意味で、新約聖書において「ゲヘナ」という言葉が使われている（マタイ5:29–30、10:28、18:9、23:15；マルコ9:43,45；ルカ12:5；ヤコブ3:6）。

[5560] ゲッセマネは、ヘブライ語で「オリーブ搾り場」を意味し、エレオン山の麓にある場所である。ここは、救い主が贖いの苦悩に苛まれ、大祭司としての祈りを捧げたことで有名である（マルコ14:26,32; ルカ22:39；ヨハネ18:1）。4世紀に遡る伝承によれば、ゲッセマネはケドロン川に架かる橋から東へ50サジェンの場所にあったとされる。

そこには、御自身の義なる両親であるヨアキムとアンナ、そして婚約者である聖ヨセフの墓がありました。　これらの墓は、エルサレムとオリーブ山の間に広がるヨサファトの谷に隣接しており、かつてはエルサレムの貧しい住民たちの共同埋葬地であった。

聖母マリアがこれらの臨終の遺言を述べている最中、突然、雷鳴のような轟音が響き渡り、雲が聖ヨハネ・テオロゴスの家を包み込んだ。それは、神の御命令により、　天使たちは、福音を宣べ伝えるために宇宙の果てへと散らばっていた使徒たちを天に迎え上げ、雲に乗ってエルサレムへと運び、シオンの丘にある、神の母が住まわれていた家の門の前に立たせた。聖なる使徒たちは、互いの姿を見て喜び、同時に驚きながらこう言った。

「主は、いったいどのような理由から、私たちをここに集められたのでしょうか？」

すると、聖ヨハネ・テオロゴスが彼らのもとへ出てきて、喜びの涙を流しながら彼らを迎え、その際、至聖なる神の母のまもなく訪れる御逝去について告げました。　その時、聖使徒たちは、主が宇宙のさまざまな果てから彼らを集められたのは、御母の聖なる最期に立ち会い、その清らかな御体を尊厳をもって埋葬するためであることを悟った。聖母マリアのまもなく訪れる最期という知らせは、聖使徒たちの心を深い悲しみで満たした。　家の中に入ると、彼らは喜びに満ちた表情で寝台に座っておられる聖母マリアを見ました。聖使徒たちは、次のように言って彼女を迎えました。

「天と地を創造された主より、あなたは祝福されています！」

「主ご自身が選ばれた兄弟たちよ、平安あれ！」と、至聖なる御母は答えられた。

そして、こう尋ねた。

「どのようにしてここへ来られたのですか？」

聖なる使徒たちは、それぞれが説教の場から神の御霊の力によって引き上げられ、雲に乗ってシオンへと運ばれてきたことを彼女に明かした。神の母は、彼女の祈りを聞き入れ、彼女の心の願い――最期の時に聖なる使徒たちに会いたいという願い――を叶えてくださった神を賛美した。

「主は」と、彼女は彼らに語りかけました。「私の魂を慰めるために、あなた方をここに導いてくださいました。私の魂は、死すべき性質が求める通り、まもなく肉体と別れることになっています。私の創造主によって定められた時が、すでに近づいているのです。」

それに対し、彼らは悲しみを込めて彼女にこう語った。

「御母よ、あなたがこの地上におられた間、私たちはあなたを、私たちの主であり師であるお方そのものとして仰ぎ見て慰めを得ておりましたが、今やあなたの御姿を失い、私たちの魂を覆うこの重い悲しみを、いったいどう耐え忍べばよいのでしょうか？」　しかし、あなたは、あなたが産み出されたキリスト・神の御心により、天上の住まいに去って行かれるのです。私たちは、あなたに関する神の御定めに喜びを感じずにはいられませんが、同時に、もはや私たちの母であり慰め主であるあなたにお目にかかれないという、この孤児のような境遇を嘆かずにはいられません。

この言葉を聞いて、聖なる使徒たちは涙に暮れました。

「泣かないでください」と、至聖なる神の母は彼らを慰め、「キリストの友よ、弟子たちよ、私の喜びを、あなたがたの悲しみで曇らせないでください。むしろ、私と共に喜びなさい。私は私の御子であり、神である方のもとへ去っていくのですから。」　私が自ら埋葬のために整えたこの御体を、ゲッセマネの地に葬り、その後、再びあなたがたに委ねられた福音宣教の務めに戻ってください。私については、主の御心ならば、私が去った後も、またお会いできるでしょう。

聖母マリアが聖なる使徒たちと語り合っている最中、神に選ばれた器、すなわち聖使徒パウロが到着した。彼は至聖なる聖母マリアの足元にひれ伏し、口を開いて彼女を賛美し、称え称えた。

「喜びなさい」と聖使徒は言った。「いのちの母、そして私の宣教よ。主イエス・キリストの昇天まで、私はこの地上で主の御顔を仰ぐ喜びを味わうことができませんでしたが、今、あなたを見つめることで、あたかも主をお見ているかのようです。」

使徒パウロの傍らには、彼の親しい弟子たちであるディオニシオス・アレオパゴス[5561] 、イエロフェイ[5562] 、そしてティモテオ[5563] がいた。 また、七十人の使徒たちの中から他の者たちも同席していた。彼らは皆、聖霊によって集められ、聖母マリアの祝福に与るため、そしてその臨在によって彼女の埋葬の儀式をより荘厳なものにするために集まっていたのである。 至聖なる御母は、聖なる使徒たち一人ひとりを名指しで御自身のもとに呼び寄せ、キリスト・イエスについての福音を宣べ伝える際の信仰と功績を称えられました。御母は一人ひとりに永遠の至福を願い、全世界の平和のために祈られました。

8月15日が訪れ、誰もが待ち望んでいた祝福された時――それは正午を過ぎて3時間後――、至聖なる神の母の御帰天の時が近づいた。 部屋には数多くの灯がともされ、聖なる使徒たちは神に賛美を捧げていた。一方、汚れなき聖母は、飾り立てられた寝台に横たわり、至福の最期を迎える準備を整え、愛する御子であり主である方が御自身のもとに来られるのを待っておられた。 突然、部屋の中に言葉では言い表せない神の栄光の光が輝き、灯火の光を覆い隠した。この幻を目の当たりにした者たちは恐怖に襲われた。彼らは、部屋の屋根が開き、主の栄光が天から降りてくるのを見た。――栄光の王キリストご自身が、天使や大天使の群れ、すべての天の軍勢、かつて至聖なるおとめについて予告した聖なる先祖や預言者たち、そしてすべての義人の魂たちと共に、御自身の至聖なる母のもとへと近づいてこられた。 御子の到来を目にした神の母は、大いなる喜びのうちに、御自身の賛歌の言葉を叫ばれました：

「*わが魂は主を賛美し、わが霊はわが救い主なる神を喜び祝う。主は、そのしもべのへりくだりを顧みてくださったからである*」（ルカ1:46–47）。

そして、寝台から身を起こし、あたかも御子を迎えに出ようとしているかのように、御母は主を拝んだ。主は近づき、愛を込めて御母を見つめながら、こう言われた。

「来なさい、わが最愛の者よ、来なさい、わが鳩よ、来なさい、わが尊き宝よ。そして、永遠の命の住まいに入りなさい。」

神の母は、ひれ伏してこう答えた。

「栄光の主、わが神よ、あなたの御名をあがめましょう。あなたは、あなたの秘儀に仕えるために、この謙虚なしもべをお選びくださいました。栄光の王よ、あなたの永遠の御国において、私を覚えてください。 あなたがご存知の通り、私は心を尽くしてあなたを愛し、私に託された宝を守り抜きました。どうか今、私の霊を安らかに迎え入れ、闇のサタンの力のあらゆる策略から私をお守りください。

主は、すでに御自身によって打ち負かされたサタンの力を恐れる必要はないと説き、愛に満ちた言葉で彼女を慰められました。そして、恐れずにこの地から天へと移るよう、愛を込めて彼女を招かれました。

[5561] アテネのアレオパゴスの議員であった聖ディオニシオス・アレオパゴスは、『使徒言行録』（使徒17:34）の証言によれば、聖使徒パウロによって改宗させられた。 教会史家エウセビオスの言葉によれば、彼はアテネの初代司教であり、アリスティデスの弁明書が述べるように、96年にドミティアヌス帝の治世下で殉教の死を遂げ、その奉仕を刻み込んだ。

[5562] 聖イエロフェイもまたアテネのアレオパゴスの一員であり、同じく聖使徒パウロによってキリスト教に改宗した。彼はパウロによってアテネの司教に任命され、1世紀に死去した。

[5563] 聖ティモテオは、小アジアのデルヴィアまたはリストラ出身である（使徒言行録16:1、20:4；テモテへの手紙第二3:4）。彼がキリストに回心したのは、使徒パウロの説教によるものであり、そのためパウロは彼を「自分の息子」と呼んでいる（コリントの信徒への手紙第一4:17； テモテへの手紙第一1:2）。彼は、聖使徒パウロが福音を宣教するための旅において、常に同行していた（ローマ16:21；コリント人への手紙第一16:10；テサロニケ人への手紙第一3:2）。 その後、伝承によれば使徒自身の手によってエフェソ教会の司教に按手されたティモテオは、15年にわたる司教としての奉仕を、ある説ではドミティアヌス帝の治世（81–96年）、別の説ではネルワ帝の治世（96–98年）に殉教によって終えた。 ある異教の祭りの際、聖ティモテオは、その非難に満ちた説教に憤慨した異教徒の群衆によって石打ちに遭った。

「『わが心は準備ができております、神よ、わが心は準備ができております』（詩編107:2）」――聖母マリアはそう答えました。

そして、かつて彼女が語った言葉――「御言葉どおりになりますように」（ルカ1:38）――を口にすると、再び寝台に横たわった。　御子であり主である方のまばゆいばかりの御顔を見て言い表せない喜びを感じ、神の母は、主への愛に満ちて霊的な歓喜に包まれ、その至聖なる魂を主の御手に委ねた。その時、彼女は一切の痛みを感じることなく、あたかも甘い眠りに落ちたかのようであった。　処女の身を守りつつ身ごもり、病むことなく産み出した御方こそが、その清らかな御体から御母の魂をも迎え入れられた。そしてたちまち、喜びに満ちた驚くべき天使たちの歌声が響き渡り、その中で天使たちが繰り返し唱える、ガブリエルによる至聖なるおとめへの挨拶の言葉が聞こえた：

「『喜びなさい、恵まれた方よ。主はあなたと共におられます。あなたは女たちの中で祝福されています』（ルカ1:28）。」

このような荘厳な賛美歌とともに、天の軍勢は、主の御手によって天上の住まいへと向かう聖母マリアの至聖なる御魂を見送った。　その光景を目撃する栄誉に浴した聖使徒たちは、かつてオリーブ山から昇天された主（使徒言行録1:9–12）を見送った時と同様に、感極まった眼差しで神の母を見送った。彼らは長い間立ち尽くし、畏怖の念に打たれ、まるで意識を失ったかのような状態にあった。　我に返ったキリストの弟子たちは、御母の御魂を栄光のうちに天へと昇らせた主にひれ伏し、涙を流しながら聖母の御寝台を取り囲んだ。至福の聖母マリアの御顔は太陽のように輝き、その至聖なる御体からは、この地上では決して見出すことのできないような、驚くべき芳香が漂っていた。すべての信者たちは、その至聖なる御体を畏敬の念をもって崇め、畏れつつその御体に口づけをした。聖母マリアの尊い御遺骸からは聖化の力が発せられ、それに触れたすべての者の心を喜びで満たした。　また、病める者たちは癒やされた。盲人は目が見えるようになり、耳の聞こえない者は耳が開き、足の不自由な者はまっすぐに立ち上がり、悪霊は追い出され――神の母の御遺体にただ触れるだけで、あらゆる病が完全に消え去った。

聖母マリアの死を囲むこうした出来事の中、その尊い御遺体を埋葬するための荘厳な行列が始まった。　聖使徒ペトロが、聖使徒パウロおよび神の兄弟ヤコブと共に先頭に立ち、他の十二使徒たちと共に至聖なる神の母の御棺を掲げた。一方、聖ヨハネ・テオロゴスは、輝きを放つ楽園の枝を先頭で運んだ。　残りの信者たちは、ろうそくと香炉を手に、棺を取り囲むようにその近くを歩いた。皆が式典の冒頭の祈りを歌った。聖使徒ペトロが先導し、他の者たちは彼に続いて、ダビデの詩篇『イスラエルのエジプトからの脱出』（詩篇113篇）を調和のとれた声で歌い、各節の終わりに「ハレルヤ」を付け加えた。　聖霊の導きにより、他の荘厳な祈りと感謝の詩篇も歌われた。聖母マリアの清らかな御体を載せた荘厳な行列は、シオンからエルサレムを経てゲッセマネへと向かった。御座と行列の参列者たちの上には、冠を思わせる雲の輪が現れ、並外れて明るい光に照らされていた。　そして雲の中から、誰の耳にも届くように、空気を満たすかのように、素晴らしい天使たちの歌声が響き渡った。この雲の冠は、聖母の寝台の上を空中に漂いながら、埋葬の場所まで続いていった。その間ずっと、天使たちの歌声も途切れることはなかった。　しかし、その喜びに満ちた行列――その様子を、人間の貧弱な言葉では到底語り尽くすことはできない――は、予期せず中断されてしまった。キリストを信じなかった多くのユダヤ人たちは、その異例の歌声を聞き、荘厳な行列を目にして、家を出て行列に加わった。彼らもまた、イエス・キリストの母である聖なる御遺体に捧げられる栄光と敬意に驚きながら、町の外へと向かった。　このことを知った祭司長や律法学者たちは激しい怒りに駆られ、使用人や兵士たち――さらに民衆の中からも多くの人々をそそのかして――を派遣し、行列に追いついて参加者を追い散らすよう命じた。同時に、彼らはキリストの弟子たちを殺害し、聖母マリアの遺体を焼き払うよう命じた。　しかし、扇動者たちの言いなりになった群衆が、まるで戦いに備えるかのように武装し、怒りに任せて至聖なる聖母の御遺体を護送する一行の後を追って走り出し

、すでに彼らに追いつきかけたその時、突然、空を漂っていた雲の輪が地上に降りてきて、まるで壁のように聖なる使徒たちやその他のキリスト教徒たちを囲み込んだ。　追跡者たちは、雲の向こうに誰の姿も見えず、ただ歌声だけが聞こえた。聖母マリアの御遺体とキリスト教徒たちの上空に目に見えずに漂っていた聖なる天使たちは、悪意に満ちた追跡者たちを盲目にした。そのうちの何人かは城壁に頭を打ち付け、他の者たちは手探りで壁を確かめ、どこへ進めばよいのか分からず、案内人を探していた。　その頃、アフォニウスという名のユダヤ人の祭司がたまたま旅に出ていた。聖使徒たち――神の御母のさらなる栄光のために、神の御命により雲が再び立ち上っていた――と、蝋燭を手に歌いながら、永遠の処女マリアの遺体を囲む大勢のキリスト教徒たちを目にしたアフォニウスは、嫉妬に満ち溢れた。 彼の中に、かつての主に対する憎悪が再燃し、彼はこう言った。

「見よ、私たちの先祖の律法を打ち砕いた詐い者を産んだあの者の遺体を、これほどまでに敬意が包んでいるではないか！」

非常に力強い彼は、狂おしいほどの激怒をもってキリスト教徒の群衆をかき分け、聖床へと駆け寄り、私たちの至聖なる御母の御遺体を地面に投げ落とそうとした。　司祭の厚かましい手が祭壇に触れた瞬間、目に見えない天使が、神の復讐の無形の剣でその手を真っ二つに切り裂き、手は祭壇から離れずにぶら下がったままとなり、アフォニウス自身は地面に倒れ込み、こう叫んだ。

「ああ、私は悲惨だ！」

自らの罪を悟った彼は悔い改め、聖なる使徒たちにこう言った。

「どうか私を憐れんでください、キリストの僕たちよ！」

聖使徒ペトロは、聖母マリアの遺体を運んでいた者たちに立ち止まるよう命じ、アフォニウスにこう言った。

「ほら、お前の望み通りになった。神は『復讐の主』（詩編93:1）であることを知れ。我々は、お前の傷を癒すことはできない。　それをなせるのは、あなたがたが不義にも反逆し、捕らえて殺した、我らの主ご自身のみである。しかし、あなたが心を尽くして主を信じ、口をもってイエスが真のメシア、神の御子であることを告白するまでは、主もあなたに癒やしを授けようとはされないだろう。」

アフォニウスは叫んだ。

「私は、預言者たちによってあらかじめ告げられていた世界の救い主――キリスト――であると信じます。私たちは当初から、彼が神の子であることを見ていましたが、悪意に満ちた嫉妬に目が曇り、神の偉大さを公然と認めようとはせず、彼を無実のままで死に追いやりました。　しかし、主は御自身の神性の力によって三日目に復活され、私たち――主を憎んだ者たち――すべてを恥じ入らせた。私たちは衛兵を買収して主の復活を隠そうとしたが、その栄光が至る所に広まってしまったため、何もできなかった。

アフォニオスが自らの罪を悔い改めながらこう語ったとき、聖なる使徒たちとすべての信者たちは、悔い改める罪人に対して天使たちのような喜びを覚えた。聖使徒ペトロは、アフォニオスに対し、信仰をもって切断された両手の傷口を、寝台に吊るされた手に当て、至聖なる神の母の御名を呼び求めるよう命じた。　アフォニウスがその通りにすると、たちまち切断された両手は元の位置に癒合し、完全に健康な状態に戻った。残ったのは、肘を囲む赤い糸のような、切断の痕跡だけだった。アフォニウスは寝台の前でひれ伏し、至聖なる聖母マリアから生まれたキリスト――神――に礼拝を捧げ、その清き母を数多くの賛美の言葉で称えながら、　彼は聖書から、聖母マリアとキリストの両方について証しする預言を引用し、人々はアフォニーの切断された手の奇跡的な癒やしを目の当たりにし、主イエスを賛美し、聖母マリアを称える彼の賢明な言葉を耳にして、二重に驚嘆した。　その後、アフォニオスは聖なる使徒たちに加わり、他のキリスト教徒たちと共に、棺を運ぶ行列に従ってゲッセマネへと向かった。　同様に、自分の罪を自覚し、悔い改めの心を持って案内人に連れられて尊い御寝台に近づき、信仰をもってそれに触れた盲人たちも癒やされた。彼らは肉体的な目だけでな

く、心の目も開かれたのである。　すべての者の慈悲深い母、私たちの至聖なる御母は、ご自身の誕生によって全宇宙に喜びをもたらされたのと同様に、ご永眠の際にも、誰をも悲しませることを望まれませんでした。善き王の善き母として、御母はかつての敵たちさえも、ご自身の恵み深い賜物をもって慈愛をもって慰められたのです。

しかし、聖なる使徒たちは多くのキリスト教徒たちと共にゲッセマネの園にたどり着いた。尊き御体を安置したとき、再びキリスト教徒たちの間で泣き声が上がった。皆、このような宝を失い、自分たちの孤児となった境遇を嘆いて泣いた。　最後の口づけを捧げる際、キリスト教徒たちは至聖なる神の母の御体にひれ伏し、涙を流しながらそれを口づけしたため、夕方にようやく尊い御体を棺に納めることができた。しかし、棺に巨大な石が積み上げられた後も、キリスト教徒たちは聖母への愛に引き留められ、その場から離れようとはしなかった。– 聖使徒たちは、ゲツセマネの園を離れることなく、至聖なる聖母マリアの棺のそばに三日間留まり、昼夜を問わず詩篇を歌い続けた。そしてその間ずっと、空には天の軍勢による不思議な歌声が響き渡り、彼らは神を賛美し、その至聖なる母を称えていた。

神の特別な御計画により、使徒の一人である聖トマスは、聖母マリアの御遺体の栄光に満ちた埋葬に立ち会うことができませんでした。彼は3日目にようやくゲッセマネに現れたのです。 聖使徒トマスは、他の聖使徒たちのように、聖母マリアの最後の挨拶と祝福を受けるに値しなかったことを深く嘆き、心を痛めました。　また、聖母の御眠りと荘厳な埋葬の際に現れた神の栄光、驚くべき神秘、そして神の御業を、自分だけが目にすることができなかったことについても、激しく泣いた。聖使徒たちは彼を憐れみ、聖　トマスが、せめて至福の聖母マリアの遺体だけでも目にし、それに礼拝し、口づけを捧げ、それによって悲しみを幾分和らげ、苦悩の中に慰めを得られるよう、棺を開けることに決めた。　しかし、聖使徒たちが石をどかして棺を開けたとき、彼らは恐怖に襲われた。棺の中には聖母マリアの御体はなく、ただ、不思議な香りを放つ埋葬用の布だけが残されていたのである。聖使徒たちは、これが何を意味するのかと理解できず、驚愕のうちに立ち尽くした。　涙と畏敬の念を込めて、墓に残された埋葬用の布に口づけをしながら、彼らは主に向かって、至聖なる聖母マリアの御体がどこへ消えたのか、その行方を明らかにしてくださるよう祈った。夕方になると、彼らは少し食事をとるために席に着いた。　聖なる使徒たちには、食事の際にある習慣があった。彼らは、キリストを称えるために――キリストの一部として――パン一片をその席に置き、その席を空けておくのである。　食事が終わると、彼らは感謝を捧げながら、主の一部と呼ばれるそのパンの一片を取り、至聖なる三位一体の偉大なる御名を賛美しつつ高く掲げ、その後、「主イエス・キリストよ、私たちをお助けください！」という言葉に続いて、この一片を神の祝福として食べました。　聖なる使徒たちは、皆が一緒にいる時だけでなく、互いに離れている時にも、このように行っていた。さて、ゲッセマネでの食事の間、彼らは、なぜ聖母マリアの清らかな御体が墓に見つからなかったのかということ以外、何も考えず、何も語らなかった。　そして、食事を終え、聖なる使徒たちが主を称えて取っておいたパンの一片を掲げ、至聖なる三位一体を賛美し始めたとき、突然、天使たちの歌声が聞こえてきた。目を上げると、彼らは空中に、多くの天使たちに囲まれた聖母マリアが立っているのを見た。 彼女は言い表せない光に包まれており、彼らにこう言われました。

「喜びなさい！　わたしはすべての日にあなたがたと共にいるから。」

聖なる使徒たちは喜びに満たされ、いつもの「主イエス・キリストよ、私たちをお助けください」という代わりに、こう叫びました。

「至聖なる神の母よ、私たちをお助けください！」

それ以来、彼らは自らそう信じるようになっただけでなく、聖なる教会にも、至聖なる神の母が埋葬から三日目に御子によって復活させられ、肉体ごと天に上げられたと信じるよう教えた。　再

び墓の中に入った聖使徒たちは、悲しみに暮れる人々を慰めるため、また聖母が墓から復活した確かな証しとして、そこに残されていた聖骸布を持ち帰った。

命の幕屋が死の支配下に置かれることはふさわしくなく、被造物の創造主を産み出した方が、地上の被造物と同じ朽ち果てる運命を分かち合うこともまたふさわしくありませんでした。律法の制定者ご自身が、御自身から与えられた「子は両親を敬うべし」という律法の実行者となられました。御子は、御自身の如く、汚れなき御母を尊ばれた――御自身が第三日に栄光のうちに復活し、その後、清らかな御肉体を携えて天に昇られたように、御母をも第三日に栄光のうちに復活させ、天の住まいへと御自身のもとに迎え入れられたのである。　聖ダビデもこれについて予言し、「*主よ、あなたの安息の場所にお立ちください。あなたは、あなたの力の箱です*」（詩編131:8）と語りました。　その預言の言葉は、主の復活と、主による御母の復活によって成就した。――石に彫られた聖母の空の墓は、御子と同様に、今なお保存されており、信者たちの敬虔な崇敬の対象となっている。

主は、御自身の特別な御計画により、聖トマスが聖母マリアの御永眠の日に到着するのを遅らせ、彼のために墓が開かれるようにされた。こうして教会は、かつて同じ使徒の不信仰を通じてキリストの復活を確信したのと同様に、聖母マリアの復活を確信することとなった（ヨハネ20:24–31）。――こうして、私たちの聖母マリアの御眠りと、その汚れなき御体の埋葬、その栄光に満ちた復活、そして肉体ごと天に上げられたという荘厳な確証が成し遂げられたのである。

これらすべての驚くべき奇跡と神の神秘が終わると、聖なる使徒たちは再び雲に運ばれ、それぞれが福音宣教の際に出発した国へと戻っていった。

聖アンブロシウスは、この世における私たちの御母の生涯について語る際、至聖なる神の御母の驚くべき内面の資質を次のように描写している。

「彼女は肉体のみならず、霊においても処女である。心は謙虚で、言葉は穏やかである。彼女の言葉は神の知恵に満ちている。彼女はほぼ常に聖書を読み、労苦に疲れを知らない。会話においては貞潔であり、人々と話すときも、あたかも神の前で話すかのように振る舞う。彼女は誰をも傷つけることは決してなく、すべての人に善を願った。　たとえ貧しい者であっても誰をも軽んじず、誰をも嘲笑することもなく、目にするすべてのものを御自身の愛で包み込みました。御口からは、恵みをもたらさない言葉が決して発せられることはありませんでした。あらゆる行いにおいて、御方は至高の貞潔の模範を示されました。　その外見は、内面の完全さ――すなわち、慈愛と悪意のなさ――を映し出していた。

聖アンブロシウスはこのように語っている。聖母の心の聖さと外見についての記述は、エピファニオスやニキフォロスにも見られる：

――いずれにせよ、彼女は尊厳ある威厳と一貫性を保っていた。話すことはごくわずかであり、必要なこと、善いことについてのみ語った――彼女の言葉は耳に心地よかった。誰に対しても相応の敬意を払い、一人ひとりとその人にふさわしい会話を交わし、笑ったり、動揺したり、ましてや怒ったりすることはなかった。　身長は平均的だった。肌の色は小麦の粒のような色で、髪は明るい金髪で、やや金色の輝きを帯びていた。眼差しは鋭く、洞察力に富んでいた。瞳の色はオリーブの実を思わせ、　眉はわずかに下がり、濃く、鼻は中くらい、口元はバラの花のような色合いで、言葉遣いは優しかった。顔は完全な丸顔ではなく、手や指は細長い。彼女には傲慢さが微塵もなく、すべてに素朴さが漂い、偽りは一切なかった。彼女はあらゆる虚飾を排し、同時に至高の謙虚さの模範を示していた。　彼女の衣服は質素で、いかなる人工的な装飾もなかった。それは、今日まで残されている彼女の頭巾が物語っている通りである。要するに、彼女のすべてに、彼女を貫く神聖な恵みが現れていたのである。

このように、ニキフォロスとエピファニオスは、地上の生涯における至聖なる神の母の精神的・肉体的な姿について語っている。

さて、今や天の住まいに住まわれ、神の御座の右に立たれている神の母については、天の御霊たち、そして聖母の御前に立ち、神と聖母の両方を直視してその御姿を仰ぎ見ている義人の魂たちだけが語ることができる。彼女たちの聖性にふさわしい形で、彼女について語ることができるのは彼らだけなのである。　私たちもまた、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美するとともに、神にふさわしくその至聖なる母をも賛美し、すべての世代にわたり永遠に賛美され、祝福される御母に、心を込めて礼拝を捧げます。

至聖なる神の母の生涯における個々の出来事については、その誕生の日から、受胎、誕生、神殿への奉献、受胎告知、そしてキリストの降誕や主の奉献といった、彼女に捧げられた特別な祝日に記されています。　ここでは、彼女の不滅の眠りについての叙述に続き、その生涯の物語を補完するために、キリストの昇天後、私たちの御母がどこで、どのように暮らされたかについて述べたいと思います。

聖福音記者ルカは『使徒言行録』の中で、主が天に昇られた後、弟子たちはオリーブ山からエルサレムに戻り、　（キリストの最後の晩餐が行われた）上階の部屋に入ると、*「彼らは皆、心を一つにして祈りと懇願に専念し、数人の女性たちや、イエスの母マリアと共にいた」*（使徒言行録1:13–14）。　イエス・キリストの昇天後、聖母マリアは弟子たちにとって唯一の慰めであり、悲しみの中の喜びであり、確固たる信仰の導き手であった。　なぜなら、神の母が御心に留めておられた（ルカ2:19）すべての言葉と奇跡的な出来事――ガブリエルによる、キリストの無原罪の受胎と処女の胎からの朽ちることのない誕生に関する喜びの告知から始まり、主の幼少期、そしてヨハネによる洗礼までの生涯に至るまで――　――これらすべてを、彼女は御子の弟子たちに明かしました。聖霊から豊かな啓示を受け、また主が世に現れる日までキリストの生涯において行われたすべての奇跡的な御業の証人であった神の母は、救い主の洗礼に至るまでの生涯について詳細に語り伝えることで、聖なる使徒たちの信仰を強めました。　すべての信者たちは、前述の部屋にとどまり、主が父から約束された聖霊の賜物を受け入れる準備を整えながら、絶え間なく祈りを捧げていました。そして、聖霊降臨の時――主の昇天から11日目に、　――聖霊が火の舌の形で使徒たちの上に降りた時（使徒言行録2:1–4）、父から遣わされた慰め主（ヨハネ14:16）は、まず無原罪の聖母の上に留まり、彼女はこれまで、聖霊が絶えず宿っていた、聖霊にふさわしい神殿であった。　聖霊の賜物は、聖なる使徒たちよりもはるかに豊かな量で、この至福の聖母の上に注がれました。それは、大きな器ほど多くの水を収容できるのと同様に、聖母マリアは、　聖霊の賜物に最も満ちた器であり、それは彼女が使徒たち、預言者たち、そしてすべての聖人たちよりも高きお方であるからであり、教会が彼女にこう呼びかけるように：「まことに、清きおとめよ、あなたはすべての人よりも高きお方です」。それゆえ、彼女は聖霊の賜物を誰よりも多くその内に受け入れたのである。

神の母は、エルサレムで最も高い場所であるシオンの山にある、聖ヨハネ・テオロゴスの家に住んでおられました。それは、主が十字架の上から、最愛の弟子を指さして御母に*「女よ！　見よ、あなたの息子だ」*と仰せになり、その弟子に*「見よ、あなたの母だ」*と仰せになった（ヨハネ19:26–27）その時から、ヨハネは至聖なる乙女を自分のもとに迎え入れ、まさに自分の母として彼女に仕えたのである。　――聖霊の降臨後、聖なる使徒たちは直ちに世界中に散らばって福音を宣べ伝えることはせず、使徒行伝からも明らかなように、長い間エルサレムにとどまっていた。 そこには、 による聖なる最初の殉教者ステファノの殺害（使徒行伝7:59–60）の後、*「エルサレムの教会に激しい迫害*が起こり、*使徒たちを除くすべての者がユダヤとサマリアの各地に散らされた」*（使徒行伝8:1）と記されている。　神の力に守られたキリストの弟子たちは、主の昇天の時から、*「ヘロデ王が教会の者たちの一部に手を下して害を加えようとした」*（使徒行伝12:1）日まで、約10年間エルサレムにとどまった。　確かに、この期間中、聖なる使徒たちは一時的に他の国へ赴くこともあった。例えば、ペテロとヨハネが共にサマリアへ行った（使徒8:14–15）、あるいはペテロが単独でリドへ行き、

そこで8年間も麻痺に苦しんでいたエネアを癒した（使徒9:32–34）、また、ヨッピでは亡くなったタフィラを復活させ（使徒行伝9:36–43）、 ケサレアでは百人隊長コルニリウスを洗礼し（第10章）、アンティオキアでは自身の司教職の最初の座を設立した。あるいは、ヨハネの兄弟ヤコブがスペインへ赴いたが、その後彼らは再びエルサレムへ戻った。 宣教の初期、聖なる使徒たちは、主にイスラエルの民の救いに奉仕することを望みつつ、同時に、聖ヨハネス・ダマスコスが次のように謳うように、すべての教会の母であるエルサレムの最初の教会を確立した。 「喜びなさい、聖なるシオンよ、諸教会の母、神の住まいよ。あなたは、最初に罪の赦しを受け入れたのだから」。同時に、彼らはできるだけ頻繁に神の母に会い、彼女から教えを請いたいと願っていた。 聖使徒たちは、彼女をあたかもキリストの代理人のように崇め、神の母の尊く栄光に満ちた御顔を、キリストご自身の御顔として仰ぎ見、永遠の処女の慈愛に満ちた御言葉に耳を傾けるたび、言い表せない霊的な喜びに満たされ、その御言葉の甘美さによって、苦難や不幸の苦さを忘れていた。 それゆえ、遠く離れた国々からキリストを信じた多くの人々が、神の母に会って、聖なる知恵に満ちた御言葉を聞くためにエルサレムを訪れた。キリストとその至聖なる母に関する栄光が宇宙の隅々まで広まり、多くの人々をエルサレムの至聖なる処女のもとへと引き寄せたことは、 これは、聖イグナティオス・テオフォロスからアンティオキアの聖ヨハネ・テオロゴスへの書簡からも明らかである：

「私たちのところには」と彼は書いている、「イエスの母にお目にかかりたいと願う多くの妻たちがいます。彼女たちは、あなたのもとを訪れて母に会いたいと常に切望しており、主イエスを育てたその胸に寄り添い、母からいくつかの秘め事を教えてもらいたいと願っているのです。 私たちのところでは、彼女は神の母であり、恵みと徳に満ちた聖母として崇められています。 彼女については、苦難や迫害の中でも喜びに満ち、貧困や欠乏の中でも悲しむことなく、自分に害を及ぼす者たちに対して怒るどころか、むしろ彼らに恩恵を施すと伝えられています。喜びの出来事においては、彼女は柔和であり、貧しい人々に対して慈悲深く、できる限り彼らを助けています。 一方、私たちの信仰に敵対する者たちに対しては、確固たる姿勢で立ち向かわれる。御方は私たちの新しい敬虔の師であり、すべての信徒にとってあらゆる善行の導き手である。特に謙遜な人々を愛し、御自身もすべての人に対して謙遜である。御方を見た者は皆、御方を称賛する。ユダヤ人の律法学者やパリサイ人たちが御方を嘲笑したとき、御方はなんと謙遜であったことか！ 私たちには、完全に信頼に値する人々から、イエスの母マリアにおいては、その聖性ゆえに、人間性が天使的な性質と結びついているかのように見えると語られました。これらすべては、それを聞く私たちの中に、天上の――そう言ってもよいでしょう――驚くべき、至聖なる奇跡を目撃したいという計り知れない願望を呼び起こします。

別の手紙の中で、同じ聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は、再び聖ヨハネ・テオロゴス（神学者）に次のように書いています：

――機会があれば、私はあなたのところへ赴き、エルサレムに集う信徒たち、とりわけイエスの母にお目にかかりたいと思います。彼女については、高潔で親しみやすく、すべての人を驚嘆させ、誰もが彼女に会いたいと願っていると言われています。そもそも、真の神を産み出された聖母に会い、彼女と語り合いたいと願わない者がいるでしょうか?

聖イグナティオが神学者ヨハネに宛てたこれらの書簡から、聖人たちが、神の生ける聖所である無原罪の聖母マリアに会いたいとどれほど強く願っていたか、また、その御姿を見る恵みにあずかった者たちが、自分たちをこの上なく幸福だと考えていたことが容易に理解できる。 まことに、救い主キリストを通して彼女を仰ぎ見た目々は幸いであり、また、霊的な命へと蘇らせる彼女の言葉を、その尊き御口から聞く恵みにあずかった耳もまた幸いである！

彼らはなんと大きな喜びと恵みを受けたことか！

主は、その御清き母を地上に残されたのは、まさに、彼女の御臨在と導き、教え、そして御子と神への温かい祈りによって、戦いを続ける教会が増し加わり、確固たるものとなり、主のために自らの命を捧げるという大胆さに至るまで成長するためであった。　神の母はすべての人を力づけ、聖霊による喜びをもってすべての人を慰め、すべての人のために祈られました。　聖なる使徒たちが牢獄に閉じ込められたとき、神の母は心を動かされ、彼らのために祈りました。すると、主によって天使が彼らのもとに遣わされ、夜中に牢の扉を開けて彼らを外へ連れ出しました（使徒行伝5:18–19）。 聖なる第一殉教者ステファノが に処刑へと連行されたとき、神の母は遠くから彼の後を追って行き、聖ステファノがヨサファトの谷、ケドロン川沿いで石打ちに遭い始めたとき（使徒行伝7:57–60）、　彼女は神学者ヨハネと共に、遠く離れた一つの丘の上に立ち、そこから彼の最期を見守り、主がその苦しむ者を強め、その魂を御手の中に迎え入れてくださるよう、神に熱心に祈りました。　「*サウロが教会を迫害していた*」（使徒言行録8:3）とき、信者たちを追い回していた彼のために、神の母は主に向かって、これほど温かい涙を流して祈った。その結果、彼は貪欲な狼から柔和な子羊へ、敵から使徒へ、迫害者から全宇宙の弟子であり教師へと変えられたのである。　そして、最初の教会は、乳飲み子が母から受けるように、聖母マリアからどれほどの恵みを受けたことか。　この尽きることのない泉から、どのような恵みを汲み取らなかったというのでしょうか。教会の育成と、力強い成熟への導きは、聖母の慈しみと恵み深い働きなしには成し得なかったのです。教会は、地獄の門さえもそれを打ち破ることができないほどに強固になりました（マタイ16:18）。 それゆえ、ダビデの言葉にあるように、聖母ご自身も、子供たちを喜ぶ母のように喜び（詩編112:9）ました。　御母は、教会の子供たちが絶えず増え続けているのをご覧になっていました。そう、初めには聖使徒ペトロの説教によって3000人が改宗し（使徒言行録2:41）、その後5000人（使徒言行録4:4）、そしてますます多くの人々が加わっていったのです。　聖なる使徒たちは、エルサレムで福音を宣べ伝えて戻ってくる際、キリストの教会が全宇宙に広がっていることを、至聖なる神の母にも語りました。キリスト教の宣教の成功は、彼女を霊的な喜びで満たし、御子であり神である方への賛美を捧げるよう促しました。

しかし、やがて教会はヘロデによる迫害に見舞われた。彼はスペインから戻ってきたヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺害し、続いてペトロを拘束して、彼にも同様の死を遂げさせるつもりで牢獄に投獄した（使徒言行録12:1–4）。その後、天使によって聖ペトロが牢獄の束縛から奇跡的に解放されると、使徒たち自身もユダヤ人による激しい迫害を避けるためにエルサレムを離れる必要に迫られた。彼らはくじを引き、誰がどの国で宣教を行うかを決めて、世界中に散らばっていった。　しかし、散らばる前に、聖なる使徒たちは、至る所で一致してキリストへの聖なる信仰を宣教し、広めるために、信仰告白を策定した。各人はくじで決まった場所へと去っていった。エルサレムに残ったのは、ただ一人、神の兄弟である聖ヤコブだけであり、彼は主ご自身によってエルサレムの司教に任命されていた。　迫害を避けて、聖ヨハネ・テオロゴスもまた、彼が養子として迎えられた神の母と共にその地を去りました。彼らは、ユダヤ人たちの激しい迫害と拷問に耐えかね、その怒りが収まるまでエルサレムを離れました。　しかし、時間を無駄にしないため、神の母と聖ヨハネ福音書記者はエフェソへと向かった。そこへは、神学者であるヨハネがくじ引きで割り当てられた場所であった。　聖母マリアと聖ヨハネがエフェソに滞在したことは、以下の事実によって明確に裏付けられている。すなわち、ネストリウスに対抗してエフェソで開催された第三回全地公会議の教父たちから、コンスタンティノープルの聖職者たちへの書簡が存在する。この書簡には、次のような一節がある：　「邪悪な異端の始祖ネストリウスは、かつて聖ヨハネ・テオロゴスと聖母マリアが滞在されたエフェソスにおいて、聖なる教父たちおよび公会議の司教たちによって（裁判に）召喚されたが、自らの邪悪な良心に責められ、自らを破門したかのように、彼らのもとへ現れることを敢えてしなかった。　それゆえ、三度の召喚の後、彼は聖公会議の公正な裁きにより有罪とされ、聖職から罷免された」。エフェソス

における聖母マリアと福音記者ヨハネの滞在に関するこれらの言葉から、至聖なる聖母がキリストの愛する弟子と共に、実際にエルサレムを離れ、しばらくの間エフェソスで過ごしたことが見て取れる。　そして、エフェソスだけでなく、キリストの教えの光に照らされた他の都市や国々にも、神の母は訪れました。伝承によれば、彼女はアンティオキアの聖イグナティオス・テオフォロスのもとを訪れ、訪問に先立って、自身の旅について次のような知らせを送ったとされています。　「ヨハネと共に、あなたとあなたの羊の群れに会いに参ります」。また、至聖なる神の母は、キプロス島[5564]　で、そこで司教の務めを果たしていた「四日間のラザロ」のもとを訪れ、アトス山にも滞在したと伝えられています。これについては、アトス山の修道士ステファノスが記しています。

私たちの主イエス・キリストが天に昇られた後、聖なる使徒たちは神の母と共にシオンに離れずに留まりました。そこで彼らは、約束された聖霊を受けるまでエルサレムを離れてはならないと命じられた主の御言葉に従い、慰め主を待ち望んでいました（ルカ24:49）。　キリストの弟子たちは、神の福音を宣教するために、具体的に誰が、どの国に遣わされるかをくじ引きで決めました。聖母マリアはこう言われました。

「私も福音宣教に参加したい。そして、神が示される国を受け取るために、皆さんと共にくじを引きたい。」

神の母の御言葉に従い、聖なる使徒たちは畏敬と畏怖の念をもってくじを引いたところ、彼女にイヴェル地方が当たった[5565]。至聖なる神の母は喜びをもってそのくじを受け入れ、直ちに――炎の舌の形をした聖霊が降臨すると――イヴェル地方へ向かおうとしましたが、神の御使いは彼女にこう言いました。

「今はエルサレムを離れるな。時が来るまでここに留まりなさい。あなたに割り当てられたその地は、終わりの日に光に満ち、あなたの支配がそこに確立されるだろう。しばらく時が経てば、神があなたを導かれる地で、福音を宣べ伝える務めがあなたを待っている。」

こうして、至聖なる神の母は、かなり長い間エルサレムに留まられた。

ラザロはキプロス島に住んでおり、そこで聖使徒バルナバによって司教に叙階された。彼は、長い間会っていなかった私たちの主の聖母に会いたいと強く願っていたが、ユダヤ人たちを恐れてエルサレムへ行くことをためらっていた。　このことを知った神の母は、ラザロに手紙を書いた。その中で彼女は彼を慰め、キプロスで彼を訪ねるために船を送るよう命じた。しかし、聖母ご自身は、自分のためにエルサレムに来るようとは命じなかった。　その手紙を読んだラザロは、大いに喜び、同時に聖母の謙遜さに感嘆した。彼は少しも躊躇することなく、返事の手紙と共に、聖母を迎えに行くための船を送り出した。　至福の聖母は、キリストの愛弟子ヨハネや、敬虔に彼らに付き添う他の者たちと共に船に乗り込み、皆でキプロスへと向かった。しかし、突然吹き荒れた逆風により、船はアトス山の近くにある港へと追い込まれた。　これこそが、天使が聖母に語った「短期間の伝道活動」であった。アトス山全体[5566]　は偶像で溢れかえっていた。ここにはアポロンの巨大な神殿と聖域があり、この場所では占いや魔術、その他の悪魔的な儀式が行われていた。　すべての異教徒たちは、この場所を神々に選ばれた聖地として深く崇めていた。全宇宙から人々が礼拝のためにここに集まり、占い師たちから自らの問いに対する答えを得ていた。そして、至聖なる聖母マリアが乗った船が埠頭に入港したとき、すべての偶像はたちまちこう叫んだ。

「アポロに惑わされた者たちよ、皆、山から降りてクリメントの埠頭へ行き、偉大なる神イエスの母マリアを出迎えよ」（こうして、偶像の中に自らの意志に反して閉じ込められていた悪霊たち

[5564] 地中海の北東端に位置する島。

[5565] 現在のジョージア。

[5566]　アトス山（アフォン）――エーゲ海に突き出た細長い山岳半島で、ギリシャ正教の修道生活の中心地として知られる。この地での修道生活は古代に始まったが、シリアやパレスチナよりは若干遅かった。

は、神の力に駆り立てられて真理を告げ知らせた。それは、かつてゲルゲセンの地で主に向かって叫んだ者たちのように：　*『神の子イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。時期尚早にここに来て、私たちを苦しめるのですか』*（マタイ8:29）。

これを聞いた民衆は驚き、急いで海辺のその埠頭へと向かった。船と神の母を見かけると、彼らは彼女を敬意をもって迎え、集まってこう尋ねた。

「どのような神をお産みになったのですか？　そのお名前は？」

至聖なる神の母は、その神聖な口を開き、キリスト・イエスについてすべてを詳しく民に告げられた。　人々は皆、地にひれ伏して、彼女から生まれた神に礼拝を捧げ、その御子を産まれた彼女に深い敬意を表した。そして、信仰を抱き、洗礼を受けた。というのも、聖母マリアがこの地で多くの奇跡を行われたからである。洗礼の後、聖母は、船で彼女に同行していた者の一人を、新たに信仰を得た人々の指導者兼教師に任命し、心から喜びながらこう言われた。

「この地が、私の御子であり、私の神である方から私に与えられた私の分となるように。」

この言葉の後、至聖なる聖母は人々を祝福し、再びこう言われました。

「神の恵みが、この地と、ここに暮らし、信仰と畏敬の念をもってわが子であり神である方の戒めを守る人々に留まりますように。彼らは、過酷な労働をすることなく、生活に必要なものをすべて豊かに得るでしょう。彼らには天の命が授けられ、世の終わりまで、わが子の慈しみはこの地から離れることはありません。　私はこの地の守護者となり、神の前でこの地のために温かく執り成す者となるでしょう。

そう告げると、神の母は再び民を祝福し、ヨハネや彼女に同行していた者たちと共に船に乗り込み、キプロスへと出航した。　彼女はラザロが深い悲しみに沈んでいるのを見つけた。聖母マリアの旅はあまりにも長く、彼は嵐のために遅れが生じたのではないかと恐れていたからである。アトス山で神の御心により起こった出来事については、彼には知らされていなかったのだ。　聖母マリアは、その到来によって　、彼の悲しみを喜びへと変えた。彼女は彼への贈り物として、自ら彼のために作ったオモフォールとポルーキを持参し、エルサレムとアトス山で起こったすべての出来事を彼に語った。そして、彼らはすべてのことについて神に感謝を捧げた。　キプロスにしばらく滞在し、キプロス教会のキリスト教徒たちを慰め、彼らに祝福を与えた後、神の母は船に乗り込み、エルサレムへと旅立った。（ここまで、アトス山の修道士ステファンによる記述）。

前述の諸国を訪れた後、聖母マリアは再びエルサレムにある聖福音記者ヨハネの家に身を寄せました。全能なる神の御手は、神の子と彼を信じる者たちに対して絶えず敵意を抱き、神殺しのシナゴーグによる嫉妬に満ちた陰謀から、聖母を守り続けました。　もちろん、悪意に満ちたユダヤ人たちは、イエスの母を生かしておこうとはせず、いかなる手段を用いても彼女を滅ぼそうとしたであろう。しかし、神の特別な御加護が、生ける神の箱である彼女を覆い、不信仰者たちの手が彼女に触れることのないように守ったのである。　かつて、彼女の御子である私たちの神、キリストは、ナザレのシナゴーグで説教をした後、怒りに満ちたユダヤ人たちに山の上へと連行され、そこから突き落とされようとしたとき、　御子は無傷のまま彼らの間を通り抜けた。ユダヤ人たちは御子を見ながらも、御子に手をかけたり、触れたりすることさえできなかった。なぜなら、神の力が彼らを後ずさりさせ、その位置に留まらせたからである。それは、神の御子の受難の時がまだ来ていなかったからである（ルカ4:29–30）；　主は、御自身の至聖なる母に対しても同じ御業を示され、ユダヤ人たちが企てた陰謀を阻止し、彼女に対する彼らの計画を打ち砕かれた。ユダヤ人たちは、神の母を捕らえ、拷問にかけて殺そうと何度も試みたが、何も成し遂げることができなかった。　これほど激しい憎しみと敵意に囲まれながら、聖母マリアはエルサレムで、まるで狼の群れの中の羊、いばらの中のユリのように暮らされ、ご自身の先祖ダビデの言葉を、まさに御自身に実現した通り、しばしば繰り返されました。*「主は私の光、私の救い。私が誰を恐れるべきか？　主はわがいのちの砦。誰を恐れることがあろうか。悪者や敵、敵対者たちが、わが肉を食い尽くそうと、わたしに襲いかかってきても、彼ら*

自身が躓いて倒れる。軍勢がわたしに対して立ち向かおうとも、わが心は恐れない。戦いがわたしに起ころうとも、その時こそ、わたしは希望を持つ」（詩編26:1–3）、なぜなら、あなた、わが子、わが神よ、あなたが私と共におられるからです。――聖ディオニシオス・アレオパゴスは、聖使徒パウロによってアテネでキリストに改宗し、三年間彼に付き従い続けた後、聖母マリアに拝礼するために彼女を訪ねました。 彼は神の母に会いたいと強く願い、そのため、回心してから3年後、師である聖使徒パウロの祝福を受けてエルサレムを訪れました。そして、至聖なる神の母を目の当たりにしたとき、彼は大きな霊的な喜びに満たされました。　聖ディオニシオス・アレオパゴスは、聖使徒パウロへの書簡の中で、聖母マリアへの参拝について次のように記している。

「私にとって、私たちの偉大なる導き手よ、疑いようもなく、　――神の御前で申し上げます――至高の神以外に、これほど神聖な力と驚くべき恵みに満ちたものは存在し得ないことは疑いようもありませんでした。しかし、人間の知性では、私が、すべての天の天使たちをも聖性において凌駕する、尊き御姿の、私たちの主イエス・キリストの至聖なる母を目撃したことを理解することは不可能です。　これは、神の恵みと使徒の位という栄誉、そして、最も慈悲深い聖母ご自身の測り知れない慈愛と憐れみによって、私に授けられたものでした。私は再び、神の全能の前、救い主の恵みの前、そして主の母である聖母の偉大なる栄光の前で、　御母である聖母の偉大なる栄光の前で、改めて告白する。すなわち、私が、福音書記者および預言者たちの筆頭であり、肉体にあってなお天の太陽のように輝くヨハネと共に、美しき御姿の聖母マリアのもとへ導かれたとき、私の外側を偉大なる神聖な光が包み込み、私の魂を照らし出した。　その際、私はあまりにも素晴らしい芳香を感じ、私の霊と肉体は、この栄光の現れと永遠の至福の予兆に耐えきれないほどであった。その栄光と彼女の神聖な恵みによって、私の心と霊は力尽きてしまった。　最も尊き処女の胎内に宿られた神に誓って、もし新たに啓発された私の魂が、あなたの神聖な教えと律法を心に留めていなかったならば、私は彼女を真の神として認め、ただ唯一の神にのみふさわしい礼拝をもって彼女を崇め奉ったであろう。神に称えられし人々のいかなる栄誉や栄光も、当時、不適格な私が授かったあの至福には及ばない。その時は、私にとってこの上ない至福の時であった。　至高にして至善なる私の神、神聖なる聖母、使徒たちの中で偉大なるヨハネ、そして教会の栄光であり不敗の指導者であるあなたにも、私にこれほど大きな恩恵を慈しみ深く授けてくださったことに感謝いたします。

聖ディオニシオス・アレオパゴイテスのこの書簡から、地上の生涯において、私たちの至聖なる御母の御顔がどれほど神の恵みに照らされていたか、また、御母を肉眼で見た人々の魂がいかに啓発され、その心がどれほどの霊的な喜びで満たされていたかが、はっきりと見て取れます。　彼女のもとには、至る所から大勢の、新たに啓蒙された男女が集まってきました。　真の母として、彼女はすべての人を平等に、　、偏りなく受け入れ、その恵みの寛大さをすべての人に注ぎました。病める者には癒やしを、弱き者には健康を、悲しむ者には慰めを与え、また例外なくすべての人に、信仰における確固たる確信、希望における揺るぎなき強さ、そして愛における神聖な喜びを与え、罪人に対しては改心を授けました。

聖ヨハネの家に住まわれていた間、至聖なるおとめは、愛する御子であり神である方が、御自身の足跡と御自身の血を流すことによって聖別された場所を頻繁に訪れました。　こうして、彼女はベツレヘムを訪れました。そこでは、言葉に尽くせないほどにその処女性を守り抜いた結果、彼女からキリスト・神が誕生したのです。しかし、とりわけ頻繁に、神の母は、私たちの主が御心によって苦難に遭われた場所を訪れました。母なる愛が彼女を駆り立て、そこで彼女はあふれんばかりの涙を流し、こう語りました。

「ここで、私の最愛の御子が鞭打たれ、ここで茨の冠を戴き、ここで十字架を背負って歩み、ここで十字架につけられたのです。」

また、墓の前では、聖母は言葉に尽くせないほどの喜びに満たされ、喜びの涙を流しながらこう叫ばれました。

「そして、ここで御子は葬られ、三日目に栄光のうちに復活されたのです。」

これに加え、次のような報告もある。ユダヤ人の中には、イエスの母マリアが毎日ゴルゴタへ行き、彼女の息子イエスが葬られた墓の前でひざまずき、泣き、香を焚いていると、大祭司や律法学者たちに密告した者たちがいた。　そこで彼らは、キリスト教徒の誰もその場所を通れないよう、警備を配置した。　ここから、すでに当時、敬虔なキリスト教徒たちが聖地を訪れ、そこで私たちのために神の御心により苦難に遭われたキリスト・神を礼拝するという敬虔な慣習が始まっていたことがわかる。この点における最初の模範を示されたのは聖母マリアご自身であり、他の聖なる女性や男性たちもそれに倣ったのである。　かくして、悪意と殺意に満ちた祭司長や律法学者たちは、イエスの墓に誰も近づけないよう、またその母を殺害するよう命じられた警備隊を配置した。しかし、神は警備隊の目をくらませ、彼らがキリスト・イエスの母が墓にやって来るのを見ることができないようにされた。　そして、至福の聖母が、いつもの習慣に従って墓を訪れたとき、警備兵たちは彼女も、彼女と共にいた人々も見ることはできませんでした。長い時間が経った後、彼らは墓を離れ、大祭司や律法学者たちに対して、イエスの墓に近づいた者を誰も見なかったと誓って断言しました。　至聖なる神の母は、また、私たちの主が天に昇られたオリーブ山にも頻繁に足を運ばれました。そこで、ひざまずき、石に刻まれたキリストの足跡に口づけをされました。その際、神の母は激しい涙を流しながら、主が彼女をも御許に迎えてくださるよう祈られました。もちろん、　聖使徒パウロよりもはるかに強く、*「この世を去ってキリストと共にいることを切望していた」*（フィリピ1:23）のであり、ダビデの言葉をしばしば繰り返していました。*「いつ、神の御前に現れることができるだろうか！『私の涙は、昼も夜も私の糧であった』*（詩編41:3–4）――愛する御子に会えるのはいつだろうか？いつ御父なる神の右に座しておられる御方の御許へ行けるのだろうか？（マルコ16:19）いつ御栄光の御座の前に立つことができるだろうか？　いつ御顔を仰ぎ見て満ち足りることができるだろうか？ああ、至甘美なるわが子、わが神よ！シオンを憐れむ時（詩篇50:20参照）――今こそ、この世の悲しみの谷で、あなたの御顔を見ることなく、今に至るまで嘆き続けている、あなたの母である私を憐れんでください。　この肉体という牢獄から、私の魂を解き放ってください。鹿が水の泉を慕うように、私の魂もまた、神よ、あなたを慕い求めています。あなたの栄光が私に現れるとき、その喜びを味わいたいのです（詩編41:2）。至聖なるおとめは、時折、オリーブ山にかなり長い間留まることがありました。山のふもとにはゲッセマネの園と、聖ヨハネ・テオロゴスに相続されたゼベダイの小さな領地がありました。　ゲッセマネの園で、私たちの主は、自発的な受難の前に、血の汗を流すほどに祈り、天の御父の前でひざまずき、顔を地に伏せられました（マタイ26:36–44）。ここ、まさにこの場所で、御母マリアもまた、ひざまずき、顔を地面につけ、涙で大地を濡らしながら、温かい祈りを捧げられました。そしてここで、御母は御自身の天使を通じて主から慰めを受け、まもなく天に召されることを告げられたのです。　ギリシャの歴史家ゲオルギー・ケドリンの証言によれば、至聖なる神の母は、その最期を迎える前に天使から二度現れを受けました。一度目は永眠の15日前、二度目は3日前でした。聖母は天使から楽園のナツメヤシの枝を受け取り、それを聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネが、聖母の寝床の前まで運んだ。　サルディスのメリトン司教など一部の人々は、キリストの愛する弟子が聖母マリアの永眠の前にエフェソスへ退き、そこから他の使徒たちと同様に、ただ彼らより先に、雲に包まれて天に上げられ、聖母マリアの埋葬の場へと連れて行かれたと伝えている。　しかし、メタフラストやソフロニオスといった他の人々は、聖ヨハネ・テオロゴスが、神の恵みに満ちた母――彼を養子として迎え入れてくださった方――から決して離れることはなく、真の息子として、聖母が亡くなるその日まで、自らの家に彼女を住まわせ、仕えていたと、迷いなく断

言している。 ただ時折、ごく短時間だけ、彼は近隣の地域を訪れていた （前述の『使徒行伝』 にもあるように、聖ヨハネ・テオロゴスは使徒ペトロと共にサマリアに滞在していた）が、それは神の母ご自身の同意と祝福を得て行われたものであり、彼は直ちにエルサレムへ戻って母のもとへ帰った。そして、彼が戻るまでの間、聖母マリアに仕えていたのは、神の兄弟である聖ヤコブであり、彼は自らの司教区であるエルサレムを決して離れることはなかった。もし、聖ヨハネ・テオロゴスが他の聖使徒たちと同様に雲に包まれて天に上げられたという説に同意するとしても、それは間違いなく、エルサレムに最も近い地域からであったに違いない。

8月15日の至聖なる聖母マリアの被昇天の荘厳な祝祭は、敬虔なギリシャ王マウリキオスの治世中に制定された[5567] 。 – 神の母が地から天へと栄光のうちに召されたことを喜び祝うにあたり、彼

[5567] ユウェナリスが、伝承に基づき、マルキアヌス帝（450–457年）の前で、当時広まっていた「聖母マリアが肉体を持ったまま奇跡的に天に昇った」という説話の信憑性を主張したという、信憑性のある伝承が存在する。 彼はさらに、コンスタンティノープルへ聖母マリアの埋葬用布を送り、それらはマルキアヌス帝の治世初期に、皇后プルケリアが自ら建設したヴラケルナの聖母マリア教会に安置された。 ユウェナリウスに関するこの伝承は、10世紀のヴァシレイオスの月暦に7月2日として記録されている。その著者は、皇帝本人でなかったとしても、コンスタンティノープルの住民であり、信頼できる情報源に基づいて、ヴラヘルナ聖堂にある埋葬用シーツについて間違いなく知っていた。このことについては、歴史家ニキフォロス・カリストス（14世紀）が詳しく述べている。 ここから、マルキアヌスとプルケリアの治世下のコンスタンティノープルにおいて、聖母マリアの被昇天の祝祭が行われていたことが明らかであり、そのことは聖母の埋葬用布によって如実に示されていた。詩的な序文から、被昇天の祝祭がヴラヘルン教会で行われていたことが見て取れる。コンスタンティヌス大帝によって聖母マリアの庇護に委ねられ、コンスタンティヌス自身によって複数の教会が、プルケリアによって3つの教会が建設されたコンスタンティノープルにおいて、多くの聖人の祝日が祝われていた4世紀、あるいは少なくとも5世紀に、至聖なる処女の被昇天の祝典が行われていなかったとは考えにくい。 したがって、歴史家ニキフォロスの証言に基づいて、「聖母の被昇天の祝日はマウリキウス皇帝（592–602年）によって初めて制定された」とする見解は不当である。 ニキフォロスは次のように述べている。「皇帝（ユスティニアヌス）は、全世界で『主の奉献』を祝日として崇めるよう定めた。ユスティヌスはキリストの聖なる降誕についても同様の措置を講じ、その直後、マウリキウスは聖母マリアの被昇天を8月15日に祝うよう命じた」。 ニキフォロスの言葉は、マウリキウスがこの祝祭をより荘厳なものにし、何よりも8月15日という特定の祝祭日を定めた、と理解すべきである。 それまでは、1月に聖母の被昇天を祝う者もいた。古代ローマのヒエロニムスの殉教者名鑑では、聖母の被昇天は1月18日、8月15日は天への昇天として記されている。 グリゴリウス・トゥルスキウス（594年没）は、フランスでは聖母マリアの栄光ある天昇が第11ヶ月、すなわち1月（3月から数えて）に祝われていたと述べている。 コプト教およびアビシニアの文献では、1月16日が聖母の被昇天、8月16日が聖母の天昇として記されている。さらに、聖母の被昇天の祝日は、マウリキウス帝の時代より丸1世紀も前の、教皇ゲラシウス1世（492～496年）の『秘蹟書』にも記載されている。 4世紀、遅くとも5世紀には、あるローマの暦において8月16日にこの祝日が記載されており、また、キリストの降誕を除く他の主要な祝日は、古代の暦におけるその名称からも明らかなように、東方から西方へと伝わったことが知られている。聖母被昇天の祝日についても、同様に考えるべきである。 東方では7世紀初頭、エルサレム総主教モデスト（634年没）がこの祝日に説教を行った。また、同世紀あるいは8世紀初頭には、聖アンドレイ・クリテス（712年没）が、聖母被昇天に関する3つの説教の中で、この日の厳粛な祝賀について述べている。 聖母被昇天の祝日は、現存する最古の祝日用福音書である715年のものに記載されており、8世紀およびそれ以降のすべての暦に関する文献にも見られる。 「疑いなく――」と、前述の考察に続いて、著名な聖人伝学者であるウラジーミル司教セルギイは論じている――「聖母が栄光に満ちた肉体を保ったまま天に昇られたというキリスト教徒の信仰は真実である。 もし、大洪水以前の世界のエノクや、律法以前の世界の預言者エリヤが、肉体ごと天に上げられたのであれば、果たして、ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも栄光ある聖母の至聖なる肉体が、朽ち果てる運命にあるというのだろうか。殉教者や修道者の群れは、癒しの流れを注ぎ出す、芳香を放つ朽ちない聖遺物によって栄光に包まれている。 かつて無名であった彼らの多くが、長い間地中に留まった後、信者たちへの啓示や奇跡によってその遺体が発見されているのに、聖母マリアの至聖なる御体は、たとえ朽ちないものであったとしても、どこかの地中に知られざるまま隠されているというのでしょうか？ キリスト教世界のいかなる場所にも、聖母の聖遺物の断片は存在しない。それは、聖母が清らかな肉体をもって天に昇られたという信仰が極めて古く、使徒や殉教者たちの時代から受け継がれているからである。 聖母の帯や聖なる衣は、キリスト教世界が崇敬できるよう公開されている。敬虔に保管され、世界各地に分配されているそれらは、過去にも現在も奇跡を起こし続けている。数多くの聖母のイコンは至る所で、数え切れないほどの癒やしと御業をもたらしている。それなのに、聖母の聖なる御体は、地中のどこにあるのかさえ分からな

女から生まれ、天において彼女を栄光のうちに迎えられた方、すなわち、父と聖霊と共に永遠に賛美される私たちの神、キリストに栄光を捧げましょう。アーメン。

トロパリオ、第1声：

御降誕の際、処女性を保たれ、御眠りの際も世界を捨てられませんでした、神の母よ。命そのものである御母よ、あなたは命の源へと移り、あなたの祈りによって、私たちの魂を死から救ってくださいます。

コンダク、第2調：

祈りにおいて絶えることのない聖母よ、また執り成しにおいて揺るぎない希望よ、墓も死もあなたを留めることはできませんでした。なぜなら、命の母は命の御許へと移り、御胎内に宿られた永遠の処女だからです。

8月29日

8月16日（旧暦）

エデッサからコンスタンティノープルへの、人の手によらずして現れた我らの主イエス・キリストの聖像の移送

記念日8月16日

私たちの主イエス・キリストがこの地上に現れ、人々と共に暮らし、神の御国について説きながら、ユダヤや周辺諸国の町々や村々を巡り歩いていた頃、*「「人々のあらゆる病や傷を癒やしながら」」*、ユーフラテス川の向こう岸にあるシリアの都市エデッサには、アヴガルという王子が住んでいた。彼は治ることのない病、すなわちハンセン病に苦しんでいた。体の外側は青みがかった潰瘍に覆われ、内側では骨の痛みと全身の脱力感を感じていた。　アヴガルには、主イエス・キリストと、主がなさる偉大な奇跡――御言葉によってハンセン病や麻痺、あらゆる病を癒やされること――についての噂[5568]　が届いた。アヴガルは、そのような奇跡の創造主をこの目で見たいと強く願い、自分も主

い。　いや、それはあり得ない！　栄光ある殉教者たちの聖遺物は、時が経つにつれ、地上に生きる者たちの罪ゆえに、時に火や洪水、地震、あるいは野蛮人による冒涜といった、この世の運命にさらされることがある。　しかし、聖母マリアの至聖なる御体に関しては、そのようなことは許されていません。その御体は、移ろいゆくこの世の偶然の変化に委ねられることもなく、また、聖人たちの御体のように、地中に埋もれてその存在が知られなくなるような屈辱を受けることもありません。その御体は、天への栄光に満ちた昇天によって、聖人たちの御体よりも比類なきほど高く掲げられているのです」。（『東方教会暦全集』第II巻。『聖なる東方』、D. B. セルギウス大主教著。ウラジーミル、1901年8月15日、323–326頁）。

[5568] キリストとアウガルスとの関わりに関する最初の伝承は、教会史家エウセビオス・パンフィルス（340年没）に見られる。彼自身の言葉によれば、彼はこの伝承を、単なる伝承だけでなく、エデッサの公文書館で発見した文書に基づいて、自身の歴史書に記したのである。　エウセビオスに続き、4世紀のエフレム・シリン、5世紀のアルメニアの歴史家モーセ・ホレン、そして6世紀のプロコピオスがこれを伝えている。5世紀のアルメニアの歴史家モーセ・ホレンは、アヴガルがイエス・キリストのことを知った経緯について、次のように記述している。　アヴガルは、フェニキア、パレスチナ、シ

から癒やしを受けられることを望んでいた。　しかし、王子は自らユダヤへ赴くことができなかったため、主イエスに願いを送り、エデッサへ来てくださるよう懇願した。　しかし、その願いが叶うかどうか確信が持てなかったアヴガル王は、熟練した画家アナニアをパレスチナへ派遣し、イコンに主の御顔を描くよう命じた。王は、病の中にあっても、キリスト・イエスの御顔の像を見るという慰めだけでも得たいと願っていた。それほどまでに、彼は耳で聞いた信仰によって、キリストへの深い愛を抱いていたのである。　アヴガルが主イエスに送った書簡は、次のようなものであった。「エデッサの君主アヴガルより、エルサレムの地で現れ、肉において喜びをもたらされた善き救い主イエスへ。

私のもとに、あなたとあなたの栄光に満ちた奇跡についての噂が届きました。あなたは、治療も薬も用いずに病を癒やし、盲人に視力を与え、　足の不自由な者に歩行の力を与え、人々から汚れた霊を追い払い、ハンセン病患者や、長年にわたり寝台に横たわっている麻痺者を清め、言葉によって癒やし、死者をよみがえらせている。あなたがこれほど驚くべき奇跡を行っていると聞き、私はあなたについて次のような二つの結論に達しました。　あなたは、天から降りてきた神か、あるいは神の子である。それゆえ、私はこのように謙虚な願いをもってあなたに訴えるのです。どうか私のところへ来て、私が長年にわたり苦しんでいるこの不治の病を癒してください。また、ユダヤ人たちがあなたを憎み、 あなたに害を加えようとしているという噂も耳にしました。 私にも、小さな町ではありますが、美しく、あらゆるものに恵まれた町があります。どうか私のところへお越しになり、この町で私と共に暮らしてください。この町には、私たち二人にとって必要なものがすべて揃っています」。

このアヴガルの使者としての使命を帯びて、画家のアナニアはエルサレムに到着した。彼は、平野で多くの人々の前で教えを説いておられる主イエスを見かけたが、人々がぎゅうぎゅうに詰めかけていたため、近づくことができなかった。　群衆が散るのを待ちながら、アナニアは地面から少し高くなった一つの石の上に立ち、　そこから、彼は救い主の顔を注意深く見つめ、その姿を描こうと試みた。しかし、アナニアにはそれができなかった。全知全能なる主は、画家の意図を良しとされず、御自身の顔を、人間の筆では表現し得ない、神聖で不可解な栄光と恵みによって変容させておられたからである。アナニアは長い間努力したが、何の結果も得られなかった。　そこで主は、使徒トマスに、岩の上に立って御顔を写し取っているその男を連れてくるよう命じられた。彼が連れて来られ、まだ何も言い始める前に、主は彼の名前を呼んでそばに呼び寄せ、その行いを指し示して、彼を「画家のアナニア」と呼び、彼をここに連れてきた理由を明かしてこう言われた。

「エデッサから私のもとに持ってきた、あなたの主君アヴガルからの手紙はどこにあるのか。」

アナニアは、主の洞察力に驚きと恐怖を覚え、直ちに王の書簡を取り出し、戦々恐々としてそれを救い主の手に渡した。主はその書簡を読み終えると、アヴガルに次のように書き送った。

「アヴガルよ、あなたは私を見ずに私を信じた。幸いな者だ。私についてこう記されている。『私を見る者は信仰を持たないが、私を見ない者は私を信じ、永遠の命を受け継ぐ』と。　あなたは、私があなたのところへ来るよう私に書き送っているが、私には、私が遣わされた目的を果たし、それを成し遂げた後、私を遣わされた父のもとへ戻ることがふさわしい。　そして、わたしが御父のもとへ上げられたとき、わたしの弟子の一人をあなたのところへ遣わす。その者は、あなたの病を完全に癒やし、あなたとあなたと共にいる者たちに（洗礼を通して）永遠の命を与えるであろう」。

リア、メソポタミアを統治するローマのトリブヌスのもとへ派遣した使節たちからキリストのことを知った。使節たちは帰路、エルサレムに立ち寄り、そこで救い主の奇跡を目撃したのである。　10世紀の著述家コンスタンティノス・ポルフィロロドス（959年没）は、「手造りなき聖像」の由来について最も詳細な記述を残しているが、彼は、エジプトへの旅から戻ったアヴガールの家臣アナニアが、アヴガールにキリストについて伝えたと記している。

アヴガルにこのようなメッセージを書き送った後、主イエス・キリストはそれを封印し、その封印にはヘブライ文字で「神の御現れ、神聖な奇跡」と刻まれていた。　その後、主はアヴガルと画家の願いを叶えるため、水を持ってくるよう命じ、ご自身の至聖なる御顔を洗われた後、差し出された四隅のある布で拭われた。そして、なんと奇跡のことか！　ただの水が絵の具へと変わり、その布には神聖な御顔の御姿が焼き付いた。この像を手紙と共にアナニアに手渡しながら、主はこう言われた。

「これを持って行き、あなたを遣わした者に渡せ。」（これは、主が苦難に遭われる前の、地上の生涯の最後の数日間のことであった[5569]。

そして、アナニアは[5570] エデッサに戻り、自分の君主のもとへ行き、布に描かれたキリストの御顔の、人の手によるものではない像と手紙を彼に手渡した。　それらを受け取ると、アヴガルは喜びに満たされ、愛を込めてそれらに口づけをした。キリストの御像にひれ伏すと、彼は即座に病の軽快を得たため、主から遣わされた弟子が彼の元に来るべき時が来るまで、彼の顔にはハンセン病の痕がほんのわずかしか残っていなかった。

主の自発的な受難、復活、そして天への昇天の後、神の恵みにより、七十人の使徒の一人である聖タダイがエデッサを訪れた。　アヴガルにキリストへの聖なる信仰を十分に教え導いた後、聖ファデウスは王を洗礼した。そしてアヴガルが聖なる洗礼槽に入り、洗礼を受けたとき、残っていたハ

5569 アヴガルからイエス・キリストへの書簡、およびイエス・キリストからアヴガルへの書簡の信憑性に対しては異論がある。彼らは次のように主張する。1）福音書はこの出来事について沈黙している。 しかし、福音書には次のように記されている。*「イエスは、弟子たちの前で、この書物に書かれていない他の多くの奇跡を行われた」*（ヨハネ20:30）。福音書によれば、イエス・キリストの評判はシリアにまで広まり、そこから病人が連れてこられた（マタイ4:24）。2) エウセビオス以前の最初の三世紀の著述家たちは沈黙している。しかし、これも最初の証拠と同様、否定的な証拠に過ぎない。キケロの『共和政』は1822年に初めて発見されたのである。東方のギリシャ人著述家たちがこの書簡を知らなかったとしても、驚くべきことではない。彼らの著作の多くは現存していないのだから。　もっとも、ゲオルギオス・シンケロスの著作には、西暦215年の項で、アフリカのユリウスがエデッサの聖人アウガルス王について語っていたと記されており、モーセ・ホレンスキュス（5世紀、第2巻第9章）の著作にも同様の記述がある。 3) 至福のヒエロニムスは沈黙を守っている。しかし、エウセビオスはヒエロニムスと同等の立場にある。彼自身、これらの文書を目撃し、自身の『教会史』の中でギリシャ語で公表した。4)　至福のアウグスティヌスは、イエス・キリストは何も書き残さなかったと述べている。これは、キリストご自身がご自身について書かれたとされる著作を根拠としたマニ教徒たちとの論争の中で述べたものであり、概して、イエス・キリストはご自身に関する教えを文書で述べたり、述べる意図を持ったりしなかったという意味であるが、これはイエス・キリストがアヴガルに宛てた短い手紙には当てはまらない。　イエス・キリストは、姦淫の女を御前に連れてきたパリサイ人たちの前で、地に向かってひざまずいてお書きになった。5)　イエス・キリストの手紙には、ヨハネへの言及がある（XX, 29）。 ヨハネではなく、イザヤの預言（6:9、50、15:65:2）を指している。6) エウセビオスによれば、イエス・キリストの没年はセレウコス朝暦340年にあたり、これはキリストの生涯の30年目（ティベリウス帝の治世15年目）にあたる。　エウセビオスは自身の暦ではなく、エデッサの暦を採用している。古代には、イエス・キリストが宣教活動の初年、すなわち生後30年に受難されたとする見解が広く持たれていた。もっとも、古代の写本における数値の誤りはよくあることである。 7) 教皇ゲラシウスは、自身の布告によってこの著作を外典であると認定した。しかし、これは単にそれが正典の書物には含まれなかったことを意味するに過ぎず、外典と認定された書物のすべてが信頼に値しないわけではない。――スラブの『ミネイ』には、使徒ファデウスがフェニキアの都市ヴィリテで永眠したと記されている。　ヒッポリュトスによる、あるいはヒッポリュトスに帰せられる使徒に関する著作では、ヴィリテでの殉教は、12使徒のうちのファデウス、あるいはユダ（6月19日）に帰せられている。

5570 コンスタンティノス・ポルフィロロドスによって記録された伝承によると、アナニアが故郷へ帰る途中、イエラポリスに到着した際、彼は町の外で立ち止まり、作りたてのレンガの山の中にキリストの御顔の像を隠した。真夜中頃、町の住民たちはその場所を取り囲む炎を目撃し、そこに隠された聖遺物を見つけた。　同時に、ある煉瓦の一つに救い主の像が浮かび上がっていることが判明した。イェラポリの住民たちはその煉瓦を保管し、アナニアを解放した。コンスタンティノスは、この煉瓦が彼の時代にもなおイェラポリに保存されていたと記している。

ンセン病の痕跡はたちまち消え去り、彼は身体も魂も完全に清く、健やかな状態で洗礼槽から出た。アヴガルと共に、彼の家族全員と街全体が洗礼を受け、エデッサでは、唯一の真の神である我らの主イエス・キリストの御名が賛美された。　エデッサの城門には、古くからある異教の神々の偶像が立っており、街に入る者は皆、それに礼拝を捧げなければならなかった。アヴガルはこの偶像をその場所から引き倒し、破壊した。その後、彼は城門の上にある石壁に、雨が降り込まないよう丸い窪みを作り、　腐らない木の板の上に、人の手によらず現れたキリストの御像を載せ、アヴガルはそれを金と宝石で飾り立て、門の上の壁に据えた。さらに、彼は金文字で次のような銘文を刻んだ。

「キリストよ、神よ！あなたを信頼する者は、決して恥をかくことはない。」

そしてアヴガーは、街に入る者も出る者も皆、キリストの神聖な御像に礼拝するよう命じた；彼は、主の御像に必ずこのような敬意を払うよう命じる法律を公布した。法律によって裏付けられたアヴガールのこの敬虔な命令は、長年にわたり遵守された。すなわち、彼と、彼の死後エデッサを統治した息子の時代、そして孫の時代においても同様であった。　その後、エデッサで統治を引き継いだアヴガールの曽孫の一人の治世下で、街には古来の異教的な不敬が再び蔓延した。この君主は堕落し、キリストから背き、偶像崇拝へと走った。　城門に掲げられ、出入りするすべての人々から崇められていた救い主の像を目にした公爵は、キリストの敵として激怒した。彼は、その神聖な像を城壁から取り外し、その場所に偶像を据えようとした。　このことを、主からの特別な啓示によって知ったエデッサの司教は、夜、聖職者たちを連れて町の門へと向かい、はしごを登って、聖なるキリストの御像の前に木油を灯したランプを置いた。　その後、司教は聖像を粘土の板で覆い、さらに煉瓦で塞ぎ、そのように塞がれた場所を白亜で覆って城壁と同じ高さに整えた――それは神の御現れによって命じられたことだった。　キリストの「人の手によらずして造られた」聖像が見えなくなると、不敬虔な王はその企てを断念した。そして長い時が経つにつれ、人々の記憶から聖像のことは消え去り、それが封じられた場所も忘れ去られてしまった。非常に長い年月が経過した後、次のようにして奇跡的な出現が起きたその日まで、誰もそのことを知らなかった。

敬虔なユスティニアヌス帝の治世中、ペルシャ王ホズロイは大軍を率いてエデッサに迫り、同地を包囲して、執拗かつ長期にわたる包囲戦を開始した。　すると、困惑と大きな恐怖に打ちひしがれ、涙ながらに神に祈りを捧げていた市民たちのもとへ、ある夜、エデッサの司教エウラヴィオスに、ある極めて清らかで、偉大な栄光に輝く花嫁が現れた。彼女は指で城門と城壁の一箇所を指し示しながら、こう言った。

「この門の上には、神の御手によらず造られた救い主キリストの御像が隠されています。それを城壁の外へ運び出せば、あなたは善行を成し遂げるでしょう。」

司教は急いで門へと向かい、城壁の指定された場所へ登ると、啓示で告げられたとおりにすべてが置かれているのを発見した。　仕切りを確かめると、それを掘り起こして板を取り除いた。すると、清く聖なるキリストの御像が無傷で、長い年月が経っていたにもかかわらず、灯油が満タンで消えていないランプが見つかった。　そして、その聖像を覆っていた板そのものに、人の手によらず、キリストの御顔のもう一つの同じ姿が映し出されていた。司教は救い主の御姿が描かれた布を取り、市民たちに見せた。すると、皆に大きな喜びが満ち、主を信頼して勇気がみなぎった。 司教は、 熱心な祈りを捧げながら、その像を城壁に沿って運び、町を包囲していたペルシャの兵士たちに救い主の御顔を現した。すると直ちに、神の力に追い立てられたペルシャ軍全体が、逃げ惑った。　こうしてエデッサは、私たちの神キリストの慈悲と、御手によらず現れたその至聖なる聖像によって、敵から救われたのである。

その後、さらに多くの年月が経過し、ギリシャでは、リカペニスとも呼ばれ、レオ・ザ・ワイズ（賢王）の息子であり自身の娘婿であるコンスタンティヌスと権力を分かち合っていたロマン・バグリアノロドスが王となっていた頃、　キリストの神聖な御顔の「人の手によらずして現れた」御姿

が描かれた聖なる布は、サラセン人に占領されたエデッサからコンスタンティノープルへと移された。当時、エデッサのあるシリア全土はすでにサラセン人の支配下にあった。　この移送は次のように行われた。ギリシャ皇帝ロマンは、コンスタンティノープルにこの計り知れない宝（御手の業によらず現れた救い主の御像）を安置したいと願い、サラセン人のエミールに対し、キリストの御像を譲り渡すよう何度も要請を送った。　しかし、エデッサのキリスト教徒たちから懇願されたエミールは、その像を譲り渡すことを拒んだため、戦争が勃発した。ローマ王はエデッサに軍隊を派遣して都市を包囲し、周辺地域を荒廃させた。そこでエデッサの人々は、ギリシャ王に戦争の終結を求める嘆願を送ったが、王は彼らにキリストの像の引き渡しを求めた。　エデッサを支配下に置いていたサラセン人のエミールは、それを無償で引き渡すことを拒んだ。　一方、キリスト教の王は、人の手によらずして現れたキリストの御像を自らの手元に置きたいという強い願いに駆られ、エミールに1万2千の銀貨を贈り、ギリシャの捕虜となっていた200人のサラセン人の貴族を解放した。さらに、王は自身の王璽で封印した書簡を添え、エデッサやその周辺の都市に対して決して戦争を仕掛けないことを約束した。　こうして望みを叶えた王は、キリストの「人の手によらずして造られた」御像を受け取り、それに加えて、前述の通り、我らの主イエス・キリストがエデッサの君主アヴガルに書き送った書簡も併せて受け取った。聖職者やその他の高潔な聖職者たちの手によって、その聖なる御像はコンスタンティノープルへと運ばれた。　道中およびコンスタンティノープル市内において、この尊い聖像からは多くの奇跡が起こった。あらゆる病が癒やされ、盲人は目が見えるようになり、耳の聞こえない者は聞こえるようになり、足の不自由な者は歩けるようになり、悪霊は追い出された。ある悪霊に取りつかれた者は、こう叫んだ。

「コンスタンティノープルよ、汝の栄光と喜びを受け入れよ。そして、紫の血を引く者よ、汝の王国の栄誉を受け入れよ。」

そう叫ぶと、その男は悪霊に取りつかれていた状態から癒やされた。

キリストの「人の手によらずして造られた」聖像の移送を祝う祭日は、8月16日に定められた。すなわち、その日、都はこれを大いなる栄光と祝賀をもって迎え入れ、ファロス島の至聖なる聖母マリア教会[5571]に安置し、都の守護と、父と聖霊と共に今、そして常に、世々限りなく賛美される我らの神キリストの栄光のために捧げたのである。アーメン[5572]。

トロパリオ、第2調：

慈愛に満ちた主よ、私たちはあなたの至聖なる御姿に礼拝を捧げ、私たちの罪の赦しを願います。キリスト、神よ。あなたは御心により、御身を十字架に架けることをお選びになり、あなたが創造された私たちを、敵の支配から救い出してくださいました。それゆえ、私たちは感謝の念を込めて

[5571] この教会はミカイル皇帝（856–867年）によって建立された。

[5572] コンスタンティノス・ポルフィロゲネトスは、944年にエデッサからコンスタンティノープルへ「人の手によらずして現れた聖像」と、キリストからアヴガルへの手紙が移送されたことを記述している。「人の手によらずして現れた聖像」は1204年までコンスタンティノープルに保管されていた。　「手造りなき聖像」が描かれた煉瓦については、ゾナラス（1118年没）の証言によれば、968年にニキフォロス・フォコス皇帝（963–969年）によって移送された。ゾナラスはこれを「*イエロン・ケ・フィオン・エクトピラ*（神聖かつ神的な像）」と呼んでいる。――ある伝承によれば、1362年頃、ヨハネス・パレオロゴスによって、サラセン人の襲撃からギリシャ帝国を救った功績に対し、ジェノヴァの将軍レオナルド・デ・モンタルトに「非手造りの聖像」が贈られ、モンタルトはそれをジェノヴァの聖バルトロメオ修道院に寄贈し、現在も同所に保管されている。　別の、より信憑性の高い伝承によれば、1204年から1261年にかけてコンスタンティノープルが十字軍に支配されていた時期に、ヴェネツィアのドージェ、ダンドロロによって奪われたが、他の聖遺物と共に載せられていた船がプロポンティス海で沈没したという。

あなたに叫びます。「世を救うために来られた私たちの救い主よ、あなたはすべてを喜びで満たしてくださいました。」

コンダク、第2調:

人に対する御自身の言い表し難く神聖な御まなざし、父なる神の筆舌に尽くしがたい御言葉、そして御自身の偽りのない受肉を導く、書き記されざる、神によって描かれた勝利の御姿に、私たちは口づけを捧げて崇めます。

聖ヨハネ・ダマスコスによる、聖なるイコンへの礼拝に関する説教[5573]

記念日：8月16日

ある者たちは、私たちが救い主の御姿や神の母の御姿、さらにはキリストの他の聖なる僕たちの像（イコン）[5574] を崇拝し、敬うことを非難していますが、そのような者たちは、そもそも神がご自身の御姿に似せて人を創造されたことを知るべきです。　私たちが互いに礼拝し（互いに挨拶を交わし）合うのは、私たち全員が神の御姿に似せて創造されたからに他ならないのではないか。神を宿す聖なる大教父バシレイオス大主教[5575] は、像に捧げられる敬意は原型に由来すると述べている。 原型とは、その姿が描き出され、そこからイコン上の像が与えられるものである。そして、モーセの民が、天のものの幕屋を囲んで礼拝したのは、どのような理由によるものだろうか。その幕屋は多くの像の似姿を示していたのである。なぜなら、神はモーセにこう言われたからである。　*「見よ、山であなたに示された型に従って、それらを作れ」*（出エジプト記25:40）。また、祭壇を覆っていたケルビムも、人の手によるものではなかったか。同様に、栄光に満ちたエルサレムの教会も、人の手の技によって建てられたのではないだろうか。　聖書が非難するのは、偶像を礼拝し、悪魔に犠牲を捧げる者たちだけである。ギリシア人もユダヤ人も犠牲を捧げていたが、前者は悪魔に、後者は神に捧げていた。ギリシア人の犠牲は拒絶され、呪われたが、ユダヤ人の犠牲は主の御心にかなった。　ノアが[5576]　で犠牲を捧げたとき、*「主はその香りを喜ばしく受け取られた」*（創世記8:21）のは、この犠牲が清く善意に満ちた心から捧げられたからである。しかし、ギリシャの偶像は、忌まわしく神に憎まれるものであり、悪魔の偶像であったため、禁じられ、呪われたのである。

さらに、目に見えず、形もなく、言葉では言い表せず、描写することさえできない神の御顔を、いったい誰が描き表すことができようか。神性がそれ自体として存在しているありのままの姿を描

[5573] 聖ヨハネス・ダマスコスは、8世紀に生きた著名な神学者であり、聖歌作家、聖サヴァ修道院の修道士、そして偶像破壊派との闘いにおいて正教の擁護者であった。その芸術性が高く、心を打つ聖歌により、彼は「黄金の歌声」という異名を得た。 – 聖教会では、12月4日に彼の記念日が祝われる。

[5574] キリスト教徒を非難する人々について語る際、聖ヨハネス・ダマスコスは偶像破壊派を指しています。偶像破壊派の異端は8世紀に現れたため、聖ヨハネス・ダマスコスはその同時代人でした。偶像破壊派は、聖像崇敬と偶像崇拝を無分別に混同していました。　聖ヨハネス・ダマスコスは、聖なるイコンへの礼拝に関するこの説教の中で、イコン破壊派の不敬虔な誤りを糾弾している。――イコン破壊の異端の創始者は、ナコイアの司教コンスタンティノス（フリギア――小アジア地方）とされている。 イコノボリアの最も熱心な擁護者は、皇帝レウス3世・イサウリア人（717～741年）とコンスタンティノス5世・コプロニモス（741～775年）であった。この異端は、787年にニカイアで開催された第7回全地公会議で非難された。

[5575] 聖バシレイオス大聖人――4世紀の最も著名な教父――その記念日は、正教会において1月1日と30日に祝われる。

[5576] ノア――ラメクの息子であり、大洪水前の最後の族長。ノアは箱舟から出た後、神に犠牲を捧げた（創世記8:15–20）が、これはキリストの犠牲の予型であった。

こうとするのは、狂気じみた不敬虔である。このため、旧約聖書においては、イコンは用いられていなかった。　しかしその後、慈悲深い神が、ご自身の憐れみによって私たちの救いを成し遂げようと、かつてアブラハムや預言者たちの前に現れたような単なる人間の姿の似姿ではなく、真の人間としての姿で現れ、地を歩み、人々と共に暮らし、奇跡を行い、苦難を受け、　十字架に架けられ、葬られ、その後復活し、天に昇られた――その時、実際にあったこと、人々が目撃したこと、しかし当時を生きていなかった私たちには見ることのできなかったこと――これらすべてが、私たちの教訓と記憶のために記録されたのである。それは、私たちが見ていないにもかかわらず、あたかもそれを聞いたかのように感じられるためである。　そして、信仰によって（永遠の）至福を得られるようにするためです。しかし、聖書を知ることはすべての人に与えられているわけではなく、本を読む才能もすべての人に与えられているわけではないため、聖なる教父たちは、これらすべてを、栄光に満ちた勝利のしるしとして、より速やかに思い起こせるよう、イコンに描くことを満場一致で決定しました。なぜなら、私たちの不注意ゆえに、主の受難をしばしば忘れてしまうからです。しかし、キリストの磔刑の像　を見つめれば、私たちは直ちにその救いのための受難を思い出し、ひれ伏して礼拝するのは、物そのものではなく、私たちの目の前にあるその像に表された御方そのものです。　なぜなら、私たちは福音書が作られた素材そのものに礼拝するのではなく、そこに記された神の言葉に礼拝するからです。同様に、私たちは十字架が作られた素材そのものに礼拝するのではなく、十字架によって表されるキリストの受難に礼拝するのです。　もしキリストの磔刑を表していなければ、十字架は、それが作られている素材と何ら変わりがないでしょう。同じことが、至聖なる神の母のイコンについても言えるのです。なぜなら、私たちが神の母に捧げるその敬意は、彼女から受肉された方へと遡るからです。　同様に、イコンに描かれた神の聖なる奉仕者たちの勇敢な功績は、私たちに勇気と熱意を与え、彼らの美徳を模倣し、神を賛美するよう促します。そして、前述したように、イコンに描かれた称賛に値する修道者たちに私たちが捧げるその敬意は、　は、私たち全員の主に対する私たちの熱意の証であり、さらに、その敬意は真の原型へと遡るものである。

私たちが述べたことは、聖書には記されていません。東の方角への礼拝や、十字架の崇敬、その他多くの類似した事柄についても、同様に聖書には記されていないのです。　しかし、『歴史』には、エデッサの王アヴガルが、主の肖像を描くために自身の画家を遣わしたが、その画家（は）キリストの御顔から放たれる不思議な光のゆえに、命じられたことを成し遂げることができなかったと記されている。　そこで、主ご自身が、神聖で命を与える御顔に布を当て、その布に御自身の姿を写し出し、アヴガルの願いを叶えるために、それを彼に送られたのである。また、聖なる使徒たちが聖書には記されていない多くのことを私たちに伝えてきたことについては、異邦人の使徒である聖パウロが次のように証言している。　*「ですから、兄弟たちよ、堅く立ち、あなたがたが、私たちの言葉や手紙によって教えられた伝統を守り続けてください」*（テサロニケの信徒への手紙第二 2:15）。また別の箇所では、*「兄弟たちよ、あなたがたが私のことをすべて覚えており、伝統を守っていることを、私は誇りに思います」*（コリントの信徒への手紙第一 11:2）。

聖殉教者ディオミデスの記念日

記念日：8月16日

聖ディオミドはキリキアのタルスス[5577] の出身であり、職業は医師でしたが、信仰においてはキリスト教徒であり、人々の肉体だけでなく魂をも癒やしました。彼はギリシャ人たちに神を信じるよう勧め、彼らを啓蒙し、聖なる洗礼を受ける準備を整えたのです。

[5577] キリキア――小アジアの地域。

ディオクレティアヌス帝の治世中[5578] 、聖ディオミドはタルスを離れ、ビフィニア地方にあるニカイアの町[5579] へとやって来た。 そこで、聖ディオミドはいつものように癒しの業を行い、薬による治療だけでなく、主に全能にして癒しの力を持つ我らの主イエス・キリストの御名と、尊き十字架のしるしによって人々を癒しました； 彼はその治癒の技と教えによって、多くの偶像崇拝者をキリストへの信仰へと導いた。

当時、東方諸国に滞在していたディオクレティアヌス皇帝がこれを知ると、聖人を捕らえるために兵士たちを派遣した。兵士たちがその場所に到着したとき、聖ディオミドはすでに主のもとで息を引き取っていたが、彼らは死者の首を切り落とし、皇帝のもとへ持ち帰ろうとした。 しかし、首が切り落とされた直後、兵士たちは視力を失い、盲目となってしまった。そのため、他の者たちに連れられて皇帝のもとへ向かうこととなり、その際、彼らは聖殉教者ディオミデスの切り落とされた首を運んでいた。

皇帝は首と、また盲目になった兵士たちを見るや、直ちにその首を運び、元の場所に体につけるよう命じた。兵士たちがその通りにすると、たちまち視力が回復し、私たちの主イエス・キリスト、まことの神を信じるようになった。神に永遠の栄光が帰されますように。アーメン[5580] 。

同日、聖ヘリモンの記念日

記念日：8月16日

聖ヘリモンは、パラディオスの著書『ラヴサイク』および『アルファベット順のパテリコン』に言及されている。彼の洞窟は水辺から十二ポプリシュの距離にあった。彼がこの世を去った際、彼は自分の席に座り、手仕事を手にしたまま発見された。というのも、彼は作業中に息を引き取ったからである。 この聖ヘリモンは、聖テオドロス・ストゥディトスによる『[5581] 』の四旬節トリオディ、乳製品許容土曜日の早課のカノン、第6歌『[5582] 』にも言及されている。

8月30日

8月17日（旧暦）

同日、聖殉教者パウロとその妹ユリアニアの記念日。彼らの記念日は3月の4日に祝われる（この日付の下に、彼らの殉教の経緯が詳しく記されている）。

同日、聖殉教者フィルス、レウキアおよびその仲間たちの記念日。彼らはデキウス皇帝（249–251年）の治世下、ビティニアのケサレアで殉教した。彼らの記念日は12月の14日にも祝われる（この日付の項には、彼らの殉教の物語も掲載されている）。

聖殉教者パトロクルの殉教

記念日：8月17日

[5578] 在位：284年～305年

[5579] ビフィニアは小アジアの地域である。

[5580] 聖ディオミドの没は、3世紀末か4世紀初頭であった。

[5581] 記念日は11月11日

[5582] 聖ヘリモンの死は、4世紀末か5世紀初頭であった。

アウレリアヌス帝の治世[5583] 、ガリアをはじめとする各地で、キリスト教徒に対する残酷な迫害が繰り広げられた。この頃、トリカッシーネという町に、パトロクルという名の誠実な男が住んでいた。彼は町の郊外にある、両親の死後に相続した家に暮らしており、裕福で多くの財産を持っていた。　この男は昼夜を問わず神に仕えていた。彼は神の聖なる律法を愛し、厳格で敬虔なキリスト教徒としての生活を送っていた。学識に富んでいた彼は、常に熱心に聖書を読み、刻一刻とひざまずいて祈りを捧げていた。　食事は一日に一度、正午にのみ摂り、その前には食事前の賛美と主への祈りを捧げていた。また、彼が持っていた富は、困窮者や未亡人、孤児、とりわけ心を尽くして主に仕える貧しいキリスト教徒たちに施していた。　彼の慈悲は極めて大きく、貧しい人々は彼を天の宝を配る者として見なしていた。なぜなら、彼は地上の宝を蓄えることなく、天の宝を蓄え、天の御国を得ることをひたすらに思い巡らし、この世のあらゆる快楽から遠ざかっていたからである。　神を畏れ、断食と祈り、そしてあらゆる神への奉仕に生涯を捧げたこの聖なる人は、主から悪霊を支配する権能を授かった。また、癒しの恵みも与えられ、キリストの力によって不浄な霊を追い出し、人々に降りかかる様々な病を癒やした。　その頃、不信心なアウレリアヌス王――キリスト教徒を激しく迫害した者――が、セノニイスカの町からトリカッシンの町へとやって来た。聖パトロクレスについて耳にしたアウレリアヌスは、彼を捕らえて自分の元へ連れてくるよう命じた。パトロクレスを目の当たりにすると、彼はこう言った。

「お前の狂気については聞いている。お前は虚しい信仰を受け入れ、人々から侮辱された御方にひれ伏しているのだ。」

しかし、聖人はこの狂気じみた言葉に対して何も答えなかった。

そこでアウレリアヌスは彼に尋ねた。

「お前の名は何か？」

聖人は答えた。

「私の名はパトロクルスだ。」

アウレリアヌスは再び尋ねた。

「どのような信仰を持ち、どの神を崇拝しているのか？」

聖パトロクルスは答えた。

「私は、天にまじり、謙虚な者たちを見守られる、生けるまことの神を崇拝しています。私は、何事も起こる前にすべてをご存知であるその神を崇拝しています。」

アウレリアヌスは言った。

「その狂気を捨て、我らの神々に拝礼せよ。そうすれば、我らはあなたに名誉と富を与え、あなたの名は称えられるだろう。」

聖人は答えた。

「私は、天と地と海、そして目に見えるものも見えないものすべてを創造された、その唯一の真の神以外には、他の神を知りません。」

これに対し、アウレリアヌスは言った。

「お前の言うことが真実であるかどうか、我々に証明してみせろ。」

パトロクルスは答えた。

「私が語ることはすべて真実です。しかし、あなた方は皆、偽りの中に溺れているため、真理を信じようとはしません。偽りは常に真理を憎むからです。」

アウレリアヌスは言った。

「もし神々に生贄を捧げなければ、お前を火あぶりにするぞ。」

すると聖人はこう答えた。

[5583] アウレリアヌス帝は270年から275年まで在位した。

「見よ、私は賛美の捧げ物を捧げます。そして、御自身の聖なる御名のゆえに、私を殉教の業へと招いてくださった私の神に、私自身をも捧げます。」

すると、アウレリアヌス王は怒りに満ち、殉教者の足に、火で熱した鉄の足枷をはめるよう命じた。　また、聖人の両手を、火で熱した鉄の鎖で後ろ手に縛るよう命じた。その後、聖人を牢獄に投げ込み、聖人を滅ぼす方法を思いつくまでそこに閉じ込めておくよう命じた。

足枷を嵌められたまま、聖人は神にこう祈りました。

「*『あなたの御言葉どおり、あなたのしもべに、あなたの憐れみが慰めとなりますように』*（詩編118:76）。

そしてまた：

「*あなたの慈しみを喜び、楽しみます。あなたは私の苦難に目を留めてくださったからです*」（詩編30:8）。

三日後、アウレリアヌス帝は公の法廷に腰を下ろし、殉教者を牢獄から連れ出し、裁判にかけるよう命じた。聖人が連れて来られると、皇帝は彼にこう言った。

「不敬者よ、さあ、早く自らを死から救い、神々に犠牲を捧げよ。」

殉教者はこう答えた。

「私たちの主は、御自分のしもべたちの魂を永遠の死から救ってくださいました。主は、御自分に望みを置く者たちを誰も見捨てられません。もしあなたが私の財産から何かを得たいと望むなら、喜んであなたに差し上げましょう。あなたが貧しいことがわかるからです。」

これに対し、アウレリアヌスは言った。

「私が数え切れないほどの財宝を持っているというのに、どうして皇帝である私を乞食などと呼ぶことができるのか？」

聖人は答えた。

「あなたは、はかないこの世の富を持っています。しかし、あなたは貧しいのです。なぜなら、あなたは自分自身さえも持っていないからです。あなたの心には、私たちの主イエス・キリストへの聖なる信仰が根付いていないからです。それゆえ、あなたは義なる裁き主である神によって、あなたの父である悪魔と共に、苦しみを受けるよう裁かれるでしょう。」

アウレリアヌスは言った：

「お前は私をひどく侮辱している。それゆえ、私はお前に対して慈悲を示すことはできない。」

殉教者は言った：

「私にとっては、幼い頃から仕えてきた私の神が慈悲深きお方です。しかし、今あなたが仕えている悪魔が苦しみの中にいるその場所に連れて行かれる時、あなたには悲惨なことが待ち受けています。そこで、あなたのために用意された永遠の苦しみを見るでしょう。」

これに対し、皇帝は言った。

「お前の言っていることは理解できない。ただ、お前が私の手中にあり、私の手からお前を救い出せる者は誰もいないということだけは分かっている。」

聖人は言った：

「お前の支配下にあるのは、私の肉体だけだ。　しかし、私の魂には手を触れることはできない。なぜなら、それを創造された唯一の神以外、誰もそれに権威を持たないからだ。その神は、私たち、御自分のしもべたちにこう言われた。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるがよい」*（マタイ10:28）。

これに対し、アウレリアヌス帝はこう言った。

「わが神々もまた、まさに同じ権威をお持ちではないか。彼らは我々にとって真実な存在であり、尋ねられることすべてに常に答えを与えてくださる。今に至るまで、彼らはあなた――その敵であり冒涜者であるあなた――を生かしておられるのだ。」

聖人は言った。

「あなた方の神々とは、どのような神々なのか？」

アウレリアヌスは答えた：

「我らの神々には、偉大なるアポロン[5584]、強大なゼウス[5585]、そして神々の母ダイアナ[5586]が含まれる。彼らは人々に未来を偽りなく予言するからだ[5587]。」

そこで、聖パトロクレスはこう言った。

「あなたが神と呼ぶアポロンについては、我々は先祖から、彼がテッサリアの王アドメトスの羊飼いだったと聞いています[5588]； また、あなたが神として崇拝するゼウスについては、彼が卑劣で不敬虔な人間であり、淫行者、姦通者、強盗、そしてあらゆる悪の種を蒔く者であったことが我々には知られている； 彼が人々の間に敵意と暴挙をまき散らし、殺人や略奪を犯し、さらには最も恥ずべき死を遂げたため、大地は彼の死体を受け入れなかったことは周知の事実である。 一方、あなたがたの神々の母と呼ばれるディアナについては、彼女が正午の狂気[5589]であることを知らなかった者はいないだろう。ああ、不信仰によって目がくらみ、虚しく空しいものを崇拝する者たちの、なんと嘆かわしい狂気であろうか！

王は言った。

「わが忍耐は深い。今に至るまで、お前の冒涜を聞き続けてきたからだ。しかし今、最後通告を告げる。もしアポロン、ゼウス、そしてディアナに拝礼し、生贄を捧げないならば、今すぐお前を死に追いやる。」

殉教者はこう答えた。

「不敬虔な拷問者よ！ お前は、罪のない人を殺しながらも、その肉体を食い尽くすことのできない強盗のようだ。お前もまた、私の肉体を死に追いやると自慢しているが、それを食らうことはできない。たとえ私の肉体を食い尽くしたとしても、私の魂に傷をつけることなど、お前にできるはずがない。」

聖人がこう言い終えると、アウレリアヌスは激しく怒り、聖人を剣で斬首するよう命じた。その際、アウレリアヌスは兵士たちに、聖人を乾いた土地ではなく、どこかの湿地帯で斬首するよう命じた。それは、聖人が人々にふさわしい通常の埋葬を受けられず、爬虫類や鳥、獣たちに食い尽くされるようにするためであった。

[5584] 古代ギリシャ人にとって、アポロンは光の神とみなされていた。同時に、彼には未来を予言する力があると信じられていた。

[5585] ゼウス――古代ギリシャ宗教の最高神であり、他の神々の始祖とされていた。

[5586] ディアナは、古代ギリシャ人にとって光と生命の女神とされ、自然の清新で花咲く生命を授ける存在としても崇められていた。

[5587] 異教徒であったアウレリアヌス皇帝は、自身が信仰する神々が未来を予言できると確信していた。彼は、古代ギリシャ人によって未来を予言する者として崇められていたアポロンの名を、意図的に言及したのである。 古代ギリシャ人がアポロンのために建てた多くの神殿は、同時に有名な神託所としても知られていた。中でも最も有名だったのは、デルフォイの神託所、オロビアの神託所、エウボイア島の神託所などである。 古代ギリシャ人は、私生活においても社会生活においても、あらゆる重大かつ重要な局面において神託の助けを求めた。言うまでもなく、ギリシャ人が助言を求めて訪れた占い師たちは、常に支離滅裂で曖昧な答えしか与えなかったため、未来を予言することはできなかった。

[5588] この場合、聖パトロクロスは、古代ギリシャ神話の荒唐無稽な伝説を指していた。

[5589] 「正午の悪魔」とは、文字通り「正午に荒廃をもたらす疫病」を意味する。おそらく、南の太陽の灼熱の光線によって引き起こされる、狂犬病のような特殊な病気のことだろう（詩篇90:6参照）。

兵士たちは聖なる殉教者を連れ出し、セクワナという名の川の岸辺へと向かった。そこで、川岸の沼地で聖人を斬り殺そうとしたのである。聖人は喜びをもって死へと歩みを進め、祈りを込めてこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、私の肉体があの湿地で滅びることを許さず、あなたの至聖なる御名を崇めさせ、それがあなたの敵たちの目の前で栄光となるように。そして異教徒たちが『彼らの神、はどこにいるのか』と言わないように。」　――聖なる主よ、あなたが御自分の民のために祈ったモーセとアロンの祈りを聞き入れ、海を分け、イスラエルの民を乾いた地の上を導かれた（出エジプト記14:21–32）ように、私の祈りも聞いてください；私にも、この川を渡って向こう岸、湿地ではない場所へ導いてください。そうすれば、乾いた地で私の血が流され、私の体が沼地ではなく安らぎを見出すことができます。*「私を泥沼から引き上げ、私が沈まないようにしてください」*（詩篇68:15）。私を迫害者たちから救い出してください！

聖人がこのように祈り終えるやいなや、彼を連れてきた兵士たちの目が曇り、彼らは（兵士たちは）殉教者の姿を見ることができなくなった。

一方、聖パトロクレスは川に入り、膝より下の深さまで水をかき分けながら進んだ。その川は極めて広く深く、さらに雨で水量も増していたが、　しかし、聖なる殉教者は、膝さえも水に浸すことなくその川を渡り、対岸にたどり着くと、そこにあった山に登り、こう言った。

「主は御自身の尊い聖徒たちの魂を守り、罪人たちの手から救ってくださる。」

一方、兵士たちは、自分たちが連行していた殉教者の姿が見えないことに、大きな恐怖と戦慄に襲われた。王が、自分たちの意思で死刑囚を逃がしたと思い込み、彼らを処刑に処すのではないかと恐れたからである。兵士たちは心の中でこう呟いた。

「あの人の神はなんと偉大なお方だろう。神は目に見えないまま、彼を我々の手から救い出されたのだ！」

また、兵士たちの中にはこう言う者もいた。

「あれは人間ではなく、ある種の幽霊だったに違いない。彼は我々の目の前から跡形もなく消え去ったのだから。」

兵士たちが長い間このことについて互いに議論を交わし、王のもとへ戻ることをためらっていたその時、小舟で川を渡っていたある異教徒の女性が、兵士たちの議論を耳にし、彼らの悲しみを目の当たりにして、こう言った。

「川の向こう岸の山の上で、あなたがたが探しているキリスト教徒の男性を見かけました。彼はうつ伏せになって、自分の神に祈っていました。」

しかし、彼らは無実の者の血を流すことに躊躇しない者たちであったため、直ちに舟で川を渡り、山に登ると、その女性が言った通りの姿勢で聖人を見つけた。すると、年長の戦士は憤りを込めて聖人にこう言った。

「まことに、お前は死に値する。我々の前から逃げたからだ。だが、今また我々の手に落ちた。もう二度と逃げられない。お前は死に追いやられる。もし生き残りたいのなら、我々の神々に生贄を捧げよ。」

聖人は彼らにこう答えた。

「私は不敬な悪魔たちには拝まない。私はただ唯一の神のみに拝むのだ。」

兵士たちは彼に言った：

「お前の神とは、生まれ出た神か、それとも造られた神か？」

聖人は言った：

「ああ、なんと虚しい迷いよ！　なんと狂おしい不信仰よ！　なんと理不尽な言葉よ！　人間の中で、始まりなき神について何かを語ることのできる者がいるだろうか！　誰が神の起源について語れるというのか。神が語られれば、すべては起こった。神が命じられれば、目に見えるものも見え

ないものも、すべてが創造された。神は人類に救い主、御自身の独り子、我らの主イエス・キリストを遣わされた。キリストは、私たちを滅びと永遠の死から救うために、私たちのために聖なる御血を流された。　しかし、主は三日目に死者の中から復活され、弟子たちの目の前で天に昇られ、約束どおり彼らに聖霊をお遣わしになった。　そして、聖霊が使徒たちの口を通して教えたとおりに信じるべきである。なぜなら、この教えこそが正しく真実なものだからである。この教えを信じない者は、永遠の命を見ることはなく、神の怒りがその者に永遠に留まるであろう。　私たちキリスト教徒は、私たちの神であるキリストから永遠の命を受けると固く信じ、希望を抱いている。それゆえ、私たちは愛をもってキリストのために苦しみ、喜んで死を迎えるのである。なぜなら、生きようとも死のうとも、私たちは主のものだと知っているからだ。しかし、あなた方のように悪魔を崇拝する者たちは、悪魔たちと共にゲヘナの火に投げ込まれることになる。

聖人がこれらの言葉を語っている間、兵士たちは激怒し、聖人を自分たちの神々を冒涜する者だと罵り、聖人を斬り殺そうと剣を抜き放った。そこで殉教者は、神に向かってこう言った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます。私があなたの至聖なる御名のために死ぬことを、あなたはご存知だからです。」

その後、聖殉教者パトロクレスは首を斬り落とされた[5590]。

兵士たちは殉教者の首を取り、遺体から遠く離れた場所に投げ捨て、その後立ち去った。

その時、その場所の近くの山には、二人の年老いた物乞いがいた。彼らは以前、聖人から施しを受けており、キリスト教の信仰を告白していた。彼らは殉教者の最期を目撃し、その最期の言葉を耳にした。　兵士たちが去ると、二人は不信心者たちに気づかれることを恐れ、大きな畏れを抱きつつ殉教者の遺体とその首を回収した。彼らは殉教者の尊い遺体と首を夕方まで隠しておき、その後、その町のプロトプレスヴィテルであるエウセビオスに、すべてのことを密かに告げた。

夜が更けると、プロトプレスビターは助祭リベリウスと共に、殉教者の遺体が隠されていたその場所へと向かった。彼らは清らかな布でその聖なる遺体を包み、異教徒を恐れて、その夜、静かに、わずかなろうそくの明かりの下で、相応しい詩篇を歌いながら、彼を埋葬した。

聖殉教者パトロクレスは、ローマではアウレリアヌスの治世の間に、キリスト教徒の間では、父と聖霊と共に、今また永遠に栄光と誉れが帰される、我らの主イエス・キリストの支配の下で、この世を去った。アーメン。

私たちの尊い父アリピオス・ペチェルスキーの伝記

記念日：8月17日

私たちの尊い父アリピオス・ペチェルスキーは、聖福音記者ルカの模範に従う者として自らを現しました。なぜなら、彼は、私たちを御自身の像と似姿に造られた（創世記1:26）主に、まさにそのルカと同様に仕えたからです。すなわち、　彼は、イコンに聖人たちの姿を奇跡的に描き出すだけでなく、自らの魂の中に彼らの美徳を体現していた。さらに、彼は卓越した医師でもあった。その敬虔な生涯は、次のように私たちに伝えられている。

キエフの敬虔な公ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチ[5591]　の治世下、修道院長である尊者ニコンの在任中、神の御計画と、死後10年目にコンスタンティノープルに奇跡的に現れた尊者アントニオス

[5590] 聖殉教者パトロクルの死は、およそ275年に起こった。

[5591] ヴェセヴォロド・ヤロスラヴィチは、1075年から1076年（6ヶ月間）にかけて初めて公爵となり、1078年から1093年にかけて二度目の公爵を務めた。

とテオドシオスの助言により、聖ペチェールスク教会を装飾するためにギリシャのイコン画家たちがやって来た。　このイコン画家たちの元へ、至福のアリピイは両親によって絵画芸術の修業のために預けられたのである。聖アリピイは、ペチェルスクの教会に関する伝承に語られるあの驚くべき奇跡の目撃者であった。すなわち、イコン画家たちが祭壇を絵画で装飾していたとき、そこに聖母マリアのイコンが自ずと現れたのである。　その際、このイコンは輝き、太陽よりも明るく煌めいた。その後、至聖なる聖母マリアの口から鳩が飛び出し、長い間（教会内を）飛び回った後、教会の上部に掲げられていたイコンに描かれた救い主の口へと飛び込んだ。　――当時、この至福のアリピイは、師たちを手伝いながら学んでいた。また、彼は心の中で見事な絵を描いていた。なぜなら、聖霊の恵みがその洞窟の教会に宿っていたからである。

前述のイコン画家たちがその仕事を終え、聖なる教会をイコンで飾り終えたとき、アリピオスもまた、敬虔な修道院長ニコノスによって、驚くべき方法で聖なる天使の修道会の一員として飾られた。　こうして聖アリピオスは、聖人たちの美徳を自らの心の中に描き出す術を学び始め、すでにその技法を習得していたため、彼らの姿を（イコンに）具現的に描き出すことができたのである。

聖アリピオはその技に極めて熟達しており、神の恵みにより、イコン上の目に見える像を通じて、あたかも美徳そのものの霊的な姿を再現していた。というのも、彼は富を得るためではなく、美徳を得るためにイコン画の技法を学んだからである。　彼は絶えず、修道院長や修道士たち、そして困窮しているすべての人々のためにイコンを描き続け、その労苦に対して何の見返りも求めなかった。

至福のアリピオスは、どの教会であれ、老朽化したイコンを見かけた者は皆、彼に知らせるよう求めた。そうすれば、彼は一切の報酬を求めず、自らの技でそれらの教会を美しく飾り立てた。また、聖人がそのような仕事から解放されているときは、自らのためにイコン画の技を磨き、イコンの装飾に必要な金や銀を借りた人々に、そのイコンを贈っていた。　聖人は、怠惰に時間を費やさないためにこのように行動していた。彼は、常に手仕事に励んでいた古代の聖人　の父たちや、自らについて「私の手は、私自身の必要と、私と共にいた人々の必要のために働いた」（使徒行伝20:34）と語った、最も高き使徒パウロに倣っていたのである。

もし聖アリピオスが手仕事によっていくらかのお金を稼ぐことがあったならば、彼はそれを三等分した。第一の分はイコンの修復に、第二の分は貧しい人々への施しに、第三の分は修道院の必要に充てた。聖人は毎年このように行い、昼も夜も休むことなく努めた。　というのも、夜には祈りの徹夜や礼拝に励み、昼間は深い謙遜、無欲、清らかさ、忍耐、断食、愛、神への思索をもって手仕事に打ち込んでいたからである。彼が怠けているところを見た者は誰もいなかった。しかし、それにもかかわらず、彼は自分の仕事のためであっても、祈りの集まりを欠かすことは決してなかった。

修道院長が、この聖者にこれほど偉大な徳とイコン画の技量を見出し、彼が天使のような姿で修道者の位をまとい、神の子イエス・キリストの模範となるにふさわしいと認めたとき――メルキゼデク式の司祭[5592] ――彼を司祭の位に叙任した。 こうして、この聖人は燭台の上の灯火（マタイ5:15）として、あるいは、より正確に言えば、高い場所に置かれた模範として立てられ、修道者および司祭としての徳の格別な美しさを放っていた。そして、彼は単なる聖なる模範にとどまらず、奇跡を行っていた。彼の数多くの奇跡のうち、ここではそのいくつかを紹介しよう。

[5592] サリムの王であり、至高の神の祭司であるメルキゼデクは、創世記14:18に言及されている。メルキゼデクについて語る創世記は、　メルキゼデクの出自についても、その最期についても何も語っていない。このことは、アブラハムへの祝福と同様に、聖使徒パウロの解説（ヘブライ人への手紙6:20）によれば、メルキゼデクをイエス・キリスト――永遠の大祭司であり王――の先型としたのである。　メルキゼデクの祭司職が持つ予型的な意義については、王であり預言者であるダビデも、神の御子について「*あなたはメルキゼデクの位に従って、永遠の祭司である*」（詩編109:4）と語った際に、すでに指摘していた。　しかし、メルキゼデクの予型としての意義は、特に聖使徒パウロによる『ヘブライ人への手紙』7:1–28において、極めて明確かつ詳細に明らかにされている。

キエフの裕福な市民の一人がハンセン病を患っていた。彼は多くの医師や魔術師、異教徒に助けを求めたが、病状が和らぐどころか、さらに悪化した。　そこで、病人の友人の一人が、聖なる父たちに祈りを願うためにペチェルシク修道院へ行くよう彼に勧めた。彼は承諾したが、不本意な様子だった。

この病人がペチェルシク修道院に連れて来られると、修道院長は、敬虔な修道士が掘った井戸の水を彼に飲ませるよう命じ、さらにその同じ水で彼の顔を洗うよう指示した。　するとたちまち、患者の体からは、その不信仰に対する罰として大量の膿が噴き出し、周囲の人々は、患者の体から漂う悪臭に耐えきれず、皆彼から距離を置いた。　そこで、このハンセン病患者は泣き叫び、憤りつつ自宅に戻り、自身から漂う悪臭のせいで何日も家から出ず、友人たちにこう語った。「『*私の顔は恥辱に覆われている。　私は兄弟たちにとってはよそ者となり、母の息子たちにとっては見知らぬ者となった*』（詩編68:8–9）。それは、私が尊い父アントニオスとテオドシオスに信仰を示さなかったからであり、毎日、自分の死を待っていた。

しかし、我に返ったこの男は、自分のすべての罪を告白しようと決心した。そこで、再びペチェルスクの修道院へ赴き、聖アリピオのもとを訪れて、自分の罪を告白した。すると、聖人は彼にこう言った。

「わが子よ、私の不甲斐なさを前にして、神に自分の罪を告白しに来たのは、よくやった。預言者もまた、主に向かってこう叫び、自らを証ししている。『*私は言った、「主よ、私の罪を告白します」と。すると、あなたは私の罪の責めを私から取り除いてくださった*』（詩編31:5）。

その後、聖アリピオスは長い間、彼の魂を救う言葉を説き、続いてイコン画の絵の具を取り、化膿した箇所に塗って彼の顔を美しく整えた。　その後、聖アリピオスは病人を教会へ連れて行き、聖体拝領を授け、聖職者が聖なる秘跡を受けた後に通常用いる水で顔を洗うよう命じました。すると間もなく、病人の体から膿んだかさぶたが剥がれ落ち、彼は以前と同じように健康を取り戻しました。

この奇跡において、私たちの尊い父アリピオスは、私たちの主イエス・キリストご自身に倣う者であることを示した。　なぜなら、キリストがハンセン病患者を癒やされた際、彼に祭司の前に現れ、清めのための供え物を捧げるよう命じられた（マタイ8:4）のと同様に、この聖なる父もまた、ハンセン病の患者に対し、礼拝の最中に祭司である自分の前に現れ、預言者が語っている次のような供え物を捧げるよう命じたからである。　「*主がわたしに施してくださったすべての恵みに、どのように報いようか。わたしは救いの杯を受けよう*」（詩編115:3–4）。ここでその供え物についても触れておこう。このハンセン病患者の曽孫は、彼の清めへの感謝として、洞窟教会の聖なる祭壇の上にあった契約の箱を金で覆ったのである。

このほか、聖アリピオスは、生まれつき目の不自由な者を癒やしたキリストの模範に従う者であることを示した。というのも、キリストが生まれつき目の不自由な者を癒やす際、まずその目に泥を塗った後、シロアム（「遣わされた者」を意味する）の池で顔を洗うよう命じたのと同様に　（ヨハネ9:6–7）、この聖人もまた、まずハンセン病患者の瘡蓋にイコン用の絵の具を塗布し、その後、神の使者である司祭たちが通常顔を洗うのと同じ水で顔を洗うよう命じた。　このようにして、聖人は病人を肉体のハンセン病からも、罪による盲目からも癒やしたため、病人と共に町からやって来た者たちは皆、この迅速な癒やしに大いに驚嘆した。しかし、聖アリピオスは彼らにこう言った。

「兄弟たちよ！『*だれも、ふたりの主人に仕えることはできない*』（マタイ6:24）という言葉に注意を払ってください。この人は当初、自らの罪のゆえに悪魔に支配されていたのです。　それゆえ、彼が神のもとに来た際、敵の誘いに従って自らの救いを絶望し、ただ一人彼を救うことのできる主を信じなかったとき――その不信仰への罰として、らい病はさらに強い力で彼の体を襲ったのである；　主は「*求めなさい*」と仰せられたが、単に「求めなさい」というだけでなく、信仰をもって「*求めなさい*」と仰せられ、「*与えられる*」と約束された（マタイ7:7）。そして今、彼が私の目の前

で悔い改めて再び神に立ち返ったとき、*「あわれみに富む神」*（エフェソ2:4）は彼を癒やしてくださった。

これを聞いた人々は聖人にひれ伏し、癒やされた者と共に帰路についた。その道中、彼らは神と、聖アントニオスと聖テオドシオス、そして彼らの弟子である私たちの聖アリピオスを賛美した。そして、この聖アリピオスについて、彼が彼らにとって新たなエリシャとして現れたのだと語り合った。というのも、彼がその病人をハンセン病から癒やしたのは、エリシャがシリア人ネエマンをハンセン病から癒やしたのと同じであったからである（列王記下5:14）。

また、同じキエフの町には、ある敬虔な男性がいた。　この人は教会を建て、その装飾のために七枚の大きなイコンを望んだ。彼は、イコンを描くための板と共に銀を、知り合いであるペチェルスク修道院の二人の修道士に渡し、イコンの制作について聖アリピオに相談するよう頼んだ。　しかし、修道士たちはアリピオに何も伝えず、銀を横領してしまった。しばらくして、その男性は修道士たちに、自分のイコンは描かれたのかどうか尋ねさせた。彼らは、アリピオがさらに銀を要求していると答えた。その後、再びその男性から送られてきた銀を受け取り、それを横領してしまった。　さらに、極度の厚顔無恥に至ったこの二人の修道士は、再びその男性に（聖人を誹謗して）、「アリピウスは受け取ったのと同じだけの銀をさらに要求している」と伝えさせた。キリストを愛するその男性は、三度目も銀を渡して、こう言った。

「私は、彼の御手による御業から、祈りと祝福を授かることを切に願っている。」

しかし、聖アリピオは、修道士たちが何をしているのか全く知らなかった。

ついにその男は、イコンはもう描かれたのかどうかを確かめるために、もう一度使いを送った。しかし、修道士たちはどう答えればよいか分からず、アリピオスが三度送られた銀をすべて受け取ったものの、イコンを描く気はないと答えた。

そこで、そのキリストを愛する男は、従者たちを連れてペチェルスクの修道院にやって来て、イグメン・ニコンのもとへ赴き、アリピオによって（とされる）悲しみの原因について彼に語った。イグメンはアリピオを呼び寄せ、こう言った。

「兄弟よ、なぜあなたは、この我らの息子にこれほどの侮辱を与えるのか。彼はあなたにイコンを描くよう熱心に懇願し、あなたが求めただけの銀を渡したではないか。それなのにあなたは、これほど多くの銀を受け取り、イコンを描くという約束をしたにもかかわらず、それを描かなかった。他の場合には、何の報酬もなくイコンを描いていたというのに。」

すると、至福のアリピオスはこう答えた。

– 敬愛する父よ！私がこの仕事において決して怠慢を見せたことがないことは、あなたもよくご存知でしょう。しかし今、あなたが何を言っているのか、私には全く理解できません。

すると、修道院長は再び彼にこう言った。

「お前は七枚のイコンを描く代金として三倍の金額を受け取った。しかし、今に至るまで、それらを描いていないではないか。」

そして直ちに、聖人を糾弾しようと、イコンを描くための板を持ってくるよう命じた（その板は前日、修道院の建物の一つに置かれているのを見かけており、そこには何も描かれていなかった）。　修道院長はまた、その男が聖人に銀を渡す際に仲介役を務めた修道士たちを呼び出すよう命じ、彼らにアリピオスを告発させた。

板を取りに行った者たちは、それらが非常に巧みに彩色されているのを見つけ、修道院長のもとに持ち帰った。　これを見たそこにいた者たちは皆、大いに驚き、深い恐怖に襲われた。その後、戦々恐々として地面にひれ伏し、　、人の手によって作られたものではないそれらの像――すなわち、主の御像、至聖なる聖母マリアの御像、そしてその他の神の聖人たちの御像――に礼拝を捧げた。

その後、アリピオスを誹謗した二人の修道士がやって来た。彼らはこの奇跡について何も知らず、聖人と口論になり、こう言った。

「お前は三倍の報酬を受け取ったくせに、イコンを描こうともしないではないか！」

この言葉を聞いたそこにいた者たちは皆、その修道士たちにイコンを見せながら、こう言った。

「ほら、神ご自身が描かれたこれらのイコンこそが、アリピウスの無実を証明しているのだ！」

一方、その修道士たちは、イコンを見て、これほど偉大な奇跡に恐怖を覚えた。彼らは直ちに修道院長によって窃盗と嘘を糾弾され、修道院から追放され、すべての財産を没収された。

しかし、これらの修道士たちはその悪意を止めなかった。彼らは町中でアリピオ聖人に対する誹謗中傷を広め、あたかも自分たちがそれらのイコンを描いたかのように主張した。 「我らの長老は」と彼らは言った。「我々の労苦に対する報酬を支払うことを望まず、我々を仕事から遠ざけるために、アリピオスを正当化しようとした神ご自身が描いたかのように、聖像について嘘をついたのだ。」

そのような言葉を耳にした多くの市民は、それらのイコンを見て礼拝するために、町から修道院へと向かった。しかし、多くの市民が、アリピオ神父を誹謗中傷した修道士たちの言葉を信じてしまったにもかかわらず――神は、聖なる福音書の中でご自身がおっしゃっているように、ご自身の聖徒たちを栄光に輝かせておられる。*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）；また、*「灯をともして、それを器の下に置くのではなく、燭台の上に置く。そうすれば、家の中の人すべてに光を照らす」*（（マタイ5:15）――神は、この義人の高潔な行いを隠されなかった。なぜなら、聖アリピオスのために主が成し遂げられたこの奇跡の知らせは、ウラジーミル・モノマフ公[5593] にまで届いたからである。この奇跡は、さらに次のように裏付けられた：

神の御許しにより、キエフで火災が発生し、キエフのポドル地区[5594] のほぼ全域が焼失した。この地区には、前述のイコンが安置されていた教会もあったが、これも焼失した。しかし、火災の後、その7枚のイコンはすべて全く無傷の状態で発見された。

公爵はこの話を聞くと、そこで起きた奇跡をこの目で見たいと願い、自ら火災現場に赴いた。火事にもかかわらず無傷のまま残っていたイコンを目の当たりにした公爵は、まず第一に、それらが神の御心により一夜のうちに描かれたものであることを知った。神は、アリピウスに対して向けられていた誹謗中傷を晴らすことを望まれていたのだ。 そこで、ウラジーミル・モノマフ公は、聖アリピオスの徳のためにこれほど偉大な奇跡を示された万物の創造主である神を、熱心に賛美した。その後、公はそれらのイコンの一つ――すなわち至聖なる聖母マリアのイコン――を取り上げ、自ら建設したロストフの石造りの教会へ送るよう命じた。 かつて、ロストフにあるこの教会も崩壊したが、そのイコンは全く無傷のまま残っていた。その後、イコンは木造の教会に安置されたが、この教会もしばらくして火災により焼失した。しかし、イコンは再び無傷のままであり、火災の後もわずかな傷一つ見当たらなかった。

これらすべてが、私たちの尊い父アリピオスの徳高い生涯を疑いようもなく裏付けており、その聖人のために、そのイコンはまるで自ずと描かれたかのようであった。

それでは、聖人の臨終の際に起こった奇跡について見ていこう。この人物、すなわち熟練したイコン画家である彼が、いかに驚くべき形で、この一時的な人生から永遠の命へと移り行ったかを理解するためである。

ある敬虔な人が、私たちの尊い父アリピオに、至聖なる聖母マリアのイコンを描いてほしいと頼みました。その際、彼は聖人に、このイコンを聖母被昇天の祝日までに完成させてほしいと懇願しました。 しかし、尊師はまもなく病に倒れ、すでに死の床に近づいていました。その間、イコンは

[5593] ウラジーミル・モノマフは1114年から1125年まで統治した。

[5594] 街の一角。

まだ描かれておらず、その人はこの事態を深く嘆き、聖人にしきりに心配をかけました。すると、至福のアリピオスは彼にこう言いました。

「わが子よ！　私を煩わせないで、あなたの悲しみをすべて主に委ねなさい。そうすれば、主は御心のままになさるでしょう。そのイコンは、祝日のその日に、その場所に備わるでしょう。」

その男は聖人の言葉を信じ、喜びながら自分の家へ帰った。

その後、彼は聖母マリアの被昇天の祝日の前日に、再びアリピオのもとを訪れた。イコンがまだ描かれていないのを見て、また、尊者アリピオの病状がさらに悪化しているのを見て、その男は聖人を責め立て、こう言った。

「なぜ、あなたの重い病気のことを私に何も言わなかったのですか？　そうすれば、私はそのイコンを別のイコン画家へ委ね、彼に描いてもらって、祝祭を厳粛かつ荘厳なものにできたでしょう。しかし今や、あなたは私を大きな恥に陥れているのです。」

聖人は柔和にこう答えた。

「おお、わが子よ！　果たして私が怠惰のゆえにこうしたというのか？　しかし、神は御言葉一つで御母のイコンを描かれることができる。主が私に告げられた通り、私は今、この世を去ろうとしているが、あなたを悲しみに沈めたくはないのだ。」

その男は深い悲しみを抱いて立ち去った。　彼が去った直後、ある輝かしい若者が聖アリピオのもとへ入ってきて、その男のためにイコンを描き始めた。アリピオは、あの男が自分に腹を立てて新しいイコン画家を送り込んだのだと思い、最初はその若者を人間だと見なしたが、その仕事の速さと優雅さは、それが天使であることを示していた。　というのも、彼は三時間の間に極めて美しいイコンを描き上げたからである。時にはイコンに金を施し、時には石の上で様々な絵の具をすり合わせ、それらを使って描いていた。その後、彼は尊者に向かってこう言った。

「師よ！もしかすると、まだ何か足りないところがあるのでしょうか。あるいは、私が何か過ちを犯してしまったのでしょうか？」

すると、尊者はこう答えられた。

「あなたはすべてを完璧に成し遂げました。神ご自身が、あなたにこれほど見事なイコンを描くよう助けてくださったのです。これは神ご自身が、あなたを通して成し遂げられたのです。」

そして夕暮れになると、そのイコン画家はそのイコンと共に姿を消してしまった。

一方、イコンの所有者は、祝祭日までにイコンが完成しないのではないかと心配し、悲しみのあまり一晩中眠ることができなかった。そのため、彼は自分には神のそのような恵みを受ける資格がないと考え、自分を大いなる罪人だと称していた。このため、翌朝起きると、彼は教会へ行き、そこで主に対して自分の罪を告白しようとした。　しかし、教会の扉を開けた途端、彼はその場所にイコンが立っているのを見た。彼はそれが幽霊だと思い、恐怖のあまり即座に地面に倒れ込んだ。その後、少し体を起こしてイコンを注意深く見つめると、それが自分のイコンであることに気づいた。　この出来事に、彼は大きな恐怖と戦慄に襲われ、聖アリピオスが「そのイコンは祝日に間に合うだろう」と彼に告げていた言葉を思い出した。そして、家中の者たちを起こしに行った。　家族たちは喜び勇んで、ろうそくと香炉を持って教会へと急いだ。そこで太陽のように輝いている聖像を目にしたとき、皆は地面にひれ伏し、聖像に礼拝を捧げ、喜びに満ちた心で聖像に口づけをした。

その後、その敬虔な男は修道院長のもとへ赴き、聖像に起こった奇跡について語った。それから二人は共に尊者アリピオのもとへ向かったが、彼はすでにこの世を去ろうとしていた。それにもかかわらず、修道院長は彼に尋ねた。

「父よ！この聖像は、誰によって、どのようにして描かれたのですか？」

アリピオスは、自分が見たことをすべて彼らに伝え、こう言った。

「そのイコンは天使によって描かれたものであり、今まさにその天使がここに立ち、私の魂を迎えに来ようとしているのです。」

こう告げると、この祝福された方は、8月17日[5595]　に、主の御手に御霊を委ねられた。兄弟たちは、その遺体を布で覆い、教会へと運び、その後、慣例通りの葬送の歌を捧げた後、聖人の遺体を聖アントニオの洞窟に安置した。

こうして、この聖なる奇跡を行うイコン画家は、天と地を飾り立てた。地上で肉体をもって生きた後、彼は徳ある魂をもって天に昇り、イコン画家の長である神、父なる神を賛美した。神はこう言われた。*「われわれの像に、われわれに似せて、人を造ろう」*　（創世記 1:26）と仰せられた方、また*「御自身の位格の像」*　（ヘブライ人への手紙1:3）によっても創造された。御子なる神は、*「人の姿をとって」*（フィリピの信徒への手紙2:7）現れ、また、鳩の姿（マタイによる福音書3:16）や火の舌の姿（使徒言行録2:3）をもって天から降臨された聖霊と共に。　これらすべて、すなわち、唯一の本質に宿る父なる神、御子なる神、聖霊なる神を、私たちの尊き父アリピオスと共に賛美し、永遠の世々にわたり栄光を帰しましょう。アーメン。

聖殉教者ストラトン、フィリッポス、エウティキアノス、キプリアンの殉教記念日

記念日：8月17日

これらの聖なる殉教者たちは、高貴な身分の者たちであり、ニコミディア[5596]　を巡り、民衆の観覧会場を訪れては、そこに集まった人々を教え、偶像への礼拝をやめてキリストへの信仰に立ち返るよう説得した。　ある日、市の長官は、競技場が空っぽで、観客がほとんどいないのを見かけ、その理由を知った。すなわち、民衆が聖なる殉教者たちから教えを受け、競技場に集まることをやめ、先祖代々の慣習を軽んじて、何らかの新しい生活を送っているということだった。そこで長官は直ちに、聖人たちを自分の元へ連行するよう命じた。　彼らが都市の統治者の前に引き出されると、キリストへの信仰を堅持し、他の人々にもその教えを説いていると告げた。そこで彼らは闘技場に連行され、野獣に引き裂かれるように放たれたが、野獣たちは彼らに何の害も与えなかった。　その後、彼らは多種多様な拷問にさらされ、ついに火の中に投げ込まれた。こうして聖なる殉教者たちは、キリストのために[5597] の苦難の道を歩み、勝利を収めて、[5598] の冠を授かった。

聖殉教者ミロンの記念日

記念日：8月17日

聖ミロンは、不義の王デキオス[5599]　の治世下、アカイア[5600]　の長老であった。その国の総督はアンティパトロスであった。聖人は名門かつ裕福な家系に生まれ、非常に温和な性格であった。彼は心の中で常に神と人々への温かい愛を育み、神に喜ばれる生活を送っていた。

ある日、キリストの降誕祭の日、総督アンティパトロスは、祈りのために集まっていたキリスト教徒を捕らえて拷問にかけるため、キリスト教の教会に踏み込んだ。これを見た聖ミロンは熱意に

[5595] アリピオス尊者は1114年に逝去した。

[5596] ニコメディアは、古代ローマ帝国東部の首都であり、ディオクレティアヌス帝の居城であった。小アジア北西部に位置するローマ属州ビフィニアの有名な都市である。

[5597] ギリシャ人にとって「ポプリシュチェ」とは、走ることのために柵で囲まれた、一定の長さと幅を持つ場所を指した。ポプリシュチェを走り抜け、他の誰よりも先にゴールした者が勝者とされ、賞として花冠を授与された。

[5598] これらの聖なる殉教者たちの没年は不明である。

[5599] デキウス皇帝は249年から251年まで在位した。

[5600] アカイアは、ペロポネソス半島にあった古代ギリシャの地域である。

燃え上がり、総督を力強く非難し、叱責した。　このため、彼はイゲモンの命令により捕らえられ、残酷な拷問にさらされた。木に吊るされ、鉄の櫛で皮膚を削られ、その後、火で焼かれた。　最後に、激しく燃え上がり、恐ろしい炎を放つ炉に投げ込まれた。しかしその時、炉から火が飛び出し、近くに立っていたイゲモンの不敬虔な家来たち百五十人を焼き尽くした。　聖人はキリストの恵みにより生き残り、何の害も受けず、炉の真ん中に立って神を賛美した。その間、炉の中には聖なる天使たちが、聖人の周囲の炎の中に立ち、炉の熱を和らげているのが見えた。

炉の火が消え、聖人が何の傷も負わずにそこから出てきたとき、イゲモンは彼に偶像への礼拝を強要し始めた。しかし、聖人がこの不敬な命令に従わなかったため、イゲモンは聖人の皮膚を剥ぎ取り、肩から足まで帯状に切り分けるよう命じた。　しかし、聖なる殉教者は、自分の体から一本の革紐を取り、それをイゲモンの顔に投げつけた。すると、彼は再び裸の体を鉄の爪で削られる刑に処され、その後、野獣に食わせられたが、それでも野獣から何の害も受けなかった。

その時、イゲモン・アンティパトロスは、キリストの殉教者ミロンによってあらゆる点で恥をかかされたのを見て、怒りと狂乱に駆られ、自らの手で自ら命を絶った。こうして、その不信心者は騒ぎを巻き起こして滅び、その忌まわしい魂を悪魔たちに委ね、地獄で永遠の苦しみを受けることとなった。 一方、聖なる殉教者はキジクという町へ連行され[5601] 、そこで首を刎ねられて息を引き取り、その聖なる魂を神の御手に委ねた[5602] 。こうして、殉教の冠を受け、彼は主の喜びの中へと入っていった。

コンダク、第4声：

幼き頃から栄光に満ちたキリストを愛し、その神聖な戒めを守り通したゆえに、あなたは完全な姿のままその御許へと駆け寄った、至聖なるミロンよ。天使たちと共に熱心に祈り給え。あなたの記憶を敬うすべての人々の罪の赦しを請い願え。

8月31日

8月18日（旧暦）

同日、コンスタンティノープルの聖総主教ヨハネスとゲオルギオスの記念日。ヨハネスは669年から674年まで、ゲオルギオスは678年から683年まで総主教を務め、両者ともコンスタンティノス・ポゴナトス皇帝（668～685年）の治世下にあった。

聖司祭殉教者エミリアンおよび彼と共に殉教した者たちの殉教

記念日：8月18日

聖エミリアンは、アルメニアのアジア側地域で生まれた。彼の両親はキリスト教徒であり、高貴で裕福な人々であった。彼らは彼を学問を学ばせるため、ある徳の高い人物、イラリオンという名の聖なる修道士のもとへ預けた。　書物の理解をしっかりと学び、成人すると、エミリアンは貞潔で、神に喜ばれる敬虔な生活を送り、断食、祈り、書物の読解に熱心に励み、その処女の純潔を汚れなく守り抜いた。　不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスがヨーロッパでキリスト教徒に対する残酷な迫害を開始したという噂がアルメニアに届くと、エミリアンは正しい信仰に対

[5601] キジクという都市はアルクトニッセ半島に位置していた。

[5602] 聖殉教者ミロンの死は、およそ250年頃であった。

する聖なる熱意に燃え上がり、キリストへの愛に駆られて、キリストのために死をも厭わない覚悟を固め、　異教徒たちにキリストの御名を宣べ伝え、主のために自らの命を捧げるべく、それらの国々へ向かうことを決意した。エミリアンには、ディオニシウスとエルミッポスという二人の兄弟がいた。彼は神に導かれた説得によって、彼らにも同じ志を抱かせた。　こうして兄弟たちは、両親の死後、互いの合意のもと、キリストへの愛ゆえに家、故郷、遺産、そしてこの世のあらゆる富を捨て、アジアからヨーロッパへと旅立った。彼らは師である聖修道士イラリオンも連れ出し、イタリアのスポリトンという町[5603]に到着した。この町では、異教徒の中に、清く正しい生活を送る多くのキリスト教徒を見つけ、彼らの願いに応じて、彼らの元で暮らすようになった。祝福されたエミリアンは、昼も夜も祈りと神の御言葉の説教に励んでいたため、すべての人にとって聖性の模範であった。

しばらくして、トレビア[5604]と呼ばれる近隣の町で、司教が亡くなった。そこで、その町の住民たち――彼らはキリスト教徒でありながら、偶像崇拝者たちの間に、雑草の中の麦や茨の中のユリのように暮らしていた――は、聖エミリアンの生涯と知恵を知り、彼を自分たちの司教に選んだ。彼は年齢こそ若かったが、知性と徳において年長者たちを凌駕する人物であったからである。　叙階のため、彼らは彼をローマへ送り、教皇マルケリンの元に赴かせた。教皇から司教の叙階を受けた聖エミリアンは、師と兄弟たちと共に、スポリトンから自身の教区の主教座都市であるトレビアへと移り住んだ。　教区民の指導に就くと、彼は勇敢に彼らを導き、キリストの羊の群れを言葉と行いによって教え導いた。その際、奇跡的に病を癒やし、キリストの恵みによって人々の肉体と魂を癒やすことで、多くの異教徒をキリスト教の信仰へと改宗させた。

当時、その地方を統治していたのは、マクシミアヌスという名の残忍な人物であり、不敬虔な皇帝たちからエトルリアとウンブリアに対する権力を委ねられていた。　キリスト教の司教エミリアヌスが、多くの人々を偶像崇拝からキリストへと改宗させ、異教の神殿を撤去しているという噂を耳にしたマクシミアンは、急いでトレビアに駆けつけ、神の聖人を捕らえて自分の前に引き出させ、裁きにかけるよう命じた後、彼にこう言った。

「エミリアヌスよ、お前の噂を耳にしたぞ。なぜその狂気によって、自ら進んで死を望むのか？もし我らの神々にひれ伏さぬならば、お前に残酷な拷問を加え、恐ろしい死を遂げさせるつもりだ。」

「私は悪魔には拝まない」と、聖なる司教は断固として答えた。「なぜなら、聖書にも記されている通り、すべての異教の神々は悪魔であり、それらに拝む者は地獄で永遠の苦しみを受けることになるからだ。」

この言葉を聞いて、総督は激怒し、聖人を容赦なく殴打するよう命じた。そして、殴打が終わると、言葉で彼を嘲り始めた。彼はキリストなる神を冒涜し、キリスト教の神には何の力もなく、自分が崇める神々こそが全能であると語った。すると、神の聖人は彼にこう言った。

「望むなら試してみよ。キリストの力と、お前の神々の力と、どちらが優れているかを知ることができるだろう。ここに、中風を患う者か、あるいは他の何らかの病に冒された者を連れて来させよ。そして、お前の祭司たちに命じて、病人の癒やしを神々に祈らせよ。　私も私の神に祈ろう。そして、どちらの神がその力によって病人を癒やすか、その神こそがすべての人によって真の神として認められ、すべての人がその神を崇拝するようになるように。」

この聖エミリアヌスの提案はマクシミアヌスの気に入り、彼は直ちに病人を探し出すよう命じた。まもなく、非常に長い間床に伏せ、手足を全く動かすことのできない麻痺した男が連れてこられ

[5603] 現在のスポレートは、ウンブリア地方のティブレ川の支流の一つ沿いに位置している。この支流は古代にはクリトゥムナと呼ばれていた。

[5604] トレビアは、古代にはかなり重要な都市であり、スポリトンと同様に、世界の首都であるローマとアドリア海沿岸の港の一つを結ぶ大街道沿いに位置していたが、現在は存在しない。この都市はウンブリアにあり、スポリトンのやや北、そこから近い距離にあった。

た。この光景を目撃しようと、これから起こる奇跡を見たいと願う大勢の民衆が集まった。　そこで、統治者の命により、祭司たちは自分たちの神々に祈りを捧げ始め、アポロン、ゼウス、メルクリウス、そしてその他の虚しく偽りの神々を呼び求め、その麻痺した男を癒やしてくれるよう願った。彼らは非常に長い間祈り続けたが、何の成果も得られなかった。一方、聖人は脇に立ってその様子を眺め、彼らや彼らの神々を嘲笑っていた。　ついに、マクシミアンは自分の祭司たちに祈りをやめるよう命じ、キリスト教の司教エミリアヌスに向き直って言った。

「さあ、もし神から何かを得られると期待しているのなら、今こそお前の神に祈ってみよ。」

すると、司教は祈りを捧げるためにひざまずき、両手を上げ、天を仰いでこう祈り始めた。

「*主よ！　私の祈りを聞き入れ、私の叫びがあなたのもとへ届きますように。　御顔を私から隠さないでください……私が（あなたに）呼び求めるその日、速やかに私の声に耳を傾けてください*」（詩編101篇2～3節）。主よ、ここに集うすべての人々に、あなたが唯一の真の神であることを示し、あなたを信じる者たちを救ってください。

そう祈り終えると、聖師は麻痺した人のところへ歩み寄り、その手を握って言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、立ち上がり、健やかになりなさい。」

その麻痺した男はたちまち立ち上がり、全身が健やかになり、皆の目の前で歩き回り、喜びながら神を賛美した。彼は完全に癒されたことを証明するために皆に姿を見せ、喜びながら家路についた。

この奇跡は、それを見守っていたすべての人々を驚嘆させ、多くの者がキリストを信じるようになった。マクシミアン自身も心の中で信仰に傾きかけていたが、不敬虔な祭司たちは、この奇跡は神の力によるものではなく、エミリアヌスの魔術によるものだと説得し、統治者にこう訴えた。

「神々への崇拝が完全に失われることのないよう、この魔術師を処刑せよ。」

不敬虔な祭司たちの言葉に耳を傾け、目に見える神の力よりも彼らの偽りの言葉をより信じたマクシミアンは、再び聖エミリアヌスに偶像を拝むよう説得し、こう言った。

「神々に犠牲を捧げよ。私の助言に従わなかった多くの人々が、これまで恐ろしい苦しみの中で死んでいったことを知っておきながら。」

「あなたの不敬虔な神々に犠牲を捧げず、キリストのために死ぬことを選んだ者たちは、今やキリストと共に永遠の至福を享受しているのです」と聖人は答えた。

「もうキリストの名については語るな」と、これに対しマクシミアヌスは言った。「だが、若さを惜しめ。恐ろしい拷問が君を待っているのだから。」

「私は――キリストの僕である」と聖エミリアヌスは答えた。「イエス・キリストの御名を公然と口にし、賛美することを決してやめない。主のために、あらゆる苦しみ、そして死さえも甘んじて受け入れる覚悟がある。」

そこでマクシミアンは、聖人を裸にし、拷問場に吊るし、火のついたろうそくでその体を焼くよう命じた。

この拷問を黙って耐え忍びながら、聖なる殉教者は、苦しみの中で自分を強めてくださるよう主に祈った。すると、キリストが現れてこう言われた。

「恐れるな、エミリアンよ。わたし自身が、あなたと共にいるのだ！」

その瞬間、ろうそくの火は消え、処刑人の手は痙攣した。これを見た総督は、殉教者を拷問台から降ろすよう命じ、彼にこう言った。

「どのような術を用いて、ろうそくを消し、私の家来たちの手を不具にしたのか？　しかし、私にはお前に課す、さらに過酷な拷問が用意されている。それを乗り越えることは、もはやお前にできないだろう。」

「私の術とは――」と殉教者は答えた。「私のキリストです。もしあなたが私にさらなる拷問を加えるなら、主は私にさらなる忍耐を与え、私を通して主のさらなる御力を示してくださるでしょう。」

そこでマクシミアヌスは、錫の釜を溶かし、その中に殉教者を投げ込むよう命じた。　しかし、キリストは再びそのしもべの前に現れ、彼の手を取って共に釜の中に入った。すると、火はたちまち消え、釜は砕け散り、錫は流れ出したが、聖人は無傷のままであった。この奇跡は統治者とその場にいた者たち全員を驚嘆させたが、彼らはそれを神の力とは認めなかった。

その後、マクシミアヌスは、聖殉教者の首に大きな石を縛り付け、町の近くを流れるクリトゥムナと呼ばれる川に投げ込むよう命じた。しかし、ここでもキリストは聖エミリアヌスの前に現れ、かつて使徒ペトロにしたように、彼の手を取り、水の深みから岸へと導き出した。　兵士たちは聖人を統治者の元へ連れ戻し、起こった奇跡について彼に報告した。

その時、マクシミアンはエミリアンを野獣の餌食にするよう命じたが、野獣たちでさえ、この神の聖人に何の害も及ぼさなかった。なぜなら、再び御自分の御心に適う者に現れた主ご自身が、そこにいらっしゃったからである。キリストは彼にこう言われた。

「勇気を出せ、エミリアンよ、わが善良で忠実なしもべよ！」

すると、獣たちは落ち着きを取り戻した。ライオンやヒョウは子羊のように柔和になり、ある者は聖人の足を、またある者はその手を舐めた。このような奇跡を目の当たりにして、民衆は叫んだ。

「キリストの神は偉大なり！そのしもべを自由の身にしてください。」

そしてその日、千人がキリストを信じた。民衆に対する激しい怒りに駆られたマクシミアヌスは、武装した兵士たちを民衆のもとへ送り込み、キリストを賛美する者たちを殺すよう命じた。こうして、男女を問わず、あらゆる年齢の信者千人が殺害された。　さらに、激怒した統治者の命令により、殉教者に害を及ぼさなかった獣たちまでもが殺害された。獣たちが虐殺されるのを見て、エミリアヌスは叫んでこう言った。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。あなたのために死ぬのは人間だけでなく、獣までもがそうするのだから。」

聖エミリアヌスにどのような拷問を加えればよいか迷っていたマクシミアヌスは、彼を牢獄に投獄するよう命じた。その間、処刑人たちの助言に従い、彼は拷問用の特別な車輪を製作させ、そこに無数の鋭い鉄の歯を取り付けるよう命じた。　しかし、彼の命令により、牢獄から連れ出された聖殉教者をその車輪に縛り付け、山から転がし下ろした瞬間、聖人の前に現れた主が彼を車輪から解き放ち、引き下ろされた。そして、転がり落ちた車輪は、山のふもとにいる多くの異教徒たちを傷つけ、殺してしまった。　その後、聖殉教者は再び牢獄に投獄された。一方、マクシミアヌスは、聖エミリアンの二人の兄弟、ディオニシオスとエルミッペ、そして彼らの師であるイラリオンについて知ると、恐怖のあまり身を隠していた彼らを探し出すよう兵士たちを派遣した。　彼らが発見され、統治者の元へ連行されると、統治者は彼らを聖エミリアンが収監されていたのと同じ牢獄に投獄するよう命じた。自分の師と兄弟たちを見た神の聖人は大いに喜び、彼らは皆、キリストの御名のために苦難を受けるに値する者とされたことを共に喜んだ。　その夜、至福のイラリオンは神から、彼ら全員がまもなく殉教の冠を受けるという啓示を受けた。その直後、ディオニシオスとエルミッポスは、長老イラリオンと共に、統治者の裁きを受けるために連行された。　しかし、統治者が彼らに偶像への礼拝を強要し、拷問で脅し始めたとき、彼らの信仰を強めるために主キリストが現れ、同時に地震が起こり、偶像は台座から転がり落ちて粉々に砕け散った。そのため、聖人たちは、　統治者の命令により、残酷に殴打され、ついに斬首された。　こうして、彼らは主から約束されていた殉教の冠を受け取ったのである。

翌日朝、マクシミアヌスは神の聖人エミリアヌスを法廷に連行するよう命じ、彼にこう言った。

「お前の兄弟たちとお前の師はキリストを否認した。私は彼らを別の都市へ送り、栄誉を受けるようにしたのだ。」

しかし、聖エミリアンは、神の啓示によって聖人たちの殉教の死を知っていたため、統治者にこう答えた。

「迫害者よ、お前の言うことは真実ではない。彼らはキリストを否定したのではなく、キリストのために命を捧げたのだ。とはいえ、彼らを別の町へ送ったというお前の言葉は正しい。なぜなら、彼らを殺したことで、お前は実際に彼らを天の都へ送り、栄光の王であるキリスト――彼らがそのために苦難を受けた方――から栄誉を受けるようにしたのだから。」

この言葉を聞いて、マクシミアヌスは激怒し、聖エミリアヌスに剣による斬首を宣告した。この判決の後、聖人は大勢の民衆に囲まれ、処刑を行うために、都市から一ポプリシュ[5605]の距離にあるカルピアノヴォと呼ばれる場所へと連れ出された。　処刑場へと向かう途中、殉教者は神を賛美し、民のために祈りを捧げながら歌っていた。　処刑人が聖人の首に剣を振り下ろしたとき、剣は蝋のように曲がり、何の傷も負わせなかった。すると、処刑に立ち会っていた兵士たちは聖人の足元にひれ伏し、許しを請い、キリストこそが唯一の真の神であることを認め、聖なる殉教者に、キリスト神に自分たちのために祈ってくださるよう懇願した。　そして、殉教者がひざまずき、彼らだけでなくすべての人々のために祈り始めたとき、天から声が聞こえてきた。その声は、彼の祈りが受け入れられたことを告げるとともに、彼自身を天の御国へと招いていた。この声を聞いた聖なる殉教者は、言葉に尽くせないほどの喜びに満たされた。　彼は一刻も早く肉体を脱ぎ捨て、キリストと共に生きたいと願ったが、それを実現するには、普通の死ではなく殉教の死を遂げたいという願いがあった。そこで彼は主に対し、剣によって死ぬことを許してくださるよう祈った。すると、別の処刑人が現れ、彼の尊い首を切り落とした。　こうして、聖エミリアン司教は殉教者の冠を授けられた。その傷口からは血の代わりに乳が流れ出し、こうした奇跡を目の当たりにした多くの異教徒たちが、キリストを信じるようになった。彼らは聖殉教者の尊い遺体を、香油を塗った清らかな布で包み、その場で埋葬した。

その後、キリスト教徒への迫害が収まると、信者たちは聖人の遺骸を厳かに街へと移し、聖なる場所に安置した。そして、キリスト・神を賛美した。神に、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

聖殉教者フローラとラウラの記念日

記念日：8月18日

聖殉教者フローラとラウラは、肉親としてだけでなく、霊においても兄弟であった。なぜなら、二人は心を一つにしてキリストを信じ、善行をもってキリストに奉仕したからである。職業は石工であった。　彼らの師は敬虔な人物プロクルスとマクシムスであり、彼らから職人技とともに、キリスト教の信仰の教えに従った神に喜ばれる生き方も学びました。　キリストへの信仰ゆえに、まず彼らの師たちが処刑され、それからしばらくして、師たちに続いて彼らもまた殉教の冠を受け継ぎ、イリリアの統治者リキオン（[5606]）の手によって苦難に満ちた死を遂げた。彼らの苦難のきっかけとなったのは、次のような出来事であった。

[5605] ポプリシュチェ――約1ヴェルスタ（690サジェーニャ）に相当する距離の単位。

[5606] イリュリア――バルカン半島北西部に広がる広大な地域で、アドリア海沿岸に位置していた。現在、古代イリュリアの地にはボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビアなどが位置している。

ある隣国の統治者が、異教の神々のための壮麗な石造りの神殿を建設するために、熟練した石工を送ってほしいとイリリアの統治者に依頼した。国内でこの分野の最も熟練した専門家であったのが聖フロルと聖ラヴルであったため、リキオンは彼らをその統治者のもとへ送り出した。　その統治者の意向に従って神殿を建設する中で、聖なる兄弟たちは、自分の労働の対価として受け取った報酬を貧しい人々に配り、　同時に、貧しい人々にキリストへの聖なる信仰を教えた。彼ら自身は常に断食、祈り、そして労働に時間を費やしていた。夜は祈りを捧げ、昼は仕事をこなし、　食事は少量しか摂らなかったが、その代わりに飢えた者や貧しい者たちにはたっぷりと食事を与えた。このように行動する中で、彼らは自分たちが世話をしていた貧しい人々だけでなく、ある異教の祭司とその息子までもがキリスト教の信仰に改宗させた。その経緯は次の通りである。

ある日、聖なる兄弟たちが石を削っていると、その神官の息子である若い青年が近づいてきて、すぐそばで彼らの作業を見守っていた。すると突然、石から破片が飛び出し、青年の目に当たり、目をえぐり出してしまった。　痛みに耐えかねて青年は叫び声を上げた。その叫び声を聞いて、異教の祭司である父親が駆けつけた。息子の顔が血まみれで、片目が飛び出しているのを見て、彼は悲しみのあまり自分の服を引き裂き、聖なる労働者たちを罵り、彼らを殴りつけようと襲いかかろうとしたが、そこにいた他の労働者たちに引き止められた。　聖なる兄弟たちの無実を証明しつつ、彼らは、この不幸の責任は若者自身にあると語った。というのも、彼らが石を削っている最中に、若者が安全対策を講じることなく近づき、その作業を見ていたからである。　神の聖なる御使いであるフロールとラヴルは、司祭をなだめようと努め、まもなく彼の息子の目を癒やし、以前と同じように見えるようにすると約束した。

その後、彼らはその若者を一晩自分の家に泊め、唯一の真の神であるイエス・キリストについて教え始め、こう語った。

「もし、私たちがあなたに宣べ伝えているその神を、心を尽くして信じるなら、あなたの目はすぐに癒やされるでしょう。」

「もし私の目が以前と同じようになれば」と青年は答えた。「私はあなた方の神を信じ、その神を崇めます。病人を癒やし、盲人の視力を取り戻してくださる神を信じる方が、病人を癒やすどころか、健康な人を病気にさえしてしまうような神々を信じるよりも、間違いなくふさわしいことです。」

そう言って、若者は聖人たちに次のような出来事を語った。

「はい」と彼は言った。「私たちの祭司たちの中に、エルムという名の祭司が一人います。数年前、彼を祭司の位に就かせようとした際、ゼウス像の前に連れて行き、その像の手を彼の頭の上に載せる儀式が行われました。　これは、私たちの間で神官に任命する際の儀式として行われているものです。その儀式とは、肩に取り付けられ、関節で動く偶像の手を、神官たちが銀の鎖を使って上へ持ち上げ、その後、任命される者の頭へと下ろすというものです。　この手をエルマの頭の上に下ろそうとしたとき、銀の鎖が偶然、それを支えていた者たちの手から滑り落ち、偶像の手がエルマの顔に落下し、爪で骨まで削り取ってしまいました。そのため、今日に至るまで、彼の歯は遠くからでも見えるほどです。そして、どの神も彼を助けようとはせず、むしろ彼の状況はますます悪化しています。

若者がこの出来事を語ると、聖フロルと聖ラヴルは涙を流しながら、神に若者を癒やし、彼の肉体の目だけでなく、魂の目をも照らしてくださるよう祈り始めた。　熱心な祈りの後、彼らは若者の患った目に十字を切ると、その目はたちまち治り、完全に健康を取り戻し、以前と同じようによく見えるようになった。　この奇跡により、癒やされた若者だけでなく、異教の祭司であったその父もまた、キリストを信じるようになった。この祭司の名はメメルティンといい、彼はこの時から、悪魔に仕える者から、息子と共に我らの主イエス・キリストの僕となった。

その後、聖なる働き手であるフロルとラヴルは、神の御使いの助けを得て、短期間で建設中の教会を完成させた。しかし、彼らはそれを偶像の住処として残すことはせず、イエス・キリストの至聖なる御名を賛美するために聖別した。　彼らはその教会堂の東側に尊い十字架を立て、三百人もの貧しい人々、すなわち信仰の兄弟たちを集め、キリストなる神を賛美しながら徹夜祈祷を行った。祈祷の最中、天の栄光の言い表せない光が上から降り注ぎ、教会堂を驚くべき輝きで満たした。　徹夜祈祷が終わると、教会にいた者たちは皆、すぐ近くに建っていた建物へと向かった。そこには新しい教会のために用意されていた偶像があり、彼らはそれらの偶像の首に自分の帯を巻きつけ、地面を引きずり回したり、殴ったり、打ち砕いたりして、こうしてそれらを細かく粉々に砕いた。

この一連の出来事を知った地方総督は、フローラとラヴラ、そして彼らと共にいた者たち全員――その中にはマメルティヌスとその息子も含まれていた――を捕らえるよう命じた。聖人たちと共にいた者全員を火刑に処す判決を下し、彼ら自身については残酷な拷問を加えた上で縛り上げ、イリュリアの総督リキオンのもとへ送った。　リキオン は彼らにすべてについて詳しく尋問し、彼らがキリスト教徒であり、信仰を揺るがすことなく堅持していることを知ると、深い井戸に投げ込み、土で埋め尽くすよう命じた。

それから長い年月が経ち、彼らの聖なる、多くの病を癒す聖遺骨が発見され、私たちの神キリストの栄光のために、コンスタンティノープルへと尊く移された。

トロパリオ、第4声：

神に愛され、神の知恵に満ちた、この輝かしい二人を、その功績にふさわしく、忠実に称えましょう。至福のフローラと、至聖なるラウラよ。お二人は、創造されざる三位一体を、すべての人々に熱心に、明確に説き明かされました。　それゆえ、血を流すまでの苦難に遭い、輝かしい冠を戴かれたお二人は、キリスト・神に祈り、私たちの魂を救ってくださるよう願ってください。

コンダク、第8調：

敬虔な殉教者であり、キリストの神に導かれた苦難の者たちとして、今日、全宇宙はフローラとラウラを栄光のうちに崇めている。彼らの祈りによって、我らが恵みと憐れみを得、災いと苦難から救われ、審判の日に怒りと悲しみから解放されますように。

聖殉教者エルマ、セラピオン、ポリエンの記念日

記念日：8月18日

異教徒たちは、これらの聖なる殉教者たちについて、彼らがキリストを崇め、偶像を忌み嫌って軽蔑していると告発した。その結果、彼らは捕らえられ、ローマの地方総督[5607] の前に引き出されると、大胆にキリストへの信仰を告白した。　このため、彼らはまず悪臭漂う牢獄に閉じ込められたが、その後そこから連れ出された。しかし、彼らは偶像への生け贄を捧げることを拒んだ。そこで、彼らは狭く通り抜けられない場所を這わされ、岩に打ちつけられながら、神に清らかな魂を捧げ、すべての喜びに満ちた者たちの住まいである場所[5608] で、永遠の至福を得た。

[5607] ギリシャ・ローマ帝国において、「エパルハ」とは地方の行政長官を指す呼称であった。

[5608] これらの聖殉教者たちの没年は不明である。

9月

9月1日

8月19日（旧暦）

聖殉教者アンドレイ・ストラティラトの殉教

記念日8月19日

不敬虔なマクシミアヌス[5609] は、ローマ帝国の東部を統治し、キリスト教徒に対する広範な迫害を開始した。当時、シリアにはアンティオコスという名の軍司令官がいた。彼は残忍な性格の持ち主であり、偶像崇拝の熱心な信奉者で、　のキリストを信じる者たちに対して脅迫と処刑を振りかざしていた。　皇帝からシリア全土の統治権を委ねられ、キリスト教徒を拷問し処刑するよう命じられていた。そのために、多数の千人隊長と、彼らに配下にあるローマ軍が彼の指揮下に置かれた。　他の千人隊長たちの中でも、いばらの茂みの中の芳しいユリの花のように、アンティオコス統治下にはキリストの信徒アンドレイがいた。彼は当初、キリストへの聖なる信仰を密かに抱いていたが、やがて時が来ると、それを全世界に明らかにし、万人の前で公然とキリストの御名を告白した。　彼はまだ洗礼を受けてはいなかったが、心の中に揺るぎない信仰とキリストへの熱烈な愛を抱き、神に喜ばれないあらゆる行いを避け、神の御心にかなう行いを熱心に実践していた。　そのような敬虔さゆえに、神は彼に並外れた勇気と戦場での勇敢さをお与えになった。その結果、その勇敢さと勇気において、ローマ軍全体で彼に匹敵する者は一人もいなかった。彼は幾度となく敵に対して輝かしい勝利を収め、兵士たちの間では他のどの将軍よりも大きな名声と尊敬を集めていた。

ある日、ペルシア軍の大軍がアンティオコスに対して戦争を仕掛け、シリアに奇襲を仕掛けた。ペルシア軍の攻撃が予期せぬものであったため、アンティオコスは大きな動揺に陥った。　しかし、勇敢な千人隊長アンドレイのことを思い出し、彼は急いで彼を呼び寄せ、自身の代わりに軍隊の最高指揮権を委ね、彼を「ストラティラト」、すなわち将軍たちの長と名付け、国を襲った敵に対して軍を率いて出撃し、その進軍を阻止するよう命じた。その際、彼はこう言った。

「お前の戦場における勇気と勇敢さは、私だけでなく、皇帝ご自身もよくご存知である。だからこそ、私はお前をこれほど高い位に就かせたのだ。さて、この予期せぬ戦争を、お前に託す。軍を率い、私の代わりに指揮を執り、お前の持つ栄光をさらに高めてほしい。」

この任務を受け入れたキリストの戦士、聖アンドレイは、自身の栄光のためではなく、イエス・キリストの御名の栄光のために、ふさわしい勇猛さをもって敵に立ち向かおうと望んだ。しかし、古代のゲデオンに倣い　（士師記7:1）に倣い、数多いローマ軍の中から、戦いに臨むためにわずかな兵士たちだけを選び出した。彼は、聖なる王ダビデの「*主は馬の力を見ず、人の足の速さを喜ばれない。主は、御自分を畏れる者、御慈悲を仰ぐ者を喜ばれる*」　（詩編146:10–11）という聖なるダビデ

[5609] ここでいうのは、もちろんディオクレティアヌスの共同統治者マクシミアヌス・ヘルクルではなく、ディオクレティアヌスの娘婿であり、ローマ帝国東部の共同統治者であったマクシミアヌス・ガレリウスである。彼はディオクレティアヌスに、キリスト教徒に対する普遍的な法律を制定するよう働きかけ、その結果、キリスト教徒に対する広範な迫害が始まった。

王の言葉をよく知っていたからである。聖アンドレイが選んだのは、神の恵みが神秘的な霊感によって彼の心に示した者たちであり、彼は彼らと共に敵に立ち向かった。　シリア地方にイナゴのように襲いかかってきた敵の非常に大規模な軍勢を目の当たりにした聖アンドレイは、兵士たちが少数であるにもかかわらず、数多きペルシャ軍を恐れないよう、勇敢な戦いに備えて士気を高めた。　また、彼の兵士たちは皆偶像を崇拝しており、まだキリスト教徒は一人もいなかったため、彼は彼らに、唯一にして全能であり、戦いの場では恐るべき神、すなわち、神を信じる者たちに全能の助けを与える神を知るよう勧めた。彼は彼らにこう言った。

「兄弟たち、友よ！　今こそ、異教の神々が悪魔であることを、実際に確かめることができるだろう。　彼ら自身は無力であり、誰の助けにもなれない。しかし、私が仕える唯一の真の神がおられ、その神は天と地を創造された。神は全能であり、神を呼び求める者すべてに速やかな助けを送られる。戦いで彼らを強くし、敵を彼らの前から逃げ散らせるのだ。　ご覧の通り、今、数多くの敵軍が我々に向かって進軍してきており、その数において我々ははるかに劣っています。しかし、もしあなたがたが虚しい神々を捨て、私と共に唯一の真の神を呼び求めれば、敵がまるで煙や塵が消えるかのように、たちまちあなたがたの目の前から消え去るのを目にするでしょう。

聖人がこう言うと、彼と共にいたすべての戦士たちはその言葉を信じ、キリスト・神に助けを求め、勇敢に敵へと突撃した。　激しい戦いが繰り広げられ、聖アンドレアの兵士たちは輝かしい勝利を収めた。聖人の信仰と祈りによって、天から目に見えない力が彼らを助けに現れ、ペルシャ軍に恐怖を植え付け、混乱に陥らせたからである。ペルシャ軍は後退し、逃げ出した。　一方、聖アンドレイが率いるローマ軍は、彼らを追撃し、鎌で麦の穂を刈り取るかのように、剣でペルシャ兵の首を次々と刈り落とした。このようにして、キリストの力の助けにより、ローマ軍はペルシャ軍に対して輝かしい勝利を収めたのである。　敵が追い払われると、聖アンドレアスと共にいたすべての兵士たちは、キリストの助けによって得られたこの予期せぬ勝利を目の当たりにして、キリストを信じるようになった。そして聖アンドレアスは、救いへと導く正しい道を彼らに説き明かし、できる限り彼らの信仰を確固たるものにした。　戦から威風堂々と帰還した聖アンドレイと、栄光に包まれたその兵士たちは、アンティオキアの街に入城した。

一方、嫉妬深い将校たちの中には、聖アンドレイの武勇と栄光を妬み、彼をアンティオコスに密告し、ストラティラート（軍団長）であるアンドレイが十字架にかけられた神を崇拝していると告げた者もいた。　これを聞いたアンティオコスは激怒し、軍の上級将校数名をアンドレイのもとへ遣わし、彼について語られていることが事実かどうかを確かめさせた。　そのすべてが事実であることを確認すると、アンティオコスは再び使者をアンドレイのもとへ送り、一部は諭し、一部は脅し、そしてキリスト教徒に対する自身の不寛容さを改めて告げ、最後に使者にこう伝えるよう命じた。

「私がポリエウクトスの息子エウフィミオスや、彼と共に多くのキリスト教の信者たちを、いかに残酷な刑罰に処したか、お前はよく知っているはずだ。私は彼らを一人として容赦しなかった。それなのに、十字架に架けられたその方に神としての崇敬を捧げているお前は、一体何を期待し、何を望んでいるというのか？」

アンティオコスから遣わされた使者が、そのような命を受けて聖人のもとへやって来て、これらの言葉を伝えると、聖人は彼らにこう答えた。

「アンティオコスの言葉は、私を脅かすというよりはむしろ勇気づけてくれる。　なぜなら、彼が私に思い起こさせる者たちが、残酷な拷問にさらされながらも、彼に打ち勝ち、殉教者の冠を戴いてキリスト・神の御前に現れたのであれば、なぜ私こそが、私の主イエス・キリストの忠実な僕となり、私より先に主のために苦難を受けた彼らと共に、主の御国における相続の権利に与ることを、果たせないというのか？」

使者が聖アンドレイのこの返答をアンティオコスに伝えると、彼は激怒し、聖人を縛って自分の元へ連行するよう命じて兵士たちを派遣した。　裁判長の席に着くと、彼は聖アンドレイに対し、王の命令に従うのか、それとも自分の神に仕えるつもりなのかを、皆の前で公に宣言するよう命じた。すると聖人は、この不敬虔な法廷に立ち、天使たちと人々の面前で、力強い声で大胆に、キリストを真の神であり、自分はそのしもべであると告白した。　その後、拷問官は直ちに銅の床を運び込ませ、キリストの戦士をその上で焼き尽くすべく、激しく焼き熱くするよう命じた。床が火花を散らすほどに熱せられたとき、アンティオコスは殉教者にこう言った。

「アンドレイよ、お前は軍務に多大な労力を費やした。それゆえ、これほどの苦労の後は、この床の上で休むべきだ。」

聖なる殉教者は、処刑人が自分を抱き上げるのを待たず、直ちに自ら衣服を脱ぎ捨て、急いで台の上に登り、あたかも柔らかい寝床であるかのようにその上に横たわり、肉体の灼熱を勇敢に耐え抜いた。　最初は痛みを感じた彼は、キリスト・神に、速やかな助けを授けてくださるよう祈り始めた。すると、神の御心により、火は直ちにその力を失い、殉教者の体に害を及ぼすことはできなくなった。　その一方で、アンティオコスはアンドレイの兵士たちの中から他の数名の男たちを捕らえるよう命じ、彼らの両手を十字架の形に釘で四つの部分からなる木に打ち付けるよう命じると、嘲笑を込めて彼らに「これは心地よいか？」と尋ねた。彼らは、キリストのために受けるこのような苦しみこそが自分たちにとって極めて喜ばしいことであると考え、こう答えた。

「ああ、もし私たちが、十字架の木に架けられた私たちの主キリストの模範となれることを許されるなら！」

その後、拷問官は再び聖アンドレイに語りかけ、火あぶりの刑で十分に罰を受けたか、キリストを否定して神々を崇拝するつもりはないかと尋ねた。　これに対し、殉教者は、最後まで耐え抜きたいと答えた。なぜなら、終わりがすべての始めたことを締めくくるからである。キリスト・神から報いを受けるのは、その業を立派に始めた者ではなく、立派に終えた者だからである。そこで、拷問官アンティオキオスは、聖アンドレイを銅の台から降ろすよう命じ、　その仲間たちを木から解き放ち、牢獄に投獄するよう命じた。表向きは、彼らが神々への帰依に同意するまで熟考する時間を与えるためであったが、実際には皇帝に彼らのことを報告するためであった。というのも、皇帝の知らぬ間に、また同意なしに、アンドレイのような勇敢で高貴な人物とその仲間たちを処刑することに、彼は踏み切ることができなかったからである。　マクシミアヌス皇帝は、アンティオコスからの報告を受け取り、それを読んだ後、これほど著名な戦士や、彼と共に並外れた勇気を示した他の戦士たちを公然と処刑することは危険であると判断した。そうすれば、軍隊内で動揺や反乱が起こることもなく、彼らのせいで新たな戦争が勃発することもないだろうからである。　そこで皇帝はアンティオコスに返書を送り、その中でアンドレイとその仲間たちを釈放し、投獄や処刑から解放するよう命じた。しかし同時に、アンドレイとその仲間たちが解放された後、　少し時間を置いてから、巧妙に彼らに別の罪をでっち上げ、もし彼らが頑なにキリスト教徒であり続けるならば、あたかも信仰のためではないかのように、　一人ずつ処刑するよう命じた。　皇帝からこのような命令を受けたアンティオコスは、直ちに聖アンドレイとその仲間たちを枷や牢獄から解放し、自由の身とした。その際、彼らには以前と同じ地位にとどまるよう命じた。

一方、キリストの戦士である聖アンドレイは、神の啓示によって不信心者たちのこのような陰険な企みを知ると、　アンティオコスに内緒で、キリストを信じたすべての兵士たち（その数は2593人であった）と共に、キリキアの都市タルス[5610]へ赴き、同市の司教ペトロのもとで聖なる洗礼を受けることにした。というのも、彼の兵士たちも彼自身も、まだ洗礼を受けていなかったからである。

[5610] キリキアはローマの属州であり、小アジア半島の南東部、地中海沿岸、シリアの北東に位置し、東側でシリアと国境を接していた。タルスという都市は、使徒パウロの生誕地である。

しばらくして、アンティオコスは聖アンドレイとその一行がキリキア地方へ去ったことを知ると、恐ろしいほどの激怒と憤りに満ち、側近たちと相談した上で、キリキアの総督セレウコスに手紙を送り、その中で次のように記した。

「汝も、かつて皇帝軍で千人隊長を務めていたアンドレアスについて耳にしているはずだ。今や彼は、皇帝の命令に従わず自ら狂気に陥っただけでなく、多くの兵士をも同じ狂気へと引き込み、我々が聞いたところによれば、志を同じくする者たちと共にキリキア地方へ逃亡した。　そこで、皇帝の命令に従い、アンドレイおよび彼と共にいる者全員を捕らえ、縛り上げて我々の元へ送るよう命じてほしい。もし彼らが抵抗したり逃亡しようとしたりした場合は、武装した兵士たちに命じて彼らを打ちのめすようにせよ。

セレウコスはアンティオコスからこのような手紙を受け取ると、直ちにキリキア全土に使者を派遣して、アンドレイと彼と共にいる兵士たちの行方を探らせ、彼がタルススにいることを知ると、自ら軍を率いてそこへ向かった。　その頃、聖アンドレイは、キリストの群れに狼が迫っていることを霊によって予見し、タルソスの司教である　至福のペトロと、当時たまたまタルスに滞在していたベレアの司教ノナに対し、直ちに彼と彼の戦士たちに聖なる洗礼を授けるよう懇願した。そして司教たちは直ちに聖アンドレイとその全軍に洗礼を授けた。

聖なる洗礼を受けた聖アンドレイは、仲間たちと共にタルスからタクサニティと呼ばれる地へと去った。それは死を恐れたからではなく、むしろキリストのために死を強く望んでいたからであり、主の「*ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい*」（マタイ10:23）という言葉に表された主の命令に従ったのである。その直後、セレウコスは戦いに備えた武装兵を率いてタルスに到着した。そこでアンドレイとその仲間たちを見つけられなかったため、彼は動揺し、怒りで顔色さえ変えた。そして、恐ろしい激怒に駆られて、キリストの群れを追跡し始めた。　一方、聖人たちは前述の場所から、アルメニアの国境にあるタウロス[5611]と呼ばれる山々へと向かったが、セレウコスは至る所で彼らを追跡し、追い詰めて打ちのめそうと試みていた。　これらの山々を通り抜け、様々な地域を移動する中で、聖人たちは、四方を壁のように切り立った岩に囲まれた狭い場所へとたどり着いた。そこへは、まるで町の門を通るかのように、たった一つの通路を通ってしか入ることができなかった。そこで聖アンドレイは仲間たちと共に立ち止まり、自分たちを殺そうとする者たちを待ち構えた。というのも、まさにこの場所こそが、彼と彼の同志たちが殉教の死を遂げるために、神によってあらかじめ定められていた場所だったからである。聖アンドレイはそこで仲間たちに向かって、次のように語った。

「友よ、兄弟たちよ、わが子らよ、*『今こそ恵みの時、今こそ救いの日』*（IIコリント6:2、イザヤ49:8）である。さあ、私たちの主が命じられたように、心を一つにして、神の愛の中にしっかりと立ち続けよう。私たちを迫害する者たちに対して手を上げることはせず、むしろ、神が私たちをこの時までに生き延びさせてくださったこと、そして、神のために苦難を受けたすべての聖徒たちと共に、その御国を受け継ぐ時が来ることを感謝して、祈りを込めて神に向かって手を上げよう。　さあ、ユダヤ人たちがステファノ聖人を石打ちにしたとき、彼が「主イエス・キリストよ、御自分のしもべたちの魂をお受け入れください（使徒7:59）。私たちはそれを御手の内に委ねます」と祈ったように、私たちも主に祈りましょう。

このような言葉を仲間たちに告げた後、聖アンドレイは彼らの真ん中に立ち、両手を上げ、天を仰いで、次のように祈り始めました。

「主よ、主よ、偉大にして全能なる方よ！罪深く、不適格なあなたのしもべと、私と共にあり、あなたへの聖なる信仰を汚れなく守り抜いた者たちすべての祈りを聞き入れ、私たちの　魂を平安

[5611] 現在のタウルス山脈は、スカニア半島の南岸に沿って伸び、その後北へ上昇して東へと続く山脈である。その東部はアンチタウルスと呼ばれている。アンチタウルスの氷河から、有名なティグリス川が源を発している。

のうちに受け入れ、あなたの憐れみで彼らを覆い、天国の住まいへと導いてください。主よ！　また、私たちの記念を尊ぶ人々のためにも、あなたに祈ります。彼らの救いにつながるすべての願いを叶え、私たちの祈りのゆえに、彼らのあらゆる必要において助け手となってください。そして、あなたのために私たちの謙虚な血が流されるこの場所が、癒やしを与え、不浄な霊を追い払う泉となりますように。　また、ここに訪れるすべての人々をあらゆる災いから守り、彼らに心身の健康をお与えください。そうして、この場所で、御父と御子と聖霊の御名が、至聖なる御名として賛美されますように。

聖アンドレイと彼と共にいた者たちがこのように神に祈っている最中、セレウコスが兵士たちを率いて彼らに追いついた。彼らは剣を抜き、歯を食いしばり、まるで獣のようにキリストの群れに襲いかかった。　しかし、キリストの聖なる戦士たちは、勇敢で戦いに熟達しており、この通路が一つしかない狭い場所で、殺し屋たちの手から身を守ることができたはずでしたが、主にならって、悪意のない子羊のように、自分たちを屠る者たちの手に身を委ねました。　彼らはひざまずき、首を剣の下に差し出した。そしてセレウコスの兵士たちは、容赦なく彼らを斬りつけ、短時間で全員を殺害した。聖人たちの血は、まるで水のようにその場所から小川となって流れ出し、彼らの魂は喜びに満ちて主の御許へと入っていった。

聖人たちは8月19日、日曜日の午後2時に殉教し、彼らの殉教の血が流れたその場所から、直ちに清らかで癒しの泉が湧き出た。

聖人たちが殴打される様子を、ある岩の上に身を隠していた前述の司教たち、キリキアのタルソス出身のペトロスとベレアのノンが見ていた。彼らは、聖人たちの最期を目撃しようと、聖職者たちを率いて遠くから彼らを追跡していたからである。　聖なる殉教者たちを殴打した後、セレウコスが兵士たちを率いて帰路につくと、これらの司教たちは聖職者たちと共に殉教者たちの遺体の元へ近づき、その上で泣き悲しんだ。その後、埋葬の準備を整え、その場所で彼らを尊厳をもって葬った。彼らはまた、聖なる殉教者たちの祈りによって湧き出た泉も目撃し、そこから水を飲んでその治癒力を知った。というのも、司教たちと共にいた聖職者の一人が、長い間悪霊に悩まされていたが、この泉の水を飲んだ途端、悪霊は即座に彼から離れたからである。　聖人たちの埋葬後、ペトロ司教はタルスには戻らなかった。セレウコスが彼を捜し出し、処刑しようとしていたためである。そこで、彼と共にいた者たち全員を連れて、イサウリアへと向かった。

一方、近隣の住民たちは、その癒しの泉のことを知ると、そこを訪れ、病人を連れてくるようになった。　人々は水を飲み、その水で身を洗い、聖なる受難者アンドレイと彼と共に苦難を受けた聖なる殉教者たちの祈り、そして私たちの主イエス・キリストの恵みによって、あらゆる病から癒やされた。主イエス・キリストに、父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第5調：

地上の地位の栄光を捨て、天の御国を相続された。血の滴をもって、まるで驚くべき宝石のように朽ちることなき冠を飾り、キリストのもとへ殉教者たちの群れを導き、天使たちの列と共に、沈むことのないキリストの太陽の尽きることなき光の中に見出された、　聖アンドレイ・ストラティラトよ。あなたと共に苦難を耐え抜いた者たちと共に、常に彼に祈り、私たちの魂を救ってくださいますように。

コンダク、第2調:

主への祈りの前に立ち、星が太陽に先立つがごとく、御国の望ましい宝を仰ぎ見、言い表せぬ喜びに満たされ、永遠の王に、天使たちが絶えず賛美する御方を、　アンドレイ・ストラティラートよ、彼らと共に、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

ドンスカヤ「[5612]」の聖母イコンを称える祝日

記念日：8月19日

本日、ドンスカと呼ばれ、帝都モスクワの近くにある修道院において、崇敬される奇跡を起こす聖母のイコンに敬意を表して、聖母マリアの祝日が執り行われます。

このイコンについては、次のような伝承がある。

敬虔な大公ディミトリ・イオアンノヴィチが、ドン川とネプリアドヴァ川の間にあって、不敬虔なタタール人のハン・ママイと戦っていた際、ロシア軍にはこの尊く、奇跡を起こすイコンも携行されていた。それはドン軍によって大公への献上物として、また敵に対する助力として持ち込まれたものであった。　聖母マリアの祈りと、この奇跡を起こすイコンから発せられるその恵み深い力により、タタール軍は打ち破られた。　軍と共に勝利を盛大に祝った大公は、自身の都であるモスクワに戻り、ドン川でタタール軍に勝利したことにちなんで「ドンスカヤ」と名付けられたこの尊いイコンを携えて帰還した。

ドンスカヤの聖母イコンにちなんで「ドンスカヤ」と呼ばれる修道院については、次のような逸話が残っている。

敬虔なツァーリであり大公であるフェオドール・イオアンノヴィチの治世中、クリミア・オルダがモスクワ公国の領土に突然の襲撃を仕掛け、タタール人のハン、ムラト・ギレイが首都モスクワそのものに迫った。　そこで、敬虔なツァーリは自らの軍を率いてタタール軍に立ち向かい、現在の修道院があるまさにその場所に陣を敷いた。彼は、ドン川から持ち帰った至聖なる聖母マリアのイコンを、この軍営へと持ち込んだ。聖母マリアの御加護により、彼はタタール軍に勝利を収め、彼らを撃退した。　勝利に対する感謝の意を聖母に捧げ、彼はこの場所に石造りの教会を建て、その中に前述のイコンを安置するよう命じました。それ以来、この修道院は「ドンスカヤ」と呼ばれるようになりました。

この日、モスクワ市の大聖堂から、聖職者たちが皆、聖なる十字架やイコンを携えてこの修道院を訪れ、聖母マリアを称える盛大な祝祭を行う。

聖殉教者ティモフェイ、アガピイ、フェクラの殉教記念日

記念日：8月19日

栄光ある殉教者ティモフェイは、パレスチナのガザの町[5613]　の出身であった。彼はその生き様と言葉の才によって人々の驚嘆を誘ったため、キリストの信仰の教師に任命された。　彼はガザで捕

[5612] イコンについては golden-ship.boom.ru を参照

[5613] ガザは地中海の沿岸に位置している。古代には、フィリスティム人の5大都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の境界線となっていた。　新約聖書においてガザが言及されているのは、エチオピアの女王カンダキアの改宗の物語（使徒行伝8:26）のみである。4世紀にはすでにガザはキリスト教の都市となっていたが、7世紀にはイスラム教徒に征服された。

らえられ、同市の統治者ウルバンの前に引き出された際、尋問の中で自らをキリスト教徒であると宣言し、さらにキリストの人々への愛、この世への降臨、そして受肉について説いた。このため、彼は様々な拷問にさらされたが、信仰を曲げることなく貫いた。　その後、火の中に投げ込まれ、息を引き取った。ちょうどその頃、同じ町で聖アガピオスと聖テクラも残酷な拷問にさらされたが、それでもなおキリストへの信仰を貫いたため、野獣に引き裂かれる運命にさらされ、そこで息を引き取り、天の冠を授かった[5614]。

9月2日

8月20日（旧暦）

聖預言者サムエルの生涯

記念日8月20日

イスラエルに王が立つ以前、神の民がまだ士師たちによって統治されていた時代、エルカナという名の男がいた。彼はレビ族の出身で、エフライムの領地にある、　ラマフ（ラマ）と呼ばれる町に住んでおり、その町はスペラと呼ばれる山の上に位置していた。　その後、この町はアルマフェム、そしてアリマフェイと呼ばれるようになり、後に、私たちの主イエス・キリストの聖なる御体を葬ったヨセフの出身地となった。エルカナには二人の妻がいた。一人はアンナ、もう一人はフェナンナという名であった。　フェンナナには子供が生まれたが、アンナには子供が授からなかった。しかし、エルカナはフェンナナよりもアンナを深く愛していたため、フェンナナはアンナを憎み、しばしば彼女を侮辱した。憎むべき相手によって心を乱されたアンナは、子宝に恵まれないことを嘆き、悲しみのあまり泣いていた。　エルカナは毎年、主要な祭りのたびに、二人の妻を連れてシロ（山と町の名前）へ行き、主なる神サバオトに犠牲を捧げ、祈りを捧げていた。というのも、エルサレムに神殿が建てられるまでは、そこに神殿と神の契約の箱があり、イスラエルのすべての部族が神を礼拝するためにそこへ集まっていたからである。　当時、イスラエルの祭司であり、同時に裁判官でもあったエリという人物がおり、彼にはオフニとピネハスという二人の息子がいた。

ある日、エルカナは妻たちを連れてシロへ行き、神に犠牲を捧げた後、その供え物の一部をフェナナに与え、彼女の子供たち一人ひとりに特別な分け前を与えたが、アンナには子供がなかったため、ただ一つの分け前しか与えなかった。すると、フェナナは彼女を嘲り、責め立てた。　アンナは、フェナナの非難と、自身の不妊の両方に深く心を痛めていた。彼女は泣き続け、食事も口にせず、主が彼女の胎を閉ざし、子供を授けず、それゆえにフェナナから嘲笑の的とされたという深い悲しみから、衰弱してしまっていた。その時、夫のエルカナは彼女に言った。

「アンナ、どうしたのだ？　なぜ泣いているのか、なぜ食事を口にしないのか、そしてなぜこれほど深い悲しみで心を枯らし尽くそうとするのか？　私一人の方が、十人の子供たちよりも君にとって良いのではないのか？」

しかし、アンナには慰められる気力もなかった。食事が終わると、彼女は立ち上がり、シロにある主の神殿へと向かった。その頃、祭司エリは主の神殿の入り口の敷居のそばにある祭司の席に座

[5614] ヴェルシンスキーの暦によれば、聖ティモフェイと聖テクラは304年にガザで、聖アガピオスは306年にパレスチナのケサレアで殉教した。聖ティモフェイは火刑に処され、聖テクラは野獣に引き裂かれ、聖アガピオスは海に投げ込まれた。

っていた。神殿の前に立つと、アンナは主にひれ伏し、心の悲しみから泣き出した。そして、密かにこう祈り始めた。

「アドナイ、主サバオトよ！もしあなたが、このあなたのしもべのへりくだりを憐れみ、私を覚えて、このしもべに男の子を授けてくださるなら、私はその子をあなたに捧げ、その子が生涯を通じてあなたに仕えるようにいたします。　その子はぶどう酒も、いかなる酔わせる飲み物も飲まず、また（ナゾレ人の慣習に従い）かみそりがその頭に触れることもありません。

アンナがこのように主の御前で祈り、長い間祈りを続けていたとき、祭司エリは彼女の口元を見つめていた。彼女は心の中で語り、口元だけが動いていて、声は聞こえなかったため、エリは彼女が酔っていると思い、こう言った。

「いつまで酔っ払ったままここに居続けるつもりか。主の御前から立ち去り、酔いを覚ませ。」

「いいえ、ご主人様」とアンナは答えた。「私は酔っていません。ただ、深い悲しみに打ちひしがれている女なのです。」　私はワインも、その他の酔わせる飲み物も一切飲んでいません。ただ、主の前で私の心を打ち明けていたのです。どうか、あなたのしもべであるこの者を、イスラエルの娘たちの嘲りの種にしないでください。私は、この大きな悲しみと苦しみゆえに、今こうして語っていたのです。

すると、エリは彼女の言葉にこう言った。

「平安のうちに帰りなさい。イスラエルの神が、あなたが神に願ったすべての願いを叶えてくださいますように。」

「あなたのしもべである私は」とアンナは言った。「あなたの目に恵みを見出しました。」

その後、アンナは夫のもとへ戻り、夫と共に食事をし、酒を飲んだ。そして、彼女の顔にはもはや以前のような悲しみの色は見られなかった。　翌日、彼らは早起きして主に礼拝を捧げた後、自分の家へ戻った。主はアンナの謙遜な心を顧み、彼女の祈りを聞き入れ、不妊の悩みを解消してくださった。アンナは身ごもり、時が満ちると男の子を産み、彼に「サムエル」という名をつけた。これは「神に願い求めた者」という意味である。

まもなく、アンナの夫が、いつもの慣習に従って家族全員を連れてシロへ行き、神に犠牲を捧げ、祈りを捧げ、土地の収穫の十分の一を納める祭りの時期が近づいた。アンナは夫に言った。

「今回はあなたと一緒にシロへは行きません。赤ん坊の授乳が終わるまで家に留まります。そして、彼が断乳したら、主の御前に現れ、主に立てた誓いを果たします。すなわち、私の息子を永遠に主に仕えさせるという誓いです。」

夫は彼女にこう答えた。

「お望みのままにされなさい。主が、あなたの口から出たその言葉を成就してくださいますように。」アンナは家に留まり、サムエルという赤ん坊の乳離れをするまでの三年間、シロの主のもとへは行かなかった。ユダヤ人の母親たちには、赤ん坊に三年間母乳を与える習慣があったからである。

サムエルが断乳した後、アンナは彼と夫と共にシロへ行った。彼らは犠牲として三頭の子牛を連れて行き、小麦粉三メーラとワイン一メーラを携え、子供を連れてシロの主の宮に入った。　アンナは約束通り、その子を主への捧げ物として差し出し、祭司エリヤに手渡しながらこう言った。

「私は、三年前、あなたがここで、不妊の解消を主に祈っていたのを見たあの女性です。主は私の願いを聞き入れ、私が主に求めたこの子を授けてくださいました。今、私はこの子を主に捧げます。この子が、その生涯のすべての日に主に仕えるためです。」

そう言って、アンナは自分の子を祭司の手に委ね、主にひれ伏した。そして、夫のエルカナは、いけにえとして持参した供え物を祭司に手渡した（サムエル記上1:1–28）。そこでアンナは預言の霊に満たされ、次のように歌った。

「私の心は主によって強められ、私の力は私の神によって高められた」――そして、現在教会で頻繁に歌われているその他の言葉も（サムエル記上2:1–10）。

感謝のいけにえと祈りを捧げた後、エルカナとアンナは家路についたが、三歳の少年サムエルは、かつて神に委ねた者を再び自分の元へ連れ帰ることを望まなかったため、祭司エリヤのもとで主に委ねておいた。　それ以来、少年は神の神殿で育てられ、エリヤの指導の下、読み書きと神の聖所での奉仕を学んだ。母は、神への捧げ物を携えてしばしばシロを訪れ、息子に衣服を届け、彼が成長し、祭司の亜麻布の衣を身にまとって主の神殿で奉仕する姿を見て、喜びを感じていた。　祭司エリヤは、彼の奉仕への熱心さに気づき、彼の中に神から与えられた賜物を見出して、彼を愛した。そしてエリヤはサムエルの両親を祝福し、エルカナに言った。

「あなたがたが主に捧げたサムエルの代わりに、主が私を通してあなたに子供たちを与えてくださいますように。」

その後、主は再びアンナに恵みを授け、彼女は息子や娘を産むようになった。一方、サムエルはこの間、体だけでなく知恵も成長し、主と人々の好意を勝ち得ていた。

祭司エリは年老いており、その息子たちであるオフニとピネハスは、堕落した者たちであった。不義を行う者たちの息子たちと同様に、彼らは神を知らず、祭司としての義務も果たさなかった。彼らは、犠牲を捧げる者たちに不当な扱いを行い、最良の部分を自分たちで奪い取り、主の神殿に祈りを捧げにやって来た女性たちを辱めた。　彼らの行いは、イスラエル全土にとって誘惑と害悪となった。というのも、彼らは他にも多くの不正を犯していたからである。彼らの父エリはこれを耳にしていたが、彼らを鞭打ちや追放によって懲らしめることはせず、ただ言葉で悪行をやめるよう説得しただけであった。しかし、彼らは彼の言うことを聞き入れなかった。　そこで、主は、不品行な息子たちだけでなく、彼ら自身の罪に対して適切な懲罰を与えなかった父エリヤに対しても怒りを燃やされた。エリヤ自身は清かったにもかかわらずである。主はエリヤとその息子たち、そして彼らの家系すべてを滅ぼそうと決心され、まず一人の名も知れない預言者をエリヤのもとに遣わして、こう告げさせた。

「わたしは、イスラエルのすべての家の中から、あなたの父の家を、わたしの神殿でわたしに仕えるために選んだ。しかし、あなたはわたしが与えた栄誉を軽んじ、わたしよりも自分の息子たちを優先させた。彼らはわたしの目の前で不義を行うのを、あなたが許したからだ。　それゆえ、わたしはあなたの家からこの栄光を奪い取る。わたしを賛美する者だけを、わたしは栄光に輝かせ、わたしを賛美しない者は恥をかかせるからだ。見よ、わたしがあなたの子孫と、あなたの父の家の子孫を滅ぼす日が近づいている。　そして、あなたの家に下る懲罰のしるしとして、あなたの二人の息子が同じ日に共に剣によって死ぬことになる。そして、彼らの代わりに、わたしに忠実な祭司を立て、その者はすべて、わたしの心にかなうように行なうであろう（サムエル記上2:10–36）。

この預言は、サムエルがまだ幼い少年だった頃にエリヤに与えられたものであったが、この預言の後も、エリヤは実効性のある懲罰をもって息子たちを戒めようとはせず、ただ言葉で諭し続けるだけであったため、堕落した息子たちは父親を恐れることはなかった。　そして、ますます怒りを募らせた神は、懲罰を近づけ、サムエルを通してエリヤに次のように再び予告された。

サムエルがすでに十二歳になり、祭司エリのもとで主に仕えていたある夜、エリは主の神殿に隣接する前庭にある自分の定位置で休んでおり、　彼の目は眠気で重くなり始めていた。一方、サムエルは神の箱が安置され、燭台がまだ灯っていた主の神殿で眠っていた。　すると、主は内側の垂れ幕の向こうから声を上げ、こう言われた。

「サムエルよ、サムエルよ！」

サムエルはすぐに目を覚まし、答えた。

「はい、ここにいます！」

そしてエリのところに駆け寄り、言った。

「はい、ここにいます。私を呼んでおられましたね。」
しかし、エリヤは言った。
「私はお前を呼んでいない、わが子よ。戻って、寝なさい。」
サムエルは戻って横になった。しかし、主は再び彼に呼びかけた。
「サムエル、サムエル！」
サムエルは起き上がり、エリのところに駆け寄り、二度目にこう言った。
「はい、ここです。私を呼んでおられましたね。」
しかし、祭司は言った。
「私はあなたを呼んでいない、わが子よ。戻って、寝なさい。」
サムエルは当時、まだ主の声を認識していなかった。神からの啓示を受けていなかったからである。
そして、主はサミュエルに三度目も呼びかけられた。サミュエルは素早く立ち上がり、三度目もエリヤのもとへ行き、言った。
「はい、ここです！ 私を呼んでいましたね。」
そこでエリは、主がその少年を呼んでおられることを悟り、こう言った。
「戻って、わが子よ、横になりなさい。そして、呼びかける者がまたあなたを呼んだら、こう言いなさい。
『主よ、お語りください。あなたのしもべは聞いております。』
サムエルは行って、自分の場所に横になった。すると主が来て、そばに立ち、最初、二度目、三度目と同じように呼びかけ、こう言われた。
「サムエルよ、サムエルよ！」
サムエルは目を覚まして素早く起き上がり、こう言った。
「主よ、お語りください。あなたのしもべは聞いております。」
主はサムエルに言われた。
「見よ、わたしはイスラエルにおいて、それを聞く者の両耳が鳴り響くようなことを行おう。その日、わたしはエリについて、その家について語ったすべてのことを成し遂げる。わたしは始め、また終わらせる。」　わたしは彼に告げた。彼の息子たちが不義な行いをしていることを知りながら、彼らを戒めなかったという罪のゆえに、その家を永遠に罰すると。
サムエルは主のこれらの言葉を畏れおののきながら聞き、主の御出現が終わると、再び眠りにつき、朝まで眠り続けた。朝起きて、彼は主の神殿の扉を開けたが、その幻を主君である祭司エリに打ち明けるのを恐れていた。しかし、エリはサムエルを呼び寄せて言った。
「わが子、サムエルよ。主はあなたに何とおっしゃったのか。どうか、私から隠さないでほしい。」
そしてエリは、少年サムエルに対し、神の言葉の一つも自分から隠さないよう誓いを立てさせた。そこでサムエルは、聞いたことをすべて彼に語った。祭司エリは謙虚にこう言った。
「わが主の御心ならば、そのとおりに成し遂げられますように。」
しかし、エリはもはや自分の息子たちを戒め、正す力を持っていなかった。彼はすでに非常に年老いており、息子たちは彼を全く恐れていなかったからである。　一方、サムエルは日ごとに成長し、霊が強められ、神の恵みが彼の中に増し加わっていった。主は彼と共におられ、彼は預言の言葉を語り、その言葉は一つとして成就しないものはなかった。こうして、イスラエルの民全体は、サムエルが主の預言者であることを悟った（サムエル記上 3:1–21）。
しばらくして、神の懲罰がエリヤの家に下り、それとともにイスラエルの民全体にも下った。なぜなら、エリヤの息子たちだけでなく、イスラエル人全体も神を怒らせたからである。　すべての人ではないにせよ、彼らの多くは異邦人から偶像礼拝の習慣を学び、それを捨てず、真の神に仕えな

がらも同時に偶像に犠牲を捧げ、それによって自分たちの神を怒らせたのである。　しかし、寛容な神は、イスラエルの民の罪を、その息子たちであるエリヤたち――彼らは祭司であり、イスラエルの民の指導者であった――が神を冒涜するまでは、忍耐をもって許しておられた。　そして、彼らがその不法によって神の怒りと懲罰を招いたとき、義なる裁き主であり報い主である神は、民の罪も思い起こし、すべての人をまとめて懲らしめた。　なぜなら、神は指導者たちとともに、その配下の人々をも懲らしめるからである。　民の罪が怒れる神の懲罰を招くのは、神が民の指導者や統治者として立てた者たちの罪ほど迅速ではない。

ペリシテ人はイスラエル人に対して戦いを仕掛け、イスラエル人はペリシテ人に敗れ、イスラエルの軍勢からは四千人が戦死した。そこで、イスラエルの長老たちは互いに言った。

「なぜ主は今日、異邦人の前で私たちを打ち砕かれたのか。シロから私たちの神、主の契約の箱を取り出し、私たちの陣営に運び込もう。ペリシテ人との戦いの間、それが私たちの間に留まり、敵の手から私たちを救ってくださるよう願おう。」

こうして決心した彼らは、シロへ使者を送り、ケルビムの上に座しておられる神の箱をそこから運び出した。神の箱のそばには、エリの二人の息子、オフニとピネハスがいた。主の箱が陣営に到着すると、イスラエル全土は喜びのあまり、地がうなるほどの大歓声を上げた。　ペリシテ人はこの叫び声を聞き、言った。

「ユダヤ人の陣営から、なぜあれほど大きな叫び声が聞こえるのか？」

そしてペリシテ人は、主の契約の箱がイスラエルの陣営に到着したことを知った。彼らは恐れおののき、こう言った。

「神が彼らと共に陣営に来られ、我々と戦おうとしている。我らに災いあれ！　誰が我らを神の御手から救い出してくれるのか。神はエジプト人をあらゆる災いで打ち砕かれたからだ。しかし、ペリシテの勇士たちよ、気を取り直して、ユダヤ人と勇敢に戦おう。そうすれば、我々が彼らに隷属させられることなく、彼らが我々に隷属させられたように、我々が彼らを支配することができるのだ。」

このように互いに励まし合いながら、ペリシテ人は勇気を奮い起こしてユダヤ人に立ち向かった。　戦いが始まり、双方で激しい戦闘が繰り広げられたが、ペリシテ人は敗れるどころか、ユダヤ人を打ち破った。神が怒っておられたため、聖なる箱も助けにはならなかった。神の懲罰が及ぶところでは、聖なる箱でさえも容赦されないからである。　ペリシテ人はイスラエル人を打ち破り、その戦士三万人を殺し、神の箱を捕らえ、その傍らにいたエリの二人の息子を殺した。こうして、神の御言葉により、二人は共に剣によって倒れた。

このように、神は指導者たちの罪のために部下たちを罰し、祭壇に仕える者たちの不義な行いのために、不敬虔な者たちが聖なる祭壇を略奪し、御自身の神殿を荒廃させることを許されるのである。　老いた父に代わって、イスラエル全土の祭司、裁判官、統治者となっていたエリヤの息子たちは、主に彼らの不法行為によって神を激しく怒らせた。その一方で、イスラエル全土が彼らのために神からの懲罰を受け、主の契約の箱は異邦人の不敬虔な手に渡されてしまった。

こうしてイスラエルの軍勢が敗北したとき、ベニヤミン族のイメネイという一人の男が、戦場から逃げ出し、服を引き裂き、頭に灰をまいてシロにやって来て、町の人々にイスラエル軍の敗北を告げると、町全体が大きな嘆き声に包まれた。　その頃、エリは主の神殿の入り口にある自分の座に腰を下ろしており、神の契約の箱のことを思うと胸が震えていた。民の叫び声を耳にした彼は、そばにいた者たちに尋ねた。

「一体、あの騒ぎは何だ？」

すると、陣営から駆けつけてきたその男がエリヤのもとに来て言った。

「私は戦場から駆けつけてきました。」

エリヤは彼に尋ねた。

「そこで何が起きたのか、わが子よ？」

「イスラエル人は」と彼は答えた。「ペリシテ人に打ち負かされ、彼らから逃げ出しました。民は大敗を喫し、あなたの二人の息子は殺され、契約の箱も奪われました。」

エリヤは、神の契約の箱が奪われたと聞くや否や、直ちにその席から仰向けに倒れ、背骨を折って死んでしまった。彼は九十八歳という高齢で、体が重かったからである（サムエル記上 4:1–22）。

一方、ペリシテ人はイスラエル軍に敗れた後、神の箱を奪い取り、イスラエルの聖物を捕らえたことを誇り、自慢しながら、それを自分たちの主要都市アゾトへ運び、不浄な神ダゴンの神殿に運び込み、自分たちの偶像の隣に置いた。 しかし、翌日の朝、ダゴンの神殿に入ると、彼らは自分たちの神が地面に倒れ、神の箱の前でうつ伏せになっているのを見つけた。彼らはそれを地面から持ち上げ、元の場所に戻した。 ところが、その翌日の朝、彼らが再び神殿に入ると、ダゴンは神の箱の前で伏せているだけでなく、打ち砕かれていた。その頭と両足は、それぞれ切り落とされて敷居の上に、両手は扉のそばに転がっており、残っていたのは ダゴンの胴体だけだった。 契約の箱に宿っていた神の力は、このペリシテの神だけでなく、すべてのペリシテ人と彼らの地をもこのように罰した。 幼い者から年長者まで、彼らは体の隠れた部分に膿んだ腫れ物ができるという異常な病に襲われ、多くの者が死に、生き残った者たちは恐ろしい傷に苦しみ、耐え難い痛みから激しく叫び、その叫び声は天にまで届いた（サムエル記上5章）。 さらに、その国はあらゆるものを食い荒らすネズミで溢れかえり、ネズミの多さゆえに土地は悪臭を放つようになった。 ペリシテ人はその時、イスラエルの神が、彼らが捕らえた契約の箱のせいで彼らを罰しているのだと悟り、不本意ながらも、金製の献げ物を添えてそれをイスラエル人に返還した。その詳細は『列王記上』に詳しく記されている（列王記上6:1–21）。 さて、私たちは聖なる預言者サムエルの物語に戻ろう。

前述の戦争が終わり、イスラエルの祭司であり裁き人であったエリヤが亡くなった後、イスラエル人は20年間、ペリシテ人の隷属の下に置かれ、敵の支配下にあり、彼らに貢ぎ物を納め続けていた。 しかし、20年が経過すると、神はペリシテ人に虐げられていた御自分の民の苦難に目を留め、彼らを憐れんでイスラエルを敵の支配から救い出そうと望まれたとき、まずその民の中に、悔い改めを説く者、御自分の忠実なしもべであり祭司である預言者サムエルを立てられた。 なぜなら、神は、民が悔い改めた後にのみ、御自分の民を憐れむことを望まれたからである。そして、聖なるサムエルはイスラエルのすべての部族に説教し、こう語った。

「もしあなたがたが心を尽くして主に立ち返るなら、あなたがたの中から異国の神々やアスタルテの聖所（[5615] ）を取り除き、心を主に向け、主のみに仕えなさい。そうすれば、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出してくださる。」

民はサムエルの言葉に従い、彼を信じた。彼らはサムエルが幼い頃から彼を知っていた上、彼の預言の言葉が常に成就することを知っていたからである。 こうしてイスラエルの子らは、異国の神々、バアル[5616] やアスタルテの聖木を取り除き、ただ主のみに仕えるようになった。そして、神の預言者であり祭司である聖なるサムエルは、彼らの裁判官であり統治者となった。 そして、聖なるサムエルは、イスラエル全土に、マシフの町にある高い山に集まるよう命じ、そこで神への国民的な悔い改めの祈りを捧げるようにした。 イスラエルの民が神の預言者サムエルの元に集まり、断食して罪を告白し、「私たちは主の御前で罪を犯しました」と祈っている間、聖なるサムエルは神の祭司として、民の罪の赦しを願って神に犠牲を捧げていた。 その時、ペリシテ人はイスラエルの民が集まっていることを聞きつけ、彼らが自分たちに対して戦争を仕掛けようとしていると考え、大勢で武

[5615] アスタルタは、フェニキア人やその他の古代東洋の民族によって崇拝された女神である。その崇拝者たちは、彼女に奉仕するために神殿ではなく、樫の林や木立を設けていた。

[5616] 太陽神バアルは、古代フェニキア人によって特に崇敬されていた。

装して、イスラエル人を完全に殲滅しようと、不意に襲いかかった。　イスラエル人は、敵が自分たちを襲うために近づいてきていると聞き、大いに恐れおののき、神の預言者サムエルにこう言った。

「私たちの神、主に向かって、私たちのために祈り続けてください。主が私たちをペリシテ人の手から救ってくださいますように。」

しかし、聖なる預言者は彼らを励まし、恐れることなくただ神に祈り、神に希望を置くよう促し、自らもいけにえをささげながら、彼らのために熱心に祈った。そして、主はサムエルの祈りを聞き入れられた。　彼がまだいけにえを捧げ終えないうちに、ペリシテ人がイスラエル人と戦うために近づいてきたが、その日、主はペリシテ人の上に激しい雷鳴を轟かせ、恐ろしい雷撃と稲妻を彼らに下された。彼らは恐怖に襲われ、イスラエルの前で打ち砕かれた。　そこで、イスラエル人はマシファの町から進軍し、敵を追撃し、ベフホル[5617] の麓に至るまで追い打ちをかけ、神に愛された聖人サムエルの祈りと、彼ら自身の悔い改め、そして神の助けにより、敵を完全に打ち破った。

こうして主は御自分の民の前でペリシテ人を鎮め、サムエルの在任中、彼らはもはやイスラエルの領土に侵入することはなく、さらに、彼らがイスラエル人から奪っていた町々も、再び彼らに返還した。　そして、聖なるサムエルがイスラエル全土を立派に統治し、民の裁き人であり統治者であったその間、神の民の間には平和が保たれた。　彼は町々を巡り、是正すべきことはすべて是正し、公正かつ私心なく裁きを行った。なぜなら、誰からも贈り物を受け取らず、　、争う者たちの顔色をうかがうことなく裁いたからである。　その後、彼はアルマフェム（ラム）に戻った。そこには彼の家があり、そこで民を裁き、またそこで主のための祭壇を築いた（列王記上7:1–17）。

長年にわたりイスラエルの裁き人として仕えた聖なるサムエルは、年老いたため、自分の代わりに二人の息子、ヨエルとアビヤを民の裁き人に任命した。　しかし、彼の息子たちは彼の道に従おうとはしなかった。彼らは私利私欲に走って、裁きを求めてやって来る人々から贈り物を受け取り、贈り物に応じて裁きを行い、不公正な裁きを下した。そこで、イスラエルの長老たちは集まり、聖なるサムエルのところへ来て、彼にこう言った。

「あなたは年老いてしまいましたが、あなたの息子たちはあなたの道に従おうとしません。ですから、他の国々のように、私たちを裁き、治めてくれる王を私たちの上に立ててください。」

長老たちのこの言葉はサムエルには気に入らなかった。彼らは、サムエルが喜んで行ったであろう、自分の息子たちを罰したり、彼らから裁判官の権限を取り上げたりすることを求めたのではなく、王を立ててほしいと求めたからである。民はこう言い続けて主張した。

「私たちに王を与えてください。その王が私たちを裁いてくれるように。」

そこでサムエルは主に祈り、主は彼にこう言われた。

「この民の声に耳を傾け、彼らの願い通りにせよ。彼らが拒んだのはあなたではなく、わたしが彼らの上に君臨することを拒んだのだ。しかし、彼らの上に君臨する王の権利について、彼らに告げなさい。」

そこでサムエルは民に言った。

「イスラエルの人々よ。あなたがたが求めている王が、どのようにあなたがたを治めるかを知っておきなさい。その王はあなたがたの息子たちを連れて行き、自分のしもべとする。彼らに武器を背負わせ、馬に乗せ、自分の戦車の前を走らせ、千人隊長や百人隊長として配属する。　さらに、彼は彼らを自分の奴隷とし、自分の畑を耕させ、自分の穀物畑を刈り取らせ、自分のぶどう畑でぶどうを収穫させ、自分に必要なあらゆる仕事をさせよう。また、あなたがたの娘たちを連れ去り、香油を調合させ、料理を作らせ、パンを焼かせるだろう。　また、あなたがたの畑、ぶどう畑、オリーブ園、そしてあなたがたが持つ最良のものはすべて、彼が奪い取って自分の家来たちに与える。あなたが

[5617] ベフホル――同名の町がある山岳地帯。それはベニヤミン族の領地内にあり、ペリシテ人の領土の北東の境界近くに位置していた。

たに残された作物の収穫、ぶどう畑、畑については、彼は十分の一税を課すので、あなたがたに残されたものの中から、その十分の一を彼に納めなければならない。　同様に、あなたがたの男奴隷や女奴隷、そして最良の家畜までも、彼はあなたがたから奪い取って自分のものとし、あなたがたは彼の奴隷となる。その日、あなたがたは王の重荷に喘ぐことになるが、主はあなたがたに答えてはくださらない。あなたがた自身が王を望んだからだ。

聖なるサムエルがこう語ったとき、民は彼の言葉に耳を傾けようとはせず、彼に向かって叫んで言った。

「私たちも他の国々のように、王が欲しいのです。私たちの王が私たちを裁き、敵との戦いに先頭に立って出陣してください。」

その後、聖なるサムエルは、神が王となるにふさわしい人物を彼に示されるまで、民にそれぞれの家へ帰るように命じた（サムエル記上8章）。

ベニヤミン族の、ガバア（ギベ）と呼ばれる町に、キスという名の男がいた。彼にはサウルという名の息子がおり、背が高く美男子で、イスラエル人の中で彼ほど目立つ者はいなかった。キスのところから雌ロバが数頭いなくなってしまったので、キスは息子のサウルを召使いと共に探しに行かせた。　ロバを探してあちこちを歩き回ったが、見つからなかった。やがて、彼らはシファと呼ばれる山にたどり着いた。そこには、聖なるサムエルの故郷であり居住地であるアルマフェム（ラマ）という町があった。そこでサウルは使用人に言った。

「父のもとへ帰ろう。父は、雌ロバのことよりも、むしろ私たちのことを心配しているに違いない。」

しかし、従者は彼に言った。

「この町には、先見の明のある神の人物がいます。彼のもとを訪れる者には、未来を予言してくれるのです。私たちも彼のもとへ行きましょう。もしかしたら、ロバたちの居場所を教えてくれるかもしれません。」

そこで彼らは神の人のもとへ向かったが、その前に主はすでに聖サムエルにサウルに関するすべてを明かされ、彼にサウルを王として油を注ぐよう命じておられた。　聖サムエルは、キソの息子サウルを見ると、温かく迎え入れ、ロバのことは心配するな、と告げた。なぜなら、ロバはすでに見つかったからである。そして、その日とその夜、彼を自分の家に泊めてやった。　翌日の朝、サウルを見送る際、サムエルは油の入った器を取り、その頭に油を注ぎ、彼に口づけをしてこう言った。

「見よ、主はあなたを御自分の民の王として油を注がれた。今やあなたは主の民を治め、周囲の敵の手から彼らを救い出すことになる。」

この油注ぎは、サウルが将来王となるという預言として、秘密裏に行われた。そして聖なるサムエルは、油注がれたサウルに、彼の道のりで起こるべきすべてのことを告げ、こう言った。

「見よ、これが主があなたを王として油を注がれたしるしである。　今、あなたが私のところから立ち去ると、ベニヤミンの領地ツェルアハにあるラケルの墓の近くで、急いで歩いている二人の男に出会うだろう。彼らはあなたにこう言うだろう。『あなたが探しに行っていた雌ロバが見つかった。しかし、あなたの父は雌ロバのことは忘れてしまい、あなたたちのことをとても心配している』と。　その二人の男から離れて、ファヴォルの樫の森に着くと、そこでベテルへ神のもとへ、いけにえの供え物を携えて行く三人の男に出会うだろう。一人は三匹の子山羊を連れており、もう一人は三袋のパンを運び、三番目の男は皮袋に入ったぶどう酒を運んでいる。彼らはあなたに挨拶し、パンを二つくれるだろう。　それから、あなたは神の丘に登り、預言者たちの群れに出会う。そこで主の御霊があなたに臨み、あなたは彼らと共に預言するようになる。これらのしるしが、私の言葉どおりに実現するのを見たら、神があなたと共におられることを知れ。

サウルが聖なるサムエルのもとを去ると、道中で預言者が告げたとおりに、すべてが起こった。

その後、聖なるサムエルは、すべての民に主のもとへマシフの町に集まるよう命じ、自らそこへ赴き、イスラエルの人々にこう言った。

「イスラエルの神、主はこう言われる。わたしはあなたがたの先祖をエジプトの地から導き出し、ファラオの手や、あなたがたを虐げたすべての王たちから救い出した。しかし、あなたがたは今、あらゆる災いからあなたがたを救う神を拒み、あなたがたの上に立つ王を求め、その任命を求めた。それゆえ、あなたがたの願いどおりになろう。」

そう言うと、サムエルはイスラエルのすべての部族を、その氏族ごとに主の御前に並べ、どの部族から王を選ぶかをくじ引きで決めた。くじはベニヤミン族に当たった。　その後、その部族の中で名のある者たちの中から再びくじを引くと、くじはキソの子サウルに当たった。人々はサウルを探し回ったが、見つからなかった。彼は、そのような高い栄誉に値しないと思い、それを避けてある家に身を隠していたからである。しかし、主が彼を明らかにされた。　そこで、民のうちの何人かがサムエルと共にそこへ行き、彼を連れ出し、民の集まりの中に立たせた。彼は身丈が民の中で最も高かった。サムエルは民全体に言った。

「見よ、主が選ばれたのはこの人だ。あなたがたの中に、彼に匹敵する者は一人もいない。」

民は皆喜び、こう叫んだ。

「王よ、万歳！」

そしてサムエルは民に王に関する掟を説明し、その掟を書き記して、主の御前に置いた。しかし、その時点では、不満を抱く者や反対する者がいたため、サウルの王権はまだ完全に確立されてはいなかった。サムエルは民を解散させ、人々はそれぞれ自分の家へ帰った。　サウルもまた、ガバア（ギブ）の町にある自分の家へと向かった。彼には、主がサウルに心を傾けさせた勇敢な者たちが付き従っていたが、サウルの敵対者たちは言った。

「この者が、どうして私たちを敵の手から救い出せるというのか。」

そして彼らはサウルを軽蔑し、贈り物も捧げなかったが、サウルは彼らの軽蔑的な言葉を聞かないふりをした（サムエル記上9–10）。

それから約一ヶ月が過ぎた頃、アンモン人の王ナアスが大軍を率いて、マナセの領地にあるヤビス・ガリラヤという町にやって来て、四方から包囲した。包囲された町の住民たちは、ナアスの大軍を見て、彼に言った。

「私たちと同盟を結んでください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」

しかし、ナアスは彼らにこう答えた。

「私はあなたたちと同盟を結ぶが、その条件として、あなたたち一人ひとりの右目をえぐり出し、それによってイスラエル全体に恥辱をもたらすのだ。」

そこで、町の住民たちはサウルのもとへ使者を送り、助けを求めて包囲から解放してほしいと懇願した。サウルは直ちにイスラエルの全地域に使者を送り、迅速に大規模な軍勢を集め、聖なる預言者サムエルを伴って、不意にナアスの元へ迫った。　早朝、彼はナアスを奇襲し、その軍勢を打ち破って散らし、ナアス自身をも殺した。すると、イスラエルの人々は預言者サムエルに言った。

「サウルが私たちを治めていないなどと言った者がいたか。その者たちを私たちに引き渡せ。私たちが彼らを殺してやる。」

しかし、サウルは言った。

「今日、私のせいで誰一人として死ぬことがあってはならない。なぜなら、今日、主はイスラエルに救いをもたらされたからだ。」

すると、聖なるサムエルは言った。

「ガルガルへ行こう。そこで王権を新たにしよう。」

そこで、民全体が進み行き、サムエルは民の目の前で、ガルガルにおいて主の御前でサウルに油を注いで王とした。そして、彼らはそこで主の御前で平安のいけにえをささげ、サウルとイスラエルの民は皆、大いに喜び祝った（サムエル記上 11:1–15）。

この時、イスラエルの人々は、アンモン人に対してこれほど輝かしい勝利を収めた、新たに立てられた王を喜び祝っていたが、聖なるサムエルは彼らにこう言った。

「見よ、わたしはあなたがたがわたしに語ったすべてのことに従い、あなたがたの上に王を立てた。そして今、その王は、わたしの若き日から今日に至るまで、あなたがたの前を歩んでいる。さあ、今、神と、神の油注がれた者、すなわちあなたがたの王の前で、私があなたがたのうちの誰かから、牛やろば、あるいはその他のものを奪ったことがあるか、誰かを傷つけたり虐げたりしたことがあるか、あるいは誰かから報酬や贈り物を受け取ったことがあるか、証言してください。あなたがたが私を告発するなら、私はそれを返します。

民は彼に答えて言った。

「あなたは私たちを傷つけたり、虐げたりしたことはなく、力ずくで奪ったり、報酬や贈り物を要求したりもしませんでした。」

その後、サムエルは言った。

「今日、主とその油注がれた者、すなわちあなたがたの王が、あなたがたがわたしに対して、王を求めるような過ちを犯していないことの証人である。主ご自身があなたがたの王であり、さまざまな裁判官を通してあなたがたを治め、敵の手からあなたがたを救ってこられたからだ。　あなたがたは、王を求めようとしたことで、主の御前で大きな罪を犯したことを知れ。今、あなたがたはしるしを見るだろう（サムエル記上 12:1–25）。

これらの言葉を語り終えると、サムエルは主に祈り始めた。ちょうど収穫の時期で、晴れて乾燥した日であった。すると突然、激しい雷鳴が轟き、恐ろしい稲妻が走り、雲が現れ、土砂降りの雨が降り出した。民はみな、主とサムエルを恐れおののき、預言者に言った。

「あなたの神、主にお祈りください。私たちがこの世を去ることのないよう、あなたのしもべたちのために。私たちは、王を求めるという罪を、これまでのすべての罪に加えてしまったことを悟っているからです。」

すると、聖なるサムエルは民にこう答えた。

「恐れることはありません。主はご自分の民を見捨てられることはありません。あなたがたは王のもとにとどまりなさい。しかし、心を尽くして主に仕え、あなたがたとあなたがたの王とが主の御心を行いなさい。私は、あなたがたのために主に祈り続けるでしょう。ただ、主を畏れ、主があなたがたのためになさったすべての奇跡と恵みを覚えて、真心を込めて主に仕えなさい。　もし悪を行うようになれば、あなたがたは王と共に滅びてしまうだろう。」こうして民にすべてを語り終えると、聖なるサムエルは裁判官の職を辞し、ただ祭司としての務めだけに専念した。

イスラエルを治める中で、サウルは時が経つにつれて堕落し、神を怒らせ、さらには神の祭司サミュエルを介さずに神に犠牲を捧げるなど、祭司の権限を自ら奪うことを敢えてした。さらに、彼は神の命令にも従わなかった。　なぜなら、主は御自身の預言者サムエルの口を通して、サウルに、アマレク人を滅ぼし尽くすよう命じられたからである。それは、かつてイスラエルの民がエジプトから約束の地へと荒野を旅していた際、アマレク人がその道に大きな妨げとなったという、彼らの昔からの悪行に対する報いとしてであった。主は次のように命じられた。

「彼らの中から誰一人として生かしてはならない。男から女まで、少年から乳飲み子まで、牛から羊まで、らくだからろばまで、すべてを殺し尽くせ。」

サウル王は、イスラエル人から大軍を集め、アマレク人の地へ進軍し、その軍勢を打ち破り、その国を制圧して、彼らの王を生け捕りにした。アマレク人の民すべて、老いも若きも、男も女も、彼は剣で滅ぼしたが、彼らの王だけは生かしておいた。　さらに、アマレク人の家畜のうち、最良の

ものはすべて、彼と彼の兵士たちが自分たちのものとし、劣ったものや取るに足らないものだけを滅ぼした。彼らはまた、アマレク人の最良の財産もすべて略奪して自分たちのものとした。これは、「何一つ容赦せず、何も自分たちのものにしてはならず、すべてを滅ぼし尽くせ」という主の命令に従わなかったからである。

そして、主は預言者サムエルにこう言われた。

「わたしがサウルを王に立てたことを悔いている。彼はわたしから背き、わたしの言葉を守らなかったからだ。」

そこでサムエルはサウルのことを悲しみ、一晩中主に向かって叫び、彼のために祈った。早朝に起きると、サムエルは戦場から帰還するイスラエル人たちに会いに出かけ、ガルガルでサウルと出会った。聖なるサムエルを見て、サウルは彼に言った。

「あなたは主によって祝福されています。私は、主があなたを通して私に告げられたことをすべて果たしましたから。」

しかし、サムエルは言った。

「私の耳に聞こえるこの羊の鳴き声や、牛のうめき声は何なのか。」

サウルは答えた。

「私はアマレク人からそれらを連れてきました。良質なものは民が容赦して集め、質の悪いものは皆殺しにしたのです。」

すると、聖なるサムエルは彼に言った。

「なぜ、主があなたに告げられたすべてのことに従わず、戦利品に飛びつき、主の御目の前で悪を行ったのか。」

すると、サウルはサムエルに答えた。

「私は主の御声に従い、主が私に命じられたとおりにしました。私はアマレク人を滅ぼし、彼らの王を捕らえて生け捕りにして連れてきました。そして民は家畜の中から、最良の羊や水牛を戦利品として取り、主なる神への全焼のいけにえと献げ物として捧げるためでした。」

聖なるサムエルはサウルに答えた。

「果たして、あなたの全焼のいけにえや犠牲が、主の御心にかなうものだろうか。主の御命令に従う方が、よほど良かったのではないか。なぜなら、従順であることは、いかなる犠牲や雄羊の脂肪よりも、はるかに神の御心にかなうからだ。神の御命令に背くことは、魔術と同じ罪であり、主の戒めを破ることは、偶像崇拝と同じことである。　そして、あなたが主の御言葉を拒んだ以上、主もまたあなたを拒まれる。それゆえ、あなたの家系はイスラエルにおいて王位につくことはない。」

サウルは言った。

「私は罪を犯しました。主の命令とあなたの言葉を破ったからです。しかし、私は民を恐れ、彼らの声に従ってしまいました。どうか、私の罪をお赦しください。そして、私と共にいけにえの場所へ戻り、あなたの目の前で主なる神に礼拝させてください。」

しかし、聖なるサムエルは彼から離れようと背を向けた。するとサウルは彼の衣の裾をつかみ、それを引き裂き、神の御使いを自分の方へ引き寄せた。そこで聖なる者は彼に言った。

「今や、主はイスラエルの王権をあなたから取り去り、あなたより優れたあなたの隣人にそれを与えられた。」

サウルはサムエルに言った。

「私は主の御前で罪を犯しました。しかし、今、イスラエルの長老たちや私の民の前で私を辱めないでください。私と一緒に戻り、私があなたの神、主を礼拝できるようにしてください。」

サムエルはサウルと共に引き返し、二人は主に礼拝した。そして聖なるサムエルは言った。

「アマレク人の王アガグを、私のところへ連れて来なさい。」

アガグは震えながら彼のところへ来て、言った。

「ああ、死とはなんと苦いものか！」

聖サムエルは彼に言った。

「あなたの剣が妻たちから子供たちを奪ったように、あなたの母もまた、妻たちの間で息子を奪われるようにせよ。」

こうしてサムエルは、主の御前でガルガルにてアガグを斬り殺した。それは彼を苦しめるためではなく、主の御命令を果たすためであった。　その後、サムエルはアルマフェム（ラム）へ去り、サウルはガヴァヤ（ギブ）にある自分の家へと向かった。そして、聖なるサムエルは、自分の死ぬ日まで、サウル王と二度と会うことはなかったが、彼の滅びを嘆き、哀れんだ（サムエル記上 15:1–35）。

しばらくして、主はサムエルに言われた。

「わたしがイスラエルの王となることを拒んだサウルを、いつまで嘆き悲しむのか。あなたの角に油を満たし、ベツレヘムのイッサイのもとへ行きなさい。彼の息子たちの中に、王となるにふさわしい者を見つけたからである。」

サムエルは主に答えて言った。

「どうして行けるでしょうか。サウルがそれを聞いて、私を殺してしまうでしょう。」

すると、主は言われた。

「群れの中から雌の子牛を一頭取り、それをベツレヘムに連れて行き、『主へのいけにえを捧げに来た』と言いなさい。そして、イッサイとその息子たちをそのいけにえに招きなさい。私があなたに何をすべきかを示すから、私が指し示す者を、私のために油を注ぎなさい。」

サムエルは主が言われたとおりにし、ベツレヘムへ行った。彼の到来に、町の長老たちは恐れをなして、彼を迎えに出てきて言った。

「預言者よ。あなたの来訪は平和なものでしょうか。」

サムエルは答えた。

「平和です。私は主に犠牲を捧げるために来ました。断食と祈りによって身を清め、私のところに来てください。そうすれば、私が犠牲の儀式を執り行います。」

いけにえを捧げた後、聖サムエルはイッサイの家へ行き、息子たちを一人ずつ自分のところへ連れてくるよう命じた。イッサイは長男のエリヤブを預言者の前に連れてきた。預言者は心の中で主に祈り、この者が主によって王に定められた者ではないかと尋ねた。主はサムエルに言われた。

「その容姿や背の高さを見てはならない。わたしは彼を拒んだからだ。わたしは人の外見を見て裁くことはない。人は外見を見るが、神は心を見る。」

そこで、イッサイはアミナダブを呼び寄せ、サムエルの前に連れて行った。預言者は言った。

「主はこの者も選ばれなかった。」

その後、イッサイはサムを連れて行き、サムエルは言った。「主はこの者も選ばれなかった。」

こうして、イッサイは七人の息子たちをサムエルの前に連れて行った。サムエルはイッサイに言った。

「これらがあなたの息子たち全員か？」

イッサイは答えた。

「まだ一人、末の息子がいます。彼は野原で羊の世話をしています。」

サムエルは言った。

「行って、彼を連れて来させなさい。彼がここに来るまでは、私たちは食事を始めない。」

イッサイは人を遣わし、ダビデを連れて来させた。彼は金髪で、美しい目と愛らしい顔立ちをしていた。主はサムエルに言われた。

「立ち上がって、彼に油を注ぎなさい。この人こそ、その者だからだ。」

そこでサムエルは油の入った角を取り、兄弟たちの真ん中でダビデに油を注いだ。その日から以後、主の御霊がダビデの上に臨んだ。その後、サムエルは立ち上がり、アルマフェム（ラム）にある自分の家へ帰った（Iサムエル16:1–13）。

その生涯を終え、すでに老齢となっていたサムエルは、安らかに息を引き取った。すると、イスラエルの民は皆集まり、彼のために泣き悲しみ、アルマフェム（ラマ）にある彼の家に彼を葬った（列王記上25:1）。

この聖なる預言者サムエルを、シラフの息子イエスは、次のように称賛して讃えている。

「主の愛された預言者サムエルは、王国を確立し、その民の上に王たち（サウルとダビデ）に油を注いだ。彼は主の律法に従って民を裁き、（彼の祈りによって）主はヤコブに目を留められた。その信仰によって、彼は真の預言者であると認められた。四方から敵に包囲されたとき、彼は全能の主に呼びかけ、主は天から雷鳴を轟かせ、轟音の中で御声を響かせ、ティルスの指導者たちとペリシテのすべての君主たちを滅ぼされた。　また、その死の時期が来る前から、（サムエルは）主とその油注がれた者の前で、財産から靴に至るまで、誰からも何も受け取らなかったことを証しし、彼を非難する者は一人もいなかった。　彼は死後も預言を続け、王（サウル）にその死を予告し、預言の中で地から声を上げ、不義な民が滅ぼされることを告げた（シラ書46:16–23）。

これが、シラ書がサムエルについて語っていることである。私たち罪人は、この神に愛された聖人の祈りによって罪の赦しと救いを得られることを望み、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を、今、常に、そして世々限りなく賛美しよう。アーメン。

コンダク、第8調：

[5618]、あなたは受胎の前から神に捧げられた尊き賜物であり、幼き頃から天使のように神に仕え、未来の出来事を告げ知らせる恵みにあずかった。それゆえ、我らはあなたに叫ぶ。「喜びなさい、神の預言者サムエルよ、偉大なる司祭よ。」

聖殉教者セヴィルと百人隊長メムノン、および彼らと共に殉教した三十七人の殉教者たち。

記念日：8月20日

同日、聖殉教者セヴィル（フラキア出身）と百人隊長メムノン、および彼らと共にフィリッポポリスにて、ヘゲモン・アペリアヌスによってキリストのために殉教した三十七人の殉教者たちを記念する。　セヴィルスは鉄で削り取られる刑に処され、その後、指には赤熱した指輪をはめられ、さらに火で熱した鉄の帯を腰に巻かれ、最後に首を斬り落とされた。　百人隊長メムノンは二本の柱に引き伸ばされて拷問にさらされ、拷問者たちは彼の皮膚から頭から足まで三本の帯を切り取った。その後、拷問者たちはメムノンと他の37人の殉教者たちの手足を切り落とし、巨大な炉に火を点けて、キリストのために苦しむ者たち全員を火の中に投げ込んだ。　こうして、聖なる受難者たちはその苦難を終えた。[5619]。

[5618] すなわち、特別な崇敬に値する賜物である。

[5619] これらの聖なる殉教者たちは、304年、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の治世下で殉教した。

9月3日

8月21日（旧暦）

同日は、12世紀頃にアントニオの洞窟で修行に励んだ、勤勉なペチェルスクの聖アヴラミイの記念日である。

同日、スモレンスクの奇跡行者である聖アヴラミオスの記念日（13世紀前半に没）。

聖使徒（七十人使徒の一人）ファデオスの生涯

記念日：8月21日

聖使徒ファデオはエデッサの町[5620] の出身であり、ユダヤ人として生まれ、旧約聖書を完全に熟知していた。聖ヨハネ・バプティスタの時代に、聖ファデオはエルサレムを訪れた。そこで主の先駆者の説教を聞き、その天使のような生き様を目の当たりにすると、 ファデウスは深く感銘を受け、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた。その直後、聖ファデウスは、肉体をまとって人々の間に住まわれた我らの主イエス・キリストを目撃し、その教えを聞き、我らの主イエス・キリストによってなされた驚くべき奇跡を目の当たりにし、主に従った。 聖タダイは主によって受け入れられ、福音書に「*主はさらに七十人の弟子を選び、ご自身が訪れようとしていたあらゆる町や場所に、二人ずつ先立って遣わされた*」（ルカ10:1）と記されている七十人の使徒（小使徒）の一員に数えられました。

この七十人の使徒の中に、今記念されている聖使徒タダイがいました。主は、これらの使徒たちを福音宣教へと送り出す際、彼らにこう言われました。

「収穫は多いが、働き手は少ない。だから、収穫の主なる神に、御自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。行きなさい。わたしはあなたがたを、狼の群れの中に小羊を送り出すように遣わす。袋も、旅袋も、履物も持ってはならない。また、道中で誰にも挨拶をしてはならない。 どの家に入っても、まず『この家に平安あれ』と言いなさい。もし受け入れられなければ、その言葉はあなたがたのもとに戻ってくる。その家には留まり、彼らが用意するものを食べ、飲みなさい。働く者は、その労苦に見合う報いを受けるにふさわしいからである。家から家へと移ってはならない。もしどの町に入っても、あなたがたを受け入れてくれるなら、出されるものを食べなさい。また、その町にいる病人を癒やし、彼らにこう言いなさい。『神の御国があなたがたに近づいた。』もし、ある町に入って、あなたがたを受け入れてくれないなら、通りに出てこう言いなさい。『あなたがたの町から私たちに付着したほこりを、あなたがたのために振り払う。しかし、神の御国があなたがたに近づいたことを知っておきなさい…』 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾けるものであり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者である。そして、わたしを拒む者は、わたしを遣わした方を拒むのである（ルカ10:2–16）。

七十人の弟子たちは、大きな喜びをもって福音を宣べ伝えるために旅立ち、主の御言葉を宣べ伝えました。その後、彼らは主のもとに戻り、主の御名によって悪霊たちまでもが彼らに従ったことを主にお伝えしました。

[5620] エデッサ（現在のウルファ）は、メソポタミア北部のユーフラテス川沿いに位置する都市であり、紀元前137年からは、新たに成立したオズロエス王国（あるいはエデッサ王国）の首都となった。紀元217年、ローマ人によって東方の植民都市へと改められた。–4世紀、エデッサでは聖エフレム・シリア人によって神学学校が設立されたが、5世紀にはネストリウス派に傾倒し、エデッサ神学校の教師である長老イヴァが、その支持に特に尽力した。614年、 エデッサはアラブのカリフたちに征服された。1098年にはバルドゥイン伯爵がこれを占領し、エデッサ公国の首都とした。1144年にはトルコ人に征服され、それ以降、支配者が次々と変わり、1637年にようやくトルコの支配下に入った。

私たちの主イエス・キリストが、自発的な受難、死、三日目の復活、そして天への昇天を経た後、聖なる使徒たちは、全宇宙に福音を宣べ伝えるために各地へと散っていった。聖なる使徒タダイは、エデッサの町で福音を宣べ伝えるために主から遣わされた。　というのも、私たちの主イエス・キリストは、ご自身の自発的な受難の前から、すでに御自身の聖なる使徒の一人をこの地に遣わすと約束されていたからである。この町の統治者はアヴガル公であり、主はこのアヴガル公に、御自身の使徒を遣わすと約束されたのである。

このアヴガルは、治ることのない病――ハンセン病――に冒されていた。主イエス・キリストが行われた驚くべき奇跡の話を耳にしたアヴガルは、主にお会いし、その教えを聞き、主の力によって自らの重い病から癒やされたいと強く願った。　しかし、主イエス・キリストご自身が自分のもとに来られるとはあえて期待できず、アヴガルはある熟練したイコン画家（聖像画家）を主のもとへ遣わし、主の御顔を絵の具で描くよう依頼した。　その際、アヴガルは主のもとへ書簡を送り、その中で、主とその驚くべき奇跡について聞いたこと――主がいかなる薬や植物も用いることなく病を癒し、盲人の目を開かせ、　足の不自由な者に歩行の力を与え、ハンセン病患者を癒やし、人々から汚れた霊を追い出し、ただ一言で、長い間病床に伏していた麻痺者を癒やし、死者をよみがえらせたことについて記していた。

「これらすべてをあなたについて聞いて、」アヴガルはこう記した。「私はあなたについて二つのうちのどちらかだと考えています。すなわち、あなたは天から降りてこられた神ご自身か、あるいは神の子であるか、です。なぜなら、あなたは実に驚くべき、そして栄光に満ちた奇跡を行っておられるからです。　それゆえ、私はこの謙虚な手紙をあなたに書き送ります。どうか、私のところへお越しくださり、私が長年にわたり苦しんでいるこの不治の病を癒やしてくださるようお願いいたします。[5621]：

私たちの主イエス・キリストは、アヴガル公の信仰と希望をご覧になり、御自身の至聖なる御顔の、人の手によらない像を彼に送られただけでなく、次のように記した手紙も送られました：

「アヴガルよ、あなたは私を見たことがないのに、私を信じた。それゆえ、あなたは幸いである。私について、『私を見る者は信仰を示さないが、私を見ない者は私を信じ、永遠の命を受け継ぐ』と書かれているからだ。　あなたは、私があなたのところへ来るよう私に手紙を書いているが、私には、私が遣わされた目的を果たし、それを成し遂げた後、私を遣わされた父のもとへ戻ることがふさわしい。そして、私が父のもとへ昇天したとき、私は私の弟子の一人をあなたのところへ遣わす。その者は、あなたの病を完全に癒やし、あなたとあなたと共にいる者たちに永遠の命を与えるであろう。

アヴガル公は、この手紙を受け取り、人の手によらず現れた我らの主イエス・キリストの御姿を見て、大きな喜びに満たされた。愛を込めて手紙に口づけをし、キリストの御姿にひれ伏すと、アヴガルはすぐに病の著しい軽減を得た。というのも、彼の顔にはハンセン病の痕がほんのわずかに残っているだけだったからである。

アヴガルを病から完全に癒やすために、主はご自身の約束に従い、聖使徒タダイを遣わされた。タダイは、後述するように、アヴガルを肉体だけでなく魂までも完全に癒やしたのである。

聖使徒ファデウスがエデッサの町に到着したとき、彼はすぐにアヴガル王に名乗り出ず、まずトビアという名の、彼が知っていたあるユダヤ人の家に入った。　このユダヤ人の家に滞在している間、聖ファデウスはキリストの力によって、実に多様な奇跡的な癒やしを行い、手を置くことと、我らの主イエス・キリストの御名を呼び求めることによって、ありとあらゆる病を癒やした。

[5621] これに関する詳細は、上記の16番の項を参照のこと

聖ファデウスの評判はすぐに街中に広まり、市民たちは多くの病人をこの聖なる使徒のもとに連れてくるようになった。彼らが瞬く間に癒やされるのを見て、皆、大いに驚嘆した。

しばらくして、エルサレムからやってきた身元不明の男が、キリストの御名によって多くの奇跡を行っていると、アヴガル王に報告された。

アヴガル王は直ちに、キリストが「自分の弟子の一人を彼のもとに遣わす」と約束したことを思い出し、心の中でこう考えた——「主が遣わすと約束されたのは、この人ではないだろうか」。そして、トビアを呼び寄せ、彼にこう言った。

「お前の家に、エルサレムから来たある男が滞在していると聞いた。その男は、イエス・キリストの名によって病を癒やしていると言われている。」

トビアは答えた。

「はい、その通りです。ご主人様、おっしゃる通り、私のところに滞在しているその男は、主イエス・キリストの名によって多くの奇跡を行っております。」

すると、王子は言った。

「その人を私のところへ連れて来なさい。」

トビアは聖ファデウスのところへ行き、彼に言った。

「この町の王様が私を呼び出し、あなたが患っている病気を癒やすために、あなたを王様のところへ連れてくるよう命じました。」

聖ファデウスは答えた。

「まことに、私は彼のところへ遣わされたのだ。」

翌日、早朝、二人は領主のもとへ向かった。その間にも、領主の宮殿にはすでにすべての貴族や顧問たちが集まっていた。

聖使徒ファデウスが公爵の宮殿の扉をくぐったとき、公爵は彼を見つめ、使徒の顔が何とも不思議な光に照らされていることに気づいた。アヴガル公爵は恐怖に駆られ、席から立ち上がり、キリストの使徒に地面にひれ伏して礼をした。

一方、そこにいた者たちは皆、公爵のこの振る舞いに大いに驚き、なぜ公爵がただの一般人に頭を下げたのかと首をかしげた。というのも、彼らはキリストの使徒の顔から放たれていたあの不思議な輝きを見ていなかったからである。

その後、公爵は聖ファデオに尋ねた。

「あなたは、神の子である主イエス・キリストの弟子でしょうか。主は、私の病を完全に癒やし、私と私のすべての親しい者たちに永遠の命を与えるために、ご自身の弟子の一人を私に遣わすと約束されたではありませんか？」

キリストの使徒はこう答えました。

「あなたが私の主イエス・キリストに大きな希望を寄せたからこそ、私は主によってあなたのところへ遣わされたのです。もしあなたの信仰がさらに深まれば、信仰に基づいて望むことはすべて叶えられるでしょう。」

アウガルは答えた：

「私は主イエスをこれほど熱烈に信じていたため、主を十字架につけたユダヤ人たちに対して軍勢を率いて戦いを挑み、彼らの残虐さと悪意への復讐を果たし、彼らを完全に根絶やしにしようと考えていました。しかし、私たちの国を支配するローマ当局によって、その計画は阻まれてしまいました。」

聖タダイは言った：

「私たちの主であり神であるイエス・キリストは、嫉妬深く冷酷なユダヤ人たちによる苦難のさなかに、人間の助けを全く必要としなかった。なぜなら、もし望まれたならば、御自身で天使の軍勢を現すことができたからである。しかし、御父の御心を成し遂げるために、私たちの主は世界の救いのために苦難を受けられた。　そして御父の御心を全うされた後、栄光のうちに天に昇り、御父の右の座に着かれた。私たちの主は、誰かに敵への復讐を代行してもらう必要などない。なぜなら、主ご自身がすべてを支配しておられるからである。主ご自身がやがて生ける者と死んだ者を裁き、それぞれの行いに応じて報いを与えられるであろう。

聖使徒タダイは、アヴガル王と彼と共にいたすべての人々に、私たちの主イエス・キリストについて、他にも多くのことを語りました。そして、彼を主への完全な信仰へと導いた後、彼に洗礼を授けました。

洗礼を受けた直後、アヴガルはハンセン病から癒やされた。注目すべきは、最初の癒やし[5622]を受けた後も、アヴガルの顔にはまだハンセン病の痕が残っていたことであり、当初、彼は全身にハンセン病を患っていたのである。　キリストからの手紙（使徒書簡）と、人の手によらずして描かれた至聖なるキリストの御顔の像が彼のもとに届けられたとき、アヴガルは初めて癒やされた――彼の体はハンセン病から清められたが、神の御心により、体のほんの一部、すなわち顔だけが、使徒が到着するまでまだ癒やされていなかった。

それと同時に、使徒の到着後、聖なる洗礼によって、肉体だけでなく魂をも癒やす別の癒やしも起こった。なぜなら、アヴガル王子は聖なる洗礼槽から完全に健康な状態で出てきたからである。

使徒の説教の後、アヴガル王だけが洗礼を受けたのではありません。彼の家に住む者たちは皆洗礼を受け、また、使徒が行った奇跡を目撃した者たち、さらには使徒によって病から癒やされた者たちも、皆洗礼を受けました。

その後、聖使徒ファデウスは、王子に対し、市民全員を集めるよう命じた。そうすれば、彼らもまた神の御言葉を聞くことができるからである。

翌朝、民衆全員が集合した。キリストの使徒は高い場所に立ち、天と地、そして目に見えるものも見えないものもすべて、その全能の力によって創造された唯一の神について、民衆全体に福音を宣べ伝え始めた。　聖使徒ファデウスはまた、私たちの主イエス・キリストが、人々の救いのために言葉に尽くせぬほどに受肉して天から地上に降りてこられたこと、御意志によって苦難を受け、　復活し、天に昇られ、徳ある者たちには天における永遠の報いを、悪しき者たちには地獄における果てしない苦しみを用意されたことについても語った。聖なる使徒は、神の御計画に関するその他のすべての奥義についても、詳細な説教の中で語った。

使徒の言葉を聞いた民衆は皆、使徒が行った奇跡を目の当たりにしたため、その言葉に信仰を示した。皆、自分たちの君主や、以前は様々な病に冒されていた多くの人々が癒やされるのを見たのである。人々は皆、主を賛美し始め、使徒に洗礼を請うようになった。

このようにして、エデッサの町は、我らの主イエス・キリストの御名による聖なる信仰と聖なる洗礼によって照らされた。その後、この地には教会が建てられ始め、使徒の指名によって長老たちが任命された。

アヴガル王子は、この奇跡的な癒やしに対して、キリストの使徒に何らかの形で恩返しをしたいと強く願っていたため、彼に多くの金を差し出したが、聖人は何も受け入れず、こう言った。

「もし私たちが自分のものを捨てたのなら、どうして他者から何かを受け取り、手に入れようなどと言えるでしょうか？」

[5622] 同上を参照。

聖使徒タダイは、エデッサにおいて聖なる信仰と敬虔さを確立し、すべてを善き方向へと導いた後、メソポタミアへと向かった[5623] 。そこで彼は多くの人々を啓蒙し、キリストへと導き、教会を建立した。聖使徒は、キリストの御名を宣べ伝えることに尽力しながら、シリアの多くの都市を巡った。 その後、フェニキアの都市ベイルート[5624] に到着し、ここでキリストの御名を宣べ伝え、多くの人々に洗礼を授けた後、聖使徒タダイは、主のもとで安らかに息を引き取った[5625] 。

なお、本日記念される聖使徒ファデウスは、十二使徒の一人であり、レウベウスとも呼ばれる聖使徒ユダ・ファデウスとは別の人物であることに留意すべきである。後者の記念日は6月19日であり（この日付をクリックすると、その生涯を読むことができる）。 プロローグの、本日の日付のシナクサールに記載されている、本日記念される聖使徒ファデオに関する記述には、次のような記述がある。「聖使徒ファデオ、すなわちレヴェイの記念日 」。 しかし、注意すべきは、「レヴェイ」という通称は、この聖ファデオスではなく、マタイによる福音書（マタイ10:3）にも言及されているように、十二使徒のうちの別の使徒に帰属させるべきであるという点である。

このことについて、古代ギリシャの教会史家ニキフォロス・カリスト[5626] は、自身の『教会史』第2巻第40章でより詳しく述べている。 まさにニキフォロス・カリストは次のように述べている。「聖ユダ、すなわちイスカリオテではなく、別の者であり、ファデウスとレウベウスという二つの名で知られていた。彼はヨセフの息子であり、神殿の屋根から突き落とされたヤコブの兄弟である。彼は当初、ユダヤとガリラヤで福音を宣べ伝え、 サマリアやエドム、さらにはアラビアの都市、シリアやメソポタミアの諸国でも福音を宣べ伝え、その後、アヴガル王の都エデッサへと赴いた。そこでは以前、七十人の使徒の一人である別のファデウスがキリストの御名を宣べ伝えていたが、ユダはこの地で、そのファデウスによって成し遂げられなかったすべてのことを補完した」[5627] 。

ニキフォロス・カリストは、この二人のファデオについて次のように述べている。一人は（十二使徒のうちの一人として）レヴェエと呼び、もう一人（現在言及されている者）は（七十人の使徒のうちの一人として）単にファデオと呼び、レヴェエとは呼ばない。

[5623] メソポタミア――ティグリス川とユーフラテス川の間に位置し、北はアルメニアから南はペルシャ湾まで広がる、岩だらけで砂の多い土地である。

[5624] ベイルートはレバノンの主要都市である。古代、ベイルートはフェニキアの港湾都市であり、ベリトスと呼ばれていた。エジプト王トゥトモシス2世がこの都市を征服し、アンティオコス3世がプトレマイオス朝からこれを奪還した。 紀元前140年、ベイルートはシリア人のディオトス・トリフォンによって破壊されたが、アウグストゥス帝の治世下でアグリッパによって再建され、ローマの退役軍人のための植民地とされた。後の皇帝たちの時代には、ベイルートは修辞学、詩学、そしてとりわけ法学の高等教育機関で名声を博した。

[5625] 聖使徒ファデオスの死は、紀元前44年頃であった。 – アッシリア王ナルセスが、エデッサの君主アヴガルに対し、聖使徒ファデウスを自分のもとへ送るか、あるいはこの使徒によって行われた奇跡について（ナルセスに）書き送るよう要請した使節団の記録がある。 このナルセスの要請に対し、アヴガルは使徒ファデオスの奇跡について彼に伝えた。

[5626] ニキフォロス・カリストスは、14世紀の最も著名な教会史家であり、コンスタンティノープルのソフィア修道院の修道士であった。彼の『教会史』（全18巻）は、ビザンツ皇帝フォキスの没年（約611年）までを網羅している。

[5627] 聖使徒ユダがペルシアでもキリスト教を宣教し、そこから自身の公同書簡を執筆したという伝承がある。 この書簡が執筆されたきっかけは、信徒の共同体に不敬虔な者たちが紛れ込み、神の恵みを不法行為の口実にし、キリスト教の自由を装ってあらゆる罪深い行いを許容していたという状況であった。 この書簡には、一部、教義的な教え――聖三位一体の神秘、イエス・キリストの受肉、善なる天使と悪なる天使の違い、そして将来の最後の審判について――が含まれている。 また、道徳的な教えも含まれています。すなわち、罪深い不潔さ、肉欲、冒涜、高慢、不従順、その他の悪徳を避けるよう勧めるものです； 使徒は、すべての人に対し、それぞれの義務と務め――すなわち信仰、祈り、愛――に堅く立ち続けるよう勧め、迷える者たちの回心を気遣い、異端者から身を守るよう勧めています。

また、聖使徒であり福音記者であるマタイも、一部の福音書記者によってレヴェエと呼ばれている点にも留意すべきである[5628]。

コンダク、第4調:

「教会は、あなたを輝かしい星として仰ぎ、使徒ファデエよ、あなたの奇跡によって常に照らされています。信仰をもってあなたの記念を尊ぶ者たちを救い給え。」

聖殉教者ヴァッサとその子ら、テオグニオス、アガピオス、ピスタの記念日

記念日：8月21日

聖殉教者ヴァッサは、マクシミアヌス帝の治世[5629]にエデッサの町[5630]で暮らしていた。ヴァレリウスという名の偶像崇拝の祭司と結婚し、テオグニウス、アガピウス、ピスタという三人の息子を産み、キリスト教徒であったため、彼らをキリスト教の敬虔さの中で育て上げた（彼女は両親からキリスト教の聖なる信仰について教えを受けていた）。夫に誣告された彼女は、異教の裁判官の前に引き出され、そこで自らをキリスト教徒であると告白した。そのため、彼女は子供たちと共に牢獄に投獄された。その後、聖ヴァッサは裁判の場へと連行された；その際、彼女の目の前で息子たちは様々な拷問にさらされた。まずテオグニオスが絞首刑に処され、体を削り取られた。次に、もう一人の息子アガピオスが鞭打ちの刑に処された。拷問者たちはこのアガピオスの頭から胸にかけての皮膚を剥ぎ取ったが、彼は黙り込み、一言も発しなかった。続いて、三番目の息子もまた様々な拷問にさらされた。母は子供たちの苦しみを見つめながら、彼らを励まし、祈りを込めて、自らの試練を勇敢に耐え抜くよう諭した。そして、この三人の少年たちは、課せられたすべての拷問を勇敢に耐え抜き、同時に剣で斬り殺された。

彼らの母ヴァッサは、最愛の子供たちをキリストのもとへ先立たせたことを喜び、その後再び牢獄に投じられた。そこで彼女は飢えに苦しめられたが、天使から食物を与えられ、それによってさらなる苦難に耐える力を得た。その後、拷問官の命令により、彼女はマケドニアへ連行され、そこで忌まわしい生贄を強要されたが、拷問官たちの命令に従わなかったため、まず水の中に投げ込まれ、次に火の中に投げ込まれた。その後、石打ちの刑に処されたが、あらゆる拷問の中でも無傷のままであった。彼女が偶像崇拝の神殿に連行されたとき、ゼウス神の像[5631]を手に取り、それを地面に投げつけて粉々に砕いた。その後、聖ヴァッサは野獣に食わせられたが、その中においても無傷のままであった。そこで拷問者たちは、彼女を海岸から三十ポプリシュの距離にある海に投げ込んだ。遠くから聖女を見つめていた者たちは皆、太陽よりも明るく輝く三人の光り輝く男たちが、聖女を船へと導き、玉座に座らせたのを見た。その8日後、聖ヴァッサはヘレスポントと呼ばれるある島で兵士たちの前に現れた。このことをマケドニアの総督フィリッポスが知ると、キジク地方（ヘレスポント教区）の統治者に、殉教者を捕らえるよう書簡を送った。その総督は聖女を捕らえると、偶像への生贄を強要した。しかし、聖女が断固として屈しないのを見て、両手を後ろ手に縛らせ、全身を容赦なく打ちのめさせた。そしてついに、その尊い首を切り落とすよう命じた。こうして、聖殉教者ヴ

[5628] これについてより詳しく知りたい方は、聖使徒兼福音記者マタイの伝記（第16章）をお読みください。
[5629] マクシミアヌス皇帝は、305年から311年までローマ帝国の東部を統治した。
[5630] エデッサという都市はマケドニアにありました。
[5631] ゼウス――古代ギリシャの宗教における最高神であり、他の神々の祖とみなされていた。

ァッサは、その聖なる魂を、今、常に、そして永遠に栄光が帰されるキリスト・神の御手に委ねた。アーメン[5632]。

9月4日

8月22日（旧暦）

聖殉教者エウラリアの殉教。

記念日8月22日

異教の皇帝たちが統治し、全宇宙がギリシャ式の不敬虔によって暗く覆われていた頃、スペインの都市バルキノン[5633]に、エウラリアという名の少女が住んでいた。彼女はキリスト教徒の両親の娘であった。　彼女は幼い頃から、全き心をもって我らの主イエス・キリストを愛していた。そして、両親と共に、町からかなり離れた村に住んでいた。両親は、エウラリアの柔和さ、謙遜さ、そして年齢を超えた知性を深く愛していた。　エウラリアは学問を修め、清らかな処女性をもって主に仕えるという揺るぎない決意を抱いていた。聖女は、同年代の少女たちと共に特別な修道室で暮らし、昼夜を問わず書物の読誦と神への賛美に励んでいた。

エウラリアが十四歳になった時、ディオクレティアヌス皇帝[5634]はキリスト教徒に対する残酷な迫害を開始した。イゲモン・ダキアンがバルキノン市に到着し、そこで不敬な神々への忌まわしい生贄を捧げた後、キリスト教徒を探し出し、偶像に香を焚かせるよう強要し始めた。　その結果、町には大混乱が巻き起こった。キリスト教徒たちは家から無理やり引きずり出され、拷問によって偶像崇拝を強要されたからである。このことはすぐに周辺の村々にも知れ渡った。

乙女エウラリアはこれらすべてを耳にすると、大きな霊的な喜びに満たされ、明るい表情でこう言った。

「主イエス・キリストよ、感謝いたします！　あなたの至聖なる御名に栄光あれ。私は求めていたものを得たからです。主よ、私はあなたを信じます。あなたの助けによって、私の心の願いが叶うことを。」

エヴラリアの両親や、彼女と共にいた乙女たちは、聖女のこの言葉を聞いて、彼女が何を言っているのか理解できず、彼女に尋ねた。「なぜそんなに喜んでいるのか、何を得たのか、そして何を望んでいるのか」。しかし、彼女は自分の意図を心に秘めたまま、彼らには何も語らなかった。　皆は驚いた。というのも、聖女は聖なる信仰に関して理解したことは何も隠さないのが常であり、神の恵みによって啓発され、書物から自ら悟ったことはすべて、人々の益となるよう皆に語り伝えていたからである。それゆえ、皆は彼女を自分の魂のように愛していたのである。　しかし、エウラリアは当時、自分を深く愛していた父と母から、自分の計画に妨げられることを避けるために、自分の考えを口にしなかった。

夜が更け、皆が眠りについた頃（すでに雄鶏の最初の鳴き声が聞こえていた）、聖なる乙女は密かに家を出た。その際、誰も彼女の去ることに気づかなかった。そして、天の婚約者である主キリ

[5632] 聖殉教者ヴァッサとその子らの殉教は、4世紀初頭に起こった。450年頃、ハルキドンには聖殉教者ヴァッサを称えて建てられた教会が存在した。

[5633] 現在のバルセロナ。

[5634] ディオクレティアヌス帝は284年から305年まで在位した。

ストへの愛に全身を包まれ、彼のために自らの魂を捧げるという固い決意を胸に、町へと向かった。そして、この夜の旅は、夜に家を出ることを恐れるすべての若い乙女たちにとって通常そうであるように、彼女にとって恐ろしいものには思えなかった。すべての希望を神に託し、主のために死ぬと固く決意していた聖女は、夜の闇をものともせず、夜の幽霊にも、道を横切る獣たちにも動じることなく、　まるで水源へと駆け寄る鹿のように、彼女は、そのような過酷な道に慣れていない素足で、岩だらけの道を突き進んだ。

聖エウラリアは、すでに昼になって街に到着した。城門をくぐる際、彼女は民衆を処刑場へと呼び集める布告人の声を耳にした。彼女は街の中心にある処刑場へと駆けつけた。そこで聖女は、高い裁判席に座っているイゲモン・ダキアヌスを見出した。　人混みを必死でかき分けて、聖女はイゲモンの前に進み出て、力強い声でこう言った。

「不義な裁判官よ、高い玉座に座しながら、万物の上にいらっしゃる神を恐れない者よ。あなたがここに座しているのは、神がご自身の姿と似姿に従って、神に仕えるために創造された罪なき人々を滅ぼすためなのか。あなたは彼らをサタンに仕えるように誘い込み、あなたの言うことを聞かない者たちを死に追いやっているのだ。」

イゲモンは、この若い乙女のあまりにも大胆な態度に驚き、こう言った。

「お前は一体誰だ。呼び出されもせずに我らの法廷に現れ、我々の面前で非難の言葉を発し、王の命令に逆らうとは？」

聖女は、大いなる大胆さをもってこう答えた。

――私はエウラリアと申します。王の王、主の主であられる主イエス・キリストのしもべです。主を信頼して、私はためらうことなく自らここに来て、あなたを非難するのです。なぜあなたは、天、地、海、そしてそれらの上や中に存在するすべてのものを創造された神を軽んじ、これほどまでに無分別な行いをするのですか。　なぜあなたは悪魔を崇拝し、さらに、真の神に仕える人々を、様々な拷問によって、神ではなく悪霊に過ぎない偶像への崇拝へと強いるのですか。それらと、それらを崇拝するあなた方すべては、永遠の火に投げ込まれることになるでしょう。

イゲモンは怒りに満ち、直ちに裸の少女の背中を、容赦なく樫の棒で打つよう命じた。そして、エウラリアが打ちのめされているとき、イゲモンは言った。

「忌まわしい娘よ！　お前の神はどこにいるのだ？　なぜ神は、この鞭打ちからお前を救わないのか。そして、なぜお前はこれほどまでに正気を失い、自分とは無関係な事柄について口を出すような無謀なことをするのだ？　さあ、裁判官の権威がいかに大きいかを知らず、未熟さゆえにこうしたことをしてしまったのだと認めなさい。そうすれば、あなたは許されるだろう。なぜなら、これほど若く、美しく、高貴な乙女を、これほど残酷な鞭打ちにさらすのは、私にとっても心苦しいことだからだ。

すると、聖女はこう答えた。

「私はあなたを嘲笑します。なぜなら、あなたは私に、あたかも無知ゆえに私の神のために苦難を受けようとしたかのように、またあたかもあなたの権力がどれほど大きいかを知らなかったかのように、嘘をつくよう勧めているからです。あらゆる専制君主の権力が一時的なものであることを知らない者などいるでしょうか。　人が今日生きていても、明日には死ぬのと同じように、その権力は移ろいやすいものです。しかし、私の主イエス・キリストの権力は無限です。なぜなら、主ご自身が永遠だからです。私は嘘をつくことを望みません。なぜなら、すべての偽り者と不法者を、燃えるゲヘナに投げ込み、焼き尽くすであろう私の主を恐れているからです。　しかし、もし私が主のために苦難を受け入れるならば、私の処女としての若さはさらに輝きを増し、私の高潔さはさらに高まるでしょう。拷問者よ、知っておきなさい。私の主であるキリストの守りのおかげで、私に与えられる苦

しみから痛みを感じることはありません。キリストは、最後の審判の日に、あなたの行いに応じて、あなたを永遠の苦しみへと裁かれるのです。

この殉教者の言葉に、イゲモンはさらに激怒し、聖女を拷問用の十字架状の木に吊るし、鉄の櫛で彼女の清らかな処女の体を削り取り、皮膚がすべて剥がれ落ちるまで続けるよう命じた。聖女は、その苦しみの中、神にこう叫び求めた。

「主イエス・キリストよ！　あなたの不肖のしもべである私の声を聞き、私の罪をお赦しください！　あなたの聖なる御名のために私が受け入れているこの苦しみの中で、私を強めてください。そうして、悪魔とその手下たちが恥をかくようにしてください。」

すると、イゲモンは彼女にこう言った。

「お前は、一体誰に向かって叫んでいるのだ？　この狂った、呪われた乙女よ、むしろ私の言うことを聞き、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、お前は生き残ることができるだろう。なぜなら、お前の死はすでに近づいており、お前を救い出せる者は誰もいないのだから。」

すると、聖エウラリアは彼にこう答えた。

「あなたには何の幸いもないでしょう、聖なる父よ、悪霊に取り憑かれた、破滅に満ちた人よ！　私はなおさら、私の神から離れることはありません。なぜなら、私が呼び求めている方は、ここにいらっしゃるからです。しかし、あなたは自分の不浄さゆえに、その方を見ることができません。あなたは、その方を見るに値しないからです。　主は私を強めてくださる。だから、あなたが私に敢えて加える苦しみなど、何とも思わないのだ。

そこで、総督は聖女を火のついたろうそくで焼くよう命じ、彼女が死ぬまで焼き続けるよう命じた。

焼かれる中、殉教者は喜びに満ち溢れ、詩篇の言葉を大声で唱えた。*「見よ、神は私の助け手。主は私の魂を強めてくださる。主は私の敵に悪の報いを下し、御真実をもって彼らを滅ぼしてくださる。　私は熱心にあなたに犠牲を捧げ、主よ、あなたの御名を賛美します。それは、あなたの御名が善であり、あなたが私をすべての苦難から救い出してくださったからです」*（詩編53:6–9）。

聖女がこのように祈っている間、ろうそくの炎が使用人たちに燃え移り、彼らの顔をひどく焼いたため、彼らは地面に倒れ込んだ。聖女はこれを見て、天に目を上げ、さらに大きな声でこう言った。

「主イエス・キリストよ！　私の祈りを聞き入れ、私に御慈悲を示してください。私を、永遠の命において安らぎを得る御選民の一員に加えてください。*「私に恵みのしるしを示し、私を憎む者たちがそれを見て恥じ入るようにしてください」*（詩編85:17）。そして、あなたを信じる者たちが、あなたの御力を賛美することができますように。

このように祈り終えると、聖女は神に息を引き取った[5635]；そして、皆が、雪のように白い鳩が彼女の口から飛び出し、天へと舞い上がっていくのを見た。これを見た者たちは皆、大いに驚いた。　一方、キリスト教徒たち（民衆の中に多くいた）は、自分たちの町からも天の主への執り成し役を得ることができたことを喜びました。

イゲモンは、殉教者がすでに息を引き取ったのを見て、若い乙女に打ち負かされたことを深く恥じ、怒りを露わにして裁判の席から立ち上がり、自分の家へと戻っていった。　イゲモンは、殉教者の遺体をその処刑の木に吊るしたままにしておくよう命じ、誰もそこから遺体を降ろせないよう警備兵を配置した。イゲモンは言った。「鳥たちに食べられ、骨が散らばるまで、彼女を木に吊るしておけ。」

イゲモンが立ち去った後も、聖女の遺体は依然として木に吊るされたままであったが、突然、雲から雪が降り注ぎ、聖なる殉教者の遺体を白い衣のように覆った。それを見た警備兵たちは恐怖に

[5635] 聖殉教者エウラリアの殉教は、303年頃であった。

襲われ、その場から退き、遠くからその光景を眺めながら、起こったすべてのことに対して戦慄を覚えた。

その間、聖女の両親はすべてのことを知った。彼らは朝起きて、家の中に最愛の娘の姿が見当たらないことに気づき、大いに動揺して、あちこちを探し回ったからである。　正午頃になって、彼らは娘がキリストの御名を告白したために亡くなり、今もなお拷問の木に吊るされたままであることを知った。そこで、彼らは苦渋の涙を流しながら、急いで町へと向かった。　雪に覆われ、十字架のように木に張り付けられて亡くなった聖女の姿を目の当たりにした両親は、激しく泣き、心を痛め、苦い涙を流して嗚咽した。しかし同時に、愛する娘が殉教の冠を受け、天の花婿の宮殿に入ったことを喜びもした。　彼らはキリストの殉教者の遺体を持ち帰ろうとしたが、警備兵に近づくことを許されなかった。遠くから聖女を見つめながら、彼らは泣きつつも、心の中では喜びに満ちていた。

三日目の夜、ある敬虔な男たちが（警備兵に気づかれることなく）聖なる殉教者の尊い遺体を運び出し、香りのよい清らかな布で包んだ。その傍らでは、両親が愛しい娘の遺体を涙で洗い清めていた。 一方、聖フェリックス（後にキリストの御名を告白したために殉教した）[5636] は、亡くなった殉教者の顔を見つめながら、喜びの涙を流してこう言った。

「エウラリア様！あなたは私たちより先に、殉教の冠を授かる栄誉に浴されました！」

フェリックスがこう語ったとき、すでに三日間も死んでいた乙女の顔が、まるで生きているかのように微笑み、彼を見つめた。その後、そこにいた者たちは皆、詩篇の言葉を歌い始めた。*「[義人たちは]叫べば、主は聞き、すべての苦しみから彼らを救い出される」*（詩編33:18）。

そして、聖殉教者エウラリアの遺体は、父なる神、その独り子である主イエス・キリスト、そして聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しつつ、栄光をもって葬られた。その御国は限りなく、世々限りなく続く。アーメン。

グルジアの聖母マリアのイコンを称える祝日

記念日：8月22日

ロシア北部にはピネガ川が流れ、ドヴィナ川に注いでいます。ピネガ川の河岸には多くの集落が点在しています。この川には、「チェルナヤ」と呼ばれる大きく高い山が隣接しており、　この山は（北極）海まで延びており、その長さは約500ポプリシュである。かつては人影もなく、無人地帯であった。

ある神の啓示により、その山には、世界の創造から7111年（西暦1603年）に、至聖なる聖母マリアに捧げられた修道院が建立された。この修道院は、ミロンという名のその国の司祭によって建てられたものであり、彼は後にその修道院の修道院長となった。

なお、敬虔な王にして大公ミハイル・フェオドロヴィチ[5637] の治世中、ペルシャのシャー・アッバース[5638] はイヴェリア[5639] を征服し、 そこで、主なる神であり、我らの救い主イエス・キリストの多大な癒しの力を持つ衣を発見し、それを奪い取った。この時、ペルシャ人はイヴェリアから他にも多くの聖遺物や尊いイコンを奪い、それらをすべてペルシャへ持ち去った。それは崇拝のためではなく（彼らは異教徒であったから）、ロシアの商人たちに売りさばくためであった；　というのも、当時ペルシアにはロシアの商人が非常に多く、ペルシア人は彼らが聖なるイコンを崇敬し、礼拝して

[5636] 聖フェリクスの記念日は、正教会において8月22日に祝われる。

[5637] ミハイル・フェオドロヴィチは1613年から1645年まで在位した。

[5638] 1622年

[5639] 現在のジョージア。

いることを知っていたからである。これらの商人の中には、ロシアの都市ヤロスラヴリ出身のステファンという人物がいた。このステファンは、ヤロスラヴリの市民ゲオルギーという人物の領地の管理人であった。　あるペルシャ人が、このステファンのもとへ、銀と金で装飾された至聖なる聖母マリアのイコンを持ち込み、彼に購入を申し出た。その敬虔な男は、大いなる喜びをもって、その尊いイコンをペルシャ人から購入した。

彼がペルシアでこのイコンを購入していたまさにその頃、前述のヤロスラヴリに住む主人のゲオルギーは、夢の中で幻を見、次のような言葉を聞いた。

「ペルシアに住むあなたの領地の管理人が、あなたのために貴重なビーズを手に入れた。彼がそれをあなたのもとに持ってきたら、それをドヴィナ地方の境界にある『黒い山』へ送りなさい。」

案の定、しばらくして、前述のゲオルギーの領地の管理人ステファンがペルシアから到着し、ペルシアで購入した聖母マリアの尊いイコンをゲオルギーに届けました。ゲオルギーは喜びをもってその聖物を迎え、幻視のことを思い出し、こう言いました。

「これこそ、まさに夢の幻視の中で私に告げられた、かけがえのない真珠である。」

その直後、神の御心に従い、ゲオルギーはドヴィナ地方へと向かい、前述のチェルノゴル修道院[5640]に、その尊いイコン を持ち込んだ（このイコンは、イヴェリア、すなわちグルジアの国から持ち込まれたことから、「グルジアのイコン」と呼ばれていた）。　ゲオルギーは、修道院へ多くの金、銀、教会用具、そして礼拝用の書物[5641]を寄進した。

この修道院に聖母マリアの尊いイコンが持ち込まれた当時、修道院長と修道士たちは聖堂で徹夜祈祷を行っていた。　その修道院のピティリムという名の修道士は、長年にわたり目も耳も不自由であり、礼拝の最中に修道院の病院にいたが、神に祈りを捧げるために、自分の独房の前にあるベランダへ出た。　彼が祈っている最中、突然、まばゆい光が彼を照らし、彼は（失明のため）長年にわたり光を見ていなかったため、ひどく怯えてしまった。　ピティリムはこれを悪魔の惑わしだと考えた。その後、聖十字架の印を自らに結び、その大きな山に目を向けると、そこに太陽の光のような光が見えた。そして祈りを捧げると、たちまち目で見え、耳で聞こえるようになった。　朝の賛美の礼拝の後、ピティリムは修道院長のもとへ行き、彼や兄弟たちに、自分が盲目と難聴から癒やされたことを告げた。そこにいた者たちは皆、神を賛美した。

当時そこにいた敬虔な男ゲオルギーは、この輝かしい奇跡を耳にすると、至聖なる神の母を称えるために、その修道院に美しい教会を建てた。　そして、その聖なるイコンから多種多様な奇跡が起こり始め、多くの病人が癒やされた。例えば、至聖なる聖母マリアの恵みによって、ネオニラという名の、痲痺を患っていたある女性が癒やされた。また、テオドシアという名の、目の病に苦しんでいた別の女性も癒やされた。　至聖なる聖母は、コドラトという名の男にも御助けを現された。彼は悪霊に取り憑かれ、10週間にわたり砂漠を悪霊に追われ、何も食べず、何も飲まずに過ごしていた。聖母は彼に現れ、彼を力づけ、両親の家への道を示し、御自身の聖堂にある奇跡を起こすイコンのもとに来るよう命じ、病からの完全な癒やしを授けると約束し、実際にそれを与えた。　聖母の取り成しにより、ヨハネという名の漁師が湖で溺れかけていたところを救われた。さらに、聖母は、海辺の地に住み、丸一年もの間胃の病に苦しんでいたパウロという別の男性にも現れた。　このパウロの前に現れた聖母は、彼に聖書を教え、病を癒やした。同様に、聖母は胃の病気、体の腫瘍、様々な眼や歯の病気など、他の多くの不治の病や不調からも人々を癒やしてきた。　また、悪霊に取りつかれた人々をも癒やし、今日に至るまで、様々な病からの癒やしを通じてその奇跡的な力を示し続けておら

[5640] あるいはクラスノゴルスク。

[5641] グルジアの聖母マリアのイコンは、1629年にチェルノゴル（あるいはクラスノゴル）修道院に持ち込まれた。

れます[5642] 。そこだけでなく、モスクワにおいても、聖三位一体教会に安置されているその尊いイコンの写しから、多くの奇跡が起こっています。

このイコンの複製画は、次のような経緯で制作されました。

1654年、奇跡を起こすグルジアの聖母イコンは、絵の修復のためにチェルノゴルスキー修道院、あるいはクラスノゴルスキー修道院からモスクワへ運ばれ、伝承によれば、トロイツカヤ教会、ニキトニキ教会、あるいは同教会の信徒の一人の家に安置されたとされています。 同年、大斎の最初の週に、重病の息子を持つある職人ガブリエル・エウドキモフの依頼を受けた修道士マカリイが、祈祷のためにこのイコンを彼の家へ持ち込んだところ、病人は癒やされた。 この治癒への感謝の印として、ガブリエル・エウドキモフは、グルジアの奇跡を起こすイコンの複製を作成し、ヴァルヴァルスカヤ門近くのトロイツカヤ教会に安置した。

このイコンによる奇跡は今日でも起こっており、モスクワ市民の間で熱心な祈りと崇敬を集めている[5643] 。

これらの奇跡は、信仰を持って訪れるすべての人々に与えられ、父と聖霊と共に、今、常に、そして永遠に賛美される我らの主イエス・キリストの栄光のために成し遂げられた。アーメン。

聖殉教者アガフォニカ、ゾティカ、テオプレピア、アキンディナ、セウィリアヌス、および彼らと共に殉教した他の聖人たちの記念日

8月22日の記念日

キリストの殉教者アガフォニクスは、皇帝マクシミアヌスの治世中、ニコメディア[5644] に暮らしていた[5645] 。彼はギリシア人を偶像崇拝から遠ざけ、キリストへと導いた。彼は、エウトルミオスというコミート[5646] によって拷問を受けるために連行された。このコミットは、皇帝からキリスト教徒を拷問するためにポンテウス地方へ派遣され、船でカルピンと呼ばれる場所に到着すると、そこで聖ゾティクスと、キリストを告白していた弟子たちを見つけた。コミットのエウトルミオスは弟子たちを十字架刑に処したが、聖ゾティクスは彼と共に連れ去った。 ニコミディアに戻ると、彼は聖アガフォニクスからキリスト教の聖なる信仰を教えられたあるプリツィプスを捕らえ、 彼を縛り上げ、アガフォニクス、ゾティクス、そしてテオプレピオス、アキンディン、セウィリアンをはじめとする他のキリスト教徒たちと共に、全員をフラキアへと連行した。そこへ皇帝自身も到着し、彼ら全員を拷問にかけるためであった。 聖人たちがポタマと呼ばれる地にいる間、コミットは聖ゾティコス、テオプレピオス、アキンディノスを処刑した。彼らは以前に負った傷や潰瘍のため、もはや歩くこ

[5642] アレクセイ・ミハイロヴィチの治世（1645年～1676年）には、奇跡を起こすグルジアの聖母マリアのイコンは、シベリアのレナ川や、ロシア内陸部の都市であるウスチュグ、ヴォログダ、ペレヤスラヴリ・ザレスキー、そしてモスクワへと運ばれた。–天の女王の慈悲による奇跡的な御現れは、このグルジアのイコンから現在に至るまで絶えることなく起こり続けている。例えば、1897年（6月17日）、ヴォロゴダ県トテム郡シュイスク村の司祭の妻が、このイコンの前で極めて重篤かつ危険な病から癒やされた。

[5643] このイコンの前で現れた奇跡的な御現れについて、より詳しく知りたい方は、前述の書籍『聖母マリアの栄光』（590～591ページ）をご参照ください。

[5644] ニコメディアは、大理石海によって形成される湾の北東端に位置する都市である。紀元前264年に建設され、その名はビフィニアの王ニコメデス1世に由来する。古代ニコメディアの跡地には、現在イスマイドという都市がある。

[5645] アウグストゥスの称号を冠したマクシミアヌス・ヘルクルスは、ディオクレティアヌスの共同統治者であり、285年から305年にかけてローマ帝国の西部を統治した。

[5646] コミットとは、王の護衛、王室の財源となる税の徴収官、都市の長を指す。ここでは、「コミット」という言葉は都市の長を意味している。

とができなかったからである。そして、ハルキドンの近郊[5647] に到着すると、コミットはキリストを大胆に告白した聖セウィリアンを処刑した。　その他の殉教者たちは、聖アガフォニクスと共にビザンティウムへ連行され、そこでしばらくの間拷問を受けた。その後、彼らと共にスリムヴリアの「アムムス」と呼ばれる場所へ到着した――そこはマクシミアヌスが滞在していた場所であった。　そこで、聖殉教者アガフォニクス、そして彼と共にニコメディアから連行されたすべてのキリスト教徒たちは、最後に拷問と苦しみを味わわされ、その後、死の判決を受け、斬首された。彼らは、我らの神であるキリストの御名のために殉教したのである[5648] 。

コンダク、第1声：

神の知恵により善き名声を獲得し、悪しき者たちの信仰から背を向け、苦しみをも恐れず、栄光あるアガフォニケよ。それゆえ、あなたは善きものの相続人となり、共に苦難を耐えた者たちと共に、ふさわしい冠を受けられた。

同日は、尊者アンフサ、聖司祭殉教者アファナシオ司教、および聖アンフサの二人の従者ハリシマとネオフィトの記念日である

記念日：8月22日

聖アンフサは、セレウキアの裕福な家の娘であり、洗礼を受けた後、23年間砂漠で修行に励みました。聖アンフサに洗礼を授けたキリキアのタルソスの司教アファナシオスは、アウレリアヌス帝の治世（270～275年）に剣で斬り殺されました。　その女主人と共に洗礼を受けたハリシムとネオフィトも、同じ死を遂げた。聖アンフサは、彼らの殉教から長い年月（20年以上）を経て、安らかにこの世を去った。

9月5日

8月23日（旧暦）

リヨンの司教、聖殉教者イリネイの殉教

記念日8月23日

聖イリネイ、リヨンの司教は、教会の最も傑出した教父および教師の一人に数えられる。彼は2世紀に生き、その生涯をグノーシス主義との闘いに捧げた[5649] 。2世紀のキリスト教会における彼の

[5647] ハルキドン、あるいはより正確にはカルケドンは、もともとマルマラ海沿岸にあったメガラの植民地であった。キリスト教皇帝の治世下、ハルキドンは小アジアのビフィニア地方の首都であった。キリスト教会の歴史において、ハルキドンは451年にマルキアヌス皇帝によって招集された第4回全地公会議の開催地として著名である。

[5648] 聖殉教者たちの殉教は、3世紀末か4世紀初頭に起こった。

[5649] グノーシス主義とは、キリスト教時代の最初の2世紀の間に現れた多くの異端的な偽教義の総称である。グノーシス主義は広く普及し、さまざまな国で多くの信奉者を擁していた。エジプトのグノーシス、シリア・カルデアのグノーシス、小アジアのグノーシスに区別される。　エジプトのグノーシスの代表者としては、ケリンフス（聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの同時代人）、バレンティヌス、バシリデスが挙げられる。シリア・カルデアのグノーシスは、シモン・マゴスとメナンドロスの追随者たちによって支持されていた。　小アジアのグノーシスを支持したのは、異端者ケドロンと

重要性は、4世紀のキリスト教会における聖アタナシウス大司教の重要性に匹敵する。 両者とも同様に、そしてとりわけ、その生涯と活動において、当時の誤った異端の教えに対して、純粋で損なわれていない教会の教義の擁護者であった。すなわち、聖イレネウスはグノーシス主義に対して、聖アタナシウスはアリウス主義に対してである[5650] 。

聖イレネウスは小アジアの出身であり、その故郷はスミルナという都市であった。若き頃からイレネウスはギリシャの知恵のすべてを徹底的に学び、ギリシャの詩、哲学、その他の学問に精通していた。

しかし、聖イレネオスは、偽りの世俗的な知識に惑わされることはなかった。 霊的な知恵、すなわちキリスト教の至高の知恵について耳にしたイリネイは、それを心の底から受け入れたいと願った。もはや彼は、この真の魂を救う知恵のみを学びたいと望み、世俗的な知恵、すなわちギリシャの知恵を何の価値もないものと見なしていた。

キリスト教の信仰の真理について、聖イレネオスは当初、スミルナの司教である聖ポリカルプから教えを受けた。この聖ポリカルプは、聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネの弟子であり、彼自身によってスミルナの司教の座に任命されたのである。 聖ポリカルプは、キリストの教会のために多大な労を惜しまなかった。彼はスミルナの信徒たちの世話をするだけでなく、近隣の教会にも書簡を送っていたからである。至福のヒエロニムスの証言[5651] によれば、ポリカルプは「キリスト教における全アジアの指導者」であった。

この輝かしいポリカープの弟子こそが、聖イレネウスであった。聖ポリカープの口から魂を救うキリスト教の教えを聞いたイレネウスは、それをあらゆる世俗の学問よりも愛するようになった。ポリカルプの弟子となった聖イレネウスは、いわばキリストご自身の弟子となったのである。なぜなら、彼は全力を尽くしてキリスト教の信仰の真理を心に受け止め、自らのすべてを神への奉仕に捧げたからである。 ポリカルプは聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネの弟子であったため、キリストの目撃者であり僕であった聖使徒たちから自ら聞いたことをすべて、聖イレネウスに伝えた。

イリネイはこれらすべてを心に刻み込み、あたかも一枚の紙のように、そのすべてを心に書き留めていました。

聖イレネウスは聖ポリカルプによって長老の聖職に叙階され、ここで神の御言葉を宣教するために、彼によってガリアへ派遣された。

マルキオンであった。グノーシス派は、神聖な（霊的な）存在と世俗的な（肉的な）存在を厳格に区別した。その際、すべてのグノーシス主義の体系は、絶対的（完全無欠な）存在と相対的存在（すなわち、世界の存在）との間の交わりの可能性そのものを否定した。神聖なものと世俗的なもの、霊的なものと肉的なものとの間の無条件の分離は、実践の領域において、必然的に霊と肉の分離をもたらした。グノーシス派は神の啓示を否定し、キリスト教教義のあらゆる真理を、純粋に理性の努力によってのみ説明しようとした。

[5650] アリウス派の異端の始祖は、アレクサンドリアの長老アリウスであった。彼は、神の御子と父なる神との同質性を否定し、イエス・キリストを被造物であると見なした。アリウスの異端は、第1回（325年）および第2回（381年） 全地公会議において断固として非難され、集まった教父たちによって信条が制定された。5世紀には、ローマ帝国においてアリウス派の信奉者はほとんどいなくなったが、ゲルマニアのゴート族、ブルグンド族、ヴァンダル族、ロンゴバルド族の間で復活し、7世紀まで存続した。

[5651] 福者ヒエロニムスは、西方教会の最も偉大な教師の一人である（330–419年）。スラヴ人（ダルマチアのストリドン出身）であったヒエロニムスは、ローマで当時としては卓越した教育を受けた。 373年、彼は洗礼を受けた後、東方へと旅立った。その敬虔な生活により、ヒエロニムスは司祭に叙階された。——福者ヒエロニムスは、神学の様々な問題について非常に多くの著作を残した。 至福のヒエロニムスの著作は、1）解釈学、2）教義学、3）道徳教訓、4）歴史学の4つの主要なグループに分類される。至福のヒエロニムスの最も重要な業績は、『ウルガタ』として知られる聖書の翻訳である。 さらに、ヒエロニムスの著作のうち、特に注目に値するのは、『年代記』、『教父伝』、『著名な人物について』、『殉教者録』などである。些細な書簡を除いた、至福のヒエロニムスの全著作数は180に及ぶ。

当時、リヨンの司教を務めていたのは聖ポフィンであり、彼は後にキリストの御名のために殉教することで、その説教を確固たるものとした。ガリアの都市リヨンに到着した聖イレネウスは、聖ポフィンの牧会活動を補佐し、熱心に働き始めた。

この頃、リヨンでは異教徒によるキリスト教徒への激しい迫害が繰り広げられており、聖イレネウスはキリスト教徒の勇敢な擁護者であり、教会の揺るぎない支柱としての姿を示しました。そこで聖イレネウスは、ポフィン司教によってローマへ派遣され、殉教者たちからの書簡をエレフフェリウス司教に届けることとなりました[5652]。

ローマから戻った聖イレネウスは、聖ポフィンが殉教して亡くなった後[5653]、司教の座を引き継ぎました。

聖イレネウスは、リヨンの市民にとって最も困難な時期に、彼らにとって良き牧者となった。当時、キリストの教会は多くの災難に見舞われていたからである。不敬虔な偶像崇拝者たちはキリスト教徒に対して残酷な迫害を繰り広げ、さらに、不信心な異端者たちが神の教会に混乱と不和をまき散らし始めていた。

聖イレネオスは、キリストの御名のために、偶像崇拝者たちから加えられたあらゆる迫害や苦難を忍耐強く耐え忍び、異端者たちに対しては、自らの言葉と著作をもって威厳をもって立ち向かった。 聖イレネオスの牧会活動は、その市民全員をキリスト教に改宗させたリヨンにとどまらず、ガリア全土にまで及んでいた。 聖イリネイは、ローマ教会だけでなく、小アジアの諸教会とも極めて活発な交流を維持しており、これは、ローマの長老フロリヌスとブラストへの書簡、および復活祭の祝日に関する論争の際にローマおよび小アジアの司教たちへ送られた書簡によって裏付けられている。[5654]。聖イレネウスは常に、敵対し、意見の相違がある者たちを和解させようと努めた。 例えば、前述のローマ教皇ヴィクトル1世が、復活祭の祝賀時期に関する見解の相違をめぐり、その不合理な執拗さによって東方と西方のキリスト教徒の間に分裂を引き起こしかけた際、聖イレネウスは自身の影響力をもって分裂を未然に防ぎ、意見の対立する者たちを和解させた。

聖イレネオスは、同時代の異端的な偽りの教えを糾弾する上でも、並外れた熱意を示した。彼は多くの著作を執筆し、その中で異端者たちの誤りを果敢に糾弾し、キリスト教の教義の真理を明らかにした。 彼の著作の中で最も注目すべきは、『異端反駁』[5655]と題された著作である。この著作は、聖イレネオスが、ある友人の依頼に応じて、当時ローマだけでなくガリアでもその偽りの教えを広く広めていたヴァレンティニアン派[5656]の異端を反駁する目的で執筆を始めたものである。 その後、聖イレネウスは、先行する異端者たちの誤りを単に繰り返すに過ぎないヴァレンティヌス派の異端の虚偽性と本質を明らかにしようと、以前から現れ、キリスト教と対立してきた最も古い異端について記述し、 そして、真のキリスト教の知恵をもって、イレネウスは異端者たちのあらゆる誤りを反駁し、唯一の救いとなる教え――すなわちキリスト教の教え――を明らかにした。

すべてのキリスト教の信仰教義が築かれている主たる基盤、すなわち聖イリネイの表現によれば「教会の柱であり支え」[5657] ――は、主の弟子たちおよび目撃者たちによって書かれた新約聖書の四つの福音書である。これらの福音書は――とイリネイは論じている――以下の通りである： ヘブライ語で書かれたマタイによる福音書、使徒ペトロの弟子であるマルコによる福音書、聖使徒パウロ

[5652] この書簡では、聖イレネウスがキリスト教信仰の最も熱心な擁護者として称賛されている。

[5653] 聖ポフィノスの殉教は、およそ177年に起こった。

[5654] ヴィクトル1世は、187年から200年まで教皇の座に就いていた。

[5655] この著作の正確な題名は『偽りの知識の暴露と反駁』である。この著作はギリシャ語で書かれたが、原典からは東方教会の著述家たちによる断片のみが残されている。この著作は5巻から成り、最も傑出した論争的著作の一つに数えられる。

[5656] これらの異端者たちは、その主要な創始者であるヴァレンティスの名にちなんで、そのように呼ばれるようになった。

[5657] 『異端反駁』第3巻、第11章。

の同行者であるルカによる福音書、そして主の愛弟子ヨハネによる福音書（彼が小アジアのエフェソに滞在中に執筆したもの）である。　このように、真に使徒的な福音書、すなわち信頼でき、誤りのないものは、教会にはただ四つしか存在しない。そして、「教会に存在する数よりも多くも少なくも、福音書が存在することはあり得ない」と聖イレネウスは論じている[5658]。――一方、（異端者）ヴァレンティヌスの追随者たちは――と彼は続ける――何の恐れもなく自らの著作を提示し、現存する福音書よりも多くの福音書を持っていると自慢している。　彼らは、使徒たちの福音書とは何一つ一致しないにもかかわらず、自分たちの最近の著作を『真理の福音書』と題するほどの大胆さを見せている。　なぜなら、もし彼らが提示する福音書が真実であるにもかかわらず、使徒たちから私たちに伝えられたものとは全く似ていないのであれば、望む者は、聖書そのものが示す通り、それが使徒たちから伝えられた『真理の福音』ではないことを知ることができるからだ[5659]。――そして、それらの福音書こそが真実かつ信頼に足るものであることを、聖イレネウスは次のように証明している。福音書は四つでなければならない。それは、この世に四つの国しか存在しないという事実だけでも十分な根拠となるからである；　さらに、聖イレネオスの推論によれば、福音書の数が四つであることは、神が人類に与えた四つの契約――アダムの時代の大洪水以前に与えられた契約、大洪水後のノアの時代に与えられた契約、モーセの時代の律法、そして最後に　第四にして最後の契約、すなわち他のすべての契約を包含するキリスト教の契約である[5660]。　最後に、聖イレネウスは、福音書の数が4つであり、それより多くも少なくもないという最も重要な証拠を、福音書が黙示録に登場する4つの獣――「すべてを秩序づけ、すべてを支える御言葉」が永遠に鎮座するケルビム――と対応している点に見出している[5661]。　この証拠の説得力は、福音書が、黙示録[5662]において四つの生き物――ケルビム――の象徴として示されている、神の御子の四つの活動の種類や様相を表現するものであるという点にある。　黙示録に語られているように、第一の生き物は獅子に似ており、言葉なる神の永遠の支配と王権を指し示している。これと同じことを、ヨハネの福音書もまた、父から子への永遠かつ栄光に満ちた誕生を、「神から神へ」として描写することで表現している。　*「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この言葉は、初めに神と共にあった。万物は、この方によって造られた。造られたもので、この方によらないものは一つもなかった*」（ヨハネ1:1–2）。第二の獣は子牛に似ており、私たちの主イエス・キリストの大祭司としての奉仕を意味する。　聖イリネイの解釈によれば、ルカによる福音書もまた、まさにこの奉仕を指し示している。同書は、神に犠牲を捧げる祭司ザカリアの物語から始まる。これは、世の罪のために屠られるよう永遠の昔から定められていた小羊が、人々の罪のための贖いの犠牲を神に捧げるために、この世に現れたことを意味する。　「御言葉」が乗っていた三番目の獣は、人の顔を持ち、人の姿と形をとって現れた神の御子を指し示していた。また、マタイによる福音書も、イエス・キリストをヨセフとマリアの子として描くことで、主にその人間性を宣べ伝えている。– 最後に、第四の獣は飛翔する鷲に似ており、神の御子の贖いの功績のために父なる神によって遣わされた聖霊が教会に臨在していることを示している。　聖イリネイの論じるところによれば、聖霊の臨在は、簡潔で、いわば要約された物語の形式で書かれたマルコによる福音書によっても表現されており、それはまさに預言的な精神そのものだからである。「このように」と聖イリネイは結論づける。「神の御子の働きがどのようなものであるか、それこそが動物たちの姿であり、動物たちの姿がどのようなものであるか、それこそが福音書の性質である。動物が四つの姿を持つように、福音書も四つの姿を持ち、主の御業もまた四つの姿を持つのである」

[5658] 同上、第3巻、第11章。
[5659] 同上。
[5660] 同上。
[5661] 同上。
[5662] 黙示録 4:1–11

[5663] 。福音書が、私たちの主イエス・キリストの四つの御業、すなわち奉仕の様式と完全に一致していることは、このようにして、それらが真に　使徒的起源を持つこと、その真実性と信頼性の疑いようのない証拠となる。　真のものと称される他のすべての福音書は、真正ではなく、信頼に足らないものである。なぜなら、真正な福音書は四つしか存在し得ず、それ以上でもそれ以下でもないからである。

聖イレネオスは、神の本質の統一性を否定した異端者たちを特に厳しく非難した。異端者マルキオンは、旧約と新約という二つの契約に表れている、神における二つの相反する働きを誤って主張した。彼は、二つの神が存在すると主張した――一方は罰し懲らしめる神であり、もう一方はただ憐れみを与える神である、と。

この誤った教えを糾弾して、聖イレネオスは、そのような考え方は神という概念そのものと矛盾すると述べた。　「真の神は」と聖イレネウスは論じる、「愛や慈愛を欠いた、もっぱら罰し懲らしめる存在であることも、正義や裁きを欠いた、もっぱら善く慈悲深い存在であることもあり得ない。なぜなら、愛も正義も、本質的かつ必然的に神に属するものであるからである」。　神の最も本質的な属性の一つは、と聖イレネウスは論じる、知恵である。もし神が知恵深ければ、それは神が判断し決定する能力、ひいては裁く能力を備えていることを意味する。そして、裁くということは、各人にその行いに応じて報いる、すなわち罰するか報いるかを意味する[5664] 。

マルキオンが、旧約と新約の「家づくり」、すなわち旧約と新約の対立という自身の理論の根拠とした主要な証拠の一つは、旧約における神の御業が、あたかも新約における神の御業と正反対であるかのように見えたという点にあった。　「旧約聖書における神は、いわば裁きと正義の神に過ぎない」とマルキオンは論じた。「新約聖書における神は、いわば愛と慈愛の神に他ならない」と。

聖イレネウスは自身の著作において、マルキオンのこの不敬虔な誤りを反駁し、旧約と新約の両方が不可分の一体であることを明らかにした。　旧約聖書の神に正義のみを、新約聖書の神に包括的な愛のみを帰属させることは、聖イレネオスの論じるところによれば、どちらの契約の精神も意味も知らず、理解していないことを意味する。　神は旧約において厳しく罰されるが、新約においてはさらに厳しく罰されるし、実際に罰しておられる。キリスト教はユダヤ教よりも完全であり、新約は旧約よりも広く、より完全である。この根拠に基づき、キリスト教の要求はユダヤ教の要求よりもはるかに厳格でなければならない。　ユダヤ教では神の律法を履行するための手段は少なかったが、キリスト教ではそれらがはるかに多く与えられている――キリスト教には、神の律法を履行するためのあらゆる恵みの賜物と力が与えられている。その結果、キリスト教におけるこの律法のあらゆる違反や不履行は、ユダヤ教よりもはるかに厳しく罰せられなければならない。――　「新約聖書において、　――聖イレネウスはこう論じている――神に対する私たちの信仰がどれほど深まったか（すなわち、より広く開かれたか）に比例して、生活様式に関する要求も同様に高まった。――私たちには、悪行だけでなく、悪意のある思い、無駄話、軽率な言葉、空虚な言葉さえも控えるよう命じられている。それと同じ程度に、御言葉を信じず、その到来を軽んじる者たちへの罰も増大した」[5665] 。ユダヤ教においては、それがキリスト教ほど完全ではないという理由から、聖イリネイの論じるところによれば、神の懲罰は「穏やかな」、いわば一時的なものであった。一方、キリスト教においては、それがユダヤ教よりも高次で完全であるため、これらの懲罰ははるかに厳しく、もはや一時的なものではなく、永遠のものとなっている[5666] 。

[5663] 『異端駁』第3巻、第11章。

[5664] 『異端反駁』第3巻、第25章。

[5665] 『異端反駁』第1巻、第27章；参照：第3巻、第25章；第4巻、第28章および第40章。

[5666] 『異端反駁』第4巻第28章。

このように、旧約聖書においても新約聖書においても、神は懲罰者であり、かつ慈愛に満ちた存在として等しく御自身を現しておられる。どちらにおいても、神は報いも与え、罰も下し、憐れみも示し、懲らしめもなされる。そして、これこそが、唯一無二の真の神、全能にして全き神なのである。

マルキオンや彼に類する異端者たちを糾弾する中で、聖イリネイは自身の著作において、旧約聖書の意味と意義を詳細に解き明かしている。

聖イレネオスの論じるところによれば、旧約の律法には、外面的・儀礼的な側面と、内的・道徳的・霊的な側面の二つが含まれている。律法の外面的側面は、あくまで相対的かつ一時的な意味しか持たなかった。　旧約時代の人々の生活全体を取り囲み、彼らを奴隷のくびきの下に留めていたそれらの儀礼的な規定や定めは、聖イリネイの見解によれば、ユダヤ人に対してのみ　な意味を持ち、神の摂理の手中においては、ユダヤ民族の道徳的・宗教的育成のための必要な手段に過ぎなかった。ユダヤ人を奴隷のくびきの下に置く必要があったのは、「彼らの心の粗暴さと不従順さ」のためであり、また「彼らが常に偶像に立ち返り、自ら金の子牛を鋳造する傾向」があったからであると、聖イレネオスは論じている[5667]。しかし、新約の到来とともに、モーセの律法における儀礼的な規定は、まったく不要かつ余剰なものとなった。なぜなら、人間は今や神との関係を、親密で子としての関係へと変え、特別な詳細な外的な規定なしに、自由かつ自然に神の命令を果たすことができるようになったからである。　旧約における人間と神との関係における「奴隷の精神」と、新約における「子としての精神」は、聖イリネイの論じるところによれば、互いに全く矛盾するものではない。　奴隷の精神から自由と子としての精神への変化は、神の家造りの歴史および人々の道徳的・宗教的育成における、厳格な段階性と一貫性、そして極めて賢明な妥当性を示しているに過ぎない。　同じ神が、かつては特定の方法で古代の人類を教育し、今や全く異なる方法で新しい人類を教育しておられる。「神はすべてを節度と秩序をもって行われる――」と聖イリネイは論じている。「神には節度を欠くものは何一つなく、なぜなら無秩序なものは何一つないからである」[5668]。

神の契約の手中において必要な教育手段であったものが、不要かつ余剰なものとなり、それゆえに廃止された――モーセの律法の外面的側面は、同時に、聖イレネオスの論じるところによれば、メシアの来るべき時代に関する預言であり、先取り的な意義を持っていた。　この観点からも、モーセの儀礼的な律法の廃止はやはり自然かつ必然的なものであり、旧約と新約の間に矛盾があることを決して証明するものではない。　しかし、マルキオンの説に特に反論となるのは、旧約の律法の内的・道徳的な側面に対する救い主の態度である。聖イレネオスは次のように論じている。「救い主はこの側面を廃止したのではなく、ただ『それを完成させ、拡大した』に過ぎない」[5669]。モーセの律法における最も重要な道徳的戒めは、神と隣人への愛であった。救い主はこの戒めを廃止するのではなく、それどころか、新約の律法の根本的な戒めとして、それを確固たるものとし、明確にしたのである。　福音書、ひいては新約聖書全体の道徳的教義は、旧約聖書の道徳的教義よりも高次で完全なものですが、その両者の主な基盤は一つであり、したがって、両者の道徳的教義の源泉もまた同一です。

したがって――聖イリネイの論じるところによれば――旧約と新約の間には、わずかな対立も存在せず、両者とも、永遠の昔から定められた英知に満ちた計画に従い、厳格な段階性と連続性をもって人々の救いの業を築き上げられた、唯一の真の至高の神の御業である。　ここから自ずと分かるように、人々の救いに関する神の御心と御計画が表現されている旧約聖書の書物も、救いの成就と受

[5667] 『異端駁』第4巻、第14章および第15章。
[5668] 同上、第4巻、第4章。
[5669] 同上、第4巻、第12章および第13章。

容そのものが描かれている新約聖書の書物と同様に、神の霊感に満ちており、救いをもたらすものである。「同じ神の御霊が、 ――聖イレネオスはこう論じている――「預言者たちを通して主の到来がどのようなものであるかを告げ、長老たちを通じて[5670] 、預言者たちが語ったことをよく解き明かしたその御霊こそが、使徒たちを通して、子としての地位を得る時の満ちる時が来て、天の御国が近づいたことを宣べ伝えたのである」[5671] 。

聖イレネオスの教えによれば、神は、その言葉の最も広い意味において、万物の主である。ただ神のみが万物の主であり、神に等しい、あるいは神に似た他の主は存在せず、また存在し得ない。「なぜなら――聖イリネイは論じている――自分より上位の者や自分と同等の者を持つ者は、もはや神とも、偉大なる王とも呼ばれることはできないからである」[5672] 。 ただ唯一の神のみが、万物の主として、すべてに対して分割不能な至高の権威と力を有している。存在する他のすべてのものは、神によって創造され、神の権威によって支えられている。

異端者たちを糾弾する中で、聖イレネオスはキリスト教の聖なる信仰の源泉についても論じた。要約すると、その論旨は以下の通りである。

旧約聖書および新約聖書といった聖書は、疑いなく神聖な起源を持つ。なぜなら、それらは神の御霊による特別な霊的啓示のもと、聖書の著者たちによって記されたからである。この聖霊は、預言者たちを通じて、また使徒たちを通じて働かれた。 聖書は、信仰と宗教的知識の第一かつ最も重要な源泉であり、真実かつ誤りのないものであり、すべての人にとって義務的なものである。聖書を正しく、かつ誤りなく理解することは、聖なる普遍的教会の導きがあって初めて可能であり、真理を見出すことができるのは、この教会のみである。聖書と同様に神聖な起源を持つのが、聖伝であり、――それゆえ、聖伝は信仰と宗教的知識のもう一つの源泉を成しており、聖書と同様に真実かつ誤りのないものであり、すべての人にとって必須のものである。真に使徒的な伝承の唯一の守護者は、その指導者たちを代表とするカトリック教会のみである。 –「真理を知りたいと願う者は誰でも」と聖イレネオスは論じている、「教会に目を向けなければならない。なぜなら、使徒たちは神の真理を教会にのみ伝え、まるで宝庫に財を蓄える富める者のように、真理に関わるすべてのものを教会に託したからである。『教会こそが命の門である』[5673] 。そして特に、聖イレネオスの教えによれば、正当に按手を受けた教会の牧者たちこそが、教会に秘められた真理の真の教師であり、守護者である。

真に使徒的な伝承の唯一の誤りのない守護者かつ担い手としての教会のこのような意義について、聖イリネイは、教会における聖霊の絶え間ない臨在と、教会における神の賜物と力の絶え間ない働きに基づいて説明している。聖イリネイの教えによれば、神の御霊は教会の設立当初から教会の中に存在している。 聖霊は、いわば教会の命であり魂であり、魂が私たちの体の各部位を動かして支配するのと同じように、教会を動かし、支配しておられる。教会には、神によって、使徒職、預言、教導といった、私たちの救いが成し遂げられるために必要なすべての奉仕が定められている。

教会における神の御霊の絶え間なく直接的な臨在により、教会は決して罪を犯したり、誤りに陥ったりすることはない。 したがって、使徒たちによって口頭または文書で教会に伝えられた神の真理は、常に教会の中で、使徒たちの時代と同じ、すなわち同じように純粋で神聖な真理として保たれ続ける。なぜなら、同じ聖霊が、かつて使徒たちの中で働いていたのと同様に、今や彼らの後継者たちを通じて教会の中で働いているからである。 聖イレネオスは、使徒の地位の継承が教会において至る所で絶え間なく保たれており、それとともに使徒の伝承もまた、その純粋かつ損なわれていない姿で保たれていると論じている。 –「概して、」と聖イレネオスは指摘する、「教会は、世界中に散らばっているとはいえ、その中に同じ神の御霊が臨在し、同じ使徒的地位が絶え間なく受け継がれ

[5670] 言うまでもなく、70人の注釈者たちのことである。
[5671] 『異端反駁』第3巻、第21章。
[5672] 同上、第2巻、第30章。
[5673] 同上、第3巻、第4章。

ているゆえに、至る所で同じ教えを守り続けている。　教会は、あたかも一つの魂と一つの心を持つかのように、同じ信仰を持ち、あたかも一つの口を持つかのように、同じように説き、教え、伝えている。　ドイツ、スペイン、ガリア、そして東方のエジプトやリビアにおいても、教会は同じように信じ、同じ伝統を保っている。全世界で太陽が一つであるように、真理の宣教もまた、教会全体において一つとして輝き、すべての人を照らしている」[5674]。

このようにすべての人を教え導くことで、聖イレネウスは多くの人々を異教の偶像崇拝や異端の迷いから救い出し、多くのキリスト教徒を救いの道へと導き、また他の人々を殉教の業へと奮い立たせた。ついに、彼自身もキリストの御名のために殉教し、セウィルス皇帝の治世下であった[5675]。福音を告白したため、聖イレネオスは首を斬られ、こうして主イエス・キリストの御国において、殉教の栄光の冠を受けた[5676]。

コンスタンティノープル総主教聖カリニコスの記念日

記念日：8月23日

聖カリニコスは当初、聖母マリアに捧げられたヴラヘルナ[5677]の教会の司祭兼聖器保管係であった。　その後、パヴェル総主教が主のもとに召された際、聖カリニクスは総主教の座に就きました。これはユスティニアヌス2世[5678]の治世のことでした。彼は気性が荒く、神を畏れない王であり、多くの（キリスト教徒）を迫害し、聖職者を尊重せず、神の教会を敬うこともありませんでした。

この皇帝は、自らの名に因んで名付けたいと願う、巨大で美しい宮殿を建設していた。その宮殿の近くには、至聖なる神の母の名に捧げられた教会があり、この教会は「大主教座教会」と呼ばれていた。　ユスティニアヌス帝の命により建設されていた宮殿の壁の一つを、前述の教会の横を通す必要があったため、皇帝は、建設中の宮殿の妨げとならないよう、その教会を破壊することを企てた。とりわけ、まさにその場所に、宮殿の入り口前の階段とポーチが建設される予定であったからである。　皇帝は総主教に対し、その教会の解体に向けた祝福の祈りを捧げるよう命じた。しかし、総主教は皇帝に反対し、こう言った。

「私には教会を破壊するための祈りなどありません。それどころか、教会の建立と建設のための祈りがあります。なぜなら、神はこの世界を存在させるために創造されたのであり、破壊するために創造されたのではないからです。」

すると、皇帝の使者たちは力ずくで総主教に懇願し始め、さらには皇帝の命令に従うよう強要さえした。総主教は涙を流しながら、こう叫んだ。

「すべてに耐え忍ばれるキリストよ、あなたに栄光あれ！」

すると、その直後に教会は崩れ落ちた。

[5674] 同上、第1巻、第10章。

[5675] セウィルス皇帝の治世は193年から211年までであった。聖殉教者イリネイの死は202年に訪れた。

[5676] 『異端反駁』（『偽りの知識の暴露と反駁』）のほかにも、聖イリネイには多くの著作があるが、それらは断片的な形でしか現存していない。具体的には以下のものが挙げられる：　『ローマ司教ヴィクトルへの書簡』（復活祭の祝賀時期に関する問題について）、『唯一の支配者について、あるいは神は悪の加害者ではないということについて』、『八つの時代について』（すなわちエオンについて；――エオンを生命の源とするグノーシス主義の教義に対する反駁を指す）。さらに、聖イリネイの名が記された約50の短い断片が収集されているが、それらの真偽はまだ証明されていない。

[5677] ヴラケルナは、コンスタンティノープルの西端に位置していた地区であり、その聖地で知られていた。ここには、聖人伝に言及されている教会があり、これは皇帝レオ大帝（457年～474年）によって至聖なる神の母の名に捧げられて建設されたもので、同皇帝の治世中に、パレスチナから持ち込まれた聖母マリアの尊い衣がこの教会に安置された。　この出来事は、聖教会において7月2日に記念されている（この日付の項目には、前述の出来事に関する記述も掲載されている）。――その後、この教会は焼失し、現在ではそのわずかな遺構しか見られない。

[5678] ユスティニアヌス2世皇帝は685年から695年まで在位し、その後705年から711年まで再び在位した。

ほどなくして、神の義なる裁きにより、王自身も破滅に見舞われた。彼は不名誉な形で王国から追放され、彼が建てた宮殿は他者の住処となってしまった。これらすべては、このようにして起こったのである。

皇帝は、コンスタンティノープルの住民たちが、度重なる弾圧や無法な生活のために自分を嫌っており、自分に対して不満を漏らしていることを知り、街中で皆が自分を悪く言っているという話を耳にすると、街全体に対して怒りと憤りに満ち溢れた。 その後、パトリキウスである[5679]と、ペルシャ出身で、容赦なく人々の血を流す残忍な軍司令官ステファノに対し、誰にも知られぬよう武装した兵士を準備させ、その翌夜、最も高貴な市民たちに不意を突いて襲いかかり、容赦なく全員を殺害するよう命じた。

当時、コンスタンティノープルには、東方で戦功を立てていた総督レオティオスが住んでいた。この総督は、戦場で幾度となく大いなる勇気を示し、多くの敵軍を打ち破ったが、栄誉や称賛を受けるどころか、皇帝によって3年間牢獄に投獄されていた。この時、彼はちょうど牢獄からの解放を受けたばかりであった。

このレオティウスは、皇帝の残酷で不当な企みと命令を知ると、そのすべてを密かに数人の忠実な友人たちに伝えた。彼らは同じ内容を同じ方法で他の友人たちに伝え、こうして夜も更ける頃には、彼らは大勢で一堂に会した。　その夜に始まろうとしていた市民に対する不当な虐殺を未然に防ぐため、彼らは皆、武装して王宮へと向かった。王が眠っているのを見ると、兵士たちは王を捕らえて縛り上げた。　直ちにレオティオスはすべての牢獄の扉を開け、そこに囚われていた者たちをすべて連れ出し、彼らに武器を持たせて街の至る所に送り出した。彼らは街中を歩き回り、こう叫んだ。

「キリスト教徒の皆さん！　聖ソフィア大聖堂に皆で集まってください。ユスティニアヌス王は打ち負かされ、縛り上げられたのです。」

これを聞いた人々は皆、大きな喜びをもって教会へと向かい、こう言った。

「『*この日を主が造られた。喜び祝おう、この日を*』」（詩編117:24）

その日が来ると、レオティオスは縛られた皇帝を、普段馬の闘技が行われていた場所へ連れ出した[5680]　。その場所に集まった民衆全員の面前で、彼は皇帝の鼻を切り落とし、彼をヘルソネス[5681]へ流刑に送った。それ以来、ユスティニアヌスは「鼻切り」と呼ばれるようになった[5682]。 一方、コンスタンティノープルの住民たちは直ちにレオティオスを皇帝として擁立し、至聖なるカリニク総主教が彼に戴冠式を執り行った。

レオンティオスは3年間王位に在位したが、その後、軍司令官アプシマールによって王位から追放された。アプシマールの兵士たちは彼を皇帝に選出すると、ティベリウス3世と名付けた[5683]　。アプシマールはレオンティオスを捕らえ、ダルマチアの修道院へ流刑に処した。アプシマールの治世は7年続いた。

この頃、ユスティニアヌス・コルコノスはヘルソネスの幽閉先から脱走し、最初はハザール族のもとへ、その後ブルガリア人へと向かった。ブルガリア人から大規模な軍勢を集めたユスティニアヌスは、コンスタンティノープルへと進軍し、黄金の門の付近に陣を敷いた[5684]　。その軍勢の規模は極めて大きく、ヴラケルナにまで及んでいた。 ユスティニアヌスはここで3日間留まり、コンスタンティノープルの住民たちに再び彼を王として迎え入れるよう提案したが、住民たちは彼を非難し、罵声を浴びせた。

[5679] 古代において、パトリキウスとは高貴な家系の出身者を指し、通常、最も重要な国家の要職に就くことが多かった。

[5680] 馬レース。

[5681] ヘルソネス、あるいはヘルソン（古ロシア語：コルスン）は、現在のクリミア半島の古称である。

[5682] ギリシャ語からの訳では「鼻を切り落とされた」という意味である。

[5683] ティベリウス3世・アプシマルス皇帝は、698年から705年まで在位した。

[5684] コンスタンティノープルにある地区。

一方、アプシマルは、大軍を率いて迫ってきたユスティニアヌスを恐れ、アポロニアへ逃亡した[5685]。そこでユスティニアヌスは、聖なるカリニコス総主教およびシンクリト全体[5686]に使者を送り、自分を受け入れてくれるよう懇願するとともに、誰に対してもいかなる害も加えないことを誓約した。

総主教とシンクリトは協議の末、ユスティニアヌスに対し、主の尊い十字架、聖福音書、そしてキリストの聖なる御体と御血の秘跡に口づけをするよう提案した。この口づけによって、彼が以前の追放について誰に対しても復讐を行わないという誓いを確約するためであった。　ユスティニアヌスはこうして自らの誓いを確認した。

すると、コンスタンティノープルの住民たちは彼のために城門を開き、栄誉をもって迎え入れた。しかし、皇帝は兵士たちと共に都に入り、王位に就くと、すぐにその誓いを破り、忌まわしいことに、シンクリトのメンバーの多くや、その他の著名な市民たちを殺害し始めた。　その後、彼を追い出したダルマティアの修道院からレオティオスを連行するよう命じた。また、彼の兵士たちはアポロニアにいるアプシマルも捕らえて彼の元へ連れてきた。彼は、縛られた二人を恥辱にまみれて街中を引き回すよう命じた。　その後、彼は二人を馬の闘技場へと連れてくるよう命じた。二人が連れて来られ、彼の足元に投げ出されると、彼は彼らの首に足を踏みつけ、頭を踏みにじった。その間、彼の兵士たちは大声で叫んだ。

「*あなたはアスピドやバシリスクを踏みにじり、獅子や竜を踏み砕くであろう*」（詩篇90:13）。

彼らを嘲笑し、侮辱した後、ユスティニアヌスは彼らを斬首するよう命じた。

しかし、それだけでは足りなかった。ユスティニアヌスは民衆さえも容赦せず、街全体を血で染め上げた。その後、至聖なるカリニコス総主教を捕らえ、その両目をえぐり出し、鼻と舌を切り落とし、ローマへ流刑に処し、そこで石の壁に埋め込むよう命じた。

皇帝の命令は実行され、聖カリニクスは壁の中に閉じ込められた。しかし、40日後、壁の塞ぎ物が崩れ落ち、聖カリニクスはかろうじて息をしているものの、まだ生きていたことが判明した。4日後、聖人は主のもとへ旅立った[5687]。

その頃、ローマ教皇ヨハネス6世[5688]　の夢の中に、聖なる大使徒ペトロとパウロが現れ、聖カリニコス総主教の遺体を彼らの使徒教会に尊厳をもって埋葬するよう命じた。教皇は聖使徒たちの命令に従った。

一方、誓いを破り、迫害を行った皇帝ユスティニアヌス・コルコノスは、神の義なる裁きから逃れることはできなかった。彼の非人道的な弾圧に耐えかねた市民や軍司令官たちは、彼に対する陰謀を企て、好機を伺って彼に襲いかかり、首を刎ねた。

こうして、不信心な者は惨めな死を遂げた。一方、キリストの聖人カリニクスは、我らの主イエス・キリストの御国において、殉教者の冠を授かるに至った。

聖殉教者ルッパの記念日

記念日：8月23日

[5685] アポロニアという名を持つ古代ギリシャの都市はいくつか知られている。この場合、おそらくイリュリアにあったアポロニアを指すものと思われる。

[5686] シンクリトスとは、最年長かつ最も名誉ある市民（および最高位の宗教的権威の代表者）で構成される評議会のことである。

[5687] 聖カリニコスは705年に死去した。

[5688] ヨハネス6世は701年から705年まで教皇の座に就いていた。

聖殉教者ルッパは、アウレリアヌス帝の治世[5689] に生き、ある主人の奴隷であったが、主キリストにおいては自由な者であり（参照：コリントの信徒への手紙一 7:22）、その主を信じた。 敬虔な熱意に満たされた聖ルッパは、魂のないギリシャの偶像を打ち砕き、他の偶像を海の深みに沈めた。 これを見た不敬虔な偶像崇拝者たちは、怒りに満ちて、聖人を切り刻もうと剣を抜き放って襲いかかったが、正気を失い、互いに切り合い始めた。 一方、聖人は異教徒たちの真ん中にありながら無傷のままで、信仰と知恵、そして神の恵みに満ち溢れ、彼らに神の御言葉を説いた。あらゆる努力にもかかわらず、不信心者たちは聖人を捕らえることができなかった。なぜなら、キリストの力がそれを阻み、彼らをキリストの殉教者に近づくことさえ許さなかったからである； それゆえ、不信心者たちは遠くに立ち、弓を引き、聖人に向かって矢を放ち始めたが、殉教者の代わりに互いに矢を当ててしまった。一方、聖ルッポは皆の真ん中で的（照準点）のように立っていたが、矢で殺されるどころか、傷一つ負わなかった。 キリストの殉教者はまだ洗礼を受けておらず、迫害者たちの手によって非キリスト教徒として死ぬことのないよう、聖なる洗礼を切に望んでいたため、このことを主にお祈りした。すると、たちまち天から水が彼の上に注がれた。 このようにして、キリストの聖なる殉教者は、彼を見つめ、起こっていることすべてに深く驚嘆していたすべてのギリシャ人の面前で、天から神聖な洗礼を受けたのである。

その後、聖ルッポは、汚れなき小羊のように、自ら進んで不義な者たちの手に身を委ね、犠牲となることを受け入れた。不義な者たちは聖人を捕らえ、イゲモンのもとへ連行した。イゲモンは当初、甘い言葉でキリストのしもべを説得し、主から離れ、偶像を拝むよう促したが、聖人を惑わすことはできなかった。 そこで総督は、聖人を容赦なく棒で打つよう命じた。その後、総督は聖人を他の拷問にさらしたが、打ち負かすことのできないキリストのしもべを屈服させることができなかったため、剣による斬首を宣告した。

こうして、聖殉教者ルッポは、剣の下に頭を差し出し、主キリストのためにその魂を捧げた[5690] 、そして信者たちによって相応の栄誉をもって埋葬された。また、彼の棺からは、聖なる祈りと我らの主イエス・キリストの恵みにより、あらゆる病や不調の治癒がもたらされた。

聖エウティキオスと聖フロレンティウスの記念日

記念日：8月23日

ヌルシア地方には、聖なる修道者の生活を送り、荒野で隠遁生活を送っていた二人の男が共に暮らしていた。一人はエウティキオス、もう一人はフロレンティオスと呼ばれていた。 エウティキオスは、霊的な熱意の温もりに燃え、自らの救いだけでなく他者の救いにも心を配り、魂を救う教えや訓戒をもって、あらゆる手段を尽くしてすべての人を主のもとへ導こうと努めました。一方、フロレンティオスは、その素朴さゆえに、ただ自分自身のことをのみ思い、生涯を祈りに捧げて過ごしました。

聖エウティキオスと聖フロレンティオスが住んでいた場所の近くには、ある修道院があった。ある時、その修道院でアッバ・[5691] が亡くなった。修道士たちは集まり、エウティキオスのもとへやって来て、 、自分たちの修道院のアッバになってほしいと懇願し始めた。 彼らの願いを聞き入れたエウティキオスは、彼らの元へ赴き、修道院の指導者となった。一方、友人のフロレンティオスについては、彼らがそこに持っていた教会（その教会はごく小さなものであった）が荒れ果てないよう、あの隠遁の地で一人修業を続けるように残した。

[5689] アウレリアヌス皇帝は270年から275年まで在位した。

[5690] 聖殉教者ルッパの死は、およそ275年に起こった。

[5691] アッバ——修道院の長、院長。

一人残されたフロレンティウスは、神に熱心に祈りを捧げ始め、その人里離れた場所で、自分一人でも支障なく修行を続けられるよう、神の助けを請うた。

その後、ある時、いつもの祈りを捧げて教会を出ると、　フロレンティウスは、教会の扉のそばに立っている熊を見かけた。その熊は頭を地面に垂れており、野獣らしい気性など微塵も見せず、むしろその温厚さによって、神から聖フロレンティウスに仕え、働くために遣わされたのだということを示していた。　これを悟った神の聖なる僕フロレンティウスは、このような仲間を遣わしてくださった神に感謝を捧げた。フロレンティウスは自分の修道室のそばに五匹の羊を飼っていた。誰がそれらを放牧し、守ってくれるのか分からなかったため、フロレンティウスは熊にこう命じた。

「さあ、この羊たちを牧草地に連れて行き、放牧しなさい。そして、六時頃には羊たちと一緒に戻ってきなさい。」

そして、その獣は常にそのように行動し、自分に託された羊の世話の任を引き受けた。こうして、獲物を引き裂いて食べることに慣れていたその獣は、空腹に耐えながら、自らの生来の習性を克服し、羊の世話をしたのである。

神の人が九時までの断食を望むときは、九時までに羊を連れて来るよう熊に命じ、熊はその通りにした。九時までの断食をせず、六時に食事をとりたいと望むときは、その時刻に熊も戻ってきた。　要するに、その獣は神の人のあらゆる命令に従い、決して間違いを犯さなかった――第六時に来るよう命じられた時には決して第九時に来ず、逆に、第九時に来るよう命じられた時には一度も第六時に来なかった。　なぜなら、神ご自身が、御自身の聖人に従わせたその獣に知恵を与え、長老の命令を理解し、その意志を実行するように教えられたからである。

その獣が長老に長く仕えた後、その国中に「神の御使いフロレンティア」という噂が広まり始めた。なぜなら、獣が羊の群れを放牧し、長老に仕えているのを見て、誰もがその驚くべき出来事に感嘆したからである。

一方、古の敵である悪魔は、ある者たちに嫉妬の念を煽った。悪魔は、その栄光に輝く高潔な人々を見るや、品性や生活が堕落した者たちを嫉妬で捕らえ、彼らを破滅へと誘い込むからである。かくして、悪魔の唆しにより、聖エウティキオスの弟子である四人の修道士は、フロレンティウスに激しい嫉妬を抱いた。彼らの師は奇跡を行わなかったのに対し、（嫉妬深い者たちはこう論じた）師に荒野の修道室に置き去りにされたたった一人のフロレンティウスだけが、かくも名声を博していたからである。　そのような考えを抱いた四人の弟子たちは、フロレンティウスの元へ行き、熊が羊を放牧するために追い出していた場所に潜み、熊を殺してしまった。　熊が、戻るよう命じられた時刻に長老のもとへ戻らなかったため、長老は戸惑った。夕方まで待ったが、熊も羊も現れず、長老は、自分の素朴さゆえに「兄弟」と呼ぶことに慣れていた熊が、自分のもとに戻ってこなかったことを悲しみ始めた。

翌日の朝、フローレンティンは熊と羊を探すために野原へ向かったが、殺された熊を見て、老人は深く悲しんだ。　よく観察して、その獣を誰が殺したのかを理解すると、老人は泣き出した。しかし、彼が泣いたのは、熊の死そのものというよりは、あの四人の兄弟たちの破滅的な悪意のせいであり、彼は苦々しく泣きじゃくった。

アッバ・エウティキオスがフロレンティウスの悲しみと嘆きを知ると、彼を呼び寄せ、慰め始めた。すると、その神の人はアッバの前で、深く悲しみに満ちた表情を浮かべて、こう言った。

「全能の神に望みを置きます。誰にも何の害も及ぼさなかった熊を殺した者たちは、この現世において、皆の目の前で主からの懲罰を受けることになるでしょう。」

神の御心に適う者がこの言葉を言い終えるやいなや、その直後にその言葉通りの出来事が起こった。すなわち、突然、その四人の修道士は主によって恐ろしいハンセン病に冒され、全身が腐り果て、その病の中で息を引き取ったのである。

これらすべての出来事が起こった後、神の僕フロレンティウスは、あの兄弟たちを呪ってしまったことを深く恐れ、生涯を通じて彼らを嘆き悲しみ続け、自らを彼らの残酷な殺人者と呼んだ。

全能の神は、このすべてを、あの素朴で徳高い男が傷つけられた後も、二度と自分の口で誰をも呪うことがないようにと、そうされたのである。

この神に愛された男は、さらに別の驚くべき業も成し遂げた。彼についての噂が至る所に広まると、ある助祭が遠くから彼のもとを訪れ、その祈りと祝福を受けることを願った。彼の修道室の周囲に非常に多くの蛇や様々な種類の爬虫類がいるのを見て、助祭はひどく恐れをなして叫び、こう言った。

「神のしもべよ！私のために祈ってください！」

その時、太陽の光に照らされていたため、空気は極めて澄み渡り、晴れ渡っていた。フロレンティウスは修道室から出て地面に立ち、天を仰ぎ見ながら両手を天へと掲げ、主ご自身が御存知の方法で、そこからそれらの爬虫類を追い払ってくださるよう祈った。　するとすぐに雷鳴が轟き、稲妻が走り、その雷と稲妻によって、その場所に棲んでいたすべての蛇が打ち倒された。このすべてを目撃した神の僕フロレンティウスは、再び天を仰ぎ見て、こう言った。

「主よ、あなたはこれらの蛇を打ち倒されました。しかし、誰がここからそれらを持ち去るのでしょうか？」

その言葉が終わるやいなや、打ち倒された蛇の数と同じほどの大群の鳥が飛来し、一羽の鳥がそれぞれ一匹の蛇をくわえて遠くへ運び、そこに放り投げた。こうして、聖人が住んでいたその場所は蛇から一掃されたのである。

生涯を通じて神に深く仕え続けた聖フロレンティウスは、終わりのない命へと旅立った[5692]。

これと同様に、聖エウティキオスもまた、長年にわたり、彼に託された羊の群れを牧し、多くの人々を天の御国への道へと導き、多くの人々を救いへと導いた後、主のもとへ帰った[5693]。 また、生前には奇跡を行わなかったこの聖人は、その死後、奇跡を行う者として現れました。というのも、聖人の死後に残された衣から、様々な病に苦しむ人々への癒しがもたらされたからです。こうして、主は御自分のしもべを栄光に輝かせられました。

雨が降らず、大地が干ばつに苦しむことがあったとき、その国の住民たちは集まり、尊者エウティキオスの衣を取り、それを教会へ持ち込み、主への祈りを捧げた後、その衣を携えて村々や畑、果樹園を巡った。すると直ちに、主から雨が降り注ぎ、大地を潤し、潤いをもたらした[5694]。 このことから、生前のその人物の精神的な美徳の内なる力がどれほど偉大であったかが、誰の目にも明らかであった。なぜなら、主の御前に捧げられた単なる外衣一枚でさえ、すでに主の怒りを和らげていたからである。

こうして、神は当時、御自身の二人の聖人によって賛美され、今なお彼らゆえに、御自身のしもべである私たちから賛美されており、そして永遠の世にわたり賛美され続けるであろう。アーメン。

9月6日

8月24日（旧暦）

同日、聖ゲオルギオス・リムネオトス（殉教者）の記念日。彼は、偶像破壊派の皇帝レオン3世イサウロス（717–741年）の治世下で信仰を守り抜いた。

[5692] 聖フロレンティウスの死は547年に起こった。

[5693] 聖エウティキオスは540年頃に亡くなった。

[5694] ここで述べられている出来事は1492年に起こった。

同日、1550年に逝去したヴォロゴダの奇跡行者、コメル出身の聖アルセニオスの記念日。
同日、全ロシアの奇跡行者である聖ペトロ大主教の聖遺骨の移送（1479年）。

聖殉教者シラの受難

記念日：8月24日

ペルシャの王ホスロー長老[5695] の治世第28年、ペルシャに、まるで海の中の最も清らかな真珠のように、聖処女シラが現れた。彼女はキリスト教の信仰の美しさに輝き、キリストの御名のために偉大な殉教の功績を成し遂げて名声を博した。

聖シラは、ケルク・セレウキアと呼ばれる町で生まれ、不信心な家系の出身であった。彼女の父は偶像崇拝の祭司であり、（異教徒たちから）非常に尊敬されていた魔術師であった。彼は長きにわたり、ペルシャの魔術師や祭司たちの集団の裁判官兼長を務めていた。　彼は、ペルシアにおける占星術（星の科学）の第一人者であり、最古の最高魔術師ゾロアスター[5696] の教えを熟知していた。この魔術師、すなわち聖女シラの父は、キリスト教徒を深く憎み、娘がキリスト教について知ったり、キリスト教徒の少女たちと親しくなったりしないよう、強く警戒していた。　というのも、当時ペルシアには（アガリア人の支配下にあるアジア全土で概してそうであったように）非常に多くのキリスト教徒がいたが、彼らはひどく弾圧され、迫害されていたにもかかわらずである。　この理由から（シラをキリスト教の影響から守りたいと願って）、父は母の死後、彼女をファルスと呼ばれる別の町（この町では魔術が極めて広く行われていた）に住む、魔術師であるある親戚の女性の元へ預け、彼女を異教の不敬虔な慣習の中で育てさせたのである。

少女が物心つき始めると、彼女は魔術を教え込まれ、忌まわしい偶像崇拝に身を捧げることとなった。すなわち、彼女には悪魔たちへのある種の秘密の生贄を捧げるよう命じられたのである。それは異教徒たちによって「イアスフ」と呼ばれ、彼らにとっては清らかな生贄と見なされていた。

これらすべてが聖なる乙女シレについて語られているのは、彼女がどれほど悪魔による惑わしと迷妄の中にあり、またどれほど深い闇から、悪魔の罠を逃れて、真の信仰を知る光へと移り変わったかを明らかにするためである。

シラが成人し、あらゆる魔法の術を徹底的に習得した頃――彼女はすでにペルシャの忌まわしい神々の巫女として仕えていた――、救いの道は次のように開かれた。

神の御計画と御意志により、彼女は数人の貧しいキリスト教徒の女性たちと知り合い、彼女たちから初めて主キリスト、まことの神について聞いた。その後、彼女はキリスト教の信仰、その教義、キリスト教の教え全般、そしてキリスト教徒の生活について、彼女たちに詳しく尋ね始めた。　彼女たちは彼女から聞いたすべてのことを心の中で熟考し、キリスト教の信仰とペルシャの信仰とを比較検討した結果、両者の間に大きな違いがあることに気づいた。　というのも、ペルシャの信仰に関わるものはすべて、彼女は偽りであり忌まわしいものと見なし始め、一方でキリスト教の信仰に関わるものはすべて、正義であり清いものだと考えるようになったからである。そこで彼女は、ペルシャの不敬虔な信仰を捨て、キリスト教徒に加わるという固い決意を抱くようになった。　キリスト教の敬虔さをさらに深く知りたいと願った彼女は、密かにキリスト教の教会に通い始め、そこで聖書の朗読や教会の賛美歌、神の言葉に基づく説教に耳を傾け、礼拝が敬虔かつ神聖に行われる様子を注意深

[5695] ホズロイ（より正確にはホスロー）は、ペルシア語で「王」を意味する。この称号は通常、特定のペルシア王の名前に付け加えられた。ホズロイ長老、すなわちホズロイ1世アヌシルヴァンは、531年から579年まで在位した。

[5696] ゾロアスターは、ペルシアの賢者（マギ）であり、紀元前1000年に生きた。彼は、二元論の原理（すなわち、善と悪という、互いに相容れないが、同時に独立した二つの原理を厳格に分離する原理）に基づいた、非常に複雑な宗教的教義を確立した。

く観察した。　次第に彼女はキリスト教の信仰を深く愛するようになり、キリスト教徒の生き方に魅力を感じるようになった。そこで彼女は、敬虔さと肉体の抑制において、慎重にキリスト教徒に倣い始めた。　彼女はすでに十八歳になっており、何よりも、結婚させられて、世俗的な心配事で心を煩わされることを恐れていた。　そのため、彼女は（異教徒である）人々の前に姿を現さず、ペルシャの著名で裕福な乙女や女性たちとも親交を持たず、むしろ彼女たちを避け、会話や交友関係を遠ざけていた。　一方、キリスト教徒の乙女や妻たちのところには頻繁に訪れ、聖母マリアからキリストが誕生されたこと、キリストのあらゆる奇跡、キリストの自発的な受難と死、復活、そして肉体ごと天に昇られたこと、将来の最後の審判、義人への報い、そして罪人への苦しみについて語り合った。彼女はキリスト教徒の乙女たちから聞いたことすべてを疑うことなく信じ、彼女たちの語ったことをすべて心に刻み込み、魂が感動し、主への愛がますます燃え上がっていった。　彼女は自分の部屋に閉じこもり、キリスト教の書物を読み、祈りと詩篇の詠唱に慣れ親しみ、頭に灰を振りかけながら、唯一の真のキリスト教の神に祈りを捧げた。こうして長い間、彼女はキリスト教の信仰を秘密に守りながら、精進を続けた。　というのも、彼女は父や他の魔術師たちを恐れていた上、さらに、救いを得るには　キリストを密かに信じるだけで十分だと考えていたからである。彼女はまだ、使徒の言葉*「心で信じて義と認められ、口で告白して救われる」*（ローマ10:10）を十分に理解していなかったのだ。

かなり長い時間が経った後、シラはある病に倒れたが、あの不信心な者たちの慣習のように魔術による治療を求めず、心を主に向け直した。　肉体の苦しみの中、彼女はキリスト教の教会を訪れ、その灰によって癒やしを得られることを願って、長老にせめて少しばかりの教会の灰を分けてくれるよう懇願し始めた。しかし、長老は彼女を不信心者として拒絶し、こう言った。

「信仰を持たないお前と、信者たちとの間に、どのような交わりがあり得ようか。偶像崇拝者であるお前と、キリスト教の教会との間に、何の共通点があるというのか。」

彼女は、自らの不適格さを自覚していたため、これに腹を立てることはなく、黙って信仰をもって司祭の衣に触れた。かつて出血の病を患っていた女性がキリストの衣に触れたように（マタイ9:20–22）――すると、たちまちその病から癒やされ、　その後、健康を取り戻して家に戻ったため、皆はその驚くほど早い回復に驚嘆した。

その後、聖女シラは心の中でこう考えた。「もしキリストの僕たちの力がこれほどであるならば、キリストご自身はどれほど全能な方であろうか」と。そして、どのようにすれば聖なる洗礼を受けるにふさわしい者になれるかを考えながら、キリスト教の信仰をより深く知りたいと強く願った。

あらゆる善を妬む悪魔は、至福の乙女シラの中に聖なる信仰の萌芽を見出し、彼女を妨害しようと企んだ。そこで、彼は夜、怒りに満ちた姿で彼女の前に現れ、彼女が故郷の慣習を捨て、病のさなかにキリスト教徒の助けを求め、キリスト教の司祭の衣に触れたことを非難し始めた。

しかし、その聖なる乙女は、それが悪魔の誘惑であることを悟ると、キリスト教徒から教えられた通り、十字架の印を胸に刻み、ひざまずいてダビデの第九十篇を朗読し始めました。「*至高者の庇の下に住む者は、全能者の陰に安らぐ*」（詩編90:1）と、最後まで読み上げた。

その後、悪魔はしばらくの間姿を消したが、詩篇を読み終えると再び現れ、怒りを込めて少女に同じことを言った。

すると少女は再び神に向かってひざまずき、同じ詩篇を読み始めた。

悪魔は再びしばらくの間姿を消したが、その後また戻ってきて、少女にこう言い放った。

「私は、至高の天に住まう神であり、その庇護の下にすべての者が留まっている。そして、お前（彼は続けた）は、お前を惑わすキリスト教徒たちではなく、私に助けを求めるべきだ。」

聖なる乙女は、祈りを込めて三度ひざまずくと、熱心にキリスト・神に、真理を明らかにし、あらゆる惑わしを彼女から追い払ってくださるよう願い始めた。

すると直ちに、神の力によって誘惑者は聖女から追い払われた。しかし、彼女の心には、悪魔の惑わしの痕跡として、疑念が残っていた。この疑念が悪魔の誘惑によるものであると悟ったシラは、温かい心で神に立ち返り、涙ながらに悔い改め、自らの弱さを神に告白した。

その翌夜、聖女は夢の幻の中で神に慰められ、それは彼女の殉教を予兆するものであった。

彼女は、司祭たちよりも高い場所に立ち、キリストの血で満たされた聖杯を両手に持っているように見えた。彼女はその聖杯を民衆に見せている間、二人の助祭が彼女の左右に立って香を焚いていた。　この幻視は、聖女がキリストの御名のために、その惨劇を見守る民衆の面前で、苦難の杯を飲み干さなければならないことを示していた。　また、彼女が立っていた高い場所は、あらゆる聖人の位階を超える殉教という崇高な栄誉を象徴していた。そして、香を焚くことは、彼女の苦難が、いけにえや香のように神に喜ばれるものであり、その苦難によってキリストの教会全体が芳しい香りに包まれることを示していた。

その幻を見た後、聖女は神に捧げる厳格な修道生活を送り始めた。まもなく、彼女の兄弟や親族は、彼女がキリスト教の信仰に共感していることを知った。　というのも、彼女の肉体が変化し、禁欲と断食によって顔色が青ざめ、ほとんど誰とも話さず、自分の部屋に閉じこもって沈黙を守り、神々への供物を捧げるのをやめ、異教徒の間で通常行われていた儀式も放棄していたのを見たからである。　これを見て、彼らは悲しみ、継母に懇願し始めた。娘にそのような生活を捨て、先祖の神々への奉仕から離れないよう説得してほしいと。そうしなければ、一族の名誉を汚し、　王の怒りを一族全体に招いてしまうからである。　しかし、継母は、かつて蛇の姿をとって楽園でエバを惑わした者[5697] に教え込まれていたため、その至福に満ちた乙女のもとへ、喜びと楽しげな表情を浮かべて密かに近づき、自分もまた同じキリスト教の信仰を告白しているが、それを密かに守り、キリストに仕えていると語り始めた。　継母は、密かにキリストから離れることなく、表向きは皆の前で偶像への通常の祭司的奉仕を行うよう彼女に助言した。そうすれば、彼女が神々に仕えているのを見た人々は、彼女がキリスト教徒であるとの疑いを抱かなくなるだろうからである。

「そうすれば」と、その誘惑者は言った。「あなたはキリストを怒らせることもない（なぜなら、キリストは、誰かが密かに御自身に仕えることさえも喜んでおられるからだ）。また、父や兄弟たちを苛立たせることもなく、私の助言に従わなければ間違いなく降りかかるであろう激しい苦痛を免れることができるのだ。」　考えてみて、あなたのような若い乙女で、肉体も弱々しいあなたが、殴打や傷、肉体の拷問、火による灼熱、その他の苦痛に耐えられるでしょうか。苦しみ耐えきれず、自分の意志に反してキリストを否定してしまうことを、本当に恐れないのですか？そうなれば、あなたは重大で許されない罪を犯すことになります。　あなたにとっては、密かにキリストに仕え、表向きは神々に仕えているかのように装うほうが、はるかに良い。そうすれば、それは罪とはみなされない。

継母は、少女シレにこうしたことや、これに類する多くのことを毎日語りかけ、彼女の心を自分の助言へと傾けさせた。*「悪い交わりは善い行いを損なう」*（Iコリント15:33）と聖書は述べている。

しかし、主は御自分のしもべが、あたかも深淵のように、その惑わしに沈み込むことを許さず、再び新たな啓示をもって彼女を力づけてくださった。

それから四ヶ月が過ぎ、大斎期――聖なる四旬節――が訪れ、聖なる乙女は密かに断食と祈りに励みたいと願った。　聖女が断食を始めると、（夢のような幻の中で）自分の兄弟たちが膿や泥に沈んでいるのを見、また父が汚れた寝台に横たわっているのを見た。そして反対側を見ると、驚くべき光に輝く、高く美しい宮殿と寝台が見えた。　また、多くの明るい顔をした人々が、彼女をその宮殿へと招き入れているのを見た。

[5697] すなわち、悪魔のことである。

その幻視の後、彼女は眠りから覚め、早朝にキリスト教の教会へ向かった。ヨハネ司教のもとへ行き、彼女は自分のことについてすべてを詳しく語った。すなわち、司祭の衣に触れて病が癒やされたこと、主からどのような幻視を受けたか、そして司教に聖なる洗礼を授けてくださるよう懇願し始めた。

司教は、その娘から語られたすべてを聞き、彼女が神によって救いへと招かれていることを悟り、心から彼女を喜んだ。　しかし、当時の厳しい情勢を考慮し、彼女に洗礼を授けることはしなかった。というのも、彼女が極めて由緒ある家柄の出身であり、（異教徒たちから）非常に尊敬されている父を持つことを知っていたからである。　また、すべての魔術師たちが信者たちに対して抱く和解の余地のない憎悪についても知っていた。彼は、異教徒たちを刺激して、その乙女の洗礼に激怒させ、王にキリストの教会への迫害を仕向けるよう説得させ、狼のように残酷な彼らの怒りによって、キリストの霊的な羊たちを追い散らしてしまうことを恐れたのである。　さらに、司教はその乙女のことも案じていた。彼女が両親の怒りを恐れ、拷問を恐れてキリストを否定し、それによって聖なる洗礼の恵みが冒涜されることのないよう、と。　そこで司教は、その祝福された乙女に対し、まず父親や兄弟、親族、そして家族全員の前でキリストを告白するよう助言した。　もし彼女が、敬虔な親族から加えられるかもしれない苦難に耐えうることが判明すれば、彼女は最後までキリストの御名を告白することに揺るぎない姿勢を保つことができ、そうすれば聖なる洗礼を受けるにふさわしい者とされるだろう。司教は少女にそのような助言を与え、彼女を平安のうちに送り出した。

乙女は、自分の願いが叶わなかったため、非常に悲しげに司教のもとを後にした。彼女は愛と恐怖の間で揺れ動き、心は混乱していた――キリストへの愛に燃えつつも、同時に拷問を恐れていたのだ。そのため、恐怖のあまり黙り込んでしまった。

しばらくして、聖なる乙女は再び夢の中で幻を見ました。すなわち、彼女は神の天使が鉄の棒を手に持ち、その棒で彼女を打つのを見ました。その時、天使は彼女にこう尋ねました。

「お前の誓いはどこにあるのか？　お前は真の神に忠実に仕え、不信心者たちに対して神の聖なる御名を堅く守ることを誓ったではないか。」

この夢と幻から目覚めた乙女は、大きな恐怖に襲われた。

朝になると、彼女は継母のもとへ呼ばれた。継母は、慣例に従って、神々への朝の捧げ物を執り行うよう彼女に命じた。　すでにキリスト・神への熱意に燃えていたシラは、皆の前でキリストの御名を公然と告白し、魔術や偶像崇拝を放棄するつもりだったが、その時は母親への従順を装い、ゾロアスター教の伝承に従って悪魔的な儀式用の道具を手に取り、祭壇へと歩み寄った。　しかしその時、彼女はあたかも神聖な光に照らされているかのように感じた。　心を引き締め、魂から恐怖を追い払った聖女は、皆の目の前でその祭司の道具を打ち砕き、ペルシャ人が神として崇めていた火に唾を吐きかけ、それを消し止め、祭壇を破壊し、大声で叫んだ。

「私はキリスト教徒だ！　私は偶像への奉仕を拒絶し、悪魔的なあらゆる邪悪な魔術を非難し、偽りの神々と不敬虔な祭壇を踏み躙る。そして、唯一の真のキリスト教の神を信じ、キリスト教の教会へ向かうのだ。」

兄弟たちと継母、そして家の中にいて少女の言葉をすべて耳にした者たちは、彼女を捕らえて押さえつけ、部屋の中に閉じ込め、そこから出られないようにした。その後、少女を見張るために番人を配置した（その時、父親は家にいなかった）。　しかし、その聖女は、たとえ彼らによって拷問にさらされることになっても、キリストの御名を告白するために、父を呼び寄せてほしいと彼らに懇願し始めた。彼女はもはやキリストへの信仰を隠すことを望まず、いかなる拷問も恐れず、すべての人にそれを公然と示したいと願っていたからである。

その間、少女のもとには親族や知人たちが訪れ、涙ながらに、そのような行いをやめ、父や兄弟たちを悲しませたり、一族の名誉を汚したり、自ら進んで激しい拷問に身を委ねたりしないよう、彼女を諭し始めた。しかし、聖女はこうした悪意に満ちた諭しを聞くことさえ拒んだ。

父親がやって来て、自分が神と崇めていた魔法の火が消え、　祭壇が倒され、祭儀の器具が粉々に砕かれているのを見て、さらに娘のシラが声高らかにキリストの御名を賛美していたと耳にすると、激しい怒りに満ち、彼女を掴んで容赦なく自らの手で殴り始め、自身が力尽きるまで彼女を殴り続けた。　その後、彼は涙ながらに彼女を諭し、優しく慰め、慈愛と親しみを込めて語りかけたが、何の効果も得られなかった。父親が彼女に多くの苦痛を与え、縄で縛り、暗い場所に閉じ込め、飢えと渇きに苦しめ、何度も殴打したにもかかわらず、　時には自ら、あるいは親族を通じて、父の神々や祭司の務めに戻るよう優しく懇願することもあったが、真のキリストのしもべである彼女は、ダイヤモンドのように堅固であり、私たちの主イエス・キリストの至聖なる御名を告白するにあたり、柱のように揺るぎなかった。

父は、シラがキリスト教への揺るぎない信念を抱いていること、また、いかなる手段を用いてもこの乙女をキリスト教から引き離すことは不可能であることを確信すると、ペルシャ人にとって魔術師の長と見なされていたマヴィプティスの元へ行き、すべてを報告した。　マヴィプティスは、近隣の都市からすべての祭司や魔術師たちを集め、彼らの神である「火」の神殿のそばに彼らと共に座り、キリストの乙女を自分の法廷に引き出すよう命じた。　そこには大勢の群衆が集まった。その中には、シラという乙女の偉業を目撃しようとやって来たキリスト教徒も少なくなかった。というのも、彼女の改宗や、父親から受けた苦難については、すでに皆が知っていたからである。

マヴィプティスは少女に対し、なぜ父の神々や父の伝承を拒み、別の信仰を受け入れたのかを問い詰め始めた。少女は次のように答えた。

「健全な理性を備えた人間なら、誰一人として、自分を生んだ者の後を、どこへ行くのか分からないまま盲目的に追う愚かな動物のようにはならない。人は、自分にとって最善だと見なす道を進むものだ。分別ある人間なら、自分の父や先祖が、自らの迷いによって破滅へと導こうとしても、決してその後に従うことはない。」　それと同様に、私も、キリスト教の信仰が父の不敬虔さよりも比類なく優れていることを悟り、より良いものを選び、悪いものを拒んだのです。

マヴィプティスは怒りを込めて言った。

「もし私たちの言うことを聞かなければ、お嬢さん、多くの苦しみがお前を待っているぞ。」

シラは自分の首に手を当て、大いなる大胆さをもって言った。

「これを切り落とせ。それはお前の力次第だ――私は一度きりでそう言っておく。」

その後、マヴィプティスは何度も彼女に問いかけましたが、彼女は何も答えず、異教徒には理解できないダビデの詩篇を心の中で唱えていました。

マヴィプティスはついに周囲の人々に尋ねた。

「彼女は何を言っているのか？」

しかし、彼女が何を言っているのか、誰も知らなかった。ただ、そこにいた（異教徒の）一人だけがこう言った。

「彼女はキリスト教の祈りを唱えている。」

マヴィプティスは直ちに、その少女がキリスト教の言葉を発しているのか確かめるため、キリスト教の司教を呼び寄せるよう命じた。

司教は、魔術師たちの権力を恐れて、大きな恐怖を抱いてやって来た。殉教者は彼を見つめた。彼が恐れていることに気づくと、少女は彼に向かって大声で言った。

「恐れることはありません、神父様。聖書の言葉を思い出してください。*『わたしは王たちの前で、あなたの啓示を語り、恥じることはない』*（詩編118:46）。そしてまた、*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない』*（マタイ10:28）ともあります。」

司教は、その少女が語った言葉について問われると、それらが確かにキリスト教徒の言葉であることを認めた。

マヴィプティスはその少女に激怒し、彼女の口を打つよう命じた。その後、彼は彼女に諂うような言葉をかけたり、拷問で脅したりしたが、何一つ成功せず、その場に立ち会って一連の出来事を眺めていたキリスト教徒たちの前で恥をかかされた。

その後、マヴィプティスは、彼女の由緒ある家柄を汚さないよう、当面は王にそのことを報告せず、少女を父親の家にしばらく留めておくよう命じた。その際、マヴィプティスは少女の父親に対し、脅しよりもむしろ優しい言葉をもって、少女をキリスト教から離れさせるよう説得するよう助言した。　そして、殉教者は家に戻り、王や裁判官、そして民衆の前でキリストの御名のために苦難を受ける恵みにあずかったことを喜び、神を賛美した。

その娘が父の家にいた間、主は新たな啓示によって御自分のしもべを慰め、強めてくださった。彼女はしばしば天使たちを見、彼らから不敬虔な裁判官たちにどう答えるべきかを教えられていたからである。　時には、モーセ、エリヤ、使徒ペトロ、その他の聖人たちが彼女の前に現れた。これについては、聖処女シラの殉教に関するより詳細な伝承に記されている。[5698]

一方、その乙女の父はあらゆる手段を尽くして彼女をキリストから遠ざけようとしたが、彼女の不屈の精神に打ち勝つことはできず、そのため再び、マヴィプティスとすべての賢者たちの集まりに、その乙女の頑なさを告げた。

その頃、たまたまその街に、王の最高評議会に属するダルという名の貴族が訪れていた。　この二人の貴族、ダルとマヴィプティスは、処女の父が娘について不満を述べ、さらにキリスト教徒たちが自分に対して反乱を起こし、石で打ち殺そうとしたと誹謗中傷する話を聞かされた際、共にその場にいた。

貴族ダールは、数名の著名な男たちをその乙女のもとへ遣わし、聖女に「なぜ魔法の知恵と祭司としての務めを捨て、キリスト教の信仰に傾いたのか」と問うよう命じた。　その際、ダルは使者たちに、王からの贈り物を約束して優しい言葉で少女を説得するよう命じた。もし彼女が彼らの言うことを聞かなければ、激しい拷問が待っていると告げるよう命じたのである。

使者たちが乙女のもとを訪れ、優しく親しげに話しかけながらあらゆることを尋ね始めたとき、乙女はこう答えた。

「私は、あなた方を遣わした方のところへ自ら赴き、キリストへの私の信仰について伝えようと思っていました。しかし、あなた方が私のところへ来てくださったのですから、よく聞いてください。私がキリスト教の信仰を受け入れたのは、その真実性と正しさを理解したからです。この信仰は、万物の創造主として、唯一の全能かつ不死の神を認めているからです。　一方、あなた方の魔術や偶像崇拝を私が憎むのは、あなた方が多くの神々を崇めているからです。しかし、それらの神々は魂を持たず、取るに足らない存在に過ぎません。　さあ、あなた方を遣わした者にこう伝えてください。『見よ、約束を破ってはならない。約束通り、私を拷問にかけよ。私は、私の神であるキリストのために、苦しみを受け、死さえも厭わない覚悟があるのだから。』

少女のそのような答えを聞いた高官ダルは怒りに満ち、少女を父の家から連れ出し、牢獄へ移すよう命じた。その後、手足に鉄の鎖で縛り上げ、狭く薄暗い部屋に閉じ込め、パンも水も与えなかった。

聖女は三日三晩、牢獄に閉じ込められたままだった。身動きが取れなかったのは、彼女を縛り付けていた重い鉄の鎖のせいでもあり、また、その部屋が狭かったせいでもあった。

三日後、その乙女は監禁場所から連れ出された。その時、異教徒たちは彼女に尋ねた。「この罰で十分か。先祖の神々を崇拝し、先祖の法律を認める気はないか」と。

しかし、その乙女はキリストへの信仰を揺るがすことはなかった。

[5698] このより詳細な伝承は、現代まで伝わっていない。

そこで異教徒たちは再び彼女を裁き、聖なる彼女を非常に重い鉄の束縛で縛り上げ、暗く、悪臭が漂い、忌まわしい深い堀に投げ込むことを決定した。　乙女に束縛を課そうとした際、鎖を釘で留めようとしたが、釘は用意された場所に打ち込めなかった。多くの鍛冶屋が呼び出されたが、誰一人として成功しなかった。　殉教者は釘と鎖の上に十字の印を結び、するとたちまち釘は自ずとその所定の位置に収まった。しかし、憎悪に目がくらんだキリストの敵たちは、聖なる十字架の奇跡的な力を理解できず、慈悲もなく聖女を縛り上げ、その頭を足元に垂れさせた。そして、彼女を堀に投げ込んだ。

主キリストは、御自身を愛する者を決して見捨てられることなく、その堀の中にいた御自分のしもべに、直ちに慰めをお与えになった。なぜなら、そこでは天の光が彼女を照らし、鉄の鎖は自ずと解けて聖女の体にまとわりつき、悪臭は芳香へと変わったからである。　殉教者は、その堀を宮殿のように感じ、喜びながら神を賛美していた。

一方、その町にいたキリスト教徒たちは、司教と共に教会に集まり、殉教者シレのために涙ながらに神に祈り始めた。神が彼女を助け、その偉業を立派に成し遂げさせてくださるよう願ったのである。

殉教者はその穴の中に十五日間留まっていたが、ひどい悪臭と飢え、そして彼女に課せられた重くのしかかる足枷のため、誰も彼女が生き延びられるとは考えていなかった。

その頃、干ばつが発生し、長期間雨が降らなかったため、人々は、これは神の怒りであり、シラという乙女の無実の苦しみに報いるために、皆を干ばつと飢餓で罰したのだと語り合っていた。

15日後、不義な裁判官たちは、シラという乙女が堀の中で生き延びており、手錠からも解放されていたことを知った。皆は大きな驚きに包まれた。聖女は堀から再び民間の牢獄へと移送された。

殉教者が穴から連れ出されるやいなや、たちまち天から大地へと激しい雨が降り注ぎ、大地をたっぷりと潤した。人々は、穴から連れ出されたシラという乙女のために、神がこの雨を降らせたのだと語り合った。

主は御自分のしもべに奇跡を行う力も与えられたため、彼女は病を癒やし、悪霊を追い出すことができた。牢獄に囚われていた聖女のもとには、彼女から癒やしを受けようと、非常に多くの人々が訪れた。そして、彼女の衣に触れた者、あるいは単に彼女の足枷に触れた者でさえ、皆、自分の病から癒やされた。しかし、悪霊たちは彼女に近づくことを許さなかった。

しばらくして、かつてペルシャで殉教した聖なる殉教者たちを称える祝日が訪れた。この祝日は、街の外にある教会で年に一度だけ執り行われていた。　殉教者は、その民衆が参加する祝祭と徹夜礼拝に参列したいと願った。というのも、ある敬虔なキリスト教徒が看守たちに金を渡し、自ら殉教者の身元を保証して、彼女を牢獄から解放させ、翌朝には必ず牢獄に戻すと約束したからである。

聖女は牢獄から解放された。その際、異教徒たちに正体を見破られないよう、彼女は服を着替えた。教会に着くと、彼女は玄関の隅に立ち、教会の聖歌に耳を傾けた。

たまたまその祝祭の集まりに、ある悪霊に取り憑かれた女性がいた。その女性が聖女シラに近づいた途端、彼女の中にいた悪霊が、殴り声で叫び、「殉教者シラが教会に来て、私を追い出そうとしている」と言った。　そして、そこにいた者たちが皆、聖なる殉教者を教会内で探し始めたとき、彼女はすぐにその場を離れ、牢獄へと向かった。

悪霊たちは彼女をそれほど恐れていたため、彼女に近づくことさえできなかった。

その後のある夜、聖処女シラは、看守への賄賂と引き換えに、再び保釈されて牢獄から解放された。そこで彼女は司教のもとへ行き、町にある教会で彼から聖なる洗礼を受けた。

これら一連の出来事の後、マヴィプティスと、彼と共にいた他の裁判官や魔術師たちは、いかなる手段を用いても彼女をキリスト教の信仰告白から引き離すことができなかったため、この殉教者を王のもとへ送ることを決めた。　少女を王のもとへ送り出す際、裁判官たちは、シラという少女の代わりに他の女性が　現れることのないよう、彼らの慣習に従って殉教者の首に印を押した。その印

は、聖なる殉教者の首から、頭部ごとでなければ決して取り外すことのできないようなものであった。

兵士たちは聖女を連行し、当時王が滞在していたアリアクという名の町へと向かった。兵士たちは、殉教者の罪状、その出自、そして彼女が受けた拷問の内容を記した文書と共に、殉教者を町の長官に引き渡した。

都市の長（エパルヒ）は、まず優しい言葉で聖女を説得しようとしたが、やがて拷問で脅し始め、彼女に以前の信仰と生活（すなわち異教の信仰と生活）に戻るよう説得した。　しかし、彼女が言うことを聞かないのを見ると、彼女の衣服を脱がせ、あるみすぼらしいぼろ服を着せるよう命じ、ユダヤ人たちの監視下に置いた。ユダヤ人たちがキリスト教徒の敵であることを知っていたからである。

ユダヤ人たちは、鉄の足枷で縛られた聖女を連れ去り、狭い部屋に閉じ込め、飢え死なないよう、ごくわずかな大麦のパンを食糧として与えた。その上、毎日、罵詈雑言で彼女を責め立て、キリストをも冒涜してこう言った。

「お前の首や手足から、鎖が自ら外れるという、お前の噂の物語はどこへ行ったのだ？　さあ、今こそ鎖が外れる様子を見てやろう！」

ある日、ユダヤ人たちがそのような言葉で聖女を嘲笑ったとき、彼女は天に向かって目を上げ、ため息をつき、心の奥底から主に祈りを捧げた。するとたちまち、ユダヤ人たちの目の前で、彼女の首、手、足から束縛が解け落ち、ユダヤ人たちは大いに驚嘆した。

聖女はユダヤ人たちのところに十一日間留まった後、総督は再び彼女を王の側近である魔術師の長のもとに連れてくるよう命じ、その少女について自分が知っていることをすべて彼に伝えた。

占星術師の長はその乙女を自分の前に連れてくるよう命じ、彼女にこう尋ねた。

「なぜ、あなたは我々の信仰を拒んだのか。我々の信仰は王や公爵たちにも尊ばれており、至る所に広まり、すべての人を支配し、それを守る者を豊かにしているではないか。それなのに、なぜあなたはキリスト教徒――不名誉で貧しく、すべての人から軽蔑され、憎まれている者たち――に加わったのか。」

その娘は大胆にこう答えた。

– 今や、あなたがたの亡き王たちの王冠はどこにあるのか？公爵たちの栄光はどこにあるのか？　それらはすべて滅びてしまいました。王や公爵たちは、草のように一時的に咲き誇りましたが、やがて枯れ果て、永遠の死を受け継いだのです。なぜなら、彼らは万物の創造主である真の神を知らず、生と死の主を崇めず、火や水、太陽、月、星を神として崇拝したからです。　一方、キリスト教徒たちは、現世においてあなたがたから受ける苦難の代償として、永遠の命を得るでしょう。そして、一時的な恥辱の代償として、天の栄光を相続するのです。

魔術師たちの首領は、少女のそのような言葉に激怒し、その後、彼女が以前どこにいたのかを詳しく尋ね始めた。　彼女がどれほど大きな苦しみを受けたか、また過酷な牢獄での監禁について知り、さらに聖女がユダヤ人たちの監視下にあったことを聞くと、彼は彼女を再びユダヤ人たちに引き渡すよう命じ、キリスト教徒の誰もその乙女のもとを訪れないよう、彼らに厳重に監視するよう命じた。

ユダヤ人たちは聖女を引き取ると、容赦なく彼女を拷問し始め、三日間もの間、様々な苦痛を与えて苦しめた。

すべての牢獄と囚人の監視を任されていたある王室の高官が、この殉教者の話を耳にすると、彼女をユダヤ人たちから引き取り、自分の牢獄に収容した。　この男がそうした理由は、利益を得るためであった。というのも、キリスト教徒の間には、キリストの名のために苦しむ囚人たちに会うために、金や銀を投じて看守から牢屋への立ち入り権を購入する習慣があったからである。

殉教者が牢獄に収容されていた頃、あるキリスト教徒たちが金銭を支払って牢獄への立ち入り許可を得て、聖女シレを訪ねてきた。　彼女が鉄の足枷でしっかりと縛られ、むき出しの地面に横たわっているのを見て、彼らは彼女の大きな苦しみを少しでも和らげるために、寝床を持ってきて整えてあげた。　しかし、看守の一人が殉教者のところへやって来て、彼女を寝床から引きずり下ろし、殉教者に課せられた足枷の重さゆえに、彼女に激しい痛みを与えた。するとたちまち、その鉄の足枷は自然にほどけて殉教者から外れ、そこにいた者たちは皆、この出来事に深く驚嘆した。

その頃、王はその町からレサンクサドンと呼ばれる別の町へ赴くことを望んだ。王には、ペルシャの貴族たち全員と、魔術師の長も同行した。彼らの後を、聖なる殉教者シラ（縛られたまま）や、その他のすべての囚人たちも連行されていった。 道中ずっと、聖 殉教者は主に向かって祈りを捧げ、ダビデの詩篇を詠み続けた。聖女を連行していた兵士たちは、何度も彼女に黙るよう命じた。そのため、彼女にはさらに重い足枷がかけられたが、彼女は神を賛美し、感謝することをやめなかった。

カルスと呼ばれる場所に到着すると、魔術師の長はその他の裁判官たちと共に、聖女を尋問に引き出すよう命じ、彼女にこう尋ねた。

「お前は熟考する時間は十分にあったはずだ。さあ、どちらを選ぶのか答えよ。かつてのように神々に仕え、生き延びることに同意するのか、それともキリスト教徒として死ぬことを望むのか？」

聖女はこう答えた。

「私がすでに一度きりで選んだこと以外に、他に何を選ぶことができるというのですか？　私は何度も言いました。私はキリスト教徒であり、私の主イエス・キリストのしもべです。私は主を愛し、主に仕え、主のために死ぬことを望みます。」

魔術師の長が言った：

「当初、あなたが教えられた魔法の知恵の言葉を、私たちに語れ。」

すると聖女は、ダビデの詩篇から神への祈りの言葉を大声で唱え始めた。

魔術師たちの長は激しく怒り、彼女の衣服を引き裂き、裸の状態で自分の前に連れてきて尋問するよう命じた。そしてこう尋ねた。

「今、お前はまったく恥を感じないのか？」

聖女はこう答えた。

「何のために恥じる必要があるのですか？私は強盗でもなく、娼婦でもありません。誰に対しても悪事を働いたことはありません。あなたがたは私の外衣を剥ぎ取りましたが、私には天に、私の主が私のために用意してくださった、まばゆいばかりに輝き、朽ちることなく、永遠に続く衣があります。その主のために、私は今、裸にされているのです。」

聖女がそう語っている最中、魔術師と共に座っていたフザイン国の王子が言った。

「彼女は正気を失っている。」

しかし、聖女はこう答えた。

「狂っているのは私ではなく、あなたの方です。あなたは悪魔に仕えているからです。もし望むなら、私はあなたの額に十字の印を刻みましょう。そうすれば、あなたの中から悪魔が追い出され、あなたの心の目が開かれ、真理を知ることができるでしょう。」

すると、そこにいた者たちは皆、声を張り上げて叫んだ。

「彼女は死に値する。我らの神々を冒涜し、王を侮辱し、貴族たちに傲慢な言葉を吐いているからだ。」

そこで裁判官たちは彼女に死刑を宣告し、誰かの策略によって彼女の代わりに別の女性が殺されることのないよう、再び彼女の口に封印を施した。　その日のうちに彼女を処刑場へ連行するつもりだった。しかし、裁判官の中には、その場所で彼女を処刑すべきではないと主張し、処刑をしばら

く延期するよう助言する者もいた。そこには多くのキリスト教徒がおり、彼女の死をきっかけに反乱や不満の声が上がる恐れがあったからである。　このため、キリストの殉教者の処刑は延期され、裁判官たちは聖女を再び監獄の長に引き渡した。聖女を受け取った監獄の長は、彼女を縛り上げ、他の囚人たちと同じ房に閉じ込めるよう命じた。

その後、王はそこからヴェファマイスという町へと向かい、そこでしばらく滞在した。聖なる殉教者もこの地へ連行され、牢獄に閉じ込められた。　牢獄の中で、殉教者は重病に陥り、もはや死を待つばかりとなった。その時、キリストの殉教者は涙ながらに主に向かって祈り始め、ここで死ぬことを許さず、殉教の冠と苦しみの中での最期を授けてくださるよう願った。神は御自分のしもべの祈りを聞き入れ、彼女に健康を授けられた。

すると、牢獄の看守の一人が、悪魔にそそのかされて肉欲の罪に駆られ、上司に、囚人（聖なる乙女シラ）に対して淫らな冒涜を行うことを許可するよう懇願し始めた。

看守長から許可を得た異教徒は、不浄な情欲に燃え、キリストの花嫁に迫った。しかし、御自分のしもべを守られる主は、その看守の目、耳、舌を目に見えない形で打ち砕かれた。その結果、彼は盲目、耳聾、口がきけなくなり、地面にひれ伏して、狂ったような悲鳴を上げ始めた。

これを見た看守長は、恐怖に駆られて神の力を悟り、その看守の厚かましさを罰するどころか、聖なる乙女への情欲に駆られて、自らも不義を犯そうと企てた。

聖女は彼にこう言った。

「私は天の王と婚約しています。王は、ご自身の処女であり花嫁である私を汚されることを許されません。」

しかし、衛兵長は彼女の言葉に耳を貸さなかった。ところが、彼が恥知らずにも乙女に近づこうとした瞬間、神の天使が彼を打ち倒し、彼は死人のように地面に倒れた。使用人たちが駆けつけ、彼をその場から運び出した。彼はなかなか意識を取り戻さなかったが、このような神の懲罰を受けた後も、サタンのしもべは改心することはなかった。　怒りに満ちた彼は、直ちに殉教者を滅ぼそうと企てた。というのも、彼には殉教者を何らかの方法で死に至らしめるよう命じられていたからである。この不信心者は、聖女を剣で殺すことを望まず、代わりに縄で絞め殺そうと企んだ。鍛冶屋を呼び寄せ、殉教者の鉄の足枷を外すよう命じた。

すると、聖なる乙女は看守長にこう言った。

「ここに鍛冶屋は必要ありません。」

そう言うと、彼女は自ら首、手、足から手錠を外した。これを見た者たちは皆驚いたが、神の力を悟ることはなかった。

そこで、牢獄の看守長は、処刑の際に彼女が抵抗しないよう、再びキリストの殉教者の両手を縛るよう命じた。しかし、殉教者は再び彼にこう言った。

「その無駄な助言はやめておきなさい。私は自らの意志で、私の神のために死を甘受するつもりだから、手すら動かさないわ。」

すると、不信心者たちは殉教者の首に縄を巻きつけ、縄の輪を締め始めた。聖女がもう死の淵に立っていた時、彼らは縄を少し緩め、彼女にこう言った。

「もしキリスト教の信仰を捨てれば、お前を生かしてやる。」

しかし、殉教者は彼らにこう答えた。

「命じられた通りにしなさい。」

彼らは再び首を絞め始めたが、また縄を緩めて尋ねた。

「生き延びるために、キリストを否定する気はないか？」

しかし、聖なる殉教者はキリストのために死ぬことを望み、再び彼らに命じられたことを実行するよう命じた。すると、拷問者たちは両側から力いっぱい縄を引っ張り、聖なる殉教者を死に至らしめた。

こうして、主キリストのために殉教した聖なる殉教者、乙女シラは息を引き取った。[5699] 。

拷問者たちは、彼女の尊い遺体を埋葬せず、犬に食わせようと決めた。そこで彼らは牢獄から殉教者の遺体を運び出し、ある家へ持ち込み、そこに多くの犬を集め、門を閉ざして、殉教者の遺体を犬たちに食わせた。　しかし、犬たちはその遺体には手をつけず、夜になると異教徒たちはその家から殉教者の遺体を投げ捨てた。その町のキリスト教徒たちは、キリストの殉教者が苦難の末に亡くなったことを知ると、迫害者たちがどう動くかを注意深く見守った。　キリストの殉教者の遺体が捨てられると、キリスト教徒たちはそれを回収し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しつつ、尊厳をもって埋葬した。その神に、私たちからも、今、常に、そして永遠に、栄光と賛美が捧げられる。アーメン。

聖殉教者エウティキオスの記念日

記念日：8月24日

聖エウティキオスはセヴァストポリの町[5700] の出身であった。キリストの御名の福音を耳にすると、彼は両親や友人を残して、愛する弟子であり使徒である神学者ヨハネのもとへ赴いた。　至る所で彼に従い、その生き様に倣いながら、聖エウティキオスは彼から神の知恵を学び、泉のように彼から神の恵みを汲み取りました。使徒的な熱意に満ち溢れ、　聖エウティキオスは、悪魔の惑わしを勇敢に根絶やしにしました。　聖使徒パウロと出会ったエウティキオスは、彼の同行者となり、共に多くの労苦を厭わず、福音を宣べ伝え、あらゆる苦難を勇敢に耐え抜いた。それゆえ、この聖エウティキオスは、福音記者ヨハネ・テオロゴスと聖使徒パウロの両方の弟子と見なされている。

このエウティキオスは、七十人の使徒の中には含まれていないものの、小使徒の一人に数えられ、使徒と呼ばれている。　彼が「使徒」という称号で尊ばれているのは、古参の使徒たちと共に、我らの主イエス・キリストの御名を宣べ伝えるために尽力したからであり、また、これらの古参の使徒たちによって、御言葉（説教）の奉仕と犠牲の捧げ物のために司教に任命されたからであり、そして最後に、　キリストの御名を宣べ伝えるために多くの国々を巡り、しかも他の使徒たちと共にだけでなく、単独でも巡ったからである。とはいえ、彼は決して独りで福音を宣べ伝えていたわけではない。常に神の御使いを伴っており、その御使いは彼を力づけ、彼に起こるべきすべてのことを予告していたからである。　このキリストの使徒は、どこへ行っても忍耐強く、投獄や拷問にも耐え、主のために勇敢に苦難に耐えた。

ある時、聖エウティキオスが牢獄に閉じ込められ、長い間飢えに苦しんでいたところ、天から神によるパンが送られてきた。このパンは目に見えない手によってもたらされた。このパンを口にしたキリストの使徒は、これほどまでに力を取り戻したため、自分に課せられたあらゆる苦難を何とも思わなくなった。

またある時、彼は裸のまま拷問用の木に吊るされ、鉄の器具で苛まれていたが、その清らかな体からは血と共に芳香を放つ聖油が流れ出し、空気をその香りで満たした。

[5699] 聖殉教者シラの死は558年に訪れた。 聖殉教者シラの死後まもなく、キリストの御名を告白するために、彼女の親族である聖マリア（ペルシア語でゴリンドゥハ）が殉教の業を始めた。これは同じホズロエ1世の治世下で始まったが、ホズロエという名の別の王――すなわち、初代ホズロエの孫である――ホズロエ2世パルヴェーズの治世下でも続いた　（590年～628年）の治世下でも続いた。――聖マリア・ゴリンドゥハの記念日は7月12日

[5700] 古代には、セヴァストポリ（またはセヴァスティア）という名の都市がいくつか知られているが、この場合、具体的にどのセヴァストポリを指すのかは不明である。

その後、聖なる使徒が燃え盛る火刑の焚き火に投げ込まれたとき、突然、天から雷鳴が轟き、続いて大雨が雪（雹）と共に降り注ぎ、火を消し止め、聖人は生き残り、無傷のままで、主を賛美した。

聖人はまた、野獣に食わせられることにもなりましたが、野獣たちは彼を見るやいなや、羊のようにおとなしくなりました。　しかし、何よりも驚くべきことは、彼に放たれたライオンが人間の声で語り、主であり私たちの救い主であるイエス・キリストの偉大さを万人に聞かせるように賛美し、その光景を見守っていたすべての人々を大いに驚かせ、さらには恐怖に陥れたことである。

しかし、それのどこが驚くべきことだろうか。 昔、バラムのロバの口を開かせ（民数記22:28–31）、それが人間の言葉で語るようにされた方が、不義な者たちを糾弾し恥じ入らせ、御自身の全能の力を賛美するために、ライオンの口を開かせて人間の言葉で語らせることができなかったはずがないではないか？ ここでもあそこでも、同じ主が臨在し、奇跡を行われたのである。

聖使徒エウティキオスがどのようにその生涯を閉じたかについては、エフェソスから故郷のセヴァストポリへ縛られたまま連行され、そこで息を引き取ったことが知られている。　また、ミネイに記されている彼のための礼拝では、その死の様相について次のように述べられている。すなわち、彼は聖なる頭部を剣で斬り落とされたが、神はその頭に栄光に満ちた勝利の冠を授けられたのである[5701]。

コンダク、第3声：

使徒たちの共同祭司であり、聖人たちの美徳であったエウティキエよ、汝は殉教によって栄光を得、太陽のように輝き、すべての人を照らし、不信心の深い闇を打ち砕いた。このゆえに、我らは汝を、まことに神聖なるキリストの秘儀執行者として崇める。

聖殉教者タティオンの記念日

記念日：8月24日

この聖なる殉教者は、クラウディオポリス都主教区およびゴノリアド司教区[5702] に属するマンティネア出身であった。　キリストを信じたことを理由に異教徒たちに捕らえられ、クラウディオポリス[5703] の都市の統治者ウルバヌスの元へ連行された。尋問の際、彼は自らをキリスト教徒であると宣言したため、牢獄に投獄された。　その後、彼は再度尋問を受けたが、一貫してキリストへの信仰を貫いたため、まず棒で殴打され、次に鉄の器具で体を削られ、さらに殴打された後、街中を引きずり回された。　城門にたどり着くと、聖なる殉教者は十字架の印をもって身を守り、そのとき天から声が聞こえ、喜びに満ちた未来を告げられた。その後、彼は主のもとへ息を引き取った。[5704]。

[5701] 聖使徒エウティキオスの死は、1世紀末か2世紀初頭に起こった。

[5702] マンティネーとクラウディオポリスは、小アジア北西部のローマ属州ビフィニアにあるゴノリアド地方に位置していた。ギリシャ人にとって、属州の主要都市は「ミトロポリス」、地方の都市は「エパルヒア」と呼ばれていた。　行政上、マンティネウスはクラウディオポリスのイゲモンとゴノリアドのエパルヒアの管轄下にあった。

[5703] かつてビフィニアと呼ばれていたクラウディオポリスという都市は、小アジアのビフィニア属州、ビレヤ川の上流付近に位置していた。

[5704] 聖タティオンの迫害者はプレフェクトのウルバンであったことから、彼の殉教はディオクレティアヌス帝の治世、すなわち305年にさかのぼるとされている。皇帝ヴァシレイオスは、自身の月暦において彼をタティアヌスと呼んでいる。

9月7日

8月25日（旧暦）

聖使徒ティトス

8月25日の記念日

聖使徒ティトスはクレタ島出身であり、その両親は貴族であった（彼らはクレタ王ミロイを先祖に数えていた）ものの、正教の信仰を持たず、偶像崇拝という不敬虔な行いに従事していた異教徒であった。　ティト自身も当初は同じ不敬虔な信仰に従事しており、若き日にはギリシャの学問を学ぶことに大きな熱意を示した。彼は、ホメロスらをはじめとする古代の哲学者や詩人の著作を熱心に研究した。　それにもかかわらず、ティトスは悪意のない、貞潔な生活を送っていた。彼は真の神を知らなかったものの、後に聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）がフィラデルフィア人への書簡の中でティトスを「処女」と呼んで証言したように、自身の肉体の純潔を汚れなく守っていた。ティトスが信仰によって知らなかったその神その方を、彼は善行をもって崇め、神に喜ばれた。

ティトが二十歳の誕生日を迎えたとき、彼は天から降りてくる声を聞き、こう告げられた。

「ティトよ！　ここから立ち去り、汝の魂を救うがよい。ギリシャの教えは救いへと導かないからである。」

ティトはこの声を聞いた後、もう一度その声を聞きたいと願った。なぜなら、時には偶像からの声や囁きがあることを知っていたからである。しかし、ティトはもはや偶像を信じることを望まなかった。悪魔の惑わし（偶像を崇拝する者すべてが陥るもの）を悟り始めていたからである。そして、彼はそこでさらに一年を過ごした。

その後、彼は夢の中で神から、ユダヤの書物を読むよう命じられた。その夢の啓示を受けて、ティトはユダヤの書物を探し始めた。聖なる預言者イザヤの書を見つけると、ティトはそれを開き、第41章に目を留めた。その章は次のように始まっている。　*「諸島よ、わたしの前で静まれ。諸国民よ、力を新たにしなさい」*（イザヤ41:1）。この章を読んでいると、ティトスは、まるで神ご自身が自分の心に語りかけているかのように思えるいくつかの言葉に出くわした。すなわち、　*「あなたはわたしのしもべ、わたしはあなたを選び、あなたを捨てはしない。恐れてはならない。わたしはあなたと共にある。」*惑わされてはならない。*「わたしはあなたの神である」*（イザヤ41:9–10）。そしてまた、*「わたしは主、あなたの神である。わたしはあなたの右の手を握っている」*（イザヤ41:13）。　そして、その章の終わりに、偶像による惑わしについて読んだ。すなわち、「*彼らの中には、わたしが尋ねて答えを得られるような助言者など一人もいなかった。見よ、彼らは皆無に等しく、その行いも無に等しい。彼らの彫像は風であり、空虚である」*（イザヤ41:28–29）。

預言書のこれらの言葉やその他の言葉は、ティトスにとって、あたかも鍵のようなものであり、唯一の真の神を知るための心の扉を開くと同時に、偶像による惑わしや異教の迷いを理解する扉も開いた。それ以来、ティトスの心は、ユダヤ人たちが崇める神へと燃え上がった。

この頃、クレタ島（ティトゥスが住んでいた場所）には、キリスト――肉となって現れ、エルサレムで人々の間に住み、驚くべき、言葉では言い表せない奇跡を行われた神――に関する噂が広まっていた。なぜなら、キリストの栄光は地の果てまで知れ渡っていたからである。　クリト島のアンフィパト[5705]　――彼はティトの母方の叔父にあたる――は、名士たちと相談した上で、その賢明で知的好奇心旺盛な甥であるティトをエルサレムへ遣わした。それは、キリストの口から語られる言葉を

[5705] つまり、統治者である。

しっかりと聞き、理解し、キリストと語り合うためであった。こうして、　ティトスは、キリストについて自ら知ったことをすべて、同胞たちに極めて詳細に伝えることができたのである。

ティトスはエルサレムへと向かった。主キリストを目にした彼は、主を礼拝し、主とその弟子たちの後を追い、主の後を大勢でついていく群衆の中に混じった。こうしてティトスは、キリストによってなされた多くの奇跡をこの目で目撃し、主の救いをもたらす受難を目の当たりにし、また主の復活をも確信した。　その後、主の昇天の後、聖霊が火の舌のような姿で使徒たちの上に降り、使徒たちがさまざまな言語で語り始めたとき、ティトスは使徒たちがクレタ語でも話しているのを耳にし、非常に驚いた。これは『使徒行伝』にも次のように記されている。　*「クレタから来た人々*（その中にはティトもいた）*やアラビア人」*は、驚きながら互いにこう語り合った。*「彼らが私たちの言葉で、神の偉大な御業について語っているのが聞こえる」*（使徒行伝2:10–11）。その後、ティトはこれらすべてを、故郷であるクレタで語り継いだ。

祝福されたティトは、使徒的奉仕にも参加しました。　異邦人にも信仰の門が開かれた時（使徒14:27）、百人隊長コルネリウスが洗礼を受け、その後他のギリシャ人たちも洗礼を受けた。その時、割礼を受けていない異邦人の出身であるティトも、かつてサウロと呼ばれていた聖使徒パウロから洗礼を受けた。　ティトはキリストを信じたものの、洗礼を受けるまでは、使徒たちは彼を初期の教会に受け入れようとしなかった。というのも、彼らは一般的に割礼を受けていない者を一切受け入れなかったからである；　ティトスは旧約聖書の割礼の儀式を行うことを望まなかったが、キリストを信じたユダヤ人たちは当初、すべての異邦人に対してこの儀式の履行を要求し、「割礼なしには誰も救いを得ることができない」と主張していた。これは『使徒行伝』にも次のように記されている。ユダヤから来た者たちのうち、ある人々は兄弟たちに、*「モーセの律法に従って割礼を受けなければ、救われることはできない」*と教えていた（使徒行伝15:1）。こうした者たちは、百人隊長コルニリウスの洗礼について、聖なる首席使徒ペトロに対しても不平を述べ、彼（使徒ペトロ）と論争を繰り広げ、彼が割礼を受けていない者たちの家に入り、彼らと共に食事をしたと非難した。　そこで、聖なる使徒たちは公会議でこの問題を審議し、異邦人に割礼を強制しないことを決定した。　そこで、ティトスも洗礼を受けた。彼に割礼を強いる者は誰もいなかったからである。このことについては、使徒パウロもガラテヤ人への手紙の中で言及しており、*「しかし、彼らは、私と共にいたティトス――彼はギリシア人であったが――にも、割礼を受けるよう強要しなかった」*（ガラテヤ2:3）と述べている。

洗礼の後、ティトスは他の主要な使徒たちから使徒的奉仕の権限を与えられ、七十人の小使徒の一人に数えられた。　ティトは、神の御言葉を宣べ伝えるために、使徒パウロと共に異邦人のもとに遣わされた。そしてティトは、聖なるパウロに絶えず従い、単に師に従う弟子としてだけでなく、最愛の父に従う息子として彼に付き従った。　なぜなら、パウロは彼を自分の息子と呼んでいるからであり、これは『テトスへの手紙』からも見て取れる。*「テトスへ、同じ信仰を持つ真の息子へ。恵みと憐れみがありますように」*（テトス1:4）。聖テトスは、時には使徒パウロと共に旅をし、時にはパウロから派遣されて単独で宣教を行った。　例えば、彼はパウロによってダルマチアへ派遣されたことがあり、これについてパウロはテモテへの手紙の中で、*「ティトはダルマチアへ」*（IIテモテ4:10）と述べている。すなわち、ダルマチアの諸都市で福音を宣教するために、私によって派遣されたのである。　また、聖使徒パウロは、時にティトに自身の使徒的書簡を託して送り出した。例えば、コリント人への手紙において、パウロは*「私はティトに懇願し、兄弟の一人を彼と共に遣わした」*（IIコリント12:18）と述べている。　また、*「私たちはティトに、始めたことを最後までやり遂げるよう頼んだ」*（IIコリント8:6）とも述べている。さらに、*「あなたがたに対するそのような熱意をティトの心に植え付けてくださった神に感謝する」*（IIコリント8:16）とも記されている。　疑いなく、パウロはキリストにあってティトスに対して大きな霊的な愛を抱いていた。なぜなら、彼はティトスを時には息子、時には兄弟と呼び、ティトスがパウロのもとを離れてから遅れて戻ってきた時には、

パウロは彼を案じ、自分自身について次のように語ったからである：　*「キリストの福音を宣べ伝えるためにトロアス　に来たが、主によって門が閉ざされていたにもかかわらず、私の霊には安らぎがなかった。なぜなら、そこに私の兄弟ティトスがいなかったからである」*（IIコリント2:12–13）。そして、偉大な使徒がティトスの不在をどれほど嘆いたか、それと同じくらい、ティトスの存在によって慰められていた。なぜなら、彼はこう言っているからだ。*「へりくだった者を慰められる神は、ティトスの到来によって私たちを慰めてくださった」*（IIコリント7:6）。さらにこうも言っている。*「私たちはティトスの喜びによって喜びを得た」*（IIコリント7:13）。

キリストの御名を宣べ伝えるために多くの国々を巡り歩いた聖なる使徒たちは、ティトの故郷であるクレタ島にたどり着いた。　当時、クレタ島にはティトの姉妹の夫であるルスティルがアンフィパトスにいました。彼は、キリスト・神に関する使徒たちの説教を聞いた際、当初はそれを嘲笑しました。しかし、亡くなっていた彼の息子が使徒パウロによってよみがえらされたとき、ルスティルはキリストを信じ、家族全員とともに聖なる洗礼を受けました。　同時に、その島に住んでいた他の多くの異教徒たちも、聖なる信仰と洗礼を受け入れた。聖パウロは、祝福されたティトをクレタ島および周辺の諸島の司教に任命し、新たに改宗したキリスト教徒たちを彼に託して、彼をその地に残し、　自身は他の国々へと向かい、異教徒たちにキリストの御名を宣べ伝えました。ニコポリスに到着した聖パウロは、ティトスに手紙を書き、その中で（羊の群れに対する）善き統治について教えました：　*「私があなたをクレタに残したのは、未完の仕事を完成させ、私が命じたように、すべての町に長老たちを任命するためである」*（テトス1:5）。この使徒の言葉について、聖金口ヨハネは次のように説明している。　「テトスは、パウロと共にいた者たちの中で最も有能な人物であった。もし彼が有能でなかったならば、パウロは彼に島全体を任せることも、未完の仕事を完了させるよう命じることも、司教たちを彼の裁きに従わせることもなかっただろう。パウロはこの人物（テトス）を信頼していたからである」。

パウロがニコポリに滞在していた際、再びティトを呼び寄せ、彼への手紙の中で次のように述べた。*「アルテミスかティキカをあなたのところへ送ったら、急いでニコポリの私のところへ来なさい。私はそこで冬を過ごすことにしたからである」*（テトス3:12）。こうして、聖ティトはニコポリスにやって来た。パウロと短期間共に過ごした後、ティトは再び彼によってクレタへ遣わされた。

その後、聖パウロはエルサレムで捕らえられ、足枷をはめられてローマへ送られた。ティトスはこの一連の出来事を耳にし、師の苦難の業をこの目で見るためにローマへと向かった。　ティトスは、聖使徒パウロが亡くなるまでローマに留まった。使徒の尊い首が切断された後（これはネロの命令によって行われた[5706]）、ティトスは使徒の尊い遺体を埋葬し、再び自分の牧会する群れのもと、クレタ島へと戻った。　ティトは、クリト島有数の都市であるゴルティナに司教座を置いていた。ティトは絶え間なく働き、迷いの中にあったギリシャ人をキリストへと導き、彼らを教え、奇跡によって彼らの信仰を確固たるものにした。

なお、その島には、異教徒たちが崇める女神ディアナ（[5707]）の偶像があった。この偶像を崇拝するために多くのギリシャ人が訪れ、犠牲を捧げていた。　ある日、聖ティトスは、不信心者たちが集まるその場所を訪れ、彼らに神の御言葉を語り始め、偶像による惑わしを見抜き、真の神に立ち返るよう諭した。　しかし、人々は彼の言葉に耳を貸さなかったため、聖ティトスは神に祈りを捧げると、たちまちその偶像は倒れ、塵と化して散り散りになった。すると、そこにいた者たちは皆、恐怖に襲われ、その日、五百人がキリストを信じるようになった。　同様に、ローマ皇帝の命令により、クレタ島で忌まわしい神ゼウス[5708]を称える巨大な偶像の神殿が建設され、すでに完成間近となっ

[5706] ネロ皇帝は54年から68年まで在位した。
[5707] ディアナは、古代ギリシャ人にとって狩猟の女神であり、自然全般の守護神とされていた。
[5708] ゼウスはギリシャ人にとって主神であり、他のすべての人間や神々の始祖とされていた。

ていたとき、キリストの使徒ティトはその場所を通りかかり、真の神に祈りを捧げると、その神殿は突然倒れ、基礎まで崩壊した。　この奇跡を目撃した多くのギリシャ人はキリストに帰依し、真の神である主イエス・キリストの名に因んで美しい教会を建てた。

クレタ島とその周辺の国々を聖なる信仰の光で照らした使徒ティトは、大いに年を重ね、生後九十四歳で主のもとへ帰った。　彼の臨終の際、天使たちが天から降りてきて、その魂を迎えに来た。すると、彼の顔は太陽のように輝いた。なぜなら、その生涯が世の光であった者の死は、我らの主イエス・キリストからの光の輝きによって尊ばれたからである。[5709]。

コンダク、第2調：

パウロはあなたの語り手となり、使徒よ、この者を通して、あなたは私たちに神の恵みの言葉を予告されました。秘められた御言葉を語る者、永遠に記憶されるテトスよ。このゆえに、私たちはあなたに叫びます。私たちすべてのために、祈りを絶やさないでください。

聖使徒バルトロマイの尊い遺骸の移送

記念日：8月25日

聖使徒バルトロマイ[5710]が、アルメニアの都市アルバネ[5711]において、不信心者たちの手によりキリストのために殉教した後、信徒たちは聖使徒の尊い遺体を受け取り、同じ都市の錫の聖櫃に安置しました。　そして、使徒の聖遺物から奇跡が起こり始め、病める者たちはそこから癒やしを受けた。このため、多くの異教徒がキリストへと回心した。　しかし、悪魔の僕である不敬虔で残忍な祭司たちは、それらの奇跡について耳にし、さらには自らの目でそれを目撃したにもかかわらず、神の力を認めようとはせず、かえって心の中で憎しみを募らせ、使徒の尊い聖遺物を憎むようになった。敵意と激怒が極限に達すると、これらの悪魔の僕たちは、前述の聖遺物が入った錫の聖櫃を奪い取り、それを海に投げ込み、海の深みに沈めようと企てた。　さらに、これらの不信心者たちは、他の聖なる殉教者たち――すなわち、伝えられるところによれば、パピアン、ルキアン、グリゴリウス、アカキオスの――遺骨を納めた四つの聖櫃もまた海に投げ込んだ。しかし、これらの聖櫃は海の深淵に沈むどころか、船のように海面を漂い、その中には計り知れない宝物が収められていた。　使徒バルトロメオの聖遺物箱は、錫製ではあったが、水に沈むことはなかった。　それどころか、自然の理を超えたほどに極めて軽く、全能の神に導かれる船のように、他の殉教者たちの聖櫃に囲まれて海の上を漂っていた。というのも、使徒の栄光に敬意を表して、その右側に二つの聖櫃、左側に二つの聖櫃が配置されていたからである。

奇跡的な方法で海を漂いながら、前述の聖櫃はプロポンティス海にあるフラキアのボスポラス海峡に到達し、その後、ヘレスポント海峡を通り抜け、エーゲ海とイオニア海を渡り、シチリア島に到達した。　シラクーサを左舷に残して西へと進み、リパーレ島にたどり着いた。ここで使徒の聖櫃は岸に接岸した。一方、他の聖殉教者たちの聖櫃は、使徒をリパーレまで送り届けた後、彼をそこに残して別れ、神の御心に従い、それぞれが自分の進むべき方向へと向かった。　パピアスの聖遺物箱はシチリアへ、ルキアノスのものはメッシニアへ、グリゴリオスのものはカラブリアへ、アカキイの

[5709] 聖使徒ティトの聖遺骨は、ゴルティナの大聖堂に安置されていた。 823年にサラセン人によって島が荒廃した後、その聖遺物からは頭部のみが残り、それがヴェネツィアの聖マルコ大聖堂へ持ち込まれた。しかし、別の伝承によれば、使徒の頭部はクレタ島そのものにある、彼にちなんで名付けられた教会に保管されているという。

[5710] 聖使徒バルトロメオの記念日は6月11日に祝われる

[5711] 現在のバクー。

ものはアスカロスという町へと向かった。これらすべてについて、リパレ島の司教アガフォンに神からの啓示があった。

この司教は聖職者や民衆を率いて海岸へと向かい、そこで使徒の聖遺物を収めた聖櫃を見つけると、他の者たちと共に喜びに満ち溢れ、こう言った。

「リパリよ、この計り知れない富は、どこからあなたのもとにやってきたのか。まことに、あなたは今や高貴となり、栄光に包まれた。喜び、歓喜せよ。あなたを訪れたこの偉大なる守護者であり、神への執り成し手である方を、自らの手で迎え入れ、彼に向かって叫べ。『主の使徒よ、あなたが私たちのもとに来てくださって、なんと幸いなことか！』と。」

皆は、聖使徒の遺骨を納めた錫の聖櫃が、水に沈むどころか、船よりも軽く、明らかに人間の力ではなく神の力に導かれて、これほど遠い海の道を渡ってきたことに驚嘆した。そして、皆は神の偉大さを賛美した。

その後、使徒の聖遺骨を納めた聖なる聖櫃を、詩篇を歌いながら厳かに教会へと運び込んだ。すると、使徒の聖遺骨から聖油が流れ出し、この聖油によって不治の病が癒やされた[5712]。

この尊いキリストの使徒の聖遺物は、テオフィロス（偶像破壊者）の治世に至るまで、長い間その島に安置されていた[5713]。しかし、このテオフィロスの治世において、人々の罪に対する神の許しにより、アガリア人がリパロ島を攻略した。 ベネヴェンテ市の統治者であるシカード公は、かねてよりキリストの使徒の奇跡について聞いており、聖人に対する熱烈な信仰に燃えていた。 そこで、アマルフィの港「 」から船員たちを呼び寄せ、十分な報酬を約束した上で、彼らを説得して船でリパルー島へ渡らせ、そこから聖使徒バルトロメオの聖遺物を、ある種の貴重な宝物として持ち帰らせることにした。 これらの男たちは船で出航し、リパレ島に到着すると、そこから切望されていた霊的な宝物を手に入れ、仲間のもとへ戻った。そして、シカルド公が聖人の遺骨が近づいていると聞くやいなや、司教や大勢の人々を伴い、船で海に出て出迎えに向かった； キリストの使徒の尊い聖遺物は喜びをもって迎えられ、その後、ベネヴェントの街へ栄誉をもって運ばれ、大聖堂に安置され、この出来事が盛大に祝われた。 それ以来、8月25日に、聖使徒バルトロメオの尊い聖遺物の移送を記念する祝祭日が定められた。この尊い聖遺物からは、使徒バルトロメオの祈りと、我らの主イエス・キリストの恵みにより、様々な病に苦しむ者たちに癒しがもたらされた[5714]。

コンダク、第4調:

汝は、教えの輝きと恐るべき奇跡によって、全宇宙の偉大なる太陽として現れ、汝を崇める者たちを光へと導く、バルトロマイよ、主の使徒よ。

エデッサにてアリウス派の手により殉教した、キリストの聖なる殉教者たちの記念

記念日：8月25日

不敬虔な偶像崇拝の王たちや迫害者たちによって引き起こされた、数多くのキリスト教徒への迫害の後、 キリストの教会は、偉大なるコンスタンティヌス帝の時代に自由を得て、平和と静寂の中で繁栄し始めましたが、悪魔の働きによって新たな迫害がもたらされました。しかし、それはもはや偶像崇拝者によるものではなく、異端へと逸脱した邪信のキリスト教徒たちによるものでした。

[5712] この出来事は6世紀末に起こった。

[5713] テオフィロス皇帝は829年から842年まで在位した。

[5714] 聖使徒バルトロメオの尊い遺骸は、839年頃、リパーラからベネヴェントの街へ移された。

コンスタンティヌス皇帝の死後、神を冒涜するアリウス派の異端[5715] は、まずコンスタンティヌスの息子コンスタンティウス[5716] の治世において、そしてその後ヴァレンティヌス[5717] の治世において、著しく勢力を強めた。というのも、両者ともアリウス派の異端を信奉しており、それぞれの治世において、キリストの教会を激しく迫害したからである。

ヴァレンティヌスの治世、正統な司教たちがその座から追放され、その代わりに異端者たちが据えられていた頃、エデッサの街にはバルシスという司教がいた。彼は正統で聖なる人物であり、人々のあらゆる病を癒す賜物を持っていた。このバルシスは、アリウス派の異端に熱心に立ち向かった。 不敬虔な皇帝ヴァレンティヌスは、この聖なる人物を容認できず、彼を司教の座から追放し、当初はアラド島へ流刑に処した。 しかし、そこで聖ヴァルシス司教のもとに多くの民衆が集まり、彼の正統な教えに耳を傾けていると知ると、ヴァレンティヌスは彼をそこからエジプトの都市オキシリンポスへ移送した。 しかし、聖人がここでも奇跡と教えによって名声を博すると、ヴァレンティヌスは再び、野蛮人の居住地の近くにある、フェノンというさらに遠い都市へ彼を移送した。聖人はそこで、キリストの殉教者として、至福の死を遂げた。 また、彼の後に残された「オドル（寝台）」は、ラデ島において病を癒やす力を持っていた。いかなる病に苦しむ者であれ、その寝台に横たわれば、健康を取り戻し、不浄な霊から解放されたのである。

この聖なる司教をエデッサ教会の座から追放した後、不敬虔な王は、その代わりに、名も性質も「狼」そのものである者を据えた。というのも、その虚栄心にあふれた司教はルプスと呼ばれており、それは「狼」を意味するからである[5718]。 こうして、真の羊飼いの代わりに、羊飼いの衣をまとった貪欲な狼が、キリストの群れの中に侵入したのである。

しかし、正信のエデスの民は、聖なる場所、すなわち教会に居座り、「荒廃の憎むべきもの」（マタイ24:15）として振る舞うその偽りの牧者、異端者との交わりを拒んだ。 それゆえ、その町の正信の市民たちは町を出て野原へ行き、開けた場所に集まり、そこで神殿にいるかのように神への礼拝を執り行った。というのも、正信者たちに利用を許された神殿は一つもなく、すべての神殿は彼らに対して閉ざされており、王の命令に従って、最も栄光ある神殿のすべてがアリウス派によって占拠されていたからである。

ある時、皇帝自らがアンティオキアからエデッサへと向かう途中、同地を訪れた。そこで、正信者（キリスト教徒）たちがアリウス派の不敬虔さを忌み嫌い、前述の司教との交わりを拒み、彼から逃げ出して城外の場所で祈りを捧げていることを知ると、 ――王は、エデッサのエパルヒであるモデスタに対し、民にそのような行為を許したとして激怒し、その頬を平手打ちにした。その後、武装した兵士を準備するよう命じ、 さらに、その兵士たちを民衆の祈りの集会の場所へ連れて行き、キリスト教徒を斬り殺し、彼らを追い散らすよう、エパルハに命じた。

司教は、王から命令を受けたものの、罪のない民を憐れみ、信者たちに密かに知らせた。王が怒りに任せて、キリスト教徒を殺害するために武装した兵士たちを派遣するよう命じたため、翌日は街から出ず、いつもの祈りと礼拝の集まりにも集まらないようにと。 しかし、信者たちはこれを聞いても恐れるどころか、かえってさらに熱意に燃え上がり、早朝に起きて妻や子供たちと共に城外へ出た。キリスト教徒たちは、そこでキリストのために自らの命を捧げる決意を固め、いつもの集会所へと向かった。 一方、エパルクスは皇帝の命令を遂行するため、翌日の朝、まるで戦場へ出陣するかのように、武装した兵士たちを率いてその場所へ向かった。 そして、彼が町の門に差し掛かった

[5715] アリウス派異端の始祖は、アレクサンドリアの長老アリウスであった。彼は、神の御子が父なる神と同質であることを否定し、イエス・キリストを被造物として崇め、全能、全知などの神聖な完全性を彼に認めなかった。 アリウス派の異端は、第1回（325年）および第2回（381年）の全地公会議において断固として非難された。

[5716] 在位は337年から361年まで。

[5717] 364年から378年まで

[5718] ラテン語の lupus は「狼」を意味する。

とき、ある女性が自分の家から出てきて、ドアを閉めもせず、急いで着替えただけの（身だしなみを整えていない）姿で、幼い少年を連れて歩いているのを見かけた。その女性は泣きながら、彼の兵士たちを追い越そうと、町の外へと向かっていた。　エパルクは彼女を捕らえて自分のところへ連れてくるよう命じた。道端で立ち止まると、エパルクは尋問を始め、こう言った。

「哀れな女よ！ こんな早朝にどこへ急いでいるのか、なぜそんなに慌てているのか？」

女性は答えた。

「私は、キリスト教徒たちが集まっている野原へ急いでいるのです。」

総督はこう返した。

「総督が兵士たちを率いてそこへ行き、そこにいる者全員を打ちのめそうとしていると、聞いたことがないのか？」

女性は答えた。

「ええ、その話は聞いています。だからこそ、彼ら（キリスト教徒たち）と共に、キリストの御名のために死ぬために急いでいるのです。」

エパルクは再び尋ねた。

「では、なぜこの少年を連れてきたのだ？」

すると、その女性はこう答えた。

「この少年にも、私と共に殉教者の冠を授かる資格を得てほしいのです。」

これを聞いて、エパルヒはキリスト教徒たちのそのような熱意と、信仰のために死ぬ覚悟に驚き、兵士たちに引き返すよう命じた。その後、王のもとへ行き、こう言った。

「もし私に死ぬよう命じられるなら、私は覚悟はできています。しかし、あなたが私に下した命令は、私には果たせません。」

その後、司教は王に、子供連れの女性のことを語り、彼女が殉教の死を授かるために、自らも子供も望んでいたその死を求めて、どれほど熱心に城の外の野原へと急いだかを述べた。　さらに、総督は王に、民全体が死を受け入れる覚悟があることも告げた。というのも、すべてのキリスト教徒は、妻や子供たちと共に、キリストへの信仰を告白するために死ぬ覚悟ができていたからである。

「そして、たとえすべての市民を死刑に処したとしても、エデスの民を司教との信仰の交わりに強制することは不可能です」と、エパルフは付け加えた。「しかし、そこから何の益があるというのでしょうか？　彼らはその勇敢で苦難に満ちた偉業によって、すべてのキリスト教徒の間で称賛されることになるでしょう。一方、私たちには恥と永遠の嘲笑が残るだけです。」

このように述べたことで、主教は王が民衆を虐殺することを思いとどまらせた。王は民衆を迫害しないよう命じ、アリウス派の司教との交わりを拒む司祭、助祭、その他の聖職者だけを拷問にかけるよう命じた。

その後、教区長は正統信仰を守るエデスの聖職者全員を呼び寄せ、穏やかに皆に王の命令に従うよう諭し、ルプスと呼ばれる司教との交わりに入るよう提案した。その際、教区長は次のように述べた。

「最も愚かなのは、あなたがたがわずかな人数に過ぎないにもかかわらず、多くの国々を支配する皇帝の命令に耳を貸さず、それに反抗しているという点である。」

教区長がそう語っている間、皆は黙り込んでいた。その後、教区長は、すでに高齢となっていたエウロギオスという名の最年長の司祭に目を向け、こう尋ねた。

「なぜ私に答えないのか？」

エウロギオスは答えた。

「私が答えないのは、あなたが皆に一斉に話しているからです。そのために、私は他の者たちより先に答えることを望みません。しかし、もし私一人に何かを尋ねてくださるなら、その時はお答えします。」

エパルフは尋ねた。

「なぜあなたは王と共に聖体拝領をしないのか？」

一方、至福のエウロギオスは、異端者の問いを嘲笑うようにこう答えた。

「王は、私が彼と共に聖体拝領をするために、司祭の聖職を受けたというのか？」

エパルフは怒りに満ち、聖なる長老を叱責して言った。

「愚か者め！　なぜ王の信仰を拒み、王と交わりを持つ者たちとの交わりを拒むのか？」

そこで、聖なる長老エウロギオスをはじめとする全員が、父と同質かつ同本質である真の神、キリストへの正教の信仰を告白し、この告白のために自らの命を捧げる覚悟を表明した。

その後、司教は王の命令により、聖職者八十名を捕らえ、彼らを鎖で縛り、フラキアへの流刑に処した。

そして、これらのキリストの殉教者たちが追放へと連行される際、至る所の町や村から人々が彼らを出迎え、敬意を表し、必要な物資をすべて提供した。これを知った異端者たちは、すぐに使者を皇帝のもとへ送り、「追放される者たちには、不名誉の代わりに大きな名誉が与えられている」と報告させた。

そこで王は、前述のキリスト教徒たちを二人ずつに分けるよう命じ、全員をさまざまな国へ送り出すよう指示した。ある者はフラキアへ、ある者はアラビアへ、ある者はエジプトへ――そしてその他の国々へと。　一方、祝福された長老エウロギオスと、彼と共にいたプロトゲンという名のもう一人の高潔な長老は、フィヴァイド地方の都市アンティノイへと連行された。そこではキリスト教徒はわずかであったが、偶像を崇拝するギリシャ人は数え切れないほど多くいた。　聖人たちはこの地でかなりの期間を過ごし、イエス・キリストの御名を呼び求めることによって人々の様々な病を癒やし、多くの異教徒をキリスト教の信仰へと導き、彼らに聖なる洗礼を授けた。

不敬虔な王ヴァレントが亡くなり、東方の王国の王位を敬虔なテオドシウスが引き継ぐと、アリウス派の異端は恥じ入り、沈静化し、キリストの教会を迫害していた異端者たちの力と権勢は衰え果てた。　流刑に遭っていたキリストの殉教者たち（すなわち、まだ主のもとへ召されず、生き残っていた者たち）は自由を取り戻し、それぞれ故郷へと帰還した。正統派の司教たちは再び自らの座に就いた。　その時、前述の二人の聖なる長老、エウロギオスとプロトゲネスも、エデッサでの流刑から帰還した。そして、正統なキリスト教徒たちは、アリウス派から彼らの教会を奪い返した。聖バルシスはすでに流刑の地で主のもとへ召されていたため、エウロギオスはエデッサの司教に任命され、一方、プロトゲンはメソポタミアの都市カリヤの司教に任命された。これらの聖エウロギオスとプロトゲンは、その生涯の終わりまで、言葉と生き様をもってキリストの教会を輝かせた[5719]　。私たちは、これらすべての人々を通して、父と聖霊と共に永遠に賛美される、私たちの救い主であるキリスト・神を賛美する。アーメン。

コンスタンティノープル総主教、聖ミーナの記念日。

記念日：8月25日

ユスティニアヌス帝の治世[5720]　、聖ミナは聖サンプソンの旅人宿において、司祭として旅人たちの世話役を務めていました。 異端的な思索を理由にアンフィム総主教[5721] がその座から罷免された後、聖ミナは、正統な信仰を持ち、聖なる生活を送り、それゆえに高い聖職にふさわしい人物として

[5719] キリストの聖なる殉教者エウロギオスとプロトゲノスは、4世紀後半に亡くなった。

[5720] 言うまでもなく、527年から565年まで在位したユスティニアヌス1世皇帝のことである。

[5721] アンフィム1世は535年から536年まで在位した。

、当時コンスタンティノープルを訪れていたローマ教皇聖アガピト[5722] によって総主教の座に就かされた。

聖ミナの総主教在任中、コンスタンティノープルで次のような奇跡が起こった。

あるユダヤ人の少年が、キリスト教徒の子供たちと共に、キリストの聖なる御体と御血の聖餐式が行われている最中に教会に入った。この少年は、他の子供たちと共に聖餐に近づき、聖体拝領を受けた。少年が家に帰ると、父親は彼に「どこに行っていたのか、なぜ遅れたのか」と尋ねた。　少年は子供らしく、ありのままをすべて話した――キリスト教の教会にいて、キリスト教の聖体拝領を受けたのだと。これを聞いたユダヤ人の父親は激しく怒り、子供を掴んで、ガラス細工を作るために使っていた燃え盛る炉の中に放り込んだ（彼はガラス職人だったからだ）。しかし、妻には何も言わなかった。

その間、母親は泣きながらあちこちで息子を探し、名前を呼んでいた。捜索の三日目、彼女は燃え盛る炉に近づくと、子供が彼女の呼び声に答えた。そこで彼女は大変な苦労の末、子供をそこから引き出し、こう尋ねた。

「どうして、こんな炎の中にいながら、燃え尽きずにまだ生きているの？」

すると、少年は次のように語った。

「ある『輝かしい女性』が頻繁に私のところに来て、火を冷まし、水をくれたのです。私が空腹のときは、彼女がお食事も持ってきてくれました。」

まもなく、この奇跡の知らせは街中に広まり、ユスティニアヌス帝と聖ミナ総主教もこの奇跡を知ることとなった。　その後、前述の少年は母親と共に洗礼を受けましたが、激怒して洗礼を受けることを拒んだその少年の父親については、皇帝は彼を子殺しとして裁判にかけ、死刑を命じました

聖ミナは16年間、キリストの教会を牧会し、その後、主のもとへ召された[5723]。

9月8日

8月26日（旧暦）

聖殉教者アドリアンとナタリアの殉教

記念日 8月26日

キリストの教会の大迫害者である不義の王マクシミアヌス[5724] は、至る所で多くのキリスト教徒を迫害し殺害しながら、ニコミディアの町に到着した[5725]。 偶像の神殿に入ると、王は自らの邪悪な神々に礼拝を捧げ、偶像の前で地面にひれ伏し、街の住民全員の立ち会いのもと、忌まわしい生贄を捧げた。　その後、彼はキリスト教徒を探し出し、拷問にかけるよう命じた。王は、キリスト教徒を隠そうとする者に対しては、特別な刑罰を科すと脅した。　それに対し、キリスト教徒がどこに隠れているかを知って通報したり、あるいはそのような者を見つけて自ら裁判にかけたりした者には、王は報奨と栄誉を約束した。そのため、人々は互いに死へと引き渡すようになった。隣人は隣人を、

[5722] アガピト1世は535年から536年まで教皇の座に就いていた。

[5723] 聖ミナは536年から552年まで総主教を務めた。

[5724] マクシミアヌス・ガレリウス（305年～311年）は、ディオクレティアヌス帝の娘婿であり、その後、後継者となった。

[5725] ニコメディアは、ローマ帝国の東方首都であり、小アジア北西部のビフィニア地方、マルマラ海のほとりに位置する壮麗な都市であった。

近しい者は近しい者を。ある者は王の恐ろしい命令を恐れ、ある者は報奨目当てでそうしたのである。

不信心者たちの中には、ある洞窟にキリスト教徒が隠れており、そこで一晩中歌を歌い、自分たちの神に祈りを捧げていると、自分の軍司令官に通報した者もいた。　直ちに兵士たちが派遣され、彼らは洞窟に押し入り、そこにいたキリスト教徒二十三人全員を捕らえた。鉄の鎖で縛り上げ、王に引き渡すために街へと連行した。

その時、王は犠牲を捧げるために戦車に乗って偶像崇拝の神殿へ向かっていた。道中で王と出くわした、縛られたキリスト教徒を連行していた兵士たちは、王に向かって叫んだ。

「王よ！ ここに、あなたの命令に背き、我らの偉大なる神々を冒涜する者たちがいます。」

王は戦車を止めるよう命じ、その囚人たちを近くに呼び寄せると、どこから来たのかと尋ねた。

「私たちはこの国で生まれましたが、信仰としてはキリスト教徒です」と彼らは答えた。

「お前たちは、キリスト教徒と名乗る者たちにどのような拷問が待ち受けているか、聞いたことがないのか？」と王は続けた。

「聞いてはいます」と聖人たちは答えた。「そして、あなたの狂気と、神を信じない者たち――あなたがその長である者たち――の中に働くサタンそのものを嘲笑いました！」

激怒した王は叫んだ。

「おお、忌まわしき者どもよ！　よくも私を狂人と呼び、私を嘲笑うなどという不遜なことを！　偉大なる神々に誓って、私は最も凄惨な拷問で、お前たちの肉体を粉々に砕いてやる！」

「彼らを引き伸ばし、容赦なく棒で打ちのめせ」と彼は兵士たちに命じた。「そうすれば、彼らの神が助けに来て、私の手から彼らを救い出すかどうか、見てみようではないか」

そして殉教者たちは兵士たちに残酷に打ちのめされた。殉教者たちが殴打されている間、彼らは王にこう言った。

「神の敵よ！　我々の上に、あと三人の拷問者を立てよ。お前がいくら彼らを呼び寄せようとも、どんな拷問を考案しようとも、それによって我々の冠がさらに増すだけだと知れ。」

「おお、人間の中で最も忌まわしき者たちよ！」と王は叫んだ。「私はお前たちの首を切り落とすつもりだ。それでもなお、その首に冠が授かることを期待しているのか？……その虚しい信仰を捨てよ。自らの狂気のために自らを滅ぼしてはならない！」

殉教者たちは答えた。

「神は、何の悪も犯していない御自分のしもべたちを不当に苦しめるお前を滅ぼされるだろう！」

すると王は兵士たちに命じた。

「彼らの口を石で打ち砕け！」

急いで石を手に取った家来たちは、殉教者たちの口を石で打ち始めたが、彼らに害を与えるというよりは、むしろ自分たちを傷つけていた。彼らはすでに正気を失っており、その石で互いの顎を砕き合っていたからである。

聖人たちは、迫害者マクシミアンにこう言った。

「不法者よ、神を憎む者よ！　お前は、お前の前で何の罪もない私たちを容赦なく打ちつけている。しかし、神の御使いがお前をも殺し、お前の不義な家全体を滅ぼすだろう。」　お前は、これほど長い時間、これほど残酷に私たちを苦しめ続けても、その苦痛に飽きることはないようだが、お前自身には比べものにならないほど大きな苦痛が待っている。　お前は、我々がお前と同じ肉体を持っていることを明らかに考えていない。ただ一つの違いは、お前の肉体は汚れて不浄であるのに対し、我々の肉体は聖なる洗礼によって清められ、聖別されているということだ。

その言葉にさらに激怒した拷問官マクシミアンは、こう叫んだ。

「偉大なる神々に誓って、お前たちの舌を切り落とさせるぞ。そうすれば、他の人々もお前たちを見て、主人に逆らってはならないと学ぶだろう！」

キリストの殉教者たちはこう答えた。

「聞け、不敬虔な拷問者よ！　もしお前が、この世の主人に逆らう奴隷たちを憎み、苦しめているのなら、なぜ私たちに、私たちの主なる神に逆らうよう強いるのか？　それとも、お前に用意されているのと同じ苦しみも、私たちに味わわせたいのか？」

「では教えてくれ」と拷問者は尋ねた。「私に用意されている苦しみとは、いったい何なのか？」

「神が悪魔とその天使たちに用意されたもの――」と聖人たちは答えた。「神は、悪魔の器であるあなたたちにも、同じものを用意しておられる。　すなわち、消えることのない火、休むことのない虫、絶え間ない苦しみ、永遠の刑罰、地獄の滅び、漆黒の闇――そこでは泣き叫び、歯ぎしりが聞こえ、その他数え切れないほどの苦しみがあるのです。

「誓って言うが、お前たちの舌を切り落としてやる！」と拷問官は叫んだ。

「狂人め！」　――と聖人たちは答えた――もしあなたが、私たちが神を賛美するために用いるその器官を切り落とすならば、私たちの嘆きはさらに容易に神のもとへ届き、私たちの心はさらに強く神に向かって叫びを上げるだろう。そして、あなたが流す私たちの血は、ラッパのように、私たちが不当に苦しんでいることを主に向かって声を高らかに告げ知らせるだろう。

聖人たちのそのような答えを聞いた不信心な王は、彼らを鉄の鎖で縛り、牢獄に投獄し、彼らの名前と言葉を裁判記録に書き留めるよう命じた。

聖人たちが名前を記録するために法廷に連行されたとき、その法廷の長官の一人である、アドリアンという名の高貴な男――彼はギリシャの不敬な信仰に染まっていた[5726]　――は、それらの殉教者たちの忍耐強く勇敢な苦難を目の当たりにし、彼らに近づいてこう尋ねた。

「あなたがたがこれほど苦しんでいるその神の名にかけて誓ってほしい――良心に従って答えてほしい。このような苦しみに対して、あなたがたは神からどのような報いを期待しているのか？　私は、あなたがたが神から何か偉大で驚くべきものを得られると期待しているのだと思う。」

聖なる殉教者たちは彼にこう答えた。

「私たちが口であなたに語り尽くすこともできず、またあなたが耳で聞き尽くすことも、心で理解することもできないほど、私たちが主、すなわち義なる報い主から受けることを期待している喜びと、この上なく栄光に満ちた栄誉があるのです。」

「では、律法書や預言書、その他の書物には、このことについて何か書かれていないのか？」とハドリアヌスは尋ねた。

「預言者たち自身でさえ」と聖人たちは答えた。「それらの永遠の恵みを完全に理解することはできなかった。彼らは私たちと同じ人間だったからだ。　彼らは善き信仰と善行をもって神に喜ばれ、聖霊が彼らに啓示したことを語ったものの、私たちが受けると期待しているその栄光と報いについては、聖書にこう記されている。*「神が御自身を愛する者たちのために備えておられるものは、人の目が見たこともなく、人の耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」*（Iコリント2:9）。

その言葉を聞いたハドリアヌスは、中央に歩み出て、殉教者たちの名前を書き留めていた書記官たちにこう言った。

「これらの聖人たちと共に、私の名前も書き留めてくれ。私もキリスト教徒であり、彼らと共にキリスト・神のために死ぬのだから！」

[5726] すなわち、ギリシャ・ローマ宗教のことである。

書記官たちは直ちに王のもとへ駆けつけ、アドリアンが自らをキリスト教徒であると宣言し、有罪判決を受けた者たちの名簿に自分の名前も加えるよう求めていることを報告した。

これを聞いた王は驚き、激怒し、直ちにアドリアンを呼びつけてこう尋ねた。

「アドリアンよ、お前は正気を失ったのか？　それとも、お前もまた、忌まわしい破滅を望んでいるのか？」

「いいえ」と彼は答えた。「私は正気を失ったわけではありません。それどころか、大きな狂気から正気に戻ったのです。」

「理屈を並べるな」と王は叫んだ。「むしろ許しを請い、皆の前で自分が罪を犯したことを認め、有罪者の名簿から自分の名前を消せ。」

「これからは」とアドリアンは答えた。「異教徒であった頃に犯した罪を、真の神が赦してくださるよう、懇願し始めるつもりだ。」

アドリアヌスのその言葉に激怒したマクシミアヌス帝は、彼もまた鉄の鎖で縛り上げ、他の殉教者たちと共に牢獄に閉じ込めるよう命じ、彼ら全員を拷問にかける日を定めた。

アドリアヌスの家来の一人が、急いで彼の家へ駆けつけ、主人の妻であるナタリアに、主人が鎖で縛られて牢獄へ送られたことを告げた。

これを聞いたナタリアは、大きな恐怖に襲われ、痛ましく、痛ましく泣き崩れ、身に着けていた服を引き裂きながら、使用人に尋ねた。

「一体、どのような罪で私の夫は牢獄に投獄されたのですか？」

「ある人々が、キリストという名の者のために、また王の命令に従わず、自らの信仰を捨てず、神々に犠牲を捧げなかったという理由で拷問を受けているのを目撃した主人は、彼らと共に死にたいと願って、書記官たちに自分の名前も死刑判決を受けた者たちの名簿に書き加えてほしいと頼まれたのです」と、使用人は答えた。

「あの男たちが、一体何のために拷問を受けたのか、もっと詳しく知らないの？」と、ナタリアは再び使用人に尋ねた。

「さっきも言ったでしょう」と召使いは答えた。「彼らは、あるキリストという者のために、そして神々に拝むという王の命令に従わなかったために、拷問を受けたのです。」

するとナタリアは心を大いに奮い立たせ、泣き止み、破れた服を脱ぎ捨て、最も立派な服を身にまとって、牢獄へと向かった。

神を信じる聖なる両親の娘であるナタリアは、以前、キリストへの信仰を誰にも明かすことを恐れていた。それは、不信心者たちからキリスト教徒がどれほど激しい迫害や拷問にさらされているかを目の当たりにしていたからである。　しかし今、夫がキリストを信じ、拷問を受ける者たちのリストに名を連ねていると聞き、彼女は自らをキリスト教徒であると公言することを固く決意した。

牢獄に入ると、聖女ナタリアは夫の足元にひれ伏し、その足枷に口づけをしてこう言った。

「ああ、私の主よ、アドリアン、あなたは幸いですね。ご両親から受け継ぐことのできなかったこのような宝を見出したのですから。**神を畏れる人は、このように祝福されるのです**。」　まことに、わが主よ、あなたは今、この若き年において、キリストへの信仰によって、ギリシャの迷いの中に留まっていたなら、老いてさえも得られなかったであろうような富を築き上げました。　今や、あなたは悲しみなく来世へと旅立ち、そこで、大きな富を蓄え、財産を築く者たちが決して得ることのできないような宝を見出すでしょう。そこでは、もはや何かを獲得したり、貸し付けたり、あるいは誰かから借りたりする時間などありません。なぜなら、誰も、ハデスにおける永遠の死やゲヘナの苦しみから救い出すことはできないからです。　そこでは、誰も互いに助け合うことはできない――父が息子を、母が娘を、この世の莫大な富がそれを蓄えた者を、また奴隷が主人を助けることもない。ただ、各人が自らの罰を負うだけである。　しかし、わが主よ、あなたのすべての美徳は、あなたと共にキリストのもとへ行き、キリストを愛する者たちに用意された至福を、キリストから受け取るで

しょう。ですから、将来の罰を恐れることなく、大胆にキリストのもとへ行きなさい。あなたはすでに、消えることのない火やその他の苦しみにも打ち勝っているのですから。　どうか、主よ、神の憐れみによって召されたその召命に、しっかりと留まってください。若き日の美しさへの未練も、親族への愛も、友人も、富も、男奴隷も、女奴隷も、この世のいかなるものも、あなたをその善き道から引き戻すことのないように。これらすべては朽ち果て、消え去るものです。　ただ、永遠なるものだけを目の前に置き、この世の朽ちゆく一時的な恵みには目を向けないでください。親族や友人たちの媚びた言葉に惑わされないでください。彼らの狡猾な助言によって、信仰から逸らされないように。彼らの愛想の良さを憎み、彼らの助言を拒絶し、彼らの欺瞞に満ちた言葉に耳を貸さないでください。　ただ、あなたと共にいる聖なる殉教者たちだけを見つめ、彼らの言葉に耳を傾け、彼らの忍耐をためらいなく見習いなさい。拷問者の怒りや、その様々な拷問を恐れてはならない。これらすべてはまもなく終わる。そして、天のキリストは、御自身のために苦しむそのしもべたちに、永遠の報いを与えてくださる。

そう言うと、ナタリアは黙った。すでに夕方になっていた。

アドリアンは彼女に言った。

「さあ、家に帰って、安らかに眠りなさい、私の姉妹よ。そして、私たちが拷問に引き出される時刻がわかったら、あなたに知らせて、私たちの最期を見届けてもらえるようにする。」

アドリアンの足元から立ち上がったナタリアは、二十三人の囚人一人ひとりのところへ近づき、彼らに身を寄せながら、その足枷に口づけをしてこう言った。

「キリストの僕たちよ！お願いです、このキリストの羊を堅く支えてください。彼に最後まで耐え抜くよう励まし、キリスト・神に自らの血を捧げる忠実な者たちに用意された未来の報いを示してください。あなた方が自らの血を捧げたように、その苦しみに対して、あなた方は永遠の救いという報いを受けるのですから。　彼の魂をも、あなたがたの魂に結びつけ、不義であった肉親の代わりに、彼にとっての父となりなさい。あなたがたの聖なる助言をもって彼を強め、彼が揺るぎない信仰をもって、その苦難の業を成し遂げられるようにしなさい。

そう言うと、ナタリアは再び、牢獄の最深部にいたアドリアンに向き直った。

「よく聞いてください、私の主よ」と彼女は言った。「あなたの若さや肉体の美しさを惜しんではいけません。この儚い肉体は、やがて虫の餌となるのです。　自分の財産や金銀のことなど考えてはなりません。それらはすべて、最後の審判において何の役にも立たないからです。そこでは、いかなる贈り物をもってしても、誰も自分の魂を永遠の滅びから贖うことはできません。なぜなら、誰もその贈り物を受け取らないからです。神が贈り物の代わりに受け入れてくださるものは、聖なる魂たちの善行だけなのです。

そう言うと、ナタリアは家路についた。

数日後、アドリアンは、王がすでに彼を他の囚人たちと共に裁判と拷問にかけようとしていると聞き、聖なる殉教者たちに次のように願い出た。

「主よ！」と彼は言った。「皆様の祝福を得て、私は自宅へ行き、皆様のしもべであり、私の妹であるナタリアを呼び出さなければなりません。彼女に私たちの苦しみを見てもらうためです。というのも、私はそのために定められた時刻に彼女を呼び出すと約束していたからです。」

聖人たちは彼に祝福を与え、彼を保証した。アドリアンは牢屋の看守たちに報酬を払い、家路についた。

ある町人が、彼が家に向かって歩いているのを見て、急いでナタリアのもとへ駆けつけ、夫が鎖から解放され、家に向かっていることを告げた。

これを聞いたナタリアは信じられず、こう言った。

「一体誰が彼を解放したの？　私の夫が聖なる殉教者たちと別れるなんてあり得ないわ。」

その会話の最中、使用人の一人がやって来て言った。

「奥様、ご主人様が解放され、家のすぐ近くまで来られているのをご存じですか？」

彼がキリストを捨てたために解放されたのだと思い、ナタリアは深い悲しみに襲われ、苦々しく泣き崩れた。そして窓から彼がすでに家の近くまで近づいているのを見ると、手元の仕事を放り出し、慌てて立ち上がり、扉を閉めて大声で言った。

「私から離れなさい、神から背き、主を欺いた者よ！　神を拒んだ者とは話すこともできず、偽りの言葉など聞くつもりもない。ああ、不信心者よ、最も呪われた者よ！　誰があなたを、最後までやり遂げることのできない行いに手を出すよう唆したのか？　誰があなたを聖徒たちから引き離したのか？　誰があなたを、彼らとの交わりから離れるよう誘惑したのか？　戦いに赴く前から、何があなたを逃げ出させたのか？　あなたはまだ敵を見ていないのに、すでに武器を捨ててしまった。あなたに向けられた矢はまだ放たれていないのに、あなたはすでに傷ついている！　私は驚いた。不敬虔な一族や不義の都から、果たして何か良いものが生まれるだろうか？　拷問者の子孫から、神への清らかな捧げ物が捧げられるだろうか？　無実の血を流す者たちによる香炉の煙が、至高者にとって芳しいものとなるだろうか？　そして、この不義な者と結婚してしまった、この呪われた私は、どうすればよいのだろうか？　私は殉教者の妻という称号に値する者とはならず、それどころか背教者の妻となってしまった。私の喜びは束の間であり、それは永遠の恥辱へと変わった。かつては女性たちの間で称賛されていたが、今や彼女たちの前で絶え間ない恥辱を味わうことになるのだ！

聖アドリアンは、扉の向こうに立ち、ナタリアの言葉を聞きながら、心から喜び、その偉業への決意を固め、キリスト・神に誓ったことを果たしたいという、さらに強い願いに燃えていた。彼は、結婚してまだわずか13ヶ月しか経っていない若い妻のそのような言葉に驚いていた。

妻の深い悲しみを目の当たりにしたアドリアンは、扉を叩きながら、こう懇願し始めた。

「さあ、扉を開けてくれ、我が妻ナタリアよ！　君が思っているように、私は苦しみから逃げ出したわけではない。いや、そんなことはできなかったのだ。約束通り、君を連れて行くために来たのだ。私たちの最期を君に見届けてもらうために。」

彼の言葉を信じなかったナタリアは、非難の言葉を浴びせながらこう言い続けた。

「これが犯罪者の欺きか、これが第二のユダによる嘘か！　私から離れなさい、さもないとあなたを殺してしまうわ！...」

そして、ドアを開けようとはしなかった。

「早く開けてくれ」とアドリアンは懇願した。「さもないと、君に会えずに去ることになり、君はそれを悲しむことになるだろう。私は一刻も早く戻らなければならないのだから。」　聖なる殉教者たちが私の身保証をしてくれている。もし私が決められた期限までに戻らず、上層部から私の行方を問われた時に私がいなければ、聖なる殉教者たちは自分たちの苦しみだけでなく、私の分まで苦しみを受けなければならないだろう。しかし、彼らはすでにかろうじて生き延びているだけなのに、私の分まで苦しみを受けられるだろうか?

これを聞いて、ナタリアはすぐに喜びながら扉を開け、二人は互いに抱き合った。

「あなたはなんと幸いな妻だろう！」とアドリアンは言った。「あなたはただ一人、夫を救うために神を知ったのだ！　まことに、あなたは夫を愛する妻だ！　その報いとして、あなたには至福という冠が与えられるだろう。なぜなら、あなたは自ら苦しみを受けることはないが、殉教者たちの苦しみに共感し、共に悲しんでいるのだから。」

アドリアンは妻を連れ、彼女と共に旅立った。

道中、彼は妻に尋ねた。

「では、私たちの財産はどうすればよいのか？」

ナタリアは答えた。

「主よ、この世のことはお任せください。それがあなたの心を惑わさないように。ただ、あなたが召された偉業を成し遂げることにのみ心を配り、思いを巡らせてください。　この世の、はかな

い、そして魂を傷つけるようなものはすべて忘れ、むしろ、あなたと、主の道を共に歩む聖人たちのために用意された永遠の恵みを見出し、受け取ることに心を向けてください。

牢屋に入ると、神の僕ナタリアは聖なる殉教者たちの前にひれ伏し、彼らの足枷に口づけをした。その際、彼女は彼らの傷がすでに化膿し、そこから蛆が這い出ているのを見た。また、彼らが縛られていた鉄の足枷の重みで、彼らの肉体がバラバラになりつつあった。彼女は身をかがめて、彼らの傷から膿を拭き取った。　その後、彼女は直ちに侍女たちを家へ遣わし、上質な布と包帯を持ってくるよう命じた。それらがすべて運ばれてくると、ナタリアは自らの手で殉教者たちの傷を包帯で巻き、できる限り彼らの耐え難い苦しみを和らげ、彼らが裁判にかけられるまでの七日間、牢獄で世話を続けた。

裁判の日が訪れると、マクシミアヌス王は裁判の席に着き、囚人たちを自分の前に連れてくるよう命じた。　使用人たちは直ちに牢獄へ向かい、彼らに皇帝の命令を伝えた。重傷により体が衰弱し、歩くことさえできない様子を見た使用人たちは、すべての殉教者を、まるで一本の鎖でつながれた家畜の死体のように引きずっていった。一方、アドリアヌスは両手を後ろ手に縛られ、一行の最後尾を歩かされた。

彼らが法廷に近づいたとき、囚人たちが連れてこられたことが王に報告された。

「全員をここに連れて来い」と王は命じた。「互いの拷問の様子が見えるように、そして拷問を受ける準備が整った裸の状態で連れて来い。」

牢屋の長は王に報告した。

「王よ！以前拷問を受けた者たちは、この試練の場に連れてくることはできません。　そこで、アドリアン一人だけを連れてくるよう命じられた。彼はまだ意識がはっきりしており、体も健やかで、様々な拷問に耐えられるからだ。他の者たちの体は化膿しており、傷口からは骨が見えている。もし再び拷問を始めれば、彼らはおそらく、用意された多くの苦痛に耐えきれず、即座に死んでしまうだろう。　我々は、罪の軽い者たちが短時間の拷問で死ぬことを望んではいない。むしろ、彼らが回復し、体力を取り戻すための時間を与え、その後、彼らの不法行為に対して最も過酷な拷問を課すべきである。

そこで王は、アドリアン一人を連れてくるよう命じた。

アドリアンを全裸にさせると、使用人たちは彼に処刑用の道具を手渡して、自分の手でそれを運ばせた。

聖なる殉教者たちは彼にこう言った。

「アドリアンよ、あなたは自分の十字架を背負い、キリストに従うことを許された、なんと幸いなことか！　さあ、恐れることなく、引き返さず、あなたの報いを失うことのないように。悪魔にあなたの宝を奪われないよう気をつけなさい。　目に見える苦しみは恐れるな、むしろ将来の報いに目を向けよ。勇敢に踏み出し、拷問者を恥じ入らせよ！知れ、*「今の一時の苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもない」*（ローマ 8:18）と。私たちは主の恵みによって、その栄光を受けると希望しているのだ。

聖女ナタリアもまた彼にこう言った。

「主よ、あなたの心をただ神のみに向け、あなたの心が何ものも恐れないようにしてください！　労苦はわずかですが、安らぎは果てしなく、苦しみは一時的ですが、殉教の栄光は永遠です。少しの間、病に耐えれば、まもなく天使たちと共に喜びを分かち合うことになるでしょう。」　もしあなたが、地上の王に仕える際、わずかな税の徴収に心を配り、自らの健康を顧みず、戦いで死ぬ覚悟さえあったのなら、今や、天の王のためにあらゆる苦難に耐え、その王のために死ぬこと――あなた自身もその王と共に王座に就くことになるのです――には、それ以上の勇気が求められるのではないでしょうか！

アドリアンが不敬虔な王マクシミアヌスの前に引き出されたとき、王は彼を一瞥してこう尋ねた。

「まさか、お前はまだその狂気に囚われており、苦しみをもって生涯を終えようというのか？」

「以前にも申し上げた通り」とアドリアンは答えた。「私は正気を失ったのではなく、むしろ正気を取り戻し、この世で死ぬ覚悟ができているのです！」

王は尋ねた。

「私や私と共にいる者たちが神々にひれ伏し、犠牲を捧げているように、お前も犠牲を捧げ、神々にひれ伏さないのか？」

「狂人よ」とアドリアンは答えた。「自ら迷いながら、なぜ他の人々をも同じ迷いへと導くのか？　お前は自分自身を破滅にさらしているだけでなく、お前の言葉に耳を傾ける民全体をも、、同じ破滅へと引きずり込んでいるのだ。天と地の創造主である真の神を捨て、魂のない偶像に拝むよう勧め、強要しているのだから！

「では、あなたは我々の偉大なる神々を小さな神々だと考えているのか？」と王は尋ねた。

「私は」とアドリアンは答えた。「彼らを小さいとも偉大とも呼びません。なぜなら、彼らは無に等しいからです。」

激怒した拷問官は、直ちに彼を棒で激しく打ち据えるよう命じた。

聖女ナタリアは、夫が殴打され始めたと聞き、聖なる殉教者たちに次のように告げた。

「私の夫が苦しめられ始めました！」

聖人たちは直ちに、神が苦しみの中で彼を強めてくださるよう、彼のために祈り始めた。

王は拷問人たちに、「神々を冒涜してはならない！」と宣告するよう命じた。

殉教者が殴打されている間、彼は王にこう言った。

「もし私が、神ではない者たちを冒涜したために苦しんでいるのなら、生ける真の神を冒涜したあなたには、いったいどのような苦しみ待ち受けているというのか？」

「お前は、おそらくあの諂い者たちから、そんな生意気な言い方を教わったのだろう？」と王は尋ねた。

殉教者はこう答えた。

「なぜ、救いへの導き手であり、永遠の命への導き手である人々を、諂い者と呼ぶのですか？あなたたちは、人々を破滅へと誘い込む大いなる欺瞞者たちです！」

激怒したマクシミアヌスは、四人の屈強な家来に、太い杭で殉教者を激しく打ちつけるよう命じた。

そして、アドリアンが殴打されている間、彼はこう言った。

「拷問者よ、お前が私にどんな拷問を考案しようとも、それによって私のために冠が授かる可能性はますます高まるのだ！」

そして、至福のナタリアは、王が尋ねたことすべてと、アドリアンがそれに答えたことを、聖なる殉教者たちに伝えていた。

「せめて若さだけは惜しめ」と、拷問者は説得を続けた。「そして神々を呼び求めよ！　なぜ、これほど無駄に、自ら進んで死を選ぼうとするのか？　私の神々は偉大であり、お前がどれほど激しく苦しんでいるか、その美しさがどれほど損なわれているかを見て、私はお前を深く憐れんでいるのだ！」

「私は自分自身を惜しんでいるのだ」と殉教者は答えた。「最後まで滅びないために！」

「さあ、神々を呼び求めよ」と拷問者は懇願した。「神々はあなたを赦してくださるだろう。そして私は、あなたに以前の地位を返してやる。」　お前を、お前と共に囚われの身となっていた者

たちと同列に扱うべきではない。お前は高貴な人物であり、名門の家の息子であり、若くとも偉大な栄誉に値するからだ。一方、あの囚人たちは貧しく、身分の低い、愚かで無知な者たちだ！

「わかっている」と殉教者は答えた。「お前が私の家柄や出自を知っていることは。しかし、もしお前があの聖人たちの家柄と、彼らが待ち望んでいる豊かな遺産を知っていたなら、お前こそ真っ先に彼らの足元にひれ伏し、自分のために祈ってほしいと懇願し、自らの手でその無情な神々を滅ぼしただろう！」

さらに激怒した拷問官は、四人の屈強な使用人に、殉教者の腹を殴打するよう命じた。

そして彼らは、聖人の腹が破れ、内臓が飛び出し始めるまで殴り続けた。それを見た拷問官は、殴るのをやめるよう命じた。

至福のアドリアンは若く、体も華奢だった。彼は生後わずか二十八歳に過ぎなかった。

「ほら、」と王は彼に語りかけた。「私がどれほどお前を憐れんでいるか分かるか！　お前がたった一言で神々を呼び出せば、彼らは即座にお前に慈悲を授けるだろう。そして私は医師たちを呼び、お前の傷を癒やさせ、今日中にお前を私の王宮に迎えるつもりだ！」

「もしあなたが、医師による治療と、あなたの宮殿での敬遇を約束し、あなたの神々が私に慈悲を注いでくれると言うのなら、それでもやはり、彼ら自身の口で、私に何を与えてくれるのか、どのような恩恵を約束してくれるのかを、私に告げさせてほしい！」　そして、私が彼らの言葉を聞いたら、お前の望む通りに彼らに供物を捧げ、拝むつもりだ！

「彼らは話すことができないのだ！」と王は答えた。

「もし彼らが話すことができないのなら」と殉教者は言った。「なぜ、声もなく魂もない彼らに、ひれ伏さなければならないのか？」

怒りと憤りに駆られた拷問官は、聖なる殉教者を他の囚人たちと共に再び縛り上げ、牢獄に閉じ込めるよう命じ、彼らを裁判にかける日を定めた。

そこで兵士たちは聖なる殉教者たちを連れ出し、ある者は引きずり、またある者は肉体の苦痛で力尽き、歩くことのできない者を腕に抱えて運び、聖アドリアヌスを連れて行き、再び地下牢に閉じ込めた。

祝福されたナタリアは彼を励まし、慰め、抱きしめてこう言った。

「ああ、私の主よ、あなたは聖なる殉教者たちの運命に与ることを許されたのですから、なんと幸いなことでしょう！　私の目の光よ、あなたのために苦しまれた方のために苦しんでいるのですから、なんと幸いなことでしょう！　今、あなたは御方の栄光を見、その栄光に与る者となるのです。なぜなら、御方の苦しみに与る者は、御方の栄光にも与る者となるからです。」

この会話の間、ナタリアは彼の血を拭い取り、その血で自分の体を塗っていた。

そして、聖なる殉教者たちは、アドリアンの勇敢な忍耐を大いに喜び、彼に近づいて口づけをし、「平安あれ、兄弟よ」と言った。

また、傷の重さで歩くことのできない者たちは、床に横たわり、這うようにして彼に近づき、彼に口づけをし、皆が彼にこう言った。

「愛する兄弟よ、主を喜びなさい。あなたの名は、神の栄光あるしもべたちと共に記されているのだから！」

「キリストの僕たちよ、あなた方も喜びなさい」とアドリアンは答えた。「私を気遣ってくれたことに対し、あなた方は冠を授かるでしょう！　どうか主に向かって私のために祈ってください。肉体がひどく衰弱している私を主が力づけてくださり、私に立ち向かう敵――悪魔――が、私に何一つ手出しできないように！」

「神を信頼しなさい」と聖人たちは言った。「サタンはあなたを打ち負かすことはできない。あなたは自らの苦しみによって、彼を遠くへ追い払ったのだから。」　私たちは当初、あなたが人間として弱ってしまうのではないかと心配していましたが、今やあなたの揺るぎない忍耐を見て、もは

やあなたを疑うことはなく、神の助けがあれば敵はあなたに何一つできないと信じています。ですから恐れることはありません。あなたと共にいるのは、悪魔に打ち勝ったキリストなのですから！

聖ナタリアと共に、他の敬虔な女性たちもおり、彼女たちは聖人たちに奉仕し、その傷に薬品を塗り、包帯を巻いてあげました。その際、殉教者たちを互いに分け合い、それぞれが担当する聖人の世話を尽くせるようにしたのです。

多くの敬虔な女性たちが牢獄を訪れ、囚人たちの傷に薬を塗って世話をしていることを知った不義な王は、彼女たちが囚人の元へ立ち入ることを禁じた。

女性たちがもはや殉教者たちの元へ行くことが許されなくなったのを見て、聖ナタリアは自分の頭髪を刈り落とし、男装して、男の姿で牢獄に入り、夫である聖アドリアンだけでなく、他のすべての聖なる殉教者たちにも一人で世話をした。

殉教者たちの傷の手当てをした後、彼女はアドリアンの足元に座り、こう語った。

「どうか、私の主よ、私たちの絆と、あなたが苦しみを受ける間、私があなたのそばにいて、あなたが栄冠を得ることを願っていたことを覚えていてください。私たちの主イエス・キリストに祈り、私をもあなたと共に連れて行ってくださるよう願ってください。そうすれば、この多くの悲しみと罪に満ちた人生で私たちが共に暮らしたように、あの至福の生活においても、私たちは決して離れることなく共にいられるでしょう。　お願いいたします、ご主人様。あなたが主キリストの御前に立つとき、私について真っ先に祈りを捧げてください。あなたが何を願おうとも、主はすべてをお与えになると私は信じています。なぜなら、あなたの祈りは主の御心に適い、あなたの願いは主にとって喜ばしいものだからです。　しかし、あなたは、この地の民の不義と王の無神論をご存知でしょう。私は、もし私が別の者、すなわち不義な者や異教徒と結婚することを強要されるのではないかと恐れています。そうなれば、私の寝床は穢され、私たちの絆は断ち切られてしまうでしょう。　どうか、使徒が教えているように、あなたの妻を守ってください。私の貞節への報いとして、あなたと共に死ぬことを許してください！」

そう言うと、彼女は立ち上がり、再び聖人たちに仕え、彼らに食べ物や飲み物を差し出し、傷を洗い、包帯を巻いてあげた。

敬虔な女性たちは、ナタリアが男装して聖徒たちに奉仕していることを知ると、彼女の模範に倣って、自分たちの頭髪も刈り落とし、男装して、相変わらず牢獄に入り、聖徒たちに奉仕した。

不敬虔な王は、女性たちがそうしたこと、また囚人たちが化膿した傷のためにひどく衰弱し、かろうじて息をしているだけであることを知ると、拷問台と鉄の槌を牢屋に持ち込ませ、殉教者たちの脛や腕を打ち砕くよう命じ、こう言った。

「彼らを、人間にとってありふれた暴力的な死ではなく、別の方法で死なせてやれ！」

そして、拷問者たちや殺し屋である家来たちが鉄の金床とハンマーを牢屋に持ち込んだとき、ナタリアはそれを見て、彼らがやってきた理由を知ると、まずアドリアンから処刑を始めるよう懇願した。それは、夫が他の殉教者たちの凄惨な拷問や最期を目撃して、恐怖に駆られることを恐れたからである。

拷問者たちはナタリアの願いを聞き入れ、まずアドリアンから処刑を始めた。

一方、ナタリアは夫の両足を持ち上げ、金床の上に載せた。拷問者たちは、殉教者の足にハンマーを激しく打ち下ろし、脛骨を砕き、両足を打ち砕いた。

「お願いです、私の主よ、キリストの僕よ」とナタリアは言った。「あなたがまだ生きているうちに、手を差し出して、それを打ち砕いてもらってください。そうすれば、あなたも、あなたよりもさらに大きな苦しみを受けた他の聖なる殉教者たちと同じようになるでしょう！」

聖アドリアンは彼女に向かって手を差し伸べ、彼女はそれを受け取ると、金床の上に置いた。拷問者はハンマーでその手を激しく打ち、切り落とした。すると直ちに、聖アドリアンは激しい苦痛の末、その魂を神の御手に委ねた。

聖アドリアンを殺害した後、拷問者たちは金槌と金床を持って他の殉教者たちのところへ行ったが、彼らは自ら足や手を金床の上に置き、こう言った。

「主よ、私たちの魂をお受けください！」

その後、不信心な王は、キリスト教徒たちが殉教者たちの遺体を持ち去ることができないよう、その遺体を焼き払うよう命じた。

この王の命令を耳にした聖ナタリアは、夫の手を密かに取り、焼かれることのないよう自分のところに隠した。

拷問者の家来たちが炉に火を点け、聖なる殉教者たちの遺体を焼くために牢獄から運び出したとき、聖ナタリアと他の敬虔な女性たちは彼らの後を追って、殉教者の血を自分たちの愛しい衣服や包帯に集め、それを大切に保管し、自らの体に塗った。　さらに、彼女たちは金銭を払って、拷問者の手下たちから、殉教者たちの血で染まった衣服までも買い取った。

聖人たちの遺体が炉に投げ込まれたとき、女性たちは涙ながらにこう叫びました。

「主よ、あなたの永遠の安息の中で、私たちを覚えてください！」

一方、聖ナタリアは、夫と共に神への生贄となることを願って、すでに炉へと駆け寄り、火の中に飛び込もうとしていたが、それを止められた。

すると突然、恐ろしい雷鳴が轟き、稲妻が走り、激しい雨が降り注ぎ、その雨は至る所を水浸しにし、炉そのものを消し止めてしまった。恐怖に襲われた不信心な拷問者たちは逃げ出したが、その多くは道中で稲妻に打たれて死んで倒れた。

拷問者の手下が逃げ去ると、そこにいた忠実な男たちは、聖ナタリアや他の女性たちと共に、聖なる殉教者たちの遺体を炉から取り出した。遺体は火による損傷を全く受けておらず、髪の毛一本すら焦げていなかった。

ある敬虔な男が妻と共にナタリアにすがりつき、彼女や他の兄弟たちにこう懇願し始めた。

「私たちは町の端の人里離れた場所に住んでいます。不敬虔な行いを忌み嫌っており、不義の王が引き起こしているこの残酷な流血をこれ以上見過ごすことはできません。それゆえ、もはやここに留まることを望まず、ビザンティウムへ移住するつもりです。　聖なる殉教者たちの遺体を私たちにお与えください。私たちはそれらを船に運び、ここから連れ出し、不敬虔な王マクシミアヌスが死ぬまでそこで守り続けます。そして彼の死後、もし私たちが生きているならば、ここに戻って聖人たちの遺体を再びここに運び、皆に崇敬されるようにいたします。　もし今、遺体がここに残されれば、王は再びそれらを焼くよう命じるでしょう。そうなれば、神が雨によって焼却から守ってくださった遺体を、あなたがたは裏切ることになってしまいます。

皆がこれに同意し、殉教者たちの遺体を船に移してビザンティウムへ送り出すことにした。そして、船の出航には風も好都合であった。

その間、聖ナタリアは自宅に住み、愛する夫である聖アドリアンの手を、貴重な香油で塗って紫の布で包み、自分の寝床の頭元に置いていたが、そのことは家族のうち誰も知らなかった。

しばらくして、ある高貴な男性――千人隊長という地位にある者――が、ナタリアが若く、美しく、裕福であったことから、彼女と結婚したいと願った。彼は王に、アドリアヌスの妻を妻として迎えることを許可してほしいと願い出、王はこの結婚に同意した。　花婿は直ちに、ナタリアのもとへ貴族の女性たちを遣わし、結婚の申し入れをさせた。しかし、ナタリアは彼女たちにこう言った。

「そのような方が私を妻に迎えたいと願ってくださると聞き、嬉しく思います。しかし、私がこれほど早く結婚することになるとは全く予想していませんでしたので、準備をするために三日間お待ちください。」

そう言いながら、聖女ナタリアは、殉教者たちの遺体が運ばれた場所へ逃げ出そうと心に決めた。

彼女のもとへ遣わされた女性たちを千人隊長のもとへ送り出し、彼女たちを安心させると、彼女は自ら、聖アドリアンの右手が安置されていた寝室に入り、地面にひれ伏して、泣きながら主に向かってこう叫んだ。

「主よ、私たちの神よ、悲しむ者たちと心を砕かれた者たちの神よ、あなたのしもべである私を見守り、あなたの殉教者アドリアンの寝床が汚されることのないようお守りください。主よ、あなたのしもべがあなたの聖なる御名のゆえに耐え忍んだ苦しみを、どうかお忘れにならないでください！　慈悲深い主よ！　彼の脛の骨折や両手の切断、そしてあなたのために耐え忍んだ他のあなたのしもべたちのことを思い出してください。彼らの苦しみが無駄にならないようにしてください。彼らのために、そして私のために憐れみをお示しください。そして、あなたの敵との同居を許さないでください。あの聖人たちを火から救い出されたあなたよ、私をも、その邪悪な男の企みから救い出してください！

この祈りの最中、ナタリアは疲労と悲しみからうとうとし、浅い眠りに落ちました。すると、夢の中で聖なる殉教者の一人が彼女に現れ、こう言いました。

「平安あれ、キリストのしもべ、ナタリアよ！神はあなたを見捨ててはおられず、私たちもまた、私たちが牢獄に閉じ込められていた間、あなたが私たちを世話してくださった労苦を忘れてはいないことを信じてください。キリストの御前に進み出てください。私たちは、キリストがあなたにも一刻も早く私たちのところへ来るよう命じてくださるよう、彼に祈っています。」

すると、祝福されたナタリアは彼に尋ねた。

「教えてください、聖なる殉教者よ。私の主アドリアンは、あなた方と共に主キリストの御前に立っているのでしょうか？」

殉教者は答えた。

「彼は私たちより先に主の御前に現れました！　あなたはさあ、すぐに船に乗り込み、私たちの遺体がある場所へ航海してください。そこで主があなたに現れ、私たちのもとへ導いてくださるでしょう！」

眠りから覚めると、聖ナタリアは直ちにすべてを置き去りにし、聖アドリアンの手だけを握って家を出た。そして海辺に近づくと、まるで彼女を待っていたかのように、ビザンティウムへ出航する準備が整った船が見えた。　その船に乗り込むと、そこには男女を問わず、不敬虔なマクシミアヌス王の迫害から逃れてきたキリスト教徒たちが皆乗っており、彼女は神に栄光を帰した。

一方、千人隊長はナタリアの出発を知ると、王に兵士の派遣を懇願し、別の船に乗り込んで彼女を追いかけた。　彼の船が岸から千スタディオンほど離れたところで、海上に逆風が吹き、船を出発した場所へと押し戻し、大きな被害をもたらしたため、乗船していた者の多くが溺死した。　一方、聖ナタリアが乗っていたキリスト教徒の船は、何の危険もなく航行していた。真夜中、悪魔が、まるで東から船に乗ってやって来たかのように現れ、船員のような者たちを従えていた。悪魔は、まるで舵取りの声を装って、キリスト教徒の船員たちに尋ねた。

「お前たちはどこから来て、どこへ向かっているのか？」

彼らはこう答えた。

「私たちはニコメディアから来て、ビザンティウムへ向かっています[5727]。」

敵は彼らに言った。

「お前たちは正しい道から外れている。船を左に回せ。」

[5727] ビザンティウム（後に有名なコンスタンティノープル、あるいはツァールグラードと呼ばれるようになった）は、当初、紀元前658年頃に設立されたメガラの小さな植民地であり、かつてペルシアの支配下にあった小アジアのギリシャ都市ミレトス出身の創設者ヴィザスの名にちなんで名付けられた。

そう言って、悪魔は彼らを騙して溺れさせようとした。キリスト教徒たちは、その偽りの助言を信じ、自分たちと出会った者たちが本当に東方から航海してきているのだと思い込み、帆と船を左へと向け始めた。しかし、突然、光を放つ聖殉教者アドリアンが現れ、大きな声で叫んだ。

「定めた航路を進め。敵の言葉を聞いてはならない。あの者はきっと、お前たちを滅ぼそうとしているのだ。」

そう言うと、殉教者はまるで水の上を歩いていくかのように前へ進み、悪魔はその船とともに姿を消した。

至福のナタリアは立ち上がり、船の前を歩む聖アドリアンを見て、こう叫んだ。

「ああ、私の主よ！」

すると、聖人はたちまち姿を見えなくなった。

追い風が吹いた。旅人たちは夜明け前にビザンティウムに到着し、聖殉教者たちの遺体が安置されている教会が近くにある岸辺に船を寄せ、喜びながら上陸した。

聖堂で聖殉教者たちの遺体の前に来ると、聖ナタリアは言葉に尽くせない喜びで遺体に抱きつき、それらに口づけをし、喜びの涙を流した。そして、聖アドリアンの手をその遺体に添えると、ひざまずいて長い間祈りを捧げた。　その後、長い祈りを終えて立ち上がると、彼女はその場にいた兄弟姉妹たちに口づけをした。そこには多くの忠実なキリスト教徒が集まっており、彼らは彼女を喜びをもって迎え入れ、家の中へ案内し、航海でひどく疲れ切っている様子を見て、少し休むよう勧めた。彼女が深く眠りにつくと、聖アドリアンが夢の中に現れ、こう言った。

「キリストのしもべであり、殉教者の娘よ、ここに来てくれてよかった。主があなたのために用意された安息の場所へ来なさい。来て、あなたにふさわしい報いを受け取りなさい！」

眠りから覚めた聖ナタリアは、そばにいたキリスト教徒たちにその夢を語り、自分のために祈ってほしいと頼んだ。その後、彼女は再び眠りについた。　一時間後、信者たちが彼女を起こしに来たが、彼女はすでに息を引き取っていた。彼女の聖なる魂は、主のもとへ永遠の安息へと旅立ったのである。こうして、聖なる殉教者たちの苦難の直後、聖ナタリアもまた、血を流すことなく、自らの殉教の業を全うしたのである。　彼女は聖なる殉教者たちと共に多くの苦難を耐え、牢獄で彼らに仕え、彼らの苦しみを目の当たりにし、また貞潔のために自らの家と祖国をも捨て、殉教者の一員として、私たちの救い主キリストの御前に現れました。キリストには、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れが捧げられます。 アーメン。

トロパリオ、第4調：

主よ、あなたの殉教者たちは、その苦しみの中で、私たちの神であるあなたから朽ちることのない冠を受けました。彼らはあなたの力をもって、迫害者たちを打ち倒し、悪魔たちの無力な傲慢を打ち砕きました。彼らの祈りによって、私たちの魂を救ってください。

コンダク、第4調：

神の知恵に満ちた妻よ、キリストの殉教者アドリアナに神の御言葉を心に刻み、殉教へと熱心に突き進み、その配偶者と共に冠を受けられた。

ウラジーミル聖母イコンの出会いを記念する祝日

記念日：8月26日

敬虔なる大公ヴァシーリー・ドミトリエヴィチ[5728]　の治世中、至聖なるキプリアン大主教[5729]の在任中に、アガリアの王（モンゴルの征服者）タメルランによるロシアへの侵攻が起こった。　このタメルランは、東から大軍を率いて進軍し、多くの国を征服し、ついにロシアの国境に近づいた。リャザン地方の境界に到達すると、タメルランはイェレツの町を陥落させ、イェレツの公を捕虜にし、多くのキリスト教徒を殺害した。彼はキリスト教徒を憎悪し、恐ろしい迫害者であったからである。　タメルランは、ロシア全土を荒廃させ、キリスト教の信仰を根絶やしにすると豪語していた。この荒廃の使者は、モスクワを破壊する意図をもって、その進路を同市へと向けた。

大公ヴァシーリー・ドミトリエヴィチはこの報を聞くと、自らの軍勢を集め、コロムナへ向かった。そこから進軍し、オカ川のほとりに陣を張り、そこで敵に対抗して備えを固めた。一方、タメルランは一か所に十五日間留まっていた。　大公（およびすべてのキリスト教徒の兵士たち）は、大軍を率いてロシアに侵攻してきた不敬虔な王の偉大な力を知り、　またその邪悪な企みについても耳にしたとき、兵士たちと共に天に向かって両手を挙げ、涙ながらに主と聖母マリアに祈りを捧げ、その不敬虔なアガリア人からの救済を懇願した。大公は、神の御心に適う者たち、聖なる主教ペトロスとアレクシオス、尊者セルギイ、そしてその他のロシアの奇跡行者たちに助けを求めた。

それと同時に、大公は自身の霊的指導者であるキプリアン大主教に対し、民衆に断食と祈りを呼びかけるよう要請した。また、大公は大主教に対し、ウラジーミル市から聖母マリアの奇跡のイコンを取り出し、ロシアの首都を守るためにそのイコンをモスクワへ持ち込むよう求めた。　神の聖人キプリアンは、以前から前述の尊い聖母マリアのイコンをモスクワへ持ち込むことを考えていた。そこで大公からの命を受けると、神が大公の心に同じ考えを植え付けてくださったことに、熱心に神に感謝した。　大公との考えの一致を、聖なる大主教は、奇跡を起こす聖母マリアのイコンがモスクワへ運ばれることに対する、神の御好意と御許しのしるしであると受け取った。

その直後、大主教はウラジーミルへ、聖母マリアの尊いイコンを回収するため、聖職者の中から選りすぐりの者たちを派遣した。　聖なる大主教は、聖職者全員と大勢の民衆を集め、敵に対する勝利を祈る共同の祈りを捧げ、すべての人に祈りを伴う断食を命じた。自身は教会を離れず、昼夜を問わず礼拝を執り行い、大公と彼の兵士たち、そしてすべての正教徒のために涙ながらに祈りを捧げた。

ウラジーミル市から持ち出されたその尊いイコンがモスクワ市に近づいた時、8月の15日、至聖なる聖母マリアの被昇天の祝日に、大主教閣下は他の聖職者たちや大勢の民衆を率いて、そのイコンを出迎えた。　その聖なるイコンを目にした人々は皆、地面にひれ伏し、彼らの元を訪れた至聖なる神の母そのものとしてそれに礼拝し、大きな喜びをもってそれを受け入れた。このイコンを見つめながら、皆は感動の涙を流し、アガリア人の侵攻からの救いを求めて聖母に祈りを捧げた。

皆の熱心な祈りは無駄にはならなかった。聖なる聖母マリアのイコンがモスクワに運ばれたその日、不信心なアガリア人の王タメルランは、夢の中で恐ろしい幻影を見て恐怖に襲われ、誰も追いかけていないにもかかわらず、全軍を率いて逃げ帰った。

彼が夢で見た幻は次のようなものであった。彼は眼前にそびえ立つ高い山を目にし、その頂上から聖人たちが金色の杖を手に持ち、彼を威嚇しながら降りてくるのを見た。これらの聖人たちの頭上には、空中に異様な光が輝いていた。　また、彼は、その聖者たちの真ん中に、言い表せないほどの栄光に包まれ、深紅の衣をまとい、太陽よりも明るく稲妻のような光を放っているある女王の姿も見た。この女王の周囲には、彼女に仕え、まるで戦いに備えているかのような、数え切れないほどの武装した戦士たちがいた。　女王の両手は天に向かって差し伸べられており、まるで祈っているかの

[5728] ヴァシリー（II）・ドミトリエヴィチは1389年から1425年まで統治した。

[5729] キプリアンは、1380年から1385年まで、そして1390年から1406年まで、モスクワ都主教区を統治した。

ようだった。タメルランには、その女王が彼を威嚇し、ロシアの領土から退くよう命じ、まるで自らの軍勢に彼に向かって突撃するよう命じているかのように思えた。

この恐ろしい幻影に、タメルランは恐怖に襲われた。寝台から飛び起き、恐怖のあまり叫んだ。

「ああ、私は恐ろしい光景を見てしまった！」

そして、その不幸な男は震え上がり、身震いしながらうめき、まるで恍惚状態にあるかのようだった。

しばらくしてタメルランは正気を取り戻し、諸侯や軍司令官たちを呼び寄せ、恐怖で震えながら、自分が見たことをすべて語った。

彼らもまた、タメルランの話を聞き、彼が恐怖で震えているのを見て、同様に恐怖に襲われ、戸惑いながら互いに尋ね合った。

「さて、これからどうなるのか？」

また、中にはこう言う者もいた。

「あの女王は、キリスト教の神、主イエス・キリストの母である。間違いなく、彼女はキリスト教徒を守ろうとしている。なぜなら、彼女は彼らの助け手であり、守護者だからだ。」

タメルランは言った。

「もしキリスト教徒にそのような助け手がおられるのなら、我々が彼らに対して武装したのは無駄だった。我々の努力は徒労に終わる。なぜなら、もし彼女が御前に仕える者の中からたった一人を送り出されただけでも、彼女は我々全員を打ち負かし、我々が逃げ込む場所さえ見つからなくなるだろうから。」

こうして、その不敬虔な王は、アガリア人の全軍を率いて、恥をさらして逃げ帰った。アガリア人たちは、ロシアの地から多くの軍勢が彼らを追撃してきているように見えたからである。　このことに恐怖と戦慄を覚え、アガリア人は互いに押し合い、武器を捨て、戦利品や捕虜となった者たちすべてを置き去りにした。

こうして、至聖なる聖母マリアの祈りにより、正教徒たちは戦わずして敵に勝利し、血を流すことなく敵を打ち破ることができたのである。

このタメルランによるアガリア人との共同侵攻、および彼をロシアの領土から奇跡的に追放した出来事は、世界の創造から6903年目に起こった[5730]；それ以来、帝都モスクワでは、聖母マリアの「ウラジーミル」と呼ばれる聖像の巡礼を記念する祝日が制定された[5731]。これは、聖母マリアの取り次ぎによって授けられた、アガリアンからの奇跡的な救済を、忘れがたく、感謝の念をもって記念するためである。　私たちからも、神の母と、彼女から生まれたキリストなる神に対し、今この時、そして永遠に、常に敬意と栄光と礼拝が捧げられますように。アーメン。

[5730] 1395年、ローマ暦X年。

[5731] 記述された出来事から85年後、1480年のオルダ・ハン・アフマートの侵攻から救われたことへの感謝として、6月23日にウラジーミル聖像の第二の祝日が制定された。「軽薄な者たちが、彼らの武器に対する恐怖を誇ってはならない――」と、ロシアの年代記作者たちはこの奇跡を説明して述べた。　「いや、武器でも、人間の知恵でもなく、主ご自身が今、ロシアを救われたのだ」。　1521年、モンゴル軍はマフメト・ギレイの指揮の下、再びロシアへと進軍した。聖母マリアの取り成しにより、今回もモスクワは敵から救われた。この出来事を記念して、正教会では5月21日に記念礼拝が執り行われる。　1812年、フランス軍の侵攻の際、奇跡を起こすウラジーミル聖母像は、イヴェル聖母像およびスモレンスク聖母像とともに、9月1日にアウグスティン大司教によってムロムへ移送され、モスクワが敵から解放された後、10月20日に再び首都へ戻された。　奇跡を起こすウラジーミル聖母イコンは、現在モスクワの聖母被昇天大聖堂に安置されている（このイコンに関するより詳細な記述は、モスクワ総主教庁印刷局から出版された書籍『聖母マリアの栄光』（モスクワ、1907年、380–385ページ）に収録されている）。

トロパリオ、第4調：

今日、最も栄光に満ちた都モスクワは、太陽の暁のように輝きを放っています。主よ、あなたが奇跡を起こす聖像を受け入れられたからです。今、私たちはその聖像のもとに駆け寄り、あなたに祈りを捧げ、こう叫びます：　おお、驚くべき御母なる神の母よ、あなたから受肉された私たちの神、キリストに祈り、この都、そしてすべてのキリスト教の都と国々が、敵のあらゆる中傷から無傷で守られ、また、憐れみ深い御方として、私たちの魂を救ってくださいますように。

コンダク、第8調：

選ばれた将軍よ、あなたの尊き御姿の到来によって悪から救われた勝利の御方、主の母よ、私たちはあなたの出会いの祝祭を輝かしく祝し、いつものようにあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、花嫁でありながら花嫁ではない方よ。」

9月9日

8月27日（旧暦）

同日、ヴェネファレフの聖サヴァの記念日（この地名および聖サヴァの生没時期は不明）。

同日、聖殉教者アンフィサの記念日。キリストの御名を告白したため井戸に投げ込まれた（その功績の時期および没地は不明）。

尊者ピメーン大聖人の生涯

記念日：8月27日

聖ピメンはエジプト出身であった[5732]；彼は二人の弟たちと共に、エジプトの共同生活を行う修道院の一つに入った。そこで兄弟たちと共に修道者の生活を送った[5733]。

それから数年後、兄弟たちの母は、子に対する自然な母性愛から、彼らに会いたいと願って訪ねてきたが、直接会うことはできなかったため、彼らが祈りのために教会に来るのを待ちながら、教会のそばに立っていた。　彼らが教会へ向かうと、母は彼らに近づいたが、彼らは彼女から逃げ出し、修道室に入って扉を閉ざしてしまった。彼女は扉に近づき、修道室の外に立ちながら、感極まって泣きながら息子たちを呼びかけ、扉を叩き始めた。しかし、修道士たちは修道室の扉を開けるどころか、何の返事も返さなかった。　その間、その女性が小部屋の扉の前で長い間泣き続けていた時、アッバ・アヌウィーはすべてを耳にし、別の扉から修道士たちのところへ入り、ピメンにこう言った。

「この老婆をどうしようか。彼女はもう長い間、ここから離れずに切なく泣いている。」

すると、ピメンは立ち上がり、扉のそばへ近づいて尋ねた。

「何のために泣いているのですか、老婆よ？」

彼女は彼の声を聞いたが、扉が閉まっていたため彼自身は見えなかった。そこでこう言った。

「あなたたちに会いたいのです、私の子供たちよ！　私の乳であなたたちを育てたのは私ではありませんか？　あなたたちを育て上げたのは私ではありませんか？　そして今、私はすでに老い衰

[5732] 聖ピメンは340年頃に生まれた。

[5733] ピメンは355年頃に修道生活に入った。

えてしまいました。子供たちの声を聞きながら、その姿が見えないことに、心は深く苦しんでいます。死ぬ前に、どうかあなたたちに会いたいのです、私の子供たちよ。」

ピメンは言った。

「どこで私たちに会いたいのですか。ここですか、それともあの世でですか？」

彼女は答えた：

「もしここであなたたちに会えなければ、あの世で会えるでしょうか、私の子供たちよ？」

ピメンは答えた。

「もしあなたが穏やかに耐え忍び、ここで私たちに会えなかったとしても、神の慈愛によって、あなたはきっとあちらで私たちに会えることを願っています。」

その言葉を聞き、彼女はこう答えた。

「確かに、私はここであなたたちに会うよりも、あそこで会うことを望みます。」

その後、彼女は大きな希望を抱き、大いに喜びながらその場を去った。なぜなら、この世の生活よりも、来世において子供たちに会いたいと願っていたからである。

祝福されたピメンは、断食の修行に日々、年を重ね、絶えず祈りに身を捧げながら、修道者の美徳に励み、神の助けを借りて、目に見えない敵に勇敢に立ち向かった。　彼は、霊と戦っていた自らの肉体を打ち砕き、ある種の捕虜のように、多大な労苦によってそれを消耗させ、霊に仕えるよう服従させた。こうして、彼は無情の頂点に登り詰め、徳において最も完成された者として、すべての荒野の父たちの中で最も栄光ある者となった。

しばらくして、その国の統治者は、我らが尊い父ピメナに謁見したいと願い、使者を遣わして、尊者に面会を許してほしいと依頼した。しかし、長老は深く嘆き、心の中でこう考えた。

「もし高官たちが私に敬意を表すために訪ねてくるようになれば、民衆の中からも多くの者が私のもとを訪れ、私を煩わせるだろう。彼らは私の沈黙を妨げ、私は神の助けを借りて若き日から多大な労苦の末に得た謙遜の恵みを失ってしまう。そうなれば、私は容易に高慢に陥ってしまうかもしれない。」

このように心の中で考えた聖人は、公爵との面会を断り、同じ使者を通じて、公爵に自分のもとへ来ないよう頼んだ。聖人は、「私は公爵に会わない。むしろ、その場から追い返すだろう」と述べたのである。

その返事を聞いて、公爵は深く悲しみ、こう言った。

「これは私の罪のせいで、神の御使いにお目にかかれないのだ。」

しかし、どうしても聖なる長老に会いたいと強く願っていた公爵は、ある策略を思いついた。長老の妹の息子を、あたかも何らかの過ちを犯したかのように扱って牢獄に閉じ込め、長老が甥のために公爵に嘆願してくれることを期待したのだ。そうすれば、聖人に会えるだろうと考えたのである。そこで公爵は家来たちにこう言った。

「もしアッバ・ピメンが来れば、直ちにその若者を釈放する。しかし、もし来なければ、過ちを犯した者を罰せずに放っておくことはしない。彼の過ちは極めて重大だからだ。」

若者の母（ピメンの妹）はこれを聞くと、直ちに荒野へ兄のもとへ向かった。彼の隠遁者のケリアに着くと、彼女は扉を叩き始め、涙ながらに、王子のもとへ行って息子のために取り成し、解放されるよう懇願してほしいと頼んだ。

しかし、長老は扉を開けるどころか、何の返事も返さなかった。

しかし、姉は長い間、涙ながらに扉を叩き続け、長老に懇願し続けた。だが、何の返答も得られなかったため、彼女は非難と怒りを込めて長老にこう言い放った。

「無慈悲で、無情で、残酷で、不信心で、獣のような男め！　私の涙に心を動かされないというのか？　私にとってたった一人の息子が、今まさに死の危機に瀕しているというのに！」

すると、老僧は弟子を遣わして彼女にこう言わせた。

「ここから立ち去れ。ピメンには子供がおらず、だから彼は悲しんでいないのだ。」

姉は苦々しく泣きながら戻り、弟を責めた。

公爵は一連の出来事を聞くと、友人たちにこう言った。

「長老に伝えてくれ――釈放を求める嘆願の手紙を私に書いてもらうように。そうすれば、私は彼の甥を牢獄から釈放してやる。」

そして多くの者が長老に、公爵へ手紙を書くよう勧めた。長老は次のように書いた。

「御権威をもって、罪を犯した若者の罪状を徹底的に調査させよ。もし死に値する罪が見つかったならば、彼を死なせて、一時的な処刑によって永遠の苦しみから逃れさせよ。もし罪を犯した者が死に値しないと判明したならば、法律に従って罰を与えた上で、釈放せよ。」

公爵は長老からのこの書簡を読み、その知恵と徳に驚き、彼が真の神の御心にかなう者であることを悟った。公爵は若者を釈放し、尊者ピメンは、虚栄的な名声や人々の称賛を避け、長い間、さまざまな国を放浪した。　その後、再びエジプトの荒野に定住し、断食の行いによって神に奉仕しながら、老いるまでそこに留まった。そして、この聖ピメンは多くの修道士たちの父となった。

自らも謙遜の賢者であったため、弟子たちに謙遜の知恵を説く際、尊者はある老人の物語（おそらくは自分自身のこと）を模範として挙げ、次のように語った。

– それほど昔のことではないが、あるエジプト人の修道士が、コンスタンティノープルの近くにあるある人里離れた場所で、小さな修道室を構えて暮らしていた。　ある時、敬虔なテオドシウス帝（若き[5734] ）がその地を通りかかった。そこに住む修道士のことを耳にした皇帝は、随行員全員を置き去りにし、一兵卒に扮して、その老修道士の小部屋の扉へと向かった。　皇帝が扉を叩くと、修道士は小部屋を開けたが、訪れたのが皇帝であることに気づかず、ただの兵士だと思い込んだ。祈りを捧げた後、二人は腰を下ろした。それから皇帝は尋ねた。

「エジプトに住む修道士たちは、どのように修行に励んでいるのですか？」

「皆、私たちの救いを神に祈っています。」

長老の独房をくまなく見回したが、王は壁に掛けられた籠と、その中に少しの乾いたパンがある以外、何も見つからなかった。そして王は長老に言った。

「父よ！ 少しだけ味わわせてくださいますか。」

すると、老僧はすぐに器に水を注ぎ、塩を振りかけ、乾いたパンの切れ端を乗せた。二人は一緒にそれを食べた。その後、老僧は水の入った水差しを持ってきて、王に飲ませた。食事が終わると、王は老僧に尋ねた。

「私が誰か、ご存知ですか？」

老人は答えた。

「存じ上げません、殿。神こそがあなたをご存知です。」

すると、王は彼に言った。

「私はテオドシウス王だ。」

すると、その老人はすぐに彼に頭を下げた。

その後、王は言った。

「修道士たちよ、あなたがたは幸いである。この世の虚しい心配事から解放され、ただ天の永遠の命と天の恵みを得ることを心に留め、静寂な生活を送っているのだから。」　まことに、あなたに告げよう。私はこの王国に生まれ、今や王として治めているが、かつてこれほど甘美なパンを味わい、これほど大きな喜びをもって水を飲んだことはなかった。

すると、長老はこう答えました。

[5734] もっとも、ここでは379年から395年まで在位したテオドシウス大帝を指すものと解釈する者もいる。

「それは、私たち修道士が祈りと祝福を込めて食事をとるからです。そのおかげで、最も質素な食事でさえも美味しく感じられるのです。一方、王様の御邸宅では、食事の支度は祈りなしに行われ、多くの口論や無駄話に満ちています。そのため、王様の食事には、それを甘美なものにするような祝福が与えられていないのです。」

王は長老に口づけを捧げ、その場を去ったが、それ以来、その修道士を深く敬うようになった。

一方、長老は、破滅的な自惚れや高慢を恐れ、人々の敬意によって謙遜という賜物を失わず、また神の恵みを失わないようにと、立ち上がってそこから逃げ出し、その後再びエジプトへと戻った。

聖ピメンはこの物語を、弟子たちに謙遜を教えたいと願って語った。聖ピメンはこの物語を通じて、修道士たちに、益ではなく害をもたらす虚しい称賛や栄誉を避けるよう教えようとしたのである。

聖ピメンは弟子たちに他の美徳についても教えた。彼の教えは常に実効性があった。なぜなら、彼は誰にでも救いの道を教えることができたからである。彼が自らの生涯をもって天使に等しい美徳の模範を示したのと同様に、彼の言葉もすべての人にとって有益であった。　そして、彼のもとを訪れるのは、修道生活の初心者のみならず、修道生活において長年の功績を積んだ者たちもおり、彼らは魂の救いに何が有益であるかを尋ねた。尊者のもとを訪れた者たちは皆、自らの魂の啓発となる、神の知恵に満ち、神の霊感を受けた答えを彼から受けた。それらの答えは、ある者たちによって『教父の書』[5735]に記録された。ここでは、それらの答えのいくつかを振り返ってみよう。

ある人がアヴヴァ・ピメンに次のように尋ねた。

「もし、罪を犯した兄弟を見かけたら、私はその罪を隠すべきでしょうか？」

ピメンはこう答えました：

「もし私たちが兄弟たちの罪を隠すならば、神もまた私たちの罪を隠してくださるでしょう。」

ある兄弟がアヴヴァ・ピメンにこう言いました。

「父よ！私は困惑しており、ここを去ろうかと考えています。」

長老は言った。

「どのような理由でここを去ろうとするのですか？」

その兄弟は答えた。

「ここに住む兄弟の一人について、悪い噂を耳にしてしまい、誘惑に駆られているのです。」

長老は言った。

「君が聞いたことは、真実ではない。」

兄弟は答えた。

「実のところ、師よ、それは真実でした。なぜなら、そのことを私に伝えた者は、十分に信頼できる人物だからです。」

しかし、長老は言った。

「いや、君に伝えた者は信頼に値しない。もし彼が信頼に値する者であれば、君にそのようなことを伝えなかったはずだからだ。しかし、自分で目にしていないことは、決して人の言葉を鵜呑みにしてはならない。なぜなら、神でさえ、ソドムの叫び声を聞かれたとき、ご自身で降りてきて、ご自身の目で全てを確認されるまでは、そのことを確かめられなかったのだ。[5736]：*「主は言われた。『ソドムとゴモラの叫びは大きく、彼らの罪は極めて重い。わたしが下って行って、彼らについて、*

[5735] すなわち、『オテチニキ』、『パテリキ』のことである。

[5736] 比喩的な表現である。

わたしのもとに上ってくる叫びの通りに行っているのか、そうでないのか、確かめてみよう』」（創世記18:20–21）。

それに対し、兄弟はこう言った：

「私も、父上、あの兄弟が罪を犯しているのを、この目で確かに見ました。」

これを聞いて、長老は地面を見つめた。それから、地面から小さな小枝を拾い上げ、その兄弟に言った。

「これは何だ？」

兄弟は答えた。

「これは小枝です。」

それから長老は建物の屋根を見上げ、屋根を支えている丸太を指さして尋ねた。

「では、これは何だ？」

修道士は答えた。

「これは丸太です。」

すると、老僧は修道士に言った。

「よく心に留めておきなさい。あなたの罪はこの丸太のようなものであり、あなたが語っている兄弟の罪は、この節のようなものである。そうすれば、あなたは決して困惑したり、誘惑に駆られたりすることはないだろう。」

当時、聖ピメンの元にいたアッバ・シソイは、この言葉を耳にした。彼はその言葉に深く感銘を受け、聖ピメンにこう言った。

「アッバ・ピメンよ、あなたをどのように称えればよいのでしょうか！　まことに、あなたの言葉は、まるである種の宝石のように、恵みと栄光に満ちています！」

すると、アッバ・ピメンはこう言った。

「『自分の目で見えたことだけを証しせよ』とあります。しかし、私はあなた方に言います。たとえ自分の目で何かを見ても、それを信じてはなりません。」

そして、次のような出来事を語った。

ある兄弟が、悪魔によって幻影を見せられ、嘲笑された。彼は、別の兄弟が女性と罪を犯しているのを見てしまったのだ。その兄弟は心が乱れ、情欲に駆られた。近づくと、彼は足で二人を蹴り飛ばし、こう言った。

「やめなさい。なぜ罪を犯しているのですか？」

しかし、それは人間ではなく、小麦の束だったことが判明した。

それゆえ――とピメンは締めくくった――私はあなたに言う。自分の目で見たことさえも、鵜呑みにしてはならない。

アッバ・アヌヴィイは聖ピメンに言った。

「しかし、もし罪人を見かけても、それを非難しなかったとしたら、あなたは神にどう答えるつもりですか？」

ピメンはこれに対し、こう言った。

「私は神にこう申し上げるでしょう。『主よ！ あなたはこう命じられました。*「まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目から小枝を取り除くことができるでしょう」*（マタイ7:5）。私はあなたの命令を果たしました』と。」

その後、ある兄弟がアブ・ピメンにこう尋ねた。

「父よ！ 私は重大な罪を犯してしまいました。三年間、悔い改めの生活を送りたいと思います。しかし、悔い改めには三年で十分なのでしょうか？」

長老はこう答えました:
「それは多いね。」
すると、兄は言った。
「では、悔い改める期間はたった一年だけだとおっしゃるのですか？」
それに対し、老人はこう答えた。
「それだけでも十分だ。」
これを聞いた他の兄弟たちは、こう言った。
「それなら、悔い改める期間は四十日以内ということか？」
しかし、長老はこう言った。
「それだけでも十分だ。」
そして、こう付け加えた。
「人が心から悔い改め、二度と罪に逆戻りしないという固い決意を固めるならば、たとえ三日間の悔い改めであっても、神はそれを受け入れてくださると思う。」
ある兄弟がアブ・ピメンにこう尋ねた。
「人はどのように生きるべきでしょうか？」
長老はこう答えた。
「ダニエルの例からわかるように、彼が主なる神に仕えたこと以外、彼を誹謗中傷することはできなかったのです。」
この言葉によって、聖人は、人の生き方は、その生涯のすべてが、ただ主なる神への奉仕に他ならないものでなければならないことを示した。
別の修道士が尋ねた。
– どうすれば、敵の策略から身を守ることができるでしょうか?
師はこう答えた。
「下から火を焚かれて沸騰している釜には、ハエも他のどんな虫も近づくことはできません。しかし、冷めてしまえば、ハエや虫たちがその上に群がってくるのです。　これと同様に、徳の行いに熱心に励む修道士には、敵は近づくこともできず、その罠に引きずり込むこともできない。しかし、無防備さと怠惰の中で生活を送る人に対しては、敵は容易に近づき、思いのままに罪へと誘い込むのである。
ある人が長老に、心に押し寄せる邪悪な考えをどうすれば取り除けるか尋ねた。長老はこう答えた。
「この状況は、左側に火があり、右側に水の入った器がある人に似ている。もし人が火に燃え移ったら、器から水を取り出して火を消すだろう。」　火とは、私たちの救いの敵が、人が罪深い欲望に燃え上がるようにと、ある神殿に火花を投げ込むかのように、人の心に植え付ける邪悪な思いのことである。一方、水とは、人が神へと向かって祈りを捧げる心のことである。
アッバ・アモンは、心から生じる邪悪な思いや虚しい欲望について、再び長老ピメナに尋ねた。すると長老は聖書の一節を引用して、次のように答えた。
「斧は、それを振るう者がいなければ、どのような栄光を得ることができるだろうか。また、鋸は、それを扱う者がいなければ、自慢できるだろうか。それと同じように、あなたも邪悪な思いに自分の同意を助けるようなことをしてはならない。そうすれば、それらの思いはすべて消え去るだろう。」
アッバ・ヨセフはアッバ・ピメンに断食について尋ね、こう言った。
「どのように断食すべきでしょうか？」
長老はこう答えた。

「私は毎日、少しばかりの食事を摂り、完全に満腹にはならないようにしている。」

アッバ・ヨセフは尋ねた。

「あなたが若かった頃、二日間断食することはなかったのですか？」

ピメンは答えた：

「確かに断食しました。二日間だけでなく、三日間、さらには一週間も断食しました。しかし、その両方を経験した聖なる父たちは、毎日少しずつ食べるほうがよいと悟りました。なぜなら、それは（救いへの）王の道であり、心が驕らないようにするため、より容易で適しているからです。」

ヴェリキー修道院のイグメンは、アヴヴァ・ピメンに次のように尋ねた。

「どうすれば、私は心を和らげることができるでしょうか？」

長老はこう答えた。

「チーズや油の入った器、その他の世俗的な事柄ばかりを心に留めているような心に、どうして憐れみが宿り得ようか？」

ある人が長老に尋ねた。

「話すことと黙っていること、どちらがよいのでしょうか？」

長老は答えた：

「神のために語る者は善きことを行っている。同様に、神のために沈黙を守る者もまた、善きことを行っているのだ。」

長老は質問に対してこのように賢明な答えを返した。さらに、『教父集』には、聖ピメンの多くの賢明な格言が収められている。そのうちのいくつかを以下に挙げる。

アッバ・ピメンはこう語った。

– 人が家を建てるつもりになると、家を建てるのに使える多くの材料を集める。それと同様に、私たちも、あらゆる美徳から少しずつ取り入れれば、自分の中に霊的な家を容易に築くことができる。

また、こうも言いました：

「人は三つの主要な規則を守る必要がある。神を畏れ、頻繁に祈り、隣人に善を行うことである。」

また、アッバ・ピメンはこうも語った。

「無欲、忍耐、そして分別――これこそが修道生活の三つの基盤である。なぜなら、*『もしその中にノア、ダニエル、ヨブという三人の男がいたとしても、彼らはその義によって自分たちの魂だけを救うに過ぎない』*（エゼキエル14:14）と書かれているからだ。 ノアは不貪の模範であり、ヨブは忍耐の模範であり、ダニエルは分別ある判断の模範である。もし修道士にこれら三つの美徳が見出されれば、彼を救う神は彼の中に宿られるだろう。

長老はさらにこう語った。

「もし修道士が二つのものを憎むならば、この世の誘惑から自由になれるだろう。」

兄弟が長老に尋ねた：

「それは一体どのようなものですか？」

それに対し、長老はこう答えた。

「肉の安らぎと虚栄心だ。」

その後、長老はこう言った。

「福音書にはこう書かれている。『衣を持っている者は、それを売って剣を買え』（ルカ22:36）。これは、肉体の安らぎを持っている者は、それを捨てて、狭い道に入り、厳しい生活を送り始めよ、という意味だ。」

さらにこうも言った。

ダビデが獅子や熊と戦ったとき、その喉元をつかんで獣を殺した（サムエル記上17:34–35）。これと同様に、私たちも神の助けを借りて、獅子――すなわち悪魔――と熊――すなわち私たちの肉――に打ち勝つことができる。ただし、私たちの喉元と腹に節制という手綱を課すならば、の話である。

さらに長老はこう言った。

「もしバビロンの王の料理長であるナブザルダンがエルサレムに来なかったなら、主の神殿は焼かれることはなかっただろう。　これと同様に、私たちの中にも罪深い欲望の炎は燃え上がらず、また敵と戦う私たちの心も決して敗北することはない――もし私たちが過食や怠惰に身を任せないならば。

長老はさらにこう語った。

「ミツバチが煙から逃げ、人々にその働きの甘い実を享受させるのと同様に、肉体の安逸は私たちの魂から主への畏れを追い払い、魂はあらゆる善行を失ってしまうのだ。」

さらにこうも言った。

「あらゆる王の護衛が王のそばに立ち、常に王を守る準備ができているように、私たちの魂もまた、淫行という悪魔との戦いに常に備えていなければならない。」

ある日、アバ・ピメンは、ある兄弟が六日間断食し、七日目にのみわずかな食事を摂っていたものの、同時に自分の兄弟に対して怒りを抱いていたという話を耳にした。アバ・ピメンはその者についてこう言った。

「六日間断食することを学んだのに、怒りを抑えることさえ一日もできないとは。」

ある修道院の長老は、頻繁に町へ出掛け、浴場で体を洗い、自らの救いに努めていない兄弟たちがいると聞き、彼らに怒りを覚え、修道院に戻ると、彼らの修道服を剥ぎ取った。　しかしその後、後悔してアッバ・ピメンのもとへ行き、あの兄弟たちに対して行ったことすべてを話した。すると長老は彼にこう言った。

「あなた自身にも、古い人の面影が残っているのではないか。あるいは、もしかすると、あなたは完全にその古い人の[5737]に堕ちてしまったのではないか？」

長老は、その老僧の言葉を聞いて心を打たれ、自分が傷つけてしまった兄弟たちを呼び寄せ、彼らに悔い改めを表明し、再び彼らに修道服を着せた。

ある日、アッバ・イサアクがアッバ・ピメンのもとを訪れ、彼が自分の足に少量の水を注いでいるのを見て、こう言った。

「ある人々は、なんと残酷に自分の肉体を苦しめていることか！」

すると、長老は彼にこう言った。

「我々は、肉体を殺す者となるよう教えられてはいない。」

そしてこう続けた。

「人は時に沈黙しているように見えることがある。しかし、もしその心が他人を非難しているなら、その人は常に語っているのだ。また、朝から晩まで口を開いて話している者もいるが、同時に沈黙を守っている者もいる（なぜなら、隣人を非難しない者は、沈黙している者と同じだからである）。」

アッバ・ヨセフは、次のように語りながらこう述べた。

– ある時、私たちがアッバ・ピメンの元に座っていたとき、その中に若き兄弟アガフォンがいた。このアガフォンに何かを伝えようとした老僧（ピメン）は、彼をアッバと呼び、こう言った：

[5737] 「古い人」とは、罪に堕ち、救いの道を知らない人のことである。聖使徒パウロは、まだ新約の恵みを受けていない人々にこの呼称を用いている（エフェソ4:22、コロサイ3:9参照）。

「アッバ・アガフォン。」

しかし、私たちは長老にこう言いました：

「この兄弟はまだ若いです。なぜ彼を『アッバ』と呼ぶのですか？」

すると、長老はこう答えられた。

–彼の沈黙する口元が、私に彼をアッバと呼ぶようにさせるのだ。

その後、アッバ・ピメンもこう語った。

「兄弟よ、隣人と共にいる者は、石像のようになるべきだ。侮られても怒ってはならない。称賛されても驕ってはならない。」

さらにこうも言った。

「悪をもって悪を打ち勝つことは決してできない。もし誰かがあなたに悪を行っても、その者に善を施せ。そうすれば、あなたの徳がその者の悪意に打ち勝つだろう。」

この徳（他の徳と同様に）について、尊者ピメンは自らの行いによっても教えた。というのも、彼がエジプトのスキタから到着する以前、エジプトには皆から尊敬されているある長老が住んでいたからである。　アッバ・ピメンがその地に来ると、多くの人々がその長老を離れてピメンのもとへ集まり始めた。このため、その長老はやって来たアッバ（ピメン）に怒りを覚え、彼を妬み、悪口を言い始めた。アッバ・ピメンはこれを聞いて悲しみ、兄弟たちにこう言った。

「さて、我々は今、どうすればよいのか。人々は、あれほど聖く徳高い長老を置き去りにして、取るに足らない我々のもとへやって来たことで、我々に悲しみを招いてしまったではないか。どうすれば、あの偉大なる父の怒りを和らげることができるだろうか。少しばかりの食事とワインを用意し、その長老のもとへ行って、共に食卓を囲もう。そうすれば、彼の心を和らげることができるかもしれない。」

少しの食事とワインを持って、彼らはその長老のもとへ向かい、彼の修道室の扉をノックした。その長老の弟子がノックを聞いて尋ねた：

「どなたですか？」

すると、こう答えられた。

「あなたのアッバに、ピメンが兄弟たちと共に、あなたのアッバから祝福を受けるために来たとお伝えください。」

弟子は行って、そのことを長老に伝えた。長老はそれを聞いて言った。

「行って彼らにこう伝えなさい。『ここから立ち去りなさい。私にはあなたたちに会う時間がないから』と。」

弟子がそう伝えて戻ると、彼らはこう答えた。

「長老に拝礼を許されるまでは、ここから立ち去りません。」

そして、彼らはケリアの扉の前で、灼熱の太陽の下に立ち続けた。

訪れた者たちの謙虚さと忍耐を見て、長老は心を動かされ、扉を開けて彼らを迎え入れ、頬に口づけをして歓迎した。席に着くと、皆が愛を込めて語り合い、持参された食事を味わった。その後、その長老は言った。

「まことに、あなたがたについて聞いていたことは正しいだけでなく、私はあなたがたの中に、その百倍もの善行を見出しています。」

それ以来、長老はアッバ・ピメンに対して和やかな態度をとるようになった。

このように、尊者ピメンは、自分に敵意を抱く者の憎しみを和らげる術を知っており、その模範を他の人々に示していた。

尊者ピメンは、言葉と同様に、沈黙によっても他者を癒やす術を心得ていた。

ある日、その地方の長老たちが、尊者ピメンが滞在していた修道院を訪れた。アッバ・アヌウィーは、せめて少しばかりでも彼らをもてなしたいと思い、尊者ピメンの元へ行き、そのことを伝えた。しかし、ピメンは答えを返さず、長い間沈黙を保っていた。そこでアッバ・アヌウィーは悲しみを胸に、彼の元を後にした。

その後、彼のもとにおりた兄弟たちが（アッバ・ピメンに）尋ねた。

「なぜアッバ・アヌヴィーに答えなかったのですか？」

すると、長老は彼らにこう答えた。

「私にはそのための道具（すなわち言葉）がなかった。私は死んでいるからだ。死者は語らない。だから、私をあなたがたと共にいる者とは見なさないでほしい。」

長老がこのように振る舞ったのは、新しく来た兄弟たちの食事の席に呼ばれないようにするためであった。　また、彼については次のような話も伝えられている。すなわち、兄弟たちが彼を招いて共に食事をとろうとしたとき、彼はまるで気が進まないかのように泣きながら向かった。それは、自分の腹を満たすことを望まなかったからであるが、同時に、兄弟たちを悲しませないために、彼らの言葉に逆らうことも望まなかったからである。

ある修道士が、尊者ピメンの徳高い生き様を聞き、彼に会って教えを請うために遠い国からやって来た。長老は修道士を丁重にもてなした。互いに口づけを交わした後、二人は席に着いた。　その修道士は、聖書に記されている難解な事柄や天上の事柄について、長老と語り合いを始めた。しかし、ピメン長老は顔を背け、黙ったままで、来訪者に何の答えも返さなかった。　その修道士は長い間、聖書に基づいて語り続けたが、長老からは何の返答も得られなかった。長老は黙り込んでいたからである。やがて、修道士は悲しげにケリアを出て、長老の弟子にこう言った。

「私は、これほど偉大で困難な旅を無駄にしてしまった。私は彼（アッバ・ピメン）のためにここに来たのに、彼は私に一言も話してくれなかった。」

その後、その弟子は長老のもとへ入り、こう言った。

「父よ！　あなたのために、この高潔な人物――自国の修道士たちの間で名高い人物――がやって来たのです。なぜ彼に何も言わなかったのですか？」

長老は答えた。

「彼は上の世界から来た者であり、天上の事柄について語る。一方、私は下の世界から来た者であり、地上の事柄についてしか語ることができない。もし、私たちのもとを訪れた兄弟が、心の情欲や肉体の弱さについて語っていたなら、私は彼に答えただろう。しかし、彼が天上の事柄について語っている以上、それについては何も言うことができないのだ。」

弟子は長老のもとを後にし、その修道士のもとへ行き、こう言った。

「父よ、ご承知おきください。その長老は聖書について話すのを好まないのですが、もし誰かが心の情欲について語り始めれば、長老は答えてくださいます。」

心を動かされたその修道士は、長老のもとへ入り、こう尋ねた。

「アヴォ！ 私は情欲の虜となっています。どうすればよいのでしょうか？」

すると、長老は喜びに満ちた顔で彼を見つめ、こう言った。

「来てくれてよかった。さあ、私は口を開き、その口を善き言葉で満たそう。」

そして、私たちに立ち上がる情欲をいかに打ち勝つかについて、十分な時間をかけて彼と語り合った。その修道士は、長老の神に導かれた言葉に深く感銘を受け、このような長老に会い、その話を聞くことを許してくださった神に感謝し、魂にとって大きな益を得たことを喜びながら、仲間のところへ戻っていった。

その後、別の修道士、アバ・イサアクがピメン神父のもとを訪ねると、彼は黙って座り、まるで恍惚状態にあるかのように見えた。しばらく待ったが、長老が正気に戻る様子が見られなかったため、その修道士は長老に深く頭を下げ、こう言った。

「父よ、お教えください。あなたの心はどこにありましたか？」

老人は、執拗な懇願に迫られてようやく答えた。

「私の心は、十字架のそばに立ち、涙を流しておられた聖母マリアの御許にありました。そして、私もいつもそのように泣いていたいのです。」

このように、教父たちの中でも偉大なる一人である尊者ピメンは、あらゆる美徳を修め、その生き様と語りの両方によってすべての人々に益をもたらしたが、その心にはこれほどまでに大きな謙遜があり、しばしばため息混じりにこう語った。

「私は、サタンが投げ込まれるその場所に投げ込まれることになるだろう！」

しかし、主は、その謙遜なしもべを、聖なる天使たちが住む場所、すなわち義人と敬虔な者たちの住む場所へと引き上げられた。主は、この世での長き生涯を終えた後、彼を、歳月が尽きることのない天の住処へと迎え入れられた[5738]； そこでは、すべての聖人たちが、神の栄光の御座の前に立ち、常に父を賛美し、　、また御子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美しています。私たち罪人からも、今、常に、そして永遠に、その神に栄光が捧げられます。アーメン。

トロパリオ、第8調：

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深淵からの嘆きによって百の労苦を実りあるものとし、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、ピメネ、わが父よ、キリスト・神に、わが魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第4調：

尊き父よ、あなたの輝かしい功績を記念する聖なる日、今日、敬虔な人々の魂を喜ばせてください。神に賢きピメネ、我らの尊き父よ。

聖殉教者ククシと断食者ピメンの記念日

記念日：8月27日

行いが明確な証しとなる場所では、多くの言葉を費やす必要はない。これら祝福された方々のことについても、まさにそう言える。なぜなら、祝福された聖殉教者ククシャ――聖ペチェルスク修道院の父の一人――は、かつて不信仰に覆われていたヴィャチチ族に洗礼を授け、多くの人々を信仰によって啓蒙したため、万人に知られていたからである。　この聖ククシャは、多くの輝かしい奇跡を成し遂げた。悪霊を追い払い、天から雨を降らせ、湖を干上がらせ、その他にも多くの驚くべき奇跡を起こした。ついに、多くの苦難の末、彼は弟子と共に異教徒たちによって斬殺された。

その頃、ペチェルスク修道院では、至福のピメン・ポストニクが神に喜ばれるよう精進していた。その偉大な断食と労苦により、彼は神から極めて偉大な賜物を受け、病人の癒やしだけでなく、未来や遠く離れた未知の地で起こる出来事をも予見することで名声を博した。　この聖ピメンは多くの病人を癒やし、多くの預言を行い、亡くなる2年前に、主のもとへ旅立つことをあらかじめ知って

[5738] 聖ピメンは生後110年でこの世を去った。その死は450年頃であった。

いた。聖ピメンは、遠く離れた場所にいた至福のククシャが斬殺されることを予見し、ペチェルスクの教会の中で大声でこう叫んだ。

「我らの兄弟ククシャが、今日、殺害された！」

そう言い終えると、ピメンは聖ククシャとその弟子[5739]と同じ日にこの世を去った。

このようにして、この三人は共に、目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない三重の喜びを得た（参照：コリントの信徒への手紙一 2:9）。 この喜びは、三位一体の唯一なる神が、御自身を愛するすべての人々のために備えてくださったものである。神に、今、常に、そして永遠に、栄光が帰せられる。アーメン。

聖リベリウス殉教者、ローマ教皇の記念日

記念日：8月27日

聖リベリウスは、教皇ユリウス[5740] の後を継いで司教の座に就いた。在位当初から、彼は正統信仰の熱心な擁護者であり、アリウス派と戦った聖アタナシウス・アレクサンドリアの絶え間ない擁護者であった。 （アリウス派に傾いていた）コンスタンティウス皇帝は、脅しや甘言を用い、側近を通じても、あるいは自ら直接に働きかけても、聖リベリウスに聖アタナシウス、ひいては正統信仰を非難させることはできなかった。 正統信仰に対するこのような不屈の姿勢 ゆえに、リベリウスはベリア――フラキア――へ追放された。しかし、コンスタンティウス皇帝がローマに滞在していた際[5741] 、自らの大司教を尊敬し愛していた民衆は、皇帝に対し、リベリウス教皇のローマへの帰還を懇願した。 しかし、ローマに戻る前に、リベリウスは第3回シルミウム公会議（半アリウス派）に召喚され、そこで同公会議の決定文への署名を強要された。その後、ようやくローマへの帰還を許可され、リベリウスは2年間の流刑を経てローマに戻った[5742] 。 しかしその後、リベリウスは（第3回シルミウム半アリウス派公会議の決定書への署名という形で表れた）自身の行いに対して深い悔い改めを示した。これは、誠実な悔い改めによって主への背きを償った聖使徒ペトロの模範に倣ったものである。 ローマにおいて、リベリウスは正教のために多大な尽力を行い、ついに主のもとへ召された[5743] 。

コルドゥブ司教、殉教者オシアス尊師の記念日

記念日：8月27日

この尊い方は、世俗の快楽から離れ、あらゆる美徳を身にまとい、コルドゥバ市の司教座に就きました[5744] 。正統な信仰を熱心に守り抜くため、彼は第一回全地公会議に出席し、アリウスの狂気を糾弾し、その魂を蝕む異端を根絶しようとしました。 そして、この公会議に全員が集合すると、彼はその非難の言葉をもってアリウスや他の多くの人々を痛烈に批判した。 正統派の司教たちが、

[5739] 聖ククシ聖殉教者とピメン・ポストニクの没年は、およそ1113年であった。

[5740] ユリウスは337年から352年まで教皇の座に就いていた。リベリウスは352年5月22日にローマ教皇の座に就いた。

[5741] コンスタンティウス皇帝は337年から361年まで在位した。彼は357年にローマに滞在しており、その際、民衆がリベリウスを流刑地から帰還させるよう懇願した。

[5742] リベリウスは358年にローマへ戻った。

[5743] 聖リベリウスは366年に逝去した。

[5744] コルドゥバ（現在のコルドバ）は、スペイン南部のベタ川（現在はグアダルキヴィラ川と呼ばれる）の右岸に位置していた。

アタナシオス大司教[5745] の追放に加担せず、アリウスの偽りの教えに同調しなかったことを理由に、コンスタンティヌス皇帝[5746] によって司教座から追放された後、彼もまた流刑に処され、そこで多くの苦難に耐えた末、この世を去った[5747] 。

聖ピメン（パレスチナ人）の記念日

記念日：8月27日

聖なる父たちソフロニオスとヨハネは、彼らの著書『[5748] 』の中で、この聖ピメノスについて次のように記している：

「アッバ・アガフォニク、すなわち我らの尊き父サヴァの修道院の院長が、私たちに次のように語った」と彼らは記している。

「ある時、私は」とアッバ・アガフォニクは語った。「ルヴの荒野へ、洞窟に住み、根を糧としていたアッバ・ピメンのもとへ向かっていた。 彼を見つけると、私は自分の思いを打ち明けた。すでに夕方になっていたため、彼は私をその洞窟に一晩一人残し、自身は別の洞窟へと去っていった。その夜は非常に寒く、私は寒さでひどく苦しんだ。翌朝、その長老が私のところに来て、こう尋ねた。

「わが子よ、昨夜はどのように過ごしたか？」

――私は――とアバ・アガフォニクは語る――彼にこう答えました：

「お許しください、父よ！ 一晩中、寒さでひどく苦しみました。」

すると彼は私にこう言いました：

「正直に言うが、わが子よ――私は寒さで少しも苦しむことはなかった。」

– それを聞いて（アガフォニクは語る）、私は大いに驚いた。というのも、その長老は裸だったからだ。それから、私は彼にこう尋ねた。

「父よ、私への愛を示してください。なぜ裸であるにもかかわらず、寒さに苦しむことがなかったのか、教えてください。」

すると、その老人は私にこう答えました：

「ライオンが来て、私のそばに横たわり、私の体を温めてくれたのだ。しかし、わが子よ、知っておいてほしい。私はやがて獣たちに食われてしまうのだ。」

そこで私は彼に尋ねた。

「父よ、なぜあなたは獣たちに食われてしまうのですか？」

すると、老人は私にこう答えた。

[5745] ここで言及されているのは、もちろん、アレクサンドリアの大司教である聖アタナシウス大聖人であり、アリウスの異端説に対して、神の子に関する正統な教義を力強く擁護した人物である。――彼の記念日は5月2日と1月18日に祝われる。

[5746] ここでの序文には誤り、あるいは誤植がある。正教会の司教たちがその座から追放されたのは、コンスタンティヌス皇帝ではなく、その息子でありアリウス派であったコンスタンティウスによるものであった。

[5747] 聖オシアは355年、聖アタナシウスを擁護したとして、コンスタンティウス皇帝によってシルミウムへ追放された。脅迫、投獄、暴行により、彼は357年の第2シルミウム公会議におけるアリウス派の信条に署名することを余儀なくされ、その後コルドバに戻されたが、359年に死去した（シュタッドラーによれば358年）。しかし、死の直前、彼は再びアリウス派を破門した。

[5748] 言うまでもなく、『リモナール』（あるいは『霊の牧場』）、すなわち隠遁者たちの偉業に関する教訓的な物語の集大成（第167章）のことである。

「私が故郷で世俗の生活を送っていた頃（二人はともにガラティア出身であった[5749] ）、私は羊飼いをしていた。ある日、羊の群れを放牧していると、ある男が私の群れのそばを通りかかった。私の飼い犬たちが彼に襲いかかり、引き裂いてしまった。　私は彼を犬たちから救うことができたが、そうはしなかった。そして、神の啓示によって、私もまた同じ死を遂げなければならないこと――すなわち、獣たちに引き裂かれることになる――を知ったのだ。

聖ピメンはこれをアガフォニク司祭に語った。そして、彼の言った通りになった。というのも、三年後、隠遁者ピメンが獣に食い殺されたことが明らかになったからである[5750] 。そして、彼の聖なる魂は、私たちの主イエス・キリストの憐れみにより、聖なる父たちの列に加えられた。主イエス・キリストに、永遠の栄光が帰せられる。

9月10日

8月28日（旧暦）

私たちの尊い父モーセ・ムリンの生涯

記念日：8月28日

エジプトの地には、モーセという名の、ムリン族出身の盗賊が住んでいた。[5751] 顔つきは陰鬱であった。当初、彼はある名高い主人の奴隷であったが、モーセが殺人を犯したため、その主人によって追放され、盗賊の一味に加わった。　その盗賊たちは、彼が力強く、厳しい気性であることを見て、彼を首領に選んだ。この聖なるモーセの物語は、彼の改心を明らかにし、モーセがいかにしてそのような悪しき生活から悔い改め、神に喜ばれる者となったかを知らせるためである；　なぜなら、聖人たちの（かつての）罪は隠されることなく、義なる者と不義なる者を分け隔て、罪人から義人を作り出す神の慈悲を称えるためである。

強盗行為を行う中で、モーセは仲間たちと共に多くの略奪や流血を繰り返し、その他多くの忌まわしい不法行為や犯罪を犯した。その残虐さゆえに、モーセは万人の間で悪名高く、誰もが彼を恐れていた。彼の強盗行為の中でも、特に次のような出来事が挙げられる。

モーセは、羊を飼っていたある羊飼いに恨みを抱いていた。その羊飼いが、かつて（群れを守る）犬たちを連れて、モーセが悪行を働くのを妨げたからである。ある日、その羊飼いがナイル川の向こう岸で羊を飼っているのを見たモーセは、彼を殺そうと企んだ。　ナイル川は（氾濫のため）水で溢れかえっていた。モーセは衣服を束ねて頭に結びつけ、口に剣を咥え、この大河を泳ぎ渡ろうとした。前述の羊飼いは、川を渡るモーセを遠くから目撃すると、羊を置き去りにしてその場から逃げ去った。　モーセは川を渡ったが、羊飼いの姿が見当たらなかったため、最も大きな子羊四匹を屠り、それらを縄で縛り、子羊たちを連れて ナイル川を再び渡った。 これらの子羊の皮を剥ぎ、モーセはその肉（非常に美味しかった）を食べ、皮を売って得た金でワインを飲んだ。

モーセは長い間、このような罪深い行いを続けていた。しかしある日、偶然にも彼は正気に戻った。それは、神が彼に憐れみを示し、悔い改めへと招かれたからである。何しろ、至善にして人を愛する主は、罪人の滅びを望まれるのではなく、彼らが救いへと立ち返ることを待っておられるから

[5749] ガラティア――小アジアの地域。

[5750] 聖ピメノスの死は6世紀末に訪れた。

[5751] すなわち、エチオピアの。

である。　この罪人は心を痛め、自らの悪行を悔い改め、強盗行為と仲間たちを捨て、荒野の修道院へと向かい、修道院長や兄弟たち、そして何よりも神ご自身への服従と従順に身を委ねた。　モーセは、かつて犯した罪を悔い改め、昼も夜も多くの涙を流した。彼に任されたすべての仕事や奉仕を、怠ることなく遂行し、立派な修道士となった。

しばらくして、モーセは隠遁者の小部屋へと移った。そこで彼は独り暮らしをし、神について思いを巡らせながら、かつて犯した不義を温かい悔い改めによって清めていた。

モーセがこのように悔い改めの生活を送っていたとき、修道室にいた彼に、それがモーセであることを知らなかった四人の強盗が襲いかかった。彼はたった一人でありながら、彼らを打ち負かし、縛り上げ、束ねた麦の穂のように肩に担いで修道院の教会へと運び、兄弟たちにこう言った。

「彼らをどうすべきか、ご助言をください。私は誰をも傷つけるべきではありませんが、彼らが私のところに来たので、捕らえたのです。」

修道士たちは彼に、その強盗たちの縄を解き、自由の身にしてやるよう命じ、こう言った。

「我々は誰をも殺してはならない。」

一方、強盗たちは、その人物がかつて自分たちの頭目であったモーセであることを悟り、彼の生き方のこのような変化に驚き、神を賛美した。そして自らも心を打たれ、神への畏れを抱き、悔い改めた末、立派な修道士となった。

そして、この四人だけでなく、他の強盗たちも、彼らの首領モーセが悔い改めて修道士になったという話を聞き、同様に強盗やあらゆる罪深い行いを捨て、徳の高い修道士となった。

こうして、モーセは悔い改めの苦行に励んでいた。当初、淫行の悪霊たちが彼を罪深い思いで苛み、その情欲をかき立て、かつての淫らな生活へと引き戻そうとした。彼は後に兄弟たちにこう語った。

「私は肉欲と闘う中で、これほど大きな苦難に遭い、修道誓願を破りそうになったほどでした。」

彼はアッバ・イシドール長老のスキートを訪れ、肉欲による苦しみについて打ち明けた。すると、聖イシドールは彼にこう言った。

「気にするな、兄弟よ！　あなたはまだ初心者の身（すなわち、修行を始めたばかり）である。それゆえ、悪魔たちは、あなたの中に以前の性情を見出そうとして、激しく襲いかかってくるのだ。彼らを追い払うために、日々の断食と禁欲を守り、腹を完全に満たさないようにすることを勧める。」　まるで、肉屋が投げ捨てる骨をかじることに慣れた犬が、店が閉まるまでその場を離れないように――　しかし、商売が終わり、犬に何か食べ物を投げ与えてくれる者がいなくなると、犬は飢えに耐えかねてその場を離れる。それと同じように、淫行の悪魔は、満腹になるまで食べ続ける人のそばに潜んでいるのだ。　しかし、もしあなたが絶えず断食と節制を守り、この世の肉体を死なせ、満腹への扉を断食によって塞ぎ、罪深い欲望をかき立てる満腹が自分の中に入ってくるのを許さなければ、その悪霊は、まるで飢えに疲れ果てたかのように、悲しみを帯びてあなたから離れていくでしょう。

神の僕モーセは、自分の小部屋へと向かい、そこに閉じこもって日々の禁欲生活を送り、日没後の夕方にごくわずかなパンを口にするだけだった。モーセは手仕事に非常に励み、一日に五十回も立ち上がって、ひざまずいて祈りを捧げた。

しかし、モーセが労苦と苦行によって肉体を苦しめていたにもかかわらず、罪へと誘う肉欲は彼の中から消え去らなかった。そこで彼は再びアッベ・イシドルのもとへ行き、こう言った。

「父よ！　私は自分の修道室にいられません。肉欲の情に苛まれているからです。」

すると、聖イシドールは彼を連れて、自分の小部屋の二階へと案内し、こう言った。

「西の方を見てごらん！」

モーセが目を向けると、そこには無数の恐ろしい悪魔たちが、慌ただしく動き回り、戦いの準備をしているのが見えた。

すると、アッバ・イシドールは言った。

「さあ、今度は東の方を向いて見てごらん。」

東の方角を見やると、モーセは、同じく戦いの準備をしている、数え切れないほどの聖なる光を放つ天使たちを見た。

そして、聖イシドールはモーセにこう言った。

「西にいる者たちは、神の聖徒たちに戦いを挑んでいるが、東にいる者たちは、主によって善き修道士たちを助けるために遣わされているのだ。私たちに立ち向かう者たちよりも、私たちを助けてくれる者たちの方が多いことを知っておきなさい。」

モーセは、この幻と長老の言葉によって力を得て、自分の小部屋に戻り、再びいつもの苦行と祈りの務めに励み始めた。

しかし、その後も戦いは彼を離れることはなかった。それどころか、モーセは夢の中の妄想に煽られ、敵からさらに激しい苦しみを受けるようになった。そこで、彼は起き上がって、非常に経験豊富な別の聖なる長老のもとへ行き、こう言った。

「アッバよ、私はどうすればよいのでしょうか。眠りの中の幻が私の心を曇らせ、肉体を煽り立て、情欲を甘やかし、私を元の罪深い生活様式へと駆り立て、幻影で私を惑わせているのです。」

長老は彼にこう答えた。

「あなたがその忌まわしい幻に悩まされているのは、快楽に満ちた空想から心を遠ざけていないからだ。だから、私の言う通りにしなさい。徹夜祈祷に身を捧げ、少しずつそれに慣れ、活気を持って祈りなさい。そうすれば、あなたはその戦いの束縛から解放されるだろう。」

モーセは、経験豊かな聖なる導師からのこの良き助言を受け入れ、独房に戻って徹夜の祈り（すなわち、一晩中祈りを捧げながら目を覚まし続けること）を学び始めた。　彼は一晩中、小部屋の真ん中に立ち、眠りに落ちないよう祈りの際に膝を屈めることなく、目を閉じることなくまっすぐに立っていた。

聖人はこの修行を六年間続けたが、それでもなお、霊と戦いを繰り広げる肉欲から逃れることはできなかった。なぜなら、神は、この尊い方が炉の中で金のように試練を受け、他の苦行者たちと共に栄光の冠を受けることができるように、あえてそう許されたからである。

しばらくして、この勇敢な修道士は新たな過酷な修行を思いついた。夜、自分のケリアを出て、荒野の老修道士たちの隠遁所を巡り、各ケリアのそばに置かれた空き水瓶を手に取り、老修道士たちが気づかないうちに水を運んだのである（その場所は、水場から離れた場所にあった）。　長老たちの中には、水源から二ポプリシャ[5752] 離れた場所にケリヤを持つ者もいれば、三、四、あるいはそれ以上離れた場所にケリヤを持つ者もいた。また、高齢のあまり、自分では全く水を運ぶことのできない者もいた。モーセは毎晩、そのような者たちの器に水を満たしていた。聖モーセのこのような行いは、悪魔にとって憎むべきものであった。　神の御許しにより、悪魔は聖モーセに次のような災難をもたらした。

ある夜、その勤勉な聖人は、ある老人の器を持って井戸に身を乗り出し、水を汲もうとしていた。その時、悪魔は大きな力で木の棒を彼の背中に打ちつけた。聖人は意識を失って倒れ、まるで死んだかのように横たわっていた。

翌朝、その井戸に水を汲みに来た修道士たちは、半死半生の状態で横たわっているモーセを目にした。　修道士たちは、偉大なスキトスのアッバ・イシドールのもとへ行き、すべてを報告した。

[5752] ポプリシュチェ――長さの単位で、およそ2キロメートルに相当する。

すると彼は兄弟たちを連れてやって来て、モーセを運び出し、教会へと連れて行った。モーセは、まるで麻痺したかのように体が不自由で、ひどく苦しんでいたため、ようやく1年後に回復した。

その後、アッバ・イシドールは彼にこう言った。

「兄弟モーセよ！　悪魔との戦いを、自分の力の及ぶ範囲を超えて拡大してはならない。大胆さにおいても、節度を保つことが必要だからだ。」

キリストの無敵の戦士モーセは、これに対しこう答えた。

「あの忌まわしい夢が私を離れるまでは、戦いを終わらせるつもりはない。」

すると、アッバ・イシドールは彼にこう言った。

– 我らが主イエス・キリストの御名において、今やこれらの肉欲はあなたから去りつつある。今やあなたは平安のうちにいる。さあ、大胆に歩み寄り、キリストの聖なる御体と御血の秘跡を受けなさい。　知れ、このような厳しい肉欲との戦いがあなたに許されたのは、あなたが自分の断食や修行によって情欲を克服したかのように心の中で驕ることなく、また、驕り高ぶって滅びることのないようにするためであったのだ。

この言葉を聞いたモーセは、神の聖体と聖血の秘跡を拝領し、自分の修道室に戻り、以前のような苦悩から解放され、厳格な断食と沈黙の生活を送りながら、もはや平穏のうちに修行に励んだ。

しばらくして、モーセは「情欲に悩まされているか」と尋ねられた。モーセはこう答えた。

「キリストの僕イシドールが私のために祈って以来、私はもはや肉欲に苦しむことはありません。」

これほど大きな試練を経た後、至福のモーセは神の憐れみにより（心の）平安を得て、それ以来、肉欲の誘惑に悩まされることなく生涯を送った。同時に、彼は神から悪霊に対する偉大な権威を授かり、悪霊たちを虫けらのように軽蔑するようになった。そして、聖霊の恵みに満たされ、修道者たちの間で称賛された。

聖モーセはその徳高い生活によって名声を博したため、その国の君主（統治者）も彼のことを知った。君主はアブ・モーセに会いたいと願い、修道院へと向かった。　長老は、領主が彼（モーセ）に会いに来るつもりであるという知らせを受けた。しかし、モーセはケリアから出て、沼地や葦原へ逃げ込もうと企てた。ところが、領主と共にいた家来たちが彼に出くわし、こう尋ねた。

「アッバ・モーセのケリアはどこにあるのか？」

彼は彼らに言った。

「彼に何の用があるのですか？　あの長老は分別がなく、非常に偽り深く、罪深い生活を送っています。」

彼らはその言葉を聞いて驚き、そのまま通り過ぎていった。そして神殿に着くと、王子は聖職者たちに言った。

「アッバ・モーセの話を聞き、彼から祝福を受けに参りました。しかし、エジプトへ向かうある修道士に出くわし、アッバ・モーセがどこに住んでいるか尋ねたところ、彼はモーセを中傷し、彼を分別のない老人であり、嘘つきで、罪深い生活を送っている者だと非難しました。」

これを聞いて、聖職者たちは深く悲しみ、こう尋ねた。

「聖なる人物に対してこのような誹謗中傷を口にしたその老人は、一体どのような人物だったのですか？」

彼らは答えた。

「背が高く、顔つきが陰鬱で、粗末な服を着た老人でした。」

聖職者たちは言った。

「まことに、その方はアヴヴァ・モーセその人でした。しかし、彼はあなた方に自分の正体を明かすことを望まず、あなた方からの敬意を受けることも望まなかったため、あたかも他人のことであるかのように、自分自身について悪口を言ったのです。」

多くの（精神的な）恵みを受けた公爵は、神を賛美してその場を去った。

このように、尊者モーセは世間の名声や敬意を避け、彼を訪ねてくる信徒たちとの会話を好まなかった。とはいえ、彼はもてなしの心にあふれており、彼を訪ねてくるすべての巡礼の兄弟たちを愛をもって迎え入れていた。その旅人への愛については、『オテチニク』にも記されている。

ある日、スキートに住むすべての隠遁者たちに、次のような命令が下された。

「今週一週間、断食を行い、過越の祭りを執り行いなさい。」

たまたま、エジプトから来た巡礼の兄弟たちがモーセのもとを訪れた。長老は彼らのために少量の煮物を用意したが、隣人たちがその煙を見て、聖職者たちにこう言った。

「モーセは命令に背き、自分用に食事を調理している。」

しかし、聖職者たちはこう言った。

「彼が集会に来たら、その時に彼を非難しよう（というのも、皆、モーセの断食の行いを知っていたからだ）。」

安息日になると、モーセは聖堂の合唱に参加するためにやって来た。すると、すべての聖職者の面前で、彼にこう言われた。

「モーセよ！ あなたは人間の戒めを破ったが、神の戒めは果たしたのだ。」

また、聖アルセニオスの伝記には次のように記されている。

ある兄弟が、聖アルセニオスに会おうと遠くからスキート（隠遁所）を訪れた。アルセニオスの元へ案内され、その兄弟は彼を目にしたものの、その言葉を聞くことは許されなかった。というのも、長老（アルセニオス）は黙って座り、地面を見つめていたからである。

その後、その巡礼の修道士は、修道に入る前は強盗だったモーセのもとへ連れて行ってほしいと、その兄弟に懇願し始めた。兄弟はその願いを聞き入れ、彼を聖モーセのもとへ案内した。

彼らがモーセのもとに着くと、モーセは喜びをもって彼らを迎え入れ、休息をとって食事をとるよう勧め、深い愛を示した後、彼らを見送った。

帰り道、スキトスの修道士は来訪者にこう言った。

「さあ、あなたはアルセニイ神父にも、モーセ神父にも会った。あなたとしては、どちらが優れていると思うか？」

修道士はこう答えた。

「私たちを愛をもって迎え入れてくれた方が、より優れている。」

――ある修道士は、この話を聞くと、神に向かって次のように祈り始めた。

「主よ！　どちらがより完全であり、あなたのより大きな恵みに値するのか、教えてください。あなたのために人々から身を隠す者か、それとも、やはりあなたのためにすべての人を受け入れる者か？」

この修道士は、その祈りへの答えとして、次のような幻を見ました。ある非常に大きな川を航行する二隻の船が目に浮かんだのです。一隻の船には聖アルセニオスが乗っており、神の御霊がその船を操り、深い静寂の中で彼を守っていました。もう一隻には聖モーセが乗っており、　その船は神の天使たちが操り、モーセの口に蜜を注いでいた。

長い間、断食の修行に励んだ後、聖モイセイは神からのある啓示により、長老の位を授けられた。そして、司祭の第一位に叙階された際、スティハールを身にまとわされた。その時、司教は彼にこう言った。

「見よ、アッバ・モーセは今や全身が白くなった。」

するとモーセは司教にこう言った。

「主教様！　人を司祭たらしめるのは、外的なものか、それとも内的なものか（つまり、彼はこう言いたかったのです。「人を外側から覆う衣が、その人を司祭職にふさわしいものにするのか、それとも内面の美徳なのか？」と）。

司教は、モーセを試して、彼が本当に魂の奥底に美徳を宿すキリストの僕であるかどうかを確かめようと、聖職者たちにこう言った。

「モーセが祭壇に入ってきたら、彼を追い出せ。それから彼の後を追って、彼が何を言うか聞きなさい。」

聖職者たちはその通りにした。モーセを祭壇から追い出し、こう言った。

「出て行け、黒人め！」

すると彼は外に出て、人目につかない場所に立ち、自らを責め始め、こう言った。

「お前はよくやられたものだ、犬め。よくやられたものだ、闇のようなエチオピア人よ。お前にはその資格などないのに、どうして聖なる場所に踏み込むなどという大胆なことをしたのか。お前は人間ですらない。それなのに、どうして人々に、そして神の僕たちに近づくなどという大胆なことをするのだ？」

聖人のこの言葉を聞いた聖職者たちは、それを司教に報告した。すると司教は、モーセを再び祭壇に呼び出すよう命じ、彼を長老の位に叙階した。その後、司教は彼にこう尋ねた。

「父よ、追放された後、再び戻された時、あなたは何を思っていたのですか？」

モーセはこう答えました。

「私は自分を、追い出されると逃げ出すが、呼び戻されるとすぐに戻ってくる犬に例えていました。」

すると、司教は言った。

「まことに、この人は神の恵みにふさわしい。神は謙遜な者に恵みを与えられるからだ。」

同様の試練は、この父がまだ修道生活の初期にあった頃にもあった。兄弟たちが皆、スキートに集まっていた時、長老たちはモーセの謙遜さを試そうと、彼を貶め始め、こう言ったのである。

「このエチオピア人は、なぜ我々の間を歩き回っているのか？」

彼はそれを聞いても、黙っていた。

兄弟たちが解散しようとしたとき、彼にこう尋ねた。

「モーセ父よ！　あなたは動揺しているのですか、それともそうではないのですか？」

彼は詩篇の言葉で答えた。*「私は動揺して、言葉も出ない」*（詩篇76:5）（すなわち、私は黙って侮辱に耐えている）。

長老の位を受け、敬虔なるモーセは、生後75歳となり、さらに15年間修業に励んだ。75人の弟子たちを周囲に集めた後、彼は殉教の死を遂げた[5753]。その経緯は次の通りである。

ある日、兄弟たちの間にいたとき、彼はこう言った。

「まもなく野蛮人たちが修道院に押し寄せ、修道士たちを斬り殺そうとしている。立ち上がって、ここから逃げなさい。」

すると、兄弟たちは彼にこう尋ねた。

「なぜ、父よ、あなたはここから逃げないのですか？」

しかし、彼は彼らにこう答えました：

「私はすでに長年にわたり、私の主イエス・キリストが*『剣を取る者は皆、剣によって滅びる』*（マタイ26:52）と仰せになった御言葉が、私の上に成就する時を待ち望んでいるのだ。」

すると、兄弟たちは彼に言った。

[5753] 聖モーセ・ムリーナの没は、400年頃のことである。

「私たちも逃げたりはしません。あなたと共に死にます！」

しかし、彼は彼らにこう答えた。

「その必要はない。各自が最善だと思うように行動すればよい。」

すると、兄弟たちはその場から逃げ去り、ただ七人の修道士だけが尊者のもとに留まった。しばらくして、長老は彼らに言った。

「野蛮人たちがもうすぐそこまで来ている！」

前述の七人の修道士の一人は、恐怖に駆られて独房から逃げ出し、ある場所に身を隠した。野蛮人たちは小部屋に入り、聖モーセと彼と共にいた六人の修道士を殺害した。死を免れた修道士は、隠れ場所に身を潜めながら、天が開き、七つのまばゆいばかりの冠が天から降りてくるのを見た。

野蛮人たちが去った後、その修道士は独房に戻り、モーセと他の修道士たちが殺害されているのを発見した。彼らの遺体は血にまみれて横たわっていた。これを見た修道士は泣き出した。その後、残りの兄弟たちがやって来て、泣きながら殺害された修道士たちを葬った。

こうして、強盗から修道士となり、心からの悔い改めによって神に喜ばれた、私たちの尊い父モーセ・ムリーナの生涯は幕を閉じた。彼は殉教者として、楽園だけでなく天そのものをも開かれ、栄光の冠を授けられたのである。　その祈りによって、私たちをも真の悔い改めの道へと導き、私たちをも天の御国にふさわしい者とさせてくださいますように。人を愛する主キリスト、私たちの神よ。父と聖霊と共に、今、常に、そして永遠に、栄光と誉れが捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

荒野の住人、肉体のうちにあって天使、そして奇跡を行う者、神を宿す我らの父モーセよ。断食と徹夜祈祷と祈りによって、天からの賜物を受け、病める者を癒やし、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る魂たちを救い給う。　あなたに力を与えた方に栄光あれ。あなたを冠した方に栄光あれ。あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

コンダク、第4調：

ムリナを耳に突き刺し、悪魔の顔に唾を吐きかけ、あなたは心の中で、まるで明るい太陽のように輝き、あなたの生涯の光と教えによって、私たちの魂を導いてくださいました。

我らの尊き父サヴァ・クリペツキー、プスコフの奇跡行者の記念日

記念日：8月28日

尊き父サヴァは、異国の地で生まれ、教育を受け、修道者となった。彼がどの国出身であったかは不明である[5754]　。ただ、彼がロシアの地で生まれたのではなく、外国人としてプスコフの街にある、スニャトゴルスクと呼ばれる聖母マリア修道院[5755] にやってきたことだけが知られている。 修道院長に受け入れられると、彼は修道者として勇敢に修行に励み、その徳高い生き方によって、すべての人々から称賛と栄誉を勝ち取った。　しかし、人々からの名声を望まなかった彼は、トルヴァ川沿

[5754] ヴェルシンスキーの月暦によれば、聖サヴァは出身地がセルビアであった。

[5755]　スニャトゴルスクの聖母修道院は、プスコフ地方で最も古い修道院の一つであり（1265年に言及されている）、プスコフから4ヴェルスタ離れたヴェリカヤ川のほとり、「スニャトナヤ・ゴラ」と呼ばれる地域に位置していた。

いの偉大なるエウフロシンの修道院[5756] へと移った。尊者エウフロシンは彼を受け入れ、修道院の奉仕者としての務めを果たすよう命じた。修道士サヴァは、これらの務めを熱心に、そして謙虚に果たした。　しばらくして、偉大なるエウフロシノスから祝福を請うと、彼はエウフロシノスの修道院から15ポプリシュの距離にある、クリペツと呼ばれる湖のほとりの荒野へと向かい、そこは完全に人里離れた場所に定住した。ここで、尊者サヴァは悪魔からの数多くの誘惑に耐え抜いた。　やがて彼は、自らの修行の地であるその場所に聖ヨハネ・テオロゴスに捧げる教会を建て、修道室を整え、修道院を設立した。その後、彼の元にはかなりの数の修道士たちが集まった。彼の徳高い生活に関する評判は瞬く間に広まり、プスコフ公ヤロスラフ・ヴァシリエヴィチもそのことを知った[5757]。公は尊者に対して深い敬意を抱いていた。彼は修道院の整備のために多額の寄付を行い、修道士たちの生計のために土地[5758] や湖を寄進し、尊者から祝福を受けるために自らも頻繁に修道院を訪れていた。ある時、彼は妻である公妃を伴って修道院を訪れた。聖サヴァは彼を大いなる敬意をもって迎え入れたが、公妃の修道院への立ち入りは許さず、修道院の門の外で彼女に祝福を与え、病を患っていた彼女を癒やした。

聖サヴァは長きにわたり生き、1495年8月30日、[5759] に主のもとへ召された。　その聖遺骨は、1554年に、彼が建立したイザヤ修道院に聖なる修道士が現れたことをきっかけに発見され、今日に至るまで、信仰をもって訪れる人々に多くの癒やしをもたらしている。これは、今、常に、そして永遠に栄光あれ、キリスト・神の栄光のためである。

聖なる義人アンナの記念日

記念日：8月28日

聖なる義人アンナはアシロの部族の出身であり、ファヌイロの娘であった。その名（アンナはヘブライ語で「慈悲深い」を意味する）が示す通り、彼女は徳の高い女性であった。　その敬虔な生涯により、アンナは預言の賜物を授かりました。高齢に達してもなお、福音書の言葉にあるように、*「神殿を離れず、断食と祈りをもって昼も夜も神に仕えていた」*（ルカ2:37）のです。

聖アンナは、メシアの到来を心待ちにしていた敬虔なユダヤ人女性の一人であり、ヨセフとマリアは、幼子キリストに定められた儀式を執り行うために、この神殿に彼を連れてきたのである。その時、神を受け入れたシメオンは幼子イエスを抱き上げ、彼について次のような驚くべき預言を語った。

「主よ、今、あなたは御言葉どおり、あなたのしもべを平安のうちに去らせてくださいます。私の目は、あなたがすべての民の目の前で備えてくださったあなたの救い、異邦人を照らす光、そしてあなたの民イスラエルの栄光を見たからです」（ルカ2:29–32）。

その後、シメオンは主の母に目を向け、彼女に次のような預言を語った。

[5756] これは、プスコフ州のトルヴェ川沿い、プスコフから30ヴェルスタの場所にあったスパソ＝ヴェリコプスティンスキー修道院であり、1450年頃に聖エウフロシンによって創建された。聖エウフロシンの記念日は5月15日である。この日付には、彼の記念日も記載されている。

[5757] これは、プスコフを統治していたヤロスラフ・ヴァシリエヴィチ・オボレンスキー公であった。

[5758] 1487年、ヤロスラフ・ヴァシリエヴィチ公は修道院のための土地に関する勅書を発行し、苔や沼地を越えて聖サヴァ修道院へと続く、長さ1400サジェーニの橋を建設するよう命じた。この橋は今日でも「ヤロスラフ橋」と呼ばれている。

[5759] ここ『プロローグ』には誤植があると推測される。なぜなら、聖サヴァに関するすべての伝承において、彼の没日は8月28日と記されているからである。

「*見よ、この子は、イスラエルの多くの人々のつまずきとなり、また立ち上がりとなるでしょう。また、論争の的となり（あなた自身の魂も剣が貫くでしょう）、多くの人の心の思いが明らかにされるのです*」（ルカ2:34–35）。

この聖なる厳粛な瞬間に、神殿には聖なる義人であり預言者であるアンナがいた。彼女はこの時、すでに八十四歳になっていた。こうして、人生の黄昏に、彼女は幼子イエスを見るという幸いに恵まれた。これで、彼女は安らかに息を引き取ることができた。

シメオンのキリストに関する預言を聞き、彼女はシメオンと共に主を賛美し、エルサレムで救いを待ち望んでいたすべての人々に主について語った[5760]。

9月11日

8月29日（旧暦）

主の聖なる預言者、先駆者、洗礼者ヨハネの首が切断されたという伝承

8月29日の記念日

聖ヨハネ、主なる神および我らの救い主イエス・キリストの先駆者は、その死をもって、主の誕生と主の死の両方を先取りすべきであった。また、地上で「*わたしより力ある方が、わたしの後に来られる*」（マルコ1:7）と語ったように、地獄にいた聖なる先祖たちの魂に対しても、主の到来を宣べ伝えるべきであった。なぜなら、洗礼者ヨハネはそこで、世が待ち望んでいたメシアがすでに現れたことを告げなければならなかったからである。　また、私たちの主イエス・キリストが人々の罪のために苦難を受けられたのと同様に、その先駆者もまた、ヘロデの不法のために苦難の死を遂げることとなった。その経緯は次の通りである：

アンティポスと呼ばれたヘロデは、ベツレヘムの幼子たちを虐殺した初代ヘロデの息子であり、邪悪な根から生えた邪悪な枝のような人物であった。彼はガリラヤを支配下に置いており、当初はアラビアの王アレファの娘と結婚し、彼女と長い間共に暮らしていた。　しかしその後、実の兄弟フィリポの妻であるヘロディアの美しさに魅了され、彼女と親密な関係になった。というのも、彼女は彼の情欲に応じていたからである。この淫婦の要求により、彼は最初の正妻を追い払い、法律に反して兄弟の妻と結婚した。　というのも、たとえ兄が死んだとしても、その妻から生まれた兄の娘が存命である限り、彼はその妻を娶ることはできなかったからである。律法は、亡くなった兄に子供が残されていない場合に限り、その妻（未亡人）を娶ることを命じていたからである[5761]。　確かな伝承に

[5760] 聖アンナの記念日は、聖シメオン・ボゴプリイムツの記念日とともに、2月3日にも祝われる。

[5761] ユダヤ人の間にある、先祖から受け継がれた古くからの「ウジチェスト」という慣習は、『申命記』の記述によれば、次のようなものであった。　「*兄弟が共に住んでいて、そのうちのひとりが息子を持たずに死んだ場合、死者の妻は他人の男のもとへ嫁いではならない。むしろ、彼女の義兄が彼女のもとに入り、彼女を妻として迎え、彼女と共に暮らさなければならない。　――そして、彼女が産む長子は、亡くなった兄弟の名を継ぐものとする。そうして、その名がイスラエルから消え去らないようにするためである。もし彼がその嫁を妻に迎えることを拒むならば、その嫁は町の門にある長老たちのところへ行き、こう告げなければならない。『私の義兄は、イスラエルにおいて兄弟の名を存続させることを拒み、私と結婚することを望んでいません』。そのとき、その町の長老たちは彼を呼び出し、説得しなければならない。もし彼が立ち上がって、「彼女を妻に迎えるつもりはない」と言うなら、その嫁は長老たちの目の前で彼のところへ行き、彼の足から靴を脱がせ、彼の顔に唾を吐きかけ、こう言わなければならない。　『これは、兄弟のために家（イスラエルにおいて）を築かない者に対する処置である』と。そして、イスラエルにおいて、彼を「靴を脱がされた家」と呼ぶ*」（申命記25:5–10）。ユダヤ人において、族長ヤコブの時代より前に始まったこの「義兄弟の義務」の慣習は、モアブ人に

よれば、ヘロデは、兄フィリッポがまだ生きている間に、その妻を奪ったという。こうして彼は、略奪者、姦淫者、近親相姦者として、大いなる不法を犯したのである。

ヘロデによるこのような不法行為を目の当たりにし、神の律法の守り手であり、人間の罪を糾弾し、悔い改めを説く者である聖ヨハネ・バプティストは、沈黙を守ることはなく、万人の面前でヘロデを、兄弟の妻を奪った姦通者かつ強奪者として糾弾し、彼にこう言った。

「あなたは、あなたの兄弟フィリポの妻を妻にしてはならない。」

しかし、ヘロデはその非難に耐えかね、ヨハネを足枷をはめて牢獄に閉じ込めるよう命じた。とりわけ、ヘロデの妻ヘロディアは聖人に激しく怒り、彼の死を強く望んでいたが、彼を殺すことはできなかった。なぜなら、ヘロデ自身が、妻の殺意から囚人を守っていたからである。 ヘロデはヨハネを義人であり聖人であると考えていた。以前、彼はヨハネの言葉を喜んで聞き、その教えに従って多くの善行を行っていた。それゆえ、ヘロデはヨハネを死に追いやることを恐れていた。 しかし、彼は神を恐れるというよりは、むしろ人々を恐れていた。福音書記者マタイが言うように、*「彼を殺そうとしたが、民を恐れた。民は彼を預言者と見なしていたからである」*（マタイ14:5）; ヘロデは、民が自分に反旗を翻し、反乱を起こすのではないかと恐れていた。この理由から、彼は、万人に愛され、敬われている預言者であり、主の洗礼者であるヨハネを公然と死刑に処すことを敢えてせず、ただ牢獄に閉じ込めて苦しめ、自分を非難し続けるその口を封じようとしたのである。

聖ヨハネは長い間牢獄に閉じ込められていた。弟子たちは彼のもとに集まり、ヨハネはしばしば、神の律法に従って徳ある生活を送るよう彼らを教え、すでにこの世に来られたメシアについて告げ知らせ、彼らをそのメシアのもとへ送り出した。これは福音書にも次のように記されている。 *「さて、ヨハネは牢獄の中でキリストの御業を聞き、弟子たちのうち二人を遣わして、キリストにこう尋ねさせた。『あなたは、来るべき方ですか。それとも、私たちは別の誰かを待つべきでしょうか』」*（マタイ11:2–3）。彼が問い合わせてくるように送ったのは、自分自身が知らなかったからではない。なぜなら、自分が洗礼を授け、天から降りてくる聖霊を見た方、その方について父なる神の証しの声を聞き、そして最後に自ら指をさしてこう言った方を知らないはずがないからだ。

「見よ、神の小羊だ」（ヨハネ1:36）。

ヨハネは、弟子たちが主のなされる栄光に満ちた奇跡をこの目で確かめ、主（イエス・キリスト）が人類を救うために来られたことを完全に確信できるようにと、弟子たちを遣わして主に尋ねさせたのである。

しばらくして、ヘロデが恒例として自身の誕生を祝う日が来た。ヘロデは、すべての諸侯、総督、長老たち、そしてガリラヤのテトラルコスたち[5762] を召集し、彼らのために盛大な宴会を催した（マルコ6:21）。この宴の最中、ヘロディアの娘が踊りを披露し、その踊りでヘロデと彼と共に席に着いていた者たちを大いに喜ばせた。 残酷な母の教えに従い、彼女はヘロデに洗礼者ヨハネの首を求め、その願いを叶えられた。というのも、ヘロデは、たとえ自分の王国の半分であっても、彼女が何を求めようとも与えると彼女に誓っていたからである。 この忌まわしい男は、自らの誓いを破ることも、踊り子の忌まわしい母を悲しませることも望まなかったが、それまでヨハネを殺すことを躊躇わせていた恐怖を忘れ、またヨハネの聖なる生涯をも忘れ、まるで酒に酔ったかのように、罪なき者の血を流そうという意図に燃え上がった。 そして直ちに、彼は処刑人を牢獄へ送り、ヨハネの首を切り落とし、皿に乗せて持ち帰るように命じた。

も存在していた。 また、ペルシャ人など他の東方の民族の間でも知られていた。その起源については様々な説があるが、おそらくその説明は、東方の民族が、子孫を通じて自らの家系と名を永続させたいという強い願望に求めるべきであろう。

[5762] 諸地域の統治者たち。

このようにして、キリストの先駆者ヨハネは、ヘロデとヘロディアの不法な同棲を糾弾したために、深夜になって獄中で首を刎ねられた。というのも、その忌まわしい宴は、聖福音書記者マルコによって「晩餐」と呼ばれているからである。「（福音書記者はこう述べている）*彼は自分の高官たちのために宴を開いた*」（マルコ6:21）。この晩餐会は真夜中を遥かに過ぎてまで続き、皆がすでにワインでひどく酔いしれ、前述の恥知らずな乙女の踊りに十分な時間を楽しんでいたその時、まさにその時に、あの不義な殺害が行われたのである。　そして、聖ヨハネの首が皿に乗せられて宴会の真ん中に運ばれてきたが、その際、血はまだ滴り落ちており、（ある説によれば）首は斬られた後もなお、ヘロデに向かって次のような非難の言葉を語り続けたという。

「あなたは、あなたの兄弟フィリッポの妻を妻にしてはならない。」

ああ、あの晩餐の席に横たわっていた者や立ち会っていた者たち全員が、どれほど大きな恐怖に襲われたことか。皆が、血を流し、さらに口を動かし言葉を語り続ける人間の首が、まるで料理であるかのように皿に乗せられて運ばれてくるのを目撃したのだ。そして、その首を踊り子がその厚かましい手で掴み、母親のもとへ持ち去った。　ヘロディアはそれを受け取ると、自分の不義を告発していたその舌を針で刺し貫いた。　十分に嘲笑した後、ヘロディアはヨハネの首を遺体と共に埋葬することを許さなかった。なぜなら、もし首が遺体に合わされれば、ヨハネが復活し、再び彼女とヘロデを非難し始めるのではないかと恐れたからである。　聖なる先駆者の遺体は、その夜、弟子たちによって牢獄から運び出され、セバスティアに埋葬された。一方、洗礼者ヨハネの首は、ヘロディアによって、彼女自身の宮殿内の、ある不名誉で人目につかない場所に埋められた。　洗礼者ヨハネの首がそこからどのようにして取り出されたかについては、この尊い首の発見が祝われる2月24日の項に記されている。

主の栄光ある先駆者であり洗礼者である聖ヨハネが殺害された後、呪われたヘロデは、これにも劣らない別の悪行を犯した。すなわち、聖福音記者ルカが語るように、彼は私たちのために自発的に苦難を受けられた主イエス・キリストを嘲笑したのである。　「*ヘロデは兵士たちと共に、イエスを辱め、嘲り、白い衣を着せて、ピラトのもとへ送り返した*」（ルカ23:11）。

しかし、預言者を殺し、キリストを冒涜した者に対する神の報いは、遅れることなく下った。なぜなら、一方では、ヨハネの血が、かつてカインに対するアベルの血のように（創世記4:1–16）、ヘロデに向かって神に叫び求めたからであり、　他方、ヘロデのその他の不法行為（とりわけ、我らの主イエス・キリストに対する冒涜）は、彼に神の義なる懲罰を招いた。そして実際、ほどなくしてヘロデは、ヘロディアと踊り子と共に、王位と命を失った。　というのも、アラビアの王アレファは、娘に対する不名誉と侮辱への復讐として、兵士たちを集め、彼らを率いてヘロデに攻め込んだからである。同様に、ヘロデもまた、自らの兵士たちを集め、アレファとの戦いに臨んだ。　両軍の兵士たちによる激しい戦闘が繰り広げられ、アレファの軍勢がヘロデの軍勢に勝利した。ヘロデは惨敗を喫し、彼の兵士たちはほぼ全滅し、彼自身もかろうじて命からがら逃げ延びた。　その後、ヘロデはローマ皇帝によって権力とすべての富を剥奪され、姦通を犯した女とその娘と共に、当初はガリアの都市リヨンへ、その後そこからスペインの都市イレルダへと流刑に処され、そこで苦難と貧困の中で生涯を閉じた。　しかし、死の前に、彼は娘である舞姫の死を目撃した。彼女は次のようにして命を落としたのである。

ある冬の日のこと、彼女はある用事でシコリスという名の川を渡ろうとした。渡っている最中、足元の氷が割れ、彼女は水の中に落ち、首まで水に浸かってしまった。神の裁きにより、氷が彼女の首を締め付け、体は水中に沈んだまま、頭だけが氷の上に出た状態となった；　かつて彼女が地上で足を踏み鳴らして踊っていたのと同様に、今回も彼女の足は地面に届かず、ただ水中で踊るように無力な動きを繰り返していた。川の流れが彼女を揺さぶっていたが、誰も彼女を助けることはできなかった；　そして、その忌まわしい女は、鋭い氷が彼女の首を切り裂くまで、その姿勢のまま水中に

ぶら下がっていた。水流に流されて氷の下に沈んだ彼女の忌まわしい死体は発見されなかったが、その首は、かつて洗礼者ヨハネの首がそうであったように、ヘロデとヘロディアのもとに運ばれた。ただ、それは剣ではなく、氷によって切り落とされたのである。　こうして、神の正義は、聖ヨハネの尊い首を切り落とした罪を犯した踊り子を罰した。

その後、不法な殺人者ヘロデと忌まわしいヘロディアは「大騒ぎの末」に滅びた。伝えられるところによれば、彼らは生きたまま大地に飲み込まれたという。

一方、聖ヨハネは、生前も死後も、主キリストの先駆者であった。主が地獄に下られるに先立ち、彼は地獄にいた者たちに、肉となって現れた神の福音を宣べ伝え、聖なる先祖たちを喜ばせた。キリストの復活によって地獄が滅ぼされた後、彼は彼らと共に地獄から導き出され、貞潔な者として、隠遁者として、悔い改めの教師および宣教者として、預言者として、先駆者および洗礼者として、また殉教者として、天の御国において多くの冠に与るにふさわしい者とされた。　その祈りによって、慈悲深き主であり、私たちの神であるキリストが、私たちをも真の悔い改めの道へと導き、天の御国に与えてくださいますように。キリストに、父と聖霊と共に、永遠に栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第2調:

義人の記念を賛美をもって称えよう。主の証しはあなたにふさわしい、洗礼者よ。あなたはまことに、預言者たちの中で最も尊い者であることを示した。また、宣べ伝えられた方のために、水の流れの中で洗礼を授けるにふさわしい者とされたからである。　それゆえ、真理のために苦難を受けながらも喜びつつ、あなたは、ハデスにいらっしゃる神が肉となって現れ、世の罪を取り除き、私たちに大きな憐れみを与えてくださることを宣べ伝えました。

コンダク、第5調:

洗礼者ヨハネの栄光ある首の切断は、ある種の神聖な光景であり、また、ハデスに居る者たちへの救い主の到来を告げる説教でもあった。それゆえ、不法な殺害を求めたヘロディアは嘆き悲しむべきである。彼女は神の律法も、永遠の命も愛さず、偽りの、一時的なものだけを愛したからである。

主の先駆者聖ヨハネの首の切断の日に際しての、聖ヨハネ・クロソストモスの説教[5763]。

記念日：8月29日

[5763] この説教において、聖ヨハネス・クロイソストモスは、いわゆる「邪悪な女性たち」、すなわち、人生において悪と犯罪の極みに達してしまった女性たちを厳しく非難している。特に聖ヨハネス・クロイソストモスは、その過ちによって義人および敬虔な人々が苦しめられた女性たちに対して、熱烈に抗議している。　しかし、ヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥス自身も（この説教の中で）指摘しているように、「邪悪な」、堕落した女性たちのほかに、称賛に値する高潔な女性たちも存在する（彼は説教の最後にそうした女性たちを称賛している）。このように、聖ヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥスが反対しているのは、女性の性質そのものではなく、その性質が人生において示す悪しき側面である。

ヘロディアは再び狂乱し、再び恥じ入り、再び踊り、再びヘロデに、洗礼者ヨハネの首を切るという不法な行為を要求する。 またしてもイゼベル[5764] は、ナボテのぶどう畑[5765] を奪おうと企み、聖エリヤを山へ追放しようと画策する。そして、福音の声を聞いた者たち[5766] のすべてが、私と共に、ヨハネの大胆さ、ヘロデの愚かさ、そして不敬虔な女たちの獣のような狂乱に驚嘆するわけではない。 なぜなら、我々は何を聞いたか。*「ヘロデは使者を送り、ヨハネを捕らえて牢に閉じ込めた」*（マルコ6:17）。その理由は何か。*「自分の兄弟フィリポの妻、ヘロディアのせいであった」*。

ヘロデの、過度な妻への迎合によって現れた狂気を、誰が十分に糾弾し得ようか？ あるいは、邪悪な女性たちの前代未聞の厚かましさを、誰が描き出せようか？ この世には、邪悪な妻に匹敵するような獣は存在しないように思われる（ここで私が語るのは邪悪な女性についてのみであり、善良で貞淑な女性については触れない。なぜなら、穏やかで品行方正な女性が多く存在し、 その徳高い生き様は、後に言及され、徳ある者たちの益となり模範となるだろう。そうして私たちが善と誠実さを愛するようになるためである）。この世のどの獣も、邪悪な女性には似ていない。爬虫類の中で、蛇ほど危険なものはあるだろうか？ しかし、ライオンや蛇でさえ、（邪悪な）女性ほど悪意を抱いてはいない。最も賢明なソロモンも、私の言葉を裏付けるようにこう述べている。*「口論好きで気性の荒い妻と暮らすよりは、荒れ野に住むほうがましだ」*（箴言21:19；シラ書25:18参照）。 預言者が（女性を）嘲笑してこう語ったのだと、誰も思ってはならない。実際の出来事がまさにそのことを如実に証明している。ダニエルが穴の中にいたとき、獅子たちは彼を恐れて引き下がったが、義人ナブテヤはイゼベルによって殺されたのである。 クジラは腹の中でヨナを無傷のまま守ったが、ダリダはサムソンの髪を切り、縛り上げて異邦人に引き渡した。 荒野の蛇やアスピド、マムシたちはヨハネを恐れたが、ヘロディアは晩餐の席で彼を斬り殺した。カラスたちは山でエリヤを養ったが、イゼベルは彼が雨を降らせて恵みをもたらした後、彼を殺そうと躍起になった。彼女が彼にこう言ったのである。

「もしあなたがエリヤなら、私はイゼベルだ。もし明日、この時刻までにあなたの命が奪われないなら、神々が私に（望むままの）ことをなさり、私への報いを倍増させてください」（参照：列王記下19:2）。

そこでエリヤは恐れ、自分の命を救うためにその場を離れ、四十日間歩いて荒野に身を隠し、自ら死を求めながらこう言った。

「主よ、神よ！ （この苦しみは）私にとって十分です。私の魂を私から取り去ってください。私は先祖たちより少しも優れていないのですから！」

ああ、悲しや！預言者エリヤは一人の女性に怯えたのだ。異教徒たちの上に宇宙の雨を降らせ、天から火を降らせ、祈りによって死者をよみがえらせたその人が、一人の女性に怯えたのである。

そう、確かに、彼は恐れたのだ。なぜなら、いかなる悪意も、邪悪な女性の悪意には及ばないからである。私の言葉は『知恵の書』によっても裏付けられており、そこには *「蛇の頭ほど毒のある頭はない」*（シラ書 25:17）とあり、女性の悪意ほど恐ろしいものはないのだ！

ああ、悪魔的な悪よ、最も鋭い武器よ！

[5764] イゼベル――イスラエルの王アハブの妻であり、極度の不敬虔さと放蕩な生活で知られていた。彼女の影響に盲目的に従ったアハブは、不敬虔さにおいてすべての先王たちを上回り、最も恥ずべき偶像崇拝に身を投じた。 彼はサマリアにバアルの神殿を建て、聖なる森を造成し、イゼベルがティルスとシドンの神々の祭壇を築くことを許した（列王記下16:31–33）。イゼベルは四百人の偽預言者たちを養い、彼らは彼女の食卓から食事を与えられていた（列王記下18:19）。

[5765] ナブテは、イゼレエル出身の敬虔なイスラエル人であった。 彼は、王の宮廷に隣接する自分のぶどう園をアハブに売り渡すことを拒んだ。このため、イゼベルの唆しにより、ナブテは神への冒涜と反逆の罪で公に誹謗され、石打ちの刑に処された（詳細は3サムエル21:1–29を参照）。

[5766] 説教者は聴衆に語りかける（この説教は神殿で行われた）。

古来より、楽園において悪魔は女を用いてアダムを傷つけ、最も柔和なダビデを女によってウリヤを欺いて殺すように誘い込み、 最も賢明なソロモンを女性によって罪へと誘い、最も勇敢なサムソンを女性によって盲目にし、女性のせいで祭司エリヤの息子たちを殺害し、女性のせいで最も高潔なヨセフを鎖で縛って牢獄に閉じ込め、女性のせいで全世界の光であるヨハネを斬首に処した。

そう、私が（そもそも）人間について語っていることなど何だろう？ 女のせいで、悪魔は聖人たちさえも美徳から逸らした。悪魔は女を用いて、すべての人を打ちのめし、すべての人を殺し、すべての人を汚し、すべての人を辱める。なぜなら、恥知らずな女は誰をも容赦せず、祭司を敬わず、レビ人を恥じず、預言者を恐れないからだ。 ああ、あらゆる悪の中で最も邪悪なるもの、邪悪な女よ！ 彼女が貧しければ、悪意によって富み、もし彼女の狡猾さを助長する富を持っていれば、それは二重に破滅的である。女とは、せっかちな獣であり、治ることのない病であり、手なずけることのできない猛獣である。 私は、手なずけられないアスピッドが飼い慣らされたのを見、ライオンやユニコーン、熊が調教されたのを見た。しかし、邪悪な女は、非難されれば怒り、優しく諭されれば高慢になる。 もし夫が権威ある地位にあるならば、彼女は昼夜を問わず言葉で夫を堕落させ、ヘロディアがヘロデをそうさせたように、悪行へと駆り立てる。もし夫が貧しい者であれば、彼女は夫を怒りと口論へと駆り立てる。 もし彼女が未亡人であれば、自らすべての人を辱める。なぜなら、彼女は主への畏れをもって自分の舌を制せず、将来の裁きを顧みず、神に信頼を置かず、愛の律法を守らないからである。邪悪な女にとって、夫を死に追いやることは何でもない。なぜなら、義人ヨブの妻は、神を冒涜して彼に死を勧めたからである。彼女はこう言った。

「主に向かって何か一言言って、死んでしまえ」（ヨブ記2:9）。

なんと悪辣な気性か！なんと不敬虔な意図か！ヨブの妻は、重い病のために内臓が痛みに苛まれ、まるで火の粉を散らす炭のように苦しむ夫を見て——その全身が潰瘍に覆われ、虫に食われているのを見て—— 彼が身をかがめ、ひどく病み、極度の苦痛に苛まれ、痛みに開いた口から荒い息を漏らしているのを見て、憐れみに心を動かさなかった。かつては王の紫の衣を身にまとい歩いていた者が、今や膿の溜まり場に横たわり、裸の体をさらしているのを見て、心は和らぐことがなかった。かつての、日常的な優しい夫婦の絆を思い出すこともなく、以前彼からどれほど多くの栄光と恩恵を受けたかを思い出すこともなかった。しかし、彼女はこう言うのだ。

「主に向かって一言でも言って、死んでしまえ。」

ああ、女性の慈悲よ！ ああ、悲しみを癒やす手段よ！ ああ、夫婦の愛を正当化するものよ！ 彼（すなわち夫）は、病に伏していたあなたに、かつてそのような言葉を口にしたことがあっただろうか？ 彼は自らの祈りと善行によって、あなたの病を癒やしてくれたのではないのか？ 彼にとって、この一時的な罰で十分ではなかったのか。それなのに、あなたは（主への）冒涜によって、彼に永遠の苦しみを求めるのか？ それとも、あらゆる罪は人々に赦されるが、冒涜——すなわち聖霊に対する罪——は、この世でも来世でも決して赦されないことを知らないのか？（マタイ12:31）

この女のように狡猾な別の（女）を見たいのか。ダリダを見てみよ。彼女は、強きサムソンを縛り上げ、異邦人に引き渡した（士師記16:6）。彼女は、愛し、慈しみ、自分よりも彼を愛していると語っていた夫を、異邦人に引き渡したのだ。 昨日まで愛していた相手を、今や誘惑し、昨日まで口づけで温めていた相手を、今や誘惑して死に追いやっている。彼は美しくなかったというのか？ 頭上に七つの三つ編みをなびかせ（士師記16:13–14）、七つの光に満ちた恵みの姿を現していたあの時、彼より美しい者がいただろうか？ 彼は男らしくなかっただろうか？ しかし、旅の途中で恐ろしい獅子を単身で打ち負かし、ロバの顎骨一本だけで千人の異邦人を打ち倒したあの時、彼より男らしい者がいただろうか？ しかし、もしかすると彼は徳高くなかったのだろうか？ いや、彼はそれほどまでに徳高かった。かつて喉の渇きを覚えたとき、彼は水（神から水が与えられるよう）を祈り求めたところ、彼が手に持っていた死んだロバの顎骨から水が流れ出し、それで喉の渇きを癒したのだ。 かくも素晴らしく、かくも勇敢で、かくも高潔な男を、実の妻が敵のように縛り上げ、敵の手

に引き渡したのだ。しかし、一体どうやって、その女はこれほど強い男に打ち勝つことができたのだろうか？　それは、男性に特有の優しさゆえである。彼女は夜、彼の力の秘密を暴き、彼を裸のまま丈夫な縄で縛り上げたのだ。それゆえ、（神聖な）知恵はあなたにこう命じる。*「あなたの膝の上に横たわる者から、あなたの口の扉を守れ」*（ミカ7:5）。

教えてほしい、いったいどの動物が、自分と同じ雄の同種に対してそのようなことを考え得ただろうか？　どの蛇が、自分の同居者を滅ぼそうとするだろうか？　どの雌ライオンが、自分の雄ライオンを屠られるように差し出すだろうか？　『　』というように、『知恵の書』が*「蛇の頭ほど毒のある頭はない」*（シラ書25:17）と述べているのは正当であり、女性の悪意ほどひどいものはないのだ！

率直に言おう。邪悪な妻を持つ者は、それが自らの不義に対する報いであることを知れ。この言葉が根拠のないものでないことを示すために、知恵の書が「邪悪な妻は、不義な夫の悪行の報いとして彼のもとに送られる」（シラ書25:22–29）と述べているのを聞きなさい。

これまで我々は邪悪な女性について語ってきたが、ここでこの話を締めくくろう。今こそ、特にここにいらっしゃる方々のために、善良な女性たちについても触れておくべきである。

なぜ、これらの女性たちは「善良」と呼ばれるのか。それは、他者が神に喜ばれる美徳を実践しているのを見ると、あたかも自分のことであるかのように喜び、その人々の労苦を、美徳に対する報いとして自らに受け入れるからである。

ソマニの女は、徳高く、貧しい人々を愛する女性でした。彼女は夫の同意を得て、エリシャが彼女の家で休息できるよう、住む場所を用意しました（列王記下4:9–10；ルカ4:25–26参照）。彼女はエリシャのために寝床、ランプ、そして食事を用意しました。　寝床には毛布が欠けていたわけではなく、預言者にふさわしい装いが整えられていた。灯には光が欠けていたわけではなく、燃え輝き照らす油が注がれていた。食卓にはパンが欠けていたわけではなく、食べ物が満ち溢れていた。

同様に、預言者エリヤをもてなしたあの貧しい未亡人について、誰が非難できるだろうか。彼女には多くの財産はなかったが、寛大な心という富を示したのだ。　彼女には小麦も、ワインも、この世の物など何一つありませんでした。小麦を蒔いて穀物を収穫できる畑もなく、ぶどう畑からは甘い房の実も実らず、植物からは甘い野菜も育ちませんでした。それなのに、どうして彼女は預言者を迎え入れ、養うことができたのでしょうか。　彼女は耕すための土地を五指分すら持たず、ぶどう畑も一肘分（すなわち面積、あるいは体積）も持っていなかったが、収穫の時期になると常に畑の境界を歩き、地面に身を屈めて、刈り取り人たちの鎌の下から落ちた穂を拾い集め、　そのようにして、彼女は毎年、自分に必要な量の食料を蓄えていた。　この未亡人のところへ、エリヤが飢饉のさなかにやって来た。その時は、全土が干ばつで枯れ果て、空は裂け、空気は灼熱し、雲は閉ざされていた。穀物も、花も、植物の若芽も、若い穂を潤し成長を促す湿った風の息吹さえもなかった。　川は干上がり、川を潤していた泉は酷暑のために消え去り、海は極めて塩辛くなっていた。というのも、雨や流れが枯渇したため、淡水が海に流れ込まなくなっていたからである。まさにその時、エリヤはこの貧しい未亡人のもとを訪れた。しかし、豊作の時でさえ、未亡人がいかに苦しんでいるかは、あなた方もご存じだろう。　しかし、預言者は、豊富なパンの備蓄を持つ富裕層を置き去りにし、山を下りて、この未亡人のもとへやって来た。では、なぜ、その言葉によって天から火を降らせたエリヤは、自分自身のためにパンを降らせなかったのだろうか。もしかすると、できなかったからだろうか。いいえ、できたはずだが、そうはしなかったのだ。　では、なぜでしょうか。それは、貧しい人への慈愛という実を未亡人から奪わないためであり、また、小麦粉の入った器とわずかな油の備蓄を、祝福によって増やすためでした。なぜなら、預言者が訪れたのは、自ら腹を満たすためというよりは、むしろこの貧しい人を養い、彼女の心に秘められた美徳と善意を明らかにするためだったからです。神はこのように働かれる。すなわち、この世で御自身と共にいたすべてのしもべたちを養う力をお持ちでありながら、彼らの慈善の行いによって、善意に満ちた心を明らかにするために、施しを求めら

れるのである。　そして、もはや彼ら（御自分のしもべたち）を養うことのできる者が誰もいなくなったとき、神は、山上のエリヤのように鳥によって、あるいは穴の中のダニエルのように異国の預言者たちによって、あるいはイオンのように鯨という海の獣によって、あるいは荒野の私たちの先祖たちのように御自身から食物を送り、彼らを養われるのである。　なぜなら、彼らに（食糧として）手に入れるものが何一つなかったとき、神は天からマナを降らせ、岩から水を湧き出させたからである。　しかし、神の聖徒たちが他の人々と共に世の中で生活しているとき、神は、彼らが苦しんでいるのを見ていながらも、御手を差し伸べず、彼らを見捨てておられる。それは、彼らに施しを望む者たちに恵みをもって報いるためである。なぜなら、それによって多くの者が救いを得ることができるからである。

そこで、エリヤはある未亡人のところへやって来た。彼女の手元には、自分と子供たちの一食分にも満たない、ほんの一握りの小麦粉しかなかった。さて、預言者は彼女に何と言っただろうか。

「水を少し器に入れて持ってきてくれ。私が飲めるように。」

彼女が水を汲みに行くと、預言者は彼女の後ろからこう言った。

「手には焼いたパンも持ってきてくれ。」

彼女は持っていないものについてはそう言ったが、持っているものについては隠さず、こう告げた。

「主が生きておられる限り、私に隠し場所にあるパンなどあるでしょうか。私には、一握りの小麦粉と、器に入った少量の油以外、何もありません。」

このような乏しい状況にもかかわらず、彼女が持っていたわずかな食料を隠さなかったこと自体が、すでに素晴らしいことである。今、金や銀をたくさん持ちながら、友人が頼んでも分け与えようとしない人々が、どれほど多いことか。　たとえ愛情を込めて懇願されても、彼らは「何もない」と言って与えることを拒む。しかし、長い懇願の末に誰かに貸すことに同意したとしても、その際には、受け取る者から鉄よりも堅固な借用証書を取り、証人や保証人の面前で、受け取る者の手に署名させて縛りつけるのだ。　しかし、あの未亡人は、たった一言で、一握りの小麦粉さえも手放そうとはしなかった。

では、預言者は彼女に何と言ったのでしょうか。

「急いで、まず私のために、そして次にあなた自身とあなたの子供たちのために、種入れぬパンを用意しなさい。」

この預言者の言葉は試練であった――心の試練であり、善意の試練であった。その幸いな未亡人の心は、まるで万力に挟まれたかのようであり、子供たちへの愛と、預言者への慈愛のどちらを優先すべきか、途方に暮れていた。　そして、その未亡人は、自分自身や子供たちを不快にさせることを厭わず、預言者を受け入れることを選んだ。なぜなら、*「預言者を預言者の名によって迎える者は、預言者の報いを受ける」*（マタイ10:41）こと、また、「弟子の一人の名によって冷たい水一杯を飲ませる者も、その報いを失うことはない」（マタイ10:42）ことを知っていたからである。

しかし、なぜ預言者は「急いで！」と言ったのでしょうか。彼はそれほど空腹で、未亡人の特別な熱意を必要としていたのでしょうか？　いいえ、決してそうではありません。彼は、善行は悲しみや憂いではなく、熱意と喜びをもって行われるべきであることを、この言葉によって神秘的に示していたのです。*「神は、喜んで与える人を愛しておられる」からです*（IIコリント9:7）。

– 急いで準備をしなさい。まず私のために、そして次にあなた自身とあなたの子供たちのために。

「急いで」――それは、天使たちがアブラハムのもとに訪れたとき、アブラハムが雄牛のところへ急いで行き、子牛を屠って、小羊を迎えるためにしたのと同じである（創世記18:6）。また、サラが天に隠されたパンを得るために、無酵パンのところへ急いだのと同じである。

急いで、アブラハムが神へのいけにえを捧げたように行動しなさい。カインやオフニ、そして祭司エリの息子ピネハスたちがしたように、「まず自分が取り、それから私に与える」という態度を取ってはならない。彼らは、神に捧げられる供え物の初穂を自分の利益のために取り、神を軽んじたのである。

その未亡人は、預言者の命令を熱心に果たした。

預言者は、そのパンを受け取った。それはわずかな量ではあったが、深い熱意をもって捧げられたものであった。彼はそれを味わい、彼女の家を恵みで満たした。彼はこう言ったのである。

「主が地に雨を降らせられるまで、水瓶の中の小麦粉も、器の中の油も尽きることはない。」

しかし、なぜ――そのとき（雨が降るまで）なのでしょうか?

それは、天からの雨のように、新しい恵みが現れた時に、古い律法が終わりを迎えることを、神秘的に示すためである。

そして、預言者が言ったとおり、実際にそうなった。

ご覧なさい、善良な女性たちが、貧しい人々への愛の果実をどのように受け取ったかを。なぜなら、善い行いは善い実を結び、貞潔という朽ちることのない根を育むからです。

女性たちよ、悪しき女性たちの行いと、善き女性たちの美徳について聞いたことがあるでしょう。ある者たちを愛し、他の者たちからは遠ざかりなさい。ある者たちには倣い、他の者たちからは避けなさい。そうして、善き（女性たちの）道を歩むことによって、あなたがたが聖徒の列に加えられるように。主イエス・キリストに、永遠の栄光と権威がありますように。 アーメン。

9月12日

8月30日（旧暦）

同日、1652年にモスクワの聖ダニイル・アレクサンドロヴィチ公の聖遺骨が発見された。その聖遺骨はモスクワのダニイル修道院に安置されている（聖ダニイル公の帰天記念日は3月4日）。

聖アレクサンドル、聖ヨハネ、聖パウロ、コンスタンティノープル総主教

記念日：8月30日

聖アレクサンドルは、コンスタンティノープル初代総主教ミトロファン聖下（[5767] ）のもとで司教（ホレピスコプス[5768] ）を務めていました。このアレクサンドルは、あらゆる美徳に満ち溢れていました。 ニカイアで第1回全地公会議が招集された際、敬虔さの熱心な擁護者であるアレクサンドルが公会議に派遣された。これは、ミトロファン総主教が高齢であることに加え、身体の病も抱えていたため、公会議に出席することができなかったからである。 この公会議において総主教の席を占め（すなわち、その代表者兼代理として）、アレクサンドルは邪悪なアリウスに対して、正教の信仰を熱心に擁護した。 公会議の審議が終了し、アレクサンドルがすでにコンスタンティノープルへ帰路についていたとき、至福のミトロファンに主の天使が現れた。この天使はミトロファンに、彼の死が間近であることを告げ、後継の総主教としてアレクサンドルを指名するよう命じた。天使はミトロファンにこう言った。

「十日後、あなたは神から冠を授かる。そして、あなたの後を継いで総主教の座に就くのは、あなたの同僚であるアレクサンドルであるように。」

[5767] ミトロファンは315年から325年まで総主教を務めた。

[5768] ホレピスコプとは、地方の司教、すなわち都市に隣接する集落の司教のことである。

敬虔なコンスタンティヌス王は、多くの司祭たちと共に、すでに死の床に横たわっていた至聖なるミトロファン総主教のもとを訪れた。コンスタンティヌスが、自身の死後、誰に総主教の座を継がせることを祝福するか尋ねると、聖ミトロファンは次のように答えた。

「主は私に、私の後を継ぐのは私の同僚であるアレクサンドルであると啓示されました。彼はまことに、選出にふさわしく、聖霊の賜物を受けるに値する者です。」

そして、その通りになった。

至聖なるミトロファン総主教が主のもとへ召された後、コンスタンティノープル総主教にはアレクサンドルが任命された。彼は熱心にキリストの御言葉の群れを牧し[5769]、狼や ——すなわち異端者やギリシア人たちを追い払ったのである。なぜなら、（アレクサンドルは）アリウス派だけでなく、ギリシアの哲学者たちとも激しい闘いを繰り広げなければならなかったからである。

ある時、ギリシャの哲学者たちの一部が、王のもとへ近づき、王が先祖代々の信仰やローマ・ギリシャの法律を捨て、ある新しい信仰と新しい法律を受け入れたことを非難した。これらの哲学者たちは、それが　王国の強化ではなく、その崩壊につながると主張した。哲学者たちは、アレクサンドル司教と信仰について論争することを王に許可するよう求めた。王はこの論争を許可した。神の聖人アレクサンドルは、ギリシャ哲学の教育を受けてはいなかったが、聖霊に満たされていたため、論争を拒むことはなかった。

哲学者たちが大勢集まり、全員が同時にキリスト教の司教と論争したいと申し出たとき、聖人は彼らに対し、自分たちの仲間の中から、より賢明で雄弁な哲学者を一人選び、その者に論争を任せるよう提案した。残りの哲学者たちは、その論争を聞くことにした。

「ありえない」と聖アレクサンドルは論じた。「叫び、声を張り上げるあなた方全員を、たった一人の人間が説得できるはずがない。」

哲学者たちは自分たちの仲間の中から、最も賢明だと見なされた一人を選び出し、聖人に紹介すると、自分たちは注意深く耳を傾ける準備をした。論争を始めると、至聖なるアレクサンドル総主教はその哲学者に向かって言った。

「わが主イエス・キリストの名において、お前に黙るよう命じる！」

するとたちまち、その哲学者の舌は動かなくなり、彼は口がきけなくなってしまったため、一言も発することができなかった。

すると、集まっていた哲学者たちは皆、恐怖と恥に襲われ、中には恥を忍んで逃げ去る者もいれば、キリストを信じるようになった者もいた。一方、言葉を失ったその哲学者は、身振りで、自らの誤りとキリスト教の信仰の正しさを認めることを示した。そして、聖人の足元にひれ伏すと、　するとたちまち、彼の舌は沈黙から解き放たれ、彼は皆が聞こえるように我らの主イエス・キリストを賛美し始め、その後、他の友人たちと共に洗礼を受けた。

この出来事に際し、王とすべての信者たちは喜び、御自分の御使いにこれほど驚くべき力を授けられた神を皆で賛美した。

この聖アレクサンドルは、その後、その祈りによって、邪悪なアリウスをも滅ぼした。

異端者アリウスは、第1回全地公会議から数年後、コンスタンティノープルに召された。そこで彼は、その狡猾さをもって、敬虔なコンスタンティヌス王を次のように惑わした。コンスタンティヌスは彼に尋ねた。「あなたは、ニカイア公会議で聖なる教父たちが信じるよう命じたとおりに信じているのか？」　するとアリウスは、自らの異端の教えが記された文書を胸に抱き、胸を叩きながらこう言った。

「私はそう信じている！」

[5769] アレクサンドロスは325年から340年まで総主教を務めた。

このようにして、この異端者は、表向きはニカイアで確立された信仰に同意しているように見せたが、心の中では、自らの手で書き記した通り――その文書は彼の胸元にあった――を信じていると語っていた。そして、この不敬な者は王の前で、「私はそう信じている」と誓った。

そのような狡猾さに気づかぬまま、王はアリウスの言葉を信じ、彼を至聖なるアレクサンドロス総主教のもとへ送り、アリウスを正統派として教会の交わりに受け入れるよう命じた。その際、アリウスを教会に導き入れ、信徒たちと交わりを持つべき日曜日も指定された。

しかし、聖アレクサンドルは、異端の創始者であるアリアを教会の交わりに受け入れることを拒んだ。

その間、土曜日が過ぎ、日曜日が訪れた。日曜日の前夜、神の司教は祭壇の御座の前で祈りにふけっていた。　彼は涙ながらに、アリアスが教会の交わりに加わり、聖なる秘跡の聖体拝領を行うその日を目にすることのないよう、神に自らの魂を肉体から取り去ってくださるよう懇願した。あるいは、御自身の教会への憐れみにより、アリアスを生ける者の間から滅ぼしてくださるよう願った。

聖アレクサンドルは一晩中そのように祈り続けた。朝が訪れ、聖体礼儀の時刻が近づいた。アリウスは王宮から大いなる高慢を帯びて出て、教会へと向かった。彼は、自身の異端に同調する王室の高官たちや、大勢の従者に取り囲まれていた。

アリウスが「コンスタンティヌスの市場」と呼ばれる場所（そこには王の彫像が施された大理石の柱が立っていた）に近づいたとき、良心の呵責に苛まれ、大きな恐怖に襲われた。　その恐怖のせいで、アリウスは肉体の欲求を満たす必要性を感じ、人目につかない場所を探し始めた。　その近くには人々が集まる場所があった。そこに入ったアリイは、予期せず激しい内臓の病に襲われ、ユダ（マタイ27:1）のように、その不信心者の腹が裂け、内臓がすべて体外へ飛び出した。

こうして、異端者は恐ろしい最期を遂げた。

近くでアリオスの退出を待っていた者たちは、彼がなかなか出てこないのを見て、自ら中に入り、膿と血の中に横たわって死んでいる彼を発見した。そしてたちまち、異端者アリオスの恐ろしく予期せぬ死の知らせが街中に広まった。　異端者たちは恥をかかされ、一方、正信者たちは、真の神であるキリストが、その敵であり冒涜者である者に報復を下されたことを大いに喜んだ。とりわけ、至聖なるアレクサンドル総主教は、キリスト・神に感謝を捧げ、神が御自身の教会に憐れみを示し、その凶暴な狼から教会を救ってくださったことを称えた。

敬虔なコンスタンティヌス大帝は、アリウスのこのような死を知ると、敬虔な信仰をさらに強め、その最期に至るまでニカイア公会議の教義を守り抜いた。

神の偉大な司教アレクサンドルの義なる祈りは、神の前でこれほどの力を持っていた。　鋭い武器のように、その祈りは神の敵を打ち倒し、正教会の勝利をもたらした。このことについて、後に聖グリゴリオス・テオロゴス[5770] は、コンスタンティノープルの住民に向けた説教の中で、アレクサンドロスを称賛し、次のように語っている。

「まことに、あなたがたに告げよう。あなたがたは、栄光あるアレクサンドルの弟子たちである。彼は聖三位一体の熱心な擁護者であり宣教者であり、言葉と行いの両方で異端の迷いに対して立ち向かったのである。　あなたがたは、彼の使徒に等しい祈りを覚えているでしょう。その祈りによって、彼は異端者たちの首領をその場で滅ぼしました。その場所は、不敬虔な異端者にとってふさわしい場所であり、恥をもって恥に報い、その行いにふさわしい不名誉な死によって、多くの魂を滅ぼした異端という致命的な悪が、永遠に糾弾されるためでした。

聖グリゴリウスは、聖アレクサンドロスを称え、不敬虔なアリウスを恥じ入らせるためにこの言葉を語った。それゆえ、彼はアレクサンドロスの祈りによって、不名誉な場所で起こったアリウス

[5770] 聖グリゴリオス・テオロゴス（ナジアンゾス）は、コンスタンティノープル総主教を短期間（1年未満）務めた。彼はその崇高な著作で知られており、その功績から「テオロゴス（神学者）」の称号を得た。彼の記念日は1月25日である。

の死について言及したのである。　というのも、アリウスが神の御子を侮辱し、父なる神と同等かつ同質であるその神性を冒涜したのと同様に、彼自身もまた不名誉な死を遂げたからである。このようにして、侮辱は侮辱によって報復されたのである。

聖アレクサンドルは、深き老齢に達するまで、長きにわたりキリストの教会を牧した。彼がすでに死の床に就いていたとき、彼の言葉による羊たちは、牧者の寝床を取り囲み、彼にこう尋ねた。

「父よ、あなたは私たち、あなたの子供たちを誰に託して行かれるのですか。あなたの代わりに、誰が私たちの牧者となるのでしょうか。誰があなたの足跡をたどり、教会を堅く導くことができるでしょうか。」

アレクサンドルは、二人の高潔な人物――すなわち、長老パウロと助祭マケドニア――を指差し、こう答えた。

「もしあなたがたが、賢明で美徳に満ちた牧者を求めるなら、パウロを選びなさい。もし、ただ見栄えが良く、外見の美しさに輝くだけの牧者を望むなら、マケドニアを選びなさい。」

こう述べた後、至聖なるアレクサンドル総主教は、生後九十八歳で主のもとに召された。彼の後を継いで総主教の座に就いたのは、聖パウロ、すなわちこの名を持つ最初のコンスタンティノープル総主教であった[5771]（記念日は11月6日）。

カッパドキア出身であったことから「カッパドキアの」と呼ばれた聖ヨハネは、異端者ティモテオ[5772] の後を継ぎ、異端者アナスタシオス[5773] の治世の終わりに、コンスタンティノープル総主教の座に就いた。　彼は自らの意思に反して選出された（この高位を受け入れることを望まなかったからである）が、皇帝の権力というよりは、むしろ正信の民によって総主教の座に就かされたのである。　ヨハネは、不敬虔な皇帝（アナスタシオス）から死の日まで安らぎを得ることができず、彼から憎まれ、迫害され続けた。というのも、この皇帝は、ハルキドン（第4回全地公会議）[5774] において聖なる教父たちの公会議に反対した、アンティオキアの偽総主教セヴェロス[5775] の異端を擁護していたからである。　この異端者セヴェルは、その公会議で破門され、破門宣告を受けたディオスコーロスとエウティキオスの教えに従い、我らの主イエス・キリストの御人格においてただ一つの本性のみを認めていた。　彼は、受肉において「御言葉」と「肉」が一つの本性に融合したと主張し、聖なる教父たちが信じるよう教えた通り、また現在も神学において教会が謳っているように、キリストの唯一の御顔の中に二つの本性を認めなかった：　「その本性において神であり、私たちのために人となられた。二つの位格に分かれることなく、二つの本性が混ざることなく認識される」[5776]。 前述の、正教に対する空想的な敵対者は、聖三位一体の神性がキリストの人間性とともに十字架上で苦しみを受けたと誤って主張した。このため、彼は「三聖歌」の詠唱に、「我らのために十字架にかかられた方よ、我らを憐れみ給え」という言葉を付け加えた。

この忌まわしい北の地から、「アケファロイ」、すなわち「頭なき者たち」と呼ばれる異端が生じた。彼らがこのように呼ばれたのは、頭（首長）が他の肢体を統率するように、正教会の司教が配下の教会に対して持つ権威を認めなかったからである。しかし、彼ら一人ひとりは、自らの思索に従って、自らを指導者かつ教師であると見なしていた。　この偽りの教えを擁護していた異端の司教や長老たちが亡くなった後、それらの異端者たちの間では、通常の教会の儀式に従った洗礼も聖体礼儀も行われなくなった。　彼らは、あらかじめ用意され、長期間保存されていた子羊を用いて聖体拝

[5771] パウロ（第1世）は340年から総主教を務めたが、まもなく追放され、347年に再び復帰し、350年まで総主教の座に就いた。

[5772] ティモテイ（1世）は511年から518年まで総主教を務めた。

[5773] アナスタシウス（ディコル）皇帝は、491年から518年まで在位した。

[5774] 451年

[5775] セヴェルは512年から519年まで総主教を務めた。

[5776] 第6声の『ドグマティック』。

領を行い、　聖なる復活祭の日に集まり、その子羊を小さな断片に砕いていた。その時、これらの異端者たちはそれぞれが望む信仰を自ら選び、勝手に教導の権威を掌握して、他の人々にも教えを説き、自らの偽りの教義を宣べ伝えていた。　そのため、これらの異端者たちから、互いに矛盾し合う非常に多くの異端が派生した。ギリシャの教会史家ニキフォロス・カリストスは、第18巻第45章において、これらの異端者たちについて次のように言及している。

「そのような異端者の一人に、不敬虔な皇帝アナスタシオスがいた。彼は正統派の司教たちをその座から追放し、神の教会に多大な損害を与えた。この皇帝は、コンスタンティノープル総主教聖ヨハネをも追放しようとしたが、神の裁きが異端者に下り、その命は死によって断たれたのである。」

ここで、このような状況下で起こったこの不敬虔な皇帝の死についても触れておくことは無駄ではないだろう。

死の数日前に、この皇帝は夢の中で、ある恐ろしい人物を見た。その人物は、裁き主のように栄光に包まれて高い玉座に座しており、その前には多くの人々がひれ伏していた。この裁き主は手に一冊の本を握っていた。その本を開くと、そこにはアナスタシウスの名前が記されており、それを皇帝に見せながら、こう言った。

「私はお前にもっと長く生きさせてやろうと思ったが、お前の不敬虔さゆえに、お前の寿命から十四年を削り取ることにする。」

そう言うと、判事は書物に書かれていた文字を消し去った。　王は恐怖と戦慄に襲われ、不安を抱きながら眠りから覚めると、最も親しい側近の一人であるアマンタを呼び寄せた。彼は王の考えに全面的に賛同しており（王の異端的な思索にも同調していた）、王はその夢の幻視について悲しげに彼に語った。 アマンタは王の話を聞き、その話に戦慄を覚え、こう言った。

「今夜、私も恐ろしい幻を見ました。まるで召使いのように、王の御顔のそばに立っていたところ、大きな豚が近づいてきて、私の上着をつかみ、地面に投げ倒して、食べてしまったのです。」

互いにそのような恐ろしい夢を語り合い、それに戦慄を覚えた二人は、プロクラという名の占い師を呼び寄せ、その夢の解釈を求め、自分の夢を語った。占い師は、二人はまもなく死ぬだろうと告げた。

そして実際、間もなく王宮に落雷が直撃し、王は命を落とした。こうして、不信心な王は悲惨な最期を遂げたのである。

王の死後、アナスタシアに代わり、敬虔で正義感あふれる人物であるユスティン[5777] が王位に選出された。　一方、アマンテや、アナスタシウスの悪行に加担し、信者たちを迫害していた他の不信心者たちは、公正な裁判を経て死刑に処された。こうして、アナスタシウスとアマンテの夢に見た予言は現実のものとなった。

これらの敵が滅びた後、キリストの教会とその牧者たちの間に平和と静けさが訪れた。至聖なるヨハネ総主教は、新たに選出された敬虔なユスティヌス王およびすべての正信の民と共に、聖なる教会が迫害者たちの束縛から解放されたことを喜び、教会で感謝の賛美を歌った。　その直後、彼ら（王と総主教）は近隣の司教たち（40名）を地方公会議に召集し、アンティオキアの偽総主教セヴェロスとそのすべての同調者たちを破門するとともに、ハルキドンで開催された第四回全地公会議を承認し、称賛した。

聖ヨハネは、残りの生涯を教会の平和の中で過ごし、委ねられた羊の群れを熱心に牧し、神に喜ばれるように努めた。三年間その座に就いた後、ヨハネは安らかに主のもとへ旅立った[5778] 。

[5777] ユスティヌス1世は518年から527年まで在位した。

[5778] ヨハネスは518年から520年まで総主教を務めた。

[5779]現在崇敬されている聖パウロは、同名の第4代コンスタンティノープル総主教であり、キプロス出身であった。彼は、異端の聖像破壊者ニキタ[5780]　の後を継ぎ、コプロニモスの息子レオン[5781]の治世下 に総主教の座に就いた。この聖パウロについては、聖タラシオの伝記[5782] にも言及されている。

パウロは徳高く敬虔な人物であったが、あまりにも意志が弱く臆病であった。というのも、多くの正信者が不敬虔な王から聖なるイコンのために受けた甚大な迫害を目の当たりにし、本意ではなかったものの、自らの敬虔さを隠して異端者たちと交わっていたからである。　その不敬虔な王の死後、彼は聖なるイコンを崇拝するという敬虔な慣習を復活させようとしたが、それを成し遂げることはできなかった。彼には協力者がいなかったからである。その間、イコン破壊運動は都全体だけでなく、周辺の地域においても強く根を下ろしていた。　このため、パウロは深く悲しんだ。成功を期待するのは難しいと悟り、彼は在任期間が4年にも満たなかった総主教の座を辞任することを決意した。病に倒れた彼は、密かに総主教公邸を離れ、聖フローラ修道院へと向かい、そこで聖なる修道服を身にまとった。

まもなくこのことは至る所で知れ渡り、人々は皆、大いに驚いた。

イリナ皇后[5783] は、総主教が誰にも何も告げずにそのような行動をとったことを知り、この出来事に深く悲しんだ。イリナは息子のコンスタンティノス皇帝を連れて彼の元を訪れ、こう尋ねた。

「父上？　あなたは一体何をしたのですか。なぜそのようなことをされたのですか？」

パヴェルはこれにこう答えた。

「この聖なる隠遁者の姿を受け入れるよう私を促したのは、病と死が近いという予感であったが、何よりも私を総主教の座を去らせるよう促したのは、教会内の混乱と不和であった。なぜなら、教会は偶像破壊の異端に揺さぶられ、苦しんでいるからである。　異端者たちの長きにわたる不敬虔な策略により、教会は深い傷を負った。そして、この罪深い私は、すでに三度も自らの手と署名をもってその異端を承認してしまった。私は迷信の罠を逃れるどころか、言葉と手をもってその中に深くはまり込んでしまった。今、そのことを深く嘆いている。　しかし、何よりも私の魂を傷つけ、重く圧迫しているのは、貴殿の支配下にあるすべての国々が、正統な信仰告白を堅く守り、正統な教義に留まり、喜びに満ちていながら、私たちの教会を疎外し、私たちを、キリストの群れであるにもかかわらず、異邦の羊として自分たちから追い出しているのを目の当たりにしていることである。　このため、私は異端の集まりの牧者となることを望まず、むしろ墓の中にいる方が、使徒の四つの聖座[5784] から破門されるよりはましだと考えます。しかし、神は、天の下に散らばったキリスト教の群れに対して王としての配慮を尽くすよう、あなた方の手に権威の笏をお与えになったのですから、あなた方の母である　――すなわち教会――の悲しみに目を向け、彼女がこれ以上慰めのない悲嘆の中に留まることを許さず、あらゆる手段を尽くして、彼女が再びかつての輝きを取り戻せるよう配慮してください。もはや、野原から出てきた豚のような忌まわしい異端が、あなたの敬虔な統治の下でキリストのぶどう畑を荒らし、破壊することを許してはなりません；　異端が不敬虔な知恵によってキリストのぶどう畑を汚すことを許してはなりません。あなた方には、唯一の教会という神聖な研ぎ石で

[5779] 偶像破壊の異端は8世紀に現れた。偶像破壊者たちは、偶像崇拝と偶像礼拝を無分別に混同していた。 イコノボレズムの最も熱心な支持者は、皇帝レウ3世・イサウリア人（717年～741年）とコンスタンティノス5世・コプロニモス（741年～775年）であった。この異端は、787年にニカイアで開催された第7回全地公会議で非難された。

[5780] ニキタ1世は766年から780年まで総主教を務めた。

[5781] レウス4世（ハザール）は775年から780年まで在位した。

[5782] 聖タラシウスの記念日は、正教会において2月25日に祝われる。

[5783] イリナ皇后は797年から802年まで在位した。

[5784] 言うまでもなく、総主教座とは、コンスタンティノープル、ローマ、アンティオキア、アレクサンドリアの各総主教座を指す。

磨き上げ、真の信仰告白の房を育て上げることができる熟練した職人がいます。この職人は、知恵の杯を満たし、敬虔な民のために正教の知恵という飲み物を用意してくれるでしょう。

人々は彼に尋ねた：

「父よ、あなたは誰のことをおっしゃっているのですか？」

彼は答えた：

「私は、貴殿の第一顧問であるタラシイ[5785] について語っているのです。彼は教会の統治者となるにふさわしいと私は知っています。なぜなら、彼はその知恵の杖をもって異端の空論を追い払い、キリストの羊の群れを賢明に導き、正信という一つの柵の下に集めることができるからです。」

パヴェル総主教のこうした言葉を耳にした敬虔なイリーナ皇后とその息子コンスタンティン皇帝は、悲しみに暮れてその場を去った。一方、パヴェルは、そばに残っていた数人の貴族たちに向き直り、こう語った。

「ああ、全地総主教座によって断罪された異端者たちによって教会が混乱に陥っていたあの時、私があの玉座に就いていなかったらと、どれほど願うことか。もし第七回全地公会議が招集されず、もし偶像排斥の異端が断罪されなければ、あなた方は救われないだろう。」

貴族たちは彼にこう言った。

「では、なぜあなたは総主教に就任した際、偶像排斥主義に書面による承認を与えたのですか？」

パウロは答えた。

「当時、私が署名してしまった以上、今となってはそれを悔い改めています。また、恐怖のあまり沈黙し、真実を語らなかったことに対し、神からの罰を恐れています。今、私は悔い改め、あなたがたがあの異端的な思惑に留まり続ける限り、救いを期待することはできないと告げます。」

その数日後、総主教は安らかに息を引き取った[5786] 。それ以来、コンスタンティノープルの市民たちは、聖なるイコンについて、異端者たちと自由かつ恐れることなく議論し、論争するようになった。聖イコンを擁護するために、レオ・イサウルスの時代以来、誰も口を開こうとはしなかったのだ[5787]

口を開こうとはしなかったのです。

今ここに記念される三人の聖人、アレクサンドロス、ヨハネス、パウロスについてこれらすべてを知った私たちは、三位一体の唯一の神、父と子と聖霊を賛美しましょう。アーメン。

コンダク、第8調：

キリストの愛に燃え、その軛を受け入れ、尊き十字架を背負い、その生涯を模範とし、神の栄光に与った者たちよ、神智のアレクサンドロス、奇跡のヨハネス、そして栄光のパウロスよ。それゆえ、御座の御前に立ち、私たちの魂のために熱心に祈ってください。

[5785] タラシオスは、784年から806年まで（パウロ4世の後任として）コンスタンティノープル総主教を務めた。
[5786] パウロ4世は780年から784年まで総主教を務めた。
[5787] 717年から741年まで在位したレウ3世（イサウル）は、激しい偶像破壊者であった。

聖なる信仰深い公爵アレクサンドル・ネフスキーの生涯[5788]

記念日：8月30日

聖なる敬虔な大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、1219年5月30日、ペレスラヴリの町で生まれた[5789]。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチの父である大公ヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチは、同時代の人々の証言によれば、温厚で慈悲深く、敬虔であり、すべての人から愛された大公であった。敬虔なアレクサンドルの母、敬虔な公妃テオドシアは、その敬虔さと献身的な行いにより、生前から同時代の人々から「聖なる公妃」という名を得ていました[5790]。敬虔で、彼を深く愛する両親の監督の下、敬虔なアレクサンドル大公の幼少期は過ごされました。

当時の慣習に従い、彼は幼い頃から教育を受け始めました。当時の教育では、何よりもまず子供の心に神への畏敬の念と敬虔さを育むことが重視されていたため、敬虔な公爵にはまず第一に、聖書――福音書や　聖歌集――聖なるルーシで愛されてきた聖典――を教えられました。その賢明な言葉の中に、私たちの敬虔な公爵たちは、主以外の誰からも助けも慰めも期待できなかった、人生で最も困難な瞬間に、自らへの慰めを求め、見出していたのです。

主は、幼少の頃から、敬虔なアレクサンドル公を、信仰と美徳の炎を燃やす灯として育てられました。この敬虔な公の生涯を記した古の著者の証言によれば、彼は決して子供じみた遊びや娯楽にふけることはありませんでした。　彼の最も好きな行いは聖典を読むことであり、最も好きな休息は主への熱烈な祈りであり、その手本として、彼は常に敬虔な母の姿を目の当たりにしていた。教会賛美歌を歌うことで魂を慰め、断食と節制によって肉体の力を強め、鍛え上げた。

古ロシアの公爵家では、書物による教育と並行して、身体的な教育にも多くの注意が払われていた。すなわち、力と敏捷性の育成、剣や槍の扱い方、馬術などである。　というのも、公爵は霊的な偉業だけでなく、戦いの偉業においても熟達していなければならず、キリストの戦士であるだけでなく、この世の戦士でもあり、聖なる教会を言葉の力によって、そして必要とされるときには剣の力によっても守ることができなければならなかったからである。　そして、同時代の人々から「無敵の勇士」と呼ばれた敬虔なアレクサンドル公は、この公としての教育の側面を完璧に身につけ、同志たちにとって指導者であるだけでなく、戦場における勇猛さの模範でもあった。

幼い公爵たちに対する、将来待ち受ける統治活動への準備も、早い時期から始まっていた。この点においても、敬虔なアレクサンドルにとって、高い模範であり、見習うべき手本となり得たのは、その名高い父であった。同時代の人々の評によれば、彼はロシアの地のために苦難を耐え忍び、神から統治を託された国のために自らの魂を捧げた人物であった。

しかし、敬虔なアレクサンドル公が父の庇護と世話の下で暮らすことは長くは続かなかった。彼は非常に早い段階で、自立した人生の道を歩み始めなければならなかった。

当時、現在のルーシ北部のほぼ全域を支配し、自ら法律や秩序を定め、自ら公爵を選出し、また解任も行う「自由」都市であった大ノヴゴロドは、敬虔なアレクサンドル公の父であるヤロスラフ

[5788] 敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公の生涯に関する情報は、彼の古来の伝記や年代記に記されている。 古代ルーシでは、この敬虔な公の伝記が5つ編纂されたが、そのうち最初の簡潔なものはアレクサンドル・ヤロスラヴィチの同時代人によって書かれ、最後の最も詳細なものは、互いに補完し合いながら順次加筆されていった最古の伝記を基に、17世紀になってようやく執筆されたものである。

[5789] 現在はウラジーミル州の小さな町（トゥルベジェ川沿い、同川がペレヤスラフ湖に注ぐ地点）であるが、当時はペレヤスラヴリ＝ザレスキー分領公国の主要都市であった。

[5790] 敬虔なフェオドシア公妃は、有名なロシアの公ムスティスラフ・ムスティスラヴィチ・ウダリョの娘であり、1244年に逝去した。

に公爵の座を申し出た。　ヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチはこの提案を受け入れたが、ノヴゴロドの人々の下で公が置かれる従属的な立場には納得できなかった。　1228年、ノヴゴロド市民の不服従に激怒したヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチは、自身の居城であるペレヤスラヴリへと退去し、ノヴゴロドには、信頼するボヤールたちの世話の下、幼い二人の息子、フェオドールとアレクサンドルを残した。　1233年6月5日、長男の公爵が結婚式の準備が進められていた最中に全く予期せず死去し、敬虔な公爵アレクサンドルは、自分にとって見知らぬ街で独り取り残されてしまった。

彼の置かれた状況は決して楽なものではなかった。一方では、自由を愛するノヴゴロドの人々は、若き公が自分たちの支配から抜け出さず、彼らの望みを素直に聞き入れ、彼らの自由気ままな振る舞いや慣習を尊重することを望んでいた。　他方、自らの志を貫くヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチは、息子に対し、自分と同じ道を歩み、ノヴゴロドにおける公爵の権威を高めることに尽力するよう求めていた。ノヴゴロド市民の不満の爆発など意に介さずに。　若き公には、父の計画を実行しつつ、自らの自由を何一つ譲りたがらないノヴゴロドの人々の信頼と愛情を勝ち取るために、どれほどの意志の強さ、慎重さ、そして同時に人々を扱う手腕、彼らの見解や習慣に寛容に接する姿勢が求められたことか。　彼はまるで二つの火の間に挟まれたかのようにここで暮らし、常に警戒を怠らず、あらゆる困難を巧みに乗り越えていった。父は彼を称賛し、ノヴゴロドの人々は彼を愛し、「我らの公」と呼び、どのロシアの地域も自らの公として迎えたいと願うアレクサンドルが、自分たちの地を治めていることを誇りに思っていた。

敬虔な公アレクサンドルが、ノヴゴロドの人々の心と知性を惹きつけたのは、知性と賢明な統治だけではありませんでした。　人々をこの聖なる公に惹きつけたのは、彼の類まれな人格的資質であり、また、精神的な美しさに加え、一度でもこの敬虔な公を見た者を皆驚嘆させた並外れた肉体的美しさでもあった。敬虔な公アレクサンドルがその容姿で与えた抗いがたい印象について、彼の古くからの伝記には次のような記述が残されている。

ノヴゴロドに、アンドリアシュという名のドイツ人騎士が一人やって来た。　敬虔なアレクサンドル公の驚くべき美しさに心を奪われた彼は、祖国に帰国後、同胞たちに次のような言葉でその印象を伝えた。「私は多くの国を巡り、多くの人々を見てきたが、王たちの中にも、公爵たちの中にも、アレクサンドル公に匹敵する者は一人もいなかった」。

敬虔なアレクサンドル公の威厳ある姿は、ルーシの恐るべき征服者バトゥーにも同様の印象を与えた。一方、聖アレクサンドルの同時代人であるロシアの人々は、その公の外見を形容するにあたり、ドイツの騎士と同様に、当時の生活の中で比較対象を見つけることができなかった。　美しさにおいては、彼らは敬虔な公を、ファラオがエジプト全土の統治者に任命した総主教ヨセフに、力においては旧約聖書の士師 サムソンに、知恵においてはソロモン王に、 勇気と軍事的武勇においては、古代ローマ皇帝ウェスパシアヌス[5791] に例えられた。

敬虔な公が民に語りかけたり、兵士たちに命令を下したりするとき、同時代人であり公の伝記を記した人物によれば、その声はラッパのように響いたという。

しかし、敬虔な公爵は、その精神的な美しさによってさらに人々の心を惹きつけた。その美しさは、同時代の人々にとって、肉体的な美しさと同様に並外れたものとして映っていた。「彼は計り知れないほど慈悲深かった」と、年代記編者は記している。

慈悲深さは、敬虔なアレクサンドル公の公爵家において、際立った遺伝的な特徴であった。彼の両親であるヤロスラフとフェオドシアもこの点で際立っており、　この資質によって、アレクサンドル公の叔父であるウラジーミル大公ユーリー・ヴェセヴォロドヴィチは人々の愛を勝ち取り、聖アレクサンドルの先祖であるキエフ大公ウラジーミル・ヴェセヴォロドヴィチ・モノマフ――その寛大

[5791] ウェスパシアヌス皇帝は70年から79年まで在位した。

さと、困っている人なら誰にでも手を差し伸べる姿勢で人々を惹きつけた、古ロシアの偉大な慈悲深い人物――もまた、この資質を遺した。

敬虔なアレクサンドル公の青年期を過ごしたノヴゴロドでの出来事は、特にこの聖なる公が先祖から受け継いだこの特質を育むのに寄与したに違いない。豊かな商業都市ノヴゴロドは、農業にとって必ずしも好ましいとは言えない土壌条件のため、不作や食糧不足にしばしば見舞われていた。そのような時期には、パンの価格が恐ろしいほど高騰し、貧しい人々は時に餓死の危機に瀕した。このような不幸は、敬虔なアレクサンドル公がノヴゴロドで過ごした初期の年にも実際に起こった。

1230年、早霜の影響で、ノヴゴロド地方の冬作物はすべて枯れてしまった。ルーシの他の地域でも不作だったため、穀物の搬入はなかった。ノヴゴロドの人々は、西側の隣人であるドイツ人商人たちからわずかな援助を受けることができた。ノヴゴロドは彼らと広範な貿易を行っていたからだ。しかし、外国の商人たちが運んでこられる量はあまりにも少なかった。食糧不足のため、人々はコケやシナノキやマツの樹皮、ドングリを食べ始め、やがて馬肉や犬、猫にまで手を伸ばしたが、それでも食料は足りなかった。　飢餓で亡くなった人々の埋葬されない死体が、街中に無数に転がっていた。彼らの埋葬を世話する者などおらず、誰もが同じような恐ろしい死を恐れて生きていた。飢餓は、人々の心にあるあらゆる人間的な感情を押し殺しているかのようだった。兄弟は兄弟に、父は息子に、母は娘に、一塊のパンさえも分け与えようとしなかった。　親たちは、自分たちがその哀れな一片を手に入れるためなら、子供たちを奴隷として売り飛ばした。ついには、飢えと絶望に狂わされ、人々の死体を食べ始めた者も現れ、中には狂乱のあまり、生きている人間に襲いかかり、殺して食らう者さえいた。道路や通りは人影を失い、誰もが家から出ることを恐れていた。　捕らえられ、罪を問われた者たちを、いかなる処刑も止めることはできなかった。飢えは、罰や死への恐怖に打ち勝っていたのである。あらゆる社会秩序は崩壊し、略奪や住居への放火が横行し、何とかしてパンの備蓄を見つけ出そうとする中、同胞殺しの虐殺が始まった。　当時まだほとんど子供に過ぎなかった敬虔な公アレクサンドルは、ノヴゴロドの人々と共にこれらすべての恐怖を経験しており、それらが彼の感受性の強い子供の心にどれほどの影響を与えたか、想像に難くない。しかし、この不幸は唯一のものではなかった。その後も、程度こそ軽かったものの、同様の災難が何度も繰り返され、過去に経験したことを思い起こさせるそれらの出来事は、未来に対する恐怖をも植え付けた。

敬虔な公爵にとって、貧しい民衆が被ったこれらの不幸は、彼らに対する特別な憐れみを呼び起こした。古代の伝記によれば、アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、困窮し、恵まれないすべての人々の真の友であり、未亡人や孤児たちの父であり、乞食や貧しい人々を養う者であった。　地上で宝を蓄えてはならないという救い主の戒めを心に留め、彼は困窮する者たちに惜しみなく施し、公爵の屋敷から、願いが叶わずに去る者は一人もいなかった。

神の懲罰による恐ろしい災難に加え、敬虔なアレクサンドル公は、ノヴゴロドに暮らす中で、人間の恣意や不正から生じる多くの災難も目の当たりにせざるを得なかった。

自らの自由をこれほどまでに重んじた自由都市であっても、常に、またすべての人に対して等しく公正で思いやりに満ちていたわけではなかった。すべての国政が決定される民衆集会では、富裕層の影響を受けて、人々の運命に重い影を落とすような決議がしばしば可決され、　貧しい人々からは当然のことながら不満や不平の声が上がった。　不当な扱いを受けた人々が、権力者たちに保護を求めることは必ずしもできなかった。というのも、通常、民会の決議を執行する権力は、まさにその富裕層に属していたからである。そして、不満が公然たる反乱へと発展することも珍しくなかった。対立する両陣営は、自分たちが主犯と見なした者たちに対して残酷な報復を行った。

ヴォルホフ橋[5792] では恐ろしい光景が繰り広げられた。生きた人間が川に投げ込まれ、ノヴゴロドの聖人が「敵意と憎しみを忘れ、祈りによって兄弟の血を清めよ」と呼びかけた声だけが、この兄弟殺しの争いを食い止めたのである。　ノヴゴロドの公は、このような状況下で都市を鎮めるための何らかの措置を講じることはできず、起きている惨劇を傍観するしかありませんでした。なぜなら、彼の介入は事態を鎮めるどころか、さらに大きな怒りを招く恐れがあったからです。ノヴゴロドの考えによれば、公がノヴゴロドの内部事情に干渉するのは不適切とされていたのです。

その後、大衆の動乱のきっかけを、公爵たち自身、とりわけ地元の住民に対して必ずしも公正な態度をとらなかった彼らのボヤールやドリュジニキが提供してしまうケースもあった。　敬虔なアレクサンドル公は、配下たちが住民との関係において、不満や苦情の種を一切与えないよう、細心の注意を払っていた。彼は、ドリュジニキたちに対し、権力をどのように行使すべきかについて、賢明な助言を与えた。

「神から――と彼は言った――我々は神の民に対する権力を授かった。そして、恐るべき神の審判の日に、この権力の行使について説明を求められなければならない。　神への畏れを胸に刻み、各人の行いに応じて報いが与えられるあの普遍的な審判の日を念頭に置き、あらゆる公正をもって裁きを行いなさい。争う者たちの顔や立場に左右されず、富める者にも貧しい者にも等しく配慮しなさい。有罪者を罰する際、残酷になってはならず、慈悲をもって罰の程度を量りなさい。　怒りや苛立ち、嫉妬に駆られて行動してはならない。困窮している人々を忘れず、すべての人を助け、「惜しみない」施しを行い、それによって自らも神の慈悲に値する者となれ。」

疑いなく、敬虔なアレクサンドル公は、このような訓示だけに留まらなかった。賢明な先祖であるウラジーミル・モノマフの遺訓――「公はあらゆる事柄を自ら深く見極め、自分自身ができて、またなすべきことを他人に任せてはならない」――を心に留め、側近たちの行動を注意深く見守っていた。　そのおかげで、公とノヴゴロド市民との間の平和と調和が乱されることはほとんどなく、市民側から公やその従者たちに対する非難が口にされることも一度もなかった。　「我らの公は罪なき方」――これが、聖アレクサンドルに対するノヴゴロド市民の評である。彼らは、敵対者たちの影響を受けて、いつもの調和が崩壊しそうになった時でさえ、公の功績を忘れ、不和の張本人たちが、こうした場合にありがちな言葉を口にしようとした時でさえ、この評を繰り返した。　「公よ、あなたはあなた、我々は我々だ」――つまり、「もう君は必要ない、好きなところへ行け」という意味である。

しかし、敬虔なアレクサンドル公が直面しなければならなかったのは、ノヴゴロドの厳しい生活環境だけではなかった。彼の若き頃、主はロシア全土に大きな試練をもたらされた。1223年、ロシア南部には、それまで誰も知らなかった恐ろしい征服者――タタール人が現れたのである。　南ロシアの諸公爵たちは、カルキ川のほとりでタタール軍に惨敗を喫した[5793] 。同時代の記録によれば、この敗北により、ロシアの地は実に200年もの間、悲しみに包まれたという。しかし、勝利者はこの勝利に満足したかのように、それ以上の攻勢を続けず、しばらくの間、ロシアを静観することにした。ルーシの北東部では、迫り来る災難に十分な注意を払わず、恐ろしい敵が再び現れる可能性など考えもしなかった。諸侯の間では不和が絶えず、それがルーシをさらに弱体化させていた。　そして、カルクの大虐殺から14年後、再びルーシの領内にタタール人が現れたとき、彼らはその荒廃をもたらす進軍において、ほとんど何の抵抗にも遭わなかった。タタール人の首領バトゥイは、自らの軍勢を率いてカム川とヴォルガ川を渡り、ルーシの諸公国を次々と荒廃させた。　リャザン、モスクワ、そし

[5792] ノヴゴロドはヴォルホフ川によって二つの地区に分かれている。一つはソフィイスカヤ地区で、ここには主要な聖地である「神の知恵」聖ソフィア大聖堂があり、もう一つはトルゴヴァヤ地区で、ここにはいわゆる「ヤロスラフの宮廷」があった。

[5793] カルカ川はロシア南部の川で、アゾフ海に注ぐ。

て当時の北東ルーシの首都であったウラジーミルは、すっかり廃墟と化していた。大公ユーリー・ヴセヴォロドヴィチはタタール軍を阻止しようと試み、シティ川で彼らと戦いを交えた[5794] が、敗北を喫し、この不幸な戦いで自らも命を落とした。

道中で遭遇した他の都市を荒らした後、タタール軍はノヴゴロドへと進軍した。 しかし、これらの恐ろしい出来事の同時代人が指摘するように、ノヴゴロドの聖人、公爵、および敬虔な人々の祈りにより、主はヴェリキー・ノヴゴロドとノヴゴロド公を守られた。ノヴゴロドまであと100ヴェルストというところで、タタール軍は南へ進路を変え、ロシアの都市の母である首都キーエフを破壊しに向かった。

この侵攻を境に、ロシアの歴史において「タタールの隷属」として知られる苦難の時代が始まった。大公の座には、敬虔なアレクサンドル公の父、ヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチが就いた。当時のルーシの首都であるウラジーミルに到着した彼は、そこには廃墟と死体しか残されていないのを目の当たりにした。 そこで公はたゆまぬ活動を開始した。街から死体を撤去し、逃げ散った住民を呼び戻して落ち着かせ、秩序を回復させた。しかし、完全な平穏は訪れなかった。あの恐ろしい征服者が次に何を企て、その破壊的な襲撃をどのように終わらせるのか、誰も知らなかったからである。 至る所で、ハーンによるルーシへの新たな襲撃や、かつての恐怖の再現を恐れていた。住民たちはそれほどまでに怯えていたため、同時代人の言葉によれば、「タタール」という言葉を耳にするだけで、誰もがどこへ逃げるかも分からぬまま、手当たり次第に逃げ出したという。

ヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチは、民衆を落ち着かせ、またハンがロシアに対してどのような態度をとるのかを見極めるために、オルダへ赴き、バトゥに慈悲を請うた。この旅において、敬虔な公は、恐るべきハンの慈悲を引き出すために、多くの苦労、苦悩、屈辱を耐え忍ばなければならなかった。 しかし、ヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチはバティヤの好意を勝ち取ることに成功した。同時代の年代記作者によれば、タタール・オルドではロシアの公を栄誉をもって迎え入れ、彼をロシアへ送り出す際、すべてのロシアの公に対する最高権力を彼に委ねたという。

ロシアの人々は、これまでに経験した恐怖や将来への不安から、多少なりとも安堵することができた。 確かに、タタール人はルーシ人に全人口を対象とした非常に重い貢納と、彼らの要求すべてへの無条件の履行を要求したが、彼らは襲撃でルーシ人を悩ませることはなく、彼らから離れた場所に住み[5795] 、ルーシの国家生活の秩序を侵さず、そして特に重要なこととして、 ロシアの信仰――古代ルーシの市民秩序の基盤であり、その将来の復興、すなわち重苦しい隷属からの解放の保証――を侵さなかった。

タタール人から遠く離れたノヴゴロドに住んでいた敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、北東ロシアの秩序回復に向けた父の活動に直接関与することはなかった。 いや、彼にはそれについて考える暇などなかったのだ。北東ルーシがタタールによる滅亡の危機に瀕していたのと同時に、北西のルーシの都市――ヴェリキー・ノヴゴロドとプスコフ――には、それ以上に危険な敵――スウェーデン人、ドイツ人、リトアニア人――が迫っていた。

タタールによるルーシの壊滅、そして大公がノヴゴロドやプスコフの人々に援助を送ることができない状況を利用し、彼らはルーシの辺境都市への攻勢を強め、さほど苦労することなくそれらを自らの支配下に置けることを期待していた。

[5794] シチ川は、モロティ川の支流で、トヴェリ州とヤロスラヴリ州を流れている。

[5795] ルーシを征服した後、タタール人はヴォルガ川とドン川沿いの草原地帯を占領し、そこで「黄金のオルダ」として知られるタタール王国を築いた。オルダの首都は、ヴォルガ川下流に位置するサライであった。

ロシア北西部には恐ろしい危険が迫っていた。ここでの問題は、政治的自立を失い、ロシアの地から切り離されてしまう可能性だけでなく、正教の信仰そのものを失うことにもあった。　西方の敵は、異教の征服者でさえ手をつけなかったこの何世紀にもわたるロシアの聖域に対して、大胆不敵な襲撃を仕掛けていた。すでに長い間、教皇側からは、「分派者」[5796] に対して剣の力で戦い、血の川を流して彼らを教皇とカトリック教会に従属させる必要があるという呼びかけが繰り返されていた。　タタールによる大虐殺は、この目的のためには、どうやら極めて好都合な時期であったようで、カトリック教会の最高代表者から正教会に対する闘争の呼びかけがより執拗に発せられ、その一部の信徒たちによってより真剣に聞き入れられたとしても、驚くことではない。　しかし、敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公という人物を通じて、主は正教の信仰を守るためにこれほど強大で無敵の守護者を立てられ、カトリック教徒たちは彼に対して何も為すことができなかった。

敬虔なアレクサンドル公は、闘争の不可避性を予見し、それに備えていた。1239年、彼はポロツク公ブリアチスラフの娘と結婚した。ブリアチスラフはロシアの辺境の公の一人であり、ノヴゴロド以上にカトリック教徒の脅威にさらされていた。　アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、義父という形で、
強大ではないにせよ、信頼できる同盟者を獲得した。公爵の結婚式はトロプツェで行われ[5797] 、結婚祝宴はトルジクとノヴゴロドで催された。　そして、結婚の祝宴が終わるやいなや、敬虔なアレクサンドル公は直ちに重要な事業に取り掛かった。それは、何よりもまず攻撃が予想されるノヴゴロド・プスコフ領の境界に要塞を築くことだった。シェロニ川沿いには一連の要塞が建設された。　しかし、敵はノヴゴロド・プスコフ国境の要塞化に向けたこれらの準備作業を完了させることを許さなかった。バトゥの侵攻から4年後、西方の敵との激しい戦いが始まり、それは敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公の生涯のほぼ全期間にわたって絶えることなく続いた。最初に戦いを仕掛けたのはスウェーデン人であった。

当時、スウェーデンの王位にはエーリヒが就いていた。　王の最も近い親族であるビルゲルは、勇敢な騎士であり軍司令官であり、当時のフィンランドおよびそれに隣接するノヴゴロドの領土への大胆な襲撃ですでに名声を博していたが、子宝に恵まれなかったエリヒの死後、スウェーデンの王位を継承することを目論んでいた。　新たな勝利によって民衆の支持を得ようとした彼は、教皇に煽られて、ルーシに対する戦争を開始した。　スウェーデン人だけでなくノルウェー人やフィンランド人も含む大規模な軍勢を率い、カトリックの司教たちに付き添われて、ビルゲルは1240年、ルーシ人にとって予期せぬ形でイジョラ川の河口[5798] に現れ、敬虔なアレクサンドル公に対し、ノヴゴロドへ大胆不敵な挑戦状を送った。　「私はすでに汝の地に足を踏み入れ、これを荒廃させ、汝をも捕らえようとしている。もし私に抵抗できるなら、抵抗してみよ」。ビルゲルは、敬虔なアレクサンドル公が抵抗することは不可能だと確信しており、すでに勝利を予感していた。　そして実際、彼の襲撃はノヴゴロドの人々にとって予期せぬものであり、彼らは抵抗する準備ができていなかった。同時代の

[5796] すなわち、分裂派のことである。ロシア人が教皇の権威やローマ教会によって新たに導入された教義を認めなかったことから、ラテン系の人々は正教徒をこのように呼んでいた。

[5797] 聖なるアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公の妃、アレクサンドラ・ブリャチスラヴォヴナは、祝福として奇跡を起こす聖母マリアのイコンを授かった。伝承によれば、聖福音記者ルカによって描かれたこのイコンは、ギリシャ皇帝マヌイルによって、聖なるポロツク公女エウフロシニア （1173年5月23日没）に贈られたものである。トロペツでの自身の結婚式を記念して、アレクサンドラ・ブリャチスラヴォヴナはこの聖遺物を当地に残し、それは現在もトロペツの大聖堂に「コルスンの聖母イコン」として保管されている。　聖アレクサンドル公が結婚式を挙げた聖三位一体の木造教会は、現在まで現存していない。その跡地には、現在、聖三位一体に捧げられた古い石造りの教会が建っている。

[5798] イジョラ川はネヴァ川の支流である。

人が指摘するように、大公ヤロスラフが息子を脅かす災難を知ることができず、間に合うように彼を助けられなかったこと、そしてアレクサンドル・ヤロスラヴィチが父に危険を警告できなかったことは、痛ましい光景であった。　ノヴゴロドの軍勢は召集されていなかった。アレクサンドル・ヤロスラヴィチには、わずかな親衛隊しかおらず、彼はそれを急いでノヴゴロドの民で補充した。しかし、彼は敵の大胆な挑発に怯むことはなかった。敵に対抗するため、彼は何よりもまず神に保護と助けを求めた。　ノヴゴロドの聖ソフィア（神の知恵）教会で、敬虔な公爵は、助けを求める熱烈で涙ぐましい祈りを神に捧げ、高慢な敵との争いを裁き、御自身の所有物を不義な者たちの手に渡さないよう懇願した。

「義なる、偉大なる、永遠にして全能なる神よ」と、敬虔なアレクサンドル公は祈りを込めて叫んだ。「あなたは天と地を創造し、諸民族の領土の境界を定め、他者の領土に踏み込まぬよう命じられました。あなたは、あなたに忠実な小さな群れに、彼らを襲う者たちを恐れることのないよう、希望を与えてくださいました。　今こそ、寛大なる主よ、御覧になり、御聞きください。この敵の傲慢な言葉を――彼は、あなたの聖なる教会を荒廃させ、正教の信仰を根絶やしにし、罪なきキリスト教徒の血を流すと自慢しているのです。私と彼との争いを裁いてください。　助けとして立ち上がり、私たちを守ってください。そうすれば、敵たちが「彼らの神はどこにいるのか」と口にすることなどできなくなるでしょう。主よ、私たちはあなたに信頼を置き、今、そして常に、世々限りなく、あなたに栄光を捧げます。

その後、敬虔な公爵は、キリスト教徒の守護者、勝利の将軍、神の母、そして正教の信仰の聖なる守護者たち、聖なるルーシのために天で執り成し、祈りを捧げる者たち――敬虔な公爵ウラジーミル、ボリス、そして聖グレブ――に対し、同様に熱烈な祈りを捧げました。

祈りが終わると、敬虔な公はノヴゴロドのスピリドン司教から祝福を受け、側近たちに貧しい人々に施しを与え、彼らに祈りを請うよう命じた。そして自身は、その少人数を気にして動揺していた従軍兵たちの元へ出て行き、これから待ち受ける偉業に向けて彼らの士気を高めた。　「神は力にあるのではなく、正義にあるのだ」――敬虔な首長は、このようにして仲間たちを奮い立たせた。その後、この一握りの勇敢な者たちを率いて、彼は素早く敵へと向かった。そしてここ、ネヴァ川のほとりで、ルーシにとって記念すべき 、その啓蒙者である敬虔なウラジーミル公の聖なる記念日（7月15日）に、有名な戦いが繰り広げられ、この戦いの功績により、アレクサンドル・ヤロスラヴィチは「ネフスキー」の称号を得た。

迫り来る偉業に臨む正教の信仰を守る者たちを力づけるため、主は彼らに奇跡的な前兆を与えられた。

敬虔なアレクサンドルの軍勢の中には、イジョラ人であるペルグシイ（洗礼名はフィリッポ）が一人おり、アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、その土地を熟知した経験豊富な戦士として、彼に夜間の警備を任せた。　異教を信仰し続けていた同族の中で、キリスト教徒のペルグシイは敬虔な生活で際立っていた。彼は祈り、労働、そして断食の行いに時間を費やしていた。そして主は、この敬虔な戦士に次のような奇跡的な幻を授けられた。

日の出の頃、ペルグシウスは川の方から近づいてくる船の物音を耳にし、敵だと思い、警戒を倍加させた。漕ぎ手たちは、まるで顔を隠すような霧に包まれていた。　見えるのは、舟の中に立っている二人の勇士だけだった。彼らの明るい顔立ちと服装は、ペルグシウスにとってどこか見覚えがあるように見えた。そして突然、彼の推測を裏付ける声が聞こえ、すべての疑念を払拭し、その魂を喜びで満たした。　二人の騎士のうち年長者が、年少者に語りかけて言った。「兄弟のグレブよ、漕ぎ手を急がせよ。我らの親族であるアレクサンドル・ヤロスラヴィチを助けに急ごう」。彼らは、敬

虔な殉教者であり、敬虔な公アレクサンドルが祈りを込めて助けを求めていた、敬虔な公ボリスとグレブであった。

ペルグシイは急いでその光景を公に伝えた。この奇跡的な前兆に勇気づけられたアレクサンドル・ヤロスラヴィチは、その日のうちに敵を攻撃した。スウェーデン軍は攻撃を予期しておらず、敵がこれほど近くにいるとは考えておらず、その兵力や戦力も把握していなかった。激しい戦いは朝から夕方まで続いた。

その指導者に鼓舞され、敬虔な公爵の軍勢は驚くべき勇気を発揮し、敵を驚嘆させた。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ自身も終始、戦いの最前線に立ち、スウェーデン軍の指揮官の顔に傷を負わせた。 ある戦士はビルゲルの天幕を切り倒し、別の戦士は戦いの熱に駆られてスウェーデンの船に駆け上がり、不意打ちと恐怖で動揺した敵に対し、剣で凄まじい一撃を次々と浴びせ続けた。 あらゆる地点で敗北し、最も勇敢な仲間たちを失ったスウェーデン軍は、ロシア軍に対して数の上で優位にあったにもかかわらず、戦いを再開したり、朝まで戦場に留まったりする勇気はなかった。 戦死者の遺体で二つの穴を埋め尽くし、殺された者の中から身分の高い者を船に連れ去ると、彼らはその夜、自分たちにとって不親切なネヴァ川の岸辺から急いで立ち去った。ロシア側の損害は軽微で、戦死者はわずか二十名、その中には戦いで最も活躍した六人の戦士の一人であるラトミールも含まれていた。

しかし、この栄光あるネヴァ川の勝利は、ドリージナとその首長の勇気だけで勝ち取られたものではなかった。戦いの開始前に奇跡的な幻視によってロシアの戦士たちを勇気づけた主は、戦いの最中にもその助けを授けたのである。 翌日、戦いの参加者たちは、イジョラ川の対岸――戦闘中、ロシアの戦士が一人も足を踏み入れなかった、ほとんど通行不能な場所――に、多数の敵の死体が横たわっているのを驚きをもって目にした。神の天使たちは、聖なる信仰を冒涜する敵に対して、その信仰を守る一握りの防衛者たちを、目に見えない形で助けていたのだ。

主の奇跡的な御加護と勝利に対して主への感謝を捧げた後、敬虔なアレクサンドル公は、ノヴゴロド市民から熱狂的な歓迎を受けながら、大いなる栄光のうちにノヴゴロドへと帰還した。

聖なるルーシは、この聖なる公爵とその従軍者たちの輝かしい武勇を決して忘れず、戦いで倒れた戦士たちの名を祈りを込めて偲び、敬虔なアレクサンドル公に「ネフスキー」という称号を永遠に与え続けた。敵たちもまた、自らの敗北を長く記憶していた。 しかし、自国の公のこの偉業をとりわけ大切にすべきだったはずのノヴゴロドの人々は、どうやらすぐにそれを忘れてしまったようだ。危険が去ると、彼らはすぐに公と不和になった。アレクサンドル・ヤロスラヴィチはノヴゴロドを去り、ペレヤスラヴリへと向かった。まもなく、ノヴゴロドの人々は自らの恩知らずな行いを後悔することになった。

ノヴゴロドでの不和と聖アレクサンドルの退去の報を耳にしたリヴォニアのドイツ人たちは、この機会を利用しようと決心し、プスコフを攻撃した[5799] 。プスコフの国境にある要塞イズボルスクを攻略した後 、ドイツ軍はプスコフへと進軍した。 プスコフの住民たちは包囲に耐えきれなかった。とりわけ、彼らの間に裏切り者が一人おり、密かにドイツ人を城内に招き入れてしまったためである。聖オルガの聖なる都は、こうしてドイツの支配下となった。 ドイツ軍は市内に総督を任命した。ドイツ式の秩序が確立されたことに続き、信仰の変化も予想された。ドイツ軍はプスコフにカトリックの司教区を開設することを決定した。

[5799] リヴォニア（現在のバルト海沿岸地域）には、12世紀後半にドイツ人が現れた。1201年、彼らはここにリヴォニアの首都であるリガを建設し、翌年には、リヴォニア地方の征服だけでなく、武力によって現地住民をカトリックに改宗させることを目的とした、特別な宗教的・騎士団的（半修道的、半軍事的） 騎士修道会が設立された。この修道会は、リヴォニア地方の征服だけでなく、武力によって現地住民をカトリックに改宗させることも目的としていた。1237年、剣騎士団は、それ以前にヴィスワ川下流で支配を確立していた、同じく修道騎士団であるテウトン騎士団と合流した。

しかし、危険にさらされていたのはプスコフだけではなかった。ドイツ軍はノヴゴロドにも進軍していた。冬にノヴゴロドのヴォドスカヤ・ピャティナ[5800] を制圧すると、彼らはここにコポリエ要塞を築き、テソフを占領し、ノヴゴロドから30ヴェルスタの地点で略奪や殺戮を行い、捕虜を捕らえてリヴォニアへ送った。 ノヴゴロドでは人々に恐怖が蔓延し、交易は途絶え、都市の包囲を待ち受ける状況となったが、指導者や首領の不在により、都市の防衛準備は極めて不十分なままだった。そこでノヴゴロドの人々は、その名高い公を思い出し、聖アレクサンドルに与えた侮辱を悔い改め、何としても彼にノヴゴロドへ戻ってきてもらうよう懇願することを決めた。 その目的で、ノヴゴロドの人々はウラジーミルへ使節団を派遣し、大公ヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチに対し、敬虔なアレクサンドル公をノヴゴロドへ帰還させてくれるよう懇願した。

ヤロスラフは息子のアンドレイを率いる軍隊をノヴゴロドへ派遣した。しかし、ノヴゴロドの人々が求めていたのはアンドレイではなく、アレクサンドルであった。彼らは、自分たちを襲った災難から救い出せるのは彼だけだと悟り、大公のもとへ大司教を団長とする新たな使節団を急いで派遣し、アレクサンドル・ヤロスラヴィチの公位復帰を改めて懇願した。 慈悲深い公は、ノヴゴロドの人々から受けた侮辱を忘れ、自分を切実に必要としているその地へと急いだ。 彼の到着により、ノヴゴロドの状況は一変した。街に迫る敵との戦いの準備は迅速かつ順調に進められ、皆の間に勝利への確信が戻り、英雄である大公と共に新たな偉業を成し遂げようという意気込みが湧き上がった。戦いの準備を整えたアレクサンドル・ヤロスラヴィチは、ノヴゴロドとニゾフの部隊を率いて、プスコフを解放するために向かった。 ドイツ軍はプスコフから追放され、プスコフの人々は救い主を歓喜をもって迎えた。

しかし、敬虔な公は、単にドイツ人をプスコフから追い出すことだけに留まらなかった。ルーシ北西部の平穏を確固たるものにし、敵に教訓を与え、敵による新たな攻撃の可能性を未然に防ぐ必要があった。敬虔な公は、ドイツ人の攻撃と略奪に対する報復として、彼らの領土への攻勢を仕掛けることを決意した。

聖三位一体教会で、敬虔な親族であるプスコフ公ヴセヴォロド・ムスティスラヴィチの聖遺物箱の前で祈りを捧げ、プスコフ市民の祈りと祝福に送り出されたアレクサンドル・ヤロスラヴィチは、自らの軍団を率いてリヴォニアへと向かった。ドイツ人はこれほど迅速な攻撃を予想しておらず、抵抗することはできなかった。 リヴォニアはロシア軍によって荒廃させられた。リヴォニアからプスコフへの帰路、敬虔な公はチュド湖のほとりに立ち寄り、ここで1242年4月5日、歴史上「氷上の大虐殺」として知られるドイツ騎士団との有名な戦いが繰り広げられた[5801] 。

大勢の騎士たちは勝利を確信していた。 「さあ、ロシアのアレクサンドル公を捕らえよう。スラブ人は我々の奴隷となるべきだ」と、騎士たちは威張って言った。しかし、神の助けを仰ぎ、自らの守る大義の聖さと正しさを信じていた敬虔な公は、こうした威勢の良い言葉にもひるむことはなかった。 騎士たちとの衝突における最初の失敗も、彼を動揺させることはなかった。敵の動きを監視するために敬虔な公爵が派遣した軽装の前衛部隊は、ドイツ軍の主力部隊に遭遇し、撃破されてしまった。 その一部は捕虜となり、残りは で起きた不運な出来事についての悲報を携えて公爵のもと

[5800] ノヴゴロドの領土は5つの部分、すなわち「ピャティナ」に分割されていた。ヴォドスカヤ・ピャティナは、ラドガ湖周辺に位置する土地で構成されていた。

[5801] チュド湖はプスコフの近くにある。 その別名はペイプスである。「暖かい湖」と呼ばれる海峡を介して、プスコフ湖とつながっている。チュド湖の長さは90ヴェルスト、幅は47ヴェルストであり、プスコフ湖の長さは50ヴェルスト、幅は20ヴェルストである。

へ駆けつけた。そこで敬虔な公爵は、ウズメニのヴォロニャ・カメン付近にあるチュド湖の氷上[5802]に軍を停め、ここで決戦の準備を始めた。

その兵力はノヴゴロドからの新たな兵士によって補充されたが、それでも騎士軍と比べれば、あまりにも少なかった。しかし、その兵力の少なさは、兵士たちの高揚した士気、そして正義の大義と愛する公のために命を捧げるという恐れを知らぬ覚悟によって補われていた。　首長は戦士たちの闘志を鼓舞する必要などなかった。誰もが目前の戦いの重要性を自覚しており、誇り高き敵との戦いに身を投じていた。「ああ、我らが愛すべき誠実な公よ！その時が来た。我らは皆、あなたのために命を捧げよう」――ロシア兵の隊列からは、このような熱気あふれる叫び声が響き渡った。

最初に戦いを始めたのは騎士たちだった。頭から足先まで鉄の鎧に身を包んだ彼らは、その数でロシア軍を圧倒しようと突進した。しかしそこで彼らは、あまりにも勇敢な抵抗に遭い、愕然とした。　予想されていた敵の動揺や、さらには敗走どころか、彼らは恐怖に駆られながら、ロシア軍の隊列がさらに密に固まり、まるで生きた壁を形成しているのを目の当たりにした。　騎士たちは動揺し、足を止めた。その時、敬虔なアレクサンドル公は敵の動揺に気づくと、自軍の部隊の一部を巧みに迂回させ、騎士たちが全く予想していなかった方向から攻撃を仕掛けた。凄まじい激戦が繰り広げられた。　盾や兜に剣が打ちつけられる恐ろしい音、砕ける槍の軋み、打ち倒され、水没していく者たちのうめき声により、将たちは戦況を指揮し、軍に命令を下すことさえできなかった。秩序立った戦闘などなかった。　敗北を悟った騎士たちは、自分たちを包囲するロシア軍の大隊を突破し、捕虜になるのを避けるため、全力を振り絞った。しかし、それも叶わなかった。湖の氷は血で染まり、多くの場所で耐えきれずに崩れ落ち、兵士たちや彼らの武器を巻き込んでいった。戦いは夜遅くまで続いた。　騎士たちの損失は甚大だった。生き残った者たちは逃走して助かろうとしたが、ロシア軍に追いつかれ、殺された。七ヴェルストにわたって、湖は死体で埋め尽くされた。多くの騎士が捕虜となり、さらに多くの者が命を落とし、つい最近までそれほど恐ろしく、数も多かった民兵部隊は、ほとんど跡形もなくなってしまった。

勝利者たちは、その首領を先頭に、厳かにプスコフへと帰還した。敬虔な公爵の馬のそばには、最も名高い騎士五十人が付き従い、ロシア軍の後ろには、数多くの一般の捕虜たちが連行されていた。プスコフの人々は、自分たちの救い主を喜びをもって迎えた。

「柔和なダビデが異民族を打ち負かすのを助けた主は、我らが敬虔な公爵がプスコフの街を異教徒や異民族から解放するのを助けてくださった」――この喜びの叫びが至る所で響き渡った。

至る所に喜びと歓喜が満ち溢れていた。皆、この勝利がいかに重要であったか、また、数多くの敵の攻撃から自らの独立を守る力など到底持たなかったこの辺境のロシアの町に対し、敬虔な公がどれほどの恩恵をもたらしたかを痛感していた。プスコフの人々は、聖なるアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公のこの偉業を決して忘れてはならない。　「ああ、無知なプスコフの人々よ！もしあなたがたが偉大なるアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公を忘れ、あるいは彼やその子孫、その一族から背を向けるならば、主がエジプトの奴隷制から解放し、荒野でマナを与えて養ってくださったにもかかわらず、主を忘れてしまったユダヤ人たちと同じようになるだろう」　――と、同時代の年代記作者は、この輝かしい勝利の記述を締めくくっている。この言葉によって、彼はあたかもプスコフの人々に対し、彼らの「兄貴分」であるノヴゴロドの人々の行いを戒めようとしているかのようだ。ノヴゴロドの人々は、ネヴァ川の勝利をあまりにも早く忘れ、恩知らずであるだけでなく、その名高い公の偉業を理解し評価することさえできなかったのだ。

[5802] この地は、チュド湖からプスコフ湖へと曲がる地点に位置している。その名は、かつてそこに群れをなして旋回していた多くのカラスに由来する。

プスコフの解放を盛大に祝った後、敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は自らの軍勢を率いてノヴゴロドへと急行し、そこではプスコフと同様に、熱狂と喜びをもって迎えられた。

ロシアのこの二つの辺境の都市では、チュド湖での輝かしい勝利が長く記憶され、16世紀末になってもなお、この戦いで戦死した戦士たちの名を祈りを込めて偲び続けていた。勝利者の名声は遠くまで広まった。ヴァリャーガ海（[5803]）、黒海、カスピ海の沿岸、ローマ、そして遠くアジアに至るまで、と、この敬虔な公爵の同時代人である伝記作家は記しているが、アレクサンドル・ヤロスラヴィチの輝かしい勝利の知らせが伝えられていた。

ルーシで勝利が盛大に祝われている一方で、リヴォニアでは騎士義勇軍の壊滅の知らせが瞬く間に広まり、すべての人々に恐怖をもたらした。　ドイツ人たちは、敬虔なアレクサンドル公が軍を率いてリヴォニアの首都リガに間もなく到着するだろうと日ごとに予想しており、自らの力だけでロシア公の攻撃を撃退し、新たな首都を守り抜くことは望めていなかった。　ドイツ騎士団の団長（マスター）は急いでデンマーク王に使節団を派遣し、ノヴゴロド公に対する支援を要請した。

しかし、敬虔なアレクサンドル公は、征服など全く考えておらず、望んでもいなかった。　輝かしい功績を成し遂げ、ノヴゴロドとプスコフを脅かしていた災厄から解放すると、彼は自身の居城であるペレヤスラヴリへと帰った。するとドイツ人たちは、公がノヴゴロドを去ったという知らせを聞くと、急いで使節を派遣し、和平の締結と捕虜の交換を求めた。　彼らはすべての征服地を放棄し、ノヴゴロドの人々を和平へと導くためなら、ノヴゴロドの領土に隣接する自国の領地の一部を譲る用意さえあった。そして、和平は「ノヴゴロドの自由意志のすべて」に基づき、すなわちノヴゴロドの人々自身が提案した条件で締結された。

こうして、スウェーデンおよびドイツとの戦いは終結した。

ロシア人にとって、ネフスカヤの戦いとチュドスカヤの戦いの勝利は極めて重要な意味を持っていた。もはや、異邦人がロシアの辺境の都市を掌握し、それらを自らの支配下に置き、ロシアの人々に聖なる正教の信仰からカトリックへの改宗を強いるという脅威は、もはや恐れるに足るものではなかった。　神ご自身が、長きにわたる争いに決着をつけ、私たちの祖国をラテン人の陰謀から守り、ドイツの支配の拡大に歯止めをかけ、その忠実な僕である敬虔なアレクサンドル公の力強い手を通じて、他国の領土に侵入せず、ロシアの聖なるもの――正教の信仰――に手を出さないよう、厳しく警告されたのである。　聖なるルーシの守護者であり、同時代の人々から「無敵」と称された敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、ルーシに多大な功績を残した。聖なるルーシは、彼のこの偉大な地上の偉業を決して忘れず、今後も決して忘れることはないだろう。

二つの強大な西方の敵は打ち負かされ、以前ほど脅威とは見なされなくなった。しかし、新たな――確かにそれほど危険ではないが、その分より獰猛な――敵が現れた。それはリトアニア人であり、その荒廃をもたらす襲撃により、ノヴゴロドおよびプスコフの領土の南西の国境地帯は苦しめられていた。

バルト海の東海岸、ヴィスワ川と西ドヴィナ川の河口の間にある平原には、すでに数世紀にわたり、出自も言語も我々に近いリトアニア族が暮らしていた。　貧しく、知的にも未発達であった彼らは、スラブ人との最初の衝突の際、その優位性を認めざるを得ず、辺境のロシアの公爵たちに服従し、貢ぎ物を納めていた。当時のリトアニア人は個別の部族に分かれており、互いに敵対することも珍しくなく、国家体制や秩序も持っていなかった。　しかし、13世紀初頭、ドイツ騎士団による絶え間ない襲撃の影響を受けて、それまで分散していたリトアニアの部族は統合され始めた。リトアニア人の間には好戦的な公爵たちが現れ、国内でますます大きな権力と影響力を獲得していった。　リトアニアの公たちは当初、共通の敵であるドイツ人に対して、ロシアの公たちと連合して戦っていたが

[5803] 古代、バルト海はこの名前で呼ばれていた。

、やがては同盟国に対しても攻撃を仕掛けるようになった。彼らは、耐久力とスピードに優れた馬に乗った小規模な部隊を率いて、ロシアの国境沿いの地域に襲撃を仕掛け、荒廃と殺戮をもたらした。ノヴゴロドやプスコフの辺境の町や村の住民たちは、リトアニアからの予期せぬ襲撃を常に恐れて暮らしていた。また、ノヴゴロドやプスコフの人々は、主に　ドイツ人やスウェーデン人との戦いに忙殺されていたため、主に重装甲の軍隊を擁し、軽装で機動性の高い部隊――弓兵――はごくわずかしかいなかった。そのため、リトアニアとの国境地帯を防衛することができなかった。ここでもまた、守護者となったのは敬虔なアレクサンドル公であった。

「氷上の戦い」という記念すべき年の夏、ノヴゴロドにはリトアニア人による略奪的な襲撃の知らせが届き、その直後に敬虔な公は彼らとの戦いを開始した。たった一回の遠征で、彼は異なる地域で互いに独立して活動していた最大七つの敵部隊を散らすことに成功した。　多くのリトアニア軍部隊の指揮官が、敬虔な公の部隊によって打ち倒されたり、捕虜にされたりした。この出来事の同時代人である年代記作家が述べるように、リトアニア人はこの頃からアレクサンドル公の名を恐れるようになったが、略奪的な襲撃を止める気はなかった。

1245年、彼らはトルジクとベジェツクの周辺を荒らし尽くし、奪った戦利品と捕虜を連れて、すでに故郷へ帰還しようとしていた。　しかし、トロペツの城壁の下で、ノヴォトルジ、トヴェリ、ドミトロフの連合軍に追いつかれ、野原で敗北を喫した後、トロペツに立てこもった。　そこで、古きトロペツ――ムスティスラフ・ムスティスラヴィチ・ウダリイ公の領地――を防衛するため、敬虔なアレクサンドル公が、自身の小規模なドリュジナとノヴゴロドの兵を率いて急行した。包囲初日、トロペツは敬虔な公の軍勢によって陥落した。　リトアニア軍は城から逃げ出そうとしたが、アレクサンドル・ヤロスラヴィチのドリュジナに追いつかれ、その襲撃の代償を高く払わされた。彼らの指導者8人が戦死し、生き残った者たちは略奪品を捨てて、逃げ延びた。

しかし、敬虔な公アレクサンドルは、この勝利にとどまらなかった。傲慢な敵に教訓を与え、さらなるリトアニアの襲撃や略奪からロシアの国境を守るため、彼は、ノヴゴロドの人々がさらなる遠征への同行を望まなかったにもかかわらず、自身の小さな軍勢を率いて敵を追撃した。　ジヴツァ湖の近くで、彼は逃亡者たちを追い詰め、一人残らず全滅させた。　その後、義父のブリアチスラフが統治していたヴィテブスクへ向かい、短期間の休息を経て再びリトアニア人の領内へと進軍し、ウスヴィャト近郊で彼らの新たな民兵部隊を撃破した。これにより敵に多大な恐怖を植え付けたため、彼らは長い間、ロシアの領土を攻撃することを敢えてしなくなった。

このように、敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、自らの北西の領地を勇敢に守り抜いた。その並外れた勇敢さと軍事的才能により、彼はタタール支配の初期という古代ルーシにとって極めて困難な時代[5804]においても、古ルーシの北西地域を防衛しただけでなく、それらを完全に安全に保ち、同時に西方の敵に対して、タタールに打ち負かされたルーシでさえ、自らの独立と信仰を守り抜くことができることを証明したのである。

ノヴゴロド・プスコフ地方だけでなく、多くの地で敬虔な公の勝利を喜んだ。その知らせは当時のルーシ全土に広まり、厳しい試練の時期にルーシの人々を勇気づけ、より良い未来への希望を吹き込んだ英雄である公に、すべての人の視線が注がれた。　タタールの支配下に苦しみ続けていた北東ルーシも、ノヴゴロドと同様に、大公の玉座に敬虔なアレクサンドル公が就くことを切望しており、ノヴゴロドの人々以上に彼の功績を高く評価していた。

1246年の出来事は、一時的にロシア北西部における敬虔なアレクサンドル公の活動を中断させ、彼を北東部へと呼び戻した。　この年、敬虔なアレクサンドル公の父であるウラジーミル大公ヤロ

[5804] 当時、北東部のルーシは、アレクサンドル・ヤロスラヴィチがスウェーデン人、ドイツ人、リトアニア人といった強大な敵と戦う中で、支援や援助をほとんど提供することができなかった。

スラフ・ヴェセヴォロドヴィチ[5805] が、オルドで殉教した。古ロシアの慣習によれば、大公の座への権利は、故公の弟であるスヴィャトスラフ・ヴェセヴォロドヴィチに帰属していた。　しかし、この頃には最高権力と公爵の地位を授ける権利はすでにタタール人の手に移っており、ハンの承認を得るために、スヴィャトスラフは自らオルダを訪れる必要があった。同年、スヴィャトスラフの甥であるアンドレイとアレクサンドル・ヤロスラヴィチも、ハンに拝謁するためオルダへと向かった。

勇敢なノヴゴロドの公とその輝かしい勝利に関する噂は、ハンの耳にも届いていた。バトゥーは、あれほど話題になっていた敬虔な公に会いたいと考え、直ちにオルドへ来るよう要求した。

「神は私に多くの民族を服従させた。まさか、お前一人だけが服従を拒むというのか？もし自分の領土を守りたいのなら、私の元へ参拝に来い」――バトゥーはアレクサンドル・ヤロスラヴィチにそう伝えるよう命じた。

この恐るべき支配者の命令に逆らうことはできず、敬虔な公は急いで遠い旅路についた。

そこで何が待ち受けているかは、誰にも分からなかった。彼の父はそこで栄誉をもって迎えられたが、その栄誉ある歓迎は、一連の屈辱と侮辱を代償として得られたものだった。公爵たちは、浄化の火の中を通り抜けたり、茂みや亡きハーンたちの影に頭を下げたりすることを強要された。　ロシアの公爵たちの中には、キリスト教徒にとって屈辱的なこれらの要求に従うことに同意しなかった者もおり、その不服従の代償として命を落とした。ロシアの殉教者ミハイル・ヤロスラヴィチ・チェルニゴフスキー公の例は、疑いなく敬虔なアレクサンドル公にもよく知られていた。　しかし同時に、彼の父の例は、服従し、ハンの要求をすべて履行したとしても、必ずしも救われるとは限らないことを示していた。ヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチは、最初の訪問　でオルドに敬意をもって迎えられたが、二度目の訪問の際にタタール人に毒殺されたのである。　そこで、敬虔なアレクサンドル公は、たとえその拒絶が自らの命を犠牲にすることになろうとも、異教の儀式を行うことを拒むことを決意した。正教の信仰を勇敢に守り、幼い頃から主によって敬虔さの器として選ばれた彼が、果たして他の行動をとることができただろうか！

聖なる賜物と大司教の祝福を受けて、彼はノヴゴロドからオルドへと向かった。

敬虔な公がオルドに到着し、ハーンに謁見する前に、タタール人の慣習である儀式を行うよう命じられたとき、彼はその命令を拒否した。「私はキリスト教徒だ」と彼は言った。「したがって、被造物に頭を下げることは私にふさわしくない。　私は、天と地、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された、三位一体において賛美される唯一の神、父と子と聖霊を崇拝するのです」。聖なる公の穏やかで断固とした答えは、ハンの廷臣たちを驚かせた。しかし、アレクサンドル・ヤロスラヴィチがタタールの儀式を行うことを拒んだと聞いたバトゥーが、このような場合に通常下される「不従順者には死を」という命令の代わりに、聖なる公をこれ以上強要せず、一刻も早く自分の元へ連れてくるよう命じたとき、彼らはさらに驚かされた。

「王よ」と、敬虔な公はハンの前にひざまずきながら語りかけた。「私はあなたに頭を下げます。神があなたに王位を授けられたからです。しかし、被造物には頭を下げるつもりはありません。私は唯一の神に仕え、神を尊び、神に礼拝を捧げるのです」。

バティは、アレクサンドル・ヤロスラヴィチの美しく、気高い顔立ちを長い間眺め、ついに周囲の廷臣たちに向き直って言った。「彼について聞かされていたことは真実だった。彼に匹敵する公はいない」。また、敬虔な公はハーンの妃からも丁重にもてなされた。

[5805] ヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチは、公爵の敵対者たちによってハンに讒言された。タタール人たちは彼を毒殺した。

バティは独立した支配者ではなく、バイカル湖の向こう側、アジアのゴビ砂漠の山岳地帯にあるカラ・コルムに住む大ハンの代理に過ぎないと見なされていた。　最も近い君主であるオルドンのハンに拝謁した後、ロシアの公爵たちは、モンゴルの最高統治者が治める遠く離れた首都へと赴き、彼に拝謁しなければならなかった。この遠く、極めて困難な旅路を、バティの命令により、敬虔な公爵アレクサンドル・ヤロスラヴィチもまた踏まなければならなかった[5806]。

彼はアジアの支配者に温かく迎えられ、しばらくの間モンゴルの首都で暮らし、ルーシを支配する者たちの性格を注意深く観察した。そして1250年になってようやく、アレクサンドル・ヤロスラヴィチと彼の弟アンドレイはルーシへと帰還した。　ハンはアンドレイに大公の座を与え、アレクサンドル・ヤロスラヴィチにはキエフとノヴゴロドを残した。しかし、ロシアの都市の母であり、ルーシ最古の首都であるキエフは、タタールによる破壊の後、廃墟と化していた。　キエフ地方の住民は、タタールから逃れるため、一部は南西の現在のガリツィアへ、一部は北東のウラジーミル・ルーシへと散り散りになった。アレクサンドル・ヤロスラヴィチにはここでやるべきことがなかったため、ウラジーミルにしばらく滞在した後、ヴェリーキー・ノヴゴロドに戻った。

ノヴゴロドの人々は彼を喜びをもって迎えたが、その喜びはまもなく悲しみと不安に覆われてしまった。敬虔な公は、過酷な旅路とオルダで経験した苦難に疲れ果て、危篤状態に陥ったのである。　ノヴゴロドの人々は、公の病状を心配そうに見守り、朝から晩まで教会は、敬虔な公の回復を熱心に祈る人々で溢れかえっていた。そして主は民の祈りを聞き入れられた。敬虔な公は重い病から回復したのである。

ノヴゴロドの人々は、今や平和を謳歌していた。西方の隣国たちは、アレクサンドル・ヤロスラヴィチの輝かしい勝利を記憶に留め、再び攻撃を仕掛けることを敢えてせず、ノルウェー人だけが時折、ノヴゴロドの辺境領土に襲撃を仕掛けてくる程度であった。　敬虔な公は、自らの領地をノルウェー人の襲撃からも守りたかったため、ノルウェー人をノヴゴロドとの同盟に引き入れようとした。　この目的のために、ノルウェーのガコン王へ使節団が派遣された。同時に、この使節団には、王に対し、アレクサンドル・ヤロスラヴィチと親族関係を結ぶこと――すなわち、王の娘クリスティーナをアレクサンドルの息子ヴァシリーに嫁がせること――を提案するよう命じられていた。

この結婚は実現しなかったが、使節団の主な目的は達成された。ノルウェー王はこれに応じ、ノヴゴロドとの条約を締結するために使者をノヴゴロドへ派遣し、それ以来、ノルウェーによる襲撃は止んだ。この条約締結後まもなく、アレクサンドル・ヤロスラヴィチはノヴゴロドの公位を永久に去った。

大公の地位を得たアンドレイ・ヤロスラヴィチは、兄が備えていたような慎重さや統治の英知を全く持ち合わせていなかった。彼は統治にほとんど関心を示さず、ほとんどの時間を様々な娯楽に費やし、経験の浅い顧問たちを周囲に集め、タタール人との折り合いをつけることもできなかった。オルダでは、彼は反抗的な公と見なされており、バティヤの後継者であるサルタクは、このロシアの公を懲らしめることを決意した。彼はネヴリュイを指揮官とする大軍を彼に対して派遣した。　アン

[5806] この旅の困難さは、現代の旅行家による中央アジアの砂漠の記述から推し量ることができる。「あらゆる植生を欠いた、果てしなく広がる草原の広大さは、旅人の心に陰鬱で重苦しい印象を与える。　動物たちはこの恐ろしい砂漠から逃げ出している。トカゲや昆虫でさえめったに見かけない。足元には、死んだ馬やラバ、ラクダの骨が至る所に転がっている。土壌は耐え難い暑さで焼けつき、太陽は日の出から日没まで容赦なく照りつける。　そよ風は空気を揺らすこともなく、ほんの数分間の涼しささえも与えてくれない。ただ時折、熱い旋風が駆け抜け、その前をくるくると渦巻く塩の塵の柱を追い立てる。嵐の最中、この塩の塵は旅人たちを覆い尽くし、彼らの目をくらませる」。

ドレイ・ヤロスラヴィチは、タタール軍の接近を耳にするやいなや、ウラジーミルからまずノヴゴロドへ、そしてノヴゴロドの人々が彼を受け入れることを拒否したため、スウェーデンへと逃れた[5807]。大公の軽率な行動の代償を払わされたのは、民衆であった。彼を守るために現れたのが、敬虔な公アレクサンドルであった。

祖国をタタールの荒廃から救うため、アレクサンドル・ヤロスラヴィチはオルダへと向かい、ハンの怒りを鎮め、こうしてルーシで始まった流血を食い止めることに成功しただけでなく、ハンから大公位を認める勅書も授かった。　この時から、タタール人の隷属の重荷を和らげることに全力を捧げた、敬虔な公の祖国への献身的な奉仕が始まったのである。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、タタール人によって大群でオルドへ連行された捕虜の身代金として、公国の財宝を惜しみなく投じた。　また、捕虜として残された者たちが、その悲しみの中で最大の慰めである祈りと礼拝を奪われないよう配慮した。彼はキリル都主教と共に、ハンからオルダの首都サラエにロシアの教区を設置する許可を勝ち取った。

しかし、この敬虔な公の配慮を必要としていたのは、捕虜たちだけではなかった。ネヴリュエフの侵攻後、北東ルーシは再び荒廃し、敬虔なアレクサンドル公は、破壊された教会を早急に再建し、散り散りになった人々を集め、荒廃した焼け跡で彼らが生活を立て直せるよう支援に奔走した。聖公の同時代人が指摘するように、彼はまるで父親のように民を慈しみ、その配慮のおかげで、大公国には徐々に平穏と秩序が取り戻されていった。敬虔な公は、民を落ち着かせるだけでなく、彼らの苦しい境遇を和らげ、タタールの隷属の重荷を可能な限り軽減したいと願っていた。

ロシアの国家体制を変えず、聖なる信仰と教会の制度を不可侵のままに保ったことに対し、タタール人はルースに重い貢納を課した。彼らは最良で貴重なものをすべて奪い取り、その要求において、被支配者が要求された額の税を支払う能力があるかどうかを一切考慮しなかった。　タタール人は、富裕層と貧困層を区別することなく、一人当たりの貢納金を徴収した。支払能力のない被支配者については、一切の憐れみもなくオルダへ連行し、奴隷とした。

1257年、ルーシから得られる収入をより正確に把握するため、タタール人は役人を派遣してすべてのルーシ人を数え上げさせた。大公は、この措置がいかに過酷であろうとも、タタール人によるさらなる弾圧を招かないためには従う必要があることをよく理解していた。しかし、誰もがそう考えていたわけではなかった。

大公の強い要請により、ウラジーミロ・スーズダリ・ルーシでは人口調査が平穏に行われ、アレクサンドルは、ルーシの人々とその大公の従順さに満足したハンの慈悲を請うため、急いでオルドへと向かった。　しかし、オルドでは、ルーシの支配者たちに対する憎悪が特に強く高まっていたヴェリキー・ノヴゴロドも、人口調査の対象に含めることが決定されていた。ノヴゴロドの人々のこうした動揺を知っていた大公は、重く、憂慮に満ちた思いを抱きながら故郷へと戻った。そして、彼の懸念は的中した。

ノヴゴロドで国勢調査の準備が進められているという話が伝わるとすぐに、民衆の間で動揺が広がり、ヴェーチェ（市民集会）が開かれ、ハンの要求に従うよりはむしろ死を選ぶと決議した。ノヴゴロド市民が人口調査に同意しなかったのは、ノヴゴロドがタタール人に征服されていなかったという理由もあった。多くの人々は、それだけでもタタール人には聖ソフィアの領域を好き勝手に支配する権利はないと考えていたのだ。　「聖ソフィアと天使の住まいのため（聖なる修道院）に死のう」――街の至る所でそのような叫び声が響き渡り、市民たちは反乱の準備を進めていた。

[5807] その後、アレクサンドル公はアンドレイ公とハンとの和解を仲介した。アンドレイは故郷に戻り、スーズダリの統治権を授かった。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、ノヴゴロドがタタール人の恐ろしい報復を受けるのを防ぐため、急いでこの地へと向かった。彼は、ノヴゴロドの人々が自分の賢明な助言に従ってくれることを期待していた。　しかし、公が到着する前から、街では意見の対立が生じていた。庶民はタタール人と戦うことを望んでいたのに対し、富裕層はタタール人も大公も刺激しないよう、要求された貢納金を支払うことを好んだのである。アレクサンドル・ヤロスラヴィチはこの状況を利用し、その断固たる態度によって、ノヴゴロドの人々を人口調査への協力へと導くことに成功した。　しかし、タタール人高官の出現と、人口調査中にタタール人だけでなく裕福なノヴゴロド市民からも行われた横暴な行為が、再びノヴゴロドで騒動を引き起こした。今回はノヴゴロド公ヴァシーリー・アレクサンドロヴィチも動揺した人々の側に立ったが、父を恐れてプスコフへ逃亡した。

敬虔な公アレクサンドルは、反抗的な息子を捕らえるよう命じ、ノヴゴロドの公位を剥奪した上で、スーズダリ・ルーシへ追放した。　反乱の首謀者たちも厳しく処罰されたが、こうした厳しい措置の後もノヴゴロド市民は沈静化せず、ハンの要求を受け入れようとしなかったため、敬虔な公アレクサンドルはタタール人と共に直ちにノヴゴロドを去り、ノヴゴロド市民自身にハンの怒りに対処させることにした。　大公の去り際は、いかなる説得よりも強い効果をもたらした。ノヴゴロドの人々は屈服し、ハンの役人を受け入れた。こうして、タタールによるノヴゴロドの壊滅は未然に防がれた。

しかし、2年余りが経過すると、ルーシでは再びタタールの貢納徴収官に対する騒動が起こり、それは公然たる反乱へと発展し、ルーシ北東部のほぼすべての都市を巻き込む恐れがあった。この騒動のきっかけとなったのは、以下の事情であった。

新ハンであるベルケは、貢納徴収官による横領や徴収額の隠蔽といった不正行為を鑑み、その徴収業務をヒヴァの商人、すなわちベセルメンに委託した。　当然のことながら、彼らは利益を得るために、ハンに支払った額よりもはるかに多くの税金を徴収し、以前のタタール人徴収官に比べて、さらに過酷な民衆への弾圧を行った。　民衆はこうした弾圧に耐えきれず、各地で反乱が起こり始めた。しかし、この反乱が極限に達したのは、徴収官の中にゾシマという名の、正教から背いた一人の修道士が現れた時であった。彼は同族を弾圧しただけでなく、正教を露骨に侮辱した。　民衆はこうした侮辱に耐えきれず、ヤロスラヴリで憎むべき背教者を殺害した。これに続き、ロストフ公国やスーズダリ公国の他のロシアの都市でも反乱が始まり、タタール人の徴税官を追い払い、特に憎まれていた者たちを殴打した。　大公アレクサンドル自身が各都市に「タタールを打ち倒せ」という書簡を送り、民衆運動の先頭に立つ準備をしているという噂が広まった。

ハンの徴税人に対する粛清は、タタール側からの恐ろしい報復を招くはずだった。大公は再びオルダへ急行し、ルーシに降りかかろうとしている災難を未然に防がねばならなかった。　敬虔な大公には、困難な偉業が待ち受けていた。しかし、北東ルーシでこのような恐ろしい気運が高まっていたこの時、北西のノヴゴロド・プスコフ地方でも事態は不安定だった。

ネヴァ川の戦いと氷上の大虐殺の後、西方の敵はルーシを攻撃する勇気を持てなくなっていた。ネヴァ川の英雄を打ち負かすことは不可能だと確信した彼らは、彼を服従させるために別の手段を試みることにした。

1248年、教皇インノケンティウス4世は、2人の博学な枢機卿――ガルドとゲモント――を団長とする使節団をアレクサンドル・ヤロスラヴィチのもとへ派遣した。　使節たちがルーシの公に手渡すことになっていた書簡の中で、教皇は次のように記していた。「我々は、あなたが素晴らしく誠実な公であり、あなたの領土が広大であることを耳にした。そこで、我々は二人の枢機卿をあなたのもとへ遣わした。彼らの教えに耳を傾けてほしい」。　ロシア公の広大な領土がローマ教会の支配下にないことを偽りの嘆きとして表現しつつ、教皇はアレクサンドル・ヤロスラヴィチに対し、自らの権

威に従い、民衆をラテン教義へと導くよう説得した。　ラテン教会にのみ救いと真の信仰が見出せると説きつつ、教皇は、教皇の権威に従うことで公が得られるこの世的な利益についても指摘した。同時に、この服従がロシアの公を少しも辱めるものではないと警告しようと努め、さらに教皇は、「我々はあなたをカトリックの君主たちの中で最も優れた者と見なし、常に特別な熱意をもってあなたの名声を高めるよう努める」と付け加えた。　最後に、敬虔な公爵にとって父の記憶がいかに大切であるかを承知していた教皇は、意図的に虚偽の記述を書簡に盛り込んだ。すなわち、ヤロスラフ・ヴェセヴォロドヴィチがすでにロシア教会を教皇の支配下に置くという誠実な願望を表明しており、ヤロスラフの早すぎる死だけが、彼がその意図を実行するのを妨げたかのように装ったのである。

しかし、教皇のこうしたあらゆる策略は、何ら成功を収めなかった。インノケンティウスの長い書簡に対し、アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、極めて簡潔でありながら、その説得力において極めて力強い返答をした。　「世界の創造から大洪水まで、大洪水から言語の分裂、そしてアブラハムに至るまで、アブラハムからイスラエル人のエジプト脱出、紅海の横断、そしてダビデ王の死に至るまで、ソロモンの治世の始まりから、世界の救い主キリストが生まれたローマ皇帝アウグストゥスの時代まで、　そして主の受難、復活、昇天から、第1回全地公会議およびその後の7回の全地公会議に至るまで――これらすべてを我々はよく知っている。ゆえに、あなたの教えなど必要とせず、受け入れることもない。」

教皇たちも黙ってはいなかった。彼らは、従順でないロシアの公爵に対して、スウェーデン人や騎士たちを動員し始めたが、これらの新たな遠征も失敗に終わった。

1256年、スウェーデン人は再びフィンランド沿岸を支配下に置こうと試み、デンマーク人やエミュー[5808] と連合して、ナロヴァ川に要塞の建設を始めた。 そこでノヴゴロドの人々は、大公に援軍を要請する使節を派遣し、自らの管轄地域にも兵を召集するよう命じた。敵はこうした準備を恐れて、急いで海を越えて撤退した。　冬になると、敬虔な大公がノヴゴロドを訪れ、ノヴゴロドの人々と自らの軍団を率いて、フィンランドのエムへと進軍した。これはフィンランド人を威嚇し、ノヴゴロドの辺境に対するさらなる攻撃の可能性を未然に防ぐためであった。　見知らぬ国を旅する道程は極めて過酷であった。吹雪のため、軍は昼夜の見分けがつかないほどであった。しかし、困難にもかかわらず、この遠征は大成功を収めた。ロシア軍はエミの地を荒廃させ、敵は抵抗することさえ考えられなかった。

1262年、ドイツ人との敵対的な衝突が始まった。大公はドイツ人への遠征の準備を進めていたが、タタールに対する反乱により、急いでオルダへ向かうことを余儀なくされた。　大公の弟ヤロスラフと、その息子であるディミトリ・アレクサンドロヴィチ公の指揮下にあるロシア軍は、今回も一連の輝かしい勝利を収めた。　大公ヤロスラフ・ムドリーが築いた古都ユリエフが陥落し、軍は多大な戦利品と多数の捕虜を伴ってノヴゴロドへ帰還した。

一方、敬虔な大公アレクサンドルは無事にオルダに到着し、主の御加護により、怒りを露わにしていたハンをもなだめることに成功した。　ハンは、タタール人の徴税官が暴行を受けた件についてロシア人を許しただけでなく、聖なるアレクサンドル大公の嘆願に応じて、彼らに新たな恩恵を与え、タタール軍での兵役という重荷から解放した[5809] 。

敬虔な公は、喜びの知らせを携えて急いで故郷へ戻ろうとしていた。しかし、ロシアの人々は、公自身の口からその喜びの知らせを聞くことは叶わなかった。これが、敬虔な公の最後の偉業となった。　旅の困難や、彼が経験せざるを得なかった数々の不安に疲れ果てた敬虔な公アレクサンドル

[5808] エムイ族――フィンランド系の部族。

[5809] この頃、アジアの奥地への遠征が準備されており、ハンに服従するすべての民族がこれに参加することになっていた。

・ヤロスラヴィチは、オルダからゴロデツへの帰路、[5810] で重篤な病に倒れた。 至福の死を予感した彼は、同行者たちを呼び集め、最後の別れの言葉を語った。その言葉は、間もなく訪れる喪失を思うと、皆の目に苦い涙を誘った。その後、敬虔な公は修道院長を呼び寄せ、修道士の剃髪を受け、公としての名を修道名「アレクシー」に改めた。　聖なる秘跡を受け、周囲の修道士たちに別れを告げた後、敬虔な公爵であり修道士であった彼は、静かに永遠の住処へと旅立ち、この世での生涯において熱心に奉仕した主のもとへ、その清らかな魂を委ねた。それは1263年11月14日のことだった。　彼はまだ45歳にも満たない若さでこの世を去った。戦場では無敵であった彼が、大公の冠という重荷の下で力尽きてしまったのである。あのルーシにとって困難な時代において、その冠はまさに茨の冠であり、絶え間ない力の消耗を強いる一方で、大公にもたらしたのは苦悩と不安だけだった。

ウラジーミルでは、ゴロデツから特使が到着するよりも早く、大公の安らかな死が知れ渡った。主は、当時のウラジーミルの聖人であり、全ロシアの総主教キリルに、このことを奇跡的に啓示されたのである。

司教が聖職者たちに囲まれ、聖なるルーシとその大公のために熱烈な祈りを捧げていたとき、彼は次のような奇跡的な幻視を授かった。すなわち、神の天使たちが、敬虔なアレクサンドル大公の安らかな魂を天へと昇らせていくのを目撃したのである。　この幻視に深く感動した聖人はしばらく沈黙を守り、その後、説教壇に上がって祈りを捧げていた人々に悲痛な知らせを伝えた。「兄弟たちよ、知れ。すでに 、ルーシの地の太陽は沈んだのだ」。 人々が戸惑いながらその言葉を聞き終えると、聖師は少し間を置いて、自らの言葉の意味を次のように説明した。「今、敬虔なる大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチが天に召された」。　この悲報に、皆が恐怖に包まれた。教会には悲しみと絶望の叫び声が響き渡り、「我々は滅びる」と、祈りを捧げていた者たちは声を揃えて繰り返した。敬虔な大公の死がどれほど深い悲しみをもたらしたかは、聖なる大公の同時代人が、その死の記述の冒頭で用いた言葉からうかがうことができる。

「ああ、哀れな人よ！　どうして主君の死を筆に託すことができようか！　涙とともに瞳が飛び出さないはずがない！　苦い悲しみのあまり、心が引き裂かれないはずがない！　人は父を忘れることはあっても、慈愛に満ちた主君を忘れることはできない。もし可能であれば、彼と共に棺に横たわりたいほどだ」。

この悲痛な出来事の目撃者たちも皆、同様の感情を抱いていた。ウラジーミルで、敬虔な公の遺体が街に近づいているという知らせが聞こえるやいなや、人々はこぞって出迎えに向かった。キリル大主教は聖職者たちと共に、ボゴリュボフで亡き公の遺体を出迎えた。　数え切れないほどの人々――富める者も貧しい者も、大人も子供も――が周辺一帯を埋め尽くした。そして棺が姿を現すやいなや、皆は抑えきれない勢いで駆け寄り、誰もが敬虔な公爵の遺体が安置された棺に口づけをしようと競い合った。　人々の泣き声はすべてを覆い尽くし、聖職者や聖歌隊の声は聞こえなかった。同時代人の言葉によれば、その嘆きと叫び声によって大地さえも揺らぐかのように思われたという。

11月23日、ウラジーミル大聖堂にて、大群衆が見守る中、大主教と聖職者たちによって厳粛に埋葬の儀式が執り行われた。主は、敬虔な公爵の死を悼む人々に慰めをお与えになった。埋葬の儀式の最中、次のような奇跡が起こった。

キリル・セバスティアンの執事が棺に近づき、大主教が「別れの書簡」（許しの祈り）をその手に納められるよう、故人の両手を広げようとしたとき、敬虔な公爵はまるで生きているかのように自ら手を伸ばし、巻物を受け取ると、再び両手を胸の前で十字架の形に組んだ。　畏敬の念に満ちた戦慄が、参列者全員を包み込んだ。皆は驚き、このような奇跡的なしるしを示された主を賛美した。敬虔に敬虔な公爵の遺体が納められた棺を受け取り、修道院内の聖母マリアの降誕教会に埋葬した。

[5810] ヴォルガ川沿いのゴロデツは、ニジニ・ノヴゴロド州の村である。

埋葬の際に起きたこの奇跡について、キリル大主教の指示により、　こうして、聖なるルーシのために命を捧げた守護者である公を悼んでいた敬虔なルーシ全土に、彼の早すぎる死という悲報とともに、敬虔なアレクサンドル公という人物を通じて、ルーシが至高者の御座の前で新たな祈りの者であり、執り成し手を得たという慰めの知らせも広まったのである。　この知らせは、近い将来を不安げに見据えていたロシアの人々の悲しみに満ちた心に、どれほどの慰めをもたらしたことか！

敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公の生涯は、すべて祖国への奉仕に捧げられたものであった。　比類なき勇敢さと軍事的武勇によって、彼は北西の領地を、西方のカトリック諸民族による絶え間ない領有権主張から守り抜いた。剣の力と英知をもって、彼は正教会を、ラテン系諸民族の攻撃やローマ教皇たちの陰謀から守り抜いた。　慎重さと賢明な統治活動によって、彼はタタールによる重苦しい隷属の枷を和らげ、ロシアの人々がそれをより穏やかに耐え忍ぶことを可能にし、彼らの中にルーシの力への信仰を支え、より良い時代への希望を植え付けた。そして、征服者たち自身に、征服された国とその公に対して敬意を払うよう迫った。　この敬虔な公の偉大な奉仕について、同時代の伝記作家は次のように見事に言い表している。「彼はルーシの地、ノヴゴロド、プスコフ、そして大公国全体のために多大な労力を尽くし、自らの命を捧げ、正教の信仰のために尽力した」。

しかし、死後も、敬虔な公アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、ルーシの地に対するその偉大な奉仕を止めなかった。彼は常に、わが祖国の最も困難な局面において、執り成し手であり、迅速な助け手であった。

敬虔な公の死去から200年余りもの間、わが祖国はタタール人の重苦しい隷属に苦しめられてきた。　タタール人による多くの災厄と脅威にさらされ続けたが、敬虔なアレクサンドル公の子孫であるモスクワ公たち[5811]　の賢明な統治の下で国力は強まり、抑圧者たちとの戦いに乗り出し、彼らの隷属を打ち破っただけでなく、かつては恐ろしい存在であったタタール諸王国をも自らの支配下に置いた。　、敬虔なアレクサンドル公の没後120年を経て、モスクワ大公ディミトリ・イヴァノヴィチ・ドンスキーの治世下、ロシア軍はドナ川の河畔で初めてタタール軍に勝利を収めた[5812]　。　この勝利はロシア人にとって多大な犠牲を伴ったが、民衆の士気を高め、タタール人の支配の時代が終わりつつあるという確信を植え付けたため、彼らにとってかけがえのないものであった。そして、この重要な歴史的瞬間に、聖なるルーシの助けとして、その天上の守護者である敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公が現れたのである。　以下は、敬虔な公爵が親族である大公ディミトリ・イヴァノヴィチに与えた奇跡的な助けについて、その古くからの伝記に伝えられている内容である。

ウラジーミルの至聖なる聖母マリア修道院――そこには敬虔な公爵の聖遺骨が安置されていた――で、敬虔な修道生活を送っていたある神を畏れる修道士が、ある夜、教会の玄関で涙ながらに、タタール人の首領ママイの軍勢からルーシを救い出してくれるよう主に祈りを捧げた。　彼はその祈りの中で、大公ディミトリのために、敬虔な公アレクサンドルの助けを呼び求めた。　そして祈りの最中、彼は敬虔な公爵の棺の前で、ろうそくが自然に燃え上がったのを見た。続いて、祭壇から二人の威厳ある長老が現れ、聖人の墓に近づくとこう言った。「立ち上がれ。あなたの親族である、敬虔な公爵ディミトリ・イオアンノヴィチを助けに急げ」。　すると、聖公アレクサンドルは即座に立ち上がり、姿を消した。この奇跡に打ちのめされた修道士は黙り込んでいたが、ちょうどその時にドンスキーの輝かしい勝利があったことが判明した後、彼はその幻視についてウラジーミルの聖者に報告した。　司教の命により、直ちに敬虔な公爵の聖遺物が検査され、それらは朽ちていないことが確認

[5811] モスクワ公家の始祖は、聖アレクサンドル・ネフスキーの末息子ダニイル・アレクサンドロヴィチであった。

[5812] モスクワ大公ディミトリ・イヴァノヴィチ・ドンスキーは、1363年から1389年まで統治した。大公が「ドンスキー」の称号を得たきっかけとなった、タタール族との有名なドンスキーの戦いは、1380年9月8日に起こった。

された。多くの病人が新たに現れた神の御心に適う者に祈りを捧げ、その聖遺物の棺の前では数多くの癒やしが起こった。

有名なドン川の勝利は、タタール支配という過酷な時代における先祖たちの人生で最も喜びに満ちた瞬間の一つであったが、それでもまだルーシを異国の支配から解放するには至らなかった。オルダは弱体化していたが、ルーシもまた、自らの独立を守り抜くほどにはまだ強くなかった。タタールの支配は続いていたが、もはやかつての様相を失っていた。 タタール人自身も、モスクワの公たちが、かつてはばらばらだったルーシの諸公国から強固な統一国家を築き上げ、その力を利用するのはもちろん、当時タタール人の間で生じていた不和や分裂――それらがかつてのタタール人の強大さを弱めていた――をも利用することを、見抜いていたのである。 ドンスカヤの勝利から100年が経過し、ディミトリ・イヴァノヴィチ・ドンスキーの曽孫である大公イオアン3世は、戦いを交えることなくタタール人の隷属を打ち破り、2世紀にわたるアジア人による支配からルーシを解放することに成功した。 こうして、ロシア人とタタール人の間の従来の関係は、もはや決定的に変化した。かつて、敬虔なアレクサンドル・ネフスキー公の治世下でタタール・ハンの従順な貢納国であったルーシは、今やタタール人に対する攻勢を開始し、徐々に彼らを自らの支配下に収めつつある。 かつては恐ろしい存在であったタタール諸王国が次々と我が国の領土に組み込まれ、征服された異民族によるルーシへの支配に関する断片的な記憶は、人々の記憶の中にのみ残されるようになった。 タタール人とのこの長期にわたる執拗な闘いにおいて、わが祖国は相変わらず、天の守護者である敬虔なアレクサンドル・ネフスキー公の助けと庇護に支えられていた。

1552年、カザン公国征服の遠征に出発する際、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチはウラジーミールで、敬虔なアレクサンドル公の聖遺物が安置された聖櫃の前で祈りを捧げ、彼の助けを求めた。まるでその助けの証であるかのように、敬虔なアレクサンドル公は次の奇跡を起こした。

ツァーリと共に、彼のボヤールたちも祈りを捧げており、その中には、後にこの敬虔な公の奇跡を記述することになる人物もいた。 彼が他の者たちと共に聖人の遺骸に接吻した際、病んでいた手の三本の指を聖遺物箱の隙間（開口部）に差し込んだ。彼は、その指を何らかの芳香のある軟膏に浸したかのように感じ、手を引き抜いた時には、以前の病気の痕跡は微塵も残っていなかった。 この奇跡的な治癒を目の当たりにした者たちは皆、主から癒しの賜物を受けた敬虔なアレクサンドル公を畏敬の念をもって称え、彼の助けを信じてさらなる旅路へと向かった。

カザン遠征は無事に終結した。モスクワの近くに位置し、一世紀にわたり国境沿いのロシア領への襲撃で脅かしてきたタタール王国は、モスクワ大公に服従した。 タタールのモスクがあった場所やその周辺には聖なる教会が建てられ、このイスラム教の地で聖 による福音の宣教が始まり、私たちの先祖たちはすでに安らかに未来を見据えることができた。 カザンに続き、もう一つのタタール王国であるアストラハンも併合され、ロシアの河川の中で「女王」と称されるヴォルガ川は、その豊かな資源とともに、全流域にわたって今やロシアの川となった。 ロシア人は極東のシベリアにおいてもその支配を順調に拡大し始め、徐々に大洋の岸辺へと進出した。しかし南方のクリミアには、依然として強大な敵――クリミア・タタール人――が残っており、ロシア国家は彼らとの戦いを長く続けざるを得なかった[5813]。 カザンとアストラハンがモスクワに併合されるまではモスクワ大公の同盟者であったクリミア・ハンは、ロシアの勢力が強まるのを見て、ロシアとの戦いを始めた。彼をイスラム教の最高守護者であるオスマン帝国のスルタンが支援していたため、この戦いは我々にとってなおさら危険なものとなった。 そして、この闘争の間も、ルーシの天の守護者である敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、絶えずその援助を惜しまなかった。

[5813] 1783年、エカテリーナ2世女帝に

1571年、クリミア・ハン・デヴレット・ギレイによるモスクワ侵攻の最中、ウラジーミルのロズデストヴェンスキー修道院の修道士アントニー――祈りと断食に励む人物――は、聖母マリアのイコンの前で、祖国への恐ろしいハンの侵攻を退けるよう祈りを捧げていた際、次のような奇跡的な幻視を授かった。　彼が祖国を襲った災難を嘆いていたその時、突然、明るい服を身にまとった二人の若者が、稲妻のような速さで白い馬に乗って修道院へと近づいてくるのが見えた。彼らは馬から降りると、馬を修道院の門の前に残し、自ら教会へと入っていった　（彼らは聖なる公ボリスとグレブであった）。長老アントニーは彼らの後を追った。聖なる公たちが教会に入るとすぐに、王の扉が開き、ろうそくに火が灯った。聖なる公アレクサンドルの聖遺物箱に近づくと、聖ボリスとグレブは彼に向かって次のように語りかけた。　「立ち上がれ、わが兄弟よ、大公アレクサンドルよ。我らの親族である敬虔なるツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチを助けに急ごう」。敬虔なるアレクサンドルは直ちに立ち上がり、彼らと共に教会を出て修道院の門へと向かった。そこには戦いに備えて用意された三頭の白い馬が待っており、敬虔なる公爵たちはその馬にまたがった。　旅立つにあたり、彼らはこう言った。「聖母マリアの大聖堂へ行き、私たちの親族である敬虔な公爵たち――アンドレイ[5814]、ヴェセヴォロド[5815]、ゲオルギー[5816]、ヤロスラフ[5817]――を私たちと共に呼び集めよう。」

長老は彼らの後を追った。そしてここでも、修道院の聖堂と同様に、聖なる公爵たちが参入すると王の門が開き、敬虔な公爵たちは自らの墓から立ち上がり、城壁を越えて奇跡的に空を飛んでロストフへと向かい、次のように語った。「ロストフの皇太子ペトロ[5818]　のところへ行こう。彼にも私たちを助けてもらおう」。　これらの天の戦士たちの助けにより、クリミア・ハンに対する勝利が勝ち取られたのである。

このようにして、敬虔な公アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、その生涯をすべて、恐ろしい征服者から聖なるルーシを守るという同じ使命に捧げ、祖国をタタールから守り抜いたのである。

生前、偉大な慈悲に満ち、恵まれない者や苦しむ者すべてを助けた、ロシア国家の天の守護者である敬虔なアレクサンドル公は、その死後も、助けを必要とし、祈りを込めて彼に助けを求めたすべての人々に、絶えずその慈愛を注ぎ続けた。　聖遺骸が安置された聖堂の前では、病める者は癒やしを受け、悲しみに暮れる者や憤りを持つ者は、恵み深い慰めと助けを得た。これらの奇跡のすべてが記録されたわけではないが、聖公の古の伝記作家たちによって記述されたそのごく一部でさえも、は、敬虔なアレクサンドル公の聖遺物から、いかに豊かな癒やしと奇跡の泉が湧き出ていたか、また聖なるロシアが、その天の守護者であり指導者である彼を通じて、いかに尊い神の慈悲の器を得たかを、はっきりと示している。　聖アレクサンドルの祝日が制定される以前から、ロジェストヴェンスキー修道院の修道士たちは、敬虔な公爵の聖性と神に喜ばれる生き方を予示する天のしるしを目撃する栄誉に何度も浴していた。また、彼ら自身も、修道院も、そしてウラジーミル市も、聖公爵から天の助けを何度も受けたのである。

1491年、ウラジーミルで恐ろしい火災が発生し、その際、敬虔なアレクサンドル公の聖遺骨が安置されていた教会も焼失した。　この火災の最中、祈りを捧げていた人々は、敬虔な 公が、まるで

[5814] アンドレイ・ユリエヴィチ、ウラジーミル大公（1169年～1174年）。

[5815] ヴセヴォロド3世、ウラジーミル大公（1176年～1212年）

[5816] ゲオルギー、あるいはユーリー・ヴェセヴォロドヴィチ、聖アレクサンドル公の叔父、ウラジーミル大公（1219年～1238年）。

[5817] ヤロスラフ・ヴセヴォロドヴィチ、アレクサンドル公の父、1238年から1246年までウラジーミル大公。

[5818] 聖ペトロ、オルダ王子のペトロは、ハン・ベルケの甥であり、オルダに滞在していたロストフのキリル司教の言葉に心を動かされ、親族に内緒でロストフへ逃れ、洗礼を受けた。彼は1290年に死去し、臨終の前に修道誓願を立てた。彼の記念日は6月29日である。

馬に乗ったかのように空へと昇っていくのを目撃した。そして火災の後、教会の内部がすべて焼け焦げていたにもかかわらず、敬虔な公の聖遺物は火の被害を免れていたことが判明した。

1541年、聖母マリアの被昇天の祝日の後、晩課が終わった直後、敬虔なアレクサンドル公の聖遺骸が安置された聖櫃の前で、ろうそくが自然に燃え上がり、修道士や参拝者の多くが驚きながらその様子を見守った。　修道院の司祭補は、素朴な性格ゆえにここに何か異常な点を見出せず、近づいてろうそくの火を消した。　その後、この出来事は修道院長のアルヒマンドリト・エウフロシンに報告された。彼が聖堂に近づき、ろうそくの一つに触れてみると、そこから何とも不思議な温もりが漂っていることに気づいた。この奇跡は、皆によって、敬虔なアレクサンドル公の聖性を示す特別なしるしであると理解された。

ロジェストヴェンスキー修道院の修道士、長老ダヴィドは、重く長い病に伏していた。寝床に横たわり、涙を流しながら、彼は聖なるアレクサンドル公に癒やしを祈った。まもなく彼は安らぎを感じ、さらに熱心に祈りを捧げた。祈りが終わると、彼はその病から完全に癒やされた。

同じ修道院の修道士で、クラソフツェフという名の者は、長い間、身体が麻痺した状態にあった。　彼は敬虔なアレクサンドル公の聖遺骸の棺の前に運ばれ、感動の念を抱きながらそれを見つめ、温かい涙を流して自らの罪を省みていると、麻痺していた手足に力が戻ってくるのを感じ、まもなく完全に回復した。

修道院の修道士テレンティウスは、悪霊に取り憑かれていた。彼が敬虔な公爵の聖遺物箱の前に連れて行かれ、彼のために祈りが捧げられると、彼はたちまち穏やかになり、癒やしを授けてくださった神とその聖人に、祈りを込めて感謝し始めた。

さらに、古代の伝記作家たちによって、様々な身分や年齢の世俗の人々に対して行われた癒やしの事例が数多く記録されている。

プスコフに住んでいたあるボヤールの息子、セミョン・ザベリンは、手足が使えないほど重病で、食事も水分摂取も全くできない状態だった。　古くからのプスコフで常に敬虔な記憶として語り継がれていた「敬虔なアレクサンドル公」への深い信仰を持っていた彼は、家族に懇願してウラジーミルへ連れて行ってもらい、その公の聖遺骸の聖櫃の前で祈りを捧げた。そしてそこで、祈りの最中に、彼は病から癒やされたのである。

もう一人のボヤールの息子、ゴロフキンは、同じ病に冒され、回復の望みを持たず、ただ死のことばかり考えていた。彼は財産のほとんどすべてを医師たちに与えたが、治療からは何の助けも利益も得られなかった。　そして、敬虔なアレクサンドル公の取り成しにより、その聖遺物の棺の前で、彼は医師の技では得られなかったもの、すなわち不治の病からの完全な治癒を主から授かった。

ウラジーミル郡のある村から、半身不随の女性が運ばれ、敬虔な公爵の聖遺物の近くの階段に横たえられた。神の御心にかなう者に癒やしを願って熱心に祈っている最中、彼女は突然、聖なる公爵が奇跡的に彼女の前に現れ、その手を握って病床から立ち上がらせてくれたのを感じた。

ウラジーミル地方の貴族マクシム・ニキティンには、ヨアンという名の少年がいたが、彼は口がきけず、また半身不随であった。両親は信仰をもって、この不憫な息子を聖なる公爵のもとへ、ロジェストヴェンスキー修道院へ連れて行き、そこで彼は癒やされた。

多くの人々が、敬虔な公アレクサンドルの取り次ぎにより、失明から癒やされた。例えば、ウラジーミル市の盲人ダヴィド・イオシフォフは、教会で福音書が朗読されている最中に、突然光を見ることができた。　癒やしへの希望が心に閃き、魂の底から感動した彼は、神の御心に適う聖人への祈りをさらに深め、聖人の遺骨が安置された聖櫃まで連れて行ってくれるよう懇願した。そこで、聖なる遺骨の前で聖水で清められたとき、彼は完全に視力を取り戻した。

ウラジーミル州のクラスノエ村から、視力を失った女性が連れてこられ、敬虔な公爵の聖遺物が安置された聖櫃の前で、まるで最初から病気でなかったかのように完全に癒やされた。

敬虔な公爵の奇跡を起こす聖遺物からは、恐ろしい病である悪霊に取り憑かれた者たちに対しても、幾度となく慈悲が注がれた。以下は、古代の伝記作家たちによって記録された事例の一部である。

スタロイ村から、その恐ろしい姿で周囲を恐怖に陥れていた悪霊に取り憑かれた者が修道院に連れてこられた。彼は恐ろしい言葉を吐き、野獣のように人々に襲いかかっていた。彼は縛られた状態で修道院に連れてこられたが、祈祷会の最中に癒やされた。

別の憑依者は、身内さえも認識できず、自分の髪を引っ張り、舌を噛みしめていた。その体は、自らに与えた殴打による傷跡で覆われていた。そして、敬虔なアレクサンドル公の取り成しにより、彼はその恐ろしい病から完全な癒やしを受ける恵みにあずかった。

ウグリョモヴァ村（ウラジーミル県）の修道院の近くに住む農民アファナシー・ニキティンは、精神錯乱の発作に襲われ、周囲の人々の顔も分からなくなり、食事を拒み、全く眠れなくなっていた。　ところが、ある瞬間、意識がはっきりした彼は、家族に「ロジェストヴェンスキー修道院へ連れて行って、敬虔なアレクサンドル公の聖遺物の前へ連れて行ってほしい」と懇願し始めた。　家族は彼の願いを叶え、修道院へ向かう道中、病人は健康を取り戻したかのように感じ、修道院に到着すると、心からの感動を込めて、聖アレクサンドル公がどのように自分に現れ、聖公の聖遺物の聖櫃で癒やしを求めるよう自ら指示してくれたかを皆に語った。

病に苦しむ者や心に憎しみを抱く者たちが、敬虔な公爵への信仰によってこれほど多くの恵みを受けることができたのである！そして、私たちの先祖たちの中で、神の御心にかなう聖人の恩恵と、祖国の栄光のために成し遂げたこの世での偉業への記憶が、決して消えることはなかった。敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公爵の生涯は、その死後すぐに、人々の教訓となる記述の対象となった。　この聖公の同時代人によって書かれた伝記に続き、ロシアの各地、とりわけ聖公が暮らし、善行を施した場所――ウラジーミルやノヴゴロド・プスコフ地方――で、より詳細な伝記が次々と編纂された。　人々は、ロシアの地のために苦難を耐え抜いたこの聖公の生涯と活動、すなわちタタール支配という最も暗く厳しい時代に、私たちの先祖の生きる道を照らしたこの明るい星のあらゆる側面を、後世の教訓として残そうと努めたのである。　伝記作家たちと並行して、古ロシアの年代記作者たちもまた、その著作にこの敬虔な公の生涯に関する記述を盛り込んでいった。そのおかげで、北東ルーシの公たちの中でも、敬虔なアレクサンドル公ほど多くの情報や物語が後世に伝えられている者はいない。

聖公の安らかな逝去直後から、教会によるその顕尊が始まった。埋葬の際に起きた奇跡そのものが、彼の聖性と神に喜ばれる生き方をすべての人々に明確に証ししていた。また、彼の聖遺骨が納められた聖櫃からは、尽きることのない泉のように絶え間なく他の奇跡も湧き出ており、これらもまた彼の聖性を証ししていた。　1547年、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチの意向により、モスクワで教会公会議が開催された。この公会議は、著名な全ロシア都主教マカリーが議長を務め、それまで地域限定で崇敬されていたロシアの聖人に対する全ロシア的な祝祭が制定された。　この公会議では、敬虔なアレクサンドル・ネフスキー公を称える全ロシア的な祝日も制定され、大主教の指示により、礼拝式（11月23日、同公の帰天の日）と、より詳細な新しい聖人伝が作成された。17世紀初頭、モスクワには敬虔なアレクサンドル公を称える教会も存在していた。

1724年には、聖アレクサンドル公の聖遺物がウラジーミルからサンクトペテルブルクへ移送されたことを記念して、8月30日に新たな祝日が制定された。

聖アレクサンドルの死去から約500年後、ネヴァ川のほとりで、皇帝ピョートル1世は、ロシアの古くからの敵であるスウェーデンに対して、新たな輝かしい勝利を収めた。　この地では1703年にロシア国家の新たな首都の礎が築かれ、1717年には新たなロシアの聖地であるアレクサンドロ・ネフ

スキー修道院が建立された。 ピョートル1世皇帝は、ウラジーミルの聖公の聖遺骨をサンクトペテルブルクへ移すことを望んでおり、ロシアが新たに征服したこの地での支配を確固たるものとしたやいなや、聖遺骨の移送に関する命令が下された。 皇帝自らが、この移送をどのように行うかについて詳細な勅令を起草し、敬虔なアレクサンドル公の聖遺骨が安置されることになっていた新しい修道院と教会の建設を、自ら注意深く見守った。しかし、スウェーデンやトルコとの戦争により、この勅令の執行は遅れ、1723年になってようやくその実行に着手された。

ウラジーミルは、約5世紀にわたりこの古都の貴重な装飾となっていた、その記念すべき聖遺物を厳かに送り出した。8月10日から11日にかけて、すべての教会で徹夜祈祷が行われ、翌朝には神聖な典礼が執り行われた。 市内および近隣の修道院の聖職者たちは、大勢の民衆が集まる中、ロジェストヴェンスキー修道院へと向かい、祈祷の後、聖職者たちが聖遺物を収めた聖櫃を手に持ち、教会から運び出し、城外へと送り出した。 8月17日、 、敬虔な公爵の聖遺骨は、さらに盛大な式典をもってモスクワで迎えられ、その後、教会の行列はトヴェリとノヴゴロドを経由してサンクトペテルブルクへと向かった。 敬虔なアレクサンドル公の聖遺物の移送は、全ロシア的な祝典であった。すべての都市や村で礼拝が執り行われ、道中、大勢の人々が聖遺物を送り出した。サンクトペテルブルクへの聖遺物の搬入は、直前にスウェーデンと締結されたニシュタット条約の記念日である8月30日に行われる予定であった。 しかし、道のりの遠さゆえにこの計画を正確に実行することはできず、聖遺物がシュリッセルブルクに到着したのは10月1日になってからであった。皇帝の命により、聖遺物は現地の受胎告知大聖堂に安置され、サンクトペテルブルクへの移送は翌年（1724年）の8月30日に延期された。

サンクトペテルブルクでの聖遺物の出迎えは、とりわけ荘厳なものであった。皇帝は随行員を伴い、ガレー船でイジョラ川の河口へと向かった。皇帝は聖遺物を敬虔にガレー船に安置すると、貴族たちに櫂を漕ぐよう命じ、自らは船尾に立ち、舵を操った。 サンクトペテルブルクには専用の桟橋が設けられ、聖遺物を載せたガレー船はそこに停泊した。聖職者や民衆に囲まれながら、最も高位の貴族たちが聖遺物の聖櫃を運んだ。鐘の音と大砲の轟きが、その厳粛さを一層高めた。 聖遺物は、敬虔な公爵に捧げられた教会に安置された。翌日、アレクサンドロ・ネフスキー修道院では祝賀行事が続いた。皇帝は出席者たちに、修道院に建設が予定されている建物の設計図を配り、その際、聖遺物の移送を8月30日に恒久的に祝うことが定められた。

こうして、皇帝の念願は叶った。しかし、彼が描いた新しい修道院の建設計画を完成させることは叶わなかった。この祝典から半年後、ピョートルは逝去したのだ。だが、ピョートルの後継者たちは、彼が始めた事業を完遂した。彼の娘であるエリザヴェータ・ペトロヴナ皇后は、壮麗な銀製の聖遺物箱を造らせ、その中に聖遺物は現在も安置されている。 エカテリーナ2世皇后は、旧大聖堂の跡地に新しい大聖堂を建設するよう命じ、1790年8月30日、新聖堂の奉献式が行われ、敬虔な公爵の聖遺骨がそこへ移された。

そして今なお、敬虔なアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公は、神から授けられたその分与――すなわち我らの祖国――を守り続けています。 そして今なお、彼は、信仰をもってその聖なる御名を呼び求めるすべての人々に親しみ深く、迅速に応え、その慈悲を注ぎ、全能の神の御座の前で執り成しをなさっている――御自身の聖徒たちを賛美される神に、永遠に栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

あなたは、敬虔なる者の根から生じた尊き枝であった、至福のアレクサンドルよ。キリストはあなたを、ロシアの地の神聖なる宝、新たな奇跡行者、栄光に満ち、神に愛される者として現された

。　そして今日、あなたの記念に集い、信仰と愛をもって、詩篇と賛美の歌に喜びながら、あなたに癒しの恵みを与えられた主を賛美します。主が、この都を救い、あなたの親族たちが神に喜ばれる生き方をするよう、またロシアの子らが救われるよう、主にお祈りください。

もう一つのトロパリオ、第4声：

ロシアのヨセフよ、エジプトではなく天に君臨するあなたの兄弟、敬虔なアレクサンドル公を知り、彼らの祈りを受け入れ、あなたの地の豊かな実りによって人々の糧を増やし、　祈りによってあなたの支配の都を守り、あなたの後継者である私たちの敬虔な皇帝たちのために、敵対する者たちと戦ってくださいますように。

コンダク、第8調：

我らは、東から輝き、西へと至った、あなたという最も輝かしい星を崇める。あなたは、この国全体を奇跡と慈愛で豊かにし、あなたの記憶を敬う者たちを信仰によって照らす、至福のアレクサンドルよ。　このゆえに、今日、私たちはあなたの帰天を祝う、あなたの民として：あなたの祖国、そして　の正教皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチの大帝国、さらにあなたの聖遺物の聖櫃に駆け寄り、誠実にあなたに叫ぶ者たちすべてを救うよう、祈ってください。喜びなさい、私たちの都の堅固な守りよ。

別のコンダク：

かつてあなたの親族であるボリスとグレブが、ヴェイルガのスヴェイスカで奮闘する者とその軍勢を助けるために天から現れたように、今、至福のアレクサンドルよ、あなたの親族を助けにやって来て、我らと戦う者たちを打ち破ってください。

我らの尊き父アレクサンドル・スヴィルスキーの記念日。

記念日：8月30日

至福のアレクサンドルは、[5819]、ヴェリキー・ノヴゴロドの領地[5820]、オボネジ地方[5821]に生まれました。この地方はオヤティ川[5822] 沿いに位置し、マンデラと呼ばれる村にあり、オストロフスキ

[5819] 聖アレクサンドルは1448年6月15日に生まれた。

[5820] ヴェリキー・ノヴゴロドの領土は、ルーシ北西部の広大な一角を占め、北は白海に、東はウラル山脈を越えて広がっていた。　その範囲は、現在のノヴゴロド州、サンクトペテルブルク州、オロネツ州の一部、アルハンゲリスク州、ペルミ州、ヴィャトカ州の一部、ヴォロゴダ州、ヤロスラヴリ州の一部、トヴェリ州の一部、およびプスコフ州に及び、18世紀初頭までは5つの区域、すなわち「ピャティナ」に分割されていた。

[5821] ここでいうのは、もちろんオボネジエ、すなわちオボネジスカヤ・ピャティナであり、ノヴゴロドのすべてのピャティナの中で最も広大な地域であった。　この地域はノヴゴロドの北および北東に広がり、一方ではヴォルホフ川とラドガ湖の間に、もう一方ではイルメン湖とメタ川およびムダ川の間に位置していた。オネジ湖を四方から取り囲んでいたことから、この地域はその名を得たのである。

[5822] オヤット川はスヴィリ川の左支流であり、現在のオロネツ州に位置している。

ーの聖母マリア修道院（聖母の御入堂を称える修道院）[5823] の向かいにありました。 彼は、ステファノという名の父とヴァシリッサという名の母の間に、ある種の神の力の現れ[5824] によって生まれ、聖なる洗礼を受けた。読み書きを学ぶ時期になると、彼は両親によって聖書の学習に預けられた。 しかし、学友たちが順調に学業を修める一方で、彼はその習得に時間を要した。これは神の特別な御心によるものであり、彼が人ではなく神から知恵を授かるためであった。そして、後にその通りとなった。 ある日、彼は教会を訪れ、我らの主イエス・キリストとその聖母マリアの御像の前にひれ伏し、聖書の学びに必要な知恵が与えられるよう、涙ながらに祈り始めた。すると、その祈りに即座に応えがあり、彼は「立ちなさい、恐れるな。 お前は求めたものを授かるだろう」と告げる声を聞いた。

喜びに満ちた少年は立ち上がり、父のもとへ戻った。 父と母は彼の心の喜びに気づき、それが神の御慈悲の現れによるものだと察し、そう考えて神に感謝した。そして、その祝福された少年は、それ以来、学業において急速な進歩を見せ、神の書物の朗読に熱心に耳を傾け、あらゆる点で両親に従った。 同時に、彼は非常に厳しい断食を守り、一日に一度、パンを一つだけ適量食べるだけであり、夜もほとんど眠らなかった。少年の両親はこれに驚嘆し、母はある日、彼を諭してこう言った。

「わが子よ！ なぜそんなに自分を疲れさせるの？ 私たちと一緒に食事をし、私たちと同じように眠りなさい。」しかし、少年は母にこう答えました。

「母よ、なぜ私にそう言って、私が心地よく感じている節制から遠ざけようとするのですか？聖書には、食べ物や飲み物が私たちを神に近づけるものではないと書かれています（Iコリント8:8）。私が始めたように、このままさせてください。」

息子のその賢明な答えに驚き、とりわけ彼がそのような修行に対して真摯な願いを抱いているのを見て、母は彼にこう言った。

「息子よ、あなたがどうしたいか、その通りにしなさい。」

しかし、この素晴らしい少年は、目に見える富よりも偉業に強く惹かれていた。富の豊かさを影のようなものと見なし、この世にある人間的なものすべてを、虚しく取るに足らないものと見なしていた。

彼が成人すると、両親は彼を正式な結婚へと導こうとしたが、神を愛するその若者はそれを拒んだ。彼は常に、この世を離れ、自らの望むものを達成することだけを願い、考えていた。 まるで近くの村へ行くかのように父の祝福を受けると、彼は実家を離れ、神の導き、あるいはむしろ天使を伴いながら、ヴァラアム島にある聖救世主・神の栄光ある変容修道院（[5825] ）へとたどり着いた。 彼はその修道院の院長に、修道士として剃髪させてほしいと懇願した。当時、彼は生後26歳であった。修道院に入ると、彼は徳のある生活の実践にこれほど熱心に打ち込んだため、皆が彼について語り始めた。 そのような名声に煩わしさを感じた彼は、その修道院の院長に祝福を請い、必要な衣服以外は何も持たずに、夜中に修道院を去った。彼は、実家を離れた当初、住み着こうとしていた場所へと向かった。 その場所は、[5826] 湖のほとりにあり、スヴィリ川から4ポプリシュの距離にあった。ここで聖人は小さな小部屋を建て、修行の合間の短い休息のためにそれを利用していた。

[5823] ヴィヴェンスキーの聖母修道院はオヤット川沿いにあった。1581年、この修道院は「ドイツ人」によって完全に焼き払われたため、6人の修道士たちは修道院の外、荒れ地にある島で暮らしていた。

[5824] 聖アレクサンドルの両親は、子供を産む能力を早々に失ってしまっていたが、子供を授かる能力が戻るよう神に祈ったところ、その後、息子アモス（後の聖アレクサンドル）が生まれた。

[5825] ヴァラアムは、ラドガ湖の北岸近くにある島で、現在ではその修道院による整備により、ロシア北部で広く知られている。

[5826] この湖はかつてロシュネッスキー湖と呼ばれていました。

ある日、彼は住処を構えられる場所を探して周辺を歩き回っていたところ、ある神聖な光に照らされた美しい場所を見つけました。その場所には、今もなお修道院が建っています。　彼がここに滞在していたある日、水を汲むために小部屋から湖へと出たところ、天から声が聞こえてきた。その声は彼の名前を呼び、こう告げた。　「あなたはわたしの戒めを守ってきた。それゆえ、わたしは数えきれないほど多くの人々をあなたの元へ集める。あなたは彼らを拒んではならない。両手を広げて迎え入れ、彼らを救いへと導く導き手となりなさい。」

この言葉を聞いた聖人は、地面にひれ伏して神に感謝の祈りを捧げ、その後、水を汲んで自分の小部屋に戻った。

それからしばらくして、聖人を探し求めていた実の兄弟ヨハネが、聖人のもとを訪れた。兄弟の姿を見て、聖人は喜び、二人は共に暮らすために、より広々とした住まいを作る作業に取りかかった。　しかし間もなく、聖人の兄弟は亡くなり、アレクサンドルは彼の前で葬送の賛美歌を歌い、彼を葬った。その後、聖人は再び厳しい断食の生活に身を捧げ、兄弟たちの数は増えていった。彼らは沈黙を守りながら、互いに離れて暮らし、それぞれの力の及ぶ限り、聖人に倣って生活した。

このようにして聖人は生涯を送り、やがてその祈りによって悪霊を追い払い、天使たちを語り相手とするに至った。ある日、彼は三つの御姿で現れた神ご自身を拝見する栄誉に浴し、教会を設立し、修道院を建設し、修道者たちを集める方法について神と語り合った。　その後、どこに教会を建てるべきかについて祈っていると、主の天使がその場所を彼に示した。兄弟たちは彼に司祭職を受けるよう強く勧め、しばらくして彼は聖三位一体の名に因んで教会を建て、それを奉献した。その後、兄弟たちの数はさらに増え続けた。

尊者は修道院の院長職を引き受けたものの、自らの戒律を変えることはなく、院長として、主の「第一になりたい者は、すべての者の末となり、すべての者のしもべとなりなさい」（マルコ9:35、10:43参照）という御言葉を心に留め、謙遜の模範を皆に示した。　それゆえ、尊者様は自らを謙遜に保ち、誰よりも小さい者となるよう努め、すべての人に奉仕した。彼は自らの姿をもって皆に模範を示し、誰よりも早く仕事に出かけて勤勉に働いた。彼は常にすべてを自分の手でこなした。厨房へ行き、生地をこねてパンを焼き、時には湖から水を汲み、薪を割り、それを修道院へ運んだ。　時には、修道士たちがライ麦を挽いている製粉所へ行き、彼らがまだ眠っている間に、挽くために用意されたライ麦を取り、各修道士に割り当てられた分を挽き終えると、挽き終わったものを所定の場所に置き、それから自分の独房へ戻った。教会には誰よりも早く到着し、誰よりも遅く退出していた。彼が藁の敷物の上に横たわっている姿や、自分の体に水を浴びせている姿を目撃した者は、誰一人としていなかった。彼の衣服は粗い布で作られた修道服で、　それほど激しく擦り切れていたため、その上には無数の継ぎ目が縫い付けられていた。多くの愚かな人々が彼を嘲笑し、罵倒したが、彼はそうした罵倒を喜んで受け入れた。

しばらく時が経つと、神の御心により、この聖人は至聖なる命の源である三位一体の名に因んで石造りの教会を建立し（[5827]）、修道院を拡張し、四方に修道室を建てさせ、中央には食堂を備えた大きな教会を建て、修道者たちの必要に役立つその他の設備もすべて整えた。

このように、尊者は神に喜ばれる生涯を送り、最期の日までその功績を続け、その功績ゆえに、生前に神から奇跡を行う賜物を受けました。ついに、神のもとへ旅立つ時が近づいているのを感じた尊者は、兄弟たちを呼び寄せ、こう言いました。

「兄弟たちよ！　もはや私の生涯の終わりが近づき、私はこの世を去ろうとしている。あなた方を神に委ねる。神があなた方を守り、御自身の愛の中に堅く立たせてくださいますように。」

こう語り終えると、聖人は兄弟たちに、互いに愛を保ち、寛容であり、その他の美徳を磨くよう教えた。　最後に、彼は死後も、兄弟たちの誰も酔わせる飲み物を手元に置かないよう遺言した。

[5827] この教会は、1526年にマカリー大司教の祝福を受けて奉献された。

そして、聖人の魂が神のもとへ旅立つ時が来ると、彼は天に向かって両手を挙げ、祈りを捧げ、次のように締めくくった。

「主よ！ 私の霊を御手に委ねます。」

こうして、口に祈りを湛えながら、聖人はその清らかな魂を主にお委ねした。これは1533年8月30日に起こったことである。 その生涯は85年に及んだ。その清らかな遺体は、神の栄光の変容教会において、祭壇の右側に栄誉をもって埋葬された。その聖なる墓に信仰をもって訪れる者たちに対し、多くの癒やしがもたらされている。[5828]

トロパリオ、第4声：

若き日から神に賢明であり、霊的な願いをもって荒野に身を置き、ただ一人のキリストの足跡を熱心にたどることを切望した。 それゆえ、あなたを見守る天使たちも、いかにしてこの肉体を持ちながら目に見えぬ敵と戦ったのかと驚嘆し、あなたは節制によって情欲の軍勢に打ち勝ち、地上で天使に等しい者となった、尊きアレクサンドルよ。キリスト・神に、私たちの魂を救ってくださるよう祈り求めてください。

コンダク、第8調：

父よ、今日、ロシアの地に多光の星として輝き出でたあなたは、キリストの足跡を熱心に追うべく荒野に身を置き、その聖なる軛をあなたの肩に担ぎ、尊き十字架を背負い、肉体の欲望という労苦を打ち砕かれた。 それゆえ、我らはあなたに叫びます。「あなたが知恵をもって集められたあなたの群れを救ってください。」そして、あなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、尊きアレクサンドルよ、我らの父よ。」

尊き父クリストフォロスの記念日

記念日：8月30日

この尊者クリストフォロスについて、『リモナール』と題された書の著者であるヨハネスとソフロニオスは、次のように語っている。

「私たちがアレクサンドリアにいたとき、ファランにある聖ソフィア修道院に滞在していたアッバ・テオドゥロスを訪ねました。その長老は私たちにこう語りました：

「私は、私たちの尊い父テオドシオスのキノヴィアで修道誓願を立てた。そのキノヴィアは、聖なるキリストの都エルサレムの荒野にある。そこで私は、クリストフォロスという名の、背の高い長老に出会った。彼はローマ出身であった。 ある日、私は彼に頭を下げてこう言った。「父よ、私に愛を示してください。若き日からどのような功績を成し遂げてこられたのか、お話しください。」

私が何度も懇願した末、長老は私が（魂の）益のためにそれを求めていることを理解し、こう言ってご自身のことを語ってくださった。

「わが子よ、私が世俗を捨てたとき、修道生活への深い愛と熱意を抱いていた。

[5828] 聖アレクサンドルは1547年から聖人として崇敬され、同年に彼のための礼拝式が制定され、1559年にはモスクワに彼を称える付属礼拝堂が設けられた。 その聖遺骨は1641年4月17日に発見され、1643年にツァーリ・ミハイル・フェオドロヴィチが銀製の聖遺骨箱を造らせ、現在もそこに安置されている。

昼間は神への奉仕に励み、夜遅くになると、かつて聖テオドシウスや他の聖なる父たちが祈りを捧げていた洞窟へと向かった。洞窟に入る際、私は百回の礼拝を行い、一段ごとに神の前でひれ伏した。階段は全部で十八段あった。　洞窟の中に入ると、朝の賛美を呼びかける鐘が鳴るまで、祈りに時間を費やした。その鐘が鳴って初めて、私は洞窟を出て教会へと向かった。

私はこの修行を十一年間続け、この規則を決して破ることなく、深い敬虔さと思いを慎みつつ精進し、任されたあらゆる務めにおいて肉体を労し、また私の無欲さゆえに大きな苦難に耐え抜いた。

ある夜、洞窟に戻った私は、階段の上でいつものようにひざまずいて祈りを捧げ始めた。最後の段にたどり着いたとき、私は立ち止まった――突然、恍惚とした状態に陥ったのだ。洞窟全体がランプで満たされており、その中には灯っているものもあれば、灯っていないものもあった。　また、白い衣をまとった光のような姿の二人の男が、ランプに火を灯しているのを見かけ、彼らに尋ねた。

「なぜここにこれらのランプを置いて、私がここに入って祈ることができないのですか？」

彼らは私にこう答えました：

「これらは、神に仕える先人たちのランプです。」

そこで私は再び彼らに尋ねた。

「なぜ、ある灯は燃えているのに、他の灯は燃えていないのですか？」

彼らは私にこう答えました：

「主に熱心に仕える者たちは自分のランプに火を灯しましたが、怠惰な者たちは灯しませんでした。」

それから私は彼らに言った：

「どうか私を愛して、教えてくれ。私のランプは灯っているのか、それとも灯っていないのか？」

彼らは私にこう答えた：

「努力し、祈りなさい。そうすれば、私たちがそれを灯して差し上げます。」

しかし、私は言った。

「私はいつも祈っており、これまで他に何もしてこなかったのだ。」

その言葉を言い終えると、私は我に返り、もう誰の姿も見えなくなっていた。それから私は自分にこう言った。

「おお、クリストフォールよ！　自分の灯を灯すためには、さらに大きな苦労を背負わなければならないのだ！」

翌朝、私は修道院を出て、身に着けていた服以外は何も持たずにシナイ山へと向かった。シナイ山で五十年を過ごし、多くの苦行に励んだ後、私にこう告げる声が降りてきた。

「クリストフォロスよ！かつて修行に励んだあなたの修道院へ戻り、そこであなたの父たちと共に安らぎを得なさい。」

自身のこの体験を語った後、聖クリストフォロスはしばらくの間生き、その聖なる魂を神の御手に委ねた。

その後、同じアバ・テオドゥルスが（ヨハネスとソフロニオスが伝えているように）、同じクリストフォロス師について、彼が亡くなる前の別の機会に、次のように語っていたと私たちに語った。

ある日の昼、私は（彼は語った）自分の修道院を出て、聖なる都エルサレムへと向かい、主の命を与える十字架に礼拝し、口づけを捧げるためであった。　そして、私がそこに着き、礼拝を終えて立ち去ろうとしたとき、教会の庭の中、門のそばに立っているある兄弟を見かけました。彼は中に入ろうとも、外に出ようともしていませんでした。また、私は二羽のカラスが、彼の目の前で恐れを

知らずに飛び回り、彼が入るのを許さない様子も目撃しました。私は、あのカラスたちが悪魔であることに気づきました。そこで、私はそこに立っていた人にこう言いました。

「教えてくれ、兄弟よ。なぜあなたは門の真ん中に立ち尽くし、中に入らないのですか？」

彼は私にこう答えた。

「お許しください、神父様。私は思いに囚われているのです。ある思いは『行って、尊い十字架にひれ伏し、それに口づけしなさい』と言い、別の思いは『いや、行くな。まず自分の務めを果たしてから、また来てひれ伏せばよい』と言うのです。」

私はこれを聞いて（聖クリストフォロスは言う）、その兄弟の手を取り、教会へと導き入れた。すると、たちまちあのカラスたちは姿を消した。私は彼に、尊い十字架と主の聖なる御墓に礼拝するよう勧め、その後、彼を平安のうちに送り出した。

これは（テオドゥルが言うには）、尊者クリストフォロスが私に語ってくれたことである。彼は、私が修道院の務めには熱心に取り組んでいたものの、祈りにはあまり励んでいないのを見て――何よりもまず霊的な奉仕を全うし、その後に肉体の必要を満たすための労働を行うべきであることを私に知らせるために――そう語ったのである。

このことを知った聖なる父ヨハネとソフロニオスは、キリスト、我らの神の栄光のために、これを読み、聞く人々の益となるよう記した[5829]。

私たちの尊い父ファンティンの記念日

記念日：8月30日

この聖人はカラブリアの[5830]で生まれ、ゲオルギオスとヴリエナの息子であった。若き頃から、彼は神への奉仕に身を捧げた。ある修道院[5831]に預けられ、修道士の剃髪を受けた後、あらゆる美徳を修め、神の戒めを極めて巧みに実践したため、偉大な神の啓示に恵まれた。荒野や山々を放浪し、二十日間も食事を摂らず、四年間は完全に裸の状態で過ごした。サラセン人による数々の災難に苦しめられ[5832]、彼は60年間にわたりそれらを忍耐強く耐え抜き、その後、弟子であるヴィタリウスとニキフォロスを連れて、彼らと共にペロポネソス半島へと向かった[5833]。彼はしばしばコリントを訪れ[5834]、多くの人々にとって救いの手助けとなった。また、アテネにも足を運んだ[5835]。そこで聖母マリアの聖堂で祈りを捧げた後、テッサロニキへ向かい[5836]、そこで大殉教者ディミトリオスの聖遺物から現れる奇跡を目の当たりにした。彼はここで8年間、定められた規則を守り、質素な生活を送り、高齢の末にこの世を去った[5837]。

[5829] 聖クリストフォロスは5世紀に活動した。

[5830] カラブリアは、古代ローマの地方であり、アペニン半島の南部に位置していた。

[5831] ある『プロローグ』には、聖ファンティンが8歳で修道院に入ったと記されている。

[5832] サラセン人とは、本来アラビアの住民を指す。当初、この名称はアラビアを遊牧していた盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの呼称を、アラブ人およびイスラム教徒全般に広めた。アフリカのサラセン人は、828年頃、シチリアとカラブリアを襲撃した。

[5833] ペロポネソスとは、古代においてバルカン半島の南部を指す名称であった。バシレイオス皇帝の暦に従い、聖ファンティンはカラブリアからテッサリアへと向かい、アテネ（そしておそらくコリント）を訪れた後、その主要都市であるラリッサで、5月15日に記念される聖アキリオスの墓のそばにかなり長い間滞在した。

[5834] コリントは、古代ギリシャの有名な都市である。それは、コリント湾の海岸近くにある古代アルゴリス地方に位置していた。

[5835] アテネは、古代ギリシャの首都であり、地中海沿岸に近いアッティカ地方に位置していた。

[5836] テッサロニキはマケドニアにある都市である。エーゲ海の海岸沿いに位置していた。

[5837] 聖ファンティンは9世紀末か10世紀初頭に亡くなった。

9月13日

8月31日（旧暦）

9月

聖殉教者キプリアン、カルタゴの司教の生涯と殉教

記念日：8月31日

聖キプリアン、カルタゴの司教は、3世紀の教会において最も傑出した教父および教師の一人に数えられます。　彼は、キリストの教会が、外部からの迫害――異教徒によるもの――と、内部の混乱――異端者や分裂を招く者たちによるもの――の両方に翻弄されていた時代に生き、活動せざるを得ませんでした。　聖キプリアヌスは、キリストの御名のために苦難を受け、羊たちのために自らの命を捧げた勇敢な大牧者としての模範であると同時に、教会の内的な生活を賢明に整えた指導者としての模範も示した。　彼は数多くの著作を残しており、その中で多様な神学的問題に触れ、当時の教会の内的な生活整備に関して生じていたほぼすべての疑問を解決している。それゆえ、彼の生涯と受難の歴史は、とりわけ教訓に富んだものとして受け止められている。

キプリアヌスは3世紀初頭に生まれた[5838]　。両親は異教徒であり、カルタゴの著名で高貴な市民の一員であった。彼の本来の名前はファッシウス・キプリアヌスであった。青年期、キプリアヌスは優れた世俗教育を受けた。　キプリアヌスは雄弁術において極めて大きな成功を収め、そのためカルタゴの学校で修辞学の教師に選ばれた。また、この理由から、多くの人々が彼を訴訟手続きの代理人（弁護士）として選んだ。　キプリアンは相続によって相当な財産を手にしたと推測される。さらに、弁護士としての職務から得られる利益も、彼に贅沢な生活を送るための豊富な資金をもたらしたため、当初、異教徒であったキプリアンは罪深い生活を送っていた。　その結果、キプリアン自身が述べているように、「（自身の）情欲に身を任せることで、まるでそれが生まれつきの宿命であるかのように、知らず知らずのうちに自らの不幸を招いてしまった」[5839]。

キプリアヌスは、神の恵みが彼の魂を照らし、救いへと招くまで、このような罪深い生活を送り続けた。キプリアヌスは成人するまで、おそらく46歳になるまで異教徒のままであったと考えられている[5840]。

3世紀初頭、カルタゴにはすでに多くのキリスト教徒がいた。キプリアヌスはこのことを知っていた。彼は生まれつき好奇心旺盛で高潔な精神の持ち主であったため、キリスト教の崇高な教えに興味を抱かずにはいられなかった。キリスト教に改宗する前から、キプリアヌスはテルトゥリアヌスのいくつかの著作に接していた[5841]、そしてそれが彼を真理の道へと導いたのである。

まだ異教徒であった頃から、キプリアヌスは異教的な生活に対して嫌悪感を抱き始めていた。彼は、ある者たちの殺害が他の者たちに快楽をもたらす剣闘士の闘技の有害さと罪深さを自覚していた。また、キプリアヌスは、過去の悪行を人々の記憶に刻み込み、人々を堕落させる異教の悲劇や喜劇に対しても嫌悪感を抱いていた。　まだ異教徒であった頃から、彼は裁判官による不正や弾圧、個人間の欺瞞や争いを嘆きながら見つめていた。　まだ異教徒であった頃、彼は、多くの人々にとってこれほど魅力的で魅惑的に見える名声、名誉、富が、実際には魂を空虚で苦痛に満ちた不安や懸念で

[5838] キプリアンは、推定では200年頃に生まれた。

[5839] 『ドナトゥスへの手紙』第4章。

[5840] キプリアヌスがキリスト教に改宗したのは、一般に246年とされている。

[5841] キプリアヌスはテルトゥリアヌスの『弁明』を知っていた。

満たすだけであることを自覚していた。　これらすべてが、キプリアヌスに、異教では救われることはできず、異教の宗教は人間に心の平安を与えることはできず、キリスト教と比較すれば、わずかな注目に値するものでもないという確信を抱かせた。

しかし、道徳的堕落の深さと遍在性を自覚していたことが、キプリアンのキリスト教への改宗を一時的に阻んでいた。彼はしばしば自身の道徳的堕落や、改心してキリスト教の中で新たな人生を始める必要性について思索にふけったが、同時に、キリスト教が当初から課す高い要求を恐れていた。　彼は、キリスト教において与えられるような霊的な再生を極めて困難なものと見なしていた。というのも、彼はすでに長年にわたり異教の中で過ごしてきたからである。この件に関する自身の疑念や困惑を、彼は『ドナトゥスへの手紙』の中で雄弁に表現している。　キプリアヌスはここで次のように述べている。「　、かつて自分が何者であったかをすべて捨て去り、同じ肉体でありながら、心と精神において別の人物になることなど、果たして可能だろうか？……深い物質から生まれ、それとともに固まってしまったもの、あるいは長年の習慣によって歳月とともに根付いてしまったものを、果たして脱ぎ捨てることはできるだろうか……　豪華な饗宴や精緻な料理に慣れ親しんだ者が、いつの日か倹約を身につけるだろうか？　常に金で飾られた高価な衣装を身にまとっていた者が、いつの日か平凡で質素な服を着るだろうか？　いいえ――とキプリアンは論じた――贅沢の息子であり、栄誉に慣れきった者は、決して平凡で無名な人間になることを決意することはないだろう。常に使用人に付き添われ、敬意の印として彼の前にひれ伏す大勢の民衆に囲まれている彼は、一人きりになることを罰だと考えているのだ。　絶え間ない享楽の虜となっている彼は、たいてい酒に溺れ、傲慢にふけり、怒りに燃え上がり、窃盗を企て、残虐さに屈し、情欲に溺れる。私はしばしば自分自身にそう語りかけていた――とキプリアヌスは記している――というのも、私自身も多くの過ちに陥りやすかったからだ」[5842]。

このような道徳的な葛藤と迷いの状態にあるキプリアヌスは、外部からの助けや助言の必要性を否応なく感じずにはいられなかった。そして、自身の疑念を解消するため、キプリアヌスはカルタゴのある長老、セシリウスという人物に助けを求めた。　セシリウスは、異教の多神信仰がいかに極めて不合理であるか、また、人間の最も邪悪な性向でさえ、全能なる神の恵みの働きによって変えられることを、キプリアンに納得させることに成功した。こうして、キプリアンはキリスト教徒になるという固い決意を固めた。

古代教会に存在した慣習に従い、キプリアンは洗礼を受けるまで、いわゆる「聴道期」[5843]と呼ばれる期間を過ごす必要があった。キプリアンが聴道期をどれくらいの期間過ごしたかは不明だが、それほど長くはなかったと推測される。

キリスト教徒になることを決意したキプリアヌスは、実際に自らの生活様式を改めることで、その決意の誠実さを証明した。　まだ「聴道者」の段階にあったキプリアヌスは、すべての財産を売り払い、その代金を自分には何も残さず、すべて貧しい人々に施した。その後、キプリアヌスの霊的生活を見守っていた司祭セシリウスは、もはやこの弟子の回心の誠実さを疑う余地はなかった。当然のことながら、その直後にキプリアヌスの洗礼が執り行われた。

洗礼の秘跡によって与えられた霊的変容の生きた感覚は、キプリアヌスに強く作用した。彼は友人ドナトゥスへの手紙の中で、洗礼の秘跡の救いをもたらす働きを次のように述べている。

「洗礼の命を与える水が、私の過去の生活の汚れを洗い流し、清められ、義とされた心に天の光が注がれたとき。天の御霊を受け入れ、私が新しい人となったとき、私は以前疑っていたことについて、不思議なほど完全に確信を持つようになった。　奥義が明らかになり始め、闇が消え去り、かつては困難に思えたことが容易になり、不可能だったことが可能になった……天の賜物を受け取るこ

[5842] 『ドナトゥスへの手紙』第3章および第4章。

[5843] 宣教とは、キリスト教の信仰の真理に関する口頭による教えのことである。

とに限りはない。　ただ、私たちの心が渇望し、開かれている限り、私たちは恵みを受け入れることのできるだけの信仰を持っている。恵みは、節度ある清らかさ、汚れなき思い、清らかな言葉、偽りのない徳によって、罪の毒となる力を滅ぼす力を与えてくれる。恵みは、堕落した心の汚れを清め、その健全さを取り戻させてくれる。　敵を和解させ、不安な者を鎮め、恐ろしい呪文によって、人に取り憑く不浄な霊に自白を強いる力を与えてくれる。悪霊が宿る者たちに対する恵みの働きは目に見えず、悪霊を打ち倒す一撃も目立たないが、その裁きは目に見え、圧倒的である。　こうして、私たちの中に宿った恵みの霊は、その強大な力を現し始め、たとえ私たちがまだ肉体とその肢体を別のものへと変えられていなくとも、私たちの目はもはやこの世の闇によって曇らされることはない。なんと偉大な力、なんと強大な霊の力であろうか！　清められ、清いまま留まっている者は、自らを世俗の誘惑から守るだけでなく、襲いかかる敵のいかなる罠にも引っかからないばかりか、自らの力を強め、敵の全軍を支配する君主として君臨するに至るのだ」[5844]。

こうして、キプリアンの洗礼直後、神の恵みは彼の中に内なる霊的な再生として現れた。　前述の通り、彼は洗礼を受ける前、すなわち「　」の段階にある「オグラシェニエ」の期間中にすでに生活様式を変えていたが、彼自身の告白によれば、その信仰は洗礼の時点で完全な確固たるものとなり、意志もまた完全な力と強さを獲得したのである。彼がおそらく洗礼を受けたのは、復活祭かペンテコステの祝日であったと思われる[5845]。

洗礼後、キプリアヌスは厳格で徳高い生活を送り始めた。彼はすべての人にとって無欲の模範であり、貧しい人々や困窮者に同情し、自分の持っているものをすべて分け与えて慈善を行った。洗礼後の聖キプリアヌスの主な活動は、祈りと聖書の朗読であった。

慈善の行いを行い、困窮するすべての人々に施しを施していたキプリアヌスは、キリスト教の信仰の奥義を彼に明かし、彼がキリスト教に改宗するのを助けてくれた師である司祭セシリウスに対して、特別な愛と感謝の念を抱かずにはいられなかった。　そして、長老セシリウスは、キプリアヌスにこれほどまでの献身と自分への親愛を見出し、死を前にして、残された家族への世話と配慮を、彼以上に確信と信頼を持って託せる人物を他に誰も見出せなかった。

キリスト教に改宗した後、キプリアヌスはセシリウスと同じ家に住んでいた。というのも、彼はすべての財産を貧しい人々に施してしまったからである。そして、キプリアヌスもセシリウスも、共に厳格で徳高い生活を送っていた。

洗礼を受けてから1年かそれより少し経った頃、キプリアンはカルタゴ教会の長老に叙階された。

長老の位についた聖キプリアヌスは、さらに熱心に敬虔な生活を送り始めた。助祭ポンティウス（[5846]）の証言によれば、キプリアヌスは長老として、古代の義人たちを模範として多くのことを成し遂げ、自らも模範となるにふさわしい人物となった。

その直後、カルタゴのドナト司教が死去した。空席となった司教の座には、民衆の満場一致により聖キプリアンが選出された。このように、キプリアンは長老の位に在任したのは1年にも満たなかった。

キプリアヌスは当初、このような栄誉を拒んでいた。彼は、これほど高い職務に就くに値しないと考えていたからである。彼より年長で、自分よりもふさわしい長老たちがいると彼は述べていた。　しかし、その善良な牧者を愛する民衆は、聖キプリアンの司教叙階を強く求めた。叙階の定まった時が来ると、キリスト教徒たちはキプリアンがいた家を囲み、キプリアンがキリスト教徒たちと共に教会へ行くことに同意するまで、彼らが占拠した出入り口を離れることを拒んだ。　その深い謙虚

[5844] 『ドナトゥスへの手紙』第4章および第5章。
[5845] 古代教会において、これらの日はその厳粛さゆえに、改宗する異教徒の洗礼を行うのに特に適した日とされていた。
[5846] 助祭ポンティウスは、聖キプリアヌスの伝記を残した。

さにもかかわらず、キプリアンは兄弟たちの愛に譲歩せざるを得ず、教会へと向かい、皆の喜びの中で司教に叙階された。

こうして聖キプリアンは、まるで燭台に置かれた灯火のように、その美徳をもって世を照らすために立てられたのである[5847]。

司教の位についたキプリアンは、まず第一に教会の整備に注力した。当時、名ばかりキリスト教徒を名乗りながら、実際には真のキリスト教徒にふさわしくない生活を送っていた者が少なからなかったことに留意すべきである。 異教徒によるキリスト教徒への迫害はとっくに終息しており、教会は40年近くにわたる平和を享受していたため、一部のキリスト教徒は軽率にも、厳格なキリスト教の慣習から逸脱することを許していた。キプリアン自身が当時の道徳的欠陥を次のように記述している：

「誰もが財産の増大ばかりを気にかけていた。司祭たちには、彼らの誓約にふさわしい敬虔さが欠けており、聖職者たちには純粋な信仰がなく、行いには慈悲がなく、品行には整然さがなかった[5848]。多くのキリスト教徒は、キリストの信仰の真理を堅く守らず、キリストから背いていた。 無分別な誓いが頻繁に行われ、指導者たちへの軽蔑や不服従、中傷、そして相互の敵意が見られた」[5849]。

こうした状況を受けて、聖キプリアンは司教として、教会の内部秩序の回復のために多大な労力を費やさざるを得なかった。

司教に叙任されて間もなく、聖キプリアンは、キリスト教徒の生活に忍び込んだ混乱の根絶に取り掛かった。

キプリアヌスはまず第一に、民の指導者である教会の聖職者たち、すなわち牧者たちそのものに注目した。キプリアヌスは、各人の能力と行いについて事前の綿密な調査を行わずに、聖職の最も低い位階であっても誰をも認めることはなかった。 彼は、教会の奉仕に就こうとする者たちに一定の準備を求めた。キリスト教の教義に関する知識の試験そのものは、キプリアヌスが長老たちの立会いのもとで行った。これは、キプリアヌスが司教就任当初、オプタヌスを求道者の教師に任命したことからも知られている。

同時に、キプリアヌスはキリスト教徒たちの道徳の是正にも心を配った。助祭ポンティウスは、聖キプリアヌスの司教としての奉仕について次のように語っている。「なんと敬虔なことか！ なんと警戒心が強いことか！ なんと慈悲深かったことか！ なんと厳格だったことか！ 彼の口からはこれほど多くの聖さと恵みが溢れ出ていたため、彼を見た者すべてを驚嘆させたのである」。

聖キプリアヌスは外見も端正で、顔立ちも立派であった。それは、彼の魂の奥底に秘められた聖性が、その顔にも表れていたからである。 『伝道の書』の言葉にあるように、知恵も聖さも人の顔を飾るものである（伝道の書8:1）。この神の人、聖キプリアンには、その両方が備わっていた。彼は賢く、かつ聖なる人であった。 彼が身に着けていた衣服は、あまりに豪華でもなく、あまりに粗末でもなかった。聖人は高慢や自惚れを避けていたが、司教の位を辱めさせることも望まなかったからである。彼の性格は非常に控えめであった。彼はあまりに厳格でもなく、また過度に柔和で温厚でもなかった。 懲らしめるべき場面では、慈悲深くはあったものの、怒りを示した。それゆえ、彼はすべての人から尊敬され、崇められていた。さらに、聖キプリアンは、不当な扱いを受けた者や困窮しているすべての人々に対して、大きな慈悲と憐れみを示した。彼は孤児、旅人、貧者、病人の助け手であった。

聖キプリアンは、大司教としての指示や行動において、これほどまでに分別と英知を示したため、他の教会の指導者たちまでもが彼の助言を求めました。

[5847] キプリアンは、おそらく248年の終わりに司教に叙階された。

[5848] 『堕落者について』、第6章。

[5849] 『堕落者について』、第6章。

例えば、ノヴの司教ロガツィアンは、ある助祭から受けた侮辱について、聖キプリアンに助言を求めました。キプリアンは次のように答えました。

「もしその助祭が今後もあなたの命令に背き、あなたを侮辱し続けるのであれば、あなたは権限に基づき、その助祭の聖職を剥奪するか、あるいは教会共同体から破門することもできます。しかし」と彼は付け加えた、「私たちは、あなたが聖職の権威をもって罰するよりも、柔和な忍耐をもってその侮辱や傷を覆い隠してくださることを、むしろ望みます。」

別の司教、エウクラティオスはキプリアヌスに尋ねた。

「キリスト教徒になった後も、異教徒の頃に携わっていた芸術を若者たちに教え続けていた役者を、教会の交わりに受け入れるべきでしょうか？」

キプリアンはこれに対し、次のように答えた。

「貧困は、この役者（現在はキリスト教徒）を弁解する理由にはならない。彼が、より質素ではあるが罪のない生活で満足する意志さえあれば、教会の献金によって生計を立てることができる。それゆえ、彼に教会の支援で満足するよう説得しなさい。もし、あなた方の教会の献金が労働者たちの生計を立てるのに不十分であるならば、彼を私たちのところに来させ、私たちから食事や衣服に必要なものを受け取らせなさい。

聖キプリアンは、彼に尋ねてくるすべての人々に、他にも多くの助言を与えました。なぜなら、彼は自らの知恵と洞察を隠そうとはせず、すべての人々の役に立つよう努めたからです。

神の御心により、聖キプリアンは数年間、自身の教区を平穏に統治した。　キプリアヌスが教会の司教の座に就いて間もなく、嵐のようにデキウスによる迫害が吹き荒れた[5850]　。この不敬虔な皇帝は即位後まもなく、すべてのキリスト教徒に異教の宗教を受け入れ、神々に犠牲を捧げることを強制する勅令を発した。

この迫害が始まるずっと前から、キプリアンは主から幻視を通じてこの災難について告げられていた。すなわち、キプリアンは一人の老人の姿を見た。その右側には、ある種の動揺、憤り、そして悲しみに満ちた若者が座っており、左側には誰かが網を手に持ち、周囲に立っている人々をその網で捕らえようと脅かしていた。　キプリアヌスはこの幻に驚いた。その意味は、右側に座っている者が、キリスト教徒たちが神の戒めを守っていないことを嘆き悲しんでいるのに対し、左側にいた者は、民衆に自らの怒りをぶつける機会が訪れ、その許可が下りたことを喜んでいる、と説明された。聖キプリアヌスは、幻視の中で現れた人物たちが、父なる神、我らの主イエス・キリスト、そして世の古くからの敵である悪魔であることを悟った。

この迫害によって、キリスト教徒たちは火の中の金のように試練にさらされ、それによってキリスト教の美徳の輝きが至る所でより明るく、より強く現れるようになったのである。

カルタゴに皇帝の勅令が届くと、異教徒たちはまず第一にキプリアヌスを拷問にかけようとした。彼はその徳とキリスト教徒への影響力で特に知られていたため、異教徒たちは他のキリスト教徒を威嚇するために、何よりも先に彼を拷問にかけるつもりだった。　しかし、聖キプリアヌスの偉業を成し遂げる時はまだ来ていなかったため、彼は一時的にカルタゴを離れることを決意した。異教徒たちに知られていない場所から、説得と教えによってキリスト教徒の信仰を支え、キリストの御名を堅く告白するよう促すためであった。　カルタゴからしばらく身を引くことを決めたキプリアヌスは、自身の長老や助祭たち、そしてローマ教会の指導者たちに向けて書簡を送った。　この書簡の中でキプリアヌスは、自身の存在が迫害の激しさをさらに助長することのないよう、カルタゴを離れることを伝えた。また、肉体的には自分の羊の群れから離れていても、　主において彼らと共にいること、そして、強き者を慰め、弱き者を励まし、教会の内なる生活における様々な不和を取り除き、迷う者たちの魂を安らげるために、十三通の手紙を書いたことを伝えた。

[5850] デキウス皇帝は249年から251年まで在位した。

キプリアヌスは自らの行動を次のように説明した。「勝利の第一段階は、異教徒の手にかかった後も主を告白することにある。栄光の第二段階は、賢明な退避によって主のために自らを救うことにある。　一つは公の告白であり、もう一つは私的な告白である。前者は世俗の裁判官に打ち勝つものであり、後者は裁判官である神にとってより好ましいものである。なぜなら、心の清らかさを保ち、良心を汚れのない状態に保つからである。前者はより生き生きとした不屈の精神を示し、後者はより確固たる慎重さを示す。　ある者は、その時が近づくと、すでに死を迎える準備が整っているが、別の者にとっては、死が先延ばしになるかもしれない――例えば、自分の遺産を残して、信仰から離れないようにというまさにその理由のために身を引いた者だが、もし彼もまた（異教徒たちに）捕らえられていたならば、間違いなく自らをキリスト教徒であると告白したであろう」。

疑いなく、キプリアンは一時的な追放によって、即座に殉教を果たすよりも、教会に対してより大きな貢献を果たした。

追放される前、聖キプリアンは、それまで自身の管理下にあった教会の資金を、カルタゴに残ったすべての聖職者たちに分配し、貧しい人々や困窮者への支援をより円滑に行えるようにした。聖職者たちは、その一方で、司教に対し、信徒たちの状況に関するあらゆる情報を進んで報告し、司教が直接その場にいた時と同様に、彼に従った。公平に言えば、あの困難な時期にカルタゴの教会を統率できたのは、彼ただ一人であったと言えるだろう。

彼の伝記作者である助祭ポンティウスは、次のように述べている。「もし彼（キプリアヌス）が当時（すなわち、カルタゴから身を隠さなかったならば）、殉教の死を遂げていたと想像してみよう……　堕落した者たちに悔い改めを、異端者たちに真理を、分裂を招く者たちに一致を、神の子供たちに平和の維持と祈りを、誰が教えただろうか？」

このように、聖キプリアンは常に自分の信徒たちと連絡を取り合い、長老たち、助祭たち、殉教者たち、そして信仰の証人たちに度重なる手紙やメッセージを送っていた。　まず彼は、神が御心であることを示され次第、彼らの元へ赴くと語った。そして、未亡人や病人、旅人、そしてすべての貧しい人々を慈しむよう彼らに求めた。　彼はこの目的のために一定の金額を残していたが、すでにすべて使い果たされているかもしれないと懸念し、使用人のナリクを新たな献金を持って派遣した。キプリアヌスが何よりも気にかけていたのは、試練の嵐の中でキリスト教徒たちが気力を失わないようにすることだった。　聖キプリアンは、殉教者や信仰の証人に対しても、同様に心からの思いで手紙を書いた。彼は彼らの勇気を奮い立たせ、その忠誠を称え、すべてのキリスト教徒に対し、殉教者が亡くなった後にはその遺体に相応の敬意が払われ、苦しみの中ではあらゆる可能な慰めが与えられるよう配慮するよう諭した。

聖キプリアンは、聖なる信仰告白者たちについて大いに称賛した。彼は、信仰告白者たちの栄光に何一つ欠けることがないのと同様に、彼らへの援助にも何一つ欠けることがないように、自身の聖職者たちに配慮するよう促し、彼らの死の日を自分に知らせるよう求めた。そうすることで、彼は彼らの追悼のために祈りと犠牲を捧げることができたのである。

聖キプリアヌスがカルタゴから追放された直後は、キリスト教徒を迫害していた異教徒たちの怒りも幾分和らいだ。しかし、しばらくすると、その怒りはさらに激化した。キリスト教徒たちに、彼らが信じる信仰を放棄させるため、異教徒たちは様々な残酷な拷問や苦しみを考案した。　キリストの御名を告白する者たちは、鞭で打たれ、枝で殴られ、鉄の器具で引き裂かれ、火あぶりにされた。　牢獄はキリスト教徒で溢れかえった。囚人の中には、間もなく勝利の冠を授かる者もいれば、同じ勇気と熱意に燃え、戦いの偉業に身を投じようとしていたため、その冠を授かる寸前まで迫っていた者もいた。　しかし、拷問に耐えきれず、犠牲を捧げたり、偶像に香を焚いたり、あるいは金で都市の統治者から「偶像に犠牲を捧げ、キリストを否認した」と記された文書を購入したキリスト教徒もいた。実際にはそうではなかったにもかかわらずである。中には、何の要求もされずに自発的に異教の神々に犠牲を捧げた者さえいた。　また、異教の裁判官たちは、夜になると彼らを家に帰し、犠

牲を強要することはなかったが、彼ら自身が、翌日まで先延ばしにすることなく、夕方に犠牲を捧げる許可を求めた。さらに、自分たちがそうしたように、友人たちにキリスト教の信仰を放棄するよう説得する者も大勢いた。

聖キプリアヌスにとって、自分の羊の群れの中の弱い者たちが堕落したという話を聞くことは、苦しく、つらいことだった！　聖キプリアヌスは、彼らの堕落を、自らの心の一部が引き裂かれることだと表現した。その後、彼はこの件について次のように記している。「兄弟たちよ、私はあなた方と共に嘆き悲しんでいる。私の安全や健康が保たれているとしても、私の苦しみは和らぐことはない。羊飼いとして、私は自分の群れに加えられた一撃によって傷つけられているのだ。　私の心はあなたがた一人ひとりと結びついており、一人ひとりと共に病み、共に死んでいくのだ！　残酷な敵の打撃は、私の肉体をも打ち砕いた！　そして、武器は私の魂をも貫いた！　迫害から遠く離れ、自由であった私の心でさえ、安らぎを得られなかった。兄弟たちが打たれるとき、愛が私を打ち砕いたのだ」[5851]。

この頃、聖キプリアヌスに少なからぬ苦悩をもたらしたもう一つの出来事が起こった。

古代、カルタゴの教会では、他の教会と同様、殉教者たちの間で、背教者たちに特別な種類の嘆願書、すなわち「和解の手紙」を渡す慣習があり、それによって罪を犯した者たちは、より早く信徒たちとの交わりに受け入れられていたことに留意する必要がある。　そして今、キリストから背いた者の多くは、殉教者や証人たちの執り成しに大きな期待を寄せていた。しかしその一方で、多くの殉教者たちは、堕落した者たちに対して過度に寛容であったため、彼らの悔い改めの真偽に注意を払わず、適切な審査や慎重さを欠いたまま、これらの執り成しの書簡（「和解の手紙」）を発行していた。　迫害の終結後、司教自身が帰還し、堕落した者たちの道徳的状態を綿密に調査した上で、一部の堕落した者たちに和解を許すよう司教に請願したのは、ごく少数の殉教者たちだけだった。　このような堕落者への寛容さは、カルタゴで迫害が依然として猛威を振るっていた時期に示されたものであり、したがって、この寛容さは、まだ迫害を受けていない他のキリスト教徒たちの信仰の堅固さを弱める恐れがあった。

聖キプリアヌスはこの一連の事態を知ると、カルタゴの聖職者、殉教者、そして民衆に向けて三通の手紙を送った。そして、古来の教会の規律を主に破っていたのが長老たちであったため、キプリアヌスはこれらすべての手紙の中で、とりわけ彼らを厳しく非難した。　聖職者も信徒も問わず、すべての人々に対し、堕落した者たちの教会への受け入れに関する公会議での審議を待つよう説得し、自身は迫害が終息し、カルタゴに戻った後に公会議を招集することを約束した。　キプリアンは、殉教者たちに対し、彼らが取り成しを申し出る人々のうち、一人ひとりの行いや功績、堕落の経緯や性質に特に注意を払うよう求めた。

しかし、聖キプリアヌスのこれらの書簡はすべて、完全な成功を収めることはなかった。確かに、牧者に従順な長老たちは、堕落した者たちを信徒と同等に教会の交わりに受け入れることをやめ、彼らに対し、まず誠実な悔い改めによって自らの罪を償うよう諭した。　しかし、堕落した者たちの中には、その後も悔い改めを拒み、迫害が終息するまで自身の件の決着を待とうとせず、直ちに罪の赦しを要求する者もいた。

しかし、聖キプリアンは、一部の堕落したキリスト教徒によるこのような不服従の知らせを受けても、自らの要求を緩めることはなかった。

このように断固として教会の規律を守りつつ、聖キプリアヌスは追放先の地から近隣の司教たちとの書簡のやり取りを再開し、彼らの同意を得ることで、堕落した者たちへの悔い改めの要求をさらに確固たるものにした。　彼の手紙への返答として、司教たちはその要求を全面的に支持すると伝

[5851] 『殉教者伝』第4章。

え、迫害の終結後に開催される公会議までは、いかなる場合でも自身の決定から退くべきではないと彼に書き送った。

近隣の司教たちが堕落者たちに関する聖キプリアヌスの要求を公然と支持し承認した一方で、殉教者たちは彼に反対を表明した。　そのうちのひとりであるルキアヌスは、全員を代表してキプリアヌスに手紙を書き、すべての殉教者が堕落者たちに和解を与えたことを通知した。このルキアヌスは、ローマの殉教者セレリヌスにも同様の手紙を送った。

このような殉教者たちの後押しに勇気づけられたアフリカ属州のいくつかの都市の背教者たちは、司教たちに対して反乱を起こし、脅迫を交えて、殉教者や殉教者たちがすでに与えたと彼らが主張する和解を要求した。　カルタゴ市内でも、その後、落ち着きのない信徒たちは、さらに大胆に教会との和解を要求し始めた。

一方、聖キプリアヌスは聖職者や民衆に対し、以前指示された通りに振る舞うよう諭した。

このため、堕落した者たちのうち、より善意のある者たちは完全に謙虚になり、司教への完全な服従を誓った。　その直後、彼らの一部はすでに聖キプリアヌスに手紙を送り、自らの堕落を自覚しており、教会の規則で定められた悔い改めを行っており、信者たちとの性急で時期尚早な和解を望まず、むしろ司教の帰還を待ち望んでいると述べた。そして、和解は司教の面前で行われる方が彼らにとってより喜ばしいことだと語った。

その直後、キプリアヌスは幻視の中で、まもなく教会に平和が回復すること、ただ一部の者たちに対してのみ、短期間ながら迫害が続くこと、そして祈りの熱心さに応じて平和が早まる可能性があることを示された。

そして実際、聖キプリアヌスの幻視は、その後の出来事によって裏付けられていった。カルタゴにおけるキリスト教徒への迫害は依然として続いていたものの、その勢いは弱まりつつあった。異教徒たちは、キリストの御名を告白する者たちに、ますます大きな自由を許し始めた。牢獄に閉じ込められていた者たちは解放され、流刑に処されていた者たちは故郷へと帰還した。

しかし、迫害はまだ終わっていなかった。この輝かしい大牧者、聖キプリアヌスには、まだ多くの心配事や不安が待ち受けていた。　キプリアヌスが不在の間、カルタゴでは長老や聖職者が必要とされた。キプリアヌスは、いわば4人の代理を選出し、彼らに、キプリアヌスによって何らかの聖職位に叙任されるべき人物の年齢、状況、功績を綿密に審査するよう命じた。　これらの代理として選ばれたのは、カルタゴに最も近い教区の二人の司教――カルドニウスとヘルクラン――、続いてカルタゴの長老であり殉教者であるロガツィアン、そして聖職者ヌミディクスであった。

これらの人物たちは直ちに、司教の指示に従い任務に着手した。しかし、彼らに委ねられた任務を遂行する中で、キプリアヌスが教会のふさわしい奉仕者を選出するために示した、この極めて正当かつ必要な配慮を快く思わない者たちから、強い抵抗に直面した。　そのような人物として、あるフェリシシムという平信徒と、長老ノヴァトがいた。彼らには、キプリアヌスによる自分たちへの公正な裁きを恐れたさらに四人の長老が加わった。彼ら、とりわけ長老ノヴァトは、フェリシシムに、自らの司教に対する反乱を起こすよう唆した。

この一連の出来事がキプリアヌスの耳に入ると、彼はフェリシシムを破門し、その共謀者全員にも同様の処罰を下すと脅した。さらに、キプリアヌスがこの件に関して書いた書簡そのものを、民衆に読み上げさせ、カルタゴの聖職者たちにも送るよう命じた。　当初、フェリシシマスの熱心な支持者は6名しか確認されず、彼らは直ちに教会から破門された。しかし、フェリシシマスの新たな支持者が現れたため、彼が引き起こした騒動は依然として収束していなかった。

キプリアヌスは復活祭の時期までにカルタゴに戻るつもりだったが、フェリシシマとその支持者たちによる騒動がまだ収まっていないことを鑑み、自身の帰還によって混乱を助長することを望まなかったため、追放先の地で復活祭を過ごすことに決めた。　また、自身の不在中に敵がさらに勢力を拡大しないよう、彼は信徒たちに対し、反乱者たちの有害な言葉を信用しないよう書面で諭した。

この頃、聖キプリアヌスは自分の信徒たちのために深く心を痛めていた。その悲しみは、この機会に書かれた手紙に表れている：

「今、私はどれほど苦しんでいることか」と彼はカルタゴのキリスト教徒たちに書き送った。「主とその福音の教えに従って、自らあなたがたのところへ赴き、一人ひとりを直接諭すことができないのだから。すでに2年にも及ぶ追放と、あなたがたとの苦い別れだけでは私にとって十分ではなかった。あなたがたがいなくて絶えず私を苦しめた悲しみと嘆きだけでは十分ではなかった。　あなたがたがこれほど深い愛と熱意をもって選んだ牧者が、直接あなたがたに挨拶することも、あなたがたの抱擁に包まれることもできないという事実のために、昼夜を問わず流した涙も、まだ足りなかったのです。悲しみのあまり萎え果てようとしている私たちの心に、さらに大きな悲しみが訪れました。このような不安と苦境の中、私自身もすぐにあなたがたの元へ行くことはできません……　しかし、その代わり、ここから、愛する兄弟たちよ、私はあなた方に強く訴え、お願いいたします。破滅的な言葉に耳を貸さず、欺瞞に満ちた言葉に安易に惑わされず、光の代わりに闇を、昼の代わりに夜を、食物の代わりに飢えを、飲み物の代わりに渇きを、薬の代わりに毒を、健康の代わりに死を選んではなりません……　自ら平安を持たない者たちは、私たちに平安をもたらすことはありません……だれも、あなたがたを主の道からそらしてはなりません。自らの滅びを望んだ者たちだけが滅びるがよい。教会から離反した者たちだけが教会の外に留まるがよい。司教たちに反旗を翻した者たちだけが、司教たちと共にあってはならない……　お願いです。そのような者たちから離れ、私の助言に従ってください。　私は日々、主の御前であなたがたのために絶え間ない祈りを捧げています。私はあなたがたを教会と再び結びつけたいと願っています。私は神に、まず母なる教会（教会）の平安を、そしてその後にこそその子らの平安を願うのみです。私の祈りと嘆願に、あなたがたの祈りを、私の涙に、あなたがたの涙を合わせてください」[5852]。

彼の言葉の中に父なる愛の声を理解できた人々をこのように感動的に諭しつつ、聖キプリアンは、彼に従おうとしない者たちに対して、教会からの破門という罰を警告した。

この手紙は、当然のことながら、善意ある人々を司教の側に留まらせた。

その直後、ノヴァトゥスが共謀者たちを通じて、聖キプリアンの同意も知らぬ間にフェリシシマを助祭に叙階した際、キプリアンはこの違法な叙階について、聖職者や民衆に向けてさらに二通の手紙を書いた。　これらは、彼が追放されていた地から送られた最後の手紙であった。フェリシシマスの反乱は、キプリアヌスがカルタゴに戻った後に開催された公会議において、すでに終結していた[5853]。

カルタゴへの帰還直後、キプリアヌスはこの公会議の議長を務め、同公会議では、フェリシシマによる分裂問題と、堕落した者たちの信徒との交わりの許容という二つの問題が審議された。

公会議の父たちは、長く多くの議論を重ねた末、堕落した者たちが神の慈悲を絶望して異教的な生き方をすることのないよう、教会との交わりを拒んではならないと満場一致で決定した。しかし、彼らを時期尚早に交わりに受け入れるべきではなく、教会との和解には、長期にわたる悔い改め、涙を伴う神への祈り、そして一人ひとりの道徳的状態の精査が先行しなければならないと定めた。この際、堕落した者たちの状況の違いに応じて、さまざまな段階の悔い改めが定められた。一方、フェリシシムとその同調者たちは、司教の権威に反旗を翻したとして、教会から破門された。

しかし、キプリアヌスの敵たちはそれだけでは満足しなかった。　長老ノヴァトゥスはまもなくローマへ赴き、そこでフェリシシムに背いてノヴァティアヌスの派閥に加わった[5854]。その結果、

[5852] 第40書簡。

[5853] この公会議は251年に開催された。

[5854] ノヴァティアヌスはローマの司祭であり、彼は以前、堕落した者たちの教会への受け入れをめぐる問題について、ローマの聖職者全員を代表してキプリアヌスに書簡を送っていた。

ローマ教会とカルタゴ教会の双方で多くの混乱を引き起こした。一方、フェリシシムは同志たちと共に、1年後に神の聖人キプリアヌスに対して新たな反乱を起こした。

ノヴァティアヌスはローマで、たとえ悔い改めを捧げたとしても、堕落した者を決して聖餐の交わりに受け入れてはならないと主張する偽りの教えを広め始めた。同時に、ノヴァティアヌスは、正当に司教に選出されたローマの長老コルニリウスから司教の尊厳を先取りしようと試みた。　ローマに到着したノヴァタの助力により、ノヴァティアヌスは3人のイタリアの司教を説得し、自らを司教として按手させることに成功した。

聖キプリアヌスは、真にキリスト教的な英知をもって、あらゆる教会の不和や動揺を根源から断ち切ろうと努めた。キプリアヌスは、アフリカの司教たちへの回状を通じて、コルニリウスの合法的な司教就任と、ノヴァティアヌスの違法な行為について通告した。　神の聖人は、ある場所で一人の司教が合法的に選出され叙階されているところには、別の司教を任命してはならないという真理を、絶えずすべての人に説き続け、教会の平和を乱す者たちに対し、破滅的な分裂や論争を止め、唯一の真の普遍教会の懐に戻るよう説得した。　また、ノヴァティアヌスやフェリシシムスといった分裂主義者たちの誘惑から信徒たちを守るため、聖キプリアンは『教会の統一について』という書物を著した。

しかし、キプリアヌスの試練はこれで終わりではなかった。　教会内に不和と騒乱の種をまき続ける者たちが現れた。例えば、ある異端者プリヴァトゥスは、フェリシシマ派に加わり、カルタゴのフォルトゥナトゥスを違法に司教に就任させることに成功した。しかし、キプリアンの説得の後、フォルトゥナトゥスの支持者たちは彼を見限り、教会の平和へと戻っていった。

教会の平和の敵によって引き起こされるあらゆる不和や対立を完全に排除するため、神の聖人キプリアンはカルタゴで地方公会議を招集することを決めた。カルタゴでは、このような公会議が何度か開かれた。　この公会議では、堕落した者たちの受け入れや異端者の洗礼など、教会の内部生活に関する多くの問題が解決された。次第に、教会内の不服従な信徒たちによって引き起こされていた動揺は収まり、教会には平和と静けさが戻っていった。

主は、聖キプリアヌスにさらなる試練を与えることをお望みになった。異教徒による迫害という災いに代わって、自然災害――ペスト――が現れたのである。

予期せず発生したこの災いは、キリスト教徒にとっても異教徒にとっても等しく過酷なものであった。ペストは、各州、各都市、そしてほぼすべての家庭において、長い間絶え間なく猛威を振るった。

この普遍的な災難は、キプリアヌスを最も献身的かつ高潔な活動へと駆り立てた。　異教徒たちが自らの利己心をますます強め、恐怖に完全に支配され、最も愛する親族さえも置き去りにし、死者を路上に埋葬もせずに放置するようになった一方で、キプリアヌスの指導の下にあるキリスト教徒たちは、揺るぎない姿勢を貫いた。　キプリアン自身も、説得にとどまらず、自らの行動をもってすべてのキリスト教徒に模範を示した。

疫病には、いつもの恐ろしい伴侶である干ばつと飢饉が付きまとっていた。さらに、ローマ帝国の国境沿いにはヌミディア人の野蛮人の群れが徘徊し、襲撃を繰り返して多くの捕虜を連れ去っていた。　カルタゴのキリスト教徒たちは、聖キプリアンの指導の下、少なくともその捕虜たちの一部を身代金で買い戻すために資金を寄付した。

このように、社会全体を襲った恐ろしい災難の最中、キプリアヌスは苦しむ人々の境遇をあらゆる手段で和らげるべく、あらゆる措置を講じた。

それにもかかわらず、異教徒の中には、この疫病も他の社会的な災難と同様に、キリスト教徒が異教の神々を崇拝しなかったことに対する報いとして、異教の神々によって送り込まれたのだと主張する者たちがいた。このような噂を特に広めたのは、カルタゴの裁判官の一人であるディミトリア

ヌスという人物であった。彼に続いて、他の異教徒たちもまた、キリスト教徒に対するこの誹謗中傷を繰り返した。

聖キプリアヌスは、この誤った考えを反駁するため、この件に関する特別な論考を執筆した。「世の災いは」――彼はディミトリアヌスおよび彼の考えに賛同するすべての人々に向けてこう記した――「人々の堕落にその原因がある。　これらの災いは、預言者たちによって、特に異教徒の間で蔓延している悪徳に対する罰として予言されており、それ自体が常に、民族や個人の幸福を破壊するものである。異教の神々は――キプリアヌスは論じた――自らを守ることはできず、キリスト教徒によって人々の中から追い出される時、キリスト教徒への依存を明らかに証明しているのだ[5855]；「私たちキリスト教徒は」と聖キプリアンは論じた、「外部からの災難にさらされることはあっても、それを不平を言わずに耐え、来世への希望を抱いているため、不幸に苦しむことはない」。

その一方で、聖キプリアンの受難の時が近づいていた。皇帝ヴァレリアヌスが即位し[5856]、キリスト教徒に対する残酷な迫害を開始した。

キリスト教徒に対する新たな迫害の知らせは、まもなくアフリカの教会にも届き、いつものように、臆病な者たちを恐れおののかせる一方で、信仰に堅固な者たちを勇敢な忍耐へと燃え立たせた。　「私たちにとって、絶え間ない勧告によって、私たちに託された民を悪魔の矢から守る準備をさせること以上に、より重要で、より優先すべき事柄があるでしょうか」――当時、聖キプリアンはトゥッカボル司教フォルトゥナトゥスにそう書き送った。　しかし、口頭や書面による勧告に加え、聖キプリアンは自らの行動をもって、異教徒の前で恐れを知らぬ信仰告白の模範を示した。

キリスト教徒に対する迫害が宣言された後、カルタゴの総督アスパシウス・パテルヌスは、キリスト教徒に偶像崇拝を強いるよう命じる皇帝の勅令を受け取った。これに伴い、キリスト教の司教たちは追放の対象となり、キリスト教の集会も禁止された。　プロコンスルは、何よりもまず聖キプリアヌスにキリスト教からの離反を強いることを意図しており、そのため真っ先に彼を尋問に呼び出した。

キプリアヌスが到着すると、プロコンスルは彼にこう尋ねた。

「皇帝は、すべてのキリスト教徒に偶像を崇拝するよう強制するよう私に命じた。これについて、あなたはどう答えるか？」

聖キプリアヌスはこう答えた。

「私はキリスト教徒であり、キリスト教の司教である。天と地、海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された唯一の真の神以外に、他の神々を知らない。私たちキリスト教徒は、昼も夜もこの神に仕えている。」

プロコンスルは言った：

「では、お前は自分の決意を貫くつもりか？」

キプリアヌスはこれに対し、こう答えた。

「主が御存知の正しい決意は、決して揺らぐことはありません。」プロコンスルは言った：

「それなら、皇帝の命令に従い、お前は流刑に処されることになる。」キプリアヌスはプロコンスルにこう答えた。

「喜んで流刑の地へ向かいます。」

その後、プロコンスルはさらにキプリアンに尋ねた。

「私は皇帝から、司教たちだけでなく、司祭たちについても命令を受けている。それゆえ、この街にはどのような司祭たちがいるのか、教えてほしい。」

これに対し、キプリアンは次のように答えた：

[5855] 言うまでもなく、人々に憑依していた悪霊の追放のことである。

[5856] ヴァレリアヌス帝は253年から259年まで在位した。

「貴国の法律では密告が禁じられているため、私はあなたに司祭たちの居場所を明かすことはできません。しかし、もしあなたが彼らを探そうとすれば、街中できっと見つかるでしょう。」

プロコンスルはさらにこう言った。

「私には、キリスト教徒がどこにも集会を開かず、どこでも礼拝を行わないよう監視する任務も課されている。」

聖キプリアンはプロコンスルにこう答えた。

「命じられた通りにせよ。」

その直後、聖キプリアンはクルービス[5857] への流刑に処された。聖キプリアンの生涯を記した助祭ポンティウスは、自ら進んで彼を流刑地まで付き添った。

ここに到着した初日の夜、聖キプリアンは、自身の殉教の死を予兆する幻視を見た。キプリアンはこの幻視について、助祭ポンティウスに次のように語った。

「ほんの少しうとうとした途端、ある若者の姿が見えた。その若者は醜く、風貌も良くなかったが、私を裁判のためのプレトリアへと案内した。私は、イゲモンの裁判に立ち会うことになっているのだと思った。イゲモンは私を一瞥したが、何も言わず、すぐに何かを書き記した。　彼が何を書いたのかは分からなかったが、イゲモンの後ろに立っている、顔立ちの整った別の若者が目に入った。その若者は、イゲモンが書く様子を見つめ、イゲモンが書いたものを心の中で読んでいた。　書き終えると、その若者は手振りで、そこに私に対する死刑判決が記されていることを示した。つまり、私は剣で斬り殺される運命にあったのだ。私もまた、手振りで、彼が説明してくれたことを理解したことを若者に伝えた。　その際、私は熱心に裁判官に、自分の用事をすべて片付けるために、あと一日だけ命を延ばしてほしいと懇願し始めた。その時、　私が裁判官にそう懇願していると、裁判官は私に何も答えず、まるで私の願いに応えるかのように、何かを書き始めた。　裁判官の後ろに立っていた若者が、裁判官が書いている内容を見守りながら、手振りで私に、私の命があと一日延ばされることを教えてくれた。私はこれに大いに喜んだが、同時に大きな恐怖と動揺に襲われていた」。

聖キプリアンはこの幻視を、キリストの御名を告白したために剣で斬り殺されることが神によって定められている、という意味で自分自身に当てはめて解釈した。　この幻視に従い、キプリアンは自分に与えられた「一日」の命を「一年」と解釈した。そして実際、彼はその幻視から一年後、キリストの御名を告白したために剣で斬り殺され、殉教の死を遂げたのである。

流刑の地において、聖キプリアンは常に神を想うことに時間を費やし、死に備えていた。監禁中、キプリアンは多くの神に導かれた著作を執筆した。　魂の救いに関する対話を求めて彼を訪れるすべての人々に、信仰に堅く立ち、迫害者たちの脅しやキリストの御名を告白することによる苦難を恐れないよう説き、また、キリスト教徒たちに対し、この世の一時的で儚い慰めに執着することなく、永遠の命を求めよと諭した。

流刑の地において、聖キプリアンはキリストの御名のためにあらゆる苦難を忍耐強く耐え忍び、その監禁生活を自らの祖国と見なした。　なぜなら、すべての希望を神に託したキリスト教徒にとって、祖国や実の家は「旅先」に他ならないからである。それは、「わたしはあなたの御前で旅人であり、寄留者である。わたしの先祖たちも皆そうであった」（詩編38:13）という言葉の通りである。　他方、そのようなキリスト教徒にとって、追放や放浪の地もまた故郷となる。なぜなら、彼はあらゆる場所で、自分のそばに神がおられるのを見るからである。「私は常に主を私の前に見ていた」（詩編15:8）という言葉の通りである。

さらに一年が過ぎ、前述のアスパジア・シュテルナに代わって、ガレリウス・マクシムスがプロコンスルに任命された。　この頃、皇帝ヴァレリアヌスは、キリスト教徒の迫害に関するさらに過酷な勅令を発した。すなわち、ヴァレリアヌスは、すべてのキリスト教の司教、長老、そしてキリス

[5857] クルビスはカルタゴから数日分の道のりに位置していた。

ト教の指導者全般に対し、その職位と財産を剥奪することを要求し、もしキリスト教を信仰し続けるならば、死刑に処すべきであると定めたのである。

皇帝の勅令がアフリカで知られるようになったのは、プロコンスル・ガレリウス・マクシムスがウティカという町へ出向いていた時であった。そこには各地から多くのキリスト教徒が流刑に処されていた。プロコンスルはそこで直ちにキリスト教徒への迫害を開始しようとし、兵士たちに聖キプリアヌスをその地へ連行するよう命じた。

常に完全な平静と不屈の精神をもって殉教の死を受け入れる準備ができていた聖キプリアヌスだったが、それでもなお、自らの信徒たちの間で殉教の偉業を成し遂げることがふさわしく、また有益であると考えていた。　このように考え、また、彼を追う警備隊が派遣されたことを知らせた友人たちの助言にも従い、キプリアヌスは一時的にある知られざる場所に身を隠したが、それはプロコンスルがカルタゴに戻るまでの間だけだった。　そして、この一時的な隠遁が非難の対象とならないよう、キプリアヌスは聖職者や民衆に向けて手紙を書き、隠遁の理由を説明した。その手紙の中で、キプリアヌスは聖職者や信徒たちに最後の訓示を与えた。

プロコンスル・ガレリウス・マクシムスがカルタゴに到着するやいなや、キプリアヌスは直ちに隠遁先から姿を現した。その直後、プロコンスルは二人の高潔な男を遣わし、キプリアヌスを連行するよう命じた。キプリアヌスは勇敢にも殉教の道を選び、前述の二人の男と共に戦車に乗ってプロコンスルの元へ向かった。　しかし、プロコンスルの命令により、神の聖人に対する裁判は翌日に延期されたため、キプリアヌスはその夜、プロコンスルから彼を連行するために派遣された男たちのうちのひとりの家に連れて行かれた。聖人はそこで最後の夜を過ごしたが、彼に対する同情と信頼から、ほとんど警備もつけられずに過ごした。

その間、キプリアン司教が拷問を受けるために監禁先から連れ戻されたという噂が街中に広まった。すると、キリスト教徒たちは、自分たちの牧者であり師であるキプリアンに最後の一目を見ようと、彼が滞在していた家へと一斉に駆けつけた。　その際、キリスト教徒たちは、聖キプリアンに対して、彼が司教に選出された時よりもさらに深い愛と献身を示した。彼らは最愛の大牧者との別れを、その最期が訪れるまで拒み、そのため一晩中、彼の家の門前で眠らずに過ごした。　キリスト教徒たちがこのように行動したのは、聖キプリアヌスを異教徒の手や支配から救い出そうとしたからではなく、彼を霊的な父として、最後の祝福を授かるためであった。

翌朝、キプリアンはその家から連れ出され、尋問のためにプロコンスルのもとに引き渡された。

プロコンスルはキプリアヌスに尋ねた。

「お前がキプリアンか？」

キプリアンは答えた。

「はい、私です。」

すると、プロコンスルは言った。

「お前こそ、自らをキリスト教徒と称するあの狂信者たちの先頭に、司教として立っている者か？」

キプリアヌスは答えた。

「はい、私はキリストの民の司教です。」

プロコンスルは尋問を続け、こう言った。

「敬虔にして栄光ある皇帝たちは、あなたに神々への生け贄を捧げるよう命じておられる。」

これに対し、キプリアヌスは答えた。

「いかなる場合でも、私はそれをしません。」

プロコンスルは言った。

「よく考えて、自分にとってより有益だと思う方を選びなさい。」

これに対し、神の聖人はこう答えた。

「お前は命じられた通りにせよ。私に関しては、これほど明白な事柄において、熟考の必要などない。」

その後、プロコンスルは尋問に立ち会っていた他の裁判官たちと協議し、キプリアヌスが偶像を崇拝しなかったことを非難した上で、彼を剣で斬首するという断固たる判決を下し、次のように述べた。

「キプリアン、キリスト教の司教は、剣で斬首されなければならない。」

しかし、キリストの聖人は、自分に対するそのような判決を聞くと、喜び、皆が聞こえるようにこう言った。

「主を賛美せよ！」

その一連の出来事を目撃していた民衆は、プロコンスルに向かって叫び始めた。

「我々も彼と共に死にたい！」

そして、民衆の間には大いなる騒動が巻き起こった。

その間、キプリアンは処刑場へと連行された。そこへ、死へと導かれる牧者を見て涙を流すキリスト者たちも、神の聖人の後を追って行った。

定められた場所に到着すると、神の聖人は上着を脱ぎ、ひざまずいて神に祈りを捧げ始めた。十分な時間祈りを捧げた後、キリストの聖殉教者は皆に平安と祝福を与え、友人たちに死刑執行人に二十五ズラトニツを与えるよう命じ、死の床にあっても善行を成し遂げた。そして、ハンカチで目を覆い、傍らに立っていた司祭と副助祭に両手を縛らせた。　その間、一部のキリスト教徒たちは、聖人の前に手ぬぐいや布を敷き、キリストの聖殉教者の血を、ある種の貴重な宝物として受け止めるためであった。ついに、神の聖人は頭を垂れ、剣によって首を刎ねられた。

こうして、神の聖人は、私たちの神であるキリストの栄光のために苦難を受け、その生涯を閉じた[5858]。

キリストの聖人の尊い御遺体は、夜、ろうそくの灯りとふさわしい賛美歌に導かれて、ある検事マクロヴィウス・カンディディアヌスの私有墓地へと移され、そこで埋葬された。　その後、カール大帝の治世下で、聖殉教者キプリアンの聖遺骨はフランスのアルルへ、そしてカール・ルースの治世下でコンピエーニュの聖コルネリウス修道院へと移された。

一方、不敬虔な迫害者たちは罰を免れることはなく、まもなく神の公正な裁きが彼らに下った。

聖キプリアヌスが殉教して数日後、神の裁きにより、プロコンスル・ガレリウス・マクシムスはこの世から召し取られた。一方、キリスト教徒を残酷に迫害していた皇帝ヴァレリウスは、ペルシアとの戦争で惨敗を喫し、敵に捕らえられて牢獄で命を落とした。

聖キプリアヌスは、教義上の真理と道徳上の真理の両方を明らかにした、非常に多くの著作を残した。　その大部分は書簡で構成されており（キプリアヌスが書いた書簡は計約80通）、さらにキプリアヌスは多くの独立した論説や著作も執筆した。　彼の著作の主題は、教会の牧者や処女たち、苦難に遭う者や堕落した者、異教徒やユダヤ人、異端者や分裂を招く者たちであった。　教会の牧者たちのために、キプリアヌスは「熱意と嫉妬に関する書」――真に使徒的な精神の結晶――を著し、教会の平和と益のためにどう振る舞うべきかについての指針を示した。処女たちのためには、「処女の振る舞いに関する書」を著した。　苦しむ人々への愛が、聖キプリアヌスに三つの傑作――『忍耐の高みについて』、『慈悲について』、『死について』――を執筆させる原動力となった。　『堕落

[5858] 聖キプリアヌスの死は258年に訪れた。

者について』には、悔い改めに関する教訓的な考察が盛り込まれている。異教徒の攻撃に対してキリスト教を擁護した聖キプリアヌスの弁明的著作には、『デメトリアヌスへの書』や『偶像の虚しさについて』が含まれる。　『ユダヤ人に対する三つの証言』は、キリスト教の信仰と活動に関する簡潔な概説と、頑なユダヤ人に対する非難を包含している。　異端や分裂を糾弾するために、キプリアヌスは『教会の統一に関する書』と『ドナトゥスへの洗礼に関する書』を著した。『フォルトゥナトゥスへの書：殉教への勧告』において、キプリアヌスは、迫害に耐える際、すべてのキリスト教徒に対し、精神の強さを保つよう呼びかけている。　聖キプリアヌスは、他にも多くの輝かしい著作を残した。至福のヒエロニムスの指摘によれば、キプリアヌスの著作は太陽そのものよりも有名であった。エフェソス公会議およびカルケドン公会議の教父たちは、[5859] 、異端者たちの攻撃からキリスト教の信仰を守り、彼らの誤った思想を糾弾するために、キプリアヌスの著作から証拠を引用した。

聖キプリアンの著作には、教会に関する教義がより詳細かつ綿密に述べられている。この問題に関する聖キプリアンの論考を簡潔にまとめると、以下の通りである。

教会とは、主イエス・キリストによって設立され、使徒たちによって組織され、確立された人々の共同体であり、その内的・外的な両面において、唯一の頭である我らの主イエス・キリストに率いられた、一つの統一体を成している。　教会の内的統一が信仰と愛の統一によってもたらされるのと同様に、その外的統一は、階層制（そしてその中で主に司教の権威）および教会の秘跡によってもたらされる。聖キプリアンの論じるところによれば、この唯一の真の救いの教会以外には、救いはなく、またあり得ない。　この唯一の教会こそが真に使徒的な教会であり、したがって、誤りのない教会である。「私たちは」と聖キプリアンは論じる。「使徒たちから受け継いだものに従っているが、使徒たちは私たちにただ一つの教会のみを伝えた。　ただ一つの教会のみが、いのちの恵みを受け、永遠に生き、神の民にいのちを与えるのである」[5860] 。まさにこの唯一の真の教会、すなわちいのちの恵みを受けた教会に、すべての神の恵みが集約されており、救いが可能なのはこの教会ただ一つである。　「教会が唯一であるということは」と聖キプリアンは論じている、「聖霊も『雅歌』の中で、イエス・キリストの御名において次のように告げている。『彼女は唯一、わが鳩、わが清き者。彼女は母のもとで唯一、生みの母に印を付けられた者である』（第6章8節）；　また、彼女についてこうも語っている。『閉ざされた園は、わが姉妹、花嫁。閉ざされた井戸、生ける水の井戸である』（4章12節および15節）。もし、教会であるキリストの花嫁が『閉ざされた園』であるならば、その閉ざされたものは、部外者や関係のない者に開くことはできない。　もし教会が「封印された泉」であるならば、外側にいてその泉にアクセスできない者は、そこから飲むことも、その泉によって封印されることもできない。もし教会が唯一の「生ける水」の泉であるならば、教会の外にいる者は、教会の中にいる者にのみ与えられているその水を飲み、用いることによって、聖別され、生かされることはできない。　主は、渇く者は誰でも、御自身から湧き出る「生ける水」の泉へ行って飲むようにと、大声で呼びかけておられます。では、渇く者はどこへ行くべきなのでしょうか。泉も、命を与える水の川も全く持たない異端者たちのところへ行くべきでしょうか。それとも、主の御言葉に従って、その鍵を受け継いだ唯一の教会へ行くべきでしょうか。　教会だけが、その花婿であり主である方のすべての権威を保持し、所有している。教会の真の、救いをもたらす聖なる水は、教会そのものが朽ちることなく、清く、貞潔であるため、腐ることも、汚されることもない」[5861] 。

キリストの教会には、命と救いのすべての充満が込められている。　大洪水の際、救いはノアの箱舟の中でのみ可能であったように、あるいはエリコの破壊の際、ラアブの家（ヨシュア記2章）でのみ可能であったように、同様に教会こそが人々の救いの唯一の場所である。「神の家はただ一つ

[5859] エフェソスでは第3回全地公会議が、ハルキドンでは第4回全地公会議が開かれた。
[5860] 書簡71および73。
[5861] 書簡73。

であり――聖キプリアンは論じている――、教会以外では誰も救われることはできない。「司教や司祭に従わずに、命と救いを相続できるなどとは、決して考えてはならない」[5862]。

教会の外にいて、その一致と交わりから離れている者たちは、真の命を持っていない。「明らかに――と聖キプリアンは指摘する――キリストの教会に属さない者たちは死者の中に数えられ、自ら生きていない者が他者を生き返らせることはできない」[5863]。

しかし、愛を伴わない信仰だけでは、教会のすべての構成員を結びつける強固で確固たる絆とはなり得ない。「何かを得るだけでは不十分である」と聖キプリアンは論じている。「それ以上に重要なのは、得たものを守り抜くことである。信仰そのものと救いをもたらす再生が命を与えるのは、私たちがそれらを得たからではなく、主に、私たちがそれらを守り抜いたからである」[5864]。愛と結びついた、誠実で生き生きとした、そして活動的な信仰のみが、人にキリストとの、またすべてのキリスト教兄弟団との生きた結びつきに入る権利を与える。どちらか一方が欠けているところには、キリストとの命もなく、したがって救いもない。

聖キプリアンの論じるところによれば、愛はすべての美徳の基盤をなすものである。「愛とは――聖キプリアンはこう論じている――兄弟愛の結びつきであり、平和の基盤であり、一致の要塞であり、その確固たる基盤である。……愛は善行や殉教に先立ち、天の御国において、神のもとで永遠に私たちと共にあり続けるであろう」[5865]。

聖キプリアンは、主なる神と私たちの救い主イエス・キリストの栄光のために、その著作の中で他にも多くの魂を救う真理を明らかにしている。アーメン。

コンスタンティノープル総主教聖ゲナディオスの記念日

記念日：8月31日

聖ゲナディオスは、皇帝レウス大帝の治世下[5866]、聖アナトリアス[5867]の後を継いでコンスタンティノープル総主教の座に就きました。彼の神に喜ばれる生涯については、『リモナール』と呼ばれる書物に記されており、この書物の中で、尊い父たちソフロニオスとヨハネスは次のように語っています。

「我々は」と彼らは言う、「サラマと呼ばれ、アレクサンドリアから九ポプリシュ離れたキノヴィア[5868]にやって来たが、そこでかつてコンスタンティノープル教会の長老であった二人の長老を見つけた。これらの長老たちは、コンスタンティノープルの総主教である至福のゲナディウスについて、彼が極めて柔和であり、肉体の清さを保ち、節制に優れていたと私たちに語った。また、ハリシマという名の、極めて多くの罪を犯していたある聖職者のせいで、多くの者が彼に大きな迷惑をかけたという話も聞かされた。この聖職者は聖殉教者エレウフェリオスの教会で奉仕していたが、彼は怠惰と無気力、そして罪深い不潔さの中で生活しているだけでなく、強盗を働き、魔術にも手を染めていると言われていた。総主教はこの聖職者を呼び出し、父のように柔和な心で諭し、改心させようとしたが、彼が改める気配を見せないのを見て、軽い懲罰を下すよう命じた。しかし、それで

[5862] 書簡62。
[5863] 書簡71。
[5864] 書簡6。
[5865] 『忍耐の美徳』第15章。
[5866] レウス大帝は457年から474年まで在位した。
[5867] アナトリオスは449年から458年まで総主教を務めた。
[5868] キノヴィア（ギリシャ語の「xoinos（共通の）」と「bios（生活）」に由来）とは、修道院の費用で修道士たちの生活が賄われ、その見返りとして修道士たちが修道院全体の利益のために労働を提供する共同生活を行う修道院のことを指す。

もなお彼が改心せず、懲罰も彼に効果を現さなかったため、総主教は自分の使用人の一人を、ハリシムがいた殉教者の教会へ遣わし、殉教者に懇願して、自らその教会の罪に溺れた聖職者を改心させるか、あるいは教会から追放するよう求めた。　遣わされた者は、教会に到着すると祭壇の前に立ち、殉教者の棺に向かって手を差し伸べ、こう言った。

「聖なる殉教者エレウフェリウスよ！　総主教ゲナディウスは、この罪深い私を通じて、あなたの教会で奉仕している聖職者ハリシムが多くの不法行為を犯し、人々を誘惑していると告げます。それゆえ、あなた自身で彼を改心させるか、あるいは教会から追放してください。」

その後、翌朝、ハリシムは死んでいるのが発見された。

このことから、至福のゲナディウスが神と聖人たちにどれほど喜ばれていたかがわかる。というのも、使者を通じて聖殉教者に伝えられた彼の言葉は、間もなく聞き入れられ、実際に実行されたからである。

この聖ゲナディオスの時代に、コンスタンティノープルに、古代ローマからやってきたストゥディオという名の元老院議員によって、主の先駆者である聖ヨハネを称える教会が建てられた。また、（元老院議員ストゥディオの名にちなんで）ストゥディオ修道院と呼ばれる修道院も設立され、この修道院には、不眠の修道会が設立された。

ゲナディオス総主教の時代、教会の会計係を務めていたのは、敬虔なマルキアノスであった。このマルキアヌスは、身に着けていた最後の衣服を脱ぎ、それを乞食に与えた。また、この尊者マルキアヌスがフェロニアの下に王のポルフィラを身に着けているのが目撃されたが、そのことは彼の伝記『[5869] 』に記されている。また、この同じ総主教の治世下で、聖柱者ダニエルも修行に励み、総主教によって司祭に叙階された。

聖ゲナディオス総主教の時代、コンスタンティノープルで次のような奇跡が起こった。

あるイコン画家が、異教の神ゼウスに似せて救い主キリストの像を描くという不敬な行為に及んだ[5870] 。すると直ちに、そのイコン画家には神の懲罰が下り、主をそのような姿で描こうとしたその手は、枯れてしまった。　彼は、これほど迅速な神の報復を身に受けたことを悟ると、急いで聖なるゲナディウス総主教のもとへ駆けつけ、皆の前で泣きながら自分の罪を告白し、悔い改めた。聖なる総主教は主のために彼のために祈り、その手を癒やしたため、手は以前と同じように健康な状態に戻った。

聖ゲナディウス総主教は、（志願者が）詩篇全巻を暗唱できるようになるまでは、彼を司祭に叙任しないという慣例を持っていた。というのも、この偉大な神の司教は、教会の儀式が厳格に守られることを熱心に心掛けていたからである。　彼は、すべての司祭や聖職者が聖書の解釈を学び、神の御言葉を正しく理解できるようになって初めて、この儀式が綿密に執り行われることができると認識していた。なぜなら、聖書の知識を持たない長老は、他者を教えることもできず、自ら救いの道を知らなければ、他者を正し、救いの道へと導くこともできないからである。　このような状況において、キリストの御言葉が実現する。「盲人が盲人を導くことができるだろうか。二人とも穴に落ちはしないだろうか」（ルカ6:39）。

聖ゲナディオスは、エウティキオスの異端を根絶するため、また教会の秩序を正すため、コンスタンティノープルで地方公会議を招集した。この公会議において、司教たちの間で蔓延していたシモニア（職権売買）が禁止された。

聖ゲナディオスは、彼に託された神の民を13年間守り抜いた。彼は、同じく「大」と称されるレオの治世中に、主のもとへ召された[5871] 。

[5869] 聖教会では、1月10日に彼の記念日が祝われる。

[5870] ゼウスは、古代ギリシャ人にとって至高の神であり、他の神々（および人間）の祖とみなされていた。

[5871]　聖ゲナディオスは458年から471年まで総主教を務めた。聖ゲナディオスには、いくつかの神学著作が帰せられている。ゲナディオス・メッサリウスは、聖ゲナディオスについて次のように述べている。　「雄弁で鋭い知性を持ち、古代の

逝去の日が近づく頃、聖ゲナディウスが夜、教会で祈りを捧げていたところ、ある恐ろしい悪魔が現れた。聖ゲナディウスは聖十字架の印をもってこの恐ろしい存在を追い払った。悪魔は十字架の印を恐れ、逃げ去りながらこう言った。　「私はここから完全に立ち去り、あなたが生きている限り、ここで誰にも害を及ぼすことはない。しかし、あなたの死後、再び戻ってきて、あらゆる手段を用いて教会を混乱させ、多くの人々を破滅へと導くであろう」。

聖ゲナディウスは、死のその日まで絶え間なく涙を流し、主が御自身の教会を、地獄の門に打ち負かされることのないよう守ってくださるよう祈り続けた。　そして、生前に聖なる教会のために主のもとで熱心に執り成しをしたのと同様に、死後も他の聖なる主教たちと共に、教会の頭であるキリスト、私たちの主のもとで立ち、父と聖霊と共に永遠の栄光が帰される御方に、教会のために絶え間ない祈りを捧げている。

至聖なる神の母の尊い帯の安置。

記念日：8月31日

至聖なる神の母の尊い帯は、コンスタンティノープルに運ばれた後、敬虔なテオドシウス2世によって建てられた教会において、皇帝の印章の下にある金の聖櫃に納められました。　この教会は、「ハルコプラティア」（「銅の市場」を意味する）と呼ばれていた場所に、至聖なる神の母の名を冠して建立された。

それから何年も経った後、レオ・ザ・ワイズの治世において、彼の妻ゾエが邪悪な霊に苦しめられるという出来事が起こり、このため皇帝とその親族たちは深く悲しんだ。そして皆、苦しむ皇后のために、主に向かって熱心な祈りを捧げ始めた。

その後、ゾエ王妃は神からの啓示を受け、聖母マリアの帯を身にまとえば癒やされるというしるしを与えられた。

皇后はこの幻視を夫であるレフ王に語った。王は直ちに総主教に、至聖なる聖母マリアの帯を開けるよう懇願した。封印が解かれ、聖櫃が開かれると、そこには至聖なる聖母マリアの尊い帯が、時の経過による損傷を微塵も受けず、完全な状態で現れていた。皆は畏敬の念を抱きながら、その帯に口づけをした。　そして、総主教がそれを女王の上に広げた途端、彼女は悪魔による苦しみから解放され、その病から完全に癒やされた。

そこで、皆は喜びをもってキリスト神とその至聖なる母を賛美し、感謝の賛美歌を歌った後、その尊い帯を再び同じ金の聖櫃に納め、王の封印で封印し、至福の聖母マリアを称える祝祭を制定した。　その尊い帯によってもたらされた奇跡を記念し、恵みと慈悲と人間愛によって彼女から生まれたキリスト、私たちの神に捧げる祝祭日を制定した。

トロパリオ、第8調：

聖母マリアよ、永遠の処女、人々の守りよ、あなたの至聖なる御体の衣と帯は、あなたの都に威厳ある栄光を授けました。あなたは無原罪の御生により朽ちることなくおられ、あなたによって、自然も時間も新たにされるのです。　それゆえ、私たちはあなたに祈ります。あなたの都に平和を授け、私たちの魂に偉大な憐れみを授けてください。

書物による研鑽を深く積んでいたため、預言者ダニエルの言葉を一語一語まで解説し、多くの対話集を著した」。これらの著作は現在すべて失われており、459年の公会議で承認された、シモニア（聖職売買）に反対する彼の回勅のみが後世に伝わっている。

コンダク、第2調：

神に喜ばれる御胎よ、神の母よ、御身を包む尊き帯よ、御都の権威は揺るぎなく、善きものの宝庫は尽きることなく、唯一の御子をお生みになった永遠の処女よ。

もう一つのコンダク、第4声：

今日、あなたの聖なる帯の奉献を祝う、讃えられしあなたの聖堂は、熱心にあなたに呼びかけます。「喜びなさい、おとめよ、キリスト教徒の誉れよ。」

9月14日

9月1日（旧暦）

インディクト（新年の初日）における説教

9月1日の記念日
9月1日

世々の王、私たちの主なる神は、*「時と季節を御自身の権威の下に定められた」*（使徒行伝1:7）[5872]。神ご自身が、御自身の栄光を現し、人々が世俗の務めから休息を得るために、これらの時期に様々な祝日を定められた。　旧約聖書の時代から、主は毎年、第七の月の到来を特に祝うよう命じられました。それは、人々が世俗の喧騒から解放され、この日に唯一の神に仕えるためです。　なぜなら、モーセの書には次のように記されているからである。*「主はモーセに告げて言われた。『イスラエルの子らに告げよ。第七の月の初日には、あなたがたは安息日とし、その日、あなたがたのすべての住まいで、いかなる仕事もしてはならない。そして、主に犠牲をささげよ』」*（レビ記23:24–31）。[5873]　かつて、御言葉によって六日間で世界を創造された創造主ご自身が、創造の業から休まれて第七の日を祝福し、聖別されたように（創世記2:2–3；出エジプト記20:11；ヘブライ人への手紙4:4）、その後、人間に対しても次のような戒めを与えられた。　*「六日間は働き、七日目は安息日として、あなたの神、主のために、いかなる仕事もしてはならない」*（出エジプト記20:9–10）[5874]、それと同様に、主は第七の月を祝福し、聖別し、人々にこの時期に世俗の務めから休息するよう命じられた。　これについて、主はモーセに再び命じ、*「『第七の月、あなたがたが地の産物を収穫するとき、主の祭りを祝え』」*（レビ記23:39）[5875] *と語られました。*

では、なぜこの祝祭が定められたのでしょうか。

[5872] ダニエル書2:21を参照。――「時代」とは長期的な期間を指し、「年」とは短期間を指す。

[5873] 全焼のいけにえ――特定の種類のいけにえに対する聖書的な呼称。他のいけにえでは一部のみが焼かれ、残りは聖職者や供え主自身のものとなったのに対し、全焼のいけにえとして捧げられるものは、そのすべてが焼かれた。　全焼のいけにえは、それを捧げる者が自分自身、すなわち魂と肉体のすべてを神に捧げることを意味し、キリストの犠牲の予型であった（参照：ヘブライ人への手紙9:9–14）。

[5874] レビ記23:3；申命記5:13。

[5875] 秋は、古来より新年の始まりとされていた。その根拠は自然そのものにも見出すことができる。夏の終わりとともに、通常、収穫と一年間の労働が終わる（出エジプト記23:16）。 実りの収穫は、自然と農耕の目的が達成されたことを示し、新たな活動の循環と、将来の豊穣への新たな希望が訪れる。

まさにこの月、大洪水の水が引き始めた時、ノアの箱舟はアララト山脈に停泊したのです[5876]。

この月、聖なる預言者モーセは、神の栄光に照らされた顔で山から降りてきて、主ご自身が与えられた律法が刻まれた新しい石板を持ち帰りました[5877]（出エジプト記34:29）。

この月、イスラエルの民の宿営の真ん中で、主の幕屋の建設が始まった（出エジプト記35:1–35）[5878]。

またこの月、大祭司は一年に一度だけ、至聖所に入りました。*「自分自身と、民の無知による罪のために捧げる血を携えて」*[5879]。

この月、神の民は断食によって自らの魂を謙虚にし、主に全焼のいけにえを捧げることで、その一年間に犯した罪からの清めを受けた[5880]。

この月、ソロモン王によって建てられた壮麗な主の神殿の荘厳な奉献式が執り行われ、契約の箱がこの神殿に運び込まれた（列王記下8:1–66）。

この月、イスラエルの民のすべての部族は、主の戒め「*これはあなたがたにとって安息の日である。あなたがたの心を静めなさい*」（レビ記23:32）に従い、各地からエルサレムに集まって祭りを祝った。[5881]

この月から、50年ごとに特別な年として数え始められた。イスラエルの民が約束の地に入った際、主は人々に50年ごとの年を特に祝うよう命じられた。そして、人々だけでなく、しもべや家畜もこの祝いに加わるよう定められた。　さらに、イスラエル人が定住した土地そのものについても、休ませ、耕さず、種を蒔かず、麦の穂も、ぶどうの実も、果樹の実も収穫してはならないと命じられました。これらすべては、貧しい人々や、獣や鳥たちの糧として与えられることになっていたのです。これについて、モーセの書には次のように記されている。「*あなたがたの全土でラッパを吹き鳴らし、五十年目を聖別し、その地のすべての住民に自由を宣言せよ。　その地に自生するものを蒔いたり*

5876　大洪水以前の世界の最後の族長であるノアと、世界的な大洪水については、次のように語られている（創世記5:29–32, 6–9）。聖使徒ペトロは、ノアの箱舟による大洪水からの人々の救いにおいて、キリストへの洗礼を通じた私たちの救いへの指し示しを見出させている。（Iペトロ3:19–22）。――アララト――ロシア、トルコ、ペルシャの国境にそびえるアルメニアの最高峰で、二つの峰がある。ペルシャ人からは「ノアの山」と呼ばれる大アララトと、小アララトである。

5877 十戒の石板――神ご自身が十戒を刻まれた石の板。

5878 幕屋（天幕、テント）――これはユダヤ教の移動式聖所である。これは、シナイ山で神がモーセに示した模様に基づいて建造された（出エジプト記25:8–9,　40）もので、「集会の幕屋」と呼ばれたのは、民が礼拝のためにここに集まったからであり、「啓示の幕屋」あるいは「証しの幕屋」と呼ばれたのは、ここで神が人々に御自身と御心を明らかにされたからである。

5879　至聖所は、幕屋の三番目、最も内側の部分である。ここには契約の箱が置かれており、その中には十戒の石板、マナが入った金の器（スタマ）、そしてアロンの杖が収められていた。　ここに入ることができたのは大祭司だけであり、年に一度行われる清めの日に、犠牲の動物の血を持って入り、民の罪を清めるためにその血を契約の箱の上に振りかけた（レビ記16:29–34参照）。　この聖なる儀式の意義と重要性は、使徒パウロによって『ヘブライ人への手紙』（ヘブライ人への手紙9:3–7, 8–15, 24–28, 10:1–39）で明らかにされている。

5880 これは「清めの日」あるいは「贖罪の日」と呼ばれる10日目に執り行われた。この日、大祭司は幕屋の前に二頭の雄山羊を置き、くじ引きで選ばれた一頭を屠り、民全体の罪のためのいけにえとして捧げ、もう一頭の上で民の罪を告白し、それを荒野へ追放するよう命じた（レビ記23:26–32。ヘブライ人への手紙11:11–14参照）。

5881　ユダヤ人の一年は12の太陰月から成っていた。アビブ月またはニサン月（ネヘミヤ記2:1、エステル記3:7）は、私たちの3月に相当し、聖年の始まりであった（出エジプト記12:2、13:4）であり、7番目の月であるティシュリ月（現代の9月に相当）は、暦年の最初の月とみなされていた。この月は全月が祝祭日であった。1日目、すなわち新年の始まりは「ラッパの祭り」と呼ばれた（出エジプト記23:24）；　10日目は清めの日、15日目は「仮庵の祭り」であり、ユダヤ人が荒野を放浪し、天幕やテントで暮らしていた際に神が彼らを守ってくださったことを記念して定められたものでした（レビ記23:33–34；　民数記29:12–39）。また、この月には、7年ごと、すなわち安息年、および50年ごと、すなわちヨベルの年の祝いが始まっていた（レビ記25:9）。そのため、第7の月は「安息の安息」、すなわち「祝いの祝日」とも呼ばれている。

刈り取ったりしてはならない。また、その未剪定のぶどうの木から実を摘んではならない。そうすれば、あなたの民のうちの貧しい者たちがそれを食べ、彼らの後に残ったものは野の獣が食べる。あなたのぶどう畑やオリーブ畑についても、同様にせよ」（レビ記25:9–11；　出エジプト記23:11）。この五十年目の年には、債務者の借金は免除され、奴隷は自由の身となり、一人ひとりは、いかなる罪によっても主を怒らせたり、隣人を悲しませたりしないよう、特に自戒した。それは、すべての罪が赦され、清められる年であった。　この50年の周期は、主の御命令により、7つの7年周期（すなわち、7年×7回）に分けられ、7年ごとに訪れる年は「安息年」または「休息の年」と呼ばれた。　これについて、主はモーセを通して次のような命令を下された。*「六年間はあなたの畑に種を蒔き、六年間はあなたのぶどう畑を剪定し、その実りを収穫せよ。七年目には、地の安息年、すなわち主の安息年とせよ。その年には、あなたの畑に種を蒔いてはならず、ぶどう畑を剪定してはならない。　もしあなたがたが、『第七年には、種を蒔かず、収穫も得られないのに、何を食べればよいのか』と言うなら、わたしは第六年にわたしの祝福をあなたがたに与え、その年は三年間分の収穫をもたらすであろう」*（レビ記25:3–4, 20–21）。主が人と地のために祝祭的な安息を定めたこれらの年はすべて、主の命じられたとおり、9月から始まっていた。　*「ラッパを吹き鳴らしなさい」*と主は言われた。*「第七の月に安息の年を告げなさい」*（レビ記25:9）、すなわち9月に[5882]。というのも、世界の創造以来の最初の月である3月から数えて、9月は第七の月だからである。

しかし、年が9月1日から始まるのは、旧約聖書の律法だけでなく、異教のインディクティオンによっても定められていた。このインディクティオンについては、次のように伝えられている。

ローマ皇帝アウグストゥス[5883]　が、エジプトを支配していたアントニウスとクレオパトラ[5884]に勝利し、全宇宙の唯一の支配者となった際、各国からの税収をより円滑に徴収するため、15年周期のインディクティオンを制定した[5885]。　アウグストゥスはこのインディクティオンを、それぞれ5年ずつ3つの期間に分け、インディクティオン期間全体を通じて、5年ごとに3回 税が徴収されるようにした。　このような法律が制定されたのは、主に国家の辺境地域を対象としたものであった。これらの地域からは毎年税を徴収することが困難であったためである。というのも、徴収された税は5年経ってもようやく首都ローマに届く程度だったからである。 5年ごとの周期は「リュストルム」、すなわち「明るい」と呼ばれた。これは、「カエサルのものはカエサルに」（ルカ20:25）という教えに従い、人々がこの時期に祝宴を楽しみ、ろうそくを灯したからである。税は少額で負担が軽く、自発的に納められていたため、民衆は税を重荷とは感じなかった。　一方、インディクティオンは次の理由により15年間続いた。 最初の5年間は、剣、槍、兜、盾、鎧、およびあらゆる軍事兵器の製造に用いられる鉄と銅を貢ぎ物として納めた。2番目の5年間は、軍隊の給与に充てる銀を徴収した。そして3番目の5年間は、偶像の装飾用に金をローマへ貢ぎ物として納めた。　15年周期のインディクティオ

[5882] ラテン語で「9月」は「7番目」を意味する。

[5883] ローマのカエサル、すなわち皇帝（紀元14年没）であったオクタヴィアヌスは、ローマ帝国全土の唯一の支配者となった際、元老院から「アウグストゥス」の称号を授けられた。この言葉は「威厳」「偉大」「尊厳」「神聖」を意味する。この称号はその後、他のローマ皇帝たちにも引き継がれた。

[5884] 紀元前42年から31年にかけて、ローマ世界はオクタヴィウス、アントニウス、レピドゥスの3人の軍司令官――いわゆる「三頭政治」――によって統治されていた。彼らは最高権力とローマの属州を三者間で分割し、オクタヴィウスは西部、アントニウスは東部、レピドゥスはアフリカを管轄することになった。　しかし、レピドゥスはまもなく政務から排除され、その後、オクタヴィウスとアントニウスとの間で権力争いが勃発した。アントニウスは、その並外れた美しさで彼を魅了したエジプトの女王クレオパトラに完全に従属しており、祝宴や享楽に明け暮れていた。　これに乗じたオクタヴィウスは、アントニウスとクレオパトラに宣戦布告した。アクティウムの海戦（紀元前31年）において、クレオパトラは敗走し、自殺してその生涯を閉じた。世界の覇権を失ったアントニウスもまた、同様に自殺した。　エジプトはローマの属州となり、オクタヴィアヌスは独裁者となった。

[5885] インディクティオン、あるいはインディクトとは、ローマ語で「宣言」「指定」「税」を意味する言葉である。インディクトとは9月の1日を指し、この名称は現在に至るまで我々の教会法典に残っており、教会暦の始まりを示すために用いられている。キリスト教のインディクトもまた15年で構成されている。

ンのサイクルが終わると、再びそれを開始し、インディクティオンの初年度を新年と呼んだ。この慣習は9月1日から定められた。というのも、まさにこの日にアントニウスに対する勝利が収められ、アウグストゥスの単独統治が宣言されたからである。　聖なる教会もまた、9月1日をインディクティオンの始まりとして祝う慣習を受け入れた。これは、ユダヤおよび全世界で新年が祝われていた時期に、我らの主イエス・キリストがナザレ[5886]にやって来て、そこで育てられたという理由によるものである。　それは安息日であり、この日、ユダヤ人たちはシナゴーグに集まり、預言書の朗読に時間を費やすのが慣例となっていた。主も*「いつものように」*、シナゴーグに入られ[5887]、教師たちの真ん中に立たれた。人々は預言者イザヤの書を手渡した[5888]；主はその書物を開いて、次のように書かれている箇所を見つけられた。「主の御霊が私の上に臨んでいる。主は、貧しい人々に福音を宣べ伝えるために、私に油を注がれた。主は、心を砕かれた人々を癒やし、捕らわれの身にある者に解放を、囚人たちに牢獄の扉が開かれることを告げ知らせ、主の恵みの年を宣べ伝えるために、私を遣わされた」（イザヤ61:1–2）[5889]。そして、書物を閉じて奉仕者に返すと、イエスは、読み上げられた預言が御自身に成就したこと、御自身が、人々の救いのために父なる神から遣わされた真のメシア[5890]であり、彼らのいのちを新たにする者であることを語り始められた。*「そして、皆はこれを証しし、その口から出る恵みの言葉に驚嘆した」*（ルカ4:16–22）。

[5886] 小さな町ナザレは、ガリラヤと呼ばれていたパレスチナの北部に位置していた。その住民は貧しく、他のユダヤ人からは軽んじられていた（ヨハネ1:46）。しかし、ここは聖母マリアの婚約者ヨセフの故郷であり、聖母マリアへの受胎告知が行われた場所でもあった。　ここでイエス・キリストの幼少期と青年期が過ごされ、ここで彼は育てられ、公の宣教の初めもここで過ごされたため、「ナザレ人」と呼ばれたのである。この時から、それまで無名だったナザレは、ガリラヤ全土で最も有名な場所となった。　しかし、1263年にトルコ人によって完全に廃墟と化してしまった。数世紀を経て再建されたが、長い間最も貧しい村であった。現在、ナザレの人口は約6,000人で、キリスト教領事たちの特別な保護下にあり、キリスト教世界のあらゆる地域からの巡礼地となっている。

[5887] シナゴーグ（「集会」を意味し、スラブ語では「ソンミシェ」）とは、ユダヤ人の宗教的集会の場である。律法によれば、礼拝は幕屋、そして後にエルサレム神殿で行われることになっていた。しかし、ユダヤ人が捕囚に遭った際、エルサレム神殿は破壊され、ユダヤ人たちは礼拝のために民家へと集まるようになった。こうした私的な集まりは、次第に決まった場所や時間、定まった儀式や順序を持つようになり、こうしてシナゴーグの起源となった。　イエス・キリストや使徒たちの時代には、ユダヤ人が住むところならどこにでもシナゴーグが広まっており、大都市には数カ所のシナゴーグがあった。シナゴーグでの集会は、安息日や祭日に行われた。

[5888] シナゴーグでの集会では、通常、律法、すなわちモーセの書、および預言者、すなわち旧約聖書の預言書の特定の部分が朗読され、その朗読内容について解説、すなわち、読み上げられた内容や聞いたことについて説教が行われた。　読経と解説を行う権利は、シナゴーグの長（アルキシナゴーグ）と長老たちの許可を得て、希望する者なら誰でも持っていた。読経を希望する者は、その意思を表明する際に立ち上がり、聖書の一節を読み上げる間は立ったままだった。　主が、ご自身が朗読し、教えを語りたいという合図をされたとき、律法の朗読は、どうやらすでに終わっており、次は預言書の朗読が行われるところだった。

[5889] 預言者は、メシアに代わって、主がこの世に来られた目的――すなわち、人類の生活に新たな時代、すなわち、信仰をもってイエス・キリストの教えを受け入れ、その教えの偉大な戒めを生活の中で実践する者たちにとっての至福の時代を築くこと――を描き出している。–「主の年は喜ばしい」――これはユダヤ人において「ヨベルの年」、すなわち五十年目（上記参照）を指す呼称であり、万人の解放が宣言されることから最も喜びに満ちた年とされ、預言者はこれを、贖われた人類にとって幸福なキリストの御国の時代を表すために用いた。

[5890] 「メシア」はヘブライ語であり、ギリシャ語の「キリスト」と同じ意味、すなわち「油注がれた者」を意味し、聖なる油による塗油に由来する。この塗油を通じて、神によって選ばれ、あるいは特定の奉仕へと召された者たちに、聖霊の賜物が与えられた。　「油注がれた者」とは、王、預言者、大祭司のことを指した。しかし、とりわけこの呼称はイエス・キリストに属する。なぜなら、聖霊のすべての賜物が彼に注がれているからである（イザヤ11:1–2）。主には、悪とは無縁であり、永遠の祭司職を持つ大祭司の聖さ（ヘブライ人への手紙7:10参照）と、至高の天の教えによって世界を照らした預言者の知恵（ルカによる福音書1:79、2:32；マタイによる福音書4:16；　ヨハネ1:4–10、8:12、9:5、12:35–36、46）を啓示した預言者の知恵、そして天と地のすべての力を持ち、すべてを人類の救いという偉大な目的へと導く王の権威と力（マタイ28:18、ルカ1:33、Iコリント15:25–26）。

新年の祝日は、第1回全地公会議（ニカイア公会議）[5891] において、聖なる教父たちによって定められた。 それはまさに、コンスタンティヌス大帝がマクセンティウスを打ち破り[5892] 、敬虔の光で全世界を照らし、偶像崇拝の祭りを根絶し、キリストの信仰を過酷な迫害から解放し、自らのインディクティオンを制定した時期のことでした。 当時、聖なる教父たちは、キリストがこの日にユダヤ人のシナゴーグを訪れ、「主の喜びの夏」について説教されたことを記念し、キリスト教の自由の始まりとして新年の祝いを定めた。それ以来、私たちも9月の初日を祝っている。しかし、これはもはや旧約の祝日ではなく、新しい恵みの祝日である[5893] 。 なぜなら、この日、天から降臨し、御父の御霊をその内に宿す律法の制定者ご自身が、御自身を世に現し、神の律法を、指ではなく、御自身の神聖な舌と甘美な口によって、また石の板ではなく、*「肉の板」*（IIコリント3:3）*に*書き記されたからである[5894] 。 旧約聖書の幕屋が単なる予型に過ぎなかった御自身の教会を築き上げ[5895] 、主は私たちの罪のために、血を伴う犠牲、すなわち御自身そのものを父なる神に捧げられました。 天を通り抜けた（ヘブライ人への手紙 4:14）大祭司ご自身が、私たちのために流された御血によって私たちを罪から清め、使徒の言葉にあるように、*「神の宮は聖なるものであり、その宮とは、すなわちあなたがたである」*（コリントの信徒への手紙第一 3:17）[5896] として、私たちを聖なる宮とされました。

[5891] 第1回全地公会議は、326年に聖コンスタンティヌス大帝（記念日は5月21日）によって、イエス・キリストは神ではないという異端の教義を説いた長老アリウスとその共謀者たちに対抗して招集された。 318人の司教から成る公会議は、アリウス派の異端を非難し、御子と父なる神との同一本質に関する教義を確立し、現在も正教会で使用されている「信仰告白」の最初の7条を定めた。 – ニカイアは小アジアにある都市で、古代には豊かで繁栄していたが、現在は貧しく人口も少ない。1330年に（二度目の）征服を果たしたトルコ人は、優れた建造物を破壊し、教会をモスクへと改築した。

[5892] マクセンティウス――ローマ皇帝（306～312年）。彼はキリスト教徒を迫害し、その残虐さで知られていた。忍耐の限界に達したローマ市民はコンスタンティヌスを援軍として招き入れ、コンスタンティヌスは救いの象徴である十字架の下でマクセンティウスの軍勢に勝利を収め、マクセンティウスはテヴェレ川の波間に身を投じて命を落とした。 313年、コンスタンティヌス帝とリキニウス帝（東部を統治）は勅令を発し、キリスト教を古代の異教と同等に国教と宣言した。しかし、リキニウスはまもなくキリスト教徒への迫害を始めた。そこでコンスタンティヌスはリキニウスに対して武力を行使し、323年9月に彼を完全に打ち破って、ローマ帝国の唯一の支配者となった。この出来事が、9月に新年の祝いを定めた直接のきっかけとなったのである。

[5893] 「恵み」という言葉は聖書に頻繁に登場し、様々な意味（好意、憐れみ、愛）で用いられるが、特に、イエス・キリストの功績によって私たちに与えられ、私たちを霊的な命へと再生させ、私たちの聖化と救いを成し遂げる、神の救いの力を意味する。 それが「恵み」と呼ばれるのは、天の父からの良き賜物だからである（エフェソ2:8参照）。――旧約の律法と恵みとの対比は、聖使徒パウロによって『ローマ人への手紙』、『ガラテヤ人への手紙』、『ヘブライ人への手紙』で明らかにされている。 主な相違点：モーセの律法は、その全容において完全に遵守することが困難な戒めを課し、違反者を呪いによって罰したが、一方で、律法的な義に達するための十分な力を与えてはいなかった（ガラテヤ3:10）；キリストの恵みは、人から律法による呪いを取り除き、神の前で義と認め、神と和解させてくれる（ガラテヤ3:13；ローマ 5:9–10）、罪を赦し清め、新約の律法を、それが「良い軛」であり「軽い荷」であるかのように感じられるように、それを守る力を与えてくださる（Iヨハネ 1:9、マタイ 11:30）。

[5894] 参照：エゼキエル書 11章およびヘブライ人への手紙 8:10。

[5895] モスクワ都主教フィラレートによる解説によれば、幕屋は、人類全体において、また特に各信者の魂の中に徐々に築き上げられていく教会を象徴していた。 すべての民に開かれた庭は、外なる教会と、それへの普遍的な招きを意味し、祭壇と水盤は、教会に入り、教会との結びつきを刻印する、キリスト教の「血と水」の秘跡を予表していた。 祭司たちにのみ許された聖所は、内なる教会を表しており、そこではキリストこそが真の光であり、命のパンであり、また、信者たちが捧げる祈りと感謝を神へと捧げる祭壇そのものであった。 ただ一人の大祭司のみが立ち入ることが許された至聖所は、神人メシアの御座そのものと支配を意味していた。メシアは、ここで律法の石板や、アロンの杖に生じたマナによって予表され、私たちにとって贖い、義認、清め、そして聖化となってくださる方である。 私たちの魂の三つの部分に関して、幕屋は、私たちが神に近づく三つの段階、すなわち、外的な清め、内的な啓発、そしてキリストとの神秘的な結合を象徴していた。

[5896] 参照：Iコリント6:19。 使徒は、クリスチャンが聖三位一体全体と霊的かつ神秘的な一致にあると語っています。なぜなら、すべての被造物の主である神である父は、御独り子をお遣わしになり、その尊い御血によって罪深い人々を悪魔の奴隷状態から贖い出させ、 また、聖霊は家の建設者として、迷い出た僕たちを神の家へと導き、彼らをキリストと結び

これらすべてに対して主に感謝を捧げつつ、私たちは主の祭りを喜びをもって祝います。私たちは主から数えきれないほどの計り知れない恵みを受けたのですから、私たち自身も主の御心に適う者となるよう急ぎましょう。なぜなら、私たちが祝っているのは、ローマの王たちによって定められたものではなく、栄光の天の王――キリスト――によって定められたインディクティオンだからです。 キリストの 、すなわちインディクティオンとは、私たちが守り、実行すべきキリストの聖なる戒めのことである。私たちの王であるキリストは、私たちに銅も鉄も銀も金も求めない。かつてダビデが*「主よ、あなたは私の主。私の富はあなたには必要ありません」*（詩編15:2）[5897] と語ったように。 しかし、鉄や銅の代わりに、主は私たちに、堅固で揺るぎない美徳、すなわち神への正統な信仰を求めておられます。なぜなら、私たちの信仰は、鉄や銅の武器によって引き裂かれた聖なる殉教者たちの血に基づいているからです。彼ら一人ひとりについて、*「その魂は鉄の中に入った」*（詩篇104:18）と言えるのです。 天の王であり、私たちの神は、私たちが正しい心と敬虔さをもって御自身を信じるよう命じられました。*「心で信じて義と認められるからである」*（ローマ10:10）[5898] 。私たちもまた、この信仰を鉄の武器や銅の盾として用いて、敵に打ち勝とうではありませんか。 「*信仰によって王国を打ち破り、義を行い、約束を受け、獅子の口を封じ、火の勢いを消し、剣の刃を避け、弱さから強められ、戦いに強く、異邦人の軍勢を追い払った*」
（ヘブライ人への手紙11:33–34）[5899] 。

銀の代わりに、私たちの王であるキリストは、私たちに第二の美徳、すなわち神への揺るぎない希望を求めておられます。この美徳は、銀以上に、人に幸福な人生をもたらします。もし、多くの銀で富を築いた者が、この世のあらゆる恵みを得られると確信し、富を頼りに陽気に日々を過ごしているのなら、 それならばなおさら、神への揺るぎない希望に富み、神のみにすべての期待を託した者は、望むものすべてを得て、喜びのうちに生き、この世や肉、悪魔から生じるあらゆる災いや苦難をものともせず、来世の報いのためにこれらすべてを喜んで耐え忍ぶことになる。 銀はしばしばその持ち主を裏切り、不意に消え去って、持ち主を貧困に陥れる。そして、生涯を通じてあらゆる豊かさを享受できると期待していた者は、突然、日々の糧を失ってしまう。――しかし、主を信頼する者は、*「シオンの山のように、決して揺らぐことがない」* （詩篇124:1）[5900] *「恥じることはない。神の愛が注がれたからである」*（ローマ5:5）。主が私たちに求めておられるのは、まさにこの目に見えない「銀」であり、主は私たちに、はかない富に希望を置くのではなく、*「生ける神」*に希望を置くよう命じておられる（テモテへの手紙I 6:17）、*「主の言葉は清く、精錬された銀のようだ」*（詩篇11:7）[5901] 。主は、御自身の御国における言葉に尽くせない永遠の祝福を、私たちに偽りなく約束してくださいました。それは、私たちが心で信じた主の豊かな恵みを、口でも告白し、*「口で告白し*

つけ、聖なる秘跡を通して与えられる恵みの賜物によって、一人ひとりの魂を、魂と体のすべての力を尽くして神に仕えるための霊的な住まいとして造り上げてくださる。

[5897] すなわち、主よ、あなたは何ものにも欠けることはありません。もし誰かが善行を為すなら、その者自身がそこから益を得るだけであり、あなたには何の得もありません。

[5898] すなわち、救い主キリストによる義認は、キリストへの揺るぎない心からの信仰、そして、私たちの救いのためにキリストが地上に降臨されたこと、また、墓からの命を与える復活を信じるという確信への全き献身によって達成されるのです。

[5899] 忍耐と信仰を勧める中で、使徒パウロは、なぜ信仰がクリスチャンにとってこれほど必要なのかを説明した。信仰は、期待されることを現実のものとし、見えないものを可視のものとする。信仰は偉大な義人たちを生み出し、彼らの中に働きかけ、危険の中で彼らを無敵にし、苦難へと駆り立てたのである。 特に、「獅子の口を閉ざした」という言葉は預言者ダニエルを指し（ダニエル書6:1–28参照）、「火の力を消し去った」はバビロンの炉の中の三人の若者を指し（ダニエル書3:1–100参照）、「剣の刃を免れた」はダビデと預言者 エリヤを指し、「衰えの中から力を得た」はヨブとヒゼキヤを指す（列王記下 20:1–21）。

[5900] シオン――エルサレムが築かれた山。

[5901] 神の言葉は、火によって精錬された純銀のように、あらゆる偽りや欺瞞の不純物から清められている。

て救いに至る」（ローマ10:10）[5902]。それでは、キリストの良き戦士として[5903]、報いの希望をもって、自らを励まし、偉大な功績を成し遂げようではありませんか。　何しろ、報いへの希望こそが戦士を戦いに駆り立てるのです。聖ヨハネス・ダマスコスが殉教者たちについて語ったように、「主よ、あなたの殉教者たちは、信仰に堅く立ち、希望をもって自らを強め、敵の迫害に打ち勝ち、冠を受けました」[5904]。

金に代わって、私たちの王であるキリストは、私たちに最も尊い美徳、すなわち神と隣人に対する偽りのない愛を求めておられます。その崇高な意義ゆえに、愛は教会の教師たちによって常に金の象徴として描かれています。なぜなら、金が銀や銅、鉄よりも尊いように、愛もまた希望や信仰よりも高いものだからです。　「今や」と聖書には記されている。「*この三つ、すなわち信仰、希望、愛は残る。しかし、その中でも愛が最も偉大である」*（Iコリント13:13）[5905]。主はまさにこのような「金」を私たちに求めておられ、心で信じ、口で告白するだけでなく、実際にこの愛を実践して、偽りなく主に祈るよう命じておられます。　私たちは、主のために自らの魂を捧げ、私たちに対する主の神聖な愛のために死を受け入れる覚悟を持たなければなりません。　さらに、私たちは、キリストの愛する弟子である神学者ヨハネが教えるように、隣人も愛さなければなりません。*「わが子たちよ」*と彼は言いました。「*言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真理をもって愛しましょう」*（Iヨハネ3:18）[5906]。このような愛は、人間の息子たちよりもはるかに美しい、私たちの神であるキリストご自身によって、装飾として受け入れられる。神の知恵そのものがこう語っているように：「彼女は身を飾り、主と人々の前で美しくなった。これこそが、兄弟たちの間の心を一つにすること、そして隣人同士の愛である」（シラ書25:1–2）[5907]。

今や正教会は、古代の異教的なものにかわり、このようなキリスト教的なインディクティオンを祝っている。*「古い人をその行いとともに脱ぎ捨て、創造主の御姿に倣って新しくされる新しい人を着た」*（コロサイ3:9–10）のである。それでは、使徒が私たちに勧めるように、新年の祝いをしましょう。すなわち、*「古い文字に従うのではなく、御霊の刷新によって」*仕えるために、刷新された生活を送りましょう（ローマ7:6）[5908]。モーセを通して与えられた、私たちの主なる神の命令に従い、インディクティオンを祝おう。その書物には今、次のように記されている。*「もしあなたがたがわたしの定めを守り、わたしの戒めを保ち、それらを行うなら、　わたしはあなたがたに時宜にかなった雨を与え、地はその実りを生み出し、わたしはあなたがたの地に平安をもたらし、あなたがたは敵を追い払い、わたしはあなたがたに目を留め、あなたがたを祝福し、わたしの魂はあなたがたを嫌うことはなく、わたしはあなたがたのうちを歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」*（レビ記26:3–4, 6–7, 11, 12）[5909].

[5902] クリスチャンには、救いを得るために信仰だけでなく、その表現も求められており、信仰が満ち溢れている時には、その表現は自然と（告白として）現れるものである。

[5903] キリストの戦士とその武器の描写（エフェソ6:10–18）。

[5904] 水曜日の晩課における第3声の聖歌。

[5905] 使徒は、信仰の根源と希望の実を併せ持つ美徳として愛を重んじているが、同時に、信仰と希望を愛と並べて置くことで、それらにもまた偉大な価値があることを示している。

[5906] 使徒は、見せかけの愛や口先だけの愛ではなく、行いそのものによって証明される純粋で真実な愛を命じています。

[5907] 「知恵」という言葉は、聖書における用法において極めて広範な意味を持ち、時には、永遠に存在し、神の本質そのものであるキリストご自身、すなわち神の御言葉を指すこともあります（箴言8:1–22、36、およびコリントの信徒への手紙一1:24、30など参照）。

[5908] 旧約の律法は、文字として、いかなる内なる力も持たず、ただその規定によって人を束縛するだけで、それらを履行する力を与えてはくれません。しかし今や、いのちの御霊が現れた以上、私たちはこの新しいいのちの御霊に従って神に仕え、神の助けへの希望を持って、自由かつ喜びをもって仕えなければなりません。

[5909] 聖書のこれらの言葉は、インディクトの日の礼拝において、定められた三つのパレミアの一つとして朗読される。イザヤ書61:1–9――イエス・キリストが、油注がれた者、教師、救い主、そして地上のすべての苦しむ者たちの回復者であ

インディクトのトロパリオ、第2調：

万物の創造主よ、時と季節を御自身の御手の中に置かれた主よ、御慈愛の夏の冠を祝福し、聖母マリアの祈りによって皇帝と御都を平和のうちに守り、私たちを救い給え。

コンダク、第2調：

高き所におられる生けるキリスト、王よ、目に見えるものも見えないものもすべてを創造し、築き上げられた方よ、昼も夜も、季節も年々も造り出された方よ、今、夏の冠を祝福し、正教の皇帝と、あなたの都と民を、平和のうちに守り、保ってください、大いなる慈悲深き方よ。

尊き神を宿した父シメオン・ストルプニクの生涯

記念日：9月1日

カッパドキア地方[5910] のシサンという村に、クリスチャンのスソティオンとマルタが住んでいた。神は彼らの夫婦生活に祝福を与え、息子を授けられた。彼らはその子をシメオンと名付け、キリスト教の慣習に従って、洗礼の浴場で清めた[5911] 。 この少年は、書物による教えではなく、素朴さと悪意のない心の中で育てられた。しかし、神の知恵はしばしば素朴な人々にも宿り、彼らを自らの道具として選び、この世の知恵を恥じ入らせるのである（Iコリント15:21）。 のちの「言葉の羊」の牧者[5912] シメオンは、生後13歳になったとき、父の羊の群れを飼い始めた。ヤコブ、モーセ、ダビデのように、彼らもまた羊を飼い、神の啓示に恵まれたが、シメオンもまた神に召されたのである。 ある冬の日、大雪が降ったため、数日間羊を牧草地に放つことができませんでした[5913] 。仕事から解放されたこの祝福された少年は、日曜日に父と母と共に教会へ出かけました。 シメオンは、教会で歌われ、読まれている言葉に注意深く耳を傾け、聖福音書を耳にした。そこには、貧しい者、嘆き悲し

ること、その教会が諸国民の間に広まること、そして教会に属する者たちの至福と栄光についての預言。 上述したように、まさにこの預言が、救い主ご自身によってナザレのシナゴーグで朗読されたのである。——第2のパレミア（レビ記26:3–12、14–17、19–20、22、33、40–41）には、主の戒めを守る者への主の約束と、それを破る者への警告が記されている。これらの戒めを熱心に守ることは、新年の到来に際して私たちが通常、自分自身や隣人のために願う、地上の幸福を得るための主要な条件である。——第3のパレミア （『知恵の書』4:7–25より）は、その生涯において真の知恵の教訓を実践し、『知恵の書』で称賛される敬虔の勝利を示した聖シメオン・ストルプニクを記念するものである。——8世紀、聖ヨハネス・ダマスコスは9月1日のために多くの聖歌を著した。

[5910] カッパドキア——小アジアの地域。カッパドキアはかつて独立した国家であった。紀元前363年から370年にかけて、最初はペルシアの支配下にあり、その後マケドニアの支配下に入った。その後、紀元16年までは再び独自の王を擁していた。 紀元17年、ティベリウス帝の治世下で、カッパドキアはポントスおよび小アルメニアと統合され、ローマの属州となった。11世紀末（1074年）、カッパドキアはトルコ人の支配下に入り、現在に至るまでその支配下にある。聖シメオンの時代、この地ではキリスト教が繁栄していた。 教会の偉大な教師たち——聖グリゴリオス・ナジアンゼン、その友人である聖バシレイオス大聖人、そして聖バシレイオスの兄弟である聖グリゴリオス・ニッサス——は、いずれもカッパドキア出身であった。

[5911] すなわち、彼には聖なる洗礼の秘跡が授けられたのである。これは聖書において「水浴」と呼ばれている（テトス3:5、エフェソ5:26参照）。

[5912] 聖シメオンは、実際には「言葉の羊」の牧者、すなわち司祭の聖職に就いていたわけではなく、その生涯そのものと教え（説教）によって人々を救いへと導いたことから、そのように呼ばれている。

[5913] 東方では、今でも家畜は一年中放牧されており、激しい雪や嵐の時だけ特別な囲いの中に留め置かれる。

む者、柔和な者、心の清い者が「幸いである」と記されていた[5914] 。彼は、隣に立っていた敬虔な長老に、これらの言葉の意味を尋ねた。 神の御霊に導かれて、その長老はシメオンに説明を始め、長い間彼を教え導き、霊的な貧しさ、清さ、神の愛、そして徳ある生活への道を示した。 長老の教えという良き種は、良き土壌に落ちた。なぜなら、直ちにシメオンの魂の中に、神への熱心な憧れが芽生え、神へと続く狭い道を歩みたいという確固たる願いが湧き上がったからである（ルカ 13:24； マタイ7:14）。彼は心の中で、直ちにすべてを捨て、自分が望むものだけを目指すことを決意した。高潔な長老に頭を下げ、有益な教えに感謝を述べながら、シメオンは彼にこう言った。

「あなたは今や、私にとって父であり母であり、善行の師であり、私の救いへの導き手となりました。」

その直後、シメオンは教会を出て、家には寄らずに、祈りに適した場所に身を隠した。そこで彼は十字架の形に地面に伏し[5915] 、涙ながらに主に対し、救いへの道を示してくださるよう祈った。彼は長い間その姿勢で横たわり祈り続けたが、ついに眠りに落ち、夢の中で次のような幻を見た。夢の中で、彼はある建物のために堀を掘っているのだった。すると、「もっと深く掘れ！」と言う声が聞こえてきた。彼はさらに深く掘り進めたが、もう十分だと思い[5916] 、手を止めた。しかし、再び「もっと深く掘れ」と命じる声が聞こえてきた。 彼は再び掘り始め、また一旦手を止めたとき、三度目も同じ声が彼に同じ作業を続けるよう促した。ついに彼はこう言われました：

「もうやめなさい。さあ、もし建物を建てたいのなら、築き上げなさい。しかし、懸命に働かなければならない。労なくして、何事も成し遂げられないのだから。」

この不思議な幻視は、シメオン自身に現実のものとなった。彼は深い謙虚さをもって、自分自身と他者を高めるための確固たる基盤を築き上げた。その美徳と偉業は、まるで人間の本性を超えたかのようであった[5917] 。

この幻視の後、シメオンは立ち上がり、故郷にある修道院の一つへ向かった。その修道院のイグメン（修道院長）[5918] は、至福のティモフェイであった。シメオンは修道院の門の前で地面にひれ伏し、七日間、飢えと渇きに耐えながら横たわっていた。 八日目に、修道院長 が修道院から出てきて、シメオンに、どこから来たのか、どこへ行くのか、名前は何か、何か悪事を働いたことはないか、あるいは主人のもとから逃げ出したのではないか、と尋ね始めた。するとシメオンは、修道院長の足元にひれ伏し、泣きながらこう言った。

「いいえ、父上、私はそのような者ではありません。誰にも悪事を働いたことはなく、ただ全力を尽くして神に仕えたいと願っているのです。罪深い私を憐れんでください。私を修道院に入れ、皆の召使いとして仕えさせてください。」

彼の中に神の召しを見出した修道院長は、彼の手を取り、修道院へと導き入れながら、兄弟たちにこう言った。

「彼に修道生活と、修道院の規則や掟を教えなさい。」

修道院に身を置いたシメオンは、誰に対しても文句一つ言わずに従い、仕えた。短期間のうちに、彼は詩篇全巻を暗唱するようになった。まだ生後わずか十八歳であったにもかかわらず、彼はすでに修道士としての剃髪を受け、やがてその厳格な生活態度によって、その修道院のすべての修道士

[5914] 福音書の「八福」は、マタイによる福音書5:3–12およびルカによる福音書6:20–23に記載されている。

[5915] 古代のキリスト教徒は、祈りの際、顔を地面につけて十字架の形、すなわち両手を横に広げる姿勢をとった。これにより、十字架にかけられた主への信仰と、人間の罪深さへの自覚が表現されていた。

[5916] つまり、彼が固い（本土の）大地にたどり着いたということである。

[5917] 聖シメオンと同時代に生きたキルスクの司教、福者テオドリトスは、彼が柱の上にいた間に自ら彼を訪ねた。 彼は次のように記している。「彼の行いについては、誰もが証言できるだろうが、それらが人間の自然を超越しているため、後世の人々に荒唐無稽で信憑性に欠けるものと思われないよう、私はその叙述に着手することを恐れている」。

[5918] イグメン（ギリシャ語で「指導者」の意）――修道院の長。

たちを凌駕するようになった。　ある修道士たちは一日に一度、夕方にのみ食事をとっていたが、またある者たちは三日に一度しか食べず、彼に至っては一週間も食事を口にしなかった。

シメオンの両親は2年間彼を探し続けたが、神が彼を隠しておられたため、見つけることはできなかった。彼らは息子を思って大いに泣き、深く嘆き悲しんだため、父は悲しみのあまり亡くなってしまった。一方、シメオンは神を父として見出し、若き日から全身全霊を神に捧げた。

[5919]の修道院に滞在していた時、至福のシメオンはある日、水を汲むために井戸へ向かった。[5920] の汲み棒のロープ――[5921] のヤシの枝を編んだ非常に硬いもの――を取り、それを腰から首にかけて裸の体に巻きつけた。その巻き方は非常にきつく、ロープが肉に食い込むほどであった。　十日が経つと、彼の体は傷口から膿み出し、その傷口には無数の蛆がうごめいていた。修道士たちはイグメンにこう訴えた。

「一体どこからこの男を連れてきたのですか？　彼を我慢して一緒にいることなどできません。彼からは悪臭が漂っています。誰も彼のそばに立っていられません。彼が歩くたびに、蛆が彼から落ちてきます。彼の寝床も蛆だらけです。」

イグメンはこれを聞いて驚いたが、語られたことがすべて事実であることを確かめると、シメオンに尋ねた。

「教えてくれ、わが子よ、なぜお前からそんな悪臭が漂っているのか？」

しかし、シメオンは目を伏せたまま、修道院長の前で黙って立っていた。修道院長は激怒し、シメオンの上着を力ずくで剥ぎ取るよう命じた。すると、彼が着ていた羊毛の衣[5922] が血まみれであり、縄が骨の髄まで深く食い込んでいるのが見えた。修道院長も、そこにいた者たちも皆、恐怖に襲われた。　大変な苦労の末、ようやくシメオンからその縄を取り除くことができたが、縄が引き抜かれるたびに、腐りかけた肉も一緒に剥がれ落ちていった。一方、シメオンはこれらの苦しみを辛抱強く耐え忍びながら、こう言った。

「私を、悪臭を放つ犬のように放してください。私は自分の罪のゆえに、この苦しみを被るに値するのです。」

「お前はまだ十八歳に過ぎない」と修道院長は言った。「一体、どんな罪があるというのか？」

「父よ！」とシメオンは答えた。「預言者がこう言っています。『わたしは不義のうちに宿り、罪のうちに母はわたしを産んだ』（詩篇50:7）。」

その答えを聞いて、修道院長はシメオンの分別ある言葉に驚き、これほど素朴な若者がこれほど深く神への畏れを心に刻んでいることに感嘆した。しかし、彼はシメオンに、そのような苦行を自分に課さないよう説得し始めた。

「力以上のことに手を出すのは何の益もない」と彼は言った。「弟子が師のようになるだけで十分である（マタイ10:24参照）。」

シメオンの傷が癒えるまでには、長い時間がかかった。　しかし、シメオンが回復すると、修道院長と修道士たちは、彼が以前と同様に自分の体を酷使していることに再び気づいた。そこで、他の体力の弱い者たちが彼を真似て、自ら死を招くことのないよう恐れた修道院長は、シメオンに修道

[5919] ラヴラ（ギリシャ語で「都市の一部、路地」の意）とは、修道院長邸の周囲を囲む塀の中に、都市の路地のように配置された一連の独房のことである。週の最初と最後の日には、隠遁者たちが礼拝のために集まり、それ以外の日は沈黙を守っていた。　ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに過酷であった。古来より、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士が住み、重要な修道院を指すのに用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられるようになった。

[5920] つまり、井戸から水を汲み上げるのに使われたバケツに由来する。

[5921] ヤシの枝で作られた縄――いわば私たちの「モチャルナ」のようなものだ。

[5922] ヴラシニツァとは、馬の毛を編んで作られた下着で、修道士たちが素肌に直接身につけるものである。

院を去るよう命じた。　修道院を後にしたシメオンは、長い間、荒野や山々をさまよった末、ついに、爬虫類が棲む水のない井戸を見つけた。その井戸に降りていったシメオンは、そこで神に祈りを捧げ始めた。

それからしばらくして、ある夜、修道院長は幻を見ました。そこには、武器とろうそくを手にした大勢の人々が修道院を取り囲み、こう叫んでいるのです。

「神の僕シメオンはどこにいるのか？　神と天使たちにこれほど好意を持たれている者を我々に見せよ。もし彼を見せなければ、お前たちと修道院全体を焼き払う。シメオンはあなたたち全員よりも高き存在であり、神は彼を通して地上で多くの奇跡を起こされるだろう。」

眠りから飛び起きた修道院長は、その恐ろしい幻視を兄弟たちに告げ、シメオンのせいで自分がどれほどの恐怖に襲われたかを語った。彼は至る所にシメオンを探すよう命じ、自らも捜索に出かけた。兄弟たち数名を連れて、修道院長は荒野や洞窟を歩き回り、その修行者を捜し求めた。　ほどなくして、羊の群れを放牧している羊飼いたちに遭遇し、彼らに尋ねたところ、シメオンが空の井戸の中にいることを知った。その井戸へと急いで向かった修道院長は、シメオンを呼びかけた。

「神のしもべよ、ここにいるのか？」

「聖なる父たちよ、私を放っておいてください」とシメオンは答えた。「私が息を引き取るまでのほんの少しの間だけ。私の魂は疲れ果てています。私は主を怒らせてしまったからです。」

しかし、修道士たちは彼を無理やり井戸から引き上げ、修道院へ連れて行った。ここでしばらく過ごした後、至福のシメオンは密かに修道院を抜け出し、再び山や荒野を放浪するようになった。神の御霊に導かれて、彼はタラニスの集落の近くにある山にたどり着き、そこで岩に彫り込まれた小さな修道室[5923] を見つけ、そこに閉じこもった。彼はこの修道室で三年間を過ごした。そこで彼は、モーセとエリヤが四十日間断食したことを思い起こし（出エジプト記 24:18；　列王記上 19:8）を思い起こし、自らも同様の断食を試みてみたいと願った。その頃、その国のヴァスという名の司教が、町や村の教会を巡回してタラニッスを訪れた。　聖シメオンのことを耳にした司教は、彼のもとを訪れた。シメオンは司教に、40日間、自分のケリアの扉を閉ざし、いかなる食物も与えないよう懇願した。しかし、司教は同意しなかった。

「人が過度な断食によって自らを滅ぼすことはふさわしくない」と彼は言った。「それは美徳というより、むしろ罪であるからだ。」

「それなら、父よ、」と聖人は答えた。「必要になった時に、少しばかり体を養えるよう、パンと水だけ置いてください。」

ヴァスはその通りにした。小部屋にパンと水を置き、扉を石で塞いで、自分の道へと旅立った。四十日が過ぎると、彼は再び聖者の元へ戻り、石をどかして扉を開け、小部屋に入った。　そこで彼は、尊者がまるで死人のように地面に横たわっているのを見ました。そして、パンと水は置かれたまま手つかずでそこにありました。この偉大な断食者は、それらにさえ触れていなかったのです。

ヴァスはスポンジを取り、聖者の口を洗い清めて冷やしてやった。聖者が少し意識を取り戻すとすぐに、彼に聖体拝領を授けた。その後、シメオンは軽い食事を摂って体力を回復させた。司教はこのシメオンの偉大な節制について、多くの兄弟たちの益となるよう語り伝えた。　聖人はこの時から、毎年聖四旬節の間、同様に断食を行うようになった。何も飲まず、何も口にせず、絶え間ない祈りに時間を費やし、二十日間は立ち続け、残りの二十日間は極度の疲労のため座って過ごした。

狭い石造りの独房で三年間過ごした後、シメオンは山の頂上に登った。　そして、ここから離れないようにするため、彼は二十キュビトの長さの鉄の鎖[5924] を取り、その一端で自分の足を縛り、

[5923] 「ケリア」はラテン語で、本来は「蜂の巣の細胞」を意味する。

[5924] 「ロコート」または「ラコート」とは、10.5ヴェルシュクに相当する長さの単位である。

もう一端を山に釘付けにした。そのような姿勢で、聖人は常に天を仰ぎ、心をもって天よりも高いお方へと昇りつめていた。

この修行者のことを聞きつけたのは、アンティオキア教会の大司教である至福のメレティオス自身であり、彼を訪ねてやって来た。シメオンが山に鎖でつながれているのを見て、彼はこう言った。

「人は鎖がなくても自制できる。鉄ではなく、ただ理性と意志だけで、自分自身を一つの場所に縛り付けることもできるのだ。」

聖人はこれを聞くと、与えられた教えを急いで実践し、キリストの自発的な囚人となることを望んで、自ら足枷を外し、意志のみによって自らを縛り、*「思い　を打ち砕き、神の知識に逆らうあらゆる高慢を打ち砕き、あらゆる思いをキリストへの従順へと捕らえる」*（IIコリント10:5）。[5925]

この聖なる修道者の名声は至る所に広まった。そして、近隣に住む人々だけでなく、遠く離れた国々からも、そのために長い旅を余儀なくされた人々までもが、彼のもとを訪れるようになった。中には病人を連れてくる者もいれば、自宅で寝たきりの病人の癒やしを願う者もいた。また、自ら災いや悲しみに苛まれている者もいれば、悪霊による苦しみに耐えている者もいた。　聖人のもとを訪れた者は、誰一人として慰めを得ずに帰ることはなく、誰もが求めたものを得た。ある者は癒やしを、ある者は慰めを、またある者は有益な教えを、さらに別の者は何らかの助けを得た。皆、神を賛美しながら喜びをもってそれぞれの家へと帰っていった。聖人は、自分の祈りによって癒やされた者がいると、いつもこう言った。

「あなたに癒やしを授けてくださった主を賛美しなさい。決して『シメオンが私を癒やした』などと言ってはならない。そうしなければ、あなたにさらなる災いが降りかかることになるからだ。」

川のように、さまざまな民族や部族がシメオンのもとに集まってきた。アラビアやペルシア、アルメニアやイベリア[5926]、イタリア、スペイン、ブリタニアから人々が彼のもとにやって来た。こうして、神は御自身を賛美した者を栄光に包まれたのである。　やがてシメオンのもとにはこれほど多くの人々が集まり、皆が彼に触れて祝福を受けようとせがむようになったが、この聖人はそのような崇敬と騒ぎに煩わしさを感じるようになった。そこで彼は、人々の喧騒から逃れるための前代未聞の方法を思いついた。訪れる者たちが自分に触れられないようにするため、柱を建て、その上に立つことを企てたのである。　その柱を立てると、彼はその上に二肘の狭い住処を設け、そこで断食と祈りに専念して生活を送るようになった。こうして彼は最初の柱上修道士となった。柱の高さは六肘あり、聖シメオンは数年間、その上に立ち続けた。　その後、柱の高さは二十肘にまで増され、さらに三十六肘にまで達した。　こうして、尊者は高さの異なる柱を梯子のようにして天の国へと登り、苦難に耐え続けた。夏は雨に打たれ、灼熱の暑さに焼かれ、冬は寒さに耐えた。彼の食事は水に浸したソチヴォ（[5927]）であり、飲み物は水であった。やがて、彼の柱の周囲には二つの石の柵（[5928]）が設けられた。

シメオンのこのような生活について、荒野に住む聖なる父たちは耳にし、彼の並外れた功績に驚嘆した。というのも、柱の上に立つという生活様式を自ら編み出した者は、それまで誰もいなかったからである。そこで、彼を試そうと、次のように告げさせた。

[5925] 神の御心に逆らう思いとは、啓示の真理や教会の教義に反する不遜な考えのことである。あらゆる心をキリストへの従順へと捕らえるとは、心をキリストの真理に服従させ、その高さと力を認めさせることを意味する。

[5926] イベリアとは、現在のジョージアのことである。

[5927] 「水で戻した穀物」とは、乾燥した果実、米、小麦などを水で戻したり、煮たりしたものである。

[5928] これらの囲いは、この地を訪れた人々によって、乾燥した石を用いて築かれた。このように囲われた場所は「マンドラ」と呼ばれ、聖シメオンの指導の下で修行を志す者たちがそこに定住したため、彼は「アルヒマンドリトス」と呼ばれるようになった（例えば、『礼拝暦』において）。

「なぜあなたは先人たちの道を歩まず、別の――新しい――道を編み出したのですか。柱から降りて、古の荒野の修道士たちの生き方に従いなさい。」

その際、使者たちには、もしシメオンが従わなければ、力ずくで柱から降りさせるよう、また、もし従って降りようとした場合は、彼が始めたようにそのまま立っているままにしておくよう指示した。なぜなら、そうすれば、彼の新しい生き方が神からのものであることが明らかになるからだ、と彼らは言ったのである。　使者たちがシメオンの元へやって来て、聖なる父たちである隠者たちの会議の決定を伝えると、彼はすぐに梯子に足をかけ、降りようとした。

それを見た使者たちは叫んだ。

「いいえ、降りないでください、聖なる父よ。柱の上に留まってください。今や、あなたが始めたこの業が神からのものであることがわかりました。どうか神が最後まであなたを助けてくださいますように。」

アンティオキア総主教ドムヌス[5929] ――聖メレティオスの後継者――もシメオンのもとを訪れ、その生涯を知って感嘆し、魂にとって有益なことについて彼と長く語り合った。その後、総主教は礼拝を執り行い、二人は共に神の聖体拝領を受けた。

その後、総主教はアンティオキアへ戻ったが、聖人は目に見えない敵に立ち向かうべく、さらに大きな苦行に身を投じた。 その時、あらゆる善を憎む悪魔は、光り輝く 天使の姿をとり、まるで天から降りてくるかのように、火の馬を引いた火の戦車に乗って、柱の近くにいる聖人の前に現れ、こう言った。

「聞け、シメオンよ！　天と地の神は、ご覧の通り、戦車と馬を伴って私をあなたのところへ遣わされた。それは、エリヤのようにあなたを天へと連れ上げるためである（列王記下 2:11）。あなたは、その聖なる生涯ゆえに、このような栄誉に値する者であり、今や、自らの労苦の果実を味わい、主の御手から称賛の冠を受ける時が来たのだ。　さあ、主のしもべよ、急いであなたの創造主を仰ぎ見、ご自身の御姿に似せてあなたを創造された御方にひれ伏しなさい。天使たちや大天使たち、預言者たち、使徒たち、そして殉教者たちも、あなたに会いたいと願っているのです。

聖人は敵の誘惑を見抜けず、こう言いました。

「主よ！ 私のような罪人を、天に迎え入れようとお考えなのですか？」

そしてシメオンは、炎の戦車に足を踏み入れようと右足を上げたが、同時に十字を切って身を守った。すると、悪魔と戦車は、風で吹き飛ばされた塵のように消え去った。　シメオンは悪魔の誘惑に気づき、悔い改め、悪魔の戦車に足を踏み入れようとしたその足を罰として、丸一年間、その足一本で立ち続けた。

悪魔はこのような苦行を許さず、聖人の足に激しい腫れ物を生じさせ、足の肉は腐り、無数の蛆が現れ、柱を伝って地面へと、蛆混じりの膿が傷口から滲み出た。
アントニーという名の若者が[5930] 、地面に落ちる蛆を集め、聖なる殉教者の命に従って、再びそれらを柱の上の彼のもとへ運んだ。聖人は、第二のヨブのように大きな忍耐をもって病に耐え、蛆を傷口に当てながら、「神があなたがたに送ったものを食べなさい」と言った。

その頃、サラセン人の王[5931] ヴァシリクは、聖シメオンについて多くの話を耳にしていたため、彼のもとを訪れ、彼と語り合った結果、大きな恵みを受け、キリストを信じるようになった。しかし、聖人の傷口から地面に落ちたミミズを目にした王は、それを手に取ってその場を離れた。聖人は彼を呼び止め、こう言った。

[5929] 聖メレティオスは358年から381年までアンティオキア総主教を務め、ドムヌス2世、あるいはドムニンは441年から448年までその職にあった。

[5930] アントニオスは聖シメオンの弟子であり、その伝記を著した。

[5931] サラセン人とは、アラビアの住民のことである。当初、この名称は遊牧する盗賊部族を指していたが、その後、キリスト教の著述家たちがこの名称を彼ら全員、ひいてはイスラム教徒全般に転用した。

「なぜ、私の腐った体から落ちた、この悪臭を放つ虫を、その清らかな手に取ったのか？」
すると、ヴァシリクは腕を伸ばすと、その中に貴重な真珠を見つけ、こう言った。
「これは虫ではなく、真珠だ。」
「お前の信仰ゆえに、これが与えられたのだ」と聖人は言った。
そしてサラセン人は、彼から祝福を受けると、自分の家へと帰っていった。
長い年月が流れ、聖人の母マルファは息子のことを知り、彼に会いに来た。そして、塀の入り口で立ち止まり、激しく泣いた。しかし、シメオンは彼女と会うことを望まず、使者を通じてこう伝えた。
「今は私を煩わせないでください、母よ。もし私たちがそれに値するなら、あの世で再会できるでしょう。」
すると彼女は、なおさら彼に会いたいと切望した。そこで聖人は再び使者を送り、黙って少しの間待ってくれるよう懇願した。
彼女は塀の扉の前に横たわり、そこで主のもとへ息を引き取った。聖シメオンは彼女の死をすぐに知り、その遺体を柱のそばへ運ぶよう命じた。母の姿を見ると、彼は涙を流しながら彼女のために祈り始めた。彼が祈っている間、聖マルタの遺体には動きが見られ、顔には微笑みが浮かんだ。これを見た者たちは皆驚き、神を賛美した。彼女は柱のそばに埋葬され、聖人は毎日二回、祈りの中で母を偲んだ。その後まもなく、聖人の柱は再び取り替えられ、四十キュビトの新しい柱が設けられた。この柱の上で、聖人はその至福の最期を迎えるまで立ち続けた。
尊者がその驚くべき生涯を送った場所の近くには水がなく、遠くから運ばれてくるため、尊者を訪ねてくる人々と彼らの家畜はひどく苦しんでいた。 聖人は、水不足によるこうした苦しみを目の当たりにし、かつて荒野で渇きに苦しんだイスラエルの民に神が水を送られたように（民数記20:2–10）、神に熱心に祈りを捧げた。 すると、昼の十時頃、突然大地が揺れ、塀の東側が割れ、まるで洞窟のような隙間が開いた。そこには、予想をはるかに超えるほど多くの水があった。聖人はさらにその場所を周囲七キュビトの範囲で掘り起こすよう命じると、そこから水が豊かに流れ出した。
ある女性が夜、喉の渇きを感じ、水と一緒に小さな蛇を飲み込んでしまった。その蛇は女性の腹の中で成長し、大きなものとなった。女性の顔色は草のように緑色になり、 多くの医師が彼女を治療したが、治すことはできなかった。 彼女は聖シメオンの元へ連れて行かれた。聖人は言った。「この地の水を彼女に飲ませなさい」。すると、女性が水を飲み始めたとき、彼女の中から大きな蛇が出てきた。その蛇は柱まで這い寄ると、たちまちバラバラに砕け散った。
ある人々が、遠方から聖者に会いに来る途中、暑さを避けて木陰で少し休むために立ち止まった。そこで木陰に座っていると、通りかかった妊娠中の雌鹿を見かけ、彼女に向かって叫んだ。
「聖シメオンの祈りによって、どうか少しの間、立ち止まってください！」
すると、驚くべき奇跡が起こった。雌鹿は立ち止まったのだ。かくして、聖人の名によって、獣たちさえも穏やかで従順になったのである！ 旅人たちは雌鹿を捕らえて殺し、皮を剥ぎ、その肉で食事を用意した。しかし、食べ始めた途端、突然神の怒りに打たれ、人間の声を失い、鹿のように鳴き叫び始めた。 彼らは、自らの罪の証しとして雌鹿の皮を携え、聖シメオンの元へ駆けつけた。彼らは柱のそばで二年を過ごし、ようやく癒やされ、人間の言葉で話せるようになった。そして、雌鹿の皮は、この出来事の証しとして柱に掛けられた。
聖シメオンが修行に励んでいたその山で、柱からそう遠くない場所に、恐ろしい大蛇が住み着いており、そのせいでその場所には草一本も生えていなかった。ある日、大蛇の右目に、肘ほどの大きさの枝が突き刺さり、大蛇に激しい痛みを与えていた。 すると、大蛇は聖人の柱まで這い寄り、柵の入り口の前に横たわり、まるで謙虚さを示し、聖シメオンに慈悲を乞うかのように、体をくねらせていた。聖人がその大蛇を見下ろすと、たちまち枝が眼から抜け落ち、大蛇は三日間、羊のように入り口の前に横たわったままだった。 人々は皆、恐れることなくその場を往来し、蛇から何の害も

受けなかった。やがて目が完全に癒えると、蛇は自分の巣穴へと去っていった。そして、皆はその驚くべき奇跡を目の当たりにし、感嘆した。

その国には、パルド[5932]という、人間も家畜も食い尽くす、巨大で極めて恐ろしい獣が住んでいた。　誰もその獣が棲みついた場所のそばを通る勇気はなく、獣は周辺一帯に多くの災いをもたらしていた。そのことが聖者に伝えられた。聖者は、自分の囲いから土を取り、そこからの水も用意するよう命じ、獣がいる場所の周囲を回り、遠くからそれらをまき散らし、振りかけるように指示した。　人々は聖人の命じた通りに実行した。しばらくして、獣がどこにも姿を見せないのを見て、探しに行くと、聖人の塀から取り除かれたまさにその土地の上に、死んでいる獣が見つかった。そして、皆が神を賛美した。

まもなく、最初の獣よりもさらに凶暴な、言葉を使う獣がその地に現れた。それはアンティオキア出身の[5933]、イオナファンという名の強盗であった。彼は道や家々で多くの人々を殺害し、村や郊外を不意に襲って略奪を繰り返していた。　多くの者が道で待ち伏せしていたにもかかわらず、誰も彼を捕らえることはできなかった。彼は極めて強靭で勇敢であり、誰も彼に立ち向かうことはできなかったからである。やがてアンティオキアが騒然となり、彼を捕らえるために兵士たちが派遣されると、その強盗は、大勢の追跡から逃れる術がなく、聖シメオンの囲いの中に駆け込んだ。　娼婦がキリストの足にすがったように（ルカ7:37–38）、彼は柱にしがみつき、苦々しく泣いた。

すると、聖人は柱の上から彼に向かってこう呼びかけた。

「お前は誰だ。どこから来て、なぜここに来たのか？」

彼はこう答えた。

「私は、あらゆる悪を数多く犯した盗賊ヨナファンです。自分の罪を悔い改めるためにここへやって来ました。」

彼がそう話しているとき、アンティオキアから兵士たちが駆けつけ、聖人にこう叫び始めた。

「父よ、我らの敵であるこの盗賊を我々に引き渡してください。すでに町では、彼を引き裂くための獣たちが用意されているのですから！」[5934]

しかし、聖シメオンは彼らにこう言った。

「わが子らよ！　彼をここに連れてきたのは私ではなく、彼の悔い改めを望まれる神が、彼を私のところへ導かれたのだ。もし中に入ることができるなら、彼を連れ去ってよい。しかし、私は彼をあなたたちのところへ連れ出すことはできない。彼を私のところへ遣わされた方を畏れているからだ。」

これを聞いて、兵士たちは柵の中に入るどころか、聖人に対して一言でも口にすることさえ恐れ、おののきながら引き返し、アンティオキアでそのすべてを報告した。

一方、その強盗は七日間、柱のそばに留まり、激しく泣きながら、神に祈りを捧げ、自分の罪を告白した。そこにいた者たちは皆、彼の悔い改めと涙を見て、心を打たれた。七日が過ぎると、その強盗は聖人にこう呼びかけた。

「父よ！　私をここから離してくださいますか？」

「また、あなたの悪行に戻ろうとしているのですか？」と聖なる父は彼に言った。

「いいえ、父よ」と彼は答えた。「私の時は来たのです。」

5932 パード、あるいはレオパードとは、トラに似た肉食獣であるが、縞模様ではなく斑点模様の毛皮を持ち、体長もトラより小さい。

5933 聖人の生前に、この名を持つ都市がいくつか存在した。彼が身を隠した場所に最も近かったのは、セレウキアのアンティオキア（ピエリアのセレウキア市の近く）であった。

5934 犯罪者を野獣に食い殺させるという処刑方法は、通常「サーカス」と呼ばれる特別な施設で行われ、異教の時代からの伝統として、民衆向けの公開の娯楽となっていた。

そう彼と語り合いながら、彼は神に息を引き取った。聖シメオンの弟子たちが、塀のそばでその強盗の遺体を埋葬しようとしたとき、アンティオキアから軍の長たちがやって来て、叫び始めた。

「神父様、この敵を私たちに引き渡してください。この男のために、街全体が混乱に陥っているのです。」

しかし、聖人はこう答えた。

「彼を私のところへ連れてきた方は、多くの天の軍勢を率いて来られ、悔い改めによって清められた彼を御自身のもとに迎え入れられた。それゆえ、私を煩わせないでほしい。」

亡くなった強盗の姿を目の当たりにした将校たちは恐怖に襲われ、罪人の死を望まない神を賛美した。彼らは町に戻ると、聖人から聞いたこと、そして目撃したことを人々に伝えた。

燭台の上の蝋燭のように柱の上に立ち、私たちの尊い父シメオンは、この世の光となり、偶像崇拝の闇の中にいた民を照らし、真の神を知る光へと導いた。彼の中で働かれた神の驚くべき恵みに栄光あれ！　一か所に立ちながら、この修道士は、あたかも全宇宙を巡り歩き、教えを説き、福音を宣べ伝えているかのように、多くの人々を信仰へと導いた。なぜなら、彼は太陽のように、その徳高い生活と甘美な言葉による教えの光を放ち、周辺の国々を照らしたからである。彼の柱の周りでは、聖なる洗礼を受けるペルシャ人やアルメニア人の姿が見られた。イスマイル派の人々[5935]は、二百人、三百人、時には千人もの大群となってやって来た。彼らは叫び声を上げながら、先祖の迷いを捨て去り、古来より尊び崇めてきた偶像を柱の前に持ち込み、その場で打ち砕き、足で踏みつけ、　そして、聖人の蜜のように甘い言葉から真の信仰の教えを受け入れ、神聖な秘跡の聖体拝領に与った後、聖なる福音の光に照らされ、大きな喜びをもって帰っていった。

あるサラセン人の軍司令官は、親族に癱痺を患う者がいたため、聖人にその病人の癒やしを祈った。聖人は彼を柱のところに連れてくるよう命じ、こう尋ねた。

「お前の先祖たちの不義を否定するか？」

彼は言った。

「否認します。」

すると聖人は再び尋ねた。

「父と子と聖霊を信じるか？」

その若者は、何の疑いもなく信じていると告白した。

すると聖人は「立ちなさい」と言い、その瞬間、若者はまるで何の病気もなかったかのように、健康な姿で立ち上がった。　そして、その回復をより明確に示すため、聖人はその若者に、太った体格の軍司令官を肩に担いで自分の陣営へ運ぶよう命じた。若者はその命令に従い、司令官を麦の束のように肩に担ぎ上げた。これを見た者たちは皆、御自身の聖人を通して驚くべき奇跡を行われる神を賛美した。

また、この聖人は預言の賜物も持っていた。彼は二年前から干ばつや飢饉、疫病を予言し、さらに三十日後にイナゴが襲来すると告げていたが、これらすべてが現実のものとなった。　ある時、彼は幻の中で、天から降りてくる二本の杖を見ました。そのうちの一本は東に、もう一本は西に落ちました。この幻について、聖人は周囲の人々に語り、ペルシャ人とスキタイ人が[5936]、ギリシャとローマの領土に対して反乱を起こすと預言しました。　そして、聖人は多くの涙と絶え間ない祈りをもって神をなだめ、神が御自身の義なる怒りを退け、キリスト教徒たちにその懲罰が下らないよう願った。　そして、このことについて神に懇願した。すると、すでに戦いの準備を整えていたペルシャ軍

[5935] イシュマエル人――パトリアルヒ・アブラハムとハガルとの間に生まれた息子イシュマエルの子孫。創世記25章12節以降を参照。

[5936] スキタイ人は主に黒海の北岸に居住していた。

全体が、神の御心により出陣を遅らせ、さらにペルシャ人たちの間で内紛が始まったため、彼らはその企てを断念したのである。

ある日、聖人は、テオドシウス2世[5937]　が、キリスト教徒に与えられていた礼拝堂をユダヤ人に返還したことを知った。彼は直ちに皇帝に手紙を送り、皇帝の威厳を恐れず、神の怒りをちらつかせて脅した。　その手紙を読んだ皇帝は恐れをなして、再びキリスト教徒たちに礼拝堂を受け入れるよう命じ、教会をユダヤ人に返還するよう助言した都市長官をその職から罷免し、自ら聖者に懇願の書簡を送り、彼を許し、神への祈りを捧げてくれるよう求めた。　また、同王の妃であるエウドキア王妃は、夫の死後、エウティキウス派の異端に陥っていたが[5938]　、聖人は手紙で彼女を諭し、四ヶ月の間に彼女を再び敬虔な信仰へと立ち返らせた。 回心後、さらに4年間悔い改めの生活を送った彼女は、エルサレムで安らかな最期を遂げ、自ら建立した聖ステファノ第一殉教者教会に埋葬された。テオドシウス2世の後を継いで王位についたマルキアヌス[5939]　は、しばしば密かに聖シメオンを訪ね、彼から多くの恩恵を受けた。

ペルシャの女王は、聖シメオンの奇跡と聖性について耳にすると、彼に祝福を求める使者を送り、彼から祝福された聖油を受け取った。女王はこれを偉大な賜物として尊び、敬意を込めて大切に保管した。

イスマイルの女王は、不妊であったため、聖シメオンに使いを送り、彼女のために祈ってほしいと願い、彼の聖なる祈りによって母になれることを望んだ。そしてその通りになった。まもなく彼女の不妊は解消され、彼女は息子を産んだ。女王は赤ん坊を抱いて、聖シメオンのもとへ向かった。しかし、聖人は女性との面会を禁じており、実の母でさえも面会を許さなかったと聞き、女王は息子を家来の腕に託して送り出し、次のように伝えるよう命じた。

「父よ、これがあなたの聖なる祈りの実です。どうかこの赤ん坊を祝福してください。」

この聖人の計り知れない偉業について、何と言えばよいだろうか。それらは人間の力をはるかに超えているため、言葉で表現することは不可能である。

「私――」と、至福のテオドリトスは言う――「何よりもまず、彼の忍耐力に驚かされる。昼夜を問わず、彼は皆に見えるようにそこに立っているのだ。」　ある時、扉と上部の壁のかなりの部分が老朽化により崩れ落ち、壁と扉が修復されるまでの間、聖人は長い間、誰の目にもさらされていた。その時、人々は新しく驚くべき光景を目にした。時折、彼は長い間じっと立ち尽くし、また時には頻繁に頭を下げながら神に祈りを捧げていたのだ。　柱のそばに立っていたある人は、修道士が絶え間なく繰り返していたお辞儀の回数を数えようとしたが、1,244回を数えたところで力尽き、柱の高さを見上げることもできなくなったため、数えるのをやめたと語った。　しかし、聖人は礼拝によって衰弱することはなく、週に一度、それもごく少量で軽い食事を摂ることで、体が軽くなり、頻繁に礼拝を行うことができるようになっていた。　また、長時間の立ちっぱなしのせいで、もう一方の足にも治らない潰瘍ができ、そこから大量の血が流れ出た。しかし、この苦しみでさえ、彼を神への思索からそらすことはできなかった。

この自発的な殉教者はすべてを勇敢に耐え抜いたが、やむを得ずその潰瘍を見せざるを得なくなった。アラビアから来たある司祭――善良で神に導かれた人物――が彼の元を訪れ、こう語りかけた。

[5937] 408年から450年まで在位した。

[5938] 第4回全地公会議で非難されたエウティキオスは、イエス・キリストには神性という単一の本質しかないと教えたが、聖なる教会は常に、イエス・キリストにおいて、融合せず、かつ分離しない二つの本質――神性と人性――を認めてきたし、今も認めている。

[5939] 在位は450年から457年まで。

「人類を御自身のもとに引き寄せられた『真理そのもの』の名において、あなたに問う。教えてほしい。あなたは人間なのか、それとも無形の存在なのか？」

「なぜ私にそんなことを尋ねるのですか？」と、聖人は彼に言った。

「あなたのことを聞いたことがあります」と司祭は答えた。「あなたは食べず、飲まず、眠らないと。しかし、それは人間には不自然なことであり、人は食事も飲み物も睡眠なしでは生きられません。」

そこで聖人は司祭に、自分のいる柱の上に登るよう命じ、膿と蛆に覆われた傷を見たり触れたりすることを許した。司祭は、その傷を目にし、聖人が一週間に一度しか食事をとらないという話を聞いて、聖人の忍耐と偉業に驚嘆した。

これほどの偉業を成し遂げ、多くの奇跡を起こし、これほど徳高い生活を送りながら、聖人はまるで誰よりも卑しく、取るに足らない存在であるかのように、柔和で謙虚であった。　誰に対しても、その顔は等しく明るく、言葉は慈愛に満ちていた――貴族に対しても、奴隷に対しても、富める者に対しても、貧しい者に対しても、そして　、最も卑しい悪党に対しても。なぜなら、彼には人を見下すような態度などなかったからである。　そして、誰もが――その聖なる御顔を見つめることにも、その甘美な語りかけにも――飽きることがなかった。なぜなら、その口は聖霊の恵みに満ちていたからである。　知恵の賜物を持つ彼は、毎日、聴衆の心を教えの川で満たし、その教えに導かれた多くの人々は、この世のすべてを捨て、鳥のように高みへと舞い上がった――ある者は修道院へ、ある者は荒野へ、またある者は彼のそばに残って暮らした。

尊者の一日の生活は、次のようなものであった。昼夜を問わず、九時までは祈りに専念し、九時を過ぎると、柱の周りに集まった人々に説教を行い、その後、彼を訪ねてきた人々の悩みや願いに耳を傾け、病人を癒やした。　その後、人々の争いや論争を鎮め、平和を取り戻した。そして最後に、日没とともに、再び祈りに専念した。このような労苦を背負いながらも、彼は教会の平和を顧みることを決して怠らず、異教の不敬を打ち砕き、ユダヤ人の冒涜を論破し、異端の教えを根絶した。また、王や諸侯、あらゆる権力者たちに対し、その賢明で有益な書簡によって、神への畏れ、慈悲、愛へと導き、神の教会を守るよう促し、すべての人々に魂に有益な教えを数多く授けた。　このように、人間の性質には耐え難いと思われるような驚くべき生涯を送り、生後100歳を超えて、彼はすでに死期を迎えようとしていた。信頼に足る人々の記述によれば、彼は柱の上に80年間も立っていたという。彼は徳において完全に完成しており、まさに地上の天使であり、天の人であった。

この尊者（レプドス）の至福の最期について、その弟子アントニウスは次のように語っている。

「ある日――と彼は言う――ちょうど金曜日、九時を過ぎた頃、私たちが彼からのいつもの教えと祝福を待っていたが、彼は柱の上から私たちを見下ろさなかった。土曜日も、日曜日も、いつものように父のような言葉を私たちに授けてはくれなかった。　私は恐れをなして柱の上に登ると、見よ、尊者様は祈っているかのように頭を下げて立ち、両手を胸の前で組んでおられた。祈りを捧げているのだと思い、私は黙って立っていたが、やがて彼の前に進み出て言った。

「父よ！　私たちを祝福してください。民は、もう三日三晩も柱を取り囲み、あなたからの祝福を待っているのですから。」しかし、彼は私に答えなかった。そこで私は再び彼に言った。

「父よ、なぜ悲しみに沈むこの息子に答えてくださらないのですか？　まさか私が何かであなたを怒らせてしまったのでしょうか？　どうか御手を差し伸べてください。そうすれば、その御手に口づけをさせてください。」

しかし、返答はなかった。彼の前に半時間ほど立ち尽くした後、私は疑念を抱き、こう考えた。「彼はすでに主のもとへ旅立ったのではないか？」私は耳を彼に近づけたが、息遣いは聞こえず、ただ、あたかも様々な芳香から漂うかのような強い香りが、彼の体から立ち上っていた。

その時、彼が主のもとで安らかに眠りについたことを悟り、私は悲しみに打ちひしがれ、苦々しく泣いた。そして彼の元へ近づき、その遺骨を収めて隠し、彼の目、顎鬚、口、そして手を口づけしながら、こう言った。

「父よ、あなたは私を誰に委ねて行かれるのですか？　あなたの甘美な教えをどこで聞くことができるでしょう？　あなたの天使のような語りかけに、どこで満たされることができるでしょう？　あるいは、あなたの祝福を待ち望む民に、あなたについてどう答えればよいのでしょうか？　癒やしを求めてここに来る病人たちには、何と言えばよいのでしょうか？」　そして、あなたの柱が空っぽで、その上にあなたが灯としておられないのを見て、誰が涙を流さないでしょうか。また、遠くからあなたを求めてここへやって来る多くの人々が、あなたを見つけられなかったとき――彼らは泣き叫ばないでしょうか。ああ、私は悲しむべき者です！今、私はあなたを見ていますが、明日――右へ行こうと左へ行こうと――あなたを見つけることはできないでしょう！

こうして彼のために泣き、心の悲しみに沈んでいると、私はうたた寝をしてしまった。すると、尊い方が太陽のように現れ、こう言われた。

「私はこの柱も、この場所も、この祝福された山も離れることはない。降りて行って、民に祝福を与えなさい。私はすでに安らぎを得たからだ。主はそう望まれたのだ。また、噂が広まらないよう、彼らにはこのことを話してはならない。しかし、私のことをアンティオキアに早急に知らせなさい。　あなたには、この地で奉仕することがふさわしい。主はあなたの労苦に応じて報いてくださるだろう。

そして私は眠りから覚め、震えながら言った。「父よ、あなたの聖なる安息のうちに、私を忘れないでください」――そして彼の足元にひれ伏し、その聖なる足に口づけをし、彼の手を取って自分の目に当てながら、「父よ、私を祝福してください」と言い、再び激しく泣いた。　その後、立ち上がって、この出来事を誰にも知られないよう涙を拭い、下りて行って、忠実な兄弟を密かにアンティオキアのマルティリウス総主教のもとへ[5940]、尊者のお亡くなりになったという知らせを伝えさせた。すると間もなく、総主教が三人の司教を伴って到着し、また、都市の統治者もその軍勢を率いてやって来た。　アンティオキアだけでなく、周辺のすべての町や村から大勢の人々が、また修道院からは蝋燭や香炉を手にした修道士たちが、さらに大勢のサラセン人も、まるで川のように次々と集まってきた。というのも、尊者のお亡くなりになったという知らせ　が、風に乗って至る所に広まっていたからである。　そして、総主教は司教たちと共に柱の上に登り、尊い遺骨を手に取り、下へ運び下ろして柱のそばに安置した。民衆は皆、泣き悲しんだ。さらには、多くの鳥たちが、誰の目にも見えるところで、鳴き声を上げながら柱の周りを飛び回り、あたかもこの世の灯火である聖人の死を悼んでいるかのようであった。民衆の嗚咽は七スタディオン先まで聞こえ[5941]、周辺の山々、野原、木々までもが、まるで人々と共に嘆き、泣いているかのようであった。なぜなら、至る所で空気が重苦しく、暗い雲が漂っていたからである。　私は、聖遺物の前に現れた天使を見た。その顔は稲妻のようで、衣は雪のようであった。そして、彼と共に七人の長老たちが語り合っていた。彼らの声も聞こえたが、何が語られていたのかは理解できなかった。恐怖と戦慄が私を襲ったからである」。

尊者シメオンが世を去ったその日、彼の弟子であり、聖人の生涯を模範として歩んだ尊者ダニエルは――黒海の河口、コンスタンティノープル近郊で、自分もまた柱に登ろうとしていたその直前に、　――聖シメオンの柱があった方向から、地から天へと昇っていく無数の天の軍勢と、その真ん中で喜びに満ちて昇天していく聖シメオンの魂を目撃した。　そして、尊者ダニエルだけでなく、荒

[5940] マルティリウスは、456年から468年までアンティオキア総主教を務めた。

[5941] スタディオンは長さの単位で、約88サジェーンに相当する。7スタディオンは、約1.25ヴェルスタに相当する。

野からハルキドン公会議に招かれた至福のアウクセンティウスも[5942] 、当時ベタニヤに滞在していた際[5943]、同じ光景を目撃した。

聖シメオンの尊い遺骨が用意された担架に安置されたとき、総主教は祝福の記念として聖人の顎鬚から少しの毛を採取しようと手を伸ばしたが、その瞬間、彼の手は乾いてしまった。そして、皆が彼のために神と神の御心に適う者に熱心に祈りを捧げた後になって初めて、総主教の手は元通りになった。 聖シメオンの尊い遺骨を携え、詩篇を歌いながらアンティオキアへと運ぶと、街中の人々が迎えに出た。 そこには、四十歳ほどの耳が聞こえず、口もきけない男がいた。彼が聖人の聖遺体を目にした途端、耳と言葉の束縛が解け、聖遺物の前にひれ伏して、「神のしもべよ、あなたは祝福をもたらしてくださった。あなたの到来が私を癒やしてくれたのだ」と叫んだ。

アンティオキアの住民たちは、金や銀よりも尊い聖人の遺体を受け取り、それを大総主教座教会[5944] へと運び、その棺の周りでは多くの奇跡と癒しが起こった。数年後、聖シメオン・ストルプニクに捧げられた教会が建立され、彼の聖遺骨はそこへ移された。

尊者シメオンは、レウス大帝の治世[5945] 、その治世の4年目にこの世を去った。 これは西暦460年のことである。皇帝レオはアンティオキアの人々に使者を送り、聖人の遺骨をコンスタンティノープルへ移送するために引き渡すよう求めた。しかし、彼らはそのような守護者を失いたくなかったため、皇帝の使者にこう答えた。

「わが都には石の城壁がない。その一部は王の怒りによって荒廃し、また一部は大地震によって崩壊してしまったからである[5946] 。だからこそ、私たちは聖シメオンの聖遺体をこの地へ運び込んだのだ。それが私たちにとって城壁となり、守りとなるように[5947] 。」

また、聖シメオンの柱があったその場所には、彼の名にちなんで美しい十字形の教会が建てられ、大きな修道院が設けられた[5948] 。そして、聖人は、弟子アントニウスに幻視の中で語った「自分の場所を離れない」という約束を果たした。なぜなら、そこでは奇跡や病人の癒やしが絶えることがなかったからである。 そして、彼の記念日には毎年、柱の上に大きな星が現れ、国中を照らし出した。その星の出現については、多くの歴史家、とりわけ自らの目でそれを目撃したエヴァグリオス・スコラスティコス[5949] が証言している。 同エヴァグリオスは、この聖地が女性には立ち入り禁止であり、女性の足が敷居に触れることのないようあらゆる手段を講じて守られていたと記している。その敷居を跨ぐことは、聖人の母でさえ許されなかった。 ある女性が、正体を知られずに聖シメオンの教会に入るために男装をしたが、教会の敷居に触れた途端、 仰向けに倒れて死んでしまったと伝えられている。 ニキフォロス[5950] が記しているように、たとえ女性がそこを訪れたとしても、彼女たち

[5942] カルキドン公会議（第4回全地公会議）は451年に開催された。

[5943] ベタニヤ――エルサレムの南東、2ヴェルスタ強の距離にあり、オリーブ山の麓にある村。

[5944] 東方における「大教会」とは、各総主教区にあり、総主教自らがそこで礼拝を執り行うために指定された教会を指す。

[5945] レウス大帝は457年から474年まで在位した。

[5946] ここでいうのは、もちろんシリアのアンティオキアであり、かつてはシリア国家の壮麗な首都であったが、現在はトルコ・アジア側の貧しい小さな町となっている。

[5947] 聖シメオンの聖遺物の一部は、その後、尊者ダニエル・ストルプニクの祈りによって、彼のもとに移された。このことは、同聖人の伝記（12月11日）にも記されている。

[5948] 8世紀には、聖ヨハネス・ダマスコスによって聖シメオンへのカノンが作曲され、また、ゲルマン総主教から、教会は同聖人を称える聖歌を受け入れた。

[5949] 6世紀に生きたエヴァグリオス・スコラスティコスは、『教会史』を著した。

[5950] 14世紀に生きたニキフォロス・カリストスは、『教会史』を著した。

はやはり柵に近づくことを敢えてせず、少し離れた場所に立ち、柱を見つめながら祈りを捧げていた。

そして、信仰をもって訪れた者たちは皆、聖人の恵みを授かり、助けや様々な癒やしを受け、喜びをもって帰っていった。父と子と聖霊、三位一体の唯一の神に感謝し、その神に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と賛美と礼拝を捧げる。アーメン。

ルガからの言葉[5951]

修道者の姿を取り去ってこの世へ去ったが、聖シメオンを通じて再びその姿に身を包み、救われたディアコノス・ミナについて

ゲオルギー・ライフスキー（[5952] ）が、かつてそこで助祭を務めていたミナという名の兄弟について、次のように語ってくれた。

「彼は修道院を去った。彼に何が起きたのかは知らないが、ただ修道者の身分を捨て、一般の信徒（平信徒）となった。　それから多くの日が過ぎ、彼は神の都アンティオキアへと向かっていたが、セレウキア[5953] を通り過ぎたとき、遠くに聖シメオン・ストルプニクの修道院を目にして、心の中でこう言った。「行ってみよう、偉大なるシメオンを見てみよう。私は彼を一度も見たことがないのだから」。　彼が柱に近づき、聖シメオンに姿が見えるほどになったとき、シメオンは神から、ミナが修道士であり、助祭の務めを果たしていたことを知らされた。そして、自分の侍者呼び寄せ、こう言った。

「はさみをここに持って来い。」

従者が持ってきた。シメオンは彼に言った。

「主は祝福された。この者を剃れ」と、ミナを指さした。柱の周りには大勢の人が立っていた。

ミナは、聖人の言葉に驚き、大きな畏れに包まれたが、神が長老に自分のことを明かされたことを悟り、少しも反論しなかった。そして、彼の剃髪が終わると、偉大なるシメオンは彼に言った。「祈りを捧げなさい、助祭よ」。彼が祈りを捧げると、聖人は彼に言った。「あなたが来た場所であるライフへ行きなさい」。

すると、その者が「父たちからの恥辱には耐えられない」と言い出したとき、シメオンは彼にこう言った。

「私を信じてくれ、わが子よ。今起こったことについて、お前には何の恥もない。長老たちは平穏のうちにあなたを受け入れ、あなたの帰還を喜び、楽しみとするだろう。そして知っておきなさい。神はあなたにしるしを示される。それによって、神があなたの罪を赦されたことを知るだろう。神の恵みは計り知れないのだから。」

彼がライフに到着すると、長老たちは両手を広げて彼を迎え入れ、彼を助祭の位にとどめた。ある日曜日のこと、彼が偉大なる神であり、我らの救い主イエス・キリストの命を与える御血を運ん

[5951] 『霊の牧場』は、修道士ヨハネス・モスカによる著作であり、東方における隠者たちの生涯に関する伝承が収められている。

[5952] ライファ――シナイ半島の東岸にある集落。

[5953] セレウキア――シリアの海辺の都市で、アンティオキアの西、地中海沿岸のオロンテス川の河口に位置する。

でいたとき、突然、彼の目が飛び出した。そして、このしるしによって、長老たちは、聖シメオンの言葉「[5954]」の通り、主が彼の罪を赦されたことを悟った。

聖シメオンが長老に対して行った奇跡

ある時、ある長老が教会の玄関に座って聖福音書を読んでいた。すると、邪悪な霊が暗く陰鬱な雲の姿となって彼に近づき、修道士の頭巾のように彼の頭を包み込んだ。すると、彼の目の前の光は消え、理性を失い、全身の骨が脱力して、話すこともできなくなってしまった。　中に入った者たちは、彼が死んだように横たわっているのを見つけた。彼はその病状のまま九年間を過ごし、誰かが手伝ってくれない限り、体を反対側に向けることさえできなかった。　彼の家族は、聖シメオンについて聞き及ぶと、病人を寝台に乗せて聖人のもとへ向かったが、修道院まであと三ポプリシュのところで、休息のために立ち止まった。そして、祈りを捧げていた聖シメオンには、その長老のことについて啓示が与えられた。真夜中、聖人は弟子の一人を呼び寄せ、こう言った。

「ここから水を汲んで、急いで行きなさい。ベッドに運ばれているある長老に出会うだろう。その長老にこの水を振りかけ、『罪深いシメオンがあなたにこう告げる。我らの主イエス・キリストの御名によって、起き上がり、そのベッドを離れ、自分の足で私のところへ来なさい』と伝えなさい。」

弟子は行って、聖人の言葉通りにした。すると、長老はすっかり元気を取り戻して立ち上がり、聖人の元へ来て、その足元にひれ伏した。

聖人は彼にこう言った。

「立ちなさい、恐れることはない！　悪魔が九年間もあなたに苦しみを与え続けたとはいえ、神の慈愛は、あなたが完全に滅びるまで見捨てなかったのだ。　あなたが神への畏れを持たず、聖なる祭壇において聖なるものを冒涜するような振る舞いをしたこと、また真理が明らかにされる前に、密かに隣人を非難する中傷者たちの言葉に耳を傾け、罪のない人々を中傷し、彼らを聖体の拝領から締め出したこと、そしてそうした行いによって、人を愛する神を大いに悲しませ、　一方で悪魔を大いに喜ばせた――それゆえ、悪魔はあなたに対して力を得たのである。しかし、神の愛と憐れみは、あなたに対してさらに増し加わった。　あなたが破門によって悲しませた人々は、今や重病に伏している。彼らは、あなたが回復して彼らを赦してくれるよう、あなたのために祈っている。神があなたに憐れみを示されたように、あなたも彼らに憐れみを示し、ここから土を採取して、彼らの上に振りかけなさい。

そこで、長老は喜びながら神に感謝し、聖人が命じたとおりにした。すると、彼らはたちまち癒やされ、神を賛美した[5955]。

[5954] 助祭ミナの出来事は、次のように理解することができる。何らかの理由により、ミナは独断で修道生活と助祭職を離れ、平信徒として過ごしていた。彼によるこの独断は、もちろん重大な罪であったが、同時に、教会による裁きを受けるまでは、彼はまだ助祭職の恵みを失った者とみなされることはなかった。　これに従い、尊者のお命によりミナに対して行われた剃髪式も、またミナによる祈り、すなわちエクテニアの唱和も、彼が独断で放棄してしまった修道生活と助祭の務めについて、ミナに象徴的かつ目に見える形で思い出させるものに過ぎなかった。　この喚起を通じて、聖人は明らかにミーナに悔い改めを促そうとしたのであり、さらに、おそらくは、ミーナが助祭の務めを継続できるかどうかという疑念を修道院の兄弟たちから払拭しようとしたのである。　一方、ミナの目から涙が溢れ出たことについては、それはミナが自らの罪のために神ご自身によって罰せられたことを意味し、したがって、（修道院の規律や教会の規則によれば）これ以上の罰を受けることはないことを示していた。

[5955] この物語で注目すべきは、誹謗中傷によって長老から破門された者たちが、無実でありながら聖体拝領を禁じられたにもかかわらず、重い病に襲われたことである。しかも彼ら自身、あたかも自らの無実を忘れたかのように、自分たちを破門した者の回復を祈り、彼から赦しを得て、聖体拝領に与る機会を得ようとしたのである。　このように、聖体の力は、たとえその剥奪が被剥奪者の過失によるものではなかったとしても、彼にとって無傷で済むことなどないのだ！

トロパリオ、第1声：

忍耐の柱であられた、熱心な先祖の尊者よ。苦難におけるヨブ、試練におけるヨセフ、そして肉体の中にありながら霊的な生活を送られたシメオン、我らの父よ。キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第2調：

高きものを求め、高きものと交わり、火の戦車の柱となられた。それゆえ、尊き者よ、あなたは天使たちと語り合う者となり、彼らと共に、私たちすべてのために絶えずキリスト神に祈っておられる。

義人イエス・ナヴィンの記念日

記念日：9月1日

ヨシュアは、モーセの後を継いでユダヤ民族の指導者となった。彼は民全員を率いて、モーセが紅海を渡ったのと同様に、乾いたヨルダン川を渡った（ヨシュア記 3:14–17；出エジプト記 14:1–31）。 彼は天の軍勢の統率者である大天使ミカエルと顔を合わせて会いました（ヨシュア記 5:13–16）。また、ラッパの音によって、 エリコの城壁を崩壊させました（ヨシュア記 6:1–26）[5956]。 ある敵との戦いの際、彼は敵を完全に打ち破るまで太陽を止めた（ヨシュア記 10:12–14）[5957] 。民を約束の地へと導き入れた後、ヨシュアはくじ引きによってその地をユダヤ人たちの間に分配し、110歳の時に安らかに息を引き取った[5958]。

ミアシンの修道院にある至聖なる聖母マリア大聖堂の記念日

9月1日の記念日

[5956] エリコという町は、ヨルダン川の西岸、実り豊かな谷間にあり、ヤシの木が溢れる果樹園に囲まれていたため、「ヤシの町」と呼ばれていた。そこはカナン地方の王都であり、豊かで堅固な町で、広い城壁に囲まれていた。 ユダヤ人が約束の地に入った際、この町は最初に征服の対象となり、奇跡的な方法で陥落した。現在、古代のエリコ付近には、リハという小さく、貧しく、不潔な村があり、そこには数軒の粗末な小屋と、みすぼらしい住民たちが暮らしている。

[5957] イエスの祈りによって日が奇跡的に延びたという物語については、ヨシュア記10:12–14を参照のこと。

[5958] ユダヤ人の指導者としてのヨシュア・ナヴィンの活動は、彼に帰せられる『ヨシュア記』に詳細に記されている。 この書は聖書においてモーセ五書の直後に置かれており、モーセの書で始まった物語の続きとして、約束の地の征服、イスラエルの各部族へのその分割、そしてヨシュアの死について語り、紀元前1556年から1550年までの期間を網羅している。イエシュア・ナヴィンの書には、型としての預言的意義もある。 使徒パウロはヨシュアをイエス・キリストの型と呼んでいる（ヘブライ人への手紙4:8–9参照）。彼がイスラエルを約束の地へと導いたように、キリストもまた、御自身を信じる者たちを天の御国における嗣業へと導かれる。ユダヤ人たちのヨルダン川渡河——これこそが、私たちの洗礼の型である。 ラアブ——異邦人でありながら救い主の祖母となった女性（マタイ1:5参照）——は、キリストの教会に入った異邦人の型である。教会の礼拝では、ヨシュア記から3つの聖句が朗読される（1月5日、大土曜日、および天使たちを称える祝日）。

当時、イコノボリスト（聖像破壊派）の異端[5959] が、自らも最初のイコノボリストであった皇帝レウ・イサウルス[5960] の加担により、東方において著しく勢力を強めていた中、ミアシンの修道院に安置されていた聖母マリアの奇跡の聖像は、アズロヴォ湖に投げ込まれた。　ミアシンの修道院が具体的にどこにあったかについては、メリティノの司教聖アカキオスの伝記に記されている。この伝記には、次のように書かれている。　「アルメニアの都市メリティナ（[5961] ）から18ポプリシュ（[5962] ）の距離に、ミアシニという名のギリシャ人の集落があった。そこは、両側に遠くまで続く二つの丘に挟まれた、非常に美しく、平坦で広々とした谷であった。　この谷の間を、東に向かって流れの速く清らかなアズール川が流れ、その周囲の谷全体を湖で満たしていた。ここ、とりわけ美しい場所に、偶像崇拝の神殿と、素晴らしい実を結ぶ木々の庭園があった。この庭園では、忌まわしい偶像への生贄が捧げられていた。　聖アカキウス司教はこの場所を偶像崇拝の汚れから清め、ここに聖母マリアの名を冠した教会を建立した。新しく建てられた教会を奉献した後、聖アカキウスは、かつて悪霊たちが棲んでいたその場所を、聖なる天使たちの住まいとした。　かつて悪魔を称えて血の犠牲が捧げられていたその場所で、真の神への清らかな「無血の犠牲」が捧げられるようになり、至聖なる神の母のイコンから奇跡が起こるようになった」。このように、その地名にちなんでミアシンスキーと呼ばれる修道院は、前述の至聖なる神の母の教会のそばに建立されたことが明らかである。　聖母マリアのイコンが偶像破壊者たちによって湖に投げ込まれてから、長い年月が経過していた。敬虔なミハイル王とその母テオドラの治世中[5963] 、そのイコンは湖の表面に浮上し、9月1日に信者たちによって発見されたが、長い間水中にあったにもかかわらず、全く損傷を受けていなかった。　この奇跡的な出来事 を記念して、その修道院では毎年、無原罪の御母、聖母マリア[5964] を称え、その栄光を讃える祝祭が行われていた。

トロパリオ、第1声：

喜びなさい、喜びに満ちた聖母マリアよ、人類の避難所であり、執り成し手よ。あなたから、世界の救い主が受肉されたからです。あなたは唯一の母であり処女、常に祝福され、至高に賛美される方です。キリスト・神に、全宇宙に平和を授けてくださるようお祈りください。

40人の断食を行う聖処女たちと、その師であるアムムンの記念日

記念日：9月1日

[5959] イコン崇敬を偶像崇拝であるとして拒絶し、迫害した異端者たち。同様に、聖遺物の崇敬も偶像崇拝と見なした。 偶像破壊の異端は、8世紀初頭に東方教会で発生し、長い間東方において支配的であったが、ついに787年にニカイアで開催された第7回全地公会議で非難された。偶像崇拝は、842年のコンスタンティノープル公会議において最終的に復活した。

[5960] 716年から741年まで在位した。

[5961] ローマ皇帝トラヤヌスによって建設された。同名の国の首都であり、かつて小アルメニアの一部を構成していたカッパドキアに位置していた。

[5962] ポプリシュの1単位はおよそ690サジェンに相当したため、18ポプリシュは約23ヴェルストとなる。

[5963] ビザンツ皇帝テオフィロス（偶像破壊者）の妻。 同皇帝の死後、息子のミカイル3世（在位842年～867年）の治世下、842年のコンスタンティノープル公会議において、聖像崇拝が復活し、四旬節の最初の週に行われる正教の祝典が制定された。

[5964] この出来事は、コンスタンティノープルのハルコプラティオス聖母教会でも祝われた。17世紀のスラブ語の手書きおよび印刷された聖人暦において、このイコンが発見された年は6364年と記されている。　世界の創造からキリストの降誕まで、一般に受け入れられている暦法によれば5508年が経過したが、17世紀の印刷された聖人暦の歴史的年表では、聖母の誕生からキリストの降誕までの年数が5508年ではなく、　ちょうど5500年と数えられることが多いため、ここでは西暦856年ではなく、864年と理解すべきである。この頃（855～867年）、テオドラ皇后はすでに私生活を送っていた。

これらの聖なる処女たち[5965] は、マケドニアのアドリアノポリス[5966] の出身であり、助祭アムムンに教えを受けて、キリストを信じた。　その都市の統治者ヴァヴドは、彼女たちを裁判にかけるよう命じ、偶像を崇拝させるために多くの拷問を加えた。彼女たちは神に祈ると、突然、偶像の祭司が不可視の力によって空中に持ち上げられ、長い間その状態が続いた後、地面に落ちて死んだ。　その後、迫害者は聖アムンを絞首刑に処し、肋骨を削るよう命じた。さらに、彼の頭に灼熱の兜をかぶせたが、聖なる殉教者は奇跡的にそこから救われた。そこで、聖アムンは聖なる乙女たちと共に、別の迫害者が待つイラクリオ[5967] へと送られた。 その拷問官の命令により、彼女たちのうち十人は火の中に投げ込まれ、八人は師と共に剣で斬り殺された。中には、口や心臓を剣で刺されて息を引き取った者もいた。六人はナイフで刺し殺され、残りの六人は、口の中に赤熱した鉄を詰め込まれた後、主のもとへ旅立った。

聖殉教者カリスタとその実の兄弟エヴォドおよびエルモゲンの記念日

記念日：9月1日

これらの聖なる殉教者たち[5968] は、聖なる洗礼の秘跡によって霊的な再生を得た後、異教の統治者の前でキリスト教徒であるとして告発された。彼らがキリストへの信仰を揺るぎなく告白しているのを見た統治者は、彼らを剣による斬首に処し、彼らは殉教の業を成し遂げて、主のもとへ旅立った。

9月15日

9月2日（旧暦）

聖殉教者ママンタの生涯と受難

記念日：9月2日

キリストの聖殉教者ママントは、パフラゴニア[5969] で生まれた。 その両親であるテオドトスとルフィナは高貴な家柄の人々であった。二人はともにパトリキウス家の出身であり[5970] 、尊敬され、裕福で、敬虔さにおいて際立っていた。彼らはキリストへの信仰と、キリストに対する熱烈な愛を長く胸に秘めておくことはできず、人々の前で公然と自らの信仰を告白し、多くの人々をキリストへと導いた。 そのため、彼らのことはガングラ市の総督アレクサンドロス[5971] に密告された。この総督に

[5965] 311年から324年までコンスタンティヌス大帝と共同統治を行ったリキニウス帝の治世下で迫害を受けた。

[5966] マケドニア――ギリシャの北に位置するビザンツ帝国の属州。アドリアノープルは当初、ハドリアヌス帝によって建設され、その名にちなんで名付けられた。コンスタンティノープルからほど近く、現在の東ルメリアに位置する。かつては極めて重要な都市であったが、近年は衰退している。 人口の半分はブルガリア人とセルビア人である。

[5967] イラクリア――マルマラ海の沿岸にある都市。

[5968] 小アジア北西部のニコメディア、ディオクレティアヌス帝の居城で殉教した。 これらの聖人たちの没年については正確には知られていない。一部では、ディオクレティアヌスの迫害（4世紀初頭）の時期とされている。11世紀のアレクシオス総主教による『ストゥディオス修道院規則』には、彼らの聖遺物がストゥディオス修道院に安置されており、9月1日に礼拝が執り行われていたと記されている。

[5969] パフラゴニア――小アジアの南部に位置していたローマ帝国の属州。

[5970] ローマ帝国における最高階級は、現代の貴族階級に相当し、「パトリキウス」と呼ばれていた。

[5971] ガングラは、パフラゴニアの主要都市である。

は、王から「あらゆる手段を講じて異教の神々への崇拝を広め、確立し、キリスト教徒やこの王の命令に従わない者すべてを拷問し、殺害せよ」という命令が下されていた。

アレクサンドロスはテオドトスを裁判のために呼び出し、偶像への生贄を捧げるよう強要した。しかし、テオドトスは総督の言葉を聞くことさえ拒んだ。アレクサンドロスは、この不服従者を直ちに拷問にかけようとしたが、テオドトスの高貴な家柄を考慮して、それを控えた。　というのも、王からの特別な許可なしに、パトリキウス（貴族）の子孫を辱め、拷問する権利は彼にはなかったからである。そのため、アレクサンドルはテオドトスをカッパドキアのケサリア[5972]へ、総督ファウストのもとへ送り返した。この総督は、その不敬虔な邪悪さに熱心であるほど、キリスト教徒に対して残酷であった。　テオドトスを見るやいなや、ファウストは直ちに彼を牢獄に閉じ込めた。テオドトスの妻である祝福されたルフィナも、当時妊娠中であったにもかかわらず、夫の後を追って牢獄に入り、そこでキリストのために苦難に耐えた。　テオドトスは自らの肉体の弱さを自覚し、拷問者の凄まじい残虐さを見ていたが、敬虔さに反するいかなる罪も犯すよりは、むしろ死を選ぶことを望んだ。そして、これから待ち受ける過酷な拷問に耐える力が自分には足りないのではないかと恐れ、主に向かって熱心に祈りを捧げた。

「主よ、力の神よ」とテオドトは祈った。「あなたの愛する御子の父よ！　御名のために、私をこの牢獄に投じられることを許してくださったことを、私はあなたを賛美し、栄光を帰します。しかし、主よ、お願いいたします。あなたは私の弱さをご存知です。どうかこの牢獄で私の霊をお受け取りください。そうすれば、私の敵が私を嘲ることはありません。

「すべての人の心を造り……すべての行いを深く見通される」（詩編32:15）神は、御自身の忠実なしもべの祈りを聞き入れ、まもなく彼に幸いな最期を授けられた。神は彼の魂を肉体の牢獄から解き放ち、それを天の明るい住まいへと移されたのである。　一方、テオドトスの妻である至福のルフィナは、牢獄での困窮と苦難に耐え、夫への深い悲しみに打ちひしがれながら、時期尚早に息子を出産した。新生児と、息絶えた夫の遺体を見つめながら、彼女は心を痛め、涙を流して神にこう祈った。

「神よ、人を創造し、その肋骨から妻を造られた方よ、どうか私も、夫が歩んだのと同じ道を歩むことができますように。この儚い生から私を解き放ち、あなたの永遠の御国にお迎えください！　そして、生まれたばかりのこの赤ん坊を、あなたが御存知の通り、あなたご自身で育ててください！　どうか彼にとって父であり、母であり、その命の守り手となってください！

このように悲しみの中で神に呼びかけたこの高潔で聖なる妻は、神に聞き届けられ、肉体の束縛から解き放たれ、魂を主の御手に委ねて、永遠の自由へと旅立った。一方、その幼子は、亡くなった両親の間に生き残った。

その時、*「主は幼子たちを守られる」*（詩編114:5）と、主はケサレアに住むアミヤという名の、高貴で敬虔な女性の一人に、この出来事を明らかにされることをお許しになった。　主は夢の幻の中で、御自身の天使を通じて、彼女に命じられた。牢獄で息を引き取った聖徒たちの遺体を、その管理者に求め、彼らを尊厳をもって葬り、またその幼児を自分のもとに引き取り、実の息子のように育て上げるようにと。　目を覚ますと、アミヤは主の命じられたことを急いで実行に移し、看守に、牢獄から亡くなった囚人たちの遺体を引き取る許可を求めた。神は看守の冷酷な心を憐れみに導かれ、看守はその高潔な女性の願いを拒むことはなかった。　こうしてアミヤは牢獄に入り、隣り合って横たわっている二人の囚人の遺体を見つけ、その真ん中には――　――美しく、生き生きとした赤ん坊がいた。聖なる二人の遺体を受け取ると、彼女はそれらを自分の庭に丁重に葬り、赤ん坊を自分の

[5972] 「ケサリア」という名の都市はいくつか存在した。ローマ帝国のカッパドキア属州の主要都市であったケサリアは、後に地震によって破壊された。

もとに引き取った。彼女は子供のない未亡人であり、貞節に生涯を送っていた。　その赤ん坊を自分の息子のように愛し、キリスト教の教えに従って育てた。

赤ちゃんは成長したが、5歳になるまで一言も話さなかった。 彼にとっていわば第二の母となったアミアに、彼が最初に口にした言葉は「ママ」（ギリシャ語で「乳」または「母」を意味する）であり、この言葉から彼はママントと名付けられた。アミアは彼を文字を学ぶために学校へ通わせたところ、彼はまもなく同年代の子供たちをはるかに凌駕するほどになり、誰もがその知性に驚嘆した。

当時、ローマでは不敬虔なアウレリアヌス[5973] が統治していた。彼はすべての人々に偶像崇拝を強要し、大人の男女だけでなく幼い少年たちまでもが対象となっていた。しかも、彼は子供たちに特に注意を向けていた。彼らは幼く分別がないため、容易に惑わされ、あらゆる悪事へと導かれるだろうと期待していたからである。　さらに、この不敬虔な王は、幼い頃から生贄の肉を味わうことに慣れ親しんだ子供たちは、年老いた頃にはより熱心な偶像崇拝者になると考えていた。そのため、彼は様々な甘言を用いて、子供たちを自らの不敬虔な道へと導いた。　少年たちの多く、さらには若者たちでさえ、実際にその誘惑に屈し、王の意志に従った。しかし、学校でママントの仲間だった者たちは、彼の教えに従い、王の命令には従わなかった。というのも、ママントは幼い頃から「*人にとっては白髪に相当する知恵と、老齢にふさわしい汚れなき生活*」（箴言4:9）を備えていたため、無情で無力な異教の神々の無価値さを仲間に証明し、自らも崇拝していた唯一の真の神を知り、その神に霊的ないけにえ――砕かれた霊と謙遜な心（詩篇50:19）――を捧げるよう彼らに教えた。

その頃、ファウストの後任として、王からケサレアにデモクリトという名の別の総督が派遣された。彼は自らの不義で不敬虔な信仰の熱烈な擁護者であり、まるでキリスト教徒への迫害と殺戮を息づいているかのようであった。　彼のもとに、ママンテについて、彼自身が神々に拝礼しないだけでなく、共に学んでいる他の少年たちをも堕落させ、キリスト教の信仰を教えているという報告がもたらされた。　当時、ママンテは生後15年目を迎えていた。彼はすでに再び孤児となっていた。というのも、彼の第二の母であるアミアが、養子である聖ママンテを唯一の相続人として多大な財産を残し、神を愛する者たちに用意された天の富へと旅立ったからである。

デモクリトスはママントの噂を聞きつけ、彼を呼び寄せた。そして、彼が連れて来られると、まず第一に、彼がキリスト教徒であるかどうか、また、彼自身が神々を崇拝しないだけでなく、仲間たちを堕落させ、王の命令に従わないよう教えているというのは本当なのかと尋ねた。

若きママントは、まるで完成された成熟した男であるかのように、恐れを知らずにこう答えた。

「私は、あなたの知恵など何の価値もないと考える者そのものです。　貴方は正しい道から逸れ、あまりにも深い闇の中をさまよっているため、真理の光さえ直視することができません。真の、生ける神を見捨て、悪霊に身を委ね、魂も耳も持たない偶像にひれ伏しているのです。しかし、私は決して私のキリストから離れることはなく、できる限り多くの人々をキリストへと導こうと努めています。

ママントのこの大胆不敵な返答に驚愕したデモクリトスは激怒し、直ちに彼を彼らの邪悪な神セラピスの神殿[5974] へ連行し、そこで力ずくで偶像への生贄を捧げさせるよう命じた。しかしママントは、統治者の怒りを微塵も恐れず、冷静にこう反論した。

「私を侮辱してはならない。私は、高貴な元老院議員の家系に生まれた者なのだ。」

[5973] アウレリアヌス帝は270年から275年まで在位した。

[5974] セラピスは、玉座に座り、手に笏を持ち、足元に鷲を従えた男性の姿で描かれる異教の神であり、頭上には豊穣の象徴である籠を載せていた。この神は、自然の男性的かつ生殖的な力を体現していた。殉教者ママンタの時代、ローマ帝国においてこの偶像への崇拝は特に広まっていた。

そこでデモクリトスは、周囲の人々にママントの身元を尋ね、彼が古代ローマの貴族の家系に生まれ、高貴で裕福な女性アミアに育てられ、その莫大な財産の相続人にされていたことを知ると、彼を拷問にかけることをためらった。実際、彼にはその権利がなかったからである。 そこで、彼に鉄の足枷をはめ、当時エガスの町に滞在していたアウレリアヌス王のもとへ送り[5975] 、手紙の中でママンタに関するすべてを説明した。 王はデモクリトスの手紙を受け取り、 それを読み終えると、直ちに若きママンタを自分の元へ連れてくるよう命じた。殉教者が王の前に現れると、王は脅しや甘言を交え、贈り物や栄誉を約束して、あらゆる手段で彼を自分の不敬虔な道へと誘い込もうとし、こう言った。

「美しい若者よ、もしあなたが偉大なるセラピスに近づき、彼に犠牲を捧げるなら、あなたは私たちと共に宮殿で暮らし、王のように育てられ、誰もがあなたを敬い称賛し、まことに幸福になるだろう。しかし、もし私の言うことを聞かなければ、残酷な死を遂げることになる。」

しかし、若きママントは勇敢にこう答えた。

「おお、王よ！ あなたがたが神として崇める、魂なき偶像に私がひれ伏すことなど、決してありえません。生ける神ではなく、木や無感覚な石にひれ伏すとは、なんと愚かなことでしょうか！」 お世辞で私を惑わすのはやめてください。あなたが私に恩恵を与えていると思っている時、実は私を苦しめているのです。そして、私を苦しめている時こそ、あなたは私に恩恵を与えていることになるのです。 知っておきなさい。あなたが私に約束したすべての恩恵、贈り物、栄誉は、もし私がキリストの代わりにそれらを愛したならば、私にとって耐え難い苦しみとなるでしょう。しかし、キリストの御名のためにあなたが私に与えると約束する耐え難い苦しみは、私にとって大きな恩恵となるのです。なぜなら、私のキリストのための死は、いかなる栄誉や富よりも私にとって尊いからです。

こうして、聖ママントは王の前で恐れを知らずに語った。彼は若者の体にありながら、年老いた男の知恵と心を持っていた。なぜなら、神の力は、小さな少年でさえも、打ち負かすことのできないゴリアテに変えることができるからである[5976] 、*「あなたは乳飲み子や幼児の口から賛美を築かれた」*（詩編8:3）とあり、幼い子でさえ、老人たちよりも深く理解できるほどの知恵を授かるのである。これらすべてが、若きママントに実現した。不義な王の言葉も彼を説得できず、贈り物も彼を惑わせず、拷問も彼を恐れさせなかった。彼は、その拷問を、偉大な栄誉よりも大きな喜びをもって受け入れたのである。

激怒した拷問官は、直ちに容赦なく彼を打ち据えるよう命じた。しかし、聖ママントは、まるで痛みを全く感じていないかのように、忍耐強く拷問に耐えた。

王は彼にこう言った：

「神々に生贄を捧げることを約束してくれ。そうすれば、すぐに苦しみから解放されるだろう。」

すると、殉教者はこう答えた。

「たとえ私に一万倍もの傷を負わせようとも、私は心でも口でも、私の神であり王であるイエス・キリストを否定することはない。 これらの傷は、私を愛する主と結びつけてくれる。そして、私は拷問者たちの手が疲れることのないよう願う。なぜなら、彼らが私を打てば打つほど、キリストという模範者からより多くの恵みを受けるからだ。

アウレリアヌスは、ママントが苦しみを決して恐れていないのを見て、ろうそくの火で彼の体を焼くよう命じた。しかし、火はまるで殉教者の体を恥じるかのように、彼には触れず、むしろ拷問

[5975] エギの町は、小アジアのキリキア州、イッソス湾のほとりに位置していた。

[5976] ゴリアテは、聖書に登場する有名な巨人であり、ペリシテ人であった。彼は無敵と見なされていたが、ダビデとの一騎打ちで倒された（サムエル記上 17:1–58）。

者たちの顔へと向けられた。　王は怒りに燃え上がり、キリストの殉教者が物質的な炎にさらされた時よりもさらに激しい激怒に包まれた。なぜなら、殉教者が炎を全く意に介さないほど、拷問者の心は燃え上がっていたからである。そこで王は、聖ママントを石で打ち殺すよう命じた。　しかし、キリストへの愛に包まれた殉教者にとって、この苦しみは、あたかも誰かが香りのよい花を彼に降り注いでいるかのように、実に心地よいものであった。そこで王は、何をしてもしばらくは成功しないことを悟り、殉教者に死刑を宣告し、海に投げ込むよう命じた。　首に重い鉛の重りを縛り付けた王の家来たちは、彼を海へと連れて行った。しかし、ここでも主は御自分のしもべを見捨てられなかった。*「主は御自分の天使たちに、あなたを守れと命じられるからである」*（詩編90:11）。　海へ向かう途中、稲妻のように輝く主の天使が現れた。それを見た従者たちは、聖ママントを見捨て、恐怖に駆られて逃げ帰った。一方、天使は殉教者を抱き上げ、鉛の重りを解き、ケサリア近郊の荒野にある高い山へと導き、そこで暮らすよう命じた。

聖ママントは、荒野での生活を断食から始めた。その山で彼は四十日四十夜断食し、あたかも第二のモーセ（出エジプト記24:18）のように現れ、その手には新しい律法が与えられた。すなわち、天から声と杖が彼のもとに降りてきたのである。　この杖を受け取ったママントは、天からの命じに従い、それを地面に打ちつけると、たちまち地の深みから福音書が現れた。その後、彼は小さな教会を建て、その中で聖なる福音書を読みながら祈りを捧げた。　神の御命により、その荒野から獣たちが聖ママントのもとに集まってきた。まるで羊が羊飼いの元へ集まるように、そしてまるで知性ある生き物であるかのように、彼らは彼の言葉に耳を傾け、彼に従った。　彼の糧は野生の獣たちの乳であり、彼はそれを使ってチーズを作った――それは自分だけのためではなく、貧しい人々のためでもあった。なぜなら、たくさんのチーズを準備すると、彼はそれをケサリアの町へ運び、貧しい人々に配ったからである。

まもなく、ケサリア全土にママンテの噂が広まった。　その時、アレクサンドロス――前述の人物ではなく、別の者――が、当時カッパドキアの総督に任命されていた。彼は残酷で極めて邪悪な人物であり、ママントのすべてを知ると、彼を魔術師だと見なし、騎兵を砂漠へ派遣して彼を探し出し、自分の元へ連行させた。　山を下りてきた聖ママントは、自ら騎馬隊に出迎え、彼らが誰を探しているのか尋ねた。彼らは、山で羊を放牧している羊飼いだと勘違いし、こう答えた。

「この砂漠のどこかに住んでいるママントを探しているんだ。彼を知っているか、どこにいるか知っているか？」

「なぜ彼を探しているのですか？」とママントは尋ねた。

戦士たちはこう答えた。

「彼が魔術師だと総督に密告されたので、総督が彼を捕らえて拷問にかけるよう、私たちを遣わしたのです。」

すると、ママントは彼らにこう言った。

「友よ、彼について話してやろう。だがその前に、私の小屋に入って、少し疲れを癒やし、食事をとって休んでくれ。」

兵士たちは彼に従って小屋に入り、彼は彼らにチーズを振る舞った。彼らが食べ始めると、聖なる修行者に乳を搾られることに慣れた雌鹿や野生の山羊たちがやって来た。　ママントは乳を搾り終えると、戦士たちに飲むよう勧め、自身は祈りを捧げ始めた。すると、さらに多くの獣が集まってきた。それを見た戦士たちは怖がり、食べ物を放り出してママントのところへ駆け寄った。彼は彼らを落ち着かせ、それから自分がまさに彼らが探しているあのママントであると告げた。すると彼らは彼にこう言った。

「もしお前自身が総督のもとへ行きたいのなら、我々と共に来い。もし行きたくないのなら、我々だけを放してくれ。我々は、お前を連れて行くことはできないからだ。ただ、獣たちが我々を襲わないよう、お願いしたい。」

戦士たちを落ち着かせたママントは、彼らに先に行くよう命じた。

「行け」と彼は言った。「まずお前たちが先に行き、私はその後を一人でついていく。」

その場を離れた兵士たちは、城門でママントの到着を待っていた。彼らは、この驚くべき男の言葉を完全に信じており、彼について悪いことを考えることさえできなかったからだ。　一方、ママントはライオンを連れて、戦士たちの後を追った。彼が城門をくぐると、ライオンは城の外に残された。戦士たちはママントを捕らえ、総督アレクサンドルの前に引き出した。

総督は聖人を見ると、すぐに尋問を始めた。

「お前こそ、私が耳にしたあの魔術師か？」と彼は言った。

すると聖人はこう答えた。

「私はイエス・キリストのしもべです。キリストは、御自身を信じるすべての人に救いを与え、御心を行われる方であり、魔術師や呪術師たちを永遠の火に投げ込む方です。教えてください。なぜ私をここに呼び出したのですか？」

「それは」と総督は答えた。「お前がどのような魔術や呪文を用いて、あの野生の凶暴な獣たちをこれほどまでに従わせ、その群れの中に住み、また私が聞いたところによれば、まるで知性ある生き物であるかのようにそれらを支配しているのか、私には分からないからだ。」

聖ママントはこれに対し、こう言った。

「唯一にして生ける真の神に仕える者は、決して偶像崇拝者や悪人らと共に暮らすことなど受け入れない。それゆえ、私もまた、罪人たちの集落であなた方と共に暮らすよりは、砂漠で獣たちと共に暮らすことを選んだのだ。」　なぜなら、獣たちが私に馴れ、従うのは、あなたが考えているような魔術によるものでは決してない――私は魔術が何であるかさえ知らない――が、たとえ彼らが理性を持ち合わせない存在であっても、神を畏れ、神のしもべたちを敬うことを知っているからだ。しかし、あなた方は獣よりもはるかに理性を欠いている。なぜなら、真の神を崇めず、神の僕たちを辱め、慈悲もなく彼らを苦しめ、殺しているからだ。

総督はこのような言葉を聞いて激怒し、直ちに聖殉教者を絞首刑に処し、鞭打ち、鉄の爪でその肉体を削るよう命じた。　しかし、殉教者は、ひどく傷つけられながらも、まるで何の苦しみも感じていないかのように、この苦難を並外れた勇気をもって耐え抜いた。彼は叫びも呻きもせず、ただ感極まった様子で天を仰ぎ、そこから助けを待ち望んだ。そして、その助けは確かに与えられた。なぜなら、突然、天から彼に向かって声が響き渡り、こう告げたからである。

「勇気を出し、奮い立て、ママントよ！」

その声を、そこに立ち会っていた多くの信者たちが耳にし、彼らの信仰はさらに確固たるものとなった。聖ママントは、その声によって完全に勇気づけられ、苦痛のことなど微塵も考えなかった。聖人は長い間、体を鞭打たれるなどして拷問を受けた。ついに、総督が彼を焼き殺そうと企んでいた炉の準備が整うまでの間、彼は一時的に牢獄に投げ込まれた。　牢獄には他にも四十人ほどの囚人が収容されていた。彼らが飢え　と渇きで力尽きかけたとき、聖ママントは祈りを捧げた。すると、小さな窓から一羽の鳩が牢獄に飛び込んできた。その口には、真珠のように輝き、蜜よりも甘い食物をくわえていた。聖ママントの前にそれを置くと、鳩は飛び去っていった。　その食べ物は、かつて荒野で多くの民のために小さなパンが増えたように（マタイ14:19–20）、すべての囚人のために増えた。この奇跡の食べ物を口にした囚人たちは、力を取り戻した。　そして再び、聖ママントの祈りによって、真夜中に牢屋の扉が開き、すべての囚人たちは外へ出た。残ったのは聖ママントただ一人であった。やがて炉の炎が激しく燃え上がったとき、殉教者は牢屋から引き出され、その燃え盛る炉の中に投げ込まれた。　しかし、かつて三人の若者のためにバビロンの炉を潤した（ダニエル書3:49–50）神は、ママントのためにも火を潤し、燃え盛る炎のただ中で、御自分のしもべに涼をもたらされた。　殉教者は、その炉の中で神を賛美し、礼賛しながら、炉が完全に冷め、炭が灰になるまでの三日間、そこに留まった。三日後、総督はママントがまだ生きているのを見て驚き、こう言った。

「この魔術師の力は、果たしてそれほどまでに偉大で、火さえも彼に触れることができないというのか？」

一方、民衆の多くは、火が聖人に微塵も触れず、何の害も与えなかったのを見て、真の神を悟り、この奇跡を唯一の神に帰し、その力を賛美した。

しかし、狂気の総督は全能の神を知ることを望まず、殉教者を炉から引きずり出し、火が彼に害を及ぼしていないのを見て、これを魔術の仕業だと決めつけ、真理に対して多くの冒涜的な言葉を吐いた。ついに彼は、殉教者を野獣に食わせる刑に処した。 聖人はサーカスに連れて行かれ[5977]、飢えた雌熊が放たれた。しかし、熊は近づくと聖人にひれ伏し、その足元に横たわり、聖人の足を抱きしめた。次にヒョウが放たれたが、それもまた柔和に聖人の首を抱きしめ、顔に口づけをし、額から流れる汗を舐めた。　その時、聖人と共に荒野からやって来たあのライオンが駆けつけ、闘技場に飛び込むと、人間の声で（神が全能の御力を示すために、かつてバラムのロバにそうされたように、獣の口を開かれたのである）聖人に次のように語りかけた。

「あなたは、山で私を牧してくれた私の羊飼いである！」

そう言い終えると、その獅子はたちまち、そこにいた数え切れないほどの大群衆――ギリシャ人もユダヤ人も、大人も子供も――に襲いかかった。　神の御心により、サーカスの扉は自然に閉ざされ、そこで獣は多くの民を食い散らしたため、総督自身もかろうじて逃れるのが精一杯であった。サーカスにいた者たちのうち、猛烈な勢いで皆を捕らえて引き裂く獅子の猛威を免れた者はごくわずかであった。しかし、聖人は獅子をなだめ、荒野へと追い返した。　総督は再び聖人を捕らえ、しばらくの間牢獄に閉じ込めた後、再びサーカスに連れ出し、最も獰猛な獅子を彼に放った。しかし、この獅子も瞬く間に従順になり、聖人の足元に横たわった。これを見た民衆は怒りに駆られ、聖人に向かって歯ぎしりし、総督に向かって叫んだ。

「ライオンを退けろ。そうすれば、この魔術師を石で打ち殺してやる！」

そして、殉教者に石を投げ始めた。一方、異教の司祭の一人が、拷問者の命令に従い、三叉の矛で聖人の腹を激しく突き刺し、切り裂いたため、腹の中から内臓がすべて飛び出した。聖ママントはそれらを拾い上げ、自らの手で抱えながら、街の外へと歩み出した。　水のように流れ出る彼の血を、信者の女性の一人が器に集めていた。約200サジェンを歩いた後、聖ママントは岩山の中に洞窟を見つけ、そこで眠りについた。　そこで彼は、天から「天上の住まいに来い」と呼びかける声を聞き、主のために熱心に苦難に耐えた[5978]として、喜びをもってその魂を主の御手に委ねた。

こうして聖ママントは殉教の冠を受けた。彼の聖遺体は、信者たちによってその死の地に埋葬され、そこでは多くの癒やしと奇跡が起こった。これは、聖バシレイオス大主教の言葉からも明らかである。彼は、聖殉教者ママントを偲んで民衆に向けた説教の中で、次のように述べている：

– 聖なる殉教者を称えよ――幻視の中で彼を見た者たち、この地に住む者の中で彼を助け手とする者たち、その名を呼び求めた者たちの中で彼が実際の行いによって助けた者たち、人生で迷っていた者たちを導いた者たち、病から癒やした者たち、すでに亡くなっていた子供たちを再び生き返らせた者たち、その命を延ばした者たち、– 皆、一堂に会して、この殉教者に賛美を捧げましょう。

ユリアヌス・背教者[5979] は、まだ若く、敬虔さの記念碑を残そうとしていた頃（とはいえ、その当時ですらすでに羊の皮を被った狼であったが）、　聖殉教者ママンタを称えて、その墓の上に壮麗な教会を建て始めたとき（これは敬虔さからではなく、虚栄心と偽善から行ったことだったが）、

[5977] サーカスとは、一連のベンチや壁で囲まれた広場のことを指した。そこでは、戦士同士や戦士と獣との闘いが繰り広げられた。この広場、すなわちアリーナには、キリスト教徒も投げ込まれ、その後、サーカスの敷地内の特別な檻に収容されていた猛獣が放たれた。

[5978] ママンは275年に死去した。

[5979] ユリアヌス皇帝は361年から363年まで在位した。皇帝に即位すると、彼はキリスト教の信仰から背き、異教の復活を人生の目標とした。そのため、彼は「背教者」と呼ばれている。

その時にはまことに輝かしい奇跡が見られた。というのも、昼間に建てられたものが、夜になると破壊されてしまったからである。立てられた柱は瓦礫の山と化し、　ある石は壁にきちんと固定されず、ある石は固くなって切り出すことができず、またある石は粉々に砕け散った。そして、モルタルや煉瓦は毎朝、まるで風に吹き飛ばされたかのように、その場所から散らばっていた。　これはユリアヌスの迷信を暴くものであり、彼が将来、神の教会に対して行う迫害の前兆でもあった。このような奇跡は聖人の棺のそばで起こった。というのも、聖人は、まもなく真の信仰のために迫害を受けることになる人々のために、自分の名誉を称えて教会が建てられることを望まなかったからである。

主よ、御殉教者ママンタの祈りによって、私たちに恵みのしるしをお与えください。そして、私たちを迫害する者たちから救い出してください。そうして、私たちが父と聖霊とともに、永遠に御名を賛美できますように。アーメン。

コンダク、第3調：

神より与えられた聖なる杖をもって、命の草地であなたの民を守り給え。また、目に見えず、抑えがたい獣たちを、あなたを讃える者たちの足の下で打ち砕き給え。なぜなら、苦難にあるすべての者は、あなたを熱心に擁護するママンテを頼りとしているからである。

コンスタンティノープル総主教、聖ヨハネ・ポストニクスの生涯

記念日：9月2日

聖ヨハネはコンスタンティノープルで生まれた[5980]　。彼は、ユスティヌス[5981]、ティベリウス[5982]　、マウリキウス[5983]　の各皇帝の治世下で修道生活を送った。当初は金細工師であったが、その徳高い生活から、敬虔で、貧しい者を愛し、旅を好み、神を畏れる人物であった。

ヨハネは、エウセビオスという名のパレスチナ出身の修道士を自宅に迎え入れ、彼と共に暮らしていた。ある日、二人が一緒に歩いていると、その修道士はヨハネの右側にいた。すると突然、彼は見知らぬ誰かが「父よ、あなたは偉大な方の右側を歩くべきではありません」と言うのを耳にした。　これは、ヨハネに偉大な司教の務めが委ねられるという、神からの前兆であった。これを聞いた修道士は、そのことをコンスタンティノープル総主教エウティキオスに伝えた[5984]　。総主教は、ヨハネを教会の聖職者にふさわしいと見なし、修道生活に入るよう勧めた。

そして、聖ラウレンティウスの教会で、祈りを捧げている最中、聖ヨハネは次のような啓示を受けた。祭壇の中に多くの聖人たちがおり、彼らは皆、白く輝く衣を身にまとい、美しい賛美歌を歌っていた。　その後、祭壇からある人物が器を持って現れ、そこに集まった多くの乞食たちに惜しみなく施しを配ったが、その器は空になることがなかった。ある乞食が混雑に耐えかねて「主よ、憐れみたまえ。この器がいつまで空にならないのか！」と叫ぶと、その器はたちまち空になった。　この

[5980] コンスタンティノープルはビザンツ帝国の首都であり、現在のイスタンブールにあたる。コンスタンティヌス大帝によってビザンティウムという小都市として築かれた。

[5981] ユスティヌス2世（若）――東ローマ皇帝、在位は565年から578年まで。

[5982] ティベリウス――ユスティヌス2世の後継者。在位は578年から582年まで。

[5983] ティベリウスの後継者。在位は582年から602年まで。

[5984] エウティキオスは552年から565年まで初めて総主教を務めた。 その後、5年間にわたりヨハネス3世・スコラスティクスが後任として総主教を務めた。その後、エウティキオスは再び総主教に就任し、582年に死去するまでその職に就いた。彼の死後、聖ヨハネス4世・断食者が後任として就任した。

啓示に、聖人は深く思いを巡らせ、自身の将来の聖職と、貧しい人々への偉大な寛大さを予兆するこの幻視に驚嘆した。

しばらくして、コンスタンティノープル総主教エウティキオスが亡くなり、神の御心により、ヨハネスはふさわしい人物として選出され、叙階を受けることになった。しかし、彼は　、次の恐ろしい幻視を見るまでは承諾しなかった。一方には、天まで達する海と恐ろしい火の炉が見え、　もう一方には、多くの天使たちが彼にこう告げていた。「あなたは座を受け入れないのか？　―― 他の者が就くことになろうとも、あなたは我々全員から罰を受けることになるだろう」。天使たちがヨハネにこのように脅しを告げた後、彼は本意ではなかったものの従い、コンスタンティノープル総主教に就任した。　この地位において、彼は死に至るまで断食と徳に満ちた生活を送り、そのことは彼の奇跡によって証明されている。　彼は祈りと十字の印によって、大荒れの海を鎮めた。ガザ出身のヨハネという名の盲人[5985] に対し、キリストの聖体の断片をその目に載せ、「生まれつき盲人を癒やした方が、あなたをも癒やしてくださいますように」と告げると、その盲人は即座に目が見えるようになった。

ある時、神の御許しにより、コンスタンティノープルで大疫病が流行した。　聖人は、神がその義なる怒りを退けてくださるよう祈った。そして、忠実な使用人の一人に、二つの器――一つは小石で満たされたもの、もう一つは空のもの――を持って、死者が運ばれてくる場所に一日中立ち、小石を満杯の器から空の器に移しながら死者の数を数えるよう命じた。　数え終えたところ、その召使いは初日に運び込まれた死者が三百二十三体であることを確認し、それを聖人に報告した。　すると聖ヨハネは、疫病が収まるだろうと予言した。そしてその予言は日ごとに現実のものとなっていった。というのも、二日目には、その場に立ち続けて数えていた従者が運ばれてきた死者の数を前日より少なく数え、三日目にはさらに少なくなり、日曜日には、聖人の予言と祈りによって、疫病はついに完全に収まったからである。

聖ヨハネの禁食は、6日間は一切の食物を口にせず、7日目にわずかな野菜――メロン、ブドウ、あるいはイチジク――を口にするというものであった。彼は聖職に就いている間ずっと、このように食事を摂っていた。　睡眠は極めて少なく、それも座ったままだった。その際、彼はろうそくに細い紐を結びつけ、水の入った桶を置いていた。ろうそくが燃え尽きて紐が桶に落ちると音が鳴り、それによって目を覚ますようにしていたのである。聖人は絶えず祈りに専念し、多くの苦行を通じて情欲と闘った。　彼は幾度となく異民族の侵攻を撃退し、祈りと断食によって街を破滅から救った。また、目に見える敵からも目に見えない敵からも、自分の羊の群れを守り抜いた。彼は極めて慈悲深く、孤児たちの父であり、貧しい者たちの養い手であり、不当な扱いを受けた者たちの擁護者であり、神への熱心な奉仕者であり、あらゆる悪意を根絶する者であった。　ある金曜日のこと、聖人は翌日、馬の競走が行われるという知らせを受けた。その日はちょうど五旬節の土曜日であった。　聖人はこう答えました。「聖なるペンテコステの日に馬の競走などあってはならない」。そして、ひざまずいて、そのような行いを恐れさせ、阻止するために、何らかのしるしが現れるよう神に祈りました。すると――皆が普段競技が行われる場所に集まり、競技が始まったその時――突然、激しい嵐が吹き荒れ、雷鳴と稲妻が走り、雨と大きな雹が降り注いだため、人々は恐怖のあまり会場から逃げ去った。

聖人は、悪霊を追い出す力も持っていた。ある時、悪霊に取り憑かれた夫を持つ妻が、彼をある隠者に連れて行ったが、その隠者は彼女にこう言った。「コンスタンティノープル総主教である聖ヨハネのもとへ行きなさい。彼ならあなたの夫を癒やしてくれるだろう」。　その言葉に従った妻は

[5985] ガザは地中海の沿岸に位置しており、古代には最も有名な5つのペリシテの都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の境界地として機能していた。　新約聖書においてガザが言及されているのは、エチオピアの女王カンダキアの貴族の改宗の物語（使徒行伝8:25）のみである。4世紀にはすでにガザはキリスト教の都市となっていたが、7世紀にイスラム教徒によって征服された。

願いを叶えられ、聖人の祈りによって癒やされた夫と共に、喜びながら家路についた。そして、多くの病人がこの聖人から癒やしを受けた。多くの女性も、彼の祈りによって不妊が解消された。

このように、言葉の群れを賢明に導いた聖人は、尊厳ある老齢に達して安らかな最期を迎え、この世から天の住まいに移った[5986] 。聖人の遺体がすでに横たわっていた時、有名な地方長官ニルが別れを告げに訪れ、ひれ伏してその遺体に口づけをした。 すると、聖人は死後、皆の目の前で、驚くべきことに、地方長官ニルスの耳元で数語をささやきかけた。ニルスはその言葉を誰にも明かさなかった。 聖ヨハネは、そのような栄誉にふさわしい者として、聖使徒たちの祭壇の内に埋葬され、聖徒たちの中で驚くべき神――父、子、聖霊――を賛美し、祝福した。アーメン。

ニコメディアで殉教した3618人の殉教者を記念して

9月2日の記念日

ローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世[5987] 、アレクサンドリアから来た3618人の殉教者[5988] が、ニコミディアでキリストのために殉教した。 アレクサンドリアの大司教聖ペトロが殺害された後、その殺害者たちは、家族全員およびキリストのために死を望む多くの者たちと共に、主を信じるようになった。彼らは妻や子供、そしてすべての親しい者たちを連れて、キリストのために殉教するため自発的にニコミディアへ向かい、皇帝の前に現れてこう叫んだ。 「我らはキリスト者である！」これを聞いたディオクレティアヌスは動揺し、最初は甘言をもって彼らに十字架にかけられた方を否定するよう説得したが、彼らが従わなかったため、兵士たちに命じて目の前で剣で斬り殺し、その遺体を山の渓谷に投げ捨てさせた。 それから何年も経って、聖なる殉教者たちによる一連の奇跡により、彼らの尊い遺骨が発見された。

9月16日

9月3日（旧暦）

聖司祭殉教者アンフィモス、ニコミディアの司教、および彼と共に殉教した多くの聖人たちの生涯と受難

9月3日の記念日

聖アンフィムは、ニコメディアの町で生まれた[5989] 。幼い頃から、彼はすでに完成された大人のような資質を示し、悪意のない人柄で際立っていた。肉体が成長するにつれて、その精神もまた成長していった。 成人すると、彼はその徳高い生き方によって誰よりも際立つようになりました。そして、人間の生活において、情欲がまるで小麦の中の雑草のように人の中で育ちやすいその年代においてさえ、アンフィムはすでに無情の模範となっていました。彼の肉体は罪深い欲望から解放され、

[5986] それは西暦595年9月2日のことだった。

[5987] 284年、ローマ帝国は東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂した。前者はディオクレティアヌスが、後者はその友人マクシミアヌスが統治し、284年から305年まで在位した。

[5988] ニコメディアは、東ローマ帝国の首都であり、ディオクレティアヌス帝の居城であった。小アジア北西部のビフィニア地方、プロポンティス（大理石の海）のほとりに位置する壮麗な都市である。

[5989] ニコメディアは、東ローマ帝国の首都であり、ディオクレティアヌス帝の居城であった。小アジア北西部のビフィニア地方、プロポンティス（大理石の海）の湖岸に位置する壮麗な都市である。

その精神は謙遜に満ちていました。　あらゆる種類の嫉妬、怒り、怠惰を彼は自らの魂から完全に根絶し、肉体が過食や酩酊に溺れることも許さなかった。それどころか、彼は自らの模範によって、あらゆる事柄における節制、すべての人への愛と平和、分別、そして神の栄光に対する熱心な配慮を示していた。　このような敬虔で徳高い生活を送ったため、彼は間もなく司祭の聖職に叙階された。この聖職において、アンフィムは心を尽くして神を想う祈りと魂に有益な働きに励み、言葉と行いをもってすべての人を徳の救いの道へと導いた。　ニコミディア教会の大牧者である聖キリルが逝去すると、アンフィムがその地位に就いた。彼を司教に選出したことは、その職にふさわしい人物であるという天からの証しであった。すなわち、彼の叙任の際、天の光が教会を包み込み、天からある神聖な声が聞こえたのである。　ニコミディア教会の指導を引き受けた聖アンフィムは、嵐の中の熟練した舵取りのように、まるで沈没から免れた船のように教会を守り抜いた。なぜなら、多くのキリスト教徒がキリストのために海に沈められはしたが、それゆえに彼らは不幸に陥ることはなかったからである。　偶像崇拝という嵐に飲み込まれることもなく、地獄の深淵に飲み込まれることもなく、聖なる大牧者アンフィムの導きと指導によって、彼らは穏やかで荒れ狂わない天の安息の地へとたどり着いた。このキリストの良き羊飼いは、殉教の冠を戴いて、その言葉によって導かれた羊の群れのほぼすべてを神のもとへと導いた。　偶像崇拝者たちが東方全域、とりわけニコメディア――当時、不義の王ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[5990]が治めていた地――でキリスト教徒に対する大規模な迫害を開始したとき、聖アンフィムはすべての信者たちを殉教の業へと導き、その信仰を強めた。

「今こそ」と彼は語った。「我々は真のキリスト教徒であることを示すべき時である。今こそ、勇猛な行いを示すべき時であり、今こそ、真にイエス・キリストの戦士である者は、勇敢に戦いに立ち向かうべきである。　ここで私たちが受ける苦しみは、私たちのために多くの苦しみを負われたキリストに比べればほんのわずかなものに過ぎない。ここで人々の前でキリストを告白しよう。そうすれば、あそこでキリストが天の御父の前で私たちを告白してくださるだろう。ここで人々の前でキリストを賛美しよう。そうすれば、あそこでキリストが御自身の天使たちの前で私たちを賛美してくださるだろう。　さあ、私たちの肉体を苦難に委ねて、神を賛美しよう。一時的な死を遂げて永遠の命を得るために、殺す者たちを恐れてはならない。たとえ彼らが私たちを殺したとしても、彼らは私たちの将来の至福の立役者となるからだ。切り落とされた頭には、私たちの模範となられた方の右手が朽ちることのない冠を授けるだろう。　砕かれた肢体は、御国において太陽のように輝き、受けた傷は私たちに永遠の報いを倍増させ、血にまみれた苦しみは私たちを天の花婿の宮殿へと導くでしょう。さあ、私たちは自らの血さえも流す覚悟を固め、天使や人々の目の前で、侮辱と屈辱の光景となりましょう。

聖人のこうした言葉や類似の言葉に励まされ、非常に多くの信者たちが、最も甘美なるイエス、すなわち彼らの主のために、自ら進んで激しい苦しみへと身を投じた。　とりわけ信仰に燃え、神への熱意に駆られたあるキリスト教徒は、このような勇敢な行動に踏み切った。ニコメディアで、キリスト教徒を処刑するという羊皮紙に書かれた皇帝の勅令が読み上げられ、その後、人目につく場所に壁に貼り付けられたとき、　――彼は皆の前へ進み出て、キリストを告白し、壁からその勅令を引き剥がして破り捨て、異教の邪悪さを大声で糾弾した――こうして、彼はニコミディアにおける最初の殉教者となった。

[5990] ここでいうのは、もちろんディオクレティアヌスと共同統治を行わなかった共同統治者マクシミアヌスではなく、ディオクレティアヌスの娘婿であるマクシミアヌス・ガレリウスであり、彼はローマ帝国東部におけるディオクレティアヌスの共同統治者であり、その後、後継者となった（305～311年）。　ディオクレティアヌス帝によるキリスト教徒への迫害は303年に始まった。迫害のきっかけは、ディオクレティアヌス帝を説得してキリスト教徒に対する一般法を公布させたガレリウスであった。この法律は、キリスト教の礼拝所を破壊し、聖書を焼却し、キリスト教徒からすべての市民権と公職を剥奪することを定めていた。　ディオクレティアヌス帝時代の迫害は、第一に拷問の残虐さ、第二に殉教者の数の多さ――1日に10人から100人以上が一斉に処刑された――という点で際立っていた。

その後、貴族や宮廷の高官たちのうち、非常に多くの者が公然とキリストを告白し、自らをキリスト教徒であると宣言し始めた。その中には、ドロフェイ、マルドニイ、ミグドニイ、ペトロス、インディス、ゴルゴニイ[5991]、およびその他の数多くの仲間たちがいた。 彼らは皆、キリストのために自ら進んで拷問に身を委ね、その多くは拷問者たちによって様々な処刑の末に命を落とした。

ちょうどその頃、キリスト教徒たちの耐え難い悲しみに、さらに次の出来事が加わった。理由は不明だが、王宮に火が燃え上がり、その大部分が焼失した。 邪悪な異教徒たちは、キリスト教徒たちが憎しみから王宮に火をつけたと誹謗中傷した。すると、王の怒りは極限に達し、野獣よりも獰猛になって、キリスト教徒を大挙して虐殺し、ある者は剣で斬り殺し、ある者は火あぶりにした。 それにもかかわらず、信者たちは、同じ信仰を持つ兄弟たちの殉教の死を目の当たりにし、自分たちにも同じ運命が待ち受けていることを知りながらも、神の愛に燃え上がり、あたかも心地よく涼しい場所へ行くかのように、自らを拷問者たちの手に委ね、火刑に処された。 また、残りの多くのキリスト教徒たちは、迫害者たちに縛られ、船に乗せられて海の深みに沈められました。王は抑えきれない怒りから、生きている者だけでなく、すでに埋葬されていた聖なる殉教者たちの遺体をも地面から掘り起こし、海に投げ込むよう命じました。それは、生き残ったキリスト教徒たちが彼らを崇拝することを防ぐためでした。 迫害はこれほどまでに残酷であり、その最中、聖アンフィムは*「屠られる小羊のように」*（イザヤ書53:7）追われ続けた。羊飼いが引き裂かれる前に、狼たちはその群れに襲いかかった。しかし、神の摂理と御加護により、彼はセマナと呼ばれる一つの村に守られていた。それは、まず彼が言葉の羊たちを神のもとへ導き、その後、自らの血を流すことでニコミディア教会の信仰を確証し、自らも神のもとへ旅立つためであった。 その頃、教会では、キリストの降誕の日に、二万人に及ぶ聖なる殉教者たちが焼き殺され、聖アンフィモスの羊の群れの残りの者たちは牢獄に閉じ込められた。 一方、聖人は、キリスト教徒たちに密かに送り続けた頻繁な書簡によって、彼らを教え、信仰を確固たるものにした。そのため、神の御心により一時的に彼らから離れて肉体を共にすることはなかったものの、その霊は牢獄にいる彼らと共にあり、書簡を通じて彼らに霊的な糧を届けていた。 羊たちは公然と、そして彼らの羊飼いは密かに狼たちと戦っていた。聖人は、拷問を恐れて隠れていたのではなく、教えと祈りによって信仰の弱い者たちを確固たるものにし、最も弱く臆病な者たちを 強め、やがてすべての人をキリストのもとに導き、その後で初めて自らもその同じ拷問に身を委ねるためであった。

聖アンフィモスに励まされた信者の一人、ジノンという名の職業軍人は、次のようにして、皆の前でマクシミアヌス帝の悪行を糾弾した。 ニコメディアのサーカスの近くには、異教の女神セレラ[5992] の神殿があった。ある日、マクシミアヌスは兵士たちや民衆を率いて、この女神の偶像に豊かな供物を捧げていた。そこでジノンは、この不敬な祭りの最中、高台に立ち、大声でこう叫んだ。

「王よ、あなたは魂のない石や声なき木を崇拝して、自らを惑わしている。それは悪魔たちの欺瞞であり、崇拝者たちを破滅へと導くものである。」 マクシミアンよ、真理を知りなさい。そして、肉眼と霊の目を共に天に向けなさい。見上げなさい。このまばゆいばかりの被造物を熟視することで、その創造主がどのようなお方であるか、すなわち創造主ご自身について悟りなさい。 被造物を観察することによってこれを悟りなさい。屠殺され、息苦しい煙の中で焼かれる言葉を持たない動物たちの血を喜ばれるのではなく、理性を備えた被造物の清らかな魂と清らかな心を喜ばれるこの神を崇めることを学びなさい。

[5991] ドロフェイはプレポジト（高官）、ペトロスとゴルゴニウスは宮廷の高官であった。 ゴルゴニウスの聖遺骨はローマに移された。ミグドニウスは出身地にちなんで「ミグドニウス」、すなわちフリギア人またはマシウス人（小アジアの西部および北西部）と呼ばれる。インディスは宦官である。彼らについては、この伝記の後の部分で詳述する。

[5992] ケレラまたはデメテル――ローマおよびギリシャの豊穣、農業、結婚の女神。この女神を称える不道徳な儀式は、ビフィニアに隣接するフリギアで特に広く行われていた。

これを聞いたマクシミアヌスは、ジノンを捕らえるよう命じ、王に対してこのような大胆不敵な言葉を述べたとして、その顔と口を石で打ちつけるよう命じた。　拷問者たちは彼の歯を打ち砕き、顔を傷だらけにし、キリストを告白するその舌を切り取り、ついに、かろうじて息のある状態で彼を街から追い出し、王の命令により、その聖なる首を切り落とした。

その頃、聖アンフィムは、身を隠していた住処から、牢獄に囚われていたドロテウスや、キリストのために彼と共に投獄されていた他の者たちへ、自分の手紙を携えた助祭を送り、彼らが「命の与え主」である主のために喜んで死ぬ覚悟ができるよう、忍耐を勧めた。　不信心者たちはこの助祭を捕らえ、聖アンフィムの書簡とともにマクシミアヌス王のもとに引き渡した。　王はこれらの手紙を読み、そこに書かれた内容が自分にとって不快であると感じた。手紙には、聖人による殉教者たちへの心からの挨拶、彼らに対する深い憐れみ、父のような訓戒、牧者の教え、殉教の業に対する聖職者としての祝福、そして偶像を打ち倒すための励ましが込められていたからである。　これらすべてに激しく怒った王は、すべての殉教者を牢獄から連れ出し、自分の前に引き出して裁くよう命じた。彼らに傲慢で残忍な眼差しを向け、王は長い間彼らを責め立てた。その後、聖アンフィモスの書簡を読み上げさせ、彼らを非難し、糾弾した。

「お前たちは、この邪悪な男の欺瞞に満ちた作り話を信じ、王の命令ではなく、彼の堕落した教えに耳を傾けているのだ！」と彼は言った。

信者たちは、読み上げられる書簡を聞いて深く喜び、喜びの涙を流しながら、遠くに立っている助祭アンフィモフを、明るい眼差しと喜びに満ちた表情、そして頭を垂れて歓迎した。一方、彼らを責めるために読み上げられた聖アンフィモフの言葉は、彼らは心の中に深く刻み込んだ。

すると、王は助祭にこう言った。

「教えてくれ、お前はどこから来たのか？　民を惑わすこれらのメッセージを、誰がお前に与えたのか？ そして、お前を送り込んだ者はどこに隠れているのか？」

助祭は、恵みに満ちた口を開き、次のように語り始めた。

「これらの書簡を送る者は、羊飼いです。しかし、彼は自分の群れから遠く離れているため、手紙によって群れを導き、敬虔へと励ましているのです。とりわけ、多くの狼が言葉の群れに襲いかかっているという知らせを耳にした時には、羊たちに何をすべきかを大声で告げ知らせるのです。そして彼は、大牧者からの次の言葉を彼らに告げ知らせる。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*（マタイ10:28）。私はこのメッセージをキリストの羊の群れに届け、その内容を伝えるために来た。　しかし、今、これを遣わした方がどこにおられるかについては、私は語らない。なぜなら、もし私が、すべての人々に大きな益をもたらし、私の知らせがなくてもまもなく現れるであろう私の牧者に対する裏切り者となれば、それは大きな愚行となるからである。なぜなら、*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）からである。

この勇敢な言葉に激怒した拷問官は、テオファンという名の聖なる助祭に死刑を宣告した。まず、神の恵みに満ちた言葉を語っていたその舌を切り落とし、その後、石で打ちつけ、矢で貫いて殺害した。　その後、王は、裁判にかけられた殉教者たちに対しても、様々な残酷な刑罰によって処刑するよう命じた。聖ドロフェウスには首を刎ねさせ、　マルドニアを火刑に処し、ミグドニアを生きたまま穴に投げ込み土で埋め、ゴルゴニア、　インディスとペトロを首に石臼の石を吊るして海に沈め、その他全員を多くの他の刑罰によって滅ぼした。こうして、彼らは皆、様々な死の道をたどって主のもとへ召された。　海に投げ込まれた殉教者たちの遺体は、後に漁師たちが網で引き上げ、ドムナという名の一人の乙女がそれらを埋葬した。このことを知った異教徒たちは、彼女が聖なる殉教者たちの遺骨の前で祈りを捧げている最中に、剣で彼女を斬り殺した。　その頃、説教によって多くの人々をキリストへの信仰と殉教の道へと導いたエウフィミオスも、同じニコメディアにて、様々な拷問を受けた後、剣で斬り殺され、殉教の死を遂げた。これら一連の出来事のあと、聖アンフィモスにとっても、イエス・キリストへの信仰を告白するために苦難を受ける時が訪れた。

彼が前述のセマネの村に身を隠し、密かに神の言葉を広め、キリストへの信仰を深めていたとき、マクシミアヌスは彼のことを察知し、直ちに二十人の兵士を派遣して彼を捕らえさせた。その村に到着した兵士たちは、そこで聖アンフィムに出くわし、彼にこう尋ねた。

「キリスト教の教師であるアンフィムはどこにいるのか？」

戦士たちに出くわすと、アンフィムは彼らを自分の小屋へ案内し、こう言った。

「アンフィムのことをお伝えし、彼をあなた方の手に引き渡しましょう。ただ、まずは旅の疲れを少し癒してください。」

それから彼は、彼らに食事を勧めて、手頃な食事を用意し、温かくもてなした。その後、聖人は彼らの前で、自分がアンフィムであることを明かした。

「私こそ」と彼は言った、「あなたがたが探している者だ。さあ、私を捕らえて、あなたがたを遣わした者のもとへ連れて行ってくれ。」

これを聞いて、兵士たちは驚き、アンフィムの威厳ある白髪に目を向けることさえ恥ずかしく思った。なぜなら、彼が心温まるもてなしと親切な食事で迎えてくれたのを見ていたからである。そこで彼らは、この無実で善良な人を、この世での幸福のためではなく、拷問者のもとへ――極度の苦しみと、激しい拷問の後に待ち受ける明らかな死へと――連れて行かなければならないことについて、互いに話し合った。彼らはアンフィムを不憫に思い、彼の前で恥じ入り、聖人にこう言った。

「我々はあなたを連れて行くことはしないが、隠れることを勧める。そして我々はマクシミアヌスの前で、ニコメディア周辺の至る所でアンフィマを探したが、どこにも見つからなかったと報告するつもりだ。」

しかし、アンフィムは主の戒めを熱心に守っていたため、彼らのために嘘をつかれることを望まず、むしろキリストのために苦しみ、死ぬことを望んでいたので、彼らに真実を語るよう説得した。それゆえ、彼は彼らと共に旅立った。道中、彼は彼らに神の言葉を宣べ伝え、私たちの主イエス・キリストへの信仰を教えた。　アンフィムが蒔いたこの神の言葉の種は、決して無駄にはならず、良い土壌に落ちた。それは兵士たちの心に根を下ろし、そこで実を結び、彼らの信仰を完成へと導いた。彼らが川にたどり着くと、アンフィムは彼らのために祈りを捧げ、父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けた。　その後、彼らは再び旅立ち、魂に益となる会話を交わしながら、ニコメディアに到達した。アンフィムが街に入ると、そのことがマクシミアヌスに伝えられ、彼は縛られたアンフィムを自分の前に引き出すよう命じた。

こうして聖人は、両手を後ろで縛られたまま拷問官の前に引き出された。なぜなら、真理の証しとして、不敬虔な異教徒たちの法廷には、あたかも悪人のかのように縛られた姿で現れるべきであったからである。しかし、彼の魂は自由であり、天へと向けられ、そこから助けを待ち望んでいた。拷問官は、拷問に用いられるあらゆる道具を持ち込むよう命じた。それは、何よりもまず、その姿だけでアンフィムを威嚇し、聖人がそれらを恐れて王の意志に従うことに同意するだろうと計算していたからである。その後、彼らは彼に問いかけ始めた。

「お前こそ、キリストという名のただの一人の人間について誤った考えを抱き、それによって庶民をも同じ誤りに導き、彼らを欺いて我が王の命令に逆らうよう煽動し、さらに数え切れないほどの罵詈雑言をもって我が神々を冒涜し、非難しているアンフィムか？」

アンフィムは、差し出された拷問器具と王の言葉を嘲笑して、こう言った。

「王よ、知っておいてほしい。もし、神聖な使徒が『*あなたがたの希望について説明を求められても、答えられるように備えよ*』　（Iペテロ3:15）と教えている神聖な使徒が私にそう助言していなければ、私はこの質問には一切答えなかっただろう。なぜなら、神は私たちに*「口と知恵」*を与え、*「私たちに敵対する者たちが、それに反論することも、立ち向かうこともできないようにする」*と約束されたからだ（ルカ21:15）。　そして、私は真っ先に、あなたがたが神と呼ぶ偶像たちを嘲笑した。今や私は、あなたがたの大いなる狂気を嘲笑している。あなたは、私を私の創造主から引き離そ

うとしたのだ。その創造主は、恩知らずな被造物であるあなたさえも、御自身の姿に似せて尊ばれた方である。それなのに、なぜあなたは私を縛り上げてあなたの裁きの場に引き出し、私の目の前に拷問の道具を突きつけたのか？　、それらで私を脅かし、恐怖に駆られてお前の不敬虔な命令に従わせようというのか？しかし、主のために自ら死を望む者を、それによって脅かすことなどお前にはできない。　それを、気弱で臆病な者たち――彼らにとってこの一時的な人生は大きな慰めであり、その喪失は大きな悲しみである――に説きなさい。彼らを脅かせ、私を脅かすな。　私にとって、この朽ちゆく肉体とこの一時的な人生は、まるで重い束縛や牢獄のようで、私の魂が切望する神のもとへ移ることを妨げている。　それゆえ、あなたの脅しや処刑、拷問は、死がそれに続くという点で、私にとってはあらゆる地上の快楽よりもむしろ喜ばしいものである。その死は、私を肉体の束縛から解放し、私のすべての願いが向けられている場所へと移してくれるのだから。

聖人がこれらの言葉を語り終えると、拷問官は彼の首に石を投げつけるよう命じた。　アンフィムは、キリストのために受ける苦難の始まりであり、殉教の冠の礎となるこの打撃を感謝して受け入れ、さらに大きな苦難を望み、最高の報いを受け継ごうと願った。そして、時には拷問官を嘲笑し侮辱し、時には彼を激しい怒りに駆り立て、　最も過酷な苦しみで自分を拷問するよう命じさせるため、威厳ある預言の言葉を繰り返した。*「天と地を造らなかった神々は、地から、また天の下から消え去るであろう」*（エレミヤ10:11）。

この言葉は拷問者の心を激しい怒りで貫き、彼は赤熱した鋭い鉄の杭で聖殉教者の両足を貫くよう命じた。しかし、この拷問さえも聖人にとっては喜びであった。なぜなら、彼は喜びながら、主イエス・キリストの御名のためにこのような苦しみを受けることを許してくださった神を賛美していたからである。　その後、マクシミアヌスは、地面に鋭い陶器の破片を敷き詰め、その上に拷問を受ける者を裸のまま横たえ、その状態でさらに激しく棒で打ち据えるよう命じた。それは、上からは棒による打撃、下からは鋭い陶器の破片による痛みが、彼の心を二重に貫くようにするためであった。しかし、聖人はその時でさえ、拷問者に対する勝利を絶望することなく、次のように讃美した。「主よ、永遠の王よ、あなたに感謝します。*あなたは私に戦いの力を与え、私に立ち向かう者たちを私の足の下に打ち倒してくださいました。　あなたは私の敵を私に背を向かせ、私は私を憎む者たちを滅ぼします」*（詩編17:40–41）。

すると、拷問官は別の拷問を考案した。銅のブーツを赤熱させ、それをアンフィモスの足に履かせたのである。しかし、天からの神の恵みがこの殉教者に降り注ぎ、苦しみの中で彼を強め、彼はまもなく天の冠が与えられると約束する声を聞き、その声は彼の心を至福で満たした。　この神からの慰めにより、聖人は皆の前で明らかに拷問を意に介さなくなり、まるで何の苦しみも受けていないかのように、その顔は天の喜びに輝いた。　これを見た拷問官は驚愕し、聖アンフィマスについて、彼は魔術師であり、何らかの魔法によって火の灼熱の力を克服しているのだと語った。人々は彼に尋ねた。「なぜ、これほどの苦しみの中にありながら、あなたは喜んでいるのですか？」

「私がこれほど喜んでいるのは」と聖人は答えた。「この苦しみこそが、約束された恵みへの確固たる希望となっているからだ。まもなく私は、お前の傲慢な高慢を打ち破り、お前の神々が人間の力よりもはるかに無力であることを証明してやる。そしてお前は、自らの悪意を永遠に悔い改めることになるだろうが、それは無駄なことだ。　――そして、永遠の滅びに裁かれるまでは、この世を去ることはないだろう。

この言葉にさらに激怒した拷問官は、聖人を車輪に縛り付け、車輪の軸を彼と共に回転させ、その体を火で焼くよう命じた。しかし、家来たちが王の命令を実行し始め、アンフィモスを車輪に縛り付け、その下で火を焚き始めたとき、彼ら自身が突然、まるで死んだかのように倒れてしまった。車輪は止まり、炎が彼らに襲いかかって火傷を負わせた。その後、彼らは拷問者に次のように語った。

「私たちが車輪を回し始め、それに縛りつけられた者を焼き始めると、私たちのそばに三人の光を放つ男が現れ、『恐れるな、神の僕アンフィムよ！』と言った。しかし、彼らが私たちの方へ視線を向けると、私たちに恐怖が襲い、車輪の下の火が私たちの顔へと向けられ、私たちを焼いた。」

これを聞いた拷問官は驚いたが、これらすべてを魔術の仕業だと決めつけた。その後、聖アンフィムは車輪から降ろされ、王は、もし偶像に犠牲を捧げなければ剣で斬り殺すと彼を脅した。　しかし、殉教者は、剣で斬り殺される運命にあると聞いて喜び、神に熱心に祈り、自分より先に殉教の道を歩んで天に昇った自分の群れのもとへ、一日も早く帰らせてくださるよう願った。そうすれば、自分も*「見よ、私と、主が私に与えてくださった子供たち」*（イザヤ8:18）と言えるようになるからである。

しかし、邪悪な王はあらかじめ、聖人を牢獄に投じ、鉄の鎖で縛るよう命じていた。アンフィムが牢獄へと連行される際、彼はすべてのことについて神を賛美し、祝福した。すると突然、天から光が彼を照らし、鎖は解け、彼を連行していた役人たちは恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。　しかし、アンフィムは彼らを　起こし、命じられたことを実行するよう命じた。牢獄に着くと、聖人は中に入り、そこに閉じ込められていた悪党や強盗たちの中に留まった。しかし、彼はまるで宴会や婚礼の祝宴に招かれたかのように喜んでいた。　囚人たちに神の言葉という霊的な糧を与え、敬虔という飲み物を差し出した聖人は、彼らをキリストのもとに導き、信仰と善行を教え、キリストの聖なる教会に迎え入れた。そして、その牢獄の中で、聖なる洗礼の水によって彼らを新たに生かした。　そして、その牢獄は、聖霊の賜物に満ちた明るい教会となり、そこで信者たちは昼夜を問わず、神に賛美の捧げ物をささげた。

このことを知ったマクシミアヌスは、聖アンフィムを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼を甘言で誘惑して異教の神々への礼拝へと導こうとし、彼を偶像崇拝の祭司たちの筆頭にすると約束した。しかし、アンフィムはいつものように大胆に王に答えた。

「私は、あなたの言葉を聞く前から、すでに神の祭司たちの中で最も高き祭司である[5993]。私は、私の肉体をまとい、私のために、私のゆえに天から降りてこられた、大牧者キリストの祭司である。　御方は、父なる神の前で人々の贖いのいけにえとして仕え、十字架上で死に、葬られ、三日目に復活し、栄光のうちに天に昇られ、御方を信じるすべての者をそこに導き上げられた。私はその方の司祭であり、それゆえ、自分自身を御方に生けるいけにえとして捧げるのである。　しかし、あなたがたの祭司職も、いけにえも、偽りの神々も、すべて闇であり、永遠の闇へと消え去るであろう。

これを聞いた拷問官は、アンフィモスを死刑に処した。そして聖人は、天の喜びに満ちて死へと向かった。

「今こそ」と彼は言った。「私の喜びの時、今こそ私の願いが叶う時、今こそ永遠の命の扉が私のために開かれる。そう、この肉体を離れて主のもとに入り、主の栄光が私の前に現れるとき、私はその栄光に満たされるだろう。」

一時的な死を経て永遠の命へと移るべき処刑の場にたどり着くと、聖人は祈りの時間を求め、祈りを捧げた後、その聖なる頭を斧の下に差し出した。そして、王の命令に従って斧で首を刎ねられ、こうして9月3日、キリストのために殉教の最期を迎えた。　夕方になると、信者たちの一部が密かに処刑場へやって来て、聖アンフィモスの苦難に満ちた遺体を運び出し、聖三位一体、すなわち父と子と聖霊、唯一の神を賛美しつつ、尊厳をもって彼を埋葬した。その神に、永遠の栄光あれ、アーメン[5994]。

[5993] すなわち、司教のこと。

[5994] 聖アンフィモスの殉教は303年にさかのぼるものと考えられる。　この年、ディオクレティアヌスはニコメディアの教会を、そこにいたすべてのキリスト教徒ごと焼き払うよう命じ、キリスト教徒が礼拝のために集まることを禁じる勅令を発布し、さらに別の勅令で、司教、長老、助祭を牢獄に閉じ込め、彼らに異教の神々への生贄を捧げるよう要求し、　もし拒否した場合は、拷問にかけて殺害するよう命じた。――ビザンツ帝国のユスティニアヌス帝（527～565年）は、聖殉

コンダク、第4声：

聖なる生活を送り、苦難の道を全うし、偶像崇拝の奉仕を断ち切り、神の知恵に満ちた者として、あなたの群れを守る戦士となられた。それゆえ、我らは今、あなたを崇め、心の中でこう叫ぶ。「永遠に記憶されるアンフィメよ、あなたの祈りによって、我々を災いから救い出してください。」

同日、聖殉教者ヴァシリサの殉教記念日

記念日：9月3日

不義なローマ皇帝ディオクレティアヌスの治世において、ニコメディアほど多くの殉教者の血が流された都市は、他にほとんどなかったでしょう。　そこでは、キリストのためにこれほど多くの信徒が殺害され、たった一ヶ月の間に殉教の死を遂げた者だけで一万七千人に上り、さらにキリストの降誕の日に教会で焼かれた二万人は含まれていない。そして、この残酷な迫害における信徒たちへの不当な殺戮は、一ヶ月どころか、長い期間にわたって続いた。　この期間に殉教したすべてのキリスト教徒を、数えきれないほどの星々を数え尽くす唯一の神以外、 に誰が数えきれるだろうか！　また、ニコメディアでは、聖殉教者ヴァシリサも苦難に遭いました。大人だけでなく幼い子供たちの中にも、その偉大な力を現わされる全能の神に栄光あれ！この聖なる殉教者が、ニコメディアの総督、すなわち統治者である　アレクサンドロス。その前で、この少女殉教者――天の花婿の汚れなき花嫁――は、キリストをこれほど勇敢に告白したため、誰もが彼女の分別と、キリストの信仰をめぐってまるで完全な成人男性のように拷問官と議論を交わす自由な物言いに驚嘆した。　総督は、甘言や約束をもって彼女を自らの神々の崇拝へと誘導しようとしたが、聖女は断固として屈しなかった。そこで総督は彼女の顔を打つよう命じたが、聖なる乙女はそれに対して神に感謝を捧げた。　そこで総督は、彼女の衣服を脱がせ、鞭で打つよう命じた。彼女はこれに対しても、主に対してさらに大きな感謝を捧げた。これにより総督は激怒し、さらに激しく打つよう命じた。やがて彼女の全身がまるで一面の潰瘍で覆われたかのように見えたとき、彼女は叫んだ。「神よ、これらすべてに感謝いたします」。　そこで総督は、彼女のすねに串を突き刺し、逆さ吊りにして、その下に焚かれた火の上に、樹脂、硫黄、油、鉛を投げ込むよう命じた。激しい苦痛と悪臭を放つ煙によって、彼女がすぐに息を引き取るだろうと確信していたからである。　しかし、聖女はこうした拷問の中でも、まるで楽園の涼しさの中にいるかのように、主への賛美を絶やすことはなかった。聖女が自分が考案した拷問を軽んじているのを見て、総督は彼女を燃え盛る炉に投げ込むよう命じた。　尊き十字架の印で身を守り、聖ヴァシリーサは炎の中へと歩み入り、何の害も受けずに長い間その中に留まった。立ち会っていた者たちは皆、恐怖に襲われ、この驚くべき光景を呆然と見つめていた。　そこで、彼女を炉から引きずり出し、二頭のライオンを放って彼女を引き裂かせようとしたが、聖女は祈りを捧げた後、無傷のままであった。この乙女の祈りは、かつて預言者ダニエルの祈りがそうであったように、ライオンの口を封じたのである（ダニエル書 6:1–100）。 その時、恐怖に襲われたのは、王アレクサンドロス自身であった。彼は長い間、まるで恍惚状態にあるかのように過ごした後、ついにこう叫んだ。　「これは神の御心だ！」　そうして、聖殉教者の足元にひれ伏し、こう訴えた。「天の王であり神である御方のしもべよ、私を憐れんでください。そして、すべての苦しみをお赦しください。あなたの神に祈ってください。主があなたのために私を滅ぼさないよう。なぜなら、今や私も主を信じるからです

教者アンフィムに敬意を表して、ゴールデンホーンの岸辺に大理石と金で装飾された壮麗な教会を建立した。レウス大帝は、キシロピルカ近郊に彼のための教会を建立した。　10世紀には、聖アンフィムの頭部がニコメディアに安置されており、そこでは多くの奇跡が起こり、頭部からは絶えず髪が生え続けていた。

。」　そこで聖殉教者は、統治者の盲目さを癒やし、彼に真理の知識を開かれた慈悲深い主を声高らかに賛美し、アントニヌス司教に命じてアレクサンドロスに真の信仰を説き明かし、彼を教え導いた上で洗礼を授けるよう指示した。　そこにいたすべてのキリスト教徒は、アレクサンドル統治者の改宗を心から喜んだ。彼は洗礼を受けた後、かつての不敬虔な行いと、キリスト教徒たちに与えた苦しみについて悔い改め、聖ヴァシリスに、主の御許で彼のために赦しを請うよう懇願した。　聖殉教者の取り成しと祈りにより、アレクサンドル統治者は完全に信仰を確信し、まもなく真の悔い改めに満ちてこの世を去り、キリスト教徒たちによって名誉をもって埋葬された。一方、聖女は彼の埋葬後、街から三ポプリシュ（約4キロメートル）の距離へと退いた。　そこで、喉の渇きを感じ、一つの石を見つけた聖女は、その石の上に立ち、主に向かって祈りを捧げると、たちまち石から水が湧き出た。喉の渇きを癒やした後、彼女はその場所から少し離れ、祈りを捧げながらひざまずき、神のもとへ息を引き取った。　このことを知ったアントニン司教はそこへやって来て、聖女の祈りによって水が湧き出たその石の近くに、聖女を葬った。聖なる殉教者の祈りに応えて、主よ、私たちにもあなたの偉大で豊かな憐れみを注いでください。アーメン。

同日、聖司祭殉教者アリスティオンの記念日

記念日：9月3日

この聖アリスティオンは、シリアのイッソスとアンティオキアの間に位置する、海沿いのアレクサンドリアの司教であった。　彼はキリストとその救いのための受難、死、そして復活について熱心に説教し、また、地上のすべてのものは朽ちやすく儚いものであり、永遠で朽ちることのないのは未来の天の恵みだけであることを人々に教えました。　このような教えのため、彼はアレクサンドリアの総督の裁判にかけられ、キリストを真の神であると告白した後、火刑に処され、この殉教の業をもってその至福の生涯を閉じた。

9月17日

9月4日（旧暦）

聖司祭殉教者バヴィラと、彼と共に殉教した三人の少年たちの殉教

記念日9月4日

不義の王ヌメリアン[5995]は、アンティオキアに滞在中、偶像を称える盛大な祝祭を催した。偶像に捧げられた犠牲の中には、王の息子である幼い少年の無垢な血も流された。ヌメリアンは、ある異国の王との堅固で破ることのできない平和の証として、この少年を人質として受け入れていたのである。　ヌメリアヌスはかつてこの王と戦争を繰り広げていたが、互いに相手を打ち負かすことができなかったため、和平を結び、相互の誓いをもってそれを確固たるものとし、友好関係を築いた。揺るぎない平和と友好の証として、その異国の王は、ヌメリアヌスに自分の幼い息子を託し、彼が父親の代わりとなり、実の子供のように育ててくれるよう求めた。　この王子の受け入れを喜んで受け入れたヌメリアヌスは、まもなく非人道的な残虐性を露わにした。彼は王との平和を破り、自らの誓いを軽んじ、友情を無視し、自らの手で、忌まわしい神々の神殿において王の息子を刺し殺したのである。

[5995] ローマ皇帝、在位は283年から284年まで。

当時、アンティオキア教会の大司教は、聖なる、神を畏れるバビラ司教であった。　神の摂理の導きにより司教の座に選ばれた聖バビラは、*「言葉、生活、愛、霊、信仰、清さにおいて、信徒たちの模範であった」*（テモテへの手紙一 4:12）。　偶像崇拝の祭りと非人道的な殺戮が行われている間、司教はアンティオキアにいたすべてのキリスト教徒を聖なる神殿に集め、そこで真の神に血を流さない捧げ物を捧げ、自分の言葉の羊の群れが、魂を滅ぼす狼たちに奪われないよう祈りつつ、　その際、彼は自分の言葉の羊たちに対し、信仰に堅く立ち、患難の時に教会から離れないよう教え導いた。　忌まわしく人殺しの生贄の儀式から戻る途中、不敬虔な王はキリスト教の教会へと向かい、神聖な秘跡の執行を目撃しようと企み、教会に足を踏み入れることで主の聖所を汚そうと脅かした。
不敬虔な王が全廷臣を率いて教会へ向かっているとの報を耳にした、神の栄光を熱心に守る者、偉大なる聖人バビラは、神聖な祭壇を離れ、王を迎えに出て、教会の入り口に立ち止まった。王が教会に近づくと、聖人は力強い声で叫んだ。

「偶像崇拝者である王よ、生ける神の聖所に入り、その存在によってそれを汚してはならない。」

王の偶像崇拝という不敬を糾弾し、叱責しつつ、聖バビラは果敢に王の行く手を阻み、教会へ入ることを許さなかった。　そして、王が教会の扉にさらに近づいたとき、聖バビラは右手を王の胸に当て、彼を神の神殿から押し返し、王は大きな恥をさらして引き返した。　王には家来や軍勢が付き従っていたため、力ずくで教会に入ろうとしたが、聖バビラを通して働いた神の力は、その不信心者が教会の敷居に触れることさえ許さなかった。バビラの言葉は、不信心者にとって天使の言葉のように恐ろしいものだった。　さらに、大勢の民衆が集まり、信者も多数いたため、王は争いや騒動が起こるのではないかと恐れた。そこで彼は、苛立ちを黙って抑え込み、怒りを抱えたまま自分の宮殿へと戻った。　しかし翌日、彼は教会を焼き払うよう命じ、聖人を呼びつけ、その厚かましい行いを責め立てた。

「おお、すべての死すべき者の中で最も不幸な者よ！」と皇帝は言った。「私の権威に敢えて抵抗し、教会への立ち入りを禁じたとき、お前は誰を頼りにしていたのか？　皇帝を怒らせることがどれほど大きな悪であるか、また、皇帝の人格を汚そうとする者にどのような刑罰が待ち受けているか、お前は知らないのか？」

聖バビラはこれに恐れを知らずにこう答えた。

「私は地上の王を見ず、その顔を恐れることもありません。しかし、天の王を見つめ、その方に望みを置いています。私が恐れるのは、私を御自身の羊の牧者とし、狼の襲撃から羊を守り、獣が群れに入らないように命じられた方です。　私は王を苛立たせたわけではない。そのような無礼は狂気に等しいと知っているからだ。しかし、その場に入ることによって神の聖所を侮辱し、汚そうとした者を、私は引き止めたのだ。　それゆえ、正義に照らせば、あなたがそのような邪悪な企てから引き止めたことに対し、私に感謝すべきである。もしそれを実行していたなら、あなたは自らを完全に破滅させていたはずだ。なぜなら、創造主を限りなく侮辱することになり、その方から離反することは、いかなる死よりも恐ろしいことだからである。

「あなたとしては、」ヌメリアンは言った、「昨日私たちに対して示したその厚かましさを悔い改め、許しを請うべきだったはずだ。それなのに、あなたは今もなお私たちを苛立たせている。」

「私たちキリスト教徒は、」とバビラは答えた。「いかなる人間をも非難したり、煩わせたりしてはならない。私たちはあなたを煩わせてもいない。なぜなら、神の御姿と御似姿に従って創造された神の被造物を冒涜してはならないからだ。」　しかし、もし誰かが神に反逆し、神の聖所を冒涜するならば、その者は尊敬に値しないばかりか、ダビデの言葉にあるように、主の敵として憎まれるのも当然である。*「主よ、あなたを憎む者を私が憎まず、あなたに反逆する者を私が嫌悪しないはずがあるでしょうか。私は彼らを心底憎む。彼らは私の敵だからである」*（詩篇138:21–22）。

「無駄口を叩くのはやめろ」と王は彼に言った。「そして我々の言うことを聞け。もし自分の罪による処刑を免れ、赦しを得たいのなら、我々の神々に犠牲を捧げ、彼らを拝め。」

「私に託された羊の群れのためなら」と聖人は答えた。「私はどんな苦しみも耐え、死さえも厭わない。」

そして少し間を置いて、こう言った。

「私は自分の神を否定し、その不義を思うだけでも恥ずかしい偽りの神々に仕えることはできません。」

「もう一度言うぞ」と王は言った。「無駄口を叩くのはやめて、神々に生贄を捧げよ。もしこれに従わぬなら、私の権力は、お前が邪悪であるのと同様に、お前を滅ぼしてやる。」

ヴァヴィラはこう答えた。

「私は、あなたを取り巻く闇からあなたを救い出し、終わりのない苦しみから逃れさせてあげたいと願っていた。それなのに、あなたは自らさらに大きな苦しみをもたらし、他の人々をもその苦しみへと誘っている。まことに、あなたに告げる。あなたは生ける神の御手から逃れることはできない。」

すると、拷問官は穏やかなふりをし、聖ヴァヴィルに静かに尋ねた。

「君は――」と彼は言った、「『神』とは何かを、私たちに説明できるか？」

バビロスは答えた。

「神の御業を悟ることは不可能だ。たとえあなたがそのためにあらゆる努力を尽くしたとしても。なぜなら、神は永遠に存在される万物の王であり創造主であり、言葉では言い表せず、理解し難く、人間の知性では測り知れない存在であり、万物の源であり力だからである。　神は天使や大天使、そしてその他すべての無形の存在を創造された。その後、神は人間を創造し、数え切れないほどの恵みを授け、御自身が天において君臨されるのと同様に、人間を地上の王として立て、楽園に置かれた。　また、人間が自らの崇高な使命を理解し、動物よりもどれほど優れているかを認識できるよう、神は動物たちを人間のもとに連れてきて、それらに名前をつけるよう命じられた。神は人間のために助け手を創造し、御自身との対話を楽しむ特権を授けられた。　恩知らずな人間は、自らの創造主を軽んじ、神の戒めを無視し、自分に対して何の善行もせず、ただお世辞を並べるだけの敵の言うことを聞き入れた。　そのお世辞めいた言葉に騙された人間は、神の公正な裁きによって楽園から追放された。しかし、悪意のない慈愛に満ちた神は、人間を御自身から遠ざけたとはいえ、絶えず彼に恵みを施し、私たちの数え切れないほどの罪にもかかわらず、神が私たちの滅びを望んでおられるのではなく、あらゆる手段を尽くして私たちの救いを整えておられることをはっきりと示しておられる。

そのような言葉を聞いて、ヌメリアンは理解することができなかった。　そもそも、恵みを知らず、信仰の教えを授かっていない彼の魂が、どうしてそれを理解できようか。しかし、周囲の人々が自分の理解不足に気づいていないことを恥じ、彼はバビラが語ったことをすべて完全に理解したかのように装い、彼を「非常に理路整然と論じる人」として称賛した。そして再び彼に尋ねた。

「では、人間とは何ですか？」

「人間とは」とヴァヴィラは答えた。「この世に生きた死すべき存在でありながら、すべての死すべき動物よりも高貴な存在です。穏やかで、隣人に対して親切ですが、私たちは互いに、獣よりもさらに残酷になってしまいました。」

ヴァヴィラの言葉に驚きつつも、自らも賢者を装い続けたヌメリアンは、神々にかけて誓った。もしヴァヴィラが神々に犠牲を捧げさえすれば、彼は真実を語っており、その知恵を証明することになるだろうと。

「バビラに欠けているのはただ一つ、わが神々に敬意を払うことだけだ」と王は言った。「これほど賢明な人物が、神々を冒涜し、あえて神々に逆らうようなことを言うなどあり得ない。」

そしてバビラを慈しむように見つめ、こう言った。

「おお、賢明なる老賢者よ！　神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、私は直ちにあなたをまるで自分の父のように敬うだろう。神々に誓って、私は嘘をついてはいない。そして、私の王国にある多くの領地をあなたに授けることを約束する。」

そして、様々な甘言や、大きな栄誉と富の約束をもって、不敬虔な王はこの義人をおびき寄せようと努めた。しかし、真のキリストの信徒は、その信仰において揺るぎなかった。迫害者の媚びた言葉に対し、彼はこう答えた。

「あらゆる善の始まりであり基盤は敬虔さにある。それなしには、あなたが私に約束するすべての善は、ただ貧困であり、極度の悲しみであり、私が今持っているものさえも奪われることとなる。」

聖バビルを不義へと誘うことは不可能だと確信したヌメリアヌスは、再び激怒し、軍司令官ヴィクトリヌスに、聖人の首と足に重い鎖をはめ、街中を引き回して、皆の前で恥をかかせるよう命じた。　この無法者は、万人の称賛と尊敬を集めるこの高潔な老人が、このような不名誉を恥じて、王の不敬虔な望みを叶えることに同意するだろうと期待していた。聖人に鎖がかけられると、王は彼を嘲笑し始めた。

「神が私の証人だ」と彼は言った。「バビラよ、お前にはこの鎖を身につけて歩くのがよく似合う。それらは、お前の老齢にふさわしいものだ。」

「おお、王よ」と聖人は答えた。「あなたは嘲笑を込めてその言葉を口にしているが、私はあなたに真実を告げよう。この鎖は、あなたにとっての王冠と同じように私にとって名誉なものであり、キリストのために受ける苦しみは、あなたにとっての王権が喜びであるのと同じように、私にとっても喜びである。　不死の王のために死ぬことは、あなたにとっての命と同じくらい、私にとって望ましいことなのです。

聖バビラのもとには、実の兄弟である三人の少年がいた。彼らは年齢こそ若かったが、知性は成熟しており、霊的に彼らを育てたバビラは、彼らをまるで自分の子供のように思っていた。師に従い、彼らはバビラが鎖で縛られていた時でさえ、彼を見捨てなかった。彼らを一瞥して、王は聖人に言った。

「ヴァヴィラよ、私は思うのだが、この子供たちはあなたを師と呼ぶことで、ただあなたの傲慢さを増幅させているに過ぎない。彼らのせいで、あなたは我々の意志に逆らう姿勢を頑なに貫いているのだ。」

「もしあなたが」と聖人は答えた。「この子供たちに尋ねてみれば、彼らがあなた自身よりも賢明であることがわかるでしょう。そして、彼らが私の教えの種であることもおわかりになるはずです。」

「では、この子供たちは誰の子なのか？」と王は尋ねた。

「彼らは私の霊の子たちです」とバビラは答えた。「私は福音を宣べ伝えて彼らを再生させ、教えで育て上げ、訓戒で成長させました。今、あなたの目の前にいるこの小さな体の中に、偉大な人物であり、完全なキリスト教徒たちがいるのです。試してみれば、お分かりになるでしょう。」

王はヴァヴィラを広場へ連行し、牢獄に閉じ込めるよう命じた。そして少年たちを自分の元へ呼び寄せ、まず最初に、彼らに母親がいるかどうか尋ねた。

「私たちにとって、母であり、父であり、師であるのはバビラです」と子供たちは答えた。「私たちは母よりも彼を愛しています。母はただ私たちを産んだだけですが、彼は私たちに知恵と敬虔さを教え、私たちの魂を慈しみ、高い美徳へと導いてくださるからです。」

しかし、王は直ちにこれらの少年たちの母親を探し出し、自分の元へ連れてくるよう命じた。彼女が連れて来られると、王は彼女の名前を尋ね、本当にこの子供たちの母親なのかと問いただした。

彼女はこう答えた。

「私の名はクリストドゥラです。この子たちは確かに私の子供です。私は、私の病の始まりとして、彼らを神への捧げ物として捧げました。そして、私の子供たちをその世話に託した、英知に満ちたバビラが、彼らを天の宝庫へと導いてくださることを願っています。」

ヌメリアヌスは激怒し、敬虔な母親の頬を打つよう命じ、彼女にこう言った。

「王に対してそんな生意気なことを言うな。」

一方、子供たちは、母親が打たれるのを見て、こう言った。

「王は正気を失った。母が真実を語ったというだけで、母を打つとは。」

その後、王は子供たちに、名前と年齢を尋ね始めた。

彼らは、長男は12歳でウルヴァンという名、次男はプリリディアンで9歳、三男はエッポロニウスという名で7歳だと答えた。

拷問官は、優しい言葉や贈り物で彼らを誘惑し、偶像に拝むよう説得した。しかし、彼らは口を揃えてこう答えた。

「私たちはキリスト教徒であり、偶像にひれ伏すことはふさわしくありません。私たちは、天と地を創造された唯一の神を知るよう教えられました。私たちが崇拝するのはその神であり、悪魔ではありません。」

幾度もの甘言を弄した末、子供たちが断固として譲らないのを見て、拷問官は彼らを打つよう命じ、それぞれの年齢の数だけ傷を負わせた。こうして、最初の少年には十二の残酷な傷が、もう一人の少年には九つ、そして三番目の少年には七つの傷が与えられた。　少年たちは勇敢に苦痛に耐え、ただ、キリストのためにさらに多くの傷を負うだけの年齢が足りないことだけを残念がった。

「たとえ私たちを殺そうと決心されたとしても」と彼らは言った。「私たちは偽りの神々にひれ伏すことはありません。唯一の神、主イエス・キリストに仕えるのです。」

王は母親を解放し、子供たちを別の場所へ連行させた後、再びバビルを呼び寄せた。

「ほら」と王は言った。「お前の子供たちはすでに我々の神々にひれ伏した。お前も直ちに自らひれ伏すべきだ。」

「偽りの父である悪魔から、あなたもまた嘘をつくことを学んだのだ」と、バビラは王に答えた。「私は知っている。いかなる誘惑や拷問によっても、子供たちをキリストから引き離すことは不可能だと。なぜなら、私は彼らに、唯一の真の神を崇め、その神を信じることをしっかりと教えたからだ。」

そこで王は、バビラと子供たちを木に吊るし、火で焼き殺すよう命じた。

バビラは天を仰ぎ、神に祈りを捧げ、この幼い子供たちに御自身の力を授け、これから訪れる苦しみの中で乗り越えられないほどの忍耐を授けてくださるよう願った。そして子供たち自身に対しては、キリストからの偉大な報いを約束し、勇敢に苦しみを耐え抜くよう励ました。　悪意のない子供たちは、師と共に勇敢に苦難に耐え、神の助けが彼らの忍耐を強めた。

拷問者たちは、苦しむ者たちを木から降ろし、バビルを拷問の場からほど近い一軒の家に鎖で閉じ込めるよう命じた後、再び子供たちを甘言で誘惑しようと決めた。彼は彼らを自分の子供たちと呼び、品行方正で美しい若者たちだと称え、金や銀を贈った。しかし、子供たちは声を揃えて彼にこう言った。

「狡猾な詐い者よ！　なぜ我々の前に、その誘惑の複雑に編まれた網を張り巡らすのか？　まさか、私たちを鳥のように捕まえられると思っているのか？たとえ全力を尽くしたとしても、決して成功することはない。なぜなら、私たちを守り、覆っているのはキリストの力だからだ。そして、その力によって、お前の網はまもなく打ち砕かれ、私たちは救いを得るだろう。

すると、若者たちは叫んだ。

「おお、私たちの母よ、敬虔なる方よ、私たちはあなたから離れることはありません！　おお、私たちの愛する師よ、バビラよ、私たちはあなたの教えに忠実であり続けます！　なぜなら、この

王一人だけでなく、たとえここに多くの、最も残酷な王や拷問者たちがいたとしても、彼らでさえ私たちを私たちの神から引き離すことはできないからです。」

その近くで投獄されていた聖ヴァヴィラは、弟子たちのこの言葉を聞いて、言い表せないほどの喜びに満たされ、子供たちの口を通して御自身を賛美してくださる神に感謝を捧げた。

まもなく、王はバビラを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼にこう言った。

「ヴァヴィラよ、この子たちはあなたの実の子供ではないのか？　彼らの気性の悪さはあなたにそっくりだから、きっとあなたの子に違いないと思う。」

– まことにその通りです――聖人は答えた――この若者たちは私の子供たちですが、肉によるものではなく、霊によるものです。なぜなら、私はこれまで肉欲に誘惑されたこともなく、夫婦生活も経験したことがないからです。

「不従順なヴァヴィラよ！」と王は言った。「なぜ今に至るまで、その冷酷さを貫き、自分自身も我々も苦しめ続けるのか？　早く神々に生贄を捧げよ。そうすれば、我々もこれ以上苦労する必要がなくなり、お前も子供たちと共に苦しみから解放され、我々からの栄誉と贈り物に恵まれるだろう。　自ら進んで自分やこの幼い子供たちを苦しみと死にさらすことに、お前に何の益があるというのか？賢明な導き手として、子供たちを自分の命と同じように大切にし、彼らが時期尚早に命を落とさず、若さの最盛期に早々に枯れて死なないように配慮すべきではないのか？

しかし、神に導かれたバビラはこう反論した。

「王よ、あなたは自分の王国を顧み、敵に対して武装し、彼らと戦うべきではないでしょうか。罪のない私たちを苦しめるのではなく。あなたは、この世のあらゆる心配事を投げ捨てて私たちに襲いかかり、国を蹂躙する敵のことを忘れ、私たちと戦い、私たちを追い詰めているではありませんか。　そして、あなたがこれらすべてを行っているのは、あなたの王国に何らかの利益をもたらすためではなく、ただあなたの獣のような激怒と凶暴な気性に迎合するためだけなのです。

この言葉に激怒した王は、バビラと子供たちをも死刑に処した。兵士たちは聖徒たちを斬首の場へと連行したが、その間、バビラはダビデの言葉を歌っていた。

「*わが魂よ、安らぎの場所へ戻れ。主はあなたに恵みを与えられたから*」（詩編114:6）。

聖徒たちがキリストのために首を差し出すことになっていた場所にたどり着くと、バビラは少年たちを自分の前に立たせ、まず彼らを剣の下に導いた。彼は、もし自分より後に残った少年たちの誰かが、死を恐れて主から背くのではないかと恐れていたからである。　それゆえ、彼は少年たちを先立って天へと送り出し、彼らを慰めながら、剣によって斬り殺されることを恐れるな、と教えた。なぜなら、彼らはキリストから永遠の命を受けるからである。そして、少年たちが剣によって死を受け入れたとき、バビラは喜びのうちにこう叫んだ。

「*見よ、これこそ、主がわたしに与えてくださったわが子らである*」（イザヤ書8:18）。

その後、彼自身も首を剣の下に差し出した。その際、彼は自分の遺体を埋葬する者たちに対し、棺の中に鎖や足枷も一緒に納めるよう遺言した。

「それらを――」と彼は言った、「わが体の飾りとせよ。」

首を斬られて、聖バビラは天の住まいに去り、子供たちと共に天の父の御前に現れた。その尊い遺体は、彼が臨終の際に自ら命じた通り、鎖と共に埋葬された。彼と共に、三人の聖なる幼児たちも埋葬された。

それから何年も経った後、コンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス王[5996]は、自分の叔父[5997]の息子であるユリアヌスの兄弟を、ガリアの共同統治者に任命した（彼には自分の子供がいなかったからである）。　ガリアは、アンティオキアに到着すると、聖バビラと彼と共に殉

[5996] ローマ皇帝。コンスタンティヌス大帝の次男で、361年まで在位した。

[5997] ユリア・コンスタンティア、コンスタンティヌス大帝の弟。これらの共同統治者は「カエサル」と呼ばれた。

教した三人の少年たちの聖遺骨を、アンティオキアの郊外にあるダフナと呼ばれる場所に移した。その場所については、ギリシャの異教の伝説に語られているように、アポロンから身を隠していたダフネという名の乙女にちなんで名付けられたと伝えられている[5998]。 この場所は非常に美しく、キパリス（ヒノキ）の木々に囲まれ、他の背の高い木々の林に包まれており、広大な面積を占め、肥沃な土地であり、清らかな水が湧き出る泉があった。ダフナの中心には偶像崇拝の神殿が聳え立ち、その中には芸術的に彫刻されたアポロンの偶像が安置されていた。 この偶像は、問いかけられた者に答えを返していた。というのも、その中には悪魔が潜んでいたからである[5999]。ここには異教徒たちが集まり、偶像に生贄を捧げ、様々な不敬な遊びや不法行為を行っていた。前述のガッリウスは、敬虔なキリスト教徒であり、異教徒たちをその不法行為から遠ざけようとしていたが、 ダフネにある偶像の神殿を破壊しようとしたが、それによってギリシャ人の間で反乱が起きるのではないかと恐れた。なぜなら、そこにはまだ多くの異教徒がおり、彼らは邪悪な神々のために死さえも厭わない覚悟をしていたからである。 そこでガッリウスはそこに小さな教会を建て、すでに述べたように、聖バビラと三人の少年の聖遺物を大きな石の聖櫃に納めて、そこへ移した。彼は、不信心者たちがその場所に集まるにつれ、聖遺物から湧き出る奇跡を目にして、少しずつキリストへと立ち返っていくことを期待していた。 ガッリウスが殺害され、コンスタンティウスが死去した後、ユリアヌス・アポステート[6000] が即位した。ペルシア遠征の途中、彼はアンティオキアを訪れ、アポロンの神殿に立ち寄った。その偶像の前で生贄を捧げた後、ユリアヌスは、自分がペルシア人に勝利できるかどうかを偶像に尋ねた。 しかし、偶像は彼に答えなかった。というのも、聖バビラの聖遺物がダフヌに移されて以来、悪霊は姿を消し、偶像は沈黙し、いかなる質問にも答えることがなくなっていたからである。アポロンの祭司たちからそのことを知ったユリアヌス は、「ガリラヤ人」[6001] に、聖人の聖遺物が入った石の聖櫃をそこから持ち去るよう命じた。 アンティオキアのキリスト教徒たちは、老若男女を問わず皆集まり、詩篇と賛美歌を歌いながら、聖バビラと三人の少年の聖遺物を街へと運び込んだ。聖遺物箱を四方から取り囲んだキリスト教徒たちは、次のように歌った。*「偶像に仕え、偶像を誇る者たちは皆、恥じよ」*（詩編96:7）。聖人の遺骨がダフネから街へと運ばれるやいなや、アポロンの神殿に天から火が降り注ぎ、偶像とともに神殿を焼き尽くした。こうして不信心者たちは恥をかかされ、信者たちは喜び、神を賛美した。主の栄光は永遠に。アーメン。

聖預言者モーセ・神視者の生涯

記念日：9月4日

ヨセフの死後、その父ヤコブの子孫は、数百年もの間[6002] エジプトの地でこれほどまでに増え広がり、その全土がイスラエル人で溢れかえり、戦時には彼らだけで六十万人の軍勢を動員することができた。 そこでエジプトの王は、イスラエルの民がエジプトの敵と結託し、自由を求めて自分に

5998 アポロン――古代ギリシャおよびローマの神であり、光、とりわけ太陽の光の神として崇められ、また知性の啓蒙、詩、音楽の神、予言者、病を癒す者、あらゆる市民秩序の守護神とされた。

5999 つまり、ここにはいわゆる「オラクル」が存在していた。それは、古代ギリシャ人やローマ人の信仰によれば、神々が神聖な木の葉のざわめきや水のせせらぎなどを通じて、人々に未来を予言する場所であった。 これらの予言は謎めいた言葉の性質を持っており、その解釈者は祭司たちであった。彼らは自らの利益のために、民衆の間で粗野な迷信や誤った考えを助長していた。

6000 ユリアヌス・フラウィウス、いわゆる「背教者」と呼ばれたローマ皇帝。

6001 「ガリラヤ人」とは、キリストの信奉者たちのことであり、キリストは「ガリラヤのイエス」（マタイ26:69）と呼ばれていた。それは、キリストが幼少期と青年期を、ガリラヤの小さな町ナザレで過ごしたためである。

6002 族長ヨセフの死は、およそ紀元前1923年頃と見なされる。イスラエル人のエジプト滞在は、ヤコブとその家族がエジプトに移住して以来、約398年間続いた。

対して武装蜂起するのではないかと恐れ始めた。王はイスラエル人に特別な監督官を付け、彼らに過酷な労働でイスラエル人を疲れ果てさせることを義務付けた。　彼らはとりわけ残酷にイスラエル人を苦しめ、土地を耕させ、煉瓦を作らせ、都市を建設させた。それは虚栄心のためでもあったが、とりわけ、ユダヤ民族を一日も早く根絶やしにするためであった。　しかし、彼らがイスラエル人に対してますます憎悪を募らせ、彼らを酷使すればするほど、イスラエル人はますます増え続けた。なぜなら、神ご自身が増やし、栄光を与えることを望まれた人々の数を、彼らは減らすことができなかったからである。　王は助産婦たちに、ユダヤ人の男児が生まれた直後に殺すよう密かに命じたが、彼女たちは神を畏れ、彼らを殺さなかった。　そこで王は、エジプト全土に非人道的な命令を下し、ユダヤ人の男児を見かけた者は誰でも、その子を川に投げ込まなければならないとした（出エジプト記第1章）。

その頃、レビ族のアンラムという名の男がそこに住んでおり、同じレビ族のヨハヴェドゥという妻を持っていた。彼らには、その時点で、息子のアロンと娘のマリアムが生まれており[6003]。ユダヤ人の新生児が皆殺しにされていたあの最も過酷な時期に、彼らには第二の息子が生まれた。その子はあまりにも美しく、母親はユダヤ人の新生児をすべて殺すという残忍な法律を知りつつも、その子を憐れみ、自宅で隠すことを決意し、三ヶ月間そうしていた。　しかしその後、もはや赤ん坊を隠し続けることができなくなったため、彼女は籠を取り、それをタールで塗り、その中に赤ん坊を寝かせ、川岸の葦の茂みに置いた。　赤ん坊の姉は、少し離れたところから、彼に何が起こるかを見守っていた（出エジプト記2:2）。すると、ファラオの娘[6004]が、川[6005]で水浴びをしにやって来て、彼女の侍女たちは川岸を歩き回っていた。彼女は葦の茂みの中に籠を見つけ、侍女にそれを取りに行かせた。　かごを開けて、その中で泣いている赤ん坊を見ると、彼女は憐れみを感じ、「これはヘブライ人の子だ」と言った。王女は赤ん坊を養子に迎え、ヘブライ人の女性の中から乳母を見つけようと考えた。ヨセフス・フラヴィウスの記述[6006]によると、見つかった赤ん坊のもとには多くのユダヤ人の乳母が連れてこられたが、赤ん坊は彼女たちから乳を飲もうとしなかった。そこで、モーセの姉マリアムは勇気を出してファラオの娘のもとへ近づき、こう言った。

「私が行って、ユダヤ人の乳母を一人連れてきて、その子に授乳させてあげましょうか？」

ファラオの娘は彼女に「行ってきて」と答え、マリアムは自分の母親を連れてきた。するとファラオの娘は彼女に言った。

「この赤ん坊を受け取って育ててくれ。その見返りとして、報酬を支払うから。」

ヨハヴェダは赤ん坊を受け取り、赤ん坊は彼女に寄り添い、彼女を自分の母親だと感じ取った。　彼女は自分の家でその子を育てた。そして、その子が成長すると、彼女は彼をファラオの娘のもとに連れて行った。ファラオの娘は彼を養子とし、彼に「モーセ」という名をつけた。「*なぜなら、私は彼を水の中から救い出したから*」と彼女は言った（この名前はエジプト語で「水」を意味する）（出エジプト記2:7–10）。

いくつかの古代の伝説[6007]によると、ある時、ファラオの娘がモーセを父のもとに連れて行くと、父は彼と遊んでいる最中に、小さな偶像の彫像が飾られた王冠を彼の頭に載せた。しかし、モー

6003　アムラムはレビ族（族長ヤコブの息子）の出身であり、レビの息子カアフの息子であった（出エジプト記6:20；民数記3:29、26:58–59）。ヨハヴェダはレビの娘であった（出エジプト記6:20；民数記26:59）。

6004 すなわち、エジプトの王の娘である。エジプトの王たちはファラオと呼ばれていた。

6005　ここで言及されているのは、言うまでもなくナイル川、すなわち地球上で最も偉大な川である。ナイル川の全長は6000ヴェルストと推定されており、アフリカ北東部をエチオピアから流れ出し、地中海に注いでいる。

6006 ヨセフス・フラヴィウス（西暦37年生まれ）はユダヤ人の歴史家であり、『ユダヤ古代史』の著者である。同書の中で、彼は聖書の聖典には記載されていないモーセに関するいくつかの伝承を伝えている。

6007 この伝承は、11世紀末から12世紀初頭のビザンツの作家ゲオルギー・ケドリンによって伝えられている。彼は、いわゆる『歴史的シノプシス』、すなわち世界の創造から西暦1059年までの年代記的伝承を集めた著作の著者である。

セはその王冠を頭から引き剥がし、地面に投げ捨て、自分の足で踏みつけたという。　異教の祭司は、東方の三博士[6008]から、「イスラエル人に指導者が生まれたとき、エジプトは多くの災いに見舞われる」という予言を受けていたため、ファラオに対し、その幼児が成長して国に災いをもたらすことのないよう、殺すよう助言した。　しかし、神の御心と御計画により、他の人々はこれに反対し、その赤ん坊は無知ゆえに、故意ではなくそうしたのだと主張した。彼の幼い無知を試すために、人々は熱い炭を持って来たが、彼はそれを手に取り口の中に入れたため、舌を火傷し、その結果、言葉が不自由になった。

モーセが成長すると、王の娘は、エジプトのあらゆる知恵を彼に教えるために、エジプトの最も優れた賢者たちを彼の側に付けました。彼は言葉と行いに優れ、短期間のうちに師たちを凌駕し、王や王の側近たちの寵愛を受けるようになりました（使徒行伝7:21–22）。しかし、自分がイスラエル人であるという出自を知り、天に存在し、宇宙の創造主である唯一の神――その神を自分の民が信じていた――を悟ると、彼はエジプトの異教的な不義を忌み嫌うようになった（ヘブライ人への手紙11:24–26）。

一部の歴史家は[6009]において、エチオピア人がエジプトと戦った際、すでに成人していたモーセがエジプト人によって軍司令官に選ばれ、その勇猛さによって敵を打ち破ったと記している。　しかし、エジプトの王は感謝するどころか、彼をますます憎むようになった。というのも、エジプトの祭司たちの一部が、占いの結果、モーセが将来エジプトに災いをもたらすと予言し、王に彼を殺すよう助言したからである。　彼らの唆しを受けて、王は確かにモーセを殺害しようと企てたが、娘を傷つけたくなかったこと、またモーセに何らかの過ちを見つけ出したり、より好都合な時期を待ったりしたいと考え、すぐには実行に移さなかった。

ある時、モーセは同胞であるイスラエルの民のもとへ行き、彼らの過酷な労働の様子を見回していると、あるエジプト人が一人のユダヤ人を殴っているのを目撃した。その場所の近くに第三者がいないことを確認すると、彼はそのエジプト人を殺し、その遺体を砂の中に隠した。　翌日、彼は再び外に出て、口論している二人のユダヤ人を見かけ、口論を始めた方にこう言った。

「なぜあなたは隣人を殴るのか。」

すると、その男は言った。

「誰があなたを、私たちの上の指導者や裁判官に任命したのですか？　昨日エジプト人を殺したように、私をも殺そうとしているのですか？」

モーセはこれを聞いて恐れ、心の中でこう思った。

「おそらく、この件は皆に知れ渡ってしまったのだろう。」

ファラオはこのことを聞くと、モーセを殺そうとした。しかし、モーセはファラオから逃れ、マディアムの地へ身を寄せた（出エジプト記2:11–15）。

長い旅路に疲れ果てたモーセは、井戸のそばに座った。　すると、マディアムの祭司ヨフォルの七人の娘たち[6010]が、父の羊の群れを牧していたところ、その井戸にやって来た。彼女たちは、羊

6008　古代において「ヴォルフ」という名称は、高尚かつ広範な知識、とりわけ自然の秘力、天体、神聖な文字などに関する知識を備えた賢者を指していた。　彼らは自然現象を観察し、夢を解き明かし、未来を予言した。また、その多くは同時に祭司でもあり、王宮や民衆の間で多大な尊敬を集めていた。とりわけエジプトのヴォルフフたちはそのような存在であった。

6009 ヨセフス・フラヴィウスの『ユダヤ古代史』第2巻第10章。

6010　マディアニ人、あるいはマディアミ人は、アブラハムとヘッテラとの間に生まれた第四子マディアムの子孫であった。彼らは、さまざまなアラビアの部族からなる数多くの民であり、遊牧生活を送っていた。　彼らが主な居住地としていたマディアムの地は、アラビアの紅海（チェルムノエ海）のエラニト湾沿い、その東側に位置する砂漠地帯であった。アブラハムの息子マディアムの子孫として、イオフォルとその一族は真の神を崇拝していた。

に水を飲ませるために、水桶　に水を汲み始めた。しかし、他の羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。そこでモーセは立ち上がり、娘たちを守り、彼女たちのために水を汲み、羊に飲ませた。

娘たちは家に帰ると、あるエジプト人が羊飼いたちから自分たちを守り、さらには水を汲んで羊に飲ませてくれたことを父に話した。ヨフォルは急いでモーセを招き入れ、家に迎え入れ、その後、娘のセプフォラをモーセに嫁がせた。モーセは彼女との間に二人の息子をもうけた。　長男には「リサム」と名付けた。「なぜなら、私は異国の地でよそ者となったからだ」と彼は言った。次男には「エリエゼル」と名付け、「私の父の神は私の助け手となり、ファラオの手から私を救い出してくださった」と語った（出エジプト記2:16–22）。

長い時が経ち、エジプトの王が死んだ。イスラエルの子らは重労働に嘆き、その苦しみと重荷の叫びが神に届いた。　神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い出された。そして神は人々の苦しみをご覧になり、彼らを救い出そうと決心された（出エジプト記2:23–25）。

モーセは、義父ヨフォルのところで羊の群れを飼っていた。ある日、彼は群れを連れて遠くの荒野へと進み、神の山ホリブにたどり着いた[6011]。すると、いばらの茂みの真ん中から、炎の中に主の御使いが現れた[6012]。モーセは、そのいばらの茂みが火に包まれているのに、燃え尽きないのを見た。

モーセは言った。

「行って、この驚くべき光景を見てこよう。なぜこの荊の茂みが燃え尽きないのか？」

すると、主は荊の茂みの内から彼に呼びかけられた。

「モーセよ、モーセよ！」

彼は答えた。

「はい、主よ！」

すると、神は彼に言われた。

「ここに近づいてはならない。あなたの足から履物を脱ぎなさい。あなたが立っている場所は聖なる地だからである。」

そして、さらにこう付け加えられた。

「わたしは、あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」

モーセは、神を直視することを恐れて、顔を覆った。

「わたし」と主はモーセに言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみと、彼らを虐げる者たちからの叫び声を聞き、彼らの苦しみを知っている。　そこで、わたしは彼らをエジプト人の手から救い出し、この地から導き出し、実り豊かで広大な地、すなわちカナン人、ヘテ人、アモリ人、ゲルゲセ人、ペリジ人、エヴェ人、およびエブス人の地、乳と蜜の流れる地[6013]へと導き

6011 ホリブ――アラビアの砂漠にある山で、シナイ山が東部を構成する同じ山脈の西側の高地である。

6012 スラブ語では「クピナ」と呼ばれる。これはアラビア半島に自生する棘の多いアカシアの一種で、特にホリブ山やシナイ山周辺に豊富に生育しており、鋭い棘を持つ小さな低木である。　モーセの前に現れた、燃えているが燃え尽きないこの低木は、聖教会の教えによれば、受肉と神の御子の誕生後も朽ちることなく留まった聖母マリアを象徴している。

6013 「カナンの地」とは、場合によっては、アジア西部、地中海東岸に広がる広大な地域――特にヨルダン川のこちら側、フェニキア、およびペリシテ人の地――を指し、これとは区別されるのがヨルダン川対岸の地域である。　近世においては、カナンの地とは通常、約束の地全体、すなわちヨルダン川の両岸にイスラエル人が居住するすべての土地を指す。カナンの地は、並外れた肥沃さと、牧畜に適した牧草地の豊富さで知られており、その意味で聖書では「乳と蜜の流れる地」と呼ばれている。　カナン人は、カナン地方の最初の住民であり、ハムの息子カナンの子孫である。彼らは11の部族に分かれていたが、そのうち5つ――エヴェ人、イェヴス人、アモリ人、ゲルゲセ人、ヘッテ人――は、後にイスラエル人が占領した土地、すなわち厳密な意味での「約束の地」に住んでいた。　エヴェイ族は、カナン人の中でも特に人口の多い部族であり、カナン地方の中央部および一部は南部に住んでいた。　アモリ族――モーセの時代において最も強大なカナン族――は、ヨルダン川のこちら側にあるカナン地方そのものに広く分布し、その中央部とアモリの山地を占め、北

入れる。 見よ、イスラエルの子らの叫びがすでにわたしのもとに届いている。そして、わたしは 、エジプト人が彼らをいかに苦しめているかを見ている。さあ、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わし、あなたはエジプトからわたしの民、イスラエルの子らを導き出さなければならない。

モーセは神に言った。

「私は、いったい誰という者でしょうか。ファラオのもとへ行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出すなど、私にできることでしょうか。」

「わたしがあなたと共にある」と神は彼に答えられた。「そして、わたしがあなたを遣わしたしるしをあなたに示そう。あなたがわたしの民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神への礼拝を行うことになる。」

モーセは神に言った。

「さて、私がイスラエルの子らのところへ行って、『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのもとに遣わされた』と告げるとします。すると彼らは、『その方の御名は何か』と私に尋ねるでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。

「わたしは『ある者』である[6014] 」と、神はモーセに答えられた。「だから、イスラエルの子らにこう言いなさい。『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神[6015] が、わたしをあなたがたのところへ遣わした。』これが、永遠にわたしの名であり、代々わたしの記憶として伝えられるものである。」 行って、イスラエルの長老たちを集め、彼らにこう告げなさい。『あなたがたの先祖の神、主がわたしに現れて、こう言われた。「わたしはあなたがたを顧みた……そして、あなたがたをエジプトの苦役から導き出す。」』そうすれば、彼らはあなたの言うことを聞き、あなたがたはエジプトの王のもとへ行き、彼にこう告げるのだ。『ヘブライ人の神、エホバが、私たちを召された。』 それゆえ、私たちを荒野へ、三日分の道のりだけ行かせて、私たちの神、主に犠牲を捧げさせてほしい。」「しかし、私はエジプトの王があなたがたを行かせることを許さないことを知っている。そのとき、私は奇跡をもってエジプトを打ち、ファラオはあなたがたを行かせることを余儀なくされるだろう。」

「もし彼らが私を信じず、私の言葉に耳を傾けず、『主はあなたに現れなかったのではないか』と言うなら？」とモーセは反論した。

主は言われた。「お前の手にあるものは何だ？

彼は答えた。「杖です。」

主は言われた。「それを地面に投げなさい。」

モーセが投げると、杖は蛇に変わった。モーセはそこから逃げ出したが、神は彼に蛇の尾をつかむよう命じ、蛇は彼の手の中で再び杖になった。

主は言われた：

にも南にも遠くまで広がっていた； ヘテ人はアモリ人の近くの高地に住み、彼らもまた強大で数多くの部族であった。エブス人はモーセの時代、約束の地の南部を占めていた。ゲルゲセ人はヨルダン川の西側に住んでいた。 ペレゼ人は、パレスチナの古来の先住民に属する民族であり、カナン族の出身ではなかった。彼らは主にパレスチナの中央部、すなわちカナンの地に住んでいた。

6014 「存在する者」、あるいはヘブライ語で「エホバ」とは、神の存在そのものの独自性、永遠性、不変性を表す神の御名の一つである。

6015 神は、地上で信仰を守り続ける者としてアブラハムを選び、彼と契約を結ばれた後、その約束をイサクとヤコブにも繰り返された。 このため、聖書においては、これらの族長はしばしば、ユダヤ民族の始祖としてだけでなく、神の契約と約束の継承者かつ守護者として、また信仰と敬虔の偉大な実践者として、さらに神の御前でとりなし手および擁護者として、その信仰と美徳によって神から特別な恵みを授かった者として、共に挙げられています。 それゆえ、聖書の中で、また神の民への御出現や啓示の際にも、彼らの名が繰り返し言及されており、この意味で、神は「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と呼ばれている。

「これは、主、すなわち彼らの先祖の神があなたに現れたことを、人々が信じるためのしるしである。もし彼らがこれでも信じないなら、さらにこうしなさい。手を胸の内に差し入れなさい。」

モーセは手を胸の内に差し入れ、それから取り出すと、その手が雪のように白く、ハンセン病に冒されていたことに気づいた[6016]。主は彼に再び手を胸の内に差し入れるよう命じると、その手は再び健康な状態に戻った。

「もしこの奇跡さえも信じないなら」と主は言われた。「川から水を汲み、陸地に注ぎなさい。そうすれば、その水は陸地の上で血となるだろう。」

モーセは再び、自分は口下手であり、言葉に不自由であるため、神が自分を遣わさないよう懇願した。

主は言われた。

「人間に口を与えたのは誰か。誰が人を口がきけない者や耳の聞こえない者、目が見える者や目の見えない者にするのか。それは私、主なる神ではないか。さあ、行きなさい。私があなたの口に寄り添い、何を語るべきかを教えよう。」

モーセは依然として拒み続け、自分の代わりに、もっと有能な誰かを遣わしてほしいと懇願した。すると、主はモーセに怒りを燃やし、こう言われた。

「あなたには兄弟のアロンがいるではないか。彼があなたの代わりに話すことができることを、私は知っている。彼はあなたに会いに出てくるだろう。そして、あなたと会うことを喜びとするだろう。　あなたは彼に語りかけ、わたしの言葉を彼の口に授ける。そうすれば、わたしはあなたの口と彼の口のそばにいて、あなたがたに何をすべきかを教える。彼は　、民に向かってあなたの代わりに語り、あなたの口となる。そして、あなたは彼にとって神の代わりとなる。この杖（蛇に変えられたもの）をあなたの手に取れ。それを使って、[6017]、しるしを行うのだ。

その後、モーセはヨフォルのところに戻り、彼に言った。「私はエジプトへ行き、兄弟たちがまだ生きているかどうか確かめてくる。」

「安らかに行きなさい」とヨフォルは答えた。

こうしてモーセは恐れることなくエジプトへ向かった。というのも、彼を殺そうとしたあの王も、彼の滅びを望んでいた者たちも、すでに皆死んでいたからである。神の御命により、アロンがモーセを出迎えに出てきて、喜びのあまり彼に口づけをした。モーセは主の御言葉をすべてアロンに伝えた。　エジプトに着くと、彼らはイスラエルの長老たちをすべて集め、主がモーセに語られたすべての言葉を彼らに告げた。そしてモーセは、彼らの目の前でしるしと奇跡を行った。イスラエルの人々は彼らを信じ、神がイスラエルの子らを顧み、彼らの苦しみを見守ってくださったことを喜び祝った。

その後、モーセとアロンはファラオのもとへ行き、彼に言った。

「イスラエルの神、主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、荒野でわたしに祭りを捧げさせよ。』」

しかし、ファラオは言った。

「イスラエルの神とは一体何者なのか。どうしてその声に従わなければならないのか。私は主を知らないし、イスラエルの民を去らせるつもりはない。モーセ、アロンよ、なぜ民を仕事からそらそうとするのか。さあ、各自自分の仕事に戻れ。」

[6016] ハンセン病は、最も恐ろしく、嫌悪感を抱かせる伝染病である。この病気は主に暑い気候の国々、特にエジプト、パレスチナ、シリア、アラビア、インド、そして東洋全般に蔓延している。　この病気が進行すると、皮膚は白くなり、その後、腫れ上がり、乾燥し、不快な臭いを放つかさぶたや潰瘍で覆われる。さらに四肢が脱落し、多くの場合、最終的にこの病に冒された者は恐ろしい苦痛の中で死に至る。

[6017] 神がモーセに現れ、彼を召されたことについては、出エジプト記3:1–4:17を参照のこと。

そして直ちに、ユダヤ人を監督する役人たちに、彼らをさらに過酷な労働で苦しめ、今後、煉瓦作りに必要な藁を与えないよう命じた。それ以来、彼らは自ら藁を集めなければならなくなったが、それでも煉瓦のノルマは減らされなかった。

「ユダヤ人たちは怠けている」と王は言った。「だから、『我々は行って、我らの神に犠牲を捧げよう』と叫んでいるのだ。」

その後、ユダヤ人への弾圧はさらに激化した。自分たちで材料を探さなければならなかったため、彼らは毎日割り当てられたレンガの数を間に合わせることができなかった。そのせいで、ユダヤ人の監督者たちは殴打され、いかなる弁明も聞き入れられなかった。そこで彼らはモーセとアロンを非難し、こう叫んだ。 「あなたがたが、私たちをファラオとその家来たちの目に憎まれる者とし、私たちを殺すための武器を彼らの手に渡したその行いについて、主があなたがたを裁かれますように。」

モーセは主に向かってこう言った。

「主よ。なぜこの民にこのような災いを下されたのですか。なぜ私を遣わされたのですか。私がファラオのもとへ行き、あなたの御名によって語り始めて以来、彼は民に対してますますひどい仕打ちをするようになったのです。」

主はモーセに答えられた。

「今、あなたが、わたしがファラオに何をするかを見るだろう。力強い御手の働きによって、彼はイスラエルの子らを去らせ、さらには彼らを自分の国から追い出すだろう。 彼らにこう告げよ。『わたし、主は、あなたがたをエジプト人のくびきから解き放ち、あなたがたを救い出し、あなたがたをわたしの民とし、あなたがたの神となる。そして、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地へあなたがたを導き入れ、それをあなたがたの嗣業として与える。』

モーセはこれらの言葉をイスラエルの子らに伝えたが、彼らは臆病さと重労働のゆえに、モーセを信じなかった。そこで主はモーセに、ファラオのもとへ行き、イスラエルの子らをその地から解放するよう告げるよう命じられた。 モーセは、「イスラエルの子らでさえ私の言うことを聞かないのに、私の言葉さえも不明瞭であるのに、どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか」と答えた。

これに対し、主は彼にこう答えられた。

「わたしはあなたを、ファラオにとって神のような存在として立てた。そして、あなたの兄弟アロンは、あなたにとって預言者となる。あなたは、わたしが命じることをすべて彼に告げ、あなたの兄弟はファラオに語り、イスラエル人を解放するよう求めるのだ。 しかし、わたしはファラオが全力を尽くして頑なさを示し、あなたがたに耳を貸さないようにする。それゆえ、わたしはエジプトに手を下し、驚くべき災いをもって厳しい裁きを行う。そうすれば、すべてのエジプト人は、わたしが神であることを知るだろう！ そして、わたしはイスラエルの子らを彼らのうちから導き出す。もしファラオがあなたたちに証拠を求めれば、あなたはアロンに杖を投げさせるがよい。そうすれば、その杖は蛇となる。

神ご自身に勇気づけられたモーセとアロンは、再びファラオとその家臣たちの前に現れ、主が命じられたとおりにした。アロンはファラオの前で自分の杖を投げると、その杖は蛇になった。 ファラオはエジプトの賢者たちや魔術師たちを呼び寄せ、彼らもまた魔術を用いて同じことを行おうとしたが、アロンの杖は 彼らの杖を飲み込んでしまった。 ファラオの心は頑なになり、主が予告されたとおり、彼らの言葉に耳を傾けず、ヘブライ人を解放しようとはしなかった。そこで、神の命により、モーセとアロンはエジプトの地に災いを下し始めた[6018]。

[6018] エジプトの災いについては、出エジプト記7章～12章を参照のこと。

翌日、アロンはモーセの命に従い、自分の杖を取り、ファラオとその家来たちの目の前で川の水を打つと、川の水はすべて血に変わり、川の中の魚は死に絶え、川は悪臭を放つようになり、エジプト人は川の水飲むことができなくなった。 第二の災いはヒキガエルであった[6019]：アロンはエジプトの水に向かって手を伸ばし、そこからヒキガエルを呼び出した。それらは家々、寝室、寝床、炉、捏き桶に入り込み、王や家来たち、そして民の身にもまとわりつき、どこにも、誰にも安らぎを与えなかった。　こうしてエジプト全土がヒキガエルで覆われたが、モーセの命令によってそれらが死に絶えると、エジプト人はそれらを山のように積み上げ、死に絶えて腐ったヒキガエルのため、全土が悪臭を放つようになった。　第三の災いは、人々や家畜、ファラオとその家、そしてその家来たちを襲った蚊であり、エジプト全土の地面は蚊で埋め尽くされた[6020]　。第四の災いは、ハエであった[6021]。第五の災いは、エジプト全土の家畜に降りかかった極めて重い疫病であった。　第六の災いは、人と家畜に生じた化膿性の腫れ物であった。第七の災いは、雹と、その雹の中に混じった火であった[6022]。その雹は、野原にあるすべてのもの、すなわち草、木、家畜、そして人々を打ち倒した。 第八の災いは、イナゴとイモムシ[6023]であり、それらはエジプトのすべての植物を食い尽くした。 第九の災いは、エジプト全土を覆った三日間の暗闇であった。その暗闇は極めて濃く、火を灯しても光が差し込まなかったため、三日間、誰も互いの姿を見ることができず、その間、誰も寝台から起き上がることができなかった。第十の、そして最後の災いは、エジプトの初子たちの死であった。

これらの災いはすべて、イスラエル人には一切害を及ぼさず、エジプト人のみに降りかかったものであり、ファラオが神の民を荒野へ送り出し、神に仕えさせようとしなかったことに対する報いとして、神がモーセとアロンを通じて下されたものであった。　というのも、彼は災いを恐れて何度か彼らを解放すると約束したものの、災いが弱まると再び意を固くし、そのようにして第十の災いが下るまで彼らを解放しなかったからである。　第十の災いの直前、イスラエルの子らは、モーセの命じたとおりに、エジプト人から銀や金の器、そして高価な衣服を、持ち運べる限り多くねだり取った。

その後、モーセは、エジプトからの脱出を記念して、主の御命令に従い、イスラエルの子らに過越の祭りを定めました。主はモーセとアロンにこう言われました。

「この月[6024] を、あなたがたにとって一年の初めとせよ。イスラエルの子らの全会衆に告げよ。この月の九日目に、各家庭は自分の群れから子羊を一頭ずつ選び出さなければならない。　その子羊は、欠点のない、雄の、一歳のものとしなさい。そして、今月の十四日まで、それをあなたがたの

[6019] 大きな尾のないカエルの種。 ヒキガエル自体は無害で危険ではないが、非常に不快で嫌悪感を催す。エジプトの地を無数に覆い、沼地やナイル川の運河、野原や庭を埋め尽くし、家屋や寝室、寝床、炉や樽にまで這い込むため、住民にとってはまさに災いとなっていた。

[6020] 「スキナ」という言葉について、大多数の注釈者はここで蚊を指していると解釈している。蚊は東方や温暖な国々、特に川の近くでは数え切れないほど多く生息しており、しばしばその国の災いとなっている。他の解釈によれば、これは人間や家畜に寄生する様々な種類の寄生虫を指すという。

[6021] 「犬のハエ」とは、犬にとって特に有害とされる、皮膚に潰瘍を引き起こすハエや昆虫の一種である。しかし、ここではこの表現に代わるヘブライ語は、本来「混合物」や「多数」を意味するため、ここでは一般的に有害な昆虫の多さを指すと解釈すべきである。

[6022] 第七の災いとして、ハムシン、すなわち砂漠からエジプトへ大量の砂を運び込み、しばしば壊滅的な嵐や激しい雹を伴う、灼熱の南風を意味すると解釈する者もいる。ハムシンは、エジプトの住民にとって恐ろしい災害を伴う。

[6023] イナゴは、跳躍性で草食性の昆虫である。 その貪欲さによって知られており、そのため、東方における最も恐ろしい神の災いの一つと見なされている。イナゴは常に東風に乗って群れをなして飛来し、その進路上のすべての植物を食い尽くす。そして、その風がイナゴを海へと追いやり、そこで死滅するまでは、何者もこれに抗うことはできない。　聖書はしばしば、イナゴを神の怒りの特別な道具として指摘している。――「イモムシ」とは、羽が生える前の幼虫段階にあるイナゴの一種である。

[6024] ヘブライ語では「アヴィヴ」または「ニサン」の月であり、これは私たちの暦の3月の後半から4月の前半に相当する。

ところで保管させなさい。その日の夕方、各家庭でその子羊を屠りなさい。それから、その血で、子羊を食べるために集まる家々の両側の扉枠と上部の横木に塗らせなさい。　その肉は、水で煮たものではなく、火で焼いたものを、無発酵のパンと苦いハーブと共に食べなければならない。朝まで何も残してはならず、骨も砕いてはならない。残ったものはすべて火で焼き払え。急いで食べなさい。腰に帯を締め、靴を履き、杖を手に持って。これこそが、主の過越の祭りである[6025]。わたしは今夜、エジプトの地を巡り、エジプト人のすべての長子、人から家畜に至るまでを撃つ。しかし、あなたがたの家の扉に血を見れば、わたしはあなたがたを通り過ぎ、滅ぼす者があなたがたの家に入って撃つことを許さない。　この日を記念とし、あなたがたのすべての代にわたり、主への祭りを祝いなさい。これは永遠の定めである[6026]。

神の命じられたとおり、イスラエルの各家庭では、定められた時刻のために子羊が選び出され、準備された。イスラエルのすべての息子たちの家の戸口には血が塗られ、戸は閉ざされていた。朝になるまで、誰もそこから外に出なかった。　真夜中、滅ぼす御使いがエジプトを巡り、ファラオの長子から牢獄に閉じ込められた囚人の長子に至るまで、エジプトのすべての長子と、家畜のすべての初子を打った。しかし、ユダヤ人たちは皆、無事であった。

その夜、ファラオと彼のすべての家来、そしてエジプト人全員が目を覚ました。エジプト全土に大きな叫び声が響き渡った。死者がいない家などなかったからである。ファラオは直ちにモーセとアロンを呼び寄せ、言った。

「立ち上がれ。あなたがたとイスラエルの子ら全員は、わたしの民の中から出て行き、あなたがたが言っていたように、あなたがたの神、主への礼拝を捧げなさい。家畜の大小を連れて行きなさい。行って、わたしを祝福しなさい。」

エジプト人たちは、イスラエル人たちに、早く自分たちの国から出て行くよう強要し始めた。彼らは、「さもないと、彼らのせいで我々全員が死んでしまう」と言ったからである。

そこで、イスラエルの民は、生地が酸っぱくなる前にそれを持ち出した。衣に包んで結んだ発酵桶を肩に担いでいた。エジプト人に急かされていたため、旅の糧となるパンを十分に用意する時間がなかったからである。　彼らは銀、金、宝石を持って出て行った。また、多くの来客や、大小の家畜も彼らと共に去っていった。家族やその他の来客を除いた、徒歩の男性の総数は60万人に達した。モーセは、エジプトで亡くなったヨセフの遺骨を携えて行った。ヨセフは死ぬ前に、預言者の霊によって未来を見通し、イスラエルの子らにこう誓わせた。「*神があなたがたを訪ねられるとき、あなたがたは私の遺骨をここから連れ出してください*」（創世記50:24–25）。

主なる神はイスラエルの民の先頭に立って進まれた。昼は雲の柱で、夜は火の柱で彼らを照らし、昼も夜も歩みを進められるようにされた。昼の雲の柱も、夜の火の柱も、民全員の目の前から離れることはなかった（出エジプト記13:16–32）。

エジプトの王に、イスラエルの民が逃げ出したと告げられると、王とその家来たちの心はこの民に対して向きを変え、彼らは言った。「我々は何をしてしまったのか。なぜイスラエル人を解放し、我々のために働かせなかったのか。」　ファラオは自分の戦車に馬を繋ぎ、民を率いて出陣した。選りすぐりの戦車六百台と、エジプトの他のすべての戦車、そしてそれらを統率する将校たちを連れ

[6025] 過越（ペサハ）――ヘブライ語からの訳では、「通過」「通り過ぎる」「救い」を意味し、そこから「通過の犠牲」「救いの犠牲」という語が派生した。過越は、旧約聖書のユダヤ教の祭日の中で最も重要なものであり、ユダヤ人がエジプトの奴隷制から奇跡的に救い出されたことを記念して定められた。　旧約聖書の過越祭は、神の小羊であるキリストの苦しみと死によって人類が罪から贖われることの予型であり、ユダヤ人にとって信仰の偉大な秘跡であった（ヘブライ人への手紙11:28）。

[6026] 過越の祭りの制定については、出エジプト記12:1–51、13:1–16を参照のこと。

て行った。彼らはイスラエル人を追いかけて、彼らが海辺に陣を張っていたところ[6027] に追いついたが、彼らを攻撃することはできなかった。　イスラエルの子らの陣営の先頭に立っていた神の御使いが、彼らの後ろに回り込み、エジプトの陣営とイスラエルの子らの陣営の間に立ち、一方には雲と闇となり、他方には夜を照らし、互いに近づくことはなかった。　モーセが海に向かって手を伸ばすと、主は一晩中吹き続けた強い東風で海を吹き分け、海を陸地に変え、水は両側に分かれた。イスラエルの民は陸地の上を歩いて海を渡り、水は彼らの右と左に壁のように立ちはだかった。　エジプト人は彼らを追いかけて、ファラオのすべての馬、戦車、騎兵が海の中へと入っていった。イスラエル人が海を渡り終えた後、モーセは神の命じられたとおりに海に向かって手を伸ばすと、朝になると水は元の場所に戻り、エジプト人は水に向かって逃げ出した。　主は海の中でエジプト人を溺れさせられた。戻ってきた水が、彼らを追って海に入ったファラオの全軍、すなわち戦車と騎兵たちを覆い尽くし、 、彼らの一人も生き残らなかった。 その日、主はイスラエル人をエジプト人の手から救い出された。イスラエル人は、海辺に打ち上げられたエジプト人の死体を目にしたが、彼らの一人も生き残らなかった。　そこでイスラエル人は、この出来事の中に、主がエジプト人に対して示された大いなる御業を見出し、民は主を畏れ、主とそのしもべモーセを信じた（出エジプト記第14章）。　モーセとイスラエルの子らは、喜び、祝賀しながら、主に感謝の歌を歌った。

「*主を賛美しよう。主は高く栄え、馬とその騎手を海に投げ込まれた……*」（[6028] 、出エジプト記15:1–18）。

また、モーセとアロンの姉マリヤムは、イスラエルの女たちを集め、手にティンパニを携えて彼女たちを率いて踊り、[6029] ；彼女たちは皆、ティンパニを打ち鳴らし、彼女の導きに従って同じ歌を歌った。

その後、モーセはイスラエルの民を紅海から導き出し[6030] 、彼らはスールの荒野に入った[6031] 。そして三日間、荒野を歩いたが、水を見つけることができなかった。やがて彼らがメルラに着き、そこで泉を見つけたが、その水は苦かったため飲むことができなかった。そこで民はモーセに不平を言い、こう言った。　「私たちは何で飲めばよいのか？」モーセは主に叫び求めた。すると主は彼に一本の木を示された。モーセがそれを水の中に投げ込むと、水は甘くなった[6032] 。こうしてモーセは、四十年にわたりイスラエルの民をさまざまな荒野を旅させ、彼らに必要なすべてのものを神から請

[6027] この時、イスラエル人はバアル・ツェフォンの前のピ・ハヒロフに陣を敷いていた（出エジプト記14:9）。バアル・ツェフォンは、紅海の北端の西側に位置するエジプトの都市である。　ピ・ガヒロフは、紅海の北（イェロポリタン）湾の先端、バアル・ツェフォンの東に位置する地域で、アギルードまたはアグルードとも呼ばれる。現在は要塞となっており、その泉の水は極めて苦いため、非常に丈夫なラクダでさえほとんど飲むことができないほどである。

[6028] 出エジプト記15:1–18。この感謝の賛美歌全体の言葉は、畏敬の念に満ちた歓喜に満ちており、神聖な威厳の印を帯びている。　このイスラエル人が主に向けて歌った荘厳な賛歌は、私たちの正教会において、神と聖人たちの栄光を称えて教会で毎日歌われる有名な賛歌カノンの基礎となる九つの聖なる賛歌の中で、第一の地位を占めている。

[6029] ティンパンは最も古い楽器の一つであり、現在でも東方全域、そして一部では西方でも広く使用されている。これは手のひらほどの幅を持つ木製または金属製の円盤で、皮が張られており、その縁には通常、様々な金属製の輪やリング、タンバリンが取り付けられている。　そして現在も、古代と同様に、この楽器は主に女性たちが用いるものであり、彼女たちは歌や踊りの際、左手でティンパンを持ち、それを揺らしながら、右手ではリズムに合わせて叩く。

[6030] チェルムノエ海、いわゆる「紅海」は、インド洋に属する細長い海峡であり、アラビア半島をエジプトから、またアジアをアフリカから隔てている。紅海は、海岸からごくわずかな距離であっても、非常に深い。

[6031] スールとは、パレスチナとエジプトの間、紅海湾と地中海の間、パレスチナの南西の国境に至る砂漠のことである。現在では、いわゆるエル・ジファール砂漠と呼ばれる。

[6032] 出エジプト記15:22–25。メラ（訳すると「苦味」を意味する）――スール砂漠にある場所であり、チェルム海（紅海）の東岸に位置する。　現在、この地域はアイユン・ムーザからシナイへ向かう途中の、ゴヴァレまたはガヴォレと呼ばれる鉱泉地帯にあると考えられている。そこでは水が非常に不快で、苦く塩辛いため、遊牧民のアラブ人からは最悪の泉と見なされている。

い求めた。　彼らがエジプトで食べていた肉を思い出し、食糧のことでモーセとアロンに不平を言ったとき、モーセは神に懇願し、主は彼らにマナを降らせ、ウズラを飽きるほど送られた[6033]。イスラエルの民は、約束の地カナンに入るまで、アラビアの荒野で40年間、このマナを食べ続けた。彼らが渇きを理由に不平を言ったとき、モーセは岩から水を湧き出させた。彼は杖で岩を打つと、泉が湧き出たのである[6034]。アマレク人がイスラエル人を襲撃したとき、モーセは祈りを捧げながら神に向かって両手を挙げた。すると、イスラエル人は敵を打ち負かし、勝利を収め、その軍勢を剣で完全に殲滅した[6035]。彼らが荒野で何度神を怒らせようとも、そのたびにモーセは、彼らを滅ぼそうとされた主のために懇願した。もし、神に選ばれたモーセが、神の怒りを和らげ、彼らを滅ぼさないよう、神の御前に立ちはだからなかったならば、主は彼らを滅ぼしてしまっていたであろう！

一方、モーセの義父ヨフォルは、イスラエルの民がエジプトから脱出する際、神がモーセとイスラエルの民のために成し遂げられたことを聞き、モーセの妻セフォラと二人の息子を連れて、イスラエルの民が天幕を張っていたホリブ山 へと向かった。 モーセは彼を迎えに出て、互いに挨拶を交わした後、主がイスラエルのためにファラオやエジプト人全員に対してなされたすべての御業、そして旅の途中で遭遇したあらゆる困難について彼に語った。　ヨフォルは、神がイスラエルに示された恵みを聞いて喜び、エジプト人の支配から民を救い出された神を賛美し、主がすべての神々よりも偉大であることを皆の前で告白し、主に犠牲を捧げた。

翌日、モーセは民を裁くために座り、民は朝から夕方まで彼の前に立っていた。

これを見て、ヨフォルはモーセに、彼自身も民も無駄に労している、この仕事は彼一人には重すぎるのだと指摘した。

「私の言葉に耳を傾けてください」とヨフォルは言った。「民のために神の御前で仲介者となり、彼らの事柄を神に申し上げなさい。イスラエルの子らに神の定めと律法を教え、彼らが歩むべき神の道と、行うべき行いを示しなさい。　そして、有能で、神を畏れ、正直で、私利私欲を憎む人々を選び出し、彼らを民の指導者として、千人長、百人長、五十人長、十人長、および書記官に任命せよ。　彼らに、常に民を裁かせ、重要な事柄についてはあなたに報告させ、些細な事柄は彼ら自身で裁かせなさい。そうすれば、あなたの負担は軽くなり、彼らもあなたと共にその重荷を担うことになる。

モーセは義父の助言に従った。その後まもなく、ヨフォルはモーセに別れを告げ、自分の地へと帰っていった（出エジプト記18）。

イスラエル人がエジプトを出てから三ヶ月目の新月の日、彼らはシナイの荒野に到着し、山のふもとに宿営した。モーセはシナイ山に登り[6036]、主は山から彼に語りかけ、御自身の名においてイ

[6033] 出エジプト記16:1–36。これは、シナイに近いアラビアのシン砂漠での出来事であった。――マナ――ヘブライ語から訳すと「これは何なのか？」という意味である。というのも、ユダヤ人たちは、空から雪のような細かい粒が降り注ぐのを初めて目にした際、戸惑いながら互いにこう尋ね合ったからである：　「これは何だろう？」ここでいうマナは、特定の穀物植物の小さな粒から作られる、自然界に存在するあらゆる種類のマナとは一切異なる。それは、神が天からイスラエルの民に送った、特別で奇跡的な食物であった。　モーセはマナの味を、蜂蜜や油を混ぜた小麦粉の味に例えている。また、マナは様々な料理を作るのにも適していた。

[6034] 出エジプト記17:1–7。これは、アラビアの荒野にあるレフィディム、ホリブの山のそばでの出来事であった。 岩から奇跡的に水を湧き出させた後、モーセはその場所を「マッサ」と「メリバ」（すなわち「試み」と「非難」）と名付けた。これは、イスラエルの子らが非難されたこと、また彼らが「主は私たちの間にいるのか、いないのか」と言って主を試みたためである。

[6035] 出エジプト記17:8–16。アマレク人は、パレスチナ南部の岩だらけのアラビア、エドムとエジプトの間、シンとファランの荒野、シナイ半島の北部に住んでいた遊牧民である。

[6036] シナイ山は、実際には花崗岩の岩肌からなる山群であり、険しく荒々しい谷に切り裂かれ、それらに囲まれている。現在、アラブ人からはトゥール山、あるいはジェベル・トゥール・シナと呼ばれており、シナイ半島を形成する紅海の既知の湾のほぼ中央に位置している。 この山は3つの山脈から構成されている。イスラエルの民が神と契約を結び、神から

スラエル人に告げるよう命じられた。 「あなたがたは、わたしがエジプト人たちに何をしたか、また、鷲の翼のようにあなたがたを運び、わたしのところへ導いたことを見た。もしあなたがたがわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたは他のすべての民よりも、わたしの選ばれた民となり、わたしの前で聖なる王国、聖なる民となるであろう」。

民は、神が命じられることは何でも行う用意があることを表明した。そこで主はモーセに、民を聖別し、二日間の清めの儀式を行って三日目に備えるよう命じられた。三日目の朝、雷鳴が響き、稲妻が走り、濃い闇が山を覆った。 ラッパの音が鳴り響き、その音はますます強くなっていった。民全体が戦慄した。モーセは民を陣営から連れ出し、主を迎えに出た。皆は山のふもとに立ち止まった。山は四方を境界線で囲まれており、それを越えることは死罪とされていた。 民は、シナイ山がその根元から揺れ動いているのを見、まるで炉から立ち上るように、そこから煙が立ち上っているのを見た。それは、主が濃い雲と火の中にあって、その山に降りてこられたからである。モーセとアロンは、神の命じられたとおり、民の目の前で山の上に立った（出エジプト記19:3–25）。

その時、民全体が主の声を聞いた。

「わたしは主、あなたの神である。わたしはあなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した。わたしの御前に、他の神々を置いてはならない。あなたは、天の上にあるもの、地の下にあるもの、地の下の水の中にあるものの、いかなる像も造ってはならない。 それらを拝んではならない。また、それらに仕えてはならない。わたしは主、あなたの神、嫉妬深い神である。わたしを憎む者の罪を、父の代から三代目、四代目まで罰し、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、千代にわたって恵みを施す。 あなたの神、主の御名をむやみに口にしてはならない。主は、その御名をむやみに口にする者を罰せずにはおかないからである。安息日を覚えて、それを聖別せよ。六日間は働いて、あらゆる仕事を成し遂げよ。しかし、七日目は、あなたの神、主のための安息日である。 その日には、あなたも、あなたの息子も、娘も、あなたの男奴隷も、女奴隷も、[あなたの牛も、ろばも、あらゆる]家畜も、またあなたの家に住む寄留者も、いかなる仕事もしてはならない。 主は六日間で天と地、海、そしてそれらの中にいるすべてのものを造り、第七日に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、それを聖別された。あなたの父と母を敬え。[そうすれば、あなたに幸いが与えられ、] 主、あなたの神があなたに与える地で、あなたの命が長く続くように。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人に対して偽りの 証言をしてはならない。」 『隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、[その畑、]その男奴隷、その女奴隷、その牛、そのろば、[そのあらゆる家畜、]隣人の所有するものは何一つ欲してはならない』」（出エジプト記20:2–17；申命記5:5）。

その後、イスラエルの長老たちはモーセの前に進み出て、こう言った。

「見よ、神は御自身の栄光を私たちに示され、私たちは火の中から神の御声も聞きました……私たちのように、永遠に生きておられる神の声を聞きながら、生き残ることができるような人間など、一人もいないと私たちは感じています。むしろ、あなたが進んで行って、私たちの神があなたに語られることをすべて聞き、それを私たちに伝えてください。私たちはそれを聞き、従います。」

「恐れることはありません」とモーセは言った。「神は、あなたがたに御自身の畏れを抱かせ、御自身の戒めを破ることを防ぐために、あなたがたを試しておられるのです。」

その後、モーセは、エホバの至近の臨在によって示された闇の中に入り、そこで神から、神の民の宗教的および市民的な秩序に関する様々な律法を受け取り、山を下りて、主が語られたすべてを民に伝え、それをすべて書物に記した。 翌日、モーセは山のふもとに土で祭壇を築き、その周りにイスラエルの十二部族の数に合わせ十二個の石を立て、全民を代表して、屠られた子牛や山羊による

律法の戒めを受けたシナイ山そのものは、中央の山脈の南東端にある最も高い頂であり、一方、北西端にある最も低い頂はホリブ山である。

全焼のいけにえと感謝のいけにえを神にささげた。全民は、この際、主が命じられたすべてのことを守ることを誓った （申命記5:23–31；出エジプト記20:18–21、24:1–11）。その後、主はモーセに言われた。

「わたしのもとへ山に登り、そこに留まりなさい。そうすれば、わたしはあなたに石の板[6037]、そして、民を教えるためにわたしが書き記した律法と戒めを与える。」

モーセは、奉仕の務めにおいて彼の助手である ナヴィンの子イエス[6038] と共にシナイ山に登った。すると、雲が山を覆い、主の栄光がその山に降り注いだ。雲は六日間シナイ山を覆い続け、七日目に主はモーセに呼びかけられた。モーセは山の頂上へと登り、そこで四十日四十夜を過ごした。この間、モーセは、民が犠牲を捧げ、神に祈りをささげるための幕屋、すなわち移動式の神殿をどのように設けるべきかについて、指示を受けた。 四十日が過ぎると、主は彼に二つの石板を与えられた。そこには、主が民全員の前で声に出して告げられた十戒のすべてが、神の指によって刻まれていた（出エジプト記24:12–18, 31；申命記9:9–11）。

一方、民はモーセが長い間山から降りてこないのを見て、アロンのところに集まり、彼らの先頭に立って導く神を造るよう要求した。「モーセに何かあったに違いない」と彼らは言ったのである。 彼らは妻や娘たちの金の耳輪をアロンに持ち寄ると、アロンはその金で子牛の像を作った。民は言った。「これこそ、私たちをエジプトの地から導き出した神だ」。 そして翌日、子牛の前の祭壇で犠牲を捧げ、酒を飲み、食事をし、踊り始めた[6039] 。神は彼らに怒りを燃やし、モーセにこう告げられた。「わたしがエジプトから導き出したこの頑なな民は、道から迷い出て、神の戒めを破り、偽りの神を拝んでいる。」 モーセは民のために祈り始め、神はその願いを聞き入れた。山のふもとまで下りてきたモーセとヨシュアは、子牛と踊りを見かけた。 モーセは激しい怒りに燃え、十戒の石板を投げ捨て、民全員の目の前で山のふもとでそれを粉々に砕いた。それから、彼らが作った子牛を取り上げ、それを打ち砕いて粉々にし、その粉を山から流れ出る小川に流し込み、人造の神を辱めるために、イスラエルの民にその水を飲ませた。 アロンはモーセの非難に対し、暴れ回る民の抑制のきかない性質と頑固さを言い訳にしたが、モーセは民に弁明の余地がないことを悟った。彼は陣営の門に立ち、こう叫んだ。

「主に対して忠実な者は、私のところに来なさい！」

すると、レビ族の者たちが皆、彼のところに集まった。モーセは彼ら一人ひとりに、剣を持って陣営を往復し、出会う者をすべて殺すよう命じた。こうして、罪を犯した者の中から三千人もの者が倒れた（出エジプト記32:1–29；申命記9:12–17, 21）。

翌日、モーセは再び山に登り、神の御前にひれ伏して、四十日四十夜断食し、民の罪を赦してくださるよう懇願して言った。

「もしあなたが彼らの罪を赦さないなら、永遠の至福に定められた者たちが記されているあなたの書物から、私をも消し去ってください。」

主は、御自身の御前で罪を犯した者たちを御名簿から消し去ると答え、モーセに民を約束の地へ導くよう命じるとともに、もはや特別な御加護をもって彼らに付き添うことはないと告げられた。

[6037] すなわち、石の板のことである。

[6038] ヨシュアはモーセの後継者であり、イスラエルの指導者として、ユダヤ人を約束の地へと導いた人物である。彼の記念日は9月1日である。

[6039] もちろん、イスラエル人が金属で神像を作り、エジプトからの解放をその神に帰そうとしたなどとは考えられない。つい先日、神が彼らに御自身の律法を告げられたばかりだったのだから。いや、彼らはエホバに仕えようとしていた（出エジプト記32:5）が、 しかし、神の明確な禁令（20:4）に反して、感覚的な形象で神々を崇拝する異教徒たちの例に流されてしまった。その最も身近な例が、オシリス神を象徴する黒い雄牛アピスを崇め、その像を金属で鋳造していたエジプト人であった。 それゆえ、彼らの罪は偶像崇拝であり、厳しい罰に値するものであった。

民はこの脅しを聞いて泣き崩れ、皆、悔い改めの衣を身にまとった。モーセは祈りを重ね、神はイスラエル人への御好意を取り戻された。

その後、モーセはシナイ山で主の栄光を仰ぐ栄誉に浴した。

「わたしの御顔は、」と主は彼に言われた、「あなたには見ることができない。人はわたしを見て生き残ることはできないからだ。　しかし、わたしはわたしの栄光のすべてをあなたの前を通り過ぎさせ、その名を『エホバ』と告げよう……わたしの栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたを岩の裂け目に立たせ、それが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。そして、わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろ姿を見るが、わたしの御顔はあなたには見えない。

これに伴い、モーセは契約の言葉を書物に書き記すよう命じられ、再び石板を受け取った。その石板には、神が以前のものと同じ十戒を再び刻み込まれた。

神の栄光を仰いだことは、モーセの顔に痕跡を残した。彼が山から降りてきたとき、アロンとイスラエルの民は皆、彼の顔が輝いているのを見て、近づくのを恐れた。モーセは彼らを呼び寄せ、神が彼に命じられたことをすべて伝えた。　その後、彼は顔に覆いをかけ、神の御前に立つときだけそれを外すようになった（出エジプト記32:30–33、33:1–6、12–23、34:1–8、10–18、22–24、26–35；申命記9:18–19、10:1–4；コリントの信徒への手紙二3:13）。

モーセはイスラエルの子らに幕屋に関する神の御心を告げ、シナイ山で40日間滞在した際に目にした模範に従い、神が指名された職人たちにその建設を委ねて、その建設に着手した。　一方、イスラエルの民は、金、銀、銅、羊毛、絹、皮、木材、香料、宝石など、各自が持てる限りのものを惜しみなく献げた。　幕屋が完成し、すべての備品が聖別油で聖別されると、雲がそれを覆い、幕屋全体を満たしたので、モーセ自身でさえ中に入ることができなかった。　そしてモーセは、幕屋の中に、金で覆われた契約の箱[6040] を安置し、その中に、マナが入った金の壺[6041] 、花を咲かせたアロンの杖[6042] 、そして契約の石板を納め、契約の箱の上には二つの金のケルビムの像[6043] を置き、犠牲の捧げ物や全焼のいけにえに必要なすべてのものを整えた。　その後、モーセはイスラエルの民のために祭日と 新月祭[6044] を定め、彼らに祭司とレビ人を任命した。神の御命令に従い、レビ族全体を神に仕えるために選び出し、それをアロンとその子らの管理下に委ねた[6045] 。

[6040] キヴォット、あるいはギリシャ語で「契約の箱」と呼ばれる、幕屋の最も神聖な聖物は、シッティムの木（最高級の杉の一種）で作られた箱であった。

[6041] スタムナとは、ギリシャ語から訳すと、水差し、あるいは一般的に器を意味する。この金のスタムナには、イスラエル人がアラビアの荒野を40年間放浪する間、奇跡的に糧としていたマナの一部が保管されていた。

[6042] このアロンの杖の由来については、『民数記』に記されている。ある時、モーセとアロンに対して危険な反乱が起こった。その首謀者はレビ人のコレイと、ルベン族のダファンおよびアビロンであり、彼らにはさらに250人の部族の長たちが加わった。　コレイはアロンを妬み、自ら大祭司の座を望み、共謀者たちと共に、「民全体が聖なるものであり、モーセとアロンが自分たちを他者より優位に置くのは無駄である」と言い始めた。　罪人たちは神の裁きによって罰せられ、地が裂けて飲み込まれた。しかし、反乱は続き、神の怒りによってさらに14,700人が打ち倒された。 祭司職の権利が誰に属すべきかという論争を防ぐため、神はイスラエルの十二部族の長たちからそれぞれ杖を取り、それを幕屋に置くよう命じ、御自身が選んだ者の杖には花が咲くと約束された。　翌日、モーセはアロンの杖が花を咲かせ、アーモンドの実をつけたのを見つけた。そこでモーセは、アロンの杖を契約の箱の前に保管し、アロンとその子孫が神によって祭司として選ばれたことを、後の世代への証しとした。

[6043] 人間の姿でありながら翼を持つケルビムの像が、契約の箱の上に安置されていたことは、彼らが至高の霊的存在として神に特に近い存在とされ、神の御座の前に立ち、私たちの救いの神秘に深く関わりながら、敬虔に神に仕えていることを表していた。

[6044] これらの祝日は以下の通りであった：安息日、 過越祭と無酵パンの祭り、五旬節（シナイ山での律法授与を記念し、新たな地の実りに対して神に感謝を捧げるために定められた）、角笛の祭り、贖罪の日、仮庵の祭り、新月――各月の初めであり、犠牲の捧げ物によって聖別された日である。　さらに、イスラエル人にとって特別な祝祭日として、安息年（第七年）とヨベルの年（第五十年）があった。

[6045] 民数記3:5–13、8:5–22、1:5–53。まず、アロンとその息子たちは、幕屋において神の御前で奉仕するための特別な聖別を受けた。その後、レビ族全体が彼らに加わった。　祭司職そのものはアロンとその子ら、およびその子孫に属していた

神のしもべモーセは、他にも多くのしるしと奇跡を行い、イスラエルの民のために多くの配慮を尽くし、彼らに多くの律法と賢明な定めを与えた。　これらすべては、彼が聖書に記した『出エジプト記』、『レビ記』、『民数記』、『申命記』に記されている。これらの書物には、彼がイスラエルの子らを統治していた間に自ら引き受けた生涯と業が詳細に記述されている。

イスラエルの民がカディス・バルネのモアブ山（[6046] ）にたどり着いたとき、モーセは彼らに、主が彼らに嗣業として与えられた地が今、彼らの目の前にあると告げた。　しかし、イスラエルの民はまず偵察者を遣わしてその地を調査したいと望んだ。そこで、神の命により、モーセはイスラエルの指導者たちの中から、各部族から一人ずつ、ヨシュア・ナヴィンを含めて、カナン地方を視察するために選んだ。　使者たちは戻ってくると、その地が果実や牧草、家畜、ミツバチに恵まれていると報告したが、そのうちの何人かは、並外れた身長と力を持つその地の住民を恐れ、アモリ人の手によって滅ぼされないよう、イスラエル人にエジプトへ戻るよう勧めた。　しかし、その美しい地へ進むよう説得したヨシュアや他の者たちに対し、イスラエル人は石打ちにしようとした。　しかし、神はモーセの祈りによってイスラエル人の罪を赦されたが、騒動を起こした者たちは突然の死によって打ち倒された（民数記 13:1–34、14:1–45；申命記 1:19–46）。

その後の旅路で、イスラエルの子らは再び臆病さを露呈し、神に対して不平を言い、不平を漏らし始めた。そこで主は、その毒牙が致命的な毒蛇を送り、多くのイスラエルの子らがそのせいで死んだ。民は謙虚になり、神に対して罪を犯し、モーセに不平を言ったことを悔い改めた。　そこでモーセは、主が蛇たちを彼らから追い払ってくださるよう祈り、主は彼にこう言われた。「蛇を作り、それを竿に掲げなさい。そうすれば、噛まれた者は誰でも、それを見上げさえすれば、生き延びることができる。」　モーセは銅の蛇の像を竿に掲げると、その後、噛まれた者たちのうち、信仰をもってその像を見つめた者は皆、無傷でいられた[6047] 。

こうしてモーセは、カナンの地へ向かう道中、イスラエルの民を導き、自らの祈りと奇跡によって、様々な災いや神の懲罰から民を救った。

モーセ自身は、約束の地の外で死ぬことが定められていた。彼の死が近づくと、主は彼にまもなくこの世を去ることを予告し、こう言われた。

「モアブの地、エリコの向かいにあるアバリム山[6048] に登り、わたしがイスラエルの子らに所有として与えるカナンの地を見よ。そして、その山で死に、あなたの民に加われ。アロンが　あなたの兄弟が、オル山[6049] で死んで、その民に加わったように、あなたもその山で死に、その民に加わるのだ。それは、あなたがたがシンの荒野のカデシュにあるメリバの水のほとりで、イスラエルの子らの前でわたしに対して罪を犯し、イスラエルの子らの前でわたしの聖さを現さなかったからである。あなたは、わたしがイスラエルの子らに与える地を目の当たりにするが、あなた自身はそこに入ることはできない（申命記31:14–30、32:1–52、33:1–29）。

。大祭司の地位は、その一族の長に属していた。　その他の子孫は祭司となり、レビ族の残りの者たちは総称してレビ人と呼ばれ、幕屋で奉仕し、下級の務めを果たした。すなわち、幕屋とその備品を運搬し、それらを守り、礼拝の際に祭司を補佐し、その中には歌い手や音楽家、書記官、民事裁判官などがいた。

[6046] カディス、あるいはカディス・バルネーは、約束の地の境界にある、パレスチナ南部のセイル山の近くの地である。

[6047] 民数記21:4–9。 荒野で掲げられた蛇は――聖グリゴリオス・ニッサスの表現によれば――十字架の秘跡のしるしであり、これは神の御言葉が「*モーセが荒野で蛇を掲げたように、人の子もまた掲げられなければならない*」（ヨハネ3:14）と語ることで、はっきりと教えている。

[6048] アヴァリムとは、実際にはヨルダン川の向こう側、モアブ地方にあり、エリコに向かって連なる山脈のことである。モーセはネボ山の頂上から約束の地を見たが、この頂上はファスガと呼ばれていた。

[6049] オル山は、エドムとパレスチナの国境、カディス近郊、死海の南に位置していた。――アロンは、モーセの死の1年前にすでに亡くなっていた。

モーセは死ぬ前に、イスラエルの子ら、すなわち各部族を個別に祝福し、彼らの将来の運命について預言した（申命記3:23–28；民数記27:12–23）。　その後、神の命じるところにより、彼は山に登り、主は彼に、ダナに至るまでのガリラヤの全地、ネフィリムの全地、エフライムとマナセの全地、ユダの全地、さらには西の海や南の国、そしてヤシの木の町エリコの谷の平野に至るまで、シゴル[6050]までを示された。 そこで、主のしもべモーセは、主の御言葉どおり、モアブの地でそこで死んだ。 その遺体は、モアブ地のベト・ペゴル[6051]の向かいにある谷に葬られたが、その埋葬地を誰も知る者はいなかった。モーセが亡くなったとき、その年齢は百二十歳であったが、その目は衰えず、その力は衰えなかった。　イスラエルの民は、モーセの死を悼み、三十日間泣き悲しんだ。イスラエルの民の間には、モーセのような預言者は、もはや現れなかった。主は、イスラエルの民全員の目の前でモーセが行ったあらゆるしるしと奇跡によって、彼と顔を合わせて知っておられたのである（申命記34:1–12）。

聖なる預言者モーセの祈りによって、主が私たちをもあらゆる苦しみから救い出し、エジプト――すなわち、多くの災いに満ちたこの世――から導き出し、永遠の住まいへと導いてくださいますように。アーメン。

トロパリオ、第2調：

預言者モーセよ、あなたは徳の高みへと登り、それゆえに神の栄光を仰ぐにふさわしい者とされました。恵みに満ちた律法の石板を受け取り、その恵みを自らの内に宿し、預言者たちの尊い称賛であり、敬虔の偉大な秘跡であられました。

コンダク、第2調：

預言者たちの御姿は、モーセとアロンと共に、今日喜びに満ちておられます。彼らの預言が、私たちにおいて成就したからです。今日、私たちを救われた御十字架が輝いています。キリストよ、神よ、彼らの祈りによって、私たちを憐れんでください。

聖殉教者テオドール、ミアン、ユリアヌス、キオンの記念日

9月4日の記念日

これらの聖なる殉教者たちは、マクシミアヌス帝の治世に生き、カンダヴリ村[6052]の出身であった。キリストを公に告白したため、彼らは捕らえられ、様々な拷問を受けた。まず、彼らの体は激しく削られ、骨がむき出しになるほどであった。　その後、彼らは非常に高温に熱された蒸し風呂に閉じ込められ、聖なる殉教者たちがそこから出られないよう、扉は王の印章で封印された。しかし、

[6050] ガリラヤ地方とは、ヨルダン川東岸の地域――ヘルモン山からアルノン川までの地域――を指す。ダンという町はパレスチナの北部にあり、約束の地の北の境界となっていた。　ネフィリムの地は、カナン地方の最北端を占めていた。約束の地の分割の際、エフライムの部族はそのちょうど中央を占めた。マナセの部族は、ガリラヤに隣接する北部の地域を占め、後にガリラヤも同部族の支配下に入った。　ユダ族は、地中海から死海まで、またエジプトの川からエフライム族の境界に至るまで、カナン地方の最も広大かつ重要な部分を占めた。――ここで「西の海」とは、当然ながら地中海を指す。–「南の地」、すなわち南側のことである。シゴルは、ユダヤの荒野の南、死海の東側に位置するシディムの谷にある町である。このようにして、モーセには、神の御心によりユダヤ人が占領すべき全土が示されたのである。

[6051] ベト・フェゴルは、エリコと向かい合う東側に位置するアモリ人の王シゴンの支配下にあった都市の一つである。

[6052] ここでいう「マクシミアン」とは、もちろんマクシミアヌス・ガレリウスのことである。カンダヴラは、ニコメディア近郊の村である。聖殉教者たちの苦難と死は、西暦305年から311年の間に起こった。

神の天使が彼らを呼び寄せ、彼らは封印された扉を通り抜け、無傷で外に出ることができた。兵士たちは彼らを捕らえ、街の外へと連れ出した。　聖人たちの願いにより、彼らには祈りの時間が与えられた。彼らは長く祈りを捧げ、キリストのために苦難に耐えることを許してくださった神に感謝した。その後、彼らの体は切り刻まれ、膝は砕かれ、ついに彼ら自身は火の中に投げ込まれ、そこで喜びをもって主のもとへ魂を捧げた。

ニコミディアの聖バヴィラと、彼と共に殉教した84人の子供たちの記念日

記念日：9月4日

当時、マクシミアヌス皇帝がキリスト教徒を迫害するためにニコミディアに滞在していたため、多くの信徒が迫害者たちから身を隠していた。そこへ、ある隠れ家にバビラという名の老人がおり、子供たちに異教の神々ではなく、十字架にかけられたキリストを崇めるよう教えているという報告が皇帝のもとに届いた。　直ちに兵士たちが派遣され、聖バビラとその弟子たちは皇帝のもとに連行された。皇帝は彼にこう問いただした。「老僧よ、なぜお前は、ユダヤ人によって十字架につけられた者を崇め、我らの神々を拝まないという迷いに自ら陥っているだけでなく、無知な子供たちまでも同じことを教えているのか？」　聖バビロスは王にこう答えました。「異教の神々は悪魔に過ぎませんが、私たちの神は天と地を創造されました。王よ、あなたとあなたの側近たちは皆、盲目です。なぜなら、あなたたちは真理を見ることができないからです」。マクシミアヌスは四人の兵士に、聖人の顔、肋骨、膝を殴打するよう命じました。　苦しみの中、全身が血に染まったとき、聖バビラは主に向かって叫んだ。「主よ、感謝いたします。老いて衰えた私を、若く力強い者――王自身よりも強い者――にしてくださったことを！」　マクシミアヌスは、石で彼の肩と足を打つよう命じた。　その後、彼の全身を打ち砕いた上で、首に重い荷を掛け、足に鉄の足枷をはめ、彼を牢獄に閉じ込めた。その後、聖人の幼い弟子たち、少年と少女合わせて八十四人が王のもとに連れてこられた。王は彼らに、偶像を拝むよう優しく説得し始めた。　しかし、彼らは王に何も答えず、ただ互いに頻繁に視線を交わしていた。彼らが沈黙しているのを見て、マクシミアヌスは彼らの中から年長の十人を選び出し、こう言った。「ほら、君たちは他の者たちより賢い。だから、私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、私の宮殿で暮らすことができ、私から多くの豊かな贈り物を受け取れるだろう」。　すると、そのうちの二人、アモニウスとドナトゥスが彼に答えた。「我らはキリスト教徒であり、口も耳も利かない悪魔たちに犠牲を捧げることはしない」。王は彼らを鞭打つよう命じた。鞭打たれている間も、彼らは絶えずこう繰り返した。「我らはキリスト教徒であり、お前の神々には仕えない」。　王はその後、残りの子供たちを説得し始めたが、彼らは確固として信仰を告白し、偶像への生け贄を捧げることを拒んだ。子供たちを説得できないと悟った王は、彼らを牢獄に投じ、その教師たちを絞首刑に処し、鉄の棒で打ち据えるよう命じた。　これらすべての拷問をもってしても彼らがキリストを否定するに至らなかったため、聖なる子供たちとその師に対して死刑判決が下され、彼らは剣による斬首刑に処されることとなった。弟子たちと共に処刑場へ向かう途中、聖バビラはこう歌った。*「見よ、私と、神が私に与えてくださった子供たちだ！」*　処刑場に着くと、まず聖バビラが処刑され、続いて彼の弟子である子供たち全員が処刑された。信者たちは夜中に駆けつけ、彼らの聖遺骨を船に載せてビザンティウムへ運び、三つの聖櫃に納め、神を賛美し感謝を捧げた。

聖殉教者エルミオニアの記念日

記念日：9月4日

エチオピアの女王カンダキアの貴族に洗礼を授けた聖使徒フィリッポ（使徒言行録8:26–40）には、四人の娘がいた。聖福音記者ルカは、彼女たちが預言者であり処女であったと記している（使徒言行録21:9）。そのうちのエルミオニアとエウティキアは、聖ヨハネ・テオロゴスを求めてアジアへ旅立った[6053]。しかし、主がかつてエノク（創世記5:24）やエリヤ（列王記下2:11）を*「連れ去られた」*[6054]ように、彼を*「連れ去られた」*ため、彼女たちは彼を見つけることができなかった。そして彼女たちは、使徒パウロの弟子であるペトロニウスに出会い、彼の生き方に倣って、その弟子となった。聖ヘルミオニアは医療の術に長けていたため、多くのキリスト教徒が彼女のもとに訪れるようになり、彼女はキリストの力によって彼ら全員を癒した。当時、トラヤヌス皇帝[6055]はペルシャへの遠征に出かけていた。エルミオニアがキリスト教徒であると報告を受けると、皇帝は彼女を自分の元へ連れてくるよう命じ、彼女を誘惑してキリストから離れさせようと、優しく語りかけた。しかし、彼女は皇帝の説得に屈しなかった。そこで皇帝は、長い間、彼女の顔を殴り続けるよう命じた。　聖女は、そのような拷問の中にあっても、慰めの幻視に恵まれた。彼女は、裁きの玉座に座り、顔立ちがペトロニウスに似た主が、彼女と語りかけ、彼女を力づけてくださる姿を目撃し、喜びをもって苦難に耐えた。　彼女の揺るぎない信仰を確信した皇帝は、彼女を解放した。彼女は宿屋を開き、トラヤヌスの治世の間ずっと、そこで病人を迎え入れ、彼らの心と体を癒やし続けた。　後継者のハドリアヌスは、再び彼女を裁判に呼び出し、救い主キリストへの揺るぎない信仰告白を理由に、　に容赦なく彼女を殴打するよう命じた。彼女は祈りを口にしながら、この苦しみを受け入れた。聖女を殴打していた使用人たちが力尽きると、皇帝は他の使用人たちに、長い釘で彼女の足の裏を貫くよう命じた。　聖女はこの拷問をも、神を賛美しつつ耐え抜いた。その後、彼女は沸騰する樹脂と鉛、硫黄が入った大釜に投げ込まれた。その大釜の中にいた聖エルミオニアは天を仰ぎ、祈りを捧げると、たちまち火は消え、鉛は溶け出し、聖女は無傷のまま残った。　ハドリアヌスは、聖なる殉教者を滅ぼすため、大釜の火をさらに強く燃やすよう命じた。しかし、皆の大きな驚きに、彼女はまるで露の中に立っているかのように、大釜の中に立っていた。王はこの奇跡に驚き、玉座から立ち上がって、大釜が冷めていないか確かめようと手で触れた。　すると、彼の手の皮膚と爪がひどく火傷を負った。「キリストの神は偉大なり！」――聖女は叫んだ。拷問官はそこで、鉄板を熱く焼き、その上に裸の聖女を載せるよう命じた。しかし、主の天使が炭を散らし、鉄板の周りに立っていた多くの人々を火傷させた。　一方、聖女は、まるで青々とした草の上に立っているかのように、その鉄板の上に立ち、主を賛美し、栄光を称えた。王はこの輝かしい奇跡を目にして恐れをなすと、彼女を鉄板から降ろすよう命じた。すると、聖なる殉教者は、神ヘルクレスに犠牲を捧げたいふりをした[6056]。王は喜びながら彼女を偶像の神殿へと連れて行った。彼女は真の神に祈りを捧げると、突然激しい雷鳴が響き、神殿内のすべての偶像が倒れて粉々になった。　王は激しく怒り、エルミオニアを城の外へ連れ出し、首を刎ねるよう命じた。二人の家来、テオドゥルとティモテイが聖殉教者を連れ出し、城の外へ連れて行った。彼女を処刑する前に、彼らは彼女に暴行を加えようと迫ったが、突然、彼らの手は干からびてしまった。　そこで彼らは、我らの主イエス・キリストを信じ、聖殉教者の足元にひれ伏し、主が彼女より先に彼らを御許に召してくださるよう、彼女に祈ってほしいと懇願した。そして、彼女の祈りによって、その願いは叶えられた。その後、聖女は自身の為にも祈りを捧げ、その場所で安ら

6053 アシアは、小アジア半島の西部に位置するローマ帝国の属州で、主要都市はエフェソスである。
6054 つまり、彼を生きたまま天に迎え入れたということである。
6055 トラヤヌス――ローマ皇帝。98年から117年まで在位した。
6056 ヘラクレス――古代ギリシャの伝説に登場する英雄で、人間の肉体的な力を体現し、後に古代ギリシャ人によって最も愛された神々のひとりとして崇められていた。

かに息を引き取った。　敬虔なキリスト教徒たちが彼らの聖遺骨を回収し、エフェソスの尊い場所に安置して、神を賛美した。[6057]

9月18日

9月5日（旧暦）

聖預言者ザカリアの生涯

記念日9月5日

聖預言者ザカリアは、アロンの子イファマルの子孫である祭司であり、妻エリサベトは同じくアロンの家系に属し、至聖なる神の母アンナの姉妹であった。　聖福音書は、ザカリアとエリサベトについて、彼らがあらゆる美徳に恵まれ、汚れなく人生の道を歩んだと証言している。聖使徒兼福音記者ルカは彼らについて次のように述べている。*「二人は神の前で義人であり、主のすべての戒めと掟を、非の打ち所なく守っていた」*（ルカ1:6）。彼らの生涯が真に敬虔であったことは、彼らの聖なる子孫である、高潔で栄光に満ちた預言者、主の先駆者であり洗礼者ヨハネによっても証しされています。聖書にはこう記されています。*「その実によって彼らを見分けることができる」*（マタイ7:16）とあります。良い木の実が邪悪であるはずがありません。なぜなら、同じ聖書が「*もし根が聖なるものであれば、枝も聖なるものである*」（ローマ11:16）と述べているからです。それゆえ、聖なる枝であるヨハネは、聖なる根からしか生まれ得なかったのです。

洗礼者ヨハネの父である聖ザカリアは、ヘロデの治世下でエルサレムにて祭司を務めていた[6058]。彼はアビエの組、すなわちアビエの家系に属しており、その当番は第八週に当たっていた。

これらの当番について、次のように伝えられている。

ダビデ王は、アロンの一族が非常に多くなり、全員が同時に神殿で奉仕を行うことが不可能になったのを見て、アロンの子孫を二十四の組、すなわち「リカ」に分け、彼らが順番に、それぞれ自分の週を担当して神殿での奉仕を行うようにした。　王は各組から最も高潔な人物を一人選び、その組の長とした。こうして各組にはそれぞれの主任祭司がおり、各組には五千人以上の祭司がいた。各組の主任祭司たちの間で、どの組が最初の週、どの組が2週目、3週目といった順序で奉仕するかについて争いが生じないよう、　24週目まで、彼らはくじを引き、そのくじの結果に従って割り当てを行った。そして、こうして一度定められた順番は、新たな恵みが訪れるまで守られ続けた。そのため、各祭司の子孫たちは、先祖が引いたくじによる順番を遵守したのである。 8番目のくじは祭司アビヤに当たり（歴代誌上24:10）、その子孫の中には聖ザカリアもいた。それゆえ、彼は8週目の間、一族全員と共に神殿で奉仕を行ったのである。彼は、その列に属する他の祭司たちの中で筆頭であったからである。

ある日、ザカリアは、自分の順番に従って神の御前で奉仕していたとき、祭司の慣習に従い、香を焚くために主の神殿に入る必要があった。そのとき、多くの民が祈りを捧げていた。聖所に入ると、ザカリアは香の祭壇の右側に立っている主の御使いに気づいた。　天使の姿を見て、ザカリアは

[6057] 聖殉教者の死は、西暦117年頃であった。2世紀半ばのデキウス帝の治世における聖ミロピアの伝記には、聖ミロピアがエフェソスの聖エルミオニアの墓に対して特別な敬意を払い、その聖遺物からは癒しの香油が尽きることなく流れ出ていたと記されている。

[6058] 歴史上「大」と呼ばれるヘロデは、ユダヤの王アンティパトロスの息子であり、当初はガリラヤの統治者であったが、ローマ初代皇帝オクタヴィウス・アウグストゥスが即位する前の紀元前40年、　ユダヤ王の称号を授かり、当時ローマ帝国に属していたユダヤ全土を統治した。

恐れに襲われた。しかし、神の使者は「恐れるな、ザカリア」と言って彼を安心させた。そして、その義なる祭司を慰め、彼の祈りが神に受け入れられたことを告げ、その祈りに応えて、主は彼に恵みを授けることを告げた。　主は彼の妻エリサベトを祝福し、彼女の老齢にもかかわらず不妊の束縛を解き放たれ、彼女は「恵み」を意味するヨハネという名の息子を産むこととなる[6059]。その誕生は両親だけでなく、多くの人々に喜びをもたらすだろう：　「多くの人々が、――天使は付け加えた――彼の誕生を喜び祝うであろう」。天使はまたザカリアに、その息子が肉体ではなく霊において主の前に偉大となること、　彼は断食者となり、他の誰よりも節制した生活を送るだろう。そして実際、神の御子ご自身も彼について次のように証言された。*「洗礼者ヨハネが来た。彼はパンも食べず、ぶどう酒も飲まない」*（ルカ7:33）。天使は、ヨハネがまだ母の胎内にいるうちに聖霊に満たされ、イスラエルの子らの多くを真の主なる神へと立ち返らせ、預言者エリヤの霊と力をもってキリストの先駆者となり[6060]、民が救い主である主を受け入れる準備を整えるだろうと予言した。

これらすべてを聞いて、ザカリアは驚き、戸惑い、その言葉を信じようとはしなかった。エリサベトは不妊であり、二人ともすでに高齢であったため、彼にはそれが奇妙に思えたのである。そこで彼は天使に言った。

「どうしてこれを信じられましょうか。私はすでに年老いており、子供を産んだことのない妻もまた年老いているのですから。」

すると、天使は彼にこう答えた。

「私は、神の御前に立つガブリエルである。あなたにこのことを告げ、福音を伝えるために遣わされたのだ。そして、あなたが私の言葉を信じなかったため、あなたは口がきけなくなり、これらすべてが成就するまでは、一言も語ることができなくなるだろう。」

ザカリアが天使との会話に夢中になって祭壇に長居したため、教会にいた人々はこれを不思議に思った。人々のところへ出てきたザカリアは、身振り手振りで自分が口がきけなくなったことを示さざるを得なかった。すると、そこにいた人々は、彼が祭壇で幻を見たのだと理解した。

当番を終えたザカリアは、山岳地帯にあるユダの町ヘブロンにある自分の家に戻った。この町は、くじ引きによってユダの子孫に与えられ、祭司たちの居住地として定められていた町の一つであった[6061]。

天使が告げたことが成就し、それまで不妊だったエリサベトがヨハネを産んだとき――ザカリアはこの名を、渡された板に書き記した――ザカリアの口が開き、舌が解け、神を賛美し始めた。聖霊に満たされた彼は、預言し始め、こう言った。　*「イスラエルの神、主はほめたたえられる。主は御自分の民を顧み、救いを与えてくださった。また、ダビデの家、御自分のしもべの中に、私たちのために救いの角を立てられた。これは、古くからいた聖なる預言者たちの口を通して告げられたとおり、主は私たちを敵から、また私たちを憎む者たちの手から救い出してくださる。　また、私たちの先祖に慈しみを示し、御自身の聖なる契約、すなわち、私たちの父アブラハムに誓われた誓いを思い起こしてくださる。それは、敵の手から救い出された後、私たちが恐れずに、生涯のすべての日に、聖さと真実をもって御前に仕えることができるようにするためである。そして、幼子よ、　「至高者の預言者」と呼ばれる。あなたは主の御前に先立って行き、主の道を整え、御民に、罪の赦しによる*

[6059] 「ヨハネ」という言葉は、ギリシャ語で「神の恵み」を意味する（ギリシャ語形［ヨハネス］は、ヘブライ語の名ヨハナン、「ヤハウェは慈悲深い」に由来する）。

[6060] すなわち、かつて神に熱心な偉大な預言者エリヤが示したのと同じ、揺るぎない熱意と道徳的な力を持って行動した。

[6061] ヨシュア記21:13；歴代誌上6:65。ヘブロンは、カナンの地で最も古い都市の一つであった。 現在もなお存在しており、1万人近い住民が、商業、農業、果樹園の経営、そしてワイン醸造に従事している。この都市はエルサレムより1,000フィート高い場所に位置し、両側を山々に囲まれた深く狭い谷間にあり、豊かに耕作され、実り豊かな土地にある。　町の周辺一帯は、オリーブの木、ザクロの木、イチジクの木、ピスタチオの木に覆われており、特にヘブロンは、広大で優れたブドウ畑で名高い。

救いを悟らせるためである。これは、私たちの神の慈愛に満ちた憐れみによるものであり、その御業は天から私たちを訪れ、暗闇と死の陰に座する者たちを照らし、私たちの足を平和の道へと導くのである」（ルカ1:68–79）。

しかし、やがて、私たちの主イエス・キリストがベツレヘムで生まれた時が来た。東から不思議な星の現れを見てやって来た東方の三博士は、生まれたばかりの王についてヘロデに告げた。　そこでヘロデは、ベツレヘムに兵士たちを遣わしてすべての幼児を殺させるとともに、かねてよりその名を耳にしていたザカリアの息子をも殺害するよう命じた。ヘロデは、ヨハネの誕生の際に起こったすべての出来事を知っていた。というのも、ヨハネの誕生に伴う一連の出来事は、周辺の住民たちの間に恐怖と驚嘆を引き起こしていたからである。　すべてのユダヤ人がこれらの奇跡的な出来事について語り合っており、その噂はヘロデの耳にも届いていた。それを聞いた人々は皆、心の中でその出来事を噛みしめ、「*この幼子は将来どうなるのだろうか*」と語った。（ルカ1:66）。ヘロデは、この時になってヨハネのことを思い出し、「この子がユダヤ人の王になるのではないか」と考えた。彼を殺そうと企てた王は、ザカリアの家に暗殺者を密かに送り込んだが、遣わされた者たちは聖ヨハネを見つけることができなかった。　というのも、ベツレヘムで不敬虔な幼児虐殺が始まったとき、そのうめき声と悲鳴は、ベツレヘムからそう遠くない場所にあり、祭司たちが住んでいたユダの町ヘブロンにまで聞こえていたからである。当然のことながら、ヘブロンでもすぐにその悲鳴の原因が知れ渡った。　そこで聖エリサベトは、当時すでに一歳半になっていた息子、少年ヨハネを連れて、彼と共に山へ逃げた。一方、聖ザカリアはその時、エルサレムにいて、自分の順番に従って通常の礼拝を執り行っていた。　山に身を隠しながら、エリサベスは涙ながらに神に、自分と息子を守ってくださるよう祈った。山の上から、逃亡者たちを徹底的に捜索し、すでにすぐ近くまで迫っている兵士たちを目にした彼女は、恐怖のあまり、最も近い岩山に向かって叫んだ。「神の山よ、母と息子を受け入れてください！」　すると、山はたちまち割れ、二人をその中に包み込み、こうして彼らは追手から身を隠すことができた。探していた者を見つけられず、使者たちは手ぶらで王のもとへ戻った。そこでヘロデは、神殿にいるザカリアに、息子のヨハネを引き渡すよう命令を送った。

「私は今、イスラエルの神、主に仕えております」と、聖ザカリアはこれに応えて言った。「そして、私の息子が今どこにいるのかは存じ上げません。」

激怒したヘロデは再び彼のもとへ使者を送り、もし息子を引き渡さなければザカリア自身を殺せと命じた。凶暴な殺し屋たちは獣のように駆けつけ、王の命令を直ちに実行しようと、神の祭司に向かって激しく叫んだ。

「お前の息子をどこに隠した？　王の命令だから、彼を我々に引き渡せ。もし息子を引き渡さなければ、お前自身も凄惨な死を遂げるだろう。」

これに対し、聖ザカリアはこう答えた。

「あなたがたは私の肉体を殺すだろうが、私の魂は主が受け入れてくださる。」

すると、殺し屋たちはザカリアに襲いかかり、王の命じたとおり、教会と祭壇の間に彼を殺害した。聖人の流された血は、大理石の上で凝固し、ヘロデに対する証しであり、永遠の非難として石のように固まった。一方、神に守られたエリサベスは、息子と共に、裂けた山の中に留まっていた。神の御命により、彼らのためにそこに洞窟が用意され、泉が湧き出し、洞窟の上にはナツメヤシが育ち、その木には実が豊かに実った。母と息子が食事をしようとすると、木は身を屈めて実を差し出し、その後またまっすぐに伸びた。

ザカリアが殺害されてから40日後、洗礼者ヨハネの母である聖エリサベトはその洞窟で息を引き取り、聖ヨハネは成人するまで天使に養われ、イスラエルの民の前に現れるその日まで荒野で守られていた。

聖ザカリアへのトロパリオ、第4調:

至賢き者よ、祭司の衣をまとい、神の律法に従い、全焼のいけにえを神聖に捧げられたザカリアよ。あなたは灯火であり、秘められた事柄を見通す者であり、あなたの中に恵みのしるしを明らかに宿した全知なる方よ。神の神殿で剣によって殺されたあなたは、　キリストの預言者よ、先駆者と共に、我らの魂が救われるよう祈り給え。

コンダク、第3調:

今日、預言者にして至高者の祭司であるザカリアよ、洗礼者ヨハネの父よ、あなたの記念の食卓を供え、信者たちを養い、すべての人に真理の飲み物を注ぎ給え。このゆえに、あなたは神の恵みの神聖な秘儀の守り手として、この世を去ったのです。

聖エリサベトのコンダク、第4調:

満月のごとく、あなたは心の中の太陽であるメシアから真理の光を受け入れ、ザカリアと共に主のすべての戒めに従って歩まれた、神に愛されたエリサベトよ。あなたにふさわしい賛歌をもってあなたを称え、すべての人を照らす、至慈愛なる主を讃美します。

聖殉教者ウルヴァン、テオドール、メディムナ、および彼らと共に殉教した多くの聖人たちの記念日

9月5日の記念日

邪悪なヴァレンティヌス帝の治世中[6062]、コンスタンティノープルのアリウス派は大きな勢力を持ち、その権力を広げていた。というのも、皇帝自身がその異端に惑わされ、彼らを助けていたからである。彼らは正教徒に対する迫害を開始し、エヴァグリオス司教を追放し、信者たちを激しく弾圧した。　ある者は殴打し、ある者は牢獄に投じ、またある者の財産を略奪するなど、あらゆる手段で彼らを弾圧した。　この事態を深く嘆いた信者たちは、密かに集まり、当時ニコメディアに滞在していた王に嘆願書を送ることを決めた。その内容は、もしアリウス派から完全に解放することはできなくても、少なくとも迫害を緩和するよう命じ、人々が完全に滅びてしまわないようにしてほしいというものであった。　この任務のために、彼らはウルヴァン、テオドール、メディムヌスを筆頭に、信仰に堅固で、言葉に力があり、知性に優れた七十名に満たない高潔な聖職者たちを選出した。旅に出た彼らはニコミディアに到着し、王の前に進み出て、彼らを憐れみ、アリウス派の手から守ってくださるよう熱心に懇願した。　王は彼らに対して激しく激怒したが、怒っている様子は表に出さず、密かに彼らをエパルフ[6063] モデストのもとへ送り、彼らを捕らえて処刑するよう命じた。 エパルフは彼らを捕らえたが、人々の前で公然と処刑することを恐れ、民衆の間に噂が広まらないよう、全員を船に乗せ、捕らえられた者たちは流刑に送られるという噂を流すよう命じた。　その一方で、彼は船員たちに、海の真ん中に差し掛かったら小舟に乗り移り、七十人の男たちを乗せた船に火をつけるよう指示し、彼らはその通りに実行した。　アスタキアの深海にたどり着くと、彼らはあらかじめ用意されていた小舟に先に乗り移り、聖なる殉教者たちを乗せた船に火を放ち、総督のもとへ戻って、それらの男たちの死を報告した。船はろうそくのように燃え上がり、風に乗じて海を速やかに進んだ;

[6062] ヴァレントは、西暦364年から378年にかけて帝国の東部を統治したローマ皇帝であり、アリウス派の熱心な後援者であった。

[6063] エパルコスとは、「長」を意味するギリシャ語である。ローマの各州の統治者はこのように呼ばれていた。

炎に包まれて航行する船は、　で「ダキディス」として知られる場所に到達した。そこに停泊すると、船は完全に燃え尽き、聖なる殉教者たちの焼ける遺体からは、神へと昇る香の煙のような煙が立ち上った。　こうして聖人たちは息を引き取り、聖書の言葉（詩編65:12）が彼らに成就した。水上で火に焼かれたこれらの聖なる人々は、天の安息の地[6064]　に宿り、そこで主の御座の前に立ち、私たちのために祈っている。主よ、彼らの祈りによって、私たちにも永遠の命が与えられるようお与えください。アーメン。

聖殉教者アヴディウスの記念日

9月5日の記念日

この聖なる殉教者は、ペルシャで暮らし、殉教しました。彼はその教えによって多くの人々をキリストへの信仰へと導いたため、魔術師の長はその彼を捕らえ、太陽と火を崇拝し、キリストを否定するよう強要しました。　真の神を断固として告白したため、彼は鋭い棘のついた茨の棒で腰を打ち据えられました。　四人の兵士が彼を長く打ち続けたため、彼は息絶えた状態で彼らの家へ運ばれ、そこでまもなく、神を賛美し感謝しつつ、また、私たちの主イエス・キリストの御名のために殉教する栄誉に浴したことを喜びながら、その聖なる至福の魂を神に委ねた[6065]。

聖殉教者フィファイラとフィヴェイの記念日

記念日：9月5日

これらの聖なる殉教者たちは、万物の創造主であり摂理者である真の神、キリストを、すべての人の前で大胆に告白し、偶像を「耳の聞こえない彫像」と呼んだ。彼らは多くの人々を真の信仰へと導いた。異教徒たちは彼らを捕らえ、激しく拷問した。　ついに、聖フィファイールは木に吊るされ、のこぎりで切り裂かれ、その妹フィヴェイアは首に槍を突き刺されて殺された。二人は共に、口に賛美の祈りを捧げながら、その聖なる祝福された魂を神の御手に委ねた。「[6066]」。

聖公グレビの殉教

記念日：9月5日

聖公グレビの弟スヴィャトポルクは、「父が死の床にあり、お前を呼んでいる」と伝言を送り、欺いて彼をムロムから呼び出した。その頃、スヴィャトポルクはすでにグレビの兄である聖ボリスを殺害しており、聖グレビの殺害も企て始めていた[6067]。 彼はすべての権力を自分の手に握るために

[6064] それは370年のことだった。

[6065] 聖殉教者アヴディウスは、ペルシャ王イズディゲルドの治世（408～420年）に殉教した。

[6066] 2世紀初頭、トラヤヌス帝の治世中に殉教した。

[6067] グレブは、聖使徒同等のウラジーミル大公の末息子であり、ギリシャの王女アンナとのキリスト教徒同士の結婚から生まれた。　彼は、ロストフ・スーズダリ地方北部の中心地であった古代ムロムの公であった（現在はウラジーミル州のさほど重要ではない郡都）。ボリスは、同じ母を持つ聖グレブの実の兄弟であり、ロストフ公であった（ロストフは現在、ヤロスラヴリ州の郡都）。　1015年のウラジーミルの死後まもなく、ペチェネグ族への遠征から帰還中にアルテ川で野営していた際、買収された暗殺者たちによって兄弟殺しの形で殺害された。スヴィャトポルクは、ウラジーミルの兄ヤロポルクの未亡人との間に生まれた息子であり、その悪行により「呪われた者」という名で歴史に名を残した。　ボリスとグレブを殺害した後、彼はヤロスラフ・ムドリーに敗れ、キエフから追放された。ポーランドへ逃亡したが、その後、ポーランドとボヘミアの間の荒野で「不名誉な死」を遂げた。

、兄弟全員を殺害するという不敬虔な意図を抱いていたが、この悪行の結末は永遠の苦しみとなった。それは預言者の言葉通り、*「不義な者はその手の業によって捕らえられる」*（詩編9:17）からである。
その頃、グレビュ大公はすでにキエフへ向かう途上であり、スモレンスク近郊のスミャディン[6068] にいたところ、スヴィャトポルクに送り込まれた、その悪意において獰猛な獣にも劣らない忌まわしい暗殺者たちに追いつかれた。　聖グレブは彼らからの挨拶を待っていたが、彼らは彼の命を奪うことを企み、　予期せず四方から彼を取り囲んだ。その後、聖グレブの料理人であり、トルチン出身の[6069]が、9月の5日[6070] に、主人の首をナイフで斬り落とした。その遺体は人里離れた場所に捨てられた。しかし、主なる神はそのしもべを見捨てず、かつて聖第一殉教者ステファノス[6071] のように、彼を栄光に輝かせた。時折、聖公爵の遺体が横たわっていた場所の上空に火の柱が現れたり、燃えるろうそくが現れたり、あるいは天使の歌声が聞こえたりした。　これらのしるしを目撃した人々は、それを町中に知らせ、住民たちは聖人の遺体を運び出し、ヴィシュゴロドへ移した[6072] 。

アフィルにおける聖使徒ペトロの祝祭

記念日：9月5日

この聖使徒 ペトロの教会については、コンスタンティノープル総主教聖エウティキオス（4月6日）の伝記に言及があり、そこには、552年にこの総主教が選出される前に、ユスティニアヌス帝[6073] が幻視を受け、誓いを立ててそれを他の人々に明かしたことが記されている。夢の中で、彼はアフィルにある聖使徒 ペトロ教会[6074] に立っている自身の姿を夢に見た。そこへ聖使徒ペトロ自身が現れ、聖エウティキオスを指さして、「この者をあなたがたの司教に任命せよ」と言った。

聖殉教者ユウェンティヌスとマクシムスの記念日

記念日：9月5日

聖殉教者ユウェンティヌスとマクシムスは、ローマ皇帝ユリアヌス「背教者」の治世下で殉教した戦士たちであり、彼らはその皇帝のもとで盾持ちの役職に就いていた。　ある日、ユリアヌスはアンティオキアを訪れ、市場で売られているすべての食べ物や飲み物に偶像への生贄の水を振りかけ、それによってキリスト教徒たちを自らの不敬虔な生贄の儀式に加担させようとした。　その頃、こ

[6068] スミャディン – スモレンスク近郊にあるドニエプル川の小さな支流。

[6069] トルキ族――アジア系4の遊牧民族の一つで、古代の分封・ヴェーチェ制のルーシにおいて、主にその南西部に居住していた。

[6070] 聖なる信仰深い公グレイブの死は1015年に訪れた。聖なる洗礼において、グレイブはダヴィドと名付けられていた。

[6071] 『チェティイ・ミネイ』には、聖第一殉教者ステファノの尊い遺骸が崇敬されたことについて、とりわけ次のように記されている。「夜になると、聖人の遺骸の上に光が現れ、聖櫃（遺骸を納めた箱）からは強い芳香が漂い、空には天使の歌声が聞こえた」。8月2日の項を参照。

[6072] ヴィシュゴロドは、キエフからドニエプル川を上流へ15ヴェルスタの地点にある、古くから存在し、かつては重要なロシアの都市であった。キエフの北側を守る強固な要塞としての役割を果たし、キエフの大公たち、とりわけウラジーミル大公のお気に入りの都市であった。 – ヴィシュゴロドには、1019年、キエフでヤロスラフ・ムドリーが統治していた時代に、聖グレブ公の聖遺骨が移され、聖ボリス公の聖遺骨と共に安置された。1072年には、聖公たちを称えて祝祭日が制定された。 彼らの聖遺物は、1240年にモンゴルのハンであるバトゥがキエフに侵攻した際に失われた。

[6073] ユスティニアヌス大帝――著名なビザンツ帝国の皇帝で、527年から565年まで在位した。

[6074] アフィラ（またはアフィール）という都市は、アフィラ川がマルマラ海に注ぐ河口に位置し、別名ポロスとも呼ばれていた。コンスタンティノープルからは2万歩の距離にあった。

の二人のキリストのしもべたちは、他の兵士たちと同じ宴席に同席しながら、王の不法について悲しみを込めて彼らと語り合い、かつてバビロンで三人の聖なる少年たちが語った言葉を繰り返した。*「そして、私たちを、不法な敵、最も憎むべき背教者たち、そして全地で最も不義で邪悪な王の手に引き渡した」*（ダニエル書3:32）。

宴に参加していた者の一人が、翌朝、この言葉を王に伝えた。

すると王は聖なる戦士たちを呼び寄せ、こう尋ねた。

「昨日、宴会で何と言ったのか？」

彼らは真実を答え、同じ言葉を繰り返して王を非難し、その不法な背教を責めた。

激怒した王は、まず彼らを容赦なく打ちのめし、牢獄に投獄するよう命じた。その後、真夜中に処刑人を牢獄へ送り込み、処刑人は牢獄の暗闇の中で彼らを殺害した。

9月19日

9月6日（旧暦）

ホネフにおける聖大天使ミカエルの奇跡の記念日

記念日：9月6日

フリギアの都市コロッサス[6075] 、イェラポリス[6076] の近くにある、奇跡の泉のほとりに、聖大天使ミカエルの聖堂が建っていた。この泉の水によって、病人は多くの癒やしを受けた——それはシロアムの浴場[6077] での癒やしよりもさらに大きなものであった。 あの浴場には、年に一度だけ主の天使が降りてきて水を撹拌したが、ここでは常に天使長による恵みが宿っていた。あちらでは、水が撹拌された後に真っ先に浴場に入った者だけが健康を取り戻したが、ここでは——信仰を持って訪れた者なら誰でも、最初の人も最後の人も、皆が健康を取り戻した。 あちらでは、癒やしを長く待ち続ける病人のための待合室が必要だった。中には38年もの歳月を経てようやく健康を取り戻す者もいたからだ。しかしここでは、たった1日、あるいは1時間で、病人は健康を取り戻した。この泉の由来については、次のように伝えられている。

全宇宙が異教的多神教の闇に覆われ、人々が創造主ではなく被造物を崇拝していた頃——その当時、イェラポールでは異教徒たちが巨大で恐ろしいエキドナ[6078] を崇め、悪魔の誘惑に惑わされた

6075 コロッソスは、フリギアの南西部、リコス川沿い、ラオディキアとイェラポリスの近くに位置する都市である。ネロの治世10年（西暦64年）、コロッソスは地震によって破壊された。その後再建されたが、かつての栄光を取り戻すことはなかった。 その後、ホニと呼ばれた。現在はホナス山の斜面にある小さな村となっており、その周辺には古代都市コロッソスの遺跡が今も残っている。使徒パウロの手紙の一つは、この都市の住民に向けて書かれたものである。——聖大天使ミカエルの教会は、古くからこの都市に存在していた。

6076 イェラポリス（ギリシャ語で「聖なる都市」の意）は、小アジアのフリギア地方にある都市である。コロッソスやラオディキアの近く、メアンドロス川とリコス川の合流点付近に位置していた。 この都市の現在の名称は、ランブク・カレシ（綿花の街）である。イェラポルはかつて、325年の第1ニカイア公会議に出席した司教を擁していた。また、ここで紹介する物語からもわかるように、聖使徒フィリッポスはイェラポルで教えを説き、殉教した。

6077 シロアム——シロアムの泉、あるいは水場、およびそのそばに設けられたシロアムの浴場は、エルサレムの南東側、シオン山とモリヤ山の麓に位置していた。 シロアムの泉については、聖書の中で3回か4回言及されており、とりわけヨハネとルカの福音書に見られる。（ヨハネ5章および9章7～11節、ルカ13章4節を参照）。

6078 エキドナとは、体長約12フィート以上の毒蛇である。これに噛まれると極めて危険であり、ほとんどの場合、迅速かつ避けられない死を招く。 聖書において、蛇は一般的に恐ろしく危険な動物として描かれており、人間は常にそれらと

国中が彼女を崇拝していた。　不信心者たちは、このエヒドナを称えて神殿を建て、そこで彼女を飼育し、多種多様な生贄を捧げて、多くの人々に害を及ぼすこの毒のあるエヒドナを養っていた。　唯一の真の神は、御自身の知恵の光をもって世界を照らし、迷える人々を真の道へと導こうと望まれ、すべての地に御自身の聖なる弟子たちと使徒たちを遣わし、すべての人々に福音を宣べ伝えさせた。使徒のうちの二人――聖ヨハネ・テオロゴスと聖フィリッポス――は、一人はエフェソスへ[6079]、もう一人はイェラポリスへと赴き、そこでキリストの福音を宣べ伝えることに尽力した。当時、エフェソスには、有名な異教の女神アルテミスの驚くべき神殿と偶像があった[6080]。霊的な剣、すなわち神の言葉をもって、この女神の奉仕者や崇拝者たちに立ち向かった聖ヨハネ・テオロゴスは、彼らに勝利を収めた。キリストの御名の力によって、彼は神殿を破壊し、偶像を灰に変え、それによって街全体を聖なる信仰へと導いた。　アルテミスの偶像を破壊した後、聖ヨハネ・テオロゴスはエフェソスからイェラポリスへと向かい、同僚である聖使徒フィリッポスを助けに行きました。当時、その地には聖使徒バルトロマイと、フィリッポスの妹マリアミアも滞在していました。　聖ヨハネ・テオロゴスは彼らと共に、人々の救いの業に尽力した。　まず彼らは、狂信者たちがこの生き物を神と崇めて生贄を捧げていたエヒドナに立ち向かった。祈りによって彼らはこのエヒドナを退治し、それに崇拝を捧げていた者たちを、天と 地を創造された唯一の真の神へと導いた。「ヘロトパ」と呼ばれるある場所に立ち、彼らは、その地に神の恵みが輝き、天の軍勢の統率者である聖大天使ミカエルがこの地を訪れ、ここで奇跡が起こると預言した。これらすべてはまもなく現実のものとなった。　聖ヨハネ・テオロゴスが他の都市へ福音を宣教しに出かけ、聖使徒フィリッポスが不信心者たちによって迫害を受け、バルトロマイとマリアミアもまた他の国々へと散っていったとき――その時、聖使徒の預言通り、その場所に奇跡の水が現れた。　こうして、聖書の言葉が成就した。*「荒野に水が湧き出し、砂漠に小川が流れる。水の幻は湖となり、渇いた地は水の泉となる。ジャッカルの住処、彼らが休む場所には、葦や葦の茂みが生える。*
そこには大いなる道があり、その道は聖なる道と呼ばれる」[6081]（イザヤ書35:6–8）。この泉には、信者だけでなく、非信者も訪れるようになった。なぜなら、そこで起こる奇跡が、轟くラッパのように、すべての人をここに呼び寄せたからである。そして、この泉から水を飲み、顔を洗った者は皆、病から癒され、多くの人が健康を取り戻すと、聖三位一体の名によって洗礼を受けた。

その頃、ラオディキア[6082]には、生まれつき口がきけない一人娘を持つあるギリシャ人が住んでいた。父親はこれを深く嘆き、娘の口がきけない状態を治すために多大な努力を尽くしたが、何の成果も得られず、深い絶望に陥った。　ある夜、自分の寝床で眠りについたとき、彼は太陽のように輝く神の天使を幻視した。この幻視は、彼がそれに値したからではなく、それを通じて真理を知り、

敵対して生きなければならない。それらは、その性質上、害と破滅をもたらすあらゆるものの象徴となっている（伝道の書10:11；箴言21:31–33；マタイ7:10）。

[6079] エーゲ海に面したエフェソスは、小アジアにおける重要な商業都市であった。

[6080] アルテミス――別名ダイアナ――は、ギリシャ人にとってよく知られた異教の女神であり、月を象徴し、森と狩猟の守護神とされていた。この女神への礼拝は、非常に華やかで壮麗に行われ、特にエフェソスでは深く崇められていた。

[6081] この箇所で、預言者イザヤは、救い主がこの世に来られる際に伴うであろう偉大な結果について指摘している。その時、「荒野に水が川のように流れ出し、それゆえ、乾いた地に森や谷が現れる」のであり、そして「水のない地は湖に変わり、乾いた地に泉が現れる。（それゆえ）そこでは鳥たちが喜び、葦が生え、牧草地となる」のである。

[6082] ラオディキアは、フリギアの南西部、コロッサスの町からほど近い、リコス川沿いに位置する同地方の主要都市である。ラオディキアの教会は、『ヨハネの黙示録』に言及されている七つの小アジアの教会の一つであった。　教会史において、ラオディキアは、かつてそこにあった公会議（約365年）で知られており、その公会議では、礼拝の順序、聖職者や信徒の道徳的行動、そして当時の様々な誤りに関する詳細な規則が定められた。

他の人々をも神のもとへ導くためであった。　天使を見て彼は恐怖に襲われたが、同時に天使から次のような言葉を聞いた。

「もし娘の舌が解けることを望むなら、イェラポリス近郊の『ヘロトペ』にある私の泉へ彼女を連れて行きなさい。その泉の水で彼女に飲ませれば、神の栄光を見ることができるだろう。」

目を覚ますと、その男は夢で見た光景に驚き、告げられた言葉を信じて、すぐに娘を連れて奇跡の泉へと急いだ。そこには、その水を汲み、その中で洗礼を受け、病の癒やしを得ている大勢の人々がいた。彼は彼らに尋ねた。

「この水で身を清めながら、あなた方は誰を呼び求めているのですか？」

彼らは彼にこう答えた。

「私たちは父と子と聖霊の御名を呼び求め、聖なる大天使ミカエルの助けを求めています。」

すると、その男は天を仰ぎ、両手を挙げてこう言った。

「父と子と聖霊よ――キリスト教の神よ――私たちを憐れんでください！聖ミカエルよ、神の僕よ、私の娘を助けて癒してください！」

そう言って、彼は泉から水を汲み、信仰を込めて娘の口に注ぎ込んだ。するとたちまち、失語に縛られていた彼女の舌が解け、神を賛美する言葉が溢れ出し、彼女ははっきりとこう言った。

「キリストの神よ、私を憐れんでください！聖ミカエルよ、私を助けてください！」

そこにいた者たちは皆、神の御力に驚き、聖三位一体を賛美しつつ、聖大天使ミカエルの助けを称えた。一方、ギリシャ人は、娘が癒やされたのを見て、この上なく喜び、直ちに娘や、彼と共に来た家族全員と共に洗礼を受けた。　感謝のしるしとして、彼は奇跡の泉の上に、天の軍勢の司令官である聖ミカエル大天使の名を冠した美しい教会を建てた。この教会を壮麗に飾り立て、そこで熱心に祈りを捧げた後、そのギリシャ人は自宅へと帰った。

この教会が建てられてから90年目のこと、イェラポリスからアルキッポスという名の10歳の少年がそこを訪れた。彼の両親は熱心なキリスト教徒であり、息子を敬虔に育て上げていた。アルキッポスは聖大天使ミカエルの教会に身を寄せ、そこで助祭の務めを果たすようになった。　この少年は、　自身の生活において次のような規則に従うようになった。すなわち、その教会に身を寄せ、神に仕えて以来、彼は世俗の食べ物や飲み物を一切口にしなかった。肉も、ワインも、さらにはパンさえも食べず、自ら摘んで茹でた荒野の草だけで身を養った。　食事は週に一度だけ取り、それも塩を加えずに摂り、飲み物としてはごくわずかな水のみを口にした。このような節制によって、この若者は肉体を死なせ、青年期から老齢に至るまで、常にこうした美徳に留まり、魂のすべてを神に捧げ、無形の者たちの生き様に倣った。 彼の衣服は極めて質素であった。持っていたのは二枚の麻布（6083）だけであり、その一枚を身にまとい、もう一枚で鋭い石を敷き詰めた寝床を覆っていた。　彼が寝床を麻布で覆っていたのは、住居に入ってくる人々が、彼が鋭い石の上で眠っているのを見ないようにするためであった。また、彼の枕代わりには、茨で満たされた小さな袋が使われていた。これこそが、この至福の修行者の寝床であった。　彼の睡眠と休息は次のようなものであった。眠気を感じると、彼は石や鋭い茨の上に横たわった――それはむしろ眠りというより覚醒に近く、彼の休息は安らぎというより苦行であった。　なぜなら、硬い石の上に横たわることなど、体に何の休息となるだろうか。また、頭が鋭い茨の上に置かれている状態で、一体どのような眠りがあるというのか。アルキッポスは毎年、衣服を入れ替えていた。身にまとっていた麻布で寝床を覆い、寝床にあったものを身にまとい、一年が過ぎると、再びそれらの麻布を入れ替えたのである。　このように、昼も夜も安らぎを得ることなく、彼は自らの肉体を死に至らしめ、敵の罠から魂を守り抜いた。これほど過酷で悲痛な人生の道を歩みながら、至福のアルキッポスは神に呼びかけ、こう祈った。

6083 ヴェレティシェ――麻布や麻縄で作られた袋――ぼろ服、毛皮の衣。

「主よ、どうか私がこの地上で虚しい喜びにふけることを許さず、私の目がこの世のいかなる恵みも見ることなく、この一時的な人生において、私に何の慰めもありませんように。　主よ、私の目を霊的な涙で満たし、私の心に悔い改めを与え、私の道を整えてください。そうして、私の生涯の終わりまで、私の肉を死なせ、それを霊に服従させることができますように。　この土から造られた私の朽ちゆく肉体は、私に何の益をもたらすというのでしょうか。それはまるで花のように、朝には咲き誇り、夕方には枯れてしまうのです！しかし主よ、私の魂と永遠の命のために有益なことに、熱心に励むことができるよう、私をお導きください。

このように祈り、このように学びながら、福者アルキッポスは、地上で天の生活を送る神の御使いに似ていきました。そして、聖人は自分の救いだけでなく、他者の救いにも心を配りました。なぜなら、彼は多くの異教徒をキリストへと導き、彼らに洗礼を授けたからです。　不信心なギリシャ人たちは、これらすべてを見て、至福のアルキッポスを妬み、聖なる泉から現れる輝かしい奇跡に耐えかねて、そこに住むこの義人を憎むようになった。　彼らはしばしば聖アルキッポスを襲い、髪や髭を引っ張り、地面に倒して足で踏みつけ、様々な拷問を加えた後、そこから追い出した。　しかし、アダマントのように堅固な精神[6084] を持っていた至福のアルキッポスは、偶像崇拝者たちからのこれらすべての迫害を勇敢に耐え抜き、聖なる神殿から退くことはなく、聖なる心と悪意のない心をもって神に仕え、人々の魂の救いを案じていた。

ある日、不信心なギリシャ人たちが大勢集まり、互いにこう語り合った。

「もし我々がこの泉を土で埋め、そのぼろ服を着た男を殺さなければ、そこで癒やされる者たちのせいで、我々の神々は完全に辱められてしまうだろう。」

その後、彼らは奇跡の水を土で埋め立て、罪のない人――至福のアルキッポ――を殺そうと向かった。聖なる場所に両側から近づくと、一団は教会と泉へと駆け寄り、もう一団は至福のアルキッポの住居へと急ぎ、彼を殺そうとした。　しかし、義人の運命を案じ、彼らを罪人の手に渡さない主は、その僕を殺し屋たちから守られた。突然、彼らの手が麻痺し、聖人に触れることさえできなくなったのである。　また、その泉からは並外れた奇跡が現れた。不義な者たちが泉に近づくとすぐに、水の中から炎が噴き出し、不義な者たちに向かって襲いかかり、彼らを泉から遠くへ追い払った。こうして、これらの不義な者たちは、聖アルキッポスに何の害も与えることなく、恥じ入って泉と聖アルキッポスの元から逃げ去った。　しかし、彼らはこの奇跡によって改心することはなかった。歯ぎしりしながら、彼らはその泉と教会、そして教会の奉仕者を滅ぼしてやると、絶えず自慢し続けた。その場所には、クリソスという名の川が、教会の左側を流れていた。不義の者たちは、その川を聖なる場所へと流し込み、聖なる泉が川の水と混ざり合うことで　、その奇跡の力を失うように企んだ。しかし、彼らがその邪悪な企てを実行に移し、泉を水没させるために川の流れを泉へと向けたとき、神の御命令により、川はその流れを変え、教会の右側を流れるようになった。こうして、不信心者たちは再び恥じ入って家路についた。

そこにはさらに、東から流れ出て、その聖地まで三スタディオンの距離に迫る二つの川があった。一方の川はリコカペル、もう一方はクフォスと呼ばれていた。この二つの川は、大きな山の麓で合流し、右側へと流れ、リキア地方へと注いでいた[6085] 。 あらゆる悪を企む悪魔は、不信心な人々に邪悪な企みを吹き込んだ。悪魔は彼らに、その二つの川の水を奇跡の起こる場所へと流すよう教えた

[6084] アダマント（ダイヤモンド）――他の石を削り取っても、それによって自ら傷つくことのないほどの強さを備えた石。教会文献では、この名称は、信仰や性格の堅固さで名高い多くの教父や教会の教師たちに与えられている。

[6085] リキア――小アジアの州。北はピシディア、東はパンフィリア、南はパンフィリア海、あるいは地中海全般、西はカリアと接している。リキアの都市のうち、聖書にはパタラとミラスが言及されている。　使徒パウロは、エルサレムへの第三回伝道旅行から帰途につく際、パタラに短期間滞在した（使徒行伝21:1）。パタラとミレの二つの都市は、ミルリキの大司教である聖ニコラオスの物語を通じて、信者たちに特に知られている。リキアのパタラは彼の故郷であり、ミレでは司教を務めていた。

。その結果、聖大天使ミカエルの神殿は破壊され、聖なる泉は水に飲み込まれ、聖アルキッポスは溺死することになるはずだった。　この一帯は、水をその場所へ導くのに非常に適していた。なぜなら、川は山の頂上から流れ出ており、教会は最も低い場所にあったからである。共謀した不信心者たちは、あらゆる都市から大群をなしてラオディキアの村に集まり、教会へと向かった。教会の祭壇の近くには巨大な岩があり、　彼らはこの岩を起点に、川が合流する山の麓まで、深く広い堀を掘り始めた。その後、彼らは多大な労力を費やして、水を教会へと流せる堀を掘り抜き、より多くの水が溜まるよう川をせき止めた。不信心者たちはこの無益な作業に十日間も費やした。　不信心者たちのこの行いを見て、聖アルキッポスは教会の中で地面にひれ伏し、涙ながらに神に祈りを捧げ、速やかな執り成し手である聖大天使ミカエルの助けを求め、聖なる場所が水没から守られ、主の聖所を滅ぼそうとする敵たちが喜びを口にできないようにと願った。

「私はこの場所を離れない」と、至福のアルキッポスは言った。「教会から立ち去ることもない。もし主がこの聖なる場所を水没させることを許されるなら、私はここで死ぬことさえ厭わない。」

十日が過ぎ、水位が著しく上昇したとき、不信心者たちは、水が用意された水路に沿って流れ込むはずだった場所を掘り起こし、夜の一時に聖なる神殿へと川の水を送り込んだ。彼ら自身はそこから離れ、左側の高い場所に立ち、聖なる場所が水没する様子を見届けようとした。　すると、水が下へと流れ下り、雷のような轟音を立てた。　教会で祈りを捧げていた聖アルキッポスは、水の轟きを耳にし、この聖なる場所が水没することなく、不信心な敵たちが喜びを隠し、恥をかくよう、神と聖大天使ミカエルに一層熱心に祈りを捧げた。　また、主の御名が賛美され、天使の力と執り成しが称えられますように。そして彼はダビデの詩篇を歌った。

「『*主よ、川は声を上げ、川は声を上げ、川は波を立てる。しかし、多くの水の轟きや、海の激しい波よりも、天にいます主は力強い。　あなたの啓示は疑いなく真実です。主よ、あなたの家には、永遠に聖さが属します*』」（詩編92:3–5）。

この言葉を賛美していたとき、至福のアルキッポスは、教会から出るよう命じる声を聞いた。教会を出ると、彼はキリスト教徒の偉大な執り成し手であり守護者である聖大天使ミカエルを、かつて預言者ダニエルに現れた時（ダニエル書10:1–21）と同様に、美しく、まばゆいばかりの男性の姿で見た。至福のアルキッポスは、その姿を見ることもできず、恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。

すると、大天使は彼にこう言った。

「恐れるな。立ち上がり、私のところへ来なさい。そうすれば、この水の上で神の御力を目にするだろう。」

祝福されたアルキッポスは立ち上がり、恐れつつ天の軍勢の統率者に近づき、その命に従って左側に立ち止まった。すると、彼は地から天へと立ち上る火の柱を目にした。　水が近づいてくると、大天使は右手を上げ、水面に十字の印を描きながら言った。

「そこで止まれ！」

すると、たちまち水は引き返した。こうして、「*水はあなたを見て恐れおののいた*」（詩編76:17）という預言の言葉が成就した。川は石の壁のようになり、高い山のようにそびえ立った。　これに続いて、大天使は神殿の方を向き、祭壇のそばにあった巨大な岩を杖で打ち、その上に十字の印を描いた。するとすぐに大きな雷鳴が響き、大地が揺れ、岩は二つに割れて、その中に巨大な裂け目ができた。これに伴い、大天使ミカエルは次のように語った。

「ここに存在するあらゆる抵抗する力が滅び、信仰をもってここに来るすべての者が、あらゆる悪から救われるように！」

そう言うと、彼はアルキッポに右側へ渡るよう命じた。尊者がそこへ渡ると、聖ミカエルは水に向かって雷のような声で叫んだ。

「この峡谷に入りなさい！」

するとたちまち、水は轟音を立てて岩の裂け目へと流れ込み、それ以来、絶えずこの道を通って岩の間を流れ続けている。左側に立ち、聖なる神殿が水没するのを待ち構えていた敵たちは、恐怖のあまり石のように固まってしまった。　聖堂と聖アルキッポを水没から守った聖大天使ミカエルは天に昇り、至福のアルキッポは、その輝かしい奇跡に対して神に感謝を捧げ、偉大なる守護者である大天使ミカエルの偉大な取り成しを称えた。　すると、すべての敵は恥じ入り、信者たちは大きな喜びに包まれ、彼らは天使の聖堂と奇跡の泉を訪れ、尊者アルキッポスと共に神を賛美した。それ以来、天使の御出現によって奇跡が成し遂げられたその日を祝うことが定められた。　聖アルキッポスはその地で長年にわたり、神のために熱心に奉仕し、生後70歳で安らかに息を引き取った。信者たちは、前述の奇跡にちなんで「ホニ」、すなわち「沈み込み」[6086] と呼ばれるその場所に彼を埋葬した。なぜなら、そこでは水が岩の中に沈み込んでいたからである。

また、キリスト教徒の守護者である聖大天使ミカエルの他の奇跡についても言及しておくべきである。

アドリア海とガルガンと呼ばれる山[6087] の間には、その山から1万2千ストーブ[6088] 離れたシポントという町がある。その町には、ガルガン山の麓で家畜の群れを放牧していたある裕福な男がいた。ある日、彼の群れから一頭の雄牛が取り残され、行方不明になってしまった。　彼は使用人たちと共にその雄牛を長い間探し回り、ついに山の頂上にあるある洞窟の入り口でそれを見つけた。怒りと捜索の疲れから、その男は弓と矢を取り出し、雄牛を殺そうとして矢を放った。　すると突然、矢が反転して、放った男自身を直撃した。その場にいた者たちはそれを見て恐れをなして、その洞窟に近づくこともできず、町に戻り、そこで起きた出来事を人々に伝えた。このことを知ったその町の司教は、神に祈りを捧げ、この秘密を明らかにしてくださるよう願った。　すると、大天使ミカエルが幻視の中で彼に現れ、その場所を自らの聖地として選び、守り、頻繁に訪れて、祈りを捧げにやって来る人々を助けたいと告げた。司教はこの幻視を人々に伝え、町全体に三日間の断食を命じた。その後、司教は聖職者たちや民衆全員を率いて、その山へと向かった。　山に登ると、彼らは岩の中に狭い入り口のある洞窟を見つけたが、中に入る勇気はなく、入り口の前で祈りを捧げた。それ以来、人々は頻繁にそこを訪れ、神と聖なる大天使ミカエルに祈りを捧げるようになった。

ある日、ナポリの人々[6089] は、まだ信仰を持たないまま、軍勢を集めて、シポントの町を攻略し、荒廃させるべく、不意にその町に迫った。　市民たちは大きな恐怖に襲われた。そこで司教は、その町の住民たちに、三日間の断食と、彼らを取り囲む敵からの救いを願う祈りを命じた。敵が町を完全に破壊すると定めた日が明ける直前、天の軍勢の統率者である聖大天使ミカエルが、幻の中で司教の前に現れ、こう言った。

「明日、午後4時に、市民たちに武装して街を出て敵に立ち向かうよう命じなさい。そうすれば、私があなた方を助けにやってくる。」

目を覚ますと、司教はこの幻視をすべての人々に伝え、神によって予言された異教徒に対する勝利に、人々は大いに喜んだ。そして午後4時になると、激しい雷鳴が響き、皆が目を上げると、ガルガン山に降り注ぐ雲が見えた。　その瞬間、かつてシナイ山で（出エジプト記19:1–25）見られたように、火と煙、稲妻と雷が現れ、山全体が揺れ動き、雲に覆われた。　敵はこれを見て恐怖に駆られ、逃げ出した。一方、市民たちは、彼らの良き守護者であり、迅速な擁護者である聖大天使ミカエル

6086 「ホナス」（ギリシャ語）とは、穴、窪み、裂け目を意味する。

6087 ガルガン――中部イタリアの東岸にある石灰岩の山。ガルガン山は、ストラボン、メーラ、ウェルギリウスなど、古代のキリスト教以前の著述家たちによって言及されている。

6088 「ストパ」は距離の単位であり、我々の単位で言えば約4ヴェルシュクに相当する。12,000ストパはおよそ2ヴェルストに相当する。

6089 すなわち、ナポリの住民のこと。ナポリは、同名のイタリア王国の州の主要都市であり、ナポリ湾の北岸に位置している。

が天の軍勢を率いて助けに来てくれたことを悟り、城門を開いて敵を追いかけた。そして、敵を藁の茎のように打ち倒した。　市民たちは背後から敵を追撃し、聖大天使ミカエルは高みから雷と稲妻で敵を打ち倒した。その日、雷と稲妻によって命を落とした者は600人にのぼった。シポンテの市民たちは敵をナポリまで追撃し、天の軍勢の指揮官の助けを借りて敵を打ち破り、勝利を祝って自都市へと帰還した。　それ以来、ナポリの人々は、全能の神の力強い御手を知り、聖なる信仰を受け入れた。一方、シポンテの市民たちは、司教や聖職者たちと共に一堂に会し、あの恐ろしい現象が起こった山へと向かった。そこで、神と、彼らの助け手である聖大天使ミカエル、そしてすべての天の軍勢に感謝を捧げようとしたのである。　彼らがその洞窟の入り口に近づくと、大理石の上に小さな人間の足跡が見つかった。それはまるでぬかるんだ地面に押されたかのように、はっきりと刻まれていた。そこで彼らは互いにこう言った。

「ほら、まさに聖なる大天使ミカエルがここに訪れた証を残したのだ。彼自身がここにいて、私たちを敵から救ってくれたのだから。」

彼らはその足跡に頭を下げて口づけをし、祈りの歌を捧げた後、自分たちにこのような守護者であり擁護者がいることを喜び、神に感謝を捧げた。そこで彼らは、聖大天使ミカエルの名に因んで教会を建てることに決めた。彼らが建設に取り掛かると、大天使ミカエルは再び司教の前に現れ、こう言った。

「あなたがたは教会の建物について心配する必要はない。私はあなたがたの労力を要することなく、すでにそこに自分のための聖堂を用意しておいた。ただそこに入ればよい。そして、あなたは翌日、そこで聖なる典礼を執り行い、信者たちに聖なる神の秘跡を授けなさい。」

この幻視の後、司教はすべての人々に聖なる秘跡の聖体拝領に備えるよう命じ、彼らと共に祈りの歌を歌いながらその場所へ向かった。　彼らが、聖なる足跡が大理石に刻まれていたその聖なる場所にたどり着くと、岩に彫り込まれた洞窟のような小さな教会を見つけた。その壁は滑らかではなく、高さも場所によって異なっていた。ある場所では頭が届くほどだったが、別の場所では手すら届かないほど高かった。　「これにより、人々は、神が教会に求めるのは貴重な石ではなく、清らかな心であることを悟った。この教会の祭壇は紫の覆いで覆われており、司教はこの祭壇で聖なる典礼を執り行い、信者たちに至聖なる聖体を与えた。　また、祭壇の北側の上部からは水が流れ出した――その水は清く、美味しく、非常に澄んでおり、奇跡的な力を持っていた。聖体拝領の後、この水を飲んだすべての病人は癒やされ、聖大天使ミカエルの祈りによって、その教会では他にも数え切れないほどの奇跡が起こった。　司教は教会のそばに修道室を建て、そこに司祭、助祭、聖歌隊員、朗読者を配置し、神の栄光と聖大天使ミカエルの栄誉のために、毎日そこで礼拝が執り行われるようにした。

さらに、アトス山で起こった奇跡についても触れておこう[6090]。敬虔なブルガリアの王たちが治めていた時代、ドヒアルという名の裕福で高貴な人物がいた。　かつて彼は、神に喜ばれたいと願い、修道士になることを志した。多くの金を持って、聖なる山へと向かい、そこにある修道院を巡り、定住に適した場所を探した。　多くの修道院を巡り、多額の施しを施した後、彼は聖アファナシオス修道院を出て、テッサロニキから[6091]へと海沿いを進んだ。そこで彼は、美味しい水と豊かな植生に恵まれた非常に美しい場所を見つけた。この場所にはまだ誰も住んでいなかった。　彼はこの場所を大変気に入り、ここに定住して修道院を建てることを思い立った。熱心に取り組み、まもなくその願いを叶えた。まず、聖ニコラオスに捧げる美しい教会を建て、その後、修道院を整備し、石の壁で

6090 アトス山――群島に突き出た、細長い山岳半島。アトス山（別名アフォン）は、東方正教世界において最も崇敬される聖地の一つであり、毎年何千人もの巡礼者が訪れている。現在、アトス山には20の大きな修道院、数か所のスキト、そして多数の独立したケリヤが立地している。

6091 テッサロニキ（別名ソロン）は、マケドニア地方の州都の一つである。テッサロニキでは、使徒パウロが福音を宣教し、彼の書簡のうち2通は、この地方およびこの都市の住民に向けて書かれたものである。

囲んだ。 これらすべてを適切な 秩序に整えた後、彼自身もその修道院で修道者の生活を送り始めた。しかし、多くの建造物を建てたため、手持ちの金が足りなくなり、教会をふさわしい威厳をもって飾ることができなかった。神の助けに希望を託し、彼はこう語った。

「もし主なる神がこの場所を栄光に輝かせたいとお考えなら、神ご自身が教会の装飾を御手配くださるでしょう。神の御心が成されますように！」

聖なる山の向かいには、ルグと呼ばれる島があり、船で一日分の距離に位置していた。そこは牧草地として非常に適していたため、羊飼いたちが住み、家畜を放牧していた。 この島の人の住まない場所に、高い石柱が立てられていた。その柱の上には石の偶像が置かれており、そこにはギリシャ語で「私を上に叩き上げた者は、多くの金を見つけるだろう」と書かれていた。多くの人が、それが本当かどうか確かめようと、偶像の頭を叩いてみたが、何も見つからなかった。 ちょうどその頃、ある若者が、その石柱の近くで牛の放牧をしていた。その若者は非常に聡明で、読み書きもできた。石柱に刻まれた文字を読み、他の人たちと同じように金を見つけるために偶像の頭を叩いたが、やはり何も見つからなかった。 そこで彼は、もしかすると金が地中に埋められているのではないかと考え、日が沈む頃、その柱の影が地面でどこまで伸びているかを確かめ、偶像の頭から落ちる影の終わる場所で、宝物を探して地面を掘り始めたが、ここでも何も見つからなかった。 やがて太陽が昇ると、彼は再び柱の影がどこで終わるかを確かめ、その場所で掘り始めた。 掘っていると、その場所で何か音が聞こえ、そこに宝が隠されていると悟ると、さらに熱心に掘り進め、石臼の石にたどり着いた。その石は、彼には持ち上げることもできないほど巨大だった。 石の隙間から手を差し伸べると、そこにはたくさんの金があり、彼は何をすべきか迷った。

「もし誰かにこの金のことを話したら」と彼は考えた。「そのせいで、殺されてしまうかもしれない。」

しかし、聖なる神殿の装飾を気にかけていた前述の老人の祈りに耳を傾けた神は、その若者に、聖なる山にある修道院の一つへ向かい、発見した宝物について修道院長に話すよう促した。 青年はそのまま実行した。発見の証拠として金貨を数枚持ち、海辺の村へ行き、そこで聖なる山まで自分を運んでくれる人を雇った。 神の御心により、彼は前述の、建設者の名にちなんで「ドキアール」と名付けられた、新しく建てられた修道院の上流にある船着き場に立ち寄った。船頭は自分の村へ戻り、青年はその修道院へ向かった。そこで修道院長に会うと、彼は見つけた宝物について詳しく話した。 修道院長は、これに神の御業を見出し、三人の修道士を呼び寄せ、若者から聞いた話を伝えた上で、彼らを若者と共に行かせ、見つけた金を修道院へ持ち帰らせた。修道士たちは急いで舟に乗り出し、島に到着すると、金が埋められていた柱のそばまでたどり着いた。 彼らが石臼の石をどかすと、その下から金で満たされた大釜が見つかり、彼らは大いに喜んだ。しかし、人類の古くからの敵であり、あらゆる善を憎む悪魔が、その修道士の一人に悪意ある考えを吹き込み、その修道士は別の修道士にこう言った。

「兄弟よ、なぜわざわざこの金を修道院長のもとへ持っていく必要があるのか！ 神が私たちにこれを送ってくださったのだ。この金で、私たち自身で住まいを建て、修道院を建立しよう。」

すると、もう一人の修道士が「この金をどうやって隠せばいいのだ？」と反論すると、彼はこう答えた。

「すべては我々の思いのままだ。この若者を海に投げ込めば、我々を告発する証人は一人もいなくなる。」

そう話し合った彼らは、そのことを三番目の修道士に伝えた。しかし、その修道士は神を畏れる人であったため、こう言った。

「いや、兄弟たちよ、そんなことをしてはならない。金のために少年を、ひいては自分たちの魂までも滅ぼしてはならない。」

しかし、彼らはその諭しを聞き入れず、彼に自分たちと同じ考えになるよう強要し、ついにはこう言った。

「もしお前が我々と手を組まないなら、その少年と共に、お前も滅ぼしてやる。」

その兄弟は、彼らの抗いがたい悪意を見て、自分も殺されてしまうのではないかと恐れ、こう言った。

「もしそう決めたのなら、好きにすればよい。私は神の名にかけて誓う。このことを誰にも話さず、あなたたちから金を要求することもない。」

こうして、誓いをもって言葉を固めた彼は、黙り込んだ。一方、彼らは金と、その金を覆っていた石を手に取り、それを舟に運び込み、少年と共に舟に乗り込んで修道院へと向かった。水深の深い場所に来たとき、彼らは少年に襲いかかり、その首に石を縛り付け始めた。　少年は、彼らが自分に何をしようとしているのか悟ると、泣き叫びながら、自分を殺さないでほしいと懇願し始めたが、無駄だった。　あの不敬虔な修道士たちは、石のように硬い心と金に目がくらんだ魂を持ち、神を恐れず、少年の涙に心を動かされることもなく、彼の謙虚な懇願にも耳を貸さなかった。　少年を捕らえると、彼らは彼を石と共に海の深みへ投げ込み、少年はたちまち海底へと沈んでいった。この悪行が行われたのは、夜のことであった。　高みから少年の痛ましい泣き声を眺め、彼の無実の溺死を目撃した慈悲深い神は、人類の守護者である聖大天使ミカエルを遣わし、海の底から溺死した少年を救い出し、生きたまま教会へ連れてくるよう命じられた。そして、その通りになった。　突然、少年は首に石を吊られたまま、聖餐台のそばに現れた。早課の礼拝の時間になると、教会係の[6092]が、ろうそくに火を灯し、朝の礼拝の鐘を鳴らすために教会に入った。　その時、彼は祭壇の中から人の声とうめき声を聞いた。彼はひどく怖くなり、そのことを修道院長に報告しに行った。修道院長は彼を臆病者で気弱だと非難し、再び教会へ行くよう命じた。二度目にそこへ行くと、彼はまた同じ声を聞き、再び修道院長のところへ戻った。　そこで修道院長は自ら彼と共に教会へ行き、その声を聞いて祭壇の中に入った。そこでは、聖餐台の近くに、首に石を縛り付けられた少年が横たわっており、その衣服からは海水が滴り落ちていた。修道院長は少年を認識し、尋ねた。

「どうしたのだ、わが子よ。どうしてここに来たのか？」

少年はまるで眠りから覚めたかのように言って、こう答えた。

「あなたが私と一緒に見つかった金を探しに行かせたあの悪辣な修道士たちが、この石を私の首に縛り付けて、私を海に投げ込んだのです。海底に沈んでいくと、太陽のように輝く二人の男を見かけ、彼らが交わす会話を耳にしました。一人がもう一人にこう言いました。『大天使ミカエルよ！この少年をドキアールの修道院へ連れて行け！」これを聞いて、私は意識を失い、どうやってここにたどり着いたのか分からない。

少年の話を聞いた修道院長は驚き、驚くべき輝かしい奇跡をなされる神を賛美した。それから彼は少年に言った。

「わが子よ、悪意が暴かれるまで、朝になるまでこの場所に留まりなさい。」

それから、彼はそこを出て教会を閉め、エクリシアルクにこのことを誰にも話さないよう命じ、早課についてはイグメンが玄関で執り行うよう命じた。その際、彼はエクリシアルクにこう付け加えた。

「もし誰かが『なぜ教会ではなく、玄関で早課を唱えるのか』と尋ねたら、修道院長がそう命じたと答えなさい。」

朝になると、あの殺人者たちは修道院に近づいてきたが、金は別の場所に隠しておいた。彼らを見た修道院長は、他の修道士たちと共に彼らを迎えに出て、こう尋ねた。

[6092] エクリシアルヒ（ギリシャ語で「教会の長」の意）は、教会の規則に従い、教会堂とその内部の清潔さ、ならびに修道院における礼拝の秩序を監督する義務を負っていた。

「昨日、四人で出かけたのに、なぜ今は三人で戻ってきたのか？　四人目はどこにいるのだ？」

すると彼らは怒りを込めてこう答えた。

「父上、あの若者はあなたにも私たちにも『金を見つけた』と嘘をつきました。彼は私たちに何も見せることはできませんでした。彼自身も何も知らず、恥じてどこかへ逃げ隠れしてしまったのです。私たちは長い間彼を探しましたが、見つからず、私たちだけであなたのところへ戻ってきました。」

修道院長は、「神の御心ありませよう」と言い、彼らと共に修道院へ向かった。若者が横たわっている教会に彼らを連れて行くと、その若者の服からはまだ水が滴り落ちていた。修道院長は彼らにその若者を指さし、尋ねた。

「この者は誰か？」

若者を見て、彼らは恐怖に襲われ、石像のように立ち尽くした。長い間、何も答えることができなかったが、ついに、本意ではないにせよ、自らの悪行を認め、見つけた金をどこに隠したかを話した。そこで修道院長は、より信頼できる修道士たちを遣わし、彼らは見つけた金を修道院へ持ち帰った。　この奇跡的な出来事の噂は聖なる山全体に広まり、すべての修道院から修道士たちが集まり、この輝かしい奇跡を目撃した。彼らは総会を開き、その教会を聖大天使ミカエルの名に改め、聖ニコライ・チュドトヴォルツェの名を冠した別の教会を建てた。　あの二人の悪辣な殺人者は呪われ、修道院から追放されたが、少年を海に投げ込むことに同意せず、悪行を拒んだ三番目の修道士は、無実と認められた。海に投げ込まれることから救われた少年は、修道士の装いをまとい、善良な修行者であり、厳格な修道士となった。　その後、修道院長は持ち込まれた金を使って教会を華やかに装飾し、非常に美しい前庭を新たに建設した。また、少年が海に投げ込まれた際に使われた石は、現れた奇跡が万人に知られるよう、壁に埋め込まれた。修道院長が世を去ると、　、溺死を免れたその修道士が後任の修道院長に任命された。　神に喜ばれる生涯を送った後、彼もまた、かつて聖大天使ミカエルによって海から教会へと運ばれたのと同じように、その御手によって主のもとへと運ばれていった。

これらすべてのために、父と子と聖霊を賛美し、聖大天使ミカエルを永遠に称えましょう。

大天使へのトロパリオ、第4調：

天の軍勢の総司令官よ、常に不適格な私たちはあなたに祈ります。あなたの祈りによって、あなたの栄光の無形の翼の覆いで私たちを守り、熱心にひれ伏し、「災いから私たちを救い出してください。あなたは天の軍勢の統率者であるから」と叫ぶ私たちを、どうか守ってください。

コンダク、第2調：

神のアルキストラティゴスよ、神の栄光の奉仕者よ、天使たちの長よ、そして人々の導き手よ、私たちのために有益なことを願い、大いなる憐れみをお与えください。無形のアルキストラティゴスとして。

聖殉教者ロミラの受難

記念日：9月6日

聖ロミルは、トラヤヌス帝の治世[6093]に生き、王宮全体において第一の重臣であった。

ある時、トラヤヌスは、イヴェル人、サウロマタ人、アラブ人、その他の諸民族を征服するため、大軍を率いて東方諸国に滞在していたが（[6094]）、兵士の数を再確認しようと思い立ち、各軍団の中から、キリストを信仰し、偶像崇拝を拒む1万1千人の者たちを発見した。　トラヤヌスは彼ら全員を恥辱とともにアルメニアへ追放し、それによって彼らがキリストを捨て、偶像に犠牲を捧げるようになれば、再び兵士としての地位に戻り、かつての軍人としての名誉を取り戻せるだろうと期待した。

そこで、軍司令官であるロミルは王のもとへ赴き、王の無神論と無分別さを非難した。すなわち、戦争に出陣しながら自ら軍勢を減らしていることである。一方、ロミル自身は、主イエス・キリストの名のために死を厭わないキリスト教徒であることを公言した。

トラヤヌスは聖人に激しく怒り、彼を激しく殴打するよう命じ、死刑を宣告した。　その直後、聖殉教者[6095]の尊い首は斬り落とされた。流刑に処されたキリスト教徒たちもまた、様々な方法で殺害された。そのうち九千人は、アルメニアのアララト山近くの砂漠で磔にされ、残りの者たちは他の拷問によって命を落とした。

聖殉教者エウドクシオスの受難

記念日：9月6日

聖エウドクシオスは、神の教会を激しく迫害したディオクレティアヌスの治世に生きた。この皇帝は、帝国内で唯一真の神　を崇拝することを禁じ、神にふさわしい栄光を、声なき無魂の偶像に捧げることを命じる不敬な勅令を発した。　この勅令が公布されると、多くの信者たちは、不義な人々と共に都市で暮らすよりは、むしろ獣たちと共に砂漠や山で暮らすことを選び、そこへ逃げ込んだ。　同様に、多くの高官や貴族たちも、その地位や住居を捨て、人知れぬ場所に身を隠した。その一人に、イエス・キリストの忠実な僕である軍司令官エウドクシオスがいた。彼は、王の怒りを避けるため、その地位を捨て、妻や子供たちと共に不信心者たちから身を隠した。　その間、メリティナの統治者――聖エウドクシウスがその者に誹謗中傷されていた――から派遣された兵士たちが、至る所で彼を探し回っていた。ある場所で、兵士たちは粗末な服を着たエウドクシウスに出くわし、「軍司令官エウドクシウスの居場所を知らないか」と尋ねた。

聖人は、拷問にかけるために自分を探しているのだと悟り、彼らにこう言った。

「私の家へおいでください。私のパンを召し上がり、旅の疲れを癒やしてください。そうすれば、エウドクシオスをお見せしましょう。彼が家族と共にどこに隠れているか、私は知っているからです。」

兵士たちは承諾し、聖なる殉教者のもとへ向かった。

エウドクシオスは彼らを迎え入れ、手厚くもてなした後、自分がまさに彼らが探している人物であると告げた。

聖人のその振る舞いに驚いた兵士たちは、こう答えた。

[6093] トラヤヌスはローマ皇帝であり、西暦98年から117年まで在位した。ローマ史上屈指の優れた皇帝の一人である。　しかし、彼もまたキリスト教徒を迫害し、キリスト教徒に対する公然たる迫害の始まりに少なからぬ影響を与えた二つの法律を公布した。その一つはあらゆる秘密集会を禁止するものであり、もう一つは、キリスト教の信仰を告白することを理由に、異教の神々への生贄を頑なに拒んだ者をすべて処刑することを合法化するものであった。

[6094] イヴェル人とは、現在のグルジア人である。サウロマタイ人、あるいはサルマタイ人は、コーカサスやカスピ海からさらに東へと広がる地域で、イヴェル人と隣り合って暮らしていた。アラブ人はアラビア半島に居住していた。

[6095] 聖殉教者の安らかな死は、トラヤヌス皇帝が軍を率いて東方に駐留していた頃、107年頃あるいは115年頃に訪れた。

「あなたの善行に報いるため、あなたを捕らえることはしません。私たちを遣わした者には、長い間探したがあなたを見つけられなかったと伝えましょう。あなたは、他の人に知られず、あなたの居場所が漏れないよう、身を隠しておいてください。」

兵士たちはもう立ち去ろうとしていたが、聖人は彼らを引き止め、こう言った。

「待ってください、兄弟たちよ。私もあなた方と一緒に行きます。もはや身を隠すのはふさわしくありません。神ご自身が、私も殉教の業に就き、神の聖なる御名を告白し、証しをするよう、私を召しておられるからです。」　もし神が、私が露見しないことを望んでおられたなら、あなたがたは道中で私に出くわすことはなかったばかりか、私を探しに来るよう遣わされることもなく、私があなたがたと出会うこともなかったはずだ。起こったすべてのことは、私が神のために、血を流すことさえ厭わず苦しむべきであるという、神の御心によるしるしなのだ。

その後、エウドクシオスは、ヴァシリサという名の妻や子供たち、家来たち、そして友人たちを呼び寄せ、こう語った。

「かつては身を隠していたが、今こそ身を現し、私たちのために自ら苦難に身を捧げられたイエス・キリストのために、進んで迫害者たちの手に身を委ねる時である。さあ、私は行く。主が望まれるままに、私を導き、助けてくださるだろう。そして、あなた方を主の御加護の下に委ねていく。」

その後、家事を整えた聖人は、子供たちや使用人たちに、自分がいない間も徳高く、　神への畏れと愛をもって生きるよう教え、妻には、自分の死の知らせを聞いたとき、泣いたり嘆いたりせず、その日を大きな喜びと歓びのうちに過ごし、神が御自分のしもべに殉教の冠を授けてくださったことを感謝するよう遺言した。

家族と別れを告げ、その位にふさわしい衣装、武器、そして軍用ベルトを身に着け――それは軍隊の指揮官として相応しい装いであった――聖人は、主への愛のためにすべてを捨て、家、妻、子供たち、奴隷、友人、そして全財産を後にした。

夫を失う妻、父を失う子供たち、最愛の友を失う友人たち――この別れは実に胸を打つものでした！　皆、彼と別れる際、彼がもう二度と戻ってこないことを知っていたため、苦々しく涙を流した。彼らの悲しみを和らげる唯一の慰めは、エウドクシオスがキリストのために苦しみを受け、勝利の殉教者となり、殉教者の冠を戴いて主キリストの御前に立つことを望んでいるということだけだった。

こうして愛する者たち全員と別れを告げた後、福者エウドクシオスは兵士たちと共に旅立った。一方、妻のヴァシリーサは、彼の苦難をこの目で見届けたいと願い、遠くから彼を追いかけていった。彼女と共に歩んだのは、エウドクシオスの二人の親友、ジノンとマカリオスであり、彼らにもまた、主から殉教の冠が用意されていたのである。

祝福されたエウドクシオスが統治者の前に連れて行かれると、統治者は彼を温かく迎え入れ、こう言った。

「我々は、お前をここに呼び出したのは、王の命令に従い、崇拝に値する神々、とりわけ万神の父である偉大なるゼウス、太陽のようなアポロン、そして愛すべき女神アルテミスに、犠牲を捧げるためである。」

聖エウドクシオスはこう答えた。

「私は、世界を創造し、命と救いを授けてくださる、三位一体として賛美される唯一の神に犠牲を捧げるべきであることを知っています。私はその神に賛美の犠牲を捧げますが、あなたが神と呼ぶものたちには捧げません。それらは木や石に過ぎず、いかなる無生物とも何ら変わりがないからです。」

統治者は再びエウドクシオスに言った。

「私は、お前が神々に相応の敬意を払うよう命じる。しかし、お前は、私の見る限り、神々を軽蔑するだけでなく、王そのものを何とも思っていないようだ。お前が何らかの新しい信仰を広め、多くの人々をそれに誘い込んでいると聞いた。」

そう言いながら、統治者は周囲に立っている大勢の兵士たちを見渡し、怒りを込めて言った。

「王の命令に従わない者は、それを身に着けるに値しない者として、軍服を剥奪される。そして、その者は軍人としての名誉も奪われることを知れ。」

このように語ったのは、聖エウドクシオスを恥じ入らせようとした不法な統治者であった。彼は、王の命令に逆らう者はまだ誰も現れておらず、エウドクシオスだけが従わないままであると期待していた。それゆえ、エウドクシオスは、その地位の栄誉を失わないために、恥を忍んで王の命令に従うだろうと考えていたのだ。しかし、その代わりに、彼自身が恥をかかされることとなった。　その演説の最中、聖エウドクシオスは、指導者の権威の象徴であった帯を身から外し、それを統治者の顔に投げつけた。　これを見た多くの兵士たち――その数は千百四人にのぼり、彼らは密かにキリスト教徒であった――は、神への熱意に燃え上がり、指揮官エウドクシオスと同じ行動をとった。すなわち、軍服の徽章を外して統治者の顔に投げつけ、イエス・キリストの名のために自らの魂を捧げ、肉体を失うことさえ厭わない覚悟を示したのである。

拷問官は、このように突然現れた多数のキリストの殉教者たちを見て動揺し、彼らの試練を中止すると、直ちにディオクレティアヌス帝にこの出来事を報告し、どう対処すべきか指示を求めた。皇帝はまもなく、次のような命令を返答として送ってきた。すなわち、将校たちには残酷な拷問を加え、下級兵士たちは放っておくように、というものであった。

皇帝の命令を受け取った総督は、裁判の席に着き、最高司令官であるエウドクシオスを呼び寄せ、再び彼にこう語りかけた。

「エウドクシウスよ、お前に忠告する。その邪悪な反抗と狂気の抵抗を捨て、自発的に神々に生贄を捧げるがよい。もし同意しないならば、強い苦痛に追い込まれ、意に反してこれを強いられることになるだろう。」

そう言うと、総督は、監禁、恐ろしい地下牢、傷、体の削り取り、火による焼灼、その他、言及するだけで恐怖を誘うような残虐な拷問の数々を列挙し始めた。

殉教者はこう答えた。

「総督よ、私にそう言うのは嘲笑に他なりません。私はあなたの拷問を子供のお化けのようなものだと考えています。なぜなら、私は寛大な報い主であるキリストから将来受ける報いを信じているからです。　私が恐れているのは、あなたが言及したあの火ではなく、決して消えることのない火、そして歯ぎしりやその他の激しい苦しみ――それらは、真の神に背き、神を拒む者たちに用意されているものだからだ。　それと比較すれば、あなたの苦しみなど子供のおもちゃに過ぎず、あなたが私に脅かすその火は、ゲヘナの火に比べれば水よりも冷たい。　「あなたの剣は」と聖人は続けた、「私にとって、憧れの地の扉を開く鍵となるだろう。そこでは、この目に見える、まもなく沈む太陽の代わりに、沈むことのない、揺らぐことのない光を見ることができ、一時的な恵みの代わりに、永遠の恵みを相続するのだ。　知っておいてほしい。私はあなた方の神々にひれ伏すことはない。なぜなら、木や石、あるいは芸術家の手によって加工された金や銀を神として崇めることは、大きな狂気だからだ。

聖人のこの答えを聞いて、統治者は彼にこう言った。

「お前のその狂気じみた答えは、私が寛大すぎたせいだ。私が許したからこそ、お前はこれほど厚かましく神々や王、そして私を冒涜するのだ。私自身の冒涜ならまだ耐えられるが、神々や王への冒涜はこれ以上許すことはできない。」

その後、統治者は聖人を手足を引き伸ばして、硬い革紐で容赦なく打ち据えるよう命じ、続いて絞首刑に処し、鋭い鉄の道具でその肉体を削り取るよう命じた。これらの拷問の後、聖人は牢獄に投げ込まれた。

数日後、彼は再び尋問に連行されたが、拷問官はエウドクシオスが以前と変わらず信仰において揺るぎない姿――まるで打ち砕くことのできない柱や、攻略不可能な要塞のよう――であることを確認した。　そこで拷問官は、殉教者の首を鉄の棒で打ち、全身の関節をすべて外すよう命じた。この拷問は、死そのものよりも過酷なものであった。

その後、拷問官はエウドクシオスを剣による斬首に処すことを命じた。

聖人が処刑場へと連行される際、聖なる殉教者は次のように祈った。

「神よ、アベルとアブラハムのいけにえに目を留められ、多くの殉教者たちの忍耐を慈しみをもって受け入れてくださった方よ、どうかあなたの慈悲深い御目で私のいけにえにも目を留め、愛に満ちた心から、心の温もりを込めてあなたに捧げる私の血を、拒まないでください。」

そう祈っていると、エウドクシオスは、泣きながら彼の後を追ってくる妻の姿を目にし、自分が命じた通りにすべて行われたかどうかを彼女に尋ね、自分の首が斬られた後にのみ、その遺体を持ち帰り、アミムナと呼ばれる場所に埋葬するよう命じた。　その後、再び彼女にこう言い聞かせた――自分の死を嘆くのではなく、その日を明るい衣装で祝い、様々な宝石で身を飾るようにと。

その後、自分のために泣いている友人ジノンを見かけると、エウドクシオスは彼にもこう言った。

「愛するジノンよ、泣かないでください。私たちが仕える神は、私たちを引き離すことはなく、まるで一つの舟に乗るかのように、私たちは共に永遠の命へと渡っていくのです。」

この言葉はジノンに深く響き、彼は声を高らかに叫び始めた。

「私もキリスト教徒だ。キリストを信じる。そして、キリストのために死にたい。」

たちまち彼は不敬虔な家来たちに捕らえられ、そのことが統治者に報告された。　総督は、彼をエウドクシオスと共に剣で斬首するよう命じた。彼らが処刑場へ連行されると、まずジノンが剣で斬り殺され、その間、エウドクシオスは彼のために祈りを捧げていた。こうして友を天国へと先立たせた後、エウドクシオスは剣の下で頭を垂れ、至福の死を迎えた。

彼らと共に、キリストを大胆に告白した他の殉教者たちも斬り殺され、その遺体は埋葬されることなく放置された。一方、エウドクシオスの妻ヴァシリーサは、恐れずに彼の遺体を受け取り、彼が自ら指定したその場所で、尊厳をもって埋葬した。

この行為により、彼女は捕らえられて統治者の前に引き出されたが、そこで彼女は神を明確に告白し、偶像とその崇拝者たちを罵り、同じ殉教の道を歩んで、夫に続いて主のもとへ一刻も早く行きたいと願った。

しかし、拷問官は彼女にこう言った。

「お前は、ガリラヤ人（すなわちキリスト教徒）から称賛を得るために、夫の後を追いたいと願っていることは知っている。だが、お前は死に値する者ではあるが、私はお前を殺すつもりはない。」

ヴァシリサはこれに対し、拷問官にこう言った。

「私の主イエス・キリストは、この私の願いをご存知であり、その行いそのものの代わりにそれを受け入れてくださるでしょう。たとえあなたが私を拷問で殺さなかったとしても、私は主なる神のもとで夫と共に過ごす至福を失うことはありません。」

その言葉を聞いた後、総督は彼女を追い払った。

七日後、聖エウドクシオスが彼女の夢に現れ、こう言った。

「私たちの友であり、家政係であるマカリオに、法廷へ行き、私たちの模範に従うよう伝えてください。私たちは彼を待っています。」

ヴァシリーサがこの幻視についてマカリオに告げると、彼は直ちに総督のもとへ赴き、自らをキリスト教徒であり、エウドクシオスの弟子であると宣言した。総督は彼を見て、その大胆な信仰告白を耳にすると、彼に対しても剣で首を刎ねるよう命じた。（311年）

こうしてマカリイもまた、エウドクシオスとジノンに続いて、善き救い主キリスト、我らの主のもとへと旅立った。ヴァシリーサもまた、真の信仰のうちに息を引き取り、主の御心に適い、聖徒たちの群れの中にあって神の栄光の御座の前に立ち、父と子と聖霊を永遠に賛美している。アーメン。

ゴルティノの主教、聖殉教者キリルの記念日

聖殉教者キリル、ゴルティナ司教の記念日

記念日：9月6日

この祝福されたキリルは、マクシミアヌス皇帝の治世、ヘゲモン（統治者）アグリッピナの時代に生きた。　あらゆる美徳に彩られた彼は、わずか九十五年の生涯を全うした。ある日、彼は二人の従者、テオファンとテオクティリストを伴い、ある修道院へと向かった。その道中、異教徒たちが偶像に雄牛や羊を捧げているのを目撃し、彼はその愚行に嘆息し、 偶像崇拝者たちを非難した。 このため、彼らは彼を捕らえて牢獄に閉じ込めた。ある真夜中、聖キリルがそこで神に祈っていると、天からの声が聞こえてきた。「キリルよ、ローマへ行きなさい！」翌朝、牢獄の扉は開いており、周囲の偶像はすべて打ち砕かれていた。　聖キリルは修道院までたどり着き、そこで幻視の中で聖フィロクセノスを見、彼はこう告げた。「あなたは二つの冠を受けるだろう。一つは聖職者の冠、もう一つは殉教者の冠だ」。その後、聖人はローマへ向かい、そこで説教によって信者たちを励ました。迫害が始まると、彼はエルサレムへ向かうことを決意した。その途上、マレオーネ島で、白い衣をまとった男が現れ、クレタ島を素通りしてはならないと命じた。彼はその指示に従った。クレタ島のゴルティナという町で、彼は司教に任命された。当時、彼は生後六十歳であった。　再びキリスト教徒への迫害が始まると、聖人はイゲモン（統治者）の裁判にかけられ、キリストを否定するよう説得された。しかし、聖なる殉教者はその説得に屈することを拒んだため、剣による斬首の刑に処せられた。　そこで、彼の口に馬のくつわをくわえさせ、老齢のため歩くことができなかったため荷車に乗せ、運ばれた。ラクサと呼ばれる場所に到着したとき、天から「ここまでだ！」という声が聞こえた。荷車は止まり、聖人の首は斬り落とされた。

聖ダビデの生涯

記念日：9月6日

聖なる敬虔なダビデは、かつては山賊であり、エルモポリの荒野[6096] に住み、多くの悪事を働き、多くの人を殺害し、他の誰よりも邪悪で残酷であった。　彼の指揮下には、彼と共に強盗を働いていた三十人以上の仲間がいた。ある日、彼らと共に山に座っていた時、彼は自分の人生について深く考え込み、人々にどれほどの悪と災いをもたらしたかを思い出し、神を深く恐れるようになった。かつて共にいた強盗たち全員を見捨て、彼は修道院へ向かった。

ダビデが門を叩くと、門番が出てきて彼に言った。

[6096] エルモポリの砂漠はエジプトにあり、その名称は古代エジプトの都市エルモポリに由来する。

「何の用だ？」

ダビデは答えた。

「修道士になりたいのです。」

門番は行って、彼のこと修道院長に報告した。修道院長が彼のもとへ出てきたが、彼が年老いた男であるのを見て、こう言った。

「ここにはいられない。兄弟たちは多くの労苦を背負い、厳しい禁欲生活を送っているからだ。お前は性質が異なり、修道院の戒律を守り通すことはできないだろう。」

ダヴィドは、修道院に受け入れてくれるよう懇願し続けた。

「何でも、おっしゃる通りにいたします」と彼は言った。「どうか、私を受け入れてください。」

修道院長はこう言って断った。

「お前は我々と共に暮らすことはできない。」

すると、ダビデは修道院長にこう言った。

「父上、知っておいてください。私は盗賊の頭目ダビデです。自分の罪を悔い改めるために、ここへやって来たのです。もし私を受け入れてくださらないなら、誓って約束します。私は引き返し、盗賊たちを連れて戻り、あなた方を皆殺しにし、この修道院を破壊してやります。」

これを聞いた修道院長は、ダヴィドを修道院に受け入れ、彼を修道士として剃髪させた。そしてダヴィドは、禁欲に励み、謙遜を自らに教え込み始めた。やがて彼は、修道院の他の修道士たちを徳において凌駕し、その生き様と言葉によって皆の益となるように尽くした。

ある日、ダビデが独房に座っていると、大天使ガブリエルが現れ、彼にこう言った。

「ダビデよ、主はあなたの罪を赦された。これからは、あなたは奇跡を行うようになるだろう。」

ダビデは天使にこう答えた。

「主がこれほど早く私の罪を赦してくださったとは信じられません。私の罪は極めて重く、海の砂よりも数多いからです。」

大天使は彼にこう言った。

「私は大天使ガブリエルだ。かつてザカリア[6097] が私の言葉を信じなかったとき、彼をも容赦せず、私の言葉を信じるよう懲らしめとして彼の舌を縛った。ましてや、お前を容赦するはずがない。それゆえ、これからは口がきけなくなるのだ！」

ダビデはひれ伏して、天使に言った。

「私が強盗であり、不法な行いをし、多くの血を流していた頃、あなたは、神の栄光を讃えることのできない私の舌を縛りませんでした。しかし今、私が主に仕え、主に賛美を捧げようと願うこの時に、あなたは私の舌を縛り、私に言葉を語らせないようにするのですか！」

すると、天使は言った。

「話してもよい。ただし、神を賛美し、定められた時間に神に祈る時だけだ。それ以外の時間は、黙っていなさい！」

こうして彼を懲らしめた後、天使は彼から離れていった。ダビデは、自分の罪が赦されたことを神に感謝した。その後、彼は神の恵みによって多くの奇跡を行った。盲人の目を開き、足の不自由な者を立ち上がらせ、悪霊に取りつかれた者を癒やした。　彼は教会での礼拝において神に賛美歌を歌ったが、それ以外の言葉は口にすることができなかった。このように長年にわたり、すべての人々

[6097] ここで言及されているのは、もちろん聖ヨハネ・洗礼者の父である祭司ザカリアである。ルカによる福音書1:11–22を参照。

の模範となって生き、彼は主のもとに召された[6098] 。そして今、主の御前に立ち、絶えず私たちのために祈り続けている。

その祈りによって、私たちも主の恵みを受けられますように。アーメン。

聖殉教者キリアコス、ファウスト、アビブの記念日

記念日：9月6日

これらの聖なる殉教者たちは、デキウス皇帝の治世下[6099] 、アレクサンドリア[6100] において、ローマ教皇聖ファビアン[6101] と聖アレクサンドロス・アレクサンドリアス[6102] が殉教したのと同じ迫害のさなかに、殉教しました。 彼らは都市の統治者ヴァレリウスの前に引き出され、キリストの御名を堅く告白し、偶像崇拝の虚栄と空しさを勇敢に糾弾したため、剣によって斬り殺された。彼らと共に、さらに十三人の殉教者も殺害された。アレクサンドリアのキリスト教徒の一部は、彼らの聖遺骨を回収し、真の神である我らのキリストの栄光のために、自分たちの街に敬虔に安置した。

9月20日

9月7日（旧暦）

聖殉教者ソゾントの殉教

記念日9月7日

キリキアの統治者マクシミアン[6103] は、皇帝の命により不敬虔な偶像多神教を広め、ポンペオポリスという町を訪れ、その地の黄金の偶像を崇め、多くの生贄を捧げた。 その頃、その地には、リカオニア[6104] 出身のソゾントという名の若者がいた。彼はキリスト教徒であり、 気立てが良く、善行に満ちていた。というのも、彼は昼夜を問わず主の律法を学んでいたからである。 彼は言葉を持たない羊の群れを牧していたが、同時に、キリストの「言葉を持つ羊」たちをも、良き牧草地へと導いていた。 彼が羊たちとどこにいようとも、至る所で他の羊飼い、若者や男たちが彼のもとに集まってきた。そして彼は彼らに唯一の神を知ることを教え、多くの人々を聖なる洗礼へと導いた。それは、彼の上に聖霊の恵みが宿っていたからである。ある時、大きな樫の木が立つ泉のほとりで羊の群れを放牧していたとき、 ソゾントは安らかな眠りに落ち、神聖な幻を見ました。その幻は彼に殉教の業へと招き、その場所が多くの者に益をもたらすことを告げていました。なぜなら、その場所は天から降り注ぐ恵みによって聖別され、多くの人々がそこで救いを見出し、聖三位一体を賛美するから

[6098] 6世紀に生きた後、同世紀に没した。

[6099] デキウス――キリスト教徒に対する残酷な迫害者。249年から251年まで在位した。

[6100] アレクサンドリア――その教養、政治的重要性、そして貿易で名高い都市で、紀元前333年頃、アレクサンドロス大王によってエジプトに建設された。

[6101] 聖ファビアン――236年から250年にかけてローマ教皇を務めた。

[6102] 聖アレクサンドロス－212年から250年にかけてアレクサンドリア総主教を務めた。

[6103] 一部の古代の暦（バシレイオス帝の暦など）では、「マクシミアン」の代わりに「マクシム」と記されている。これは、304年にキリキアの総督を務めたヌメリウス・マクシムであったと考えられている。

[6104] 皇帝バシレイオスの暦では、殉教者ソゾントの出生地はリキアと記されているが、『プロローグ』や『チェティイ・ミネイ』ではリカオニアとなっている。殉教記録によれば、それはキリキアであり、そこには古代のソリとして知られた海辺の都市ポンペオポリスがあった。

です。　眠りから覚めると、この善良な羊飼いは羊の世話を他の人々に任せ、その場所に自分の弓と三本の矢を記念として残し、ポンペオポリスという町へと向かった。そこで彼は、不義が蔓延し、聖なる信仰が踏みにじられているのを見て、心から嘆き悲しんだ。　黄金の偶像が安置されている神殿に入ると、彼はその偶像の手を折って砕き、それを貧しい人々に分け与えた。偶像から黄金の手が奪われたことは、町に大きな騒動を引き起こし、多くの人々が尋問され、拷問を受けた。　しかし、聖ソゾントは、他の誰かが自分のせいで苦しむことを望まず、自ら統治者マクシミアヌスの元へ赴き、自分がその事件の犯人であると告げた。　「私はあなた方の神の腕を取り上げ、それを砕いて、貧しい人々に金を配りました」と彼は言った。なぜそのようなことを敢えて行い、神の腕を取り上げて砕くことで神に不名誉をもたらしたのかと尋問されると、彼はこう答えた。

「私は、あなた方の神の無力さを目の当たりにするためにそうしたのだ。なぜなら、私がその神の手を奪い取ったとき、神は私に抵抗せず、何も言わず、痛みを示すこともなく、うめき声さえ上げなかったからだ。」　実際、口がきけず、正気でもないその像が、抵抗できたはずがあるだろうか。もし彼が真の神であり、生ける者であったなら、私に立ち向かい、自分に害を及ぼすことを許さなかったはずだ。　しかし、私はそれが神ではなく偶像であることを知っていたため、その腕を砕き、さらにはその全体さえも砕き散らそうとした。それは、あなたがたが、目も耳も口も手も足も持っているにもかかわらず、　しかし、見ず、聞かず、語らず、触れることもなく、歩くこともできず、殴られたり粉々に砕かれたりしても、自分自身を助けることなど何一つできないのだ。

統治者はこれを聞くと、ソゾントを容赦なく拷問するよう命じた。　まず、彼を木に吊るし、鉄の爪で肋骨を削り始めた。次に、内側に鋭い釘が打ち込まれた鉄のブーツを履かせ、街中を引き回した。聖人はそのブーツを履いて歩きながら、神を賛美した。その後、再び木に吊るされ、鉄の棒で激しく殴打されたため、肉体だけでなく骨までもが砕け散った。　こうした拷問の中、聖人は神に息を引き取った[6105]。彼がすでに亡くなったことを確認すると、拷問者たちはその遺体を木から降ろし、統治者の命令により、遺体が信者たちの崇拝の対象となることを恐れて、遺体を焼くために激しい火を焚いた。　そして、この多くの苦難に耐えた遺体が火の中に投げ込まれたとき、突然稲妻が走り、雷鳴が轟き、雹を伴う激しい雨が降り注いだため、火はたちまち消え去った。そこにいた人々は恐怖のあまり逃げ去り、聖人の遺体は無傷のまま残された。　夜が更けると、信者たちは聖人の聖遺骨を回収しようとしたが、深い闇に包まれていたためできず、深く嘆いた。しかし真夜中、天から光が聖遺骨を照らし出し、信者たちはそれを回収して、敬意を込めて埋葬した。　殉教者の棺からは多くの奇跡が湧き出ていた。棺だけでなく、かつて聖人が眠りの中で幻視を受けた樫の木の下を流れる泉からも、キリストの恵みと聖殉教者の祈りによって、病める者たちへの様々な癒しがもたらされた。それゆえ、後にその地に、三位一体の唯一の真の神を賛美するために、聖人の名を冠した教会が建立された。主を永遠に賛美します。アーメン。

聖人のコンダク、第2調:

真実にして神に賢明な殉教者、敬虔さにおいて熟達した苦難の受難者、今日ここに集う我らは、恵みの秘儀の守り手であり、豊かな癒やしの与え主であるソゾントを、声高らかに賛美しよう。キリスト・神が、我らすべてのために祈ってくださるよう。

[6105] 聖山（アトス山）のニコディモスによるギリシャ語のシナクサリオスによれば、聖殉教者ソゾントの苦難と死は288年に起こったとされる。他の伝承によれば、これは304年頃のことである。

聖使徒エヴォドとオニシフォロスの記念日。

9月7日の記念日

聖エヴォドは、七十人の使徒の一人であり、聖使徒ペトロに次いで、偉大なるアンティオキアの最初の司教であり、神の御言葉の偉大な説教者であった。聖イグナティオス・テオフォロス（神を宿す者）は、アンティオキアの人々への書簡の中で、彼について次のように言及している：　「使徒たちによってあなたがたの最初の牧者として任命された、あなたがたの祝福された父エヴォドを記念しなさい。父があなたがたを恥じることのないよう、姦淫を行う者ではなく、真に彼の息子たちでありなさい」。この聖エヴォドは、至聖なるおとめについて、生後15歳で世界の救い主キリストを産んだと記している。　「三歳の時、彼女は主の神殿に捧げられ、そこで十一年間を過ごした。十四歳になった時、彼女は祭司たちによってヨセフに託され、彼が彼女を守るようになった。　彼のもとで四ヶ月を過ごしたとき、天使から喜びの福音を授かり、十五歳の終わりに、世の光であるキリストを産んだ」。このほかにも、聖エヴォドは多くの有益な著作を残したが、それらはすべて、神の教会が迫害にさらされていたあの災難の多い時代に失われてしまい、そのため現代まで伝わってこなかった。現在、知られているのは『スヴェティロ』という題名の書物のみであるが、これについては、古代の歴史家ニキフォロスによる言及があるのみである[6106]　。聖エヴォド自身については、ローマの殉教者録[6107]　にその記録が見られ、そこでは彼がキリストのために血を流し、殉教の死を遂げたと記されている。　一部の人々は、この聖人がウェスパシアヌス帝の治世下、アンティオキアで殉教したと主張している[6108]　。当時、あるアンティオコスという名のユダヤ人が、ある都市で大きな騒動を引き起こしたという。彼は信仰を裏切り、偶像への生け贄を捧げるようになり、その結果、偶像を崇拝しなかった多くのユダヤ人が殺害された。　そこで、非常に多くのユダヤ人がキリスト教の信仰を受け入れ、彼らの司教として福者エヴォドがいた。彼は彼らの指導者であり牧者であったが、まもなく殺害された[6109]　。

聖オニシフォロスもまた、七十人の使徒の一人であった。使徒パウロはテモテへの手紙の中で、彼について*次のように*述べている。*「主がオニシフォロスの家に憐れみをお与えになりますように。彼は何度も私を慰め、私の束縛を恥じることなく、ローマにいたとき、熱心に私を探し求め、見つけ出してくれたからです。　主が、その日、彼が主の御前に恵みを得られるようにしてくださいますように。彼がエフェソでどれほど私に奉仕してくれたかについては、あなたがよくご存じでしょう」*（IIテモテ1:16–18）。 このオニシフォロスはコロフォンの司教であり[6110]　、信仰のために苦難を受け、殉教の死を遂げた。彼の殉教については殉教録に記されており、そこには聖オニシフォロスが多くの拷問を受けた後、野生の馬に引き裂かれ、エヴォドと共に天の住まいにいる神の告白者たちの群れに加わったと述べられている。

聖殉教者エウプシキオスの記念日

記念日：9月7日

6106 ニキフォロス・カリスト。

6107　殉教録、すなわち殉教記録とは、殉教者たちの苦難に関する最も古い記録の集大成である。殉教記録の起源および最初の根拠は、異教の当局による殉教者たちの尋問、有罪判決、処刑に関する記録である。　ローマ皇帝デキウス・トラヤヌスによる迫害の時代（西暦250年）以降、ローマやその他の地域で、殉教者たちの運命に関する正式な教会記録が作成されるようになったが、それらの中から現存しているのはごくわずかな断片に過ぎない。

6108 ウェスパシアヌスは、西暦70年から79年まで在位したローマ皇帝である。

6109 聖エヴォドの祝福された死は、西暦66年に訪れた。

6110 コロフォン――小アジア北西部に位置するリディアの古代都市。近年、この都市の遺跡が発見された。

聖エウプシキオスは、カッパドキアのケサレアで生まれ、そこで教育を受けた。　ハドリアヌス帝の治世[6111]、彼が異教の神々を崇拝せず、キリストを崇めているという告発がなされた。この告発の結果、エウプシキオスはカッパドキアの総督に連行され、拷問を受けた。その体は、肋骨が露わになるまで鉄の爪で削り取られた。 拷問の後、かろうじて息のある聖エウプシキオスは、 牢獄に投げ込まれた。そこで彼は主に向かって熱心に祈りを捧げると、その祈りの最中に天使が現れ、その触れるだけで殉教者の傷を癒やした。

その直後、聖エウプキシオスは牢獄から解放された。この解放は、エウプキシオスが所有していた富が不義な者たちの手に渡ることなく、貧しい人々に分配されるよう、神の御心によって成し遂げられたのである。　そして実際、聖エウプシキオスは、その曽祖父の代から蓄積されてきた全財産を、貧しい人々や困窮者に施し、その一部を、自分を誹謗中傷した敵たちにも与えた。こうして彼は、自らの苦難の原因となった者たちを、あたかも恩人であるかのように、贈り物をもって敬ったのである。

その後、ケサリアを統治していたサプリキウス公の治世下で、聖エウプシキオスは再び捕らえられた。彼は絞首刑に処され、長時間にわたり拷問を受けた後、剣による斬首によって殉教の死を遂げた。伝えられるところによれば、彼の体の傷口からは、血の代わりに乳と水が流れ出たという。

我らの聖なる父、ノヴゴロドの大司教ヨハネの生涯

記念日：9月7日

ロシアの新しい奇跡行者、聖ヨハネは、ヴェリキー・ノヴゴロドで生まれた。彼の両親――ニコライとクリスティーナ――は敬虔な人々であった。そのため、彼も、また弟のガブリエルも、二人とも神を畏れる心を持って育てられた。　幼い頃から聖ヨハネは神に身を捧げ、徳のある生活を送っていた。そして成人すると、聖殉教者ブラシアの教会で司祭に叙階された。新たに叙階された司祭は、神のすべての戒めを厳格かつ忠実に守りながら、これまで以上に熱心に主に仕えるようになった。その間、聖ヨハネの両親は亡くなった。もともと彼は静寂に満ちた生活が好きで、修道者の戒律を受けることさえ考えていたが、今度は兄弟のガブリエルと相談した上で、聖ヨハネは両親が残した資金で新しい修道院を設立することを決めた。　まず彼らは、栄光に満ちた受胎告知を記念して、無原罪の聖母に捧げる木造の教会を建て、修道院を設立した。その後、石造りの教会を建立することを計画した。　兄弟たちは、その善き意図を遂行しようと熱心に取り組み始め、石造りの教会を丹念に建設し、すでに半分まで完成させていたが、資金が底をついたため、やむなく工事を中断せざるを得なかった。このことに、至福のヨハネと彼の兄弟ガブリエルは深く悲しみ、その落胆は甚大であった。こうして、このような困難な状況にありながらも、同時に聖母マリアへの揺るぎない信仰と深い熱意を抱き、彼らは、悲しみに沈むすべての人々の迅速な助け手であり慰め手であるこの御方に、祈りを捧げた。

「我らの御母よ！」と兄弟たちは祈った。「あなたは、あなたの御子であり我らの神である方への、我らの信仰と愛をご存知です。あなたは、我らが主よ、あなたに呼びかけるこの熱意をご覧になっています。　お願いいたします、この聖堂を完成させるよう私たちをお助けください。私たちのすべての希望を、神の母であるあなたに託します。主よ、あなたのしもべである私たちを見捨てず、恥をかかせないでください。私たちはこの聖堂の建設を始めましたが、あなたの助けなしには完成させることはできません。

[6111] ハドリアヌス――ローマ皇帝。西暦117年から138年まで在位した。彼はキリスト教徒に対して特に長期にわたる迫害を行わなかったものの、その治世下で多くのキリスト教殉教者が犠牲となり、彼自身も迷信や異教の神秘的な教義に傾倒する傾向があった。

こうして彼らは聖母に祈りを捧げ、御前でその悲しみを打ち明けた。彼らの切実な願いは聞き届けられた。天の女王は夢の幻として彼らに現れ、こう言われた。

「なぜ、わたしに愛される神のしもべたちよ、聖堂の建設が遅れているという理由で、これほど悲しみに沈み、嘆きにふけるのですか。　私はあなたがたの祈りを無視はしない。あなたがたの信仰と愛を見ているからだ。まもなく、あなたがたには、聖堂の建設に十分な資金が得られるだけでなく、余りさえ出るだろう。ただ、この善き行いを放棄せず、信仰に冷めぬようにしなさい。」

この幻視は、二人の兄弟に与えられたものであり、彼らに力と活力を与えた。眠りから覚めると、彼らは大きな喜びに満たされた。早課の後、兄弟たちは互いに見たことを語り合い、彼らの希望はさらに強まった。　神の御導きにより、彼らはその日の早朝、修道院を出た。すると突然、修道院の門の前に、金で縁取られた手綱を付けられた美しい馬が立っているのが見えた。鞍もまた同じ金属で装飾されていた。馬は静かにじっと立っていたが、その馬の主と思われる騎手は誰もいなかった。兄弟たちは、その馬の美しさと豪華な装飾に深く驚嘆した。彼らは、飼い主がどこからか現れないかと長い間待っていた。しかし、誰も現れず、馬は同じ場所　にじっと立ち続けていた。そこで彼らは馬に近づいてみると、鞍の両側に、ぎっしりと詰められた二つの袋がぶら下がっているのを見つけた。　これが天から彼らに授けられたものだと悟ると、彼らは馬から袋を取り下ろした。すると、たちまち馬は見えなくなってしまった。　兄弟たちは袋の紐を解くと、一方の袋には縁まで金が詰まっており、もう一方の袋には銀が満たされていた。神と聖母マリアによるこのような彼らへの御加護に驚き、彼らは熱烈な感謝の祈りを捧げ始めた。　やがて、神の御加護により、彼らは教会を完成させ、見事に装飾した。その後、修道院の運営のために多くの村を購入したが、それでもなおかなりの金銭が残っていたため、それを修道院長と修道士たちに捧げた。　この修道院で、彼ら自身も修道者の剃髪を受け、ヨハネはイリヤと、ガブリエルはグリゴリーと名付けられた。彼らの生活は、断食と祈りの中で、様々な修道者の労苦と功績に満ち、神に喜ばれるものとして過ごされた。

ノヴゴロドの聖アルカディ大司教が逝去した際、至福のイリヤは修道院から呼び出され、本意に反して大司教の座に就かされた。　イリヤは自らをそのような聖職にふさわしくないと考え、それを拒んだが、神ご自身に導かれた公爵や世俗・教会の指導者たち、そしてノヴゴロドの市民全員が、満場一致でイリヤを大司教に選出した。なぜなら、彼は神と人々に喜ばれる者であったからである。皆は熱心な懇願と嘆願をもって、この謙虚な修道士に大司教の座に就くよう説得し、皆がこれを強く求めた。　ついに、本意に反して、彼は市民の意志に従い、キエフおよび全ロシアの総主教である至聖なるヨハネスによって、ノヴゴロドの大司教として按手を受けた。彼は、聖さと義に満ちた生活を送りながら、キリストの羊の群れを忠実に牧した[6112]。彼が大司教を務めていた頃、スーズダリの公ロマンは、ロシアの地の他の多くの公たち――その数は七十二名に上った――と共に、ヴェリキー・ノヴゴロドに対して反乱を起こし、同地を荒廃させ、血を分かち合い、同じ信仰を持つ兄弟たちを捕らえて処刑しようと企てた。　彼らは大軍を率いて都市に迫り、周囲を取り囲んで三日間、激しく包囲した。市民たちは包囲軍の多さを目の当たりにして意気消沈した。彼らの力は尽き果て、深く嘆き、動揺していた。どこからも助けを期待できず、ただ神に慈悲を願い、聖なる大司教の祈りに希望を託した。　一方、その司教は、真に善良な羊飼いとして、自分の群れを略奪しようとする狼たちが近づいてくるのを見て、見張りを立て、休むことなく神を見つめ、聖なる祈りを城壁のようにして街を守った。　三日目の夜、彼がいつものように主イエス・キリストのイコンの前で祈りを捧げ、涙ながらに主なる神に町の救いを懇願していたとき、ある声が彼にこう語りかけた。

[6112] ヨハネがある公会議に参加し、そこで「偉大な是正を示した」という伝承がある。

「イリインスカヤ通りにある主イエス・キリストの教会へ行き、聖母マリアの聖像を取り、それを敵に立ち向かう城壁の上へ持ち出せ。そうすれば、直ちにこの町の救いを見ることになるだろう。」

この言葉を聞いたイリヤは、言い表せないほどの喜びに満たされ、その夜一晩中眠らずに過ごした。そして朝になると、彼は皆を呼び集め、起こった出来事を語った。それを聞いた人々は、神と聖母マリアを賛美し、あたかも何らかの助けを得たかのように、気力を取り戻した。　一方、大司教は自身のプロトディアコンと聖職者たちを遣わし、その尊いイコンを自分の元へ持ち帰るよう命じ、自身は聖職者会議と共に、神の英知であるソフィアの名を冠した大聖堂で、祈りの賛美歌を唱え始めた。　使者たちは、奇跡を起こす至聖なる聖母マリアのイコンが安置されていたスパソヴァ教会に到着すると、まず慣例に従ってイコンに礼拝を捧げた。その後、イコンを持ち上げようとしたが、その場から動かすことさえできなかった。何度イコンを持ち上げようとしても、どうしても成功しなかった。　そこで彼らは大司教のもとへ戻り、その不思議な出来事を報告した。大司教は全員を連れてスパソヴァ教会へ向かった。そこに着くと、彼は聖母のイコンの前でひざまずき、次のように祈った。

「おお、慈愛に満ちた御母よ、神の母マリアよ。あなたは私たちの街の拠り所であり、希望であり、守護者です。あなたはすべてのキリスト教徒の防壁であり、覆いであり、避難所です。それゆえ、私たち罪人をもあなたに希望を託します。　主よ、あなたの御子であり、私たちの神である御方に、この街のために祈ってください。私たちの罪のゆえに、私たちを敵の手に渡さないでください。どうか、あなたの民の嘆きと嘆息に耳を傾け、かつてあなたの御子がニネベの人々の悔い改めを見て彼らを憐れまれたように、私たちをも憐れんでください。聖母よ、私たちにもあなたの慈悲をお示しください。

祈りを終えると、聖師は礼拝を始めました。そして、聖職者たちが「キリスト教徒の恥じることなき執り成し」というコンダクを歌い上げたとき、突然、聖母マリアの尊いイコンが自ら動き出しました。この驚くべき奇跡を目撃した民衆は皆、声を揃えて叫びました。「主よ、憐れみたまえ！」そして、至聖なる大司教は、聖なるイコンを手に取り、敬虔に口づけをした後、民衆と共に　の祈りの歌を歌いながら進み、イコンを城壁の上に掲げ、敵の方角に向けて設置した。その頃、敵はますます激しく城を包囲し、矢の雨を城へと浴びせていた。　すると、至聖なる聖母マリアは敵から顔を背け、城へと視線を向けられた。これは、包囲下で苦難に遭う人々に示された、聖母の偉大なる慈悲の明らかなしるしであった。　大司教は聖なるイコンを見つめると、聖母の目に涙が浮かんでいるのを見た。彼は自分のフェロン（法衣）を取り、イコンから滴り落ちる涙をその中に集めながら、こう叫んだ。

「なんと栄光に満ちた奇跡か――枯れた木から涙が流れ出ている！　これをもって、女王よ、あなたは私たちに、この街の救済を願って、あなたの御子であり私たちの神である方へ涙を流しながら祈っておられるというしるしを与えてくださるのです。」

そして、涙を流す至聖なる聖母マリアを目にした民衆は皆、嗚咽と心からの感動をもって神に叫び求めた。突如として敵に恐怖が襲いかかり、闇が彼らを覆い、神の怒りが彼らを混乱に陥れ、彼らは互いに殺し合い始めた。　敵の混乱に気づいたノヴゴロドの住民たちは、城門を開き、武器を手に敵へと突進した。ある者は剣で斬り伏せ、ある者は生け捕りにし、こうして至聖なる聖母の御加護により、敵の全軍を打ち破った。　この時から、神の聖人イリヤは、偉大なるノヴゴロドにおいて、至聖なる聖母マリアの驚くべき御徴を祝う荘厳な祭日を定め、その日を「救いの日」かつ「懲罰の日」と名付けた。なぜなら、至聖なる聖母マリアの祈りによって、　神は市民に救いを、また、同族かつ同信仰の兄弟たちに大胆にも反旗を翻し、内乱を引き起こした者たちには懲罰をお与えになったのである。それ以来、偉大なるノヴゴロドは、その良き牧者に導かれ、完全な平和と深い静寂に包まれた。　数年にわたり大司教の座に就いていた至福のイリヤは、神の聖なる御名をより一層賛美しようと熱心に尽力し、美しい教会を建設した。彼が建立した教会の数は、計七つにも及んだ。

彼が修道者となる前から建立した最初の教会は、至聖なる神の母の受胎告知を称えるものであった。第二の教会は、主の顕現を記念するもので、すでに彼が聖職に就いてから建てられた。　三番目は聖預言者エリヤに、四番目はストゥディオス修道院の修道院長である聖テオドロスに、五番目は聖なる三人の少年――アナニア、アザリヤ、ミサイア――および聖預言者ダニエルに、六番目は四日目の聖義人ラザロに、七番目は聖奇跡行者ニコラオスに捧げられた。

教会を建立する傍ら、イリヤは敬虔な生活によっても名声を博した。彼はすべての人に対して極めて慈悲深く、並外れた柔和さと偽りのない愛を備えていた。　彼はまるでキリストの教会における太陽のようで、善行によって光を放ち、悪行の闇を追い払い、常に敵意を抱き、人々の救いを妬む闇の君主――悪魔――の頭を打ち砕いた。　また、聖エリヤは不浄な霊たちに対して、その言葉だけで彼らを縛りつけるほどの権威を持っており、そのことは次の驚くべき物語が証明している。

ある夜、聖人はいつものように真夜中に自分の修道室で祈りを捧げていた。悪魔は聖人を脅かそうと、修道室に吊るされていた手洗い鉢に入り込み、水を濁らせて騒音を立て始めた。　聖人は、これが悪魔の仕業であると悟ると、その器に近づき、十字を切って呪いをかけ、その禁制によって悪霊を手洗い器の中に閉じ込めた。悪霊はそこから出ることもできず、長い間そこに閉じ込められていた。　ついに、十字架の印の力が彼を焼き尽くすような苦痛に耐えきれなくなり、悪魔は人間の声で叫び始めた。

「ああ、私は悲惨だ！十字架の力が私を焼き尽くす。もはやこのような苦しみには耐えられない。どうか早く私を解放してくれ、神に愛された聖人よ。」

すると、エリヤは尋ねた：

「お前は誰だ？どうやってここに入った？」

悪魔は答えた。

「私は狡猾な悪魔であり、お前を惑わしに来たのだ。お前が人間として恐怖に駆られ、祈りをやめてしまうだろうと思っていたからだ。だが、お前は私をこの器に閉じ込め、今や私はひどく苦しんでいる。惑わされてここに入ってしまったことを深く後悔している。神の僕よ、私を解放してくれ。これからは二度とここには来ない。」

そうして、悪魔は長い間叫び続けた。

ついに聖人は言った。

「お前の恥知らずな厚かましさゆえに、今夜、私をエルサレムへ運び、主の聖墳墓がある神殿の前に置くよう命じる。エルサレムからは、その同じ夜に直ちに私を　ここ、私の修道室へ連れ戻さなければならない。そうすれば、お前を解放してやる。」　悪魔は、聖人が器から自分を解放してくれることさえあれば、聖人の意志を何でも果たすとあらゆる手段で約束した。聖人は次のように言いながら、悪魔を解放した。

「鞍を載せた馬に変身し、私の小部屋の前に立ちなさい。」

闇のように悪魔は器から出て、聖人の命に従って馬へと姿を変えた。至福のイリヤは小部屋から出て、その悪魔にまたがり、その夜中に聖都エルサレム、主の御墓がある聖復活教会付近へとたどり着いた。　そこで、神の御心に適う者は、悪魔にその場所から離れることを禁じた。そして、イリヤが主の聖墳墓と尊い聖十字架に礼拝を捧げるまで、悪魔はまるで釘付けにされたかのように立ち尽くし、その場から動く力さえなかった。聖堂に近づくと、聖人は扉の前でひざまずき、祈りを捧げた。　すると突然、閉ざされていた扉が自ずと開き、主の聖棺の前で蝋燭とランプが灯った。大司教は、神に感謝の祈りを捧げ、涙を流しながら、主の聖棺にひれ伏し、畏敬の念を込めてその聖棺に口づけをした；　また、命を与える聖なる木や、すべての聖なるイコン、聖地にも礼拝を捧げた。願いを叶えた彼は教会から出て行くと、再び教会の扉は自然に閉じた。一方、悪魔は命じられた場所に、鞍を載せた馬の姿で立っていた。　その馬にまたがり、ヨハネは再びその夜のうちに偉大なるノヴゴロドに到着し、自分の修道室にたどり着いた。聖人から離れる際、悪魔は彼に、自分がどのように彼に

仕え、どのように誓約で縛られ、まるで囚人のように従っていたかを、誰にも話さないよう懇願した。

「もし誰かに、――」と不浄な霊は付け加えた、「あなたが私の背に乗ったことを話せば、私はあなたに対して陰謀を企てることをやめず、あなたに強い誘惑を仕掛けるだろう。」

悪魔はそう脅したが、聖人は十字を切って身を守ると、悪魔はたちまち煙のように彼の前から消え去った。

ある時、聖ヨハネは、修道院長や司祭、敬虔な市民といった高潔な人々と霊的な対話を交わしていた。　聖人の伝記を語り、魂に有益な偉業について多くを語り、その合間に、自身に起こったこと――すなわち、エルサレムへの旅――についても語った。しかし、語る際、彼は自分自身を名指しせず、あたかも他の誰かのことを語っているかのようにしていた。

「私」と彼は言った。「ある人物を知っている。その人は、ある夜、ノヴゴロドからエルサレムまでたどり着いた。主の聖墳墓と、命を与える主の十字架に礼拝を捧げた後、その同じ夜に再び偉大なるノヴゴロドへと戻ってきたのだ。　旅の間、彼はベセに乗っていたが、そのベセを自分の禁制で縛りつけ、まるで自分の捕虜のようにしていたのだ。

聴衆たちは聖人のこの話に大いに驚いたが、悪魔は大司教に向かって歯ぎしりしながら言った。

「お前は秘密を明かしてしまったのだから、お前に、すべての市民から淫行者として非難されるような誘惑を仕掛けてやる。」

それ以来、悪魔は神の許しを得て、聖人の名誉を傷つけようと、実際に狡猾な策略を仕掛け始めた。彼は、祝福を求めて大勢でヨハネのもとを訪れる人々に、聖人の独房の中で様々な幻を見せつけた。時には女性の靴、時には首飾り、時には何らかの女性の衣服といった具合に。　大司教のもとを訪れる人々は、これを見て惑わされ、聖人が自分の修道室に娼婦を隠しているのではないかと疑い始めた。彼らはこれに深く動揺し、目撃したことを互いに語り合いながら、こう言い合った。

「淫行にふける者が使徒の座に就くなど、ふさわしくない。」

ある日、人々が集まって聖人の独房へ向かうと、悪魔は乙女に変身し、あたかも聖人の独房から立ち去るかのように、人々の前を走り去った。　これを見た人々は叫び声を上げ、その少女を捕まえようと追いかけたが、悪魔は聖人の小部屋の奥へ逃げ込み、姿を消してしまった。人々の叫び声と騒ぎを耳にした聖人は小部屋から出てきて、集まった人々に尋ねた。

「どうしたのだ、わが子らよ？　何でそんなに騒いでいるのだ？」

人々は彼に向かって叫び、淫乱者であるかのように罵り、非難し、彼を捕まえて嘲笑し始めた。そして、今後彼をどう扱えばよいか分からず、互いに相談し合った。

「彼を川まで連れて行き、筏に乗せて、川を下って町から追い出そう。」

相談した末、彼らは聖なる貞潔な神の司教をヴォルホヴァ川の大きな橋へと連れて行き、聖人を筏に乗せた。こうして、悪しき悪魔の言葉が実現した。悪魔は自慢げにこう言っていたのだ。

「お前に、誰もが姦淫者だと非難するような誘惑を仕掛けてやる。」

こうして、聖人がこのように辱めを受けるのを見て、人類の狡猾な敵は大いに喜んだ。しかし、神の摂理により、義人の無垢さが勝利を収め、狡猾な敵を恥じ入らせた。　というのも、聖人が筏に乗せられたとき、その筏は下流へではなく、大きな橋の付近で水流が非常に強かったにもかかわらず、流れに逆らって上流へと進んだからである。誰も筏を引いてはいなかったが、神の御心によって筏は自ら進み、街から三ポプリシュの距離にある聖ゲオルギオス修道院へと向かっていった。　この奇跡を目撃した人々は恐怖に襲われ、憎しみを忘れ、衣服を引き裂き、泣きながらこう言った。

「私たちは罪を犯し、不義の行いを犯しました。私たち羊は、無実のあなた、私たちの羊飼いを裁いてしまったのです。」

岸辺を歩きながら、彼らは聖人に、自分たちの罪を赦し、再びその座に戻ってくださるよう懇願した。

「父よ、私たちをお赦しください」と彼らは叫んだ。「無知のゆえに、私たちはあなたに対して罪を犯しました。私たちの悪意を顧みず、あなたの子供たちを見捨てないでください。」

また、聖職者たちも皆、前に駆け寄り、聖人に地面にひれ伏して、泣きながら、その座に戻ってくださるよう懇願した。一方、大司教は、最初の殉教者ステファノのように、自分を傷つけた者たちのために祈り、こう言った。

「主よ、これを彼らの罪と数えなさらないでください！」

前述の修道院から半ポプリシュの距離にある岸辺に[6113] 着くと、彼は筏から降りて岸に上がった。民衆は泣きながら彼にすがりつき、許しを請うた。聖師が彼らに赦しを与えたとき、大いなる歓喜が湧き起こった。さらに、主が彼の無垢で清らかな生涯を明らかにしてくださったことに、彼らはなおさら深く喜んだ。　悪意のない牧者は、すべての人に赦しを与えた後、エルサレムを訪れたこと、ベツレヘムへ旅したこと、そして悪魔がどのように彼を脅そうとしたかを語った。これを聞いた人々は皆、神を賛美した。

こうして、聖師は大きな名誉と栄光のうちに自らの座に戻り、人々にこう教え始めた。

「子らよ、悪魔に惑わされないよう、また、善行が悪行によって曇らされず、主なる神を怒らせることがないよう、あらゆる行いを慎重に行いなさい。」

以上の出来事のあと、聖人は長くは生きられなかった。死が近づいていることを知ると、彼は司教のオモフォルを脱ぎ捨て、スキーマ（隠者服）を身にまとい、そこでヨハネという名が与えられた。彼は修道者となるまで、この名を名乗っていた。　この天使のような姿で、彼は安らかに主のもとへ召された[6114] 。その遺体は、ソフィア（神の知恵）教会に埋葬された[6115] 。彼の後を継いで、実の兄弟であるグリゴリーが大司教の座に就き、彼もまた、神の民を忠実に牧した。

わが神に、今、そして常に、世々限りなく栄光あれ！ アーメン。

トロパリオ、第8調：

今日、最も栄光に満ちた偉大なるノヴグラードは、聖ヨハネよ、あなたの聖遺骨をその中に宿し、太陽の光線のように輝き、信仰をもってあなたの聖遺骨の聖櫃に駆け寄る者たちに癒やしを授けています。　キリスト・神に、この都を野蛮な捕囚、内乱、そして火災から無傷で救い出されるよう、聖なる神知恵者、奇跡を行う者、天の人、地上の天使よ、祈り求めてください。　あなたの記念に愛をもって集い、歌と賛美をもって喜びに満ちて明るく祝うとき、癒しの恵みをあなたに授け、偉大なるノヴグラードに守りと確固たる基盤を与えてくださったキリストを賛美いたします。

[6113] つまり、345サジェニ、あるいは2/3ヴェルスタ強に相当する。

[6114] 1186年9月7日

[6115] 1439年、エウフィミオス大司教の在任中に、聖ヨハネの聖遺骨が発見された。時が経つにつれ、市民たちはこの聖なる大司教のことを忘れ、彼の墓の場所さえも知らなくなっていた。　その同じ年、ソフィア大聖堂の玄関ホールにあった小さな石が所から外れて、この聖人の墓の上に落下し、大きな石の墓石が砕けてしまった。これは不思議な出来事と思われたため、砕けた墓石を取り除くと、その下からこの神の御使いの朽ちない聖遺体が発見された。　しかし、この修行者の名前を知る者は誰もいなかった。すると、ヨハネ自身が夢の中でエウフィミオス大司教の前に現れ、自らの名を明かした。それ以来、聖ヨハネへの地元での崇敬が始まり、この修行者の記念日を広く祝うことは、1547年にマカリオス都主教によって定められた。

コンダク、第4調：

キリストの尊き教会よ、喜びなさい。今日、大ノヴァグラードから輝きを放ち、その輝かしい奇跡によって全土を驚かせ、　あらゆる美徳をもって身を飾り立てた聖人を記念して、喜びに満ちよ。まことに、その御逝去の後、その尊い御遺体は朽ちることなく発見され、大いなる奇跡を注ぎ出している。それゆえ、我らは彼にこう呼びかける。「おお、至福なる方よ、キリスト・神に、我らすべてのために絶えず祈り給え。」

9月21日

9月8日（旧暦）

聖母マリアの降誕の説教

9月8日の記念日

天にまします主は、地上に現れ、人々と共に暮らすことを望まれたため、あらかじめこの地上に御自身の栄光の住まい――御自身の至聖なる母――を用意された。というのも、王たちは、ある都市を訪れる際、そこに滞在するための宮殿をあらかじめ用意するのが通例だからである。　そして、地上の王たちの宮殿が、最も優れた職人によって、最も貴重な材料を用いて、最も高き場所に、他の人間の住まいのどれよりも美しく広大に築かれるように、天の王の栄光の宮殿もまた、そのように造られることになっていたのです。旧約聖書において、神がエルサレムに住まわれることを望まれたとき、ソロモン[6116]は神のために神殿を建てました（列王記下5:1–18、7:1–51；歴代誌下2:1–18、3:1–17、4:1–22）を、あらゆる仕事に芸術的才能、知恵、知識に満ちた、最も熟練した建築家ヒラム[6117]　を通じて建てたのである。　ソロモンは、最も貴重な材料、すなわち上質な石（列王記下5:17–18）、レバノンから運ばれてきた香りのよい木々、すなわち杉とヒノキ（列王記下6:9–10）[6118]　、そして純金を用いて、最も高い場所であるモリヤの山[6119]に神殿を築いた。 神殿は、その壁面にケルビムや様々な木々、果実の彫刻が施されていたことから、なお一層美しいものとなっていた（列王記下6:18–35、7:18–22、29–42）。 神殿の広さは非常に大きく、イスラエルの民のすべてが窮屈さを感じることなく収まるほどであり、主の栄光が火と雲の中にあってその上に降りた（列王記下8:10–11）。　しかし、この神殿は、計り知れない神をその中に収めるには不十分であった。ソロモンは神のために神殿を築いたが、至高なる方は人の手によって造られた神殿にはお住まいでない。*「あなたがたは、わたし*

6116 ソロモンは、イスラエルの王であり、詩篇の作者であるダビデ王の末子かつ後継者として、紀元前993年から953年にかけて、大いなる栄光のうちに統治した。彼は国境を強化し、内乱を鎮圧し、近隣諸国との活発な貿易を確立した。　ソロモンの時代は、科学と芸術にとって最も輝かしい時代であった。彼の富、そしてとりわけその知恵の誉れは、イスラエル王国の境界をはるかに超えて広まった。ソロモンの名は、後に「賢者」の代名詞となった。　神の霊感を受けた彼の著作（『箴言』、『伝道の書』、『雅歌』）は、すべての人々にとって、永遠に知恵と徳の教訓として残るだろう。――ソロモンの晩年は、彼の堕落によって曇らされたが、最期の時を迎えて、彼はこの世のすべての虚しさを悟った。

6117 聖書の歴史においてヒラムという名で知られる人物は二人がおり、どちらもエルサレム神殿の建設に深く関わっていた。1）ソロモンと友好関係にあり、素晴らしい建築物で名を馳せたティルスの王。 彼は神殿建設のために、ソロモンに杉やヒノキ、大工や職人を送り込んだ。そして2)　ソロモンの神殿用の器を設計したティルスの建築家である。ここでは、後者を指すと考えるのが自然である。　彼は、金、銀、銅、鉄、石、木、糸、ビソン、緋色の布など、あらゆる素材を用いて様々な製品を製作する技術と技能を身につけていた。参照：列王記下7:13–40、歴代誌下2:13–14、4:11、16。

6118 レバノン――パレスチナ北端、ユダとシリアの国境に位置する山脈で、シリアからフェニキアを隔て、その全域に沿って伸びている。美しい樹木、特に杉、ヒノキ、樫で有名である。

6119 モリヤ――エルサレム近郊の山。この山は、エルサレムが築かれた丘の一つであり、シオンの北東に位置している。

のためにどのような家を建て、どのような場所をわたしの住まいとするというのか」と主は言われる（使徒7:49）。そして、神は、新約の恵みの始まりに、人の手によらない神殿――至聖なる、至福の聖母マリア――が造られることを御心に適わせられた。では、その神殿はどのような建築者によって造られたのか。まことに、最も賢明なる方、すなわち神の知恵そのものによってである。聖書がこう述べているように：　*「知恵は自らに家を建てた」*（箴言9:1）、そして神の知恵によって創造されたすべてのものは、美しく、完全である。　そして、神の知恵が御言葉という生ける宮を創造されたゆえに、完全なる神のための完全なる神殿、至光なる王のための至光なる宮、至清にして汚れなき花婿のための至清にして汚れなき宮殿、汚れなき小羊のための汚れなき住まいが創造されたのである。これについて、天には忠実な証人がおり、彼女に向かってこう語っている。*「あなたはすべて美しい、わが愛する者よ。あなたには汚れがない！」*（雅歌4:7）。また、聖ダマスキノスは次のように記している。　「そのすべてが御霊の宮殿であり、すべてが神の都であり、恵みの海であり、すべてが善であり、すべてが神に近き者である」（聖母マリアの降誕に関する説教第1篇）。

　　では、この宮殿はどのような物質から造られたのでしょうか。まことに、最も貴重なものからなのです。なぜなら、それはまるで宝石のように、王家の血筋、すなわちダビデから生まれたからです。ダビデは、投石器に装填された石――それはキリストという石を予表するものでした――で、ゴリアテを打ち倒したのです[6120]（サムエル記上17:39–51）；　また、香りのよい杉やヒノキの木々のように、聖母マリアは、神に香ばしい供え物を捧げる司祭の家系から生まれました。　彼女の父である聖なる義人ヨアキムは、ダビデの子ナファンの子孫であるバルラフィルの息子であり、母である聖なる義人アンナは、アロンの部族に属する祭司マトファンの娘であった。このように、至聖なる聖母は父方では王家の血筋、母方では司祭の家系に属していた。　なんと尊い素材――すなわち、最も尊い家系――によって、栄光の王のための生ける宮殿が築かれたことか！　ソロモンの神殿において、石や木で造られた建物が、純金で金箔が施されたことによって特別な価値を得たのと同様に、　同様に、至聖なる神の母の御降誕においても、王家および司教家の高貴な家系は、その聖なるご両親の貞潔によって、さらに深い敬意に値するものでした。その貞潔は、*「金よりも尊く、宝石よりも貴重であり、あなたが望むいかなるものも、それに匹敵するものは何もない」*（箴言3:15）ほどに*尊い*ものです。　なぜなら、至聖なるおとめは、あらゆる高貴さを凌ぐ貞潔な両親から生まれたからである。これについて、聖ダマスキノスは、聖なる義なる神の父たちに語りかけて、次のように述べている。

　　「ああ、幸いなご夫婦、ヨアキムとアンナよ！まことに、あなたがたの胎から生まれた御子によって、あなたがたは汚れなき者であることが示されました。それは主の御言葉*『その実によって彼らを知ることができる』*（マタイ7:16, 20）の通りです。あなたがたは、神に喜ばれるように、また、あなたがたから生まれた御子にふさわしいように、ご自身の生涯を築き上げられました。　なぜなら、貞潔かつ義にかなった生活を送ることで、あなたがたは処女という宝を育んだからです。すなわち、処女とは、誕生前の処女、誕生時の処女、誕生後の処女、そして常に処女であり、心、魂、そして肉体のすべてにおいて、唯一、永遠に処女であり続けるお方です。　そして、貞潔から生まれたこの処女性こそが、御独り子なる光ご自身に、肉体として捧げられるにふさわしいものでした。最も清らかな言葉の鳩の二羽よ、ヨアキムとアンナよ！　あなたがたは、貞潔をもって自然の法則を守り、神聖なる超自然の賜物に恵まれ、世界に神の母である聖母を産み出しました。あなたがたは、人間としての性質の中で敬虔かつ義にかなった生活を送り、天使たちよりも高き御子、今や天使たちを統べる御子を産み出しました。ああ、最も美しく、最も愛らしい御子よ！　いばらの只中で、最も高貴な

[6120] この出来事において、聖エフレム・シリン、アウグスティヌスら教父たちは、キリストを予表する特徴を見出している。すなわち、ダビデは投石器から放たれた石でゴリアテを打ち倒したが、これは「キリストの型として」であり、　ゴリアテは悪魔の象徴である。悪魔は神の言葉と謙遜によって打ち倒され、ついにゴルゴタで完全に打ち砕かれた」。

王家の根から育った蓮よ！あなたによって、聖職の王国は豊かになった」[6121] 。聖ダマスキノスは、これらの言葉によって、神の母がどのような両親から生まれたのか、天の王の宮殿がいかに貴重な素材で築かれているかを明確に示している。

では、この生ける宮殿は、いったいどのような場所に築かれたのでしょうか。まことに、それは最も高き場所にありました。なぜなら、教会は彼女について次のように証言しているからです。「まことに、あなたはすべての人よりも高きお方、清きおとめよ」[6122] ；しかし、その「高き」とは場所のことではなく、徳と神からの賜物の高さを指すのです。 さて、至福の聖母が生まれた場所は、ガリラヤ地方にあるナザレと呼ばれる小さな町であり、それは大都市カペナウムに属していた[6123] 。その住民たちは軽蔑されていたため、キリストについても*「ナザレから、何か良いものが生まれるだろうか」*（ヨハネ1:46）と言われたのである。 しかし、*「高き所におられながら、 天と地を見下ろすために身を屈めておられる」* （詩篇112:5–6）と、御自身の至聖なる母が、その高慢さゆえに天にまで達していたカペナウムではなく、謙遜なナザレで生まれることをお許しになった。*「人の間で高いものは、神の前では忌まわしいものだからである」* （ルカ16:15）とあり、人々が軽んじ、蔑むものは、神の御前では高く尊ばれるのである。ナザレというその名そのものが、この点において、聖母の美徳の高さを象徴している。 なぜなら、主はご自身の誕生において、「パンの家」を意味するベツレヘム[6124] を通じて、人々を生き返らせ、強めるために天から降ってきたパン[6125] であることを密かに予表されたように、御母マリアの誕生においても、ナザレを通じて崇高な事柄を表しておられるからである。 というのも、「ナザレ」という名称は、花咲き、囲まれ、冠され、秘められた場所を意味するからである[6126] ：そして、これらすべてが至聖なる処女を明確に予表している。 彼女は、不毛で古びた枯れ木の胎内から芽吹いた花であり、萎れることのない花、処女性によって常に咲き誇る花、香りを放つ花であり、唯一の王の香りを生み出す花――実を結ぶ花、すなわちキリスト・神・主、唯一の芳しい果実である。 彼女は、彼女の上に降り立ち、彼女を覆った聖霊の恵みによって聖別され、「すべての聖人の中で最も聖なる御言葉」[6127] を産んだ者として、すべての聖人の中で最も聖なるお方である。 彼女は、清く汚れなき者として、罪深い地上の者たちの数から除外されており、ご自身だけが罪とは無縁であるだけでなく、罪人たちをも不義から遠ざけてくださる。教会が彼女に呼びかけるように：「喜びなさい、邪悪な行いを取り除く方よ」[6128] 。彼女は栄光と誉れに冠されています。栄光に冠されているのは、王家の血筋から生まれたからです。誉れに冠されているのは、祭司の家系に由来するからです。栄光に冠されているのは、貞潔な両親から生まれたからです。誉れに冠されているのは、大天使による福音の宣教と奉仕によって尊ばれたからです。 神の母として栄光に包まれている。神を産むこと以上に栄光あることがあろうか。永遠の処女として名誉に包まれている。出産後も処女であり続けること以上に尊いことがあろうか。「最も栄光あるセラフィム」として

[6121] 聖ヨハネ・ダマスコスの、至聖なる神の母の降誕に関する説教。

[6122] 聖母マリアの入堂の礼拝より。カノン、イルモス9。

[6123] カペナウム――ゲネサレト湖、あるいはティベリアス海の北西岸に位置する町で、ガリラヤに属し、ネフィリム族とザヴロヌ族の境界線上にある。ヨルダン川が海に注ぐ地点からほど近い岬に位置していた。 救い主の地上での生涯の間、カペナウムは繁栄と富に恵まれていた。ローマ人との戦争でカペナウムは完全に荒廃し、現在ここに残っているのは、数軒の漁師の小屋と、みすぼらしい廃墟だけである。

[6124] ベツレヘムは、ユダ族の領地にある、エルサレムから南へ約2時間の道のりにある、小さく目立たない町であり、おそらくその肥沃な土地にちなんで名付けられた、キリストの誕生の地である。

[6125] 救い主ご自身がご自身についてこう語られた言葉によれば、*「わたしは天から下った生けるパンである。このパンを食べる者は、永遠に生きる」*（ヨハネ6:51）。

[6126] ナザレという名は、ヘブライ語から訳すと、「*子孫*」「*枝*」「*低木*」、あるいは「*囲まれた*」「*秘められた*場所」を意味する可能性があります。

[6127] 至聖なる神の母へのアカフィスト、コンダク第13番。

[6128] アカフィスト、イコス第5。

、セラフィムのように神を愛したゆえに、栄光に包まれている。「最も尊きケルビム」[6129]として、ケルビムたちを神性の知恵と認識において凌駕した者として、栄誉に冠せられた。「*善を行うすべての人に、栄光と誉れと平安がある*」（ローマ2:10）と、使徒は語っている。しかし、この世に生まれた者の中で、至聖なる処女よりも徳の高い者がいるだろうか。彼女は主のすべての戒めを守り、主の御心をすべて果たし、主のすべての教えを遵守し、主のすべての言葉を心に秘め、隣人に対してあらゆる慈愛の行いを実践した。それゆえ、彼女はあらゆる善を行う者として、ふさわしく栄冠を授けられたのである。　また、彼女は一種の宝庫でもあります。なぜなら、彼女は処女としての貞潔という宝を非常に慎重に守り、天使にさえそれを託そうとはしなかったからです。天使を見たとき、彼女はその言葉に戸惑い、この挨拶が何を意味するのかと考え込んだからです（ルカ1:29）。ナザレは、その名によって、このすべてを聖母マリアに予表した。そして、キリストの宮殿が、神の美徳と賜物によっていかに高く築き上げられたか、誰が否定できようか。それは高い。なぜなら、地上の者たちから地上に生まれたにもかかわらず、天から授けられたからである；　――天からである。なぜなら、神に啓示を受けた人々の何人かが言うように、ヨハネの誕生をザカリアに告げた大天使ガブリエルは、ヨアキムとアンナに至聖なる神の母の受胎を告げ、天から彼女に最も祝福された御名をもたらし、不妊の母にこう言ったのである。「アンナ、アンナ！　あなたは至福に満ちた娘を産む。その名はマリアと呼ばれるであろう」と告げた。したがって、彼女は疑いなく、聖なる都、神から天より降りてくる新しいエルサレム（黙示録21:2）、神の幕屋と呼ぶことができる。この神の幕屋は高きにあり、なぜなら、キリストという王を産んだことにより、セラフィムたちよりも高く昇ったからである。ああ、人間の思いでは到底及ばない高みよ！

さて、その心象上のキリストの御殿の美しさとはどのようなものか――これについては、同じく甘美な言葉遣いのヨハネス・ダマスコスが、彼女について次のように語っているのを聞いてほしい。　「彼女は、あらゆるものの王である神のもとに、あたかも黄金の衣のように美徳の輝きに包まれ、聖霊の恵みによって飾られ、その内なる栄光をもって捧げられた。なぜなら、あらゆる妻にとっての栄光が外からやって来る夫であるように、聖母マリアの栄光は彼女の内なるもの、すなわち『　』、すなわち彼女の胎内の実であるからである」[6130]。さらにダマスキノスは、彼女に語りかけてこう言っている。「おお、神の恵みに満ちた乙女よ、神の聖なる教会よ。世界を創造したソロモン（世界の至賢なる創造主）が霊的に築き上げ、その中に宿られたものよ！　彼女は金や無機質な宝石で飾られているのではなく、金の代わりに御霊によって輝き、高価な宝石の代わりに、かけがえのない真珠――キリスト――を宿しているのです[6131]。これこそが、ケルビムや木々、花々の像が飾られていたソロモンの神殿にあったものよりもはるかに美しい、その聖所の装飾なのです。　しかし、この生きた教会、すなわち至聖なるおとめの中にも、ケルビムの姿ははっきりと見て取れます。なぜなら、おとめはケルビムのような生き方によって、単にケルビムに匹敵しただけでなく、彼らをも凌駕したからです。もし教会が他の聖人たちをケルビムと呼ぶことに慣れているなら、「聖なる者たちよ、あなた方を何と呼べばよいのか。ケルビムよ、キリストはあなたがたの上に安息された」[6132]と讃えるのであれば、なおさら聖母マリアはケルビムである。なぜなら、キリストは御自身の御体を彼女の中に安息させ、神は御座のように彼女の至聖なる御手に座されたからである。聖母はケルビムの御座となったのである。　彼女は御自身の中に実り豊かな木々の姿も備えており、霊的に神の家において実り豊かなオリーブの木となり、花咲くナツメヤシ（詩編55:10）となった。それゆえ、今や教会が次のように讃えるとき、彼女は「命を与える園」と呼ばれるのである：　「実を結ばぬ根から、私たちに

[6129] 聖母への祈り「ふさわしい」より。
[6130] 聖母マリアの降誕に関する説教。
[6131] 同上。
[6132] オクトイヒ、金曜日の詩篇集における殉教者篇、第8章。

命の庭を育んでください。奇跡の神なる御母よ」[6133] 。これらすべては、彼女の霊的な美しさについて語られている。　しかし、彼女は肉体の美しさも欠いてはいなかった。多くの教会の教師たちが証言しているように、この地上のどこにも、聖母マリアほど美しい乙女はかつてなく、今後も現れることはない。聖ディオニシオス・アレオパゴス[6134] は、彼女を目にした際、もし彼女から生まれた神を知らなければ、彼女を神と呼びたかったほどであった。　というのも、彼女の内に満ちていた神聖な恵みは、そのまばゆいばかりの顔にも輝いていたからである。天の王は、地上にこのような住まいを自ら備えておられた――魂も肉体も美しい住まい、*「花嫁のように整えられ、夫のために飾られた」*（黙示録21:2） ――しかも広々とした宮殿である。「彼女の胎は天よりも広く造られた」[6135] 、そして「計り知れないキリスト・神」が彼女の中に収まったのである。

王の宮殿は通常、王だけでなく、多くの侍従や、四方八方から訪れる人々をも収容できるよう、広大に建てられるものである。　御言葉の広大な住まいである至聖なるおとめは、王である御言葉の神のためだけでなく、御言葉が宿られる御母のもとへ駆け寄る私たち、神のしもべたちのためにも広々としています。神を御胎内に宿し、私たちを御母の慈愛の懐に受け入れてくださるのです。　神に選ばれた器である聖使徒パウロは、愛に動かされて、愛する子らにこう語りました。*「私たちの心は広くなっています。　あなたがたは、私たちの中で窮屈に感じることはない」*（IIコリント6:11–12）。しかし、聖人たちのうち、マリアの、そして神への慈愛のような、これほど広大な慈愛を持つ者がいるだろうか。　ここには貞潔な者も受け入れられ、罪人にとっても狭すぎることはありません。悔い改める者は彼女の中に自分の居場所を持ち、絶望した者や悔い改めない者にとっても、彼女は妨げのない避難所です。それは、ノアの箱舟が清い動物だけでなく、不浄な動物たちにとっても避難所となったのと同じです。　その慈愛に満ちた胎内には、悲しむ者、傷つけられた者、飢える者、旅する者、苦悩に苛まれる者、病める者――あらゆる者が、窮屈さを感じることなく受け入れられる。なぜなら、私たちに善き神を産み出されたその胎内が、慈悲深くないはずがないからである。　地上の王たちの宮殿は、多くの武装した衛兵によって守られており、そこに入ろうとする者すべてを中に入れるわけではなく、どこから、何のために来たのかを注意深く調べ、選別している。　しかし、生けるキリストの御殿は、ケルビムやセラフィム、そして数え切れないほどの天使たちやすべての聖人たちに囲まれているとはいえ、それでもなお、その慈愛に満ちた御母の慈しみの扉には、望む者なら誰でも妨げられることなく入ることができる。　守衛も追い返さず、戦士たちも追い払わず、またその人がなぜ来るのかを問い詰めることもなく、誰もが祈りを捧げて妨げられることなくそこに入り、ふさわしい願いに応じて賜物を受け取るのです。

それゆえ、私たちは、不妊の胎から生まれ出でた御方の慈悲に、次のような賛辞をもってすがろう：

喜びなさい、万王の王の、汚れなき宮よ！　喜びなさい、神と御言葉の住まいよ。父と聖霊と共に、また父の娘、御子の母、聖霊の花嫁であるあなたに、私たち死すべき者から、永遠に栄光と誉れがありますように。アーメン。

[6133] 聖母マリアの降誕の礼拝、「主よ、私は呼び求めます」の第1ステヒラ。

[6134] ディオニシオス・アレオパゴイテス――アテネのアレオパゴスの議員であり、使徒パウロによってキリスト教に改宗した（使徒言行録17:34）。アテネの初代司教となり、多くの人々や教会へ書簡を送った。　彼は、ドミティアヌス帝の治世下、96年頃に殉教の死を遂げ、その奉仕の生涯を締めくくった。記念日は10月3日。

[6135] 聖バシレイオス大主教の典礼、賛美歌「あなたを喜び祝う」より。

トロパリオ、第4調:

聖母マリアよ、あなたの降誕は全宇宙に喜びを告げ知らせる。あなたから、正義の太陽である私たちの神キリストが輝き出で、呪いを打ち砕いて祝福を与え、死を滅ぼして私たちに永遠の命をお与えになったからである。

コンダク、第4調:

ヨアキムとアンナは子なきことによる侮辱から、またアダムとエバは死の朽ちる身から、あなたの聖なる御降誕によって解放されました。それゆえ、罪の重荷から解き放たれたあなたの民もまたこれを祝い、こう呼びかけます。「不妊の者が、神の母であり、私たちの命の養い主を産んだ」と。

9月22日

9月9日（旧暦）

聖なる義人、神の父ヨアキムとアンナの生涯

記念日 9月9日

聖なる義人ヨアキムは、ユダ族、ダビデ王の家系に生まれました。その系図は次の通りです。ダビデの息子ナファンの子としてレビが生まれ、レビはメルキヤとパンフィルをもうけ、パンフィルはバルパフィルをもうけ、バルパフィルは神の母の父であるヨアキムをもうけました。

聖ヨアキムはガリラヤのナザレという町に住んでおり、妻はアンナという名の女性で、レビの部族、アロンの家系に属し、アンティパトロスの息子ヘロデの治世以前に生きた祭司マトファンの娘であった。　この祭司マトファンには、ユダ族のベツレヘム出身のマリアという妻と、マリア、ソヴィア、アンナの三人の娘がいた。　彼女たちのうち、最初にベツレヘムで結婚したのはマリアで、サロミアを産んだ。次にソヴィアもベツレヘムで結婚し、洗礼者ヨハネの母エリサベトを産んだ。　三番目の娘は、すでに述べたように、至聖なる神の母であり、ガリラヤ地方のナザレの町でヨアキムと結婚した。この夫婦、ヨアキムとアンナは、名門の家系に生まれ、主の律法を学び、神の前で義人であった。　物質的な富に恵まれていた彼らは、霊的な富にも欠けることはありませんでした。あらゆる美徳に彩られ、彼らは神の律法のすべての戒めを非の打ち所なく守っていました。毎回の祝祭日ごとに、この敬虔な夫婦は財産の二分の一を分け、その半分を教会の必要に充て、もう半分を貧しい人々に施しました。

その義にかなった生活によって、ヨアキムとアンナは神に深く喜ばれ、神は彼らに、主のあらかじめ選ばれた母である至聖なるおとめを産む親となる恵みを授けられた。　このことだけでも、彼らの生活が聖く、神に喜ばれ、清らかであったことがわかります。なぜなら、彼らには、すべての聖人の中で最も聖なる、誰よりも神に喜ばれ、ケルビムよりも尊い御娘が生まれたからです。当時、この地上には、その汚れなき生活ゆえに、ヨアキムとアンナ以上に神に喜ばれる人々は存在しませんでした。　当時、義にかなった生活を送り、神に喜ばれる人々は他にも多くいたが、この二人はその美徳によってすべての人を凌駕し、神の御母が彼らから生まれるにふさわしい者として、神の御前に最も適した存在であった。もし彼らが真に義と聖さにおいてすべての人を凌駕していなかったならば、神は彼らにそのような恵みを授けることはなかったであろう。　しかし、主ご自身が至聖にして至清き母から受肉されることとなられたように、神の母もまた、聖なる清き両親から生まれることがふさわしかったのである。　地上の王たちが、単なる布ではなく金糸で織られた紫の衣を身にまとってい

るように、天の王もまた、御自身の至清き母を望まれ、その肉体に、まるで王の紫の衣のように、御自身をまとうべきものであった。その御母は、あたかも粗末な布地のように、平凡で節制を欠く両親から生まれたのではなく、あたかも金糸で織られた布地のように、貞潔で聖なる両親から生まれたのである。その先駆けとなったのが、旧約聖書の幕屋であり、神はモーセに、緋色と赤色の布とビソンでそれを造るよう命じられた（出エジプト記27:16）で造るよう命じられた。この幕屋は、神が「*人々の間*」に宿られた聖母マリアを予表しており、次のように記されている。「*見よ、神の幕屋が人々と共にあり、神は彼らと共におられる*」（黙示録21:3）。幕屋が作られた緋色と深紅の布、そして細布は、神の母の両親を予表していた。神の母は、貞潔と節制――あたかも緋色と深紅の衣のように――から生まれ、また主のすべての戒めを完全に守る彼らの完全さ――あたかも細布のように――から生まれたのである。

しかし、この聖なる夫婦は、神の御心により、長い間子宝に恵まれなかった。それは、そのような娘の受胎と誕生そのものにおいて、神の恵みの力、御子誕生の栄光、そして両親の尊厳が明らかにされるためであった。　なぜなら、不妊で年老いた女性が子を産むことは、神の恵みの力によらなければ不可能だからである。ここにはもはや自然の力が働いているのではなく、自然の法則に打ち勝ち、不妊の束縛を打ち砕く神が働いているのである。　不妊で高齢の両親から生まれることは、生まれた者自身にとっても大きな栄誉である。なぜなら、彼女は放蕩な両親からではなく、ヨアキムとアンナのように、50年間夫婦として暮らしながら子供に恵まれなかった、節制を重んじる高齢の両親から生まれたからである。　最後に、このような誕生を通じて、両親自身の尊厳も明らかになる。なぜなら、彼らは長い不妊の末に全世界の喜びを産み出したからであり、それによって、神の約束に従って老齢でイサクを産んだ聖なる族長アブラハムとその敬虔な妻サラに倣ったのである（創世記21:2）。　しかし、疑いなく言えるのは、聖母マリアの誕生は、アブラハムとサラによるイサクの誕生よりも尊いということです。生まれた聖母マリア自身がイサクよりもどれほど高貴で、より称賛に値する存在であるか、それと同じくらい、ヨアキムとアンナの尊厳はアブラハムとサラよりも大きく、高いのです。　彼らはこの尊厳をすぐに得たわけではなく、熱心な断食と祈りによって、心の苦しみと悲しみの中で神に懇願した。そして、彼らの悲しみは喜びへと変わり、彼らの不名誉は偉大な栄光の前兆となり、熱心な願いは恵みを得るための導き手となり、祈りは最良の執り成し手となったのである。

ヨアキムとアンナは、子供がいなかったことを長い間嘆き、泣いていた。ある日、ヨアキムは大きな祭りの日に、エルサレムの神殿で主なる神に供え物を捧げていた。ヨアキムと共に、すべてのイスラエル人も神への捧げ物を捧げていた。　当時、大祭司を務めていたイッサカルは、ヨアキムに子供がいないという理由で、彼の供え物を受け取ろうとしなかった。

「あなたから供え物を受け取るべきではない。あなたには子供がいないからであり、したがって神の祝福も受けていない。きっと、あなたには何か隠れた罪があるに違いない」と彼は言った。

また、ルベン族のユダヤ人の一人が、他の者たちと共に供え物を捧げながら、ヨアキムを非難してこう言った。

「なぜ、私より先に神に捧げ物をしようとするのか。あなたは、私たちと共に捧げ物を捧げるに値しないことを知らないのか。あなたはイスラエルに子孫を残さないのだから[6136]？」

この非難にヨアキムは深く悲しみ、激しい嘆きの中で、恥と屈辱を味わいながら神の神殿を去った。彼にとって祝祭は悲しみに変わり、祝祭の喜びは嘆きへと変わった。　深く嘆き悲しんだ彼は

[6136] かつてイスラエルの民の族長たちには、子孫を繁栄させるという神の約束が繰り返し与えられていた。それゆえ、イスラエル人は数多い子孫を、最高の幸福であり、神の祝福であると見なしていた。　一方、神の古くからの約束により、イスラエル人はその子孫の中に、神が約束された「女の種」――すなわちメシア――を見出すことを望んでいた。　だからこそ、子宝に恵まれないことはユダヤ人にとって重大な不幸であり、罪に対する神の罰とみなされ、子供を持たない人々をユダヤ人は大いなる罪人として見ていた。

、家には戻らず、自分の群れを飼っていた羊飼いたちのもとへ荒野へと向かい、そこで自分の不妊と、向けられた侮辱や非難について泣き悲しんだ。すでに高齢であったにもかかわらず、神から息子を授かった先祖アブラアムのことを思い出し、　ヨアキムは、主が彼にも同様の恵みを授けてくださるよう、また彼の祈りを聞き入れ、憐れみ、人々からの侮辱を取り除き、かつてアブラハムに与えられたように、老いてから夫婦の間に子を与えられるよう、熱心に主へ祈り求めた。

「どうか、私が」と彼は祈った。「子供を持つ父と呼ばれることができ、子宝に恵まれず、神に見捨てられた者として人々からの非難に耐えることのないように！」

この祈りに加え、ヨアキムは断食を行い、四十日間パンを口にしなかった。

「私は食べない」と彼は言った。「そして、自分の家にも戻らない。主、イスラエルの神が私の嘲笑を聞き入れ、取り除いてくださるまで、私の涙を糧とし、この荒野を住まいとしよう。」

同様に、家にいた彼の妻も、大祭司が不妊を責めて彼らの供え物を受け取ろうとしなかったこと、そして夫が深い悲しみから荒野へ去ってしまったことを聞き、慰めようのない涙を流していた。

「今や」と彼女は言った。「私は誰よりも不幸だ。神に見捨てられ、人々からは侮られ、夫にも見放されてしまった！　今、何を泣けばよいのか。自分の未亡人であることをか、子がないことをか、孤児であることをか、それとも母と呼ばれるに値しないことをか？！」

彼女は、その間ずっと、そうして苦々しく泣き続けた。

アンナの侍女ユディフは彼女を慰めようとしたが、できなかった。なぜなら、海のように深い悲しみを抱く者を、誰が慰めることができようか。

ある日、悲しみに暮れるアンナは自分の庭へ行き、月桂樹の下に座り、心の底からため息をついた。そして、涙で潤んだ目を天に向けると、木の上に小さな雛がいる鳥の巣を見つけた。その光景は彼女にさらに大きな悲しみをもたらし、彼女は泣きながら叫び始めた。

「ああ、子なき私よ！　私はきっと、イスラエルの娘たちの中で最も罪深い者なのだろう。他のすべての妻たちの中で、私だけがこれほどまでに辱められているのだから。皆は自分の胎の果実を腕に抱き、皆は自分の子供たちに慰められている。それなのに、私だけがこの喜びから遠ざけられている。ああ、私よ！　すべての人の捧げ物は神の神殿で受け入れられ、子宝があることに対して敬意が払われている。それなのに、私だけが私の主の神殿から拒絶されている。ああ、私はなんと哀れなことか！　私は誰に例えられるだろうか？　天の鳥にも、地の獣にも例えられない。なぜなら、それらでさえも、主なる神よ、あなたにその実を捧げているのに、私だけが実を結ばないからだ。　大地とさえ自分を比べることはできません。なぜなら、大地は息づき、種を育て、実を結んで、天の父であるあなたを賛美するからです。しかし、私だけは、この地上で実を結ばないのです。ああ、主よ、主よ、私はなんと哀れなことでしょう！私一人、罪深い身でありながら、子孫に恵まれないのです。かつて、高齢のサラに息子イサクを授けられた方（創世記21:1–8）、御預言者サムエルの母アンナの胎を開かれた方（サムエル記上1:20）、どうか今、私を見守り、私の祈りを聞いてください。 主サバオトよ！あなたは子なしの苦しみを御存知です。どうか私の心の悲しみを終わらせ、私の胎を開き、不妊の私を実りある者となさってください。そうして、私が産む子を、祝福し、賛美し、心を一つにしてあなたの憐れみを称えながら、あなたに捧げることができますように。

アンナが泣き叫び、すすり泣きながらこのように叫んだとき、主の御使いが現れて、こう言った。

「アンナ、アンナ！　あなたの祈りは聞き届けられた。あなたの嘆きは雲を貫き、あなたの涙は神の御前に届いた。あなたは身ごもり、至福に満ちた娘を産むであろう。彼女を通して、地上のすべての民族が祝福を受け、全世界に救いが与えられる。その名はマリアである。」

天使の言葉を聞いたアンナは、神にひれ伏してこう言った。

「主なる神が生きておられる限り、もし私に子が授かるなら、その子を神に仕えるために捧げます。その子が、生涯を通じて昼も夜も、神に仕え、神の聖なる御名を賛美しますように。」

その後、言い表せないほどの喜びに満たされた聖アンナは、神の慈愛に満ちた御訪れに祈りを込めて感謝を捧げるため、急いでエルサレムへと向かった。

ちょうどその時、天使は荒野にいるヨアキムのもとに現れ、こう言った。

「ヨアキム、ヨアキム！神はあなたの祈りを聞き入れ、あなたに御自身の恵みを授けることをお許しになった。あなたの妻アンナは身ごもり、あなたに娘を産むだろう。その誕生は全世界にとって喜びとなるであろう。　そして、私があなたに真実を告げているというしるしをあなたに示そう。エルサレムの神の神殿へ行きなさい。そこにある黄金の門のところで、あなたの妻アンナに出会うだろう。私は彼女にも同じことを告げたのだ。

ヨアキムは、このような天使の福音を聞いて驚き、神を賛美し、その偉大な憐れみに心と口をもって感謝を捧げ、喜びと歓びをもって急いでエルサレムの神殿へと向かった。　そこで、天使が告げた通り、彼は黄金の門のそばで神に祈りを捧げているアンナを見つけ、天使からの告げを彼女に伝えた。　また、アンナもまた、自分に娘が生まれることを告げた天使を見、その声を聞いたことを彼に語った。そこでヨアキムとアンナは、彼らにこれほど大きな恵みを与えてくださった神を賛美し、聖なる神殿で神に礼拝を捧げた後、自宅へと戻った。

そして、聖アンナは12月の9日に身ごもり、9月8日に娘、すなわち至聖にして至福の聖母マリアを産んだ。彼女は私たちの救いの源であり、その誕生に天も地も喜びに満ちた。　ヨアキムは、彼女の誕生を機に、神に豊かな供え物、犠牲、全焼のいけにえを捧げ、神の祝福に恵まれたことに対し、大祭司、祭司たち、レビ人、そしてすべての人々から祝福を受けた。その後、彼は自宅で盛大な宴を催し、皆が喜びのうちに神を賛美した。

成長していく聖母マリアを、その両親は目の瞳のように大切に守った。神からの特別な啓示により、彼女が全世界の光となり、人間の本性を刷新する者となることを知っていたからである。それゆえ、彼らは、私たちの救い主の母となるべき方　にふさわしい、極めて慎重かつ周到な配慮をもって彼女を育て上げた。　彼らは、長い間待ち望まれていた娘として彼女を愛しただけでなく、彼女について語られた天使の言葉を思い出し、また御霊によって彼女の上に成し遂げられるべきことを予見して、彼女を自らの主として崇めました。そして、神の恵みに満ちた彼女は、その同じ恵みによって両親をも神秘的に豊かにしました。　太陽がその光線で天の星々を照らし、自らの光の一部を分け与えるように、神に選ばれたマリアもまた、太陽のように、彼女に与えられた恵みの光線でヨアキムとアンナを照らし出した。それゆえ、彼らもまた神の御霊に満たされ、天使の言葉が成就することを固く信じたのである。

幼きマリアが三歳になったとき、両親は灯をともした燭台を携えて、彼女を栄光のうちに主の神殿へ導き入れ、約束通り、彼女を神への奉仕に捧げた。マリアが神殿に導き入れられてから数年が経った後、聖ヨアキムは生後八十歳で亡くなった。　聖アンナは未亡人となり、ナザレを離れてエルサレムへ赴き、そこで至聖なる娘のそばに留まり、神の神殿で絶えず祈りを捧げました。エルサレムで2年間過ごした後、彼女は79歳で主のもとへ召されました[6137]。

ああ、聖なる両親、ヨアキムとアンナよ、あなたがたの至福の御娘のゆえに、なんと祝福されていることでしょう！

あなたがたは、彼女の御子、私たちの主イエス・キリストのゆえに、とりわけ祝福されています。この御子を通して、地上のすべての民と部族が祝福を受けたのです！　聖なる教会があなた方を「神の父」と呼んだのは当然のことです[6138]。なぜなら、あなた方の至聖なる御娘から神が生まれた

[6137] 教会は7月25日に、義人アンナの逝去を記念する。

[6138] 教会では毎日、聖務礼拝の終了後、閉会祈祷において、聖堂を後にする信徒のために、聖母マリアおよび聖なる義人である神の父ヨアキムとアンナの祈りを通じて、主からの憐れみと救いを請い求め、毎年、聖母マリアの降誕祭の翌日に彼らの記念を執り行っている。なぜなら、聖母マリアの降誕祭の後には、聖母の両親を称えることがふさわしいからである。

ことを、私たちは知っているからです。今、天において御傍に侍っておられるあなた方、どうか私たちにも、あなた方の尽きることのない喜びのほんの一部でも分け与えられるよう、お祈りください。アーメン。

トロパリオ、第1声：

正しい者として神の恵みの中にあり、神より与えられた御子をお生みになったヨアキムとアンナよ。それゆえ、今日、神の教会は、ダビデの家に救いの角を立てられた神を賛美しつつ、あなた方の尊い記念を明るく祝し、喜びをもって祝賀するのです。

コンダク、第2調：

アンナは今、不妊という束縛から解き放たれて喜び、至聖なる御母を養い、その胎から唯一の母であり、汚れなき御母を人として与えてくださった方を讃えるよう、すべての人を呼び集めています。

聖殉教者セウィリアンの受難

記念日：9月9日

不義の王リキニウスの治世中、セバスティアの総督アグリコラエ[6139] によって四十人の聖殉教者たちが捕らえられ、牢獄に投じられた頃、その地方にはセウィリアヌスという名の、由緒ある家系の出身の男が住んでいた。

セウィリアンはキリスト教徒であった。彼はしばしば牢獄にいる四十人の殉教者を訪ね、キリストの御名のために苦難に耐えるよう彼らを励ました。そして彼らは主への愛に燃え上がり、セバスティアの冷たい湖でさえ、その神聖な愛を消し去ることはできなかった。　不義な支配者の命令により湖の水中に立たされた彼らは、拷問者の前で一斉にイエス・キリストの御名を告白し、そこで殉教の死を遂げた[6140] 。

セバスティアの殉教者たちの苦難の後――アグリコラエの後任として、同じ不敬虔な王リキニウスによってリシウスが任命されたとき、　野獣のように信者たちを虐殺し、キリスト教徒の血を流した、凶暴で残酷な人物が――聖セウィリアヌスにとっても、かつて自らの言葉で他の人々を奮い立たせてきたのと同じ偉業と闘いに立ち向かう時が訪れた。

その地方の統治者の元へ中傷者たちが現れ、こう言い始めた。

「この街では、セウィリアヌスのせいで我らが偉大なる神々の名誉が傷つけられています。彼は自ら神々を敬わず、崇拝しないばかりか、多くの者にも神々を冒涜し、侮辱するよう勧めているのです。　彼自身、十字架にかけられた方を信じ、他の人々にも同じ信仰を説いている。すでに多くの人々が彼に従って離反しており、もしあなたが彼を滅ぼさなければ、まもなく街全体が彼の信仰に従うことになるだろう。そうなれば、神々は我々の街に怒りを向け、その慈悲を撤回されるだろう。そして、王もこのことを聞けば、我々を容赦しないだろう。」

[6139] セバスティアはアルメニアの都市である。

[6140] セバスティアの殉教者たちは320年に殉教した。彼らの記念日は3月9日である。彼らの伝記によれば、彼らは信仰を断固として告白したために拷問を受け、その後、北風が吹きすさぶ中、氷に覆われた湖で一晩過ごすよう命じられ、翌日、さらなる過酷な拷問を受けた後、火刑に処された。

これを聞いた総督リシウスは、家来たちを遣わしてセウィリアヌスを捕らえ、自分の元へ連行させた。しかし、キリストの戦士であるセウィリアヌスは、遣わされた者たちが到着して自分を捕らえるのを待たず、彼らの到着に先んじて自ら出向き、リシウスの前に進み出て、勇敢かつ大胆にこう言った。

「総督よ、あなた自身の滅びだけでは足りないのか。なぜ、私たちの魂までも滅ぼし、あたかも何らかの獲物であるかのように、悪魔の手に引き渡そうとするのか？」　しかし、知っておきなさい。あなたはここで、臆病で怯えやすい者たちではなく、勇敢な者たちに遭遇したのだ。なぜなら、私の神聖な師パウロが言うように、私にとって*「生きることはキリストであり、死ぬことは益である」*（フィリピ1:21）からである。

総督リシウスは、この言葉を聞いてしばらく沈黙した。そして、目の前に立っている家来たちを見渡し、セウィリアヌスを指差して、怒りを込めてこう言った。

「彼を捕らえて、厳しい鞭で打ちのめせ。統治者に話す際には、どれほどの謙遜さが必要かを、彼に思い知らせてやれ。」

聖人が拷問を受け始めたとき、彼はキリストのために苦難に遭うことを許されたことを喜び、その苦しみの中でまるで慰めとなるかのように、詩篇の言葉を歌い上げた。*「私の背中には耕す者たちが耕し、長い畝を引いた」*[6141]（詩篇128:3）。

拷問官は、自分の手下がすでに疲れ果てているのを見て、一方で殉教者の顔には相変わらずの清らかな輝きと勇気が宿っているのを見て、彼への殴打を止めるよう命じ、それから彼に向き直って言った。

「さあ、今や、お前の傷跡によって、お前のキリストが、お前の人生に喜びも幸福ももたらさないことを悟ることができるだろう。」

殉教者はこう答えた。

「もしあなたの心の目が不信心の闇によって曇っていなければ、私の苦しみがいかに多くの恵みをキリストから私にもたらしてくれるかを、あなたに明かすことができたでしょう。しかし今、あなたの不信心の前では、まるで盲人の前でろうそくを灯し、耳の聞こえない人の前で歌を歌うようなもので、私に何ができるというのでしょうか。おお、裁判官よ！　もしあなたがそれほど盲目でも耳が聞こえないわけでもなければ、キリストの恵みと、私を強めてくださるその力を知ることができたでしょう。

聖なる殉教者のこれらの言葉や、その他多くの言葉は、統治者をさらに激しい怒りに駆り立てた。彼は殉教者を木に吊るし、鉄の爪でその肉体を削り取るよう命じた。一方、聖セウィリアヌスは、激しい苦しみの中、神にこう祈った。

「イエス・キリストよ、かつて十字架に架けられ、敵の傲慢を打ち砕き、今に至るまでそのすべての驚くべき御業によって賛美されている御方よ、どうか来てください。私を助け、あらゆる悪意に満ちた拷問者の力を打ち砕き、引き裂かれた私の肢体を癒やし、私が殉教の偉業を勇敢に成し遂げられるようお与えください！」

そして、聖人を拷問していた役人たちは次々と交代していった。ついに、長い間彼を苦しめた後、総督の命令により、彼を牢獄へと連行した。　牢獄へ向かう途中、聖なる殉教者は雄弁な演説家としての姿を見せ、まるで自らの苦しみを全く感じていないかのように、キリストのために負った傷を誇らしげに語った。彼が街中を歩いているとき、自らの傷跡を指さしながら、明るい表情と優しい口調で、彼を見つめる大勢の民衆に向かってこう語った。

6141 ここでの「預言の言葉」とは、邪悪な拷問者たちによって勝利を収めた殉教者たちに課された鞭打ちや傷を指している。

「おお、人々よ、私を見て、私が今日どれほど至福の中にいるかを悟ってください！　皆さんは今、私を最も不幸で貧しい人間だと思っているでしょう。なぜなら、私は一時的な名誉や富だけでなく、健康さえも失ってしまったからです。　それなのに、今や私はあなた方全員よりも幸せなのです。なぜなら、キリストの御名のために受けた私の傷は、この世のいかなる喜びよりも私にとって尊いからです。私が流した血、そして　その血に染まった衣は、王の紫の衣よりも尊いのです。そして、私の主のために受けるこの苦しみこそが、あなた方がこれほど愛するこの世のあらゆる慰めよりも、私にとっては比べものにならないほど心地よいものなのです。　そして、私の高い地位や富――それらは、この世の虚栄と塵と惑わしに他ならなかったではないか。私はそれらを、足から泥を振り払うように振り払い、最高の殉教者の尊厳へと昇り、尽きることのない富を受け入れているのだ。　私にとって、殉教者と呼ばれることは、いかなる王の位よりも栄光であり、キリストのために富を失うことは、この世のすべての王の宝物よりも尊い。そして、かつて私が持っていた健康、力強さ、美しささえも、病気、弱さ、醜さ以外の何ものであろうか？　もし今、私の体の各部分がキリストのために傷つけられず、血に染まっていなければ、それらは私の体の一部ではなく、ただ私の魂にとっての束縛や牢獄に過ぎなかったでしょう。しかし今、それらがキリストのために苦しめられているとき、それらは真に私の体の一部なのです。今、私の肉体が死に至らしめられているとき、それは健やかで力強いのです。　私の美しさは今も私と共にあります。たとえ今、私が人間の姿を失い、まるで一つの傷跡のようであっても――キリストもまた、頭から足まで傷つけられたからです。*「今、私はあなたがたのために受ける苦しみの中で喜び、キリストの体のために、私の肉においてキリストの苦しみの不足を補っています」*（コロサイ1:24）。あなたがたは、私の傷を見つめながら、それに対する報いについて思いを巡らせてください。不死の王が、今、御自身のために苦しむ者たちに与えておられ、また天において彼らの永遠の至福のために備えておられるその恵みは、知性では理解できず、言葉では言い表すこともできません。　キリストのために苦しむことそのものがすでに喜びであり、キリストのために死ぬことはさらに切望すべきことである。友よ！もしここに我々の仲間が一人でもいるなら、もしキリストの忠実なしもべの一人がこの不信仰な民の中にいるなら、私がどのように苦しんでいるかを見据え、心を強め、勇気を奮い起こし、恐れずにいよ。　いかなる苦しみも、あなたがたをイエス・キリストの至甘き御名から引き離してはならない。剣による斬りつけも、炉の炎も、獣の猛威も、あなたがたを恐れさせてはならない！　拷問者の甘言も、贈り物や地位の約束も、あなたがたを惑わせてはならない。これらすべてを、キリストと共に王座に就くために、塵のように踏みつけよ。

セウィリアヌスがこのように語っている間、多くの民衆が彼の後をついてきた。その言葉を聞きながら、民衆は聖なる殉教者を牢獄の入り口まで見送った。そこに投獄されると、キリストの戦士は、あたかも明るい宮殿にいるかのように喜び、かつて頻繁に訪れて語り合っていた四十人の聖なる殉教者たちが閉じ込められていた場所を口づけした。　彼は牢獄に五日間留め置かれた後、再び法廷に連行された。

法廷で、リシウスはまるで羊の皮を被った狼のように、聖人に同情しているかのような素振りを示し、次のように狡猾に語りかけた。

「セウィリアンよ、すべての神々がご覧の通り、私はあなたを深く憐れんでいる。そして、あなたのような傑出した、品格があり、尊厳ある人物が、なぜ自ら進んでこの喜びに満ちた世を捨てようとするのか、大変驚いている。　もしあなたがその不屈の精神と勇気を敵に対して向けさえすれば、私はそれを称賛しただろう。しかし、鉄や火、獣や石と戦い、そのように自らを滅ぼすなど、まさに狂気の沙汰である。そして今や、あなたの力はすでに打ち砕かれ、肉体は引き裂かれてしまった。

そう言いながら、不法な拷問者は狡猾さをもって、真のキリストの僕を惑わそうとしたが、彼は勇敢にこう答えた。

「傷だらけの私の体を憐れむな。むしろ、私の苦しみをさらに増せ。私を殴り、体を打ちのめすだけでなく、石を投げつけ、火で焼くなど、お前の望むこと、できることは何でもせよ。　お前は決して私を私の主から引き離すことはできない。キリストの御名のために私が苦しむよりも、むしろお前の方が、私を苦しめることに疲れ果てるだろう。

すると、拷問官は狡猾さを捨て、いつもの猛烈な怒りに任せて、聖セウィリアヌスの口を石で打つよう命じ、その際にこう言い放った。

「キリストの名を口にするな。そして、その名を思い起こして、支配者たちの耳を煩わせるな。」

聖なる殉教者は、すでに打撃で打ち砕かれた口で、拷問者にこう答えた。

「哀れな者よ、もしお前の心に悪魔の住処を設けたのなら、当然、お前の耳もキリストの名を聞くことなど耐えられないだろう！」

リシウスは再び殉教者を木に吊るし、鉄の爪で削るよう命じた。残酷な拷問にさらされていたセウィリアヌスは、こう述べた。

「私が残酷だと考える傷はただ一つ、キリストから引き離す傷だけです。しかし、これらの傷は私にとって苦しみというよりはむしろ喜びです。なぜなら、それらは私をこの世のあらゆるものから解き放ち、キリストと結びつけてくれるからです。」[6142]

すると、統治者は再び彼に言った。

「セウィリアンよ、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、苦しみから解放されるだろう。」

これに対し、キリストの戦士は何も答えなかった。ただ静かにこう言った。

– *「今この世で受ける一時的な苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもない」*（ローマ8:18）。

リシウスは、殉教者が自分の言葉に何も答えなかったことを侮辱と受け止め、彼のために新たな拷問を考案した。聖人を木から降ろし、城壁へと連行すると、重い石を一つは首に、もう一つは足に縛り付け、体を縄で縛り上げ、城壁の高いところから吊り下げた。

そのように吊るされたまま、聖人はその義なる魂を、殉教の模範である主キリストの御手に委ねた[6143]。一部のキリスト教徒たちは、夜になって城壁からその尊い遺体を降ろし、殉教者がかつて住んでいた場所へと運んだ。　彼らが、詩篇を歌いながら敬虔に遺体を運んで、セウィリアヌスの家があった村に近づくと、住民のほぼ全員が聖遺物を出迎えるために外へ出てきた。老いも若きも、皆一様に急ぎ、互いに競い合うようにして、まるで多くの苦難を耐え抜いた神の御使いからの祝福を先取りしようとしているかのようであった。　ただ、セウィリアヌスの奴隷の一人の妻だけが家に残り、夫の遺体の上で泣いていた。夫はつい先ほど亡くなり、まだ埋葬されずに家に横たわっていたのだ。彼女は夫の遺体の上で泣きじゃくりながら、まるで生きているかのように彼にこう語りかけた。

「ほら、私たちの主人が家へと近づいておられます。皆が迎えに出ましたが、あなただけが出てきませんでした。私があなたのためにここに残ったのです。さあ、立ち上がって、あなたの主人のところへ出迎えなさい。」

彼女がそう言い終えるや否や、死者はまるで眠りから覚めたかのようにたち上がり、聖遺物を運ぶ者たちの方へと歩み寄り、彼らにひれ伏して、喜びのうちに主人の遺体に口づけをした。　人々は皆、聖なる遺体が彼らの集落に運ばれてきたことで、死者がよみがえったのを見て、この奇跡に驚嘆し、主を賛美し、さらに熱心に尊い聖遺物に口づけをするようになった。

[6142] この表現の意味は、聖なる殉教者が、使徒パウロと同様に、キリストが耐え忍ばれた苦しみや悲しみを、自らの肉においてまだ十分に経験していないと感じ、それを補う機会を求め、キリストの御名を告白することによる苦しみの中でそのような機会を見出したことを喜んでいる、ということである。

[6143] セウィリアヌスの殉教は320年、セバスティアの40人の殉教者たちと同じ迫害の中で、しかし彼らより半年遅れて起こりました。

聖なる殉教者の遺体の埋葬をめぐり、その村の住民たちの間で意見の相違が生じた。ある者はある場所に、またある者は別の場所に埋葬したいと望んだのである。　セウィリアヌスの聖遺物の上には、美しい花で編まれた花輪が置かれていた。すると突然、どこからともなく鷲が現れ、その花輪をつかんだ。少し飛び去った後、鷲は再び地上に降り立った。　これを見た者たちは皆、鷲の飛ぶ跡を追って行き、鷲に近づくと、鷲は花輪をくわえたままゆっくりとさらに先へと飛んでいった。人々もまた、その後に続いた。こうして鷲は敬虔な住民たちを最も近い荒野へと導き、そこで高く美しい山の一つに止まり、その上に花輪を置くと、人々の視界から姿を消した。　人々は山の上で殉教者の花輪を見つけ、主がその山にセウィリアヌスの聖なる遺体を安息させることをお許しになったのだと判断し、聖遺骨を回収して、ふさわしい敬意を払ってその山に埋葬した。そして、キリストの殉教者の墓の周りでは、多くの癒やしが起こった[6144]。

前述の奴隷は、セウィリアヌスの聖遺体が移送される際に蘇り、その後さらに十五年間、主人の墓のそばに常に寄り添って生きた。

これらすべてについて、三位一体の唯一なる神、すなわち父と子と聖霊に、今、常に、そして世々限りなく、栄光がありますように！アーメン。

ディアコン・ソゾントが見た、神の隠れた義人、祝福されたニキタの記念日

記念日：9月9日

神の隠れた御用者、祝福されたニキタは、ハルトゥラリウス（[6145]）と呼ばれ、コンスタンティノープルで高貴な両親のもとで生まれ育った。　世の中で平穏に暮らしつつ密かに神に仕えた彼は、神にこれほどまでに愛されたため、真夜中に祈りを捧げに教会へ訪れると、教会の扉が自ら開き、人の手によらずとも灯された燭台が彼を照らし、さらに彼は、亡くなった司祭をまるで生きているかのように助祭ソゾントに見せることさえできた。これについては、次のような伝承が残されている。

ある敬虔な司祭と信心深い助祭は、神において互いに愛を抱いていたが、しばらくして、二人とも悪魔の唆しに影響され、その愛を敵意へと変えてしまった。助祭の名はソゾントであり、司祭の名は不明のままである。　二人は長い間敵対し続け、その感情を抱いたまま司祭は亡くなってしまった。その時、助祭は、司祭との敵意を断ち切らず、赦しによって怒りを消し去らなかったことを思い、心を乱され、良心の呵責に苛まれるようになった。　そこで彼は、自分の良心を打ち明けることのできる賢明な霊的指導者を探し求め、心の病を癒やす医師を求めて人里離れた場所を歩き回った。ついに、徳の高い偉大な聖なる長老を見つけ出し、司祭に対して抱いていた怒りと敵意という罪を告白し、許しを請うた。

長老は彼にこう言った。*「求める者はみな受け、探す者は見出し、門を叩く者には開かれる」*（マタイ7:7、ルカ11:10–11）。　兄弟よ、この大きな罪を早急に清めようと努めるのは立派なことだ。主があなたを助けてくださいますように。なぜなら、あなたを亡き方と和解させることは、私の役目ではないからだ、わが子よ。　しかし、君が来た場所であるコンスタンティノープルへ戻りなさい。夜になって聖ソフィア大聖堂[6146]へ行き、その大きくて美しい扉の前に立ちなさい。そして、最初

[6144] 殉教者の聖遺骨の移送は、彼の死後15年を経て行われた。

[6145] ギリシャ教会において、「ハルトゥラリオン」とは、教会の役人の下で書記を務める者たちのことを指した。――神に愛された隠遁者、福者ニキタの生涯と功績は、12世紀にさかのぼる。

[6146] ここで言うのは、もちろん、537年にビザンツ帝国のユスティニアヌス大帝によってコンスタンティノープルに建設された、聖ソフィア――神の英知――に捧げられた、最も荘厳で壮麗な大聖堂のことである。1453年、トルコ軍によるコンスタンティノープル征服後、聖ソフィア大聖堂はモスクへと改築された。

に扉に近づいてくる人物を見かけたら、その人に頭を下げ、私たちのことを伝え、この封印された手紙を渡してください。その人を通じて、君の罪の赦しを得ることになるでしょう。

助祭は、霊的父の命に従い、街へと向かい、夜になって聖ソフィア大聖堂の扉にたどり着くと、見知らぬ人物の到来を待ち構えた。すると、扉に近づいてくる一人の男を目にした——それが、この物語の主人公である至福のニキタであった。　助祭は彼に頭を下げ、口づけをし、長老からの手紙を手渡し、自身の悲しみを打ち明けた。その男は、助祭の告白に耳を傾け、受け取った長老の手紙について話し合い、それを読み終えると、涙を流してこう言った。

「私の力をはるかに超えるこの事柄に、どうして踏み切れるでしょうか。しかし、あなたを遣わした方の祈りに頼り、神が私にどれほど助けてくださるかに期待して、命じられたことに取り掛かります。」　そう言うと、彼は扉の前に立ち、天に向かって両手を挙げ、ささやき声で祈り始めた。それから、ひざまずいて頭を地面につけ、静かに祈りを捧げ、しばらくして立ち上がり、こう言った。

「主よ、御慈悲の門を私たちに開いてください！」

するとたちまち、教会の玄関が自然に開いた。聖ニキータは助祭を連れて玄関の階段に上がり、教会の扉のすぐそばまで近づくと、彼に「ここでじっと立っていなさい」と言い、自身は教会の敷居で一礼した。扉が開き、彼は中に入った。　彼が教会の真ん中で祈りを捧げ始めると、教会の天井から灯された燭台がその男の頭上に降りてきて、教会全体を照らし出した。その後、彼は祭壇へと向かい、そこでも扉が自然に開いた。頭を垂れて黙って祈りを捧げた後、彼は助祭のところへ戻ると、再びすべての扉が自然に閉じた。　これを見た助祭は恐怖に襲われ、その男に近づくことを敢えてしなかった。彼を大きな恐れが包んでいたからである。さらに、その男の顔は、まるで祈りによって栄光に包まれた天使の顔のように助祭には見えた。そして助祭は思った。「これは天使ではないだろうか？」しかし、その思いは男にも伝わっており、彼は助祭にこう言った。

「なぜ、私のことを考えて戸惑っているのか。私もまた、血と肉を持つ人間であり、良家の子として生まれ、この町で育ったのだと信じてほしい。神の恵みは、もし御心があれば、弱さの中にあっても力を持つ。さあ、私たちに待ち受ける旅路へと進もう！」

その後、彼は市場へと向かい、助祭は彼の後を追った。彼らがそこで聖母マリア教会にたどり着くと、祈りによって教会の扉が再び開かれた。教会で祈りを捧げた後、神の御使いは外へ出ると、扉は自然に閉まった。　これを見た助祭は、ただ恐怖に駆られ 、心の中で「主よ、憐れみたまえ！」と呟いた。こうして彼らはヴラヘルナ教会へと向かった。後になって、助祭は、自分が目撃した教会巡りが、まるで鳥が飛ぶかのように素早く行われていたことに気づいた。　彼らがヴラヘルン教会の扉に近づくと[6147] 、その男は涙ながらに祈りを捧げると、他の教会と同様、たちまち扉が自然に開いた。彼は助祭を扉のそばに立たせ、中を注意深く見守るよう命じると、自ら教会に入り、ひざまずいて熱心に祈り始めた。　一方、入り口に立っていた助祭は、教会内部で周囲を照らす光と、祭壇から出てきて教会全体に香を焚いている、光のような姿の助祭を見ました。しばらくすると、彼は白い衣をまとった司祭たちの姿が祭壇から教会の真ん中へと出てくるのを見ました。　また、赤い祭服を身にまとった別の司祭たちの姿も見えた。彼らは皆、教会の真ん中に集まり、美しく、どこか特別な聖歌を歌っていたが、助祭は「ハレルヤ」以外、その歌の一つも覚えることができなかった。

その男は、祈りを終えて立ち上がると、助祭にこう言った。

「兄弟よ、恐れることなく教会の中に入り、立っている司祭たちの左側を見てみよ。かつて敵対していたあの司祭を、見分けられるか？」

[6147] ヴラヘルナは、コンスタンティノープルの西端に位置する地区であり、ビザンツ帝国時代にはその聖地群によって東方全土にその名を知られていた。　特に有名だったのは、レオ大帝によって建設されたヴラヘルナの聖母教会であり、同帝の治世下である474年、パレスチナから持ち込まれた聖母マリアの聖衣がこの教会に安置された。

助祭は畏れおののきながら中に入り、神の人のそばに近づくと、左側を見渡したが、探していた司祭の姿は見当たらなかった。天使のようなその男は、助祭に司祭たちの右側もよく見るよう命じた。　助祭が見てみると、かつて敵対していたその司祭を見つけ、神の僕に彼を指さした。すると神の僕は助祭にこう言った。

「行って、見分けがついたその司祭にこう伝えなさい。『ニキタ・ハルトゥラリウスが教会の外に立っていて、君に会いに来るよう呼んでいる』と！」

助祭は命に従って行き、その司祭の右手を握って、その時にはすでに教会から出ていた神の僕のもとへ連れて行った。神の僕は穏やかにその司祭を見つめ、静かな声で言った。

「長老よ、あなたの兄弟と話し合い、互いの間に生じている敵意を終わらせてください。」

するとすぐに、司祭と助祭は互いに向き合ってひざまずき、長い挨拶を交わした後、敵意を解消した。　司祭は和解の後、教会に入り、自分の席についた。一方、神の僕ニキータは教会の入り口で一礼すると、すぐに教会の扉が閉ざされた。その後、彼は助祭と共に帰路についた。しばらく歩いたところで、至福のニキータは助祭にこう言った。

「ソゾント兄弟よ、あなた自身のため、そして私のためにも、あなたの魂を救いなさい。そして、あなたを遣わした父には、彼の聖なる祈りの清さと神への信頼は、死者さえもよみがえらせることができると伝えてください！」

こう告げると、聖人は助祭の目の前から姿を消した。助祭は、この驚くべき人物が立っていたその場所で礼拝を捧げ、恐れと喜びのうちに、自分の霊的指導者である長老のもとへ向かった。そして、民衆の間や世の混乱の中で神に深く愛された、神の隠れた僕ニキタ・ハルトゥラリウスの祈りによって、亡くなった司祭と驚くべき奇跡的な方法で和解することを神が許してくださったことを、神を賛美し、感謝した。　民衆や世俗の混乱の中で、神に深く愛された、神の隠れたしもべニキータ・ハルトゥラリウスの祈りによって、死んだ司祭と和解することを許してくださったことを、神を賛美し、感謝しながら向かった。

エフェソスにおける第三回全地公会議の記念日

記念日：9月9日

アルカディウスの息子であるテオドシウス2世の治世21年、エフェソスにおいて、以下の理由により第3回全地公会議[6148] が招集された。　コンスタンティノープル総主教の座に、その地位にふさわしくない 形で就いていたネストリウス[6149] は、かつての異端者パウロス・サモサタスやディオドロス・タルシウス[6150] の教えに類似した偽りの教義を説き始めた。 彼は、私たちのために、また私たち

[6148] テオドシウス2世（若きテオドシウス）――東ローマ（ビザンツ）帝国の皇帝で、テオドシウス大帝の孫。408年から450年まで在位した。第3回全地公会議は431年に召集された。 – エフェソスは、小アジアの西岸に位置するイオニアの都市であり、当初は小アジアのギリシャ植民地の中心地であったが、ローマ支配下ではプロコンスル管轄区アジアの主要都市となった。広範な貿易、学問、芸術、そして異教の女神ディアナを祀る壮麗な神殿で知られていた。　その後、エフェソスは急速に衰退した。現在、かつて名高く輝かしい都市であったこの地には、廃墟だけが残っている。

[6149] ネストリウスは、428年から431年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[6150] パウロス・サモサタス（サモサタはシリアの古代都市）――アンティオキアの司教（260年）――は、イエス・キリストを神性に至った人間として、また聖霊を神の力として説いた。269年のアンティオキア公会議で非難された。 – ディオドロス、タルスス（タルススはキリキア――小アジア南東部のローマ属州――の主要都市）の司教――4世紀の著名なキリスト教神学者の一人であり、敬虔さと学識で知られていた。　しかし、彼はイエス・キリストにおける神性と人性の二つの本性の結合を、本質的なものではなく、あくまで道徳的なものとしてのみ認めていた――すなわち、混ざり合うこと

の救いのために受肉し、人となった、神の独り子キリスト――神の父から母なしに永遠に生まれ、地上で父なしに人間として生まれた方――が、一つの御顔（イポスタシス）ではなく、二つの異なる御顔を持っていると断言することを躊躇しなかった。　一つは神性のものであり、もう一つは人間性のものである。また、私たちの主イエス・キリストの至聖なる母について、彼は不敬な教えを説き、彼女を「神の母」と呼ぶべきではなく「キリストの母」と呼ぶべきだとし、彼女が真に神の御言葉の肉体を産んだことを認めようとしなかった。 アレクサンドリアの大司教聖キリル[6151] は、彼に多くの書簡を送り、そのような誤りから離れるよう諭したが、彼がその諭しに耳を傾けるどころか、むしろ自らの異端をさらに強固にしているのを見て、 ――ローマ教皇セレステヌス[6152] や他の総主教たちに書簡を送り、ネストリウスにその偽りの教えを放棄するよう説得するよう懇願した。彼らもまた、不敬虔なネストリウスをその偽りの教えから引き離すことができなかったため、正統派の司教たちはテオドシウス皇帝に対し、全地公会議を招集するよう要請した。　テオドシウスはエフェソスでそのような公会議を招集するよう命じた。この公会議には200人の聖なる教父たちが参列し、その中でも最も著名な人物は、聖キリロス・アレクサンドリアス、聖ユヴェナリウス、メムノン・エフェソスなどであった（ローマ教皇聖セレステインは病気のため公会議に出席できなかった）。ネストリウスもエフェソスにやって来た。エフェソス公会議の聖父たちは、彼に公会議への出席を求める招待状を三度送ったが、彼はそのたびに頑なに拒否した。そこで聖父たちは、彼抜きで公会議の審議を開始することを決めた。　ネストリウスとその不敬虔な教義を非難し、彼らは、私たちの主イエス・キリストにおいて一つの位格と二つの本性を告白すべきであること、また、その清き御母を唯一の永遠の処女であり真の神の母として称えるべきであるという正統な教義を厳粛に確認した。　ネストリウスの不敬虔さをさらに明らかにするため、この公会議の聖なる父たちは、聖キリロス・アレクサンドリアスによる『ネストリウスに対する十二の破門宣言』と題する著作を承認し、聖なる教会の指針として伝えた。

ヴォロコラムスの聖ヨセフの記念日

記念日：9月9日

聖ヨセフは、ヴォロカ・ラムスクの近郊[6153] の出身であった。彼の曽祖父はリトアニア系であり、両親の名前はヨハネとマリーナであった[6154] 。7歳の時に教育を受けるために預けられ[6155] 、ごく短期間で聖書を習得した。　彼は頻繁に神の教会へ通うことを好み、同年代の仲間たちから距離を置

なく、かつ分離することもないものとして――。このため、多くの人が、彼をネストリウス派の直接の先駆者と見なすのも、決して根拠のないことではない。

6151 アレクサンドリアのキリル――5世紀のキリスト教教会において最も傑出かつ博学な神学者であり、正教の擁護者であり、様々な異端、とりわけネストリウス派を糾弾した人物。数多くの著作を残し、444年に死去した。

6152 聖セレスティヌス1世――422年から432年までローマ教皇を務めた。

6153 「ヴォロク・ラムスキー」、別名単に「ヴォロク」とも呼ばれた、現在のモスクワ州の県都ヴォロコラムスクは、当初、ノヴゴロドからの入植者たちによって、ラマ川の支流であるゴロデンカ川沿いに設立され、1135年にはすでに存在していた。 古代、ヴォロク・ラムスキーは広大で、人口も多く、豊かな土地であった。

6154 聖ヨセフ（俗名イワン・サニン）は、1439年または1440年に生まれた。

6155 聖ヨセフは、ヴォズドヴィジェンスキー修道院で読み書きを学んだ。

き、すべての思いを神に喜ばれることに注いでいた。 世俗の喧騒を軽んじ、彼はボロフスク[6156]にある聖パフヌティウスの修道院へと退き、そこで修道服を授けられた[6157]。彼は常に 断食と祈りに専念し、あらゆる点で自分の霊的指導者に従順な、熟練した修行者であった。　しばらくして、彼は同じ修道院に、同じく修道生活に入った実の父を迎え入れ、父の死に至るまで仕え、その世話をした。彼は18年間、聖パフヌティウスの下で従順に過ごした。師であり指導者であったパフヌティウスの死後、彼はその修道院のイグメンに任命され、約2年間その運営を執り行った。 その後、彼は兄弟たちの数名と共に、ヴォロク・ラムスキーの町を取り囲む森へと退き、そこに修道院を建立した。その修道院には、聖母マリアの被昇天を称える石造りの教会を建てた[6158]。彼は多くの兄弟たちを集め、極めて厳格な共同生活を築いた。彼自身は托鉢僧のような装いをしていたため、誰も彼が修道院長であるとは見分けられなかった。 彼は「ユダヤ教化」という異端に対して熱心に闘い[6159]、それを糾弾する書物を著した。さらに、自身の修道院のための規則も制定した。飢饉の際、彼の修道院は多くの貧しい人々に食糧を届けた。 尊者テオファンは、9月9日、世界の創造から7094年目[6160]、大公ヴァシリー・イオアンノヴィチの治世中に、わずか75年の生涯を閉じ、その聖遺体は、彼の修道院の大聖堂の祭壇の近くに安置された[6161]。

敬虔なるテオファン、断食者かつ殉教者の記念日

記念日：9月9日

テオファンの両親は異教徒であったが、彼自身は幼少の頃からキリストに帰依していた。まだ乳児であった頃、寒さで死にかけている子供を目にした彼は、その子を憐れみ、自分の服を脱いでその子に着せた。その後、家に帰ると、両親は彼に「子よ、お前の服はどこだ？」と尋ねた。

彼はこう答えました：

「キリストにその服を着せてあげました。」

父親は彼に尋ねた。

「キリストとは誰のことだ？　我々はメルクリウスとアポロンを崇拝しているのだ。」

その後、少年は両親のもとを去った。主の天使が彼を連れ去り、ディアヴィス山へと導き、そこで七十五年間修道生活を送っていたある断食者に彼を託した。　その長老は少年を受け入れ、修道生活と聖典を教え始めた。二人の食料は天使が与えていた。それから五年後、長老は世を去った。長老の死後、少年は洞窟に住み、五十八年間にわたり禁欲的な生活を送った。　その後、神の天使からの命を受け、彼は洞窟を出て、獅子にまたがり、キリストの信仰を説きながら六十ポプリシュを旅し

[6156] ボロフスク――現在はカルーガ県の県都――は、プロトヴァ川の急な曲がりくねった右岸に位置し、モスクワから80ヴェルスタ、カルーガからもほぼ同じ距離にある。この町は13世紀から存在しており、現在も町を取り囲む広大な松林（ボロフ）にちなんでその名が付けられた。

[6157] それは1459年頃のことだった。

[6158] それは1479年頃のことだった。

[6159] 「ユダヤ教化」という異端は、15世紀後半にノヴゴロドで発生した。そこでは、他所から来たユダヤ人スカリアがその広め役となり、そこからモスクワへと伝わり、広く蔓延して、正教会に大きな混乱をもたらした。　この異端に対する最も傑出かつ精力的な闘士となったのは、聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーであり、彼は彼らを批判するために、いわゆる『啓蒙者』と題する16巻からなる著作を執筆し、その偽りの教えを詳細に暴いた。　「ユダヤ主義者」の異端は、ユダヤ教から多くの要素を取り入れており、その名称もそこから由来している。「ユダヤ主義者」たちは、神の受肉とイエス・キリストの神性を否定し、修道生活や聖職階層、秘跡、聖人やイコンへの崇敬を否定し、来世の存在なども否定した。1504年の公会議は、異端者たちを破門し、一部の異端者を火刑に処し、異端のさらなる拡散を阻止した。

[6160] 1515年のキリスト降誕以来

[6161] 聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーの聖遺骨は、現在、彼の修道院の地下に安置されている。

た。カル王、カリン王、ヌメリアン王[6162] は彼を捕らえて拷問するよう命じた。聖人は首に百回の打撃を受け、その後も多くの拷問に耐えた。　拷問者たちは、彼がどれほど多くの奇跡を行い、どれほど多くの人々が彼のもとにやって来て聖なる洗礼を受けているかを目の当たりにすると、自らの無力さを恥じ、彼を平和的に解放した。彼は自分の洞窟に戻り、そこでさらに十七年間、厳格な断食の生活を送った後、主のもとへ召された[6163] 。

9月23日

9月10日（旧暦）

聖殉教者ミノドーラ、ミトロドーラ、ニムフォドーラの生涯と受難

記念日：9月10日

三人の乙女――ミノドーラ、ミトロドーラ、ニンフォドーラ――は、御自身を至聖なる三位一体への捧げ物とした。ある人々は、自らの財産から神に捧げ物を捧げる――かつて東方の三人の王が、神に金、乳香、没薬を捧げたように[6164] （マタイ2:11参照）；　しかし、聖なる乙女たちは、自らの内なる宝から神に捧げ物を捧げました。彼女たちは、金のかわりに、朽ちることのない金ではなく、汚れなき小羊の尊い血によって贖われた自らの魂を神に捧げました[6165] （参照：Iペテロ1:19）；乳香のかわりに、清い良心を捧げ、使徒と共にこう言いました：　*「私たちはキリストの香りのよい香りだからです」*[6166]（IIコリント2:15）；スミルナの代わりに、主への捧げ物として自らの肉体を捧げ、まだ汚れなき処女のうちに、キリストのためにその体を傷つけられたのです。　聖なる処女たちは、主が私たちの一時的な富ではなく、私たち自身を求めておられることを固く確信していた。かつてダビデが言ったように、*「あなたは私の主。私の富はあなたには必要ない」*（詩編15:2）。それゆえ、彼女たちは神に自分自身を犠牲として捧げたのである。それは、彼女たちの聖なる生涯と勇敢な苦難からはっきりと見て取れる。

聖なる乙女たちはビフィニアで生まれた[6167] 。血のつながった姉妹であった彼女たちは、霊においても姉妹であり続けた。なぜなら、彼女たちは心を一つにして、この世とそのすべての虚栄の奴隷となるよりも、神に仕えることを選んだからである。　魂と肉体を共に汚れのないまま保ち、完全な清らかさをもって、その清き花婿である主キリストと結ばれることを願って、聖なる処女たちは主の呼びかけに従いました。*「それゆえ、主は言われる、『あなたがたは、彼らの間から出て、彼らか*

6162 カル、ヌメリアヌス、カリンは、相次いでローマ皇帝の座に就いた人物たちである。カルは282年から283年まで、そしてカルの息子であるヌメリアヌスとカリンは、283年から284年まで共同で統治した。

6163 聖テオファノスの没は300年頃であった。

6164 三賢者はペルシア出身であり、賢者や学者からなる名誉ある階層に属していた。伝承によれば、彼らは民の指導者であったため、ここでは「王」と呼ばれている。

6165 人々がキリストに回心する前の状態を、使徒は奴隷の状態に例えている。奴隷の状態からは身代金を払うことで解放されることができたが、罪と虚しい生活という奴隷状態からは、聖書において「小羊」と呼ばれる汚れなきキリストの血によって、私たちは贖われたのである。

6166 イエス・キリストに関する知識は、キリストについての説教によって世界に広められていますが、使徒パウロは次のように述べています。旧約聖書において、聖なる器や幕屋の奉仕者たちが聖油を注がれて周囲に芳香を放っていたように、　同様に、新約聖書においても、使徒たちは、いわば最も芳しい香油――すなわちキリストへの知識――の器として、その芳香に満たされ、キリストを宣べ伝えることによって、その芳香を至る所に広めたのである。

6167 ビフィニアは当時、小アジアの北西部の州であり、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に位置していた。

ら離れ、不浄なものに触れてはならない。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れる』」（IIコリント6:17）。処女の清さを何よりも愛し、淫行や絶え間ない罪に傾きがちな人々の間でこの清さを保つことがいかに困難かを悟った聖なる処女たちは、人間社会を離れ、この世のすべてから身を引いて、人里離れた場所に身を寄せた。　川の水が海に流れ込み、海の水と混ざり合うやいなや、その甘さを失って塩辛くなるのと同様に、心の清さも、この世の中に身を置けば、その快楽追求の風潮に染まらずにはいられない。　こうして、ヤコブの娘ディナは、異教の町シェケムへ身を委ねるまでは、処女の清らかさを保っていた。しかし、その町に住む娘たちと知り合い、彼女たちと交流を持つやいなや、たちまちその処女性を失ってしまった[6168]。この世とその三人の娘たち――肉の欲望、目の欲望、そして世の誇り――[6169]（参照：Iヨハネ2:16）――それはまさにシェケムそのものであり、自分を愛する者たちに害を及ぼすこと以外には何も気にかけない。樹脂がそれに触れる者を黒く染めるように、この世もまた、自分を崇める者たちを汚く、不浄なものにしてしまう。　それゆえ、この世の汚れによって自らを汚さないよう、この世を避ける者は幸いである。また、この世とその邪悪な娘たちから逃げ出した、 の三人の乙女たちも幸いである。 世俗の汚れは聖なる乙女たちを黒く染めることはなく、彼女たちは白い鳩のように清らかなままであり、徳と神の御姿を見る力という翼に乗って山々や荒野を飛び回り、まるで巣のように、神の愛の中に安息の場を見出そうと願っていた。このように、虚しい世の外に暮らす隠者たちには、ただ神への絶え間ない憧れがあるだけである。

聖なる乙女たちは、自らの住処として、ピフィア（[6170]　）の温かい泉から二ポプリシュ（[6171]）離れた場所にある、高く人里離れた丘を選んだ。ここに定住して、彼女たちは静かな安息の地と確かな安らぎを見出し、断食と絶え間ない祈りの中で生涯を過ごした。　聖なる乙女たちは、荒野において人々の視線から自らの処女の清らかさを隠し、その清らかさを天使たちに見てもらえるよう、高い丘へと捧げた。彼女たちは山の頂上に登り、地上の塵を払い落として、天により近づきやすくしたのだ。　彼女たちの生活がいかに徳に満ちていたかは、彼女たちが滞在した場所そのものから判断することができる。なぜなら、荒野とは、すべてを拒絶し、孤独に身を置くこと以外の何ものであろうか。高い丘は、神への思索以外の何を物語るだろうか。聖なる乙女たちが住み着いた温かい水は、神に対する彼女たちの心の温かさを示す以外の何ものであろうか。　イスラエルの民がエジプトの奴隷制から解放され、荒野を旅しなければならなかったように（[6172]）；同様に、聖なる乙女たちは世を離れ、荒野の生活を愛した。モーセが山に登り、神を仰ぎ見たように（出エジプト記34:4, 6）； 彼女たちもまた、高い丘に住み、主に向かって目を上げ、心の眼で主をはっきりと仰ぎ見た。荒野で、杖で岩を打つとそこから水が湧き出たように（民数記20:2–11）；聖なる乙女たちの胸を打つ謙遜の打撃から、その目からは涙の川が流れ出た。　そして、これらの熱い涙には、温水の泉にはないような力があった。水は肉体の汚れを洗い流すことしかできなかったが、涙は魂の悪を清め、魂を雪よりも白くした。 しかし、肉体的にも精神的にもあらゆる汚れから自らを清め（Iコリント7:1）、天使のようにこの地上に生きていた者たちにとって、涙で清めるべきものなど何があったというのか。　もし誰かの心に、数多くの罪を思い起こして涙が湧き上がるとしても、これらの清らかな乙女たちの涙は、ただ神への愛から生じていた。なぜなら、神への愛が燃え盛る炎のように燃えているところには、涙の川が流れずにはいられないからである。　この炎の力はかくも強大で、ある人の心の中で炉のよ

[6168] ディーナについては、『創世記』（創世記30:21、34:1、48:15）に言及されている。 ヤコブがシケムの地にとどまっていたとき、ディーナは好奇心から、その地の娘たちを見に行きました。その時、シケムの領主の息子が彼女の美しさに魅了され、勝手に彼女を拉致して自分のところへ連れ去り、辱めました。

[6169] 使徒は、クリスチャンに対し、この世を愛したり、この世に執着したりしてはならないと戒めた。この世には三つの情欲が働いている――肉の情欲、目の情欲、そして心の情欲、すなわち世俗的な高慢である。

[6170] これはニコメディアの町近くの地名の呼び名であった。その後、この地にユスティニアヌス帝（527–565）が宮殿、病院、そして大天使ミカエルに捧げる神殿を建設した。

[6171] 二つの競技場――約3km。

[6172] アラビアの荒野をユダヤ人が放浪した歴史は、民数記11:21に記されている。

うに燃え上がると、炎が燃え広がるほどに、涙もまた増していく。愛がどれほど大きければ、感動もまたそれだけ大きくなるからである。　涙は愛から生まれる。それゆえ、キリストが亡くなったラザロのそばで涙を流されたとき、*「見よ、いかに彼を愛しておられたか」*（ヨハネ11:36）と言われたのである。聖なる乙女たちは、祈りを捧げ、神について思いを巡らせながら泣いた。彼女たちは主を愛し、主の御顔を仰ぎ見ることに満ち足りたかったからである。　涙を流しながら、愛する天の花婿にお目にかかる時を待ち望んでいた。彼女たちは一人ひとりがダビデの言葉を繰り返した。*「私が神の御前に現れるとき、私の涙は昼も夜も私の糧であった」*（詩篇41:3–4）[6173]。聖なる乙女たちはこう語った。「昼も夜も、私たちは、私たちの最も甘美な花婿であるイエス・キリストの御前に現れる時が、これほど長く訪れないことを嘆いている。その御姿を仰ぎ見ることで満たされることを、私たちは、鹿が水の泉を渇望するように（詩篇41:1）、強く願っているのだ。」

しかし、*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）[6174]；同様に、聖なる乙女たちは、その特別な生活によって世から完全に身を遠ざけていたにもかかわらず、神ご自身によって人々に現されたのである。　聖なる乙女たちの祈りによって行われた病人の奇跡的な癒やしは、轟くラッパのように、彼女たちの名を国中に広めた。当時、邪悪なマクシミアヌスが帝位にあり、ビフィニア地方はフロントン公によって統治されていた。聖なる乙女たちの噂を耳にした公は、彼女たちを捕らえて自分の元へ連行するよう命じた。　荒野の獣たちでさえ何の害も与えなかったキリストの羊たちは、獣のような姿と獣のような性質を持つ者たちに捕らえられ、拷問者の元へ連行された。三人の乙女たちは、不義者たちの法廷において、まるで三人の天使のようであった。彼女たちは、三位一体において賛美される神ご自身の御前に立つべきであり、聖女たちの顔――天使のような美しさと聖霊の恵みに輝いていたその顔――を仰ぎ見る資格すらない罪深い人々の前に立つべきではなかったのだ。　拷問官自身でさえ、王宮でさえ見たことのないような美しさが、どうして荒野で保たれているのかと驚いた。というのも、聖なる乙女たちの体は断食と数々の苦行によって完全に衰弱していたにもかかわらず、彼女たちの顔は、　その乙女らしい美しさを失うどころか、かえってさらに輝きを増していたからである。　心が霊的な喜びと楽しさで満たされているところでは、顔の美しさが衰えることはなかった。聖書にもあるように、喜びに満ちた心は顔を明るくする（箴言 15:13）。節制の中には、消耗をもたらすどころか、人間の顔に美しさを与える何かがある。かつてダニエルと彼と共にいた三人の若者は、断食と節制の中で暮らしていたにもかかわらず、その美しさによって王の若者のうちで際立っていた（ダニエル書 1:5–16）。　聖なる乙女たちについても同様であり、この「荒野の花」、すなわち神の娘たちの美しさは、世俗の娘たちのあらゆる美しさを凌駕しており、人間の知恵では計り知れないものであった。

公爵はまず、聖なる乙女たちに、名前と出身地を尋ねた。

彼女たちは、キリストの名に因んで「キリスト教徒」と呼ばれており、聖なる洗礼の際にミノドラ、ミトロドラ、ニンフォドラという名前が与えられたこと、また、実の姉妹であり、このビフィニアの地で生まれたことを答えた。

公爵は話を続け、甘い言葉で聖なる乙女たちを自らの邪悪な道へと誘い込もうと、こう言った。

「美しい乙女たちよ！　我らの偉大なる神々は、あなた方を愛し、このような美しさをもって称えてくださった。神々はさらに、あなた方を大いなる富をもって称える用意がある。ただ、あなた方が神々に敬意を表し、我々と共に神々に拝礼し、供物を捧げるだけでよい。そうすれば、私は王の前であなた方を称賛して差し上げる。　そして、王があなた方をご覧になれば、あなた方を愛し、多

[6173] すなわち、私の涙は、私にとっていわば絶え間ない糧となった。詩篇41:3–4を参照。

[6174] 救い主が使徒たちに語られた言葉（マタイ5:14）。これは、美徳に彩られ、神に近づいた魂は、注意深い目から隠れることはできない、ということを意味する。

くの贈り物で称え、高位の重臣たちに嫁がせてくださるでしょう。そうすれば、あなた方は他の妻たちよりも、名誉と栄光、そして富を享受することになるでしょう。

すると、姉のミノドーラが言った。

「神は私たちを御自身の姿と似姿に造られました。私たちは神を礼拝しますが、他の神々については聞く耳も持ちません。あなたの贈り物や栄誉など、私たちにとって、足で踏みつけられる塵と同じくらい不要なものです。」　あなたは、あなたの王から高貴な男性たちを私たちに与えると約束しているが、私たちが信仰をもって身を捧げた私たちの主イエス・キリスト以上に、誰が優れているというのか？　私たちは主と清らかな結婚の契りを結び、魂を主へと寄り添わせ、愛によって主と結ばれた。主こそが私たちの誉れ、栄光、富であり、あなたやあなたの王のみならず、この世の誰一人として、私たちを引き離すことはできない。

次女のミトロドラはこう言いました。

「*人が全世界を得ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか？*」　（マタイ16:26）。愛する花婿であり、私たちの主である方と比べれば、この世など私たちにとって何であろうか。それは、金と泥、太陽と闇、蜂蜜と胆汁のようなものだ。果たして私たちは、この虚しい世のために、主への愛を裏切り、自らの魂を滅ぼすというのか。決してあり得ない！

「お前はよくもそんなことを言うものだ」と拷問官は言った。「それは、まだ苦しみを見ておらず、傷を負っていないからだ。それらを知れば、きっと違うことを言うだろう。」

「まさか、拷問や残酷な傷で私たちを脅そうというのですか？」と、末の妹ニムフォドーラは大胆に答えた。　全宇宙から拷問の道具――剣、杭、鉄の爪――をここに集め、世界中からすべての拷問者を呼び集め、ありとあらゆる拷問を組み合わせ、私たちの弱き肉体をそれらに委ねてみよ。それでも、私たちが私たちのキリストから背を向けるよりは、むしろ、それらの拷問器具はすべて砕け散り、すべての拷問者の手は疲れ果て、あなたのあらゆる種類の拷問は尽きてしまうでしょう。キリストのために受ける苦しみは、私たちにとって甘美な楽園となり、一時的な死は永遠の命となるのです。

しかし、公爵は彼らを説得し続けた。

「父として、あなた方に忠告する」と彼は言った。「私の言うことを聞きなさい、子供たちよ。そして、我らの神々に生贄を捧げなさい。あなた方は実の姉妹なのだ。互いに恥辱や不名誉、苦痛に苛まれる姿を見たくはないだろうし、あなた方の美しさが衰えていくのを見たくもないだろう。私の言うことは真実ではないか？　私の言葉はあなた方のためになるのではないのか？　私は真に父としての助言をあなたたちに与えているのだ。なぜなら、あなたたちが裸にされ、殴られ、苦しめられ、バラバラにされるのを見たくないからだ。さあ、私の意志に従ってほしい。そうすれば、私だけでなく王からも好意を得て、あらゆる恵みを受け、生涯を安寧のうちに過ごすことができるだろう。もし今、私の言うことを聞かなければ、直ちに苦痛と重い病に苛まれ、あなたの美しさは失われてしまうでしょう。

「裁判官！」 –とミノドーラは言った――「あなたの媚びへつらいは不快だし、あなたの脅しなど恐れるに足らない。私たちは知っている。あなた方と共に富や名声、そしてあらゆる一時的な快楽を享受することは、地獄で永遠の悲しみを自ら招くことに等しい。一方、キリストのために一時的な苦難に耐えることは、天国での永遠の喜びに値するのだ。」　あなたが私たちに約束するその幸福は移ろいやすいものです。　あなたが私たちに脅かす苦しみは一時的なものです。しかし、私たちの主が、御自身を憎む者たちに用意されている苦しみは永遠であり、主が御自身を愛する者たちのために備えておられる数多くの恵みは無限です。私たちは、あなた方の儚い恵みを望まず、あなた方の一時的な苦しみも恐れません。　むしろ、地獄の苦しみをおそれ、天の恵みへと向かいます。なぜなら、それらは永遠だからです。しかし何よりも重要なのは、私たちがキリスト、すなわち私たちの花婿を愛しているからこそ、心を一つにしてキリストのために死ぬことを願い、共に死ぬことを願ってい

るということです。そうすることで、私たちが肉体よりもむしろ霊において姉妹であることが明らかになるからです。　一つの胎が私たちをこの世に生み出したように、一つの死が私たちをこの世から連れ去り、救い主の御殿が私たちを受け入れ、そこで永遠に留まることができますように。

これらの言葉を述べた後、彼女は天を仰ぎ見てこう言った。

「イエス・キリスト、私たちの神よ！私たちは人々の前であなたを否定しません。どうかあなたも、天の御父の前で私たちを否定なさらないでください。」

そして再び、拷問官に向き直り、こう語り始めた。

「さあ、私たちを苦しめてください、裁判官よ！　あなたが美しいと思うこの肉体を、傷で傷つけなさい。私たちの肉体にとって、金も、真珠も、高価な衣服も、私たちのキリストのために負う傷ほど素晴らしい装飾はありません。私たちはとっくに、その傷を受け入れることを望んでいたのです。」

「お前は年齢も知恵も一番上だ」と公爵は彼女に言った。「だから、他の人たちに王の命令や我々の命令に従うよう教えるべきなのに、お前自身はそれを聞かず、彼女たちを堕落させている。」お願いだ。私の言うことを聞き、私が命じることを実行し、神々にひれ伏せ。そうすれば、あなたの姉妹たちもあなたの模範に従って、同じことをするだろう。

「公爵よ、あなたの努力は無駄です」と聖女は答えた。「私たちをキリストから引き離し、あなたがたが『神々』と呼ぶ偶像を崇拝させようと努めても、無駄です。私も、私の姉妹たちも、決してそうはしません。なぜなら、私たちには一つの魂、一つの思い、そしてキリストを愛する一つの心があるからです。」　それゆえ、これ以上言葉を費やすのではなく、実際の行動で私たちを試してみてください。私たちを殴り、切りつけ、焼き、粉々に砕いてください。そうすれば、私たちがあなたの不敬虔な命令に従うかどうか、お分かりになるでしょう。私たちはキリストのものであり、キリストのために死ぬ覚悟があります。

このような言葉を聞いたフロントン公は激怒し、その怒りのすべてをミノドラにぶつけた。二人の妹たちを退かせると、彼はミノドラを全裸にし、殴打するよう命じた。　四人の処刑人が聖女を打ち始めると、その間、告示役は「神々に敬意を表し、王を称え、我らの法律を冒涜してはならない」と叫び続けた。

聖女ミノドーラへの殴打は2時間続いた。ついに、拷問官は彼女にこう言った。

「さあ、神々に生贄を捧げよ。」

「私は他に何もしていないわ」と殉教者は答えた。「ただ捧げ物をしているだけよ。私が自分のすべてを私の神に捧げているのが、あなたには見えないの？」

すると拷問官は、使用人たちに聖ミノドラをさらに激しく殴打するよう命じた。　そして、彼らは彼女の全身を容赦なく打ち、関節を砕き、骨を折り、体を粉々に砕いた。しかし、聖なる乙女は、燃えるような愛と、不死の婚約者への憧れに包まれ、まるで痛みを感じていないかのように、勇敢に苦痛に耐え抜いた。

ついに、彼女は心の底からこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、わが喜び、わが心の愛よ、あなたにすがります。わが希望よ、お願いいたします。どうか私の魂を安らかに受け入れてください。」

この祈りとともに、聖女は息を引き取り、高価な装飾品のかわりに全身を傷で覆われたまま、最愛の花婿のもとへと旅立った。

四日後、拷問官はミトロドラとニンフォドラを裁判に呼び出し、姉の死体を連れてきて、彼女たちの足元に置くよう命じた。聖ミノドラの尊い遺体は、何の覆いもなく裸のまま横たわっていた。それは足先から頭頂まで傷だらけで、すべての関節が砕かれていた。　その光景は、すべての者に深い憐れみを呼び起こした。拷問官は、まるで若い乙女たちに「見よ、お前の姉がこうなったのだ。お

前たちも同じ運命をたどるだろう」と言わんばかりだった。彼は、これほど残酷に拷問された姉の遺体を見ることで、乙女たちが恐怖に駆られ、自分の意に従うことを期待していたのである。　その場にいた者たちは皆、引き裂かれた死体を見つめ、自然な憐れみを抑えきれず、涙を隠そうとはしなかった。ただ一人、拷問者だけが石のように冷酷で、ますます激昂していった。　自然の情や姉妹への愛が、聖女ミトロドロスとニンフォドロスをも涙に駆り立てたが、キリストへのさらに大きな愛が、彼女たちを泣くことから抑え止めていた。 彼女たちには、姉がすでに、その な花婿の宮殿で喜びを満喫しており、同じ傷で飾られた彼女たちも、待ち望まれる主の御前に急いで現れることを待っているという、揺るぎない希望があった。それゆえ、彼女たちは目の前に横たわる聖なる遺体を見つめながら、こう語った。

「祝福あれ、私たちの姉妹であり母よ。あなたは殉教の冠にふさわしい者とされ、あなたの花婿の宮殿に入られました。」　どうか、今あなたが仰ぎ見ている至聖なる主にお祈りください。主が今すぐ、私たちにもあなたの歩んだ道を通って御許へ来るよう命じ、偉大なる神である主を礼拝し、主の愛と主との永遠の喜びを味わうにふさわしい者としてくださいますように。そして、拷問者たちよ、なぜ躊躇して私たちを殺さないのか？　なぜ、私たちの最愛の姉妹と同じ運命を私たちに与えないのですか？なぜ、私たちが最も甘い飲み物のように渇望している死の杯を、直ちに私たちに差し出さないのですか？ほら、私たちの骨は砕かれる準備ができており、肋骨は焼かれる準備ができており、私たちの体は引き裂かれる準備ができており、頭は切り落とされる準備ができており、心は勇敢に耐える準備ができています。　さあ、その務めを始めなさい。もはや私たちに何も期待してはならない。私たちは偽りの神々の前にひざまずくことはない。私たちがどれほど熱心に死を望んでいるか、あなた方もお分かりだろう。それなのに、まだ何を望むというのか？　私たちの最愛の花婿である主キリストのために、姉妹と共に死ぬこと――それこそが私たちの唯一の願いである。

裁判官は、彼女たちがどれほど恐れを知らないかを見て、キリストのために死を望むその決意が揺るぎないことを信じていた。しかし、それでもなお、優しい言葉をもって彼女たちを自分と同じ考えに導こうとし、狡猾に説得を続けた。

しかし、姉妹たちはこう答えた。

「いつになったら、この忌まわしき拷問者よ、私たちの揺るぎない決意に逆らうのをやめるのか？　あなたは、私たちが同じ根から生えた枝であり、実の姉妹であることを知っているはずだ。だから、私たちが同じ考えを持っていることを確信してよい。」　あなたも、あなたが苦しめたあの姉から、そのことを理解できたはずだ。もし彼女が、苦しみの中で勇気の模範を目の前に一つも持たないまま、あれほど不屈の忍耐を示したのなら、私たちに手本を示してくれた姉の姿を目の当たりにしている私たちが、一体何をすべきだろうか？　彼女は口を閉ざして横たわっているにもかかわらず、その開いた傷口を通じて、私たちに教えを授け、苦難の偉業へと導いているのが、あなたには見えないのですか？いいえ、私たちは彼女と別れることも、私たちの血縁の絆を断ち切ることもありません。彼女と同じように、キリストのために死ぬのです。　あなたがたが約束した富を拒み、栄光も、また地から出て再び地に戻るすべてのものを拒みます。　朽ちる花婿たちを拒む。なぜなら、私たちには朽ちることのないお方がおられるからだ。私たちはただそのお方だけを愛し、持参金の代わりに、私たちの死をそのお方に捧げ、永遠に清く聖なる御殿において不死の恵みにあずかることを願う。

あらゆる希望を失った拷問官は、恐ろしい怒りに駆られ、末の妹を退けた後、ミトロドラを絞首刑に処し、その遺体をろうそくの火で焼くよう命じた。こうしてミトロドラは二時間にわたり拷問を受けた。　拷問に耐えながら、聖女は、自らのために苦しみを受けた唯一の最愛の花婿である主へと目を向け、主の助けを懇願した。彼女は炭のように焦げた状態で木から降ろされたが、拷問者は鉄の杖で彼女を激しく打ち、その全身を打ち砕くよう命じた。　このような拷問の中、聖ミトロドラは主を呼び求め、その清らかな魂を主の御手に委ねた。

彼女が息を引き取ると、三番目のキリストの羊であるニンフォドーラが連れてこられ、二人の姉妹の死体を目の当たりにし、その残酷な死に恐怖を覚え、キリストを否定するよう迫られた。

公爵は狡猾に彼女にこう語りかけた。

「美しい乙女よ！　私は他の誰よりもお前の美しさに驚嘆し、お前の若さを惜しんでいる。神々に誓って、私はお前を実の娘のように愛している。　ただ神々にひれ伏すだけであれば、すぐに王から大きな寵愛を受けるだろう。王はあなたに領地を与え、栄誉を惜しみなく授けるだろう。もしそうしなければ、あなたの目の前に横たわる姉妹たちと同じように、あなたもまた命を落とすことになる。

これらの言葉は、風のように聖なる乙女の耳を通り過ぎていった。彼女はそれらに耳を傾けるどころか、偶像や偶像崇拝者たちを軽蔑して語り、ダビデのようにこう言った。「*偶像は銀や金、人の手による造り物である。それらを作る者たちや、それらに望みを置く者たちは、それらに似るであろう*」（詩篇 113:12, 16）[6175]。

不義の者は、言葉では成功しないことを悟ると、彼女を裸にして吊るし、鉄の爪でその体を削るよう命じた。　しかし彼女は、そのような苦痛の中でも、わずかな苛立ちも見せず、叫び声も呻き声も上げず、ただ天を仰ぎ、無言で唇を動かし続けていた。それは、彼女の　熱心な祈りのしるしであった。　そして、布告者が「神々に生贄を捧げよ。そうすれば苦しみから解放される」と叫ぶと、聖女はこう語った。

「私はすでに自分自身を私の神への生け贄として捧げました。神のために受ける苦しみは私にとって甘美であり、死は得るべきものなのです。」

ついに、拷問官は彼女を鉄の杖で殴り殺すよう命じ、聖ニムフォドーラはイエス・キリストを告白したために殺害された。

こうして、三人の乙女たちは、その苦難に満ちた最期によって、至聖なる三位一体を賛美したのである。

しかし、拷問官は乙女たちの苦しみだけでは満足せず、死者にさえもその抑えきれない怒りをぶつけた。彼は大きな焚き火を焚かせ、聖なる殉教者たちの遺体をその中に投げ込むよう命じた。
それが実行されるとすぐに、突然、大きな轟音と共に天から火が降り注ぎ、聖なる乙女たちを苦しめていたフロントン公爵とその家来たち全員を瞬く間に焼き尽くした。一方、燃え盛っていた焚き火には激しい雨が降り注ぎ、火を消し止めた。　信者たちは、炎にも傷つけられなかった聖女たちの遺体を運び出し、温かい水のそばに一つの棺に納めて、尊厳をもって埋葬した。こうして、同じ母胎から生まれた者たちは一つの棺に納められ、生前も死後も、決して離れることのない絆で結ばれたのである。　地上で姉妹であった彼女たちは、天国でも姉妹であり続け、棺の中でも、そして花婿の宮殿においても、姉妹であり続けた。
彼女たちの遺体の上には、彼女たちの名に因んで教会が建てられた[6176]、そして彼女たちの聖遺物からは、至聖なる三位一体の栄光と、聖なる三人の乙女たちの記憶のために、川のように癒しの力が流れ出ている。彼女たちの祈りによって、私たちもまた、父と子と聖霊、唯一の神を仰ぎ見ることができるよう願う。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

[6175] 偶像は人の手によるものであり、偶像崇拝者たち自身も、その偶像と同様に、理性を失い、無感覚な存在となってしまう。

[6176] 聖なる殉教者たちを称えるための礼拝があり、そのカノンは聖ヨセフ・ペスノピス（883年没）によって編纂された。

コンダク、第4調:

三位一体のために忍耐強く苦難に耐え、狡猾な敵を打ち破り、聖霊に兄弟のように包まれたあなたは、五人の乙女たちと共に[6177] 、天の殉教者たちの聖堂に居を構え、天使たちと共に全能の王の御前に絶え間なく喜びをもって仕えている。

聖女プルケリアの生涯

記念日：9月10日

ギリシャ皇帝アルカディウス[6178] は、臨終の際、8歳の息子テオドシウスと、3人の娘――プルケリア、アルカディア、マリーナ――を残しました。 兄より年上のプルケリアは、聡明さと謙虚さを兼ね備えていた。それは、若きテオドシウスを助け、異端者たちの攻撃から正教を守るために、神の摂理がギリシャ帝国に与えた偉大な賜物であった[6179] 。 年齢の割に賢明であった彼女は、兄によって共同統治者として迎え入れられ、アウグスタの称号を授かった[6180] 。彼女が16歳の時、権力を握ると、妻としての分別ではなく、夫のような英知をもってギリシャ帝国を統治し始め、当時の全世界を驚かせた。これは、彼女の清らかな生き方に対して、神から与えられたものだったのである。 なぜなら、神への愛に加え、臣民の平和と安寧を案じた彼女は、夫と兄の間にいかなる不和も生じないよう結婚を拒み、自らを神に捧げて、死ぬまで処女の身を守り通したからである： そして、その処女性を神に捧げた証として、大聖堂[6181] の聖堂内に、金と宝石で造られた、見事な細工の施された、極めて高価な祭壇を設けた。 彼女は姉妹たちにも貞節を守るよう説得し、姉妹たちは死ぬまで処女の清らかさを守ることを神に誓い、彼女と共に断食と祈りの生活を送り、彼女を長姉としてだけでなく、母であり女王であるかのように従った。

プルケリアは、兄であるテオドシウス皇帝にとって母の代わりとなり、あらゆる面で彼を世話し、神を畏れる心を教え込んだ。 ギリシャ語とラテン語に精通していた彼女は、自ら彼の教師となり、書物だけでなく品行についても教えた。彼女は、会話の際の振る舞い方、一般的な立ち振る舞い、罪人を罰したり赦したりする方法など、要するに良き統治者にとって必要なすべてのことを彼に教えた。 そして、その良き種は不毛の地に落ちたわけではなかった。彼はあらゆる点で彼女の言葉に従ったからである。彼が受けた良き教育のおかげで、成人した彼は、他のどの王よりも善良で、柔和で、忍耐強く、悪意がなく、賢明で、分別があり、慈悲深い人物となった。 しかし、教育に加え、聖プルケリアの祈りもまた、彼の人生を支えていた。彼女はヴラケルナに聖母マリアに捧げる壮麗な教会を建立し[6182] 、その他多くの教会や修道院を設立し、貧しい人々に惜しみなく施しを施した。彼女の尽力により、ギリシャ王国は、国内の異端の動乱を除けば、平和と静寂に包まれていた。

テオドシウスが二十歳になり、結婚の時期が訪れると、聖プルケリアは彼にふさわしい妻を探すことに心を砕いた。 その頃、アテネ[6183] からコンスタンティノープルに、アフィナイダという名の一人の乙女がやって来た。彼女は異教徒であり、容姿端麗で、謙虚かつ聡明であり、アテネの著名な

[6177] ここで言及されているのは、明らかに、救い主のたとえ話（マタイ25:1–13）に登場する五人の賢い乙女たちのことである。

[6178] 395年から408年まで在位した。

[6179] ネストリウス派およびエウティケス派。これらについては後述を参照のこと。

[6180] この称号は、異教徒のローマ皇帝たちからキリスト教のギリシャ皇帝たちへと受け継がれた。異教徒のローマ皇帝たちは皆、自身の名に加え、「アウグストゥス」という称号を冠していた――これは、その名を冠した最初のローマ皇帝にちなんでのことである。ここから、我々の言葉「アウグスティシムス」が派生した。

[6181] すなわち、総主教座の。

[6182] コンスタンティノープルにある地区。

[6183] ギリシャの都市。現在は首都。

哲学者[6184] レオティオスの娘であった。父から天文学、幾何学、そしてあらゆるギリシャの[6185] 知恵を教え込まれ、その知性は多くの賢者を凌駕していた。　彼女がコンスタンティノープルを訪れたのは、次のような理由によるものであった。　父は臨終の際、全財産を二人の息子、ヴァレリウスとアエティウスに分与したが、彼女には数枚の金貨以外何も残さなかった。親族や隣人が「娘には何を残すのか」と尋ねると、レオティオスは「彼女の美しさと知恵があれば十分だ」と答えた。

父の死後、二人の兄弟は父の全財産を二人で分け合い、妹には何も与えなかった。彼女は兄弟たちへの不満を訴えるために、コンスタンティノープルを訪れたのである。彼女を見た聖プルケリアは、その美しさ、品行の良さ、そして知性に目を留め、弟を彼女と結婚させることを決めた。　しかし、まず彼女は彼女をキリストの信仰へと導き、実の娘のように身近に迎え入れ、その後に初めて、皇帝との結婚にふさわしい者としてテオドシウスに嫁がせた。　聖なる洗礼において、彼女にはエウドキアという名が与えられた。テオドシウスとの結婚により、娘のエウドキアが生まれ、彼女は後にローマ皇帝ヴァレンティニアヌス3世と結婚した[6186]。

テオドシウス帝およびヴァレンティニアヌス帝の治世中[6187]、福者プルケリアの尽力により、不敬虔なネストリウスに対抗してエフェソスで第3回全地公会議が招集された[6188]。プルケリアは敬虔さに対して並々ならぬ熱意を持ち、異端に傾き始め、真の教えから遠ざかりかけていた弟を自らの諭しによって改心させ、正統信仰に確固たるものとした。この功績により、彼女は聖なる教父たちから多くの称賛をもって敬われた。　しかし、数年が経つと、人類の敵は、聖プルケリアによる異端への打撃をこれ以上耐えられなくなり、彼女に対して武装し、彼女を王座と権力から排除しようと企てた。そして、神は時に聖なる敬虔な者たちが試練にさらされることを許されるため、彼は一時的にその企てを成功させたのである。　聖プルケリアへの試練は、次のように始まった。テオドシウス皇帝には、クリサフィオスという名の宦官[6189]がいた。彼は皇帝の寵臣であり顧問であったが、狡猾で悪意に満ち、金に執着する人物であった。彼は、聖プロクルスの後継者であるフラヴィアヌス総主教[6190]に対して敵意を抱いていた。フラヴィアヌスはその敬虔さと非の打ち所のない生活から、総主教の地位にふさわしい人物であったが、クリサフィオスは異端者[6191]であり、そのためフラヴィアヌスの総主教就任に賛同しなかった。　フラヴィアヌスに何らかの罪を被せようと企んだクリサフィオスは、新たに就任した聖職者として、皇帝に「祝福」のための贈り物を捧げるよう彼に要求した。フラヴィアヌスは、上質な小麦粉で作ったパンを数個 用意させ、それらを宮殿へ送らせたが、 しかし、クリサフィオスは「祝福のため」には、総主教がパンではなく金を送るべきだと述べ、それを受け取らなかった。総主教は使者を通じて次のように答えた。「クリサフィオスは、教会の金や銀が神のものであり、乞食以外には誰にも与えることができないことをよく知っているはずだ」。

これにより、彼はクリサフィオスをさらに敵に回してしまった。クリサフィオスは総主教を滅ぼす方法を模索し始めたが、敬虔なプルケリアが総主教を強く支持しており、そのため総主教に害を及ぼすことが困難であることに気づくと、今度は彼女に対しても新たな陰謀を企て始めた。　彼は彼女と皇后エウドキアの間に不和の種をまき始め、あらゆる手段を尽くして二人の相互の愛情を壊そうとした。

[6184] 哲学者――賢者。

[6185] エリンスキー――ギリシャの；時にはこの言葉は異教を意味することもある。キリスト降誕の頃、ギリシャ人は古代において最も教養のある民族であった。

[6186] 423年から455年まで在位した。

[6187] ここでの「ヴァレンティニアヌス3世」とは、テオドシウス2世の同時代人を指す。

[6188] テオドシウスはかつてネストリウスをコンスタンティノープル大司教に任命した。

[6189] 「エヴヌフ」はギリシャ語で「寝所の守り人」を意味する。ビザンツ帝国では、皇帝の寝室を管理する特別な宮廷官吏をこう呼んだ。同時に、彼らは通常、皇帝に最も近い人物たちでもあった。

[6190] 聖フラヴィアヌスは447年から449年まで総主教を務めた。

[6191] クリサフィオスはエウティキウス派であった。

その間、次のような出来事が起きた。テオドシウス皇帝には、文書の内容を読まずに署名するという習慣があった。　プルケリアは、彼に対するいつもの気遣いから、この欠点も直してあげたいと考えた。そこで、皇帝の名義で書簡を用意し、その中には「皇帝はプルケリアの願いにより、自身の妻を彼女に奴隷として譲り渡し、これ以降、エウドキアに対して一切の権限を持たないことを宣言する」と記し、　――この文書をテオドシウスに署名のために差し出した。テオドシウスはいつもの習慣通り、文書を読まず、そこに何が書かれているかも知らずに、署名をした。　プルケリアは文書を受け取ると、エウドキア皇后を宮殿に招き入れ、楽しい会話と丁重なもてなしで長い間引き留めた。皇帝が妻を呼び戻そうと使者を送った際も、彼女を帰すことを許さず、二度目に送られた使者に対し、プルケリアは微笑みながらこう答えた。

「皇帝には、もはや自分の妻に対する権威などないことを知ってもらいたい。彼は彼女を私の奴隷として差し出し、そのことを皇帝勅令で裏付けたのだから。」

その後、彼女は自ら兄のもとへ赴き、こう言った。

「ほら、文書を読まずに署名するなんて、あなたがいかに愚かなことをしているか」と言い、その勅令を彼に見せた。

彼女のこの機転により、皇帝はそれ以来、より慎重になり、署名しなければならない文書を熟読するようになった。

このことを知った狡猾なクリサフィオスは、皇后エウドキアの元へ現れ、こう言った。

「ほら、プルケリアがあなたに何をしているか、いかにあなたを辱めているか見てごらん。彼女はあなたを自分の奴隷にしたいのだ。いつまで彼女に耐え続けるつもりだ？　あなたも彼女と同じ女王ではないか？　皇帝と一体となって、誰よりも皇帝に近い存在ではないか？」

このような言葉やそれに類する言葉によって、彼はエウドキアの中にプルケリアに対する怒りを煽り立て、彼女は夫を唆して、妹から権力を奪い、独りで統治するよう仕向けた。　妻とクリサフィオスに説得された王は、彼らの望み通りにしようとはしていたものの、自分より年上の姉であり師である彼女を辱めることを恥じていた。　そこでエウドキアとクリサフィオスは、総主教に懇願し、プルケリアが教会に現れた際、その清く聖なる生涯を理由に、ディアコニッサの称号を受け入れるよう説得してほしいと頼んだ。　当時、清らかな生活で知られる未婚の女性や未亡人を、たとえ本人の意思に反してでも、ディアコニッサとしての奉仕に就かせるという慣習があった。聖プルケリアの敵たちは、まさにこの慣習を利用して、彼女を権力の座から引きずり下ろそうと企んでいた[6192]。総主教は、彼らの陰謀について彼女に密かに知らせた。　しかし、プルケリアは兄の企みを察し、エウドキアやクリサフィオスからの敵意を目の当たりにすると、自ら王権を捨て、仕えていた乙女たちと共に宮殿を離れ、人里離れた地へ赴き、そこで沈黙のうちに敬虔な生活を送った。

一方、異端者クリサフィオスは、その悪意に満ちた企みを実行に移す好機を待ち、皇帝を扇動して総主教に反旗を翻させた。こうして、神の教会には混乱の時代が訪れた。敬虔さの守護者であるプルケリアが不在であったため、　異端者たちは何の恐れもなく行動し始めた。しかし、やがて神が皇帝の霊的な目を開かれたため、彼はついに自らの過ちに気づき、妻が聖プルケリアに対して抱いていた怒りが不当であったことを確信し、クリサフィオスの悪意を理解した。

[6192] ディアコニッサとは、ギリシャ語で「奉仕者」を意味する。ディアコニッサの制度は使徒の時代にまで遡る（ローマ16:1参照）。ディアコニッサの職には、年配（40歳以上）の処女または未亡人が選ばれた。彼女たちの職務は、礼拝中の女性たちの品行と秩序を見守ること、キリスト教に改宗しようとする女性たちを指導すること――すなわち、洗礼の際にどのように振る舞うべきかを教え、女性の洗礼の際、司教を補佐し、司教に代わって額以外の身体部位への塗油を行うことなどであった。ディアコニッサに関しては、いくつかの教会法上の規定があり、具体的には、第4回全地公会議第15条、第6回全地公会議第14条、およびヴァシレウス大公会議第44条。――結婚したディアコニッサは、夫とともに破門の対象とされた。したがって、聖プルケリアがもしディアコニッサとなっていたならば、王位への道は完全に閉ざされていたことになる。

ある日、テオドシウス皇帝のもとに、極めて美しく、並外れて大きなリンゴが届けられた。その美しさと大きさに驚嘆した彼は、それを妻に送った。妻はそれを手元に置いておき、自ら食べることはせず、当時病気だった皇帝の寵臣であるパヴリン元老院議員に送った。　パヴリンは事情を知らず、そのリンゴを皇帝に送り返した。リンゴを受け取った皇帝はそれが何であるか気づき、皇后のもとへ赴いて尋ねた。

「私が君に送ったリンゴはどこだ？」王妃は、そのリンゴが再び夫の手に渡ったことを知らず、こう答えた：

「私がそれを食べてしまったの。」

すると、王は彼女にリンゴを見せながら尋ねた。

「これは何だ？」

王は妻に対して激しく怒り、彼女がパヴリンと不倫していると疑い、あらゆる手段で彼女を罵倒した。皇帝はパヴリンをカッパドキアへ流刑に処し、妻には自分の前に現れることを禁じた。しかし同時に、多くの災いの原因がクリサフィオスにあることを知ったため、彼に対しても激しい怒りを抱いた。　まず皇帝はクリサフィオスから領地を没収し、その後、流刑に処した。神ご自身が、聖プルケリアに対する不当な侮辱の罪でクリサフィオスを罰されたのである。流刑地へ向かう船上で、クリサフィオスは海に溺死し、何の罪もないパヴリンは、流刑地で皇帝の命により剣で斬殺された。その後、エウドキア自身も臨終の際、誓いを立ててパヴリンの無実と自身の無実を証言した。しかし、神は彼らにこのような不幸が起こることを許された――パヴリンにとっては魂の救いのため、皇后にとっては罰としてである。　皇后はパヴリンの死を聞き、自分のせいでこれほど賢明で貞潔な人物が無実の罪で命を落としたことに深く悲しみ、夫に聖地を参拝する許可を請うた。　許可を得ると、彼女はエルサレムへ向かい、そこで多額の施しを行い、多くの教会を建立し、修道院を設立した。彼女は長い間エルサレムに留まり、執拗な懇願によって夫の怒りを和らげ、聖プルケリアと和解した。和解の証しとして、また揺るぎない愛の証として、彼女は聖なる福音記者ルカによって描かれたと伝わる聖母マリアの聖像を、聖プルケリアに送った。

皇后エウドキアがエルサレムへ向かった後、テオドシウスは聖プルケリアに対し、再び宮廷に戻るよう懇願したが、彼女はそれを望まず、多くの国々を統治することよりも、唯一の神への孤独な奉仕を選んだ。　そこで皇帝は、宮殿に戻り、自分と共に王国の統治を担うよう、改めて彼女に懇願し、願いが叶うまでその要請を止めなかった。こうして聖プルケリアは、盛大な栄誉を伴って王宮へと戻った。　こうして、異端によって引き起こされた嵐は再び収まり、動乱も鎮まった。教会には平穏が訪れ、ギリシャ帝国は平和を享受した。　かなり長い時間が経過した後、エウドキア皇后もエルサレムから帰還し、聖第一殉教者ステファノスの右手を携えてきた。エウドキアが道中、それをハルキドンに持ち込んだとき[6193]、聖ステファノスは夜、プルケリアの前に現れてこう言った。

「ほら、あなたは望みを叶えた。私はすでにハルキドンに来たのだから。」

翌朝、プルケリアはテオドシウスと共に、聖第一殉教者の聖遺物を出迎えるために出かけた。そこで彼らは、エウドキア皇后をも温かく迎え入れた。

生後42年目、テオドシウス皇帝は病に倒れ、死が近づいていることを感じると、エフェソスの聖ヨハネ・テオロゴス教会で受けた啓示について、聖プルケリアに語った。　彼がそこで祈りを捧げていたとき、自身の死後、戦士マルキアヌスが後継者となることが啓示された。そのため、テオドシウスはプルケリアに、マルキアヌスが帝位に就くよう助力するよう頼んだ。

[6193] 小アジアにある都市で、コンスタンティノープル海峡の岸辺に位置する（その対岸にはコンスタンティノープルがある）。

マルキアヌスはフラキア[6194] の出身で、武士の息子であり、自身も勇敢な戦士であった。彼は成熟した年齢に達しており、聡明で気立ての良い人物であった。　若き頃から天によって王位に選ばれていた彼は、奇跡的に死から守られていた。ある日、フィリッポポリス[6195] へ向かう途中、彼は道端で最近殺されたばかりの死体を見つけ、その死者に憐れみを覚え、その傍らに立ち止まった。　慈悲の行い――すなわち死者を埋葬すること――を成し遂げたいと願った彼は、そのために穴を掘り始めた。すると、同じ道を通りかかった人々が、マルキアヌスが死者を埋葬しているのを見かけた。彼らが彼を殺人犯だと誤解し、捕らえて街へ連行し、裁判にかけたのである。　彼の無実を証言する者は誰もおらず、彼自身の弁明も　信じられなかったため、彼は殺人犯として死刑を宣告された。処刑が執行されようとしたまさにその時、神の啓示によって真の殺人犯が特定された。　真犯人はその罪を認めたため、マルキアヌスは名誉ある形で釈放された。その後、彼はアスパルの指揮下にあるギリシャ軍に仕えた。ヴァンダル族との戦争中[6196] 、ヴァンダル族がギリシャ軍を打ち破り、多くの者を捕虜にした際、マルキアヌスも他の者たちと共に捕らえられ、ヴァンダル族の首長ギゼリクのもとに連行された。　ある日、ギゼリヒは捕虜たちを見ようと、真昼の猛暑の中、高台に登った。すると遠くから、地面で眠っているマルキアンの姿が見えた。その頭上には、一羽の鷲が舞い降りて、まるで天幕を張るかのように翼を広げ、彼を日差しから守っていた。　それを見たギゼリヒは、この捕虜の将来を悟り、彼を呼び寄せて名前や出自を尋ねた後、こう言った。

「もし生き延び、無傷で自由でありたいのなら、王位についた暁には、決してヴァンダル族と戦わず、我々と平和に共存することを私に誓え。」

マルキアヌスはギゼリヒの望む通りに誓いを立て、名誉をもって故国へ帰還を許された。

捕虜から戻ったマルキアヌスは、再びギリシャ軍の中で重要な地位を占めるようになった。ある日、ギリシャ軍がペルシア軍に対して遠征を行っていた際、マルキアヌスは道中で体調を崩し、リキアの町シディネに留まることになった。　そこで、タティアヌスとユリアヌスという二人の兄弟という善良な人々に自宅に迎え入れられ、彼らはマルキアヌスを深く慕い、彼の健康を細やかに気遣った。やがて彼が回復すると、二人の兄弟は彼と共に鳥狩りに出かけた。正午になり、日差しが厳しくなると、彼らは休むために横になり、眠りについた。　タティアンが誰よりも先に目を覚まし、かつてギゼリヒがそうであったように、眠るマルキアンの上空を舞う大きな鷲を見ました。その鷲は広げた翼でマルキアンの上を覆い、太陽の熱から彼を守っていました。これを見たタティアンは弟のユリアヌスを起こし、二人はこの不思議な光景に驚嘆しました。　その後、マルキアヌスも起き上がると、鷲は飛び去った。兄弟たちはマルキアヌスに、彼が王になると予言し、即位した際にはどのような恩恵と慈悲を彼らに与えてくれるのかと尋ねた。彼はこう答えた。

「もしあなた方の予言が実現するなら、あなた方は私にとって父の代わりとなるでしょう。」

その後、マルキアヌスはますます名声を高めていった。それは、神ご自身が、御心に適う者として選んだこの男を栄光に包んでおられたからである。 その間、敬虔なテオドシウス2世皇帝が崩御し、その妃エウドキアは再びエルサレムへと退き、そこで数年間敬虔に過ごした後、彼女もまたこの世を去り、自ら建立した聖ステファノ第一殉教者の教会に埋葬された。　テオドシウスの死後、聖プルケリアは宮廷の重臣や軍司令官たちと合意し、神にふさわしく、神に喜ばれる人物としてマルキアヌスを皇帝に選んだ。　即位すると、マルキアヌスは前述のタティアヌスとユリアヌスの二人の兄弟を宮廷に呼び寄せ、彼らに高い位を与え、一人はトラキア、もう一人はリキアの統治者に任命した[6197] 。また、彼はギゼリヒへの誓いを果たし、在位期間を通じて彼との平和を揺るぎないものとした

6194 バルカン半島北東部に位置するビザンツ帝国の地域。

6195 トラキア西部の都市。

6196 ヴァンダル族――当初はスペイン南部、その後北アフリカに居住していた民族。ゲルマン系部族に属し、聖プルケリアの時代にはアリウス派を信仰していた。

6197 小アジア南西部に位置するビザンツ帝国の地域。

。　マルキアヌスの即位後、聖プルケリアは再び隠遁生活に戻りたいと願ったが、新帝と全シンクリトは、彼女が統治の事柄に極めて賢明で経験豊富であることから、彼らを見捨てずに王国の統治を手助けしてほしいと懇願した。しかし、彼女にとってそれが可能となるのは、皇帝の妃となる以外にはなかった。　彼女は、死に至るまで守らなければならないと神に誓った貞潔について彼らに指摘した。しかし、マルキアヌスもまた、神に純潔を守る誓いを立てたと宣言した。そこで、増え続ける異端者たちに揺さぶられていた聖なる教会の必要のため、聖プルケリアはマルキアヌスとの結婚に同意した。ただし、　ただし、生涯を通じて処女であり続けることを条件とした。というのも、神への誓い、夫婦双方の生まれ持った貞潔さ、そしてすでに若くはない二人の年齢――当時彼女は51歳であり、皇帝もまた若くはなかった――が、それを求めていたからである。　このように、プルケリアは彼の妻と呼ばれていたが、実際には妻ではなく、姉妹であり、彼と共に共同統治を行い、神の教会全体および帝国全体のために大いに貢献して統治していた。　同様に、マルキアヌスも彼女の夫と呼ばれていたが、実際には夫ではなく、父の王位を継承した王女である彼女と共に統治する兄弟であった。かくして、当時、ギリシャの王座には、いわば処女の純潔が君臨しているかのように見えた。なぜなら、魂も肉体も清らかな王と、自らを汚れなく保つ処女の王妃とが共に統治していたからである。

ああ、処女の結婚よ、これほど稀なものは他に見ることも聞くこともない！不純な欲望に満ちたこの世は、これに驚嘆すべきである！肉欲と快楽に身を委ねる人々は、天使の清らかさに匹敵する、この敬虔な王夫妻の結婚について聞き、恥じるべきである！

聖なる王妃の尽力により、前述のエフェソス公会議に加え、不敬虔なディオスコーロスとアルヒマンドリトのエウティキオスに対抗して、ハルキドンで聖なる教父たちの公会議が招集された[6198]。彼女は全力を尽くして正教を擁護したため、一部の著述家たちは、これら両公会議における信仰の擁護をまさに彼女の手柄としている。

プルケリアのこのような敬虔さへの熱意と彼女の偉大な知恵は、聖霊が彼女の魂と清らかな心に、あたかもご自身の聖なる神殿であるかのように宿り、彼女をその偉大な賜物で満たしていたことに由来していた。

54年の生涯を送り、全財産を教会や修道院、そして貧しい人々に施した後、聖プルケリアは、心を尽くして仕えた主のもとへ召されました[6199]。

主よ、彼女の祈りによって、私たちもあなたの天の御国から締め出されないようにしてください。アーメン。

荒野の山で発見された三人の聖女たちの記念日[6200]

記念日：9月10日

モノムヴァシオスの主教[6201] パウロは、次のような伝承を語りました。

私がまだ平信徒であった頃、王への貢ぎ物を徴収するために東方へ派遣されました。道中、ある荒涼とした修道院を目にし、そこに入ってみようと思いました。　すると、修道院からイグメンと

6198　アレクサンドリア総主教ディオスコーロスとエウティキオスは、イエス・キリストには唯一の神性のみが存在すると教えた。すなわち、キリストにおける人間性は神性によって吸収されたのである。彼らの追随者たちは、エウティキウス派、あるいは単性論者（ギリシャ語で「一つ」と「性質」を意味する言葉に由来）と呼ばれた。 第4回全地公会議（カルキドン公会議）は451年に行われた。

6199　聖プルケリア皇后の逝去は453年にあった。彼女の記念日は、逝去後まもなく、レウス皇帝（457–474年）によって祝われるようになった。

6200 10世紀に活躍した。

6201　モネムヴァシアは、アルゴス湾に面したミノア島にある都市で、かつては強固な要塞であり、ビザンツ帝国と東方との貿易の主要な拠点であった。現在は、要塞の遺跡が残るささいな町となっている。

修道士たちが迎えに出てきて、互いに挨拶を交わした後、果樹園が広がる修道院の中庭に腰を下ろした。すると、木々に鳥たちが飛来し、実のついた枝をくわえては、あっという間に飛び去っていくのが見えた。

私は修道院長に尋ねた。

「なぜ鳥たちは、その場で果実を食べずに、枝ごと持ち去ってしまうのですか？」

修道院長はこう答えました：

「これらの鳥たちがそうするようになって、もう11年目になります。」

その時、私はまるで神からの啓示を受けたかのように、近くの山々のどこかに神の修道士や修道女たちがおり、主の御命により、鳥たちが彼らにこれらの果実を運んでいるのだと述べた。　私がそう話している最中、一羽のカラスが飛来し、実のついた枝を折って持ち去った。そこで私はイグメヌに、その鳥を追いかけてみようと提案し、私たちは実をくわえて前方を飛ぶカラスを追った。ところが、カラスは丘に舞い上がり、枝を地面に置いて降り立った。　私たちが丘を登り始めると、カラスは再び枝をつかんで、深淵のように深い峡谷へと飛び去り、その後、枝を持たずにそこから飛び出してきました。そこで私たちもその峡谷に近づき、そこに石を投げ込みました。すると突然、そこから声が聞こえてきました。

「もしあなたがたがキリスト教徒なら、私たちを殺さないでください。」

私たちは尋ねた。

「あなたたちは一体誰ですか？」

彼らは答えた：

「私たちに会いたいなら、服を三着投げてくれ。私たちは女性で、裸だから。それから山のそばへ行きなさい。そこには細い小道があり、それが私たちのもとへ導いてくれる。」

そこで、私たちに同行していた修道士のうち三人が衣服を脱ぎ、その中に石を包んで、彼女たちのいる下へと投げ下ろした。私たち自身も丘を下り、言われた通り、かろうじて通れるほどの狭い通路を見つけ、その道を通って、三人の聖なる な女性たちがいた峡谷にたどり着いた。 私たちと対面すると、女性たちは地面にひれ伏して礼をした。私たちは祈りを捧げて座り、女性の一人も座ったが、他の二人は立ったままだった。そこで、修道院長は座っていた女性にこう尋ねた。

「あなたはどこから来て、どうやってこのような場所へたどり着いたのですか？」

尋ねられた女性はこう答えました。

「私はコンスタンティノープル出身で、かつて宮廷の廷臣と結婚していました。しかし、夫は若くして亡くなり、私は二十歳を少し過ぎた頃に未亡人となりました。その未亡人であることと、子供がいなかったことを嘆いていました。」　数日後、ある高官が私のことを聞きつけ、私を無理やり連れ去ろうと奴隷たちを送り込んできた。使者たちは、私が直ちに彼らの主人のもとへ行くよう要求した。　そこで私は、私の主イエス・キリストに祈りを捧げ、私の魂と肉体を暴力で汚そうとするその男から私を救ってくださるよう願い、奴隷たちにこう言いました。「私が、あなた方のその高貴なご主人のもとへ喜んで行くことを、まさか疑っているのですか？　しかし、今は女性の病に冒されており、絶え間ない出血のため不浄な状態にある。私が病から回復し、清められるまで少し待ってほしい。そうすれば、喜んであなた方の主人のもとへ赴くつもりだ」。私の話を聞き終えると、使者たちは「わかった、我らの主人は40日間、あなたを待ってくれる」と言って去っていった。　彼らが去った後、私は男奴隷と女奴隷たちを解放し、金を与え、ここにいるお二人のみを手元に残し、自分の全財産を貧しい人々に施しました。　その後、私は敬虔な親戚を招き、厳粛な誓いを立てさせて、私の領地や家を売却し、その売却代金を貧しい人々に配るよう約束させました。　その後、ある夜、私はこの二人の女中――今や私の姉妹となった者たち――を連れて船に乗り込み、神の導きによりこの地へとたどり着きました。そして今日、あなた方以外の人間の顔を見ることもなく、すでに11年が経ちました。私たちの衣服は、1年が過ぎるうちにぼろぼろになり、体から剥がれ落ちてしまいました。

修道院長は彼女に尋ねました。

「どこから食料を調達しているのですか？」

聖なる女性はこう答えました：

「砂漠で四十年にわたり御自分の民を養ってくださった、慈愛に満ちた私たちの神は、私たちのような不肖のしもべたちにも、食物をお与えくださいます。毎日、神の御摂理により、鳥たちが私たちに必要な量よりもはるかに多くの食物を運んでくれます。　その同じ至福の主は、私たちを覆い、御恵みをもって温めてくださいます。そのため、私たちは冬の寒さも夏の暑さも恐れることなく、まるで楽園にいるかのように暮らし、絶えず聖三位一体を賛美しているのです。

その話を聞いて驚いた修道院長は、こう言いました。

「もしよろしければ、奥様、修道院の兄弟の一人を食料を取りに行かせ、皆様と一緒に食事をとらせていただきます。」

しかし、その聖なる婦人はこう答えました。

「むしろ、司祭を呼んでいただき、ここで聖なる典礼を執り行い、私たちにキリストの至聖なる秘跡の聖体拝領を授けてくださるようお命じください。というのも、私たちが街を出て以来、聖体拝領を受けていないからです。」

修道院長はためらいながらも、すぐに修道士を修道院へ送り、司祭と食事を手配させた。到着した司祭は聖体礼儀を執り行い、その後、まずその婦人が、続いて彼女の侍女たちが、至聖なる秘跡を拝領した。　その後、私たちと共に食事をとった後――と、パウロ司教は語り終える――、その聖なる夫人は修道院長に、三日間彼らのところに滞在させてほしいと願い出、修道院長はこれに同意した。すると、その祝福された夫人は立ち上がり、熱心に祈りを捧げた後、神のもとへ息を引き取った。 私たちは涙ながらに葬送の賛美歌を歌い、その後、彼女を埋葬した。 翌日、二番目の女性も祈りを捧げた後、安らかに息を引き取り、三日目には三番目の女性もまたそうしました。彼女たちを葬り終えると、私たちは修道院に戻り、聖徒たちの中に輝かしい御業と奇跡を行われる私たちの神、キリストを賛美しました。神に、永遠の栄光と礼拝が捧げられますように。アーメン。

聖殉教者バリプサヴァの記念日

記念日：9月10日

この聖人は、ある隠者から、我らの主イエス・キリストの至聖なる肋骨から流れ出た血を受け取り、それによって多くの癒やしを成し遂げた。異教徒たちは夜、聖バリプサヴァを殺害したが[6202]、その偉大な宝であるキリストの血は、彼の弟子たちによって守られた。

聖使徒アペリウス、ルカ、クレメンスの記念日

記念日：9月10日

聖使徒アペリウスはスミルナの司教であった[6203]；使徒パウロは『ローマ人への手紙』（ローマ16:10）の中で彼について言及している。聖ルカ（ルキオス）――使徒パウロが『ローマ人への手

[6202] 聖バリプサヴァの殉教と彼の功績は、2世紀にさかのぼる。

[6203] スミルナは、イオニアの有名な商業都市であり、エーゲ海（あるいはエーゲ諸島）の東岸、エフェソスから56ヴェルスタ離れたメレス川の河口に位置し、小アジアで最も古い都市の一つである。スミルナには、聖使徒ヨハネ・テオロゴスによって教会が設立された。　スミルナは現在トルコに属しているが、今なおそこでは正教会の信仰が保たれ、繁栄している。この都市は現在も、帝国で最も繁栄し、人口の多い都市の一つであり続けている。

紙』（15:21）で証言しているように、彼はシリアのラオディキアの司教であった[6204]。パウロもローマ人への手紙（15:21）で証言している）は、シリアのラオディキアの司教であった　。聖クリメントは、使徒パウロがフィリピの信徒への手紙（フィリピ4:3）で言及している人物であり、サルディクの司教であった[6205]。

9月24日

9月11日（旧暦）

男性の装いで修道生活を送った、私たちの尊い母テオドラの生涯と功績

9月11日の記念日

「主の御目は太陽よりも一万倍も明るく、人のすべての道を注視し、隠された場所までも見通しておられる。万物が創造される前から、主はすべてをご存知であった」（シラ書　23:27–29）。

アレクサンドリアに住んでいた貴族の女性、テオドラは、この真理を知らなかった[6206]　。彼女は、敵である悪魔を信じてしまった。悪魔は密かに彼女に囁き、説得した。「闇の中で犯された罪――太陽の光が当たらない罪は、神には知られないだろう」と。　しかし、自らの経験を通じて、神の前では何一つ隠すことはできないと悟ったとき、彼女はなんと偉大な悔い改めを示したことか！

夫との結婚生活を誠実に送っていたテオドラは、ある誘惑に陥ってしまった。ある若く軽薄な金持ちが、悪魔に駆り立てられて彼女に欲望を抱き、あらゆる手段を尽くして彼女を姦淫へと誘おうとした。彼女に高価な贈り物を送り、さらに高価なものを約束し、言葉でも誘惑した。　しかし、自分だけでは何もできないと悟った彼は、ある誘惑者――魔女を雇い、貞淑なフェオドラを惑わし、彼が企んだ邪悪な行いに誘い込もうとした。そして、この誘惑者はサタンを手先として、好機をうかがってフェオドラに、あの若者のことについても語り始めた。

すると、テオドラはこう言った。

「ああ、もしこの男を追い払うことができれば！　彼はもう長い間、私を悩ませているのです。もし私が彼の言うことを聞けば、私たちを照らす太陽そのものが、神の前で私の罪の証人となってしまうでしょう！」

「それなら」と誘惑者は助言した。「日が沈み、漆黒の夜が訪れたら、人目につかない場所でその若者の望みを叶えてあげなさい。そうすれば、誰も二人のことを知ることはなく、神の前で証人となる者もいないでしょう。夜が深く、闇がすべてを覆い隠してくれるからです。」

テオドラは言った。

「ああ、もし神が夜に犯される罪を知らなければ、どんなに良いことでしょう！」

[6204] ラオディキア・シリアは、かつてフリギアの主要都市であり、小アジアのフリギア南西部、リクス川沿いに位置していた。広範な貿易で知られていた。現在、荒廃したエスキ・ガッサラの集落にある、一つの低い丘の上の遺跡だけが、この古代都市の記念碑となっている。

[6205] サルディカ――古代のサルディス、あるいはサルディは、小アジア北西部に位置するリディアの豊かな都市であり、かつてその富で知られるクレオス王の首都兼居城であった。使徒たちの時代にはまだ重要な都市であり、早くからキリスト教教会も設立されていた。　10世紀、サルディカはアジアの征服者ティムールによって根こそぎ破壊された。現在、ここには取るに足らない小さな村があるだけで、かつてのこの都市の栄華を物語るのは廃墟だけである。

[6206] アレクサンドリアは、紀元前333年頃、アレクサンドロス大王によって、地中海南岸に突き出た岬（現在の同名の都市より若干南）に築かれた有名な都市である。かつては学問の中心地であり、世界一の商業都市であった。4世紀初頭にはキリスト教の中心地となり、総主教の居城となった。

「その通りになるわ」と誘惑者は答えた。「神は太陽に照らされた罪しか見ないのだから。闇の中で行われることを、神がどうして見ることができるというの？」

テオドラは、若く、純真で、経験の浅い女性であったため、誘惑者のそのような甘言に屈してしまった。悪魔の誘惑も大きく作用した。その力は強大であり、私たちの性質は情欲に傾きやすく、私たちの力は弱いからだ。かくして、　テオドラは悪意ある助言に従い、夜の闇の中で不義を犯してしまった。しかし、夜明けが訪れると、彼女の心には直ちに神の慈悲の光が輝いた。というのも、自分の罪を自覚した彼女は、深く悔い改め、顔を打ち、髪を引っ張り、自分自身を恥じ、自分自身に嫌悪感を抱くようになったからである。　このように、罪人の死を望まない神の慈悲は、彼女のかつての貞潔ゆえに、彼女を速やかな悔い改めと改心へと駆り立てたのである。なぜなら、神は時に、人が立ち直った際に、さらに大きな功績と改心、そして罪を赦してくださる神へのさらなる熱意を示すことができるよう、ある程度の過ちを許されるからである。

犯した罪を悔やみ、泣きながら、テオドラはこう考えて、せめて少しでも自分を慰めようとした。

「神は私の罪をご存じない。とはいえ、たとえご存じなくとも、それでも私には恥と悲しみがあるのだ。」

その悲しみを和らげようと、フェオドラは知り合いの修道院長がいるある女子修道院を訪れた。彼女の悲しみに満ちた顔を見て、修道院長は尋ねた。

「どうしたの、娘よ？ 夫に何かひどいことをされたのか？」

フェオドラは答えた。

「いいえ、修道院長様。ただ、なぜ私の心が悲しんでいるのか、私自身も分かりません。」

修道院長は彼女を慰めようと、神の御霊の導きに従って、彼女と魂に益となる対話を始め、聖書を読み聞かせた。そして、ある一節（教え）を読み進めるうちに、福音書にある次の言葉にたどり着いた。*「隠されているもので、明らかにされないものはなく、秘密にされているもので、知られないものはない。　だから、あなたがたが暗闇の中で語ったことは、光の中で聞かれるようになり、家の中で耳元で語ったことは、屋上で宣べ伝えられるようになる」*（ルカ12:2–3；マタイ10:26）。

この福音書の言葉を聞いて、テオドラは胸を打ちながら、こう叫んだ。

「ああ、哀れな私よ！　私は今や滅びてしまった。神は私の罪を知らないだろうと思い込んで、自らを欺いてしまったのだ。

そして、泣き叫びながら、自分の体を打ち始めた。

その時、修道院長は、テオドラが罪を犯してしまったことを悟り、彼女に「一体何が起きたのか」と尋ね始めた。

テオドラは、涙で声もかろうじて出るほどだったが、修道院長にすべてを詳しく話し、彼女の足元にひれ伏して叫んだ。

「お慈悲を、修道院長様。滅びてしまった私を憐れんでください。そして、私にどうすべきかを教えてください。私は救われることができるのでしょうか、それともう永遠に滅びてしまったのでしょうか。神の慈悲に希望を持つべきでしょうか、それとも絶望すべきでしょうか？」

修道院長は彼女にこう語りかけた。

「わが娘よ、敵の言うことを聞いてしまったのは、よくないことだった。　神の御前から身を隠せると考えたのは誤りだった――神は心と胎内を試し、遠くから人の思いを知り、まだ成されていないことも御目で見通しておられる。夜も、いかなる隠れた暗い場所も、罪人を神の全知の御目から隠すことはできないのだ。　わが娘よ、あなたは悪いことをした。神を怒らせ、夫への忠実さを守らず、自らの体を汚し、自らの魂を傷つけたのだ。　なぜ、誘惑されていたあの時、私にこのことを先に話してくれなかったのか。そうすれば、私があなたを助け、敵の罠をどう避けるかを教えてあげられたのに。しかし、すでにこのようなことが起きてしまった以上、せめて今は心を改め、神の憐れみ

にすがり、悔い改めの祈りを捧げなさい。そうすれば、神はあなたの罪を赦してくださるでしょう。絶望してはならない、わが娘よ。たとえあなたが大きな罪を犯したとしても、神の慈悲はそれ以上に大きく、神の愛に打ち勝つ罪などないのだ。ただ勇気を奮い立たせれば、あなたは救われるだろう。

修道院長は、彼女にこうした言葉や同様の言葉を語りかけ、彼女を諭し、教え、悔い改めの道へと導くとともに、神の慈悲と、悔い改める者を受け入れ、罪を犯した者を赦す神の言い表せないほどの慈愛について語り、彼女を慰めた。　また、福音書に登場する罪深い女のことも彼女に思い起こさせた。その女は涙でキリストの足を洗い、自分の髪の毛でそれを拭き、神から自分の罪の赦しを受けたのである。

テオドラは、この親切な指導者の言葉をすべて聞き、それを心に刻み込んでから、こう言いました。

「私は私の神を信じます、奥様。これからはそのような罪を犯しませんし、すでに犯してしまったことについても、できる限り償いをいたします。」

心に久々の安らぎを得て、彼女は自宅へと戻った。しかし、良心が彼女を責め立てていたため、夫の顔をまっすぐに見つめるのが恥ずかしく、どうすれば神をなだめることができるかと考えを巡らせていた。彼女は一度、女子修道院に入ろうとしたが、夫が許してくれないことを知っていた。そこで、夫や知人全員から身を隠すために、彼女は次のような策を思いついた。

夫が用事で家を空けたある夜遅く、彼女は髪を短く切り、男装をして、神の御心に身を委ね、密かに家を出て、網から飛び出した鳥のように素早く歩き出した。　街から十八ヴェルスタ離れた、「オクトデカト」[6207] と呼ばれるある人里離れた修道院に着くと、彼女は門を叩き、門番の姿を見てこう言った。

「父よ、どうか憐れみをお示しください。行って、イグメヌに、この罪深い私を修道院に受け入れてくださるようお伝えください。私は自分の悪行を悔い改めたいのです。それゆえここに参りました。どうかあなたの聖なる足を洗い、昼も夜も、お命じになることは何でもお仕えいたします。」

門番は行って、修道院長に報告した。すると修道院長は言った。

「試してみなければならない――神が彼を我々のところへ導かれたのかどうか。それゆえ、朝まで彼に返答せず、修道院へは入れないようにせよ。もし彼が立ち去らず、慈悲を待ち望んで修道院の門の前で辛抱強く留まるならば、その時こそ、彼が真に、そして熱心に神に仕えるために来たのだと分かるだろう。」

門番はその通りにし、テオドラを無価値な奴隷のように軽蔑して、彼女に目もくれなかった。彼女は門のそばに座り、泣いていた。　夜が更けると、獣たちが通り過ぎるようになった（その荒野は獣で満ちていたからである）。しかし、テオドラは神の恵みにより、十字の印と祈りをまるで盾のように身を守りとして、無傷のままでいた。

朝になると、門番が小さな窓から覗き込み、テオドラが門のそばに座っているのを見て、こう言った。

「ここで何を待っているのか？　お前は我々の役に立たないから、受け入れない。」

すると彼女はこう答えた。

「たとえここで門の前で死ぬことになっても、あなたがたが私を憐れみ、修道院に受け入れてくださるまでは、ここを離れません。」

[6207] オクトデカとは、ギリシャ語で「十八」を意味する。この言葉に由来して、修道院はその名称を得た。 なお、初期の数世紀において、エジプトは修道生活で知られており、修道生活はそもそもそこで生まれたものであり、修道院も数多く存在していた。これは、本伝記の後の記述からも明らかである。そのため、一部の修道院は、最も近い、多かれ少なかれ大きな中心地からの距離に基づいて名称が付けられていた。

すると門番は、彼女の忍耐と謙虚さを見て、門を開き、彼女を修道院長のもとへ案内した。修道院長は彼女に、どこから来たのか、名前は何か、そしてなぜ来たのかと尋ねた。彼女はこう答えた。

「アレクサンドリアからです、父上。私の名はテオドール。私は罪と不法に満ちております。しかし、我に返り、自らの過ちを悟ったため、悔い改めを捧げたいと願いました。そこで、この聖なる場所へ参りました。どうか私を修道会にお迎えいただき、滅びゆく罪人を救ってください。」　どうか、主が強盗や徴税人、放蕩息子を受け入れてくださったように、父よ、私を受け入れてください。

すると、修道院長は彼女に修道院の労苦と修行について説き、こう言いました。

「子よ、お前にはこれを耐え抜く力はないだろう。お前は若く、世俗の快楽の中で育ってきたのが見て取れるからだ。我らの修道院には何の慰めもなく、我らの規律は厳しい生活を求めており、我らと共に過ごすには、大きな節制と断食が必要となるのだ。」　我らの兄弟たちは、従順の精神をもって大きな労苦を背負い、教会の規則――すなわち、深夜の祈りや早朝の礼拝、時課や夕べの祈り、そして数多くの個室での祈りや礼拝、さらには頻繁に行われる徹夜の祈りの立ち祈り――も決して怠らない。　しかし、あなたは肉体の安楽に慣れきっており、私たちと共に修道生活の重荷を担うことはできません。あなたが熱意を持ってやって来たことは見て取れますが、それでも、　あなたの決意が変わってしまうのではないかと恐れています。なぜなら、多くの人はしばしば熱意を持って善き行いを始めますが、すぐに耐えきれずにその善き試みを放棄し、最も怠惰な者になってしまうからです。　それゆえ、私はあなたに世俗に戻るよう勧めます。そして、神が御心に適うように、あなたの救いを整えてくださいますように。

すると、テオドラは修道院長の足元にひれ伏し、涙ながらにこう言った。

「父よ、私をあなたの聖なる修道院から追い出さないでください。あなた方との天使のような共同生活を奪わないでください。私がエジプトから逃れたユダヤ人のように逃げ出したこの世へ、私を追い返さないでください。私は二度と戻ってこないでしょう。」　私の若さを気になさらないでください。あなたの聖なる祈りによって、私はあらゆる禁欲に慣れ、神の助けを借りて、あらゆる労苦を耐え忍び、あなたが命じられることはすべて、熱意と勤勉をもって行います――ただ、自分の罪を悔い改めようとする私を受け入れてください。

彼女のそのような懇願に心を動かされ、修道院長は彼女を受け入れ、修道院のあらゆる務めをこなすよう命じました。こうして、妻は男たちの間に、男の姿と名で暮らすこととなり、この秘密を知っていたのは、ただ神お一人だけでした。　そして、彼女の苦難に満ちた生涯を誰が語り得ようか。兄弟たちは、彼女が務めを果たす際の労苦、禁欲における忍耐、服従における謙遜を目にした――しかし、彼女の秘められた功績、徹夜の祈り、心の底からの嘆き、涙、　ひざまずく姿、両手を組む姿は、神ご自身のみがご覧になった。そして彼女は昼も夜も、かつて涙で主の御足を洗い清めた娼婦のように、神の憐れみにすがり続けた。　そして、彼女の悔い改めは、犯した罪よりもさらに大きかった。なぜなら、彼女は謙遜によって自らのあらゆる情欲と欲望を打ち砕き、万人の前で自らを低くし、自己犠牲によって自らの意志を克服し、いわば「肉体の天使」となったからである。　かつては穢れていた彼女の体は、今や悔い改めの行いとあふれんばかりの涙によって清められ、神の聖なる神殿、聖霊の住まいとなった。

八年が過ぎた頃、修道院で油が不足し、テオドラはラクダを連れてアレクサンドリアの街へ油を買いに行くよう命じられた。一方、夫は妻がどこへ行ったのか、また彼女に何が起きたのかを知らず、長い間彼女を探し続けた。　彼女を見つけられないまま、彼は昼夜を問わず嘆き、妻の居場所を神が明らかにしてくださるよう熱心に祈り続けた。そしてある夜、彼は天使を見かけ、その天使は彼にこう告げた。

「妻のことを悲しむな。彼女は神のしもべたちの間で、神に仕えているのだ。もし彼女に会いたいなら、朝、聖ペテロ教会へ行き、その前に立っていなさい。そこで彼女を見ることができるだろう。なぜなら、教会の前を通りかかり、あなたに挨拶をする者が、あなたの妻だからだ。」

テオドラの夫は、妻の安否と彼女に会う方法を告げたこの天使の啓示に喜びを覚えた。　早朝、彼は急いで聖ペテロ教会へと向かい、そこに立って、望むものが見えるのを待ちながら、左右を見回した。その時、ラクダを連れた聖なるテオドラが、男性の修道服を身にまとって通りかかった。夫は彼女を認識できなかったし、そもそも彼女を認識することなど不可能だった。その理由の一つは男性の服を着ていたこと、もう一つは顔立ちが変わっていたことである。かつて彼女は美しい顔立ちをしていたが、断食や修道生活による苦行によって、その美しさは色あせてしまっていた。一方、テオドラは遠くから夫を認識すると、気づかれないように涙を流し、心の中でこう言った。

「ああ、哀れな私、罪人よ！夫に対する罪のゆえに、私は神の恵みを失ってしまったのだ！」

そして彼のそばを通り過ぎる際、彼女は彼に頭を下げてこう言った。

「こんにちは、ご主人様！」

すると彼もまた彼女に頭を下げ、こう言った。

「ご機嫌よう、神父様！」

こうして二人は別れた。ほぼ一日中立ち尽くした後、フェオドーラの夫は、望んでいたものを得られなかったことを嘆き、天使の幻視を欺瞞だと見なして家に戻った。家に戻ると、彼は再び涙を流しながら祈り始めた。

「主よ！　あなたは私の悲しみをご覧になっています。どうか私の祈りを聞き届け、妻が生きているのか、それとも死んでいるのか、教えてください。彼女は善の道を進んでいるのか、それとも悪の道を進んでいるのか？」

そして、ある夜、彼は再び幻の中で、こう語る天使を見た。

「なぜ泣いているのか？　昨日、私が言った通り、妻の姿を見なかったのか？」

彼は言った：

「いいえ、主よ、見ませんでした。」

すると天使は言った。

「通りすがりにあなたに頭を下げ、挨拶をする者こそが、あなたの妻であると、私はあなたに言わなかったか？」

その時、夫は、妻を見かけたものの彼女だと気づかなかったことに気づき、妻が生きていること、そして神に仕えていることを神に感謝した。彼は、妻の祈りによって自分も救われることを望んだ。そして、聖テオドラは、夫に会えたこと、そして夫が彼女だと気づかなかったことを神に感謝した。　そして修道院に戻ると、彼女は自らの救いのために精進し、最初は一日、次に二日、さらに三日、四日と断食を重ねた。時には一週間もの間、食事を摂らずに過ごし、自分の罪の赦しを熱心に祈り続けた。

その修道院の近くには湖があり、そこにはワニという獣[6208]が住んでいた。そのワニはしばしば湖から這い出し、通りかかる人や家畜を食い殺していた。ツィノン王[6209]によってアレクサンドリ

[6208] 背中に骨化した皮の甲羅を持ち、巨大な口と鋭く巨大な歯を持つ、巨大なトカゲのような爬虫類である。ワニは大きな魚や腐肉だけでなく、動物や人間さえも食い尽くす。　世界最大の川であるナイル川は、エジプト全土に水を供給しているが、クロコダイルが大量に生息しており、甚大な被害をもたらしていた。　それにもかかわらず、古代エジプト人はワニを神格化し、しばしば池で飼育し、そこで動物や人間の肉を与えて餌としていた。したがって、この川に生息する爬虫類が湖に現れたことは驚くべきことではなく、また、アレクサンドリアにはまだ多くの異教徒がいたため、当局が彼らを恐れて、この危険な動物を捕獲し駆除することを躊躇したことも同様に不思議ではない。　この湖とは、アレクサンドリアからもナイル川からもほど近い場所にあったモレオティス湖、あるいはマリウト湖のことだと推測される。クロコダイルはそこへ自力で比較的容易に這って移動することができたはずである。

[6209] ビザンツ帝国の皇帝。474年から491年まで在位した。

ア市の統治に任命されたエパルヒ[6210] のグリゴリーは、湖のそばを通る道に警備を配置し、誰もその道を通れないようにした。テオドーラに宿る神の恵みを知りたかった修道院長は、彼女を呼び寄せ、こう言った。

「テオドール兄弟よ、我々は水が必要だ。水瓶を持って、湖へ行き、水を汲んで私のところへ持って来なさい。」

テオドールは、従順な修道見習いとして、水瓶を手に取って出かけた。彼女に出くわした見張りは言った。

「父よ、水を汲みにここへ来ないでください。さもないと、獣に食い殺されてしまいます。」

彼女はこう反論した。

「私の父である修道院長が私を遣わしたのです。私は命じられたことを果たさなければなりません。」

彼女が湖の岸に着くと、ワニが現れ、彼女を背中に乗せて湖の真ん中へと運んだ。彼女が水を汲み終えると、その獣は再び彼女を岸へと運んできた。彼女は、それ以降、その獣が誰にも害を与えないよう呪いをかけると――たちまちその獣は死んでしまった。　この奇跡を目撃した見張りは、修道院長と司教に報告し、皆が神を賛美した。一方、修道者たちは、その獣が聖女に何の害も及ぼさなかったことに驚き、従順の力を称賛した。

しかし、修道者たちの中には、悪魔にそそのかされた者たちもいた（何しろ、誰も敵の誘惑から自由ではないのだから）。彼らは起こった出来事を信じず、テオドロスを憎み始め、こう言った。

「我々はこれほど長年修道院で暮らしてきたが、奇跡を起こすことはできない。それなのに、彼は昨日来たばかりなのに、すでに奇跡を起こしている。我々より上になりたいのではないか？　何か魔法を使って獣を殺したのではないか？」

この修道院から数ヴェルスタ離れた、深い荒野の中に、もう一つの修道院があった。テオドラを憎む者たちは、自分たちの修道院長に内緒で、その修道院宛ての手紙を書き、夜遅くに聖なるテオドラの独房を訪れ、彼女にこう言った。

「テオドール兄弟よ、修道院長は、この手紙を速やかにあの修道院へ届けるよう命じている。」

テオドラは立ち上がり、手紙を受け取ると、夜中にその修道院へと向かった。しかし、敵対者たちは、彼女が道中で獣に食い殺されるようにと、この仕掛けを仕組んだのである。なぜなら、その場所には数え切れないほどの獣が[6211] おり、そのため夜間にその道を通り抜けることは誰にも不可能だったからだ。敵対者たちは互いにこう語り合った。

「獣たちさえも従うというこの聖人めが、無事に帰ってくるかどうか見てやろう」

テオドラがその道を歩いていると、巨大な獣に出くわした。獣は彼女に頭を下げると、引き返して彼女の先頭に立ち、修道院の門まで先導した。　獣が門を突き飛ばすと、門番が門を開け、聖テオドラは書簡を持って修道院長のもとへ向かった。しかし、門番が門を閉め忘れたため、獣は修道院に入り込み、門番を捕らえて苛み始めた。

門番は叫んだ。

「ああ、大変だ、助けてくれ！」

その叫び声で皆が目を覚ました。事態を知った聖女は、修道院長室から戻り、獣に苦しめられている兄弟のもとへ歩み寄った。獣の喉元を掴んで門番を解放すると、聖女は獣にこう言った。

[6210] ギリシャ・ローマ帝国の地方総督。

[6211] エジプトの砂漠は、アフリカの砂漠全般と同様に、特に獰猛なライオンが数多く生息している。以下で語られる獣の名前は、ライオンを指すものと理解すべきである。

「よくも神の御像に襲いかかり、彼を殺そうなどという不遜なことをしたな。さあ、お前自身が死ね。」

するとたちまち、獣はテオドラの足元に倒れ、息絶えた。そして、獣に噛みつかれた修道士には、キリストの御名を呼びながら聖油を塗り、その傷に十字の印を刻み、彼を健やかで無傷の状態に戻した。　この奇跡を目の当たりにした者たちは皆、聖女にひれ伏し、そのしもべテオドラに野獣を服従させた神を賛美した。そして、その修道院から解放されたテオドラは、非常に早く自分の修道院に戻り、到着しても、自分がどこにいたのか、何をしたのかを誰にも話さなかった。

翌日、修道士たちが何らかの供物を携えてその修道院を訪れ、修道院長とすべての修道士たちに起こった出来事を語り、修道院長に頭を下げて感謝した。それは、彼の弟子テオドロスが門番を獣の牙から救い出し、傷を癒やし、さらにその獣自体を退治してくれたことに対する感謝であった。これを聞いた修道院長とすべての修道士たちは、大変驚いた。訪れた修道士たちを見送った後、修道院長はすべての修道士を集め、こう尋ねた。

「誰がテオドール兄弟をあの修道院へ遣わしたのか？」

皆は口を揃えてこう答えた。

「知りません。」

修道院長はテオドロスにも尋ねて言った。

「兄弟よ、誰が夜中に君をあの修道院へ送り込んだのか？」

自分を送り出した憎むべき者たちの正体を明かすことを望まなかったフェオドラは、イグメンにこう言った。

「お許しください、父上！　私は独房でうたた寝をしてしまい、誰が近づいてきて、あなたの名において、あのイグメンに手紙を急いで届けるよう命じたのか覚えていません。私は従順に従って行ったのです。」

すると、敵意を抱いていた者たちは、至福のフェオドラの中に神の恵みを見出し、自らの悪意を悔い改め、彼女にひれ伏して許しを請いました。　しかし、彼女は悪意のない人であったため、そのことについて彼らに少しも怒りを抱かず、誰にも彼らのことを話さなかったばかりか、それどころか、自らを罪深く、兄弟たちの愛に値しない者として謙遜した。

ある日、テオドラが自分の務めを果たしていたとき、悪魔が現れて怒りを込めてこう言った。

「お前、夫を捨てた卑劣な姦通女め、私に立ち向かうためにここへ来たのか？　私は全力を尽くして、お前を修道生活だけでなく、十字架にかけられた方への信仰からも背かせ、この場所から逃げ出させるつもりだ！私がここにいないなどと思うな。お前の足を網に絡め取り、お前が予期もしない穴に突き落とすまで、私はお前を放っておかないからだ。

一方、フェオドラは十字を切ってこう言った。

「神よ、悪魔よ、お前の力を打ち砕いてください！」

すると、悪魔は姿を消した。

しばらくして、聖女テオドラは再びラクダを連れてアレクサンドリアの街へ、修道院の必要のために小麦を買いに行くよう命じられた。

彼女を見送る際、修道院長はこう言った。

「もし、わが子よ、道中で遅れてしまったら、エナト修道院へ寄り道し、そこでラクダたちと共に一晩過ごせ（というのも、その道中には、アレクサンドリアの街の近くに『エナト』と呼ばれる修道院があったからである[6212]）。

[6212] おそらくその都市のすぐ近く――ギリシャ語の修道院の名称が示すように、1ヴェルスタの距離内――であったと思われる。

旅立ったテオドラは、案の定、道中で遅れてしまい、修道院長の指示に従ってエナト修道院に立ち寄った。そして、その修道院の修道院長に頭を下げて、日が明けるまでラクダを休ませてほしいと祝福を求めた。　修道院長は、ラクダの囲いがある宿舎の部屋を彼女に提供した。その時、その宿舎には、すでに若くはない娘が一人いた。彼女は、その修道院長の娘であり、父に挨拶をし、見舞いに来ていたのだ。　その若い修道女（すなわち、聖テオドラ）を見た娘は、悪魔の唆しにより、彼女に対して情欲を抱き、夜になってラクダのそばで眠っていたテオドラのもとへやって来た。そして、相手が女性であることに気づかずに、恥知らずにも彼女に迫り、罪へと誘い始めた。　しかし、テオドラはこう言った。

「私から離れてください、姉妹よ。私はそのようなことに慣れていないのです。それに、私には邪悪な霊が宿っており、その霊があなたを殺してしまうのではないかと恐れているのです。」

恥じ入って立ち去ったその娘は、別の客を見つけ、彼と不義を犯して身ごもってしまった。一方、フェオドラは日が明けると町へ出向き、与えられた務めを果たした後、　自分の修道院に戻り、自らの救いのために修行を続けた。　六ヶ月後、その娘が妊娠していることが発覚し、家族は彼女を殴りつけ、誰が彼女をそのようにしたのかと問い詰めた。彼女は悪魔の唆しにより、至福のテオドラを非難し、こう言った。

「オクトデカトの修道士テオドールが、ラクダを連れて町へ向かう途中、宿屋に泊まった。夜、彼が私のところに来て、私は彼の子を身ごもったのです。」

これを聞いた彼女の父であるイグメン・エナツキーは、自分の修道士たちをオクトデカト修道院へ遣わし、その修道士が娘の名誉を傷つけたとイグメンに訴えさせた。

修道院長はテオドラを呼び出し、こう尋ねた。

「人々が、あなたがその娘の名誉を傷つけ、彼女は今妊娠していると言っているのを聞いているか？」

テオドラはこう答えた。

「お許しください、父上。しかし、神が証人です。私はこの件に関して無実です。」

修道院長は、フェオドール兄弟の清く、天使のような生活を知っていたため、修道士たちが彼について語った話を信じなかった。やがてその娘が息子を出産すると、エナトの修道士たちはオクトデカト修道院を訪れ、その子を修道院の真ん中に置き去りにし、そこに住む兄弟たちを非難してこう言った。

「その赤ん坊を育てなさい！」

そこで修道院長は、その赤ん坊を見て、噂通りのことが実際にあったと信じ込み、罪のない、心身ともに清らかなテオドラに対して激しく怒りを露わにした。修道士たちを集め、テオドラを呼び出すと、彼は彼女にこう問いただした。

「言え、この忌まわしい者よ、お前は何をしたのだ？　お前は我らの修道院に不名誉をもたらし、我らの修道会を冒涜した！　お前は神を恐れなかった。我々はあなたをまるで天使のように思っていたが、お前は悪魔の共犯者だったのだ。さあ、その不法行為を自白せよ。」

一方、聖女テオドラは、降りかかった災難に驚きつつ、謙虚にこう言った。

「お許しください、聖なる父たちよ、私は罪人です！」

修道士たちは互いに相談した後、彼女を不名誉な扱いと暴行を加えて修道院から追放し、赤ん坊を彼女に返した。これほどまでに、聖女の驚くべき忍耐は偉大であった！　一言で自分の無実を証明することもできたが、自分が女性であるという秘密を明かすことを望まず、かつての罪に対する償いとして、他人の罪を自ら引き受けたのである。赤ん坊を抱きかかえると、彼女は修道院の門のそばに座り込み、楽園から追放されたアダムのように泣きじゃくった。　修道院の向かいに、彼女は赤ん坊のために小さな小屋を建て、羊飼いたちから乳を恵み乞いし、丸七年間、その乳で赤ん坊を育てた

。彼女自身は、飢え、渇き、裸身、寒さ、そして酷暑に耐え、海水を飲み、野草を食して生き延びた。

そのような苦難に耐えかねた悪魔は、別の方法でテオドラを誘惑しようと企んだ。悪魔は彼女の夫の姿に変身し、彼女が赤ん坊と一緒に座っていた小屋に入り、こう言った。

「ここにいるのか、我が夫人よ？　私はこれほど長い間、涙を流しながら君を探し求めてきたのに、君は私のことを全く気にかけていないのか、我が夫人よ？　君のために私は父と母を捨てたのに、君は私を見捨てたことを知らないのか？　誰があなたをこの場所へ来るように仕向けたのですか？　あなたの顔色はどうか？　なぜそんなに身を疲れさせてしまったのですか？　さあ、私の最愛の人よ、私たちの家へ帰りましょう。もしあなたが望むなら、家でも貞節を守ることができます。私はあなたを妨げるつもりはありません。私の愛を思い出してください、奥様。そして私と一緒に私たちの家へ行ってください。

その女性は、それが悪魔であることに気づかず、本当に自分の夫だと思い込み、彼にこう言った。

「私の罪のゆえに逃げ出したあの世へ、あなたのもとへ戻ることはできません。もっと大きな罪に陥ってしまうのではないかと恐れているのです。」

ところが、彼女が祈りのために十字を切って手を挙げた瞬間、悪魔はたちまち見えなくなった。その時、聖女はそれが悪魔であったと悟り、こう言った。

「悪魔よ、あなたは私を惑わしかけたわ。」

彼女は悪魔と会話を交わしてしまったことを悔い改め、それ以来、悪魔の策略から身を守るよう一層注意を払うようになった。しかし、悪魔はテオドラに対して攻撃を仕掛けることをやめなかった。そこで彼は多くの悪魔を集め、それらは様々な獣の姿をとって彼女に襲いかかり、人間の声で叫んだ。

「この姦淫の女を引き裂いてやろう！」

テオドラは十字を切ってこう言った。「*彼らは私を取り囲み、包囲したが、主の御名によって私は彼らを打ち倒した*」（詩編117:11）。すると、悪魔たちはたちまち姿を消した。その後、悪魔は彼女を金銭欲で惑わそうと、大量の金とそれを集める人々を見せたが、これもまた十字を切ったことで消え去った。

続いて悪魔は公爵の姿に変身し、その先頭を行く大勢の騎馬隊がテオドラの小屋の横を通り過ぎながら叫んだ。

「公爵がおいでだ、公爵がおいでだ！」

それから彼らはテオドラに言った。

「公爵に頭を下げなさい。」

すると彼女はこう答えた。

「私は唯一の神にひれ伏します。」

すると彼らは、彼女を小屋から引きずり出し、闇の支配者の元へ無理やり連れて行き（神は、彼女が*「炉の中の金のように」*（詩篇3:6）試練を受けるため、聖なる者に触れることを許された）、彼に拝むよう強要した。しかし彼女はそれを拒み、こう言った。

「私は私の主なる神に礼拝し、ただそのお方だけに仕えます。」

すると、悪魔たちは容赦なく彼女を殴りつけ、かろうじて息があるだけの状態で置き去りにして去っていった。一方、羊飼いたちはテオドラのもとへやって来て、彼女が死んだかのように横たわっているのを見つけ、彼女が亡くなったと思い込み、小屋へ運び、そこに寝かせた。そのことを修道院にも知らせ、こう告げた。

「貴方の修道士テオドールが亡くなりました。遺体を引き取り、埋葬してください。」

修道院長と修道士たちはテオドーラの小屋を訪れ、彼女の魂がまだ体に残っていることに気づくと、こう言った。

「そのままにしておきなさい。彼女は生き返るだろう。」

そして彼らは修道院へと戻った。一方、フェオドラは真夜中に意識を取り戻すと、泣きながら胸を叩き、こう叫んだ。

「ああ、罪深い私よ、哀れな私よ！　神は私の罪のために、なんと私を罰されることか。」

そして、天に向かって両手を上げ、大きな声で叫んだ。

「慈悲深い神よ、私を悪魔の手から救い出し、私の罪をお赦しください！」

その場所の近くで夜を明かしていた羊飼いたちは、死んだと思っていた聖テオドラが祈っているのを耳にし、彼女がまだ生きていることに驚き、神を賛美した。

その後、修道院長は彼女から赤ん坊を修道院に連れて行くよう命じた。テオドラは、赤ん坊を育てる労苦や心配から解放されたため、これを大いに喜んだ。彼女自身は、その後も荒野をさまよい続けた。　彼女の体は寒さと暑さで黒ずみ、目は苦い涙でくすんでしまい、彼女は獣たちと共に暮らしていた。その獣たちは、まるで羊のように彼女に従順で、おとなしかった。

悪魔は再び彼女を誘惑しようとした。彼女がひどく飢えているのを見て、悪魔は美味しい食べ物を運んできた戦士の姿で彼女の前に現れ、こう言った。

「かつてあなたを殴った領主が、今そのことを悔い改め、この食べ物を送ってきました。彼を許し、彼からの贈り物を受け取ってほしいと頼んでいます。」

しかし、テオドラは悪魔の誘惑を見抜き、十字を切ってこう言った。

「神よ、敵よ、お前の狡猾さを滅ぼし、打ち砕いてください！神は私の助け手です。お前は私を惑わすことはできません。」

それ以来、悪魔は彼女を誘惑することをやめた。

テオドラのこのような苦難に満ちた生活が七年を経た後、修道士たちは彼女を憐れみ、修道院長のもとへやって来てこう言った。

「父よ、兄弟テオドラを憐れんでください。彼はすでに自分の罪を悔い改めました。彼を赦し、修道院に迎え入れてください。」

すると、修道院長はこう答えた。

「テオドール兄弟よ、神はあなたが犯した罪を赦された。私たちと共に修道院で暮らし、修行に励みなさい。二度と悪魔に誘惑されないよう、修道院の外には決して出てはならない。そして、あなたの息子も育て上げ、彼があなたの修行の熱心な後継者となるようにしなさい。」

そして修道院長は彼女に独房を与え、あらゆる修道院の務めから解放し、彼女が安らかに神に祈りを捧げ、これほど大きな苦労の後に休息をとれるようにした。　そしてテオドラは、その独房で、養子である　のテオドラと共に二年間暮らし、彼に読み書きと神への畏敬の念、そして謙遜、従順、その他の修道者の美徳を教えた。

ある夏、大干ばつに見舞われ、修道院の井戸は干上がり、湖も枯れてしまった。その時、イグメンは数人の兄弟たちにこう言った。

「神に水を授けてくださるよう祈ることができるのは、テオドール神父以外にはいない。彼は神の偉大な恵みに満ちているからだ。」

修道院長は、その聖なる方を呼び寄せ、こう言いました。

「テオドール神父よ、器を持って、井戸から水を汲んでくれ。」

しかし、井戸は干上がっており、一滴の水もなかった。

「神の祝福を、父よ！」とテオドラは言い、井戸へと向かった。

彼女は器を井戸に下ろし、澄んだ水で満たして、修道院長と兄弟たちに運んだ。これを見た者たちは皆、驚嘆した。　彼らはすぐに、とっくに水が枯れていた井戸へと向かい、中を覗き込むと、

井戸が水で満たされているのを見て、神を賛美した。その水は、雨が降り、干上がっていたすべての貯水池が水で満たされるまで、修道院のあらゆる必要を満たすのに十分であった。

謙虚な心を持った聖テオドラは、修道者たちにこう語った。

「このことは私のためではなく、私を遣わした私たちの父である修道院長のために行われたのです。彼は神に対して揺るぎない、不変の信仰を持っています。私はただ、私たちの父の祈りに頼りながら、命じられたことを果たしたに過ぎません。」

そしてテオドラは、自分の独房で神に祈りを捧げながら、養子である少年を育て続けました。

ある晩、皆の目の前で少年を連れ出したテオドラは、彼と共に独房に閉じこもり、教えを説き始めた。　一方、修道院長は神の導きにより、兄弟たちのうち数人を密かに修道室のそばに遣わし、彼女が少年と何を話しているのかを聞き耳を立てさせた。テオドラは少年を胸に抱きしめ、抱擁して口づけをしながら、こう言った。

「わが愛する子よ！　私の時は満ち、終わりが訪れ、私はあなたのもとを去ろうとしている。あなたは私のことを泣いたり、「私は孤児だ」などと言ってはならない。なぜなら、あなたには、その恵みをもってあなたを覆ってくださる神が父としておられるからだ。私も（もし神の前で大胆さを得ることができれば）、あなたのために神に祈るつもりである。　私の最期の言葉を聞き、それを心に刻みつけなさい。あらゆる被造物よりも、そして自分自身よりも神を愛し、心を尽くして神に寄り添い、口と心、言葉と知性をもって、絶えず神を賛美し、祈り続けなさい。　共同生活の規則を決して怠らず、他の兄弟たちと共に教会へ行きなさい。第一、第三、第六、第九の時課、晩課、深夜の祈り、そして早課に参列しなさい。　あなたのすべての祈りが、心の砕け、涙、そして嘆きと結びつきますように。毎日、神の前で泣き、永遠の慰めを得ることができますように。修道院長と兄弟たちの言葉に従い、自分の意志を捨て、今から生涯の終わりまで悪意を持たないようにしなさい。口を閉ざして沈黙を守りなさい。　誰かを非難したり、他人の罪を嘲笑したりしないよう努めなさい。また、罪を犯している者を見かけたら、唯一の無罪なる神にその者のために祈り、神がその者を正し、あなたを罪の堕落や敵の誘惑から救ってくださるよう願いなさい。　無駄な言葉も、卑しい言葉も、冒涜的な言葉も一切口にしてはならない。審判の日にあなたが責任を問われるような言葉が、あなたの口から出てはならない。心を柔和にし、謙虚であれ。すべての人を自分の父や恩人として敬い、自分自身を誰よりも低い者と見なせ。　兄弟たちの誰かが病気だと聞いたら、面倒がらずに彼を訪ね、熱心に世話をし、あなたに課せられたあらゆる務めを不平を言わずに果たしなさい。貧しさと無所有を、まるで貴重な宝物であるかのように愛しなさい。　私があなたと共に放浪していた日々を思い起こしなさい。修道院の塀の前にある私の小屋で、私が得たものは何だったか。美食か、衣服か。食器か、あるいは何かの宝物か。　神以外には何もなかった。なぜなら、人間にとって、神と神の愛以上に大切なものがあるだろうか。神こそが私たちの宝であり、富であり、食べ物と飲み物であり、衣服と覆いであり、私たちの健康と力であり、喜びと楽しみであり、希望と信頼そのものである。　わが子よ、神を得ることに努めなさい。もし神を得ることができれば、それだけで十分であり、たとえ全世界を手に入れたとしても得られないほどの喜びを、神によって味わうことになるだろう。　自らの清さを保つよう努めなさい。今、あなたが心身ともに清いように、生涯の終わりまでそのままであり続けなさい。わが子よ、神の御霊を冒涜したり、快楽や肉欲によって御霊を自分から遠ざけたりしないよう、自らを慎みなさい。　自分の肢体を死なせ、自分の体に安らぎや寛容を与えてはならない。従順でないロバのように、飢えと渇き、労働と傷によってそれを謙遜させ、自分の魂を清らかな花嫁としてキリストに捧げるまで続けなさい。　悪魔の策略から身を守り、自制し、目を覚ましていなさい。悪魔は眠ることなく、神に仕える者すべてを飲み込もうと狙っているからだ。この敵から、神の助けがあなたを守ってくださいますように！　また、わが子よ、私のことについても を覚えて祈りなさい。そうすれば、私は、明らかな罪だけでなく隠れた罪までも裁かれる義なる審判者、すなわち私が今、その御許へと旅立とうとしている方の御前で、憐れみを得ることができるでしょう。

すると、賢明な少年はこう言いました。

「まさか、父よ、あなたは私を孤児にして、私の元を去るおつもりですか？　あなたなしでは、私はどうすればよいのでしょうか？　ああ、哀れな私よ！　悲しむべきこと、孤児である私が、あなた、私の慈愛深い父を失うとは！」

フェオドラは彼を慰めながら、こう言った。

「私はあなたに、自分を孤児だと言ってはならないと、すでに話したでしょう。あなたには、あなたを慈しみ、守ってくださる神がおられるのですから。神はあなたにとって、父であり母であり、教師であり導き手であり、守護者であり、救いへと導く導き手となってくださるでしょう。」

その後、フェオドラは立ち上がり、涙を流しながらこう祈り始めた。

「神よ、私の罪と悔い改めをご存知です！あなたは私の心の悲しみをご存知です――主よ、私があなたを怒らせてしまったことを、いかに絶えず深く悔やんできたかをご存知です！　あなたは、私が罪深い肉体を謙遜させるために費やした労苦をご存知です――私が不義を犯し、あなたの慈愛を傷つけるという大胆な行いをしたことのために、　あなたは私の魂の悲しみをご存知です。私が自分の罪を自覚して以来、あなたを怒らせてしまったことを嘆き、苦々しく悲しむことを、私の魂が絶えず続けてきたことをご存知です。　どうか今、私の嘆きを聞き、私の祈りに耳を傾けてください。蝋のように溶けゆく私の心をご覧になり、それを試み、私の涙に目を留め、この堕落した私の魂を憐れんでください！　私の不義を赦し、私の罪を赦し、私の悪行を思い出さないでください。*「主よ、あなたの慈しみによって私を思い出してください。あなたの恵みのゆえに、主よ！」*（詩篇24:7）。私の悔い改めを受け入れてください。私の祈りと嗚咽を受け入れてください。そして、私の魂も受け入れてください！

彼女はそうして長く祈り続けましたが、彼女の言葉のすべてが聞き取れるわけではなく、聞こえてきたのは彼女の泣き声と胸を打つ音だけでした。少年も彼女と共に泣き、自分の孤児であることを嘆いていました。彼女は再び彼を慰め、また祈りを捧げました。ついに、彼女は喜びをもってこう言いました。

「私のあまからしき創造主よ、あなたが私の祈りを聞き入れ、憐れみ深く、私の魂を死から、私の目を涙から救ってくださったことを感謝いたします。」

他にも感謝の言葉を述べ、心が喜びに満たされると、テオドラは黙り込んだ。まるで彼女がその聖なる魂を主の御手に委ねたかのようだった。もはや彼女の言葉は聞こえず、聞こえるのは少年が泣く声だけだった。そのとき、早課の鐘が鳴り響いた。　テオドラの言葉をすべて聞いていた修道士たちは、イグメヌスのもとへ行き、すべてを彼に話した。イグメヌスは彼らの話を聞き終えると、涙を流しながらこう語り始めた。

「わが子らよ、今夜、私は幻を見ました。まるで二人の光を放つ男が現れ、私を天の高みへと導いたかのようでした。そこから、『来なさい。私が私の花嫁テオドラのためにどのような恵みを用意したか、見てごらん』という声が聞こえてきました。」　そして私は、その美しさと壮麗さを言葉では言い表せないほど輝かしい楽園を目にした。現れた二人の男は、私を楽園の中へと導き入れ、宮殿と、その中に用意された黄金の寝台を見せてくれた。そして、その寝台のそばに立つ天使が、それを守っていた。私は私を案内する者たちに尋ねた。「この宮殿と寝台は、誰のために用意されたのですか？」すると彼らは私に言った。　「少し待てば、神の栄光を見るだろう」。やがて、私は天使の列、殉教者たち、そして聖人たちが、その甘美さは言葉では言い表せないほど美しい歌声を響かせながら歩んでくるのを見た。その真ん中に、偉大な栄光に包まれた美しい妻の姿があった。彼女を宮殿へと導き、甘美な歌を歌いながら寝台に座らせた。　私は畏敬の念を抱き、その高潔な妻に頭を下げた。すると天使が私に言った。「この方が誰か、知っているか？」私は答えた。「存じ上げません、主よ」。すると彼は私に言った。「これはあなたの修道士、テオドールだ。本来は女性であったが、外見上は男性であったのだ。　しばらく夫婦として暮らした後、テオドラは神のために世俗を捨て、

あなたの修道院で奉仕に励んだ。そして、赤ん坊を産んだ乙女として誹謗中傷された際も、自分が女性であることを明かさなかった。まるで実の父親であるかのように、その赤ん坊を受け入れ、育て上げたのだ。　しかし、あなたの修道院から追放されると、彼女は多くの苦難に遭い、草や海水で身を養い、寒さや暑さ、貧困に耐え、悪魔たちからの数々の試練に耐え抜いた。　これらすべてのために、慈悲深い神は彼女をこれほどまでに高く評価されたのです。なぜなら、神は彼女を御自身の花嫁として愛し、すべての聖人たちと共に御自身の御国の相続人となさったからです」。　これを聞いて、私は泣き出した。この秘密を知らず、嘘を信じて聖女を侮辱し、不名誉な形で修道院から追放してしまったからだ。泣いているうちに、私は目を覚ました。さて、わが子らよ、今、私の心は喜びと悲しみで満たされている。　人間の目には見たことのない、この上なく栄光に満ちた幻を拝見し、耳には聞いたことのない聖なる賛美歌の甘美な響きを聞くことができたことを喜びとしています。しかし、私たちがこの神のしもべであり、私たちの間に住まう神の愛する花嫁であることを知らず、そのことを知らずに長い間彼女を傷つけてしまったことを悲しみ、涙を流しています。

その後、修道院長は兄弟たちを集め、至福のテオドラの独房へと向かい、扉を軽く叩いてこう言った。

「テオドール師よ、祝福を！」

しかし、返答はなかった。テオドラはすでに主のもとへ召されていたからである。一方、少年は彼女のそばで泣きながら眠り込んでしまい、ようやく彼を起こすことができた。独房に入ると、修道士たちは、地面に横たわっている聖なるテオドラを見た。彼女の手は胸の上で組まれ、目は閉じられていたが、その顔は天使の顔のように美しさに輝いていた。　彼女の尊い遺体を埋葬の準備をしているとき、修道院長は、長期間の断食でやせ細った彼女の胸元を開いた。そして、皆はそれが女性であったことを知った。　修道院長は、修道女の貞操を誹謗した者たちが招かれるまでは、この秘密を誰にも明かさないよう兄弟たちに命じ、エナトの修道院長のもとへ兄弟たちを遣わして、こう告げた。

「父よ、どうかお力添えを願います。修道士たちを連れて私たちのところへお越しください。今日、私たちには大きな祝日があり、あなたにも私たちと共に祝っていただきたいのです。」

そこで、エナトの修道院長は、自身の修道士たちと共にやって来た。そして、彼らは彼を聖なるテオドラの遺体の元へ連れて行き、こう言った。

「父上、あなたの娘の夫が亡くなりました。」

聖女の遺体を彼に見せながら、尋ねた。

「これはテオドールではありませんか？」

すると、エナトの修道院長は言った。

「確かに、彼です。」

彼と共にやってきた修道士たちにも尋ねて言った。

「彼をご存じですか？」

すると彼らは言った。

「よく知っています。この男は、乙女を汚した偽りの兄弟テオドールです。神が彼の行いに応じて報いてくださいますように！」

すると、オクトデカトスの修道院長は彼女の胸元を開き、女性の乳房を見せながら言った。

「これは男の体か？　そうか、我ら父たちは間違っていた。男だと思っていたが、実は女だったのだ。外見を変え、男の名を名乗り、この秘密を知らない我々罪人たちの間に天使のように暮らしていたが、我々から多くの苦難を被ったのだ。」　しかし今、彼女の死によって、彼女が何者であり、何であるかが明らかになった。彼女は義に満ち、敬虔であり、我らの神キリストに喜ばれる者だからである。私は、彼女が天の宮殿において、天使たちやすべての聖人たちと共に、栄光と偉大な光の中で喜び祝っているのを見たからだ。

その時、そこにいた者たちは皆、この偉大な神秘に恐れおののき、驚嘆した。一方、彼女が犯してもいない罪で彼女を誹謗した者たちは、深く恥じ入り、皆、激しく泣きながらこう叫んだ。

「ああ、私たちよ、これほど長く神のしもべを侮辱してしまったとは！」

そして、彼女の聖遺物にひれ伏し、涙ながらにこう言った。

「神のしもべよ、無知のゆえにあなたに対して罪を犯してしまったことを、どうかお赦しください！」

その後、神の御使いがオクトデカトの修道院長のもとに現れ、こう言った。

「馬に乗って町へ向かい、最初に出会った者を連れてここへ連れて来なさい。」

修道院長は直ちに出発し、道で向かってくる人を見かけると、彼に尋ねた：

「どこへ行くの？」

彼はこう答えた。

「ある修道院で妻が亡くなったと聞いたので、彼女に会いにいくところです。」

修道院長は、その男を連れて行き、馬に乗せると、修道院に戻り、彼を聖女の聖遺物の前に連れて行った。テオドラの姿を見た夫は、彼女の聖遺物の前で、悲痛で慰めようのない泣き声を上げ始めた。－オクトデカト修道院の周辺に住む数え切れないほどの修道士たちは、この一連の出来事を耳にすると、ろうそくと香炉を手に集まり、聖テオドラの遺体を聖なる儀式で弔った後、彼女が献身的に修業に励んだその修道院に、敬意を込めて埋葬した。　そして、人々は多くの日々にわたり、キリスト・神を賛美し、その最愛の花嫁である聖女テオドラを称えながら、明るく祝った。　一方、彼女の夫は、彼女の埋葬後、妻、いや、むしろキリストの花嫁が住んでいた独房を求め、修道士となって、そこで断食と祈りと涙に励み、聖テオドラの功績を偲びながら、しばらくして主のもとへ旅立った。　また、聖女が息子代わりに育てた少年テオドールは、　、その「父」――いや、むしろ「母」である聖女テオドール――の気質、功績、そして徳に満ちた生涯のすべてを受け継いだ。　彼は極めて高い境地に達し、修道院長が亡くなると、すべての修道士たちによって後任に選ばれました。彼は慈愛に満ちた父として、子らを救いの道へと導き、自らも聖テオドラの足跡をたどり、彼女と共に天の住まいに住まうようになりました。

主よ、御自身の聖人たちの祈りによって、私たちをも御自身の天の御国から締め出さないでください。アーメン。

コンダク、第2調：

あなたは断食によって肉体を疲れさせ、徹夜祈祷をもって創造主にご自身の罪を懇願し、完全な赦しを受けられるよう願いました。そして、赦しを受け、悔い改めの道を示されました。

聖エウフロシノスの記念日

記念日：9月11日

聖エウフロシン（[6213]　）は、身分の低い両親の間に生まれたが、その徳によって、生まれながらの貴族たちをも凌駕した。　多くの者は、その家柄の高貴さにもかかわらず、何の美徳も持たず、それゆえに地獄の深淵へと堕ちていく。それに対し、身分の低い人々であっても、その恵み深い謙遜さによって、神の楽園へと昇ることは珍しくない。この聖エウフロシンもまた、幻視の中で楽園にいる姿が見られ、彼はその聖なる生涯によって、まさにその楽園を継承したのである。

[6213] 9世紀、アモリ人の地、すなわちパレスチナのヨルダン川近くで生活し、修業に励んだ。

修道院では、エウフロシンは厨房で兄弟たちに仕えていたが、それは人々に仕えるというよりは、あたかも神に仕えるかのように――深い謙遜と従順をもって行っていた。昼夜を問わず奉仕に励みながらも、彼は決して祈りと断食を怠らなかった。　彼の忍耐は驚くべきものでした。なぜなら、彼は大きな苦難、侮辱、冒涜、そして度重なる嫌がらせに耐え抜いたからです。厨房で物質的な火を燃やす一方で、彼は神への愛という霊的な炎に燃え上がり、その心は神に向かって燃え盛っていました。　兄弟たちの食事を用意しながら、彼はその徳高い生活によって、神の御国における自らの食卓を備え、そこで*「神の御国でパンを味わう者は幸いである」*（ルカ14:15）と語られた人々と共に、天の至福に満たされるようにした。　彼は主を密かに仕え、公に報いを受けるためであったが、それはまさにその通りになったのである。

主は、そのしもべエウフロシンがふさわしいとされたものを、このように示されたのである。

エウフロシノスと同じ修道院に住んでいたある司祭は、常に神に、神を愛する者たちに用意されている将来の恵みを、感覚的に理解できる形で示してくださるよう祈り続けていた。　そしてある夜、彼は次のような幻を見ました。自分が楽園に立っており、畏敬と喜びの念を抱きながら、その言葉では言い表せない美しさを仰ぎ見ているのです。そこで彼は、自分の修道院の料理人であるエウフロシノスを見かけました。

彼に近づき、司祭は尋ねた。

「エウフロシン兄弟、これは何ですか？ まさか、これが楽園なのでしょうか？」

エウフロシンは答えた。

「はい、神父様、ここは楽園です。」

司祭は再び彼に尋ねた。

「あなたは、どうしてここにいるのですか？」

エウフロシンは答えた：

「神の偉大なる慈悲により、私はここに身を落ち着かせて暮らしています。ここは、神に選ばれた者たちの住処だからです。」

司祭は尋ねた。

「君は、この美しい景色に対して何か力を持っているのか？」

エウフロシンは答えた。

「私の力の及ぶ限り、あなたが目にしているものの中から与えているのです。」

司祭は言った：

「私にも、その恵みの中から何かを分けてはくれないか？」

エウフロシンは答えた。

「私の神の恵みにより、お好きなものをお取りください。」

すると司祭は、手でリンゴを指さして、それを求めた。エウフロシンはリンゴを三つ摘み取り、司祭のハンカチに包みながら言った。

「お求めになったものをお受け取りになり、お召し上がりください。」

その頃、早課の鐘が鳴り始めた。司祭は目を覚まして正気に戻ると、見たことを夢だと思ったが、ハンカチに手を伸ばしてみると、幻の中でエウフロシンから受け取ったあのリンゴが入っており、そこから言葉に尽くせない芳香が漂ってくるのを感じ、驚嘆した。　ベッドから起き上がり、リンゴをその上に置くと、彼は教会へ向かい、そこでエウフロシンが早朝の礼拝に立っているのを見た。彼に近づくと、司祭は誓いを立てて、今夜どこにいたのかを明かしてくれるよう懇願した。

エウフロシンはこう答えた。

「お許しください、神父様。今夜、私はあなたが私を見かけた場所にいました。」

司祭は言った。

「だからこそ、神の御業を明かすよう、あなたに誓わせたのだ。真実を隠さないようにするためだ。」

すると、謙虚で賢明なエウフロシンは言った。

「神父様、あなたは主に対し、選ばれた者たちへの報いを目に見える形で示してくださるよう願われました。そして主は、この卑しく不適格な私を通して、その御業をあなたの尊い御身に示すことをお許しになりました。それゆえ、あなたは私の神の楽園で私をご覧になったのです。」

司祭は尋ねた。

「父よ、私があなたに求めた時、あなたは楽園で私に何を与えてくださったのですか？」

エウフロシンは答えた：

「私はあなたに三つのリンゴを差し上げました——あなたが自分の修道室の寝台の上に置いていた、まさにそれです。しかし、父よ、私をお許しください。私は人間ではなく、ただの一匹の虫に過ぎないのですから。」

早課が終わると、司祭は兄弟たちを集め、三つの楽園のリンゴを見せながら、自分が見たことを詳しく語った。すると、皆はそのリンゴから言葉に尽くせない芳香と霊的な喜びを感じ、感極まりながら司祭の語ったことに驚嘆した。　彼らは神のしもべに敬意を表すため、エウフロシノスのいる厨房へ向かったが、彼はすでにそこにはいなかった。彼は人間の称賛を避けて教会を出て姿を消しており、どうしても彼を見つけることができなかったのだ。　さて、彼が一体どこへ姿を隠したのか——それについて深く詮索する必要はない。なぜなら、もし彼のために楽園が開かれたのなら、一体どこへ隠れることができようか。兄弟たちはそのリンゴを互いに分け合い、祝福として多くの人々に配り、とりわけ癒しのために与えた。なぜなら、それらを口にした病人は、その病から癒やされたからである。　そして、皆は聖エウフロシノスのこの賜物から多くの恵みを受け、記述されたこの驚くべき幻視を紙の上だけでなく、自らの心にも刻み込み、偉大な功績を成し遂げようと努め、神に喜ばれる生き方をした。

聖エウフロシノスの祈りによって、主が私たちをも天国の住まいへと導いてくださいますように！ アーメン。

聖殉教者イイの記念日

記念日：9月11日

聖殉教者イアは、ヴィザダという町[6214] の出身であった。彼女は9000人のキリスト教徒と共に、ペルシャ王サポル[6215] に捕らえられた。キリストを告白したため、彼女は魔術師の長による裁判にかけられ、その長は彼女にキリストを否定するよう強要した。　しかし、彼女は彼の説得に屈することなく、真の信仰に堅く立ち続けた。このため、彼女は牢獄に閉じ込められ、丸一年間、飢えに苦しめられた。その後、彼女は牢から引き出され、節のある棒で激しく殴打された。その後、再び牢獄に連れ戻され、そこで15年間を過ごした。　その期間が過ぎると、彼女は再び連れ出され、膝、太もも、両手がロープで強く縛られたため、骨が折れてしまった。その後、硬い革のベルトで腰や腹を打ちつけられ、ついに首を斬り落とされた[6216] 。

[6214] ヴィザド——ペルシア王国の主要地域にある都市。

[6215] 「大帝」の異名で知られるサポル2世は、ペルシャの王であり、西暦310年から381年まで在位した。ローマ人との戦いで勝利を収めたことで知られ、キリスト教に対する残酷な迫害者でもあった。

[6216] 聖イオの殉教は362年から384年の間に起こった。

聖殉教者ディオドロスとディディモスの記念日

9月11日の記念日

これらの聖なる殉教者たちは、シリアのラオディキア出身であった。キリストの信仰を告白し、異教徒たちにキリストについて教え、その多くを改宗させ、洗礼を授けた。このため、彼らはラオディキアの総督のもとへ引き出され裁きを受けたが、そこで彼らは勇敢にキリストを告白した。　彼らは恐ろしい拷問にさらされたが、キリストを否定することはなく、恐れることなく偶像崇拝の虚偽を糾弾し、真の神を捨てて偽りの神々を崇拝しているとして総督を非難した。祈りを口にしながら、彼らは苦しみの中で自らの魂を主の御許に委ねた。

9月25日

9月12日（旧暦）

聖殉教者オートノムの生涯と殉教

記念日9月12日

聖オートノムは、ディオクレティアヌス帝の治世下、イタリアの司教であった。キリスト教徒に対する激しい迫害が始まると、オートノムは聖福音書に記された主の言葉を思い出した。　*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい」*（マタイ10:23）と、イタリアを離れ、ビフィニアに移住しました。そこで神の御心により、ソレオス[6217] と呼ばれるある村に身を寄せました。ここで聖オートノムは、ある旅好きのコルニリウスという人物に迎え入れられました。　彼はコルニリウスの元でかなり長い間暮らし、キリストを宣べ伝えることで、多くのギリシャ人をキリスト教の信仰へと導いた。　そして彼はここで、神のために多くの魂を救った。というのも、聖オートノムの教えを聞くために、大勢の人々がコルニリウスの家に集まっていたからである。彼は使徒たちと同様に、大胆に神の御言葉を宣べ伝えた。なぜなら、かつて聖なる使徒たちの上に火の舌となって降ったのと同じ聖霊が、彼の中に働いていたからである。　オートノモスの説教を通じて、聖霊は人々の心を神の愛と敬虔へと燃え立たせ、その結果、彼の教えに耳を傾ける者たちは心を打たれ、喜んでその説教を受け入れ、彼に聖なる洗礼を請うようになった。　そして、その地方で彼は非常に多くの人々を聖なる信仰へと導いたため、コルニリウスの家ではもはや信者たちの集まりをすべて収容できなくなった。そこで、聖オートノムは、天の軍勢の統率者である聖大天使ミカエルの名に因んで、キリスト教徒のために教会を建立し、彼が新たに導いたすべての人々をその守護に委ねた。　自身はコルニリウスを助祭に叙階し、キリストの羊の群れの牧会を彼に託すと、リカオニアとイサウリア[6218] へと向かい、そこでも敬虔の宣教者となることを望んだ。

これらの地でかなり長い間、神の御言葉を宣教する働きに励んだ後、聖オートノムは再びコルニリウスのもとへ戻った。彼は、コルニリウスが獲得したキリストの羊の群れを訪ねたかったのだ。彼はコルニリウスを長老に任命し、彼と共に人類の救いのために奉仕するようになった。

不敬虔なディオクレティアヌス帝が、ニコミディアにいるキリストの信徒たちを皆殺しにする目的で同地を訪れた際、偶像崇拝者たちは、キリスト教徒の中で最も著名な人物として、聖オートノ

[6217] ビフィニア――小アジアの地方。――ソレオス、あるいはソレイ――は、ニコミディウス湾またはアスタケンス湾に入ってくる船舶の右舷側に位置していた。

[6218] リカオニア――小アジアの地域で、同じく小アジアの地域であるイサウリアに隣接し、同名の都市がある。イサウリアはかつて、フリギア、ピシディア、リカオニアのいずれにも属していた。

ムをも探し始めた。　しかし、聖人は、より多くの人々を悪魔の闇から真の神を知る光へと導きたいと願い、迫害者たちの手に身を委ねることはしなかった。　教会の益のために身を慎んだ聖オートノムは、エウクシノス海[6219]の岸辺に位置するクラウディオポリスへと船出した。そこで彼は神の御言葉の種を蒔き、その種は人々の心の肥沃な土壌に落ち、まもなく神の恵みによって多くの霊的な実を結んだ。　そこで敬虔な生活に必要なあらゆることを適切に整え、信者たちを救いの道へと導いた後、聖オートノムは再びソレオスへと戻った。

ここで信者の数がさらに増えているのを見て、聖人はコルニリウスを司教に任命し、自身はアジア地方[6220]へと向かい、そこで不信仰という茨を根絶やしにし、唯一の神への聖なる信仰を広めた。　そしてここでも、神の恵みにより、彼は説教によって偶像の祭壇を打ち砕き、人々の心に聖霊のための霊的な神殿を築き上げ、多くの人々を迷いと永遠の滅びから救い出した。

まもなく、聖オートノムは再びコルニリアと、彼に託された信徒たちを訪ねた。ここで皆が神の律法を学び、徳を積んでいるのを見て、オートノムはこれに慰められ、自分の労苦が無駄にならなかったこと、そして福音を宣べ伝えることによって生み出した霊的な子らが増え続けたことを神に感謝した。

ソレオスという町の近くには、リムナという名の村があった。この村の住民たちは、依然として偶像崇拝の闇に覆われていた。　そこで、聖オートノムは彼らの元へ向かい、キリストを宣教し、多くの人々をキリスト教へと改宗させ、聖なる信仰の奥義を教え、洗礼によって彼らを啓発し、それによって彼らをキリストの選ばれた群れに加えました。

ある日、依然として不信仰のままであった地元の住民たちが、自分たちの邪悪な偶像の一体への祭りを執り行い、悪霊たちに生贄を捧げながら、その偶像の神殿で歓喜に沸いていた。　その時、すでに大勢になっていたキリスト教徒たちは集まり、祝祭を行っていた異教徒たちの元へ赴き、彼らの祭壇を倒し、すべての偶像を打ち砕き、その神殿を基礎まで破壊した。　これにより、彼らは異教徒たちに、彼らの神々など取るに足らない存在であることを示した。なぜなら、神々は打ち砕かれても抵抗できず、粉々にされても叫び声を上げないからである。

異教徒たちは、このような甚だしい屈辱を与えられたことにキリスト教徒たちに対して激怒し、自分たちの偶像が打ち砕かれたことへの報復を決意し、その好機を待ち構えるようになった。

ある日、主の僕オートノムが、ソレオス市に自ら建立した大天使ミカエルの教会で、神に無血のいけにえを捧げる予定の日を知ると、　彼らはリムナから、周辺の他の村々の異教徒たちと共に数え切れないほどの大群を率いて集結し、密かに神の聖堂に奇襲を仕掛け、キリスト教の牧者である聖オートノムを殺害する準備を整え、その計画を実行に移した。

神聖な聖体礼儀が行われている最中、大勢の異教徒たちが教会に襲いかかった。その中には武器を手にしている者もいれば、棒や石を手にしている者もいた。彼らは教会にいたすべてのキリスト教徒を追い出し、聖オートノムを非人道的に殺害した。彼らは祭壇の中で彼を拷問し、その結果、祭壇全体が彼の聖なる血で染まりきった。　かくして、血なき犠牲を捧げつつ、聖人は自ら、天の祭壇へと血塗られた犠牲として捧げられたのである[6221]。

聖オートノムを殺害した後、異教徒たちは彼に無数の石を投げつけ、それによって彼を殺した。自分たちの神々への冒涜に対してキリスト教徒に復讐を果たしたことを祝って祝宴を催した後、彼らは皆、散っていった。　聖人は殺害されたまま横たわっていた――その時、教会には大きな動揺が広がり、信者たちは、彼らの父であり良き牧者である聖人が殺害されたことを嘆き、慰めようのない

[6219] エウクシノス海、あるいはポントス――黒海の古代の名称である。伝承によれば、かつては嵐の多さから「アクシノス（不親切な）」と呼ばれていたが、7世紀以降、その沿岸にギリシャの植民都市が次々と築かれるようになると、「エウクシノス（親切な）」と呼ばれるようになった。

[6220] アジアは、小アジアの西部を包含するローマの属州であり、別名「プロコンスル管轄のアジア」とも呼ばれた。

[6221] 殉教者オートノムの死は、ディオクレティアヌスの迫害の直後、312年頃に起こった。

泣き声を上げた。ある女執事マリアという名の女性が、聖殉教者の聖なる遺体を受け取り、敬虔な心をもって埋葬した。

聖オートノムの埋葬から長い年月が経ち、コンスタンティヌス大帝が即位した頃、セウィリアンという名の貴族が、皇帝の命によりアレクサンドリアへ派遣された。彼は荒れた海を恐れて、海路ではなく、海岸沿いの陸路を旅した。　神の御導きにより、彼らは聖殉教者オートノムの遺体が横たわっていた場所のそばを通ることになった。すると突然、馬たちが立ち止まり、どうしても先へ進むことができなくなった。　鞭でどれだけ打っても、一頭たりともその場から動くことはできなかった。積んでいた荷物を軽くしてみたが、それでも道を進むことはできなかった。まるで目に見えない手が馬たちを留めているかのようであり、セウィリアンは大きな困惑に陥った。

セウィリアヌスと共に、神の奥義を見通す賜物を持つある敬虔な男が同行していた。彼はセウィリアヌスにこう言った。

「この場所に、ここに遺体が埋葬されているあの殉教者のために教会を建てるべきだ。もしあなたがそうすることを誓うなら、あなたの馬たちがすぐに先へ進んでいくのを見ることになるだろう。」

セウィリアヌスは喜んでそうすることを約束すると、彼の馬たちは確かにその直後に動き出し、素早く走り出した。セウィリアヌスは、アレクサンドリアから戻るまでに、その場所に聖殉教者を称える小さな礼拝堂を建て、帰国後はその棺の上に美しい教会を建立した。

それから何年も経った後、ある司祭が、この教会の地下に聖オートノムの聖遺骨が眠っていることを知らずに、老朽化を理由に教会を取り壊し、海の近くにある別の場所に新しい教会を建てた[6222]。聖人の遺骸が地中に眠っていたその場所は、ビザンツ帝国の皇帝ジノンの死[6223]に至るまでの60年間、荒れ果てたままだった。そして、地底に隠されていたその貴重な宝物について、誰も知る者はいなかった。　当時、ヨハネスという名の皇帝の護衛の一人が、ある皇帝の命令を遂行するために、前述の地域――ソレオスとリムネ――に滞在していた。　ある日、彼は狩りに出かけた。すると、かつて聖人の遺骨の上に教会が建っていたまさにその場所で、一匹のウサギを見かけ、弓を引き、矢を放ってそれを仕留めた。他にも多くの獣を仕留めた後、彼は家路についた。　ところがその夜、彼がすでに寝台で眠りについていたとき、聖殉教者オートノムが夢の中に現れ、前日に彼がウサギを射殺したまさにその場所に教会を建てるよう命じた。　ヨハネは目を覚ますと、命じられたことを果たすために全力を尽くすことを決意し、間もなく聖殉教者オートノムの名を冠した素晴らしい教会を建立した。そして、その聖遺骨を地中から完全な状態で、全く朽ちていないまま発見し、そこから多くの奇跡が起こり、多くの病人がここで癒やされた。

聖オートノムの遺骸の発見そのものについて、至福のシメオン・メタフラスト[6224]は次のように述べている。

「人間の性質に打ち勝つ、称賛に値する修行者を見て、私は神を賛美した。そして、ある時、聖殉教者オートノムの棺に目を凝らしてみると、その聖遺物が死の力に打ち勝って残っているのを目にした。　三日で生き物の全身を破壊すると自慢する死でさえ、これほど長い年月を経ても、この栄光ある男の髪の毛一本すら滅ぼすことはできなかった。彼の頭と髪は無傷で、顔はそのまま、肌は丈夫であり、まつげの一本も朽ちてはいなかった。ただ、彼の目だけが閉じられていた。　そして、私

[6222] それは430年頃のことでしたが、聖オートノムの朽ちない聖遺骨が発見されたのは、それから60年後のことでした。

[6223] ビザンツ帝国の皇帝ジノンは、474年から491年まで在位した。

[6224] シメオン・メタフラストは、10世紀の著名な教会作家（940年没）であり、『聖人伝』の編纂者・収集者である。この分野における彼の著作は、後に聖ディミトリイ・ロストフスキーの『チェティイ・ミネイ』の主要な出典となった。　メタフラストはここで、聖オートノムの死から200年後に生きた、自らをユスティヌス皇帝（518–527年）の同時代人であると称する別の人物の証言を繰り返している。

が彼を見つめていると、死は彼にただ沈黙を強いただけであり、彼の全身とすべての構成要素はそのまま保たれているように思えた。頭からは何も落ちず、体の他の部分からも何も分離していなかった。　このように、主は、聖なる御体をもって御自身を賛美する者たちを栄光に包まれる。今、常に、そして世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝は主にある。アーメン。

ニコミディアの司教、聖殉教者コルヌートの記念日

記念日：9月12日

聖殉教者コルヌートは、ニコメディア近郊のサタラ（サルサラ、スルサナ）という村に住んでいた。彼はキリストの御名を熱心に告白する者であった。　キリスト教徒への迫害の際、イコニウムの[6225] の総督ペレンニウスがその地へ派遣された。多くのキリスト教徒が彼の迫害から逃れて隠れ家に身を隠した中、すでに高齢に達していた聖コルヌートは、自ら彼の前に現れた。　総督から「あなたは誰か」と問われると、老聖人は勇敢に「私はキリスト教徒です」と答え、キリストこそが真の神であり、万物の創造主であることを公然と 告白し、偶像崇拝の虚偽を糾弾し始めた。 彼の足は細い縄で縛られ、街の通りを引きずり回された。縄で切り裂かれた足からは、血が小川のように流れ出た。苦しみの中にあっても、この聖殉教者は神に感謝を捧げた。その後、さらなる拷問を受けた後、彼は剣で斬り殺された[6226] 。

聖殉教者ユリアンの記念日

記念日：9月12日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世下、ガラティア地方の総督として[6227] アントニヌスが任命された。ある山中の洞窟にユリアヌスが他の40人のキリスト教徒と共に潜伏しており、そこでキリスト教の礼拝を行っているという報告が彼のもとに届いた。　総督の命により、彼は捕らえられ、共にいた他のキリスト教徒たちを密告するよう説得されたが、彼はそれに応じなかった。裁判に臨む直前、聖ユリアヌスは洞窟に残った同志たちの方を向き、力強い声でこう叫んだ。

「さあ、私はすでに裁判にかけられ、あなた方を裏切ることなく、キリストのために殉教の業へと向かう！しかし、あなた方も私の業に続くよう、熱心に努めてほしい！」

聖ユリアンが総督アントニヌスの前に出頭すると、総督は彼にこう言った。

「神々の前に進み出て、彼らに犠牲を捧げよ。」

聖殉教者は大胆にこう答えた。

「あなたの助言は私にとって受け入れがたい。私たちキリスト教徒にとって、私たちが育まれてきたその聖なる信仰のために死ぬこと以上に、これ以上の運命はないのだ。」

そこで統治者は、鉄の床を赤熱させるよう命じ、殉教者の衣服を脱がせてその上に横たえさせた。その場所に連れて行かれた聖なる殉教者は、十字の印を切ってから、赤熱した床に上がった。すると、主の天使が現れ、炎を冷やし、聖なる殉教者を無傷のまま守った。

「お前は誰だ？」とアントニンは殉教者に尋ねた。「どうしてそんなに簡単に火を消せたのだ？」

[6225] イコニアは、小アジア内陸部、タウロス山麓の高く肥沃な平原に位置する都市である。かつてはリカオニアの主要都市であったが、現在はコニアと呼ばれ、小アジアのトルコ領カラマニア地方の主要都市となっている。

[6226] 聖コルヌートの殉教は、ローマ皇帝デキウス（249–251年）の治世中に起こった。

[6227] ガラティアは、小アジアにある、山岳地帯ではあるが肥沃な小規模な州で、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置している。聖ユリアヌスの苦難と殉教は、非常に古い都市アンキラ（現在のアンカラ）で起こった。

「私は神の僕です。私の名はユリアンです」と、聖なる殉教者は答えた。イゲモンは再び彼に尋ねた。

「お前の両親は誰だ？」

殉教者はこう答えた。

「母は年老いた女性で、父は主のもとへ旅立ちました。」

アントニンは彼の母を連れてくるよう命じ、彼女を怒りの眼差しで見つめながら言った。

「その邪悪な息子を説得して、女神に香を捧げさせなさい。もしそうしなければ、お前の体を辱めものにするぞ。」

聖殉教者の高潔な母は、このイゲモンにこう答えた。

「もし私の意志に反して私の体が汚されたとしても、それは私にとって罪とはみなされないばかりか、永遠の栄光と至福の報いの証となるでしょう。」

老女のこの言葉に恥をかかされたイゲモンは、彼女を釈放するよう命じ、聖ユリアヌスには剣による斬首刑を宣告した。兵士たちと共に処刑場に着くと、聖殉教者は彼らに祈りの時間を求めた。

「主よ、感謝いたします」と彼は祈った。「あなたが私を強め、血を流すその瞬間まで揺るぎない信仰を保てるよう助けてくださったことを。主よ、私の埋葬地から土を採取する者たちに、罪の赦しと情欲からの解放をお与えください。　そして、彼らの畑に、いかなる害虫――イナゴであれ、イモムシであれ、その他何であれ――が現れることがないように。また、彼らは猛禽類の襲撃からも守られますように！そして、私の霊を平安のうちに受け入れてください！」

すると、天から声が聞こえてきた：

「汝の模範であるキリストは、汝に御自身の御国の門を開かれた。その門をくぐり入れよ。汝は御名のゆえに正しく奮闘したからである！」

この声を、洞窟に身を隠していた四十人のキリスト教徒たちも聞いた。彼らは聖殉教者の受難の現場へ向かったが、彼がすでに息を引き取っているのを見つけた。彼らはすべての兵士たちの前で、真の神であるキリストを大声で告白した。すると兵士たちは彼らを縛り上げ、総督のもとに連行し、総督は彼らに首を刎ねるよう命じた[6228]。

9月26日

9月13日（旧暦）

エルサレムのキリスト復活聖堂の修復に関する説教[6229]

9月13日の記念日

本日、私たちはエルサレムにある栄光に満ちた偉大なる聖堂の修復を祝う。それは、ソロモン王がモリヤの山に建てたものではなく、　敬虔なコンスタンティヌス王が、その称賛に値する母ヘレナと共にゴルゴタの丘に、異教の不敬によって穢された聖地を清め、修復して見事に築き上げた聖堂です。

[6228] 聖ユリアヌスと、彼と共に殉教した40人のキリストの殉教者たちの死は、4世紀初頭に起こった。

[6229] この祝日は「復活の予兆」、すなわちいわゆる復活と呼ばれています。 この名称は、これが「光の復活」でも「日曜日」でもないことを示しており、特別な祝日であることを意味する。この日は日曜日ではないが、キリストの復活教会に由来するため、民間の言葉遣いでは「復活」と呼ばれているのである。

我らの主イエス・キリストの自発的な受難と死、その復活および天への昇天の後、我らの救いが成し遂げられたその聖なる場所は、キリストの敵たちによって冒涜され、穢されていた。とりわけ、不敬虔なローマ皇帝ハドリアヌスは、悪魔的な偶像や犠牲によってすべての聖なる場所を穢した。ティトゥスによって荒廃させられたエルサレムの地に[6230] 都市を築き上げた彼は、主の御墓を土と大量の石で埋め尽くすよう命じ、主が十字架につけられたその山には、異教の淫乱の女神ヴィーナスの神殿を建ててその偶像を安置し、主の御墓の上には神ディヤ （ユピテル）の偶像を据えた。かくして、神の子羊が私たちの罪のために父なる神に自らを犠牲として捧げたその場所で、悪魔たちへの不浄な生贄が捧げられ、あらゆる種類の淫らな行いがなされていたのである。 同様に、至聖なる御方が至聖なる処女の胎内から誕生されたベツレヘムにおいても、不敬虔な王はアドニスの偶像を安置し[6231] 、この聖なる場所までもが恥辱的な行いによって穢され、かつてソロモンの神殿があった場所には、異教の神殿を建設した。 彼はその都市自体を、自身の名にちなんでエリヤと名付けた――というのも、彼の名はエリイ・ハドリアヌスであったからである――そして、誰もそれをエルサレムと呼ぶことを敢えてしてはならないと命じた。彼がこれらすべてを行ったのは、イエス・キリストの名に関する記憶そのものを地上から根絶やしにしたいという願望からであった。 彼は、イエス・キリストが数多くの奇跡を行われたこの都市の名称を変更し、主の誕生、磔刑、そして埋葬の地には悪魔の住処を設けた。それはまさに、後世の人類がキリストを完全に忘れ、主が住み、教えを説かれた場所を二度と思い出さないようにするためであった。 しかし、ハドリアヌス自身は命を落とし、栄光の王は再びその聖地を栄光に包まれた。

主は、聖なる信仰の光をもってコンスタンティヌス帝とその母ヘレナを照らし、彼らの心に、聖都エルサレムを再建したいという願いを植え付けられました。それは、荒廃したキリストの御体の神殿が三日間で建てられたその場所でした（ヨハネ2:19, 21; マタイ26:16、27:40；マルコ14:58、15:29）、美しい神の神殿を築き、すべての聖地を悪魔の汚れから清め、聖別するよう願った。このため、敬虔な皇帝は母を多量の金と共にエルサレムへ送り、至聖なるマカリオス総主教[6232] に、教会の整備に全力を尽くすよう書簡を送った。 聖ヘレナは、エルサレムに到着すると、そこにあるすべての異教の神殿を破壊し、偶像を滅ぼし、街全体を異教の汚れから清め、聖別した。 彼女は 、土や石をかき分けて、主の尊い十字架と墓を見つけ出し、その場所に、十字架刑の場所と キリストの埋葬地までもが、一つの建物で囲まれるほど大きな教会をその地に建てた。なぜなら、それらは互いに近接していたからであり、福音書記者ヨハネが次のように記している通りである。*「彼が十字架につけられた場所には園があり、その園にはまだ誰も葬られたことのない新しい墓があった。 ユダヤ人の安息日を迎えるため、その墓が近かったからである」*（ヨハネ19:41–42）。こうして、彼女は一つの教会でゴルゴタと主の聖墓の両方を囲んだのである。 この教会は「マルティリオン」、すなわち「証し」と名付けられた。それはまさにキリストの復活の証しである。なぜなら、その場所でキリストは死に、復活されたからである[6233] 。聖ヘレナは他にも、ベツレヘム、オリーブ山[6234] 、ゲッセマ

[6230] ティトゥス――79年から81年まで在位したローマ皇帝。エルサレムは70年、その父ウェスパシアヌスの治世中にティトゥスによって征服された。

[6231] アドニス――古代ギリシャの神で、冬に死に、春に復活する太陽の化身とされた。彼への崇拝は広く行われ、不道徳な儀式や遊びを伴う盛大な祝祭が催された。

[6232] マカリオス1世は、313年から333年までエルサレム総主教を務めた。

[6233] 聖キリロス・エルサレムは、「マルティリオン」と呼ばれる復活の場所も予見していた。なぜなら、ゴルゴタと復活のこの場所が、他の教会のように「教会」と呼ばれず、「マルティリオン」と呼ばれるのは、どのような理由によるのだろうか。おそらく、預言者の言葉、「わたしの復活の日に、証し（マルティリオン）として」に基づいているのだろう。

[6234] エレオン山、あるいはオリーブ山は、エルサレムの東に位置するユダヤの山の一つであり、ケドロン渓谷によってエルサレムから隔てられている。その名は、山に数多く生えていたオリーブの木に由来する。この山は、シオン山やモリヤ

ネ[6235]、そして多くの聖地に教会を建設し、それらを多彩かつ豪華に装飾した。しかし、主の聖墳墓の上にある教会は、それらすべての中で最も美しく、最も壮大なものでした。しかし、その建設の完成をヘレナ皇后自身は目にすることはありませんでした。息子の元へ戻った後、教会がまだ完成していないうちに、彼女は主のもとへ召されました[6236]。というのも、これほど巨大で素晴らしい建物を短期間で再建することは不可能であり、その完成には10年を要したからです。

教会が完全に整うと、敬虔な王は、神殿の奉献式のために、あらゆる国々の司教たちをエルサレムに集まるよう命じた。すると、ビフィニア、トラキア、キリキア、カッパドキア、シリア、メソポタミア、フェニキア、アラビア、パレスチナ、エジプト、そしてアフリカのその他の国々から、さらにはペルシアからも一人の司教が参集した。また、全世界から数え切れないほどの人々が集まったため、エルサレムの市街地には全員を収容しきれないほどであった。復活教会は、コンスタンティヌス帝の治世30年目にあたる335年9月13日に奉献され、その際、エルサレム全市も一新された。この祝典に集まった聖なる父たちは、旧約聖書の規定に倣い、神殿の刷新の日を永遠に祝うことを定めた。というのも、旧約聖書において、ユダ・マカベウスが、シリアの偶像崇拝による穢れから至聖所を清め、その再建を永遠に祝うことを定めた（マカバイ記上4:36–59）ように、福音書にも次のように記されているからである。*「そのとき、エルサレムでは神殿の再建の祭りが行われた」*（ヨハネ10:22）；同様に、新約聖書においても、使徒に等しいコンスタンティヌス帝は、いわば第二の至聖所を建設し、聖なる教父たちと共に、全宇宙において、すべての教会の母である偉大なるエルサレム教会の「刷新」を祝うことを定めました。

さて、今、私たちは、その「刷新」を祝おう。キリスト・神に感謝しつつ。キリストは、ご自身の受難と復活によって、すべての被造物を刷新し、聖なる御教会を偶像の汚れから清められたのである。私たち自身も、生ける神の宮として、古い人を脱ぎ捨て、新しい人をまとい、私たちの中に根付いた悪から身を清め、新しい敬虔な生活を送り始め、善行を積んでいきましょう。そうすれば——人々が人の手によって造られた神殿の刷新を祝うのと同様に——天使たちは、私たちの霊的な神殿の刷新を祝うでしょう；なぜなら、悔い改めによって新たにされるすべての罪人について、天では天使たちが喜び、彼らと共に、罪人の死を望まない天使たちの創造主ご自身——私たちの主キリスト——もまた、その人を喜び祝われるからである。主キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン。

トロパリオ、第4調：

主よ、あなたは天の蒼穹の栄光と同様に、地上のあなたの栄光の聖なる住まいも明らかにされました。これを永遠に堅く保たれ、その中に、すべての者の命であり復活である聖母マリアを通して、絶えずあなたに捧げられる私たちの祈りをお受けください。

山など、周辺の他の山々よりも高く、その頂上からは四方へ素晴らしい景色が広がっている。イエス・キリストは、復活から40日目に、オリーブ山の頂上から天に昇られた。ここにヘレナ皇后によって建てられた壮麗な神殿は、後にトルコ人によってモスクへと改築された。

[6235] ゲッセマネは、ケドル川を越えた先、オリーブ山の麓にある村、あるいは場所であり、そこでイエスはユダに裏切られた（マタイ26:36、ヨハネ18:1–3）。ゲッセマネとは、ロシア語で「オリーブの木のある場所」、あるいは「オリーブの実から果汁を搾り出すための搾り機」を意味する。ゲッセマネの園は、現在もなお、オリーブ山の麓、その南側にあるとされている。園内には、ゴルゴタの受難に先立って主がゲッセマネの祈りを捧げた場所や、聖母マリアの埋葬用の洞窟（現在は彼女の棺が安置されている）も示されている。

[6236] ヘレナ皇后の死は327年に訪れました。

コンダク、第4調：

天の多き光に満ちた教会が現れ、すべての信徒を照らし出しています。その中に立つ私たちは呼び求めます。「主よ、この家を堅く立ててください。」

聖殉教者コルニリウス百人隊長の生涯

記念日：9月13日

我らの主イエス・キリストの受難の後まもなく、また主の復活と天への昇天の後、パレスチナのケサレアに、イタリアのフラキア地方出身のコルニリウスという名の百人隊長が住み着いた[6237]。彼は不信仰の闇の中にいたとはいえ、すでに光の行いをなし、ギリシャ人でありながらも、まるでキリスト教徒のようであった。キリストを知ってはいなかったが、慈善の行いによって無意識のうちにキリストを崇めていた。堕落した世の中に生きながらも、彼は徳高かった。聖ルカが『使徒言行録』で彼について次のように証言しているように：　*「カイサリアには、コルニリウスという名の男がいた。彼は『イタリア連隊』と呼ばれる部隊の百人隊長であった」*[6238]（使徒行伝10:1）。神は彼のこうした美徳を見捨てず、信仰の光で彼を照らし、真理への認識へと導くことをお許しになった。それは、彼の善行が不信仰の闇に覆われることのないようにするためであった。

ある日、自宅で神に祈っていたこの敬虔な男は、神の御使いを見ました。その御使いは、彼の祈りと施しが神に受け入れられたことを告げました。 天使は彼に、ヨッピへ使者を送り（[6239]）、シモン、すなわちペトロを招き、その者が言うことをすべて行うよう命じた。彼は直ちに、ペトロを呼ぶよう懇願して使者を送った。コルネリウスが遣わした使者たちがヨッピへ向かっている間、ペトロは午後六時（[6240]）に家の二階に上がり、祈りを捧げていた。 その時、ペトロは空腹を感じていたが、そこに幻が現れ、割礼を受けていない異邦人のところへ行くことを忌み嫌ってはならないと告げた。というのも、ユダヤ人は異邦人と交わりを持ちませんでしたし、彼らを忌み嫌っていたからである。ペトロに現れた幻は、次のようなものであった。　天から三度、四隅を縛られた大きな布のような器が降りてきて、声がペトロに命じて、その器の中にいた動物、獣、爬虫類、鳥を屠って食べるようにと告げた。ペトロがそれを拒み、「私はこれまで不浄なものを食べたことがありません」と言ったとき、天からの声が再び彼にこう告げた。

「神が清めたものを、汚れたものとして認めてはならない。」

この幻は、コルニリウスや他の異邦人たちの回心のしるしであった。ペトロの飢えは、預言者アモスが記述した飢え――*「パンを渇くことではなく、水を渇くことではなく、主の御言葉を聞くことを渇くことである」*[6241]（アモス8:11）――を象徴していた。 コルニリウスの家やすべての異邦人の間には、まさにそのような飢えがあった。ペトロが肉体のために必要なパンを渇望したように、彼らもまた、魂のためのパンを渇望していたのである。四隅を縛られた器は、四人の福音書記者によっ

6237 マケドニアの北東に位置するローマ帝国の領土。現在、フラキアはルーマニアとして知られている。

6238 ケサリア――地中海に面したパレスチナの主要都市で、ローマの総督が駐在していた。スピラ・イタリカ――生粋のローマ人で構成された軍団。

6239 イオッピア（ヘブライ語から訳すと「美しい、高台にある場所」という意味）――フェニキア最古の都市であり、約束の地が征服された後、ダナンの部族に割り当てられた。地中海に面した高い丘の上に位置し、南には花咲くサロン平野が広がり、エルサレムから12時間の距離にある。　この都市は、いつの時代も極めて重要な港湾・商業都市であり、現在はヤッファと呼ばれている。

6240 ユダヤ人たちは通常、家の屋根の上にある上階の部屋（私たちのメゾニンに相当する）に退いて祈りを捧げていた。一方、ペトロは屋根の上、青空の下にとどまっていた。第六時は、私たちの正午に相当する。

6241 すなわち、神と救いに関する真の教えを聞きたいという願いである。

て信仰において確固たるものとなったキリストの教会を象徴していた。　その器の中にいた様々な不浄な動物、獣、爬虫類、鳥類は、異教徒たちを象徴していた。彼らは、その卑しい地上の欲望において四足動物に似ており、心の目でただ地ばかりを見つめ、天上のことについて　な思いを抱くこともなく、地上のものより高いものを求めることもできなかった。　その獰猛さにおいては獣であり、魂にとって有害な不義においては毒を持つ爬虫類であり、高慢な傲慢さにおいては高く舞い上がる鳥に似ていた。　彼らには、それらを屠り、食べるよう命じられた――すなわち、神の言葉という鋭い剣によって、古来の異教的な情欲や獣のような習性を滅ぼし、洗礼によって清められた彼らの魂と体を、*「生きた、聖なる、神に喜ばれる供え物」*（ローマ12:1）とするためであった。器が三度沈められたことは、洗礼の三度の浸礼を象徴していた。そして、天からの声が彼らが神によって清められたと告げたとき、それはキリストが、イスラエル人だけでなく異邦人のためにも、罪の汚れを洗い流す御血を流されたことを意味していた。

ペトロがこの幻について考えを巡らせ、戸惑っていたとき、コルネリウスが遣わした使者たちが彼の家に来て、彼を尋ねた。神の御霊は、最初の異邦人をキリストの教会に迎え入れるために、ためらうことなく彼らと共にいくよう彼に命じた。彼の後に、他の異邦人たちもまたキリストのもとへ続くはずだった。　ペトロが家に入ると、コルネリウスは親族や友人たちに囲まれ、彼を丁重にもてなして迎え、ペトロの足元にひれ伏して礼をした。するとペトロは彼を引き起こし、こう言った。

「ユダヤ人が異邦人の家に入り、彼らと交わることは不適切であることは、あなたもご存知でしょう。しかし、神は私に、いかなる人間も不浄であるとか汚れているとか呼んではならないと啓示してくださいました。ですから、私はためらうことなくここへ参りました。さて、あなたがたはなぜ私をここに招いたのですか？」

コルネリウスは、天使を見たとその時に聞いたことを、細部に至るまでペトロに語り、救いを得る方法を教えてほしいと頼んだ。　ペトロは口を開き、イエス・キリストについて説き始めた。すなわち、キリストは受肉した神であり、地上の人々と共に暮らし、彼らを教え、天の御国へと導く道を示し、多くのしるしと奇跡を行い、あらゆる病を癒やし、御言葉によって死者をよみがえらせたことである。　さらにペトロは、キリストが自発的に苦しみを受け、死なれた後、人間を苦しみから解放し、死からよみがえらせて永遠の命を授けるために復活されたこと、また、キリストが生者と死者を裁かれること、すべての預言者がキリストについて証ししていること、そして、キリストの御名を信じる者は誰でも罪の赦しを受けることを語った。　ペトロがこのように語っているとき、聖霊は彼の言葉を聞き手の心に刻み込み、彼らを信仰へと導かれた。こうしてコルネリウスは家族全員とともに洗礼を受けた。彼は異邦人の中で初めて、私たちの主イエス・キリストを信じた者であり、洗礼を受けた後、すべてを捨ててペトロに従った。ペトロは彼を司教に任命した。　ペトロや他の宣教者たちと共に様々な国々を巡りながら、彼は熱心に働き、キリストについて宣教した。ペトロがティモテオとコルニリウスと共にエフェソの町にいたとき、スケプシア[6242] の町で偶像崇拝が特に盛んであることが彼らの耳に入り、彼らは、自分たちのうち誰がそこへ行って宣教すべきか話し合った。　彼らはくじを引いたところ、コルニリウスに当たった。彼は神に助けを求め、急いでその町へ向かった。そこにはディミトリウスという名の領主が住んでいた。彼はギリシャの知恵を学んだ哲学者であり、キリスト教の信仰を極めて憎み、異教の神々、とりわけアポロとディオを崇拝していた。　コルニリウスが街に到着したことを知ると、公爵は直ちに彼を呼びつけ、「どこから、なぜここに来たのか」と尋ねた。

コルニリウスはこう答えた。

「私は生ける神の僕であり、あなたを無知という最も深い闇から引き出し、真理の光へと導き、あなたの魂に純粋な知恵の光を注ぐために遣わされた者として、ここへ参りました。」

[6242] 小アジア西部のミシア州にある都市。

しかし、その公爵はコルニリウスの言葉の意味を全く理解できず、怒りを露わにして激しく言った。

「私は一つのことを尋ねているのに、お前は別のことを話している。神々に誓って、もし私の質問の一つひとつに答えないなら、お前の老齢を憐れむことも、お前の白髪を恥じることもない。さあ、答えよ。お前は誰に仕えているのか、そしてなぜここに来たのか？」

コルニリウスはこう答えた。

「私の身分を知りたいというのなら、私は百人隊長であることを知っておいてほしい。　あなたやあなたの妻、そしてこの地方のすべての住民が大きな迷いの中に陥っているという話を聞いたので、悪魔の誘惑からあなた方を救い出し、真の道へと導き、天と地、そしてそこに存在するすべてのものを創造された唯一の生ける神と和解させるために、ここへ来たのだ。

これに対し、ディミトリオスは言った。

「お前は老いに苛まれているのがわかる。その高齢を考慮して、お前を憐れんでやる。偽りを語るのをやめ、我らの神々の前に進み出て、彼らに拝礼せよ。もしこれを拒むならば、私がお前を激しい拷問にかけることを知っておけ。私の神々以外のいかなる神も、私の手からお前を救い出すことはできない。」

「わが神よ」とコルネリウスは答えた。「神は、あらゆる悪から私を無傷で守り、人の手から救い出すだけでなく、あなたの神々を滅ぼし、その偶像を粉々に砕き、それらにむなしく頼るあなたを、神の御心を知るように導いてくださるのだ！」　しかし、私は決して悪魔や、その魂のない像には拝むことはない。なぜなら、*『天と地を造らなかった神々は、滅び去る』*と書かれているからだ（エレミヤ10:11）。　また、*「あなたの神、主を礼拝し、主のみに仕えなさい」*（マタイ4:10）ともある。私は、あなたがたを悔い改めへと導き、「*悪魔の罠から解き放たれるように*」（2テモテ2:26）するために、ここに来たのである。

すると、その君主は言った。

「私は自分の神々にかけて誓った。もしあなたが神々に犠牲を捧げなければ、容赦せず、厳しい拷問にかけるつもりだ。」

「どの神々に犠牲を捧げよと命じるのですか？」とコルニリウスは尋ねた。

すると、王子は言った。

「アポロンとディオに犠牲を捧げよ。」

するとコルニリウスは言った。

「その神々を私に見せてくれ。」

公爵は、彼が礼拝しようとしているのだと思い、喜んで彼をディウスの神殿へと案内した。

その後ろには、コルニリウスが偶像に礼拝する様子を見ようと、民衆が続いていた。　神殿に着くと、皆が中に入った――領主とコルニリウス、そしてその他の人々。その中には、エヴァンフィアという名の領主の妻や、父の名にちなんでディミトリアンと名付けられた息子もいた。偶像の神殿に入ると、コルニリウスは東を向いた[6243]、そして膝を地面につけて、次のように祈った。

「神よ、大地を揺るがし、山々を海の深淵へと変える方よ！　あなたはダニエルの手によってバアルを打ち砕き、大蛇を殺し、獅子の口を塞いで、あなたのしもべを無傷で守られました（ダニエル書 14）。今こそ、これらの偶像を打ち倒し、人々にあなたの強大な力を知らしめてください！

このように祈り終えると、聖人は神殿から出て行った。彼と共に、ディミトリイ公と、そこに集まっていた民衆全員が外へ出た。一方、エヴァンフィアとディミトリアンは神殿の中に残った。すると、突然地震が起こり、偶像が安置された神殿は崩れ落ち、異教徒たちが頼りにしていた神々は

[6243] 古代のキリスト教徒たちは、太陽が昇る東の方角に向かって祈りを捧げました。太陽は「真理の太陽」であるキリストの象徴とされていたからです。

粉々に砕け散った。しかし、公爵の妻と息子は、崩れ落ちた壁に阻まれて外に出られなくなってしまった。民衆は皆、神殿の崩壊を見て恐怖に震えたが、公爵は妻と息子が壁の下敷きになっていることを知らなかった。

生ける神の力を喜びながら、コルニリウスは公にこう言った。

「公よ、今やあなたの偉大なる神々はどこにいるのか？」

すると、公爵は怒りに満ちてこう言った。

「魔術師よ、どのような呪術を用いて神殿と我らの神々を崩壊させたのか、教えてくれ。」

そして、彼は側近たちと相談し、どのような拷問でコルニリウスを滅ぼすべきか考え始めた。

日はすでに夕暮れに差し掛かり、太陽が沈み始めていたため、コルニリウスを拷問する時間は残されていなかった。公爵は彼の手足を縛り、その状態で地下牢に吊るし、一晩中ぶら下がったまま朝まで苦しませるよう命じた。そして朝になれば、公爵は彼を残酷に拷問し、殺害するつもりだった。　聖人が牢獄に連行され、拷問者の命令により手足を縛られたまま吊るされたとき、タレフォンという名の公爵の奴隷の一人が駆け寄って来て、こう言った。

「ご主人様！　私の女主人と、あなたの唯一の息子が、地震で崩れた神殿の中で亡くなりました。」

ディミトリイ公はこれを聞くと、衣服を引き裂き[6244]、苦々しく泣き崩れた。町の長老たちも彼と共に泣き、またある者たちは彼を慰めた。しかし、妻と息子の突然の死の知らせを聞き、彼が心の中で感じたような深い悲しみを、いったい誰が慰めることができようか。

そこで、公は側近たちにこう言った。

「行け、倒れた神殿の瓦礫をかき分け、私の最愛の妻と愛しい息子の遺骨を見つけ出し、私のところへ持って来い。」

そう言うと、彼は再び苦々しく泣き崩れた。その時、祭司長バルバトが急いで彼の元へ駆けつけ、こう言った。

「私は、崩れ落ちた壁の間から、あなたの妻と息子の声が『キリスト教の神は偉大なり。神は御自分のしもべコルニリウスを通して、私たちを恐ろしい死から生かしてくださった』と叫んでいるのを耳にしました。　どうかこの聖なる人に、私たちをここから連れ出して、ここで死なずに済むよう頼んでください。私たちは、その神の驚くべき奇跡を目の当たりにし、天使たちが『天には栄光、地には平和、人々に神の御心』と歌っている声を聞いているのです（ルカ2:14）。

バルバタからこれを聞いた公爵は、側近全員を連れて急いで神のしもべのいる牢屋へと駆けつけ、そこで彼が自由に歩き回っているのを見つけた。主の天使が彼の束縛を解いてくれたのである。そして公爵はコルニリウスの足元にひれ伏し、こう言った。

「コルニリウスよ、私の妻と息子を倒壊した神殿の中に守ってくださっているあなたの神は偉大です。どうか、至高の神のしもべよ、そこへ行って彼らを連れ出してください。私と私の側近たちは皆、あなたが宣べ伝えている十字架につけられたキリストを信じています。」

聖コルネリウスは彼らと共に倒れた偶像の神殿へと向かい、天を仰ぎ見てこう言った。

「主なる力ある神よ、*『主が地を見下ろされると、地は震える』*（詩編103:32）とあります。御顔の前では山々が溶け、深淵が干上がるのです！　主よ、囚人たちの祈りを聞き入れ、瓦礫の中からエヴァンフィアを救い出し、その息子から御顔を背けず、御名のゆえに彼らの声に耳を傾けてください。

彼がこのように祈っていると、突然、崩れ落ちた壁の間にエヴァンフィアとその息子が閉じ込められていた場所が開き、二人は無傷でそこから出てきて、神を賛美した。そこにいた者たち、そしてこの輝かしい奇跡を目撃した者たちは皆、こう叫んだ：

[6244] 古代の人々は、悲しみのしるしとして衣服を引き裂いた。

「キリスト教の神は偉大なり！」

ディミトリオスは妻、息子、そして家族全員と共に洗礼を受け、彼と共に二百七十七人の市民も洗礼を受けた。聖コルネリウスはその町でかなり長い間暮らし、人々の心から不信仰という茨を根絶し、敬虔の種を蒔き続けた。　やがて彼は町全体をキリストへと改宗させ、エヴノミウスという名の尊敬される一人の男性を、その地の長老に任命した。彼は高齢に達し、あらかじめ知らされていた死が近づくと、主のもとへの旅路に備えて熱心に祈りを捧げた。　異教からキリスト教へと改宗させた人々をすべて自分のもとに集め、信仰と愛に留まり、あらゆる美徳を実践し、主の戒めを忠実に守るよう彼らを教え導いた。彼らに多くの教えを授けた後、彼は天からの声を聞いた。

「コルネリウスよ。わたしのもとに来なさい。あなたには*『義の冠』*が用意されているからである」（IIテモテ4:8）。

これを聞いたコルネリウスは、直ちに祈りを捧げ、ひざまずいてこう言いました。

「主なる私たちの神よ！あなたは私に信仰を守り、偉業を成し遂げ、敵に打ち勝つことを許してくださいました。すべてに感謝いたします！　しかし、主よ、お願いいたします。あなたの聖なる高みから、あなたのしもべたちを見下ろし、彼らに憐れみをお与えください。彼らを信仰に堅く立たせ、善行を強め、あなたの聖なる戒めを果たすための助けをお与えください。そうして、彼らが今、そして世々限りなく、あなたの至聖なる御名を絶えず賛美することができますように。

そして、皆が「アーメン」と言ったとき、彼は喜びをもって、天に彼を招き寄せられた主の御手に、その霊を委ねた。

一方、ディミトリイ公爵は、妻のエヴァンフィア、息子のディミトリアン[6245]　、司祭エヴノミイ、そしてすべての信者たちと共に、彼らの父であり師である彼の死を長く嘆き悲しんだ。ろうそくに火を灯し、葬送の歌を歌った後、彼らは彼の遺体を、倒壊したディエフ神殿の近くで、栄誉をもって埋葬した。　そして毎日、信者たちは彼の墓を訪れて乳香を焚き、祈りを捧げた。また、彼の棺からは病める者たちに多くの癒しがもたらされた。

長い年月が流れ、これらの出来事を目撃した同時代の人々は皆、主のもとへ旅立った。後世の人々には、聖コルネリウスの聖遺骨が埋葬された場所がどこであるか分からなくなってしまった。というのも、彼の墓の周囲には茨や茂みが生い茂り、そこに秘められた貴重な　の宝物について知る者は誰もいなかったからである。 ある日、トロアデの都市[6246]の司教シルアヌスがたまたまその場所を訪れた際、聖コルニリウスが夜、夢の中に現れてこう言った。

「私は長い間ここに住んでいるが、誰も私を訪ねてきてはくれない。」

司教は眠りから覚めると、見た光景に驚き、誰が自分に現れたのかと首をかしげた。次の夜、聖人は再び彼の前に現れ、こう言った。

「私は百人隊長コルネリウスだ。私の聖遺骨は、かつてディヤの神殿が立っていた場所の近くに生えている茨の中に眠っている。ディミトリウスに属していた場所の近くに、私のために教会を建ててほしい。その場所はパンドキウム[6247]　と呼ばれており、そこには多くの信徒や聖なる兄弟たちの遺体が埋葬されている。」

翌朝、司教はその幻視について聖職者たちに語り、皆と共に、幻視の中で聖人が示したあの茨の茂みへと向かった。　祈りを捧げた後、彼らは地面を掘り始め、まもなく聖コルニリウスの聖遺骨が完全かつ朽ちることなく収められた聖櫃を発見した。そこから並外れた芳香が漂っており、皆、このような偉大な宝物が見つかったことを大いに喜んだ。　しかし、司教は、聖人が彼に建設を命じた教会について、途方に暮れていた。なぜなら、教会を建てるのに必要なだけの資金が彼にはなかったからである。しかし、この件においても、聖コルニリウスは司教を助けるのを遅らせなかった。　そ

[6245] 3人ともキリストのために殉教し、聖人の列に加えられており、その記念日は9月11日である。

[6246] トロアダ――小アジア西部のミシア州にある古代都市トロイの地域。トロアダの司教シルアヌスは425年に死去した。

[6247] ギリシャ語で「客間」を意味する名称。

の翌夜、聖人はエウゲニウスという敬虔で非常に裕福な人物の前に現れ、教会を建てるのに必要なだけの金をシルアヌス司教に与えるよう命じた。　エウゲニウスはその幻視について司教に伝え、必要なものをすべて提供した。その後、聖堂は建設され、あらゆる装飾で美しく飾られた。尊い聖遺骨を茨の茂みから新しく建てられた教会へ移す時が来ると、多くの信者たちが、シルアヌス司教やエウゲニウスと共に、手に灯したろうそくを持って集まった。　司教と聖職者たちが「三聖歌」を歌い始めた途端、聖櫃は突然、自ら浮き上がり、目に見えない手によって教会へと運ばれていった。民衆のうち、誰もそれに触れることを敢えてしなかった。聖櫃が自ら動いているのを見て、皆は驚き、畏怖の念を抱き、口を揃えて叫んだ。

「聖なる、聖なる、聖なる、サバオットの主よ。御自分のしもべコルニリウスを通して、御自身の力と奇跡を私たちに示してくださる方よ！」

その時、その場に多くの不信仰者も居合わせたが、彼らはこの奇跡を見て、私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。そして、皆が教会にたどり着き中に入ると、聖遺物箱がどのように進み、どこに止まるのかを見ようと、両側に並んだ。聖遺物箱はまっすぐ進み、祭壇の右側に止まった。　司教はそれを祭壇の中に安置しようとしたが、聖遺物箱が自ら止まったその場所から、誰もそれを動かすことはできなかった。そして、その当時もその後も、神に愛されたこの聖人の聖なる奇跡の聖遺物から、多くの奇跡が起こった。　シルアヌス司教の死後、その地位をフィロストルギウスが引き継ぎ、彼はエンクラティアという名のイコン画家に対し、教会全体を聖なる絵で彩り、とりわけ聖コルニリウスのイコンの制作に最優先で取り組むよう説得した。　しかし、そのイコン画家は聖コルニリウスのイコンを描き始めたものの、どうしてもその顔をうまく描くことができず、聖人の顔を十分に威厳ある姿で描き切れないと感じ、イコンに描いたものを何度か洗い流してしまった。　エンクラティオスは激怒し、聖人に対する冒涜的な言葉を吐き捨て、そのイコンを放置した。そして、教会の壁に何か他のものを描こうと梯子に登ったが、足を滑らせて転落し、激しく打ち付けて、まるで死人のように横たわってしまった。　教会にいた人々は彼を運び出し、家まで運び、かろうじて息があるだけで一言も発することのできない彼を寝台に寝かせた。彼の口の周りには蛆が見え、その中には口の中へ這い入るものもあれば、口から這い出るものもあった。これは、彼が聖人に対する冒涜的な言葉を口にするという不遜を犯したことに対する罰であった。　しかし、主ご自身も、その聖なる僕たちも、怒りを最後まで抱き続けるわけではなく、永遠に憤り続けるわけでもない。というのも、翌朝、崩れた壁の中からディミトリイの妻と息子を生き延びさせて救い出した人物が、エンクラティオスの前に現れ、彼の手を取って、まるで眠りから覚ますかのように寝台から起こすと、たちまち姿を消したからである。　エンクラティオスは、自分が健康になったのを感じると、急いで聖人の教会へ駆けつけ、コルニリウスの癒しの聖遺骨が安置されている尊い聖櫃にひれ伏し、泣きながら自分の過ちを詫び、死の淵に立っていた自分を憐れみ、病から癒やしてくれた聖人に感謝した。　そのイコン画家は、聖人の顕現　によって二重の恩恵を受けた。すなわち、病から癒やされ、聖人の御姿を知ることができたのである。その後、彼は顕現で見た通りの姿で聖コルニリウスのイコンを描き、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト・神を賛美した。アーメン。

聖殉教者ゴルディアヌス、マクロヴィウス、イリアス、ゾティクス、ルキアヌス、ヴァレリアヌスの記念日

聖殉教者ゴルディアヌス、マクロヴィウス、イリアス、ゾティクス、ルキアヌス、ヴァレリアヌスの記念日

記念日：9月13日

これらの殉教者たちは、リキニウス帝の治世下で殉教した。ゴルディアンはカッパドキア出身、マクロヴィウスはパフラゴニア出身であり、二人とも若き殉教者で、キリストへの揺るぎない信仰ゆえに、以前トマスの町で殉教していた。　マクシムス公の命により、彼らは数々の拷問を受けた後、剣で斬り殺された。聖ヴァレリアヌスは殉教者たちの棺の前で激しく泣き、嗚咽しながら息を引き取った[6248]。

アトロエの聖ペトロの記念日

記念日：9月13日

この聖人は、母の胎内からすでに神に聖別されていた。生涯を断食と絶え間ない祈りに捧げ、多くの奇跡を起こした。とりわけ、ガリス川をまるで乾いた地を歩くかのように渡った。彼は鉄の鎖で自らの体をこれほどまでに苦しめたため、人間というよりはむしろ影のように見えた。　神に喜ばれた彼は、十分な時を経て、安らかにこの世を去った[6249]。

聖殉教者セレウコス、ストラトニクス、クロニデス、レオンティウス、セラピオンの記念日

記念日：9月13日

聖セレウコスはガラティア出身、ストラトニコスはビフィニアのニコメディア出身、そしてクロニドス、レオンティオス、セラピオンはエジプト出身であった。数々の拷問の末、迫害者たちは聖クロニドス、レオンティオス、セラピオンの手足を縛り、海に投げ込んだ。　海の波が彼らの聖遺体を陸に打ち上げた。天使たちはキリスト教徒たちに、彼らを埋葬するよう命じた。聖セレウコスはガラティアで殉教した。彼は様々な拷問を長く受け、ついに野獣の餌として投げ込まれた。　一方、聖ストラトニクスは次のように殉教した。ビティニアの総督は、多くの拷問を加えた後、彼を二本の曲げられた木の枝に縛り付けるよう命じた。その後、その枝を放すと、聖殉教者は二つに引き裂かれ、こうして神に息を引き取った[6250]。

9月27日

9月14日（旧暦）

[6248] 4世紀初頭に殉教した。カッパドキアとパフラゴニアは小アジアの地域である。「スキフィア」とは、おそらく黒海沿岸にあるその植民地を指すものと思われる。トミ市は、現在のルーマニアの港湾都市キュステンジェである。

[6249] ガリス――小アジア北西部の川で、カッパドキアとガラティアを流れ、黒海に注ぐ。アトロエとは、現在ではその所在が不明な小アジアの都市を指すものと思われる。 聖ペトロは、コンスタンティノープル総主教タラシオス（784–806年）およびビザンツ皇帝ニキフォロス（802–811年）の治世下で修道生活を送った。

[6250] 彼らの殉教は3世紀のことである。クロニドス、レオントス、セラピオンは、多くの拷問を受けた後、237年頃、マクシミヌス1世の治世下のエジプト、アレクサンドリアで海に投げ込まれて殉教した。ストラトニクスはビフィニアのニコメディアで殉教した（彼の記念日は9月9日にも祝われる）。

主の尊き命を与える十字架の建立に関する伝承

記念日 9月14日

ローマでマクセンティウスが統治していた頃、彼は民に多くの害を及ぼし、キリスト教徒を迫害し苦しめるだけでなく、異教徒をも殺害し、彼らの財産を略奪し、高貴な家系を侮辱して放蕩な生活を送っていた。彼はその残虐さと堕落した生活のため、ローマ全土から嫌われ、忌み嫌われていた。　そのため、ローマ市民たちは、当時母と共にブリタニアに滞在していたコンスタンティヌス帝に密かに嘆願書を送り、この迫害者から彼らを救い出してくれるよう懇願した。コンスタンティヌスはまずマクセンティウスに書簡を送り、友好的に拷問をやめるよう諭した。　しかし、マクセンティウスは彼の言葉に耳を貸さず、改心するどころか、さらに悪質になり、コンスタンティヌスを自分と同等の王とすることを望まず、彼に対して武器を執った。一方、全軍がコンスタンティヌスを王位に推戴したのに対し、マクセンティウスは独断で王位に就いた。　民衆は彼を好まなかったが、彼が莫大な賜物と多くの栄誉を約束した一部の貴族だけが、彼の選出を望んだ。一方、コンスタンティヌスは万人の合意のもとで皇帝として擁立された。

マクセンティウスが改心するどころか、その悪意を強めていると聞き及んだコンスタンティヌスは、軍を召集して彼に対して戦いを挑んだ。自らの軍勢の力が微々たるものであること、さらにマクセンティウスの悪辣な策略も考慮に入れ、彼は勝利を疑い始めた。　彼は、マクセンティウスが魔術を行うために多くの人々の血を流し、頼りにしていた偽りの神々をなだめるために、腹に子を宿した多くの少年、少女、そして女性たちを悪魔への生贄として捧げてきたことを知っていた。　マクセンティウスを悪魔の力が助けていることを知ったコンスタンティヌスは、天と地を支配する唯一の神――キリスト教徒全体が崇める神――に祈りを捧げ始め、その迫害者に対する勝利のしるしを授けてくださるよう懇願した。　そして、彼がこのように熱心に祈っていると、正午に、天に主の十字架の姿が現れ、それは星のように太陽の光よりも強く輝いていた。その上には、「これをもって勝利せよ」という文字が記されていた。　この奇跡的な現象を、将軍アルテミオス（彼は後にユリアヌス帝の治世下でキリストのために殉教した）[6251] を含むすべての兵士たちが目撃し、驚嘆した。しかし、彼らの大半は恐怖に駆られた。異教徒にとって、十字架の像は不運と死の象徴であった。なぜなら、死刑を宣告された強盗や悪党たちは十字架上で処刑されていたからである。そのため、兵士たちは自分たちの戦争が不運なものになるのではないかと恐れた。　コンスタンティヌス帝自身も大きな困惑に陥っていた。しかし、ある夜、主キリストご自身が彼の夢に現れ、昼間に現れた「尊き十字架」のしるしを再び示し、こう告げた。

「このしるしの模造品を作り、軍団の先頭に掲げさせよ。そうすれば、マクセンティウスだけでなく、あなたのすべての敵をも打ち負かすことができるだろう。」

皇帝はその幻視を側近たちに語り、熟練した金細工師たちを呼び寄せ、現れたしるしに倣って、金、ビーズ、宝石を用いて主の聖なる十字架を作るよう命じた。　さらに、すべての兵士に対し、武器や兜、盾の至る所に十字架の印を刻むよう命じた。

不敬なマクセンティウスは、コンスタンティヌスがイタリアのローマへ遠征するという話を耳にすると、ローマ軍を率いて偉大なるコンスタンティヌスに果敢に立ち向かった。　コンスタンティヌスは、自軍の各連隊の先頭に「尊き十字架」を掲げるよう命じた。彼らがマクセンティウスと合流し、戦いを交えると、マクセンティウスは「尊き十字架」の力によって打ち負かされ、多くの兵士が殺され、彼自身も逃走を余儀なくされた。　コンスタンティヌス帝に追われ、彼は自ら築いた橋でテヴェレ川を渡ろうとしたが、その瞬間、神の力によって橋は崩れ落ち、この哀れな迫害者は、　古代のファラオのように、自らの軍勢と共に川に溺れ死んだ。そして川は、騎兵や馬、武器で[6252] 埋め尽

[6251] アルテミオスの記念日は10月20日で、彼の殉教は363年に起こった。

[6252] この出来事は312年10月28日に起こった。

くされた。　コンスタンティヌス大帝は勝利を収めてローマに入城し、民衆全体が喜びをもって彼を大いなる栄誉をもって迎えた。　王は、尊き命を与える十字架の力によって迫害者に対する勝利を授けてくださった神に、最大の感謝を捧げ、その輝かしい勝利を記念して、ローマの中心にある高い石柱の上に十字架を立て、その上に「この救いのしるしによって、この都は迫害者のくびきから解放された」と記した。

ある時、コンスタンティヌスはビザンティウム人に対して戦争を仕掛けた。ビザンティウムという小さな町は、ユダヤの王マナシアの時代に、あるギリシャ人ヴィザスが自身の名にちなんで築いたものであった[6253]。彼らに二度も敗北したコンスタンティヌスは、深い悲しみに沈んでいた。夕暮れが迫ると、彼は天を仰ぎ見たところ、折り畳まれた手紙が見え、そこにはこう書かれていた。*「苦難の日にわたしを呼び求めよ。　わたしはあなたを救い出し、あなたはわたしを賛美するであろう」*（詩篇49:15）。恐怖に駆られた彼は再び天を見上げると、以前と同じように星々で描かれた十字架が天に浮かび、その周囲には次のような文字が記されていた：　「このしるしによって、あなたは勝利する」。その後、戦いで十字架が掲げられた際、コンスタンティヌスはドナウ川でスキタイ人[6254]と戦ったが、再び天にこの救いの武器が現れ、以前と同様に、コンスタンティヌスは勝利を収めた。

このことから、十字架に架けられたキリストの力を悟り、キリストこそが唯一の真の神であると信じたコンスタンティヌスは、その御名によって洗礼を受けた。また、その称賛に値する母ヘレナも共に洗礼を受けた。コンスタンティヌスは、彼女の深い敬虔さゆえに、主の尊い十字架を発見するため、莫大な財宝を携えて彼女をエルサレムへ派遣した。　皇后ヘレナはエルサレムへ向かい、聖地を巡り、偶像による穢れを取り除き、多くの聖人の遺骸を日の目に出した。　当時、エルサレムの総主教はマカリオスであり、彼は女王を相応の礼遇をもって出迎えた。至福の女王ヘレナは、ユダヤ人によって隠された主の命を与える十字架を見つけ出そうと願い、すべてのユダヤ人を呼び集め、主の尊い十字架が隠されている場所を教えるよう求めた。　しかし、彼らが「知らない」と否認し始めたため、ヘレナ女王は彼らに拷問と死を脅した。すると彼らは、ユダという名の老人を女王に指し示し、「彼は尊敬される預言者の息子であるため、女王が探しているものを示すことができる」と語った。

長時間にわたる拷問にもかかわらず、ユダは主の十字架が隠されている場所を明かすことを拒み続けた。そこで、ヘレナ女王は彼を深い堀に投げ込むよう命じた。しばらくその中にいた後、ユダはついに、地中に埋められたキリストの十字架について知っていることを話すことを約束した。　そこで彼は堀から引き上げられ、彼の指示に従って、土と石でできた大きな丘のある場所へと向かった。その丘の上には、ローマ皇帝ハドリアヌスがすでに異教の女神ヴィーナスのために神殿を建てており（[6255]）、その中に偶像を安置していた。ユダは、まさにここにキリストの十字架が隠されていると示した。

ヘレナ皇后は、その偶像崇拝の神殿を破壊し、土と石を散らして掘り起こすよう命じた。　マカリオス総主教がその場所で祈りを捧げると、空気に芳香が漂い、直ちに東の方角へと、キリストの聖棺と髑髏の場所が発見された。その近くには三つの十字架が埋められており、その後、主が十字架に釘付けにされた際に使われた釘も発見された。　発見された十字架のうち、どれがキリストの十字

[6253] ビザンティウム、後に有名なコンスタンティノープル、あるいはツァールグラードは、コンスタンティヌス大帝によって初めて築かれたもので、紀元前658年頃に設立され、その主要な創設者の名にちなんで名付けられた（当時ペルシャ帝国に属していた小アジアのギリシャ都市ミレトスの出身者たちによって設立された）。

[6254] スキタイ人は、アジアからやって来た野蛮な遊牧民族であり、当初は現在のロシア南部の草原地帯を遊牧していたが、その後さらに西のドナウ川へと進出し、ドナウ川沿いのローマ帝国領を荒廃させるような略奪行為で脅かした。

[6255] ギリシャ・ローマ神話の愛、美、快楽、そして不純な欲望の女神。主の墓の洞窟は、今から2世紀前、キリストの磔刑と埋葬の場所を完全に判別不能にすることを目的として、ローマ皇帝ハドリアヌスの命令により埋め立てられた。これは西暦119年のことである。

架であるかを特定できなかったとき、ちょうどその頃、ある死者が埋葬のために運び出された。そこでマカリオス総主教は担ぎ手に立ち止まるよう命じ、十字架を順番にその死者の上に載せた。　キリストの十字架がその遺体に置かれたとき、死者は即座に復活し、主の神聖な十字架の力によって、生き返って立ち上がった[6256]。皇后は喜びをもって尊い十字架を受け入れ、それにひれ伏して口づけをした――彼女と共にいたすべての軍や文官の指導者や高官たちも同様であった。　その際、場所が狭かったため、聖なる十字架を間近で見たり口づけしたりすることができなかった者たちがおり、せめて遠くからでもそれを見せてほしいと懇願した。そこで、エルサレムの総主教マカリオスは、最も高い場所に立ち、十字架を掲げて民衆に見せた。

そして民衆はこう叫んだ。

「主よ、憐れみたまえ！」

こうして、「主の尊き十字架の挙揚」の祝日[6257]が始まったのである。

女王は、主の尊き十字架の木の一部と釘を自ら保管し、十字架そのものは銀の聖櫃に納めて、将来の世代のために保存するようマカリオス総主教に託した。　ユダは、多くのユダヤ人とともにキリストを信じ、洗礼を受け、聖なる洗礼においてキリアコスと名付けられました。その後、彼はエルサレム総主教となり、背教者ユリアヌスの治世下でキリストのために殉教して亡くなりました[6258]。また、聖なる皇后ヘレナは、エルサレムの聖地々に教会を建立するよう命じ、とりわけ、キリストの墓と尊い十字架が発見された場所に、我らの主イエス・キリストの復活教会を建設するよう命じた。その後、彼女はゲッセマネに、聖母マリアの御寝所が安置されていた場所に、その尊い御眠りを記念して教会を建立するよう命じました。　その後、敬虔な女王はさらに十八の教会を建立し、それらを様々な宝石で飾り、必要なものをすべて備えてから、主の命を与える十字架の一部と、かつてキリストの御体が釘付けにされた釘を携えて、ビザンティウムへと帰還した。

祝福されたコンスタンティヌス帝は、命を与える十字架を金の聖櫃に納めた。そして、主の釘のうちの一つは、聖ヘレナがコンスタンティノープルへ帰還する際、[6259]、吹き荒れる激しい嵐と荒波を鎮めるためにアドリア海に投げ込まれた。もう一つは、皇帝が自身の兜に打ち込み、　三本目は皇帝が自身の馬のくつわの口金に打ち付け、預言者ザカリヤの預言*「その時には、馬の装具にも『主の聖なるもの』と記される」*（ザカリヤ14:20）を成就させた。そして四本目の釘は、皇后ヘレナが皇帝の側近たちに保管を託した。

聖ヘレナがエルサレムからビザンティウムに戻ると、キリストを愛するコンスタンティヌス帝は、戦いで現れた三つの勝利の数にちなんで、三つの大きな十字架を建立した。一つはローマでマクセンティウスを撃破した際、もう一つはビザンティウムを攻略した際、三つ目はドナウ川でスキタイ

[6256] 聖ディミトリ・ロストフスキーは、『主の十字架の挙揚に関する説教』（注記にて）の中で、次のような詳細を添えている。「キリストの真の十字架が明らかになったあの奇跡について、人々の説は一致していない。　ある者は、死んだ乙女が埋葬のために運ばれている最中に、十字架の力によって復活させられたと語る。またある者は、死んだ未亡人が、命を与える木によって生き返ったと語る。　また、ある未亡人が自宅で病に伏し、死の淵に瀕していたところ、パトリアルヒ（マカリオス）が皇后（ヘレナ）を伴って訪れ、十字架を持ち込んで病人にその十字架を置いたところ、主の十字架が置かれるやいなや、彼女はたちまち元気になって立ち上がったと語る者もいる。　また、別の伝承によれば、（当時）墓地へ運ばれていた死者が、主の十字架に触れたことで復活したとも伝えられている。 ニキフォロス・カリストス（第8巻、第29章）は、この二つの奇跡が当時、主の十字架によって成し遂げられたと述べている。「すなわち、自宅で病に伏し、すでに死の淵にあった未亡人は、死の門から生と健康へと戻され、また、埋葬のために運ばれていた死者は、復活させられたのである」。

[6257] 聖人伝研究者の調査によると、これはおよそ326年5月末のことであった。335年、9月13日にキリストの復活教会が奉献されて以来、主の十字架の挙揚は翌日の9月14日に祝われることとなった。

[6258] キリアコの記念日は10月28日に祝われる

[6259] アドリア海は、地中海の一部をなす湾状の海域であり、アペニン半島とバルカン半島の西岸を洗っている。エルサレム出身の聖ヘレナ皇后は、おそらくまずローマへ向かい、そこから帝国の新首都コンスタンティノープルへと向かった。

人を打ち破った際である。　これら三つの勝利にちなんで、彼は貴重な素材を用いて三つの聖なる十字架を造り、その上に金文字で「IS　XS　NIKA」、すなわち「イエス・キリストは勝利した」と刻んだ。　すべての人々の前で自身の敬虔さへの熱意を証し、十字架の力によって敵を打ち負かしたことを示すため、皇帝は一つの十字架を東側の市場広場の高台に、もう一つの十字架を市の中心広場にあるローマの「[6260]」の紫色の柱の頂上に、三つ目の十字架を、キリストの聖なる十字架のために多くの奇跡としるしが現れたパン市場の美しい大理石の壇の上に立てた。　多くの人々が証言しているところによると、主の天使が夜、輝かしい光に包まれて天からその場所へ降りてきて、聖なる十字架の周りを巡りながら香を焚き、甘美な声で「三聖歌」を歌い上げ、その後再び天へと昇っていったという。　これは年に三度起こった。九月の「キリストの尊い十字架の挙揚」の夜、二度目は5月7日の「天に現れた主の十字架」の記念の夜、そして三度目は四旬節の「　」の十字架礼拝の週であった。　そして、義にかなった聖なる生活を送る敬虔な人々の多くは、この天使の降臨を目撃し、その歌声を耳にし、その後、このことを他の人々に語り伝えました。

ここで、かつて主の十字架という尊く命を与える木が、ペルシャ人によって奪われた後、信者たちの喜びのもと、再びエルサレムに返還された[6261]という出来事についても思い起こすべきである。

ビザンツ帝国のフォキス帝の治世中、ペルシャ王ホズロイはエジプト、アフリカ、パレスチナを征服し、エルサレムを占領して、多くのキリスト教徒を殺害した[6262]。その際、様々な教会の宝物や祭具を略奪し、他の品々の中でも、この極めて貴重な宝物――主の命を与える十字架の木――を奪い取り、ペルシアへと持ち去った。　しばらく時が経ち、フォキス王の死後、その王位を継いだのはヘラクレイオスであった[6263]。彼はホズロイを打ち負かそうと試みたものの、逆に何度も彼に敗北を喫したため、和平を懇願したが、傲慢な敵からは受け入れられなかった。　そこで、深い悲しみに沈んでいた皇帝は、神に助けを求め始めた。彼は、すべての信者に対し、祈りと徹夜祷、断食を行うよう命じた。それは、その高慢さゆえに「すべてのキリスト教徒を根絶やしにする」と豪語し、主の御名を冒涜する敵から、主が彼らを救い出されるためであり、また敵が次のように言うことができないようにするためであった。　「我らの手（すなわち力）は堅く、我らの神々は強い」と言うことができないようにし、異教徒たちに、唯一の真の神がおられ、その堅固さと力に誰も抗うことができないことを悟らせるためであった。　王自身も涙を流して祈り、熱心に断食を行った。その後、すべての兵士を集め、十字架の力に身を委ね、神の助けを期待して、　ヘラクレイオスはペルシア軍に対して出兵し、ホズロイとの戦いで彼を打ち破って敗走させた。その後、7年間にわたりペルシア王国を荒廃させ、都市や集落を征服し、ホズロイの多数の軍団に対して勝利を収めた。　ついにホズロイは、もはやギリシャ軍に抵抗する余地がなく、自国から逃亡し、ティグリス川を渡る際[6264]、末子のメダルスを共同統治者に任命した。これに憤った長男のシロエスは、父と弟を共に殺害することを企て、まもなくそれを実行に移した。　その後、シロエスはペルシア王国の後継者兼支配者となり、ギリシ

[6260] そして今なお、コンスタンティノープルには、かつてコンスタンティヌス大帝によってローマから運ばれたこの「紫の柱」の残骸が保存されている。この残骸は「焼け焦げた柱」という名で知られており、その名の通り、実際に焦げた状態を呈している。

[6261] 以下の記述は、聖ディミトリ・ロストフスキーの『チェチイ・ミネイ』から、殉教者でありカノンの制定者であるテオファン（9世紀前半に没）および11世紀末から12世紀初頭のビザンツ教会史家ゲオルギー・ケドリンの言葉に基づいて翻訳されたものである。

[6262] ビザンツ皇帝フォカスは602年から610年まで在位した。ペルシア王ホズロ2世は、同盟者であったマウリキオス皇帝とその子供たちが、簒奪者フォカス皇帝によって非人道的に殺害されたことへの報復を口実に、ギリシャ人に対して宣戦布告した。

[6263] ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

[6264] ティグリス川――ペルシアのメソポタミアを流れる川。下流でユーフラテス川と合流し、ペルシャ湾に注ぐ。

ャ王ヘラクレイオスに使節団を派遣し、嘆願と数多くの贈り物を携えて、彼への服従を表明するとともに、その荒廃をもたらす戦争を止めるよう懇願した。　そこで、ヘラクレイオス王はペルシア王と和平を結び、ホズロエによってエルサレムから奪われ、14年間にわたりペルシア人の手に囚われていた「命を与える主の十字架」も持ち帰った。　こうしてギリシャの王は、多くの戦利品を携えて帰還し、神の偉大な御加護を喜び、神を賛美した。

エルサレムに到着すると、王は尊い十字架を自らの肩に担ぎ、元の場所へ戻そうとした。王は、金や宝石で飾られた王の紫の衣を身にまとい、頭に王冠を戴いてそれを運んでいた。　その時、大きな奇跡が起こった。王は、聖所へと通じる門の前で突然立ち止まり、皆の驚きの中、キリストの尊い十字架を背負ったまま、一歩も前に進むことができなかった。　一方、コンスタンティノープルの総主教ザカリアは、エルサレムのすべての住民と共に、枝やナツメヤシの実を手に、オリーブ山の手前まで王を迎えに出て、王と共に歩いた。すると彼は、その門に立ち、入場を阻む、光を放つ神の天使を見た。

すると、天使は彼にこう言った。

「私たちの創造主が十字架の木をここに運ばれたのは、あなたがたがそれを運んでいるような方法ではなかった。」

それを見て聞いて、総主教は身震いし、王に向かって言った。

「王よ、知っておきなさい。豪華な衣装を身にまとい、王の装飾品で飾られた者が、私たちのために貧しさを選び、謙遜のうちに担がれたこの聖なる木を担ぐことは不可能です。もしこれを持ち込みたいのなら、キリストの貧しさを見習いなさい。」

そこで、敬虔なヘラクレイオス王は、紫のポルフィラを脱ぎ捨て、質素で貧しい服を身にまとい、もはや何の妨げもなく、裸足で聖なる十字架の木を運び、　――それを教会へと運び込み、かつてペルシャ王ホズロイによって持ち去られたまさにその場所に、再び聖十字架を安置した[6265]。

そして、主の十字架が戻ってきたことを受けて、信者たちの間には大きな喜びと歓喜が満ち、彼らは（かつてイスラエル人がペリシテ人から契約の箱が返還されたことを喜んだのと同様に）歓喜した（サムエル記上7章）、十字架に架けられたキリスト、栄光の王を賛美し、その聖なる十字架の足元にひれ伏した。私たちからも、今、そして世々限りなく、彼に栄光と賛美と礼拝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

主よ、御自分の民を救い、御自分の御国を祝福し、私たちの敬虔な皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチに勝利を授け、敵対する者たちを打ち破り、御自分の十字架によって御自分の住まいの民を守り給え。

コンダク、第4調：

御自身の御意志により十字架に昇られた方よ、あなたの同名の新しい住まいに[6266]、キリストなる神よ、あなたの寛大さを授け給え。あなたの力によって、私たちの敬虔な皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチを喜ばせ、敵対者たちに対する勝利を彼に与え、あなたの平和の武器によって彼を助け、無敵の勝利を授け給え。

[6265] それは西暦629年のことだった。当時、エルサレム総主教は聖ザカリアであり、在任期間は609年から633年までであった（614年から628年まではペルシア人に捕虜となっていた）。

[6266] すなわち、キリスト教徒たちである。

聖殉教者パピウスの記念日

記念日：9月14日

聖パピウスは、マクシミアヌス帝の治世、ヘゲモン・マグネの治めるリカオン地方で殉教しました。彼は多岐にわたる拷問を受けました。顎と頬骨を砕かれ、吊るされ、爪で引っかかれ、さらに釘の打たれた鉄のブーツを履かされ、その状態で歩かされました。　このような拷問の末、彼は主のもとへ息を引き取った[6267]。

9月28日

9月15日（旧暦）

聖殉教者ニキタの受難

記念日9月15日

主の尊く命を与える十字架、すなわちこの勝利のしるしが、世界の遥か上へと掲げられたとき、その勝利と同じ名を持つ聖ニキータがその庇の下へとやって来た。　この日の前日には、世界にとって無敵の勝利である聖十字架の挙揚を祝いましたが、本日は「勝利者」を意味する名を持つ聖ニキタを称えます（[6268]）。このイエス・キリストの善良な戦士は、あたかも軍旗の下に立つかのように、聖十字架の下に立ち、そこに磔にされた方の栄光のために、聖十字架の敵たちとの戦いを率いた。ある者は地上の王　のために戦い、ある者は自らの命や虚しい栄光のために戦い、またある者は一時的な富のために戦うが、聖ニキータは、すべての被造物の王であり、私たちの栄光であり、決して尽きることのない富である、唯一の主イエス・キリストのために戦ったのである。　さて、この戦士がどこで、どのようにしてキリストのために奮闘したか――それについては、次のように語られている。

聖なる使徒同等の王コンスタンティヌス大帝の治世に、聖なる信仰が全宇宙に広まり始めた頃、ゴート人の国[6269]、イストラ川[6270]（ドナウ川）の対岸においても、闇の中の光のように、聖なる敬虔さが輝き出した。　聖ニキータは、その地で生まれ、洗礼を受け、教育を受けた。ゴート族の司教テオフィロス[6271]　は、第1ニカイア公会議に参加し、正教の教義を告白し、公会議の決定に署名した人物であるが、彼はニキータを信仰の光で啓発し、父と子と聖霊の名において彼に洗礼を授けた。

しばらくして、古来からの嫉妬深い敵である悪魔は、キリストの聖なる信仰が広まり、キリスト教徒の数がますます増え続けることを耐えかね、偶像崇拝に覆われたこの野蛮な地において、キリストの御名を告白し、主を信じる者たちに対する闘争と激しい迫害を引き起こした。　悪意の霊は、

[6267] 聖パピウスは3世紀末か4世紀初頭に殉教した。彼はリカオニア（小アジアの地域で、北はガラティア、西はフリギアとイサウリア、東はカッパドキア、南はリキアと接する地域）のララランダという町出身で、そこで殉教の道を歩み始め、その後ディオケサリアで殉教を続け、イサウリアのセレウキアでその生涯を閉じた。

[6268] ニキタ――ギリシャ語から訳すと「勝利者」という意味である。

[6269] ゴート族の領土は、ヴィスワ川下流から黒海まで広がっていた。ゴート族は主に、現在のルーマニアのドナウ川沿いに住んでいた。

[6270] イストル――ドナウ川の古称。

[6271] 340年頃に没。

その国の君主であるファナリクという者に、キリスト教徒を殺害し、自らの土地から彼らの記憶さえも根絶やしにするよう唆した。その頃、ゴート族の間で分裂と内戦が起こった。彼らは二つの派閥に分かれた。一方はフリティゲルンという者を首領とし、もう一方は残酷な拷問者アファナリクが率いていた。　これらの同族同士が戦場で激突し、大虐殺が繰り広げられた際、より大きな力と勇気を備えていたアファナリクは敵を打ち破り、その軍勢を敗走させた。　敗北したフリティゲルンはギリシャへ逃れ、そこでキリスト教を憎むヴァレンタヌス王に助けを求めた[6272]。皇帝は、フラキアに駐留していた全軍に対し、フリティゲルンの救援に向かうよう命じた。　その後、フリティゲルンは、残りの全兵士と、フラキアで集結させたギリシャ軍を率いて、敵対者に対して出撃した。イストル川（ドナウ川）を渡る際、彼は聖十字架の像を作らせ、これを自軍の先頭に掲げて進軍するよう命じた。こうして彼はアファナリコスに襲いかかった。　凄まじい戦いが繰り広げられたが、キリスト教徒たちは十字架の加護によりアファナリコスを打ち破り、その全軍を撃破した。敵の一部は殺され、他は捕虜となり、アファナリコス自身も少数の側近を連れてかろうじて逃れるのが精一杯であった。　それ以来、ゴート族の間でキリスト教正教の信仰はますます広まっていった。というのも、戦いで現れた十字架の抗しがたい力を目の当たりにした多くの人々が、十字架に架けられた主を信じるようになったからである。

テオフィロス司教が亡くなると、その座には、賢明で敬虔な人物であるウルフィル[6273]が就いた。彼はゴート族のために文字を考案し、多くの書をギリシャ語からゴート語に翻訳したため、聖なるキリスト教の信仰はゴート族の間で日ごとにますます広まっていった。　また、その地で最も高貴かつ名高い人物の一人である聖ニキタも、その熱意をもってキリストへの信仰の確立に寄与した。彼はその敬虔さと神に啓示された言葉によって、多くの人々をキリストへと導いた。

しばらくして、不信心なアファナリヒは再び故郷へと戻った。権力と勢力を手に入れた彼は、悪魔に唆されて、自らの領内でキリスト教徒に対する恐ろしい迫害を開始し、戦いでキリスト教徒に打ち負かされ、恥をかかされたことへの復讐を図った。

そこで、聖ニキタは神への熱意に燃え、目に見えない敵と目に見える敵、この二つの敵との戦いに乗り出した。目に見えない敵との戦いにおいては、異教徒を真の信仰へと導き、信者たちを殉教の業へと備えさせた。　一方、目に見える敵との戦いは、拷問者アファナリヒを糾弾し、その不敬虔さと非人道性、そして多くの信者を様々な拷問にさらしたことを非難することで戦った。こうして聖ニキタは両者を打ち破り、悪魔を踏みつけ、拷問者の残酷さも克服したのである。　この善良なキリストの殉教者に、キリストへの背信を強要しようとした様々な拷問は、何の力も持たず、拷問者自身も、なぜ自分がこれほどの権力を持ちながら、 、キリストのしもべの一人を、 堅固な柱のように揺るぎない信仰を貫いていたキリストの僕一人を、自分の邪悪な道へと屈服させることができなかったのか、と不可解に思っていた。

そこで、その不法者は何を企んだのか。彼は、多くの傷や肉体の拷問、四肢の切断によっても殺すことができなかったその者を、火によって滅ぼそうと企んだのである。　しかし、その不義の者は何を得たのか。彼は、炎によって殉教者を焼き尽くすよりも、むしろ自らの激怒によって自分自身を焼き尽くしてしまったのである。聖ニキタは、火の中にいたにもかかわらず、その肉体は火によって焼かれることはなく、その魂は新たな永遠の不死の命へと甦った。　一方、拷問者は火がなくても、自らの不敬虔さによって焼き尽くされてしまった。彼は魂を死に至らしめ、自らの体を地獄へと導いたのである。こうして聖ニキタは、十字架の旗印の下でキリストのために戦い、勝利者であることを示した。それは名ばかりではなく、実際にそうであったのである。

[6272] 皇帝ヴァレントは364年から378年まで在位した。

[6273] ウルフィル、あるいはウルフィラ――ゴート族初代司教であり、ゴート族の間で熱心にキリスト教を布教した人物。311年から383年まで生きた。

聖人の遺体は、火の被害を受けることなく、埋葬されることもなく、不名誉なまま放置されていた。当時、その地にはマリアンという名の敬虔なキリスト教徒が住んでいた。この男はキリキア地方のモプスエスティア[6274]の出身であった。 ある用事でゴート人の地を訪れた彼は、そこでかなり長い間滞在することになった。マリアンは聖ニキタと知り合い、彼の友情と愛情を勝ち取った。とりわけ、聖なる修道士がキリストの聖なる信仰のために、自らの血を流す覚悟さえあるのを見たとき、彼は彼を深く愛するようになった。　そして、聖人の遺体がまだ埋葬されないまま放置されていた時、マリアンは、愛する友人でありキリストの殉教者であるその遺体を、いかにして手に入れ、故郷へ持ち帰るか考え始めた。しかし、殉教者の遺体を誰も埋葬してはならないと命じた公爵を恐れて、彼はその計画を実行に移すことを躊躇していた。　そこでマリアンは、夜陰に乗じて密かに遺体を持ち出すことを思いついた。

夜が更けると、マリアンは計画を実行に移す準備が整っていた。しかし、その夜は暗く雨も降っており、歩くのが困難だった。マリアンはこれに深く悲しんだ。どこへ進めばよいのか、探している殉教者の遺体をどこで見つけられるのか、見当がつかなかったからである。　彼がこのことを深く嘆いていたとき、かつて東方の三博士に星によってベツレヘムへの道を示された（マタイ2:2）あらゆる慰めの神は、嘆きに暮れるマリアンを慰め、聖人の遺体を見つけるための適切な道を示された。神は星の姿をしたある天の力を遣わされ、その星はマリアンの前で輝き、彼を必要な場所へと導いた。　その星はマリアンの前を先導し、夜の闇を追い払った。マリアンは喜びながらその星の後を追った。聖人の遺体が安置されている場所にたどり着くと、星はその上空で止まった。そこでマリアンは、殉教者の遺体を清らかな布で包み、自分が住む家へと運び込んだ。

こうしてマリアンは、求めていた宝を手に入れた。しばらくの間、自宅に細心の注意を払ってそれを隠しておいた後、まもなく故郷に戻り、聖殉教者の遺体[6275]を携えて帰った。モプスエスティアの街に着くと、マリアンはその遺体を自分の家で尊厳をもって埋葬した。

神は、御自身の殉教者である聖ニキータのために、マリアンの家に祝福を授けられた。かつて神が、ヨセフのためにペンテフルの家に多くの富を授け（創世記39:5）、契約の箱のためにアベダルの家に祝福を授けられた（列王記下6:11）のと同様に。 マリアンの家は、物質的にも精神的にも大きな富に満ち溢れるようになった。というのも、聖人の棺からは、困窮するすべての人々に多くの施しが与えられ、病める者たちには多くの癒しがもたらされたからである。　街全体と近隣の住民たちが聖人の棺のもとに集まったため、マリアナの家はここに集まる信者全員を収容することができなかった。そこで、皆は聖ニキタの名を冠した教会を建設し、そこに殉教者の聖遺骨を安置することに決めた。信者たちはこの事業に熱心に取り組み、間もなく教会を建立した。　建設が完了し、教会がふさわしい威厳をもって飾り立てられると、聖殉教者の棺が開かれ、聖遺物箱が取り出されて新しく建てられた教会へと運ばれ、そこで地中に埋葬された。　ただマリアン一人だけが、自分の家の守りとして聖人の遺骨から指一本を持ち帰ることに成功し、それを敬虔に保管していた。それ以外、誰も聖ニキタの遺骨の一片すら持ち帰ることはできなかった。

ある日、モプスエスティスの司教である至福のアウクセンティウスは、聖殉教者タラハ、プロヴァ、アンドロニクスの栄光を称える教会を建立し、そこにこれら三人の聖人の遺骨を安置した。彼は書簡の中で、アナザルヴァの市民に対し、新しく建てられた教会のために聖殉教者たちの遺骨の一部を譲ってほしいと要請した。　すると、アナザルヴァの市民たちは、アウクセンティウスに対し、その見返りとして、彼らの町への祝福となるよう、聖ニキタの聖遺物の一部を彼らに与えてほしいと願い出た 。彼らの願いを叶えたいと考えた司教は、聖殉教者ニキタの棺を開けるよう命じた。 すると、目に見える理由もなく、聖人の棺の上に置かれていた大理石の石が二つに割れてしまった。そこ

[6274] モプスエスティアの町は、ピラマ川のほとりの平野に位置していた。
[6275] 聖ニキタの死は372年9月15日に訪れた。

に居合わせた者の一人が、大胆にも聖遺物に手を触れたが、たちまちその手は乾ききってしまい、彼自身は恐怖に襲われた。　その瞬間、空から激しい雷鳴が轟き、鮮やかな稲妻が走った。皆が恐怖に襲われた。そこで司教は、聖人の遺骨を砕くことを神が祝福されていないと悟り、自らの意図を悔い改めた。　聖人の遺骨に無礼にも触れた男の乾いた手を掴むと、司教はその手で再び遺骨に触れ、こう祈り始めた。

「おお、キリストの聖殉教者ニキタよ！　あなたには害を与えるよりも癒やすことこそふさわしい。あなたは慈愛に満ち、全き慈愛の主を模範としているのだから。もしあなたがこの男を即座に罰したのなら、なおさら早く彼を赦してくださるのではないか。」

司教がこれらの言葉を口にするやいなや、その男の萎えていた手はたちまち癒やされ、皆は聖殉教者ニキタの奇跡に驚き、神を賛美した。　もはや神の御心に適う者の聖遺物に触れることを敢えてせず、司教は[6276]、その聖遺物に対して敬虔な賛美を捧げた後、再びその墓を尊厳をもって閉じ、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美した。その神には、永遠にすべての栄光と誉れと礼拝がふさわしい。アーメン。

聖フィロフェイ、司祭にして奇跡行者の記念日

記念日：9月15日

尊者フィロフェイは、ムラヴィエフ（ムラヴィノ）と呼ばれる村[6277]の出身であった。成人すると、彼は結婚し、子供にも恵まれた。その後、彼は聖職に就く栄誉に浴した。それ以来、聖人は絶えず断食と祈りに励んだ。　その聖なる生涯により、彼は奇跡を行う賜物を受け、キリストの御名によって多くの奇跡を成し遂げました。例えば、水をワインに変えたり、一言で岩を動かしたり、その他多くの奇跡を行いました。同時に、彼はキリスト教の愛の行いを実践し、飢えた人々を養い、困窮している人々を助けました。 彼の死後一年が経過した頃[6278]、信者たちが彼の聖遺体を別の場所へ移そうとしたとき、聖人はまるで生きているかのように両手を伸ばし、遺体を運んでいた二人の司祭の肩を掴んで立ち上がり、三歩歩いた。彼は再び元の場所に安置され、その聖遺体からは豊かな聖油が滲み出した。

聖殉教者ポルフィリイの記念日

聖殉教者ポルフィリウスの記念日

記念日：9月15日

ある日、背教者ユリアヌス皇帝の誕生日が祝われた。ポルフィリウスは、俳優として劇場でキリスト教徒を嘲笑し、侮辱するよう命じられていた。　その目的で水に浸かり、「父と子と聖霊の御名によって、ポルフィリウスは洗礼を受ける」と叫んだその瞬間、彼は突然、真の神を信じるように

[6276] アウクセンティウス2世司教は5世紀半ばに生きた人物であり、451年にハルキドンで開催された第4回全地公会議に参加した。

[6277] ギリシャ語からの翻訳によると、「ミルミクス」とあり、これは「アリ」を意味する。ここから「ムラヴェエヴォ」、あるいは「ムラヴィノ」という地名になった。この集落は小アジアのビフィニア地方に位置していた。

[6278] 聖フィロフェイの没年は10世紀頃とされている。

なり、水から上がると、公然とキリストを告白し始めた。このため、彼は拷問にかけられ、剣で斬り殺された[6279]。

聖殉教者マクシムス、アスクリアダス、テオドトスの記念日

記念日：9月15日

聖殉教者マクシムスとアスクリアダスは、不敬虔なマクシミアヌスの治世下、ミシアのマルキアノポリスという町に住んでいた。彼らはその敬虔さで知られ、多くの人々に真の信仰を教え、聖なる洗礼へと導いた。　このことを知った、当時マルキアノポリスを訪れていたフラキアの統治者ティリスは、彼らを裁判にかけるよう命じた。マクシムスと信仰について長時間にわたる議論を交わした後、拷問官は四人の男に命じて彼の全身を殴打させた。その後、アスクリアダがキリストへの信仰を告白すると、彼女に対しても靴底で殴打するよう命じた。　そこで、敬虔なテオドトスが立ち上がり、拷問官の非人道的な行為を非難した。このため、彼は木に吊るされ、全身を削り取られる刑に処された。 13日後、ティリスがアドリアノープルに到着すると、同市に連行されていた3人の殉教者全員に新たな傷を負わせ、赤熱した銅の板で焼いて彼らの肉体を溶かし尽くそうとしたが、天からの声が彼らを慰め、勇気づけた。　数日間牢獄に閉じ込められた後、大勢の群衆が集まる中、彼らはサーカスで野獣に投げ込まれた。しかし、マクシムスとテオドトスに放たれた雌熊は彼らに寄り添い、アスクリアドゥスが縛り付けられた雄牛は、まるで縛られているかのように立ち止まり、その場から動こうとしなかった。　激怒した総督は、聖なる殉教者たちを連れてフィリッポポリスへ向かったが、その都市にまだ到着しないうちに、サルティスという村で、キリストを否定するよう改めて説得を試みたものの、彼らの首を刎ねるよう命じた。その直後、裁判の席に座っていた拷問官は、稲妻に打たれて倒れた[6280]。

9月29日

9月16日（旧暦）

全き称賛に値する大殉教者エウフィミアの殉教

記念日 9月16日

[6279] 聖殉教者ポルフィリウスは、361年、ユリアヌス「背教者」の治世下、小アジアのエフェソスで殉教した。

[6280] 聖殉教者テオドトス、マクシムス、アスキアダ（別名アスキピオドタ）は、ローマ帝国東部でガレリウス・マクシミアヌスが統治していた4世紀初頭に殉教した。 ここでいうミジアとは、北西部の地域ではなく、ドナウ川沿いのローマ属州を指し、西部の「上ミジア」と東部の「下ミジア」に分かれていた。マルキアノポリスは、コンスタンティノープルからドナウ川へ向かう道沿いにある下ミジアの都市で、後にプレスラヴとなり、現在はブルガリアのプラヴォディ村である。 アドリアノープル（トルコ語でエディルネ）は、2世紀前半にローマ皇帝ハドリアヌスによって建設された有名な都市である。フィリッポポリスは、フラキア地方にある古代の要塞都市で、現在は東ルメリアのマリツァ川沿いに位置しており、今日でもその産業と人口規模において極めて重要な都市である。

不義なディオクレティアヌスの治世下[6281] 、ハルキドン[6282] は、彼によって任命されたプロコンスル・プリスクス[6283] によって統治されていた。 ハルキドンに神殿が捧げられ、その中に像が安置されていた異教の神アレイス[6284] を称える祭りを催そうとしたプリスクは、周辺のすべての都市や集落に勅令を送り、皇帝の名において、皆が祭りのためにハルキドンに集まり、各自が自分の身分に応じてアレイスに供物を捧げるよう命じた。 プリスクスはその勅令の中で、自身の命令に従わず、勅令発布の日から9日目に指定された祝祭に参列しない者に対し、激しい苦痛を与えると脅した。 そして、この悪魔的な祭りのために定められた日が訪れると、ハルキドンには大勢の人々が、生贄として連れてこられた家畜と共に集まり、皆が羊や牛を犠牲として捧げ、魂のない偶像、あるいはむしろそこに宿る悪魔に拝礼しながら、祝祭の歓喜に沸き立った。 そこで、その地のキリスト教徒たちは、この神に忌み嫌われる祭りを憎み、プロコンスルの恐ろしい怒りを恐れて身を隠し、秘密の場所に集まって、真の神、我らの主イエス・キリストへの礼拝を捧げた。 一方、拷問官は、 、誰かが彼の命令に逆らっていないか、アレイオスの偶像を崇拝しない者がいないか、徹底的な捜索を行うよう命じた。そして、キリスト教徒たちが拷問官に反抗していることが判明した。彼らはプロコンスルの命令に従わず、ただ唯一の真の神にのみふさわしい栄光を、その悪霊に捧げなかったからである。 拷問官は、キリスト教徒たちが自分の言うことを聞かないことに激怒し、彼らを探し出して拷問にかけるよう命じた。

その頃、ある秘密の場所に49人のキリスト教徒が身を隠し、祈りを捧げていた。その中には、エウフィミアという名の美しい乙女がいた。彼女は高貴な家柄の出身で、敬虔な人物であるフィロフロン上院議員とその妻テオドロシアの娘であった。 隠れていたキリスト教徒たちのことが拷問官に密告されると、彼は全員を捕らえて自分の前に引き出し、裁きにかけるよう命じた。すると直ちに、凶暴な家来たちが武器を手に、獲物に襲いかかる獣のように、キリストの御言葉によって集められた群れへと突進した。 信者たちが密かに神に仕えていた家は、誰も逃げられないよう四方から包囲された。彼らは扉を破り、容赦なくキリスト教徒を一人ずつ引きずり出し、全員を捕らえると、侮辱と嘲笑を浴びせながらプロコンスルのもとへ連行した。 屠殺場へ連れて行かれる羊のように引きずられていった、キリストの謙虚な聖なる僕たちは、高慢な拷問者の前に立たされ、血を流すことさえ厭わず、主のために苦難に耐える覚悟を固めていた。

彼らを見た高慢な統治者は言った。

「お前たちは、偉大なる神アレイスの栄光を称えて行われる生け贄を侮辱し、皇帝および我々の命令に逆らっているのか？」

キリスト教徒たちは答えた。

「王の命令であれ、あるいはあなた、プロコンスル様の命令であれ――それが天の神に背くものでない限り――疑いなく従わねばなりません。しかし、もしそれが神に背くものであるならば、従わないばかりか、むしろ抵抗すべきです。 もし、私たちが権威に従うべきことを命じられたなら、私たちは「カエサルのものはカエサルに」（マタイ22:20）と応じたでしょう。 しかし、あなたの命令は神に背き、神に忌み嫌われるものである。なぜなら、あなたは創造主の代わりに被造物を崇めるよう命じ、至高の神ではなく悪魔にひれ伏し、犠牲を捧げるよう強要しているからだ。それゆえ、私

[6281] 3世紀初頭。

[6282] ローマ帝国ビフィニア属州の州都で、プロポンティス（マーブル海）の南岸、ビザンティウムの対岸に位置していた。

[6283] プロコンスルとは、属州や地域における皇帝の代理人のことを指した。

[6284] アレスまたはマルス――異教の神。戦争の神とされ、同時に人々や農地をあらゆる害悪から守る守護神とも考えられていた。

たちはこのあなたの命令を決して実行しない。なぜなら、私たちは天にいます真の神を崇める真の信者だからである。

その時、迫害者は、その偽りの口を開き、かみそりのように鋭い諂いの舌を研ぎ澄まして、狡猾な言葉を彼らに向けて語りかけた。そして、贈り物や栄誉を約束することで、主が「御自身の尊い血によって贖われた」者たちを、正しい道から逸らし、破滅へと導く偶像崇拝へと誘おうとしたのである[6285]。同時に、プロコンスルは、もし彼らが自分の助言や命令に従おうとしないならば、恐ろしい拷問を与えると脅した。

それに対し、聖徒たちはこう答えた。

「総督よ、あなたが私たちに約束する贈り物や栄誉は、私たちはとっくに拒み、憎み、*『キリスト・イエスを知ることに勝るものはない』*[6286]（フィリピ3:8）と認めたのです。なぜなら、私たちには地上の恵みよりも大きく、優れた天の恵みがあるからです。 地上の恵みは一時的で移ろいやすいものですが、天の恵みは永遠で不変です（IIコリント4:18）； あなたが私たちに脅かす恐ろしい苦しみについて、私たちは恐れるどころか、むしろそれを耐え抜くことを強く望んでいる。そうすれば、私たちの内に、あなたがたが驚嘆し、あなたがたの邪悪な神々の無力さを知って恥じるような、私たちの神の力と強さが現れるからである。 しかし、これ以上、言葉だけの論争を続ける必要があるだろうか。あなたが企てていることを実行に移してみよ。そうすれば、あなたが拷問に注ぐ熱意よりも、私たちには耐え忍ぶことにおいてはるかに大きな不屈の精神があることを、あなたは確信するだろう。

そこで、拷問官は彼らに様々な拷問を加え始め、聖人たちは丸十九日間、様々な苦痛にさらされ、毎日新たな傷を負い、飢えと渇きに耐え続けた。彼らと共にいたのは、若く美しい聖女エウフィミアであった。聖人たちは彼女を励ましながら、こう言った。

「処女よ、天の花婿のために奮い立て。苦しみをもって御心にかなうよう奮い立て。賢い乙女たちと共に御前に出迎え、御方があなたを花嫁として愛し、御自身の宮殿へ迎え入れてくださるよう、奮い立て[6287]。」

それから二十日目に、彼女たちは裁判にかけられ、そこで総督は彼女たちに尋ねた。

「苦難を通じて教訓を得た今、我々の勅令に従う気はあるか？」

すると、聖なる殉教者たちは、聖エウフィミアと共に、こう答えた。

「プロコンスルよ、私たちを正しい道からそらそうなどとは期待するな。地上の山を覆し、天の星を動かすことの方が、私たちの心を真の神から引き離すことよりも容易いだろう。」

この言葉に憤った拷問官は、彼らの顔を長く打ち続けるよう命じた。しかし、それが効果を挙げないのを見て、彼らを王のもとへ送ることを決め、それまでの間、牢獄に閉じ込めるよう命じた。彼らがそこへ連行されると、総督は聖エウフィミアを見た。彼女は若く美しい乙女であり、聖なる殉教者たちの群れの中で、星々の間の月のように輝いていた。総督は狼のように、キリストの群れからこの羊をさらった。彼女は天に向かって目と両手を上げ、こう叫んだ。

「私の最も愛すべき花婿、イエス・キリストよ、私を見捨てないでください。私はあなたに希望を置いているのです。あなたを愛し、あなたの聖なる御名を告白するこの魂を、獣たちに引き渡さないでください。私の敵に、私を嘲笑わせないでください。弱きあなたのしもべである私を強めてください。不義に打ち負かされないように。」

[6285] 主の奉献の日のカノン、第3歌、イルモス。

[6286] すなわち、キリストを通して得られる恵みと比較すれば、それは部屋から掃き出される単なる恥に過ぎないと考える。

[6287] ここには、当然ながら、救い主の「賢い乙女たち」のたとえ話が含まれている（マタイ25:1–13参照）。

彼女を自分の不敬虔な道へと引き戻そうと、拷問官はあらゆる手段を講じて彼女を誘惑し、優しい言葉や贈り物、そして様々な約束で彼女の乙女の心を惑わせようとした。

しかし、彼女は断固としてこう言った。

「拷問者よ、狡猾な説得で私の弱さをあなたの不敬虔と不法へと容易に傾けられるなどと思わないでください。私は生まれながらの女性であり、肉体は弱く、年齢も若くはありますが、それでも私の心はあなたよりも堅固であり、私の信仰の力は、あなた方の勇気よりもはるかに強いのです。さらに、私の主キリストの恵みにより、私は、あなたがたが自らを賢いと思い込んでいるすべての異教の弁舌よりも優れた知恵を持っている。あなたがたは、真の神を知ろうとせず、悪魔を神として崇めているため、実際にはすべての無知な者たちよりも狂っているのだ。　それゆえ、かつて蛇が私たちの原初の母を惑わしたように、あなたは巧妙な言葉で私を惑わすことはできない。また、私が最も甘美な私のイエスのために苦味と見なしているこの世の快楽をもって、この苦い世を私に甘く見せかけることもできない。そして、*あなたの攻撃*がいかに激しくとも、*「弱さの中に現れる力」*[6288]（IIコリント12:9）を打ち負かすことはできない。たとえお前の攻撃がいかに強大であろうとも。なぜなら、私は私のキリストに希望を置いているからだ。悪魔の傲慢な頭部が、妻の足によって踏みつけられるその日まで、主は私を見捨てず、私からその力強い助けの手を奪うことはないだろう。

その時、聖エウフィミアのこの答えに恥をかかされた拷問官は、激しく怒り、これまで彼女に示していた卑劣な愛情を猛烈な怒りに変え、無数の鋭い刃が付いた拷問用の車輪を用意するよう命じた。　役人たちがこの車輪に聖なる乙女を縛り付けたとき、彼女は十字の印を切って身を守った。そして車輪が回り始めると、殉教者の体は断片ごとに切り裂かれ、関節は粉々に砕け散った。

それでも彼女は熱心に神に祈りを捧げた。

「主イエス・キリストよ」と聖なる乙女は叫んだ。「わが魂の光、命の泉、あなたを信頼する者に救いを与えてくださる方よ！　今、私を助けに来てください。そうすれば、あなたが唯一の神であり、あなたに希望を置く者たちにとって揺るぎない希望であることを、すべての人が知るでしょう。「*あなたに災いは及ばず、病はあなたの住まいには近づかない」*[6289]（詩編90:9–10）。

彼女が祈ると、車輪は突然止まり、奉仕者たちは力尽きて倒れました。それは、神の御使いが現れて車輪を壊し、聖なる乙女を車輪から降ろして、彼女の傷を癒やし、健康を取り戻させたからです。　彼女は、無傷で健やかなまま車輪から降りると、喜びの歌を歌い、神に感謝し、その全能の力を賛美した。

それを見た拷問官とそこにいた者たちは皆、困惑し、この奇跡に深く驚嘆した。しかし、悪意が心の目を曇らせているところでは、これほど偉大な奇跡も何の役にも立たなかった。　彼らは真の神の力強い御手を知ることはできなかった。「*この民の心は鈍り、耳は聞こえにくく、目は閉ざされている」*（イザヤ書6:10）ため、この奇跡的なしるしを魔術の仕業だと見なした。

その後、拷問官は特別な炉に大きな火を燃やし、そこに聖女を投げ込むよう命じた。　炉に火がくべられ、すでに激しい炎が燃え上がっていたその時、聖なる殉教者は再び祈りに身を委ねた。その祈りは、かつて火の炉の中で三人の若者を鎧のように守ったものだった。聖なる乙女は、物質的な火に対して、神への熱烈な愛という火を対抗させ、天を仰ぎ見てこう語った。

「高き所に住まわれ、謙遜な者を顧みられる神よ（イザヤ33:5；詩篇137:6）！　あなたはバビロンにおいて、御法のために火に投げ込まれた三人の若者を、御自身の聖なる天使によって火から無傷で守り、天から露を彼らに降らせてくださいました。どうか、御自身の栄光のために奮闘するこのあなたのしもべ、私をも助けてください、わがキリストよ！

[6288] すなわち、弱き人々を強める神の力のことである。

[6289] すなわち、神を自分の避難所とした者たちには、災いが及ぶこともなく、傷が体を苦しめることもない（詩篇90:9–10）。

そう言うと、彼女は十字の印を盾のように掲げ、火の中に投げ込まれるのを静かに待ち続けました。

すると、殉教者を炉に投げ込むはずだった二人の兵士、ヴィクトルとソスフェンは、炎の中に現れた驚くべき光景を目にした。彼らの前に神の天使たちが現れ、炉の中の炎をかき分け、キリストの花嫁に触れることを禁じたのである。この奇跡を目撃した彼らは、拷問官にこう言った。

「プロコンスルよ、たとえあなたが我々の首を刎ねるよう命じようとも、この聖なる乙女に我々の汚れた手で触れ、彼女を火の中に投げ込むことなど、決してできません。なぜなら、あなたの目には見えない驚くべき奇跡を、我々は目撃しているからです。　むしろ、炎の中から私たちを脅かす、あの光を放つ人々の怒りを受けるよりは、あなたの激怒に耐えるほうがましです。

これを聞いた拷問官は彼らに激怒した。彼らがキリスト教徒であり、それゆえに少女を炉に投げ込むことを拒んでいるのだと考え、彼らを縛り上げるよう命じ、エウフィミアに関する命令は他の二人の兵士、すなわちカエサルとヴァリウスに執行させた。　この二人は少女を捕らえて炉に投げ込んだが、たちまち炉から激しい炎が噴き出し、少女を炉に投げ込んだ兵士たちに向かって襲いかかり、その場で彼らを灰へと焼き尽くし、他の従者たちを逃げ出させた。　一方、聖女は炉の真ん中で、あたかも明るい宮殿や涼しい露の中にいるかのように喜び踊りながら、三人の若者の歌を歌った。「*主よ、私たちの先祖の神よ、あなたは祝福され、永遠に賛美され、称えられますように*」（ダニエル書3:52）。そして驚くべき奇跡が起こった。火は彼女に触れることもなく、その衣服さえも焦がさなかった。というのも、朽ちることのない彼女の花婿ご自身、主キリストが、密かに炉の中に降りてきて、御自身の聖なる花嫁を天の涼しさで包んでくださったからである。炉の火が消えると、聖女は無傷で健やかに出てきて、皆を驚嘆させた。　どう対処すべきか分からなかった拷問官は、彼女を牢獄に投獄するよう命じ、「夜になってから、この魔女をどうするか考えよう」と心の中で呟いた。その後、ヴィクトルとソスフェンを呼びつけ、激しい怒りをぶつけ、もし彼らが偶像を崇拝しなければ、彼らを滅ぼすと脅した。

それに対し、二人はこう答えた。

「これまで私たちは真理を知らず、迷い続けていました。しかし今、天と地を創造された唯一の神を知りました。私たちは神を信じ、礼拝します。かつて私たちも礼拝していたあなたの神々については、悪霊に惑わされていたことを知らずに崇めていたのですから、これからは決して崇めることはありません。　私たちにどうしようとご自由に：私たちの肉体はあなたの手に委ねられているが、魂は神の御加護の下にある。

そして、拷問官は彼らを野獣に引き裂かれる刑に処した。　聖人たちが、獣に引き裂かれることになっているその場所へ向かう際、彼らは神に熱心に祈り、神が彼らに憐れみを示し、迷いと不信仰の中にあった頃に犯した罪を赦し、神を信じる者たちがいる場所へ彼らの魂を導いてくださるよう願った。　するとたちまち、天から神の御声が響き渡り、彼らを安息へと招いた。その声を聞いた彼らは、喜びをもって自らの魂を神の御手に委ねた。一方、獣たちは彼らの遺体には手を出さず、その遺体は後に信者たちによって密かに埋葬された。

夜が明けて朝になると、拷問官は裁判官の席に着き、聖エウフィミアは牢獄から連れ出された。裁判に向かう途中、彼女は喜びながらこう歌った。

「*『神よ！　あなたに新しい歌を歌います』*（詩編143:9）。主よ、私の力よ、私はあなたを賛美します！　諸国民の中であなたを讃え、あなたの御名を称えます。あなたは唯一の真の神であり、あなた以外に神はいないからです。」

そう歌いながら、彼女は裁判の場へと連れて行かれた。そこで彼女は長い間尋問され、拷問を受け、生贄となるよう強要された。それでもなお従うことを拒むと、拷問官は彼女の不屈の姿勢を確信し、彼女を絞首刑に処し、鋭いナイフでその肉体を削り取るよう命じた。しかし、この拷問の後も、彼女は神の力によって無傷のままであった。　その後、深い堀を掘り、そこに水を満たし、数え切

れないほどの蛇、ハリモグラ、有毒な海蛇、そして陸や水に生息するあらゆる爬虫類を放り込んだ。堀がそれらで満たされると、拷問官は聖エウフィミアをそこに投げ込むよう命じた。

彼女は十字を切ってこう言った。

「わが光、イエス・キリストよ！　あなたは水の獣の腹の中でヨナを無傷で守り、ダニエルを獅子の口から救い出されました。どうか、あなたの力強い御手によって私をも守り、私を通してあなたの聖なる御名が栄光を受けますように。」

そう言い終えると、彼女は堀へと身を投げた。すると、蛇や毒蛇たちが彼女に近づいたが、彼女に何の害も与えず、むしろ彼女を気遣っているかのように、水で満たされた堀の深みで溺れないよう、自分たちの背中に彼女を乗せて支えてくれた。こうして聖なる乙女は、神の御慈悲により、何の傷も負うことなくそこから出てきたのである。　拷問官は、彼女をどう扱えばよいのか分からず、すでに完全に途方に暮れていた。　それでもなお彼女を滅ぼそうと望み、聖女が持つと彼が考えていた魔法は、明らかな危険には打ち勝つものの、隠された策略には通用しないだろうと考え、彼は別の堀を掘らせ、そこに鋭い槍や　剣やナイフで埋め尽くし、それらの武器をすべて、刃先を上に向けて堀の底に突き刺し、外側を枝や土で少し覆わせた。　その後、彼は殉教者にその堀を渡るよう命じた。彼女は何も知らずに、突き立てられた鋭い武器の上に転落し、傷によって死ぬだろうと期待していたのである。しかし、聖女は網を飛び越える鳥のように軽やかに渡り切った。一方、その堀の存在を知らなかった一部の異教徒たちは、そこに転落して命を落とした。　これを見た拷問官は恥に打ちのめされ、ここで聖書の言葉が成就した。*「彼は堀を掘り、それを掘ったが、自ら用意した穴に落ちた」*（詩編7:16）。

聖女は神を賛美し、次のように歌った。

「主の御力を誰が語り尽くせよう。そのすべての賛美を誰が告げ伝えられようか？」　（詩編105:2）。なぜなら、あなたは苦しめられていたあなたのしもべを、傷一つ負わせることなく守り、火から救い出し、獣や水、車輪から守り、堀から引き上げてくださったからです。そして今、主よ、古くからあなたに従順な者たちの敵であった者の手から、私の魂を救い出してください。　*「わが若き日の罪と、わが過ちとを、思い起こさないでください」*（詩編24:7）。しかし、私のために流された御血の一滴によって、私の肉と霊の汚れを清めてください。あなたは、御自分のしもべたちを清め、聖別し、照らす方だからです（ヘブライ人への手紙1:3；ルカによる福音書2:32）。

総督は、再び優しい言葉で彼女を誘惑しようと試みた。

「お前の家系を汚すな」と彼は言った。「お前の若さの輝きを台無しにせず、自らを死に追いやるな。偉大なるアレウスを崇めよ。そうすれば、我ら全員から敬われ、称賛され、偉大な栄光と富をもって報われるだろう。」

彼は彼女を誘惑するために他にも多くのことを語ったが、彼女は彼を嘲笑し、狂人呼ばわりした。

そこで彼は再び彼女を拷問し始め、棒で残酷に打ちのめした後、鋭い鋸で彼女を切断するよう命じた。しかし、その鋸は彼女の聖なる体に何の害も与えることができなかった。　その後、彼は彼女を熱した鉄板の上で焼くよう命じたが、天使たちがキリストの花嫁と共にあり、あらゆる拷問の中で彼女を守っていたため、鉄板は冷めてしまった。ついに、総督はエウフィミアを野獣に食わせる刑に処した。

聖女が、獣たちに引き裂かれることになっていたサーカスへと連行されたとき、彼女は、主が彼女の苦しみ終わらせ、その魂を御手の中に迎え入れ、この多くの苦しみを味わった体から、切望する国へと移るよう命じてくださるよう祈った。

「力ある主よ！」と彼女は言った。「あなたは私に、あなたの無敵の力と打ち負かされぬ御右の手を現わし、悪魔たちの無力さと拷問者の狂気を示し、私をあらゆる苦しみよりも高い所に置かれました。　かつて私より先に殉教した人々の殺害と流血を許されたように、今、砕かれた心と謙虚な

精神をもってあなたに捧げる私の犠牲も受け入れてください。そして、聖徒たちの住まいで、殉教者たちの仲間に加わり、私の魂を安らかにしてください。「あなたは永遠に祝福された方です」。

聖エウフィミアが祈りを終えると、彼女に向かって獅子や熊といった猛獣が放たれたが、それらは彼女に近づくと、彼女の足を舐めた。　ただ一頭の雌熊だけが彼女に小さな傷を負わせ、そこから血が流れた。その時、天から声が聞こえ、彼女を天上の住まいに招き寄せた。そして直ちに、彼女は、その御名のために全き献身をもって苦難に耐えた主のもとへ、その霊を委ねた。　すると大地が揺れ、街が揺らぎ、城壁は崩れ、神殿は倒れ、すべての人を大きな恐怖が包み込んだ。人々が恐怖のあまりサーカスから逃げ去った後、殉教者の聖なる遺体は地面に横たわったまま残された。

エウフミアの両親は、聖なる娘の遺体を抱き上げ、敬意を込めて、町の近く、一ポプリシュの距離にある場所に彼女を葬った[6290]。 両親は神に感謝し、このような娘の親となれたことを喜び、彼女は自らの血を流すことによって、天の花婿、キリスト、そして万物の王の花嫁となった。その御方に、父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

コンダク、第4調:

汝は苦難のうちに立派に奮闘し、死後も奇跡の恵みによって我々を聖別してくださる、万人に称えられる方よ。それゆえ、我らは信仰をもって汝の神聖な聖堂に駆け寄り、汝の聖なる眠りを讃え、心の病から解放され、奇跡の恵みを汲み取ることができるように。

聖殉教者セバスティアナの記念日

記念日：9月16日

聖セバスティアナはドミティアヌス帝の治世[6291]に生き、使徒パウロの弟子であった。総督ゲオルギオスは、マルキアノポリス[6292]で彼女を捕らえるよう命じた。彼女は殴打され、灼熱の炉に投げ込まれたが、無傷のままそこに留まった。 その後、彼女はヘラクレイア[6293]へ連行され、そこで木に吊るされた後、野獣の餌として放り込まれた。しかし、彼女は再び無傷のままであった。ついに、彼女は剣で首を刎ねられたが、その際、血の代わりに乳が流れ出た[6294]。

聖殉教者メリティナの記念日

記念日：9月16日

6290 その後、この場所に大殉教者エウフィミアの栄光を称える教会が建てられた。この教会では、西暦451年に第4回全地公会議（カルキドン公会議）が開催された。5世紀には、ローマとメディオランに大殉教者を祀る教会が建てられた。 彼女の聖遺骨は、テオドシウス大帝の治世中にアレクサンドリアへ移され、その後ハルキドンへ返還された。ハルキドンがペルシャ軍に占領された後（617年）、聖エウフィミアの聖遺骨はコンスタンティノープルへ移され、現在もそこに保存されている。

6291 ドミティアヌス――81年から96年まで在位したローマ皇帝で、キリスト教徒に対する残酷な迫害者であった。

6292 マルキアノポリス――コンスタンティノープルからドナウ川へ向かう道沿い、下ミシア地方にある都市。後にプレスラヴと改称され、現在はブルガリアのプラヴォディ村にあたる。

6293 イラクリア、あるいはヘラクレイア――都市名として頻繁に見られる名称である。ここでは、プロポンティス（マーブル海）沿岸に位置し、優れた港湾を持つ、この名のフラキアの都市を指す。これはサモス島人の古代植民地であり、現在はエレグリと呼ばれる。ヘラクレイアにおいて、セバスティアナの拷問を行ったのは、統治者ポンピアンであった。

6294 ギリシャの伝承によれば、彼女の遺体は海に投げ込まれたが、三人の天使がそれをリジスト（レデスト――フランクイアのマルマラ海沿岸、現在のロドスト）へと運び去った。

聖メリティナは、フラキアのマルキアノポリスという町出身であり、アントニヌスの治世[6295]、イゲモン・アンティオコスの時代に生きた。彼女は多くの奇跡を行った。例えば、その祈りによって偶像を倒し、アポロとヘラクレスの像を粉砕し、多くの人々を真の信仰へと導いた。　その後、彼女はイゲモンの妻をキリストへと改宗させた。このため、彼女は斬首された。彼女の尊い遺体は、当初、埋葬されずに放置されていた。あるマケドニア人、アカキウスという名の男が、故郷へ帰る途中でその場所を通りかかり、彼女の聖遺骨を持ち帰る許可を求め、それを聖櫃に納め、故郷へ持ち帰ろうとした。 航海の途中、彼は病に倒れ、息を引き取った。船がレムノス島の岬[6296] に到達したとき、聖殉教者の遺体はそこに安置された。彼女の墓の近くには、アカキイの遺体も埋葬された。

聖殉教者リュドミラの記念日

記念日：9月16日

福者リュドミラはセルビア出身で、セルビアの公爵の娘であった。彼女はチェコの公ボリヴォイに嫁がされた。当時、チェコの人々はまだ洗礼を受けておらず、ボリヴォイ公自身とその若い妻も異教徒であった。 結婚後、二人はキリストを信じ、父と子 、そして聖霊の名において洗礼を受け、教会を建て、そこに司祭を置いた。彼らには三人の息子と一人の娘がいた。　ボリヴォイは生後36年で亡くなった。聖女リュドミラは、神の御心への完全な献身をもってその悲しみを耐え忍び、全財産を貧しい人々に施した。彼女の息子ヴラティスラフは父の後を継いで王位につき、33年間民を治めたが、その後、彼もまたこの世を去った。　権力を掌握したのは、リュドミラの孫であるヴィャチェスラフであった。その時、ヴィャチェスラフの母は、義母であるリュドミラを憎み、あらゆる手段を講じて彼女を滅ぼそうとした。このことを知ったリュドミラは、テチンという町へと身を隠した。　彼女の嫁は二人のボヤールをそそのかし、至福のリュドミラを殺害するようテチンへ送り込んだ。この二人の悪党は現地に到着すると、自分たちと同じような悪人どもを大勢集めた。夕暮れになると、彼らは至福のリュドミラが滞在していた中庭と宮殿そのものを包囲し、扉を破壊して宮殿内に侵入した。　彼らは聖なる公妃を捕らえると、彼女の首に縄をかけ、絞め殺した。このようにして、至福のリュドミラは神に喜ばれ、殉教の死を遂げた。これは土曜日の深夜1時に起こったことであり、当時、彼女は生後61歳であった。　神は、彼女の埋葬地（彼女は教会ではなく、城壁の下に埋葬された）を多くの奇跡によって栄光に包まれた。毎夜、その場所の上には燃えるろうそくが現れ、ある盲人は聖リュドミラの墓の土に触れたとき、目が見えるようになった。　こうした奇跡的なしるしを耳にした彼女の孫ヴィャチェスラフは、彼女の聖遺骨をプラハ市へ移し、聖ゲオルギオス教会に安置した。そこでは現在もなお、多くのしるしと奇跡が顕現している。一方、ヴィャチェスラフの呪われた母は、悲惨な最期を遂げた[6297] 。

[6295] ローマ皇帝アントニヌス・ピウスは、138年から161年まで在位した。

[6296] レムノス島は、エーゲ海で最も大きな島の一つであり、トラキアの領土に属し、アトス山から87マイルの距離にある。

[6297] 至福のリュドミラは、チェコのキリスト教公ボリヴォイの妻であり、9世紀末から10世紀初頭にかけて生きた。 彼女は聖ヴァーツラフ公（926～935年、ヴラティスラフ公と異教徒のドラゴミラの息子。聖なる生涯を送り、民衆に愛され、死後は国の守護聖人として崇敬されるようになった）の祖母であった。　ボヘミアに隣接するモラヴィアの聖使徒同等のメフォディウスから、夫と共に聖なる洗礼を受けた。夫の死後、チェコの首都プラハで暮らし、孫であるヴィャチェスラフ公を信仰の真理に基づいて丹念に育て上げた。 聖リュドミラは、異教に戻った義理の娘ドラゴミラの讒言により、927年に殉教の死を遂げた。　彼女の墓の前では、数々の奇跡や異変が起こった。その噂を耳にしたヴィエチェスラフ公は、彼女の朽ちることのない遺体を、父が建設したプラハの聖大殉教者ゲオルギオス教会へ厳かに移した。彼女はチェコの守護聖人とされている。

キエフ都主教聖キプリアンの記念日

記念日：9月16日

聖キプリアン、キエフおよび全ロシアの大主教であり、奇跡行者であった彼は、セルビアのテルノヴァという町出身であり、聖なる生活[6298]、卓越した知恵、そして聖典への深い造詣[6299]によって際立っていた。彼は、神に導かれた教えと、魂を救う訓示によって、すべての人を啓発した。　彼は絶え間ない教えの業に熱心に励み[6300]、信徒たちに対し、神への畏れを保ち、あらゆる形で嘲笑や無駄話を控え、とりわけ祈りと真の悔い改めに励むよう指導した。　彼は静かで物静かな生活を愛していたため、しばしば自身の大主教領であるゴレニシェヴォの村[6301]へと身を引いた。このとりわけ安らぎに満ちた場所は、セトゥン川とラメニス川の間に位置し、豊かな森に囲まれていた。　ここで彼は、聖バシレイオス大主教、聖グリゴリオス神学者、聖ヨハネス・クラマトルスの三聖人の名に因んで教会を建立した。

この地で暮らしながら、聖キプリアンは司教や司祭を叙任し、多くの聖典をギリシャ語からスラブ語へ書き写し、翻訳することに熱心に取り組みました[6302]。また、偉大な奇跡行者であり、全ロシアの総主教であった聖ペトロの伝記も執筆しました[6303]。聖キプリアンは、祈りと聖書の読誦にも深く励みました[6304]。彼は常に、死の記憶、キリストの最後の審判、罪人の苦しみ、そして義人の至福を心に留めていました。　このような神に喜ばれる行いに励み、キプリアン大主教は高齢に達し、

6298 聖キプリアンは当初、アトス山で修道生活を送り、テルノフの総主教エウフィミオスがアトス山の修道士キプリアンに宛てた書簡が示すように、その労苦によって名声を博した。

6299 その教養、探究心、そして聖典への深い造詣により、彼はアトス山に在留中からもすでに知られており、そこから前述のエウフィミオス総主教に対し、ある「教会に関する事柄」、　具体的には、ペンテコステの期間およびキリストの降誕から神現祭までの12日間における礼拝の作法、ならびに荒野で司祭が不在の際の聖体拝領に関する質問であった。　彼の教養と聖なる生活は、コンスタンティノープル総主教フィロフェイの特別な注目を集め、総主教は彼を側近として信頼を寄せ、後に当初はキエフおよびリトアニアの大主教に叙任した。聖アレクシオスの死後、　キプリアンは全ロシアの大主教となり、2年間にわたる教会階層の混乱を経て、1390年にロシア教会の統治を引き受けた。

6300 彼の教導の遺産として残されているものには、とりわけ、真のキリスト教的知恵の精神と、彼に委ねられた信徒たちの霊的必要に対する熱心な牧会的配慮に満ちた、様々な書簡がある。そうした書簡の中でも、特に注目に値するのは、イグメン・アファナシイへの書簡と、プスコフの聖職者たちへの書簡である。

6301 ゴレニシェヴォは、モスクワ近郊の村で、モスクワ郡のヴォロビエヴィ・ゴリ（鳩の山）の向こう側、風光明媚な高台に位置しており、現在も存在している。また、聖人はかつて、ウラジーミル郡のいわゆる「聖なる湖」へと身を隠したことがあり、そこにも主の変容に捧げられた教会を自ら建立した。

6302 このように、聖キプリアンによってギリシャ語から翻訳されたものには、『トレブニク』や『スルージェブニク』があり、これらは一部の箇所において、ロシアの教会実務のニーズに合わせて部分的に改変されている。また、カノンや祈祷文、さらには16世紀にはまだモスクワのウスペンスキー大聖堂に保管されていた『コルムチャヤ』も翻訳された。　聖キプリアンには、典礼に関するいくつかの小論も帰せられており、その一部は翻訳であり、一部は独自のものである。聖人はまた、ロシアの聖人や公爵たちによる規範的な文章を収集し、典礼やその他の聖務のリストを送付し、聖務に関する解説を提示し、その執行における恣意的な行為を糾弾するなどした。　概して、ロシア教会の歴史において、キプリアン都主教は、とりわけ教会礼拝書や教会儀式の是正の分野における活動家として、重要な位置を占めている。　聖キプリアンに関する古い伝承によれば、彼は「多くの聖書をギリシャ語からロシア語に翻訳し、我々の益となる多くの書物を残した」とされている。

6303 聖キプリアンが著した聖ペトロ大主教の伝記は、生きた敬虔さに満ちており、災いや重い病から救われたことへの感謝の表れである。このことはキプリアン自身も証言している。　――キプリアンには、現在まで伝わる歴史的著作が他にもいくつかあり、そのうちの一部はいわゆる『ステペンナヤ・クニガ』に収録されている。また、聖キプリアンが多くのロシアの聖人の行伝を著したという記録も残されている。

6304 年代記の記述によれば、彼は「あらゆる知恵と理性」に満ちており、「非常に博学で、極めて霊的であり、自らの手で書物を執筆し、祈りに頻繁に励み、神聖な聖書の尊崇にも熱心であった」という。

自身の村であるゴレニシェフで病に倒れました。 臨終の4日前、彼は遺書を残し、その中ですべての信徒を赦し、祝福するとともに、自らも彼らに許しを請い、これによって真のキリスト教的な寛容と謙遜を示した。彼がそうしたのは、謙遜が持つ力を知っていたからである。謙遜は罪を赦し、すべてを善へと導くのである。 聖人は臨終に際し、周囲にいた司教や側近たちに、自身の埋葬の際、棺の前でこの書簡を読み上げるよう遺言した[6305] 。そして、そのような謙遜の心と、感謝の祈りを口にしながら、彼は世界創造から6914年目の9月16日、主のもとで安らかに息を引き取った[6306] 。

聖ドローフェイ・隠者の記念日

記念日：9月16日

聖ドローフェイはフィヴァイダ出身であり、アレクサンドリア近郊の荒野にある、「隠者の住居」と呼ばれる場所に滞在していた[6307] 。ヘレノポリスの司教パラディオス[6308] は、若き日に彼の断食の苦行をこの目で見ていたが、彼について次のように語っている。

その長老は60年間、一つの洞窟に滞在し、極めて厳しい生活を送っていた。彼は毎日、真昼の酷暑の中、海辺を歩き回り、石を集めて小部屋を築き、それを自分で築くことのできない人々に与えていた。私（パラディオス）はある日、彼にこう尋ねた。

「父よ、なぜこれほど高齢になられた今、酷暑の中でご自身の体を苦しめるのですか？」

すると彼は私にこう答えた。

「それは、体が私を苦しめるのではなく、私が体を苦しめるためだ。」

彼は毎日、適量だけ、乾いたパンとわずかな荒野の草を口にし、一日に一度、水も適量だけ飲んでいた。神が証人である。誰も彼が藁の敷物の上に横たわったり、眠ったりしているのを見たことはなかった。夜通し、彼は座ったままナツメヤシの枝で籠を編み、それを売って食糧を買っていた。そこで私は、彼が私の前だけでこれほど厳格に生活しているのではないかと思い、彼の生涯のすべてを知りたくて、多くの弟子たちに、彼の生活は常にこれほど厳格なものなのかと尋ねた。 すると彼らは、彼が幼い頃からそのような生活を送っており、習慣として決して眠らず、何かをしている時や食事をしている時にだけ、時折目を閉じる程度だったと教えてくれた。そのため、食事中にパンが口からこぼれ落ちることも度々あったという。ある時、私たちが彼に、せめて少しだけでも藁の敷物の上で眠るよう強要すると、彼はまるで私たちを憐れむかのように、こう言った。

6305 聖キプリアンの遺書、すなわち霊的書簡は、彼の遺志に従い、彼の埋葬の際に朗読され、その後も彼の後継者たちの埋葬の際に朗読された。 この書簡はキリスト教の知恵に満ち、深い敬虔の精神に貫かれており、この世のすべてのものの儚さ、虚しさ、無価値さ、そして死すべき者の記憶について、感動的な雄弁さで語っている。

6306 西暦1406年——その聖遺骨は1472年に発見され、現在モスクワのウスペンスキー大聖堂の地下に安置されている（聖遺骨の発見と移送を記念する祝日は5月27日である）。 – 聖キプリアンがロシア教会を統率していた時期、特に注目に値するのは、モスクワおよびロシア全土が、 聖母マリアの御加護により、恐ろしいアジアの征服者タメルランの侵攻から救われた出来事である。これは、聖キプリアンの指示と願いにより、奇跡を起こす「ウラジーミル聖母像」がウラジーミルからモスクワへ移された時期と重なっていた。

6307 フィヴァイダとは、古代に名高い都市フィヴァの地域を指す。この名称は、主要都市フィヴァの名にちなんで、上エジプト（南部）全体を指すようになった。エジプトの修道院の一つで、ナイル川の西岸に位置する場所は、「隠者の修道院」と呼ばれていた。

6308 パッラディオス・エレノポリス（368–430年）は、聖ドロフェイの弟子であり、ガラティア出身である。388年にアレクサンドリアに到着し、その後、聖ドロフェイも修行していた近隣の荒野へと移り、そこで修行に励んだ後、ベツレヘムに移住した。 399年、小アジアのビフィニアにあるエレノポリスの司教に選出された。 その後、アルカディウス帝は、彼を聖ヨハネス・クラマトルスの支持者として上エジプトへ追放したが、408年にアンティノイへ移され、412年には聖人伝と彼らに関する伝承をまとめた著作を著し、これを彼にちなんで『ラウサイコス』と名付けた。

「もしあなたがたがいつか天使を眠らせることに成功したら、私にも眠らせてくれ。」

ある日のこと――パラディウスはこう語っている――彼は九時頃、私を自分の井戸へ遣わし、食事の席に持っていくための小さな水瓶を持ってくるよう命じた。　すると、私が井戸に近づき、身を屈めたとき、その中にアスピド（[6309]）がいるのを見かけた――恐怖のあまり、水を汲むことすらできず、走って彼のところへ戻り、見たことを告げてこう言った。

「私たちは終わりです、師よ。井戸の中にアスピダを見ましたから。」

すると、その聖人は少し微笑んで首を横に振りながら、私にこう言いました。

「もし悪魔が、すべての井戸や泉にエヒドナやアスピド、その他の毒蛇を放ちたがったとしても、お前は決して水を飲むことはなく、渇きで死んでしまうだろう。」

そう言うと、彼は立ち上がり、自ら井戸へと向かい、水を汲み上げると、それに十字を切って祝福し、それを口に含みながらこう言った。

「十字架があるところには、悪魔の力は全く害を及ぼさないのだ。[6310]。」

9月30日

9月17日（旧暦）

聖女ヴェラ、ナデージダ、リュブヴィ、およびその母ソフィアの殉教記念日

記念日9月17日

ハドリアヌス帝の治世、ローマにはソフィアという名のイタリア出身の未亡人が住んでいた。ソフィアとは「至高の知恵」を意味する。　彼女はキリスト教徒であり、その名にふさわしく、使徒ヤコブが「*上から来る知恵は、まず清く、次に平和を愛し、謙遜で、従順であり、憐れみに満ち、善い実を結ぶ*」[6311]　（ヤコブ3:17）と称賛するその知恵に従って、分別ある生活を送っていた。この賢明なソフィアは、誠実な夫婦生活を送り、三人の娘をもうけ、彼女たちに三つのキリスト教的美徳にふさわしい名前を付けた。長女を「信仰」、次女を「希望」、三女を「愛」と名付けたのである。そもそも、キリスト教の英知から生まれるものといえば、神に喜ばれる美徳以外に何があるだろうか。三女の誕生後まもなく、ソフィアは夫を亡くした。　未亡人となった後も、彼女は　敬虔な生活を続け、祈り、断食、施しによって神に奉仕した。そして、娘たちについては、賢明な母としてできる限りの教育を施した。彼女たちは、その名にふさわしいキリスト教の美徳を、日常生活の中でも実践できるよう、娘たちを導いた。

子供たちが成長するにつれて、彼女たちの中にある美徳も深まっていった。彼女たちはすでに預言書や使徒書をよく知っており、指導者たちの教えに耳を傾けることに慣れ、熱心に読書に励み、祈りと家事に勤勉であった。　聖なる、神に導かれた母に従い、彼女たちはあらゆる面で優れた成果を上げ、ますます力強くなっていった。そして、彼女たちは並外れて美しく、分別があったため、やがて皆が彼女たちに注目するようになった。

[6309] アスピド、あるいはバシリスクは、最も毒性の強い蛇の一つであり、その毒は致命的である。アラビア、エジプト、サハラの砂漠地帯に生息している。

[6310] 『ラヴサイク』第2章――聖ドロフェイは、4世紀末、テオドシウス大帝（379～395年）の治世中にこの世を去った。

[6311] 使徒は、地上の、世俗的な知恵を、上からの、すなわち神から下る知恵と比較し、後者の特性を次のように指摘している：　それはあらゆる罪や情欲から解放されており、平和を愛し、自ら平和を愛し、あらゆる敵意を和らげようと努める。平和を乱さないために、自らあらゆる不正を柔和に耐え忍ぶ。　そこには論争や議論への情熱がなく、他者においても、従順さをもってその情熱を抑えようと努め、慈悲と善行に満ちている。

彼女たちの英知と美しさの評判は、ローマ全土に広まった。アンティオキアの地方長官も彼女たちのことを耳にし、会いたいと願った。　彼女たちを見るやいなや、彼は彼女たちがキリスト教徒であることを即座に確信した。なぜなら、彼女たちはキリストへの信仰を隠そうとはせず、キリストへの希望を疑うこともなく、キリストへの愛を弱めることもなく、むしろ皆の前で公然と主キリストを賛美し、神に忌み嫌われる異教の偶像を憎んでいたからである。

アンティオコスはこれらすべてをアドリアヌス王に報告し、王は直ちに家来たちを遣わして、少女たちを自分の元へ連れてくるよう命じた。王の命令に従い、家来たちはソフィアの家へ向かい、彼女の元に着くと、彼女が娘たちに教えを説いているところだった。　家来たちは、王が彼女と娘たちを自分の元へ呼び出していると告げた。王がどのような目的で彼女たちを呼び出しているのかを理解した彼女たちは、皆、神に向かって次のような祈りを捧げた。

「全能の神よ、御心のままに私たちを導いてください。私たちを見捨てず、聖なる御加護をお与えください。そうして、私たちの心が傲慢な拷問者に怯えることなく、その恐ろしい拷問を恐れず、死を恐れることもありませんように。何ものも、私たちを私たちの神であるあなたから引き離すことのないようにしてください。」

祈りを捧げ、主なる神にひれ伏した後、母と娘たち四人は、編んだ花輪のように互いに手を取り合い、王のもとへ向かった。そして、しばしば天を見上げながら、心の底からのため息と密かな祈りを込めて、自らを次のような方の助けに委ねた。　*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たち」*（マタイ10:28）を恐れるな、と命じられた方の御手に身を委ねた。王宮に近づくと、彼女たちは十字を切ってこう言った。

「神よ、私たちの救い主よ、あなたの聖なる御名の栄光のために、私たちをお助けください。」

彼らは宮殿に案内され、玉座に威風堂々と座する王の前に進み出た。　王の姿を目にすると、彼らは王に相応しい敬意を表したが、恐れも顔色を変えることもなく、心に勇気を抱いて王の前に立ち、まるで祝宴に招かれたかのように、皆を明るい眼差しで見つめていた。彼らは、主のために拷問を受けるべく、これほどまでに喜びをもって王の前に現れたのである。

彼女たちの気高く、明るく、恐れを知らない顔を見て、王は彼女たちがどのような家柄なのか、名前は何か、そしてどのような信仰を持っているのかを尋ね始めた。賢明な母は、非常に分別ある答えを返したため、その場にいた者たちは皆、彼女の答えを聞きながら、その知恵に驚嘆した。　自分の出自と名前について簡潔に述べた後、ソフィアはキリストについて語り始めた。その出自を誰も説明することはできない[6312]が、その御名はあらゆる民族が崇めるべきものである[6313]。彼女は、神の御子イエス・キリストへの信仰を公然と告白し、自らをそのしもべと称して、その御名を賛美した。

「私はクリスチャンです」と彼女は言った。「これこそが、私が誇りに思う尊い御名なのです。」

さらに彼女は、自分の娘たちをもキリストに嫁がせ、朽ちることのない花婿――神の御子――のために、彼女たちの朽ちることのない純潔を守らせるつもりだと語った。

そこで王は、目の前にこれほど賢明な女性がいるのを見て、しかし彼女と長々と語り合ったり裁いたりすることを望まなかったため、この件を別の機会に先送りした。王はソフィアと娘たちを、

[6312] *「その系図を誰が語り得ようか」*――と預言者イザヤの書（イザヤ書53:8）に記されている；すなわち、イエス・キリストの系譜や誕生（父なる神からの永遠の誕生、そして至聖なる聖母マリアからの一時的な誕生）を、誰もふさわしく描き出すことはできない。この偉大な神秘は、天使たちにも完全には明らかにされていない（Iペテロ1:12参照）。

[6313] フィリピ2:10を参照。ここでの「御名」とは、当然ながら神の御子の名を指しており、その御名によって、天にあるもの、地にあるもの、さらには陰府に住む者たちや悪霊に至るまで、あらゆる被造物がキリストを礼拝しなければならないのである。

パラディオという名の貴婦人のもとへ送り、彼女に娘たちを見守らせ、三日後に王のもとへ連れてきて裁きを受けるよう命じた。

パラディイの家に住み、娘たちを教育するための十分な時間を手にしたソフィアは、神から啓示を受けた言葉で教えを説き、昼夜を問わず彼女たちの信仰を確固たるものにした。

「愛する娘たちよ」と彼女は言った。「今こそあなたがたの功績を示す時であり、今こそ不死の花婿との結婚の日が訪れたのです。今こそ、あなたがたは自らの名にふさわしく、揺るぎない信仰、疑いのない希望、偽りのない永遠の愛を示さなければなりません。　今こそ、あなたがたが殉教の冠を戴き、愛しき花婿と結ばれ、大いなる喜びをもってその輝かしい御殿に入られる、あなたがたの栄光の時が来たのです。わが娘たちよ、このキリストの栄光のために、あなたがたの若き肉体を惜しむな。　あなたがたの美しさや若さを惜しんではなりません。人間の息子たちよりも慈愛に満ちた最も美しい方のために、そして永遠の命のために、この一時的な命を失うことを嘆いてはなりません。なぜなら、あなたがたの天の最愛の方、イエス・キリストこそが、永遠の健康であり、言葉に尽くせぬ美しさであり、尽きることのない命だからです。　そして、あなたがたの肉体が御名のために死に至るまで苦しめられたとき、御方はそれを朽ちることのないものへと変え、あなたがたの傷を、天の星のように輝かせるであろう。あなたがたの美しさが、御名のために受ける苦しみによって奪われたとき、御方は、人間の目がかつて見たことのない天の美しさをもって、あなたがたを飾ってくださるであろう。　そして、あなたがたが主のために魂を捧げてこの世の命を失うとき、主はあなたがたに永遠の命という報いを与え、その命の中で、天の御父と御父の聖なる天使たちの御前で、永遠にあなたがたを栄光に輝かせてくださいます。そして、すべての天の軍勢は、あなたがたをキリストの花嫁たち、そしてキリストの殉教者たちと呼ぶでしょう。　すべての聖なる者たちがあなた方を称え、賢い乙女たちはあなた方のために喜び、あなた方をその交わりに迎え入れるでしょう。愛する娘たちよ！　敵の誘惑に惑わされてはなりません。なぜなら、私の思うに、王はあなた方に愛撫を惜しみなく注ぎ、大きな贈り物を約束し、栄光、富、名誉、そしてこの朽ちゆく虚しい世のあらゆる美しさと甘美さを差し出すでしょう。　しかし、そのようなものを決して望んではなりません。なぜなら、これらすべては、煙のように消え去り、風によって吹き飛ばされる塵のようになり、花や草が枯れて土に還るように消え去るからです。激しい苦しみを見ても恐れてはなりません。少しの苦難を経れば、あなたがたは敵に打ち勝ち、永遠に勝利を収めるからです。　私は私の神、イエス・キリストを信じます。主は、御名のために苦しむあなた方を決して見捨てないことを信じます。主ご自身がこう言われたからです。*「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。胎内の子を憐れまないだろうか。　たとえ彼女が忘れても、わたしはあなたを忘れない」*（イザヤ49:15）。主は、あなたがたのあらゆる苦しみの中で絶えず共にいてくださり、あなたがたの功績を見守り、弱さを強め、報いとして朽ちることのない冠を用意してくださるのです。わが愛しき娘たちよ！　あなたがたが生まれた時の私の苦しみを思い出し、あなたがたを育て上げた私の労苦を思い出し、神への畏れを教えた私の言葉を思い出し、キリストへの信仰を善く、かつ勇敢に告白することで、老いた母を慰めてください。　もし私が「殉教者たちの母」と呼ばれるにふさわしい者とされ、もしあなたがたがキリストのために示す勇敢な忍耐、その聖なる御名の揺るぎない告白、そしてキリストのために死ぬ姿を見ることができれば、それは私にとって、すべての信者たちの間で、祝賀であり、喜びであり、名誉であり、栄光となるでしょう。その時、私の魂は喜び、私の霊は歓喜し、私の老いは力づけられるでしょう。　その時、あなたがたもまた、母の教えに従い、血を流すまで主のために立ち続け、熱意をもって主のために死ぬならば、真に私の娘となるでしょう。

母のこのような教えを感動して聞き入った乙女たちは、心に甘美さを感じ、霊を喜ばせ、殉教の時を婚礼の時のように待ち望んだ。なぜなら、聖なる根から生えた聖なる枝である彼女たちは、賢明な母ソフィアが教えたことを、魂のすべてをもって切望していたからである。　彼女たちは母の言

葉の一つひとつを心に刻み、まるで光り輝く宮殿へと向かうかのように、信仰をもって身を守り、希望をもって心を強め、主への愛の炎を胸に灯しながら、殉教の偉業に備えていた。　互いに励まし合い、支え合いながら、彼らは母に対し、キリストの助けを借りて、その魂に有益な助言をすべて実際に実行すると誓った。

三日目が来ると、彼女たちは不法な王のもとへ引き出され、裁きを受けることになった。王は、彼女たちが自分の誘惑的な言葉に容易に従うだろうと考え、こう語りかけた。

「娘たちよ！　お前たちの美しさを見て、若さを憐れむ者として、父としてこう助言する。宇宙の支配者である神々にひれ伏せ。もし私の言うことを聞き、命じられたことを実行するなら、お前たちを私の娘と呼んでやろう。　私は高官や統治者、そしてすべての顧問たちを呼び集め、彼らの面前であなた方を私の娘として公に認めよう。そうすれば、あなた方はすべての人々から称賛と敬意を受けることになるだろう。　しかし、もしあなたがたが私の言葉に従わず、私の命令を実行しなければ、自らに大きな災いをもたらし、老いた母を悲しませ、最も無邪気に楽しく過ごすべき時期に、自ら滅びてしまうことになるだろう。なぜなら、私はあなたがたを凄惨な死に追いやる。そして、あなたがたの体をバラバラに切り刻み、犬に食わせるために投げ捨て、あなたがたはすべての人々から踏みつけられることになるからだ。　それゆえ、あなたたち自身の幸福のために、私の言うことを聞きなさい。私はあなたたちを愛しており、あなたたちの美しさを損なったり、この命を奪ったりするつもりは毛頭なく、むしろあなたたちの父になりたいと願っているのだ。

しかし、聖なる乙女たちは、声を揃えて、心を一つにして彼に答えた。

「私たちの父は、天におられる神です。神は私たちと私たちの命を見守り、私たちの魂を憐れんでくださいます。私たちは神に愛されたいと願い、神の真の子と呼ばれることを望みます。　神にひれ伏し、神の御命令と戒めを守り抜く者として、あなたの神々など唾棄するものであり、あなたの脅しなど恐れません。なぜなら、私たちが望むのはただ一つ、最も甘美なるイエス・キリスト、私たちの神のために苦しみ、苦痛に耐えることだけだからです。

彼らからそのような答えを聞いた王は、ソフィア王妃に、娘たちの名前と年齢を尋ねた。

聖ソフィアはこう答えた。

「私の長女の名前はヴェラで、十二歳です。次女のナデージダは十歳、三女のリュボフはわずか九歳です。」

王は、これほど幼い年齢でありながら、彼女たちが勇気と知恵を持ち、このように答えることができることに大いに驚いた。王は再び彼女たち一人ひとりを自分の不敬な行いに従わせようと試み、まず長女のヴェラにこう言った。

「偉大なる女神アルテミスに生贄を捧げよ。」

しかし、ヴェラはそれを拒んだ。そこで王は、彼女を全裸にして鞭打つよう命じた。拷問人たちは、容赦なく彼女を打ちながら、こう言った。

「偉大なる女神アルテミスに捧げよ（犠牲を捧げよ）。」

しかし、彼女はまるで自分の体ではなく、他人の体を打たれているかのように、黙って苦痛に耐えた。何の成果も得られなかった拷問官は、彼女の処女の乳房を切り落とすよう命じた。しかし、傷口からは血の代わりに乳が流れ出た。　ヴェーラの拷問を見守っていた者たちは皆、この奇跡と殉教者の忍耐に驚嘆した。そして、首を横に振りながら、密かに王の狂気と残虐さを非難し、こう言った。

「この美しい乙女は、いったい何の罪を犯したのか。なぜこれほど苦しめられなければならないのか。王の愚かさと、老人だけでなく幼子までも非人道的に滅ぼすその野蛮な残虐さよ。」

その後、鉄の格子が運ばれてきて、激しい火にかけられた。それが赤熱して熱い炭のようになり、火花が飛び散るようになったとき、聖なる乙女ヴェラがその上に置かれた。　彼女は二時間もの間、その火格子の上に横たわり、主に向かって祈りを捧げながらも、微塵も火傷を負わず、その様子

は皆を驚嘆させた。その後、彼女は火にかけられた大釜の中に放り込まれた。その釜には沸騰する樹脂と油が満たされていたが、彼女はその中でも無傷のままであり、あたかも冷たい水の中に座っているかのように、神を賛美し続けた。　拷問官は、彼女をどうすればよいのか、どうすればキリストの信仰から彼女を遠ざけることができるのか分からず、剣による斬首を宣告した。

この判決を聞いた聖ヴェラは喜びに満ち、母にこう言った。

「母よ、私のために祈ってください。私がこの旅路を終え、切望する終着点にたどり着き、愛する主であり私の救い主にお目にかかり、その神性の御姿を仰ぎ見て喜びを満喫できるよう、どうかお祈りください。」

そして姉妹たちにはこう言った。

「愛する姉妹たちよ、私たちが誰に誓いを立て、誰に身を捧げたかを忘れないでください。私たちは主の聖なる十字架の印を刻まれ、永遠に主に仕えなければならないことを知っています。ですから、最後まで耐え抜きましょう。」　私たちを産み、育て、教え導いてくださったのは同じ母です。それゆえ、私たちもまた同じ最期を迎えなければなりません。同じ母胎から生まれた姉妹として、私たちは一つの意志を持たなければなりません。私があなた方の模範となり、あなた方も二人とも、私に従って、私たちを招いておられる私たちの花婿のもとへ歩んでいくように。

その後、彼女は母に口づけをし、続いて姉妹たちを抱きしめて同様に口づけをした後、剣の下へと歩み出た。一方、母は娘のことを少しも嘆かなかった。なぜなら、神への愛が、彼女の心の中の悲しみや、子供たちに対する母の憐れみを打ち勝ったからである。　彼女が心を痛め、気にかけていたのは、娘たちの誰かが苦しみをおそれ、主から背を向けてしまわないかということだけだった。

そして彼女はヴェラにこう言った。

「私はあなたを産んだ、わが娘よ。そしてあなたのために病に苦しんだ。しかし、あなたはキリストの御名のために死に、私の胎内で受け入れたその血を、主のために流すことで、この恩に報いてくれるのだ。　行け、私の最愛の子よ。自らの血に染まり、あたかも緋色の衣をまとったかのように、あなたの花婿の御前に美しく現れなさい。そして、あなたの貧しい母のことを御前で思い起こし、あなたの姉妹たちのために彼に祈りなさい。そうすれば、主は彼女たちをも、あなたが示しているのと同じ忍耐をもって強めてくださるでしょう。

その後、聖ヴェラは尊い首を斬られ、その頭であるキリスト・神のもとへと旅立った。一方、母は、苦難に満ちた娘の遺体を抱きしめ、それに口づけをしながら喜び、娘のヴェラを天の御殿に迎え入れてくださったキリスト・神を賛美した。

すると、不義の王は、もう一人の姉妹ナデージダを自分の前に立たせ、彼女にこう言った。

「愛しい子よ！　私の助言を受け入れてほしい。これは、父親として君を愛しているからこそ言うのだ――偉大なるアルテミスに頭を下げなさい。そうすれば、君もまた、姉のように命を落とすことにはならないだろう。　あなたは彼女の恐ろしい苦しみも、その悲惨な最期も目撃した。まさかあなたも、同じように苦しみたいと願うのか。信じてほしい、我が子よ。私はあなたの若さを憐れんでいるのだ。もし私の命令に従ってくれたなら、私はあなたを自分の娘として迎え入れただろう。

聖なるナデージダはこう答えた。

「王よ！　私が、あなたが殺したあの人の妹ではないというのですか？　私だって、彼女と同じ母から生まれたのではないですか？　聖なる姉と同じ母乳で育てられ、同じ洗礼を受けたのではありませんか？　私は彼女と共に育ち、同じ書物から、そして母の同じ教えによって、神と私たちの主イエス・キリストを知り、主を信じ、主のみに仕えることを学びました。　王よ、私が彼女とは異なる行動や考えを持ち、私の姉ヴェラとは異なる願いを抱いているなどとは、決して思わないでください。いいえ、私は彼女の足跡をたどりたいのです。躊躇したり、多くの言葉で私を説得しようとした

りせず、さっさと本題に入ってください。そうすれば、私が姉と心を一つにしていることがお分かりになるでしょう。

そのような答えを聞いた王は、彼女を拷問にかけた。

ヴェラと同じように彼女を裸にさせると、王の家来たちは、疲れ果てるまで、一切の情けもかけずに長い間彼女を殴り続けた。　しかし、彼女はまるで痛みを全く感じていないかのように黙り込み、ただそこに立っていた母、至福のソフィアを見つめていた。母は娘の苦しみを見据えながら、神に娘に強固な忍耐を授けてくださるよう祈っていた。

不法な王の命令により、聖ナデージダは火の中に投げ込まれたが、三人の少年たちと同様に無傷のままであり、神を賛美した。　その後、彼女は絞首刑に処され、鉄の爪で引き裂かれた。その体は断片となって落ち、血は川のように流れ出したが、傷口からは不思議な芳香が漂い、聖霊の恵みによって明るく輝いている彼女の顔には、微笑みが浮かんでいた。　聖ナデージダは、これほど幼い少女の忍耐に打ち勝つことのできないという事実をもって、さらに拷問者を恥じ入らせた。

「キリストこそが私の助けです」と彼女は言った。「私は拷問を恐れるどころか、それを天国の甘美さのように望んでいます。キリストのために苦しむことは、私にとってこれほどまでに心地よいのです。しかし、拷問者よ、あなたを待っているのは、あなたが神と崇めている悪魔たちと共に、燃えるゲヘナでの苦しみです。」

その言葉は拷問者をさらに激怒させ、彼は大釜に樹脂と油を満たし、火をつけて聖女を投げ込むよう命じた。しかし、聖女を沸騰する大釜に投げ込もうとした瞬間、大釜はまるで蝋のようにたちまち溶け出し、樹脂と油がこぼれ出して周囲の人々全員に火傷を負わせた。　このように、神の奇跡的な力は聖ナデージダを見捨てなかった。

高慢な拷問官は、これらすべてを目の当たりにしながらも、真の神を知ることを拒んだ。彼の心は、悪魔の惑わしと破滅的な迷いによって曇らされていたからである。　しかし、幼い少女に嘲笑されたことで、彼は大きな恥を感じた。これ以上そのような恥辱に耐えきれず、ついに彼は聖女を剣による斬首刑に処した。少女は、自分の死が近づいていることを知ると、喜びながら母のもとへ歩み寄り、こう言った。

「母よ！　あなたに平安がありますように。お元気でいて、この娘のことを思い出してください。」

母は彼女を抱きしめて口づけをし、こう言った。

「わが娘ナデージダよ！　あなたが主なる神を信頼し、神のために自らの血を流すことを惜しまないゆえに、あなたは至高の神から祝福されている。姉のヴェラのもとへ行き、彼女と共にあなたの最愛の御方の御前に進みなさい。」

ナデージダは、自分の苦しみを見守っていた妹リュボフとも口づけを交わし、彼女にこう言った。

「姉よ、あなたもここに留まってはならない。共に聖三位一体の御前に進もう。」

そう言うと、彼女は息絶えた姉ヴェーラの遺体に近づき、愛を込めて抱きしめた。人間としての自然な哀れみから涙を流そうとしたが、キリストへの愛によって、その涙を喜びへと変えた。その後、聖ナデージダは頭を垂れ、剣によって斬り殺された。

その遺体を抱きしめ、母は神を賛美し、娘たちの勇気を喜び、優しい言葉と賢明な諭しをもって、末娘にも同じ忍耐を促した。

一方、拷問官は三番目の乙女リュブヴィを呼び出し、最初の二人の姉妹と同様に、彼女を甘言で誘惑し、十字架にかけられた方から背を向け、アルテミスに拝むよう説得しようと試みた。　しかし、誘惑者の努力は無駄に終わった。なぜなら、愛する主のためにこれほど堅く苦難に耐えることができるのは、愛そのものであり、聖書にもこう記されているからだ。「*愛は死のように強く……大水も愛を消し去ることはできず、川もそれを押し流すことはできない*」（雅歌8:6–7）。

この乙女の心に燃える神への愛の炎は、この世の誘惑という多くの水によっても消されることはなく、苦難と苦しみという川によっても溺れさせられることはなかった。　彼女の偉大な愛は、愛する方である主イエス・キリストのために自らの命を捧げる覚悟があったことからも、とりわけはっきりと見て取れた。友のために命を捧げることほど大きな愛はないのだから（ヨハネ15:13）。

拷問官は、優しい言葉では何もできないと悟ると、彼女を苦しみと愛にさらすことを決意し、様々な拷問によって彼女をキリストへの愛から引き離そうとしましたが、彼女は使徒の言葉に従ってこう答えました：

「*誰が私たちを神の愛から引き離すことができようか。苦しみか、窮乏か、迫害か、飢えか、裸か、危険か、あるいは剣か*」（ローマ8:35）。

拷問官は、彼女を車輪に縛り付けて、棒で打つよう命じた。彼女は、体の各部位が関節から引き離されるほどに引き伸ばされており、棒で打たれるにつれ、まるで緋色の衣のように血に染まり、その血はまるで雨のように大地を濡らした。

その後、炉に火がつけられた。拷問官は炉を指さしながら、聖女にこう言った。

「乙女よ！　せめて『アルテミス女神は偉大である』と一言でも言え。そうすれば、お前を解放してやる。もしそれを言わなければ、今すぐこの燃え盛る炉の中で焼かれてしまうぞ。」

しかし、聖女はこう答えた。

「私の神、イエス・キリストこそ偉大です。アルテミスも、あなたも、彼女と共に滅びるでしょう！」

拷問官は、その言葉に激怒し、傍らにいた者たちに、直ちに彼女を炉に投げ込むよう命じた。

しかし、聖女は誰かが彼女を炉に投げ込むのを待たず、自ら急いで炉の中に入り、無傷のまま、あたかも涼しい場所にいるかのように炉の中央を歩き回り、歌いながら神を賛美し、喜びに満ちていた。

その瞬間、炉から炎が飛び出し、炉を取り囲んでいた不信仰者たちを襲った。ある者は灰と化し、ある者は火傷を負い、その炎は王にまで達して彼も焼かれたため、王は遠くへ逃げ去った。

その炉の中には、他にも光を放つ顔が見え、それらは殉教者と共に歓喜していた。そして、キリストの御名が賛美され、不義な者たちは恥をかかされた。

炉の火が消えると、キリストの美しい花嫁である殉教者は、まるで宮殿から出るかのように、健やかで喜びに満ちた姿でそこから出てきた。

すると、拷問者たちは王の命令により、鉄のドリルで彼女の体を穿ち通したが、神は聖女を御自身の助けで支え、この苦しみの中でも、彼女は死ななかった。

いったい誰が、このような拷問に耐え、即座に死なずにいられようか？！

しかし、最愛の花婿であるイエス・キリストは、不義な者たちを可能な限り恥じ入らせ、彼女に大きな報いを与え、また、弱き人間の器において神の力強さが栄光を受けるようにと、聖女を支え続けたのである。

火傷で病に倒れた拷問官は、ついに聖女を剣で斬り殺すよう命じた。

聖女はこれを聞いて喜び、こう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべ『愛』を愛してくださった方よ。私を姉妹たちと共に立たせてくださり、彼女たちがあなたの御名のために耐え忍んだのと同じことを、私も耐え忍ぶことを許してくださったことを、私はあなたの賛美に満ちた御名を歌い、祝福いたします。」

彼女の母である聖ソフィアは、末娘のために絶えず神に祈り、神が彼女に最後まで忍耐を授けてくださるよう願い、娘にこう言いました。

「わが三番目の枝よ、愛しき我が子よ、最後まで奮闘しなさい。　あなたは善き道を歩んでおり、あなたのためにすでに冠が編まれ、用意された宮殿が開かれている。花婿はすでにあなたを待ち

わびており、高みからあなたの功績を見守っている。そうして、あなたが剣の下に頭を垂れたとき、あなたの清く汚れなき魂をその腕に抱き、姉妹たちと共に安らぎを与えるためである。　あなたの花婿の御国において、私、あなたの母をも覚えてください。そうすれば、彼が私にも憐れみを示し、私があなた方と共にその聖なる栄光に与り、そこに留まることを妨げないでしょう。

そして直ちに、聖リュボフは剣によって首を刎ねられた。

母は彼女の遺体を受け取り、聖ヴェラと聖ナデージダの遺体と共に高価な棺に納め、遺体をふさわしく飾り立てた後、棺を葬送用の馬車に乗せ、街から少し離れた場所まで運び、喜びの涙を流しながら、高い丘の上で娘たちを栄光のうちに葬った。　彼女はその墓のそばで三日間を過ごし、神に熱心に祈りを捧げた後、自らも主のもとで息を引き取った。信者たちは彼女を、娘たちと同じ場所に埋葬した。こうして彼女もまた、娘たちと共に天の御国への参加と殉教の栄冠を失うことはなかった。なぜなら、たとえ肉体ではなくとも、心をもってキリストのために苦難を耐え忍んだからである。

こうして、至賢きソフィアは、その三人の徳高い娘たち――信仰、希望、愛――を聖三位一体への捧げ物として捧げ、賢明にその生涯を閉じた。

ああ、聖なる義人ソフィアよ！　あなたのように、救い主と結ばれ、御ために苦しみを受け、今や御方と共に君臨し、栄光に浴しているような子供たちを産み、子宝を通じて救われた女性など、他に誰がいようか（[6314]）？　まことに、あなたは驚嘆に値し、称賛にふさわしい母である。なぜなら、愛する子供たちの恐ろしく過酷な苦しみと死を目の当たりにしても、あなたは母として当然の悲しみに沈むどころか、神の恵みに慰められ、むしろ喜びに満ち、娘たちにこの世の命に未練を持たず、主キリストのために惜しみなく血を流すよう自ら教え、懇願したからである。

今や、あなたの聖なる娘たちと共に、その至聖なる御顔を仰ぎ見ながら喜びに満ちているあなたよ、私たちにも知恵をお与えください。そうして、私たちが信仰、希望、愛という美徳を保ち続け、至聖なる、被造物ではない、命を与える三位一体の御前に立つにふさわしい者とされ、世々限りなく御方を賛美することができますように。アーメン。

コンダク、第1声調：

聖ソフィアの尊き聖なる枝、すなわち信仰、希望、愛が現れ、ギリシャの知恵を[6315]の恵みによって導いた。そして苦難に耐え、勝利を収めた者として、万物の主より朽ちることなき冠を授けられた。

聖殉教者アガフォクリアの記念日

記念日：9月17日

聖アガフォクリアは、あるキリスト教徒ニコライの奴隷であった。その妻パヴリーナは、アリウス派の異端を信奉しており[6316]、8年間にわたりアガフォクリアを酷く苦しめ、正教の信仰を捨て

[6314] 病苦を伴う出産は、エバの堕落に対する女性への罰であったが、そこには同時に彼女たちの救いの条件も含まれている。それゆえ、使徒パウロは「（妻は）*子を生むことによって救われる*」（テモテへの手紙第一2:15）と述べているが、ただし「*信仰と愛と、聖さと貞潔を保ち続けるならば*」という条件付きである。　聖ソフィアもまさにそのような人物であった。

[6315] すなわち、異教の知恵は愚かさに変えられたのである。イザヤ書33章およびコリントの信徒への手紙一1:20、3:16を参照。

[6316] アレクサンドリアの司祭アリウスは、神の御子の永遠の存在、父なる神との平等および同質性を否定し、神の御子は父なる神によって世の初めから生み出されたのではなく、創造されたものであると主張した。この異端は、325年の第1回ニカイア公会議で非難された。

て異端の教えを受け入れるよう強要した。　時には石で首を殴り、時には鋭い石の上を裸足で歩かせ、ある時は鉄のハンマーで肋骨を砕き、ついには舌を切り落とした。　聖なる殉教者は女主人の説得に屈しなかったため、牢獄に閉じ込められ、飢えに苦しめられた。しかし、神の御計らいにより、鳥たちが彼女に小さな木の実を運んできた。ついに、女主人は鉄のバールで彼女を殺害した[6317]。

聖殉教者テオドティアの記念日

記念日：9月17日

ローマでアレクサンドロス・セウェルスが統治していた頃[6318]、イゲモン・シムヴリキオスがカッパドキアに派遣された。彼のもとに、ポンティウス地方[6319]出身で、非常に裕福なあるキリスト教徒の女性、テオドティアについての報告が届いた。イゲモンは彼女に対し、キリストの信仰を捨てよと長く説得したが、成功しなかった。　そこで彼女は絞首刑に処され、遺体が削り取られ始めた。彼女は、神を賛美し、まるで自らの苦しみを全く感じていないかのように、この拷問に耐え抜いた。その後、彼女には足枷がはめられ、牢獄へと連行された。　八日が過ぎると、牢獄の扉が自然に開いた。これを見た看守たちは恐怖に駆られ、シムヴリキオスに報告しに走った。しかし、彼は彼らの言葉を信じず、聖女を自分の元へ連れてくるよう命じた。彼女が傷一つなく、かつての苦しみによるわずかな痕跡はあるものの、全く無傷であるのを見て、彼は彼女に尋ねた。

「お前は誰だ？」

聖女は彼にこう答えた。

「あなたの心は曇っている。もしあなたが正気であれば、私がテオドティアであることをきっと見抜いたはずだ。」

そこでシムヴリキウスは、聖女を燃え盛る炉に投げ込むよう命じた。すると突然、その炉から炎が噴き出し、七十人を焼き殺した。炉の近くにいた残りの者たちは、炉の開口部を塞いで逃げ去った。　イゲモンは、聖殉教者の遺体の灰を散らすために、偶像崇拝の祭司二人と他の数人を遣わした。　炉の蓋を開けると、そこから炎が噴き出し、祭司たちを焼き尽くした。残りの使者たちは、聖女が炉の中で白い衣をまとった二人の若者の間に座り、歌っているのを目撃した。この光景に彼らは恐怖のあまり、まるで死人のように倒れ込んでしまった。　聖女は喜びながら神を賛美し、炉から出てきた。しかし、シンヴリキウスがビザンティウムへ赴くつもりで、聖殉教者を鎖で縛って連れて行こうとしていたため、彼女は再び牢獄に閉じ込められた。ビザンティウムからの帰途、アンキラに滞在中、イゲモンは再び聖女を裁判のために呼び出し、こう言った。

「もし私の言うことを聞かず、神々に犠牲を捧げなければ、お前を灼熱の鉄の上に載せるよう命じるぞ。」

彼女はこう答えた。

「もしリヴィシウス[6320]ドロフェイが私と共に鉄板の上に立ち、火が彼に触れなければ、私は神々に犠牲を捧げましょう。」

シムブリキウスはこれに同意し、ドロフェイは灼熱の鉄板の上に上がったが、たちまち焼けてしまったのに対し、聖なる殉教者は無傷のままであった。　イゲモンは、どうすべきか途方に暮れた

6317 ギリシャの聖人暦によれば、パヴリーナはキリスト教から背き、偶像を崇拝していたとされる。――聖殉教者の受難と死の時期は正確には不明である。

6318 アレクサンドロス・セウェルス――ローマ皇帝。222年から235年まで在位した。

6319 ポンティウス地方、あるいはポントスは、黒海沿岸の小アジア北東部の属州である。

6320 リヴィシウス――イゲモンの私設秘書。

が、やがて聖なる殉教者を縛り上げ、ニカイアへ連行するよう命じた[6321] 。そこで彼は、彼女を偶像の神殿に連れ込み、偶像への生贄を強要しようとした。彼女が祈ると、突然、すべての偶像が地面に倒れ、粉々に砕け散った。　これを見た者たちは皆、恐怖に襲われた。偶像へのこのような冒涜に激しく怒ったイゲモンは、四人の兵士に聖女を縛り付け、のこぎりで切り裂くよう命じた。　しかし、のこぎりは鈍り、手下たちは力尽きてしまったが、聖女は再び無傷のままであり、神を賛美した。そこでシムブリキウスは、剣で彼女の首を切り落とすよう命じ、このような処刑を経て、聖テオドティアは殉教者の冠にふさわしい者とされた[6322] 。

10月

10月1日

9月18日（旧暦）

我らの尊き父エウメニオス、ホルティン司教

記念日 9月18日

聖エウメニオスは、若き頃からその徳高い生活によって神に喜ばれました。彼は、*「狭い門から入りなさい」*（ルカ13:24）という主の御言葉に耳を傾け、天の御国へと続く狭い道を歩みました。　この門を通りたいと願う者は、財産への執着と肉体の世話という二つの重い重荷を捨て去らなければならない。エウメニオスは、富める者が神の御国に入るのはいかに難しいかを心に留め、自らの財産を捨てて貧しい人々に分け与えた。なぜなら、富への執着という重荷を背負った者が、天国の狭い門を通り抜けることができるだろうか。　主は、永遠の命を受け継ぐために何をすべきか尋ねた若者に、良き助言を与えられた。「*もし完全になりたいのなら*」と主は彼に言われた。「*行って、あなたの財産を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい。そうすれば、天に宝を持つことになる*」（マタイ19:21）。マモンに仕える者（[6323] ）は神に仕えることはできず、富の重荷を負った者は、ラクダが針の穴を通ることができないのと同じように、天国の狭い門を通り抜けることはできない。　狭い場所を通り抜けようとする者が、荷だけでなく衣服までも脱がなければならないのと同様に、天国に入りたいと願う者は、耐え難い重荷である余分な財産だけでなく、必要最低限のもの、さらには体を覆う衣服までも貧しい人々に分け与え、それによって主に倣うのである。　聖エウメニオスもまさにそのようであった。彼はすべてを屑と見なし、すべてを捨て、すべてを置き去りにして、キリストに従い、ただキリストを見出し、獲得するために歩んだ。財産を捨て、あたかも衣服を脱ぐかのようにそれを身から解き放ち、その財産で貧者や裸の者、困窮している者たちを覆った。　あらゆる地上の執着から身を解き放ち、彼は貧しさという狭き道へと踏み出し、天の富へと通じる狭い門をくぐった。また、この聖人は、肉体の世話という別の重荷も捨て去りました。自らの修行、労苦、節制、断食、

[6321] ニカイア（現在のイシク）――古代には小アジアのビフィニア地方にある豊かで繁栄した都市であったが、現在は極めて貧しく、人口も少ない。

[6322] 230年頃。

[6323] 「マモン」という言葉――カルデア語またはシリア語に由来する――は、財産、富、地上の恵みを意味する。なぜなら、人はそれらに希望を託し、それによって富そのものだけでなく、それに対する愛や愛着も表現するからである。　新約聖書において、マモンはあたかも富を司る神のような存在として描かれている（マタイ6:24参照）。

徹夜祈祷によって、彼は肉欲を死滅させ、肉体を鍛え上げ、あらゆる肉欲の快楽や快楽追求から遠ざかりました。　「なぜなら、*『修道者たちは』*――使徒が言うように――*『あらゆるものから身を遠ざける』からである*」（Iコリント9:25）。彼は、肉体を肥え太らせ、思考を重くし、情欲を生み出すあらゆるものから身を遠ざけた。彼は、魂と肉体を情欲から清め、聖霊の住まいとなるまで、自らの目に眠りを許さなかった。　こうして、財産という重い重荷やあらゆる肉欲を振り払い、彼は永遠の命へと続く狭い道と狭い門を通り抜けることができる者となったのである。

聖エウメニオスの徳高い生涯は、まるで灯火のように輝き、すべての人にとって大いに有益であったため、彼はゴルティナ教会の司教に選出され、その座に就いた[6324]。そして、燭台に立つ蝋燭のように、自らの信徒たちを照らし、太陽のように　キリストの教会を照らし出したのである。なぜなら、世の光たる者は、光そのものが目に見える灯台に先立って輝くのと同様に、言葉に先立って行いをもって示すべきだからである。　こうして聖エウメニオスは、司教の座に就きながら、まず何よりも行いによって霊的な子らを教え、清く神に喜ばれる生活をもって自らの群れの手本となり、その後、言葉によっても彼らを教えた。　まず自らがいわば光となり、それから他の人々をも照らした。自ら昼夜を問わず主の律法を学び、その後、他の人々にも同じことを教えた。自ら清い良心を培い、他の人々の良心をも清めた。彼は、その名「[6325]」の意味通り、極めて慈悲深く、その生涯は慈愛の行いに満ちていた。彼は孤児たちの父であり、貧者たちの富であり、求める者への施し手であり、悲しむ者たちの慰め手であり、苦しむ者たちの医者であり、驚くべき奇跡の行者であった。　ある時、聖人は祈りによって、自分に襲いかかってきた大きな蛇を退治した。しかし、さらに大きな奇跡を成し遂げたのは、地獄の蛇である悪魔を打ち負かし、祈りによって彼を制圧し、キリストから託された羊の群れから追い払ったことである。そして、ゴルティナだけでなく、ローマ[6326]においても、聖エウメニオスは悪霊たちに対して立ち向かった。　ローマに到着すると、彼はそのしるしと奇跡によって多くの人々を驚嘆させた。彼は人々から悪霊を追い出し、病人を癒やし、敵対する者たちや　怒り狂う者たちを和解させた。その後、彼はフィヴァイデにも滞在し[6327]、そこで干ばつの最中に祈りによって天から雨を降らせた――そしてその地で後に安らかに息を引き取り、この世の生涯から永遠に尽きることのない生命へと移った[6328]。彼の聖なる遺体は、彼が奉仕した地であるゴルティンへと移され、そこで栄誉をもって埋葬された。

コンダク、第2声調：

神の光に照らされ、至福に満ちた御方よ、私たちをも照らしてください。あなたの尊く、栄光に満ち、聖なる御死を愛をもって讃える私たちは、司教エウメニオスよ、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

[6324] ゴルティナ、あるいはゴルティンは、古代においてクレタ島のレフェエ川（現在のイエロポタモス）沿いにあった重要な都市であった。この古代都市の遺跡は、今日まで残されている。

[6325] エウメニオスとは、ギリシャ語から訳すと、「好意的、善意に満ちた、慈悲深い」という意味である。

[6326] ここで「ローマ」という名称は、「新ローマ」あるいは「第二のローマ」と呼ばれたコンスタンティノープルを指すと理解すべきである。このような解釈こそが、この聖人伝全体の趣旨およびそこに描かれる出来事の展開に最も合致する。

[6327] 教会の聖歌によれば、聖エウメニオスは自らの意思でフィヴァイダへ向かったのではなく、正教の信仰の敵たちによってそこに追放されたのである（カノン第7歌、トロパリオ第2番）。　彼が追放されたのは、キリストにおいて神の意志のみを認めていたモノフェリテ派の「暗黒の異端」（セダレン）を「打ち砕いた」ためであった。

[6328] 聖エウメニオスの活動と死は、7世紀にさかのぼる。

聖殉教者アリアドナの記念日

記念日：9月18日

聖殉教者アリアドナは、不義の皇帝ハドリアヌスの治世下で、キリストのために殉教した[6329]。彼女は、フリギアのプリムニサの統治者であるテルティルという人物の奴隷であった[6330]。

このテルティルが、息子の誕生を祝って偶像の神殿で祝宴を開き、そこで生贄を捧げ、悪霊を崇拝し、家族や友人、隣人たちと共に歓喜に沸いていたとき、聖アリアドナは家に留まり、主人のと共に祝うために偶像の神殿に入ることを拒んだ。　すると、主人は彼女に激怒し、容赦なく殴りつけ、ついには首を吊らせた後、鉄の棒で彼女を打ちのめすよう命じた。その後、彼はアリアドナを投獄し、長い間飢えさせ、キリストを捨てて魂のない偶像を崇拝するよう強要したが、やがて彼女を牢獄から解放し、彼女は町を去った。　すると、テルティルは彼女を逃がしてしまったことを後悔し、家来たちを連れて彼女を追いかけた。アリアドネは振り返って追っ手が見えると走り出し、ある岩のそばにたどり着くと、敵の手から救い出してくださるよう神に祈り始めた。　すると直ちに、神の御命令により、岩が裂け、聖女は岩の内部に入り、裂けた岩の半分は再び一つに合わさった。この奇跡は、そこに現れた主の天使によってなされたのである。すると、彼女を追っていた者たちは恐怖に怯え、互いに争い始め、槍で互いを傷つけ合い、死んでしまった。　かくして主は、御自分のしもべを、猟師の網から鳥を救い出すように、不義な者たちの手から救い出された。彼女の祈りによって、主が私たちをも敵から救い出し、聖アリアドネと共に、永遠に天の喜びを祝うことができるようにしてくださいますように。アーメン。

10月2日

9月19日（旧暦）

聖殉教者トロフィモス、サヴァティオス、ドリメドントスの殉教

記念日9月19日

ローマ皇帝プロバス[6331]の治世、またイリオドールとも呼ばれたアッティコスによるアンティオキア統治の時代、アンティオキアの住民たちはある日、ダフニオスのアポロンを称える祭りを執り行い、慣例に従って　一日中、偶像への生贄の捧げ物や酩酊、歓喜の騒ぎ、そしてあらゆる種類の不道徳な行いに明け暮れていた。　その頃、他国からトロフィムとサヴァティウスという二人の身元不明の男がアンティオキアにやって来た。彼らは敬虔な人々であり、真の神を崇める者たちであった。これほど多くの魂が盲目となり、滅びゆくのを見て、彼らはただ嘆息し、神に顔を向け、涙ながらにこう祈った。

「神よ、御言葉一つで無から全宇宙を創造し、御自身の姿に似せて人を造られた方よ！天より御目を向けて、これらの人々を敵対する者の手から救い出してください。」

[6329] この聖なる殉教者の死は、ハドリアヌス帝の治世の終わりに訪れた。

[6330] フリギアは小アジアの広大な地域であり、当初は半島西側の半分の中央部全体を網羅していたほか、後にミシアに編入されたプロポンティス（大理石海）の南岸からヘレスポント（ダーダネルス海峡）に至る地域も含まれていた。　その境界は、西はミシア、リディア、カリア、南はリキア、ピシディア、リカオニア、東はカッパドキア、北はガラティア、ビフィニアであった。

[6331] ローマ皇帝プロブスは276年から282年まで在位した。

彼らがこう語っているとき、偶像崇拝者たちは、彼らが異教の神々を崇拝していないことに気づき、彼らを捕らえて、彼らの支配者であり裁判官であるアッティクス・イリオドールのもとへ連行した。彼は彼らを互いに引き離し、まず聖トロフィモスを自分のところへ連れてくるよう命じ、その名前、生涯、そして信仰について尋問を始めた。

聖人はこう答えた。

「私の名はトロフィムです。自由で高貴な両親の間に生まれましたが、罪の支配下に陥り、最初は不敬虔な生活を送っていました。しかし、聖なる洗礼を通じて、真の自由と高貴さを得たのです。」

すると、裁判官は尋ねた。

「お前の信仰は何か？」

トロフィムは答えた。

「すでに申し上げましたが、よく聞いてください――さらに明確に申し上げます。私はキリスト教徒であり、キリストの僕であり、キリストへの生贄となることを望んでいます。」

裁判官は尋ねた：

「キリスト教徒に関する皇帝の勅令は読んだか？」

「読みました」と聖人は答えた。「しかし、それが私たちに何の関係があるというのですか？敬虔さと悪魔の誘惑との間には、昼と夜ほどの違いがあるのです。」

この言葉に拷問官は激怒し、聖トロフィモスの服を脱がせ、手足を広げた状態で、容赦なく打ち据えるよう命じた。殉教者は長く打ち続けられ、地面は血で染まった。その後、裁判官は殴打を止めるよう命じ、こう言った。

「トロフィムよ、神々に生贄を捧げよ。さもなくば、私はお前をフリギア[6332] の拷問者ディオニシオスのもとへ送る。」

このディオニシオスは、その残忍さと非人道性で広く知られていた。

聖トロフィムはこう答えた。

「私にとって、お前が私を殺そうと、他の誰かが殺そうと、お前が私を拷問しようと、ディオニシウスがそうしようと、死はただ一つに過ぎない。なぜなら、お前たち二人の意図は同じだからだ。すなわち、真の神に仕える者たちを殺すことである。」

裁判官はさらに激怒し、聖人を木に吊るし、その肉体を拷問するよう命じた。すると、直ちに鋭利な武器を持った処刑人たちが彼を取り囲み、殉教者を拷問し、その肉体を骨まで、さらには内臓に至るまで削り取った。しかし、彼はあらゆる苦痛に耐えながらも、静かに、穏やかにこう言った。

「主よ、あなたのしもべをお助けください！」

すると、裁判官は尋ねた。

「お前のキリストはどこにいるのか？」

殉教者は答えた。

「私のキリストは、御名を呼び求めるすべての人々と共にいます。キリストは私からも離れることはありません。そして、キリストが私と共にいるという明らかなしるしは、私がこの苦しみをかんたんに耐え忍んでいることにあるのです。もし神ご自身が苦しむ者たちを助けられていなければ、人間の性質では到底耐えられないような苦しみなのです。」

これらの拷問の後、聖トロフィモスは牢獄に投じられた。

そこで、至福のサヴァティウスが裁判にかけられ、裁判官は彼にこう言った。

「お前がキリスト教徒かどうかは問わない。まず、お前の身分は何か答えよ。」

[6332] フリギアは小アジアの地域である。

異教徒にとって「キリスト教徒」という言葉そのものがあまりにも忌まわしいものであったため、拷問者はそれを聞くことさえ拒んだ。病人が、すべての健常者にとって心地よい光を直視できないのと同じように、彼もまた、　心の目が曇っていたため、キリストの御名の光をその目で見つめることができなかった。それゆえ、「お前がキリスト教徒かどうかなど、私は尋ねてはいない」と言ったのである。

聖サヴァティウスはこう答えた。

「私の称号、尊厳、祖国、栄光、そして富は、永遠に存在される神の御子キリストそのものです。宇宙は、キリストの摂理によって確立され、支配されているのです。」

裁判官は、殉教者のこの大胆な答えを自分への侮辱と受け止め、激怒して彼の頬を平手打ちし、こう言った。

「尋ねられたことに答えよ。そして、私が拷問でお前を滅ぼしてしまう前に、神々の元へ行き、彼らに生贄を捧げよ。」

しかし、聖人は神々を罵り、不信心者たちの狂気を嘲笑し、彼らの不敬虔を糾弾した。

そこで、拷問官の命令により、サヴァティウスは絞首刑に処され、骨がむき出しになるまで鉄の爪で削り取られた。すでに骨から肉が塊ごと剥がれ落ち、内臓もすべて引き裂かれていたため、拷問者たちはこれ以上苦しめるものがなくなっていた。　そこで殉教者は木から解き放たれ、聖サヴァティウスは直ちにその魂を主の御手に委ねた。

聖サヴァティウスが主のもとへ召されたとき、拷問者たちの手に残されたのは、ただ一人の至福のトロフィムだけだった。アッティクスは、彼が偶像崇拝に改宗する見込みがないと絶望し、彼をフリギアにいる拷問者ディオニシオスのもとへ送ることに決めた。　彼はディオニシオスに手紙を書き、トロフィムについて、また彼がどれほどの拷問に耐えようとも、それにもかかわらず拷問者たちよりも強かったこと、彼がキリストのみを崇め、神々を嘲笑し、彼らを何とも思っていないことを伝えた。　その後、彼は聖人を牢獄から連れ出し、釘の先端が上を向くように詰め込まれた鉄のブーツを履かせ、そのブーツを履かせたままフリギアへ連行するよう命じた。　兵士たちは聖人を捕らえ、連れ出し、自分たちの横を歩かせた。彼らは馬に乗っていたが、聖人は釘の打ち込まれた鉄のブーツを履き、足を貫かれたまま徒歩で歩いた。その間、徒歩や馬に乗る者たちを追い越し、道中を自らの血で染め上げていった。　それはまさに、至福の生活へと続く悲痛な道であった。彼が一歩踏み出すたびに、足には新たな傷が刻まれ、新たな傷が一つ増えるごとに、彼は病と苦痛に苛まれた。しかし、主ご自身が彼に寄り添い、この道において御自分のしもべを力づけ、一歩ごとに報いを用意してくださった。

三日間の旅の末、聖なる殉教者を伴う兵士たちは、シナド[6333]と呼ばれるフリギアの都市に到達し、そこでディオニシオスにイリオドロスの書簡を手渡した。書簡を読み終えると、ディオニシオスは直ちに聖トロフィモスを自分の元へ連れてくるよう命じ、こう尋ねた。

「お前がトロフィモスか？」

殉教者は答えた。

「私はトロフィモスであり、真の神のしもべです。その神を信じる者は、決して恥じることはありません。」

ディオニシウスは言った。

「お前は依然として従順ではなく、多くの者の死の原因となった、虚栄に満ちた無益なキリストを呼び求めている。しかし、もし以前、彼を捨てようとしなかったのなら、今こそ彼に抱いていた希望を捨てよ。神々に犠牲を捧げ、激しい苦しみと死から逃れ、平穏に生涯を全うせよ。」

[6333] シナド、あるいはシンナダは、フリギア北部の山脈の近くにある都市で、そこには有名なシンナダの大理石採石場があった。現在はエスキカラ近郊の遺跡となっている。

勇敢なトロフィムはこう答えた。

「たとえ私が死から逃れたいと願ったとしても、それは不可能です。なぜなら、あなたが私を殺さなかったとしても、私の本質はいずれにせよ死すべきものだからです。」　死によってこそ、永遠の命を得ることができるのだ。それは、悪に満ちた短命なこの世の生活よりも、計り知れないほど素晴らしく、長く続くものである。そして、来世の恵みは、我々の朽ちゆく目には見えず、耳には聞こえず、人の心には思い浮かぶことさえできないのだ。　私はこの人生に対する大きな憧れに満たされており、あなたが私に脅かす死について聞くたびに喜びを感じている。

すると、ディオニシオスは怒りに満ちて、聖トロフィモスを太い皮の鞭で打つよう命じた。彼を鞭打っている間、拷問者はこう言った。

「神々に生贄を捧げると約束さえすれば、すぐにこの苦しみから解放されるぞ。」

しかし、彼は傷や拷問者の言葉に耳を貸さず、黙り込んでいた。

使用人たちは、拷問官の命令に従い、酢を取り、それをマスタードと混ぜ合わせて、トロフィモスの鼻孔に注ぎ込んだ。その後、彼を木に吊るし、脇腹を切りつけ、深く細長い傷を負わせた。すると、彼の肋骨からは血の奔流が流れ出した。

聖人はこれらの苦痛を黙って耐え忍び、心の中でこう言い聞かせていた。*「義人には多くの苦難があるが、主はそれらすべてから彼を救い出される」*（詩編33:20）。

ディオニシウスはこれを聞いて、こう言った。

「トロフィムよ、お前の希望は無駄であり、お前の考えも空しい。なぜなら、誰が天からやって来て、お前をこの苦しみから救い出すというのか。だから、神々に犠牲を捧げることを勧める。そうすれば、お前は自らを救うことができるだろう。」

聖人は、拷問者の狂気を嘲笑しながら、こう答えた。

「私は、真実で生ける私の神を決して捨てはしない。」

すると、ディオニシオスは激怒して家来たちに言った。

「さらに彼を苦しめよ。」

そして、彼らはさらに残酷に彼を拷問し始めた。

一方、聖人は祈りながらこう言った。*「わが神よ！　私を不義の者の手から、不法者や迫害者の手から救い出してください。主なる神よ、あなたは私の希望だからです」*（詩編70:4–5）。

拷問官は、聖殉教者の傷口に塩を混ぜた酢を注ぐよう命じ、それによって彼の苦しみを増大させようとした。

すると、聖人は拷問者にこう言った。

「お前は今、私の体を強めているだけだ。そうすれば、お前が負わせた傷によって体が朽ち果てることはないだろう。」

その後、燃えるろうそくで彼の肋骨を焼こうとしたが、それでもこの無敵のキリストの戦士を打ち負かすことはできなかった。その後、聖トロフィモスは牢獄に投獄された。

シナデには、ドリメドントという名の元老院議員兼首席顧問がいた。彼は敬虔なキリスト教徒だったが、拷問者を恐れてそのことを隠していた。彼はしばしば密かに聖トロフィモスの牢獄を訪れ、血を洗い流し、きれいなタオルでかさぶたを拭き取り、傷口を包帯で巻くなど、あらゆる面で彼の世話を焼いた。　しかし、彼が拷問官から身を隠し続けられるのは長くはなかった。まもなく、「ディオスクリア」、すなわちカストルとポルックスの日と呼ばれる、神に背く祭りが訪れた[6334]：この

[6334] カストルとポルックスは、ギリシャ人やローマ人の信仰によれば、天空の支配者であり諸神の最高神であるゼウス（別名ディオス）の息子たちであったため、ディオスクーロイと呼ばれていた。この信仰によれば、彼らは死後も生き続け、一日ごとに再び死んでいくが、これはロポネソスの光の神々を模したものである。　同時に、彼らは国家の守護神としても崇められていた。彼らを称えて、「ディオスクリア」（彼らの名に由来する）や、「アナキア」（一部の地域でカストルとポルックスが「支配者や統治者」として呼ばれていたことに由来する）と呼ばれる特別な祭りが執り行われた。

祝祭はシナデの街で市民全体によって執り行われていた。　ディオニシオスは、側近や顧問たち全員と共に偶像を崇拝していたが、ドリモデントが彼らと一緒にいないのを見て、彼に祭りに出席するよう伝える使者を送った。

至福のドリメドントは使者にこう答えた。

「私はキリスト教徒である。それゆえ、悪魔の祭りに参加すべきではない。」

ディオニシオスはこれを聞くと、力ずくで彼を自分の元へ連行させ、尋問した結果、彼が確かにキリスト教徒であることを確信した。しかし、その日のうちに裁きを下すことを望まなかったため、彼を拘束するよう命じた。

その後、彼は友人たちを彼のもとへ送り、悔い改めて自分たちの神々に帰依するよう説得させた。しかし、ドリメドントは彼らを威圧的な眼差しで見据え、「*不義を行う者たちよ、みな私から離れよ*」（詩篇6:9）と言った。

その後、彼は黙り込み、*「耳を塞ぎ、口に答えを持たない人のよう」*であった（詩篇37:15）。

翌日、拷問官は法廷へ赴き、ドリメドントを連れてくるよう命じた。

「惑わされた者よ！」と彼は聖なる殉教者に言った。「昨日、お前には一体何が起きたのだ？なぜ神々から背き、王の命令に従うことを拒んだのか？　皆からお前が敬われ、我々の間で末席ではない地位を占めることを、もはや望まなくなったというのか？」

聖人はこれに対し、次のように答えた。

「真の神を愛する者は、世俗の名誉や栄光を何とも思わない。他人の前で誇り、高価な服を身にまとい、偶像を崇拝することに、何の益があるというのか？　これらすべては一時的で虚しいものであり、これらすべてが人を神から遠ざけ、人を火のゲヘナへと突き落とすのだ。」

拷問官は、長い間、甘言や脅しを用いて聖ドリメドントをキリストから引き離そうと試みたが、何の結果も得られなかったため、彼を裸にし、吊るし上げ、赤熱した鉄の杭で肋骨を焼くよう命じ、その際こう言った。

「キリストが君を助けに来るかどうか、見てやろう」

しかし、聖人はこうした拷問の中でも主なる神の御名を呼び求め、異教の神々を嘲笑し、その言葉によって、拷問者が槍で聖人の肉体を傷つける以上に、拷問者の心を深く傷つけた。

そこでディオニシウスは、聖人を拷問していた家来たちへと怒りを向け、自分たちの神々を冒涜するたった一人の男を黙らせることができないと彼らを叱責した。　激怒した家来たちは、鉄の爪で聖人の顔を引っ掻き、歯を打ち砕いたが、それでもなお、キリストを告白し、魂なき偶像を罵倒する、神の言葉を語るその口を黙らせることはできなかった。　その後、聖なる殉教者の足元に火を焚き、燃え盛る炭の上に彼を立たせた。しかし、彼はまるで美しい花の上を歩くかのようにその上を歩き、こうした苦しみの中で喜び、キリストのためにさらに大きく、最も苛烈な苦痛に耐える覚悟であった。　その後、拷問官は彼を牢獄へ連行するよう命じ、聖トロフィモスを拷問の場へ連れ出した。彼は絞首刑に処され、鉄の爪で肉体を引き裂かれ、以前の傷口を再び抉られ、さらに赤熱した棒で両目をえぐり出された。しかし、聖人はそのような苦しみの中でもキリストに感謝を捧げ、その後再び牢獄へと連れ戻された。

ディオニシオスは、あらゆる拷問をもものともしなかったトロフィモスとドリメドンにどのような死を遂げさせるべきか、側近たちと相談し、殉教者たちを野獣の餌食にすることに決めた。そのため、この拷問官は空腹の野獣を用意させ、公開の処刑を行うよう命じた。　聖人たちを野獣の餌食にしようとする日が訪れると、ディオニシウスはすべての顧問や家来を伴ってこの見世物に現れ、大勢の民衆が集まった。聖殉教者トロフィムとドリメドントは、裸で傷だらけの状態で牢獄から連れ出され、その全身はまるで一面の潰瘍のようであった。　聖人たちが獣に襲わせるために用意された場所に立たされると、雌熊が放たれ、猛烈な勢いで彼らに襲いかかったが、近づくとすぐに穏やかにな

った。聖ドリメドントは、「この肉体を*脱ぎ捨て、キリストと共にいること*」（フィリピ1:23）を早めたくて、雌熊の耳をつかんで、早く自分を引き裂いてくれるよう挑発した。しかし、雌熊はまるで恥じ入るかのように、頭を傾けて彼から顔を背けた。　すると、拷問官は獣以上に激怒し、聖人たちが雌熊から無傷のままであるのを見て、彼らにヒョウを放ったが、それもまるで犬のように彼らの足を舐めるばかりだった。その後、ライオンが放たれたが、この獣もまた、前の獣たちと同様に、子羊のように柔和になった。　拷問官は獣の世話係に激怒し、もし彼が獣たちを怒らせてこの二人のキリスト教徒を食い殺させることができなければ、死を宣告すると脅した。しかし、その男がライオンを挑発しようとしたとき、ライオンは彼に襲いかかり、引き裂いてしまった。　その奇跡を目撃したすべての者は恐れおののき、真の神であり、我らの救い主である方の力を悟った。ただ一人、不義な拷問官だけがそれを認めようとはせず、むしろ自らの狂気の闇にさらに深く覆われ、キリストを冒涜し、その僕たちを魔術師と呼んだ。　その後、彼は剣で聖人たちの首を刎ねるよう命じた。こうして、多くの激しい拷問の末に剣によって息を引き取った聖トロフィムと聖ドリメドントの苦難は終わりを告げ、彼らは聖サヴァティウスと共に不死の命へと加わり、今や天使たちと共に喜び、聖三位一体を賛美している。　――父と子と聖霊、唯一の神、すべての者によって世々限りなく賛美される御方を。アーメン。

トロパリオ、第8調：

三位一体において賛美される神よ、三位一体の殉教者、トロフィモス、サヴァティオス、そしてドリメドントを栄光に包み給え。彼らはその御方に信仰を置き、敵を打ち倒した。彼らの祈りによって、キリスト、我らの神よ、我らを憐れみ給え。

コンダク、第8調：

殉教者たちの礎であり、敬虔さの確証であるゆえに、教会はあなたの光に満ちた殉教を尊び、賛美します。常に讃えられし、幸いな殉教者、英知に満ちた栄光あるトロフィムよ。あなたと共に苦難を耐え、清めを謳う者たちのために、あなたが不敗の者であるゆえに、彼らに清めを授けてください。

聖殉教者ゾシマ（隠者）の殉教

記念日：9月19日

ある日、キリキアの統治者ドメティアヌスは、家来たちと共に狩りに出かけ、多くの荒野や丘、山々を駆け巡り、獣を追いかけて捕らえていました。するとある場所で、彼は多くの獣たちを見かけました。その真ん中で、一人の老人が歩き回り、まるで人間と話すかのように獣たちと語り合っていたのです。　狩人たちは彼らに飛びかかり、獣たちが逃げ去ると、その老人を捕らえて公爵のもとへ連れて行った。彼らは、彼が魔術師であり、荒野で魔法を使っているのだと考えたのである。

彼らはその老人に、自分が何者で、名前は何かと尋ねた。

聖人はこう答えた。

「私はキリスト教徒です。私の名はゾシマです。」

そこで彼は縛られ、裁判を受けるために町へ連行された。そこで公爵は、魔法や呪術について彼に問い詰めた。「どのようにして獣たちを魔法にかけ、その真ん中で無傷で暮らし、まるで人間のように彼らと語り合っているのか？」

ゾシマはこう答えた。

「私は魔術のために荒野に住んでいるわけではありません。しかし、私自身クリスチャンである以上、不信仰者たちと共に町で暮らすことはできません。だからこそ、私の主イエス・キリストの敵である邪悪な人間たちと暮らすよりは、むしろ獣たちと共にいるほうがましだと願い、荒野へ赴いたのです。」　そのような生き方の手本として、世を離れ荒野で暮らす他のキリスト教徒――聖なる父たち――の生涯を仰ぎ、私もできる限り彼らに倣おうと努めてきました。　しかし、御自身に仕える者たちを知り、彼らのために御手配をなさる神は、その慈しみによって私を安らかにしてくださり、私の慰めとして野獣たちを私に従わせてくださいました。そして今、私は彼らと共に暮らし、主を喜び、すべての望みを主に託しています。

公爵はこれに対し、彼にこう言った。

「そうか、お前は邪悪な老いぼれで、ナザレの者を崇めているのか。よし。では、私はナザレへ行き、そこでお前を酷く拷問してやる。そうすれば、お前はナザレの者を否定するか、あるいは激しい苦しみの中で命を落とすことになるだろう。ついでに、ナザレの人々もお前の苦しみを見て、恐れおののくようにしてやろう。」

そして彼はまず、聖ゾシマを鎖で縛ってナザレへ送り、その後、自らもそこへ向かった。裁判の日時を決めると、ドメティアヌスはゾシマを連れてくるよう命じ、彼に尋ねた。

「お前の魔術について語れ。どうやって獣たちを魅了したのだ？」

ゾシマはこれに対し、自分がキリスト教徒であることを告白した。

すると、公は聖人を逆さ吊りにし、首に大きな石を縛り付け、鉄の爪で削るよう命じた。

その後、彼は再び尋ねた。

「今なら、その魔法について話してくれるか？」

ゾシマはこれに対し、こう言った。

「キリスト、わが神――砂漠で私を慰めるために獣たちを送ってくださったのは、まさにその方です。」

公爵は彼に言った。

「もし獣たちがあなたの神に従うのなら、一匹の獣をここに呼び寄せてみよ。そうすれば、我々は皆、あなたの信仰を受け入れるだろう。」

ゾシマは、清らかな両手を天へと掲げ、祈り始めた。

「主よ、イエス・キリスト、神の子よ！」と彼は言った。「あなたのしもべである私の願いを聞き入れ、ここに一頭のライオンを送り、私に仕えさせてください。」

すると突然、恐ろしいライオンが町に駆け込んできた――それを見た者たちは皆、逃げ散った。ライオンはゾシマのもとへ近づくと、彼の首に縛り付けられていた石を支え始めた。

すると、公爵は聖人にこう懇願した。

「ゾシマよ！　その獣をなだめてくれ。そうすれば、我々は君を解き放ってやる。」

ゾシマは獣に柔和であるよう命じ、公は聖人を解き放つよう命じ、彼を皇帝のもとへ送ろうとした。しかし、ゾシマは神に息を引き取った[6335]。キリスト教徒たちは、永遠に賛美される父、子、聖霊を讃えながら、聖人の遺体を尊厳をもって埋葬した。アーメン。

[6335] 聖ゾシマの殉教は、4世紀初頭、ローマ皇帝ディオクレティアヌスの治世の時代にさかのぼる。 隠者聖ゾシマの記念日は、1月4日に聖アファナシオス・コメンタリシオス（囚人の監視役であり、彼らの記録を担当していた人物）と共に祝われる。彼は、恐ろしい拷問の後も無傷のままであるゾシマを見てキリストを信じ、祈りの功績を積んだ後、荒野で主のもとへ息を引き取った。　聖ディミトリ・ロストフスキーも簡潔に伝えている『ミネイ』の記述によれば、聖ゾシマはドメティアヌスによる拷問の末に亡くなったのではなく、聖アファナシウスと共に、同じ荒野にある岩の裂け目で、安らかに主のもとへ魂を捧げたのである。

スモレンスクおよびヤロスラヴリの奇跡行者、聖なる信仰深い公テオドールとその子ダビデおよびコンスタンティンの記念日

記念日：9月19日

聖なる至福のテオドール公（通称「黒公」）は、スモレンスクのロスティスラフ・ムスティスラヴォヴィチ公の息子であり、聖使徒同等のウラジーミル公から九代目の子孫であった[6336]。 フェオドールにはグレブとミハイルという二人の兄弟がいたが、彼らは父の死後、彼を不当に扱い、モジャイスクという一つの都市だけを領地として与えた[6337]。それにもかかわらず、彼は彼らに怒りを抱くことなく、忍耐強くその領地を治めた。 そのような彼の寛容さゆえに、神は後に、栄光ある都市ヤロスラヴリの統治を彼に託した。その経緯は次の通りである。ヤロスラヴリには、ロストフ公ヴァシリーの妻であるクセニア公妃が住んでおり、彼女には一人娘がいた。 敬虔なテオドール公は、このロストフ公の娘と結婚し、その後、息子ミハイルと娘をもうけ、ヤロスラヴリの都市を領有することとなった[6338]。そして、弟ミハイルの死後、彼はスモレンスクの公国も継承した[6339]。

フェオドール公はヤロスラヴリで敬虔かつ神に喜ばれる生活を送った。それは、彼が幼い頃からキリストとその聖母マリアを深く愛していたからである。特に彼は司祭や修道士を敬い、貧しい人々に施しを行った。キリストの勇敢な戦士として、彼はあらゆる事において主の御心にかなうよう努め、あらゆる不正から遠ざかった。

当時、ロシアの地にタタールの隷属が重くのしかかっていた時代、ロシアの公たちは、公としての地位を確固たるものにするために、オルドのハンのもとへ赴くのが慣例となっていた。 ある日、数人の公爵がオルドへ向かった際、ヤロスラヴリの至福の公爵フェオドールも、ハンとその妃への多くの贈り物を持って彼らと共にそこへ向かった[6340]。オルドでは彼は非常に好意的に迎えられ、ハンの宮廷で寵臣として仕え、大いに尊敬された。 その男らしい美貌と知性は、ハンの妻を深く魅了し、彼女は自分の娘を彼に嫁がせたいと願った。しかし、彼はヤロスラヴリに妻がいると彼女に告げ、彼女の説得には応じなかった。

[6336] 聖なる信仰深いテオドロス公の生年は正確には特定できないが、間違いなく1240年から1245年の間であった。 – 彼の伝記作者（15世紀後半の修道士アントニオ）の証言によれば、彼は幼い頃から敬虔に育てられ、神の教義を教え込まれた。その教義は、清らかな水で潤される唇のように、彼の心を愛で満たした。 少年時代にはすでに子供らしい遊びや習慣を避け、とりわけ聖書の読解に励み、心と体の清らかさを保っていた。

[6337] モジャイスク（現在はモスクワ州の小さな郡庁所在地）は、当時まだ非常に若く、貧しく、人口の少ない町であり、その周辺には小さな地域と隣接する村々があったに過ぎなかった。しかし、フェオドールは、その伝記の著者の表現を借りれば、不平を言わずにその領地を受け入れ、何よりもまず、盗まれることのない、朽ちることのない、永遠の宝を獲得することを心に留めていた。 聡明で慈悲深いこの公は、短期間のうちに自らの領地を人口の多い豊かな土地へと変え、民衆から畏敬の念を込めた愛を勝ち取った。

[6338] ヤロスラヴリは、コトロスリ川がヴォルガ川に合流する地点に位置し、モスクワから244ヴェルスタの距離にある。ロシアで最も古い都市の一つであり、当初はロストフの支配下にあったが、後に独自の公爵たちによって統治されるようになった。 – 聖テオドールは1267年頃、ロストフの王女マリア・ヴァシリエヴナと結婚し、その直後にヤロスラヴリ公国の統治を引き受けた。

[6339] それは1279年のことだった。 もっとも、敬虔なテオドール公自身はスモレンスクには住んでおらず、単に「スモレンスク公」の称号を名乗っていたに過ぎない。とはいえ、しばらくの間は同地へ公文書を送り、様々な裁判を裁き、公としてスモレンスク市民の福祉に配慮していた。やがて彼はスモレンスクを甥のアレクサンドル・グレボヴィチに譲った。

[6340] フェオドール公のオルダへの旅は、部分的には他の事情によっても行われた。黄金オルダのハン、メンク・テミラは、タタール族への貢納を拒んでいたヤッソ人およびカム川流域のブルガール人を鎮めるため、他のロシアの諸公爵たちと共にフェオドールも召喚したのである。公はオルダで、聖なるハンのもとで約3年間を過ごした。

ハーンからヤロスラヴリでの公位就任の承認を求め、それを得た後、聖テオドールはオルダを後にし、故郷へと帰った。ヤロスラヴリに到着すると、妻の　が亡くなったという知らせを耳にした。　彼は、当時息子のミハイルと義母が住んでいた街に入ろうとしたが、ボヤールたちと義母は彼を入れず、彼について荒唐無稽な言葉を並べ立て始めた。「我々の慣習では、異国の地からやって来た者を公として迎えることはあり得ない。　フェオドロフ家の後継者であるミハイルを我々の公として迎えるだけで十分である」。聖フェオドールは再びオドラへ向かい、ハンにヤロスラヴリ公国を再び与えてくれるよう懇願した。ハンはヤロスラヴリの人々に、彼らの公を受け入れるよう厳命したが、彼らはその命令に従わず、フェオドールを受け入れることを頑なに拒んだ。　その間、聖公爵がハンのもとに客としてオルダに滞在している間、ハンの妻は再び夫に、娘をフェオドールに嫁がせるよう提案し始めた。しかし、ハンは長い間同意せず、「ハンの娘を、ましてや異教徒である臣下に嫁がせるのはふさわしくない」と述べた。　そこでハーンの妃は、娘がキリスト教の信仰を受け入れ洗礼を受けた上で、テオドールと結婚することを望んでいると夫に打ち明けた。ハーンはこれに同意した[6341]。ハーンの娘は洗礼を受け、その後ヤロスラヴリの公と結婚した。彼女は洗礼の際にアンナと名付けられた。　この結婚の後、ハンは聖テオドロスをさらに深く愛するようになった。彼はしばしばテオドロスを自分の食卓に同席させ、毎日ハンの冠を彼の頭に戴かせ、自分のポルフィラを身にまといさせ、彼のために美しい宮殿を建て、栄光と富で彼を囲んだ[6342]。しかし、このすべての華やかさの中でも、この祝福された公爵の心は高ぶることはなく、この世の栄光も彼をキリストへの愛からそらすことはなく、彼は主の戒めを守ることにますます励んでいった。　彼がまだオルダに滞在している間に、彼には息子が生まれ、聖なる洗礼においてダヴィドと名付けられた。その後、彼には第二の息子が生まれ、聖なる洗礼においてコンスタンティンと名付けられた。

その直後、ロシアから使者が到着し、息子のミハイルがヤロスラヴリで亡くなったという知らせをもたらした。そこで、フェオドール公はハンに対し、公妃と子供たちと共にルーシの地へ帰れるよう懇願した。ハンは彼を大いなる栄誉をもって送り出し、冠を授け、ヤロスラヴリの大公位を授けた。　聖公は多大な栄誉を伴ってヤロスラヴリに到着した。彼と共に、ハンの宮廷から多くのタタール貴族も同行したが、聖公はしばらくして彼らを栄誉をもってオルダへ帰した。

聖テオドール公は、自身の都ヤロスラヴリにおいて、敬虔かつ神に喜ばれる統治を、深き老齢に至るまで続けた[6343]。病に倒れ、この病が死の予兆であると悟ると、彼は妻である公妃と子供たちを呼び寄せ、互いに愛と平和のうちに生きるよう遺言した[6344]。その後、彼は自らを修道院へ運ばせるよう命じ、そこで大きな喜びをもって修道院長から修道服を授かり、その日一日中、自分の魂がかねてより切望していたこの賜物を神が与えてくださったことに喜び、神に感謝し続けた。　臨終の直前、彼はスキマ（修道服）を授かることを望み、その後、すべての人に赦しを与え、自らもすべての

6341 ハンは自ら、この結婚の許可を得るためコンスタンティノープル総主教への請願を引き受け、そのためにサラヤの司教テオグノストを団長とする使節団を派遣した。総主教は、ハンの娘がキリスト教の信仰を受け入れることを条件として許可を与えた。

6342 これに伴い、ハンは娘と娘婿の生活費として、チェルニヒウ、ボルガリー、クマニー、コルスン、アルスク、カザンなど、計36の都市を彼らに与えた。　フェオドール公はハンに、オルダ内にいくつかの教会を建設する許可を求め、あらゆる手段を講じてキリスト教を広め、聖職者を庇護した。

6343 聖フェオドールは、穏やかに、賢明に、公平に公国を統治し、不当な扱いを受けた者や未亡人、孤児を擁護し、貧者や困窮者に慈悲を注いだ。　年代記は、とりわけ彼の誠実で謙虚な敬虔さ、厳しい断食と祈り、教会建設と教会の栄華に関する多大な労苦と配慮、そして司教や司祭の聖職に対する敬意を特筆しており、これらについては、彼の敬虔な息子たち——　ダヴィドとコンスタンティンであり、そのうち弟は後に未婚のまま世を去り、兄は23年間にわたりヤロスラヴリ公国を平和に統治した。

6344 聖なる福者テオドロス公の臨終の遺言は、実に感動的で教訓に富んでいる。 その全文は、スパス修道院（彼と彼の家族が愛した、敬虔な妻アンナによって建立された修道院）にある古代のイコンに記されている。そのイコンには、聖テオドールが修道服を身にまとい、息子たちに囲まれ、左手に巻物を持ち、全身像として描かれている。

人に赦しを請うと、十字の印を切って、その魂を神の御手に委ねた[6345] 。彼は、主の変容の教会 に、威厳をもって埋葬された。　その聖なる遺骸は、今日に至るまで、私たちの主イエス・キリストの栄光のために多くの奇跡を起こしており、主には今、そして常に、そして世々限りなく栄光がありますように。

トロパリオ、第4調:

若き日からキリストへの愛に深く結びつき、聖なる者たちよ、律法とその義を熱心に守り抜きました。それゆえ、奇跡の賜物に富み、癒やしを注ぎ出しておられます、テオドール、ダビデ、コンスタンティンよ。信仰をもってあなた方を崇める者たちのために、キリスト・神に祈り、私たちの魂が救われますように。

聖人の遺骸の移送に際するトロパリオ、第8調:

若き日から輝かしい星として輝き、尊い御遺骸の移送によって信徒たちの心を照らされた方よ。地上で天使の如く現れ、節制の泉のほとりの木のように、御自身の涙の泉に潤され、汚れを洗い清められた方よ。　それゆえ、テオドール、ダビデ、コンスタンティンよ、あなたがたは神の御霊の友として現れたのです。キリスト・神に、私たちの魂が救われるようお祈りください。

コンダク、第8調:

あなたがたは、最も輝かしい灯として、肉体をまとって天使の如く現れ、また楽園の命の木のごとく、断食と徹夜祈祷と信仰によって成長し、天の恵みを受け、祈りによって栄えました。　力強い医師として現れ、信仰をもって御遺骸の聖櫃に駆け寄る病める魂を癒やされる、栄光ある奇跡行者たちよ、テオドール、ダビデ、コンスタンティンよ。キリスト神に、信仰と愛をもってあなた方の記憶を尊ぶ者たちに、罪の赦しを授けてくださるよう、お祈りください。

10月3日

9月20日（旧暦）

[6345] それは1299年9月19日のことだった。 聖テオドール公の息子であり後継者であるダヴィド公は1321年に没したが、コンスタンティン公の没年は年代記には記載されていない。彼らの遺体は、生前の遺志に従い、父の遺体のそば、教会のアーチの下にある納骨堂に、地中ではなく、その上にある墓室に安置された。　ヤロスラヴリの聖なる信仰深い公爵テオドール、ダヴィド、コンスタンティンの朽ちない聖遺物が発見されたのは、数多くの驚くべき治癒現象を伴い、その発見から約200年後の1467年のことだった。　1658年には、彼らの聖遺骨の移送が行われ、これがきっかけとなって6月13日が地元の祝日として定められた。　1704年、ロストフ都主教聖ディミトリイは、ヤロスラヴリの奇跡を行う聖人たちの聖遺骨のためにキパリス製の聖遺骨箱を製作し、6月22日に聖遺骨をその中に移し、この日を恒久的な祝日と定めた。 その後、聖人の遺骨を納めたキパリス製の聖遺物箱は、新しい銀製の聖遺物箱に収められ、同時に、聖ヤロスラヴリの奇跡行者たち、テオドロス公、　ダヴィド、コンスタンティンに捧げられた新築の教会へと聖遺骨が移され、現在も左側の聖所付近に安置されている。

聖大殉教者エウスタフィオス・プラキダス、その妻および子供たちの生涯と殉教

記念日9月20日

トラヤヌス帝の治世[6346] 、ローマにはプラキダ[6347] という名の総督が住んでいた。彼は名門の出身であり、莫大な富を所有していた。戦場における彼の勇猛さは広く知られており、プラキダという名だけで敵を戦慄させた。 ティトゥス皇帝がユダヤの地で戦っていた当時[6348] 、プラキダは傑出したローマの軍司令官であり、あらゆる戦いで不屈の勇気を発揮していた。

信仰上、プラキダは偶像崇拝者であったが、その生涯において多くの善行やキリスト教的な行いを実践した。彼は飢えた者に食を与え、裸の者に衣を与え、困窮する者を助け、多くの人々を束縛や 牢獄から解放した。 彼は、誰かが苦難や悲しみに直面している時に助けを差し伸べることができれば心から喜び、敵に対する輝かしい勝利以上にその喜びを感じたほどであった。かつて『使徒言行録』（使徒言行録 10:1–48）に語られるコルネリウスのように、 プラキダはあらゆる善行において完全な境地に達していたが、まだ私たちの主イエス・キリストに対する聖なる信仰を持っていなかった。その信仰がなければ、すべての善行は死んだも同然である（ヤコブ2:17）。プラキダには、彼自身と同じように徳の高い妻と、二人の息子がいた。 プラキダは誰に対しても非常に親切で慈悲深かった。ただ、唯一の真の神についての知識だけが彼には欠けていた。彼はその神をまだ知らなかったが、すでに自分の善行によってその神を崇めていたのである。しかし、慈悲深く人を愛する主は、すべての人の救いを望み、善を行う者たちを見守っておられる。 *「どの民族においても、主を畏れ、義を行う者は、主の御心に適う」*（使徒行伝10:35）。主はこの徳高い男をも見捨てず、偶像崇拝の迷いの闇の中で滅びることを許さず、自ら進んで彼に救いへの道を示してくださった。

ある日、プラキダはいつものように、兵士や使用人たちを連れて狩りに出かけた。鹿の群れに出くわすと、彼は騎手を配置し、鹿の追跡を始めた。ほどなくして、彼は群れの中で最も大きな一頭が群れから離れていくのに気づいた。 兵士たちを置き去りにし、プラキダは少数の随行者と共に、その鹿を追って砂漠へと駆け込んだ。 プラキダの同行者たちはすぐに力尽き、彼から遠く後方に取り残されてしまった。一方、より強靭で速い馬に乗っていたプラキダは、一頭だけで追跡を続け、その鹿が高い岩山に駆け上がるまで追い続けた。プラキダは岩山のふもとに立ち止まり、鹿を見つめながら、どうすれば捕まえられるか考え込んだ。 その時、あらゆる手段を用いて人々を救いへと導き、神のみが知る運命によって彼らを真理の道へと導かれる全き恵み深い神は、かつて使徒パウロに現れたように（使徒行伝9:3–6）、プラキダの前に現れ、猟師その人を捕らえられた。 鹿を見つめ続けていると、プラキダはその角の間に輝く十字架を見、その十字架の上には、私たちのために十字架につけられた主イエス・キリストの御姿が浮かび上がっていた。この驚くべき幻に呆然としていると、総督は突然、次のような声を聞いた。

「なぜわたしを迫害するのか、プラキダよ？」

そして、その神聖な声と同時に、プラキダを恐怖が瞬時に襲った。馬から転げ落ちたプラキダは、まるで死んだかのように地面に横たわっていた。恐怖からようやく我に返ると、彼は尋ねた。

6346 トラヤヌスはローマ帝国の最も優れた皇帝の一人であった。民の福祉に深く心を配り、国家統治を全面的に改革し、幸運な戦争によって帝国の領土を拡大し、新たな都市を建設した。しかし、彼もまたキリスト教徒を迫害した。

6347 聖エウスタフィオスの異教時代の名前は、より正確にはローマ式発音で「プラシダス」であり、ラテン語の「placidus」（「穏やかな」、「平穏な」、「静かな」、「柔和な」、「温厚な」を意味する）に由来する。 この名は、聖エウスタフィオスがキリスト教に改宗する前から、その高い道徳的資質を見事に表している。

6348 ティトゥスは、ローマ皇帝ウェスパシアヌスの息子であり後継者であり、79年から81年まで在位した。父の治世中、ローマ支配に反旗を翻したユダヤ人を懲罰するため、大軍を率いてユダヤへ派遣された。ここで言及されているのは、まさにこの戦争のことである。 この戦争は70年、エルサレムとソロモンの神殿の破壊をもって終結した。

「主よ、私にお語りになっているのは、どなたですか？」

すると、主は彼に言われた。

「わたしはイエス・キリストである。人々の救いのために受肉し、自ら進んで苦難と十字架の死を耐え忍んだ神であり、あなたはそれを知らずに、わたしを崇めているのだ。　あなたの善行と惜しみない施しは私の耳に届き、私はあなたを救いたいと願った。そこで私はここに現れ、あなたを私を知る者とし、私の忠実な僕たちの仲間に加えようとしたのだ。なぜなら、義の行いをする者が、敵の罠にかかって滅びることを、私は望まないからである。

地面から立ち上がり、もはや目の前に誰もいないのを見て、プラキダは言った。

「主よ、今や私は信じます。あなたが天と地の神であり、すべての被造物の創造主であることを。これからは、ただあなただけを崇め、あなた以外の神は知りません。主よ、どうか私に、どうすべきかを教えてください。」

すると、再び声が聞こえてきた。

「キリスト教の司祭のもとへ行き、彼から洗礼を受けなさい。そうすれば、彼はあなたを救いへと導いてくれるでしょう。」

喜びと感動に満たされたプラキダは、涙を流しながら地にひれ伏し、御自身を現してくださった主に礼拝を捧げた。　彼は、これまで真理を知らず、真の神を知らなかったことを深く悔やみつつも、同時に、真理を悟らせ、正しい道へと導いてくれたこのような恵みにあずかることができたことを、心から喜んだ。　再び馬にまたがり、彼は同行者たちの元へ戻ったが、その大きな喜びを胸に秘め、自分に何が起きたかを誰にも語らなかった。そして、狩りから家に戻ると、妻を呼び寄せ、二人きりになって、自分が見聞きしたすべてを話した。すると妻は彼にこう告げた。

「昨夜、誰かが私にこう語りかけるのを聞いたの。『あなたと、あなたの夫、そして息子たちは明日、私のところに来て、私、イエス・キリスト、すなわち、私を愛する者たちに救いを与えるまことの神を知ることになる』と。さあ、先延ばしにせず、命じられたことを直ちに果たしましょう。」

夜が更けた。プラキダは、キリスト教の司祭がどこに住んでいるかを探させるよう命じた。その家の場所を知ると、プラキダは妻や子供たち、そして忠実な家来数人を連れて、ヨハネという名の司祭のもとへ向かった。司祭のもとに着くと、彼らは主の御出現について詳しく語り、洗礼を授けてくれるよう懇願した。　彼らの話を聞き終えると、司祭は異教徒の中から御心に適う者を選ばれる神を賛美し、聖なる　信仰を教え、神のすべての戒めを彼らに明らかにした。その後、彼は祈りを捧げ、父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けた。　そして、聖なる洗礼の際、彼らには次のような名が与えられた。プラキデスにはエウスタフィオス、その妻にはテオピスティア、そして息子たちにはアガピオスとテオピストである。洗礼の後、司祭は彼らに神の聖餐を授け、平和のうちに送り出し、こう言った。

「あなたがたを御自身の知識の光で照らし、永遠のいのちの嗣業へと招いてくださった神が、常にあなたがたと共にありますように！そして、あなたがたがそのいのちにおいて神の御顔を仰ぐにふさわしい者とされたとき、私、あなたがたの霊的な父のことも覚えていてください。」

こうして聖なる洗礼によって新たに生まれ変わった彼らは、言い表せないほどの喜びに満たされ、自らの家へと戻った。神の恵みが彼らの魂を穏やかな光で照らし、心をこれほどの至福で満たしたため、彼らはまるで地上ではなく天国にいるかのように感じられた。

翌日、エウスタフィオスは馬に乗り、数人の使用人を連れて、あたかも狩りに出かけるかのように、主が御自身を現されたまさにその場所へと向かった。それは、主の測り知れない賜物に対して感謝を捧げるためであった。　その場所に到着すると、彼は使用人たちを散らして獲物を探させた。一方、自身は馬から降り、顔を地面につけて、涙ながらに祈りを捧げ、信仰の光で自分を照らしてく

ださったという、言葉に尽くせない主の慈しみに感謝した。　祈りの中で、彼は自らを主の御手に委ね、あらゆることを主の善き、完全な御心に従わせ、主の慈しみによって、主ご自身が御存知であり、御心に適うように、すべてが彼にとって益となるよう整えてくださるよう懇願した。そして彼はそこで、これから彼に降りかかる災難や苦難についての啓示を受けた。

「エウスタフィオよ」と主は彼に言われた。「あなたは、私に対する信仰、揺るぎない希望、そして熱心な愛を、実際に行いによって示すべきである。これらすべては、一時的な富や虚しい幸福の中ではなく、貧しさや苦難の中でこそ明らかになるのだ。　あなたには、ヨブのように、多くの苦難に耐え、多くの災難を経験しなければならない。そうして、炉の中で金のように試練を経て、わたしにふさわしい者となり、わたしの手から冠を受け取るのだ。

「主よ、御心が行われますように」とエウスタフィオスは答えた。「私は、感謝を込めて、あなたの御手から与えられるものすべてを受け入れる用意があります。」　私は、あなたが慈愛に満ち、憐れみ深く、また父として、憐れみをもって懲らしめられることを知っています。果たして、私はあなたの慈悲深い御手から、父としての懲らしめを受け入れないというのでしょうか？まことに、私はしもべとして、私に課されるすべてのことを忍耐強く背負う覚悟があります。ただ、あなたの全能の助けが私と共にあればよいのです。

そして再び、彼は声を聞いた。

「今、苦難に耐えたいのか、それとも人生の最期に耐えたいのか？」

「主よ」とエウスタフィオスは言った。「もし試練を完全に避けることができないのなら、どうか今すぐこの苦難に耐えさせてください。ただ、悪に打ち負かされず、あなたの愛から引き離されないよう、あなたの助けを私にお与えください。」

主は彼に言われた。

「勇気を出せ、エウスタフィオよ。わたしの恵みがあなたと共にあり、あなたを守ってくれるからだ。　お前には深い屈辱が待ち受けているが、わたしはお前を高めよう――天においてわたしの天使たちの前であなたを称えるだけでなく、人々の間でもお前の名誉を回復させてやる。多くの苦難の後に、わたしは再びあなたに慰めを与え、かつての地位を取り戻させてやる。　しかし、あなたは一時的な栄誉ではなく、あなたの名が永遠のいのちの書に記されていることを喜びとしなさい。

こうして聖エウスタフィオスは目に見えない主と語り合い、神の恵みに満たされながら、主からの啓示を受け取った。霊を喜びで満たし、神への愛に燃えながら、彼は自宅へと戻った。　神から啓示されたすべてのことを、エウスタフィオスは誠実な妻に打ち明けた。彼は、これから多くの試練や苦難が待ち受けていることを妻に隠さず、主のためにそれらを勇敢に耐え忍ぶよう説得した。主は、これらの苦難を永遠の喜びと楽しみへと変えてくださるからである。

夫の言葉を聞き、この賢明な女性はこう言った。

「主の御心が私たちの上にありますように。私たちは全力を尽くして、ただ主が私たちに忍耐をお与えくださるよう、主にお祈りいたします。」

そして二人は敬虔かつ誠実に暮らし、断食と祈りに励み、貧しい人々に以前よりもさらに惜しみなく施しを行い、あらゆる美徳において以前以上に熱心に自己を磨いていった。

しばらくして、神の御許しにより、エウスタフィオスの家には病と死が訪れた。　彼の家族全員が病に倒れ、短期間のうちに、使用人のほぼ全員が亡くなっただけでなく、家畜もすべて死んでしまった。そして、生き残った者たちは病床に伏していたため、エウスタフィオスの財宝　を守る者がいなくなり、夜になると盗賊たちが彼の財産を略奪していった。　まもなく、かつては名高く裕福だった総督は、ほとんど乞食同然となってしまった。しかし、エウスタフィオスはこの事態に少しも悲しむことなく、慰めようのない嘆きに陥ることもなかった。これらすべての試練の中で、彼は神の前で何一つ罪を犯さず、神に感謝しつつ、ヨブのようにこう語った。

「*主が与え、主が取り去られた。主の御名がほめたたえられますように！*」（ヨブ記1:21）。

そしてエウスタフィオスは妻を慰め、自分たちに起きていることを嘆かないようにと励ました。妻もまた、夫を慰め返した。こうして二人は、神への感謝を胸に苦難に耐え、すべてを神の御心に委ね、神の憐れみへの希望に支えられていった。　財産を失ったことを悟ったエウスタフィオスは、知人全員から身を隠し、どこか遠い土地へ逃れることを決意した。そしてそこでは、自身の高貴な出自や高い地位を明かすことなく、謙遜と貧しさの中で庶民の中に混じって暮らすことにした。　彼は、そのような生活を送ることで、何の妨げもなく、世間の噂から遠く離れて、私たちの救いのために貧しくなり、謙遜になられたキリスト・主に仕えることができると期待していた。エウスタフィオスはそのことを妻と相談し、その後、二人は夜中に家を出ることに決めた。　こうして、家族――その数はごくわずかであり、しかも病に伏していた――に内緒で、彼らは子供たちを連れ出し、高価な衣服をぼろ服に着替え、家を後にした。　名門の出身であり、高位の官吏として王に寵愛され、万人に尊敬されていたエウスタフィオスなら、失った栄光、名誉、富を容易に取り戻すことができたはずだが、それらを無に等しいものと見なし、すべてを捨てて神のみを庇護者として仰ぐことを選んだ。身元がバレないよう身を隠しながら、エウスタフィオスは人知れぬ場所を放浪し、最も質素で無学な人々の間に身を寄せた。こうして、豪華な宮殿を後にしたこのキリストの模範者は、どこにも身を寄せる場所もなく、さまよっていた。　やがて、王もすべての貴族たちも、彼らの寵愛する総督プラキダがどこへともなく姿を消したことを知った。皆は困惑し、どう考えればよいか分からなかった。誰かがプラキダを殺したのか、それとも彼自身が何らかの偶然で命を落としたのか。　人々は彼を深く悼み、捜し求めたが、エウスタフィオスの生涯において成し遂げられた神の神秘を解き明かすことはできなかった。*「だれが主の御心を悟り得ようか。また、だれが主の助言者となり得ようか」*（ローマ11:34）。

その頃、エウスタフィオスが家族と共にどこかの知られざる場所に滞在していたとき、彼の妻は彼にこう言った。

「主よ、私たちはいつまでここに住むのでしょうか？　誰にも私たちを気づかれないように、また知人たちの嘲笑の的にならないように、ここから遠く離れた国へ去ったほうがよいでしょう。」

こうして、彼らは子供たちを連れて、エジプトへと続く道を進んだ[6349]。数日歩くと海辺にたどり着き、埠頭にエジプトへ向かう準備が整った船があるのを見て、その船に乗り込み、出航した。船の船主は外国人[6350]で、非常に凶暴な男だった。エウスタフィオスの妻の美しさに魅了された彼は、彼女への情熱に燃え上がり、この貧しい男から彼女を奪い、自分のものにしようという悪巧みを心に抱いた。　エウスタフィウスが船を降りるべき岸辺に到着すると、船主は海路の運賃の代わりに、エウスタフィウスの妻を自分のものにした。エウスタフィウスは抵抗したが、どうすることもできなかった。なぜなら、凶暴で非人道的なその異邦人は、剣を抜き放ち、エウスタフィウスを殺して海に投げ込むと脅したからである。　エウスタフィウスを擁護してくれる者はいなかった。彼は泣きながらその邪悪な男の足元にひれ伏し、最愛の友と引き離さないでほしいと懇願した。しかし、彼の懇願はすべて聞き入れられず、彼は断固とした答えを耳にした。

「生き残りたいなら、黙ってここから立ち去れ。さもなければ、今すぐこの場で剣に倒れ、この海を墓とせよ。」

6349 つまり、エジプトに到達するためには船で渡らなければならない地中海方面へ向かったということである。エジプトは、アフリカ北東部に位置する国である。記述されている当時、エジプトはローマの支配下にあり、紀元前30年に完全にローマの支配下に入った。

6350 その伝記では、彼は「野蛮人」と呼ばれている。ギリシャ人、そしてそれに続いてローマ人は、外国人全般をこのように呼んでいた。これは、他民族の粗野さや無知を意味する軽蔑的な呼び名であった。同時に、この呼称は聖書において、非人間的で凶暴な人間という概念そのものとして定着した。　おそらく彼は、当時まだ地中海沿岸で頻繁に恐怖をまき散らし、美しい女性や少女たちを拉致して奴隷として売り払い、その妨げとなる者を非人道的に殺害していた海賊の一人だったのだろう。

エウスタフィウスは泣きながら子供たちを抱きしめ、船を降りた。一方、船主は岸から漕ぎ出し、帆を上げて航海へと旅立った。この敬虔な男にとって、貞淑で忠実な妻との別れは、なんと辛いものだったことか！　涙で溢れる瞳と、悲しみに引き裂かれそうな心で、二人は互いに別れを告げた。岸に残されたエウスタフィオスは泣きじゃくり、船の上では、夫から無理やり引き離され　、未知の国へと連れ去られる妻もまた泣きじゃくっていた。　彼らの悲しみ、泣き声、そして嗚咽を言葉で表すことなどできるだろうか。エウスタフィオスは長い間岸辺に立ち、船が見えなくなるまでその姿を追い続けた。その後、彼は幼い子供たちを連れて旅立った。夫は妻を、子供たちは母親を嘆き悲しんだ。　義人エウスタフィイの魂にとって唯一の慰めは、これらの試練を主の御手から受け入れているということだった。主の御心なしには、彼に何事も起こり得ないからだ。また、エウスタフィイを勇気づけたのは、彼がキリストの信仰へと召されたのは、忍耐をもって天の故郷への道を歩むためであるという考えでもあった。

しかし、エウスタフィオスの悲しみはまだ終わっていなかった。それどころか、彼はまもなく、以前よりも大きな新たな悲しみを味わうことになった。最初の悲しみを忘れる間もなく、新たな悲劇が迫ってきた。彼は妻との痛ましい別れを乗り越えたばかりだったが、すでに子供たちを失うという事態も目前に迫っていた。　旅を続けるうち、エウスタフィオスは水量が多く、流れの非常に速い川にたどり着いた。この川には渡し場も橋もなく、川を渡らざるを得なかった。二人の息子を一度に反対岸へ運ぶことは不可能だった。そこでエウスタフィオスは、そのうちのひとりを抱き上げ、肩に乗せて対岸へと運んだ。　息子を対岸に下ろすと、彼はもう一人の息子も運ぶために引き返した。しかし、川の中ほどまで来たとき、突然、悲鳴が響いた。エウスタフィイが振り返ると、恐怖に駆られながら、自分の息子がライオンに捕まり、砂漠へと連れ去られていくのを目撃した。　エウスタフィオスは、苦々しくも哀れな叫び声を上げながら、獲物を抱えた獣が視界から消えるまで、遠ざかっていくその姿をじっと見つめていた。エウスタフィオスは急いでもう一人の息子のところへ戻ろうとした。しかし、岸にたどり着く間もなく、突然オオカミが飛び出してきて、少年を森へと引きずり込んだ。　四方八方から押し寄せる深い悲しみに包まれ、エウスタフィオスは川の真ん中に立ち尽くし、まるで自らの涙の海に溺れているかのようだった。　果たして、彼の心の悲しみと嗚咽がいかに大きかったかを、誰が語り得ようか。彼は、貞淑で、同じ信仰を持ち、敬虔な妻を失った。また、降りかかった試練の中で唯一の慰めとして見守っていた子供たちをも失ってしまったのだ。　この男が、これほど大きな悲しみの重みに耐えきれず倒れることなく、生き延びたことは、まさに奇跡であった。疑いなく、全能なる神の御手が、エウスタフィオスを支え、これらの悲しみを乗り越えさせたのである。なぜなら、彼にそのような試練を許された方こそが、彼にそのような忍耐も授けることができたからである。

岸に上がると、エウスタフィイは長く、切なく泣き続け、その後、心の底からの悲しみを抱きながら、再び旅路を続けた。　彼にとって唯一の慰め主は、神ただお一人であった。彼はその神を固く信じ、その神のためにこのすべての苦難に耐えていた。エウスタフィイは神に対して少しも不平を言わず、「主よ、まさかあなたが私を御自身を知るよう召されたのは、私が妻や子供たちを失うためだったのですか？　あなたを信じることに、私がすべての人の中で最も不幸になることこそが、その益なのでしょうか？　あなたは、互いに引き離されて滅びてしまうように、あなたを信じる者たちを愛しておられるのですか？」この義に満ち、忍耐強い男は、そのようなことを微塵も考えなかった。それどころか、彼は深い謙遜のうちに、主が御自分のしもべたちを、この世の安寧や虚しい慰めの中ではなく、苦難や災いの中に置かれることを御心に適うものとされ、来世において永遠の喜びと歓びをもって彼らを慰めてくださることを、主に感謝を捧げたのである。

しかし、全能の神はすべてを善きものへと導かれる。もし義人が災いに陥ることを許されるとしても、それは彼を罰するためではなく、その信仰と勇気を試すためであり、涙ではなく堅固な忍耐を喜ばれ、その感謝の祈りに耳を傾けておられるのである。　かつて主がヨナをクジラの腹の中で無

傷のまま守られたように（ヨナ書第2章）、主は獣にさらわれたエウスタフィオスの子供たちをも、無傷のまま守られた。ライオンが少年を荒野へ連れ去ろうとしたとき、羊飼いたちがそれを見つけ、叫び声を上げて追いかけた。　少年を放り出すと、ライオンは逃げ出して助かろうとした。また、別の少年をさらった狼も、農夫たちに発見され、叫び声を上げて追われた。狼も少年を放り出した。羊飼いたちも農夫たちも同じ村の出身だった。彼らは子供たちを引き取り、育て上げた。

しかし、エウスタフィオスはこうしたことを何も知らなかった。旅を続けながら、彼は忍耐をもって神に感謝したり、あるいは人間の本性に打ち負かされて泣きながら、こう叫んだりした。

「ああ、哀れな私よ！かつては裕福だったのに、今は貧しく、すべてを失ってしまった。ああ、哀れな私よ！かつては栄光に包まれていたのに、今は不名誉にまみれている。ああ、哀れな私よ！かつては家督を継ぎ、広大な領地を持っていたのに、今は放浪者だ。　かつて私は葉が茂り実りの多い木のような存在だったが、今や枯れ枝のようだ。かつては家では友に、街では使用人に、戦場では戦士たちに囲まれていたが、今や荒野で一人きりだ。しかし、主よ、私を見捨てないでください！全知なる御方よ、私を軽んじないでください！　私を忘れないでください、全善なる御方よ！主よ、最後まで私を見捨てないでください！主よ、私は、あなたが私に現れた場所で語られた御言葉を思い出しました。「あなたはヨブのように苦難を受けなければならない」。　しかし、今や私には、ヨブ以上に大きなことが降りかかっている。なぜなら、彼は、　、財産と名声を失ったとはいえ、自分の寝床に横たわっていたが、私は異国の地におり、どこへ行けばよいのかさえ分からない。　彼には慰めてくれる友人がいたが、私の慰めであった愛する子供たちは、荒野で野獣にさらわれ、食い尽くされてしまった；　彼は子供たちを失ったとはいえ、妻からある程度の慰めと助けを得ることができた——しかし、私の善良な妻は不法な異邦人の手に落ち、私は砂漠の葦のように、私の苦い悲しみの嵐に揺れ動いている。主よ、私が心の悲しみからこのように語っていることを、どうか怒らないでください；　私はただ人間として語っているに過ぎないからだ。しかし、私の摂理者であり、私の道を整えてくださるあなたに、私は身を委ね、あなたに希望を置く。そして、あなたの愛を涼しい露や風のそよぎのようにして、私の悲しみの炎を鎮め、あなたへの憧れをある種の甘美さとして、私の苦難の苦さを和らげるのだ。

そう嘆き、涙を流しながら、エウスタフィオスはヴァディシスと呼ばれるある村にたどり着いた。そこに定住すると、彼は現地の住民に雇われて働き始め、自らの労働によって生計を立てるようになった。彼は、これまで慣れ親しんだこともなく、知らなかったような仕事に取り組み、懸命に働いた。　その後、エウスタフィオスはその村の住民たちに、彼らの穀物の番を任せてほしいと懇願し、その見返りとしてわずかな報酬を受け取った。こうして彼は、その村で十五年間、極度の貧困と謙虚さ、そして多くの労苦の中で暮らし、額に汗して自らのパンを口にした。彼の美徳と偉業を、いったい誰が描き表すことができようか。　誰もが、そのような貧困と放浪の生活の中で、彼が何よりも祈り、断食、涙、徹夜祷、そして心の深き嘆きに励み、目と心を神に向け、神の言い表せない慈愛からの憐れみを待ち望んでいたことを思い描けば、その価値を評価できるだろう。　一方、エウスタフィオスの子供たちは、そこからそう遠くない別の村で育てられていたが、彼は彼らのことを知らなかったし、彼ら自身も、同じ村に住んでいたにもかかわらず、互いの存在を知らなかった。　そして彼の妻は、かつてのサラのように[6351]、神によって、あの異国の男による不品行から守られていた。その男は、義なる夫から彼女を奪い去ったまさにその瞬間に病に倒れ、自国に戻ると、彼女に触れることなく、その捕らわれの身を清らかなままにして、死んでしまったのである。　このように、神は御自身の忠実なしもべを守られた。彼女は罠の中にいながらも捕らえられることはなく、まるで鳥が罠

[6351] ここで言うのは、もちろん、旧約聖書の族長アブラハムとその妻サラが、カナン地に移住して間もなく経験した、同様の有名な事例のことである。　飢饉が訪れた際、アブラハムがエジプトに来たとき、ファラオはサラの美しさに惹かれて彼女を妻にしようとしたが、主はこれを許さず、サラのせいで王とその宮廷の人々に重い罰を下した（創世記 12:11–20）。

から逃れるかのように、罠は砕け散り、彼女は至高者の助けによって救われたのである。その異邦人の死後、この徳高い女性は自由の身となり、災いもなく平穏に暮らし、自らの労苦によって糧を得て生きた。

当時、異民族たちはローマに対して戦争を仕掛け、多くの損害を与え、いくつかの都市や地域を制圧していた[6352] 。そのため、トラヤヌス帝は深い悲しみに沈み、勇敢な将軍プラキドゥスを思い起こして、こう語った。

「もし我らのプラキダが我々と共にいたなら、敵は我々を嘲笑うことはできなかっただろう。彼は敵にとって恐るべき存在であり、敵は彼の名を恐れていた。なぜなら、彼は勇敢で、戦いに恵まれていたからだ。」

そして王は、すべての重臣たちと共に、プラキダが妻や子供たちと共にどこへ消えたのか分からないという、その奇妙な状況に驚いていた。王国全土に彼を探し出すよう命じようと決心したトラヤヌスは、周囲の人々にこう言った。

「もし誰かが私のプラキダスを見つけてくれたなら、その者には大きな栄誉を与え、多くの贈り物を授けるつもりだ。」

すると、かつてプラキダの忠実な友人であり、彼の屋敷で暮らしていた二人の立派な戦士、アンティオコスとアカキウスがこう言った。

「独裁王よ、ローマ帝国全体にとって極めて重要なこの人物を探すよう、我々に命じてください。たとえ最も遠い辺境まで探しに行かなければならないとしても、我々は全力を尽くします。」

王は彼らのその意気込みを喜び、直ちにプラキダを探すよう彼らを遣わした。彼らは旅立ち、数多くの地域を巡り、町や村々で愛する総督を探し求め、出会う人々に「どこかでそのような人物を見かけなかったか」と尋ね回った。やがて、彼らはエウスタフィオスが住む村に近づいた。　その頃、エウスタフィオスは野原で穀物を守っていた。自分の方へやってくる兵士たちを見かけると、彼は彼らをじっと見つめ、遠くから彼らだと気づくと喜び、嬉しさのあまり涙を流した。心の奥底で神に深く祈りを捧げながら、エウスタフィオスは兵士たちが通るはずの道に立ち、　戦士たちはエウスタフィオスに近づき、挨拶を交わすと、ここはどの村なのか、誰が支配しているのかと尋ねた。その後、プラキダという名で、ある特定の年齢と容姿の旅人がここにいるかどうかを尋ね始めた。

エウスタフィオスは彼らに尋ねた。

「なぜ彼を探しているのですか？」

彼らはこう答えた。

「彼は私たちの友人ですが、長い間会っておらず、妻や子供たちと共にどこにいるのかも分かりません。もし誰かが彼の行方を知らせてくれたら、その人にはたくさんの金を差し上げます。」

エウスタフィオスは彼らに言った。

「私は彼を知りませんし、プラキデスという名も聞いたことがありません。しかし、諸君、どうか村に入って、私の小屋で休んでください。あなた方も馬も、旅の疲れが見て取れますから。さあ、私のところで休んでから、その人物のことを知っている誰かから、探している人のことを聞いてみてください。」

兵士たちはエウスタフィオスの言葉に従い、彼と共に村へ向かったが、村を認識できなかった。一方、エウスタフィオスは彼らをすぐに見分け、思わず涙が出そうになったが、なんとかこらえた。　その村には一人の心優しい人が住んでおり、エウスタフィウスはその人の家に身を寄せた。彼は戦士たちをその人の元へ案内し、彼らをもてなして食事を振る舞ってくれるよう頼んだ。

[6352] この出来事は、物語そのものからも明らかなように、トラヤヌスの死の直前のことだった。歴史からわかるように、当時、ローマの支配下にあったアジアの諸民族がローマの支配に反旗を翻しており、皇帝はメソポタミアへの遠征の準備を進めていた。

「そして」と彼は付け加えた。「あなたがもてなしに費やした費用は、私の労働で全額お返しします。なぜなら、この人たちは私の知り合いだからです。」

その男は、自身の親切心から、またエウスタフィウスの願いにも耳を傾け、客たちを熱心にもてなした。　一方、エウスタフィオスは彼らに仕え、料理を運んできて彼らの前に並べた。その際、彼はかつての自分の人生を思い出した。今、自分が仕えている者たちが、かつては彼自身にそうして仕えてくれていたのだ――そして彼は、人間本来の弱さに打ち勝ちきれず、涙をこらえるのがやっとだったが、正体を悟られないよう戦士たちの前では平静を装った。　何度か小屋から出ては、少し泣いて涙を拭うと、すぐにまた中に入り、奴隷やただの村人として彼らに仕えていた。　一方、兵士たちは彼の顔を頻繁に見つめるうちに、少しずつ彼だと気づき始め、互いにひそひそと語り合った。「この男はプラキダに似ている……まさか、本当に彼なのか……？」そしてこう付け加えた。「プラキダには、戦いで負った深い傷が首にあったことを覚えている。　もしこの男にそのような傷があるなら、彼はまさにプラキダその人だ」。彼の首にその傷を見た兵士たちは、たちまち食卓から飛び起き、彼の足元にひれ伏し、彼を抱きしめ、喜びのあまり大泣きしながらこう言った。

「お前は、我々が探し求めていたプラキダだ！お前は、王がこれほど長く嘆き悲しんでいる寵愛の者だ！お前は、すべての兵士たちがその死を悼んでいるローマの総督だ！」

その時、エウスタフィウスは、主が彼に予告されていた時が到来し、そこで彼は再び最初の位階と、かつての栄光と名誉を取り戻すべき時が来たことを悟り、兵士たちにこう言った。

「兄弟たちよ、私がまさにあなたがたが探している者だ！私はプラキダだ。あなたがたはかつて、私と共に長い間、敵と戦ってきた。私はかつてローマの誇りであり、異民族にとって恐るべき存在であり、あなたがたにとって大切な人物であったが、今や貧しく、みすぼらしく、誰にも知られていない者となってしまったのだ！」

互いの喜びは大きく、彼らの涙は喜びに満ちていた。彼らはエウスタフィオスを、自分たちの軍司令官として高価な衣装で着せ、王からの書簡を手渡し、彼に直ちに王のもとへ向かうよう熱心に懇願し、こう言った。

「我らの敵が我々を圧倒し始めている。あなたほど勇敢で、彼らを打ち破り、散らすことのできる者は他にいないのだ！」

その家の主人も、その家族も皆、これを聞いて驚き、首をかしげた。そして、その村に偉大な人物が現れたという知らせが、村中に広まった。村人たちは皆、まるで大きな奇跡を目撃するかのように集まり、総督のような装いをし、兵士たちから敬意を払われているエウスタフィオスを驚きの眼差しで見つめた。　アンティオコスとアカキオスは、民衆にプラキダの武勇、その勇敢さ、名声、そして高潔さについて語った。民衆は、エウスタフィオスがこれほど勇敢なローマの軍司令官であることを聞き、驚きながらこう言った。「おお、なんと偉大な人物が、傭兵として我々に仕えながら、我々の間に住んでいたことか！」そして、地面にひれ伏して彼に礼を捧げ、こう言った。

「なぜ、ご主人様、ご自身の高貴な出自や身分を私たちに明かされなかったのですか？」

プラキダが以前住んでいた家の元家主は、彼の足元にひれ伏し、自分からの無礼な振る舞いについて怒らないでほしいと懇願した。そして、その村の住民たちは皆、偉大な人物を雇い人として、まるで奴隷のように扱っていたことを思い、恥じ入った。　兵士たちはエウスタフィオスを馬に乗せ、彼を連れてローマへと戻り始めた。村人たちは皆、彼を大いなる敬意を込めて遠くまで見送った。道中、エウスタフィオスは兵士たちと会話を交わし、彼らは彼の妻や子供たちのことを尋ねた。彼は自分に起こった出来事を順を追ってすべて語り、兵士たちはその悲惨な体験を聞いて涙を流した。その一方で、兵士たちもまた、王が彼のためにどれほど悲しんでいたか、そして王だけでなく、宮廷全体や兵士たちまでもが悲しんでいたことを彼に伝えた。　このように語り合いながら、数日後に彼らはローマに到着し、兵士たちは王に、プラキダを見つけたこと、そしてそれがどのようにして起こったかを報告した。　王はすべての重臣たちに囲まれてプラキダを丁重に迎え、喜びのうちに彼を抱き

しめ、彼に何が起きたのかと尋ねた。エウスタフィオスは、自分や妻、子供たちに起きたすべての出来事を王に語り、それを聞いた者たちは皆、心を打たれた。　その後、王はエウスタフィオスに以前の位階を回復させ、当初所有していたものよりもさらに多くの富を授けた。ローマ全土がエウスタフィオスの帰還を喜んだ。王は彼に対し、異民族との戦いに赴き、その勇敢さをもってローマを彼らの侵攻から守り、また、いくつかの都市を奪われたことへの復讐を果たすよう求めた。　すべての兵士を集めたエウスタフィオスは、そのような戦争には兵力が不足していることに気づいた。そこで彼は、王に対し、王国のすべての地域に勅令を出し、都市や村々から兵役適格な若者たちを集め、その後ローマへ送るよう提案した。そして、その提案は実行された。　王は布告を出し、ローマには戦争に適した若く健やかな人々が大勢集められた。その中には、エウスタフィオスの二人の息子、アガピオスとテオピストもローマに連れてこられた。彼らはその頃にはすでに成人しており、顔立ちは美しく、体格は堂々としており、力も強かった。　彼らがローマに連れて来られ、総督が彼らを見たとき、彼は彼らを深く愛した。それは、父親としての本能が彼を子供たちへと引き寄せ、彼らに対して強い愛情を抱いたからである。　彼は彼らが自分の子供であることを知らなかったが、それでも自分の子供のように彼らを愛し、彼らは常に彼のそばにいて、同じ食卓を囲んでいた。彼らは彼の心に深く愛されていたからである。その後、エウスタフィオスは異民族との戦いに赴き、キリストの力によって彼らを打ち破った。　彼は、敵が占領していた都市や地域を奪還しただけでなく、敵の領土全体を征服し、その軍勢を完全に打ち破った。主の力に支えられ、彼は以前よりもさらに大きな勇気を示し、かつてないほど輝かしい勝利を収めた。

戦いが終わり、エウスタフィオスが平穏のうちに故郷へ帰還していたとき、彼は川沿いの風光明媚な場所に位置するある村に立ち寄ることになった。　その場所は宿営に適していたため、エウスタフィオスは兵士たちと共に三日間滞在した。それは、神が、御自身の忠実なしもべが妻や子供たちと再会し、離散していた者たちが再び一つに集まることを望まれたからである。　彼の妻は、まさにその村に住んでおり、庭を持っていたが、そこからかろうじて生計を立てていた。神の御手配により、アガピオスとテオピストは、母親のことを何も知らずに、彼女の庭の近くにテントを張った。同じ村で育った彼らは、一つのテントを共有し、実の兄弟のように互いを愛し合っていた。　彼らは自分たちが実の兄弟であることを知らなかったが、その近しい血縁関係を知らずとも、互いに兄弟愛を育んでいた。二人は共に、母の菜園のそば、軍司令官の陣営からそう遠くない場所で、休息をとっていた。　ある日、正午頃、母親が自分の庭で働いていると、その頃テントで休んでいたアガピオスとテオピストスの会話を耳にした。彼らの会話は次のようなものだった。二人は互いに自分の出自について尋ね合い、年上の者がこう言った。

「父がローマで総督だったことは少し覚えている。なぜ父が母と共に、私と弟（私たち兄弟は二人いた）を連れてこの街を去ったのかは分からない。」　さらに覚えているのは、私たちが海までたどり着き、船に乗ったことだ。その後、航海の途中で岸に着いたとき、父は船から降り、私たち兄弟も父についていったが、母はなぜか船に残った。　父が母のことを悲しみに暮れて泣いていたこと、私たちも父と一緒に泣いていたこと、そして父は泣きながら旅を続けたことも覚えています。川に差し掛かったとき、父は私を岸辺に座らせ、弟を肩に乗せて対岸へと運んでいきました。　その後、父が弟を運んで私のところへ戻ってくると、ライオンが駆け寄ってきて、私を捕まえて砂漠へ連れ去った。しかし、羊飼いたちがライオンから私を奪い返し、私はあなたが知っているあの村で育てられたのだ。

すると、弟は素早く立ち上がり、喜びの涙を流しながら父の首に飛びつき、こう言った。

「本当に君は僕の兄弟だ。だって、君が話していることはすべて僕も覚えているし、ライオンに君がさらわれたのもこの目で見た。そのとき、僕はオオカミに連れ去られたが、農夫たちが僕をオオカミから救い出してくれたんだ。」

血のつながりを知った兄弟たちは大いに喜び、互いに抱き合い、口づけを交わしながら、喜びの涙を流した。　そして、その会話を耳にした二人の母は驚き、ため息と涙を流しながら天を仰いだ。彼女は、彼らが確かに自分の子供たちであることを確信し、数々の苦難の末に、心は甘美さと安らぎに満たされていたからである。　しかし、賢明な女性として、彼女はもっと確かな知らせがない限り、彼らのもとへ現れて正体を明かすことを敢えてしなかった。というのも、彼女は貧しく、粗末な服を着ていたのに対し、彼らは名高く立派な戦士たちだったからである。　そこで彼女は、軍団長のもとへ行き、その軍隊と共にローマへ戻る許可を請うことに決めた。ローマであれば、息子たちに正体を明かすのも容易だろうし、夫が生きているかどうかも知ることができると期待していたのだ。彼女は軍団長のもとへ行き、その前に立ち、頭を下げてこう言った。

「お願いです、閣下。どうか、私があなたの部隊に随行してローマへ戻れるようお命じください。私はローマ人ですが、異民族に捕らえられ、この地に連れて来られてから、すでに十六年が経ちます。そして今、自由の身となったものの、異国の地をさまよい、極度の貧困に苦しんでいます。」

エウスタフィウスは、その優しい心ゆえに、直ちに彼女の願いを聞き入れ、恐れることなく故郷へ帰れるよう許した。すると、その妻は総督を見つめ、彼が自分の夫であることを完全に確信し、驚きでまるで我を忘れたかのように立ち尽くした。しかし、エウスタフィウスは妻を認識しなかった。　彼女は、かつて悲しみが次々と訪れたのとは対照的に、予期せぬ喜びが次々と訪れる中、心の中でため息をつきながら神に祈り、夫に正体を明かし「私があなたの妻です」と告げることを恐れていた。というのも、夫は今や大きな栄光に包まれ、多くの側近に囲まれていたのに対し、彼女はまるで最下層の乞食のようだったからである。　そこで彼女は、夫と子供たちが自分だと気づくよう、主であり神である御方が自らそのように導いてくださるよう祈りながら、彼の天幕を後にした。その後、より都合の良い時を見計らって、再びエウスタフィオスの元へ入り、彼の前に立った。すると彼は彼女を見て、こう尋ねた。

「老女よ、私にまた何を求めているのだ？」

彼女は地面にひれ伏してこう言った。

「お願いです、ご主人様。あることをお尋ねしたいのですが、このしもべである私を怒らないでください。どうか忍耐強く、私の話を聞いてください。」

彼は彼女に言った。

「よし、話せ。」

すると、彼女はこう語り始めた。

「プラキダよ、聖なる洗礼においてエウスタフィオと名付けられたのはあなたではありませんか？　鹿の角の間に十字架にかけられたキリストを見られたのはあなたではありませんか？　主なる神のために、妻と二人の子供、アガピオとテオピストを連れてローマを去ったのはあなたではありませんか？　船の上で、見知らぬ旅人に妻を奪われたのはあなたではありませんか？　天にいらっしゃる忠実な証人――主キリストご自身が、私が多くの苦難に耐えてきたのは、私があなたの妻であり、キリストの恵みによって辱めから守られたからであることを証ししてくださいます。なぜなら、あの見知らぬ男は、あなたから私を奪い去ったまさにその瞬間に、神の怒りによって罰せられ、滅びてしまったからです。私は清らかなままであり、今、苦難に遭い、放浪の身となっているのです。

これらすべてを聞いて、エウスタフィオスはまるで眠りから覚めたかのように、たちまち妻だと気づき、立ち上がって彼女を抱きしめ、二人は大きな喜びのあまり、共に大いに泣いた。そしてエウスタフィオスは言った。

「私たちの救い主キリストを賛美し、感謝しましょう。主は御慈悲をもって私たちを見捨てず、苦難の後に私たちを慰めると約束された通り、まさにそうしてくださったのです！」

そして二人は、喜びの涙を流しながら神に感謝した。その後、エウスタフィオスが泣き止むと、妻は彼に尋ねた。

「私たちの子供たちはどこにいるの？」
すると彼は深くため息をついて、こう答えた。
「獣に食べられてしまった。」
すると、妻は彼にこう言った。
「悲しまないでください、夫よ！神様が私たちを思いがけず再会させてくださったのですから、きっと子供たちを見つける手助けもしてくださるでしょう。」
彼は彼女にこう言った。
「獣に食べられたと言ったではないか？」
すると彼女は、前日に自分の庭で働いている時に耳にしたこと――テントの中で二人の戦士が交わしていた会話のすべて――を彼に語り始めた。その会話から、彼らが自分たちの息子たちであることを知ったのだ。
エウスタフィオスは直ちにその二人の戦士を呼び寄せ、こう尋ねた。
「お前たちはどんな出自だ？　どこで生まれた？　どこで育った？」
すると、年長の者がこう答えた。
「ご主人様、私たちは幼い頃に両親を亡くしたため、幼少期のことはほとんど覚えておりません。ただ、父があなたと同じようなローマの軍司令官であったことだけは覚えております。しかし、父に何が起きたのか、なぜ父が母と私たち二人を連れて夜中にローマを離れたのかは存じ上げません。　また、私たちが船で海を渡った際、なぜ母だけがその船に残されたのかも分かりません。父は母を嘆きながら、私たちを連れてある川へと向かいました。　父が私たちを一人ずつ川を渡して、川の中ほどにいたその時、獣たちにさらわれてしまいました。私はライオンに、弟はオオカミに。しかし、私たちは二人とも獣から救われました。私は羊飼いたちに救われ育てられ、弟は農民たちに救われたのです。
これを聞いて、エウスタフィオスとその妻は自分の子供たちだと気づき、彼らの首に飛びついて、長い間泣き続けた。そして、エウスタフィオスの陣営には、かつてエジプトでヨセフの兄弟たちが彼を認めた時（創世記45:1–15）のように、大きな喜びが満ちた。　彼らの司令官の妻と子供たちが発見されたという噂がすべての連隊に広まり、すべての兵士たちは喜び勇んで集まり、全軍に大きな歓喜が沸き起こった。彼らは勝利のときよりも、この喜ばしい出来事の方をより深く喜んだ。こうして神は御自身の忠実なしもべたちを慰められた。なぜなら、神は*「主は死なせ、また生かされる方であり……　主は貧しくもされ、富ませもなさる」*（サムエル記上2:6–7）からであり、悲しみに沈め、喜びと歓びへと引き上げてくださる。そしてエウスタフィオスも、その時ダビデにこう語ることができた。*「さあ、神を畏れる者たちよ、皆、聞いてください。主が私の魂のためになされたことを、私は[あなたがたに]告げましょう。*主がわたしに示してくださった恵みを思い起こそう。*主の右の手は高く、主の右の手は力を行なわれる！」*（詩篇65:16、10:16、117:16）と語ることができた。
エウスタフィオスが戦場から帰還し、勝利と妻や子供たちの再会という二重の喜びに浸っていたその頃――彼がローマに到着するよりも前に――トラヤヌス帝が死去した。後を継いだのはハドリアヌス帝であったが、彼は極めて残酷で、善良な人々を憎み、敬虔な者たちを迫害した。　エウスタフィオスが、ローマの将軍たちの慣例に従い、多くの捕虜を従え、豊かな戦利品に囲まれて大々的な祝賀のうちにローマに入城すると、皇帝とすべてのローマ人は彼を[6353]として敬意をもって迎え、彼の勇猛さは以前よりもさらに称賛され、誰もが以前以上に彼を敬うようになった。　しかし、神は、御自分のしもべたちが、この移ろいやすく不安定な世において、虚しく一時的な称賛によって敬われ、称えられることを望んでおられない。なぜなら、神は彼らに天において永遠で朽ちることのない栄

[6353] すなわち、プラキデスには、ローマの慣習に従い、いわゆる「凱旋式」、すなわち栄光に輝く将軍――勝利者――にふさわしい、華やかで荘厳な出迎えが執り行われたのである。

光と誉れを用意しておられるからである。　――エウスタティオスに殉教の道を指し示された。まもなく、神は再び彼に不名誉と苦難を送られたが、彼はキリストのためにそれを喜んで耐え抜いた。
不敬虔なハドリアヌスは、敵に対する勝利への感謝として、悪霊たちへの生贄を捧げようとした。彼が重臣たちと共に偶像の神殿に入ろうとしたとき、エウスタフィオスは彼らの後を追わず、外に残った。王は彼に尋ねた。

「なぜ我々と共に神殿に入り、神々に拝礼しないのか？　神々は、戦いでお前を無傷で守り、勝利を授けただけでなく、妻や子供たちを見つける手助けまでしてくれたのだから、誰よりもまずお前が神々に感謝を捧げるべきではないか。」

エウスタフィオスはこう答えた。

「私はキリスト教徒であり、私の唯一の神であるイエス・キリストを知っています。私は彼を崇め、感謝し、礼拝します。なぜなら、健康も、勝利も、妻も、子供たちも、すべては彼が私に与えてくださったものだからです。しかし、耳も口も利かず、力のない偶像には、私は礼拝しません。」

そしてエウスタフィオスは自分の家へと帰った。王は激怒し、自らの神々を冒涜したエウスタフィオスをいかに罰すべきか考え始めた。　まず、彼はエウスタフィオスから軍司令官の地位を剥奪し、妻や子供たちと共に、一介の民として裁判にかけ、偶像への生贄を捧げるよう説得した。しかし、彼らを説得することができなかったため、野獣の餌食とする判決を下した。　こうして、聖エウスタフィオス――この栄光に満ちた勇敢な戦士――は、妻と息子たちと共に処刑を宣告され、闘技場へと向かった。しかし、彼はこの不名誉を恥じることもなく、熱心に仕え、万人の前でその聖なる御名を告白していたキリストのために死ぬことを恐れることもなかった。　彼は、聖なる妻と子供たちをも励まし、すべての者の命の与え主である主のために死を恐れないようにした。そして　、彼らは未来の報いへの希望をもって互いに励まし合いながら、まるで祝宴に向かうかのように死へと向かった。　彼らには猛獣が放たれたが、獣たちは彼らに触れることはなかった。というのも、どの獣が彼らに近づこうとも、すぐに引き返し、彼らの前で頭を垂れたからである。獣たちはその猛威を和らげたが、王はさらに激怒し、彼らを牢獄へ連行するよう命じた。　そして翌日、王は青銅の雄牛を赤熱させ、聖エウスタフィオスとその妻、子供たちをその中に投げ込むよう命じた[6354]　。しかし、この赤熱した雄牛は、聖なる殉教者たちにとって、聖なる少年たちにとっての、露で冷やされたカルデアの炉（ダニエル書3:21）のようなものであった。 その雄牛の中にいた聖なる殉教者たちは、祈りを捧げた後、自らの魂を神に委ね、天の御国へと旅立った。三日後、アドリアヌスは焼かれた殉教者たちの遺骸を見ようと、その雄牛に近づいた。 扉を開けると、拷問者たちは彼らの遺体が無傷で、頭髪の1本すら焼け落ちておらず、その顔は眠っている人のようで、不思議な美しさに輝いているのを見つけた。そこにいた民衆全員が声を上げて叫んだ。

「キリストの神は偉大なり！」

[6354] マカリア大主教の『大チェティ・ミネイ』は、ここに聖ディミトリ・ロストフスキーの記述にはない以下の詳細を付け加えている。　聖殉教者たちが恐ろしい処刑の場へと近づいたとき、彼らは両手を天へと掲げ、まるで何らかの天上の現象を仰ぎ見ているかのように、主に向かって熱烈な祈りを捧げました。これは彼らの祈りの冒頭の言葉からも明らかです。その祈りは次のようなものでした。「力ある主なる神よ、万物には見えなくとも、私たちには見える方よ！　私たちに耳を傾け、あなたに祈る私たちに、この最後の祈りをお受けください。　今、私たちは一つとなり、あなたは私たちをあなたの聖徒たちの運命に与えてくださいました。バビロンで火の中に投げ込まれた三人の少年たちが、あなたによって拒まれなかったように、今、私たちもこの火の中で息を引き取ることができるようお許しください。そうして、あなたが私たちを喜ばれるいけにえとして受け入れてくださいますように。　主なる神よ、私たちの記憶を偲ぶすべての人々に、天の御国での分け前をお与えください。また、この火の猛烈な炎を冷たさに変え、私たちがこの中で息を引き取れるようお導きください。さらに、主よ、私たちの体が離れることなく、共に眠りにつくことができるようお導きください」。この祈りに応えて、天から神の御声が響き渡りました。「あなたがたの願いどおりになれ！　あなたがたは多くの試練に耐え、打ち負かされることはなかったのだから、さらに多くの恵みが与えられるであろう。平安のうちに去り、その苦難に対する勝利の冠を受け取り、世々限りなく安らかに眠れ」。

王は恥じ入って宮殿へ戻り、民衆は皆、ローマにとってこれほど不可欠な総督を無意味に処刑したその悪意を非難した。
一方、キリスト教徒たちは、聖なる殉教者たちの尊い遺体を運び出し、[6355] に埋葬し、聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神、父と子と聖霊を賛美した。神に、私たち全員から、今、そして常に、そして世々限りなく、栄光と賛美と礼拝が捧げられますように。アーメン。

コンダク、第2声調:

キリストの受難に倣い、その杯を熱心に飲み干したあなたは、エウスタフィエよ、キリストの共同の杯を分かち合う者であり、栄光の共同相続人であり、すべての神ご自身から、高きところより神聖な御恵みを受けられた。

チェルニゴフの公ミハイルと、その家臣テオドロスという聖なる殉教者たちの受難――不義なるバトゥによって苦しめられた者たち

記念日：9月20日

あなたが混乱や戦争、あるいはその他の災難を目にする時、これらすべてが単にこの一時的な世のありふれた現象であるとか、あるいは何らかの偶然から生じたものだと考えてはなりません。むしろ、これらの災難は、罪を犯す者たちが正気に戻り、改心するようにと、全能の神の御心によって、私たちの罪のために許されているのだと知ってください。　主はまず、私たち罪人に対し、小さな懲らしめをもって戒められます。しかし、もし私たちが改心しなければ、かつてイスラエルの民に下されたように、主は私たちに大きな懲らしめをお送りになります。なぜなら、キリストのむちの懲らしめから改心しようとしなかった者たちに、主は何を許されたのでしょうか？（ヨハネ2:15）――*「あなたは彼らを、鉄の杖で打ち砕く」*と主は言われた（詩篇2:9）。主が最初に許される小さな懲罰とは、反乱、飢饉、突然の死、内戦などである。　もし、そのような懲罰によって罪人たちが改心しないならば、主は彼らに異民族による残酷で過酷な侵略を送り、少なくともこの大いなる災いの中で人々が正気に戻り、その悪しき道から立ち返ることができるようにされる――預言者の言葉にあるように：*「主が彼らを殺されたとき、彼らは主を慕った」*（詩篇77:34）。私たち、そしてロシア全土にとっても、まさにそうであった。　私たちが邪悪な行いによって、全き慈愛に満ちた神の恵みを怒らせ、その憐れみを深く傷つけ、悔い改め、悪から離れ、善を行うことを拒んだとき――その時、主は私たちに対して御自身の義なる怒りを燃やし、私たちの不法に対して最も厳しい懲罰をもって私たちを罰しようとされた。　そこで主は、タタールと呼ばれる不敬虔で残忍な野蛮人たちが、最も不義で無法な王バティ[6356] を率いて、私たちに襲いかかることを許されたのである。数えきれないほどの大軍を率いてロシアの地に襲いかかり[6357] 、彼らは敬虔なロシアの諸公を打ち破り、その軍勢を粉砕した。彼らはすべての都市を荒廃させ、剣と火によってロシアの地を荒廃させた。なぜなら、かつて預言者を通してこう語られた神が、私たちの罪のために私たちをその不敬虔な大軍に引き渡された

[6355] 聖エウスタフィオとその一族の聖遺骨は、ローマにある同名の教会に安置されている。

[6356] バトゥーは、偉大なるチンギス・ハンの孫であり、タタール人のハンである。バトゥーはヴォルキ川のほとりに居を構え、その都を「サライ」と名付けた。ここには、黄金のオルダ、あるいはキプチャク・オルダとして知られる彼のオルダ（オルダとはタタール人の営地のこと）が遊牧していた。　しかし、バトゥー自身は絶対的な支配者ではなかった。彼もまた、チンギスの後継者である大ハンに依存していた。大ハンは巨大なオルダを率いて中央アジアの砂漠を遊牧しており、多くのロシアの公爵たちが大ハンへの服従を示すためにそこを訪れていた。

[6357] このタタール人によるルーシの地への侵攻は、1238年のことだった。

ため、誰もその大軍に抵抗することはできなかったからである。 *「もしあなたがたが望み、聞き従うなら、地の恵みを味わうであろう。しかし、もし背き、頑なであるなら、剣があなたがたを食い尽くすであろう」*（イザヤ書1:19–20）。 剣や捕囚から逃れたキリスト教徒たちは、山々や人跡未踏の荒野に身を隠した。そして、当時のルーシ全土は悲惨な光景を呈していた。かつて人々が住んでいた場所――都市や村々――は荒れ果て、かつて野獣が棲んでいた場所には、野蛮人から身を隠すために人々が定住するようになった。

その頃、敬虔で永遠に記憶されるミハイルがいた。彼はヴェセヴォロド・チェルムヌイ[6358] の息子であり、チェルニゴフ公であった。 彼は若い頃から徳高い生活を送り、キリストを愛し、心を尽くして主に仕えた。そして、誰もが公爵の心の優しさ――その柔和さ、謙虚さ、すべての人への気配り、そして貧しい人々への慈悲――を目の当たりにしていた。 常に祈りと断食によって神に奉仕し、あらゆる善行をもって自らの魂を飾り立てたミハイル公は、その魂を、自らの創造主である神の素晴らしい住まいとした。

この敬虔な公には、彼と同様に徳の高い、テオドールという名の愛するボヤリンがいた。ミハイル公は彼と共に、不敬虔なバトゥイの手によって苦難を受け、キリストのために自らの魂を捧げたのである。

敬虔でキリストを愛するミハイルがキエフ公国を治めていた頃、不信心なバトゥーは、キエフの街を視察させるためにタタール人を派遣した。 使節たちは、キエフの街の壮大さと美しさを目の当たりにして驚嘆し、バティイのもとへ戻ると、この名高い街について彼に報告した。そこでバティイは再びミハイルのもとへ使者を派遣し、彼らに諂いをもって公を説得し、自発的に自分に服従させるよう命じた。 敬虔なミハイル公は、タタール人が狡猾な手段で街を陥落させ、荒廃させようとしていることを見抜いた。公は以前から、あの残忍な野蛮人たちが、自発的に服従する者でさえ容赦なく殺害するという話を聞いていたため、バトゥの使者を処刑するよう命じた。 その後、ミハイルは、巨大なタタール軍が接近していることを知った。その軍勢は、イナゴのように膨大な数（兵士は60万人にのぼった）でロシアの地に押し寄せ、要塞化された都市を次々と制圧していった。 キエフが迫り来る敵から生き残ることは不可能だと悟ったミハイル公は、ボヤリンのフェオドールと共にハンガリーへ逃れ、[6359] 祖国への援軍を求めた。 この援助を得られなかったミハイルは、しばらくの間、異国の地を放浪した。*「怒りが過ぎ去るまで、ひととき身を隠せ」*[6360]（イザヤ書26:20）。

ミハイル公がキエフを去った後、他のルーシの諸公がキエフ公国を支配したが、彼らもまた、不義なバトゥーからキエフを守り抜くことはできなかった。全軍を率いて到来したバトゥーは、キエフ、チェルニヒウ、その他の要塞都市や公国を制圧し、それらはすべて火と剣によって甚大な被害を受けた。 ――それは、世界の創造から6748年目、キリストの降誕から1240年目のことだった。――その時、名高く栄光に満ちた都市キエフは、キリストを憎む敵の手によって完全に荒廃させられ、名士たちは不義な者たちの剣によって命を落とした――ある者は殺され、ある者は捕虜として連れ去られた。 神の荘厳な聖堂は冒涜され、焼き払われた。こうしてダビデの言葉が成就した。*「神よ！異教徒たちがあなたの嗣業に侵入し、あなたの聖なる神殿を冒涜し、エルサレムを廃墟と化した。 あ*

[6358] ヴェセヴォロド（通称チェルムノイ）は、チェルニゴフ公であり、キエフ大公スヴィャトスラフ・ヴェセヴォロドヴィチの息子である。1210年から1214年まで、ヴェセヴォロドはキエフを統治し、1215年に死去した。

[6359] ハンガリー（スラヴ語で「ウグリア」）は、オーストリア＝ハンガリー帝国の主要な領土である王国である。 ミハイル・チェルニゴフスキーの息子ロスティスラフは、ハンガリー王ベラの娘と結婚していた。親族の中に忠実な同盟者を見出そうと考えたミハイル公は、王に対し、共同の力で共通の敵に対して反乱を起こすよう懇願したが、王も、助けを求めた他の者たちも、誰も説得できなかった。

[6360] この箇所で、預言者イザヤは、これらの災難が民の不義に対する神の怒りの結果であるため、耐え難い災難を忍耐強く耐え忍ぶよう呼びかけている。*「隠れなさい」と預言者は言う。「主の怒りが過ぎ去るまでの、ほんの短い間だけでも」*。

なたのしもべたちの死体　は、空の鳥の餌とされ、あなたの聖徒たちの遺体は、地上の獣の餌とされました。彼らの血は、エルサレムの周囲で水のように流され、彼らを葬る者もいませんでした」（詩篇78:1–3）。

当時、異国を放浪していたミハイル公は、ロシアの地で起きているすべての出来事を耳にし、同じ信仰を持つ同胞たちの死と、自国の荒廃を深く嘆いた。　まもなくミハイルは、剣や捕虜となる運命からわずかに生き残った都市の住民たちに対し、不敬虔なツァーリが、彼らが自分の住む場所で恐れることなく暮らすことを許したものの、その代わりに彼に貢ぎ物を納めるよう命じたことを知った。　そして、遠く異国の地へ逃れていた多くのロシアの公爵たちは、このことを耳にすると、故郷の地へと戻り始めた。不敬な王に頭を下げ、彼らはそれぞれの公国を取り戻し、バトゥに貢ぎ物を納めつつ、荒廃した都市に定住した。　敬虔なミハイル公もまた、ボヤリンのフェオドールや家臣たち全員を率いて放浪の旅から帰還した。異教の王に貢ぎ物を納め、たとえ荒廃した故郷であってもそこで暮らす方が、異国の地で放浪者となるよりはましだと考えたからである。　彼はまずキエフに到着し、聖地が荒廃し、天国を思わせるペチェールスカヤ教会（[6361]）が基礎まで破壊されているのを見て、苦々しく泣いた。　その後、ミハイルはチェルニヒウへと向かった。ミハイル公が旅の疲れを癒やす間もなく、彼の帰還を聞きつけたタタール人たちがバトゥのもとからやって来て、彼（および他のロシアの諸公）を自分たちの王のもとへ呼び寄せ、こう言った。

「バトゥの領土で、彼に拝礼せずに生きることは許されない。さあ、行って彼に拝礼し、その臣下となれ。そうすれば、自分の住処に留まることができる。」

その不敬虔な王には、次のような慣習があった。　もしルーシの公爵の誰かが彼に拝礼しに来た場合、タタールの魔術師や祭司たちは彼らに火の中を通り抜けるよう強要した[6362]。また、もし公爵の誰かが王への贈り物を携えてきた場合、魔術師たちはそれらの贈り物すべてから少しずつ取り分け、生贄として火の中に投げ込んだ。　火の中を通り抜けさせた後、彼らは太陽や灌木、偶像への礼拝を強要し、その後にようやく王への謁見を許した。　多くのルーシの公たちは、王への恐れから、また自らの公国を維持するために、これらすべてに従った。すなわち、火の中を通り抜け、偶像を崇拝し――その見返りとして、王から求めたものを手に入れたのである。

多くのロシアの公爵たちが、この世の栄光に惑わされて偶像を崇拝したと聞き、敬虔なミハイル公は深く嘆き、主なる神への熱意に燃え、すべての人の中で最も不義で狡猾な皇帝のもとへ赴き、恐れを知らずにキリストを告白し、主のために自らの血を流すことを決意した。　これを企て、魂に燃える思いを抱いたミハイルは、忠実な顧問であるボヤリンのフェオドールを呼び寄せ、自らの意図を打ち明けた。フェオドールは敬虔で信仰に堅固であったため、主君の決断を称賛し、最期まで主君を見捨てず、共にキリストのために命を捧げることを誓った。　この協議の後、彼らは決してその決意を曲げることなく、イエス・キリストを告白するために赴き、そのために死ぬことを固く決心した。直ちに彼らは、ヨハネという名の自分の霊的指導者のもとへ赴き、このことを告げた。彼の元へ着くと、公爵はこう言った。

[6361] キエフ・ペチェールスカヤの聖母教会は、1073年、ミハイル司教の時代、敬虔なスヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ公の治世下において、聖アントニーと聖テオドシウス・ペチェールスキーの両聖父によって建立された。　様々な奇跡や前兆を伴って始まった教会の建設は、聖ステファノと聖ニコンの修道院長時代を経て、イオアンヌ修道院長のもとで完成した。　この教会の美しさと壮麗さは、同時代の人々を驚嘆させた。その内部は金とモザイクで輝き、イコン画が人々の視線を惹きつけた。床は、美しい模様を成す色とりどりの石でモザイク状に敷き詰められていた。　教会の頂部は金箔で覆われ、主ドームに掲げられた十字架は純金で鋳造されていた。それゆえ、同時代の人々がペチェールスク教会を「天に似た」と呼び、それが全ロシアの栄光であり装飾であると語ったのも不思議ではない。

[6362] ハンの元を訪れる者全員を、タタールの司祭たちは炎の間をくぐらせて通した。彼らの信念によれば、これにより、彼らの君主のもとへ向かう者たちのあらゆる悪意が消し去られるとされていた。彼らの信仰によれば、火は「あらゆる悪意の浄化の場」であり、隠された毒の力さえも奪い去るとされていた。

「父よ、私は他のすべてのロシアの公爵たちと同様に、王のもとへ行きたいのです。」

霊的指導者は、その言葉を悲しげに聞き、深くため息をついて言った。

「多くの公爵がそこへ行き、バトゥの意志に従い、火や太陽、その他の偶像にひれ伏したことで、自らの魂を滅ぼしてしまった。　そして、ミハイルよ、もし望むなら、平穏にそこへ行ってもよい。ただ、懇願する――彼らに倣わず、彼らが地上の権力を保つために行ったようなことをしてはならない。不義な者たちの火の中を通り抜けたり、彼らの忌まわしい神々に拝礼したりしてはならない。なぜなら、私たちの神は唯一、イエス・キリストだからである；　また、不浄な偶像の供え物からは何も口にしないように。そうしなければ、あなたは自らの魂を滅ぼしてしまうことになる。

公爵とボヤリンはこう答えた。

「我らはキリストのために血を流し、御ために魂を捧げ、御心に適ういけにえとなりたいと願う。」

これを聞いて、ヨハネは心から喜び、喜びに満ちた眼差しで彼らを見つめ、こう言った。

「もしそうされるなら、あなたがたは祝福され、この世の終わりに『新たに現れた殉教者』と呼ばれることになるでしょう。」

その後、福音書やその他の神霊に導かれた書物から彼らに教えを授けた後、彼は公爵とボヤリンにキリストの御体と御血の聖なる秘跡を授け、彼らを祝福してこう言った。

「主なる神があなたがたを強め、聖霊の賜物を授けてくださいますように。そうして、あなたがたが信仰において堅固であり、キリストの御名を告白する際に勇敢であり、苦難において気高くあり、天の王があなたがたを最初の聖なる殉教者たちの列に加えられますように。」

その後、ミハイルとフェオドールは家路についた。そこで旅に必要な準備をすべて整え、家族と別れを告げると、神への祈りを捧げながら、神への心からの愛に燃え、殉教の冠を願って、急いで旅立った。*「鹿が水の川を慕うように、わが魂はあなたを慕います、神よ！」*（詩篇41:2）。

彼らが不信心な王バトゥイのいる場所にたどり着くと、彼らの到着は直ちに彼に報告された。バトゥーは占星術師や自分の祭司たちを呼び寄せ、慣例に従ってチェルニヒウ公を火の中を通らせ、偶像に拝ませた上で、それから自分の前に連れてくるよう命じた。公の元にやって来た占星術師たちは、彼にこう言った。

「偉大なる王があなたを呼んでいる。」

そして彼を連れ出し、連れて行った。彼のボヤリンであるフェオドールも、主人の後を従うようにしてついていった。やがて彼らは、両側に火が焚かれ、その真ん中に多くの者がすでに通り抜けていた道がある場所にたどり着いた。魔術師たちは、この道を通ってミハイル公も連れて行こうとした。その時、公は言った。

「不信心者たちが神と崇めるその火の中を通り抜けることは、キリスト教徒にふさわしくない。私はキリスト教徒である。　それゆえ、私は火の中を通りはせず、被造物にひれ伏すこともない。私は創造主――父と子と聖霊――三位一体の唯一の神、天と地の創造主にのみひれ伏すからだ。

公爵のそのような言葉を耳にした魔術師や祭司たちは激怒し、ミハイルを置き去りにして、彼の言葉を王に報告しに行った。　その頃、ミハイル公のもとへ、バトゥへの拝謁に彼と共に来た数人のルーシの公たちが近づいてきた。その中には、ロストフ公ボリスもいた[6363]　。彼らはミハイルを憐

[6363] ボリス・ヴァシルコヴィチ（ヴァシリエヴィチ）――ロストフ公。ミハイル・チェルニゴフスキーの孫であり、ヴァシルコ・コンスタンティノヴィチとチェルニゴフ公女マリア・ミハイロヴナとの結婚から生まれた二人の息子のうち、長男である。　1238年、ロストフ近郊のシュチェレンスキーの森でタタール人に殺害された父の死後、ボリスはロストフを領地として受け継いだ。この公は、歴史上、金帳汗国に対するロシアの悲劇の使者として知られている。 彼はオルダに8回以上赴き、バティの命令により、1245年には大タタリアのハン・サルタクのもとへさえ赴いた。ボリスは1277年にオルダで死去し、ロストフのウスペンスキー大聖堂に埋葬された。

れみ、深く彼を案じつつも、同時に自分たちも王の怒りを招くことを恐れて、ミハイルにバトゥの意に従うよう勧めた。

「君なら」と彼らは言った。「王の怒りと残酷な死を免れるためだけに、見せかけだけで命令に従い、火と太陽に拝礼することもできるだろう。」　無事に自宅へ戻った後なら、その時は自分の望むままに行動すればよい。主はこのことについてあなたを罰したり、怒ったりはなさらない。なぜなら、主はあなたが強制されてそうしたことをご存知だからだ。　もしあなたの告解司祭が、その行いを罪だと断じようとも、私たち全員があなたの罪を背負うつもりだ――ただ私たちの言うことを聞き、火の中を通り抜けてタタールの神々に拝礼してくれ。そうすれば、あなた自身も私たちも王の怒りと残酷な死から解放され、あなたの国のためにも多くの恩恵を請い求めることができるだろう。

彼らはこうした言葉を、苦々しい涙を流しながらミハイルに語りかけた。敬虔なボヤリン、フェオドールは彼らの言葉を聞き、公爵が周囲の助言に従い、信仰から離れるのではないかと恐れ、深く悲しんだ。公爵のもとへ歩み寄ると、彼は公爵の誓いと告解司祭の言葉を思い出させ始めた。

「思い出してください、敬虔な公爵よ」と彼は言った。「あなたがキリストのために自らの魂を捧げると誓ったことを。*また*、霊的指導者が私たちに教えた福音書の言葉を思い出してください。*『自分の魂を保とうとする者はそれを失い、わたしのためと福音のために魂を失う者は、それを保つのである。人がたとえ全世界を得ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか？』*（マルコ8:35–36）――*「それゆえ、人々の前でわたしを公に認める者は、わたしも天の父の前でその者を認める。しかし、人々の前でわたしを否む者は、わたしも天の父の前でその者を否む」*（マタイ10:32–33）。

ミハイル公は、このボヤリンの言葉を喜びをもって聞き、神への熱意に燃え、命の与え主であるキリストのために死ぬ覚悟で、殉教を喜んで待ち望んでいた。一方、前述のボリス公は、ミハイルに対し、皇帝の意志に従うよう強く懇願し続けた。

「名ばかりキリスト教徒でいることは望まない」とミハイルは彼らに答えた。「異教徒のように振る舞うことなどできない。」

そして、自分の剣を抜き、彼らのほうへ投げ捨てて言った。

「この世の栄光を奪い取れ。私には必要ない。」

その後、バトゥのもとからエルデガという名の高位の宮廷人がやって来て、ミハイル公に王からの次の言葉を伝えた。

「大君主はこうおっしゃっている。どちらか一方を選べ。　もし私の命令に従い、火の中を通り抜けて私の神々に拝礼すれば、命は助かるだけでなく、私から大きな恩恵を受け、自分の公国で完全な支配者となるだろう。もし私の言うことを聞かず、私の神々に拝礼しなければ、惨めな死を遂げるだろう。

エルデギから王の言葉を聞いたミハイル公は、少しも怯むことなく、勇敢にこう答えた。

「王にこう伝えてほしい――キリストのしもべであるミハイル公はこう言う。　もし、王よ、あなたが神からこの世の王国と栄光を授かり、至高者の御手が私たちの罪ゆえに私たちをあなたに服従させたのであれば、私たちは王としてあなたにひれ伏し、あなたの王としての威厳にふさわしい敬意を払わなければならない。しかし、キリストを否定してあなたの神々にひれ伏すこと――それは決してない。なぜなら、彼らは神ではなく、被造物に過ぎないからだ。　一方、私たちの預言の書にはこう記されている。*「天と地を造らなかった神々は、地から、また天の下から消え去るであろう」*（エレミヤ書10:11）。創造主を捨てて被造物に拝むことほど、狂気なことがあるだろうか。

エルデガは彼にこう言った。

「ミカエルよ、君は太陽を被造物と呼ぶのは誤りだ。なぜなら――教えてほしいのだが――あの計り知れない天の高みに登り、全宇宙を照らすこの偉大な天体を創造したのは、いったい誰なのか？」

「もし私の話を聞いてくれるなら」と聖人は彼に答えた。「太陽や、目に見えるもの、目に見えないものすべてを創造された方がおられることを、あなたに教えてあげよう。それは、初めもなく、目に見えない神であり、その独り子である私たちの主イエス・キリストもまた、創造されたものではなく、初めも終わりもない。同様に、聖霊も、　――三つの位格を持ちながら、本質においては唯一の神――が、天と地、そしてあなたがたが拝んでいる太陽、月、星々、さらには海と陸を創造された。また、神は最初の人間であるアダムを創造し、すべての被造物を彼に仕えさせるために与えられた。　主は人々に、地にも天にもあるいかなる被造物にも拝んではならないという律法を与え、すべてを創造された唯一の神を拝むようにと命じられました。私もまた、その神を拝んでいます。　もし王が私に公国やこの世の栄光を約束したとしても、私はそれを求めません。王自身も永遠ではないからです。また、王が私に与える権力も永遠ではなく、私にはその権力は必要ありません。私が信じる私の神が、終わりのない永遠の王国を私に与えてくださることを願っています。

すると、エルデガは言った。

「ミハイルよ、もしお前が頑なに王の命令に従わないならば、即座に処刑されることになる。」

聖人は答えた。

「私は、神と共に永遠に過ごす栄誉を得られるような死を恐れてはいない。――そもそも、なぜこれほど長く語る必要があるのか？私はキリスト教徒であり、天と地の創造主を信仰し、彼を固く信じ、喜んで彼のために死ぬつもりだ。」

そこでエルデガは、甘言も脅しも用いてもミハイルを王の命令に従わせることはできないと悟ると、バトゥのもとへ行き、ミハイルから聞いたことをすべて伝えた。

エルデガの話を聞き終えると、バトゥは激怒し、側近たちに直ちにミハイル公を殺害するよう命じた。そして、拷問者の手下たちは、まるで狩りに出かける犬や、羊を追いかける狼のように、ミハイル公に襲いかかった。　その間、キリストの聖なる殉教者は、死を恐れずテオドールと共に留まり、彼らは詩篇を詠み、神に熱心に祈りを捧げていた。近づいてくる殺し屋たちを見て、彼らはこう歌い始めた。「主よ、あなたの殉教者たちは多くの苦難に耐え、あなたの愛によって聖なる魂たちを結び合わせました」。　ミハイル公が立っていた場所にたどり着くと、殺し屋たちは獣のように彼の手足をつかみ、地面に押し倒して、長く　し、容赦なく全身を殴りつけたため、地面さえも彼の血で赤く染まった。ミハイルはこれらすべてを勇敢に耐え抜き、ただ一つだけ「私はキリスト教徒だ！」と繰り返した。

そこには、かつてはキリスト教徒であったが、後に背教し、タタールの不敬虔な信仰を受け入れた王の家臣の一人がいた。　この背教者は、聖人が勇敢に拷問に耐えているのを見て、彼に憤りを覚え、キリスト教徒の敵であったため、ナイフを取り出し、ミハイルの首を掴んで切り落とし、投げ捨てた――その間も、聖なる殉教者の口からは「私はキリスト教徒だ」という言葉が繰り返し発せられていた。

ああ、なんと驚くべき奇跡であろうか！　すでに身体から切り離された頭部でさえ、なおキリストを告白し続けていたのだ。

その後、不敬虔な拷問者たちは敬虔なテオドロスに近づき、こう言った。

「王の命令に従い、我らの神々にひれ伏せ。そうすれば、お前は生き延びるだけでなく、王から大きな栄誉を与えられ、主君の公国を継ぐことになるだろう。」

しかし、聖テオドールはこう答えた。

「私は主君の公国を求めない。あなた方の王からの栄誉も必要ない。私が望むのはただ、主君が歩んだのと同じ道をたどってキリストのもとへ行くことだけだ。　――聖なる殉教者ミハイル公爵が歩んだのと同じ道を、キリストのもとへ歩むことだけを望んでいる。なぜなら、私も彼と同様に、

天と地の創造主である唯一のキリストを信じ、彼のために苦難に耐えたいと願っており、拷問や死そのものを恐れてはいないからだ。

テオドロスの揺るぎない決意を見て、殺し屋たちは彼を捕らえ、聖ミハイルと同じくらい残酷に拷問し始めた。ついに、彼らは彼の尊い首を切り落とし、その際にこう言った。

「輝ける太陽にひれ伏そうとしなかった者は、太陽を見るに値しない。」

こうして、尊く殉教した聖ミカエルと聖テオドールは、創造から6753年、キリストの降誕から1245年、9月20日に、その魂を主の御手に委ねた。彼らの聖なる遺体は犬に食わせるために投げ捨てられたが、何日も経っても無傷のままで、誰にも触れられることはなかった。 ——キリストの恵みが彼らを無傷のまま守っていたのである。——さらに、殉教者たちの遺体の上には、鮮やかな輝きを放つ火の柱が現れ、毎晩、燃えるろうそくが見えた。これらすべてを目撃した、当時オルダに滞在していたキリスト教徒たちは、密かに殉教者たちの遺体を運び出し、敬意を込めて埋葬した[6364]。

聖なる殉教者たちが殺害された後、不敬虔なバトゥイは再び全軍を率いて、まずポーランドへ、次にハンガリーへと進軍したが、ハンガリー王ヴラディスラフによって殺害され、こうしてその邪悪な生涯に悲惨な最期を迎えた。 ——こうして、迫害者バトゥイは地獄を運命として受け、聖なる殉教者たちは天の御国を相続し、父と子と聖霊を永遠に賛美している。アーメン。

トロパリオ、第4声:

殉教の生涯を全うし、信仰告白の冠を戴いて、天へと昇られたミカエルと、賢明なるテオドロスよ。キリスト・神に、その大いなる憐れみにより、あなたの祖国と皇帝、そして民を守ってくださるよう、祈り求めてください。

コンダク、第8調:

地上の王国を無に等しいものと見なし、過ぎ去る栄光を捨て去り、[6365] と名乗り、苦行の道へと歩み出し、不義の拷問者の前で三位一体を宣べ伝えた、受難者ミハイルよ、 テオドールと共に。力の王の御前に立ち、あなたの祖国と皇帝、そして民を無傷で守ってくださるようお祈りください。そうすれば、私たちは絶えずあなた方を崇敬し続けるでしょう。

10月4日

9月21日（旧暦）

[6364] 敬虔なキリスト教徒たちによって、聖ミハイル公とその家臣フェオドールの聖遺骨は、オルドからまずウラジーミルへ、その後ミハイル公の故郷であるチェルニゴフへと移された。 その後、1572年2月14日、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイの命により、チェルニゴフがポーランドの支配下に入ったことで、カトリック教徒による冒涜を受けることを懸念し、聖遺骨はモスクワへ移された。 聖遺骨は、クレムリン内のタイニツキー門の近くにあったチェルニゴフの奇跡行者大聖堂に、地下に安置された。 その後、この大聖堂が廃止されると、聖遺骨はエカテリーナ2世皇后の命により、1770年8月25日に「セニャ」の宮殿内にあるスレテンスキー大聖堂へ厳かに移送された。 そこから1774年11月21日、アルハンゲリスク大聖堂へ移され、当初はトルコとの和平を記念して作られた豪華な銀製の聖遺物箱に安置されていたが、1812年（この聖遺物箱が敵によって奪われた年）以降は、現在に至るまで銀メッキを施した銅製の聖遺物箱に安置されている。

[6365] つまり、強制されることなく、自発的に。

聖使徒コドラト

記念日9月21日

聖使徒コドラトは、七十人の一人として、アテネとマグネシア[6366] で神の言葉を宣教し、そこで司教を務めました。その説教によって、多くの人々を神の知恵の光へと導きました。 シラ書の言葉によれば、彼は*「雲の中の明けの明星のよう」*であった（シラ書50:6）。ここでいう暗い雲とは、敬虔の光とは無縁な異教の不信仰を指す。それに囚われた人々は、死の闇と影の中に座していた。しかし、聖使徒コドラトは、神の言葉を宣べ伝えることで、まるで大いなる光のように彼らの前に輝いた。彼は彼らを取り巻く闇を追い払い、偶像への生け贄を滅ぼし、偶像を打ち砕き、その祈りによって悪魔の神殿を荒廃させた。 かつて星が東方の王たちの道しるべとなったように、彼もまたキリストへの道を示し、明けの明星が太陽を先導するように、彼もまた世界に偉大なる光をお告げし、人々の魂を包む闇を追い払った。 しかし、闇は光の永遠の敵である。それゆえ、不敬虔なギリシャ人たちは、コドラトが彼らの偶像を破壊し、悪霊を追い出し、不義を根絶しているのを見て、聖使徒に対して迫害を仕掛け、かつてユダヤ人たちがステパノに対して行ったように（使徒行伝7:59）、石を投げつけて襲いかかった。 聖コドラトは石を投げつけられたものの、キリストの恵みに守られて生き延びた。その後、彼は牢獄に閉じ込められ、長い間飢えに苦しめられた。不敬虔な偶像崇拝者たちは、朽ちるパンではなく、永遠の命へと導く糧をもって彼らの魂を満たしていた者を、自然の糧から切り離したのだ。 彼らは聖人を飢えで苦しめたが、聖書が*「パンを渇くことではなく、水を渇くことではなく、主の御言葉を聞くことを渇くことである」*（アモス書8:11）と語るその飢えによって、彼ら自身が滅びていった。彼らは、常に天から支えられていたその男を飢えで滅ぼすことはできなかったが、自らを永遠の死に追いやったのである。 長い苦難の末、聖コドラトは亡くなりましたが、その魂は天の御国に生き続け、楽園の至福を享受しています。彼はハドリアヌス帝の治世下で苦難の業を全うし、栄光の王イエス・キリストの御前で永遠の命を得ました。主と共に苦しみ、主と共にその御国で栄光に輝いているのです。 マグネシアに安置されたその聖なる遺体は、病める者たちに多くの癒やしをもたらした。アーメン。

コンダク、第8調：

主よ、全宇宙は、尊き教会の指導者であり、最も堅固な殉教者である使徒コドラトをあなたに捧げ、その尊い記憶を賛美の歌をもって称え、彼の慈愛を謳う者たちに、常に罪の赦しが与えられるよう願い求めています。

聖殉教者イパティオスとアンドレイの記念日

記念日：9月21日

これらの聖人たちは、リディア地方の[6367] で生まれた。幼少期、二人は同じ修道院で共に学問に励み、あらゆる美徳を身につけながら、信仰をますます強めていった。成人すると、イパティオスは修道生活に入り、常に沈黙を守り、 神の御前で奉仕することに努めた。 一方、アンドレイは人々に奉仕することに身を捧げた。彼は聖職者の地位に就き、神の御言葉を熱心に説き、教会でキリスト教徒たちに熱心に教えを説いた。二人はともに、並外れた節制、謙虚さ、そしてすべての人に対する

[6366] マグネシア――東部の半島およびテッサリア地方。

[6367] リディア――小アジアの西岸に位置する地域。

偽りのない愛によって際立っていた。　エフェソスの大司教は、これらの敬虔な人々の徳高い生活を知ると、彼らを自分のもとへ招いた。大司教は彼らと語り合う中で少なからぬ恩恵を受け、それゆえに彼らを深く愛するようになり、イパティアを本人の望みとは裏腹にアジア教会の司教に任命し、こう言った。

「このような灯火が、荒野で人知れず隠れているのはふさわしくない。彼は聖座に就き、キリストの教えをもって教会を照らすべきである。」

また、アンドレイを司祭に叙階した。こうして、この二人の聖人は、その至高の教えと清らかな生き様によって人々を啓発し、輝きを放った。一方、ギリシャ王レウ・イサウリア人[6368]は、聖なるイコンに対する迫害を開始し、　彼は帝国全土において、神の聖堂から聖像を撤去するよう命じ、誰も聖像を崇拝してはならないという最も厳しい勅令を発した。そこで聖イパティオスとアンドレイは、聖像破壊者たちに対抗して立ち上がった。彼らは信徒たちに、不敬虔な皇帝の勅令に従わないよう説得した。　皇帝はこれを耳にすると、二人を自分の元へ連れてくるよう命じ、聖なるイコンの崇拝を放棄するよう長く説得した。彼はさらに、自らの賢者たちに、この勇敢なキリストの戦士たちと論争を交わすよう命じたが、正統な信仰の迫害者である皇帝は、これらの揺るぎない教会の支柱たちを何一つ揺るがすことはできなかった。　その後、彼らを牢獄に閉じ込め、長い間そこに留め置き、それによって彼らの信念を捨てさせられることを期待した。期待が裏切られると、彼は容赦なく彼らを殴打し、頭から髪ごと皮を剥ぎ取り、髭に樹脂を塗りつけて火をつけ、さらに彼らの頭の上で貴重な聖なるイコンを炎に投げ込むよう命じた。　彼らはこれらすべてを勇敢に耐え抜き、神の力によって生き延びた。その後、レフは彼らを街中を引き回すよう命じ、聖人たちは皆の嘲笑の的として引き回された。　ついに彼らは子羊のように屠られ、聖なるイコンのために苦難を耐え抜いた末、その魂を神の御手に委ねた。彼らの尊い遺体は犬に食わせるために投げ捨てられたが、信者たちは密かにそれらを回収し、これらの殉教者にふさわしい栄誉をもって埋葬した。

聖殉教者エウセビオスとプリスカの記念日

記念日：9月21日

聖エウセビオスはフェニキアに暮らしており[6369]、当初はキリストの秘密の信者でした。当時、異教徒たちはキリスト教徒に対して恐ろしい迫害を繰り広げており、信者たちを見つけ次第、至る所で様々な拷問を加えていました。そのため、多くの信者たちは不義な者たちの手から逃れ、秘密の場所に身を隠していました。　聖エウセビオスは、キリストの*「人々の前でわたしを認める者は、わたしも天の父の前でその者を認める」*（マタイ10:32）という御言葉を深く思索し、神聖な熱意に満たされて、その町の統治者のもとへ行き、その前に立ち、こう言った。

「神に敵対する者よ、キリストの群れを迫害するなど、何を狂ったことをしているのか。」

すると、領主は彼を一瞥して尋ねた。

「お前は一体何者だ？」

すると彼は答えた。

「私は、あなたが反逆しているキリストのしもべです。」

その言葉に激しく怒った公爵は言った。

「よくもまあ、この厚かましい者がここに来て、私、公爵の名誉を傷つけるなどという無礼を働いたものだ！」

[6368] 皇帝レウス3世イサウルスは717年から741年まで在位した。

[6369] フェニキア――パレスチナの北に位置する古代の国。海とレバノン山脈の間に挟まれた細長い海岸地帯であり、この地域の都市の中で最も著名なのはティルスとシドンである。

これに対し、エウセビオスは答えた。

「私の主イエス・キリストへの熱意が、あなたの盲目さを暴くように私を駆り立てたのです。あなたは正気を失い、神ではなく悪魔を崇拝しているからです。」

そこで公爵は、彼を裸にし、吊るし、その体を削るよう命じた。聖人は、骨がむき出しになるまで鋭い鉄で削られ、その後、酢と塩を注がれ、 その傷口がこすりつけられた。 キリストの殉教者は、まるで自分の肉体がそのような苦痛に耐えているのではないかのように、これらすべてを勇敢に耐え抜き、キリストへの信仰のために苦しんでいることを喜びとした。彼がこれらの苦痛に耐え抜いたとき、公爵は彼に言った。

「神々に生贄を捧げれば、命は助かる。もしそうしなければ、我々はあなたを殺す。」

すると彼はこう答えた。

「あなたがたは私の肉体を滅ぼすことはできても、キリストは私の魂を受け入れてくださる。私はキリストのためにすべてに耐えたい。なぜなら、*『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』*（マタイ24:13）からである。」

彼の不屈の姿勢を見て、不信心者たちは剣で彼の首を切り落とした。こうして彼は天に昇り、主の手から栄光の冠を受け取った。

聖プリスクスはフリギアでキリストの御名を宣べ伝え、多くの異教徒をキリストのもとへと導いた。その後、不信心者たちは彼を捕らえて絞首刑にし、鉄の爪で彼の肋骨を深く削り続けたため、聖プリスクスの全身は、耕された大地のように傷だらけとなった。 そこに立っていた不信心者たちの中には、これほど激しい拷問と殉教者の流れ出る血を見て、激しい怒りに駆られた者もいた。彼らは剣を抜き放ち、聖人に向かって突進し、その首を切り落とした。

こうして、イエス・キリストを証ししたこの善良な殉教者は苦難に遭ったが、今やキリストは天の御父の御前で彼を証ししておられる。

神に栄光あれ、世々限りなく。アーメン。

聖イサキオスおよびメレティオス両司教の記念日

記念日：9月21日

尊き、敬虔なる私たちの父たち、イサキオスとメレティオスは、キリストの教会の司教であった。二人はともに同じ聖職の務めを果たし、神を畏れる心とキリスト教の美徳に優れていた。彼らの絶え間ない務めは、民に神聖で霊的な言葉を教え、神の戒めに従って歩むよう導くことであった。お二人は慈善の心にも優れており、自らの財産を貧しい人々に分け与え、彼らに慈しみを示しました。物質的なパンで彼らを養うとともに、霊的なパン――すなわち教えや魂に有益な訓戒――でも彼らを養ったのです。その生涯によって、お二人は奇跡を行う賜物を授かり、それぞれ異なる年に、しかし同じ日、この世を去り、安らかに老衰により亡くなりました。[6370]。

聖ディミトリイ、ロストフ都主教、奇跡行者の生涯

記念日：9月21日

[6370] 聖イサキオスはキプロスの司教であり、キプロス（地中海北東部に位置する大きな島）で亡くなった。メレティオスはその後、どの都市で亡くなったかは不明である。

聖ディミトリ（俗名ダニイル）は、1651年12月、キエフ市から40ヴェルスタ離れたマカロヴェという町[6371]で生まれた。父のサヴァ・グリゴリエヴィチ・トゥプタロは、平民のコサックから百人隊長の地位まで昇進し、残りの生涯を教会の奉仕に捧げ、キリロフ修道院[6372]の施主としての責務を引き受けた。彼も妻のマリア・ミハイロヴナも敬虔な人々であり、善良なキリスト教徒としての生活を送っていた。　しかし、父は常に軍事活動のために家を離れることが多く、少年は主に母の指導の下で育てられた。聖人自身も、母の死を悼んで、彼女について深い愛情と称賛を込めて次のように語っている。　「最も聖なる金曜日、救いの受難の日、わが母は昼の第九時にこの世を去った。まさに、私たちの救いのために十字架上で苦しみ、御霊を父なる神の御手に委ねられた救い主が、その時刻に息を引き取られたのと全く同じ時刻であった。彼女は生後七十歳を超えていた……主が天の御国において彼女を御記憶くださいますように！ 彼女は穏やかな心持ちで、 な記憶と言葉を保ったまま息を引き取りました。どうか主が、彼女の祈りによって、私にもそのような至福の最期を授けてくださいますように！そしてまことに、彼女の最期はキリスト教的なものでした。なぜなら、すべてのキリスト教の儀式と通常の秘跡を伴い、恐れず、恥じることなく、安らかに逝ったからです。　さらに、主が恐るべき御裁きにおいて彼女に良い答えを与えてくださいますように。私は、彼女の変わらぬ高潔で敬虔な生涯を知っているゆえに、神の憐れみと彼女の救いについて疑う余地はありません。　また、彼女の救いの良い兆しとして、主キリストが、十字架上の苦しみの中、強盗に楽園を開かれたのと同じ日、同じ時刻に、彼女の魂が肉体から離れるよう命じられたことを挙げます」[6373]。このような徳高い母の影響を受けて、少年ダニエルは神への畏敬と敬虔さの中で成長し、ますます力をつけ、徳を固めていった。

ダニエルは初等教育を自宅で受けた。両親は彼に読み方を教え、ダニエルが11歳になったとき、彼をキエフのブラトスコエ学校へ送り出した[6374]。優れた才能と勉学への熱意のおかげで、ダニエルはすぐに学業で頭角を現し、同年代の仲間たちをすべて凌駕した。　修辞学の授業では、詩作と雄弁術の才により、特に注目を集めた。　著名な説教者であり、論争的な神学者であるガリャトフスキー[6375]の指導の下、ダニイルは、後に彼の説教を聞く者たちを思わず感嘆させるような修辞技法や言葉の表現を完璧に習得し、後に異端者たちとの闘いにおいて発揮されることになる、そのエネルギーと圧倒的な説得力を身につけた。　しかし、学業で優秀な成績を収める一方で、ダニイルは並外れた高潔な品性を備えており、早くから瞑想的で禁欲的な生活への傾向を示していた。彼は子供たちの遊びには一切参加せず、あらゆる娯楽や楽しみを避けていた。　学校の授業がない時間は、聖書や聖人たちの著作、聖人伝を読み、祈りに費やしていた。　彼はとりわけ熱心に神の宮を訪れ、そこで畏敬の念を込めて主に向かって熱心な祈りを捧げた。聖書や聖なる教父たちの行伝を頻繁に、そして熱心に読むほど、聖なる敬虔な人々に倣いたいという願いが彼の心の中でますます強まっていった。

[6371] マカロフは、現在ではキエフ州および同郡に属する小さな町であるが、当時はリトアニアのヘトマンの領地に属していた。

[6372] キエフのキリロフ修道院は、12世紀にチェルニヒウ公ヴセヴォロド・オルゴヴィチによって創建された。バティイによって荒廃したが、17世紀に再建され、1786年に廃止された。

[6373] 1689年3月29日付の『ディアリイ』（聖人の日誌）

[6374] キエフ兄弟学校（現在のキエフ神学アカデミー）は、1615年にエピファニー兄弟修道院と同時に、同修道院の敷地内に開設された。 ミトロポリタン・ペトル・モギラ（1633–1647）によって改組され、それ以来長きにわたり、ロシアにおける神学および世俗学の中心地となった。キエフ学校からは、多くの教養ある牧師や、正教を熱心に擁護する者たちが輩出された。

[6375] イオアンニキイ・ガリャトフスキー（†1688年）は、当初は教師、後にキエフ学校の校長（1657–1665）を務め、その繁栄に多大な貢献をした人物であり、同時代の最も著名な神学者・論争家・説教者の一人であった。　ラテン派やユニエート派を批判したイオアンニキの数多くの著作は、正教の真理を守るための彼の熱意を物語っている。

15歳になったダニイルは、学校を去らざるを得なかった。　キエフにとって苦難の時代であった当時、この都市は絶えずポーランドの支配下からロシアの支配下へと移り変わっていた。これは学校の状況にも影響を及ぼし、1665年にポーランド軍がキエフを占領した際、学校は完全に破壊され、長い間荒廃したままとなった。

そのため、ダニイルは課程を修了することができず、学校にわずか3年間在籍しただけで、学業を断念せざるを得なかった。

少年時代から修道生活への志を抱いていたダニイルは、学校を卒業して間もなく、この世のあらゆる恵みを捨てて出家した。両親の祝福を得て、彼は18歳の時にキリロフ修道院に入院した。　修道院のイグメン（院長）であるメレティイ・ジクは、かつてキエフの学校の校長を務めていたため、かねてよりダニイルのことをよく知っていた。1668年7月9日、彼はダニイルの修道入会の儀式を執り行い、彼にディミトリという名を与えた。新たに修道者となった彼は、自らのすべてを神の御心と摂理に委ねた。　彼は修道院の規則をすべて厳格かつ揺るぎなく遵守し、謙遜と服従の精神をもって熱心に修道者の修行に励んだ。　彼は全力を尽くして、聖アントニオや聖テオドシオ、そしてその他のペチョラ地方の修道者たちの徳に倣おうと努めた。彼は財産や富の獲得には全く関心を示さず、ただ魂のすべてを注いで神に喜ばれること、ただ神のみに誠実かつ偽りなく仕え、それによって朽ちることのない富を得ることを切望していた。

ディミトリイが修道衣を纏ってから1年も経たないうちに、修道院長の要請により、彼は聖職者助祭の位に叙階された。この叙階は、1669年　、聖母マリアの受胎告知の日に、当時カネフ市に住んでいた、キエフ都主教区に任命されたヨシフ・トゥカルスキー[6376]によって執り行われた。ディミトリイは、聖助祭の位にありながら、キリロフ修道院にかなり長い間留まった。彼は修道院長にすべてに従い、謙虚かつ熱心に兄弟たちに奉仕し、あらゆる奉仕を文句一つ言わずに果たし、教会には一番乗りで来て、最後に出た。　教会では畏敬の念を持って立ち、聖書の言葉に敬虔に耳を傾け、独房では頻繁に祈りを捧げ、イグメンから命じられた執筆や著述を行い、学問の研鑽にも熱心に励み続けた。

こうしてディミトリは1675年まで修業に励んだ。この頃、グスティンスキー修道院にはチェルニヒウ大司教ラザール・バラノヴィッチ[6377]が滞在していた。ここで、聖ディミトリは司祭修道士への叙階を受けるために大司教に紹介され、その叙階は5月23日、聖霊降臨の日に執り行われた。この当時、聖ディミトリはわずか24歳だったが、すでに神の言葉を説くことに熟達していた。彼と親しくなり、その高い霊的資質を知った大司教は、聖ディミトリをチェルニヒウ大聖堂[6378]の説教者に招いた。聖ディミトリは2年以上にわたり、チェルニヒフ教区の大聖堂やその他の教会で説教を行った。人々にキリストの教えを説くことで、彼はすべての聴衆に大きな霊的益をもたらし、彼らに大きな喜びを与えた。彼の生き生きとして魅力的な言葉は、知恵の塩で彩られていたため、誰もが彼の説教に耳を傾けようと集まった。

[6376] ヨシフ（ネリュボヴィチ＝トゥカルスキー）は、1661年からモギレフ大司教、その後キエフ都主教を務めた。ポーランド軍に捕虜となり、1676年にチギリンで死去した。

[6377] ラザール・バラノヴィチ（†1693年）は、1657年からチェルニヒウ大司教を務めた。かつてキエフ・アカデミーの生徒であり、同校の学長（1650年～1656年）も務めたラザールは、神の言葉を説くことで名声を博し、モスクワ政府によるマロロシアの服属に協力した。聖ディミトリは彼を「教会の偉大な支柱」と呼んだ。

[6378] 16世紀末までのロシアでは、説教が口頭で行われることは稀であり、その大部分は教父たちの教えや聖人の伝記の翻訳が朗読される形をとっていた。　しかし、ロシア南西部に学校が設立されるようになると、独自の説教の様式が現れ始め、同時に、大聖堂、修道院、兄弟会において、教育を受けた聖職者たちが務める「説教者」という特別な役職が形成された。

偉大な説教者としての聖ディミトリの評判は、小ロシアとリトアニアに瞬く間に広まり、修道院は次々と彼を招き、その雄弁な教訓を聞くようになった。こうした招待の直接のきっかけとなったのは、次の出来事であった。 1677年6月、敬虔な熱意に駆られて、ディミトリはチェルニヒフからノヴォドヴォルスキー修道院（[6379] ）へと向かい、モスクワ都主教聖ペトロによって描かれた奇跡を起こす聖母マリアのイコンを礼拝し、リトアニアに滞在することになっていた。 聖ディミトリが到着した当時、修道院ではこのイコンを古い教会から新しい教会へ厳粛に移す準備が進められていた。そのために、ベラルーシのテオドシイ司教と、ヴィリニュスの聖霊修道院の院長クリメントが到着していた。 祝祭の終了後、クリメントはディミトリを自身の修道院へ連れて帰った。 ディミトリイは2ヶ月以上ヴィルノに滞在し、そこで2回の説教を行った。しかし間もなく、テオドシイ司教の要請により、聖ディミトリイはスルツクへと向かい、ブラツキー・プレオブラジェンスキー修道院（[6380] ）に身を寄せ、14ヶ月にわたり神の言葉を説くことにたゆまず尽力した。 修道院の寄進者であるイオアン・スコチェヴィチは、ディミトリを深く愛し、彼に厚い恩恵を施した。プレオブラジェンスキー修道院は、まさに彼の資金によって建設されたのである。聖ディミトリもまた、この恩人を深く尊敬し、愛していた。彼はその恩人が亡くなるまでスルツクに留まり、葬儀で説教を行うことでその記憶を称えた。

その間、聖ディミトリウスには、すでに何度もマロロシアへの帰還が要請されていた。ヘトマン・サモイロヴィチ[6381] や、かつての修道院長であり、当時はキエフのミハイロフ修道院を統括していたメレティウスも、彼を呼び戻そうとしていた。 1679年2月、聖ディミトリはバトゥリン[6382] に到着し、ヘトマン[6383] から、非常に温かく、慈愛に満ちた歓迎を受けた。 バトゥリンからほど近いニコライエフスキー・クルピツキー修道院[6384] に身を寄せたディミトリイは、断食、祈り、そして魂に有益な書物の絶え間ない読誦に熱心に励み続け、とりわけ熱意をもって神の言葉を説いた。 彼の徳高い生き方に関する評判は、すべての修道院に広まった。多くの修道院が、聖ディミトリを招き、修道院の運営を任せるよう求めた。こうして、キリロフ修道院の修道士たちは、彼らを統率するよう、彼に切実な願いを伝えた。 しかし、聖ディミトリは、おそらくその謙虚さゆえに、またヘトマンに引き留められていたこともあり、この要請を断り、キリロフ修道院に感謝の手紙を送った。 その直後、1681年に、マクサコフのプレオブラジェンスキー修道院のイグメン、[6385] が死去した。修道院の兄弟たちは、聖ディミトリウスにもまた、彼らのイグメンになってほしいと懇願した。その人里離れた立地から、マクサコフの修道院は、ディミトリウスの厳格な修道生活にこれ以上ないほど適していた

[6379] 1618年にユニオに対抗するために設立されたノヴォドヴォルスキー修道院は、リトアニア領内（現在のピンスク郡）に位置し、ヴィリニュスの聖霊修道院の管轄下にあった。

[6380] スルツク市はミンスク県に属していた。1600年頃に設立されたプレオブラジェンスキー修道院は、スルツク兄弟会に属しており、他の兄弟会と同様に、カトリック教徒やユニエートによる迫害から正教を守っていた。

[6381] 司祭の息子であるイワン・サモイロヴィチは、1672年にヘトマンに選出されたが、1687年にヘトマンの地位を剥奪され、1690年にトボリスクで死去した。

[6382] バトゥリン――現在はセイメ川沿いの小さな町で、コノトパ郡庁所在地から27ヴェルスタの距離にある――は、1575年にポーランド王ステファン・バトリアによって設立され、彼はこの地に自身の名前（バトリン）を冠した。ツァーリ・アレクセイ・ミハイロヴィチは、マロロシアの併合に伴い、バトゥリンをヘトマンの居城に指定した。

[6383] ヘトマン（カザックの指導者）は、マロロシアにおける最高かつ独立した権力者であった。

[6384] 15世紀に創建され、クリミア・タタール人に荒らされた後、16世紀に再建された。この修道院は、飢饉の際に修道院の近くに降ってきた「クルピツ（穀物の粒）」にちなんで「クルピツキー」と名付けられた。この伝承は、聖ディミトリ自身の筆によって、祭壇の福音書に記されている。

[6385] 現在は正教会の女子修道院となっており、ソスニツキー郡のボルズナ市の近く、デスナ川のほとりに位置している。

。　そこで、ヘトマンの同意を得て、彼はマクサコフの修道士たちの提案を受け入れ、ヘトマンからの書簡を携えて、勅令を得るためにチェルニヒウの大司教ラザリ・バラノヴィチのもとへ向かった。

大司教はディミトリを非常に温かく迎え入れた。　まるで未来を見通すかのように、ラザリウスはヘトマンの手紙を開封するやいなや、ディミトリイにこう言った。「手紙を読むまでもなく言います。主なる神が、あなたをイグメン（修道院長）として祝福されるだけでなく、ディミトリイという名にふさわしく、ミトラ（主教冠）を授かることを願います。ディミトリイよ、ミトラを受け取れ。」

その日、ディミトリイが修道院長に叙任された後（[6386] ）、ラザールは次のようにディミトリイを歓迎した。「本日は、神を見る者である預言者モーセの記念日である。主なる神は、この日に、主の変容の聖堂があるこの修道院で、あなたを修道院長に任命された。それは、ファヴォル山におけるモーセの如きものである。　そして、モーセに御自身の道を示された主が、このファヴォールにおいて、永遠のファヴォールへと至る御自身の道を、あなた方にも示してくださいますように」。

「この言葉は」と聖ディミトリ自身は証言している。「私のような罪人である私は、良い前兆であり預言であると受け止め、心に留めた。神よ、彼の大司牧職に関するこの預言が成就しますように」。

翌日、ディミトリオスと別れの挨拶を交わす際、ラザロは彼に立派な杖を贈った。

「そして、彼は――聖ディミトリは語る――まるで実の息子を送り出す父親のように、温かく私を見送ってくれた。主よ、彼の心にかなうあらゆる恵みを彼に与えてください」。

修道院の運営を引き継いだ聖ディミトリは、以前の厳格な修道生活を決して変えなかった。相変わらず徹夜祈祷、祈り、善行に励み、すべての人々にキリスト教的な謙遜の模範を示した。　*「あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、あなたがたのしもべとなりなさい」*（マタイ20:26）という主の言葉を常に心に留め、自らそのように生き、他の人々にもそのように生きるよう教え、すべての人にとって信仰と敬虔の模範となった。　このような修道院長は、間違いなく、彼らが統率する修道院の栄光であり、誇りである。だからこそ、聖ディミトリはどの修道院にも長く留まることはなく、後で見るように、ある修道院から別の修道院へと転任していったのである。

マクサコフの修道士たちがディミトリイの言葉と聖なる生涯から啓発を受けたのも、長くは続きませんでした。1682年3月1日、彼はニコラエフスキー・バトゥリン修道院のイグメンに任命されました。しかし、彼自身はまもなくこの修道院を辞退しました。　彼は、神への思索や祈り、その他の神に喜ばれる行いに妨げられることなく没頭できるよう、静かで沈黙に満ちた生活を切望していた。そのため、バトゥリンでの修道院長就任から翌年、自身の守護聖人の日である1683年10月26日、彼は修道院の運営から身を引いて、単なる修道士としてそこに留まることにした。　しかし間もなく、神の摂理により、聖ディミトリイは『ミネイ・チェティイ』を編纂するという偉大な使命に召され、それによってロシア国民全体に多大な恩恵をもたらした。

1684年、キエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラのアルヒマンドリトにヴァルラーム・ヤシンスキーが任命された。彼は先任者であるペトル・モヒラとイノケンティ・ギゼル[6387] から、アルヒマンドリトの称号とともに、聖人の伝記を編纂するという偉大な事業への構想を受け継いだ。　この事業は、タタール人の襲撃やリトアニア・ポーランドによる略奪の結果、教会が多くの貴重な聖書や聖人の伝記を失っていたことから、なおさら必要とされていた。 この重要かつ偉大な 事業にふさわしい人物を探していたヴァルラアムは、すでに魂の救済に向けた熱心な働きで名声を博していた聖ディミトリに目を留めた。　この人選は、修道院の他の長老たちや修道者たちの満場一致の賛同を得た。そこ

[6386] 1681年9月1日（『ディアリイ』、1681年の項）。

[6387] ヤシンスキー、モギラ、ギゼールについては、本書の序文を参照のこと。

でヴァルラアムはディミトリウスに、キエフ大修道院に移り住み、聖人の伝記の校訂と編纂という任務を引き受けてほしいと依頼した。

課せられた任務の重さに恐れをなした謙虚な修道士は、その依頼を断ろうと努めた。しかし、不従順という罪を恐れ、また教会が抱える必要性を自らよく認識していたため、彼はヴァルラームの執拗な要請に従うことを選んだ。　神の御加護と、聖母マリアおよびすべての聖人たちの祈りに希望を託し、ディミトリイは1684年6月、新たな修業に着手し、課せられた務めを細心の注意を払って遂行し始めた。　聖人たちの伝記の研究に没頭していた彼の魂は、聖人たちの姿で満たされ、夢の中で霊的な啓示を受けるようになり、それらは彼を最高の霊的完成への道において強め、偉大な労苦の中で彼を励ました。

「1685年8月10日――聖ディミトリ自身がこう語っている――月曜日、私は早課の鐘の音を聞いたが、いつもの怠惰のせいで寝坊してしまい、開始に間に合わず、詩篇の朗読が始まるまで寝過ごしてしまった。　その時、次のような幻視を見た。ある洞窟の監視を私に任されたかのようであり、その中には聖人の遺骨が安置されていた。ろうそくの明かりで聖人の棺を点検していると、そこに、あたかも眠っているかのように、聖大殉教者バルバラが横たわっているのを見た。　その棺に近づくと、彼女は横向きに横たわっており、棺にはある程度の腐敗が見られた。それを清めたいと思い、私は聖遺骨を棺から取り出し、別の場所に置いた。　聖遺物箱を清めた後、聖遺物に近づき、それを手に取って聖遺物箱に戻そうとしたところ、突然、生身の聖バルバラの姿を目にした。

「聖女バルバラよ、私の恩人よ！私の罪のために神に祈ってください」と私は叫んだ。

聖女は、まるで少し疑念を抱いているかのように、こう答えました。

「祈ってあげられるかどうか分かりません。あなたはローマ式の祈り方をしているからです。」

これは、私が祈りに対して非常に怠惰であり、その点でローマ人たちに似ていたから、私に言われたのだと思う。ローマ人たちは祈りの言葉が非常に簡潔だが、私の祈りもまた簡潔で、しかも稀なものだからだ。　聖女からこの言葉を聞いて、私は悲しみに沈み、まるで絶望しかけた。しかし、聖女はしばらくして、明るく笑顔を浮かべた顔で私を見つめ、「恐れるな」と言い、他にもいくつかの慰めの言葉を口にしたが、私はそれを覚えていない。　その後、聖遺物を聖櫃に納めると、私はその手と足に口づけをした。その遺体はまるで生きているかのようで、非常に白かったが、聖櫃は粗末で老朽化していた。　不浄で汚れた手と口で聖遺物に触れることを敢えてしたこと、そして立派な聖遺物箱が見当たらないことを悔やみながら、この棺をどう飾り付ければよいか考え、聖遺物を移し替えるための新しく豪華な聖遺物箱を探し始めた。しかし、まさにその瞬間、私は目を覚ました。　目覚めてしまったことを残念に思いながらも、私の心は喜びを感じた」。

この物語を締めくくるにあたり、聖ディミトリは謙虚にこう述べている。「神のみが、この夢が何を意味し、その後にどのような出来事が起こるかをご存知である！ああ、私の守護聖人である聖バルバラの祈りによって[6388]、神が私の邪悪で堕落した生活を正してくださる日が来ますように！」

最初の夢から三、四ヶ月後に起こった別の夢は、次のようなものでした。「1685年、フィリッポフの断食期間中、　――聖ディミトリはこう記している――ある夜、11月10日に記念される聖殉教者オレステスの受難記を書き終え、早課の1時間かそれより少し前に、服を脱がずに休むために横になった。すると、眠りの中の幻視の中で、聖殉教者オレステスが、明るい表情で私に向かって次のように語りかけているのを見た：

[6388] 聖ディミトリオスは、特に聖大殉教女バルバラを崇敬していた。1678年、彼がスルツクに滞在していた頃、メレティオス修道院長は聖バルバラの聖遺物の一部を贈り物として彼に送った。　そして、前述の幻視から数年後、すなわち1691年1月13日、聖ディミトリイは、トゥカルスキーの死後、バトゥリンの国庫で「まるで隠すかのように」保管されていた、その同じ大殉教者の聖遺物の一部を、　ニコライエフ修道院へ厳粛に移送し、毎週火曜日に聖バルバラへの祈りの歌を捧げることを定めた。

「私は、あなたが書いた以上に、キリストのために苦難に耐えてきたのだ。」

そう言い放つと、彼は私に胸を開き、左脇腹に内臓まで貫通している大きな傷を見せながら、こう言った。

「これは鉄で焼き付けられた傷だ。」

それから、右腕を肘まで露わにし、ちょうど肘の真向かいにある傷を見せながら、こう言った。

「これは、私を斬りつけられた傷だ。」

その際、切断された腱が見えた。また、左手も露わにし、同じ場所に同じような傷を指し示して、こう言った。

「これも切り裂かれたのだ。」

それから、身をかがめて脚を露わにし、膝の曲がり目にできた傷を指さした。同様に、もう一方の脚も膝まで露わにして、同じ場所にできた同じ傷を指さし、こう言った。

「これは鎌で切り裂かれたんだ。」

そして、まっすぐに立ち、私の顔を見つめながら、こう言った。

「見ただろうか？　私はキリストのために、お前が書いた以上の苦しみを味わったのだ。」

私は、これに対して何も言う勇気がなく、黙って心の中で考えた。「このオレステスとは一体誰なのか。もしかして『五人の殉教者』（12月13日）の一人ではないだろうか？」と。その私の思いに対し、聖なる殉教者はこう答えた。

「私は『五人の殉教者』の一人であるオレステスではない。今、君がその生涯を記しているあのオレステスその人だ。」

私は、その背後に立っていた別の、ある高貴な人物を見ました。彼もまた殉教者のようでしたが、何も語りませんでした。ちょうどその時、早課の鐘の音が私を目覚めさせ、この実に心地よい幻視がすぐに終わってしまったことを残念に思いました。

「この幻視について――」と、聖ディミトリオスは、3年以上を経てこれを記録した際（[6389]）に付け加えている。「私のような不適格で罪深い者が、書いた通り、まさにその通りに見たのである。私の司祭としての誓いのもと、そう断言する。なぜなら、そのすべてを当時完全に記憶していたのと同様に、今も覚えているからだ」。

聖ディミトリがイグメノスの職を辞し、人里離れた独房でその偉大な業に励んでから、2年以上が経過していた。ある時、彼はアルヒマンドリト・ヴァルラアムと共にバトゥリンに滞在することになった。ヘトマンと新任のゲデオン都主教は彼を喜んで迎え入れ[6390]、再びニコラエフ修道院の運営を引き受けるよう説得し始めた。　ディミトリイは長い間これを拒んでいたが、ついに熱心な懇願に折れ、1686年2月9日にバトゥリンへ移り住んだ。しかし、キエフ大修道院を去った後も、聖ディミトリイはその事業を放棄することはなかった。　ラヴラにいた時と同じ熱意をもって、彼は聖人の伝記を書き続け、ここで9月、10月、11月の3ヶ月分を含む『ミーネイ・チェチイ』の最初の四半部を完成させた。

聖ディミトリは、その著作をアルヒマンドリト・ヴァルラアムに提出した。　ヴァルラアムは、大聖堂の長老たちや他の賢明な人々と共にその原稿を読み、検討した上で、聖人伝の印刷に着手することを決めた。聖ディミトリはバトゥリンから大修道院に到着し、彼の直接の監督の下、1689年に『ミネイ・チェチイ』の第1巻が印刷された。

[6389] 日記、1689年の項

[6390] ゲデオン・チェトヴェルティンスキー（†1690）は、1685年7月にキエフで選出され、同年11月8日にモスクワで叙階を受けた。モスクワからの帰路、ゲデオン都主教はバトゥリンに立ち寄った。

その直後、聖ディミトリにはモスクワを訪れる機会が訪れた。ゴリツィン公は、クリミア遠征の終了を報告するため、ヘトマン・マゼパをモスクワへ派遣した[6391] [6392]。 ヘトマンと共に、いくつかの教会問題について総主教と協議するため、聖ディミトリとキリロフ修道院のイグメン、イノケンティが派遣された。それは1689年7月21日のことだった。モスクワに到着すると、彼らはツァーリ・イオアン・アレクセーエヴィチとツァーリヴナ・ソフィアに紹介された。 同日、聖ディミトリは総主教イオアキムに紹介された[6393]。到着から1ヶ月後、聖ディミトリはヘトマンと共にトロイツェ＝セルギエフ修道院を訪れた。当時、この地には、ソフィア王女による暗殺未遂から身を隠していたツァーリ・ピョートル・アレクセーエヴィチが滞在していた。彼はディミトリを温かく迎え入れた。また、修道院でディミトリイは総主教に会う機会を得た。「私たちは頻繁に彼を訪ねました」と聖人自身が語っている。「彼は、罪深い私に対し、聖人の伝記を書き続けるよう祝福し、祝福として額縁に入った至聖なる聖母マリアの聖像を授けてくださいました」。

自分の修道院に戻ると、聖ディミトリイは熱心に聖人の伝記の編纂に取り組み始めた。 この神に喜ばれる事業により専念するため、彼は修道院長室を離れ、聖ニコライ・クルピツキー教会の近くの人里離れた場所に、自身のための特別な独房を設けた。彼はその独房を、自身の手記の中で「スキト」と呼んでいる。

聖ディミトリが『ミネイ・チェチイ』の第2巻の編纂に取り組んでいた頃、モスクワの新任総主教アドリアン[6394] が彼に称賛状を送った。この称賛状を届けたのは、モスクワで（1690年8月31日）キエフ都主教の位に叙任されたヴァルラアムであった。

「神ご自身が――と総主教は記した――兄弟よ、あなたにあらゆる恵み深い祝福を授け、永遠の命の書にあなたの名を記してくださるであろう。それは、聖人の伝記という魂に有益な書物を執筆し、校訂し、活版で出版するという、神に喜ばれる労苦――最初の3ヶ月、すなわち9月、 10月、11月の最初の3ヶ月間、聖人の伝記を執筆し、校訂し、活版で出版するという神に喜ばれる労苦に対して、神ご自身が、あなたを『永遠のいのちの書』に記し、あらゆる恵み豊かな祝福をもって報いてくださるであろう。また、神が今後もあなたを祝福し、強め、一年を通じて、その他の同様の聖人の伝記を完全に校訂し、活版で出版するよう、その労苦を速やかに進められるようにしてくださることを願う」。

同時に、総主教は、新任の都主教であり、将来ラヴラのアルヒマンドリトとなる人物に対しても、「熟練し、賢明で、熱心な働き手」である聖ディミトリイのあらゆる活動に協力するよう要請した。

総主教の配慮に勇気づけられた聖ディミトリは、謙虚な感謝の念を込めて、モスクワの教階長に次のように答えた。「聖なる者たちにおいて、また聖なる者たちによって賛美される神が、今や御自身の聖なる教会に、これほど善良で熟達した牧者、 貴殿の牧会者としての職務は、その務めの初めから、何よりもまず神と聖人たちの栄光を増すことを心に留め、その生涯が平和の模範として示さ

[6391] イワン・ステパノヴィチ・マゼパ＝コレディンスキー（†1709年）は、ポーランド王ヤン・カジミェシュの宮廷で教育を受け、海外で学業を修了した。 サモイロヴィチの失脚後、1687年にヘトマンに選出され、ゴリツィンの第2次クリミア遠征に参加した。1708年、ツァーリ・ピョートルとロシアに背いたため、破門された。

[6392] ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ゴリツィン公（1643–1714）は、ソフィア王女の7年間の統治期間（1682–1689）において、最初の国家指導者であった。 ここで言及されているのは、当然ながら1689年の彼のクリミア遠征であり、1687年の最初の遠征と同様に不首尾に終わったものの、ゴリツィンには勝利者として栄誉がもたらされた。

[6393] イオアキム（1674–1690）、第9代全ロシア総主教は、当初、南西ルーシのすべての学者たちと同様に、聖ディミトリに対して不信感を抱いていた。

[6394] アドリアン（1690–1700）は、全ロシアの最後の総主教である。

れ、ロシアの正教徒すべてのために役立つことを願っておられます。この栄光は、すべての聖なる方々に帰します。　今や、不適格な私でさえ、主の御加護に支えられ、目前の課題に向けて、この儚く罪深い私の手を差し伸べます。その事業において、貴殿の聖職が私を助け、強め、導く祝福として、私を大いに奮い立たせ、怠惰の眠りを振り払い、命じられたことを丹念に遂行させてくださいます。たとえ私が未熟であり、着手した事業をすべて完璧に成し遂げるほどの知識や能力を備えていないとしても、私を強めてくださるイエス様のために、聖なる従順の軛を負わねばなりません。　私の乏しい知恵では不十分ではありますが、その御業の成就によって私たち全員が恵みを受け、今もなお受け続けているのです。どうか今後も、神に喜ばれる貴殿の牧会者としての祈りが、祝福とともに私を助けてくださいますように。私はその祈りに大いに希望を寄せております」。

こうして聖ディミトリは、チェティ・ミネイに専念することを決意した。　「1692年2月14日――と彼自身が語っている――四旬節の最初の週、ミサの前に、私はバトゥリン修道院でのイグメン職を辞し、より静かな生活を送り、聖人の伝記を執筆することに専念した」。　人里離れた自分の独房で生活しながら、彼は12月、1月、2月の3ヶ月間を網羅した第2巻を執筆し、1693年5月9日、自らそれをキエフ・ペチェールスクの印刷所に持ち込んだ。

しかし、勤勉な修道士がどれほど静かで人里離れた生活を望もうとも、彼の崇高な人柄を高く評価する人々は、彼に安らぎを与えることを許さなかった。　こうして、聖ディミトリイが自身の著作の印刷を見守っている間、チェルニヒウの新大司教である聖フェオドシイ・ウグリツキーは、グルホフ市から27ヴェルスタ離れた場所にあるペトロパヴロフスク修道院の運営を引き受けるよう彼を説得した[6395]。彼がこの修道院に滞在していた1695年1月、『チェティイ・ミネイ』の第2四半期の印刷が完了した。そしてこの本について、アドリアン総主教は第1巻と同様にディミトリを称賛し、彼に別の称賛状を送った。これによりディミトリは熱心に仕事を続ける意欲を掻き立てられ、3月、4月、5月の各月を網羅する第3巻の編纂に着手した。

1697年の初頭、聖ディミトリはキエフのキリロフ修道院の院長に任命され、その5か月後の6月20日、チェルニヒウのエレツ・ウスペンスキー修道院のアルヒマンドリトに叙任された[6396]。こうして、ついにラザール・バラノヴィチの願いが叶い、ディミトリは ミトラを授かった。しかし、アルヒマンドリトの位に就いた聖ディミトリイは、「多く与えられた者には、多くが求められる」（ルカ12:48）という聖書の言葉を心に留め、これまで以上に熱意と勤勉さをもって、その務めと功績に打ち込んだ。　聖人伝の研究を怠ることなく、修道院の整備にも気を配り、至る所で助言や説得、言葉と行動をもって支援した。

さらに2年が経過し、聖ディミトリはスパスキー・ノヴゴロド＝セヴェルスキー修道院[6397]　に移されました。これが彼が統括した最後の修道院でした。ここで彼は『ミネイ・チェチイ』の第3四半部を完成させ、それが1700年1月に刊行されました。その後、ラヴラのアルヒマンドリト・イオア

[6395] チェルニゴフ州のグルホフにあるペトロ・パヴロフスキー修道院は、誰によって、いつ設立されたかは不明である。17世紀半ばにはすでに存在していた。聖ディミトリは、この修道院に石造の大聖堂を建立した。

[6396] チェルニゴフ郊外のボルディン山にあるイェレツの聖母被昇天修道院は、聖アントニー・ペチェルスキーの助言に基づき、1069年にスヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチ公によって、聖母マリアのイコンが現れた場所に建立された。　タタール人に荒らされたが、1500年に再建された。1635年から1649年まではユニエイト派の支配下にあったが、1671年に再建された。

[6397] ノヴゴロド・セヴェルスキーの市街地にあったこの修道院は、17世紀半ばにラザール・バラノヴィチ大司教によって建設された。

サフ・クロコフスキー（[6398] ）は、聖人伝の編纂者に対する特別な敬意の印として、修道院の兄弟たちと共に、アレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝が即位式の際にキエフ都主教ペトル・モギラに下賜した「至聖なる聖母マリア」のイコンを、彼への贈り物として送った。

その同じ1700年、ピョートル大帝は、広大な領土の辺境地域への配慮から、キエフ都主教ヴァルラアムに対し、「アルヒマンドリトやイグメン、あるいはその他の修道士の中から、 善良で学識豊か、かつ清廉潔白な生活を送っている者の中から、トボリスクの都主教となるにふさわしい人物を探し出し、神の御恵みによって中国やシベリアで説教を行い、偶像崇拝の闇やその他の無知に囚われた人々を、真の生ける神への認識と奉仕、そして礼拝へと導くことができるようにせよ」と命じた。この点において、ヴァルラアムにとって、ノヴゴロド・セヴェルスキーのアルヒマンドリットほどよく知られた人物はいなかった。そして、1701年の初めに、聖ディミトリはモスクワへ召された。そこで彼は皇帝に歓迎の演説を行い、その中では、地上のキリスト――天の王――の姿を地上に体現する地上の王の尊厳を描き出した。 まもなく――3月23日――聖ディミトリはシベリアおよびトボリスクの都主教に叙任された。この高い栄誉は謙虚なディミトリを飾ったが、彼自身はそれを望んでいなかった。シベリアは過酷で寒冷な土地であり、聖ディミトリの健康は、絶え間ない務めによって衰弱していた。 シベリアは遠い地であり、聖ディミトリには、キエフで始め、当時啓蒙活動が集中していたその地、あるいはその近辺でしか続けられない、心に深く響く活動があった。人里離れた遠いシベリアでは、それを続けることはできなかった。これらすべてが彼を深く悩ませ、彼は病床に伏すことになった。 皇帝自らが病床を訪れ、病の原因を知ると、彼を慰め、最寄りの教区が決まるまでしばらくモスクワに留まることを許可した。まもなく、そのような教区の空席が生まれた。ロストフのミトロポリト・イオアサフが死去し、聖ディミトリは1702年1月4日、その後継者に任命された。

聖ディミトリは、大斎の第2週にあたる3月1日にロストフに到着した。街に入ると、彼はまずスパソ＝ヤコヴレフ修道院を訪れた。ロストフの聖ヤコブの聖遺骨が安置されている「聖母受胎大聖堂」に入ると、 新任の大司教は慣例通りの祈りを捧げると同時に、天からの特別な啓示により、ロストフで自身の多難かつ多大な功績を残した生涯を終える運命にあることを知り、大聖堂の右隅に自身の墓所を定め、周囲の人々にこう語った。「ここが私の安息の地である。ここに永遠に眠るであろう」[6399] 。 その後、ウスペンスキー大聖堂で神聖な典礼を執り行った聖師は、新たな信徒たちに向けて雄弁かつ感動的な説教を行い、そこで牧者と信徒の相互の義務について説いた。

「私の到来について、あなたがたの心を惑わしてはならない」と聖師は語った。「私は門から入ったのだ。他の場所をよじ登って入ったのではない。私は求めてはいなかったが、求めてきた。また、私はあなたがたを知らなかったし、あなたがたも私を知らなかった。しかし、主の御計画は計り知れないほど深遠である。 それらが私をあなたがたのところへ遣わしたのであり、私は来た。あなたがたに私に仕えてもらうためではなく、私があなたがたに仕えるためである。主の御言葉のとおり、『あなたがたの中で第一になりたい者は、すべての人のしもべとなりなさい』。」

ロストフ都主教区の統治に就いた聖ディミトリは、そこに大きな混乱があることを発見した。エリヤのような熱意をもって、彼は教会の整備と人々の魂の救済にたゆまぬ努力を捧げた。 真の牧者として、福音書の*「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。そうすれば、人々はあなたがたの善行を見て、天におられるあなたがたの父を賛美するようになる」*（マタイ5:16）という言葉に従い、聖人はあらゆる面で敬虔さの模範を示した。 同時に、彼はあらゆる身分の人々の中から、悪 な習

[6398] イオアサフ・クロコフスキーは、1697年から1708年にかけてペチェールスク・ラヴラのアルヒマンドリトを務めた。

[6399] スパソ＝ヤコヴレフスキー・ロストフ修道院は、14世紀末にロストフのイアコフ司教（†1392年）によって設立されたが、17世紀初頭のリトアニアの侵攻の際に荒廃した。 聖アンナの受胎に捧げられた大聖堂には、聖ディミトリの聖遺骨が安置されており、1691年から存在している。

性、嫉妬、不実、その他の悪徳を根絶しようと努めた。特に聖人を悲しませたのは、聖職者たちの無知と、神の御言葉を宣教することへの軽視であった。

「ああ、この嘆かわしい時代よ」と、聖ディミトリオスはある説教の中でこう語った。「種まきがこれほどまでに軽んじられ、神の御言葉がすっかり見捨てられてしまった。誰をまず嘆くべきか、種を蒔く者か、それとも大地か、司祭か、それとも人々の心か、あるいはそのすべてか、私にはわからない。」 彼らは皆、不道徳であり、善を行う者は一人もいない。 種を蒔く者は蒔かず、大地は受け入れず；司祭たちは怠慢であり、人々は迷い；司祭たちは教えず、人々は無知であり；司祭たちは神の言葉を説かず、人々は耳を傾けず、聞く気さえ持たない」。

聖人は、多くの聖職者たちの中に、良き道徳的薫陶さえ見出せなかった。それどころか、彼は悲しみをもって、家長たちが家族による主要なキリスト教的義務の履行に無関心であることを指摘せざるを得なかった。

「さらに驚くべきことは」と聖ディミトリオスは続ける。「司祭の妻や子供たちの多くが、決して聖体拝領をしていないということだ。ここからわかったことだが、司祭の息子たちは父の地位を継ぐためにやって来る。彼らに『いつ最後に聖体拝領をしたか』と尋ねると、多くの者が『いつ聖体拝領をしたか覚えていない』と正直に答えるのだ。 ああ、自分の家庭を顧みない司祭たちよ！ 聖なる教会を気にかけることなどできるだろうか、自分の家族を聖体拝領に導かない者たちが？　家庭内の魂の救いを顧みない者が、どうして信徒たちを導くことができるだろうか？」

司祭たちは自らの義務を十分に理解していなかった。彼らの間には、宴会の席で、告解の際に明かされた自分の霊の子たちの罪を、非難や叱責を込めて語り広める者もいた。また、病人の元へ告解や聖体の授与のために訪れることを怠る者もおり、とりわけ貧しい人々への訪問を怠っていた。

さらに、聖人は敬虔な熱意に満たされ、ある司祭たちが神への畏れを忘れ、キリストの至聖にして命を与える秘跡に相応しい敬意を払っていないことを知ったとき、その悲しみは一層深まった。聖人はある書簡の中で、次のような出来事を語っている。

「1702年1月、私たちはヤロスラヴリへ向かう途中でした。道中、私はある田舎の教会に立ち寄りました。いつもの祈りを捧げた後、キリストの至聖なる秘跡にふさわしい敬意と礼拝を捧げようと、その教会の司祭に尋ねました。

「キリストの命を与える聖体はどこにありますか？」

司祭は、私の言葉を理解できないかのように、戸惑った様子で立ち尽くし、黙り込んでいました。そこで私は再び彼に尋ねました：

「キリストの御体はどこにありますか？」

司祭はこの質問も理解できなかった。そこで、私を同行していた経験豊富な司祭の一人が、彼に尋ねた。

「聖体の保管場所はどこですか？」

すると司祭は、隅から「極めて卑しい器」を取り出し、その中にこれほど無造作に保管されていた、天使たちでさえ畏れおののいて見つめる偉大な聖遺物を示した。

「私はそのことに心から深く悲しんだ」と聖人は語る。「なぜなら、キリストの御体がこれほどまでに軽んじられて保管されていること、また、尊い聖体秘跡にふさわしい敬称すら用いられていないことである。天よ、これに驚け。地の果てよ、震えよ！」

聖人は、このような甚だしい欠陥を直ちに根絶することに尽力した。　司祭たちが怠慢を捨て、あらゆる注意と神への畏れをもって奉仕を行うことを願って、聖ディミトリオスは牧者たちに向けた二つの回状を書いた。これらの回状は多くの写本として司祭たちに配布され、彼らが自ら書き写し、頻繁に読み返し、それに従って職務を正すようにとされたのである。

第一の手紙において、聖人は牧者たちに対し、父のような愛をもって悪しき行いを改めるよう諭し、自分の霊の子らの罪を他人に話したり、霊的父としての地位や立場を誇ったりすることを禁じ

た。　主の御名において、彼は彼らに対し、貧者や困窮者を軽んじることなく、すべての信徒の魂を等しく、絶えず顧みるよう懇願した。

第二の手紙において、聖ディミトリオスは、大牧者としての権威をもって、司祭たちに対し、恐るべき神の裁きを恐れて、自ら聖なる命を与える秘跡にふさわしい礼拝を捧げるだけでなく、他の人々にもそうするよう教えるよう命じました。 それらを聖所にふさわしい場所や な器に保管し、「備蓄」とは呼ばないよう諭し、司祭たちには自らの聖なる奉仕にふさわしく備えるよう説得し、可能な限り頻繁に民衆を教え、自らも職務を綿密に遂行するよう懇願した。

聖職者たちの間に存在する欠点を完全に根絶しようと努めた聖ディミトリは、そのための最も効果的な手段が、良き教えと教育にあることを認識していた。　そこで彼は、自身の司教邸に学校を設立した[6400] 。この学校には、聖職者の子供たち200人以上を集め、彼らを3つのクラスに分け、各クラスに専任の教師を配置した。この学校は聖人の特別な配慮の対象であった。彼は頻繁に教室を訪れ、自ら生徒たちの話を聞き、その知識を試験した。　教師が不在の場合は、聖人が自らその役目を引き受けた。通常の業務の合間を縫って、聖人は才能ある生徒たちを集め、旧約聖書のいくつかの書物を解説した。夏の間は、司教の別荘があるデミャン村に滞在し、生徒たちに新約聖書を解説した。聖人は、生徒たちの道徳教育にも同様に心を配った。　日曜日や祝日には、生徒たちは大聖堂にやって来て、徹夜祈祷と聖体礼儀に参加しなければならなかった。第一カフィズマの終了後、ある聖句や聖人の伝記が朗読されている間に、生徒たちは聖人の元へ近づき、祝福を受け、それによって自分の出席を知らせることになっていた。　大司教は弟子たちに、四旬節だけでなく他の断食期間も厳格に守るよう命じ、自ら彼らの懺悔を聞き、聖体拝領を授けた。修業を終えた者には、聖師は資質に応じて各教会での役職を与えた。　助祭や教会係に対しては、その職務に対する敬意を植え付けるため、ステイハール（聖職者の法衣）を授けていたが、これはかつてロストフでは行われていなかったことである。

しかし、聖師は数多くの心配事や業務に追われていたにもかかわらず、新たな奉仕の場においても、聖人の伝記の執筆という労作を疎かにすることはなかった。　聖ディミトリがロストフに到着してからほぼ3年が経過し、ロストフ大聖堂に所蔵されているロストフの主教たちの年代記には、聖ディミトリによるこの偉大な事業の完了について、次のような記録が記された。　「神の御言葉の受肉から1705年目の夏、2月の9日、聖殉教者ニキフォロス（勝利者と呼ばれる）の記念日、主の奉献の祝日にあたり、聖シメオン・神受容者に次のように祈りを捧げた：　『今、御自分のしもべを御許へお送りください、主よ』と。それは主の受難の日である金曜日であり、その日、キリストは十字架の上でこう仰せになった：　「成し遂げられた」と仰せになった。――死者を偲ぶ安息日の前、そして最後の審判の週を前に、神の御加護と聖母マリア、そしてすべての聖人の祈りにより、8月が記された。アーメン」。

同年9月、6月、7月、8月の各月を網羅するこの最後の巻が、キエフ・ペチェールシク大修道院で印刷された。こうして、聖人が20年以上にわたる多大な労力を費やして成し遂げた『ミネイ・チェティイ』編纂という偉業は、ついに完結したのである。

しかし、聖ディミトリウスには、ロストフの教区において、もう一つの重要な偉業が待ち受けていた。当時、その地には多くの分派者がおり、その指導者たちはブリンの森に身を隠しながら[6401]、秘密の説教者たちを通じて至る所に有害な教義を広めていた。　彼らは誤った解釈と秘密の説得に

6400 学校での授業は1702年9月1日に始まった。しかし、聖ディミトリによって開設されたこの学校は長くは続かず、1705年にその歴史に幕を閉じた。

6401 鬱蒼としたブリンの森は、オカ川の支流であるジズドラ川に注ぐブリン川沿いに、カルーガ県に広がっていた。この森には分派者たちが潜んでいた。ここから、「ブリンの信仰」という分派の名称が由来している。

よって、キリストの羊たちを自らの破滅的な罠へと誘い込んでいた。多くの人々が、彼らの甘言に満ちた教えを信じ、真の信仰に迷いを抱くようになった。

「ああ、この終わりの時代の忌まわしき者たちよ！」と聖人は叫ぶ。「今や聖なる教会は、外部の迫害者たちによって、また内部の分裂者たちによって、大いに圧迫され、弱められている。使徒の言葉によれば、*『彼らは私たちの中から出て行ったが、もともと私たちのものではなかった』*（Iヨハネ2:19）のである。そして、この分裂によって、最も真の使徒的公会議の教会そのものが弱体化してしまった。もはや教会の真の子を見つけることはほとんど不可能である。なぜなら、ほぼすべての都市で、何らかの異なった独自の信仰が作り出されており、　すでに信仰について、真の道をほとんど知らない素朴な男や女までもが、教義を定めて教えを説いている。例えば、三本の指を組み合わせて、それが正しい新しい十字架であると主張し、その頑固な態度の中で呪われた者たちとして立ち続け、真の教会の教師たちを軽蔑し、拒絶しているのだ」。

このような現象は、キリストの信仰を守る教養ある擁護者にとって、極めて嘆かわしいものであった。聖人は、自らの教区を数回にわたり巡回し、ヤロスラヴリに長期滞在することを決意した。それは、正教会からの背教者たちの頑なな無知を、自らの言葉で糾弾するためであった。　ヤロスラヴリを訪れたある時、聖ディミトリイは日曜日に大聖堂で聖体礼儀を執り行った後、自宅へ戻っていた。その時、彼には見知らぬ二人の男が近づき、こう尋ねてきた。

「聖なる大主教様、どうお命じになりますか？　髭を剃れと命じられています[6402]、しかし私たちは髭を守るために命を捧げる覚悟です。」

聖人はこの予期せぬ問いに驚き、逆にこう尋ねた。

「もし頭を切り落とされたら、その頭はまた生えてくると思うか？」

「いいえ」と彼らは答えた。

「では、ひげは生えてくるか？」と聖人は尋ねた。

「ひげは生えてくる」と彼らは答えた。

「それなら、髭を切り落とさせなさい。また生えてくるのだから。」

聖人と、彼を見送った著名な市民たちが彼の修道室に入ると、彼らはひげ剃りについて長い間語り合った。聖ディミトリオスは、自分の信徒の中に、皇帝の勅令によってひげを剃らされたことを理由に、自らの救いを疑っている人々が少なからずいることを知った。　彼らは、ひげとともに神の御姿と似姿をも失ってしまったと考えていた。聖人は、神の御姿と似姿はひげや顔にあるのではなく、人の魂の中にあるのだと説き、こうした疑念を捨て去るよう長く諭した。　その後、聖人は『人間の神の像と似姿について』という論考を執筆し、自身の教区に配布した。皇帝の命により、この論考は3回にわたり印刷された。

まもなく、聖ディミトリは『ブリンの信仰に関する考察』[6403]という大著を執筆し、分裂の真髄を暴いた。

6402 当時、ピョートル大帝は髭を剃ることを命じる勅令を発布した。

6403 『分派であるブリンの信仰に関する論考』は、1745年にモスクワで初めて刊行された。この著作は三つの部分に分かれている。第一部において、聖ディミトリは「分派者たちの信仰は正しいのか？」および「彼らの信仰は古来のものなのか？」という二つの問いについて論じている。　最初の問いに対して、聖ディミトリは、分派者たちには真の信仰がないことを立証している。なぜなら、彼らの信仰は古い書物やイコン、八芒星の十字架、十字の印を切る際の独自の指の動き、そして典礼におけるプロスフォラの数が7個であることに限定されており、それらは信仰を構成するものではないからである。　第二の問いについて、聖人は、分裂派の信仰は新しいものであるか、あるいは古い異端や迷いを刷新したものに過ぎないと述べる。『調査』の第2部において、著者は、偽りの教師たちに由来する分裂派の教義が、1) 虚偽であり、2) 異端的であり、3) 神を冒涜するものであると述べている。 第3部――分裂派の行いについて――では、一見善そうに見える彼らの行いも、傲慢、虚栄、偽善によって損なわれていることが証明され、続いて、分裂派の邪悪で明らかに不法な行いが列挙されている。

聖ディミトリイはこの著作において、分裂派の信仰が誤りであり、その教義が魂に有害であり、その行いが神に喜ばれるものではないことを、明確かつ説得力を持って証明した。

教会と国家のためにたゆまず尽力した聖ディミトリは、他にも様々な事業に取り組んだ。例えば、彼は「世界の創造からキリストの降誕に至るまでの出来事を記した年代記」を編纂しようとしていた。聖人は、この書を自身の修道院での読書の為だけでなく、他の特別な事情のためにも編纂しようとしていた。　彼は、小ロシアだけでなく大ロシアにおいても、スラブ語の聖書を持っている者がほとんどいないことをよく知っていた。それを購入できるのは富裕層だけであり、貧しい人々は、この神に霊感を受けた書物を読むことによって得られる霊的な恩恵を全く享受できていなかった。聖職者の間ですら、聖書の物語の順序を知らない者が多かった。　そのため、聖人は簡潔な聖書物語を編纂し、誰もが手頃な価格で入手して聖書の内容を知ることができるようにしたいと願った[6404]　。聖ディミトリは直ちにその作業に取り掛かり、聖書や様々な年代記から情報を厳選し始めた[6405]。

「私は――聖人はこう語った――神の助けを借りて、道徳的教訓を、また所々では聖書の解釈を、私の微力な力の及ぶ限り書き記している。そして、聖書の物語については、序文の代わりにごく簡潔に引用し、それらを源泉として、そこから道徳的教訓の泉を湧き出させている」[6406]。

聖人はどれほど『年代記』を完成させたいと願っても、その意図を果たすことはできなかった。これには、彼の健康状態が著しく悪化していたことが大きな障害となった。彼は4600年分の出来事しか記述することができなかった。　一方、この著作に続き、聖人は神の御加護のもと、詩篇の簡潔な注解の執筆に着手しようと考えていた[6407]。

聖ディミトリオスは当時の著名な説教者であり、しばしば信徒たちに向けて、教訓に満ちた雄弁な言葉を語っていた。　いかなる仕事や義務も、彼を神の御言葉の説教から決してそらすことはなかった。彼が説いたキリスト教の真理は、説教者の魂からまっすぐに溢れ出るものであり、常に生き生きとして力強く、父親が子供たちに、教師が生徒たちに語りかけるような素朴な語り口で、聴衆を魅了した。　もしこのロシアの「金口」のすべての教えを見つけ出し、一つにまとめることができた

[6404] この聖人の意図については、彼の『書簡集』、すなわち書簡の集大成から知られている。

[6405] 「クロノグラフ」という言葉はギリシャ語（xroyos＝時間、grapo＝書く）に由来し、「年代記」を意味する。ビザンツ帝国では、聖書の物語も記された歴史的な内容の様々な集成をこのように呼んでいた。それらはビザンツから我々の地にも伝わった。

[6406] 1708年の『ディアリア』に記載された書簡。

[6407] 聖ディミトリオスの数多くの著作のうち、あるものは教義的な内容を持ち、あるものは霊的・道徳的な内容を持ち、またあるものは歴史的な内容を持っている。――I. 教義的なものには、1）『信仰に関する簡潔な問答』、2）『正教の信仰告白の鏡』（両著作とも、正教会の信仰教義および道徳教義をカテキズム形式で解説したものである）；3) 「パンとぶどう酒が我らの主イエス・キリストの体と血へと変容することに関する十二の条項」；4) 「ブリンの信仰に関する考察」。–II. 霊的・道徳的なものには、以下のものがある：1)『心の動揺に対する霊的な治療』（『天梯』『パテリカ』、聖人伝などから抜粋）；2) 『苦難にある人の悲しみを和らげるための弁明』（悲しむ者と慰める者との対話）；3) 「心の牢獄に閉じこもり、ひそかに学び、祈る内なる人」（この著作の目的は、キリスト教徒に祈りを身につけさせることにある）；4)「聖三位一体への礼拝」；5)「至聖なる神の母への礼拝」；6)「日々の神への懺悔の祈り」；7）「総懺悔」；8）「聖体拝領について」（聖なる秘跡にどのようにふさわしく臨むかについての考察、および聖体拝領前後の祈り）；　9) 主の受難に関する祈りの黙想（様々な題名付き）；10) 2通の牧会書簡（悔い改めと聖体拝領の秘跡を適切に執り行うことについて）；11) 『霊的アルファベット』（ヨハネ・クレマティコスの『梯子』に倣い、スラブ文字順に並べられた簡潔な霊的・道徳的規範）；12)『霊的詩篇または賛歌』など――III. 歴史的著作には以下のものがある：1)『日記』（1681年から1703年までの日々の記録および聖人の学術的著作に関連する書簡）；2)　『潤された羊毛』（チェルニヒウのイリインスキー修道院にある聖母マリアのイコンによる24の奇跡に関する物語）；3)　『世界の始まりからキリストの降誕に至るまでの出来事を記した年代記』；4)『キエフ都主教名鑑』；5)『ミネイ・チェチイ』。

なら、その数は膨大に及んだに違いない。しかし、残念ながら、聖ディミトリの教えの多くは失われてしまっている[6408]。

聖ディミトリは、その信徒たちを賢明に導き、決して厳しい措置に訴えることはなかった。柔和さを特徴とし、貴族であれ庶民であれ、すべての人に対して等しく愛を注ぎ、いかなる偏見も持たなかった。　教会のすべての忠実な信徒たちは、彼を父のように愛し、敬いました。皇帝ご自身や王室の全家族も、その真に徳高い生涯ゆえに、ロストフ都主教を深く尊敬していました。　聖ディミトリのキリスト教的な美徳は、修道院の独房においても、聖職者の座においても等しく輝いていた。とりわけ、彼の生活においては、祈り、断食、謙遜、無欲、そして貧しい人々や孤児への愛が鮮やかに輝いていた。

教区の運営に関する多くの業務にもかかわらず、聖ディミトリは毎日教会に赴いて祈りを捧げた。すべての日曜日と祝日には聖体礼儀を執り行い、説教を行った。また、たとえどれほど長く、遠くても、常に自ら十字架行列に参加した。　また、体調が優れないときは――それは珍しくなかったが――神学校に使いを送り、弟子たちにキリストの五つの傷を記念して[6409]、主の祈り（「主の祈り」）を五回唱えさせた。　神学校を訪れる際、彼は生徒たちに、知恵の導き手であり、理解の与え主である全能の主の助けを絶えず求めるよう諭した。聖人は、使用人や共に暮らすすべての人々に、時計の鐘が鳴るたびに十字を切って、「聖母マリアよ、喜びなさい」という祈りを静かに唱えるよう教えた。　彼は従者たちに非常に人間味あふれる態度で接した。誰かの名日の際には、聖像を授けたり、金銭を贈ったりして祝福した。　また、熱心に断食し、過食や酩酊を避けるよう彼らに教えました。聖ディミトリ自身も、自らの生活においてその模範を示していました。　肉体の力を維持するためだけに食事を摂り、聖人は大斎の最初の週にはたった一度だけ食事をとりました。そして、受難の週の聖木曜日にも、たった一度だけ食事をとったのです。

「自分を高める者は低くされ、自分を低くする者は高められる」（ルカ18:14）という救い主の言葉を絶えず心に留め、聖ディミトリオスは生涯を通じて、偉大な謙遜さを示した。

「私はそのような者ではない――聖人は自らについてこう語った――あなたの愛が私をそうあるように導いてくださるからである。私は品行方正ではなく、むしろ悪辣であり、悪しき習わしに満ちており、知性においても賢明な人々からは遠く離れている。私は乱暴で無知であり、私の輝きはただ闇と塵に過ぎない……　それゆえ、兄弟としてのあなたの愛をもって、私の光である主のために私のために祈ってください。主が私の闇を照らし、この不適格な者から尊いものが現れるように」[6410]。

聖職の最高位に達しても、聖ディミトリオスは変わらぬ謙虚さを保ち、目上の人には敬意を払い、同輩には親しみ深く、部下には慈悲深く、不幸な人々には憐れみ深かった。

言うまでもなく、これほど高い道徳的資質を備えた聖人は、完全な無私無欲さでも際立っていたに違いない。実際、彼の心には、吝嗇や貪欲、金銭への執着の余地はなかった。　生涯を通じて、彼はすべての施しや収入を、教会の必要のため、あるいは貧しい人々への慈善活動のために用いた。聖人は、孤児や未亡人、物乞いや貧しい人々を、まるで父親が自分の子供たちを世話するように慈しんだ。　得たものはすべて彼らに分け与え、盲人、聾者、足の不自由な者、貧しい人々を「十字架の間」に招き入れ、食事を振る舞い、衣服を与え、その他の慈愛を示した。聖人は、亡くなる2年半前に自ら作成した霊的遺言の中で、自身の無私無欲と貪欲のなさについて自ら証言している。

「私は、」と彼は言う、「この遺言書によって、私の死後、私の私有財産の相続を求める者すべてに、その旨を周知させることにした。それは、彼らが無駄な労力を費やすことなく、また、神の

[6408] 小ロシアにおける聖人の説教活動については、5つの説教が知られている。聖ディミトリの説教は、計で約100編が刊行されている。

[6409] ここでいうのは、キリストの至聖なる御手、御足、そして肋骨にある十字架の傷を指す。

[6410] 聖ディミトリは、モスクワの印刷局の監修官である友人の修道士テオロゴスに、このように書き送った。

ために私に仕えた者たちを苦しめることのないようにするためである。　私の真の宝と富は、若き日から蓄えてきたものではない（これは自慢して言うのではなく、私の死後に財産を求める者たちに知らせるためである）。　というのも、私は聖なる修道者の道を選び、18歳の夏にキエフのキリロフ修道院で剃髪し、神に対して自発的な貧しさを誓ったからである。その時から、死が近づくまで、私は財産や富を蓄えることはなかった[6411]、聖書を除いて[6412]、金や銀を集めることもなく、余分な衣服や、必要最低限のもの以外のいかなる物も持つことを望まず、修道者としての無所有と貧しさを、精神と行動の両面で可能な限り守り抜くよう努め、自分自身を気にかけることなく、決して私を見捨てない神の摂理に身を委ねてきた。　また、恩人からの施しや、修道院の収入として私の手に渡ったものは、私が修道院長や大修道院長として、また現在の主教として在任していた間、私自身の必要や修道院の必要のために使い果たした。　わずかな修道院の収入を集めることはせず、それらを私の必要に充て、また神が命じられるところの困窮している人々の必要に充てた。　ゆえに、私の死後、誰も私の修道院の財産を調査したり、何かを要求したりしてはならない。なぜなら、私は埋葬のためにも、追悼のためにも何も残さないからであり、むしろ、死の床において修道者の貧しさこそが、神の御前に最も顕れるからである。「なぜなら、たとえ私のために一ツのツァタ（[6413]）さえ残らなくても、多くの財産が兄弟たちに分配される場合よりも、神にとっては喜ばしいことであると信じているからである」。

この遺言において、聖人はスパソ＝ヤコヴレフスキー修道院に埋葬されたいという自身の願いを改めて表明し、それを友であるヤヴォルスクのステファン都主教に伝えた[6414]。その際、二人は互いに誓いを交わした。もしステファン大主教が先に亡くなれば、その葬儀はディミトリ大主教が執り行うこととし、もしディミトリが先に主のもとへ旅立つならば、ステファンが彼を葬るべきである、と。

聖ディミトリは、生後58年目の1709年10月28日、自身の名日（テゾイメニト）の翌日にこの世を去った。　逝去の数日前、パラスケヴァ・フェオドロヴナ皇后がまもなくロストフに到着するという報告が彼のもとに届いた。[6415] これは、トログの聖母マリアの奇跡のイコンに参拝するためであった。当初、このイコンは、秋の悪天候により皇后のヤロスラヴリへの旅が困難となったため、[6416] 今回、そこからロストフへ移送されることになっていた。　聖人はこれを聞くと、自身の財務担当である修道士フィラレートを呼び寄せ、自らの死が近いことを預言的に告げた。　「今、二人の女王がロストフへとやって来る。天の女王と地上の女王である。ただ、私はもはや彼女たちを見ることは叶わない。だから、財務官であるお前は、彼女たちを迎える準備を整えておくべきだ。」

聖ディミトリの逝去の3日前、かねてから胸に潜んでいた病が、激しい咳として現れた。それにもかかわらず、聖人は元気なふりをしようと努めた。　自身の名日である10月26日、彼は自ら大聖堂で聖体礼儀を執り行ったが、説教を語ることはもはやできず、聖歌隊の一人にノートから読み上げさせた。昼食の席では、極度の苦痛に耐えながらも、客たちと共に席に着いた。　翌日、ペレスラヴ

[6411] 「ムシェロイムストヴォ」とは、私利私欲を意味する。

[6412] ロストフの学識ある大司教が残した大規模な図書館は、ギリシャ語、ラテン語、ポーランド語、スラブ語の書籍（写本および印刷本）で構成されており、モスクワ総主教庁（現・シノダル）図書館に収蔵された。　聖ディミトリが所有していた数冊の書籍は、モスクワ・シノダル印刷所の図書館に所蔵されている。

[6413] 小銭。

[6414] ステファン・ヤヴォルスキー（1658–1722）は、リャザン都主教であり、総主教座の代理を務めた人物で、ピョートル大帝時代の最も著名な人物の一人であり、説教者として知られている。彼は1684年に聖ディミトリと知り合った。

[6415] 1696年に死去したツァーリ・イオアン・アレクセーエヴィチの未亡人。

[6416] トルグの聖母イコンを称える祝日は8月8日である。トルグ修道院はヴォルガ川沿いのヤロスラヴリから9ヴェルスタの場所にあり、1314年にロストフの司教プロホール（修道名トリフォン）が、イコンが現れた場所に設立した。

リのダニロフ修道院のアルヒマンドリトが、聖ヴァルラアムを見舞いに訪れた。　二人の会話の最中、当時ロストフに住んでいた修道女ヴァルソノフィアが聖人に使者を送った。彼女はかつてアレクセイ・ペトロヴィチ皇子の乳母であり、聖ディミトリ自身によって修道衣を授けられた人物であった。彼女はロストフの大司教を深く敬い、しばしば彼から魂に有益な教えを求めていた。　今回もまた、ヴァルソノフィアは聖人にその日のうちに自分を訪ねてくれるよう熱心に懇願した。聖ディミトリはアルヒマンドリト・ヴァルラアムと共に彼女の元へ向かった。帰り道、彼は侍者たちに支えられなければ、自分の修道室までたどり着くことさえ困難な状態になっていた。

彼は直ちに、自ら作曲した霊的な賛美歌――「わが最愛のイエスよ」、「わが望みを神に託す」、「あなたはわが神、イエスよ、あなたはわが喜び」など――を歌うために、聖歌隊員たちを呼び寄せるよう命じた。　その歌は、彼自身の魂から湧き出た言葉によって彼の魂を慰め、彼はストーブのそばで暖まりながら、聖歌隊の歌声に耳を傾けていた。

歌が終わり、聖歌隊を帰した後、聖人はその中の一人、彼が愛し、自身の著作を熱心に書き写していたサヴヴァ・ヤコヴレフを呼び留めた。　聖ディミトリは、自分の生涯について語り始めた。若き日や成人してからの生活、神と聖母マリア、そしてすべての聖人たちにどのように祈ってきたかを語り、こう言った。「あなたたちも、子供たちよ、同じように祈りなさい」。

その後、聖人は聖歌隊員を祝福し、小部屋から送り出す際、地面に届くほど深く頭を下げて、写本作成への献身的な努力に感謝した。

大司教がこれほど謙虚かつ異例な形で自分を見送り、これほど深く頭を下げているのを見て、聖歌隊長は身震いし、畏敬の念を込めてこう言った。

「聖なる大司教様、私のような、あなたの最も卑しいしもべに、これほど深くお辞儀をなさるのですか？」

それに対し、聖師は同じ謙虚さをもってこう答えた。

「ありがとう、わが子よ！」

聖歌隊員は苦々しく泣きながらその場を去った。その後、聖ディミトリは奉仕者たちにそれぞれの場所へ戻るよう命じ、自身はまるで休息を望むかのように特別な部屋に閉じこもり、一人きりで神への熱心な祈りに没頭した。　朝、奉仕者たちがその部屋に入ると、聖人は祈る姿勢のまま、ひざまずいた状態で息を引き取っていた。かくして、聖人の生涯を甘美なものとしていた祈りは、死の瞬間までも彼に寄り添っていたのである。

故聖人の尊い遺体は、聖人自身が用意した司教の法衣に包まれ[6417]、その日のうちに自宅の礼拝堂へ移された。　棺の中では、聖ディミトリイの遺言に従い、頭の下と全身の下に、彼の下書き用紙が敷かれた。聖人の逝去の知らせは、たちまちロストフ全土に広まった。　棺の周りには大勢の人々が集まり、愛する牧者であり師である聖人の計り知れない喪失を心から嘆き悲しんだ。その同じ日、パラスケヴァ・フェオドロヴナ皇后が、娘たちであるエカテリーナ、パラスケヴァ、そしてアンナ（将来の皇后）の各王女を伴ってロストフに到着した。　聖人が自ら予言していた通り、生前に彼に会うことは叶わなかったため、皇后は彼から祝福を受ける栄誉に浴せなかったことを深く嘆き、大聖堂で追悼のミサを執り行うよう命じた。

10月30日、皇后の命により、聖人の遺体は相応の栄誉をもって大聖堂へ移送された。皇后は再び追悼の礼拝に参列し、神の御心にかなう聖人と最後のお別れを告げた後、モスクワへと向かった。

[6417] 聖ディミトリの修道院には、パラスケヴァ・フェオドロヴナ皇后やアレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝の娘たちが頻繁に訪れ、彼に司祭服を贈った。聖人はこれらの寄進品を用いて司教の礼服を自作し、その衣装を身にまとったまま埋葬されるよう遺言した。

まもなく、聖人の埋葬のためにステファン都主教が到着した。彼は大聖堂に直行し、亡き友の遺体に頭を下げ、その前で涙を流した。　その後、彼は財務官フィラレートに、ヤコブレフ修道院での埋葬に必要なすべての準備を整えるよう命じた。すると、ロストフ地方の各修道院の院長たち、大聖堂の司祭たち、そして多くの市民がステファンのもとへ駆け寄り、かつての主教たちが通常埋葬されていた大聖堂にディミトリを葬るよう懇願した。　しかし、ステファンは「ディミトリ大主教は、ロストフの主教座に着任した際、まずヤコブレフスキー修道院を訪れ、自らここで埋葬される場所を選ばれた。どうして私がその遺志に背くことができようか」と言って、これを承諾しなかった。

埋葬が予定されていた11月25日、ステファン大主教は友情の誓いを忠実に守り、聖体礼儀と埋葬を執り行い、その際、「聖ディミトリ、聖なる方！」と繰り返し叫びながら説教を行った。　その後、泣き悲しむ民衆に見送られ、聖ディミトリの遺体はヤコブレフスキー修道院へと運ばれ、そこでザチャティエフスキー大聖堂にて埋葬された。ステファン大主教は墓碑銘の詩を書き、その中で、とりわけ次のように述べた。

ロストフの街の人々よ、皆、涙を流せ、
亡き牧者を涙ながらに偲び、
ディミトリイ大主教と、尊き、
穏やかで謙虚な大主教を。

約43年間、聖ディミトリの遺体は地下に安置されていた。1752年9月、ザチャチエフスキー大聖堂の老朽化した床を解体していた際、腐朽した木造の骨組みが見つかった。その上には屋根の代わりに太い丸太が縦に並べられていたが、それらは後に骨組みの内部へと崩れ落ちていた。　腐朽した木組みを解体し、堆積した土を取り除くと、聖人の棺が現れた。棺は損傷を受けていた。屋根は崩れ落ちた丸太によって砕かれており、その隙間からは、腐敗の影響を受けていない覆い、ミトラ、そして聖人の衣類のすべてが見えていた。　聖遺物が検視されたところ、聖人の胸の上で十字架のように組まれた両手は全く腐敗しておらず、ただ右手の4本の指が棺の内側に崩れ落ちた板によって折れ、左手は肘から切り離されていただけで、それ以外の身体の部位はすべて無傷であった。

聖遺骨の発見を耳にした民衆は、群れをなして新たに現れた神の御愛する者に駆けつけ、その棺の前では豊かな癒やしの泉が開かれた[6418]　。その恵みは、今もなお、聖なる御使いたちにおいて驚くべき御業をなされる三位一体の神、父と子と聖霊の栄光のために、信者たちに与えられている。アーメン。

トロパリオ、第8調：

正教の熱心な擁護者、分裂の根絶者、ロシアの癒し手、そして神への新たな祈りの人よ、あなたの書簡によって、多くの者を貞潔に導き、　霊の泉よ、至福のディミトリよ、キリスト・神に祈り、我らの皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチと、その全継承者、そしてその支配が救われるよう願え。

コンダク、第8調：

キエフから輝き出で、ノヴグラード・セヴェルスキーを経てロストフに至り、この国全体を教えと奇跡で照らし出した、ロシアの星を、雄弁な教師ディミトリを称えましょう。　彼はすべての人

[6418] 1757年4月22日、聖ディミトリは聖人の列に加えられた。聖シノドの委嘱により、ロストフ都主教アルセニイは同時期に聖人の伝記を執筆し、また、ペレヤスラフ司教（後にモスクワ大司教）アムブロシイによって、聖ディミトリのための礼拝式が制定された。

々を教え導くために、あらゆることを書き記し、パウロがキリストに献身したように、すべての人をキリストに引き寄せ、正信によって我らの魂を救うであろう。

10月5日

9月22日（旧暦）

聖司祭殉教者フォキオス、シノプス司教の殉教日

記念日9月22日

シノペの町[6419]には、パムフィルという名の男が、妻のマリアと共に暮らしていた。彼らは、福者フォキスの両親であった。　聖人は幼い頃から聖霊の恵みを受け、人々から悪霊を追い出し、病を癒やすことができた。フォカが成人すると、その徳高い生活が認められ、故郷の町で司教に選出され、熱心に言葉の羊たちを牧するようになった。　言葉で教えつつ、自らの模範をもって彼らを導きました。以前から徳のある生活を送っていましたが、司教の位に就いてからはさらに精進し、その善行を見た人々は皆、天の父を賛美しました。　彼は多くの人々を迷いから救い、多くの異教徒を偶像崇拝から遠ざけ、唯一の神を崇めるように導いた。　主は、御自身の忠実なしもべに殉教の冠を授けることをお許しになり、次のような幻の中で彼にそれを告げられた。高みから一羽の鳩が飛来し、くちばしに花輪をくわえていた。その鳩は、その花輪を聖人の頭に載せ、人間の声でこう言った。

「あなたの杯はすでに満たされた。今こそそれを飲み干すべき時である。」

この幻視から、聖フォカスは、自分がキリストのために苦難を受けることになることを悟った。そして我々は、彼が神の前で偉大な御心に適う者であったことをここから知る。なぜなら、まだこの世に生きているうちに、彼は天から冠を授かるにふさわしい者とされたからである。　かくして、至聖なる神は御自身の聖徒たちを高め、彼らに栄光と誉れを与え、その頭に冠を授けられるのである。聖フォカは、その魂と肉体の清らかさゆえに、真の天の花婿であった。天は彼と結ばれ、彼に冠を授けようと望まれたが、　しかし、この冠は、より優れた冠の前兆であった――すなわち、救い主の宮殿において、彼が永遠に戴き、そこで天の婚礼に臨むべき冠である。この栄光に満ちたしるしの後、トラヤヌス帝の治世下、フォカスは総督アフリカヌスによって拷問に処された。　この統治者は長い間、彼に偶像への生贄を捧げるよう強要したが、聖人は自らを神への生贄として捧げることを選んだ。彼は総督の命令に従わなかった――ケルビムの上に座す唯一の神にふさわしい栄光を、人の手によって造られたものに捧げることを拒んだのである。そこで総督は、聖人を木に縛り付け、拷問を加えるよう命じた。　その全身は傷だらけとなった。まるで飢えた猛禽類が死骸に襲いかかり、食い荒らしながらそれを引き裂くように、拷問者たちはキリストの殉教者の清らかな肉体を苛んだ。　しかし、聖フォカスはこれらすべてを勇敢に耐え抜いた。彼は天の高みから、自分を力づける声を聞いていた。イエス・キリストを呼び求めながら、あらゆる苦しみを軽んじて、拷問に耐え抜いた。　彼は、御自身を惜しまず、私たちのために十字架上で苦しまれた方のために、自らの肉体を惜しまなかった。この苦しみは、聖フォカにとってまるで天国の涼しさのようであった。かくして彼は、私たちのために苦しまれた主の御名を告白しつつ、勇敢に苦痛に耐え抜いた。主のために苦しんだこの忠実なしもべにとって、耐え難いものなど何一つなかった。　たとえ全世界から拷問者が集まろうとも、あらゆる拷問が考案されようとも、それでも彼は、愛する主のためにすべてを耐え忍ぶ覚悟があり、預言者ダビデと共にこう叫んだ。*「神よ、わが心は備わっています」*（詩編107:2）。　拷問者たちは彼

[6419] シノプの町は、黒海の南岸に位置している。

を激しく焼けた鉄板の上に置いたが、その鉄はたちまち冷めてしまった。聖人の心は神への愛に燃えており、この霊的な炎が、肉体的火の力を打ち負かしたからである。　そして、彼のために考え出されたあらゆる拷問において、聖フォカスは勝利者となった。なぜなら、彼の周囲には天使の軍勢が現れ、言葉に尽くせない神の光が輝いていたからである。　牢獄では天の光が彼を照らし、束縛の中でも彼は天の自由への希望に喜び、苦難の中では天使たちに慰められ、傷を負った時にはイエス・キリストによって力づけられた。　数多くの様々な拷問を受けた後、彼は燃え盛る蒸し風呂に投げ込まれ、そこで祈りを捧げながら、その霊を神の御手に委ね[6420]、祝賀に満ちた教会 において、勝利者の冠を受けるにふさわしい者とされた。彼の聖なる遺体は信者たちによって栄誉をもって埋葬され、その棺の周りでは多くの奇跡が起こった[6421]。

コンダク、第6調：

司教として父なる神に犠牲を捧げ、ついに自ら生ける犠牲となり、キリストなる神を正しく証しし、天使たちに支えられ、死を甘受された。我らと共に「フォコよ、我らのもとに来てください。我らに敵う者など誰もいない」と叫ぶ者たちと共に。

「果樹園の守り手」と呼ばれる聖殉教者フォカスの生涯と受難[6422]

記念日：9月22日

同じシノペの町に、しかし別の時代に、別のフォカという人物が住んでいた。彼は海の近くに庭を作り、そこに様々な野菜を植え、それを売って、自分自身と貧しい人々の生計を立てていた。彼は自分の庭の野菜の一部を道端に置いて、通りすがりの人々が誰でも持ち帰れるようにしていた。というのも、彼は隣人への深い愛と旅人への慈愛に満ちており、物質的な果樹園よりもむしろ、自らの魂の中に果樹園を築き上げていたからである。敬虔さに満ち、心に清らかな思いを抱きながら、彼は美徳の実を結んでいた。それゆえ、彼の聖なる魂は、聖書に記されているように、「聖霊の果樹園」と呼ぶにふさわしかったのである。*「閉ざされた園よ、わが姉妹、わが花嫁よ」*（雅歌4:12）；また、「*御霊の実とは、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、忠実、柔和、自制である*」（ガラテヤ5:23）。

福者フォカは美徳によってこれほどまでに守られていたため、私たちの原初の母から楽園の庭における至福を奪った古の盗人――悪魔でさえ、聖フォカから美徳を奪うことはできなかった。　聖人は自らの救いを熱心に求め、使徒の言葉を畏れつつ心に留めていた。*「目を覚まし、警戒しなさい。あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうとしてうろついているからです」*（Iペテロ5:8）。こうして聖人は精進し、その敬虔な生き方の評判は人々の間に広まった。　美徳は、燃えるろうそくのように隠れることはできず、夜の闇の中でも遠くから輝きを放つ。それと同じように、聖フォカもまた、まるで闇の中にあって、不信仰で堕落した人々の間でその敬虔さによって輝き、多くの人々を光への認識へと導いた。　聖人に関する噂は、この国の不信心な公爵の耳にも届いた。公爵には、フォカが自ら十字架にかけられた方を信じているだけでなく、他の人々をも自らの後を追ってその方へと導いていると伝えられた。そこで公爵は、キリストの僕を殺すよう家来たちを遣わした。家来たちは直ちに出発し、フォカを探し出して彼を殺害しようとした。

彼らを出迎えたのはフォカ自身であり、こう尋ねた。

[6420] 聖殉教者フォキスの逝去は117年にあった。

[6421] 7月22日には、彼の尊い遺骨がポントスからツァールグラードへ移送されたことが祝われる。

[6422] ヴェルトグラダルとは、果樹園や菜園の管理人、すなわち園丁のことである。

「誰を探しているのか？」

彼らは答えた。

「フォカを探しているのです。」

すると、フォカは言った。

「さあ、私のところへお越しください、諸君。彼についてお話ししましょう。」

そう言うと、彼は彼らを自分の家へ案内し、もてなした。それは、聖書の言葉『*もし敵が飢えていれば、パンを与えよ。渇いていれば、水を飲ませよ*』（箴言25:22）に従い、敵に対してもそうすべきだからである。

使用人たちがワインを口にしたとき、フォカは彼らに尋ねた。

「なぜ、この男を探しているのですか？」

すると、彼らは彼にその秘密を打ち明けた。

「我々は彼を拷問にかけるために探しているのです。彼は我々の神々を崇拝せず、十字架にかけられた方を崇めているという理由で、公爵が我々に彼を殺すよう命じたからです。」

フォカは彼らにこう頼んだ。

「お願いです、諸君。朝まで私の家で待っていてください。ご馳走を食べ、酒を飲んでください。明日、私が彼をあなたたちに引き渡します。私ほど彼をよく知っている者はいません。彼はここからそう遠くないところに住んでいます。今はどこかへ出かけていますが、すぐに戻ってくるでしょう。その時には、彼をあなたたちの手に引き渡します。」

使者たちは同意し、聖フォカの家で宴を催した。一方、フォカはこの間に自分の庭に棺を用意し、埋葬に必要なものをすべて整え、財産を貧しい人々に分け与え、一晩中祈りを捧げて死に備えていた。朝になると、公爵から遣わされた家来たちは起き上がり、彼に尋ねた。

「あなたが我々の手に引き渡そうとしていたフォカは、ここにいるのか？」

すると聖人は喜びながらこう答えた。

「はい、ここにおります、諸君。彼を好きに扱ってください。」

すると、家来たちは尋ねた。

「では、彼はどこにいるのか？」

聖人は答えた。

「私が、あなたがたが探しているフォカです。私はイエス・キリストのしもべです……私はあなたがたの忌まわしい神々を拒みます。私を殺してください。」

これを聞いて、使者たちは驚いた。彼らは恥を感じ、この男の血で自分の手を汚すことを望まなかった。というのも、彼は彼らを温かく迎え入れ、もてなしてくれたからである。彼らは立ち去ろうとして、彼にこう言った。

「我らは領主に、至る所でフォカを探したが、どこにも見つからなかったと報告しよう。」

しかし、彼は彼らに懇願し始め、彼らの足をつかんで、命じられたことを果たすよう懇願し、こう言った。

「私のもてなしに対する報いとして、私がお願いしていることほどふさわしいものはありません。なぜなら、それによって、あなたは私を肉の束縛から解き放ち、私が切望するキリストと結ばれることができるからです。」

このように、聖フォカスは肉体の束縛から解き放たれ、キリストと共に生きることを切望していた。彼はキリストのために自らの血を流すことをこれほど強く望み、神への愛があまりにも深かったため、こう語った。

「*あなたの慈しみは、命よりも尊い*」（詩編62:4）。

こうして、彼は家来たちに懇願し、殉教の冠を受け入れた。剣で首を刎ねられた後、彼は地から天へと旅立った[6423] 。彼の聖遺体は、彼自身が用意した棺に埋葬された。その後、その地方で敬虔さがさらに広まると、殉教者の墓の上には、彼にちなんで名付けられた教会が建てられた。 そして多くの信者たちが、キリストの殉教者の聖遺物から恵みを受け、ある者は病の癒やしを、ある者は悲しみの中の慰めを、またある者は聖殉教者フォキスの祈りによって苦難からの助けを得た。 シノペの街だけでなく、全宇宙、陸でも海でも、信仰をもってその名を呼び求め、その祈りに身を委ねるすべての人々にとって、聖人は苦難における偉大な恩人であり、迅速な助け手であった。 航海者たちは、聖フォカに助けを求めるのが習慣となっていた。というのも、彼は何度も彼らの前に現れたからである。夜、波が高くなると、眠っている舵手を起こしたり、自ら帆を揚げているのが見られたり、時には船首に姿を見せたり、あるいは海の上を歩いている姿が見られたりした。 黒海やアドリア海、そして大洋を航行する多くの船で、聖フォカの名は称えられていた。船員たちはいつもの歌の代わりに、聖フォカを称える賛美歌を歌うようになり、その結果、航海者たちの口からは常にその名が語られていた。 彼らは、災難の時だけでなく、楽しい時にも聖フォカを思い出した。彼らには次のような習慣があった。食事や何かの饗宴の席に着くと、聖フォカに捧げるために食べ物や飲み物の一部を取り分けていた。 食卓に同席していた誰かがその分け前を買い取り、その売却代金は特別な壺に集められました。こうして毎日、食事の一部を聖人に捧げ、次々と誰かがその分け前を買い取っていきました。今日は一人、明日は別の人、その次は三人目……最初の人から最後の人まで、全員が順番にその分け前を買い取り、その代金を集めたのです。 そして彼らが岸に戻ると、これらの分け前を売って集めたお金を、貧しい人々、病める者、孤児、そして旅人たちに配った。

この慣習は、聖十字架の敵たちが――私たちの罪ゆえに神の御許しを得て――これらの国々すべてを[6424] に占領するまで、長年にわたり守られていました。彼らは聖なる信仰を激しく弾圧し、キリスト教徒の数を減らしました。しかし、今もなお、万人の共通の守護者である聖フォカスは、この世の海を航海する者たちを助け続けています。 主に向かって熱心に私たちのために祈りつつ、私たちを天の安息の地へと導いてくださいます。どうか、このキリストの殉教者の祈りによって、私たちがあらゆる沈没、波乱、嵐から救われますように。今、常に、そして世々限りなく。アーメン。

聖預言者ヨナの伝

記念日：9月22日

聖預言者ヨナはアマフィ人の子であり、ガフヘフェルという町[6425] の出身であった。 伝承によれば、その母は、飢饉の際に預言者エリヤに食糧を与え、彼を通じて自らも養われた、あのサレプタの未亡人[6426] その人であった。主が地に雨を降らせられるその日まで、彼女の甕の中の小麦粉は尽きず、水瓶の中の油も減ることはなかったからである。 その間、当時まだ幼かったヨナは病に倒れ、亡くなってしまった。すると、その未亡人はエリヤにこう言った。

「神の人よ、私はあなたに何をしたというのですか。あなたは私の罪を思い起こさせ、息子の死をもって私を罰するために、私のところに来られたのですか。」

[6423] これは320年頃のことである。

[6424] ここでいう「ムスリム」とは、トルコ人を指す。1214年、シノプはセルジューク朝トルコ人の支配下に入り、それから2.5世紀後、1461年に再びムスリム（オスマン・トルコ人）によって征服された。 すなわち、コンスタンティノープルを征服し、ビザンツ帝国の廃墟の上にトルコ（イスラム）帝国を築いたメフメト2世によってである。

[6425] ヨハネ1:1; 列王記下14:25。ヨシュア記の記述によれば、約束の地がイスラエルの子らにくじ引きによって分配された際、ガフヘフェルはザブルンの部族に割り当てられ、ガリラヤ（パレスチナ北部）の北部、ティベリアスへの道沿い、ナザレの上方に位置していた。

[6426] 3列王記17:14–23。シドンのサレプタ――シドンからほど近い場所に位置するフェニキアの都市。

すると、エリヤは彼女に言った。

「あなたの息子を私に渡してください。」

エリヤは彼女から少年を受け取ると、自分が住んでいた部屋へ連れて行き、自分の寝床に寝かせた。それから、主に向かって叫び、こう言った。

「主よ、私の神よ。まさか、私が滞在しているこの未亡人に対しても、その息子を死なせるという悪を行われるおつもりでしょうか。」

そして、その少年に三度息を吹きかけ、こう祈り始めた。

「主よ、わが神よ。どうかこの少年の魂をその体に戻してください。」

主は御自身の聖なる預言者の祈りを聞き入れ、その願い通りに成し遂げられた。少年の魂は体に戻り、彼はよみがえった。

成人すると、ヨナは徳高い生活を送り、主のすべての戒めを揺るぎなく守った。彼は神にこれほどまでに喜ばれたため、伝承によれば、まもなく預言の賜物を受け、他の予言の中でも、主の受難、エルサレムの荒廃、そして世界の終焉について予言した。

「いつの日か」と彼は語った。「石が細く哀れな声で叫ぶのを耳にし、木から神への呼びかけが響き渡るとき、その時こそ救いが近づき、すべての民が主を礼拝するためにエルサレムへと向かうだろう。　一方、獣たちで満ちたエルサレムは、荒廃という忌まわしさの中にあり、その時、すべての生きとし生けるものの終わりが訪れるだろう。

神から天より預言の賜物を受けたヨナは、預言者エリシャの後を継いで公の預言者としての務めに就き、エリシャ自身がエリヤの業を継いだように、彼もまたエリヤの業を継ぐ者となり、エリヤと一つの霊を分かち合ったのである。　古代ユダヤの伝承によれば、聖なる預言者ヨナはエリシャの弟子[6427] であり、当初は預言者エリヤが、その後エリシャが率いた「預言者の子ら」の学校に属していた。ヨナは、エリシャによって、イェフーを イスラエルの王位[6428] に油注ぐために遣わされた「預言者の子ら」の一人であった。　エリシャの死後、ヨナは彼の後を継いだ。強大なシリア王国との戦いを控えていたイスラエルの王エレボアムに勇気を与えるため、預言者ヨナは神からの命を受け、この戦争における彼の偉大な勝利を予言し、　そして、エレボアムはその言葉に従い、エマフから死海に至るまでイスラエル王国の境界を回復し、こうしてシリア人によって奪われていた王国の古の領土を取り戻した[6429] 。

その同じエレボアムの治世中、ヨナは新たな使命を授かった。彼は神から、不義であり、イスラエル人に対して敵対的な異邦人たちに悔い改めを説くために出向くよう命じられた。

「立ち上がれ」と主は彼に命じられた。「ニネベ――あの大いなる都[6430] ――へ行き、そこで説教せよ。その悪行がわたしの耳に届いたからである。」

しかし、預言者は神の命令に従わなかった。彼は、神が慈愛深く、憐れみ深く、忍耐強く、恵みに満ちたお方であるため、ニネベの人々が自分の罪を悔い改めれば、神は彼らを憐れんでくださるだろうと考えていた。　それゆえ、彼はニネベの滅亡に関する自分の預言が実現せず、自分が詐欺師

[6427] エリシャ――イスラエルの著名な預言者であり、預言者エリヤの弟子かつ後継者。

[6428] 4列王記9:9–22。――イスラエル人の中で、「預言者の子ら」と呼ばれたのは、預言者たちの弟子たちであり、彼らは共同体を形成し、預言者たちの直接的な指導の下で育てられていた。　これらは厳密な意味での学校ではなかったが、それでもなお、その召命を受けた若者たちはそこで預言者としての奉仕に備え、これらの中心地から民衆へと宗教教育が広まっていった。

[6429] 列王記下14:25。ここから、エレボアムとその先代であるヨアスの治世にさかのぼるヨナの預言者としての奉仕の時期も特定される。したがって、ヨナはイスラエルで最も古い預言者の一人であり、紀元前9世紀に生きていた。

[6430] ニネベはアッシリア人の主要都市であり、当時ユダヤ人はアッシリア人と敵対関係にあった。この都市はメソポタミアのティグリス川の東岸に位置していた。　そこは古代世界でもっとも人口が多く、最も豊かな都市であり、周囲は約84ヴェルストあった。これは、ヨナ書における「三日間の道のり」という聖書の記述（ヨナ3:3）と完全に一致する。というのも、東方の諸民族における一日の道のりは、私たちの25～30ヴェルストに相当するからである。

と見なされ、イスラエルの神の名そのものが非難や嘲笑にさらされることを恐れた。　彼は心の底から、この不義な町――その住民がイスラエル人に対してこれほど敵対的で危険であった――への憐れみさえも望んでいなかった。同時に、神への不従順の重さを痛感し、ヨナは恐れと悲しみの中で、神の御前から逃げ出した。　しかし、誰も神から隠れることはできない。*「地と、その中にあるすべてのものは、主のものだから」*（詩篇23:2）である。「至る所に臨在し、万物を満たしておられる方」から、誰が逃げられようか。

逃亡の途中、ヨナはヨッピにたどり着き、そこで遠く離れたファルシスへ向かう船を見つけた[6431]。運賃を支払うと、彼は船に乗り込み、遠い旅路へと出発した。しかし、主は御自分のしもべに悟りを与えようと、激しい風を吹き起こされ、海には大嵐が巻き起こった。激しい波が船を左右に激しく揺さぶり、もはや船は砕け散りそうだった。船員たちは恐怖に襲われ、それぞれが自分たちが崇め、守護神として仰いでいた神々に叫び求めた。　その一方で、船の余分な重さを減らして差し迫った危険を和らげようと、彼らは積荷を海に投げ捨て始めた。ただヨナ一人だけが何もしなかった。彼は船の奥へ下り、そこで横になり、ぐっすりと眠り込んでしまった。

そこへ、舵手がヨナのところへやって来て、このような危険な状況の中で彼が眠っているのを見つけると、彼を起こして、恐怖に震えながらこう言った。

「なぜ眠っているのか？　起き上がって、あなたの神に叫べ。そうすれば、神が私たちのことを思い出してくださり、私たちは滅びずに済むかもしれない。」

しかし、嵐は収まる気配もなく、その危険も和らぐことはなかった。そこで船乗りたちは互いにこう言い合った。

「さあ、くじを引いて、この災いが誰のせいかを確かめよう。」

彼らはくじを引くと、くじはヨナに当たった。そこで彼らは彼に尋ねた。

「教えてくれ、なぜ私たちにこの災いが降りかかったのか。あなたの職業は何か、どこから来たのか、あなたの国はどこか、そしてどの民族に属しているのか。」

ヨナは言った。

「私はユダヤ人で、海と陸を創造された天の主なる神を崇めています。」

それから彼は、神の御心に背いたこと、そして神の前で罪を犯し、恐れおののいて今、神の御前から逃げていることを彼らに語った。これを聞いた船乗りたちは大いに恐れおののき、神の御心に背いた彼の罪に戦慄し、叫んだ。

「なぜそんなことをしたのか？」

ヨナに死を宣告するくじが当たり、彼ら自身も破滅の危機に瀕していたにもかかわらず、彼らは、人間愛からだけでなく、ヨナの背きに対して嵐を巻き起こした全能のイスラエルの神への畏れからも、彼に対する判決を執行することを拒んだ。　この神の使者であると彼を認めた彼らは、彼にこう尋ね始めた。

「海を静めるために、私たちはあなたをどう扱えばよいのか？」

しかし、嵐は収まる気配がなく、波はますます激しくなっていった。そこでヨナは彼らに言った。

「私を捕らえて海に投げ込め。そうすれば、海はあなたたちのために静まるだろう。この大嵐が、私のせいであなたたちに降りかかったのだと、私は知っているからだ。」

しかし、船乗りたちは依然として迷っていた。彼らはヨナを並外れた人物と見なし、彼を通じてイスラエルの全能の神を冒涜することを恐れていた。それどころか、海が依然として彼らに猛威を

[6431] ファルシス、あるいはタルテスは、古代イベリア（スペイン）の南西端、ベティス川（グアダルキビル川）沿いにあった古代フェニキアの植民地である。

振るい続ける中、彼らは陸にたどり着こうと懸命に漕ぎ始めた。そしてついに、彼らはヨナに対する判決を執行することを決意した。しかし、それを実行する前に、彼らは主にこう叫んだ。

「主よ、どうかこの人のために私たちが滅びることのないよう、また、私たちに無実の者の血の罪を負わせないでください。主よ、あなたは御心に適うことをなされたのですから。」

そして彼らはヨナを捕らえて海に投げ込んだところ、たちまち海の荒れは収まった。　そこで、船に乗っていた者たちは皆、この嵐がヨナの罪に対する罰として神によって送られたものであると、さらに強く確信し、神の全能を恐れ、神への畏敬の念に満たされて感謝のいけにえを捧げ、神を崇めることを誓った。

その間、預言者ヨナは神の御命により、クジラに飲み込まれ、そのクジラの腹の中で三日三晩を過ごした[6432]。海に投げ出され、鯨に飲み込まれたヨナは、死を覚悟するほどの悲しみを禁じ得なかった。しかし、特に無傷であることに気づいたとき、彼は冷静さを失わなかった。彼の中には、主が再び神の光を見させてくださり、海の深みから救い出してくださるという希望が湧き上がった。この希望に満たされ、彼は主なる神に祈りを捧げ、主の前で自分の罪を悔い改めた。悲しみと悔い改め、そして同時に神への感謝の念を注ぎ出しながら、ヨナはクジラの腹の中からこう叫んだ。

「私は苦しみの中で主に叫び求めたところ、主は私を聞いてくださった。陰府の腹の中から私は叫んだところ、あなたは私の声を聞いてくださった。あなたは私を深淵、海の底に投げ込み、激流が私を取り囲んだ。あなたのすべての水と波が私の上を通り過ぎた。　そして私は言った。「私はあなたの御目から追い出された」と。すると、激流が私を取り囲み、あなたのすべての水と波が私の上を通り過ぎた。水は私の魂にまで達し、深淵が私を閉じ込め、私の頭は海草に覆われた。　私は山の根元まで降り、地はその障壁をもって、永遠に私を閉じ込めた。しかし、主、私の神よ、あなたは私の魂を陰府から救い出してくださる。　私の魂が力尽きたとき、私は主を思い起こし、私の祈りはあなたのもと、あなたの聖なる宮に届いた。虚しく偽りの　神々を崇める者たちは、彼らの慈悲深い恩

[6432] 預言者ヨナがクジラの腹の中で過ごした三日間は、救い主キリストが地中に留まられた三日間を予表している。イエス・キリストご自身が、預言者ヨナの予型としての意義について次のように証言されている。*「ヨナが鯨の腹の中に三日三晩いたように、人の子もまた、地の中心に三日三晩いるであろう」*（マタイ12:39–40）。救い主はご自身をヨナに例えてこう言われます。*「ニネベの人々は、この世代と共に裁きの座に立ち、この世代を裁くであろう。彼らはヨナの説教によって悔い改めたからである。見よ、ここにはヨナよりも偉大な者がいる」*（マタイ12:41）。　このように、ヨナはその奉仕と生涯において、イエス・キリストの死、復活、そして宣教を予表していた。教父たちはこれについて次のように述べている。「逃亡した預言者は船に乗り込み、キリストは木に登られた。海には激しい嵐が巻き起こったが、この海の荒れ狂いはユダヤ人たちの不信仰である。　預言者は海に投げ込まれるというくじを引き当てた。このくじは、キリストが苦しみと死の深淵へと降りていくという父の御心を表している。ヨナは自ら進んで海に投げ込まれることに同意し、イエス・キリストは自ら進んで十字架に上られた。ヨナは船から海へと降りていく。　キリストは十字架から棺へと、そして地の深淵へと降りていかれる。ヨナは嵐に遭った人々を救うために自らを犠牲にする。キリストは、罪の波に翻弄される人類を救うために死なれる。獣に飲み込まれながらも食われなかった預言者は、その腹の中で祈る。　イエス・キリストは死に打ち倒されたが、死に支配されることはなく、すべての人々のために祈られた。ヨナはクジラの腹の中で無傷のままであった；イエス・キリストの御体は、墓の中で無傷のままであった。ヨナはクジラの腹の中に三日三晩留まった；イエスは三日三晩、地の中心におられた。　ヨナは三日目に無傷のまま鯨の腹から吐き出された。イエス・キリストは、御自身の神性の力によって、三日目に朽ちることなく墓からよみがえられた。死からの奇跡的な救いを受けた後、ヨナはニネベの人々に悔い改めを説きに行った。キリストの復活後、その教えは異邦人たちに宣べ伝えられた。　ヨナの災難に満ちた航海の時期まで、ニネベは悔い改めの説教を聞いたことがなく、神の怒りを招いていたが、その後、預言者はその説教によってニネベの人々を主の怒りから救った。　このように、キリストの死と復活によってのみ、罪の深淵に沈んでいた人類は、罪と呪いと死から救われ、神と和解するのです。

人を見捨てた。しかし私は、賛美の声を上げてあなたに捧げ物をささげ、誓ったことを果たす。救いは主にある[6433]。

ヨナの祈りは聞き入れられた。慈悲深い主は、神の御心に背いたことに対して御自分のしもべを懲らしめたが、彼の死を望まなかったため、鯨にヨナを陸地に吐き出させるよう命じられた。日の光、空、大地、そして海を目の当たりにしたヨナは、自分を死から救ってくださった神に熱心に感謝を捧げた。

その後、再び主の御言葉がヨナに下った。

「立ち上がり、大いなる都ニネベへ行き、そこで、わたしがすでにあなたに命じたことを宣べ伝えなさい。」

そこでヨナは立ち上がり、ニネベへ向かった。ニネベは、周囲を回るのに三日かかるほど大きな町であった。ヨナは一日に歩ける範囲だけ町を歩き回り、こう宣べ伝えた。

「あと四十日すれば、ニネベは滅ぼされる。」

預言者ヨナの言葉は簡潔で威圧的であり、どうやらニネベの差し迫った滅亡を断固として予言しているようだった。　しかし、町の住民たちは、神が彼らの滅亡を定めていながらも、理由なくその執行をしばらく先延ばしにしていること、すなわち、この四十日間が間違いなく悔い改めのための猶予として与えられていることを悟り、預言者ヨナを通じて神から告げられた言葉を信じた。　彼らは断食を宣言し、年長者から幼子に至るまで、皆、粗布を身にまとった。ヨナの説教は、強大なニネベの王の耳にも届いた。　――王は玉座から立ち上がり、王の衣を脱ぎ捨て、粗布を身にまとい、灰の上に座した[6434]。その後、王は自らの名と高官たちの名において、ニネベ全土に布告を下し、人、家畜、牛、羊を問わず、何も食べてはならず、　牧草地へ出たり水を飲んだりしてはならないこと、また、人と家畜は粗布を身にまとい、神に熱心に叫び求め、一人ひとりが自分の悪しき道と、自分の手の暴虐から立ち返るよう命じた。

「誰が知るだろうか」とニネベの人々は言った。「もしかすると、神はまだ憐れみ深く、燃え盛る御怒りを私たちから退けてくださり、私たちは滅びずに済むかもしれない。」

その希望は、悔い改めたニネベの人々を裏切らなかった。神は彼らの砕かれた心と悔い改めの行いをご覧になり、ご自身の定めを取り消し、彼らを憐れみ、御自身の預言者の口を通して予告されていた災いを彼らに下すことはなかった。

しかし、神がニネベの人々の悔い改めを見て彼らを憐れむことを喜ばれたのに対し、預言の不可変性という従来の考えに固執し、人間の弱さゆえに神の限りない憐れみを理解できなかったヨナは、悔い改めた罪人たちにすぐに憐れみが与えられたことに深く憤りを感じた。　四十日間の説教が終わると、彼は町を出て、町の東側にある山に登り、そこで茂みを作り、その陰に座って、町に何が起こるかを見守った。しかし、町に何事も起こらなかったのを見て、彼は深い悲しみに沈み、祈りの中で神にこう叫んだ。

「ああ、主よ！　私がまだ故国にいたとき、まさにこう言ったではありませんか。それゆえ、私はファルシスへと逃げたのです。あなたは慈愛に満ち、憐れみ深く、忍耐強く、恵みに富んだ神で

[6433] クジラの腹の中でヨナが捧げた祈りは、カノンの第6歌の基礎となっている。聖なる教会は、ヨナの航海に、救い主の苦難と墓の中での滞在を予表するものだけでなく、私たちの人生の姿をも見出している。　嵐に襲われ、波に飲み込まれたヨナの船を、聖教会は、世の海の波に翻弄され、罪によって沈められ、霊的な獣――悪魔――に捕らえられようとする私たちの魂に例えています。　ヨナが打ち上げられた救いの岸を、教会は、私たちの魂が神の中に見出す静かな安息の地になぞらえています。 この考えに基づき、彼女は毎日、早課の第6歌のカノンにおいて、ヨナの悔い改めの歌を私たちに思い起こさせ、その言葉を私たちの口に込めることで、ヨナが鯨の腹の中で祈ったように、私たちも熱心に祈り、神が私たちの霊の朽ち果てから、私たちの霊の命を甦らせてくださるよう願うよう促している。

[6434] これらは、東方の諸民族の間で一般的な悲しみと悔恨の表現であった。

あることを知っていたからです。今、主よ、私の魂を私から取り去ってください。生きるよりも死ぬほうがましです。」

そこで、主なる神は夜、ヨナの頭上に蔦の植物（[6435] ）を伸びさせ、彼を太陽の灼熱から、そして同時に悲しみからも救われた。預言者は、このことに安らぎを見出し、その悲しみに満ちた心を慰めたからである。　ヨナは、このことに、その場に留まり、この町に何が起こるかを待つという神の御心の示しを見出すことができた。それはまた、神が何らかの奇跡的な方法でニネベに対する裁きを覆してくださるという希望を、彼の中に抱かせたかもしれない。　同時に、明らかに奇跡的な日陰を作る植物の出現の中に、ヨナは神による自分への特別な配慮を見出した。　彼の心は喜びに満ち、神が自分を見捨てたという考えから生じていた悲しみ（　）は喜びへと変わり、ヨナはその日一日中、生い茂った植物の下に留まり、灼熱の太陽から身を隠していた。

しかし、ヨナがその木陰に抱いた喜びは長くは続かなかった。翌日、夜明けとともに、神の御命令により、虫がその木を食い荒らし、木は枯れてしまった。

やがて太陽が昇ると、神は灼熱の東風を吹きつけ、太陽がヨナの頭を照りつけたため、彼は力尽きて死を願った。

「生きるよりは、死んだほうがましだ」と彼は言った。

すると、神はヨナに言われた。

「植物が枯れてしまったことで、それほどまでに悲しんでいるのか。」

ヨナは答えた。

「死ぬほど悲しんでいます。」

そこで、神は預言者を父のように諭して言われた。

「お前は、自分が労力を費やしたわけでもなく、育てたわけでもない植物を惜しんでいる。それは一晩で生え、また一晩で消えてしまったものだ。それなのに、右と左の区別もつかない[6436] 、そして数多くの家畜がいた、十万人以上の人口を抱える大都市ニネベを、私が憐れまないはずがあるだろうか？」

その後、四十日が過ぎてもニネベの滅亡は起こらず、むしろ太陽が輝いたとき、ニネベの人々はこれを神の慈悲と赦しのしるしと見なし、救われたことへの感謝として、街から出て預言者ヨナのもとへ行き、エルサレムの神殿への献げ物を贈った。　神の怒りを告げる預言によって時宜を得て彼らを改心させたニネベの人々の感謝に包まれながら、ヨナは平和のうちにニネベを後にし、故郷の地へと帰った。　そこで神に喜ばれる生活を十分に送った後、聖なる預言者ヨナは安らかに息を引き取り、故郷の町に埋葬された[6437] 。そして今、天においてキリスト・神の御前に立ち、その御顔を仰ぎ見ながら、預言者たちや使徒たち、そしてすべての聖徒たちと共に、永遠に神を賛美している[6438] 。アーメン。

[6435] ヘブライ語の原文にはここで「キカイオン」という言葉があり、これはツタのような特別な木陰を作る木、あるいは一部の翻訳者が指摘するように、数日で木陰を作る木の高さまで成長するヒメツタを指しています。しかし、根元を虫に食われることが多いため、同様に急速に枯れてしまうこともあります。

[6436] この名称は、おそらく幼い子供たちを指すものと考えられ、その場合、ニネベの住民数は通常64万5000人と推定されている。

[6437] 没年：紀元前800年頃――預言者ヨナの説教後の生涯については伝承からしか知られておらず、最も古い伝承によれば、彼は故郷の町で亡くなり、その地には今も彼の墓が指し示されており、イスラム教徒たちは彼を称えて壮麗なモスクを建てたという。　別の伝承によれば、預言者はニネベに残り、モスル近郊のその廃墟の中にも彼の墓があるとされ、そこはキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒のすべてから敬虔な崇敬の対象となっている。　前者の見解は、『マカバイ記第三』の記述によって裏付けられている。そこには、神が「*海の深みに住む鯨の腹の中で絶望的に苦しんでいたヨナを、無傷のまま、彼に親しい者たち全員に現された*」と記されている（マカバイ記第三6:6）。

[6438] 預言者ヨナの名前は、小預言書のうちの第五巻の題名として用いられており、その内容は、悔い改めを説くためにヨナがニネベへ派遣された使節の物語である。ヨナの使節の目的は、ニネベの救いだけでなく、当時異民族に対する不寛容

尊者イオナ司祭の記念日

記念日：9月22日

尊者イオナ司祭はパレスチナに暮らし、聖テオドロスおよび聖テオファン「ナチェルタン」の父であった。彼らは聖像を崇敬したために、聖像破壊派の皇帝たちから多くの迫害を受けた[6439]。イオナ　は、神を畏れる心と徳高い生活で際立っており、とりわけ巡礼者への愛やその他のキリスト教的慈愛の行いに熱心に取り組んだ。彼は愛情を込めて息子たちの教育に尽力し、まだ家庭にいる頃から自ら彼らに学問の知恵を教え、とりわけ敬虔の規範について指導した。　成熟した年齢となり、老齢に近づくにつれ、イオナは神の御心により妻を亡くし、残りの生涯を神への完全かつ献身的な奉仕に捧げることを決意した。　彼は、聖なる修道士たちの功績で名高い、人里離れた聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイ修道院へと身を寄せた。そこは、かつて彼の聖なる息子たちも修行に励んでいた場所であった。　そこで彼は修道服をまとい、その修道院の修道士たちの聖なる苦行の生活に倣い、さらに深い神への畏敬の念を培い、畏れをもって自らの救いを築き上げた。

イオナは絶えず厳しい断食と、熱心で神を想う祈りに身を捧げていた。自身の救いを祈りつつも、　彼は、自分が去ってきた世のことを忘れず、心を痛め、隣人への愛に燃えながら、キリスト教の繁栄、聖なる教会の平和、そして王たちの敬虔さについて、神に熱心に祈った。というのも、当時のビザンツの王たちは、当時、聖像破壊派の教会へと傾き、神の教会の平和を乱していたからである[6440]。このような徳高い生涯を送る中で、イオナは高齢に達し、神に喜ばれる生き方によって、神から癒しの恵みの賜物を授かった。平穏に最期を迎え、彼は喜びをもって、その聖なる至福の魂を、常に清く熱烈な愛を燃やし続けていた主[6441]に委ねた。

かつて徴税人であった聖ペトロの生涯[6442]

記念日：9月22日

アフリカには、ペトロという名の、冷酷で慈悲のない徴税人が一人住んでいた。彼は貧しい者たちを憐れむことは決してなく、死について考えることもなく、神の教会に通うこともなく、物乞い

さを強めていたユダヤ人自身への戒めでもあった。　主は預言者に、救いは異邦人にも与えられるものであると悟らせ、ユダヤ人に対しては、悔い改めなければ彼らも滅び、その地位を異邦人に奪われることになるとして、改心するよう戒められます。　ここから、すべての民族をキリストの教会へと招く新約聖書の使徒的説教を先取りした、ヨナによる説教の新たな予型的な意義が導き出される。　預言者ヨナ書およびヨナ自身にこのような意味があることは、救い主ご自身の言葉にも示唆が見出せる。救い主は、ユダヤ人、とりわけパリサイ人たちの悔い改めのなさ、不信仰、そして洗礼者ヨハネの悔い改めの説教に対する無関心を叱責し、次のように語られた。　*「ニネベの人々は、この世代と共に裁きの座に立ち、この世代を裁くであろう。彼らはヨナの説教によって悔い改めたからである。見よ、ここにはヨナよりも偉大な者がいる」*（マタイ12:41）。 – 預言者ヨナの書は、救い主の復活に関する旧約聖書の他の預言と同様に、聖大土曜日の晩課の礼拝において全文が朗読される。

[6439] 聖テオドロス・ナチェルタンヌイの記念日は、12月27日に教会によって祝われる。「彼らが『ナチェルタンヌイ』と呼ばれるのは、イコン崇拝を理由にビザンツ帝国のイコン破壊派皇帝たちから受けた拷問の中で、　彼らの狂気を嘲る不名誉な詩句が体に刻まれ、その苦痛を伴う刻印により、赤熱した針で顔に目まで焼き付けられたからです。聖テオファンは、著述家およびカノンの作成者としても知られています。

[6440] 聖イオネの同時代人であるビザンツ皇帝には、レウ5世アルメニア人（813–820年）、ミカイル2世バルバ（820–829年）、テオフィロス（829–842年）が挙げられる。　偶像破壊の異端は、8世紀前半にビザンツで発生し、9世紀半ば（842年）まで続いた。

[6441] 聖イオーン司祭は、9世紀前半に逝去した。

[6442] ミタリスとは、税の徴収官のことである。

をする者たちに対して常に心を閉ざしていた。　しかし、慈愛に満ち、人を愛する神は、罪人の死を望まれるのではなく、すべての者の救いを顧みられ、その測り知れない御摂理によって一人ひとりを救われる。神はこのペトロにも御慈悲を示され、次のようにして彼を救われた。

ある日、路上で座っていた貧しい人々が、自分たちに慈悲深く接してくれる人々を称え、彼らのために神に祈り、一方、無慈悲な人々を非難し始めた。　そう話しているうちに、彼らはペトロの話題にも触れ、彼が彼らにどれほど残酷に振る舞っているかを語り合い、互いに「ペトロの家から施しをもらったことがある者はいるか」と尋ね合いました。しかし、そのような人は一人も見つからなかったため、貧しい人々の一人が立ち上がり、こう言いました。

「もし私が今すぐ行って、彼に施しを乞うたら、皆さんは私に何を与えてくれますか？」

話し合いの末、彼らは保証金を集め、その乞食は出かけてペトロの門の前に立った。ほどなくして、ペトロが家から出てきた。彼は、公爵の昼食用のパンを積んだロバを連れていた。　乞食は彼に頭を下げ、大声で施しを請うた。ペトルはパンを掴むと、それを乞食の顔に投げつけ、立ち去った。パンを拾い上げた乞食は仲間のところへ戻り、こう言った。

「ペトロ自身の手から、このパンを受け取ったのだ。」

そう言うと、彼は主を賛美し、ペトルがこれほど慈悲深いことを主にお礼を述べた。二日後、徴税人は重病に陥り、死の淵にまで追い込まれた。すると、彼は幻の中で、自分が裁きの場に立っており、自分の行いが天秤にかけられているのを見た。　天秤の片側には、悪臭を放つ邪悪な精霊たちが立ち、もう片側には、明るく端正な姿の男たちが立っていた。　邪悪な精霊たちは、徴税人ペトロが幼い頃から生涯を通じて犯したあらゆる悪行を持ち込み、天秤に乗せた。一方、清らかな男たちは、天秤の反対側に載せられるようなペトロの善行を一つも見つけられなかった。そのため、彼らは悲しみに暮れ、困惑しながら互いにこう語り合った。

「天秤に乗せるものが何もない。」

すると、そのうちのひとりが言った。

「確かに、載せるものはない。ただ一つ、二日前に彼がキリストのために差し出したパンがあるが、それも仕方なくやったことだった。」

彼らはそのパンを天秤のもう一方の皿に乗せると、天秤は彼の側に傾いた。すると、光り輝く男たちは徴税人に言った。

「行け、哀れなペトロよ。そして、このパンにさらに何かを加えよ。そうすれば、悪霊たちに捕らえられ、永遠の苦しみへと連れ去られることはないだろう。」

我に返ったペトルは、この出来事を深く考え込み、自分が見たものは幻ではなく真実であったと悟った。その瞬間、彼は自分のすべての罪――すでに忘れていたものさえも――を思い出した。すべての過ちがはっきりと脳裏に浮かび上がった。まさにそれらの罪を、邪悪な悪魔たちが集めて天秤に乗せていたのだ。そこでペトルは驚きながら、こう考えた。

「もし、私が貧しい人の顔に投げつけたたった一つのパンが、悪魔たちが私を連れ去れないほどに私を助けてくれたのなら、信仰と熱意をもって行われる寛大な施しは、惜しみなく自分の富を貧しい人々に分け与える人々を、どれほどさらに助けてくれることだろうか。」

それ以来、彼は極めて慈悲深い人となり、自分自身さえも惜しまなくなった。ある日、彼は自分の関所[6443]へ向かっていた。道中で、ある船主と出会った。その男は裸だった。船が沈没したため、彼は完全に貧しくなってしまったのだ。　そこで、この男はペトロの足元にひれ伏し、自分の裸を隠せるよう衣服をくれるよう懇願した。ペトロは、美しく高価な上着を脱いで彼に与えた。しかし、その男は、そのような服を着て歩くことを恥じ、ある商人に売り渡してしまった。　ペトロは税関か

[6443] 関所――関税や税金を徴収する場所。

ら帰る途中、偶然その服が市場に売り出されているのを見かけた。このことに深く心を痛めた彼は、家に帰ると食事さえ口にしようとはせず、部屋に閉じこもって泣きじゃくりながらこう言った。

「神は私の施しを受け入れてくださらなかった。私は、貧しい者が私のことを覚えていてくれるほどに値しないのだ。」

そのように泣き悲しんでいるうちに、彼は少し眠りについた。すると、太陽よりも明るく輝く、端正な風貌の男が彼の前に現れた。その男の頭には十字架が載っており、身に着けていたのは、ペトルが破産した船主に渡したまさにその服だった。その男はペトルにこう言った。

「兄弟ペトロよ、何に嘆き、泣いているのか？」

すると、徴税人はこう答えた。

「主よ、私があなたからいただいたものを貧しい人々に与えているのに、彼らがそれをまた市場で売り払っているのです。そんな状況で、どうして泣かずにいられましょうか。」

すると、現れた方は彼にこう言われた。

「私が着ているこの服が何か分かるか？」

すると、ペトロは答えた。

「はい、主よ、わかります。それは私のものです。私はそれを使って、裸の人を着せました。」

現れた方は言われた。

「もう悲しむのはやめなさい。あなたが貧しい人に与えたその服を、私が受け取り、今、あなたが見ているように身に着けているのだから。あなたの善行を称賛する。あなたは、寒さで死にそうになっていた私を覆ってくれたのだから。」

目を覚ますと、徴税人は驚き、貧しい人々の生活を羨ましく思い、こう言った。

「もし貧しい人々がキリストそのものであるなら、主にかけて誓う。私が彼らの仲間になるまでは、決して死なない。」

彼は直ちに全財産を貧しい人々に分け与え、奴隷たちを解放したが、そのうちのただ一人だけを残した。そして、その奴隷にこう言った。

「お前に一つの秘密を教えよう。それを守り、私の言うことを聞きなさい。もし秘密を守らず、私の言うことを聞かなければ、お前を異教徒たちに売り渡すことを知っておけ。」

これに対し、奴隷はこう答えた。

「主よ、あなたが私に命じられることは何でも、私は行わなければなりません。」

すると、ペトロは彼に言った。

「聖なる都へ行こう。命を与える主の聖墓に礼拝を捧げよう。そこで、君は私をクリスチャンの誰かに売り渡し、その代金を貧しい人々に施しなさい。そうすれば、君自身も自由の身になれるだろう。」

奴隷は主人のその奇妙な意図に驚き、従うことを拒んでこう言った。

「私はあなたの奴隷ですから、聖都へあなたと一緒に行くのは仕方ありません。しかし、私の主人であるあなたを売ることはできませんし、決してそんなことはしません。」

すると、ペトロは彼に言った。

「もしお前が私を売らないなら、すでに言った通り、私がお前を異教徒たちに売り渡すぞ。」

そして、彼らはエルサレムへと向かった。聖地を参拝した後、ペトロは再び奴隷に言った。

「私を売り渡せ。もしお前が私を売り渡さないなら、私がお前を異教徒たちに売り渡し、過酷な奴隷生活を送らせるぞ。」

主人のその揺るぎない決意を見て、奴隷は自分の意志に反しても彼に従わざるを得なかった。奴隷は、ゾイラという名の、神を畏れる銀細工師で、自分が知っているある男に出会うと、彼にこう言った。

「聞いてくれ、ゾイラ。私から立派な奴隷を買ってくれ。」
すると、銀細工師はこう答えた。
「兄弟よ、信じてほしい。私は貧乏になってしまい、彼を買うお金がないのだ。」
すると、その奴隷は彼にこう提案した。
「誰かから借りてでも彼を買ってくれ。彼はとても立派な奴隷だし、神も彼を買い取ったことであなたを祝福してくださるだろう。」
その言葉を信じて、ゾイルはある友人から三十金貨を借り、その金でその奴隷からペトロを買った。ペトロが実はその奴隷の主人であるとは知らずに。その奴隷は、主人の代わりに金を受け取ると、コンスタンティノープルへと去り、自分が何をしたかを誰にも告げずに、その金を貧しい人々に配った。　それ以来、ペトロはゾイルに仕えるようになった。彼はそれまで慣れていなかった仕事をこなさなければならなかった。時には台所で働き、時にはゾイルの家から肥料を運び出し、時にはブドウ畑で土を掘った。こうした重労働やその他の過酷な仕事を通じて、彼は計り知れないほどの謙遜をもって自らの肉体を酷使した。　ゾイルは、かつてペンテフリアの家がヨセフのおかげで祝福を受けたように、ペトルが自分の家に祝福をもたらしていることを見ていた。彼は自分の富が増大しているのを見て、それゆえにペトルを愛するようになった。同時に、彼の並外れた謙虚さを見て、彼に対して敬意を抱いていた。ある日、彼はペトルにこう言った。
「ペトロよ、私はあなたを解放したい。私の兄弟になってほしい。」
しかし、ペトロは自由を望まず、むしろ奴隷として仕えることを好んだ。他の奴隷たちが彼を罵ったり、時には殴ったり、あらゆる方法で侮辱したりする姿がよく見られたが、彼は一言も発することなく、これらすべてを忍耐強く耐え忍んでいた。　ある日、ペトルは夢の中で、かつてアフリカで自分の服を着て現れた、輝かしい男性を見ました。その男性は、今や手に三十枚の金貨を持っており、彼にこう言いました。
「悲しむな、兄弟ペトロよ。わたし自身が、お前の身代金を受け取ったのだ。お前が誰であるかが知られるその時まで、辛抱しなさい。」
しばらくして、アフリカから聖地を参拝するために数人の銀商人がやって来た。ペトロの主人であるゾイルは、彼らを自宅に招いて昼食を振る舞った。食事の最中、客たちはペトロに気づき、互いにこう言い合った。
「この人は、税吏のペトロにそっくりだ。」
彼らの会話を耳にしたペトロは、彼らに完全に正体を見破られないよう、顔を隠そうとした。しかし、彼らは彼だと気づき、その家の主人にこう言い始めた。
「ゾイル、あなたに重要なことを伝えたい。あなたの家に、ペトロという偉大な人物が仕えていることをご存知ですか？彼はアフリカでは非常に著名な人物で、自分の奴隷をすべて解放しました。公爵はペトロが私たちのもとを去ったことを深く悲しみ、残念がっています。ですから、私たちは彼を連れて行くことにします。」
戸の外にいたペトロは、その言葉をすべて聞いていた。持っていた皿を地面に置くと、逃げ出すために門へと急いだ。門番は生まれつき口が利けず耳も聞こえなかったため、決められた合図に従ってのみ門を開け閉めしていた。
聖ペトロは急いで外に出ようと、その耳が聞こえず口もきけない門番に言った。
「わが主イエス・キリストの名によって命じる。直ちに門を開けよ。」
すると、その口が解け、彼は言った。
「はい、ご主人様、今すぐ開けます。」
そう言うと、彼はすぐに門を開け、ペトロは急いで立ち去った。すると、かつて口がきけなかった男は主人のもとへ行き、皆の前で話し始めた。家の中にいた者たちは、彼が話すのを聞いて驚いた。すぐに皆がペトロを探し始めたが、見つからなかった。口がきけない男は言った。

「見てください、彼が逃げ出していないか。この方は偉大な神のしもべであることを知ってください。彼が門に近づいたとき、私にこう言いました。『主イエス・キリストの御名によって、あなたに命じる。門を開けなさい。』すると私は、彼の口から出る炎が私に触れるのを感じ、その瞬間、話すことができるようになったのです。」

皆は直ちにペトロの足跡を追ったが、追いつくことはできなかった。至る所を丹念に探したが、見つからなかった。すると、ゾイラの家の人々は皆、声をあげて泣きながら言った。「どうして私たちは、彼がこれほど偉大な神の僕であることを知らなかったのだろうか？」　そして、多くの隠れたしもべたちを擁する神を賛美した。一方、ペトロは世間の栄光から逃れるため、この世を去るその日まで、人知れぬ場所に身を隠していた[6444]。

主を永遠に賛美します。アーメン。

10月6日

9月23日（旧暦）

尊く栄光ある預言者、主の先駆者にして洗礼者ヨハネの受胎を記念する説教

記念日：9月23日

私たちの救い主の受胎が近づいていた頃、聖ヨハネ・洗礼者（先駆者）の受胎が、栄光に満ちた奇跡的な形で成し遂げられました。　多くの母親が子を身ごもるが、その受胎が聖なる教会によって称えられ、祝われるような例は稀である。その胎内で成し遂げられた受胎が全世界の驚嘆の的となった母親は、ただ三人しか知られていない。それは、義人アンナ、聖エリサベト、そして至聖なる聖母マリアである。　義人アンナは聖母マリアを、エリサベトは洗礼者ヨハネを、そして聖母マリアは私たちの救い主キリストを身ごもりました。これらすべての受胎は天使によって告げられ、神の恵みによって成し遂げられましたが、それは、伝達者と受胎する者たちとの対話を通じてのみ行われました。なぜなら、神ご自身が受胎する者たちの同意を求めておられたからです。　それゆえ、福音を告げる者である聖大天使ガブリエルは、当時神の御前で奉仕していた祭司ザカリアのいる聖所に入り、こう言った。

「ザカリアよ、恐れることはない。あなたの祈りは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトはあなたに息子を産む。あなたは彼にヨハネという名をつける。そして、多くの人々が彼の誕生を喜ぶであろう。」

ザカリアは答えた。

「喜びの使者よ、あなたが私に告げていることは、予想外であり、また不思議です。老いて子をもうけることは不自然なことだからです。私は年老いており、妻も高齢です。どうして私たちが子を授かり、息子を産むことができるでしょうか。」

すると、天使は答えた。

「ザカリアよ、あなたの最初の言葉からして、あなたが信仰に欠けていることがわかります。あなたは私の言葉が実現するとは信じていないのです。確かに、私が告げていることは、あなたの性質にはふさわしくないことですが、これには神の御心があり、神にとって不可能なことは何一つありません。*『神は、これらの石からでも、アブラハムの子孫を興すことができる』*　（マタイ3:9）。神

[6444] 聖人は6世紀にコンスタンティノープルで逝去した。

が土からアダムを造り、アダムの骨からエバを創り、年老いたサラに息子イサクを授けられたことを、あなたは知らないのか。それゆえ、全能の神はあなたの妻にも、老いてから息子を授けてくださる。あなたの祈りは聞き入れられたのだ。

「私は」とザカリアは言った、「今、神に、神が御自身の聖なる預言者たちの口を通して約束された、待ち望まれるメシアの到来について祈りを捧げている。神が、アブラハムの子孫を異邦人の奴隷状態から救うために、一日も早く彼を地上に遣わしてくださるよう祈っている。　また、私の過ちと民全体の罪を赦してくださるよう、神に祈っている。しかし、息子を授かることについては、今は祈っていない。というのも、私自身もすでに高齢であり、妻も年老いているからだ。

すると、天使は彼に言った。

「私は、神の御前に立つガブリエルである。神の啓示により、今、あなたが息子の授かりを願っているのではなく、私に語ったことを願っていることを知っている。しかし、かつてあなたもあなたの妻もまだ年老いていなかった頃、あなたは主があなたたちに息子を授けてくださるよう、熱心に祈っていたではないか。」　慈愛に満ちた主は、人間の心のわずかな動きさえも隠すことはできず、主に向かって祈る者の声に耳を傾け、主を畏れる者の願いを叶えてくださる。　あなたの以前の祈りを聞き入れ、主はあなたに、恵み「[6445] 」と同じ名を持つ息子を授けてくださいます。主はご自身の御心に従って、いつ聖徒たちの願いを叶えるかをご存知だからです。そして、あなたには、主の御前で偉大な者となる息子が生まれるでしょう。

これに対し、ザカリアはこう答えた。

「今、私は悟りました、御使いよ。あなたは神の御使いです。あなたの言葉がそれを証し、あなたの姿がそれをはっきりと示し、あなたの言葉の力がそれを裏付けているからです。　しかし、あなたが突然私の前に現れて語りかけた時、私は恐怖に襲われました。かつて預言者ダニエルが天使を見て恐れたのと同じように。「*私はその偉大な幻を見たが、私の内には力が残っていなかった*」と彼は言いました（ダニエル10:8）；　また、サムソンの母もこう語った。「*神の人が私のところに来た。その姿は、神の御使いの姿のようで、非常に威厳に満ちていた[恐ろしかった]*」（士師記13:6）。それゆえ、私も恐れをなして、あなたの御使いのような言葉に異議を唱える勇気はないが、一つお尋ねしたい。なぜ、私の身から生まれる息子は偉大になるというのか？　まさか、主の御言葉が「*わたしがあなたを母の胎内で形造る前から、わたしはあなたを知っていた。あなたが母の胎から出る前から、わたしはあなたを聖別し、諸国民への預言者としてあなたを立てた*」（エレミヤ1:5）と告げられた預言者エレミヤよりも、彼が偉大で聖なる存在になるというのでしょうか。

すると、天使はこう言いました。

「あなたの息子は主の御前で偉大となる。その霊的な偉大さにおいて、預言者エレミヤに匹敵するだけでなく、彼をも凌駕するだろう。エレミヤは生まれる前から聖別されたが、この子は母の胎内にいるうちから、さらに深く聖霊に満たされるのだ。　エレミヤはメシアに関する預言のみを命じられていたが、この子は、メシアに手を置き、彼に洗礼を授ける栄誉にもあずかるであろう。　そして、エレミヤだけでなく、他の偉大な聖人たちをも、神の恵みの威光において凌駕するであろう。なぜなら、常に主サバオスの御顔を仰ぎ見る我らの天使の位階においても、神は御自身の善き御心の奥義をすべての人に等しく明かされるのではなく、上位の位階を通じて下位の者たちにそれを示されるからである。　日の出の前に多くの星が現れるが、太陽そのものに先立つのは明けの明星ただ一つである。　多くの預言者がメシアの到来を宣べ伝えてきたが、あなたが産むその幼子は、言葉によって宣べ伝えるだけでなく、その指をもって、世の罪を取り除く神の小羊を人々に示すであろう。それゆえ、あなたの息子は偉大であり、女から生まれた者の中で最も偉大となるのである。　喜びの知らせが実現することこそ、その知らせそのものよりもはるかに喜ばしいことであるように、あなたから生

[6445] 「ヨハネス」は「恵み」を意味する。

まれるその預言者は、他の預言者たちと比べて、それ以上に栄誉を受けることになる。彼以前には、すべての預言者たちと律法そのものが預言を行ってきたが、この預言者こそがすべての預言者の集大成であり、旧約の終わりであり、新しい恵みの先駆者となるのである。

ザカリアはこれに対し、こう言った。

「主の御使いよ、あなたの知らせは素晴らしく、喜びに満ちています。たとえどんな賢い息子も父を喜ばせるものですが、すべての預言者たちよりもはるかに賢い息子が、この老いた私をどれほど喜ばせてくれることでしょう！　しかし、あなたの言葉を疑っている私が、どうして喜べましょうか。疑わしい事柄には喜びも楽しみもありません。確かな事柄にのみ、それがあるのです。ですから、神の御使いよ、どうか私に教えてください。あなたが告げていることを、どうすれば確信できるのでしょうか?

すると、ガブリエルはこう答えた。

「ザカリアよ、あなたはまだ疑い続け、私の言葉を信じていない。神の使者である私が、どうして偽りを語るだろうか。［何しろ］*『主はすべての御言葉において真実であり、すべての御業において聖なる方である』*（詩篇144:13）とあり、それゆえ*「神にとって不可能なことなど何一つない」*（ルカ1:37）のだ。あなたはイスラエルの祭司であり教師である。私がバビロンの預言者ダニエルのもとへ遣わされた際、七週単位で計算したその時期が到来したことを、まさか知らないというのか?あなた方は彼の預言を読んだことがないのか。よく考えて悟りなさい。イスラエルを救う方がすでに近づいておられ、その御前に、肉となった天使――すなわち、あなたの息子――が先立って現れるのだ。彼は 、エリヤの霊と力によって、メシアの道を整えるために、御前に歩むのである。 しかし、私の言葉を信じなかったため、あなたは口がきけなくなり、これが成就するその日まで、一言も語ることができなくなるだろう。

するとたちまち、ザカリアの口は黙して語れなくなり、エリサベトの不妊の束縛は解かれた。そして天使は全能者の御座へと去っていった。主を永遠に賛美せよ。アーメン。

トロパリオ、第4調:

まず、子を産むことのできなかった女よ、喜びなさい。あなたは、全宇宙を照らし、盲目という病に苦しむ者たちを癒やす、太陽の光となる御子を身ごもったからである。ザカリアよ、大胆に叫びながら喜びなさい。「至高者の預言者が、まもなく生まれようとしている。」

コンダク、第1声:

偉大なるザカリアは、栄光に満ちた妻エリサベトと共に、前駆者ヨハネを尊く宿したことを喜び祝う。大天使は喜びをもって彼に福音を告げ知らせた。我らもまた、恵みの秘儀の担い手として、彼をふさわしく崇めよう。

聖殉教者アンドレイ、ヨハネ、ペトロ、アントニンの記念日

記念日：9月23日

これらの聖なる殉教者たちは、アフリカを支配していた残忍な君主イブラヒムの時代に殉教した。シチリアの都市シラクーサ[6446] が陥落し、破壊された際、イブラヒムはそこからヨハネとその二人の子供、ペトロとアントニヌスをアフリカへ連れ出した。　イブラヒムは、この二人の幼い少年た

[6446] シラクーサの陥落は868年のことでした。

ちに、アラビア語と学問を教えるよう命じた。彼らが成長するにつれ、イブラヒム公は彼らの知恵と徳高い生き方に深く感銘を受け、アントニナを自分の親族と呼び、ペトロにはサケラリアの称号を授けた[6447]。 彼らは密かにキリスト教を信仰していたが、これを公爵から隠し通すことはできなかった。彼らがキリストを信じていることを知った公爵は激しく怒り、彼らを鉄の足枷で縛り上げ、節のある棒で打ち据えるよう命じた。拷問者たちは長い間、聖アントニヌスに打撃を与え続け、　その後、彼をロバに乗せ、丈夫な革紐で縛り付け、街中を引き回しながら、殴打を加え、あらゆる種類の侮辱を浴びせた。聖アントニヌスは、神に感謝しつつ、これらすべてに耐え抜いた。一方、聖ペトロは服を脱がされ、骨や腹部を棒で長時間殴打された。その後、殉教者たちは牢獄に閉じ込められた。　しばらくして、公爵は彼らを牢から引き出し、重い木の板を載せるよう命じた。その結果、彼らの両手は体から引きちぎられ、腰と膝は完全に砕け散った。聖なる殉教者たちの体は自らの血で染まり、すべての骨が砕け散った。　その後、彼らの父ヨハネが連れてこられた。公爵は左手で彼の首を掴み、右手でナイフを彼の喉元に突き刺した。こうして聖なる殉教者は、子供たちの遺体の前で息を引き取った。そこでイブラヒムは、大きな焚き火を焚き、その上で聖なる殉教者たちの遺体を焼き尽くすよう命じた。　すでに高齢であった聖アンドレイに対しては、残酷な拷問者は次のように振る舞った。まず、彼はかなり長い間、聖人を飢えと渇きで苦しめ、衣服を剥ぎ取った。そして、馬にまたがり槍を手に取ると、聖殉教者に襲いかかり、その胸を槍で突き刺した。　聖アンドレイは、大声で神を賛美し始めた。残酷な公は二度目に聖人に襲いかかり、肩の間に槍を突き刺した。血を流しながら、聖人は地面に倒れ、その後、剣で首を斬り落とされた。

聖殉教者イライダの記念日

記念日：9月23日

聖処女イライダはアレクサンドリアに住んでいた。ある日、水を汲みに泉へ出かけたところ、岸に停泊している船を目にした。その船には多くの乙女、男性、司祭、助祭、修道士たちが乗っており、　彼らは皆、手錠をかけられていた。イエス・キリストの御名を告白したために、拷問を受けるために連行されていたのである。突如として、イライダは主への大いなる愛に燃え上がった。水瓶を投げ捨て、彼女は自ら進んでキリストの囚人たちに加わり、彼らと共に手錠をかけられた。　船がエジプトの都市アンティノポリスに到着すると、聖イライダは他の誰よりも先に残酷な拷問に耐え、剣で斬り殺された[6448]　。その後、他の者たちも皆、自らの血をもってイエス・キリストへの信仰の告白を刻み込んだ。

聖ポリクセニアの生涯

記念日：9月23日

聖ポリクセニアはスペインの出身であった。彼女はキリスト降誕後1世紀、聖使徒たちの時代に生き、彼らの弟子であった。　ポリクセニアは生まれながらにして、また若い頃も異教徒であった。姉のクサンティッパ[6449] ——その国の統治者プロヴァの元妻——と共に、処女のポリクセニアは、聖使徒パウロがスペインで説教を行った際、救い主キリストの神聖な教えを耳にした。　クサンティ

[6447] 執事長。
[6448] 聖イライダは308年頃に亡くなりました。ライサという名でも、9月5日に彼女の記念日が祝われます。
[6449] 同日には、尊者クサンティッパの記念日も祝われる。

ッパとプロヴは直ちにキリスト教を受け入れたが、ポリクセニアは依然として異教徒のままであった。

その後、ポリクセニアには不幸が降りかかった。彼女は並外れて美しく、その美しさに魅了されたある不貞な男が、ポリクセニアを無理やり拉致し、ギリシャへと連れ去った。　しかし、無防備で無垢な者たちの慈悲深く全能の守護者である主は、その若い乙女を無傷のまま守り、不義な誘拐犯の犯罪的な企てが成就することを許されなかった。主は、その不義な者の邪悪な企てさえも、ポリクセニアにとって有益なものへと転じられた。　ギリシャへ向かう船の上で、ポリクセニアは、キリストのもう一人の偉大な弟子である聖使徒ペトロの説教を耳にしました。救い主キリストの崇高な神の教えに心を動かされた彼女は、ギリシャに到着すると、キリスト教徒の庇護と保護を、生き生きとした信頼をもって求めました。　当時、その地で説教を行っていたキリストの聖使徒フィリッポスは、ある敬虔な一家に、ポリクセニアを彼女を誘拐した犯罪者から隠すよう依頼した。　多くの困難と障害を乗り越え、これらの徳高いキリスト教徒たちは、ポリクセニアをアハイア地方のギリシャの都市パトラ（またはパトラス）に隠すことに成功した。当時、この地の住民の大多数は、救い主キリストの最初の弟子である聖使徒アンドレイの説教によって、すでにキリスト教に改宗していたのである。

パトラスにおいて、すでにキリストの聖使徒パウロ、ペトロ、フィリッポの福音を聞き、さらにキリスト教徒たちの積極的な慈善活動を身をもって体験していたポリクセニアは、救い主キリストの教えの神性を生き生きとした信仰をもって受け入れ、キリスト教に改宗し、聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイ自身によって洗礼を受けた。　そこでポリクセニアは、聖使徒アンドレイによって行われた輝かしい奇跡を目の当たりにした。　彼女は、当時すでに高齢となっていたこの長老が、いかに穏やかに過酷な拷問や苦痛に耐え、主イエス・キリストを否定することを拒み、キリスト教徒たちを勇敢に擁護したために、いかに十字架の死を遂げたかを目の当たりにした。

「あなた自身、キリストを信じなさい」と、聖使徒は、死の脅しをもって聖アンドレイにキリストを否定し、異教の神々にひれ伏し、その神々のために生贄を捧げるよう要求した、怒りに満ちた異教徒の都市および地方の統治者に語りかけた。　「私は、自分に待ち受ける苦しみよりも、あなたの滅びを深く嘆いている」と聖使徒は続けた。「私の苦しみは一日か二日続くだけだが、あなたの苦しみは永遠に続くのだ」。

しかし、聖アンドレイの穏やかな諭しを意に介さず、悪意に満ちた統治者は、まず彼に残酷な拷問を科し、その後、十字架刑に処した。そして、苦しみができるだけ長く続くよう、彼を釘で打ち付けず、十字架に縛り付けるよう命じた。

神の使徒が磔の場へと連行されると、若いポリクセニアも混じった群衆が彼の周りに大挙して集まり、大声で叫んだ。

「この義人、この神の友は、いったい何の罪を犯したというのか。なぜ、最も凶悪な犯罪者だけが処刑される、わが国で最も恥ずべき刑罰へと連れて行かれるのか？」

しかし、聖アンドレイは民衆をなだめ、説得しつつ、キリストを告白したために受ける苦難の場へと喜びをもって歩んでいった。

聖アンドレイに忠実な弟子たちは、ポリクセニアもその中に含まれていたが、彼が十字架に釘付けにされ、吊るされたその時でさえ、彼を離れようとはしなかった。大勢の民衆が、無実の罪で十字架にかけられた聖アンドレイの周りに群がり、統治者の決定に憤り、ますます高まる不満を込めて叫んだ。

「この聖なる人は、むやみに苦しめられている！」

一方、使徒は動揺する人々をなだめようと努め、神の御言葉を教え続けた。

「ここに立っている人々よ――」と彼は言った。「妻や子供たち、老人や若者、奴隷や自由人よ！　私の言葉に耳を傾け、この世の儚い生活のことなどもう考えず、キリストのために十字架に架

けられ、すでにこの肉体を離れる準備ができている私を見なさい。この世で真理のために死に直面する者たちは、死を恐れる必要はない。彼らは至福の安らぎに到達するのだ。　自らを清め、私の教えを忘れるな。心を尽くして、父と子と聖霊を信じなさい。私たちの主イエス・キリストの戒めを守り、それによって、主を愛する者たちのために主が用意してくださった永遠の至福にふさわしい者であることを示しなさい！

昼も夜も、このように過ぎていった。聖なる長老は、激しい拷問にもかかわらず、民を教え続けることをやめなかった。そして、十字架の上からなされた、この柔和でありながら生命力と真の愛に満ちた説教は、特に若いポリクセニアの心に深く響いた。わずか数日の間に、彼女は一生分の経験を味わい、キリスト教への信仰が彼女の心の中に揺るぎなく根付いた。

一方、聖アンドレイの長期にわたる苦しみは、民衆の不満と憤りをさらに煽り立て、群衆は叫び声を上げながら統治者エゲアトの住居を取り囲み、すでに三日間も食事も与えられずに十字架に吊るされていた聖アンドレイの解放を要求した。

「この柔和で、聖く、平和な人が、無駄に苦しんでいる」と民衆は言った。「もう二日以上も十字架に吊るされたまま、善と真理を教え続けている。彼を降ろすべきだ！」

エゲアトは騒動を恐れ、民衆の願いを受け入れ、自ら処刑場へ向かい、聖アンドレイを十字架から降ろすよう命じた。初代使徒は彼を見て、こう言った。

「何のために来たのだ、エゲアトよ？」　もし主イエス・キリストへの信仰を告白するために来たのなら、間違いなく赦しを受けるだろう。しかし、もし私をこの木から解き放つために来たのなら、今さらそれを試みても無駄だ――私はすでに天の王の姿を仰ぎ見て喜び、すでに御前にひれ伏し、すでに御前に立っているのだ！　しかし、まだ時間があるうちに、自分の魂の救いを考え、永遠の苦しみをもたらすようなことをしないようにしなさい。

統治者の命令により、兵士たちは聖アンドレイを十字架から解き放とうとしたが、使徒は天を仰ぎ見て、こう叫んだ。

「主よ、私を十字架から降ろさせないでください。あなたが苦難を受けることをお許しになったのと同じ方法で、私もあなたのために苦難を受けることをお許しください。」　私の福音を聞いてあなたを知り、愛するようになった者たちが、揺らぐことのないようお守りください。彼らをあなたの聖なる信仰の中に保ち、確固たるものとしてください。そうして彼らもまた、まことの神であるあなたを賛美することができますように。そして、私をも平安のうちに迎え入れてください！」

そして実際、処刑執行人たちは、十字架に架けられた聖アンドレイに近づき、彼を十字架から解き放とうと懸命に試みたが、その努力は無駄に終わった――目に見えない力が彼らを阻んでいたのである。　太陽の光よりもさらに明るい眩い光が、聖アンドレイを完全に包み込み、30分近くもの間、周囲の人々の目から彼を隠していました。やがてその光が消えたとき、聖使徒アンドレイはすでに神に息を引き取っており、彼の顔だけが天の光に照らされていたことが明らかになりました。

イエス・キリストの復活が聖使徒たちをその神聖な教えを宣教するよう強く奮い立たせたように、聖使徒アンドレアの殉教もまた、聖ポリクセニアに実り多い影響を与えた。　聖使徒アンドレアスというキリスト教会の柱からキリスト教を受け入れ、彼の指導の下で救い主の神聖な教義を実践し、その信仰を強めていった聖ポリクセニアは、自らも救い主キリストの神聖な教えを宣教したいと願うようになった。　そして、使徒アンドレイの死後まもなくパトラの街を訪れた聖オニシモスが、スペインへ宣教に向かうことを知ったとき、聖ポリクセニアは喜びをもって、　の福音を広める働きのために、彼に同行して故郷へと向かった。彼女は、まだ福音の光に照らされていない同胞たちをキリストへと導きたかったのだ。

聖オニシモスと、彼女と共に洗礼を受けた友人のレベッカと共にスペインに戻った聖ポリクセニアは、同族の間でキリスト教を積極的に広めることに熱心に取り組みました。　彼女の妹クサンテ

ィッパもまた、その伝道活動に加わった。特に人通りの多いトレドの街で、彼女たちが頻繁に説教を行っていたという伝承が残っている。

こうして、聖ポリクセニアは残りの生涯、およそ40年間にわたり、この偉大な業に身を捧げ、キリストを信じる者たちに敬虔な生活の模範を示しました。彼女のこの敬虔な使徒的奉仕の成果として、スペインの非常に多くの異教徒が彼女によって改宗し、キリスト教の信仰を確固たるものにしました。

キリスト降誕後109年頃、聖ポリクセニアは、この世での生涯の最後まで処女性を保ったまま、安らかに息を引き取った。

10月7日

9月24日（旧暦）

聖第一殉教者、使徒に等しいテクラの生涯と殉教

記念日：9月24日

聖使徒パウロとバルナバは、世界に福音を宣べ伝えるため、イコニウム[6450]を訪れ、オニシフォロの家に滞在した。聖パウロは『テモテへの手紙』の中で、このオニシフォロについて次のように述べている。 *「主がオニシフォロの家に恵みをお与えになりますように。彼は何度も私を慰め、私の束縛を恥じなかったからです」*（IIテモテ1:16）。 オニシフォロの家に滞在中、彼らは頻繁にシナゴーグを訪れ、恐れを知らずに神の御言葉を宣べ伝え、人々を救いの道へと導き、イエス・キリストへの信仰へと回心させた。すると、多くの人々が彼らの教えに耳を傾け、彼らによってなされるしるしや奇跡を見て、私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。 このことは『使徒行伝』に次のように記されている。*「イコニオでは、彼ら*（すなわちパウロとバルナバ）*は共にユダヤ人の会堂に入り、語りかけたところ、多くのユダヤ人とギリシア人が信仰を持った。しかし、信仰を持たないユダヤ人たちは、異邦人の兄弟たちに対して心を煽り立て、憤らせた。しかし、彼らは[そこに]かなりの期間留まり、主について大胆に働き続けた。主は、御自身の恵みの御言葉の証しとして、彼らの手を通してしるしと奇跡を行われた」*（使徒行伝14:1–3）。

当時、イコニオには、テオクリアの娘で、高貴で名門の家系に生まれた、美しく麗しい十八歳の乙女テクラが住んでいた。彼女は、その街で最も高貴な若者の一人であり、富と美貌で際立っていたファミルという人物と婚約していた。 使徒たちが行う奇跡を目の当たりにしたテクラは、他の人々と共にオニシフォロの家の窓辺で彼らの話を聞き、彼らが説くすべてに熱心に耳を傾けていた。神の御言葉の種は良い土壌に落ち、聖霊の働きによってテクラの心に深く根を下ろし、実を結んだ。彼女は神の御子を信じ、御子を愛し、魂のすべてを捧げて御子にすがりついた。 一方、パウロは天からの啓示に従い、処女性と貞潔について語り始めた。彼はとりわけ、キリストへの愛のために処女性を守る乙女は天使に似ており、彼女はキリストの花嫁であり、キリストこそが彼女を天の御殿へと導く花婿であると語った。 聖パウロはこのことについて多くを語り、テクラに処女性を守るよう促した。それにより、聖なる乙女は直ちに婚約者を捨て、この世のあらゆる快楽を軽んじ、最期を迎えるまで清らかにキリストに仕えることを固く決意した。 こうして、賢明な乙女は天の花婿の花嫁と

[6450] これは、キリスト降誕後45～46年、聖使徒パウロの最初の旅の間に起こった出来事である。 イコニアの町は、カッパドキアの南西に位置する小アジアの地域、リカオニアにあった。聖使徒パウロの第一回伝道旅行については、『使徒言行録』の第13章から第14章にかけて記されている。聖使徒は、ピシディアのアンティオキアからイコニアに到着した。

なり、燃えるような愛をもって彼に従った。朽ちることのない花婿である　へと向かい求めるうちに、彼女は蝋のように溶けていった。それゆえ、ダビデが語った言葉が彼女に実現したのである。*「わが心は蝋のようになり、わが内なるものの真ん中で溶けてしまった」*（詩篇21:15）。テクラはパウロの語りかけに深く感銘を受け、三日三晩、食事や飲み物、そして肉体の安らぎをすっかり忘れてしまった。かつて*「イエスの足もとに座った」*（ルカ10:39）がただ神のことだけを考えていたように、テクラもまた神の言葉だけで養われていた。聖書にはこう記されている。*「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる」*（マタイ4:4）。　ところが、テオクリアは、娘がキリストを信じ、熱心に神の御言葉を聞いていることを知ると、怒りに駆られてやって来て、彼女をこの魂に有益な行いから無理やり引き離した。そして、聖なる説教者たち――使徒たち――を非難し、彼らを罵りながら、すでにキリストの小羊となっていた娘を、キリストの群れから引き離した。 その後、娘の婚約者ファミールを呼び寄せ、彼にこう言った。

「あなたは、花嫁が何らかの恍惚状態に陥っていることなど、気にも留めないのか？　見てごらん。彼女は、高尚な言葉で狂った人々を魅了する、この来訪者たち――すなわち詐欺師たちに惑わされてしまったのだ。もう三日も、自分の家のことを忘れて、彼らから離れようとはしない。」

そこでファミールは、フェクラに優しく、優しく語りかけ始めた。しかし、彼女は彼とは何の話もしたくなかった。彼を見ることも望まなかった。なぜなら、彼女の心には別の花婿――「人間の息子たちよりも、その優しさにおいて最も美しい」――が宿っていたからである。　彼女は霊的な目で彼を見つめ、心の中で彼と語り合っていたが、この儚く一時的な婚約者は、彼女に嫌悪感しか抱かせなかった。　ファミルは、フェクラが自分を拒絶し、愛していないのを見て、深く嘆き悲しんだ。一方、テオクリアは怒りに駆られて娘を殴り、髪を引っ張り、足で踏みつけ、その後、娘を一人きりで閉じ込め、飢えさせ続けた。　しかし、彼女自身も、母としての自然な愛情に打ち勝てず、娘のことを思って泣いた。娘を抱きしめて口づけをし、涙ながらに、フェクラに、美しく、裕福で、高貴で、皆から尊敬されているその婚約者を拒絶せず、ファミールの隣の席に座らせてほしいと懇願した。一方、フェクラは彼から顔を背け、黙って座り、うつむいたまま、何も口にせず、ただ心の奥底で天の婚約者のことを絶えず思い続けていた。　やがてファミールが彼女を愛撫し、無理やり抱きしめてキスしようとしたとき、彼女は彼の目に唾を吐きかけ、網から逃れる鳥のように彼の手から飛び出した。すると母は再び激怒し、また彼女を殴り始めた。一方、深く傷ついたファミールは、使徒パウロに対する苦情を訴えるため、公爵のもとへ向かった。

「この町に」とファミールは言った。「あるよそ者が現れました。彼は魔術で人々を惑わせ、神々への崇拝から遠ざけ、ユダヤ人によって十字架にかけられたキリスト・イエスへと導いているのです。　彼は私の婚約者であるフェクラという娘をも惑わした。当初、彼女は私を深く愛していたが、今では私を見るのも嫌がるだけでなく、まるでハンセン病患者のように私を忌み嫌って、まるで野獣であるかのように私から逃げ回っている。あの魔術師は、彼女の中の私への愛をそうして消し去ってしまったのだ。彼が彼女に何をしたのか、私には理解できない。

公爵はパウロを呼び寄せ、彼に尋ねた。「お前はどこの者か。この町で一体何をしたのか？」そこでパウロは使徒としての口を開き、いつものように神の御言葉を説き、イエス・キリストについて宣教し始めた。　しかし、公爵はすぐにはこの件を裁くことはせず、パウロに対する裁判を別の機会に先送りした。彼はパウロを縛り上げ、牢獄に投獄し、より詳しく尋問できる機会が訪れるまでそこに留めておくよう命じた。一方、テクラは、自分のせいでパウロが牢獄に投獄されたと聞くや、夜中に起き上がり、密かに家を出て牢獄へと向かった。　牢屋の扉を見張っていた番人を見つけると、彼女は首飾りやその他の金の装身具を外して番人に渡し、扉を開けてパヴェルのもとへ通してくれるよう頼んだ。

このことについて、聖金口ヨハネスは次のように述べている。

「聖テクラの話を聞きなさい。彼女はパウロに会うために、自分の金を牢屋の番人に与えた。それなのに、あなたはキリストを見るために、たった一ツァタも与えようとしない[6451] 、キリストを仰ぎ見るために[6452] 。」

牢番は彼女の願いを聞き入れ――貴重な首飾りや金の品々に喜びを覚えた――彼女を聖パウロのもとへ案内した。フェクラは喜びの涙を流しながら彼の前にひれ伏し、キリストの囚人の足枷に口づけをした。 最初、パウロは彼女を見て恐怖に襲われたが、その後、彼女が貞節を守るために母や婚約者から受けたすべての苦難を知ると、 彼はその若い乙女の勇気に大いなる喜びを感じ、彼女の頭に口づけをし、彼女を祝福し、その信仰と乙女としての貞節を称え、彼女をキリストの花嫁、そして福音によって再生させた自分の最初の娘と呼んだ。 そしてテクラは、 の牢獄でパウロと共に、まるで娘が父と共にいるかのように座り、彼の父のような教えに耳を傾け、その言葉を心の中に、かけがえのない宝物としてしまい込んでいた。 また、パウロは彼女に主イエス・キリストへの信仰について多くを教え、神への愛を説き、貞潔な処女性を守るよう説得し、キリストの教えにおいて彼女を完全に確固たるものにした。聖グリゴリオス・ニッサス[6453] で次のように記している：

「かつてパウロは、純潔の白いユリ（[6454] ）のようなこのミロ（すなわち教え）を、聖なる乙女の耳に注ぎ込んだ。心のユリから湧き出るこれらの滴によって、テクラは外なる人――すなわち、あらゆる虚しい思い――を死に渡し、欲望を消し去ったのである。」

また、聖エピファニオス[6455] も次のように記している：

――テクラは、町随一の美貌を持ち、極めて裕福で、非常に尊敬され、高貴な婚約者を擁していたが、パウロと出会い、彼によってその婚約者との婚約を断念させられた。こうして聖処女は、天の恵みにあずかるために、すべての地上の恵みを捨て去ったのである。

その間、テオクレイアの屋敷ではフェクラを探し始めたが、見つからなかった。 すると、悲鳴や泣き声、叫び声が上がった。母は娘を、ファミールは花嫁を、奴隷たちは女主人を嘆き悲しんだ。使用人たちは四方八方に散らばり、通りや家々をくまなく探し回り、人々に尋ね回ったが、どこにも彼女の姿は見つからなかった。 かなり長い時間が経ってようやく、彼女が牢獄にいることがわかった。使者たちは直ちにそこへ駆けつけた。到着すると、使者たちは彼女がパウロのそばに座り、まるで釘付けになったかのように、彼の教えに最も熱心に耳を傾けているのを見た。そこで彼女を捕らえて牢獄から連れ出し、一連の出来事を公爵に報告した。 公爵は裁判官の席に着くと、パウロを自分の前に連れてくるよう命じた。民衆は彼が連れてこられたのを見るやいなや、公爵に向かって叫んだ。

「公爵よ、この男は魔術師だ。処刑せよ！」

とりわけファミルは、パヴェルを処刑するよう強く主張した。彼は訴えの中で、パヴェルが自分の婚約者を自分から遠ざけたと指摘していた。フェクラが呼び出されると、公爵は彼女に尋ねた。

「なぜ、これほど美しく高貴な婚約者を嫌うのか？ なぜ彼と結婚しないのか？」

しかし彼女はパヴェルを見つめただけで、何も答えなかった。するとテオクリアは、娘への自然な愛情を忘れ、母としての情に背き、まるで獰猛な雌ライオンや激怒した雌熊のように、公爵に向かって激しく叫び始めた。

「この邪悪な奴隷を焼き殺せ。彼女にはそのような死に値する。これは私の娘ではない。なぜなら、彼女は私、母親の言うことを聞かないからだ。他の者への戒めとして彼女を焼き殺せ――街の

[6451] ツァタとは、10コペイカに相当する硬貨のことである。

[6452] フェクレに関するこの証言は、聖ヨハネ・クロソストモスの『使徒言行録』に関する第25講話に見られる。

[6453] 『雅歌』に関する第4講話において。

[6454] クリン――ユリ。

[6455] 聖エピファニオスは、聖ヨハネ・クロソストモスの同時代人であり、キプロス島で36年間にわたり司教を務めた。

すべての娘たちがこれを見て恐れ、この悪意に満ちた不従順な娘のように、母親の言うことを聞かず、反抗するような真似を敢えてしないようにさせよ。」　いいえ、これは私の子ではない、私の胎から生まれたものでもない。呪われた子であり、枯れ枝に過ぎない――彼女を焼き殺せ！

母は娘を焼き殺すよう執拗に要求し、ファミールはパウロを処刑するよう求めた。　公爵は聖使徒を長く尋問したが、キリストの説教以外に何の罪も見出せなかったため、彼に死刑を宣告することはせず、他の乙女たちにも貞操を守るよう説得できないよう、彼を鞭打って街から追放するよう命じた。 パウロと共に、バルナバとオニシフォロスとその息子たちも追放の処分を受けた。 もっとも、パウロ自身も、領主やファミル、テオクリアに迫害されていたからというだけでなく、民衆が彼を襲い、神の言葉を宣べ伝え、イエス・キリストについて証しをしたことを理由に彼を殺そうとしていたため、その町を去ろうとしていた。　このことについて、聖ルカは『使徒言行録』の中で次のように述べている。*「しかし、不信仰なユダヤ人たちは、異邦人の心を煽り立て、兄弟たちに対して敵意を抱かせた。その間、町の人々は二分された。ある者はユダヤ人の側に立ち、またある者は使徒たちの側に立った。　異邦人とユダヤ人、そしてその指導者たちが、彼らを辱め、石で打ち殺そうと襲いかかってきたとき、使徒たちはそれを知ると、リカオニアの町リストラとデルベへ退いた」*[6456]（使徒14:2,4–6）。そこからアンティオキアへ向かった。 まず彼らは、イコニアの町の近く、ダフナへの道沿いにあるある洞窟で数日間過ごした[6457] 。フェクラの行方を確かめようとしたのである。そこで彼らは断食し、主が彼女を強め、彼女に御慈悲を注いでくださるよう熱心に祈った。そして、その願いは確かに叶った。

公爵は長い間、フェクラに以前と同じ愛情をもって婚約者に対処するよう説得を試みたが、その努力は実を結ばなかった。そこで彼は、テオクレイアの請願に応じて、この聖なる乙女を火刑に処す判決を下した。そのために、大量の乾いた薪、干し草、小枝が運ばれ、大きな焚き火が組まれた。その後、使用人たちが聖女をその場所へ連れて行こうとしたが、　しかし彼女は連れ去られることを許さず、自ら急いで用意された火刑台へと歩み寄り、十字を切って火刑台の上に登り、燃え尽きる覚悟で立ち上がった。彼女にとって物質的な火は恐ろしいものではなかった。なぜなら、彼女自身、神の愛という非物質的な炎に燃えていたからである。　火刑台の上に立ち、彼女は前方を凝視すると、パウロの姿に化けた主が立っておられ、彼女に「堅く立ちなさい」と命じているのを目にした。それゆえ、聖キプリアンは祈りの中で次のように述べている。「パウロが鎖につながれていたように、またテクラが火の中にいたように、私たちのために現れてください」[6458] 。

その間、火がくべられ、火刑台は四方から燃やされた。しかし、皆の驚きにも、炎は高く立ち上り、テクラを取り囲んだ。さらに皆が驚愕したのは、突然、雹を伴う大雨が降り注ぎ、火を消し去ったときであった。公爵と民衆は皆、激しい雨と激しい雹から逃れるため、恐怖のうちにそれぞれの家へと逃げ帰った。　しかし、フェクラは無傷で降り立った。火は清らかな乙女に微塵も及ばなかった。その後、彼女は母の家へ帰らず、イコニアに留まることもなく、霊的な父であるパウロを探しに街を出て行った。　道中、彼女はオニシフォロの家から来たパウロの弟子の一人に遭遇した。その弟子はパンを買いに町へ向かっていた。聖なる乙女は彼を認識し、こう尋ねた。

「イエス・キリストの使徒パウロはどこにおられますか？」

すると、その弟子はテクラを、パウロが他の者たちと共にいた洞窟へと案内し、パウロは断食をしながら、彼女のために神に熱心に祈っていた。テクラが健在であることを見て、皆は大いなる喜びに包まれ、目を天に向け、両手を天に差し伸べて、御自分のしもべを無傷で守ってくださった神に

[6456] リストラとデルビアの二つの都市は、小アジアのリカオニア地方にあり、イコニアからほど近い場所に位置していた。

[6457] アンティオキアの郊外。

[6458] これらの言葉は、聖キプリアヌスの殉教者に関する講話に見られる。

感謝を捧げた。　その後、彼女にパンを差し出し、自分たちも食事をとった。そこからパウロとバルナバは、リストラとデルビアを経て、福音を宣べ伝え、病人を癒やしながら進んだ。テクラも彼らに続いてアンティオキアまで同行した。　彼らがこの町に入ろうとしたとき、偶然にもその町の長老であるアレクサンドロスという人物が彼らに出くわした。彼は若く、快楽に溺れ、異教徒が通常そうであるように不敬虔な行いにふけっていた。聖なる乙女テクラを見て、その美しさに心を奪われた彼は、彼女に対して不純な欲望を抱いた。　フェクラがパウロの妻だと思い込んだアレクサンドロスは、まずパウロに多額の金を提示し、自分の邪悪な企てを妨げないように説得しようとした。しかし、フェクラがパウロの妻ではなく未婚の乙女であることを知ると、彼女への情熱はさらに燃え上がり、彼女を妻に迎えたいと願うようになった。　彼は聖なるフェクラに自分を愛するよう説得し始めたが、彼女は、咆哮し、彼女の心の優しさを飲み込もうとする獅子から逃げるかのように、彼から逃げ回った。　一方、アレクサンドルはあらゆる手段を尽くして彼女を捕らえようとした。ある時、大勢の人混みの中で道端でフェクラと出くわした彼は、胸に燃え盛る情欲の炎を抑えきれなかった。あらゆる羞恥心を忘れ、彼女を無理やり掴み、首に飛びついた。聖なる乙女は涙ながらに、アレクサンドルに自分を放してやってほしいと懇願した。

「私を強要しないでください、旅人よ。私を強要しないでください、神の僕よ。私は婚約者を断りました。あなたの望みに応じることができるでしょうか？」

そう言いながら、テクラは彼の手から逃れ出し、皆の目の前で彼の衣服を引き裂き、それによって彼に大きな恥をかかせた。アレクサンドルは激しく怒り、さらに彼女がキリスト教徒であることを知ると、彼女を公爵の裁判に引き出した。「なぜ結婚を嫌がるのか」という問いに対し、テクラはこう答えた。

「私の花婿は、神の御子キリストです。私は彼と霊的な結婚を交わしました。」

公爵は彼女に、キリストを否定して結婚するよう強要した。しかし、彼女が断固として拒否すると、公爵は彼女を野獣に食わせる刑に処した。その理由は二つの罪――敬虔さと貞節、すなわちキリストを信じていること、そして若く美しいにもかかわらず結婚を拒んだこと――によるものであった。　この処刑は翌朝まで延期され、その間、彼女を守るために、トリフェナという名の女性がその夜、彼女を自分の家に迎え入れた。　トリフェナは王族の出身で、大きな尊敬を集めていた。その後、彼女もまたキリストを信じるようになった　。聖パウロは『ローマ人への手紙』の中で彼女について言及している。「*トリフェナとトリフォスに挨拶を伝えてください*」[6459]（ローマ16:12）。

トリフェナはフェクラを自分の元へ迎え入れ、一晩中彼女と霊的な対話を交わした。翌朝、この光景を見ようと大勢の群衆が集まった。公爵や市のすべての役人もやって来た。聖女フェクラは、犠牲に捧げられる子羊のように連れ出され、獣たちに食い尽くされるはずの場所に立たされた。　獣たちが彼女に向かって放たれたとき、それらは皆、彼女の周りをうろつき回ったが、一頭として彼女に触れることはなかった。かつてダニエルの穴でそうであったように、神が獣たちの口を封じておられたからである。　見物人たちは皆、この驚くべき現象に驚嘆した。血に飢えた獣たちはその凶暴さを捨て、羊のように柔和になったのである。民の中には、テクラが信仰を告白した神を賛美する者もいれば、逆に神を冒涜してこう言う者もいた。

「彼女の衣服には魔法がかけられているのだ。だから獣たちは彼女に触れないのだ。」

また、公爵自身も市の役人たちと共に、彼女は魔女であり、獣たちが彼女に危害を加えられないよう呪いをかけたのだと語った。そのため、彼らは翌日、フェクラをさらに数多くの、最も飢えた獣たちに引き渡すことに決め、それまでの間、彼女を再びトリフェナの元へ送り返した。　トリフェナは、聖なる乙女が処刑場から無傷で戻ってきたのを見て、大いに喜んだ。フェクラが朝までトリフ

[6459] この二人の女性については、ローマの暦の11月10日の項で次のように言及されている。「リカオンのイコニアに住んだ聖女トリフェナとトリフォサの記念日。聖パウロの説教に導かれ、聖テクラの模範に励まされて、彼女たちはキリスト教の教えにおいて多くの成果を上げた」。

ェナの家に留まっている間、公爵は獣たちに餌を与えないよう命じた。飢えた獣たちが、より早く犠牲者に襲いかかるようにするためであった。　そして翌朝、聖女は再び処刑場へと連行された。その後にトリフェナも続き、何の罪もない聖なる乙女が死に追いやられることを嘆きながら泣いていた。フェクラは人目につく場所に立たされ、恥知らずな公爵は聖女を裸にするよう命じた。

「彼女の衣服には――」と彼は言った。「魔法がかけられている。だからこそ獣たちは彼女に手を出さないのだ。この魔女を裸にしてみよ。そうすれば、彼女が無傷であるかどうかが分かるだろう。」

そこで、聖なる乙女は裸にされ、民衆に見えるように立たされた。ただ恥じらいだけが彼女の覆いであり、彼女は預言者ダビデの言葉を繰り返した。*「恥が私の顔を覆う……」*（詩篇43:16）。彼女には、飢えに駆られ激昂した獣たち――ライオンや熊――が放たれた。　檻から出て、衣服を身にまとわない乙女を見たとき、彼らは頭を地面まで下げ、目を伏せ、まるで乙女の裸体を恥じるかのように、彼女から後退した。なんと驚くべき光景だろう！　獣たちは恥を感じていたのだ：　少女の裸体を目にするのを避けたが、人々は恥知らずにも彼女を見つめていた――かくして、言葉を持たない動物たちが、この光景において人間を非難し裁く者となったのである。本来は血に飢えた性質である獣たちが、貞潔な人間の品性を身につけた一方で、理性を備えた人間たちは、野獣のようになってしまったのだ。　しかし、彼らはそれで何を得たというのか。人々の目の前で貞淑な乙女を裸にし、彼女の名誉を傷つけようとしたが、かえってその名誉を高めてしまっただけである。聖金口ヨハネスは、寝室でペンテフリエの妻が、そして民衆の面前でフェクラが裸にされたことを振り返り、次のようによく語っている：　「エジプトの好色な妻は、寝室で裸にされたことで、いったいどのような利益を得たというのか？　最初の殉教者フェクラは、大勢の民衆の目の前で裸にされたことで、いったいどのような害を被ったというのか？　フェクラは、裸にされたにもかかわらず、エジプトの女のように罪を犯すこともなく、不名誉にまみれることもなく、むしろ聖人として称えられました。多くの人々の前でさらされたこの裸体は栄光に包まれたのに対し、あの閉ざされた寝室での裸体は恥辱にまみれたのです[6460]。

聖テクラがその場所で裸で立っていると、雌ライオンの一頭が近づいてきて、彼女の前に横たわり、まるで彼女の処女の貞節に敬意を表するかのように、その足を舐めた。このことについて、聖アンブロシウス[6461]は次のように述べている：　「地面に横たわり、聖女の足を舐める獣が見られた。それによって、その獣は、処女の体に害を及ぼすことはできないと無言で証ししていたのである。獣は、自分によって引き裂かれることになっていたその者にひれ伏し、自らの本性を忘れ、人間が失ってしまった品性を身につけたのである。」

一方、民衆は、獣たちが聖なる乙女に触れようともしないのを見て、大声で叫び始めた。

「フェクラが信仰する神は偉大なり。」

しかし、拷問官は神の力を知らず、別の方法でフェクラを滅ぼそうとした。彼は深い穴を掘らせ、そこに様々な爬虫類や蛇、エヒドナを詰め込み、聖女をそこに投げ込むよう命じた。　しかし、かつてライオンの口を押さえ、今や蛇の牙を鈍らせ、その猛威を鎮め、毒を無力化した御方は、聖女を無傷のまま穴から出させられた。それゆえ、皆はこの奇跡に驚嘆した。　邪悪な拷問者は、これ以上何をすべきか長い間途方に暮れていた。ついに、彼は二頭の力強い雄牛を連れてくるよう命じ、フェクラの足をその間に縛り付け、燃え盛る棒で雄牛を突いて、雄牛たちが四方八方に散り散りになって彼女を引き裂くように仕向けた。　しかし、その後も聖女は無傷のままであった。というのも、彼女が丈夫な縄で雄牛たちに縛り付けられ、赤熱した鉄で雄牛たちを突かれ始めたとき、縄は蜘蛛の巣のように引き裂かれ、雄牛たちは逃げ去ったが、聖女は全く傷つくことなくその場に留まっていたか

[6460] この金口ヨハネの言葉は、生まれつき目の見えない人に関する説教の中に含まれている。

[6461] ミラノの聖アンブロシウス司教は、アリウス派との勝利に満ちた闘争と、信徒たちの福祉への配慮で知られている。彼は397年に死去した。その記念日は12月7日である。聖テクラについては、『貞潔論』第2巻で言及されている。

らである。　そこで、この出来事に驚いた公爵自身も、その乙女に神の力が宿っていることを認め、フェクラを呼び寄せてこう尋ねた。

「お前は誰だ？　そして、どのような力を持っているのだ？　何ものも、お前を傷つけることができないのか？」

すると彼女はこう答えた。

「私は生ける神のしもべです！」

それ以上は何も語らなかった。公爵は、フェクラをあらゆる危害から守ってくださる神を畏れ、彼女に立派な服を着せるよう命じ、次のような判決を下して彼女を解放した。「神のしもべであるフェクラを、自由の身とする」。

聖女はトリフェナの家へ向かい、フェクラの解放を祝って、トリフェナの家全体に大きな喜びが満ち溢れた。　しばらくそこに滞在しながら、フェクラは神の言葉を説き、多くの人々にキリストへの信仰を教えた。彼女は、自分の父であり師であるパウロに会いたいと強く願い、彼を見つけ出しては彼に従おうとしたが、パウロはそれを許さず、こう言った。

「花嫁を連れて戦場へ行く者などいない。」

そこで彼女は使徒から祝福を受け、セレウキア[6462]へ向かい、セレウキア近郊の山にある荒野に定住した。そこで断食、祈り、神への黙想に励み、多くの奇跡を行い、あらゆる病を癒した。　周辺の住民たちはこのことを知ると、彼女のもとを訪れ、病人を連れてきた。聖テクラは彼らに、我らの主イエス・キリストへの信仰を教え、癒やした。　ある日、聖女が住んでいた場所のそばを、セレウキアから異教の祭司が馬に乗って通りかかった。その時、自分の食事用の草を摘んでいたテクラを見て、彼はその美しさに魅了され、不純な欲望に燃え上がった。馬を鞭打って彼女のもとへ駆け寄り、邪悪な企みを遂げようとした。　しかし、聖女は神の力に支えられ、彼を捕らえて地面に叩きつけ、激しく地面に叩きつけたため、彼は三日間、意識を失い、身動きもできないまま横たわっていた。通りかかった人々は、祭司が死人のように横たわっているのを見て、彼に何が起きたのかと首をかしげた。　三日目に、この出来事は町にも知れ渡った。すると、大勢の人々が町から駆けつけ、彼に何が起きたのかを見物し、彼を家に連れ帰ろうとした。司祭は意識を取り戻すやいなや、すぐに立ち上がり、こう言った。

「ある女神を見かけ、そのせいでこのような目に遭ったのだ。」

彼は激しい痛みに苦しみながら、ようやく自宅までたどり着くことができた。　彼は画家を呼び寄せ、18歳の乙女を板に描くよう命じた。画家が描き始めると、神の御業により、彼は聖テクラの姿を非常に見事に描き出すことができた。その絵は驚くほど生き生きとしていた。仕事を終えた画家は、そのイコンを司祭のもとに持ってきた。司祭は、これほど忠実に描かれた姿を見て、こう言った。

「まさに私が目にしたのは、そんな娘だった！」

彼はイコンを受け取ると、それに口づけをし、たちまち完全に癒やされた。そして、この聖テクラの像をその後も自宅に敬虔に祀り続けた。その後、彼は聖処女の説教によって、家族全員と共にキリストを信じるようになった。　使徒に等しいテクラは、長い間その地に住み、多くの人々を救いの道へと導き、多くの人の不幸を助け、多くの病を癒した。　セレウキアの医師や魔術師たちは、何らかの病に罹った者が自分たちのところへではなく、まっすぐにテクラのもとへ向かうのを見て、彼らの狡猾な手口は終わりを告げた。　利益を失った彼らは貧しくなり、そのため深く嘆き、無償で訪れる者すべてを癒やしていた善良な治療者フェクラに憤りを抱くようになった。嫉妬と怒りに駆られた彼らは、ある堕落した若者たちを唆して、彼女を無理やり辱めさせようと企んだ。敵対者たちは互いにこう語り合った。

[6462] セレウキアは、リカオニアの南、アンティオキアの北に位置する。

「フェクラは清らかな乙女だから、偉大なる女神アルテミスに愛されているのだ。女神は彼女の願いを聞き入れ、病める者を癒す力を与えている。もし彼女が穢されれば、アルテミスは彼女から背を向け、その癒しの力は奪われるだろう。そうなれば、我々の医療技術が再び優位に立つことになる。」

そう考えながら、彼らはこの卑劣な行いを行うために恥知らずな若者たちを探し出し、ワインを飲ませて酔わせた上で、フェクラを辱めるよう懇願した。その際、彼らに多額の金を渡し、もし彼らの願いを叶えてくれれば、さらに多くの金を与えると約束した。　狂気と不信仰に囚われた彼らは、フェクラがアルテミスの力ではなく、キリストの恵みによってあらゆる病や不調を癒していることを知らなかったのだ！

放蕩な若者たちは、酒に酔いしれ、医師や魔術師たちの言葉に従った。彼らは、情欲に駆られ、邪悪な考えと悪意に満ちて、急いでフェクラのもとへ向かった。

彼らを見て、フェクラは尋ねた。

「子らよ！　何のご用ですか？」

彼らはそれに答えて、卑猥な言葉を口にし始めた。これを聞き、彼らの邪悪な意図を悟った聖テクラは、彼らから逃げ出した。野獣を一度も恐れたことのない彼女が、恥知らずな人間たちから逃げ出したのである。　彼らはフェクラを追いかけて、まるで狼が羊を追いかけると同じように彼女を追い詰めた。彼らがもうすぐ彼女に追いつこうとしたとき、彼女は神に、不義な者たちの手から自分を守ってくださるよう祈った。すると直ちに、その場所にあった岩山が神の御命令により割れ、聖女をその奥深くに迎え入れ、彼女の貞操を守った。　この山は、彼女の尊い遺体の墓となり、そこで彼女は自らの魂を神の御手に委ねた。彼女の生涯は九十年に及んだ。今や彼女は、終わりのない命の中で、父と聖霊と共に今、そして常に、世々限りなく賛美される、命の与え主であるキリスト・神を賛美している。アーメン。

トロパリオ、第4調：

パウロの教えに学び、神を知らぬ者であったフェクロよ、ペトロの信仰によって確固たるものとなり、神に召された最初の殉教者、また女性たちの最初の苦難者となられた。　あなたは、まるで花咲き誇る場所であるかのように炎に登り、獣や若者たちはあなたを恐れおののきました。あなたは十字架を武器としたのです。それゆえ、称賛に値するキリスト・神よ、私たちの魂が救われますようにと、彼女を通して祈ってください。

コンダク、第8調：

あなたは貞潔の美徳をもって輝き、殉教の冠をもって飾られ、最も栄光ある乙女として使徒職に委ねられました。あなたは火の炎を露へと変え、また、最初の苦難者としての祈りによって、若者の激怒を鎮められました。

聖コプリイの記念日

記念日：9月24日

聖コプリイは、共同生活の指導者である聖テオドシオス大聖人の修道院の塀の近くにある[6463]のゴミ捨て場で生まれた。彼の母は、アガリア人による迫害から逃れるため、他の多くの人々と共に、聖テオドシオス大聖人の修道院の塀の下に身を寄せるために駆け込んだのである。　アガリア人が去ると、修道士たちは修道院から出て行き、その堆肥場で生まれたばかりの赤ん坊を見つけた。彼らのイグメンである大テオドシオスの命令により、彼らはその赤ん坊を引き取り、コプリイという名を授けた。その子は山羊の乳で育てられた。そのために、修道士たちは群れの中からわざわざ一頭の特別な山羊を選んだ。　赤ん坊が食事を求めてくるたびに、その山羊は、共に放牧されていた羊の群れから自ら離れ、山を下りてきて、赤ん坊に乳を与えた後、再び群れに戻っていった。彼女は、赤ん坊が固形食を食べられるようになるまで、そうし続けた。　若きコプリイが成人すると、聖テオドシウス大聖人は彼を特に愛するようになった。その敬虔な生活により、彼はやがて聖霊の住まいとなった。野生の獣たちでさえ、彼の言うことを聞いた。ある時、彼は修道院の庭で、菜園の野菜を貪り食っている熊を見かけた。 聖人はその獣を捕まえ、庭から連れ出し、 今後そこに入らないよう命じた。またある時、彼は修道院に薪を運ぶため、ロバと共に山へ登っていた。彼が薪を集め始めたその時、熊がロバの太ももを噛みついた。そこで聖コプリイは熊に薪を載せ、こう言った。

「お前は、ロバが回復するまで働き続けなければならない。」

熊は彼の言うことを聞き、ロバが回復するまで薪や水を運んだ。そして、ようやく聖人はその獣を許した。

しばらくの間、聖コプリイは修道院の厨房で奉仕していた。ある日、大釜の中の料理が沸騰し、縁から溢れ出し始めた。近くに杓子が見つからなかったため、聖人は素手で泡を取り除き、続いてその手で釜の中の料理をかき混ぜて沸騰を止めたが、自身は全く無傷であった。　聖人は90歳に達し、修道士たちの間で太陽のように輝いていた。彼は聖職に叙階され、あらゆる美徳に恵まれていた。しばしば人里離れた場所へ赴き、神に熱心に祈りを捧げた。　当時すでにこの世を去っていた聖テオドシウス大聖人は、時折彼の前に現れ、そばに立って彼と共に祈りを唱えた。最後に彼の前に現れた際、彼はこう言った。

「さあ、コプリイよ、今こそこの世の生涯を去る時が来た。あなたのために用意された安息の地へ、我々のところへ来なさい。」

この幻視の直後、この尊い聖人は、しばらく病に伏した後、修道者たちに別れを告げて、主のもとへ召された[6464]。

我らの尊き父ニカンドル・プスコフの聖伝

記念日：9月24日

モスクワ大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチ[6465] の治世、プスコフ地方の荒涼とした湿地帯にあるヴィデレビエ村に、フィリッポという名の敬虔な人物が住んでいた。　彼自身も、その妻アナスタシアも、神に喜ばれる生活を送り、頻繁に神殿を訪れて主の御言葉を聞き、キリストの戒めを学んでいた。　長男のアルセニーは、常に両親の敬虔な模範を目の当たりにし、世俗の喧騒を捨てて修道院に入り、修道衣をまといました。しかし、その弟のニコン――後に私たちの尊者ニカンドルとなった人物――は、その偉業と奇跡によってさらに名声を博しました。

[6463] コプリウスという名は、ギリシャ語の「コプラ」（腐敗した堆肥、糞の山）に由来する。

[6464] 聖コプリイは530年頃に逝去した。

[6465] ヴァシリー・イオアンノヴィチ公（1505年～1533年）。

ニコンは1507年に生まれ、幼い頃から神の恵みに包まれていました。まだ若い頃、彼は両親に、聖書の教えを受けるために自分を預けてほしいと頼みました。　偉大なる神の御寵児、ミルリキの大司教ニコライに捧げられた教会を頻繁に訪れ、この栄光ある修行者の奇跡の話を耳にするうちに、少年ニコーンは幼い頃からキリストに従いたいという熱意に燃えるようになった。また、労働と祈りに捧げられた兄アルセニイの静かな修道生活も、彼には大いに好ましかった。　また、最近この世を去り、その功績と奇跡によって輝きを放ったプスコフの聖サヴァと聖エウフロシーナの模範も、若者の決意を強固なものにした。ニコンは、これらの神の御使いたちの朽ちることのない聖遺物に拝礼し、彼らが修業に励んだプスコフ近郊の地を訪れたいと願っていた。　この聖なる少年は、創造主に対し、有害な世俗の虚栄から彼を救い出し、御自身の永遠の御国にふさわしい者にしてくださるよう、頻繁に、そして熱心に祈った。　ニコンは、その若さにふさわしい遊びも、美しい衣服も好まず、無駄な会話にも加わらず、常に質素な服を身にまとい、霊的な貧しさと心の清さを愛し、絶えず人類の敵と戦い、そのようにして将来の、さらに大きな霊的偉業へと自らを準備していた。　その間、神の御心により、彼の父は世を去った。十七歳の青年は、主に仕えたいという強い願いに燃え、涙と謙虚さをもって母を説得し、財産の一部を貧しい人々に分け与え、一部を神の教会に献げ、この虚しい世を去るよう促した。　ある女子修道院を訪れたアナスタシアは、そこで修道衣をまとい、まもなく永遠の命へと旅立った。そこでは、徳高く敬虔な者たちが、古来より定められた通り、朽ちることのない冠を受けるのである。　その後、ニコンはプスコフの街へ向かい、そこにあるすべての教会や修道院を訪れ、周辺の修道院も巡り、　、ついに聖エウフロシーナと聖サヴァの偉業が刻まれた地へとたどり着いた。　敬虔な若者は、主が彼をこれらの御自分の聖人たちの聖遺物に拝礼させるために導いてくださったことを大いに喜び――それは彼がかねてより切望していたことでもあった――これから待ち受ける苦行に向けて、さらに精神を強めた。ただ、ニコンが深く嘆いていたのは、聖書について十分に教えられていなかったことだけであった；　それゆえ、この若き修行者は、主であり万人の師である方に対し、彼の心の目を照らしてくださるよう熱心に祈った。そして、聖霊の導きにより、彼は再びプスコフへと向かった。そこで、フィリッポという名の敬虔な男がニコンに出会い、彼を自分の家に迎え入れ、仕事を与えた。　ニコンが聖書を深く理解したいという強い願いを持っているのを見て、フィリッポは彼を、その知識と知恵で名高いある助祭のもとへ学びに送り出した。聖人は頻繁に、そして熱心に祈り、こう言った。

「主よ、あなたの真理をもって私を導き、あなたの御言葉を学ぶ知恵をお与えください。」

そして、人を愛する神は、その謙虚なしもべの熱烈な祈りを聞き入れられた。神はニコーンに聖書の知識を啓示し、彼に御自身の恵みを注ぎ、知恵の霊を授けられた。そのため、ニコーンがどれほど早く、そして見事に聖書を習得したか、皆が驚嘆した。　火が金を精錬するように、不幸もまた人を清め、さらに高めるのである。　人類の古くからの嫉妬者である悪魔は、この聖人の敬虔な生活を許せず、彼に対して悪意ある者たちを煽り立てた。しかし、聖ニコンはキリストの戒めに従い、すべての攻撃を祈りと感謝をもって耐え忍び、その謙遜さによって、自分に反旗を翻した者たちを打ち負かした。

ある日、教会で祈っていたとき、聖人は福音書の次の言葉を耳にしました。「疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。　わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。わたしは心優しく、へりくだっているから。そうすれば、あなたがたの魂は安らぎを得る。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイ11:28–30）。この言葉はニコンを深く感動させ、彼は長年の願いを一日も早く実現しようと決心した。 彼は以前から、プスコフとポルホフの間[6466]、村や集落から遠く離れた、荒野のような場所について聞いていた。そこは原生林と立ち入ることのできない沼地に囲まれていた。しかし、ニコンにはそ

[6466] 現在はプスコフ州の郡庁所在地である。

の場所を正確に教えてくれる人がいなかった。　聖霊が義なる預言者であり王であるダビデを通して語られた言葉、*「私は遠くへ去り、荒野にとどまりたい。嵐や暴風から逃れるために急いで身を隠したい」*（詩篇54:8–9）を常に実践したいと願って、この謙虚な修行者は熱心に主に祈り、こう言った。

「主よ、わが命の主よ、イエス・キリスト、神の御子よ、わが祈りを聞き入れ、私に荒野を見る恵みをお与えください。そして、私を救いの道へと導き、その人里離れた場所を示してくれる人を、私のもとに遣わしてください。」

聖人の祈りは聞き入れられ、聖霊の導きにより、彼はプスコフから故郷の村ヴィデレビエへと向かった。そこでニコンは、テオドールという名の男がその場所を知っていることを知った。テオドールの元を訪れた聖人は、彼にこう頼んだ。

「幼い頃から人里離れた場所の話を聞いていましたが、その場所を教えてくれる人はいませんでした。あなたはその場所をご存じですね。偉大なる神の御名のゆえに、その場所を教えてください。そうすれば、あなた自身も主から報いを受け、私の罪深い魂の導き手となってくださるでしょう。」

ニコンのそのような強い願いを見て、敬虔な男テオドールは、他の人々に内緒で彼を荒野へと案内した。　小さな小屋を建て、二人はそこに住み着き、労苦と祈りに励むようになった。しばらくして、尊者ニコンは、いつもの習慣に従って、聖なる栄光ある神現祭の教会で神聖な典礼に参列するため、プスコフに戻った。その教会で、祭壇からニコンに向かって声が響いた。

「ニコンよ、ニコンよ、わがしもべよ、敬虔な人テオドールが示した荒野へ行きなさい。そこであなたは安らぎを見出すだろう。その荒野はあなたを通して栄え、多くの人々がそこで救われるだろう。そこを訪れる者たちは恵みを受け、わが名を賛美するであろう。」

聖人は直ちに霊的な喜びに満ちて教会を出て、主ご自身が示された場所へと向かった。道中、ニコンは至福のニコライ・プスコフスキー[6467] に出会い、彼は、荒野では修道士を悪魔による様々な誘惑や悪人からの攻撃が待ち受けていると予言した。しかし、何ものもニコンを止めることはできなかった。 戦いに赴く戦士のように歓喜に満ちて、尊者は自身の 荒野に戻り、そこで15年間、労苦、祈り、断食、聖書の朗読、絶え間ない徹夜祈祷に励み、悪魔や悪人からの多くの苦難に耐えた。

その間、彼の功績の噂が広まり、近隣の住民たちが彼のもとに集まってくるようになった。謙虚な修行者にとって、これは重荷であった。彼は人々からではなく、神からの報いを期待しており、この世の栄光は彼にとって重荷だったからである。　かくして、涙と深い悲しみを抱き、この地を離れたくはないと思いながらも、同時に人々の称賛から逃れるべく、聖人は再びプスコフへと向かった。そこで彼を迎え入れたのは、修道士が修行中に暮らしていたあのフィリッポであった。　ニコンが神に身を捧げることを固く決意したことを知ると、彼はこの至福の者を聖ヨハネ・神学者修道院へと連れて行った。そこには、この修道院の創設者である聖サヴァ・クリペツキーの聖遺骨が安置されていた。この神の修道者の肖像を目にし、その聖遺骨の棺にひれ伏して、ニコンはこう祈り始めた。

「神に愛された尊者サヴァよ、主キリストに祈ってください。主が、罪深く、不適格な御僕である私を、あなたが歩まれたその道を歩むにふさわしい者とされ、この道において私を助け、私の守護者となってくださいますように。」

その後、ニコンは謙虚に涙を流しながら、この修道院のイグメンに、自分をも修道者の一員として受け入れてくれるよう懇願した。しかし、イグメンは彼を引き止め、こう言った。

「当修道院は貧しく、あなた自身も健康が優れていない。そのような重い負担を自らに負うのはやめなさい。私たちと一緒に暮らすことはできるが、修道服を着ることを急ぐ必要はない。」

[6467] プスコフの福者ニコライは、1576年2月28日に帰天した。

しかし、ニコンはただ一つ、自分の願いを叶えてほしいと懇願した。そこで修道院長は、聖人のそのような熱意、修道生活を受け入れたいという抑えきれない願望を見て、ついに聖人の切実な願いに屈せざるを得なかった。彼は司祭修道士の一人にニコンの剃髪を行うよう命じ、彼にはニカンドルという名が与えられた。

それから、この尊者は新たな力を得て修行に打ち込み、徳においてますます進歩し、主に対して百倍の果実を捧げた。キリストへの愛に燃え、彼は自らの意志を完全に捨て去り、全身全霊を神に委ね、聖霊の恵み豊かな宮となった。　彼は常に次のような敬虔な思索によって自らを強めていた。「修道生活は小麦畑に似ている。そこには頻繁な涙の雨と、多大な勤勉さが求められる。もし茨ではなく豊かな実りを結ばせたいのなら、心を澄ませて勤勉に励め。　石だらけの土壌ではなく、肥沃な大地となるよう努めよ。そうすれば、天からあなたの心に蒔かれた種が実を結び、落胆や怠慢という灼熱によって枯れることがないだろう。このような救いをもたらす思索で魂を養い、祈りによって霊的な喜びを与えつつ、尊者ニカンドルは自らの肉体を疲れ果てるまで鍛え上げた。　ダビデの*「わが苦しみを、わが衰えを顧み、わがすべての罪を赦したまえ」*（詩編24:18）という言葉を常に心に留め、尊者はいかなる肉体労働も決して怠らなかった。兄弟たちや修道院長は、聖人の生き様と功績に驚き、このような修行者を送ってくださる神を賛美した。　前述の二人の男、フィリッポスとテオドロスは、聖人の模範に従い、同じ修道院で修道衣をまとい、出家した。前者はフィラレートと、後者はテオドシオスと名付けられた。しばらくして、二人は安らかに永遠の命へと旅立った。

一方、尊者ニカンドルは、自身の修道生活が兄弟たちに驚きを与えていることに気づき、修道士たちとの共同生活に嫌気がさし始めた。彼にとって、人々の称賛は重荷であった。　兄弟たちの称賛から逃れ、かつての隠遁生活を懐かしみながら、彼は自らの荒野へと向かい、そこでさらに丸15年間を過ごした。彼はしばしば「ウジ」と呼ばれる草（[6468] ）だけを糧とし、絶えず祈りと労苦に励み、あらゆる手段を尽くして自らの魂の救済に心を砕いた。　彼の命そのものが、しばしば危険にさらされた。ある時、悪魔の唆しを受けた悪人たちが、聖人の粗末な小屋を襲撃し、隠者のわずかな持ち物を奪い、彼の最後の慰めである聖なるイコンや書物までも奪い去った。さらに、彼自身を槍で肋骨に深く刺し、かろうじて息があるだけの状態で置き去りにした。　神の助けにより、聖人は立ち上がり、次のように祈り始めた。

「主よ、わが神イエス・キリストよ、あなたを信頼する者たちの力であり、砦であられる方よ！　罪なきあなたは、不当にもユダヤ人たちから自発的な苦しみを受けられました。しかし、私は、あなたのふさわしくないしもべとして、数えきれないほどの罪のゆえに、これらすべてを完全に当然の報いとして耐え忍びました。　すべてに感謝し、涙と心を打たれた思いをもって、この人々のためにあなたに祈ります。彼らを赦してください。彼らは自分が何をしているのかを知りません。罪を犯したのは彼らではなく、あらゆる　の悪の種をまく敵が、彼らをそのような行いに駆り立てたのです。主よ、私という罪人のせいで彼らが滅びることをお許しください。彼らは無知のうちにこれを犯したのです。

助けを速やかに与えてくださる主は、驚くべき方法で、その謙虚なしもべに癒やしを授けられたが、強盗たちもまた罰せられた。聖人の庵から一と半ヴェルスタ離れたところにはデミャノヴォ湖があり、そこへデミャンカ川が流れ込んでいる。　神の御許しにより、この湖のほとりで強盗たちは道に迷ってしまった。彼らは三日間、道を探そうと徒労に終わり、激しい飢えに苦しんだ。そのうち二人は自分の罪を悔い改め、仲間たちにこう語りかけた。

「私たちが道を見つけられないのは、聖人の持ち物を奪い、彼に重傷を負わせたという不義を犯したからだ。」

残りの二人は完全な絶望に陥り、こう言い始めた。

[6468] ウジ、あるいはウジグサは野生のカラシナであり、この植物の別名はブリレナである。

「あの人、自分すら守れなかったんだ。」

しかし、全知の神はこれらの言葉を聞き届け、聖人を誹謗した者たちを罰された。デミャンカ川を渡ろうとしたとき、彼らは足場から転落し、溺死してしまった。それを見た残りの二人は恐怖に駆られ、主が彼らの罪を赦してくださるよう祈り始めた。　彼らの祈りは聞き届けられ、やがて彼らはニカンドルの小屋への道を見出した。尊者から奪ったものをすべて返すと、彼らは苦々しい泣き声とすすり泣きを上げて、聖人の前にひれ伏し、彼らを赦し、主のために祈ってくださるよう懇願した。　尊者ニカンドルは、父のような愛をもって悔い改めた二人を迎え入れ、赦し、食事を振る舞い、悪しき行いをやめるよう懇願した。また、人間の敵が彼らにこの破滅的な道を進むよう唆していることを指摘し、平穏のうちに彼らを見送った。　無事に帰還した彼らは、自分たちに起きた出来事を皆に語り、その際、慈悲深い神と、その御心に適う聖ニカンドルを賛美した。それ以来、聖人の名声はさらに高まり、多くの人々が聖人のもとを訪れ、食糧を捧げ、祝福を請うようになった。

ニカンドルは長い年月を荒野で過ごし、そこで多くの苦難に耐えたが、それでもなお、この世の名声は彼にとって重く耐え難いものであり、何よりもそれを恐れていた。彼が恐れていたのは、強盗たちというよりは、むしろ人々の称賛の方であった。そのため、聖人は再び荒野を離れ、クリペツキー修道院へ向かい、そこで修道士となった。　修道院に到着しても、聖人は修業の生活を続けた。彼は乾いたパンだけを糧とし、渓流の水で喉の渇きを癒やし、ワインも魚も口にしなかった。ただ土曜日と日曜日には、わずかな煮込み料理を自分に許したが、それもしばしばなかった。　この謙虚な修行者は、その徳高く厳格な生活によって修道院の誰よりも優れており、常に皆に奉仕と援助を惜しまず、遠くから水や薪を運び、　夜は絶え間ない徹夜祷に明け暮れ、しばしば夜間に森へ出て、裸身となり、蚊やアブに刺され、その体は血の筋で覆われるほどであった。その間、彼は微動だにせず座り続け、糸を紡ぎながらダビデの詩篇を詠んでいた。　そして朝になると、聖人は修道院に戻り、真っ先に教会へ駆けつけ、そこで礼拝の間中、席を離れることなく立ち続け、最後に教会を後にした。兄弟たちは彼の偉業に感嘆し、彼を聖堂奉仕者に任命した。　聖人には、プロスフォラを焼くという困難で重責な務めが課されたが、聖ニカンドロスは喜びをもってこの仕事を果たし、こう語った。

「もし我らの主イエス・キリストが、最後の晩餐のために用意されたパンを御自身の体と呼ばれたのなら、私は、神が私に、偉大かつ畏れ多い秘儀が執り行われるようなパンを準備する栄誉を与えてくださったことを喜ぶべきです。それらは、驚くべき、そして計り知れない方法で、キリストの聖なる御体へと変容するのです。」

こうして、神の修道士はたゆまず働き続けた。兄弟たちは、彼のますます高まる熱意を目の当たりにし、その謙遜さと柔和さに心を打たれ、イグメンにニカンドルをケラー（[6469]）に任命するよう懇願した。イグメンは修道士たちの願いを聞き入れ、この尊い方をケラーの職に就かせた。　この昇進に際しても、聖人は以前の生活を変えることなく、あたかも主ご自身から託された務めであるかのように、謙遜と熱意をもって新たな職務を全うした。彼は与えられた権威に驕ることなく、常に聖書の言葉、「*あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、あなたがたのしもべとなりなさい*」（マタイ20:26）という聖書の言葉を常に心に留めていた。しかし、聖ニカンドロスが会計係を務めたのは長くは続かなかった。彼は新しい役職において誰かを傷つけてしまうことを恐れていた。さらに、以前の隠遁生活に戻りたいと切望していたため、再び修道院を去ることを決意した。　修道院を出て、彼は修道院から4ヴェルスタ離れたある島に定住した。そこで聖人は再びいつもの労役に専念し、そこで3年半を過ごした。この隠者の　な修行生活の名声は多くの人々を彼のもとに引き寄せるようになったが、ニカンドロスは再びそれを重荷に感じるようになった。　その間、人々の敵であり嫉妬の源である悪魔――偽りと不正の父――は、クリペツキー修道院のイグメンに、ニカンドルが修道院の収入を減らしているという考えを吹き込んだ。そのため、イグメンは尊者に対し、どこか別の場所

[6469] ケラー（ギリシャ語の「ケラリオス」に由来）は、修道院の備蓄品を保管する義務を負っていた。

へ移るよう求めた。　聖人は、不当に自分を非難した修道院長のご要望を、極めて謙虚に受け入れた。そして、以前聖霊から示されていた荒野へと再び向かった。

旅の途中、聖ニカンドルはロコティという村に到着した。日はすでに暮れかけており、聖人は一晩泊めてもらうためにある村人の家を訪れたが、その家ではちょうど宴会が開かれていた。これはちょうど「チーズ週間」の月曜日であり、聖人はいつもの習慣に従って断食を守っていた。　農民はニカンドルに食事を勧めたが、聖人はそれを拒んだ。そこで、人間の救いの敵は聖人を侮辱しようと企んだ。聖人が村に到着する少し前、彼は一部の悪人たちに、その村の農民の一人の家を略奪するという考えを吹き込んだ。　彼らはその通りに実行し、その家の家に襲いかかり、略奪し、焼き払った。そのため、聖人をもてなした農民も、聖人の拒絶に腹を立て、こう言い出した。

「おそらく、お前も私の隣人の家を焼き払った連中の一人だろう。そして、私の食事に手をつけようとしないことからして、私に対しても同様のことを企んでいるに違いない。」

彼はこのことを隣人たちに話した。隣人たちは集まり、聖人の全身と頭を棒で容赦なく打ち始めた。　しかし、私たちの救い主キリストは、聖人が長く苦しめられ、悪魔の誣告によって命を落とすことを許さず、まもなく、私たちの至聖なる主の母、神の母であり永遠の処女であるマリアの祈りによって、彼を苦しみから救い出された。聖ニカンドロスのうめき声と、彼を殴打する者たちの叫び声は、通りかかった人々の耳に届いた。彼らは駆け寄って、こう言い始めた。

「この老人は、あなたたちに何の悪も働いていない。何をしているのだ、狂人たちょ。罪のない人を死に追いやろうというのか？」

その人々は恥じ入り、聖人に彼らを赦してくれるよう懇願した。また、彼が望むような食事を差し出したが、聖人はそれを口にするのを拒み、自分を苦しめた者たちのために次のように祈り始めた。

「主イエス・キリスト、神の御子よ、彼らにこの罪を問わないでください。彼らは、自分が何をしているのか分かっていないのです。」

翌日の朝になってようやく、ニカンドロスは少しのパンを口にし、無知のゆえに彼を殴打した村人たちを心から赦し、謙虚な心で旅路についた。　ある時、旅を続ける中で、聖人は疲れ果てて横になり、うとうとし始めた。すると突然、二匹の巨大で力強い狼が自分に襲いかかろうとしているのが見えた。聖人は起き上がり、十字を切って、杖で地面を叩きながらこう言った。

「*不義を行う者たちよ、みな私から離れよ*」（詩編6:9）。

すると、獣たちはたちまち姿を消した。自分の荒野に到着すると、聖人は再び修行に励み、そこで丸15年間を過ごした。　悪魔や悪人からの多くの試練に遭ったが、絶え間ない祈りと自らの罪に対する涙の嘆きによって、彼らの狡猾さを打ち破り、勝利を収めた。まるで輝く真珠のように、その行いで自らの魂を飾り立て、常に魂に有益な思索にふけっていた。

万物の創造主である私たちの神の恵みは偉大である。神は、その御使いが世を去った後、天において彼を栄光に輝かせただけでなく、生前にも彼に透視の賜物を授けられた。そのことは、以下の話からも明らかである。　ペトルという名で、通称エシウコフと呼ばれるある男が、聖人の小屋から十二ヴェルスタ離れた場所に住んでおり、子供がいなかったことを深く嘆いていた。ある日、一頭のヘラジカがペトルの庭のすぐそばまで駆け寄ってきた。　これは偶然ではなく、神の御心によるものであった。なぜなら、福音書にはこう記されているからである。*「山の上にある町は隠れることができない。また、灯をともして、それを器の下に置くことはなく、燭台の上に置く。そうすれば、家の中の人すべてに光を照らす」*（マタイ5:14）。かくして、慈悲深い主は、ヘラジカを通じて聖ニカンドロを彼に示されたのである。ペトルは馬にまたがり、仲間たちと共にその獣を追いかけた。同行者たちは次第に彼から遅れを取り、ついには彼一人だけが残された。　ペトロは、森に身を隠そうとするその獣を長い間追跡した。人里離れた、通り抜けられない密林に迷い込んだペトロは、ヘラジカを

見失ってしまった。まさにその時、彼は小さな小屋に気づいた。ここに誰かが住んでいると思い、ペトロは扉を叩きながらこう言った。

「主イエス・キリスト、我らの神よ、我らを憐れみたまえ。」

しかし、返事はない。三度目になってようやく（聖人の慣習だった）、扉が開き、ニカンドルは、これまで一度もその聖人を見たことのなかったペトルを迎え、こう言った。

「わが子よ、ペトルよ、来訪者のための部屋が設けられている樫の木の方へ行ってくれ。私もすぐにそこへ行くから。」

指定された場所に着くと、ペトロはまもなく、端正な風貌の老人が自分に近づいてくるのを見た。彼はその老人に頭を下げ、祝福を求めた。

「主の祝福が、あなたとあなたの妻の上にありますように」と、老人は答えた。

ペトルは心の中でこう考えた。

「まことに、この人には神の恵みが宿っている。まことに聖霊に満たされている。なぜなら、私を見たこともないのに、私の名前も、私が結婚していることも知っているのだから。」

長老に深く頭を下げて礼を述べた後、ペトルは彼の名前と、砂漠でどれほど長く暮らしているのかを尋ねた。

「罪人ニカンドル――それが私の名です。そして、私がここにどれほど長く住んでいるかについては、尋ねないでください。それを知っているのは神お一人だけです」と、老修道士は謙虚に答えた。

するとペトロは、聖人の前にひざまずき、自分の不幸を痛切に嘆き始めた。

「私はもう年老いてしまったのに、息子一人もいないのです。」

それに対し、尊者ニカンドルはこう答えた。

「立ちなさい、わが子よ。そして、あなたの家へ帰りなさい。至聖なる聖母マリアの祈りによって、あなたには息子が授かるでしょう。」

そして実際、聖人の予言は的中した。それ以来、ペトルは頻繁に尊者のもとを訪れるようになり、その魂を養う教えに満たされた。

ある日、神の御心に適う者は彼にこう言った。

「私が永遠の命へと旅立った後、この荒野の地は高められ、栄光に包まれるだろう。私の罪深い肉体が葬られる棺の上には、私たちの至聖なる主の母、聖母マリアの栄光ある受胎告知を称える教会が建てられるだろう。」

またある時、シメオンという名の男が、聖人から祝福と教えを受けたいと願ってニカンドロスのもとを訪れた。聖人は、シメオンがまもなく死を迎えることを見抜くと、こう言った。

「シメオンよ、汝の命の時は短くなっている」と、そして彼にハサミを手渡して、こう続けた。

「主が示される修道院へ行き、修道者の姿を受け入れなさい。あなたの生涯の終わりが近づいているのだから。」

それを聞いたシメオンは、ある修道院へと向かい、そこで修道衣をまとい、まもなくキリストの聖体拝領を受けた後、安らかに永遠の命へと旅立った。

一方、人々は聖ニカンドロスの苦行の生活について耳にすると、ますます頻繁に彼のもとを訪れるようになった。彼らが静かに彼の修道室に近づくと、聖人が祈りを捧げ、何度も地面にひれ伏しているのが聞こえた。　聖人が彼らの到来に気づくと、眠っているふりをした。訪ねてきた者が「神父様、祝福をください」と言って扉を叩いても、ニカンドルは黙っていた。二度目も答えず、三度目にようやく、まるで眠りから覚めたかのように、聖人はこう答えた。

「我らの主イエス・キリストが、あなたを祝福してくださいますように、わが子よ。」

聖人はこのような修行に昼夜を費やしていた。この至福の者は決して横になって眠ることはなかったが、もし眠気に襲われることがあれば、座ったままうたた寝にふけった。それもほんの短い間だけで、その後また祈りを始めた。ニカンドロスは肉体を軽んじることを極め、水で洗うのは手と顔だけだった。　食事は、ほとんど植物で済ませていた。敬虔な人々がパンを捧げると、聖人は感謝の言葉を添えてその供え物を受け取り、その後、パンを乾かしてから、日没時にその状態で口にしていた。　喉の渇きは水で癒やした。これほど過酷な生活を送っていたにもかかわらず、彼の顔が曇っているのを見ることは決してなく、常に喜びと安らぎに満ちて輝いていた。大四旬節の間、聖人は週に一度だけ食事をとったが、聖金曜日にはデミャンスキー修道院へ向かった；　そこで畏れ多くも命を与えるキリストの聖餐に与った後、彼は再び自分のいる荒野へと戻っていった。この修道院の兄弟たちの仲間入りを果たすには、自分はふさわしくないと考えていたからである。聖ニカンドルが荒野で耐え抜いた労苦と偉業は、神のみがご存知である。　しばしば悪霊が現れて尊者をかき乱し、聖アントニオス・エジプトス（[6470] ）の場合と同様に、彼に傷を負わせることさえあった。主は御自身の修道士を励ますため、幻視の中で尊者アレクサンドル・スヴィルスキーを彼のもとに遣わされた。この神に愛された聖人は、目に見えない敵との戦いに臨むニカンドルを勇気づけた。　福音書には、この種は祈りと断食以外に何によっても追い出されない、と記されている。聖ニカンドルもまた、この武器によって闇の君主に対して勝利を収めたのである。　しかし、彼は悪意の霊たちと長く戦わなければならなかった。ニカンドルが労苦から休息をとろうとするたびに、　、彼のケリアの周囲で、まるで無数の戦車が通り過ぎるかのような騒音が立ち上ったり、あるいはティンパニや笛の音が聞こえたりした[6471] 。その時、聖人はダビデの詩篇を唱え始めると、騒音は止んだ。 このように、悪霊たちは長い間、昼夜を問わず聖人が休息をとることを許さなかったが、神の恵みによって聖人がついに彼らを完全に打ち負かすまで続いた。ある日、大きな熊が聖人の小部屋を訪れ、小部屋に体をこすりつける力があまりにも強かったため、小部屋は震え、今にも崩れ落ちそうになった。　聖人は小部屋の窓に十字を刻み、自らにも十字を切ってから外を見渡すと、小部屋の前に大きな獣が立っているのが見えた。そこで聖人は、もう一度十字を切ってから小部屋を出て、その獣に十字を切った。　まるで目に見えない力に打たれたかのように、熊は聖人の前に倒れ込み、その尊い足を従順に舐め始め、その後、森へと去っていった。そしてまた別の時、修道院の玄関で、尊者アレクサンドル・スヴィルスキーが彼に現れた。彼は聖人の功績を称え、こう言った。

「恐れるな、わが兄弟ニカンドルよ。今より、主があなたを敵のあらゆる罠から救い出されるだろう。」

それ以来、聖人は悪魔たちに対して絶大な権威を振るうようになり、悪魔たちは彼のケリヤに近づくことさえ敢えてしなくなった。

聖人のケリヤの近くに住んでいたナザリという名の男が、重い病に倒れた。全身が蛆に覆われ、とりわけ胸には大きな潰瘍ができて、内臓が見えるほどであった。その上、患者は激しい痛みを伴わずに体を動かすことさえできなかった。　ナザリウスは、この重病に一年六ヶ月もの間苦しめられた。家族たちは、ナザリウスがこのような不治の病に倒れたのを見て、病人の苦しみをどう和らげればよいか分からず、涙を流していた。　一方、ナザリウスは、聖ニカンドロスの奇跡と苦行の生活について耳にすると、家来たちに自分をその聖人のもとへ連れて行くよう命じた。家来たちはナザリウスの願いを聞き入れ、病人を連れてきて、隠者のケリアの前に寝かせた。　ニカンドロスが住居から

[6470] 悪意の霊たちと勇敢に戦った聖アントニオ・ザ・グレートの記念日は、1月17日に祝われる。

[6471] ティンパンとは、皮で張られた2枚の金属製の皿からなり、両側に鈴が付いた打楽器である。笛（スヴィレリ）は管楽器である。

出てくると、ナザリウスは全力を振り絞り、聖人の足を抱きしめて涙を流し、主に対して自分のために祈ってくださるよう、聖人に懇願し始めた。すると、聖人はこう答えた。

「ナザリウスよ、私の足に触れてはならない。あなたがそれを口づけしても無駄であり、私に癒やしを願っても無駄だ。なぜなら、あなたの癒やしは人間には不可能だが、神には可能だからである。癒やしを願うなら、信仰をもって神に祈るべきなのだ。」　これを聞いて、病人は、以前一度も会ったことのない聖者が自分の名前を知っていることに驚き、それゆえに、なお一層熱心に彼に懇願するようになった。

「もし、父上、あなたが私を見捨てられるなら」とナザリウスは付け加えた。「私はこの場所を離れず、あなたの修道室の前で死ぬでしょう。」

そこで、聖人はナザリウスの熱烈な信仰を見て、彼を旅人のための宿泊所に運ばせるよう命じ、そこで眠れるよう努めるようにと彼に言った。しかし、病人はこう答えた。

「聖なる父よ、この病気の間、私は一度も目を閉じることはできませんでした。それなのに、どうして今、眠るようにと勧めるのですか。」

これに対し、ニカンドルは言った。

「お前が来る前から、私はその部屋を暖めておいた。お前が私のところに来ることは分かっていたからだ。さて、私が祈りに行く間、眠れるよう努めてくれ。その後で、その傷を見せてくれ。」

ナザリウスはすぐに傷口をさらそうとしたが、シャツが体に強く張り付いていて、どうやっても剥がせなかった。それを見た聖人は、傷口に十字を切ってから、ナザリウスを指定された場所へ送り出した。そこで彼はまもなく深い眠りについた。　一方、聖人は自分の独房に閉じこもり、一晩中熱心に主へ祈りを捧げた。すべての苦しむ者たちの唯一の癒し主である主が、病める者に健康を与え、同時にその魂の目を照らし、信仰を強めてくださるよう願ったのである。　信仰をもって御名を呼び求めるすべての人々に速やかに助けを差し伸べられる主は、そのしもべの祈りを聞き入れられた。翌朝、ナザリウスは目を覚ますと、完全に健康になったのを感じた。彼はすぐに立ち上がり、かさぶたはシャツとともに皮のように剥がれ落ちた。　そこで彼は、癒やしを授けてくださった神に熱心に感謝し、その御使いである聖ニカンドロを賛美し始めた。しかし、尊者ニカンドロは、人々からの称賛を望まず、彼にこの出来事を語ることを禁じた。「そうしなければ、お前の身にさらに悪いことが起こるかもしれないから」と彼は付け加えた。

またある時、コストロフ公の家来である農民シメオン・ヴァシリエフがニカンドルの元を訪れ、馬を盗まれたと苦々しく訴えた。聖人はそれを聞くと深くため息をついた。　シメオンはなおも嘆き続け、その時からすでに五日が経過したと述べた。するとニカンドルは、深い謙虚さと柔和さをもってこう語り始めた。

「わが子よ、馬が盗まれたこと自体を嘆くべきではない。いや、盗まれたものを嘆くのではなく、盗んだ者を嘆くべきだ。なぜなら、その人は悪魔の唆しによってそうしたのだから。」

シメオンは驚いて彼にこう言った。

「では、父よ、あなたは盗みを働いたその人のことを悲しんでいるのですか？」

すると、ニカンドロスはこう答えた。

– シメオンよ、我が子よ、家へ帰りなさい。盗まれたものは戻ってくるだろう。

聖人のこの言葉は的中した。その夜、馬は自ら家まで駆け戻ってきたのである。シメオンは再び聖人のもとを訪れ、感謝を述べるとともに、起こった出来事を語った。

「そして、私の馬を盗んだ男は」と彼は付け加えた。「川で溺れ死んだのです。」

これを聞いて、ニカンドロスは悲しみに沈み、シメオンにこう説いた。

「わが子よ、自分の罪を悔い改める間もなく死を迎えてしまったキリスト教徒たちを悼むべきである。そして、その男のためにも祈らなければならない。主はこう言われたからだ。*『もし悔い改めなければ、皆同じように滅びてしまう』*と（ルカ13:3）。

尊者ニカンドルは長く語り続け、愛に満ちたその教えによってシメオンの心の目を照らした。シメオンは、このような御自分の聖人を地上に遣わしてくださった主を、これまで以上に熱心に賛美するようになった。

一方、聖ニカンドルは、この世での人生の終わりが近づいているのを見て、あらゆる美徳を身にまとって天の御国に入る準備を始めました。彼は昼夜を問わず祈り、全き慈悲の主が彼の罪を赦してくださるよう懇願しました。　普段の厳格な生活にとどまらず、天使たちに倣い、大修道服を身にまとうことを決意した。そのために聖人はデミャンスキー修道院へ向かい、そこで修道院長の手によって大修道服を授かった。これは彼の死の8年前のことであり、その後、聖人は再び隠遁生活に戻った。

その頃、ポルホフの町からペトルという名の助祭が、しばしば尊者のもとを訪れるようになった。聖人は彼と、聖書やキリストの信仰、キリスト教の美徳について多く語り合った。ある日、ニカンドルはペトルに、自身に起こったある奇跡について語った。

「以前は足にひどく苦しめられていたが、今は神の御慈悲により、その病から解放されたのだ。」

聖人の足に目をやると、ペトルは彼のすね全体が衣服から露わになっているのを見て、深く驚いた。またある時、ニカンドルはペトルにこう言った。

「まもなく主は、この罪深い私の魂を御許に召されるでしょう。私が亡くなったことを知ったら、ここに来て、この朽ちゆく私の体を葬ってください。」

「あなたが話していることは、いつ頃起こるのですか」とペトルは尋ねた。「そして、その出来事をどうやって私に知らせてくれるのですか？」

「どう知らせるかは分かりません。その頃には戦乱が起きているでしょう。その時、ポーランドとリトアニアの軍隊がここにやって来て、プスコフとポルホフを包囲するでしょう。　君は、私が神のもとへ旅立ったという知らせを聞いたら、恐れることなく、私の遺体を見つけたその場所で埋葬してくれ。そして、私の墓の上には、偉大で栄光に満ちた受胎告知を称える教会が建てられるだろう。

こうしてニカンドルは、この一時的な世を去る準備を穏やかに進めていた。尊者が最後に隠遁生活を送り始めてから47年2ヶ月が経過した頃、彼は肉体の病に倒れた。　まもなく聖人は死の訪れを感じ、涙ながらに主に対し、すべての罪の赦しを授けてくださるよう懇願し、祈りの中ですべての聖人を呼び求め、自身の隠遁の地を至聖なる聖母マリアの御守護に委ねた。　その後、尊者ニカンドルは病床に横たわり、両手を十字架の形に組み、「御心に従ってくださる神を賛美します。あなたに栄光あれ」という言葉とともに、主のもとへ息を引き取った。

こうして、この尊き父である尊者ニカンドルは、1582年9月24日、主の御許に安らかに息を引き取ったのである。

神の御許しにより、ポーランド王ステファン・バトーリ[6472] は、その軍勢をロシアの地に率いてきた。敵はプスコフとポルホフの両都市を包囲し、その一帯にはポーランド人やリトアニア人が大勢いたため、市民たちは城壁の外に出ることができなかった。　その頃、聖人から祝福を受けるために、ボロヴィチ村の農民で、名はヨアン、あだ名は「ドルギイ」という男が、その修道士が住む荒野を訪れた。　ニカンドルの修道室の扉を一度、二度、三度と叩いたが、ヨハネは修道士からの返事を得ることができなかった。そこで、修道室に入ると、聖ニカンドルが主のもとへ召されていたのを見、小屋全体が並外れた芳香に満ちていた。　そこでヨハネは、聖人の尊い遺体を敬虔に抱き上げ、心からの感動を込めて土で覆った。その後、聖人の祈りによってポーランド軍に気づかれることなく、ポルホフの町へと向かい、住民全員にこの尊者のお亡くなりになったことを伝えた。　この知らせを

[6472] ステファン・バトリーは、1576年から1586年までポーランド王であった。

聞いたポルホフの市民たちは、神の前でこれほど栄光ある守護者であり、祈りの仲介者を失ったことを嘆き、泣き崩れた。彼らは聖人の埋葬に参列したいと強く願ったが、敵を恐れていた。そこで、助祭ペトロは、同胞たちの迷いを見て、次のように語りかけた。

「兄弟たちよ、新しく天に召されたニカンドル神父について、私が語ることを聞いてほしい。なぜなら、私自身、この長老の苦難に満ちた修道生活を生で目撃してきたからだ。この神父のすべての美徳を、人間の口で語り尽くすことは不可能である。尊者ご自身が、神のもとへ旅立つことを私に予言された。　リトアニア人の侵攻の際に亡くなるだろうと予言しておられました。ですから、皆さんは恐れたり怯えたりせず、勇気を持ってこの修道者の尊い遺体を埋葬してください。尊い方ご自身が、主なる神が皆さんを敵の手に渡すことはなく、悪が皆さんに及ぶこともないと私に告げてくださったからです。

ペトロはその言葉によって、同胞たちを説得し、神の御心に適う者がこの世の生涯を通じて熱心に修行に励んだ砂漠へ、恐れずに向かわせた。　誰にも妨げられることなく、市民全員――信徒も聖職者も、男性も女性も、老人も若者も――は、聖人の遺体が土に覆われていたその場所へと荒野へ赴き、彼を尊厳をもって埋葬した。

聖ニカンドルは75年8ヶ月を生きた。生涯を通じて、彼は誠実かつ偽りなく主に仕え、私たちに善き、神に喜ばれる生活の模範を残してくれた。　私たちもまたその足跡をたどり、忍耐と謙遜においてこの神に喜ばれる者に絶えず倣いましょう。そうすれば、彼が「尊き父ニカンドルよ、私たちのために神に祈ってください」と信仰をもって呼び求めるすべての人々に、助けと庇護を授けてくださるでしょう。

1585年、ある修道士イザヤは、尊者ニカンドルの模範に従いたいと願い、この神の御心にかなう者が住み、修行に励んでいたその地を訪れました。イザヤは長い間、足の病に苦しんでいましたが、ついに尊者の祈りによって、その病から癒やされました。　このイザヤは、聖ニカンドロの修行の地である場所に修道院を建立し[6473]、そこに多くの修道士たちを集めた。修道士たちの強い願いにより、イザヤは修道院長職を引き受け、ノヴゴロドのアレクサンドル司教によって聖職に叙階された。司教は新しい修道院を細やかに世話し、資金を提供するとともに、聖ニカンドロスの棺の上に、聖母マリアの受胎告知を称える教会を建設するよう命じた。

トロパリオ、第4声：

福音書に記された神の御声を、尊き父ニカンドルよ、あなたは聞き、「労苦し、重荷を負う者よ、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう」と。そして十字架を受け入れ、キリストに従った。　世を捨てて荒野に身を置き、断食と徹夜祈祷によって天の賜物を受け、信仰をもってあなたのもとに訪れる病める魂たちを癒やしました。それゆえ、尊き父よ、あなたの霊は天使たちと共に喜びに満ちています。

コンダク、第1声：

キリストはあなたを太陽の光として示された、尊き者よ。あなたはロシアの地に恵みの奇跡を輝かせ、信仰をもってあなたのもとに来る者たちから、情欲と悲しみの闇を追い払われる。　それゆえ、我らはあなたの御記憶を尊び、ニカンドロス、我らの父よ、あなたにこう叫びます。「荒野の修道者たちの美しさよ、喜びなさい。わが国の誉れであり、支えである者よ。」

[6473] ポルホフから20ヴェルスタ離れた場所にある、現在は廃墟となった「受胎告知のニカンドロフ修道院」。

10月8日

9月25日（旧暦）

尊き母エウフロシニアの生涯

記念日 9月25日

かつてアレクサンドリアの町に、パフヌティウスという名の男が住んでいた。彼は裕福で名高く、尊敬を集め、神を畏れ、主の戒めを守り、神に喜ばれる生活を送っていた。　その妻もまた、善良で敬虔、神を畏れる女性であった。ただ一つ、彼らを悩ませていたことがあった。それは、彼らに子供がなかったことである。彼らはこのことを深く嘆いていた。なぜなら、死後、自分たちの財産を適切に管理してくれる後継者がいなかったからである。　子宝に恵まれないことを嘆きつつ、二人は絶えず主に子供を授けてくださるよう祈り、貧しい人々に惜しみなく施しを行い、教会や修道院にも多額の寄付をした。さらに、断食と祈りに励み、神の聖堂を巡り、願いが叶うよう神に懇願した。
ある日、パフヌティウスはある修道院を訪れた。その修道院の修道院長は、彼が聞いていた通り、聖なる生活で知られていた。彼はこの修道院にも多額の寄付をした。修道院長と語り合う中で、パフヌティウスは彼から慰めを受けた。　この修道士が神に喜ばれていることを悟ったパフヌティウスは、修道院長に自身の悲しみ、すなわち子供に恵まれていないことを打ち明けた。彼は深く頭を下げて、修道院長に、修道院の兄弟たちと共に神に彼のために祈り、主が彼に子供を授けてくださるよう願ってほしいと懇願した。　熱心に祈り、主を呼び求めるすべての者の祈りを慈愛をもって受け入れてくださる至福の神は、修道院長の祈りに耳を傾け、パフヌティウスを祝福された。その後、妻の不妊は解消され、神は彼らに、非常に美しい娘を授けられた。　両親は、この上ない喜びに満たされ、心から神に感謝を捧げた。 洗礼の際、その赤ん坊にはエウフロシニアという名が与えられた（[6474]）。それ以来、パフヌティウスはその修道院を頻繁に訪れるようになり、すべての修道士たちに施しを配り、その修道院長に対しては、有益な教えを授けてくれたこと、そして彼の祈りによって神から望みを叶えていただいたことに対し、深い愛情を抱くようになった。　エウフロシニアの誕生から12年後、彼女の母は永遠の命へと旅立った。パフヌティオスは以前と同様に、娘に聖書を教え続けた。　聖書に親しんだ少女は、熱心に聖典を読むことに没頭した。その間、彼女の賢明さと美しさの評判はアレクサンドリア全土に広まった。そのため、多くの貴族や名士たちが、彼女を息子の妻にしたいと願い、競うようにしてその意向を彼女の父に伝えに駆けつけた。しかし、パフヌティウスはこう言った。

「主の御心に従うがよい！」

エウフロシニアの婚約を求める者たちの中には、その高潔さ、地位、富、名声において他の誰よりも際立った一人の男がいた。彼はパフヌティウスに、娘を自分の息子に嫁がせてほしいと懇願し、パフヌティウスもそれに同意した。二人は話し合い、結婚式の日取りを決めた。

結婚に先立ち、パフヌティウスは娘を連れて、彼が父のように敬っていた前述の修道院長が住む修道院を訪れ、こう言った。

「聖なる父よ、私はあなたのもとへ、私の娘を連れて参りました。彼女は、あなたの祈りによって神が私に授けてくださったその娘です。どうか彼女のために祈ってください。私は彼女を嫁がせたいのです。」

修道院長はエウフロシニアに祝福を与え、その後、パフヌティウスと魂の救いについて語り合い、娘には貞潔、謙遜、神への畏れ、そして創造主への愛について教え、また施しを行うよう諭した。　これらの言葉はすべて、当時十八歳だった賢明で分別のある乙女の心に深く刻み込まれた。　パフ

[6474] 聖エウフロシニアは5世紀半ばに修道生活を送った。

ヌティウスは娘と共に、修道院の客舎で三日間を過ごした。この間、エウフロシニアは毎日、教会での朗読や聖歌に耳を傾けていた。彼女は修道士たちの献身的な行いに感嘆し、心の中でこう呟いた。

「この人々は幸いである。彼らはこの地上でも天使のように生き、来世では天使たちと共に住むことになるのだから。」

そして、彼らの聖なる生活に倣いたいと強く願った。三日が過ぎたとき、パフヌティウスは修道院長に言った。

「私たちは町へ行きたいのです。どうか平穏のうちに私たちを解放してください、敬愛する父よ。」

一方、エウフロシニアはイグメンの足元にひれ伏して、こう言った。

「お願いです、父上。主が私の魂を救ってくださるよう、私のために祈ってください。」

修道院長は彼女を祝福し、主に向かって次のように祈った。

「神よ、人が生まれる前からその運命を知っておられる方よ、このあなたのしもべに、世の初めからあなたに喜ばれたすべての人々と同じ報いと報償をお与えください。」

その後、修道院長に頭を下げて礼を述べたパフヌティウスは、娘と共に町へと戻った。この義人は修道生活を深く尊んでいたため、道中や町中で修道士に出会うたびに、彼を自宅に招き入れ、もてなして食事を振る舞い、自分と娘のために神に祈ってくれるよう頼んだ。

まもなく、その修道院では創立者の追悼の日が訪れ、修道院長は修道士の一人を遣わして、この日に際し、修道院の恩人であるパフヌティウスを招くよう命じた。　ところが、遣わされた修道士はパフヌティウスが家にいないことに気づいた。エウフロシニアは、修道士が家を訪れたことを知ると、彼を呼び寄せ、修道院には何人の修道士がいるのかと尋ね始めた。彼はこう答えた。

「三百五十二人です。」

すると彼女は彼に尋ねた。

「もし誰かがあなたの修道院に来て、あなたたちと一緒に暮らしたいと言った場合、修道院長は彼を受け入れてくれるでしょうか？」

これに対し、修道士はこう答えた。

「もちろんです。喜んで受け入れます。主の御言葉*『わたしのもとに来る者を、決して追い出さない』*（ヨハネ6:37）を心に留めているからです。」

少女はさらに彼にこう尋ねた。

「皆さんは皆で一緒に歌ったり、同じように断食したりするのですか？」

「はい、私たちは皆で一緒に歌います」と修道士は答えました。「そして、断食については、一人ひとりが自分の望む分、できる分だけ行っています。」

修道士に修道院の生活についてあれこれ尋ねた後、その娘は彼にこう言いました：

「私もそんな生活を始めてみたいのですが、父の言うことを聞かないのが怖いです。父は、この世の虚しい富に惑わされて、私を嫁がせようとしているのですから。」

修道士は彼女にこう言った。

「死すべき者との一時的で儚い結びつきを望んではならない。むしろ、キリストに身を捧げなさい。キリストは、すべての儚く空しい恵みの代わりに、あなたに天の御国と天使たちとの共在を授けてくださる。密かに家を出て修道院へ行きなさい。世俗の服を脱ぎ捨て、修道服を身にまとい、誰にも気づかれないようにしなさい。」

聖エウフロシニアは、この修道士の言葉を聞いて喜び、彼に尋ねました：

「では、誰が私の髪を剃ってくださるのですか？」

すると、修道士はこう答えました。

「あなたの父が私たちの修道院に来て、三、四日間滞在するでしょう。その間に、あなたは修道士を一人呼び寄せてください。その人は喜んであなたの願いを叶え、あなたに剃髪をしてくれるでしょう。」

二人がこのように語り合っている最中、パフヌティウスがやって来て、修道士を見かけると、彼に尋ねた。

「何がきっかけでここへお越しになったのですか、父上？」

修道士は答えた。

「私たちの修道院の創設者の記念日が近づいており、修道院長があなたにここへ来て、私たちの祝祭に参加してほしいと頼んでいます。そうすれば、神からの祝福を受けるでしょう。」

パフヌティウスは喜んでその修道士と共に修道院へ向かうことに同意し、修道院の教会と修道者たちのために多くの献げ物を携えていった。彼が不在の間、娘である聖エウフロシニアは、忠実な使用人の一人を呼び寄せ、こう言った。

「聖テオドシオスの修道院へ行きなさい。そこで教会に入り、最初に出会った修道士を私のところへ連れてきてください。」

その使用人は、神の特別な御導きにより、修道院から手作りの品を売りに出していた一人の修道士と出会った。彼はその修道士に、主人の家まで一緒に来てほしいと頼み、修道士は承諾した。エウフロシニアは、威厳ある修道士の姿を見ると、迎えに出て頭を下げ、自分のために祈ってほしいと頼んだ。　修道士は祈りを捧げ、彼女に祝福を与え、二人は席に着いた。聖なる乙女は彼にこう語りかけた。

「ご主人様、私の父はキリスト教徒であり、神の忠実な僕ですが、母はすでに他界しております。　大いなる富を持つ父は、自分の宝がすべて失われないよう、私を嫁がせたいと望んでおります。しかし、私は世俗の虚栄によって身を汚したくはありません。とはいえ、父の言うことを聞かないのも恐ろしく、どうすればよいか分かりません。　昨夜は一睡もせず、神に御慈悲を授けてくださるよう懇願し続けました。そして朝になると、修道者の父の一人を呼び寄せ、彼から教訓と、私がどう振る舞うべきかの指針を聞きたいと思いました。　「お願いです、父よ、主の道を教えてください。あなたは神から私のもとに遣わされた方だと知っているからです。」

すると、長老は彼女に次のように教え始めました。

「主は聖なる福音書の中でこう言われています。*『もしだれかがわたしのもとに来るのに、自分の父や母、妻や子供、兄弟や姉妹、さらには自分の命さえも憎まないなら、その人はわたしの弟子になることはできない』*（ルカ14:26）。　これ以上、あなたに何を言えばよいのか分かりません。もしあなたが肉欲との戦いに耐えられるなら、すべてを捨てて、イスラエルがファラオの労働から逃げたように、この世から逃げなさい。　そして、あなたの父の富を相続する者は非常に多い。教会、修道院、病院、宿屋、孤児、未亡人、旅人、牢獄に閉じ込められた者、捕虜となった者たちだ。あなたの父は、望む者に財産を分け与えることができるが、あなた自身は自分の魂の世話をしなさい。

これに対し、その乙女は彼にこう言った。

「私は神と、父上のお祈りに希望を託しています。天からの助けを得て、神に身を捧げたいと願っているからです。」

「その決意を遅らせるな、わが娘よ」と長老は答えた。「神に喜ばれる行いを先延ばしにする者は、たいてい後でその遅れを悔やむものだ。今こそ悔い改める時である。」

聖エウフロシニアは長老にこう言った。

「それゆえに、父上、あなたに私のところへ来てくださるようお願いしたのです。私の心の願いを叶えていただき、私のために祈り、祝福を授けて、私を修道女として剃髪していただきたいのです。」

そこで長老は立ち上がり、祈りを捧げた後、神の御許しを得て、エウフロシニアを修道生活へと導き、彼女に修道服を授けた。その際、彼は彼女にこう言った。

「すべての聖徒たちに救いを授けてくださった神が、あらゆる悪からあなたを守ってくださいますように。」

その後、彼は喜びながら神を賛美し、自らの修道院へと戻っていった。一方、エウフロシニアは心の中でこう考え始めた。

「もし私が女子修道院に行けば、父がそこで私を見つけ出し、修道院を出て結婚するよう強要するだろう。それならば、誰も私を認識しない男子修道院へ行くほうがよい。」

その決意を固めた彼女は、夜遅くに男装をして、誰にも知られぬよう家を出た。持参したのは金貨五十枚だけで、その夜はどこかの場所に身を隠した。翌朝、彼女の父が町にやって来て、神の特別な導きにより、すぐに教会へ向かった。　一方、エウフロシニアは、彼女の父親が知られているあの修道院へと向かった。修道院の門に近づくと、彼女はノックをして門番にこう言った。

「行って、修道院長に伝えてください。王宮から宦官の[6475] がやって来て、門の前に立っており、彼と話をしたいと願っている、と。」

修道院長が出てくると、エウフロシニアは地面にひれ伏して彼に頭を下げた。修道院長は彼女を助け起こし、慣例に従って祈りを捧げた後、二人は腰を下ろした。それから修道院長は彼女に尋ね始めた。

「なぜ、わが子よ、ここへ来たのか？」

エウフロシニアはこう答えた。

「父上、私は王宮で宦官として仕えておりましたが、修道生活がとても好きになりました。しかし、街では私の魂が求めていたものを見つけることができませんでした。貴修道院の修道士たちの苦行の生活について知り、皆さんと共に修行を積みたいと願い、この聖なる修道院に参りました。」

これに対し、修道院長はこう答えました。

「我が子よ、我らのところへ来てくれたのはよくやった。もしこの修道院で暮らしたいというのなら、ここに留まりなさい。」

それから彼は、彼女の名前を尋ねた。エウフロシニアは、自分の名前はイズマラグドだと答えた。

「イズマラグドよ」と修道院長は彼女に言った。「君はまだ若く、一人きりで独房で暮らすことはできない。君には霊的な指導者が必要だ。その人が修道生活において君を導き、修道院の規則やあらゆる慣習を教えてくれるだろう。」

これに対し、少女はこう答えた。

「父上、お望みの通りに私を導いてください。」

その瞬間、彼女は金貨五十枚を取り出し、修道院長に手渡してこう言った。

「これをお受け取りください、神父様。後日、街に残っている私の残りの全財産も、修道院に寄付いたします。」

修道院長は、アガピトという名の、聖なる生活を送る修道士の一人を呼び寄せ、次のように言ってイズマラグダを彼に託した。

「この若者は、これからはお前の霊的な息子であり弟子となるのだ。彼を徳の道に導き、師を超える者となるよう育てよ。」

熱心にひざまずいて祈りを捧げた後、長老アガピットはイズマラグドを自分の独房に迎え入れ、修道生活について指導した。　「その新入りの修道士は、非常に美しい顔立ちをしていた。彼が礼

[6475] 古代において、「宦官」とは、王宮で宝物や王室の財宝の守護者として、また特に（宮廷ではよくあることだが）王妃や王女の寝室の警護役として仕えた者たちを指した。大部分の宦官は去勢されていた。　ビザンツ宮廷において、宦官の地位は非常に名誉あるものでした。

拝のために教会に来ると、悪魔は多くの兄弟たちを不純な思いで惑わせ、新入りの修道士の美しさで彼らの心を傷つけた。そのため、兄弟たちは修道院長を非難し、こう言った。

「なぜ、最も弱い修道士たちを誘惑するために、これほど美しい兄弟を修道院に迎え入れたのか？」

これを聞いたイグメンは、イズマラグを呼び寄せ、こう言った。

「お前の美しさに目を奪われ、兄弟たちの中でも最も弱い者たちが誘惑されている。それゆえ、お前一人だけで独房に留まり、沈黙と祈りに励み、教会には来ないほうがよい。お前の霊的指導者が食事を独房まで届けてくれるから、どこへも出かける必要はない。」

エウフロシニアはこう答えた。

「師よ、おっしゃる通りにいたします。」

修道院長はアガピトに、イズマラグドのための隔離された独房を用意するよう命じた。アガピトは院長の意志に従い、イズマラグドをその独房に案内した。イズマラグドはそこで、祈りと断食、徹夜祷に時間を費やし、清らかな心をもって昼夜を問わず神に仕えるようになった。　至福のアガピトは、彼の功績と労苦に感嘆し、修道院の兄弟たち全員に、彼らの模範となるようその話を語った。兄弟たちはこれらの功績から教訓を得て、若き修行者にそのような力を授けた神を賛美した。

一方、エウフロシニアの父パフヌティウスは、家に戻ると急いで娘の部屋に入ったが、そこに彼女の姿が見当たらず、激しく嘆き悲しんだ。彼は怒りを込めて、使用人たちにエウフロシニアに何が起きたのか、どこへ行ったのかを問い詰めた。使用人たちはこう答えた。

「昨晩はまだ彼女を見かけましたが、今日はまだ姿を見せていません。そのため、婚約者の父親が彼女を自宅に招いたのではないかと考えました。」

パフヌティウスは使用人たちを娘の婚約者の家へ遣わしたが、そこでも彼女を見つけることはできなかった。婚約者とその父も、エウフロシニアの失踪を聞き、深く悲しんだ。そしてパフヌティウスの元を訪れると、彼は深い悲しみに沈み、地面に横たわって泣きじゃくっていた。

「誰かが彼女を誘惑したのではないか、あるいは彼女と一緒に逃げ出したのではないか」と、彼らは彼に言った。

直ちにアレクサンドリア全土に騎手を派遣してエウフロシネーを探させた。隣人の家々や道端、海辺、船の上まで捜索し、多くの女子修道院や野原、砂漠、山々、洞窟をくまなく巡り――悲嘆に暮れる父親の娘を、至る所で探し回った。　どこを探しても彼女が見つからず、使者たちは悲しみに暮れて戻ってきた。そして皆、まるで亡くなったかのように彼女を悼んで泣いた。花婿は花嫁を嘆き、義父は嫁を悼み、父はかつてヤコブがヨセフを悼んだように、娘のために苦い涙を流し、次のような悲痛な言葉を口にした。

「ああ、哀れな私よ、わが愛しい子よ！　ああ、哀れな私よ、わが目の光よ！　ああ、哀れな私よ、わが魂の慰めよ！　誰がわが宝を奪ったのか？　誰がわが枝を枯らしたのか？　誰がわが灯を消したのか？　誰がわが希望を奪ったのか？　誰がわが娘の名誉を汚したのか？　いったいどの狼が、私の子羊を引き裂いたのか？　いったいどの場所が、彼女の輝く顔を私から隠してしまったのか？彼女は私の家系を再興し、私の老後の支えとなり、私の悲しみの慰めとなってくれたはずだった。私の娘エウフロシニアに何が起きたのかを知るまでは、大地よ、私の遺体をその中に隠してはならない！

パフヌティオスの元に集まった友人や隣人たちもまた、彼の娘の予期せぬ死に、彼と共に嘆き、声をあげて泣き崩れた。悲しみを和らげる術をどこにも見出せなかったパフヌティオスは、娘が隠遁生活を送っていた修道院を訪れ、修道院長の前でひれ伏してこう言った。

「父上よ、どうか神に、私の祈りを聞き届けてくださるよう、絶えず祈り続けてください。私の娘に何が起きたのか、誰かに誘拐されたのか、それとも他の何らかの形で命を落としたのか、私には分からないのです。」

この言葉を聞いた敬虔な長老は大変戸惑い、すべての修道士たちを呼び集めてこう言った。

「兄弟たちよ、愛を示し、主が私たちの友であり恩人であるパフヌティウスの娘の行方を明らかにしてくださるよう、主にお祈りください。」

一週間もの間、修道士たちは断食し、祈りを捧げたが、他の願い事の時のように、何の啓示も得られなかった。というのも、エウフロシニアは昼夜を問わず、この地上の生涯において、自分のことを誰にも明かさないよう神に祈り続けており、その祈りは修道院の兄弟たち全員の祈りよりも強かったからである。

エウフロシニアに関する啓示が何一つ得られなかったため、修道院長はパフヌティウスを次のような言葉で慰め始めた。

「わが子よ、*『主の懲らしめを軽んじてはならない……主は、愛する者を懲らしめられるからである』*（ヘブライ人への手紙12:5,6）。主の御心なしには、一羽の鳥さえも地に落ちることはないのだから、ましてや、お前の娘に何かが起こるはずなどなかったのだ。　彼女はより良い道を選んだのだと思う。だからこそ、私たちには彼女について神からの啓示がなかったのだ。　もし彼女が罪に陥ったとしても（そのようなことがあってはなりません！）、神は私たちの修道院の兄弟たち全員によるこのほど大きな祈りの労苦を軽んじられることはなく、彼女について私たちに明らかにしてくださったでしょう。私は、この地上の生涯のうちに、主があなたに彼女について明らかにしてくださることを望んでいます。

パフヌティウスはその言葉に多少慰められ、神に感謝して自宅に戻りました。彼は毎日、熱心に主に祈りを捧げ、貧しい人々に惜しみなく施しをしました。数日後、彼は再び修道院を訪れ、兄弟たちに祈りを求めました。ある日、修道院長と出会うと、彼は頭を下げてこう言いました。

「父よ、私のために祈ってください。娘に対する私の悲しみは一向に消えず、私の魂は微塵も慰められず、心の傷はますます深まり、日ごとに私の悲しみは強まるばかりなのです。」

修道院長は、彼の深い悲しみを目の当たりにし、あらゆる方法で彼を慰めた。ある会話の中で、彼はイズマラグドのことを思い出し、こう言った。

「ここには、非常に厳格な生活を送っている修道士がいます。彼はテオドシウス皇帝の宮殿からここへやって来たのです[6476]、そして私たち皆、彼の聖なる生き方に感嘆しています。彼と話をしてみませんか？　もしかすると、その会話から多少なりとも慰めを得られるかもしれません。彼は聖霊に満たされているのですから。」

– はい、お会いしたいです――とパフヌティウスは答えた。

そこで、イグメンは、イズマラグドがパフヌティウスの娘であることを知らずに、アガピタを呼び寄せ、こう言った。

「パフヌティウスをイスマラグドのところへ連れて行き、彼と話をさせてくれ。」

アガピトとパフヌティウスはイスマラグドの独房に入った。エウフロシニアは父親の姿を見るや、彼だと気づき、涙を流した。　パフヌティウスは、彼女が祈りの感動から泣いているのだと思ったが、彼女を識別することはできなかった。なぜなら、厳しい禁欲と徹夜の祈りのせいで、彼女の顔色は萎れており、さらにエウフロシニア自身も、誰にも気づかれないよう、わざと修道帽で顔を覆っていたからである。　祈りを終えると、二人は腰を下ろし、イズマラグドはパフヌティウスとの対話を始めた。彼は天の御国について、また、謙遜、清さ、聖さ、施し、そして愛を通じて人が到達しうる永遠の栄光について語った。さらに、この世を捨てること、そして万物の創造主である神よりも子供たちを愛してはならないことについても語り、　また、*「苦難からは忍耐が生まれ、忍耐からは経験が生まれる」*（ローマ5:3–4）という使徒の言葉を引用した。父の深い悲しみを目の当たりにしたイスマラードは、彼に哀悼の意を表し、次のように言って慰めた。

[6476] ここで言及されているのは、もちろんテオドシウス2世（408–450年）のことである。

「私を信じてください。神はあなたを見捨てたりはしません。もしあなたの娘が破滅への道を歩んでいたなら、そのことについて熱心に祈り続けてきた聖なる父たちの祈りによって、主はあなたにそのことを明らかにされたはずです。いいえ、私は確信しています。あなたの娘は、福音書の中でこう語られる善き師の教えに従ったのです。　*『父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない。また、自分の持っているすべてのものを捨てない者は、わたしの弟子になることはできない』*（マタイ10:37、ルカ14:33）。神は、この現世のうちにさえ、彼女をあなたに示してくださるかもしれない。だから、悲しむのをやめなさい。なぜ、悲しみに打ちひしがれているのですか？　それどころか、すべてのことについて神に感謝し、希望を失わないでください。というのも、私の師であるアガピトスが、あなたが修道院に来られたことやあなたの悲しみについて私に告げたとき、私も熱心に神に祈り、神があなたに忍耐と勇気を与え、あなたとあなたの娘のためにすべてを最善の方向に導き、あなたを慰めてくださるよう願ったからです。　神は、あなたが悲しみに沈んだまま終わることのないよう、あらゆる慰めを与えてくださることを信じています。たとえすぐには叶わなくても、あなたがこれほど心を痛めている娘の運命について、神はいつかあなたに明らかにしてくださるでしょう。

その後、エウフロシニアは、父親とあまりにも長く話し込んでしまったため、父親に正体を見破られるのではないかと恐れ、パフヌティウスにこう言いました。

「ご主人様、どうか安らかにご帰宅ください。」

この言葉を聞いて、パフヌティオスは泣き、また喜びもした。なぜなら、彼の心はイズマラグドへの自然な愛に燃え上がり、彼との会話から多くの恵みを受けたからである。その後、彼は修道院長のもとへ行き、こう言った。

「父よ、この修道士から私がどのような恵みを受けたかは、神のみがご存知です。神の恵みにより、彼の言葉は、まるで愛する子を見つけたかのような喜びで私の心を満たしてくれました。」

その後、パフヌティウスはすべての修道士たちに自分のために祈ってほしいと頼み、家路についた。――一方、イズマラグドはその修道院で三十八年を過ごし、神に喜ばれる生活を送った。その期間が過ぎると、彼は重い病に倒れ、その後、主のもとへ魂を委ねた。　彼が息を引き取る前、パフヌティウスは再び修道院を訪れ、礼拝と兄弟たちへの挨拶をした。修道院長とのいつもの会話を終えた後、彼はこう言った。

「父上、もし可能であれば、兄弟のイズマラグドに会わせてほしい。私は彼をとても愛しているからだ。」

修道院長はアガピトを呼び寄せ、パフヌティウスをイズマラグドの元へ連れて行くよう命じた。パフヌティウスが彼の独房に入り、重病で床に横たわるイズマラグドの姿を見ると、その寝台にすがりつき、苦々しい涙を流しながらこう語りかけた。

「ああ、哀れな私よ！　あなたの優しい言葉はどこへ行ったのか。私の亡き娘に会わせてくれるという約束はどこへ行ったのか。見よ、私は彼女に会えないばかりか、私の慰め手であるあなたまでも失おうとしている。ああ、哀れな私よ！　今や誰が私の老いを慰めてくれるというのか。私は誰のもとへ行けばよいのか。私の悲しみを和らげてくれるのは誰なのか？　私はあなたとの別れを嘆き、心から悲しんでいる。もう三十八年もの間、私は娘の姿を見ることなく、彼女からの便りもどこからも届かない。そして、私の愛するイスマラードまでもが私を去ろうとしている――まるで亡き娘を見つけたかのように、私は彼を心から喜んでいたのだ。　今、私に何が待っているというのか？　どこに慰めを見出せばよいのか？　私に残された道はただ一つ、この悲しみを抱えたまま棺の中へ下りることだけだ！

パフヌティウスが慰めようもなく泣きじゃくっているのを見て、イスマラードは彼にこう言った。

「なぜあなたは動揺し、深い悲しみに打ちひしがれているのですか？　主の御手は強くないでしょうか？　それとも、神にとって不可能なことなどあるでしょうか？　ですから、悲しむのをやめてください。　かつて主が、死んだかのように泣き悲しんでいたヤコブに、生きているヨセフを現されたことを思い出せ。その同じ神が、あなたをも慰めてくださるだろう。さて、一つだけお願いがある。三日間ここに留まり、私から離れないでほしい。

パフヌティウスは修道院にとどまり、心の中でこう考えを巡らせた。

「主は、私の娘について、イスマラグドに何かを明らかにしてくださるのではないか？」

やがて三日目が訪れ、主のもとへ旅立つ時が来たことを啓示を受けたエウフロシニアは、父パフヌティウスを呼び寄せ、こう言った。

「全能の神は御心に従って私の運命を定め、私の願いを叶えてくださいました。今や私は、自分の力ではなく、敵の罠の中で私を守ってくださった方の助けによって修道者の道を歩み終え、その業の終わりに達しました。もうこれ以上、あなたが娘を嘆き悲しむのは望みません。」　私はエウフロシニア、あなたの娘です。あなたは私の父です。私が、あなたが探している者なのです。　私は神への愛ゆえに、父であるあなたのもとを離れ、すべての遺産と婚約者をも捨て、自分が女性であることを隠してここへやって来ました。今、あなたにお願いします。あなた以外の誰にも、私の遺体を清めさせないでください。　さらに懇願します。私がこの修道院の院長に誓った約束を果たしてください。私がここへ受け入れてもらうよう頼んだ際、私には多大な　財産があり、それをこの修道院に寄付するつもりだと申し上げました。ですから、私の約束を果たし、残りの財産をこの修道院に寄付し、私のために祈ってください。

この言葉を残して、エウフロシニアは主のもとへ息を引き取った。このすべてを聞き、娘が亡くなったのを見たパフヌティウスは、恐怖と深い悲しみから気を失い、まるで死んだかのように地面に横たわった。　アガピトがやって来て、イスマラードが亡くなり、パフヌティウスがかろうじて息をしているのを見ると、パフヌティウスの顔に水をかけ、彼を地面から起こして尋ねた。

「どうしたのだ、パフヌティウスよ？」

すると、パフヌティウスはこう答えた。

「私をここに置いて死なせてくれ。私は驚くべき奇跡を目撃したのだ。」

その後、パフヌティウスは地面から立ち上がり、亡き人の顔に顔を寄せ、苦々しく泣きながらこう言った。

「ああ、哀れな私よ、愛しい我が子よ、なぜこの時が来るまで私に正体を明かさなかったのか。ああ、どれほど君と共に死にたかったことか！　私の愛しい娘よ、君が私から身を隠していたとは、なんと悲しいことか！　君は敵の罠をうまく避け、この世の虚栄から身を隠し、永遠の命へと入ったのだ！」

パフヌティウスの言葉に耳を傾け、アガピトはこの驚くべき秘密を理解した。彼は恐怖に駆られ、直ちにそのことを修道院長に報告しに行った。修道院長は直ちにその場へ駆けつけ、エウフロシニアの聖なる遺体にひれ伏し、嗚咽しながらこう語り始めた。

「エウフロシニアよ、キリストの花嫁であり聖なる処女よ、あなたの同志たちとこの修道院を忘れないでください。そして、主イエス・キリストに私たちのために祈ってください。そうすれば、主は私たちにも、善行の後に救いに達し、主の聖徒たちと共に住まうことをお許しくださるでしょう。」

その後、修道院長は、すべての修道士を集め、彼女の聖なる遺体を相応しい敬意をもって埋葬するよう命じた。すべての修道士が集まり、この驚くべき奇跡を目撃すると、彼らは、弱き肉体に御自身の強大な力を現された神を賛美した。　修道者たちの中には、片目が不自由な者がいた。彼は聖女の遺骸の前に進み出て、涙を流しながらその尊い遺体を口づけすると、たちまちその目が開かれ、視力を取り戻した。　この癒やしを目撃した修道者たちは皆、神の慈悲を称え、神の聖なる御使いエ

ウフロシニアを賛美し、彼女の聖なる生涯に感銘を受けた。その後、彼女を聖なる父たち――苦行者たちの安息の地――に埋葬し、霊的な喜びをもって彼女のための追悼の儀式を執り行った。　そして、彼女の父パフヌティオスは自宅に戻り、自分の財産を教会や修道院、貧者や旅人たちに分配し、残った大部分をその修道院の必要のために捧げ、自らもそこで修道衣をまとい、修道者となった。彼は娘の住んでいた独房を自分のために求め、そこで神に喜ばれる生活を送りながら十年を過ごした。その期間が過ぎると、彼は、娘である聖エウフロシニアが息を引き取ったのと同じ藁の敷物の上で、この世を去った。彼は娘のそばに尊厳をもって埋葬され、至聖なる三位一体、すなわち父と子と聖霊、聖徒たちの中に現れる驚くべき神の栄光のために、毎年彼らの記念式を行うことが定められた。彼に永遠の栄光あれ。アーメン。

コンダク、第2調:

天上の命を切望し、地上の甘美さを慎重に捨て去り[6477]　、最も美しいお方よ、あなたは人々のただ中で自らを謙遜に振る舞われた。キリスト、すなわちあなたの花婿のために、一時的な婚約者には無関心であったからである。

私たちの尊き、神に愛された父、ラドネジの奇跡行者セルギイの生涯と奇跡[6478]

記念日：9月25日

私たちの敬虔で神に愛された父セルギイは、ロストフ州で、敬虔な両親キリルとマリアの間に生まれた[6479]　。母の胎内にいる時から、神は彼を御自身の奉仕のために選ばれた。彼の誕生間近のある日曜日、母はいつもの習慣通り、礼拝のために教会へ行った。　聖福音書の朗読が始まる前、彼女の胎内の赤ん坊は、教会に立っていたすべての人々の耳に届くほど大きな声を上げて泣き叫びました。　ケルビムの賛歌の最中、その胎児は二度目に声を上げた。そして司祭が「聖なる者よ、聖なる者」と唱えたとき、三度目に母の胎内からその声が聞こえてきた。　これにより、皆は、世の偉大な光であり、至聖三位の奉仕者がこの世に生まれることを悟った。聖母マリアの胎内で聖ヨハネ・洗礼者が喜びのあまり跳ね回った（ルカ1:41）のと同様に、この胎児もまた、主の聖なる神殿において主の前で跳ね回ったのである。　この奇跡を目の当たりにして、聖人の母は恐れと戦慄に襲われ、その声を聞いた者たちも皆、深く驚いた。誕生の日が訪れると、神はマリアに息子を授け、その名をバルトロマイと名付けた。生後間もない頃から、この幼子は厳格な断食者としての素質を示した。　両親や周囲の人々は、この幼児が水曜日と金曜日には母の乳を飲まないことに気づき始めました。また、母が肉を食べる日には、乳首にも触れないのでした。これに気づいた母は、肉食を完全に断ちました。

7歳になると、バルトロメオは両親によって読み書きの教育を受けさせられた。彼と共に、兄のステファンと弟のペトロの二人の兄弟も学んでいた。　彼らはよく学び、大きな進歩を遂げたが、バルトロメオは彼らに大きく遅れをとっていた。勉強は彼にとって難しく、教師が熱心に指導してくれたにもかかわらず、あまり上達しなかった。

これは神の御心によるものであり、その子が人間からではなく、神から学問の知恵を授かるためであった。バルトロメオはそれを深く嘆き、神が彼に読み書きの理解力を授けてくださるよう、熱

[6477] すなわち、天の命を得たいと願ったあなたは、この世の快楽を急いで捨て去ったのである。

[6478] 15世紀に聖エピファニオス（同聖人の弟子）によって書かれた聖セルギイの伝記およびその他の資料に基づいて作成された。

[6479] 聖セルギイの生年は正確には不明だが、おそらく1314年であったと思われる。

心に涙ながらに祈った。そして主は、敬虔な少年の心の奥底から湧き出たその祈りに耳を傾けられた。

ある日、父はバルトロマイに馬を取りに行くよう命じた。両親の意志に無条件に従うことに慣れていた少年は、すぐにその場を出て行った。彼はもともと孤独と静寂を好んでいたため、このような用事はなおさら彼の好みに合っていた。　彼の道は森の中を通っていた。そこで彼は、ある修道士――いや、むしろ神から遣わされた、修道士の姿をした天使――に出会った。その人物は森の中に立ち、祈りを捧げていた。バルトロメオは老人に近づき、頭を下げて礼を述べると、彼が祈りを終えるのを待つことにした。　祈りが終わると、老僧は少年を祝福し、頬にキスをし、何が必要なのかと尋ねた。

バルトロメオはこう答えました。

「父よ、私は学問を学んでいますが、先生が私に言っていることがほとんど理解できません。そのことを深く嘆いており、どうすればよいのか分かりません。」

そう言うと、少年は長老に、自分のために主にお祈りしてくださるよう頼んだ。修道士はバルトロメオの願いを聞き入れた。祈りを終えると、彼は少年を祝福し、こう言った。

「これからは、神がわが子よ、あなたに必要なことを理解させてくださるだろう。そうすれば、あなたも他の人々を教え導くことができるようになるだろう。」

そう言うと、老修道士は小さな器を取り出し、バルトロメオにプロスフォラの一片のようなものを与えた。そして、彼に口に含むよう命じながら、こう言った。

「受け取って、食べなさい、わが子よ。これは、神の恵みのしるしとして、また聖書を理解するために与えられるものだ。この一片がこれほど小さいことなど気にするな。これを味わえば、お前の喜びは大きくなるだろう。」

その後、長老は旅を続けようとしたが、喜びに満ちた少年は、修道士に両親の家を訪ねてくれるよう熱心に懇願した。

「どうか私たちの家を素通りしないでください」とバルトロメオは懇願した。「私の両親にも、あなたの聖なる祝福を授けてください。」

修道士たちを敬っていたバルトロメオの両親は、待ち望んでいた客人を丁重にもてなした。彼らは食事をもてなそうとしたが、老修道士は「まずは霊的な糧を味わうべきだ」と答え、皆が祈りを始めると、バルトロメオに詩篇を唱えるよう命じた。

「私はできません、父上」と少年は答えた。

しかし、修道士は預言者のようにこう告げた。

「これからは、主があなたに読み書きの知識を授けてくださるでしょう。」

そして実際、少年はすぐに整った声で詩篇を読み始めた。両親は、息子に起こったこの変化に深く驚いた。

別れの際、長老は聖人の両親にこう言った。

「あなた方の息子は、神と人々の前で偉大なる者となるでしょう。彼はやがて聖霊の選ばれた住まいとなり、至聖なる三位一体の奉仕者となるのです。」

雨をたっぷりと浴びた大地が実り豊かになるように、聖なる少年もその時から、何の困難もなく書物を読み、そこに書かれたすべてを理解するようになった。彼にとって読み書きは容易であった。なぜなら、*「聖書の理解への知恵が彼に開かれた」*からである（ルカ24:45）。　少年は年を重ねるにつれて、知性と徳も共に高まっていった。彼は早くから祈りへの愛を感じ、幼い頃から神との対話の甘美さを知っていた。そのため、神の神殿への参拝を熱心に重ね、礼拝を一度も欠かすことはなかった。　彼は子供たちの遊びを好まず、懸命にそれを避けていた。同年代の者たちの歓声や笑い声も彼の心に響かなかった。なぜなら、彼は*「悪い交わりは善い行いを損なう」*（Iコリント15:33）ことを知っていたからである。彼は*「知恵の初めは主を畏れることである」*（詩篇110:10）ということを

しっかりと心に留めており、それゆえ常にこの知恵を学ぶよう努めていた。　彼は並外れた注意と熱意をもって、神聖な書物の読解に没頭した。節制こそが情欲を克服する最善の道であることを知っていた若者は、自らに厳しい断食を課した。水曜日と金曜日には何も口にせず、その他の日はパンと水だけで過ごした。　彼は自分の魂を救うために、これほどまでに自分の肉体を憎んだのである。もし貧しい人に出会えば、バルトロメオは喜んで自分の衣服を分け与え、あらゆる方法でその人に仕えようとした。　まだ修道院に入っていないにもかかわらず、彼は修道者のような生活を送っていたため、その若者の節制と敬虔さを見て、誰もが驚嘆した。当初、母親は息子の健康を案じ、これほど過酷な生活様式をやめるよう説得した。しかし、分別のある少年は、母に謙虚にこう答えた。

「私を節制から遠ざけないでください。それは私の魂にとって、これほど甘美で有益なものだからです。」

その賢明な答えに驚いた母は、もはや息子の善意を妨げることを望まなかった。こうして、禁欲によって肉体を律しつつ、バルトロメオは両親の意向に背くことはなかった。

その間、キリルとマリアは前述のロストフの町から、「ラドネジ」と呼ばれる地域へ移り住んだ[6480]。これは、その場所が知られていたからでも、何かで有名だったからでもなく、神がそうお許しになったからである。まさにこの場所で、神は御自身の熱心な僕を栄光に輝かせようと望まれたのである。

当時15歳前後だったバルフォロメイも、両親に続いてラドネジへと向かった。その頃、彼の兄弟たちはすでに結婚していた。　その若者が20歳になったとき、彼は両親に、修道士となることを許してくれるよう懇願し始めた。彼はかねてより、自らを主に捧げたいと切望していたのである。両親は修道生活こそ何よりも尊いと考えていたが、それでも息子にしばらく待つよう求めた。

「息子よ」と両親は彼に言った。「我々が年老いていることは知っているだろう。我々の最期もそう遠くない。老後の面倒を見てくれるのは、お前しかいないのだ。もう少しだけ我慢して、我々の葬儀を執り行ってくれ。そうすれば、誰もお前の念願を叶えることを妨げる者はいないだろう。」

バルトロメオは、従順で親孝行な息子として、両親の意志に従い、彼らの祈りと祝福に値するよう、両親の老後を安らかに過ごせるよう懸命に尽くした。亡くなる少し前、キリルとマリアは、ラドネジから3ヴェルスタ離れたポクロフスキー＝ホトコフ修道院で修道者となった[6481]。　そこへ、その頃未亡人となっていたバルトロメオの兄ステファンもやって来て、修道士の一員となった。ほどなくして、この聖なる若者の両親は、相次いで安らかに主のもとへ召され、この修道院に埋葬された。両親の死後、兄弟たちはここで40日間を過ごし、新たに主のもとに召された神の僕たちの安息を願って、主に向かって熱心に祈りを捧げた。キリルとマリアは、すべての財産をバルトロメオに遺した。両親の死を目の当たりにして、聖人は心の中でこう考えた。「私は死すべき存在であり、両親と同じように、私も死ぬのだ」。　このようにこの世の命の儚さについて深く思索を重ねた賢明な若者は、両親の全財産を分配し、自分には何も残さ　なかった。生計を立てるためのものさえも手元に残さなかった。それは、*「飢えた者にパンを与える」*神（詩篇145:7）を信頼していたからである。

隠遁生活を目指し、バルトロメオは弟のステファノと共に、荒野での生活にふさわしい場所を探しに出かけた。兄弟たちは周辺の森を長い間歩き回り、やがて、現在、聖セルギイの名によって深く称えられている至聖三位一体修道院が聳え立つ場所にたどり着いた。　当時、この場所は人の手が及ばない、鬱蒼とした密林に覆われていた。この森を貫く道は一本もなく、住居も一軒もなく、ただ獣や鳥だけがここに生息していた。　兄弟たちは熱烈な祈りを捧げて神に呼びかけ、将来の住処となるこの場所に神の祝福を求め、自らの運命を神の聖なる御心に委ねた。小屋を建てると、彼らは熱心に修行に励み、神に祈りを捧げた。また、小さな教会を建て、全員の合意のもと、それを至聖三位の

[6480] かつてのラドネジの跡地には、現在ゴロディシュチェ、あるいはゴロドクという村がある。この村はモスクワとトロイツェ＝セルギエフ修道院の間に位置し、同修道院からは12ヴェルスタ離れている。

[6481] この修道院には当時、修道士用の棟と修道女用の棟の2つの棟があった。

御名によって聖別することに決めた。 そのために彼らはモスクワへ赴き、テオグノスト大主教[6482] に対し、教会の奉献に対する祝福を与えてくれるよう懇願した。聖人は彼らを温かく迎え入れ、教会を奉献するために司祭たちを彼らと共に派遣した。こうして、聖三位一体修道院の礎は、このように質素に築かれたのである。

バルトロメオは、熱意とたゆまぬ情熱をもって、霊的な修行に身を捧げるようになった。長年の願いが叶ったのを見て、この若き修行者は大きな喜びに包まれた。

一方、兄のステファンは、そのような人里離れた場所での生活に耐えきれず、バルトロメオを残してモスクワのボゴヤヴェンスキー修道院に移り住み、そこで後にモスクワ都主教となるアレクシーと親しくなった。

完全な孤独の中に残されたバルトロメオは、修道生活への準備をさらに進めた。労苦と修行に耐え、修道規則を厳格に遵守することに身を慣らしてから初めて、彼は修道士の剃髪を受けることを決意した。

その頃、ミトロファンという名の修道院長が彼のもとを訪れ、彼は聖バルトロメオが23歳の時に、彼に修道衣を授けた。修道衣授与の儀式は、聖殉教者セルギイとヴァフの記念日に執り行われ、バルトロメオにはセルギイという名が与えられた。 剃髪後、ミトロファンは至聖三位一体教会で神聖な聖体礼儀を執り行い、新しい修道士にキリストの聖なる秘跡の聖体拝領を授けた。まさにその瞬間、教会は並外れた芳香に満たされ、その香りは教会の壁の外にまで広がった。新しく剃髪した修道士は、七日間、教会から一歩も外に出ることなく過ごした。 ミトロファンは毎日聖体礼儀を執り行い、彼に主の聖なる御体と御血を授けた。この間、セルギイの糧は、ミトロファンから毎日与えられたプロスフォラのみであった。 セルギイは常に祈りと神への思索にふけり、清らかな心の奥底から絶えず神に呼びかけ、主の偉大なる御名を賛美し、ダビデの詩篇や霊的な歌を歌った。彼は全身が喜びに包まれ、その魂は神聖な炎と敬虔な熱意に燃えていた。 セルギイと数日間を過ごした後、ミトロファンは彼にこう言った。

「わが子よ、私はこの地を去り、あなたを神の御手に委ねる。主があなたの守り手となり、守り主となられますように。」

そして未来を見通して、彼はこう予言した。

「この地に、神は偉大で栄光に満ちた修道院を築かれるだろう。そこでは、神の偉大で畏れ多い御名が賛美され、徳が輝き渡るであろう。」

祈りを捧げ、修道生活についていくつかの教えを授けた後、ミトロファンは去っていった。聖セルギイはその場に一人残され、熱心に修行に励み、断食や徹夜祈祷、そして様々な労苦によって肉体を律した。そして、厳しい冬の時期、寒さで大地がひび割れるような時でさえ、彼は一枚の衣だけで寒さに耐え抜いた。 特に、荒野での孤独な生活が始まった当初、彼は悪魔たちから多くの苦難と誘惑にさらされた。目に見えない敵たちは修道士に対して激しく牙をむき、その修行を許さず、聖人を脅かしてその場所を去らせようとした。 彼らは時として獣に、時として蛇に変身した。しかしセルギイは祈りによって彼らを追い払った。主の御名を呼び求め、悪魔の惑わしを薄い蜘蛛の巣のように打ち砕いたのである。ある夜、悪魔たちはまるで大軍のように威嚇して彼に近づき、恐ろしい怒りを込めて叫んだ。

「この場所から立ち去れ、立ち去れ。さもなくば、お前は凄惨な死を遂げるぞ！」

悪魔たちがこれらの言葉を口にするたび、彼らの口からは炎が噴き出した。しかし、聖人は祈りを武器として敵の勢力を追い払い、神を賛美しつつ、何の恐れもなくその場に留まり続けた。

ある夜、隠者が規則を唱えていたとき、突然森から物音がした。大勢の悪魔たちが再び小部屋を取り囲み、脅しを込めて聖セルギイに叫んだ。

[6482] フェオグノストは1328年から1353年まで大主教を務めた。

「さあ、ここから立ち去れ。なぜこの人里離れた森に来たのだ？何を求めている？もうここで生き延びられるなど期待するな。お前自身も見ての通り、この場所は荒れ果てて、人跡未踏だ！飢え死にするか、強盗の手にかかって死ぬことを恐れないのか？」

悪魔たちはこのような言葉で聖人を脅したが、その努力はすべて無駄だった。聖人は主にお祈りすると、たちまち悪魔の大群は姿を消した。

これらの幻視の後、修道士にとって野獣の姿はそれほど恐ろしいものではなくなった。彼の孤独なケリアの前を、修道士を引き裂こうとする飢えたオオカミの群れが駆け抜け、クマさえもここへやって来た。しかし、祈りの力はここでも隠遁者を救った。　ある日、聖セルギイは自分のケリアの前に熊がいるのに気づいた。熊が非常に空腹であるのを見て、彼はその獣を憐れみ、パンの切れ端を持ってきて、切り株の上に置いた。　それ以来、熊は頻繁にケリヤを訪れるようになり、いつもの施しを待ちながら、聖人を穏やかな眼差しで見つめていた。聖セルギイは熊と食料を分け合い、しばしば最後のひと切れさえも与えた。そして、その野生の獣は極めておとなしくなり、聖人の呼び声にも従うようになった。

このように、主は荒野にいる御自分の御使いを見捨てられることはなかった。主はあらゆる苦難や誘惑の中で彼と共にあり、この熱心で忠実な御自分のしもべを助け、励まし、力づけてくださったのである。

その間、この聖人の名声は至る所に広まっていった。ある者は彼の厳格な禁欲や勤勉さ、その他の偉業について語り、ある者は彼の素朴さと悪意のなさに驚き、またある者は悪霊に対する彼の力について語った――そして誰もが、彼の謙虚さと心の清らかさに感嘆した。　そのため、近隣の町や村から多くの人々が聖者に集まり始めた。助言を求めて訪れる者もいれば、魂を救う彼の語りかけに耳を傾けたいと願う者もいた。　誰もが彼から良き助言を得、誰もが慰められ、安らぎを得て帰っていき、誰もが心の中が明るくなった。それは、助言や敬虔な教えを求めて訪れるすべての人を、セルギイが穏やかで恵みに満ちた言葉で迎え入れたからであった。　尊者は愛をもってすべての人を受け入れた。中には、彼と共に暮らすことを願い出る者さえいたが、聖人は修道生活の困難さを指摘して、彼らを思いとどまらせた。

「この地は」と聖人は言った。「荒涼として野性的であり、ここでは多くの苦難が待ち受けている。」

聖人に対する深い敬意に満ちた来訪者たちは、ただ一つ、セルギイにここに定住することを許してほしいと願った。彼らの固い決意と、神に身を捧げようとする揺るぎない覚悟を見て、聖人は彼らの願いを受け入れざるを得なかった。　まもなく、聖人の指導の下、十二人が集まり、この人数は長い間変わらなかった。もし兄弟たちの誰かが亡くなれば、その代わりに別の者がやって来たため、多くの人々は、この人数に偶然の一致を見出した。すなわち、聖人の弟子たちの数は、我らの主イエス・キリストの弟子たちの数と同じであったのである。　また、ある者たちは、それをイスラエルの十二部族の数に例えた。集まった者たちは12の修道室を建てた。セルギイは兄弟たちと共に、それらの修道室を木製の柵で囲んだ。こうして、神の恵みにより今日まで存続している修道院が誕生した。

隠者たちの修道生活は静かで平和に過ぎていった。彼らは毎日、自分たちの小さな教会に集まり、そこで主に向かって熱心な祈りを捧げた。　一日に七回、修道院は修道士たちを受け入れた。彼らはここで深夜の祈り、早朝の礼拝、第三時、第六時、第九時の礼拝、夕べの祈り、そして晩課を執り行い、神聖な聖体礼儀を行う際には、近隣の村から司祭を招いていた。

セルギイのもとへ兄弟たちがやって来てから一年後、前述の聖職者ミトロファンも、新しく設立された修道院に定住した。彼は尊者セルギイの剃髪式を執り行った人物であり、兄弟たちから喜びをもって迎えられ、満場一致で修道院長に選出された。　修道士たちは、以前よりもはるかに頻繁に聖体礼儀を執り行えるようになったことを喜んだ。しかし、ミトロファンはまもなく主のもとへ旅立った。そこで修道士たちは、尊者に対し、司祭の聖職に就き、彼らのイグメンとなってくれるよう懇

願した。　セルギイはこれを断った。彼は主に倣い、すべての者の僕でありたかったからである。彼は自らいくつかの修道室を建て、井戸を掘り、水を運び、各兄弟の修道室の前に置いておき、　薪を切り、パンを焼き、衣服を縫い、食事を用意し、謙虚に他の仕事もこなした。　労働の合間を縫って、セルギイは祈りと断食に身を捧げ、パンと水のみをわずかな量で摂り、毎晩を祈りと徹夜で過ごし、ほんのわずかな時間だけ眠りに落ちた。　皆の大きな驚きに、これほど過酷な生活は、修道者の健康を損なうどころか、むしろその体を強め、さらに大きな偉業を成し遂げるための力を与えているかのようであった。その節制、謙虚さ、そして敬虔な生活によって、聖セルギイはすべての修道者たちに模範を示した。　隠遁者たちは、この「肉体の天使」を驚嘆の眼差しで見つめ、全力を尽くして彼に倣おうとした。彼と同様に、彼らは断食、祈り、そして絶え間ない労働に身を捧げた。時には衣服を縫い、時には本を写し書きし、時には自分たちの小さな菜園を耕し、その他同様の仕事をこなした。　修道院内には完全な平等があったが、その頂点に立っていたのは聖者であった。彼はこの修道院における最初の修行者、あるいはむしろ最初にして最後の修行者であった。というのも、彼の時代やその後も多くの者がここで修行に励んだが、彼に匹敵する者は誰もいなかったからである。彼は星々の間で月のように輝いていた。　彼の修行生活に関する評判は、ますます高まり、確固たるものとなり、広まっていった。彼の兄弟ステファンは、12歳の息子ヨハネを彼のもとに連れてきた。　その少年は、セルギイの聖なる生涯を耳にすると、彼に倣いたいという熱意に燃え上がった。彼は修道誓願を立て、テオドールと名付けられた。テオドールはこの修道院で約22年間を過ごし、イコン画の制作に励んだ。

セルギイのもとへ最初の弟子たちがやって来てから10年以上が経過し、日ごとに修道院長と司祭の必要性がますます強く感じられるようになっていた。司祭を招くことが常に可能だったわけではなく、また、修道院長の権威を帯びた指導者も必要とされていた。　この修道院の創設者以外に、その地位にふさわしい人物はいなかったが、聖セルギイは修道院長職を恐れていた。彼は、自らの労苦によって築かれたこの修道院において、指導者ではなく、最下位の修道士でありたいと願っていたのである。ついに、隠遁者たちは集まり、聖セルギイのもとへやって来て、こう言った。

「父よ、私たちは修道院長なしでは生きられません。どうかあなたが私たちの導き手となり、指導者となってください。私たちは悔い改めの心を持ってあなたの元を訪れ、すべての思いをあなたに打ち明け、毎日、あなたから罪の赦しを賜りたいと願っています。どうか私たちのために聖なる典礼を執り行い、あなたの尊い御手によって、私たちが神の聖体拝領を受けられますように。」

セルギイは強く、そして長く拒み続けました。

「兄弟たちよ」と彼は言った。「私には修道院長になることなど、一度も考えたこともありません。私の魂が望むのはただ一つ、単純な修道士として生涯を終えることだけです。どうか私を強要しないでください。むしろ、このすべてを神に委ねましょう。神ご自身が御心を私たちに示してくださるでしょう。そうすれば、私たちがどうすべきかが分かるでしょう。」

しかし、修道士たちは、尊者に対し、彼らの願いを叶えてくれるよう執拗に懇願し続け、こう言った。

「もしあなたが私たちの魂を顧み、私たちの牧者となってくださらないのなら、私たちは皆、この場所を去り、立てた誓いを破らざるを得なくなります。そうなれば、私たちは牧者のいない羊のようにさまようことになるでしょう。」

修道士たちは、その後も長い間、説得し、懇願し、さらには強く迫り続けた。　ついに、彼らの懇願に心を動かされ、説得された聖人は、二人の長老を伴って、ペレヤスラヴリ・ザレスキー（[6483]）へ赴き、ヴォリンの主教アファナシイを訪ねた。というのも、聖アレクシオス大主教がコンスタンティノープルへ旅立ったため、当時、アファナシイが同大主教区の事務を統括していたからであ

[6483] ペレヤスラヴリ・ザレスキー――現在はウラジーミル州の県都である。

る。　聖人は、かねてよりその噂を耳にしていたこの修行者を温かく迎え入れた。彼に口づけをすると、魂の救いについて長い間語り合った。対話が終了すると、聖セルギイは謙虚にアファナシイに頭を下げ、自身の修道院のイグメン（修道院長）を任命してほしいと懇願した。この願いに対し、聖人は次のように答えた。

「これからは、あなたが『命の源である三位一体』の新しい修道院に集めた兄弟たちの父であり、イグメンとなりなさい！」

こうして聖セルギイは、まず司祭助祭に叙階され、続いて司祭修道士に叙階された。セルギイは、畏敬の念に満ち、畏れと感動に包まれながら、最初の聖体礼儀を執り行い、その後に修道院長に任命された。アファナシイは、新たに任命された修道院長と長く語り合い、彼にこう言った。

「わが子よ、今やあなたは聖職という偉大な位階を受けた。偉大なる使徒の戒めに従い、あなたにふさわしいことを知れ。　*『私たち強い者は、弱い者の弱さを担い、自分自身の快楽を追い求めてはならない』*（ローマ15:1）。また、彼のこの言葉も心に留めよ。*「互いに重荷を担い合いなさい。そうして、キリストの律法を全うしなさい」*（ガラテヤ6:2）。

その後、聖アファナシオスは、その尊者を抱擁し祝福した後、彼を平安のうちに至聖なる三位一体の修道院へと送り出した。荒野の修道者たちは、彼らの最初のイグメーンを歓喜をもって迎え、師であり父である彼に会いに出向き、子としての愛をもって彼に頭を下げた。　イグメンもまた、自分の霊的な子らを見て喜びに満たされた。教会に着くと、彼は主に向かって熱心な祈りを捧げ、神が彼を祝福し、この新しく困難な奉仕において全能の助けを授けてくださるよう願った。　祈りを終えると、尊者は兄弟たちに説教の言葉をかけ、修道士たちに修行を怠らないよう励まし、彼らに協力を求め、初めて修道院長としての祝福を与えた。その教えは簡素で言葉数は少なかったが、その明快さと説得力によって、人々の心に永遠に根付いた。　とはいえ、尊者は言葉によって行動するよりも、むしろ自らの生き様そのもので皆に良き手本を示していた。イグメンとなった後も、以前の厳格さを変えるどころか、さらに熱心にすべての修道規則を遵守するようになった。彼は常に、救い主の「*あなたがたの中で第一になりたい者は、すべての人のしもべとなりなさい*」（マルコ10:44）という言葉を常に心に留めていた。彼は毎日神聖な典礼を執り行い、常に自らプロスフォラを準備し、そのための小麦を自ら挽き、その他あらゆる作業をこなした。　特に尊者にとって愛してやまない仕事だったのはプロスフォラの焼き上げであり、この仕事については、多くの兄弟たちが自ら引き受けたいと願っていたにもかかわらず、彼は他の誰にも任せることを許さなかった。彼は誰よりも早く教会に到着し、そこでまっすぐに立ち、決して壁にもたれたり座ったりすることはなかった。そして、誰よりも遅く神の聖堂を後にした。　絶え間なく、愛を込めて兄弟たちに教えを説き、神の偉大な修道者たちの足跡に従うよう説得した。彼はしばしば、その霊的な子らに、彼らの生涯について語っていた。こうして彼は、言葉による羊の群れを熱心に牧し、救いの道へと導き、祈りによって心の狼たちを追い払った。

しばらく時が経つと、聖人の徳高い生活を耐えかねた悪魔たちは、再び彼に反旗を翻し始めた。蛇へと姿を変えた彼らは、床一面を覆い尽くすほどの大群となって、彼の修道室に這い込んだ。そこで、聖人は主に向かって祈りを捧げ、涙ながらに悪魔の誘惑から救い出してくれるよう懇願すると、たちまち悪霊たちは煙のように消え去った。この時から、神は御自分の御心に適う者に、不浄な霊たちに対するそのような権威を授けられたため、悪霊たちは聖人に近づくことさえ敢えてしなくなった。

長い間、修道院の修道士は12人でした。しかし、ある日、スモレンスクからシメオンという名のアルヒマンドリットがやって来ました。シメオンは要職を辞し、深い謙遜の念をもって、尊者に対し、一介の修道士として受け入れてくれるよう懇願しました。セルギイはその願いに深く心を動かされ、愛をもってこの来訪者を受け入れました。　アルヒマンドリト・シメオンは多くの財産を携えてきて、聖人がより広々とした教会を建てられるよう、それを尊者にお渡しした。シメオンの寄付によ

り、尊者は神の御加護のもと、まもなく新しい教会を建て、修道院を拡張し、兄弟たちと共に昼夜を問わず神を賛美した。

それ以来、多くの人々が聖セルギイのもとへ集まり、この栄光ある修行者の指導のもとで自らの魂を救おうとするようになった。聖なる修道院長は、訪れる者すべてを愛情をもって迎え入れたが、修道生活の困難さを身をもって知っていたため、彼らをすぐに修道士として剃髪させることはなかった。　通常、彼は来訪者に黒い毛織物の長い衣を着せるよう命じ、他の修道士たちと共に何らかの奉仕を行うよう指示した。　彼がこのようにしたのは、新しく来た者が修道院の規則のすべてを学べるようにするためであった。長い試練を経て初めて、聖セルギイは来訪者にマントを授け、修道帽を与えた。

これほど入念な試練を経て修道士たちを受け入れた後、聖人は彼らの生活にも細心の配慮を払った。例えば、聖セルギイは、晩課の後、修道士たちが自分の独房から出ることを厳しく禁じ、互いに会話を交わすことも許さなかった。この時間帯、各修道士は自分の独房にとどまり、手仕事に従事するか、祈りを捧げなければならなかった。　夜遅く、特に暗く長い夜には、疲れを知らず熱心な修道院長は、個室での祈りを終えた後、各個室を巡回し、小さな窓から各人が何をしているかを確認した。　もし修道士が祈りを捧げているところ、手仕事をしているところ、あるいは魂を救う書物を読んでいるところを目撃すれば、彼は喜びをもってその修道士のために神に祈りを捧げ、主がその者を力づけてくださるよう願った。　しかし、許されない会話を耳にしたり、誰かが無駄なことに没頭しているのを見つけたりすると、扉や窓を軽く叩き、　と告げてその場を離れた。翌日、彼はその修道士を呼び出し、彼と対話を交わした。　従順な修道士は過ちを認め、許しを請い、セルギイは父のような愛をもって彼を許した。一方、従わない者には悔悛の行いを課した。このように、聖セルギイは自分に託された羊の群れを慈しみ、柔和さと厳しさを巧みに調和させていた。彼は自修道院の修道士たちにとって、真の牧者であった。

真のキリスト教的生活の模範に満ちた聖セルギイの修道院は、設立当初、最も必要な物資に乏しく、修道者たちはしばしば、生活必需品に極度の不足を強いられていた。　人里から遠く離れ、あらゆる外界から、あらゆる野獣がはびこる人里離れた密林によって隔てられていたこの修道院は、人々の助けを期待することはできなかった。修道士たちは、神聖な聖体礼儀を行うためのワインがないことがしばしばあり、深い後悔の念を抱きつつ、この霊的な慰めを自ら断たざるを得なかった。　また、プロフォラ（聖体）用の小麦や、香を焚くための乳香、ろうそく用の蝋、ランプ用の聖油が不足することも頻繁にあり、そのような時は修道士たちは松明に火を灯し、その明かりの下で教会での礼拝を執り行った。貧しく、薄暗い教会の中で、彼ら自身は、最も明るいろうそくよりも鮮やかに、神への愛に燃え、輝いていた。　修道士たちの外見上の生活は質素で簡素であり、彼らを取り巻くものや彼らが用いるものもすべて同様に質素であったが、その簡素さには威厳があった。聖体拝領の秘跡に用いられた器は木製であり、祭服は素朴な染め布で作られ、礼拝用の書物は樺の樹皮に書かれていた。　当時まだ共同寮がなかったこの修道院の修道士たちは、時折食糧不足に苦しんだ。修道院長自身でさえ、しばしば困窮を強いられた。ある時、尊者にはパンが一切残っておらず、修道院全体でも食糧が乏しかった。　しかし、修道院を出て信徒に食糧を乞うことについては、尊者様は修道士たちに厳しく禁じていた。彼は、あらゆる生き物を養う神に希望を置き、信仰をもって必要なものをすべて神に求めるよう求めた。そして、兄弟たちに命じたことは、自身も一切の怠りなく実行していた。それゆえ、聖人は三日間耐え忍んだ。しかし、四日目の夜明け、飢えに苛まれた彼は斧を手に取り、この修道院に住むダニイルという名の長老のもとへ行き、こう言った。

「長老よ、あなたが自分の独房にひさしを付けたいと伺いました。私は手を休めてはいられないので、あなたのもとへ参りました。どうか、私にそのひさしを建てさせてください。」

これに対し、ダニイルはこう答えた。

「ああ、私もずっと前からひさしを作りたいと思っており、必要なものはすべて用意済みだ。あとは村の大工が来るのを待っているだけだ。しかし、この仕事を君に任せるのは躊躇している。君には相応の報酬を支払わなければならないからだ。」

しかし、セルギイは、古くてカビの生えたパンを数切れあれば十分だと述べた。そこで長老はパンの切れ端が入った笊籠を持ち出したが、尊者はこう言った。

「仕事を終えるまでは、報酬は受け取らない。」

その後、彼は熱心に作業に取りかかり、一日中その仕事に没頭し、神の助けにより、それを完成させた。　夕暮れ時になってようやく彼はパンを受け取った。祈りを捧げた後、聖人はそれを口にしたが、その際、一部の修道士たちは、カビの生えたパンから聖人の口元から粉塵が舞い上がっているのに気づいた。これを見た隠遁者たちは、彼の謙遜と忍耐に驚嘆した。

またある時、食糧が底をついたことがあった。修道士たちは二日間、この苦難に耐えたが、ついに、そのうちのひとりが激しい空腹に耐えかねて、聖人に対してこう不平を漏らした。

「いつまで私たちに修道院から出て、必要なものを乞うことを禁じ続けるつもりなのか？　あと一晩は耐えるが、朝にはここから出て行く。飢え死にするよりはましだからな。」

聖人は兄弟たちを慰め、聖なる先人たちの偉業を思い起こさせ、彼らがキリストのためにいかに飢えや渇きに耐え、多くの苦難を経験したかを説いた。そして、キリストの言葉を引用してこう言った。「*空の鳥たちを見なさい。彼らは種を蒔くことも、刈り取ることも、倉に蓄えることもない。それでも、あなたがたの天の父は彼らを養ってくださる*」（マタイ6:26）。

「もし神が鳥たちを養ってくださるのなら」と聖人は語った。「果たして私たちに食物を与えてくださらないはずがあるでしょうか。今こそ忍耐の時であるのに、私たちは不平を言っています。もし私たちがこの一時的な試練を感謝の心で乗り越えるならば、この試練そのものが私たちにとって大きな益となるでしょう。何しろ、火なくして純金などあり得ないのですから。」

そう言って、彼は預言者のようにこう語った。

「今は一時的に物資が不足していますが、明日の朝には豊かになるでしょう。

そして聖人の予言は的中した。翌日の朝、ある名も知らぬ人物から、修道院へ焼きたてのパンや魚、その他作りたての料理が大量に届けられた。これらを届けた人々はこう言った。

「これは、キリストを愛する者が、アッベ・[6484]・セルギイと、彼と共に暮らす兄弟たちに送ったものです。」

そこで修道士たちは、使者たちに一緒に食事を召し上がってほしいと頼んだが、彼らは「直ちに引き返すよう命じられている」と言って断り、急いで修道院を後にした。　隠遁者たちは、運ばれてきた料理の豊富さを見て、主が御慈悲をもって彼らを訪ねてくださったことを悟り、熱心に神に感謝を捧げた後、食事を用意した。その際、修道士たちは、パンの並外れた柔らかさと格別の味に深く感銘を受けた。　これらの食料は、修道者たちにとって長い間十分な量であった。尊い修道院長は、この機会を利用して修道士たちを戒め、次のように説いた。

「兄弟たちよ、よく見て驚け。神が忍耐に対してどのような報いを送ってくださるかを。『*主よ、わが神よ、立ち上がってください。御手を上げてください。苦しむ者たちを忘れないでください*』［主は御自身の貧しい者たちを最後まで忘れられない］（詩編9:33）。神は、この聖なる場所と、そこで昼夜を問わず神に仕える御自分のしもべたちを決して見捨てられることはない。

他にも、尊者による兄弟たちへの父のような配慮と、その並外れた謙遜さがしばしば表れており、それは以下の出来事からも明らかである。

荒野に到着した聖セルギイは、水のない場所に定住した。聖人がここに留まったのには意図があった。遠くから水を運ぶことで、自らの労苦をさらに大きくし、肉体をより一層疲れさせようとし

[6484] アヴァ――父。

たのである。　やがて、神の御許しにより、兄弟たちの数が増え、修道院が形成されると、水不足が顕著になり、遠くから大きな苦労を伴って水を運ばなければならなくなった。そのため、ある者たちは聖人に不満を漏らし、こう言った。

「なぜ、よく考えもせずにこの場所に定住したのか？　近くに水もないのに、なぜここに修道院を建てたのか？」

聖人はこうした非難に対し、謙虚にこう答えました。

「兄弟たちよ、私はこの場所で独り静寂を保ちたかったのですが、神はここに修道院が建つことをお望みになったのです。　神は私たちに水も与えてくださるでしょう。ただ、気力を失わず、信仰をもって祈り続けてください。何しろ、神は荒野で、不従順なユダヤの民のために岩から水を湧き出させられたのですから、ましてや、熱心に神に仕えるあなた方を見捨てられるはずがありません。

その後、彼はある日、兄弟の一人を連れて、修道院の下にある、流れ水など一度もなかった密林へと密かに下っていった。溝に少しの雨水を見つけた聖人は、ひざまずいて次のように祈り始めた。

「神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ。天と地、そして目に見えるものも見えないものもすべてを創造し、人を造り、罪人の死を望まれない方よ。私たち、罪深く、ふさわしくないあなたのしもべたちは、この時に私たちの祈りを聞き入れ、あなたの栄光を現してください。　かつて荒野でモーセを通して、御手の力強い御業により岩から水を湧き出させられたように、ここでも御力を現してください、　――天と地の創造主よ、この地に水を授けてください。そして、あなたに祈りを捧げ、父と子と聖霊に栄光を帰する者たちの声に、あなたが耳を傾けておられることを、すべての者が悟ることができますように。今、そして世々限りなく。アーメン。

すると、突然、豊かな泉が湧き出しました。修道者たちは深く感銘を受け、不満のつぶやきは聖なる修道院長に対する畏敬の念へと変わりました。修道者たちは、この泉を「セルギイの泉」と呼ぶようになったほどです。しかし、謙虚な修行者にとって、人々からの称賛は重荷でした。そこで彼はこう言いました。

「兄弟たちよ、この水をあなた方に与えたのは私ではなく、主ご自身が私たちのような不適格な者たちにこれを送ってくださったのです。ですから、私の名で呼んではいけません。」

師のこの言葉に従い、修道士たちはその泉を「セルギイの泉」と呼ぶのをやめた。

それ以来、修道士たちはもはや水不足に悩まされることはなくなり、修道院のあらゆる必要のためにこの泉から水を汲むようになった。そして、信仰をもってこの水を汲む者たちは、しばしばそこから癒やしを受けた。

尊者セルギイが修道院の礎を築いてから、すでにかなりの年月が経過していた。この偉大な修行者の聖なる生活は、人々の目に留まらずにはいられず、やがて多くの人々が、鬱蒼とした森に覆われたその地に定住するようになった。また、多くの人々が尊者に祈りと祝福を求めて訪れるようになり、　村人の多くも頻繁に修道院を訪れ、生活に必要な物資を届けるようになった。聖人に関する評判はますます高まり、広まっていった。尊者サーギイは生前、数多くの様々な奇跡を起こした。主は御自身の御心に適う者に並外れた奇跡の力を授けられた。ある時、尊者サーギイは死者を蘇らせたのである。 その出来事は次のようにして起こった。 修道院の近隣には、セルギイに深い信仰を抱く一人の男が住んでいた。彼の唯一の息子は不治の病に冒されていた。聖人が息子を癒やしてくれると固く信じ、この村人は尊者のもとへ向かった。　しかし、彼が聖人の庵を訪れ、病める息子を助けてくれるよう懇願し始めたまさにその時、重い病に蝕まれた少年は息を引き取った。あらゆる希望を失った少年の父は、苦々しく泣き崩れた。

「ああ、悲しいことだ」と彼は聖人に言った。「神の御使いよ、私はあなたが私を助けてくださると固く信じてあなたのところへやって来た。もし息子が家で亡くなっていたなら、それこそ良かった。そうすれば、これまであなたに対して抱いてきた信仰が揺らぐこともなかっただろう。」

そう嘆き、泣きじゃくりながら、彼は息子の埋葬に必要なものをすべて用意するために外へ出て行った。

この男の嗚咽を見て、聖人は彼を憐れみ、祈りを捧げて少年を蘇らせた。まもなく、村人は息子の棺を持って戻ってきた。

すると、聖人は彼にこう言った。

「むやみに悲しみに身を任せるのは無駄だ。その少年は死んではおらず、生きているのだ。」

この男は息子が死ぬのをこの目で見ていたため、聖人の言葉を信じようとはしなかった。しかし、近づいてみると、少年が確かに生きていることに驚きを隠せなかった。そこで、喜びに満ちた父親は、息子の復活を感謝して聖人に礼を述べた。

「あなたは錯覚している」とセルギイは言った。「自分が何を言っているのかさえ分かっていない。あなたが少年をここに運んできた時、激しい寒さで彼は衰弱していた――あなたは彼が死んだと思ったのだ。今、暖かい修道室で彼は温まった――それなのに、あなたは彼が蘇ったように感じているのだ。」

しかし、村人は、息子が聖人の祈りによってよみがえったと主張し続けた。そこでセルギイは、彼にそのことについて話すのを禁じ、こう付け加えた。

「もしそのことを語り広めれば、お前は息子を完全に失うことになるだろう。」

この男は大きな喜びをもって家へ帰り、神とその御使いセルギイを賛美した。この奇跡について、聖人の弟子の一人が知り、それを語り広めた。

尊者には他にも多くの奇跡があった。ある時、近隣の住民の一人が重い病に倒れ、しばらくの間、眠ることも食事をすることもできなかった。　その兄弟たちは、聖セルギイの奇跡を耳にすると、病人を修道士のもとへ連れて行き、苦しむ者を癒やしてほしいと懇願した。聖人は祈りを捧げ、病人に聖水を振りかけた。すると、その人は眠りにつき、目を覚ますと、まるで一度も病気になったことがなかったかのように、完全に健康で元気な姿で立ち上がった。　この村人は、偉大な修行者を称え、感謝を捧げながら、自宅へと戻っていった。

尊者のもとには、近隣の村々だけでなく、遠く離れた地域からも人々が訪れるようになった。ある時、ヴォルガ川のほとりから、悪霊に取り憑かれた高貴な身分の男がセルギイのもとに連れてこられた。彼はひどく苦しんでおり、噛みついたり、暴れたり、人々から逃げ出したりしていた。十人の男がやっと彼を押さえつけるのがやっとだった。　彼の親族は、セルギイの話を聞き、この悪霊に取り憑かれた者を聖者に連れて行くことに決めた。そのためには、多大な労力と並々ならぬ努力が必要だった。病人を修道院の周辺まで連れてきたとき、彼は並外れた力で鉄の足枷を引きちぎり、修道院の中まで聞こえるほど大声で叫び始めた。　それを知ったセルギイは、その病人のために祈りの歌を捧げた。その間、苦しむ男は幾分落ち着きを取り戻し、修道院の中まで連れ込まれることさえできた。祈りの歌が終わると、聖人は十字架を手に取り、その憑かれた男のところへ歩み寄り、彼に十字を切ろうとした。　まさにその瞬間、その男は大きな叫び声を上げて、雨の後にすぐそばに溜まっていた水の中に飛び込んだ。聖者が聖なる十字架で彼に祝福を与えたとき、彼は完全に健康になったと感じ、正気を取り戻した。なぜ水の中に飛び込んだのかと尋ねられると、癒された男はこう答えた。

「私が聖者に連れて行かれ、聖者が聖なる十字架で私を祝福し始めたとき、十字架から大きな炎が立ち上るのを見ました。その火に焼かれると思い、水の中に飛び込んだのです。」

その後、彼は数日間修道院に留まり、神の慈悲を賛美し、自分の癒やしを聖なる敬虔な人に感謝した。

しばしば他の悪霊に取りつかれた者たちも聖人のもとへ連れてこられ、彼らは皆、解放された。

慈悲深い主は、その熱心で忠実なしもべに、病人が聖人の元へ連れて行かれる前から、悪霊に憑かれた人々から悪霊が追い出されるほどの力を授けられた。この修行者の祈りによって、他にも多

くの奇跡が起こった。 *「盲人は目が見え、足の不自由な者は歩き、らい病人は清められる」*（マタイ11:5）。つまり、信仰をもって聖人に訪れる者は、どのような病に苦しんでいようとも、肉体の健康と道徳的な啓発を得て、二重の恵みを受けるのであった。

聖セルギイのこうした奇跡の噂はますます広まり、その極めて厳格な修道生活に関する評判もますます高まり、修道院を訪れる人々の数はますます増えていった。誰もが聖セルギイを称え、敬虔に崇敬した。多くの人が、聖なる修道士に会いたいと願い、様々な都市や地域からここを訪れた。多くの人が彼から教えを受け、その魂に益となる会話に耳を傾けようと望んだ。多くの修道士が、それぞれの修道院を離れ、尊者によって設立された修道院の庇護の下にやって来て、彼の指導の下で修行し、彼と共に暮らそうとした。庶民も貴族も彼から祝福を受けることを切望し、公爵やボヤールたちもこの至福の父のもとを訪れた。 誰もが彼を尊敬し、まるで古の聖なる教父の一人、あるいは預言者のように見なしていた。

皆から尊敬され、称賛された聖セルギイは、相変わらず謙虚な修道士であり続けました。世間の名声に惑わされることはなく、相変わらず勤勉に働き、すべての人々の模範であり続けました。彼は自分の持っているものはすべて貧しい人々と分かち合いました。柔らかく美しい衣服を好まず、常に粗い布で、自ら縫い上げた衣を身にまとっていました。 ある時、修道院には良質な毛織物がなく、たった一枚しか残っていなかったが、それはあまりにも質が悪く、腐りかけていたため、修道士たちはそれを受け取ることを拒んだ。そこでセルギイはそれを手に入れ、自ら服を仕立て、それがボロボロになるまで着続けた。

そもそも聖人は常に古びた質素な服を着ていたため、多くの人は彼を見分けられず、ただの修道士だと思っていた。 ある遠い村の農夫が、聖セルギイの評判を多く耳にし、彼に会いたいと願った。そこで彼は聖人の修道院を訪れ、聖人がどこにいるのかと尋ね始めた。ちょうどその時、聖人は菜園で土を掘っていた。 修道院の兄弟たちが、訪れた農民にそのことを伝えると、彼はすぐに菜園へ向かい、そこで、ぼろぼろで破れ、あちこちに継ぎ当てが施された服を着て土を掘っている聖人を見かけた。彼は、この老人を指し示した者たちが自分をからかったのだと思った。というのも、彼は聖人が大きな栄光と名誉に包まれている姿を期待していたからである。

そこで、修道院に戻ると、彼は再びこう尋ねた。

「聖セルギイはどこにおられますか？ 私は遠くから彼に会って拝むために来たのですから、彼を見せてください。」

すると、修道士たちはこう答えた。

「あなたが目にしたその老人が、まさに私たちの尊い父なのです。」

その後、聖人が菜園から出てきたとき、農夫は彼から顔を背け、その聖人を見ることを拒んだ。憤りを感じながら、彼はこう考えた。

「なんて無駄な苦労をしたことか！偉大な聖人を見にやって来て、彼が大きな敬意と栄光に包まれている姿を見られると期待していたのに――ところが今、目の前にいるのはただの貧しい老人だ。」

その考えを見抜いた聖人は、心の中で主を熱心に感謝した。なぜなら、虚栄心のある者が称賛や栄誉を誇りとするのと同じくらい、謙虚な者は侮辱や屈辱を喜ぶものだからである。 その村人を自分のところへ呼び寄せ、聖人は彼の前に食事を用意して、温かくもてなした。その際、聖人は彼にこう言った。

「悲しむな、友よ。まもなく、あなたが会いたかったその人に会えるだろう。」

聖者がその言葉を口にした途端、使者がやって来て、公爵が修道院に到着したことを知らせた。セルギイは立ち上がり、大勢の従者を従えて修道院を訪れた高貴な客人を迎えに出た。 修道院長を見かけると、公爵は遠くから敬虔に聖人に地まで頭を下げ、謙虚に祝福を請うた。聖人は公爵を祝福すると、相応しい礼遇をもって彼を修道院内に案内した。そこで長老と公爵は隣り合って座り、語

り合いを始めたが、他の者たちは皆、傍らで立っていた。　公爵の従者たちに遠くへ押しやられていた村人は、いくら努力しても、かつて軽蔑していたあの長老を遠くから見分けることができなかった。そこで彼は、傍らに立っていた者の一人に小声で尋ねた。

「ご主人様、公爵の隣に座っているあの老人は一体誰ですか？」

すると、その男はこう答えた。

「まさか、あなたはここへ来たばかりなのか？　この老人のことを知らないとは。あの方は、聖セルギイだ。」

すると、その村人は自らを責め、悔やみ始めた。

「私は本当に目がくらんでいたのだ」と彼は言った。「聖なる父を私に示してくれた人々を信じなかったのだから。」

公爵が修道院を出ると、村人は急いで尊者のもとへ駆け寄り、直視するのが恥ずかしくて、老人の足元に頭を下げ、無知ゆえに罪を犯してしまったことを詫びた。すると聖人は彼を励ましてこう言った。

「子よ、悲しむな。なぜなら、私をただの人間だと言って、私について正しく考えていたのはお前だけだったのだ。他の人々は皆、私が偉大だと考えて誤っているのだ！」

このことから、聖セルギイがどれほど偉大な謙遜さを備えていたかがはっきりと見て取れる。彼を軽んじた農夫を、彼に敬意を表した公爵よりも深く愛したのである。　聖人はこの穏やかな言葉で、素朴な村人を慰めた。しばらく世俗で暮らした後、この男はすぐに再び修道院に戻り、ここで修道衣をまとった。それほどまでに、偉大な修行者の謙虚さに心を打たれたのである。

ある晩遅く、至福の聖人はいつものように修業を行い、弟子たちのために神に熱心に祈っていたところ、突然、彼を呼ぶ声が聞こえた。

「セルギイよ！」

聖人は、夜間にこのような異例の現象に深く驚いた。窓を開けて、誰が自分を呼んでいるのか確かめようとした。すると、空から大きな光が差し込み、夜の闇を追い払い、まるで昼間のように明るくなった。声が二度目に聞こえてきた。

「セルギイよ！　あなたは自分の子らのために祈っている。その祈りは聞き届けられた。見てごらん――聖なる三位一体の名のもとに、あなたの指導の下に集まる多くの修道士たちが見えるだろう。」

振り返ると、聖人は修道院の中やその周囲に、数え切れないほど多くの美しい鳥たちが止まり、言葉に尽くせないほど甘美な歌声を響かせているのを見た。そして再び声が聞こえた。

「かくして、あなたの弟子たちの数は、これらの鳥のように増え続けるだろう。そして、あなたの死後も、その数は減ることも、衰えることもない。あなたの足跡をたどろうとする者たちは皆、その徳によって、驚くほど多様に飾られるだろう。」

聖人はこの驚くべき幻に心を奪われた。誰か他の者にも自分と共にこの喜びを分かち合ってもらいたいと願い、彼は大きな声で、他の者たちよりも近くに住んでいたシメオンを呼び寄せた。　修道院長からの異例の呼びかけに驚いたシメオンは、急いで彼の元へ駆けつけたが、幻視のすべてを見ることは叶わず、その天の光の一部しか目にすることはできなかった。尊者は、自分が見聞きしたすべてをシメオンに詳しく語り、二人は一晩中眠ることなく、喜びながら神を賛美した。

その直後、コンスタンティノープルの至聖なる総主教フィロフェイ[6485]からの使節が聖者に訪れ、総主教からの祝福とともに、十字架、パラマンド[6486]、そして修道服を聖者に手渡した。

[6485] フィロフェイは1354年から1355年まで、そして1362年から1376年まで、2度にわたり総主教を務めた。

[6486] パラマンド――主の受難を描いた小さな四角い板。

「あなた方は、もしかすると他の誰かのところへ遣わされたのではないですか」と、謙虚な修道院長は彼らに言った。「私のような罪人が、至聖なる総主教からの贈り物を受け取るなど、どうしてできるでしょうか。」

これに対し、使節たちは答えた。

「いいえ、父上、私たちは間違っていません。他の誰かのところへ行ったのではなく、あなた、セルギイのもとへ来たのです。」

彼らは総主教からの次の書簡を持参した。

「神の御慈悲により、コンスタンティノープル大司教、全地総主教フィロフェイ殿より、聖霊について我らの謙遜な息子であり共同奉仕者であるセルギイへ、恵みと平安、そして我らの祝福を！我らは、あなたが神の戒めに従って徳ある生活を送っていることを聞き、神を賛美し、その御名を称えました。しかし、あなた方にはまだ一つ、それも最も重要なものが欠けています。それは共同生活です。あなたもご存知の通り、神の父である預言者ダビデは、その知恵をもって万物を包み込みながら、こう述べました。*『兄弟たちが共に住むことは、なんと良く、なんと楽しいことか！』*（詩編132:1）。それゆえ、私たちもあなた方に善き助言を授けます――共同生活を築き上げなさい。そして、神の慈しみと私たちの祝福があなた方と共にありますように」。

この総主教の書簡を受け取った聖人は、至福のアレクシオス都主教のもとへ赴き、この書簡を見せながら、彼にこう尋ねました。

「聖なる大主教様、どうなさいますか？」

長老の問いに、大主教はこう答えました。

「神ご自身が、御身に忠実に仕える者を称えられます！神はあなたにもそのような恵みをお与えになり、あなたの名と生き様に関する評判が遠く離れた国々にまで届きました。偉大なる全地総主教が助言されている通り、私たちもまた同じことを助言し、是認いたします。」

それ以来、聖セルギイは自身の修道院に共同生活制を導入し、共同生活の規則を厳格に遵守するよう命じた。すなわち、自分のために何も購入せず、何も自分のものとは呼ばず、聖なる父たちの戒めに従い、すべてを共有することである。

一方、尊者様は世間の名声に煩わしさを感じておられました。共同生活を確立した後、彼は人里離れた場所に身を置き、静寂と沈黙の中で神の御前にて奉仕することを望んでおられました。そこで、彼は密かに修道院を後にし、荒野へと向かいました。　約六十ヴェルストほど進んだところで、彼はキルジャチ[6487]と呼ばれる川のほとりに、大変気に入った場所を見つけた。一方、兄弟たちは、自分たちの父に見捨てられたと知り、深い悲しみと動揺に襲われた。羊飼いのいない羊のようになった修道士たちは、至る所で彼を探し始めた。　しばらくして、彼らは自分たちの牧者がどこに定住したかを知り、そこへやって来て、涙ながらに聖人に修道院へ戻ってくださるよう懇願した。　しかし、静寂と孤独を愛する聖人は、新しい場所に留まることを選んだ。そのため、彼の弟子たちの多くは修道院を離れ、彼と共にその荒野に定住し、修道院を建立し、至聖なる神の母の名を冠した教会を建てた。　しかし、大修道院の修道士たちは、師のいない生活を送りたくはなかったものの、同時に彼に帰還を懇願することもできなかったため、アレクシオス大主教のもとへ赴き、尊者に対し、至聖三位一体修道院へ戻るよう説得してほしいと懇願した。　そこで、至福のアレクシオスは、二人のアルヒマンドリトを尊者のもとへ遣わし、兄弟たちの嘆願に耳を傾け、戻って彼らを慰めてほしいと依頼した。彼は、セルギイに対し、自身が設立した修道院の修道士たちが牧者を失って散り散りになったり、聖なる場所が荒れ果てたりしないように、そうするよう諭した。　尊者セルギイは、この至福の聖人の願いを何の異議もなく聞き入れ、ラヴラへ戻り、最初に滞在していた場所へ戻った。これにより、修道者たちは大いに慰められ、喜びに満たされた。

[6487] ウラジーミル州ポクロフスキー郡。

聖ステファン、ペルミの司教[6488] は、尊者に対して深い愛情を抱いており、ある日、自身の教区からモスクワの街へ向かって旅をしていた。 聖人が通った道は、セルギエフ修道院から8ヴェルスタほど離れていた。ステファンは都へ急いでいたため、帰路に立ち寄るつもりで修道院を通り過ぎてしまった。　しかし、修道院の前まで来たとき、彼は戦車から降りて、「ふさわしい」と唱え、いつもの祈りを捧げた後、聖セルギイに頭を下げ、こう言った。

「平安あれ、霊の兄弟よ。」

ちょうどその時、至福のセルギイは兄弟たちと共に食事をしていた。司教への敬意を霊的に悟ると、彼は直ちに立ち上がり、しばらく立ち止まって祈りを捧げた後、すでに修道院から遠く離れてしまった司教に向かって、自らもまた敬意を表し、こう言った。

「キリストの群れの牧者よ、あなたも喜びなさい。主の祝福があなたと共にありますように。」

修道者たちは、聖人のこの尋常ならざる振る舞いに驚いた。しかし、中には、尊者が啓示を受けたのだと悟った者もいた。食事が終わると、修道者たちは彼に何が起きたのか尋ね始めた。すると彼はこう答えた。

「その刻、モスクワへ向かう途中のステファン司教が、当修道院の前で立ち止まり、至聖なる三位一体に礼拝を捧げ、私たち罪深い者たちを祝福してくださったのだ。」

その後、尊者の一部の弟子たちは、これが事実であったことを知り、神から彼らの父セルギイに授けられた先見の明に驚嘆した[6489] 。

多くの敬虔な人々が、尊者セルギイの修道院で栄光を放ちました。その多くは、その偉大な徳により他の修道院のイグメンに任命され、またある者は聖職者の座に就きました。彼らは皆、偉大なる師であるセルギイの指導と導きのもと、徳を磨いていきました。

尊者にはイサアクという名の弟子が一人いた。彼は沈黙の修行に身を捧げたいと願い、そのため、この偉大な修行に対する聖人の祝福をしばしば求めていた。ある日、賢明な牧者は彼の願いに応えてこう言った。

「もしお前が、我が子よ、沈黙を守りたいと望むなら、明日、そのための祝福を与えてやろう。」

翌日、神聖な聖体礼儀が終わると、聖セルギイは彼に聖十字架を振りかざし、こう言った。

「主が汝の願いを叶えてくださいますように。」

まさにその瞬間、イサアクは、尊者から並外れた炎が放たれ、自分、イサアクを包み込むのを見た。それ以来、彼は沈黙を守り続けたが、ただ一度だけ、奇跡的な現象によって口を開くことを許された。

聖セルギイは、まだこの世に生きている間、肉体を持つ者として、霊体を持つ者たちと交わる恵みにあずかった。その出来事は次のようにして起こった。ある日、聖なる修道院長は、弟のステファンと甥のテオドールと共に神聖な聖体礼儀を執り行っていた。その時、教会には他の信徒たちの中に、沈黙を守るイサアクもいた。　聖人は、いつものように畏敬の念と敬虔な心をもって、この偉大な秘跡を執り行っていた。すると突然、イサアクは祭壇の中に、驚くほど輝かしい祭服を身にまとい、並外れた光を放つ第四の男を目にした。　福音書を持っての小入堂の際、天の共祭者が聖職者の後

[6488] ペルミの布教者聖ステファノの記念日は4月27日に祝われ、その聖遺骨はモスクワの「ボルの救世主大聖堂」に安置されている。

[6489] これを記念して、今日に至るまでトロイツェ＝セルギエフ修道院には次のような慣習が残されている。最後の料理が供される前、鈴の音が鳴ると、すべての修道士が立ち上がり、当番の修道司祭が次のように唱える。　「主イエス・キリストよ、私たちの聖なる父たちの祈りによって、私たちを憐れんでください」――その後、皆は再び席に着き、食事を終える。

を従い、その顔は雪のように輝いており、直視することさえできなかった。この不思議な光景にイサアクは驚愕し、口を開いて、隣に立っていたマカリア神父に尋ねた。

「これは一体どのような不思議な光景でしょうか、神父様？この並外れた人物は誰なのでしょうか？」

マカリーもまた、同様に美徳に満ちた人物であり、この幻視を目撃していた。驚きと感嘆に打ちひしがれながら、彼はこう答えた。

「分かりません、兄弟よ。私自身も、このような不思議な光景を目の当たりにして戦慄しています。もしかすると、ウラジーミル公と共に、何らかの聖職者が来られたのでしょうか？」

当時、ウラジーミル・アンドレーエヴィチ公[6490]は、ボヤールたちと共に教会にいました。長老たちはそのうちのひとりに、公爵と共に司祭が来ていなかったかと尋ねました。尋ねられた者は、公爵には司祭は同行していなかったと答えました。そこで修道士たちは、尊者セルギイと共に奉仕しているのは神の天使であると悟ったのです。　聖体礼儀が終わると、前述の聖人の弟子たちが彼の元へ近づき、このことについて尋ねた。当初、修道院長は彼らにその秘密を明かすことを拒んだ。

「子らよ、お前たちは一体どのような異様な現象を見たのか？　聖体礼儀を執り行ったのは、ステファン、フェオドール、そして罪深い私だけであり、他に誰もいなかったのだ。」

しかし弟子たちは執拗に尋ね続けた。そこで聖人は彼らにこう言った。

「子らよ、もし主なる神ご自身があなた方にこれを明らかにされたのなら、私がこれを隠すことなどできようか。あなた方が見たのは主の天使であった。今だけでなく、私のような不適格者が聖体礼儀を執り行うときはいつでも、神の御心により、彼は私と共に奉仕しているのだ。しかし、私が生きている間は、このことを厳重に秘密にしておいてほしい。」

尊者には、尊者自身と同じロストフの町出身の、アンドロニクという名の弟子が一人いた。彼はまだ若き頃、至福の父セルギイの修道院を訪れ、修道士の一員として受け入れられた。そこで彼は長年にわたり修行に励み、多くの美徳を身につけ、多くの労苦を乗り越えた。それゆえ、聖人はこの熱心な弟子を深く愛し、主に対して彼のために熱心に祈りを捧げていた。　当時、モスクワの総主教は聖アレクシオスであった。この聖人と至福のセルギイは、親密な友情と兄弟愛の絆で結ばれていた。二人はしばしば魂に益となる対話を交わし、聖なる総主教が尊者イグメーンに助言を求めることも珍しくなかった。ある日、修道院を訪れたアレクシオスはセルギイにこう言った。

「愛する者よ、あなたに一つの恩恵をお願いしたい。あなたが私への愛ゆえに、この願いを断ることはないだろうと思う。」

すると、長老は司教にこう答えました。

「聖なる大主教様、私たちは皆、あなたの御意に従います。この修道院において、あなたに禁じられたことは何一つありません。」

すると、大主教はこう言った。

「私は、神の御加護のもと、修道院を建立したいのです。というのも、私たちがコンスタンティノープルから船で航海していた際、激しい嵐が吹き荒れ、船は沈没しそうになり、私たちは死の危機に瀕していたからです。　皆が神に祈り始め、私もまた、差し迫った死から私たちを救ってくださるよう神に懇願した。その際、私は、主が私たちを岸に上陸させてくださるその日に記念される聖人の名に因んで、教会を建てるという誓いを立てた。その瞬間、嵐は収まり、静けさが訪れ、私たちは

[6490] トロイツカヤ・ラヴラが位置していたセルプホフ公国を治めたウラジーミル・アンドレーエヴィチ・セルプホフスキー公は、クリコヴォの戦いでディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーの戦友であった。

8月16日に岸にたどり着いた[6491] ； 今、私はその誓いを果たしたい――私たちの主イエス・キリストの名において、その「人の手によらずして造られた御像」を称える教会を建立し、その隣に修道院を設け、そこに共同生活を送る共同体を設立したいのです。それゆえ、お願いいたします。あなたの愛する弟子アンドロニコスを私に与えてください。

聖人は、大主教の願いを快く聞き入れた。 修道院の必要経費を寄付した後、アレクシイはモスクワへ向かい、そこでヤウザ川のほとりに「[6492] 」という修道院を設立し、その長老職を前述のアンドロニクに委ねた。しばらくして、聖セルギイ自らがこの新しい修道院を訪れ、弟子を祝福してこう言った。

「主よ、天よりこの地を見守り、御慈悲をもってこの地を訪れてください。」

また、聖アレクシオスは、自身の謙虚な祈りによってタタール王妃タイドゥラが癒やされたことを主へ感謝し、モスクワに別の修道院――大天使ミカエルの奇跡を記念して――を設立した。そして、このチュドフ修道院のために、大主教はセルギイから数人の長老を派遣するよう依頼した。

この聖人の名は、モスクワにあるもう一つの修道院、すなわちシモノフスキー修道院（[6493] ）の創設とも結びついている。前述のフェオドール、すなわちセルギイの甥は、この偉大な修行者の修道院に長く滞在し、徳を磨き、禁欲によって肉体を鍛え上げた。 彼は師である修道院長に対して決して何も隠さず、あらゆる思いや考えを告白していた。すでに司祭修道士となっていた頃、彼はどこかに修道院を設立したいと願い、そのことを聖セルギイに打ち明けた。 しばらくして、聖セルギイはこれに神の御心を見出し、テオドールと、兄弟たちのうち数名を祝福して送り出した。モスクワ川のほとりにあるシモノヴォという場所を見つけたテオドールは、ここに修道院を建立しようと考えた。 聖セルギイはこの話を聞くと、その地を訪れ、テオドールを祝福し、その志を称賛した。テオドールは、聖母マリアの栄光ある降誕を記念して、聖母マリアの名を冠した教会を建立し、そこに修道院を設け、共同生活を送り始めた。 フェオドールの徳高い生活に関する評判は広く広まり、その修道院の修道士数は増え続けた。尊者セルギイ自身もこの修道院を度々訪れ、伝承によれば、修道士たちの労働にも参加した。 しばらくして、聖テオドールはロストフ大司教の位に叙任され、1394年11月28日にこの世を去るまで、その徳によって、まるで明るい灯火のようにその地を照らし続けた。

モスクワだけでなく、他の多くの場所でも、聖セルギイの弟子たちによって設立されたり、あるいはこの偉大な修行者自身によって築かれたりした、真の信仰の灯台である修道院が次々と現れました。 こうして、大公ディミトリ・イオアンノヴィチは、コロムナの「ゴルトヴィノ」と呼ばれる場所に修道院を建立したいと願い、聖セルギイにその場所を祝福し、教会を建立するよう熱心に懇願した。 大公のそのような信仰に心を打たれ、また彼への愛に駆られて、聖セルギイは――彼は常にそうする習慣があった――徒歩でコロムナへと向かい、その場所を祝福し、そこに聖エピファニオスの名に因む教会を建立した。 大公の願いに応じて、聖者は新しい修道院のために、自身の弟子の一人である聖職者グリゴリー――敬虔で信心深い人物――を派遣した。まもなく、共同生活施設も設けられたこの修道院は、神の恵みにより、三位一体において賛美される唯一の神の栄光のために繁栄した[6494] 。

[6491] 8月16日は、944年にエデッサからコンスタンティノープルへ移された、人の手によらずして描かれた我らの主イエス・キリストの聖像の祝日である。

[6492] スパソ＝アンドロニコフ修道院は1361年に創建された。

[6493] シモノフ修道院の起源は、1370年頃である。

[6494] 当初、1385年頃に創建されたコロメンスキー・ゴルトヴィン修道院は、コロムナ市から4ヴェルスタ離れた、モスクワ川がオク川に合流する地点に位置していたが、18世紀にこの修道院は市街地そのものに移転したため、「ノヴォゴルトヴィン」と呼ばれるようになった。

別の公、ウラジーミル・アンドレーエヴィチからの要請により、尊師はセルプホフにある一画を、至聖なる聖母マリアの受胎を称える修道院の建設地として祝福した。　この「ヴィソツキー」と呼ばれる修道院には、聖人は、最も愛した弟子の一人であるアファナシーを建設責任者として派遣した。アファナシーは、神の　聖書に精通し、並外れた従順さとその他の美徳に優れ、書物の写本作成に多大な労力を注いだ人物であった[6495]。このように、尊者セルギイは、多くの修道院を祝福し、そこに弟子たちを派遣することで、教会の益となり、また我らの主イエス・キリストの聖なる偉大なる御名の栄光のために尽力した。　この聖人の天使に等しい生涯、並外れた謙遜さ、そして教会の益となる働きは、聖アレクシオス大主教に、至福のセルギイを自身の後継者かつ代理としたいという願いを抱かせた。

このキリストの群れの立派な牧者は、自らの死が近づいていることに気づくと、聖セルギイを呼び寄せ、金と宝石で飾られた司教の十字架を取り、聖セルギイに手渡した。しかし、この偉大な修行者は、謙虚に頭を下げてこう言った。

「お許しください、聖なる主教様。私は若き頃から金持ちではありませんでしたし、老いてからはなおさら、貧しさの中に留まりたいと願っております。」

聖アレクシオスは彼にこう言った。

「愛する者よ、あなたの生き方は常にそのようであったことを私は知っている。さあ、今こそ従順を示し、私たちから与えられる祝福を受け入れなさい。」

そう言って、彼は自ら聖人に十字架を授け、それから語り始めた。

「尊い方よ、私がなぜあなたを呼び寄せたのか、そして何を提案したいのか、お分かりでしょうか。私は、主の御心に従い、神から託されたロシアの総主教職を、主が望まれる限り務めてまいりました。しかし、今や私の最期は近づいており、ただ、いつこの世を去るかは分かりません。　私は生前に、私の後にキリストの羊の群れを牧することができる人物を見つけたいと願っているが、あなた以外にふさわしい者は見当たらない。　公爵も、ボヤールも、聖職者も――つまり最後の一人まで――皆があなたを敬愛しており、あなただけがこの大司教の座にふさわしいと認められているため、皆があなたにその座に就くよう懇願するだろうことは、私にもよく分かっている。それゆえ、今こそ司教の位を受け入れ、私の死後、私の後任となってほしい。

この言葉を聞いた聖人は、自らをそのような位にふさわしくないと考えていたため、深く動揺した。

「お許しください、大主教様」と彼は聖人に答えた。「あなたは私の力の及ばない重荷を私に背負わせようとしておられます。それは不可能です。私は罪深く、すべての人の中で最も卑しい者です。どうして私がこれほど高い位を受け入れるなど、おこがましいことでしょうか？」

聖アレクシオス大主教は長い間、その修道士を説得しようとした。しかし、謙遜を愛するセルギイは、決して譲らなかった。

「聖なる大主教様」と彼は言った。「もし私をこの地から追い出そうとお考えでないのなら、これ以上この件についてお話しにならないでください。また、他の誰にも、そのような言葉で私を煩わせないようにしてください。私からは、この件について同意を得ることは決してないでしょう。」

聖人が断固として譲らないのを見て、大司教はこの件について彼に話すのをやめた。彼は、尊者がさらに遠く離れた場所や荒野へ去ってしまい、モスクワがそのような光を失ってしまうことを恐れたのである。霊的な対話で彼を慰めた後、聖大主教は彼を平穏のうちに修道院へ送り出した。

しばらくして、聖アレクシイ大主教が逝去した。すると、皆がセルギイにロシアの大主教職を引き受けるよう強く懇願した。しかし、尊者（セルギイ）はダイヤモンドのように揺るぎなかった。

[6495] ナリ川の高い岸辺に位置することからその名がついたヴィソツキー修道院は、1374年に創建された。

その間、大司教の座にはアルヒマンドリト・ミハイルが就いた。　彼は、叙任前に聖職者の衣を身にまとい、白い頭巾を被るという大胆な行為に及んだ。セルギイが彼のこの厚かましい企てを阻止し、自ら大主教座に就こうとするだろうと考えた彼は、尊者とその修道院に対して陰謀を企て始めた。このことを知った尊者は、弟子たちにこう言った。

「この修道院と我々の貧しさの上に高慢に君臨しようとするミハイルは、望みを叶えることはなく、コンスタンティノープルを見ることもないだろう。彼は高慢によって打ち負かされているからだ。」

聖人の予言は的中した。ミハイルが叙任式のために船でツァーグラードへ向かっていた際[6496]、彼は病に倒れて亡くなり、代わりにキプリアンが教座に就いた[6497]。

150年以上にわたり、ロシアの地は過酷な災難に見舞われていた。タタール人に支配されてから、すでに150年以上が経過していたのである。これらの恐ろしい征服者たちによる隷属は、苦痛に満ち、屈辱的なものであった。　広範な地域への頻繁な襲撃、住民の荒廃、住民への暴行、神の教会の破壊、多額の貢納――これらすべてが耐え難い重荷としてロシアの地にのしかかっていた。諸侯たちはしばしばオルダへ参拝に行かざるを得ず、そこで様々な屈辱にさらされた。　しばしば諸公爵の間でも意見の相違や争いが生じ、それが団結して異民族の隷属を打ち破ることを妨げていた。

この時、人々の罪に対する神の許しにより、タタールのハーンの一人である不敬虔なママイが、数え切れないほどの軍勢を率いてルーシに侵攻した。傲慢なハーンは、正教の信仰さえも滅ぼそうとした。その高慢さから、彼は貴族たちにこう語った。

「私はルーシの地を奪い、キリスト教の教会を破壊し、ルーシの諸公爵を皆殺しにしてやる。」

敬虔なディミトリ・イオアンノヴィチ公が、贈り物や服従をもってタタールの怒りを鎮めようと試みたが、それは無駄であった。ハンは容赦なく、すでに敵の大軍は雷雲のようにルーシの国境へと迫っていた。　大公もまた遠征の準備を始めたが、出陣する前に、彼は「命を与える聖三位一体」修道院を訪れ、主を礼拝し、この修道院の聖なるイグメンから今後の遠征への祝福を請うた。至聖三位一体のイコンの前で熱心に祈りを捧げた後、ディミトリは尊者セルギイにこう言った。

「父上、私とすべての正教徒をどれほど大きな悲しみが打ち砕いているか、ご存知でしょう。不信心なハン・ママイが全軍を動員し、今まさに私の領地へと進軍してきて、聖なる教会を荒廃させ、ロシアの民を殲滅しようとしています。どうか、父上、神が私たちをこの大いなる災いから救ってくださるよう、お祈りください。」

これを聞いた聖人は、公爵を励まし始め、こう言った。

「あなたは、神から託された羊の群れを顧み、不信心者たちに立ち向かうべきです。」

その後、聖なる長老は大公を招き、神聖な典礼に参列するよう勧めました。典礼が終わると、セルギイはディミトリ・イオアンノヴィチに対し、自分の修道院で食事をとるよう懇願しました。大公は自らの軍隊のもとへ急いで向かおうとしていましたが、聖なる修道院長に従いました。すると、長老は彼にこう言いました。

「この食事は、大公よ、あなたにとって益となるでしょう。主なる神があなたの助け手です。あなた自身が勝利の冠を戴く時はまだ来ていませんが、数え切れないほど多くの、あなたの同志たちには、殉教者の冠が用意されています。」

食事が終わると、尊者は大公と同行者たちに聖水を振りかけ、こう言った。

[6496] 当時、ロシア正教会は依然としてコンスタンティノープル総主教の管轄下にあった。

[6497] 彼は1354年から1391年まで大主教を務めた。

「敵には最終的な滅びが待ち受けているが、あなたには神からの慈悲と助け、そして栄光がある。どうか主と聖母マリアに信頼を置かれよ。」

その後、聖人は大公に聖なる十字架を掲げて祝福し、預言者のようにこう告げた。

「さあ、殿、恐れることなく進みなさい。主は不信心者たちに対してあなたを助け、あなたは敵に打ち勝つでしょう。」

この最後の言葉は公爵一人にだけ向けられた。すると、ルーシの地の守護者は喜び、聖人の預言に心を打たれて感極まり、涙を流した。ちょうどその頃、セルギエフ修道院には、アレクサンドル・ペレスヴェートとアンドレイ・オスリアビアという二人の修道士が修行に励んでいた。彼らは俗世では戦いに熟達した戦士であった。　大公は、この戦士修道士たちを聖セルギイに求めた。長老は直ちにディミトリ・イオアンノヴィチの願いを聞き入れ、これらの修道士たちにキリストの十字架が描かれた修道服を身にまとうよう命じた。

「ほら、子らよ、これが無敵の武器だ。これが、あなたたちの戦いの兜や盾の代わりとなるように！」

すると、大公は感動してこう叫んだ。

「もし主が私を助け、私が不信心者たちに勝利を収めることができれば、聖母マリアの名に因んで修道院を建立しよう。」

その後、尊者は大公と彼を取り囲む者たちを再び祝福した。伝承によれば、彼は大公に全能の主のイコンを授け、修道院の門まで見送ったという。こうして聖なる修道院長は、不敬虔な敵たちがルーシの名を地上から消し去り、正教の信仰を滅ぼそうと脅かしていたこの困難な時期に、大公を励まそうとしたのである。

その間、ロシアの諸公爵たちは結集し、集結した軍勢は出陣した。9月7日、民兵部隊はドン川に到達し、川を渡って、有名なクリコヴォの野[6498]、に陣を張り、恐るべき敵を迎え撃つ準備を整えた。　9月8日の朝、聖母マリアの降誕祭の日に、軍は戦闘の準備を始めた。戦いの直前に、聖セルギイのもとから修道士ネクタリイが、他の二人の兄弟と共にやって来た。　聖なる修道院長は、公爵の勇気を奮い立たせようとした。彼は公爵に至聖なる三位一体の祝福を伝え、修道士たちを通じて聖母マリアの聖パンと書簡を送り、その中で神の助けへの希望をもって公爵を慰め、主が彼に勝利を授けると予言した。　セルギイの使者たちの知らせは各連隊に瞬く間に広まり、兵士たちに勇気を吹き込んだ。彼らは聖セルギイの祈りに希望を託し、正教の信仰と故郷の地のために死ぬ覚悟で、恐れを知らずに戦場へと向かった。

数え切れないほどのタタール軍の群れが、雲のように押し寄せてきた。その群れの中から、巨体の勇者チェルベイが現れた。彼は並外れた力に恵まれていた。古代のゴリアテのように傲慢に、彼はロシア兵の中から誰かを一対一の決闘に挑んだ。この勇者の威圧的な姿は恐ろしいものだった。しかし、彼に立ち向かったのは、謙虚な修道士ペレスヴェートであった。心の中で、自分の霊的父、同胞のオスリアバ、そして大公に別れを告げると、このキリストの勇敢な戦士は、槍を手に敵へと素早く突進した。恐るべき力で二人は激突し、共に息絶えた。　そこで恐ろしい戦いが始まった。ルーシでこれほどの激戦はかつてなかった。彼らはナイフで斬り合い、素手で互いの首を絞め合った。互いに押し合い、馬の蹄の下で息絶えていった。塵と無数の矢のせいで太陽は見えなくなり、血は十ヴェルストにも及ぶ広範囲に川のように流れた。　その日、多くの勇敢なルーシの戦士たちが倒れたが、タタール人の死者はその倍以上にも上った――戦いは敵の完全な敗北で終わった。不敬で傲慢な敵たちは、倒れた者たちの死体で埋め尽くされた戦場を後にし、逃げ去った。ママイ自身も、わずかな従者たちを連れてかろうじて逃げ延びた。

[6498] クリコヴォの野は、トゥーラ州エピファノフスキー郡に位置している。

その恐ろしい戦いが繰り広げられている間ずっと、聖セルギイは兄弟たちを集め、彼らと共に祈りを捧げ、主が正教の軍勢に勝利を授けてくださるよう熱心に懇願していた。　先見の明という賜物を持っていた聖人は、まるで目の前であるかのように、自分から遠く離れた場所での出来事をはっきりと見ていた。これらすべてを予見して、彼は修道士たちにロシア軍の勝利を告げ、戦死者の名前を一人ひとり挙げ、自ら彼らのために祈りを捧げた。かくして、主は御自身の御心に適う者にすべてを明らかにされたのである。

タタール人に対するこの輝かしい勝利により「ドンスキー」という異名を得た大公は、この上ない喜びをもってモスクワに戻り、直ちに聖セルギイのもとへ向かった。修道院に到着すると、彼は心から主への感謝を捧げ、　「戦いに強き方」に感謝し、聖なる修道院長と修道者たちの祈りに感謝し、聖者に戦いの詳細を語り、クリコヴォの野で戦死したすべての兵士たちのために追悼の典礼と追悼の祈りを捧げるよう命じ[6499]、修道院に多額の寄付を行った。戦いの前に「修道院を建設する」と誓ったことを思い出し、大公は、場所を選定し、新しい修道院の教会を聖別した聖セルギイの助けを借りて、ドゥベンカ川沿いに「聖母マリアの被昇天」に捧げる修道院を建設した[6500]。そこには共同寮も設けられた。

その直後、悪魔の誘惑により、新ハン・トフタミシュ率いるタタール軍が、狡猾な手段でロシアの地を襲撃した[6501]；トフタミシュは突如としてモスクワを占領し、他にもいくつかの都市を荒廃させた。　聖セルギイはトヴェリへと退いた。恐ろしい敵はすでに修道院のすぐ近くまで迫っていたが、神の力強い御手によって、修道院は恐るべき征服者たちの横暴な手から守られた。トフタミシュは、大公が軍勢を率いて接近していることを知ると、すぐにその場を去った。

それ自体で恐ろしいタタール人は、大公の座やその他の領土をめぐって諸公爵の間で様々な争いや不和が生じていた当時、ロシアの地にとってさらに恐ろしく、危険な存在であった。　一部の公爵たちは、ロシアの地の敵であるタタール人やリトアニア人との同盟さえ結んでいた。こうした内紛はしばしば我々の敵に利用され、その結果、ロシアの地には避けられない破滅の危機が迫っていた。その一方で、ロシアの地を救い、恐ろしい敵を撃退するためには、あらゆる相互の争いを忘れ、皆が緊密に団結し、異教徒から祖国を堅固に守らなければならなかった。そのためには、最高権力が一人の大公の手中にあり、他の諸侯が彼に従い、その意志を実行することが必要であった。　聖セルギイは、クリコフの戦い以前も、　、そして戦後も、このことに尽力し、それによって故郷の地に多大な恩恵をもたらした。彼は何度か、ある公から別の公へと訪れ、神の助けを借りて、その霊感に満ちた言葉によってしばしば争いを収めた。　こうして1365年、彼はニジニ・ノヴゴロドを訪れ、実弟ディミトリからこの都市を奪っていたボリス・コンスタンティノヴィチ公を説得し、ニジニ・ノヴゴロドの返還を要求していた大公ディミトリ・イオアンノヴィチに従うよう促した。

聖セルギイは、モスクワ大公とリャザン公オレグとの間を和解させた。　オレグは、ロシアの敵と結託し、度々条約を破っていた。ディミトリ・イオアンノヴィチは、キリストの戒めに従い、何度かオレグに和平を申し入れたが、オレグは大公の提案をすべて拒絶した。そこで彼は、オレグを和解へと導いてほしいと、聖セルギイに懇願した。　1385年、謙虚な修道院長は、いつものように徒歩でリャザンへ向かい、オレグと長い間語り合った。リャザンの公は心を打たれ、聖なる人物の前で恥じ入り、大公と永遠の平和を結びました。

[6499] 当時、この戦いで戦死した兵士たち、そしてすべての故人を追悼する日として、ディミトリエフスカヤ・サブボタ（10月）が制定された。

[6500] ラヴラから40ヴェルスタ離れた、ドゥブナ川に合流するドゥベンカ川沿いに建てられたドゥベンスキー修道院は、現在では存在しない。

[6501] トクタミシュの侵攻は1382年のことでした。

ディミトリ・イオアンノヴィチ自身も、聖セルギイに対して特別な愛情と敬意を抱いていた。彼はしばしば聖なる修道院長に助言を求め、祝福を受けるために彼の元を訪れた。　彼はセルギイを自身の子供たちの代父に招いた。この公の遺言書には、尊者自身の署名さえも記されていた。この遺言書には、大公の座の継承順序が永久に定められており、大公の権力は長男が継承することとなっていた。

前述のウラジーミル・アンドレーエヴィチ公は、聖人に対して息子のような愛情と深い信仰を抱いていた。彼は頻繁に聖人のもとを訪れ、生活必需品などを贈り物として送っていた。ある時、彼はいつもの習慣通り、様々なご馳走を携えた使用人を聖人の修道院へ送り出した。　道中、その使用人は悪魔の誘惑に負けて、送られたご馳走を少し食べてしまった。修道院に着くと、彼は聖人に、これらのご馳走は公爵から送られたものだと告げた。しかし、先見の明のある老聖人は、それらを受け取ることを拒み、こう言った。

「なぜ、わが子よ、お前は敵の言うことを聞いたのか。なぜ、祝福なしには触れてはならない料理を口にして、惑わされてしまったのか？」

その過ちを指摘された使用人は、聖なる長老の足元にひれ伏し、涙ながらに許しを請い、自らの罪を悔い改めた。　その時になって初めて、聖人は送られてきた品を受け取った。彼は従者を許し、二度とそのようなことをしないよう戒め、平穏のうちに彼を帰した。そして、敬虔な公爵には、至聖三位一体修道院からの感謝と祝福を伝えるよう命じた。

多くの人々が尊者のもとを訪れ、助けと取り成しを請い求めたが、セルギイは常に苦難にある人々を助け、抑圧された者や貧しい者たちを守った。　修道院の近くには、けちで冷酷な男が一人住んでいた。彼は隣人である孤児を不当に扱った。代金を支払わずにその豚を奪い取り、それを屠るよう命じたのである。不当な扱いを受けた孤児は、尊者のもとに訴え出て助けを求めた。そこで尊者はその男を呼び寄せ、こう言った。

「子よ、神がおられると信じているか。神は義人と罪人の裁き主であり、孤児や未亡人の父である。　神は報復される用意がある――しかし、神の御手に落ちることは恐ろしい。それなのに、なぜ私たちは他人のものを奪い、隣人を傷つけ、あらゆる悪を行うことを恐れないのか？　神が御恵みによって私たちに与えてくださるものにまだ満足していないというのか、他人の財産に心を奪われているというのか？　どうして私たちは神の寛容さを軽んじることができるのか？　不正を行う者たちが貧しくなり、その家は荒れ果て、彼らの記憶は永遠に消え去り、来世では果てしない苦しみ待ち受けていることを、私たちは見ていないのだろうか。

聖人はこの男にさらに長く説教し、孤児に正当な対価を支払うよう命じ、こう付け加えた。

「決して孤児を虐げてはならない。」

その男は悔い改め、改心して隣人に金を返すと約束したが、しばらくして心変わりし、孤児に金を返さなかった。　すると、屠殺された豚の肉が置かれていた小屋に入ると、当時は霜が降りていたにもかかわらず、肉がすべて虫に食い荒らされているのを突然目にした。恐怖に襲われた彼は、直ちに孤児に支払うべき金額を払い、肉は犬たちに投げ与えた。

ある日、ツァリグラードからある司教がモスクワを訪れた。彼は神の聖なる御使いについて多くの話を聞いていたが、それを信じてはいなかった。

「果たして、この地にこれほど偉大な導き手が現れるものだろうか」と彼は考えた。

そう考えながら、彼は修道院へ向かい、自らその長老をこの目で見ようと決心した。修道院に近づくにつれ、彼を恐怖が襲った。そして、修道院に入り、聖人を見た途端、　、彼はたちまち目が見えなくなった。そこで、尊者（セルギイ）は彼の手を取り、自分の独房へと案内した。　司教は涙ながらにセルギイに懇願し始め、自分の不信仰を打ち明け、視力の回復を願い、自分の罪を悔い改めた。謙虚な修道院長は彼の目に触れると、司教はたちまち視力を取り戻した。そこで聖人は穏やかに

優しく彼と語り合い、驕ってはならないと説いた。　かつて疑いを抱いていた司教は、今や聖人がまことに神の人であり、主が彼に地上の天使、天上の人の姿を拝む恵みを与えられたのだと、皆に確信をもって語り始めた。聖人は相応しい敬意をもって司教を修道院から送り出し、司教は神とその御使いセルギイを賛美しながら、自らの居所へと戻っていった。

ある夜、至福のセルギイは、聖母マリアのイコンの前に立ち、いつもの祈りを捧げながら、その聖なる御顔を見つめ、次のように祈った。

「私たちの主イエス・キリストの至聖なる母よ、人類の守護者であり力強い助け手よ、私たちのような不適格な者たちのために執り成し手となってください。常に御子であり私たちの神である御方に祈り、この聖なる場所を御顧みくださいますように。」　最も愛すべきキリストの母よ、あなたのしもべたちはあなたに助けを求めます。あなたはすべての人にとっての避難所であり、希望だからです。

こうして、尊者（聖人）は祈りを捧げ、聖母マリアへの感謝のカノンを詠んだ。祈りを終えると、彼は少しの間、休息のために腰を下ろした。すると突然、彼は弟子ミヘイにこう言った。

「子よ、目を覚まし、気を引き締めよ！今まさに、我らに予期せぬ、奇跡的な訪問者が訪れるだろう。」

彼がその言葉を口にした途端、突然、次のような声が聞こえてきた。

「見よ、聖母マリアがおいでになる。」

これを聞いた聖人は、急いでケリアから玄関へと出た。そこで、太陽の輝きよりも明るい大いなる光が彼を照らし、彼は二人の使徒、ペトロとヨハネに付き添われた聖母マリアを拝見する栄恵に与った。聖母マリアの周囲には、並外れた輝きが包み込んでいた。　その驚くべき輝きに耐えきれず、聖人はひれ伏した。すると、聖母は御自身の手で聖人に触れ、こう言われた。

「恐れることはない、わが選ばれし者よ！　私はあなたを訪ねて参った。弟子たちへのあなたの祈りが聞き届けられたからだ。もはやこの修道院のことを嘆く必要はない。これからは、あなたが生きている間だけでなく、あなたが神のもとへ旅立った後も、あらゆる面で豊かさが満ち溢れるだろう。そして私は、この場所を決して離れることはない。」

こう告げると、至聖なる神の母は姿を消した。聖人は大きな恐怖と戦慄に襲われた。しばらくして我に返ると、彼は自分の弟子が死人のように横たわっているのを見た。聖人が彼を起こすと、ミヘイは長老の足元にひれ伏し、こう言った。

「師よ、主の御名において、この不思議な現象が何であるかお教えください。この幻はそれほどまでに驚くべきもので、私の魂が肉体から離れそうになりました。」

聖人は大きな喜びに包まれ、その顔は言葉に尽くせないほどの歓喜で輝いていた。彼はただこう言うことしかできなかった。

「わが子よ、少し待て。この不思議な幻に、私の魂も震えているのだ！」

そしてしばらくの間、聖人は黙って立っていた。その後、彼は弟子にこう言った。

「イサクとシモンを私のところへ呼んでくれ！」

二人が来ると、聖人は、聖母マリアが使徒たちと共に現れた様子や、聖母が自分に語った言葉を、順を追ってすべて彼らに語った。これを聞いて、二人は大きな喜びに満たされ、皆で聖母への祈りを捧げた。一方、聖人はその夜一晩中、眠ることなく、聖母マリアの慈悲深い御訪問について思いを巡らせていた。

ある日、聖人は神聖な聖体礼儀を執り行っていた。前述の弟子シモン――確かな徳を備えた人物――は、その時、教会執事（エクリシアルヒ）を務めていた。すると突然、聖人の祭壇の上を炎が舞い、祭壇を照らし、奉仕していたセルギイを包み込み、聖人は頭から足先まで炎に包まれた。　そして、尊者がキリストの聖体を受けようとしたとき、炎は立ち上がり、まるで不思議なベールのよう

に渦を巻いて聖杯の中に沈み込み、そこからこのキリストにふさわしい奉仕者である聖セルギイは聖体拝領を行った。

これを見たシモンは恐怖に襲われ、黙り込んで立ち尽くした。聖体拝領を終えたセルギイは聖座から離れ、シモンが幻視を授かったことを悟ると、彼を呼び寄せて尋ねた。

「わが子よ、なぜあなたの魂はそれほど恐れたのか？」

「父よ、私は驚くべき幻を見ました。聖霊の恵みが、あなたと共に働いているのを見たのです。」

すると、聖人は彼に、このことを誰にも話してはならないと命じ、こう言った。

「主が私を御許に召されるまでは、このことを誰にも話すな。」

そして二人は、このような恵みを授けてくださった創造主を熱心に感謝し始めた。

長年にわたり、絶え間ない労苦の中で厳格な禁欲生活を送り、数多くの輝かしい奇跡を成し遂げた聖人は、深き老齢に達した。彼はすでに七十八歳になっていた。　逝去の六ヶ月前、神のもとへ旅立つことを予見した彼は、兄弟たちを呼び寄せ、その指導を弟子であるニコンに託した。ニコンは年齢こそ若かったが、霊的な経験によって知恵に富んでいた。この弟子は生涯を通じて、師であり導き手である聖セルギイに倣い続けていた。　聖人はこのニコンを修道院長に任命し、自身は完全な沈黙に身を委ね、この一時的な人生からの旅立ちの準備を始めた。9月、彼は重い病に倒れ、自らの死を悟ると、修道士たちを呼び寄せた。　修道士たちが集まると、聖人は最後に彼らに向けて説教と訓戒を述べた。彼は修道士たちに信仰と一致を保つよう諭し、心と体の清らかさを保つよう懇願し、すべての人に対して偽りのない愛を抱くよう遺言し、　邪悪な欲望や情欲から遠ざかり、飲食に節度を保つよう助言し、旅人への愛を忘れず謙虚であり、この世の栄光から逃れるよう説いた。最後に、彼は彼らにこう言った。

「私は、私を召される神のもとへ去ります。そして、あなた方を全能の主と、その聖母マリアにお委ねします。どうか聖母が、あなた方にとって、悪者の矢から守る避難所であり、防壁となりますように。」

最期の瞬間、聖人はキリストの聖なる秘跡を受けることを望んだ。もはや彼は自力で寝台から起き上がることができなかった。弟子たちは、師が最後にキリストの御体と御血を拝領する際、畏敬の念をもって師の両腕を支えた。その後、聖人は両手を天に掲げ、祈りを捧げながら、その清らかな魂を主に委ねた[6502]。 聖人が息を引き取るやいなや、言葉に尽くせぬ芳香が彼のケリア（修道室）に満ち溢れた。義人の顔は天の至福に輝いており、まるで深い眠りについたかのようであった。

師であり導き手である彼を失い、兄弟たちは苦い涙を流し、羊が牧者を失ったかのように深く嘆いた。彼らは葬送の歌と詩篇の詠唱を捧げながら、聖人の尊い遺体を埋葬し、彼が生涯にわたり熱心に修業に励んだ修道院に安置した。

尊者セルギイの帰天から、すでに三十年以上が経過していた。　主は、御自身の御使いをさらに称えようと望まれた。その頃、修道院の近くに一人の敬虔な人が住んでいた。彼は聖人に対して深い信仰を抱いており、しばしばセルギイの墓を訪れ、神の御使いに熱心に祈りを捧げていた。ある夜、熱心な祈りの後、彼は浅い眠りに落ちた。すると突然、聖セルギイが現れてこう言った。

「この修道院のイグメヌスに伝えなさい。なぜ、私の遺体が水に囲まれたまま、これほど長く土の下に安置されているのかと。」

目を覚ますと、その男は恐怖に満たされながらも、同時に心の中に並外れた喜びを感じた。彼は直ちに、この幻視について、聖セルギイの弟子であり、当時修道院長を務めていたニコンに語った。ニコンはこれを修道院の兄弟たちに伝え、すべての修道士たちは大いに歓喜した。　そのような幻視の噂は遠くまで広まり、そのため多くの人々が修道院に集まった。聖セルギイを父のように敬い、

[6502] 聖セルギイの逝去は1392年9月25日であった。

聖なる修道院を深く気遣っていたユーリー・ドミトリエヴィチ公も到着した[6503] 。集まった人々が聖セルギイの棺を開けた途端、たちまち素晴らしい香りが辺りに広がった。　その時、驚くべき奇跡が目の当たりにされた。尊者セルギイの尊い御遺体が無傷で完全なまま保存されていただけでなく、その衣さえも朽ちていなかったのだ。棺の両側には水が張られていたが、その水は尊者の聖遺物にも、その衣にも触れていなかった。　これを見て、皆は喜び、その御使いをこれほどまでに驚くべき形で栄光に輝かせた神を賛美した。歓喜のうちに、聖人の聖遺骨は新しい聖遺骨箱に納められた。聖セルギイの聖遺骨の発見は1428年7月5日に起こり、これを記念して祝祭日が定められた。

慈悲深き主は、御自身の偉大な聖人を驚くべきほどに栄光に輝かせられた。その聖なる御名を信仰をもって呼び求め、その多大な癒やしと奇跡をもたらす聖遺物が納められた聖櫃にひれ伏すすべての人々に、数え切れないほど多種多様な奇跡が授けられているのである。　この謙虚な修行者は世俗の栄光を避けていましたが、神の力強い御手は彼を高く引き上げ、彼が自らを謙遜に振る舞えば振る舞うほど、神は彼をますます栄光に輝かせました。　まだこの世にいた頃、聖セルギイは多くの奇跡を行い、驚くべき幻視に恵まれました。しかし、　の謙遜と柔和の精神に満たされていた彼は、弟子たちにそのことを語ることを禁じていました。　しかし、この世を去った後、主からそのような力を授かったため、彼の祈りによって行われる様々な奇跡は、その流れが決して衰えることのない大河のようだ。　*「神よ、あなたは御自身の聖所において畏るべき方である」*［神は御自身の聖徒たちにおいて驚くべき方である］（詩編67:36）*という*聖書の言葉は、まことに真実であり、偽りがない。この神に愛された者を通してすべての人に与えられる奇跡は驚くべきものであり、　盲人は視力を取り戻し、足の不自由な者は癒やされ、口がきけない者は言葉を授かり、悪霊に取りつかれた者は邪悪な霊から解放され、病める者は健康を取り戻し、苦難にある者は助けと庇護を受け、敵に追いつめられている者は守られ、悲しむ者は安らぎと慰めを得、　要するに、この聖人に助けを求めるすべての人に、助けが与えられるのである。太陽は明るく輝き、その光線で大地を温めるが、この奇跡行者はそれ以上に明るく輝き、その奇跡と祈りによって人々の魂を照らし出している。　そして太陽は沈むが、この奇跡行者の栄光は決して消えることはない――それは永遠に輝き続けるであろう。なぜなら、聖書には*「義人は永遠に生きる」*（テサロニケの信徒への手紙一 5:15）と記されているからである。

この神に愛された者の奇跡について黙っていることはできませんが、それらを記述することも容易ではありません。その数はあまりにも多く、その様相も実に多様だからです。ここでは、神が御自身の偉大な修行者[6504] を称えるために御許しになった、最も重要な奇跡についてのみ触れておきましょう。

修道兄弟たちを目に見える形で去った後も、聖セルギイは彼らとの目に見えない交わりを絶やすことはなかった。この偉大な奇跡行者は、死後も自らの修道院を気遣い、度々兄弟たちの誰かの前に姿を現した。　ある時、この修道院のイグナティイという名の修道士が、次のような幻視を授かりました。聖セルギイが徹夜祈祷の席に立ち、他の兄弟たちと共に聖歌に参加していたのです。　驚いたイグナティウスは直ちにこのことを兄弟たちに伝え、皆は、彼らにこれほど偉大な祈りの人であり、助け手を与えてくださった主を大いなる喜びをもって賛美した。

[6503] ズヴェニゴロド公。

[6504] 聖セルギイの死後の奇跡に関する記述は、全ロシア都主教マカリーの『チェティム・ミネイ』、都主教プラトンおよびフィラレートが編纂したセルギイの『聖人伝』、ならびにシモン・アザリーンの死後の奇跡に関する伝承に基づいてまとめられたものである。　ポーランド軍によるラヴラ包囲時の奇跡の記述は、ケラール（修道院の物資管理責任者）アヴラミイ・パリツィンによる『トロイツキー修道院包囲の伝承』から引用された。また、尊者セルギイの古版伝記やその他の歴史的資料も参考とされた。

1408年の秋、前述の尊者ニコンの弟子が修道院長を務めていた頃、凶暴なエディゲイ率いるタタール軍がモスクワの境界に迫りつつあった。尊者ニコンは、主がこの地を守り、恐ろしい敵の侵攻から守ってくださるよう、長い間主へ祈りを捧げた。　その際、彼はこの修道院の偉大な創設者である聖セルギイの名を呼び求めた。ある夜、祈りを終えた彼は一息つくために腰を下ろし、うたた寝をしてしまった。すると突然、聖ペトロと聖アレクシオス、そして彼らと共にいる聖セルギイの姿が見え、聖セルギイはこう告げた。

「主は、異民族がこの地にも足を踏み入れることを御心に適わせられた。だが、わが子よ、悲しんだり動揺したりしてはならない。この修道院は荒廃することなく、むしろさらに繁栄するだろう。」

その後、聖人たちは祝福を与えると、姿を消した。我に返った聖ニコンは急いで扉へと向かったが、それは鍵がかかっていた。扉を開けると、聖人たちが彼の独房から教会へと歩いていくのが見えた。その時、彼はこれが夢ではなく、真の幻視であったことを悟った。　聖セルギイの予言はまもなく現実のものとなった。タタール人が修道院を荒らし、焼き払ったのである。しかし、このような奇跡的な方法で警告を受けていたニコンは、兄弟たちと共に一時的に修道院を離れた。そして、タタール人がモスクワの境界から撤退すると、　ニコンは、神の御加護と聖セルギイの祈りにより、再び修道院を再建し、至聖三位一体を称える石造りの教会を建立した。そこには今日に至るまで、聖セルギイの聖遺骨が安置されている[6505]　。その際、多くの高潔な人々が、聖アレクシイが聖セルギイと共に、修道院の新しい建物の奉献式に参列する姿を目撃した。

その同じ尊者ニコンの修道院長在任中、ある修道士が個室の建設のために木材を切り出していたところ、斧で顔を深く傷つけてしまった。激しい痛みのため作業を続けることができず、彼は自分の個室に戻った。すでに夕暮れが迫っていたが、その時、修道院には修道院長がいなかった。　すると突然、その修道士は、誰かが独房の扉をノックし、自分を修道院長だと名乗る声を聞いた。　痛みと失血で力尽き、彼は立ち上がって扉を開けることができなかった。すると、扉は自ずと開き、修道室全体が突然、不思議な光に包まれた。その輝きの中に、修道士は二人の男を見出した。そのうちの一人は司教の法衣を身にまとっていた。苦しむ修道士は心の中で、訪れた者たちに祝福を請うた。光を放つ長老が聖人に小部屋の基礎を示し、聖人はそれを祝福した。すると、病人は、この上ない驚きとともに、 の傷口から血が流れ止まっていることに気づき、完全に健康になったのを感じた。 このことから、彼は聖アレクシオスと聖セルギイにお目にかかったのだと悟った。このように、生前に兄弟愛という強い絆で結ばれていたこの二人の聖人は、死後もしばしば共に多くの人々の前に現れたのである。

モスクワに住むシメオンという名の男は、聖人の予言通りに生まれたが、重病にかかり、身動きもできず、眠ることも、食事も取れず、まるで死人のように寝台に横たわっていた。このように苦しんでいたある夜、彼は聖セルギイに助けを求めてこう叫んだ。

「尊者セルギイよ、どうか私を助けてください。この病から私を救ってください。あなたは生前、私の両親に深い慈愛を注ぎ、私の誕生を予言してくださいました。この重病に苦しむ私を、どうか見捨てないでください。」

すると突然、彼の前に二人の長老が現れた。そのうちのひとりはニコンであった。　病人はすぐに彼を見分けました。というのも、この聖人が存命の頃から個人的に知っていたからです。そして、現れたもう一人の人物こそが、聖セルギウスご本人であることを悟りました。その尊い長老は、病人に十字を切って祝福し、その後、ニコンに病床のそばに置かれていたイコンを取りに行くよう命じました――それはかつてニコン自身がシメオンに贈ったものでした。　その後、病人は自分の皮膚がすべて体から剥がれ落ちたかのように感じた。その直後、聖人たちは見えなくなった。その瞬間、シ

[6505] この教会の奉献式は1412年9月25日に行われた。

メオンは自分が完全に回復したことを感じた。彼は寝台から身を起こしたが、もはや誰も彼を支えてはいなかった。そこで彼は、皮膚が剥がれたのではなく、病気が去ったのだと悟った。　彼の喜びは計り知れないものであった。立ち上がると、彼はこの予期せぬ、そしてこれほどまでに驚くべき癒やしについて、聖セルギイと尊者ニコンの両者に熱心に感謝し始めた。

ある日、聖三一を称える大祭が近づいていたため、例年通り、修道院には大勢の人々が集まっていた。その中には、七歳の頃から視力を失っていた貧しい盲人が一人いた。　彼は、そのとき敬虔に荘厳な礼拝が行われていた教会の外に立っていた。案内人はしばらくの間、彼から離れてしまっていた。教会の聖歌を聞きながら、盲人は、よく耳にしていたように、数多くの癒やしをもたらすという尊者ニコンの聖遺物に参拝し、礼拝することができないことを嘆いていた。　案内人に置き去りにされた彼は、苦々しく泣き出した。すると突然、苦難にあるすべての人々の迅速な助け手である聖セルギイが現れた。聖人は彼の手を取り、教会へと導き入れ、聖遺物箱のそばまで連れて行った。盲人はそれに礼拝を捧げると、たちまちその失明は消え去った。　大勢の人々がこの輝かしい奇跡を目撃し、皆が神に感謝し、その聖人を称えた。そして、癒やしを受けたその男は、感謝の印として、永遠に聖人の修道院にとどまり、癒やされたお礼として、兄弟たちの仕事を助けるようになった。

1551年、ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイ[6506]は、タタール族からの防衛のため、スヴィヤジスク[6507]という都市を建設した。この都市には、至聖三位一体に捧げられた修道院が建てられ、そこには聖セルギイの聖像が安置されていた。この聖像からは、信者だけでなく、信仰を持たない異教徒の間でも、多くの奇跡がもたらされた。　ある日、山岳地帯のチェレミス族の長老たちが、恭しくスヴィヤジスクを訪れた[6508]；彼らは次のように語った。「この町が築かれる約5年前、この地がまだ何もない頃、私たちはここでしばしばロシアの教会の鐘の音を耳にしました；そこで、何が起きているのか確かめるために、足の速い若者たちをここへ送り込んだ。彼らは、まるで教会にいるかのように美しく歌う声を聞いたが、誰も見当たらなかった。ただ一人の修道士が十字架を掲げて歩き回り、四方八方に祝福を与え、まるで今の町の場所を測量するかのようにしていた。そして、その一帯は芳しい香りに包まれていた。　そこへ矢を放っても、矢は彼を傷つけることなく、上空へ舞い上がり、折れて地面に落ちた。私たちはそのことを公爵たちに伝え、公爵たちは女王や貴族たちに報告した」。

しかし、特に多くの奇跡が、ポーランド軍によるトロイツキー修道院の包囲という苦難の時期に、聖セルギイによって行われた。聖人はその御出現によって、この栄光ある修道院の守り手たちの勇気を奮い立たせ、すべての正教徒を力づけようとしたのである。　リソフスキーとサペガ率いる敵軍は、1608年9月23日に修道院の包囲を開始した。その数は膨大で、3万人に達したが、守備隊は2千人強に過ぎなかった。　そのため、修道院に集まった者たちは皆、深く意気消沈した。皆が泣き叫ぶ中、9月25日――聖セルギイの記念日（　）――の夜通しの徹夜祷が執り行われた。しかし、尊者（聖人）は悲しみと嘆きに沈む者たちを励ますべく急いだ。その同じ夜、ある修道士ピメンに幻視が与えられた。　この修道士は、全き慈悲の救い主と聖母マリアに祈りを捧げていた。すると突然、彼の独房は昼のように明るくなった。敵が修道院に火を放ったのだと思い、ピメンは独房から出て行くと、驚くべき光景が目に飛び込んできた。彼は、命の源である三位一体の聖堂の頂上に、天へと昇る炎の柱を見たのである。　驚愕したピメンは他の修道士たちや一部の信徒を呼び寄せた――そして皆、この並外れた幻影に驚嘆した。しばらくすると、その柱は降り始め、炎の雲へと変わり、入り口の上にある窓から三位一体の聖堂へと入り込んだ。

[6506] イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイは1533年から1584年まで在位した。

[6507] スヴィャージスクは現在、カザン州の郡庁所在地である。

[6508] チェレミス族は、主にヴィャトカ、カザン、オレンブルク、ペルミ、コストロマ、ニジニ・ノヴゴロドの各州に散在するフィン系部族である。

その間、包囲軍は修道院に砲弾を浴びせ続けたが、全能なる神の御手は至聖三位一体の修道院を守り抜いた。砲弾は人影のない場所や池に落ち、包囲された者たちにほとんど被害を与えなかった。大勢の人々が修道院の城壁の下に避難してきたため、修道院内は尋常ではないほど混雑していた。季節も遅かったにもかかわらず、多くの者が寝床を持たなかった。その間、敵は修道院の下にトンネルを掘り始め、頻繁な襲撃で包囲された者たちの体力を消耗させた。修道院にいる者たちを励ますため、ある日曜日に、尊者セルギイは司祭補のイリナルフの前に現れ、敵の攻撃を予言した。　その後、その同じ長老は、聖セルギイが塀に沿って歩き、聖水でそれを清めているのを見た。その翌夜、敵は確かに修道院に対して激しい攻撃を仕掛けたが、このような奇跡的な方法で警告を受けていた守備隊は敵を撃退し、彼らに少なからぬ打撃を与えた。

土塁の掘削については知っていたものの、包囲された者たちはその方向を把握していなかった。刻一刻と凄惨な死の脅威にさらされ、誰もが毎時、目の前で死を目前にしていた。この悲痛な時、皆は熱心に「命の源なる三位一体」の聖堂に集まり、心を打たれて神に助けを求め、自らの罪を悔い改めた。　偉大なる守護者であるセルギイとニコンの聖遺物に信仰をもって祈りを捧げない者は一人もいなかった。皆、主の尊い御体と御血を拝領し、死に備えていた。この苦難の日々、聖セルギイはアルヒマンドリト・イオアサフの前に現れた[6509]；ある日、イオアサフは至聖なる三位一体のイコンの前で熱心に祈った後、軽くうたた寝をしてしまった。すると突然、聖人が両手を挙げて涙ながらに至聖なる三位一体に祈っているのが見えた。祈りを終えると、聖人はアルヒマンドリトの方を向き、こう言った。

「起きなさい、兄弟よ。今こそ祈るべき時です。*『誘惑に陥らないように、目を覚まして祈りなさい』*（マタイ26:41）。全能にして慈悲深き主は、あなたがたを憐れみ、これからも祈りと悔い改めに励むことができるようにしてくださったのです。」

アルヒマンドリトはこの出来事を修道院の兄弟たちに語り、恐怖に襲われ、悲しみに打ちひしがれていた人々を大いに慰めた。

その直後、同じアルヒマンドリト・イオアサフは、さらに別の幻視を授かりました。ある日、彼は自分の修道室で定時の祈りを捧げていたところ、突然、聖セルギイが彼の元へ現れ、こう言いました。

「立ち上がり、悲しむな。喜びをもって祈りを捧げよ。なぜなら、至聖なる神の母、永遠の処女マリアが、天使たちやすべての聖人たちと共に、あなたがた全員のために神に祈ってくださっているからだ。」

聖セルギイは、聖なる修道院にいる者たちだけでなく、修道院を包囲していたコサックたちの前にも現れた。　敵陣の一人のコサックが修道院を訪れ、聖人の御出現について語った。多くの軍司令官たちが、聖セルギイや聖ニコンのような奇跡を行う聖人の姿をした、光に包まれた二人の長老が修道院の壁の上を歩いているのを目撃したという。そのうちのひとりは修道院に香を焚き、もうひとりは聖水をかけていた。　その後、彼らはコサックの部隊に向き直り、異教徒と共に至聖三者（プレスヴェートアヤ・トロイツァ）の家を荒らそうとしていることを非難した。ポーランド兵の中には長老たちに向けて矢を放つ者もいたが、矢や弾丸は射手自身に跳ね返り、その多くが負傷した。　その夜、尊者は多くのポーランド人の夢に現れ、彼らに破滅を予言した[6510]。この現象に恐怖を覚えた一部のコサックは、敵の陣営を離れ、二度と正教徒に対して武器を振るわないと誓って故郷へ帰った。神の御慈悲により、包囲された者たちは地下坑道の方向を突き止めることができた。彼らはそれを破壊したが、その際、数名の防衛者が、キリストの戒め*「人が友のために自分の命を捨てることほど、*

[6509] イオアサフは1608年から1610年まで大修道院長を務めた。

[6510] 実際、ポーランド軍の二大指導者であるサペガとリソフスキーは間もなく亡くなった。サペガは1611年にモスクワで死去し、リソフスキーは1616年9月25日――聖セルギイの記念日――に馬から転落して突然の死を遂げた。

大きな愛はない」（ヨハネ15:13）を果たすために、自らの命を捧げた。　一方、冬が訪れたことで敵は頻繁な攻撃を中止せざるを得なくなったが、包囲された者たちは恐ろしい「内なる敵」にひどく苦しめられるようになった。修道院内の狭さと質の悪い 食事により、恐ろしい病気――壊血病[6511] ――が蔓延した。　守備隊のわずかな兵力は日ごとに減少し、修道士たちは死にゆく者たちに最後の祈りを捧げる暇さえなかった。武器を携行できる者は約200人しか残っていなかった。包囲された者たちは、落胆しながら戦闘の再開を待っていた。しかし、神は、その偉大な聖人が設立したこの修道院を、驚くべき方法で守ってくださった。　わずかな兵力で、守備隊は長い間敵の攻撃を撃退し続けた。しかし、時間が経つにつれて、包囲された者たちの士気はますます低下していった。弱気な者や優柔不断な者たちは、自ら進んで敵に降伏するようさえ勧めた。彼らは、敵が修道院をこれほどまでに包囲しているため、もはやモスクワに援軍を求める使者を送ることは不可能だと語った。　こうした不平や落胆が渦巻く中、聖セルギイは勇気を奮い立たせ、気弱な者たちを励まそうとした。彼は再び司祭補のイリナルフの前に現れ、こう言った。

「兄弟たちやすべての戦士たちにこう伝えてくれ。モスクワへ知らせを送ることができないことを、なぜ嘆く必要があるのか？　今日、夜中の三時に、私は自らの代理として、三人の弟子――ミヘイ、バルトロメオ、ナウム――をモスクワの聖母マリアの御屋敷と、モスクワのすべての奇跡を起こす聖人たちの御前に送り出し、そこで祈りを捧げさせたのだ。敵は使者たちを目撃していた。なぜ彼らを捕らえなかったのか、尋ねてみよ。

イリナルクがこの出来事を告げると、皆が警備兵や敵に、修道院から派遣された者たちを見なかったかと尋ね始めた。すると、敵が確かに三人の長老たちを目撃していたことが判明した。彼らは長老たちを追跡し、長老たちの乗る馬が非常に弱かったため、すぐに追いつけるだろうと期待していた。　しかし、追跡者たちの期待は裏切られた。長老たちが乗っていた馬は、まるで翼があるかのように駆け抜け、敵はどうしても彼らに追いつくことができなかった。

その頃、修道院には一人の病床にある長老がいた。この話を耳にした彼は、セルギイが派遣した長老たちが一体どのような馬に乗っていたのか、そしてこの出来事は本当にあったことなのか、と深く考え込んだ。　すると突然、尊者が彼の前に現れた。尊者は、飼料不足のために修道院の塀の外に放たれていたあの盲目の馬たちに乗って長老たちを送り出したと告げ、その長老を病気から、そして同時に不信仰からも癒やした。

まさにその日、モスクワでは、焼きたてのパンで満たされた十二台の荷車を引き連れた長老の姿が目撃された。当時、モスクワもまた敵に包囲されていた。長老は、当時ラヴラ修道院の支院があったボゴヤヴレンスキー修道院へと向かっていた。　長老を目撃した人々は驚き、敵の部隊の間をどうやって気づかれずに通り抜けることができたのかと首をかしげた。

「あなたはどなたですか。どうやってこれほど多くの軍勢の間を通り抜けたのですか？」と、モスクワの住民たちは長老に尋ねた。

すると、彼はこう答えました。

「我らは皆、至聖にして命の源なる三位一体の御家から来た者である。」

聖セルギイの修道院で何が起きているのかと尋ねられると、長老はこう答えました。

「主は御名を不信仰者たちの侮辱にさらすことはなさらない。ただ、兄弟たちよ、あなたがた自身は動揺せず、絶望に陥らないでほしい。」

その間、モスクワでは聖セルギイの修道院から人々が到着したという噂が広まり始めた。ヴァシーリー皇帝[6512] 自身も、なぜ彼らを自分の元へ連れてこなかったのかと問い詰めた。エピファニー

[6511] チンガとは、歯茎が腫れ、足に潰瘍ができる病気である。

[6512] ヴァシーリー・イオアンノヴィチ・シュイスキーは1606年から1610年まで在位した。

修道院には大勢の人々が押し寄せたが、そこでは誰も到着した人々を見かけなかった。　ところが、この修道院に突然、大量のパンが溢れ出したとき、人々はそれが幻だったと悟った。

モスクワも包囲による苦難に耐えていた。敵はモスクワへのあらゆるアクセスを遮断したため、パンの価格は大幅に高騰した。ヴァシリー王とゲルモゲン総主教[6513]は、トロイツキー修道院の物資管理責任者アヴラミー・パリツィン[6514]に、ボゴヤヴレンスキー修道院の備蓄にあるパンの一部を安価で売却するよう説得した。アヴラミーはこの命令を実行したが、しばらくするとパンの価格は再び非常に高騰してしまった。　皇帝と総主教は再び、ラヴラ修道院の支院からパンを放出するよう求めた。アヴラミーは、パンの備蓄がすぐに底を尽きてしまうことを懸念していたが、神の慈悲を信じ、偉大なる聖人である尊者セルギイの名を呼び求めつつ、皇帝の要請に応じた。　当時、ボゴヤヴェンスキー修道院の穀物倉庫では、スピリドンという人物が務めていた。彼はパンをかき集めていると、壁の隙間からライ麦がこぼれ出ているのに気づいた。それをかき出そうとしたところ、さらに激しく流れ出した。この奇跡を目撃した彼は、他の奉仕者たちや倉庫番自身にそのことを伝えた。　驚くべきことに、包囲戦の間中、修道院の食糧備蓄は減ることはなく、ここに住む者たちだけでなく、多くの訪問者たちもこのパンで養われた。ついに、幾度も敗北を喫した敵軍は、恐怖に駆られて1610年1月12日、トロイツキー修道院の城壁から撤退した[6515]。

当時、ロシア全土は苦難の時期を迎えていた。敵は各地に散らばり、ある都市は包囲され、またある都市は、どうすべきか、誰に従うべきか、誰の言うことを聞くべきか分からずにいた。敵は多くの血を流し、ロシアの地は滅びかけていた。この苦難の時期に、トロイツカヤ・ラヴラは祖国に多大な恩恵をもたらした。同修道院のアルヒマンドリト・ディオニシイ（[6516]）とケラール（財務責任者）のアヴラミー・パリツィンは、機敏で聡明な書記たちを周囲に集め、説得力のある書簡を作成して各都市へ送り出した。これらの書簡の中で、アルヒマンドリトとケラールは、すべてのロシアの人々に団結し、ロシアの地と正教の信仰に対する敵に対して強固に立ち向かうよう呼びかけた。　そうした書簡の一つがニジニ・ノヴゴロドに届いた。当時、そこにはコズマ・ミニンという敬虔な人物が住んでいた。彼はしばしば特別な礼拝堂に籠もり、そこで一人きりで神に熱心な祈りを捧げることを好んでいた。　ある日、この礼拝堂で、彼は夢の中で聖セルギイの御姿を目にした。偉大なる奇跡行者はコズマに、兵士たちのために資金を集め、彼らと共にモスクワ公国を敵から浄化するために出陣するよう命じた。　目を覚ますと、コズマは恐れを抱きながらこの幻視について考え込んだが、軍勢を集めることは自分の役目ではないと考え、どう決断すべきか分からなかった。しばらくして、聖人は再び彼に現れたが、それでもコズマは決断できずにいた。そこで聖セルギイは三度目に彼に現れ、こう言った。

「戦士たちを集めるよう、私はあなたに言わなかったか。慈悲深い主は、正教徒たちを憐れみ、彼らを動揺から救い出し、平和と静けさを与えようと望まれたのだ。だからこそ、私はあなたに、敵からルーシの地を解放するために出陣するよう言ったのだ。　年長者たちが君の言うことをあまり聞き入れないことを恐れるな。若者たちは喜んで君に従うだろう――この善き行いは、良い結末を迎えるだろう。

この最後の幻視にコズマは戦慄し、病に倒れてしまった。そして、この病は疑念に対する罰として下されたものだと考え、尊者セルギイに許しを熱心に請い、その後、熱心にその事業に取り組み

[6513] 殉教的な最期で知られるヘルモゲンは、1606年から1612年まで総主教を務めた。

[6514] ケラー（ギリシャ語の「ケラリオス」に由来）は、修道院の備蓄品を保管する役割を担っていた。アヴラミー・パリツィンは、ポーランド軍によるトロイツカヤ・ラヴラ包囲戦の伝説を残し、1625年に死去した。

[6515] これを記念して、12日に最も近い日曜日に、ラヴラで十字架行列が行われる。

[6516] ディオニシイは1610年からトロイツキー修道院のアルヒマンドリトを務め、その生涯を閉じた。

始めた。　彼は同胞たちを説得し、軍勢を集めて敵に立ち向かうよう促し始めた。特に若者たちは彼を力強く支えた。　まもなくコズマは地方の長老に選出され、市民たちはあらゆる事柄において彼の言うことを聞くことにした。そこで、この敬虔な男は自身の全財産を兵士たちのために捧げ、ニジニ・ノヴゴロドの住民全員が彼の模範に従った。こうして彼は軍勢を集め、不信心な敵へと向かい、故郷の地をポーランド人やリトアニア人から解放することに大きく貢献した。　その後も数年間、神の御許しにより、彼らはロシアの地を蹂躙し、正教徒の血を流した。しかし、罪人の死を望まない全能の主は、その慈悲深い眼差しでロシアの国を見守り、御自身の栄光ある聖人である尊者セルギイの祈りによって、この国を救い、守り抜かれたのである。

この神の御使いは他にも多くの奇跡を成し遂げ、今に至るまで、その棺は尽きることのない奇跡の源となっている。信仰をもって訪れる者は皆、多様で豊かな恵みを受ける。私たちもまた、聖セルギイの多大な癒しの力を持つ聖遺物が納められた棺にひれ伏し、心からの感動をもってこう呼びかけよう。「尊き父セルギイよ、私たちのために神に祈ってください」。

トロパリオ、第4調:

美徳の修道士よ、キリスト・神の真の戦士として、この世の生涯において苦難に深く励み、賛美と徹夜祈祷、そして断食において、あなたの弟子たちの模範となられた。それゆえ、至聖なる御霊があなたに宿り、その御業によってあなたは輝かしく飾られた。　しかし、聖三位一体に対して大胆に祈る者として、あなたが賢明に集めた群れを覚えてください。そして、約束されたとおり、あなたの子供たちを訪ねてくださることを忘れないでください、尊き父セルギイよ。

コンダク、第8調:

キリストの愛に心を打たれ、尊き父よ、その揺るぎない願いに従い、あらゆる肉欲を憎み、太陽のようにあなたの故郷を照らしたゆえに、キリストは奇跡の賜物をもってあなたを豊かにされた。あなたの輝かしい御記憶を崇める私たちを覚えてください。そうすれば、私たちはあなたにこう呼びかけましょう。「喜びなさい、神に賢きセルギイよ。」

スーズダリの聖エウフロシニアの伝記

記念日：9月25日

聖エウフロシニアは、キリストの信仰を殉教したチェルニゴフ公ミハイルの娘であった。　この公爵の夫人は長い間、子に恵まれませんでした。ミハイル公爵と公爵夫人は、深い信仰をもって至聖なる聖母マリアと、聖アントニオおよび聖テオドシオの聖父たちに祈りを捧げ、涙ながらに、胎内に子を与えられるよう祝福を懇願しました。ある夜、至聖なる聖母マリアが彼らの前に現れ、こう言われました。

「勇気を出して祈りなさい。あなたの願いは叶うでしょう。そのしるしとして、あなたは芳香を受け取るでしょう。」

この幻視に、二人は恐怖に襲われた。眠りから覚めると、枕元に香の束が置かれているのを見つけ、それを急いで香炉に投入すると、家全体が不思議な香りに包まれた。公爵の家臣や家族たちも、この言葉では言い表せない香りに驚嘆した。　ミハイル公とその妻は、さらに熱心に神に祈りを捧げるようになった。その後、再び聖母マリアが現れ、彼らの手に鳩を授けると、家中に芳香が満ちた。そして三度目、聖母マリアは聖アントニオスと聖テオドシオスと共に現れ、こう告げた。

「あなたがたの祈りは聞き届けられた。あなたたちには娘が生まれ、その子をテオドゥリエと名付けるだろう。彼女はヴラヘルナ教会の奉仕者となる。」

ついにその娘[6517] の出産の時が訪れ、両親は聖母の御言葉に従い、彼女をテオドゥリエと名付けた。乳母が肉を食べると、聖女は、まだおむつを穿いている身でありながら、その日一日中、乳母の乳房から乳を飲もうとしなかった。これを見て、母は娘の将来について思い巡らした。　そしてある日、彼女にはある幻が見えた。自分自身が翼に乗って天へと舞い上がり、自分の幼い娘を神に捧げているという幻である。眠りから覚めると、彼女は聖母マリアに対し、そのすべての不思議なしるしに対して感謝を捧げた。　生まれたばかりの少女は、ペチェルスク修道院の無原罪の聖母教会で、聖なる洗礼を受けた。彼女が成長するにつれ、敬虔なミハイル公自らが彼女に聖書を教え込んだ。そのほか、若き王女の指導役を務めたのは、その知恵と学識で際立っていたボヤリンのフェオドールであった。　敬虔な少女は、学業の成績とその美貌において、同年代の少女たちすべてを凌駕していた。彼女の聡明さと美しさを耳にした多くの人々が、熱心に求婚したが、ことごとく拒絶された。当時、スーズダリには非常に敬虔なミナ公が住んでいた。　彼は聖なる乙女の両親に、テオドゥリアを自分に嫁がせてほしいと頼んだ。両親は承諾したが、乙女自身はこれに深く悲しみ、聖母マリアに処女の身を守ってくださるよう熱心に祈った。聖母マリアは彼女に現れ、両親の言うことを聞くよう命じ、こう言った。

「汚れはあなたの身体に触れることはない。」

聖なる乙女は両親の意志に従い、スーズダリへと向かった。しかし、彼女がまだ道中にある間に、婚約者は亡くなってしまった。その街に到着すると、彼女はヴラヘルナにおける至聖なる聖母マリアの衣の安置を記念して、現地の修道院で修道衣をまとい、その際にエウフロシニアという名を与えられた。　彼女は修道院の修道女たちに対して深い従順を示し、肉体を厳しく鍛え、絶えず自らの魂を顧み、あらゆる美徳をもって輝かしく輝いていた。その聖なる生涯により、エウフロシニアは神から預言の賜物を受け、しばしば福音の言葉をもって皆を教え導き、多くの病人を癒した。　不敬虔なバトゥの侵攻の際、聖女は自らの祈りによって修道院を荒廃から守り抜いた。彼女は9月25日、すなわち修道衣を授かったまさにその日に、永遠の命へと旅立った[6518] 。

尊者殉教者パフヌティウスの記念日。

記念日：9月25日

聖パフヌティオス尊者殉教者は、ディオクレティアヌス帝の時代に生き、エジプト出身であった。キリスト教徒を迫害していたエジプトの統治者アリアンは、ゲンティリア（テンティル）の町に到着すると、200人の兵士に、修道士パフヌティオスを見つけ出し、自分の元へ連行するよう命じた。　しかし、天使から事前に知らされていた彼は自ら現れ、キリストを告白した後、牢獄に投じられた。その後、再び総督の前に引き出された際、彼の手足の足枷が自然に外れた。そこで彼は極めて過酷な拷問を受け、内臓が飛び出すほどであったが、天使が彼を癒やした。　聖人を拷問していた二人の兵士、ディオニシオスとカリマコスは、この光景を目にして信仰を抱き、その場で斬首された。牢獄に閉じ込められたパフヌティオスは、統治者によってそこに放り込まれた40人の役人を改宗させた。彼らは皆、キリストを告白したために火刑に処された。　その後、奇跡的に監禁から解放され、ネストリアという名の裕福な人物の家に喜びをもって迎えられた聖人は、その人物自身、その妻、そして娘のステファナを殉教の道へと導いた。彼らはアリアンによって斬首された。その後、聖パフヌティウスは、高貴な両親を持つ16人の少年弟子たちを改宗させた。　彼らは槍で刺し貫かれ、そのうち

[6517] 聖女は1212年に生まれた。

[6518] 聖エウフロシニアは1250年に帰天し、その尊い遺骨はスーズダリのリゾポロジェンスキー修道院に安置されている。

の1人は火刑台で息を引き取った。殉教へと奮い立たされた80人の漁師たちは、斧によって命を奪われた。パフヌティウス自身は、その指揮官エウセビオスを含むさらに400人の兵士を改宗させたが、彼らは穴の中で焼き殺された。　その後、聖人は石を載せて川に投げ込まれたが、その石に乗って岸までたどり着いた。ついにディオクレティアヌス帝の御前に引き出された聖パフヌティウスは、帝によってヤシの木に釘付けにされ、神に息を引き取った。

10月9日

9月26日（旧暦）

聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの生涯

記念日9月26日

聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスは、ゼベダイと、洗礼者ヨセフの娘サロメの息子であった[6519]。彼は漁網のそばで福音宣教の召命を受けた。私たちの主イエス・キリストがガリラヤ湖のほとりを歩かれ、漁師たちの中から使徒たちを選ばれ、すでにペトロとアンデレという二人の兄弟を召されたとき、そこで他の兄弟たち、　ゼベダイのヤコブとヨハネが、父ゼベダイと共に舟の中で網を繕っているのを見て、彼らを召されました[6520]。彼らは直ちに舟と父を残して、イエス・キリストに従いました。

ヨハネは、召命を受けた当初、主から「雷の子」と呼ばれた。それは、彼の神学が雷のように全世界に響き渡り、全地を満たすべきであったからである[6521]。そしてヨハネは、その良き師の後に従い、その口から発せられる至高の知恵を学びました。また、彼はその完全な無悪意と処女のような清らかさゆえに、主キリストから深く愛されていました。　主は彼を、十二使徒の中でも最も立派な一人として、　として尊ばれた。彼は、主が幾度も御自身の神聖な奥義を明かされた、キリストの最も親しい三人の弟子の一人であった。例えば、主がヤイロの娘をよみがえらせようとされたとき、ペトロ、ヤコブ、そしてヨハネ以外の誰にも、ご自身についてくることを許されなかった。　ファボラ山で御自身の神性の栄光を示そうとされたとき、ペトロ、ヤコブ、そしてヨハネを連れて行かれた。園で祈られたときも、ヨハネはそこにいた。なぜなら、主は弟子たちに「*私があそこで祈っている間、ここに座っていてください。そして、ペトロとゼベダイの二人の息子たちを連れて行った*」　（マタイ26:36–37）、すなわちヤコブとヨハネを連れて行かれた。どこへ行っても、ヨハネは「愛する弟

6519　聖ヨハネ・テオロゴスの生誕地はベツサイダであった。彼の両親は敬虔な人々であり、メシアの到来を待ち望んで暮らしていた。彼らはヨハネがまだ少年である頃から、モーセの律法を教え込んだ。また、幼少の頃から聖ヨハネは、漁業や商売に従事する父の手伝いをしてきた。　ヨハネの仲間であり、志を同じくする者たちは、同じベツサイダ出身の聖ペトロと聖アンドレイの兄弟たちであり、彼らは後に聖使徒ともなった。聖ヨハネ・バプティストが説教を始めたとき、これらの敬虔な若者たちは皆、まだ自分の家も仕事も捨ててはいなかったにもかかわらず、喜んで彼の弟子となった。　彼らがこれらすべてを捨てたのは、主が彼らを御自身の弟子として迎え入れてくださった時になってからでした。

6520　聖ヒエロニムスの伝承によれば、主がヨハネを御自身の弟子の一人として召されたとき、彼はまだごく若い少年であった。敬虔な両親は、ヨハネも、またその兄弟ヤコブも、神の師の弟子となることを妨げなかった。

6521　さらに、「ボアネゲス」（雷の子）という名は、聖使徒の性格のいくつかの特徴も示していた。清く、善良で、悪意がなく、人を信じやすい一方で、彼は神の栄光に対して強い熱意に満ちていた。　彼は、その無垢な心の全力をもって主を愛した。それゆえ、主は他のどの弟子よりもヨハネを愛されたのである。召命からわずか1年後、ヨハネは多くの弟子の中から主によって12使徒の一人に選ばれた。

子」として、キリストから離れることはなかった。そして、キリストがどれほど彼を愛しておられたかは、ヨハネがキリストの胸に寄りかかっていたことからも明らかである。　というのも、最後の晩餐の席で、主がご自身を裏切る者について予言され、弟子たちが「主は誰のことをおっしゃっているのか」と戸惑いながら互いに顔を見合わせ始めたとき、ヨハネは最愛の師の胸に寄りかかっていたからである。彼自身がそのことを自身の福音書の中で次のように語っている：　*「イエスが愛しておられた弟子の一人が、イエスの胸に寄りかかっていた。シモン・ペテロは、イエスがどの人について語っておられるのか尋ねるよう、その弟子に合図をした。そこで、その弟子はイエスの胸に顔を寄せ、イエスに言った。『主よ、『それは誰ですか？』』*」（ヨハネ13:23–25）。ヨハネは主からこれほど愛されていたため、彼だけが妨げられることなく主の胸に寄り添い、この秘密について大胆に尋ねることができたのである。しかし、ヨハネもまた、自分を愛してくださった師に対して、他の使徒たちよりも大きな相互の愛を示した。　なぜなら、キリストが自発的に苦難を受けられた際、他の使徒たちは皆、自分たちの羊飼いを置き去りにして逃げ去ったが、彼一人だけは、キリストのすべての苦しみから目を離さず、心から同情し、聖母マリアと共に泣き、嗚咽していたからである。　主の母である聖母マリアと共に、私たちのために苦しみを受けた神の御子から、救い主が十字架にかけられ、死に至るまで、彼女から離れることはなかった。このため、彼は十字架の下で、主から聖母マリアの養子として迎えられたのである。十字架にかけられた主は、*「母と、そこに立っている、御自身が愛しておられた弟子を見て、御母に言われた。『婦人よ！　見よ、あなたの息子だ。」そして、その弟子に言われた。「見よ、あなたの母だ。」こうして、その時から、この弟子は彼女を自分の家に迎え入れた*」（ヨハネ19:26–27）。そして彼は、彼女を自分の母として、あらゆる敬意を払って接し、彼女の尊厳に満ちた栄光ある永眠に至るまで仕えた。　彼女の永眠の日、神の母の尊く聖なる御遺体が埋葬のために運ばれたとき、聖ヨハネは、光のように輝く王の笏を手に、彼女の棺の前を歩いた。その笏は、大天使ガブリエルが、聖母マリアを地から天へと迎え上げられることを告げ知らせるために、彼女に授けたものであった。

至聖なる神の母の御永眠の後、聖ヨハネは弟子プロホールと共に小アジアへと向かい、そこで神の御言葉を宣教する使命を授かった[6522]。そこへ向かう途中、聖ヨハネは海上で災難が訪れることを予見し、悲しみに沈んでいた。彼はそのことを弟子プロホールにも予言していた。　ところが、彼らがヨッピエで船に乗り込み航海を始めたところ、昼の11時に大嵐が襲い、夜には船が難破し、乗船していた者たちは皆、手当たり次第に何かにつかまりながら、波間に漂うこととなった。　そして、その日の午後6時、海はプロホールを含む全員を、セレウキアから5ポプリシュの距離にある海岸に打ち上げた[6523]：ただヨハネ一人だけが海に残された。プロホールは長く激しく泣き、一人でアジアへと向かった。旅の14日目、彼は海沿いにあるある村にたどり着き、そこで休息をとった。　そしてある日、彼が海を眺めながらヨハネを想って物思いにふけっていると、泡を立てた波が大きな音を立てて岸に押し寄せ、ヨハネを生きながらにして打ち上げた。　プロホールは海が誰を打ち上げたのか見ようと近づき、ヨハネを見つけると、彼を地面から抱き起こした。二人は抱き合い、涙を流し、すべてのことについて神に感謝した。こうして聖ヨハネは十四日十四夜を海で過ごし、神の恵みによって生き延びたのである。　村に入ると、彼らは水とパンを求め、腹ごしらえをした後、エフェソへと向かった[6524]。

[6522] 西暦50年、すなわち聖母マリアの被昇天から2年後、聖ヨハネは依然としてエルサレムに滞在していた。というのも、彼がその年にエルサレムで開催された使徒公会議に出席していたことが知られているからである。　西暦58年以降になって初めて、聖ヨハネは、彼より先に聖使徒パウロが宣教を行っていた小アジアの諸国を、自らの宣教の地として選びました。

[6523] シリアの海岸沿いの都市。

[6524] キリスト教の信仰の最初の礎は、ここで洗礼者ヨハネの弟子たちによって築かれた。すでに使徒ペトロもここでキリスト教徒たちに出会っていたが、主にここで福音を宣べ伝えたのは使徒パウロであった。その後、彼の弟子ティモテオが

彼らが一緒に街に入ると、ローマにまでその悪行の名が知れ渡っていたロマナ（ロメカ）という名の女性が彼らを出迎えた。彼女は、その街で公衆浴場を経営していた。そして彼女は、ヨハネとプロホールを雇い入れ、浴場で働かせるように命じ、彼らを苦しめた。　彼女は狡猾な手口で二人を自分の下に仕えさせた　。ヨハネには火の世話を、プロホロスには水を汲む仕事を命じ、二人は生涯にわたってその務めに従わされ、長い間、大変な苦難にさらされた。　その浴場には、毎年、そこで入浴する者――若者か少女――を一人殺害する悪魔がいた。この浴場が建設され、基礎が築かれた際、悪魔の唆しにより、生きたままの若者と少女がそこに埋められた。それ以来、そのような殺人が繰り返されるようになったのである。　ちょうどその頃、市の長老ディオスコリドスの息子であるドムンという名の少年が、その浴場に入った。ドムンが浴場で体を洗っていると、悪魔が襲いかかり、彼を絞め殺してしまった。その死を悼む声は、街中に響き渡った。　この出来事はエフェソス全市に知れ渡った。これを知ったディオスコリデス自身も深く悲しみに打ちひしがれ、その悲しみから彼もまた亡くなってしまった。一方、ロマナはアルテミスにドムンを蘇らせてくれるよう熱心に祈り、祈りながら自らの体を傷つけ続けたが、何の効果もなかった。　その頃、ヨハネがプロホロスに起こった出来事について尋ねていると、ロマナは二人が話しているのを見て、ヨハネを掴み、ドムナの死の責任をヨハネに押し付け、責め立てながら彼を殴り始めた。ついに彼女は、「もしドムナを蘇らせないなら、あなたを殺す」と言った。

ヨハネは祈りを捧げ、その少年を蘇らせた。ロマナは恐怖に襲われた。彼女はヨハネを「神」あるいは「神の子」と呼んだが、ヨハネはキリストの力を説き、キリストを信じるよう教えた。その後、彼はディオスコリドスをも蘇らせ、ディオスコリドスとドムナはキリストを信じ、彼ら全員が洗礼を受けた。　人々は皆恐怖に襲われ、起こった出来事に驚嘆した。　ある者たちはヨハネとプロホロスについて、彼らが魔術師だと語ったが、他の者たちは、魔術師は死者をよみがえらせることはできないと、正当に反論した。ヨハネは浴場から悪霊を追い出し、プロホロスと共にディオスコリドスの家に滞在し、新たに信仰に導かれた者たちを信仰に堅く立たせ、徳ある生き方を教えた。

ある時、エフェソスでアルテミスの祭りが行われ、民衆は皆白い衣を身にまとい、アルテミス神殿の前で祝賀し、歓喜して騒いでいた。神殿の向かい側には、その女神の偶像が立っていた。　そこでヨハネは高い場所に登り、偶像のそばに立ち、異教徒たちの盲目さを大声で非難した。彼らは、誰を崇拝しているのかを知らず、神の代わりに悪魔を崇めているのだと。　これに対し、民は激怒し、ヨハネに石を投げつけたが、石は一つとして彼に命中しなかった。むしろ、石はそれを投げた者たち自身を打ちのめした。　ヨハネは天に向かって両手を挙げ、祈り始めた。するとたちまち、地上に激しい暑さと灼熱が訪れ、大勢の人々のうち200人ほどが倒れ、全員が死んでしまった。残りの者たちは恐怖からようやく正気を取り戻すと、ヨハネに慈悲を懇願した。彼らには恐怖と戦慄が襲いかかっていたからである。　しかし、ヨハネが神に祈ると、死んだ者たちは皆よみがえり、皆ヨハネのもとにひれ伏し、キリストを信じて洗礼を受けた。その場所、ティキと呼ばれるある場所で、ヨハネは12年間も寝たきりだった中風患者を癒した。癒された者は神を賛美した。

その後、ヨハネによって他にも多くのしるしがなされ、その奇跡の噂が至る所に広まると、アルテミスの神殿に宿っていた悪霊は、自分もヨハネによって追い出されることを恐れ、戦士の姿をとって目立つ場所に座り、激しく泣き出した。　通りかかった人々は、彼にどこから来たのか、なぜそんなに激しく泣いているのかと尋ねた。

すると彼はこう答えた。「私はパレスチナのケサレア出身で、牢獄の長である。エルサレムから来た二人の賢者、ヨハネとプロホロスを監視するよう命じられていた。彼らは数々の悪行のため、死刑を宣告されていたのだ。　彼らは朝には残酷な死を遂げるはずだったが、夜間に魔術を使って牢

ここで司教を務め、最後に、　エフェソスは使徒ヨハネの居住地であり、彼はここで息を引き取った。使徒ヨハネのたゆまぬ配慮の成果として、エフェソスでは純粋な福音の教えが守られ続けたため、聖イリネイの言葉を借りれば、エフェソス教会は使徒的伝承の真の証人であった。

獄から脱走してしまった。そのせいで私は窮地に陥っている。公爵が彼らの代わりに私を処刑しようとしているからだ。　私は公爵に、彼らを追跡させてほしいと懇願した。そして今、あの魔術師たちがここにいると聞いたのだが、彼らを捕まえるのを手伝ってくれる者が誰もいないのだ」。

そう言いながら、悪魔はそれを証明する文書を見せ、また大量の金の包みも示し、これらの魔術師を倒した者にはそれを与えると約束した。

これを聞いた一部の兵士たちは彼を不憫に思い、民衆を煽ってヨハネとプロホロスに敵対させ、ディオスコリドスの家へと近づいてこう言った。「魔術師たちを引き渡せ。さもなくば、お前の家を焼き払うぞ」。　ディオスコリドスは、使徒と弟子プロホロスを引き渡すよりは、むしろ自分の家が焼かれることを選んだ。しかし、ヨハネは霊によって、民衆の反乱が善き結果をもたらすことを予見し、自らとプロホロスを民衆の群衆に引き渡した。　民衆に連れられて、彼らはアルテミスの神殿にたどり着いた。ヨハネが神に祈ると、突然、偶像の神殿が崩れ落ちたが、誰一人として傷つく者はいなかった。そして使徒は、そこに座っていた悪魔に向かって言った。

「聞け、不敬虔な悪魔よ。お前はここに住んで何年になるのか。そして、この民を我々に敵対させるよう煽動したのはお前なのか？」

すると、悪魔は答えた。

「私はここ109年間留まっており、この民をあなたたちに対して扇動したのは私だ。」

すると、ヨハネは彼に言った。

「ナザレのイエスの御名によって、お前に命じる。この場所から立ち去れ。」すると、たちまち悪霊は出て行った。

人々は皆、恐怖に襲われ、キリストを信じるようになった。ヨハネによってさらに大きなしるしが現れ、大勢の民が主のもとへ立ち返った。

その頃、ローマ皇帝ドミティアヌスはキリスト教徒に対して激しい迫害を開始し、ヨハネは皇帝の前で誹謗中傷された。　アジアの総督は聖人を捕らえ、縛られたままローマの皇帝のもとへ送った。そこで、キリストを告白したため、ヨハネはまず拷問を受け、その後、致死性の毒で満たされた杯を飲むことを強いられた。　しかし、キリストの御言葉*「たとえ死に至るものを飲んでも*、彼らには*害がない」*（マルコ16:18）通り、彼はそこから何の害も受けなかった。そこで、彼は沸騰した油の入った大釜に投げ込まれたが、そこからも無傷で出てきた。すると、民衆は叫んだ。　「キリスト教の神は偉大なり！」　そこで皇帝は、もはやヨハネを拷問する勇気もなく、彼を不死身であると見なし、パトモス島への追放を命じた。それはまさに、主が夢の中でヨハネに告げられた通りであった。「あなたは多くの苦難に遭うべきであり、ある島へ追放されるだろう。その島は、あなたを大いに必要としている。」

兵士たちはヨハネとプロホールを連れ出し、船に乗せて出航した。航海の途中のある日、王の重臣たちが昼食をとることになり、豊富な料理と酒を囲んで楽しんでいた。その中の一人の若者が、遊んでいる最中に船から海に落ちて溺死してしまった。　すると、彼らの歓びと喜びは泣き声と嘆きへと変わった。なぜなら、海の深みに落ちた少年を助ける術がなかったからである。とりわけ、同じ船に乗っていたその少年の父親は激しく泣き叫んだ。彼は海に飛び込もうとしたが、他の者たちに引き止められた。　ヨハネが奇跡を行う力を持っていることを知っていた彼らは、皆、熱心に彼に助けを請い始めた。ヨハネは一人ひとりに、それぞれどの神を崇めているかを尋ねた。すると、ある者はアポロ、ある者はゼウス、ある者はヘラクレス、またある者はアスクレピオス、さらにある者はエフェソスのアルテミスと答えた[6525]。

すると、ヨハネは彼らにこう言った。

[6525] アスクレピオスはアポロンの息子であり、伝説上の医師で、異教徒の考えによれば、死後、医療の神となった。彼は蛇が巻きついた杖を携えた姿で描かれていた。

「あなたたちにはこれほど多くの神々がいますが、溺れているたった一人の人間さえ救うことができないのですか！」

そして彼は、彼らを朝まで悲しみに沈んだままにしておいた。翌朝、ヨハネは若者の死を憐れみ、涙を流しながら神に熱心に祈った。　するとたちまち海は荒れ狂い、一つの波が船まで押し寄せ、その若者を生き返らせてヨハネの足元に打ち上げた。これを見た者たちは皆驚き、溺死から救われた若者を喜び祝った。そして彼らはヨハネを深く敬うようになり、彼の鉄の足枷を外した。

ある夜、五時頃、海上で大嵐が巻き起こり、船もすでに壊れ始めていたため、皆は命の絶望を感じ、叫び声を上げ始めた。その時、皆はヨハネに向かって叫び、彼らを助けてくれるよう、また神に懇願して滅びから救い出してくれるよう求めた。　聖人は彼らに静かにするよう命じ、祈りを捧げ始めると、嵐はたちまち収まり、深い静寂が訪れた。

ある兵士は胃の病に冒され、すでに死の淵にありました。使徒は彼を癒しました。

船の水は底をつき、多くの者が渇きに耐えきれず、死の淵に立っていた。ヨハネはプロホールに言った。

「器に海の水を満たせ。」

そして、器が満たされると、彼は言った。

「イエス・キリストの御名によって、水を汲んで飲みなさい！」

汲んでみると、その水は甘く、飲み干して一息ついた。このような奇跡を目の当たりにしたヨハネの同行者たちは洗礼を受け、ヨハネを自由の身にしてあげようとした。しかし、ヨハネ自身は彼らに、自分に示された場所へ連れて行ってくれるよう説得した。　パトモス島に到着すると、彼らはイゲモンに書簡を手渡した。イゲモンの義父であるミロンは、ヨハネとプロホロスを自分の家に迎え入れた。ミロンにはアポロニドという名の長男がおり、彼の中には未来を予言する「予言の悪霊」が宿っていた。そのため、人々は皆、アポロニドを預言者だと考えていた。　ヨハネがミロンの家に入ったその瞬間、アポロニドはたちまち行方不明になった。彼は、予言する悪霊がヨハネによって自分から追い出されることを恐れて、別の町へ逃げ去ったのである。　ミロンの家でアポロニドをめぐる騒ぎが起こると、彼から一通の通知が届いた。そこには、ヨハネが魔術によって彼を家から追い出したこと、そしてヨハネが滅ぼされるまでは戻ることができないと記されていた。

その手紙を読んだミロンは、義理の兄弟であるイゲモンのもとへ行き、起きた出来事を報告した。するとイゲモンはヨハネを捕らえ、獣の餌食にしようとした。　しかし、ヨハネはイゲモンに、少しの間待ってくれ、弟子をアポロニドのもとへ遣わすことを許してほしいと懇願し、その弟子を必ず家へ連れ戻すと約束した。　イゲモンは弟子を送ることを妨げなかったが、ヨハネ自身を二つの鎖で縛り、牢獄に閉じ込めた。そしてプロホルは、ヨハネからの手紙を携えてアポロニドのもとへ向かった。その手紙には次のように書かれていた。「私、ヨハネ、神の子イエス・キリストの使徒は、アポロニデスの中に宿る預言の霊に対し、父と子と聖霊の名によって命じる。神の被造物から出て行き、二度とそこに入ってはならない。この島の外、水のない場所で、人々の間ではなく、独りであれ」。

プロホールがそのようなメッセージを携えてアポロニドのもとへ来ると、悪霊はたちまち彼から出て行った。アポロニドは正気を取り戻し、まるで眠りから覚めたかのように、プロホールと共に自分の町へと戻っていった。　しかし、彼はすぐに家に入ることはせず、まず牢獄にいるヨハネのもとへ駆けつけ、その足元にひれ伏して、不浄な霊から自分を解放してくれたことへの感謝を捧げた。アポロニドスの帰還を知ると、両親や兄弟姉妹たちが皆集まって喜び、ヨハネは束縛から解放された。　アポロニドは、自身の体験について次のように語った。「私が寝台で深い眠りについてから、すでに何年もが経過していた。ある男が寝台の左側に立ち、私を揺さぶって起こした――すると、その男は焼け焦げて腐った切り株よりも黒く、　その目はろうそくのように燃え盛っており、私は恐怖で

身震いした。すると彼は私に『口を開けよ』と言った。私が口を開けると、彼は私の口に入り込み、私の腹を満たした。その時から、善悪の区別、そして家の中で起こるすべてのことが私に明らかになった。　ところが、キリストの使徒が我が家に入ってきたとき、私の中に宿っていた者が私にこう言った。「アポロニデスよ、ここから逃げろ。苦しみの中で死ぬことのないように。この男は魔術師であり、お前を殺そうとしているのだ。」　そこで私はすぐに別の町へ逃げた。しかし、私が戻ろうとしたとき、彼は「ヨハネが死ななければ、お前は自分の家に住むことはできない」と言って、私を許さなかった。　ところが、プロホールが私がいたその町に来て、私が彼を見たとき、その汚れた霊は、当初私の腹に入ったのと同じ方法で、たちまち私から出て行った。そして私は大きな重荷から解放されたのを感じ、私の心は健全な状態に戻り、気分が良くなった。」

これを聞いた者たちは皆、ヨハネの足元にひれ伏した。ヨハネは口を開き、主イエス・キリストへの信仰について彼らに説いた。ミロンも妻や子供たちも信仰を受け入れ、皆が洗礼を受け、ミロンの家には大きな喜びが満ちた。　その後、イゲモノスの妻であるクリシッピダ（ミロンの娘）も、息子とすべての奴隷たちと共に聖なる洗礼を受けた。彼女に続いて、その夫であるラウレンティウス、すなわちその島のイゲモノスも洗礼を受け、神により自由に仕えるために自らの権力を手放した。そして、ヨハネはプロホールと共にミロノフの家に三年間留まり、神の御言葉を宣べ伝えた。　そこで彼は、イエス・キリストの力によって多くのしるしと奇跡を行った。病人を癒やし、悪霊を追い出し、一言でアポロンの神殿とその中のすべての偶像を破壊し、多くの人々をキリストへの信仰へと導いて洗礼を授けた。

その国にはキノプスという名の魔術師が一人おり、荒野に住み、長年にわたり邪悪な霊たちと親交を持っていた。彼が引き起こす幻影のため、島の住民たちは皆、彼を神だと信じていた。　一方、アポロンの神殿を破壊し、人々をすべてイエス・キリストの信徒にしてしまったことに憤慨したアポロンの祭司たちは、キノプスのもとを訪れ、キリストの使徒について訴え、自分たちの神々への冒涜に対する報復を懇願した。　しかし、キノプスは、長年その場所に閉じ込められて暮らしていたため、自ら街へ出向くことを拒んだ。だが、市民たちは同じ願いを携えて、ますます頻繁に彼のもとを訪れるようになった。そこで彼は、ミロンの家へ悪霊を送り込み、ヨハネの魂を奪い、永遠の裁きに委ねると約束した。　朝、彼は悪霊を統べる王子の一人をヨハネのもとへ遣わし、その魂を自分のもとへ連れてくるよう命じた。ミロノフ家の屋敷に着くと、悪霊はヨハネがいた場所に立ち止まった。ヨハネは悪霊を見て、こう言った。

「キリストの御名によって、お前に命じる。お前は、なぜ私のところへ来たのか、その目的を私に告げるまで、この場所から動いてはならない。」

ヨハネの言葉に縛られた悪魔は、身動きもできず、ヨハネにこう言った。

「アポロンの祭司たちがキノプスのところへ来て、彼に『町へ行き、あなたに死をもたらせ』と懇願したが、彼は『私は長年、この場所に留まり、外に出ることなく暮らしてきた。今さら、貧しく取るに足らない人間のために、わざわざ手間をかける必要があるだろうか？　お前たちは自分の道を行け。明朝、私は自分の霊を送り、その霊が彼の魂を奪い、私のところへ連れてくる。そして私はその魂を永遠の裁きに委ねる」

そこでヨハネは悪魔に言った。

「彼はかつて、人の魂を奪って彼のもとに連れてくるよう、あなたを遣わしたことはあるか？」

悪魔は答えた。

「彼の中にはサタンの力がすべて宿っており、彼は我らの君主たちと協定を結んでいる。我々も彼と結ばれており、キノプスも我々の言うことを聞き、我々も彼の言うことを聞いているのだ。」

そこでヨハネは言った。

「わたし、イエス・キリストの使徒は、お前、邪悪な霊に命じる。人間の住処に入ってはならず、キノプスのもとへ戻ってはならない。この島から立ち去り、苦しみを受けよ。」

すると、たちまちその悪霊は島から去っていった。キノプスは、その霊が戻ってこないのを見て、別の悪霊を送り込んだが、その悪霊もまた苦しめられた。さらに彼は闇の君主たちの中から二人を送り出し、一人はヨハネのもとへ入るよう命じ、もう一人は外で待機して、彼に返答を伝えるように命じた。　ヨハネのもとに入った悪魔は、先に来た者と同じように苦しめられた。一方、外に立っていたもう一人の悪魔は、仲間の惨状を見て、キノプスのもとへ逃げ帰り、起こったことを報告した。するとキノプスは激怒し、大勢の悪魔たちを率いて町へとやって来た。　街中の人々はキノプスを見て喜び、集まってきては彼に頭を下げた。キノプスは、ヨハネが民衆に教えを説いているのを見つけると、激しい怒りに満ちて、民衆にこう言った。

「盲目の者たちよ、真の道から迷い出た者たちよ、私の言葉を聞きなさい！　もしヨハネが義人であり、彼の言うことがすべて真実であるなら、彼に私と論じ合い、私がなすのと同じような奇跡を行わせてみよ。そうすれば、ヨハネと私、どちらが優れているか、あなたがたはわかるだろう。もし彼が私より強いことが証明されれば、私も彼の言葉と行いを信じるつもりだ。

そしてキノプスはある若者に言った。

「若者よ！　お前の父は健在か？」

すると、その若者は答えた。

「亡くなりました。」

するとキノプスは言った。

「どのような死に方をされたのですか？」

すると、彼は答えた。

「彼は水泳が得意だったが、船が難破した際、海で溺死したのだ。」

キノプスはヨハネに言った。

「さあ、ヨハネよ、我々が君の言葉を信じるように、その力を示してみよ。その息子に、生きている父親の姿を見せてみよ。」

ヨハネは答えた：

「キリストは、私を海から死者を引き上げるために遣わされたのではなく、惑わされた人々を教え導くために遣わされたのです。」

そしてキノプスは民衆全員に言った。

「さあ、今こそ私を信じてほしい。ヨハネは詐い者であり、あなた方を欺いているのだ。彼を捕らえて拘束しておきなさい。私がその少年の父を生き返らせて連れてくるまでだ。」

人々はヨハネを捕らえ、キノプスは両手を広げ、それを水面に打ちつけた。海から水しぶきの音が聞こえると、皆が恐怖に震え、キノプスは姿を消した。そして、皆が叫んだ。

「キノプスよ、お前は偉大だ！」

すると突然、キノプスが海から現れ、言った通り、少年の父親を連れていた。皆は驚いた。そしてキノプスは言った。

「これがお前の父か？」

「はい、ご主人様」と少年は答えた。

すると、人々はキノプスの足元にひれ伏し、ヨハネを殺そうとした。しかし、キノプスは彼らを制してこう言った。

「これ以上の奇跡を目撃してから、彼を処罰せよ。」

その後、別の人を呼び寄せ、こう言った。

「お前には息子がいたか？」

すると、その男は答えた。

「はい、ご主人様、いました。しかし、ある者が嫉妬から彼を殺してしまいました。」
すると、キノプスは声を上げて、殺人者と殺された者の名を呼びかけると、二人はその場に現れた。キノプスはヨハネに言った。
「驚いているのか、ヨハネよ？」
聖ヨハネは答えた。
「いいえ、私はこれを不思議には思いません。」
キノプスは言った。
「もっと多くのものを見るだろう。そうすれば驚嘆するだろう。そして、私がしるしをもってあなたを恐れさせない限り、あなたは死なない。」
すると、ヨハネはキノプスにこう答えた。
「お前のしるしはまもなく崩れ去るだろう。」
その言葉を聞いた民衆は、ヨハネに襲いかかり、彼が死んだとみなされるまで殴り続けた。そしてキノプスは民衆に言った。
「彼を埋葬せずに放置せよ。鳥たちに引き裂かせてしまえ。」
そして彼らはキノプスと共に喜びながら、その場を去った。しかし間もなく、ヨハネが犯罪者たちが石打ちにされた場所で説教をしているという話を耳にした。キノプスは、魔術を行うために頼りにしていた悪魔を呼び出し、その場所へやって来て、ヨハネに言った。
「私は、お前にさらに大きな屈辱と恥をかかせることを企んでいる。そのために、お前を生かしておいたのだ。海の砂浜へ来い――そこで私の栄光を見て、恥じ入るだろう。」
彼には三人の悪魔が付き従っていたが、民衆は彼らを、キノプスが死者の中から蘇らせた人間だと考えていた。キノプスは両手を激しく打ち鳴らすと、海に身を沈め、誰の目にも見えなくなった。
「キノプスよ、汝は偉大なり」と民は叫んだ。「汝に勝る者は他にいない！」
ヨハネは、人間の姿をとっていた悪魔たちに、自分から離れないよう命じた。　そして彼は、キノプスが生き返らないよう主に祈り、その通りになった。なぜなら、海は突然荒れ狂い、波が沸き立ち、キノプスはもはや海から現れることはなく、かつての呪われたファラオのように海の深みに留まったからである。そして、民が死から蘇った人間だと考えていたあの悪魔たちに対し、ヨハネはこう言った。
「十字架にかけられ、三日目に復活されたイエス・キリストの名によって、この島から立ち去れ。」すると、彼らはたちまち姿を消した。
一方、民は砂浜に座り込み、三日三晩にわたりキノプスを待ち続けた。飢えと渇き、そして灼熱の太陽のせいで、彼らの多くは力尽きて声も出せずに横たわり、子供たちのうち三人が亡くなった。　ヨハネは民を憐れみ、彼らの救いのために祈り、信仰について長く語り合った後、子供たちをよみがえらせ、病人を癒した。そして、彼らは皆、心を一つにして主に向き直り、洗礼を受け、キリストを賛美しながらそれぞれの家へと帰っていった。　そしてヨハネはミロンの家に戻り、頻繁に民のもとを訪れて、イエス・キリストへの信仰について教えを説いた。ある日、彼は道端で高熱に苦しむ病人を発見し、十字の印を掲げて彼を癒した。　フィロンという名のユダヤ人が、聖書に基づいて使徒と論争していたが、この光景を目にして、ヨハネを自分の家に招いた。彼にはハンセン病を患う妻がいたが、その妻が使徒にすがりつくと、たちまちハンセン病が癒やされ、キリストを信じるようになった。　そこでフィロン自身も信仰を持ち、家族全員と共に聖なる洗礼を受けた。その後、聖ヨハネは市場に出ると、人々が彼の口から救いの教えを聞くために集まってきた。偶像崇拝の祭司たちもやって来たが、そのうちのひとりが聖人を試そうとして言った。

「先生！私には両足が不自由な息子がいます。どうか彼を癒してください。もし彼を癒してくださるなら、私もあなたが宣べ伝えているその神を信じます。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「なぜ、あなたの心の偽りを明らかに示される神を、そのように試そうとするのですか？」

そう言うと、ヨハネはその息子のもとへ使いを送り、次のように告げさせた。

「私の神、キリストの名によって、立ち上がって私のところへ来なさい。」

すると、その息子はたちまち立ち上がり、健やかな姿で聖人のもとへやって来た。一方、父親はその試みをしたその瞬間、両足が不自由になり、激しい痛みに耐えかねて叫び声を上げながら地面に倒れ込み、聖人にこう懇願した。

「神の聖者よ、私を憐れんでください。あなたの神であるキリストの名によって私を癒してください。私は、彼以外に神はいないと信じています。」

その懇願に心を動かされた聖人は、司祭を癒やし、信仰を教え、イエス・キリストの名によって彼に洗礼を授けた。

朝、ヨハネは、水腫に苦しみ、17年間も床から起き上がれなかった男が横たわっていた場所を訪れた。使徒は言葉によって彼を癒やし、聖なる洗礼によって彼を救いに導いた。　その同じ日、ミロノフの義理の息子ラヴレンティイの後を継いでイゲモンとなった男が、ヨハネを呼び寄せ、聖人に自分の家へ来てくれるよう熱心に懇願した。というのも、イゲモンの妻は身重であり、出産の時が迫っていたが、産みの苦しみに耐えかね、その重荷から解放されることができなかったからである。使徒はすぐに駆けつけ、家の敷居を跨いだ途端、妻はたちまち出産し、苦しみは和らいだ。これを見たイゲモンは、家族全員と共にキリストを信じるようになった。

そこで三年間過ごした後、ヨハネは別の町へと向かった。その町の住民たちは、偶像崇拝という闇に覆われていた。彼がその町に入ると、悪魔を崇拝して祝宴を催している人々や、縛られた数人の若者たちを目にした。そこでヨハネは、そこに立っていた一人に尋ねた。

「なぜ、これらの若者たちは縛られているのですか？」

その男は答えた。

「我々は偉大なる神――狼を崇拝しており、今まさにその祭りを執り行っている。これらの若者たちは、その神への生贄として刺し殺されるのだ。」

ヨハネは彼らの神を見せてほしいと頼むと、その男は言った。

「もしその姿を見たいのなら、午後四時まで待ってください。その時、神が現れる場所へ、民と共に歩む祭司たちの姿が見えるでしょう。彼らについて行けば、私たちの神を見ることができます。」

ヨハネはこう言った。

「あなたは善良な人だとわかります。私はここに来たのですから、どうか今すぐその場所に連れて行ってください。私はあなたの神をぜひとも見たいのです。もし神を見せてくださるなら、貴重な真珠を差し上げます。」

その人はヨハネを連れて行き、水で満たされた沼地を見せながら言った。

「ここから私たちの神が出てきて、人々の前に現れるのだ。」

ヨハネはその神が現れるのを待っていた。すると、午後4時頃、水の中から巨大な狼の姿をした悪魔が現れた。聖ヨハネはキリストの名によってその悪魔を制止し、こう尋ねた。

「ここに住んで何年になるのか？」

「70年だ」と悪魔は答えた。

すると、キリストの使徒は言った。

「父と子と聖霊の御名によって、お前に命じる。この島から去り、二度とここへ来るな。」

すると、悪魔はたちまち姿を消した。その出来事を目撃した男は恐怖に駆られ、使徒の足元にひれ伏した。ヨハネは彼に聖なる信仰を教え、こう言った。

「ほら、これが、私があなたに与えると約束した真珠だ。」

その間、縛られた少年たちを連れた祭司たちが、手にナイフを持ち、大勢の民衆を従えてその場所に到着した。彼らは、少年たちを食わせるために狼が現れるのを長い間待ち続けていた。

ついに、ヨハネが彼らのところへ近づき、罪のない若者たちを解放するよう懇願した。

「もういい」と彼は言った。「あなたがたの神は狼だ。あれは悪魔であり、キリストの力がそれを打ち負かし、追い払ったのだ。」

狼が死んだと聞いて、彼らは恐怖に駆られ、長い間探し回ったものの狼が見つからなかったため、若者たちを解放し、無傷のまま帰した。聖ヨハネは彼らにキリストについて説教し、彼らの迷いを糾弾し始めた。すると、彼らの多くは信仰を抱き、洗礼を受けた。

その町には浴場があった。ある日、祭司ゼウソスの息子がそこで体を洗っていたところ、浴場に潜んでいた悪魔によって殺されてしまった。これを聞いた父親は、激しく泣きながらヨハネのもとへ駆けつけ、息子をよみがえらせてほしいと懇願し、キリストを信じることを誓った。　聖人は彼と共に赴き、キリストの御名によって死者をよみがえらせた。そして、その若者に死の原因を尋ねた。

すると、青年はこう答えた。

「私が風呂で体を洗っていた時、黒い何かが水の中から現れ、私をつかんで首を絞めたのです。」

その風呂場に悪霊が棲みついていると悟った聖人は、その悪霊を縛り上げ、こう尋ねた。

「お前は誰だ？　なぜここに住んでいるのだ？」

悪魔は答えた：

「私は、あなたがエフェソスの風呂場から追い出した者だ。ここに住んでもう6年になる。人々を苦しめているのだ。」

聖ヨハネは、この場所からも悪魔を追い出した。それを見た祭司はキリストを信じ、息子や家族全員と共に洗礼を受けた。

その後、ヨハネは市場広場へ出ると、神の御言葉を聞くために町のほぼ全員が彼のもとに集まっていた。すると、ある女性が彼の足元にひれ伏し、泣きながら、悪霊に取りつかれた息子を癒やしてほしいと懇願した。彼女は息子の治療のために、財産のほとんどを医師たちに費やしていたのである。　使徒は彼を自分のところへ連れてくるよう命じ、遣わされた者たちが悪霊に取りつかれた少年に「ヨハネがあなたを呼んでいる」と言うやいなや、悪霊はたちまち彼から出て行った。使徒のもとへ来たその少年は、癒やされた後、キリストへの信仰を告白し、母親と共に洗礼を受けた。

その同じ町には、偶像崇拝者たちから「自由の父」と呼ばれていたバクスという偶像を祀る、とりわけ崇敬されていた神殿があった。祝祭の日には、男女がここに集まり、食べ物や飲み物を持ち寄って楽しみ、酔っ払って、その忌まわしい神を称えて甚だしい不道徳な行いを働いていた。　祭りの最中にここを訪れたヨハネは、彼らの不道徳な祝祭を非難した。しかし、そこに大勢いた祭司たちは彼を捕らえ、殴打して縛り上げたまま放り出し、自分たちは再びその忌まわしい行いに戻っていった。　聖ヨハネは、神がこのような不法を容認されないよう祈った。すると直ちに、偶像の神殿は基礎まで崩れ落ち、すべての祭司を押し潰した。残りの人々は恐怖に駆られ、使徒を縛りから解き放ち、自分たちも滅ぼさないよう懇願した。

その町には、ヌキアンという名の有名な魔術師がいた。彼は神殿の崩壊と祭司たちの死を知ると、激しく憤り、聖ヨハネのもとへやって来て言った。

「バクスの神殿を破壊し、その祭司たちを滅ぼしたのは、よくない行いだ。浴場で祭司の息子をよみがえらせたように、彼らをも再びよみがえらせてほしい。そうすれば、私はあなたの神を信じるつもりだ。」

聖ヨハネはこう答えた。

「彼らの死の原因は、彼らの不義にある。それゆえ、彼らはここに住むに値せず、ゲヘナで苦しむがよい。」

「もしあなたが彼らを蘇らせることができないのなら」とヌキアンは言った。「私は私の神々の名において祭司たちを蘇らせ、神殿を再建する。そうすれば、あなたは死を免れることはできないだろう。」

そう言い終えると、二人は別れた。ヨハネは民を教えに赴き、ヌキアンは倒壊した神殿の跡地へ向かい、魔術を駆使してその周囲を巡った。すると、打ち倒された祭司たちの姿をした12体の悪魔が現れ、ヌキアンは彼らに自分についてきてヨハネを殺せと命じた。

すると、悪魔たちは言った。

「我々に彼を殺すことなど到底できないばかりか、彼が居る場所に現れることさえできない。もしヨハネを死なせたいのなら、行って民をここに連れて来い。そうすれば、民は我々を見てヨハネに怒りを燃やし、彼を滅ぼすだろう。」

ヌキアンはそこを離れ、聖ヨハネの教えに耳を傾けている大勢の民に出くわすと、力強い声で彼らに叫んだ。

「愚かな者たちよ！　なぜ、この旅人に惑わされるのか。彼は、あなたがたの神殿と祭司たちを滅ぼしただけでなく、もしあなたがたが彼の言うことを聞けば、あなたがた自身をも滅ぼすだろう。私について来なさい。そうすれば、私がよみがえらせたあなたがたの祭司たちを見ることができる。さらに、破壊された神殿も、あなたがたの目の前で再建してやる。それはヨハネにはできないことだ。」

そして皆は狂ったように彼の後を追って行き、ヨハネを置き去りにした。しかし、使徒はプロホールと共に別の道を通って進み、彼らより先に、復活した祭司の姿をした悪霊たちがいるその場所にたどり着いた。ヨハネを見るや、悪霊たちはたちまち姿を消した。　やがて、ヌキアンが民衆を率いてやって来た。しかし、悪霊たちを見つけられず、彼は深い悲しみに沈み、再び破壊された神殿の周りを歩き回り、呪文を唱えて悪霊たちを呼び寄せようとしたが、成功しなかった。夕方になると、民衆は怒りに駆られ、自分たちを騙したとしてヌキアンを殺そうとした。ある者たちは言った。

「彼を捕らえてヨハネのもとへ連れて行こう。そして、彼が命じることをすべて行おう。」

これを聞いた聖ヨハネは、同じ方法で彼らに警告し、以前と同じ場所に立った。民衆はヌキアヌスを聖人のところへ連れて行き、こう言った。

「この詐欺師であり、あなたの敵である男は、あなたを滅ぼそうと企んでいる。しかし、彼については、あなたが指示する通りにするつもりだ。」

すると聖人は言った。

「彼を放してやれ。悔い改めさせよ。」

翌朝、ヨハネは再び民衆にキリストへの信仰を説き、その多くが信仰を抱き、ヨハネに洗礼を授けてくれるよう懇願した。しかし、ヨハネが彼らを川へ連れて行くと、ヌキアンは魔術を用いて水を血に変えてしまった。使徒は祈りによってヌキアンの目をくらませ、水を再び清らかにして、信仰を抱いた者全員に洗礼を授けた。　これに打ち負かされたヌキアンは正気を取り戻し、心から悔い改めて、使徒に慈悲を乞うた。聖人は彼の悔い改めを見て、十分に教えを説いた後、彼に洗礼を授けた。すると彼はたちまち目が見えるようになり、ヨハネを自分の家へ招き入れた。　ヨハネが家に入ると、ヌキアンの家にあるすべての偶像が突然倒れ、粉々に砕け散った。この奇跡を目撃した家来たちは恐れをなして、信仰を告白し、洗礼を受けた。

その町には、プロクリアニアという名の、裕福で美しい未亡人がいた。彼女はソシパトラという美貌の息子をもうけていたが、悪魔の誘惑により、彼への情欲に燃え上がり、あらゆる手段を尽くして彼を自分の不道徳な行いに引き込もうとした。しかし、息子はそのような狂おしい情熱を抱く母

を憎むようになった。 彼女から逃げ出し、 当時聖ヨハネが教鞭を執っていた場所へやって来ると、彼は使徒の教えを喜びをもって聞き入った。　聖ヨハネは、ソシパトロに起こったすべての出来事を聖霊によって知らされていた。彼はソシパトロと二人きりになると、母を敬うよう教えつつも、不法な事柄については彼女の言うことを聞いてはならず、また誰にもそのことを話さず、母の罪を隠しておくよう諭した。　ソシパトルは母の家へ戻ることを拒んだ。しかし、プロクリアニアは彼に出くわすと、服をつかんで叫び声を上げながら家へと引きずり込んだ。その叫び声を聞いて、その街に最近着任したばかりのイゲモンが現れ、なぜその女が若者をそうやって引きずっているのかと尋ねた。一方、母親は自身の不法な企みを隠し、息子が自分に暴行を加えようとしたかのように誣告し、泣き叫びながら髪を引きむしった。これを聞いたイゲモンは嘘を信じ込み、無実のソシパトロを、致命的な毒蛇たちと共に革の袋に詰め込み、海に投げ込むよう判決を下した。　このことを知ったヨハネは、イゲモンの元へ赴き、不当な裁判を非難した。すなわち、告発内容を適切に調査することなく、無実の若者を死刑に処したことを責めたのである。一方、プロクリアニアはヨハネに対しても、この詐欺師が自分の息子にそのような悪事を教えたのだと誹謗中傷した。　これを聞いたイゲモンは、聖使徒をもソシパトロや様々な毒蛇と同じ皮袋に閉じ込めて溺死させるよう命じた。聖使徒が祈ると、突然大地が揺れ、イゲモンは聖使徒に対する死刑判決に署名したその手を萎えさせてしまった。　プロクリアニオスに至っては、両手が萎え、目が歪んでしまった。これを見た裁判官は恐怖に震え、そこにいた者たちは皆、恐怖のあまりひれ伏した。そして裁判官はヨハネに、自分を憐れみ、萎えた手を癒やしてくれるよう懇願した。　聖人は、公正な裁きとキリストへの信仰について十分に説いた後、彼を癒やし、父と子と聖霊の御名によって彼に洗礼を授けた。こうして、罪のないソシパトルは災いと死から救われ、裁判官は真の神を知ることとなった。一方、プロクリアニアは神の懲罰を背負いながら、少年から逃れて自宅へ戻った。　使徒はソシパトロを連れて、彼女の家へ向かった。ソシパトロは母のもとへ行くことを拒んだが、ヨハネは彼に悪意を持たないよう教え、「今や母からはもはや不法なことは何も聞かされることはない。彼女は貞潔を保っているからだ」と保証した。そして、その通りになった。というのも、ヨハネがソシパトロを連れて彼女の家に入ったとき、 プロクリアニアは直ちに使徒の足元にひれ伏し、泣きながら自分の罪を告白し、悔い改めた。使徒は彼女を病から癒やし、信仰と貞潔を教え、彼女とその家族全員に洗礼を授けた。こうして貞潔を保つようになったプロクリアニアは、深い悔い改めのうちに日々を過ごした。

その頃、ドミティアヌス帝が殺害された。彼の後を継いでローマ帝国の王位についたのは、非常に慈悲深い人物であるネルヴァであった。彼は、投獄されていた者たちをすべて解放した。他の者たちと共に投獄から解放されたヨハネは、エフェソスに戻ることを決意した。というのも、パトモス島に住む人々のほぼ全員を、彼はすでにキリストへと導いていたからである。　しかし、キリスト教徒たちは彼のその意図を知ると、最後まで自分たちを置き去りにしないでほしいと懇願した。使徒は彼らと共に留まることを望まず、エフェソスへ戻りたいと願ったため、彼らは、彼の教えの記念として、せめて彼がそこで書いた福音書だけでも残してほしいと頼んだ。　ある時、彼は皆に断食を命じ、弟子プロホールを連れて町から遠く離れた場所へ行き、高い山に登って、そこで三日間祈りを捧げた。三日目の終わりに、大きな雷鳴が轟き、稲妻が走り、山が揺れ動いた。プロホールは恐怖のあまり地面に倒れ込んだ。　ヨハネは彼に語りかけ、彼を助け起こして自分の右手に座らせ、こう言った。

「私の口から聞くことを書き記せ。」

そして、天を仰ぎ見て再び祈りを捧げ、祈りが終わるとこう語り始めた。

「初めに言葉があった」など。

弟子は、彼の口から聞いたことをすべて注意深く書き留めた。こうして『聖福音書』が記され、使徒は山を下りた後、プロホールにそれを書き写すよう命じた。そして彼は、キリスト教徒たちの

願いに従い、書き写したものをパトモス島に残すことに同意し、最初に書かれた原本は手元に保管した。 また、聖ヨハネは同じ島で『黙示録』[6526]も著した。

その島を去る前に、彼は周辺の町や村を巡り、信仰における兄弟愛を確固たるものにした。ある時、彼はある村を訪れたが、そこにはエウハリスという名のゼウス神の祭司が住んでおり、その祭司には盲目の息子がいた。 その祭司はかねてよりヨハネに会いたいと願っていた。ヨハネが彼らの村 に到着したと聞くと、彼は聖人のもとへやって来て、自分の家に来て息子を癒やしてほしいと懇願した。ヨハネは、ここでキリストのために人々の魂を救うことができると悟り、祭司の家へ行き、その盲目の息子にこう言った。 「わが主イエス・キリストの御名によって、目を開けなさい」――すると、その盲人はたちまち目が見えるようになった。

これを見たエウカリスはキリストを信じ、息子と共に洗礼を受けた。そして、その島のすべての町で、聖ヨハネは聖なる教会を整え、そこに司教や長老を任命した。住民たちに十分に教えを授けた後、彼は皆に別れを告げ、エフェソスへと帰路についた。 信者たちは、その教えによって自分たちの国を照らしてくれたこの太陽を失いたくないと、大いなる泣き声と嗚咽を上げて彼を見送った。しかし、聖人は船に乗り込み、皆に平安を告げて、その旅路へと出航した。 彼がエフェソに到着すると、信者たちは言い表せないほどの喜びをもって彼を迎え、「主の御名によって来られる方を祝福します！」と叫び、声を高めた。

そして、彼は栄誉をもって迎えられた。ここに滞在する間、彼は労苦を惜しまず、常に民を教え、救いの道へと導き続けた。

アレクサンドリアのクレメンスが聖ヨハネについて語っていること（[6527] ）を、ここで触れないわけにはいかない。使徒がアジアの諸都市を巡回していたとき、ある町で、善行に心を開いている若者を目にした。聖使徒は彼を教え、洗礼を授けた。 そして、そこから離れて福音を宣教しようと決意した聖使徒は、皆の前でこの若者をその町の司教に託し、牧者が彼にあらゆる善行を教えるよう命じた。 司教はその若者を預かり、聖書を教えたが、本来あるべきほど彼を気遣うことはなく、若者にふさわしい教育を与えることもなく、むしろ彼を放任してしまった。やがてその若者は悪しき生活を送り始め、酒に溺れ、盗みを働くようになった。 ついには、彼は山賊たちと親しくなり、彼らに誘惑されて荒野や山へと連れ去られ、彼らの頭目に任命され、道中で強盗を働くようになった。しばらくして戻ってきたヨハネは、その町を訪れ、その少年が堕落して山賊になってしまったという話を耳にすると、司教にこう言った。

「私が信頼できる手としてあなたに預けたあの宝物を、私に返してください。また、神への畏れを教えるために、皆の面前であなたに託したあの若者を、私に返してください。」

すると、司教は泣きながらこう答えた。

「その若者は滅びてしまいました。魂は死んでしまい、肉体は道で強盗を働いています。」

すると、ヨハネは司教に言った。

[6526] 伝承によれば、ある時、ヨハネは弟子プロホロスと共に、街を離れて人里離れた洞窟に籠もり、そこでプロホロスと共に10日間を過ごし、残りの10日間は一人で過ごした。この最後の10日間、彼は何も食べず、ただ神に祈り、自分が何をすべきかを明らかにしてくださるよう願った。 すると、天からヨハネに向かって声が響いた。「ヨハネ、ヨハネ！」 ヨハネは答えた。「主よ、何をお命じになりますか？」 天の声は言った。「あと10日間耐え忍べ。そうすれば、多くの偉大な啓示が与えられるだろう。」 ヨハネはそこでさらに10日間、食事を摂らずに過ごした。 すると、そのとき驚くべきことが起こった。神からの天使たちが彼の元へ降りてきて、言葉では言い表せない多くのことを告げた。プロホールが彼の元に戻ってくると、ヨハネは彼に墨と紙を取りに行くよう命じ、その後二日間、自分に与えられた啓示についてプロホールに語り、プロホールはそれを書き留めた。

[6527] アレクサンドリアのクレメンスは、キリスト教初期の最も著名なキリスト教学者の一人であり、217年頃に亡くなった。

「それが、お前の兄弟の魂を守るにふさわしい行いだったのか？　馬と案内人をくれ。お前が滅ぼしてしまったその者を探しに行くのだ。」

ヨハネが山賊たちのところへやって来ると、彼らに首領のもとへ連れて行ってくれるよう頼み、彼らはその願いを聞き入れた。一方、その若者は聖ヨハネの姿を見て恥じ入り、立ち上がって荒野へと駆け出した。ヨハネは自分の老いを忘れ、彼を追いかけてこう叫んだ。

「わが子よ！　父のもとへ戻りなさい。自分の過ちを嘆いて絶望してはならない。お前の罪は私が引き受ける。主が私をあなたのもとへ遣わされたのだから、立ち止まって私を待っていてくれ。」

若者は立ち止まると、畏れと大きな恥じらいを抱き、聖人の顔を見ることもできず、その足元にひれ伏した。ヨハネは父のような愛をもって彼を抱きしめ、口づけをし、迷い出た羊を見出したことを喜びながら、彼を町へと連れ帰った。　そして聖ヨハネは彼に多くのことを教え、悔い改めを説いた。若者はその悔い改めに熱心に励み、神に喜ばれ、罪の赦しを受け、安らかにこの世を去った。

その頃、あるキリスト教徒が、極度の貧困に陥り、貸し手への借金を返済する手段を失っていた。激しい苦悩のあまり、彼は自ら命を絶つことを決意し、あるユダヤ人の魔術師に、致死性の毒をくれるよう頼んだ。　すると、このキリスト教の敵であり、悪魔の友である男は、その願いを聞き入れ、彼に致死性の飲み物を与えた。キリスト教徒は、その致死性の毒を受け取ると、自宅へ向かったが、道中で考え込み、どうすればよいか分からず恐怖に襲われた。　ついに、杯に十字の印を刻んでからそれを飲み干したが、十字の印が杯から毒をすべて取り除いたため、彼はそれによってわずかな害も感じなかった。そして、自分が無事で、何の害も感じていないことに、心の中で大いに驚いた。しかし、再び金貸したちからの迫害に耐えきれず、彼はユダヤ人の元へ行き、最も強力な毒をくれと頼んだ。　その男がまだ生きていることに驚いた魔術師は、彼に最強の毒を与えた。毒を受け取った男は自宅へ帰った。そして、飲む前に長い間考え込んだ末、以前と同様にその杯にも十字の印を結び、飲み干したが、今回も全く 害を被らなかった。 彼は再びユダヤ人のもとへ赴き、元気な姿で現れた。そして、魔術師が魔術に不慣れであることを嘲笑した。ユダヤ人は恐怖に駆られ、彼に「飲んだ時、何をしたのか」と尋ねた。すると彼は、「ただ、杯に十字の印を切っただけだ」と答えた。　こうしてユダヤ人は、聖なる十字架の力が死を追い払ったことを知った。そして、真実を知りたがり、その毒を犬に与えたところ、犬は即座に彼の目の前で息絶えた。これを見たユダヤ人は、そのキリスト教徒と共に使徒のもとへ行き、彼らに起こった出来事を語った。　聖ヨハネはユダヤ人にキリストへの信仰を教え、彼に洗礼を授けた。そして、その貧しいキリスト教徒には、一抱えの干し草を持ってくるよう命じた。聖ヨハネはそれを十字の印と祈りによって金に変え、彼が借金を返済し、残りで生計を立てられるようにした。　その後、使徒は再びエフェソスに戻り、ドムナの家に滞在しながら、大勢の人々をキリストへと導き、数えきれないほどの奇跡を起こした[6528]。

[6528] ヨハネは生涯の最後の数年間、厳しい禁欲生活を送った。パンと水だけで身を支え、髪を切らず、質素な麻の服を着ていた。　老齢のため、彼はもはやエフェソスの近郊でさえ神の御言葉を説教する力を持っていなかった。彼はもはや教会の司教たちを教え導き、彼らに福音の言葉を絶えず民に教え、とりわけ福音の第一かつ最も重要な戒めである「愛の戒め」を心に留め、説教するよう励ますことしかできなかった。　至福のヒエロニムスが語るように、聖使徒が極度の衰弱に陥り、弟子たちが苦労してようやく彼を教会へ連れて行くようになり、もはや長時間の説教を行うことができなくなったとき、彼は次のような教えを絶えず繰り返すことに話を限定した。「子供たちよ、互いに愛し合いなさい！」　そしてある日、弟子たちがなぜ絶えずこれを繰り返すのかと尋ねると、ヨハネは彼にふさわしい次の言葉で答えました。「これこそが主の戒めであり、もしあなたがたがこれを守るなら、それで十分である」。その生涯の終わりに、聖使徒はキリスト教世界全体から特別な愛を寄せられていました。　当時、他の使徒たちはすでに皆亡くなっていたため、彼は主をこの目で見届けた唯一の使徒でした。キリスト教世界全体が、聖ヨハネが主の最も愛された弟子であったことを知っていました。そのため、多くの人々が使徒に会える機会を待ち望み、彼の衣に触れることを名誉であり幸福であると考えていました。　異教徒の間でキリスト教の信仰を広めるための偉大な働きに加え、聖使徒ヨハネは、著作活動を通じてキリストの教会に奉仕した。彼は聖福音書、三通の手紙、そして『黙示録』を著した。

使徒が百歳を超えたとき、彼は七人の弟子たちを連れてドムナの家を出て、ある場所まで来ると、そこで弟子たちに座るよう命じた。時刻はすでに明け方になっており、彼は石を投げられるほどの距離まで離れて、祈りを始めた。　その後、弟子たちが彼の意志に従って十字架の形をした墓穴を掘ると、彼はプロホールにエルサレムへ行き、自分の最期までそこに留まるよう命じた。さらに弟子たちに教えを授け、彼らに口づけをした後、使徒はこう言った。「この土を、わが母よ、取って私を覆ってくれ」。　弟子たちは彼に口づけをし、膝まで土をかぶせた。彼が再び彼らに口づけをすると、弟子たちは首まで土をかぶせ、顔に覆いをかけ、さらに口づけをして、大泣きしながら彼を完全に土で覆った。これを聞いた兄弟たちは町から駆けつけ、墓を掘り起こしたが、そこには何も見つからず、大いに泣いた。　その後、祈りを捧げて、彼らは町へと戻った。そして毎年、5月の8日になると、彼の棺から芳香を放つ聖油が現れ、聖使徒の祈りによって、病める者たちに癒やしをもたらした。[6529] 神の栄光のために、三位一体において永遠に賛美される御名に。アーメン。

この福音書は、ヨハネがすでに高齢となった、西暦1世紀の終わりに執筆されたものである。 エフェソスおよび小アジア全土の司教たちは、当時増え続けていた、我らの主イエス・キリストの御人格に関する偽りの教えを恐れ、また聖使徒の死が間近であることを予見して、彼に（すでに存在していた三つの福音書とは異なる）新たな福音書を授けてくれるよう懇願しました。　彼らは、キリストの神性を否定する異端者たちとの闘いにおいて、この福音書を指針として手元に置いておきたいと願った。ヨハネは司教たちの願いを聞き入れ、聖霊の導きによって自ら執筆した、マタイ、マルコ、ルカの福音書とは異なる福音書を彼らに授けた。　聖ヨハネは自身の福音書において、主に、他の福音書記者たちが触れていない事柄について語っている。彼は、彼らによって伝えられた部分を省略し、彼らによって省略された事柄を語り、彼らを補完している。ヨハネが言及する救い主の地上での生涯におけるすべての出来事は、彼の福音書において極めて詳細かつ正確に伝えられている。　この福音書によって、聖ヨハネは「神学者」という称号を得た。すなわち、彼は自身の福音書において、主に主の地上での生涯の出来事ではなく、神、すなわち「神の御言葉」、つまり　神の御子、および聖霊による霊的な再生（ヨハネ3:1–36）、人々の霊的な渇きを癒やす命の水（ヨハネ4:1–54）、　人の魂を養う命のパン（ヨハネ6:1–71）、真理へと導く神秘的な道、私たちが入り出する門（ヨハネ10:1–42）、光と暖かさなどについての話。　聖ヨハネは、これらすべての名称の下に、常に主イエス・キリストご自身を意味しています。なぜなら、ただ主のみが、真に「生ける水」、霊的なパン、光、私たちの救いの門、真理、正しさ、神そのものであるからです。主は私たちの救い主であり、太古の昔から神と共に、神の中に存在し、ご自身が神そのものであるのです。　そして、神とは至高の愛そのものであり、この愛は世界をこれほどまでに愛したため、御子さえも惜しまず、人々の贖罪と、罪、呪い、そして死からの救いのために、御子をこの世に送り出し、苦難を味わわせたのである。　ヨハネの福音書は、そのように崇高な内容ゆえに「霊的な」福音書と呼ばれ、聖ヨハネ・テオロゴスはイコンにおいて鷲と共に描かれています。鷲が天高く舞い上がるように、ヨハネもまたその福音書において、最も高き宗教的真理へと昇りつめているのです。　「神学の川は、あなたの尊い口から流れ出でた、使徒よ」――聖教会は、聖ヨハネへの賛美歌の中でこう謳っている。　また、聖教会は彼を「天の賛歌を奏でる神に動かされた笛」、「秘められた言葉の書き手」、「神によって語られた口」、「言い表せない神秘の目撃者」、「言い表せないものの秘儀の守り手」、「神学の高みへと登りつめた者」などと呼んでいる。聖ヨハネもまた、自身の三通の手紙の中で同様の考えを明らかにしている。　これらの書簡はすべて、エフェソスで書かれたものである。その中で彼はまた、異端者たちの偽りの教えを論破し、世界の救い主としてのイエス・キリストの尊厳、その受肉の真実性、そしてその教えの真実性を擁護するとともに、信者たちに対し、名ばかりではなく、真にキリスト者であるよう説いている。　当時、キリストの受肉を否定する異端者たちが現れていたため、使徒ヨハネは信者たちにそのような誤った教えに対して警告し、「*イエス・キリストが肉において来られたことを告白する霊はすべて、神から出たものである*」（Iヨハネ4:2）と語っている。　さらに、彼の書簡の中でも、*「神は愛である」*（Iヨハネ4:16）と繰り返し述べ、それゆえ人々も神を愛さなければならないと説いています。*「愛にとどまる者は、神にとどまり、神もその人にとどまる」*（Iヨハネ4:16）のです。しかし、神への愛とは何でしょうか？――　*「愛とは、私たちが神の戒めに従って歩むことにある」*（IIヨハネ1:6）。そして、主の戒めは愛の戒めに集約される（Iヨハネ4:7–8）。愛することは、*「言葉や口先だけでなく、行いと真理によって」*行わなければならない（Iヨハネ3:18）。*「『　『私は彼*（すなわち神）*を知った』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であり、その人には真理がない」*（Iヨハネ2:4）。同様に、*「『私は神を愛している』と言いながら、兄弟を憎む者」*にも真理はない（Iヨハネ4:20）。*「神を愛する者は、兄弟も愛する」*　（Iヨハネ4:21）。『黙示録』は、キリストの教会の将来の運命、キリストと反キリストとの戦い、そして反キリストの打倒を描いている。キリストの教会の将来の運命は、聖書の他のどの書物よりも、ここで最も完全に描かれている。

[6529] この驚くべき出来事を記念して、毎年5月8日に聖使徒ヨハネの祝日が定められている

トロパリオ、第2調：

キリスト・神に愛された使徒よ、救いを求めてひれ伏す人々を速やかに救い出してください。胸に倒れ伏す者を受け入れてくださるあなたに、神学者よ、彼に祈り、諸言語の覆う闇を払いのけ、私たちに平和と大きな憐れみをお与えください。

コンダク、第2調：

おとめよ、あなたの偉大さを誰が語り尽くせようか。あなたは奇跡を起こし、癒やしを注ぎ出し、神学者でありキリストの友として、私たちの魂のために祈ってくださる。

10月10日

9月27日（旧暦）

聖殉教者カリストラトスの生涯と受難

記念日：9月27日

キリストの選ばれた群れが日ごとに増え続けるのを見て、嫉妬深い敵である悪魔は、言葉の羊たちをすべて奪い、滅ぼそうと企み、激しい怒りをもって彼らに立ち向かった[6530]。そのための道具として、彼はディオクレティアヌスとマクシミアヌスという、その残虐さにおいて非人道的な獣に等しい不敬虔なローマ皇帝たちを選んだ。悪魔は彼らを、キリストの群れに襲いかかる貪欲な狼のように仕向け、彼らを通じて、激しく、そして容赦なくその群れを引き裂いた。なぜなら、悪魔は彼らの心にキリスト教徒に対する極めて強い憤りを植え付けたため、これらの皇帝たちは、自らの王国に関する他のあらゆる懸念を後回しにし、すべてのキリスト教徒を根絶やしにすることだけにその力を注いだのである。彼らはこの邪悪な意図と行いを、他のあらゆる偉大な王の業や、輝かしい勝利、敵に対する勝利よりも、はるかに大きく、最も高貴な功績であると自負していた。このため、彼らは、自分たちと同等、あるいはそれ以上に悪意に満ちた総督や拷問官を地の果てまで派遣し、至る所でキリスト教徒に偶像への生贄を強要し、従わない者には拷問を加え、殺害し、様々な死刑によって滅ぼさせた。この命令が実行に移されると、心からキリストに忠実で献身的な信徒の多くは、殉教の冠を戴き、戦いの教会から勝利の教会へと移り[6531]、敵に対する勝利の歌を歌った。他の多くの者たち の中でも、キリストの勇敢な戦士カリストラトもその一人であった。彼は、自身だけでなく、数多くの仲間たちと共に、殉教という栄光の道を歩み、敵を打ち破って、キリストという世界の勝利者の御前に進み出た。その身には、キリストのために受けた傷跡を刻み、その偉業に対する栄誉を受けたのである。

このキリストの殉教者の故郷はカルタゴであった[6532]。彼はここから兵役につかされ、ペルセンティヌス将軍の連隊に配属された。この連隊において、カリストラトただ一人だけが、暗い夜空の

[6530] すなわち、理性を持つ存在――キリストが羊飼いが羊を守るように守ってくださる人々――のことです。

[6531] 「戦いの教会」とは、地上に生きるキリスト者を包含する教会であり、「栄光の教会」とは、天に dwell する栄光に包まれた信者たちの共同体である。

[6532] カルタゴは北アフリカの都市である。

星のようにその敬虔さによって輝いていた。というのも、彼の戦友たちは皆、偶像崇拝の闇に覆われていたからである。　彼だけが、かつてキリスト教徒であった父から教えられた聖なる信仰の光に照らされていた。その父は、ネオコルという名の祖父から信仰を授かっていた。その祖父は、主イエス・キリストがポンティウス・ピラトの治世下でエルサレムにて自発的に受難を耐え忍ばれた際、兵士の一人としてその場にいたのである。　主の死と復活の際に起こったすべての奇跡を目の当たりにし、彼は主を信じ、使徒たちから洗礼を受けて故郷へ戻った。　彼はここに、キリストへの信仰という貴重な宝をもたらし、それによって息子である父カリストラトや家族全員を豊かにし、自分の目で見たこと、そして使徒たちから聞いたことすべてを、キリスト・イエスについて彼らに伝えました。祖父と父から、誰にも奪うことのできない信仰という霊的な富を相続した聖カリストラトは、その富でできる限り多くの人々を豊かにし、密かに真理の知識を教え、人々の魂を神へと導いた。このため、彼は仲間たちから疑いの目を向けられ、彼らがキリスト教徒であるかどうかの確認のために、彼を注意深く監視していた。

彼が指揮官と共にローマに滞在していた時[6533]、彼のキリスト教徒としての敬虔さは次のような形で明らかになった。この福者は毎晩、祈りのために起き上がり、密かに長い間祈る習慣を持っていた。　ある夜、彼がいつものように起きて祈っていると、そばで眠っていた兵士数人が目を覚ましてそれに気づいた。彼らが、彼が頻繁にイエス・キリストの名を呼び求めているのを耳にし、彼が真のキリスト教徒であることを確信した。彼らは好機をうかがって、ペルセンティヌス軍司令官に聞いたことを報告した。すると、総督は直ちにカリストラトを呼び出し、こう尋ねた。

「カリストラトよ、仲間たちが君について言っていることは本当か？」

聖人は答えた。

「彼らが私のことについて何を語ったのかは知りません。なぜなら、私は自分自身の行いに何の悪事も見出せないからです。」

ペルセンティンが兵士たちに遠慮なく話すよう命じると、兵士たちは総督にこう言った。

「殿、彼に神々への生贄を捧げさせるよう命じれば、すぐに彼の考えと信仰が分かるでしょう。」

総督はカリストラトに、神々に犠牲を捧げ、彼らに拝むよう命じた。すると、聖カリストラトはこう答えた。

「私は多くの神々に犠牲を捧げることを学んだのではなく、ただ唯一の真の生ける神、すなわち無から有へと万物を呼び出し、土から人間を創造された神にのみ捧げることを学んだのです。しかし、あなたがたが崇める、人の手によって造られた神々については、私はそれらを神とは呼ばず、悪霊と呼びます。それは、聖書にこう記されていることを知ったからです。　*『諸国民の神々はすべて偶像である』*（詩篇95:5）と、*『彼らの偶像は銀や金、人の手による造り物である』*（詩篇113:12）と記されている。そして私は聖書から、天にまします神を知り、賛美のいけにえを捧げ、至高なる方に誓いを立てることを学んだのである。　さて、これらの人々は、私が多くの偽りの神々ではなく、唯一の真の神を崇めているという理由で、私を非難しているのだろうか。彼らが私を告発すべきなのは、私が兵士としての義務を怠り、臆病で敵から逃げ出したことが判明した場合に限られるはずだ。そうした行いについてこそ、彼らはあなたの前で私を非難できたはずであり、そのような告発であれば、総督であるあなたが耳を傾けるのも妥当だったでしょう。私がそのような罪を犯していないこと

[6533] ここではビザンティウムを指すと理解すべきであり、同地はローマ帝国の東の首都となった後、「新ローマ」と呼ばれるようになった。　古代ローマでは、聖カリストラトスの崇敬は行われていなかった。さらに、ここで言及されているローマは、後述の通り海のすぐ岸辺に位置していたのに対し、古代ローマからは海が遠く離れていた（約4ヴェルスト）。

を知っていながら、なぜあなたは誹謗中傷者の言葉に耳を傾け、私が従う信仰の教えがあなた方のものと一致しないというだけの理由で、私を裁判にかけるのですか?

この言葉に対し、総督は怒りを込めてこう言った。

「今は雄弁な長広舌を振るう時ではなく、激しい苦痛と残酷な処刑の時だ。もし私に服従せず、王自身も崇拝している神々に犠牲を捧げなければ、まもなくお前はそれらを受けることになる。私がどれほど残酷か、お前は知らないのか。私は、拷問に先立って、ただの一瞥と声だけで誰をも震え上がらせる力を持っているのだ。」

聖カリストラトスはこう答えた:

「お前の怒りと歯ぎしりは、たとえ恐怖を呼び起こすとしても、それは一時的なものに過ぎない。しかし、永遠の恐怖と歯ぎしりというものがあり、私は何よりもそれに陥ることを恐れている。そのことを思い出すだけで、私は戦慄を覚えるのだ。」

怒りを抑えきれなかった総督は、聖人を地面に投げ捨て、殴打するよう命じた。しかし、聖人は長い拷問の間、一切の苛立ちを見せず、神に向かってこう語りかけた。*「わたしは、あなたの正しい裁きを守ることを誓った。そして、それを果たす」*（詩編118:106–107）。 さらにこうも言った。*「主よ、私は衰え果てました。『御言葉によって私を生き返らせてください』*（詩編118:25）。この不義な者が私を侮辱することを許さないでください。主よ、私の謙虚で弱々しい体に力を与え、私の内に勇気の霊を奮い立たせて、この苦しみ耐え抜くことができるよう、私を強めてください。」

殉教者の傷口から血が奔流のように流れ出るのを見て、総督は彼を苦しみから解放するよう命じ、こう言った。

「これは、お前の不従順に対する罰の始まりに過ぎない、カリストラトよ。だから、大きな苦しみから逃れるために、私の命令に従うよう、善意の助言をしておく。 もし従わないならば、神々に誓って、拷問者たちの手が汝の体を粉々に砕き、犬たちが汝の血を舐め、獅子が汝の肉を食い尽くすだろう。そうして汝は恐ろしい死を遂げるのだ。

しかし、勇敢なカリストラトはこう答えた。

「私は、力強い神、生ける神に希望を置いている。神が私を獅子の口から救い出し、*『犬たちから私の孤独な[魂]』*を救い出してくださることを」 （詩篇21:21）。この魂こそ、この多くの戦士たちの中でただ一人、真の神を知っている。私は、その神が私の魂だけでなく、他の多くの魂をも御自身のもとに迎え入れ、彼らに御名の至聖なる御名「[6534] 」を知る恵みを授けてくださることを期待しているのだ!

これらの言葉にさらに激怒した総督は、カリストラトを裸にし、地面に散らばった鋭い陶器の破片の上を引きずり回すよう命じ、それによって彼の傷だらけの体にさらに激しい苦痛を与えた。聖人がこの苦痛にも耐え抜くと、拷問官は、まるで革の袋に注ぐかのように、漏斗を通して彼の口に水を注ぎ込むよう命じた。この拷問の最中、総督は聖人にこう言った。

「カリストラトよ、もし神々に生贄を捧げないなら、私は直ちにあなたを海に投げ込む。なぜなら、もし私がすぐにあなたを死に追いやらなければ、あなたが他の兵士たちをも惑わしてしまうのではないかと恐れているからだ。」

「おお、大いなる不法者よ」と殉教者は答えた。「お前は、お前の父である悪魔の支配下にある群れが減少しないよう心配しているが、私は神に信頼を置き、この群れを私のキリストのもとに導き、彼らを真の信仰に堅く立たせ、この町の真ん中に教会を建ててやるのだ。[6535] 。」

怒りに燃えて、総督は言った。

[6534] 神の御名を知るということは、世界と人間の生活の統治において現れる神の属性と完全性を知ることを意味する。

[6535] すなわち、殉教者たち——戦士たちが信者たちによって崇敬される聖堂のことである。

「不敬虔で忌まわしい者よ、死はすでに汝の頭上に迫っているというのに、お前は教会を建て、多くの人々を汝の神へと改宗させようなどと考えているのか！」

そう言うと、総督は直ちに皮の袋を持ってくるよう命じ、殉教者をその中に閉じ込めて海の深みに投げ込み、自らは岸辺に立ち、聖人の死を目撃しようと待ち構えた。 しかし、イオナがクジラの腹の中で祈ったように祈りを捧げていた聖カリストラトが入っていた皮袋は、神の御心により、海流に流されて鋭い岩に打ちつけられ、破れてしまった。すると、二頭のイルカが聖カリストラトを背中に乗せ[6536]、静かに岸へと運び出した。 殉教者は喜びをもってこう歌った。*「私は海の深みに下った」*（詩編68:3）。しかし、水の嵐は私を溺れさせず、主よ、あなたへの祈りの呼びかけも尽きることがなかった。 あなたはすぐに私の祈りを聞き入れ、もはや何の希望もなかった時に、解決不可能な束縛と海の深みから、奇跡的に私を救い出してくださった。*「あなたは私から麻の衣を取り去り、喜びで私を帯びさせてくださった」*（詩編29:12）。 聖人が喜びの声を上げてこれを謳い上げたとき、多くの兵士たちは驚き、そのうちの何人かは聖人の足元にひれ伏し、悪魔の惑わしから彼らを救い出し、彼らの神であるキリストのもとへ導いてくださるよう懇願しました。そのような者は四十九人おり、彼らはこう言いました：

「私たちは、あなたの神が偉大で真実であることを悟りました。なぜなら、神はあなたを海の深みから奇跡的に救い出されたからです。」

すると、その祝福された殉教者はこう言った。

「わが主イエス・キリストは、御自身のもとに来る者を追い払われることはありません。主はこう言われているからです。*『疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう』*（マタイ11:28）。」

こう言い終えると、彼は天に向かって両手を広げ、目を天に向け、こう祈った：

「主よ、高き所におられ、謙遜な者たちを見守られる方よ！ このあなたの小さな群れに目を留め、あらゆる悪から守り、目に見える獣――拷問者ペルセンティン――からも、目に見えない獣――悪魔――からも無傷でいさせてください。あなたは永遠に賛美される唯一の方だからです。」

その様子を見て、総督は驚き、こう言った。

「[6537] の輝ける太陽に誓って――この男は偉大な魔術の力を有している。彼は海から無傷で現れ、約束通り、私の兵士たちを魔術で惑わせたのだ。」

同時に、彼は聖人にこう言った。

「カリストラトよ、まもなく私はお前の魔法を打ち砕いてやる。そうすれば、偉大なる神々の奉仕者であるペルセンティンとは何者か、そしてお前が崇め、無駄に頼りを置いている『十字架にかけられた方』とは何者か、お前は知るだろう。」

それから彼は裁判官の席に着き、キリストを信じたすべての兵士たちを激しく打ち、その関節を砕くよう命じた。拷問にさらされながらも、これらの兵士たちはまるで口を揃えてこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべたちの助け手となってください。そして、最後まで耐え抜く力を与えてください。私たちはあなたのために、このような苦しみを受けたのですから。」私たちの師であり牧者であるカリストラトを守り、彼を通して、私たちが一神であるあなたを告白することをさらに深く学べますように。今、主よ、私たちはあなたの御前で、迷い出た羊のような者なのです。

さて、ペルセンティヌスの怒りが幾分収まると、彼は拷問を中止し、殉教者たちを牢獄へ連行するよう命じました。彼らをどう処遇すべきか考えがまとまるまでの間、そうするよう命じたのです。というのも、彼の部隊が五十人の兵士を失ったことが、彼を大いに悲しませたからです。

[6536] イルカは、海に生息する肉食性の哺乳類である。

[6537] 異教徒たちは太陽を神として崇め、アポロと呼んでいた。

彼らが聖カリストラトと共に牢獄に投げ込まれると、彼から神についての知識を詳細に学び始めた。聖人は口を開き、世界の創造や、楽園で最初の人間たちが犯した罪から、キリストの受肉、自発的な受難、そして復活に至るまで、すべてを彼らに説明したからである。　聖人は彼らに、審判や魂、来世、義人への報い、そして地獄における罪人への懲罰について説き明かし、信仰の聖なる奥義をすべて解き明かして、彼らを殉教の業へと奮い立たせた。

翌日、多くの兵士に囲まれた総督は裁判官の席に着き、聖カリストラトとその仲間たちを牢獄から連れてくるよう命じ、彼に向かって次のように語りかけた。

「答えよ、カリストラトよ！　激しい苦しみから解放されるために神々に生贄を捧げるのか、それともこれまで通りの頑なな態度を貫くのか？」

すると、聖カリストラトはこう答えた。

「私については、死ぬまで主から離れないと断言する。しかし、彼らについては、彼ら自身に語らせよ。彼らに尋ねれば、彼らがあなたに何を言うか分かるだろう。」

すると、総督は彼らに言った。

「お前たち、惑わされた者どもよ、どう答えるのか？」

彼らは答えた。

「我らはキリスト教徒であり、天と地を創造された唯一の神を告白し、我らの良き師カリストラトが教えてくださった通り、神とその独り子である主イエス・キリスト、そして聖霊を信じている。」

聖人たちが口を揃えてこう告げると、総督は彼らを一人ずつ残酷に殴打するよう命じた。その後、手足を縛って、そこからほど近い池に投げ込むよう命じた。

この命令が実行される前に、聖カリストラトは神に祈りを捧げ、こう言いました。

「主よ、高き所におられ、謙遜な者たちを見守られる方よ、あなたの慈愛に満ちた御目を、このあなたの小さな群れに向け、この水を、再生と神の子としての受け入れの洗礼槽として、[6538] あなたの聖霊の臨在によって彼らを洗い清めてください。そうして彼らが、古い人のすべての汚れを洗い流して[6539]、（コロサイ1:12）の相続人となるように。

さて、殉教者たちが縛られて水の中に投げ込まれたとき、その束縛はたちまち解け、彼らは顔を輝かせて水の中に立ち、自らの洗礼を喜び祝った。その時、天から彼らに向かって降りてくる美しい冠が見え、次のような声が聞こえた。

「カリストラトよ、あなたの群れと共に勇気を持ち、彼らと共に永遠の住まいへと安らぎなさい。」

その言葉が終わるやいなや、激しい地震が起こり、その震動で、その近くにあったある邪悪な異教の神の像が倒れ、粉々に砕け散った。これを見た他の135人の兵士たちは、カリストラトのもとへ天から響いた声を聞いていたため、私たちの主を信じるようになった。　部隊内に噂や動揺が広がるのを恐れた司令官は、彼らには何も言わず、最初の四十九人の兵士たちをカリストラトと共に再び牢獄に投獄するよう命じた。そこで聖カリストラトは仲間たちにこう言った。

「さあ、兄弟たちよ、キリストの恵みにより、あなたがたは聖なる洗礼を受けるにふさわしい者とされました。それゆえ、神にふさわしく感謝を捧げるべきです。さあ、立ち上がって、神に祈りましょう！」

皆が立ち上がり、両手と目を天に向けると、カリストラトは次のように祈った。

[6538] これは、古来より特別な洗礼槽や浴場で行われてきた洗礼を指している。――洗礼によって、人は新しく聖なる命に生まれ変わり、神の子となる。

[6539] 「古い人」とは、キリスト教の洗礼を受けておらず、依然としてアダムの罪の下にある人を指す。（コロサイ1:12参照）。

「主なる神よ、*『すべての人が救われることを望まれる方』*（テモテへの手紙一 2:4）よ、この群れを獅子の口から救い出し、永遠の救いへと招いてくださった方よ！　私たちに、私たちの神であるあなたへの聖なる信仰のうちに息を引き取る恵みをお与えください。そして、私たちが汚れなく清らかな姿で、あなたの聖なる御前に現れ、永遠に祝福されたあなたを礼拝することができますように。

聖カリストラトスとすべての聖なる殉教者たちは、熱心に祈りを捧げました。　夜が更けると、拷問官の命令により、剣を抜き放った兵士たちが牢獄に入り、全員をバラバラに切り刻んだ[6540]。こうして聖カリストラトは、その仲間たちと共に、主のために血を流すまで（ヘブライ人への手紙12:4参照）立ち向かい、勇敢に戦った。　聖人たちの遺骸は、キリストを信じた135人の兵士たちによって集められ、敬意を込めて埋葬された。また、その同じ兵士たちによって、後に聖人たちの遺骸の上に教会が建てられた。　こうして、聖カリストラトがペルセンティヌスに語った言葉、「この都の真ん中に教会を建てる」が成就した。もっとも、その教会は彼の存命中には建てられず、殉教後のことではあったが、そこでは主なる神、そして私たちの救い主イエス・キリストの御名が賛美され、彼に、私たちからも、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調:

数多の傷に耐え、神より明らかに冠を受けられた、祝福されたキリストよ、私たちのために祈ってください。あなたの至聖なる記念を祝う者たち、偉大なるカリストラトよ、あなたと共に苦難を共にした者たちよ、羊の群れと人々を和解させるために：[6541]、すなわち、信者たちの確固たる支えである方。

私たちの尊い父、ソロヴェツキーのサヴァティイ、奇跡行者の生涯

記念日：9月27日

尊者サヴァティイがどの都市や村の出身であったか、両親が誰であったか、また何歳の時に修道生活に入ったかについては、記録が残っていない。　知られているのは、全ロシアのミトロポリト・フォティオスの時代[6542]に、称賛に値する長老サヴァティイが、ノヴゴロド州にある聖キリルのベロゼルスク修道院[6543]で修行に励んでいたということだけである。この敬虔な修行者は、祈り、絶え間ない徹夜、飢えと渇き、そしてその他あらゆる種類の数え切れないほどの　厳しい修道生活の労苦によって肉体を鍛え上げ、怠けることなくすべての修道院の礼拝をこなし、イグメンや修道院の兄弟たちに対して常に従順であった。　修道誓願を揺るぎなく果たしたため、尊者サヴァティイはすべての人から愛され、尊敬され、修道院の他の修道士たちにとって徳高く勤勉な生活の模範となり、その名は修道士たちや修道院長によって絶えず称えられていた。　しかし、この世の生活において称賛を求めるべきは人ではなく神であるということを固く心に留めていた聖人は、自分に与えられる栄光に重荷を感じ、そのため、長年修行を積んできたキリロフ修道院を離れ、　また、人々の目から遠ざか

[6540] 聖カリストラトスとその仲間たちは、西暦304年頃に殉教した。

[6541] すなわち、主イエス・キリストのことである。

[6542] モレイア出身のギリシャ人であるフォティオス都主教は、1408年から1431年まで主教座に就いていた。

[6543] ノヴゴロド州キリロフ市にあるキリロ・ベロゼルスキー修道院は、ベロエ湖の南に位置し、1397年に聖キリル（†1427年6月9日）によって設立された。

り、無名かつ孤独な生活を送ることができる、新たな修行の地を探すことについても、絶えず思案していた。

ノヴゴロド地方にネヴォ湖[6544] があり、その湖にはヴァラーム[6545] と呼ばれる島があり、そこには主の変容を称える修道院があり、その修道士たちは厳格な修行に励み、絶え間なく神に祈りを捧げ、自らの労働で生計を立てているという話を耳にしたとき、 ――聖サヴァティイは、キリロフ・ベロゼルスキー修道院のイグメンと修道者たちに、祝福を得てヴァラアム修道院へ移り住むことを許可してほしいと懇願した。 彼らの祝福を受けて送り出された聖人は、ヴァラーム島に到着し、そこで修道院の兄弟たちから喜びをもって迎えられた。ここで聖人は、かなりの時間を過ごした。現地の修道士たちの過酷な修行に倣い、絶えず自らの労苦を増やしていき、 聖サヴァティイは、キリロフ修道院と同様に、ここでも修業において誰よりも優れており、その徳高い生活はヴァラアム島でも広く知られるようになった。彼は肉体を極限まで消耗させ、生前からすでに聖霊の住まいとなっていたからである。

新たな居住地であるヴァラアム修道院においても、キリロフ修道院と同様に、聖サヴァティイは敬われ、称賛された。 そのため、尊者サヴァティイは再び深く嘆き、兄弟たちからの崇敬や称賛に重荷を感じ、自らの修行のために静寂で人里離れた場所を探すことを改めて考え始めた。 以前、尊者は、白海の冷たい海に浮かび、本土から二日間の航海距離にある、無人のソロヴェツキー島[6546] について耳にしていた。その無人島についての話を聞くにつれ、尊者は心を喜びで満たされ、沈黙の修行のためにそこに定住したいという熱い願望に駆られた。 彼はヴァラーム修道院の院長に対し、自分を解放してくれるよう熱心に懇願し始めた。一方、院長と修道士たちは、尊者様を愛し、彼を神の使者として敬っていたため、皆にとって徳の模範[6547] である、これほど称賛に値する共同生活者を失いたくはなく、尊者様に自分たちを離れないよう懇願した。 ヴァラームの修道士たちの願いを聞き入れ、尊者は彼らの修道院でまだしばらくの間過ごしたが、その後、神に祈りを捧げ、神の聖なる助けに身を委ねて、夜陰に乗じて誰にも気づかれることなく、ひっそりと修道院を後にした。

神に導かれ、守られながら、彼はソロヴェツキー島へと向かった。海辺に着くと、尊師はソロヴェツキー島の対岸に住む住民たちに出会い、島について尋ね始めた。 彼らは聖人に、ソロヴェツキー島は海岸から遠く離れており、そこへの道は困難で危険であり、船乗りたちでさえ、穏やかな天候の時でなければ、二日間の航海を経てようやく島にたどり着く程度だと伝えた。 島について詳しく尋ねた後、聖サヴァティイは、ここが沈黙と修道者の隠遁生活を送るのに最も適した場所であると考えた。彼は、島の周囲が100ヴェルスト以上あること、その周辺で魚や海獣の漁が行われていること、 島内には飲用に適した淡水があり、魚の生息する湖、山頂が成木林に覆われた山々、低木林が生い茂る谷間があり、様々な種類の果実も豊富にある。尊者サヴァティイは、ソロヴェツキー島が人間の生活には十分に適していることを知った。しかし、本土との往来が極めて不便であるため、人は住んでいないのだ。 、そこに定住したいと何度も願った多くの人々も、海の荒波を恐れてそれを実現できなかった。時折、天気が良い時に、漁師たちが本土からボートで島にやってくるが、漁が終わるとすぐに本土へ戻ってしまう。 沿岸の住民たちからこれらすべてを聞いた後、サヴァティイ師は

[6544] ネヴァ川が流れ出ているラドガ湖の当初の名称であり、ネヴァ川はラドガ湖の古名にちなんで名付けられた。

[6545] ラドガ湖の北部。ヴァラアムのスパソ・プレオブラジェンスキー修道院は、14世紀初頭に聖セルギイと聖ゲルマンによって創建された。両聖人がいつ安らかに息を引き取ったのかは、正確には分かっていない。

[6546] 白海に浮かぶアルハンゲリスク州のソロヴェツ諸島は6つの島からなり、ケムスキー郡の海岸から150ヴェルスタ、アルハンゲリスク市からは400ヴェルスタの距離にある。 その中でも最大の島はソロヴェキ島で、北から南への長さは23ヴェルスタ、幅は18ヴェルスタであり、海岸線に沿った島の周囲は175ヴェルスタである。

[6547] 修道生活において経験豊富な聖サヴァティイは、ヴァラアム修道院に滞在中、初心者の修道士たちの長老を務め、彼らの修行を指導していた。その弟子の中には、後にノヴゴロド大司教となり、1484年から1504年までその座に就いたゲナディイがいた。

ソロヴェツキー島に定住したいという燃えるような願望を抱いた。聖人のその意図を知った沿岸の住民たちは、彼をその考えから思いとどまらせようと、こう言った。

「お年寄りよ！　これほど高齢で、何も持たないあなたが、島で何を食べ、何を着て暮らすというのですか？　しかも、もう自分では何もできない身で、人から遠く離れた寒い土地で、どうやって一人で生きていくというのですか？」

聖人は彼らにこう答えました。

「子らよ、私には、老人の体を若返らせ、赤ん坊をも老齢に至るまで育て上げるような主がおられるのだ。　主は貧しい者を豊かにし、物乞いに必要なものを与え、裸の者に衣を与え、わずかな食物で飢えた者を満腹に満たしてくださる。かつて荒野で、五つのパンで五千人を満腹にされたのと同じように（ヨハネ　6:5–13）。

長老が聖書から語った言葉を聞いたポモリアンの人々の中には、その知恵に驚嘆する者もいれば、無知ゆえに嘲笑する者もいた。　一方、尊者サヴァティイは、*「自分の悩みを主に委ね」*（詩篇54:23）、ヴィグ川[6548] へと赴き、そこで礼拝堂のそばに住んでいた修道士ゲルマン[6549] と出会った。尊者サヴァティイはしばらくの間、ゲルマンの元で暮らした。彼から、ポモリャン人から聞いたのと同じことをソロヴェツキー島について知った。　互いに相談し合い、神に身を委ねた後、二人の修行者はソロヴェツキー島へ向かい、共にそこに定住することを決意した。　舟を整備し、少量の食料や衣服、そして必要な作業のための道具を携えて、彼らは神に熱心に祈りを捧げ、すべての希望を神に託して舟に乗り込み、穏やかな天候の中、航海を始めた。

神の御加護により、彼らは3日目に島に到達し、心から喜び楽しみながら、この人里離れた場所[6550] を彼らに示してくださった神に感謝を捧げた。修道士たちの船が着岸したその場所の岸辺に、彼らは十字架を立てた。 島の奥深くへ[6551] 少し距離を置いて進んだ後、敬虔な修道士たちは湖のほとりに非常に美しい山岳地帯を見出し、そこで定住することを決めた。　そこで彼らは、修道室を建て、主のために生き始め、汗を流して断食用の食料を自ら得たり、鍬で土を掘ったり[6552] しながら、労苦に励んだ。敬虔な修道士たちは、自らの手で働き、口では主を賛美し、絶え間ない祈りとダビデの詩篇の詠唱を通じて、霊において主に近づいていった。

しばらく時が経つと、島に最も近い場所に暮らしていたポモール人たちは、島に定住した敬虔な長老たちを妬み始め、彼らをここから追い出そうと企み、互いにこう語り合った。　「我々は島の最も近い隣人であり、いわばその所有者でもある。我々はカレリアの地の先住民であるから、我々、そして我々の後の子孫が代々、この島の所有権に参与すべきである。」

しばらくして、ある漁師が友人の勧めで、妻と家族全員を連れてその島を訪れ、敬虔な長老たちの修道室の近くに定住した。　そこで暮らすようになり、彼は家族と共に湖で魚を捕り始めた。一方、聖なる長老たちは自らの救いを念頭に、沈黙を守り続けていたため、そこに定住した漁師の一家の存在には気づかなかった。

ある日曜日の早朝、いつもの礼拝を終えた後、聖サヴァティイは香炉を手に取り、自分の庵の近くに立てた聖十字架に香を焚きに外へ出た。その時、まるで誰かが殴打されているかのような、殴る音と悲鳴が聞こえてきた。　聖人はその叫び声に恐怖を覚え、それは単なる夢に過ぎないと推測して、十字を切って身を守り、戻って、聞いた殴打の音や叫び声について、共に暮らしていた至福のゲ

[6548] ヴィグ川はオロネツ州とアルハンゲリスク州を流れ、白海のオネジ湾に注いでいる。聖サヴァティイが滞在した場所は、ヴィグ川の河口（現在のソロキ村、カレリア側の岸辺）にある。

[6549] ソロヴェツキーの聖ヘルマンは1479年に逝去し、その記念日は7月30日である。

[6550] 聖サヴァティイと聖ゲルマンは1429年にソロヴェツキー島に到着した。

[6551] 現在の修道院から12ヴェルスタ離れた、セキルナヤ山の近く。この場所には後に、聖サヴァティイの礼拝堂を備えた隠遁所が建てられた。

[6552] モティガは、特殊な種類の鍬である。

ルマンに話した。 小部屋から出て、同じ音を耳にした 、聖ヘルマンは叫び声の方へ向かい、泣いている女性を見つけると、彼女に何が起きたのか、なぜ泣いているのかと尋ねた。女性は涙ながらに、自分に起きた出来事を語った。

「夫のもとへ湖へ向かっていたところ」と彼女は言った。「二人の光り輝く若者に遭遇し、彼らは私を捕まえて、枝で激しく殴りながら、『この場所から立ち去りなさい。あなたたちはここに住むに値しない。神はここを修道士たちの住まいとして定められたのだから。 さあ、ここから早く立ち去りなさい。さもないと、あなたたちは悲惨な死を遂げてしまうでしょう」と。その後、その輝かしい若者たちは姿を消した。

至福のヘルマンは、尊者サヴァティイのもとに戻り、漁師の妻から聞いた話を彼に伝え、二人は共に神を賛美した。そして漁師は、妻と持ち物を連れて、遅れることなく、以前住んでいた集落へと船で戻っていった。 それ以来、一般の信徒はもはやソロヴェツキー島に定住しようとはせず、漁師たちだけが時折、漁のために島を訪れるようになった。

数年が経過すると、至福のヘルマンはオネガ川へと去っていった[6553] 、そして敬虔なサヴァティイは、神への深い信仰を胸に、ただ一人島に残った。 全知なる主のみが、天上から御自分の御使いを見守り、また、肉体を持ちながらも無形の存在に倣った神の僕サヴァティイを訪ねた聖なる天使たちだけが、彼が島でどのような生活を送り、どのような断食を行い、どのような霊的な苦行に励んでいたかを知っていたのである！ 私たちにとっては、彼が定住したその場所の性質そのものから、この尊者による修道生活の労苦と苦難を推し量ることができる。人里離れた、誰も訪れない海の島に孤独に暮らしていたこの尊い長老にとって、絶え間ない神への黙想という修行に励むこと以外に、他にすべきことはあり得なかった。 そして実際、心をもって神との絶え間ない祈りの対話に深く没頭し、涙に満ちた瞳を神に向けながら、尊者様は昼夜を問わずため息をつき、この肉体を捨てて主と一つになることを切望しておられた。

神に喜ばれる労苦の末、深き老齢に達し、死の接近を感じた聖サヴァティイは、ヴァラーム修道院を去って以来、受けられなくなっていた神聖な秘跡の聖体拝領に、いかにして恵まれるかについて考え始めた。 そのことを神に祈った後、彼は小さな小舟に乗り込み、祈りによって海が静まったのを待って、二日間かけて海の対岸へと渡った。 岸に上がると、彼は陸路を進み、ヴィーガ川沿いにある礼拝堂へとたどり着こうとした。ちょうどその頃、ヴィーガ川には、そこに住むキリスト教徒たちを訪ねるためにやって来たあるイグメン、ナファナイルが滞在していた。

あらかじめ定めた道を進んでいた聖人は、神の御心により、病人に聖体拝領を授けるため、聖なる秘跡を携えてある辺鄙な村へ向かっていたナファナイル修道院長と出会った。修道者同士の慣例的な挨拶を交わした後、出会った旅人たちは会話を交わし、互いの正体を知って喜び合った。 聖サヴァティイは、求めていたものを見つけたことを喜び、一方、イグメン・ナファナイールは、その高潔な白髪と聖人のような顔立ちを持つ聖サヴァティイに会う機会に恵まれたことを喜んだ。彼は、聖サヴァティイの徳高い生活について多く聞いていたからである。そして、至福のサヴァティイはナファナイールにこう言った。

「父よ、あなたの聖なる御心に懇願いたします。神から与えられた権威をもって、私があなたに告白しようとする罪を赦し、私の主であるキリストの至聖なる御体と御血の聖餐に与ることをお許しください。私は長年にわたり、この神聖な糧で私の魂を満たしたいという切なる願いに燃えてきました。 どうか、聖なる父よ、今、私を養ってください。私の神であるキリストは、私が若き日から今日に至るまで、言葉、行い、そして思いによって犯した罪から私を清めてくださるよう、あなたの神への愛を私に示してくださったのです。

[6553] オネガ川はオロネツ州およびアルハンゲリスク州を流れ、オネジ湾に注ぐ。

「神があなたを赦してくださいますように、兄弟よ」と、イグメン・ナファナイルは答え、しばらく沈黙した後、天に向かって両手を挙げ、涙ながらにこう述べた。「ああ、もし私の怠慢を清めるために、あなたの罪を私が背負うことができたなら、尊き方よ！」

聖サヴァティイはナファナイルに言った。

「私の聖なる方よ、私の生涯の終わりが近づいているのですから、どうか直ちに私に神の聖体拝領を授けてくださるよう、懇願いたします。」

修道院長は答えた。

「主よ、サヴァティウス神父様、今すぐ礼拝堂へ行き、そこで私を待っていてください。私は病人のところへ行ってきますが、すぐにあなたの元へ戻ります。明日の早朝、あなたのもとへ参ります。」

これに対し、聖サヴァティイはこう言った。

「父よ、朝まで待たないでください。明日まで息をしているかどうかも分からないのですから、ましてやその後何が起こるかなど、どうして知ることができるでしょうか。」

聖サヴァティウスは、自身の間近に迫った死を予言するかのようにこう語った。

サヴァティウスが神に愛される者であることを悟ったイグメン・ナファナイルは、もはや彼に逆らうことを敢えてせず、その願いを叶えるべく、告解を終えた後、彼にキリストの聖体を与え、兄弟としての口づけを交わしてこう言った。

「神のしもべよ、お願いです。ヴィーガの小礼拝堂で私を待っていてください。」

聖人はそこで修道院長を待つことに同意した。　修道院長は病人のもとへ向かい、一方、聖サヴァティイは指定された場所へ向かった。そこで、聖体拝領を授かったこと、そして神が彼に与えてくださったすべての恵みに感謝を捧げた後、礼拝堂の隣にあった小部屋に入り、そこに閉じこもって、自らの至福に満ちた魂を神の御手に委ねる準備を整えた。

その頃、ヴェリキー・ノヴゴロド出身のヨアンという名の商人が、商品を積んでヴィーゲ川を下り、岸辺に建つ礼拝堂のそばに船を寄せた。船から岸に上がると、彼は礼拝堂で聖なるイコンに礼拝し、聖サヴァティイの独房に入って彼から祝福を受けた。　祝福を与えた後、聖サヴァティイは聖書に基づいて商人に教えを説き、善行を行うよう導いた。商人は非常に裕福で、奴隷も所有しており、自分の商品の中から必要なものをすべて聖人に贈りたいと願った。しかし、聖人は商人から何も受け取ることを望まず、こう言った。

「もしあなたが施しをしたいと望むなら、あなたの周りには困っている人々がいます。しかし、私には何も必要ありません。」

その後、尊者はヨハネに、貧しさを愛すること、家族への慈愛、そしてその他の美徳について説いた。商人は、長老が自分から何も受け取らなかったことに心を痛めた。彼を慰めようと、尊者はこう言った。

「わが子ヨハネよ！　朝までここで一晩過ごせ。そうすれば、神の恵みを目の当たりにし、無事に自分の道へと旅立つことができるだろう。」

しかし、ヨハネはそこから船出したいと願っていた。すると突然、雷鳴と稲妻を伴う嵐が襲い、川と海は荒れ狂い始めた。急激な天候の変化と激しい波を見て、ヨハネは恐怖に駆られ、その場所で一晩を過ごすことになった。　朝になると、彼は旅立つ前に――波もすでに収まっていたため――聖サヴァティウスから祝福を受けたいと願い、その庵を訪れた。　祈りを捧げながら聖者の小部屋の扉をノックしたが、返事はない。二度、三度とノックすると、扉が開き、小部屋の中に入ると、ヨハネはマントとククーレを身にまとった聖者が座り、その傍らに香炉が置かれているのを見た。そして商人は聖者にこう言った。

「神のしもべよ、あなたの聖性に愛と信仰を抱き、あえてここへ入らせていただいたことをお許しください。どうか、あなたの祝福をもって私の旅路を導いてください。そうすれば、あなたの聖なる祈りに守られ、無事に旅を続けることができますように。」

ヨハネがそう語ったとき、返事もなく、反応もなかった。それは、聖人の聖なる魂がすでに主のもとへ旅立っていたからであり、その瞬間、修道室全体に強烈な芳香が漂っていた。　聖人が何も答えないのを見て、眠っているのだと思い、ヨハネは彼のそばに近づき、手を触れた。しかし、彼が主のもとで息を引き取ったことを確信すると、恐怖に襲われながらも同時に心を打たれ、温かい涙を流した。

ちょうどその時、病人の元から戻ってきたナファナイル修道院長が、小部屋に入ってきた。聖人が世を去ったのを見て、彼は痛切に泣き、その尊い遺体に口づけをした。　修道院長と商人は互いに聖人について語り合った。前者は、昨日、神の御心に適う者に神の秘儀を授ける栄誉に浴したこと、後者は、聖人との魂に有益な対話を楽しむ栄誉に浴したことを語った。葬送の聖歌の後、彼らは聖人の聖なる遺体を埋葬し、土に還した。

尊者サヴァティイは、[6554]　の9月27日に永眠した。この日、神の栄光、すなわち三位一体、父と子と聖霊に賛美される神の栄光のために、彼の記念が崇められている。神に永遠の栄光と礼拝あれ。アーメン。

トロパリオ、第3調:

世を離れ、荒野に身を置き、善き行い、苦難、瞑想、そして祈りによって奮闘された。それゆえ、死後もなお癒やしを注ぎ出される、サヴァティイ、我らの父よ。キリスト・神に、我らの魂が救われるよう祈り求めてください。

コンダク、第2調:

世俗の喧騒を避け、賢明にも海の島に身を置き、御自身の十字架を背負い、キリストに従い、祈りと徹夜祷と断食の中で、苦難をもって御自身の肉体を消耗させられました。　それゆえ、あなたは敬虔な者たちの模範となられました。このゆえに、私たちは愛をもってあなたの記念を祝います、敬虔なるサヴァティエよ。キリスト・神に、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

聖使徒マルコ、アリスタルコス、ジナの記念日

記念日：9月27日

聖使徒マルコは、ヨハネとも呼ばれ[6555]、聖ルカが『使徒行伝』（使徒15:37）で言及している人物であり、使徒たちによってバビロンの司教に任命され、福音の宣教に熱心に励みました。　彼は神に対してこれほどの大胆さを備えていたため、その影さえも病人を癒やすほどであった。

使徒パウロが書簡の中で言及している聖アリスタルコス（コロサイ4:10、フィリモン1:24）は、シリアのアパメアの司教であった[6556]。

[6554] 1435年。1465年、同聖人の遺骨は、ヴィーゲ川沿いのその死の地からソロヴェツキー島へと移された。

[6555] 使徒パウロとバルナバの最初の使徒旅行における同行者。パウロの第二の使徒旅行において、使徒バルナバは「異邦人の使徒」パウロから離れ、ヨハネ・マルコと共に独自の使徒旅行を行った。

[6556] シリアのアパメアは、シリア南西部、シリア最大の河川であるオロンテ川のほとりに位置していた。この川は、この都市の近くで地下から湧き出し、大きな湖を形成している。　古代のアパメアは、シリアのアパメア地方の主要都市であ

聖ジナは（使徒となる前は）律法学者[6557] であり、その後、ディオスポレの司教[6558] となりました。

聖殉教者エピカリアの記念日

記念日：9月27日

キリストの殉教者エピカリアは、ディオクレティアヌス帝の治世下、ローマに暮らしていた[6559] 。エパルヒのケサリウスは、彼女を捕らえて自身の元へ連行し、裁きにかけるよう命じた。キリストの御名を断固として告白したため、彼女は絞首刑に処され、体を引き裂かれた後、40人の兵士が錫のハンマーで彼女を殴打したが、彼女の祈りにより、天使が彼らを打ち倒した。　あらゆる拷問の末、彼女は剣で首を刎ねられた。聖なる殉教者が立っていた石からは、大量の水が湧き出た。

聖イグナティオの記念日。

記念日：9月27日

この尊者イグナティオスは、皇帝ニキフォロス・フォケスとヨハネス・ツィミスケスの治世[6560] 、カッパドキアに暮らしていた。幼少の頃から、かつてのサムエル[6561] のように、両親によって神に捧げられた。成人すると、修道士となり、まもなく司祭に叙階され、その後、修道院長となった。 彼は自身の修道院[6562] のために多大な貢献をした。修道院を拡張し、装飾し、豊かにし、その中に聖預言者エリヤに捧げる二つの教会を建設し、さらに別の町には聖使徒たちに捧げる教会を建立した。さらに、彼は修道院の周囲に堅固で壮麗な塀を築いた。　ある時、コンスタンティノープルへ赴き、ある修道院に聖十字架と聖福音書を寄進した尊者ですが、帰路の途中で胃の病に倒れ、アモリア[6563] で息を引き取りました。彼はこの町の教会の一つに埋葬されました。 冬が過ぎ去ると、修道院の修道士たちは彼の遺体を移そうと決めた。棺を開けてみると、遺体は傷一つなく、腐敗もせず、不思議な香りを放っていた。彼らは畏敬の念を込めて遺体を運び出し、教会の玄関に安置し、聖人たちに現れる神の御業を賛美した。

10月11日

9月28日（旧暦）

り、その名称は、シリアの統治者セレウコス1世ニカトールの妻アパメに由来する。この都市がその重要性を獲得できたのは、まさに彼のおかげであった。

6557 聖ジナは使徒パウロの弟子であり、協力者であった。西暦64年頃、使徒パウロがテトスへの手紙を執筆していた際、彼はテトスと共にクレタ島で活動していた。　律法学者（あるいは書士）とは、粗野で素朴な庶民の中で、特に特権的な階級を形成していた学識者たちのことであり、彼らは律法に精通し、教会の法廷で法的な事案を裁いていた。

6558 ディオスポルは、エルサレムからヨッピア（ヤッフェ）へと続く北の道沿いにある都市である。

6559 これは4世紀初頭のことである。

6560 ビザンツ帝国の皇帝ニキフォロス2世フォカスは963年から969年まで在位し、後継者のヨハネス・ツィミスケスは969年から975年まで在位した。

6561 列王記上 1:1–28

6562 「深き川の救い主」の修道院。西暦9世紀初頭に設立され、小アジアのマルマラ海沿岸、コンスタンティノープルの近くに位置する。

6563 アモリアは小アジアのフリギアに位置し、繁栄し人口の多い都市であった。

尊者ハリトン・殉教者の生涯

記念日9月28日

尊者ハリトンは、リカオニア教区のイコニアという町に住んでいた[6564] 。彼は敬虔なキリスト教徒であり、徳に優れており、不義な皇帝アウレリアヌスの治世において、キリストの御名の殉教者としての姿を現した[6565] 。 というのも、キリスト教徒に偶像への生け贄を強要し、従わない者は殺害せよという王の不敬虔な命令が全土に広まった際、この指令を執行するため、イコニアでは、キリスト教徒の中で最も敬虔さを際立たせ、美徳に輝いていたハリトンが、その地のイゲモンによって拘束されたからである。 彼は縛られ、不敬虔な者たちの法廷に連行された。そこで総督は彼にこう尋ねた。

「なぜ、王やすべての民が頭を垂れる、名高い神々に礼拝しないのか？」

ハリトンはこう答えた。

「異教の神々はすべて、かつて至高の神に匹敵しようと望み、その高慢のゆえに天から冥界の深淵へと追放された悪魔たちである。今や彼らは、狂気と惑わされた人々から神として崇められることを望んでいるのだ。 とはいえ、彼らも、彼らに頭を下げる者たちも、まもなく滅び、煙のようにたちまち消え去るだろう。それゆえ、私は彼らを崇拝しない。私は真の神を信じ、その御方に仕え、崇拝する。なぜなら、御方は万物の創造主であり、世界の救い主であり、永遠に存続される方だからである。

「この最初の無礼な返答だけで」とイゲモンは言った、「お前は死に値する者となった。なぜなら、不死の神々を冒涜する大胆さを示し、彼らを崇拝する我々を狂人であり、惑わされた者だと呼ぶことを敢えてしたからだ。このことだけで、お前の悪意に満ちた頭を剣で切り落とすのが当然である。 しかし、我らの神々は寛容であり、彼らに与えられた不名誉に対する報復を急ぐことはない。ゆえに、私はお前を容赦し、 直ちに滅ぼすことはしない。 もしかすると、我に返った汝は、健全な判断を下し、今や冒涜している者たちと共に我々と共に犠牲を捧げ、犯した罪の赦しを彼らに請うかもしれない。彼らもまた、悪意のない者たちとして、汝を受け入れ、その冒涜を赦す用意があるのだ。

ハリトンは答えた：

「もしあなた方の偶像が神であるならば、イゲモンよ、私がそれらを冒涜するような侮辱を許すのは、あなたにとって誤りである。なぜなら、誰もが自分の神の名誉を守り、その神に対する熱意を表明すべきだからだ。もしそれらが神でないのなら、あなたがそれらを崇拝するよう命じるのは無駄なことだ。 いかなる苦しみも、私を生ける神から引き離すことはできず、また、卑しい偶像を崇拝させることもないことを知っておきなさい。なぜなら、私は、私たちのイコニアにおいて殉教の明るい暁として輝いた、祝福された最初の殉教者テクラの弟子だからである。[6566] 彼女もまた、この偉大な業へと、偉大な師である聖パウロによって導かれたのである。今、私も彼と共にこう言う。「誰

[6564] リカオニア州およびリカオニア教区は、小アジアに位置し、18の都市を管轄していた。イコニアはリカオニア教区の中心都市である。そこでは、異端者の洗礼に関する公会議が開かれた（エウセビオス『教会史』第7巻第6章）。

[6565] 古代教会において「殉教者」とは、異教徒の裁判に召喚され、死に至らない拷問にさらされても、キリストの信仰を否定しなかったキリスト教徒のことを指した。 さらに、この称号は、世とその誘惑と戦い、それによって救い主キリストへの献身を証ししつつ、極めて高潔な生活を送ったキリスト教徒たちにも与えられていた。

[6566] 「弟子」とは「追随者」という意味であり、使徒たちの同時代人である聖テクラの真の弟子として、聖ハリトンはあり得なかった。彼は3世紀後半から4世紀前半にかけて生きたからである。

が私を神の愛から引き離すことができようか。苦しみか、窮地か、迫害か、災いか、剣か、あるいはその他の困難か？」[6567]。すると、イゲモンは言った。

「もし我らの神々が、お前の言うように神でなかったなら、我らに安らかな生活、富、栄光、そして健康を授けることはなかっただろう。」

ハリトンはこう答えた。

「イゲモンよ、あなたは間違っている。これらすべてを、あなた自身の偽りの神々から得たと考えているが、それらの神々自身は貧しく、自らの滅び以外に何一つ持っていないのだ。なぜなら、悪霊たちは、神の許しなしには豚たちさえも支配できないのだから（マタイ8:31–32）。偶像など、自分たちが何も持たないのに、誰かに何かを与えることなどできるだろうか？　それらは手を伸ばすことも、足を動かすことも、舌で話すことも、目で見ることも、耳で聞くこともできない。なぜなら、それらには魂がないからだ。もし真実を知りたいのなら、実際に試してみれば、その無価値さがわかるだろう。火のついたろうそくを偶像の口元に当てて、それを焼き払ってみよ――痛がるだろうか？　斧を取ってその足を切り裂いてみよ――叫ぶだろうか？　ハンマーを持ってきてその肋骨を砕いてみよ――うめくだろうか？　まことに、何の音も聞こえないだろう。なぜなら、それには命も息もないからだ。

これを聞いて、総督は激怒し、まるで酔っ払いのようにはりきって怒鳴り散らし、聖人が話を続けるのを許さなかった。　彼は直ちに、聖人を捕らえ、服を脱がせ、十字架の形に縛り付けて、容赦なく皮帯で打ち据えるよう命じた。しかし聖人は、創造主を否定して不法の中に生きるよりは、主キリストのために死ぬことを選んだと決意し、勇敢に苦痛に耐えた。

聖人が鞭打たれている間、拷問官は彼に問いかけた。

「ハリトンよ、不死の神々に生贄を捧げるか、それともさらに大きな傷を負うことを望むか？」

「もし私に――」と殉教者は答えた。「私の救い主のために千回死ぬことが許されるなら、私は生きながら悪魔にひれ伏すことよりも、むしろそれを喜んで受け入れるだろう。」

聖人は全身を激しく殴打され、内臓さえ見えるほどであった。肉は骨から剥がれ落ち、血は川のように流れ出し、全身がただ一つの傷跡と化していた。　ついに彼が息も絶え絶えであることに気づくと、拷問者たちは殴打をやめ、彼がまもなく死ぬだろうと考え、彼を肩に担いで牢獄へと運び去った。彼は自力で歩くことなど到底できず、一言も発する力さえなく、ただかろうじて息をしているだけだった。それほどまでに彼は深く傷つけられていたのだ。　彼を牢獄に放り込むと、拷問者たちは立ち去った。

その苦しむ者の忍耐をご覧になった神は、御自身の助けをもって彼を力づけ、すぐに傷を癒やし、不義な者たちが死んでいるのを見たいと望んでいたその人を、生き生きと健やかな姿に変え、彼がダビデと共にこう言えるようにされた。　*「わたしは死なず、生き続け、主の御業を宣べ伝える」*（詩編117:17）。その後、彼は再び裁判に引き出されたが、その際、前回よりもさらに大胆な態度を示したため、拷問者の怒りをさらに煽ることとなった。　イゲモンは聖人の体をろうそくの火で焼くよう命じたため、その全身は、食事用に調理された肉のように焼け焦げてしまった。しかし彼は、主であるキリストのためにそのような苦しみを受けながらも喜び、再び同じ牢獄に投げ込まれた。

その頃、アウレリアヌス帝は、キリスト教徒の血を流した罪により、神の怒りによって罰せられ、この世を去った。　ビザンティウムとヘラクレイアの間の旅の途中、彼はまず天から轟く大雷に怯えさせられ、それが彼の死が間近であることを予兆していた。そして、その同じ旅の途中で、彼は側近たち（ ）によって殺害され、かくも哀れな形でこの世の生涯を終えた。 彼の死後、キリスト教

[6567] ローマの信徒への手紙8:35の若干改変された文章。ここでは、使徒パウロが救い主キリストへの献身を表明している。

徒への迫害は止み、追放や足枷、牢獄に囚われていたキリストの囚人たちは解放された。というのも、アウレリアヌスの死後に帝位を継いだタキトゥス皇帝は、先代の皇帝が処刑されたことを教訓として悟り、支配下のすべての国々に、すべてのキリスト教徒を解放するよう命令を下したのである。彼は、もしキリスト教徒に対して残酷な態度をとれば、アウレリアヌスと同じように災難に見舞われることを恐れていた。　そして、信者たちには大きな喜びが訪れた。囚人たちは釈放され、追放されていた者たちは流刑地から戻り、迫害者たちへの恐怖から隠れていた司教、司祭、信徒たちが荒野や洞窟から現れ、互いに挨拶を交わしながら、教会の平穏を喜んだ。　その時、聖ハリトン殉教者も牢獄から解放された。しかし、彼は最後まで苦難に耐える必要がなくなったことを喜ばなかった。なぜなら、彼は生き残るよりも、苦難によって殉教の冠を完成させることを望んでいたからである。彼にとって、キリストのために死ぬことの方が、自由の身となることよりも望ましいことだったのだ。とはいえ、神の摂理は、多くの人々の益となるよう彼の命を延ばし、彼が天の御国において、ただ一人ではなく、自発的な殉教者たちの群れと共に、羊飼いが羊と共に、父が子供たちと共にいるかのように、神の御前に立つことができるようにされたのである。

それ以来、キリストの傷跡に飾られた戦士である聖ハリトンは、この世と、この世にあるすべてのものから背を向け、自らの十字架を背負って困難な道を歩み、生ける死者――この世にとっては死んだ者、しかし神にとっては生きている者――となった。　なぜなら、主イエスの傷跡を身に負い（ガラテヤ6:17）、彼は全身全霊で主に身を委ね、主と共に十字架にかけられたからである。そして、主の神聖な受難を常に眼前に留めておくために、彼は、私たちの主が十字架上で御霊を息絶えられたエルサレムへと向かった。　彼がそこへ向かい、すでにエルサレムに近づいたとき、強盗たちの手に落ちた。強盗たちは彼から価値あるものを何も見つけられなかったが、彼を捕らえて自分たちの洞窟へ連れ去り、そこで残酷な死を遂げさせようとした。しかし、彼らは彼を殺さなかった。というのも、旅人を襲って略奪するために急いで出かけてしまったからである。　聖ハリトンは縛られたまま洞窟に放置された。彼は以前と同様、束縛と苦痛の中にありながらも神に感謝し、神の御許しによって自分に降りかかるいかなる死も受け入れる覚悟であった。その時、彼は大胆にも悪魔に向かってこう言った。

「悪魔よ、お前が自ら私と対峙することを恐れ、強盗どもを私のもとに送り込み、私の意図を阻もうとしてこの道に罠を仕掛けたことは知っている。だが、呪われた者よ、知っておけ。お前が私を支配するのではなく、私の神の助けを借りて、私がお前を打ち負かすのだ。　たとえ強盗たちに殺されたとしても、私は神の憐れみを頼り、神の聖なる安息を相続するだろう。だが、お前はゲヘナを相続することになるのだ[6568]。私は永遠の命に復活するが、お前は永遠の死を遂げ、その苦しみには終わりがないのだ。　とはいえ、わが主は、ここでもなお、私を強盗の手から生きたまま救い出し、死から免れてくださるかもしれない。イサクを犠牲から救われたように（創世記22:1–24）、若者たちを炉から救われたように（ダニエル書2:1–49）、 ダニエルを獅子から（ダニエル書14:1–42）、聖テクラを火と獣から救い出されたように、ここでも私を生きたまま盗賊の手から解放し、死から救い出してくださるかもしれない。

聖人がこう語っているとき、蛇が洞窟に這い込み、そこでワインの入った器を見つけると、そこから飲み始めました。酔っ払った蛇は、自分の毒と共にワインを再びその器に吐き出し、その後、這い去りました。　強盗たちは家に戻り、喉の渇きに苛まれて、次々とその器から酒を飲み干したが、たちまちその毒によって中毒となった。彼らは皆、地面に倒れ、恐ろしい苦痛のうちに息を引き取った。こうして彼らは自らの罪に対する相応の報いを受け、恐ろしい形でその生涯を終えた。

死の危機を免れた聖ハリトンは、神の助けによって束縛から解放され、その洞窟の中で、強盗たちが長年にわたり強盗行為によって集めた膨大な量の金を見つけた。　聖ハリトンは、強盗たちが

[6568] ゲヘナ――地獄のこと。

不正な手段で得たこの富を慈善に費やし、残りの金でその場所に「ファレ」[6569] という名の修道院を建立し、強盗の洞窟を教会へと改築して、ここに修道士たちを集めた。　彼の名声はその国中に広まり、多くの人々が彼の徳高い生活を求めて彼のもとにやって来た。彼から修道衣を授かると[6570] 、彼らはその修道院で静かな生活を送り、師であり導き手である尊者ハリトンの教えから恩恵を受けた。彼らは、ハリトンの聖なる生き様を、まるで明るい灯火のように仰ぎ見、そこから教訓を得て励まされたのである。　なぜなら、彼は徳と修道者の行いに完璧であり、断食と節制を甘い糧のように愛し、労苦を安らぎとして尊び、貧しさを富として守っていたからである。　それにもかかわらず、彼は慈悲深く、旅人を温かく迎え入れ、憐れみ深く、兄弟を愛し、柔和で、寡黙であり、誰に対しても親しみやすい人であった。 また、彼の口からは、知恵の塩で味付けされた言葉が語られ[6571] 、それによって常に兄弟たちを救いの道へと導いた。　彼は自身の修道院において、一日に一度、それも夕方に食事をとることを定め、特別に調理された料理や飲み物ではなく、パンと水のみを、しかも適量にとるようにした。これは、食事や飲み物の過食によって腹が重くなり、兄弟たちが真夜中に眠りから覚めて祈りを捧げることに怠惰にならないようにするためであった。　また、祈りの後、修道士たちが手仕事に励むよう定め、一時間たりとも怠惰に過ごすことのないよう注意させた。それは、悪魔が怠けている修道士を見つけ、罪の網で容易に捕らえてしまうのを防ぐためである。なぜなら、怠惰と無為こそが、罪に陥る始まりだからである。　聖人はさらに、兄弟たちが各自の独房にとどまり、沈黙を守り、あちこちを歩き回ったり、無駄話のために集まったりしないよう命じた。なぜなら、空虚な会話からは多くの誘惑が生じるからであり、聖書も*「悪い交わりは善き行いを損なう」*[6572]（Iコリント15:33）と証言しているからである。　また、尊者様は、良心の清さを瞳のように大切にし、金や銀よりも貧しさを愛し、従順を救いに導く助け手として心に留めるよう教えました。そして、謙遜、愛、忍耐、悪意のなさ、その他すべての修道者の美徳を、貴重な宝物として身につけ、それらによって豊かになるよう教えられました。

このように兄弟たちを教え、修道院を適切な秩序に整えた後、尊者は皆を集め、兄弟たちの中から最も徳の高さで知られていた者を選び、彼を自分の後継者として彼らの牧者とした。そして自身は、沈黙を愛し、人々から身を引くために、最も奥深い荒野へと去ることを決意した。　というのも、彼には病を癒やし、悪霊を追い払う恵みがあったため、至る所から人々が病人を連れて彼のもとに集まってきたからである。また、彼から祝福を受けるために高位の貴族たちも訪れてきたため、彼は完全な修道者の沈黙を保つことができなかった。　この騒ぎに疲れ果てた彼は、世俗の名声を避け、人里離れた場所に身を隠すことを決意した。しかし、兄弟たちは彼に「私たちを置いて行かないでください」と切に懇願し、その願いが聞き入れられなかったとき、彼らはまるで父を失った孤児のように、彼を嘆き悲しんだ。　しかし、神に喜ばれるこの善良な父の祈りは、彼の子供たちを見捨てなかった。彼の祈りによって、皆が主の戒めを守ることに成功し、まるで荒野に植えられたクリンの花[6573] のように、聖性において花開いたからである。 こうして、兄弟たちと別れを告げ、彼らに祝福を与え、神に委ねた後、尊者は遠く離れた荒野と、人跡未踏の密林[6574] へと去っていった。

[6569] ファレまたはファルスの修道院は、エルサレムの南に6ミリアリオン、すなわち6万歩の距離に位置していた。

[6570] 「剃髪」とは、修道士として受け入れられるための特別な礼拝儀式であり、この名称が付けられたのは、古代において髪を剃ることが修道士への叙任を示す最初の外的なしるしであったためである。剃髪が終わって初めて、叙任される者は修道服を身にまとった。

[6571] すなわち、彼の言葉は、まるで料理に欠かせない塩のように、知恵で味付けされていたのである。コロサイ4:6を参照。

[6572] すなわち、良い習慣や道徳は、悪しき交わりや無駄話に加わることで、しばしば損なわれてしまう。参照：Iコリント15:33。

[6573] すなわち、野生のユリのことである。

[6574] デブル――密林に覆われた谷や低地、あるいは岩に囲まれた狭い場所。

一日の道のりを歩んだ後[6575]、尊者はエリコの境界からそう遠くない場所に別の洞窟を見つけ[6576]、そこに住み着き、まるで天使のように[6577]、昼も夜も神を賛美しながら、神のために生きた。彼の糧は、その場所の周辺に生えていた草木でしたが、何よりも彼は神の御言葉、絶え間ない祈り、そして神への心からの愛から湧き出る温かい涙によって養われていました。それは詩篇の言葉の通り、*「私の涙は、昼も夜も私の糧であった」*（詩篇41:4）というものでした。

彼がそこにしばらく留まっていると、神は彼を、まるで野原に隠された宝物のように人々に現された[6578]。多くの人々が彼の去りゆくことを嘆き、良き父を失ったことを嘆いていたため、兄弟たちのうち数人は互いに相談し合い、荒野へ行って自分たちの牧者を探しに出かけた。神ご自身が、熟達した導き手であり、多くの人々にとって良き統治者である彼が、自分自身だけでなく他の人々をも天の御国へと導き、導いていくことを望まれたのである。この時から、彼の隠遁の地が知られるようになり、修道士や信徒たちが彼のもとを訪れるようになった。彼らは彼と共に暮らし、天使のようなその顔を見、有益な語りかけに心を満たしたいと願っていたのである。やがて、言葉の羊の群れが少なからず集まり、最初の修道院と同じ規律と規則に基づいた別の修道院が設立された。こうして、神の栄光は、不法や争いがはびこる人混みの多い都市の中よりも、むしろ人里離れた荒涼とした地で、より一層高まり、広まっていった。しかし、父は弟子たちと共に過ごしたのは長くはなかった。というのも、修道院の秩序をすべてふさわしいように整えた後、彼は、フェクイットの地[6579]から十四スタディオン以上離れた最も深い荒野へと再び去り、そこでエリヤや洗礼者ヨハネに倣い、*「私は遠く離れて、荒野にとどまるであろう」*（詩篇54:8）と願ったからである。彼は、荒野や急流、丘、裂け目、そして地の深淵を、あちこちと渡り歩き、全身全霊を神に委ねていた。誰が彼の荒野における労苦を語ることができるだろうか。隠されたことを知っておられる神のみが、彼の偉業を知り、その労苦を見守り、それゆえに彼のために天の報いを用意しておられたのである。

その聖者が長い間砂漠を放浪した後、神は、美徳の光を放つこの灯火が、再び砂漠の隠遁生活[6580]から現れ、永遠の命へと続く狭い道を歩もうとするすべての人々に、その生き様をもって光を照らすことを望まれた。砂漠を通りかかった修道士たちの一部が再び彼を見つけ、彼の足元にひれ伏して、自分たちが彼と共に留まり、その敬虔な行いを模倣できるよう許してほしいと懇願した。このことを他の者たちも知ると、世俗の喧騒を避けて、多くの人が尊者のもとに集まり始めた。彼はすでに三度目となるキリストの羊の群れを集め、彼らに修道生活の手ほどきをした後、三つ目の修道院を設立した。この修道院は後にシリア語で「スキイスカヤ」、ギリシャ語では「スタラヤ・ラヴラ」と呼ばれるようになった。その後、彼はその地にある山の頂上に登り、小さな洞窟がある高台に身を寄せた。そこへは、非常に高い梯子を使ってしか登ることができなかった。そこで彼は、まるで柱の上に立つかのように[6581]、地上から離れ、天の住まいに近づいた。そこから、見張りを立てる善き羊飼いのように、彼は自身の修道院のために祈りを捧げ、そこに集められた兄弟たちの救いを思い巡らした。まるで船の舵輪に立つかのように、彼はそこから数え切れないほどの魂の航海を導いた。というのも、彼が設立したすべての修道院から、霊的な糧を必要とする人々が彼のもとに集まってき

[6575] すなわち、歩行者が通常1日に歩く距離のこと。

[6576] おそらく、ユダヤの荒野のことである。

[6577] 聖書の言葉によれば、天使たちは絶えず神を賛美している。詩篇21:4。

[6578] 「畑に隠された宝」のたとえを参照。マタイによる福音書13:44。

[6579] フェクヤ――ベツレヘムの近くにあった古代ユダヤの都市。

[6580] スプード――粉状の物質を量る単位で、時には灯火を消したくない場合に夜間にそれを覆うために用いられた。スプードの下――密かに。

[6581] ここでは、明らかに、広大な牧草地に散らばった自分の群れを見張るために、パレスチナの羊飼いたちが設けていたような木製の小さな見張り塔のことを指している。

たからである。　そして彼はその場所で、断食と祈り、そして語り尽くすことのできないような功徳に励みながら、深き老齢に至るまで暮らした。なぜなら、日ごとに労苦を増していく彼は、肉体を持ちながらも、まるで無形の存在のように見えたからである。　その場所は水のない場所であったが、師は、兄弟たちの誰かが彼のために苦労して遠くから水を運んでくることを望まなかった。しかし、彼自身も、高い丘への登り口が不便であったこと、また、年老いて労苦によって衰弱した体のため、自分で水を運ぶことができなかった。　そこで彼は、神が荒野のイスラエルの民のためにされたように、岩から水を湧き出させてくださるよう、神に熱心に祈った。そしてその願いは叶えられた。主は御自身を畏れる者たちの願いを叶え、その祈りを聞き入れてくださるからである。すると突然、乾いた、決して砕けることのない岩から、神の力によって泉が湧き出したのである。　これほどまでに、この徳高い父の祈りは、神の御前で大きな力を持っていたのである。

完全な敬虔さの中で生涯を送り、熟した葡萄の房のように人生の極限に達した聖人は、至福の最期を迎えようとしていた。　神からそのことを告げられると、彼は三つの修道院から修道院長たちと修道士たちを呼び寄せた。彼らは、この聖人の祈りと神への執り成しによって、その荒野で天の星のように増え続けていた者たちであった。そして、聖人は彼らに、自身の死が間近であることを告げた。

「私は」と彼は言った。「主の御心に従い、あなたがたのもとを去ります。なぜなら、私がかねてより待ち望んでいた時が訪れたからです。肉との結びつきを断ち切り、私の神の御前に進み出て、その御前に現れるためです。　あなたがた、子らよ、自らの救いを大切にしなさい。そうすれば、あなたがた一人ひとりが敵の罠を避け、死の後、主のもとに入り、主から恵みを受けることができるでしょう。

これを聞いて、皆は泣きながらこう言った。

「父よ、師よ、あなたは私たち、あなたの子供たちを置き去りにするのですか！　牧者よ、導き手よ、あなたは私たちを置き去りにするのですか！　私たちの灯よ、私たちの道の導き手よ、あなたは消え去ろうとしているのですか！」

すると、彼は彼らを慰めてこう言った。

「私たちの主イエス・キリストは、世の終わりまで私たちと決して離れることなく共にいてくださると約束されました。主はあなた方を決して見捨てられません。　もし私が主からその栄誉を授かるならば、その御慈悲深い御方に、最後の審判の日に羊と山羊を分けるように、あなたがたを互いに引き離さず、むしろあなたがた全員を御自身の右の座に[6582]に据え、御国において一つの囲いの中に集めてくださるよう、祈り求めよう。

兄弟たちは彼に尋ねた。

「父よ、ご自身の遺体についてはどのようにお取り決めになりますか？　どこに埋葬すればよいのでしょうか？」

彼は言った：

「土を、あなたがたが望む場所に返してください。*『主は地と、その中にあるすべてのもの』*[6583]（詩篇23:1）です。」

すると、彼らは言った。

「いいえ、父上。あなたは三つの修道院を設立し、三つの群れを集められました。そのそれぞれが、あなたの聖遺物を自分たちのところに安置したいと願っています[6584]。ですから、私たちの間に争いが生じないよう、今すぐ、あなたの聖遺物をどこに安置すべきか、遺言を残してください。」

[6582]「右の座に立つ」とは、神によって義と認められることを意味する。マタイ25:33。

[6583] すなわち、すべては神に属しており、あらゆる土地の一片も例外ではない。詩篇23:1。

[6584]「聖遺物」とは、一般的には亡くなったキリスト教徒の遺体を指すが、特に、神に栄光を受けた聖人の遺骨を指す。

彼らの願いを聞き入れ、彼は最初の修道院に埋葬されることを承諾した。そこは、かつて彼が強盗に拉致され、神の恵みによって奇跡的に彼らから救い出された場所であった。　三つの修道院の修道士たちは皆、彼を迎えに行き、その修道院へと連れて行った。そこで彼は、兄弟たちに完全な修道生活について多くの教えを与え、彼らに平安を授けた後、寝台に横たわり、いかなる肉体の病にも苦しむことなく、その聖なる魂を主の御手に委ねた[6585]。

かくして、私たちの尊い父ハリトン、キリストの殉教者、信仰の証人、そして善良な修道士は、この世を去った。　すべての荒野の父たちは彼のために涙を流し、太陽のように世界を照らしたこの偉大な父であり師である彼の死を悼み、荒野全体が嘆きに包まれた。彼のために十分な時間を泣き悲しんだ後、修道士たちは彼の聖なる遺骨を敬意を込めて埋葬し、父と子と聖霊を永遠に賛美した。アーメン。

コンダク、第2調：

神の知恵による節制を味わい、御自身の肉の欲望を抑制し、信仰によって回心した者として現れた。そして、命の木として、楽園の真ん中で花開いた、至福のカリトンよ、最も聖なる方よ。

聖預言者バルクの記念日

記念日：9月28日

聖預言者エレミヤは、70歳の時にバビロン捕囚を目の当たりにしたが、その弟子である聖バルクは、師のそばを離れなかった。　エレミヤがエルサレムの破壊を嘆き悲しんでいた時、バルクは洞窟に身を隠し、同様に苦々しく泣いた。しばらくして彼は洞窟から出てきて、悲しみに満ちて、師であるエレミヤが石打ちにされるのを目の当たりにした。聖バルクは、神の御子の受肉についてとりわけ明確に預言した。　その預言は、*「この方こそが私たちの神であり、この方に匹敵する者は他にいない」*（バルク書3:36–38）という言葉で始まっている。彼はまた、エルサレムの運命も予言した。彼が埋葬を手配した聖エレミヤの死後、まもなく彼自身もこの世を去った[6586]。

聖殉教者アレクサンドロス、アルフェイ、ゾシマ、マルコ、ニコン、ネオン、イリオドロスの記念日。

9月28日の記念日

これらすべての聖殉教者たちは、ディオクレティアヌス帝の治世下[6587]、ピシディアのアンティオキアにおいて、イゲモン・マグヌスの支配下で殉教した。彼らがとある山に登ったとき、羊の群

[6585] 西暦350年頃。

[6586] 預言者バルクはエジプトで亡くなった。おそらく、ネブカドネツァルによるエルサレム破壊から12年後、すなわち紀元前595年のことである。この預言者の名にちなんで、聖書には特別な書物が記されている。この書物が書かれた目的は、その内容からもわかるように、ユダヤ人たちに、彼らを襲ったすべての災いは、先祖と彼ら自身の罪のために主が下されたものであることを示し、それによって彼らに心の砕けと悔い改めの念を呼び起こすことにあった。　同時に、彼らを襲った災いの中にあっても、間もなく訪れる捕囚からの解放、さらにはメシアの恵みの時代の到来という約束によって、彼らに慰めを与えることにもあった。預言者バルクの書は、いわば預言者エレミヤの書への補足あるいは付録と見なされており、それ単体ではどこにも見られない。　教父たちの間では、この書はしばしば預言者エレミヤの書と直接結びつけられ、後者の名称で呼ばれることが少なくない。キリストの降誕前夜にこの書から選ばれる聖句（バルク3:36–38、4:1–5）でさえ、バルクの預言ではなく、エレミヤの預言として読まれている。

[6587] 西暦4世紀初頭

れを飼っていた聖マルコを見かけた；　、そして兵士たちに追われていた獣が、彼の足元に横たわり、その足を舐めていた。　その話を聞いたマグヌスは、三十人の兵士に彼を自分の元へ連行するよう命じた。しかし、これらの兵士たちは皆、聖マルコから教えを受けてキリストに改宗してしまった。総督は彼らのうち数人を縛らせ、残りをニカイアへ送ったが、そこで彼らは斬首された。その後、アルフェイ、アレクサンドロス、ゾシマという三人のキリスト教徒の兄弟が発見された。　聖マルコは彼らと共に十字架に磔にされ、その後、剣で斬り殺された。マグヌスは彼の首を、自身の女神アルテミスの神殿へ送った。聖殉教者の首が神殿に運び込まれるやいなや、そこにあったすべての偶像が倒れ、粉々に砕け散った。　この奇跡を目撃したニコン、ネオン、イリオドールもまたキリストを信じ、その場で処刑された。

チェコの公ヴィャチェスラフの聖人伝

記念日：9月28日

聖ヴィエチェスラフは、チェコを統治していた公爵家[6588]の出身であり、聖殉教者リュドミラの孫にあたった。彼の両親――チェコの公爵ヴラティスラフ[6589]とその妻ドラゴミラ――には、彼の他にボレスラフとスピティグネフという二人の息子と、数人の娘がいたが、彼はその中でも特に才能と慈愛に恵まれていた。　聖ヴィエチェスラフが成長するにつれ、父は当時の慣習に従い、司教や司祭たち、そして教会の聖職者全員に、彼に神の祝福を授けるよう依頼した。司教は、至聖なる聖母マリア教会で聖体礼儀を執り行った後、少年を教会の階段の上に立たせ、次のような言葉で彼を祝福した。

「主なる神、イエス・キリストよ、この少年を祝福したまえ。あなたが御自身の義人――アブラハム、イサク、ヤコブ――を祝福されたように。また、あなたが正教の王たち、使徒に等しいコンスタンティヌスとヘレナを戴冠されたように、彼をも戴冠したまえ。」

まさにこの時から、神の恵みにより、少年は成長し、才能を開花させていった。　彼の祖母である聖リュドミラは、自身の霊的指導者であるある司祭に、彼にスラブ語の読み書きを教えるよう依頼した。聖人はその言語を極めて短期間で完全に習得した。その進歩を見て、父は彼をブデチという町へ送り、ラテン語やその他の学問を学ばせた。彼はこれらすべてにおいて、教師たちを驚かせるほどに優れた成績を収めた。

しかし、神の御心により、ヴラティスラフ公はまもなく亡くなり[6590]、まだ若かった聖ヴィャチェスラフが父の王位を継いだ。ここで、統治者としての地位に就いた彼は、とりわけその才能を発

[6588] チェコは、ほぼ四方を山々に囲まれ、ラバ川（エルベ川）とその支流によって潤されている中欧の高原に位置している。はるか昔、この地はケルト民族の一派であるボイ族によって占められており、その名に由来して「ボヘミア」という別名も持っている。　紀元前間もなく、ボイ族はゲルマン人のマルコマニ族によって追放された。マルコマニ族はローマ人と長きにわたる戦争を繰り広げ、5世紀半ばに完全に姿を消した。その直後、おそらくはスラブ系のチェフ族がこの荒廃した土地に定住し、その名にちなんでこの国は「チェコ」と呼ばれるようになった。　聖なる兄弟キリルとメフォディウスがスラブ諸国――モラヴィアとパノニア――で布教を行った際、チェコ人も彼らによって洗礼を受け、スラブ語による礼拝が導入された。　チェコ人たちの間でキリスト教は急速に広まり、間もなく聖なる修道士たちが現れた。正教会では、至福のリュドミラ、聖ヴィャチェスラフ、そして11世紀に生きた尊者プロコピウス（その記念日は9月16日）が知られている。　しかし、チェコ人が洗礼を受ける以前から、スラブ人の聖なる最初の教師として、ドイツ人宣教師たちがチェコに現れ、ラテン語による礼拝を広め始めた。彼らは、チェコ人と隣接する強大なドイツ諸国の庇護を受けていたため、　チェコと隣接していたため、時が経つにつれて彼らはスラブ式の礼拝を完全に駆逐することに成功した。このスラブ式の礼拝は、11世紀にはすでに聖プロコピオスによって守られなければならなかったが、一部の地域ではその後も存続し続けた。

[6589] 9世紀末、チェコの公位に就いたのは

[6590] ヴラティスラフ公は西暦920年に死去した。

揮した。母と共に国の統治の改善に努め、一族の世話をし、　姉妹たちを近隣の公国へ嫁がせ、弟たちの教育を見守り、自らも知識を深める機会を逃さず、やがてスラブ語やラテン語だけでなく、ギリシャ語の学問までも完全に習得し、この点においていかなる司祭や司教をも凌駕するほどになった。神は彼の活動を祝福し、彼に深い知恵を授けられた。彼もまた、神に喜ばれるよう熱心に努め、貧しい人々を気遣い、彼らに食事を与え、福音書の言葉*「わたしは飢えていたのに、あなたがたはわたしに食べ物を与えてくれた。渇いていたのに、あなたがたはわたしに飲み物を与えてくれた。旅人だったのに、あなたがたはわたしを受け入れてくれた」*（マタイ25:35）という福音の言葉に従って旅人を迎え入れ、聖職者を敬い、教会を建設し装飾し、富める者にも貧しい者にも等しく愛をもって接し、その短い生涯を通じて、ただ善のことのみを心に留めていた。

しかし、人類の古くからの敵である悪魔は、今もなおあらゆる手段を尽くして混乱をまき散らそうとしていた。ある悪意ある貴族たちは、聖人が父の死後、わずか十八歳という若さであったことを利用しようとしたのである。　そこで彼らはまず、ヴィャチェスラフ公を母親に対して扇動し始め、彼女が公の祖母である聖リュドミラを殺害し、公に対して悪意を抱いていると吹き込んだ。　ヴィャチェスラフは当初、この言葉を信じ、母をブデチという町へ追放したが、すぐに使徒パウロの言葉を思い出した。*「あなたの父と母を敬え。これは、約束を伴う最初の戒めである」*（エフェソの信徒への手紙6:2）。彼は母を自宅へ連れ戻し、苦々しい涙を流しながら悔い改め、こう言った。

「主よ、わが神よ、このことを私の罪とみなさないでください」と、そして詩篇の作者の言葉を繰り返した。*「わが若き日の罪と、わが過ちを思い出さないでください」*（詩篇24:7）。

それ以来、彼はあらゆる面で母を敬い、母は彼の敬虔さと優しさに喜びを感じた。彼は身体に障害のある者を養い、未亡人や孤児の世話をし、捕虜を身代金で買い戻し、すべての人に善行を施した。こうして、善良で正義感あふれるヴャチェスラフ公の名は至る所で称賛されるようになった。

悪意ある貴族たちは、聖人の知恵と高潔さゆえに自分たちの企みが失敗に終わったのを見て、彼の弟であるボレスラフを扇動し始めた。ボレスラフは弟として、本来ならヴィャチェスラフに従うべき立場にあった。　彼らはボレスラフに、ヴィャチェスラフ公が側近や母と共に彼を殺害しようと企んでいるかのように吹き込み、自らの命を守るためには聖なる公を殺し、自ら公の座に就くべきだと助言した。　これらの悪意に満ちた扇動者たちの助言はボレスラフの心を惑わせ、彼は兄の死を企てるようになった。これは、ほぼ100年後に[6591]　、ルーシの地で独裁者となることを望んだ「忌まわしき」スヴィャトポルクが、兄弟たちを殺害しようと企てたのと同様であった。

その犯罪的な企てを実行に移そうと、ボレスラフは、日曜日に予定されていた教会の奉献式に兄を招いた。その日は、ちょうど聖コスマスとダミアンの記念日とも重なっていた。　聖ヴィャチェスラフは到着し、聖なる典礼に参列した後、プラハへ戻ろうとした[6592]　。しかし、ボレスラフは彼を引き留め、自分が用意したもてなしを断って気分を害させないでほしいと懇願した。　聖人は滞在することに同意したが、ボレスラフの屋敷の中庭に出た際、使用人たちは兄弟の企みについて彼に警告した。聖人はこれを信じず、すべての希望を神に託した。その日一日、彼らは喜びのうちに共に過ごした。　その一方で、夜になると、悪党たちはグネヴィシという名の共謀者の一人の庭に集まり、ボレスラフと共に聖ヴィャチェスラフをどのように殺害すべきか謀議し、聖人がその敬虔さゆえに礼拝を欠かさないことを知っていたため、彼が起きて早課に向かうやいなや襲撃することを決めた。　そして彼らの予想は的中した。早課の鐘が鳴り響くや否や、ヴィャチェスラフはすぐに立ち上がり、こう言った。

「わが主なる神よ、あなたに栄光あれ。私に光を与え、この朝まで生き延びさせてくださったことを感謝します。」

[6591] 1015年。

[6592] チェコの首都は、ラベ川の支流であるヴルタヴァ川沿いに位置している。

それから彼は服を着て、顔を洗うと、教会へ向かった。家の門で、ボレスラフが彼に追いついた。聖人は振り返って言った。

「やあ、兄弟。昨日は良かったな……」

しかし、彼が言葉を終える間もなく、ボレスラフは悪魔の唆しにより、鞘から剣を抜き放ち、兄弟の頭を斬りつけながらこう言った。

「今日は、お前にもっと素晴らしいもてなしをしてやる。」

ヴィャチェスラフは叫んだ。

「兄弟よ、何を企んでいるのだ？」

そして彼を掴んで地面に押し倒し、こう尋ねた。

「兄弟よ、私はお前にどんな悪事を働いたというのか？」

しかしその時、陰謀者の一人が駆け寄り、聖人の腕を斬りつけた。そこで彼はボレスラフを置き去りにして、教会へと駆け出した。　共謀者たちは彼を追いかけてきて、そのうちの二人――チェスタとティラ――が教会の入り口で彼を斬り殺し、三人目のグネヴィサはさらに剣で彼の脇腹を突き刺した。福者はこう言い残して息を引き取った。

「主よ、私の霊を御手に委ねます。」

公が殺害されると、悪党たちは彼の家臣たちを殴打し、聖ヴィャチェスラフが自宅に保護していた者たち全員を略奪し、追い出した。陰謀者ティラは、兄弟と母親の両方を一気に排除するために、ボレスラフに母親にも襲いかかるよう助言したが、ボレスラフは「彼女には逃げ場がないのだから、それはまだ後でも間に合う」と答えた。

一方、聖ヴィャチェスラフの遺体は、陰謀者たちによって切り刻まれ、埋葬されることもなく放置されたが、ある司祭が覆い布をかけておいた。　その頃、聖人の母は息子の殺害の知らせを聞き、彼を探しに出かけ、切り刻まれた遺骸を目の当たりにして、苦悩の涙に暮れた。彼女は息子の遺体のすべての断片を集め、それを自宅に持ち帰ることを恐れ、その場である教会の司祭の庭で遺体を洗い、衣服を着せ、その後、遺体は教会へ運ばれて安置された。　殉教して亡くなった息子にこの最後の敬意を捧げた後、聖ヴィャチェスラフの母は、死を逃れるためにクロアチアの地へ身を隠した[6593]。そのため、ボレスラフが彼女のもとへ殺し屋を送ろうとしたとき、彼らはもはや彼女を見つけることができなかった。

福者である公爵の遺体は、埋葬を待つ間、しばらくの間まだ教会に安置されていたが、ついに聖なる殉教者の葬儀を執り行い、彼を埋葬するために司祭を呼ぶことが許された。そして、教会の扉で流された彼の血は、どんなに努力しても、どうしても洗い流すことができなかった。　しかし、三日が過ぎると、その血は奇跡的に消え去った[6594]。

まもなく、兄弟殺しを犯したボレスラフは自らの重い罪を悟り、悔い改めながら苦々しく泣き、こう言った。

「私は罪を犯しました。私の罪と不義を自覚しています。神よ、この罪人である私をお助けください。」

彼は司祭たちと側近たちを遣わし、聖ヴィエチェスラフの聖遺骨を首都プラハへ移送させ、聖ヴィエチェスラフ自身が建立した聖ヴィート教会の祭壇の右側に、栄誉をもって安置させた。

10月12日

9月29日（旧暦）

[6593] チェコより南、アドリア海沿岸およびドナウ川の支流であるサヴァ川とドラヴァ川沿いに住むスラブ族。

[6594] チェコの公、聖ヴァーツラフの殉教は、935年9月28日に起こった。

私たちの尊い父キリアクの聖伝

記念日9月29日

聖キリアコスはコリント出身であり[6595]、大聖堂の司祭ヨハネの息子であった。母の名はエウドクシアであった。彼はテオドシウス2世の治世の末期に生まれた[6596]。聖人の親族であるコリントの司教ペトロスは、彼がまだ少年だった頃に、彼を大聖堂の朗読者にした。朝から晩まで、そして晩から朝まで聖書の朗読に励みながら、キリアコスは聖書を学び、神が世界の初めから人類の救いのためにいかに英知をもってすべてを計画されたか、また、あらゆる世代において、神に喜ばれた者たちに偉大な栄誉を与え、彼らに偉大な栄光を授けられたことに驚嘆した。なぜなら、神はアベルをその捧げ物のゆえに栄光を与え（創世記4:4）、エノクについては、彼が神に深く喜ばれた[6597]ゆえに、楽園へ移されるという栄誉を与えられたからである。また、神はノアの義のゆえに、この人類の火花である[6598]を大洪水から守られた（創世記7:1–24、8:1–22）、アブラハムの信仰ゆえに彼を多くの国民の父とされた[6599]（創世記12:4–5）、メルキゼデクの善き祭司職を御心に適うものと示された[6600]（創世記14:18–20；ヘブライ人への手紙7:1–28）、ヨセフをその貞潔のゆえに高く評価し（創世記41:39–57）、ヨブを通じて全人類に忍耐の模範を示し（ヨブ記；ヤコブ5:10–11）、モーセを律法の制定者とし、ヨシュアに太陽と月の動きを止めることを許し（ヨシュア記10:12–14）、ダビデにおいて預言者、王、そして救い主キリストの先祖を現し、若者たちのためにバビロンの炉の炎を露に変えた（ダニエル書3:50）。とりわけキリアクは、キリストの無原罪の受胎と不可解な誕生について思いを巡らせ、処女が処女性を損なうことなくいかにして母となり、また神の御言葉がいかにしてその本質を変えずに人となり、十字架によって地獄を打ち負かし、誘惑者である蛇を打ち倒して、再びアダムを楽園へと導き入れたのか、と深く驚嘆した。これらについて思索を巡らせ、聖人の伝記を読みながら、キリアクは霊に燃え上がり、その心には神への畏れが宿った。彼は神に愛された聖人たちに倣おうと志し、どうすれば聖都エルサレムへ赴き、そこで世を捨てて、ただ神のみに仕えることができるかと考えた。そのような思いにふけっていたある日、日曜日の礼拝で、彼はその日に定められた福音書の言葉を耳にした。*「わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従いなさい」*（マタイ16:24）。キリアクは、この言葉が自分に向けられたものであると悟ると、直ちに教会を出て、誰にも自分の決意を告げることなく、船着き場のある岸辺へ向かった。そこでパレ

6595 コリントは、古代ギリシャで最も古く、有名で豊かな都市であり、ペロポネソス半島（ギリシャ南部）とギリシャ本土を結ぶコリント地峡に位置し、イオニア海とエーゲ海の間に広がるコリント湾の南東端にある、美しく肥沃な平野にありました。コリントにおけるキリスト教の始まりは、使徒パウロによってもたらされた。現在、古代コリントの遺跡は、現在のコリントの近く、クルントと呼ばれる場所にあり、その人口はわずか5000人ほどである。

6596 紀元後448年頃

6597 創世記5:24：*「エノクは神の御前に歩み、神が彼を御自身のもとに引き上げられたので、彼はいなくなった」*。この表現は通常、エノクが天に引き上げられたという意味で理解されている。「おそらく――とフィラレート大主教は述べている――エノクにおいては、その内なる人があらかじめ定められた恵みの年齢に達したとき、死すべきものが命に飲み込まれた（IIコリント5:4）のであり、それは私たちが『肉体の死』と呼ぶものよりも、はるかに高貴な方法によるものだったのだろう」。

6598 ノアは「人類の火花」と呼ぶことができる。それは、大洪水前の人類が全般的に堕落していた中で、彼一人だけが、まるで灰の中の火花のように、真の神への認識と義を保っていたからであり、また、大洪水の後、彼から数多くの子孫が生まれたからでもある。それは、一つの火花から大きな炎が燃え上がるのと同じである。

6599 「アブラハム」という名そのものが、「多くの父」を意味する。この名は、サラからイサクが生まれる前に、それまでアブラムと呼ばれていたアブラハムに、主が与えられたものである。

6600 サリムの王メルキゼデクは、同時に至高の神の祭司でもあり、王としての尊厳と祭司としての尊厳をその身に兼ね備え、主イエス・キリストの祭司職と王としての奉仕の先駆けとなった。ヘブライ人への手紙7:1–28。

スチナへ向かう船を見つけると、神への信頼を胸にその船に乗り込み、出航した。　キリアクは、新しいヤコブのように、神のためにすべてを捨てて父の家を出たとき（創世記28:7–10）、生後18歳であった。　まもなく彼は聖都エルサレムに到着した。そこではアナスタシウスが司教を務めていた。それは彼の司教就任8年目、皇帝レオの治世9年目のことであった[6601]。

聖地を巡礼した後、キリアコスは、聖シオンの近くに修道院を設立したエウストルギオスという名の神の僕を訪ね[6602]、彼に迎え入れられ、そこで冬を過ごした。修道士たちの功績に感銘を受けたキリアクは、自らも修道生活を送り始め、まるで階段を一段ずつ登るかのように、徳のある生活の頂点へと至っていった。　エウストルギオスの修道院に滞在する中、彼は多くの人々から、荒野に修道院（[6603]）を建立した聖エウフィミオスとその完璧な生涯について耳にした。そこで、彼は荒野を愛し、そこで暮らしたいと願っていたため、至福のエウストルギオスに、エウフィミオスの修道院へ行くことを許してくれるよう懇願した。　エウストルギオスはキリアクスに相応しい教えを授けた後、祈りと祝福を込めて、彼を聖エウフィミオスの元へ送り出した。エウフィミオスは、彼の中にやがて開かれるであろう神の賜物を見抜き、愛情を込めて彼を受け入れた。　まもなく、聖エウフィミオスは自らの手でキリアコスに修道服を着せ、ヨルダン川にいる聖ゲラシモスのもとへ送り出した。聖ゲラシモスは、主のもとへ旅立った偉大なるテオクティストの後を継いでいた。キリアコスがまだ若すぎると見た聖ゲラシモスは、彼に修道院の共同生活の中で暮らし、様々な奉仕に励むよう命じた[6604]。

キリアクはあらゆる労苦に耐える覚悟を示し、厨房で薪を割り、水を運び、食事を用意するなどの務めに従事した。概して、彼はあらゆる務めを感謝の念をもって、休む間もなく遂行し、それによって自らの体を酷使した。　というのも、昼間は修道院のために全力を尽くして働き、夜は祈りに明け暮れ、たまに少しの間だけ眠りに落ちることがあっただけだったからである。また、彼は非常に厳格に断食を行い、2日に1度しかパンと水を口にしなかった。　祝日に守られていた慣習に従って、たまたま少量のワインを口にすることがあっても、彼はまずそれを水で薄め、またオリーブオイルにはディルの汁を混ぜていた。

これほど若い年齢でこのような節制を見せたことに、聖ゲラシムは驚き、キリアコスを深く愛するようになった。ゲラシムには、聖四旬節の期間、ルヴァと呼ばれる人里離れた荒野へ赴く習慣があり、聖エウフィミオスも時折そこへ籠もっていた。　聖キリアコスを愛していたゲラシムは、彼にも特別な禁欲を実践する機会を与えるため、彼を荒野へ連れて行った。そこでキリアコスは毎週、ゲラシムの手からキリストの聖体拝領を受けた。こうして彼らは、ヴァイの週まで荒野の静寂の中に留まり、その後、魂にとって大きな益を得て修道院へと戻った。　しばらくして、尊者エウフィミオスが世を去った。聖ゲラシムは自身の独房にいながら、神の御使いたちが尊者の魂を喜びをもって天へと昇らせていくのを見たため、そのことを知った。　彼は直ちにキリアコスを連れてエウフィミオスの修道院へ向かい、そこで尊者エウフィミオスが主のもとで息を引き取っているのを見つけた。その尊い遺体を丁重に埋葬した後、ゲラシムは愛する弟子と共に自分の独房へと戻った。

[6601] 聖レウ1世はビザンツ帝国の皇帝であり、457年から474年まで在位した。聖アナスタシオス1世は458年から478年までエルサレムで総主教を務めた。聖キリアコスは、両親に内緒で465年頃にエルサレムへと向かった。

[6602] シオン――エルサレムの南西に位置する山で、エルサレムはこの山の上に築かれ、エルサレム要塞がそびえ立っている。聖書において、シオンは聖なる山、神の住まい、神の家と呼ばれており、しばしばエルサレムそのものと見なされる。本稿においても、その意味でこの名称が用いられている。

[6603] 聖エウフィミオス修道院は、エルサレムからほど近い場所にあった。

[6604] エウフィミオス大聖人は、まだラヴラの過酷な荒野の生活に備えが十分でなく、「大修道服」への叙任に値しないと見なした非常に若い修道士たちを、自身のラヴラには受け入れなかった。この「大修道服」はラヴラの隠遁者にとって必須のものであり、同時に修道院内での厳格な閉鎖生活も義務付けられていた。　一方、共同生活の修道院では、生活はいくつかの点でそれほど厳しくはなかった。

キリアクがパレスチナに到着してから9年目、神の偉大な御使いゲラシムは、この世の住処から永遠の住処へと旅立った。その時、27歳になっていたキリアクは、再び聖エウフィミオスの修道院へと戻った。そこは、かつて彼が聖人の聖なる御手から天使のような肖像画を受け取った場所であった[6605]。当時、修道院の院長（イグメン）はイリヤであった。キリアクは彼に人里離れた独房を願い出て、そこで沈黙を守りながら暮らすようになった。修道院で彼は、トマスという名の修道士という友を得た。トマスは偉大な断食者であり、修道生活に完璧を期していた人物であり、キリアクは聖霊によって彼に対して深い愛を抱くようになった。　二人は互いに恵みを受け合っていた。なぜなら、二人とも神の恵みに満ちていたからである。しかし、彼らが友として共に過ごす喜びは長くは続かなかった。神の御心によって、二人は引き離されてしまったからである。こうして、福者トマスは、修道院に必要な品々を購入するため、助祭フィドスによってアレクサンドリアへ遣わされた。　その際、マルティリウス司教から、アレクサンドリアの大司教ティモテイオス宛ての書簡が彼に託された[6606] [6607]。アレクサンドリアの大司教ティモテイオスは、訪れたトマスの内に宿る恵みを見抜き、彼を留めておき、按手礼を施してエチオピアの地の司教に任命した[6608]。その地へ赴いた聖トマスは、キリスト教の光をもってこの国の全地域を照らし、多くのしるしと奇跡を行い、自分に託された羊の群れの良き牧者となった。

友である修道士トマスを失った聖キリアコスは、深い沈黙の誓いを立て、まるで棺に葬られたかのように独房に閉じこもり、ただ神とだけ語り合いながら暮らした。そして、彼が助祭に叙階されたその修道院に、十年間留まった。　当時、エウフィミオス修道院とテオクティストス修道院の両方は、偉大なるエウフィミオスの規則に従い、同じ共同生活と一つの統治体制を保っていた。しかし、敵はこれらの修道院に動乱を引き起こし、両者の間に分裂と不和を植え付けた。　修道院間のこの分裂を嘆き悲しんだ聖キリアコスは、尊者ハリトンが設立・整備したスキイ修道院へと退き、そこで修道者の服従の務めを果たし始めた。パン屋や病院など様々な奉仕の場で4年間を過ごし、すべての長老たちから称賛を得た後、彼は助祭の務めを執ることを許された。 それから3年が経過した時、生後40年目に、キリアクは司祭に叙階され、その後カノナルクに任命された[6609]。彼はこの務めを18年間務め、 、スキイ修道院での生活は計30年以上に及んだ。 彼自身、カノナルクであった当時、食事をとっているところや誰かに怒りを露わにしているところを太陽に照らされたことはなかったと証言している。また、毎晩、独房で祈りを捧げる際、真夜中の賛美歌[6610] の鐘が鳴るまで、詩篇の朗読と詠唱を行っていたとも語っていた。

さらに厳格な生活を送りたいと願ったキリアクは、生後70年の時に荒野へと退隠した。彼は一人の弟子を連れて、長い間荒野を旅し、ナトゥフと呼ばれる地域にたどり着き、そこで定住した。その砂漠の植物は極めて苦かったため、生計を立てる手段が何もなかった彼は、神に祈りを捧げ、神の慈悲を信じて弟子にこう言った。

[6605] 「天使の模範」とは、修道者の位に叙任されることを指し、そこでは人々は、いわば無形の天使に倣うように、すべての時間を神への思索、祈り、そして肉欲を克服するための様々な高潔な霊的行いに捧げなければならない。

[6606] ここでいう「司教」とは、478年から486年まで在位したエルサレム総主教マルティリウスを指すものと解される。

[6607] ティモテイオス2世・サロファキイロス――460年から482年にかけてアレクサンドリア総主教を務めた人物。

[6608] エチオピア――エジプトの南に位置していた広大な国の古代の名称。ここでは主に、4世紀にはすでにキリスト教が広まっていたアビシニアを指す。

[6609] 「カノナルク」とは、定められた聖歌の先唱者を意味する。古代、修道院の貧困により礼拝用聖書を必要な部数用意することができず、また聖歌隊の中に読み書きのできる者が少なかったため、聖歌を口述に従って歌う習慣が定着した。ある修道士が書物を手に持ち、一節ずつ大声で読み上げると、他の聖歌隊のメンバーは、その一節が読み上げられるたびにそれに合わせて歌った。「カノナルハニエ」は、今日に至るまで修道院に受け継がれている。

[6610] ビロとは、金属製または木製の板のことで、古代には、また地域によっては現在でも、信者を礼拝に招集するための鐘の代わりとして用いられている。

「行け、わが子よ、苦い草を摘んで煮てみよ。全能の神は祝福されている――神は、その草をもって私たちを養ってくださるだろう！」

弟子は聖人が命じたことを実行した。そして、神は、御自身に希望を託したすべての人々を養われる方として、その草の苦味を甘味に変えられ、それは四年間、彼らの糧となった。四年の終わりに、砂漠で羊を放牧していた羊飼いたちから、フェクイ出身のコミトの長老、[6611] がキリアクについて耳にした。　彼はロバにパン入りの袋を載せ、キリアコスのもとを訪れ、祝福と祈りを求めた。祈りを捧げた後、キリアコスは彼と魂に有益な事柄について語り合い、その後、祝福を与えて彼を見送った。それ以来、彼らは長老が運んできたパンを糧とするようになった。　しかしある日、キリアクの弟子が、聖なる長老の指示なしに薬草を煎じ、それを口にしたところ、あまりの苦味に、一言も発することができなくなってしまった。　彼が言葉を失った理由を悟った長老は、彼のために祈りを捧げ、聖なる秘跡を授け、それによって彼の病を癒した。その際、彼は彼に次のように教えを説いた。

「神が常に奇跡を行われるわけではない。それは、私たちが苦難に遭い、極度の困窮に陥った時だけのことだ。パンがなかった時、神は私たちがそれを食べられるよう、その薬草を甘くしてくださった。しかし今、私たちにはパンがある。苦い薬草を甘いものに変えるような奇跡が、果たして必要だろうか？」

ところが、パンが底をつき、再び食糧が不足してしまった。その時、長老は再び弟子に言った。

「神は祝福された、わが子よ。草を摘んで茹でなさい。」

弟子はその指示に従ったが、食事の時間になっても、また苦しみを受けることを恐れて、それを口にしようとはしなかった。　一方、長老は食事に十字の印を結び、まず自ら一口を口にした。すると、弟子も長老を見つめながら勇気を振り絞って一口を口にした。二人は何の害も受けず、以前と同じようにその料理が甘く感じられた。それ以来、二人はその薬草を糧とするようになった。

キリアクが荒野で過ごして5年目のある日、フェクイ出身のある男がこの聖人の噂を耳にした。彼は、新月のたびに凶暴な悪霊に苦しめられていた息子を連れてきて、聖人に憐れみをかけてその息子から邪悪な苦しめ手を追い出してくれるよう懇願した。　祈りを捧げた後、キリアコスは病人に聖油を塗り、その体に十字の印を描き、それによって悪霊を追い出した。そして、その男は回復した息子を連れて家に戻り、この奇跡について人々に語り広めた。

聖人の評判はその国中に広まり、多くの人々が彼のもとに集まるようになった。ある者は祝福を求め、ある者は癒やしを求め、またある者は彼と語り合い、自分の魂の益を得たいと願った。　世間の名声を避けるため、聖キリアクスはルヴァと呼ばれる内陸の荒野へと去り、そこで五年間を過ごした。その間、メラグリアと呼ばれる植物の根や、葦の若芽[6612] を糧としていた。しかし、そこでも彼を見つけ出した者たちがおり、病者や悪霊に苦しむ人々を彼のもとに連れてきた。聖人は、十字の印と祈りによって、すべての人を癒した。

ここでも安らぎを見出せなかった聖人は、ルヴァを去り、隠遁者が一人もいない人里離れた秘境に定住した。この場所はスサキムと呼ばれ、スキイ修道院 から90ポプリシュ[6613] の距離にあった。かつてはここに二つの深い川が合流していたが、その後干上がり、その跡には深く広い川床だけが残っていた。　ある人々の説によれば、それらはイファムの川であり、ダビデが詩篇の中で神に語りか

[6611] コミティとは、王の護衛兵を指す呼称であった。その後、この称号は、プロコンスル、地方長官、総督といった最高位の公職者の随行員である公職者たちに用いられるようになった。また、コミティの職務には、後に国庫への税金の徴収も含まれるようになった。

[6612] メラグリアとは、パレスチナに自生するあまり知られていない荒野の植物で、苦味がある。ここでいう「葦」とは、いわゆる「芳香葦」を指す。これは、芳香があり心地よいが、味は苦い根を持つ植物である。

[6613] 90ポプリシュは、我々の計算では約124ヴェルストに相当する。

け、「*あなたは力強い川を干上がらせた*」[6614]（詩篇73:15）と述べたものだったという。そしてキリアクはそこで七年間を過ごし、天使に等しい生活を送った。

神の御許しにより、その地方に飢饉と疫病が襲った。迫り来る災難を恐れたスキイ修道院の修道士たちは、聖キリアコスの元を訪れ、彼らの修道院に来てくれるよう懇願した。彼らは、聖キリアコスが共にいれば、神の怒りが彼らから遠ざかると信じていたからである。そして、その通りになった。　修道士たちの願いに応じて修道院に到着した聖キリアコスは、かつて聖ハリトンが住んでいた修道院の近くの隠遁者の洞窟で暮らすようになった。

当時、オリゲネス派の異端[6615]が勢いを増していたが、聖キリアコスはその根絶に多大な労力を注ぎ、不敬虔な異端の教えを打ち破り、惑わされた者たちを祈りと言葉によって真の道へと導き、正信者たちの信仰を強固なものにした。この伝記の著者キリルは、次のように述べている。

「当時、私は大エウフィミオスの修道院を出て、聖サヴァの修道院にいる敬虔なヨハネ・沈黙者司教のもとを訪れた。　私は彼から、聖都で異端者たちによって引き起こされた争乱をアッバ・キリアコスに知らせるため、また、オリゲネスと同様にキリストに対する冒涜を繰り返す異端の指導者たち、ノーンとレオントイスの高慢を打ち砕くよう、神に絶え間ない祈りを捧げてくださるよう懇願する手紙を託された。　スクイの修道院に到着すると、私は聖ハリトンの洞窟へ向かい、至福のキリアコスに礼拝を捧げた後、手紙を手渡すと同時に、あの驚くべき沈黙のヨハネスから命じられたことを自らも口にした。すると聖人は私にこう答えた。

「あなたを遣わした父は悲しむ必要はない。まもなく、神の御慈悲により、我々は異端の没落を目にするだろう。」

そして、彼はオリゲネス派の教義を説くノーンとレオントイの早すぎる死を予言した。　教訓に満ちた会話を続けながら、キリアコスはオリゲネス派の狂気と欺瞞を私に明らかにし、神の啓示によって、この異端の害悪と、それに惑わされた者たちの破滅がどのように示されたかを語った。私たちの会話から、私が偉大なるエウフィミオスのラヴラ出身の修道士であることを知ると、その至福の聖人はこう言った。

「さて、兄弟よ、あなたは私と同じ修道院の出身ですね。」

そして彼は、私の魂の益となるようエウフィミオスについて多くのことを語り始め、その甘美な語り口で有益な話をもって私の魂を満たした後、平穏のうちに私を見送ってくれた。まもなく、至福のキリアクの預言は実現した。異端の指導者たちは突然この世を去り、異端の集団は崩壊し、正教徒に対する迫害も終焉を迎えたのである。　そこでキリアコスは、心配事から解放されると、尊者ハリトンの洞窟を後にし、再びスサキムへと戻った。それは彼が九十九歳の時であり、そこで八年間、沈黙の中で過ごした。

再び尊者聖なる御顔を拝し、その甘美な対話を味わいたいと願った私は、スキイ修道院へ向かい、そこで彼の弟子ヨハネを見つけると、彼と共にスサキムへ、至福のキリアコスのもとへ向かった。その場所に近づいたとき、巨大で恐ろしいライオンが私たちを出迎えた。　その獣に私が恐怖を覚えているのを見て、聖人の弟子ヨハネは私にこう言った。

「恐れるな、キリル兄弟よ。この獅子は我らの父に仕える者であり、彼のもとを訪れる兄弟たちに何の害も及ぼさないのだ。」

[6614] イファムス――ヘブライ語から訳すと、「通り抜けられない、深い、速い」という意味である。

[6615] オリゲネス――アレクサンドリア教会の著名なキリスト教の教師（254年没）――は、その並外れた知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡と称された。　多くの傑出した教父たちは、オリゲネスの神学上の著作と功績に対して深い敬意を払っていた。しかしその後、彼は生前にアレクサンドリアで開催された2回の地方公会議で、また死後には543年のコンスタンティノープル地方公会議において、異端者として非難された。　オリゲネスは、自身の非正統的な見解を不変の真理として主張することはなかったものの、キリスト教会の多くの真理について誤った考えを抱いており、そのため、主要なキリスト教の教義に対する彼の確固たる信念を疑う者もいた。

確かに、その獅子は私たちが長老のもとへ向かっているのを見て、道から退いた。私を見ると、アッバ・キリアコスは言った。

「ほら、私の修道院の兄弟、キリルが私のところへやって来た。」

祈りを捧げた後、私たちは座って語り合いを始めた。すると、彼の弟子であるヨハネが彼に言った。

「父よ！キリル兄弟は、ライオンを見てとても怖がっていました。」

すると、長老は私にこう言いました。

「恐れるな、キリルよ。そのライオンは私と共に暮らしており、このわずかな野菜を野生の山羊から守ってくれているのだ。」

その後、聖人は偉大なエウフィミオスや、徳ある生活を送った他の荒野の父たちについて多くを語ってくださり、それから私に食事を用意するよう命じられた。私たちが食事をしていると、ライオンがやって来て私たちの前に立ち止まった。すると長老は立ち上がり、ライオンにパンの切れ端を渡し、こう言った。

「行け、野菜を守ってくれ。」

そして私にこう言いました。

「ほら、子よ、このライオンが見えるか？　彼は野菜を守るだけでなく、ここから強盗や野蛮人たちも追い払ってくれるのだ。邪悪な者たちがこの貧しい場所を何度も襲ったが、ライオンが彼らを追い払ってくれたのだ。」

これを聞いて、私は驚き、野獣たちを羊のように御自分の聖者に従わせた神を賛美した。私は彼のもとで一日を過ごしたが、多くのことを学んだ。翌朝、祈りを捧げた後、彼は私に祝福を与え、平安のうちに送り出し、弟子に私を見送るよう命じた。　聖人の元を後にすると、道中で一頭のライオンに出くわした。それは横たわって野生の山羊を食い荒らしていた。その横を通り過ぎる勇気がなく、私たちは立ち止まった。するとライオンは、私たちが立ち止まっているのを見て、獲物を置き去りにし、道から退いて、私たちを通してくれた。

聖者が住んでいた場所は乾燥して水がなく、井戸もなかった。そこで聖者は岩に窪みを掘り、冬にそこに水を貯めておき、その水は夏の間、自身と野菜の水やりに十分だった。しかしある年の7月、猛暑のため、岩に貯めた水が干上がってしまった。　水不足を嘆き、聖人は天を仰ぎ、次のように祈った。

「神よ、荒野で渇きに苦しむイスラエルに水を飲ませた方（出エジプト記17:1–6；民数記20:2–12）よ！この荒野において、私の貧しい肉体の必要を満たすためのわずかな水をも、私に与えてください。」

するとたちまち、スサキムの頭上に小さな雲が現れ、聖人の住まいの周囲に雨が降り、岩と岩の間にあったすべての窪みを満たした。かくして、神は御自分のしもべの祈りを速やかに聞き入れられたのである。

「ここで、この伝記の著者であるキリルが、至福のキリアコの弟子であるヨハネ神父から聞かされたことについても述べておくのが有益だと考える。私たちが彼と共に荒野を歩いていたとき、彼はある場所を指さしてこう言った。

『これが至福のマリアの住まいだ』

私は彼に彼女について語ってほしいと頼むと、彼は語り始めた。

『少し前のことですが』と彼は言った。『私が友であるパラモン兄弟と共にキリヤコス神父のもとへ向かっていたとき、遠くに立っている人影を目にして、それは何らかの隠者だろうと思いました。　私たちは彼に敬意を表そうと急いで近づいたが、その場所に近づいた途端、彼はたちまち私たちの前から姿を消してしまった。　それが悪霊だと思い、私たちは少なからぬ恐怖に襲われ、そこで祈りを捧げました。祈りを終え、辺りを見回すと、地面に洞窟があるのを見つけ、あれは悪霊ではな

く、私たちから身を隠していた神の僕の一人だったのだと気づきました。　洞窟のすぐそばまで近づくと、私たちは彼に姿を現し、私たちへの祈りと有益な対話を絶やさないよう懇願し、呼びかけました。すると、洞窟の中から次のような答えが聞こえてきました。

「私からどんな助けを求めているのですか？私は罪深く、ただの女に過ぎません。」

そして彼女は私たちに尋ねた：

「どこへ行くのですか？」

私たちはこう答えました：

「隠遁者のキリアコ神父のもとへ向かっています。どうか、神の名にかけて教えてください。あなたの名前は？どのように暮らしているのですか？どこから来て、なぜここへ来たのですか？」

すると彼女はこう答えた。

「お二人は、行こうとしていたところへ行ってください。帰ってくる時には、すべてお話ししますから。」

私たちは彼女にこう言い聞かせた。

「あなたの名前や、どんな生活を送っているのかを知るまでは、ここを離れません。」

私たちが立ち去る気がないのを見て、彼女は洞窟から顔を出さずに、自分のことを語り始めた。

「私の名はマリア。かつてはキリストの復活教会で聖歌隊の一員[6616]として歌っていたが、悪魔は私を利用して多くの人々を誘惑した。　私は、誰かの邪悪な思惑や堕落の原因となってしまわないよう、またそれによって自分の罪を増やさないよう、神に熱心に祈り、そのような誘惑から私を救ってくださるよう願いました。　そこで、ある日、心を動かされ、神への畏れに満たされた私は、シロアムへ行き、そこで水瓶に水を汲み、水に浸した豆の入った小さな籠も持っていき、神の御加護に身を委ねて、夜、聖都から荒野へと旅立った。　神は私をこの地へ導いてくださることをお許しになり、こうして私はすでに十八年間ここに住んでおります。神の御慈悲により、これまで壺の水が尽きることも、かごの豆が減ることもありませんでした。さて、どうかキリアコ神父のもとへ行き、用事を済ませてください。そして、お帰りになる際には、この貧しい私を訪ねてください。

これを聞いて、私たちはキリアク神父のもとへ行き、聖マリアから聞いたことをすべて話しました。キリアク神父は驚き、こう言いました。

「わが神よ、あなたに栄光あれ！　あなたには、男性だけでなく女性も含め、ひそかにあなたに仕える隠れた聖人たちがどれほど多くおられることか！　さあ、わが子らよ、神の御心にかなうその女性のところへ行き、彼女があなたたちに語ることを心に留めておきなさい。」

尊者キリアクのもとから戻る途中、私たちは至福のマリアの洞窟に着き、彼女を呼びかけ、こう言った。

「神のしもべマリアよ！　あなたの命じられたとおり、私たちは参りました。」

しかし、返事はありませんでした。洞窟の入り口に入り、私たちは祈りを捧げましたが、マリアは私たちに応えてくれませんでした。そして、洞窟の奥へと進むと、マリアが主のもとで息を引き取っているのを見つけました。彼女の聖なる御体からは、素晴らしい香りが漂っていました。　彼女に身に着けてもらったり、埋葬したりできるものを何も持っていなかったので、私たちは修道院へ行き、必要なものをすべて持ち帰った。その祝福された方に衣を着せ、洞窟に葬り、入り口を石で塞いだ。

このようにヨアン神父は私に語ってくれた。私は、その神のしもべのこのような生涯に感嘆し、これを書き記して、聞く者たちの教訓とし、また、御自身を愛する者たちに忍耐を与えてくださる、人を愛する神の栄光のために捧げようと心に決めたのである」。

[6616] 詩篇歌手の務めは、キリスト教徒の礼拝の集いにおいて詩篇を朗読することでした。

スサキマでの滞在8年目の終わり頃、尊者キリアコスはすでに生後107歳という高齢に達していた。スキイ修道院の修道士たちは集まり、互いに相談し合った。

「このような尊い父が、――と彼らは言った――私たちの修道院から遠く離れた場所でこの世を去ることを許してはならない。そうでなければ、私たちは尊い最期を知ることもできず、彼の最後の祝福を受けることもできなくなるだろう。」

彼らは聖人のもとへ赴き、スサキマから、修道院の近くにある聖ハリトンの洞窟へ移るよう、長い間懇願した。そこは、かつて彼がオリゲニストたちと闘っていた頃に暮らしていた場所であった。ついに彼らの願いを受け入れたキリアクは、神のもとへ旅立つ2年前に、ハリトンの洞窟に身を寄せた。

「私のような取るに足らない者ですが」と著者は述べる。「私はよくそこを訪れ、彼を慰め、その聖なる語りかけや偉大な行いから、私の魂に大きな恵みを受けました。高齢にもかかわらず、聖キリアクは体が丈夫で、勤勉かつ非常に活動的でした。決して怠けることなく、祈るか、働くかのどちらかでした。　彼は誰に対しても親しみやすく、洞察力に富み、教訓に満ち、正統な信仰を持ち、聖霊と神の恵みに満たされていた。そして、主が聖人の多くの労苦の末、彼を天の安息へと移すことをお許しになったとき、尊者は肉体の病に倒れたが、その状態は長くは続かなかった。　その修道院のイグメーンと兄弟たちを呼び寄せ、彼は魂の救いについて説教し、皆に口づけをして祝福を与えた。　その後、天を仰ぎ、両手を広げ、すべての兄弟たちのために祈りを捧げ、その尊く聖なる魂を主の御手に委ねた。それは、[6617] 年の9月29日のことである。彼は計109年を生き抜いた。

兄弟たちは彼を深く悼み、ふさわしい詩篇と賛美歌を捧げながら、神を賛美し、この神の御心に適う者の長年にわたる労苦を偲びつつ、その聖なる遺体を葬った。

どうか、私たち罪人からも、今、そして常に、そして世々限りなく、私たちの神に栄光がありますように！ アーメン。

コンダク、第8調：

強き戦士であり守護者であるあなたを、聖なる月桂樹は常に称え、夏の記念祭を祝う：[6618] 。しかし、主への大胆さを持つ者として、迫り来る敵から私たちを守り、こう呼びかけさせてください。「喜びなさい、至福の父よ」。

聖殉教者ダダ、ガヴェッダイ、カズドイの記念日

記念日：9月29日

ペルシャ王サポル（聖殉教者ガヴェッダイの父）の治世の頃、王宮にはダダという名のキリスト教徒が一人住んでいました。彼は王室の重臣の中でも筆頭であり、王から深く愛され、尊敬されていました。　王は、彼がキリスト教徒であることを知らずに、ペルシャ王国の領土の一つを統治するよう彼を派遣した。ほどなくして、ダダがキリストを信仰しているという報告が王のもとに届いた。そこで王は、それが事実かどうかを調査するため、高官アンドロメリヒを派遣した。それが事実であることを確認したアンドロメリヒは、そのことをサポルに報告した。　その後、王はこの高官に、王国内のキリスト教徒に対する全権を委ね、自らも息子のガヴェッダイと共にダダを尋問し始めた。彼との会話を通じて、ダダが全身全霊で主イエス・キリストを信じ、そのために死を望んでいることを、さらに明確に確信した。　そこで、大きな焚き火が焚かれ、聖ダダをその中に投げ込もうとした。

[6617] 聖キリアコスは556年に亡くなった。

[6618] すなわち、毎年、あなたの記念日が祝われている。

その焚き火はあまりにも巨大で、それを見た者たちは皆、恐怖に震えた。聖ダダが激しく燃え盛る炎に近づくと、彼は十字を切った。　すると突然、皆が火が消え、その代わりに水が流れ出ているのを見て、この偉大な奇跡に驚嘆した。王子のガヴェッダイは聖なる殉教者に尋ねた。

「誰があなたにそのような魔術を教えたのですか？」

聖ダダは彼にこう答えた。

「もしあなたも、私が従っている教えに従おうとするなら、あなたも同じような奇跡を行うことができるようになるでしょう。」

「まさか」とガヴェッダイは尋ねた。「もし私があなたのキリストを信じるなら、私も同じような奇跡的なしるしを行えるようになるのですか？」聖ダダはそれに対してこう言った。

「行えるだけでなく、キリストと共に王座に就くことになるだろう。」

そこでガヴェッダイは大きな焚き火を焚くよう命じ、キリストの御名を呼び求めたところ、火は消え去った。この奇跡を目撃した王子（ガヴェッダイ）は、聖ダダの足元にひれ伏し、キリストへの信仰を告白した。王の重臣アンドロメリヒは、この一連の出来事をサポル王に報告した。　息子のガヴェッダイがキリストを信じていることを知った王は、四人の家来に、王子を節のある棒で打つよう命じた。この四人が長時間の殴打で力尽きると、王は他の者たちに彼らの代わりを務めるよう命じた。　鞭打ちの間、聖ガヴェッダイは神に助けを求めた。すると天使が現れ、彼を力づけ、こう言った。

「勇気を出せ、私はあなたと共にいる。」

その後、聖なる殉教者は牢獄に投じられ、そこで五日間を過ごした。　まもなく、サポル王は、自分の王国内のすべてのキリスト教徒を裁く権限を、あるガルガルという者に委ねた。ガルガルは、聖ガヴェッダイを牛革の帯で打つよう命じた。そのような拷問に耐えながら、聖なる殉教者は先祖代々の信仰を貶めた。そこでガルガルは、彼の体から足元から頭まで二本の革の帯を剥ぎ取るよう命じ、こう言った。

「お前のキリストが、お前を癒やしに来るかどうか見てやろう。」すると、聖なる殉教者は突然、完全に健康を取り戻した。ガルガルは彼を牢獄に閉じ込めたが、神の力によって、その束縛は解けてしまった。裁判官は怒りに我を忘れ、この一連の出来事を王に報告しに行った。王は彼にこう言った。

「その不信心者を殺せ。彼はもはやわが子ではなく、キリストを信じたゆえに悪意に満ちた者となったのだ。」

ガルガルは鉄の棒を赤熱させ、それを使って聖なる殉教者の頭を耳から耳へと貫いた。しかし、殉教者が祈っている最中、天使が現れ、その棒を引き抜き、苦しむ聖人を癒やした。それを見たガルガルは、鋭い鉄の針で彼の体を刺し続けながら、こう言い放った。

「お前のキリストが来て、お前を癒やすかどうか、見てみよう。」

しかし、聖ガヴェッダイは再び祈りを捧げ、癒やされた。この一連の出来事を目の当たりにした牢屋の看守たちは恐怖に駆られ、こう叫んだ。

「キリスト教の神は偉大だ。」

しかし、裁判官はさらに激怒し、殉教者の肩に鉄の針を突き刺し、彼を吊るすよう命じ、第三時から第九時までその姿勢のまま放置させた。　聖人は吊るされたまま祈り続けた。その後、彼は降ろされ、再び牢獄へと連れ戻された。母と姉は牢獄で彼に面会したかったが、王を恐れて近づくことができなかった。一方、サポル王は殉教者が生きていることを知ると、彼に新たな拷問を加えた。彼は、殉教者の頭から皮を剥ぎ取り、顔を覆い隠し、再び牢獄に閉じ込めるよう命じた。　聖人はこれらすべての苦難に耐えながら、神を賛美し続けた。殉教者がまだ生きていることを知った王は、彼の手足の爪を引き抜き、歯をすべて打ち砕くよう命じた。再び彼を牢獄に閉じ込めると、王は彼に水を飲ませたり、誰かを会わせたりすることを禁じた。

殉教者の姉はこっそりと牢屋に入り、彼に水を飲ませたが、処刑を脅して看守にそのことを口外しないよう命じた。あらゆる苦しみの中でも、聖なる殉教者は喜びを保ち、彼を訪ねてくる人々のあらゆる病や不調を癒やし、皆はそのことに驚嘆した。

その頃、多くの罪を犯して処罰された魔術師ガルガルという者が、同じく牢獄に囚われていた。彼は聖ガヴェッダイの忍耐と、彼が成し遂げた奇跡を目の当たりにすると、その足元にひれ伏してこう言った。

「お願いだ、神のしもべよ。どうか、あなたのキリストの御前で、私を覚えていてください。」

聖人は彼にこう答えた。

「彼を信じなさい。そうすれば、彼はあなたのすべての悪からあなたを救い出してくれるでしょう。」

ガルガルは叫んだ。

「主イエス・キリストよ、私はあなたを信じます！」

その後、彼はガヴェダイに加わった。翌日、拷問官は二人を自分の元へ連れてきて裁くよう命じ、ガルガルの服を脱がせて、棒で打ち据えた。打たれている間、殉教者は天を見上げ、こう祈った。

「主イエス・キリストよ、御名のゆえに私は苦しんでいます。私を強めてください！」

そう言い終えると、彼は主のもとへ息を引き取った。一方、聖ガヴェダイは回転する車輪の上に載せられ、両足の皮を剥がされた。その後、赤熱した鉄のハンマーで彼の手の筋肉を焼き付けられ、再び牢獄に投げ込まれた。

そこにいた囚人たちは、彼の傷口から流れ出る血を身に塗り、自らの傷を癒やされた。そして、すべての病人は癒やされ、神を賛美した。ガルガル公爵はこれを聞いて、信じようとしなかった。しかし、15日が経過して牢獄から連れ出された聖なる殉教者が、無傷で完全に健康であることが判明したとき、彼は大きな恐怖に襲われた。そこで彼は、聖人を樹脂と硫黄で満たされた灼熱の釜に投げ込むよう命じたが、それでもなお殉教者は無傷のままであった。

側近たちと相談した後、拷問官は聖なる殉教者を十字架に磔にするよう命じ、その後、大勢の群衆が見守る中、長い間弓矢を彼に向けて放ち続けた。すると、新たな輝かしい奇跡が起こった。聖人自身が無傷だっただけでなく、彼の体に放たれた矢そのものが跳ね返り、射手たちを傷つけたのである。　この一連の出来事は、民衆を恐怖に陥れた。このことが王に報告された。王は、聖ガヴェッダイを慰めるために、娘のカズダヤを遣わした。　カズドヤはガヴェッダイのもとを訪れ、彼に起こったすべての出来事を目の当たりにすると、彼から教えを受けた彼女は自らキリストを信じるようになった。サポル王は激しく怒り、娘を地面に引きずり下ろして棒で打ちのめすよう命じ、その後、彼女もまた牢獄に投げ込まれた。カズドヤは牢獄に横たわり、傷の痛みに耐えながら、聖ガヴェッダイにこう言った。

「私がこの苦しみ耐え抜けるよう、私のために祈ってください。」

聖なる殉教者は彼女にこう答えた。

「キリストへのあなたの信仰があなたを助けてくれるでしょう。悲しむことはありません。私は主を信頼しています。主の御心により、この苦しみはあなたには及ばず、あなたはこれ以上、他の苦しみを受けることはないでしょう。」

サポル王は、聖なる殉教者を連れ出し、手足を縛らせ、その後、馬の闘技場の真ん中に放り投げ、一晩中、聖人が馬に踏みつけられるように命じた。　しかし、神の恵みにより、聖なる殉教者は馬たちから無傷で守られ、そのことを神に感謝した。翌日、聖人が縛りを解かれ、全く無傷であるのを見て、皆はこの奇跡に驚嘆した。そこで、人々は燃えさかる炭火で彼を焼こうとしたが、彼はひた

すら祈り続け、絶え間なく喜びをもって主を賛美した。　一方、キリスト教徒であり、王の怒りを恐れてその場に立っていたダディウスとアウディウスは、聖殉教者の苦難を密かに記録していた。聖人は彼らにこう言った。

「もし可能なら、私が洗礼を受けられるよう、水と油を持ってきてください。もしそれが不可能なら、主が私の罪を赦してくださるよう祈ってください。」

すると、小さな雲が殉教者の頭上に水と油を注ぎ下ろした。そして雲の中から声が聞こえた。

「神のしもべよ、あなたはすでに聖なる洗礼を受けたのだ！」

すると、殉教者の顔は太陽のように輝き、空気に芳しい香りが漂った。　この声を聞いた聖ガヴェッダイは、神に感謝し、神を賛美した。すると、ガルガルは鋭い槍で彼の体を突き刺すよう命じた。聖なる殉教者は数時間にわたりこの苦痛に耐え、ついに祈りを口にしながら、その魂を主の御手に委ねた。　ガルガルは、その遺体を三つに切り分け、四方八方に散らすよう命じた。かつて司祭であったダディウスとアヴディウス、そして助祭のアルマザットは、その聖なる遺骸を大いなる敬意をもって受け取り、自宅へ運び、香油を塗って、神を賛美しつつ畏敬の念をもって埋葬した。　また、聖なる栄光あるダドゥ、王の親族は、以前から多くの拷問を受けていたが、ついに四つに切り裂かれ、こうして主のもとで息を引き取った。　一方、神を愛する者たちは彼の遺体を運び出し、尊厳をもって整え、特別な場所に安置した。その夜、前述の男たち（ダディ、アヴディ、アルマザト）が共に賛美歌を歌っていると、真夜中の時刻に聖ガヴェッダイが彼らの真ん中に現れ、こう言った。

「主において力強くあれ、兄弟たちよ。」

彼らはその御姿を見て大いに喜びました。すると聖人は再び彼らにこう言いました。

「あなたがたが行ったことに対して、主が報いを与えてくださいますように！」

そして、ダディイに顔を向け、彼にこう言った。

「私の頭から油の入った角を取り、私のキリストの聖体を少し受け取って、王宮に入り、私の妹カズダに油を注ぎ、その後、彼女にキリストの聖体を授けてください。」

ダディウスは聖殉教者の言葉通りに行い、彼女に洗礼を授け、聖体拝領をさせながらこう言った。

「主の再臨まで、安らかに眠れ、姉妹よ！」

すると、主の天使が彼女の魂を迎え入れ、彼女は天へと移された。母親が彼女の元へ駆けつけたとき、彼女はすでに息を引き取っていた。そこで母親は王のもとへ行き、こう言った。

「ほら、あなたはなんと非人道的で残酷な人なのか――自分の実の子供たちさえも容赦しなかったではないか！　あなたの息子は多くの苦しみを受けた末に殺され、娘もまた殺されたのだ。それを喜べ！　あなたの冷酷さに嘆き悲しめ！　しかし、このように早すぎる死を遂げたあなたの子供たちは、もはやあなたの怒りを恐れることはない。」

妻のそのような言葉を聞いたが、残酷で非情な王は、彼女が涙ながらにこれらすべてを語ったにもかかわらず、少しも悲しむことはなく、相変わらず頑なで残酷なままであった。　彼のそのような非人道的な振る舞いを見て、王妃は貴重な香を取り、娘の聖なる遺体に乳香を焚き、王の深紅の衣をまとわせ、息子のガヴェッダイの遺体の隣に横たえた。そして、静かに泣きながら、哀れみを込めてこう叫んだ。

「愛しい我が子たちよ！　あなたがたがキリストと共に喜びを分かち合うその日、喜びの日には、私、あなたがたの母のことを思い出してください。そうすれば、この罪深い私も、キリスト・神の栄光の中で、罪の赦しを得ることができるでしょう！」[6619]

[6619] 聖殉教者ダダ、ガヴェッダイ、カズドイの苦難と殉教は、4世紀半ば頃に起こった。

聖テオファンの記念日

記念日：9月29日

ガザの町[6620] には、テオファンという名の裕福で、非常に慈悲深い男が住んでいた。彼は旅人を迎え入れ、休ませ、その他にも多くの善行を行っていた。しばらく時が経つと、彼の全財産は貧者や困窮者に配り尽くされ、彼自身も完全に貧しくなってしまった。しかし、彼はそれを嘆くことはなく、ただ自分の罪について嘆息するばかりであった。　その後、神の御許しにより、彼は激しい病に倒れ、手足は水腫で腫れ上がり、腐り始め、そこから大量の膿が流れ出た。しかし、彼はこれらすべてを謙虚に耐え忍び、神に感謝し、神を賛美し続けた。　やがて彼の死期が近づくと、激しい嵐が吹き荒れ、埋葬のために彼の遺体を家から運び出すことさえできなくなった。

彼の妻は、苦々しい涙を流しながら叫んだ。

「ああ、私の主よ、私はどうすればよいのでしょうか？　どうやってあなたの遺体を埋葬のために運び出せばよいのですか？」

すると彼は彼女にこう答えた。

「泣かないでくれ、妻よ。これまで試練が続いていたが、今や慈悲深い神からの憐れみが訪れるのだ。なぜなら、私が息を引き取るその瞬間、神の御心により、嵐は止むのだから。」

そして、まさにその通りになった。彼が魂を神の御手に委ねたその瞬間、大地も空も完全な静寂に包まれた。近所の人々がやって来て、彼の遺体を清め始めたところ、その体には傷や腫れ物が一つもなかったのを見て、彼らは敬虔な気持ちで彼を葬った。　四日が過ぎた後、彼はある人の夢に現れ、自分の墓の墓石を取り除くよう命じた。それが行われると、彼の遺体から素晴らしい香りが広がり、膿の代わりに聖油が流れ出し、聖テオファンの聖遺物に訪れ、あるいは運ばれてきたすべての病人を癒した。

10月13日

9月30日（旧暦）

10月

大アルメニアの司教である聖殉教者グリゴリオスと、彼と共に殉教した三十七人の処女たちの生涯と受難

記念日：9月30日

[6620] ガザは、小アジアの南シリアに位置する重要な沿岸都市であり、かつてはペリシテ人の支配下にあったが、世界最古の都市の一つである。

大アルメニアの布教者である聖グリゴリウス（[6621] ）は、高貴で名門の家系に生まれながらも、不信仰の闇の中にいた両親のもとで育った。父のアナクはパルフィア族（[6622] ）の出身であり、ペルシア王アルタバンの親族であり、その弟であるアルメニア王クルサルの親族でもあった。　アナクがアルメニアに移住したのは、次のような経緯によるものであった。ペルシア王国がパルティアの支配下に入り、パルティア人のアルタバーンがペルシア王となった際、ペルシア人たちは異民族の支配下にあることを苦々しく思っていた。　この頃、ペルシアの最も高貴な貴族の一人であったアルタシルは、あらかじめ友人や同志たちと合意した上で、アルタバヌス王に対する反乱を扇動し、彼を殺害して、自らペルシア王位の座に就いた。　アルメニア王クルサールは、実弟であるアルタバンの殺害の報を聞くと、深く悲しみ、アルメニアの全軍を召集してペルシアへ出兵し、兄弟の血が流されたことへの復讐を果たした。　10年間にわたり、ペルシアはアルメニア人の攻撃にさらされ、彼らから甚大な被害を受けた。深い悲しみと困惑に陥ったアルタシールは、敵の攻撃をどのように撃退すべきかについて貴族たちと協議し、 のクルサールを殺した者を自身の共同統治者にすると誓った。 王が招集した会議には、グリゴリウスの父アナクも出席しており、彼は戦争をせずに、ある巧妙な策略によってクルサールを倒し、殺すと約束した。これに対し、アルタシールは彼にこう言った。

「もしお前がその約束を果たすなら、私はお前の頭に王冠を戴かせ、お前は私と共に統治者となる。そしてパルティア王国はお前と、お前の家系に受け継がれるだろう。」

こうして取り決め、互いに条件を確認し合った後、二人は別れた。企てた計画を実行するため、アナクは弟を助っ人として招いた。彼らは全財産と妻や子供たちを連れてペルシアを出発し、アルタシルの怒りを逃れた追放者であるかのように装い、親族であるアルメニア王のもとへアルメニアへと向かった。　王は彼らを温かく迎え入れ、自分の領土に定住することを許可するとともに、彼らを側近の顧問とした。王は自らのすべての計画、さらには自分自身までもをアナクに打ち明け、彼を王の諮問機関における首席顧問に任命した。　一方、アナクは王の心を巧みに取り入る一方で、心の中では王を殺害する方法を企み、その好機を伺っていた。

ある時、王がアララト山に滞在していた際、アナクとその兄弟は、王に二人きりで話したいと申し出た。

「我々は」と兄弟たちは言った。「あなたに、ある有益で有益な助言を密かに申し上げたいのです。」

[6621] アルメニアは、クラー川とティグリス川・ユーフラテス川の上流の間に位置する山岳地帯であり、アラム王にちなんでその名がついたアルメニア人が居住し、紀元前2世紀から紀元5世紀にかけて同部族出身の王たちによって統治されていた。　この地は「大アルメニア」と呼ばれ、これに対し「小アルメニア」――ユーフラテス川とガラサ川の源流の間に位置し、ポンティウス王ミトリダテスの王国の一部であり、西暦70年以降はローマ帝国の一部となった地域――と区別されていた。　この国は人類の第二の揺籃であった。なぜなら、ノアの箱舟は、大アルメニアに位置するアララト山（創世記8:4）に停泊したからである。現在も残る地名には、大洪水後の族長ノアの生活状況に関する聖書の記述を裏付けるものが多く見られる。例えば：　エリヴァル「出現」――ノアが初めて大地を目にした場所；アッコリ――「ブドウの木の植え付け」（アララト山にて）、ノアが初めてブドウの木を植えた場所；　アルノイトン――「ノアの足元」、すなわちノアが埋葬された場所など。この国は、その大部分の期間、他の民族（アッシリア人、バビロニア人、メディア人、ペルシア人、マケドニア人、ビザンツ人、トルコ人）の支配下にあった。　伝承によれば、アルメニアにおけるキリスト教の始まりは、イエス・キリストと使徒たち――ファデオ、バルトロマイ、シモン・カナニテ、ユダ・レヴェイ――の地上での生涯の時代に遡る。　この地では2世紀にはすでにキリスト教の確かな痕跡が見られ、4世紀には国全体が完全にキリスト教化し、最初のキリスト教国家となった。グリゴリウス・プロスヴェティテルこそが、アルメニアの最初の使徒であった（257年頃生まれ、302年に司教に叙任された）。

[6622] パルフィア人はパルフィアに住んでいた。この国は、古代において現在のイランのホラーサーン州に相当する地域を占めていた。　住民は当初ペルシア人の支配下にあったが、紀元前156年から紀元299年にかけては独立して生活し、独自の王国を築いた。その後、再びペルシア人に征服された。

そして、王が一人きりの時に彼のもとへ入り、剣で致命的な一撃を加えた。その後、外へ出てあらかじめ用意しておいた馬にまたがり、ペルシアへ向かおうとして駆け去った。　ほどなくして、王の寝室に侍従たちが入ると、床の上で王が血の海に浮かび、かろうじて息をしているのを発見した。侍従たちは大きな恐怖に襲われ、起こった出来事と目撃したすべてを、すべての軍司令官や貴族たちに報告した。　彼らは急いで殺人犯たちの後を追跡し、ある川辺で追いつくと、彼らを殺害し、水の中に沈めた。一方、重傷を負ったクルサール王は、死の床で、アナカとその兄弟の一族全員――妻や子供たちも含めて――を皆殺しにするよう命じ、その命令は実行された。

アナカの一族が皆殺しにされている最中、ある親族が、まだおむつを履いていたアナカの二人の息子――聖グリゴリウスとその弟――を何とか連れ去り、自分の家に隠して育てた。　その間、アルメニアで大規模な反乱が起こった。これを耳にしたペルシャ王アルタシールは、軍を率いてアルメニアに侵攻し、アルメニア王国を征服して自らの支配下に置いた。　その後、アルメニア王クルサールの後を継いだのは、ティリダトという名の幼い子供であった。アルタシールは彼を赦し、ローマ領へ送り出した。そこで彼は成長し、非常に強靭な戦士となった。　また、殺害を免れたアナカの幼い息子たちは、一人はペルシアへ連行され、もう一人はグリゴリウスと名付けられ――これから語られるのはこの人物である――ローマ帝国へと送られた。　成人すると、彼はカッパドキアのケサリアに住み、そこで主イエス・キリストへの信仰を学び、善良で忠実な主の僕として過ごした。彼はそこで結婚し、オルファンとアロスタンという二人の息子をもうけたが、彼らを生まれたその日から主への奉仕に捧げた。 成人すると、オルファンは長老の位に就き、アロスタンは隠遁者となった。

前述の二人の息子が生まれた直後、グリゴリウスの妻は亡くなり、それ以来、祝福されたグリゴリウスは、主のすべての戒めと教えに忠実に歩みながら、さらに熱心に神に仕えるようになった。当時、ティリダトはローマ軍に所属しており、王家の出身であったため、ある名誉ある地位に就いていた。ティリダトの話を耳にした聖グリゴリウスは、まるで彼の父アナクがティリダトの父クルサールを殺害したことを全く知らないかのように、彼の元を訪れた。　クルサールの殺害という秘密を胸に秘めたまま、彼はティリダートの忠実な家臣となり、その献身的な奉仕によって、クルサールの息子に対して、自身の父の罪を償い、贖おうとしたのである。　グリゴリウスの献身的な奉仕を見て、ティリダトは彼を愛するようになった。しかしその後、グリゴリウスがキリスト教徒であることを知ると、彼に怒りを覚え、罵倒した。一方、グリゴリウスは主人の不当な怒りを意に介さず、キリスト・神への清らかな信仰を守り続けた。

その頃、ゴート族がローマ領に侵攻[6623] し、当時のローマ皇帝はゴート族との戦いに赴く必要に迫られた。ローマ軍とゴート軍　が至近距離で対峙し、互いに敵対する態勢となったとき、ゴート族の首長がローマ皇帝に一騎打ちを挑んだ。　王は、ゴート族の首長からの挑戦に自ら応じることを恐れ、代わりにゴート族の首長と戦えるような戦士を探し始めた。王はそのような戦士を勇敢なティリダトに見出し、彼に王の鎧を身にまといさせ、王であるかのように装わせてゴート族の首長と対峙させた。　ゴート族の首長と一騎打ちを繰り広げたティリダトは、剣を使わずに彼を打ち負かし、生け捕りにしてローマ皇帝のもとへ連行した。これにより、ゴート族の全軍に対しても勝利を収めることとなった。　この功績により、ローマ皇帝はティリダトを父の王位に就かせ、彼をアルメニア王とし、アルメニア人とペルシア人の間で彼のために和平を締結した。彼と共に、忠実な家臣として、至福のグリゴリウスもアルメニアへと退いた。

ティリダト王が偶像、とりわけ最も熱心に崇拝していた女神アルテミスに、他の神々よりも多くの生贄を捧げていたとき、彼はしばしば熱心にグリゴリウスに、自分と共に偶像に生贄を捧げるよ

[6623] ゴート族は、もともとバルト海の南東部に居住していたゲルマン系部族である。 民族大移動の時代（5世紀）には、この部族は東ゴート族と西ゴート族に分かれていた。東ゴート族の王国は（4世紀には）現在のロシア南部に位置し、東はドン川まで広がっていた。一方、西ゴート族は東ゴート族の隣に居住していた。

う懇願した。しかしグリゴリウスはこれを拒み、天にも地にもキリスト以外の神はいないと告白した。　この言葉を聞いたティリダトは、グリゴリウスを激しく拷問するよう命じた。まず、彼が言葉を口にするために口を閉じられないよう、口を無理やり大きく開かせ、歯の間に木の切れ端を挟み込んだ。　その後、首に大きな岩塩の塊（アルメニアではこのような石が地中から掘り出される）を結びつけ、彼を逆さ吊りにした。　聖人は七日間、その姿勢で辛抱強く吊り続けられた。八日目になると、吊られた聖人は上から棒で容赦なく殴打され、その後さらに七日間、頭を下にして吊られたまま、その下で燃やされた糞の煙で苦しめられた。　それでも聖人は吊られたままイエス・キリストの御名を賛美し、口から木片が取り除かれた後は、その苦しみを見守っていた群衆に対し、唯一の真の神を信じるよう説き続けた。　聖人が信仰を揺るがすことなく、勇敢に苦難に耐えているのを見て、彼らは板で彼の足を挟み、縄でしっかりと縛り上げ、かかとと足の裏に鉄の釘を打ち込み、その状態で歩くよう命じた。　そうして彼は歩きながら、詩篇を詠んだ。*「あなたの口の御言葉によって、私は迫害者の道から身を守った」*（詩篇16:4）。そしてまた、*「涙を流して種を蒔く者は、喜びをもって、その束を背負って帰ってくる」*[6624]（詩篇125:6）。一方、拷問官は、特別な器具を用いて聖人の頭を曲げさせ、その後、鼻孔に硫黄入りの塩を詰め込み、酢を注ぎ込んだ上で、煤と灰で満たされた袋で頭を縛り上げた。聖人はその状態で六日間を過ごした。　その後、再び頭を下にして吊るされ、口に大量の水を無理やり注ぎ込まれ、その間も聖人を嘲笑した。というのも、あらゆる恥知らずな不潔さに満ちていた者たちには、羞恥心など微塵もなかったからである。　こうした拷問の後、王は再び狡猾な言葉で殉教者を偶像崇拝へと誘惑しようとした。しかし、聖人がその約束に屈しなかったため、拷問者たちは再び彼を吊るし上げ、鉄の爪で肋骨を削り取った。こうして聖人の全身に傷を負わせた後、彼らは彼を裸のまま、鋭い鉄の釘が敷き詰められた地面の上を引きずり回した。　殉教者はこれらすべての苦難に耐え抜き、ついに牢獄に投げ込まれたが、そこではキリストの力によって無傷のままであった。

翌日、聖グリゴリウスは牢獄から連れ出され、体に傷一つないまま、明るい表情で王の前に現れた。この様子を見て王は驚いたが、それでもなおグリゴリウスが自分の意に従うという希望を抱き、彼を自分の邪悪な道へと引き戻そうと、穏やかに語りかけた。　しかし、聖グリゴリウスがそのお世辞めいた言葉に従わなかったため、王は彼に鉄のブーツを履かせ、足枷をはめて、三日間看守に監視させるよう命じた。三日が過ぎると、王は聖人を呼び寄せ、こう言った。

「お前は無駄に自分の神を頼っている。なぜなら、神からは何の助けも得られないからだ。」

グリゴリウスはこう答えた。

「愚かな王よ、お前は自らに苦しみをもたらしているのだ。しかし、私は私の神に信頼を置いているゆえ、衰えることはない。私は神とこの肉体のために自分を惜しむことはない。なぜなら、外なる人が朽ち果てれば果てるほど、内なる人は新たにされるからだ。」

その後、拷問官は釜で鉛を溶かし、聖人の全身にそれを浴びせるよう命じたが、聖人はこれらすべてに耐えつつ、絶えずキリストを告白し続けた。

ティリダトスが、グリゴリイの揺るぎない心をどう打ち砕くか考えを巡らせている間、群衆の中から誰かが彼にこう言った。

「王よ、この男を殺してはなりません。彼はアナクの息子であり、あなたの父を殺し、アルメニア王国をペルシャの手に陥れた者なのです。」

[6624] 聖ヨハネ・クロソストモスの解釈によれば、この詩篇の一節は、バビロン捕囚に連れ去られたユダヤ人たちに当てはまる。「労苦の後に種を蒔く者が実を享受するように、預言者は言う、『あなたがたもまた、捕囚として連れ去られたとき、種を蒔く者に似て、様々な苦難に遭い、涙を流した。　種にとっての雨のように、涙は苦しむ者たちにとっての雨である。しかし、見よ、と預言者は言う、これらの労苦に対して報いを受けたのだ」。聖グレゴリオスに当てはめてこの詩篇の箇所を理解するならば、次のように解釈すべきである。すなわち、聖人は激しい苦しみの中で、主からの将来の報いへの希望をもって自らを慰めていたのである。

この言葉を聞いた王は、父の血の仇への憎しみがさらに燃え上がり、グリゴリウスの手足を縛り、アルタクサテの街にある深い堀に投げ込むよう命じた。この堀は、その存在を想像するだけで誰にとっても恐ろしいものだった。　残酷な死に処せられる者たちのために掘られたこの堀は、沼地の泥や蛇、サソリ、そして様々な種類の毒を持つ爬虫類で満たされていた。この堀に投げ込まれた聖グリゴリウスは、14年間そこに留まり、爬虫類の被害を受けることなく無傷で過ごした。　神の御摂理により、ある未亡人が毎日彼にパンの切れ端を投げ入れてくれたおかげで、彼は命をつなぐことができた。グリゴリウスはとっくに死んだと思い込んだティリダトスは、もはや彼のことを思い出すことさえやめてしまった。その後、王はペルシャ人と戦いを繰り広げ、シリアに至るまでその領土を征服し、輝かしい勝利と栄光を手にして帰還した。

当時、ローマ皇帝ディオクレティアヌスは、自国中に使者を派遣し、すべての乙女の中で最も美しい者を妻として探させた。　そして、キリスト教徒のリプシミアという女性がその人物として見出された。彼女は処女性をキリストに捧げ、修道院長ガイアニアの監督の下、女子修道院で断食と祈りに明け暮れていた。使節たちはリプシミアの肖像画を描かせるよう命じ、それを王のもとへ送った。　リプシミアの肖像は、その美しさゆえに王の心を大いに捉えた。彼女に心を奪われた王は、彼女に妻となるよう求婚した。その求婚を受け取ったリプシミアは、心の中でキリストにこう叫んだ。

「私の花婿よ、キリストよ！私はあなたから離れることはなく、私の聖なる処女性を汚すこともありません。」

彼女は修道院の姉妹たちや、修道院長ガイアニアと相談し、やがて皆で集まって、彼女とすべての姉妹たちは密かに修道院から逃げ出した。旅の途中で言葉に尽くせないほどの苦難に遭い、飢えや数え切れないほどの困難に耐え抜いた後、彼女たちはアルメニアに到着し、アララトの町の近く[6625]に定住した。そこで彼女たちはブドウ畑で暮らし始め、中でも体力のある者たちは町へ働きに出かけ、自分たちや他の修道女たちの生活に必要な糧を稼いだ。処女の純潔を守るために、このような苦難や旅路での欠乏と悲しみに耐えることに同意した少女たちは、計三十七人であった。

リプシミアが修道院の他の姉妹たちと共にアルメニアへ逃亡したという知らせを受け、ディオクレティアヌスは、親交の厚かったアルメニア王ティリダトスに次のような書簡を送った。

「一部のキリスト教徒たちが、私が妻に迎えたいと願っていたリプシミアを惑わしたため、彼女は私の妻になるよりも、恥を忍んで異国の地を放浪することを選んだ。彼女を見つけ出し、我々の元へ送り返すか、あるいは望むならば、あなた自身が彼女を妻に迎えてもよい。」

そこでティリダトスは、至る所でリプシミアを探すよう命じ、彼女の居場所を突き止めると、逃亡を防ぐため、彼女の滞在場所の周囲に警備を配置させた。　リプシミアを目撃した者たちから、彼女が驚くべき美しさであるという知らせを受けると、彼は彼女を手に入れたいという燃えるような欲望に駆られ、王の威厳にふさわしいあらゆる装飾品を彼女のもとへ送り、それらを身にまとわせて自分の元へ連れてくるよう命じた。　若き日から彼女を育ててきたガイアニア修道院長からの助言に従い、リプシミアはティリダトから送られてきたすべての装飾品を拒絶し、彼の元へ行くことを望まなかった。ガイアニア修道院長自身も、王から遣わされた使者たちにこう語った。

「これらの乙女たちは皆、すでに天の王と婚約しており、彼女たちの誰一人として地上の結婚に身を委ねることはあり得ない。」

その言葉の直後、突然、耳をつんざくような雷鳴が轟き、天からの声が乙女たちに語りかけた。

「勇気を出し、恐れるな。わたしがあなたたちと共にあるからだ。」

[6625] おそらく、ここでの「アッコリ」とは、ブドウ畑で有名だったが、1840年の地震によって破壊された現代のアッコリを指すものと考えられる。

派遣された兵士たちは、この雷鳴にひどく怯え、地面にひれ伏した。中には馬から転落し、馬の蹄に踏みつけられて死んだ者もいた。使者たちは何も手に入れられず、恐ろしい恐怖に駆られて王のもとへ戻り、起こったことをすべて報告した。

激しい怒りに駆られた王は、そこである王子に大規模な軍勢を率いさせ、すべての乙女たちを剣で斬り殺し、リプシミアを無理やり連れ戻すよう命じた。兵士たちが剣を抜き放って乙女たちに襲いかかったとき、リプシミアは王子にこう言った。

「これらの乙女たちを殺さないでください。私だけをあなたの王のもとへ連れて行ってください。」

そこで兵士たちは彼女を捕らえて連れ去ったが、他の乙女たちには何の害も与えなかった。兵士たちが去ると、彼女たちはその場から逃げ去った。

道中、リプシミアは花婿であるキリストに助けを求め、こう叫んだ。「*私の魂を剣から、私の孤独を犬たちから救い出してください*」[6626]（詩篇21:21）。リプシミアが王の寝室に連れて行かれたとき、彼女は肉体の目と心の目を天に向け、涙ながらに神に熱心に祈り、神の全能の手によって彼女の処女性が傷つけられることなく守られるよう願った。　その際、彼女は、かつて神が苦難にある人々に示された、奇跡的で慈愛に満ちた御助けを思い起こした。すなわち、神がイスラエルの民をファラオの手から、また溺死から救われたこと（出エジプト記14:1–31、15:1–27）、クジラの腹の中にいたヨナを無傷で守り（ヨナ書1:1–16）、三人の若者を炉の火から守り（ダニエル書3:1–100）、そして不貞な老人たちから祝福されたスザンナを救い出したこと（ダニエル書13:1–64）、 ――そして彼女は、自分自身がティリダトの暴行から同じように救われるよう、神に祈った。

その時、王がリプシミアの元へ入ってきたが、彼女の並外れた美しさを見て、激しく情欲に燃え上がった。悪霊と肉欲に駆られて、彼は彼女に近づき、抱きしめて強姦しようとした。しかし、彼女はキリストの力に支えられ、断固として彼に抵抗した。　王は長い間彼女と格闘したが、彼女に何の害も与えることはできなかった。なぜなら、この聖なる乙女は、神の助けにより、名高く強靭な戦士ティリダトスよりも強いことが証明されたからである。　かつて剣を用いずにゴート族の首長を打ち負かし、ペルシア人を撃破したその王でさえ、今やキリストの乙女を打ち負かすことはできなかった。なぜなら、かつての最初の殉教者フェクレのように、彼女には天から肉体の力が与えられていたからである。

何も成し遂げられなかった王は寝室を出て、ガイアニアを呼び寄せるよう命じた。彼女はリプシミアの指導者であることを知っていたからである。彼女はすぐに見つけ出され、王のもとに連れて行かれた。王はガイアニアに対し、リプシミアを説得して自分の意志に従わせるよう懇願した。　ガイアニアはリプシミアの元へ赴くと、そこにいたアルメニア人たちに言葉を理解されないよう、ラテン語で語りかけた。彼女はリプシミアに、王の望むこととは全く異なる、彼女の処女の清らかさを守るために有益なことを語った。　彼女は熱心にリプシミアを教え導き、キリストに誓約した処女性を最後まで守り抜くこと、花婿の愛と、その処女性のために用意された冠を忘れないこと、そして、恐るべき最後の審判と、誓いを守らない者を飲み込むゲヘナを恐れるよう説いた。

「キリストの乙女よ、あなたにとっては、そこで永遠に死ぬよりも、ここで一時的に死ぬほうがましだ」とガイアニアは言った。「あなたの最も美しい花婿であるイエス・キリストが、福音書の中でこう語っていることを知らないのか。　*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない』*（マタイ10:28）。たとえ不義な王があなたを殺そうと決心したとしても、決して罪

[6626] 聖アファナシオスの解釈によれば、武器や犬の手は、主がユダヤ人たちの悪意と狂気を表している。「独り子」とは、すなわち、孤独で、誰からも見捨てられた魂のことである。このような言葉で祈りながら、聖リプシミアは、ティリダテス王による侮辱から彼女を救い出してくれるよう主に懇願した。

を犯すことに同意してはならない。それは、清く朽ちることのないあなたの婚約者の御前で、あなたの貞操に対する最高の賛美となるだろう。

そこにいた者の中にはラテン語を理解できる者もおり、ガイアニアがリプシミアについて語っていることを察知し、それを他の王の家来たちに伝えた。 これを聞いた者たちは、ガイアニアの口に石を投げつけ、歯を打ち砕きながら、王の命令通りに話すよう強要した。しかし、ガイアニアがリプシミアに主への畏れを説き続けるのを止めなかったため、彼女はその場から連れ去られた。 リプシミアとの闘いに多大な労力を費やし、彼女から何も引き出せないことを悟ると、王はまるで悪霊に取り憑かれたかのように震えだし、地面を転げ回った。一方、リプシミアは夜が更けるにつれ、誰にも気づかれることなく城の外へ逃げ出した。 彼女と共に信仰を貫いていた姉妹たちと出会うと、彼女は敵に対する勝利と、自分が汚されることなく済んだことを語った。これを聞いた者たちは皆、御自身の花嫁を恥辱にさらさなかった神を賛美し、感謝を捧げた。そしてその夜中ずっと、彼らは花婿であるキリストに祈りを捧げながら賛美の歌を歌い続けた。

翌朝、不信心者たちはリプシミアを捕らえ、彼女を苦痛に満ちた死に追いやった。まず彼女の舌を切り取り、次に服を脱がせて手足を四本の柱に縛り付け、ろうそくの火で焼いた。 その後、鋭い石で彼女の腹を切り裂き、内臓をすべて取り出した。 最後に、彼女の両目をえぐり出し、全身をバラバラに切り刻んだ。こうして、聖なる処女は、この苦難に満ちた死を経て、彼女の愛する花婿であるキリストのもとへと旅立った[6627]。

その後、聖リプシミアの姉妹や従者たちである残りの乙女たち三十三人も捕らえられ、剣で殺害され、その遺体は野獣の餌として投げ捨てられた。一方、イグメニアのガイアニアは、彼女と共にいた二人の乙女と共に、最も残酷な死を遂げた。 まず、彼女たちの足を貫き、逆さ吊りにして生きたまま皮を剥ぎ取った。次に、首の後ろを切り裂き、舌を引き抜いて切り取った。その後、鋭い石で腹を切り裂き、内臓を引きずり出し、殉教者たちの首を切り落とした。 こうして彼女たちは、その婚約者であるキリストのもとへと旅立った。

一方、ティリダトスは狂人のようになっていたが、これらの乙女たちが亡くなってから6日目にようやく正気を取り戻し、狩りに出かけた。 神の驚くべき御摂理により、その道中、彼には極めて残酷な刑罰が下され、狂乱の状態に陥った彼は、正気を失っただけでなく、人間の姿さえも失い、その姿はまるで野生のイノシシのようになり、かつてのバビロンの王ネブカドネツァル（ダニエル書4:30）のようになった。そして、王自身だけでなく、すべての軍司令官、兵士、そして聖なる乙女たちの拷問を是認した者たちすべてが、狂気に取り憑かれ、野原や樫の森を駆け回り、衣服を引き裂き、自らの肉体を食い荒らした。 こうして、神の怒りは、無実の血を流したことに対する罰を遅滞なく下し、彼らを助ける者は誰一人としていなかった。なぜなら、神の怒りの前に立ち向かえる者がいるだろうか。

しかし、*「怒りをいつまでも保たず、永遠に憤り続けることはない」*（詩編102:9）という慈悲深い神は、しばしば人々のためを思って彼らを懲らしめ、人間の心をより良い方向へと正そうとされる。 そして主は、その憐れみによって、次のように彼らを憐れんでくださった。王の妹クサロドゥクテの夢に、偉大な栄光をまとった恐ろしい男が現れ、彼女にこう言った。

「グリゴリーが堀から救い出されなければ、ティリダトは癒やされない。」

目を覚ますと、クサロドゥクタはその幻視を側近たちに語った。皆、この夢を奇妙に思った。というのも、あらゆる爬虫類がうごめく沼に投げ込まれたグリゴリーが、そこで過ごした十四年の過酷な年月を経て、なお生き延びているなど、誰が予想できただろうか！ しかし、彼らは堀に近づき、大声で叫んで言った。

「グリゴリー、生きているか？」

[6627] ここで述べられている出来事は、4世紀初頭のものです。

すると、グリゴリーはこう答えた。

「わが神の恵みにより、私は生きている。」

そして、青ざめ、髪や爪が伸び放題で、沼の泥と極度の苦難によって痩せ細り、黒ずんでしまった彼は、堀から引き上げられた。聖人は体を洗い清められ、新しい服を着せられ、食事を摂らせられた後、猪のような姿をした王のもとへ連れて行かれた。　皆は聖グリゴリーのもとへ大いなる敬意を込めて進み出て、頭を下げ、その足元にひれ伏し、王や軍司令官たち、そして全軍が癒やされるよう、彼の神に祈ってほしいと懇願した。至福のグリゴリーはまず、殺害された聖処女たちの遺体について尋ねた。彼女たちは十日間も埋葬されずに放置されていたからである。

それから、彼は散らばっていた聖処女たちの遺体を集め、不敬虔な拷問者たちの非人道的な残虐さを嘆きつつ、ふさわしい形で彼女たちを葬った。その後、彼は拷問者たちを戒め、偶像から離れ、唯一の神とその御子イエス・キリストを信じ、その憐れみと恵みに頼るよう説いた。　聖グリゴリウスは彼らに、主なる神が彼を堀の中で生かしておかれたこと、そして神の御使いが頻繁に彼を訪れ、彼に偶像崇拝という闇から敬虔の光へと彼らを導く機会を与えたことを告げた。こうして聖人は、彼らに悔い改めを促しながら、キリストへの信仰を説いた。

彼女たちの謙虚な姿を見た聖人は、大きな教会を建てるよう命じ、彼女たちは短期間のうちにその命令を果たした。グリゴリウスは、この教会に祝福された殉教者たちの遺体を大いなる敬意を込めて運び入れ、聖なる十字架を安置し、民にそこに集まって祈るよう命じた。　その後、彼はティリダテス王を、王自身が殺害してしまった聖なる乙女たちの遺体の元へ連れて行き、主イエス・キリストの前で彼女たちの祈りを求めた。王がこれを実行するやいなや、彼は人間の姿を取り戻し、悪霊に取り憑かれていた将軍や兵士たちからは邪悪な霊が追い払われた。　まもなく、アルメニア全土がキリストに回心し、民は偶像の神殿を破壊し、その代わりに神のための教会を建てた。王は人々の前で公然と、自身の罪　と残虐さを告白し、神の懲罰と、彼に現れた神の恵みを宣べ伝えた。その後、彼はあらゆる善行の指導者であり、先駆者となった。　彼は聖グリゴリウスをカッパドキアのケサリアにいるレオティウス大司教のもとへ送り、彼に司教の叙階を受けさせた。叙階の後、ケサリアから帰路につく際、聖グリゴリウスは、そこで最もふさわしいと認めた多くの司祭たちを連れて帰った。彼は王、地方総督、全軍、そして宮廷の者から最も身分の低い農民に至るまで、残りの民すべてに洗礼を授けた。このようにして、聖グリゴリウスは、神の教会を建立し、そこで血を流さない犠牲を捧げながら、数え切れないほど多くの人々を真の神への信仰へと導いた。

町から町へと巡りながら、彼は司祭を按手し、学校を設立してそこに教師を配置した――要するに、教会の益と必要に関わるもの、そして神への奉仕に不可欠なことはすべて行ったのである。一方、王は教会に豊かな領地を寄進した。　聖グリゴリウスは、アルメニア人だけでなく、ペルシャ人、アッシリア人、メディア人といった他国の住民をもキリストへと導いた。彼は数多くの修道院を設立し、そこでは福音宣教の業が盛んに行われた。

このようにすべてを整えた後、聖グリゴリウスは荒野に退き、そこで神に奉仕しながらこの世の生涯を閉じた。[6628]　一方、ティリダト王は、徳と節制の行いに励み、その点において修道士たちに劣らないほどであった。　聖グリゴリウスの後任として、アルメニアに迎えられたのは、その息子アロスタンであった。彼は高い徳を備えた人物であり、若き頃から修道生活を送り、アルメニアに神の教会を設立するため、カッパドキアで司祭に叙階された。　王は彼を、アリウス派の異端を糾弾するために召集されたニカイアでの全地公会議へ派遣し、そこで彼は三百十八人の聖なる教父たちの一人として参列した。

[6628] 聖グリゴリウスの没年は335年とされる。

こうしてアルメニアはキリストを信じ、長い間神に仕え、あらゆる美徳に満ちて繁栄し、私たちの主イエス・キリストについて謙虚に、今、常に、そして世々限りなく栄光ある神を賛美した。アーメン。

コンダク、第2調:

祝福され、すべての聖職者の長である、真理の殉教者を、今日、私たちは賛美歌と聖歌をもって賛美しよう。勇敢な牧者であり教師であるグリゴリー、全世界の灯火であり、真理の擁護者を。キリストに祈り、私たちが救われるよう願おう。

ペルシュマ川沿いの修道院の院長であり、ヴォロゴダの奇跡行者である、我らの尊き父グリゴリイの生涯

記念日：9月30日

聖グリゴリーは、ガリチ市[6629] の、高貴かつ敬虔なガリチ貴族ロポトフ家の出身であり、学問において入念に教育を受けた。現世の虚しさを悟ると、彼はそれを拒絶し、実家を離れた。　神を想うのにふさわしい場所を求めて、彼はジェルトヴォドスキー修道院の尊者マカリイ修道院長のもとへ[6630] を訪れ、彼から出家式を受け、その修道院で修道生活の修行に励み、特に断食の修行において優れた成果を上げた。　その厳格で徳高い生活により、至福のマカリオス師は彼に司祭の聖職を受けることを許した。その後、尊者グリゴリーはガリチ湖の近くにある聖母降誕修道院のイグメンに任命され、こうして彼の労苦と責任は増大した。尊者の徳高い生活に関する評判は、すぐに公爵の宮廷にまで広まった。 ガリチ公ユーリー[6631] は、尊者に対し、二人の息子に洗礼を授けてくれるよう懇願し、モスクワ大公ヴァシーリー・ドミトリエヴィチ[6632] は、 にあるロストフの町で、尊者をアルヒマンドリトに任命したいと望んだ。世俗の名声を避けた尊者は、聖母降誕修道院のイグメン職を辞し、誰にも知られず、人跡未踏の地へと身を隠した。 ディオニシイ・グルシツキー尊者[6633] の噂を耳にした彼は、その修道院を訪れ、10年間、彼のもとで従順に過ごした。その後、グリゴリー尊者はグルシツキー修道院の東にある荒野へと退き、そこで絶え間ない労苦と神への奉仕に身を捧げて暮らした。　彼のもとに兄弟たちが集まり始めたとき、彼は「尊き聖母マリアの聖公会」の名を冠した教会を建立し、修道院を塀で囲み、修道院の壁の中で絶え間ない労苦と衰えることのない徹夜の祈りに身を捧げた。彼は特に、敵対し、怒り合う者たちを和解させる能力に優れていた。　ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ公[6634] がモスクワから追放され、ユーリー公が大公の座を強引に奪った際、聖グリゴリーはモスクワへ赴き、勇敢かつ賢明な言葉をもって、ユーリー公に対し、他人の世襲の座に就くことをやめ、自身の故郷であるガリチへ戻るよう諭した。　そこで、尊者グリゴリーの取り持ちにより、ユーリー

[6629] コストロマ州の郡庁所在地。

[6630] ニジニ・ノヴゴロド州、ヴォルガ川の左岸、ジェルトエ・ヴォディ湖のほとりにあるマカリエフスキー・ジェルトヴォドスキー修道院は、1444年7月25日に没した尊者マカリイによって設立された。

[6631] ユーリー・ドミトリエヴィチ・ガリツキー、ディミトリー・ドンスキーの息子。

[6632] ユーリーの兄弟で、ディミトリー・ドンスキーの息子は、1425年に死去した。

[6633] 聖ディオニシイ・グルシツキーは、ヴォロゴダ県にある同名の修道院の創設者であり、1437年6月1日に没した。

[6634] ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・テムヌイ（ヴァシリー・ドミトリエヴィチの息子）は、1425年から1462年まで公爵を務め、一度、叔父であるガリツキー公ユーリー・ドミトリエヴィチによってモスクワから追放された。

公とヴァシーリー公の間で和平が回復され、両者はそれぞれ本来あるべき公爵の座に就いた。その頃、ディミトリー公[6635]が大軍を率いてヴォログダに到来し、市民に多くの災いをもたらした。聖グリゴリーは、町のキリスト教徒たちの安寧を案じ、ディミトリイ公のもとへ赴き、彼がキリスト教徒たちに与えていたあらゆる災難について非難した。聖人の非難に耐えかねた公は、彼を橋から川へ突き落とすよう命じた。聖人はこの屈辱を、神に感謝しつつ喜びをもって受け入れた。

長年にわたる神に奉仕する生活の後、死の訪れを予感した聖人は、修道院の兄弟たちを呼び寄せ、彼らに訓示を与え、後任の修道院長を任命した。その後、聖人は衰弱していった。死が近づくと、彼は兄弟たちに最後の遺言を残し、こう語った。

「わが魂が肉体から離れる時、いかなる栄誉も授けることなく、ただわが肉体を足から持ち上げ、沼に投げ込んでくれ。」

そう言い終えると、彼は寝台に横たわり、十字の印を切って、その聖なる魂を[6636]、若き日から愛し、生涯を通じて全き熱意と真実、そして聖なる生活をもって仕えてきたキリスト・神の御手に委ねた。

今や、聖グリゴリイは聖人たちと敬虔な人々の群れの中にあって、神の御座の前に立ち、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を信じ、今、また常に、そして世々限りなく賛美し、礼拝をもって崇める私たち罪人のために、神の慈しみを祈り求めている。アーメン。

トロパリオ、第8調:

キリストの愛によって、神に賢明な者よ、あなたは啓発され、美徳に満ち溢れ、あらゆる肉欲を憎み、荒野に住み着き、この世の短い生涯において、賛美と徹夜祈祷と断食に励んで、大いに精進されました。　このゆえに、キリストは奇跡の賜物をもってあなたを豊かにされた。しかし、尊き父グリゴリイよ、あなたの輝かしい御記憶を称える私たちを覚えてください。そして、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第8調:

尊き父よ、あなたはキリストの愛に心を打たれ、その方への揺るぎない願いをもって従われました。　あらゆる肉欲を憎み、荒野に身を置き、そこで大いに精進された。それゆえ、キリストは奇跡の賜物をもってあなたを豊かにされた。あなたの輝かしい御記憶を称える私たちを覚えてください。そして、私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、尊きグリゴリイ、私たちの父よ。」

聖ミハイル、キエフおよび全ロシアのミトロポリス、奇跡行者の記念日

記念日：9月30日

聖ミハイルは、キエフおよび全ロシアの初代大主教であり、聖使徒同等のウラジーミル大公の時代に、私たちの教会を統率しました。

[6635] ディミトリ・シェミャカは、ユーリー・ドミトリエヴィチの息子である。

[6636] 聖グリゴリーは1441年9月30日に死去した。

ギリシャの都市コルスニ[6637] を征服した後、ウラジーミル公はそこで聖なる洗礼を受け、ビザンツ皇帝の妹であるアンナ王女[6638] と結婚しました。 しかし、キリストの信仰の光をもって自らの広大な領土全体を啓蒙するという固い決意を抱いていた使徒同等の公は、その後、コルスニからコンスタンティノープルへ使節団を派遣し、皇帝および総主教に対し、偶像崇拝の闇に覆われたルーシの地を洗礼し、 そしてルーシ教会を統治するため、使節団をコンスタンティノープルへ派遣した。コンスタンティノープル総主教聖ニコライ・クリソベルゴス[6639] は、司教会議と共に、知恵に富み、教訓に優れ、聖なる生活を送るミハイルをルーシの総主教として選出・任命した。 聖ミハイルが都主教に任命されるまでの生涯については、記録が残っていない。聖人の出自についてさえ、年代記の記述はまちまちであり、あるものは彼をシリア人と呼び、またあるものはブルガリア人としている。 総主教から旅立ちの訓示を受けた聖ミハイルは、統治を補佐するために派遣された聖職者たち――6人の司教と多数の司祭および聖職者――に付き添われて、ウラジーミル公のもとへ向かった。 大公は大きな喜びと祝賀のうちに聖人を迎え、その直後、聖人とその妻である王女と共に、首都キエフへと急いだ。 新たに洗礼を受けた公と、新たに任命された大主教による、ルーシの都への行進は、いわば、ウラジーミルの領地から異教の多神教や偶像崇拝を根絶するための聖なる遠征のようであった。彼らは聖遺物、十字架、イコン、そして神聖な教会用器を携えていた。彼らには、十字架を掲げた軍勢――ギリシャからやって来た、あるいは征服されたコルスニから連れてこられた教会の牧者たちが――随行していた。

聖ミハイルがロシア教会を統率した短い期間は、すべて使徒的な働きに費やされた。すなわち、異教徒への福音の説教、彼らの洗礼、そして新たに信仰に導かれた者たちの信仰の確固たるものにすることにあった。 教会の聖歌『[6640] 』によると、聖ミハイルは「不信仰の貧困に蝕まれたロシアの地に、王都からキリストの福音を運び、それを授けた」とされている。

聖人がその大司教としての奉仕の地で最初に行ったのは、公爵の一族、すなわちその息子たちの洗礼であり、続いて公爵の従者たちやボヤールたちの洗礼が行われた。

私たちの教会は、聖ミハイルを首都キエフの洗礼者として称え、次のように讃えている。「聖なる方よ、キエフの都は今日に至るまで、あなたから授かった洗礼の衣をまとい、その美しさを誇っています」。この重要な事業は、多大な苦労を伴いながらも、大いなる成功を収めて成し遂げられた。 聖なる大主教、司教たち、そして数多くの司祭たちは、キリストの信仰について無知な民を導き、聖なる洗礼を受ける準備を整え、異教の迷信を打ち砕き、「福音の教えという鎌で、偶像の彫像を打ち砕いた」のである。 この頃、ウラジーミル公は自らの権威をもって彼らの布教の成功を後押しした。彼は家臣たちに偶像を打ち砕き、それを冒涜するよう命じ、また、老若男女を問わず、貴族も庶民も、奴隷も自由人も、定められた日に川へ行き、洗礼を受けるよう命じた。 こうしてキエフの住民たちは、洗礼を受けるためにドニエプル川の岸辺に集まった。その洗礼は、大公とその家族、ボヤールたちの見守る中、聖ミハイルが多数の聖職者たちと共に執り行った。

キエフの洗礼は、福音の真理の光によってルーシを啓蒙するための確固たる礎を築いた。公爵とボヤールたちが告白したキリストの信仰は、ルーシの首都の信仰ともなったのである。 しかし、今や、その信仰を、ルシの全土、すなわちウラジーミルの支配下にあり、聖ミハイルが教会統治のた

[6637] コルスン――別名タウリカのヘルソネス――は、タウリカ半島（クリミア）の南西岸、現在のセヴァストポリ近郊に位置する古代ギリシャの都市である。その跡には廃墟が残されている。

[6638] これらすべては988年に起こった。当時のビザンツ皇帝は、皇帝ロマノス2世の息子であるヴァシレイオス2世「ブルガリア撃破王」とその弟コンスタンティノス8世であった。 彼らはほぼ全期間、共同統治を行っていた。ヴァシレイは975年から1025年まで、コンスタンティノスは979年から1028年まで在位したが、真の統治者は、最も有能で活動的なヴァシレイであった。

[6639] 聖ニコライ2世・クリソベルゴスは、983年から996年までコンスタンティノープル教会を統率した。

[6640] ここおよび以下では、聖ミカエルの礼拝式からの言葉が引用されている。

めに任命された全土の、隅々まで広める必要があった。聖ミハイル自身（　）は、言葉の羊の群れを集め、彼らの牧者であり教師となるべきであった。　それゆえ、熱心な大牧者は、使徒に等しい大公の協力を得て、ロシアの地の各都市にキリストの信仰を広めようと努めた。教会は、聖ミハイルを、真理の証人であり、キリストの福音を宣べ伝えた者として崇めている。彼は「多神教という茨を根絶し、ロシアの地に実り豊かな善の種を蒔き散らした」。当時、キエフに次ぐルーシの主要都市は、ウラジーミル公の北方領土の首都であるノヴゴロド・ヴェリキーと、ザレス地方の主要都市であるロストフ・ヴェリキーであった[6641]　。聖ミハイルは、異教徒をキリストの信仰へと改宗させるため、これら二つの都市を巡った。 990年、司教たち、公爵の軍司令官ドブリニ、そしてアナスタス・コルスニャニン[6642] に付き添われて、聖ミカエルはノヴゴロドを訪れた。そこで彼は偶像を破壊し、多くの人々に洗礼を授け、いくつかの教会を建設し、そこに司祭を任命した。　翌年、聖ミハイルは福音宣教のため、同様の旅をロストフへと敢行した。この時の宣教の成果はさらに顕著であり、数え切れないほどの人々を洗礼し、多くの教会を建立してそこに司祭や助祭を任命し、教会の礼拝と運営の規程を定めた。

992年、聖ミハイル大主教は逝去した。聖ウラジーミルは、亡き聖職者によって、善良で熱心な牧者だけでなく、国家統治における賢明な助言者をも失ったため、深く嘆き悲しんだ。

キエフの洗礼に続き、聖ミハイルはヴラディミール公に対し、至聖なる聖母マリアに捧げる「デシャティンヌイ教会」を建立するよう祝福した。聖ミハイルはその建設が完了するのを待たずにこの世を去ったが、この教会は彼の遺骨を受け入れ、彼の埋葬の地となった[6643] 。

12世紀に朽ちることなく発見された聖ミハイルの聖遺骨は、当時キエフ・ペチェールスカヤ修道院のアントニエフ洞窟へ移され、そこから1730年に同修道院の大聖母被昇天教会へ移され、現在に至るまで朽ちることなく安置されている[6644]

10月14日

10月1日（旧暦）

聖母マリアの庇護の祝日の説教

10月1日の記念日

この最近の苦難の時代、私たちの罪が増すにつれて災いも増大している――聖使徒パウロの次の言葉が成就しているかのようだ：　*「強盗からの危険、同胞からの危険、異邦人からの危険、都での危険、荒野での危険、海での危険、偽兄弟たちとの危険」*（IIコリント11:26）；　主ご自身の御言

[6641] ノヴゴロドは、イルメン湖から流れ出るヴォルホヴァ川沿いに位置し、現在は県都である。ネロ湖畔のロストフは、現在ヤロスラヴリ県の郡庁所在地である。

[6642] ドブリニャは、ウラジーミルの母方の実の叔父である。アナスタス・コルスニャニンとは、コルスニをウラジーミルに明け渡したギリシャ人である。その後、彼はデシャティナ教会の最年長の司祭となった。

[6643] デシャティナ教会は、その維持費としてウラジーミル大公が定めた「デシャティナ」（領地の10分の1）に由来して名付けられた。ギリシャから招かれた職人たちによって、7年間（989年から996年）かけて建設された。 その奉献式が行われるまで、聖ミハイルの聖遺骨は、おそらく一時的に別の場所に安置されていたと考えられる。もっとも、未完成の教会堂に埋葬されていた可能性もある。

[6644] 聖ミカエルの記念日は、伝承によれば彼の死去の日である6月15日に当初祝われていたが、1730年から9月30日に移された。

葉が成就し、民族が民族に、王国が王国に立ち向かい、各地で飢饉、疫病、地震が起こる時（マタイ24:7）、異民族の侵攻や内戦、そして死をもたらす傷に苦しめられる時――至聖にして至福の聖母マリアは、　主の母は、私たちを守るために御自身の庇護を授けてくださり、あらゆる災いから私たちを解放し、飢饉、疫病、地震から守り、戦争や傷から救い出し、御自身の庇護の下で私たちを無傷のまま保ってくださるのです。　この御徴は、王都 コンスタンティノープルにおいて、敬虔な皇帝レウ・ソフォス[6645] の治世中、ヴラヘルナ[6646] にある栄光に満ちた至聖なる神の母教会で現れました。そこでは、10月1日[6647] の日曜日、徹夜祈祷が行われている最中、夜4時、大勢の民衆が見守る中、キリストのために聖なる狂人となった聖アンドレイが、　キリストのために聖なる狂人となった聖アンドレイは、目を天に向け、天の女王、全世界の守護者である至聖なる聖母マリアが、空中に立ち、祈りを捧げ、太陽の光のように輝き、その尊いオモフォロスで人々を覆っているのを見た。　それを見て、聖アンドレイは弟子である至福のエピファニオス[6648] にこう言った。

「兄弟よ、見てごらん。全世界の女王であり主である方が、全世界のために祈っておられるではないか。」

エピファニオスは答えた：

「はい、聖なる父よ、見ています。そして畏怖の念に打たれています[6649] 。」

かつて聖ヨハネ・テオロゴスが天に「太陽に身を包まれた女」という大いなるしるしを見たように、聖アンドレイもまた、天に似たヴラハエルナ教会において、太陽の紫衣をまとった「見知らぬ花嫁」を目撃した。　神学者ヨハネが見たしるしは、私たちの至慈愛なる守護者を予表するものでした。というのも、そのしるしは、全被造物を脅かす破滅が預言者に啓示されたまさにその時に現れたからです。*「すると、稲妻と声と雷と地震と大きな雹が起きた。　そして、天に大きなしるしが現れた。太陽に身を包んだ女である」*（黙示録11:19、12:1）。　では、なぜこの、至聖なるおとめを予表するしるしは、まだすべての自然現象が穏やかであった時に、稲妻や雷鳴、声、地震、雹よりも先に現れるのではなく、天と地で最も恐ろしい混乱が巻き起こっている最中に現れたのでしょうか。　それは、私たちの至福の守護者が、最も困難な時に、　滅びが迫る時、私たちを助けに駆けつけ、惑わしやすく、束の間の輝きに過ぎない世俗の虚栄の輝きから、世俗的な高慢や虚栄の声から、敵の突然の襲撃という雷鳴から、情欲の嵐から、そして罪に対する天からの裁きという雹から、私たちを守ってくださることを示すためである。　なぜなら、これらすべての災いが私たちを圧迫するとき、直ち

6645 レオン6世「賢王」は、886年から912年まで在位したビザンツ帝国の皇帝である。

6646 ヴラケルナは、コンスタンティノープルの西端にある地区である。ビザンツ帝国の全盛期には、その聖地によって東方全土で名声を博していた。

6647 この御現れは10世紀前半、聖アンドレイ・ユロディヴィイ（没：約936年）の生涯の終わりに起こった。聖母被昇天の祝日そのものは、ロシア正教会において遅くとも12世紀半ばまでに制定された。　注目すべきは、この幻視がスラブ人出身の聖アンドレイに与えられたものであり、この祝日がスラブの地で制定され、祝われているという点である。一方、コンスタンティノープル自体にはこの祝日はなかったものの、聖アンドレイの幻視は記憶されていた。ヴラヘルナ教会には、聖アンドレイの前に現れた姿そのままの聖母マリアのイコンが安置されていた。

6648 エピファニオスは、聖アンドレイの弟子であり、一部の説によれば、後にポリエウクトという名で修道生活に入り、コンスタンティノープル総主教となった高貴な青年であった。

6649 至聖なる聖母マリアの御被覆に関する伝承は、次のような詳細で締めくくられている。聖アンドレイとエピファニオスがこの驚くべき幻視を仰ぎ見ていると、聖母マリアは長い間祈りを捧げ、その神に似て清らかな御顔を涙で濡らしていた。　そこで祈りを終えると、御座に近づき、そこに集まった民衆のために祈りを捧げられた。祈りが終わると、御自身の至聖なる頭上に戴いていた、稲妻のように輝き、偉大かつ威厳に満ちた大いなる覆いを脱ぎ、それを至聖なる御手をもって厳粛に掲げ、そこに立つ民衆全員の上に広げられた。　その場にいた人々は、民の上に広げられたこの覆いと、稲妻のように輝く主の栄光を、しばらくの間じっと見つめていた。至聖なる神の母がそこにいらっしゃる間は、その覆いも目に見えていた。しかし、御方が去られると、それも見えなくなった。だが、御方はそれを持ち去りつつ、そこにいた人々に恵みを残してくださった。

に、まるで偉大なしるしの如く、キリスト教徒の助け手である御方が現れ、目に見えない執り成しによって私たちを守り、覆ってくださるからです。　これこそが、「主が御自身を畏れる者たちに与えられた『旗』であり、*彼らが真理のためにそれを掲げるためである*」（詩篇59:6）というものである。なぜなら、この世において、私たちはまるで的のように狙われているからである。　矢は四方八方から私たちに向かって飛んでくる。あるものは、目に見える敵の武器から放たれ、彼らは急いで弓を引き、その高慢さをもって私たちの面前で自慢する。またあるものは、目に見えない敵の弓から放たれ、私たちが悪魔の矢に耐えられないことを悲しみをもって自覚させようとする。さらにあるものは、霊に敵対する私たちの肉から放たれる。　また、神の義なる怒りと懲罰の雷鳴の弓から放たれるものもある。聖ダビデがこう語っているように：*「もし［誰かが］悔い改めないなら、主は御剣を研ぎ、御弓を引き絞り、それを狙い定め、その者のために死の器を備え、御自身の矢を焼きつくすものとする」*[6650]（詩編7:13–14）。私たちがこれらすべての矢によって致命的な傷を負うことなく、危険を回避できるよう、私たちにはしるしが与えられています。それは、至聖なる、至福の　おとめマリアの庇護です。彼女の庇護という盾に覆われることで、私たちは矢から無傷でいられるのです。　なぜなら、私たちの守護者には、私たちを守るための千の盾があるからです。聖霊が彼女にこう語っている通りです。*「あなたの首は、武器のために建てられたダビデの柱のようで、その上に千の盾が掛けられている――すべては強者の盾である」*[6651]（雅歌4:4）。

かつてダビデは、高い山の上に立つシオンと、その下方に位置し「シオンの娘」と呼ばれたエルサレムとの間に、美しく、最も高い柱を築きました[6652]。その柱は、まるで体と頭をつなぐ首のように両者の間にあり、その高さはエルサレムを凌ぎ、シオンにまで達していました。　その柱には、エルサレムの防衛と戦いに必要な盾やあらゆる武器が掛けられていた。聖霊は、このダビデの柱に聖母マリアを例えられている。なぜなら、彼女はダビデの娘として、教会の頭であるキリストと、教会の体をなす信者たちとの間の仲介者であるからである。　御方は、まことに教会のすべての構成員よりも高きお方であるため、教会を超越しておられますが、キリストに肉体を授けた者として、キリストにまで達しておられます。　彼女は今なお、天と地の間、神と人々の間、戦いの先導者であるキリストと戦いの教会との間に立ち、シオンとエルサレムの間にあり、強固な盾で飾られたダビデの柱のように、仲介者となっています。　これらの盾は、彼女の尊い「聖母の庇護」の御出現の際に、それにふさわしい者たちの耳に届いた、私たちのために神へ捧げられた彼女の全能の祈りを象徴している。彼女は、母として御子であり創造主である方へ、深い愛を込めて祈り、その祈りの最中に、神の慈悲と愛に満ちた次の言葉を口にした。

「天の王よ！　あらゆる場所であなたを賛美し、あなたの至聖なる御名を呼び求めるすべての人を受け入れてください。そして、私の名が記憶されている場所はどこであれ、その場所を聖別してください。　あなたを賛美し、あなたの母である私を愛をもって崇める者たちを栄光に包み、彼らからのあらゆる祈りと敬虔な誓願を受け入れ、あらゆる悪と災いから彼らを救い出してください。」

6650 黙示録に登場する、太陽に身を包まれた女の象徴として、大多数の人は教会を、また太陽の下にいる者としてイエス・キリストを意味すると解釈している。同時に、この女は、神聖で天上の栄光に身を包まれた至聖なる聖母マリアそのものを表していた可能性もある。

6651 勝利を象徴する武器や盾で飾られたダビデの柱は、至聖なる神の母を予表しており、これについては後述する。この有名なダビデの柱については、聖書には、ある山の上に建てられたこと、そして「ファルピオフェ」で造られたこと以外、これ以上のことは知られていない。なお、「ファルピオフェ」という名称は、要塞を意味するものでもある。

6652 シオン――エルサレムが築かれた四つの高地のうち、南西に位置し、最も広大で高いもの――は、ユダヤ人によって神聖な場所として崇められ、当初はエルサレムの宗教的中心地および要塞として機能していた。　そのため、聖書ではエルサレムをしばしば「シオンの娘」と呼んでいる。例えば、詩篇9:15、イザヤ書1:8、67:11、エレミヤ書6:23、マタイによる福音書21:5を参照のこと。

このような彼女の祈りは、戦いの教会を守る盾ではないのでしょうか。まことに、それらは打ち砕くことのできない盾であり、その助けによって、私たちはあらゆる火の矢を消し去ることができるのです[6653]。

聖アンブロシウスはダビデの柱について[6654]、それが二つの目的、すなわち都市を守るためと、それを飾るために造られたと語っている。「ダビデは」とアンブロシウスは言う、「都市を守り、飾るために柱を建てた。守りとなったのは、柱の上から遠くの敵を見渡し、都市から追い払うことができたからであり、飾りとなったのは、その高さがエルサレムのあらゆる高い建物を凌駕していたからである」。それゆえ、私たちの守護者である御方が柱に例えられるのは当然のことである。御方は私たちにとって、敵の面前における堅固な柱である。まことに、御方は私たちを守り、飾ってくださるのだ。守ってくださるというのは、目に見える敵も目に見えない敵も私たちから遠くへ追い払い、捕らわれの身にある者を束縛から解放し、悪霊に苦しめられている者を救い出し、悲しむ者を慰め、不当に扱われる者の擁護者となり、嵐に翻弄される者にとって静かな避難所となり、飢えた者に食べ物を与え、病人を訪ねてくださる時です。御母は私たちを飾ってくださいます。神の前で、私たちの人生の恥ずべき裸身を、御自身の至高の功績という最も尊い衣で覆い、また、尽きることのない宝である豊かな恵みをもって私たちの乏しさを補い、主の御目にはかなう者にしてくださるのです。彼女は、婚礼の衣を持たない私たちを御自身の衣で覆うとき、私たちを飾り立て、全知の御目から、私たちの魂の恥ずべき裸身を、いわば見えなくしてくださいます。その裸身は、太古の昔から、水に覆われた、目に見えず、整えられていない大地（創世記1:1–2）によって象徴されていたのです。形をなさない荒涼とした大地は、霊的な美しさを失い、善行を欠き、神の恵みから遠ざかった罪深い魂の型であった。一方、形のない大地を覆っていた水は、海のように尽きることのない聖母マリアの慈悲を象徴しており、水量の豊かな川のように、すべての人に注がれ、すべてを覆っている。神の御霊が水の上を漂われたとき、それは水の下に隠され、に飾られていない大地の上をも漂われ、あたかもその醜さを視ていないかのように振る舞われた。これは神秘的に、聖母マリアの限りなく慈愛に満ちた覆いに包まれた魂も、たとえ美徳で飾られていなくとも、聖霊の恵みを失うことはない。なぜなら、至聖なる神の母の覆いは、水が未形成の地を覆ったように、その醜さを覆い隠し、同時にその恵みの輝きで彼女を飾り立て、聖霊を彼女に引き寄せるからである。至聖なる聖母は、罪人を義人とし、不浄な者を清くすることで、私たちを飾ってくださる。これについて、至福のアナスタシオス・シナイテスは次のように述べている。「彼女は魔術師を使徒とし、徴税人を福音宣教者とし、淫行者たちを処女たちよりも大きな尊敬に値する者とする。そうして、かつて娼婦であったエジプトのマリアを、今や多くの処女たちよりも尊い存在とされた。かつては闇に覆われ、不浄であった彼女が、今やキリストの御国において太陽のように輝いている――それは、彼女に助けを求めるすべての人々のための覆いであり、飾りである聖母マリアの取り成しによるものである。また、彼女は霊的なエルサレム、すなわちキリストの教会全体をも飾っておられます。その教会は、今日このように賛美しています。「ああ、すべての信者にとって驚くべき装飾であり、預言の成就であり、使徒たちの栄光であり、殉教者たちの慰めであり、処女たちの称賛であり、全世界にとって比類なき覆いである」[6655]。

ダビデの柱には、盾とともに国の守護者たちの矢が掲げられていました。そして、この生ける柱である至聖なるおとめもまた、御自身の傍らに力強い矢、すなわち、彼女と共に祈る聖人たちの祈

[6653] すなわち、この世のさまざまな状況や誘惑、とりわけ悪者の放つ火の矢、すなわち人類の古くからの恐ろしい敵である悪魔からの攻撃は、あたかも死をもたらす火のように私たちを焼き尽くすのである。

[6654] 詩篇119篇に関する講話において、アンブロシウス・メディオランスキ（イタリアのミラノ出身）――4世紀の西方教会の最も著名な教父であり、キリスト教作家（397年没）。その記念日は12月7日である

[6655] 聖母マリアの庇護の礼拝、「主よ、私は叫びました」に3つのスティヒラ。

りを備えています。　なぜなら、聖母だけが空中に浮かんで神殿に現れたのではなく、天使の軍勢や、白い衣をまとって敬虔に聖母を取り囲む多くの聖人たちと共に現れたからである。私たちすべてのために捧げられるこれらの聖人たちの祈りは、いわば力強い矢のようなものであり、私たちの敵である悪魔のすべての軍勢を追い払うことができるのである。　至聖なる聖母マリアは、この地上の私たちの生活が戦いであることをご存知である。敵は全力を挙げて私たちと戦っており、詩篇の作者の言葉にあるように、その軍勢を私たちに対して立ち向かわせ、その軍団で私たちを取り囲んでいる。*「犬たちが私を取り囲み、悪しき者たちの群れが私を包囲し、私の手と足を突き刺した。彼らは、獲物を貪り、咆哮する獅子のように、私に向かって口を開いた」*（詩編21:17、21:14）。 それゆえ、天の女王は、私たちを助けようと望まれ、敵に対して天のすべての力を動員し、預言者たちと使徒たちを呼び集め、殉教者たちと処女たちを集め、聖人と義人たちを結びつけ、彼らと共に現れて私たちを助け、強大な軍勢で私たちを取り囲み、敵に対する勝利をもたらしてくださったのです：　「彼女によって勝利がもたらされ、彼女によって敵は打ち倒される」[6656] 。彼女は天使の軍勢を率いて来られた。なぜなら、彼女はヤコブが予見した天の梯子[6657] （創世記28:12–15）そのものであり、その周囲には無数の天使たちが取り囲んでいるからである。　ここでヤコブの天の梯子を思い起こすと、ある人はこう不思議に思うかもしれない。なぜ天使たちはその梯子の上でじっとしていず、絶えず昇り降りしていたのか、と。　しかし、その天の梯子が聖母マリアの予型であったことを、教会賛美歌の「喜びよ、天へと導く架け橋よ、ヤコブが見たあの高い天の梯子よ」[6658] という言葉から理解すれば、天使たちがなぜ天の梯子の上でじっと留まっていなかったのかが分かるだろう。　なぜなら、「祈りにおいて休むことのない聖母」[6659] は、天使たちに、彼女と共に絶えず人々を助けるよう命じているからである。すなわち、天に昇る際には人々の祈りを神に捧げ、降りてくる際には神からの助けと恵みを人々に届けるのである。　その同じ「天の梯子」が、今なお多くの天使たちを天から連れ下ろし、私たちに天からの庇護と守りを授けてくださっている。彼女は天使たちと共にやって来て、彼らに「私たちのあらゆる道において私たちを守り抜く」よう命じたのである。　また、すべての聖人たちの群れを伴い、私たちのために共に祈りを捧げた後、私たちの罪深い祈りも共に御子であり、私たちの神である御方に届けてくださるためです。　聖母マリアと共に教会に現れたすべての聖人の中で、とりわけ選ばれた二人がいました。それは、聖ヨハネ・バプティスト――「*女から生まれた者の中で、彼より偉大な者はいない」*　（マタイ11:11）とされ、そして*「イエスに愛され、晩餐の席でイエスの胸にもたれかかっていた」*聖ヨハネ・テオロギオス（ヨハネ21:20）です。　神の前で大きな大胆さを持つこの二人を、私たちの祈りの母はご自身と共に掲げ、彼らと共に神を速やかに憐れみに導こうとされた。*「義人の熱心な祈りは、大きな力を持つ」*（ヤコブ5:16）。 そして 、至聖なる処女は二人の処男の間に立ち、あたかも二つのケルビムの間の契約の箱のように[6660] 、セラフィムの間の主サ

[6656] アカフィスト、イコス第2番。

[6657] 「主は――この原型について聖ヨハネス・ダマスコスはこう述べている――御自身のために、その基が地に確固として築かれ、頂が天そのものに届く、生きた天の梯子を築かれた。そして、その上に神が確固としておられる。　霊的な梯子、すなわち聖母は、地上に確立されている。なぜなら、彼女は地上で生まれたからである。彼女の頭は天に触れていた。なぜなら、彼女の頭は神であり、父であったからである」。

[6658] 受胎告知の礼拝、「主よ、私は呼び求めます」の第一スティヒラ。

[6659] 至聖なる神の母の御昇天を讃えるコンダクの表現。

[6660] 聖母は、まさに契約の箱に例えられる。旧約聖書において、幕屋、そして後にエルサレム神殿には、「至聖所」と呼ばれる内陣があり、そこには大祭司のみが、それも年に一度だけ立ち入ることが許されていた。　この聖所には、契約の箱――内側も外側も金で覆われ、神に選ばれた民にとって最も神聖な品々を収めていた箱――が保管されていた。その両側には、「栄光のケルビム」、すなわち神に最も近く、至高の天の軍勢を表す金の像が鎮座していた。　この契約の箱こそが、御自身の中に神そのものを宿された神の母を予表するものであり、それゆえに教会は彼女を「生ける神の契約の箱」として讃えている（受胎告知のカノン、第9歌）。 栄光の御座の前で人類のために絶え間なく祈りを捧げる方として、

バオスの御座のように、またアロンとオールの間に両手を広げたモーセのように；　その時、地獄のアマレクは、その闇の王国と全軍勢を率いて倒れた[6661]（出エジプト記17:11–14）。

さて、私たちは聖母マリアの「庇護」を祝うとともに、聖アンドレイとエピファニオスによって目撃された、ヴラヘルナ教会における彼女の栄光に満ちた御出現を偲びます。　私たちは、キリスト教徒の民に示されたその偉大なる慈悲に対し、私たちの守護者である聖母に感謝を捧げつつこの祝日を祝い、今も、そしていつまでも、聖母の庇護を求める私たちを、聖母が慈悲深く守ってくださるよう、熱心に祈ります。　私たちがこのように祈るのは、神を絶えず怒らせている私たちにとって、御庇護なしには生きることが不可能だからです。幾度も罪を犯す私たちは、詩篇の作者の言葉にあるように、*「不義の者には多くの苦しみがある」*（詩篇31:10）と、多くの懲罰にさらされています。もし、この限りなく慈悲深い御母が私たちのために執り成してくださらなかったならば、私たちはすでに自らの不法によって滅びていたことでしょう。「もしこの執り成し手が祈りを捧げて立っていなかったなら」この執り成し手がいなければ、「誰が私たちをこれほどの災いから救い出し、誰が今に至るまで私たちを自由の身として守ってくれただろうか」[6662]。預言者イザヤはユダヤ人たちにこう助言している。*「怒りが過ぎ去るまで、ひととき身を隠せ」*（イザヤ26:20）。　しかし、主の怒りからどこに身を隠せばよいのでしょうか。苦難のさなか、私たちは、世界の唯一の女王以外には、身を守るための覆いを見出すことができませんでした。その方は、聖霊の口を通してご自身について、「*雲のように地を覆われた」*と語っておられます[6663]（シラ書 24:3）。　まことに、私たちは、雲のように地を覆われた御方の御覆いの下に身を隠している。しかし、なぜ、最も尊き聖母マリアよ、あなたはご自身を、雲というこれほどにふさわしくないものに例えられるのか。　あなたには、太陽や月、星々といった比喩の材料がないのでしょうか。ましてや、至賢なる方が驚きをもってあなたについてこう語られたではありませんか。*「この方は誰か。夜明けのように輝き、月のように美しく、太陽のように明るい方」*[6664]（雅歌6:10）！　雲には一体どのような美しさがあるというのか、あなたがそれに喩えられることを嫌がらないほどに？この神秘は明らかである。雲が地の上で濃くなり、それを覆うとき、すべての獣は猟師から無傷でいられる。なぜなら、誰もそれらを捕まえることができないからだ。だからこそ、至聖なるおとめはご自身を雲と呼ぶのである。彼女は私たちを猟師から隠してくださるのだ。　一方、私たち罪人は、金口ヨハネの説くところによれば、その非人間性ゆえに、家畜

彼女は私たちにとって、あらゆる災いや困難からその祈りによって私たちを守ってくれるケルビムの軍勢に囲まれた聖櫃なのです。

6661 アラビアの荒野を旅していた際、イスラエルの民はレフィディムで、略奪を働く遊牧民であるアマレク人と戦わなければなりませんでした。モーセ、アロン、オルは丘の頂上に登りました。　モーセが両手を上げている間はイスラエルが優勢となり、下ろしている間はアマレクが優勢となった。やがてモーセの両手が重くなってきたため、人々は彼を岩の上に座らせ、アロンとオルが彼の両手を支えた。その両手は、日が沈むまで上げられたままだった。　そこで、ヨシュアを先頭に立つイスラエル人はアマレクを打ち破り、その民を剣の刃で滅ぼした。――この際、モーセが両手を上げたことは、イスラエルにとって祈りの力を象徴していた。　この比喩の意味は明らかである。絶え間なく祈りを捧げる聖母マリアは、その祈りの力によって、あたかも聖ヨハネ・洗礼者および聖ヨハネ・神学者によって支えられているかのように、モーセと同様に、この荒野に似たこの世で私たちを襲う、キリスト教徒の見えない敵――悪魔とそのすべての勢力を打ち倒すのである。

6662 小聖水式のトロパリより。

6663 聖母は、聖書においても、教会の聖歌においても、一般に「雲（霧）」と呼ばれている。彼女から「義の太陽が我らに輝いた」からであり、　第二に、彼女が「渇く者たちに、罪の赦しという生ける水を注ぎ出し」、私たちに「キリストの朽ちることなき雲」を降らせてくださったからであり、第三に、彼女が御自身の神聖な覆いと温かい執り成しによって、あらゆる悪や災いから私たちを覆い、守ってくださるからである。

6664 この預言的な予型は、この意味だけに限定されるものではない。夜の闇を払いのける朝の暁が、輝かしい太陽に先立ち、そこからその光を受け取るように、至聖なるおとめもまた、「義の太陽」であるキリストに直接先立ち、キリストから「神の母」としての栄光を受けたのである。　そして、キリストの誕生とともに、偶像崇拝と多神教の闇は消え去り、神を知り、敬虔に生きる、夕暮れのない日が訪れました。

や獣に等しいのです。　私たちは熊のように腹の欲に従い、ロバのように肉を肥やし、ラクダのように恨み深く、狼のように略奪に励み、蛇のように怒り、サソリのように刺し、狐のように狡猾であり、エヒドナのように憎悪の毒を内に秘めている。　私たちのような獣たちは、さまざまな狩人たちに追われている。神の義なる怒りが私たちを襲い、悪しき行いを罰する――*「復讐の神、主よ、復讐の神よ、御姿を現してください！」*（詩篇93:1）という言葉の通りである。 また、私たちの不義も私たちを襲うため、私たち一人ひとりはこう言うことができる。*「私の不義が私を襲い、私は目が見えない」*（詩篇39:13）。目に見えない敵も私たちを追い詰める。「　*『彼は私にとって、まるで待ち伏せする熊のようで、[まるで]隠れ場所にいる獅子のようだ』」*　（エレミヤの哀歌3:10）。目に見える敵も私たちを脅かしています。その敵はこう言います。*「追いかけて、追い詰め、戦利品を分け合う。私の魂はそれらで満たされ、私の剣を抜き放ち、私の手が彼らを滅ぼす」*（出エジプト記15:9）。しかし、私たちには大胆さがあり、私たちを覆う心の雲――聖母マリアがおられる。私たちは彼女に希望を置き、彼女にすがりつく。彼女の庇護の下では、私たちが心を込めてこう呼びかけるだけで、私たちの頭の毛一本さえも失われることはない。「私たちの守護者、聖母マリアよ、あなたの庇護で私たちを覆ってください。「私たちの災いの日に、私たちをお守りください！」（詩編26:5参照）。しかし、私たちの生涯の日々はすべて災いに満ちています。かつてヤコブ総主教が言ったように、*「私の生涯の日々は短く、不幸に満ちている」*（創世記47:9）のです。 とりわけ、私たちが悪を目の当たりにし、自らも多くの悪を行い、*「怒りの日に怒りを積んでいる」*[6665]（ローマ2:5）ような日々は、苦難に満ちています。これらすべての苦難に満ちた日々において、至聖なるおとめよ、あなたの慈愛に満ちた庇護が必要です！　どうか、私たちの生涯のすべての日に、とりわけ、魂が肉体から引き離されるあの恐ろしい日に、私たちをお守りください。御助けをもって私たちに寄り添い、天の下にある悪意に満ちた空中の霊たちから私たちを守り、最後の審判の日に、御加護の隠れ家に私たちを隠してください！ アーメン。

トロパリオ、第4調：

今日、私たちは信仰深い者として、聖母マリアよ、あなたの到来に照らされ、明るく祝いを捧げます。そして、あなたの至聖なる御姿を見つめながら、心を込めてこう祈ります。あなたの尊い御加護で私たちを覆い、あらゆる悪から救い出してください。そして、あなたの御子、私たちの神であるキリストに、私たちの魂を救ってくださるようお祈りください。

コンダク、第3調：

今日、聖母は教会に御臨在され、聖人たちの列と共に、目に見えぬ形で私たちのために神に祈っておられます。天使たちは司教たちと共に礼拝し、使徒たちは預言者たちと共に喜び祝っています。なぜなら、聖母は私たちのために、永遠の神に祈っておられるからです。

聖使徒アナニアの殉教

記念日：10月1日

[6665] 怒りの日、すなわちキリストの再臨と最後の審判の日。

七十人の一人である聖使徒アナニアは、ダマスカス[6666] の司教であった。彼は使徒パウロに洗礼を授けたことで知られている。ある日、主が彼に幻として現れ、こう言われた。

「立ち上がって、いわゆる『まっすぐな通り』へ行き、ユダの家にあるタルソス出身の[6667] 、サウロという名の男を尋ねなさい。彼は今、祈っている。」

アナニアは、サウロがエルサレムのキリスト教徒たちにどれほどの悪行を働いたか、また、主イエス・キリストの御名を告白する者たちをすべて捕らえるつもりでダマスカスに来たことを知っていたため、この命令を拒みました。しかし、主はアナニアを諭してこう言われました。

「行きなさい。サウロは、諸国民や王たち、そしてイスラエルの子らの前で、わたしの名を宣べ伝えるために、わたしによって選ばれた者だからである。そして、彼がわたしの名のためにどれほど苦しみを受けるべきか、わたしが彼に示そう。」

神の御命令に従い、アナニアはサウロのもとへ行き、彼に手を置いて言った。

「サウロ兄弟よ。道であなたに現れた主イエスが、あなたが目を開かれ、聖霊に満たされるようにと、わたしを遣わされたのです。」

すると、サウロはたちまち目が見えるようになり、アナニアは彼に洗礼を授けた。 しばらくして、パウロが迫害者からキリストの御名の宣教者へと転じたことを理由に、ユダヤ人たちが彼を殺害することに合意したとき、アナニアは、 他のキリストの弟子たちと共に、彼を籠に入れて城壁[6668] から下ろした。（使徒行伝9:10–25）アナニア自身も、ユダヤ人の集まり[6669] に入り、大胆に主の御名を宣べ伝えた。そして、ユダヤ人だけでなく、異邦人に対してもキリストの福音を宣べ伝えた。ダマスカスからエレウテロポリス[6670] へと向かい、そこで人々に救いの道を示し、病人を癒やすことで、多くの人々をキリストへの信仰へと導いた。

当時、エレウフェロポリスには、創造主ではなく被造物を崇拝するルキアノスという統治者がいた。悪魔は彼をキリスト教徒に対して扇動し、領土全域に次のような布告を発布するよう唆した。

「もし、キリストを崇め、十字架にかけられた方を礼拝する者がいれば、その者を死刑に処すことを命じる。一方、キリストを否定し、不死の神々に犠牲を捧げる者は、我々から賜物と栄誉を授かるであろう。」

このような邪悪で狡猾な勅令が出された頃、聖アナニアはその地域で人々に福音を宣べ伝え、あらゆる病を癒していた。主は彼と共にあり、彼を通して多くの奇跡を行われた。 偶像崇拝者たちはアナニアを捕らえ、総督ルキアノスの元へ連行した。ルキアノスは様々な手段を用いて、彼に偶像への生け贄を捧げるよう強要した。しかし、アナニアは彼の言うことを聞き入れず、こう答えた。

「私は偽りの神々を礼拝しません。私は、唯一の真の主、私の神であるイエス・キリストを礼拝します。私はこの目で見、口と口とを合わせて彼と語り合いました。それは、彼が人間として地上にいた時だけでなく、天に昇られた後も同様でした。 というのも、私がダマスカスにいたとき、主

6666 ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市であり、世界でも最も古い都市の一つである。パレスチナの北東、市内を流れるバラデ川のほとり、アンティレバンの東麓にある美しく肥沃な平野に位置している。

6667 タルス――キリキア（小アジア南東部の州）の主要都市であり、同州の南部、キドネ川沿いの肥沃な平野に位置し、同川はそこからほどなくして地中海に注いでいる。現在でも、ここは依然としてかなり重要な商業都市である。

6668 その他の古代遺跡の中でも、 ダマスカスには、今もなお、聖使徒パウロがキリストの信仰に改宗した場所、いわゆる「まっすぐな通り」、パウロが視力を取り戻し洗礼を受けたユダ家の家、使徒アナニアの家、そして彼が城壁から降ろされ、それによって迫害者たちから逃れた場所などが保存されている。

6669 ソンミシュタ、あるいはシナゴーグ（ギリシャ語で「集会」の意）は、ユダヤ人の宗教的集会の場であり、公の礼拝や説教、教会内の論争の解決、裁判を行うための開放的な建物であった。これらの建物は、討論の場、子供たちのための学校、図書館としても機能していた。 シナゴーグの設立は、バビロン捕囚の時代にさかのぼる。

6670 エレウフェロポリ――パレスチナ南部の都市で、エルサレムとガザを結ぶ道沿いに位置する。現在、この地には、セフェル平野からユダの高地へと続く出口付近に集落が立地している。その近くには、古代エレウフェロポリの遺跡が残っている。

ご自身が私に現れ、サウロを癒やすよう私を遣わされたからです。主は、その驚くべき知恵と力によって、サウロを真理の認識へと導かれたのです。主は私たちすべてを悪魔の支配から救い出し、御父のもとへと導いてくださいました。それゆえ、私は主を礼拝するのです。全人類を滅ぼそうとする悪魔たちを礼拝するわけではありません。

すると、総督はアナニアに対し、命じられたことを行わなければ拷問にかけると脅した。しかし、アナニアは揺るぎない柱のように、キリストへの信仰を堅く守り通した。彼は天に向かって両手を挙げ、こう言った。

「主イエス・キリストよ、祝福された御父の御子よ！　私の祈りに耳を傾け、来世において祝福された使徒たちの運命に私をあずからせてください。あなたがサウロを御自身の光で救われたように、真理に逆らうこの不義な者の手から私をも救ってください。彼の意志が私の上に成就することなく、彼がその狡猾な網で私を捕らえることのないように。　また、御自身が示された御自身の真理の道を愛し、御戒めを守るすべての人々のために備えられた天の御国からも、私を奪わないでください！

アナニアの言葉をこれ以上聞くに耐えかねた総督は、彼を地面に倒し、殴打するよう命じた。役人たちが聖人を容赦なく殴打している間、伝令は叫んだ。

「総督の言うことを聞きなさい。その命令に逆らわず、全世界が崇拝する神々に犠牲を捧げなさい。」

聖人への殴打が止むと、総督は彼に言った。

「せめて今は自分の身を考えて、私の言うことを聞き、十字架にかけられた方を否定しなさい。そうしなければ、私からさらに過酷な拷問を受けることになるだろう。」

これに対し、聖アナニアはこう答えた。

「最初に言ったことを、今も繰り返し言おう。私は自分の神を否定せず、あなたがたが神として崇める、魂のない石や木にひれ伏すこともない。」

聖人が断固として屈しないのを見て、統治者は鉄の爪でその肉体を引き裂き、ろうそくの火で傷口に火傷を負わせるよう命じた。しかし、聖人は苦痛に耐えつつ、天を仰ぎ、熱心に祈りを捧げた。この拷問の後、拷問官は言った。

「いつまで頑なに抵抗するつもりだ？　自分の身を憐れみ、偉大なる神々にひれ伏さないのか？　ユダヤ人たちに十字架にかけられた、いわゆるキリストのために、無意味な苦しみを受けることの方が、無傷で健康でいることよりも、お前にとって望ましいというのか？」　誓って言うが、もしこれ以上頑なに抵抗し続けるなら、お前を生きたまま私の手から逃がしてはやらない！

聖人はこう答えた。

「好きにしろ、神の敵であり悪魔の友よ。私がお前の神々には拝礼せず、ただ唯一の神――父、子、聖霊、天と地、そしてその中に存在するすべてのものの創造主――にのみ拝礼すると、お前は私から何度も聞かされているはずだ。　私はその方を信じ、その方が私に力を与えてくださったおかげで、一日中、あなたの前で揺るぎなく立ち続け、この苦痛を勇敢に耐え抜くことができた。これ以上、なぜわざわざ手間をかけるのか？　私があなたの意志に従うつもりはないと、あなたは聞いたはずだ。さあ、早くあなたの企てを実行に移せ！

怒りに燃えた拷問官は、民に聖アナニアを捕らえ、町から連れ出し、石打ちにするよう命じた。拷問官の無法な手下たちは、彼を捕らえて処刑場へ連行し、新たなステファノのように石打ちにした[6671]。彼は大声で叫んだ。

「主イエス・キリストよ！　私の霊を御手に委ねます。」

[6671] すなわち、その少し前に、ユダヤ人たちがキリストを告白したとして、キリスト教の最初の殉教者である聖ステファノ大助祭を石打ちにしたのと同様である（使徒言行録7:59）。

こうして彼は、あらゆる苦難の末に息を引き取り、天の御国へと旅立った。　民衆は彼がすでに亡くなっているのを見て、遺体を埋葬せずにその場を去った。その時、たまたまダマスカスからの数人のキリスト教徒がそこを通りかかった。彼らはキリストの使徒の聖なる遺体を運び出し、敬意を込めてダマスカスへ移し、彼の故郷の町に埋葬した[6672]。

聖ロマン・スラドコペヴェツの記念日

記念日：10月1日

聖ロマンはシリア出身で、エメサの町[6673]で教育を受け、幼い頃から神に喜ばれるよう、貞潔で清らかな生活を送り始めた。当初、彼はベリタ[6674]の教会の一つで[6675]の助祭を務め、その後、アナスタシウス皇帝[6676]の治世中にコンスタンティノープルへ移り、キロヴァ[6677]の教会で、至聖なる我らの主の母マリアに捧げられた礼拝に奉仕した。　そこで彼は断食と祈りに明け暮れ、数多くの苦行と徹夜祈祷によって自らの肉体を鍛え上げた。夕方になるとヴラヘルナへ赴き、そこで一晩中立ち続けて祈りを捧げた後、再び戻ってきた。その後、彼は聖ソフィア教会[6678]の聖堂奉仕者に任命された。聖ロマンは読み書きができなかったが、善行に長けており、その点では賢明な学者たちをも凌駕していた。彼はその知性をもって　神へと向かい、この世の知恵を求める者たちよりもはるかに熱心に神を慕っていた。　なぜなら、彼は使徒が「*神は、弱い者を選び、強い者を恥じさせるためである*」（Iコリント1:27）と語った者たちの一人であったからである[6679]。　その徳高い生き方ゆえに、総主教エウフィミオスは彼を愛した[6680]。そして、彼が教会でいかに勤勉に働き、どれほど熱心に奉仕

6672　その後、聖使徒アナニアの遺骸はコンスタンティノープルに移され、13世紀初頭にはまだそこに安置されていた。1200年頃、ロシアからの巡礼者である修道士アントニーがそれを見た。

6673 エメサ――シリアのオロンテス川の東に位置する都市。同川はシリア北西部で地中海に注いでいる。

6674 ベリト――現在のベイルート――は、地中海沿岸に位置するフェニキアの古代都市であり、5世紀には繁栄を極め、修辞学、詩学、法学の高等教育機関で名声を博した。　現在は、アジア・トルコ系シリアの主要な行政都市であり、シリア沿岸部で最も重要な貿易拠点であり、人口は8万人にも及ぶ。

6675　ポノマール、あるいはより正確にはパラモナールとは、教会や聖地を警護し、その清浄さを監視する役人である。教会規則によれば、その職務には、礼拝の鐘を鳴らすこと、礼拝用の灯火を点灯・消灯すること、香炉を準備して差し出すことが含まれていた。

6676 アナスタシオス1世――491年から518年まで在位したビザンツ帝国の皇帝。

6677 キル――テオドシウス2世の治世下で首都の知事を務めた著名な詩人であり、後にスミルナ司教、正教会の聖歌作家となった　（†470年）――自身の美意識と敬虔さを体現した記念碑、すなわち壮麗な聖母マリア教会を首都に寄贈した。この教会は彼にちなんでその名称を与えられ、彼の死後も「キル教会」と呼ばれた。その後、この教会のそばに修道院が設立された。　ローマヌスの時代にキロフ聖堂に修道院が存在したかどうかは不明であるが、彼の伝記のギリシャ語原本によれば、ローマヌスはキロフ聖堂で奉仕しただけでなく、同聖堂に属する建物に住んでいたことが示唆されている。

6678　コンスタンティノープルの主要かつ壮麗な大聖堂である「神の知恵聖ソフィア大聖堂」は、当初コンスタンティヌス大帝によって建立された。その後、この大聖堂は537年にユスティニアヌス大帝によって見事に修復・拡張されたが、1453年にコンスタンティノープルがトルコ軍に占領されると、モスクへと改築された。ユスティニアヌス帝時代の聖ソフィア大聖堂は、今日においても、ビザンチン様式におけるキリスト教建築の最も傑出した、最も荘厳な記念碑であり、その発展が最も隆盛を極めた時代の象徴である。

6679 参照：コリントの信徒への手紙一 3:18–19。それは、人間の知恵が、ただ自分自身に委ねられ、啓示の声や神の知恵に耳を傾けることに慣れていないため、迷いに陥り、高尚で救いをもたらす真理を拒絶し、あらゆる事柄について傲慢かつ破壊的に裁くからである。　それに対して、キリストに根ざした知恵は、何ものにも試されることなく、すべてを信仰をもって謙虚に受け入れる。それはこの世の目には狂気のように見えるが、それこそが真の知恵であり、使徒によれば、第一に、　清く、次に平和で、謙遜で、従順であり、憐れみに満ち、善い実を結び、偏見がなく、偽りのないものである（ヤコブ3:17）。この「無学な者」の知恵は、この世の学者たちよりも賢明である。

6680 聖エウフィミオス――490年から496年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

の務めを果たしているかを見て、聖職者たちと同等の待遇を与えた[6681] 。しかし、聖職者たちは総主教に対して不平を漏らし、こう言った。

「無知な者を我々と同等に扱ったのか！」

彼らはロマンを憎み、彼に対して陰謀を企て始めた。　ある日、キリストの降誕祭の前夜、皇帝が教会を訪れた際、ロマンが教会内で灯籠を点灯していたところ、聖職者たちは彼を捕らえて説教壇へ引きずり上げ[6682] 、「お前は我々と同等の分け前を得ているのだから、我々と同じように説教壇から神を賛美する歌を歌え」と言った。

彼らがこのように振る舞ったのは、嫉妬からであり、彼を恥をかかせようとしたのである。なぜなら、彼らは彼が聖書を理解しておらず、その務めを果たすことはできないと知っていたからである。　王や教会にいた民衆全員の前で聖職者たちからこのような屈辱を受けたロマンは、恥を感じ、泣いた。礼拝が終わり、皆が教会から出て行った後、彼は至聖なる聖母マリアのイコンの前にひれ伏し、苦々しく泣きながら祈りを捧げた。　長い間、涙と祈りにふけった後、聖ロマンは立ち上がり、自宅へと向かった。悲しみのあまり食事も口にせず、やがて眠りに落ちた。すると夢の中で、すべての悲しむ者たちの慰めである、私たちの至聖なる御母マリアが、小さな巻物[6683] を手に持ち、ロマンに静かな声でこう言った。

「口を開きなさい！」

ロマンが口を開くと、聖母はそこに巻物を入れ、それを食べるよう命じられた。

ロマンはその巻物を飲み込むと、たちまち目を覚ましたが、目の前には誰もいなかった。現れた御方はすでに姿を消していたからである。彼の心は言葉に尽くせないほどの甘美さと霊的な喜びで満たされ、彼は自分が見たものについて考えを巡らせ始めた。　そして、彼は突然、心の中に聖書の理解が芽生えるのを感じた。それは、かつて御子がお使いたちに対してそうされたように、聖母マリアが彼に聖書の理解への知恵の扉を開いてくださったからである（ルカ24:27）。　彼は偉大な知恵に満たされ、一瞬のうちに、長年にわたって達成することのできなかったような知識を授けてくださったことに、涙ながらにその導き手に感謝した。

徹夜祈祷の時刻が訪れ、聖ロマンは、神に祝福された聖母から授かった恵みに喜びつつ、教会へ向かった。

祝祭を称える聖歌を歌う時が来ると、聖ロマンは説教壇に上がり、心の中で詠んだコンダクを甘い声で歌った。

「今日、聖母は至高なる御子を産み、地は不可侵なる御方に馬小屋を捧げる。天使たちは羊飼いたちと共に賛美を捧げ、東方の三博士は星を頼りに旅をする。我らのために、永遠の神である幼き御子が生まれ給うた」[6684] 。

これを見て聞いた者たちは皆、その歌の意味を深く噛みしめながら、ロマンの歌声に驚き、心を楽しませていた。彼が歌を終えると、総主教は、彼にそのような深い知恵がどこから来たのかと尋ねた。　ロマンは聖母マリアの奇跡を隠すことなく、彼女の恵みを告白し、彼に悟りを与えてくださった天の導き手を賛美した。彼を侮辱した聖職者たちは恥じ入り、悔い改めてロマンの足元にひれ伏

[6681] ここでいう「聖職者」とは、司教による特別な祝福、いわゆる「ヒロテシア」という教会儀式を通じてその職に叙任された、朗読者や聖歌隊員を指す。聖ロマンは、その時点までは彼らの仲間には属していなかったことは明らかである。

[6682] 説教壇（ギリシャ語で「高台」の意）は、祭壇前の別の高台であるソレイの中央から始まり、張り出し部分によって聖堂内へと突き出ている。古代の教会では、説教壇はソレイよりかなり高く突き出ており、時にはそこに階段が設けられていたことさえあった。　説教壇は当初、聖職者による説教や祈りのためだけでなく、聖職の戒律を受けた聖歌隊員や朗読者にとっても、礼拝者からより見やすく、聞き取りやすいように設けられていたが、後にこの目的のために聖歌隊席が設けられるようになった。しかし、下級の未叙階の教会奉仕者たちは、説教壇に上がる権利さえ持っていなかった。

[6683] ギリシャ語で「コンダキオン（kontakion）」とは、両面に文字が書かれた薄い羊皮紙の巻物を指す。特に、教会の賛美歌や礼拝の儀式が記された巻物をこの名で呼んでいた。

[6684] キリストの降誕の祝日に唱えられるコンダク。

し、彼に 許しを請うた。 一方、総主教は直ちに聖ロマンを助祭に任命した。すると、彼の口からは知恵が川のように溢れ出し、当初、彼の素朴さや無知を非難していた者たちでさえ、後に彼から教えを受けることになった。彼は、主の祝日や聖母マリアの祝日、そして多くの聖人の記念日に捧げる数多くのコンダク[6685] を創作し、その数は千を超えるほどになった[6686] 。 そして、彼はすべての人から深く愛され、尊敬されていた。神に喜ばれるように、義にかなった生涯を送った後、彼は永遠の住まいへと移り、今や天使たちと共に、神に三聖の賛歌を永遠に歌い上げている[6687] 。アーメン。

コンダク、第8調:

幼少の頃から聖霊の神聖な美徳に飾られた、至賢きロマネよ、あなたはキリストの教会の最も尊い装飾であり、その美しい賛美をもって教会を飾り立てた。それゆえ、私たちはあなたにこう祈る：あなたの神聖な賜物を求める者たちに、それを授けてください。そうすれば、私たちはあなたにこう叫ぶことができるでしょう。「喜びなさい、至福の父よ、教会の美しさよ。」

聖サヴァ・ヴィシェルスキーの伝記

記念日：10月1日

聖サヴァは、トヴェリ公国カシナの町[6688] の出身であり、皆から尊敬される名門の家系[6689] に生まれ、そこで育ち、教育を受けた。 まだ幼い頃から、彼は徳高い生活を送っていた。世俗の服を着ていながらも、修道者の行いに倣い、完全な修道士のように祈りと断食を行い、熱心に神の教会に通っていた。 神への愛に駆られて、サヴァは修道者の道に入ることを決意し、トヴェリのいくつかの修道院で厳しい修道生活を送るようになった。彼は、厨房やパン焼き場、その他の奉仕において、様々な修道院の務めを不平一つ言わずに果たした。 その際、彼は並外れた謙虚さを示した。彼がま

[6685] このように、ロマン・スラドコペヴェツが最初にコンダクを書き始め、教会の教父たちからもコンダクの創始者として正当に認められている。コンダクという名称そのものが、その創始者を偲ばせるものであり、その由来は、聖母マリアが夢の中でロマンに飲み込むよう命じた羊皮紙の巻物のギリシャ語の名称に遡る。 それ以来、教会ではこの名称によって、主や聖母マリアの祝日、また聖人への敬意や故人を偲ぶために歌われる、簡潔な教会礼拝用の聖歌を指すようになった。これらは祝日の本質を述べ、いわば礼拝の全儀式の流れにおけるテーマを構成するものである。

[6686] 聖ロマンは、その聖歌に込められた思想の豊かさ、そして詩的な霊感、魂のこもり、感情の深み、言葉の高貴さゆえに、「甘美な歌い手」として、また聖歌作家として、キリスト教聖歌史にその名を刻んだ。 教会は、その聖歌の中で、彼を「甘美な響きを奏でるハープ」、「神の御霊の甘美な音色のシトラ」、「教会の笛」、「神の歌のウグイス」、「御霊の栄光に満ちた言葉の弦」などとして讃えている（スティヒラ）。 コンダクに加え、聖ロマン・スラドコペヴェツはイコスの創作者とも見なされている。マルコ・エフェソスの証言によれば、イコスはコンダクやペタと共に、その聖なる人物が徹夜祈祷を行う習慣があったあの美しい「オイコス」（ギリシャ語で「家」「居所」の意）に置かれていた。 そこから、この名称が付けられたのである」。「イコス」とは、教会において、祝祭を称え記念するため、あるいは故人を偲ぶために歌われる、最も長い聖歌のことを指す。その内容はコンダクと類似しており、同じ韻律で書かれ、同じ声部で歌われる。イコスは常にコンダクの後に続くが、これはイコスがコンダクの発展形であるためである。

[6687] 聖ロマノス・スラドコペヴツの生涯と活動は、5世紀後半にさかのぼる。彼の死は、同世紀の終わりに訪れた。

[6688] カシン――現在はトヴェリ州の県都であり、トヴェリから188ヴェルスタ離れたヴォルガ川沿いに位置する――は、かつてトヴェリ公国の一部を構成しており、一時は独立した、同公国で最も強力な領地であり、極めて重要な都市であったが、その後、かつての重要性を失った。

[6689] 聖サヴァは、カシンのボヤリン（貴族）イワン・ヴァシリエヴィチ・ボロズダの8人の息子のうちの2番目であった。その家系は由緒あるもので、戦場での武勇で知られていた（この家系の姓の由来もここにある。「ボロズダ」とは、古代の軍事用語で塹壕やトレンチを指す）。

もなく住み着いたトヴェリのサヴヴァ修道院（[6690] ）の修道者たちは、サヴヴァを深く愛し、その苦行の生活に対して敬意を抱くようになり、まるで神の天使であるかのように彼を仲間の中に迎え入れ、修道院長に選出した。　ボヤールやその国のすべての住民は彼を聖人として崇めるようになり、彼の謙虚さ、節制、　その他の偉大な美徳に関する評判は、遠くまで広まっていった。しかし、尊者にとって世間の名声は重荷であり、彼はそれを避けて故郷を離れ、長い間、見知らぬ土地で完全に無名のまま暮らした。　修道者のより高次の功業に熱意を抱いたサヴァは、その修行者たちの聖なる生活で名高い遥か彼方のアフォン山へと向かい、そこで霊的生活を磨き上げた[6691] 。

アフォン山から戻った後、尊者はヴェリキー・ノヴゴロドへ来たが、貧しく無名の旅人という装いで放浪し、誰にも自分の正体を明かさなかった。神の導きにより、彼はヴィシェラ川[6692] にたどり着き、そこに十字架を立て[6693] 、小さな小屋を建てて、隠遁生活を送るようになった。 彼は聖母マリアの聖像を携えており、その前で絶えず祈りを捧げていた。ある時、ノヴゴロドの住民の一人がその場所を通りかかった。当時は聖使徒ペトロとパウロの断食期間であり、蒸し暑い夏の天候が続いていた。　聖人は深い祈りに没頭しており、まるで自分の顔が蚊に覆われて全く見えなくなっていることさえ気づいていないかのようだった。驚いたノヴゴロドの男は、自分が見たことを他の人々に語り、それによって皆、彼が真の神の人であることを理解した。　自分が知られたことに気づいた聖サヴァは、その場を離れ、ソスニツァ川近くのさらに人里離れた場所[6694] に定住した。そこで彼は断食と祈りに励み続け、さらに厳しい苦行に満ちた生活を送った。

しかし、*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）*のである*。聖サヴァの聖なる生活に関する噂は周辺一帯に広まり、近隣の住民たちが彼を訪ねてきて、生活に必要な、自分たちの力の及ぶ範囲での供物を届けるようになった。　次第に、この神に愛された聖人の噂はノヴゴロド地方全体に広まり、当時ノヴゴロドの主教座に就いていた大主教ヨハネの耳にも届いた[6695] 。これを受けて、ヨハネは大尊者サヴァについて、彼が誰でどのような人物か、またその生活がどのようなものであるかを調査するよう命じた。　このために派遣された信頼できる使者に、大司教はサヴァに問い詰め、大司教の権威を尊重せず、その祝福なしにノヴゴロドの地に定住したことを非難するよう命じた。

大司教の使者は、あたかも大司教からの禁止令を携えたかのように聖サヴァのもとを訪れ、こう言った。

「大司教の許可もなく、よくもこの地に定住したものだ」

サヴァはこれに、次のたとえ話をもって謙虚に答えた。

[6690] トヴェリのサヴヴィナ（スレテンスカヤ）修道院は、サヴヴァ・ヴィシェルスキーと同時代の聖人であるサヴヴァとヴァルソノフィイ・トヴェリスキーによって1397年に設立され（彼らの記念日は3月2日）、トヴェリから20ヴェルスタ離れた、現在のサヴヴィノ村の場所に位置していた。

[6691] 聖サヴヴァのアトス山での生活については何も知られておらず、彼がそこにどれほど長く滞在したかを正確に特定することもできないが、聖人の生涯における初期および後期の出来事に関するいくつかの歴史的示唆から、彼が1411年頃にアトス山へ赴き、その滞在は3年以内であったと考えられる。 その後の聖人の生涯から、アトス山での体験が彼の心に長く刻み込まれていたことがうかがえる。また、彼がアトス山からロシアへ『コルムチャ・クニガ』の写本を持ち帰ったことも知られており、この写本は後にロストフ大司教ヴァッシアンによって用いられた。

[6692] ヴィシェラ川は、ノヴゴロド州を流れる川で、ヴォルホヴァ川の左支流である。 ——サヴヴァ＝ヴィシェラ修道院の現在の所在地からも明らかなように、聖サヴヴァはヴィシェラ川の左岸、ノヴゴロドから北東へ10ヴェルスタの地点に定住した。サヴヴァがヴィシェラ川に定住したのは、遅くとも1414年または1415年のことである。

[6693] この十字架は現在も修道院の礼拝堂に安置されている。現在、十字架は板で覆われており、正面にはアラバスター製の聖人の像が鋳込まれている。

[6694] ヴィシェラ川のそばを流れ、松林の中を貫いていた小さな川で、その松林にちなんで名付けられた。

[6695] 大司教ヨハネは、1387年から1415年までノヴゴロドの聖座を統括した。

「ある乙女が」と彼は言った。「広場の近くの窓辺に座り、通り過ぎる人々を恥知らずに見つめていた。一方、別の窓辺に座っていたもう一人の乙女は、畏敬の念を持って、自らの魂の処女の清らかさを守っていたのだ。」　通りすがりの人々は、最初の乙女の恥知らずな振る舞いに目を留め、「あのような軽薄で散漫な態度では、彼女は清らかさを保てないだろう」と言いました。一方、二番目の乙女については、その謙虚さゆえに、彼女は心の清らかさを傷つけることなく保ち続けるだろうと言われました。　それゆえ、私たちには、歩み始めたこの道において、とりわけ自分自身に注意を払い、自らを守ることがふさわしいのです。私たちはここで荒野に暮らしていますが、それはあなた、大牧者であるあなたを避けているのではなく、世から遠ざかっているのです。そして、あなたの祈りと祝福が常に私たちと共にありますようにと、常に願っています。

使者は戻ると、大司教に聖サヴァについて、その生涯、断食、そして貧しさのすべてを語った。これを聞いた大司教は、彼が霊的生活の長老であることを悟り、自ら彼に会いたいという強い願いに駆られて、荒野へと向かった。

至福のサヴァは、いつものぼろ服を身にまとい、道中で彼を出迎えた。大司教の姿を見ると、サヴァは深い謙遜の念をもって彼の前にひれ伏し、聖職者の位にふさわしい敬意を込めて礼をした。大司教は、それがサヴァであることを知らず、彼を　ただの旅人だと見なして、その尊者（サヴァ）に祝福を与えた。彼はサヴァに、自分と一緒に座ってサヴァの住居まで同行するよう命じたが、謙虚な修行者は聖職者と同じ席に座ることを敢えて許さなかったため、彼を説得するのに苦労した。　道中、聖者との会話を通じて、大司教はこの人物が単なる一般人ではなく、霊的生活に熟達した人物であることを悟り、その正体を知る前からサヴァをますます愛するようになった。　自分の住居のすぐ手前で、サヴァは謙虚に大司教に頭を下げ、自分は罪深いサヴァであると打ち明けた。すると聖人はその謙虚さに感嘆し、愛を込めて彼を祝福した。その後、二人はサヴァの修道室に入り、そこで長い間語り合った。

数時間にわたり、大司教は尊者に対し、忍耐と修行の道を揺るぎなく歩み続けるよう教え、彼と共に荒野の食事を分かち合った。　ノヴゴロドに戻った大司教は、尊者サヴァの神に喜ばれる偉大な生涯を称賛し、それ以来、彼を偉大な人物と見なし、至福のサヴァに対して深い敬意を抱くようになった。そしてその後、彼の荒野での生活に必要なものはすべて、常に彼に送り続けた。

一方、尊者サヴァは、自身の荒野に修道院を設立することを思い立ち、彼のもとを訪れる修道者たちのための独房を自らの手で建て始めた。しかし、人類の狡猾な敵はこれを許さず、彼への嫉妬に駆られて、強盗たちに尊者に害を加えるよう唆した。　彼に何らかの財産があると思い込んだ彼らは、悪意を持って彼の元を訪れた。その頃、サヴァは独房を建てていた。強盗たちは偽りの謙虚さを装い、長老に祝福を求めた。しかし、彼は彼らの狡猾な企みと、彼らが強盗であることを見抜いた。そして、彼は彼らに次のように頼んだ。

「子供たちよ！愛を示して、この木を壁の上に持ち上げるのを手伝ってくれ。」

そう言いながら、長老は彼らに丸太の細い端をつかむよう命じ、自分はその太い端をつかんだ。　山賊たちはどうやっても自分たちの持ち手を全員で持ち上げることができなかったが、老僧は神の助けを借りて、たった一人で簡単にその木を壁の上に持ち上げた。これに驚愕した山賊たちは、恥と恐怖の混じった表情で互いに顔を見合わせ、老僧のせいで自分たちが何らかの危害を被ることを恐れ、急いでその場を立ち去った。[6696]。

しばらくして、いわゆる「キツネの山」にある修道院の修道士たちの一部が、長老がその地域に住み続けることに反対し始めた。というのも、その場所は前述の修道院より少し高い位置にあったからである。　そこで、聖サヴァは、土地をめぐる争いが起きていることを耳にすると、エフレムと

[6696] この奇跡については、同聖人の礼拝においても言及されている。カノン第6歌、トロパリオ第3番。

いう名の弟子の一人をノヴゴロドへ遣わし[6697] 、スラブ地方の首長たち[6698] に対し、ヴィシェラ川沿いに隠遁修道院を建てるための場所を割り当ててほしいと依頼した。首長たちは快くこれを許可した。　その後、尊者サヴァはそこに定住し、力の及ぶ限りあらゆる手段を尽くして修道院の建設に尽力した。修道士たちのための独房を建て上げた後、彼は、我らの主イエス・キリストの栄光ある昇天を称える教会[6699] を建立しようと決意した。神の御加護により、教会はまもなく完成し、奉献された。この時から、尊者サヴァのもとには多くの人々が集まるようになった。ある者は霊的な益や教えを求めて、またある者は彼の修道院で修道生活を送るために訪れた。彼は喜びをもってすべての人を受け入れた。

その一方で、聖人は誰よりも熱心に新しい修道院の整備に励み、そのたゆまぬ勤勉さをもって皆に模範を示し続けた。　その修道院には、当時、ある平信徒が働いていましたが、彼は修道院の務めを遂行するにあたり、非常に怠惰でした。彼は、長老があまりにも多くの仕事をこなしていることを理由に、しばしば長老と口論になりました。しかし、サヴァは彼を慰めながら、こう言いました。

「悲しむな、わが子よ。修道院の仕事を遂行するために定められたこの数日間だけ耐え忍べ。そうすれば、その後、我々は約束した以上の報いを与えてやろう。」

その信徒は、長老の穏やかな言葉に心を打たれ、それが自分に対する敵の誘惑であったことを悟り、それ以来、他の誰よりもはるかに熱心に働き、労苦を厭わなくなった。

その頃、ある修道士が、至福のサヴヴァに会おうと修道院を訪れた。彼は多くの人々から、サヴヴァの偉大な修道生活について聞いていたからである。長老は自ら出迎えた。長老には、他の修道院から誰かが訪ねてくる際、修道院からまだ遠く離れた、十字架が立てられている場所まで出向き、その人を迎えるという習慣があった。　そこで短い祈りを捧げた後、客と共に教会へ向かい、そこで再び祈りを捧げてから、ようやく自分の独房へ案内し、彼と対話を交わした。

前述の修道士がこのように聖サヴァによって迎えられたとき、長老は彼と長い会話を交わした後、夜も更けてきた頃、訪れた兄弟を休ませ、自身は石臼を手に取り、ライ麦を挽き始めた。　すると、新たに訪れた修道士は、長老が小部屋からそう遠くない場所で、夜通し、早課が始まるまでライ麦を挽き続け、その口からは詩篇が唱えられているのを耳にした。修道士は驚き、以前他の人々から長老について聞いていた話よりも、はるかに多くのことを目の当たりにしたと心の中で思った。　早朝、長老から祝福を受けると、彼は自分の修道院へと戻り、聖人のこの比類なき苦行の生涯を皆に語り、自らの怠惰と不精を深く悔いた。

修道院の整備が終わると、尊者サヴァは自ら柱を立て、その上に登り、土曜日までの一週間を断食と祈りに費やした。　土曜日になると、柱から降りて兄弟たちのところへ行き、彼らと共に聖体

[6697] エフレムは、聖サヴァの愛弟子であった。師の死後、イルメン湖のほとりに退隠し、そこでペレコム修道院を建立した（†1492年）。聖エフレムの記念日は5月16日と9月26日である。

[6698] ノヴゴロド・ヴェリキーは、トルゴヴァヤ地区とソフィイスカヤ地区の2つの地区に分かれており、これらはさらにいわゆる「コンツ」と呼ばれる区域に細分化されていた。スラヴスキー・コンツはトルゴヴァヤ地区の南に位置していた。各地区および各コンツは独自の行政機関を持ち、ノヴゴロドに最も近いノヴゴロド州の各郡を管轄していた。　その場所でヴィシェラ川が流れ、リシチイ修道院が位置していた地区は、スラブ地区の管轄下にあった。　中央に十字架、周囲に「スラヴエンスキー・ケンツの印章」と刻まれた印章が知られており、裏面には冠を戴いた聖人の像と「殉教者パヴェル」という銘文が刻まれていることから、スラヴエンスキー・ケンツには独自の行政機関が存在していたことがうかがえる。

[6699] 修道院内の教会と修道室は、1418年に聖ノヴゴロド大司教シメオン（†1421年）の祝福のもと、聖サヴァの修道院に建設された。彼の記念日は2月10日と6月15日である。

拝領を行い、日曜日の礼拝に耳を傾け、他の者たちと共に食事を分かち合い、兄弟たちに魂に益となる教えを説いた後、再び柱に登り、同じように次の土曜日までそこで修行を続けた[6700]。

この偉大な柱上修行の最中、トヴェリから、長い間会っていなかった実の弟が、聖サヴァに会いに修道院を訪れた。 しかし、長老は彼に会ったり、話をしたりすることを全く望んでいなかった。兄が長い間柱のそばに留まり、せめて顔だけでも見せてほしいと長老に懇願すると、長老はついに柱から降りて兄を祝福したが、何も告げることなく、すぐに再び柱に登った。 一方、聖人の兄弟は、彼に会うと喜びのうちにトヴェリへ戻り、自らその目撃者となることを許された、神の恵みの驚くべきしるしを称え、神を賛美した。

柱の上で生活し、一見すると修道院やその運営の心配事から遠く離れているように見えたが、聖サヴァはそれでもなお、自らの祈りによって修道院を守り続けていた。 ある日、強盗たちが修道院を略奪しようと近づいてきた。柱の上で祈りを捧げていた聖人は、遠くから彼らを目撃し、彼らが抱く悪意に気づくと、杖で壁を叩き始めた。 山賊たちはその音を聞き、恐怖に駆られて逃げ去った。なぜなら、聖人の祈りが彼らを修道院から追い払ったからである[6701]。それ以来、山賊たちは修道院に近づくことをやめた。

一方、聖サヴァのもとには、彼から得られる霊的な恵みを求めて、修道士も信徒も、至る所から集まり続けた。 なぜなら、彼は使徒の言葉通り、すべての人にとってすべての人となっていた（Iコリント9:22）からであり、すべての人を教え導き、すべての人を憐れみ、あたかも自分の体の一部であるかのように世話をし、年長者には兄弟や同輩として、より若い者には自分の子供として接していたのである。 そして、尊者サヴァの修道院には、侮辱される者も、侮辱する者も一人もいなかった。なぜなら、すべての者が聖サヴァによって慰められ、和解させられていたからである。

こうした修行に励み、これほど過酷な苦難やあらゆる種類の悲しみに耐え続けた聖サヴァは、生後七十年の時に肉体の病に倒れた。 肉体を離れ、自然への最後の義務を果たす準備を整えながら、聖人はすべての兄弟たちを呼び寄せ、臨終の魂を救う教えを説いた。特に、彼らが正教の信仰と修道誓願の遵守に堅く、揺るぎなく留まり、何よりも謙遜において卓越するよう求めた。

最後に、長老は彼らにこう言いました。

「私がどのような行いをしているのを見てきたか――それこそを、あなたたち自身も実践しなさい。」

その後、修道院と修道者たちの世話と保護をノヴゴロド大司教に委ね、修道院の直近の管理と修道者たちの指導については、修道者たちの中で最年長であり、自身の最も親しい弟子であるエフレムとアンドレイ[6702] ――その修道院において最も顕著な労苦と功績を示した者たち――に託した。尊者サヴァは、 精神はますます強固になる一方で、肉体は衰え始めていった。キリストの聖なる秘跡を拝領した後、彼は1460年10月1日、安らかに主のもとへ魂を委ねた。臨終の直前、尊者サヴァは弟子たちに次のように遺言した。 「わが魂が肉体から離れる時、その遺体に対していかなる盛大な葬儀も行わず、ただ、何の準備もせずに遺体を墓まで運び、大地に委ねなさい」。

尊者たちの弟子たちは、父であり導き手である師が亡くなったのを見て、彼との別れを深く嘆いた。 その後、救いへの父であり導き手である彼の記憶を、詩篇の詠唱や墓前の賛美歌をもって称え、彼らは、教会と、彼が人生の最期に修行に励んでいた柱の間に、勤勉で多くの苦難を耐え抜いたその遺体を埋葬した。

[6700] 聖サヴァの柱上修行の偉業を称えるこの教会は、彼を「大シメオン」、すなわち聖シメオン・ストルプニクに例えている。柱は、いわば聖人にとって、偉大なるアトス山の荒野に代わるものとなったのである。

[6701] 教会はこの奇跡について、同聖人の礼拝の中で讃えている。「主よ、私は叫びました」の第3節。

[6702] 聖エフレムについては282ページを参照のこと。聖サヴァのもう一人の弟子であるアンドレイについては、断食と徹夜祈祷によって体を極限まで衰弱させ、皮と骨だけが残るほどになったことが知られている。しかし、まもなく聖サヴァの死後、サヴァ修道院の院長にはすでにゲラシオス修道院長が就任していた。

師が神のもとへ旅立った後、聖サヴァの弟子たちは、修道院の運営に一層心を配り、修道院の規則や、彼らの霊的父である聖サヴァの遺言が一つも忘れ去られないよう努めた。　とりわけ彼らは、自らの内なる霊的生活に心を配り、師であり導き手であった人物の姿に倣い、自らの欠点を丹念に改めようと努めた。そして、この点において彼らは並外れた功績を示し、多くの人々にとって良き手本となった。

かなり長い時が経ち、神の御加護と聖サヴァの祈りによって、彼の修道院が順調に繁栄していた頃、そこで大火災が発生し、修道院全体が焼失してしまった。　この際、修道室や教会、そして尊者サヴァが存命中に修行に励んでいた柱も共に焼失したが、教会と柱の間にあった尊者サヴァの棺と、その棺の上にある礼拝堂は、火によるいかなる被害も受けず、四方から炎に囲まれていたにもかかわらず、炎はそれらに触れることさえできなかった。　これは、聖人が世を去った後の最初の奇跡であった。それ以来、聖サヴァの棺の周りでは多種多様な奇跡が起こるようになり、主はそれによって、信者たちに、彼が真の御心に適う者であり、恵みに満ちた奇跡を行う者であることを示された。次の奇跡は、とりわけすべての人々にそのことを確信させた。　あるザカリアという人物が、この聖人の修道院で修道服を着用する準備をしていたが、彼はその修道院の修道士たちから、聖人の聖なる生涯や死後の奇跡について多くを聞いていた。　聞いた話に畏敬の念を抱きつつ驚嘆したザカリアは、何日もそのことを考え続け、自分もまたそのような奇跡の目撃者となれるよう神に祈り求めた。　そしてある日、彼が祈りを捧げていた際、一息つくために腰を下ろしてうとうとと眠り込んでしまったところ、突然、目の前に見知らぬ老人が現れ、こう言った。「サヴァを見たいのなら、私について来なさい。そうすれば、彼に会えるだろう」。　ザカリアは、その老人の後について行き、聖サヴァの棺の前にたどり着くと、そこには数人の聖人たちがおり、その中に高台に立っている尊者サヴァの姿があった。彼は尊者に頭を下げると、尊者は彼に教訓となる言葉をいくつか語り、彼の信仰を確固たるものにしてくれた。

その間も、病に苦しむ者や、信仰をもって聖サヴァの墓に駆けつける人々は、その苦しみの中で霊的な慰めを受け続け、重い病から奇跡的な癒やしを得ていた。これらの奇跡の噂はノヴゴロド地方全体に広まったが、特にサヴァ修道院の院長であるイグメン・ゲラシウスが、　神の御使いへの祈りによって、自身が遭った毒害から癒やされた。その際、ゲラシイは夢の中で、明るい祭服を身にまとい、視線を教会に向けて祈りを捧げている聖サヴヴァの姿を見たのである。　目を覚まして癒やされたことを感じたゲラシイは、聖なる御使いたちを通して驚くべき奇跡を行われる神を賛美し、急いでノヴゴロドの大司教のもとへ向かい、そこで自分にあった幻視と奇跡的な癒やしについて語った。そこで、ノヴゴロドの聖イオナはサヴィン・ヴィシェルスキー修道院[6703] に到着し、急いで尊者サヴァの棺のもとへ赴き、その前で祈りの歌を捧げた。その後、彼は聖サヴァのイコンを描かせ、[6704] 彼に捧げる礼拝式を制定し、その生涯[6705] を記すよう命じた。これは、御自身の聖人たちを、また彼らがこの世を去った後も、驚くべき方法で賛美してくださる主なる神、そして私たちの救い主イエス・キリストの栄光のためであった。

[6703] 聖ノヴゴロド大司教イオナは、1458年から1470年に亡くなるまで、ノヴゴロドの教会を統率した。彼の記念日は11月5日にサヴヴィノヴィシェルスク修道院で執り行われるが、この修道院の設立は1461年と見なすべきである。

[6704] この古くからの聖サヴァのイコンは、現在もなお同修道院に保管されている。以前は聖人の遺骨が安置された聖遺物箱の上に置かれていたが、現在は修道院内の昇天大聖堂にある、聖サヴァに捧げられた小聖堂に安置されている。

[6705] 聖サヴァの伝記の執筆は、15世紀後半の著名な聖人伝作家であり、聖イオナの同時代人であるパホミイ・ロゴフェトによるものとされている。　しかし、パホミオスを著者としている『行伝』の写本の中には、末尾に「聖サヴァの『行伝』は、当時その修道院のイグメンであった聖職者ゲラシオスによって、6972年の夏に書き写され、編纂された」という注記が添えられているものがあり、　――このことから、この伝記は当初1464年にイグメン・ゲラシオスによって執筆され、その後パホミイ・ロゴフェトによって修正されたと推測できる。

その後、尊者サヴァの聖遺骨は、聖母マリアの御被覆に捧げられた新しく建てられた教会[6706]へ移され、ロシア正教会では彼を称える祝日が制定された[6707]。そして今なお、その尊い聖遺骸の前では、信仰をもって尊者サヴァの執り成しを求めるすべての人々に、尽きることのない癒しが与えられています。尊者は、信仰をもってその尊い記憶を崇めるすべての人々のために、至高者の御座の前で絶えず祈り続けておられるのです。

トロパリオ、第4調:

若き日から、あなたはすべてを神に捧げ、至福なる者よ。その愛ゆえに、故郷と親族を捨て、荒野に移り住み、そこで過酷な生活を送り、主から奇跡の賜物を受けられたサヴォ、尊き者よ。キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第8調:

敬虔なる者よ、故郷を離れ、荒野に身を置き、そこで柱の上に登り、過酷な生活を送られました。その生き様で多くの人々を驚かせ、そこからキリストより奇跡の賜物を受けられました。あなたの記念を祝う私たちを覚えてください。私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、サヴォ、私たちの父よ。」

聖殉教者ドムニンの記念日

記念日：10月1日

聖ドムニンはテッサロニキ出身であった。マクシミアヌス帝[6708]がテッサロニキに宮殿を建設していた際[6709]、聖ドムニンはキリスト教徒として捕らえられ、裁判のために皇帝のもとに連行された。皇帝は怒りを込めて彼にこう言った。

「私がこの街にいる間に、なぜ公然と別の神を信仰するのだ？　生きたいのなら、神々に生贄を捧げよ。」

聖人は従わなかったため、王は彼の体を拷問するよう命じた。その後、聖人の忍耐の中に自分への非難と責めを見出し、彼を城の外へ連れ出し、膝から下を切断するよう命じた。　両足を切断された聖なる殉教者は、七日間、食事を口にすることもなく苦しみの中で生き延び、その後、彼が深く愛した神に感謝を捧げ、その至福の魂を神に委ねた。

[6706] それは1523年のことだった。

[6707] 聖サヴァを称える祝日は、1549年の公会議の決定によりロシア正教会で制定された。それ以来、聖サヴァは「ノヴゴロドの奇跡行者」として知られるようになった。　1570年、イオアン・グロズヌイの治世下、ノヴゴロドの虐殺の際、「君主の兵士たちが奇跡行者の棺を破壊した」；翌年、聖サヴァの聖遺骨は新しい聖遺骨箱に納められ、修道院の新しい石造りのポクロフスキー教会に安置された。　現在、聖人の遺骸は、修道院の昇天大聖堂内のポクロフスキー礼拝堂の地下に安置されている。修道院内には、彼にちなんで名付けられた教会が2つある。

[6708] マクシミアヌス・ガレリウス、305年から311年までローマ皇帝を務めた。

[6709] ソロウン、あるいはテッサロニキは、マケドニアの極めて重要な古代都市であり、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフェルメイ湾の奥深くに位置していた。現在、この都市はギリシャのテッサロニキとして知られている。

聖ミハイル・ゾヴィイスキーと彼と共に殉教した人々の記念日

記念日：10月1日

聖ミハイルは、コンスタンティヌスとイリナの治世[6710] 、セバスティア近郊のゾヴィアと呼ばれる修道院[6711] で、他の修道士たちと共に修業に励んでいた。アガリアのエミール・アリーム[6712] がその地を襲撃し、彼らを捕らえた。　キリストの力に支えられた聖なる父たちは、異教徒たちからの「キリストを否定せよ」という説得に屈しなかった。修道士たちの真ん中に立った聖ミハイル修道院長は声を張り上げ、キリストのために死ぬよう彼らを説得した。まず、彼らは頭を垂れたまま剣で斬り殺され、続いて聖ミハイルも斬り殺された。

10月15日

10月2日（旧暦）

聖司祭殉教者キプリアンおよび聖殉教者ユスティナの生涯と受難

10月2日の記念日

デキア帝の治世[6713] 、アンティオキア[6714] には、キプリアンという名の哲学者[6715] であり、著名な魔術師[6716] が住んでいた。彼はカルタゴ[6717] の出身であった。不信心な両親のもとで育った彼は、

6710 コンスタンティノス6世ポルフィロゲネトス――780年から797年まで在位したローマ皇帝。その母であり、皇帝レオ6世の妃であるイリナ皇后は、イコン崇拝の熱心な擁護者であり、10年間にわたり息子の代わりに国政を執り行い、その後も802年まで統治を続けた。

6711 ここでいうのは、もちろん小アジア北東部のアルメニアのセバスティアのことである。

6712 アガリア人、あるいはサラセン人とは、アラビアのベドウィンのことである。「アガリア人」という呼称は、当初はこの遊牧の盗賊部族を指していたが、後にキリスト教の著述家たちによってすべてのアラブ人に広められ、やがてはイスラム教徒全般を指すようになった。　アラビアのベドウィンがアガリアンと呼ばれたのは、ユダヤの伝承によれば、彼らがアブラハムの女奴隷ハガルの子イシュマエルの子孫であったためである。　「エミール」（アラビア語で「王子」を意味する）とは、ムハンマドの娘を母とする血筋を自認する、独立したすべての自称後継者たちを指し、彼らは個々の部族やアラブ人の盗賊集団を率いていた。

6713 デキウス――249年から251年まで在位したローマ皇帝。

6714 アンティオキア――都市名として頻繁に使われる名称である。ここでは、おそらくシリアとパレスチナの間にあるフィニキアのアンティオキア、あるいは小アジア西部のフリギアとの国境にあるピシディアのアンティオキアを指している。

6715 すなわち、偽りの賢者という意味での異教の賢者。

6716 古代において「ヴォルフ」あるいは「マゴス」という名称は、高い知識と広範な知見、とりわけ一般の人々には理解できない自然の秘力を熟知した賢者を指していた。　同時に、この名称には、魔術、呪術、占い、呪文、そして様々な欺瞞や迷信といった概念も結びつけられていた。　異教徒の間では、太古の昔から魔術が高度に発達しており、聖書の多くの箇所でそれに対して言及されている。多くの教会の教師たちの見解によれば、異教の賢者たちは、闇の精霊の影響と助けを借りて、時に驚くべき魔術を行っていた。

6717 カルタゴ――アフリカ北部に位置する、フェニキア人による最も古く有名な植民地であり、古代史において絶頂期の繁栄を極めたが、紀元前146年に滅ぼされた。 古代カルタゴの廃墟の上に、ローマ帝国の初代皇帝たちの時代に新たなカルタゴが興り、それは非常に長い期間にわたり輝かしい繁栄を誇った。カルタゴでは、あらゆる迷信、魔術、そして「魔法の術」を伴う異教的なギリシャ・ローマ式の信仰が極めて盛んに発展していた。

幼少の頃から両親によって異教の神アポロン[6718] への奉仕に捧げられていた。 7歳の時、彼は魔術師たちの元へ預けられ、魔術と悪魔の知恵を教え込まれた。 10歳になると、両親によって 、異教徒たちが神々の住まいと呼んでいたオリンポス山[6719] へ、祭司としての務めに備えるために送り出された。そこには、悪魔が宿る無数の偶像があった。この山でキプリアヌスはあらゆる悪魔的な策略を学び、 彼は悪魔の様々な変身術を体得し、大気の性質を変え、風を呼び起こし、雷や雨を降らせ、海の波を荒れ狂わせ、果樹園やブドウ畑、畑に害を与え、人々に病気や腫れ物を引き起こすことを学び、総じて、破滅的な知恵と悪に満ちた悪魔的な活動を手に入れたのである。 彼はそこで、闇の君主を筆頭とする数え切れないほどの悪魔の群れを目にした。その中には、君主の傍らに立つ者、仕える者、主君を称賛して叫ぶ者、そして人々を堕落させるために世に送り出される者たちがいた。 また、彼はそこで、異教の神々や女神たちの幻影、さらには様々な幽霊や亡霊も目撃した。彼は厳しい40日間の断食を通じて、それらを呼び出す術を学んだ。日没後は食事をとったが、それはパンでも他の食べ物でもなく、樫の実であった。

15歳になると、彼は7人の偉大な祭司たちの教えを受けるようになり、彼らから多くの悪魔的な秘儀を学んだ。その後、彼はアルゴス[6720] へと向かい、そこで女神ヘーレ[6721] に仕えた後、その祭司から多くの誘惑の術を学んだ。 彼はタウロポリス[6722] にも住み、アルテミスに仕えたが、そこからラケダイモン[6723] へと向かい、そこで様々な魔術や幻術を用いて墓から死者を呼び出し、彼らに語らせる術を習得した。 キプリアンは二十歳の時、エジプトへ渡り、メンフィス[6724] で、さらに高度な魔術や呪術を学んだ。 30歳の時、彼はカルデア人たちの元へ赴き（[6725] ）、そこで占星術を学び、修業を終えた後、あらゆる悪行に熟達した状態でアンティオキアへ戻った。 こうして彼は魔術師、呪術師、そして殺人者となり、地獄の君主[6726] の偉大な友であり忠実な僕となった。彼はその君主と顔を

6718 アポロンは、最も崇敬されたギリシャ・ローマの異教の神の一人である。 太陽と知性の啓蒙、さらには社会の繁栄と秩序の神として崇められ、法の守護者、未来を予言する神としても知られていた。その崇拝の中心地の一つは、とりわけ、古代に名高いオリンポス山の麓に広がる、北ギリシャのテムペイの谷であった。

6719 オリンポス山は、北ギリシャのマケドニアとテッサリアの境界をなす山脈の（南東部の）一連の山々そのものを指す。古代ギリシャ人にとって、オリンポス山は彼らの異教の神々が鎮座する場所として崇められていた。

6720 アルゴスは、ペロポネソス半島東部（ギリシャ南部）のアルゴリダ地方にある古代ギリシャの首都であり、その近くには異教の女神ヘラの有名な神殿があった。

6721 ヘーラ（ユノー）は、古代ギリシャ人やローマ人によって、彼らの主神ゼウスの姉であり妻として崇められ、女神たちの中で最も高貴で尊ばれる存在とされていた。また、大地と豊穣の女神であり、結婚の守護神とも考えられていた。

6722 タウロポリスは、エーゲ海（群島）の南東部に位置するイカロス島にある、女神アルテミス（ダイアナ――月の女神であり、自然の瑞々しく花咲く生命の守護神としても崇められていた）を祀る神殿そのものである。 この地名の由来は、ギリシャ人がタウリコス半島の古代住民であるタウロス族の女神オルシロフをアルテミスと同一視し、両者を区別せずに「タウロポリス」と呼んでいたことにあります。

6723 ラケダイモン、あるいはラコニアは、ペロポネソス半島（南ギリシャ）の南東部に位置する地域である。より具体的には、この名称はラコニアの主要都市、すなわちスパルタを指しており、現在ではそのわずかな遺跡しか残っていない。

6724 メンフィス――かつてエジプト全土を統べる強大な首都――は、中エジプトのナイル川沿い、本流とその支流の間に位置し、支流は都市の西側を流れていた。かつて輝かしいエジプトの首都であったこの地には、現在ではメトラサニやモガンナンといった村の周辺に、ごくわずかで貧弱な遺構が残るのみである。

6725 カルデア人とは、バビロニアの賢者や学者たちのことで、科学、特に天文学や天体の観測に従事していた。彼らはまた、秘教、占術、夢の解釈などに携わる祭司や魔術師でもあった。 その後、特に東方においては、たとえ彼らがカルデア人ではなく、すなわちバビロン出身でなかったとしても、あらゆる種類の魔術師、魔法使い、占い師が総称としてこの名で呼ばれるようになった。

6726 聖書の教えによれば、邪悪で堕落した霊たちの闇の王国には、その最高指導者がおり、聖書ではしばしば「悪魔の君主」と呼ばれ、またベエルゼブル、ベリアル、サタンなどとも呼ばれている。これは、彼に対して従属しているかのように描かれる他の悪魔たちとは明らかに区別されている。 一般的に、聖書は悪霊たちを、その位階や権力の強さによって区別している。

合わせて語り合い、彼から大きな栄誉を授かった。そのことについては、彼自身が公然と証言している。

「信じてほしい」と彼は語った。「私は闇の君主その人を見たのだ。なぜなら、私は生贄を捧げて彼をなだめたからだ。私は彼を迎え入れ、彼やその長老たちと語り合った。彼は私を愛し、私の知性を称え、皆の前でこう言ったのだ。『見よ、これこそが新たなザムブリウス[6727]だ。常に従順であり、我々と交わるにふさわしい者だ！』と。そして彼は、私がこの肉体を離れた後、私を君主として立てることを約束し、この世での生涯においては、あらゆる面で私を助けると約束した。さらに、彼は私に奉仕させるために悪魔の軍団を授けてくれた。　私が彼のもとを去ろうとした時、彼は私にこう語りかけた。「勇気を出せ、勤勉なキプリアンよ。立ち上がって私に従え。すべての悪魔の長老たちが、お前に驚嘆するように。」その結果、彼の下にいるすべての公爵たちも、　私に示された栄誉を見て、私に敬意を払った。　彼の外見は花のようなものであった。頭には（実在するものではなく、幻のように）金と輝く宝石でできた冠が戴かれており、そのおかげでその一帯全体が照らされていた。また、彼の衣装は驚くべきものだった。　彼がこちらやあちらを向くたびに、その場全体が震え、様々な位階の多くの悪霊たちが、彼の玉座のそばに恭しく立っていた。その時、私も彼に全身全霊を捧げて仕え、彼のあらゆる命令に従った。

キプリアン自身は、改宗後にこのように自らについて語っていた。

ここから、キプリアンがどのような人物であったかが明らかである。悪魔の友として、彼は悪魔たちのあらゆる行いをなし、人々に害を与え、彼らを惑わしていた。アンティオキアに住んでいた頃、彼は多くの人々をあらゆる不法行為へと誘い込み、多くの人を毒や魔術で滅ぼし、若者や乙女たちを悪魔への生贄として犠牲にした。　彼は多くの人々に、自らの破滅的な魔術を教えた。ある者には空を飛ぶ術を、ある者には雲の上を舟で航行する術を、またある者には水の上を歩く術を教えた。すべての異教徒から、彼は彼らの忌まわしい神々の最高司祭であり、最も賢明な僕として崇められ、称賛されていた。　多くの人々が困窮の際、彼に助けを求め、彼は自らに満ち溢れていた悪魔の力によって彼らを助けた。ある者には淫行を、またある者には怒り、敵意、復讐、嫉妬を助長した。彼はすでに地獄の深淵にあり、悪魔の口の中にあり、ゲヘナの息子であり、悪魔の遺産と彼らの永遠の滅びの仲間となっていた。 しかし、罪人の死を望まれない主は、 その言い表せないほどの慈愛と、人間の罪によって打ち負かされることのない憐れみによって、この滅びゆく人間を救い出し、地獄の深淵に沈んでいた者を深淵から引き上げ、彼を救うことをお許しになった。それは、すべての人々に御自身の憐れみを示すためであった。なぜなら、主の人愛に打ち勝つことのできる罪などないからである。 そして、主はキプリアヌスを次のようにして滅びから救われた。

当時、同じアンティオキアに、ユスティナという名の少女が住んでいた。彼女は異教徒の両親の間に生まれた。父はエデシウスという名の偶像崇拝の祭司であり、母はクレオドニアと呼ばれていた。　ある日、自宅の窓辺に座っていたこの乙女――その頃にはすでに成人していた――は、通りかかったプライリアという名の助祭の口から、偶然にも救いの言葉を耳にした。　彼は、私たちの主イエス・キリストの受肉について語っていた――すなわち、主が聖母マリアから生まれ、多くの奇跡を行われた後、私たちの救いのために苦難を受け入れ、栄光のうちに死からよみがえり、天に昇り、御父の右に座し、永遠に君臨しておられることについてであった。　この助祭の説教は、ユスティナの心という肥沃な土壌に落ち、すぐに実を結び始め、彼女の中の不信仰という茨を根こそぎ取り除いていった。　ユスティナは、助祭から信仰についてより深く、より完全に学びたいと願ったが、乙女としての慎み深さに縛られ、彼を訪ねる勇気はなかった。しかし、彼女は密かにキリストの教会に通い

[6727] つまり、新たな邪悪な魔術師、呪術師、そして悪魔の従順な僕という意味である。 ここで「ザムブリウス」という名は、明らかに、古代の古典作家たちによって伝えられ、その並外れた魔術で名声を博し、教父たちの見解によれば、闇の悪魔的勢力と結託していたとされる、有名な古代エジプトの魔術師を指している。

、頻繁に神の御言葉を聞くうちに、聖霊が彼女の心に働きかけ、キリストを信じるようになった。やがて彼女は母親をも説得し、続いて年老いた父親をも信仰へと導いた。娘の知恵と賢明な言葉を目の当たりにし、耳にしたエデシウスは、心の中でこう自問した。「偶像は人の手によって造られたものであり、魂も息も持たない。それゆえ、どうしてそれらが神であり得ようか」。　そう考えを巡らせていたある夜、神の御許しにより、彼は夢の中で驚くべき幻を見ました。そこには、光を放つ天使たちの大群がおり、その中に世界の救い主キリストがおられ、キリストは彼にこう言われました。

「わたしのもとに来なさい。そうすれば、わたしはあなたに天の御国を与える。」

朝起きて、エデシウスは妻と娘を連れて、オンタトゥという名のキリスト教の司教のもとへ行き、彼らにキリストの信仰を教え、聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願した。　その際、彼は娘の言葉と、自分自身が体験した天使の幻視について語った。これを聞いた司教は、彼らの改宗を喜び、キリストの信仰を教え導いた後、エデシウス、その妻クレオドニア、そして娘ユスティナに洗礼を授け、さらに聖体拝領を授けて、平安のうちに送り出した。　エデシウスがキリストの信仰に確固たるものとなったとき、司教は彼の敬虔さを見て、彼を長老に任命した。その後、一年六ヶ月にわたり、徳高く、神を畏れつつ生きたエデシウスは、聖なる信仰のうちにその生涯を閉じた。　一方、ユスティナは主の戒めを守ることに勇敢に励み、その花婿であるキリストを愛し、熱心な祈り、処女性と貞潔、断食と厳格な節制をもって主に仕えた。　しかし、人類を憎む敵は、彼女のそのような生き様を見て、その徳を妬み、彼女に害を加え始め、様々な災難や苦難をもたらした。

当時、アンティオキアには、裕福で高貴な両親の息子であるアグライドという名の若者が住んでいた。彼はこの世の虚栄に身を委ね、贅沢な生活を送っていた。ある日、彼は教会へ向かうユスティナを目撃し、その美しさに心を奪われた。すると悪魔は、彼の心に邪悪な意図を吹き込んだ。　情欲に燃えたアグライドは、あらゆる手段を尽くしてユスティナの好意と愛を勝ち取ろうとし、　な誘惑によって、清らかなキリストの羊を、彼が企てた不義へと導こうとした。　彼は、その乙女が通るであろうすべての道を監視し、彼女と出会うたびに、彼女の美しさを称え、讃えるお世辞を並べ立てた。彼女への愛を示しながら、彼は巧妙に張り巡らされた誘惑の網で、彼女を淫行へと誘い込もうとした。　しかし、その乙女は彼を嫌悪し、彼の甘言や狡猾な言葉に耳を貸すことさえ拒み、背を向けて彼を避けていた。彼女の美しさへの欲望が冷めることなく、若者は彼女に使いを送り、自分の妻になるよう懇願した。

すると彼女はこう答えた。

「私の花婿はキリストです。私は主に仕え、主のために私の純潔を守っています。主は私の魂も体も、あらゆる汚れから守ってくださいます。」

この貞淑な乙女の答えを聞いて、悪魔に煽られたアグライドは、さらに情熱を燃やした。彼女を誘惑することができなかった彼は、彼女を無理やりさらうことを企んだ。　自分と同じような無分別な若者たちを仲間に集め、彼女が普段、祈りのために教会へ通う道で待ち伏せした。そこで彼女に出くわすと、捕まえて無理やり自分の家へ引きずり込んだ。彼女は激しく叫び、彼の顔を殴り、唾を吐きかけた。　彼女の悲鳴を聞いた近所の人々が家から駆け出し、清らかな子羊、聖ユスティナを、不敬虔な若者の手から、まるで狼の口から救い出した。暴漢たちは逃げ去り、アグライドは恥じ入って自分の家へ戻った。　これからどうすればよいか分からず、彼の中の不純な欲望がさらに強まる中、新たな悪行に踏み切ることを決意した。彼は偉大な魔術師であり呪術師であるキプリアン――偶像崇拝の祭司――のもとへ赴き、自身の苦悩を打ち明けて助けを求め、多量の金と銀を与えると約束した。 アグライドの話を聞き終えると、キプリアンは彼を慰め、その願いを叶えると約束した。

「私が」と彼は言った。「その乙女自身が君の愛を求め、君が彼女に対して抱く情熱よりもさらに強い情熱を君に対して抱くように仕向けてやる。」

こうして若者を慰めたキプリアンは、彼に希望を抱かせて帰した。その後、彼は自身の秘術に関する書物を取り出し、ユスティナの心をこの若者への情熱でまもなく燃え上がらせることができる

と確信していた不浄な精霊の一人を召喚した。その悪魔は喜んでこれを果たすと約束し、誇らしげにこう言った。

——私にとってこれは難事ではない。なぜなら、私は何度も都市を震撼させ、城壁を破壊し、家屋を崩壊させ、流血や父殺しを引き起こし、兄弟や夫婦の間に敵意と激しい怒りを植え付け、貞操の誓いを立てた多くの人々を罪へと導いてきたからだ。　山に籠もり、厳しい断食に慣れ、肉欲など一度も考えたことさえない修道士たちにも、私は淫らな欲望を植え付け、肉欲の情に身を委ねるよう教え込んだ。悔い改め、罪から背を向けた人々を、私は再び悪事へと引き戻した。多くの貞潔な者たちを、私は淫行へと陥れた。　まさか、この乙女をアグライドへの愛へと誘うことさえできないというのか？　いや、何を言っているのだ？　まもなく、実際の行動で私の力を示してやる。ほら、この薬を受け取れ（彼は何かが入った器を差し出した）、そしてあの若者に渡せ。彼にユスティナの家にこれを振りかけさせれば、私の言ったことが実現するのを見ることになるだろう。

そう言うと、悪魔は姿を消した。キプリアンはアグライドを呼び寄せ、悪魔の壺から密かにユスティナの家にその液体を振りかけるよう命じた。それが行われると、淫らな悪魔が、肉欲の燃え盛る矢を携えてそこに入り込み、その乙女の心を淫行で傷つけ、その肉体を不浄な欲望で燃え上がらせようとした。

ユスティナには、毎晩主に向かって祈りを捧げる習慣があった。そして、いつものように夜中の三時に起きて神に祈っていたとき、彼女は突然、自分の体の中に動揺と、肉欲の嵐、そして地獄の炎を感じた。　彼女はそのような動揺と内なる葛藤の中に、かなり長い間留まっていた。青年アグライドのことが頭に浮かび、彼女の中に邪な考えが芽生えたのである。乙女は、自分の血が釜の中で煮えたぎるように沸き立つのを感じ、自らを不思議に思い、恥じ入った。彼女は今、かつては汚れとして常に嫌悪していたことを心に思い描いていたのである。　しかし、その分別により、ユスティナはこの葛藤が悪魔から生じたものであると悟った。彼女は直ちに十字架の印という武器に訴え、心からの祈りを捧げて神にすがり、心の底から自分の花婿であるキリストに叫んだ。

「わが主、わが神、イエス・キリストよ！　見よ、私の敵たちは私に立ち向かい、私を捕らえるための罠を仕掛け、私の魂を疲れ果てさせました。しかし、私は夜にあなたの御名を思い出し、喜びを得ました。そして今、彼らが私を追い詰めるこの時、私はあなたにすがり、私の敵が私の上に勝利を収めることのないよう願っています。　主なる神よ、あなたはご存知です。私はあなたのしもべとして、あなたのためにこの身を清く保ち、私の魂をあなたに委ねてきました。どうか、良き羊飼いよ、あなたの羊を守り、私を飲み込もうとする獣の餌食にしないでください。私の肉の邪悪な欲望に打ち勝つ力を、私に与えてください。

長く熱心に祈った後、聖なる処女は敵を恥じ入らせた。彼女の祈りに打ち負かされた敵は、恥じ入って彼女から逃げ去り、ユスティナの体と心には再び平穏が訪れた。欲望の炎は消え、闘いは終わり、沸き立っていた血も静まった。　ユスティナは神を賛美し、勝利の歌を歌った。一方、悪魔はキプリアンのもとへ戻り、何も成し遂げられなかったという悲しい知らせを伝えた。

キプリアンは、なぜその乙女を打ち負かすことができなかったのかと尋ねた。

悪魔は、しぶしぶながらも真実を明かした。

「私が彼女を打ち負かすことができなかったのは、彼女に何らかのしるしを見て、それを恐れたからです。」

そこでキプリアンは、さらに邪悪な悪魔を呼び出し、ユスティナを誘惑するよう命じた。　その悪魔は赴き、最初の悪魔よりもはるかに激しい猛攻で乙女に襲いかかった。しかし、彼女は熱心な祈りを武器とし、さらに過酷な苦行を自らに課した。彼女は毛皮の衣を身にまとい、禁欲と断食によって肉体を律し、パンと水だけを口にした。　このようにして肉体の情欲を制したユスティナは、悪魔に打ち勝ち、恥をかかせて追い払った。悪魔は、最初の悪魔と同様に、何も成し遂げられずにキプリアンのもとへ戻った。そこでキプリアンは、悪魔の首領の一人を呼び出し、たった一人の乙女にさ

え打ち勝てなかった派遣された悪魔たちの弱さを告げ、彼に助けを求めた。　その悪魔は、以前の悪魔たちに対し、この件における不手際や、乙女の心に情欲を燃え上がらせることができなかったことを厳しく叱責した。キプリアンを安心させ、別の方法で乙女を誘惑すると約束すると、その悪魔の首領は女性の姿に変身し、ユスティナの元へ入っていった。　そして、まるで彼女の徳高い生活と貞節の模範に従いたいかのように、敬虔な口調で彼女と語りかけ始めた。そう語りながら、彼はその乙女に、これほど厳格な生活と純潔を守ることに対する報いはどのようなものか、と尋ねた。

ユスティナは、貞潔に生きる者への報いは大きく、言葉では言い表せないほどであり、天使のような純潔というこれほど偉大な宝を、人々が少しも気にかけないのは実に驚くべきことだと答えた。すると悪魔は、その恥知らずさを露わにし、狡猾な言葉で彼女を誘惑し始めた。

「では、この世界はどうやって存在し得るというのか？　人々はどのようにして生まれてくるというのか？　もしエバが純潔を守っていたなら、人類の増殖はどのようにして行われたというのか？　神ご自身が定められた結婚は、まことに善き行いである。聖書もまた、*『すべての人の結婚は敬虔であり、寝床は汚れのないものであれ』*と称賛している（ヘブライ人への手紙13:4）と聖書も称賛している。それに、多くの神の聖徒たちも、主が人々に慰めとして与え、子供たちを喜び、神を賛美するために設けた結婚生活を送っていたのではないだろうか？

この言葉を聞いて、ユスティナは狡猾な誘惑者、すなわち悪魔を見抜き、エバよりも巧みに彼を打ち負かした。会話を続けることなく、彼女は直ちに主の十字架の守護にすがり、その尊い印を自らの顔に刻み、心を自分の花婿であるキリストに向け直した。　すると悪魔は、最初の二人の悪霊たちよりもさらに大きな恥辱を被って、たちまち姿を消した。

大きな当惑を抱えて、高慢な悪魔の王はキプリアンのもとへ戻った。キプリアンは、彼もまた何も成し遂げられなかったことを知ると、悪魔にこう言った。

「まさか、お前でさえ――この種の事柄において他を凌ぐほど強大で、最も熟練した王子であるお前でさえ――その乙女を打ち負かすことができなかったというのか？　お前たちのうち、いったい誰が、この打ち負かすことのできない乙女の心に何かをなすことができるというのか？　教えてくれ、彼女はどのような武器でお前たちと戦っているのか、そして、いかにしてお前たちの強大な力を無力化しているのか。」

神の力に打ち負かされた悪魔は、しぶしぶこう認めた。

「我々は十字の印を見ることもできず、そこから逃げ出さざるを得ない。それはまるで火のように我々を焼き、遠くへ追い払うからだ。」

キプリアンは、悪魔に恥をかかされたことに憤り、悪魔を罵りながら言った。

「お前の力がそれくらいなら、弱い乙女ですらお前を打ち負かすのだ！」

そこで悪魔は、キプリアンをなだめようと、さらなる試みを企てた。彼はユスティナの姿に化け、アグライドのもとへ向かった。本物のユスティナだと勘違いした若者が欲望を満たせば、悪魔としての弱さが露見することもなく、キプリアンを恥じさせることもないだろうと期待してのことだった。　そして、悪魔がユスティナの姿でアグライドの部屋に入ると、アグライドは言葉に尽くせないほどの喜びで飛び起き、偽りの乙女のもとへ駆け寄り、彼女を抱きしめて口づけを繰り返し、こう言った。

「美しいユスティナよ、君が私のところに来てくれてよかった！」

しかし、若者が「ユスティナ」という言葉を口にした途端、悪魔はユスティナの名前さえ耐えられず、たちまち姿を消してしまった。若者はひどく怯え、キプリアンのもとへ駆け寄り、起こったことを話した。　そこでキプリアンは、自身の魔術によって彼を鳥の姿に変え、空を飛べるようにし、ユスティナの家へと送り出し、窓から彼女の部屋へ飛び込むよう助言した。悪魔に空を運ばれたアグライドは、鳥の姿でユスティナの家に飛来し、屋根に降り立とうとした。　ちょうどその時、ユスティナが自分の部屋の窓の外を覗き込んだ。彼女を見ると、悪魔はアグライドを放り出して逃げ去っ

た。それと同時に、アグライドが鳥のように見えた幻影も消え去り、青年は落下して大怪我をするところだった。　彼は両手で屋根の端をつかみ、それにしがみついてぶら下がった。もし聖ユスティナの祈りによってそこから地上に降ろされなかったなら、その不信心な若者は落ちて、粉々になっていただろう。　こうして、何も成し遂げられずに、若者はキプリアンのもとへ戻り、自分の悲惨な出来事を彼に語った。自分が恥をかいたと悟ったキプリアンは深く悲しみ、自らの魔法の力を頼りに、自らユスティナのもとへ行くことを思い立った。　彼は女にも鳥にも姿を変えたが、ユスティナの家の戸口にたどり着く間もなく、美しい女や鳥の幻影は消え去り、彼は悲しみに暮れて引き返した。

その後、キプリアンは自らの恥を晴らすべく復讐を始め、かつて悪魔が義人ヨブにそうしたように（ヨブ記1:15–19、2:7）、自身の魔術によってユスティナの家や、彼女の親族、隣人、知人たちの家に様々な災いをもたらした。　彼は彼らの家畜を殺し、奴隷たちを腫れ物で苦しめ、そのようにして彼らを極度の悲しみに陥れた。彼はユスティナ自身をも病で襲い、彼女は床に伏せ、母親は彼女を案じて泣いていた。　一方、ユスティナは預言者ダビデの言葉を引用して母を慰めた。*「わたしは死なず、生き続け、主の御業を宣べ伝える」*（詩篇117:17）。

キプリアンは、その抑えがたい激怒と大きな恥辱の結果として、神の許しにより、ユスティナとその親族だけでなく、街全体にも災いをもたらした。　家畜には腫れ物が現れ、人々の間には様々な病気が蔓延した。そして、悪魔の仕業により、「大祭司キプリアヌスが、ユスティナが自分に抵抗したことを理由に、この町を罰している」という噂が広まった。　そこで、最も名高い市民たちがユスティナのもとを訪れ、彼女に対して怒りを露わにし、これ以上キプリアンを悲しませず、アグライドと結婚するよう強く促した。そうしなければ、彼女のために街全体がさらに大きな災難に見舞われることになるからだ。　しかし彼女は、キプリアンが悪魔の力を借りて引き起こしているすべての災いはまもなく終わるだろうと語り、皆をなだめた。そして、その通りになった。聖ユスティナが神に熱心に祈ると、たちまち悪魔によるすべての憑依は止み、人々は皆、腫れ物から癒され、病気から回復した。　このような変化が起こると、人々はキリストを賛美し、キプリアンとその魔術的な策略を嘲笑したため、彼は恥じて人前に現れることができなくなり、知人との面会さえ避けるようになった。　十字架の印とキリストの御名の力が、いかなるものにも打ち勝つことを確信したキプリアンは、我に返り、悪魔に向かってこう言った。

「おお、万物の破滅者よ、惑わし手よ、あらゆる不浄と汚れの源よ！今、私はお前の無力さを知った。なぜなら、お前が十字架の影さえも恐れ、キリストの御名に震えるのなら、キリストご自身が君に迫った時、一体どうするつもりだ？　もし、十字架を掲げる者たちさえ打ち負かすことができないのなら、いったい誰をキリストの手から引き離すというのか？今、私はお前の無力さを悟った。お前には復讐することさえできないのだ！お前の言葉に従ったこの不幸な私は、惑わされ、お前の狡猾さを信じてしまった。　呪われた者よ、私から離れよ、離れよ――私はキリスト教徒たちに、私を憐れんでくれるよう懇願しなければならないからだ。私は敬虔な人々に助けを求め、私を滅びから救い出し、私の救いを顧みてくれるよう頼まなければならない。去れ、去れ、私から離れよ、不法者よ、真理の敵よ、あらゆる善に敵対し、憎む者よ。

これを聞いた悪魔は、キプリアヌスを殺そうと彼に飛びかかり、襲いかかっては殴りつけ、押しつぶし始めた。　どこにも身を守る場所を見出せず、どうすれば自らを助け、悪魔の凶暴な手から逃れられるかも分からなかったキプリアンは、もはや息も絶え絶えの状態ながら、聖十字架のしるしを思い出した。その力によって、ユスティナは悪魔のあらゆる力に抗っていたのだ。そして彼は叫んだ。

「ユスティナの神よ、私を助けてください！」

そして、手を上げて十字を切ると、悪魔はまるで弓から放たれた矢のように、たちまち彼から跳び退いた。気力を振り絞ったキプリアンは勇気を奮い立たせ、キリストの御名を呼びながら、自らに十字の印を刻み、悪魔を呪い、非難して執拗に抵抗した。　一方、悪魔は十字架の印とキリストの

御名を恐れ、彼から離れた場所に立ち、近づくこともできず、あらゆる手段でキプリアンを脅かし、こう言った。

「キリストは、お前を私の手から救い出せないぞ！」

その後、キプリアンに対する長く激しい攻撃の末、悪魔は獅子のように唸り声を上げ、その場を去っていった。

そこでキプリアンは、自分の魔術の書物をすべて持ち出し、キリスト教の司教アンフィムのもとへ向かった。 司教の足元にひれ伏し、慈悲を示して聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願した。 キプリアンが偉大で、誰にとっても恐ろしい魔術師であることを知っていた司教は、彼が何らかの策略を企んでやって来たのだと考え、次のように言ってその願いを拒んだ。

「お前は異教徒たちの間で多くの悪事を働いている。キリスト教徒には手を出すな。そうしなければ、間もなくお前は滅びてしまうだろう。」

そこでキプリアンは涙ながらにすべてを司教に告白し、自分の書物を焼き払うよう手渡した。彼の謙虚な姿を見て、司教は彼を教え導き、聖なる信仰へと導いた。そして、彼に洗礼の準備をするよう命じ、その書物はすべての信者たちの目の前で焼き払った。

心を痛めながら司教のもとを離れたキプリアンは、自らの罪を嘆き、頭に灰をまき、真の神に自分の不義を清めてくださるよう懇願し、心から悔い改めた。 翌日、教会にやって来た彼は、信者たちの真ん中に立ち、喜びと感動に満ちて神の御言葉を聴いた。やがて、助祭が「洗礼志願者よ、出て行きなさい」[6728] と叫んで洗礼志願者たちに退出を命じたとき、すでに何人かは出て行っていたが、キプリアンは出て行こうとせず、助祭にこう言った。

「私はキリストのしもべです。ここから私を追い出さないでください。」

すると、助祭は彼にこう言った。

「あなたにはまだ聖なる洗礼が授けられていないのだから、聖堂から出て行かなければなりません。」

これに対し、キプリアンはこう答えた。

「私の神、キリストよ、悪魔から私を救い、処女ユスティナを清く保ち、私に憐れみを与えてくださった方よ。私が完全なキリスト教徒となるまでは、私を教会から追い出してはならない。」

助祭はこれを司教に報告した。司教はキプリアヌスの熱意とキリストの信仰への献身を見て、彼を呼び寄せ、直ちに父と子と聖霊の御名によって彼に洗礼を授けた。

このことを知った聖ユスティナは神に感謝し、貧しい人々に多くの施しを配り、教会に献金を捧げた。キプリアンについては、司教は八日目に朗読者、二十日目に副助祭、三十日目に助祭に任命し、一年後には司祭に叙階した。 キプリアンはその生き方を一変させ、日ごとにその功績を増やし、かつての悪行を絶えず悔い改めながら、自らを磨き、徳から徳へと高まっていった。やがて彼は司教に任命され、その地位において多くの偉大な聖人たちに匹敵するほど聖なる生活を送った。 その一方で、彼は自分に託されたキリストの羊の群れを熱心に世話し、聖ユスティナという処女を助祭に任命し、その後、彼女に女子修道院を任せて、他のキリスト教徒の処女たちの修道院長とした。 その行いと教えによって、彼は多くの異教徒を改宗させ、彼らをキリストの教会へと導いた。こうして、その国では偶像崇拝が次第に廃れていき、キリストの栄光はますます高まっていった。

聖キプリアヌスの厳格な生活、キリストの信仰と人々の魂の救いに対する彼の献身を見て、悪魔は彼に対して歯ぎしりし、異教徒たちをそそのかして、東方の国の統治者の前で彼を誹謗中傷させ

[6728] 「求道者」という名称は、古代教会において、洗礼を受けたいと願い、教会の教えを学ぶことでその準備をしていた成人を指していた。彼らは聖書や説教を聞くために教会に入る権利を持ち、さらには典礼の冒頭（求道者のための典礼）に立ち会うことさえ許されていたが、 彼らは、典礼の最も重要かつ本質的な部分である「信徒の典礼」が始まる前に、直ちに聖堂から退出しなければならなかった。そのことは、助祭による大声での呼びかけによって告げられ、その呼びかけは今日でも典礼の執行中に教会で受け継がれている。

た。すなわち、彼が神々を辱め、多くの人々を神々から遠ざけ、彼らの神々に敵対するキリストを賛美しているというのであった。　こうして、多くの不信心者たちが、その地域を統治していたエウトルミオス統治者の元へやって来て、キプリアヌスとユスティナを誹謗し、彼らが神々にも王にも、あらゆる権威に対しても敵対的であるとして、民を惑わせ、惑わし、自分たちに従わせ、十字架にかけられたキリストへの礼拝へと導いていると告発した。これに伴い、彼らは総督に対し、この件でキプリアヌスとユスティナを死刑に処すよう求めた。　その請願を聞いたエウトルミウスは、キプリアヌスとユスティナを捕らえ、牢獄に投獄するよう命じた。その後、ダマスカスへ向かう際、彼は二人を裁判にかけるために連れ出した。そして、キリストの囚人であるキプリアヌスとユスティナが裁判のために彼の前に引き出されると、彼はキプリアヌスにこう尋ねた。

「かつては神々の名高い僕として、多くの人々を神々の元へと導いていたのに、なぜ以前の輝かしい行いを捨てたのか？」

聖キプリアンは、悪魔たちの無力さと欺瞞に気づき、悪魔たちが恐れおののき、尊き十字架の御印の前から逃げ去るキリストの力を悟った経緯を統治者に語り、また、キリストに帰依した理由を説明し、そのために死を厭わない覚悟があることを明らかにした。　拷問官は、キプリアンの言葉（）を心に受け止めなかったが、それに対して反論する術もなかったため、聖人を絞首刑に処し、その体を削り取るよう命じ、聖ユスティナには口と目を殴打するよう命じた。　長い拷問の間、二人は絶えずキリストを告白し、感謝をもってすべてに耐え抜いた。その後、拷問官は二人を牢獄に閉じ込め、優しい説得で彼らを偶像崇拝へと引き戻そうとした。　しかし、彼らを説得できないと分かると、彼らを大釜に投げ込むよう命じた。だが、沸騰する大釜は彼らに何の害も及ぼさず、彼らはまるで涼しい場所にいるかのように、神を賛美していた。これを見たアファナシウスという名の偶像崇拝の祭司が言った。

「アスクレピオス神の名において[6729]、私もこの火の中に飛び込み、あの魔術師たちを恥じ入らせてやる。」

しかし、火が彼に触れた途端、彼は即座に死んでしまった。これを見た拷問官は恐怖に駆られ、もはや彼らを裁くことを望まず、殉教者たちをニコミディアの総督クラウディウスのもとへ送り[6730]、彼らに起こったすべての出来事を報告した。この総督は、彼らを剣による斬首刑に処した。彼らが処刑場へ連行されたとき、キプリアンは、ユスティナが先に処刑されるよう、祈りのための少しの時間を求めた。彼は、ユスティナが自分の死を目撃して怯えてしまうことを恐れていたのである。一方、ユスティナは喜びをもって剣の下に頭を垂れ、彼女の花婿であるキリストのもとへ旅立った。これらの殉教者たちの無実の死を目の当たりにした、そこに居合わせたテオクティストという人物は、彼らを深く憐れみ、神への熱意に心を燃やして聖キプリアヌスの足元にひれ伏し、彼に口づけをして、自らをキリスト教徒であると宣言した。彼はキプリアヌスと共に、即座に斬首の刑に処された。こうして彼らは自らの魂を神の御手に委ねた。　その遺体は六日間、埋葬されないまま放置されていた。そこにいた巡礼者たちの一部が密かに遺体を運び出し、ローマへ持ち帰った。そこで、クラウディウス・カエサルの親族であるルフィーネという名の、徳高く聖なる女性に遺体を託した[6731]。彼女は、キリストの殉教者たち――キプリアヌス、ユスティナ、そしてテオクティスト――の遺体を尊厳をもって埋葬した。　彼らの墓の前では、信仰をもって駆けつけた人々の間で多くの癒やしが起こった。彼らの祈りによって、主が私たちの肉体的・精神的な病をも癒やしてくださいますように！

[6729] アスクレピオス、あるいはエスクラプス――ギリシャ・ローマ神話における医療の神。

[6730] ニコメディア――小アジアの都市。――かつて繁栄を極めたニコメディアには、その輝かしい過去を物語る多くの遺跡が今なお残されている。

[6731] ローマ皇帝クラウディウス2世は268年から270年まで在位した。――聖キプリアン、聖ユスティナ、聖テオクティストの殉教は268年頃であった。

コンダク、第1声調:

魔術の術から神の知恵へと目を向け、神の知恵を悟ったあなたは、世に最も賢明な医師として現れ、あなたを崇める者たちに癒やしを授けてくださいました、キプリアンよ、ユスティナと共に。彼女と共に、人を愛する主なる神に、私たちの魂を救ってくださるよう祈ってください。

聖アンドレイ（キリストのために狂人となった者）の生涯

記念日：10月2日

ギリシャ皇帝レオ大賢王（[6732] ）の治世、すなわち皇帝バシレイオス・マケドニア人（[6733] ）の息子の時代、コンスタンティノープルにテオグノストという名の男が住んでいた。彼は多くの奴隷を購入したが、その中にはアンドレイ（[6734] ）という名の、スラブ出身の少年が一人いた。 この少年は容姿端麗で、善良な人柄を備えていた。テオグノストは他の奴隷たちよりも彼を深く愛し、最も信頼する従者として任命し、聖書の学びに専念させることにした。聖書を学んだアンドレイは、頻繁に教会を訪れ、神に祈りを捧げ、聖書を読みふけっていた。　ある夜、彼が祈りを捧げていると、悪意に満ちた悪魔がそれを見て、この善行を妬み、若者がいる部屋の扉を激しく叩き始めた。アンドレイは恐怖に駆られ、祈りをやめ、急いでベッドに横たわり、山羊の皮を身にまとった。　これを見たサタンは喜び、別の悪魔にこう言った。

「この若者の姿を見よ。ついさっきまで豆を食べていたのに、今やすでに我々に対して武装しているではないか！」

そう言い終えると、サタンは姿を消した。一方、聖人は恐怖のあまり深く眠りにつき、夢の中で次のような幻視を見た。まるで広大な広場にいるかのようだった。その片側には多くのエチオピア人が立ち並び、もう片側には白い衣をまとった多くの聖人が立っていた。両者の間では、まるで競技や闘争が行われているかのようだった。　エチオピア人たちは、自分たちの側に一人の黒人の巨人を従えており、白衣をまとった者たちに、彼らの数え切れないほどの軍団を率いる千人隊長であるその黒人のエチオピア人と戦えるような闘士を、自分たちの仲間の中から送り出すよう、誇らしげに要求した。　黒ずんだ肌のエチオピア人たちは自らの力を誇示していたが、白い衣をまとった者たちは何も返答しなかった。聖アンドレイはそこに立ち、この恐ろしい敵と戦う決心をする者が誰なのかを知りたくて、その様子を見守っていた。すると、彼は高みから降りてくる美しい若者を目にした。その若者は三つの冠を手に持っていた。　そのうちの1つは純金と宝石で飾られ、もう1つは大きくて輝く真珠で、そして3つ目――最も大きな冠――は、神の楽園の枯れることのない白と赤の花や枝で編まれていた。　これらの冠は、人間の知恵では到底理解し尽くせないほど、また人間の言葉では表現し尽くせないほど、驚くべき美しさを放っていた。これを見たアンドレイは、どうすればその三つの冠のうち、せめて一つでも手に入れられるかと考えた。現れた若者のところへ近づき、彼はこう言った。

[6732] ビザンツ皇帝レウス6世「賢王」は、886年から912年まで在位した。

[6733] その父であるバシレイオス・マケドニアスは、867年から886年まで在位し、いわゆるマケドニア王朝を築いた。

[6734] すべてのスラブ語の聖人伝において、聖アンドレイ・ユロディヴィイはスラブ人と呼ばれているが、ギリシャ語の原本によれば「スキタイ人」である。しかし、ギリシャ人は長い間、かつて東ヨーロッパに居住していた野蛮な遊牧民族であるスキタイ人と混同し、東スラブ人を誤ってそう呼んでいたのである。

「キリストの御名にかけて、教えてほしい。この冠を売ってくれるか？　私自身は買う余裕がないが、少し待っていてほしい。主人のところへ行って話してくる。主人は、君が望むだけの金額を、この冠の代金として支払ってくれるだろう。」

すると、若者は顔を輝かせて、彼にこう言った。

「信じてほしい、愛する者よ。たとえあなたが世界のすべての金を持ち込んだとしても、私はあなたにも、他の誰にも、これらの花冠の一輪の花さえも売らない。なぜなら、これらの花冠は、この世の虚しい装飾品ではなく、天にあるキリストの宝から成っているからだ。それらを戴くのは、あの黒いエチオピア人たちを打ち負かした者たちである。　もし君が――一つどころか、三つの花冠すべてを手に入れたいのなら――あの黒いエチオピア人と一対一の戦いを挑み、彼に勝利した時、君の目の前にあるすべての花冠を私から受け取ることになるだろう。

これを聞いて、アンドレイは決意を固め、その若者に言った。

「信じてほしい。おっしゃったことは必ず実行する。ただ、彼を倒すための秘訣を教えてほしい。」

若者は言った。

「彼の狡猾さが何にあるか、お前は知らないのか？　エチオピア人は見た目は恐ろしく威圧的だが――実のところ、力は弱いのだ。彼の巨体や恐ろしい眼差しを恐れるな。彼は腐った草のように弱く、朽ち果てているのだ！」

こうした言葉でアンドレイを励ました後、美しい若者は、エチオピア人と戦う方法を彼に教え始めた。

彼はこう言った。

「エチオピア人があなたを捕らえて戦いを仕掛けてきても、恐れてはならない。十字の形に腕を組んで彼と戦えば、神の助けが見えるだろう。」

その後、聖人は前に進み出て、力強い声でエチオピア人に叫んだ。

「戦え！」

威嚇し、脅しながら、エチオピア人は近づき、アンドレイを掴むと、非常に長い間、アンドレイをあちこちとひっくり返し続けた。　エチオピア人たちは拍手を送り始めたが、白い衣をまとった者たちは、まるで顔色を失ったかのようだった。彼らは、このエチオピア人がアンドレイを地面に叩きつけるのではないかと恐れていたからである。アンドレイはすでにエチオピア人に圧倒されかけていたが、気を取り直すと、十字の形をとって彼に突進した。　悪魔は、切り倒された巨大な木のように崩れ落ち、倒れる際に額を石に打ちつけ、「ああ、悲惨だ、悲惨だ！」と叫んだ。一方、明るい色の服を着た者たちは大いなる喜びに包まれた。彼らはアンドレイを両手で高く掲げ、彼に口づけを繰り返し、エチオピア人に対する彼の勝利を祝った。

すると、黒人戦士たちは大きな恥辱を味わいながら逃げ去り、美しい若者はアンドレイに冠を渡し、彼に口づけをしてこう言った。

「平安のうちに去れ！　これからは、お前は我らの友であり兄弟となる。さあ、徳の偉業へと向かい、私のために裸となり、聖なる狂人となれ[6735]。そうすれば、私の御国の日に、多くの恵みの分け前を受ける者となるだろう。」

[6735] 「ユロド」とは、本来「狂気」を意味する。キリストのための「ユロド」は、キリスト教の修業における特別かつ至高の形態である。　神への熱烈な熱意と燃えるような愛に駆り立てられ、キリストのために「ユロド」となった者たちは、他のあらゆる苦難や自己犠牲に満足することなく、地上の生き物の中で人間を最も際立たせる特徴――すなわち、理性の通常の使用――を放棄し、礼儀も羞恥心も知らず、　――時には、一見誘惑的な行動さえも許してしまうような――姿をとったのである。[…]――その困難さにもかかわらず、聖なる修道者たちにとって、この「聖なる狂人」としての行いは、自らの不名誉を神の栄光へと変え、隣人への教訓とするための高い知恵をも要求した。すなわち、滑稽な行為の中に罪深いものを、不適切に見える行為の中に他者を誘惑したり傷つけたりするものを、決して許さなかったのである。– キ

その美しい青年からの言葉を聞き終えると、至福のアンドレイは眠りから覚め、この尋常ならざる夢に驚嘆した。それ以来、彼はキリストのために聖なる狂人となった。

翌日、眠りから覚めると、彼は祈りを捧げ、ナイフを手に取り、井戸へと向かった。そこで彼は衣服を脱ぎ捨て、正気を失ったかのように振る舞い、それを細かく切り刻んだ。早朝、水を汲みに井戸へ来た料理人は、アンドレイがまるで狂乱状態にあるかのように見えるのを見て、主人のもとへ行ってそのことを報告した。　アンドレイを案じた主人は彼の元へ行き、彼がまるで正気を失い、支離滅裂なことを話しているのを見つけた。アンドレイが悪魔に取り憑かれたのだと考え、彼に鉄の鎖をかけ、聖アナスタシア教会へ連行するよう命じた。アンドレイは日中は正気を失ったふりをしていたが、夜になると神と聖アナスタシアに祈りを捧げていた。　しかし、心の奥底では、自分が始めたこの行いが神に喜ばれるものなのかどうかを思索し、その答えを知りたがっていた。

そう思索にふけっていると、幻視の中で、五人の女性と一人の光に包まれた老人が、病人を癒やし、見舞いに回っている姿が現れた。彼らはアンドレイのところにもやって来て、老人は最年長の女性にこう言った。

「アナスタシア夫人よ！　なぜ彼を癒さないのですか？」

「師よ！」と女性は答えた。「彼を癒したのは、『私のために聖なる狂人となりなさい。そうすれば、私の御国の日には、多くの恵みにあずかることになる』と彼に告げられたお方です。彼には癒やしなど必要ありません。」

そう言うと、彼らは教会へと向かい、二度と戻ってこなかった。アンドレイは、早課の鐘が鳴り始めるまで、彼らの後ろ姿を見送っていた。　その時、聖人は自分の行いが神に喜ばれていることを悟り、心から喜び、さらに熱心に修行に励むようになった——夜は祈りに、昼は聖なる狂人の行いに。

ある夜、聖アンドレイはいつものように、心の奥底から神と聖殉教者アナスタシアへの祈りを捧げていた。　すると、悪魔がはっきりと見える姿で、斧を手に、多くの悪霊たちを従えて彼の前に現れた。残りの悪霊たちは、まるで聖人を殺そうとしているかのように、ナイフや木、杭、槍を手にしていた。以前アンドレイと戦ったあのエチオピア人も現れ、遠くから彼に向かって唸り声を上げた。　聖人に飛びかかり、手に持っていた斧で彼を切り裂こうとした。その後ろから、他のすべての悪魔たちも一斉に襲いかかった。聖人は涙を流しながら両手を天に掲げ、主に向かって叫んだ。

「あなたに栄光と誉れを捧げるこの魂を、獣たちに渡さないでください！」

そして再び叫んだ。

「聖なる使徒、神学者ヨハネよ、私を助けてください！」

すると、雷鳴が轟き、大勢の人々が現れ、太陽よりも明るい顔をした威厳ある長老が、大勢の従者たちを従えて現れた。彼は同行者たちに威厳と厳しさをもってこう言った。

「門を閉めよ。この者たちの誰一人として逃げ出さないように！」

たちまち門は閉ざされ、エチオピア人たちは全員捕らえられた。するとアンドレイは、ある悪魔が仲間にこっそりとこう囁くのを耳にした。

「我々が誘惑に負けたあの時は呪われるべきだ。ヨハネは容赦がなく、我々を残酷に苦しめようとしているのだから！」

一方、聖ヨハネは、自分と共に来た白い衣をまとった人々に、アンドレイの首から鉄の鎖を外すよう命じた。それから門の外に立ち、こう言った。

「エチオピア人を一人ずつ私のところへ連れて来い。」

リストに関する「愚者」の修行の最初の実践者たちは、初期の修道生活の揺籃であるエジプトで、4世紀後半という非常に早い時期に現れた。

最初の悪魔が連れて来られ、地面に横たえられた。使徒は鎖を手に取り、それを三つに折り曲げて、悪魔に百回打ちつけた。すると、悪魔は人間のように叫んだ。

「私を憐れんでください！」

その後、別の悪魔が地面に伏せられ、彼もまた打たれた。続いて三番目の悪魔も同様に、同じ数の打撃を受けた。主が悪魔たちに下したこの打撃は、幻のものではなく、悪魔の種族に苦痛を与える実在の懲罰であった。こうしてすべてのエチオピア人が懲らしめられ終えると、ヨハネは彼らにこう言った。

「行って、あなたがたの父であるサタンに、あなたがたに負わされた傷を見せなさい。それが彼にとって喜ばしいことかどうか、確かめてみよ！」

白い衣をまとった者たちが去り、悪魔たちも姿を消した後、その威厳ある長老は神の僕アンドレイのところに歩み寄り、彼の首に鎖を掛けながらこう言った。

「私がいかに急いで君を助けに駆けつけたか、見ただろう。私は君のことを深く気にかけている。神が私に君の世話をするよう命じられたからだ。さあ、耐え忍べ。まもなく君は解放され、自分の意志のまま、好きなように歩き回れるようになるだろう。」

「ご主人様」とアンドレイは言った。「あなたはどなたですか？」

老人は答えた。

「私は、主の胸に寄り添っていた者だ（ヨハネ13:22、21:20）。」

そう言うと、彼は稲妻のように輝き、若者の目の前から姿を消した。そして、至福のアンドレイは、神が御自身の最愛の弟子を助けとして遣わしてくださったことを称えた。

聖ヨハネ・テオロゴスの御出現、彼との対話、そして悪魔たちによる拷問の後、至福のアンドレイは、相変わらず鎖で縛られたまま、眠りにつこうと横になった――すると同時に、恍惚とした状態に入った。彼は自分が王宮の中にいるのを見た。　玉座には、偉大な栄光に包まれた王が座しておられ、アンドレイを御許に呼び寄せ、こう尋ねられた。

「魂の底から、わたしのために尽くしたいと願うか？」

アンドレイは答えた。

「はい、主よ！」

王は彼に非常に苦いものを味わわせ、その際こう言った。

「これこそが、この世でわたしに仕える者たちの苦難の道である。」

その後、王はアンドレイに、雪よりも白く、マナよりも甘いものを味わわせた。それを口にしたアンドレイは喜びに満ち、最初の食べ物の苦味を忘れてしまった。すると王は彼に言った。

「これこそが、わたしに仕え、最後まで勇敢に耐え抜く者たちへの、わたしの糧である。お前も、始めたように勇敢にその業を成し遂げよ。この世でわずかな苦難を耐え抜けば、お前は永遠に尽きることのない命の中に留まることになるからだ。」

眠りから覚めたアンドレイは、自分が見た最初の食事――苦いものはこの世での忍耐を、最後の食事――甘いものは永遠の命を象徴しているのだと考えた。

その後、アンドレイの主人は四ヶ月にわたり彼を傍らに置いていたが、やがて自由の身とした。　正気を失ったふりをしたアンドレイは、街中を駆け回るようになった。彼は街を歩き回り、*「苦難、悲しみ、迫害に耐え、全世界が受け入れるに値しない者たち」*（ヘブライ人への手紙11:37–38）と共に過ごした。　ある者は彼を狂人のように侮辱し、ある者は悪臭を放つ犬のように嫌悪して追い払い、またある者は彼を悪霊に取り憑かれた者と見なし、幼い少年たちはこの福者を嘲笑し、殴打した。しかし彼はすべてに耐え忍び、自分を侮辱した者たちのために祈った。

慈悲深い施し好きの人々がアンドレイに施しを差し出すと、彼はそれを受け取ったが、他の貧しい人々に分け与えた。　もっとも、彼は施しをしていることを誰にも知られないように配っていた。乞食たちに腹を立て、まるで彼らを殴りつけたいかのように、狂人のふりをして手に持っていた金

を彼らの顔に投げつけ、乞食たちはそれを拾い集めた。　時には三日間もパンを口にせず、時には一週間も断食し、もし彼にパンの切れ端を恵んでくれる人が誰もいなければ、彼は二週間も食事を摂らずに過ごした。アンドレイの衣服は、体の裸をかろうじて覆うだけの、まったく使い物にならないぼろ服であった。　キリストのために聖シメオンに倣い、昼は街を駆け回り、夜は祈りに没頭した。これほど広大な都市で、数多い人々の間に暮らしながらも、彼には「頭を休める場所」さえなかった。乞食たちは彼を自分たちの小屋から追い払い、金持ちたちは自宅の庭に彼を入れようとしなかった。眠りにつき、疲れ果てた体を少しでも休める必要が生じると、彼は　犬たちが横たわっているゴミ捨て場を探し、その間に身を横たえた。しかし、犬たちでさえ、この神の僕を近づけようとはしなかった。　ある犬は噛みついて彼を追い払い、またある犬は自ら彼から逃げ去った。彼は決して屋根の下で眠ることはなく、常に寒さや暑さの中、ラザロのように腐敗した場所や泥の中に転がり、人や動物に踏みつけられながら過ごした。　こうして、自発的な殉教者は苦しみ、聖なる狂人は全世界を嘲笑った。*「神の愚かさは、人々の知恵よりも賢いからである」*[6736]（Iコリント1:25）。そして、聖霊の恵みが彼に宿り、彼は透視の賜物を受けた。なぜなら、彼は人々の思いを見通せるようになったからである。

ある時、コンスタンティノープルで、ある高貴な男性の娘が亡くなった。彼女は生涯、処女の清らかさを保って生きてきた。　彼女は臨終の際、父の庭にある貧しい人々のための墓地、すなわち城外の場所に埋葬されるよう遺言を残した。彼女が息を引き取ると、遺体はそこへ運ばれ、キリスト教の慣習に従って埋葬された。　当時、コンスタンティノープルには、墓を掘り起こして死者の衣服を剥ぎ取る墓掘り人がいた。彼は道端に立ち、その乙女がどこに埋葬されるかを観察していた。彼女の墓所がどこであるかを見極めると、夜が更けるのを待って墓を掘り起こし、死者の衣服を剥ぎ取ることを決心した。

ところが、聖アンドレイもまた、キリストのためにいつもの聖なる狂気の行いを実践しながら、その場所へ向かっていた。　彼がその墓荒らしに気づくやいなや、聖アンドレイは霊によってその邪悪な意図を見抜いた。盗人を企てた行いから思いとどまらせ、また彼に下されるであろう罰を予見して、聖アンドレイは厳しい眼差しで彼を見つめ、まるで激しい怒りに満ちたかのようにこう言った。

「墓に横たわる者の衣服を盗む者を裁く御霊は、こう言われる。お前はもはや太陽を見ることも、昼を見ることも、人の顔を見ることもない。お前の家の門はお前に閉ざされ、二度と開かれることはない。お前のための日は暗くなり、二度と明るくなることはない。」

これを聞いた墓掘り人は、聖人が何を言っているのか理解できず、その言葉に全く耳を貸さずに立ち去った。聖人は再び彼を見据えて、こう言った。

「お前は立ち去るのか？　盗んではならない！　もしそうするなら――イエスの御名にかけて誓うが――お前は二度と太陽を見ることはないだろう。」

聖人が自分に話しかけていると理解した墓掘り人は、どうして自分の意図を知っているのかと驚き、聖人のところに戻って言った。

「お前は間違いなく悪霊に取り憑かれており、悪魔の唆しによって、神秘的で不可解なことを語っているのだ！　私はあえてそこへ行き、お前の言葉が当たるかどうか確かめてやる！」

その後、聖人は狂人のふりを続けながらその場を去った。夕暮れが近づき、好機を見計らって、泥棒は棺の石をどかし、棺の中に入り、まず第一に故人の上着とすべての装飾品を手に取った。それらは高価なものだったからだ。　それらを手にした彼は立ち去ろうとしたが、ある内なる声が彼に

[6736] ここで、使徒たちが「愚者」について抱いていた理解――すなわち、世はキリストとその追随者たちの自己犠牲を、狂気や愚行として受け止める――を明確に認識しておく必要がある。　したがって、これらの言葉を「聖なる狂人」たちの生き方を説明するために引用するのは、必ずしも正しくありません。*「神は、知恵をもって生きる者以外を愛されない」からです*（『知恵の書』7章、注：ナフ神父）。

こう囁いた。「シャツも脱がせなさい。あれも美しいのだから」。少女からシャツを脱がせた後、墓掘り人は墓から出ようとした。　すると、死んだ娘は神の御心により、右手を上げ、墓掘り人の顔を叩いた。彼は即座に失明した。その時、その不幸な男は恐怖に震え上がり、恐怖のあまり顎や歯、膝、そして全身の骨が砕けそうになった。

すると、亡くなった乙女は口を開き、こう言った。

「哀れで、見捨てられた人間よ！　あなたは神を恐れず、自分も人間であるということを考えもしなかった！　あなたは乙女の裸体を恥じるべきだった。あなたが奪ったものはもう十分だ――せめて私の裸の体にシャツ一枚くらいは残してほしかった。　しかし、あなたは私を憐れむことなく、残酷に振る舞い、主の再臨の日に、すべての聖なる乙女たちの前で私を笑いものにするつもりだった。だが今、私はあなたにこうしてやる。そうすれば、あなたは二度と盗みを働かなくなるだろう。それは、イエス・キリストが生きていること、そして死後には裁きと報い、そして罰があることを、あなたに知らせるためだ。

こう言い終えると、その乙女は立ち上がり、自分のシャツを手に取り、それを身にまとい、すべての衣服と装飾品を身につけて横になり、こう言った。*「主よ、あなただけが私に安らぎを与えてくださる」*（詩篇4:9）。

そう言い終えると、彼女は再び安らかに息を引き取った。一方、あの見捨てられた男は、棺から這い出し、庭の塀を見つけるのがやっとだった。塀の片方の壁、またもう片方の壁と、手探りで掴みながら、彼は最も近い道に出て、町の門へとよろめきながら向かった。　彼の失明の理由を尋ねる人々に、彼は　、実際の出来事とは全く異なる話をした。しかしその後、彼に起こったすべてのことを、ある友人に打ち明けた。それ以来、彼は物乞いをし、そのようにして生計を立てた。そして、彼はしばしばこう自分に言い聞かせていた。

「呪われよ、わが喉よ。お前のせいで、私は失明してしまったのだ！」

彼はまた、聖アンドレイのことを思い出し、聖人が予見し予言した通りにすべてが成就したことに驚嘆した。

ある日、街を歩いていた聖アンドレイは、自分に向かって死者が運ばれてくるのを見かけた。亡くなったのは非常に裕福な人物で、その棺の後ろには、ろうそくや香炉を手にした大勢の人々が列をなしてついてきていた。聖職者たちは慣例通りの葬送の賛美歌を歌い、故人の親族や近親者たちは泣きじゃくっていた。　その死者に何が起きているかを透視する眼で見ていた聖人は、足を止めて見守った。すると、長い間完全に意識を失った後、彼は霊的な眼で、棺の後を歩きながら大声で叫んでいる多くのエチオピア人たちを見た。

「哀れな者よ、哀れな者よ！」

そのうちの何人かは袋を手に持ち、そこから死者を囲む人々に灰をまき散らしていた。また、他の悪霊たちは、恥知らずな娼婦のように踊り、恥知らずな笑い声を上げていた。さらに、犬のように吠える者もいれば、豚のようにクヌクヌと鳴く者もいた。死者とは、彼らにとって喜びと楽しみの対象であった。　悪魔たちの中には、死者を囲んで悪臭を放つ水をかけ回す者もいれば、死者が横たわる寝台周辺を空中で飛び回る者もいた。そして、その罪人の死体からは、息が詰まるような悪臭が立ち上っていた。　死者の後を追いながら、悪魔たちは手を叩き、恐ろしい足音を響かせ、歌っている者たちを罵り、こう言った。

「神よ、お前たち哀れなキリスト教徒の誰一人として、光を見ることを許さないでください。お前たちはあの犬の上で『聖徒たちと共に、その魂を安らかに眠らせてください』と歌いながら、あらゆる悪に染まったその者を、神の僕と呼んでいるのだから。」

改めて目を向けると、アンドレイは、悪魔の首領の一人が、燃えるような眼差しで、樹脂と硫黄を塗られたその見捨てられた者の棺へと歩み寄り、その遺体を焼き尽くそうとしているのを見た。そして、埋葬の儀式が終わると、聖アンドレイは、美しい若者の姿をした天使が、苦々しい涙を流し

ながら歩いているのを見た。通りかかった天使は、聖アンドレイに近づいた。聖アンドレイは、この若者が故人の近親者の一人であり、それゆえにそう泣いているのだと思い、彼に近づいて言った。

「天と地の神の名にかけてお願いする。なぜ泣いているのか、その理由を教えてほしい。あなたほど、死者を悼んでこれほど激しく泣く人を、私はこれまで一度も見たことがないからだ。」

天使は答えた。

「私が涙を流す理由はこうです。私は、あなたが墓へと運ばれているのを見たあの故人の護衛として任命されていました。しかし、悪魔が彼を連れ去ってしまったのです。これこそが、私の泣き悲しむ理由なのです。」

これを聞いて、聖人は彼に言った。

「今、あなたが誰なのか分かりました。どうか、聖なる天使よ、故人がどのような罪を犯したために、悪魔に連れ去られてしまったのか、教えてください。」

「アンドレイよ、神に選ばれた者よ！」と天使は答えた。「あなたがそれを知りたがっているのなら、何も隠さずに話そう。私は、純金のように輝くあなたの聖なる魂の美しさを見ている。あなたを見て、私の悲しみは幾分和らいだ。この男は王から大いに重用されていた。　しかし、彼は恐ろしい罪人であり、犯罪的な生活を送っていた。彼は淫行者であり、姦通者であり、ソドムの罪に染まり、諂い者であり、無慈悲であり、金に目がくらみ、嘘つきであり、人を憎み、恨み深く、賄賂を受け取り、誓いを破る者でもあった。　彼は貧しい使用人たちを飢えと殴打、そして裸同然の状態に追い込み、冬の間は靴も衣服も与えなかった。　多くの奴隷を殺害し、馬小屋の床下に埋めさえした。神に憎まれる情欲に取り憑かれ、彼は三百人もの魂を、卑劣で忌まわしい淫行の罪で穢した。しかし、彼にも収穫の時が訪れ、悔い改めず、言い尽くせぬ罪を抱えたまま、死が彼を襲った。　彼の魂は悪魔たちに奪われ、その忌まわしい肉体は――あなた自身も目撃した通り――悪霊たちによって侮辱されながら連れ去られた。それゆえ、聖なる魂よ、私は嘆き悲しんでいる。深い悲しみに囚われ、私は泣いている。なぜなら、私が守っていた者が今や悪魔たちの笑いものとなってしまったからだ。

神の御使いのこの言葉に、聖人はこう言った。

「友よ、お願いだ――その泣き声を止めてくれ。死者は悪行を重ねたゆえに、悔い改めることなくこの世を去ったのだ。彼には、自らの行いの報いを存分に味わわせてやれ。しかし、炎のような姿を持ち、あらゆる美徳に満ちた、全能の主サバオトの僕であるお前は、今より永遠に、お前の神の恵みのもとにあるだろう。」

この言葉を終えると、天使はアンドレイから目に見えないまま立ち去った。通りかかった人々は、聖人が独り言を言っていると思い、互いにこう語り合った。

「あの狂人を見てみろ、あのようにふざけて、壁に向かって意味のないことを話している。」

そう言いながら、彼らは彼を突き飛ばして追い払い、こう言った。

「何がお望みだ、狂人よ？　人間と話す資格もないくせに、壁に話しかけているのか！」

聖人は黙ってその場を離れ、人目につかない場所に身を隠すと、墓へと運ばれていくのを見たあの不幸な者の破滅を嘆き、苦々しく泣いた。

ある日、聖アンドレイは、コンスタンティヌス帝が建立した柱の近くにある市場で、人混みの中を歩いていた[6737]。バルバラという名のある女性は、聖霊に啓示を受けて、人混みの中に、炎の柱のように輝いている聖アンドレイを恐怖の念を抱きながら目にした。　その際、分別のない者たちは彼を突き飛ばし、また他の者たちは殴りつけた。しかし、多くの者は彼を見つめながらこう言った。

「この男は狂っている。正気を失ってしまったのだ。どうか、我らの敵にもこのようなことが起こりませんように！」

[6737] ここで言及されているのは、明らかに、コンスタンティヌス大帝が、キリストの十字架の力によってマクセンティウスに勝利したことを感謝して建立し、後に彼自身によってコンスタンティノープルへ移された、あの有名な紫色のローマの柱のことである。

一方、悪魔たちは、黒いエチオピア人の姿をとって聖アンドレイの後を歩きながら、こう言っていた。

「ああ、もし神が、この者に似た者をもう一人、地上に遣わさなかったらいいのに。なぜなら、この男ほど私たちの心を枯渇させた者はいないからだ。彼は主人のために働くことを望まず、狂人ぶって、全世界を嘲笑っているのだ。」

そして、その女性は、エチオピア人たちが聖人を殴打する者たちを指さし、互いにこう語り合っているのを見た。

「彼らが無謀にも彼を殴打しているのは、私たちにとって喜ばしいことだ。無実の神の聖人を拷問した罪により、彼らは死の瞬間に裁かれ、救いはないのだから。」

これを聞いた聖人は、神の御霊の導きにより、炎のように彼らに飛びかかり、驚くべき力で悪魔のしるしを打ち砕き、彼らに怒りを込めてこう言った。

「私を殴る者たちを責めてはならない。私は主なる神に、彼らが私を殴ったことを罪とみなさないよう祈っているからだ。彼らは無知ゆえにこれを行っているのだから、その無知ゆえに赦しを受けるだろう。」

聖人がこう語ったとき、突然、天が門のように開かれ、そこから無数の美しいツバメたちが聖人の頭上に舞い降りてきた。その真ん中には、くちばしに黄金のオリーブの葉をくわえた、真っ白な大きな鳩がいた。そして、その鳩は人間の言葉で聖人にこう言った。

「この葉を受け取りなさい。これは全能の主が、あなたへの御好意のしるしとして、楽園から送ってくださったものです。あなたは、自分を殴る者たちをも慈しみ、赦し、それが彼らの罪とならないよう彼らのために祈っているからです。」

そう言い終えると、鳩は聖人の頭の上に降り立った。この一連の出来事を目の当たりにした敬虔な女性は驚き、幻から我に返ると、こう言った。

「神は地上にどれほどの灯をお持ちでしょうか。それを知る者は誰もいません！」

彼女は何度もその幻視を他の人に話そうとしたが、神の力が彼女を制止した。その後、聖アンドレイはある場所で彼女に出会い、こう言った。

「バルバラよ、私の秘密を守りなさい。そして、あなたが見たことを、私が*『驚くべき住まいの地、すなわち神の家』*にたどり着くまでは、誰にも話してはならない（賛美の詩篇41:5）。」

「誠実な灯火であり、神の聖なる方よ」とバルバラは答えた。「たとえ私がその幻を誰かに話そうとしても、それはできません。なぜなら、目に見えない神の力が私を留めているからです。」

街を歩いていた聖アンドレイは、ある日ある高官に出くわし、その男の生涯を見通すと、彼に唾を吐きかけ、こう言った。

「邪悪な淫者よ、教会を冒涜する者よ、お前は教会へ行くふりをしている。『早課に行く』と言いながら、実際にはサタンのもとへ行き、邪悪な行いをしているのだ。ああ、真夜中に起き上がり、神を怒らせる不法者よ！」　今や、お前の行いに応じて報いを受ける時が来たのだ！それとも、恐るべき、すべてを見通し、すべてを試みる神の御目から身を隠せるとでも思っているのか?

これを聞いた貴族は、これ以上恥をかかされないよう、馬を鞭打ってその場を去った。数日後、彼は重病に陥り、衰弱していった。側近たちは彼をある教会から　別の教会へ、ある医師から別の医師へと連れ回したが、それは彼に何の益ももたらさなかった。　やがて、この見捨てられた男は、永遠の苦しみへと旅立った。ある夜、聖人はその貴族の家の近くで、西からやって来た主の天使を目撃した。天使は燃え盛る炎のような姿をしていて、大きな炎の杖を握っていた。天使が病人のそばに近づくと、上の方から声が聞こえてきた。

「この冒涜者、忌まわしいソドムの者を打ち、彼を殴りながらこう言いなさい。『お前はまだ罪を犯し、様々な人々を汚し続けたいのか?　早課に行くふりをして、悪魔の不法行為のために歩き回るつもりなのか?』」

天使は命じられた通りに実行し始めた。その際、天使の声と打撃の音は聞こえたが、天使自身の姿は見えなかった。そのような苦しみの中で、その男は息を引き取った。

ある日、聖アンドレイが市場を訪れると、高潔な生活で皆から称賛されていたある修道士に出会った。確かに彼は修道士らしく修行に励んでいたが、度を越して金銭への執着に傾いていた。　町の住民の多くは、彼に自分の罪を告白する際、貧しい人々に配るために多くの金を渡していた。しかし、彼は飽くことのない金銭への執着に囚われていたため、誰にも分け与えず、すべてを袋にしまい込み、お金が増えていくのを見て喜んでいた。　ある時、その哀れな修道士と共に道を歩いていた聖アンドレイは、透視の眼で、この金銭欲の強い修道士を恐ろしい大蛇が巻きついているのを見た。聖人は修道士に近づき、その大蛇をじっと見つめた。一方、修道士はアンドレイを施しを求める貧しい人々のひとりと勘違いし、こう言った。

「神があなたを憐れんでくださいますように、兄弟よ。私にはあなたに差し出すものなど何もないのです。」

彼から少し距離を置くと、聖人は、その修道士の周囲、大蛇の上空の空中に、黒い文字でこう書かれているのに気づいた。

「あらゆる不法行為の根源は、金銭への執着という蛇である。」

振り返ると、聖人は互いに言い争っている二人の若者に気づいた。一人は肌が黒く、瞳も暗かった。それは悪魔であり、もう一人は神の天使で、天の光のように白かった。黒い方が言った。

「その修道士は私のものだ。彼は私の意志に従っているからだ。彼は慈悲深くなく、金に貪欲だ――神とは無縁であり、偶像崇拝者のように私のために働いているのだ。」

「いや、彼は私のものだ」と天使は反論した。「彼は断食し、祈りを捧げている。しかも、彼は柔和で謙虚なのだから。」

こうして二人は言い争い、互いに合意に至らなかった。すると、天から光を放つ天使に向かって声が響いた。

「その修道士には、お前の分け前はない。彼を放っておきなさい。彼は神のためではなく、マモンに仕えているのだから。」

その後、主の天使は彼から離れ、闇の霊が彼を支配するようになった。これを見た至福のアンドレイは、敵対する悪魔が光の天使との論争に勝ったことに驚いた。ある日、街でその修道士に出くわした聖人は、彼の右手を握り、こう言った。

「神のしもべよ、怒ることなく、このあなたのしもべの言葉を聞いてください。そして、私の貧しい言葉を慈しんで受け入れてください。あなたのために、私は大きな悲しみに襲われており、かつては神の友であったあなたが、今や悪魔のしもべであり友となっていることを、もはや耐えられないのです。　あなたはセラフィムのような翼を持っていた。それなのに、なぜサタンに身を委ね、その翼を根元から切り落とさせてしまったのか。あなたの顔は稲妻のように輝いていた。それなのに、なぜ暗く曇ってしまったのか。ああ、悲しいことだ！あなたはまるで多くの目を持つかのような視力を持っていたが、今や蛇に完全に目をくらまされてしまった。　あなたは太陽であったが、暗く悲惨な夜へと沈んでしまった。なぜ、兄弟よ、あなたは自分の魂を滅ぼしたのか。なぜ、金銭への執着という悪魔と親しくなり、彼をあなたのそばに留まらせたのか。なぜ金を蓄えるのか。まさか、それと共に葬られるつもりなのか。あなたの死後、それは他人のものになるのだ！　まさか、あなたは吝嗇によって自らを滅ぼそうとしているのか？　他の人々が飢え、寒さ、渇きで死んでいるというのに、あなたは金の豊かさを眺めて楽しんでいる。これこそが悔い改めへの道なのか？　これこそが、虚しい世の生活を軽んじるよう命じる修道者の掟なのか？　果たして、あなたは世とその中にあるものから、これほどまでに身を引いたのか。果たして、あなたは世とそのすべての虚栄に対して、これほどまでに自分を犠牲にしたのか。主がこうおっしゃったのを、あなたは聞かなかったのか。*「金も銀も銅も帯に帯びてはならない。旅の袋も、着替えの服も二着も持ってはならない」*（マタイ10:9–10）

。　なぜあなたはこれらの戒めを忘れてしまったのか。今か明日か、私たちの命は終わる。*その時、「あなたが蓄えておいたものは、いったい誰のものになるのか」*（ルカ12:20）と。あなたを守っていた天使が泣きながらあなたから遠く離れてしまい、悪魔があなたのそばに立っており、あなたの首には金銭への執着という蛇が巻きついているのに、あなたはそれに気づいていないのです。　真実を告げよう――通りかかったとき、主があなたから背を向ける声を私は聞いたのだ。懇願する。あなたの財産を、貧しい者、孤児、未亡人、困窮者、そして頭を休める場所すらない旅人たちに分け与えよ。 どうか、再び神の友となるよう努めてほしい 。もし私の言うことを聞かなければ、恐ろしい死を遂げるだろう。イエス・キリストの名によって証言する。あなたはまもなく悪魔を目にするだろう。

その後、彼はこう付け加えた。

「彼が見えるか？」

すると、修道士の霊的な目が開かれ、彼はエチオピア人のように黒い、獣のような姿で、恐ろしい口を開けた悪魔を見た。しかし、悪魔は遠くに立っており、アンドレイの姿を見ると、近づくことを敢えてしなかった。そこで修道士は聖人に言った：

「神のしもべよ、私は彼を見て、恐ろしい恐怖に襲われました。教えてください。私の魂を救うためには何が必要なのでしょうか？」

アンドレイは再び彼に言った。

「私を信じてください。もし私の言うことを聞かなければ、私は彼をあなたに送り込み、あなたを苦しめさせ、あなたの恥辱を、この町の住民だけでなく、世界の四方の国々すべてに知らしめてみせます。ですから、用心し、私の言うことを実行してください。」

これを聞いて、修道士は恐れをなして、聖人が命じることをすべて実行すると約束した。するとすぐに、アンドレイは東の方角から稲妻の姿をした強大な霊が現れ、その蛇に触れてその力を滅ぼすのを見た。蛇はこれに耐えきれず、カラスへと姿を変え、姿を消した。　こうして、黒いエチオピア人も滅び、再びその修道士の上に神の天使が支配権を握った。修道士と別れる際、聖人は彼にこう命じた。

「よく聞け、私のことは誰にも話すな。私は昼夜を問わず祈りの中であなたを思い起こし、主イエス・キリストがあなたを正しい道へと導いてくださるよう願う。」

その後、その修道士は去って行き、自分の持っていた金をすべて貧しい人々に配り、その後、神と人々からさらに称賛されるようになった。多くの人々が、貧しい人々に配るために、彼に金を持ち寄った。しかし、彼は寄付者たちに、自分の手でそれを配るように命じ、こう言った。

「他人の財産を気にかけることに、私にとって何の益があるだろうか？」

彼が修道士としてふさわしい生活を送っていた頃、聖アンドレイが喜びに満ちた顔で幻の中に現れ、野原にある、甘い果実のような色をした輝く木を指さして、こう言った。

「父よ、神に感謝しなさい。神はあなたを蛇の口から救い出し、あなたの魂を花咲く木のようにしてくださったのです。さあ、この花を甘い実へと変えるよう努めなさい。あなたが見ているこの美しい木は、あなたの魂の象徴なのです。」

正気に戻った修道士は、霊的な行いにおいてさらに強くなり、救いの道へと導いてくれた神と、神の御心に適う者アンドレイに、常に感謝を捧げた。

聖アンドレイは神にこれほどまでに喜ばれ、主からも深く愛されたため、ある時、使徒パウロのように第三の天へと引き上げられ（IIコリント12:2）、そこで言い表せない御言葉を聞き、人間には目に見えない楽園の美しさを仰ぎ見た。　このことについて、彼は臨終の前に、忠実な友人ニキフォロスに自ら語った。

ある時、厳しい冬が訪れ、コンスタンティノープルでは丸二週間にわたり激しい寒波が続いた。すべての住居は雪に埋もれ、嵐で木々が折れ、鳥たちは餌を見つけられずに死んで地面に落ちた。

その時、貧しい人々や物乞いたちは皆、深い悲しみと苦難に苛まれていた。嘆き、泣き、寒さで震えながら、彼らは飢えと寒さによる苦難の末に死んでいった。その時、至福のアンドレイもまた、住む場所も衣服もなく、寒さのために少なからぬ苦しみを感じていた。　彼が、せめてしばらくの間でも屋根の下に身を隠そうと、他の物乞いのところへ行くと、彼らは彼を犬のように棒で追い払い、こう叫んだ。

「ここから出て行け、犬め！」

降りかかった災難から逃れる場所もなく、自らの命さえ絶望的だと感じた彼は、こう自分に言い聞かせた。

「主なる神を賛美します！たとえこの寒さで死ぬことになっても、主への愛ゆえに死ぬことを願います――しかし、神は私にこの寒さを耐え抜く忍耐を与えてくださるほどお力強いのです。」

ある路地裏に入ると、聖人はそこに横たわっている犬を見つけ、その体で暖まりたいと思い、犬と一緒に横になった。しかし、犬は彼を見ると立ち上がり、去っていった。そこでアンドレイは心の中でこう言った。

「ああ、お前はなんと罪深い、忌まわしい者よ。人間だけでなく、犬さえもお前を軽んじているのだ！」

彼がそのように横たわり、激しい寒さと風に震え、体は凍えきって青ざめていたとき、もはや最期の息を引き取る時が来たと思い、主が　の平安をもって彼の魂を受け入れてくださるよう祈り始めた。　すると突然、彼は体の中に内なる温もりを感じ、目を開けると、顔は太陽のように輝いている美しい若者がいた。その若者は、色とりどりの花で覆われた枝を手に持っていた。アンドレイを見つめると、若者は言った。

「アンドレイ、君はどこにいるの？」

アンドレイは答えた。

「今、私は*『闇の中、深淵の中に』*（詩篇87:7）います。」

すると、現れた若者は、手に持っていた花咲く枝でアンドレイの顔にそっと触れ、こう言った。

「お前の体に活力を与えよ。」

聖アンドレイはその花の香りを深く吸い込んだ。その香りは彼の心に染み渡り、全身を温め、生き返らせた。その直後、彼は次のような声を聞いた。

「彼をここに連れて行き、しばらく安らぎを与えよ。そうすれば、彼は再び戻ってくるだろう。」

その言葉を聞くや否や、彼には甘美な眠りが訪れ、彼は言葉に尽くせぬ神の啓示を目撃した。彼はそのことを、前述のニキフォロスに次のように詳しく語った。

「私に何が起きたのか、私には分かりません。神の御心により、私は二週間にわたり、まるで一晩中ぐっすりと眠り、朝目覚めた人のように、甘美な幻視の中にいました。私は美しく、驚くべき楽園にいる自分自身を見て、心の中でこれに驚きながら、『これはどういうことなのか？　私はコンスタンティノープルに住んでいることは知っているが、どうやってここに来たのかは分からない」。そして私は、*「肉体の中にいたのか、それとも肉体から離れていたのか、私には分からない。神のみがご存知である」*（IIコリント12:2）と、理解できなかった。 しかし、私は自分が、まるで稲妻で織りなされたかのような明るい衣を身にまとい、頭には多くの花で編まれた花冠を戴いているのを見た。私は王の帯を腰に締め、その美しさを目の当たりにして大いに喜んだ。　心と魂を尽くして、神の楽園の言い表せないほどの美しさに驚き、その中を歩き回りながら喜びに浸っていた。そこには数多くの庭園があり、背の高い木々が立ち並んでいた。それらの木々は、梢を揺らして私の目を喜ばせ、枝からは素晴らしい香りが漂っていた。　それらの木の中には、絶えず花を咲かせているものもあれば、黄金色の葉で飾られているものもあり、また、言葉に尽くせないほど美しい実を結んでいるもの

もあった。これらの木々の美しさは、この世のどの木とも比べることはできない。なぜなら、それらを植えたのは人間の手ではなく、神の手だからである。　それらの庭園には、黄金色、真っ白、そして色とりどりの翼を持つ数え切れないほどの鳥たちがいた。彼らは楽園の木の枝に止まり、あまりにも美しく歌っていたので、その甘美な歌声に私は我を忘れてしまった。私の心はこれほどまでに満たされ、その歌声は天の最も高いところまで聞こえているのではないかと思ったほどである。　それらの美しい庭園は、まるで一つの連隊がもう一つの連隊と向かい合うように、整然と並んでいた。私が心からの喜びをもってその間を歩いていると、楽園の中央を流れ、あの美しい庭園に潤いを与えている大きな川が見えた。　川の両岸にはブドウが茂り、葉と黄金色の房で飾られたつるを伸ばしていた。そこでは四方から穏やかで芳しい風が吹き、その風になびいて庭園が揺れ、葉が不思議なざわめきを奏でていた。　その後、私はある種の恐怖に襲われ、まるで天の穹蒼の頂上に立っているかのように感じられた。目の前には、太陽のように明るい顔立ちで、深紅の衣をまとった若者が歩いていた。私は、これが、花咲く枝で私の顔を叩いた人物なのだと思った。　彼の足跡をたどって歩いていると、虹のように見える大きくて美しい十字架が見えた。その周りには、炎のような姿をした歌い手たちが立ち並び、かつて十字架に架けられた主を賛美しながら、甘美な賛美歌を歌っていた。　私の前を歩いていた若者は、十字架に近づくと、それを口づけし、私にも十字架に口づけするよう合図を送った。畏敬の念と大きな喜びをもって聖なる十字架にひれ伏し、私は熱心にそれを口づけした。　それを口づけしていると、私は言い表せないほどの霊的な甘美さに満たされ、楽園の香りよりも強い芳香を嗅ぎ取った。十字架の横を通り過ぎると、私は下を見下ろし、まるで海の深淵のようなものが足元にあるのを見た。まるで空を歩いているかのように思えた。恐怖に駆られ、私は案内人に叫んだ。

「ご主人様、深淵に落ちてしまうのではないかと怖いです。」

すると彼は私の方を向いて言った。

「恐れるな。我々はさらに上へ登らなければならないのだ。」

そして彼は私に手を差し伸べた。私がその手を掴んだとき、私たちはすでに第二の天界よりも高い場所にいた。そこで私は、驚くべき人々を目にした。彼らの安らぎと、人間の言葉では言い表せないほどの祝祭の喜び。その後、私たちはある不思議な炎の中に入った。その炎は私たちを焼くことはなく、ただ照らし出してくれるだけだった。　私は恐怖に襲われたが、再び私の案内人は振り返って私に手を差し伸べ、こう言った。

「我々はさらに上へ登らなければならない。」

そして、その言葉を聞いた後、私たちは第三の天よりもさらに高いところへ登り、そこで私は、神を賛美し、栄光を称える無数の天の勢力を目撃し、その声を耳にした。　私たちは、稲妻のように輝くある幕の前に近づいた。その前には、まるで炎のような姿をした、偉大で不思議な若者たちが立っていた。彼らの顔は太陽よりも明るく輝き、手には炎の武器を握っていた。恐れおののきながらそこに立っていると、私は数え切れないほどの天の軍勢を見た。そして、私を導いていた若者が私に言った。

「その幕が開かれたとき、あなたは主キリストをお目にかかれるでしょう。さあ、その栄光の御座にひれ伏しなさい。」

これを聞いて、私は喜びと戦慄に包まれた。恐怖と筆舌に尽くしがたい喜びが私を襲ったからだ。私は立ち尽くして、垂れ幕が開くのを待ちわびながら見つめていた。　すると、ある炎のような手が幕を開き、私は預言者イザヤのように、私の主が「*高い御座に座しておられ…… その周囲にはセラフィムたちが立っていた*」（イザヤ6:1–2）。主は緋色の衣をまとい、御顔はまばゆいばかりに輝き、その目は愛を込めて私を見つめておられた。これを見て、私は主の御前にひれ伏し、そのまばゆくも畏れ多い栄光の御座を礼拝した。　御顔を仰ぎ見たときに私を包んだ喜びは、言葉では言い表せないほどであり、今でさえ、その幻を思い出すと、私は言い表せないほどの喜びに満たされる。　私は主の御前に畏れおののきながら伏し、不義の者であり罪人である私に、御前に出させて御自身の神

聖な美しさを仰がせてくださったという、主のその深い憐れみに驚嘆した。　自分の不適格さを思い巡らし、主の偉大さを仰ぎ見ながら、私は心を打たれ、預言者イザヤの言葉を心の中で繰り返した。*「ああ、私は滅びた！　私は滅びた！　私は口が汚れた者であり、口が汚れた民の中に住んでいる。それなのに、私の目は王、万軍の主を仰ぎ見たのだ」*　（イザヤ6:5）。そして、私は、限りなく慈悲深い私の創造主が、その甘美で清らかな御口をもって、三つの神聖な言葉を私に語られるのを聞いた。その言葉は私の心をこれほどまでに甘美に満たし、愛の炎で燃え上がらせたため、私は霊的な温もりのために、まるで蝋のようにすっかり溶けてしまい、ダビデの言葉が私の上に成就した。　*「わが心は蝋のようになり、わが内なるもののただ中で溶けてしまった」*（詩篇21:15）。　その後、天の軍勢すべてが、驚くべき、言葉に尽くせない賛歌を歌い上げ、そして――私自身もどうしてそうなったのか分からないが――私は再び楽園を歩いていることに気づいた。そして、私は、至聖なる聖母マリアにお目にかかれなかったことを思い巡らせていた。すると、雲のように輝く一人の男が、十字架を背負いながらこう語りかけてきた。

「あなたはここで、天の軍勢の最も輝かしい女王にお目にかかりたかったのですか？　しかし、彼女はここにはいません。彼女は、人々に助けを与え、悲しむ者たちを慰めるために、苦難に満ちたこの世へと去ってしまいました。私はあなたに彼女の聖なる場所をお見せしたいところですが、今は時間がありません。あなたは来た場所へ再び戻らなければならないからです。主がそう命じておられるのです。」

彼がそう語っている間、私はまるで心地よく眠りについたかのようだった。そして目を覚ますと、私は以前いたのと同じ場所、隅に横たわっていた。私は、幻視の間に自分がどこにいたのか、そしてそのような光景を拝見できたことに驚嘆した。　私の心は言葉に尽くせない喜びで満たされ、このような恵みを私に示してくださった主を感謝した。

聖アンドレイはこの幻視を、臨終の前に友のニキフォロスに語り、自分がこの世を去るまでは誰にも話さないよう彼に誓わせた。ニキフォロスは聖人に、主が彼に語られた三つの言葉のうち、せめて一つだけでも教えてほしいと熱心に懇願したが、聖人はそれを明かすことを望まなかった。　こうして聖アンドレイは、使徒パウロと同様に天に上げられ、この世の目には見えないものを見、この世の耳には聞こえないものを聞き、人間の心では想像すらできないような天の美しさを啓示の中で味わったのである（Iコリント2:9）。 そして、天の奥義が啓示された際、彼は聖母マリアをお目にかからなかったため、地上においてヴラヘルナ教会での幻視の中で、彼女を拝見する恵みにあずかった。その時、彼女は人々を助けるために来られ、預言者たち、　使徒たち、そして天使の位階たちと共に空中に現れ、人々のために祈り、御自身の尊いオモフォロンで彼らを覆っておられた。彼女を目撃した聖人は、弟子エピファニオスにこう言った。

「すべての者の女王であり主である方が、祈っておられるのが見えるか？」

エピファニオスは答えた：

「はい、聖なる父よ、見ています。そして畏怖の念に打たれています。」

驚くべき生涯を送った聖アンドレイは、多くの奇跡を行い、また多くの侮辱や殴打に耐え抜いた。そのことは、ニキフォロスによって書かれた彼の伝記『[6738] 』に記されている。彼は未来を予言し、多くの罪人を悔い改めへと導いた。 その後、彼は永遠の住まい[6739] へと移り住みました。そこへは以前、一時的に引き上げられたことがありましたが、今や永遠にそこに住まわれ、天使たちと共に

[6738] 聖アンドレイ・ユロディヴィの伝記のギリシャ語原本の結語で、著者は次のように述べている。「私、ニキフォルは、全能の神の御恵みにより、神の知恵（ソフィア）と呼ばれる（すなわち　ソフィア大聖堂）の司祭の一人として数えられている。私は、聖なる父アンドレイの驚くべき、そして称賛に値する生涯を、自らの目で見て、また、後に大司教となった栄え高きエピファニオスから聞いた通り、ここに記した。」

[6739] 聖アンドレイ・ユロディヴィイは、66歳でこの世を去った。その死は936年頃であった。

喜び、三位一体の唯一の神――父と子と聖霊――の御前に至福のうちに立っておられます。神に永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1調:

御使徒パウロの声を聞き、「我らはキリストのために愚者となる」と語ったとき、御使いアンドレイは、キリストなる神よ、あなたのために、この地上で愚者となりました。それゆえ、今、彼の記念を尊びつつ、あなたに祈ります。主よ、我らの魂を救いたまえ。

コンダク、第4調:

あなたは自らの意志で聖なる狂人となり、この世の美しさを決して憎まず、　肉欲的な思索を枯らし、断食と渇き、灼熱と凍てつく寒さ、雨や雪、そしてその他の気象の苦難から決して逃れることなく、炉の中の金のように自らを清めた、至福のアンドレイよ。

10月16日

10月3日（旧暦）

聖ディオニシオス・アレオパゴイテの聖伝と殉教

記念日 10月3日

聖殉教者ディオニシオス・アレオパゴイテス[6740] は、異教徒である高貴な両親の間に生まれ、名高い都市アテネ[6741] で教育を受けた。 若き頃、彼はギリシャの学問を学ぶために送り出され[6742] 、そこで目覚ましい才能を発揮し、25歳の時には、哲学の知識において同世代の誰よりも優れていた。哲学の学問をさらに深めたいと願った彼は、古くから著名な教師たちが住んでいたエジプトの都市イリオポリス[6743] へと赴いた。そこで、友人のアポロファンと共に、ディオニシウスは天文学を学んだ[6744] 。私たちの救いのために、主キリストが十字架にかけられたまさにその日、正午に太陽が暗くなり、三時間もの間闇が続いたとき、ディオニシウスは驚愕してこう叫んだ。

「あるいは、全世界の創造主である神が苦しまれているのか、あるいはこの目に見える世界が終わりを迎えているのか！」

彼は、この世の知恵の教えによるのではなく、神の御霊の導きによって、キリストの受難についてこう語ったのである。エジプトからアテネに戻ったディオニシオスは結婚し、高貴さ、知性、誠

[6740] アレオパゴス人とは、アテネの最高国家評議会および裁判所であるアレオパゴスの構成員のことである。

[6741] アテネ――古代ギリシャ国家の首都。その建築物や彫像、商業・工業の発展、とりわけ学校で名高かった。ここには、後世（紀元前6世紀）に至るまで、古代諸国の住民が教育を受ける有名な哲学学校が存在していた。

[6742] エリンの――ギリシャの；時にはこの言葉は「異教の」という意味を持つ。キリスト降誕の頃、ギリシャ人は古代において最も教養のある民族であった。

[6743] イリオポリス――アフリカの都市。ナイル川の右岸、その東側の支流の一つ沿い、下エジプトの南部に位置する。

[6744] 天文学――天体の運動法則を研究する学問。エジプトの学者、とりわけ祭司たちは、この学問の研究で特に名高かった。

実さの点で同胞の中で第一人者であったため、アレオパゴスの議員となった。　聖使徒パウロがアテネを訪れ、アレオパゴスで長老たちの前で、十字架にかけられ、復活されたキリストについて説教したとき[6745]、ディオニシオスは聖使徒の言葉を注意深く聞き、それを心に深く刻み込んだ。 他の都市の長老たちは使徒の説教を懐疑的に受け止め、キリストについての説教は別の機会に聞くと彼に告げた。しかし、他の者たちよりも賢明だったディオニシウスは、パウロと二人きりで語り合うようになった[6746]。――使徒パウロは彼に尋ねた。

「あなたは誰を神として崇めているのですか？」

ディオニシオスは、クロノスの街にあるアフロディーテ、ゼウス、ヘファイストス、ヘルメス、ディオニソス、アルテミス、その他多くの神々を彼に示した[6747]。ディオニシオスと共にこれらの神々を眺めていると、使徒パウロはある神殿に「未知の神」という碑文が刻まれているのを見つけた。――彼はディオニシオスに尋ねた：

「この『知られざる神』とは誰のことか？」

「それは」とディオニシオスは答えた。「まだ神々の間に現れてはいないが、時が来れば現れるお方です。それは、天と地を治める神であり、その御国には終わりがないのです。」

これを聞いた使徒は、肥沃な土壌に神の言葉の種を実り豊かに蒔き始めた。ディオニシウスのその言葉に基づいて、使徒は彼に、その神はすでに到来し、至聖なる永遠の処女マリアから生まれ、十字架に釘付けにされて人々の救いのために苦難に遭われたことを伝えた。　その苦しみを見るに耐えかねて、太陽は暗闇へと変わり、三時間にわたり、宇宙全体にその光を放つことをやめた。　この神こそが死からよみがえり、天に昇られたのである。「それゆえ、ディオニシウスよ」と、聖使徒パウロは言葉を締めくくった。「彼を信じ、彼を知り、真の神、イエス・キリストに正しく仕えなさい」。

ディオニシオスは、聖パウロも言及した、全地を覆ったあの暗闇を思い出し、その時に神が人間の肉体の中で苦しみを受けられたことを即座に信じた。その後、彼はそれまで知ることのなかった神、主イエス・キリストを知るために、自らの心を開いた。　神の恵みの光に照らされたディオニシオスは、使徒に、神が彼に憐れみを示し、御自分のしもべの一人として加えてくださるよう、神に祈ってほしいと懇願し始めた。

使徒パウロがアテネの街を去ろうとしたとき、生まれつき目が見えないと誰もが知っていたある盲人が、使徒に視力を授けてくれるよう懇願した。聖なる使徒は、盲人の目に十字の印を施し、こう言った。

「*『地に唾を吐き、その唾で泥を作り、その泥を盲人の目に塗った』*（ヨハネ9:6）私の主イエス・キリストが、彼に視力を授けてくださったように、主があなたをも御自身の栄光によって照らしてくださいますように！」

すると、その直後、盲人は目が見えるようになった。使徒パウロは彼に、ディオニシオスのところへ行き、こう告げるよう命じた。

[6745] 使徒パウロが福音を宣べ伝えるための第二の大旅行を行った頃――西暦54年頃――

[6746] これについては『使徒行伝』17章15節から34節に詳しく記されている。

[6747] クロノス（またはクロノス）――時間の神、ウラノス（天）の息子。ギリシャ人は、彼が人類の最初の時代に存在した「黄金時代」を地上にもたらしたと考えていた。――アフロディーテ（またはヴィーナス）――女性の美と愛の女神。– ゼウス（ローマ神話ではユピテル）は、ギリシャ人にとって主神であり、神々と人間の父、天と地、雷と稲妻、風と雨の支配者として崇められていた。– ヘファイストス――火を噴く山々の神であり、鍛冶の技の守護神。 – ヘルメス――商業および人間と神々の間のあらゆる交流の守護神であり、神々の意志を伝える使者である。 –ディオニュソス、あるいはバッカス――酒と歓楽の神。– アルテミス、あるいはディアナ――ギリシャでよく知られた異教の女神であり、月を体現し、森と狩猟の守護神とされていた。

「イエス・キリストのしもべであるパウロが、あなたを彼のもとへ遣わしました。あなたが約束通り彼のところへ行き、洗礼を受けて罪の赦しを受けるためです。」

盲人は出かけて行き、使徒パウロの命じたことを伝えた。同時に、彼は使徒を通して自分に与えられた神の恵みについて宣べ伝えた。　知っていた盲人が目が見えるようになったのを見て、ディオニシオスはキリストへの信仰をさらに強めた。妻のダマラ[6748]　、息子たち、そして家族全員と共に、彼は直ちに使徒パウロのもとへ行き、彼から洗礼を受けた。　その後、ディオニシオスは家や妻、子供たちを後にし、使徒パウロに加わり、3年間にわたり、使徒が滞在する各地を彼に従って巡った。ディオニシオスが使徒パウロから何を学んだかは、彼の著作『 』「神聖な秘跡について」[6749] に証されている。　その後、ディオニシオスは使徒パウロによって司教に叙任され、人々の救いに奉仕するため、テッサロニキからアテネへと派遣された。このディオニシオスは、使徒パウロだけでなく、すべての使徒たちの説教を耳にしていた。　彼は、聖母マリアの埋葬のために使徒たちが全員集まった際、その一団の中にいた。彼自身、自身の著書の中で、エルサレムの主の御墓に赴き、そこで神の兄弟ヤコブ[6750] および首席使徒ペトロを見聞きしたと記している。 また同地で、ディオニシオスは、使徒パウロの弟子たち――聖ティモセオと聖イエロフェオ、そして他の多くの兄弟たち――と共にいる聖ヨハネ・テオロゴスにも出会った。その際、彼はそこで信仰の秘跡について説教を行っていた。

キリストへの回心後、聖ディオニシオスはアテネでかなり長い期間を過ごし、そこで聖使徒パウロによって設立された神の教会を大いに広めた。　その後、ディオニシウスは聖使徒たちと同様に、他の国々でも福音を宣べ伝え、キリストの名のために苦難を受けることを望んだ。それは、彼の師である、ローマでネロ[6751] の下でキリストのために殉教した至福のパウロと同様にであった。 アテネの人々に後任の司教を任命した後、ディオニシオスはローマへと向かい、そこでローマ司教である聖クレメンスに喜んで迎えられた[6752]。 彼と短期間共に過ごした後、聖ディオニシウスは、ルキアノス司教、ルスティクス司祭、エレフテリオス助祭、およびその他の兄弟たちと共に、異教徒たちに神の言葉を宣教するため、クレメンスによってガリアへ派遣された[6753]。 彼らと共にガリアに到着すると、聖ディオニシウスはその地の住民たちに神の言葉を説き始め、パリの街[6754]　では、多くの人々を偶像崇拝から主への信仰へと導いた。そこで彼は、新たに改宗したキリスト教徒たちから集められた資金で教会[6755] を建設した。 この教会で、ディオニシウスは血を流さない犠牲を捧げ、多くの「言葉の羊」たちを教会へと導く力を神に授けてくださるよう祈った。　このようにしてこの地で神の御言葉が広まっていた時、ネロの迫害に次ぐ第二の迫害が、ドミティアヌスによって引き起こされた[6756]　。この皇帝は、ガリアのキリスト教徒たちを拷問にかけるため、軍司令官シシニウスを派遣した。　パリの街に到着すると、シシニウスはまず、奇跡と神の知恵によって名声を博していたディオニシウスを捕らえて拷問にかけるよう命じた。彼と共にルスティクスとエレウフェリウスも捕らえられたが、

[6748] ダマールについては、『使徒言行録』にも言及されている（使徒言行録 17:34）。

[6749] 『神秘的な神学』――この著作の別名――は、人間による神に関するあらゆる観念や定義は神の本質を表現するものではなく、神学とは、不可解な神聖な存在を神秘的に観想することにあるべきであると論じている。

[6750] 聖使徒ヤコブ（若き）は、アルフェオ（クレオパ）と、聖母マリアの姉妹であるマリアの息子であった（ヨハネ19:25；マルコ15:40, 47, 16:1；ルカ24:10；マタイ13:55；マルコ6:3）。彼は特にエルサレムの教会の整備に尽力し、西暦62年に殉教した。彼の後、彼が編纂した最古の典礼式文が残された。

[6751] ネロ――ローマ皇帝（西暦54～68年）――は、キリスト教徒に対する最初の残酷な迫害者であった。66年または67年、この迫害の最中に、聖使徒パウロは剣による斬首の刑に処され、殉教した。

[6752] 聖クレメンスは、ローマ市の第3代司教（92年から101年）である。トラヤヌス帝の治世下（101年）に殉教した。教会のために彼が成し遂げた活動の記念として、『コリントの信徒への手紙』が残されている。

[6753] ガリア――現在のフランス。

[6754] パリ――現在はセーヌ川沿いに位置するフランスの首都。古代にはリュテティアと呼ばれていた。

[6755] 後にここには、古代フランスの王たちの埋葬地である有名な「サン＝ドニ」修道院が建てられた。

[6756] ドミティアヌスは81年から96年まで在位した。

他の兄弟たちは他の国々へ逃れて宣教を続けた。　この頃、聖ディオニシウスはすでに非常に高齢であり、福音宣教の労苦に疲れ果てていた。彼が、しっかりと縛られた状態で、ルスティクスとエレウフェリウスと共にシシニウス将軍のもとに連行されると、将軍は彼を一瞥し、怒りを込めてこう言い放った。

「お前こそ、我らの神々を冒涜し（[6757]）、神々へのあらゆる奉仕を覆し、王の命令に逆らう、あの不敬な老人ディオニシウスか？」

聖人はこう答えた。

「確かに、あなた自身もご覧の通り、私の肉体はすでに老いてはいますが、私の信仰は若々しく咲き誇り、私の告白は常にキリストのために新たな子らを生み出しています。」

シシニオが「彼は誰を神として崇めているのか」と問うと、聖ディオニシオスは彼に真理の言葉を告げ、至聖なる三位一体――父と子と聖霊――の偉大なる御名を告白した。

しかし、総督は、耳の聞こえないアスピドのようになり[6758]、救いの説教に耳を傾けることを拒み、ディオニシオス、ルスティコス、エレウフェリオスの三人に、王に従い、異教の神々に犠牲を捧げる意思があるかどうかを尋ねた。彼らはまるで口を揃えたかのように、こう答えた：

「我らはキリスト教徒であり、天におられる唯一の神を尊び、その神に礼拝を捧げる。しかし、王の命令には従わない。」

そこでシシニウスは、ディオニシウスを裸にし、容赦なく縄で打ち据えるよう命じた。聖人はこれらすべてに耐え、自らの体に主の傷を負うことを許してくださった神に感謝した。　ルスティクスとエレウフェリアも同様に拷問を受けたが、彼らもまた、ディオニシウスの模範、とりわけ神ご自身によって励まされ、忍耐をもってキリストを賛美した。シシニウスは、聖人たちの忍耐が尽きるよりも先に、処刑人たちの力が衰えることを悟り、その日のうちに殉教者たちを牢獄に投獄するよう命じた。　翌朝、使用人たちは聖ディオニシオスを牢屋から連れ出し、拷問者の命令に従って、彼を灼熱の鉄板の上に横たえた。その間、聖人は詩篇を詠んだ。「*あなたの御言葉は極めて清く*[燃え盛っており]、*あなたのしもべはそれを愛しました*」[6759]（詩篇118:140）。 その後、聖人を鉄板から降ろし、野獣の餌食として放り込んだ。しかし、神が野獣の口を塞がれたため、聖人は野獣からも無傷でいられた。続いて聖人は激しい炎の中に投げ込まれたが、そこでも無傷のままであった。炎は聖人に触れず、何の害も及ぼさなかったからである。　その後、彼は再びルスティクスとエレフテリオスのいる牢獄に投げ込まれた。ディオニシオスのいる牢獄には多くの信者たちが訪れ、聖人はそこで彼らのために神聖な典礼を執り行い、キリストの聖体と聖血の秘跡を授けた。　彼が神聖な典礼を執り行っているとき、信者たちは至福のディオニシウスの上に言葉では言い表せない光を見た。天使の軍勢を従えて栄光の王が現れ、信者たちの肉眼でそれを見ることができたため、彼らはその御姿を仰ぎ見た。しばらくして、ディオニシウス、　ルスティクとエレウフェリウスは牢獄から連れ出され、軍司令官の前に引き出された。司令官は再び彼らに偶像への生贄を捧げるよう説得した。聖人たちは従わず、真の神であるキリストを告白した。すると、拷問官は怒りに駆られて聖人たちを容赦なく打ちのめすよう命じ、その後、剣による斬首を宣告した。

聖人たちが街から「アレエの山」[6760]と呼ばれる山へと連行される際、ディオニシオスは次のように叫びながら祈った。

[6757] ローマ人には、ギリシャ人と同じ神々がいたが、名前だけが異なっていた。

[6758] アスピドとは、毒蛇の一種である。礼拝書では、この言葉で悪魔を指すこともある。

[6759] 詩篇の作者は、この詩篇の節において、神の言葉、すなわち彼が何よりも愛した神の戒めについて語っている。灼熱の苦痛に耐えながら、聖ディオニシウスはあたかもその苦痛を忘れているかのように、口にするのは神の言葉だけである。

[6760] アレイエヴァ、すなわちマルスの。アレイ、あるいはマルスは、異教の戦いの神である。

「神よ、わが神よ、私を創造し、御自身の永遠の英知を教え、御自身の秘儀を私に啓示し、私がどこにいようとも、常に私と共にいてくださった方よ。　御名の至聖なる栄光のために、私を通して成し遂げてくださったすべてのことに感謝いたします。また、労苦に打ちひしがれ、御姿を仰ぎ見ようと願うこの老身を顧みて、友人たちと共に御許へと呼び寄せてくださったことにも感謝いたします。　それゆえ、あなたに祈ります。私と私の友人たちをお受け入れください。あなたの御血によって贖われ、あなたへの奉仕のゆえに御自分のしもべの列に加えられた者たちに、憐れみをお示しください。まことに、力と権威は、父と聖霊と共に、世々限りなくあなたにあります。

その後、「アーメン」と唱えると、聖人はイエス・キリストの至聖なる御名のゆえに聖なる頭を垂れ、鈍い斧で首を刎ねられた。聖エレウフェリウスと聖ルスティクスもまた、彼と共にキリストのために首を捧げた。

御自分の御使いディオニシオスの死後、神は輝かしい奇跡を示された。聖人の遺体は、首を切られたにもかかわらず、神の力の働きによって立ち上がり、自らの首を手に取り、それを抱えて二ポプリシュ[6761]の距離を歩き、キリスト教徒たちが教会を建てていた場所へと向かった。その後、聖人の遺体はカトゥッラという名の敬虔な女性にその頭部を託すと、地面に倒れ込んだ。多くの異教徒がこの奇跡を目撃し、キリストを信じるようになった。聖人の頭部を受け取ったカトゥッラは、遺体も受け取りたいと願ったが、異教徒たちはそれを許さなかった。　そこでカトゥッラは、見張りの者たちを自宅に招き入れ、温かくもてなして贈り物を配ると同時に、キリスト教徒たちにディオニシオスの聖なる遺体を回収するよう命じた。キリスト教徒たちはディオニシオスの遺体を回収し、カトゥッラに首が渡されたまさにその場所に埋葬した。

聖ディオニシオスは、生後90年目、キリスト降誕後96年に殉教した。その墓の前では、父と聖霊と共に永遠に賛美されるキリスト、すなわち私たちの神の栄光のために、多くの奇跡が起こった。アーメン[6762]。

トロパリオ、第4声：

善を学び、あらゆる事において節制を保ち、良き良心をもって聖なる装いをまとい、選ばれた器から汲み取った[6763]、言い表せない御業を成し遂げ、信仰を守り、等しい歩みを全うした：聖殉教者ディオニシオよ、キリスト神に祈り、我らの魂が救われるよう願え。

コンダク、第8調：

御霊によって天の門を通り抜け、第三の天にまで達した使徒の弟子として[6764]、ディオニシオよ、あなたは言い表せないほどあらゆる知恵に富み、無知の闇の中に座する者たちを照らした。それゆえ、我らはこう呼び求める。「全世界の父よ、喜びなさい。」

[6761] ポプリシュチェ――距離の単位であり、現在の690サジェニに相当する。したがって、2ポプリシュチェは1380サジェニ、すなわち2.75ヴェルスタとなる。

[6762] ディオニシオス・アレオパゴスには、前述のもののほか、以下の著作がある：a)『天上の階層について』――ここでは、9つの天使の位階に関する教義が述べられ、それぞれの性質と職務が説明されている；b)　『教会の階層について』――ここでは、教会の階層の位階に関する教義が同様に解説されている；c)『神の御名について』；ここではディオニシウスが、聖書で使用される神の御名の意味を解き明かしており、d)『様々な人物への十通の手紙』。

[6763] ここでいう「選ばれた器」とは、キリスト教の光をもって聖ディオニシオスを啓蒙した聖使徒パウロを指す。

[6764] すなわち、使徒パウロ（IIコリント12:2）のことである。

聖ディオニシオスによる、聖カルポスと二人の罪人に関する物語

記念日：10月3日

聖ディオニシオス・アレオパゴスは、柔和さと悪意のなさを教える目的で修道士デモフィロスに宛てて書いた書簡[6765]の中で、次のような出来事を回想している。

「私は」と彼は言う、「クレタ島を訪れた際（[6766]）、聖使徒パウロの弟子である至福のカルポスの家に滞在することになった（[6767]）。 この人物は徳の高さに優れ、極めて高潔な精神を備えていたため、神の御姿を仰ぐ能力に長けていた。彼は、天から神聖な御姿が現れる恵みにあずかるまでは、決して聖なる命を与える秘跡を執り行おうとはしなかった。 この聖なる人物は――彼自身が聖ディオニシオスに語ったように――ある不信仰者によって心を痛めさせられた。その悲しみの原因は、その不信仰者が、ある信者を教会から引き離し、自らの不義の道へと誘い込んだことにある。 この出来事に、至福のカルプは深く心を痛めた。彼には、もちろん、忍耐を保ち、信仰から離れた者を絶えず有益な言葉で諭し、不信仰者をその寛容さで和らげるべきであった。 主が、不義へと迷い込んだ者を再び御自身の聖なる教会へと立ち返らせ、不信仰の闇の中にいる者を信仰の光で照らしてくださるよう、熱心に主にお祈りすべきであった。しかし、これまで何事においても焦りを示したことのなかったカルプは、この時、心の中で非常に強く 動し、深く悲しんでいた。 夜も更け、真夜中が近づいた頃、彼は祈りのために立ち上がった。――彼はいつも真夜中に起きて祈る習慣があったのだ。――祈りを捧げながら、彼は前述の二人がもたらした強い悲しみの感情を、どうにも抑えきれなかった。 彼は、主の正しい道を歪めるこれらの不法な者たちが、不当にもこの地上に生き続けているように思えてきた。そこで彼は、天から火が降り注ぎ、その二人を焼き尽くしてくれるよう、神に祈り始めた。 彼がそう祈っていると、突然、彼が立っていた部屋が揺れ動き、上部が二つに割れた。そのため、彼はまるで庭に立っているかのように感じ、明るい炎が天から彼に向かって降り注いだ。上を見上げると、天が開いており、そこには人間の姿をした無数の天使たちに囲まれたイエス・キリストが座しておられた。 それから、視線を下げると、大地が裂けており、その中に深く暗い深淵があった。その深淵の縁には、カルプが怒りに任せて神に滅びを願ったあの二人の男が立っていた。彼らは懇願するような眼差しを浮かべ、大きな恐怖と戦慄に震えながら立っていた。というのも、彼らは今にも深淵に落ちそうだったからだ。そしてその深淵の中では、蛇が歯をきしませながら這い回っていた。そこには他にも何人かの人々がいて、その二人の罪人を殴り、突き飛ばし、恐ろしい蛇の方へと引きずり込んでいた。 カルプは、自分を悲しませた者たちがすでに深淵に落ち、蛇に食い尽くされようとしているのを見て、大きな喜びに満たされた。そして、カルプは開かれた天やそこに座するイエス・キリストを見るというよりは、むしろこの二人の罪人の差し迫った破滅を見つめていた

[6765] この書簡は、『大聖人伝』からも明らかなように、当時教会から破門されていたある兄弟を聖餐に与えたとして、デモフィロスが神殿からある司祭を追放した件に関して、彼に宛てて書かれたものである。

[6766] クレタ島（別名カンディア――同名の主要都市に由来する）は、地中海の東部、エーゲ海の南に位置している。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「諸島の女王」と呼ばれていた。 この地におけるキリスト教は、使徒たちの時代にはすでに始まっていました。その最初の礎は、聖霊が使徒たちの上に降臨した出来事の目撃者たちによって築かれたものであり、その場にクレタ人も同席していたからです（使徒行伝2:11）。 その後、この地でキリスト教は使徒パウロによって確立され、広められました。これは、パウロがティトへの手紙に記していることからも明らかです。使徒は、自らが成し遂げられなかったことを完遂し、長老たちを按手するために、ティトをクレタ島の司教に任命しました（テトス1:5）。17世紀、クレタ島はトルコの支配下に入りましたが、現在はギリシャに属しています。

[6767] 聖カルポス（七十人の使徒の一人）は、聖パウロ使徒の弟子であり協力者であった。これは、第一使徒がテモテへの手紙の中で彼について次のように回想していることからも明らかである。*「あなたがそこへ行くときは、私がトロアデのカルポスのところに置いてきたフェロンと、特に革製の書物を持ってきてください。」*（IIテモテ4:13）。カルポスは使徒パウロの指示に従って書簡を運び、マケドニアのベリアで司教を務め、キリストの信仰の普及に熱心に尽力した。聖使徒カルポスの記念日は5月26日である。

。　しかし、二人が奈落の底に落ちなかったため、カルプは再び苛立ちと悲しみに襲われ、彼らが落ちて滅びるよう、再び神に祈り始めた。　彼が以前と同じように天を見上げると、イエス・キリストが天の御座から立ち上がり、深淵の縁に立っているその人々に近づき、助けの手を差し伸べているのが見えた。天使たちはその人々を支え、力を与えながら、深淵から引き離した。すると、キリストはカルプにこう言われた。

「なぜ兄弟たちの滅びを望むのか。わたしに倣い、罪人の死を望んではならない。なぜなら、人々がその邪悪な道から立ち返り、自らの罪を憎むようになるならば、わたしは人々の救いのために再び苦難を受ける用意があるからだ。」

聖ディオニシオスは、前述の修道士デモフィロスへの書簡の中でこの物語を引用し、罪を犯す者たちに対して冷酷になってはならず、彼らのために罰ではなく、　悔い改めと回心を願うべきであること――また、罪人の死を望まない神に、そのような人々のために熱心に祈り、神ご自身が御恵みによって彼らを回心させ、憐れんでくださるよう願うべきであることを説いている。神は義人を愛されるが、罪人をも憐れまれるからである。主を永遠に賛美します。アーメン。

ケサリアの主教、聖ヨハネ・ホゼヴィトの記念日

記念日：10月3日

私たちの尊い父ヨハネ・ホゼヴィト[6768] は、エジプトのテーベの町出身であった。彼は祖父によって修道士として剃髪され、その長老の助言に従って、エルサレムの聖地を巡礼した。　そこから戻ると、彼は長老と数日間を共に過ごしましたが、その後、ある狭い峡谷へと長老のもとを離れ、そこで小さな洞窟を見つけ、根や草だけを糧としてそこで暮らしました。やがて、神が御自身の御使いを栄光に輝かせようと望まれたとき、次のようにそのことを示されました。その地方には、アナニアという名の偉大な断食者が住んでいました。　ある日、ある男の息子が、悪霊に苦しめられて彼のところに連れてこられた。アナニアは彼を受け入れなかったが、深い謙遜をもって、内陸部へ行き、そこで少年を癒やすことのできるエジプト人ヨハネを探すべきだと告げた。遣わされた者たちがヨハネを見つけると、彼らは来訪の目的を伝えた。　ヨハネは当初断ったが、長い懇願の末、悪霊を追い出すことに同意し、神に祈りを捧げた。そして悪霊に向かってこう言った。

「イエス・キリストの名によって――私ではなく、アナニアが命じるのだ、汚れた霊よ、この少年から出て行け。」

聖人の言葉に従い、悪霊は少年から出て行き、少年は健康を取り戻し、自分に起こったこの輝かしい奇跡を皆に告げた。　その後、聖ヨハネは本意に反してケサリアの司教職を引き受けることになったが、栄誉を受けることを好まず、修道生活を送りたいと願ったため、ケサリアを去り、再び荒野へと退き、そこで生涯を終えるまで過ごした。

神は、この聖なる修行者を輝かしい奇跡によって栄光に包まれた。ある男の幼い息子が、悪霊に苦しめられていた。父親は息子を籠に入れ、上から草で覆い、ヨハネのもとへ運び、聖人の洞窟の

[6768] 聖ヨハネは、修道生活の大半を過ごしたフジン修道院にちなんで、「ホゼヴィタ」という異名を得た。この修道院は、エルサレムとエリコの間、フジエフまたはホゼヴァの荒野にあり、大通りの右側、ヨルダン川流域の低地へと下る坂道の近くに位置していた。　この修道院は荒涼とした地に位置していた。教会や修道士たちの独房は渓谷の奥深くにあり、高さ50サジェンにそびえ立ち、まるで岩だらけの断崖に張り付いているかのようであった。フジフ修道院は5世紀に創建された。その最初の創設者の名は不明である。　フズィフ修道院が特に繁栄したのは、6世紀、7世紀、8世紀であり、その頃、修道者たちの厳格な生活様式で特に名声を博していた。この修道院は12世紀にもなお存在していた。その後の運命については何も知られていない。

そばに置いた。　子供が泣き出したとき、聖人は立ち上がり、その子に悪霊が宿っていることを即座に見抜いた。悪霊を追い払うと、ヨハネは子供を癒した。しかし、追い出された悪霊は諦めず、人間の姿をとって修道士に復讐を企てた。　海岸近くの峡谷で聖人に遭遇すると、悪魔はあたかも祝福を求めているかのように、聖人の足元にひれ伏した。神のしもべは、うっかりその顔を見て驚いたが、悪魔は聖人の足をつかんで、彼を岸の方へと突き落とした。　聖人は真っ逆さまに落ちたが、神の恵みにより無傷で済んだため、その殺人鬼は何も成し遂げられなかった。その後、悪霊は神の僕をある強盗の手に委ねた。その強盗は聖人を殴り、衣服を剥ぎ取り、さらには彼の小屋さえも焼き払った。聖人はこれらすべてを忍耐強く耐え忍び、ただ心の中でこう呟いた。

「おお、至高なる主よ！ もしこれが御心に適うのであれば、感謝いたします。」

すると、至高なる御方の御心により、その強盗は捕らえられ、不名誉な死を遂げ、神のしもべはしばらくの間、安らぎを得た。　しかし、悪霊は聖人への攻撃を止めなかった。ある日、聖人が兄弟たちを訪ねようと旅立ったとき、ある女性が道で彼に出会い、彼の足元にひれ伏して、自分の家に入り、祈りと祝福で家を清めてほしいと懇願した。　聖人は彼女の懇願に心を動かされ、家に入った。すると、その邪悪な誘惑者は扉を閉め切り、全身を露わにして、清らかな聖人を汚そうとあらゆる忌まわしい行いをした。しかし、堅固な聖人は悪魔の策略に揺るがず、彼女を突き飛ばして、無傷のままその場を去った。

至福のヨハネは、至る所で噂が広まっていたある断食者マルキアヌスのことを耳にし、彼に会いたいと願った。　その一方で、聖ヨハネは、いかなる誘惑も避けるため、いかなる場合でも自分の修道室を離れないと決心しており、その目的のために自らを縛り、その束縛を解くことのできないものと見なしていた。　すると、主の天使がマルキアノを彼の修道室から連れ去り、突然、至福のヨハネの前に立たせた。二人は互いに挨拶を交わし、霊的な対話を楽しんだ。その後、マルキアノは再び天使に連れ去られ、姿を消した。

聖ヨハネは多くの人々から悪霊を追い出し、重病を癒やし、祈りによって泉を湧き出させ、天から雨を降らせ、その他多くの奇跡を神の力によって行い、深き老齢に達して、安らかにその聖なる魂を神に委ねた。

祝福されたイシキオス・ホリヴィトスの記念日

記念日：10月3日

聖イシキオスは当初、魂の救いを全く顧みなかった。しかし、ある時病に倒れ、病床の間に悔い改めた。そこで彼は周囲の人々に自分を放っておいてくれるよう懇願し、十二年間、完全な沈黙の中で[6769]、パンと水だけを糧とし、常に祈りと涙に身を捧げて隠遁生活を送った。

彼の最期の時が近づくと、修道院の兄弟たちは扉を壊して中に入り、イシヒイにいくら話しかけても、彼からはただ一つの言葉しか聞かれなかった。

「お許しください！ 心に死の記憶を留めている者は、罪を犯すことはないのです。」 修道院の兄弟たちは、神の恵みによって彼に起こったこの変化に驚き、彼の死後、その遺体を尊厳をもって埋葬した。　しばらく時が経つと、彼らは聖人の遺骨を探し始めたが、見つからなかった。この出来

[6769] 沈黙は、霊的な完成に向けた重要なキリスト教的修行である。聖なる修行者たちは、この修行の重要性を深く認識し、沈黙を愛した。聖アンブロシウス・ミラネンシスは次のように記している。「沈黙を守ることは、話すことよりも難しい。　多くの人が、沈黙を守る術を知らないがゆえに話すのだと私は知っている。それゆえ、沈黙を守れる者こそ賢明である。したがって、聖書に『*賢い人は時が来るまで沈黙を守る*』（シラ書20:7）とあるのは、まさにその通りである」。

事を通じて、主は、たとえ救いについて長い間無頓着であったとしても、改心を望む者たちに対する真の悔い改めの力を皆に示されたのである[6770]。

10月17日

10月4日（旧暦）

カザン大司教グリアとトヴェリ司教バルソノフィイの聖人伝。

記念日：10月4日

聖グリーリ（俗名グリゴリー）は、ラドネジエの町[6771]で、貧しく名も知れぬボヤールであるルゴティン家の出身として生まれた。青年期、グリゴリーはイワン・ペンコフ公爵の邸宅に仕えるために送り出された。　グリゴリーは温厚で従順な性格であり、頻繁に神の教会へ祈りを捧げに赴くことを好み、自宅でも祈りを捧げた。貞潔を厳格に守り、厳しい断食を実践し、また貧しい人々に施しを与えることを好み、その他のキリスト教的な美徳にも優れていた。　その高潔な品行と誠実さにより、グリゴリーは主君の信頼を勝ち取り、主君は彼に屋敷の運営のすべてを任せた。しかし、このことがグリゴリーの同僚たちの嫉妬を煽り、彼らはグリゴリーが主君の妻と不貞を働いたと、公爵に誹謗中傷した。

公爵は中傷者たちの言葉を信じ、グリゴリーを処刑するよう命じた。しかし、父よりも慎重で分別のある公爵の息子は、父にグリゴリーを赦し、自らの判決によって一族の名誉を汚さないよう懇願した。そして、これがすべて中傷であることを知ると、彼はグリゴリーを死の運命から救い出した。 しかし、怒りに駆られた公爵は、無実のグリゴリーを深い堀に閉じ込めた。聖人はそこで2年間を過ごしたが、人間が口にするには不適切な食糧しか与えられず、飢えに苦しめられた。3日ごとに、オーツ麦の束を1つと、わずかな水だけが投げ込まれたのである。 無実の苦難者の境遇は過酷だったが、彼は古代の殉教者たちの模範に勇気を得て、牢獄が世俗の誘惑や不安から彼を救い、この孤独が永遠への備えに完全な自由をもたらしてくれたという考えで自らを奮い立たせていた。

牢獄での2年目の終わりが近づいた頃、かつての友人の一人が看守に懇願し、牢の窓に近づいてグリゴリーと話すことを許してもらった。看守はそれを承諾した。　その友人は夜、グリゴリーのもとを訪れ、きちんとした食事を届けることを申し出た。しかしグリゴリーは、「彼を養っているのは、神の豊かで限りない恵みである」と述べ、配給される食事以外のいかなる食事も受け取ることを拒んだ。　そこでグリゴリーは友人に、食事の代わりに、子供たちに読み書きを教えるためのアルファベット表を書くための紙、インク、羽ペンを届けてほしいと頼んだ。グリゴリーは、そのアルファベット表を友人に売らせ、その代金を貧しい人々に配るよう頼んだ。

二年後、慈悲深い主は、無実の苦しみを受ける御自分のしもべの立派な忍耐をご覧になり、まるで地獄から解放するかのように、彼を束縛から解き放ち、御自身の力の目に見えない御手によって、牢屋の扉を開かれた。 突然、グリゴリーは牢屋の扉の隙間から光を見た。彼は、2年間その扉が開かれたことがなかったため、これが悪魔の幻覚ではないかと恐怖に駆られ、立ち上がって祈り始めた

[6770] 聖イシキイに関する物語は、聖イシキイの同時代人であるシナイ修道院の修道院長、聖ヨハネ・クライストス（『霊の階段』第6説教）の著作に見られる。福者イシキイは6世紀に生き、ホリヴ山で修行に励み、そこから「ホリヴィタ」という名を得た。

[6771] ラドネジは、モスクワからロストフ方面へ54ヴェルスタ、現在のトロイツカヤ・ラヴラからモスクワ方面へ10ヴェルスタの場所に位置していた。

。すると再び、前回よりもさらに強い光が扉の隙間から差し込んだ。　そこでグリゴリーは近づき、手で扉に触れると、扉はたちまち開いた。神ご自身がこの牢獄からの解放を彼に与えてくださっていることを悟ったグリゴリーは、主に感謝を捧げ、牢獄に持ち込んでいた至聖なる聖母マリアのイコンを手に取り、すでに昼になっていたにもかかわらず、誰にも見られることなく外へ出た。　そして彼はその家からも町からも去り、ウスペンスキー修道院 およびイオシフォフスキー修道院[6772] へと向かった。ここでグリゴリーは「グリー」という名で修道士としての剃髪を受け、善良な修道士であり、断食に励む者となった。その模範的な修道生活により、彼は後にイオシフォフスキー修道院のイグメンに選出された。　この修道院の院長として約9年間在任した後、病のため修道院を去り、2年間は静養生活を送り、断食と神への黙想に時間を費やした。その後、グリーリはセリジャロフ修道院[6773] のイグメンに任命されたが、ここでの滞在は1年にも満たなかった。

やがて、神がツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチにカザン市[6774] を征服させた際、マカリー大主教[6775] の助言に基づき、ロシア都主教区の聖職者会議において、グリーはくじ引きによりカザン市の初代大司教[6776] に任命された。 皇帝は彼を大いなる栄誉をもってカザンへ派遣し、数多くのイコン、貴重な教会用具、そして多くの書籍を授けたほか、さらにグリー自身にも多くの貴重な品々を贈った。　聖職者や様々な修道院もまた、新たにキリスト教が広められつつあるこの地の必要に充てるため、数多くの貴重な品々を寄贈した[6777] 。復活祭後の聖父週間である1555年5月26日、 クレムリンのすべての鐘が鳴り響く中、マカリー大主教はクルチツキーのニフォンテ司教、モスクワのすべてのアルヒマンドリトおよびイグメン、ならびに聖職者グリーと彼のアルヒマンドリトたち、そして聖別された聖職者たちと共に、ツァーリおよび全シンクリトの面前で、ウスペンスキー大聖堂にて送別の祈祷式を厳かに執り行った。　祈祷式の終了後、聖グルイは十字架行列を率いてモスクワ川へと向かい、そこで用意された舟に乗り込み、鐘の鳴り響く中、祈りを捧げながら旅立ちました。　旅の途中、どの町でも、聖グルイは聖職者たちによる十字架行列で出迎えられ、荘厳な祈りを捧げたため、カザンに至るまでの聖グルイの旅路は、ほぼ絶え間ない祈りの連続であった。

二ヶ月後、聖グリーはカザン市に到着し、主教の座についた。主教としての地位においても、彼は以前と変わらぬ神に喜ばれる生活を送った。貧しい人々を養い、困窮者に必要なものをすべて与え、貧者や未亡人、孤児たちのために立ち上がり、彼らを様々な苦難から救った。　労苦に労苦を重ね、聖グリーは夜を祈りに費やし、昼間は異教徒たちに神の知識と至聖なる三位一体への信仰を教え、その教えによって多くの人々をキリストへと導いた[6778] 。 若き日に厳しい投獄によって衰弱した肉

[6772] イオシフォフスキー修道院は、ヴォロコラムスクから18ヴェルスタの場所に位置する。聖ヨセフ・ヴォロコラムスキーによって設立された。彼にちなんで、この修道院はイオシフォフスキーという名称が付けられた。

[6773] トロイツキー・セリジャロフ修道院は、セリジャロフカ川沿い、オスタシュコフ市から44ヴェルスタ離れた場所にあり、トヴェリ教区に属する。15世紀に創建された。

[6774] カザンは1552年にロシア軍によって征服された。

[6775] マカリイ――全ロシア都主教（1542～1564年）――は、ロシア正教会および文学の歴史において重要な位置を占めている。　彼の在任中には、有名な「百人会議」（1551年）が開催され、聖書の印刷を行う最初の印刷所が開設された。また、彼の希望と直接的な関与により、いわゆる『大ミネイ・チェティイ』が編纂された。

[6776] 聖グリーの叙階は1555年2月7日に行われた。

[6777] 聖グリーの補佐として、彼の指示により、二人の立派な修道司祭が任命された。一人は、かつてスターリツキー修道院（トヴェリ教区）のアルヒマンドリトを務め、イオシフォフスキー修道院で隠遁生活を送っていたゲルマン、もう一人はベスノシュスキー修道院のイグメン、ヴァルソノフィーであった。

[6778] カザン教区の管理を始めた当初、聖グリーは宣教を目的として、カザン地方に修道院を設立することに尽力した。彼は、将来カザンの修道院に入る修道士たちが、常に異教徒の間で神の言葉を説き、幼い子供たちの教育に専念することを望んでいた。　こうした観点から、聖グリーは修道院に領地（「ヴォチナ」）を確保することが不可欠であると考え、その意図を皇帝への書簡で表明した。その書簡の内容は、イオアンヌ・グロズヌイからの返答によって知られている。　「あなたは私に手紙を書き送った――」とツァーリは聖人にこう記している――「カザン市に修道院（『ジラントフ』）を

体にもかかわらず、聖人の偉大な労苦は、ついに聖グリーの健康を著しく損ない、彼は病に倒れた。肉体の病は、彼の精神的な敬虔さを微塵も損なうことはなかった。自ら礼拝を執り行うことはできなかったが、それでも彼は他者によって行われる聖務に参列し続けた。そのために、自らを、彼が建設した聖母マリアの受胎告知教会での神聖な典礼へと運ばせるよう命じた。　そこで彼は座ったり、時には横になったりしながら、礼拝に耳を傾けていた。しかし、病中においても聖グリーは　、彼にとって日常的かつ容易に実行できる行い[6779] を怠ることなく、同時に断食と節制によって自らの肉体を謙遜させ続けた。こうして聖人は三年間、精進を続けた。　神のもとへ旅立つ時が近づいていることを感じ取った聖グリーは、彼に対して「偉大なる霊的な愛」を抱いていたアルヒマンドリト・ヴァルソノフィイを呼び寄せ、彼から偉大なる天使の像、すなわちスキマ[6780] を受けたいと願った。 聖人の安らかな死は1564年12月4日に訪れた。その尊い遺体は、スパソ・プレオブラジェンスキー修道院[6781] の、大聖堂の祭壇の後ろに埋葬された。

聖ヴァルソノフィイ（本名ヨハネ）は、セルプホフ出身であった[6782] 。彼は司祭ヴァシリーの息子であり、幼い頃から読み書きと聖書を学んだ。　まだ成人する前、ヨハネはクリミア・タタール人に捕らえられ、捕虜となった[6783] 。主の御心に従い、彼は課せられた仕事や労苦を熱心にこなした。捕虜生活の中で、彼は神への頻繁かつ熱烈な祈りに慰めを見出し、覚えている詩篇を暗唱して歌っていた。　異教徒たちは、イオアンの高潔な品行、労働への熱心さ、謙虚さ、そして仕事における彼らへの無条件の服従を見て、彼の労働の重荷を軽くし、より自由に生活することを許した。捕虜生活の中で、イオアンはタタール語を習得し、その言語で話すだけでなく、書くことも自由にできるようになった。 3年後、父はタタール人からヨハネを身代金で買い戻した。その後、彼は帝都モスクワへ赴き、アンドロニコフ修道院（[6784] ）で出家し、ヴァルソノフィイと名付けられた。ここでヴァルソノフィイは、厳格な敬虔と徳行の修行に身を捧げる生活を送るようになった。　その厳格な修道生活により、ヴァルソノフィイはマカリイ大主教によってペスノシュスキー修道院[6785] のイグメーンに任

設立し、他にも建設するつもりだと。あなたは善き行いに取り組んでいる。その功績により、神があなたを助けてくださいますように……長老たちが子供たちを教育し、異教徒を信仰へと導くというのは、立派な考えである。　また、幼子たちに読み書きを教えるだけでなく、読んだ内容を正しく理解できるよう指導し、彼ら自身も他の人々や異教徒を教え導けるようにすべきだ。おお、神よ！　もしすべての司教が、マカリイ大司教やあなたのように長老であったなら、ロシアの地はどれほど幸福であったことでしょう」。聖グリーの労苦は実を結んだ――異教徒（主にタタール人）が相当数、キリスト教に改宗したのだ。

6779 「今この瞬間はすべて――」と聖グリーリは語った――「労苦の時である。報いは来世で得られる。天の喜びは、地上で精進し、朽ちない恵みを得るために朽ちるものを捨て去る者にのみ与えられる。　いかなる困難や不快にもめげず、奮闘しなければならない。「*今の苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもない*」（ローマ9:18）。

6780 スキマ――偉大なる天使の姿、偉大なる修道服、修道生活を受け入れること――は、この世からの最も完全な疎外であり、この世から解き放たれ、キリストと共にありたいという切なる願いである。（フィリピ1:23）。（スキマはギリシャ語で、「姿」「様」「位階」を意味する）。

6781 1556年に聖ヴァルソノフィイによって設立され、同氏はこの修道院の初代アルヒマンドリトとなった。

6782 セルプホフは、モスクワ州の県都である。

6783 クリミアは、ヨーロッパ・ロシアの南部に位置する半島である。1237年にタタール人に征服され、1783年にロシアによって平定された。

6784 アンドロニコフ修道院、別名「スパソ＝アンドロニエフ」修道院は、モスクワのヤウザ川のほとりに位置する。1360年頃、聖アレクシイ大主教の支援と、聖セルギイの弟子である聖アンドロニコスの尽力により設立された。

6785 ペスノシュスキー（あるいはペシュノシュスキー）・ニコラエフスキー＝メフォディエフ修道院は、モスクワ州のドミトロフ市から26ヴェルスタ離れた場所、ペシュノシ川がヤクロマ川に合流する地点に位置している。　1301年、聖セルギイ・ラドネジスキーの弟子である聖メフォディイによって設立され、同氏が初代イグメンを務めた。1544年、聖ヴァルソノフィイがペシュノシュ修道院のイグメンに任命された。

命された。その後、彼はカザン市[6786] でアルヒマンドリトを務め、そこで栄光ある主の変容を称える修道院を設立し、その中に教会と修道室を築いた。　アルヒマンドリトの位にある間も、ヴァルソノフィイは変わらず神に喜ばれる生活を送った。厳しい禁欲と徹夜祈祷によって肉体を鍛え、誰にも知られぬまま、自らの体に鎖を身に着けていた。こうして彼は、あらゆる点において修道兄弟たちにとって徳の模範であった。　カザンにおいて、ヴァルソノフィイは聖グルイを熱心に助け、ムスリムや異教徒の間でキリスト教を広める活動に尽力した。　タタール語の知識とタタール人の生活様式への理解は、この点において彼に大きな恩恵をもたらした。彼は多くの異教徒を神へと導き、彼らに洗礼を授けた。また、聖グルイに対しては、バルソノフィイは心からの愛を抱き、あらゆる点で彼に従った。

カザンから、聖バルソノフィイはトヴェリの主教座に召された[6787] 。ここで、キリストの羊たちの霊的な群れを導く良き牧者として、彼は特に修道生活に専心し、常に断食、祈り、涙、そして徹夜の祈りに身を捧げた。　彼は医学にも精通していたため、多くの病人を癒やしたが、その対価として誰からも決して金を受け取らず、無償で治療を行った。とりわけ、聖霊の恵みによって癒やした心の情欲の治療で、彼は名声を博した。　彼は手作業も怠らず、日頃からはつば付きの修道服を縫うことを習慣としており、それを兄弟たちに配りながら、自分について神に祈ってくれるよう頼んでいた。

やがて聖人は高齢に達すると、信徒たちの元を離れ、カザン市にある自身が設立した修道院へと再び移り住んだ。　そこで彼は大修道服を着用した。老齢と極度の衰弱にもかかわらず、彼は修道生活の規則を曲げることなく、老衰により　自ら礼拝を執り行うことができなくなると、弟子たちに教会へ連れて行ってくれるよう頼んだ。　やがて彼は完全に力尽き、この世を去る時が来たことを感じると、キリストの聖なる秘跡を受け、1576年4月11日に主のもとで安らかに息を引き取り、同修道院内の聖グリアの近くへ埋葬された。

聖グリアの死去から32年後、聖バルソノフィイの帰天から20年が経過した頃、テオドロス・イオアンノヴィチ王の命により、その場所に主の変容を称える石造りの教会が建設され始めた。　堀を掘り始め、聖グリアと聖バルソノフィイの墓を掘り出した時――1596年10月4日――、当時カザンの大司教であったヘルモゲン大主教[6788] にこのことが報告された。 大主教は、聖体礼儀と追悼の祈りを執り行った後、聖職者全員を率いて修道院を訪れた。聖グリアの棺を開けると、その中は芳香を放つ聖油で満たされていた。腐敗が及んでいたのは唇の上部のごく一部だけであり、聖人の衣さえも無傷で、新しいものよりも丈夫に見えた。　同様に、聖バルソノフィイの棺を開けると、聖グリアの聖遺物と同様に、その聖遺物も完全で朽ちていないことが判明した。腐敗は尊者の足にのみ及んでいたが、骨は全く損なわれておらず、極めて堅固であった。　聖人たちの尊い遺骸は、それらの棺から新しい聖遺物箱に移され、葬送の聖歌が歌われる中、地の上に安置された。そうすることで、訪れる者すべてがそれを見ることができ、信仰をもってその遺骸に口づけを捧げられるようにしたのである。このことは、テオドロス・イオアンノヴィチ皇帝およびヨブ総主教宛ての手紙によって告げられた（[6789] ）。敬虔な皇帝と至聖なる総主教、皇帝の全廷臣、そして大勢の民衆は、このことを知ると、御自身の聖人たちを称える神を賛美した。　敬虔な皇帝は、聖人たちの聖なる、そして多くの病を癒す

[6786] 1555年、ヴァルソノフィイはカザンのアルヒマンドリトに任命され、聖グリーと共に同地へ向かった。

[6787] 1567年、聖ヴァルソノフィイはトヴェリの司教に任命され、モスクワ都主教フィリッポによって叙階された。

[6788] 1589年、ゲルモゲンはカザン都主教に任命された。カザンでは、地元の異教徒を正教会へ改宗させることに多大な熱意を示した。1606年、ヴァシーリー・シュイスキーの治世下で、ゲルモゲンは全ロシア総主教に就任した。　ポーランド人や反乱を起こしたボヤールたちへの抵抗を理由に、チュドヴォ修道院で過酷な監禁に処され、1612年2月17日、そこで餓死した。――カザン都主教在任中、ゲルモゲンは聖グリアと聖バルソノフィイの詳細な伝記を著した。

[6789] イオヴ――1589年から全ロシア初の総主教を務めた。偽ディミトリの命令により、1605年にイオヴは総主教の地位を剥奪され、1607年に死去した。

聖遺骨を、大聖堂の祭壇の南側にある特別な小聖堂に安置するよう命じました。この聖堂は、この聖遺骨のために、まもなく壮麗に装飾されました。　この小聖堂が整備された際、聖人たちの遺骸は前述の新しい聖櫃の中に安置され[6790]、三位一体の神の栄光のために、今この時も、そして永遠に、信者たちに癒やしをもたらし続けている。アーメン。

聖グリアとバルソノフィイのトロパリオ、第3調:

かつては暗黒に包まれていたが、今や光に満ち、新たに啓蒙されたカザンの都の最初の教師たちよ、救いの道を最初に告げた者たちよ、使徒の伝承の真の守護者たちよ、揺るぎない柱たちよ、敬虔の教師たちよ、正教の導き手たちよ、　グリアとバルソノフィイよ、万物の主なる神に祈り、全宇宙に平和を授け、我らの魂に大いなる憐れみをお与えくださいますように。

バルソノフィイのコンダク、第6調:

節制によって肉体を御霊に服従させ、魂を天使に等しいものとなさった。このゆえに、聖職の位に就き、清き御方の御前に、最も清き者として立ち給う。　聖者よ、キリスト・神に、全能なる我らの皇帝、敬虔の守護者を救うよう祈り給え。そして、聖なる者よ、あなたの民は皆、あなたにこう叫びます。「喜びなさい、尊き父ヴァルソノフィイよ。あなたは我らの都カザンの誉れであり、支えである。」

グリアのコンダク、第4調:

肉欲の情に打ち勝ち、太陽のごとく清らかに輝き、生涯を通じて清らかな生き方を貫き、多くの者を不信仰からキリストへの信仰へと導かれた。そのゆえに、神より朽ちることのない栄誉を授かり、その奇跡に我らは驚嘆する。　聖者グリアよ、汝の祈りによって我らを災いから救い出してください。そうすれば、我らは汝にこう呼びかけよう。「喜びなさい、尊き父よ。カザン市の誉れであり、その堅固な支えよ。」

聖なる殉教者イエロフェイ、アテネの司教の記念日

記念日：10月4日

聖イエロフェイは、アレオパゴスの議員または顧問の一人でした。聖使徒パウロによってキリスト教に改宗させられ、同使徒によってアテネの司教に任命されました。　使徒たちと共に、私たちの至聖なる御母マリアの埋葬に立ち会った際、聖イエロフェイは、神の母の清らかな御体を棺へと送り出す際に神聖な賛美歌を歌い上げました。それを見た者、聞いた者すべてが、彼を義人であり聖なる人物であると認めました。　聖人にふさわしい敬虔な生涯を送り、その生き方と信徒たちへの良き導きによって神に喜ばれた聖イエロフェイは、西暦1世紀に殉教してこの世を去った。

[6790] 聖グリアとバルソノフィイの聖遺骨は、これら聖人たちに敬意を表して設けられた新しい教会の付属礼拝堂に長い間安置されていたが、1630年にマテイ大主教がプレオブラジェンスキー修道院から受胎告知大聖堂へ移した。 移送は6月20日に厳粛に行われた。その後、聖遺骨は木製の聖遺物箱から銀製の聖遺物箱に移された。聖グリアとバルソノフィオには礼拝式があり、それは（10月4日の『ミネイア・スルージェブナヤ』を参照）聖ディミトリ・ロストフスキーによって記されたものである。

コンダク、第8調:

アテネの聖なる指導者よ、我らは汝を讃える。汝は神秘的な教えを秘かに学び、この世の者には理解しがたい、言葉に尽くせぬ教えを授けたからである。まことに、この神に愛される賛美者は現れたのである。しかし、至福のイエロフェイよ、我らをあらゆる罪の堕落から救い出してくれるよう祈り、我らはこう呼びかけよう。「神に賢き父よ、喜びなさい。」

尊者アモン聖人の生涯

記念日：10月4日

私たちの尊い父アモンは、エジプトの出身であった。幼い頃に両親を亡くしたものの、神を畏れる心を持って育てられ、若い頃から聖書の読書を愛するようになった。アモンが成人すると、叔父は彼に結婚を迫った。　独身生活を結婚生活よりも好んでいたものの、同時に叔父の意志を叶えたいとも思っていたアモンは、独身生活と結婚生活をいかに両立させるかについて考え始めた。そして結婚式当日、花嫁と共に新婚の寝室に案内され、皆が退出した後、彼は扉を閉めて花嫁にこう言った。

「聞いてくれ、姉よ。そして、私が言うことに同意してほしい。私たちが結んだこの結婚は、処女性よりも決して優れているわけではない。だから、互いに離れて眠り、処女性を守りつつ、それによって神に喜ばれるようにするのが最善だ。」

そう言うと、彼は衣服の下、胸元に隠していた本を取り出し、聖書を知らないその娘に、あたかもキリストや使徒たちの代弁者のように、神の教えによる救いの言葉を読み聞かせ始めた。　彼は、神から与えられた恵みによって、読み上げた内容に加え、自らの教えも添え、彼女に清く、天使のような生活を送るよう助言した。彼女は心を打たれ、こう言った。

「ご主人様！私はあなたの言うことすべてに同意します。あなたが貞潔な生活を重んじられるのですから、私も同じことを望み、あなたが命じられることは何でも行うことに同意します。」

すると、アモンは言った。

「私たちは別々に暮らしたい。君は一つの家に、私は別の家に。」

しかし、その娘は、そのような分離を望まず、こう言った。

「いいえ、主よ。私たちは同じ家に住みますが、寝床は別々にしましょう。」

こうして彼らは貞潔な生活を送り始めた。彼らの夫婦生活は、まるで貞操の百合が咲き誇り、貞節に囲まれ、聖霊の露に潤された庭園のようであった。そのような夫婦生活の中で、彼らは長年にわたり、断食、禁欲、徹夜祈祷、　、そして肉体労働といった偉大な行いに時間を費やして過ごした。　その娘は家事に励み、アモンは毎日、自分の庭で一日中働き、肉体を酷使していた。　夕方家に帰ると、彼は妻――いや、むしろ姉妹と呼ぶべき相手――と共に少しパンを口にした。そして真夜中になると、二人は共に起きて祈りを捧げ、早朝にはアモンは再び仕事に出かけ、夕方まで働いた。　こうしてこの二人は、若き日に、いわば火の中にあって生きながらも、燃え尽きることはなかった。なぜなら、彼らは自分の中にあるあらゆる肉欲を克服していたからである。彼らはこのような共同生活を十八年間送り、完全な清さと聖さに達した。そしてある日、その娘はアモンにこう言った。

「主よ！　あなたに言いたいことがあります。もし私の話を聞いてくださるなら、あなたが本当に神のために私を愛してくださっているのだと、私は理解できるでしょう。」

すると彼は答えた。

「話してください、姉妹よ。もしそれが有益であれば、私はあなたの言葉に耳を傾けます。」

すると、その娘はこう言った。

「主よ、私たちには別々に暮らすほうがふさわしいでしょう。あなたは聖なる、義なる、貞潔な方ですから。私もできる限り、あなたの生き方に倣いたいと思います。そうすれば、私たちを通し

て他の人々にも益がもたらされるでしょう。　別々に暮らしましょう。あなたのような偉大な美徳が、私との共同生活のために、それを活用し、あなたの貞潔に倣うことのできる人々から隠されてしまうのは、好ましくありません。」

これを聞いて、アンモンは、彼がかねてより望んでいた別居の生活に、その乙女の心を向かわせた神を賛美した。そして彼は乙女に言った。

「わが姉よ！もしそれがあなたの望みなら、共に暮らすのはやめましょう。あなたはこの家に留まり、私は別の場所へ行くことにします。」

神に祈りを捧げた後、二人は別れた。アモンはニトリウス山[6791]へ向かい、修道士となった。一方、彼の名ばかりの妻は自分の家に留まり、やがて多くの乙女たちを集めてキリストに捧げ、自ら彼女たちの修道院長となった。

ニトリア山に定住したアモンは、隠遁生活を送り、神のために労苦し、精進した。彼は昼夜を問わず、心のすべてを注いで神に仕えた。彼は荒野で二十二年を過ごし、修道生活において完全な境地に達した。　神は御自身の聖人を栄光に輝かせ、彼に癒しの賜物を与えられ、聖人は彼のもとに訪れる人々の様々な病を癒した。

ある日、狂犬に噛まれた少年が彼のところに連れてこられた。その少年は、狂乱の発作に襲われると、自分の体を噛みついてしまうのだった。少年の両親は、聖アモンの足元にひれ伏し、息子を癒やしてほしいと懇願した。しかし、聖人は彼らにこう言った。

「なぜ、私の力を超えることを求めて、私を煩わせるのですか。少年の病気も癒しも、あなた方の手の中にあるのです。というのも、あなた方は（聖人はその未亡人の名前を挙げた）未亡人から雄牛を盗み、密かにそれを殺して食べてしまったからです。ですから、彼女に生きている雄牛を返せば、あなた方の息子は癒やされるでしょう。」

取り憑かれた少年の両親は、これを聞いて、聖人が自分たちの秘密を知っていることに愕然とし、罪を告白して、盗んだものを返すことを固く誓った。　すると聖人は祈りを捧げた後、少年を癒やし、彼らを平穏のうちに帰した。彼らは喜びながら家に戻ると、すぐに、自分たちが殺した牛の代わりに、別の牛をその未亡人に差し出した。

別の時、二人の男が祝福を求めて聖人のもとを訪れた。聖人は、訪ねてくる人々のために水を運んでくるよう彼らに頼んだ。というのも、来た者の一人はラクダを、もう一人はロバを連れていたからである。彼らは大きな水瓶を持って、山から水を汲みに出かけた。水瓶に水を満たしたとき、ラクダを連れていた方の男が言った。

「器は大きく、山は高い。だから、こんな重荷で私のラクダを疲れさせたくない。」

そして、仲間を残して、聖人のもとへ戻ることなく、自分の道へと去っていった。残された一人は、ロバに水を載せ、大変な苦労の末、かろうじて山の上の聖人のもとへ運び込んだ。彼を見るや、聖人は言った。

「子よ！　その労苦に対し、神があなたを祝福してくださいますように。知っておきなさい。私たちの必要のために水を運ぶことを拒んだあなたの仲間は、今まさに不幸に見舞われている。彼はラクダを失ってしまったのだ。」

そこで、その男は仲間の後を追って行くと、彼のラクダがオオカミに食い殺されてしまったため、泣き崩れているのを見つけた。

この尊者アモンについて、聖アファナシオス・アレクサンドリアスは『聖アントニオスの行伝』の中で次のように記している。

[6791] ニトリア山は下エジプトにあり、アレクサンドリア市から70マイルの距離にある。

ある日、尊者アモンはアントニオスの弟子テオドロスと共に歩いていた。彼らがリコス[6792]と呼ばれる大きな川を渡らなければならなくなり、そのために服を脱がなければならなかったとき、アモンはテオドロスに、互いの裸体を見ないように少し離れてくれるよう頼んだ。　二人が離れた後、アモンは、衣服を脱がずにどうすれば川を渡れるか考え始めた。彼は非常に貞潔で慎み深く、自分の裸でさえも恥じ、生涯一度も体を露わにしたことがなかったからである。　彼がそう考えを巡らせていると、主の天使が彼を携え上げ、川を渡らせて、瞬く間に対岸へと運んだ。一方、テオドールは大変な苦労の末、かろうじて川を渡り切った。　対岸に立っているアモンを見て、彼は、あれほど流れの速い川をあれほど早く渡り切ったことに驚いた。さらに、アモンの衣服が完全に乾いていることに気づくと、さらに驚き、聖人の足元にひれ伏して、どのようにして急流を渡ったのか教えてほしいと懇願した。　仲間の懇願に迫られ、アンモンは天使に運ばれたことを明かした。その際、彼は、自分、アンモンがこの世を去るまでは、このことを他人に話さないよう仲間に命じた。聖アントニオのもとへやって来ると、尊者から次のような言葉を聞いた。

「神は、あなたの死の日を私に示されました。ですから、あなたがまだ神のもとへ旅立たれる前に、語り合いを楽しもうとあなたをお招きしたのです。さあ、互いのために祈りましょう。」

二人は長い間語り合い、聖霊から慰めを受け、アモンは祝福を受けて聖アントニオのもとを後にした。

そして数日後、アントニオス大聖人は丘の上に座り、天を仰ぎ見ると、天使たちに喜びをもって天へと運ばれていくアモンの魂を見た。これを見て、アントニオスは大いに喜んだ。すると弟子たちは彼に尋ねた。

「父よ、その喜びの理由は何でしょうか？」

彼は答えた。

「今日、アッバ・アモンが天に召され、私は天使たちに天へと運ばれていく彼の聖なる魂を見ているのだ。」

弟子たちは、聖アントニオがアモンの帰天について語ったその日を心に刻んだ。　数日後、ニトリアから兄弟たちがやって来て[6793]、聖アモンが主のもとへ召されたことを伝えた[6794]。日数を数えてみると、アントニオスの弟子たちは、アモンが、アントニオスが天使たちと共に天へと昇っていくその魂を見たまさにその日に召されたことを確信し、神を賛美した。

私たちの尊い父パウロ・プレプロストイの伝記

記念日：10月4日

このパウロは、ある村で農夫をしていた。彼は学のない人であったが、心は極めて純朴で、悪意のない人であった。彼は、顔立ちは美しいが、心も行いも悪い女性と結婚した。彼女は長い間、夫に内緒で不貞な生活を送っていた。　ある日、仕事から帰宅したパウロは、妻が他の男と一緒にいるのを目撃した。その時、彼は少し微笑みながら、その不貞を働く男にこう言った。

「よし、よし！　私はそんなことには全く気にしていない。イエス・キリストを証人として誓うが、私はもう彼女と一緒に暮らすつもりはない。さあ、君が彼女を手に入れたのだから、子供たちの面倒も見てくれ。私はここを去って、修道士になるつもりだ。」

[6792] 急流を指す名称としてかなり頻繁に見られる。

[6793] すなわち、聖アモンが修行に励んだニトリアの荒野から。

[6794] 聖アモンの至福の死は、350年頃に訪れた。――聖アモンは、経験に裏打ちされた霊的な知恵に満ちた19の「訓示の章」を著した。

そして直ちに、すべてを置き去りにして、パヴェルは家を出た。その際、誰にも何も告げず、不貞を働いた妻を少しも責めることもなく、黙って荒野へと向かった。そこで彼は、聖アントニオス・ザ・グレート（[6795]）のもとを訪れ、その修道室の扉を叩いた。アントニオスは彼に尋ねた。

「何の用か？」

パウロは答えた。

「修道士になりたいのです。」

アントニウスは、彼がすでに年老いているのを見て、こう言った。

「お前は、老いぼれ、もう60歳近くだ。修道士になることはできない。村に戻り、神に感謝しながら自分の仕事を続けなさい。荒野での労苦に耐え、誘惑に打ち勝つことは、お前にはできないだろう。」

しかし、パヴェルは答えた。

「父よ！ あなたが命じられることは何でも果たす覚悟があります。」

しかし、アントニオスは彼の言葉に耳を貸さず、こう言った。

「言っただろう、お前は年老いていて、もはや修道士にはなれないと。ここから立ち去れ。もし修道士になりたいのなら、多くの兄弟たちが住む修道院へ行け。彼らならお前の弱さを支えてくれるだろう。私はここで一人で暮らしており、五日間も何も口にしない。だから、お前は私と一緒に暮らすことはできない。」

そう言うと、アントニオスは扉を閉め、三日間自分の小部屋から出てこなかった。しかし、老人はその間ずっと小部屋のそばに留まり、どこにも行こうとはしなかった。四日目にアントニオスが扉を開けると、再びパウロの姿が見えた。彼を追い払おうと、こう言った。

「ここから立ち去れ、長老よ。なぜ私を煩わせるのか？　ここにはいられないと言っただろう。」

「ここで死ぬとしても、ここを離れるつもりはない」と長老は答えた。

アントニオスは、長老がパンも水も持っておらず、すでに4日間も何も食べていないのを見て、心の中でこう考えた。「この長老は、これほど長く断食することに慣れていないのだから、飢えで死んでしまうかもしれない。そうなれば、私の心に彼に対する罪がのしかかるだろう」。そこで彼は、長老を自分のところに留めておくことに同意し、こう言った。

「私の言うことを聞き、私が命じることを行えば、あなたは救われるだろう。」

パウロは答えた。

「父よ、あなたが私に言うことは何でも実行する用意があります。」

アントニオスは彼を試すように、こう言った。

「私が戻ってきて、君が取り組むべきものを届けるまで、この場所で立ち止まって祈り続けなさい。」

パウロを残して、アントニウスは洞窟の中に入った。

丸一週間、彼はパヴェルのところへ出てこなかったが、窓からこっそりと彼を観察し、その間ずっと、パヴェルが昼夜を問わず同じ場所にじっと立っているのを見ていた。

そこで、アントニウスは小部屋から出てきて、長老にナツメヤシの枝を持って行き、それを水に浸してから、こう言った。

[6795] 修道生活の最初の確立者である聖アントニオス大聖人は、エジプト出身で、ナイル川の東岸、フィヴァイダ付近で修行に励んだ。　そこで、毛皮の衣を身にまとい、草や根菜だけを糧として、絶え間ない労苦と祈りの中で、20年間、人知れず過ごした。その間、神の恵みによって、誘惑や恐怖をもって彼を悩ませた誘惑者の霊を打ち負かした。　やがて、その聖なる生活と奇跡に惹かれて、多くの修道士たちがアンソニーのいる荒野へと集まってきた。彼らは彼の近くに定住し、アンソニーが定めた規則を生活の模範として受け入れた。これが修道生活の始まりであった。聖アンソニーは356年、105歳でこの世を去った。彼の記念日は1月17日である。

「長老よ、私と同じように縄を編んでください。」

そしてパウロは第九時までの間、ロープを編み続け、大変な苦労の末、十五ラクテ[6796] を編み上げた。アントニウスはその出来栄えを見て、こう言った。

「編みが下手だ。ほどいて、もう一度編み直せ。」

すでに、パウロに何も食べさせないまま七日が経っていた。アントニウスがこうしたことをしたのは、パウロを自分の元から遠ざけるためであった。彼は、パウロが試練に耐えきれず、自分から離れていくだろうと考えていたからである。　しかし、パウロは大変な苦労をしながらも、縄をほどいてはまた編み直すことを続けた。そして、どれほど空腹であっても、少しも落胆したり、不平を言ったりすることはなかった。そこでアントニオは彼を憐れみ、日が沈もうとしていた頃、パウロにこう言った。

「老僧よ、パンを少し食べてみないか？」

「お望み通りです、父上」とパウロは答えた。

アントニウスは、パウロのこの言葉に心を打たれた。パウロは空腹に苦しんでいたにもかかわらず、パンで空腹を満たそうと急ぐことなく、アントニウスの意向に従っていたのだ。

二人はパンを少しと水を口にし、食卓から立ち上がって、主に感謝を捧げた。

聖アントニウスは、一晩中眠らずに多くの礼拝を捧げながら詩篇を詠むという祈りにおいてもパウロを試したが、この点においてもパウロは忍耐強く、元気な姿を見せた。

ある時、彼らが食事をとっていた際、アントニウスはパウロに、自分よりも多く食べるよう命じた。それは、パウロがまだ厳しい断食に慣れていないことを憐れんだからである。

しかし、パウロはこう答えた。

「もし父上がお召し上がりになるなら、私もいただきます。」

「私はこれで十分だ」とアントニオスは言った。「私は修道士だからだ。」

するとパウロはこう答えた。

「私もこれで十分です。私も修道士になりたいからです。」

そしてパウロは、アントニオが命じることは何でも、いつも忠実に実行した。

ある日、アントニウスは彼に服を縫うよう命じた。パウロがそれを縫い終えると、アントニウスは言った。

「縫いが下手だ。ほどいて、もう一度縫い直せ。」

そして、改めて縫い直した服についても、またほどいて、もう一度縫い直せと命じた。

アントニウスがこれらすべてを行ったのは、パウロの忍耐と従順さを試すためであった。しかし、パウロはこれに対して少しも不平を言わず、熱意と勤勉さをもってアントニウスのすべての命令を遂行した。

ついに、アントニオはパウロが隠遁生活を送る能力があることを確信し、彼にこう言った。

「さあ、お前はすでに主イエスの御名によって修道士となったのだ。」

そしてアントニオは、自分の住居から石を四投分[6797] の距離に彼のための独房を設け、彼に孤独な生活を送るよう命じた。　そして、祝福されたパウロは聖アントニオの近くにあるその隔離された小部屋で、昼夜を問わず修道者の修行に励んだ。その功績により、彼は神から不浄な霊に対する権能を授かり、それらを追い払い、病を癒やすことができるようになった。

ある時、聖アントニオのもとに、非常に邪悪で強力な不浄の霊――神を冒涜する闇の君主の一人――に取り憑かれた若者が連れてこられた。

しかし、アントニウスはこう言った。

[6796]「ラコート」または「ロコート」とは、10.5ヴェルシュク（およそ0.5メートル）に相当する長さの単位である。

[6797] すなわち、自分の修道室から、石を4回投げられる距離のことである。

「これは私の役目ではない。私は神から最も強力な悪魔たちに対する権能を授かっていないが、極めて謙虚なパウロにはこの賜物がある。」そして彼はその若者を連れてパウロのもとへ行き、こう言った。

「アッバ・パウロよ！この若者の体から不浄な霊を追い出し、彼が神を賛美しつつ、健やかに家へ帰れるようにしてください。」

しかし、パウロは言った。

「師よ、なぜあなたはその悪霊を追い出さなかったのですか？」

アントニオスは答えた。

「私には急ぎの用事があったので、彼をあなたのところへ連れてきたのです。」

そして、悪霊に取り憑かれた若者とパウロを残して、アントニオは立ち去った。パウロは神に祈りを捧げた後、悪霊に言った。

「悪魔よ！アッバ・アントニオスが、この人から出て行けと命じている。」

すると悪魔は罵声を浴びせて答えた。

「出て行かないぞ、悪意に満ちた嘘つきの老いぼれめ。」するとパウロは、普段着ていた革の服を手に取り、悪魔を叩きながら言った。

「出て行け。聖アントニオがそう命じたのだ。」

しかし、悪魔は出て行こうとしなかった。そこでパウロは言った。

「お前が出て行くか、さもなくば私がキリストに祈り、お前に災いが降りかかるだろう。」

しかし、悪魔はキリストを冒涜して言った。

「出て行かない。」

そこでパウロは悪霊に怒りを覚え、正午――エジプトでは太陽が火の炉のように照りつける時刻――に岩の上に登り、動かない柱のようにその上に立ち、キリストに向かってこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、ポンティウス・ピラトのもとで十字架につけられた方よ！　あなたはご存知でしょう、たとえこの岩の上で死ぬことになろうとも、私はここから降りることはありません。そして、あなたが私の祈りを聞き入れ、この若者の体から悪霊を追い出されるまでは、パンも水も口にしません。」

彼がそう言い終えるや否や、悪魔は叫び始めた。

「出て行く、出て行く。だが、どこへ行くのかは分からない。」そして、その若者の体から出て行った悪魔は、長さ70キュビトの大きな蛇へと姿を変え、チェルムノエ海に棲み着いた[6798]。こうして聖パウロは、その純真さと謙遜によって悪魔に打ち勝った。なぜなら、最も弱い悪霊は人々が信仰の力によって追い出すが、悪霊の支配者たちは、この聖パウロのように、謙遜の力によって打ち負かされるからである。

至福のパウロは、洞察の賜物も持っていた。ある時、ある修道院に入った彼は、教会の前に立ち、誰がどのような思いでそこに入ってくるかを観察していた。それは晩課の時であり、皆が喜びに満ちた顔と清らかな魂を持って教会に入っていった。そして、一人ひとりと共に、守護天使も喜びをもって入っていった。　しかし、ある一人の修道士は、陰鬱な表情で、心を悪意に満ちたまま教会へと向かっていた。彼は悪霊たちに取り囲まれており、それぞれの悪霊が彼を自分の方へと引きずり込もうとしていた。一方、彼の守護天使は、落胆し、泣きながら、少し離れた後ろからついてきていた。　これを見た聖人は悲しみに打ちひしがれ、滅びゆく兄弟を深く嘆いた。深い悲しみのあまり、聖パウロは教会に入ることさえできず、泣きながらその外に座っていた。礼拝が終わると、兄弟たちは

[6798] チェルムノエ、いわゆる紅海は、インド洋にある細長い海峡であり、アラビア半島とエジプト、そしてアジアとアフリカを隔てている。　ユダヤ人たちはモーセの導きのもと、エジプトから約束の地、すなわちパレスチナへ向かう途中、この海を渡った（出エジプト記14:1–31）。

皆、入ってきた時と変わらぬ姿で出てきて、神の光が彼らを照らしていた。　パウロは、以前陰鬱だったあの兄弟の姿も目にした。すると、その顔はまるで天使の顔のように輝き、聖霊の恵みが彼を包み込み、守護天使が喜びながら彼の手を支えていた。一方、悪霊は遠くから泣きじゃくり、ほんの少しでも彼に近づくことさえ敢えてしなかった。

兄弟に起こったこの急激な変化を見て、聖人は喜び、彼を呼び止めて、周囲の人々に自分が見たことを語り、その後、兄弟にその突然の変化の理由を尋ねた。

兄は、神の啓示によって人々の前でその罪を暴かれたことを悟り、自らのことをすべて打ち明けた。

「私は」と彼は言った。「極めて罪深い者です。今日に至るまで、長年にわたり不法の中に生きてきました。今日、教会に入ったとき、預言者イザヤの書、いや、むしろ、預言者を通して語られる神ご自身がこうおっしゃっているのを耳にしました。*『清めよ、清めよ。あなたがたの悪行をわたしの目の前から取り除き、　善を行うことを学べ。たとえあなたがたの罪が緋色のように赤くても、雪のように白くする』*（イザヤ書1:16–18）[6799]。これを聞いて、私は心を打たれ、霊的な目が開かれ、自分の悪行と不義を悟り、悔い改めの心で神にこう祈りました：　「主よ、あなたは罪人を救うためにこの世に来られた。今、あなたの預言者を通して私に告げられたとおり、この御言葉を、罪人である私に対して実際に成就させてください。　なぜなら、私は今より、御助けを借りて、誰に対しても悪を行わないだけでなく、あらゆる不法を捨て、主よ、清い良心をもって御あなたに仕えることを誓います。ただ、悔い改める私を受け入れてくださり、御あなたにすがりつく私を拒まないでください。　このような誓いを立て――彼は続けた――私は教会を出て、心の中で、もはや神の前で罪を犯さないと決心した。

これを聞いて、皆は大きな声で、悔い改めをもって御自身に立ち返る者をすべて受け入れてくださる神を賛美した。

聖パウロはこれほどまでに洞察力に富んでいた。なぜなら、その純真さと悪意のなさゆえに、彼は神の恵みに満ち溢れていたからである。そもそも、悪意のない者以上に、神に喜ばれる者がいるだろうか。*「清さと正義が――主は詩人の口を通してこう言われる――私を守ってくださいますように」*（詩篇24:21）。

この聖人は、聖なる質素な生活の中で長きにわたり生き、多くの奇跡を成し遂げた後、主のもとへ旅立った[6800]。地上で質素で学のない者であった彼は、今や天において、この世のあらゆる賢者たちよりもはるかに賢明な者となり、賢明なケルビムたちと共に、神の力であり神の英知であるキリストを仰ぎ見ている。　まことに、真の知恵とは、神を畏れ、清らかな魂と悪意のない心をもって神に仕え、神に喜ばれることにあるのです。

主よ、御自分の御愛する者、極めて単純なパウロの祈りによって、私たちも御命令を全うする知恵をお与えください。知恵の源である御あなたへの畏れを私たちに与えてください。そうして、御あなたへの畏敬の念から罪を避け、御あなたの御前で善を行い、永遠に御あなたの憐れみを受けることができますように。アーメン。

聖殉教者ガイオス、ファウストス、エウセビオス、ケリモンの記念日。

10月4日の記念日

[6799]（「緋色」、すなわち濃い赤色）。すなわち、あなた方の罪の汚れを洗い流し、それらから完全に清める（詩篇50:9参照）。神は、人々に対する御慈悲により、彼らの罪を赦されますが、それは誠実な悔い改めと道徳的な改心を条件としています。

[6800] 聖パウロは4世紀に亡くなった。

これらの聖人たちは、聖ディオニシオス・アレクサンドリアスの弟子たちでした。　聖ガイオスとファウストは迫害を受け、師と共に殉教の死を遂げました。一方、エウセビオスとヘリモンは、聖ディオニシオスが追放された後、神の助けにより、牢獄に囚われた者たちを訪ね、殉教者たちの遺体を埋葬し、デキウス皇帝の治世まで生き延びました。　キリストへの信仰を告白したため、彼らは残酷な拷問に耐えましたが、揺るぎない信仰を貫きました。彼らは多くの異教徒にキリストの信仰を教え、父と子と聖霊の御名によって彼らに洗礼を授けました――ある者には密かに、またある者には公然と。その後、彼らは捕らえられ、剣で斬り殺され、その至福の魂を主のもとに捧げました[6801]。

聖殉教者ダヴィクタとその娘カリステニアの記念日

記念日：10月4日

このダヴィクト[6802]は、マクシミアヌス帝の治世下、エフェソスの総督であった[6803]。娘を不敬虔な異教徒である皇帝に嫁がせることに抵抗したため、ダヴィクトは名誉と富を剥奪され、メリティナへ追放され[6804]、そこで剣によって斬殺された。一方、カリステニアは当初ニコメディアに身を隠していたが、その後トラキア[6805]へと退き、ある女性の家に身を寄せ、その祈りによってその娘の目の病を癒した。　マクシミアヌスの死後、カリステニアは故郷に戻り、リキニウス帝の妃コンスタンティアのもとへ向かった。彼女は聖コンスタンティヌス・ラヴノアポストロスの姉妹であり、キリスト教を信仰していた。そこで彼女は、自身のことをすべて王妃に打ち明けた。　王妃は彼女を温かく迎え入れ、マクシミアヌスによって没収されていた父の財産を取り戻す手助けをした。この財産を受け取ったカリステニアは、そのすべてを貧しい人々に施した。　彼女は父の遺体を流刑地からアジアへ移し、父を偲んで教会を建てた。そして彼女自身も、残りの生涯を神に喜ばれるように過ごし、安らかに主のもとで息を引き取った。

カペトリアの長老ペトロ聖殉教者の記念日

記念日：10月4日

聖ペトロはカペトリア[6806]で生まれ育ち、結婚して三人の子供を持ち、その知恵で知られ、多くの人々を真理の道へと導いた。その後、彼は修道生活に入り、本人の意思に反して、ボストリア[6807]の司教に任命された。キリスト教の教師として、彼はアガリア人たちに捕らえられ、拷問を受けるためにダマスカスへ連行された。そこで舌を切り落とされたが、その後、奇跡的に　、以前よりも

[6801] ファウスト、エウセビオス、ケリモンは、彼らの師である聖ディオニシオス自身の証言によれば、助祭であった。エウセビオス（教会史家）は、さらに、助祭であったエウセビオスが後にシリアのラオディキア教会で司教となり、一方、高名な長老であったファウストは、エウセビオスの存命中に斬首されて殉教したと付け加えている。――3世紀後半に没した。

[6802] ギリシャの文献によれば、ダヴィクトはアダヴクトと呼ばれている。

[6803] エフェソスは、小アジアのアシア州の主要都市であり、カイストル川沿いに位置していた。現在、古代エフェソスの跡地には、アイシャ・ソリュクと呼ばれる貧しいトルコの村がある。

[6804] メリティナ――小アルメニア北部の地域で、ユーフラテス川からほど近い。トラヤヌス帝（98–117）の治世下、この地域には、その地域と同じ名を持つ集落が発展し、かなりの規模の都市へと成長した。

[6805] フラキア――ビザンツ帝国の地域で、バルカン半島の北東部に位置する。

[6806] カペトリア――エルサレムからダマスカスへ向かう途上、ガダラとアドラオの間に位置する都市。

[6807] ボストラ――アラビアの都市。

さらに明瞭に話すようになった。その後、右手と右足を切り落とされ、両目をえぐり出され、十字架に釘付けにされ、ついに首を刎ねられ、遺体は焼かれた[6808]。

10月18日

10月5日（旧暦）

聖殉教者ハリティナの受難

記念日：10月5日

ディオクレティアヌス帝の治世、ポンテ地方にクラウディウスという名の高貴で裕福な人物が住んでいた。彼は性格が優しく、貧しい人々に対して慈悲深かった。ある日、クラウディウスはハリティーナという名の幼い少女を見かけた。彼女は幼い頃に両親を亡くしていた。　クラウディウスは彼女を憐れみ、自分の元へ引き取り、実の娘のように育て上げ、深く愛した。そして実際、ハリティーナは愛されるにふさわしい少女であった。成長すると、彼女は容姿が美しいだけでなく、柔和さ、謙虚さ、従順さ、寡黙さ、貞潔、そして知性といった素晴らしい徳を備えていた。　キリストを信じるようになった彼女は、主に対して熱烈な愛を抱き、主の妻となることを決意して貞節を守り、そのため人里離れた別邸に住むようになった。彼女の養育者であり主人であるクラウディウスは、彼女のこの善意ある決意に反対するどころか、彼女の貞潔で聖なる生き方を大いに喜んだ。　彼は彼女のために特別な家を建て、そこで彼女は人里離れた生活を送り、昼夜を問わず主の律法を学んでいた。信者たちが彼女を訪ねるようになり、彼女は彼らを救いへと導き、魂に有益な教えを説いた。　また、信仰を持たない人々に対しても、キリストを宣べ伝えることで、彼らを真の信仰へと導いた。このようにして、ハリティーナはすべての人々にとって、信仰と神に喜ばれる生き方の教師となった。

当時、不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌス[6809]は、キリスト教徒に対して激しい迫害を開始した。彼の命令により、キリスト教徒は至る所で捜し出され、拷問にさらされた。とりわけ迫害者たちは、特に徳が高く賢明な人々として噂されていた者たちを執拗に追及した。　そうした中、聖ハリティーナもまた、都市長官ドミティアヌスの前で誹謗中傷の対象となった。彼女は、自身がキリスト教徒である上、多くの者をキリストへの信仰へと改宗させ、今も改宗させ続けていると告発されたのである。これを聞いた都市長官は、クラウディウスに手紙を書き、ハリティーナを自分の元へ送るよう命じた。　クラウディウスは、総督の書簡を読み、深く悲しみに打ちひしがれ、粗布を身にまとい、彼女を悼んだ。総督に逆らうことは不可能であることをよく理解していたからである。　それにもかかわらず、彼女を連れ去るために兵士たちが派遣されてきたとき、彼はハリティナと別れることが耐えられず、泣きながら自分の手で彼女を抱きしめ、誘拐者たちに引き渡さないよう、できる限り抵抗した。　兵士たちは彼女を自分たちの方へ引きずり出そうとしたが、クラウディウスは彼女を自分の手から離さず、それを阻んだ。あちこちへ引きずり回される中、聖ハリティーナは主人にこう言った。

「私を放してください、主よ。そして悲しまないで、喜んでください。私は、私自身の罪とあなたの罪のために、神に喜ばれるいけにえとなるのですから。」

[6808] 聖ペテロの没年は、3世紀または4世紀初頭とされている。

[6809] ローマ皇帝ディオクレティアヌスは、西暦284年から305年まで在位した。

兵士たちは激しく怒り、力ずくでクラウディウスの手からハリティナを引き剥がし、まるで狼が群れから羊をさらうかのように彼女を連れ去り、都の総督のもとへ連行した。彼女を見送る際、クラウディウスは泣きながらこう言った。

「聖なる殉教者たちの群れの中にあって、天の王の御前に立つとき、どうか私のことを覚えていてください！」

聖ハリティーナは総督のもとへ連行され、彼の前に立ち、心の底から神に助けを請うた。

総督は彼女に尋ねた。

「お嬢さん、私が君について聞いた話は本当なのか。君自身がキリスト教徒であり、他の多くの人々を誘惑して、同じ不敬虔な信仰へと改宗させているという話は？」

聖ハリティーナは勇敢にこう答えた。

「私がキリスト教徒であるというのは事実ですが、他の人々を堕落させているというのは嘘です。私は他人を堕落させるのではなく、不敬虔と迷いから救い出し、真の道へと導き、彼らをキリストのもとへ連れて行っているのです。キリストへの信仰は、あなたが不当に考えているような不敬虔なものではなく、聖く、義なるものです。」　それに対し、あなたの信仰はあらゆる不浄に満ちています。なぜなら、あなたは邪悪で狡猾な悪魔たちを信じ、彼らの意志に従っているからです。

聖ハリティナのこの答えを聞いた都市の統治者は激しく怒り、彼女を激しく殴打するよう命じた。その後、彼女の首に鉄の輪をはめ、地方の統治者のもとへ裁判のために送り出した。その不義な裁判官は、ハリティナにすべての拷問器具を見せつけ、彼女にこう言った。

「自分の身を憐れめ。そうすれば、残酷な苦痛の中で命を落とすことはない。私の助言に従い、不死の神々に生贄を捧げよ。そうすれば、三つの恩恵が得られるだろう。神々をなだめ、王の恩寵を得、そしてその咲き誇る美しさを、残酷な拷問によって損なわれることなく保つことができるのだ。」

これに対し、殉教者は天を仰ぎ、そこから守りを求めた。そして十字を切って、裁判官にこう言った。

「裁判官よ、あなたは狡猾で不公正だ！しかし、あなたの狡猾さでも、拷問の恐怖でも、私を捕らえることはできない。私をあなたの不敬虔な道に引きずり込むことも、キリストのために苦難を受けるという私の燃えるような願いを変えることもできない。」　むしろ、あなたの魂にとって何が有益かをよく考えなさい。そして、あなたが神として崇めている悪魔たちと共に滅びることのないよう、無機質な偶像には決して拝んではならない。

そのような言葉を耳にした裁判官は、聖なる殉教者を罵り始め、彼女の頭髪を刈り落とすよう命じた。　聖女は、毛を刈られる羊のように無言で、心の中で最愛の花婿であるキリストと語り合い、殉教の偉業を成し遂げられるよう彼に懇願していた。そして、彼女の髪が刈り取られるやいなや、皆の目の前で、以前よりも長く、美しい髪が彼女の頭に生えてきた。　これを見た裁判官は激しい怒りに駆られ、殉教者の頭に燃える炭をまかせ、それによって彼女はひどく火傷を負わされた。その後、聖女にさらなる苦痛を与えるため、火傷を負った彼女の体に、胆汁を混ぜた酢を注ぎかけた。しかし、聖女はすべてを忍耐強く耐え忍び、主に祈りながらこう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたを信頼する者たちの力強い助け手よ。燃え盛る炎の中で、あなたの三人の聖なる少年たちを無傷で守られた方よ。どうか急いで私を助けに来て、あなたのために耐えるこの苦しみの中で私を強めてください。そうすれば、私の敵たちが『彼女の神はどこにいるのか』と言わなくて済むように。」

祈りを捧げた後、彼女は苦しみから解放されたのを感じ、神に感謝を捧げた。一方、拷問官は彼女のためにますます過酷な拷問を考案した。鉄の棒を熱し、彼女の乳首を貫かせ、燃えるろうそくで肋骨を焼かせたのである。　しかし、聖ハリティナは、あたかも物質的な火を感じないかのように

、神の愛という霊的な炎に燃え上がり、心と口をもってイエス・キリストを告白し続けた。聖人のそのような不屈の姿勢を見て、拷問者は彼女を海に沈めるよう命じた。使用人たちは彼女を連れ出し、海へと向かった。 聖女は歩きながら、神にこう叫びました。

「主なる私の神よ、御名のゆえに、火の拷問の後に海の水の中を通り抜けることを許してくださり、感謝いたします。復活の日に、私が清らかな姿で現れることをお許しください。しかし今この時も、いつも通り、私を通して御奇跡をお示しください。そうして、あなたの偉大なる御名がさらに称えられますように。」

その間、使用人たちはハリティーナを海辺へ連れて行き、彼女の首に大きな石を縛り付けて、海の深みへと投げ込んだ。 しかし、その石はたちまち彼女の首から外れて海の中に消え去り、聖女は目に見えない神の力に支えられて波の上に立ち、まるで固い岩の上を歩くかのように波の上を歩いた。岸に上がると、彼女は裁判官のもとに戻り、こう言った。

「私のキリストの御力を仰ぎ見よ。そして、彼を信じなさい！」

判事は、ハリティーナが溺れずに生きているのを見て、あまりの恐怖にほとんど気を失いそうになり、黙り込んでしまった。 ようやく正気を取り戻すと、彼は彼女を魔女だと言い、魔術によって海での溺死を免れたのだと断じ、彼女を捕らえて裸のまま車輪に縛り付けるよう命じた。その車輪の下には、様々な鋭利な鉄の道具やナイフ、剣、そして燃え盛る炭が山のように積まれていた。 裁判官は、聖女が縛り付けられた車輪を回すよう使用人たちに命じた。車輪の下に置かれた鋭利な道具が彼女の肉体を引き裂き、燃え盛る炭が彼女の体を焦がし、それによって聖女にさらなる苦痛を与えるためであった。 しかし、神の御心により車輪は回転せず、使用人たちの腕の力が抜け、燃え盛る炭も消えてしまったため、彼らは拷問者の命令を遂行することができなかった。 聖女は無傷のままであった。主の天使がキリストの花嫁を守り、護っていたからである。これを見た裁判官は再び激怒し、彼女の指と足の爪を引き抜き、歯を打ち砕くよう命じたが、聖女はこれらの拷問も勇敢に耐え抜いた。 そこで、不義な裁判官は、彼女の 処女性を汚そうと決心し、そのために多くの放蕩者を集め、聖女を彼らに引き渡して汚させようと命じた。聖ハリティナは、不義な裁判官のこの不敬虔な命令を耳にすると、こう言った。

「私と共にいるのは私のキリストです。主はあなたがたの邪悪な企みをすべて打ち砕き、私を汚れのないまま御自身のもとに迎え入れてくださいます。」

そう言うと、殉教者は両手を挙げ、天を仰ぎ、神に熱心に祈り、不義な者たちの手から彼女を救い出してくださるよう願った。 召集された放蕩者たちがすでに彼女を汚そうとしたその時、彼女は突然、その清く汚れなき魂を主の御手に委ねた[6810] 、そして彼女の処女の体は、卑劣で不浄な欲望に満ちた放蕩者たちの間に、死体となって横たわっていた。 聖女が死んでいるのを見て、裁判官は彼女の遺体を皮袋に入れ、その袋に砂を詰め、聖女の遺体ごと海に投げ込むよう命じた。こうして、生前、水の上を無傷で歩いていた彼女が、死後、海に沈められたのである！ 三日後、海の波は、水の中で何の害も受けなかった聖女の遺体を岸に打ち上げた。 聖ハリティナを実の娘のように育てたクラウディウスは、その清く、多くの苦難に耐えた遺体を受け取り、涙と喜びのうちに相応しい埋葬を行い、聖母マリアから生まれた救い主キリストを賛美した。彼に、世々限りなく栄光と誉れあれ。アーメン。

[6810] 聖殉教者ハリティナは、西暦304年頃、黒海南岸のポンテ地方にあるアミシアの町で殉教した。

コンダク、第2調:

堅固な知性をもって、ハリティーナよ、信仰によって魂を強め、敵と戦う者を公然と恥じ入らせた。キリストの御前に立つ至福なる者よ、汝の血を宿す赤ん坊を携え、常に天使たちと共に喜び祝う者よ。殉教者よ、我らのために祈り給え。

ペチェルスクの聖ダミアンの生涯

記念日：10月5日

私たちが、心と体の病に苛まれているとき、聖書の言葉に従い、長老たちに助けを求め、彼らが私たちに聖油の塗油を行ってくれるよう願うならば、心の中で、神に喜ばれた長老であり癒し手である、至福のダミアンも共に呼び求めましょう。　聖テオドシオス修道院長在任中に、聖ペチェールスク修道院で善き行いをもって修業に励んだ方です。

この驚くべき修道士は、天使のような生活と、その師であり導き手である聖テオドシオスのあらゆる美徳を、極めて熱心に模範としていました。　多くの人々の証言によれば、彼は心謙虚で、従順であり、すべてに服従していた。とりわけ、彼と同じケリアに住んでいた者たちは、彼の柔和さ、夜通しの徹夜、聖書の熱心な読誦、そして頻繁な祈りのための起床を目の当たりにしていた。　それらの目撃者たちは、この人物の他の多くの偉業についても語っている。彼は極めて厳格な断食者であり、節制に優れていたため、パンと水以外は、死ぬまで何も口にしなかった。　その敬虔な生涯により、彼は主から奇跡を行う賜物、とりわけ病人を癒やす恵みを授かった。それは、彼がその名を冠していた聖ダミアノ――無償の医師であり奇跡行者――に倣うものであった。　誰かが病める子供を尊者のもとに連れてきたり、何らかの病に苦しむ大人を連れてきたりすると、テオドシウスは至福のダミアンに、病人のために祈りを捧げるよう命じた。　ダミアンは、謙虚さと不平を言わない従順さをもって、自らを癒しの賜物に値しない者と見なしながら、病人のために祈りを捧げ、聖油を塗った。そして、神の恵みにより、皆が癒やされ、健康な状態で帰っていった。

こうして、至福のダミアンは長年にわたり、神に喜ばれる修道生活を送り、自らの魂の救いのために多くの行いを成し遂げ、永遠の命にふさわしい者となった。この世の生涯の終わりを迎え、病に倒れた彼は、死が近づいているのを見て、涙ながらに神にこう祈り始めた。

「わが主、イエス・キリストよ！　どうか、私があなたの聖徒たちの栄光に与る者となり、彼らと共に、私の導き手である尊者テオドシオスと共に、あなたの御光の中に数え入れられますように。その御光は、あなたが義人たちに備えてくださったものです。」

彼がそう祈っていると、突然、聖テオドシウスの姿をした天使が彼の寝床の前に現れた。天使はダミアノに身を屈め、愛を込めて彼に口づけをしながら、こう言った。

「わが子よ！　あなたが祈りを捧げている主は、今、私を遣わして、あなたの願いが叶うことを告げ知らせた。あなたは主の聖徒たちに数えられ、彼らと共に天の主の御国に住むことになる。そして、主があなたにこの世を去り、御許へ行くよう命じられた時、私たちはその光の中においても、決して離れることはないだろう。」

こう言い終えると、天使は姿を消した。至福のダミアンは、それが神からの御出現であったと悟った。というのも、彼に話しかけていた者が扉から出入りする様子は全く見えず、現れたその場その場所で姿を消したからである。　彼は直ちに修道見習いを呼び寄せ、尊者テオドシオスのもとへ遣わし、自分のところへ来てくれるよう頼んだ。聖人がすぐにやって来ると、至福のダミアンは喜びに満ちた表情で彼に尋ねた。

「聖なる父よ、今日、幻の中で私に約束してくださった通りになるのでしょうか？」

聖テオドシウスは、何も知らずにこう答えた。

「わが子よ、私があなたに何を約束したのか、私には分かりません。」

そこで、至福のダミアンは、自分がどのように祈っていたか、そして聖テオドシオスの姿をした誰かが現れてそのような約束をしたことを彼に語った。

これを聞いた、神に導かれたテオドシウスは、神を賛美し、涙を流しながら聖人にこう言った。

「まことに、わが子よ、お前に約束された通りになるだろう。なぜなら、私の姿をした神の御使いがお前に現れたのだから。しかし、私自身は罪人である。義人たちに用意されたような栄光を、どうして私が約束できようか？」

至福のダミアンは、この言葉を聞いて喜びと希望に満たされた。その間、修道士たちが彼の独房に集まってきた。彼は皆に口づけをし、良き告白の末、天使たちが魂を迎えに来た時、平穏のうちにその魂を主の御手に委ね、顔は輝き、魂が肉体から喜びをもって離れる様子を示した[6811]。 そこで、聖テオドシウスは、すべての兄弟たちが集まるよう、鐘を鳴らすよう命じた。彼らは、賛美歌を歌い、大いなる栄誉をもって、三位一体の神に栄光あれと称えられ、キリストに愛されたこの聖人の尊い遺体を洞窟に埋葬した。

この祝福された癒やしの聖人ダミアンの祈りによって、主が私たちをも、病のない御国に、永遠の世にわたり、その一員として加わらせてくださいますように。アーメン。

ペチェルスクの聖エレミヤの伝記

記念日：10月5日

そして、私たちのロシアの地もまた、預言者エレミヤによって栄光に輝きました。彼は古代の預言者ではなく、現代の預言者です。ここでは、彼について語りたいと思います。私たちの福者である父エレミヤ・ペチェルスキーは、深く、高齢に達しました。彼は、敬虔な大公ウラジーミルの時代にあったロシアの洗礼さえも覚えていました[6812]； その当時、至福のエレミヤもまた、聖なる洗礼によって啓蒙されたのである。それから長い年月が経った後、彼はペチェルスクの聖なる修道院を訪れ、私たちの尊い父であるアントニーとフェオドシイのもとで、大いなる天使の装い――スキマ――を受け、その装いの中で、聖なる父たちの生涯に倣い、神に喜ばれるよう精進した。 その偉大な徳により、彼は神から未来を予知し、人の思いを見通す賜物を受けた。尊者（イェレミヤ）は、誰かに悪意ある思いを見出すと、その者を二人きりの場で戒め、悪魔の唆しから身を守るよう説得した。特に、兄弟の誰かが修道院を去ろうと考えた場合にはそうであった。 その時、これを予見したエレミヤは、その兄弟のもとへ赴き、その意図を指摘して慰め、忍耐強く、揺るぎなく、絶え間なく「善の敵」であり「我らの敵」である者との戦いを続け、迷いに屈しないよう諭した。そして、彼はその教えによって兄弟をこれほどまでに強く励ましたため、その兄弟は永遠にその意図を捨て去ったのである。 また、この聖人が誰かに、良いことでも悪いことでも何かを予言したときは、その長老の言葉は常に的中した。

長きにわたり生き、その洞察力によって多くの人々に恩恵をもたらした後、聖エレミヤは極老の身で[6813] に息を引き取り、魂の覆いである肉体を洞窟に残して、古の預言者たちの元へと旅立ち、、古き日々の神、父なる神ご自身の奥義を、明瞭な顔をもって仰ぎ見るために、 御父なる神に、御

[6811] 聖ダミアンは1070年に帰天した。その聖遺骨は、キエフ・ペチェールスカヤ修道院のアンソニーの洞窟に安置されている。

[6812] ルーシの地の洗礼は、988年に聖ウラジーミル大公の治世下で行われた。

[6813] 1074年。

独り子および同質なる聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

聖マタイ・ペチェルスキーの伝記

記念日：10月5日

私たちの祝福された父マタイ・ペチェルスキーは、その名においてのみ、使徒たちの筆頭である福音記者に似ていたのではなく、あの者がエチオピアの地を目撃し、その住民の不信仰を糾弾することを許されたように、この祝福された者もまた、この修道院の聖なる創始者たち——[6814]——の時代にペチェルスク修道院で修道生活を送り、その偉大な功績により、神から、地下に住むエチオピア人——すなわち悪魔たち——の顔をはっきりと見抜き、彼らを糾弾し、救いを求める者たちのために彼らの秘められた陰謀を暴くという賜物を授かった。

ある時、至福の長老マタイは教会でいつもの場所に立っていた。視線を上げ、両側の聖歌隊席に立ち歌っている兄弟たちを見渡すと、戦士の姿をした悪魔が兄弟たちの間を回り歩いているのを見た。その悪魔の衣には、粘着性のある花が咲いていた。　悪魔はその花を一輪ずつ摘み取り、歌っている者たちの誰かに投げつけた。花が付着した修道士は、しばらく立ち尽くした後、心の弱さに負けてしまい、何かと理由をつけて教会を出て、自分の部屋へ戻り、眠りに落ちてしまい、もはや礼拝堂に戻って賛美に参加することはなかった。　一方、悪魔が投げた花が修道士の衣服にまとわりつかなかった場合、その修道士は朝課の終わりまで元気よく立ち続け、それからようやく自分の独房へと向かった。長老は兄弟たちにその幻視について語り、それ以来、皆は教会から出ることを警戒するようになった。

その祝福された長老は、早課が終わり、兄弟たちがそれぞれの独房へと散っていく際、いつも最後に教会を出る習慣があった。ある日、そのように教会を出た彼は、自分の独房が教会から遠く離れていたため、少し休もうと教会の鐘楼の下に座った。　すると、修道院の門から大群衆がやってくるのが見えた。目を上げると、豚の上に高慢にまたがっている悪魔がおり、その周りには多くの悪魔たちが付き従っていた。長老は彼らに尋ねた。

「どこへ行くのですか？」

「ミハイル・トボルコヴィッチのところへ」と、豚に乗っていた悪魔が答えた。

十字を切って祈りを捧げた後、長老は自分の独房へと戻った。そして夜が明けると、聖人は先ほどの幻視の意味を理解し、弟子にこう言った。

「行って、ミハイルは独房にいるか尋ねてきてくれ」

弟子が向かうと、ミハイルは今日、早課の後、修道院の塀の外へ出て行ったと告げられた。そこで長老は、その幻視について修道院長と年長の修道士たちに語った。修道院長は兄弟を呼び寄せ、詳しく尋ねた後、戒めをもって彼を諭し、独房へ戻した。

先見の明のあるマタイ神父は、他の兄弟たちにも愛をもって教えを説き、常に神を思い起こし、罪の赦しを祈りながら、各自の独房に留まるよう助言した。

尊者マタイの在世中に、至福のイグメン・テオドシオスが世を去った。その後、イグメンにはステファンが、ステファンの後にはニコンが就任した。　このイグメンの在任中、至福のマタイは次のような幻視を経験した。ある日、早課の礼拝中に、彼はイグメンである至福のニコンを見ようと目を上げたが、イグメンの席にはロバが立っているのが見えた。そこでマタイは、ニコンが早課に来て

[6814] 聖アントニオスと聖テオドシオス

いないことを悟った。　長老はその幻視について語った。すると、修道院長は、この幻視が自分への戒めであることを悟り、深く悔い改めた。それ以来、彼は怠惰を捨てただけでなく、修道院のあらゆる緊急の用事も後回しにし、誰よりも先に教会へ参列することを習慣とするよう努めた。　このようにして、この幻視は彼を至福へとさらに強く駆り立てた。また、この祝福された長老には他にも多くの幻視があり、彼は兄弟たちの益となるようそれらを語っていた。深き老齢に達し、彼は善き信仰のうちに主のもとで安らかに息を引き取った[6815]；その尊い遺骸は、聖なる父たちと共に、[6816] の洞窟に朽ちることなく安置されており、彼自身は　の主の御座の前に立ち、私たちのために祈ってくださっている。そうして、私たちが敵の誹謗から解放され、私たちの主キリスト・イエスにおいて永遠の命を得ることができますように。御父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、御栄えがありますように。 アーメン。

聖殉教者マメルファの記念日

記念日：10月5日

聖殉教者マメルファは、ペルシャの出身で、当初は異教の女神[6817] の巫女であった。ある日、彼女は夢の中で天使を見、その天使からキリストの信仰の神秘を告げられた。恐怖に駆られて目を覚ますと、彼女はキリスト教徒であった姉にその夢の話をした。　姉は彼女を司教のもとへ連れて行った。司教はマメルファの夢の話を聞き、彼女にキリスト教を受け入れるよう説得し、彼女に洗礼を授けた。その際、彼女の姉が聖なる洗礼盤での代母を務めた。　マメルファがキリストの信仰に改宗したことに激怒した異教徒たちは、彼女がまだ洗礼の衣を身にまとっている間に、彼女を石で打ち殺した[6818] 。彼女の遺体は堀に投げ込まれたが、そこから二人のキリスト教徒によって回収され、尊厳をもって埋葬された。　その後、聖マメルファが殉教したその都市の司教は、ペルシャ王に懇願し、異教の女神を祀る神殿を破壊し、その場所に聖マメルファの名を冠した教会を建立する許可を得た[6819] 。この教会に、聖殉教者の遺体が安置された。 聖殉教者マメルファの聖遺骨が移送される際、そこから数多くの奇跡や癒しが起こり、多くの異教徒がキリストに改宗した。

モスクワの聖人ペトロ、アレクシオス、イオネ、フィリッポスの祝日

記念日：10月5日

正教の三つの偉大な柱であるバシレイオス大帝、グリゴリオス神学者、ヨハネス・クラマトルスが、異端者たちによる迫害が襲いかかった際、古代東方教会の基盤を揺るぎないものとして守り抜

[6815] 1088年。

[6816] アントニイの洞窟にて。

[6817] 『プロローグ』の一部の写本によると、マメルファはもともと、特に東方で広く崇拝されていたギリシャの異教の女神アルテミスの巫女であった。

[6818] 古代、キリスト教徒は洗礼を受けた後、8日間は洗礼の際に着ていた白い衣を身にまとい続けた。おそらく、この白い衣が異教徒の目には、マメルファがキリスト教社会に属していることを示す明白な印として映り、マメルファがこれほど早く殉教の死を遂げた原因となったのだろう。　これに関するより詳細な伝承によれば、マメルファが洗礼を受けた直後、異教徒たちは彼女に詰め寄り、アルテミスへの生贄を捧げるよう要求した。しかし彼女はこれを拒否し、勇敢に自らをキリスト教徒であると宣言した。そのため、彼女は多くの拷問にさらされ、その最中に息を引き取った。

[6819] 聖マメルファの殉教の時期は、おそらく5世紀と推定される。ビザンツ帝国のテオドシウス2世（若き）は、422年にペルシアと和平を結び、その和平は502年まで続いた。 このことが、ペルシャ王がキリスト教の司教に前述の異教の神殿を破壊することを許可した理由を説明している。これは明らかに、強大なビザンツ帝国との良好で平和的な関係を維持したいという願いからであった。

いたように、モスクワ教会の三人の偉大な聖人、ペトロス、　アレクシイ、イオナもまた、ロシアの聖なる地において、内部の混乱や数多くの外部の敵による災難という困難な時代にあっても、正教を無傷のまま守り抜いた。　また、カトリック教会は、三人のカトリック聖人それぞれに定められた祝日に加え、三人の聖人全員をまとめて称える特別な祝日を設けた。それは、彼ら全員の信仰が一つであり、その信仰への熱意も一つであり、　隣人への愛も一つであり、その愛ゆえに彼らは等しく隣人のために自らの命を危険にさらした――という事実を確固として心に留めているのと同様に、ルーシにおいても、ツァーリ・フェオドール・イオアンノヴィチと総主教イオヴァの時代（1596年以降）から、10月5日の一つの普遍的な祝典において、モスクワの三人の首席聖職者の聖名を共に祝うようになったのである。

しかし、ロシアの地には、モスクワの初代主教たちに加え、正教の守護者であり、悪習を懲らしめ、信仰と正義のために苦難を耐え抜いたもう一人の守護者がいた。その名は、不明な理由により、長い間10月5日の祝典に組み込まれていなかった。それは聖フィリッポ大主教であった。

この事実に初めて注目したのは、モスクワ大主教インノケンティ大主教殿下であった。1875年、聖シノドは彼の請願に基づき、モスクワ大主教ペトロ、アレクシイ、イオナの　の聖なる記念とともに、10月5日に聖モスクワ大主教フィリッポの追悼を行うことを決定した。 同年、モスクワ大主教イノケンティが作成した、これら4人の聖人をまとめて祝う式次第が、聖シノドによって承認された。この祝典は、現在に至るまでモスクワで行われている。 祝日の前日、すなわち10月4日には、大聖母被昇天大聖堂にて、聖人たちに捧げる荘厳な祈りの歌を伴う小晩課が執り行われる。これは、モスクワのすべての教会や修道院において、教会の祝日に通常行われている慣習である。　その後、所定の時刻になると、首都のすべての教会で、夕刻から赤い鐘の音とともに徹夜祷が行われる。晩課の鐘が鳴る間、チュドフ修道院から聖アレクシイの地元のイコンが十字架行列とともに聖母被昇天大聖堂へ運ばれ、そこでは翌日の晩課まで安置される。

トロパリオ、第4声：

ロシアの第一の座に就く者たちよ、使徒の伝承の守護者たちよ、揺るぎなき柱よ、正教の導き手たちよ、ペトロ、アレクシオ、イオアン、フィリッポよ、万物の主なる神に祈り、全宇宙に平和を授け、我らの魂に大いなる憐れみをお与えください。

コンダク、第3調：

聖人たちは敬虔に生き、人々を神の知恵へと導き、神に深く喜ばれました。それゆえ、神から朽ちることのない栄光と奇跡を授かり、神の恵みの弟子として称えられました。

アレクサンドリアの主教、聖ディオニシオスの生涯

記念日：10月5日

聖ディオニシオスは、アレクサンドリア[6820] の裕福で高貴な両親――異教徒[6821] ――の家に生まれました。若き日、彼は優れた異教の教育を受け、異教に傾倒していました。教育を終えた後、ディオニシオスは当初、修辞家[6822] としての職務に就き、学んだ異教の学問の精神に基づき、若者たちに雄弁術を教えました。 しかし、彼の明晰で聡明な知性は、生まれ育った異教の信仰における粗雑な誤りや迷信、そして彼がその基礎を学んだ異教哲学の欠点を、見過ごしてはいられなかった。 真理を渇望し、切望する彼の探究心は、異教の知識や信仰に満足を見出すことはできなかった。彼の心は異教の虚しさと虚偽を感じ取り、まだ真の神を知らないうちに、すでに神へと向かっていた。 こうしてディオニシウスは、真理を知りたいと願い、様々な人間の教えや信仰に触れ、それらを互いに比較検討した。人間の教えを偏見なく探究するというこの正しい道は、真の信仰を見出そうとする彼の熱烈な願いと相まって、ディオニシウスを唯一の真の神への認識へと導き、キリストの信仰を自覚的に受け入れることへと至らせた。 聖ディオニシオスは後に、自らについて、「人間の教えを偏見なく吟味し、自由な探究の道を通じてキリストへと回心した」と語っている。

当時、異教の学校や学者たちで名高いアレクサンドリアでは、当時の異教世界における学問の多面的な発展と並行して、キリスト教の啓蒙活動も著しい繁栄を遂げていた。 そこで設立されたキリスト教の、いわゆる「（カテキズム）」[6823] 、すなわち「教理教育」を行う学校の著名な指導者たちは、その才能を駆使して、神学的および哲学的な学識を教えに融合させ、異教の学問とその代表者たちについても熟知していた。 これらのキリスト教の教師たちの影響を受けて、異教徒の中でも優れた者たちは、しばしばキリストの真の信仰を悟り、自らの異教的な不敬虔さを捨て去った。 すでに多くのキリスト教の著作に親しんでいたディオニシウスは、アレクサンドリアのキリスト教の教師たちと親密な交流を持つようになった。その筆頭には、イェラクルス[6824] や、とりわけ著名なオリゲネス[6825] がいた。 卓越した学者であるオリゲネスのもとには、哲学や数学を学ぶために多くの異教徒

[6820] アレクサンドリアは、紀元前331年にアレクサンドロス大王によって、地中海沿岸、下エジプト（北部エジプト）のナイル川河口に築かれた有名な都市である。 アレクサンドリアはローマに次いで世界一の都市であり、貿易、産業、とりわけ異教の教養の中心地として機能し、キリスト教の初期の数世紀にはキリスト教教育の温床となった。伝承によれば、キリスト教は福音書記者マルコによって紀元59～60年頃にここに伝えられたとされる。 現在、アレクサンドリア（トルコ語およびアラビア語では「イスカンデリー」）は、地中海沿岸で最も要塞化された港湾都市の一つであり、最も重要な貿易拠点の一つに数えられ、人口は23万余りに達している。

[6821] 聖ディオニシオス・アレクサンドリアスは、195年頃に生まれた。

[6822] すなわち、彼は雄弁術を教えた。当時、雄弁術は最盛期を迎え、異教世界だけでなくキリスト教世界でも高く評価され、宗教的、政治的、教育的に大きな意義を持っていた。

[6823] アレクサンドリアは、 異教の学問の中心地であり、古くから言語学、数学、哲学の著名な博物館が存在していたが、異教に対抗して、使徒の時代からすでに、キリスト教の、いわゆる「求道者養成」あるいは「カテキズム」学校が設立され、そのキリスト教の将来に対する影響は多面的かつ計り知れないものであった。 伝承は、この学校の設立を使徒であり福音書記者であるマルコ自身によるものと、畏敬の念を込めて伝えている。当初、そこでは洗礼を受けようとする者たちへの初歩的な指導のみが行われていた。これは、アレクサンドリアの学校が「カテキズム学校」と名付けられていたことからも明らかであり、同時に、カテキスタ自身もそこで養成されていた。 しかしその後、アレクサンドリアの「カテキズム学校」は、世界的な教養と学問の中心地というその立地条件により、神学・学術的な教育機関としての性格を帯びるようになった。 これに特に貢献したのは、そのカテキスタ（教師）の一人である著名なパンテノス（180–191年）と、彼に劣らず傑出した弟子であり後継者であるアレクサンドリアのクレメンスであり、クレメンスは聴講者たちに、信仰への指針として哲学を推奨していた。 アレクサンドリアのカテキズム学校は、オリゲネスのもとでさらに隆盛を極めた。

[6824] 有名なキリスト教教師であるイェラクレスは、当初、アレクサンドリアのカテキズム学校において、オリゲネスの教育助手を務めていた。231年、イェラクレスはオリゲネスから「カテキズム学校」の運営を引き継ぎ、233年にはアレクサンドリアの司教に任命され、246年に没した。

[6825] オリゲネス――アレクサンドリアのクレメンスの弟子であり、3世紀で最も著名なキリスト教の教師――は、当初、アレクサンドリアのカテキズム学校の傑出した教師の一人であったが、後にアレクサンドリアの司教や他のアレクサンドリア教会の代表者たちから攻撃を受け、 彼が展開したいくつかの異端的な見解や自発的な禁欲主義を理由に告発され、長老の聖職を剥奪され、アレクサンドリアから追放され、教会での教鞭を禁じられた。その後、パレスチナのケサレアに居

も集まってきた。オリゲネスはこの状況を利用し、キリストの名を栄光させるために精力的に活動し、自らの著作や知識を駆使して、これらの聴衆をキリストとの交わりへと導いた。

ディオニシウスはすぐにオリゲネスの熱心な弟子となり、探究心あふれる精神を全開にしてキリスト教の教えの真理を学び始め、その教えが異教の教えよりも優れていることを即座に見抜いた。彼は熱意と愛を込めて使徒書簡、とりわけ聖パウロの書簡を読み、それらは彼に深い感銘を与え、彼のあらゆる信仰や世界観に決定的な転換をもたらした。その結果、彼は完全に自覚的な形でキリスト教へと改宗した。　キリスト教の真理を完全に確信すると、彼は、一部オリゲネスからの影響も受けつつ、遅滞なく聖なる洗礼を受け[6826]、カテキズム学校に入学し、その真の誇りとなった。それ以来、聖ディオニシオスは、キリスト教の教えの深遠な真理をさらに熱心に探究するようになり、そこに紛れ込む異端の偽教師や誤った思想からその純粋さを守り抜いた。　彼は師であるオリゲネスと特に親しく、彼に対して畏敬の念に満ちた感謝と心からの好意を抱いており、オリゲネスが後にアレクサンドリアを去らざるを得なくなった時でさえ、さらには で投獄されていた時でさえ[6827]、彼との絆を絶やすことはなかった。　キリスト教の真理の探求における聖ディオニシオスの目覚ましい成果と、その敬虔な生活は、アレクサンドリア学校の教師イェラクラスの注目を集めた。ほどなくして、聖ディオニシオスは長老の位に叙任された。　オリゲネスがアレクサンドリアから追放されると、イェラクルスはアレクサンドリアの教理学校で彼の後任として校長に就任した。その後、イェラクルスがアレクサンドリアの司教に叙任されると、ディオニシウスは教理学校の校長となり、イェラクルスの死後は、アレクサンドリアの主教座の後継者となった[6828]。

ディオニシオスがアレクサンドリアの主教座に就いて以来、彼の生涯は、教会の内外、とりわけ内部の様々な敵に対する、献身的な奮闘の連続となった。　当時、キリストの教会は異教の権力による外部からの迫害に多大な苦難を強いられていただけでなく、教会の統一と内部の平和を脅かす様々な不和、異端の偽りの教え、分裂によって、さらに激しく引き裂かれていた。　そのような困難な時代において、聖ディオニシオスは神ご自身によって、信者たちにとって揺るぎない支えとなるよう定められていた。彼のおかげで、あらゆる危険や混乱の中でも、教会の平和は確かに揺るぎないものとして保たれた。　また、この大牧者の厳格で敬虔な生活、羊たちへの献身的な愛、柔和さ、誠実さ、そして謙遜さは、敵や異端者たちの間ですら、彼に対する万人の尊敬を呼び起こした。　彼の生涯はすべて、神の教会への熱心かつたゆまぬ奉仕に捧げられた。彼は特に熱烈な情熱をもって非信者の回心を気遣い、迷える者たちには心温かく父のような柔和さをもって接し、分裂した者たちの和解に

を定め、そこで新しい学校を設立した。そこには、著名な教師の講義を聞くために四方八方から人々が集まった。　その後、しばらくの間は牢獄に幽閉されたが、やがて当時の異端者たちに対して熱心に、かつ成功裏に戦った。その後、マクシミアヌスの迫害の際には迫害者たちから身を隠し、デキウスの迫害の際にはキリストの勇敢な殉教者としての栄誉を授かり、254年にティルスで70歳の生涯を閉じた。 数多くの著作において、オリゲネスは正統的ではない異端的な見解をいくつか展開していたが、それゆえにそれらの著作は異端として非難された。とはいえ、オリゲネスは自らの正統的でない見解を不変の真理として主張したわけではなく、本来の意味での異端者でもなかった。　最も傑出した教父たちでさえ、オリゲネスの神学上の著作と功績に対して深い敬意を払っていた。彼は自身の学校で多くの傑出した教父や教会の教師を育て上げ、その中には、異教からキリスト教への改宗を彼に負っている者もいた。オリゲネスは、知識と哲学をキリスト教の信仰と調和させようとしていたのである。　また、聖書の研究、その解釈、とりわけその真の本文の復元と浄化に関する彼の著作、ならびに異端者やキリスト教の敵に対するキリスト教の擁護を目的とした著作も、特に傑出している。総じて、彼は自身の時代だけでなく、後世のためにも多大な貢献を果たし、4世紀の教会の偉大な教師たちは皆、オリゲネスの著作を大いに活用した。

[6826] 聖ディオニシウスは、比較的成熟した年齢になってからキリスト教に改宗した。彼はアレクサンドリアのディミトリオス司教（189–231年）自身によって洗礼を受けた。

[6827] こうしてディオニシウスは、オリゲネスがデキウス帝の治世下で投獄されていた際に、彼に手紙を送った。オリゲネスの死後、ディオニシウスがケサリアの司教テオテクヌスに、オリゲネスを称賛する手紙を書いたという記録が残っている。

[6828] 聖ディオニシオスは233年に名高いアレクサンドリア学派の学長となり、14年間にわたりその地位に就いた。

尽力した。　苦難の中では崇高な勇気を、信仰においては揺るぎない不変性を、そして生涯を通じて驚くべき深い謙遜さを示した――その一方で、キリスト教世界全体が彼の学識と美徳に驚嘆していた。

オリゲネスからあらゆる種類の知識への愛を受け継いだ聖ディオニシウスは、それをキリスト教の教義と調和させることが可能であると見なし、当時、その誤った教えによって神の教会を揺るがしていた優れた異教徒や様々な異端者たちの著作を、相変わらず注意深く読み、研究し続けた。　異端の偽りの教えや異論からキリスト教の教会教義の純潔を守りつつ、聖ディオニシオスはそれらを退けたが、それはまず自らの確信をもってその不備を確かめた上でであり、その後に初めて、不敬虔な異端者たちに対して力と勇気を以て立ち向かったのである。

その卓越した知性と学識を持ちながらも、柔和で謙虚であった聖ディオニシウスは、牧会の座においても、柔和さと節度という精神を際立たせていた。　キリスト教徒にとって困難な時代、不敬虔なローマ皇帝デキウスによる残酷な迫害[6829] のさなか、一部の司教たちは――迫害や拷問への恐れからではなく、彼らの世話に委ねられたキリストの羊の群れを、指導や教化、慰めのないままに放置しないために――
――自らの都市を離れ、より安全な場所へと移り、そこから羊の群れを統率した[6830] 。このように、この困難な時期に、神の導きに従って聖ディオニシオスもまた、キリストの名のために死を恐れたからではなく、必要に迫られ、またアレクサンドリアの教会の益のために、羊の群れを牧者なしに放置しないよう行動した。　プレフェクトのサビンは、聖ディオニシオスを探し出すためにスパイを送り込んだ。聖人は四日間自宅にとどまっていたが、スパイは彼が逃亡したと確信し、野原や道、川で彼を探し回り、 大司教の家に入るなどとは思いもよらなかった。 その後、内なる導きに従い、聖ディオニシオスは数人の信徒たちと共に逃亡したが、捕らえられ、拷問を受けるためにタポシリスへ送られた。しかし、神は御自身の忠実な僕を守られた。まったく予期せぬことに、彼はキリスト教徒の村人たちの一団によって、兵士たちの手から奇跡的に救い出された。その経緯は次の通りである。

ティモフェイという名のキリスト教徒一人が、聖ディオニシオスや他の信者たちと共に捕らえられてはいなかった。警備の行き届いた家を見つけた彼は、極度の動揺の中で逃げ出し、祝祭の宴に向かっていたある村人に、大司教が拘束されたことを伝えた。　この知らせは祝宴の雰囲気を一変させ、賓客たちは皆、聖人が捕らえられた場所へと猛烈な勢いで駆けつけたため、警備兵たちは逃げ去ってしまった。ディオニシウスとその仲間たちは半裸の状態でむき出しのベッドに横たえられており、村人たちを強盗だと勘違いして、自分たちを死に追いやらないよう懇願した。　しかし、聖人は身元不明の友人たちによって手足を掴まれ、抵抗したにもかかわらず、そこから連れ去られ、鞍のないロバに乗せられた。その後、本人の意思に反して、ある安全な場所へと連れ去られた。　聖人を救ったこれらの友人たちが誰であったかは、結局全く不明のままであった。明らかに、主は、当時迫害さ

[6829] ローマ皇帝デキウスは249年から251年まで在位した。彼はキリスト教徒に対する残酷な迫害者であり、その治世下で初めてキリスト教徒に対する大規模な迫害が行われた。

[6830] とりわけ、カルタゴの聖キプリアヌスも同様の道を歩み、キリストのために勇敢に殉教の死を迎えた（†268年）。 同様に、ディオニシウスやキプリアヌスに先立ち、一時期には聖ポリカルプ・スミルナ（167年に殉教）が、また彼らの後には聖アタナシウス・アレクサンドリア（†373年）が同様の行動をとった。 ドミティウスとディディムス（251年）への手紙、およびアンティオキアの司教ファビウスへの手紙の中で、聖ディオニシウスは、デキウスによる最初の迫害の際に、殴打、火、あるいは剣によって命を落としたアレクサンドリアの殉教者たちについて、非常に感動的な物語を伝えている。　さらに、彼自身も、非常に長い生涯を送ったにもかかわらず、主の御心に適うための十分な保証とはならなかった者たちの数に自らを数えている。とはいえ、彼はキリストが自分を別の適切な時のために守ってくださったと信じていた。　ヘルマンという名の司教が、どうやら彼を非難したようである。それは、カルタゴの聖キプリアヌスが臆病さと信徒を見捨てたことについて非難されたのと同様であった。　これに対し（258～259年）、ディオニシウスは、自らの意思で逃亡したのではないことを神を証人として挙げ、（キプリアヌスと同様に）その正当化として神の啓示に言及した。

れ、屈辱を受け、内部の動乱や混乱に翻弄されていた教会の益のために、奇跡的な方法で聖ディオニシオスを守っておられたのである。

隠れ家に身を寄せながら、聖ディオニシオスは信頼できる長老たちを通じて手紙を送り、アレクサンドリアの信徒たちを導き続けた。 その苦難の時代、教会は凶暴な異教徒たちから恐ろしい苦しみと悲しみを強いられていた。拷問や苦痛に耐えきれず、多くの信徒がキリストを否認した。その後、彼らは深い悔い改めと心からの悲しみをもって再び司教のもとへ戻り、謙虚にキリストの教会の懐に再び受け入れてくれるよう懇願した。 柔和で謙虚なディオニシウスは、彼らをキリスト教会の子らとして寛大に受け入れ、彼らに様々な禁制や悔悛の行いを課すことで、完全な絶望から救った[6831]。

キリストの教会を脅かす災いの上に、この困難な時期にノヴァティアヌス派の分裂が現れ、内部の混乱によって教会をさらに引き裂いた。ノヴァティアヌスとその追随者たちは、離反した者たちを教会の懐に受け入れることに公然と断固として反対し、それによって教会の苦難をさらに深刻化させ、多くの人々を絶望へと追い込んだ[6832]。 そこで、特にキリストの殉教者たちの嘆願に応じて、堕落した者たちを愛をもって受け入れていた聖ディオニシウスは、ノバティアヌス派に立ち向かい、ノバティアヌスに対し、神の教会にとって有害なこの分裂を止めるよう説得した。

「あなたはありとあらゆる苦難に耐えるべきであったが、ただ一つ、神の教会を分裂させることだけは避けるべきだった」と、この熱心な大牧者は、その偽教師に書き送った。「教会を引き裂かないために死ぬことは、偶像に犠牲を捧げないために死ぬことと同様に、栄光あることである。」私の見解では、前者のほうがさらに尊い。なぜなら、後者の場合、人々は自らの魂の救いのために死ぬのに対し、前者は教会全体の益のために死ぬからである。

そして、寛容な牧者は、後に公会議において、この破滅的な分裂によって損なわれた教会内の切望されていた平和を回復するために全力を尽くし、キリスト教の柔和さと節度という精神のもとでの献身的な努力によって、その目的を達成した[6833]。

6831 このような堕落した者たちに対して、聖ディオニシウスと全く同じ立場をとり、彼と完全に一致して行動したのが、彼の著名な同時代人であるカルタゴの司教、聖キプリアンであった。 彼らは、堕落した者たちを交わりに受け入れる前に、彼らに悔い改めの証拠を求め、また、堕落した者たちを死罪を犯した者として過度に激しく非難した多くの同時代人の極端な意見に反して、躊躇なく彼らを赦した。当時の教会の実践において、キリストの殉教者や告白者たちによる堕落した者たちへの執り成しも、また大きな意義を持っていた。

6832 ノヴァティアヌスは、デキウス帝の迫害の時代、傑出した雄弁家であるローマの司祭であったが、公会議の規則によれば、彼は聖油の塗油を伴わない臨終の洗礼（すなわち、死の床での洗礼）のみを受けていたため、叙階を受けることはできなかった。 その後、ローマの司教座を強く求めたが、計算が外れたため教会から分離し、ノヴァティアヌス派の司教となった。こうして彼は、その名を冠し、教会に大きな混乱と災難をもたらした破滅的な分裂の端緒を開いたのである。 ノヴァティアヌスは、特に教会から離反した者たちを再び温かく受け入れることに強く反対した。ノヴァティアヌス派の考えによれば、教会は聖徒の共同体である。したがって、洗礼後に堕落し、死に至る罪を犯した者はすべて教会から追放されなければならず、いかなる場合でも再び受け入れられることはできない。 教会には、重罪人を赦す権利などないというのである。もし教会が彼らを赦すならば、教会自体が不浄となり、聖なるものではなくなってしまう。 重罪人を受け入れず、正教会からの離脱者は再洗礼を経なければ受け入れないという自らの共同体を、ノヴァティアヌス派は「カファラ」、すなわち「清き者たちの共同体」と呼んだ。 ノヴァティアヌスの共同体は、カルタゴ、アレクサンドリア、シリア、小アジア、ガリア、そしてスペインに広く広がった。

6833 そこでディオニシウスはノヴァティアヌスに、穏やかで平和的な書簡を送った。そこから引用されたのが、前述のアレクサンドリアの聖人の言葉であり、分裂を防ぐために耐えた殉教は、偶像への礼拝を拒んだための殉教と同様に栄光に満ちたものである、というものである。 同時に、彼は父のようにノヴァティアヌスを諭し、もし彼が信徒たちを説得して、彼らが踏み出した誤った一歩を撤回させることができないのであれば、少なくとも自身の魂を救うことはできるはずだと述べた。 もし、ノヴァティアヌスが自身の弁明で述べているように、本意に反して司教に叙任されたのであれば、「神の教会が分裂することを避けるため」に、自発的に聖職を辞退することで、その主張の誠実さを証明すべきであると。この平和的な書簡にもかかわらず、 ディオニシウスは、彼自身の言葉によれば、「ノヴァティアヌスが教会を粉々に切り裂き、兄弟たちの一部を不敬と神への冒涜へと誘い込み、神に関する最も望ましくない教義を持ち込み、慈悲深い主

不敬虔なデキウスの死後、皇帝ガッルの短期間の治世[6834] において、キリスト教徒への迫害は止み、キリストの教会には平和がもたらされた。　この教会の平穏は、聖ディオニシオスが、アルシナの司教ネポトゥスによって引き起こされた動揺を、牧者としての配慮をもって鎮めることを可能にしたという点で、なおさら切望されていたものであった。ネポトゥスは、ヒリアズムと呼ばれる異端を説いていたのである[6835] 。　聖なる父は、ネポトに対する愛に満ちた論考を執筆しただけでなく[6836] 、同じ精神をもってこの異端の擁護者たちとの公会議での協議を行い、彼ら全員が教会の統一へと立ち返るという成果を収めた[6837] 。聖ディオニシオスは、当時教会内で巻き起こった異端者の洗礼をめぐる論争[6838] にも積極的に関与し、何よりもこの論争によって教会内に生じた動揺を鎮めることに心を配り、その論しによって見事にそれを成し遂げた。　同時に、彼はアレクサンドリア教会で発生した、邪悪かつ危険なサヴェリウスの異端と熱心に戦った。キリストの教会に少なからぬ惑わしをもたらし、その　の罠に一部の司教さえも引きずり込んだ、この有害な異端の偽りの教えに対抗しようと

を無慈悲な存在として誤って描いた」などの理由から、ノヴァティアヌスに対して敵対的な態度をとっていた。　聖人はノバティアヌス派に対していくつかの書簡を書き、彼らに対して精力的に戦った。しかし、彼や他の教会の指導者たちの尽力によって教会内の平和は回復されたものの、ノバティアヌス派には多くの信奉者がおり、その共同体は7世紀まで存続していた。

[6834] ガッルスは251年から253年まで在位し、平和を愛する性格とキリスト教徒に対する寛容さで知られていた。

[6835] ネポトは、中エジプトのアルシノエ（あるいはアルシノイ）の司教であった。――ヒリアズムは極めて早い時期に現れ、2世紀末にはすでに多くの信奉者を擁していた。　3世紀半ばには、ネポトゥスがその精力的な代表者となり、多くの支持者を集めた。とりわけ、彼の教えは、迫害や拷問にさらされるキリスト教徒にとって、いわば最も身近な慰めとなっていたからである。ネポトは、『黙示録』（黙示録20:2–6）の言葉によれば、まもなくイエス・キリストによる千年の地上統治が到来し、そこでは信者や敬虔な者たちが暮らすことになる、と説いた。ヒリアストたちは、この統治を、地上の快楽を伴う、感覚的かつ物質的な意味での地上の王国として捉えていた。　ネポタの異端的な教義は、彼の死後に知られるようになった。

[6836] 『約束について』という膨大な著作のうち、全体として現存しているのは第2部のみであり、第1部からはわずかな断片しか残っていない。　聖ディオニシウスはその著作の中で、キリストの王国に関する約束は感覚的な形ではなく、霊的な形で理解されるべきであると説明し、これを『ヨハネの黙示録』からの引用と人間の本性の考察の両方を通じて見事に立証した。また同書において、彼は黙示録全般についても論じている。

[6837] このため、ディオニシオスは急いでアルシノエへと向かい、そこでネポタの信奉者たちとの協議を求め、3日間をかけてその著書を精査した。その際、彼はネポタについて愛と敬意を込めて語り、彼を「父」であり「兄弟」と呼び、その信仰、勤勉さ、　聖書の熱心な研究、そして多くの兄弟たちがその歌声に心を癒やされた詩篇詠唱における彼の偉大な功績を称えた。「私はこの人を深く愛している」と聖ディオニシオスは語る。「彼が私たちより先に安息の地へと旅立ったという理由からも。とはいえ、真理はあらゆるものよりも高く評価され、尊ばれなければならない」。　この協議の結果、聖人はヒリアスト派を説得することに成功し、彼らの指導者であるコラキオン長老から、その論しに対して心からの感謝を受けた。コラキオン長老は深く納得し、自らの見解を撤回するとともに、今後それについて注意を払わず、議論せず、言及せず、またそれについて教えないよう求めた。　出席していた他の兄弟たちも、この対話に大いに満足したほか、全員に見られた和解の精神と共通の合意にも満足していた。この時から、ヒリアズムは東方教会においてほぼ完全に沈静化した。

[6838] クレメント、テルトゥリアヌス、聖キプリアヌス・カルタゴス、およびその他の教会の教師たち、ならびにいくつかの地方公会議は、異端者たちが改宗する際、再洗礼を要求した。ローマのみが、一度の悔い改めだけで彼らを受け入れた。　ディオニシウスはその見解において後者の意見に賛同し、現存するいくつかの書簡の断片において、聖三位一体の名によって洗礼を受けた異端者たちの再洗礼を断固として否定しており、この見解は後に第1回全地公会議（325年）で採択された。　しかし何よりも、この激しく議論された問題において、彼は再び見事な調停者の役割を果たした。彼はこの件に関して、ローマ教皇ステファノに数通の手紙を書いている。　現存する書簡の一つで、彼は教会の普遍的な平和について言及していた。しかし、ステファノが反対の見解を擁護していたカッパドキアの司教フィルミリアヌスとの交わりを拒んだ際、ディオニシウスは、その行動が招く深刻な結果を考慮するよう彼に諭した。　ステファノの死後、ディオニシオスは後継者であるシクストゥス2世とローマのディオニシオスにも同じ主題について書簡を送り、著書『悔い改めについて』においてこの問題をより詳細に論じた。

努め、聖ディオニシオスは公会議を招集し、　サヴェリウスに対する回勅を執筆し、神において「父なる神、御子、聖霊」という三位一体を認めなかった高慢な精神の独断を払拭しようと努めた[6839]。

しかし、聖ディオニシオスが教会内の平和と繁栄のために注いでいた尽力は、新たなローマ皇帝ヴァレリアヌスによる迫害によって突然断ち切られてしまった[6840]。この苛烈な迫害のまさに始まりに、アレクサンドリアの偉大な牧者は、重病にもかかわらず捕らえられ、長老マクシムス[6841]および助祭ファウスト、エウセビオス、ケリモンと共に、エミリアヌス総督[6842]の前に引き出された。当時の迫害は、教会の代表者である司教や長老たちに特にその全容を襲いかけた。　そのため、迫害者たちは、ディオニシオスにキリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるようあらゆる手段で迫った。なぜなら、彼に従えば他の人々も後に続くだろうからである。しかし、ディオニシオスは恐れを知らずにこう答えた。

「私たちは、人よりも神に従わなければならない。」

そこでエミリアヌスは、聖人にキリスト教徒とのあらゆる交わりを禁じ、ましてや彼らに対して教訓を説き、福音の教えを宣教することを一切禁じた上で、リヴィアの荒涼とした砂漠の真ん中に位置する辺鄙な村ツェフロへ彼を追放した[6843]。しかし、そこでも聖人は禁止令に反して神の言葉を教え続け、キリストの勇敢な殉教者として、迫害者たちの命令に従うことを拒んだ。異教徒たちはこのため、何度も石で彼を打ちつけた。これらすべてにもかかわらず、ディオニシウスは荒野においても、多くの異教徒をキリストの聖なる信仰へと導くことに慰めを見出した。　ディオニシウスの説教の成功はエミリアヌスをさらに激怒させ、彼は聖なる司教を、リヴィア砂漠のさらに遠く離れた荒涼とした地域にあるコルルフォという小さな町へ追放した[6844]。しかし、ここからも彼は、キリストの友や自分の信徒たち、さらには自分の教会だけでなく他の教会とも交流を持つことで慰めを得ていた。　聖ディオニシオスは以前から常にそうしていた。彼は、主要な教会のひとつを率いる者として、その声が他の教会やキリスト教共同体にも影響を及ぼすことを明確に自覚しており、自らの信徒だけでなく、キリストの教会全体にも配慮しなければならないと考えていた。とりわけ、教会内の普遍的な平和を乱そうとするあらゆる試みに立ち向かうためであった。

[6839] サヴェリウスは、神の唯一性に関するキリスト教の概念から逸脱し、極端な立場に陥った。それが彼を、キリスト教の信仰の最も重要な基礎や教義に反する異端の教えへと導いたのである。　彼は、もし神が本質において唯一であるならば、神の本質における三位一体はあり得ず、三位一体とは、世界や人間に対する関係において、同一の御方が段階的に啓示されるという意味でのみ理解されるべきであると教えた。サヴェリウスの教えによれば、神性の三つの位格は存在しない。　父、子、聖霊とは、神が人々に現れる際の既知の形態に過ぎない。旧約聖書においては、人々に律法を与える者として父として現れ、新約聖書においては、人々を救う者として子として現れ、そして今もなお、人々を聖別する霊として現れ続けているのである。– サヴェリウス主義は3世紀半ばに発生したが、同世紀の終わりにはすでに勢力を失っていた。とはいえ、4世紀になってもなお信奉者が残っていた。

[6840] ローマ皇帝ヴァレリアヌスは253年から259年まで在位した。彼が仕掛けたキリスト教徒への迫害は、とりわけ過酷な残虐性を特徴としていた。

[6841] マクシムスは、迫害を受けるキリスト教徒を慰めるために、密かにアレクサンドリアへ派遣された。その後、彼はディオニシウスの後任として主教の座に就いた（†282年）。

[6842] エミリアヌスはアレクサンドリアのプレフェクト、すなわちその統治者であり、ローマ皇帝の代表兼代理であった。しかし実際には、彼は独立して統治を行っており、当時エジプトで皇帝の権力を掌握していた、いわゆる「三十人の暴君」の一人であった。

[6843] リヴィア砂漠――広大なアフリカのサハラ砂漠の東部――は、比較的低地であり、都市や集落のあるオアシスが点在している。聖ディオニシウスが流刑に処された地域は、厳密な意味での「砂漠」とは見なせず、あくまでその場所の荒涼さ、僻地性、そして未開性を指すものとして理解すべきである。

[6844] しかし、その場所は道路のすぐそばにあったため、聖ディオニシウスや彼と共に追放された兄弟たちは、いつでも容易に捕らえられる状況にあった。

聖ディオニシオスは、この過酷で苛烈な流刑の地で三年間を過ごしたが、そこで彼がどのような苦難と悲惨な苦しみを受けたかは、神のみがご存知である。ガリアヌスの即位後（[6845] ）、彼は流刑地から解放され、その信徒たちおよびキリストの教会全体にとって大きな慰めとなった。

しかし、アレクサンドリアにおいても、この勇敢なキリストの殉教者を待っていたのは、安らぎや幸福ではなく、血なまぐさい混乱と苦難であった。内戦の悲劇の後には激しい飢饉が続き、飢饉の後には、恐ろしい残虐さで猛威を振るったペストが襲った。　ディオニシオスは、異教徒であれ信者であれ、誰であろうと、不幸な人々を真の父のような愛をもって世話をした。この壊滅的な疫病の期間にアレクサンドリア地方の住民が被った災難について　で記述する際、聖人はとりわけ次のように記している。　「私たちの兄弟たちの多くは、強い愛ゆえに、自らの命の安否を顧みず、互いを思いやり、勇敢に病人の元を訪れ、絶えず彼らに仕え、キリストの名において治療を行った。彼らは自発的に彼らと共に死に、彼らの苦しみを自ら引き受け、あたかも病気を自分に引き寄せ、喜んで彼らの腫れ物を拭い去ったかのようであった。　このように病人の世話をし、彼らに健康を取り戻させた者たちの多くは、自らも死んでしまった……　そして、この種の死は、その敬虔さと信仰の堅固さにおいて、殉教に決して劣るものではない。彼らは自らの手で聖徒たちの遺体を抱き上げ、膝の上に載せ、その目と口を閉じ、肩に担いで世話をし、彼らと寄り添うように横たえ、体を洗い、衣を着せたのである」[6846] 。

聖ディオニシオスは、アレクサンドリアにとってこの困難な時代における、とりわけ教会聖職者たちによるキリスト教の愛の偉業を、このように感動的に描いている。しかし、彼自身こそが、殉教の偉業をも凌ぐようなこの自己犠牲の、信者たちにとっての最良の模範であった。なぜなら、*「友のために自分の命を捨てるほど、これ以上の愛はない」*（ヨハネ15:13）。そして聖ディオニシオスは、病める者たちを慰め、助けることに全力を注ぎ、救い主の*「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、すなわち最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしたのである」*（マタイ25:40）という言葉を心に留め、彼らのために自らの命さえも惜しまなかった。

こうした苦難と、彼自身の重い肉体の病に加え、聖ディオニシウスには新たな苦難が加わった。　この揺るぎない正教の柱であり、不信仰や異端に対する闘士である彼が、正統から外れた思想を持っていると疑われたため、彼は、自らの弁護というよりはむしろ教会の和解を図るために、聖三位一体の三つの位格に関する自身の正統的な教義を述べた書簡を執筆せざるを得なかった[6847] 。 真理は勝利を収め、教会全体が彼、そして教会にとって混乱の時代であったこの時期に信仰の純潔を守り抜いた彼の厳格な正教的見解に対して抱く高い敬意は、揺るぎないものとして残った。

やがて、キリストの殉教者の肉体の力は、高齢、悲しみ、そして過度の労苦によりすっかり衰えてしまったが、その精神は依然として強かった。 パウロス・サモサタスによる異端の教え[6848] が教

[6845] ガリアヌスは、260年から268年までローマ皇帝を務めた。彼はヴァレリアヌスが始めたキリスト教徒への迫害を止め、追放された者たちを帰還させ、信仰の自由を宣言する勅令を発布した。

[6846] 飢饉の苦難における慰めを込めた聖ディオニシオスからアレクサンドリア教会への手紙。これはエウセビオスの教会史に引用されている。

[6847] 聖ディオニシウスの正統性は、サヴェリウスに対して正統な教義を擁護するために彼が様々な人物に宛てて書いた、まさにそれらの書簡によって疑われるようになった。　この聖なる父は、神の御子について誤った教えを説いているかのように、異端の疑いをかけられるようになった。というのも、ディオニシウスは書簡の中で聖三位一体について不注意な表現を用いたためであり、この件について、同時代の同名のローマ教皇が彼を非難したのである。　そこで、アレクサンドリアのディオニシオスは、自らの弁明として急いでローマのディオニシオスに書簡を送り、自身の言葉の解釈が誤っていることを指摘し、一部については誤りであり軽率な表現であったと認めた上で、神の子に関する厳格な正統教義を説いた。　この後、聖ディオニシオスの正統性に対するあらゆる疑念は消え去り、むしろ彼は以前以上に正統信仰の柱であり支えであると見なされるようになった。

[6848] パヴェル・サモサタス（出生地名）は、アンティオキアの司教であり、聖三位一体、とりわけ神の子に関する邪悪な異端を説いた。彼の教えによれば、神性においては位格の区別はない。　神――御言葉と聖霊は、人間の理性と霊が人間

会を揺るがし始めた際、アンティオキアで教会の聖なる父たちおよび教師たちによる公会議[6849] が招集され、聖ディオニシオスもその最初の招待者の一人として招かれた。なぜなら、誰もが彼から断固たる発言と教会の和解を期待していたからである。　しかし、アレクサンドリア教会の偉大な牧者は、老齢に苛まれ、それほど遠い道のりの重荷に耐えることが全くできないと感じ、招待を断らざるを得なかった。とはいえ、自ら直接口頭で語る代わりに、彼は公会議の教父たちに長文の手紙を送り、その中でパウロス・サモサテスの教義に対する自身の正統的な見解を述べた[6850]。その数日後、彼は安らかに神のもとへ息を引き取った（265年）。ちょうどその頃、キリスト教諸教会の指導者たちは、パウロス・サモサタスを糾弾するためにアンティオキアに集まっていた。　教会はこの痛ましい喪失を深く嘆いた。なぜなら、聖ディオニシオスという偉大な教師であり、教会の父であり、正教の揺るぎない支柱を失ったからである[6851]。

聖人の祈りによって、主なる神が御自身の教会をあらゆる偽りの知識と分裂から救い、キリスト教の柔和と愛の精神の中で、教会の団結と平和を守ってくださいますように。

10月19日

10月6日（旧暦）

の中に存在するのと同じように、父の中に存在する。彼は天から降臨した神の御子を認めず、イエスを単なる人間であると見なし、預言者たちと同様に、ただより大きな程度で神性が宿っていたに過ぎず、それゆえにのみ「神の御子」と呼ばれるのだと考えた。　その異端的な見解に加え、パウロは、堕落した性向を持ち、贅沢な生活を送り、自身の教区で古来の教会聖歌を廃止し、　救い主を称える聖歌を、自らを称える賛美歌に置き換え、教会の説教壇にふさわしくない身振りをし、拍手を要求するなどした。

[6849] パウロス・サモサタスに対するアンティオキア公会議は264年に、シリア、アジア、アラビアの司教たちによって召集された。　しかし、この公会議において、パウロはなんとか自身の異端的な誤りを曖昧に覆い隠し、和解的な態度を示してあらゆる誘惑を控えることを約束することで、公会議の参加者たちをなだめることに成功したが、この約束は果たされなかった。 そのため、その後アンティオキアでさらに2つの公会議（267年と269年）が開かれ、最後の公会議において彼は司教職を剥奪された。彼の教義は異端と認定され、彼が執り行った洗礼は無効とされた。というのも、彼は聖三位一体の御名の呼称を正統的な意味では用いていなかったからである。

[6850] 現存していないその書簡の中で、聖ディオニシオスは、4世紀の教会史家エウセビオス・パンフィルスの証言によれば、パウロス・サモサテスの異端的な見解に対して厳しい裁きを下し、その誤りを断固として明確に非難した。

[6851] 古代の教会は満場一致で聖ディオニシオスに「大」の称号を授けた。 同時代の聖アタナシオス・アレクサンドリアスは彼を「全地教会の師」と呼び、教会は彼に「聖殉教者」の称号を与えた。というのも、彼はキリストのために殉教の死を遂げることはなかったものの、生涯を通じてキリストとその聖なる教会のために勇敢かつ気高く戦い、尽力し、非難、非難、危険、迫害、放浪、困難、そしてあらゆる種類の災難や不幸に、聖なる殉教者たちに劣らず耐え抜いたからである。 – 聖ディオニシオスの著作は、4世紀の神学者たちへの影響という点において、キリスト教思想の発展史において極めて重要な意義を持っていた。ディオニシオスは高い教養を備えており、信仰に関する事柄だけでなく、一般的な学問の分野にも精通していた。　断片的にしか現存せず、しかもそのすべてが保存されているわけではない彼の著作の主題は、主に教義、聖書の解説、そして教会規律であり、彼はこれらをエジプトの教会だけでなく、ローマ、アルメニア、その他の地域においても確立しようと努めた。　前述した、当時の異端の教えに対して正教を擁護した書簡に加え、特に注目に値するのは、彼の深遠な教義論的著作『自然について』　、およびいわゆる「*復活祭の*書簡」である。これらは、天文学や数学が盛んだったアレクサンドリアの司教が、毎年、全教会における復活祭の祝賀時期を決定する義務を負っていたという古来の慣習に基づき書かれたものであり、　ディオニシウスは、この日に関する知らせに、常に復活された救い主についての教義的かつ道徳的な考察を添えていた。これらの書簡は、教会で信徒たちの集まりの前で必ず朗読された。

聖使徒トマスの生涯と殉教

記念日 10月6日

聖使徒トマス（双子のトマスとも呼ばれる）[6852] は、ガリラヤの町パネアデ[6853] で生まれた。私たちの主イエス・キリストが、地上に人々と共に滞在されていた頃、町や村々を巡り、民を教え、あらゆる病を癒やしておられたとき、トマスはその説教を聞き、その奇跡を目撃して、全身全霊で主に従うようになった。　イエス・キリストの甘美な御言葉と、その至聖なる御顔を見つめることに満たされながら、トマスは主に従い、主から十二使徒の一員に数えられる栄誉を授かり、彼らと共に、キリストの救いのための受難に至るまで従いました。　主の復活後、聖トマスは、他の使徒たちの言葉に対する自身の疑いによって、キリストの教会の信仰をさらに強固なものとした。というのも、他のキリストの弟子たちが「*私たちは主を見た*」と語っていたにもかかわらず、彼は、自らキリストを目撃し、その傷跡に触れるまでは、彼らを信じようとしなかったからである。　復活から八日後、すべての弟子が集まり、トマスも彼らと共にいたとき、主は彼らに現れ、トマスにこう言われた。「*指をここに差し出して、わたしの手を触ってみなさい。また、手を差し出して、わたしの脇腹に触れてみなさい。そして、不信仰な者ではなく、信じる者になりなさい。*」

キリストを目の当たりにし、命に満ちたその脇腹に触れたトマスは、「*わが主、わが神*」と叫びました（ヨハネ20:24–29）。

トマスに起こったこの出来事は、主の復活の真実性を誰の目にも明らかである。なぜなら、キリストは弟子たちの前に、幽霊としてでも、あるいは別の肉体をもってでもなく、私たちの救いのために苦難を耐え抜いたまさにその同じ肉体をもって現れたからである。

イエス・キリストが天に昇られ、聖霊が降臨された後、使徒たちは、神の御言葉を宣べ伝えるために各自がどこへ行くべきかを、くじ引きで決めた。　トマスには、異教によって暗闇に包まれた国々を啓蒙し、そこに住む様々な民族――パルティア人やメディア人、ペルシア人やヒルカニア人、バクトリア人やバラモン、そしてインドの最も辺境に住む人々――に真の信仰を教えるために、インドへ行くくじが当たった[6854]。

トマスは、そのような未開の民のもとへ遣わされることを深く嘆いた。しかし、主が幻の中で彼に現れ、彼を励まし、勇敢であり、恐れてはならないと命じ、ご自身が彼と共にいることを約束された。そして主はすぐに、これらの国々へ入り込む方法も彼に示された。

インドの王グンダフォールは、自分用の宮殿を可能な限り精巧に建てたいと考え、商人のアヴァンをパレスチナへ派遣し、建築に熟練し、ローマ皇帝の宮殿と同じような宮殿を建てられるような

[6852] トマス――ヘブライ語から訳すと「双子」を意味する。また、ディディムとも呼ばれていたが、これは同じ意味を表すギリシャ語である。

[6853] ガリラヤ――パレスチナの北部。パネアダ――パレスチナ北部の都市で、ヘルモン山の麓、ヨルダン川の東源流に位置し、ネフタリ族の北の境界にある。その名は、レバノン山南斜面の麓にあるパニオンという集落と洞窟に由来する。ユダヤの王ヘロデの息子フィリッポスによって、この都市は、カエサル（ローマ皇帝）ティベリウスの名誉を称えて、ケサレア（ケサレア・フィリッポス）と改名された。かつて繁栄を極めたこの都市は、今や廃墟と化し、その跡地には小さな村が一つあるのみである。

[6854] 現代の地理学的意味における「インド」とは、アジア大陸の南部を指し、大陸の3つの南部半島のうち中央に位置する半島と、中央アジアからそれを隔てる巨大な山脈に至るまでの隣接する大陸部分を包含する。しかし、古代の著述家たちは、曖昧な認識しか持っていなかったアジアの南部の豊かな国々すべてを、総称として「インド」と呼ぶことが珍しくなかった。　メディア人は、ペルシアと隣接するイラン西部、カスピ海南部に居住しており、後にペルシア人に征服された。パルティア人もまたペルシア人と隣接し、ユーフラテス川からオクサ川まで、カスピ海からインド洋に至る広大な土地に居住していたが、 紀元前3世紀にローマ人に征服された。ペルシア人はイラン南部に居住していた。ヒルカニア人はユーフラテス川とティグリス川の河岸に住み、ペルシア人に征服された。バクトリア人はイラン北東部に居住していた。バラモンとは、インド本国の住民であり、主にインドの僧侶を指す。

熟練した建築家を探させました。　主は、まさにこのアヴァンを通じて、トマにインドの地へ向かうよう命じられた。アヴァンがパネアデスで熟練した建築家を探していたとき、トマは彼と出会い、建築の技に精通した人物であると名乗った。アヴァンは彼を雇い、共に船に乗り込み、順風に乗って旅立った。

彼らがとある町にたどり着くと、そこではラッパやその他の楽器の音が聞こえてきた。　その町の王は娘を嫁がせることになり、町中に使いを遣わして、裕福な者も貧しい者も、奴隷もよそ者も、皆が結婚式に集まるよう告げさせた。もし来ることを拒む者がいれば、王の裁きを受けることになるとした。　これを聞いたアヴァンとフォマは、よそ者として王の命令に従わなければ王の怒りを買うのではないかと恐れ、王宮での婚礼の祝宴へと向かった。皆が席に着き、賑やかに楽しんでいる中、使徒は一番後ろの席に座り、何も食べず、祝宴にも加わらず、ただ物思いにふけっていた。　皆は彼を旅人や異邦人のように見つめていた。彼の隣に横たわっていた者たち[6855]は、彼にこう言った。

「何も食べも飲まもしないのに、なぜここに来たのですか？」

使徒はこう答えた。

「私は、食べたり飲んだりするためにここに来たのではなく、王の御心を行うために来たのです。なぜなら、使者が大声で、『婚礼に現れない者は、王の裁きを受けることになる』と告げていたからです。」

その時、宴会に参加していた人々の中に、笛を巧みに奏で、横たわっている一人ひとりに何かしらの挨拶を歌いかけながら踊るユダヤ人の女性が一人いた。　楽しそうにはせず、ただ頻繁に天を見上げていたトマスを見て、彼女は彼がユダヤ人であることを悟り、彼の前で笛を吹きながら、ヘブライ語で次のような歌を歌った。「神はただひとり、ユダヤ人の神であり、天と地を創造された方である」。

使徒は、その歌を喜んで聴きながら、その言葉を何度か繰り返してほしいと彼女に頼んだ。

酒を注ぐ役の者が、使徒が楽しそうにしていないのを見て、彼の顔を叩きながら言った。

「お前は婚礼に招かれたのだ。悲しむことなく、酒を飲む者たちに加わって楽しめ。」

すると、使徒は自分を殴った者にこう言った。

「主が、この世のうちに、この行いに対してあなたに報いを下されますように。そして、私を殴ったその手が、多くの人の目の前で犬に引きずり回されるのを、私がこの目で見届けたいものです！」

しばらくして、使徒を殴った給仕が、客たちにワインを薄めるための水を持ってこようと井戸へと向かった。そこで突然、一頭のライオンが彼に襲いかかり、倒して殺し、　彼の血を吸い尽くすと、立ち去った。　すると、犬たちが駆けつけ、その死体をバラバラに引き裂いた。そのうちの一匹の黒い犬が、彼の右手を掴むと、それを宴の場まで引きずって来て、皆の目の前で放り投げた。そこにいた者たちは皆、これを見て恐怖に襲われ、この手は誰のものかと尋ねた。すると、笛を吹いていた女性が叫んだ。

「今、私たちのところで、何か尋常ではない神秘的なことが起きている。私たちと共に横たわっているのは、神か、あるいは神の使者かのどちらかだ。　というのも、私は給仕が一人の男を殴るのを見ましたし、その男がヘブライ語で『あなたの右手が犬に引きずられて、多くの人の目の前で晒されるのを見させてほしい』と言うのを聞いたからです。そして、皆さんもご覧の通り、その通りになったのです。

この言葉を聞いた後、皆に恐怖が襲いかかった。

宴が終わると、王は起こった出来事を聞き、聖使徒トマスを呼び寄せ、こう言った。

「宮殿に入り、嫁ぐ私の娘を祝福しなさい。」

[6855] 古代においては、ユダヤ人をはじめとする諸民族の間で、食事の際、座るのではなく横たわる習慣があった。

使徒は寝室に入ると、新婚夫婦に貞節と純潔を守るよう教え、彼らのために祈りを捧げた後、祝福を与えてその場を去った。夢の中で、新婚夫婦はイエス様を目にした。イエス様は使徒トマスの姿で現れ、愛を込めて二人を抱きしめてくださった。　夫は、目の前にいるのがトマスだと考え、彼にこう言った。

「あなたは誰よりも先に私たちのもとを去ったのに、どうしてまたここにいるのですか？」

主はこう答えられた。

「私はトマスではなく、彼の兄弟である。彼と同じように、この世を捨てて私に従う者は皆、来世において私の兄弟となるだけでなく、私の王国を相続することになるのだ。」　さあ、わが子らよ、わが兄弟があなた方に勧めたことを忘れるな。もし、その助言に従って、あなたがたが純潔を保ち通すならば、わが天の宮殿において朽ちることのない冠に与かるであろう[6856]。

こう告げると、主は姿を消された。彼らは眠りから覚めると、夢で見たことを互いに語り合い、起き上がって一晩中、熱心に神に祈りを捧げた。そして、彼らに語られた言葉を、まるで貴重な真珠のように心に大切にしまっておいた。

朝、王は新婚夫婦がいる寝室に入ると、二人が互いに離れて座っているのを見つけた。不思議に思い、王はなぜ互いに距離を置いているのかと尋ねた。すると二人はこう答えた。

「私たちは神に、今この瞬間のように、死ぬその日まで夫婦として完全な貞節を守り通す力を与えてくださるよう祈っております。そうすれば、私たちに現れた主が約束されたように、天の宮殿で朽ちることのない冠を授かることができるからです。」

そこで王は、前日に宮殿に現れた旅人が彼らに貞操を守るよう説得したのだと悟り、激しく怒り、直ちに家来たちを遣わして使徒を捕らえさせようとしたが、彼らは彼を見つけられなかった。なぜなら、彼はアヴァンと共にすでにインドへと船出していたからである。

インドの王グンダフォルの元へ到着すると、彼らは王の前に進み出て、アヴァンはこう言った。

「陛下、ご覧ください。私はパレスチナから熟練した建築家を連れて参りました。陛下が望まれるような宮殿を、彼が建設できるよう手配いたしました。」

王は喜び、トマスに宮殿を建てたい場所を示し、その大きさを定めた上で、建設のために大量の金を彼に与え、自身は別の国へと旅立った。

トマスは金を受け取ると、それを貧しい人々や困窮している人々に配り始め、自身は福音の宣教に励み、多くの人々をキリストへの信仰へと導き、彼らに洗礼を授けた。

その頃、トマスの助言に従って妻と共に貞潔を守ることを誓ったあの若者は、使徒がインドでキリストを宣教していると聞き、妻と共に使徒のもとへやって来た。聖なる使徒からキリストの信仰を教えられ、彼らは彼から聖なる洗礼を受けた。 その際、その乙女はペラギア（ ）という名を与えられ、後にキリストのために殉教した。一方、その青年はディオニシオスと名付けられ、後に司教の位に就いた。

使徒の祝福を受けて故郷に戻ると、彼らは神の御名の栄光を広め、異教徒をキリストへと導き、各都市に教会を建てた。

二年が過ぎた頃、王は使徒のもとへ使者を送り、「宮殿の建設はまもなく完了するのか」と尋ねさせた。使徒は使者たちに、「あとは屋根を葺くだけだ」と答えた。　王は喜んだ。トマスが実際

[6856] このような貞操の称揚は、夫婦の性行為があっても夫婦の救いが不可能であることを示すものでは決してない。しかし、古代の教父たちの教えによれば、貞潔を保つ者は、黙示録の描写（黙示録14:1–5）にもあるように、天の御国において最高の報いを受けることになる。　それゆえ、主は、ご自身の神聖な先見の明により、前述の若い夫婦が持つ霊的な力と、神のみに捧げられた貞潔な生活を送る能力を知り、彼らに処女性を保つよう説得されたのである。　また、聖使徒トマスの殉教録のギリシャ語原本によれば、主は若い夫婦に対し、もし彼らに子供が生まれたとしても、その子供たちは病弱で、邪悪で、不幸なものになるだろうとも示された。

にこの地上に自分のための宮殿を建てていると信じていたからである。そして、宮殿のために壮麗な屋根を早急に築くよう命じ、さらに多くの金を彼に送った。

トマスはさらに金を受け取ると、天に向かって目と手を上げ、こう言った。

「人を愛する主よ、あなたがさまざまな方法で人々の救いを整えてくださることを感謝いたします！」

そして彼は再び、王から送られてきた金を、助けを求めてきた人々に配り、自身は熱心に神の御言葉を説き続けた。

しばらくして、王は、トマスが自分の命令をまだ実行に移すことさえしておらず、すべての金を貧しい人々に配り尽くし、建築業者は建設のことなど全く考えておらず、むしろ町や村を巡りながら、ある新しい神を説き、驚くべき奇跡を行っていると知った。　王は激怒し、家来たちを遣わして使徒を捕らえさせた。聖トマスが王の前に引き出されると、王は彼に尋ねた。

「宮殿は建てたか？」

トマスは答えた。

「建てました。しかも、それは壮麗で美しいものです。」

すると王は言った。

「さあ、お前の宮殿を見に行こう。」

使徒は答えた。

「この世にいる間は、この宮殿を見ることはできません。しかし、この世を去った時、それを見ることができ、喜びをもってそこに住み着き、永遠にそこに住むことになるでしょう。」

王は、使徒が自分を嘲笑っていると思い込み、大いに憤り、彼を連れてきた商人アヴァンと共に牢獄に投獄するよう命じた。そこで二人は、苦痛に満ちた死刑を待つ間、苦しむことになっていた。王は、二人を生きたまま皮を剥ぎ、火あぶりにするつもりだったのだ。

彼らが牢獄に閉じ込められていると、アヴァンは使徒を非難し始めた。

「お前」と彼は言った。「『最も熟練した建築家』と名乗って、私をも王をも騙した。そして今や、王の金を無駄に使い果たし、私の命までも台無しにした。お前のせいで私は苦しみ、残酷な死を遂げなければならない。王は残酷な人物であり、私たち二人を殺すだろう。」

それに対し、使徒は彼を慰めながらこう言った。

「恐れるな。私たちにとって死ぬ時はまだ来ていない。私たちは生き続け、自由の身となるだろう。そして王は、私が天の御国に彼のために築いた宮殿のゆえに、私たちを尊ぶだろう。」

その同じ夜、王の弟が病に倒れ、王にこう伝えさせた。

「お前の悲しみゆえに、私もまた憂鬱になり、その憂鬱のせいで病に倒れ、今や死に瀕している。」

その直後、王の弟は実際に亡くなった。王は以前の悔しさを忘れ、新たな悲しみに沈み、弟の死を嘆き悲しんで泣き崩れた。　一方、神の天使は、亡くなった者の魂を受け取り、それを天の住処へと運び上げ、そこにある集落を巡りながら、数多くの壮麗で輝かしい宮殿を見せた。その中には、あまりにも美しく輝いていて、その美しさを言葉で表現することさえできないほど素晴らしい宮殿が一つあった。そして天使は魂に尋ねた。

「これらすべての宮殿のうち、あなたはどの宮殿に住むのが一番お好きですか？」

彼女は、その極めて美しい広間を眺めながら、こう言った。

「もしあの広間の片隅にさえいさせていただけるなら、それ以上何も望みません。」

天使は彼女に言った。

「あなたはこの宮殿に住むことはできません。なぜなら、この宮殿はあなたの兄弟のものであり、あなたが知っている旅人トマスが、その兄弟の金を使って建てたものだからです。」

すると、その魂は言った。

「お願いです、ご主人様。私を兄のもとへお送りください。そうすれば、私は兄からこの宮殿を買い取ります。兄はまだその美しさを知らないのですから。そして、買い取った後、私はまたここに戻ってきます。」

すると天使は魂を肉体に戻し、死んでいた者はたちまち生き返り、まるで眠りから覚めたかのように、周囲の人々に兄の行方を尋ね、王が一日も早く自分のところへ来てくれるよう懇願した。王は、弟が生き返ったと聞いて大いに喜び、急いで彼の元へ駆けつけ、彼が生きているのを見て、さらに喜びを募らせた。そして、蘇った男は王にこう語りかけた。

「王よ、あなたは私を兄弟のように愛してくださっていると確信しています。私のために悲しみのあまり泣き崩れたことも知っています。もし私を死から救うことができたなら、その代償として王国の半分さえも差し出したことでしょう。」

王は答えた。

「はい、その通りです。」

「もしあなたがそれほど私を愛してくださるのなら」と、王の兄弟は言った。「ただ一つ、お願いがあります。どうかこれを断らないでください。」

王は答えた。

「わが国で私が所有するすべてのものを――愛する兄弟である君に与える」――そして、誓いを立ててその約束を確約した。

すると、蘇った兄は言った。

「天国にあるお前の宮殿を私に与え、その代わりに私の全財産を受け取ってくれ。」

王は、その言葉を聞いて当惑し、まるで言葉を失ったかのように黙り込んだ。それから彼は言った。

「天国に、私にどんな宮殿があるというのか？」

「まことに、」と王の兄弟は答えた。「天には、あなたが知らない、そしてこの世のどこにも見たことのないような宮殿がある。それをあなたのために建てたのは、あなたが牢獄に閉じ込めているトマである。私はその宮殿を見て、その言葉に尽くせない美しさに驚嘆し、せめてその片隅にでも私を置いてもらえないかと頼んだが、それは許されなかった。　というのも、私を案内していた天使がこう言ったからだ。『あなたはそこに住むことはできない。なぜなら、そこはあなたの兄弟のための宮殿であり、あなたが知っているトマスが建てたものだからだ』。私は天使に、あなたのもとへ戻らせてくれと頼み、その宮殿をあなたから買い取らせてもらおうとした。だから、もし私を愛しているのなら、その宮殿を私に譲り、その代わりに私の全財産を受け取ってほしい。

すると、王は兄弟が生き返ったことと、天国に建てられたその宮殿のことを喜び、よみがえった兄弟にこう言った。

「愛する兄弟よ！　私は、この地上で私の支配下にあるものなら何であれ、君に拒むことはしないと誓ったが、天にあるあの宮殿については約束していなかった。しかし、もし望むなら、私たちには、君のために同じような宮殿を建てることができる建築家が一人いる。」

そう言うと、王は直ちに家来たちを牢獄へ遣わし、聖トマスを、彼を連れてきた商人アヴァンと共にそこから連れ出すよう命じた。彼らが王の前に現れると、アヴァンは急いで使徒のもとへ駆け寄り、その足元にひれ伏して、無知のゆえに犯してしまった使徒に対する自分の罪を赦してほしいと懇願した。　使徒は神に感謝を捧げると、二人の兄弟に、我らの主イエス・キリストへの信仰を教え始めた。彼らは心を打たれ、愛をもってその言葉を受け入れた。まもなく、使徒は彼らに洗礼を授け、キリスト教徒としての生き方を教えた。そして、兄弟たちは数多くの施しを行うことで、天国における永遠の住まいを自ら築き上げた。　彼らとしばらく共に過ごし、聖なる信仰を確固たるものにした後、使徒は周辺の他の町や村へと向かい、人々の魂を救う働きに励んだ。

トマスが福音の説教によってインドの諸国を啓蒙していたその頃、聖母マリアの尊い御帰天の時が訪れました[6857] 。そして、各地から集まったすべての使徒たちは、天の雲に乗って天に上げられ、ゲッセマネ[6858]にある、至福の聖母の御寝所へと移されました。その時、聖使徒トマスもまたインドから天に上げられたが、神に栄光ある至聖なる聖母マリアの御遺体の埋葬当日には間に合わなかった。これは、神の御心によって、神の母が肉体ごと天に上げられたことを信者たちに確信させるために定められたことである。　なぜなら、キリストの復活に関して、私たちはトマスの不信仰を通じて信仰をより確固たるものにしたのと同様に、聖母マリアが肉体ごと天に上げられたことについても、トマスの遅れによってそれを知ることになったからである。　使徒は埋葬から三日目にようやく到着し、埋葬当日にゲッセマネにいて、他の使徒たちと共に主の母の御体を埋葬の地へ送り届けることができなかったことを嘆いた。　そこで、聖使徒たちの合意により、聖トマスのために至聖なる神の母の墓が開かれ、彼がその尊い御遺体を見て礼拝し、悲しみを和らげることができるようにした。　しかし、墓を開けてみると、御体は見つからず、そこに横たわっていたのはただ一枚の聖骸布だけだった。こうして、皆は、神の母が御子と同様に三日目に復活し、御体ごと天に上げられたことを確信した。

その後、トマスは再びインドの地に現れ、そこでキリストを宣教し、しるしと奇跡によって多くの人々を信仰へと導いた。メリアポル[6859] に到着すると、彼はそこで福音の説教によって多くの人々を啓発し、次の奇跡によって彼らを聖なる信仰に確固たるものにした。　ある場所に、並外れた大きさの木が横たわっており、それは人々だけでなく、象でさえも動かすことができなかった。しかし、トマスはその木に自分の帯を結びつけ、その帯を使って木を十スタディオン[6860] 引きずり出し、主の神殿の建設に捧げた。　これを見た信者たちは、さらに信仰を深め、不信仰者の中にも多くの者が信仰を持つようになった。使徒はそこで、最初の奇跡よりもさらに大きな別の奇跡も起こした。ある異教の祭司が自分の息子を殺し、その罪を聖トマスに押し付け、こう言った。

「トマスが私の息子を殺した。」

民衆の間で騒動が起こり、集まった群衆は聖トマスを殺人犯として捕らえ、裁判所で彼に拷問を科すよう要求した。しかし、トマスがその殺人に関与していないことを証言できる者が誰も見つからなかったため、キリストの使徒は裁判官と民衆に懇願した。

「私を解放してください。そうすれば、私は私の神の名において、殺された者に尋ね、彼自身に誰が彼を殺したのか語らせます。」

皆は彼と共に、殺された祭司の息子の遺体の元へ向かった。トマスは天を仰ぎ、神に祈りを捧げた後、死者にこう言った。

[6857] 古くから広く受け入れられている伝承によれば、聖母マリアの永眠は、主の昇天から15年後、すなわち西暦48年のことであった。

[6858] ゲッセマネは、エルサレム近郊、ケドル川を越えた先、オリーブ山の麓にある村、あるいは場所であり、そこには主が受難の前に祈りを捧げられた園があり、また、至聖なる聖母マリアがご自身の至聖なる御体を葬るよう遺言された場所でもあります。　この場所の名は、そこに数多く生えていたオリーブの木に由来しており、そこから多くのオリーブオイルが搾り出されていた（ヘブライ語から訳すと、ゲッセマネは「オリーブの場所」、あるいは「オリーブの実から果汁を搾り出すための石臼や絞り機」を意味する）。　ゲッセマネの園は、現在もエレオン山の麓、その南側にあるとされている。そこには至聖なる聖母マリアの埋葬用の洞窟があり、今もなお彼女の棺が安置されている。

[6859]　メリアポール、あるいはマリプールは、インドスタン半島の東岸（コーモランデル海岸）に位置する都市である。――この地域に住むキリスト教徒の間には、古くから、キリスト教の信仰が当初、使徒トマスまたはその弟子たちによって伝えられたという伝承が存在していた。　1500年にポルトガル人が初めてインドの海岸に上陸した際、マリプールにキリスト教徒の集落を発見した。彼らは使徒トマスから信仰を受け継いだと語っており、この都市は前世紀の終わりには「聖トマスの街」と呼ばれていた。　概して、インドのキリスト教徒は古くから自らを「使徒トマスのキリスト教徒」と呼び、自分たちの教会の起源をこの使徒に遡らせている。

[6860] 1スタディアは約88サジェン、したがって10スタディアは約114*ヴェルスタ*に相当する。

「わが主イエス・キリストの名において、若者よ、お前に命じる。誰があなたを殺したのか、私たちに告げよ。」

すると、死者はすぐにこう言った。

「私の父が私を殺したのです。」

すると、皆は声を揃えて叫んだ。

「トマスが宣べ伝える神は偉大だ。」

使徒は解放され、司祭はこうして、自ら使徒のために掘った穴に落ちてしまった。この奇跡の後、大勢の人々が神に立ち返り、使徒から洗礼を受けた。

その後、使徒はさらに先へ進み、ムズディウス王が統治するカラミド地方へと向かった。そこでキリストを宣教する中、聖人はシンディキアという名の女性――王の寵臣カリジウスの妻ミグドニアの姪――を信仰へと導いた。　シンディキアはミグドニアに対し、トマスが説く、全宇宙の創造主である唯一の神の真理を知り、その神を信じるよう説得した。すると、ミグドニアはシンディキアにこう言った。

「真の神を説くその人を、私自身の目で見て、その教えを直接聞いてみたいわ。」

シンディキアはこう答えた。

「もし神の使徒に会いたいなら、あなたが誰にも気づかれないよう、まるで素朴で貧しい女性であるかのように粗末な服を着て、それから私と一緒に来てください。」

ミグドニアはそのままその通りにし、シンディキアと共に歩いた。二人は、多くの素朴で貧しい人々の群衆の中に、キリストを説く使徒を見つけた。　群衆の中に混じり、彼女たちはトマスの教えに耳を傾けた。トマスは主キリストについて多くを語り、キリストへの信仰を説き、さらに死や審判、ゲヘナ、そして天の御国についても語っていた。　これらすべてを聞いて、ミグドニアは心を打たれ、キリストを信じるようになった。家に戻ると、彼女は絶えず使徒の言葉について思いを巡らせ、姪のシンディキアとキリストについて語り合ううちに、キリストへの愛をますます深めていった。それ以来、彼女は不信者たちを神の敵として忌み嫌い、会話や宴席での彼らとのあらゆる交流を避け、同時に世俗の快楽からも全般的に距離を置くようになった。また、夫との夫婦生活を断つことも決意した。　このことは夫を深く悲しませ、ミグドニアにその決意を翻させることはできなかったため、彼はムズディウス王に、王妃テルティアナを派遣して、ミグドニアに夫婦の同居を嫌うのをやめるよう説得してほしいと懇願した（王妃テルティアナとミグドニア、すなわちカリジウスの妻は実の姉妹であった）。王妃はミグドニアのもとへ赴き、なぜ夫の言うことを聞かないのかと尋ねた。

ミグドニアはこう答えた。

「彼は異教徒であり、神の敵[6861]だからです。私は唯一真の神、イエス・キリストの僕であり、不信仰で不浄な者に穢されたくはないのです。」

テルティアナは、ミグドニアが「真の神」と呼ぶイエス・キリストが一体誰なのかを知りたがった。そこでミグドニアは、使徒トマスの説教を彼女に語り聞かせ、真の信仰について教えた。　テルティアナは、キリストについてより明確に知り、信仰をより深く学びたいと願い、使徒ご本人にお会いして、その説教を直接聞きたいと望んだ。　ミグドニアと相談した後、彼女は密使を使わして使徒を呼び寄せ、二人は共に、真の道へと導いてくれるよう懇願した。使徒は彼女たちにキリストを説き、信仰の光で彼女たちを照らし、聖なる洗礼の水で清め、神の戒めを守ることとあらゆる美徳を教

[6861] 聖使徒パウロの教え（Iコリント7:12–14）によれば、これはキリスト教徒の女性が異教徒の夫との夫婦生活を続けることを妨げるべきではないが、ミグドニアとシンディキアに関しては、使徒　トマスはより厳しい要求を突きつけた、あるいは、より正確に言えば、彼女たち自身がより厳格であり、異教徒の配偶者との婚姻生活を望まなかった。この事情は、疑いなく、この要求が満たされて初めて、夫たちのキリスト教への改宗が実現し得たという事実によって説明され、それはこの一件の結末そのものによって裏付けられている。

えた。　テルティアナとミグドニアは、語られたすべてのことを心に刻み込み、清らかな心で主に仕え、不信仰者である夫たちとは交わらないことに同意した。　一方、使徒は神の力によって数多くの奇跡を行い、あらゆる病を癒やし続け、庶民だけでなく王宮の廷臣たちの中にも、使徒が行うしるしを見て、その教えに耳を傾けた多くの人々が、キリストに回心した。　王自身の息子の一人、アザンという名の者も信仰を持ち、使徒から洗礼を受けた。それは、主ご自身が使徒たちを通して働き、御自身の教会を増し加え、御名の栄光を広げておられたからである。

テルティアナ王妃は、ミグドニアから戻ると、祈りと断食に専念し、夫との肉体的関係を持ち続けることを拒み続けた。王は、妻のこのような変化に驚き、友人のカリシウスにこう言った。

「お前に妻を返そうとした結果、私は自分の妻まで失ってしまった。しかも、私の妻は、お前の妻がお前に接するよりも、さらに冷たく私を扱うようになったのだ。」

その後、王とカリシウスは、それぞれの妻に見られたこの変化の原因について極めて厳格な調査を行い、ある外国人、トマスという名の来訪者が、彼女たちにキリストの信仰を教え、夫との夫婦生活を断つよう説得したことを突き止めた。　また、王の息子アザンや王宮の多くの家臣、さらには高官たちや数え切れないほどの庶民までもが、トマスの説教によってキリストを信じるようになったことも判明した。　これらすべてが王たちの怒りを買い、彼らはフォマを捕らえて牢獄に投獄した。その後、使徒は王の裁きに引き出された。王は彼に尋ねた。

「お前は奴隷か、それとも自由人か？」

トマスはこう答えた。

「私は、あなたが権威を持たないお方のしもべです。」

王は言った。

「お前は、主人のもとから逃げ出し、この地に来て人々を堕落させ、我らの妻たちを惑わそうとしている、悪辣な奴隷のようだ。さあ、お前の主人は誰だ？」

– 私の主は――と使徒は答えた――天と地の主、あらゆる被造物の神であり創造主です。主は、御自身の聖なる御名を宣べ伝え、人々を迷いから立ち返らせるために、私を遣わされたのです。

王は言った。

「やめろ、詐欺師め。その狡猾な言葉を止め、わが命令に従え。お前の策略によって、わが妻たちを我々から遠ざけ、我々と交わらせなかったのと同じように、今こそ彼女たちを再び我々の元へ戻せ。もし、わが妻たちが以前のような愛と親密さをもって我々と共に暮らすようにならなければ、お前を惨たらしい死に追いやるぞ。」

使徒は答えた。

「キリストの女奴隷たちが、不義な夫たちと夫婦の交わりを持つことはふさわしくない。また、信者たちが、不敬虔で不信仰な者たちによって汚されることもあってはならない。」

これを聞いた王は、赤熱した鉄板を持ってくるよう命じ、その上に使徒を裸足で立たせた。それが行われると、板の下から突然水が湧き出し、鉄板を冷やした。その後、聖トマスは激しく燃え盛る炉に投げ込まれたが、翌日、彼は生き生きと無傷のままそこから出てきた。

その後、カリシウスは王に次のような助言をした。

「彼に、太陽の神[6862]にひれ伏し、犠牲を捧げさせよ。そうすれば、彼はそれによって、苦しみの中でも無傷でいさせてくださる自らの神を怒らせることになるだろう。」

使徒が太陽の偶像の前に連れて行かれると、その偶像はたちまち蝋のように溶けて消え去った。信者たちは天の神のこのような御力の現れを見て歓喜し、多くの異教徒が主のもとへ回心した。一方、偶像の祭司たちは、自分たちの偶像が破壊されたことを理由にトマスを非難し、王自身も極め

[6862] あらゆる最古の異教の宗教において、太陽の神格化は極めて重要な役割を果たしていた。特に、天体の崇拝（いわゆるサベイズム）は、古代において主にすべての東方諸民族の間で広く行われていた。

て侮辱されたと感じ、彼をどのように滅ぼすべきか考えを巡らせた。しかし、王は民衆や家臣たち、そしてキリストを信じた多くの高官たちを恐れていた。

王はトマスを連れ出し、兵士たちと共に街を出た。皆は、王が使徒から何らかの奇跡を見たいと望んでいるのだと思った。　一ヴェルスタほど進んだところで、王はトマスを五人の兵士に引き渡し、彼らにトマスと共に山に登り、そこで槍で刺し殺すよう命じ、自身はアクシウムの町へと向かった。一方、王の息子アザンと、シフォールという名の男は、使徒の後を急いで追いかけ、彼に追いつくと、彼のために泣き悲しんだ。　そこでトマスは、兵士たちに祈りを捧げる許可を求め、主に向かって祈りを捧げた後、シフォルを司祭に、アザンを助祭に按手し、信者の数を増やし、キリストの教会を広めるよう彼らに命じた。その後、兵士たちは彼を五本の槍で貫き、それによって彼は息を引き取った。 シフォールとアザンは長い間彼を悼み、その聖なる遺体を[6863] に尊厳をもって埋葬した。埋葬が終わると、彼らは使徒の墓のそばに座り、悲しみに暮れていた。すると、聖人が彼らに現れ、町へ行って兄弟たちを信仰に堅く立たせるよう命じた。　彼らは、師である聖使徒トマスからのこの命令に従い、その祈りの助けを借りて、キリストの教会を立派に導いた。一方、ムズディウス王とカリシウス王は、妻たちを長く苦しめたが、彼女たちを自分の望み通りに従わせることはできなかった。妻たちが死ぬまで決して自分たちに従うことはないことを悟った彼らは、彼女たちを自由に、自らの意志のままに生きさせるしかなかった。夫婦の束縛から解放された女性たちは、厳格な禁欲と祈りの生活を送り、昼夜を問わず主に仕え、その徳高い生き方によって教会に多大な恩恵をもたらした。

数年後、ムズディア王の息子の一人が悪霊に取り憑かれ、彼の中に極めて凶暴な悪霊が宿っていたため、誰も彼を癒やすことができなかった。　王は息子の病を深く嘆き、聖使徒の墓を開き、その遺骨の一つを取り出して息子の首に結びつけ、悪魔の苦しみを払おうと考えた。というのも、聖トマスが生前、自身の によって多くの人々から悪魔を追い出したと聞いていたからである。 王がそれを実行しようとしたとき、夢の中に聖トマスが現れてこう言った。

「生きている時には信じなかったのに、死んだ者から助けを得られるとでも思っているのか。しかし、その不信仰にとどまるな。そうすれば、わが主イエス・キリストはあなたに憐れみを与えてくださるだろう。」

この夢は、王の使徒の墓を開けたいという願望をさらに強めた。　聖人の埋葬地へ向かったムズディウスは棺を開けたが、そこには聖遺物はなかった。あるキリスト教徒が密かに聖遺物を持ち出し、メソポタミアへ運び、そこでふさわしい場所に安置していたからである。王はその場所の土を採取し、それを息子の首に結びつけながら、こう言った。

「主イエス・キリストよ！　あなたの使徒トマスの祈りによって、わが子を癒してください。そうすれば、私はあなたを信じます。」

すると、悪霊はたちまち王の息子から出て行き、少年は回復した。そこで、ムズディウス王はキリストを信じ、すべての貴族たちと共に、司祭シフォロスから洗礼を受けた。信者たちの心には大きな喜びが満ち溢れた。なぜなら、偶像は打ち砕かれ、その神殿は破壊され、その場所にキリストの教会が建てられたからである。　神の御言葉は広まり、聖なる信仰は強められた。王は洗礼を受けた後、過去の罪を悔い改め、すべての人々に助けと祈りを求めた。一方、シフォール長老はすべての信者たちにこう語った。

「ムズディウス王のために祈ってください。彼が私たちの主イエス・キリストから憐れみを受け、その罪の赦しを得ることができますように。」

[6863] 聖使徒トマスの殉教の地は、カリルミンにあるとされている。そこはマリプールから6ヴェルスタほど離れた高い岩山の上であり、使徒は祈りのために頻繁にそこを訪れていた。

そして、教会全体が王のために祈った。使徒の聖なる遺体が埋葬されたその場所で、彼の祈りによって、私たちの神キリストの栄光のために多くの奇跡が起こった[6864]。父と聖霊と共に、彼に私たちからの栄光と礼拝が永遠にあらんことを！アーメン。

トロパリオ、第2調：

キリストの弟子であり、神聖な使徒の集いに加わった者よ。キリストの復活を信じなかった者たちにそのことを知らせ、その至聖なる受難を自らの手で確かめた、称賛に値するトマスよ。今、私たちのために平和と大きな憐れみをお祈りください。

コンダク、第4調：

知恵の恵みに満ちた、キリストの使徒であり真の奉仕者よ、悔い改めの中であなたに叫びました。「あなたは私の神であり、主です。」

10月20日

10月7日（旧暦）

聖殉教者セルギイとバクハの殉教

記念日 10月7日

聖殉教者セルギウスとバッカス――ローマ出身――は、[6865] の著名な高官であり、マクシミアヌス帝の宮廷における貴族たちの筆頭であった。　皇帝は、会議での彼らの賢明な助言、戦場での勇敢さ、そして職務への忠誠心ゆえに、彼らを深く愛し、尊敬していた。また、皇帝に願い事を申し入れる際、この最も忠実な顧問たちを介さない者はほとんどいなかった。彼らは、他の誰よりも皇帝の寵愛を受けていたからである。　しかし、セルギウスとバッコスは、地上の王からというよりは、むしろ天の王からの寵愛を求めていた。なぜなら、彼らは我らの主イエス・キリストを信じ、自らの生涯をもって主に喜ばれるよう努め、熱心に主に仕えていたからである。　しかし、王への恐れから、彼らはしばらくの間、キリストへの信仰を隠していた。というのも、マクシミアヌスはキリスト教徒に対して計り知れない憎悪と抑えきれない激怒を抱いていたからである。とはいえ、キリストの信仰の光が彼らの内に隠されていたのは長くは続かず、まもなくすべての人々の前に明らかに現れた。

[6864] 教会著述家たちの証言によれば、聖使徒トマスの聖遺骨はその後（385年）、インドからメソポタミアのエデッサ（現在のオルファ）へと移された。古代の西方の殉教者録では、7月3日に彼の聖遺骨がこの都市へ移されたことを記念している。　しかし、インドにも聖使徒トマスの聖遺物がまだ残っていることが知られているため、エデッサへの移送に関するこの記述は、インドから移送されたのはその一部に過ぎないという意味で理解すべきである。エデッサでは、聖使徒の聖遺物の上に壮麗な教会が建てられ、遠く離れた国々からも巡礼者が集まってきた。　その後、使徒トマスの聖遺物の一部はコンスタンティノープルに移され、そこでアナスタシオス皇帝（490–518年）の治世下、宮廷高官アマンティウスによって、彼の名に因んで教会が建立された。 第4回十字軍（1204年）の際、十字軍兵士たちは数多くの聖遺物の中から聖使徒の右手を発見し、第5回十字軍の後、ハンガリー王アンドラーシュ2世がこれをハンガリーへ持ち帰った。

[6865] 伝記の原本において、セルギウスは「プリミカール」、すなわち「ゲンティリウス連隊」の第一指揮官――ローマ人の同盟者（彼らは「ゲンティレス」と呼ばれていた）で構成されていた――と記されており、バッカスについては「セコンドトリア」、すなわち同連隊の第二指揮官とされている。

ある者たちは、彼らの高い地位や王からの寵愛を妬み、彼らに王の憎しみと怒りを招こうとして、セルギウスとバッコスがキリスト教徒であり、偶像崇拝を拒んでいると王に密告した。　マクシミアヌスは、これほどまでに自分の寵愛を受けている者たちが、神々の崇拝において自分と意見が合わないなどとは信じたくなく――また、まだ確かな証拠がないまま、彼らにそのことを尋ねたり、非難したりするのは恥ずかしかった。しかし、彼は次のようにして彼らを試すことに決めた。

ある日、彼は自らの神々を称える祝祭を催し、すべての公爵や高官、兵士や家来たちを従え、王としての威光をまといながら、主神ゼウスの神殿[6866] へと向かい、そこで厳粛な生贄を捧げようとした。　その際、彼は、お気に入りの重臣であるセルギウスとバッカスという二人が、自分と共にその偶像の神殿に入るかどうかを注意深く見守っていた。　しかし、王が神殿に入ったとき、キリストの僕たちは神殿の外にとどまり、王と共にその忌まわしい神殿には入らなかった。彼らは遠く離れた場所に立ち止まり、真の神に祈りを捧げ、神にこう願った――不敬虔なその民の曇った目を照らし、彼らを通して御自身の至聖なる御名を栄光に輝かせてくださるよう。　一方、王は、セルギイとバクスが自分と共に祝典の場に入らなかったのを見て、家来たちを遣わして彼らを捕らえ、力ずくで神殿へ連行させた。

聖人たちがこの神に背く集まりに連れ込まれると、マクシミアヌスは、彼らに自分と共に偶像に拝礼し、犠牲を捧げ、偶像への供え物を口にするよう命じた。

しかし、セルギウスとバッコスは、この皇帝の命令に従うことを拒んだ。

「私たちには」と彼らは言った。「天に神がおられます。その神は、あなたがたの偶像のように無感覚でも偽りでもなく、全世界を御手の中に収めておられる、真の、生ける神であり、私たちは彼を礼拝します。」

そして彼らは、唯一の神にふさわしい栄光を、目も見えず、耳も聞こえず、口もきけない偶像に捧げているという王の迷信を非難し始めた。

すると王は激怒し、彼らから高位の身分を示すすべての装飾品――軍用ベルト、金の首飾り、指輪、そしてすべての衣服――を取り上げ、侮辱のために女性の下着を着せ、首には鉄の輪をはめさせるよう命じた。聖人たちはその姿のまま街中を引き回され、　――それによって、これほど栄光に満ちた高貴なローマの貴族たちが、唯一の真の神を崇め、偽りの異教の神々、あるいは、より正確に言えば、すでに自らをキリストへの生贄として捧げていたこれらの神の僕たちが、犠牲を捧げることを拒んだ悪魔たちそのものを侮辱したとして、民衆全員から侮辱され、嘲笑されるようにするためであった。

神に背く生贄の儀式が終わると、マクシミアヌスは自分の宮殿に戻り、セルギウスとバッコスを深く愛していたため、彼らを憐れんで呼び寄せ、こう言った。

「愛すべき、そして忠実な友よ！　なぜ、我らの神々を辱め、これほどまでに慈悲深く、あなた方に好意を寄せてくださる王を悲しませようとしたのか？　なぜ、自らにこのような不名誉を招いたのか？　私はあなた方を深く愛しているが、それでもなお、我が神々への冒涜を容認することはできず、たとえ本意に反しても、あなた方を苦痛にさらさざるを得ない。　それゆえ、私の友よ、お願いです。ユダヤ人たちが悪党として他の悪党たちと共に十字架に吊るした、このテクトノンの御子[6867] を放っておき、キリスト教の作り話や魔術に惑わされないでください。 再び我らの偉大なる神々に立ち返りなさい。そうすれば、私はあなた方にさらに大きな栄誉を与え、　さらに大きな慈悲を注

[6866] ゼウス、あるいはユピテルは、異教徒から天と地の支配者、神々と人間すべての父として崇められていたギリシャ・ローマの神である。

[6867] すなわち イエス・キリストは、同時代のユダヤ人たちから「テクトンの子」（マタイ13:55）と呼ばれていた。彼らは、イエスを聖母マリアの婚約者であり、大工の技を極めたヨセフの子であると考えていた（「テクトン」はギリシャ語で「大工」「建築家」を意味する）。　この呼称は後にローマの異教徒たちにも取り入れられ、キリスト教の王に対する嘲笑や侮辱として、キリストに付けられたのである。

ぎ、あなた方は私の愛を享受し、私と共に我が王国のあらゆる恵みを分かち合って楽しむことになるだろう。

しかし、セルギウスとバッカスはいかなる王の愛のためにも神の愛から離れ、一時的な利益のために永遠の恵みを失うことを望まなかったため、王の命令に従わなかった。　聖霊の恵みに満たされた彼らは、大胆かつ説得力を持って、王にその偽りの神々の無力さをすべて証明し始め、王の前でイエス・キリストの力と神性を勇敢に告白し、王自身にこの天の真理を知るよう勧めた。　不敬虔な王は、心が頑なになり、理性が曇っていたため、彼らの善意の助言を受け入れず、それどころか、さらに大きな怒りと激怒に燃え上がった。　彼らへの愛ゆえに、自ら彼らを苦しみへと追いやることを望まなかった王は、彼らを東方の総督[6868] アンティオコスのもとへ送り出した。この男は、キリスト教徒に対する残酷な迫害者であり拷問者であった。彼は、セルギウスとバッコスが王に請願したおかげで総督の地位に就き、その後、東方へと派遣されていた。聖人たちは今、この総督のもとへ送られたのである。

王は、帝国全土に広まっていた自身の残虐さへの噂に彼らが怯え、かつては自分たちのほぼ奴隷同然であった者の支配下にあることを恥じ、その結果、恐怖と恥辱からキリストを否定するだろうと考えていた。　しかし、たとえそうならなかったとしても、皇帝にとっては、いずれにせよ、彼らが自分の目の前で拷問を受けるよりは、遠く離れた地で拷問を受けて死ぬほうが望ましいことだった。

こうして、聖人たちは足枷を嵌められたままローマから連れ出された。丸一日旅をした後、彼らに付き添っていた兵士たちは、宿屋に泊まるために立ち寄った。　そこで、真夜中、彼らを連行していた兵士たちが深く眠りについた時、セルギウスとバッコスは祈りを捧げ、これから待ち受けるあらゆる苦難を勇敢に耐え抜く力を神に求め始めた。

彼らが祈っていると、主の天使が現れ、天の光で彼らを照らし、次のような言葉で励ました。

「勇気を出しなさい、キリストの僕たちよ。善き戦士として悪魔に立ち向かいなさい。あなたがたはまもなく悪魔に打ち勝つでしょう。」

この言葉を告げると、天使は姿を消した。

セルギイとバクスは、言葉に尽くせない喜びに満たされ、このような天使の御出現をもって御自分のしもべたちを訪れてくださった主に賛美を捧げ始めた。

東へと続く長い旅路の間、聖なる殉教者たちは祈りと詩篇の詠唱に時間を費やし、そのようにして目に見えない悪の霊たちに対して、さらに強固な備えを整えていった。　多くの都市や村々を通り過ぎ、彼らはついに東方の都市バルバリッソ[6869] に到着した。そこには当時、イゲモン・アンティオコスがおり、兵士たちは連れてきた囚人たちを彼に引き渡した。同時に、次のような内容の王の勅書も添えられた。

――永遠の王マクシミアンより、東方地方のイゲモン、アンティオコスへ。――喜びなさい！我らの神々は、いかなる人間も、とりわけ我らの王国の擁護者や僕たちが、不敬虔であり、神々への生贄の儀式に参加しないことを許さない。　このため、我々はセルギウスとバッカスを裁き、不敬虔なキリスト教信仰の信奉者として、彼らに死刑に値すると判断した。しかし、彼らは皇帝自らから刑罰を受けるに値しないため、彼らを貴殿のもとへ送った。　もし彼らが悔い改め、我々の言葉に従い、神々に犠牲を捧げるならば、彼らに寛大さを示し、定められた苦痛から解放してやれ。その際、我々も彼らに慈悲深く接し、一人ひとりが以前の地位を取り戻し、以前よりも大きな恩恵を受けることを約束せよ。　もし彼らが従わず、以前の邪悪な信仰に固執するならば、彼らに相応しい苦痛を与え、剣による斬首によって死刑に処せ。長寿を祈りつつ――ご健勝でありますように。

[6868] すなわち、ローマ帝国の東方、アジアの属州を統治する支配者に対してである。

[6869] バルバリッソ――メソポタミア、ユーフラテス川の西岸に位置する都市。

王の勅書を読み終えると、アンティオコスはセルギウスとバッカスを朝まで拘束するよう命じた。翌朝、プレトリア[6870] に入ると、彼は裁判官の席に着き、聖なる殉教者たちを目の前に立たせて、こう語りかけた。

「わが父たち、わが恩人よ、この地位を私に授けてくださった方々、私の現在の栄光の源である諸君――諸君の境遇はなんと変わってしまったことか！　今や私は裁判官としてあなたがたの前に座しているが、あなたがたは縛られた囚人として、　私の前に立っている――かつて私がしもべとして仕えていたあなたがたである。お願いだ、自らにこのような災いをもたらさないでほしい。王の命に従い、神々に犠牲を捧げよ――そうすれば、あなたがたはかつての地位を取り戻し、再び栄光をもって敬われることになるだろう。　もしそうしないならば、私は自らの意志に反してさえ、苦痛をもってあなたがたをこの王の命令に従わせるほかない。何しろ、王が書簡の中で私に命じていることを、あなたがた自身も耳にしたはずだ。　それゆえ、諸君よ、ご自身に対しても、そして私に対しても慈悲深くあってください。私は、私の恩人である諸君に対して、残酷な拷問者となることを決して望んではいないのです。

聖人たちは彼にこう答えた。

「あなたの言葉で私たちを惑わそうとしても無駄だ。天の命を求めるとは、栄誉も不名誉も、生も死も、すべて全く無関係*なことだからである。『私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である』*（フィリピ1:21）。

セルギイとバクスは、不信心者たちの偶像崇拝と不敬虔を非難し、糾弾しながら、他にも多くのことを語った。その後、アンティオコスは激怒し、聖セルギイを牢獄に投獄するよう命じ、バクスについては服を脱がせて地面に寝かせ、容赦なく打ちのめすよう命じた。　聖人は全身を長時間打ち続けられ、彼を殴打していた役人たちは疲労で力尽き、互いに交代せざるを得なかったほどであった。この拷問により、聖殉教者の肉体はまるで骨から剥がれ落ちたかのようになり、血は水のように流れ出した。このような苦しみの中、聖バクスはその魂を主の御手に委ねた。　アンティオキアは、キリストの殉教者の遺体を街の外へ運び出し、遠く離れた場所に捨てて、獣や鳥の餌にさせるよう命じた。　しかし、主はその遺骨を守られた。偶像崇拝者たちを恐れて城外の洞窟や渓谷に身を隠していたキリスト教徒たちの一部が、夜になって隠れ家から出て、聖人の遺体を運び出し、自分たちが身を隠していた洞窟の一つに、尊厳をもって埋葬したのである。

牢獄に囚われていたセルギイは、友の死を聞き、深く悲しみ、彼との別れを長く嘆いた。

「ああ、哀れな私よ、わが兄弟バックスよ」と彼は何度も繰り返した。「今や、私たち二人はもはや*『兄弟たちが共に住むことは、なんと良く、なんと楽しいことか』*（詩編132:1）と歌うことはできない。あなたは私を一人残していったのだ。」

聖セルギイがそう嘆いている最中、その翌夜、聖バッコスが天使のような顔つきで、天の光に輝く衣をまとって、彼の夢に現れた。　聖バクスは彼を慰め、天国で彼らに用意されている報いについて告げ、まもなく訪れる殉教の業に向けて彼を励ました。その業によって、彼は主キリストから大きな恵みと勇気を授かることになるのだ。この御出現の後、セルギイは喜びに満たされ、心躍らせて主を賛美し始めた。

まもなく、イゲモンは「スラ」[6871] と呼ばれる別の都市へ向かうにあたり、セルギイも連れて行くよう命じた。そこで、裁判官の席に着くと、彼は聖人にこう語りかけた。

「バクフという名の不信心な男は、神々に犠牲を捧げることを拒み、神々を崇めるよりはむしろ暴力的な死を遂げることを選んだ。そして彼は、その行いにふさわしい処刑を受けた。しかし、セルギイよ、なぜあなたはこのような不敬虔な教えに惑わされ、これほど大きな災難に身をさらすのか

[6870] プレトリア――ローマ属州の中枢都市にある最高裁判所であり、そこでローマ皇帝の代理、すなわち数つの属州を統治する総督（イゲモン）によって裁判が行われていた。

[6871] スーラ――ユーフラテス川の西岸にある都市。

？　私の恩人よ、どうかご自身を苦しみへと追い込まないでください！私は、かつてあなたが私に施してくださった恩恵や、あなたの地位を恥じています。あなたは今、私の前に有罪判決を受けた者として立っており、私は座ったままあなたに裁きを下しているのですから。かつては取るに足らない人間だった私が、今や王へのあなたの取り成しのおかげで、高い地位に昇り、もはやあなたよりも上になっています。　一方、王にこれほど多くの恩恵を請い、多くの人々に善行を施したあなたは、今や自らに災いを招こうとしている。お願いだ――私の助言に耳を傾けてほしい――王の命令に従い、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、あなたはかつての地位に復帰し、かつての栄光に浴することになるだろう。

聖セルギイは彼にこう答えた：

――一時的な名誉や栄光は儚いものであり、一時的な不名誉の後には永遠の栄光が待っている。私にとって、この世の不名誉など何の意味も持たない。私は一時的な栄光を求めない。なぜなら、私の救い主から、天の栄光における真の、そして永遠の名誉を授かることを望んでいるからだ。　あなたは、私がかつてあなたに施した恩恵――すなわち、この世の王に請願して、あなたにこれほど偉大な位階を与えたこと――を覚えているだろう。　今、あなたに告げよう――私の言葉に耳を傾け、真理を知った上で、あなたの偽りの神々を捨て、私と共に天の神、永遠の王を礼拝しなさい。そうすれば、私はマクシミアヌスから得たものよりもさらに多くの恵みを、神の御前であなたのために取り成すことを約束する。

そこでアンティオコスは、彼をキリストから引き離し、王の意志に従わせることはできないと悟ると、こう言った。

「セルギウスよ、お前は私に、お前のすべての恩恵を忘れさせ、お前を激しい苦痛にさらそうとしているのだ。」

セルギウスはこう答えた。

「好きにしろ。私にはキリストという助け手がおられる。キリストはかつてこう言われた。『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない』。今、お前も私の体を苦しめる権威を持っているが、私の魂に対しては、お前にも、お前の父であるサタンにも、何の権威もないのだ。」

その後、アンティオコスは激怒してこう言った。

「私の寛容さが、お前をますます傲慢にしているようだ」と言い、靴底に鋭く長い釘が打ち込まれた鉄のブーツを履かせるよう命じた。その釘は聖人の足を貫いた。　そのような靴を履かせたまま、アンティオコスはセルギオスを自分の戦車の前に引きずらせ、自身はテトラピルギオス[6872]へと向かい、そこからロザフ[6873]へと向かうことになっていた。

このような苦難に耐えながら、聖人は道中で次のように詠んだ。*「私は主を堅く信頼した。主は私に耳を傾け、私の叫びを聞いてくださった。主は私を恐ろしい穴から、ぬかるんだ沼地から引き上げ、私の足を岩の上に置き、私の歩みを確かなものにしてくださった」*（詩編39:2–3）。

彼らがスーラから二十ヴェルスタ離れたテトラピルギイの町に到着すると、殉教者は牢獄へと連行された。そこへ向かう道中、彼は次のように詠んだ。*「私と共にいた平和な者でさえ、私が頼りにしていた者でさえ、私のパンを食べていた者でさえ、私に対して裏切りを働いた。　主よ、どうか私を憐れみ、私を立ち上がらせてください。そうすれば、私は彼らに報いてやります」*（詩編40:10–11）。

夜、牢獄で殉教者が祈っていると、主の天使が現れ、彼の傷を癒やした。　翌日、アンティオコスは聖セルギウスを牢屋から連れ出すよう命じた。彼は、痛みで一歩も歩けないだろうと考えてい

[6872] テトラピルギウス――エウフラテス川近くの、スラとロザフォアの間に位置する都市。

[6873] ロザフ、あるいはレザフは、後に当地に建立された聖殉教者セルギウスに捧げられた有名な修道院にちなんでセルギオポリスと改名された都市であり、スラから6ヴェルスタ離れた場所に位置していた。

たのだ。しかし、遠くから彼がまるで完全に健康な人のように、少しも足を引きずることなく歩いているのを見て、拷問官は恐怖に駆られ、こう言った。

「まことに、この男は魔術師に違いない。これほどの拷問を受けた後、どうして足を引きずらずに歩けるというのか？　まるで、かつて足を痛めたことなど一度もないかのようだ。」

その後、アンティオコスは殉教者に同じ長靴を履かせ、ロザファまで先導するよう命じた。そこまでは、スーラという町から70スタディオン離れていた。　そこで、裁判の場に上がったアンティオコスは、聖セルギウスに偶像への礼拝を強要したが、キリストへの信仰を彼から引き剥がすことはできず、殉教者に死刑を宣告した。聖人が城の外の処刑場へと連行されると、彼は祈りの時間を求めた。　祈りの最中、彼は天から天上の住まいに招く声を聞き、喜びをもって剣の下に頭を差し出し、息を引き取った。その遺体は、その場にてキリスト教徒たちによって埋葬された。

しばらくして、スーラのキリスト教徒たちは、密かにロザファから聖人の遺体を運び出し、自分たちの街へ移すことに合意した。彼らが夜、墓所に近づいたとき、棺から天にまで届くほどの高さの火の柱が現れた。　ロザファに住む兵士たちの中には、真夜中に街全体を照らす炎の柱を目撃し、武装してその場所へ向かった者もいた。彼らは、その炎の現象を見て恐怖に震えるスールの市民たちを目撃した。まもなく、その奇跡的な炎の柱は消え去った。　その後、スールの市民たちは、聖セルギイが自らの血を流し、キリストのために魂を捧げたその場所を離れたくないと望んでいることを悟った。殉教者を称えて、彼らはまさにその場所にのみ、見事な石造りの墓を建立した。キリスト教が広まるにつれ、ロザフェの町には聖殉教者セルギイの名を冠した教会が建てられた。　近隣の都市から十五人の司教が集まり、聖殉教者の朽ちることなく芳香を放つ聖遺物を、新しく建てられた教会へ厳かに移し、彼の死の日である10月7日を記念日として祝うことを定めた。 どちらの場所でも――聖殉教者セルギイの聖遺物が安置された教会においても、彼が息を引き取り埋葬された場所においても――多くの悪霊に取りつかれた者や病める人々が、その病から癒やされた[6874]。

特筆すべきは、毎年、聖人の記念日に、野獣たちがあたかも何らかの掟に従うかのように、周辺の荒野から現れ、聖殉教者が最初に埋葬された場所に集まってきたことである。　その間、彼らの野性的な気性は子羊のような柔和さに変わり、人々にも家畜にも襲いかかることはなく、静かに聖地を回り、再び自分たちの荒野へと戻っていった。こうして神は御自身の聖人をこれほどまでに栄光に輝かせ、人々だけでなく、獣たちにもあたかもその記念を祝うよう促されたのである。

聖セルギイの祈りによって、主が、かつてこれらの野生の獣たちの凶暴さを鎮められたように、私たちの敵の怒りも鎮めてくださいますように――御自身の栄光のために、永遠に――アーメン。

[6874] 聖殉教者セルギウスとバッカスの記念は、古くから東方全域で深く崇敬されており、多くの人々が彼らの聖遺物を巡る敬虔な巡礼を行っていた。 殉教者セルギウスを称える毎年恒例の祝祭については、5世紀初頭からすでに知られている。同世紀、イェラポリスの司教アレクサンドルは、これらの殉教者に敬意を表して壮麗な教会を建立した。　彼らの尊い、朽ちることのない頭部は、しばらくの間コンスタンティノープルに保管されており、そこでロシアの巡礼者たち――修道士アントニー（1200年）やステファン・ノヴゴロデツ（1350年頃）――がそれを見ました。　ビザンツ帝国のユスティニアヌス大帝（527–565年）は、 ロザファを要塞化した。そこは聖セルギイが殉教し、その聖遺骨が安置されていた場所である。また、治世の初期には、コンスタンティノープルの宮殿の近くに、聖セルギイと聖バッカスに捧げる壮麗な教会を建立した。これは、即位前から彼を牢獄から救い出してくれた両聖人への感謝の表れであった。ペルシャ王ホズロイ（532–579年）が、すでにセルギオポリと改名されていたロザファに迫ると、この街に立てこもった少数の住民たちは、街を容赦してもらうために、銀で縁取られた細長い聖遺物箱に納められていた聖殉教者セルギイの聖遺物を除き、すべての貴重品を彼に差し出した。　これを知ったホズロイは全軍を率いて城へ進軍したが、城壁の上には盾を携え、防衛の準備を整えた数え切れないほどの戦士たちが現れた。ホズロイは、これが殉教者による奇跡であると悟り、恐怖に駆られて城から撤退した。 6世紀の著名なフランク人の年代記作家、グリゴリウス・トゥルスキウスは、自身の時代、西欧において、この聖人が、信仰をもって彼のもとに駆けつけた人々に対して示した数多くの奇跡と恩恵により、深く崇敬されていたと記している。

コンダク、第2声調:

知恵をもって敵に勇敢に立ち向かい、彼らのあらゆる諂いを打ち砕き、天より勝利を受け取った、称賛に値する殉教者たちは、心を一つにして叫びました。「神と共にいることは、善であり、美しいことである。」

聖殉教者ユリアヌスとケサリウスの記念日

記念日：10月7日

ローマ皇帝クラウディウスの治世下、彼は自身の母――密かにキリスト教を信仰していた――を殺害し、それ以来キリスト教徒を容赦なく迫害していたが、ローマ帝国に属する都市タルラキニウム（[6875]）に、ある助祭ケサリウスがやって来た。偶像への生贄が捧げられているのを見て、彼は偶像に唾を吐きかけ、それらを打ち砕いた。 このため、彼は牢獄に投獄され、そこで3日間、飢えに苦しめられた。その後、両手を後ろ手に縛られ、兵士たちに市長の戦車の前に引きずられてアポロ神殿へと連行された。神殿に近づいたとき、聖人は祈りを捧げると、たちまち神殿は基礎まで崩れ落ち、祭司たちやそこにいた者たち全員を押しつぶした。

これを見たイパティクス・[6876]・レオティオスは、聖人の前にひざまずき、キリストを信じた。 キリスト教の長老ユリアンは、人々の前で彼に洗礼を授け、聖体拝領をさせた。すると直ちに、聖人の祈りによって、レオンティウスは息を引き取った。ロクソリイの総督はこれを見て、聖人たちを袋に詰め、海に投げ込むよう命じた。

すると、聖人たちは彼にこう言った。

「我々は海に投げ込まれるだろうが、お前もまた凶暴な蛇に襲われ、凄惨な死を遂げるだろう。」

その二日後、ロクソリウスが海岸の砂浜を歩いていると、巨大な蛇が彼に巻きつき、全身を粉砕した。ロクソリウスは即座に息を引き取り、全身が膨れ上がったまま横たわり、通りかかる者すべてにとって恐ろしい光景を呈していた。

一方、聖人たちの遺体は神の力によって波に運ばれ、岸に打ち上げられた。 キリスト教徒たちは、それらを敬意をもって迎え入れ、町の近くに埋葬した。しかし、イパティクスの息子レオティオスは、聖人たちの尊い首を切り落とし、川に投げ込んだ。そこで、カプア市の司祭である（[6877] クワルト）は、神の天使の導きにより、聖人たちの遺骸を回収し、神の栄光のために特別な場所に安置した[6878]。

聖殉教者ポリクロニオスの記念日

記念日：10月7日

[6875] タルラキニウム――現在のテラチーナ――は、ローマの南、そこから92ヴェルスタ離れたイタリアの海辺の都市である。

[6876] この名称は、「イパトス」すなわち皇帝の総督に仕える者たちを指していた。ここで言及されているレオティオスは、おそらく、当時皇帝の総督であったその国の領主、すなわちロクソリアの統治者に仕えていたものと思われる。

[6877] カプア――南イタリア、ヴォルトゥルノ川の左岸に位置する都市兼要塞であり、イタリアの古代地方であるカンパニアの主要都市であり、イタリア全土でも最も古い都市の一つである。

[6878] 聖殉教者ケサリウスの聖遺骨はローマの「主の十字架教会」に安置されており、その尊い右手は「至聖所」に安置されている。

聖ポリクロニオスは、ガンファニダ地方[6879] の出身で、農夫ヴァルダニアの息子であった。父は少年に対し、キリストの信仰の真理、聖書の読み方、そしてそこに記された教えに従うことを教えた。　干ばつの際、水源が遠かったため、少年ポリクロニオスの祈りによって、その地に泉が湧き出た。彼はその節制と敬虔さによって、奇跡を行う賜物に恵まれたのである。　やがて成人すると、彼はブドウ栽培に従事し、コンスタンティノープルへ赴いてそこで雇われ、他の人々と同様に働きながら、2、3日に一度、わずかな水とともに食事を摂っていた。　彼の雇い主はこの神の僕に驚き、その美徳に心を打たれ、多額の金を送ると、こう伝えるよう命じた。

「家に帰って、私のために祈ってくれ。」

ポリクロニオスは金を受け取り、家に帰ると多くの奇跡を起こし、その金で教会を建てた。その後、彼は第1回全地公会議に朗読者として出席し、やがて司祭の位にも就いた。 コンスタンティヌス大帝の死後、アリウス派の異端が勢いを増した際、彼はある日、聖なる祭壇のそばで異端者たちに捕らえられた。彼らは彼に飛びかかり、刺し殺し、剣で切り刻んだ[6880] 。

我らの尊き父セルギイ・ヌロムスキー、ヴォロゴダおよびオブノルスクの奇跡行者の生涯

記念日：10月7日

聖セルギイは、聖アトス山で修道生活を始めました[6881] 。そこから、彼は偉大なるロシア帝国のモスクワ公国へと渡り、ラドネジ地方に定住しました[6882] 。そして、偉大なるロシアの光である、奇跡行者セルギイ・ラドネジスキーの修道院を訪れました[6883] 。 当時、聖セルギイはまだ存命であり、まるで宇宙全体を照らす太陽のように輝き、善行をもって世を啓蒙し、神について兄弟たちを導いていた。そして、ヌロムの聖セルギイは、偉大なるロシアの光であるセルギイの指導の下、　で長い間過ごした。彼はセルギイの教えに耳を傾け、その聖なる生き方に倣った。　そこで彼は多くの修行に励み、数多くの善行を成し遂げたため、ラドネジの聖人にして奇跡行者である尊者自身も、彼の神への熱意を見て驚き、霊的な改善について彼と語り合うことを好んだ。　一方、聖セルギイ・ヌロム

[6879] ガンファニダ地方は、コンスタンティノープルと同じ教区、すなわち管区に属していた。

[6880] 聖ポリクロニオスは、4世紀半ば頃、コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウス2世（337–362年）の治世下で殉教した。同王はアリウス派を庇護し、正統派を迫害していた。

[6881] アトス山は、ヨーロッパ南部に位置する、エーゲ海に突き出た細長い山岳半島である。そこでの修道生活は古くから存在していたが、シリアやパレスチナよりは遅い時期に始まった。　古くからアトス山には、いくつかのスラブ系修道院が存在していた（ヒランダル修道院——12世紀にセルビア王シメオンとその息子サヴヴァによって設立されたもの、聖パンテレイモン修道院——11世紀にロシア人によって設立されたものなど）。アトス山の修道院は、スラブ人に対する霊的啓蒙の中心地としての役割を果たした。　そこから、教養と修道生活に優れた修道士たちがスラブ人の元へ赴き、またそこで書籍が写本され、ギリシャ語からスラブ語へと翻訳された。ルーシとアトス山の結びつきは、ルーシ修道生活の創始者である聖アントニオス・ペチェルスキー（1073年）の時代から、非常に早くに始まっていた。　ルーシ人によるアフォンへの巡礼と滞在は、11世紀から現在に至るまで、あらゆる時代を通じて続いた。特に15世紀以降、アフォンとの交流はさらに活発化し、この時期には、アフォンに関する最初のルーシ人巡礼者の伝承も残されている。　東方正教世界において最も崇敬される聖地の一つとして、アフォン山には毎年、ロシア、バルカン半島、そしてトルコのアジア領から数千人の巡礼者が訪れている。現在、アフォン山には20の大きな修道院、数か所のスキート、そして700に及ぶ個々の修道室が点在している。

[6882] 古代のラドネジの跡地には、現在ゴロディシュチェまたはゴロドクという村があり、モスクワとトロイツェ＝セルギエフ修道院の間に位置し、同修道院から12ヴェルスタの距離にある。（世紀初頭の注記）。

[6883] 修道者たちは、およそ14世紀半ばに、聖セルギイ・ラドネジスキーのもとに集まり始めた。聖セルギイは1392年9月25日に逝去した。

スキーも、この偉大な聖人の労苦と功績を見て、同様にそれらに倣おうと努め、徳において彼に劣ることはなかった。聖セルギイ・ヌロムスキーは、これらすべてを、実り豊かな大地が種を受け入れ、雨水を吸い込むように、自らの心に受け入れ、神に百倍の果実をもたらした。　このゆえに、彼はすべての人から愛され、尊敬された。しかし、彼は世俗の名声を好まず、そこに魂への害を見出し、預言者ダビデの言葉を思い起こしながら、いかにして人々から遠ざかるかを考え始めた。*「私は遠くへ去り、荒野にとどまりたい。嵐や暴風から急いで身を隠したい」*（詩篇54:8–9）。このように絶えず思索を重ねた末、彼は師であるセルギイのもとを訪れ、地にひれ伏して礼拝し、頬を涙で濡らしながら、自らの思いを打ち明け、荒野へ退くための祝福を請うた。　聖セルギイ・ラドネジスキーは、その賢明な眼差しをもって、彼が聖霊に満たされた器であり、修道士たちの導き手となり、キリストの群れにとって良き羊飼いとなることを見抜き、彼を祝福し、荒野でどのように過ごすべきかについて教えを授け、次のように言って彼を平穏のうちに送り出した。

「行け、わが子よ。神が汝と共におられる。」

聖者から祝福を受けた後、至福のセルギイ・ヌロムスキーは喜び、誰にも知られぬよう密かに荒野へと向かった。彼は、まるで鳥が自分の巣へと飛ぶかのように、魂と肉体以外何も持たずに、神が示す場所を探し求めた。　北方の地へと向かい、彼は原生林、森、苔、沼地で覆われた地域にたどり着いた。そこで彼は、オブノル地区のヌルメ川沿い[6884]に場所を見つけ、後にそこに修道院を建立した。同じ地域には、偉大なるパヴェル、オブノルスクの奇跡行者[6885]も滞在していた。彼は当時、まだ同じヌルメ川沿いの内なる荒野で隠遁生活を送っており、キリストにおける修道院や兄弟団はまだ持っていなかった。

その場所に到着して周囲を見回すと、聖セルギイはその地を大いに愛し、神が彼の祈りを軽んじることなく、この場所に導いてくださったことに神に感謝を捧げた。　そして彼は預言者ダビデの言葉をもってこう言った。*「これはわたしの永遠の安息の場所である。わたしはここに住む。わたしはこれを望んだからである」*（詩編131:14）、さらに、*「主なる万軍の主よ、あなたの住まいはいかに望まれることか！　わが魂は、主の宮の庭を慕って渇ききっている。わが心とわが肉体は、生ける神に向かって喜び躍る。小鳥も住みかを見つけ、つばめも雛を置く巣を、あなたの祭壇のそばに見出す。力ある主よ、わが王、わが神よ！」*

「あなたの家に住む者たちは幸いである。彼らは絶えずあなたを賛美する。あなたに力を置き、その心の道が[あなたへと]向けられている人は幸いである。彼らは嘆きの谷を通り抜けるとき、そこに泉を開き、雨はその谷を祝福で覆う…… 万軍の主よ！　あなたに信頼を置く人は幸いである！」（詩編83:2–7, 13）。

そして、聖人は全き憐れみ深い神にこう祈り始めた。「全能の主よ、私たちの父なる神よ、イスラエルを奴隷の状態から、また三人の若者を火の炉から救い出された方（出エジプト記13:1–22、ダニエル書3:1–100）、この場所を顧み、祝福してください。 私を、この地で生涯を通じて御あなたに仕える者とならせてください。私は、御あなたの至聖なる御名が、私を通して今、そして常に、そして世々限りなく栄光を受けるように、永遠に御あなたに仕えるためにここに来たのです。アーメン」。

祈りを終えると、聖人はその場所に十字架を立て、礼拝堂と小さな小部屋を建てた。そして、この聖人は長年にわたりここに留まり、多くの修行に励んだ。　神に喜ばれるよう、彼は天使のような生活を送り、徹夜祈祷と不眠によって肉体を死なせ、祈りと断食、そして徳によって敵に打ち勝っ

[6884] ヌルマ川（ヴォロゴダ県グリアゾヴェツ郡）は、ヴォロゴダ県とヤロスラヴリ県を流れ、コストロマ川に注ぐオブノラ川の支流である。

[6885] 聖パウロ・オブノルスキーは、1429年1月10日に帰天した。

た。こうして彼は大きな忍耐をもって労苦し、荒野で悪霊や無知な人々から加えられる苦難に耐え抜いた。　聖人がこのような修行に励み、主に仕えていたとき、古来より人類を憎む悪魔は、その徳を妬み、彼に対して陰謀を企て、無知で狂気じみた悪意ある人々を聖人に対して扇動し、彼らを通じて聖人を脅かし、その地から追い出そうとした。　しかし、常に御自分のしもべたちを助ける用意のある神は、この聖人を見捨てなかった。

ある日、聖人は邪悪で狂暴な強盗たちに襲われた。彼らは聖人を捕らえると、容赦なく殴りつけ、多くの傷を負わせ、聖人は息絶えそうになった。かろうじて息がある状態で彼を残し、あの邪悪な強盗たちは立ち去った。聖人は、傷からかろうじて回復すると、両手を天に向け、涙ながらにこう言った。

「主よ、至善なる王よ、私があなたのためにこの荒野へ退いたゆえに受けた傷を、天よりご覧ください。あなたの選ばれた者たちと共に苦難を分かち合い、あなたの聖なる御名のゆえにこの身に傷を負うことを許してくださったことに感謝いたします。どうか、あなたの聖徒たちの運命を私に与えてください。　ご覧ください、私の敵は増え続け、不当な憎しみをもって私を憎んでいます。私の魂を守り、救い出してください。私が恥をかくことのないように。私はあなたに信頼を置いているからです。

この祈りによって、聖人は苦しみから安らぎを感じ、キリストへの愛ゆえに自らの体に傷を負うことを許されたことを主を感謝しました。そして彼は心の中でこう言いました。

「たとえ敵が闇の策略を私に対して仕掛けてきたとしても、この場所を離れることはない。私はこの場所で死にたい。なぜなら、キリストを求めて、私はここに来たのだから。」

聖人はこのように語り、主の御言葉によって自らを奮い立たせた。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきである。　二羽の小鳥がアサリウスで売られてはいないか。そのうちのどれ一羽も、あなたがたの父の御心なしには、地に落ちることはない。あなたがたの頭の毛さえも、すべて数えられている。だから恐れてはならない。あなたがたは、多くの小鳥よりもはるかに尊いのだ。最後まで耐え忍ぶ者は救われる」*（マタイ10:28–31, 22）。

これらすべてを心に留め、聖人はキリストの良き戦士として心を強め、武装し、その霊をもって目に見えない霊の軍勢に立ち向かった。そして、天の王の報いを期待して、偉大な功績を目指して、労苦に労苦を重ね、断食に断食を重ね、祈りに祈りを重ねた。

しかし、悪の首領である悪魔は、再び獅子のように聖人に向かって咆哮し、多くの試練をもってその魂を苦しめた。　しかし、悪意ある悪魔や不義な人々によるこれらすべての試練を、聖人は喜びをもって耐え忍び、その魂は堅固なダイヤモンドのように揺るぎなかった[6886]。自らの屈辱を目の当たりにした狡猾な悪魔は、再び聖人に対して悪辣で邪悪な強盗たちを煽り立て、彼らを通じてこの地で聖人に苦痛に満ちた死をもたらそうとした。

そしてある夜、邪悪な強盗たちが再び聖人に襲いかかった。その時、聖人は独房に立ち、神に夜の祈りを捧げていた。　しかし、邪悪で凶暴な山賊たちは、まるで野獣のように彼に襲いかかり、彼を小部屋から引きずり出し、狼のように引き裂こうとした。彼らの到来を耳にした聖人は、目を神に向け、涙ながらにこう祈った。

「主よ、わが神よ、私を見捨てないでください。私から離れてはいけません。どうか耳を傾け、私を助け、私の魂を救ってください。」

[6886] アダマント（ダイヤモンド）とは、他の石を削り、切り裂くほどの強さを持ちながら、それによって自らに害を受けることのない石である。教会文献では、この名称は、信仰と気質の堅固さで名高い多くの教父や教会の教師たちに与えられている。

主は、預言者が言ったように、常に御自分のしもべたちを助ける用意をしておられる。*「見よ、主の御目は、主を畏れ、その恵みに信頼する者たちの上にある。主は彼らの魂を死から救い、飢饉の時には彼らを養ってくださる」*（詩編32:18–19）。

聖人が祈りの中で神に助けを求めたとき、たちまち邪悪な強盗たちは恐怖に襲われ、その邪悪な企てを実行に移すことをためらった。神への畏れが槍のように彼らの心を貫き、神の裁きを恐れて、彼らはその場から逃げ去り、二度とそこへ戻ることはなく、聖人に何の害も及ぼさなかった。　こうして、預言者ダビデの言葉が彼らに実現した。*「不義な者たちは剣を抜き、弓を引きしめ、貧しい者や困窮する者を打ち倒し、正しい道を歩む者を貫こうとする。しかし、彼らの剣は彼ら自身の心に突き刺さり、彼らの弓は砕け散り、彼らは突然、傷つけられるであろう」*（詩編36:14–15、63:8）。

これらすべては、聖人の祈りによって成し遂げられたのである。なぜなら、聖人の祈りは、神の憐れみと、その助け――燃え盛る火と恐怖――を地上に引き寄せるからである。主は、御自分に逆らう者すべてを恐れさせ、目に見えない火で焼き尽くされるからである。　私たちはこの聖なる父に現れた神の力と助けに驚嘆すべきである。主は御自分のしもべを、武器や軍勢によってではなく、御自分の力強い右の手と御腕によって救われたからである。祈りへの信頼という武器をもって、主は天から目に見えない勝利を授けられた。　この武器を身にまとって、すべての聖人たちは神の力を授かり、王国に打ち勝ち、獅子の口を封じ、火を消し、剣の刃を避け、弱き時に強くなり、敵の軍勢を退けた。これについて使徒は次のように述べている。*「私たちには何もないが、、すべてを持っている」*（IIコリント6:10）。彼らと同様に、この聖人にも驚嘆すべきである。彼は武器も力も持たず、ただ希望と祈りによって、自分に立ち向かった者たちすべてを打ち負かすことができたのである。というのも、あの凶暴な強盗たちは、聖人の住居に侵入した際、聖人を打ち負かすべく、手に致命的な武器を握っていたのに対し、聖人自身はそうしたものは何も持っておらず、ただ小さな数珠を手に握りしめ、心と口には涙に満ちた悔い改めと祈りを捧げていたからである。　そしてたちまち、彼は彼らとその武器を打ち負かした。聖人の祈りは勝利と克服となった。*「義人の熱心な祈りは大きな力を持つ。義人の魂は神の御手の中にあり、苦しみは彼らに触れることはない」*（ヤコブ5:16；箴言3:1）。

聖セルギイは、神の恵みが自分に宿っているのを見て、さらに大きな熱意をもって断食と祈りに身を捧げ、労苦に労苦を、炎に炎を、願いに願いを、熱意に熱意を重ねていった。　心の中で義人の将来の至福を思い起こしながら、彼は絶えず精進し、徹夜の祈りと断食によって肉体を死に至らしめ、その魂は常に天上のものに向けられていた。

その寛大さにおいて慈悲深い神は、この福者の祈りと労苦、そして徳に耳を傾けられた。　主は、この福者が人々の間で長く無名であり、まるで彼らの目から隠されているかのように知られずにいることを望まれたのではなく、むしろ、高みにそびえる堅固な城のように現れることを望まれ、主はこの福者をすべての人々に示し、まるでこれまで隠されていた灯火が灯されたかのように、彼を明らかにされた。　こうして主は、訪れる人々がその城を見、見つめる人々がその光を見ることができるように、聖人を万人に知らしめられた。そして、聖人の名声はロシアの全土に広まり、多くの人々が魂の救いを求めて彼のもとを訪れるようになり、中には肉体の必要を満たすための物資を捧げる者もいた。　多くの修道院から修道士たちが聖人のもとを訪れ、彼と共に暮らし、その行いを学びながら過ごした。　聖セルギイは、まるで神から遣わされたかのように、すべての人を喜びをもって迎え入れ、使徒の言葉*「私はすべての人にとって、すべての人となった。それは、せめて何人かでも救うためである」*（Iコリント9:22）に従い、慈愛に満ちた父のように皆の世話をした。　神の御加護により、聖人のもとに集う兄弟たちの数は40人にまで増えたが、彼らには教会も独房もなかった。そこで聖人は、教会と独房の建設を始めた。そして、全き慈悲の救い主の名に因み、その尊き命を与える十字架の由来を記念して教会を建立し、独房を設け、修道院を整えた。

その頃、同じヌルメ川沿いの内陸の荒野で、私たちの偉大なる父パウロが、沈黙と孤独に満ちた生活を送っていた。彼は、偉大なるロシアの光である聖セルギイのあの栄光あるラヴラからここへやって来たのである。ヌルメの奇跡行者である聖セルギイも、同じ場所から来ていた。　聖パウロは、まだラドネジの聖セルギイの指導下にあった頃、彼の神に関する教えを熱心に学んでいた。そして、ラドネジの聖セルギイの祝福を受けて、偉大なるパウロはこの荒野へと赴き、後にここに修道院を設立した。 一方、ヌロムの至福のセルギイの修道院は、偉大なるパウロの住居から約4ヴェルストの距離にありました。ヌロムの聖なる奇跡行者たちはしばしば互いを訪ね合い、あらゆる霊的な修養について語り合い、互いの霊的な功業を励まし合いました。　さらに、尊者パウロは、至福のセルギイの聖なる御手から、私たちの神であるキリストの聖なる命を与える秘跡、すなわち御体と御血の聖体拝領を受け、至福のセルギイに自らのすべての思いを開き、尊者セルギイは偉大なるパウロの霊的父であった。　それゆえ、あらゆる事柄において、彼らは唯一の主のしもべであり、従者である者として、互いに自分の思いを語り合った。荒野における試練や悪魔の脅威について互いに相談し合い、彼らは苦難を分かち合い、神の御霊と御言葉によって強められ、将来の祝福への希望に支えられていた[6887]。

ある日、聖パウロは荒野を散策しようと、自分の小部屋を出た。彼が戻ってみると、小部屋が隅々までめちゃくちゃに荒らされていた。これを見て、私たちの偉大なる父パウロは、人間として恐怖に駆られた。悲しみと恐怖に苛まれながら、彼は聖セルギイのもとへ行き、起こった出来事を語った。しかし、聖セルギイはこれを悪魔の幻と見なし、こう言いました。

「行け、パウロ兄弟よ。お前の独房は破壊されていないのを見つけるだろう。」

そして、預言の言葉「*神は私たちの避難所であり、力である*」（詩篇45:2）を彼に思い起こさせた。

案の定、偉大なるパウロは自分のところに戻ると、聖セルギウスが言った通り、自分の小部屋が無傷で無事なまま残っているのを見つけた。

ある日、聖セルギイは霊的な対話を求めて聖パウロのもとを訪れたが、彼は小部屋のそばに立ち、手から鳥たちに餌を与えているところだった。　多くの小鳥が聖者の頭や肩にとまり、その前には熊、狐、野ウサギといった獣たちが立っていた。このように、言葉を持たない生き物たちでさえ、この隠者への愛に引き寄せられていたのである。

多くの労苦と功績を経て、聖セルギイは深い老齢に達した。老いと労苦のせいで、彼は重い病に倒れ、長い間、完全に衰弱した状態に陥っていた。聖セルギイの病を知った偉大なるパウロは、彼がこの世の生活から永遠の生活へと移りゆく時が近いと考え、彼を見舞いに訪れた。　親友であり語り相手である彼を失うことに、パウロは涙を流し、彼に祝福と許しを請いました。最初は涙のせいで、二人は言葉を交わすことができませんでした。　やがて、嗚咽をこらえた聖パウロは、聖セルギイにこう語った。「私の住む荒野のある場所、山のふもと、ヌルメ川のほとりで、私は大いなる鐘の音を聞き、太陽の光よりも強く輝く、言葉では言い表せない光を見たのです。」　これを聞いた聖セルギイは、これを単なる出来事とは考えず、神の御業であると悟った。

「その場所には」と尊者サーギイは言った。「至聖なる三位一体の栄光のために修道院が建てられ、多くの人々がその場所で救われるだろう。」

こうして、聖人は預言した。その後、ヌロムの奇跡行者たちは涙ながらに互いに口づけを交わし、偉大なるパウロは自身の内なる荒野へと去っていった。　それ以来、彼は兄弟たちを受け入れ、

[6887] 聖パウロは聖セルギイを深く尊敬しており、彼が訪問した際には、自身の住居から3分の2以上の距離まで見送った。聖人たちが通常たどり着いた場所には、礼拝堂が建てられている。

修道院の建設を始めた[6888] 。鐘の音を聞き、光を見たのと同じ場所に、聖パウロは、ヌロムの奇跡行者セルギイの預言に従い、至聖なる命の源である三位一体の名を冠した教会を建立した。

やがて、重病と老衰により、至福のセルギイは完全に衰弱してしまった。死が近づいていることを悟り、神のもとへ旅立つことを予感した彼は、キリストに帰依するすべての兄弟たちを呼び寄せた。彼らがやって来て、父が最期の時を迎えようとしているのを見ると、涙に暮れ、彼の胸にすがりつきながらこう言った。

「私たちを置き去りにしないでください、慈愛に満ちた父よ。どうかもう少し私たちと一緒にいてください。」

すると、聖人は天を仰ぎ見て、彼らにこう言った。

「兄弟たちよ、私の地上の生涯の終わりが近づき、私もまた、すべての者が果たすべき肉体の義務を果たさねばなりません。これが主の御心なのです。子らよ、私はあなた方を神と聖母マリアにお委ねします。平和の神と、その聖なる御母が、世の終わりまであなた方と共にあり、あなた方を守り、御自身の愛の中に堅く立たせてくださいますように。 諸子よ、あなたがたは私の去りゆくことを悲しむことなく、神の愛にとどまり、その戒めを守り続けなさい。そして、主キリストの御言葉、*「わたしの戒めを受け入れ、それを守る者は、わたしを愛している」*（ヨハネ14:21）を、畏れと震えをもって心に留めなさい。 神への畏れをもってあなたがたの心を守りなさい。そうすれば、神はあなたがたをあらゆる善い行いに導いてくださいます。なぜなら、*「知恵の初めは主を畏れること」*だからです（箴言1:7）。互いに謙遜をもって飾り合い、偽りの言葉を避け、それぞれが兄弟に真実を語り、中傷を憎み、敵意を避けなさい。 しかし、もしあなたがたのうち誰かが心に怒りを抱くことがあれば、愛をもってその人を諭しなさい。なぜなら、*「怒りのままに日が暮れてはならない」*（エペソ4:26）と書かれているからです。指導者たちに従いなさい。彼らはあなたがたの魂を見守っているからであり、あなたがたについて神に答えなければならないからです。怠けずに教会の礼拝を執り行いなさい。もしこのように生きるなら、あなたがたは幸いである。

父からのこの最後の教えを聞き、兄弟たちは目から涙の川を流した。そして、尊者（聖人）がすっかり衰弱し、最期の息を引き取ろうとしたとき、彼は私たちの神であるキリストの聖体と聖血の聖餐に与った。聖餐に与った後、彼は両手を天に向け、密かな祈りを捧げた。 祈りを終えると、聖セルギイは胸の上で両手を十字架の形に組み、主のもとへその霊を委ねた。こうして聖人は永遠の命へと移っていった。 そして、神のもとへ召された後の彼の顔は明るく輝いており、まるで死んだのではなく、眠りについているかのようであった。それは、彼の生涯が汚れなきものであったからである。師である聖セルギイが召されたのを見た弟子たちは、神について教えてくれた牧者であり師を失い、泣き崩れ、声をあげて嗚咽した。 ある者たちは、その寝台に身を寄せ、泣きながら聖なる遺体に口づけをし、まるで聖人の遺体から離れたくないかのように振る舞った。また、遠くに立って、感極まって尊者のお遺体をじっと見つめ、頬を涙で濡らしながら嗚咽する者たちもいた。 その聖なる遺骨を受け取った、涙に暮れる兄弟たちは、葬送の聖歌を歌い、ろうそくを灯しながら、それを頭の上に載せて教会へと運び、勤勉で聖なるその体 を、聖者自身が建立した「主の尊き命を与える聖十字架の起源」教会[6889] の近くに埋葬した。 尊者セルギイは、1421年10月7日、尊き殉教者セルギイとバッカスの記念日にこの世を去った。これこそが、この地における私たちの尊い父セルギイの労苦と忍耐であり、その苦難と改心であった。 聖人の生涯を尊び、その美徳に倣い、その労苦と神に捧げた聖なる生き様を心に刻みましょう。そうすれば、私たちは彼を通して、神への絶え間ない執り成しを得ることができるでしょう。

[6888] ヴォログダから60ヴェルスタ離れた場所にあった聖セルギイの修道院（1764年に閉鎖）は、ヌルマ川下流のパヴロフスカヤ修道院から4ヴェルスタの距離にありました。

[6889] 現在、同聖人の聖遺骨は教会に安置されている。

山の頂上に立つ町が隠れることはできず、燃える灯が誰の目にも留まらないということはあり得ない。聖人たちの美徳が、長い間、地中に埋もれたまま、覆い隠され、長年にわたり忘却の深淵に沈んでしまうこともあり得ない。なぜなら、主はそれらをすべての人々に明らかに示そうと望んでおられるからである。

この神からの賜物を、私たちの聖なる父セルギイも、その死後に授かるに至った。

聖人がこの世を去ってから何年も経った後、神の御計画により、次のような出来事が起こった。

ヌロム修道院には、ニキフォールという名の聖なる人物が住んでいた。ある夜、祈りの徹夜祷の後、彼は浅い眠りに落ち、聖セルギイが自分のところに来てこう言うのを見た。

「イグメンと修道者たちに、私の埋葬の場所を清めるよう伝えなさい。主は、その場所が知られず、放置されることを望んでおられないからだ。」

すると、ニキフォール兄弟は尋ねた。

「あなたはどなたですか、主よ？」

聖人は答えた。

「私は、この聖なる場所の長を務めていた、罪深いセルギイである。」

聖人は自分の埋葬場所も示した。

しかし、ニキフォールはこの幻を夢だと思い込み、修道院長には何も言わなかった。すると、聖人は二度目に彼に現れた。ニキフォールは二度目もその幻を無視した。聖人は三度目に彼に現れ、非難するように言った。

「もし私の言ったことを実行しなければ、あなたはサタンに罰せられることになるだろう。」

長老はこれにも耳を貸さず、再びその幻視を夢だと見なした。すると、彼は突然、全身が麻痺してしまった。修道院長と修道士たちは、彼の治癒を祈る祈りを捧げた。病状が少し回復すると、ニキフォールは自分に起こったことをすべて修道院長と修道士たちに語り、涙ながらに悔い改めた。彼は、聖人がどのように現れて、自分の埋葬場所を修道院長と修道士たちに伝えるよう命じたか、それを夢だと見なして従わなかったこと、聖人が二度、三度と現れて同じことを命じたこと、そして不従順のゆえにどのように罰せられたかを語った。　そして、ニキフォロスは聖人の尊い遺体が眠る場所を彼らに示した。修道院長と修道士たちはニキフォロスを聖セルギイの埋葬地へと連れて行った。するとそこで、ニキフォロスは聖人の祈りによって突然病から癒やされ、聖セルギイの修道院で、その棺の前で泣きながら生涯を閉じた。

修道院長と修道士たちは、ニキフォロスの指示に従い、聖人の棺が安置されていた場所をすぐに整えた。その棺は、教会の玄関の下にあったのである。　そして彼らは、聖人の棺の上に聖骸箱を安置し、墓所を設け、聖なるイコンや蝋燭で飾り立てた。それ以来、聖人の棺からは数多くの奇跡と癒しが起こった——悪霊に取りつかれた者は癒され、盲人は視力を取り戻し、足の不自由な者は再び歩けるようになり、あらゆる病に苦しむ者たちは安らぎを得た。　聖人の奇跡は数え切れないほどであった。尽きることのない泉が常に水を湧き出させるように、この聖人からも常に心身の病の癒しが湧き出ていた。そのすべての奇跡を語り尽くすことは誰にもできないが、ここではそのうちのいくつかを述べる。

レダム地方に住んでいた、イワンという名の、通称チュホリストフという男が、非常に重い病に倒れ、長い間、完全に衰弱した状態に陥っていた。　病床に臥せり、激しい苦痛に苛まれていたとき、突然、浅い眠りに落ちた。そして夢の中で、光り輝く老僧が彼の元を訪れ、こう言ったのを見た。

「イワンよ、なぜこれほど長い間、寝台に横たわり、激しい苦しみに苛まれているのか。今こそ、お前の時が来た。オブノラにある『全き慈悲の救い主』修道院へ行き、セルギイの棺の前で祈り

なさい。彼は神にあなたのために取り成し、あなたは健康を取り戻すだろう。しかし、そのためには、常に貞潔を守らなければならない。」

その男は目を覚まし、その幻を信じて、自分を「全き慈悲の救い主」修道院の聖人の墓へと連れて行くよう命じた。墓の前で祈りを捧げると、聖人の祈りによって病から回復し、喜びながら神を賛美しつつ、自宅へと戻った。

レジ・ヴォロチクに住むイシドールは、病床に伏していた。彼の顎は硬直しており、長年にわたり言葉を失い、体が麻痺していた。　神が聖セルギイを通じて人類に癒やしを与えておられるという話を耳にしたイシドールは、オブノラにある「全き慈悲の救い主」の聖セルギイの修道院へ連れて行かれるよう命じた。　聖者の棺の前で彼のために祈りが捧げられ、修道院長が聖福音書を読み始めた途端、病人の口が開き、まるでかつて口が利けなかったことなどなかったかのように話し始めた。祈祷式を終えると、病人に聖水を振りかけられた。すると直ちに、彼の全身に力が戻り、まるでその病に罹ったことなどなかったかのように回復した。彼は神を賛美し、神からそのような恵みを授けてくれた聖なる奇跡行者セルギイに感謝した。

ジノヴィイという名の、ベロゼレツ出身の男がいた。彼は正気を失い、その姿を見るだけで恐怖に襲われるほどになっていた。彼は「全き慈悲の救い主」と聖セルギイの修道院に連れて来られ、彼のために祈りの儀式が執り行われた。その時、食堂の炉に火が灯されていた。　すると、祈りの歌が歌われている最中、この悪霊に取り憑かれた男は、付き添っていた人々の手から抜け出し、食堂へ駆け込み、燃え盛る炉の中に飛び込んだ。かろうじてそこから引きずり出され、別の部屋へ連れて行かれた。そこで、その病人は無数の悪霊を見た。　すると突然、聖なる長老が、聖母マリアの聖像を手に持ち、彼のもとへ近づいてきて、自分はセルギイだと名乗った。　悪霊たちは、聖セルギイが聖母マリアの聖像を手にしているのを見ると、たちまち皆恐怖に駆られ、煙のように消え去った。そのうちのいくつかは荒野の森へ、またあるものはその教会の土台の下へ、さらに病人に見えたところでは、隙間の中へ消えていった。そしてそれ以来、その憑かれた男は聖人の祈りによって癒やされた。

また、ラメンスキー村に住むマトローナという名の女性も、正気を失ってしまった。　彼女の身内は、彼女を「全慈の救い主」修道院、尊者セルギイの墓のそばへと連れてきた。祈祷の儀式の後、彼女を鐘楼のそばに縛り付けた。すると、人類を憎む者たち、すなわち悪霊たちが、犬や猫の姿をとって彼女の元へやって来て、彼女の名前を呼び、こう言った。

「ここから立ち去れ。お前は自由だ。」

彼女が修道院を出ると、すぐに悪魔たちは彼女に罠を仕掛け始めた。人間の姿をとって彼女に近づき、沼地のある藪の中へ行くよう指示した。　しかし、寛大なる主は、罪人の死を望まず、むしろ彼を真の悟りへと導こうとされ、御自身の被造物が邪悪な背教者たる悪魔たちによって滅びゆくのをご覧になり、憐れみ深く、この女性を赦そうと望まれた。預言者がこう語った通りである。*「主の怒りは永遠には続かない」*（詩編102:9）。

そこで、主は、御自身の御寵愛を受ける聖者セルギイをさらに称えようと、御自身の神聖な御手配によって次のような出来事を起こされた。　この女性が、悪意ある悪魔たちに命じられた通り、深い森へと入っていったとき、突然、見事な白髪に飾られた聖なる長老が彼女の前に現れた。彼は自らをセルギイと名乗り、彼女の名を呼んでこう言った。

「どこへ行くのか、女よ。引き返して、私の墓へ行きなさい。今向かっている場所へは行かないで。そこへは悪魔たちがあなたを導いているのだ。」

そう言うと、聖人は姿を消した。女性はたちまち正気を取り戻し、聖人の訪問と悪魔たちの冒涜に気づき、聖人の墓へと向かった。そこで彼女は完全に健康を取り戻し、喜びながら家へと帰り、神を賛美し、奇跡を行う聖人セルギイに感謝した。

ある司祭が、聖セルギイの修道院から40ヴェルスタ離れたところに住んでいた。この司祭には、パラスケヴァという名の妻がいたが、彼女は全身の麻痺に苦しんでいた。　彼女はその病に長い間

苦しめられていた。ある夜、激しい苦痛の末、彼女は浅い眠りに落ちた。すると、聖セルギイが杖を手に持って彼女の元へやって来て、こう言った。

「なぜそんなに激しく苦しんでいるのか、女よ。寝台から起き上がり、杖を手に取り、ヌルムにある聖セルギイの修道院へ、慈悲深き救い主のもとへ行け。そうすれば、恵みを受けるだろう。」

すると聖人は即座に彼女に健康を授け、病を癒やし、こう言った。

「さあ、あなたは元気になった。私の修道院へ行き、慈悲深い神に祈りを捧げなさい。」

そう言い終えると、彼は姿を消した。女性は眠りから覚めると、まるで一度も病気になったことがなかったかのように、完全に健康になったのを感じた。病から癒やされた彼女は、聖人の訪問と慈悲を忘れ、その命令を軽んじ、修道院の聖人の墓を訪れることもなく、　の祈りを捧げることもなかった。　しかし、聖セルギイはここでも彼女を怒ることはなく、慈悲深い主の慈悲深いしもべとして、主が罪深い女を憐れまれたように（ルカ7:37–47）、彼女を憐れんだ。彼は二度目に彼女の前に現れ、叱責の言葉を投げかけた。

「おお、女よ、なぜあなたは私の言葉を忘れ、私の命じられたこと――全き慈悲の救い主に祈りに行くこと――を果たさなかったのか。さあ、今すぐ行きなさい。何も恐れることはない。しかし、もし行かず、私の言うことを聞かなければ、さらに苦い目に遭うことになるだろう。」

目を覚ますと、彼女は聖人の言葉に従わなかったことを思い出し、恐怖に襲われて、　すぐに聖人の修道院へ向かい、その癒しの棺にひれ伏して、涙ながらに聖人に自分の不従順を許してくれるよう懇願し、棺の前で毎年修道院を訪れて祈りを捧げるという誓いを立て、神を賛美しながら自宅へと戻った。

オブノルスク地方のアレクシノ村に住むアナスタシアという名の女性は、自分の手を動かすことができず、その手はまるで他人のかのようであった。彼女はそれを動かすことも、回すこともできなかった。親族たちはアナスタシアを「全き慈悲の救い主」と聖セルギイの修道院へ連れて行った。そこで、慣例に従って彼女の回復を祈る祈祷会が執り行われた。祈りを終えると、彼女を聖者が自ら掘った井戸へと連れて行き、その聖なる井戸の水で彼女の顔を洗った。するとすぐに、その女性の手は癒やされ、もう一方の手と同じように力強くなった。神に感謝し、聖セルギイを称えながら、アナスタシアは自宅へと戻った[6890]

10月21日

10月8日（旧暦）

私たちの聖母ペラギアの生涯

記念日 10月8日

主は罪人の死を望まず、彼らが正しい生活へと立ち返るのを忍耐強く待っておられるという事実に対し、私たちは常に主に対して大いなる感謝を捧げなければならない。　「驚くべき出来事――イリオポリス（[6891]　）教会の助祭ヤコブはこう記している――が、この数日間に起こった。それゆえ

[6890] 1584年までに、同聖人の奇跡は80件も記録されていた。

[6891] パレスチナのイリオポリスは、パレスチナ北部のケレシリア、現在のトルコ・アジア側のシリア地方に位置し、遥か昔には異教の東方全体の中枢地であったが、4世紀にはキリスト教の拠点となり、独自の司教を擁していた。その後、この都市は徐々に荒廃していった。

、私はこのことを聖なる兄弟たちであるあなたがたに伝える。注意深く読み、大きな益を得てほしいと願うからである。」

至聖なるアンティオキアの大司教[6892] は、教会の必要に応じて、近隣の都市から八人の司教を自身の元へ招集しました。

その中には、神の聖なる人であり、私の司教であるノンヌスもいました。彼は並外れた人物で、かつてはタヴェンヌの修道院（[6893] ）で最も厳格な修道士でした。その徳高い生涯により、彼は の修道院から召され、[6894] の司教に任命されました。ノンヌスはイリオポリスからやって来て、私をも連れてきました。　司教たちが聖殉教者ユリアヌスの教会に集まると、ノンヌから説教を聞きたいと願い、皆、教会の入り口のそばに座った。ノンヌは直ちに、聴衆の益と救いのために口頭で説教を始めた。皆、その聖なる教えに敬虔に耳を傾けた。　その時、ある女性――異教徒であり、アンティオキア全土で知られる娼婦――が、高慢な態度で教会の入り口の前を通り過ぎた。彼女は高価な衣装を身にまとい、金や宝石、真珠で飾られ、美しい衣装を纏い、金の首飾りをした多くの乙女や若者たちに囲まれていた。　彼女の顔立ちは極めて美しく、世俗の若者たちはその美しさを眺めても飽きることがなかった。　私たちのそばを通り過ぎる際、彼女は空気を芳しい香りで満たした。頭も肩も露わにしたまま、あからさまに歩む彼女を見て、司教たちは目を閉じ、静かにため息をつきながら、まるで大罪を避けるかのように顔を背けた。　しかし、至福のノンヌは、彼女が視界から消えるまで、じっと長く彼女を見つめ続け、それから司教たちの方を向いて言った。「あの女性の美しさを、あなた方は気に入らなかったのですか？」

彼らは答えなかった。ノンヌは泣きながら頭を垂れ、手にしていたハンカチだけでなく、胸までも自分の涙で濡らした。心の底からため息をつきながら、彼は再び司教たちに尋ねた。「あなた方は、彼女の美しさに心を和ませなかったのですか？」

彼らは黙り込んだ。ノンヌは言った。「まことに、私は彼女から多くのことを学んだ。なぜなら、主はこの女を御自身の恐るべき裁きの座に立たせ、彼女を通じて私たちを裁かれるからだ。　皆さんはどうお考えでしょうか。彼女は自分の寝室で、体を洗い、着替え、様々な方法で身だしなみを整え、鏡に映る自分を見つめながら、一時的な崇拝者たちの目に最も美しく映ることに、すべての思考と配慮を注いでいた時間を、一体どれほど費やしたのでしょうか？　それなのに、私たちは、天使たちさえも仰ぎ見たいと願う、天にいらっしゃる不死の花婿をお持ちでありながら、汚され、裸にさ

[6892] シリアのアンティオキアは、シリアで最も古く、最も豊かな都市の一つであり、同国の首都である。オロンテス川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルスタほど離れた、レバノン山脈とタウロス山脈の間に位置している。紀元前300年にセレウコス・ニカトルによって建設され、その父アンティオコスにちなんで名付けられた。キリスト教教会にとって、アンティオキアはエルサレムに次ぐキリスト教の第二の中心地として、また異教徒から生まれたキリスト教諸教会の母として、特別な重要性を持ちます。　有名なアンティオキア教会は、当初、聖使徒パウロとバルナバによって設立され、その後、使徒ペトロによっても確固たるものとなった。　アンティオキアでは、異端（アリウス派やネストリウス派）の争乱の時期に、教会の牧者たちによる数多くの注目すべき公会議が開かれた。アンティオキア教会は古来より、アレクサンドリア、エルサレム、コンスタンティノープル、ローマの各教会と並び、特別な特権を享受してきた。　その指導者たちは総主教の称号と特権を有していたため、聖ペラギオスの伝記のこの箇所において言及されているのは、大司教ではなく総主教であると理解すべきである。現在、アンティオキアはトルコの支配下にあり、人口1万人足らずの小さく貧しい町となっている。

[6893] タヴェンヌ修道院は、最初の共同生活を行う修道院であった。 上（南）エジプトのタヴェンナにあり、その古都テーベの北、ナイル川のほとりに位置していた。西暦340年頃、聖パホミオス大聖人（記念日は5月15日）によって設立され、その規則はキリスト教世界へと急速に広まった。　タヴェンナ修道院は、古代キリスト教の修道生活史において極めて重要な位置を占め、パコミオスの修道規則の成功は極めて大きかったため、彼が亡くなる前から、タヴェンナとその周辺には約7000人の修道士が集まっていた。　その後、タヴェンナ――その名称は当初、ナイル川にある一つの島を指していたが、後に聖パホミオスとその弟子たちが定住した川沿いの周辺地域にも広まった――は、その修道院群で名声を博した。

[6894] ノンヌスは、448年に、罷免されたイヴァの後任として、エデスの司教座に選出された。しかし、451年のカルキドン公会議でイヴァがエデスの司教座に復帰すると、ノンヌスはイリオポールの司教座に就いた。

れ、恥に満ちたこの堕落した魂を飾ることには心を配らず、　悔い改めの涙でそれを洗い清め、美徳の美しさで身を包み、神の御目に喜ばれるものとなり、子羊の婚礼の時に恥をかかされ、拒絶されることのないようにしようと努めていないのか」[6895]。

このような訓戒を終えると、至福のノンヌスは、私という罪深い助祭を連れ、聖ユリアヌス教会に併設された、私たちに与えられた独房へと向かった。寝室に入ると、私の司教は顔を地面に伏せ、泣きながらこう言った。「主イエス・キリストよ！　罪深く、ふさわしくない私をお赦しください。この女性が身の飾り立てに費やした心遣いは、私の堕落した魂に対する私のあらゆる配慮をも凌駕してしまいました。あの女性は、儚い崇拝者たちを喜ばせるために、身を飾ることにこれほどまでの努力を注ぎましたが、私は、私の神であるあなたに喜ばれるよう努めることなく、怠惰と不注意の中に留まっているのです。　どのような顔をしてあなたを見つめればよいのでしょうか。どのような言葉であなたの御前で弁明すればよいのでしょうか。罪深い私よ、哀れな私よ！あなたの聖なる祭壇の前に立ちながら、私はあなたが私から求めておられるような心の美しさを、あなたに捧げてはいないのです。　あの女は、その虚栄心から、死すべき人々に気に入られようと約束し、彼らにこれほど麗しい姿を見せて、約束を果たしている。しかし、私は、私の神であるあなたに気に入られようと約束しながら、自分の怠惰ゆえに嘘をついてしまった。　私は裸である。なぜなら、あなたの戒めを守らなかったからだ。私は自分の行いに希望を置くのではなく、あなたの憐れみに希望を置き、そこから救いを得られることを願っている」。

聖ノンヌは、そうして長い間、泣きながら叫び続けた。彼はその女性のためにも祈り、こう言った。「主よ、御手の御業を滅ぼさないでください。そのような美しさが、淫らさや悪魔の支配の下にとどまることのないよう、彼女を御自身のもとへ導き、彼女を通して御名の聖なる御名が賛美されますように。何しろ、あなたにはすべてが可能なのですから。」

その日と夜が過ぎ、早課の後（その日は日曜日だった）、聖ノンヌは私にこう言った。「ヤコブ兄弟よ、聞いてほしい。昨夜、私はどんな夢を見たか。　私は聖なる祭壇の片隅に立っているように感じられた。すると、礼拝が行われている最中に、汚れにまみれ、空気を悪臭で満たしたある黒い鳩が現れた。それは私の周りを飛び回り、私はその悪臭に耐えられなかった。　すると、助祭が『洗礼志願者は退場せよ』と告げたとき、その鳩は飛び去り、私は典礼が終わるまでその姿を見なかった。しかし、典礼が終わり、私たちが教会から出ていくとき、私は突然、あの不浄な　鳩を再び目にした。それはまた私の周りを飛び回っていた。　私は手を伸ばしてその鳩を捕まえ、教会の玄関に置かれた水の中に投げ込んだ。そこでその鳩は、自らのすべての不浄を洗い流し、雪のように清らかで真っ白になって飛び立ち、空高く舞い上がると、見えなくなってしまった」。

この夢を私に語った後、至福のノンヌは私を連れて、他の司教たちと共に大聖堂へ向かった。そこで大司教に挨拶を捧げた後、彼らは神聖な礼拝を執り行った。聖なる礼拝の終わりに、アンティオキアの大司教は、至福のノンヌに民衆への説教を行うよう提案した。　ノンヌは口を開き、彼の中に宿る神の知恵の力によって人々を教えた。彼の言葉は、この世の洗練された知恵とは異なっていたが、単純で、誰にでも理解しやすく、力強いものであった。それは、聖霊が彼の口を通して語っていたからである。彼は最後の審判と、義人と罪人に対する将来の報いについて語った。　そこにいた者たちは皆、その言葉に深く心を打たれ、涙で地面を濡らした。

慈悲深い神の御心により、私たちが語っているこの娼婦――彼女はそれまで一度も教会に足を踏み入れたことがなく、自分の罪を振り返ったこともなかった――が、ちょうどその時にたまたま教会に立ち寄ることになった。　聖ノンヌの説教を耳にした彼女は、神への畏れを抱いた。自身の罪を

[6895]　この表現は、黙示録の神秘的な描写（黙示録19:7）から借用されたもので、終わりの時にサタン、反キリスト、およびその手下たちに対する最終的な勝利の後、勝利者キリストとその聖なる教会が結ばれる婚礼、すなわち祝典を象徴している。

省み、その罪に対する永遠の苦しみについての聖ノンヌの説教を聞くにつれ、彼女は絶望に陥り、目から涙の川を流し、心を砕かれ、泣き止むことができなかった。　その後、彼女は二人の使用人にこう言った。「ここで待っていて。説教をしていたあの聖なる人が出てきたら、彼の後を追い、どこに住んでいるのか調べて、戻ってきたら私に教えてくれ。」

使用人たちはその命令に従い、聖人が聖殉教者ユリアヌスの教会に住んでいることを女主人に報告した。そこで彼女は直ちに、自らの手で至福のノンへの次のような手紙を書いた。「キリストの聖なる弟子へ、罪人であり、悪魔の弟子である者より。　あなたの神について、御方が天を低くして地上に降りてこられたのは、義人のためではなく、罪人を救うためであると聞きました。　主は、徴税人たちと共に食事をなさるほどに、ご自身を低くされました[6896]。ケルビムたちでさえ直視することを許されない方が、罪人たちと交わり、娼婦たちと語り合われました（ルカ7:37–50；ヨハネ8:3–11など）。

「主よ！もしあなたが、私がキリスト教徒たちから聞いているように、真のキリストの僕であるならば、あなたの助けを借りて世界の救い主のもとへ行き、その至聖なる御顔を見たいと願う私を、拒むことはないでしょう」。

この手紙を読んだ聖ノンヌスは、彼女に次のように返事を書いた。「あなたがどのような人であろうとも、あなた自身も、あなたの意図も、神には知られている。それゆえ、お願いである。私のような不適格者を誘惑しないでほしい。私は罪深い神の僕に過ぎない。　もしあなたが本当に、私の神を信じ、私に会いたいという善意をお持ちなら――ここには私以外にも司教たちがいます。ですから、彼らと共に来てください。そうすれば私に会えます。しかし、二人きりで私に会うことはあってはなりません」。

この手紙を受け取り、読み終えた罪深い女性は、大きな喜びに満たされ、急いで聖ユリアヌスの教会へと向かい、至福のノンヌに自分の到着を知らせた。ノンヌは他の七人の司教たちを呼び集め、彼女に中に入るよう命じた。　聖なる司教たちの集まりの前に現れると、彼女は泣きながら地面にひれ伏し、聖ノンヌの足元にすがりつき、こう叫んだ。「お願いいたします、主よ。あなたの師である主イエス・キリストに倣い、私にあなたの恵みを示し、私をキリスト教徒にしてください。　私は罪の海であり、主よ、不義の深淵です。どうか洗礼によって私を清めてください」

集まったすべての司教や聖職者たちは、これほど深い悔い改めと信仰を持ってやってきた娼婦を見て、涙を流した。福者ノンは、彼女を自分の足元から立ち上がらせるのに苦労した。

「教会の規則によれば」と彼は言った。「彼女が再び同じ淫らな生活に戻らないよう、保証人なしに娼婦に洗礼を授けてはならないと定められているのだ」。

この答えを聞くと、彼女は再び聖人の足元にひれ伏し、かつて福音書に登場する罪深い女がキリストの足を洗ったように（ルカ7:37–38）、涙でその足を洗い、自分の髪で拭いた。

「もし私を洗礼に与えてくれなければ、あなたは私の魂について神に答えなければならない」と彼女は言った。「そのとき、神はあなたの手から私の魂を求められ、私の邪悪な行いをあなたの罪として記録されるでしょう。もし私を洗礼を受けさせずに拒むなら、　、あなたは私の淫らで不浄な生活が続く原因となるのです。　もし今、私を私の悪行から救い出さないなら、私はあなたの神から背を向け、偶像を拝むことになる。もし今、私をキリストの花嫁とせず、あなたの神のもとへ導かないなら、あなたは神やその聖徒たちとの分け前を得ることはないだろう」。

[6896] 「徴税人」とは、ユダヤ人から税金を徴収するためにローマ人によって任命された者たちのことである。彼らは通常、これらの税金の徴収権を請け負い、自分たちに最大の利益をもたらすためにあらゆる手段を講じた。　異教の権力の貪欲で横暴な代理人として、徴税人はユダヤ人からは祖国と主なる神に対する裏切り者、反逆者と見なされていた。「罪人」「異教徒」「徴税人」――彼らにとってはこれらはすべて同義であり、彼らと話すことは罪とされ、彼らと関わることは穢れと見なされていた。たとえ彼らの間にも善良で神を畏れる人々がいたとしてもである。　しかし、キリストは彼らをも忌み嫌うことはなく、そのためにしばしば非難にさらされた（マタイ11:19、ルカ5:30、7:34、15:1–2）。

そこにいた者たちは皆、これを聞き、このような淫婦がこれほどまでに神への渇望に燃え上がっているのを見て、人を愛する神を賛美した。　祝福されたノンヌスは直ちに、私、謙虚なヤコブを大司教のもとへ遣わし、このことを伝えるよう命じた。大司教は、この出来事を聞いて大いに喜び、私にこう言った。　「行って、あなたの司教にこう伝えなさい。『尊い父よ、この務めはあなたを待っていたのです。私はあなたをよく知っています。あなたは神の口そのものです。神の御言葉にある通り、*「もしあなたが無価値なものから貴重なものを引き出すなら、あなたはわたしの口となる」*からです』（エレミヤ15:19）。

そして、教会の第一のディアコニッサであったロマナ夫人を呼び寄せ[6897]、彼女を私と共に遣わした。

私たちが到着すると、ペラギアはまだ地上に横たわっており、至福のノンヌの足元にいた。ノンヌは、「立ちなさい、娘よ。洗礼を受ける前に、福音を聞かなければならない」と言いながら、かろうじて彼女を立ち上がらせようとしていた。

彼女は立ち上がり、司教は彼女にこう言った。

「まず、あなたの罪を告白しなさい。」

彼女は泣きながらこう答えた。

「もし自分の良心を省み始めれば、自分の中に善行は一つも見当たらないでしょう。ただ、私の罪は海の砂よりも数え切れないほど多く、私の汚れた行いを洗い流すには、海の水では足りないほどだと知っています。しかし、私はあなたの神に希望を置いています。神が私の不義の重荷を軽くし、憐れみ深く私を見守ってくださることを。」

司教は彼女に尋ねた。

「お名前は？」

彼女は答えた。

「両親は私をペラギエーと呼んでいましたが、アンティオキアの市民たちは、私の罪が私を飾っていたあの美しく高価な装いのゆえに、私をマルガリータと改名しました。[6898]」

そこで司教は彼女を公に宣言し、父と子と聖霊の名において洗礼を授け、聖油を塗って、罪の赦しのために、私たちの主イエス・キリストの至聖にして命を与える御体と御血を聖餐として与えた。　ペラギアの霊的な母は、ディアコニッサのロマナであった。彼女は洗礼槽からペラギアを受け取ると、私たちもそこにいたため、彼女を教会から洗礼候補者の待合室へと案内した。　至福のノンヌスは他の司教たちにこう言った。「兄弟たちよ、食事を共にしよう。そして、失われた羊が見つかったことを、神の御使いたちと共に喜び祝おう。霊的な慰めのために、オリーブ油とワインを添えた食事を味わおう」。

皆が集まり、新しく洗礼を受けた女性と共に食事を始めると、悪魔は誰の耳にも届くように叫び始めた。人間の声で泣きじゃくりながら、彼はこう言った。

「ああ、悲しや、悲しや、このおしゃべりな酒飲みめが、私にどれほどの苦しみを与えていることか！　邪悪な老いぼれめ！　お前が私から奪い取って洗礼を施した三万人のサラセン人では、ま

[6897] ディアコニッサ――ギリシャ語で「奉仕者」を意味する。これは教会における特別な奉仕者の身分を指す名称であり、その制度は使徒の時代にまで遡る（ローマ16:1；参照 1テモテ5:3–10）。 ディアコニッサの職には、年配（40歳以上）の未婚の女性または未亡人が選出された。彼女たちの職務は、改宗した女性や少女たちに、洗礼の際にどのように振る舞うべきかを指導すること、彼女たちの洗礼の際に司教を補佐すること、そして司教に代わって額以外の体の部位への塗油を行うこと、　礼拝中の女性たちの秩序と品行を監督し、病人、困窮者、投獄されている人々を訪問し、拘束されている懺悔者や殉教者に奉仕し、貧しい人々を助けることなどが挙げられる。　ディアコニッサに関しては、いくつかの教会法上の規定があり、具体的には、第4回全地公会議の規則第15条、第6回全地公会議の規則第14条、および聖バシレイオス大主教の規則第44条が挙げられる。

[6898] マルガリータは、ギリシャ語から訳すと「真珠」を意味する。

だ足りなかったのか？　お前が私から奪い取り、お前の神のもとへ導いたイリオポリスでは、まだ足りなかったのか――かつてそれは私のものだったし、そこに住む者たちは皆、私にひれ伏していたのだ！　[6899] そして今、私の最後の希望までも奪い去った。一体どうすればよいというのだ、頑固な老いぼれよ、　欺瞞者よ？　お前の策略にはもう耐えられない。お前が生まれたその日が呪われよ、邪悪な老いぼれめ！　お前の涙の洪水が私の住まいを濡らし、それを空っぽにしてしまったのだ[6900]。

こうして、悪魔は私たちがいた部屋の扉の前で泣き叫び、そこにいた者たちは皆、その声を聞いた。そして再び、新しく洗礼を受けた者に向かって、悪魔はこう言った：

「ペラギア様、あなたは私に何をしているのですか？　あなたはユダを真似ているのです。使徒としての栄光と名誉に包まれていた彼は、その主を裏切りましたが、あなたも私に対して同じことをしたのです。」

すると、司教は神の僕ペラギアに、十字の印で身を守るよう命じた。彼女は自分の顔にキリストの十字の印を描き、悪魔にこう言った。

「私をあなたから救い出してくださるイエス・キリストが、あなたを追い払ってくださいますように！」

彼女がそう言うと、悪魔はたちまち姿を消した。

二日後、ペラギアが彼女の霊的指導者であるロマナ夫人と共に眠っていた時、悪魔が現れて彼女を起こし、こう語りかけた。

「愛しき私の夫人、マルガリータよ、私はあなたにどんな悪事を働いたというのか？　私はあなたを金や銀で豊かにしなかったか？　私はあなたを貴重な宝石や装飾品、衣服で飾らなかったか？　お願いだ、教えてくれ。私があなたにどんな悲しみを与えたというのか？　あなたが望むことは何でも、すぐに叶えて差し上げる。ただ、私を見捨てたり、私を笑いものにはしないでほしい。

十字架の印で身を守りながら、ペラギアはこう答えた。

「私の主イエス・キリストよ、私をあなたの牙から救い出し、天の御殿の花嫁としてくださった方が、あなたを私から追い払ってくださいますように。」

すると、悪魔はたちまち姿を消した。

ペラギアはすぐに聖ロマーナを起こし、こう言った。

「私のために祈ってください、母よ。悪者が私を追い回しているのです。」

ロマーナは答えた。

– わが娘よ、彼を恐れてはならない。今や彼は、あなたの影さえも恐れ、震えているのだから。

洗礼を受けてから三日目、ペラギアはある使用人を呼び寄せ、こう言った。「私の家へ行き、金の宝箱の中身と、私の持ち物をすべて書き出し、すべてをここに持って来なさい」。

使用人は行って、命じられたとおりにした。　そこで、祝福されたペラギアは、聖ノンヌ司教を呼び寄せ、すべてを彼の手に委ねながら、こう言った。「これこそ、サタンが私に与えた富です。私はこれをあなたの聖なる手に委ねます。どうか、お望みのままに扱ってください。私は、私の主イエス・キリストの宝を求めなければなりません。」

[6899] 5世紀初頭、イリオポリスでは異教が依然としてかなり広く普及していたが、聖ノンヌスの尽力により、その影響力はここで完全に打ち砕かれた。――サラセン人とはアラブ人を指し、聖ノンヌスはイリオポリスの主教座に在任中、最大3万人のアラブ人をキリストへと改宗させた。

[6900] ここで「荒廃し、悪魔にとって失われた住まい」とは、ペラギウスを指している。 聖書の教えによれば、敬虔な人は聖霊の宮（Iコリント6:19）であるのと同様に、不敬虔な人は悪意の霊の宮である。それゆえ、悪魔はペラギアを、彼女がキリストに回心した後に自分にとって荒れ果てたかつての住まいと呼んでいるのである。

至福のノンヌ司教は、教会の会計係を呼び寄せ、皆の面前で、ペラギアから託された財宝を彼に渡し、こう言った。 「聖なる不可分なる三位一体の御名によって、あなたに誓わせる。この金の一切を、司教の邸宅にも、神の教会にも、あなたの家にも、あるいは聖職者の誰かの家にも持ち込んではならない。 むしろ、これらすべてを自らの手で孤児や貧しい者、弱者に配りなさい。そうすれば、悪によって集められたものが善のために費やされ、罪の富が義の富となるであろう。 もしこの誓いを破るならば、あなたの家には破門の宣告が下り、あなたの運命は、*「取れ、取れ、彼を十字架につけよ」*と叫んだ者たちと同じものとなるであろう。[6901]（ルカ23:21）。

神のしもべペラギアは、自分の生計を立てるためでさえ、財産を一切残さず、ディアコニッサのロマナに養われていた。彼女は、罪深い富からは何も享受しないと誓っていたからである。彼女はすべての使用人と女中を呼び集め、一人ひとりに十分な銀と金を与えて、自由の身として解放した。

「私はあなた方を一時的な奴隷状態から解放します」と彼女は彼らに言った。「あなた方もまた、罪に満ちたこの虚しい世の奴隷状態から自らを解放するよう努めてください。そうすれば、この世で共に生きた私たちが、至福の生活においても共に過ごすことができるようになるでしょう」。

そう言い終えると、ペラギアは使用人たちを解放した。

八日目、洗礼を受けた者たちの慣習に従い、洗礼の際に授かった白い衣を脱ぐべき日（その日は日曜日であった）に、ペラギアは極めて早く起き、洗礼の際に身に着けていた白い衣を脱ぎ、羊毛の衣を身にまとった。 聖ノンヌの古びた衣を手に取ると、彼女は誰にも知られぬよう密かにアンティオキアを去り、それ以来、彼女がどこにいるのかを知る者は誰もいなかった。助祭のロマーナは彼女を案じ、涙を流した。 しかし、全知の神は、ペラギアがエルサレムへ去ったことを至福のノンヌに明らかにし、ノンヌにこう言ってロマーナを慰めた。*「泣くな、わが娘よ。むしろ喜びなさい。ペラギアは、『取り去られることのない良い部分を選んだ』マリアのようである」*（ルカ10:42）。

数日後、私たちは大司教の許可を得て、イリオポリスに戻った。三年後、私はエルサレムへ行き、私たちの主イエス・キリストの聖なる復活を礼拝したいという願いを抱いた[6902] 。そこで、私は自分の司教である至福のノンヌに、私を行かせてくれるよう頼んだ。私を見送る際、彼はこう言った。「ヤコブ兄弟よ！ 聖地に着いたら、ペラギウスという名の修道士を探しなさい。彼は宦官[6903] であり、極めて徳高く、数年間、隠遁生活を送っている。彼を見つけたら、彼と語り合いなさい。そうすれば、彼から大きな恩恵を受けるだろう。なぜなら、彼は真のキリストのしもべであり、完全さを極めた修道士だからである」。

これはノンヌスが、神のしもべペラギアについて語った言葉である。彼女はエルサレム近郊のオリーブ山（[6904] ）に、かつて我らの主が祈りを捧げられた場所に、自らの修道室を設け、そこで隠遁生活を送り、神のために生きていた。しかし、ノンヌスはこのことを私には明かさなかった。

[6901] すなわち、キリストを売り渡した者たちや神を殺した者たち――ユダヤ人たちのことである（ルカ23:21）。

[6902] すなわち、主の復活の地、主の墓、およびそこに存在するその他の最も偉大なキリスト教の聖地に建てられた、キリストの復活の聖堂のことである。

[6903] 宦官――性的情欲を持つことができない人であり、最も高い霊的な意味において、自己を死なせ、情欲に対して死んだ者である。

[6904] エレオン山、あるいはオリーブ山は、ユダヤの山の一つであり、その名はその地に数多く生えていたオリーブの木や、その他様々な木々に由来する。この山はエルサレムの東に位置し、ケドロン渓谷を挟んでエルサレムと隔てられており、周辺の他の山々よりも高くそびえ立っている。その頂上からは、四方八方に素晴らしい眺望が広がる。 オリーブ山は、新約聖書の歴史において、救い主の地上での生涯における様々な重要な出来事、とりわけ復活された主がこの山から天に昇られた出来事によって聖別されている。 現在、この非常に注目すべき山とその周辺一帯は、かつての豊かな植生を失い、極めて悲惨な様相を呈している。12世紀、昇天の場所（山の中腹）のすぐ近くにあった聖ペラギアの洞窟を、ロシアの巡礼者であるイグメン・ダニイルが見ている。 西欧の巡礼者アンセルムは1509年に次のように記している。「昇天の場所より下、20段ほどの階段を下ったところに、聖ペラギアが悔い改めを行った場所、あるいは小部屋がある」。

私は身支度を整え、聖地へと向かい、我らの主イエス・キリストの聖なる復活と、その尊い十字架に礼拝を捧げた。そして翌日、私の司教が命じた通り、ペラギウスという名の修道士を探し出し、オリーブ山で彼の小部屋を見つけた。　その独房は四方を囲まれており、扉はなかった。ただ壁に小さな窓があるのを見つけたので、そこを叩くと、開けられ、私は神のしもべの姿を目にした。彼女は私を認めたが、自分の正体を明かすことはなかった。　しかし、私は彼女を認識できなかった。そもそも、花のようにあっという間に色あせてしまったその偉大な美しさを、どうして私が見分けられようか。彼女の目は深くくぼみ、過度の禁欲のせいで、顔の骨や関節が浮き出ていた。　エルサレム中の誰もが彼女を宦官だと思い込んでおり、それが女性であることを知る者は誰一人としていなかった。私自身もそれを知らなかった。というのも、私の司教は彼女を宦官である修道士だと私に話していたからであり、私は彼女から、まるで男性の修道士であるかのように祝福を受けたのだ。彼女は私にこう言った。

「教えてください、兄弟よ。あなたは、至福のノンヌ司教の助祭ヤコブではありませんか？」

彼女が私の名前まで呼んで、私を至福のノンヌ司教の助祭だと見抜いたことに驚き、私はこう答えました。

「はい、ご主人様。」

すると彼女は私にこう言いました。

「あなたの司教に、私のために祈ってくださるよう伝えてください。彼はまことに聖なる人であり、キリストの使徒なのですから。」

「そして、私の兄弟よ」と彼女は付け加えた。「あなたにも、私のために祈ってほしい。」

そう言うと、その聖女は小さな窓を閉め、第三時の祈りを唱え始めた。私は祈りを捧げてその場を離れたが、天使のようなその修道女の姿を仰ぎ見、彼女の甘美な語りかけは、私にとって大いに益となった。

エルサレムに戻ると、私は様々な修道院を巡り、修道者たちを訪ね、聖なる人々と語り合い、彼らから祝福を受け、魂のために多くの益を得た。すべての修道院に、宦官ペラギオスの良き評判が広まり、彼の生き方はすべての人にとって益となっていた。 それゆえ、私は再び 彼のもとへ行き、彼の魂に益となる語りかけによって慰めを受けたいと願った。彼のケリアに着くと、私は祈りを込めて小さな窓をノックし、あえて彼の名前を呼んで言った。「開けてください、ペラギオス神父！」

しかし、彼は何も答えてくれなかった。

私は、彼が祈っているか、あるいは休んでいるのだと思い、少し待ってから再びノックして開けてくれるよう頼んだが、返事はない。またしばらく待ってから、もう一度ノックした。　私は三日間、その小さな窓のそばに座り、時折ノックを続け、ペラギウスの聖なる御顔を見、その祝福を受けたいという強い願いを抱いていた。しかし、声も返事もなかった。そこで私は心の中でこう言った。「彼はこの修道室を去り、そこには誰もいないか、あるいは亡くなったのだろう」。

私は思い切って窓を無理やり開けてみると、ペラギウスが地面に横たわって亡くなっているのが見えた。私は恐怖に襲われ、彼の最期の祝福を受けることができなかったことを深く嘆いた。　窓を閉め、私はエルサレムへ向かい、そこに住む聖なる父たちに、アッバ・ペラギウス――宦官――が亡くなったことを告げた。するとたちまち、聖なるペラギウス、霊に満ちた修道士が主のもとで息を引き取ったという知らせが、エルサレム中に広まった。　その尊い遺体の埋葬には、近隣のすべての修道院から修道士たちが集まり、エルサレムの全住民、そしてエリコやヨルダン川の向こう岸から数え切れないほどの人々が参列した。ケリアの窓を壊して、一人通れるだけの入り口を作り、　こうして作られた開口部から入り、敬虔な人々は尊い遺体を運び出した。エルサレムの総主教も、他の多くの司祭たちと共に訪れた。儀式に従って遺体に香油を塗ろうとしたとき、人々は、亡くなった修行者が本来は女性であったことに気づいた。

「聖なる者たちの中で驚くべき神よ」と、その場にいた者たちは涙ながらに叫んだ。「あなたに栄光あれ。あなたは地上に、男性だけでなく女性も含む、隠れた聖人たちをお持ちだからです」。

ペラギアの秘密を民から隠そうとしたが、それは叶わなかった。神は、御自分のしもべを隠すのではなく、明らかにし、栄光を称えることを望まれたからである。　そして、大勢の民衆が集まった。修道院の尼僧たちも、ろうそくと香炉、詩篇と教会の賛美歌を携えて駆けつけ、ペラギアの尊く聖なる遺体を運び出し、彼女が生前修行に励んだあの独房へと相応しい敬意をもって運び入れ、そこで埋葬した[6905]。

これがかつての娼婦の生涯であり、滅びかけた罪人の回心であり、彼女が神に喜ばれるために成し遂げた労苦と功績である。主イエス・キリストが、彼女と共に、私たちにも審判の日に恵みを与えてくださいますように！　父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、彼に栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第2調：

断食によって御身を疲れさせ、徹夜祈祷をもって創造主を懇願し、御自身の行いにより完全な赦しを受けられるよう願われた。こうして、悔い改めの道を示し、真の母として認められたのである。

聖タイシアの生涯

記念日：10月8日

かつてエジプトの地[6906]に、堕落し、恥知らずで、不潔な生活を送る女性が住んでいた。彼女にはタイシアという名の娘が一人おり、彼女は自ら慣れ親しんだのと同じ恥ずべき生き方を娘に教え込み、彼女を遊郭へ連れ出し、サタンに仕えさせた。その美しさによって多くの人々の魂を惑わし、破滅へと導いたのである。　というのも、タイシアは外見が非常に美しく、その美貌で至る所で名声を博していたからである。タイシアへの肉欲ゆえに、多くの人々が彼女に大量の金や銀、きらびやかで高価な衣服を捧げた。　彼女は崇拝者たちを惑わし、彼らを破産寸前まで追い込んだ。そのため、多くの者が彼女のために財産を失い、貧困に陥り、またある者たちは彼女を巡って互いに争いを起こし、互いに殴り合い、彼女の家の敷居を自らの血で染めた。

この話を聞いた聖パフヌティオス[6907]は、世俗の服を身にまとい、金貨一枚を持って、タイシアが住む家に入った。彼女を見ると、まるで彼女と一緒にいたいかのように、報酬としてその金貨を渡した。タイシアは金を受け取ると、彼にこう言った。

「部屋に入ってください。」

パフヌティウスは彼女と共に部屋に入り、敷かれた高い寝台を見た。そこに座ると、彼はタイシアに言った。

6905 聖ペラギアの死は、伝記によればノンヌスがイリオポリスの司教であった時期に起こったが、彼は451年から458年まで司教を務めていた。　ペラギアの回心は、彼がヒリオポリス教会を統率していた同じ時期に起こったため、彼女の死は、彼がヒリオポリスに滞在していた期間の終わり、すなわち457年頃と見なすべきである。

6906 タイシアが放蕩生活を送っていた時期に、彼女の悲劇的な「勝利」を目撃した故郷や都市は不明である。

6907 ここで「聖パフヌティオス」とは、当然ながらヘラクレイア修道院の院長を指す。ギリシャ人にとってはヘラクレイア、ユダヤ人にとってはガネス、アラブ人にとってはアナスと呼ばれるこの都市は、下エジプトと上エジプトの間に位置するヘプタノマ州の都市の一つであり、上エジプトに属していた。　ルフィヌスの『修道史』（第16章）およびパラディウスの『ラウサイコス』（第57章）の証言によれば、パフヌティオスは極めて高潔な修行者であり、人々は彼を神の天使のように仰ぎ見ていた。魂の救いを切に願い、彼は多くの迷える信徒たちを救いの道へと導いた。

「他に、人目につかない部屋はないか。そこに閉じこもって、誰にも知られないようにしたいのだが。」

タイシアは答えた。

「ありますわ。とはいえ、もしあなたが人目を気にするのなら、この部屋でも彼らから身を隠せます。扉は閉ざされており、誰もここに入ってくることはなく、私たちのことを知る者もいないからです。しかし、もしあなたが神を畏れるのなら、神の御前からあなたを隠せる場所などありません。たとえ地下に身を隠したとしても、そこでも神は見ておられるのですから。」

彼女からそのような言葉を聞いて、パフヌティウスは彼女に言った。

「まさか、あなたも神のことを知っているというのか？」

タイシアは答えた。

「神のこと、義人の至福、そして罪人の苦しみについても知っています。」

すると、長老は彼女にこう言った。

「もしあなたが神のこと、そして将来の至福や苦しみについて知っているのなら、なぜ人々を汚し、これほど多くの魂を滅ぼしてしまったのか？　ゲヘナの炎に裁かれたあなたは、自分の罪だけでなく、あなたが汚した者たちの罪の代償も負うことになるのだ。」

この言葉を聞いて、タイシアは泣きながら長老の足元にひれ伏し、こう叫んだ。

「罪を犯した者には悔い改めがあり、罪には赦しがあることも、私は知っています。あなたの祈りによって罪から解放され、主の憐れみを得られることを願っています。どうか、もう少しだけ、たった三時間だけ待ってください。その後、どこへ行くようにおっしゃっても従いますし、何とおっしゃっても実行します。」

老人は彼女を待つ場所を指定して、その場を去った。すると、タイシアは、淫行によって得たすべての財宝――その価値は四百リットルの金に相当した――を集め、それを町の真ん中に運び出し、火を焚いてそのすべてを火の上に置き、民衆全員の前で焼き払いながら、こう叫んだ。　「私と共に罪を犯した者たちよ、皆ここへ来て、あなたがたが私に与えたものを、私が焼き払うのを見てください。」

不浄な手段で得た富を火に投げ込んだ後、彼女はパフヌティウスが待っている場所へ向かった。　長老は彼女を女子修道院へと連れて行き、小さな独房を借りると、タイシアをその中に入れ、彼女をそこに閉じ込めた。そして、独房の扉をしっかりと塞ぎ、釘で打ち固め、彼女に少量のパンと水を差し入れられるように、小さな窓だけを残しておいた。

「父よ、どのように神に祈ればよいのでしょうか？」と、タイシアは聖パフヌティウスに尋ねた。

「お前は不適格だ」と長老は答えた。「主の御名を口にすることも、天に向かって両手を上げることもできない。なぜなら、お前の口は汚れに満ち、両手は不浄にまみれているからだ。ただ、頻繁に東の方角に向かって、『私を創造された方よ、私を憐れんでください』と唱えるがよい。」

そしてタイシアはその隠れ家で三年間を過ごし、パフヌティウスが教えた通りに神に祈り、わずかなパンと水だけを、それも一日に一度だけ口にしていた。

三年が過ぎた後、パフヌティウスは彼女への憐れみに駆られ、偉大なるアントニオス[6908]のもとへ赴き、神が彼女を赦されたかどうかを知りたがった。

長老のもとへ着くと、彼はタイシアの生涯についてすべてを語った。アントニオスは弟子たちを呼び寄せ、各自が自分の独房に閉じこもり、一晩中神に祈り、自分の罪を悔い改めているタイシアについて、誰かに啓示が与えられるよう願うよう命じた。　弟子たちは師の命令に従い、神に懇願した。すると神は、彼女について、パウロという名の弟子――「至純なる者」と呼ばれていた――にの

[6908] アントニオス大聖人は、修道生活の最初の創始者である。

み啓示を与えられた。　夜、祈りを捧げていると、彼は幻の中で天が開き、非常に豪華に敷き詰められ、　の偉大な栄光に輝く寝台が立っているのを見た。顔立ちが極めて清らかな三人の乙女がそこに立ち、それを守っており、その寝台の上には冠が置かれていた。これを見たパウロは尋ねた。

「確かに、この寝台と冠は、私の父アントニウス以外に誰のために用意されたものでもないでしょう。」

すると、彼に向かって声が響いた。

「これは父アントニオのために用意されたものではなく、かつて娼婦であったタイシアのために用意されたものだ。」

我に返ったパウロは、見た光景について考えを巡らせ、朝になると、聖なる父アントニオとパフヌティオのもとへ行き、自分の幻視について語った。二人はそれを聞くと、真に悔い改める者を受け入れてくださる神を賛美した。　そこでパフヌティウスは、タイシアが閉ざされた生活を送っていた女子修道院へ向かい、扉を壊して彼女を連れ出そうとした。しかし、彼女は彼にこう懇願した。

「父よ、どうか私が死ぬまでここに留まり、自分の罪を悔い改めさせてください。私の罪は数え切れないほど多いのです。」

長老は彼女にこう答えた。

「人を愛する神は、すでにあなたの悔い改めを受け入れ、あなたの罪を赦しておられる」――そして彼女を隠遁所から連れ出した。

すると、聖女タイシアはこう言った。

「信じてください、父よ。私が隠遁所に入ったやいなや、心の目で自分のすべての罪を思い描き、それを見つめながら絶えず泣いていました。私のすべての悪行は、今なお私の目から消え去ることはなく、私の前に立ちはだかり、私を恐怖に陥れています。なぜなら、それらの罪のために私は裁かれることになるからです。」

隠遁所を出てから十五日後、至福のタイシアは病に倒れ、三日間病床に伏した後、神の恵みにより安らかに息を引き取った。　病床から、彼女はパウロ・プレプロスティが天国で彼女のために用意されているのを見たあの床へと移され、そこで聖者たちと共に栄光のうちに賛美され、永遠に喜びを享受している。こうして、罪人であり淫婦であった彼女は、私たちに先立って神の御国へと入ったのである[6909]。

聖ペラギア処女の記念日

記念日：10月8日

ディオクレティアヌス帝の治世、シリアのアンティオキアに生きた聖ペラギアは、名門の家系に生まれました[6910]。市の統治者は、彼女がキリスト教徒であることを知ると、兵士たちを派遣して彼女を捕らえさせました。兵士たちは統治者の命令に従い、ペラギアが住んでいた家を包囲しました。　そこで彼女は兵士たちに待ってくれるよう懇願し、彼らが承諾すると、聖女は普段祈りを捧げていた場所で東を向いて立ち、両手を広げ、天を仰ぎながら、兵士たちの手に渡されることなく、汚れ

[6909] 救い主の御言葉によれば、*「まことに、まことに、あなたがたに告げます。徴税人や娼婦たちが、あなたがたより先に神の国に入るのです」*（マタイ21:31）。 – 聖タイシアの没年は340年頃（それ以降ではない）と推定される。というのも、彼女の功績と没年は、アントニウス大聖人（†356年）およびパウロス・プレプロストス（†340年）の時代にあったからである。

[6910] 聖ペラギアは、10月15日に記念される聖殉教者ルキアノス、アンティオキアの長老（†312年）の弟子であった。

なき清らかな生贄として神のもとへ召されるよう、神に熱心に祈りを捧げた。　その後、彼女は最も立派な服を身にまとい、家の屋上から身を投げ、神のもとで息を引き取った[6911]。

10月22日

10月9日（旧暦）

同日は、聖殉教者エウウェンティウスとマクシムス（戦士）の記念日である。彼らについては9月5日の項を参照のこと。そこではエウウェンティウスはイウウェンティヌスとも呼ばれている。

聖使徒ヤコブ・アルフェエフの生涯

記念日：10月9日

聖使徒ヤコブはアルフェオの息子であり、かつて徴税人であった使徒兼福音記者マタイの兄弟であった。　私たちの主イエス・キリストが、この地上に人としておられたとき、単純で敬虔な人々を使徒の位に選び、彼らを全世界へ福音を宣べ伝えるために遣わされた際、主はこのヤコブをも選び、ふさわしい者として使徒の列に加えられた（マタイ10:3、マルコ3:18、ルカ6:15）。こうしてヤコブは十二使徒の一人となり、キリストの目撃者であり僕となり、その奥義を宣べ伝える者、そしてキリストの追随者となった[6912]。他の使徒たちと共に、炎のような舌となって彼らの上に降りた聖霊を受け[6913]、彼は異邦人のもとへ赴き、キリストを宣べ伝え、迷える者たちを救いの道へと導いた。神聖な熱意の炎に燃え上がり、彼は不敬虔という茨を焼き払い、偶像を打ち砕き、その神殿を破壊し、様々な病を癒やし、人々から邪悪な霊を追い払い、数え切れないほど多くの人々をキリストのもとへと導いた。それにより、彼は「神の種」という新たな名を得たのである。　彼は人々の心に神の御言葉を蒔き、信仰を植え付け、敬虔さを育んだ。このゆえに、彼は「神の種」と名付けられたのである。

多くの国々を巡り、彼は天の種を蒔き、人類の救いの実りを刈り取り、キリストの足跡に従ってこの世の生涯を全うした。キリストの受難に倣い、彼は十字架に釘付けにされたまま、神に霊を委ねた[6914]。

[6911] 聖ペラギアは、処女性を守るために自ら進んで殉教したとき、わずか15歳でした。これは4世紀初頭のことでした。聖アンブロシウスは、聖ペラギアがキリストのために迫害者たちから拷問を受けることはなかったものの、彼女を殉教の模範として挙げています。　聖ヨハネス・クロイソストモスには、この若き祝福された殉教者を称える二つの言葉が残されている。

[6912] 他の使徒たちと共に、ヤコブ・アルフェオは主によって宣教のために遣わされた（マタイ10:3）。

[6913] 主の昇天後、ヤコブ・アルフェオは他の使徒たちと共に、エルサレムのシオンの上階の部屋にとどまりました（使徒行伝1:13）。また、聖霊降臨の後もしばらくの間もそこに留まりました（6:2）。

[6914] 使徒ヤコブ・アルフェオは、最初はユダヤで使徒としての奉仕を行い、その後、使徒 初代使徒アンドレイに同行してエデッサ（エデッサ――現在のオルファ――ユーフラテス川沿いのメソポタミアの古代の著名な都市）へ赴き、ガザ（ユダヤ王国との国境に位置するペリシテ人の最も古い都市の一つで、使徒の時代にはシリアに属していた）　およびエレウフェロポリ（エルサレムとガザを結ぶ道沿いにある南パレスチナの都市）およびその周辺地域でキリストの教えを説き、そこからエジプトへと向かい、そこでオストラキネ（パレスチナとの国境にある海辺の都市）にて、十字架上の殉教の死をもって使徒としての業を刻み込んだ。

そして、この神の種、聖ヤコブは、百倍の果実とともに、天の穀倉へと集められました。そこで、自ら神の御顔を仰ぎ見ることで満たされ、私たちに対しても、その同じ満たしを祈り求めて取り成してくださっています。

コンダク、第2声調:

敬虔な人々の魂に、堅固な知恵の教義を植え付けたヤコブを、神の御言葉を伝える者として、賛美をもって称えよう。彼は主の栄光の御座の前に立ち、すべての天使たちと共に喜び、絶えず私たちすべてのために祈っているからである。

聖アンドロニクスと聖アファナシイの伝記

記念日：10月9日

ビザンツ皇帝テオドシウス大帝の治世中[6915]

アンティオキアに、アンドロニクという名の金細工師が一人住んでいた。彼は、同じく金細工師の娘であるヨハナを妻に迎えた。彼女の名はアファナシアであり、これは「不死」を意味する[6916]。　そして実際、聖アファナシアは、その聖なる生涯――その最期が示す通り――によって、不滅の名声を得たのである。　この夫婦――アンドロニクとアファナシア――は、誠実で神に喜ばれる生活を送り、あらゆる美徳を身にまといました。増え続ける財産を三等分し、その一部を貧しい人々のために、もう一部を教会の美化のために、そして残りの一部を家庭の必要のために費やしました。　その　な柔和さと善行により、アンドロニクとアファナシアはすべての市民から愛され、尊敬されていた。息子ヨハネスと娘マリアが生まれた後、二人は夫婦としての肉体的関係を断ち、兄弟姉妹のように清らかに暮らした。　彼らは特に貧しい人々に対して深い配慮と慈愛を注いだ。彼らに仕える中で、病人を自らの手で運び、体を洗い、食事を与え、衣服を着せ、自らの資金で貧者や旅人にあらゆる安らぎをもたらした。その傍ら、アンドロニクとアファナシアは毎週水曜日と金曜日を断食と祈りに費やした。

彼らがこのように徳高い生活を送り続けている間、神は彼らをさらに完全な生活へと招くことをお許しになった。それは、この世のすべてを捨て去り、唯一の主であるイエス・キリストに従うためであった。キリストは、私たちがその足跡をたどるべき模範を私たちに残してくださったのである。

ある日、結婚生活二十年を経たアファナシアは、早朝の礼拝から教会に戻ると、子供たちが熱にうなされているのを見つけ、心配して彼らのそばのベッドに座った。少し遅れて教会から戻ったアンドロニクは、妻が眠っていると思い、彼女を呼んだ。アファナシアはこう答えた。

「ご主人様、どうかお怒りにならないでください。子供たちがひどい熱を出しているのですから。」

そのことを確かめると、アンドロニクは病の子供たちから離れ、こう言った。

「主の御心でありますように！」

その後、彼は両親が埋葬されている郊外の聖殉教者ユリアヌス教会へ向かった。そこで彼は第六時までの間、祈りを捧げていた。

[6915] テオドシウス大帝――379年から395年までローマ皇帝を務めた。彼の治世において、キリスト教の信仰はローマ帝国において最終的に確立された

[6916] ギリシャ語の「アファナシア」から――不死。

アンドロニクが教会にいる間に、彼の二人の子供――12歳になる息子のヨハネスと、10歳の娘マリア――は亡くなっていた。祈りを終えて帰宅する途中、アンドロニクは自宅から泣き声と悲鳴を耳にし、動揺しながら急いで駆けつけた。　彼は家の近くで、町の住民たちの大群衆に出くわし、二人の子供たちが死体となって横たわっているのを目にした。自分の礼拝堂へと退いたアンドロニクスは、我らの救い主の聖像の前にひれ伏し、義人ヨブの言葉を口にした。

「*私は母の胎から裸で出て来た。裸で、またそこへ帰る。主が与え、主が取り去られた。主の御名がほめたたえられますように！*」（ヨブ記1:21）。

亡き子供たちを嘆き悲しむアファナシアは、激しい悲しみのあまり、もはや疲れ果ててしまい、死さえも望むほどであった。彼女はこう繰り返していた。

「ああ、私も子供たちと一緒に死ねたらいいのに！」

アンドロニクスとアファナシアの子供たちの葬儀の日、市民全員が参列し、総主教自らが聖職者一同を率いて参列した。　子供たちは、彼らの先祖も眠る聖ユリアヌス教会に埋葬された。埋葬の儀式が終わった後、アファナシアは家に帰ることを拒み、泣きながら子供たちの墓のそばに座り込んでいた。

真夜中、聖殉教者ユリアヌスが修道士の姿で彼女の前に現れ、次のように語りかけた。

「女よ！　なぜここに眠る者たちを安らかにさせておかないのか？」

アファナシアはこう答えた。

「ご主人様、私を怒らないでください。私は今、計り知れない悲しみに暮れているのです。私には二人の子供がいましたが、今日、二人を一緒に葬ったのです！」

聖殉教者ユリアヌスはアファナシアに尋ねた。

「あなたの子供たちは何歳だったのですか？」

アファナシアは答えた：

「一人は十二歳、もう一人は十歳でした。」

すると聖人は彼女にこう言いました。

「なぜ子供たちのために泣くのですか？　自分の罪のために泣くほうが、あなたにとって有益だったでしょう。断言しますが、人間の肉体が食物を必要とするのと同じように、亡くなった子供たちもまた、キリストのもとで天の恵みを糧としているのです。彼らはキリストにこう祈っています：『正義の裁き主よ！　あなたは私たちから地上の恵みを奪いましたが、天の恵みまでは奪わないでください！」

この言葉を聞いて、アファナシアは心を打たれ、悲しみの代わりに喜び、こう言った。

「もし私の子供たちが天国で生き続けているのなら、私が泣く必要などあるでしょうか？」

そう言いながら、アファナシアは、自分に現れた人物ともう少し話をしたいと思い振り返ったが、もうその姿は見当たらなかった。アファナシアは教会中を探し回ったが、誰も見つからなかった。そこで彼女は、教会の扉を守っていた門番を呼び止め、こう尋ねた。

「私と話していたあの修道士はどこにいるのですか？」

門番は答えた。

「扉が閉まっていて、誰もここに入ってきていないのが見えないのか？　一体、誰かが君と話したなんて、何を言っているんだ？」

そこでアファナシアは、それが単なる幻だったと確信し、恐れをなして家に戻ると、夫に自分が見聞きしたことを語り、それによって悲しみを和らげた。

「夫よ」とアファナシアはアンドロニクスに言った。「子供たちが生きている間、私はある決意をあなたに伝えようとしていましたが、恥ずかしくて言えませんでした。しかし今、子供たちが亡くなったのですから、恥ずかしがらずに言います。私を修道院へ送り出してください。そこで私の罪

を悔い改めたいのです。」　そうすれば、私たちから子供たちを連れ去られた主が、私たちを主への奉仕に最もふさわしい者にしてくださるでしょう。

アンドロニクはこう答えました。

「行ってみなさい。一週間、その決意を試してみて、もし変わらなければ、そのことについて二人で話し合おう。」

アファナシアは試練に耐え、その決意を曲げず、多くの日が過ぎるにつれ、かえって修道生活への強い願望に満たされ、再び夫に修道院へ行くことを許してくれるよう懇願し始めた。

そこでアンドロニクスは、アファナシアの父親を呼び寄せ、こう言った。

「さて、我々は聖地を巡礼したいと考えている。そこで、我が家と全財産をあなたに託す。お願いがある。もし旅の途中で我々に何らかの不幸が起きたら、財産を貧しい人々に分け与え、我が家を貧者のための病院と旅人のための宿舎にしてほしい。」

こうしてアンドロニクスは、義父に自宅と財産を託すとともに、すべての奴隷たちを解放した。

ある夜、アンドロニクとアファナシアは、持ち物を少しばかりまとめて、誰にも気づかれることなく家を出た。神の御心に身を委ね、彼らは巡礼の旅に出たのである。

翌朝、街の外で夜明けを迎えた聖女アファナシアは、振り返って遠くに自分の家を見出し、空に視線を向けてこう言った。

「神よ、アブラハムとサラに*『あなたの地、あなたの親族、あなたの父の家を離れ、わたしが示す地へ行きなさい』*（創世記12:1）と仰せになった方よ！ 私たちにも御目を留め、御畏れをもって私たちを導いてください。私たちはあなたのために家を空けて出てきました。どうか、御国の門を私たちに閉ざさないでください。

その後、二人は泣きながら旅を続けた。エルサレムに到着すると、アンドロニクとアファナシヤは聖地に礼拝を捧げ、多くの長老たちから祝福を受け、彼らと語り合った。その後、聖殉教者ミナの聖遺物に礼拝を捧げるため、アレクサンドリアへと向かった。　そこへ向かう道中、アンドロニクスは振り返ると、ある平信徒が修道士と口論しているのを見かけ、その平信徒にこう言った。

「なぜ修道士と口論しているのか？」

その信徒は答えた。

「その修道士は、スキトへ行くために私からロバを借りたのですが、私は、日差しの強い日中は避けて夜間に移動し、朝6時にはすでにスキトに着けるよう、今すぐ出発するよう勧めました。ところが、その修道士は私の助言を受け入れようとしません。」

そこでアンドロニクスはその一般人に尋ねた。

「他にロバは持っていますか？」

すると、その男は答えた。

「はい、います。」

アンドロニクは言った。

「さあ、それを連れて来なさい。私もスキトへ[6917] へ行きたいので、君からそれを借りるつもりだ。」

[6917] 「スキト」はエジプト語で、「天秤、心の試練」を意味する。また、ギリシャ語の……（皮）に由来するという説もある。この語源は、初期のスキト人――すなわち修道士たちが、きちんとした住居を持たず、野生の獣の皮でできた覆いだけで満足していたことを示唆している。　ここでいう「スキト」とは、もちろん、孤独な隠者たちのための個別の独房という意味での、特定の修道院の形態を指すのではなく、エジプト北西部、ニトリア山から一日の行程（25〜30ヴェルスト）の距離にある有名な地名を指す。　そこは水のない岩だらけの砂漠であり、エジプトの隠者たちが好んで住んだ場所であり、そこで身を隠した修道士たちの禁欲的な功績によって名声を博した。　後に、この地名にちなんで、修道士たち

アンドロニクスは妻のアファナシアにこう言った。

「私がスキトへ行って、そこの修道士たちから祝福を受けるまで、ここで待っていてくれ。」

「私も連れて行って」とアファナシアは頼んだ。

「女性には」とアンドロニクは答えた。「スキトに行くことは許されていないのだ

スキトに入ることは許されていないのだ。

すると、アファナシアは泣きながら夫に言った。

「もし私を女子修道院に預けずに置いていくなら、その責任は聖殉教者ミーナに問われることになるわ。」

アンドロニクスは、妻の願いが叶うまでは彼女を置き去りにしないと約束した。

その後、アンドロニクスはスキトへ向かい、そこにある各修道院[6918] で、スキトの修道長たちから祝福を受けた。

尊者ダニエル[6919] のことを耳にしたアンドロニクは、大きな困難を乗り越えて彼の元を訪れ、彼に礼拝を捧げ、祈りの後、自分自身と妻のアファナシアについてすべてを語った。尊者ダニエルはアンドロニクにこう言った。

「行って、あなたの妻を連れて来なさい。そうすれば、私はあなたにフィヴァイダ[6920] への手紙を渡そう。それによって、あなたは彼女を自由にそこへ連れて行き、タヴェンニシオトの女子修道院[6921] に預けることができるだろう。」

アファナシアのもとへ戻ったアンドロニクスは、夜になって彼女を聖なる長老ダニエルのもとへ連れて行った。長老ダニエルは彼らと救いの道について語り合い、彼らの魂に大きな恵みを与えた。その後、手紙を手渡すと、長老は彼らに祝福を与え、タヴェンニシオト修道院へと送り出した。

修道院に到着すると、至福のアンドロニクスは、聖なる妻アファナシアを女子修道院に入らせた。　そこで天使のような姿を受け入れたアファナシアは、天使に等しい生活を送るようになった。一方、アンドロニク自身は、修道院の長であるダニイル長老のもとへ戻った。長老は彼を修道士として剃髪させ、徳ある生活について指導した上で、アンドロニクがそこで独り暮らしをし、沈黙の中で修行に励めるよう、専用の独房を与えた。

こうして、至福のアンドロニクスは、尊く修行に励み、十二年間にわたり沈黙の修行に専念した。その後、彼はダニエル師に、聖地を参拝するためにエルサレムへ行くことを許してほしいと懇願した。祈りを捧げた後、尊者ダニエルは祝福をもって彼を見送った。

エジプトの地方を旅していたアンドロニクスは、ある日、少し休むためにジュニパーの茂みの陰に腰を下ろした。すると、神の御計らいにより、彼は男性の装いをして歩いていた妻、至福のアファナシアを目にした。二人は互いに挨拶を交わした。アファナシアは夫のアンドロニクスを認めたが、彼は彼女を認識できなかった。　そもそも、禁欲のせいで顔が痩せ細り、エチオピア人のように肌

が「スキタ」と呼ばれるようになった。そこでは、最も熱心な修道士たちが、唯一の神に留まるために、最も厳格な隠遁生活と揺るぎない沈黙を求めて住み着いていたのである。

6918 「ラヴラ」とは、ギリシャ語で「都市の一部」を意味し、「小路」を意味する。具体的には、修道院長の住居を取り囲むように、都市の小路のように配置された一連の独房のことで、柵や壁で囲まれている。　ラヴラでの修道士たちは隠遁的な生活を送り、それぞれが自分のケリヤで修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のために集まる以外は、残りの日は厳格な沈黙を守っていた。ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに厳しいものであった。　太古の昔から、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士を擁し、その意義において重要な修道院を指して用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パレスチナでも用いられるようになった。現在、ロシアでは「ラヴラ」という名称は、もっぱら敬称としてのみ用いられている。

6919 聖ダニイル・スキツキーの記念日は、教会によって「チーズの土曜日」に祝われる。

6920 フィヴァイダとは、古代に名高いエジプトの都市フィヴァの地域を指す。また、その主要都市の名にちなんで、上エジプト（南部）全体もこの名で呼ばれていた。

6921 この地の他の修道院の中でも、タヴェンニシオの女子修道院は、その厳格な修道生活で知られていた。

が黒ずんでいたアファナシアを、どうして見分けられようか。さらに、アファナシアは外見を変え、男装していたのだ。彼女はアンドロニクスに尋ねた。

「あなたは、ダニエル神父の弟子で、アンドロニクというお名前の方ではありませんか？」

「そうだ、私だ」とアンドロニクスは答えた。

すると、彼女は再び彼に尋ねた。

「アッバ・アンドロニク！　どこへ行くのですか？」

「聖地を参拝しに行くところです」とアンドロニクスは答えた。「ところで」と彼は今度はアファナシアに尋ねた。「あなたはどこへ行くのですか？　お名前は？」

彼女は答えた。

「私も聖地へ向かっています。私の名前はアファナシイです（彼女はそうして名前を変え、アファナシアではなくアファナシイと呼ばれるようになった）。」

「一緒に行こう」とアンドロニクスは言った。アファナシアは答えた：

「もし私と一緒に歩きたいのなら、『あなたの口に守りを置け』（詩篇140:3参照）と、私たちが沈黙のうちに歩けるようにしてください。」

アンドロニクは言った。

「よし、お前の望む通りにしよう。」

アファナシアは続けた。

「さあ、行きましょう。そして、あなたの聖なる長老の祈りが私たちに寄り添いますように。」

アンドロニクとアファナシアがエルサレムに到着すると、そこにあるすべての聖地を巡礼した。その後、彼らは聖殉教者ミナの聖遺物を拝むためにアレクサンドリアへ向かった。そこで、祈りを捧げた後、アファナシアはアンドロニクにこう言った。

「父よ、私たち二人が同じケリアに共に住むことを望まれますか？」

アンドロニクは答えた。

「そうしましょう。ただ、その前に長老に、私たちが同じケリアに滞在することを許してくださるかどうか、お尋ねします。」

アファナシヤは続けた：

「行って尋ねてきてください。私は『オクトデカトス』と呼ばれるスキート[6922]であなたを待っています。もし長老が許可してくださるなら、私を迎えに来て、私たちが沈黙の中で巡礼の旅をしたのと同じように、静寂の中でケリアで暮らしましょう。　もしあなたが沈黙を守ることができないのなら、私のところへ戻ってこないでください。たとえその尊い父がそう命じられたとしても、私は沈黙という修行なしに生きることを望まないからです。

アンドロニクスはアッバ・ダニエルの元へ行き、同行者アファナシイについてすべてを語った。

すると、ダニエルはアンドロニクにこう言った。

「さあ、戻りなさい。沈黙を愛し、アファナシアと共にいなさい。彼女は完全な修道女だからだ。」

その後、アンドロニクスはアファナシアを連れて自分の独房へ行き、そこで彼女は神への畏敬と沈黙の中で、さらに十二年間を過ごした。それにもかかわらず、アンドロニクスは自分の妻だと気づかなかった。というのも、彼女は夫に正体を見破られないよう、神に熱心に祈り続けていたからで

[6922] スキトス砂漠の修道院は、アレクサンドリアからの距離に応じて番号で区別されていた（「オクトデカトス」は18番目）。

ある。　アッバ・ダニエルは頻繁に彼らの元を訪れ、教えを授けていた。ある時、彼らの元で多くの魂に有益な事柄について語り合った後、ダニエルが自分の独房へ戻ろうとした際――独房にたどり着く前に、至福のアンドロニクが彼に追いつき、こう言った。

「ダニエル父よ、アファナシアが主のもとへ旅立とうとしています！」

長老が戻ると、アファナシアは激しい熱にうなされていた。長老の姿を見るや、アファナシアは泣き出したが、長老は彼女にこう言った。

「泣くのではなく、喜ぶべきだ。あなたは主にお迎えに行くのだから。」

アファナシアはこう答えた。

「私は自分のことではなく、アンドロニクスのために泣いているのです。しかし、父よ、私にあなたの愛を示してください。私が亡くなった後、私の枕元にある手紙を見つけてください。それを読んでから、アンドロニクスに渡してください。」

その後、祈りを捧げた後、アファナシアは聖体拝領を行い、主のもとへ旅立った。兄弟たちは遺体を葬るためにやって来て、それが女性であることに気づいた。アッバ・ダニエルは、アファナシアの寝床の頭元に置かれた手紙を見つけ、それを読み、アンドロニクスに手渡した。その時、アンドロニクスは、アファナシアが自分の妻であったことを知った。

その後、皆が神を賛美した。この噂はすべての修道院に広まり、アッバ・ダニエルは修道士たちを派遣して、エジプトのすべての修道院長たちや、内陸の砂漠で修行に励んでいた者たちを招集した。　アレクサンドリアのすべての修道院の住人と、白い衣をまとった隠遁者たち（それらの隠遁者たちには、白い衣を着て歩く習慣があった）が集まり、聖アファナシアの聖なる遺体を尊厳をもって埋葬し、彼女にそのような忍耐を授けてくださった神を賛美した。

アファナシアの埋葬後、長老ダニエルはアンドロニクと共に七日間を過ごした。そしてその最後の日、亡き彼女を偲びながら、ダニエルはアンドロニクを自分の修道室に迎え入れたいと願った。一方、アンドロニクは長老に懇願してこう言った。

「父よ、私をここに残してください。そうすれば、私の友であるアファナシアと共に葬られることができますから。」

彼を残して、長老は立ち去った。しかし、まだ自分の小部屋にたどり着く前に、別の修道士が追いつき、こう言った。

「アンドロニク神父が主のもとへ旅立たれようとしています。」

長老は直ちに、立ち去った修道士たちを呼び戻し、こう言った。

「私と共にアンドロニク神父のもとへ戻ってください。」

彼らが戻ると、アンドロニクスはまだ息があり、彼から祝福を受けた。アンドロニクスが安らかに息を引き取った後[6923] 、オクトデカト修道院のスキティアンたちと、尊者アファナシアが修行し、修道士たちが白い衣を身にまとっていた別の修道院との間で、大きな争いが起きた。

後者たちはこう言った。

「故人は私たちの兄弟であり、その祈りが私たちを助けてくれるよう、彼を私たちのスキトに迎え入れたい。」

同様に、オクトデカト修道院の修道士たちもこう言った。

「この兄弟は我々のものだ。それゆえ、彼を彼の至福の姉妹アファナシアの傍らに葬るべきだ。」

すると、もう一方の修道院の修道士たちはこう言った。

「オクトデカト修道院のアルヒマンドリトが指示される通り、我々は従う。」

[6923] 5世紀前半に死去した。

長老は、アンドロニクスをアファナシアと共に埋葬するよう命じた。一方、白衣を着たスキートの修道士たちは、自分たちが多数派であったため、その命令に従うことを拒み、こう言った。

「長老は情欲を超越しており、しかも競争を恐れない。しかし、我々は最も若く、我々の聖なるアンドロニクスをここに留めて、その祈りによって助けを得たいのだ。アファナシアをあなた方に譲っただけで、我々としては十分だ！」

その後、隠遁者たちはようやく落ち着きを取り戻し、聖アンドロニクスを至福のアファナシアと共に葬り、御自身の聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神を賛美した。神に栄光あれ、世々限りなく。アーメン。

聖なる義人アブラハムの行伝

記念日：10月9日

バベルの塔の建設の際、神が諸言語を混乱させられた後[6924]、人々は地上に散らされ、多くの民族に分かれたが、真の神を忘れ、自分たちで造った偶像や、動物、太陽や月、その他の自然現象を崇拝するようになった。 そこで、旧約聖書の教会を刷新し、その中に真の神への認識を保つために、主はアブラハムという名の敬虔な一人の男を選ばれた。アブラハムは当初アブラムと呼ばれており、ファラ[6925]の末息子であった。ファラには他にも、アランとナホルという二人の息子がいた。 そのうちの最初の者は若くして亡くなり、息子ロトを残しました。アブラムはそのロトを引き取って育てました。ファラは息子たち と共に、カルデアのウル[6926]に住んでいました。しかし、主は、御自身の選ばれた敬虔なアブラムを、偶像崇拝者たちの堕落した環境から引き離すことをお望みになりました。そして、アブラムは神から次のような命令を受けました：

「あなたの地、あなたの親族、あなたの父の家を離れ、わたしが示す地へ行きなさい。 わたしはあなたから大いなる民を興し、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは多くの者にとって祝福の源となり、模範となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上のすべての民族は、あなたによって祝福を受ける[6927]。

アブラムは信仰と従順をもって神の命令を受け入れ、妻のサラ、父のファラ、そして甥のロトを連れて、カルデアのウルを出発した。 ハランにしばらく滞在し[6928]、そこで父が亡くなると[6929]、彼はその後、家族とロトを連れて一人で旅を続けた。カナンの地に着くと、彼はシケム、モレの樫の

6924 この出来事は、パトリアルヒ・エヴェルが息子ファレクをもうけた時期と同一視されており、ファレクはこの出来事を記念してその名を与えられた（ファレクはヘブライ語で「切断」「分割」を意味する）。すなわち、紀元前およそ2600年頃のことである。

6925 ファラは、ノアに続く10代目となる族長である。アブラハムは紀元前2000年近く前に生まれた。

6926 カルデアのウルは、メソポタミアにあるカルデアの王都の一つで、ユーフラテス川の河口からほど近い場所に位置し、主要な貿易の集積地であった。 現在、「ウル」という名は、ユーフラテス川の本流から西へ6マイル離れた場所、ハッチ・エル・ヒエ（ユーフラテス川に合流するティグリス川の支流）との合流点付近にある遺跡に付けられている。

6927 この神の約束にはメシア的な意味があり、聖使徒パウロがアブラハムへの神のこの言葉を引用して、それを明確に示している。 「ですから、信仰を持つ者こそがアブラハムの子孫であることを知ってください。聖書は、神が異邦人を信仰によって義と認めてくださることを予見し、アブラハムに『あなたを通してすべての民族が祝福を受ける』とあらかじめ告げていました。こうして、信仰を持つ者たちは、忠実なアブラハムと共に祝福を受けるのです」（ガラテヤ3:9）。

6928 ハランは、メソポタミア北西部、ハヴォル川（ユーフラテス川の支流）とユーフラテス川の間に位置し、エデッサの南東、山々に囲まれた広大な平原にある町である。古代には、地中海と東方を結ぶ主要な交易路上の重要な交易拠点であった。 現在では、メソポタミアにある取るに足らない小さな町となっている。

6929 教会のいくつかの教師たちは、ハラーンにおけるファラの死を、神の摂理の英知ある計画によるものと説明している。なぜなら、偶像崇拝の罪を犯したファラが、彼から分かれた世代に迷信という毒を持ち込むことを、神は望まなかったからである。それゆえ、聖書はこの出来事をこれほど正確に記しているのである。

森までその地を旅した[6930]。そこで主が彼に現れ、この地を彼の子孫に与えると約束された。この神の御現れを記念し、また神の約束への感謝を込めて、アブラムはその場所に祭壇を築いた。その後、アブラムはその地を南に向かって縦断し、ベテルとガイの間にも主のための別の祭壇を築いた[6931]。

アブラムは家族とロトを連れて、シケムの谷に定住した。二人は当初、共に暮らし、家畜や銀、金に恵まれていたが、その後、家族や使用人たちの間の争いを避けるため、アブラムはロトを自分の元から離れさせ、土地を選ぶ自由を与えた。　ロトは、ヨルダン川の水で潤された、花咲く平野を選んだ[6932]。

ロトがアブラムから離れていった後、神は御自身の選ばれた者に現れて、こう言われた。

「目を上げて、今あなたが立っているこの場所から、北、南、東、西を見渡せ。山から見えるこの地すべてを、わたしはお前とあなたの子孫に、永遠に与える[6933]。そして、あなたの子孫を、地の砂のように多くする。」　立ち上がって、この地の長さと幅を歩き回れ。わたしはそれを、あなたとあなたの子孫に、永遠に与えるからである。

神の命令に従い、アブラムは南へと向かい、マムレの樫の林のそばに定住し[6934]、そこで主のために祭壇を築いた。

一方、ロトが住処として選んだヨルダン平野には、[6935]に記されているように、それぞれの王によって統治されていた五つの町があったが、それらはすでに12年間、[6936]に記されているエラム王の支配下に置かれていた。　13年目、彼らは王に反旗を翻したが、王に打ち負かされ、その地の多くの住民、ロトも含めて捕虜となった。　このことを知ったアブラムは、自分の家来たちを武装させ、敵を打ち破り、ロトとすべての捕虜を解放し、敵が奪い去った戦利品をすべて取り戻して、それぞれの王に返還した。　アブラムが勝利を収めて帰還すると、王たちが彼を出迎えた。サリムの王であり

6930 「カナンの地」とは、最も狭義かつ本来の意味において、ヨルダン川のこちら側、フェニキア（カナンの北部）、およびペリシテの地を指す。–近世においては、カナンの地とは、しばしばヨルダン川の両岸にわたり、後にイスラエル人が占領した約束の地、すなわちパレスチナ全土を指すことが多い。シケムは、カナンの地にある古代都市で、サマリアのエフレムの山にあり、エルサレムから18時間の道のりにある。　アブラハムがカナン地を旅した際、当時はまだ存在していなかったシェケムそのものまでではなく、後にシェケムが建設された場所まで進んだ。モレは、シェケム近郊の樫の林である。

6931 ベテルは、カナン最古の都市であり、アブラハムの時代には「ルズ」と呼ばれていた。エルサレムの北、エフライム族の山岳地帯に位置し、この都市の名にちなんで「ベテルの山」と呼ばれる山の麓にある。　この場所は極めて荒涼としており、現在では廃墟の山の上に広がる牧畜民の遊牧地と化している。ガイは、ベニヤミン族の領土の北部、ベテルより東に位置する古代カナン都市である。

6932 ロトが住む場所として選んだ、ヨルダン川が流れていたヨルダン渓谷は、かなり広かった。多くの学者たちが推測するように、当時、死海はまだ存在しておらず、ヨルダン川はいくつかの支流に分かれて流れ、おそらくこの渓谷を通ってアラビア湾、あるいは紅海に注いでいたのだろう。

6933 神の約束の成就は、アブラハムの子孫に対して、肉によるだけでなく、信仰によってもなされるものであり、それゆえこの約束は「永遠の」ものと称されている。これらすべての約束の成就は、キリストにある。キリストは御自身の血によってこの地を聖なるものとし、すべての信者のためにこれを獲得し、キリスト者の魂の故郷とされたのである。　だからこそ、選ばれ、その後地球の隅々に散らばった数え切れないほどの人々とは別に、アブラハムは信仰によってさらに別の子孫を持っており、その子孫にとってパレスチナは救いの地、まさに「約束の地」なのである。

6934 マムレは、アブラハムの同盟者であったアモリ人の固有名詞である（創世記14:24）。マムレの樫の森は、エルサレムへの道沿いにある、肥沃で美しい土地に位置する、カナン最古の都市ヘブロンの近くに位置していた。

6935 ロトが定住した、花咲くヨルダン川流域には、ソドム、ゴモラ、アダマ、セボイム、ベラ（別名：バラカ）という5つの都市があった。

6936 エラム人は、シメオンの長子エラムに由来する民族である。彼らの国は、カナン地方に隣接するメソポタミアに位置していた。

、至高の神の祭司であるメルキゼデク[6937] は、パンとぶどう酒を携えて出てきて、アブラムを祝福し、こう言った。

「天と地の主、至高の神から、アブラムは祝福されますように。また、あなたの敵をあなたの手に渡された至高の神も祝福されますように。」

アブラムは戦利品の十分の一をメルキゼデクに献げた。また、ソドムの王が敵から取り戻した財産を自分のものにするよう勧めたとき、アブラムは一切受け取らなかった。

その後、アブラムはカナンの地で非常に有名になった。彼の成功は、その地の住民たちに嫉妬と恐れを抱かせた。そこで主は夜、幻の中でアブラムにこう言われた。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたには、最も偉大な報いが用意されている。」

アブラムは言った。

「主よ！　私にどのような報いを与えてくださるのですか。私には子供がいません。あなたは私に子供を与えてくださらなかったのです。私の家事はダマスコのエリエゼルが管理しています。彼こそが私の相続人となるでしょう。」

「彼ではない」と主は言われた。「あなたの実の息子が、あなたの相続人となるのだ。」

その後、主はアブラムを庭に連れ出し、こう言われた。

「天を見上げ、もしできるなら星を数えてみよ。それと同じだけ、あなたの子孫が増えるであろう[6938] 。」

アブラムはその約束を信じ、その信仰は彼にとって義とみなされ[6939] 、義にかなった、神に喜ばれる生活の基盤となった。

[6937] メルキゼデクは、おそらく当時パレスチナに住んでいたカナン人の一族であるアモリ人の出身であったと考えられる。なぜなら、彼には王としての地位と祭司としての地位の両方があったからである。当時、カナン人の部族の間にはまだ敬虔さが保たれており、アモリ人の罪の杯はまだ満ちていなかったからである。　サリムとは、後にイェブス、さらにその後エルサレムとなった場所を指す（詩篇75:3）。至高の神の祭司というその称号によって、メルキゼデクは偽りの神々を崇める者たちだけでなく、他の王たち、さらにはアブラハムとも一線を画しており、それゆえ、彼の中に、パレスチナ全土で称賛された真の神の特別な奉仕者を見出さずにはいられなかった。　聖書は、彼とその家系に関する詳細を伏せつつ、彼の中に救い主キリストの型を見出させています。　旧約聖書の時代、王であり預言者であるダビデは、メルキゼデクの並外れた祭司職の中に、メシアの祭司職の型を見出し、神の御子について次のように語った。「あなたは、メルキゼデクの位（すなわち、その姿）に従って、永遠の祭司である」（詩篇109:4）。　とりわけ、使徒パウロによる『ヘブライ人への手紙』（ヘブライ7:1–28）において、メルキゼデクの予型としての意義が極めて明確かつ詳細に明らかにされている。　メルキゼデクは、その名の意味によれば「義の王」であり、称号によれば「サリムの王」、すなわち「平和の王」であり、同時に至高の神の祭司でもある。彼は父も母も系図もないとされている。その祭司職は永遠のものである。なぜなら、彼の先駆者も後継者も目に見えないからである。　彼の祝福は至高のものであり、それは至高者の御名によって、彼が信者の父に祝福を授けるからであり、アブラハム自身も、至高者から与えられた者として、この祝福を高く評価し、畏敬の念をもって受け入れた。これらすべての崇高な特徴と優位性は、神の御子イエス・キリストにのみ備わっている。

[6938] この神がモーセに与えた約束は、単に文字通りの意味、すなわちアブラハムに由来する数多いユダヤ民族という理解に限定してはならない。この約束はメシア的な意味を持ち、神がアブラハムに与えた他の約束と不可分な関係にある。

[6939] 「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」と使徒は述べ（ローマ4:3）、アブラハムの義認は、彼の信仰のみに由来することを証明している（ここで「義」という言葉は、当然ながら「義認」の意味でも用いられている）。アブラハムは神を信じた、すなわち、神の真実さ、聖さ、　知恵、力、そして永遠性を信じたのである。すなわち、百歳という高齢にもかかわらず、神から「あなたから息子が生まれる」という約束を信仰をもって受け入れたとき、このアブラハムの信仰は、その本質上あり得ないもの――すなわち義――として彼に算入されたのである。　ここでいう義とは、神の御心への完全な従順を意味するが、当時アブラハムはまだその境地に達していなかった。そこで神は、その信仰を、従順と同等の価値を持つものとして彼に認めたのである。　――フィラレート大主教は、アブラハムの信仰が義とみなされたのは、ゆっくりと段階的な啓示の後に起こったことであると指摘している。「信仰は」と彼は言う、「神の神秘的な導きの結果であり、その結末であった。同時に、それは神の御好意の始まりであり、その基礎でもあった」。

その翌日、アブラムは神の命じられたとおり、3歳の雌牛、雌山羊、雄羊を真っ二つに切り分け、それぞれの半分を互いに向き合わせるように並べた。それらには、鳩と若いハトも加えられていた[6940]。アブラムは、その死骸を猛禽類から守っていた[6941]。 日が沈む頃、彼は眠りに落ち、恐怖と深い闇に包まれた。その時、主は彼に近づき、こう言われた。

「知れ。あなたの子孫は、四百年の間、異国の地で寄留者となり、奴隷として抑圧されることになる[6942]。しかし、わたしは彼らを奴隷とする民を裁き、その後、彼らは多くの財産を携えてここへ戻ってくる。 あなたは安らかに先祖のもとへ帰り、老いて安らかに葬られる。しかし、あなたの子孫がここに戻ってくるのは、四世代が過ぎ去ってからである[6943]。アモリ人の不義の杯はまだ満ちていないからである[6944]。

日が沈み、闇が訪れたとき、切り分けられた動物たちの間を、まるで炉から出るかのような煙と炎が通り過ぎた[6945]。そしてその日、主はこのようにアブラムと契約を結び、こう言われた。

「わたしは、エジプトの川からユーフラテス川に至るまで、この地をあなたの子孫に与える」[6946]。

アブラムがカナンの地に移り住んでから、すでに長い年月が経っていた。カルデアのウルで受けた啓示の後、神は彼に、彼から生まれるであろう数多い子孫についての約束をさらに三度繰り返された。しかし、妻のサラは子を産まず、その間、二人はすでに高齢となっていた。 子宝に恵まれないことは、アブラムにとって大きな試練であった[6947]。

[6940] これは、神がアブラハムとの契約、すなわち、アブラハムの子孫とカナンの全地の相続に関する約束を確かに果たされるという、目に見えるしるしであった。 古代において、同盟を結ぶ者たちは、通常、動物の半分に裂かれた間を通り抜けた。これは、かつてこれらの部分がひとつの生き物であったように、彼らもこれからはひとつの魂、ひとつの命を成し、ひとつの霊に導かれ、ひとつの共同体を成すことを示すしるしであった。– ここで挙げられている動物は、古くから慣習的に犠牲の儀式に用いられてきたものである。なぜなら、アブラハムはここで真の犠牲を捧げており、それはまさに厳粛な契約を結ぶ際に用いられていたものだからである。

[6941] 多くの人が、ここでの猛禽類をアブラハムの子孫の敵を予言的に表したものと解釈している。それらは、イスラエルの民を滅ぼそうとしたり、あるいは彼らを偶像崇拝へと誘い込み、契約の成就を妨げようとしたすべての偶像崇拝の部族を象徴している。

[6942] ここでの「400年」とは、エジプトにおけるユダヤ人の奴隷生活を指している。 405年の代わりに400年という丸い数字が用いられているのは、イサクの誕生からユダヤ人がエジプトを脱出するまで、ちょうどその年数が経過していたからである。アブラハムの子孫の中で最初の旅人であり、異郷の者であったイサクは、紀元前1901年に生まれ、ユダヤ人は紀元前1496年にエジプトを脱出した。

[6943] 大まかに言えば、代わって現れた4つの氏族、あるいは世代は、ヤコブの息子レビ、カアフ、アムラム、そしてモーセであり、その期間は268年であったと考えられる。

[6944] アモリ人――カナン人――は、ハモクの息子カナンの息子アモリに由来し、ユダヤ人の絶え間ない、執拗な敵であった。かつては死海の西側に住んでいたが、その後、死海の東側やヨルダン川沿いなど、他の地域にも広がっていった。彼らは主にカナンの地の中央部を占め、いくつかの強大な王国を形成していた。――聖書において「不法が満ちる」とは、社会や民族の最終的な霊的腐敗と死、神による見捨てられ、彼らに対する裁き、そしてその滅亡を意味する。

[6945] アブラムは切り裂かれた動物の間を通り抜けなかった。通り抜けたのは主の目に見える御姿のみであった。すなわち、これは恵みの契約であり、契約の儀式によって具体的に約束され、確認された恵みであった。 煙と炎――これらは二つの象徴であり、誘惑と奴隷制の苦難の中にあってのアブラハムの子孫、そして主ご自身を表していた。主の啓示と約束は、悲しみの闇における光であり慰めである。このように、煙はイスラエルの苦難を、炎は救いを意味していた。

[6946] エジプトの川、すなわちナイル川。ユーフラテス川は、メソポタミアの大河であり、アルメニアの山々から源流を発し、ペルシャ湾に注いでいる。ここに記された土地は、もしイスラエルが神との契約に忠実であり続けていたならば、そのすべてがイスラエルの所有地となっていたはずである。 しかし、民の堕落が定められた計画の成就を妨げていたにもかかわらず、ナイル川の東側の河口とユーフラテス川との間に位置するすべての国々は、一時的にアブラハムの子孫の支配下にあった。

[6947] 不妊はユダヤ人の間では常に恥とみなされ、多産は神からの特別な祝福を意味していた。だからこそ、サラは約束が一日も早く成就するよう、夫に自分の侍女を差し出したのである。 一方、アブラハムは、東方の慣習に従い、主から「まさにサラから息子を授かる」という直接の指示を受けていなかったため、最初の妻との離婚手続きを経ることなく、第

そこでサラは、神の約束が成就しない原因が自分にあると考え、アブラムに、自分の侍女であるエジプト人のハガルを妻として迎えるよう提案した。ハガルは彼に息子イシュマエルを産んだ[6948]。

アブラムがすでに99歳になったとき、主は彼に現れてこう言われた。

「わたしは全能の神である。わたしの御前に歩み、完全でありなさい。そうすれば、わたしはあなたと契約を結び、あなたに数えきれないほどの子孫を与える。」

アブラムは畏敬と献身の念に満たされ、顔を地に伏せた。神は彼に言われた。

「今からは、あなたはアブラムとは呼ばれず、あなたの名はアブラハムとなる[6949]。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。 諸国民や王たちはあなたから生まれる。わたしは、あなたとあなたの子孫[6950]との間に、永遠の契約を結ぶ。すなわち、わたしはあなたと、あなたの後の子孫の神となり、カナンの全地をあなたがたに永遠の嗣業として与える[6951]。わたしとあなたがたとの間の契約の目に見えるしるしは、あなたがたのすべての男子が割礼を受けることである。 生後八日目に、あなたがたの子供たちだけでなく、異邦人から銀で買い取った奴隷の男子も、すべて割礼を受けさせなければならない。 割礼を受けていない者は、わたしの契約を破った者として、その民との交わりを失う[6952]。あなたの妻サラを、もはやサラとは呼ばず、その名をサッラとせよ[6953]。わたしは彼女を祝福し、彼女から諸国民が生まれ、諸国民の王たちが彼女から出るであろう。

アブラハムは喜び、笑ったが、同時に不思議に思い、心の中でこう尋ねた。

二の妻を娶ることができた。実際、離婚は慣習上許容されていただけでなく、モーセの律法にも明記されていたのである。

6948 イシュマエル――ヘブライ語で「神に聞き入れられた者」――という名は、ハガルが妊娠中にサラの迫害から逃れて荒野へ逃げた際、主が彼女の苦しみを見憐れみ、彼女に帰還を命じ、息子を授けたことに由来する。

6949 「アブラム」という呼称は、「高き父」、「尊い父」を意味する敬称である。一方、「アブラハム」は、約束の成就を表す名前であり、「多くの父」、あるいは「多くの民の父」を意味する。 フィラレート大主教は、東方の王たちが誰かを高く評価する際、改名を行うことがあったと指摘している。これと同様に、ここでも神はアブラハムを高く評価し、彼の名を改めたのである。

6950 アブラハムを通じて結ばれた永遠の契約は、彼の肉的な子孫であるイスラエルの民だけでなく、さらに広く全人類――すなわち、信仰によってその約束を受け入れた者たち――と結ばれたものであり、それゆえ、メシア的な意味において「永遠の契約」と呼ばれているのである。

6951 カナンの地の永遠の嗣業は、神秘的かつ予表的な意味で理解されるべきであり、そこには神の御国とキリストの聖なる教会が示されている。

6952 割礼（最も秘められた肉の切除）は、神とアブラハムおよびその子孫との間の契約のしるしとして機能し、旧約時代の信者たちを異教徒から区別する印であった。最も高次で神秘的な意味において、割礼はキリスト教の洗礼の予型として機能した。使徒パウロは、アブラハムの割礼を「信仰の義の印」（ローマ4:11）と呼び、また私たちの「人の手によらない割礼」を「キリストによる割礼」（コロサイ2:11）と呼ぶことで、割礼のこのような意味を明らかにしている。前者は約束であり、後者はその成就であり、後者においては、悪魔とそのすべての行いを否定する内なる人が割礼を受けるのである。これは、使徒の言葉によれば、文字によるのではなく、心と霊によってなされる割礼である。 割礼によって人が信者の共同体に入っていたように、洗礼によって人はキリストを信じる信者の共同体に入るのです（ヨハネ3:5；Iコリント12:13）； また、割礼が、神への忠実さと神の戒めの厳格な遵守を条件として大きな意義を持っていたように、バプテスマもまた、肉体の不浄を洗い流すことではなく、罪の除去、あるいは使徒の言葉によれば、罪深い肉の体を脱ぎ捨てること、良心の清さという約束、そしてキリストの復活によって、私たちを救うのである（Iペテロ3:21； エフェソ5:26–27；フィリピ3:3,9–11；コロサイ2:11–13；ローマ6:2–14）。 また、使徒が「人の手によらない割礼」（洗礼）を救い主の復活と密接に結びつけていることから、教会の教父たちは、旧約聖書の割礼に神が定めた「生後八日目」という期間そのものに、 ――すなわち、第七の安息日の翌、第八日である日曜日に起こったキリストの復活への指し示しであり、それはキリストにおける私たちの義認と、洗礼による肉的な汚れの除去を予告するものであった。そのため、キリスト教の初期の時代には、乳児への洗礼はしばしば生後第八日に行われていた。

6953 最初の名前「サラ」は「支配」を意味し、すなわち「女主人」であり、一般的な敬称である。一方、「サッラ」は「公爵夫人」あるいは「高貴な妻」を意味する。この名前そのものに、彼女から王たちが生まれるという、後に語られる預言が込められている。

「果たして百歳の男に子が生まれるというのか？　そして、サラが九十歳で産むというのか？」

しかし、主は御自身の約束を繰り返され、将来の息子に「イサク」という名を与えると予告された。

その直後、主は再びマムレの樫の林でアブラハムの前に現れた――その様子は次の通りである。ある日の正午、アブラハムは自分の天幕のそばに座っていた。目を上げると、目の前に三人の旅人が立っているのが見えた。彼はすぐに彼らに向かって駆け寄り、地にひれ伏して、その筆頭にこう言った。

「主よ！もし私があなたの目にかなう者であるなら、どうかこのしもべを素通りしないでください。少し水を汲んで、あなたの足を洗わせていただけませんか[6954]；それから、この木の下で休んでください[6955]。そして、旅の糧となるパンを持って参ります。」

旅人たちは[6956]その願いを受け入れた。そこでアブラハムは急いで天幕のサラのもとへ行き、小麦粉を早くこねて無発酵のパンを焼くよう彼女に言った。それから群れのもとへ駆け寄り、柔らかくて良質の子牛を選び、自分のしもべにそれを調理するよう命じた。　無発酵のパンと子牛の調理が終わると、アブラハムはさらにチーズと牛乳を取り出し、それらすべてを客たちの前に並べた。客たちは食事を始め、その間、アブラハムは木陰に立ち、彼らに仕えていた。食事の最中、旅人たちはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻、サラはどこにいるのか？」

「彼女はここ、天幕の中にいます」とアブラハムは答えた。

すると、その中の一人――それは主ご自身であった――が言った。「来年の今頃、私が再びあなたのところに来るとき、あなたの妻サラには息子が生まれるだろう。」

サラは天幕の入り口に立っていた。その予言を聞いて、彼女は心の中でこう思い、笑った。

「私のような年寄りに、こんな慰めがあるものかしら。それに、私の主人も年をとっているのに。」

しかし、主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。神にとって不可能なことなどあるだろうか。定められた時期に、わたしはあなたのところへ来る。そしてサラには息子が生まれる。」

すると、サラは恐れおののいた。彼女は、自分の内なる思いを見通す至高の神の御力の前に立っていることを感じ、動揺しながら、自分は笑っていないと主張し始めた。　しかし、主は彼女を責め、彼女が笑ったことを改めて繰り返された。こうして、主はご自身が「心を見通す方」であることを示され、サラには自分の思いにもっと注意を払い、神の約束にもっと従順であるよう教えられた。

その後、旅人たちは立ち上がり、そこからソドムへと向かった。アブラハムは、使徒の言葉によれば、*「希望を超えて、希望をもって信じた」ため、「『あなたの子孫はこれほど[数多い]ものとなる』」と告げられた通り、多くの民の父となった。　そして、信仰において弱まることなく、彼は、百歳に近い自分の肉体がすでに死んでいること、またサラの胎内が死んでいることを考えもしなか*

6954 古代、旅人はサンダル（木製または革製の靴底を紐で足に固定したもの）しか履いておらず、旅の後の足の洗浄は、特に東方において、もてなしの第一の務めとされていた。

6955 聖ヒエロニムスの証言によれば、アブラハムが主ご自身をお迎えする栄誉に浴したマムレの樫の木は、コンスタンティウス帝の時代（すなわち、およそ4世紀半ばまで）以前から存在しており、いつの時代も聖地を訪れる敬虔な巡礼者たちにその場所が示されてきた。　現在、この聖地とそこに現存する木は、ロシア・エルサレム宣教団の所有となっている。

6956 アブラハムの前に天使として現れた旅人の一人には、主ご自身――エホバがおられ、創世記のこの箇所（創世記17:9）において、主は他の天使たちとは明確に区別されている。　三人の天使の出現を、聖三位一体という偉大な神秘の現れと見なす者もおり、そのため、この神秘を表現する際、アブラハムに現れた三人の旅人の描写がしばしば用いられる。

った。神の約束に対して不信仰によって揺らぐことなく、信仰に堅く立ち、神に栄光を帰し、神が力強く、約束を果たしてくださることを完全に確信していた。　それゆえ、それは彼の義と認められた」（ローマ4:18–22）[6957]。彼から生まれるであろう数多い子孫についての恵み深い約束を信じ、アブラハムは、神聖な訪問者たちに対する喜び、感謝、そして畏敬の念を生き生きと感じながら、彼らを見送った。

道中、主はアブラハムに、ソドムとゴモラの住民たちが数え切れないほどの不義を犯したため、彼らを滅ぼそうとしているというご自身の意図を明かされた。アブラハムは、それらの不義な町々に、たとえ五十人の義人であってもいるならば、神にその町々を赦してくださるよう懇願した。　しかし、それらの町にはその数の義人は見当たらなかった。その後、主はアブラハムの祈りに応じて、もしそこに四十人、次に三十人、二十人、そして最後にせめて十人の義人がいれば、不義な町々を赦すと約束された。　しかし、ソドムとゴモラには、その数の義人も見つからなかった。こうして、不義な町々の運命は決まった。とはいえ、アブラハムの嘆願が全く無駄で実りのないものになったわけではない。なぜなら、彼の甥であるロットは、その町々の破滅から救われたからである。

夕方、アブラハムを訪ねた二人の天使が、旅人の姿でソドムにやって来た。その時、ロットは町の門のそばに座っていた。旅人を見たロットは、彼らに地面まで頭を下げて礼を述べ、こう言った。

「ご主人様方！　どうかこのしもべの家にお入りになり、一晩お泊まりください。足を洗っていただき、明朝、ご自分の道へお進みください。」

しかし、旅人たちはロトを試すかのように断り、そのもてなしを拒んだ。そこでロトは強く懇願し、彼らは家に入った。ロトは無発酵のパンを用意して彼らに振る舞い、彼らはそれを食べた。彼らがまだ寝入る前に、ソドムの住民たちが町のあちこちからロトの家を包囲し、旅人たちを引き渡すよう要求し始めた。ロトは彼らをなだめ、自分のもてなしを受けている旅人たちに害を与えないよう説得しようと外へ出た 。しかし、彼らはロトを侮辱し、扉を壊すと脅した。 そこで、旅人の姿で現れた天使たちは、ソドムの住民たちを盲目にしてしまい、ロトを家の中に連れ込み、親族を連れて、不法行為のゆえに滅びと定められたこの町から立ち去るよう命じた。その際、天使たちはロトに自分たちの正体を明かし、主によって彼のもとに遣わされたことをはっきりと告げた。　すでに夜明けが近づいていたが、ロトはまだためらっていた。そこで天使たちは、ロトと彼の妻、そして娘たちの手を取り、彼らを外へ連れ出した。天使の一人がロトに言った：

「自分の命を救え。後ろを振り返ってはならない。この平野のどこにも立ち止まってはならない。山へ逃げよ[6958]、そうすれば、あなたは死を免れるだろう。」

しかし、ロトは言った。

「いいえ、主よ！　あなたのしもべは、あなたの御目にかなう者となり、あなたは私の命を救ってくださったその大きな恵みを私に示してくださいました。しかし、私は山へ逃れることはできません。そうすれば災いが私を襲い、私は死んでしまうでしょう。　この町は近く、しかも小さいのです。どうか、私がそこに逃げ込み、そこで命を保てるよう、お許しください。」

天使は答えて言った。

[6957] ローマ4:18–22。このアブラハムの信仰の意味については、前述を参照のこと。「真理」とは義認のことである。「むしろ、希望のない希望を信じた」、すなわち、希望の根拠がないにもかかわらず、目に見えず、理性が理解できないもの——すなわち神とその約束——に基づく希望に駆られて、それでもなお信じたのである。

[6958] 「山」とは、モアブ山脈を指す。ロトが滅びから逃れて避難したシゴル（ヘブライ語の原文ではツォアル、かつてはベラと呼ばれていた）は、ヨルダン川流域に位置する五つの同盟都市の一つであり、この国の最南端の都市で、モアブ山脈への道の半ばに位置していた。

「あなたの願い通り、私もこれを行う。この町を滅ぼすことはしない。さあ、その町へ逃げなさい。しかし、少しも遅れてはならない。あなたがそこへ逃げ込むまで、私は自分の務めを果たすことができないからだ。」

これほどまでに、神の義人への憐れみは大きいのだ！　意志は弱いが魂は清いロトのため、また神の選民アブラハムとの親族関係ゆえに、主はこの町に救いを与えるだけでなく、その憐れみによって、ロトが逃げ切るまで、不義な町々に対する正義の裁きを遅らせられたのである。

ロトがこの町にたどり着いたとき、太陽はすでに沈んでいた。その時、主は天からソドム、ゴモラ、アダマ、セボイムに、雨のように硫黄と火を降らせ、これらの町と、その平野全体、そしてそこに住むすべての住民を滅ぼされた――そして、その土地全体が塩湖と化した[6959]。

ロトの妻は天使の命令に従わなかった。ソドムからの道中、彼女は後ろを振り返ってしまったが、その瞬間、塩の柱と化した。一方、ロト自身はシゴルに残ることを恐れ、二人の娘を連れて山へ逃げ、そこで洞窟に住み始めた。

その間、神はついにサラに御慈悲を注がれた。アブラハムが百歳になったとき、彼女は彼に息子を産み、アブラハムは神ご自身からの予告に従って、その子をイサクと名付けた。八日目に、アブラハムは神の命じられたとおり、彼に割礼を施した。そして、九十歳のサラはこう言った。

「神は私に喜びの笑い（[6960]）を与えてくださった。私のことを聞く者は皆、喜ぶだろう。いったい誰がアブラハムに、『サラが子供に乳を与えるようになる』などと言えただろうか。私は彼の老齢の身で息子を産んだのだから。」

その子が成長し、乳離れをしたとき、アブラハムはこの機会を祝って盛大な宴を開いた。サラは、エジプト人のハガルがアブラハムに産んだイシュマエルが、自分の息子イサクを嘲笑しているのを見て、アブラハムに言った。

「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の息子は、私の息子イサクと共に相続人となることはできません。」

アブラハムはこれらの言葉を聞いて心を痛めた。彼は父親として、イシュマエルを愛し、憐れんでいたからである。しかし、神は彼にこう言われた。

「その少年とあなたの女奴隷のことで心を痛めるな。サラがあなたに何と言おうとも、彼女の言葉に従いなさい。イサクによって、あなたの子孫が呼ばれることになるからだ。しかし、女奴隷の息子からも、わたしは民を興す。彼もまた、あなたの子孫だからである[6961]。」

[6959] 塩湖、すなわち死海は、鋭くむき出しの岩に囲まれたヨルダン渓谷の南端に位置している。「塩の海」と呼ばれるのは、その水に多くの塩分が含まれているためである。さらに、ここにはアスファルト、すなわち岩盤から滲み出る樹脂が大量に存在し、それは今もなお湖底から湧き上がり、水面に浮上して空気中に蒸発している。この海が「死海」と呼ばれるのは、その水中でいかなる生物も生きられないからである。　塩の結晶に覆われたその岸辺でさえ、生命が完全に欠如している光景を呈しており、塩アルカリに浸された切り株さえも石のように固まってしまっている。このように、死海は不義な都市に対する神の呪いと懲罰を如実に物語る記念碑となっている。　死海は細長い形状をしており、北から南へ20時間の道のりにわたって広がっている。その水深は北部で1,318フィート、すなわち約190サジェンに達するが、南部は非常に浅い。

[6960] イサクはヘブライ語で「笑い」を意味する。イサクがこの名で呼ばれるのは、彼の母サラが、彼の誕生に関する約束を聞いて笑ったからである。しかし、彼がそう呼ばれるもう一つの理由は、彼の中に、キリストの日の現れを予表する神秘的な象徴が込められているからであり、救い主ご自身が次のように語られたのである。　*「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを喜びとし、それを見て喜んだ」*（ヨハネ8:56）。

[6961] 使徒パウロがガラテヤ人への手紙で詳述しているように、ハガルとサラは、旧約と新約という二つの契約の型であり、同様にイシュマエルとイサクは、旧約の教会と新約の教会の成員を表している（ガラテヤ4:22–31）。　ハガル――女奴隷――は、律法の下にあり、奴隷的な性質を持っていた旧約の教会の象徴である。このように、女奴隷とアブラハムの肉による子であるイシュマエルは、キリスト以前、神の約束の唯一の所有者と見なされていたユダヤ人たちを予表していた。　サラは新約を象徴しており、同様にイサクは、新約の自由な子らであるキリスト者たち、すなわちイサクと同様に「約束の子」であり、肉的な出自ではない者たちを象徴している。なぜなら、洗礼の秘跡によってキリストの教会に入る際

そこでアブラハムは、神の御心に完全に従い、ハガルとその息子イシュマエルを送り出した。旅の途中、彼らは荒野で道に迷い、渇きで死にそうになっていたが、神は奇跡的に彼らを救い、悲しむ母を、その息子から偉大な民を興すという約束をもって慰められた[6962]。

当時、アブラハムは近隣の王たちやカナンの支配者たちの間で、絶大な影響力と尊敬を集めていた。　アブラハムに対する神の最高の庇護と特別な祝福は、誰の目にも明らかであったため、ゲラルの王アビメレクは彼との同盟を求めた。しかし、アブラハムはその後も変わらず旅人として暮らし、どこにも定住する住処を持たなかった。

アブラハムの生涯は、多種多様な試練の中で流れ、忍耐、揺るぎない信仰、神への信頼、そして神の御心への完全な献身の模範を示していた。　しかし、主が彼に与えてくださった数々の恵みを経て、彼の信仰はさらに強固なものとならなければならなかった。そして、彼が長きにわたり生きた後、主は彼に、普通の人間の力をはるかに超える最後の試練を与えられた。アブラハムの信仰を試すため、神は彼に呼びかけ、こう言われた。

「あなたの愛する唯一の息子、イサクを連れて、モリヤの地へ行き、そこで、わたしが示す山の一つで、彼を全焼のいけにえとしてささげなさい。」

そのような命令がいかに異例であり、イサクに対する親としての深い愛があったにもかかわらず、アブラハムは、それが神からのものであること、そして何の異議も唱えることなくそれを果たさなければならないことを、少しも疑わなかった。神への献身はそれほど大きく、彼は唯一の愛する息子を神に捧げることを惜しまなかった。　同時に、彼は、今や子孫を残さずに死ぬこととなったイサクが、以前与えられた約束に従って、ある民族の始祖となり、約束された救い主の先祖となることを信じていた。使徒が言うように、神は力強く、約束の息子を死からよみがえらせてくださるのだと考えたのである（ヘブライ人への手紙11:19）。　そして、自分の意図を誰にも明かさずに、アブラハムは早朝、ロバにまたがり、イサクと二人のしもべを連れ、全焼のいけにえ用の薪を束ねて、主が彼に告げられた場所、すなわちイェブス人の山地へと向かった[6963]。三日目に、神からの特別なしるしによって、アブラハムは遠くからでも、いけにえを捧げるために定められた山を見出した。そこで彼は、しもべたちにロバと一緒にそこに留まるよう命じ、全焼のいけにえ用の薪を取り、それをイサクに担がせ、自らは火とナイフを手に取り、二人で共に山へと向かった。

すると、イサクはアブラハムに言った。

「父よ。火と薪はここにあります。では、全焼のいけにえとなる子羊はどこにあるのですか？」

、私たちは自然の生まれではなく、神の約束によって生まれ変わるからである。　また、ハガルとイシュマエルがアブラハムによって追放されたように、新約の到来とともにユダヤ人のシナゴーグも拒絶され、キリストの自由な教会の子供たちからは、律法という奴隷のくびきが取り除かれた。　キリストにおける永遠の命に関する恵みとすべての約束の嗣業は、キリスト教の自由の子らに与えられ、それを自分たちだけに独占しようとした、奴隷の子らであるユダヤ人からは奪われるのである。　サラがかつて不妊であったが、後に約束の子を産んだように、キリスト以前には不毛であった新約の教会も、預言者の言葉（イザヤ64:1）に従い、夫を持つ者、すなわちユダヤ人のシナゴーグよりも多くの子を産むことになる。　なぜなら、神の約束はすべての民に及んでおり、恵みの力によって、すべての人がキリストの新約の教会に受け入れられるからである。

[6962] 実際、イシュマエルからは数多くの子孫が生まれた。彼の十二人の息子は、アラビアの十二部族の始祖となり、彼らは今なお遊牧生活を続け、その始祖の独立心と野性的な気質を保っている。アラビアに住む中で、彼らは後に他の遊牧民族と混ざり合い、「アラブ人」あるいは「アラヴィア人」という総称で呼ばれるようになった。

[6963] イェブス人――ハモクの息子イェブスにその起源を持つカナン人――は、カナン地方の最も古くからの住民に属していた。　彼らの国は、後にエルサレムが建設されたのと同じ地域、すなわちシオン山にある彼らの都市「イェブス」の場所に位置していた。モリヤとは、ヘブライ語で「神によって指定された場所」を意味し、イェブセ人の土地およびその中にあり、アブラハムが神の指示に従ってイサクを神への生贄として捧げようとした山の名でもあった。　エフレム・シリンは、イサクの生贄が、神の子キリストの最も聖なる十字架の犠牲が捧げられたのと同じ山の頂上で行われたという古代の伝承を伝えている。

アブラハムは答えた。

「神ご自身が、全焼のいけにえとなる子羊を用意してくださるだろう、わが子よ。」そして二人は共にさらに進んでいった。

神が示された場所にたどり着くと、アブラハムはそこに祭壇を設け、薪を並べ、息子のイサクを縛って、薪の上に祭壇に横たえた。そしてアブラハムは手を伸ばし、ナイフを手に取り、息子を刺そうとした。

しかしその時、天から神の声が響いた。

「アブラハムよ！　アブラハムよ！」

アブラハムは立ち止まり、神の命令に耳を傾けた。

「その若者に手を下してはならない」と主は続けられた。「彼に何もしないでいなさい。今、わたしは、あなたが神を畏れ、わたしのためにあなたのひとり息子を惜しまなかったことを知っているからだ。」

そこでアブラハムは、神に対する深い喜びと感謝の念に満たされ、地面から目を上げると、自分の後ろに、角が茂みに絡まった雄羊がいるのを見た。そこで彼はイサクを解き放ち、その雄羊を捕らえて、自分の息子イサクの代わりに全焼のいけにえとして捧げた[6964]。

その後、主は再び天からアブラハムに語りかけられた。

「わたしは誓う。あなたがこのことを行い、わたしのためにあなたのひとり息子を惜しまなかったから、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を天の星や海辺の砂のように増やす。　また、あなたの子孫は敵の町々を支配し、あなたがわたしの声に従ったゆえに、地上のすべての民はあなたの子孫によって祝福を受けるであろう。

[6964] 教会の教えによれば、アブラハムがイサクを神へのいけにえとして捧げたことは、救い主の十字架上の犠牲、その死と復活を神秘的に予表していた。　アブラハムが神の御心に全身全霊を委ね、独り子を神へのいけにえとして捧げることを惜しまなかったように、神もまた*「御子を惜しまず、私たちすべての者のために彼を渡し」*（ローマ8:32）て、十字架の苦しみと死へと導かれたのである。　教会の教父や教師たちは、イサクの犠牲の細部そのものに、予型としてのメシア的な特徴を見出している。イサクは父の家を出て、犠牲が捧げられる場所に赴いた。キリストもまた、エルサレムを出て、その門の外で苦難を受けることになっていた（ヘブライ12:11）。　イサクが犠牲の場へ向かうとき、その後にロバと彼の僕たちが続いていました。同様に、キリストも受難に向かう際、異邦人の召しを示すかのように子ロバに乗られ、その後に弟子たちがヤシの枝を振って従いました。　しかし、イサクは犠牲のために山へ向かう際、従者たちから離れ去った。同様に、キリストもまた、私たちのために死を迎えるべくゴルゴタへ向かう際、弟子たちから切り離されたのである（アレクサンドリアのキリロス）。　イサクに犠牲のための薪が負わされ、彼がそれを肩に担いで犠牲の場まで運んだという事実に、教会の教父たちはキリストの十字架を担ぐ姿の象徴を見出している。　イサクの犠牲の物語全体を通して、彼が父に対して示した完全な服従が見て取れる。イエス・キリストの受難の物語においても、私たちは、キリストが「死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であった」（フィリピ2:8）御父に対する、限りない服従を目にしている。イサクは、何の罪も犯さずに犠牲として捧げられた。キリストは、罪のないお方でありながら、苦しみ、侮辱に耐え、縛られ、十字架につけられた。　「イサクは――聖エフレム・シリンはこう語る――悪意のない小羊のように山に登った。そして救い主はゴルゴタに登り、私たちのために、小羊のように屠られるためであった。そこに刃を見れば、槍を悟れ。祭壇を見つめれば、額を理解せよ。薪の束の中に――十字架を見出せ。火を見れば、心で愛と熱意を抱きしめよ」。――しかし、金口ヨハネスが指摘するように、イサクは父の意図によってのみ犠牲にされ、彼の代わりに雄羊が捧げられるのである。　しかしここでは、苦難に遭うキリストの象徴であることをやめたイサクは、復活したキリストの象徴となり、苦難の象徴の欠如は雄羊によって補われる。教会の教父たちは、この雄羊の中に、犠牲に捧げられる小羊――肉体（雄羊）においては苦難を受けたが、神性においては苦難を受けなかった（イサクによって予表された）キリスト――の姿を満場一致で認めているのである。　そして、三日目にイサクの母サラが彼を生きて見つけたように、教会もまた、救い主の十字架上の死から三日目に、復活し、無傷の御姿を見出すのである。– 最後に、イサクの犠牲の後、神がアブラハムとそのすべての子孫に豊かな祝福を注がれたように、キリストの犠牲もまた、全人類に数えきれないほどの祝福をもたらすのである。

この偉大で恵み深い約束を受けたアブラハムとイサクは、畏れと喜びのうちに山を下り、当時アブラハムが住んでいたベエル・シェバ[6965]へと戻った。

それから十二年後、アブラハムの妻サラは息を引き取り、カナンの地、マムレ（後のヘブロン）の向かいにあるマフペレの洞窟[6966]に葬られた。

それから3年後、イサクが40歳になり、アブラハムが140歳になったとき、聖なる義人である先祖は、アブラハムの兄弟ナホルの孫娘である高潔なリベカを息子に嫁がせることで慰めを得た。 その後、アブラハム自身もヘットゥラと新たな結婚をし、彼女との間にさらに 六人の息子をもうけた。 アブラハムは百七十五年を生き、その後、安らかに主なる神のもとへ息を引き取った。彼は生涯を通じて、真の神への信仰の器であり模範として、その信仰を代々の子孫に受け継がせ、神に忠実に仕え、神の御心に適う者であった。 アブラハムの優れた資質と徳を、主は愛された。それゆえ、主は自らを特に彼の神と呼ばれた（創世記 17:7、 26:24、 28:13）と自らを「彼の神」と称され、聖書は彼を「神の友」と呼んでいる（歴代誌下20:7；イザヤ41:8；ヤコブ2:23）。旧約聖書に登場する彼の子孫たち、さらには神の御前で聖とされたモーセやダビデでさえ、アブラハムを神の御前で執り成し手として呼び求めた。 このユダヤ民族の始祖、すなわちその子孫によって地上で真の信仰が守られてきた者から、キリストご自身が肉において生まれ、キリストを真に信じる者は皆、アブラハムの子らと呼ばれています（ローマ6:7–8；ガラテヤ3:7、26–29）。 また、死後の私たちの運命においても、忠実なアブラハムと共にあってこそ、永遠の命と救いの嗣業を得られると希望することができるのです。主ご自身が、金持ちとラザロのたとえ話の中で、アブラハムを天の御国における至福の住まいに住む者として指し示しておられます（マタイ8:11；ルカ16:22； ガラテヤ3:9, 29）。キリストが、御自身の肉による先祖である聖なる義人アブラハムの祈りによって、私たちすべてをその御許に導いてくださいますように。アーメン。

聖ペトロの記念日

記念日：10月9日

聖ペトロ（俗名レオティオス）は、テオフィロス皇帝の治世[6967] に生き、ガラティア[6968] 出身で、両親はテオフィロスとエウドキアであった。彼は美しく威厳のある風貌と並外れた体力を備えており、そのために王室のコミテス[6969] に選ばれ、皇帝から様々な軍事的栄誉を授けられた。 しかし、レオンティウスがその職に就いていた期間は長くは続かなかった。すべてを捨てて修道生活へと身を投じ、ダフネオンと呼ばれるある修道院[6970] で、ペトロという名で修道衣をまとい、修道者となった

6965 ビルサバ――ヘブライ語で「誓いの井戸」を意味する――という名は、その地域（パレスチナの南端、ペリシテ人の地の境界）で アブラハムが井戸を掘り、その場所でペリシテ人の王アビメレクと誓約の盟約を結んだことに由来する（創世記21:32）。その後、アブラハムはこの地に果樹園を植え、長い間住み続けた。やがて、この地に町が築かれた。

6966 ヘブロンのマムレの向かいにあるマケペラを、アブラハムはヘテ人エフロンから買い取り、そこにサラを葬った。 その後、この場所にはサラのほか、アブラハム、イサクとリベカ、そして彼らの息子ヤコブとその妻リアも埋葬された。その後、この洞窟には記念碑が建てられ、ヘブロンの主要な観光名所となり、すべての旅行者の注目を集めている。

6967 テオフィロス――829年から832年まで在位したビザンツ帝国の皇帝で、著名な偶像破壊者である。

6968 ガラティア――小アジアの小さな山岳地帯の州で、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置する。

6969 コミタスとは、当初は州の高官の随行者を指したが、後に皇帝の側近として最も身近な随行団を構成する者たちを指すようになった。コンスタンティヌス大帝の時代以降、この呼称は、たとえ皇帝の側近に属していなくても、すべての宮廷人および政府高官の称号となった。

6970 この修道院はシリアのアンティオキア近郊にあり、その名称は、修道院が位置していたダフネ市の郊外地区に由来する。

。 その後、彼はオルビア[6971]へと向かい、様々な聖地[6972]を巡礼し、ラオディキアやアッタリア[6973]にも足を運び、旅の困難やイスラム教徒からの危険を勇敢に耐え抜き、再びオルビアへと戻った。　彼は晩年を、すでにバシレイオス・マケドニアノスの治世下[6974]　において、聖フォキオスの修道院[6975]で過ごし、そこで数多くの修道者の功績を残した後、安らかに息を引き取った。

聖ポプリアの記念日。

記念日：10月9日

聖ポプリアは、ユリアヌス帝の治世においてアンティオキア教会のディアコニッサであり、その徳高い生活で知られていた。若き頃、彼女は短期間結婚生活を送り、後に敬虔な長老となった息子ヨハネをもうけた。 夫の死後、彼女は処女たちの集団[6976]を自身の元に集め、彼女たちと共に主を賛美した。ある日、彼女はこの処女たちと共に早課を歌っていた；　その際、彼女たちはとりわけ、次の詩篇を大声で詠んだ。「*異教徒の偶像は、銀や金、人の手による造り物である。それらは口はあるが語らず、　目はあるが、見えず、耳はあるが、聞こえず、その口には息がない。それらを作る者も、それらに頼る者も、すべて彼らに似ている……*」（詩編134:15–18）。　ちょうどその時、アンティオキアに到着した皇帝が偶然その場を通りかかり、この歌声を耳にすると、黙るよう命じた。しかし、ポプリアはさらに大きな声で歌い始めた。すると、激怒した皇帝は合唱団の団長を自分の元へ連れてくるよう命じ、同行していた兵士一人ひとりに彼女の顔を殴るよう命じた。　その間、聖女は怯むことなくユリアヌスの不敬虔を糾弾し、神の真理を何よりも尊ぶと語った。ついに彼女は自宅へ解放され、そこでも相変わらず、処女たちと共に神を賛美し続けた。その直後、彼女は安らかに主のもとへ息を引き取った[6977]。

10月23日

10月10日（旧暦）

聖殉教者エウランピオスとエウランピアの殉教

記念日10月10日

[6971] オルビア――現在のアスタク――は、ビフィニア北西部の都市である。

[6972] ここでは、主に、救い主の生涯、教え、受難、そして十字架上の死によって聖別されたパレスチナの地を指している。

[6973] ここでいうラオディキアとは、おそらくリコス川沿いにあり、かつて繁栄を極めたフリギアの主要都市を指すものと思われる。アッタリア（現在のアダリア）は、パンフィリアの沿岸都市である。

[6974] バシレイオス・マケドニアノスは、867年から886年まで在位したビザンツ帝国の皇帝である。

[6975] 聖殉教者フォキスの修道院は、コンスタンティノープルにありました。

[6976] 古代教会においては、女子修道院が出現する以前から、またその設立当初においても、神への奉仕に全身全霊を捧げ、貞潔の誓いを立てた処女たちの特別な階級が存在した。　こうした人々は「処女」と呼ばれ、教会内で大きな尊敬を集め、教会の栄光と見なされていた。彼女たちは、霊的生活に熟達した年長の女性たち――指導者――の指導の下、民家にて沈黙、神への黙想、そして祈りの修行に励んでいた。教会は、しばしば最も尊敬されるディアコニッサたちに、彼女たちの指導と監督を任せていた。

[6977] †4世紀後半の初め。

マクシミアヌス帝の治世下、キリスト教徒に対する激しい迫害が繰り広げられた。多くの信者たちは、迫害者たちからの追及を恐れ、家を捨てて山や洞窟、砂漠に身を隠した。当時、ニコメディアの町出身で、高貴な家系の青年エウランピオスという者がいた。彼は信仰と行いの両面において、真のキリスト教徒であった。　他のキリスト教徒たちと共に身を隠していた彼は、彼らから街へ派遣され、パンを買って密かに砂漠へ持ち帰るよう命じられた。ニコミディアに到着したエウランピオスは、城門に貼り出された、キリスト教徒を殴打するよう命じる王の勅令が、羊皮紙に書かれているのを見た。　エウランピオスはその勅令を読み上げると、祖国を脅かす敵ではなく、罪のない人々を標的にし、数え切れないほどのキリスト教徒を殺害することで自らの国土を荒廃させている王の、この狂気じみた命令を嘲笑した。　直ちにエウランピウスは捕らえられ、縛られて不正な裁判にかけられた。無法な裁判官は、若く美しいエウランピウスを目の前にして、まず狡猾な言葉で彼を誘惑し、偶像を拝むよう促した。

「その顔立ちを見れば、お前はただの者ではなく、高貴で誠実な家柄の者であることがわかる。美しい若者よ、その美しさを無駄に滅ぼしてはならない。その高貴さを不名誉と引き換えにしてはならない。それどころか、自分自身と一族全体のために、名声と名誉を勝ち取るよう努めよ。　もし王の命令に従い、我々と共に神々に拝礼すれば、我々全員から敬意と栄光を受け、王からは報奨と何らかの偉大な位階を与えられ、安寧のうちに日々を過ごすことになるだろう。私の良き助言に耳を傾け、我々と心を一つにしてほしい。　ほら、すべての神殿があなたのために開かれており、そこには様々な神々が祀られ、祭壇は供え物で満たされ、皆がそれぞれの神々を喜び、拝んでいる。あなたも中に入って拝みなさい――そうすれば、あなた自身も大きな恵みを得、私たちに喜びをもたらし、神々も常にあなたに慈しみ深くあられるでしょう。

聖エウランピオスは、聖霊の恵みに満ちて、裁判官にこう答えた。

「あなたの心は狡猾さに満ち、口からは欺瞞の言葉が溢れているが、あなたの約束はすべて無駄で偽りである。あなたは私を何によっても惑わすことはできず、キリストから遠ざけることもできない。ああ、もしあなたが私の真実の言葉と誠実な助言に耳を傾け、私が崇め、拝している真の神を知ることができたなら！　私は、彼から、一時的で虚しいものではなく、永遠で真の栄光と誉れを、また、あなたも、あなたの王も、そして今のこの世の誰も持っていないような報いと富を、あなたに約束しただろう。しかし、あなたはアスピドのように耳が聞こえない[6978]であり、あなたに有益なことだけを語っている私の言葉に耳を傾けないのだから、あなたは　の神々と同じ運命を、火のゲヘナで分かち合うことになるだろう。そして、神々に不浄な生け贄を捧げた報いとして、あなた自身が絶え間なく蛆虫に食われる生け贄となるのだ。　しかし、私は悪魔たちには従わず、*「神に賛美をささげ、至高者への誓いを果たす」*（詩編49:14）*のである。*

これを聞いた裁判官は、聖人に拷問で脅し始めた。しかし、エウランピオスは恐れを知らず、主キリストのためにいかなる苦しみにも耐える覚悟があることを示した。そこで裁判官は、彼を裸にし、地面に寝かせ、鞭で打つよう命じた。　聖人は長く容赦なく打ちのめされたが、勇敢に苦痛に耐え抜いた。受けた傷から激しい痛みを感じながらも、まるで何の痛みも感じていないかのような様子を見せた――これほどまでに偉大な精神を示したのである！　拷問官は、彼の長い忍耐を見て、さらに怒りに燃え上がり、彼を木に吊るし、鉄の器具でその肉体を苛むよう命じた。殉教者はそれによってひどく傷つけられ、深い傷口から骨さえ見えるほどであった。長い拷問の後、彼は血まみれで打ちのめされたまま地面に横たわっていた。　その体は傷だらけだった。しかし、彼の苦しみはこれで終わらなかった。裁判官は彼のために新たな拷問を考案した。彼は、殉教者の手足の指を細い革紐で縛り、強く締め上げるよう命じた。これにより、殉教者は恐ろしい痛みに耐えなければならなかった。

[6978] アスピド――毒が非常に強く、死をもたらす特殊な種類の蛇。比喩的に、この名称は極めて邪悪で有害な人間を指すために用いられる。

なぜなら、手足の指が無理やり関節から引き離されたからである。　しかし、それでもなお、拷問者の怒りは収まらなかった。彼は殉教者のこれまでの苦しみの上に、さらに新たな苦しみを加えた。鉄の床を赤熱させ、その上に聖人を横たえるよう命じたのである。そうすれば、炎の勢いによって、聖人の体はまるで蝋のようにその床の上で燃え尽きるはずだった。　床が激しく熱せられると、聖エウランピオスは十字を切ってからその上に上がり、まるで柔らかい寝床のように横たわった。聖殉教者の体は火に焼かれ、溶け始め、崩れ去り始めた。　これほど恐ろしい拷問であれば、死に至るはずだと誰もが思った。しかし、全能の神は御自分のしもべの命を支え、超自然的な方法でその魂を肉体の中に留め置かれた。それによって、弱さの中に現れる神の力と、殉教者の忍耐がすべての人々に示されるためであった。　もはや誰もが、エウランピオスがあの灼熱の火床の上で間違いなく死ぬだろうと考えていたその時、聖人は自らの内に新たな力を感じ取り、床から立ち上がると、まるで拷問を受けたことなどなかったかのように、健やかに歩き始めた。　心の中で主なる神を堅く信じ、エウランピオスは、あたかも自らの信仰を放棄し、不敬虔な異教徒たちの無神論に同意するかのようなふりをした。　それゆえ、彼は栄光のうちに偶像の神殿へと連行され、裁判官をはじめとする者たちは皆、エウランピオスがキリストを捨て、彼らの神々に拝礼しようとしていると思い、喜びに沸いた。大勢の民衆が彼に従って神殿へと向かった。　しかし、聖人は神殿へ向かう道中、主イエス・キリストに熱心に祈り、主が御力を現し、目がくらんだ人々を照らし、御名を聖なるものとして栄光をお与えくださるよう願った。　エウランピオスが神殿の中に入ると、その神殿にあるすべての偶像の中で最も大きく美しいマルスの偶像[6979]を目にしました。彼はその像に近づき、こう言いました。

「わが主イエス・キリストの名によって、声もなく魂もない偶像よ、お前に命じる。地に倒れ、塵と化せ。」

聖人がそう言い終えるやいなや、偶像は大きな音を立てて倒れ、粉々に砕け散った。これを見た民衆は叫び出した。

「キリスト教の神は唯一であり、偉大で力強い。」

こうして多くの者がキリストを信じるようになったが、裁判官は激しい怒りに駆られ、エウランピアを捕らえて再び拷問にかけるよう命じた。

エウランピアの妹であるエウランピアという名の乙女は、兄がキリストのために苦しんでいると聞き、拷問の場へ駆けつけ、その真ん中に立ち、兄にこう言った。

「私たちを産んだのは同じ母ではありませんか。同じ乳房で育てられたのではありませんか。そして、同じ神を信じるよう教えられたのではありませんか！　なぜ、キリストのために苦しむことで、私から同じ運命を奪うのですか。なぜ最初から私に知らせてくれなかったのですか。そうすれば、私も最初からあなたと共にすべての苦しみを受けられたのに。私もあなたと同じように、私の主のために死にたいのです。すべての拷問者たちに、私がキリスト教徒であり、キリストのために死ぬ覚悟があることを知らしめてください。

そして彼女は裁判官にこう言った。

「よく聞いて、裁判官よ。私が誰なのかを知ってください。私はキリストのしもべです。　キリストこそが私の命であり、私の魂の喜びです。私はキリストを愛し、キリストへの生贄となりたいのです。火を準備し、獣を連れてきて、拷問用の車輪を据え、剣を研ぎ、様々な拷問を考案してください。私のキリストのために、あなたがどのように私を苦しめようとも、私は愛する兄弟エウランピオスと同じように、すべてに耐える覚悟があります！」

[6979] マルス、あるいはアレス――ギリシャ・ローマ神話の戦いの神。

拷問官は、この言葉を聞いて彼女の大胆さに驚き、彼女の顔を殴るよう命じた。聖女は長い間殴られ続け、やがて顔はすっかり原形を留めなくなり、鼻や口から血が流れ出した。一方、聖エウランピオスは、次のように語りかけて妹を励ました。

「恐れるな、姉よ。*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たち』*（マタイ10:28）*だから。*」

その後、拷問官の命令により、エウランピオスとエウランピアの両名を投げ込むために、激しく沸騰する大釜が用意された。エウランピオスは自ら急いでその大釜の中に入った。一方、エウランピアは若い乙女らしく、まるで恐れているかのように躊躇し始めた。　兄は、彼女が躊躇しているのを見て、あたかも涼しい場所であるかのように、沸騰する大釜の中へ彼女を呼び寄せ、こう言った。

「恐れるな、姉よ。勇気を出してここへ来なさい。ほら、見てごらん。私は無傷で、何の痛みも感じていない。あなたも、この熱い釜に触れた途端、すぐに神の助けを感じ、無傷でいられるだろう。」

聖女は兄弟の言葉を聞くと、急いで釜の中に入った。するとたちまち炎の勢いが弱まり、釜は冷め、聖人たちは無傷のまま、神を賛美し、栄光を称えた。　人々はこのような奇跡を目撃して驚嘆し、二百人の男たちが信仰を告白してキリスト教徒となったが、そのために不敬虔な偶像崇拝者たちによって剣で斬り殺された。不法な裁判官は、エウランピオスの両目をえぐり出すよう命じ、その妹を髪をつかんで吊るし、殴打させた。彼女は苦しみの中、こう叫んだ。

「神よ、わが創造主よ、あなたに感謝します。あなたが、あなたのしもべである私に、あなたの聖なる御名のために苦難を受ける栄誉を与えてくださったことを。」

その後、拷問官は、殉教者たちを投げ込むために炉を激しく燃え上がらせるよう命じた。炉が燃え上がったとき、すでに失明していた聖エウランピウスは、手を引かれて炉のそばまで連れて行かれ、投げ込まれた。　一方、聖エウランピアは、誰かに手を引かれて投げ込まれるのを待つことなく、自ら喜びをもって、まるで美しい宮殿に入るかのように、急いで燃え盛る炉の中へと入っていった。しかし、ここでも聖人たちは無傷のままであった。熱は冷たさに変わったのである。　聖なる殉教者たちは炉の中で「三人の少年の歌」を歌い、神を賛美した。拷問官は、彼らをどう扱えばよいか分からず、剣による斬首を宣告した。　兵士たちは彼らを捕らえ、両手を後ろで縛ったまま連行した。処刑場に着くと、聖エウランピオスは自らその清らかな首を剣の下に差し出し、斬り落とされた。一方、聖エウランピアは処刑される前にすでにその魂を神の御手に委ねており、兵士たちは彼女がすでに亡くなっているのを見て、彼女の首を切り落とさなかった[6980]。　こうして、聖エウランピオスは妹である聖エウランピアと共に、殉教の業を全うし、殉教の業の審判者であるキリストのもとへ共に赴き、御方から義の冠を受け取った。

彼らの祈りによって、主キリストが私たちをも御国に迎え入れてくださいますように。父と聖霊と共に、キリストに永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

コンダク、第3調:

立派な殉教者たち、そして血のつながった兄弟である、賢明なエウランピアとエウランピオスを称えましょう。彼らは、十字架にかけられた方の力によって、不法な陰謀を打ち砕いたからです。このゆえに、殉教者たちの栄光と称賛が共に現れたのです。

[6980] 聖殉教者たちの祝福された死は303年に訪れた。9世紀に生きた聖テオファン「ナチェルタン」は、彼らに敬意を表してカノンを著した。彼の時代、聖エウランピオスと聖エウランピオスの聖遺物によって癒やしの奇跡が起こっていた。

聖テオフィロスの生涯

記念日：10月10日

至福のテオフィロスは、ブルガリアの都市ティベリオポリ近郊[6981]で敬虔な両親の間に生まれ、三歳の時に聖なる洗礼を受けて信仰の光に導かれた。　ある日、両親は彼を連れてセレンティイ山へ行き、聖ステファノ神父の祝福を受けようとした。聖ステファノは彼らと彼らの子である至福のテオフィロスに祝福を与え、しばらく彼らと語り合い、教えを授けた後、平安のうちに送り出した。それ以来、少年テオフィロスは、尊い父の祝福により、聖書の読解と研究に励み、常に品行方正で柔和であった。彼が十三歳になったとき、テオフィロスは再び尊い父ステファノのもとを訪れた。聖人は彼を見て、こう言った。

「なぜ、わが子よ、私のところへ来たのか？」

少年はこう答えました。

「尊い父よ、あなたが私を呼んでくださったので、私は両親のもとを離れて、あなたのところへ参りました。」

尊師は言われた。

「いつ、わが子よ、私がお前を呼んだのか。そして、何と言ったのか？」

すると少年は言った：

「私が故郷にいた時、父よ、あなたは私の前に現れ、私を見つめてこう言われました。『テオフィロスよ！　あなたは、*「自分の十字架を負って、わたしに従え」*（マタイ16:24）と語られる主から遠ざかってしまった』と。」　その言葉が私の心を打ち、私はあなたを追いかけ、修道院の門まで来ました。ここに着いたとき、あなたは私の目には見えなくなり、門は閉ざされていました。どうか今、聖なる父よ、救いを求める私から、あなたの顔を背けないでください。」

尊師は、テオフィロスが自分の独房から一歩も外に出ていなかったことを知っていたため、その言葉に驚きました。そして、この悪意のない少年の驚くべき召しを神に感謝し、彼を自分のもとへ迎え入れ、神への畏敬の念、修道生活、礼拝、そして断食の修行を教えることにしました。　三年が過ぎ、少年が善良な指導者からすべての修道者の修行をしっかりと学んだとき、聖ステファノは修道院のイグメンを呼び寄せ、従順で柔和なその少年を剃髪のために彼に託した。　修道院長は彼を受け取り、修道院へ連れて行き、そこで彼に剃髪式を執り行った。テオフィロスは剃髪を受け、あらゆる美徳に彩られた熟練した修道士となり、兄弟たちの間で天使のように暮らし、すべての人にとって有益な存在となった。

両親は、最愛の息子の行方を知らず、彼を深く案じ、神への愛のために知人全員から身を隠し、善良な修行者たちの間でひそかに主に仕えていたその息子を見つけ出そうと、絶えず至る所を探し回った。　数年後、両親はついに息子の居場所を知り、修道院を訪れて、泣きながら修道院長に息子を見せてくれるよう懇願した。修道院長は長い間、テオフィロスを見せることに同意しなかったが、熱心な懇願と悲しみ、そして苦々しい涙に心を動かされ、彼らを憐れんだ。　両親は修道服を身にまとった息子を目にしたとき、喜びの代わりに、さらに激しく泣き崩れた。彼らは数日間修道院に滞在し、聖なる父たちの生活を観察し、彼らにとって有益な話に耳を傾けた。そこで彼らは、自らの資金で、テオフィロスが修行できる修道院を建立しようと決意した。　そこで彼らは、修道院長に熱心に懇願し、テオフィロスと兄弟たちを家に帰してくれるよう頼み、自分たちの計画をできるだけ早く実現することを約束した。しかし修道院長は、若い修道士が親族や知人の間で暮らすのはふさわしくないとして、彼らの願いを聞き入れようとしなかった。　しかし、すべてを人々の益となるよう導かれる神は、テオフィロスについて御自身の御心を明らかにしようとされた。両親が執拗に修道院長に懇願し続けたため、修道院長は修道士たちを呼び集め、神ご自身が、両親の願いに応じてテオフィロス

[6981] ティベリオポリスはマケドニアの都市で、現在はストルミツァである。

を帰すことができるかどうかを告げられるまで、断食し、徹夜で祈り続けるよう命じた。　熱心な祈りの末、三日目に教会堂で、テオフィロスを解放せよと命じる声が聞こえた。そこで皆は、神ご自身がこれを求めておられることを悟り、彼のために祈りを捧げた後、神の栄光がさらに増し加わるよう、修道士数名を付き添わせて祝福とともに彼を送り出した。　両親は彼を連れ帰り、喜びながら家路につき、まもなく修道院を建立した。そこには多くの修道士を集め、必要なものをすべて備え、神の僕たちに完全な安らぎを与えた。　テオフィロスはこの修道院に身を置き、光のように美徳を放ち、皆は彼の善行を見てその恩恵に与かりながら、天の父を賛美した。

テオフィロスがすでに長年にわたり修業に励んでいた頃、人類の敵である不法な王レウ・イサウリアヌス[6982] が、尊厳ある聖なるイコンに対する迫害を開始し、それらを崇敬する者たちを拷問にかけた。　この王は神の家の美しさを憎み、主の聖堂の装飾を奪い去った。彼は聖なるイコンを沼地に投げ込み、足で踏みつけ、火で焼き払い、イコンを崇拝した多くの信者を拷問で苦しめた。　聖テオフィロスはこれに強く反対し、皆に聖像をふさわしい方法で崇敬し、そこに描かれた御顔に礼拝するよう教えた。法を犯す王はこれを知ると、兵士たちを遣わして至福のテオフィロスを捕らえさせ、自分の前に引き立て、尊い聖像の崇敬を放棄するよう命じた。　しかし、至福のテオフィロスがこれに従うことを拒むと、王は聖人を牛の腱で打ち据えるよう命じ、その後、両手を後ろ手に縛り、悪党のように嘲笑と罵声を浴びせられながら街中を引き回させた。　そこで、テオフィロスにロンギンという名の兵士の一人が加わり、拷問者の狂気を糾弾し、聖なるイコンを崇敬するよう説いた。これに対し、拷問者は彼を地面に引きずり倒し、その頭上で多くのイコンを焼き払った。　聖テオフィロスは、ニカイアの街をくまなく巡った後、　、再び不法な王の裁判の場に現れ、聖像を擁護し、王の迷いを糾弾しながら、勇敢に語りかけた。王は聖人の糾弾に耐えきれず、聖人を裸のまま二つの柱に十字架のように磔にし、前と後ろから乾いた腱で鞭打つよう命じた。　拷問の最中、聖人の傷ついた体から流れ出る血を目にした王は、凶暴な獣のようになってしまった。野獣が血を見るといっそう凶暴になるように、拷問者も殉教者の血を見てさらに激しい怒りに駆られた。王は玉座から立ち上がり、自ら長い間聖人を打ち続けた。　その後、鉄のブーツを熱く焼き、それを履かせて道端を引き回すよう命じた。聖なる殉教者は、これらすべての拷問を勇敢に耐え抜いた。王の重臣の一人がこれを見て、その勇敢な忍耐に驚き、拷問者たちの手から彼を引き取り、自分の元へ連れて行き、こう言った。

「テオフィロスよ、イコンに拝礼するのはお前一人だけが狂っているのか、それとも、それらを拝まない我々全員なのか？ まさか、王やシンクリト[6983] の全員が、神の御姿を描いたものに拝礼すべきか否かを判断するだけの分別さえ持っていないというのか？」　もし聖像に拝礼すべきであるならば、神は律法の中で「あなたは、*自分自身のために偶像や、いかなる形像も造ってはならない*」（出エジプト記20:4）と命じられることはなかっただろう。

聖人はこう答えた。

「公爵よ、あなたが聖書に精通していることがわかります。それでは、私と語り合いましょう。」

聖テオフィロスは、聖なるイコンの崇敬について語り始め、聖書に基づいて、旧約聖書の時代からすでに、モーセが荒野で掲げた青銅の蛇や、契約の箱の上に置かれた金のケルビムなど、イコンを崇めることが命じられていたことを説明した。　また、新約聖書においては、主ご自身がアヴガロス・エデススに布の上に御自身の御姿を現された。テオフィロスは多くのことを語り、その高官を諭したため、ついにその高官は彼にこう言った。

「あなたの言葉は真実です、敬虔な長老よ。私も、できる限り王を説得するよう努めます。あなたは私から赦しを受け、自分の修道室へ戻ってください。」

[6982] レウ・イサウリア人――714年から741年まで在位したビザンツ帝国の皇帝。

[6983] シンクリトス――最も重要な帝国の顧問や高官からなる、軍事および民政の政府。

しかし、聖人は、苦難の終わりを迎えられなかったことに心を痛めた。とはいえ、傷を負いながらも、使徒の言葉を引用して喜びを語っていた。*「あなたがたのために、私の苦しみの中で喜び、キリストの体のために、キリストの苦しみの欠ける部分を、私の肉において補っているのです」*（コロサイ1:24）。

その後、彼は自身の修道院に戻り、修道院の兄弟たちは皆、これを大いに喜んだ。自らの死を予言されていたテオフィロスは、その最期を迎える前に、信徒たちに向けた説教をまとめ、安らかに主のもとへ旅立った。

聖殉教者テオテクノスの受難

記念日：10月10日

不敬虔なマクシミアヌス王は、ある時アンティオキアを訪れ、自らの邪悪な神々を称える祝宴を催し、まず兵士たちが偶像に犠牲を捧げ、その後、民衆全員も同様に捧げるよう命じた。　兵士の中には多くのキリスト教徒がおり、彼らは王の命令に従うことを拒み、軍用ベルトを脱ぎ捨て、キリストのために殉教の道へと歩み出した。その中には、アンティオキア全土で知られたテオテクンという名の男がいた。マクシミアンは彼にこう語りかけた。

「テオテクンよ、お前もまた、ディヤとアポロンの神々を信じていない。私はお前を、彼らの大祭司にしようと思っていたのだ。」

これに対し、テオテクンはこう答えた。

「私はキリストなる神を信じ、その御前に自らを犠牲として捧げたいのです。」

そこでマクシミアヌスは、彼から軍服を脱がせ、女の服を着せるよう命じ、女たちと一緒に糸を紡がせた。三週間後、マクシミアヌスは再び彼を呼び出し、こう言った。

「神々に生贄を捧げよ。さもなくば、恐ろしい苦痛の中で死ぬことになる。」

フェオテクンはこれに対し一言も発しませんでした。そこで王は、彼を木に縛り付け、足元に赤熱した鉄を敷き、鉄の棒で全身の腱を切り裂くよう命じました。それでもなお彼が揺るがないのを見て、王は沸騰した硫黄と樹脂を入れた大釜を用意させ、そこに聖人を投げ込むよう命じました。彼が投げ込まれると、たちまちキリストの力によって火は消え、大釜は冷め、殉教者は無傷のままであった。マクシミアヌス　は恐怖に駆られ、聖なる殉教者を牢獄へ連行するよう命じた。そこで彼はゼグナタという名の百人隊長の管理下に置かれ、その者が望むままに彼を拷問するよう命じられた。

その頃、牢獄にはキリストを告白したために投獄されていたアレクサンドラという名の乙女が一人いた。ゼグナートはテオテクノスをその乙女のところに放り込み、二人にこう言った。

「さあ、三日間、よく考えてみよ。もし王の命令に従うことに同意すれば、大きな名誉を得られるだろう。もし同意しなければ、恐ろしい苦痛の中でお前たちを滅ぼしてやる。」

三日が過ぎると、ゼグナートは二人を牢獄から連れ出し、王の命令に従い、偶像に拝礼するつもりがあるかと尋ねた。しかし、二人はキリストへの忠誠を貫いた。そこでゼグナートは、二人の兵士に聖なる乙女を辱めるよう命じた。

テオテクンは、アレクサンドラを不名誉から救おうと、兵士たちより先に彼女の元へ駆けつけ、自分の衣服を脱いで彼女に手渡し、こう言った。

「逃げなさい、逃げなさい。不信心者たちに、あなたの清らかさを汚されないように。」

そして自身は彼女の服を身にまとい、兵士たちを待ち構えて座った。兵士たちは牢屋に入ると、乙女の代わりに女装したテオテクンが座っているのを見つけ、彼を捕らえてゼグナトのもとに連行した。ゼグナトは激しく怒り、まず彼の舌を切り落とし、その後、長く殴打するよう命じた。　その後、彼は殉教者の首に石の臼を縛り付け、川に投げ込むよう命じた。こうして、キリストの殉教者は

その生涯を閉じた[6984] 。殉教者の尊い遺骨は、キリキアのロサの町の近くで発見された。キリスト教徒たちはそれを持ち帰り、彼の故郷に尊く安置し、三位一体の唯一の神を賛美した。　彼に永遠の栄光あれ。アーメン。

聖ヴァッシアンの記念日。

記念日：10月10日

聖ヴァッシアンは、シリア東部出身であった。敬虔なマルキアヌス王の治世[6985] に、彼はコンスタンティノープルへやって来た。セヴェルとヨハネという二人の著名な人物が、彼にコンスタンティノープルに修道院を建設するための資金を提供した。聖ヴァッシアンは、生前からその徳と奇跡によって名声を博していた。　多くの人々が彼の教えに耳を傾け、世俗を捨てて修道生活に入った。聖ヴァッシアノスの弟子たちの数は300人に達した。彼は多くの人々を悪魔の支配から救い出し、神のもとへと導き、悪霊を追い払い、病を癒やし、その他数え切れないほどの奇跡を行った。聖人は大老齢に達してこの世を去った[6986] 。

10月24日

10月11日（旧暦）

聖使徒フィリッポスの生涯

記念日10月11日

聖使徒フィリッポは、パレスチナのケサレア出身であった[6987] 。結婚後、彼には預言の賜物を持つ四人の娘がいた（使徒言行録2:19）。 その後、聖なる使徒たちによって助祭に選ばれ、聖なる第一殉教者であり大助祭であるステファノと共に按手を受けた後、貧しい人々や未亡人の世話をしながら、全力を尽くして信徒たちに奉仕するようになった[6988] 。 、エルサレム教会に対する迫害のさなかに聖ステファノが殺害され、十二使徒を除くすべてのキリスト教徒がユダヤ地方やサマリア地方へと散らされた後、サマリア[6989] には、ちょうどその頃、聖フィリポも到着した。 そこで彼はキリストを宣教し、サマリアの住民たちは皆、心を一つにしてその説教に耳を傾けた。聖フィリポは、あらゆる病を癒やし、悪霊を追い出し、その悪霊が人々から出て行く際に大声で叫ぶという多くの奇跡によっ

[6984] 聖殉教者の没年は、3世紀末または4世紀初頭とされる。

[6985] マルキアヌス――ビザンツ皇帝。450年から467年まで在位した。

[6986] †5世紀末。

[6987] ケサリア――地中海東岸に位置するパレスチナの都市。ユダヤ王ヘロデによって古代都市ストラトンの跡地に建設され、カエサル・アウグストゥス（ローマ皇帝オクタヴィウス・アウグストゥス）にちなんで名付けられた。　この都市は度重なる破壊に見舞われ、現在その跡地には、雑草に覆われた廃墟が残るのみである。

[6988] 聖使徒フィリポは、使徒たちから未亡人や孤児の世話や、キリスト教徒の共同の食事の奉仕を任された七人の執事の一人であった。（使徒行伝6:1–5）

[6989] サマリアは、パレスチナの国あるいは地域として、ヨルダン川の西側、パレスチナの中央に位置していた。その境界は、北がガリラヤ、南がユダヤ、東がヨルダン川、西が地中海である。　サマリアは、サマリア地方の主要都市であり、かつてはイスラエル王国の首都でもあったが、エルサレムから北へ約3ヴェルストの距離に位置していた。現在、この古き栄光の都市には石一つ残っておらず、その跡地にはサブスティエ（かつてのセバスティア）という貧しい小さな村が建っている。

て、自らの説教を裏付けた。　そして、その町には大きな喜びが満ちていた。なぜなら、フィリッポの説教を受け入れ、真のメシアを信じた人々は、肉体の病だけでなく、心の病からも癒やされたからである。　そこには、シモンという名の、非常に著名で名高い魔術師もいた。彼はその魔術によってサマリア全土を驚かせ、人々は皆、彼を極めて偉大な人物だと考えていた。　フィリポの手によってなされる偉大なしるしと奇跡を目の当たりにし、また聖なる使徒による神の御国とイエス・キリストの御名についての福音を聞いたシモンは、信仰を持ち、他の人々と共に洗礼を受けた（使徒行伝8:5–13）。

ある日、使徒フィリポのもとに主の御使いが現れ、エルサレムからガザへと続く道[6990]へと南へ向かうよう命じた。　その道を歩いていると、聖フィリポは、エチオピアの女王カンダキアの宦官であるエチオピア人[6991]に出くわした。彼は礼拝のためにエルサレムを訪れ、自身の統治下にあるガザへ戻るところであった。戦車に乗った宦官は、預言者の書を読んでいた。　使徒は彼に、私たちの主イエス・キリストへの信仰を教え、彼と共に旅を続けながら、その道中で直ちに彼に洗礼を授けた[6992]。

宦官の洗礼の後、使徒フィリポは天使に連れ去られ、アゾトへと移された[6993]。そして、通り過ぎる先々のすべての町で神の言葉を宣べ伝え、ついにケサレアにたどり着いた。ここには彼自身の家があり、そこで四人の娘たち――処女であり預言者たち――と共にしばらく暮らした。　その後、彼は再びエルサレムに戻った。そこで聖なる使徒たちによって司教に任命されると、小アジアのトラリヤの町[6994]へ宣教に遣わされた。そこで多くの人々をキリストへと導き、偉大な奇跡を成し遂げた後、使徒フィリッポは高齢の末に主のもとへ帰った。

コンダク、第4声：

驚くべき異言の達人、キリストの弟子たちの語り手、使徒たちの中で最初に選ばれたフィリッポよ、今日、あなたは世界に癒やしの豊かさを与え、それを称える者たちをあらゆる苦難から守ってくださる。それゆえ、私たちはあなたにこう呼びかけます。「使徒よ、あなたの祈りによってすべての人を救ってください。」

聖テオファン（殉教者、カノン制定者）の生涯

記念日：10月11日

聖テオファンは、パレスチナに住む敬虔な両親の間に生まれました。両親は神を畏れる人々であり、特に巡礼に熱心でした。テオファンには兄弟がおり、後にイコン破壊派から受けた苦難ゆえに

6990 ガザは、ペリシテ人の最も古い都市の一つであり、パレスチナ南部のカナン人の境界線として機能していた。その後、この繁栄した都市はすべての重要性を失い、今では砂丘とみすぼらしい廃墟だけが、かつてここに偉大な都市が存在したことを物語っている。ここからそう遠くない場所に、同じ名前を持つ、より後世に築かれた新しい都市がある。

6991 カンダキアとは、エチオピア、あるいはアフリカの古代エチオピア、エジプトの南に位置していたメロエ王国の女王のことである。カンダキアという名は、エチオピアの女王たちの総称であった。宦官とは、東方の王室のハーレムを守る者であり、　後にこの呼称は宮廷人の一般的な称号となった。聖フィリッポスによって改宗させられた宦官は、プロゼリト、すなわち異教からユダヤ教に改宗した者であった。彼はこの信仰を敬虔に崇める者として、礼拝のためにエルサレムを訪れていた。

6992 これに関する記述は『使徒行伝』8:26–39を参照のこと。

6993 アゾト――地中海東岸、ガザからほど近い場所に位置する、古代の有名なペリシテの都市。現在は、ここにエズドゥドという小さな集落がある。

6994 トラリア――小アジア北西部に位置するリディアの都市。

、「刻まれた者」と呼ばれるようになりました――「刻まれた者」は「ナチェルタンヌイ」と訳されます。[6995]。両親の配慮により、テオファンは弟のテオドロスと共にあらゆる学問を修め、熟達した哲学者となった[6996]。現世の虚しさと移ろいやすさを悟り、*「この世の様相は過ぎ去る」*（Iコリント7:31）とあり、すべてを捨てて、兄弟たちは聖サヴァのラヴラへ赴き、そこで修道生活に身を捧げた。そして熱心に修道生活に励み、祈りとあらゆる徳において優れた成果を上げた。その徳高い生活により、テオファンは司祭の位を授けられた。

当時、聖なるイコンに対する非道な迫害[6997]が始まり、それは神の教会全体を震撼させ、多くのキリスト教徒が聖なるイコンを崇敬したために迫害や拷問にさらされた。 そこで、これらの賢明な教師たちであり、正教の擁護者たちは、エルサレム総主教[6998]によって、まるで羊が狼のもとへ送られるかのように、皇帝レウ・アルメニアヌス[6999]のもとへ派遣され、その不敬虔さを糾弾することとなった。 コンスタンティノープルに到着し、この神に敵対する者の前に現れると、彼らは大胆にもその不義を糾弾した。その結果、哲学者である兄弟たちは多大な苦難を強いられ、それは皇帝レウ・アルメニアヌスだけにとどまらず、その後を継いだ皇帝ミカイル・バルバやテオフィロス[7000]からも受けた。 彼らは、多種多様な拷問、傷や足枷、飢えや渇き、流刑や顔への烙印、投獄、その他数え切れないほどの災難に耐え抜いた。 817年から842年までの20年以上にわたり、彼らは偶像破壊派によって苦しめられ、迫害された。こうした苦難の中、聖テオドロスはこの世を去った[7001]、一方、テオファンは教会に平和が訪れるまで生き延びた。 ビザンツ皇帝テオフィロスの息子ミカエル[7002]は、母テオドーラと共にビザンツ皇帝の位を継承すると、聖像の崇敬を復活させ、それらを神の教会に奉納し、聖像崇敬のために苦難を強いられていたすべての聖なる人々を流刑先から解放し、彼ら全員に多大な敬意を払った。 その際、聖テオファンもまた流刑から解放され、聖像破壊の異端を打ち破った総主教メフォディオス[7003]から叙階を受けた後、ニカイア教会の大主教座[7004]に任命された。

[6995] 聖テオファンの兄弟である聖殉教者テオドロスの記念日は、12月27日に教会によって祝われる。これは、彼らがイコン崇拝の擁護者として受けた残酷な拷問の後、 ビザンツ皇帝テオフィロスが恥辱的な詩句を刻むよう命じ、その苦痛を伴う刻印により、赤熱した針を用いて、殉教者たちの顔はまぶたに至るまで焼き付けられたからである。

[6996] 哲学者――ギリシャ語で「知恵を愛する者」、すなわち、存在に関する至高の問い、すなわち神、世界と人間の起源および法則、人間の使命、そして世界の存在の究極の目的などについて研究に身を捧げた学者を意味する。

[6997] ビザンツ帝国では、8世紀前半に偶像破壊運動という異端と、偶像崇拝者に対する迫害が生じ、9世紀半ば近くまで続いた。その期間は、レオン・イサウリアヌス帝（714年～741年）の治世から、ミカエル3世とその母であるテオドラ皇后の時代までであった。

[6998] 当時の総主教は聖ニキフォロスであり、正統な聖像崇拝を擁護したために後に流刑に処された。彼の記念日は3月13日である。

[6999] レウ5世アルメニア人――ビザンツ皇帝――は、813年から820年まで在位した偶像破壊派の皇帝である。

[7000] ミカエル2世・バルバ（あるいは「口ごもる者」）は、820年から829年まで在位した。テオフィロスは、829年から842年まで在位した。

[7001] 840年頃

[7002] ミカエル3世が王位に就いた当初（842年）、国家は彼の母である聖テオドラによって統治されていた。 842年のコンスタンティノープル公会議において聖像崇拝が復活し、これを記念して、当時、教会に特別な「正教の儀式」が制定された。この儀式は現在も、四旬節の最初の日曜日に執り行われている。

[7003] 聖メフォディオス1世――842年から846年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[7004] ニカイア（現在のイシク）――小アジアに位置し、古代および中世には豊かで繁栄していたが、現在は貧しく人口も少ない都市である。ニカイアはローマ皇帝、そして後にビザンツ皇帝から特別な関心を寄せられ、ニカイア都主教座は最も著名なもののひとつとされていた。 この都市では、第1回および第7回全地公会議が開催された。

聖テオファンは、聖なるイコンを崇敬するための荘厳なカノンを編纂し、キリストの教会に他にも多くの有益な著作を残した[7005] 。この地上の生活から、彼は主のもとへ旅立った[7006] 、そして多くの病に苦しむ中で成し遂げた功績の後、今や天の住まいで至福を享受している。

コンダク、第2調:

キリストの神聖なる受肉を讃え、無形の敵たちを最後まで糾弾した、驚くべきテオファンよ。このゆえに、我らは皆、誠実かつ敬虔にあなたに叫びます。「絶えず我らすべてのために祈り給え」。

聖女殉教者ジナイダとフィロニラの記念日

記念日：10月11日

聖なる姉妹ジナイダとフィロニラは、キリキアのタルソス出身であり、使徒パウロの親族であった。

母を離れ、財産を捨てて、二人は医術を学び、真に使徒的な働きを行いました。二人はデメトリアドの町[7007] を訪れ、その近郊にある一つの洞窟に定住しました。 そこで、ジナイダはあらゆる病を治療し、フィロニラは断食と徹夜祈祷に専念して、偉大な奇跡を起こした。

異教徒たちが夜中に彼女たちの元へやって来て、二人を石で打ち殺した。こうして彼女たちは主のもとで安らかに息を引き取り、至福の眠りの中で天の住まいへと移り住んだ。

主イエス・キリストのイコンから現れた奇跡の記念

記念日：10月11日

ベリテ[7008] の町で、ユダヤ教のシナゴーグの近くに、主イエス・キリストのイコンを所有するあるキリスト教徒が住んでいた。 しばらくして、このキリスト教徒は別の家を購入し、そこに引っ越した。最初の家からは、神の特別な御摂理によって残された主のイコンを除き、すべてのものを運び出した。その後、主のイコンがあったその家に、あるユダヤ人が入居し、聖なるイコンに気づくこともなくそこで暮らし始めた。

ある日、彼は同じくユダヤ人である友人を昼食に招いた。食事中、客は家の壁に目をやり、そこに掛けられたイコンに気づき、主人にこう言った。

「お前はユダヤ人であるのに、どうしてこのイコンを家に置いているのだ？」

主人は、今までそれに気づかなかったと誓い立てた。しかし、客は帰ると、シナゴーグで友人を中傷した。

[7005] テオファンは正教を擁護する多くの著作を残しており、特に148編にも及ぶカノンの著者として知られている。彼の代表的なカノンには、「正教の週」のカノン、使徒たちに関するすべてのカノン、そして故人に関するカノンがある。さらに、聖テオファンは特定の日々のためのスティヒラも執筆した。

[7006] 850年頃

[7007] デメトリアダ——タルススの北に位置するキリキアの都市で、その名は、植物界、穀物、農業、豊穣の守護神とされていたギリシャの異教の女神デメテルに由来する。

[7008] ベリト（現在のベイルート）は、フィニキアの海岸、マガラ川の源流に位置する非常に古い港湾都市である。現在は、シリアのアジア・トルコ地域の主要都市であり、シリア沿岸部で最も重要な貿易拠点となっている。

「この男は」と彼は言った。「ユダヤ人であるにもかかわらず、自宅にナザレのイエスのイコンを飾っているのだ。」

すると、シナゴーグにいた者たちは皆、この事態に激しく憤慨したが、すでに夕方になっていたため、その日は何もできなかった。翌朝、ユダヤ人、祭司、長老たちが集まり、その聖なるイコンがある家へと向かった。　騒ぎ立てながら家に入り、彼らは聖像を掴み取り、家から引きずり出した。そこで彼らは聖像の周りに集まり、自分たちの先祖がそこに描かれた御方に侮辱を加えたのと同じように、この聖像をも侮辱しようと決めた。彼らは聖像に唾を吐きかけ、イエス・キリストの御顔の絵を叩き始め、そしてこう言った。

「我々の先祖たちは、彼を木に釘付けにしたと聞いた。我々もこのイコンに対して同じことをしよう。」

彼らは釘を取り、手と足が描かれている場所にイコンを木に打ち付けた。それから、酢を浸したスポンジを杖の先に付け[7009]、それを主の口元に当て、最後に槍を持ってきて、そのうちのひとりに主の脇腹を刺すよう命じた。　その者が槍でイコンを突き刺すやいなや、たちまちそこから血と水[7010]が流れ出した。これほど偉大な奇跡を目の当たりにし、立ち会っていた者たちは皆、大きな畏怖に包まれた。彼らは血と水を器に集め、盲人や足の不自由な者、悪霊に取りつかれた者たちを連れてきて、この血を塗ってやろうと決めた。

「もし連れてきた者たちが癒やされれば」と彼らは言った。「私たち全員が、十字架にかけられた方を信じるだろう。」

すると、生まれつき足の不自由な人が一人連れてこられ、聖なるイコンから流れ出た血を塗られた途端、たちまち癒やされた。続いて、盲人や多くの悪霊に取りつかれた人々が連れてこられ、その血を塗られた後、彼らは病から解放された。

このことを知った町の住民たちは、この驚くべき奇跡を見ようと急いで駆けつけた。彼らは、病者、麻痺者、ハンセン病患者を皆連れて行き、彼らもまた癒やされた。こうして、その町に住むユダヤ人全体が、私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。ユダヤ人たちは、主の御像の前にひれ伏し、心を痛めながらこう言った。

「このような奇跡を行われるキリスト、神の子よ、あなたに栄光あれ！　私たちの先祖たちが十字架につけたが、今や私たちが信じるキリストよ、あなたに栄光あれ。主よ、あなたにひれ伏す私たちを受け入れてください！」

その後、その町のすべてのユダヤ人――男、女、子供たち――が司教のもとへやって来て、聖なる洗礼によって彼らを導いてくださるよう懇願した。彼らは、血と水が流れ出たあの聖像を司教に見せ、聖なる聖像に対して自分たちが犯したあらゆる冒涜について語った。　司教は、彼らの心からの悔い改めを見て、喜んで彼らを受け入れ、聖なる信仰を教え、妻や子供たちと共に彼らに洗礼を授け、彼らのシナゴーグを我らの主イエス・キリストの教会へと改めた。　そして、多くの病人が癒やされたことだけでなく、主のイコンから起こった奇跡の結果として、異教徒であったユダヤ人たちが洗礼を受け、聖なる信仰を認めたことからも、町のすべての住民に大きな喜びがもたらされた。

それゆえ、誰もが信仰と愛をもって聖なるイコンの前で礼拝を捧げなければならない。とりわけ、神人となられた神の位格、すなわち私たちの主イエス・キリストを称え、その栄光を讃えるイコンの前ではなおさらである。主イエス・キリストには、父なる神および聖霊と共に、世々限りなく礼拝を捧げなければならない。アーメン。

[7009] 胆汁を混ぜた酢。この意識を朦朧とさせ、感覚を鈍らせる飲み物は、死刑囚に飲ませることで、苦痛を少しでも和らげるために用いられた。

[7010] この奇跡は765年頃に起こった。

第7回全地公会議の記念

10月11日の記念

10月11日、正教会は第7回全地公会議の聖なる父たちを記念する。敬虔なイリナ皇后とコンスタンティノープル総主教タラシオスによってこの公会議が招集されたきっかけは、いわゆる「聖像破壊派」の異端であった。

この異端の始まりは、皇帝レウス・イサウリアヌスの時代に遡ります。彼は、聖なるイコンを教会や家から運び出し、広場で焼き払うこと、また、救世主、　聖母マリアや聖人たちの像も、都市の広場や教会の壁面に掲げられているものを含め、すべて破壊するよう命じた。民衆がこの勅令の執行に抵抗し始めると、レウスは迫害の対象を聖像だけでなく、それらを熱心に崇敬する信者たちにも拡大した。　直ちに、群衆を構成する者全員を殺害せよとの命令が発せられた。そしてその日、聖なるイコンへの愛と熱意ゆえに、多くの人々――とりわけ女性たち――が、イコン破壊者たちの剣によって命を落とした。　その後、皇帝はコンスタンティノープルの最高神学校を閉鎖するよう命じ、それによって正教徒が、堅実な神学教育から引き出すことのできた、偶像破壊派との闘いにおける勝利の武器を奪い去った。　ビザンツの歴史家の中には、皇帝が同じ目的で、その学校に所蔵されていた豊富な図書館までも焼き払ったとさえ述べている者もいる。しかし、この迫害者は至る所で、自らの命令に対する激しい反対に直面した。　シリアのダマスカスからは、聖ヨハネス・ダマスキノスがそれらに反対する文章を執筆した。ローマでは、グリゴリウス2世の死後[7011]　、後継者である教皇グリゴリウス3世が　、引き続き反対の文章を書き続けた。また、他の地域からは、公然とした反乱という形でさえ、それに対抗する動きが見られた。

レフの息子であり後継者であるコンスタンティン・コプロニム[7012]　は、聖像崇拝の問題に関して父が採った方針から逸脱することなく、主に聖職者層に影響を与えることを決意した。というのも、聖像破壊派に対する積極的な反対勢力は、至る所で主に司教や修道士たちであったからである。

この目的のために、彼は公会議[7013]　を招集しようと努め、そこで聖像崇拝は非難された。この偽の全地公会議の直後の結果として、聖像は教会から投げ捨てられ、その大部分が焼却され、教会の壁に描かれた絵画やモザイクによる聖なる像は石灰で塗りつぶされた。　この運命を免れなかったのは、壮麗なヴラヘルナ聖母教会でさえもであった。その壁面には、最高の画家たちによって、神人（

[7011] 教皇グレゴリウス2世は皇帝に2通の書簡を送った。最初の書簡で、グレゴリウスは、聖書の箇所のうち、一方で聖像の制作を命じ、他方でそれを禁じているかのように見える箇所をすべて解説し、続いて古代の証言を引用している。　「キリストがエルサレムにおられた頃」と彼は記している。「当時のエデスの君主であり統治者であったアウガルスは、キリストの奇跡を耳にし、キリストに書簡を送った。するとキリストは、自筆の返答と、ご自身の御顔の聖なる栄光に満ちた像を彼に送られた。　この『人の手によらずして造られた』像の所へ行って、その様子を見てこい。そこには東方の民が数多く集まり、祈りを捧げているのだ」。　皇帝にこうした証言を紹介した後、教皇は、皇帝の勅令が西方の正教徒の間で引き起こしている憎悪の全貌を鮮明に描き出している。「至る所で、あなたの肖像画が地面に投げ捨てられ、――と彼は記している――足で踏みつけられ、あなたの顔が傷つけられている」などといった具合である。　教皇は、その書簡を「天から降臨された神が、すべてのキリスト教教会に、世々限りなく平和を授けてくださいますように」という熱烈な祈りで締めくくった。皇帝は脅迫的な返答を送り返したが、これに対し教皇グレゴリウス2世は第二の書簡を書き、以前と同様に断固とした態度で、皇帝にその企てを断念するよう説得した。

[7012] コンスタンティノス・コプロニモスは741年から775年まで在位した。

[7013] 公会議は754年に開催された。その開催場所は何度か変更され、時にはボスポラス海峡のアジア岸にある、いわゆる「ヒエレア」と呼ばれる皇宮で、時にはコンスタンティノープル市内のヴラケルヌの聖母教会で行われた。　当時の正教の熱心な擁護者たちは、この公会議から数多くの呪いを浴びせられた。彼らに対しては、数多くの虚偽の告発がなされた。公会議は、その虚偽の偶像排斥論の根拠として、作り話や教会父たちの偽造された言説を掲げた。

神であり人であるキリスト）の地上での生涯のすべて、そのすべての奇跡、福音書の物語のすべての出来事、そして使徒たちへの聖霊の降臨に至るまでが描かれていた。　イコン迫害から、コプロニムスは聖遺物の迫害へと移り、それらを廃棄するよう命じた。例えば、9月16日には大殉教者エウフィミアの聖遺物が教会から運び出され、海に投げ捨てられ、彼女に捧げられた壮麗なハルキドン教会は兵舎へと転用された。　コプロニムは、修道士たちを聖像崇拝の主な擁護者であると見なし、すべての修道院を閉鎖することを決意した。有名なダルマタ修道院をはじめ、コンスタンティノープルの多くの修道院が兵舎に転用されたり、破壊されたりした。　多くの修道士が拷問の末に命を落とした。その際、修道士たちは、自分たちが守ろうとしていたまさにそのイコンの上で、頭を打ち砕かれるのが常であった。

コプロニモスの後継者であるレウ4世[7014]　の治世下では、聖像崇拝者たちは多少なりとも安堵の息をつくことができた。しかし、聖像崇拝が完全に復活したのは、息子のコンスタンティノスが幼少であったため、夫であるレウ4世の死後、その王位を継いだ皇后イリナ[7015]　の治世になってからのことだった。　即位すると、彼女はまず、聖像崇拝を理由に追放されていたすべての修道士を帰還させ、司教座の大部分を熱心な聖像崇拝者に与えた。その後、聖像破壊派によって剥奪されていた聖遺物へのあらゆる敬意を回復させた。　しかし、皇后は、これらだけでは聖像崇拝を完全に復活させるにはまだ不十分であることを認識していた。コプロニモスによって招集された直近の公会議を非難し、聖像崇拝の真理を回復する全地公会議を招集する必要があった。この点について、タラシウス[7016]は、総主教の座に選出された際、特に強く主張していた。

「もし皇后陛下が、タラシウスが総主教の重責を引き受けることを真に望まれるのであれば、彼はそれに同意する。ただし、全地公会議の招集を条件とする」と彼は述べた。

タラシウスのこの説明を聞いた皇后は、彼を、総主教選出のためにマタヴル宮殿に集まっていた元老院議員や聖職者たちの前に連れて行った。　タラシウスは、この集まりの前で力強く説得力のある演説を行い、もし自分が総主教の座に就くことを望むのであれば、聖像崇拝を承認するための全地公会議を招集すべきだと宣言した。　集まった者たちの大多数はタラシウスの要求を正当であると認め、タラシウスは784年のキリスト降誕祭に総主教に叙任された。 まもなく、皇后イリナとその息子コンスタンティヌス（彼は幼少であったため、皇后が国政を執っていた）の名において、ローマ教皇アドリアヌスに対し、公会議への招待状が送られた。この招待状に、タラシイ総主教も自らからの招待状を添えた。 教皇は、 公会議に自ら出席するという栄誉を辞退した。代わりに、ローマの聖使徒ペトロ教会のプロトプレスビテロスであるペトロと、同じくローマにある聖サヴァ修道院のイグメンであるペトロという二人の使節を派遣した。また、アレクサンドリアおよびアンティオキアの各総主教からの代表者もコンスタンティノープルに到着した。 彼らは上級シンケロス[7017] であり、その中には長老のヨハネスとトマスが含まれていた。彼らはそれぞれの総主教からの全権に加え、エルサレム総主教からの書簡も携えており、その書簡の中で同総主教は聖像崇敬の承認に同意を表明していた。また、コンスタンティノープル総主教区の司教たちも首都に召集された。 当初、公会議は786年の夏、コンスタンティノープルの聖使徒教会で開幕する予定であった。公会議の開会に向けた準備はすべて整っていたが、開幕前夜、コンスタンティノープルで軍隊の間で反乱が勃発し、これが公会議の開催を妨げる結果となった。 公会議は翌年の秋（9月24日）になってようやく開かれたが、会場はコンスタンティノープルではなく、第1回全地公会議が行われた場所である近隣のニカイアにある聖ソ

[7014] レオン4世は775年から780年まで在位した。

[7015] イリナ皇后は、聖像崇拝者の敬虔な家庭で育ち、夫であるレウ4世の治世の頃からすでに聖像に対する熱意を示していたが、そのために失脚し、宮殿から追放されることさえあった。

[7016] 聖タラシオスは784年から806年までコンスタンティノープルで総主教を務めた。その記念日は2月25日である。

[7017] シンケルとは、司教と同じ修道室に住んでいた聖職者の呼称である。通常、司教たちは、最も重要な問題の解決に協力できる、より教養のある人々をシンケルとして選んでいた。

フィア大聖堂であった。公会議の参加者の正確な数は定かではない。 いずれにせよ、307人の司教が公会議の決議文書に署名していることから、その数は300人を超えていたと考えられる。公会議はタラシオス総主教の演説で始まり、その後、公会議宛ての皇帝の勅書が読み上げられた。勅書の朗読が終わると、聖像破壊運動に関与した司教たちの有罪無罪の審理が開始された。

その後、皇帝秘書官レオティオスが、教皇アドリアヌスが皇帝および総主教に宛てた聖像に関する書簡を公会議で聴取する必要性を指摘した。 これらの書簡は、最も深遠な使徒時代の古き伝統のベールを我々の前に開いてくれ、当時の聖なる教会が聖像をどのように捉えていたかを明らかにしている[7018] 。これら両方の書簡が読み上げられた後、教皇の使節たちは、総主教および公会議の全構成員がこれらに同意するかどうかを尋ねた。

タラシウスは、教皇が記したすべてを受け入れると答えた。

「これに従うべきである」と彼は言った。「これに反論することは、不合理な行いをすることを意味する。そして我々自身も、聖書、推論、証拠に基づき真理を究明し、教父たちの教えに基づいてそれを認識した上で、古来の聖なる教父たちの伝承に従い、 絵画的なイコンを、熱烈な愛をもって崇拝する。それらは主なる神と、私たちの汚れなき御母である聖母マリア、聖使徒たち、そしてすべての聖人の御名によるものだが、崇拝と信仰は唯一の真の神に向けられるものである。

「聖公会全体もまた、このように教えている」――彼の言葉に対し、公会の全構成員から応答の声が上がった。

続いて、タラシオス総主教が総主教の座に就いた際に、アンティオキア、アレクサンドリア、エルサレムの司教および長老たちに向けて書いた回勅と、それに対する東方諸総主教からの返書が朗読された。 これらの書簡の朗読後、公会議の父たちは満場一致で次のように宣言した。「我々はこれらに全面的に同意し、愛をもって聖なる尊いイコンを受け入れ、尊び、それらに礼拝を捧げる」。

次の会議の冒頭、タラシオス総主教の助言に基づき、聖書、教父たちの著作、および聖人の伝記の中から、イコン崇敬の教義を立証する根拠となり得るすべての箇所を再検討することが決定された。 後者の中には、聖なるイコンや聖遺物から生じた奇跡に関する数多くの物語が含まれていた。その一部を以下に挙げる：

聖アナスタシオス・ペルシアニヌス（ペルシア人、628年没。記念日は1月22日）の殉教記によると、彼の聖遺骨がパレスチナのケサリアへ移送された際、四方八方から人々が迎えに駆けつけた中で、アレタという名の女性が疑念を抱き、こう言ったという。

「私は、ペルシアから運ばれてきた聖遺物には拝礼しません。」数日後、聖殉教者は夢の中でアレタに現れ、こう尋ねました：

「あなたは腰の病に苦しんでいるのか？」

[7018] 聖なるイコンの崇敬に関する古代からの証言に加え、これらの書簡には教父たちの著作からの抜粋も含まれている。例えば、そこには次のような抜粋が引用されている：1) バシレイオス大主教がユリアヌス背教者に向けた言葉： 「私は、神に祈りを捧げる聖使徒たち、預言者たち、殉教者たちをも受け入れます。それゆえ、私はイコンに描かれた彼らの像をも崇敬し、公然と礼拝します。これは聖使徒たちによって伝えられたものであり、禁じられるべきではありません。それゆえ、我々はすべての教会において、彼らの物語を描き出しているのです。」 2) ボストリアの司教、聖ステファノの言葉：「イコンに関しては、それらは神の名によるあらゆる行いと同様に、善きものであり聖なるものであると告白する。なぜなら、イコンと偶像や彫像とは別物だからである。 主や天使、預言者や使徒、殉教者や義人の名において作られたあらゆる像は、崇拝の対象が木そのものではなく、木の上に描かれたもの、すなわちそこに表されているものに向けられるため、聖なるものである。 私たちは皆、指導者たちを敬い、愛をもって彼らを受け入れている。たとえ彼らが罪人であってもそうであるのだから、なぜ私たちは神の僕たちを敬ってはならないというのか。なぜ彼らの記憶を留めるために像を制作し、彼らが忘れ去られることのないようにすべきではないのか…… 私たちは聖人たちを偲んでそのイコンを描く。そうすれば、誰もがイコンに描かれた聖人を見て、彼らを思い出し、彼らを栄光に輝かせた主を賛美するようになるからだ」。

アレタが「元気です」と答える間もなく、突然、本当に病に襲われたのを感じた。彼女は長い間その病に苦しんだが、その後、一時的に症状が和らいだのを感じ、なぜこのような病に襲われたのかと考え始めた。彼女は四日間、そのことを考え続けた。 5日目の夜明け、再び聖殉教者が彼女の前に現れ、こう言った。

「テトラピルへ行きなさい[7019]。聖アナスタシアに祈れば、あなたは元気になるだろう。」

指定された場所に連れて行かれ、聖殉教者のイコンを見たとき、彼女は声を高らかに叫んだ。

「これはまさに、私が夢で見た方その人だ。」彼女は祭壇の前にひれ伏し、悔い改めの涙を長く流した後、完全に健康な状態で立ち上がった。

公会議でこの奇跡の物語が読み上げられると、教皇の代表者たちは、聖アナスタシアのこのイコンが、その尊い頭部と共にローマの修道院の一つに現在も保管されていると述べ、 タウロメニオスのヨハネ司教は、その声明に付け加えて、シチリア出身のある女性を知っていると語った。彼女はローマ滞在中に、聖殉教者のイコンによって癒やされたという。

続いて、ニコミディアの司教ペトロスによって、ベリテにある主のイコンから生じた奇跡が報告され、エヴァグリオス『[7020] 』から、エデッサにおける、人の手によらず造られた救い主の像による奇跡についての記述が引用された。その奇跡の内容は次の通りである:

「ある時、エデッサはペルシア王ホズロイに包囲された。彼の命令により築かれた巨大な土塁の上から、兵士たちは城壁越しに市民に向けて矢を放っていた。 包囲された住民たちは、土塁の下にトンネルを掘り、それを焼き払うことを決意した。しかし、トンネル内で焚いた火は、新鮮な空気が流入しなかったため、そのたびに消えてしまった。そこでエデッサの人々は、神の手によって描かれた聖像を取り出し、掘った堀のそばへ持ち出した。

その聖像に水を振りかけ、聖像を伝って流れ落ちる水滴で、積み上げられた薪の上で弱々しく燃えていた火に吹きかけたところ、たちまちすべての薪が異常な炎に包まれた。薪を炭に変えると、炎は上の木々へと移り、ホズロイのすべての建造物を瞬く間に焼き尽くした」[7021]。

この物語を読み上げた際、コンスタンティノープル大聖堂の朗読者は次のように述べた。

「私自身が――不肖の僕ではありますが――王の使節団と共にシリアへ赴いた際[7022] 、エデッサに立ち寄り、この人の手によらずして作られた聖像を目撃しました。信徒たちはそれを尊び、崇拝しています。」

これに類する聖父たちの著作からの抜粋が、最初の会議に続く公会議の各会合で数多く朗読された。 タラシウス総主教の言葉を借りれば、公会議の父たちが「教父たちの証言に満ち足りた」とき、会議の場の中央に一枚の尊いイコンが持ち出され、その前で公会議に出席していたすべての父たちは、そのイコンに口づけをしながら、二十二の簡潔な言葉を発し、それぞれを三回ずつ繰り返した。それらの中で、主要な偶像排斥の主張はすべて非難され、呪いにかけられた。

その後の会議では、偽の全地公会議であるコプロニモス公会議の決定事項の検証が行われた。この検証は極めて綿密に行われた。その過程では常に、いわば二つの立場を代表する二人の人物が仲介役を務めた。一人は偽の公会議で決定された内容を読み上げ、もう一人はその決定事項に含まれる虚偽の部分に対する反論を読み上げた。 コプロニモス公会議によって誤って解釈されていた聖書の箇所は、今や新たな解釈が加えられた。例えば、旧約聖書から、自らの な見解を擁護するために、

[7019] テトラピル――コンスタンティノープルにある地区で、聖人の遺骨とイコンが安置され、当時、その聖人の名に因んで教会が建設されていた場所。

[7020] エヴァグリオスは、6世紀の教会史家である。

[7021] ペルシア王ホズロイ1世によるエデッサへの攻撃は、545年のことである。

[7022] アポクリシアリウスとは、君主の側近として、主要な教会の司教を代表する一時的または常任の使節を指し、彼らは自教会およびその首座司教と最高権力者との間のあらゆる交渉を統括していた。

偶像排斥派は十戒の*「あなた自身のために偶像を作ってはならない」*（出エジプト記20:4）という禁令を指摘していた。公会議の教父たちはこれに対し、次のように答えた。

「子牛を崇拝し、エジプトの迷信から免れていなかったイスラエルの民に語られた言葉は、キリスト教徒の聖なる集会には適用できない。神はユダヤ人を約束の地へ導こうと意図して、彼らに『「あなた自身のために、いかなる像も造ってはならない」と命じられた。そこには、悪魔や太陽、月、星々、その他の被造物、さらには鳥や四足動物、爬虫類までもを崇拝し、生ける真の神のみに礼拝を捧げていなかった偶像崇拝者たちが住んでいたからである。　さて、主の御命令により、モーセが証しの幕屋を造ったとき、彼は、すべてが神に仕えるものであることを示すために、知性あるケルビムの姿を表す、人型のケルビムを金で造った。

また、偽の全教会公会議によって、教父たちの著作の中のある箇所も誤って解釈された。イコノボリストたちは自らの主張を擁護するために、例えば、聖アタナシオス・アレクサンドリアスの著作から次のような箇所を引用した。

「目が見える者が見えない者に、耳のある者が聞こえない者にひれ伏すという理由で、被造物を崇める者たちを哀れまずにはいられないではないか。被造物は決して被造物を救うことはできない。」

しかし、公会議は、聖アタナシウスがこの箇所で言及していたのは異教徒であり、その者たちに対して言葉を向けていたことを明らかにした。キリスト教徒は、偶像排斥派が非難したように、唯一の全能の神の代わりに被造物を崇拝したことは決してなかった。　また、偶像破壊派はしばしば教父たちの言葉を断片的に引用していた――その前後の文脈との関連性を無視して――ため、それらの言葉から彼らにとって都合の良い意味が導き出されていたことが判明した。

最後に、偶像破壊派の公会議が引用した表現の一部は、完全に捏造されたものであることが判明した。

偽の全地公会議が自らの信仰宣言を正当化するために提示した根拠が虚偽であり不十分であることが明らかになるやいなや、そのような根拠に基づいて承認されたその信仰宣言そのものが虚偽であることは誰の目にも明らかとなり、そのため公会議の父たちはすぐに、独自の公会議による信仰宣言の最終的な策定へと移った。　この最終的な信仰宣言において、公会議の父たちは、まず公会議招集の契機とそこで行われた作業について言及し、次に「信仰告白」全文を逐語的に引用し、それ以前の六つの公会議ですでに反駁されていたすべての異端に対する反論を提示し、そして最後に、　永遠に続くものとして、聖像崇敬の教義を定めた：

– 我々は、聖なる尊いイコンが、尊き命を与える十字架の像と同様に、礼拝の対象として提示されることを定める。それらが絵の具で描かれたものであれ、モザイクタイルであれ、あるいはその他の素材であれ、ただ適切な方法で制作され、神の聖なる教会内、　聖なる器や祭服、壁や板、あるいは家や道端に置かれるものであっても、また、それらが主であり神であり、我らの救い主イエス・キリスト、あるいは我らの無原罪の御母聖母マリア、あるいは尊い天使たち、そしてすべての聖人と義人たちのイコンであるかどうかにかかわらず。イコンを通じて、　それらが私たちの瞑想の対象となるほど、これらのイコンを見つめる者たちは、原型そのものである[7023]　を思い起こすよう促され、それらへの愛を深め、それらに口づけや敬意、礼拝を捧げようとする動機をより強く抱くようになる。しかし、それは決して、私たちの信仰によれば、唯一の神性のみがふさわしいとされる真の奉仕ではない。　これらのイコンを見つめる人々は、古代に行われていたように、イコンに香を焚き、その栄光を称えて蝋燭を灯すよう促される。なぜなら、イコンに捧げられる栄光はその原型に帰属し、イ

[7023] 原型、すなわちイコンに描かれている者たちのこと。

コンを崇拝する者は、そこに描かれた[7024]の位格を崇拝しているからである。しかし、これとは異なる考えを抱いたり、教えたりする者――それが司教や聖職者である場合は罷免され、修道士や平信徒である場合は破門されなければならない。

公会議は、宮殿の広間を数えきれないほど埋め尽くした、すべての司教、指導者、軍人、およびコンスタンティノープルのその他の市民による主への賛美をもって幕を閉じた。　の公会議議事録の写しは、教皇、東方諸総主教、女帝と皇帝、そしてコンスタンティノープル総主教区のすべての教会に送られた。

こうして、聖像崇敬の真理を回復し、今日に至るまで毎年10月11日に全正教会・東方教会によって記念されている、第7回全地公会議（[7025]）は、厳粛に幕を閉じた。

コンダク、第2声調：

父より言葉に尽くせぬ光として輝き出で、母より二重の性質をもって生まれし御子。その御姿を仰ぎ見て、我らは像の視線を拒むことはない。むしろ、これを敬虔に描き出し、真摯に崇め、このゆえに真の信仰を保つ教会は、キリストの受肉を表すイコンに口づけを捧げる。

10月25日

10月12日（旧暦）

聖殉教者タラハ、プロヴァ、アンドロニクの殉教

記念日10月12日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世、キリキアのタルスでプロコンスル・ヌメリウス・マクシムスが統治していた頃、ポンペオポリス[7026]という町で、タラフ、プロヴァ、アンドロニクという三人のキリスト教徒が捕らえられ、タルスのプロコンスル・マクシムスの元へ連行され、裁判にかけられた[7027]。彼らを見たプロコンスルは、タラフが威厳のある年配の男性であることに気づき、彼にこう言った。

「お名前は？　あなたは最年長であるから、他の者たちより先に尋問すべきだ。」

「私はキリスト教徒です」とタラフは答えた。

プロコンスルは言った。

「その不敬虔な信仰の話はよして、お前の名前を言え。」

「私はキリスト教徒です」と、タラフは再び言った。

すると、マクシムスは使用人たちに命じた。

「その口を殴り、こう言いなさい。『裁判官にそんな答え方をしてはならない』と。」

[7024] 「イポスタシス」とは、ギリシャ語から訳すと「本質」「実体」を意味し、イコンに関しては、そのイコンが捧げられている対象を指す。

[7025] 10月11日が平日に当たる場合、第7回全地公会議の教父たちへの礼拝は、その直後の日曜日に執り行われる。

[7026] ポンペオポリス――別名ソリ――は、キリキアの重要な古代都市であったが、現在ではその遺跡しか残っていない。

[7027] 以下に掲げる聖殉教者たちの受難に関する記述は、殉教者たちの真正な記録である。これらは、聖殉教者たちが殉教したキリキアのアナザルヴァのキリスト教徒たちが、イコニアのキリスト教徒たち宛てに送った手紙からも明らかなように、アナザルヴァのキリスト教徒たちが仲介者を通じて200ディナリウスで入手したものである。

タラフは殴られながらも、こう言った。

「私の名前など何だ？　私はこう言う。私はキリスト教徒だ。この名は、両親から与えられた名よりも私にとって尊い。もしその名も知りたいというなら、両親からはタラフと名付けられたが、戦士だった頃はヴィクトルと呼ばれていた[7028]。」

プロコンスルは彼に尋ねた。

「タラフよ、お前はどこの家系出身なのか？」

– 私は――とタラフは答えた――シリアの都市クラウディオポリス[7029]にあるローマの軍人一族の出身であり、キリスト教徒となってからは軍人としての地位を捨てました。

プロコンスルは言った。

「お前は兵士としてふさわしくなかったが、さて、どうやって軍籍を離れたのか。」

「私は上司のプブリオンに願い出たのです」とタラフは言った。「すると、彼は私を解放してくれました。」

プロコンスルは言った。

「老身を憐れみ、我らの王たちの命令に従え。そうすれば、私もお前を尊重しよう。さあ、近づいて我らの神々に犠牲を捧げよ。宇宙を支配する王たちでさえ、彼らを崇拝しているのだから。」

タラフは答えた。

「彼らはサタンに惑わされ、迷い込んでしまったのだ。」

タラハのその答えを聞いた後、プロコンスルは家来たちに命じた。

「彼の顎を砕け。彼は王たちについて、彼らが惑わされ、迷い込んだなどと言っているからだ。」

タラフは殴打されながらも、こう言った。

「私が主張してきた通り、彼らは人間として迷い込んだのだと、今もなお主張し続ける。」

プロコンスルは言った。

「その無分別な考えを捨て、我らの神々に犠牲を捧げよ。」

「私はただ一人の私の神に仕えている」とタラフは答えた。「そして、その神への捧げ物として、血ではなく、清らかな心を捧げるのだ。」

プロコンスルは言った。

「お前の老いを憐れみ、寛大に扱ってやるから、その狂ったキリスト教の信仰を捨て、神々に犠牲を捧げるよう勧める。」

「そのような不法なことはしません」とタラフは答えた。「私は私の神の律法を愛しており、そこから逸脱することはないからです。」

総督は言った。

「守るべき別の律法があるのだ、この悪党め。」

タラフは答えた。

「あなた方の法律は破滅的なものだ。不敬虔なあなた方に、石や木、すなわち人の手によって造られたものを尊び、それらにひれ伏すよう命じているのだから。」

プロコンスルは、傍らにいた者たちにタラフの首を打つよう命じた。殉教者は、打撃を辛抱強く耐えながら、こう言った。

「私を救うこの信仰から、決して背くことはない。」

「お前をこの狂気から引き離し、分別ある者にしてやる」とプロコンスルは言った。

「好きにしろ」と殉教者は答えた。「お前は私の肉体に対する権威を持っているのだから。」

[7028] ヴィクトルは、ギリシャ語で「勝利者」を意味する。

[7029] クラウディオポリスは、キリキアの一部を構成していたイサウリアの都市である。

プロコンスル・マクシムスは言った。

「彼から衣服を脱がせ、鞭で打て。」

タラフは、打たれている間もこう言っていた。

「今、あなたは私を真に賢明で分別ある者にしてくれた。この苦しみの中で、私は神と、その御子キリストを、これまで以上に信頼するようになったからだ。」

「最も不敬で罪深い者よ」と総督は言った。「当初、あなたは唯一の神に仕えていると言っていたのに、今や二柱――神とそのキリスト――を告白している。どうして今、二柱に仕えながら、我々の多くの神々を拒むのか？」

「私は」とタラフは答えた。「唯一の真の神を信仰している。」

プロコンスルは言った。

「お前は神とそのキリストの名を挙げたのではないか？」

タラフは答えた。

「キリストは神の子（父と聖霊と神性において一つである）であり、すべてのキリスト教徒の希望であり、我々はキリストのために苦難を受けることによって救われるのです。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「無駄口を叩くのはやめて、我らの神々に生贄を捧げよ。」

「私は無駄口を叩いているわけではない」とタラフは言った。「真実を語っているのだ。私はこの信仰を持ってすでに六十五年生きてきた。今さら真実から背くつもりはない。」

そこに立っていたディミトリという名の百人隊長が言った。

「老いぼれ、自分の身を守れ。神々にひれ伏し、私の助言に従え。」

「私から離れろ」とタラフは答えた。「その助言など、サタンの僕よ。」

その後、プロコンスル・マクシムスは、キリストの殉教者を鉄の鎖で縛り、牢獄に投獄するよう命じ、家来たちに言った。

「次の人を連れて来い。」

すると、百人隊長ディミトリは言った。

「ご覧ください、ご主人様。彼があなたの前に立っています。」

プロコンスル・ヌメリウス・マクシムスは、自分の前に立っているもう一人のキリスト教徒を見て、彼に言った。

「まず第一に、お前の名を告げよ。」その男は答えた。

「私の最も尊い名は『キリスト者』であり、人々が付けたもう一つの名は『プロヴ』です。」

プロコンスルは尋ねた。

–プロヴよ、お前はどこの出身か？

「私の父は――」とプロヴは答えた。「――フラキア出身でしたが、私はパンフィリアのペルギアで生まれました[7030]、そして私はキリスト教徒です。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「その名前では何の得にもならない。私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、王たちから栄誉を受け、我々の友となるだろう。」

プロヴは答えた。

「私は王たちからの栄誉も望まず、あなたとの友情も望まない。なぜなら、私には少なからぬ富があったが、それを捨てて、生ける神に仕える道を選んだからだ。」

プロコンスルは言った。

[7030] ペルギアは小アジアの都市である。

「彼を裸にし、地面に寝かせ、厳しい鞭で打ちつけよ。」聖人が打たれている時、百人隊長ディミトリオスは彼に言った。

「自分を憐れめ。お前の血が地面に流れているのが見えないのか。」

「私の体は、」プロヴは答えた。「あなた方の手に委ねられている。どうぞ苦しめてください。私にとって、その苦しみは聖油のようなものなのです。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「その狂気を改めるのか、それとも頑なさに固執して石のようになるのか？」

「私は軽薄な者ではない」とプロヴは言った。「むしろ、あなた方よりはるかに勇敢だ。なぜなら、私の勇気は主にあるからだ。」

すると、プロコンスルは家来たちに言った。

「彼をひっくり返し、腹を殴れ。」

この残酷な拷問に、プロヴは叫んだ。

「主よ、あなたのしもべを助けてください！」プロコンスルは家来たちに言った。

「彼を打つときは、『お前の助け手はどこにいるのか』と尋ねよ。」そして、使用人たちが彼に尋ねると、プロヴはこう答えた。

「主が私を助けてくださっているし、これからも助けてくださる。私はお前の拷問などあまりにも軽蔑しているので、お前の意志には屈しない。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「自分の体を見よ、不運な者よ。お前の血で大地は覆われているのだ。」

「知っておけ」とプロヴは答えた。「私の肉体がキリストのために苦しむとき、私の魂は癒やされ、生き返るのだ。」

聖人への拷問を止めるよう命じた後、裁判官は言った。「その者の手足を鎖で縛り、牢獄に放り込め。そして、誰も彼に近づけないようにし、誰も彼の世話をさせないようにせよ。」

その後、プロコンスルの命令により、三番目のキリスト教徒が裁判にかけられた。名前を問われると、彼はこう答えた。

「私はキリスト教徒です。」

プロコンスルは言った。

「お前より先に裁かれた者たちは、その名によって何の益も得られなかった。お前も別の答えをすべきだ。」

彼は言った。

「私の本名はアンドロニクスです。」プロコンスル・マクシムスは言った。

「アンドロニクよ、お前はどこの家系出身なのか？」

「私は由緒ある家系の出身です」とアンドロニクスは答えた。「エフェソスの最も高名な市民の一人の息子です。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「自分の身を守り、私を父として聞き入れなさい。なぜなら、君より先にここにいて、無分別なことを語った者たちは、何の得もなかったからだ。君は、我らの主であり父である神々に犠牲を捧げなさい。」

「あなたが彼らを『父』と呼んだのは正しい」とアンドロニクは言った。「なぜなら、あなた方の父はサタンであり、あなた方は悪魔の子らであり、その行いを実践しているのだから。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「お前は若造でありながら、私を侮辱するとは！　すでに、お前にとっての凄惨な拷問が準備されていることを知らないのか？」

「暴君よ、お前は私を、まるで過去の殉教者たちにふさわしくないかのように、それほど狂人だと思っているのか。私はどんな苦しみにも耐える覚悟がある。」

拷問官は言った。

「彼を裸にし、縛り付けて吊るせ。」

百人隊長ディミトリは、最初の二人に言ったのと同じことをアンドロニクスに言った。

「不運な者よ、お前の肉が骨から剥がれ落ちる前に、命じられたことを聞き入れよ。」

「私の肉体が滅びる方がましだ」とアンドロニクは答えた。「ただ、あなたがたが私の魂に望むことを行わない限りは。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「我々に屈服し、滅びる前に神々に生贄を捧げよ。」

「若い頃から」とアンドロニクスは答えた。「私は偶像を崇拝したことは一度もなく、今さら彼らに犠牲を捧げるつもりはない。」

プロコンスル・マクシムは言った。

「その身を拷問せよ。」

そこに立っていた別の部隊の百人隊長、アンクシウスはアンドロニクスに言った。

「プロコンスルの言うことを聞きなさい。私は年長者として、あなたに善き助言を与えているのだ。」

「あなたは年老いているが、分別がない」とアンドロニクスは答えた。「石にひれ伏し、悪魔たちに生贄を捧げろなどという助言をするとは。

聖なる殉教者が拷問を受けている間、プロコンスルはこう言った。

「不運な者よ、これほどの拷問を受けても苦しみを感じないのか？　なぜ自分を憐れまず、お前を救うことのできないその空虚な信仰から背かないのだ？」

「あなたが狂気の信仰と呼ぶそのものは、主への希望を持つ者たちにとっては最も尊い告白であり、あなたのその一時的な知恵こそが、永遠の死を招くのです。」

プロコンスルは尋ねた。

「誰があなたにそのような狂気を教えたのか？」

「神の言葉です」とアンドロニクスは言った。「それは命を与えるものであり、天に主を、そして私たちの復活への希望を置く私たちを生き返らせてくれるのです。」

プロコンスル・マクシムスは言った。

「お前に用意されている残酷な拷問にさらす前に、その無分別な考えを捨てなさい。」

「私の体は、あなたの目の前に横たわっている。権限はあなたにある。好きにすればよい」とアンドロニクスは答えた。

プロコンスルは言った。

「その口を、できる限り強く殴れ。」

「主がそれをご覧になり、――アンドロニクは答えた――私を殺人犯のように苦しめるあなたを裁かれますように。」

プロコンスルは言った。

「お前は王の命令に従わず、私の裁きを何とも思っていないのだな。」

「私がこの苦しみを受け入れているのは」とアンドロニクスは答えた。「神を信じ、神の慈悲と正義に希望を置いているからだ。」

裁判官は反論した。

「では、王たちは罪を犯したのか？　お前は死に値する。」

「彼らは確かに罪を犯しました」とアンドロニクスは答えた。「なぜなら、健全な理性で判断すれば、神々に犠牲を捧げることが大いなる罪であり、不法であるということが分かるからです。」

すると、拷問官は殴打する者たちに言った。

「武器の向きを変えて、その脇腹を打ちつけよ。」

一方、アンドロニクスは繰り返し言った。

「ほら、私はお前の前にいる。私の体を、お前の望むままに苦しめてくれ。」

この拷問の最中、アンドロニクはこう言った。

「私の肉体は傷によって鍛え上げられた。」

「ゆっくりと苦しめてやる」と拷問者は言った。「そうして、お前を滅ぼしてやる。」

「お前の脅しなど恐れない」とアンドロニクは答えた。「私の知性は、お前の悪意の企みよりも優れている。それゆえ、この拷問など意に介さないのだ。」

すると、拷問官は家来たちに言った。

「彼に足枷をはめ、足を縛り上げて、監視下に置け。」

しばらくして、プロコンスル・ヌメリウス・マクシムスが再び法廷の席に着き、キリスト教徒たちは尋問にかけられた[7031]。まず、最年長のタラハに対し、裁判官は名誉を与えると約束して、異教の生贄を捧げるよう強要した。　しかし、タラハは従うどころか、裁判官に厳しい口調で言い返したため、裁判官は彼の口を石で打ち砕き、歯を打ち抜くよう命じた。そして、使用人たちにこう言った。

「火を持って来い。そしてタラハの両手を伸ばさせ、その上に火を載せよ。」

すると、タラハは言った。

「お前のこの一時的な火など恐れない。むしろ、お前のような不信心者に屈服したことで、消えることのない火の中に落ちることになるのではないかと恐れているのだ。」

そして、火が彼の両手に置かれると、総督は言った。

「見よ、お前の両手は火に焼かれている。なぜ、その無謀さを捨てて、神々に犠牲を捧げないのか？」

「お前は――」とタラフは答えた。「その残酷さによって、私をそのような無分別な行動へと追い込み、お前の意志に従わせようとしているのだ。しかし、知っておけ。私は、私の神の助けを借りて、お前が私に用意しているあらゆる拷問を、揺るぎない決意で耐え抜く覚悟がある。」

その後、プロコンスルは彼を逆さ吊りにし、その下に火を焚かせ、さらに塩とマスタードを混ぜた強い酢を彼の鼻孔に注ぎ込むよう命じた。　彼はプロヴァやアンドロニカスに対しても、殴打、火傷、鋭い鉄の道具による削り傷、傷口への塩の散布など、様々な方法で拷問を加えたが、何の成果も得られなかったため、朝まで彼らを足枷で縛って監視するよう命じた。

朝、プロコンスルは百人隊長ディミトリウスに言った。

「不敬虔なキリスト教徒たちを私のところへ呼びなさい。」

百人隊長は言った。

「彼らは今、あなたの御前に立っています、閣下。」

「まさか、拷問や傷、そして足枷が、まだお前を打ちのめしていないというのか」と、プロコンスルはタラフに言った。「私の言うことを聞きなさい、タラフ。お前に何の役にも立たないその信仰を捨てなさい。すべての原因となった神々に犠牲を捧げなさい。」

[7031] 聖殉教者たちに対する二度目の尋問は、小アジアのキリキア地方にある都市モプスエスティアで行われた。

「どうして――」とタラフは答えた。「火と永遠の苦しみという運命が待ち受けている者たちが、平和をもたらすことなどできようか。彼らだけでなく、彼らの意志に従う者たちすべてにも、同じ運命が待っているのだ。」

プロコンスルは続けた。

「不敬な者よ、悪口を言うのをやめるつもりはないのか？　お前のその恥知らずな言葉のせいで、私が直ちにお前の首を刎ね、そうすればお前の苦しみも早く終わることを知らないのか？」

タラフはこう答えた。

「当初、私は早死によって苦しみから解放されたいと願っていた。しかし今や、主に対する私の信仰の偉業が深まるよう、この苦しみを引き延ばしてほしい。」

「お前と共に」と総督は言った。「法律によれば、お前の友人たちも苦しみ、死ななければならないのだ。」

タラフは答えた。

「私たちに死を約束するとは、お前は正気ではない。悪を行う者だけが死ぬのだ。しかし、私たちは悪を知らず、ただ主のために苦しんでいるのだから、主から報いを受けることを期待しているのだ。」

「罪深く、無価値な者よ」と総督は言った。「お前たちは、悪しき生活を送り、法に背いて生きているのに、いったいどのような報いを期待しているのだ？」

「異教徒の君には、主が天国で我々に用意してくださった報いがどのようなものか知る由もない」とタラフは答えた。「その報いのために、我々は君の激しい怒りに耐えているのだ。」

「お前には、あたかも私の友人であるかのように、これほど大胆に私に話しかける権利があるのか？」とマクシムは言った。

タラフは答えた。

「私はお前の友ではないが、話す権利はある。神が私を強めてくださる以上、誰もそれを禁じることはできない。」

「お前のその権利は――」とマクシムは言った。「私が打ち砕いてやる、不信心者め！」

タラフは答えた。

「誰もこの権利を私から奪うことはできない。お前も、お前の王たちも、そしてお前たちの父であるサタンでさえもだ。」

プロコンスル・マクシムは言った。

「彼を縛れ。彼は狂人だからだ。」

「もし私が狂人なら」とタラフは答えた。「お前の不義に屈していたはずだ。」

聖人が縛られると、プロコンスルは言った。

「お前の行いのゆえに拷問にかける前に、神々に生贄を捧げよ。」

「好きにしろ」とタラフは答えた。「とはいえ、私はかつて戦士だったのだから、ありふれた拷問を私にかけるべきではない。しかし、私が拷問を恐れてお前の意に従おうとしていると誤解されないよう、お前の悪意のあらゆる策略を私に向けよ。」

プロコンスルは言った。

「戦士たちは常に、自国の王の安泰を祈って神々に犠牲を捧げ、それにふさわしい栄誉に浴している。だが、お前は軍人としての地位から逃げ出し、犠牲を捧げようともしない、最も卑劣な者だ。その代償として、お前には最も残酷な拷問が待ち受けている。」

タラフは言った：

「なぜ怒るのだ？　言っておくが、好きにしろ、不信心者め！」

「私が一挙に君を滅ぼすなどと思わないことだ」とマクシムは言った。「私は君を苦しめ、衰弱させることを決してやめず、君の遺体は獣に食わせ、引き裂かせるつもりだ。」

「口先だけで約束するな」とタラフは言った。「やりたいことがあるなら、さっさと実行しろ。」

マクシムは言った。

「お前は、死後、香を焚いた女たちが自分の遺体を葬ってくれると思っているだろう。だが、私はお前の遺骸を完全に消し去るよう手配するつもりだ。」

「今であれ、」とタラフは答えた。「死後であれ、私の遺体には好きにすればいい。」

「まず、生贄を捧げろ」とマクシムは言った。

「狂人め」とタラフは言った。「私は何度も、捧げ物などしないと言っただろう。」

すると、拷問官マクシムは使用人たちに言った。

「こいつの顔と口を殴りつけろ。」

使用人たちがタラフを殴打している間、彼はこう言った。

「お前は私の顔を傷つけたが、その代わりに私の魂を蘇らせてくれた。」

「哀れな者よ」と拷問官は言った。「その狂った考えを捨て、この苦しみから解放されるために神々に生贄を捧げよ。」

タラフはこう答えた。

「お前は、私が主を信頼し、天国で生きると確信しているから、私を狂人だと思っている。だが、お前は肉欲に溺れ、一時的な人生を送り、その魂を永遠に滅ぼすことになるのだ。」

すると、総督は家来たちに言った。

「鉄を熱して、彼の顎に当てよ。」そのような苦痛に耐えながら、タラフは言った：

「たとえそれ以上のことをしたとしても、神のしもべに神々への生贄を捧げさせることはできないだろう。」

その後、裁判官は剃刀を持ってくるよう命じ、殉教者の耳を切り落とし、頭から皮を剥ぎ取り、頭に燃え盛る炭を載せるよう命じた。タラフはこう言った。

「たとえ私の全身の皮を剥ぐよう命じようとも、私は私の神から離れることはない。神は、あなたの悪意の拷問に耐える力を私に与えてくださるからだ。」

これらすべてが行われている最中、プロコンスルは言った。

「鉄の器具を集め、さらに熱く焼き、彼の脇の下に当てよ！」

タラフはこれを耐え忍びながら、こう言った。

「主が天からこれをご覧になり、あなたを裁かれますように！」

総督は尋ねた。

「お前は、どの主を呼び求めているのだ、罪人よ？」

「お前が知らない方だ」とタラフは答えた。「各人にその行いに応じて報いる方だ。」

そこで総督は、タラフを拘束し、別の者を尋問のために連れてくるよう命じた。プロヴァが総督の前に連れて来られると、百人隊長ディミトリは言った。

「ご主人様、ここにプロヴァが参りました。」

「プロヴよ、忠告しておくが」とプロコンスルは言った。「かつての拷問に身をさらさないように。なぜなら、かつてお前より先に頑なだった者たちは、そのことを悔い改めたからだ。さあ、今こそ犠牲を捧げよ。そうすれば、我々からも、神々からも敬われるだろう。」

プロヴは答えた。

「我らは心を一つにし、心を一つにして神に仕えている。我々からそれ以外の言葉を聞くことを期待してはならない。お前はすでに、我々を神から引き離すことはできないと聞き、目にしてきたはずだ。ほら、今、私はお前の前に立っており、お前の脅しなど恐れてはいない。これ以上、何を待っているのか？」

「お前たちは、その悪意から神々を拒むことに同意したのだ」とプロコンスルは言った。

そう言って、彼を縛り上げ、逆さ吊りにするよう命じると、彼は続けた。
「まだ苦しめられていないうちに、自分の体を憐れんでおけ。お前は、どのような苦痛が待ち受けているか、目の当たりにしているではないか。」
「好きにしろ」とプロヴは答えた。「お前が私のために用意したあらゆる悪は、私の魂の慰めとなるだろう。」
総督は家来たちに言った。
「枝を熱く焼き、彼の脇腹を焼いて、正気を失わせないようにせよ。」
一方、プロヴはこう言った。
「お前が私をどれほど狂人だと思っているか、それと同じだけ、私は主の律法に精通しているのだ。」
プロコンスルは再び使用人たちに言った。
「その赤熱した棒を、彼の背中に突き刺せ。」
プロヴは、この苦痛に耐えながら、こう言った。
「主よ、天から私の謙遜と忍耐をご覧になってください！」その後、拷問官は、犠牲の肉とワインを持ってくるよう命じ、こう言った。
「ワインを注ぎ、肉を彼の口に入れよ。」
使用人たちがそうしているとき、プロヴは言った。
「主よ、御座の高みからこの拷問をご覧になり、汝の裁きに判決を下してください！」
「お前はひどく苦しんだな、不運な者よ」と裁判官は言った。「それなのに、結局は偶像への生贄の食物を受け入れてしまったではないか。」
「大したことではない」とプロヴは答えた。「私に暴行を加えたとしても、主は私の意志をご存知だ。」
「お前は」と裁判官マクシムは言った。「偶像への供え物を食べ、飲んだのだ。」
「主はご存知だ」とプロヴはこれに応えた。「そして、私が耐えているこの暴行も見ておられる。」
プロコンスル・マクシムは言った。
「赤熱した棒で彼のすねを打ちつけよ。」
プロヴは繰り返し言った。
「火も、苦しみも、お前の父であるサタンも、神のしもべを神への信仰から引き離すことはできない。」
「熱く焼きな、」とプロコンスルは言った。「鋭い釘を、彼の両手に打ち込め。」
「主よ、感謝いたします」とプロヴは言った。「あなたの御名のために、私の両手も苦しむことを許してくださったことを。」
プロコンスルは言った。
「数々の拷問のせいで、お前は正気を失ったのだな。」
「あなたの大きな権力は」とプロヴは答えた。「あなたを狂わせただけでなく、目もくらませた。なぜなら、あなた自身、自分が何をしているのか分かっていないからだ。」
プロコンスルは言った。
「傷だらけの身でありながら、よくも私にそんな言葉を口にするか？　私は彼の目を傷つけずに残しておいたのだから、さあ、彼の目をえぐり出せ。」
それが実行されると、プロヴは言った。
「たとえお前が私の肉体の目を奪ったとしても、信仰という生きた目を奪うことは決してできない。」
プロコンスルは言った。

「これほどの拷問を受けた後、まだ生き延びられると期待しているのか？　それとも、我々が君を安らかに死なせてやるとでも思っているのか？」

「それこそが、私が奮闘している理由なのです」とプロヴは答えた。「善を行い、完全な信仰告白を果たし、あなたによって容赦なく殺されるためです。」

すると、プロコンスルは家来たちに言った。

「彼をここから連れ出し、縛って厳重に監視せよ。彼の知人が訪ねてきて、その不敬な反抗を称えることのないように。」

その後、彼はこう言った。

「アンドロニカを私の前に連れて来い。」

「こちらです」と百人隊長は答えた。「主人の御前に立っております。」

そして、プロコンスルはアンドロニクスに言った。

「神々に生贄を捧げよ。そうすれば、その枷から解放されるだろう。」

「そんなことは決してあり得ない、拷問者よ」とアンドロニクスは答えた。「私が、私の神の律法に背くようなことをするはずがない。」

プロコンスルは言った。

「お前は正気を失っている、アンドロニクよ。」

「もし私が狂っていたなら」とアンドロニクは答えた。「お前の言うことを聞いただろう。しかし、私は主を信じる者として、狂ってはいない。むしろ、お前こそが狂っており、盲目なのだ。お前は悪魔のような行いをしているのだから。」

すると、プロコンスルは家来たちに言った。

「藁の束を作り、油を染み込ませて、彼の腹の上で燃やせ。」

すると直ちに、家来たちはアンドロニクスの服を脱がせ、地面に寝かせると、油を染み込ませた多くの藁束を彼の腹の上で燃やし始めた。しかし彼はこう言った。

「たとえすべてを焼き尽くしたとしても、お前は私を打ち負かすことはできない、不信心者よ。なぜなら、私の前に、私を強めてくださる主がおられ、私はその主に仕えているからだ。」

総督は言った。

「枝を熱く焼いて、彼の指の間に挟め。」

すると、アンドロニクスはこう言った。

「神に敵対する狂人よ、お前は悪魔の企みで満ちている。お前は、お前の拷問によって衰弱していく私の肉体を見て、私がお前を恐れていると思っている。しかし、私は神の御子キリストを心に宿しており、お前など意に介さない。」

「不義者よ」とプロコンスルは言った。「お前は、自分が誰を呼んでいるのか分かっていない。ポンティウス・ピラトによって処刑され、その拷問について文書が残されているあの人のことだ。」

「黙れ、不信心者よ」とアンドロニクスは答えた。「お前に、その方について悪口を言う資格などないのだ。」

総督は言った。

「お前がキリストと呼ぶその方に希望を置くことに、何の益があるというのか？」

「まことに大きな益がある」とアンドロニクスは答えた。「そして偉大な報いがある。だからこそ、私はこれらすべてを忍耐強く耐えているのだ。」

すると、プロコンスルは家来たちに言った。

「彼の口を開けさせ、そこに犠牲の肉を入れ、ワインを注ぎ込め。」

そうされると、アンドロニクスは言った。

「主よ、主よ！私が耐えているこの暴行をご覧になってください。」

プロコンスルは言った。

「いつまで苦しみ、拷問に耐え続けるつもりだ？　ほら、もう我々の神々への生け贄を口にしたではないか。」

アンドロニクスは言った。

「偶像を崇める者たち、お前と、お前の王たちは滅びよ！」

「お前は、悪しき者よ、長い間この世に平和をもたらしてきた王たちを侮辱している」と総督は言った。

「私は、平和を乱す破壊者たち、血に飢えた者たちを呪ったのだ」とアンドロニクスは答えた。「主は御自身の力強い御手をもって、彼らを打ち倒し、滅ぼされるだろう。」

すると、プロコンスルは家来たちに言った。

「その口に鉄を詰め込み、歯を打ち砕き、神を冒涜するその舌を切り取って、王たちを誹謗できないようにし、その舌を焼き払え。」そして、使用人たちは拷問官の命じたことをすべて実行した。その後、アンドロニクスは監禁された。

以上が、聖なる殉教者たちの苦難に関する記述の終わりである。この記述は、聖人たちが拷問を受け苦しめられていたまさにその時に、書記官たちが作成した裁判記録から引用されたものである。一方、聖人たちのその他の苦難と死については、三人の敬虔な男たち、すなわち　マカリオス、フェリクス、ベリオスという三人の敬虔な人々が、聖殉教者たちの最期を見届けた後、信徒たちへの書簡の中で次のように記している[7032]：

「キリキアの総督ヌメリウス・マクシムスは、キリキアの司祭テレンティアンを呼びつけ、翌朝までに都市から千歩離れた場所に円形闘技場[7033] を準備するよう命じた。そこでは、殉教者たちを野獣の餌食にすることが予定されていた。　拷問を見物するために集まった群衆で円形劇場が埋め尽くされると、マクシムスもまたその光景を見にやって来た。一方、私たち[7034] は人目につかない場所に立ち、大きな恐怖を抱きながらその様子を見守っていた。　そしてまず、数多くの他の死刑囚たちが獣に食わせるために差し出された。その後、マクシムスは兵士たちに、キリスト教の殉教者たち――タラハ、プロヴァ、アンドロニカ――を場内へ連れてくるよう命じた。

兵士たちは、多くの傷を負って歩くことのできない殉教者たちを、人々に肩に担がせて運ばせた。私たちも、彼らが担がれて闘技場へ連れて行かれるのを見ると、顔を背けて泣き出した。　そして聖人たちは闘技場の真ん中に放り出された。その時、皆に恐怖が襲い、そのような裁きを下したマクシムに対して不平を漏らし始めた。そして多くの人々が、マクシムとその野蛮な残虐さを罵りながら、その見世物から立ち去っていった。これを見たマクシムは、傍らにいた兵士たちに、立ち去った者たちを特定するよう命じ、後で彼らの罪を調査させた。

そして彼は、殉教者たちに獣を放つよう命じた。しかし獣たちが彼らに手を出さなかったため、彼は見世物の主催者たちを殴打させ、最も獰猛な獣を放つよう要求した。放たれた熊はその日、三人を殺害した。そしてアンドロニクスに近づくと、座り込んで彼の傷を舐め始めた。　アンドロニクスは熊に自分を食わせようと挑発したが、熊は穏やかだった。激怒したプロコンスルは、槍兵たちに熊を殺すよう命じた。すると、テレンティアンはプロコンスルを恐れ、急いでアンティオキアから送られてきた雌ライオンを殉教者たちのもとへ放った。　闘技場に放たれた雌ライオンは、周囲を駆け回り、集まった観客たちをひどく怯えさせたが、殉教者たちのところへ近づくと、タラコスの前にひ

[7032] 聖殉教者たちの死に関する記述は、アナザルブのキリスト教徒たちによる書簡にも見られる。

[7033] 円形劇場とは、獣や人間による闘争を行うための、楕円形の屋外施設である。その中央には、砂が敷き詰められたアリーナ（実際の闘争が行われる場所）があった。アリーナの周囲には柵が巡らされていた。この柵の後方には、観客用のベンチが階段状に並んでいた。

[7034] この文章は、キリスト教徒の視点から語られている。

れ伏して横たわった。タラコスは彼女を自分の手で引きずり出し、そうして怒らせれば自分を食い殺してくれるだろうと期待したが、雌ライオンはタラコスのそばで、羊のようにおとなしくしていた。

この奇跡を目撃した民衆は、大きな叫び声を上げた。この奇跡に恥じ入り、また憤りを感じたプロコンスルは、家来たちに雌ライオンを挑発するよう命じたが、雌ライオンは激しく唸りながら扉へと向かい、歯でそれを噛み砕き始めた。民衆は皆、恐怖に駆られて叫んだ。

「雌ライオンを放せ。もう扉も壊れてしまったのだ。」

そこでマクシムスは激怒し、テレンティアンを呼び寄せ、聖なる殉教者たちを殺害するよう命じた。タラク、プロヴ、アンドロニクは剣で刺し殺され、四つ裂きにされ、こうして息を引き取った[7035]。その光景から立ち去る際、マクシムスは十人の兵士を残して殉教者たちの遺体を監視させ、キリスト教徒たちに身元がバレて遺体が持ち去られないよう、不信心者たちの遺体と一緒に埋めるよう命じた。我々はこれを見て、密かに遺体を運び出せる好機を主が与えてくださるよう祈った。　その後、近づいてみると、見張りが夕食をとっている様子と、夜警のために焚かれた火が見えた。そこで、私たちはひざまずき、主とそのキリストに、私たちの願いを叶えてくださるよう——天から助けを送り、聖人たちの遺体を私たちに与えてくださるよう——祈った。　突然、雷鳴と稲妻、そして激しい雨を伴う地震が起こった。　私たちは再び祈りを捧げ、遺体に近づくと、火は消え、兵士たちは一人もいなかった。彼らは雨と嵐から逃げ去っていたのだ。そこで私たちは天に向かって両手を挙げ、主が特別なしるしによって聖なる殉教者たちの遺骨を明らかにしてくださるよう、数多くの他の死体の中からそれらを見分けられるようにと祈った。　その夜は非常に暗かった。すると突然、三本のろうそくが、まるで星のように、聖人の遺骨の上に現れた。私たちは密かに聖殉教者たちの遺骨を運び出し、その天のろうそくに導かれるままにその場を離れた。それらに従って山の反対側へと進むと、天のろうそくは見えなくなった。　そこで岩に掘られた洞窟を見つけ、聖人たちの遺体をそこに安置し、不信仰者たち[7036]に発見されないよう、入り口をしっかりと塞いだ。その後、私たちは街へ出向き、何が起きているのかを確認したところ、警備兵たちがマクシムスによって殺害されたと聞いた。そこで私たちは、世々限りなく生きておられる私たちの主イエス・キリストに感謝を捧げた。

私——マカリオス、フェリクス、ベリウス——は、残りの生涯をここで過ごし、聖なる殉教者たちと共に、この地に遺体を葬られることを願っている。　そして、私たちの魂が天において、聖なる殉教者たちと共に永遠の命に満たされますように。また、この書簡を携えてあなた方の元へ遣わす者たちを、敬意をもって迎え入れてください。彼らは私たちの主イエス・キリストのしもべたちだからです。どうか、祈りの中で私たちを覚えてくださいますよう懇願いたします。神の恵みがあなた方とともにありますように。アーメン」。

トロパリオ、第5声：

聖なる殉教者たちは、天の力をその行いによって驚かせた。すなわち、死すべき肉体の中にあって、十字架の力によって無形の敵に対し、立派に戦い、目に見えぬ敵に勝利を収めたのである。そして彼らは主に向かって、私たちの魂を憐れんでくださるよう祈っている。

[7035] 聖殉教者たちの殉教は304年のことである。

[7036] 古代において、殉教者たちの栄光は偉大でした。5世紀半ば、モプスエスティアの主教アウクセンティウス2世は、この都市にこれらの聖殉教者たちに捧げる教会を建立し、アナザルヴァから彼らの聖遺物の一部を受け取ると、それをこの教会に安置しました。

コンダク、第2調:

キリストの勇敢な戦士であり殉教者であるタラフ、プロヴ、そしてアンドロニクよ、あなたがたは三位一体の栄光を私たちに示した。信仰をもって勇敢に苦難に耐え、すべての迫害者たちの不敬虔を暴いたからである。

カノンの作者、コスマス・マイウムス

記念日：10月12日

聖ヨハネス・ダマスキノスの両親[7037] は、ダマスカスに住んでおり、エルサレム出身で幼い頃に両親を亡くしたコスマという名のキリスト教徒の孤児を自宅に迎え入れた。彼らは非常に敬虔で、貧しい人々を慈しむ心を持っていたため、 聖ヨハネ・ダマスコスの両親は、彼を自分の息子の代わりに迎え入れ、実の息子ヨハネと並んで、平等に育て上げた。彼らはアガリア人[7038] から、同じくコスモスという名の修道士を奴隷として買い取り、ヨハネとコスモスの二人の少年を彼に教えを請うよう託した。 コスマは、この教養豊かな修道士からキリスト教の教えのあらゆる知恵を学び、完全な知性と成人年齢に達すると、虚しい世を離れ、ある修道院[7039] へと退き、 そこで修道服を身にまとい、その生活の中で立派に精進した。 天の穹蒼の星のように、彼もまたその生涯と神に照らされた知恵によって、キリストの教会の中で輝きを放った。 教会で聖像破壊運動が起こった際、尊者コスマは聖ヨハネス・ダマスコスに、聖なる聖像を擁護し、正教徒のために聖像礼拝に関する論考を執筆するよう促し、聖像破壊派に対する論著の執筆作業をヨハネス・ダマスコスと分担した。 また、彼は美しく霊感に満ちたトロパリやカノンによって、教会の礼拝を彩った。彼は、ラザロの復活、キリストの自発的な受難、およびいくつかの主の祝日[7040] を賛美歌で称えた。 その後、聖コスマはエルサレ

[7037] 聖ヨハネス・ダマスコスは、傑出したキリスト教の聖歌作家であり神学者であり、776年に亡くなりました。教会では12月4日に彼の記念日が祝われます。

[7038] すなわち、伝承によれば、アブラハムとハガルとの間に生まれた息子イシュマエルを祖とするアラブ人たちの間で。

[7039] この修道院は、聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの有名な修道院であった。 砂漠において、聖コスマスはダマスキノスの学問的業績を受け継ぎ、ヨハネス・エルサレムススの言うところによれば、霊的な賛美歌への愛においてダマスキノスに熱心に倣い、教会のために甘美で調和のとれた賛美歌を作曲し、たゆまぬ献身によって、自らを主への最も調和のとれた詩篇として捧げた。 注目すべきは、聖コスマと聖ヨハネの賛美歌の最も古い版において、 コスマとヨハネの聖歌集の最も古い版においても、また古代の写本においても、聖コスマの聖歌は常に「コスマ・エルサレムスの聖歌」と呼ばれていることである。これは、聖コスマが自身の聖歌を聖サヴァ修道院で執筆したという、同じヨハネ・エルサレムスの見解を裏付けるものである。

[7040] ヴァイの週、ラザロの復活、そしてキリストの受難に関する聖歌は、正教会のこの傑出した聖歌作家による最高かつ最も荘厳な作品であると正当に評価されているが、それ以外にも、聖コスマによる、聖母の被昇天、キリストの降誕、キリストの十字架の挙揚、主の奉献（スティヒラ付き）、救い主の洗礼、主の変容（スティヒラ付き）、聖霊降臨祭、そして受難週の月曜日、火曜日、水曜日、金曜日のための三歌集が、聖コスマによって残されている。 これに関連して、14世紀の著名な教会史家ニキフォロス・カリストは、聖コスマが「聖三位一体の模倣」として三歌集を最初に書き始めたと記している。また、聖コスマ・マイウムスには、聖母マリアを称える霊感に満ちた歌の作詞が帰されている: 「最も尊きケルビム」、聖木曜日のカノン、聖木曜日の四歌集、聖母の被昇天のためのイコスと14のコンダク、婚約者ヨセフ、ダビデ王、大殉教者ゲオルギオス、神学者グレゴリオスへのカノン、およびその他のいくつかの教会聖歌。 最も有名な聖母マリアの聖歌「最も尊きケルビム」についてですが、教会伝承によれば、この歌は聖母マリアに大変喜ばれ、聖母は尊者（ニキフォロス）の前に現れ、喜びに満ちた顔でこう言われたと伝えられています。「あなたの歌はすべて私にとって心地よいが、この歌は他のどの歌よりも心地よい。 霊的な歌を歌う者たちは私にとって喜ばしいが、彼らがこのあな

ム総主教によってマイウムの司教に任命された[7041] 。その職位において、彼は神に喜ばれる多くの労苦を捧げ、羊の群れをキリストの救いの牧草地に導き、やがて高齢に達して主のもとで安らかに息を引き取った[7042] 。

コンダク、第8調:

神の霊に導かれたコスモよ、美徳に彩られ、キリストの教会の飾りとなられた。あなたは賛美の歌をもって、この教会を美しく飾られた。どうか主にお祈りください。私たちを、あらゆる敵の策略から救い出してください。私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、慈愛に満ちた父よ。」

慈悲深き聖マルティン、トゥール司教の伝記

記念日：10月12日

聖マルティンはパノニアのサバリアという町[7043] の出身であり、両親は異教徒であった。父は当初、ただの兵士として仕えていたが、その勤勉な奉仕により、 の軍団長[7044] の地位にまで昇進し、高い地位を占めるようになった。 マルティヌスの幼少期はティチーノ[7045] で過ごされた。彼がまだ幼かった頃、父は職務上の事情により、この地へ移住せざるを得なかったのである。ごく幼い頃から、聖人はその柔和さ、慈悲深さ、そして清らかな心によって神に喜ばれ、天からの召命の兆しを自らに示していた。　当時、キリスト教の信仰はローマ帝国の至る所で急速かつ公然と広まっており、マルティンは信者たちと知り合い、彼らからキリストの信仰の真理を聞き、その清く汚れのない心で真理を悟りながら、全身全霊でそれへと向かっていった。　キリスト教徒の徳と聖なる生活への愛に燃え上がったこの少年は、10歳の時、両親の反対を押し切って、洗礼の予備教育を受ける者となった。彼は学問を学ばず、ただキリストの教えのみを糧として満足していた。　12歳になると、彼は聖アントニオの孤独な修道生活に倣い、隠遁者になりたいという敬虔な願いを抱いた。しかし、神は別の御心をお持ちであり、洗礼の泉で洗礼を受ける前から、彼の敬虔さがより一層明らかになるようにされた

たの新しい歌を歌う時ほど、私が彼らにこれほど近くにいることはない」と。これについて、ニキフォロス・カリストは、霊的な事物を観想する能力を持つ者たちが、その後、この歌を歌った者たちを聖母が祝福する姿を何度も目撃したと指摘している。　この伝承は、この歌に関して口伝で定められている日々の使用法によっても裏付けられている。聖コスマス・マイウムスのすべての聖歌において、その言葉は常に思索に満ちており、かつ簡潔で、響きが美しく、荘厳な威厳、敬虔さ、そして高度に芸術的なキリスト教的霊感に満ちている。　聖コスマのギリシャ語の礼拝では、次のように読まれている。「見よ、霊的な竪琴、神聖な竪琴が、すべての人を秘なる食卓へと招く。神聖で栄光に満ちたコスマは、蜜のように甘く、神聖な響きを放つ歌を捧げる……　聖歌隊の指導者、師たちに匹敵する者、調和のとれた霊的な歌の正しい模範、美声のラッパ、旋律豊かな歌の素晴らしい源泉、天使の聖歌の熱心な擁護者、コスマを、私は歌で飾りたい」。　聖コスマ・マイユムスの聖歌は、古来より常に教会から最も高く、深い敬意を払われてきた。

[7041] マイウムはパレスチナの港湾都市であり、エルサレムからほど近い、この国における重要かつ古くからの都市であるガザの港として機能していた。 – 聖コスマは、自らの意思に反して、735年頃、公会議によってマイウムの司教に選出され、エルサレム総主教ヨハネス5世によって叙任された。そして司教に叙任された後も、彼は聖ヨハネス・ダマスコスとの兄弟的な交わりを絶やすことはなかった。

[7042] 聖コスマ・マイウムスは、787年頃に†した。

[7043] パノニアは、ローマ帝国のドナウ川沿岸における重要な地域の一つであり、現在はハンガリーの一部を構成している。サバリアは、現在のシュタイン・アン・アンガーである。聖マルティンは4世紀前半に生まれた。

[7044] すなわち、軍隊内の有名な独立連隊の指揮官に就任する前のことである。

[7045] ティチーノ – 現在のパヴィア。ティチーノ川沿い、ポー川との合流点からほど近い、北イタリアの主要都市。

のである。　マルティンの父は、息子がキリスト教徒たちと親しく交わることや、その敬虔な傾向を極めて快く思っていなかった。とりわけ、野心に駆られた父は、この力強く活動的な少年を、戦場で自分の名を轟かせる名高い戦士に育て上げたいと願っていたからである。　そして、マルティンが15歳になった時、退役軍人の息子たちは[7046] 軍に入隊しなければならないという皇帝の勅令に従い、父は彼を捕らえ、鎖で縛り上げ、力ずくで軍への宣誓を強いた。　トリブヌスの息子であり、傑出した屈強な青年であったマーティンは、騎兵将校となり、上官たちから大きな信頼を勝ち取った。

マーティンの新たな要職への就任も、彼の謙虚で敬虔な生活様式を変えることはなかった。彼の資産があれば、兵士の中から2人以上の従者を従えることもできたが、彼はたった1人に満足し、その者を奴隷としてではなく、友人や兄弟として扱い、彼から奉仕を受けるよりも、むしろ自ら彼に仕えることの方を重んじた。　同僚たちに対しては深い愛情を示し、絶え間ない誘惑にさらされる環境の中でも、厳格で高潔な生活を送ることで、彼らから自分への誠実な好意だけでなく、敬意を込めた感嘆をも引き出していた。兵士であった頃でさえ、マーティンはキリスト教の慈善活動に全身全霊を捧げていた。　給料のうち、生活に必要な分だけを残し、それ以外はすべて自分を犠牲にして、残りの資金で不幸な人々を助け、裸の人々に衣服を与え、貧しい人々に食事を与え、その他の慈善活動を行った。

マルティンはガリアで兵役を務めた[7047]
。軍隊と共に、彼はアミアンで越冬を余儀なくされた[7048] 。その冬は極めて厳しく、常に慈悲深さで知られていたマルティンは、この時期、貧しい人々の食糧や生活費を賄うために、自身の財産からこれまで以上に惜しみなく寄付した。　ある日、彼は町の門を通りかかった際、半裸の物乞いに遭遇した。その男は、厳しい寒さでほとんど身動きが取れないほど凍えきっていた。通りすがりの人々は彼に全く注意を払わず、何の助けも与えなかった。おそらく、彼ら自身も困窮しており、余分なものが何一つなかったからだろう。　マルティンもまた何も持っていなかった。彼はその物乞いに施しを与えることはできなかった。というのも、その前に手持ちのお金をすべて配り尽くしていたからだ。しかし、この不幸な貧しい人を見るや、彼の心は悲しみと憐れみで締め付けられた。　そこでマーティンは、長く躊躇することなく、ただこの不幸な人に一刻も早く助けを差し伸べたいと願い、素早く軍用ベルトを外し、マントを脱いでそれを二つに分け、片方を寒さに苦しむ貧しい人に渡し、自分は残りの半分を身にまとった。　この行為を目撃した通行人の何人かは、彼の奇妙な姿を見て嘲笑し始めた。　しかし、慈悲深い戦士の心は喜びで満たされた。彼は嘲笑に動揺することもなく、神の救い主の言葉を心に留めていた。*「私は裸であったとき、あなたがたは私に服を着せてくれた……あなたがたが、これらの私の最も小さな兄弟の一人にしたことは、私にしたのである」*（マタイ25:36）。

そして主は、このマルティンの信仰を強め、その偉大な慈悲に対して天の幻をもって彼を慰められた。夜、眠っている間に、 マルティンは主イエス・キリストを目にした。主は、 のマントの一部を身にまとった姿で現れ、それがまさに彼が門のそばの貧者に与えた半分ではないか、と彼に確かめるよう命じられた。マルティンは畏敬の念に満ちた沈黙の中に立っていた。するとキリストは彼から目を離し、傍らに立つ天使たちの群れに向かって大声でこう言われた。

「このマントを私に羽織らせてくれたのはマルティンだ。彼はまだ洗礼の予備教育を受けているに過ぎないが。」

[7046] ローマ帝国時代、ローマ人たちは、まだ退役していない古参兵をこのように呼んでいた。彼らはあらゆる労働から免除されており、外部の敵から祖国を守るためだけに兵役を命じられていた。

[7047] ガリア――現在のフランス。

[7048] アミアン――現在はフランス・ソワム県の県都であり、同名の川のほとりに位置し、パリから北へ124ヴェルスタの距離にある。

この驚くほど素晴らしく、慰めとなる幻視に喜びを覚えた若者は、目を覚ました。それは彼が軍務に就いてから三年後のことだった。その後、マルティンはもはや迷うことなく、十八歳の時に直ちに聖なる洗礼を受けた。　洗礼を受けた後、彼は軍務を辞めようとさらに熱心に願うようになった。軍務は彼の敬虔な志とは全く相容れず、孤独で禁欲的な生活を送りたいという彼の切なる願いとも合致しなかったからである。しかし、彼はその願いを直ちに叶えることを断念せざるを得なかった。かつてキリスト教徒であった彼のトリブヌスは、彼と別れることを極めて嫌がっていた。マルティンが軍務を辞めて修道士になるという意向を伝えると、トリブヌスは、もし彼が任期満了まで待てば、自分も彼と共に軍を去り、世俗を離れると約束した。　マルティンはトリブンの願いを聞き入れざるを得ず、さらに2年間軍に留まり、コンスタンティウス王による野蛮なアレマンニ族に対する過酷な遠征に参加した[7049]。

ローマ帝国の辺境地域に対する数多くの蛮族による絶え間ない襲撃を撃退するために敢行されたこれらの遠征中、マーティンも所属していた部隊の指揮権は、皇帝によって彼の従兄弟であるユリアヌス（カエサルに任命されていた）に委ねられた[7050]。部隊の規模は十分ではなかったため、ユリアヌスは兵士たちを激励するため、アレマンニ族から奪った戦利品を贈り物として配ることにした。迫り来る戦いを前に兵士たちの士気をさらに高めるため、ユリアヌスは兵士一人ひとりを名前で呼び出し、自ら直接贈り物を手渡した。　マルティンの名が呼ばれると、彼は前に進み出て、指揮官に向かって勇敢にこう言った。

「皇帝よ！　これまで私はあなたの騎兵隊に仕えてきましたが、これからは神に仕えることをお許しください。あなたの贈り物は、あなたの務めを引き継ぐ他の誰かに譲ってください！　私はキリストの戦士であり、それゆえ、もはやあなたのために戦うべきではありません。」

「お前は臆病者だ、マルティン」と、激怒したユリアヌスは非難の言葉を返した。「明日は戦いが行われる。それなのに、神への畏れではなく、戦いの恐怖が、お前を奉仕から逃れさせているのだ。」

しかし、マーティンは勇敢にこう続けた。

「もしあなたが私の辞退を忠誠ではなく臆病と見なすのなら、明日、私を武器一つ持たずに、戦場の中で最も危険な場所に一人立たせてください。そうすれば、武器など一切持たず、ただキリストの御名と聖なる十字架の印だけを頼りに、私が恐れることなく敵の陣に突撃する姿をご覧になるでしょう。」

「そうしよう」とユリアヌスは言い、翌日までマルティンを拘束するよう命じた。

しかし翌日、アレマンニ族は、ユリアヌスの見事に整えられた軍勢を目の当たりにし、完全な服従を申し出る使者を彼のもとへ派遣して和平交渉を求めた。　和平が成立した。その後、マルティンは兵役の誓約から解放され、直ちに軍を離れることを急いだ。彼は、その聖なる生活とキリスト教正統派の教養で名高い、ポワティエの司教イラリウス[7051]のもとへ向かい、この聖なる人物の霊的指導の下に身を委ねようとした。　イラリウスは心からの愛をもってこの若者を迎え入れ、彼の性格を短期間試した後、彼を助祭に叙任しようとした。しかし、マーティンは深い謙遜のゆえにこの聖職を

[7049] アレマンニ族――ドナウ川、マイン川、およびライン川上流の間に住んでいたゲルマン族の野蛮な民族で、ローマ帝国の辺境属州に隣接しており、そこへ頻繁に破壊的な襲撃を仕掛けていた。コンスタンティウス皇帝によるアレマンニ族に対する遠征は、354年から355年にかけて行われた。

[7050] すなわち、皇帝の補佐役であり共同統治者であり、やがては皇帝の後継者となることを期待されていた人物である。ユリアヌスとは、当然ながらコンスタンティウスの従兄弟であり後継者であり、歴史上「背教者ユリアヌス」の名で知られる人物を指す。

[7051] 聖ヒラリウス、ポワティエの司教、著名な教父であり正統信仰の擁護者、†368年。ローマ教会では1月14日にその記念日が祝われる。　現在のギリシャ教会の月暦には彼の名前は載っていないが、その聖なる生涯は疑いようがなく、奇跡によっても裏付けられている。ポワティエは、フランスのヴィエンヌ県の県都であり、パリから南西へ340ヴェルスタの地点にある。

辞退し、説得されてようやく、より謙虚ではあるが、より過酷な「呪文詠唱者」[7052]の職務を引き受けることに同意した。　新しい職務に就いて間もなく、マルティンは両親がまだ異教徒であることに心を痛め始め、夢の中で見た啓示に従い、しばらくして彼らをキリストへと改宗させるために故郷へと向かった。彼はアルプスを越えなければならず[7053]、道なき山岳地帯でしばしば道に迷い、山賊の危険にさらされた。ある時、彼は山賊の手に落ちた。　ある山賊が剣を振りかざし、マルティンの首を切り落とそうとしたが、その仲間が若者を不憫に思い、襲いかかろうとする者を制止した。マルティンは縛られ、命を救ってくれたその山賊の監視下に置かれた。

「お前は誰だ？」と山賊が尋ねた。

「私はキリスト教徒です」と、若者は穏やかに答えた。

その後、二人の間で長い会話が始まり、その間、マルティンは盗賊に深い感銘を与え、盗賊は自らの悪辣で恥ずべき生き方を恥じるようになった。彼は直ちにマルティンを解放し、涙ながらに自分のために祈ってほしいと懇願した。　その後、元強盗は敬虔な生活を送るようになり、やがてガリアの聖マルティン修道院で修道士として修行に励んだ。

ついにイタリアの国境を越え、多くの試練と困難の中を旅を続けたマルティンは、極めて嫌悪感を催すような恐ろしい風貌の男に出くわした。その男は、好奇心旺盛な質問を次々と浴びせかけ、とりわけ「どこへ向かっているのか」という問いへの答えを引き出そうと執拗に迫ってきた。

「私は、主が私を招かれるところへ行くつもりです」とマルティンは答えた。

「そうか」と、その男は怒りを込めて言った。「だが、覚えておけ。お前がどこへ行こうと、何をしようとも、私は常に、お前の敵である。」

この出会いと会話はマーティンに深い印象を与えたが、彼は怯むことなく、ただ穏やかに、そして全知全能の神の摂理への揺るぎない信頼を込めて、こう述べた。

「主は私と共におられる。人が私に何をするかなど、私は恐れない。」

その言葉を聞いた途端、相手は瞬く間に姿を消した。その時、マーティンはそれが人類の古くからの敵――人間の姿をとった悪魔であったことをはっきりと悟った。

実家にたどり着くと、マルティンは両親が健在であることを知った。　父は彼に対して極めて冷淡な態度を取り、彼の説教には一切耳を貸そうとしなかった。しかし、母は彼の説得に心を動かされ、福音の光に照らされた。彼の故郷の町の他の多くの住民たちも同様であった。しかし、サバリアにおける聖人の福音宣教の成功は長くは続かなかった。　当時、不敬虔なコンスタンティウス王がアリウス派を庇護した結果、彼らの異端はパンノニア全土に広まった。マルティンはこの邪悪な教えに立ち向かったが、そのために迫害を受け、肉体的拷問の末、街から追放された。　彼はイタリアへと向かい、メディオランに滞在[7054]し、そこで隠遁者の小屋を建てたが、ここでもあらゆる迫害や侮辱を受けた末、アリウス派の司教アウクセンティウスによって追放された。　そこで聖人は、人里離れた岩だらけのガッリナーリ島で隠遁生活を送ることを決意し、その後、カプラリア島[7055]へと移り住んだ。この島は有毒な蛇で溢れかえっていたため、完全に無人島となっていた。そこで彼は、ただ一人の仲間と共に、神への黙想と祈りに専念し、荒野の植物だけを糧として暮らした。　神の御手は奇跡的な方法でこの聖なる修道士を守り、彼は蛇から何の害も受けなかった。

[7052] これは、古代キリスト教教会における聖職者層の一つの特別な役職であり、悪霊に取り憑かれた者、狂気の人、てんかんを患う者、および同様の病に苦しむ者たちに対して、特別な祈りを唱えることを任務としていた。現在、教会にはこのような特別な役職は存在しない。

[7053] アルプス山脈は、ヨーロッパで最も高い山脈であり、イタリア北部一帯を弧を描くように囲み、アペニン半島を四方から本土から隔てている。

[7054] メディオラン――現在のミラノ――は、ロンバルディア州にある北イタリア随一の都市であり、極めて古くから存在し、常に重要な役割を果たしてきた。

[7055] ガリナリアは、イタリア北部（リグリア地方）のティレニア海に浮かぶ島である。カプラリアは、同じ海にある小さな島である。

師であるイラリウスが、アリアニ派によってポワティエから追放されていたが、帰還の許可を得たという知らせを耳にしたマルティンは、ポワティエへ彼のもとへ向かった。そして、5年ぶりの再会を果たした二人は、喜びのうちに互いに抱き 合った。 イラリウスは再び、彼に長老の位、あるいは少なくとも助祭の位を受けるよう説得したが、マルティンは生涯を通じて単なる修道士であり続けたいと願い、頑なにそれを拒んだ。 イラリウスは彼に修道院を設立することを許可し、そのためにポワティエからほど近い、ロコシアグ、あるいはリグージュという村に場所を割り当てた[7056] 。敬虔な若者の周りには、彼から完全な修道生活について学ぶために、すぐに友人や弟子たちが集まった。 マルティンは皆を愛情をもって受け入れ、すべての人にとって、神に喜ばれる修道生活の最良の模範となった。ほとんど教育を受けていなかったにもかかわらず、彼の中に宿るキリストの恵みの力により、神への思索と徳に満ちた修道生活の功績に導かれ、 博識で深く教養のある人々さえも、真のキリスト教的生活の道へと導き、諭した。その中には、彼の影響を受けて、虚しい世を捨て、神への奉仕と荒野での修行に全身全霊を捧げた者もいた。 聖マルティヌスの修道院は短期間のうちに繁栄し、名声を博し、ガリアで最初の修道院として現れ、この国における修道生活の著名な発祥地となった。

その頃、聖なる信仰と敬虔な生活について魂に有益な教えを受けるために聖マルティヌスの修道院に入ったが、まだ洗礼を受けていなかったある求道者が、突然熱病に倒れて亡くなった。そのとき、聖人は修道院にいなかった。 戻ってみると、聖人は、泣き崩れる修道士たちの間に、その求道者の息絶えた遺体を見つけた。聖人は全員を独房から追い出し、祈りを捧げて伏し拝んだ。そして二時間後、キリストの恵みによって、亡き者を生き返らせた。蘇ったその求道者は直ちに聖なる洗礼を受け、その後も長い間、神に喜ばれる生活を送った。 その後、彼はこう語った。魂が肉体から離れたとき、ある威厳ある裁判官の前に立たされ、その裁判官から有罪の判決を下されたが、二人の天使が裁判官に「この者は、マルティンが祈っている人物である」と告げた。すると裁判官は、彼をマルティンのもとへ戻すよう命じた。

それ以来、マルティンは、天からの力を授かった聖なる、驚くべき使徒的な人物として、その名声が広まった。

様々な身分や立場の人々から数多くの弟子たちを惹きつけ[7057] 、その高潔で厳格な修道生活という模範によって彼らに影響を与え、聖マルティンは自らの教えによっても彼らに多大な影響を及ぼした。 彼自身、キリストの真理をはっきりと見抜き、それに確固として確信しており、その同じ明快さ、生き生きとした表現、簡潔さ、そして説得力をもって、信者にも非信者にもそれを伝え、解き明かす術を心得ていた。彼はたとえ話を用いて教えることを好んだが、それらは聴衆に強い印象を与えた。

聖マルティンの偉大な功績を目の当たりにし、その聖なる、神に喜ばれる生き方を許せなかった人類の古くからの敵——悪魔は、彼に現れてあらゆる手段で誘惑し、悪意に満ちた攻撃を仕掛けた。 しかし、聖人は常に自分の周囲に悪魔たちや悪魔の王その人の姿を見ていたにもかかわらず、彼らに対して微塵の恐れも示すことはなかった。彼は公然と悪魔に戦いを挑んだことさえあった。

「もしお前が私の中に少しでも関与しているのなら」と彼は言った。「それなら、そのことを行動で示してみよ。」

そこでサタンは、光の天使の姿をとって聖人を欺き、惑わそうとした。使徒が言うように、時には*「サタン自身も光の天使の姿をとる」*からである（IIコリント11:14）。 そしてある日、サタン

[7056] 聖マルティヌスの修道院は、ポワティエから8ヴェルスタの場所に位置していた。これは西洋で初めて適切に整備された修道院であり、マルティヌスは西洋における修道院設立の主要な立役者の一人である。

[7057] その中には、スルピキウス・セウェルスという名の裕福な人物がいた。彼は西方教会において最も教養のある古代の著述家の一人であり、後にマルティヌスの伝記作家となった。また、聖人の最も親しい弟子の一人であり、最も優れた弟子の一人であるガッルもいた。スルピキウスは、ガッルの証言に基づいて、マルティヌスの生涯の多くを記録した。

は祈りの最中のマルティンに姿を現した。紫色の光に先導され、その光に包まれ、王の衣をまとい、真珠と金で飾られた冠を戴き、金で覆われたサンダルを履き、陽気で喜びに満ちた表情を浮かべていた。　この尋常ならざる、驚くべき光景を目の当たりにして、マルティンは最初、強い戸惑いに襲われ、二人は長い間沈黙を守った。やがて悪魔が言った。

「マルティンよ、今、君が誰を見ているか分かるか？　私はキリストだ。再臨のために再び現れる前に、私は君に姿を現そうと思ったのだ。」

聖人は少し間を置き、何の答えも返さなかった。

「なぜ、この幻を信じることを躊躇うのか？」と悪魔は言った。「私はキリストだ。」

すると、マルティンは聖霊の導きにより、それが悪魔であることを悟り、こう言った。

「わが主イエス・キリストは、紫の衣と輝かしい冠を身につけて現れると約束されたわけではありません。キリストが、苦難に遭われたのと同じ姿で来られ、とりわけ十字架上で負われた傷を目に見える形で示されるまでは、キリストの再臨を目撃しているとは信じたくありません。」

すると、悪魔は煙のように消え去り、修道室を恐ろしい悪臭で満たした。それが悪魔であったことに、もはや疑いの余地はなかった。

しかし、こうした惑わすような幻視とともに、聖人には、あの世から天使や神の聖人たちが現れ、慰めと恵みをもたらした。そうして、聖使徒ペトロとパウロが繰り返し彼に現れ、神に霊感を受けた語りかけで彼を慰めたのである。　神の恵みは明らかに聖マルティンに宿っており、特に彼が感動的な神聖な礼拝を執り行ったり、民を祝福したりする際、すべての弟子たちの目の前で、彼と共にいることをはっきりと示していた。　ある時、弟子たちは、彼が祝福のために右手を挙げた際、その手から何とも尋常ではない輝きが放たれているのを目撃した。また別の時には、彼の額の周囲に光輪が現れるのを目撃した。

「山の上にある町は隠れることができない。また、ろうそくを灯して、それを器の下に置くのではなく、燭台の上に置けば、家中のすべての人を照らすのである」（マタイ5:15）。このように、聖マルティンについては、神が彼を、修道院の独房という孤独と静寂の中でのみ行われる黙した行いのためだけに選び出されたのではなく、教会の燭台の高い場所に彼を据え、彼がその恵み深い賜物と善行と聖なる生活によって、キリストの多くの羊の群れの牧者として、信者たちを照らすためであった。彼の偉大でますます高まる名声は、いずれかの教会の信徒たちが遅かれ早かれ、彼を司教の座に推挙するだろうことを疑いようのないものにした。そして、トゥール（[7058]）の司教座が空席となったとき、人々は聖マルティンを自分たちの司教として迎えたいと願った。しかし同時に、マルティンの深い謙虚さは誰もが知るところであり、それゆえ彼は以前、長老職やさらには助祭職の就任さえも執拗に拒んできたのである。そこで人々は、策略と力に訴えることに決めた。　ルリチウスという名の市民が、聖人の修道院を訪れ、その足元にひれ伏して、病気の妻のために来て祈ってほしいと懇願した。聖人はそこへ向かったが、そこで大勢の人々に取り囲まれ、力ずくで街へと連れ戻され、群衆一斉に彼を司教として宣言した。

聖座に就いた後も、聖マルティンは少しも変わることなく、相変わらずすべての人にとって深い謙遜の模範であり続け、質素な衣服と極めて質素な食事で満足し、ほとんどの時間を修道生活の実践に捧げ、世俗から離れ、沈黙を求めて過ごした。　町のほど近く、彼は修道生活を送るために、人里離れた荒涼とした場所を選んだ。その場所は岩山と、一方を流れるロワール川に囲まれており、そこへ通じるのはたった一本の小道だけだった。ここで聖マルティンは木造の小部屋を建てた。　その周辺には、隠遁生活を求め、敬虔な修行に励む他の修道者たちも集まり始めました。ある者は同じような小屋を建て、ある者は山の岩に洞窟を掘り出しました。こうして、聖マルティンの周囲には最大80人の兄弟たちが集まり、新たな修道院が形成されました。　それは「マルティンの修道院」、ある

[7058] トゥールはガリアの都市で、ロワール川の左岸、パリから南西に238ヴェルスタの地点に位置する。

いは「大修道院」、そして後に「マルムティエ（[7059] ）」と呼ばれるようになった。この修道院の修道士たちは、マルティンの規則を受け入れ、彼の経験豊かな指導のもと、断食と祈りの修行に励んだ。彼らは、マルティンの魂に有益でありながら、誰にでも理解できる簡潔な教えと、彼自身の極めて献身的な生活の模範を大いに活用していた。　修道者たちは私物を一切持たず、すべてのものを共有していた。物を買ったり売ったりすることは一切許されず、手仕事としては、若い修道士たちにのみ、神聖な書物や魂に有益な書物の写本が許されていた。一方、年長の修道士たちはもっぱら祈りに専念していた。　共同の礼拝のため以外、彼らはめったに独房から外に出なかった。病気の人を除いて、誰もワインを口にしなかった。彼らが1日1回だけ口にする食事は、パン、野菜、オリーブだけで構成されていた。彼らの衣服は粗いラクダの毛でできていたが、修道士たちの多くは貴族の出身であった。　修道者たちは絶対的な服従のもとで、その大部分を沈黙の中で過ごした。この修道院からは、異教徒の間でキリスト教の啓蒙を広めることに多大な労力を注いだ多くの司教が輩出された。

聖マルティン自身も、異教徒の改宗に熱心に尽力し、ガリアの大部分で偶像崇拝を打ち倒した。この使徒的奉仕において、彼はキリストの真理を説く、勇敢で、恐れを知らず、献身的な説教者であった。　そのために、マルティンは愛着のある修道院をたびたび離れ、周辺の国々を巡り、異教の神殿を破壊し、偶像崇拝者たちの聖なる木を切り倒し、教会を建て、異教徒たちにキリストの信仰を説いた。　聖マルティンの福音宣教は、キリストの力によって、多くの異教徒の目の前で聖人がしばしば奇跡や奇蹟を行っていたことから、なおさら大きな成功を収めた。　異教徒たちが最初に改宗した場所は、アンボワーズ（[7060] ）であった。ここで説教によって教会を設立すると、彼はその運営と管理を弟子たちの数人に委ねた。しかし、その地では異教の勢力が依然として強く、キリスト教徒たちは異教徒たちから大きな危険にさらされていた。というのも、そこには依然として大きな偶像を祀る異教の神殿が残っており、人々はそれを崇拝していたからである。　聖マルティンの弟子たちは、聖人の命令にもかかわらず、この偶像崇拝の拠点を破壊することに躊躇していた。マルティン自身も再びアンボワーズを訪れたが、その神殿を破壊することが確かに困難であることを確信した。そこで彼は、人里離れた場所を選び、一晩中、神への熱烈な祈りを捧げた。　そして主は、この御自分の愛する者の祈りを聞き入れられた。朝になると恐ろしい暴風が吹き荒れ、異教の神殿を土台から破壊し、その中にあった偶像を粉々に砕いた。

福音の言葉を広めながらエドゥアン地方[7061] を巡った聖マルティンは、アウグストドナ[7062] に到達し、聖殉教者シンフォリアヌスの墓前で祈りを捧げ、シンプリキウス司教が異教を根絶するのを助けるために、この地に留まった。 聖シンフォリアヌスの聖遺骨が安置されていた礼拝堂[7063] の近くには、サロン[7064] を祀る異教の神殿が聳え立っており、そこには異教徒の間で最も尊敬されていた祭司たち――いわゆる「サロンのドルイド」[7065] が住んでいた。聖マルティンは恐れを知らずこの異教の神殿に入り、サロンの像と祭壇を打ち倒した。　すると、これに激怒した武装した異教徒の群衆が彼に襲いかかった。中でも特に勇敢な一人が、すでに彼の上に剣を振りかざそうとしたが、目に見えない力がその男を聖人の足元に倒し、恐怖に打ちのめされたその傲慢な異教徒は、涙を流しながら謙

[7059] マルムティエ修道院は後に名声を博し、ガリアのみならず、西洋全体における修道史において極めて重要な位置を占めた。

[7060] アンボワーズは、トゥールから22ヴェルスタ離れた都市である。

[7061] エドゥア地方は、パリの南東、ロワール川とソーヌ川の間に位置していた。

[7062] アウグストドン――エドゥア地方に居住していたエドゥエ族の主要都市。現在はロワール・エ・ソーヌ県のオティュンであり、多くの遺跡が残っている。

[7063] 殉教者シンフォリアヌスは、ローマ教会によって崇敬されており、178年にマルクス・アウレリウス帝の治世下で殉教した。

[7064] サロン――ガリアの伝説上の王で、エドゥイ族は彼を自国の守護神として崇めていた。

[7065] ドルイド――太古の昔からガリアを支配し、ガリア人の間で絶大な尊敬と影響力を誇っていた最高位の司祭階級。

虚に聖人に許しと慈悲を請うようになった。　この奇跡を目の当たりにして、そこにいた他の異教徒たちも皆、キリストを信じるようになり、異教の神殿は真の神の聖所へと変えられた。

これと同様に驚くべき奇跡が、聖人の祈りによってレプロゼの集落[7066]でも起こった。使徒的な熱意に駆られ、彼はここでも異教徒たちに深く崇められていた神殿を破壊しようとしたが、住民たちは彼を追い払った。　そこで彼は、集落に最も近い安全な場所へ退き、そこで三日間断食と祈りに専念し、異教の神殿が滅ぼされるよう神に祈り続けた。その熱烈な祈りに応えて、まるで武装したかのような二人の輝く天使が現れ、彼らが異教徒たちに対する助けとして神から遣わされたと告げた。

これを聞いたマルティンは、直ちに村へ戻り、キリストの恵みの力によって、目に見えない神の力に縛られた人々の目の前で、犠牲台や偶像を奇跡的に灰へと変えた。このような奇跡と神殿の驚くべき破壊を目の当たりにし、その村の住民たちは偶像の無益さを悟り、キリストへと回心した。

ある日、聖マルティンは数人の弟子たちと共に、カルノトゥス[7067]へ向かう途中、ある人里離れた集落の近くを通りかかった。彼らに向かって、巨大な群衆が押し寄せてきた。その群衆はすべて異教徒で構成されていた。というのも、その地方では誰もキリストを知らず、キリストの信仰の真理を聞いたことがなかったからである。　この聖人の名声はそれほど大きく、遠くまで広がる野原を埋め尽くすほどの大勢の異教徒さえも、彼のもとに引き寄せた。マルティンは、行動を起こし、この機会を利用して、異教徒たちをキリストへと導く必要があると悟った。そこで、聖霊の導きにより、彼は力強く熱烈な説教を始め、異教徒たちに神の御言葉を宣べ伝え、これほど多くの人々が救い主である主を知らないことを、心の底から嘆きながら語った。

その時、つい先日息子を亡くしたある女性が、息子の亡骸を運び込み、聖人の足元に横たえると、彼に向かって両手を差し伸べながらこう言った。

「あなたは神の友であることを私たちは知っています。どうか私の息子を返してください。私には彼しかいないのですから。」

群衆は、その不幸な母親に同調し、彼女の願いに声を合わせて叫びました。

聖マルティンは亡くなった少年の遺体を両手で抱き上げ、民衆全員と共にひざまずき、祈りを捧げた後、立ち上がって、すでに生き返った少年を母親のもとへ返した。この光景を目にしたそこにいた者たちは皆、心を一つにしてキリストを神であると告白し、聖人の足元にひれ伏して、自分たちをキリスト教徒にしてくれるよう熱心に懇願した。　聖人は、遅れることなく、その場である野原で彼らに手を置き、真理の御言葉をもって彼らを洗礼した。この奇跡の噂は、瞬く間に国中へと広まった[7068]。聖マルティンは、ガリアの他の地域でも同様に、福音の光を広めていった。

ある日、エヴァンフィウスという名の信徒が、重病に冒され、すでに死の淵に立っていたが、マルティンを自分の元へ招いた。　聖人は直ちに彼の元へ向かったが、道のりの半分も進まないうちに、病人は聖人の力強さを感じ取り、突然癒やされたため、自ら聖マルティンと同行していた弟子たちを迎えに出た。翌日、マルティンは帰路につこうとしたが、癒やされた者の切実な懇願により、その場に留まることになった。　その間、ヘビがエヴァンフィア家の少年の一人を致命的に噛み付いた。エヴァンフィアは、聖人の偉大な奇跡の力を信じ、彼にとって不可能なことは何もないと確信していたため、瀕死の少年を肩に担いで聖人の足元に連れてきた。　蛇の毒はすでに少年の全身に広がり、血管は浮き上がり、内臓は革袋のように膨れ上がっていた。マルティンは手を伸ばして少年の全身を撫で回し、致命的な蛇の毒牙によって負わされた傷口のすぐそばを指で強く押した。　すると、そこにいた者たちは皆、驚愕のうちに、全身から毒がマルティンの指へと流れ込み、傷口から血と共に流れ出ていくのを目撃した。その後、少年は完全に健康な姿で立ち上がり、この奇跡を目撃した者たちは皆、聖徒たちを通して驚くべき御業をなされる神を賛美した。

[7066] レプロザ――現在のルヴル。パリから南へ約250ヴェルストに位置する小さな町。

[7067] カルノは、現在のシャルトルであり、パリの南西84ヴェルストに位置する都市である。

[7068] この奇跡を記念して、後にシャルトルに「命を与える慈悲深い聖マルティン」の名を冠した教会が建立された。

聖マルティンは、カルノテの町で、口がきけない少女に対して、これと同様に驚くべき奇跡を行った。生まれつき口がきけない12歳の少女が、マルティンの元へ連れてこられた。彼女の父親は、聖人が祈りによって娘の舌を解いてくれるよう懇願した。　聖人は、この件を共にいたヴァレンティヌス司教とヴィクトリシウス司教に委ね、これは自分の力では及ばないこと、そして徳においてより優れた彼らにはすべてが可能であると述べた。しかし、二人は自分たちの願いを不幸な父親の懇願と合わせ、マルティンに期待されている奇跡を起こすよう説得した。　そこでマルティンは、参列していた人々を退去させ、司教たちと少女の父のみを前にして、熱心な祈りを捧げながらひれ伏した。その後、少量の聖油に祝福を与え、自分の指で少女の舌を押さえながら、その聖油を彼女の口の中に注ぎ込んだ。　そして、驚くべき奇跡が聖人の信仰を裏付けた。聖人が少女に父親の名前を尋ねると、彼女は即座にはっきりと答えた――そして父親は聖人の膝を抱きしめ、喜びと涙に満ちて叫び、集まったすべての人々の前で、これが娘の初めての発話であったと証言した。

ある日、マルティンは大勢の民衆に囲まれてパリに入城した際、誰もが嫌悪するほど惨めな姿のハンセン病患者に出会った。　しかし、聖人は彼に憐れみを示し、その顔を舐めて祝福した。すると、その病人は突然、ハンセン病から癒やされ、翌日、教会を訪れて、自身の癒やしに対して感謝を捧げた。

敬虔な高官であり、後にその聖なる生涯で名声を博したパヴリンは、目の病にひどく苦しみ、すでに瞳は暗闇に覆われていた。しかし、聖マルティンが布で彼の目に触れると、痛みはたちまち消え去った。

聖マルティンは、不幸な人々や貧しい人々に対するキリスト教的な慈悲と愛の行いを数え切れないほど行い、その功績により「慈悲深い」という称号を得た。ある冬の日のこと、教会へ向かう途中、彼は半裸の物乞いに遭遇し、その物乞いは彼に衣服を恵んでほしいと懇願した。　聖人は大助祭を呼び寄せ、震えているその男に服を着せるよう命じた。その後、聖書室[7069] に入り、いつものように　一人で座っていた。しかし、助祭が乞食に服を渡さなかったため、その男は聖人の元へ駆け込み、聖職者や寒さについて不満を訴え始めた。 すると聖人は、上着の下から密かにチュニック[7070] を脱ぎ、貧しい者にそれを着て去るよう命じた。しばらくして助祭が入ってきて、聖なる司教に、人々が教会で待っているため、今こそ荘厳な礼拝を行う時だと告げた。これに対し、聖人は心の中でこう答えた。

「まずはその貧しい人に服を着せなければならない。彼が服を受け取らなければ、私は教会へ行くことはできない。」

助祭は、聖人が下着を着ていないことに気づかなかったため、その意味を理解できず、貧しい人を見つけられないと謝り始めた。

しかし、マルティンは執拗に繰り返した。

「用意された服を私のところへ持って来い。貧しい者が服を着ないままになることはない。」

やむを得ず、聖職者は腹を立て、近くの店から五コイン分の短くて粗末な服を掴み取り、怒りを込めてマルティンの足元に投げつけ、こう言った。

「服はここにあるが、貧しい者はいない。」

聖人は静かに、彼にしばらく扉の外で待っているよう命じ、密かにその服を身にまとって、典礼を行うために教会へと出て行った。　そして主は、この秘密のキリスト教的慈善行為に対して、遅れることなくマルティンに報いた。その日、彼が祭壇を祝福していた時、礼拝の最中に、彼の頭上から輝く火の玉が現れ、上へと昇る炎が長い光線を放った。　この日、大勢の民衆が集まる中で、この

[7069] 書記官――教会に付属する特別な部署。

[7070] チュニカ――ローマ市民の一般的な下着――は、一種のシャツのようなもので、その大部分は羊毛で作られていた。

輝かしい現象を目撃したのは、選ばれたごく少数の人々だけだった。すなわち、聖マルティンの敬虔な弟子であるガッル、一人の処女、一人の長老、そして三人の修道士である。

マルティンが際立たせていた柔和さは、異教徒たちでさえも彼を愛させるほどであった。彼にはそもそも敵などほとんどいなかったが、もしいたとすれば、彼らは自分たちが持ち合わせておらず、また真似することのできない美徳ゆえに彼を憎んでいたのである。　一方、マルティンは誰をも非難せず、悪に対して悪で報いることもなかった。あらゆる侮辱に対して彼は極めて忍耐強く、時には下位の聖職者たちから罰せられることなく侮辱されることさえあった。彼は、自分に苦痛を与えたからといって彼らを罷免することは決してなく、自分の力の及ぶ限り、彼らへの愛を絶やすことはなかった。　誰も、彼が怒ったり、動揺したり、笑ったりする姿を目にしたことはなかった。彼は常に一貫しており、その顔には天の喜びのようなものが宿っていた。　彼の口からは、キリストの御名以外の言葉が決して出なかった。彼の心には、敬虔、平和、そして憐れみ以外のものが決してなかった。彼はしばしば、自分のそばにいたり、あるいは不在の間に、蛇のような口と毒のある舌で彼を攻撃した、あの侮辱者たちの罪さえも嘆いて泣いた。

聖マルティンが侮辱者たちに対して示した忍耐と柔和さがどのようなものであったかは、次の例が如実に物語っている。修道院の聖職者の中に、ブリクティウスという名の若者がいた。彼は最も低い身分の出身であったが、マルティンは彼を保護し、育て上げ、後に助祭の位に就かせた。　悪霊に煽られたブリクティウスは、悪意のない師を、面と向かって、また陰でひどく中傷するようになった。聖人は穏やかな諭しで彼を改心させようとしたが、それは狂人に効かず、彼はさらに激しい罵詈雑言を吐き続け、やがて逃げ去ってしまった。　道中で、聖マルティンの居場所を尋ねてきた病人に遭遇したブリクティウスは、聖人を「老いた詐欺師」などという恥ずべきあだ名で呼んだ。その後まもなく、その病人が癒やされた後、マルティンがブリクティウスと出会ったとき、ただ穏やかに彼に尋ねた。

「なぜ私を『詐欺師』と呼んだのですか？」

「私は決してそんなふうには呼びませんでした」と助祭は答えた。

「たとえ私の背後で話していたとしても、私の耳はあなたの口元にあったのではないか？」と聖人は指摘した。「また、私が死んだ後、あなたは司教になるだろうが、その際には多くの苦難に遭うことになるだろう。」

その後、ブリクティウスは狂乱の発作に襲われるようになり、ある時、マルティンが自分のケリアの前にあるベンチに座っていると、ブリクティウスは激しい罵声を浴びせながら彼に襲いかかった。その際、隣の岩の上に、彼を狂気に駆り立てる二人の悪魔が彼には見えた。

「私はお前より聖なる者だ」と助祭は言った。「私は修道院で育ったが、お前はかつて兵士だったのだ。」

修道院の兄弟たちは、ブリクシオンに模範的な懲罰を科し、聖職を剥奪するよう求めたが、マルティンは彼の罵声を穏やかに受け流した。その直後、聖人の柔和さに心を打たれたブリクシオンが我に返り、良心の呵責に苛まれて彼の足元に飛び込んだとき、マルティンはただこう言った。

「ブリクシウスは自分自身を傷つけただけで、私を傷つけたわけではない。主イエス・キリストでさえ、ユダを御自身のそばに耐え忍ばれたではないか。それならば、私もこの若者をそばに耐え忍ぶべきではないか？」

マルティンの予言は的中した。ブリクシウスはその後、見違えるほど改心し、聖人の死後には後継者に指名された。その後、多くの苦難や侮辱に耐え、やがて安らかにこの世を去った[7071]。

[7071] ブリクシオンはマルティヌスの後任としてトゥール司教に選出されたが、33年後、ある虚偽の告発により民衆によって不名誉な形で追放され、7年間にわたる過酷な追放生活の末、ようやく司教座に復帰し、そこで安らかに息を引き取っ

聖マルティンの影響が、いかに傲慢で冷酷な人々、さらにはこの世の権力者たちに対しても、抗いがたく強力であったかは、以下の例が示している。聖人としての歩みを始めたばかりの頃、トゥールは、野獣にも劣らぬ猛烈な怒りを抱く残忍な地方長官アヴィツィアンの来訪に恐怖に震えた。その随行団の後には、長い囚人の列が続いており、この残忍な統治者は、彼らを処刑することで街に恐怖を植え付けようとしていた。人愛に満ちたマルティンは、統治者の怒りを恐れず、囚人たちのためだけでなく、自身の司教座のある街のためにも立ち向かうことを決意し、真夜中にアヴィツィアンの宮殿の門へと向かった。　その夜、地方総督の安らかな眠りは、彼には強い衝撃のように思えた何かに突然遮られ、ある見知らぬ声が彼にこう告げた。

「お前はここで眠っているが、その一方で、神のしもべが門の外、お前の敷居のそばに横たわっているのだ。」

アヴィツィアンは使用人たちに門の外を確認するよう命じたが、彼らはざっと見回しただけで、それは単なる気のせいだと彼に保証した。彼は安心して再び眠りについたが、ほどなくして「門の前にマルティンが立っている」という大きな声で再び起こされた。すると、使用人たちはそれが事実であることを確認した。 地方長官は聖人を呼び寄せ、こう尋ねた。

「なぜそのようなことをしたのか？」

「お前の企みは、お前が口にする前から分かっていた」と聖マルティンは果敢に答えた。「行って、天の怒りに滅ぼされないようにしなさい。」

聖人の霊感に満ちた預言的な声に恐れをなされ、自らの良心に責め立てられたアヴィツィアンは、急いでその命令を実行に移した。彼は囚人たちを解放し、街を去った。　聖マルティンの叱責は、その後もこの残酷な地方長官の性格に良い影響を与え続けた。ある日、アヴィツィアンが再びトゥール市を訪れた際、聖人は彼の部屋に入り、黙って執拗に彼を見つめた。

「なぜそんなに執拗に私を見つめるのですか、聖なる人よ？」とアヴィツィアンは尋ねた。

「私はあなたを見ているのではない」とマルティンは答えた。「あなたの首にまとわりついている忌まわしい悪魔を見ているのだ。」

そして、聖人のその言葉は再び善き効果をもたらし、残忍な地方総督を、その邪悪な企てを実行するのを思いとどまらせた。

皇帝ヴァレンティニアヌス1世[7072]　は、至る所から聖マルティンの名声を耳にし、彼と友好関係を築きたいという意向を示していたが、熱心なアリウス派信者であった妻ユスティナが、それを許さなかった。　そのため、ある日、マルティンが重要な用事で、当時皇帝の宮廷があったトリーア[7073]を訪れた際、妻の影響で彼に対して偏見を抱いていた皇帝は、彼を面会させないように命じた。皇帝に謁見しようと懸命に努力したが叶わず、聖人は祈りと断食に専念した。　七日目に、天使が現れ、宮殿へ行って皇帝に謁見するよう命じた。　この神からの啓示を受けたマルティンは、急いで宮殿へと向かい、扉が開いているのを見つけると、何の通告もなく皇帝の前に現れた。ヴァレンティニアヌスは激しく怒ったが、突然、自分の座っている玉座の下がまるで炎に包まれているかのような感覚を覚えた。　立ち上がることを余儀なくされた彼は、たちまち態度を一変させ、聖人を熱烈に抱擁して迎え入れ、長く語り合い、大切な客としてさらに数日間宮殿に留まらせ、彼が　求めることは何でも叶えると約束し、別れの際には豊かな贈り物を差し出したが、聖人は　しかし、それらを辞退し、それによって人々からの尊敬をさらに深めた。

た。　ブリクティウスは道徳的に大きく改心し、その高潔な生活によって名声を博したため、後にローマ教会によって聖人の列に加えられた（同教会では11月13日にその記念日が祝われる）。

[7072] ヴァレンティニアヌス1世――西ローマ帝国の皇帝――は、364年から375年まで在位した。

[7073] トリーア、あるいはトレヴィーは、古代ガリアの北部地域（いわゆるベルギカ）にある、人口が多く繁栄した主要都市であった。

383年、ローマ軍はマクシムスを皇帝に擁立したが、ヴァレンティニアヌス1世の息子であり後継者であるグラティアヌス[7074] は、兵士たちの反逆により敗北し、殺害された。一方、その弟であるヴァレンティニアヌス2世は逃亡を余儀なくされ、王位を追われ、領土の一部のみを残して去ることとなった。　そこで聖マルティヌスは、グラティアヌス派に属し、死の脅威にさらされていた者たちのために執り成すべく、トリーアにいるマクシムス皇帝のもとへ向かった。　マクシムスにとって、聖職者たちの忠誠を確保することは極めて重要であり、とりわけ、聖マルティンのような、人々に愛され名高い司教の支持を、可能であれば得ることが最優先事項であった。そのため、彼は聖マルティンの到来を非常に好意的に受け入れ、宮殿での御馳走に聖人を招待した。しかし、マルティンはこれを断り、並外れた勇気をもって次のように答えた。

「ある皇帝の命を奪い、別の皇帝の王位を奪った男の食卓に、私は座ることはできません。」

その一方で、マルティンは皇帝に対し、当初は事業に成功していたとはいえ、その治世は長くは続かず、まもなく破滅が待ち受けていると警告した[7075] 。 マクシムスは怒りを抑え、聖人に、王冠を自ら進んで戴いたのではなく、敵から王国を守るために兵士たちがそれを戴かせたのだと説得した。　ついに、皇帝の説得に折れて、聖マルティンは王宮での晩餐会に出席することに同意した。そこには高官や貴族たちが集まっており、マルティンは最も名誉ある席に着席させられ、同行していた司祭は皇帝の兄弟と叔父の間に席を割り当てられた。　宴の最中、皇帝にワインの入った杯が差し出されると、皇帝はまずマルティンにそれを渡して、聖職者の手から受け取るよう命じた。しかし、マルティンは杯から一口味わうと、皇帝ではなく、出席者の一人にそれを返した。まるでその人物が皇帝よりも高い地位にあるかのように。　この出来事に皇帝も出席者全員も驚いた。しかし、マクシムスは怒るどころか、それ以来、聖マルティンに対してさらに深い敬意を払うようになった。皇帝は頻繁にマルティンを宮殿に招き、丁重にもてなして、時事問題から来世、聖人たちの永遠の栄光、その他魂に有益な話題に至るまで、彼と語り合った。　敬虔な皇后は、感極まって涙を流しながら、聖マルティンの聖なる語りや教えに耳を傾け、ついに夫の同意を得て、聖マルティン一人を招いて饗宴を催した。彼女は自ら料理を準備し、彼の足元に座って給仕し、料理や飲み物を差し出した。　その後、食事が終わる頃には、すべてのパンくずや残りを集めて、それを自分自身の食事にした。しかし、聖マルティンはこれらすべてに対して極めて謙虚な態度を示し、心と思いを修道院の独房に留め、自身の周りに集めた質素な修道士たちと共に過ごしていた。

生涯の終わりに近づいたマルティンは、カンダ地方の聖職者たちの間で激しい争いが生じているという話を耳にすると、[7076] 、争っている聖職者たちの和解を回復するために急いでその地へ向かった。彼は自分の修道士たちを呼び集め、自らの死が近づいていることを告げ、彼らの涙と叫びに見送られながら旅立った。　カンダで平和を取り戻した後、聖人はそこで激しい高熱に襲われ、死が近づいているのを感じると、弟子たちに、自分を床に、シーツと灰の上に横たえるよう命じた。なぜなら、彼自身の言葉によれば、キリスト教徒はそうして死ぬべきだからである。その際、彼は自分のすぐそばに悪魔がいるように見えた。

「なぜここに立っているのだ、忌まわしい獣よ？」と聖人は言った。「お前は私の中に居場所はない。アブラハムの懐が私を受け入れてくれるだろう。」

[7074] グラティアヌス――375年から383年まで西ローマ帝国の皇帝を務めた。

[7075] 聖マルティヌスの予言は正確に実現した。まず、387年にマクシムスが実際にヴァレンティニアヌス2世をイタリアから追放した。 しかし、東ローマ帝国の皇帝テオドシウス2世（若きテオドシウス）は、それ以前に幼少期のヴァレンティニアヌス2世を自身の庇護下に置いていたため、翌年には勝利を収めて同皇帝の権威を再び回復させた。マクシムスは敗北し、テオドシウスの元へ連行されて処刑された。

[7076] ロワール川とヴィエンヌ川の合流点にある都市。

これが彼の最期の言葉であり、彼がすでに息を引き取った後、周囲にいた兄弟たちは、その顔の輝きと美しさに深く感銘を受けた[7077] 。二千人の修道士と処女たちの合唱団が彼の遺体をトゥールへと送り、そこで大勢の民衆が集まる中、彼は荘厳な葬儀をもって埋葬された。 その偉大なる神の御心に適う者であり、奇跡を行う者である の至福の死後、神は彼の遺体が朽ちないよう御許しになり、その棺の前では、神の栄光のために、数え切れないほどの偉大な奇跡[7078] が起こった。神は、御自身の聖徒たちにおいて、永遠に驚くべきお方である。アーメン。

聖殉教者ドムニカの記念日

記念日：10月12日

聖ドムニカは、ディオクレティアヌス帝の時代に信仰を守り抜きました。キリストを告白したために、キリキアのイゲモン・アナザルヴァであるリシウスの裁判に引き出された彼女は、まず牛の腱で鞭打たれ、その足は赤熱した鉄で焼かれました。 その後、棒で激しく殴打され、関節が砕かれるほどであった。ついに牢獄に投げ込まれた彼女は、そこで殉教の傷を感謝しつつ、主のもとへ息を引き取った（286年）。

マルタの聖遺物の移送を記念する祝祭

記念日：10月12日

ロシア正教会では、10月12日に、マルタ島からガッチナへ移された三つの偉大な聖遺物――主の命を与える十字架の一部、聖福音記者ルカによって描かれたフィレルムの聖母の奇跡の聖像、そして聖ヨハネ・バプティスタの右手――の移送を記念する祝祭が行われる。 ここでは、これらの聖遺物それぞれの由来と、それらを称える祝日が制定された経緯について、簡潔に紹介する。

I.

326年、聖ヘレナ皇后によってゴルゴタで主の十字架が奇跡的に発見された。その直後、皇帝の命により、ここにキリストの復活を記念する新しい教会が建立された。この教会は、その後長きにわたり、キリスト教世界全体のこの偉大な聖遺物の守護者となる運命にあった。 この聖堂は、現在に至るまでこの聖遺物を保管し続けている。しかし、聖ヘレナ皇后によって発見された当時の完全な姿のまま、その聖遺物を提示することはできない。 伝承によれば、主の十字架の多くの断片が、はるか古代にすでに十字架本体から切り離され、その聖性を広めるために世界の隅々へと運ばれたと伝えられている[7079] 。これらの断片は東方によって守られ、キリスト教の西方によっても守られてきた。

[7077] 聖マルティヌスは400年頃、11月11日に、生後約80歳でこの世を去った。

[7078] ペルペトゥス司教は、聖マルティンの墓の上に壮麗な教会を建立した。彼の聖遺物の一部は、その後、さまざまな教会に分散された。1562年、プロテスタントたちはトゥールで彼の墓を略奪し、聖遺物を焼き払った。 残された聖遺物はトゥールの大聖堂に安置され、現在もそこに保管されている。聖マルティヌスの死後の奇跡の多くは、6世紀にトゥールのグリゴリウスによって最初に記述された。彼は西方教会で聖人として列聖されており、自らもこの神の御使いの驚くべき奇跡の力を体験していた。

[7079] このことについては、4世紀（まさに主の十字架が発見されたその時代）に生きた聖キリロス・エルサレムスもまた証言している。 彼は自身の『説教集』の一つの中で、すでに彼の時代には全宇宙に十字架の木片が広まっていたと述べている。また、主の十字架発見の伝承そのものにおいても、聖ヘレナ皇后が発見された十字架の一部を切り取り、その王国への祝福として息子のコンスタンティヌスに送ったことが記されている。 5世紀には、主の十字架の断片はすでに東方の

同様に、聖なるロシアも、その千年にわたるキリスト教の歴史の中で、幾度となく東方から主の命を与える十字架の断片を受け取り、それらは現在に至るまで、大聖堂や古代の修道院、教区教会、王宮、さらには個人の家屋にまで保管されている。　しかし、その断片の一つは、西方のマルタ騎士団から授かったものである。　この騎士団の運命は、常に正教の東方世界に降りかかった運命と、さらには、異教徒であるイスラム教徒や異教徒の世界からのあらゆる災厄や陰謀に対する、その揺るぎない砦であり、勝利をもたらす武器であった「尊き十字架」の運命とも密接に結びついていました。

一方、西方のキリスト教徒の中には、巡礼者の杖を手に、東方の聖地を参拝するための敬虔な旅に出る者たちがいた。その聖地の中で、常に第一の座を占めていたのは、疑いなく「命を与える十字架の木」であった。 他方、戦いの鎧を身にまとった者たちは、 そこへ駆けつけ、自分たちを惹きつける聖地[7080] およびその巡礼者たちを守るために、自らの血を流そうとした――さらに第三の者たちは、団体を結成して、異国の地で前者たちに宿を提供し、後者たちの傷を癒やすことを自らの使命とした。 こうした団体の中でも最も古いもののひとつが、ヨハネ騎士団[7081] である。この名称は、同団が運営する病院に付属する教会が、洗礼者聖ヨハネに奉献されていたことに由来する。　当初は慈善のみを目的とする機関であったが、後に、活動的なフランス人ライムンド・ド・ピュイ[7082] が総長に就任すると、新たな規約が制定され、その活動目的には、エルサレムへ向かう巡礼者たちの武装による保護も加わった。　このような活動範囲の拡大は、ヨーロッパで大きな共感をもって受け入れられ、さまざまな国の敬虔な騎士たちがこぞってこの新しい騎士団への加入を急いだ。キリスト教を守るための異教徒との700年にわたる戦いは、ヨハネ騎士団に不朽の名声をもたらした。 その後、ヨハネ騎士団はパレスチナを去らざるを得なかったが、エルサレムに滞在していた時代（1118年～1187年）においても、エジプトおよびバグダッドのカリフ軍との戦いにおいて、並外れた勇気と献身を示した[7083] 。 その武勇の報いとして、彼らは当時、主の聖なる十字架の一片を授かり、それをプトレマイスや、キプロス、ロードス、そして最終的にはマルタといった諸島でも敬虔に保管していた[7084] 。そこから、パヴロ皇帝の治世下で、彼らはそれをロシアへと移した。

II.

主の命を与える十字架の断片と同時に、マルタ島からロシアへ、ヨハネ騎士団によって、彼らによって同様に敬虔に崇められ、長きにわたり保管されてきたもう一つの聖遺物、フィレルムの聖母像――オディギトリア――も移送された[7085] 。

太古の昔から伝わる伝承によれば、このイコンは聖福音記者ルカによって描かれ、永遠の処女ご自身による祝福をもって聖別されたという。福音記者であり画家でもあったルカは、自らの手によ

多くの教会の所有物であっただけでなく、聖ヨハネス・クラマトルスが証言するように、一般の人々の間でも「多くの者が、十字架の断片を金で覆い、首にかけて身につけていた」という。

[7080] この点において、11世紀末の西ヨーロッパの民兵組織、いわゆる「十字軍」は特に注目に値する。 この名称は、西方のキリスト教徒たちが数え切れないほどの軍勢を率いて、未知の土地や海、砂漠を越えて渡航した動機を明確に物語っている。すなわち、尊き十字架の木が冒涜されていない姿を見たいという願いが、彼らを駆り立てたのである。　最も重要な遠征は8回行われた。第1回は1096年、第2回は1147年、 第3回は1190年、第4回は1202年、第5回は1217年、第6回は1228年、第7回は1248年、第8回は1270年である。

[7081] ヨハネ騎士団は1047年に設立された。その創設者は、アマルフィ出身の裕福な商人モーヴとされており、彼は他の数名と共に、エジプトのカリフから、巡礼者のための避難所と教会をエルサレムに建設する許可を勝ち取った。

[7082] 1118年、レイモンド・ド・ピュイがヨハネ騎士団の団長に選出された。

[7083] カリフとは、ムスリム社会において最高の精神的・世俗的権力を有したムハンマドの後継者たちの称号である。

[7084] プトレマイダ――ティルスの南に位置するフェニキアの都市；キプロス――地中海北東部、小アジア沿岸に近い島；ロードス――エーゲ海で最も東に位置する島；マルタ――シチリアと北アフリカ沿岸の間に位置する地中海の島。

[7085] オディギトリア（導き手）と呼ばれる聖母マリアは、人々を救いの道へと導くことからそう呼ばれている。

る作品を、常にこの御方の祝福を受けるために捧げる習慣があったのである。　紀元46年頃、この聖画は聖ルカの故郷であるアンティオキアに持ち込まれ、コンスタンティヌス大帝の治世までそこに保存されていた。その後、イエス・キリストや使徒たちの地上の生涯に関する他の有形遺物と共に、コンスタンティヌスによって再建されたエルサレムへと移された。 480年頃、エウドキア皇后は、この聖像を祝福として、コンスタンティノープルに住むテオドシウス2世皇帝の妹である聖プルケリアのもとへ送った。　そこで聖プルケリアによって新しいヴラヘルナ教会が建設され、この聖なる聖母マリアのイコンが安置された。このイコンは、その後何世紀にもわたり、コンスタンティノープルの守護者となった。

聖プルケリアの時代から、建設者の意志により、ヴラヘルン教会では毎週火曜日に聖母マリアの御像の前で祈祷を行うことが定められていたが、626年、聖母が奇跡によって称賛されたことを契機に、この祈祷にアカフィストの朗読が加わることとなった[7086]。 そして、聖母を称える絶え間ない賛美の声がこの教会に響き渡っていたが、やがて厳しい偶像破壊運動の時代が訪れ、ある同時代人の言葉を借りれば、聖母は「女王が紫の衣を剥ぎ取られるかのように」その栄光を奪われてしまった。

聖像崇拝が復活すると、聖母マリアの聖像は、彼女に捧げられて建てられた教会において再びふさわしい位置を占めることとなった。この教会は、その中に現れた聖母マリアの奇跡的な御出現と、コンスタンティノープルの古くからの敵であるサラセン人に対する彼女の新たな執り成しによって、再び名声を博した[7087]。 しかし、コンスタンティノープルの住民たちの信仰は薄れ、彼らは守護者である聖母を失ってしまった。敵であるイスラム教徒に加え、新たな敵――西方のキリスト教徒、すなわち十字軍――が現れたのである。 第4回十字軍の際、オディギトリアのイコンは、コンスタンティノープルの他の多くの聖遺物と共に、ヴラヘルナ教会から十字軍によって奪われ、西へと送られた。その後再びパレスチナに移され、ヨハネ騎士団の手に渡った。　十字軍が終結し、それまで居住していたプトレマイオスを離れ、ロードス島へ移住することになった際、聖なるイコンも彼らによって同地へ移された。そして、彼らが皇帝パウロスにそれを献上するまで、その後のあらゆる移住の際にも、このイコンは彼らの不可欠な所有物であり続けた。

III.

聖ヨハネ・バプティスタの右腕は、ルーシにおいて10月12日の祝日が定められた3つ目の聖遺物である。福音書記者マタイは、聖ヨハネ・バプティスタの殉教の経緯を述べる中で、弟子たちがやって来て、頭部を除く遺体を運び出し、それを埋葬したと記している[7088]。 サマリアの都市セバスティアにある洗礼者ヨハネの埋葬地[7089]　には、早くも3世紀には、彼の名に捧げられた教会が建てられていた。また、彼の記憶を称え、その尊い遺骨を崇敬する行いは、使徒たちの時代からすでに執り行われていた。

太古の昔から伝わる伝承によれば、聖福音記者ルカは、セバスティアでキリストを宣教する際、洗礼者ヨハネの遺骸に敬意を表し、セバスティアの住民に対し、それらをアンティオキアへ移送す

[7086] 626年、ビザンツ皇帝ヘラクレイオスの治世下、ペルシャ王ホズロイの将軍シヴァルは、海と陸の両方から完全に無防備なコンスタンティノープルを包囲した（皇帝は軍を率いて遠征中だった）。　その時、セルギウス総主教が聖母マリアの衣を湾の水中に沈めると、突如として嵐が吹き荒れ、湾の水面を荒れ狂わせ、そこに停泊していた敵の船を沈没させた。　この出来事を記念して、聖母への感謝の歌が作られ、祈る者たちは立ちながらそれを聴かなければならなかったため、この歌は「座らない歌」、すなわちアカフィストと呼ばれるようになった。

[7087] サラセン人、すなわちアラブ人。

[7088] マタイによる福音書14:12。一部の著述家によれば、ユリアヌス・神離反王の時代、セバスティアに安置されていた聖ヨハネ・バプティスタの聖遺骨は、灰になるまで焼かれ、風に乗って散らされたという。

[7089] セバスティア――サマリアの主要都市。この都市は、アウグストゥスによってヘロデ大王に贈られた後、ヘロデ大王が都市を完全に再建し、装飾を施したことに因んで、アウグストゥスへの感謝の意を込めて「セバスティ」または「セバスティア」（「アウグストゥスの都市」を意味する）と名付けられた。

ることを許可するよう懇願した。そうすれば、異教徒による冒涜や破壊から遺骸を守ることができるからである。　しかし、セバスティアの人々は、洗礼者ヨハネの右手の遺骨のみを持ち去ることを許可し、ルカはそれを敬虔な心をもってアンティオキアへ移した。この聖遺物がアンティオキアに安置されていた時代から、そこから生じたある驚くべき奇跡に関する伝承が伝わっている。

アンティオキアの領内にはある怪物が棲んでおり、その地の異教徒たちの迷信によれば、毎年くじ引きによって、町の清らかな乙女の一人がその怪物に生贄として捧げられていた。ある日、その運命のくじが、あるキリスト教徒の娘である若いアンティオキアの娘に当たってしまった。　悲しみに打ちひしがれた彼女の父は、キリスト教徒の血を迷信深い異教の冒涜に捧げることを望まず、天の助けを求めた。教会で聖ヨハネ・バプティストに熱烈な祈りを捧げた後、彼はそこに安置されていた聖人の朽ちない聖遺物に口づけをし、歯でその指の一部を噛み切り、それを自分のところに隠した。恐ろしい生贄の時刻が訪れ、近づいてきた怪物が、無垢な乙女を捕らえようとすでに口を開けようとしたその時、その場に駆けつけた彼女の父は、手元にあった洗礼者ヨハネの右手の指の一部を怪物の口の中に投げ込んだ。すると、怪物は即座に息絶えて倒れた。この光景を目撃した異教徒たちは、大いに驚いた。　怪物の突然の死の真の原因を知った彼らの多くは、かつての迷信を捨ててキリストに帰依した。かつて迷信に基づく処刑が行われていたその場所に、彼らは洗礼者ヨハネを称える教会を建てた。この奇跡的な出来事に関する伝承は、小指の一部が欠けている洗礼者ヨハネの右手の現在の姿を説明している。　そして、アンティオキアの人々は、自分たちの街に保存されていたこの尊い聖遺物に対して、深い信仰を抱いていた。ユリアヌス・アポステートもこの聖遺物の存在を知っており、アンティオキアの人々がそれをいかに愛しているかも知っていた。というのも、彼自身、若き日にアンティオキアで暮らしていたからである。　キリスト教を連想させるあらゆるものを火の犠牲に捧げようとしていた彼は、ペルシアへの遠征（362年）の途上でアンティオキアに到着した際、この聖遺物を無視することはできなかった。　さらに、ちょうどその頃、彼が愛していたダフネのアポロ神殿が焼失してしまった[7090]。キリスト教徒が放火したと疑った激怒した皇帝は、彼らへの報復として、アンティオキアの主要な聖遺物である聖ヨハネ・バプティスタの右手を公然と焼却するよう命じた。　しかし、アンティオキアの信者たちは、ユリアヌスが到着する前から、その聖遺物を市内の塔の一つ　に隠しておいたことが判明し、皇帝の命令を実行しようとした者たちの捜索はすべて徒労に終わった。　ユリアヌスの死後、この聖遺物は再び市内の主教会に安置され、シリアがイスラム教徒に征服されるまでの約600年間、そこに留まっていた。639年、アンティオキアは陥落し、それに伴い洗礼者ヨハネの右手もイスラム教徒の手に渡った。　ビザンツの皇帝たちは何度もアンティオキアから聖遺物を奪還しようと試みたが、そのあらゆる努力も望んだ成果には至らなかった。ついに、主は、このキリスト教の聖遺物が、不敬虔な民に支配された都市から、キリスト教王国の首都へと移されるよう定められた。 959年、アンティオキア教会の敬虔な助祭ヨブは――聖ペトロ教会の聖器保管責任者に対し、聖なる器やその他の貴重な品々と共に特別な部屋に保管されていた洗礼者ヨハネの右手を彼に譲るよう、幾度となく説得を試みたが、そのたびに徒労に終わっていた――　――ついに、その聖器保管係の弱みにつけ込むことを決意した。彼がワインの飲み過ぎで深く眠り込んでいる間に、ヨブは教会の鍵を奪い、夜中に聖遺物を盗み出した。　その貴重な品々を携え、彼はまっすぐコンスタンティノープルへと向かった。ハルキドン[7091]に到着すると、彼はアンティオキアから持ち出した宝物について、コンスタンティノープルへ知らせを送った。まもなく、彼に続いて、総主教や王室の高官たちを乗せた王室の船がハルキドンに到着した。　しばらくして、皇帝と民衆全員が、大いなる祝賀と感動、そして歓喜のうちに、ボスポラス海峡で、これほど苦労して手に入れた聖遺物を、「まる

[7090] ダフナは、アンティオキアの郊外である。

[7091] ハルキドンは、コンスタンティノープル近郊の都市である。

で天から降りてきた洗礼者ヨハネそのものであるかのように」出迎えた。その聖遺物は宮殿の教会へと運ばれた。　注目すべきは、かつて主の御頭に触れた洗礼者ヨハネの右手が、まさに主の顕現の前夜、しかも水の聖別式直前に、この教会に運び込まれたことである。このような出来事の偶然の一致は、移送の祝賀ムードと、王および民衆の敬虔な喜びを一層高めた。　洗礼者ヨハネの右手の移送の祝日を主の顕現の祝日と結びつけることなく、ギリシャ正教会は、この出来事を記念して、1月7日の聖ヨハネ・洗礼者公会議の日に祝うことを定めた。　アンティオキアと同様に、コンスタンティノープルでも、民衆の前で主の洗礼者ヨハネの右手を掲げる慣習が確立されていたが、この儀式は（アンティオキアのように）主の十字架の挙揚の日ではなく、洗礼者ヨハネの誕生日である6月24日に行われていた。 コンスタンティノープルがトルコ軍の攻勢により陥落した際（[7092]）、同市に入城したスルタン・メフメト2世は、洗礼者ヨハネの右手を他のキリスト教の聖遺物と共に王室の宝物庫に収め、自身の印章で封印するよう命じた。　しかし、冒涜された都市とその冒涜された聖遺物を守るために、前述のヨハネ騎士団が立ち上がった。当時、同騎士団はロードス島を拠点としていた。ヨハネ騎士団は、ロードス島に対するトルコ人のあらゆる攻撃を勇敢に撃退しただけでなく、トルコ人の領土そのものに対しても脅威を与えるようになった。　そこで、メフメト2世の後継者であるバヤゼト2世は、彼らの好意を得ようと、[7093] を、同騎士団の団長ピエール・オブソンへの贈り物として、洗礼者ヨハネの右手を送った。　イスラム教の宝物庫にとっては価値のない宝物であったものが、キリスト教の騎士たちにとっては貴重な宝物であった。彼らの騎士団は、創設当初から聖ヨハネ・バプティスタの天の庇護下に置かれていたからである。　ヨハネ騎士団が移住する先々で、洗礼者ヨハネを称える教会が建てられ、それ以来、移住のたびにその右手も新しい教会へと移されていった。　そのような教会がオビュソンによってロードス島に建設され、その後、同騎士団のグランドマスターであるラ・ヴァレットによっても、マルタ島に同様の教会が建設された。

IV.

マルタ島がナポレオンに占領され、騎士団総長の冠が[7094] ロシア皇帝パヴェル・ペトロヴィチに移ったとき、　幼少の頃からマルタ騎士団の輝かしい歴史に憧れていた彼に対し、その庇護に感謝したヨハネ騎士団は、3つの偉大な聖遺物のすべてを彼の所有に移すことを決意した。それらは、それぞれを受け取ってから一度も手放されたことのないものばかりであった。

洗礼者ヨハネの右手は、彼らがロシアへ運び込んだ聖遺物の中で最初のものであった。1798年、それは一時的にサンクトペテルブルクにあった騎士団の礼拝堂に安置された。　その翌年の1799年10月12日、ガッチナへ[7095]　が運ばれ、それに伴い残りの2つの聖遺物、すなわち主の十字架の断片とフィレルムの聖母のイコンも一緒に運ばれた。

皇帝宮廷は、献上された聖遺物を盛大な祝典をもって迎え入れた。その日の午前10時、ガッチナ宮殿から、聖遺物の出迎えが行われる予定だったインゲブルク方面へと、皇帝を先頭に、皇族や多数の随行員を乗せた一列の行列が出発した。　出迎えは、いわゆるスパースキー門で行われ、そこから宮殿へと戻る荘厳な行列が始まった。先頭には聖職者たちが十字行進で進んだ。その後に続き、宮廷の金色の馬車には、深紅のベルベットのクッションの上に置かれた金色の聖櫃に収められた聖ヨハネ・バプティスタの右手が運ばれていた。　続いて、同様の方法で聖母マリアのイコンと、主の命を与える十字架の聖片が運ばれた。皇帝自身は、マルタ騎士団大団長の正装を身にまとい、先頭の馬車

[7092] コンスタンティノープルの陥落は1453年のことだった。

[7093] それは1484年のことだった。

[7094] 1798年11月29日。

[7095] ガッチナ――サンクトペテルブルク州ツァールスコエ・セリ地区にある都市。

の後ろを歩いていた。　行列が宮殿に近づくと、皇帝自らが洗礼者ヨハネの右手を手に取り、そのために定められたトロパリオが歌われる中、新たに装飾された宮廷教会へと運び込み、用意された場所に安置した。ここには、聖母マリアのイコンと、命を与える十字架の聖片も安置された。　この荘厳な行事のすべての詳細は、後に聖シノドの命により10月12日のために編纂された典礼に盛り込まれた。そこでは、「神に選ばれた王は、柔和で敬虔なダビデに喩えられ、かつてシオンにおいてそうであったように、古き最も尊き聖櫃を自らの家へと喜びをもって運び入れている。　あちらにはマナを運ぶ箱があり、こちらには胎内にキリストを宿した御姿がある。あちらには旧約の石板があり、こちらには新約を定めて、世界に救いと偉大なる慈悲を告げ知らせる御手がある。あちらには杖があり、こちらには全宇宙の守護者であるキリストの十字架がある」[7096]。

パウロの心からの喜びは、聖所への贈り物として、金で造られ、ダイヤモンドやその他の宝石で飾られた豪華な聖櫃をもたらし、また聖母マリアのイコンには、同様に貴重な新しい衣を捧げた。

10月12日は、聖シノドによってロシアの暦における祝日の一つに指定された。

しかし、ガッチナがマルタの聖遺物の安置地であった期間は長くは続かなかった。皇室は秋にサンクトペテルブルクへ出発する際、それらを携えていったため、翌1800年には、その移送を記念する祝祭はすでに冬宮殿の教会で行われるようになった。　50年以上にわたり、ロシアへの移送を記念して定められたこの祝祭そのものも、10月12日ではなく1月7日に、この地で執り行われていた。ニコライ・パヴロヴィチ皇帝は、忘れ去られていたガッチナに再び注目した。　ガッチナの創設者である父を偲び、彼は同地に使徒パウロに捧げる大聖堂を建設した。この聖堂の奉献式[7097]に際し、マルタ島の聖遺物は再び冬宮殿からガッチナへと運ばれた。　その年の秋、皇帝が同地を訪れた。集まった信徒たちは、教会を建立した皇帝への感謝とともに、かつて初めてガッチナに持ち込まれたマルタの聖遺物が、新しく建てられたこの教会に恒久的に安置されるよう願いを添えた。

この願いに応えて、皇帝は、王室の所有物を私設の教会の所有とすることはできないが、サンクトペテルブルクから毎年一時的にそれらを運び込むことには同意すると述べた。こうして、10月12日の祝祭が復活し、現在では宮廷教会とパヴロフスキー大聖堂の両方で執り行われている。　聖遺物は祝日の前日にサンクトペテルブルクから運ばれてくる。　この日の聖遺物への礼拝は、宮廷教会での徹夜祈祷の中で行われる。翌日、宮廷教会での早朝のミサの後、聖遺物は大聖堂へ移され、カザンの聖母イコンの祝日が訪れるまでの10日間、そこに安置される。その後、市内での十字架行列を経て、再びサンクトペテルブルクへ運ばれる。

10月12日は、ガッチナ市民にとっての主要かつ普遍的な祝日であるだけでなく、首都や周辺の村々・都市、さらにはロシアの他の州からもガッチナを訪れる多くの巡礼者にとって、マルタの聖遺物を崇拝する日でもある。　この日、ロシア全土が神に栄光を捧げる。「神はこれまで数多くの聖遺物によってこの地を栄光に輝かせてこられ、今もなおその栄光を称えることを絶やさない。それは、さまざまな国でこれまで隠されていた貴重な宝物を、神が御心によりこの地に授けてくださったからである」[7098]。

10月26日

10月13日（旧暦）

[7096] 詩篇唱壇でのスティヒラ。
[7097] 教会の奉献は1852年に行われた。
[7098] 祝日のスティヒラ。

聖殉教者カルプ、パピラ、アガフォドール、アガフォニカの記念日

10月13日の記念日

キリストのために苦難を受けた人々を思い起こすことは、極めて有益である。なぜなら、彼らの苦難を思い起こすことそのものが、私たちの魂の中に神への愛を呼び起こし、徳への私たちの志に、いわば翼を与えるからである。　――そうして、将来の報いを期して、殉教者たちが肉体をもって耐え抜いたまさにその苦しみを、心の中で体験することができるのです。この世で殉教の偉業を成し遂げた殉教者たちの群れには、カルプとパピラ――教会の偉大な支柱であり礎である――が含まれています[7099]。

二人はともに、栄光あるペルガモンという都市[7100]で敬虔な両親の間に生まれ、その徳高い生涯によって、彼らを産んだ両親の徳を明らかにした。なぜなら、聖なる枝は聖なる根から生じ、良き実が良き木を示し、清らかな流れが源に栄光をもたらすからである。　二人は食事や飲み物において、必要最低限のものだけに満足し、多様性や贅沢につながるものはすべて拒んだ。そして、必要なものさえもごく少量しか摂取しなかったため、天使と肉体を除いては区別がつかないほどであり、その偉大な節制ゆえに、まるで肉体を持たないかのように見えた。　そのような生活を通じて徳の完成に達したとき、彼らは教会の統治を委ねられるにふさわしいと認められた。カルプは司教に任命され、フィアティラの住民たちに神の言葉を説いた[7101]。一方、カルプから助祭の位を授けられたパピラは、その地位にふさわしい熱意をもって、同様の務めに励んだ。

聖カルポスとパピラの誉れは周辺のすべての国々に広まった――そもそも美徳は通常、隠れることはできず、常に明らかになるものだからである。そのため、これら聖なる人々のもとには大勢の人々が集まり、熱心に彼らの教えに耳を傾け、キリスト教に改宗していった。　あらゆる善を憎む悪魔（ヨハネ8:44参照）は、これを見て黙ってはいられなかった。自らの悪意に熱心な手先を見つけると、彼らに聖人たちを不敬虔な王デキウスに告発するよう唆した[7102]。こうして、カルパとパピルについては、彼らが神々を崇拝しないばかりか、むしろ神々を呪い、キリスト教の教えに従っているという告発がなされた。　デキウス王はこれを聞いて激しく怒り、自身の顧問であるヴァレリウスをアジアへ派遣した。彼は熱心な異教徒であり、残忍な人物であった。王は彼に聖人たちについて知って

[7099] 「教会の柱と礎」という聖殉教者たちの称号には、彼らがキリストの教会の確立に多大に貢献した――すなわち、その高潔な生涯の模範と、彼らを通して信徒たちに与えられる神の恵みによって――という考えが表されている。　聖書においては、教会の礎石および基礎として、私たちの救いの成し遂げ主である主イエス・キリストが挙げられている（詩編117:22；イザヤ28:16；マタイ21:42；Iペテロ2:4；　コリントの信徒への手紙一　3:11など）とされている。キリストの殉教者たちは、預言者や使徒たちと同様に、あくまで比喩的な意味で――すなわち、自らキリストに立脚している者として――教会の基礎と呼ぶことができる。これは、いわばキリストの教会の建物における最初の石の列であり、その偉大で永遠の基礎であるキリストの上に据えられている。　この建物における次の列の石は、私たち、キリストを信じる者たちである。使徒はキリストについて次のように記している。「*使徒と預言者たちという土台の上に築かれ、イエス・キリストご自身を礎石として*」（エフェソ2:20）。

[7100] ペルガモスは、偉大なるミシア（小アジア北西部）にある都市であり、ペルガモス王国の首都でした。古代、この都市は富と豪華さ、そして広大な図書館で知られていたほか、ペルガメント（現在の筆記用紙に代わるもの）の製造法の発明、あるいはより正確にはその改良でも有名でした。　その後、この都市はローマ帝国に併合された。『ヨハネの黙示録』（黙示録2:12）にも言及されている。　『使徒の規定』（7, 46）には、使徒ヨハネによって按手されたペルガムの初代司教ガイについて言及されている。このガイこそ、使徒ヨハネが『第三ヨハネの手紙』（3ヨハネ1:1）を書いた相手である。

[7101] フィアティラは、ペルガムの南東、ミシアとの国境にあるリディアの都市である。当初はシリア王国の領土であったが、後にローマの支配下に入った。キリスト教は、使徒たちの時代からすでにこの地で広まり始めていた。フィアティラについては、使徒行伝16:14、黙示録1:11、2:18、24にも言及されている。

[7102] デキウスは西暦249年から251年まで在位した。

いることをすべて伝え、彼らに対する完全な権限を与えた。　ヴァレリウスは命令を受けると、急いで旅立ち、聖人たちが住む場所に到着すると、自分の神々に犠牲を捧げようとした。彼は直ちに、フィアティラ国の全域に向けて、すべての住民が直ちに犠牲の場に集まり、神々を崇拝するよう命じた。　このように、この不信心な者は、自ら の異教の神々を熱心に崇拝していただけでなく、他の人々をも同じように導こうとしたのである。皆が犠牲の場に集まったとき、その中に二人のキリスト教徒、カルパとパピラの姿はなかった。彼らは別の場所で、真の神に真の犠牲、すなわち祈りを捧げていたからである。　集まった者の中に彼らの姿が見当たらなかったため、拷問官は彼らを探すよう命じた。やがて二人が見つかり、彼の元へ連れて来られると、彼は高慢な口調でこう尋ねた。

「なぜ、他の者たちと共に神々への生贄を捧げるために現れなかったのか？」そして、こう付け加えた。「私の目の前で、速やかにその過ちを正しなさい。そうすれば、あなたたちを誹謗した者たちの憎しみが彼ら自身の頭上に降りかかり、それによってあなたたちの栄光は以前よりもさらに増すことになるだろう。」

聖人たちは、恐れもせず、人間の栄光も求めず、勇敢にこう答えた。

「裁判官よ、我らは神を怒らせたり、神の恵みに恩を忘れたりしてはなりません！　なぜなら、家畜でさえも我らの恩知らずを非難するでしょう――彼らでさえも主人のことを知っているのですから。もし我らが真の主を見捨てて偽りの神々を崇拝すれば、我らは創造主を知らない者となってしまうでしょう。」

彼らがそう語ったとき、神は次のしるしをもって彼らの言葉を裏付けられた。突然、激しい地震が起こり、すべての偶像が倒れ、塵と化したのである。　しかし、ヴァレリウスの悪意は強く、頑なであった。神の言い表せない力に驚嘆し、偽りの神々の極度の無力さを嘲笑するどころか、彼はかえってさらに狂気じみて、理性を失った。　あの男たちの気高さと柔和さに恥じ入った彼は、その場で彼らに最も過酷な拷問を加えることを控え、彼らの首に鉄の鎖をかけ、裸のまま街中を引き回すよう命じた。　こうして、高い栄誉にふさわしい勇敢な信者たちは、不名誉な姿で街中を引き回され、数えきれないほどの称賛に値する者たちは、嘲笑され、侮辱にさらされた。　一方、裁判官は、このような不名誉な処罰を受けたことで、彼らが信仰の確固たる決意を翻すだろうと考え、お世辞を並べて彼らを味方につけようと企み、こう語り始めた。

「もし私があなた方を分別ある者だと思わなければ、決して善き助言を差し出すことはなく、あなた方の意志に反して拷問によって我々の信仰へと従わせようとしただろう。しかし、あなた方の分別と高潔さは、偉大な人々にふさわしい、事柄を正しく判断する能力を示している。それゆえ、私はあなた方の良き助言者となることを決意したのだ。　古来より、不滅の神々に栄光と名誉が捧げられてきたことは、皆様もご存知のことでしょう。そして、それは今日に至るまで、ギリシャ語やラテン語を解する我々[7103] だけでなく、異民族の間でも変わらず続いています。なぜなら、神々へのこのような熱意によって、都市は良き法律によって統治され、敵に対する勝利が勝ち取られ、平和が確固たるものとなるからです。　では、なぜローマの皇帝や諸侯たちは、都市や民族を打ち倒し、すべての敵を自らの支配下に置くほどの栄光を勝ち取ったのか？――それは、彼らが神々を尊び、崇拝していたからではないだろうか？――それならば、あなた方も神々を尊びなさい。　もし、無知な者たちの言葉によって、理不尽で、つい最近現れたばかりのキリスト教の信仰に惑わされたのであれば、今こそ正気に戻り、より良いものへと立ち返りなさい。そうすれば、神々もあなた方を憐れみ、あなた方は我々が持つ多くの恩恵を享受することができるだろう。また、王からも大きな恩恵が待っている。　しかし、もしあなたがたが以前の頑なさを貫くならば、これらの恵みも失うことになり、私たちもあなたがたに対して極めて残酷な扱いをとらざるを得なくなるだろう。

[7103] すなわち、教養のある人々。ギリシャ人やローマ人は、生まれながらにして自分たちの一員ではなく、彼らの言語を知らない他の人々を、粗野で無教養な人々だと見なし、「野蛮人」と呼んでいた。

聖徒たちはこれを聞くと、天を仰ぎ、十字の印を切り、ヴァレリウスにこう答えた。

「あなたは、あたかも我々が何らかの無知な者であるかのように、直ちに我々をあなたの邪悪な道へと引き戻そうとしているが、我々があなたの前に立つのは、臆病者でも愚か者でもないことを知れ。　我々は、あなたの信仰が古くからあるという理由だけで、それを尊ぶつもりはない。なぜなら、古いものすべてが必ずしも正しいとは限らないからだ。悪意も古くからあるが、その古さゆえに尊敬に値するわけではない。議論すべきは、あなたの信仰が古いかどうかではなく、それを受け入れるべきかどうかである。　我々は、それを敬う者たちに恐ろしい地獄の炎を用意するものとして、そこから距離を置き、可能な限り我々の社会から排除することを決意した。　もし真理を知りたいのなら、よく考えてみよ。そうすれば、あなた方の神々は、他ならぬ人間の手による造り物に過ぎないことがわかるだろう。彼らは口もきけず、耳も聞こえず、他者だけでなく、自分自身にさえ何の益ももたらすことができないのだ。　真の神は、その本質において表現し難く、私たちの理性には理解し難く、時間においても測り知れない。なぜなら、神には存在の始まりがないからである。神は、目に見えるもの、そして私たちの理性で把握できるすべてのものを存在へと招き出した。　神は人間を創造し、楽園に導き入れ、　、人間が創造主に従うことを習慣づけるよう戒めを与えられた。悪魔の嫉妬により、人間は不従順に陥り、死に定められた。　しかし、悪魔は人間のこのような堕落だけでは満足せず、人間の子孫をも神から遠ざけようと急いだ。それは、人々が肉体的にだけでなく、霊的にも死ぬようにするためであった。こうして、人々は神を見捨て、真理の光から目を背け、偶像崇拝の闇に陥った。　それゆえ、慈悲深く、あまねく慈しみ深い創造主は、人間を悪魔の支配から救い出すために、父の懐にとどまりつつ地上に降りて来られ、罪を除いては私たちと同じようなお方となられました。そして、十字架に釘付けにされ、私たちの罪による堕落から救うために、死なれたのです。御自身の死によって私たちの敵である悪魔に勝利を収め、御自身は天に昇られ、私たちもそこに招いてくださり、御自身のもとへ登る道を私たちにとって容易なものにしてくださいました。

――裁判官よ、あなたは自分の神々について、このようなことを何か言えるだろうか。そして、彼らを「神々」と呼ぶことを恥じないのか。

――あなたがたがこれほどまでに重んじる富や王からの栄誉など、我々は顧みない。なぜなら、我々は神からの報いを待ち望んでいるからだ。その神のために、我々は苦しみ、死ぬことを固く決意しているのだ。

この言葉を聞いて、ヴァレリウスは激しく怒りを露わにした。彼は偽善的な穏やかさを捨て去り、もはや残虐さを隠そうともせず、まず聖徒たちの財産を中傷者たちに略奪させ、聖徒たち自身を馬に縛り付けて、サルディスへ連行するよう命じた[7104]。そして、聖人たちが馬に縛り付けられたまま、一日でフィアティラからサルディスに到達できるよう、休む間もなく猛スピードで馬を駆り立てた[7105]。その道程は、勇敢な殉教者たちにとって過酷なものであった。彼らは馬と同じ速さで走ることもできず、無理やり引きずられ、地面に打ち付けられながら、多くの苦しみを耐え忍んだ。聖なる殉教者たちの奴隷である至福のアガフォドールも、主たちに同情し、哀悼の念を抱きながら、彼らの後を追った。　サルディスに到着すると、彼らは過酷な旅の後に休息をとることなく、その夜の大部分を祈りと神への賛美に費やした。そして、彼らが少し眠りにつくと、神の天使たちが幻の中で彼らを慰め、苦難に耐えるよう励ました。　眠りから覚めると、彼らは互いに見た幻について語り合い、大いに喜び、悲しみの中での慰めと、苦難における助けの約束に神に感謝し、キリストのために苦難を受けることを熱烈に願った。

[7104] サルディス、あるいはサルディは、リディア（小アジア西部）にある都市で、ペルガモンとフィアティラの南に位置し、リディア王国の首都であり、その富で知られていた。　使徒たちの時代、ここには多くのキリスト教徒がいた。サルディスの教会については、『ヨハネの黙示録』1:11、3:1–4に言及されている。

[7105] 両都市間の距離は約33マイルであった。

ヴァレリウスは、旅の途中で苦難に耐えてきた信者たちを、その苦しみゆえに無神論へと誘い込みやすくなるだろうと期待して、サルディスに到着した。しかし、この不義の者は、聖徒たちが幻視の中で示された神の恵みによって、その信仰をさらに強固なものにしていたことを知らなかった。しかし、ヴァレリウスは、彼らの顔色が以前より明るく、精神がたくましく、心には恐れがないのを見て、拷問によって彼らを打ち負かすという希望を失い、再び狡猾な手段に訴えた。キリストに堅く立つ聖徒たちの信仰を、甘い言葉や様々なお世辞で惑わし、陥れようとしたのである。　それはまるで、狐が獅子と戦っているかのようであった。なぜなら、彼の誘惑は何の成果ももたらさず、至高者の助けによって強められていた彼らを打ち負かすことはできなかったからである。ヴァレリウスは、何も達成できないと悟ると、彼らに対して別の手段を講じることを企てた。堅固で選ばれた者たちであるカルパとパピルを監禁し、　一方、殉教者たちの僕であり、自身も完全な殉教者であり、彼らへの愛ゆえに彼らの友となり、その苦難を共に味わった栄え高きアガフォドール――このアガフォドールを地面に引きずり下ろし、牛の腱で容赦なく打ち据えるよう命じた。　そして、裁判官と殉教者は互いに競い合った。裁判官は、数多くの傷を負わせることで殉教者を打ち負かそうとしたが、殉教者はその傷をこれほどまでに喜びをもって受け入れたため、まるで、打つ者たちが疲れ果てて、拷問を早く終わらせてしまわないかと心配しているかのようであった。　これほど残酷で長時間にわたる殴打の間、殉教者の体からは、まるで泉から湧き出るかのように血が流れ出し、肉が剥がれ落ち、内臓が露わになり、手足の関節から四肢が脱落していった。まことに、この勇敢な男は甚大な苦痛に耐えなければならなかった。　しかし、彼はその苦痛を、まるで痛みを全く感じていないかのような不屈の精神で耐え抜いた。沈黙のうちに重傷に耐え、キリストのために苦しんでいるという想いが、残酷な苦しみの中での彼にとって十分な慰めとなっていた。　ヴァレリウスが疲れ果てると、拷問者たちも疲れ果てたが、アガフォドールにとっては、苦しみは喜びを増すばかりであった。キリストは天から彼の偉業を見守り、報いを用意しておられ、御自分のしもべの勇敢な忍耐をご覧になると、彼を御許に召し、これほどの苦労の後に安らぎを見出させてくださった。　彼は直ちに主の御手に息を引き取り、その死体を拷問者たちに委ねた。ヴァレリウスの命令により、その死体は埋葬されることなく放置され、獣や鳥の餌とされた；　しかし、夜が更けると、信者たちの一部が聖殉教者の遺体を運び出し、密かに埋葬した。

その後、ヴァレリウスは聖殉教者カルパとパピルを呼び寄せ、こう言った。

「あなたがたの愚かなしもべは、不死の神々に犠牲を捧げることを拒んだため、その行いにふさわしい死を迎えた。それなのに、賢明であるあなたがたは、なぜ自分たちにとって有益な道を選ばず、命と喜びよりも苦痛に満ちた死を狂おしくも選んだ、まことに不幸な人間のような者になろうとするのか？」

これを聞いて、聖人たちはヴァレリウスを非難し、彼を狂人と呼んだ。そして、死を迎えた聖アガフォドールの勇気を称え、自分たちもキリストのために同じような死を望むと語った。

すると、拷問官は怒りに燃え上がり、再びカルパとパピルを馬に縛り付け、サルデスからペルガムへと、自分の前を急いで走らせるよう命じた。　そして再び、聖人たちは道中で追われ、引きずられ、大きな苦しみと苦難に耐え、その一人ひとりがダビデと共にこう語った。「あなたの御言葉によって、私は迫害者の道から身を守りました」（詩編16:4）。夜になると、傷による苦痛に加え、きつい足枷と、牢獄での過酷な監禁が彼らを襲った。　聖人たちは、過酷な道のりの後、一晩中目を覚まし続け、神に祈りを捧げ続けた。そして主は再び彼らを顧みてくださった。主の御使いが現れ、傷を癒やし、彼らの心を神聖な喜びで満たし、さらなる偉業に向けて彼らを力づけてくださったのである。　朝になると、拷問官は、昨日の道のりのせいで聖人たちが全く歩けないだろうと考え、彼らの苦しみをこの目で見るために、彼らを自分のところへ連れてくるよう命じた。そして、彼らが健康でたくましく、足に傷一つなく、顔は明るく活気に満ちているのを見て、これを彼らの魔術の力によるものと決めつけ、それゆえに彼らの苦しみをさらに増した。　聖人たちの体に重い鉄の足枷をはめ、

彼は彼らをさらに遠い道へと追いやった。道中、ある場所で偶像に生贄を捧げ、裁きの座に着いた。カルパを呼び寄せると、まるで本当に彼を気の毒に思っているかのように、親しげに語りかけた。

「ほら、神々は、お前の老いを憐れんで、このような道のりを苦労なく歩めるよう助けてくれたのだ。　それなのに、なぜあなたは恩人たちに恩を忘れ、彼らの名誉を冒涜するようなことをするのですか？私の善意の助言に耳を傾けて、私と共に神々の元へ行きましょう。私はあなたの老いを敬い、あなたを憐れみ、あなたの不幸を嘆いているのです――他人のこととしてではなく、まさに自分のこととして。しかし、どうすればよいのでしょう？　あなたは、私を深く傷つけたことを知っている。私はもはやこれ以上耐えられない。もし今、私の善意ある助言に従わないなら、たとえ自分の名誉のためでなくとも、神々のために、あなたの不従順を容認することはできない。

聖カルプはこれに対し、次のように答えた。

「あなたの助言は、光から闇へ、そして生から死へと導くものであり、誰もそれを『善き助言』とは呼べず、むしろ『惑わし』や『罠』と呼ぶだろう。もしあなたが私の老齢を敬うのなら、なぜ私が父のようにあなたに助言を与えるのに、私を信じないのか？　なぜなら、私はあなたの破滅を、あなたが私の苦しみについて感じるよりも深く嘆き、あなたの不幸――すなわち、あなたが虚しいものに希望を託し[7106]　、永遠の苦しみからあなたを救うことのできないような神々を崇めていること――を深く悲しんでいるからだ。　それらは魂を持たず、人の手によって造られたものであり、実のところ神とは呼べない、虚しい、何の役にも立たない偶像に過ぎないからだ。

ヴァレリウスは、もはや自らの神々への冒涜に耐えられなくなり、処刑人たちに聖カルパを捕らえさせ、縛り付けた上で、茨の鞭で残酷に打ち据えるよう命じた。聖人が打たれるにつれ、その全身は傷だらけとなり、打撃によって剥がれ落ちた肉片が地面に飛び散った。しかし、それだけでは拷問者には物足りなかった――彼は他の処刑人たちを呼び寄せた。　そのうちの何人かはカルパの肋骨をろうそくの火で焼いた。また、他の者たちは彼の傷口に塩を振りかけたため、聖人の血が地面を染めた。血管が破裂し、彼に極めて激しい苦痛をもたらした。しかし、殉教者は、苦しみが増すほど、神への愛と忍耐をますます強めていった。　縛られたまま、彼は苦しみの中でも微笑んだ。すると、公爵は彼に尋ねた。

「なぜ笑ったのだ、カルプよ？」

すると彼はこう答えた。

「私は、私のキリストから与えられる恵みを見、それゆえに喜びました。」というのも、聖人はそのとき、天が開かれ、御座に坐しておられる主と、その周囲に立つケルビムやセラフィムたちを見上げていたからである。

こうして主は苦しみの中にある御自分のしもべを慰められ、神の恵みがすべての苦しみを超越したため、聖人は自らの痛む傷や、勇敢に耐え忍んでいた激しい拷問のことを忘れてしまったのである。　彼は、拷問者たちが疲れ果てるまで拷問を受け続け、拷問の後、牢獄に閉じ込められても、御自身のために苦難を受けることを許してくださった神に感謝を捧げた。

その後、ヴァレリウスは聖パピロを裁判に呼び出し、まるで初めて彼を見たかのように尋ね始めた。

「お前はどの家系で、どこの出身か。また、どのような職業に就いているのか？」

「私のことはすでにご存じでしょう」と聖人は答えた。「私はペルガモの町で高貴な両親の間に生まれ、医術を心得ています。それは、地上で育つ薬草に依存するものではなく、神から授けられたものです。この医術は、肉体に益をもたらすだけでなく、心の病をも癒やすのです。」

すると、裁判官は言った。

[7106] すなわち、実際には神ではない、虚しい偽りの神々への信仰のことである。

「ガリン[7107] やヒポクラテス[7108] が記したことを学ばずして、熟達した医療などあり得ない。彼らには神々から医療の術が授けられたのだ。」

パピラはこう答えた。

「ガリン、ヒポクラテス、そして彼らの弟子たちは、私のキリストが、言い表せないほどの慈悲をもって、その人に御自身の癒やしを授けてくださる場合にのみ、病人を治すことができるのです。 そうでなければ、彼らの技は無駄になり、医療における経験も無益なものとなる。そして、あなたが神々と呼ぶ者たちは、自分たち自身を何一つ助けることさえできないのに、どうして他人の健康を気遣うことができようか! もし真実を知りたいのなら、実際に試してみなさい。ほら、あなたの隣に座っている人は片目が不自由だ。さあ、あなたの神々が彼に視力を与えてみせれば、私はその後、何も言わない。

「彼を癒やすことのできる者がいるだろうか? 」と、ヴァレリウスはそう言った。

「それだけでなく」と聖人は答えた。「あらゆる不治の病も、すべての病を癒やすキリストを呼び求める者が癒やすことができるのだ。」

「それなら、今すぐあなたの言うことをこの目で確かめさせてほしい」とヴァレリウスは言った。「もしあなたにその力があるのなら、私たちの目の前で彼を癒し、目が見えるようにしてくれ。」

「私はすぐにそれを行うつもりはない」とパピラは答えた。「あなたがその奇跡を自分の悪魔たちの仕業だと決めつけないようにするためだ。まずは、あなた方の医師たちが自分たちの神々のいずれかを呼び出させてから、それから私も私のキリストの力を示そう。」

そこでヴァレリウスは自分の祭司たちを呼び集め、盲目の顧問を癒やすよう神々を呼び出すよう命じた。彼らは虚しい自分たちの神々に呼びかけ、それぞれが自分の神を呼び求めた。ある者はアポロン、別の者はアスクレピオス、ある者はゼウス、またある者はヘルメスを。 それは笑止千万な光景であった。一日中、何の助けも与えられない者たちに祈り、耳の聞こえない者たちに呼びかけ、魂のない者たちに犠牲を捧げ、自分たちの魂が盲目であるにもかかわらず、たった一つの肉体の目を癒やすことさえできなかったのだ。

では、キリストのしもべは何をしたか。——彼は肉体の目と魂の目を天に向け、慈悲深い主を呼び求めた。そして、その手で盲人の目に触れ、その上に十字の印を刻むと、病人はたちまち目が見えるようになった。 これにより、彼は肉眼で視力を取り戻しただけでなく、魂の目も開かれた。なぜなら、神の光が彼の心に触れたからであり、彼はまるで眠りから覚めたかのように、虚しい神々の無力さを悟り、唯一の神、イエス・キリストの力を理解したからである。 「すべての人の道を照らすまことの光」（ヨハネ1:9）である唯一の神、イエス・キリストの力を悟り、彼を信じたのである。その人だけでなく、この奇跡を通じて、多くの他の人々も真理を知るに至った。なぜなら、この輝かしい奇跡に驚嘆し、信仰を抱かなかった者が誰一人としていなかったからである。そして、これを見て聞いた者は皆、こう言った。 「まことに、キリストの力は偉大であり、御方はまことの神である! 」しかし、すべての人がまことの神を賛美していたにもかかわらず、不義なヴァレリウスは御方を知ることを拒み、聖パピルスに対してさらに激しい怒りを燃やした。このような恩恵に対する感謝どころか、彼はパピルスを木に縛り付け、容赦なく打ちのめすよう命じた。

[7107] ガリン、別名ガレンは、著名な医学者である。 彼は西暦131年にペルガモンで生まれ、多くの学問を修め、各地を旅した。同時代のローマ皇帝たちの宮廷医師を務め、3世紀の初頭に亡くなった。彼は世界中の医師たちに多大な影響を与え、16世紀に至るまで、医師たちの間で揺るぎない権威を保ち続けた。

[7108] ヒポクラテスは、コサ島出身のもう一人の著名なギリシャ人医師であり、ガレノスよりはるかに以前（紀元前460年から356年）に生きた。彼にはいくつかの著作が残されており、ガレノスもそれらを学びの糧としていた。

この拷問の間、聖パピラは、自分が打たれていることではなく、さらに過酷な苦しみを受けられないことを嘆いていた。　それとは対照的に、ヴァレリウスは、殉教者の不屈の精神が苦痛に打ち勝っているのを見て、ますます苛立ちを募らせ、苦しみに苦しみを重ねた。彼はパピラの脇腹を火で焼かせ、石を投げつけるよう命じた。　しかし、殉教者は火さえも忍耐強く耐え忍び、石はまるでキリストのために苦しむ殉教者の体を敬うかのように、　別の場所に落ち、聖人に何の害も与えず、むしろ投げつけた者たち自身を打ちのめした。　やがてヴァレリウスは疲れ果て、聖人たちにこれ以上どのような拷問を加えればよいか分からなくなった。そこで、しばらく時間を置くことにした。聖人たちを一時的に解放しておけば、傷口が痛み出し、苦しみを増すことで、今後の試練に備えて彼らをさらに弱体化させられると考えたのである。　しかし、キリストを自らの医師とし、キリストのために進んで傷を受け入れた殉教者たちは、苦しみだけでなく、傷や潰瘍からも癒やされ、傷跡さえも全く見えなくなっていた。これは狂気の拷問者を大いに苛立たせた。　彼らの苦しみが和らぐほど、ヴァレリウスの心はますます苦しめられ、怒りが炎のように燃え上がった。

しばらくして、拷問官は再び裁きの座に腰を下ろし、残虐さを漂わせ、猛々しい眼差しを向けた。　一方、聖なる殉教者たちは、まるで祝宴に招かれたかのように、明るい眼差しと楽しげな表情で彼の前に現れた。不義の者は自らの激怒をもって彼らを威嚇しようとしたが、彼らの恐れを知らぬ心と大胆な口から、次のような言葉を耳にした。

「なぜ、拷問者よ、あなたは自らと家来たちを労わらせ、私たちを何度も連れてきては連れ戻し、苦しめながら、最終的な判決を下さないのですか？　あなたは、私たちをキリストと真理から遠ざけられると期待しているのですか？　しかし、私たちがあなたの不敬虔な命令に従うよりは、むしろ私たちが死んでいる姿を見る方が先でしょう。」

その後、拷問者の命令により、地面に陶器の破片や鉄の釘が撒かれた。裸の殉教者たちはその上にうつ伏せに置かれ、激しい打撃を受けながら引きずり回された。　しかし、こうした拷問の中でも、主は御自分のしもべたちを見捨てられなかった。主は御自身の助けをもって彼らのもとへ急ぎ、*「彼らの顔に息を吹きかけ、彼らの辱めを取り除かれた」*（ナホム書2:1）――すると、突然、それらの陶器の破片や鉄の釘は跡形もなく消え去り、聖徒たちは無傷のままであった。　この出来事は裁判官の怒りをさらに煽り、彼は彼らの脇腹を剃刀で切りつけるよう命じた。しかし、聖徒たちは神を賛美しつつ、これらすべてを勇敢に耐え抜いた。

その後、彼は凶暴な獣たちを集めて見せ物を行った。殉教者たちが連れて来られ、彼らに向かって雌熊が放たれた。誰もが、熊が即座に彼らを殺し、その肉体を引き裂くものと思っていたが、熊は血に飢えた様子を微塵も見せず、まるで聖人たちを敬うかのように、彼らの足元に横たわり、彼らを抱きしめた。　その後、ライオンが放たれたが、それは雌熊と同様に温順であっただけでなく、神の力がさらに驚くべき形で現れた。すなわち、ライオンは唸り声を上げながら人間の声で語り、迫害者たちとその残虐さへの執拗さを非難したのである。　しかし、彼らはこれをすべて魔術だと見なし、耳を塞いだ。そして裁判官は、聖なる殉教者たちを石灰で満たされた堀に投げ込むよう命じた。しかし、神に逆らって狂ったように奮闘したその努力は無駄であった。神は至る所で御自分のしもべたちを無傷で守っておられたからである。彼らはその石灰の中に三日間留まった後、健やかで無傷のまま出てきたのである。

ヴァレリウスは、聖人たちを打ち負かすことができないと確信すればするほど、彼らに対する怒りに燃え上がった。鋭い釘が打ち込まれた鉄のブーツを彼らに履かせ、その中を走らせたが、それでも彼は、打ち負かすことのできないキリストの戦士たちを打ち負かすことはできなかった。　その後、炉を激しく燃え上がらせ、聖人たちをその中に投げ込んだ。聖パピラの姉妹である至福のアガフォニカも、彼らと同じ功績に加わり、キリストのために死ぬことを望んで、聖人たちと共に炎の中へと入っていった。　しかし、火の炉は彼らを傷つけるどころか、キリストの力によって涼しい場所へと変わった。というのも、大雨が降り注ぎ、火を消し、炉を冷やしたからである。聖人たちが無傷で

炉から出てきたとき、彼らは再び牢獄に閉じ込められたが、そこでも教会にいるかのように神に賛美を歌い続けた。　拷問官は、これ以上何をすべきか分からず、自分に打ち勝たれたことを恥じ、殉教者たちに対して最終的な判決を下し、剣で彼らの首を刎ねるよう命じた。　聖人たちは、アガフォニカと共に処刑場へと連行される際、喜びに満ち、天に向かって目と手を上げ、自分たちのためだけでなく、自分たちを殺そうとする者たちのためにも祈り、こうして剣によって首を刎ねられることで、その偉業を全うした。　聖人たちの遺体は不名誉にも捨てられ、守られることもなかったが、信者たちは密かにそれらを回収し、尊い埋葬を執り行った。そして、私たちの主イエス・キリストを賛美し、御父と聖霊と共に、主イエス・キリストに永遠の栄光と礼拝を捧げた。アーメン[7109]。

コンダク、第2調：

主よ、あなたは尊い宝であり、癒やしの流れを注ぎ出す泉です。地上の者たちにあなたの聖遺物を授け、様々な情欲による病を取り除き、魂に絶え間なく恵みを与えてくださいます。それゆえ、あなたの神聖な殉教者たちへの愛に倣い、私たちはこの祝典を執り行います。

聖殉教者フロレンティウスの記念日

記念日：10月13日

聖殉教者フロレンティウスは、テッサロニキ出身であった。　キリスト教徒であり、真の敬虔さの熱心な擁護者であった彼は[7110]、偽りの異教の神々への信仰を非難し、糾弾し、それらへの礼拝を呪った。同時に、すべての人々にキリストの真の信仰を教え導き、キリスト教徒たちをその信仰に堅く立たせ、神の戒めを守るよう説得した。　このため、フロレンティウスはその国の統治者の前に引き出され裁きにかけられたが、尋問の際、主なる神イエス・キリストへの信仰を公然と告白し、異教の神々を木や石、金、銀、銅、鉄といった、魂も感覚もない偶像であると称した。　このことで彼はその国の統治者を激怒させ、拷問を受ける判決を下された。彼は残酷な殴打を受け、鋭利な道具で肉体を削ぎ落とされた後、足元に燃え盛る大きな火刑台に投げ込まれ、そこで喜びをもって祈りを捧げ、神に感謝しながら息を引き取った[7111]。

聖ニキータ・殉教者の記念日[7112]

記念日：10月13日

[7109] 使徒に等しい聖ヘレナ女王は、コンスタンティノープルに、主の聖墳墓に倣って、カルポスとパピラの名を冠した修道院を建立した。　1200年の巡礼者アントニオスは次のように述べている。「聖カルプスと聖パピラは、女子修道院の同一の墓に眠っている。そして、そこ（すなわちコンスタンティノープル）に、コンスタンティヌス帝が教会を建立した」。

[7110] 聖フロレンティウスは使徒の弟子であった

[7111] 3世紀初頭のことである。

[7112] 古代キリスト教会において、「殉教者」とは、キリスト教迫害の際、自らをキリスト教徒であると公然と宣言し、拷問に耐えながらも、迫害者たちによって命が助けられ、生き残った人々を指した。こうした人々はキリスト教社会において特別な尊敬を集め、堕落した者たちと教会で再び交わる権利が与えられていた。

聖ニキタは、パフラゴニア[7113] で敬虔な両親の間に生まれた。彼は、偶像破壊者テオフィロス皇帝の妻であるテオドラ皇后の遠縁にあたっていた。学業を終えた17歳の時、ニキタはコンスタンティノープルへやって来た。　当時、亡き皇帝レウス4世の妻イリナが、息子のコンスタンティノス[7114] が幼かったため、皇帝の座に就いていた。　宮廷に仕えることとなったニキータは、まもなく出世し、パトリキウスの位に叙され、宮殿全体の監督官に任命された。その後、シチリアの軍司令官に任命された。[7115] 高い地位に就いたニキータは、世俗の称号や富の虚しさと無常さを悟り、修道士となることを切望するようになった。しかし、皇帝ニキフォロスとその息子スタヴラキオス[7116] は、ニキータの国家への功績を高く評価していたため、彼を現在の職から解任して修道院へ送り出すことを望まなかった。 その後、彼らの後を継いでミハイル・ランガヴ[7117] が帝位に就くと、ニキタは彼に、職務を辞して修道士となる許可を懇願した[7118] 。しかし、首都を離れることは許されず、皇帝は彼に「黄金の門」にある、いわゆるクリソニキア[7119] に住居を与えるよう命じ、そこで 彼は常に滞在しなければならなかった。　この修道院で、聖ニキタは、偶像破壊派の皇帝レウ・アルメニアヌスの治世が始まるまで、身動きが取れない状態で過ごした[7120] 。しかし、聖ニキタは、この無法な皇帝によって聖なるイコンが冒涜されているのを目撃すると、コンスタンティノープルを離れ、郊外のある修道院の末席の修道士となり、そこで断食と労働に明け暮れた。　一方、聖像破壊派は、彼がローマから入手した救世主の聖像を所持していることを突き止め、そのことを皇帝に報告した。ニキータのもとには役人が派遣され、脅迫してその聖像を引き渡すよう強要した。　しかし、聖ニキータが断固としてその引き渡しを拒否したため、使者たちはある修道士を探し出し、その聖なるイコンの所在を聞き出した。そこで彼らは教会に入り、聖なるイコンを奪い取り、あらゆる手段でそれを冒涜した。この冒涜行為は、聖ニキータに深い悲しみをもたらした。　それだけでは満足せず、皇帝の使節たちは修道院を去る際、いかなる口実であっても彼がそこから出ることを禁じた。　その後、別の偶像排斥派の君主であるテオフィロス[7121] が王位に就くと、ある宮廷人テオドシウスが聖人に遣わされた。彼は集まった人々の前で、追放をちらつかせながら、聖人に偶像排斥派の総主教アントニウス[7122] を承認し、偶像崇拝を放棄するよう要求した。しかし、聖人はこれに対し次のように答えた。

「私は、キリストであり私の神である聖像への礼拝を決してやめない。そしてアントニオを総主教とは呼ばず、姦淫者であり犯罪者と呼ぶ……お前は好きにすればよい。」

この勇敢な信仰の業により、聖ニキータは直ちに修道院から追放された。神に感謝を捧げ、兄弟たちのうち三人を連れて、彼は別の修道院へと向かい、そこで大斎とペンテコステまでの期間を過

[7113] 聖ニキタは763年頃に生まれた。――パフラゴニア――小アジア北部の険しい山岳地帯で、ポントスおよびビフィニアと国境を接している。

[7114] レウ4世ハザールは775年から780年まで在位した。その妻イリナは、幼い息子コンスタンティノス6世ポルフィロゲネトスの治世中に国政を執り、その後797年から802年まで自ら統治した。

[7115] 当時、シチリア島はビザンツ帝国の支配下にあり、その支配は6世紀半ばから、827年に同島がアラブ人に征服されるまで続いた。

[7116] ビザンツ皇帝ニキフォロス1世は802年から811年まで在位した。その息子スタヴラキオスは、彼の後を継いでわずか2ヶ月と6日間しか在位しなかった。

[7117] ミカエル1世・ランガヴ皇帝は811年から813年まで在位した。

[7118] 聖ニキタの修道入りの時期は、813年頃とされている。当時、彼はすでに50歳になっていた。

[7119] コンスタンティノープルのアジア側、かつてコンスタンティノープルの郊外とも言える古代都市ビフィニアのクリソポリスの跡地であった。

[7120] すなわち、820年まで。

[7121] 829年。

[7122] 聖像破壊派のアンソニー1世は、821年から832年まで総主教を務めた。

ごしたが、その後、この修道院も去った。　多くの放浪と苦難を経て、彼はついに海辺のある修道院に定住し、そこで生後76年目にその生涯を閉じた[7123]。生前も死後も、彼は多くの奇跡を起こした。

聖殉教者ベニアミン・ディアコンの記念日

記念日：10月13日

聖ディアコノス・ベニアミンは、ペルシャ王イズディゲルドの治世に生きていた[7124]。多くの異教徒であったペルシャ人をキリスト教に改宗させたため、彼は誹謗中傷され、捕らえられ、残酷な拷問を受け、牢獄に投じられ、そこで2年間を過ごした。 あるギリシャ人がペルシャ宮廷へ使者として派遣され、ベニアミンに降りかかった運命を知ると、王に彼を釈放するよう懇願した。王は、ベニアミンがペルシャ人をキリスト教に改宗させないという約束をすれば、この願いを聞き入れることに同意した。　請願者はベニヤミンの代理としてその約束をした。しかし、ベニヤミンはその話を聞くと、こう言った。

「私が洗礼の浴槽で受けたその光を、裏切ることはできません。与えられた才能を隠した者、あるいは福音の教えを故意に隠す者は、なんと大きな苦しみを受けるに値することか！」

この言葉を聞き入れられなかった王は、二十本の針を研ぎ澄ませ、聖ベニアミンの手と足の爪の下に突き刺すよう命じた。　その後、聖人がこれらの苦しみをもやむを得ない喜びとして受け入れているのを見て、王は彼をさらに甚だしく耐え難い拷問にさらし、ついに太く節の多い杭で彼を貫くよう命じた。その後、この勇敢な修道士は神の御許に息を引き取った[7125]。

10月27日

10月14日（旧暦）

聖殉教者ナザリウス、ゲルヴァシウス、プロタシウス、ケルシウスの受難

記念日：10月14日

聖ナザリウスはローマで生まれた。父はユダヤ人であり、母はペルペトゥアという名のキリスト教徒で、使徒ペトロ自身から聖なる洗礼を受けていた。青年期を迎えたナザリウスは、父の信仰と母の信仰のどちらに従うべきか、長い間熟考した。　ついに彼は、聖なる母の模範に従うことを決意した。母の祈りは彼の啓発に大いに寄与していたのである。そして、リノ司教によって洗礼を受けた[7126]。

聖ナザリウスが成人すると、徳においても完璧な人物となった。主への献身的な奉仕に励み、彼は自身の救いだけでなく、他者の救いにも心を配り、多くの不信仰者をキリストへと導いた。　しかし、まもなくナザリウスはローマを去った。彼は両親から相続分として受け取った財産を持ち出し

[7123] 838年頃。

[7124] ペルシャ王イズディゲルド1世は399年から420年まで在位した。彼の治世下で、ベニアミンの助祭であり師であり司教であった聖アヴダが殉教した（418年）。彼の記念日は3月3日（16日）である。

[7125] 聖ベニアミン・ディアコンは、聖アヴダの殉教から3年後、すでにイズディゲルドの後継者であるその息子ヴァラハラン5世の治世下、421年に殉教した。

[7126] 聖リン司教は、聖使徒ペトロの直系の後継者としてローマ教会の初代司教であり、70人の使徒の一人であった。その記念日は、他の使徒たちと共に11月5日と1月1日に祝われる。

、そこで貧しい人々に施しを始めた。そしてメディオランに到着すると、持っていたすべてのものを配り、貧しい人々に施しを行い、キリストのために苦しむ囚人たちに自分の財産を捧げた。

当時、不義なネロの治世下[7127] において、キリスト教徒に対する大迫害が起こり、多くのキリストの証人たちが鎖につながれ、拷問を受けていた。聖ナザリウスは彼らに仕え、信仰を確固たるものにし、殉教の業に立ち向かう決意を強めた。 この頃、アヌリンという統治者によって、ある聖なる殉教者たち、ゲルヴァシウスとプロタシウスが捕らえられ、牢獄に閉じ込められました。 聖ナザリウスは頻繁に彼らの元を訪れ、敬虔な語りかけをもって彼らを慰めた。彼は彼らを深く愛していた。なぜなら、彼らが神の愛に満ち溢れ、十字架上で私たちのために御自身の命を捧げられた主のために、自らの命を捧げたいと熱烈に願っているのを見ていたからである。 ナザリウスは彼らに対してこれほど深い愛を抱いていたため、彼らと別れたくはなく、むしろ彼らと共に苦しみ、死ぬことを選んだ。その地方の統治者は、ナザリウスが牢獄に囚われた者たちを訪ね、必要なものをすべて届け、彼らをキリスト教の信仰に堅く立たせていることをすぐに知った。 そこで、彼はナザリウスを捕らえて自分の元へ連行するよう命じた。裁判の場で、彼はまず、彼が誰であり、どこから来たのかと尋ねた。ナザリウスが出身はローマ人であり、信仰はキリスト教徒であることを知ると、アヌリンは、ローマ人が古来より犠牲と礼拝をもって崇めてきた先祖の神々を捨ててはならないと彼を説得した。しかし、聖人はその助言に耳を貸そうとはしなかったばかりか、全く逆のことを語り、彼の偽りの神々を非難し、唯一の真の神であるイエス・キリストを告白した。そこで総督は、彼の口を打つよう命じた。 しかし、聖人は勇敢に語り続け、その不義を糾弾し続けた。それを見て、統治者はさらに激怒し、殉教者を棒で打つよう命じ、その後、不名誉な形で彼を街から追放した。 祝福されたナザリウスは、追放された後も、キリストのために傷を負うことを許されたことを喜び、義のために追放された者として、キリストの言葉を思い起こした。*「わたしのために、あなたがたがののしられ、迫害され、あらゆる不当な悪口を言われるとき、あなたがたは幸いである」*（マタイ5:11）。彼が悲しんだのは、愛する友人であるゲルヴァシウスとプロタシウスと引き離されたことだけであり、彼らと共に死ぬことを望んでいた。この願いは後に主によって叶えられたが、その当時、彼はまだ別の国で人々の救いに奉仕し、多くの人々を迷いから救い出すべきであった。 その翌夜、彼の聖母が幻の中に現れ、ガリアへ行き、そこでキリストの福音を宣べ伝える働きに励むよう命じました。彼は起き上がると、母の指示に従ってその国へ向かい、キリストを宣べ伝えることで、暗闇と死の陰に坐する人々を信仰の光で照らしました[7128] 。 聖ナザリウスがメリアと呼ばれる町[7129] に滞在していたとき、彼はそこで、ある高貴で信仰深い 女性から、ケルシアという名の三歳の少年を引き取り、彼に洗礼を授け、敬虔に育て上げた。 少年は歳を重ね、知恵も深まり、神の恵みに満たされていった。そして成人すると、師である聖ナザリウスに従い、彼から至高の知恵を学び、神に霊感を受けた言葉や父のような教えを心に刻み込んだ。 その少年はキリストについて極めて深い知恵を備え、師に匹敵するほどとなり、師と同様に人々の救いのために奉仕した。キリストを宣べ伝える中で、彼はナザリウスと共に迫害と拷問に耐え、やがて師と同じ殉教の冠を授かるに至った。

その国の統治者ディノヴィウスは、ナザリウスが多くの都市でキリスト教を広めていることを知ると、直ちに彼とケルシウスを捕らえ、殴打した後、二人を牢獄に閉じ込め、翌朝、あらゆる拷問にさらそうと企てた。 朝になると、統治者の妻は、美しい少年ケルシウスが処刑場へ連行されるのを見て、彼を不憫に思い、夫のもとに駆け寄って、その少年を赦し、師であるナザリウスと共に釈放

[7127] ネロ（西暦54～68年）は、ローマ皇帝の中でも最も残虐で、虚栄心が強く、放蕩な人物の一人である。彼はローマで最初のキリスト教迫害を開始し、その際に使徒ペトロとパウロが迫害を受けた。

[7128] すなわち、真の神を知らず、霊的に滅びつつあった人々である。この表現は『出エジプト記』9:2から借用されたものであり、『マタイによる福音書』4:16と比較されたい。

[7129] メリアまたはキメラ――現在のニースに近い、フランス南部のガリアの都市の一つ。

するよう懇願した。　彼女の執拗な懇願は、二人とも自由の身となるよう説得するまで、総督を離れることはなかった。彼らを解放する際、総督はこう言った。

「わが妻の嘆願により、お前たちはあらゆる苦しみから解放される。」

しかし、聖なる殉教者たちは、望んでいた殉教の冠を得られず、この世の戦いを終えて肉体から解き放たれ、キリストと共に生きることを果たせなかったことを嘆いた[7130] 。そこから道中、彼らはティミルの町[7131] に到着し、いつものようにそこで福音の教えを広め、キリストのために多くの魂を救った。

しかし、悪魔はそれを我慢できず、偶像崇拝者たちの怒りを煽った。聖ナザリウスとケルシウスに反旗を翻した不信心者たちは、二人を捕らえて、彼らの残忍な王ネロのもとへ送った。　聖人たちは王の前に立たされ、創造主であるキリスト・神を告白した。そのため、ナザリウスは地面に投げ倒され、足で踏みつけられ、ケルシウスは鞭で打たれた。神々への生贄を捧げるよう強要されたが、彼らはその言葉で偶像を地面に倒し、そのために野獣の餌食にされた。しかし、野獣たちは彼らに何の害も与えなかった。　その後、彼らは海に投げ込まれたが、まるで平らな野原を歩くかのように水の上を歩いた。これを見た王の家来たちはキリストを信じるようになり、聖ナザリウスから洗礼を受けた後、王宮を去り、世俗の騒動から離れてキリストに仕えるようになった。

一方、聖ナザリウスは弟子である聖ケルシウスと共に再びメディオランへ向かい、聖殉教者ゲルヴァシウスとプロタシウスがまだ生きてはいたものの、牢獄で苦しんでいるのを見つけた。

彼がメディオランで福音を宣教し始めたところ、再び総督アヌリンに捕らえられた。　アヌリンは、それまで彼がどこにいたのかと尋ねた。彼がネロ自身の手にあったことを知ると、総督は、ネロが非情で非人道的な王であり、有罪者だけでなく無実の人までも容赦なく殺害することを知っていたため、彼がどのようにしてネロの手から無傷で解放されたのかと驚嘆した。　統治者はナザリウスに、彼らの神々の前に進み出て拝むよう強要したが、彼はそれを拒んだばかりか、神々を冒涜し始めた。　そこでアヌリンは彼の口を打つよう命じ、聖人は弟子ケルシウスと共に激しい拷問を受けた後、聖ゲルヴァシウスと聖プロタシウスのいる牢獄に投じられた。ナザリウスは、愛する友人たちに再会し、彼らと同じ牢獄でキリストのために投獄されることを許されたことを、大いに喜んだ。

その頃、総督アヌリンはネロ皇帝にナザリウスについて書簡を送った。皇帝は、ナザリウスが生きていることを知ると、彼を海の深みに沈めるよう命じられていた家臣たちに対して激しく怒りを燃やした。皇帝は、彼らがナザリウスを逃がしたと思い込み、彼らを滅ぼそうと長い間探し回ったが、見つけることはできなかった。　というのも、彼らはすでにこの世から逃れ、自発的にキリストへの聖なる奉仕に身を捧げていたからである。皇帝はアヌリン総督に、直ちにナザリウスを処刑するよう書簡を送った。アヌリンは皇帝の書簡を受け取ると、聖ナザリウスとその弟子である聖ケルシウスを牢獄から連れ出し、剣で彼らの尊い首を斬り落とした。

町の郊外に住んでいたある信者は、密かに彼らの聖遺骨を手に取り、自分の家へと持ち帰った。その時、彼の家には寝台に横たわっていた麻痺の娘がいたが、聖殉教者たちの聖遺骨が家の中に運び込まれると、彼女はたちまち寝台から立ち上がり、まるで一度も病気になったことがなかったかのように健康を取り戻した。　家の主人は、家族と共にこれを大いに喜び、殉教者たちの遺体を自分の庭に丁重に埋葬した。

聖殉教者ナザリウスとケルシウスが斬首されて間もなく、モラヴィア人との戦いに赴く途中だった軍司令官アスタジウスが町にやって来た[7132] 。 偶像崇拝の祭司たちは、牢獄に残されていた聖殉教者ゲルヴァシウスとプロタシウスを殺害するよう彼に助言した。ゲルヴァシウスは錫の棒で殴打さ

[7130] この表現はフィリピの信徒への手紙1:23から引用されている。

[7131] ティミール――別名トリール。北ガリアにある、人口が多く繁栄した都市。

[7132] モラヴィア――現在はオーストリア＝ハンガリー帝国の領内に住むスラブ族。

れ、まもなく息を引き取った。一方、プロタシウスは剣による斬首によって殉教の業を全うした。キリスト教徒のフィリッポスは、息子と共に彼らの遺体を運び出し、自宅に埋葬した。

ナザリウスとケルシウス、ゲルヴァシウスとプロタシウスの四人の殉教者全員の聖遺体は、[7133] の下に地中に隠されたままであり、メディオランの司教聖アンブロシウスの時代になるまで、誰もそのことを知らなかった。　彼は、神の啓示により、テオドシウス大帝の治世中にゲルヴァシウスとプロタシウスの聖遺骨を発見し、ナザリウスとケルシウスの聖遺骨は、アルカディウスとゴノリウスの治世中に発見した[7134] 。

ナザリウスとケルシウスの聖遺骨の発見について、長老パヴリンは聖アンブロシウスの伝記の中で次のように回想している。

「聖殉教者ナザリウスの聖遺骨は、城外の庭園で発見されると、アンブロシウスは直ちにそれを聖使徒たちの教会へ運び込んだ。我々は、殉教者の聖遺骨が安置されていた棺の中で、まるで今まさに流れ出たかのような血を見た。　髪と髭の生えた頭部は、まるで今まさに棺に納められたかのように保存されており、顔はまるで今洗われたばかりのように明るく輝いていた。これこそがまさに奇跡である――主ご自身が以前、福音書の中で*「あなたがたの頭の毛一本も失われることはない」*（ルカ21:18）と約束されていたのだから（[7135] ）。そのとき、私たちはあらゆる香りを凌ぐ芳香を感じた。殉教者の聖遺骨を掘り起こし、戦車に載せると、私たちは聖アンブロシウスと共に、直ちに殉教者ケルシウスの聖遺骨を探し始めた。　その庭の所有者たちから、先祖から「この場所には偉大な宝が隠されている」という理由で、決してこの場所を離れてはならないと遺言されていたことを知りました。そして確かにそこには、*「虫も錆もそれを食い荒らすことはなく、盗人が掘り起こして盗むこともない」*[7136] （マタイ6:19）ような宝がありました。

パヴリン長老は、ナザリウスとケルシウスの聖遺物についてこのように述べている。一方、ゲルヴァシウスとプロタシウスの聖遺物については、聖アンブロシウスによる次のような記録が残されている。

「キリストの僕アンブロシウスは、イタリア全土にいる兄弟たちに、主における永遠の救いを祈る。

聖書は、主から何かを「[7137] 」として受け取りながら、それを他者に与えない者を「負債者」と呼んでいる。なぜなら、他者のために役立つものを隠しておくことは、いわば教会から何かを盗むことに等しいからである。　それゆえ、ダビデはこう言いました。「あなたの義を私の心に隠さず、あなたの真実と救いを宣べ伝え、大いなる集いの前であなたの慈しみと真実を隠さなかった」。　そして、この行いに対する報いを願うかのように、こう付け加えた。*「主よ、あなたの恵みを私から取り去らないでください」*（詩篇39:11–12）。彼はまるでこう言っているかのようだ。「私が他の人々に恵みを見出す機会を与えたように、あなたも私からあなたの恵みを取り去らないでください」。

しかし、なぜこのような序文を述べる必要があるのでしょうか。主について敬虔に思索し、信仰を持つ皆様に告げ、聖遺物の発見を喜び合うよう呼びかけたいと思います。

去る聖なる四旬節の間、神の憐れみにより、私も断食し祈る者たちの一人として、ある夜、祈りを捧げて立っていた。

[7133] すなわち――隠された場所、秘められた場所で。

[7134] アルカディウスは、テオドシウス大帝の息子であり後継者で、帝国の東半分を統治した（395～408年）。ゴノリウスもまた、テオドシウス大帝の息子であり後継者で、帝国の西半分を統治した（395～422年）。

[7135] ルカ21:18。この言葉において、イエス・キリストは使徒たち、そしてキリスト教の信仰を告白するすべての人々に、神による彼らへの特別な御摂理についての約束を与えられた。

[7136] これらの言葉は、キリスト教徒が徳ある生活を通じて自ら備えるべき、永遠で朽ちることのない天の恵み（マタイ6:19）について、イエス・キリストが語ったものである。

[7137] トゥーネ――無償で、無料で、特別な功績なしに（マタイ10:8参照）。

すると、私はある状態に陥り、眠ってはいないものの、何も感じなくなってしまった。そして、白い衣をまとった二人の若者が、両手を天に掲げて祈っているのを見た。しかし、うとうとと眠気に襲われていたため、彼らと話すことはできなかった。私が正気に戻ったとき、彼らは見えなくなっていた。

そこで私は、慈悲深い主に向かって、もしこれが悪魔の惑わしであるならば、それを私から取り除いてくださるよう、また、もしそこに何らかの真理が隠されているのであれば、それをより明確に示してくださるよう祈りました。

主から願ったものを得るために、私は断食をさらに厳しくし、二夜目、鶏が鳴く頃、初めて見たのと同じ光景――私と共に祈るあの若者たちの姿――を再び目にした。

三夜目、断食で衰弱した私の肉体はもはや眠りにつくことができず、若者たちは再び私の前に現れた。その時、私は眠っておらず、ただこの一連の出来事にただただ驚嘆していた。　彼らと共に、聖使徒パウロに似た――イコンに描かれているような――三番目の威厳ある男性もいた。彼だけが私と語りかけ、他の二人は黙っていた。

彼はこう語った。

「彼らは、私の言葉に従い、この世や富を軽んじ、地上のものや肉欲を求めず、私たちの主イエス・キリストに従った者たちである。ここミラノで十年間、神に仕えて過ごした後、彼らはキリストの殉教者となる栄誉に浴した。　彼らの遺体は、あなたが今立って祈っているその場所の地中の墓に横たわっている。それらを地中から掘り出し、彼らの名に因んで聖堂を建てなさい。

私は彼らの名前を尋ねると、彼はこう答えた。

「彼らの頭元のそばに、彼らの生と死について記された書物があるだろう。」

兄弟たちや司教たちを召集し、見たことを伝えた後、私はまず自ら掘り始め、司教たちは私を手伝ってくれた。そして私たちは、聖パウロが語った通り、まるで今まさに埋葬されたばかりのように、素晴らしい香りを放つ聖人たちの遺体が見える棺を見つけた。

彼らの頭元には一冊の本があり、そこには次のように順を追って記されていた。「私、キリストの僕フィリッポは、これらの聖人の遺体を我が家に運び、埋葬した。　彼らの母はヴァレリア、父はヴィタリウスであった。二人はこの息子たちを双子として産み、一人をプロタシウス、もう一人をゲルヴァシウスと名付けた。ヴィタリウスは戦士であり、メディオランに住み、妻と共に密かに神に仕えていた。 彼が判事パヴリンと共にラヴェンナ市に滞在していた際[7138]、そこで彼がキリスト教徒であることが発覚した。拷問にさらされても、彼はキリストを否定しなかった。彼は深い堀に投げ込まれ、上から石を投げつけられ、生き埋めにされて息を引き取った。

妻は夫の死を知ると、未亡人としての慰めとして、自宅に遺体を埋葬しようと遺体を引き取りに行きました。

しかし、ラヴェンナの市民たち――彼らはキリスト教徒であった――は、彼女が夫の遺体を引き取るのを妨げた。彼らはそのような宝を喜び、聖人の遺体をそのまま残し、自分たちのための執り成し手となるようにしたのだ。

望みを叶えられなかったヴァレリアは、メディオランへ戻る途中、ある村で、邪悪な神シルヴァヌス[7139]に犠牲を捧げる不敬虔な者たちの忌まわしい祭りに出くわした。 偶像崇拝者たちは、いつもの習慣通り、旅人たちに偶像への生贄の肉を振る舞う際、自分の道を歩いていたヴァレリアにもそ

[7138] アドリア海に面した港湾都市で、アペニン半島の北東岸に位置していた。アウグストゥス皇帝によって堅固に要塞化され、イタリアの要衝と見なされていた。　ゴノリウス帝以降の皇帝たちは、ここに居城を置いていた。ラヴェンナは現在も存続しており、同名のイタリア地方における主要な繁栄都市となっている。

[7139] シルヴァヌスは、ローマ人によって森の神――その名もこれに由来する――、野原の神、家畜の神として崇められていた。この神には三体の像が捧げられており、一つは家屋に、もう一つは野原の真ん中に、そして三つ目は領地内に置かれていた。そのため、ヴァレリアもまた、この神を称える祝祭の集まりを避けることはできなかったと考えられる。

の肉を味わうよう勧めた。しかし、彼女はそのような不浄なものを嫌悪し、悪魔的な生贄を口にすることを拒み、自分がキリスト教徒であることを告白した。　不信心者たちは激怒し、容赦なく棒で彼女を殴打したため、同行者たちによってかろうじて息のある状態でメディオランへと運ばれた。

自宅に戻ると、息子たちであるゲルヴァシウスとプロタシウスに真の信仰について教えを授け、三日目にその魂を神の御手に委ねた。　ゲルヴァシウスとプロタシウスは、殉教の冠を授かった両親を亡くして孤児となると、家と財産を売り払い、そのすべてを貧しい人々に分け与え、奴隷たちを解放した。そして自分たちは一つの小屋に閉じこもり、10年間にわたり、祈りと断食、そして聖書の読誦に熱心に打ち込んだ。　11年目、統治者アヌリンによって牢獄に閉じ込められた彼らは、キリストのために殉教した。軍司令官アスタジウスがメディオランからモラヴィアへの戦いに赴く際、偶像崇拝の祭司たちが先回りして道中で彼を迎え、こう言った。

「もし勝利を収めて王のもとへ帰りたいのなら、ゲルヴァシウスとプロタシウスに神々への生贄を捧げさせなさい。神々は、この二人が自分たちを軽んじていることに怒り、もはや私たちの問いかけに答えようとはしないのだから。」

これを聞いたアスタジウスは、聖人たちを牢獄から連れ出し、自分の前に立たせてこう言った。

「我らの神々を侮辱することなく、敬意を込めて彼らに犠牲を捧げるよう命じる。そうすれば、我らの旅路は平穏なものとなるだろう。」

ゲルヴァシウスは言った。

「敵に対する勝利は、全能の神ご自身に求めるべきであり、見ず、聞かず、語らず、息もしていないような偶像たちに求めるべきではない。」

そこでアスタジウスは、ゲルヴァシウスが死ぬまで錫の棒で打ち続けるよう命じ、聖ゲルヴァシウスはこの拷問の末に息を引き取った。

その遺体を運び出すよう命じた後、アスタジウスはプロタシウスにこう言った。

「哀れな者よ！　自分の命を惜しめ。兄のように狂った真似をするな。」

プロタシウスはこう答えた。

「どちらが不幸なのかは分からない。お前を恐れない私か、それとも私を恐れるお前か。」

アスタジウスは言った。

「何だと！　私がお前を恐れるだと、この哀れな男よ？」

聖人は言った。

「お前は、私が偶像に犠牲を捧げずに、お前を侮辱するのではないかと恐れているのだ。もし恐れていなければ、私に犠牲を強要することもなかっただろう。しかし私はお前を恐れてはおらず、お前の脅しなど軽蔑している。お前の偶像など無に等しいと見なし、天に君臨する唯一の神のみに礼拝を捧げるのだ。」

すると、アスタジウスは彼を棒で打つよう命じ、聖なる殉教者はそこで長い間打ち続けられた。彼が地面から引き上げられると、アスタジウスは言った。「哀れな者よ！　なぜそれほど高慢で、屈服しないのか？　まさか、お前の兄弟と同じように死のうというのか？」

プロタシウスはこう答えた。

「アスタジウスよ、私はあなたを恨んではいない。あなたの目が盲目であるのを見ているからだ。あなたの不信仰が、神の御業を見ることを妨げているのだ。　わが主は、ご自身を十字架につけた者たちをののしることはなく、むしろ彼らのために祈り、『彼らは自分たちが何をしているのかさえ知らない』と仰せになった。お前もまた、自分が何をしているのか分かっていない。だからこそ、私はお前を憐れむのだ。しかし、始めたことは最後までやり遂げよ。そうすれば、私は今、愛する兄弟と共に、私の救い主を仰ぎ見ることができるだろう。

すると、アスタジウスは彼を剣で斬り殺すよう命じた。それが起こったとき、私、キリストの僕フィリッポは、息子と共に、夜陰に乗じて密かに彼らの遺体を我が家へ運び、そのことを知っていたのは神のみであった。そして、この大理石の棺に彼らを葬った。　私は、彼らの祈りによって、私もまた、父と聖霊と共に永遠に生き、支配しておられる私たちの主イエス・キリストから恵みを受けると信じています。

これらの聖遺骨が地中から掘り出されると、病人は癒やされ、人々から悪霊が追い出され、盲人は目が見えるようになった。　同じ聖アンブロシウスは、彼らの町にセヴィルという名の、誰もが知る盲人がいたと記している。彼が聖人の遺骨にかかっていた衣の端に触れた途端、即座に目が見えるようになったという[7140]。

主よ、御自身の聖人たちの祈りによって、私たちの心の目を照らし、私たちが御顔の光の中を歩み、御名に永遠に喜びを得ることができますように[7141]。アーメン。

コンダク、第2調:

輝かしい灯として現れた神聖なる殉教者たちよ、奇跡の光をもってこの世を照らし、病を癒やし、深い闇を常に追い払い、唯一の神キリストに絶えず私たちすべてのために祈り続けておられます。

聖パラスケヴァの生涯。

記念日：10月14日

聖パラスケヴァ[7142]は、セルビアのカリオクラティア市の近くにあるエピヴァト村[7143]で生まれました。彼女の両親は敬虔な人々であり、神の戒めをすべて堅実に守り、その慈善活動や施しによって至る所で称賛されていました。　娘のパラスケヴァのほかに、彼らには息子も一人いました。息子は学校へ通わせられましたが、娘は敬虔な両親の家で育てられました。　パラスケヴァの兄は、聖書について十分に学んだ後、両親の同意を得て、エウフィミオスという名で修道誓願を立てた。エウフィミオスは後にマディテの司教となり[7144]、そこで徳高い生活で名声を博し、生前も死後も数多くの輝かしい奇跡を起こした。

両親の死後、パラスケヴァは悲しみと苦難に満ちた生活を送るようになった。聖人たちの生活に熱心に倣い、彼女は断食と徹夜祈祷によって肉体を鍛え、それを霊に服従させた。　主のために生きるという神聖な願いに燃え上がったパラスケヴァは、この騒がしい世で長く生きることを望まず、すべての世俗的なものを捨てて世から身を隠し、ヨルダン川沿いの荒野[7145]にたどり着くと、そこで

[7140] 聖殉教者たちの遺骨の発見は、395年または396年6月のことだった。

[7141] 詩篇88:16を参照。

[7142] パラスケヴァの俗名はペトカであった。ペトカ・パラスケヴァには、幼い頃から主のために生きたいという燃えるような願いが芽生えていた。　パラスケヴァが教会で耳にした福音書の言葉、*「わたしに従いたい者は、自分を捨てなさい」*（マルコ8:34）は、矢のように彼女の心を貫き、彼女は教会を出る際、出会った貧しい人に自分の豪華な服を渡し、その人のぼろ服と交換した。　しばらくして、パラスケヴァは再び自分の服を物乞いの女性に与え、その後も何度も同じことを繰り返した。そのことで非難されたが、彼女は「そうでなければ生きられない」と答えた。

[7143] エピヴァト（ピヴァト、トルコ語でバヤドス）――セリムヴリヤとコンスタンティノープルの間にある、海辺の小さな町。

[7144] マディト――フラキアのヘルソネソスにある港。

[7145] 聖山（アトス山）のニコディモスが収集した情報によると、パラスケヴァは、パレスチナのヨルダン砂漠へ隠遁する前に、ツァルグラード（コンスタンティノープル）を訪れ、その聖地を巡礼した。そこで彼女は、熱心な修道者たちの教

天使に等しい生活を送るようになった。　神に似た預言者エリヤや洗礼者ヨハネに倣い、彼女は荒野の穀物だけを糧とし、それもごく少量のみを、しかも日没後にのみ口にした。　暑さや寒さによって次第に衰弱していく中、彼女は、謙虚な心を持ち*「旋風や嵐」から*救うことのできる唯一の神（詩篇54:9）にのみ、その視線を向けていた。誰が、この聖女がどれほどの涙を流したかを語り得ようか。誰が、彼女の頻繁で絶えることのない嘆きを語ろうか。誰が、彼女の絶え間ないひざまずきと、さまざまな肉体の苦行について詳しく伝えようか。　ただ一人、全知全能の神だけが、聖女の行いを注視しておられた。彼女には、この世の虚栄を気にかけることはなかった。彼女が心を砕いたのは、ただ魂の清め、来世の審判への答え、そして天の花婿との再会だけであった。　「わが花婿よ、あなたを慕う」――聖女パラスケヴァはそう語り、『雅歌』の一節を常に心に留めていた。*「私の魂が愛する方よ、私に告げてください」*（雅歌1:6）。彼女が最も心を砕いていたのは、いかにして自分の灯火を飾り立て、賢い乙女たちと共に天の花婿を迎えに行き、その甘美な御声を聞き、その美しさを仰ぎ見て喜びを味わうかということでした。*「いつの日か、神の御前に現れる時が来ますように！」*（詩編41:3）――聖女は絶えずそう口にしていました。

このように尊者パラスケヴァが荒野に滞在していたとき、悪しき敵は彼女の美徳を妬み、幻や幻影を用いて彼女を脅かそうとした。幾度となく様々な獣に変身し、聖女に襲いかかり、彼女の修行の道に障害を設けようとしたのである。　しかし、キリストの良き花嫁であるパラスケヴァは、*「あなたは至高者をあなたの避難所として選んだ」*（詩編90:9）と繰り返し、主の助け――すなわち聖なる十字架のしるし――によって、敵を追い払い、まるで蜘蛛の巣を断ち切るかのように悪魔のあらゆる策略を打ち砕き、彼を完全に打ち負かした。　聖女は、女性としての性質を持ちながらも、まさに男性のような知性を備え、ダビデがゴリアテを打ち負かしたように、悪魔に打ち勝った。このような功績と美徳で自らの魂を飾り立てたパラスケヴァは、キリストの愛する花嫁となり、彼女の上に次の預言の言葉が成就した。*「王はあなたの美しさを慕う」*　（詩編44:12）という預言の言葉が彼女に成就した。こうして、この王は父と聖霊と共に彼女の中に宿り、御自身の聖なる教会の中に留まるのと同じように、彼女の中に留まられた。なぜなら、聖パラスケヴァは、自らの魂を罪と穢れから守り抜き、生ける神の教会となったからである。

ある夜、パラスケヴァは、すでに長い間荒野に滞在した後、いつものように、感極まって天に向かって両手を差し伸べ、祈りを捧げて立っていた。すると突然、彼女は、まばゆいばかりの若者の姿をした神の御使いを見出した。その御使いは彼女に近づき、こう言った。

「荒野を離れ、故郷へ戻りなさい。なぜなら、そこにおいてこそ、あなたは地上で肉体を離れ、魂をもって主のもとへ赴くべきだからである。」

聖女は、その幻視の意味を深く悟り、そこに神の御命令が表れていることを理解した。彼女は、肉体を離れる時が近づいていることを喜びつつも、荒野の孤独と別れることを惜しんだ。なぜなら、荒野と静寂ほど、魂を清め、それを原型に近づけるものはないからである。　しかし、天の御心に従い、聖女は荒野を後にし、故郷へと向かった。

帝都コンスタンティノープルに到着すると、　そこで彼女は神の知恵の美しい聖堂に入り、またヴラヘルナ教会にも立ち寄り、奇跡を起こす聖母マリアのイコンに礼拝を捧げた後、故郷のエピヴァトへと向かった。そこで彼女は、断食と祈りという、いつもの荒野での修行を怠ることなく、しばらくの間暮らした。　そして、神のもとへ旅立つ時が来ると、パラスケヴァは自分自身と全世界のために熱心に祈りを捧げ、その祈りの最中に、その至福に満ちた魂を神に委ねた。　彼女の遺体は、キ

えに耳を傾けた。 彼らの助言に従い、彼女はイラクリオス郊外にある人里離れた聖母被昇天教会に身を寄せ、そこで5年間、祈りと断食、そして涙に満ちた日々を過ごした。その後、長年の願いを叶えるべくパレスチナへと向かい、救い主の生涯によって聖別された聖地を参拝した後、ヨルダン川沿いの荒野に定住した。

リスト教の慣習に従って信者たちによって埋葬されたが、一般の墓地には葬られなかった。それは、自分がどこから来たのか、誰にも明かさなかった旅人の遺体として[7146]。

神は、御自身の御心に適う者を称えようと望まれ、長い年月が経過した後、次のような状況下で彼女の聖遺骨を現された。

その聖女が埋葬された場所の近くで、ある柱上修行者が、沈黙の修行に励んでいた。ある時、航海中に重い病に倒れ、亡くなったある船乗りの遺体が、波に打たれてその場所に打ち上げられた。この死体からは耐え難い悪臭が漂い始め、その道を通ることさえ不可能になった。その悪臭は、その場所の近くで修行していた柱上修行者でさえ耐えられず、彼は柱から降りざるを得なくなった。そこで彼は、深い穴を掘らせて、悪臭を放つ死体をそこに埋めるよう命じた。　作業員たちが穴を掘っていると、神の御摂理により、彼らは地中に横たわる朽ちていない遺体を発見し、これに大いに驚いた。しかし、作業員たちは経験も知識も乏しい人々であったため、この出来事を取るに足らない些細な出来事として、全く気にも留めなかった。彼らは互いにこう語り合った。

「もしこの遺体が聖なるものであったなら、神は何かしらの奇跡によってそれを明らかにされただろう。」

そう考えながら、彼らは再び朽ちない遺体を土で埋め戻し、そこに悪臭を放つ死体も投げ込み、その後、家路についた。　夜が更けると、その中の一人、敬虔な人物であるゲオルギーという男が、自宅で神に祈りを捧げていた。明け方近くに眠りにつくと、彼は夢の中で、まばゆいばかりの玉座に座るある女王を見、その周囲には大勢の輝く戦士たちが立っていた。　恐怖に襲われ、この王の威厳と栄光を見つめることさえできないゲオルギーは、地面に倒れ込んだ。すると、輝く戦士の一人がゲオルギーの手を取り、彼を立ち上がらせると、こう言った。

「ゲオルギイよ！　なぜあなたは聖女パラスケヴァの遺体をこれほど軽んじ、悪臭を放つ死体と共に埋葬したのか。直ちに聖女の遺体を掘り起こし、ふさわしい場所に安置せよ。神は地上で御自分のしもべを栄光に輝かせようと望んでおられるからだ。」

また、あの光り輝く女王も彼にこう言った。

「急いで私の遺骨を取り出し、ふさわしい場所に安置しなさい。私はもう、あの死体の悪臭に耐えられないのです。私は人間であり、私の故郷はエピヴァト、今あなたがたもそこに住んでいるのですから。」

その同じ夜、エウフミアという名の敬虔な女性にも、同様の幻が見られた。　朝になると、二人は自分たちが目撃したことを皆に語った。これを聞いた敬虔な民衆は、灯した蝋燭を手に、聖女パラスケヴァの聖遺物のもとへ向かい、畏敬の念をもってそれを地中から取り出し、あたかも貴重な宝物を得たかのように喜びに沸いた。　聖遺骨は、エピヴァトの村にある聖ペトロと聖パウロの教会に厳かに安置された。そこでは、聖パラスケヴァの祈りにより、その聖遺骨から多くの病人が癒やされた。盲人は目が見えるようになり、足の不自由な者は歩き始め、あらゆる病者や悪霊に取りつかれた者たちが健康を取り戻したのである。

1238年、コンスタンティノープルが十字軍（カトリック教徒）の支配下にあった頃、敬虔なるイオアン・アセン[7147] ――ブルガリアおよびセルビアの王――は、聖パラスケヴァの聖遺骨 が安置されている場所についての知らせを受けた。　そこで彼は、当時ペレヤスラフ・ブルガリアの都主教であった至福のマルコに、多くの司教や司祭を率いて、その尊い聖遺骨をブルガリアの地の首都である

[7146] これは11世紀前半のことだった。

[7147] ヨハン・アサン、あるいはアセン2世は、アセン1世（在位：1221年～1241年）の息子であり、ブルガリア王国の君主の中で最も著名な人物である。彼は、それ以前のどの王よりもブルガリア王国を栄えさせ、啓蒙した。　多くの修道院を建立し、それらを金や宝石で飾り立てた。すべての教会に数多くの寄進を行い、聖職者たちには多大な栄誉を与えた。ヨハン・アセンは、自国のブルガリア人だけでなく、ギリシャ人からも愛されていた。

テルノフ[7148]へ移送するよう命じた。 そこで聖遺骨は宮廷教会に敬意を込めて安置され、朽ちることなく眠りながら、信仰をもって訪れるすべての人々に様々な癒やしをもたらした。

かなりの時が経過した後、神の御許しにより、イスラム教徒たちは徐々にギリシャ帝国全体を征服し、それに伴いブルガリア王国とセルビア王国も制圧した。 この征服は14世紀、トルコのスルタン・バヤゼットの時代に行われた[7149]。スルタン・バヤゼットがブルガリアの都市テルノフを陥落させた際、教会の宝物や王室の装飾品はすべて略奪された。 そこで、聖パラスケヴァの聖遺骨は、ぼろ布一枚に包まれてワラキアへ移された[7150]。1396年にトルコ軍がワラキアを征服すると、セルビアの女王ミリツァがスルタンに懇願した結果、聖遺骨はセルビアのベオグラードへ移された[7151]。

1521年、スルタン・スレイマン2世[7152] はベオグラードを攻略し、そこから聖パラスケヴァの尊い遺骨も奪い取った。その後、コンスタンティノープルへ持ち帰り、自身の宮殿に安置した。 しかし、この貴重な宝物はここでも失われることはなかった。聖女の聖遺物から数多くの奇跡が起こったため、キリスト教徒だけでなく、イスラム教徒の間でも彼女の誉れが高まったからである。 イスラム教徒たちは、この事態に動揺し、聖パラスケヴァの聖遺物の奇跡的な力への信仰が、とりわけキリスト教徒たちの熱心さと献身によって、さらに広まってしまうことを恐れたため、これらの聖遺物をコンスタンティノープルのキリスト教徒たちに引き渡した。そしてキリスト教徒たちは、それらを尊厳をもって総主教座教会に安置した。

1641年、敬虔なヴァシリー・ルプル[7153] ——モルドヴァの総督兼領主——は、コンスタンティノープルの総主教座教会に聖パラスケヴァの聖遺物が安置されているという知らせを受けると、それらをそこから敬意を込めて自身の栄光ある領地へと移送することを切に願った。 その願いを後押ししたのは、自らの聖人たちを称える主であり、モルダヴィアにおいても聖パラスケヴァを称えたいと願っておられたのである。 そこで、コンスタンティノープル総主教パルフェニオス[7154]は、聖なる公会議全体の合意と、他の最も尊い総主教たちの承認を得て、敬虔な君主であるヴァシリー総督のもとへ、その第一の都ヤッシー[7155]に、聖パラスケヴァの尊い遺骨を送り届けた。 ここで、三聖人の教会において、盛大な礼典とともに、モルダヴィア全土の住民たちの大きな歓喜と喜びの中、聖遺骨は1641年、キリストの降誕後10月14日に安置された[7156]。

トロパリオ、第4声：

荒野での静寂な生活を愛し、あなたの花婿であるキリストの足跡を熱心に追い求め、若き日にその善き軛を負い、十字の印をもって心の敵に対して勇敢に武装し、 断食の行い、断食と祈り、そ

[7148] テルノフ——ブルガリアの主要都市で、ドナウ川に注ぐエトレ川（またはヤントレ川）沿いに位置する——は、現在ティルノヴォと呼ばれている。

[7149] トルコのスルタン、バヤゼト1世は1389年に即位した。ビザンツ皇帝ヨハネスとその息子アンドロニコスとの間の不和に乗じ、バヤゼトはビザンツ帝国を完全に自国の支配下に置いた。彼はブルガリア、マケドニア、テッサリア、その他多くの領土を征服した。 1402年、バヤゼットはモンゴルの征服者タメルランに捕らえられ、1403年にその地で死去した。

[7150] ワラキア——現在のルーマニア王国の南西部にあたる地域。

[7151] ベオグラードは、セルビア王国の首都であり、ドナウ川とサヴァ川が合流する地点に位置する。

[7152] スレイマン2世の治世は、オスマン帝国の全盛期を象徴するものである。トルコ人は彼を、自国の君主の中で最も偉大な人物として崇めている。

[7153] ヴァシリー・ルプル——1634年から1654年までモルダヴィアのホスダール（すなわち君主）を務めた。

[7154] パルフェニー1世 – 1639年から1644年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[7155] ヤッシー——ドナウ川沿いの諸公国の一つであるモルダヴィアの主要都市。現在、ワラキアとともにルーマニア王国を構成している。

[7156] 現在も、聖遺骨はそこに安置されている。

して涙の滴によって、情欲の炎を消し去った、称えられしパラスケヴォよ。今や天の修道院にて、賢き乙女たちと共にキリストの御前に立ち、あなたの尊い記念を崇める我らのために祈り給え。

コンダク、第6調:

あらゆる苦難における聖なる守護者、至聖なるパラスケヴァを敬虔に讃えましょう。彼女は朽ちるべき生涯を捨て、朽ちることなき永遠の喜びを得たからです。このゆえに、神の御心により、奇跡の恵みとして栄光を得たのです。

聖ニコラ・スヴィャトシの生涯

記念日10月14日

「この世の様相は過ぎ去り……支配権は民から民へと移り変わる……主は支配者たちの玉座を打ち倒し、その代わりに柔和な者たちを座につかせられる」（Iコリント7:31； シラ書 10:8, 17）。敬虔な公爵ニコラ[7157] は、ごく幼い頃から、この地上における儚く過ぎ去る支配の無常さを悟っていた。彼は、天にのみ、朽ちることなく永遠に存続し、主が御自身を愛する者たちのために備えてくださった、言葉に尽くせない永遠の恵みに満ちた王国が存在することをはっきりと見ていた。 それゆえ、彼は――かつてインドの王子ヨアサフがそうであったように――永遠の天の御国のために、この世の一時的な公国における栄光や富、名誉や権力を捨て、ペチェルスク修道院に入り、聖なる修道者の衣をまといました[7158]。 修道生活において、至福のニコライは、その聖なる生き様によってこれほどまでに輝きを放ったため、彼の善行を目にする者たちは皆、彼のために熱心に主を賛美した。そして何よりも、彼は従順において際立っていた。 当初、聖ニコライは修道院の兄弟たちのために厨房で働いていた。そこで彼は自らの手で薪を切り、岸辺から肩に担いで謙虚に運び、食事の支度に必要なその他のあらゆる作業も、怠ることなくこなしていた。彼がすでに多くの労苦を積み重ねていた頃、その功績を兄弟のイジャスラフとウラジーミルが知り、二人は彼をそのような仕事から引き離そうとした。 しかし、この真の従順な修道士は、涙ながらに彼らに懇願し、修道院の兄弟たちのために、あと一年だけ厨房で働かせてほしいと頼んだ。 こうして彼は、全力を尽くし、熱心に、丸3年間にわたり兄弟たちに仕えた。その後、彼は試練を経た有能な人物として、修道院の門番に任命され、この務めにおいても、教会以外には決して足を踏み入れず、同じく3年間その職に就いた。 そこから、彼は兄弟たちの食事の世話を任されることとなり、この務めを熱心かつ真摯に果たしたため、修道院の兄弟全員から好意を寄せられた。

このようにしてすべての服従の段階を模範的に経た後、彼はイグメーンと修道者全員の許可を得て、静寂の中で自らの救いを求めて、沈黙の修行に身を捧げた。この服従を果たすにあたり、彼は自らの手でケリアのそばに庭を造り、修道生活を送る間、彼が何もしないでいる姿を見た者は誰もいなかった。 常に何らかの仕事を手にしており、口からは絶え間なくこのイエスの祈りが絶えなかった。「主イエス・キリスト、神の御子よ、私を憐れんでください！」彼は、修道院の食堂での共同の食事以外には決して何も口にせず、それもごく少量であった。 もし、公爵としての立場ゆえに、本

[7157] スヴィャトスラフ・スヴィャトシャ（その敬虔さからそう呼ばれた）は、洗礼の際にパンクラティウスと名付けられ、修道名としてニコライを授かった。彼はチェルニヒウ公ダヴィド・スヴィャトスラヴィチの息子であり、神によって創設された聖なるペチェールスカヤ教会を建立したキエフおよびチェルニヒウ公スヴィャトスラフ・ヤロスラヴィチの孫であった。

[7158] それは1107年のことだった。

人の意思に反して親しい人々から何かを受け取らざるを得ない場合、彼はそれを直ちに旅人、乞食、そして教会の建設のために分配した。その結果、彼の資金によって教会には多くの書物が購入された。

この至福の公は、まだ自身の公国を治めていた頃、ペトロという名の非常に腕の良い医師を側近に置いていた。彼はシリア出身で、公と共に修道院へも同行した。この医師は、主人の自発的な貧しさを目の当たりにして彼のもとを離れ、キエフに住み着き、そこで多くの人々を治療した。　とはいえ、彼は度々この聖なる公爵を訪ね、彼が大きな苦難と計り知れない断食に身を置き、修道院の厨房や門の警備に従事している姿を見て、その生き方をやめるよう次のように諭した。

「公爵よ、あなたはご自身の健康に気を配るべきです。過度な労苦と節制によって、肉体を完全に衰えさせてはなりません。もしあなたが衰弱してしまえば、キリストのために自ら背負おうとしたその重荷は、あなたにとって耐え難いものになってしまうでしょう。神は、力以上の断食や苦行を求めておられるのではなく、ただ清く謙虚な心を求めておられるのです。　あなたは、まるで買い取られた奴隷のように修道士たちのために働いている。あなたはそのような苦難に慣れていないばかりか、公爵であるあなたにとって、それはふさわしくないことである。　あなたの高貴な兄弟であるウラジーミルとイジャスラフにとって、あなたの貧しさは悲しみであり、大きな屈辱である。なぜなら、あれほど偉大な栄光と名誉から、あなたはこのような苦難に至り、肉体を苛み、食糧不足のために病に倒れているからだ。　かつては美味しい果実を口にしていたあなたが、今では生野菜や乾いたパンを口にするという過酷な苦難に身をさらしている。しかし、決して病に倒れないよう気をつけなさい。さもなければ、もはや力尽きて命を落とし、私はあなたを助けることができないだろう。そうなれば、あなたは兄弟たちに慰めようのない悲しみを招くことになる。　かつてあなたに仕え、あなたのおかげでかつては高貴な身分であったボヤールたちでさえ、今や希望を失い、あなたを憐れみ、深い落胆に沈んでいる。しかし、彼らは自分たちのために大きな屋敷を建て、今そこで暮らしているのに、あなたは頭を休める場所もなく、ゴミの山や厨房、あるいは門のそばに座っているだけだ。　ロシアの公爵たちのうち、誰がこのような振る舞いをしたというのか？　あなたの父ダヴィドや、永遠に記憶されるあなたの祖父スヴィャトスラフでさえ、そうではなかったのではないか？　そして、ボヤールたちの中でも、かつてここで修道院長を務めたヴァルラアムを除けば、誰もこのような不名誉な生活を望む者などいないだろう。

それゆえ、もし私の助言に従わなければ、あなたは早死にするだろう。

聖ニコラの兄弟たちに教えを受けた医師ペトルは、調理場や門のそばで彼と共に座っている際、しばしばこのような言葉を彼に語りかけた。

至福の者は、いつもこう答えていた。

「ペトル兄弟よ！　自分の魂の救いについてよく考えるうちに、私は、肉体が霊と争ったり、私の魂の中で戦いを引き起こしたりしないよう、肉体を容赦してはならないと決心した。禁欲という修行に疲れさせられることで、肉体は謙虚になるが、衰えることはない。たとえ衰えたとしても、使徒はこう言っているではないか：　*『私の力は、弱さの中でこそ全うされる』*（IIコリント12:9）。また、*『今この世で受ける一時的な苦しみは、私たちの中に現される栄光に比べれば、何でもない』*（ローマ8:12）とも。神は謙遜で清い心を望んでおられますが、断食と修行なしにはそれはあり得ません。なぜなら、断食は貞潔と清さの母だからです。またこうも言われています。*「主は彼らを労苦によって謙遜にされた」*（詩篇106:12）。私は、神が私を世俗の心配事から解放し、御自身のしもべたち――すなわち、この至福の修道士たち――のしもべとしてくださったことを感謝する。なぜなら、私は公爵でありながら、彼らのために働いているという名目で、実は王の王のために働いているからである。一方、私の兄弟たちは、自分自身を顧みるべきである。*「各人は自分の重荷を負う」*　（ガラテヤ6:5）。私が天の御国における相続分を得るために、この世の公爵位と共に残した私の遺産は、彼らにとっては十分である。*「私はキリストを得るために、すべてのものを捨て、すべてを屑と見*

なしている」（フィリピ3:8）。 それなのに、なぜあなたは私に死を脅かし、私の貧しさや、余分な食事を控えていることを責めるのですか？ あなたも、身体の病気を治療するとき、患者に節制を命じ、ある種の食べ物を完全に避けるよう指示するではありませんか？ 私にとっても、同じ方法で心の病を癒やす必要があるのだ。たとえ肉体が死んだとしても、私にとってキリストのための*「死」は「得るもの」*なのだから（フィリピ1:21）。もし私がゴミの山に腰を下ろしているとしても、なぜあなたは私をボヤールたちより劣った者と見なすのですか？ 私には、東方のすべての子らの中で最も著名であったと言われるヨブと共に君臨すべきだからです（ヨブ記1:3）。

もしこれまでに、ロシアの公爵たちのうち誰一人として私より先にこれを行わなかったとしても、私は天の王に従い、その先駆けとなる。もしかすると、この時から誰かが私の模範に従って、私を真似るようになるかもしれない。最後に、あなたを指導している者たちと共に、自分自身をもっと大切にするよう勧める！

次のようなことも何度も起こった。この至福の公が、従順の行いに疲れ果てて病に倒れると、医師ペトルはそれを知ると、直ちにその病気に必要な薬を調合した。しかし、公はいつも、医師が薬を持って到着する前に、神の助けによって健康を取り戻し、決して治療を受けることを許さなかった。

ある時、その医師自身も病気になってしまった。聖人は彼に次のように伝言を送った。

「もし薬を飲まなければ、すぐに回復するだろう。しかし、私の言うことを聞かなければ、長く苦しむことになるだろう。」

しかし、医師は従わず、薬を飲み、病から治りたいと願ったが、危うく命を落とすところだった。とはいえ、その後、聖人の祈りによって癒やされた。その同じ医師がまもなく再び病気になったとき、至福の者は彼に同じことを伝えるよう命じた。

「もし治療を受けなければ、三日目に回復するだろう。」

最初の不従順の報いを受けた医師は、今度は福者ニコラの言うことを聞き入れ、その言葉通り、三日目に回復した。その頃、福者ニコラは修道院の門番としての務めを終えようとしていた。彼は回復した医師を呼び寄せ、こう言った。

「ペトルよ！ お前は修道者の姿となり、私の代わりに、この修道院で主とその聖母マリアのために奉仕すべきだ。なぜなら、私は三ヶ月後にはこの世を去ることになるからだ。」

医師のペトルはこれを聞くと、彼の足元にひれ伏し、涙を流しながら叫んだ。

「ああ、哀れな私よ、我が主よ、私の恩人よ、私のかけがえのない命よ！私がここに来たとき、誰が私を受け入れてくれるというのですか？ 誰が孤児や貧しい者たちに食事を与え、誰が虐げられた者たちを擁護し、誰が助けを求める多くの人々に慈悲を示すのでしょうか？公爵よ、私はあなたに、あなたがまもなく兄弟たちに慰めようのない悲しみを招くことになる、と告げませんでしたか？公爵よ、自分の命を大切にしなさい、と告げませんでしたか。あなたは多くの人々にとって有益であり、あなたの命こそが多くの人の命そのものだからです。 神の力とあなたの祈りによって、私を癒やしてくれたのはあなたではありませんか？ 善良な羊飼いよ、一体どこへ行くのですか？ もしあなた自身、私の癒やし手であるあなたが病に倒れたのなら、あなたの僕である私にその病について話してください。もし私があなたを癒やせなくても、あなたの命と魂の代わりに、私の命と魂を捧げましょう。 私の主よ、黙って私から離れて行かないでください。その知らせはどこから来たのか、私に教えてください。もし人々からのものなら、私はあなたのために私の命を捧げます。もし主があなたにこれを告げられたのなら、私があなたの代わりに死ぬことができるよう、主に祈ってください。もしあなたが私を見捨ててしまうなら、私はどこに座って、この喪失を嘆けばよいのでしょうか。あなたがよく座っていたこのゴミの山でしょうか——しかし、ここへさえ私は入れないでしょう。そして、あなた自身が裸同然であるのに、私はあなたの財産から何かを相続する機会さえあるのでしょうか。もしかすると、あなたが身に着けているこの継ぎはぎだらけのぼろ服のことでしょうか？ しか

し、この服さえも、あなたがこの世を去る時には、あなたと共に葬られるだろう。せめて、かつてエリヤがエリシャに恵みを与えたように、私にあなたの祈りを授けてほしい。その祈りによって、私の心の深みと命の水を分かち合い、[7159] 、あなたが今、去ろうとしている神の家という遠い安息の地へとたどり着けるように。　獣でさえ、日が沈むと、自分の巣穴へ帰って横たわるべきだと悟るのに、私はあなたが去った後、どこへ行けばよいのか分かりません。また、鳥についても、*「小鳥は自分の住まいを見つけ、ツバメは雛を置くための巣を見つける」*（詩篇83:4）とありますが、あなたは六年間も修道院に住みながら、自分の居場所を見つけられませんでした。一体、私をどこに残していくというのですか？」泣き崩れる医師を立ち上がらせ、聖人は彼にこう言いました。「ペトロよ！嘆いてはなりません。*『君主たちに頼るよりも、主を待ち望むほうがよい』*（詩篇117:9）のです。」　主は、ご自身が創造された被造物をいかに守られるかをご存知である。主は飢えた者を養い、貧しい者のために立ち上がり、苦難にある者を救い、あなたにとっても避難所となってくださる。　しかし、私の肉による兄弟たちは、私のことではなく、この世の嘆きに満ちた谷において、自分自身と自分の行いについて嘆き、将来、慰めと至福を得るようにすべきである。　私は、この世の一時的な生活のために治療を必要とはしない。なぜなら、私はとっくに、すべての暫定的なものに対して死んでいるからだ。*「死者は生き返らない」*（イザヤ26:14）（自然の法則に従えば）、とイザヤが言うように。

そう言うと、聖ニコライ・スヴィャトシャは医師と共に洞窟へと向かい、そこで自分の墓となる場所を整えた。その際、彼は医師にこう言った。

「私たちのうち、どちらがこの場所をより愛しているだろうか？」

ペトルは泣きながらこう答えました：

「あなたが望めば、主にお願いして、あなたがもう少し生きられるようにしてくださることを私は知っています。そして、私をここに葬ってください。」

聖人は彼にこう言った。

「主の御心にかなうならば、お前の望む通りにしよう。さあ、二人で共に主に祈ろう。ただし、修道者の装いをしてからにしよう。」

そこで、聖人の助言に従い、医師は修道服を身にまとい、三ヶ月の間、昼夜を問わず絶え間なく祈りを捧げ、涙を流して過ごした。

ある日、聖人ニコラは彼にこう言った。

「ペトロ兄弟よ、私と一緒に来てほしいか？」彼は以前と同様に、泣きながらこう答えた。

「私は、あなたが私のために死ぬことを許してくださることを願います。あなたはここに留まり、私のために祈ってください。」

聖人は彼に言った。

「兄弟よ、勇気を出し、覚悟を固めなさい。あなたの願い通り、三日目にこの世を去ることになるのだから。」

定められた時が来ると、ペトロは、聖なる命を与えるキリストの秘跡を拝領した後、病床に就き、その霊を主の御手に委ねた。　医師の死後、福者ニコライ・スヴィャトシャ公は、修道院を出ることなくさらに三十年を修道生活に捧げ、その異名通り聖なる生活において完全さを極め、すべての聖人の中で最も聖なる謙遜の王――イエス・[7160] ――のもとへ、永遠の命へと旅立った。 この聖なる公の臨終の日、キエフの街のほぼ全住民が集まり、彼に最後の口づけを捧げ、涙を流しながら彼の祈りを求めた。

[7159] すなわち、心の憂いと人生の悲しみを払拭することである。この表現は、預言者エリシャの生涯における有名な物語に倣って用いられている。

[7160] それは1143年10月14日のことでした。聖ニコラ・スヴィャートシの聖遺骨は、聖アントニオの洞窟に朽ちることなく安置されています。

とりわけ、至福の者の兄弟であるイジャスラフとウラジーミルは涙を流した。イジャスラフは修道院のイグメンに、故人の十字架、枕、そして彼がひざまずいて祈りを捧げていたベンチを、祝福と慰めとして自分に譲ってほしいと頼んだ。イグメンはそれらを彼に手渡しながら、こう言った。

「あなたの信仰に応じて、これらの品々から、あなたが望むことへの助けが得られるように。」

イジャスラフは、これらの品々を深い敬虔の念をもって受け取ると、兄弟の遺品をただで受け取ったことへの謝礼として、修道院に多額の金を送った。

このイジャスラフこそが、ある時重病に倒れ、病床から起き上がることさえ望めなくなった。その時、彼のそばには妻、子供たち、そしてすべてのボヤールたちがいた。そうしてしばらく時が過ぎた。その後、病人は多少回復して起き上がり、ペチェールスクの井戸の水を飲みたいと頼んだ。しかし、すぐに彼は再び言葉を失い、それ以来、何も話すことができなくなってしまった。　ペチェルスク修道院へ使者を送り、そこで、以前、聖テオドシウスの棺を洗い清めた水を入れた器を受け取った。修道院長は、聖ニコラ・スヴィャトシの羊毛の衣も渡し、その衣に遺体を包むよう命じた。水と羊毛の衣を携えた使者がまだ戻らないうちに、イジャスラフ公はこう口を開いた。

「急いで、聖テオドシウスと聖ニコラスの両尊師を迎えに、城の外へ行きなさい。」

羊毛の衣と水を持って使いが戻ってくると、公は再び叫んだ。

「ニコラ、ニコラ・スヴィャトシャ！」

彼にその水を飲ませ、毛皮の衣を着せると、彼はすぐに元気を取り戻し、皆が神とその聖徒たちを賛美した。

それ以来、イジアスラフは病に倒れるたびにこの羊毛の衣を身にまとい、たちまち元気を取り戻した。さらに、戦場へ赴く際も常にこの羊毛の衣を身に付けていたため、無傷でいられた。　ある時、罪を犯した彼は、その衣を身にまとうことをためらった。その戦いで彼は戦死したが、それでもなお、生前にその衣を身にまとったまま埋葬されるよう命じていた。

私たちもまた、その救いについて明らかな知らせがあるこの尊い公の祈りに望みを置き、　その祈りの力によって、一時的なものであれ永遠のものであれ、あらゆる病気や傷から癒やしを得ることができますように——謙遜の王、また栄光の王である主なる神、私たちの救い主イエス・キリストの恵みにより。御父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、御名に栄光がありますように。アーメン。

聖シルヴァノ聖司祭殉教者の記念日

記念日：10月14日

聖なる司祭殉教者シルヴァンはガザの出身であり、そこで長老を務めていた。キリストの信仰を広めることへの熱意ゆえに、フェナの鉱山での労働に流刑に処された[7161]；その後、40人のキリスト教徒の戦士たちと共に斬首された[7162]。

10月28日

10月15日（旧暦）

[7161] パレスチナにある都市で、その近くに鉱山があった。

[7162] 311年に逝去した。5月4日にもその記念日が祝われ、ケサリアの司教とも呼ばれている。

尊き父エウフィミオス・ノヴォスの生涯

記念日10月15日

聖エウフィミオス（俗名ニキタ）は、824年にガラティアのアンキラ近郊のオプソ村で生まれた[7163]。 ニキタの両親、エピファニオスとアンナは、裕福であると同時に非常に敬虔な人々であり、同郷の人々だけでなく、周辺地域のすべての住民にとっても生きた模範となっていました。彼らは思いやりがあり、柔和で、旅人を温かく迎え入れ、貧しい人々に対して慈愛に満ちており、概してあらゆるキリスト教の美徳を備えていました。　そのような敬虔な両親のもとで育ったニキータは、生まれた時から聖霊の恵みに満たされており、そのため幼い頃から穏やかで、正直で、従順であり、両親に敬意を払っていた。また、一般的な遊びからは距離を置き、教会の礼拝に頻繁に参列することを好んだ。ニキータがまだ生後7年しか経っていない頃、父が亡くなった。 母の世話をすることになったのは、ニキータのほかに、マリアとエピファニアという二人の娘たちだった。やがて、幼い頃から年齢不相応の知性を示していたニキータは、家事や家族の世話において、母の熱心な助手となった。兵役に関する規定に従い、ニキータの母は彼を兵籍に登録しなければならなかった。しかし、兵士として奉仕しながらも、ニキータはあらゆる面で母の支えとなっていた。すなわち、息子として、助手として、そして家庭や家事のあらゆる心配事における守り手としてである。　高齢のニキータの母は、家事に課せられた負担を軽減したいと願い、彼にふさわしい花嫁を急いで選び出した。神の導きにより、彼女はまもなく、裕福で名門の家庭に生まれた、賢く謙虚な娘エウフロシニアを見つけ、ニキータは彼女と結婚した。　しばらくして、神は彼らの結婚生活を祝福し、娘が生まれた。その子は聖なる洗礼においてアナスタシアと名付けられた。その後、ニキータは生まれた子が母にとっても妻にとっても十分な慰めになると考え、家族を離れ、修道者の道において神への奉仕に全身全霊を捧げることを決意した。　彼が家族を離れることの正当な理由として、既婚の姉マリアが実家の父の家に住んでおり、それゆえに母の助け手として残らなければならなかったという事情もあった。

9月14日――十字架挙揚の祝日――は、ニキータが実の家族と過ごした最後の日となった。 翌日――彼と同じ名を持つ聖殉教者ニキータの記念日――彼は、谷で草を食む自分の馬を見に行くと言って、家族のもとを永遠に去った。そして、長い間孤児となった家族は、ニキータが実家を去った本当の理由を知らなかった。

一方、ニキータは多くの場所を巡り、多くの修行者を訪ねた後、ついにオリンポスの険しい高み[7164] にたどり着いた。そこでは当時、その偉業で名高い聖ヨアンニキ・ヴェリーキーが活躍していた。

ある日、この偉大な修行者のもとには、彼から教訓の言葉を聞きたいと切望する大勢の群衆が集まった。　その群衆の中に、人混みに紛れて、若きニキータも立っていた。神に愛された父ヨアンニキスは、ニキータの修道生活への熱烈な願望、そして彼が将来、徳において栄光と成功を収めるであろうことを見抜き、それまで彼の中に隠されていた美徳を皆の前に現わそうと願った。

「世俗の姿でありながら、これほど大胆に他人と接しているのは、いったい誰なのか？」と、イオアニキは自分に集まった修道士たちに、わざとらしく尋ねた。

「存じ上げません」と彼らは答えた。

[7163] ガラティア――小アジアにある、山岳地帯ではあるが肥沃な小州で、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置する。その名は、ガリア系またはケルト系の起源を持つ好戦的な部族であるガラティア人から由来する。――アンキラは、ガラティアの傑出した都市の一つであった。

[7164] オリンポス――小アジアにある山で、フリギアとビフィニアの境界に位置する。

「この若者は悪人だ。彼は殺人者だ」と、イオアンニキは偽りの怒りを込めて叫んだ。「彼を捕らえて縛り上げよ。」

修道士たちは驚きの眼差しでその若者を眺め、口々に尋ねた。「彼は本当に殺人者なのか？」。しかし、修道に入る前から従順と謙遜を身につけていたその若者は、皆が聞こえるように自らを真の殺人者であり、重い罰に値する者だと宣言し、課せられる束縛を喜んで受け入れる用意があった。

「やめなさい」と長老は修道士たちを制した。「私が彼のことを殺人犯だと皆の前で告発したのは、ただ試すためだったのだ。もし彼が、若くして世俗にいた頃、まだ我々の生活様式を体験していないにもかかわらず、従順のゆえにそのような罪を認めたのなら、修道士となった暁には、どれほどの美徳を成し遂げることになるだろうか！」

これを聞き、謙虚なニキータは聖ヨアンニキイのもとを去った。彼は、もしヨアンニキイのそば、その修道士たちの間に留まれば、幼い頃からこれほどまでに憎んでいたあの名声から逃れられず、それを避けるために故郷の村から逃げ出したのだと悟ったのである。　ヨアンニキオスから遠く離れた場所に住んでいたもう一人の長老ヨアンは、訪ねてきたニキタを喜んで迎え入れ、修道生活の修行について教えを授けた後、すぐに彼を天使のような姿へと導き、剃髪式においてエウフィミオスと名付けた。

ヨハネのもとでかなり長い期間を過ごし、彼からスキトスの沈黙と苦行を学んだ後、エウフィミオスは師の命により、ピッサディノンにあるキノヴィア（[7165] ）へと向かい、そこで長老たちからキノヴィア修道生活の修行を学ぶこととなった。　その修道院のイグメンであるニコライは、キノヴィアを大いなる英知をもって統率しており、新しい弟子を受け入れると、まず彼に最も卑しい奉仕を割り当てた。エウフィミオスは、それらの奉仕が大きな労苦を伴うものであったにもかかわらず、これに不満を漏らすことはなかった。彼はそれらを、自身の若き肉体にとって真の薬であると見なしたのである。　彼が置き去りにした妻、親族、そして富への思いは、すでに幾度となく彼の心を揺さぶっていたが、これらの奉仕を遂行する中で、エウフィミオスは救い主の次の言葉で自らを慰めることができた。　*「わたしの名のために、家や兄弟、姉妹、父、母、妻、子供、あるいは土地を捨てた者は、百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない」*（マタイ19:29、10:37）。また、エウフィミオスが侮辱や嘲笑を受けることがあったとき――それは卑しい奉仕の道を歩む上で避けられないことだったが――彼は不平を言わず、喜びをもってそれらに耐えた。このような従順、謙遜、そして労苦を通じて、エウフィミオスはついに、自分の中のあらゆる邪悪な情欲を静めるに至った。

修道院生活の徳を確固たるものにしたエウフィミオスは、砂漠へと向かい、そこで沈黙の中で神とのさらなる親密さを追求することを決意した。　まだ歩んでいない道として、厳格な沈黙の道が残されていた。当時、アトス山の修道者たちの名声は遠くまで広まっており、エウフィミオスは今、彼らのもとへ向かうことを決意した。彼はその決意を、オリンポスの偉大な修道者の一人である長老テオドロスに打ち明けた。　聖なる長老は、熱心な修道士であるエウフィミオスの新たな旅路を祝福し、エウフィミオスが最初の剃髪を受けた長老ヨハネがすでにこの世を去っていることを知っていたため、彼に偉大な天使の像「[7166] 」を授けた。　それから8日後、エウフィミオスは15年間の滞在を経てオリンポスを去る準備を整えていた。彼には同行者も見つかった。それは、彼と同様に、修道生活における至高の功績を渇望していた修道士テオスティリクトであった。

オリンポスからアトスへの道は、ニコメディアのそばを通っていた。ニコメディアに到着したエウフィミオスは、かつて実家に残してきた親族たちが皆健在であるという喜ばしい知らせに慰めら

[7165] キノヴィア（ギリシャ語の「キノス」（共通）と「ヴィオス」（生命）に由来）とは、修道院長の方針に基づき、修道士たちが食事だけでなく衣服なども修道院から支給され、その見返りとして自らの労働とその成果のすべてを必ず修道院の共同の必要のために捧げる共同生活を行う修道院のことを指す。

[7166] すなわち、大修道服（スキマ）のことである。

れた。　彼らとの別れによる悲しみを和らげたいと願った彼は、聖なる十字架を彼らに送り、使者にこう伝えるよう命じた。「もはやあなた方の親族であるニキタはいない。代わりに修道士エウフィミオスがいる。彼もまた、あなた方に自分の模範に従うよう勧めているのだ」と。　親族の女性たちは、彼からそのような知らせを受けると最初は泣いたが、彼への愛が深かったため、やがて天からの助けに支えられ、自らもエウフィミイの模範に従うことを決意した。この時すでに結婚していた修道士の娘を除き、彼女たちは皆、尼僧となった。

アトス山に到着すると、エウフィミオスは熱心に、その地の修道院生活の規則を実践し始めた。　テオスティリクトは、厳格で沈黙を重んじる生活の重荷と苦難に耐えきれず、オリンポス山に戻ってしまったため、聖エウフィミオスは、修道者としての道において、彼より先にアトス山で修行していたある修道士ヨセフと合流した。しかし、まもなく、年下の彼が年上の師となることとなった。

「兄弟よ！ 私たちは、ダビデの言葉にあるように『[7167]』、栄誉に浴しながらも、戒めを犯すことによって無知な家畜のようになり、その高貴さを失ってしまったのだから、自らを家畜と見なし、四十日間、動物のように地面にうつむいて、草だけを食べて過ごそう。」　そうして清められたなら、再び神の御姿と似姿による美しさを取り戻せるかもしれない。

これが、ヨセフがエウフィミオスから聞いた言葉である。

ヨセフはこの提案に同意し、二人は渇き、寒さ、飢え、そして暑さに耐えながら四十日間を過ごした。キリスト教の美徳の梯子のこの新たな一段をようやく乗り越えたばかりだったが、聖エウフィミオスは再びその同志に次のように提案した。

「さあ、善良なヨセフよ、今こそ、無防備な生活による苦難を捨てよう。どこかの洞窟に身を隠し、ここにいる他の修道士たちから誰にも知られずに過ごそう。　――まるで神から下された掟であるかのように――私たち二人のうち、どちらかが三年が満ちる前に洞窟から出てはならない、と自らに課そう。もしこの三年の間に私たちのうち誰かが死ぬことがあれば、その者は、生涯を通じて死を心に留め続けた者として、まことに至福である。そして、この洞窟そのものが、その者の棺となるだろう。　そして、神の御心により、私たち二人がともに生き延びたとしても――少なくとも可能な限り――私たちの情欲や肉欲は死に絶え、私たちはより良い人間へと変わることでしょう。

ヨセフはこの提案も受け入れた。修道士たちは自分たちのための洞窟を見つけ、そこに閉じこもり、洞窟の近くで実るドングリや栗といった乏しい植物性の食物で、かろうじて生計を立てていた。　彼らの生活はすべて、徹夜での立ち祈り、絶え間ない断食、絶え間ないひざまずき、裸の地面での就寝、火を焚かずに洞窟で過ごすことといった、最も偉大な修行に満ちていた。　互いに厳格に沈黙を守り、たとえ時折それを破ったとしても、それは祈りやその他の魂に有益な事柄についての会話に限られていた。一年が経つと、修道者たちには、彼らの体に耐え難い不快感をもたらす多種多様な昆虫から身を守るための、ぼろぼろの着る物さえもなくなっていた。　彼らは、文字通りの意味で、迫害を受けない殉教者たちであった。しかし、エウフィミオスの同志の一人は、1年後、自ら進んで背負った苦難の十字架をこれ以上担い続けることができないと悟った。　体力が衰えた彼は、エウフィミオスを去った。エウフィミオスの偉業に肩を並べることができなかった修道士は、これで二人目となった。しかし、エウフィミオス自身はその後、その偉業をさらに強めた。彼はここで、悪霊からの多くの誘惑に耐えなければならなかった。　その働きにより、エウフィミオスはまず、去っていった兄弟への寂しさと悲しみに襲われ、次に孤独への恐れに苛まれ、ついには、自身が歩んできた修道者の道の高みに対する驕り高ぶった思いにしばしば心を乱されるようになった。しかし、これらすべて、そして他にも多くの誘惑は、エウフィミオスによって打ち負かされた。

誓い通り、洞窟での三年間の滞在を終えたエウフィミオスは、そこを後にした。そして洞窟の外では、ヨセフから彼の話を聞き、彼に倣いたいと願っていた多くの修行者たちが、とっくの昔から

[7167] *「しかし、人は栄華に留まることはなく、滅びゆく獣のようになる」*（詩編48:13）。

彼を待っていた。　彼らに教えを授けた後、エウフィミオスは再びオリンポスへと向かった。そこでは、彼に偉大なスキマを授けた長老テオドールが、共にアトス山へ向かうよう彼を呼び寄せていたのだ。　長老の願いは叶えられ、アトス山でテオドールの寝床のそば――彼は長年の修業のせいで衰弱し、力尽きていた――エウフィミオスは新たな偉業、すなわち救い主の戒めに従い、病者や弱者への奉仕という偉業を成し遂げる運命にあった。　彼は自らテオドールのために新しい修道室を建て、そこで熱心に彼に仕えた。この生活は、病に伏した長老が耐え難いほどの激しい病に苦しみ、医療の助けを求めるためにテッサロニキへと旅立つまで続いた。そこで彼は永遠の安息を得た。

故人への愛に駆られ、エウフィミオスは彼の棺に拝礼するためソロンへ向かった。エウフィミオスの徳行をかねてより耳にしており、今や彼の到着を知ったソロンの民のほぼ全員が、彼を出迎え、歓迎し、祝福を受けるために街へ繰り出した。しかし、エウフィミオスがソロンに滞在したのは長くはなかった。　都会の生活は、彼を沈黙から引き離してしまった。彼はテッサロニキを離れ、シメオン・ストルプニクのように、街の近くにある柱の上に登った。その柱の上から、エウフィミオスは訪ねてくるすべての人々に教えを説いた。　彼は柱の上でかなり長い間過ごし、徳ある生き方を説き、不治の病を癒やした。しかしその後、彼は再びアトス山で以前のようにただ沈黙を守りたいと願うようになった。というのも、多くの敬虔な人々が彼のもとに押し寄せる様子が、この謙虚な柱上修道士にとって大きな重荷となっていたからである。　テッサロニキを去る際、エウフィミオスはテッサロニキ大司教テオドロスの助言に従い、　助祭の叙階を受けた。これは、「予備の聖体」を通じて、自らも荒野でキリストの聖なる秘跡[7168]を受けることができるようにするためであった。

しかし、エウフィミオスはアトス山に長く留まることはなかった。なぜなら、彼が望んでいた静寂をそこに見出せなかったからである。かつての荒野には、新たな修道士たちがひしめき合っていた。彼らの間に「聖別された」修道士が現れたことを知り、彼を彼らの筆頭として敬った彼らは、頻繁に彼を訪ねるようになった。　そこでエウフィミオスは、新たな隠れ家として「ノヴィフ」と呼ばれる無人島を選び、志を同じくする二人の修道士、シメオンとイオアン・コロフと共にそこへ退いた。　神の御許しにより、サラセン人がこの島を襲撃した。二隻の船で乗り付け、彼らは修道士たちを捕らえ、連れ去ろうとした。追い風に乗じ、野蛮人たちは喜び勇んで船の帆を揚げ、さらに遠くへと航海を始めた。しかし、彼らの喜びは長くは続かなかった。　捕虜たちが乗せられていた船は、突然大海原の真ん中で立ち往生し、どうやってもその場から動けなくなってしまった。一方、もう一隻の船は全く問題なく航行していた。野蛮人の一人が、船が動けなくなった真の原因を悟り、仲間たちにこう言った。

「まさか我々は、神の僕たちに暴力を振るった報いとして、このような事態に見舞われたことを理解できないほど愚かなのか？ もし海に沈みたくないのなら、さあ、早く彼らを解放しよう！」

仲間たちは即座に同意した。彼らは皆、聖なる捕虜たちの足元にひれ伏し、許しを請い、すぐに許しを得た。その後、それまで動かなかった船が自力で出航し、まもなく、つい先ほど荒廃したばかりの島にたどり着いた。　その島の三人の住民は再び自由を取り戻した。そして彼らは、野蛮人たちに、たとえ取るに足らない品々であっても、荒野の住人である彼らにとっては極めて必要なものを返してほしいと懇願した。しかし、つい先ほど神の御手によって懲らしめられたばかりの残酷な野蛮人たちは、彼らの願いを聞き入れなかった。　そして再び、彼らはこの行為の報いとして、神の懲罰の右手の全力を身をもって味わうこととなった。彼らがすでに海の真ん中にいたとき、突然逆風が吹き、再び彼らの船を、つい先ほど離れたばかりの島へと押し戻した。もはや彼らは、修道士たちの願いを拒むことはできなかった。　ただ一人の野蛮人が、奪い返したものをまた取り戻されたことに腹

[7168] すなわち、未叙階者は自らの手でキリストの秘跡を執ることを許されていないため、聖エウフィミオスは、荒野において自ら「備えの賜物」を聖体拝領できるよう、助祭の叙階を受けたのである。

を立て、ヨアン・コロフを捕らえて、仲間たちに止められるまで容赦なく殴りつけた。その場に居合わせた聖エウフィミオスは、ただ穏やかにこう言った。

「アラブ人たちよ！もしあなたがたが、私たちを恨みを持たずに解放してくれていれば、私たちは平和のうちに故郷へたどり着けたはずだ。しかし今、兄弟に恨みを抱かせたことで、あなたがたは神への冒涜を犯してしまった。まもなく、この悪がどれほど大きいかを悟ることになるだろう。」

野蛮人たちがこの予言が実現するのを待つ時間は長くはなかった。　海上で彼らを新たな災難が待ち受けていた。ローマの軍艦に襲われ、聖人たちに侮辱を加えた者が乗っていたまさにその船が捕虜として連行されたのに対し、もう一隻の船は、予想に反して難を逃れたのである。こうして、生涯を通じて神を賛美し続けた三人の偉大な人々は、不信心な野蛮人たちの間でもその名を高めたのである。

この三人の聖人は、神を試してはならないと禁じ、危険な場所を避けるよう命じる主の戒め（マタイ10:23）を心に留めていた。そのため、新しい居住地で一度危険にさらされると、そこを去ることを決意した。しかし、彼らが再び移り住んだアトス山でさえ、もはや安全な場所とは言い難くなっていた。　野蛮人たちは、アトス山に現在住んでいる人々について知っており、そのため頻繁に襲撃を仕掛けていた。すでに多くのアトス山の修道士たちが彼らに捕らえられていた。このため、アトス山に新しく移住してきた三人は、それぞれ別の、より安全な場所へ散らばることを決意した。　聖ヨハネは、いわゆるシディロカヴシアに定住し、聖シメオンはエラダへ退去し[7169]、聖エウフィミオスはヴラスタマへと移った。　そこで彼は、かつての同志である聖ヨセフと再び出会うこととなった。さらに、エウフィミオスの近くに定住したいと願う、主を信じる多くの兄弟たちも集まってきた。エウフィミオスは彼らのためにケリイを建て、自身は一人で堀の中に住み着いた。　聖エウフィミオスは時折、自分の堀を離れて兄弟たちを訪ねたり、また時には沈黙を重んじてアフォンの高みへと登り、そこで神との祈りの中で対話し、その心と精神を極限まで清めた結果、神聖な幻視と啓示に恵まれるに至った。そしてある日、彼はそこで、こう告げる声を聞いた。

「エウフィミオスよ！　テッサロニキへ行け。そこにある山々、街の東側に、ペリステラと呼ばれる山頂があり、そこには泉がある。そこで、聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの教会を見ることになるだろう――かつては　その壮麗さは今や羊小屋と化している――その場所を清め、そこに修道院を建てよ。　ここで多くの人々が救いを見出すだろう。私はあらゆる面であなたを助ける。もはや荒野に残って悪魔たちと戦う必要はない。彼らはとっくにあなたの徳によって打ち負かされ、あなたから遠ざかっているのだから。

神の御命令に従い、聖人はアトス山の頂を後にし、二人の修道士――イグナティオスとエフレモス――を伴って、彼らと共にアトス山からテッサロニキへと向かった。この時、テッサロニキの人々は彼を「天から降りてきた天使のように」迎えた。　ペリステラと呼ばれる場所について聞きつけたエウフィミオスは、案内人を連れて、指示された山へと向かい、そこで確かに羊小屋を見つけた。天から示された兆しは、まさにこの場所にかつての神殿の廃墟を探すべきであることを示していたが、地元の住民の誰もその神殿について何も知らなかった。　地元のキリスト教徒たちは、この場所が地元の聖地であることを全く意識することなく、長い間ここに羊小屋を構えていた。聖人は、聖地がこのように冒涜されているのを見て、苦々しく泣いた。　彼が着手した発掘調査により、まもなく教会の基礎全体が発見された。その時、この地を訪れた長老の並外れた洞察力に感銘を受けた地元の人々は、忘れ去られていた教会の修復費用を喜んで負担した。それによって、彼らはかつての無関心の罪を償おうとしたのである。　こうして、聖使徒アンドレイの教会が建立された。その脇堂は、右側が聖ヨハネ・洗礼者、左側が聖エウフィミオス大聖人に捧げられた。しかし、教会の建設工事が完了

[7169] すなわち、ギリシャのことである。

するまでに、尊者自身は多くの苦労と苦難を耐え忍ばなければならなかった。　悪魔たちの悪意により、建物を囲んでいた足場が倒れたり、完成したばかりの左側が崩れ落ちたりした。こうした不幸に見舞われる中、尊者にとって、建設者たちに工事を続行するよう説得するのは容易なことではなかった。夜は祈りに明け暮れ、昼間は作業員たちのそばを離れず、自ら作業に励んで手本を示した。　ついに863年、教会堂は完成した。その傍らには、地元住民の要望により、まもなく修道院も建立され、後にそこで暮らした多くの修道士たちによってその名は広く知られるようになった。　尊者は、ここで起きた奇跡についての噂が広く広まり、多くの人がここに引き寄せられていることを知っていた。そのため、その噂だけに惹かれてここに来たばかりで、まだ自らの力を試していない新入の修道士たちが、過酷な修道生活を送るのに不向きであるようなことにならないか、強く懸念していた。　このため、彼はこれらの初心の修道士たちに多くの教えを授け、悪魔による危険について語り、それらの危険を回避する方法を示し、労働の聖性を称え、悪徳を非難し、美徳を説いた。

「兄弟たちよ！」と、聖エウフィミオスは修道士たちに説いた。「聖書にあるように、私たちの敵である悪魔は、獅子のように咆哮しながら歩き回り、自分の救いを顧みない者を飲み込もうとしている。それゆえ、私たちは心を覚醒させ、警戒し続けよう（参照：ペトロの手紙一 5:8）。 もし私たちが世を捨てたのなら、肉の欲望を切り捨てよう。もし私たちが自分の肉を十字架につけ、主の死に身を包んだのなら、肉の快楽に溺れることなく、御霊によって歩もう。もし私たちが天の御国のために天使の姿をまとったのなら、天使のように生きるべきである。　もし私たちが真に主を愛するならば、主の戒めを守らなければならない。自分の手で働こう。なぜなら、怠惰と無為によって私たちは疲れ果て、善行を行う力が弱まってしまうからだ。そうすれば、実りのなさや貧しさが私たちの避けられない運命となる。「*自分の家を乱す者は、風を分け前として受ける*」（箴言 11:29）と、知恵ある方は言われます。また、使徒パウロはこう言っています。「*働こうとしない者は、食べることもあってはならない*」（テサロニケの信徒への手紙第二 3:10）。　謙遜と愛、そして司祭への従順を保ち、彼を信じ、彼から何も隠さないようにしなさい。あなたの思いをかたらい、それによってあなたの心と精神を清めなさい。これこそが救いの道だからである。

エウフィミオスの説教を聞くにつれ、その修道院の修道士たちは、聖霊ご自身が、聖なる使徒たちに吹き込まれたのと同じように、彼に神の恵みを吹き込まれたのだと語った。これらの初心者の修道士の中には、後にテッサロニキの大司教となるヴァシレイオスもおり、彼の尽力のおかげで、尊者エウフィミオスの偉業に関する記憶が今日まで伝えられているのである。　彼は、聖なる牧者に励まされた新しい修道院の修道士たちが燃え上がっていた、その神聖な熱意について語っている。例えば、ある時、彼らの修道院に偶然一冊の異端の書物が持ち込まれた際、彼らは直ちにそれを焼き捨てた。

その敬虔な生涯により、エウフィミオスは未来を予見する賜物と奇跡を行う賜物に恵まれた。実際、前述のヴァシリーは、自分自身が聖エウフィミオスによって司教の位に就くことが予言されていたと語っている。　出家から三日後、尊者エウフィミオスは、彼が新出家者として七日間過ごすべき教会を訪れ、こう言った。

「ヴァシリーよ！　私は光の輝きや先見の明という賜物に値しない者ではあるが、あなたや他の者たちが魂の救いのために、この不肖の私の指導の下に集まってくれたゆえに、全善なる神は、私にもわずかながら恵みの滴を授けてくださった。それは、あなたたちに起こるべきことを予見し、救いに役立つ言葉を語れるようにするためである。　それゆえ、知っておきなさい。あなたは学問への愛ゆえに、まもなく修道院を去り、司教となるだろう。しかし、その時も、私をあなたの父として、また私たちの修道院と兄弟たちを覚えていてほしい。

大司教ヴァシリーによって編纂されたこの聖人の伝記からは、彼が、自らの目で目撃したその人物の偉業や奇跡を記述するにあたり、いかにその記憶を愛し、畏敬の念を抱いていたかがはっきりと見て取れる。以下に、聖エウフィミオスによって行われ、彼が目撃し伝えた奇跡のいくつかを挙げ

る。　ある時、ヴァシリーが「沈黙者」と呼ばれるもう一人の兄弟ヨハネと共に人里離れた場所にいて、飢えと疲労により死の危機に瀕していたところ、突然、聖人が現れ、持参した食物で彼らの体力を十分に回復させ、それによって彼らは旅を続けることができた。　また別の時、同じヴァシリーが聖人と共に修道院から遠く離れていたところ、聖人は突然、修道院からヨハネとアントニオという二人の兄弟が、他の兄弟たちとの間で起きた争いのために今まさに修道院を去ろうとしていると彼に告げた。　テッサロニキでは、エウフィミオスが柱の上で修行していた際、ある人物から邪悪な悪霊を追い出した。聖エウフィミオスは他にも多くの奇跡を成し遂げたが、そのうちのいくつかは、彼の伝記を記したヴァシリー自身が目撃したものであり、他のものについては第三者から聞いたものだった。

多くの修道士が、この尊者から剃髪を受けた。また、彼は自らの修行と奇跡によって、多くの世俗の人々をも修道生活の道へと導いた。オリンポス山、アトス山、そしてテッサロニキには、彼の尽力と配慮によって多くの新しい修道院が建立された。

ついに、実家を離れてから四十二年後、エウフィミオスは、自身の慰めとなることに、親族たちをも修道生活へと導くことができた。彼は、オリンポスからアフォンへ初めて向かう途中、まだニコメディアにいた頃から、彼らにそうするよう呼びかけていたのだ。　彼はいわば第二のヨセフのようであった――その生涯は同様に清く、耐え抜いた苦難と災難の後に同様に称賛され、42年を経て初めて、この世の虚しさをようやく悟り、修道生活を受け入れることを決意した肉親たちによって、その正体が認められたのである。　彼は親族を自身の修道院に迎え入れ、親族の女性たちのために、その目的で購入した土地に新しい女子修道院を建立した。　この修道院の院長には、聖人の姉妹が任命され、彼女は聖衣をまとった後、エウフィミアと名付けられた。これら二つの修道院をテッサロニキ都主教メフォディオスの世話に委ね、彼らに訓示を与えた後、聖人は再び沈黙を求めて、テッサロニキ近郊にあるかつての柱の上へと登った。　そして、この世の生活から永遠の安息を得るため、主は尊者エウフィミオスを、彼が最も多くの功績を成し遂げたアトス山の高地のすぐ近くへと導かれた。

自身の死の日を予知していた聖エウフィミオスは、5月7日、聖エウフィミオス大聖人の聖遺骨の移送を記念する日に、アトス山の修道院のうち、彼に最も近い修道院の兄弟たちを食事に招き、彼らと共にこの日を祝った後、別れを告げた。　翌日、誰にも何も告げることなく、彼は奉仕のためにただ一人の修道士ゲオルギオスだけを連れ、彼と共にアトス山を離れ、いわゆる「聖なる島」と呼ばれる人里離れた場所へと向かった。 この島で、彼は自ら見つけた一つの洞窟に約4ヶ月間篤信の生活を送り、ついに889年10月15日、ほとんど苦痛なく息を引き取った。 主は、彼が父の家を去った際に、すべての人を愛し、またすべての人から愛されていたにもかかわらず、その若き心が味わわなければならなかったあらゆる苦難の代償として、彼に苦痛なくこの世を去ることを許されたのである。

それから2年後、ペリステラの修道士たちは、死後も修道院の守護者となるよう、この神に愛された聖人の遺体を自分たちの修道院に移したいと願った。その目的のために、彼らは聖なる島へ修道司祭ヴラシオと修道士パヴロを派遣した。　派遣された二人は現地に到着すると、聖エウフィミオスの遺体が、彼が息を引き取ったまさにその洞窟の中に横たわっているのを発見した。遺体は非常に長い間そこに横たわっていたにもかかわらず、腐敗の兆候は全く見られなかった。翌年の1月13日、聖人の聖遺骨はソロン、すなわちテッサロニキへと移され、現在もそこで眠っている。[7170]

尊き、神に愛された私たちの父エウフィミオスの祈りによって、私たちも皆、心と体の病から解放され、主イエス・キリストによる天の御国に与かることができますように。主イエス・キリスト

[7170] そのため、聖エウフィミオス・ノヴィスは、テッサロニキ（ソロン）の聖人とも呼ばれている――彼の故郷はテッサロニキから遠く離れたオプソという村であったにもかかわらず、　ソロンという都市は、聖エウフィミオスの生前も死後も、その庇護と取り成しを受けており、そこでは聖人の聖遺物によって多くの奇跡が起こった。

に、　、その父なる神および聖霊と共に、すべての栄光、誉れ、礼拝が、世々限りなく帰されますように。アーメン。

コンダク、第2調:

神に賢き聖エウフィミオスよ、あなたは群衆の動揺を乾いたまま過ぎ去らせ、あなたの涙の奔流によって無形の敵を深く沈め、奇跡の賜物を受け、あらゆる情欲を癒やされます。どうか、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

アンティオキアの司祭、聖殉教者ルキアノスの生涯と受難

記念日：10月15日

聖ルキアノスは、シリアのサモサト[7171]の町で、敬虔な両親の間に生まれた。12歳の時、ルキアノスは両親を亡くし、両親から受け継いだ全財産を貧しい人々に施した。そして自らエデッサの町へ赴き、殉教者マカリオスのもとで、その指導のもと、熱心に聖書の研究に励んだ。　その間、ルキアヌスは厳格な修道生活を送った。彼は決してワインを飲まず、水だけを飲み、食事は乾いたパンと水のみであったが、それも1日1回しか摂らず、時には丸1週間何も口にしないこともあった[7172]。　その厳格で敬虔な生活、そしてユダヤ人や異邦人の間で神の言葉を熱心に広めた功績により、ルキアノスはアンティオキアの長老の位に叙任された。　そこでルキアノスは学校を設立し、多くの弟子を集め、学問的および霊的な知恵の指導者となった。彼は聖書の解釈を教え、同時に徳のある生活を送るよう指導した[7173]。この頃、ルキアノスは、悪意ある異端者たちによって著しく改竄されていた聖書の本文の訂正を、自身の活動に加え始めた。　この有益な作業のために、ルキアノスはあらかじめヘブライ語を学んだ[7174]。

やがて、ルキアノスの徳行の評判が至る所に広まると、邪悪な皇帝マクシミアヌス・ガレリウスは彼の存在を知った。東方諸国における聖なる信仰を根絶やしにし、滅ぼそうとしたマクシミアヌスは、多くのキリスト教徒、とりわけ賢明で著名なキリスト教の教師たちを拷問し、殺害した。　この無法者は、これらの教会の支柱を打ち倒せば、キリストの教会そのものもより早く崩壊するだろうと考えていた。当時、彼はすでに聖アンフィモス・ニコミディウスと聖ペトロス・アレクサンドリアスを殺害していた[7175]。そして、聖ルキアノスのことを耳にすると、彼を探し出し、拷問にかけるよ

7171 サモサタは、ユーフラテス川の西岸に位置するシリアのコムマゲナ州の主要都市であり、現在はサムサトと呼ばれている。

7172 その敬虔な生涯により、ルキアノスは、その伝記が伝えるところによれば、神の恵みによる特別な賜物に恵まれ、街を歩いているとき、ある人々には彼が見えたが、他の人々には見えなかった（10月15日のプロローグ）。

7173 ここで彼は聖書の写本作成にも取り組み、その技量を大いに高めた。この仕事によって、ルキアノスは自分自身と貧しい人々を養っていた。

7174 ルキアノスの最も著名な学術的業績は、聖書のギリシャ語本文の再検討と訂正であった。アンティオキア教会の司祭である至福のヒエロニムスは、聖書に多大な労力を注いだため、今日でも一部の写本は「ルキアノス版」と呼ばれている。　聖ルキアノスは、聖なるテキストの中に、時間の経過だけでなく、悪意ある人々によっても生じた誤りを発見し、それゆえ、自らの労力と知識を駆使して、教会に最も正確なテキストを伝承することに決意した。　聖アタナシウスは、聖ルキアノスの業績について次のように述べている。「ルキアノスは、以前の翻訳やヘブライ語の書物を精査し、欠けている部分や余分な部分に細心の注意を払い、すべてを適切な箇所で修正した」。　信仰の敵から守るため、聖ルキアノスの殉教の業の最中、その著作は壁の中に隠され、原稿が入った箱は石灰で覆われていたが、コンスタンティヌス大帝の治世下で発見され、聖ルキアノスによって改訂された後、広く一般に用いられるようになった。

7175 聖アンフィマスの記念日は9月3日、聖ペトロス・アレクサンドリアスの記念日は11月26日である。

う命じた。　すると、アンティオキアに住んでいたパンクラティウスという名の司祭――サベリウス派の信奉者――が、王から遣わされた使者たちに、ルキアヌスの居場所を告げた。　パンクラティウスはかねてよりルキアノスの高名な評判を妬んでおり、ユダのように、　、無実の者を死に追いやった。その後、聖ルキアノスは不信心者たちに捕らえられ、ニコミディア[7176] へと連行され、拷問を受けた。

当時、凶暴な拷問官はキリスト教徒に対して激しく激怒し、第二のヘロデのように、幼いキリスト教徒の子供たちまでも殺害していた。子供たちを偶像への生贄の供え物で穢そうと、彼は無理やりその供え物を子供たちの口に押し込むよう命じた。しかし、聖霊に導かれた子供たちはそれを口にすることを拒み、そのために殺害された。

そこへ、二人の高貴な少年――実の兄弟――がたまたま居合わせた。彼らは両親から、そして何よりも神から教えを受けていたため、偶像崇拝を強く嫌悪していた。　拷問官は若者たちを呼び寄せ、優しい言葉で誘惑し、偶像の供え物の甘い食べ物で誘惑し、それによって彼らを悪魔の汚れに加担させようとした。しかし若者たちは、食べ物を拒みながらこう言った。

「両親は、この食べ物を口にしてはならないと遺言しました。なぜなら、これを口にする者は、キリストを怒らせるからです。」

これに対し、拷問官は容赦なく彼らを鞭で打つよう命じた。しかし若者たちは、まるで大人の男のように、大きな忍耐をもって拷問に耐えた。すると、王の側近の一人が言った。

「まだおむつを脱いだばかりの幼子たちが、その忍耐によってローマ皇帝に打ち勝つなど、大きな恥です。偉大なる皇帝よ、この子供たちを私に譲ってください。私が彼らに神々を崇めるよう教え込みましょう。」

王は彼にその子供たちを預けた。彼は直ちに子供たちの頭を剃り落とし、強いマスタードを塗りつけ、熱い風呂に閉じ込めた。それにより、子供たちの頭はまるで稲妻に打たれたかのように炎のように燃え上がり、二人の兄弟はこの苦痛の末に息を引き取った。　最初に亡くなったのは弟の方だったが、兄は死んだ弟の姿を見て、こう叫んだ。

「お前は勝った、兄弟よ、勝ったのだ。神がお前を助けてくださる！」その後、亡くなった兄弟の遺体に口づけをすると、彼もまた息を引き取った。――これは、聖ルキアノスが拷問を受けるために連行されたニコメディアでの出来事であった。

ニコミディアへの途上にあるカッパドキアで、ルキアヌスは、拷問への恐怖からキリストを否認した兵士たちを見かけた。ルキアヌスは彼らに、忍耐強く拷問に耐えるよう諭し、こう言った。

「なんと恥ずべきことか、なんと情けないことか！　あなたがたは兵士として、この世の一時的で儚い王のために、戦場で常に自らの健康を犠牲にし、その王のために命を捧げている。それなのに、天の永遠の王であるキリストのために勇敢に立ち上がることを拒み、ただ自分を労わるだけでなく、キリストそのものを拒絶しているではないか！」　よく考えてみよ。地上の王に従うことに、あなたたちにとって何の益があるというのか？　そして同時に、天の王の命令に背くことで、あなたたちは一体何を捨て去ろうとしているのか、深く思索せよ。　虚しい名誉と栄光のために、あなたがたは自らをそのような破滅へと追い込んでいる。しかし、私たちのために御自身の血を流され、御自分のしもべたちに言い尽くせぬ恵みを備えてくださった主のためには、永遠に主と共に王座に就くために、一時的な苦難に耐えることさえ望まないのだ。　幼子や弱々しい女性たちよりも、あなたがたの方が男らしいと自負しているなら、彼らを恥じなさい。彼らは主のために勇敢に立ち上がり、あたかも強靭な男たちのようであったのに、あなたがたは苦痛を恐れて、まるで女や幼子のような者になっ

[7176] 308年、ディオクレティアヌス帝の治世下、ルキアノスはニコミディアにおける信仰の殉教者の一人であった。当時、同地ではキリスト教徒に対する激しい迫害が行われていた。　そこから彼は、ニコメディアの聖アンフィモスの殉教の死をアンティオキア教会に伝えた。しかし、この時は予想に反して釈放され、アンティオキアに戻り、そこで以前のキリスト教活動を続けた。

てしまったのです。キリストがあなたがたを御自身の裁きに召されたとき、あなたがたはどうなるのでしょうか。

これを聞いて、兵士たちは再び悔い改めてキリストに立ち返り、心と口をもって主イエス・キリストの聖なる御名を告白しながら、拷問の場へと向かった。そしてその時、キリストのために約四十人の兵士が殉教した。　このように、聖ルキアノスは、その甘美で神の恵みに満ちた言葉によって、キリストから離反していた者たちを再びキリストへと立ち返らせ、彼らを殉教の業へと奮い立たせた。

やがてルキアヌスがニコミディアに連行されると、そこには彼が知る多くのキリスト教徒や弟子たちがおり、彼らは迫害を恐れて大きな恐怖に震えていた。その中には身を隠している者もいれば、激しい拷問や死を恐れてキリスト教を棄教しようとしている者もいた。　聖ルキアノスは、その力強い言葉によって彼らの勇気を奮い立たせ、信仰を揺るぎないものにした。それは、彼らが「体を殺しても魂を殺すことのできない者たち」（マタイ10:28）を恐れないようにするためであった。

伝えられるところによると、ルキアノスの弟子であるペラギアという名の少女が、キリストへの信仰ゆえに拷問を受けるために捜し出されていた。処女性を損なわれることを恐れた少女は、高い窓から身を投げ、落下して砕け散り、息を引き取った。信者たちは彼女を殉教者として崇めた[7177]。

マクシミアヌスは、ルキアヌスが非常に愛嬌のある顔立ちをしており、その会話があまりにも魅力的であるため、彼を見たり話を聞いたりする者は誰もが必ずキリスト教徒になってしまうと聞いていた。そのため、皇帝は、もし自らルキアヌスと直接会話を交わせば、自分もキリスト教徒になってしまうのではないかと恐れていた。　そのため、ルキアノスが皇帝のもとに連れて来られた際、皇帝はカーテン越しに、ある程度の距離を置いて彼と語り合った[7178]。当初、皇帝はルキアノスに多くの贈り物や栄誉を約束したが、聖人がそのお世辞めいた狡猾な言葉を笑い飛ばすと、マクシミアヌスは新たな拷問で彼を脅し始めた。　ルキアヌスはその脅しに微塵も怯えなかった。彼は牢獄に投獄され、そこで数多くの様々な苦難に耐え抜いた。そこでは縄で縛られ、鋭い石で殴打され、長い間、飢えと渇きに苛まれた。　数ある拷問の中には、次のようなものもあった。彼の体のすべての関節を無理やり外し、背中を鋭い陶器の破片の上に寝かせ、彼はその上で14日間も横たわっていたのである。やがて主の顕現の祭日が訪れると、聖人は、自分と共にあるすべてのキリスト教徒が、キリストの聖なる秘跡を受けることを許されるよう願った。　彼はその願いが叶うよう神に祈り、神は、看守の不注意に乗じて、信者たちの一部がルキアノスのいる牢獄に集まり、パンとワインを持ち込むように導かれた。そこで聖ルキアノスは、弟子たちや牢獄にいたすべてのキリスト教徒にこう言った。

「私の周りに集まり、教会となりなさい。なぜなら、私は、木や石で建てられた教会よりも、生きた教会の方が、神にとってより良く、より喜ばしいと信じているからです。」

その後、皆がルキアンの周りに集まると、彼はこう言った。

「聖体礼儀を執り行い、神の聖なる秘跡を拝領しよう。」すると弟子たちは彼に尋ねた。

「父よ、聖なる秘跡を行うためのパンをどこに置けばよいのでしょうか？　ここには机がありません。」

[7177] 記念日は10月8日。

[7178] 教会史家エウセビオスは、信仰のゆえにマクシミアヌス皇帝の前に引き出された聖ルキアノスが、まず『弁明』を通じて言葉によって、そしてその後、行いによってもキリストの天の御国を宣べ伝えたと記している。ルキアノスは自身の『弁明』の中でキリストの復活について語り、次のように書いている。　「この出来事が起こった場所そのものの証言を引用しよう。その場所自体が私の主張を裏付けている。十字架の栄光に照らされたゴルゴタの丘、あの洞窟は、冥界への入り口の開口部を通じて、再び生気を取り戻した御体を返還し、それがより輝かしく天へと昇っていくようにしたのだ……　さらに、地上の不義な者たちの行いを目の当たりにして、正午にその光を隠した天そのものを、あなたがたに証人として提示する。あなたがたの年代記を調べれば、ピラトの治世下でキリストが受難された際、日食によって昼が途絶えたことがわかるだろう。」– これらの著作に加え、聖ルキアノスは聖三位一体に関する信仰告白を残した。

すると、縛られたまま仰向けになって横たわっていた彼は、こう言った。

「私の胸の上に置いてください。そうすれば、生ける神のための生ける祭壇となるでしょう。」

こうして、牢獄の中で、聖人の胸の上にて、神聖な典礼が、すべての適切な祈りと共に――定められた儀礼に従い、ふさわしい形で――執り行われ、皆が聖なる神の秘跡を拝領する恵みにあずかった。

朝、王は使用人を遣わして、ルキアノスがまだ生きているかどうか確かめさせた。すると、使用人たちが牢屋の扉をくぐろうとしたとき、聖ルキアノスは彼らを見て、三度叫んだ。

「私はキリスト者だ！」

そして、その言葉を残して、彼は自分の魂を、その神であるキリストの御手に委ねた[7179]。

使用人たちはマクシミアヌスの元へ戻り、ルキアヌスがすでに亡くなったことを報告した。そこで王は、殉教者の遺体を海に投げ込むよう命じた。使用人たちはその通りに実行し、聖ルキアヌスの苦難に満ちた遺体に石を結びつけ、海の深淵に投げ込んだ。その遺体は三十日間、海に留まっていた。

その後、殉教者はグリケリウスという名の弟子の一人の前に現れ、彼に海岸へ行き、その遺体を回収して埋葬するよう命じた。　グリケリウスは他のキリスト教徒たちと共に海岸へ行き、聖人の遺体を探した。すると、彼らは海の中で、殉教者の朽ちない遺体を背負ったイルカたちを目にした。イルカたちは岸に近づくと、遺体を乾いた場所に下ろした。そこで信者たちは喜びながら聖殉教者の遺体を受け取り、尊厳をもって埋葬した。

それから何年も後、聖使徒に等しい女王ヘレナ、すなわちコンスタンティヌス大帝の母は、聖殉教者ルキアノスの棺の上に教会を建立した。[7180]　、三位一体の唯一なる神の栄光のために。今なお、私たちから神に、世々限りなく栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

コンダク、第2調：

禁食において最初に輝き、苦難において次に輝いた、最も輝かしい光として、私たちすべてのために絶えず祈り続けるルキアナを、その賛歌をもって栄光を称えよう。

聖殉教者サルヴィルとヴェヴェイの記念日

記念日：10月15日

聖サルヴィルは、トラヤヌス帝の治世[7181]　に生き、当初はエデッサ[7182]　で異教の祭司であったが、その後、ある敬虔なキリスト教の司教から教えを受け、妹のヴェヴェイアと共に洗礼を受けた。エデサの領主の前でキリスト教の信仰を告白したとして告発され、裁判にかけられ、棒で打たれた。聖人は大いなる力を持って公爵を糾弾し、異教の神々の虚しさを立証したため、激怒した公爵は七回

[7179] 聖ルキアノスは西暦312年1月7日に逝去した。これは、彼の記念日に際して聖ヨハネス・クラマトルスが語った言葉からも明らかである。「かくして、昨日は我らの主が水によって洗礼を受けられ、今日、そのしもべは血によって洗礼を受けるのである」。　ギリシャ正教会では、聖ルキアノスの記念日は後に10月15日に移され、1月7日は聖ヨハネ・洗礼者公会議の祝日に充てられるようになった。

[7180] この壮麗な教会は、326年に聖使徒同等の皇后ヘレナによって建設されました（ビフィニアのドレパネという町にあり、聖皇后ヘレナにちなんでヘレノポリスと名付けられました）。　ローマ皇帝カール大帝の治世下、聖ルキアノの聖遺骨はエレノポリスからフランスのアルルへと移された。

[7181] ローマ皇帝トラヤヌスは98年から117年まで在位した。

[7182] エデス――キリキア（小アジア南東部の地域）にある都市。

にもわたり、彼を拷問台に縛り付けるよう命じた。そのたびに、彼は牛の腱で打たれ、鉄の櫛で削られ、蝋燭で焼かれた。　しかし、聖人は神に心を向け祈りを捧げると、万軍の主は彼の苦しみを和らげてくださった。拷問官は、聖人の気高い忍耐を見て、彼の頭に釘を打ち込むよう命じ、それによって皆を恐怖に陥れた。　すると、聖人の姉であるヴェヴェヤも、自分もキリスト教徒であると告白し、拷問を受け、牢獄に投じられた。聖サルヴィルの皮膚は剥ぎ取られたが、それでも彼はまだ息をしていた。そこで、二人は共に首を刎ねられた[7183]　。信者たちは彼らの遺体を運び出し、大地に葬った。

カターノの司教、聖サヴィナの記念日

記念日：10月15日

至福のサヴィンは、その偉大な徳と賢明さにより、カターニアの司教職に選出された[7184]　。しかしその後、沈黙の徳を求めて世俗の喧騒を離れ、徹夜祈祷と断食に身を捧げて完全なる境地へと熱心に歩みを進めたため、生前にすでに奇跡を行う力と予言の賜物を受けるに至った。　彼は多くの人々を説得し、世俗を捨ててキリストのみに仕えるよう導いた。彼は安らかに息を引き取り[7185]　、主の御許に霊を委ね、その尊い遺体は故郷の地に葬られた。

スーズダリの聖ヨハネ司教の伝記[7186]

記念日：10月15日

この私たちの尊い父、輝かしく堅固な導き手であるヨハネ司教にとって、天のエルサレムは、いわば故郷であり祖国であった。なぜなら、その生涯において、聖人は地上の天使、天の人と呼ぶにふさわしい存在であったからである。

聖人の出生地――それが都市であったか、あるいは一地方全体であったか――、両親、読み書きの教育、そして修道生活に入った時期については、記録が残されていない。　知られているのは、聖ヨハネがある修道院に滞在し、そこで任された務めを遂行する中で、修道院長や兄弟たちへの従順さを際立たせ、厳しい禁欲によって肉体を鍛え上げ、情欲や悪魔の誘惑に打ち勝っていたということだけである。　そして、彼は修道院の修道士たちや修道院長から愛され、称賛され　、使徒パウロの言葉「*御霊の実とは、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、忠実、柔和、自制であり、このようなものに対しては律法はない*」　（ガラテヤ5:22–23）、また詩篇の作者の言葉によれば、「*その歩みが清く、主の律法に従って歩む者は幸いである。主の啓示を守り、心を尽くして主を求める者は幸いである。主を畏れ、その戒めを深く愛する人は幸いである。　その子孫は地上で力強くなる*」（詩編118:1–2、111:1–2）。

その修道院のイグメン、すなわち修道生活に熟達したその人は、至福のヨハネを導き、修道規則を教え、神への畏れを常に心に留め、貧しい者を軽んじず、幻に飄々として高ぶることなく、常に謙遜の心にとどまり、苦難に打ちひしがれることなく、　むしろ、それらを勇敢に耐え忍び、降りかかる災難について不平を言わないようにと。というのも、聖霊の導きにより、修道院長は、至福のヨ

[7183] 2世紀初頭に没した。

[7184] カターニアは、シチリア島の東海岸にある古代都市である。現在では、教育と商業が盛んで、人口10万人を超える活気ある都市となっている。

[7185] 760年頃に没した。

[7186] 17世紀第2四半期に、スパススキー・エフフィミエフ修道院の修道士グリゴリーが、地元の伝承や文献資料を基に著した『聖人伝』に基づいて記述されている。

ハネがやがて司教の座に就き、キリストの羊の群れを忠実に牧会することになると予見していたからである。

修道院長からの霊的な教えを受け入れ、聖ヨハネは、まるで実り豊かな大地が蒔かれた種を百倍に増やすかのように、それらをさらに細心の注意を払って実践した。　また、彼は断食を厳格に行い、三日に一度しか食事をとらず、時には一週間も何も食べず、水以外は何も飲まなかった。彼は聖書を熱心に学び、何の疑いもなくそれを読み、そこに記された言葉を感動をもって自らに解釈し、そのたびに羊毛のスティハールを涙で濡らした。　そして、主は彼にそのような涙を授けられたので、その涙なしにはパンを口にすることも、言葉を口にすることもできず、常に謙遜を心に留めていた。それは使徒の言葉、*「主は高ぶる者に敵対し、謙遜な者には恵みを与えられる」*（ヤコブ4:6；参照ペトロ第一5:5）によるものである。

当時、スーズダリの大公はボリス・コンスタンティノヴィチであった[7187]。神の御心により、至福のヨハネは、その偉大な徳、謙遜、そして修道生活における見事な歩みにより、コンスタンティノープル総主教によって、スーズダリ、ニジニ・ノヴゴロド、ゴロデツの各都市の司教に任命された。至福のヨハネに信徒の群れを委ねると、総主教は彼を平安のうちにスーズダリへ送り出した。

司教が街に近づくと、高位の聖職者たちに付き添われた敬虔な大公ボリス・コンスタンティノヴィチが迎えに出た。また、聖職者会議、修道士たち、十字架を掲げた聖職者全員、そして多くの民衆――男女、老人、若者、子供たち――も司教を出迎えた。　司教が城門に近づくと、民衆全員が彼を取り囲んだ。信者たちは彼の前にひれ伏し、聖人から祝福を受け、その足に口づけをしながら、喜びの涙を流して祈りの賛美歌を歌った。　聖ヨハネは民に「主よ、憐れみたまえ」と繰り返し叫ぶよう命じ、天に向かって両手を挙げ、こう祈り始めた。

――主なる神、イエス・キリスト、私たちの神、王たちの王、主たちの主、目に見えるものも見えないものもすべてを創造された方、初めなき父と同質であり、初めなき御子よ！　貧しくみすぼらしい私ですが、あえてあなたの驚くべき、畏れ多い、聖なる御名を呼び求めます。　言葉に尽くせぬ光であるあなたを、私は呼び求めます。あなたは、私たちを救うために、この弱き肉体を身にまとわれました。私の貧しい祈りを拒まないでください。あなたの恵みが、私の謙遜を留まらせるよう定められたこの町を救ってください。　あらゆる都市とあらゆる国を、破滅的な飢饉、地震、洪水、火、剣、異民族の侵攻、そして内乱から救い出してください。あなたは慈悲深き方であり、私たちは永遠にあなたに栄光を捧げます。

祈りを終えると、聖師はこう言いました。

「すべての人に平安あれ。」

民は「アーメン」と応えた。

その後、皆は神を賛美しながら街へと向かった。祈りの聖歌を終えると、ヨハネ司教は、至聖にして至福なる我らの主の母、神の母にして永遠の処女マリアの教会に入り、その尊く栄光に満ちた降誕を祝った[7188]。民衆の一部は司教と共に教会に入り、神聖な聖体礼儀に参列した（）。一方、教会に収まりきらなかった人々は教会の周囲に立ち、神が彼らにこれほど素晴らしく聖なる司教を授け

[7187] ボリスは、聖アレクサンドル・ネフスキーの息子アンドレイの曽孫にあたる。

[7188] この教会は、スーズダリにおけるキリスト教の初期に建てられ、何度か改築されました。石造りの教会は1221年に大公ゲオルギー・ヴセヴォロドヴィチによって着工され、1528年に改修されました。　教会内には、スーズダリの司教である聖ヨハネと聖テオドールという聖人および奇跡行者の朽ちることのない聖遺物が収められた聖遺物箱が安置されている。教会の祭壇、すなわち供物台の背後には十字架が立てられており、その基部にある銀製の聖櫃の中には、主の十字架の聖木の一部が収められている。　教会内には、「スモレンスカヤ」と呼ばれる、至聖なる神の母オディギトリアの奇跡を起こす聖像が安置されている。この聖像は、聖ヨハネがゴロデツの主教を務めていた頃に、ここへ移されたものである。

てくださったことに、神に感謝を捧げた。　聖体礼儀が執り行われた後、敬虔なボリス・コンスタンティノヴィチ公と彼と共にいた者たちは、驚くべき幻視を授かった。彼らは、聖人に神の恵みが、大いなる光の形で降り注ぎ、彼を包み込むのを見た。　司教の手からプロスフォラを受け取ると、敬虔なボリス・コンスタンティノヴィチ公と市民たちは、キリスト・神に栄光を捧げ、至福のヨハネに口づけをして、それぞれ自分の家へと帰っていった。

翌朝、日曜日、至福のヨハネは礼拝を執り行った後、聖座に着座した。彼は忠実な信徒たちに平安を授け、すべての人の心を霊的な喜びで満たした。　司教は集まったすべての人々を慰めの言葉で迎え入れた。その言葉は、使徒の言葉にあるように*「塩で味付けられた」*（コロサイ4:6）ものであり、蜜が流れる川のように人々の心を潤した。ある日曜日にすべての市民を集めると、司教は彼らに次のような霊的な教えを説いた。

「兄弟たちよ、私は恐れています。なぜなら、聖職の位は私の力をはるかに超えているからです。自分の死を思うとき、また私に託された務めの偉大さを考えるとき、私は戦慄を覚えます。私は、聖職の位にふさわしくない者だと自覚しているからです。　しかし、主は私を御言葉の群れの牧者として立てられ、主のみがご存知の運命――それは*「大いなる深淵」*（詩篇35:7）――によって、この奉仕へと導いてくださいました。それゆえ、沈黙することは私にとって罪となるでしょう。私は自分を雇われ人ではなく、牧者であると自覚しなければなりません。　兄弟たちよ、どうかしっかりと立ち、正しい信仰を守り、あらゆる不潔、淫行、偽り、盗み、嫉妬、中傷、偶像礼拝を避け、あらゆる異端とあらゆる悪から遠ざかり、神の聖なる教会に頻繁に参拝し、正義を守ってください。なぜなら、使徒はこう言ったからです。　*「だれも、すでに据えられている土台以外のものを据えることはできません。その土台とは、イエス・キリストです」*（Iコリント3:11）。この土台は、聖なる使徒たちと神を宿した聖なる教父たちによって据えられました。それは、聖なる全地公会議によって宣教され、確立され、解明された正教の信仰です。　この信仰の土台の上に、使徒の教えに従い、私たちは金、銀、宝石を築き上げなければならない[7189]　――端的に言えば、この土台の上に善行を築き上げなければならない。なぜなら、神への正しい信仰を欠いた生活は、啓発されていない生活であり、善行を伴わない信仰は、私たちを神のもとへ導くことはできないからである。　神に属する完全な人となり、私たちの生活に欠陥がないようにするためには、この両方を守らなければならない。なぜなら、使徒は、*「愛によって働く信仰」*のみが救うと語ったからである（ガラテヤ5:6）。

着任して間もなく、イオアンは、敬虔なる大公ボリスの命により、聖公会と聖職者たちを率い、十字架とイコンを携え、主への祈りの賛美歌を歌いながら、街を見渡し、市内およびその周辺を巡礼した。　すると、敬虔なる大公ボリス・コンスタンティノヴィチが、他の貴族、諸侯、ボヤールたちと共に彼のもとに歩み寄り、祝福を求めた。司教は彼らに祝福を与えた。そこで大公は彼に五百ズラトニクを授け、こう言った。

「司教様、新たに任命され、この地へ来られたばかりであるあなたには、今、貧しい教会の信徒たちに配るべきものが多くあります。どうか、この私たちの献げ物をお受け取りください。」

しかし、ヨハネはそれを受け取ることを拒んだ。すると、大公は再び彼に言った。

「尊き父よ、このわが子のささやかな献げ物を受け取ってください。」

その熱意を見て、聖人はその贈り物を受け取り、金を配るよう使用人たちに手渡した。そして、敬虔な大公には、詩篇の作者の言葉を引用してこう言った。

「*主があなたの心の願いを叶え、あなたのすべての計画を成就してくださいますように。主があなたのすべてのいけにえを覚え、あなたの全焼のいけにえを豊かにしてくださいますように*」（詩編19:5,4）。

[7189] コリントの信徒への手紙一 3:12。

街を一巡した後、司教は聖職者会議、聖職者たち、諸公爵、貴族、そして民衆を率いて、聖母マリアの聖堂に入り、そこで神聖な聖体礼儀と祈祷式を執り行った。　礼拝の終了後、公爵は司教の食堂で昼食をとり、民衆全員にパンを振る舞うよう命じた。腹を満たした人々は、それぞれ自分の家へと帰っていった。

ヨハネ司教は熱心に霊的な務めに専念し、教え、戒め、励まし、慰めを与えた。また、貧しい人々を惜しみなく助け、その行いによって、すべての人々に敬虔な生活の模範と規範を示した。　司教区の収入があまりにも豊富であることを知ったヨハネは、その一部を病院に充てるよう命じた。彼はその病院を整備し、二人の敬虔な司祭にその監督を任せて、必要な物資の供給に配慮させた。司教は頻繁に病人を訪ね、必要なものをすべて届け、彼らの回復を気遣った。　で霊的な言葉を説き、彼らを励ました。なぜなら、彼の魂に益となる言葉を聞くことで、彼らは自らの苦しみを忘れていたからである。司教職に在任中、彼は福音書の言葉に従い、自分の羊の群れのために自分の命を捧げ（ヨハネ10:11）、愛をもってすべての者の救いを気遣った。　この神の忠実なしもべが成し遂げた功績を、ふさわしい形で語り尽くすことは不可能である。彼は神に祈りを捧げ、祈りの際には、まるで青銅で鋳造された像のように、揺るぎない姿勢を保っていた。　彼は寡黙で柔和であり、決して怒ることはなく、貴族にも庶民にも等しく計り知れない愛を注ぎ、虚栄や偽りを嫌った。これらの美徳に加え、彼は教導と言葉の賜物にも恵まれていたため、スーズダリだけでなく、周辺の他の町々からも多くの人が教えを求めて彼のもとに訪れた[7190]。聖人は、華美な言葉ではなく、すべての人を悔い改めへと導く教訓的な言葉で語った。富める者には、富を誇ったり、はかない富に頼ったりしないよう教え、未亡人には、断食と節制に励み、派手な装いを避けるよう教えた。

聖人から霊的な賜物と魂の恵みを受けた教えを受けた人々は、彼に導かれてそれぞれの家へと帰り、そのような牧者を与えてくださった神に感謝した。また、そのうちの多くは世俗を捨て、修道者の生活を送ることを選んだ。

ある日、至福のヨハネはいつもの習慣に従い、主イエス・キリストの御母の聖像の前で祈りを捧げていた。彼は頻繁にそのイコンを見つめながら、次のように祈った。

「おお、至聖なる神の母よ、人類の力強い守護者であり助け手よ、どうか御子のもとで私たちのために執り成し、御子が高きところからこの町とこの修道院を見守ってくださいますように。」

至聖なる聖母マリアへの感謝のカノンを唱え、定めの祈りを終えた後、至福のヨハネは休息のために腰を下ろした。しかしその時、敬虔なボリス・コンスタンティノヴィチ公が彼の元を訪れた。聖人から祝福を受け、祈りを捧げた後、公は彼と二人きりで、魂の益について語り合った。　敬虔な思いに満ちた公爵は、次のような善意の意図を聖人に打ち明けた。

「聖なる父よ、私を祝福してください。そして、主なる神に熱心に祈ってください。あなたの聖なる祈りによって、私が望むものを授かるよう、神が私を恵んでくださいますように。私たちの領地にあるスーズダリの町には、共同生活を行う修道院がありません。　もし主が、あなたの祈りによって、私が主なる神と私たちの救い主イエス・キリスト、そしてその尊き変容の名に因む石造りの教会を建立し、その隣に修道院を築くことをお助けくださるなら。それが私の心の底からの願いです。父よ、私を祝福し、このことについて神に懇願してください。　私は、あなたの祈りによって、ニジニ・ノヴゴロドにある、偉大なる聖ディオニシウス[7191]のペチェルスク修道院へ向かいます。そこで

[7190] 聖ヨハネが、大公ボリスの父コンスタンティンによって一部が征服されたモルドヴァ人の間で、神の御言葉の種を熱心に蒔いたという伝承がある。

[7191] 聖ディオニシウス・スーズダリスは、ニジニ・ノヴゴロドから5ヴェルスタ離れたペチェルスク修道院の創設者である。聖アレクシウス大主教は彼をスーズダリの司教に任命した（聖ヨハネに続く初代または二代目の司教）。　聖ディオニシウスはコンスタンティノープル総主教によって大司教に叙任され、2年後にはキエフ都主教に任命された。1384年に死去し、その記念日は6月26日に祝われる。

、神の聖堂の建設と修道院の整備に熟達した弟子の一人を、彼に与えてくださるようお願いするつもりです。聖ヨハネはこう言いました：

「おお、偉大なる公爵よ、あなたは善き行いを望んでおられます。主なる神が、あなたの助け手となり、あなたの魂に益となるこの取り組みを導き、あなたの道を守ってくださいますように。」

公爵のために祈りを捧げた後、司教は彼に祝福を与え、キリストの名による霊的な口づけを授け、平安のうちに彼を見送った。　敬虔なボリス公は大きな喜びに満たされ、ニジニ・ノヴゴロドにある、我らの主イエス・キリストの昇天を称える聖なる修道院へと向かった。そこでは、以前にも祈りと祝福を求めて訪れていた尊いディオニシウス神父が待っていた。　このペチェルスクの修道院を深く愛していた公は、必要な物資をすべて供給していた。当時、修道院には780人の修道士がいた。

修道院に到着すると、　ボリス公はディオニシウス尊師と独室で二人きりになり、魂の益について長く語り合い、聖ヨハネ司教とその生涯について語った。すなわち、彼が貧しい人々を憐れみ、病人を訪ね、未亡人を助け、また、修道生活を送る者たちの集いの場として共同修道院を建設することを公に祝福してくれたことなどである。　ディオニシオス尊者に地面に頭を下げて礼を捧げた後、公はこう言った。

「父よ、私を祝福してください。そして、修道院の建設に熟達したあなたの弟子の一人を、この修道院から私にお与えください。そうすれば、私の願いが叶わずにスーズダリへ戻ることはありません。」

聖ディオニシウスは、すべてについて神に感謝し、神の言い表せないほどの慈悲を称え、こう言った。

「おお、公爵よ、あなたは善き業を成そうとしておられます。我らの主イエス・キリストが、あなたの魂に益となるこの取り組みを助け、敬虔へのあなたの志を導いてくださいますように。なぜなら、*『あらゆる完全な賜物は、上から、諸光の父から下る』からです*（ヤコブ1:17）。」

祈りを捧げた後、聖ディオニシウスは公に祝福を与え、公が求めたすべてのことを約束して、平穏のうちに彼を見送った。　敬虔なボリス・コンスタンティノヴィチ公は、主が彼の願いを叶えてくださったことに喜びと歓びに満たされ、帰路につき、スーズダリの街へと向かった。その際、彼は修道院建設のために石と石灰を運ばせるよう命じた。

一方、尊者ディオニシウスは、公の願いに応じて、自身の修道院の修道士たちの中から、従順な弟子であるエウフィミイという名の者を選んだ。

「わが子よ」と、尊者ディオニシウスはエウフィミウスに言った。「苦難の中でも落胆してはならない。主はあらゆる善き行いにおいて、あなたの助け手であり導き手である。神に守られた都市スーズダリへ行きなさい。そこにある、至聖なる聖母マリアの栄光に満ちた聖堂で、あなたは聖なるヨハネ司教に会うだろう。」

当時、至福のエウフィミイは年齢的にはまだ若かったが、霊的な知恵においては、長年の白髪に飾られた長老たちをも凌駕していた。彼はわずか36歳であった。尊者ディオニシウスから、目に見える敵や目に見えない敵に対する鋭い槍のような祈りを受け取ったエウフィミイは、修道院の西へと向かった。

そして主は、彼にその道を容易に、遅滞なく歩む力を与えられ、まもなく彼はスーズダリの街にたどり着いた。神の母に捧げられた素晴らしく美しい教会を目にすると、エウフィミオスは中に入り、我らの主イエス・キリスト、その聖母マリア、そしてすべての聖人の聖像の前にひれ伏した。ヨハネ司教の前でひれ伏した後、彼は司教に祝福と祈りを求めた。ヨハネはエウフィミオスを祝福し、キリストの名において彼に口づけを授け、司教の居室へと案内した。

そこで彼はエウフィミオスと、魂の益について長く語り合った。対話を終えると、彼らは主に向かって徹夜祈祷を捧げ、主が彼らを助けるために天使、すなわち忠実な導き手を遣わしてくださるよう願った。夜明けが近づくと、聖ヨハネはいつもの朝の聖歌を唱え、平和の挨拶を交わした後、エウフィミオスに口づけをして彼を見送った。

翌日、日曜日、早課と神聖な聖体礼儀が終わると、ヨハネ司教は再びエウフィミウスを呼び、霊的な対話を交わした。

大公ボリス・コンスタンティノヴィチがスーズダリに到着したことを知ったエウフィミイは、彼のもとへ向かった。大公は彼の訪問を大いに喜び、大いなる敬意をもって迎え入れ、*「水の流れを慕う雌鹿のように」*（詩篇41:2）彼の到来を待ち望んでいたと語った。

長い対話を交わした後、彼らはヨハネ主教のもとへ赴き、その食卓でパンを分かち合った。ボリス・コンスタンティノヴィチ大公は、至福のヨハネに、ペチェルスクのディオニシウス聖人について、その生涯、偉大な功績、そして偉業を一つひとつ詳しく語った。

ヨハネはこれに対し、次のように述べた。

「公爵よ、使徒の言葉*『自分の家を治めることさえできない者が、どうして神の教会を顧みることができるだろうか』*（テモテへの手紙一3:5）に従い、ためらいも疑いもなく、始めたことを成し遂げなさい。善き始まりには、神から善き結末が与えられるはずである。　あなたはすでに、高潔で聖なる長老、尊者ディオニシオスから祝福と祈りを受けておられます。そして今、彼はあなたのもとへ、従順な弟子であり、勤勉で断食に励む者、　このエウフィミオスを遣わされました。彼は神の恵みにより、あなたの事業を始め、成し遂げ、これらのキリストのための奮闘において、他の人々にとっての模範となることができるのです。

そこで、公爵は席から立ち上がり、司教に地面まで頭を下げて、主が示される将来の修道院の場所へ、自分とエウフィミオスと共に同行してほしいと懇願した。そして彼らは、聖職者会議と聖職者一同、十字架とイコンを携え、祈りの歌を歌いながら、その場所を探しに出かけた。　彼らには、高官や公爵、ボヤール、そして多くの民衆――男、女、子供たち――が同行した。　道中、人々はヨハネの足元に中風を患う者たちを寝かせ、彼に癒やしを請うた。聖人は彼らの癒やしのために神へ密かな祈りを捧げ、彼らに十字架と自らの手を置き、聖水を振りかけた――するとその瞬間から彼らの病は治まり、彼らは神に感謝しつつ聖人の足に口づけをした。　民衆全体が大きな喜びに包まれ、皆が驚き、この聖人はアクラガンティの教会の聖グリゴリウス司教に似ていると言っていた。[7192]。

こうして、大公、聖ヨハネ、そして福者エウフィミオスは、人々に取り囲まれながら、祈りの賛美歌を歌いながら進んだ。神の導きにより、彼らは城の外へ出て、城の周囲を四方すべて見渡した後、北側へと向かい、彼らの都市が築かれたカメンカと呼ばれる川を遡っていった。　そこで、町の近く、川のほとりの高い山の上に、眺めが素晴らしく、修道院を建てるのに適した場所を見つけ、彼らはその場所をその目的のために選んだ。聖ヨハネは、聖職者一同とともにこの場所を祝福し、聖別し、主に向かって次のように祈りを捧げた。

「主なる私たちの神よ、あなたは御自身の血を流して、聖なる御教会を刷新されました。今、私たちは謙虚にあなたに祈ります。この地にあなたのために建てられる聖堂の礎に、聖霊の恵みを注いでください。　この教会が御栄光の住まいとなり、賛美歌と聖歌によって御威光が称えられ、また、この教会で祈る者たちが、天と地を満たす御恵みを御前から受けられますように。彼らを救い、将来の災いから守り、御栄光に与らせてください。

聖ヨハネの祈りに応じて、彼は祭壇の設置場所に尊い十字架を立てました。そして、敬虔な大公は自らの手で鍬を手に取り、教会の基礎となる堀を掘り始めました。これは1352年のことでした。

[7192] シチリアのアグリジェントの司教である聖グリゴリイは、霊的な賜物が極めて豊かであったことで知られ、手を触れるだけで病を癒やした。その記念日は11月23日である。

神の御加護により、主なる神、そして我らの救い主イエス・キリストの御名、その尊く神に似せられた変容に捧げられた、美しい石造りの教会が建てられた。　そして、敬虔な大公はあらゆる手段を尽くしてその教会を美しく飾り立て、聖ヨハネは至福のエウフィミオスをアルヒマンドリトに任命し、ミトラを戴き、杖とリピダを携えて聖職の務めを執るよう命じた。　ボリス・コンスタンティノヴィチ大公は、修道院の建設に必要なすべてのものを至福のエウフィミオスに与えた。こうして共同生活の修道院が整えられ始めた。まもなく、その修道院の修道士数は300人に達した。

我らの主イエス・キリストの変容の尊い祝日に、至福のアルヒマンドリト・エウフィミオスは、他の断食者や熟練した修道士たちと共に、修道院から司教邸へ、聖ヨハネのもとを訪れた。そして彼らは聖人に、彼らの修道院で神聖な聖体礼儀を執り行ってくださるよう懇願した。　承諾を得ると、エウフィミオス大修道院長は直ちに修道院に戻り、すべての兄弟たちと共に司教を出迎えた。　至福のエウフィミオスに口づけをした後、偉大なるヨハネは、彼や他の修道士たち――キリストのぶどうの枝であり、霊的な羊たち――と共に、祈りの聖歌を歌いながら教会へと入っていった。　聖体礼儀の最中、主イエス・キリストの変容教会に、敬虔なボリス・コンスタンティノヴィチ大公が訪れ、そこで不思議な幻を目撃した。彼には、司教と共に、明るい祭服を身にまとった男が奉仕しているように見えたが、その輝かしい姿は恐ろしく、言葉では言い表せないほどであった。　聖体礼儀が終わると、大公は好機を捉えて聖ヨハネのもとへ歩み寄り、地面にひれ伏して、自分が見た幻について説明を求めた。司教は、その秘密を明かすことを望まず、大公にこう言った。

「公爵よ、私がこの霊的な羊の群れの良き牧者と共に神聖な典礼を執り行ったことに、一体何が不思議だというのですか。ここには、陛下もご存知の修道司祭たちだけが同席しており、他の司祭は一人もいませんでした。」

しかし、公爵は聖ヨハネに、その幻について説明してほしいと懇願し続けた。そこで聖人は彼にこう言った。

「もし神があなたに幻をお示しになったのなら、私がそれを隠すことなどできようか？　あれは主の御使いであり、今だけでなく、常に神の御臨在によって、不適格な私と共に奉仕してくださったのである。しかし、私が生きている間は、あなたが見たことを誰にも話してはならない。」

聖人はそう語った。謙虚な彼は、自身の善行や、神から授かった報いが他の人々に知られることを好まなかったからである。そして、どの美徳が最も高尚であるかと問われると、彼は「密かに行われる美徳」と答えた。

至福のエウフィミオスは、兄弟たちと共に、敬虔な公爵と聖ヨハネ司教に対し、食事の席に同席してくださるよう懇願した。食事が用意されると、彼らは皆、主に感謝を捧げ、腹を満たした後、霊的な対話を交わし始めた。　その時、大公の望みと、アルヒマンドリト・エウフィミオスおよび彼と共にいた修道士たちの願いに応じて、至福のヨハネは教訓の言葉を述べた。「父たちよ、兄弟たちよ、私のような不適格で無力な者が、あなたがたに霊的な益について説くのはふさわしくありません。　救いを望む者なら誰でも、何よりもまず信仰を守り、それに従って生活すべきであることは、誰もが知っていることです。なぜなら、節制のある生活であっても、正しい信仰がなければ何の益ももたらさないからです。同様に、善行を伴わない信仰も、私たちを主の御許に近づけることはできません。しかし、完全さを求めるならば、その両方が備わっていなければなりません。　信仰は*「愛によって働く」*ものでなければなりません（ガラテヤ5:6）。愛はすべての美徳の源であり、すべての美徳はそこから生まれました。　私たちは悪事から遠ざかり、善行に励み、天にふさわしいことだけを心に留めるべきです。　私たちは、キリストの福音に従い、謙遜、従順、清さ、肉欲の自制、愛、憐れみ、人愛、そして神への畏れをもって生きるべきである。*「わが身はあなたの畏れに震え、あなたの裁きを恐れる」*　（詩篇118:120）という御言葉に従って、謙遜、従順、清さ、肉欲の自制、愛、憐

れみ、人愛、そして神への畏れをもって生きるべきです。自らの改心を怠ってはなりません。明日何が起こるかは誰にも分からないからです。多くのことを計画しても、翌日にはその計画の何一つ達成できないことがよくあるのです。　それゆえ、もし私たちが悪から遠ざかり、示された美徳を熱心に追い求めるならば、救われ、狭く苦難に満ちた道を歩みながら、天の御国に到達するであろう。

この談話を終えると、聖ヨハネは司教の邸宅へと戻っていった。彼の清らかな生き様を見た悪魔――古来より人類に害をもたらしてきた者――は、この義人に対して戦いを仕掛けた。　聖人の助祭であるエレウフェリウスという者は、数人の教会関係者と共にある娼婦を説得し、彼女に多額の銀を約束して、公爵の前で司教を誹謗中傷する好機を伺った。彼らは民衆を扇動し、司教の邸宅に押し入り、聖ヨハネを不名誉と侮辱のうちに町から追放した。　しかし、聖ヨハネは、主イエス・キリストの寛容さを心に留め、彼らの激しい攻撃に対して何も反論せず、町を出る際、東を向き、両手を天に掲げて、自分を憎む者たちのために神に祈り、こう言った。

「主よ！　彼らにこのことを罪として数えられませんように。」

すると、その祈りがまだ彼の口にあるうちに、主の怒りが教会関係者たちを襲い、彼らを恐怖と戦慄が包み込み、闇が彼らを覆った。彼らは完全に目が見えなくなり、導きを必要とした。これを見た民衆は聖人の足元にひれ伏し、叫びと涙をもって許しを請うた。　聖人は彼らを赦し、祝福した。自らの罪を悔い改め、エレウフェリウスは涙ながらにヨハネの足元にひれ伏し、こう言った。

「神のしもべよ、私を憐れんでください。そして、あなたに対して抱いた、この謙虚な者である私の不法で罪深い企みを、お赦しください。私の主なる神が生きておられる限り、あなたが私の不法な企みを赦すと約束してくださるまで、私はあなたの聖なる足元から離れません。私が犯した悪事を思い出さないでください、尊い父よ。」

そして、エレウフェリウスは長い間、この言葉を尊者に対して繰り返した。すると、至福のヨハネはこう答えた。

「おお、人よ、あなたが考えているように、私たちが赦しを約束すべきなのではなく、ただ唯一の慈悲深い神だけが赦すことができるのだ。私たちのために苦難に耐え抜かれた方が、私たちの魂の傷を癒やしてくださる。主は私たちの罪を赦し、私たちを清めてくださる。なぜなら、主は世の罪を自ら引き受けられたからである。」

エレウフェリウスを地面から起こすと、ヨハネは彼にこう言った。

「主よ、わが子よ、主はあなたを赦してくださるでしょう。」

聖人は、罪を犯したエレフテリウスと、彼に惑わされた聖職者たちのために、人々の前で祈りを捧げ、彼らに十字の印を施した。すると彼らはたちまち目が見えるようになった。人々は皆、畏敬の念を抱き、聖人たちを通して驚くべき奇跡を行われる神を賛美した。

聖ヨハネによって行われた奇跡の現場で、スーズダリの市民たちは、ホネフに「神の総大天使ミカエルの奇跡」にちなんで教会を建立することを決意した。というのも、その奇跡は、総大天使ミカエルの奇跡を祝う日に司教によって行われたからである。　聖ヨハネの祝福により、まもなくこの教会が建立され、市民たちは教会のために自分たちの土地の一部を割り当て、聖人の名にちなんで、その地をイヴァノフスキー村[7193]と名付けた。

ある日、大公ボリス・コンスタンティノヴィチの弟である敬虔なアンドレイ公が、聖ヨハネのもとを訪れた。いつもの祝福と祈りの後、公は司教にこう言った。

「おお、神に愛された聖人よ、あなたに一つの恩恵をお願いしたいのです。」

すると、その慈愛に満ちた牧者はこう答えました。

[7193] 1578年、ウデルヌイ公ウラジーミル・アンドレイヴィチの妻であるエウプラクシア公妃が、聖ヨハネの棺に敷かれた覆い布に、次のように記されたトロパールを刺繍した。　「悪意ある聖職者に対し、祈りによって速やかに目を開かせ、教え導き給え。かつて聖レオンティウスがそうであったように――彼を縛り、再び祝福し給え」。

「あなたに禁じられたことは何一つありません。」

「私は、修道女たちのための修道院を建立することについて、あなたから祝福をいただきたいのです。というのも、私に奇跡が起きたからです。」　ある日、我々はニジニ・ノヴゴロドからヴォルガ川を下っていたが、川上で猛烈な風が吹き荒れ、巨大な波が次々と押し寄せ、舟が次々と砕け始め、全員が死の危機に瀕した。その時、　、船乗りたちは神に祈りを捧げ始めた。私も彼らと共に、主が迫り来る災いから我々を救ってくださるよう祈った。　そこで私は、至聖なる聖母マリアの名において、その「ポクロヴァ（聖母の庇護）」を称え、その栄光を讃えるために教会を建立し、修道女たちの住まいと安らぎの場となる修道院を設立することを、神に誓願した。するとたちまち、川上の荒波は収まり、静けさが訪れた。今こそ、私の誓願を果たす時である。

司教はこれに対し、次のように答えました。

「お前の願いを妨げるつもりはない。」

敬虔な公爵は言った。

「尊い父であるアルヒマンドリトのエフフィミイを呼んで、川岸のどこに修道院を建てるのが適しているか、彼に尋ねよう。」

相談した末、彼らはアルヒマンドリトを呼び寄せた。彼はやって来て、彼らに頭を下げ、こう尋ねた。

「なぜ私をお呼びになったのですか、諸君？　私がここへ来る必要があったのは、何のためでしょうか？」

彼らは言った。

「長さ・幅ともに7サジェーンの土地をください。神の御加護のもと、あなたが佇むその川辺に、修道院を建てたいのです。あなたは良き羊飼いであり、キリストのぶどう畑の働き手です。」

公爵は、ヴォルガ川で自分に起こった出来事と、修道女たちが住むための修道院を建立すると誓ったことについて彼に語った。すると、至福のエウフィミオスは言った。

「おお、公爵よ！　主の地とその果てまで。もし神の御心にかなうならば、あなたが修道院の建設を求めているその場所が祝福されますように。」

公爵は聖エウフィミオスに頭を下げ、修道院に多額の施しを贈った。その後、彼はカメンカ川沿い、聖エウフィミオスの修道院の対岸に場所を選んだ。　ここで、神の御加護により、聖母マリアの名を冠した木造の教会が、その栄光ある「聖母の庇護」を記念して建てられ、修道院が設けられた[7194]。これは1364年のことである。 修道院の長老職を、イオアン司教は至福のエウフィミオスの姪に委ねた。彼は彼女を、同じスーズダリ市内の[7195] にある聖大殉教者アレクサンドルのラヴラから、この地へ移してきたのである。　しばらくして、ヨハネ司教は修道院を訪れ、それを称賛し祝福するとともに、魂の益について説教した後、自らの住居へと戻った。

このように、聖ヨハネは自らの霊的な羊の群れを慈しみ、彼らを霊的な牧草地へと導いた。そして、この聖人はスーズダリだけでなく、遠く離れた国々においても、星のように輝いた。キリストにあって神に喜ばれる羊の群れを導きながら、彼は聖なる老齢に達した。

[7194] 聖エウフィミオスは、この修道院の栄光を予言した。その後、全ロシア大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチの妻ソロモニアがここで修道衣をまとい、修道名ソフィアと名付けられた。　修道院で17年間を過ごした後、彼女は1542年12月16日に逝去した。彼女の聖遺骨は、ポクロフスカヤ教会の玄関の下にある石棺に納められている。

[7195] 聖殉教者アレクサンドル修道院は、伝承によれば、聖アレクサンドル・ネフスキーによって、彼と同じ名を持つ聖人を称えて建立されたとされる。

司教の座を退いた後[7196] 、彼はボゴリュブスクの至聖なる聖母マリア修道院[7197] へ退き、そこでスキマ（隠者）の戒律を受け、絶え間ない沈黙の中で暮らした。

その至福の臨終の時が近づくと、聖ヨハネは病に倒れましたが、それは長くは続きませんでした。肉体を離れるその時、彼は私たちの主イエス・キリストの聖なる、清き御体と御血の聖餐を受け、1373年10月15日に主のもとで安らかに息を引き取りました。　彼の聖遺骨は、賛美歌が歌われる中、スーズダリの街へと移送された。

スーズダールで聖ヨハネの帰天が知れ渡ると、ディオニシウス司教をはじめとする聖職者や世俗の者たちは、ろうそくと香炉を手に、聖人の遺骨を迎えるために街へと出向いた。　彼らは敬虔に聖遺物を出迎え、聖母マリアの降誕大聖堂の右側に尊厳をもって安置した。そこでは、聖遺物は今もなお朽ちることなく眠り続け、信仰をもって訪れる人々を助け、癒やし、私たちの神キリストの栄光のために、彼に永遠の栄光がある。

1743年10月27日、聖殉教者ネストルの記念日に、聖ヨハネの棺の前で奇跡が起こった。

いつものように早課の鐘が鳴らされた後、夜明けの3時間前、深夜の祈りが終わろうとするまさにその時、教会の番人が聖母マリアの降誕大聖堂から出て、鐘を鳴らす合図をしようとしたところ、裸足で、開いたままのカフタン一枚を身にまとった男が教会に入ってきた。　彼はすぐに右側の柱の後ろ、スーズダリの司教である聖ヨハネと聖テオドロという二人の聖なる奇跡行者の聖遺物箱へと駆け寄り、こう叫んだ。

「聖なる方よ、ヨハネ神父よ、キリストの御心にかなう者よ、私を憐れんでください。」そう言うと、彼は泣きじゃくりながら地面にひれ伏した。

見知らぬ男の異様な叫び声を聞いた教会にいた聖職者たちは、彼のところへ近づき、地面から起こして、彼が誰なのか、なぜ叫んだのかと尋ね始めた。すると彼は涙ながらに次のように語った。

「私の名はイワン・ヴァシリエヴィチ・ジンキンと申します。この町のポサドの出身です。3月から重い病に冒されており、右手と左足が動かなくなり、舌も動かなくなりました。当時ははっきりとした言葉を話すことができず、かすかで不明瞭な音を発しながら、左手で合図を送っていました。　その日の夕方、寝台に横たわりながら、私は主なる神を怒らせてしまった自分の罪を思い返し、泣き出した。　そして私は心の中で、私の寝床のそばにあった聖なる聖母マリアのイコンに助けを求め、さらに、神の御心に適う者たち、聖人であり奇跡を行う者であるスーズダリの司教ヨハネとテオドール、そしてラドネジの修道院長であり奇跡を行う聖者セルギイにも祈りを捧げた。　その時はすでに真夜中を過ぎていたため、家族は皆眠っていた。私が泣いていると、横たわっていた部屋に光が差し込んだのを見た。すると、白い衣をまとった男が現れた。彼は私の寝台のそばに立ち、両手を天に向けて祈った。

「慈悲深き主よ、あなたの被造物を憐れんでください。」

これを聞いて、私は体の中の病の痛みを感じなくなり、現れたその方に思い切って尋ねた。

「あなたはどなたですか、神の聖なる方よ。」

すると彼は答えた。

「私はスーズダリの司教ヨハネである。私の聖遺物が安置されている大聖堂へ行きなさい。そこで、あなたの病は完全に癒やされるだろう。」

[7196] 1365年にアンドレイ・コンスタンティノヴィチ公が死去すると、その兄弟であるボリス公とドミトリー公の間で激しい争いが勃発した。当時、スーズダリ、ニジニ・ノヴゴロド、ゴロデツは、大主教座の管轄下に編入されていた。

[7197] ウラジーミル市の近く。

私はその尊く聖なる御足にひれ伏そうとしたが、彼はたちまち姿を見えなくなり、住居に輝いていた光も消え去った。八ヶ月間横たわっていた寝台から起き上がると、私は健康を取り戻したのを感じ、直ちに大聖堂へ向かい、神の御使いに感謝を捧げた。

癒やされた者の話を聞いた司祭たちは驚き、教会の番人をヴァシリエフ修道院の近くにある彼の家へ送り、家族にこの出来事を知らせさせた。　癒やされた男の家族は、彼が家にいないことに大いに驚いた。まもなく、彼の母と妻が大聖堂にやって来て、普段着を持ってきて、そこにいた人々に、このイワンが確かに重い病に冒されていたこと、そして彼がどのようにして癒やされたのか自分たちには分からないと告げた。　彼らは神の御心に適う者の聖遺物の前でひれ伏し、温かい涙を流しながら、奇跡を行う聖人ヨハネに深い感謝を捧げ、祈祷式を執り行った後、自宅へと帰った。

一方、癒やされた男は彼らと共に帰らず、大聖堂に三日間留まり、涙を流しながら教会の聖歌に耳を傾けていた。　三日後、彼は霊的指導者であるヴァシリエフスキー修道院の司祭の前で懺悔の秘跡を受け、修道院でキリストの御体と御血の聖体拝領を行った後、自宅へと戻った。彼は喜び、神を賛美し、感謝するとともに、偉大なる聖人であり奇跡行者であるヨハネ、　スーズダリの主教である。この奇跡についての記録に、イワンは癒やされた右手で署名し、当時教会に居合わせた聖職者たちもこの奇跡を証言した。

スーズダリの主教ヨハネへのトロパリオ：

神のカトリックかつ使徒的な教会を統率し、神の戒めを守り、御言葉の羊の群れを極めてよく牧した。　悪意ある聖職者を、その祈りによって正気に戻らせ、かつてロシアの地の救いの助ける者、ロストフの教師である聖レオンティウスが、まず縛り、そして再び祝福したように、彼を教え導きました；　かくして、聖スージダリの司教よ、救い主であり奇跡行者であるヨハネよ、あなたのもとに駆け寄る災いから、キリスト・神に祈り、私たちの魂が救われるよう願ってください。

スーズダリの聖ヨハネと聖テオドロス両主教へのトロパリオ：

使徒に等しいスーズダリの地の導き手、魂と肉体の賢明な癒し手、神に愛された奉仕者たちよ、あなた方の尊い聖遺物の前に駆け寄り、神に祝福された聖なる司教たちよ、あなた方を称え、　テオドールとヨハネよ、歌と賛美をもって喜びつつ、あなた方に癒しの恵みを授け、私たちの都スーズダリにあなた方を通して偉大な確固たる基盤を築いてくださったキリストを賛美します。

10月29日

10月16日（旧暦）

聖殉教者ロンギヌス百人隊長の生涯と殉教

記念日 10月16日

私たちの主イエス・キリストが、その言い表せないほどの慈しみにより、ご自身の自発的な受難、十字架、　死、そして復活によって私たちを滅びから救ってくださるよう御心をお示しになったとき、カッパドキア出身のロンギンという名の百人隊長が、ピラトの支配下にありながら、自らの兵士たちと共に、イエス・キリストの受難と磔刑の現場で奉仕するよう命じられました。　キリストの

十字架の傍らで起こった奇跡――地震、日食、開かれた墓、そこから蘇った死者たち、そして岩の崩壊――を目撃した百人隊長ロンギンは、キリストこそが神の子であると告白した。この出来事について、神聖な福音記者マタイは次のように述べている。 *「百人隊長と、イエスを見張っていた者たちは、地震や起こったすべてのことを見て、大いに恐れおののき、『まことに、この方は神の子であった』と言った」*（マタイ27:54。マルコ15章およびルカ23:47参照）。 このように、キリストを信じた百人隊長ロンギノスについて、神の福音書は証言している。一方、教会の伝承は、福音書に記された証言に加え、ロンギノスが、十字架にかけられた主イエス・キリストの脇腹を刺し、そこから流れ出た血と水によって、自身の目の病を癒やされた兵士であったと伝えている。 その同じロンギヌスは、ピラトによって、棺に横たわっていたイエス・キリストの命を与える御体に付けられた警備兵の一人でもあった。 そして、主が墓から栄光のうちに復活し、その驚くべき復活によって警備兵たちに恐怖を植え付けた時[7198] 、ロンギヌスと二人の兵士はついにキリストを信じ、キリストの復活を宣べ伝える者となった。彼らはピラトと祭司長たちに、起こったすべてのことを告げたからである。 祭司長たちと長老たちは会議を開き、兵士たちに十分な金を与え、キリストの復活について口をつぐむよう命じ、彼らが眠っている間にキリストの弟子たちが夜中にやって来て、キリストを盗み出したと告げさせた（マタイ28:11–13）。しかし、ロンギヌスは金を受け取らず、その奇跡を隠そうともせず、かえってさらに熱心にそのことを証しするようになり、彼の証言は真実であった。そのため、ピラトとユダヤ人の全集団はロンギヌスを憎み、かつてキリストに対して抱いていた怒りのすべてを、今やロンギヌスに向け始めた。 ロンギンは、キリストこそが真の神であり、自分、ロンギンこそがその命を与える死と復活をこの目で目撃した者であると、公然と宣べ伝えた。 この証言のため、ロンギヌスはイエス・キリストの敵たちから憎悪と迫害にさらされ、彼らは彼を滅ぼす口実を探し始めた。しかし、彼に罪を見出せず、決断を下すことができなかった。なぜなら、ロンギヌスは兵士たちの中で最年長であり、誠実な人物で、カエサル自身にも知られた人物だったからである。 ロンギヌスは彼らの悪意を知ると、ユダヤ人の集落で暮らすよりは、彼らから拒絶されてもキリストと共にいることを選んだ。 彼は兵士としての地位、服、帯を捨て、キリストに対して同じ熱意を持つ二人の友を連れて、人々の交わりから離れ、唯一の神への奉仕に身を捧げた。 聖なる使徒たちから洗礼を受けたロンギンは、まもなくエルサレムを離れ、友人たちと共にカッパドキアへと向かった。そこで彼はキリストの説教者であり使徒となり、多くの人々を迷いから神へと導いた。 その後、その町を後にしたロンギンは、父の故郷の村に住み、断食と祈りに専念する静寂な生活を送った。

まもなく、ロンギンがカッパドキア全土で自らの教えを広め、キリストの復活について説教していることが、エルサレムのユダヤ人集会全体に知れ渡った。そこで、嫉妬と怒りに満ちたユダヤ人の祭司長や長老たちは、 多くの贈り物を携えてピラトのもとへ赴き、ロンギンが軍人としての地位を捨て、ローマ当局への服従を拒否し、カッパドキアで「別の王」について説教して民衆を扇動しているという報告を、ローマの皇帝ティベリウスへ送るよう懇願した。 ピラトは贈り物を受け取ると、ユダヤ人たちの要求に同意し、ティベリウス皇帝へ[7199] ロンギンに対する激しい誹謗中傷を含む書簡を送った。 このピラトの手紙とともに、ユダヤ人たちは自ら多くの金を皇帝に送り、それによって聖ロンギヌスの死を買い取ったのである。まもなく、皇帝ティベリウスから、ロンギヌスを皇帝の敵として処刑せよという命令が下ったからである。 ピラトは直ちに兵士たちをカッパドキアへ派遣し、ロンギヌスの首を切り落とし、それをエルサレムへ持ち帰らせて、ユダヤ人の群衆にロンギヌス

[7198] この出来事について、福音書記者は次のように述べている。*「主の御使いが天から降りてきて、墓の入り口の石をどかし、その上に座った……御使いを恐れて、見張っていた者たちは震え上がり、まるで死人のようになった」*（マタイ28:2,4）。

[7199] ティベリウスは14年から37年まで在位した。彼の治世中に、主イエス・キリストは十字架にかけられた。

の死を証明させた。　ユダヤ人たちの要請により、ピラトはまた、ロンギンと共に兵士の身分を捨て、カッパドキアで彼と共にキリストを宣教していた二人の兵士をも殺害するよう命じた。

派遣された者たちがカッパドキアの地に着くと、ロンギンの居場所について熱心に尋ね回った。彼が父の村に滞在していることを知ると、彼らはそこへ急ぎ向かい、ロンギンを殺すためではなく、あたかも彼に何らかの敬意を表すかのように振る舞おうとした。　彼らは、ロンギヌスが自分たちの手から逃げてしまったり、何も成果を得られずに派遣者に帰ることになったりすることを恐れていた。だからこそ、彼らは密かに彼を捕らえようとしたのである。

一方、聖ロンギンは、神の啓示によって、自分に待ち受ける殉教の冠について知っていた。彼は自らピラトから遣わされた使者たちを迎えに出て、親しみを込めて彼らに挨拶した。しかし、使者たちは彼を知らず、こう尋ねた。

「かつて百人隊長だったロンギンはどこにいるのか？」

「なぜ彼をお探しなのですか？」と、ロンギンもまた彼らに尋ねた。

「我々は聞いたのだ」と兵士たちは答えた。「彼は善良な人だと。彼に会いたいのだ。我々は兵士だが、彼はかつて兵士たちの百人隊長だった。だからこそ、彼に会いたいのだ。」

すると、ロンギンは言った。

「どうか、皆様、私の家にお立ち寄りいただき、旅の疲れを少し休んでください。私がロンギンに皆様のことをお伝えします。彼の住まいは知っていますし、ここからそう遠くない場所に住んでいるので、彼自身が皆様のもとへやってくるでしょう。」

戦士たちはロンギンの家に入り、彼は彼らに豪華なもてなしを振る舞った。　夕方になり、兵士たちが酒に酔って大いに盛り上がったとき、彼らはロンギンに、自分たちがなぜ遣わされたのかを打ち明けた。しかしその前に、この秘密を誰にも漏らさないよう彼に懇願し、誓いを立てさせた。兵士たちは、誰かがロンギンに話して、彼が自分たちから逃げ出してしまうことを恐れていたのだ。そして彼らは彼にこう言った。

「我々は、ロンギヌスとその二人の友人の首を刎ねるよう命じられてここに来た。それは、皇帝からピラトへ下された命令だからだ。」

ロンギンは、友人たちまでもが殺されようとしていると聞き、急いで彼らを呼び寄せ、自分のところへ招いた。しかし、友人たちが来るまでは、自分がロンギン本人であることを兵士たちには明かそうとはしなかった。　兵士たちが眠りにつくと、ロンギンは祈りを捧げ始め、その夜中ずっと、死に備えて神に熱心に祈り続けた。朝になると、兵士たちは急いで出発しようと、ロンギンに探している人物を指摘するよう求めた。そこでロンギンは彼らにこう言った。

「少しお待ちください、諸君。私は彼を呼びに行かせました。彼はすぐにあなたのところへやって来ます。信じてください、あなたがたが探しているその人は、自ら進んであなたの手に身を委ねるでしょう。ほんの少しだけお待ちください。」

その後、ロンギンは友人たちがやってくることを知った。彼はすぐに彼らを迎えに出て、口づけをして抱きしめ、こう言った。

「喜びなさい、キリストの僕たちよ、私の戦友たちよ、私と共に喜びなさい。私たちの喜びの時が近づいたからです。肉体の束縛から解放される時が来ました。さあ、今こそ私たちは共に、私たちの主イエス・キリストの御前に立つのです。」　私たちは、主が苦しみ、十字架にかけられ、葬られ、栄光のうちに復活されるのを見ました。今や、主が神の右に座しておられるのを見、その栄光を仰ぎ見て心満たされるでしょう。

こう友たちに語った後、ロンギンは、キリストの復活を証言したために彼らを殺そうと、ピラトとユダヤ人のサンヘドリンから兵士たちがやって来たと告げた。　これを聞いて、彼らは喜びに満ちた。　彼らは殉教の冠に与るにふさわしい者とされ、心から愛した主のもとにまもなく立ち会うことになるからだ。その後、ロンギンは友人たちを兵士たちのところへ連れて行き、こう言った。

「ここにロンギンとその二人の友がいる！　私が、あなたがたが探しているロンギンだ。そして、この二人は私の友であり、私と共にキリストの復活を目撃し、信仰を持った者たちだ。私たちを、あなたがたを遣わした者たちの命令通りに扱ってくれ。」

これを聞いて、兵士たちは驚き、最初は目の前にいるのがロンギン本人だとは信じられなかった。しかし、その真実を確認すると、彼らは恥じ入り、自分たちの恩人を殺すことを望まなくなった。だが、ロンギンは命じられたことを実行するよう促し、こう言った。

「私があなた方に対して抱いている愛に対し、私を、かねてより会いたいと願っていた私の主のもとへ送ることほど、私への最高の恩返しはないのだ。」

その後、白い葬送の衣を身にまとい、近くの丘を指さして、ロンギンは家来たちに、自分の遺体と二人の友人の遺体をそこに埋葬するよう命じた。その後、祈りを捧げ、皆に最後の口づけをした後、ロンギンと二人の友人[7200]は、剣の下で頭を垂れた。兵士たちは彼らの首を切り落とし、聖ロンギヌスの首を持ち去って去っていった。一方、聖人たちの遺体は、聖ロンギヌス自身が指し示したその場所で、栄誉をもって埋葬された。

エルサレムに到着すると、兵士たちは聖ロンギヌスの尊い首を持ち込み、ロンギヌスを殺害したことを彼およびユダヤ人の全集団に証明するため、それをピラトに手渡した。　ピラトとユダヤ人たちは、聖人の頭部を見て、それを町の外に投げ捨てるよう命じた。そして、それは長い間、汚物と共にそこに放置され、やがて塵に埋もれてしまった。

しかし、主は御自身の聖徒たちの*「すべての骨を保たれる」*（詩編33:21）のであり、その汚物の中にあった聖ロンギヌスの頭部も、無傷のまま守られた。

そして、主は、すでに天において天使たちの前で栄光を与えられた御自分のしもべを、地上の人の前でも栄光に輝かせようとされたとき、このようにして聖人の頭部を現されたのである。　あるカッパドキア出身のキリスト教徒の未亡人は、両目を失明し、長い間医師の助けを求めたが、治ることはなかった。その後、彼女はエルサレムへ行き、聖地を参拝し、失明した自分の目のために神の助けを求めようと決心した。彼女は一人息子を連れて、旅に出た。　しかし、聖地に着くや否や、息子は病に倒れ、数日後に亡くなってしまった。その未亡人は息子の死に深く悲しんだ。彼女は二重の喪失を嘆き泣いた。なぜなら、目も失った上に、まるで自分の目の光であり、道しるべでもあった息子までも失ってしまったからである。　そして、その未亡人が悲痛で慰めようのない涙を流していたとき、聖ロンギヌスが幻として現れ、彼女を慰め、天の栄光の中で息子に再会し、目にも光が戻ることを約束した。　聖ロンギンは、自分自身についてすべてを彼女に語った。キリストの受難、磔刑、埋葬、そして復活の場に立ち会ったこと、その後、カッパドキアでキリストを宣教し、友人たちと共にキリストのために殉教したことを。そして、彼女に町の外へ出て、ゴミ捨て場に横たわり、塵に埋もれている自分の頭部を見つけるよう命じた。

「あなたには、その頭部を見つけ出し、それによって癒やされる運命にあるのです」と、聖ロンギンはそう言い添えた。

悲しみから立ち直った未亡人は立ち上がり、街の外まで案内してほしいと頼んだ。そして、そこへ案内されている途中、彼女は付き添いの人々にこう言った。

「大きなゴミの山が見えたら、そこで私を降ろしてください。」

彼らはその通りにした。大量の掃き集められたゴミを見つけると、彼女をその場所へ連れて行き、彼女は自分の手でゴミをかき分け、ほこりを掘り起こし始めた。彼女は目では何も見えなかったが、幻視の中で聖ロンギンから告げられた言葉を深く信じていたのだ。　すると直ちに、神の御心により、彼女は求めていたものを得て、突然、太陽の光を見た。彼女の目が開かれ、塵の中に横たわっている聖人の頭部を見たからである。　その未亡人は、太陽の光を見たこと自体よりも、視力を取り

[7200] 古代の伝承によれば、彼らはイサウルとアフロディシウスであり、その記念日は4月19日である。

戻させてくれた聖人の頭部を見つけたことの方を、より深く喜んだ。そして彼女は神を賛美し、神のしもべである聖ロンギヌスを称えた。

聖人の頭部を手に取り、口づけをしたその女性は、喜びながらそれを自宅へ持ち帰った。そしてそれを洗い、香りのよい香油を塗り、この霊的な宝物を見つけたことに大いに喜び、亡き息子への悲しみを忘れてしまった。　その翌夜、聖ロンギンは再びまばゆい光に包まれて彼女の前に現れ、輝く婚礼の衣装をまとった彼女の息子を彼女の元へ連れてきた。そして、親しみを込めて、まるで父親のように息子を抱きしめ、未亡人にこう言った。

「妻よ、あなたが悲しみ、泣いているその息子を見てごらん。ほら、彼にはこれほどの栄光と誉れがあるのだ。彼を見て、慰めを受けなさい。神は彼を、御自身の御国にある天の位階に加えられた。そして今、私は救い主から彼を受け取った。彼は決して私から離れることはない。」　さあ、私の首とあなたの息子の遺体を受け取り、それらを同じ棺に納めて葬りなさい。そして、あなたの唯一の息子を嘆き悲しむな。あなたの心が動揺することのないように。なぜなら、神から彼に大きな栄光と喜び、そして尽きることのない歓びが与えられているのだから[7201]。

その言葉を聞いた女は、急いで立ち上がり、殉教者の首を亡き息子の遺体と同じ棺に納め、その後、神を賛美し称えながら自宅へと戻った。故郷に着くと、彼女は息子の遺体と殉教者の首を尊い場所に葬り、その際、こう考えた。

「今、私は*『神を愛する者、すなわち、神の御心によって召された者には、すべてのことが益となる』*（ローマ8:28）ということを知った。私は肉体の目の癒やしを求めていたが、それと同時に、魂の目の癒やしも得たのだ。」　私は息子の死の悲しみに囚われていたが、今や彼は天にいて、預言者や殉教者たちと共に、栄光のうちに神の御前に立っている。彼は彼らと共に常に喜び、ロンギヌスと共にキリストの御国において、天使たちの真ん中で勝利のしるしである十字架を背負い、ロンギヌスの弟子として喜びながらこう讃えている：　「まことに、この方は神の子であった」と、今も、そしてこれからもそうである。その御国は、すべての時代の御国であり、その支配はあらゆる世代と民族に及ぶ。御名に永遠の栄光あれ。アーメン[7202]。

コンダク、第4声：

教会は、今日、永遠に記念される殉教者ロンギヌスを偲び、喜びに満ちてこう叫ぶ。「キリストよ、あなたは私の力であり、私の支えです。」

10月30日

10月17日（旧暦）

聖アンドレイ・クリトス（殉教者）の受難

10月17日の記念日

[7201] 聖ロンギヌスの聖遺物による奇跡については、聖テオファンが殉教者の礼拝の中で述べている（『ミネイア』10月16日参照）。――聖ロンギヌス百人隊長の尊い右手は、ローマのバチカンにある使徒ペトロ大聖堂に安置されている。

[7202] 聖ロンギヌスの伝記を著したのは、エルサレムの司祭である聖イシキオス（†434年）であり、彼は聖復活大聖堂の図書館で殉教者の記録を発見し、それに基づいて自身の記述をまとめた。そこから、殉教者が10月16日に斬首されたことがわかる。

不義な王や君主たちによってキリストの教会に対して行われていた数多くの残酷な迫害が終息してから、長い時が流れた。その後、神の教会は、あたかも実り豊かな大地に植えられ、神の僕たちの尊い血で潤されたかのように、地の果てまで広がっていった。　主の家には平和と信仰の一致がもたらされ、敬虔が栄え、人々の間には善き道徳が根付き、主の戒めが守られ、信者たちはあらゆる美徳において繁栄した。その時、悪魔はこれを妬み、信者たちをキリストから遠ざけ始めた。　しかし、彼は以前のように公然とではなく、彼特有の狡猾さをもって、密かに動き始めた。その目的のために、彼はキリスト教徒自身の間に聖像破壊運動を煽った。悪魔の唆しにより、キリスト教徒の中に、神への熱意を装いながら、聖なる聖像の崇敬を拒む者たちが現れた。　悪魔が人々にこれを吹き込んだのは、彼らがキリストのイコンを拒絶することで、キリストご自身をも拒絶するようにするためであった。なぜなら、イコンに描かれるものはすべて、そこに描かれた人物に属するものであるからである。こうして、人間の救いを憎む悪魔は、コンスタンティヌス王をこの運動に駆り立てた。　――それは、キリストの信仰によって世界を啓蒙した「使徒に等しい」コンスタンティヌスではなく、同じ名前を持ちながら「コプロニム（糞の名）」と呼ばれる者、すなわち[7203] のことである。彼はまず、自身の洗礼の浴槽を糞で穢し、その後、キリストの教会をも、その不敬虔な異端によって穢したからである。　狂気の王は、キリスト教徒がイコンを崇拝し、尊ぶことはふさわしくないと言い出した。なぜなら、それは異教的な偶像崇拝であるからだ。彼は、もし物自体が魂にとって有害であるならば、その像もまた魂にとって有害であり、許されるべきではないということを理解していなかった。しかし、もしある対象がその本質において善を含み、魂にとって有益であるならば、その対象の像もまた善であり、魂に有益なものである。異教の神々は悪であり、魂を滅ぼすものであるため、それらを崇拝することは禁じられている。同様に、それらの像もまた悪であり、魂を滅ぼすものであり、神の律法はそれらを崇めることを禁じている。　私たちの主なる神イエス・キリストは聖なる方であり、そのしもべたちも聖なる者であり、ダビデが言ったように、「*神よ、あなたの友は私にとって非常に尊いものでした*」（詩篇138:17）と、私たちの魂の益のために大いに役立っている。それゆえ、主とその尊い友たち――主が「*あなたがたはわたしの友である*」（ヨハネ15:14）と語られた方々――の像は神聖であり、魂に有益であり、私たちはそれらを崇敬すべきである。なぜなら、イコンに捧げられる敬意は、そこに描かれた人物自身へと移ることを知っているからである。　不義な王コプロニムは、このことを理解せず、自国の全土に勅令を下し、すべてのイコンを主の家から捨て去らせ、誰も自分の家にそれらを保管することを敢えてしてはならないと命じた。　さらに彼は、その命令に従おうとしない者すべてに対し、恐ろしい拷問と死を脅しとした。それゆえ、神の教会には大きな悲しみ、嘆き、そして嘆嘆が満ちた[7204] 。多くの信者たちは、王の恐ろしい脅威を恐れ、逃げ出して身を隠した。町々は荒廃し、　人々は荒野へと散り散りになり、残った者たちのうち、ある者は王の命令に従い、イコンへの礼拝をやめたが、他の者たちは聖なる教父たちの伝承を堅く守り、恐れを知らず

[7203] コンスタンティノス・コプロニモスという名は、ギリシャ語の「コプロス」（糞、不浄物）に由来する。

[7204] コンスタンティノス・コプロニモス皇帝（在位741～775年）の長期にわたる治世は、ギリシャ正教会において偶像破壊運動が最高潮に達し、その勢力が最も強まった時代であった。コンスタンティノス・コプロニモス皇帝自身も、最も熱心な偶像破壊論者であった。 父であるレウ・イサウリアヌス（716–741年）の模範と、厳格な偶像排斥の教義に基づく教育が、彼を偶像崇拝の容赦ない敵へと変えた。熱心な偶像崇拝者たちは国外――特にローマ――へ逃れるか、人里離れた場所に身を隠さざるを得なかった。　皇帝の措置や命令に対して最も勇敢で、断固として、かつ気高い反対者となったのは、正教の不屈の擁護者としての姿を見せた修道士たちであった。当時、修道士たちの熱意は、キリスト教社会の精神に多大な影響を及ぼしていた。　修道士たちに対する迫害の残虐さがどれほど極まったかは、彼らが受けた処刑の様子からうかがえる。当時の教会史家ニキフォロスによれば、修道士たちは、自分たちが守ろうとしていたまさにそのイコンの上で頭を打ち砕かれたという。　また、正教を信仰する上でより勇敢な世俗の人々も、コプロニム帝の治世において少なからぬ迫害に耐えなければならなかった。概して、コプロニム帝時代の正教徒に対する迫害は極めて激しく、異教の皇帝によるキリスト教徒への迫害の中でも最も残酷であったディオクレティアヌス帝の迫害を彷彿とさせるほどであった。

にイコン破壊派に抵抗し、そのために様々な拷問にさらされた。　当時のすべての監獄、地下牢、深い堀は、山賊や泥棒、あるいは何らかの悪党たちではなく、司教、司祭、修道士、そしてその他の敬虔な人々で満たされていた。

その頃、クレタ島にはアンドレイという名の、敬虔で神を畏れる人物がいた。彼は世とその栄光を拒み、あらゆる世俗の喜びを軽んじた。自らの十字架を背負い、天へと続く狭い道を歩み、多くの人々を同じ神に喜ばれる生活へと導いた。　コンスタンティノープルで、不法なコプロニムが、新たな異端的で冒涜的、かつ聖像破壊的な教義のために多くの聖人を拘束していると聞き、アンドレイは信仰への熱意とキリストへの愛に燃え上がり、コンスタンティノープルへと向かった。　そこで彼は、いささかの恐れもなく、むしろ大いなる大胆さをもって、民衆に対し、皇帝の言葉や異端の教えに惑わされないよう公然と説教した。さらに、信仰の堅固な者たちに対しては、アンドレイは彼らの信仰を強め、真の信仰告白と苦難への忍耐へと奮い立たせた。

やがてアンドレイは、皇帝の命により、聖なるイコンを崇敬した者たちに対して、異端排斥派が、ある者は鞭で残酷に打ち、ある者は火で焼かれ、ある者は目をえぐり出され、あるいは舌を切り取られ、またある者は手足を切断されているのを見て、もはやこれを耐え忍ぶことはできなかった。アンドレイは直ちに、聖殉教者ママンタの教会へと向かった。そこには当時、皇帝と多くの高官たちが集まっていた。そこに集まった群衆をかき分けて進み、彼は勇敢に皇帝の前に立ち、力強い声で叫んだ。

「王よ、なぜあなたは自らをキリスト教徒であり、キリストの僕であると称しながら、キリストのイコンを踏みにじり、その僕たちにこれほど多くの悪行を加えるのですか？」

アンドレイはさらに言葉を続けようとしたが、王は彼を捕らえるよう命じた。たちまち従者たちがアンドレイに襲いかかり、ある者は頭をつかみ、ある者は両腕を、またある者は肩や衣服をつかんだ。アンドレイを地面に倒すと、彼らは彼を殴り、地面を引きずり回し、足で踏みつけた。　表向きは慈悲を示そうと、王はアンドレイへの暴行を止めるよう命じ、教会から出てきて彼を呼び寄せ、自ら語りかけた。

「一体どこから――」と彼は言った。「お前には、ここまでやって来て、私の目の前で悪口を言うほどの度胸が湧いてきたのか？　狂気からか、それとも何か意図があるのか？　それとも、私に知られたいからか？」

アンドレイは答えた。

「私がこうするのは狂気からではなく、いかなる企みもなく、またあなたから虚しい名声を得ようとしてのことでもありません。なぜなら、私はあなたがこの世で持っているすべてのものを、夢のように軽んじ、煙のように見なしているからです。しかし、私はあなたの邪悪な教えについて耳にしました。それによれば、あなたは聖なるイコンを冒涜し、神の聖なる教会を迫害しているのです。それゆえ、*「あなたの家への熱意が私を焼き尽くす」*（詩編68:10）のであり、私は遠くからここへやって来た。あなたを説得するか、あるいは私自身が私のキリストのために死ぬかのいずれかである。もし主が私のために死なれたのなら、私は主の像として、主の像のために死ぬべきではないのか？

王はこれに対し、アンドレイにこう言った。

「朽ちることのない神の栄光を、木や絵の具、石に捧げ、神がモーセに『いかなる像も造ってはならない』と命じられたことに耳を貸さないとは、なんと狂気であり、正気の沙汰ではないのか。一体どこから、このような狂気が湧き上がるのか。これほど明白な真理に逆らい、自ら破滅へと身を投じるなど。信じてほしい、私は真理のためでも、キリストのためでもなく、お前の恥知らずな傲慢さと反抗のゆえに、お前を拷問するのだ。

アンドレイはそのような冒涜に耐えきれず、こう言った。

「不敬虔な者よ！ キリストのイコンのために苦しむ者は、キリストのために苦しんでいるのではないのか？ あなたがイコンに与える冒涜は、そこに描かれた御方にも及ぶのではないのか？ それな

のに、なぜあなたがたは、自分たちの像や彫像を冒涜し、倒す者たちを、残酷に死刑に処すのか？あなた方は、今や塵のように存在しているが、明日には消え去る。それにもかかわらず、自分の像を通じて尊敬されたいと願っている。それならば、キリストの御姿に手を出すことは、どれほど大きな罪であろうか。なぜなら、キリストのイコンに加えられた冒涜は、そのイコンに描かれた御姿そのものであるキリストご自身への冒涜だからである。

そこで聖アンドレイは、神がモーセを通じて、神々の代わりにどのような像を持つことを命じられたかを説明しようとしたが、王は彼に話を続けさせず、こう言った。

「もし王たちが、自分たちの像に対して怒るのなら、面と向かって悪口を言われることに対しては、はるかに激しく怒るだろう。」

そして直ちに、聖人を裸にし、容赦なく打ち据えるよう命じた。しかし、聖人はすべての拷問を勇敢に耐え抜いた。そこで王は、甘い言葉でアンドレイを説得し、その不敬な命令に従わせようとした。すると聖アンドレイは、天を仰ぎ見てこう言った。

「神よ、私がこの聖なるイコンに表された私のキリストを否定することなど、決してありませんように。王よ、あなたはキリストを迫害し、その僕たちを追い回すよりも、軍務に励み、民を治めるほうがよいのです。」

すると王は、アンドレイを再び激しく殴打するよう命じ、その血で地面さえも赤く染まるほどであった。周囲にいた者の中には、王に気に入られようと、アンドレイに石を投げつけ、その石でアンドレイの口を割ったり、肋骨を砕いたりする者もいた。　ついに、多くの拷問を受けた後、聖人は牢獄に投獄された。そこでしばらく過ごしながら、彼を訪ねてくる信者たちの信仰を確固たるものにした。その後、王は再びアンドレイを牢獄から引き出し、以前の傷を再び抉り出すように命じて拷問を再開させた。この拷問の間、聖人の体は崩れ、粉々になっていった。　ついに、聖人の足を縛り、街中を地面を引きずって、悪党たちが処刑される場所へと連れて行かれた。そこで、拷問官は聖アンドレイを処刑するよう命じた。　彼が市場を通り抜けてその場所へ引きずられていく途中、ある異端者――魚商人――が、聖人がどのような理由で苦しんでいるのかを知り、悪魔に唆されてナイフを手に取り、殉教者の足を切り裂いた。これにより、彼はアンドレイの苦難に満ちた道のりを終わらせた。殉教者はその傷により即座に息を引き取ったからである[7205]。

聖アンドレイの遺体は、悪党たちの死体と共に深淵に投げ込まれ、12週間以上もそこに横たわっていた。　神の御心により、各地から悪霊に取り憑かれた者たちがそこへ集まってきた。彼らは深淵から聖アンドレイの遺体を引き上げ、死体たちと共に聖なる場所に安置した。すると直ちに、その行いに対するふさわしい報いとして、彼らは癒やしを受けた。　聖人の祈りにより、その棺の前で多くの病人が癒やされた。なぜなら、聖アンドレイは神の前で大胆に祈り、私たちすべてののために祈り、聖人たちと共に永遠に主の御座の前に立っているからである。アーメン。

トロパリオ、第4調：

山の上で断食の修行に励み、[7206]、知恵をもって敵の軍勢を十字架の全武装をもって滅ぼした、至福なる者よ。また、信仰の剣をもってコプロニモスを打ち倒し、勇敢に苦難を身にまとい、この二つの功績により、神から冠を授かった、永遠に記憶される尊い殉教者アンドレイよ。

[7205] 聖アンドレイは767年に逝去した。それから100年後、聖ヨセフ（詩人）によって彼に捧げるカノンが作曲された（『ミネイア』10月17日参照）。

[7206] ここでいうのは、もちろん、山々が数多くそびえ立ち、険しく、場所によっては登り降りできないほど険しい海岸線を特徴とするクレタ島のことです。

コンダク、第8調:

その名にふさわしい勇気を称え、[7207] 、また敬虔な秘言の語り手への賛美を、あなたへの愛から叫び上げましょう、神に祝福された方よ。しかし、主への大胆さを持ち続け、あらゆる激しいものから私たちを救い出してください。そうして私たちは歌います。「喜びなさい、永遠に記憶される父よ。」

聖預言者ホセアの記念日

10月17日の記念日

聖預言者ホセア（ベエリインの子）は、イッサカル族の出身であった[7208] 。当時、イスラエルの民の多くは真の神から背き、神の恵みと奇跡を忘れ、偶像を崇拝していた。 しかし、ホセアは神を畏れる人として、天と地を創造し、力強い御手をもってユダヤ人をエジプトから導き出された唯一の真の神に仕えました。ホセアは真理から逸れた人々を戒め、その賢明な諭しによって、彼らを再び先祖代々の敬虔さへと立ち返らせました。

聖霊の導きにより、ホセアはイスラエルの民について多くの預言を行った。 イスラエル王国の不法な住民を糾弾しつつ、彼は敵による大いなる災い、アッシリアへの捕囚、そしてその後、彼らが神に立ち返ることを予言した[7209] 。彼は、真の神の知識が全地へと広まること（ホセア2:20。 参照：エレミヤ書31:34）、アロンの祭司職と旧約のいけにえの廃止（ホセア書3:5）、またエジプトからの幼子イエスの帰還[7210] 、その三日目の復活[7211] 、そして死に対する勝利[7212] についても預言した。 こ

[7207] すなわち、「勇気」と同義、あるいは同名のもの。アンドレイという名は、ギリシャ語から訳すと「勇敢な」という意味である。

[7208] 預言者ホセアはイスラエル王国に暮らし、ユダ王国の王たちであるホセア、ヨアファム、アハズ、ヒゼキヤの時代、およびイスラエル王エレボアム2世の時代に預言を行った（ホセア書1:1）。いわゆる「小預言者」の中では、ミカやアモスが彼の同時代人であり、「大預言者」の中ではイザヤが同時代人であった。聖エフレム・シリン、ドロフェイ、エピファニオスの記述によれば、預言者ホセアはイッサカル族の町ベエル・モフの出身であった。

[7209] ホセアの預言には、以下の内容が含まれている。1）当時の不義、偶像崇拝、道徳的堕落に対する非難、また、異教の諸民族の力を頼りにしたユダヤ人との同盟に対する非難、そして悔い改めと改心への呼びかけ。2）アッシリアによる捕囚への脅威。 3) 捕囚からの解放と、メシアの王国の到来に関する予言による慰め。この王国の到来は、民が幼子のような状態にあることに合わせて、地上の栄華という形で描かれている。

[7210] メシアのエジプトからの帰還に関する預言は、預言者ホセア書の第11章にある。ユダヤ人に対する御自身の恵みを列挙しながら、主はこう言われる。*「わたしはエジプトからわが子を呼び出した」*（ホセア11:1）。福音書記者マタイは、*「主が預言者を通して言われたことが成就するためである。『わたしはエジプトからわが子を呼び出した』」*（マタイ2:16）と述べた際、まさにこの箇所を指し示している。ユダヤ民族全体がメシアの型であったように、その民族の生活における個々の出来事にも、予表的な「メシア的」意味があった。ユダヤ人たちは、ヤコブの時代の飢饉から逃れるためにエジプトに定住した。そして、その危険が去ると、ユダヤ人たちはパレスチナでの使命を果たすために、神によってそこから導き出された。 同様に、メシアであるキリストも、神の定めにより、ヘロデの悪意から逃れるためにエジプトへ退かれた。そして、ヘロデの死によって危険が去ると、メシアは、そこでご自身の使命を果たすために、神によってエジプトからパレスチナへと招かれたのである。

[7211] メシアの三日目の復活に関する預言は、ホセア書6章2節に記されている。コリントの信徒への第一の手紙において、使徒パウロは、*「キリストは『聖書の通り、三日目に復活された』」*（Iコリント15:4）と述べ、この預言を復活されたキリストに当てはめている。

[7212] ホセア書第13章14節では、預言者ホセアによって、神の前における地獄の無力さについての考え（問いかけの形で）が示されている。*「わたしは彼らを地獄の権威から贖い出し、死から救い出す。死よ！ お前の刺はどこにあるのか、地獄よ！ お前の勝利はどこにあるのか？」*使徒パウロはこう言っている。*「この朽ちるものが朽ちないものに、この死ぬものが不死に覆われるとき、そこに書かれている言葉が成就する。『死は勝利に飲み込まれた』。死よ！ その刺はどこにあるのか。地獄よ、その勝利はどこにあるのか。」*（Iコリント15:54–55）。このように、使徒はこの預言の成就を、死者の普遍的な復活の日に死に対する最終的な勝利に結びつけている。

れらの預言はすべて、14章　からなるホセア書に記されている。聖霊によって語られたものとして、これらの預言はすべて、聖書の他の神霊感を受けた書物と同様に位置づけられている。

預言者ホセアは長きにわたり生きた[7213]　そして、キリスト降誕の820年前に、極めて高齢でこの世を去り、自らの地で安らかに埋葬された。

聖コスマスとダミアンの殉教

記念日：10月17日

コスマスとダミアヌスという名の、無償で診療を行った医師である聖人兄弟が三組知られている。そのうちの一組は、異教徒の父と敬虔なキリスト教徒である母テオドティアの間に生まれ、[7214]に安らかに息を引き取り、フェレマンと呼ばれる場所に埋葬された[7215]。もう一組はローマに住んでおり、嫉妬深い師の手によって命を落とした。その師は、まるで薬草を採集するかのように装って彼らを山へ誘い出し、そこで石で打ち殺したのである[7216]。そして、今回その記念が執り行われる三組目は、アラビア地方の出身であった。　キリストを信じるようになると、彼らは無償で数え切れないほどの病人を癒やした。それは、熟練した医師のように薬草やその他の薬用療法を用いたのではなく、キリストの力によるものであった。彼らは町や村を巡りながらキリストを宣べ伝え、その御名によってすべての病人に癒やしをもたらしたのである。

彼らの教えと奇跡が至る所で広く知られるようになると、彼らは総督に捕らえられた。これは、キリスト教徒を迫害し拷問した悪名高い王ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世中のことである。キリキアの都へ連行された聖なる医師コスマスとダミアンは、総督リシオスの前に引き出された。　総督は彼らに、名前、出身地、信仰について問い詰め、その後、偶像への生贄を捧げるよう強要した。しかし、聖人たちはこれに従うことを拒み、勇敢にキリストを宣べ伝えたため、総督はまず彼らを容赦なく、非人道的に鞭打つよう命じ、その後、縛られたまま彼らを海の深みに投げ込んだ。　しかし、聖人たちは神の力によって溺死を免れた。主の御使いが彼らの縄を解き、無傷のまま陸へと導き出したからである。イゲモンはこれを見て、彼らを自分の元へ連れてくるよう命じ、こう尋ねた。

「教えてくれ、どのような魔法で海から救われたのか？　私もまた、あなた方の教えに従いたいのだ。」

彼らは答えた。

「私たちキリスト教徒は、いかなる魔術も知らず、またそれを必要としません。私たちにはキリストの力があり、それはあらゆる災いから私たちを救い出し、キリストの至聖なる御名を呼び求めるあらゆる人を救うのです。」

その後、聖人たちは牢獄に連行された。　翌日、彼らはそこから連れ出され、拷問官は彼らを火の中に投げ込むよう命じたが、彼らは火の中でも無傷のままであった。なぜなら、火はその本来の力を失い、彼らに触れることも、傷つけることもなかったからである。イゲモンはこれに大いに驚き、聖なる医師たちを吊るし、容赦なく拷問するよう命じた。　その後、手下たちは拷問官の命令に従い、聖人たちを殺すために石を投げつけたが、石は壁に当たるかのように彼らの体から跳ね返り、投げた者たち自身に当たり、彼らを殺してしまった。

[7213] ホセアの預言者としての奉仕は60年以上続いた。

[7214] 彼らの記念日は11月1日である

[7215] フェレマンはアジアにあり、アミダ（トルコ語でディヤル・ベキル）から二日間の道のりに位置していたが、トルコ人による最初の征服の際に破壊された。

[7216] 彼らは284年、カリーヌス帝の治世下で殉教し、その記念日は7月1日である。

その後、聖人たちに矢を放ち始めたが、矢も石と同様に彼らの体を傷つけることはなく、矢を放った者たち自身を傷つけた。　ついに、イゲモンは、殉教者たちが打ち負かせないことを悟り、彼らを剣で斬首する刑に処した。こうして、キリストのために、聖コスマスとダミアンという無償の医師たち、そして他の三人の兄弟――レオンティオス、アンフィモス、エウトロピオス――[7217] が斬首された。彼らは皆、共に埋葬された。　彼らは生前だけでなく、死後も多くの奇跡を行う賜物を受け、病人の前に現れて彼らに癒やしをもたらした。彼らの祈りによって、私たちもキリストから、心と体の病の癒やしを受けられますように。アーメン。

聖なる義人ラザロ（四日目のラザロ）の記念日

記念日：10月17日

聖なる義人ラザロは、マルタとマリアの兄弟であり、姉妹たちと共にエルサレムからほど近いベタニアという村に住んでいました。ラザロとその姉妹たちは、主イエス・キリストから特別な御恵みを受けていました（ヨハネ11:3）。この世におられた間、主はしばしばベタニアにある彼らの家を訪れ、ラザロを「友」と呼ばれました（ヨハネ11:11）。そして、ご自身の受難の直前に、すでに四日間墓の中にあったラザロを死からよみがえらせました[7218]。この出来事の後、聖書でラザロについて言及されているのは、あと一度だけである。すなわち、過越の祭りの6日前に主が再びベタニヤを訪れた際、そこには復活したラザロもいた（ヨハネ12:1–2）。主がベタニヤにおられた頃、多くのユダヤ人が主がそこにいることを知り、イエス・キリストのためだけでなく、主が死からよみがえらせたラザロを見るためにもやって来た。　彼らの多くは、主が行われた奇跡の真実を確信し、主への信仰に立ち返り、主の弟子となった。これを見た大祭司たちは、直ちにラザロをも殺害することを決めた（ヨハネ12:9–11）。福音書において、ラザロに関するこれ以上のことは何も知られていない。

伝承によれば、ラザロは復活後、さらに30年間生き続け、キプロス島[7219] で司教を務め、使徒たちと同様にキリスト教の普及に多大な労力を注ぎ、同地で安らかに息を引き取ったという。　キリスト降誕後9世紀、義人ラザロの聖遺骨はキティイの町[7220]　で発見された。そこでは、聖遺骨は地中に埋もれた大理石の棺の中に安置されており、その棺には「四日目のラザロ、キリストの友」と刻まれていた。　この尊い遺骸は地中から掘り出され、銀の聖櫃に納められ、ビザンツ帝国の皇帝レオン・ザ・ワイズ（賢王）の治世下でコンスタンティノープルに移され、バシレイオス・マケドニアヌス皇帝の時代に建てられた義人ラザロに捧げられた教会に安置された。

キティオスのラザロ・チェトヴェロドネヴヌイ司教へのトロパリオ：

キプロスから、盗まれることのない偉大な宝と富が、ラザロよ、万物の神の摂理により、敬虔な王の命により、あなたを崇める者たちに癒しの賜物を授け、災いやあらゆる害から救い出し、信仰

[7217] 彼らの記念日は、同じ10月17日に祝われる。

[7218] ヨハネ11:17–44。ラザロの復活は、大斎の第6週の土曜日（ラザロの土曜日）に教会によって記念される。この奇跡は、主イエス・キリストの最も偉大な奇跡の一つであり、主の神聖な全能性と死に対する主の支配を最も明確に証しするとともに、私たちの共通の復活の生きたしるしであり、主ご自身の復活の予型ともなった。

[7219] 伝承によれば、ラザロは司教であった頃、聖母マリアの御訪問を受け、その御手によって作られたオモフォルを授かったという。

[7220] キティオは、キプロス島の南岸、現在のラルナカの町に近い都市である。ここは、9つの古代フェニキアの都市の一つである。この都市の名にちなんで、ユダヤ人たちは島全体を「ヘティム」と呼んでいた。その後、キプロスの他の都市と同様、この都市もギリシャ人に占領された。

をもってあなたに呼び求める者たちを救うために、私たちのもとにやって来た。ラザロ、我らの父よ、あなたの祈りによってすべての人を救ってください。

10月31日

10月18日（旧暦）

同日、ディオクレティアヌス帝の治世下、タルススで殉教した長老マリノスの殉教記念日。

聖使徒兼福音記者ルカの生涯

記念日10月18日

聖福音記者ルカは、シリアの都市アンティオキアで生まれた。　その両親はユダヤ人ではなかった。このことは、ルカという名前自体が、ラテン語の（「ルカン」）[7221]に由来する点、そしてとりわけ使徒パウロのコロサイ人への手紙の一節において、聖パウロがルカを*「割礼を受けた者たち」*、すなわちユダヤ人とは明確に区別していることからも裏付けられる（コロサイ4:10–15）。しかし、ルカの著作からは、モーセの律法やユダヤの慣習に対する深い造詣がうかがえる。したがって、ルカはキリストに改宗する前から、すでにユダヤ教の信仰を受け入れていたと考えられる[7222]。さらに、科学と芸術が花開いていたことで知られる故郷において、ルカは様々な学術的知識でその知性を豊かにした。使徒パウロのコロサイ人への手紙からは、ルカが医学を学んだことがうかがえる[7223]；また、伝承によれば、彼は画家でもあったことが確認されている。さらに、彼の著作におけるギリシャ語は、他の新約聖書の著者の言語よりもはるかに洗練され、正確であることから、彼が全般的に優れた教育を受けていたことは疑いようがない。

主イエス・キリストの奇跡と教えの噂が、ガリラヤからシリア全土およびその周辺の各地に広まった頃、ルカもアンティオキアからガリラヤへとやって来た。そこでは、主イエス・キリストが、ご自身の救いの教えの種を蒔き始めておられたのである（マタイ4:24–26；　ルカ4:37）。その種はルカの心という肥沃な土壌に根を下ろし、百倍の実を結んだ。　まもなく、聖ルカはキリストの七十人の使徒の一員として認められ、主から旅立ちの教えと奇跡を行う力を授かると、主イエス・キリストの「御前に」立ち、神の御国の到来を宣べ伝え、救い主キリストの道を整えるようになった[7224]。

7221　この「ルカン」という名は、ルカによる福音書のラテン語訳であるいくつかの古代写本に見られる。同様の名前の短縮例としては、シルアヌスから短縮された「シラ」という名前が挙げられる（使徒言行録15:22、コリントの信徒への手紙二1など）。

7222　ユダヤ教の信仰を受け入れた異邦人は「門の異邦人」と呼ばれ、その中からユダヤ教の信仰とともに割礼も受けた者は、「義の異邦人」と呼ばれた。　初期の教会には、次のような人々がいました。使徒フィリポによって洗礼を受けたエチオピアの女王カンダキアの重臣（使徒行伝8:27–40）；　ローマの百人隊長コルネリウスもそうであった（使徒行伝10:1–3）；七人の執事の一人であるニコライも、ルカと同様にアンティオキア出身であった（使徒行伝6:6）ほか、他にも多くの者がいた（マタイ23:15；使徒行伝2:10）。

7223　使徒パウロはルカを「愛する医者」と直接呼んでいる。「*『ルカ、愛する医者が、あなたがたに口づけを送ります』*と彼は言っている」（コロサイ4:14）。

7224　ルカ10:1–24。――この伝承は、ルカ自身が、いわば「御言葉の目撃者」である使徒たちの数から自分自身を除外しているかのような言葉（ルカ1:2）と矛盾するものではない。　聖ルカはこれらの言葉によって、単に自分が12使徒の仲間には属していなかったことを述べたいだけなのである。12使徒たちは、キリストの説教の際、主の先頭を歩いていた70人の弟子たちよりも、はるかに多くの福音書の出来事を目撃していたことは言うまでもない。

救い主の地上での生涯の最後の日々、羊飼いが打ち倒されたことでその群れの羊たちも散り散りになったとき、聖ルカはエルサレムにいて、自ら進んで苦難を受け入れた主を嘆き、涙を流していた。　おそらく、主が十字架にかけられた際、イエスを知っていた他の人々と共に、ルカも*「遠く」*に立ち、悲しみに満ちて十字架にかけられた主を見つめていたのだろう（ルカ23:49）。　しかし、まもなくその悲しみは喜びへと変わった。なぜなら、復活された主は、ご自身の復活のその日、ルカを慰め、御自身を現して語りかけてくださったからである。このことについて、ルカ自身が自身の福音書の中で、とりわけ詳細かつ生き生きと伝えている[7225]。師の死を悲しみ、香油を携えた女性たちから伝えられた主の復活について戸惑いながらも、ルカは主のもう一人の弟子クレオパと共に、エルサレムからエマオへと向かっていた[7226]。そして、その村へ向かう道中で、彼は*「道であり、真理であり、命」*である方[7227]の同行者となる栄誉に浴した。二人の弟子は歩きながら互いに語り合っていたところ、イエスご自身が近づいてきて、彼らと共に歩まれた。福音書記者マルコの記述によれば、主は彼らに*「別の姿」*で（マルコ16:12）、彼らが以前知っていた姿とは異なる姿で現れたのである。さらに、神の特別な御計画により、*「彼らの目は覆われていた」*（ルカ24:16）ため、現れた主を認識することができませんでした。彼らは、自分たちと一緒に歩いているのは、過越の祭りのためにエルサレムへ行った巡礼者の一人だと思いました。

「何について、歩きながら互いに話し合っているのか。なぜ悲しんでいるのか」と、主は彼らに尋ねられた。

これに対し、クレオパは言った。

「まさか、エルサレムに来られた方の中で、この数日間にそこで起こったことをご存じないのですか？」

「何のことですか？」とイエスは再び尋ねた。

「ナザレのイエスに起きたことです」と彼らは答えた。「その方は預言者であり、神と民全体の前で、行いにおいても言葉においても力強い方でした。しかし、大祭司たちや私たちの指導者たちは、彼を 死刑に処すために引き渡し、十字架につけたのです。」「私たちは、彼がイスラエルを救うべき方だと期待していたのです」と弟子たちは話を続けた。「しかし、その出来事から、今日で三日目になります。　さらに、私たちの仲間の女性たち数人も、私たちを驚かせました。彼女たちは早朝に墓へ行ったのですが、御遺体が見つからず、戻ってきて、天使たちの現れを見たこと、そして天使たちが『主は生きておられる』と言っていたと語ったのです。そこで、私たちの仲間数人が墓へ行き、女性たちが話していた通りの状況を確認しましたが、主ご自身は見えませんでした。すると、主は彼らにこう言われました。

「ああ、無知で、心が鈍く、預言者たちが予告したすべてのことを信じようとしない者たちよ。キリストがこのように苦しみを受け、その栄光に入られるべきではなかったのか。」

そして、モーセから始めて、主キリストはすべての預言者たちの言葉の中から、聖書全体に記されている御自身に関することを彼らに解き明かされた。

主とこのように語り合っているうちに、弟子たちは知らず知らずのうちにエマオに近づいていた。彼らはその会話を楽しんでいたが、同行者はどうやらさらに先へ進もうとしているようだったので、彼らは主にとどまってほしいと願い出た。

[7225] ルカ24:13–32。ルカ自身は福音書の中で自分の名前を明かしていないが、その叙述の細部から、彼がまさにその「もう一人の弟子」、すなわち名前が言及されなかった弟子その人であったことがわかる。これについては教会の伝承も語っている。　また、旅に出る者たちのための教会の祈りには、次のように記されている。「エマオへ旅したルカとクレオパに、救い主が共に歩まれたように、今、旅を志すあなたのしもべたちにも共に歩んでください」。

[7226] エマオは、エルサレムから西へ60スタディオン（約12ヴェルスト）離れた村である。

[7227] 救い主キリストご自身の言葉、ヨハネによる福音書14章

「私たちと一緒にいてください。もう日が暮れかけていますから」と彼らは主におっしゃった。

そして主は村に入り、彼らと同じ家に泊まった。夕食の席で、主が彼らと共に食卓に着くと[7228]、食卓からパンを取り、祝福し、裂いて彼らに与えた。主がそうされたやいなや、弟子たちはすぐに主だと気づいた。 おそらく、主は以前にも弟子たちの前でこのような行いをなさっていたのだろう。さらに、彼らは主の御手に釘の跡があるのを見て、主であると認めたのかもしれない。しかし、その瞬間、主は彼らの目には見えなくなり、彼らは互いにこう言った。

「道で私たちに話してくださり、聖書を解き明かしてくださったとき、私たちの心は燃えていたのではないか。」（ルカ24:17–32）

主の他の弟子たちと喜びを分かち合いたいと願ったルカとクレオパは、すぐに夕食の席を立ち、エルサレムへと向かった。そこで彼らは、ある家に集まっていた使徒たちや他の弟子たちを見つけ、当然のことながら、キリストが復活したこと、そして自分たちが主を見、主と語り合ったことをすぐに彼らに告げた。 一方、使徒たちは彼らを慰め、「主はまことに復活され、シモンに現れた」と告げた。その後、ルカとクレオパは、道中で自分たちに起こったすべての出来事や、パンを裂く際に主キリストをどのようにして認めたかについて、使徒たちに詳しく語った。 この会話の最中、突然、復活された主ご自身が使徒たちの間に現れ、彼らに平安を与え、動揺していた彼らの心を落ち着かせた。また、目の前にいるのは亡くなった師の幻に過ぎないと考えていた者たちを確信させるために、主は御自身の手と足にある釘の跡を見せ、食事を召し上がった。 ここで、福音記者ルカは再び、旧約聖書において主について語られているすべての事柄について、主ご自身から説明を聞く栄誉に浴し、聖書を悟る賜物を受けました（ルカ24:18–49）。

主の昇天後、聖ルカは他の使徒たちと共にしばらくエルサレムに留まったが、その後、伝承によれば、すでに多くのキリスト教徒がいた故郷のアンティオキアへと向かった。 その道中、彼は説教をしながらセバスティア[7229]という町を通りかかりました。そこには、聖ヨハネ・バプティスタの朽ちない聖遺骨が安置されていました。セバスティアを去る際、聖ルカはそれらを故郷へ持ち帰ろうとしましたが、その地のキリスト教徒たちは、主の洗礼者である聖ヨハネを熱心に崇敬していたため、ルカが聖遺骨を持ち帰ることを許しませんでした。 そこで聖ルカは、かつてキリストがヨハネから洗礼を受ける際、その右手に頭を預けたという、その右手を取り上げた。この計り知れない宝を携えて、聖ルカは故郷へと戻り、アンティオキアのキリスト教徒たちは大いに喜んだ。 彼がこの地を離れたのは、聖使徒パウロの同行者兼協力者となった時だけであり、一部の古代の著述家によれば、パウロは彼と血縁関係にあったとさえ言われている。もっとも、これはすでに聖パウロの第二回使徒旅行の時期のことであった[7230]。この時、聖ルカは使徒パウロと共にギリシャへ宣教に向かい、マケドニアの都市フィリッポスにおける教会の確立と整備のためにパウロに任され、残された。聖ルカはこの時から数年にわたり、マケドニアにおけるキリスト教の普及に尽力した[7231]。

その後、使徒パウロが第三回伝道旅行の終わりに再びフィリッポスを訪れた際、ルカはパウロの依頼とすべての信者たちの選出により、パレスチナの貧しいキリスト教徒たちのために施しを集め

[7228] 古代のユダヤ人は、食事の際、座るのではなく、横になって食卓を囲んでいました。

[7229] セバスティア——サマリアの主要都市。

[7230] この使徒たちの旅は、西暦52年から55年にかけて続いた。

[7231] 使徒行伝20:6。——マケドニアはギリシャの北、イリュリア、トラキア、エーゲ海、そしてゲトス（バルカン）の間に位置していた。一時期、独立国家を形成し、特にアレクサンドロス大王の治世下で隆盛を極め、名声を博したが、その隆盛と同じくらい急速に没落した。 使徒たちの時代、マケドニアはローマ帝国の一部であった。現在はトルコ人の支配下にある。——フィリッピ——マケドニアの辺境都市であり、この地を再建し強化したマケドニア王フィリッポスにちなんで名付けられた。

るため、コリントへと向かった[7232]。 献金を集めた後、聖ルカは使徒パウロと共にパレスチナへと向かい、その道中、アルキペラゴ諸島、小アジア沿岸、フェニキア、ユダヤにある教会を訪ねた。 使徒パウロがパレスチナの都市ケサリアに投獄された際、聖ルカは彼のそばに留まりました。使徒パウロがカエサルの裁きを受けるためにローマへ送られた時も、彼はパウロを見捨てませんでした。彼は使徒パウロと共に、海路の旅のあらゆる困難に耐え、命さえ失う危険にさらされました[7233]。

ローマに到着した後も、聖ルカは使徒パウロの傍らに留まり、マルコ、アリスタルコス、および使徒の他の数名の同行者たちと共に、この古代世界の首都でキリストを宣べ伝えた[7234]。また、ローマにおいて、聖ルカは自身の福音書と『使徒言行録』を著した[7235]。 福音書において、彼は、自らが目撃し耳にしたことだけでなく、*「初めから目撃者であり、御言葉の奉仕者であった人々」*が伝えたすべてを考慮に入れて、私たちの主イエス・キリストの地上での生涯を描き出した[7236]。 聖使徒パウロはこの事業において彼を導き、その後、聖ルカが記した福音書を承認しました。同様に、『使徒言行録』も、教会の伝承が語るように、使徒パウロの命により書かれたものです[7237]。

ローマで2年間投獄された後、使徒パウロは自由の身となり、ローマを後にして、以前自ら設立した教会の一部を訪れました。聖ルカもこの時、同様に彼に同行しました。ほどなくして、ネロ皇帝はローマでキリスト教徒に対する激しい迫害を開始しました。 その頃、使徒パウロは再びローマを訪れ、自らの言葉と模範によって迫害を受ける教会を励まし支え、もし神の御心ならば、信者たちと共に殉教の冠を分かち合うためであった。彼は異教徒たちに捕らえられ、投獄された。 聖ルカは、この時も師に忠実であり続け、使徒の協力者たちの中でただ一人、この極めて過酷な時期に彼のそばに寄り添っていた。その状況は、使徒が自らを「屠殺に定められた犠牲」に例えるほど厳しいものであった。

「私はすでに犠牲となりつつある」と、使徒パウロは弟子テモテに書き送った。「私の旅立ちの時が来た。できるだけ早く私のところへ来てほしい。ディマスは現世を愛して私を去り、テサロニ

[7232] 「私たちは彼と共に、すべての教会で福音を宣べ伝えることにおいて称賛されている兄弟（使徒テトス）も遣わしました。彼は、私たちが主ご自身の栄光のために、またあなたがたの熱意に応えて奉仕しているこの慈善事業のために、教会から選ばれて私たちに同行する者なのです」（IIコリント8:18–19）。 古代の注解者たちは、「兄弟」とは使徒ルカを指すものと解釈している。聖ヨハネス・クロイソストモスは、ここに聖ルカが司教に叙階されたこと（ギリシャ語で「ヒロトニフィス」）への言及を見出している。

[7233] この長期にわたる旅の苦難について、聖使徒ルカは『使徒行伝』の第27章と第28章に記しています。

[7234] これは、当時書かれた使徒パウロのコロサイ人への手紙およびフィレモンへの手紙からも明らかである。

[7235] この福音書と『使徒行伝』（ルカ1:1–4； 使徒行伝1:1）の密接な関連性から判断すると、福音書の後に書かれ、紀元63年頃にローマで出版された『使徒行伝』との間には、ごくわずかな時間しか経過しておらず、福音書もまた紀元61年か62年頃にローマで出版されたと認めざるを得ない。これは、一部の写本に見られる署名によっても裏付けられている。 – 聖ルカは、自身の福音書と同様に、『使徒言行録』も、ある「高貴な」テオフィロという人物のために書いた（ルカ1:3；使徒言行録1:1）。 古代の伝承によれば、ある高貴なキリスト教徒――アンティオキアのテオフィロス――について語られており、聖ルカが福音書と『使徒言行録』を執筆した相手とは、この人物を指すとされている。

[7236] ルカ1:2――「他の福音書記者たちと比較して、聖ルカは――聖ヨハネ・クロソストモスが言うように――聖ヨハネ・洗礼者（前駆者）の誕生から始まる新約聖書の出来事を、彼だけが言及しているその出来事を含め、より包括的に網羅している点で際立っている。 同様に、福音書の最後の出来事であるイエス・キリストの天昇についても、マタイとヨハネの福音書では全く言及されておらず、マルコの福音書では簡潔にしか触れられていないが、聖ルカだけが詳細に記述している」。 – 正教会の規定によれば、聖ルカによる福音書は――特別な場合を除き――ペンテコステ後の第17週から第29週までの毎日、典礼で朗読される。 また、第29週から四旬節前の週までは、土曜日と日曜日、および四旬節前の週の月曜日、火曜日、木曜日にのみ朗読される。

[7237] 『使徒行伝』において、聖ルカは、使徒たちへの聖霊の降臨と、主の昇天後にユダヤおよび世界の他の国々でキリスト教の信仰を広め、確立するために彼らが成し遂げた偉業について詳細に記述している。 「とりわけ聖ルカは――聖ヨハネス・クロイソストモスが言うように――ここで、彼が最愛の弟子であり、最も親しい協力者であった聖使徒パウロの行いを記述したのです」。

ケへ行った。クリスケントはガラティアへ、ティトスはダルマティアへ行った。」　ルカだけが私と共にいる[7238]。

ルカは、ローマにおける使徒パウロの殉教の場面を目撃していた可能性が非常に高い。　使徒パウロの死後、教会の伝承によれば、聖ルカはイタリア、ダルマチア、ガリア、そしてとりわけマケドニア――彼は以前にも数年間そこで宣教活動を行っていた――およびマケドニアに隣接するアカイアで、キリストの福音を宣べ伝えた[7239]。

すでに高齢となっていた使徒ルカは、遠く離れたエジプトへの旅に出かけ、そこでイエスの聖なる御名の栄光のために多くの苦労と苦難に耐えた。彼はまずリビア全土を横断して[7240] エジプトに到着し、エジプトのフィヴァイデにおいて、多くの人々をキリストへと導いた。　アレクサンドリアの街では、福音書記者マルコによって按手され、22年間その務めを果たしていたアニアンの後任として、あるアヴィリウスを司教に按手した。　ギリシャに戻ると、彼は再びこの地――主にベオティア地方[7241] ――で教会を設立し、司祭や助祭を按手し、肉体的・精神的に病む人々を癒した。友人であり師である使徒パウロと同様に、聖ルカは*「善き戦いを戦い抜き、その歩みを全うし、信仰を守り抜いた」*。彼は84歳の時、アカイアで殉教の死を遂げた。すなわち、十字架がなかったため、オリーブの木に吊るされて亡くなったのである[7242]。その尊い遺体は、ベオティアの主要都市であるテーベに埋葬された。そこでは、数多くの癒やしをもたらした聖遺物が4世紀後半まで安置されていたが、その後、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルへと移された。

聖使徒ルカの遺骨の所在は、4世紀にそこで起こった数々の癒やしの奇跡によって知られるようになった。特に、眼の病に苦しむ人々に対する癒やしの奇跡が数多く起こった[7243]。使徒同等のコンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス皇帝は、あるアカイアの司教から、聖ルカの遺体がテーベに安置されていることを知ると、エジプトの統治者アルテミオスに聖ルカの聖遺骨を首都へ移送するよう命じ、アルテミオスは盛大な祝典を執り行い、この移送を成し遂げた[7244]。

聖ルカの聖遺骨が海辺から教会へと移送される最中、ある奇跡が起こった。　あるアナトリーという宦官（王室の侍従の一人）が、不治の病を患っていた。彼は医師に多額の金を費やしたが、治癒を得ることはできず、そこで、使徒ルカの尊い聖遺物の奇跡的な力を信じて、聖人に癒やしを祈り求めた。　そこで彼は聖人の聖遺物箱に近づき、持てる力の限り、それを運ぶのを手伝った。するとどうだろうか。彼が数歩歩いた途端、病は彼から去ったのである。　その後、彼は喜びながら聖遺物箱を聖使徒たちの教会へと運び、そこで聖ルカの聖遺物は、聖使徒アンドレイとティモテイの聖遺物と共に祭壇の下に安置された。この地で、聖遺物は奇跡の源となり、正教会の信徒たちから特別な愛をもって崇敬された。

[7238] テモテへの手紙第二4:6, 10。 ――おそらく、聖ルカは、以前と同様にこの時も、その医術をもって、囚人となっていた使徒の病を和らげていたのだろう。教会の伝承によれば、その使徒は頭痛やその他の身体の病に苦しんでいたが、聖ルカはその功績により、使徒から*「愛する医師」*という名を与えられたのである。

[7239] ダルマチア――イリュリア州の南部で、北はパノニア、西はイタリアおよびアドリア海と国境を接していた。――ガリアは、大西洋、ピレネー山脈、地中海、アルプス山脈、ライン川の間に位置する地域を含んでいた。　アカイア――ギリシャ南部の地域で、モレイ半島の北部を占めていた。

[7240] リビア――北アフリカの属州。そこには多くのギリシャ植民都市があった（もっとも、ギリシャ人にとっては、アフリカ全体が時にリビアと呼ばれていた）。

[7241] ベオティア――ギリシャ中部の地域。

[7242] 聖グリゴリオス・テオロゴスが、ユリアヌス皇帝に関する最初の説教で証言している通りである。

[7243] あたかも使徒ルカの医療の技を称えるかのように、主は聖使徒の埋葬地に、治癒の「カルリウス」、すなわち眼病の薬用湿布を雨のように降らせられた。

[7244] 聖ルカの聖遺骨の移送は、教会において4月22日に記念される。

古代の教会著述家たちは、聖ルカが初期のキリスト教徒たちの敬虔な願いに応え、最初に、御手の中に永遠の御子、　私たちの主イエス・キリストを、最初に絵の具で描いたと伝えている。その後、聖ルカは他の二つの聖母マリアのイコンも描き、それらを聖母の御裁きに委ねた。聖母はこれらのイコンをじっくりとご覧になり、こう言われた。

「私から生まれた御子の恵みと、私の慈しみが、これらのイコンに宿りますように[7245]。」

聖ルカはまた、板に聖なる首席使徒ペトロとパウロの像を描き、これにより、神と聖母マリア、そしてすべての聖人の栄光のために、聖なる教会を飾り、これらの聖なるイコンを敬虔に崇める信者たちの救いのために、聖なるイコンを描くという善き、尊い業の礎を築いた。 アーメン。

トロパリオ、第5調:

使徒行伝の語り手であり、キリストの福音書の輝かしい筆記者である、眠りについたルカよ、キリストの教会において栄光ある方よ、聖なる使徒を聖なる賛美歌をもって讃えよう。彼は、人間の弱さ、肉体の病、そして魂の傷を癒やし、絶えず我らの魂のために祈り続ける医者であるから。

コンダク、第2調:

真の敬虔の説教者、言い表し難き神秘の雄弁家、教会の星である神聖なるルカを讃えよう。主は彼を、知恵ある異邦人の教師パウロと共に選び、心の内を唯一ご存知の方である。

聖ユリアヌスの生涯。

記念日：10月18日

聖ユリアヌスは、身分の低い貧しい両親の間に生まれた。若き日、彼は外的な教育を受けることはなかったが、言葉だけでなく、実践を通じてキリストの信仰の真の知恵を身につけた。

成人すると、ユリアヌスは世俗を離れ、パルティアの荒野にあるある洞窟に身を寄せた[7246]。そこで彼は、可能な限りすべての世俗的な欲望を抑え、はかないものや儚いものすべてを超越しようと努め、そのために週に一度だけ、パンと塩、そして水をとった。　彼にとっての慰めであり、霊的な糧となったのは、聖なる預言者であり王であるダビデの詩篇、そして絶え間ない黙想と神との祈りの対話であった。

山の上に置かれた灯台が隠れることができないように、聖人の義なる生活も人々の目から隠れることはできなかった。この聖なる修道士に関する噂はすぐに人々の耳に届き、やがてユリアヌスの元には、聖人の指導と生き方の模範に従って人生を送りたいと願う多くの人々が集まった。　聖なる父に許可を請うと、彼らは聖人の洞窟の近くに、自分たちで作ったテントを張り、賢明な導師の指導の下で修行に励み始めた。

聖ユリアヌスは、やって来た者たちと共に過ごしたのは長くはなかった。完全な隠遁と祈りの生活を送りたいと願った彼は、兄弟団を離れ、50ヴェルスト先にある砂漠の奥深くへと去り、そこで

[7245] 正教会は、聖母マリアの聖像を称え、その賛美歌の中で次のように彼女に呼びかけます。「最初に描かれたあなたの聖像、福音の神秘の伝道者、そしてあなたへ；　女王に捧げられたものよ、どうかあなたを受け入れ、あなたを崇める者たちを救う力強い者とならせてください。そして、再び慈愛に満ちて、私たちの救いの協力者となられたことを喜びなさい。」（10月22日のカザン聖母イコンの礼拝におけるスティヒラ）。– モスクワのウスペンスキー大聖堂には、（ウラジーミル）聖母イコンが安置されており、教会の伝承によれば、これもまた聖ルカによって描かれたものである。

[7246] この荒野は、パルティアの地からユーフラテス川の岸辺まで広がっていた。

完全に孤独な生活を送るようになった。そして、教えを授けるためだけに、時折、彼が残してきた兄弟団のもとを訪れるようになった。

ある日、聖人が兄弟たちに教えを説き終え、砂漠へ戻ろうとしたとき、アステリウスという名の若者が、彼に同行させてほしいと熱心に懇願した。彼は贅沢な環境で育ったが、その敬虔さへの熱意は、まだ彼の力量を超えるほどであった。　ユリアンは当初、水さえもない荒野への過酷な旅をこの若者に思いとどまらせようとしたが、彼の強い願いに心を動かされ、その願いを受け入れて彼を連れて行くことにした。アステリウスは喜びながら長老の後を追ったが、三日が過ぎると体力が衰え、疲れ果ててしまった。　ついに、力尽きた彼は聖なる長老に懇願し、ユリアンが彼を憐れんで、その苦境を和らげてくれるよう頼んだ。聖人は彼に引き返すことを許したが、アステリウスは　、あまりにも衰弱して歩くことさえできなくなっていた。しかも、洞窟へどう戻ればよいのかも分からなかった。　そこで、神の人は、同行者の苦しみを見て心を動かされ、その弱さに配慮して、ひざまずき、若者の救いを神に熱心に祈り求めた。その祈りはあまりにも切実で、涙が地面に滴り落ち、大地を濡らしたほどであった。聖人の祈りは聞き届けられ、地面に落ちた涙の滴が、そこから泉を湧き出させた。

ユリアヌスの祈りの高貴さについて語る際、彼の柔和さについても触れないわけにはいかない。その証となったのが、次のような出来事である。　ある日、前述の聖ユリアヌスの弟子アステリウスは、すでに自らも修道士となり、他の人々の指導者となっていたが、愛する師への敬意の印として、大きなイチジクの袋を肩に担いで師のもとへ贈り物として持参した。彼はこの重荷を、七日間の道のりをかけて運んできたのである。　自分のために他人がこれほど苦労したことに戸惑い、心を痛めたユリアヌスは、その労苦を利用することを望まず、供物を受け取ることを拒んだ。　そこでアステリウスが、長老が献品を受け入れると約束するまでは肩の重荷を下ろさないと断言すると、聖人は、他人の労苦によって得られた食物を受け取ることにためらいを感じつつも、彼に奉仕したいという真摯な願いを見て、その好意を受け入れた。

「お前の願いを叶えてやろう」と聖人は言った。「ただ、その重荷を一刻も早く降ろしてくれ。」

ユリアヌス「背教者」皇帝とペルシャとの戦争中、多くの信者たちは、この聖人が神の忠実な僕であることを知っていたため、キリスト教徒の敵である彼を打倒するよう、聖人に祈りを求めた。聖人は、邪悪な迫害者からの解放を十日間祈り続け、ついに次のような声を聞いた。

「不浄で忌まわしい獣は滅びた。」

祈りを終えた聖人は、喜びをもって兄弟たちの元へ戻った。彼らがその喜びの理由を尋ねると、ユリアヌスはこう答えた。

「兄弟たちよ、今こそ安らぎと喜びの時である。不信心者はいなくなった。主に反逆した者は、彼を追い詰めた御手によって相応の敗北を喫したのだ。だからこそ、彼に迫害されていた教会が勝利を収めているのを見て、私は喜んでいる。また、背教者は、[7247] が崇めていた悪魔たちから何の助けも得られなかったのだ。」

聖ユリアヌスは、当時広まっていたアリウス派の異端と戦うために、少なからぬ労力を費やした。この目的のために、静寂な荒野を愛する彼は、真理について沈黙しないよう、その荒野を後にした。

アリウス派は、自らの偽りの教えを広めるために、アンティオキアで「聖ユリアヌスは、彼らが説く教義を支持している」という噂を流した。　そこで、聖人の弟子であるアカキオスとアステリオスは、敬虔な人物であるフラヴィアノスとディオドロスの勧めにより、惑わされて滅びつつある正統派の信徒たちを救うために、ユリアノスのもとへ向かった。聖人の元へ到着すると、彼らは、キリ

[7247] ユリアヌスの死は363年に訪れた。

スト教徒たちがアリウス派からどのような迫害を受けているかを彼に伝えた[7248]。これを聞いた聖人は、直ちにアンティオキアへと向かった。夜になってある村にたどり着くと、彼は7歳の息子を持つ敬虔な女性の家で休息をとった。聖人が夕食をとっている最中、その息子が食卓からこっそりと抜け出し、井戸に落ちてしまった。　敬虔な女性はこれを知っても、微塵も動揺を見せず、井戸を塞ぐよう命じてから、聖人のもてなしを続けた。彼女の信仰はそれほど深かったため、すでに奇跡を行う力を持つことで知られていた祈りの人の面前では、彼女の家に不幸が起こるはずがなかった。そして主は、彼女の信仰に応じて御業を成し遂げられた。

食事を始める前に、聖人がその少年について尋ねると、家の主人はこう答えました：

「何らかの病に襲われ、少年は寝込んでいた。聖人は、その少年が自分のところへ出てきて祝福を受けるよう求めた。そこで、家の主人は、起きた不幸な出来事を打ち明けるしかなかった。　聖人は直ちに外へ出て、井戸の蓋を取り外すと、水に流されていた少年が全く元気な様子でいるのを見つけ、手を差し伸べて彼を井戸から引き上げた。少年が一体何があったのかと尋ねられると、彼はこう答えた。

「私は何の苦しみも味わいませんでした。聖なる長老が水の上を私を運んでくださり、溺れることを許さなかったからです。」

そこから、その聖人はアンティオキアへ向かい、かつて聖使徒パウロが身を隠していたあの洞窟に身を寄せた。聖人から慰めと祝福を受けようと、洞窟の周りには大勢の群衆が集まったが、彼は激しい「火熱病」（高熱）に襲われ、意識を失ったまま横たわっていた。　やがて、彼は　正気を取り戻し、自らのために祈ると――たちまち病は去った。そこで、待ちわびていた人々のところへ出て行き、謙虚にこう言った。

「もし私の祝福があなた方の役に立つのであれば、神がそれを与えてくださいますように。」

ここで、この聖なる修道士は、その言葉によって肉体的な癒やしだけでなく、霊的な癒やしも行い、まもなく中傷者たちはその罪を暴かれ恥をかかされ、真理を信じる者たちは安らぎと喜びを得た。

ある日、道端に横たわっていた病人が彼の前に現れ、その衣の端に触れると、たちまち立ち上がり、ペトロとヨハネの後をついて歩いた足の不自由な人のように、彼の後を追って行った（使徒行伝3:1–11）。聖人はその病人に肉体の健康を取り戻させただけでなく、正教の信仰においても彼を確固たるものにした。

その後、彼は自身の荒野に戻り、そこで深き老齢に至るまで過ごし、安らかに主のもとへ旅立った[7249]。

11月

11月1日

10月19日（旧暦）

[7248] 正教徒たちの状況が苦しかったのは、主に当時、皇帝の座にアリアニストのヴァレント（364–378年）が就いており、彼が様々な抑圧的な措置を講じてアリアニズムを広めようとしていたためである。

[7249] 聖ユリアヌスは4世紀末に死去した

聖預言者ヨエルの記念日

10月19日の記念日

預言者ヨエル――十二小預言者の一人――は、バフイールの息子であった[7250] 。聖エフレム・シリン、またエピファニオスおよびドロフェイオスによって記録された古代の伝承によれば、預言者ヨエルはヨルダン川東岸地域[7251] 出身であり、ベフォロンまたはベファレ[7252] という町に住んでいた。

ヨエルの預言のきっかけとなったのは、ユダヤ王国を襲った大災害であった[7253] 。長期にわたる干ばつと、大量に襲来したイナゴが、ユダヤの国を完全に荒廃させた。このような災難の中、信仰の強い者でさえも気力を失い、ましてや気弱な者たちは言うまでもなかった。 そこで、預言者ヨエルは民に対し、助けを求める祈りを捧げてエホバに立ち返るよう呼びかけている[7254] 。なぜなら、*「主の日が近づいている」*からである（ヨエル書2:1）。その日は恐ろしい災いの日となる。ユダを襲った災い（イナゴと干ばつ）は、その日の象徴であり、前兆である。 その日が訪れる前に、天と地は揺れ動き、天のすべての光は暗くなり、その時、エホバは御自身の偉大な軍勢を率いて現れる。しかし、今この時でさえ――ヨエルは人々に諭した――これほど大きな災いから逃れる手段はある。現在起こっているもの（イナゴと干ばつ）も、将来迫り来るもの （主の日）に迫るものまで。心を尽くしてエホバに立ち返るべきであり、そうすれば主は御自分の民を大きな災いから救い出してくださる。預言者はこう言う。「全土に断食を定め、例外なくすべての人が神殿に集まろう。 その時、祭司たちは民全体を代表して主にこう叫ぶべきである。*「主よ、あなたの民を憐れんでください。あなたの嗣業を侮辱の的としないでください。諸国民がそれを嘲笑うことのないように。そうすれば、諸国民の間で『彼らの神はどこにいるのか』と言われることになるでしょう。」*（ヨエル書 2:17）

ユダヤの民は預言者の声に耳を傾け、助けを求めてエホバに祈りを捧げ、主は御自分の民を憐れまれた。 主は御自身の預言者ヨエルの口を通して、民の回心に応えて、 、繁栄と地上の恵みの豊かさをお約束になります。主は時宜を得た雨を降らせ、牧草地には草が生い茂り、木々は豊かな実を結び、脱穀場はパンで満たされ、酒ぶねはぶどうの果汁で満たされるでしょう。 その時、イスラエルの子らは、エホバが御自分の民を見捨てず、御自分の民が恥をかくことを許さないことを知るようになる（ヨエル書 2:19–27）。

ヨエルの預言によれば、主が御自身に立ち返ったユダヤの民に示される恵みは、単に地上の祝福に留まるものではない。神の民には霊的な約束も与えられるのである。預言者は、メシアによる遠い未来の恵み深い時代を予見している。 やがて、性別、年齢、身分を問わず、あらゆる肉なる者に聖霊が注がれる時が来る。*「わたしは」*と主は預言者の口を通して言われる。*「わたしの霊をあらゆる肉なる者に注ぐ。そうすれば、あなたがたの息子たちや娘たちは預言し、あなたがたの老人たちは夢を見、若者たちは幻を見るようになる。 また、その日には、僕の者や女奴隷たちにも、わたしの霊を注ぐ」*[7255] （ヨエル書2:28–29）。

[7250] 預言者ヨエルは自らをそう呼んでいる（ヨエル1:1）。

[7251] ガド族、あるいはルベン族の出身である。

[7252] ベフォロン（ベフ・オロン）――エフライム族とベニヤミン族の境界にある町

[7253] ヨエルはユダ王国で預言者としての務めを果たし、その活動はすべてヨアシュ王の治世の最初の25年間、すなわちキリスト降誕前の868年から843年にかけてのものである。

[7254] エホバ（スラブ語で「存在する者」）――神の御名の一つ。これは、神の存在の独自性、永遠性、不変性を意味し、聖書において唯一の真の神を指す際に常に用いられている。

[7255] この預言が成就した本質的かつ主要な出来事として、使徒ペトロは五旬節の日に使徒たちの上に聖霊が降臨したことを指摘している（使徒行伝2:14）。聖霊が降臨したその日、人々は使徒たちが異言を語っているのを聞いて、戸惑いながらこう尋ねた。 「これはどういうことか？」と尋ねたとき、聖使徒ペトロは周囲の人々に向けて演説を行い、この驚くべき現象はすでにヨエルによって予言されていたと述べ、その預言の全文を文字通り引用した。 その後、ヨエルの預言

預言者ヨエルは、天と地における恐ろしい現象に先立って訪れる普遍的な裁き（*「主の日」*）についても予言しており、その日には主の御名を呼び求める者だけが救われると述べた[7256]。 主の日が到来すると、エホバはヨサファトの谷で異邦人に対して裁きを行い、恐ろしい懲罰が彼らに下る（ヨエル3:19）。しかし、異邦人にとっては恐ろしい主の日も、イスラエルにとってはそうではない。イスラエルにとっては、それは救いの日となる。なぜなら、エホバが彼らの守りとなり、盾となってくださるからである。その時、イスラエルには祝福が訪れ、イスラエルのすべての敵は滅びる。「*ユダは永遠に生き、エルサレムは代々続く。 わたしは、まだ洗い流していない彼らの血を洗い流し、主はシオンに住まわれる*」（ヨエル書3:20–21）。こうして、預言者ヨエルの言葉は慰めをもって締めくくられる。 イスラエルは、その祖国を襲ったあらゆる災いの中でも、このような約束に慰めと安らぎを見出さなければならなかった。彼らは、あわれみ深く、忍耐強いエホバが、いかなる災いの中にあっても、御自分の民を忘れず、救い出してくださることを望むことができたのである。

ヨエルのトロパリオ：

神の受肉と聖霊の降臨、そして来るべき審判を予見した預言者ヨエルよ、あなたを崇める者たちを、あなたの祈りによってあらゆる苦しみから救い出してください。

聖殉教者ウアールと、彼と共に殉教した七人のキリスト教教師たちの殉教、ならびに福者クレオパトラとその子ヨハネの記念日

記念日：10月19日

不義なローマ皇帝マクシミアヌスの治世下、エジプトの首都 アレクサンドリアに、ウアルという名の兵士が一人住んでおり、密かに天の王に仕えていた。彼は、不法な 偶像崇拝者たちを恐れ、真の神への信仰をしばらくの間隠していたが、後にキリストのために*「天使や人々の目の前で恥さらしとなった」*（Iコリント4:9）[7257]とき、その信仰を全世界に明らかにした。

その頃、マクシミアヌスはキリスト教徒に対する迫害を開始し、神々への生贄を捧げることを拒むすべてのキリスト教徒を殺害するよう、支配下のすべての国々に勅令を下した。 この命令はエジプトの諸国にも届き、そこでもキリスト教徒の血が容赦なく流されるようになった。なぜなら、被造物ではなく創造主を礼拝する者たちは皆、様々な拷問にさらされたからである。

ウアルは当時、キリストを告白したために投獄されていた信者たちが収容されている牢獄を夜ごとに巡り、看守に金を払って中に入る許可を得ると、 聖なる殉教者たちの縄に口づけをし、彼ら

が成就したことを指摘し、使徒ペトロは次のように続けました（彼の話を聞いていた人々が使徒たちに「 「では、私たちはどうすればよいのでしょうか、兄弟たちよ」と尋ねた後）――*「悔い改めなさい。そして、あなたがた一人ひとりが、罪の赦しのためにイエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、聖霊の賜物を受けます。この約束は、あなたがただけでなく、あなたがたの子供たち、そして、私たちの主なる神が招かれるすべての遠い人々（すなわち異邦人を含む）にも与えられているのです」*（使徒行伝2:37–39）。 こうして、聖霊の注ぎ、すなわちその賜物の豊かな授与に関する預言の成就は、最初のキリスト教のペンテコステの日から始まり、異邦人の数が満ちてキリストの御国に入るまで（*「諸言語の成就」*――ローマ11:25）、ずっと続いていくのである。――預言者ヨエルの書第2章は、ペンテコステの日に教会でパラミアとして朗読される。

[7256] *「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」*（ヨエル2:32）。使徒パウロは、このヨエルの預言者の言葉を異邦人に当てはめている。 「ここ（すなわちキリスト教において）には」と彼は言う、「ユダヤ人と異邦人の区別はない。なぜなら、すべての者を招く主は、すべての人にとって豊かな方であり、主の御名を呼び求める者は、だれでも救われるからである」（ローマ10:12–13）。

[7257] 恥だったのは――注目を浴びた時である。

の血を洗い流し、傷を包帯で巻き、食糧を届け、主から彼への慈悲を執り成してくれるよう彼らに懇願した。

ある日、荒野に身を隠していた七人のキリスト教の教師たち[7258]が捕らえられ、エジプトの総督のもとに連行された。　総督は彼らを取り調べ、信仰が揺るぎないことを知ると、彼らを激しく拷問し、その後、縛り上げて牢獄に投げ込んだ。このことを知ったウアルは、いつものように夜中に聖人たちが投獄された牢獄へと急ぎ、看守たちに金を渡して聖人たちの元へ入った。　彼らの手の縛りを解き、足枷から解放すると[7259]、彼は彼らに食事を差し出し、すでに丸八日間何も食べていなかった彼らに、どうかそれを口にしてほしいと懇願した。その間、彼は彼らの足元にひれ伏し、彼らの頬に口づけをし、彼らの苦難を称えながらこう言った。

– 主の良き忠実な僕たちよ、あなたがたは幸いである。主の喜びの中に入る者たちよ。あなたがたは、血を流すことさえ厭わず、主のために立ち続けたからである（ヘブライ人への手紙12:4）[7260]。良き戦士たちよ、あなたがたは幸いである。天において、至高者の御手によって冠が編まれている者たちよ。「*忍耐をもって、私たちの前にある競技場を走り抜く*」（ヘブライ人への手紙12:1）、そして明日には、私が確信しているように、あなたがたは苦難を終えるでしょう。キリストの殉教者たちよ、あなたがたは幸いである。天の御国があなたがたに開かれている。あなたがたは、私たちのために苦しまれたキリストと共に苦しんでいるからである。「*キリストと共に苦しむのは、キリストと共に栄光を受けるためである*」（ローマ8:17）。どうか、神に愛された聖なる方たちよ、主キリストに私のために祈り、主が私に憐れみをお示しくださいますように。私も主のために苦しみたいと願っていますが、そのための確固たる心持ちがありません。あなたがたが経験されているのを見るような、あの苦しみへの恐れがあるからです。

すると、聖人たちはこう答えました。

「愛する者よ、心に恐れを抱いていては、誰も完全さには達することはできません。種を蒔かなければ収穫はなく、苦しみを経なければ栄冠を戴くこともありません。福音書の言葉を思い出してください。『*もし人が人々の前でわたしを否むなら、わたしも天の父の前でその人を否む*』　（マタイ10:33）。もしあなたが一時的な苦しみをおそれれば、永遠の苦しみからは逃れられない。もし地上でキリストを告白することを恐れるなら、天において御顔を仰ぐ喜びを味わうことはないだろう。さあ、兄弟よ、私たちと共に、私たちの功績を見守っておられる主のもとへ、殉教の道を歩みましょう。私たちと共に苦難に耐えなさい。このような仲間を、そう簡単には見つけられないからです。

このような言葉を聞いて、ウアルは神への愛に燃え上がり、キリストの御名のためにあらゆる苦難に耐え抜く力を自分の中に感じた。彼はその夜一晩中、聖なる殉教者たちと共に牢獄で過ごし、彼らの教えに喜びをもって耳を傾けた。

朝になると、総督の家来たちが聖なる殉教者たちを裁判に連行するために牢屋へやって来た。そこで彼らは、囚人たちと共に座り、感動しながら彼らの言葉を聞いていたウアルを見つけた。彼らは驚きながら彼に言った。

「ウアルよ、ここで何をしているのだ？　正気なのか、あの狡猾な者たちの戯言に惑わされているとは。もし誰かがこのことを総督や貴族たちに告げれば、お前は軍階を失うだけでなく、命さえも奪われることになるのではないかと恐れないのか？」

ウアルはこう答えた。

「お前たちのうち、誰が総督に私を密告するというのか？　お前たちは私の友人だろう。たとえ密告したとしても、私はキリスト教徒たちと共に、キリストのために死ぬ覚悟がある。」

[7258] つまり、キリスト教徒の信徒たちが教えを求めて訪ねてきた隠者たちのことです。

[7259] 手、足、さらには頭を通す穴が開けられた木製の板で、牢獄に閉じ込められた者たちが逃亡できないように、その体に装着されていたものである。

[7260] すなわち、キリストのために自らの血を流した者たちのことである。

すると、家来たちは黙り込み、六人の殉教者を連れ出した。しかし、傷のために力尽きていた七人目は牢獄に残され、息を引き取ってキリストのもとへ旅立った。彼は自分の場所をウアルに譲り、ウアルがその場所を引き継いで、彼の苦しみを終わらせるようにしたのだ。

縛られた聖人たちが、威厳を帯びて裁判官の席に座っていた総督の前に引き出されると、彼らは偶像への生贄を捧げるよう強要された。しかし、彼らが従わなかったため、服を脱がされ、すでに傷だらけになっていた部位を容赦なく殴打された。　古い傷の上に新たな傷を負わされることで、彼らの苦しみは増すばかりだったが、彼らはただこう言いながら耐え抜いた。

「我らはキリスト者である。」

その後、総督は彼らを一瞥して言った。

「彼らは七人ではなかったか？　今や六人しかいない。七人目はどこへ行ったのか？」

総督がそう言い終えるやいなや、そこに駆けつけた聖ウアルは、神への熱意に満たされ、その真ん中に立ち、こう言った。

「七人目は私です。なぜなら、一人はすでにこの世の旅を終え、キリストのもとに立ち、私を彼の苦しみの後継者として残していったからです。ですから、彼があなたに負っていたものは、私が彼に代わって支払う用意があります。私は彼の代わりに、キリストのために、この善良な殉教者たちと共に苦しみたいのです。なぜなら、私もキリスト教徒だからです。」

総督は、この言葉を聞くと、目の前に立っていた者たちに尋ねた。

「この者は誰だ？」と尋ねた。彼らは答えた：

「ウアルという戦士、ヒアニアのスピラの長です[7261]。」

総督は驚き、ウアルに言った。

「いったいどの悪魔が、お前を確実な破滅へと導いたのか？　お前は軍人としての名誉を失い、本来享受すべき特権を剥奪され、自らの命を大きな災難にさらすことになるのだぞ。」

至福のウアルはこう答えた。

「天から降ったパンと、わが主の尊き御血の聖杯を、私はあなたの栄誉や収入よりも重んじます。私にとって、わがキリスト以上に愛おしいものはありません。」　主なしには、あなたの名誉も、私の位も、多額の収入も、さらには命さえも、私にとって何の価値もない。なぜなら、キリストのために苦難に遭うことこそが私の名誉であり、キリストのためにすべてを失うことこそが私の得るものであり、キリストのために死ぬことこそが私の命だからである。

一方、総督は六人の殉教者たちに激しい眼差しを向け、こう言った。

「これはお前たちの仕業だ、不敬虔な欺瞞者どもよ。お前たちがこの王の戦士を惑わせ、お前たちの魔術で彼を正気を失わせたのだ。　それゆえ――わが偉大なる神々にかけて誓う！――私は彼よりも先にあなたたちを滅ぼし、あなたがたがわが神々に与えたこの不名誉に対して報復してやる。あなたがたは、不死の神々を冒涜し、他の人々を何らかの惑わしによってこの邪悪な行いに駆り立てているのだから、生き残るに値しないのだ。

聖者たちは答えた。

「我々はウアラを惑わしたのではなく、むしろ彼を惑わしから救ったのだ。我々は彼を狂わせたのではなく、それどころか、彼を正気に戻したのだ。神は、彼に偉業を成し遂げるための強さと勇気を授け、我々と共に、あなたたちやあなたたちの神々の取るに足らない力を打ち破るよう導かれたのだ。　少し待てば、キリストに仕える彼の勇気を目にするだろう。我々は彼を天使の軍勢に加え入れたのだ。お前は我々を滅ぼせることを自慢しているのか？　しかし、我々こそ、万人の主のために自らの命を捧げることを切に願っているのだ。

[7261] より正確には（ギリシャ語から）：ティアナのコゴルタ（連隊の一部）から。ティアナはエジプトの都市（Tyanis）である。ローマのコゴルタは、兵士が徴集された都市の名前を冠していた。

すると、総督は言った。

「エジプトの神々にひれ伏さなければ、直ちにあなたたちの体を粉々に砕いてやる！」

聖徒たちは答えた：

「私たちは、天と地を創造しなかった神々を拒絶する（エレミヤ10:11）。」

一方、至福のウアルは、総督をさらに激怒させようと、彼にこう言った。

「『*無知な者は愚かなことを語る*』と、預言者イザヤは言っている（イザヤ32:6）[7262] 。ほら、彼らの体はあなたの前に横たわっている――好きに扱ってくれ！」

総督は激怒し、ウアールを裸にして木に吊るし、拷問を始めるよう命じた。そして聖人たちにこう言った。

「誰が誰に勝つか見てみよう――あなたがたが苦しみを受け入れて我々を打ち負かすのか、それとも我々が苦しみを与えてあなたがたを打ち負かすのか。誓って言うが、もしあなたがたが忍耐によって我々を打ち負かすなら、私は自分の神々を捨て、あなたがたのキリストを信じるようになる。」

聖人たちはこう答えた。

「その力を我らのうちの一人に試してみよ。もし一人を打ち負かすことができれば、他の者たちに対しても同じ希望を抱くことができるだろう。」

すでに拷問を受け始めていたウアルは、聖なる殉教者たちにこう言った。

「聖なる殉教者たちよ！　私、あなた方のしもべを祝福し、あなた方と同じ運命に与かるようお導きください。主キリストに私のために祈ってください。主が私に忍耐をお与えくださいますように。主は私たちの本質をご存知であり、私たちの霊は目覚めていても、肉体は弱いからです（マタイ26:41）。」

聖人たちは天を仰ぎ、彼のために熱心に祈った。その間、ウアールの召使いたちは彼の全身を棒で打ち始めた。ウアールがこれらの殴打に耐えていると、総督は言った。

「さあ、ウアルよ、お前のキリストが、お前に何の益をもたらすというのか？」

ウアルは勇敢に答えた。

「お前の悪魔たちから得るものより、比べものにならないほど大きい。」その間、聖人たちはウアールを励まし、彼にこう呼びかけた。「勇気を出せ、ウアールよ。堅く立ちなさい。キリストがあなたの前に立ち、目に見えぬ形であなたを強めておられるのだから。」ウアールは答えた。

「まことに、私は主の助けを感じた。苦しみなど何でもないからだ。」

すると、拷問者たちは鉄のナイフやスクレーパーで彼の体を削り始め、その後、彼を頭を下にして木に釘で打ち付け、背中から皮を剥ぎ取り、腹部を節のある棒で、それが裂けて内臓がすべて地面に落ちるまで打ち続けた。　聖なる殉教者たちは、彼の内臓が飛び出すのを見て泣き崩れた。すると、拷問官は泣く殉教者たちを見て、大声で叫んだ。

「ほら、お前たちは打ち負かされた。もう力尽きたのだ。苦痛を恐れて泣いているではないか。キリストがお前たちを我々の手から救い出すことはできないと悟るために、一体他に何が必要だというのか？　今や、お前たちに残されているのは、我々の神々にひれ伏すことだけだ。」

すると聖人たちはこう答えた。

「お前は人間ではなく、獣だ！」　我々は打ち負かされたのではなく、むしろ、我々を強めてくださるイエスの助けによって、我々が勝利しているのだ。もし我々が泣いたとしても、それは拷問を恐れてのことではなく、あなたが非人道的に苦しめている我らの兄弟に対する自然な愛ゆえである。そして心の中では、善良な殉教者にすでに冠が用意されているのを見て、喜びに満ちているのだ。」

[7262] つまり、愚かな者からは愚かな言葉しか聞けないということだ。

総督は彼らを牢獄へ連行するよう命じた。すると、木に吊るされ苦しみを受けていたウアルは、鎖でつながれた聖人たちが牢獄へ引きずられていくのを見て、こう叫んだ。

「わが師たちよ！　キリストに、私のために最後のお祈りをしてください。私はもうこの肉体を離れようとしています。そして、私を永遠の命へと導いてくださったことに、心から感謝いたします。」

約五時間にわたる拷問の末、聖ウアルは、その高潔で聖なる魂を主の御手に委ねた[7263]。一方、拷問者たちは、彼がまだ生きていると思い込み、すでに冷たくなっていたその体を殴打し、苦しめた。その後、彼がすでに亡くなっていることに気づくと、木から降ろし、拷問者の命令に従って街の外へ引きずり出し、動物の死骸を捨てる場所に放り出し、犬に食わせた。

パレスチナ出身の敬虔な未亡人クレオパトラ――その夫はエジプトの軍司令官であり、ヨハネという名のまだ幼い息子を一人持っていた――は、遠くからウアールの苦しみを見守り、悲しみに暮れていた。　聖人の遺体が城外の地に投げ捨てられると、彼女は夜、数人の奴隷を連れて、苦難に満ちた聖ウアールの遺体を密かに運び出した。それを自宅に持ち帰ると、寝室の自分の寝台の前に墓穴を掘り、そこに遺体を葬った。

翌朝、総督は他の殉教者たちを牢獄から連れ出し、長く拷問を加えた後、剣で斬り殺し、埋葬もされずに町の外に投げ捨てた。彼らの遺体は、同じく夜間に、キリストの信仰を密かに告白する者たちによって埋葬された。　一方、クレオパトラは、聖ウアールの棺の上で絶えず蝋燭を灯し、香を焚き続け、彼を神の前における自らの偉大な守護者であり執り成し手として崇敬していた。

数年が経ち、迫害が収まると、クレオパトラは故国へ戻りたいと願い、聖ウアールの聖遺物をどうすれば持ち帰れるか、長い間考えを巡らせた。ついに、高価な贈り物を用意すると、彼女は仲介者を通じて総督に次のような願いを伝えた。

「私の夫は軍司令官であり、王の奉仕の最中にこの地で亡くなりました。彼はまだ正式に埋葬されていません。異国の地では、重要な軍司令官にふさわしい形で彼を葬ることはできないからです。私は異国の地で未亡人として残されましたが、故郷に戻り、親族のもとへ帰りたいのです。　ですから、閣下、どうか私の愛する夫の遺骨を連れて行き、故郷の先祖の墓所で、敬意を込めて埋葬させてください。死後も彼らと引き離されたくはないのです。

この女性は、キリスト教徒たちが、彼女が聖殉教者の遺骨を彼らの街から持ち出そうとしていることを知れば、それを妨害し、この貴重な宝物を奪い取ってしまうかもしれないと考えたため、このように行動したのです。　総督は贈り物を受け取ると、夫の遺体を持ち帰ることを許可した。そこで彼女は、その代わりに聖ウアールの聖遺物を受け取り、それをまるでエジプトからの貴重な宝物であるかのようにパレスチナへ持ち帰り、ファヴォルの近くにあるエドラと呼ばれる自分の村で、先祖たちと共に安置した。　彼女は毎日、聖人の墓を訪れ、そこで香を焚き、ろうそくを灯した。そして、彼女の模範に倣って、そこに住む他のキリスト教徒たちも彼女と共に聖人の墓を訪れるようになり、病人を連れてくるようになった。彼らは聖ウアールの祈りによって、その墓の前で癒やしを受けたのである。　こうして、聖ウアールの名声は周辺の各地に広まり、人々は皆、信仰を胸に彼の墓へと押し寄せた。

クレオパトラは、キリスト教徒たちが聖人の墓前で祈りを捧げるために集まっているのを見て、聖人の名に因んで教会を建設することを決意し、その計画を実行に移し始めた。この頃、彼女の息子ヨハネは17歳に達しており、クレオパトラは彼を王の軍隊に配属させようと努めた[7264]；何人かの取り次ぎ人の助けを借りて、彼女は王に息子のために軍隊での名誉ある地位を懇願した。彼は兵役に編

[7263] 聖ウアールの死は307年に訪れた。

[7264] この年齢になると、若者たちは通常、兵役に就くことになっていた。

入され、聖ウアールの名を冠した教会の建設が始まったまさにその時期に、その地位を示す徽章を授与された。その時、クレオパトラはこう言った。

「神の家の建設が完了するまでは、私の息子は王の軍隊に仕えない。なぜなら、私は彼に私と共に聖殉教者の棺を運ばせ、その後に王の命令を遂行させたいからだ。」

教会の建設が完了すると、　クレオパトラは司教、司祭、修道士たちを呼び集め、棺から聖殉教者の尊い遺骨を取り出し、それを貴重な寝台の上に安置した。そして遺骨の上には、息子が身に着けるはずだった軍服と帯を置き、聖人の遺骨に触れることでそれらが聖別されるようにした。　同時に、彼女は聖人に、集まったすべての聖職者や司祭たちから祝福を受けた自分の息子の助け手となってくれるよう、熱心に祈った。　そこには数え切れないほどのキリスト教徒が集まり、聖遺物を載せた寝台は教会へと運ばれた――クレオパトラも息子と共に聖遺物を運んだ。教会の聖別式が終わると、聖人の聖遺物は祭壇の下に安置され、そこで神聖な典礼が執り行われることとなった[7265]。一方、クレオパトラは聖ウアールの聖遺物にひれ伏し、次のように祈った。

「キリストの受難者よ、あなたに祈ります。神の御心に適い、私と、私の唯一の息子にとって有益なことを、神に請い願ってください。私は、主ご自身が望まれること以上のことを願うつもりはありません。主ご自身が、私たちにとって何が有益かを御存知です。どうか、私たちの上に主の善き、完全な御心が成されますように！」

聖なる礼拝が終わると、クレオパトラは集まった全員のために豪華な饗宴を催し、自らも息子と共に客たちをもてなした。その時、客たちをもてなしていた彼女の息子が突然体調を崩し、自分の寝台に横になった。　すべての客が食卓から立ち上がったとき、クレオパトラは息子を呼び、残った食事を口にさせるよう促したが、ヨハネは高熱に苛まれて一言も発することができなかった。息子が病気になったのを見て、母はこう言った。

「主にかけて誓います。息子の病がどうなるか確かめるまでは、私は一口のパンも口にしません！」

彼女は息子のそばに座り、彼を焼き尽くすような病の熱をできる限り冷まそうとしながら、唯一の息子を悼んだ。真夜中、少年は息を引き取り、母を慰めようのない悲しみに残した。彼女は泣きながら聖ウアールの神殿へと駆け込み、その墓にひれ伏して叫んだ。

「神に愛された者よ、私があなたのためにこれほど苦労したのに、これがあなたの報いなのか？私があなたのために夫を軽んじ、すべての希望をあなたに託したあの時、あなたは私にこれほどの助けしか与えなかったのか？あなたは私のたった一人の息子を死なせ、私の希望を打ち砕き、私の目の光を奪ったのだ。　今、老いた私を誰が養ってくれるというのか？　死の際、誰が私の目を閉じてくれるというのか？　誰が私の遺体を葬ってくれるというのか？　息子が、時期尚早に枯れてしまった花のように死んでしまうのを見るくらいなら、私自身が死んだほうがましだった。かつてエリシャがソマ人の女に息子を返したように（列王記下4章）、私の息子を返してくれ。さもなければ、私を今すぐここから連れ去ってくれ。この苦しみゆえに、生きることは私にとって重荷となってしまったのだから。

聖人の棺のそばで泣き続けながら、彼女は極度の疲労と深い悲しみのため、しばらくの間、眠りに落ちた。　夢の中で、聖ウアルが彼女の息子の手を引いて彼女の前に現れた。二人は太陽のように輝き、その衣は雪よりも白く、金色の帯を締め、頭には言葉に尽くせないほどの美しさの冠を戴いていた。彼らを見た聖なるクレオパトラは、彼らの足元にひれ伏したが、聖ウアルは彼女を立ち上がらせ、こう言った。

[7265] そして現在でも、正教会の教会を建立する際には、殉教者の遺骨の上に祭壇を築くというこの最も古い慣習が守られている。

「おお、女よ、なぜ私に不満を言うのか？　エジプトや旅の途中で、あなたが私に尽くしてくれた恩を、私が忘れたというのか？　それとも、あなたが家畜の死体の山から私の遺体を引き取り、自分の部屋に安置してくれた時、私が何も感じなかったとでも思っているのか？　私は常にあなたの祈りに耳を傾け、神にあなたのために祈っているではないか。何よりもまず、あなたが私を墓に葬ったあなたの親族たちのために、彼らの罪が赦されるよう神に懇願した。その後、私はあなたの息子を天の王に仕える者として迎え入れた。　あなた自身が、ここで私に、神の御心に適い、あなたとあなたの息子にとって有益なことを神に願い求めてほしいと頼んだのではないですか？　そこで、私は全善なる神に願い求めました。すると神は、その言い表せないほどの慈しみによって、あなたの息子を天の軍勢に迎え入れることをお許しになりました。そして今、あなたが見ている通り、あなたの息子は神の御座の傍らに立つ者の一人となったのです。　もし望むなら、彼を取り戻し、この世の、一時的な王のもとへ仕えに行かせてください。あなたは、彼が天の、永遠の王に仕えることを望んでいないようですね。

一方、ウアールの腕に抱かれていた少年は、彼を抱きしめてこう言った。

「いいえ、主よ！　母の言葉に耳を傾けないでください。不正とあらゆる不法に満ちたこの世へ、私を返さないでください。私はあなたの取り成しのおかげで、そこから救われたのです。父よ、あなたや聖徒たちとの交わりを、私から奪わないでください。」

それから、母に向かってこう言った。

「なぜそんなに泣いているのですか、母上？私は王であるキリストの軍勢に加えられ、天使たちと共に天で御前に立つ権利を与えられました。それなのに、母上は今、私をその王国から引き離し、屈辱にさらそうとしているのです。」

聖女クレオパトラは、息子が天使の位に就いているのを見て、こう言った。

「私をあなたと一緒に連れて行ってください。私もあなたたちと一緒にいたいのです。」

しかし、聖ウアルはこう答えた。

「ここ、地上に残っていても、あなたはやはり私たちと共にいるのです。さあ、平安のうちに去りなさい。そして、主が命じられた時、私たちがあなたを迎えに来ます。」

この言葉を終えると、二人は姿を消した。彼女は我に返ると、心に言い表せないほどの喜びと歓びを感じ、その幻視を司祭たちに語った。そして彼らと共に、聖ウアールと息子の墓のそばで、もはや涙を流すことなく、主を喜び祝いつつ、尊厳をもって埋葬の儀式を執り行った。　その後、彼女は自分の財産を貧しい人々に分け与え、自らも世俗を捨てて聖ウアールの教会のそばで暮らし、断食と祈りをもって昼夜を問わず神に仕えた。毎週日曜日、祈りの最中に、聖ウアールが息子と共に、まばゆいばかりの輝きを放って彼女の前に現れた。　このような修行を七年間続けた後、至福のクレオパトラは、神に喜ばれ、この世を去った。　彼女の遺体は聖ウアールの教会に、息子のヨハネの遺体のそばに安置され、その聖なる魂は聖ウアールとヨハネと共に、天において喜びのうちに神の御前に立っている。神に、世々限りなく栄光あれ。アーメン。

ウアルと、彼と共に七人のキリスト教の教師たちへのトロパリオ：

聖徒の軍勢よ、苦難に耐える者たちの中で、不当に迫害された者たちを目の当たりにし、あなたは男らしくその強さを示された。そして自らの意志で苦難へと身を投じ、キリストのために死ぬことを切望された。あなたの苦難の勝利の栄光を受けられたウアルよ、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第4調：

キリストに従いし殉教者ウアレよ、その杯を飲み干し、苦難の冠を戴き、天使たちと共に喜び祝うあなたよ。絶えず私たちの魂のために祈ってください。

尊き父ヨハネ・リルスキーの記念日

記念日10月19日

私たちの尊い父ヨハネ・リルスキーは、偉大な断食者であり、栄光ある都市スレデツ近郊のブルガリアの村スクリーナ出身であった[7266]。彼は、キリストを愛するブルガリア王ペトロの治世下、またギリシャ皇帝コンスタンティノス・ポルフィロロドスの治世下で生きた[7267]。敬虔な両親が亡くなると、ヨハネは残された全財産を貧しい人々に施した——彼は若き頃から何よりも神を愛していたからである——そして自ら修道者の道を選び、一枚の革の服以外何も身につけずに故郷の村を去った。　高く人里離れた山に登ると、彼はそこで修道生活を送り始め、野生の植物だけを糧として暮らした。しばらくして、悪魔の唆しにより、夜間に強盗たちがヨハネに襲いかかり、彼を殴打してその場所から追い出した。そこでヨハネはその山を離れ、リリヤの荒野[7268]へと向かい、そこで厳しい修業生活を続けた。彼は大きな木の洞に身を寄せ、断食と涙に明け暮れ、神の前で絶え間ない祈りを捧げて過ごした。　彼はその荒野で60年間を過ごした。そこで彼は植物だけを糧とし、人の顔を見ることは一度もなく、野生の獣たちに囲まれて暮らしていた。ヨハネのそのような忍耐に対し、神はその場所にエンドウ豆を育むよう命じられ、聖人はそのエンドウ豆を長年にわたり糧としていた。

ある日、羊飼いたちがヨハネの隠れ家を発見し、そのことを至る所で語り広めた[7269]。多くの人々がヨハネのもとを訪れ、病人を連れてきたが、彼らはヨハネの祈りによって癒やされた。　この聖人の名声はその土地全体に広まり、聖ヨハネの修道生活に憧れた多くの人々が、彼のそばで暮らしたいと願うようになりました。　彼らは隣の洞窟に教会を建て、修道院を設立し、その長であり牧者となったのが聖ヨハネであった。ヨハネは羊の群れにとって良き牧者として、多くの異教徒を主のもとへ導き、主の御名によって偉大で栄光に満ちた奇跡を行った[7270]。

7266 スレデツ——古代にはサルディカと呼ばれていた。現在、この都市はソフィアと呼ばれ、ブルガリア公国の首都となっている。

7267 ペトルは927年から968年までブルガリアを統治した。コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトスは912年から959年までビザンツ帝国を統治した。

7268 その名は、ラスロガ市の近郊を流れるリロ川に由来する。

7269 その経緯はこうだった。羊たちが何らかの恐怖に駆られて突然、急流を駆け下り、ある隠者が住む場所までたどり着いた。羊を追って駆けつけた羊飼いたちは、驚いてその隠者の姿を見た。「お前たちは空腹でここに来たのだな。私のエンドウ豆を摘んで食べなさい」と隠者は言った。　彼らは食べて満腹になった。ただ一人だけが、隠者の祝福も得ずにたくさんのさやを蓄えとして持ち去ったが、道中で仲間たちに分け与えたところ、盗んださやの中には一粒の豆も入っていなかった。彼らは悔い改めて、善良な老人のもとへ戻った。　老人は彼らを許し、微笑みながらこう言った。「ほら、子供たちよ、この実こそ、神が荒野で生きる者たちの糧として定められたものなのだ」。

7270 多くの人々が尊者ヨハネのもとを訪れ、病人を連れてきた。彼らは聖人の祈りによって癒やされた。数年間、悪霊に取りつかれていたある男は、ヨハネの荒野へ向かう人々を見て、彼らの後を追った。　リリスカヤの荒野まであと一ヴェルスタも残っていないところで、彼は地面に倒れ込み、「これ以上は歩けない。火で焼かれるようだ」と叫び始めた。同行者たちは、その悪霊に取り憑かれた男を縛り上げ、聖人のもとへ運び、彼を癒やしてほしいと懇願した。　「わが子らよ」と彼は言った。「これは私の力では及ばない。私もあなた方と同じように力のない人間だ。神のみが彼を癒すことができる」。彼らは執拗に懇願し、隠遁者は彼のために祈った。すると突然、病人は健康を取り戻し、皆が神を賛美した。

高齢に達したヨハネは、安らかにこの世を去り[7271] 、天国での永遠の至福に与かり、弟子たちによって埋葬された。

かなりの時が経った後、ヨハネは弟子たちの前に現れ、自分の遺骸をスレデツの町へ移すよう命じた。棺を開けると、弟子たちはヨハネの遺体が無傷で朽ちることなく、芳香を放っているのを見て、このことを神に賛美した。　彼らはその遺骸を敬意を込めてスレデツの町へ移し、聖ルカ福音書の教会に安置した。その後、その場所に聖ヨハネの名を冠した美しい教会が建てられ、そこには彼の尊い遺骸が安置され、そこから驚くべき、そして栄光に満ちた癒しの力が湧き出ていた。

それから何年も経って、ハンガリー王は多数の軍勢を率いてギリシャの地へ進軍し、その地を支配下に置いた。スレデツの町に到達すると、彼は聖人の遺骨が納められた聖櫃を手に入れた。――彼は聖人の奇跡について多く耳にしていたからである――そして、それを敬意を込めて自国へ運び、オストリゴム[7272] の街に安置するよう命じた。一方、オストリゴムの大司教は、聖ヨハネ・リルスキーが神の前で偉大であり、あらゆる国でその奇跡によって称えられていると聞いたが、それを信じようとはしなかった。

「古文書にはそのような奇跡を行う聖人の記述はない」と彼は言い、聖人への礼拝に行くことを拒んだ。すると、突然、彼の舌が動かなくなってしまった。　その失語の原因が、自分が聖人を冒涜したことにあると悟った大司教は、急いで聖人の聖櫃へと駆け寄り、それにひれ伏してその尊い遺骨に口づけをし、自分の過ちを詫びた。　神の御心に適う者、聖ヨハネは、まもなく大司教の祈りを聞き入れ、直ちに彼の舌を解き、再びはっきりと話す能力を与えた。癒やしを受けた大司教は、涙ながらに聖人の前で自らの罪を皆に告白し、神を賛美し、神の御心に適う者である聖ヨハネを称えた。

聖人はハンガリーの地で、他にも数多くの輝かしい奇跡を起こした。聖ヨハネのこれらの奇跡に驚嘆したハンガリー王は、聖人の聖櫃を銀と金で飾り、その聖遺物に口づけをした後、再び大きな栄誉をもってスレデツの街へと送り戻した。　こうして、しばらくして、神はギリシャ人による暴政で疲弊していたブルガリア国家の独立を回復させることをお許しになり、このブルガリア王国の復興は、キリストを愛する王ヨハン・アセンのもとで成し遂げられた。　この王は、即位当初から、破壊されたブルガリアの都市を再建・強化し、周辺諸国へ遠征して、新たな都市を自らの王国に編入していった。　スレツの町に到達してこれを征服すると、彼はそこで聖ヨアン・リルスキの聖遺物を目にし、その聖遺物の周囲で起こる奇跡の話を耳にして、その聖なる聖櫃に礼拝を捧げた。　その尊い聖遺物に口づけをした後、彼はバシレイオス総主教とその聖職者たちに、聖人の栄光に満ちた聖遺物箱を運び出し、大いなる栄誉をもってブルガリアの首都テルノフへ運ぶよう命じた。その行列には、皇帝の命令により、選り抜きの戦士300名が参加した。

バシレイオス総主教は尊い聖遺物箱を戦車に載せ、皆は喜びながら旅立ち、神を賛美し、聖人の祈りに守られながら進んだ。その中には、同聖人が設立した修道院の修道士たちも、修道院長ヨアンニキオスと共に歩いていた。　敬虔なイオアン・アセン皇帝自身は行列に先立ち、急いで首都に到着すると、そこで教会と聖人の聖遺物箱を安置する場所を設けるよう命じた。

[7271] 聖ヨハネは946年8月18日、70歳でこの世を去った。

[7272] オストリーグ――ハンガリーの都市で、ドナウ川の右岸、グラナ川の河口対岸に位置する。この都市は非常に古く、ハンガリーにおけるキリスト教発祥の地であった。住民はローマ・カトリック教徒である。　オストリーグの大司教は、同時にハンガリー全土のプリマス公でもある。（プリマスとはカトリックの大司教の称号であり、西洋では東方の総主教の位に相当する。）聖人は、西暦1097年に再び自身の聖堂に安置された。

そして、王は尊者聖人の聖遺物を運ぶ行列が近づいていることを知ると、自ら「オコプ」[7273]へ出向き、貴族や役人、そして大勢の民衆と共にそれを出迎えた。皆が喜び、歓喜に沸いた[7274]。聖遺物を目の当たりにすると、皆がそれにひれ伏した。 聖人の遺骸は、教会が再建されるまでの7日間、その「塹壕」に安置されていた。そして教会が再建されると、聖遺骸はそこへ移され、大いなる栄誉をもって安置され、教会自体も聖別された。 そこでは今もなお、聖人の奇跡を起こす聖遺骨が安置されており、絶え間ない癒やしの泉を湧き出させている。信仰を持って訪れる者――盲人は目が見えるようになり、口がきけない者は話し始め、病人は健康を取り戻し、悪霊に取りつかれた者は癒やされる。

ヨアン・リルスキーへのトロパリオ、第1声:

悔い改めの礎、憐れみの模範、慰めの姿、霊的な完成、天使に等しいあなたの生涯であった、尊者よ。祈りと断食と涙の中に留まっていた父ヨハネよ、キリスト神に、私たちの魂のために祈ってください。

テルノヴォからリリスキ修道院への聖遺物の帰還に際するトロパリオ:

あなたの聖遺物の帰還により、あなたの修道院は豊かになり、あなたの教会は、それを受け入れて輝きを増し、美しく飾られて、信者たちを喜びをもって集め、あなたの光り輝く光の中でこの日を祝うよう招きます。「来てください」と語りかけ、恵みの賜物を受け取ってください。

コンダク、第8調:

天使のような生を羨み、尊き方よ、この世のすべてを捨てて、キリストのもとへ駆け寄られました。そして、その戒めによって守られ、敵の攻撃にも揺るがない堅固な柱となられました。

- 同日、ペルシアの司教サドク聖司祭殉教者および彼と共に殉教した128人の殉教者の殉教記念日。彼らの記念日は2月20日にも執り行われる。

11月2日

10月20日（旧暦）

聖殉教者アルテミオス

記念日は10月20日

聖殉教者アルテミオスについて、古代の伝承によれば、彼はローマの貴族の家系に生まれ、元老院議員の地位にあり、コンスタンティウス帝の治世下で帝国の全財産を管理していたという。

アルテミオスはコンスタンティヌス大帝の治世下、この敬虔な皇帝の軍隊においてその務めを始めた。 コンスタンティヌスと共に、空に現れた聖十字架の奇跡的な御印を目撃した際、彼はキリ

[7273] オコップとは、城壁のことである。

[7274] 聖ヨハネの聖遺骨の移送は1238年に行われた。この移送は、教会によって10月19日に記念されている。

スト教の信仰を確固たるものとし、コンスタンティヌス皇帝とその家門の忠実な臣下となった[7275]。コンスタンティヌスの死後、彼はその息子コンスタンティウス[7276]の側で、親友として常に付き添い、皇帝は彼に最も名誉ある任務を任せた。　例えば、コンスタンティウスがある司教から、キリストの使徒アンデレとルカの遺体がアカイアに埋葬されていることを知ると[7277]、アルテミオスにこれらの尊い宝物をコンスタンティノープルへ移送するよう命じた。　アルテミオスは皇帝の命令に従い、聖なる使徒たちの聖遺物を大いなる栄誉をもって帝都へ移送し、その功績により、彼にふさわしい昇進を皇帝から授かった。すなわち、皇帝は彼をエジプトの公爵（ドゥクス）兼アウグスタリウス[7278]に任命し、アルテミオスはそこで神に喜ばれる生活を送った。　イエス・キリストの御名の栄光と誉れを広めながら、彼はエジプトにおいて多くの偶像を打ち倒し、粉砕した。

コンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス王が崩御すると、不敬虔な背教者ユリアヌス[7279]がローマ帝国全土の権力を掌握した。彼は以前は密かに、そして今や公然と、我らの主イエス・キリストから背き、公然と偶像を崇拝するようになった。　彼は、東も西も問わず、自分の王国の全土に勅令を発し、コンスタンティヌス大帝の治世中にキリスト教徒によって異教徒から奪われた神殿を、今や再び異教徒に返還するよう命じた。同時に、これらの神殿に再び偶像を安置し、神々への生贄を捧げるよう命じた。

こうして、この不敬虔な王は、聖なる皇帝コンスタンティヌスの時代に廃れた多神教を至る所で復活させ、キリスト教徒に対しては激しい迫害を加え、彼らを苦しめ、殺害し、財産を略奪し、イエス・キリストの聖なる御名を冒涜した。

キリスト教を辱めるために、　不敬虔なユリアヌスは、聖預言者エリセオの遺骨と、聖ヨハネ・バプティスタの聖遺物――セバスティアに安置されていた尊い頭部と右手を除く――を聖櫃から取り出し、それらを動物や不敬虔な人々の骨と混ぜ合わせて焼き払い、その灰を空中に散らした。　キリスト教徒たちはその灰と、焼却後に残った骨を集め、尊い場所に保管した。

その後、彼はパネアデの町（[7280]）に、キリストの衣の端に触れて癒やされた出血の病を患っていた女性によって建立された、救い主キリストの像があることを知った（マタイ9:20）。王はこの像を倒し、完全に粉々になるまで広場を引いて回すよう命じた。ただ、この像の頭部だけは、あるキリスト教徒が盗み出し、保存した。一方、この像が立っていた場所には、王は自身の像を建てるよう命じたが、それは雷の一撃によって破壊されてしまった。

大軍を率いた不信心者ユリアヌスは、ペルシア軍に攻め入ることを決意し、この遠征の途中でアンティオキアに到着すると、いつものようにキリストの教会に対する迫害を開始し、信者たちを殺害した。

その頃、アンティオキアの二人の長老、エウゲニオスとマカリオス――学識豊かな人々――が彼の元へ連行された。ユリアヌスは彼らと神々について長く論争し、自身の不敬な考えを証明するた

[7275] コンスタンティヌスは、強大なライバルであるマクセンティウスに立ち向かった。彼は誰に助けを祈ればよいか分からなかったが、ちょうど太陽が西に傾いた頃、コンスタンティヌスは空に輝く十字架と、その下に「これをもって勝利せよ」という文字を見た。このしるしは、彼の軍勢にも見えた。　その夜、夢の中でコンスタンティヌスにはキリストご自身が現れ、十字架の形をした旗を掲げ、兵士たちの盾や兜に十字架を描くよう命じられた。コンスタンティヌスはこの指示に従い、まもなくマクセンティウスの軍勢を完全に打ち破った。その後、彼はキリスト教への支持を公に表明した。

[7276] 在位：337年から361年まで。

[7277] ギリシャの属州。

[7278] ドゥクス――軍司令官。アウグスタリウス――現代の「殿下」に相当する称号。

[7279] ユリアヌスは、コンスタンティヌス大帝の甥であり、コンスタンティウスが存命中の頃から同皇帝の共同統治者として、ローマ帝国の西部諸州を統治していた。

[7280] パレスチナ北部の都市（別名：ケサレア・フィリッポス）。

めに異教のギリシャ人著述家たちの様々な言葉を引用したが、神を語る賢明な長老たちの口を封じることはできなかった。　それどころか、彼自身が彼らに打ちのめされ、恥をかかされ、不敬の罪を暴かれたのである。その恥辱に耐えかねたユリアヌスは、聖人たちをまず裸にしてから容赦なく鞭打つよう命じ、エウゲニウスには五百回の鞭打ちが、マカリウスには数え切れないほどの鞭打ちが下された。

これらの聖人たちが激しい拷問にさらされていたその時、処刑の場に偉大なるアルテミオスがたまたま居合わせた。ユリアヌスが即位し、ペルシアに対して遠征に出ようとしていることを耳にした――このため、彼にも全軍を率いてアンティオキアへ到着するよう勅令が下されていた――　――アルテミオスは軍を率いてこの地を訪れ、ユリアヌスに王にふさわしい敬意を表し、その際に贈り物を献上した。そして、聖なる殉教者エウゲニオスとマカリオスが拷問を受けている間、王のそばに立っていた。　不敬虔なユリアヌスがその汚れた口で主イエス・キリストを冒涜するのを耳にしたアルテミオスは、熱意に燃え、王のもとへ歩み寄って言った。

「陛下、なぜ、罪のない、神に献身した人々をこれほど非人道的に苦しめ、正教の信仰から背くよう強いるのですか？　陛下もまた、弱き人間であることをご承知おきください。たとえ神が陛下を王に立てられたとしても、やはり陛下も悪魔の誘惑にさらされる可能性があります。　私は、この悪の第一の張本人は、狡猾な悪魔であると考えます。かつて悪魔が神にヨブを試す許可を求め、それを得たように、今や悪魔はあなたを我々に敵対させ、我々を襲わせ、あなたの手を通じてキリストの麦を滅ぼし、自らの籾殻をまき散らそうとしているのです。　しかし、その努力は無駄であり、その力は取るに足らない。なぜなら、主が来られ、キリストが昇天された十字架が立てられて以来、悪魔の傲慢は打ち砕かれ、悪魔の力は粉砕されたからである。　それゆえ、王よ、惑わされてはならない。また、悪魔に迎合するために、神に守られているキリスト教徒の民を迫害してはならない。キリストの堅固さと力は、打ち負かすことも、乗り越えることもできないものであることを知れ。

これを聞いて、ユリアヌスは怒りに燃え上がり、大声で叫んだ。

「この不敬な者は、いったい誰であり、どこから来たのか。これほど大胆不敵に我々に語りかけ、我々の面と向かって侮辱するとは！」

王の傍らにいた者たちは答えた。

「陛下！　アレクサンドリアのドゥクス兼アウグスタリウスです。」

「何だと？」と王は言った。「それは、わが弟ガッル[7281] の殺害に加担した、あの忌まわしいアルテミオスか？」

「はい、威光ある王よ、まさにその人物です」と、取り巻きたちは答えた。

王はこう言った。

「不死の神々、とりわけダフニオスのアポロン[7282] に感謝せねばならない。彼らが、自らここへやって来たこの敵を私の手に引き渡してくれたのだから。さあ、この無価値な者をその地位から剥奪せよ。 彼から帯を取り上げ[7283] 、今すぐ処罰に処し、明日、神々の御心があれば、私は彼に対し、我が兄弟殺害の罪で判決を下す。私は彼によって流された無実の血の復讐を果たし、ただ一つの刑罰ではなく、数多くの刑罰をもって彼を滅ぼす。なぜなら、彼が流したのは単なる人間の血ではなく、王の血だからである。

[7281] ユリアヌスの弟ガッルスは、子宝に恵まれなかったコンスタンティウス帝によって皇位継承者に指名されたが、その後、コンスタンティウス帝の王位を転覆させようと公然と画策したため、同帝の怒りを買った。　コンスタンティウスは、ガッルから東方諸州の支配権を奪うため、信頼する部下たちを派遣したが、その使者たちは主君に気に入られたいという欲求から、ガッルを殺害してしまった。

[7282] ダフネはアンティオキアの郊外である。そこは極めて美しい土地で、あらゆる種類の木々が茂り、至る所に透き通った小川が流れ、ユリアヌスが他のどの神よりも崇拝していた太陽神アポロンの像が立っていた。

[7283] 帯――これは軍司令官の特別な象徴であった。

王がこう言うと、直ちに王の従者たちはアルテミオスを捕らえ、彼から軍司令官の帯やその他の位階の印を取り上げ、彼を裸にした。　そして聖人は処刑人の手に引き渡され、彼らは聖人の手足を縛り、四方に引き伸ばした[7284]。そして、牛の腱で背中や腹を激しく打ち続けたため、疲労のせいで四組の処刑人が交代するほどであった。　しかし、聖人は真に超人的な忍耐力を示し、まるで全く感覚がないかのように皆に映った。彼は一声も発せず、うめき声も上げず、微動だにせず、苦しみを受ける人々が通常示すような苦痛の兆候を一切見せることはなかった。　大地は彼の血で染まったが、彼は揺るぎない姿勢を保ち続けたため、不信心なユリアヌス自身でさえ含め、誰もが彼に驚嘆した。その後、皇帝は彼への拷問を止めるよう命じ、聖人は聖殉教者エウゲニオスとマカリオスと共に牢獄へと連行された。この時、殉教者たちは次のように歌った。　*「神よ、あなたは私たちを試み、銀を精錬するように私たちを精錬されました。あなたは私たちを網にかけ、腰に足枷をはめ、私たちの頭上に人を据えられました。私たちは火と水の中に入りましたが、あなたは私たちを自由へと導き出してくださいました」*（詩編65:10–12）[7285]。

歌い終えると、アルテミオスは心の中でこう言った。

「アルテミオよ、見よ、キリストの傷跡があなたの体に刻まれている。あとは、あなたの中に残された血をもって、あなたの魂そのものをキリストのために捧げるだけだ。」そして彼は、預言者の言葉を思い出した。*「わたしは、打つ者たちにわたしの背を、打つ者たちにわたしの頬を委ねた」*（イザヤ50:6）[7286]。しかし、私のような不肖の者が、主よりも多くの苦しみを耐え忍んだというのか？」と彼は言った。　主の全身は傷だらけであった。足から頭まで、傷のない箇所は一つもなく、頭は茨の冠で突き刺され、手と足は私の罪のために十字架に釘付けにされた。それなのに、主ご自身は罪を知らず、不義な言葉を一つも口にされなかったのだ。　ああ、私の苦しみと比べれば、私の主の苦しみはなんと偉大であり、私という哀れな人間は、主の忍耐と悪意のなさから、なんと遠く離れていることか！私は喜び、楽しみます。なぜなら、私は主の苦しみを身にまとっているからです。それこそが、私の苦しみをやわらげてくれるのです。　主よ、あなたの苦しみをもって私を冠してくださったことに感謝いたします！どうか、私を殉教の道を最後まで歩み通させてください。私に与えられたこの偉業に値しない者とならせないでください。私は、最も慈愛に満ちた、人を愛する主よ、あなたの寛大さに希望を託しているのですから！

このように心の中で祈りを捧げた後、聖人は牢獄へと向かい、一晩中、聖エウゲニオスと聖マカリオスと共にそこに留まり、神を賛美し続けた。

朝になると、背教者ユリアヌスは再び殉教者たちを法廷へ出頭するよう命じ、そこで尋問もせずに彼らを引き離した。アルテミオスを自分の元に残し、エウゲニオスとマカリオスについては、アラビアのオアシスへ流刑に処した[7287]。その地は極めて不健康な土地であり、そこには死をもたらす風が吹き荒れ、そこへやって来る者は誰も一年以上生き延びることができない。なぜなら、必ず激しい病に倒れ、死に至るからである。　かくして、聖エウゲニオスと聖マカリオスは、そこに送られてからしばらくして、至福の死を迎えた[7288]。一方、聖アルテミオスは数多くの苦難に耐え抜いた。しかし当初、ユリアヌスは、羊の皮を被った狼のように、あたかもアルテミオスに同情し、彼を憐れんでいるかのように穏やかに語りかけた。

[7284] 処刑される者の手足は、処刑を妨げられないよう、地面に打ち込まれた四本の杭に縛り付けられた。

[7285] この箇所では、バビロン捕囚の生活が、まるで白熱した炉の中に銀が置かれているようなもの、あるいは網にかかった鳥のようなものだったユダヤ人たちについて語られている。「背中の苦しみ」とは、背中への殴打のことである。「頭の上の人々」とは、私たちの命を掌握している拷問者たちのことである。

[7286] 預言者は本来、救い主の将来の苦難について語っているが、その言葉は、キリストの苦難のくびきを負う信者たちにも当てはまる。

[7287] オアシム――アラビアにあるオアシスのひとつ。アラビア砂漠のオアシスとは、植物と水に恵まれた場所のことを指す。

[7288] 彼らの記念日は2月19日

「アルテミオよ、お前の無謀な傲慢さゆえに、私はお前の老いを辱め、健康を損なわざるを得なかった。そのことを私は深く遺憾に思う。さあ、ここに来て、神々、とりわけ私が深く崇めるダフニオスの神アポロンに、まず最初に犠牲を捧げよ。　もしこれを果たすならば、私はお前の私の兄弟に対する罪を赦し、さらに栄光と名誉に満ちた地位を授ける。すなわち、[7289] の偉大なる神々の最高祭司とし、全宇宙の祭司たちの長とする。私はお前を私の父と呼び、お前は私の王国において、私に次ぐ第二の地位に就くことになる。　アルテミウスよ、お前自身も知っている通り、私の兄ガルは、何の罪もなく、ただ嫉妬のゆえにコンスタンティウスによって殺害されたのだ。王位には、コンスタンティヌスの家系よりも、我々の家系の方がより正当な権利を持っていた。なぜなら、私の父であるコンスタンティウスは、私の祖父であるコンスタンティウスと、マクシミアヌスの娘との間に生まれたが、コンスタンティヌスは、平民の女性であるヘレナとの間に生まれたのだ[7290] 。さらに、私の祖父は、ヘレナとの間に息子が生まれた当時、まだカエサルではなかったが、私の父が生まれた時には、すでに王位に就いていた。　しかし、コンスタンティヌスは大胆にも王権を奪い取った。その息子コンスタンティウスは、私の父とその兄弟たちを殺害し、つい最近、私の兄ガッルスをも殺害した。彼は私をも殺そうとしたが、神々が私を彼の手から救ってくださった。神々への信頼を胸に、私はキリスト教を捨て、ギリシャの宗教へと回帰した。　私はよく知っている。ギリシャの信仰とローマの信仰こそが最も古くからの信仰であり、キリスト教はごく最近現れたものである。コンスタンティヌスは、古くからの良きローマの生活規範を捨ててキリスト教を受け入れたが、それはただ彼の無知と愚かさによるものに過ぎない。そして神々は、彼を不敬虔で、自分たちの信頼に値しない者として憎んだ。　神々は彼を憎み、自らから拒絶し、その不敬虔な子孫を生きている者たちの間から根絶やしにしたのだ[7291] 。私の言うことは真実ではないか、アルテミオスよ？　あなたは年老いて賢明な人だ――さあ、私が真実を語っているかどうか、判断してほしい。それゆえ、真実を認め、我々の味方になってほしい。私は、あなたが私の友となり、王国を治める上で私の助け手となってくれることを望んでいるのだ。

これを聞いて少しの間沈黙した後、聖アルテミオスは次のように語り始めた。

――まず第一に、あなたの弟について申し上げますが、王よ、私は彼の死について何の罪もありません――そもそも、私は行動においても言葉においても、彼に害を及ぼしたことは一度もありません。いくら調査しても、私が彼の死に責任があることを証明することはできないでしょう。　私は、彼が真のキリスト教徒であり、敬虔で、キリストの律法に従順な人物であることを知っていました。天と地、そして聖なる天使たちのすべて、そして私が仕える主イエス・キリストが、私があなたの兄の殺害に関与しておらず、その殺害者たちに何ら加担しなかったことを証ししてくださいますように。　あなたの兄弟に関する審議が行われた当時、私はコンスタンティウス王のそばにはいませんでした。今年に至るまで、私はずっとエジプトに留まっていたのです。　そして、私の救い主であるキリストを否定せよというあなたの提案に対しては、ネブカドネツァルの前にいた三人の若者の言葉（

[7289] 最高祭司という地位がいかに重要であったかは、「最高祭司」という呼称がローマ皇帝の称号の一つであったことからも明らかである。この祭司には、自分に従わない下級祭司を死刑に処する権限があった。彼はヌマの古くからの王宮に住んでいた。

[7290] 西ローマ帝国の皇帝マクシミアヌス・ヘルクルスは、西暦284年から305年まで在位した。 – コンスタンティウス（通称クロルス）は、彼の後継者であり、当初はヘレナ（聖使徒同等のヘレナ）と結婚していたが、その後、ディオクレティアヌス帝の要求により彼女と離婚し、マクシミアヌス・ヘルクルの娘テオドラと結婚した。　コンスタンティヌス大帝は、やはり長男として皇位継承者に指名された。

[7291] コンスタンティヌス大帝には、コンスタンティヌス、コンスタンティウス、コンスタンスの3人の息子がいた。長男は上ガリア、ブリタニア、ゲルマニア、イスパニアを、末っ子は下ガリア、イタリア、イリュリア、アフリカを、次男は東方諸国とエジプトを支配下に置いた。　まもなくコンスタンティヌスは戦死し、コンスタンスは狩りの最中に側近のマグネンティウスによって殺害された。

ダニエル書3:18）をもって答えます。「王よ、あなたがたに知っておいていただきたい。私はあなたがたの神々には仕えず、あなたが愛するアポロンの金の像には決して拝礼しません。」 あなたは 、至福のコンスタンティヌスとその一族を、神々の敵であり狂人であると称して侮辱した。しかし、彼は天からの特別な召しによって、あなた方の神々からキリストへと回心したのだ。このことについては、その出来事の証人である私の話を聞いてほしい。　我々が、残忍な迫害者であり血に飢えたマクセンティウス[7292] との戦いに赴いていた時、正午頃、太陽よりも明るく輝く十字架が空に現れ、その十字架には星でラテン語の文字が刻まれており、コンスタンティヌスに勝利を約束していた。　私たち全員が、空に現れたその十字架を目撃し、そこに書かれた文字を読み取った。そして今なお、軍の中には、自らの目ではっきりと見たことをよく覚えている古参の兵士たちが大勢いる。もし望むなら調べてみれば、私が真実を語っていることがわかるだろう。しかし、なぜ私がこのことを語るのか? キリストの到来は、その到来のずっと前から預言者たちによって予告されていた。あなた自身もよくご存知の通りだ。キリストが実際にこの地上に来られたことを示す証拠は数多くあり、あなた方の神々でさえ、キリストの到来を予言することが珍しくなかった。シヴィラの書やウェルギリウスも、まさにそのことを語っているのだ[7293] 。

さらに聖人は、偶像の中に宿る悪霊たちが、神の力によって自らの意志に反して、キリストを真の神であると告白することがいかに頻繁であったかについて語った。　一方、ユリアヌスはアルテミオスの真実の言葉を耐えかね、殉教者の衣服を剥ぎ取り、赤熱した針でその脇腹を刺し、背中に鋭い三叉の矛を突き刺すよう命じた。　しかしアルテミオスは、以前と同様に、まるで痛みを感じていないかのように、叫びも呻き声も上げず、苦しみの中で驚くべき忍耐強さを見せた。　これらの拷問の後、ユリアヌスは再び彼を牢獄に送り返し、聖人を飢えと渇きで苦しめるよう命じた。一方、自身はダフネと呼ばれる場所へ赴き、自らの神アポロンに犠牲を捧げ、ペルシア人に対する戦争の行方について神に問いかけた[7294] 。 彼はそこでかなり長い間滞在し、毎日、邪悪なアポロンに大量の動物を犠牲として捧げたが、それでもなお、望んだ答えを得ることはできなかった。　というのも、アポロンの偶像の中に宿り、人々に答えを与えていた悪霊は、聖バビラス（アンティオキアの司教であり殉教者）の聖遺骨と、バビラスと共に殉教した三人の幼児の遺骸がその場所に移された時から、沈黙してしまったからである[7295] 。したがって、アポロンはユリアヌスに何の答えも返さなかった。 王は、長い調査の末、アポロンの像が沈黙したのは、その近くにバビラの聖遺物が安置されていたためであることを知ると、直ちにキリスト教徒たちにそこから聖遺物を持ち去るよう命じた。　しかし、聖遺骨がその場所から持ち去られるやいなや、アポロンの神殿に天から火が降り注ぎ、そこにあった偶像とともに神殿を焼き尽くした。

一方、牢獄に囚われていたアルテミオスには、主ご自身と聖なる天使たちが訪れられた。アルテミオスが祈っていると、キリストが現れてこう言われた。

「勇気を出せ、アルテミオよ！　わたしはあなたと共にあり、拷問者たちがあなたに与えたあらゆる苦痛からあなたを救い出し、すでにあなたのために栄光の冠を用意している。あなたが地上の

[7292] ローマ皇帝マクセンティウスに対するこの遠征は、312年にコンスタンティヌスによって行われた。

[7293] 古代ローマ人にとって、「シヴィラ」とは予言者のことを指した。彼女たちの予言は3冊の書物にまとめられ、カピトリーノのユピテル神殿、そして後にパラティーノの丘のアポロ神殿に保管されていた。　キリスト教の著述家たちもこれらの予言に注目し、そこにキリストの御国の到来をほのめかすいくつかの示唆を見出していた。――ウェルギリウス・マロン――著名なローマの詩人（紀元前70年生まれ）。――アルテミウスがここで言及しているのは、明らかに彼の詩集『牧歌』のことである。

[7294] 異教徒たちは、神々が人間を慈しむ心から、自らの意志を人々に明らかにしたいと望んでいると考えていた。そのため、彼らは神々から送られたとされる夢を信じていた。　さらに、異教徒の間には特別な神託所――神々の代弁者として、神官や、特別な恍惚状態に入ることができる人々が語り、そこから神官が多少なりとも首尾一貫した言葉を組み立てる場所や神殿――が存在した。神アポロンは、とりわけこれらの神託所の指導者と見なされていた。

[7295] 殉教者バビラの記念日は9月4日に祝われる

人の前でわたしを公に告白したように、わたしも天の父の前であなたを公に告白するからだ。　さあ、勇気を持ち、喜びなさい。あなたはわたしの王国で、わたしと共にいることになるのだ。

主からこの言葉を聞いた殉教者は、直ちに主を賛美し始めた。その聖なる体には、傷やただれが一つも残っておらず、その魂は神の慰めに満たされ、彼は歌いながら神を賛美した。　一方、彼が牢獄に投げ込まれて以来、彼は何も口にせず、何も飲まず、その状態は彼の死に至るまで続いた。アルテミオスは、聖霊の恵みによって天から養われていたのである。

犠牲の儀式から恥辱を帯びて戻ったユリアヌスは、アポロ神殿の焼失の責任をキリスト教徒に押し付け――まさに彼らこそが夜間に火をつけたのだと主張し――キリスト教徒から聖なる教会を奪い取り、それらを偶像崇拝の神殿へと改め、キリスト教徒に対して激しい迫害を加えるようになった。その後、牢獄からアルテミオスを呼び出させ、彼にこう言った。

「お前は、ダフネで何が起きたか、もちろん聞いただろう――不敬虔なキリスト教徒たちが、偉大なる神アポロンの神殿に火を放ち、その美しい像を破壊したのだ。しかし、不法な者たちはこれを喜んではならない。我々を嘲笑してはならない。なぜなら、私はこの報いを、あなたがたの言うところの『[7296]』のように、七十倍の七倍にして返すからだ。」

聖アルテミオスはこう答えた。

「怒れる神の御許しにより、天から降りた火があなたの神を滅ぼし、その神殿を焼き尽くしたと聞いた。しかし、もしあなたのアポロンが神であったのなら、なぜ自らを火から救わなかったのか？」

王は言った：

「お前という不運な者よ、アポロンの焼失を笑い、喜んでいるのか？」

「私は、あなたがたが、自らを火から救うことさえできなかったような神に仕えているという、その狂気を嘲笑しているのです」とアルテミオスは答えた。「そのような神が、どうしてあなたがたを永遠の火から救うことができるというのか？　私は彼の没落を慰めとし、私のキリストが奇跡的に成し遂げるすべてのことを喜んでいるのです。」　もしあなたが、何の罪もなく、あなたに何の悪も働いていないキリスト教徒たちに七十七倍の報復を与えると自慢するのなら、あなたはまもなく訪れる消えぬ火と永遠の苦しみの中に投げ込まれる時、その報いを受けることになるだろう。なぜなら、あなたの滅びはすでに近づいており、まもなくあなたの記憶は「[7297]」という叫び声と共に消え去るからだ。

拷問官は激怒し、石工たちに一つの大きな石を切り分け、それを縛られてその石の下の石板の上に横たわっていたアルテミオスの上に上から突き落とすよう命じた。それが実行されると、殉教者の全身は彼の上に落下した石に覆われ、その重みで押しつぶされ、すべての骨が砕け、　内臓は飛び出し、体の骨格は砕け、眼球は眼窩から飛び出した。なんと偉大な奇跡であろうか！石の間に押しつぶされながらも、聖人は生き続け、助け主である神を呼び求め、ダビデの言葉を口にした。

「『あなたは、私にとって手の届かない岩の上に私を高く上げられた。あなたは私の避難所、敵からの堅固な守りだからです』」（詩編60:3–4）[7298]。*「『あなたは私の足を岩の上に置き、私の歩みを確かなものにしてくださった』」*（詩編39:3）[7299]。さあ、今こそ、独り子よ、私の霊をお受けください。あなたは私の苦境をご存知ですから、私を敵の手に委ねないでください。

[7296] ユリアンは、マタイによる福音書18章22節の文意を歪曲している。ここでの話題は報復や刑罰ではなく、罪を犯した兄弟を七十七回まで赦すことについてである。

[7297] つまり、あなたの破滅は並外れたものとなり、人々の間に大きな波紋を広げるだろう。

[7298] すなわち、「主よ、あなたは私を岩の上、すなわち安全な場所に立たせてくださいました。あなたは私のために、私が救いを見いだせる堅固な柱、あるいは塔となってくださいました。

[7299] 足を正す――真の、まっすぐな道に導くこと。

こうして、石に押しつぶされたまま、聖人は丸一日を過ごした。その後、ユリアヌスは聖人がすでに死んだものと考えて石を取り除くよう命じたが、聖人は皆の驚きにも生き返り、立ち上がって歩き回った。　そして、誰もが彼を見るのを恐れた。彼らの目の前には、板のように押しつぶされ、骨は砕け、内臓は飛び出した裸の男がいた。顔は押しつぶされ、目は眼窩から飛び出していたが、それでも命はまだ彼の中にあり、足は動くことができ、舌は依然としてはっきりと話すことができた。拷問者自身も、この奇跡を目の当たりにして恐怖に駆られ、側近たちにこう言った。

「これは人間なのか、それとも幽霊なのか？　あの魔術師が我々の目を欺いたのではないか？なぜなら、我々の目の前にあるのは、恐ろしく、自然の理を超えた光景だからだ。　彼がまだ生きているなど、誰が予想しただろうか？　今や、内臓が飛び出し、すべての関節が砕け、弛緩しているにもかかわらず、彼はなおも動き、歩き、話すのだ。しかし、どうやら我らの神々は、他者を戒めるために彼を生かしておいたようだ。すなわち、神々の権威を認めようとしなかった者が、彼を見る者たちにとって恐ろしい恐怖の対象であり続けるように、と。

そしてユリアヌスは殉教者に言った。

「お前は、哀れな者よ、すでに両目を失い、体のあらゆる部位が完全に損なわれている。それなのに、これまで無駄に望みをかけてきたあの方への希望を、どうしてまだ抱き続けられるのか？　しかし、慈悲深い神々に憐れみを乞うがよい。そうすれば、神々は汝を赦し、地獄の苦しみへと追いやることはないだろう。」

キリストの殉教者は、その拷問の話を聞くと、ほほえんで王に言った。

「お前の神々が、私を苦しみへと追いやるというのか？　彼ら自身、彼らに用意された苦しみから逃れることさえできない。そして、彼らと共に、お前もまた、永遠の火に投げ込まれ、永遠に苦しむことになるだろう。なぜなら、お前は神の御子を否み、私たちのために流されたその聖なる血を踏みつけ、破滅をもたらす悪魔たちに従って、聖霊の恵みを冒涜したからだ。　しかし、私は、あなたが私に与えた些細な苦痛の代償として、私がそのために苦しんでいる主のもとで、主の天の宮殿において永遠の安息を得られることを望んでいる。

ユリアヌスはこれを聞くと、殉教者に次のような判決を下した。

「アルテミウスよ、神々を冒涜し、ローマおよび我らの法律を踏み躙り、自らをローマ人ではなくキリスト教徒であると認め、ドゥクスやアウグスタリウスという称号の代わりに、ガリラヤ人であると名乗った者――我々は彼を死刑に処し、その忌まわしい首を剣で切り落とすよう命じる。」

この判決の後、聖人は処刑場へと連行されたが、彼は「*この世から解き放たれ、キリストと共にありたい*」と願い、言葉に尽くせないほどの喜びをもってそこへ向かった[7300]。そして、処刑が行われるべき場所に到着すると、彼は祈りの時間を求め、東の方角に向き直り、三度ひざまずいて長く祈りを捧げた。その後、彼は天から次のような声を聞いた。

「聖徒たちと共に、あなたのために用意された報いを受け取りなさい。」

すると直ちに、この福者は頭を垂れ、10月20日、ある兵士によって首を刎ねられた。彼が殉教の偉業を成し遂げたその日は、金曜日であった。　彼の尊い聖なる遺体は、アンティオキア教会の助祭女であるアリスタという名の女性が、拷問官から懇願して受け取り、貴重な香油を塗って聖櫃に納め、コンスタンティノープルへ送った。そこで、その遺体は栄誉をもって埋葬された。　彼の聖遺物からは多くの驚くべき奇跡が起こり、病める者たちには様々な癒しがもたらされました。そして今もなお、聖アルテミオスは、彼への信仰をもって駆け寄るすべての人々に、その恵みを与え続けています。

アルテミオスの死後まもなく、彼がユリアヌスの目の前で、その死について語った予言が現実のものとなった。「お前に間もなく破滅が訪れる。そして、お前の名声が騒然として消え去るその時

[7300] フィリピ1:23。解き放たれる――この世の生活から去ること。

まで、もうそう長くはかからないだろう」。　というのも、ユリアヌスは聖アルテミオスを殺害した後、軍を率いてアンティオキアを出発し、ペルシアへと進軍したからである。彼がクテシフォン[7301]という都市にたどり着いたとき、あるペルシア人の老人が彼のもとに現れた。その老人は尊敬され、非常に分別のある人物であった。　その老人はユリアヌスに、ペルシア王国を裏切ると約束し、この無法な王とその全軍をペルシアへと案内する役目を自ら引き受けた。しかし、それは邪悪な血に飢えた王にとって何の利益にもならなかった。というのも、そのペルシア人は彼を欺き、まっすぐな道を進んでいるかのように見せかけながら、悪党をカルマニトの砂漠[7302]へと導き、そこでは絶え間なく断崖絶壁が現れ、水も食料も全くない通行不能な場所だったため、兵士たちは皆、飢えと渇きで衰弱し、馬やラクダはすべて倒れてしまった。その後、案内人は、ローマ軍をそのような人里離れた恐ろしい場所に意図的に導き、彼らの戦力を弱めるつもりだったと告白した。　「私がこうしたのは――と彼は言った――祖国が敵に占領されるのを見たくないからであり、私の祖国全体があなた方の手によって滅びるよりは、私一人ここで死ぬほうがましだからだ」。そして、この告白の直後、そのペルシア人は兵士たちによって四つ裂きにされた。　砂漠をさまよっていたギリシャ人とローマ人は、意に反してペルシア軍と遭遇し、そこで起きた戦闘の最中に、ユリアヌスの兵士の多くが倒れた。　ここで、神の報いがユリアヌス自身にも降りかかった。彼は、天からの目に見えない手と、目に見えない武器によって脇腹を貫かれ、その刃は腹部を貫通したのだ。彼は激しくうめき声を上げ、手で血をひと掴みして空中に投げつけ、こう叫んだ。

「お前は勝った、キリストよ！　存分に味わえ、ガリラヤ人よ！」

そして、苦しみの中で息を引き取る際、彼はその邪悪で汚れた魂を吐き出し、聖アルテミオスの預言通り、轟音と共に滅びた[7303]。一方、ローマ軍はユリアヌスの死後、キリスト教徒であったヨヴィアヌスを皇帝に擁立し、彼はペルシアと和平を結び、帰還した。　かくして、ユリアヌスはユダと共に地獄で苦しんでいる[7304]。一方、アルテミオスは聖人たちと共に天国で喜びを分かち合っている[7305]。三位一体の唯一の神、父と子と聖霊の御前に立ち、御名に永遠の栄光あれ。アーメン。

コンダク、第2調:

敬虔にして冠を戴く殉教者、敵に対して勝利を収め、相応しい賛歌をもって称えられしアルテミオスを、殉教者の中でも最も偉大なる者、また奇跡の与え主として、心から賛美しよう。彼は主に対し、私たちすべてのために祈ってくださるからである。

義人アルテミオス、ヴェルコルスの奇跡行者の記念日[7306]

記念日：10月20日

[7301] ティグリス川の左岸にあるペルシャの都市。ローマ支配時代には強固な要塞であったが、何度かローマ人の支配下に入った。

[7302] カルマニア――現在のイランのケルマン州。その北部（草原地帯のカルマニア）はほぼ全域が不毛の砂漠であり、南部は砂が多く、とはいえ、そこにはいくつかの川が流れていた。

[7303] ユリアヌスは西暦363年に死去した。

[7304] ユリアヌスは死後、異教の神殿に埋葬されたが、その後、遺体はコンスタンティノープルに移され、聖使徒教会に妻の遺体の隣に安置された。ただし、背教者の遺体として、葬儀は執り行われなかった。

[7305] 聖アルテミオスの死は363年10月20日に訪れた。彼の聖遺骨はその後、アナスタシウス皇帝によって建設された聖ヨハネ・バプティスタ教会に安置され、同教会は聖アルテミオス教会と呼ばれるようになった。

[7306] 様々な古代の伝記の写本に基づいて作成された。

聖なる義人アルテミオス、ヴェルコルの奇跡行者は、1532年にドヴィナ地方のピネゲ川沿い、ケヴロラから上流へ2ヴェルスタの地点にあるヴェルコル村で生まれた[7307] 。 両親――父のコスマ（通称「マリー」）と母のアポリーナリア――は、その村の農民でした。彼らは息子を、神への畏敬の念とキリスト教の敬虔さの中で育て上げました。 5歳の頃からすでに、彼は子供らしい習性を避け始め、子供の遊びを好まず、物静かで、柔和で、神を畏れ、両親に従順であり、自分の年齢の許す限り、父の農作業を熱心に手伝っていた。

ある日、12歳になった彼は、父と共に畑で働き、土を耕していた。突然、不気味な雲が押し寄せ、夜のように暗くなり、暴風雨が起こった。恐怖に震えるアルテミオスの頭上で、恐ろしい雷鳴が轟き――そして、その祝福された少年は息絶えて倒れた[7308] 。

かくして、慈悲深く、英知に満ちた主なる神は、御自身の義なるしもべの魂を、御自身の天の御国に迎え入れることをお許しになったのである。

アルテミオスの同村人たちは、自らの無知ゆえに、この神の御訪れを理解できず、迷信から、この至福の若者の予期せぬ死を、アルテミオスの何らかの隠れた罪を罰する神の正義の裁きであると見なした。 至福のアルテミオスの遺体は、突然死した者として、葬儀も執り行われず、埋葬もされずに放置された。遺体は松林の空き地に地面の上に置かれ、小枝や樹皮で覆われ、木製の柵で囲まれた。そうして、誰からも忘れ去られたまま、32年間その場に横たわっていた。

ある夏の日のこと、ヴェルコレ村の聖ニコライ・チュドトヴォルツ教会で助祭を務めていたアガフォニクが、キノコを採りにその森を歩いていたところ、聖なる少年が眠る場所の上空に光が差しているのを見かけ、近づいてみると、その朽ちることのない遺体を発見した。彼は直ちにそのことをヴェルコレの農民たちに伝えた。 しかし、村人たちは無知ゆえに、単にアルテミオスの遺体を運び出し、何の礼儀も払わずに自分たちの教区教会へ運び、玄関に安置した。棺は、森の中でその義なる少年を覆っていた樹皮で覆われた[7309] 。

しかし、主はケヴロル地方において御自身の聖人を栄光に輝かせることをお許しになった。その聖遺物からは、病める者たちへの尽きることのない癒しが湧き出し始めたのである。その年、神の御許しにより、ドヴィナ地方に悪性の熱病が蔓延した。多くの人々、とりわけ女性や子供たちが、この重い病で命を落とした。 ヴェルコルスクの農民カリニクの息子も、この病に倒れた。深い悲しみに暮れるカリニクは息子の治癒を祈り、その後教会へ向かい、義人アルテミイの棺に手を合わせ、その朽ちることのない聖遺物を覆っていた樹皮を取り、信仰を込めて、死に瀕した息子の胸にある十字架にそれを結びつけた。 病人は回復した。喜びに満ちたカリニクは、そのことを村人全員に伝えた。村人たちは喜び勇んで聖ニコラエ教会に集まり、義人アルテミオス少年のために祈りを捧げ、追悼の儀式を始めた。そして主は御自分のしもべたちに憐れみを示された。その地方での熱病はすぐに収まったのである。

それ以来、聖アルテミオスの奇跡はますます増え続けた。 パヴラという名の男は、重い病のため首がひどく歪み、頭が後ろ向きになり、目も閉じてしまっていた。このような苦境の中で、パヴラは神と義人アルテミオスに熱心に祈りを捧げたところ、病人の頭はまっすぐになり、目も開いた。癒やされた男は、村の皆にこの出来事を急いで伝えました。その後、 、聖ニコライ教会の敷地内に、ヴェルコルの住民たちは特別な小礼拝堂を設け、そこへ玄関からアルテミオスの聖遺骨を運び込み、新しい棺に納めました。これは1584年のことでした。

[7307] ピネガ川――ヴォロゴダ州およびアルハンゲリスク州、ソルヴィチェゴドスキー郡およびピネジスキー郡を流れる川で、セヴェルナヤ・ドヴィナ川の右支流（航行可能な川）である。 ケヴロラまたはケヴロール――その名に由来するヴォロスティの主要集落であり、現在はヴォスクレセンスコエ村となっている。その後、郡庁はヴォロク＝ピネジスキー教区に移転され、同教区は後にピネガ市へと改称された。

[7308] 義人アルテミイの死は1545年6月23日に訪れた。

[7309] 義人アルテミイの聖遺骨は1577年に発見された。

祝福された少年の聖遺物が小礼拝堂に運ばれたとき、麻痺した赤ん坊を連れた女性がそこを訪れ、祈祷会を執り行ってくれるよう願い、自分の赤ん坊をアルテミイの棺に当てた――すると、赤ん坊の患っていた手が癒やされた。　ほぼ同時期に、目の病に苦しんでいた農民のアンドレイと農婦のイリーナも、新たに現れた奇跡行者の聖棺に触れたことで、健康を取り戻し、はっきりとした視力を得た。　マリアという名の女性は、40年間にわたり胃の病に苦しんでおり、その病は極めて重く、過度の苦痛のあまりしばしば2時間から3時間ほど意識を失うほどであったが、アルテミオスの聖遺物から現れる奇跡の話を耳にし、彼に祈りを捧げたところ、速やかに癒やされた。

聖遺物から次々と癒しがもたらされるのを見て、二人の司祭、ヨハネとトマスは、古い墓の板に義人アルテミオスのイコンをいくつか描くよう命じた。　その板からは削り屑が残った。司祭ヨハネはこれらの削り屑を丁寧に集め、教会に保管した。義人アルテミオスを敬う敬虔な信者たちは、信仰をもってその削り屑を受け取ると、それぞれの病から癒やされた。

ピネギ出身のパンクラティイという名の男が、1601年にヴェルコリを通りかかった際、そのようなアルテミイのイコンの一つをヴェリキー・ウスチュグに持ち帰った。そのイコンによって、当時多くの人々が癒やされた。

1619年、ノヴゴロド都主教マカリイは、この義人の聖遺物を認証し、聖ニコラエ（奇跡行者）の記念日である12月6日[7310] に、それらを本堂へ移すことを祝福した。　しばらくして、ホルモゴル市の住民であるイラリオン・アルテミエフがヴェルコラを訪れ、次のように語った。彼は長い間目の病に苦しみ、何も見えず、ひどく苦しんでいたため、絶望のあまり首を吊ろうとしたが、駆けつけた隣人たちがそれを阻止したのだという。　義人アルテミイの聖遺物から奇跡がもたらされているという話を耳にした彼は、自身の癒やしを願って熱心に祈りを捧げた。

「その瞬間――」と、癒やされた男は語った。「私は目が見えるようになり、幻視の中で、白い衣をまとい、左手に小さな杖、右手に十字架を持った聖アルテミオの姿を見た。彼は十字架を私の上に掲げ、こう言った。

『人よ！　なぜ苦しんでいるのか。立ち上がれ。キリストは、そのしもべである私を通して、あなたを癒やしてくださる。ヴェルコラへ行き、私の墓に手を当て、このことを司祭とすべての農民たちに伝えなさい。』

そう言うと、その義なる少年は私の手を握り、まるでそうするよう促すかのようにし、その後、姿を消した。私は目を覚ますと、まるで一度も病気になったことがないかのように、完全に健康になったのを感じた。そして今、私はここにやって来て、彼の聖遺物に拝礼しているのだ」。

特に注目すべきは、ウスティユジ郡キヴォクルヤ村の農民、パトリキイ・イグナティエフに起こった奇跡である。彼は幼い頃からヘルニアにひどく苦しんでいた。　義人アルテミイの奇跡を耳にした彼は、信仰をもって彼に祈りを捧げ、その棺に手を触れるという誓願を立て、回復した。しかしその後、その誓願のことを忘れてしまった。数年後、彼は再びヘルニアの発作を感じ、以前よりもさらに激しい痛みに苦しめられるようになった。　パトリキウスは再び義人アルテミウスに祈りを捧げ、果たされなかった誓いを思い出した。　病人の祈りは聞き届けられたが、パトリキウスは再びその誓いを忘れてしまった。すると、彼に深い憂鬱が襲い、透き通らない闇が彼の目を覆った。不幸な彼は再び果たされなかった誓いを思い出し、深く悔い改め、直ちにその義務を果たすことを誓った。義人アルテミオスは再びパトリキウスを病から救い出し、癒やされた彼は喜び勇んでヴェルコラのアルテミオスの棺のもとへ急ぎ、彼のために祈祷会を執り行うよう依頼し、涙ながらにその多くの病を癒やす棺に口づけをし、皆の前で起こった奇跡と自身の罪深い忘却について告白した。

[7310] マカリイは1619年から1626年までノヴゴロド都主教を務めた。彼の祝福と指示により、アルテミイの伝記が編纂され、1605年から癒やされた人々自身の証言に基づいて記録されていた彼の死後の奇跡についての記述が盛り込まれた。

1636年3月、ケヴロラおよびメゼンへ赴任することになったアファナシー・パシュコフが旅をしていた。道中、彼はヴェルコラに立ち寄ったが、義人アルテミオスの聖遺物の棺には近づかず、彼への感謝の祈りの儀式も行わなかった。　ケヴロルで、彼の息子である少年イェレミヤが重い熱病にかかり、すでに死を目前にしていた。その時、父は義人アルテミイへの祈りを捧げなかったことを思い出し、ヴェルコラーへ巡礼に行くことを誓った。　すると突然、深い昏睡状態に陥っていたパシュコフの息子が自らベッドから起き上がり、窓枠につかまりながら、義人アルテミオのもとへはどの道を通って行けばよいかと父に尋ね始めた。これに驚いた父は、息子をヴェルコラへと連れて行った。そこで誓いに従って祈祷会が執り行われ、奇跡行者の棺からベレスタ（白樺の皮）が取り出され、病人が十字架と共に胸に身につけるように渡されたところ、少年は回復した。　感謝の念に満ちた父は、ヴェルコラでアルテミウスの聖遺骨が発見された場所に、同名の義少年殉教者アルテミウスを称える教会を建立した。

しばらくして、ヴェルコルの教会が焼失し、義人アルテミイの聖遺物も焼け落ちてしまった。地元の司祭ラヴレンティイとヴェルコル村の信徒たちは、アルテミイの聖遺物をこのような不幸な出来事から守るため、その上に特別な礼拝堂を設け、新しい聖遺物箱に納め、新しい覆いをかけ直した。

それ以来、この奇跡を起こす聖人の棺からは、新たな奇跡が次々と起こり始めた。例えば、あるシメオン・カザリノフという人物を、義人アルテミオスは溺死から救った。イリヤの日の後、彼は仲間たちと共に、マンガゼイ[7311] からアルハンゲリスクへ向かうため、北極海を船で航行していた。突然、激しい嵐が襲い、船は間もなく沈没する危機に瀕した。乗船者たちは恐怖と絶望に襲われた。どこにも救いの望みが見えず、彼らは死に備え、死を待ちながら互いに別れを告げ始めた。　その後、彼らは我に返り、涙ながらに主なる神と義人アルテミオスに救いを祈り、神の御使いに感謝の祈りを捧げることを誓った。そして、彼らの祈りに応えて海は静まり、溺れかけていた者たちは避けがたい破滅を免れた。

義人アルテミオスの聖遺物による癒しの栄光は遠くまで広まった。ノヴゴロドのキプリアン都主教は、その朽ちない聖遺物を再調査するよう使者を派遣し、届けられた癒しの記録に自らの署名で確認を加え、ヴェルコリ村の教会へ、新たに作成された奇跡行者のための礼拝式を送った。

1648年、ケヴロルには、アレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝から、同地のヴォエヴォダであるアニチコフ宛ての勅書が送られた。　そこには、義人アルテミイの聖遺骨を新しい聖遺骨箱に納めるよう命じられ、その聖遺骨が発見された場所に修道院を建設することが許可されていた。ツァーリの勅書に従い、聖遺骨は翌年にその場所へ移され、かつてヴォエヴォダ・パシュコフによって建設された聖殉教者アルテミイ教会に安置された。　これに伴い、聖遺物からは、信仰をもってそこへ駆けつけたすべての人々に、多種多様な癒しがもたらされた。　大勢集まった人々は、キリスト神と、その聖なる御心にかなう義人アルテミオス、ヴェルコルスクの奇跡行者に対し、心からの祈りを捧げ、すべての正教徒を慰めるために彼に現れた神の恵みを賛美した。　その後、火災に際して、義人アルテミオスの聖遺骨は三度にわたり修道院の教会から運び出されましたが、ついに1793年に修道院内に石造りの教会が建設され、義人アルテミオスの名誉のために奉献されたこの教会に、その聖遺骨が安置されることになりました[7312] 。

[7311] マンガゼヤは、エニセイ州トゥルハンスキー地方にある地名で、タザ川の右岸に位置し、現在、聖殉教者ヴァシリー・マンガゼイの礼拝堂が建っている。　マンガゼヤは、東シベリアで最初のロシアの都市であり、1601年に設立されたが、60年後には完全に廃墟と化した。現在、その面影はわずかに残るのみである。

[7312] 義人アルテミイ、ヴェルコルスクの奇跡行者の記念日は、6月23日と10月20日である。『イコン画集』の原本には、10月20日の項に次のように記されている。　「父である農夫コズマと共に畑へ出かけたところ、大雷に打たれて亡くなった

トロパリオ、第2声：

至高なる御命令により、雷を孕む雲が天を覆い、稲妻が閃き、雷鳴が轟く中、あなたは御魂を主の御手に委ねられた、至賢なるアルテミイよ。今やあなたは万物の主の御座の前に立ち、信仰と愛をもってあなたのもとに訪れる者たちに、　すべての人に速やかに癒やしを与え、キリスト・神に祈り、私たちの魂が救われるよう願っておられます。

賛美：

キリストの殉教者、アルテミオよ、我らはあなたを讃え、あなたの聖なる記憶を尊びます。あなたは我らのために、我らの神キリストに祈ってくださるからです。

コンダク、第8調：

今日、至賢きアルテミオスの輝かしい記念日が輝きを放つ。神から与えられた恵みが川のように溢れ出し、その聖なる癒しの遺骸の聖櫃からは、驚くべき癒しがもたらされる。私たちは信仰をもってこれを受け入れ、叫びながら言う。「喜びなさい、神に賢きアルテミオスよ。」

11月3日

10月21日（旧暦）

尊き父イラリオン大聖人の生涯

記念日10月21日

尊者イラリオンは、291年にパレスチナのガザの町に近いファヴァフェという村で生まれた。彼の両親はギリシャ人であった[7313]。茨の中に咲く薔薇のように、両親から生まれたこの尊者は、世にキリストの芳香をもたらした。　学問を修めるためにアレクサンドリアへ送られた彼は、ギリシャ人が目指していたあらゆる学識をすぐに習得しただけでなく、霊的な知恵にも深く親しんだ。主イエス・キリストを信じるようになり、聖なる洗礼を受けた[7314]。そして、頻繁に教会を訪れる中で、神聖な礼拝の言葉を心に刻んだ。　善良な品性を身につけ、心の中で神への愛に燃えるようになった彼は、どうすれば神に喜ばれるかを考えるようになった。当時、その徳高い生活の誉れが至る所に広まっていた聖アントニオ大聖人のことを耳にしたイラリオンは、彼に会いたいという切実な願いに駆られ、急いで聖人のもとへ向かった。　荒野にある聖人の滞在先にたどり着くと、イラリオンは聖人の神聖な御顔を仰ぎ、完全なる境地への道を指し示すその甘美な言葉を耳にした。　彼はしばらくの間

。12歳の若き少年で、シャツ一枚、手にブドウのつるを持ち、膝はむき出しであった」。――現在、聖アルテミオスの聖遺骨は、廃止されたヴェルコル修道院の地下に安置されている。

[7313] 聖イラリオン大聖人の両親が「エリン人」と記されているのは、ここでは主に、ギリシャ・ローマ宗教に献身した教養ある異教徒という意味で理解すべきである。ここから、彼らを「とげ」に例えるというさらなる比喩の意味が導き出される。

[7314] 聖ヒラリオンは、アレクサンドリアの聖ペトロ司教（311年に没）によって洗礼を受けた。

、聖アントニオの元に留まり、天使に等しいその生活、熱心で頻繁な祈り、手仕事と絶え間ない労働、断食と節制、隣人への愛、無欲、そして修道生活におけるその他の偉業をじっくりと観察した[7315]。

聖アントニオのもとには多くの人々が集まってきた。ある者は病の癒やしを求め、ある者は彼からの祝福を受けようと、またある者は、神に霊感を受けた、魂に益となる彼の説教に耳を傾けるために訪れたのである。　こうして、この地には完全な孤独と静寂を見出せなかったイラリオンは、ここに留まることを望まず、あらゆる喧騒や世俗から離れ、神と二人きりで過ごすことができる場所を探すことを決意した。　聖アントニオスから祝福を受けた後、彼は故郷に戻ったが、両親がすでに他界していたため、自分の財産を二つに分け、一方は親族に、もう一方は貧しい人々に与え、自分には何も残さなかった。*「すべてを塵とみなす」*（フィリピ3:8）と述べ、この世のすべてと自分自身をも捨て去り、キリストの弟子となり、その貧しさを模範とする者となる機会を得ようとした。

このようにして世俗の煩わしさから解放されたイラリオンは、マイユマ・ガズスカから7ヴェルスト離れた場所にある荒野へと向かい、海と湖の間に身を寄せた。　その荒野には強盗たちが住んでおり、知人の中には、強盗の手に落ちて殺されないよう、そこから立ち去るよう彼に助言する者もいた。しかし、聖人は肉体の死を恐れず、ただ霊的な死から逃れたいと願っていた。

「魂を殺す強盗たちは避けなければならないが、体を殺す者たちを私は恐れない」と彼は言った。「*主は私の光、私の救い。私が誰を恐れるべきか。主は私のいのちの砦。私が誰を恐れるべきか*」（詩篇26:1）。

そして、聖人はそこで絶え間ない祈りと断食の生活を送り始めた。食事は一日十五個のイチジク[7316]以上は摂らず――それも日没後だけであり、その服装は、毛皮の衣[7317]と、聖アントニオスから授かった短い革のマントで構成されていた。

あらゆる善を憎む悪魔は、若き修道士が自分に打ち勝つ姿を見て、彼に対して戦いを仕掛けた[7318]。この霊的な戦士を肉欲で打ち負かそうと、悪魔は彼の若い肉体を燃え上がらせ、不浄な思いでその心を惑わせ始めた。　罪という毒針で自分を傷つけようとする不浄な蛇の存在を感じ取ったイラリオンは、さらに厳しい肉体の鍛錬によってそれを打ち負かし、神への熱心な祈りを武器として敵に打ち勝った。　彼は断食に断食を重ね、労働に労働を重ね、三日、時には四日も食事を口にせず、土を掘ったり籠を編んだりして体を酷使し、心の中で使徒の言葉を繰り返した。*「働こうとしない者は、食べることもあってはならない」*（テサロニケの信徒への手紙第二 3:10）。　また、不純な思いは、税吏のように胸を打ち、心の底から嘆息を漏らしながら、心から追い払った。イラリオンは自分の肉体を「ロバ」と呼び、次のように語りかけた。

「おまえを飼いならしてやる、ろばよ。大麦ではなく籾殻を与え、飢えと渇きで苦しめ、重い荷を背負わせて、おまえが不潔なことよりも食物のことを考えるようにしてやる。」

彼は自らの肉体に向けて発したこの言葉を実行に移し、体を極限まで衰弱させたため、やがて皮膚に覆われた骨だけが残るほどになった。

一方、悪魔は、その罵倒では何も達成できず、聖人を打ち負かすどころか、むしろ自ら敗北を喫したことを悟ると、幽霊や幻影で彼を脅かそうと企んだ。　ある夜、祈りを捧げていた聖イラリオンは、子供たちの泣き声、女性たちのすすり泣き、ライオンの咆哮、その他の猛獣や動物たちの声、

[7315] 聖ヒラリオンは306年、生後15年の時に聖アントニオス大聖人のもとを訪れ、彼のもとで過ごしたのはわずか2ヶ月ほどであったにもかかわらず、時期的にも精神的にも、その最初の弟子の一人となった。

[7316] イチジクは、我々の間では「ワインベリー」という名で知られている。クワ科のイチジクの木に実り、熱帯気候に属する。イチジクは東方では、特にキリスト教の修道士たちの間で、日常的な食物となっている。

[7317]「ヴラセニツァ」とは、馬の毛で作られた硬い衣服のことで、修道士たちはこれを肌に直接身につけていた。

[7318]「戦い」とは、修道者の禁欲的な表現であり、悪魔が自分に抵抗する修道士たちに課す、執拗かつ長期にわたる試練を意味する。この悪魔との闘いゆえに、修道士たちは禁欲主義者の間ではしばしば「霊的な戦士」と呼ばれる。

そしてまるで大いなる戦いのようないさかいと騒ぎを耳にした。　悪魔はわざと、様々な声で叫ぶ仲間たちの一団を連れてきて、イラリオンが彼らの咆哮の一つに怯えて、荒野を捨てて逃げ出すように仕向けたのである。　しかし、これらすべてが悪魔たちが仕組んだ恐怖に過ぎないと悟ると、聖人は十字を切って身を守り、信仰という盾を手に取り、ひざまずいて、神が天から助けを与えてくださるよう熱心に祈りを捧げた。このように、祈りを捧げながら地面に伏し[7319]、イラリオンは自分を襲う敵の力を弱めた。　しかし、耳で聞いたことを自分の目で確かめようと（その夜は月明かりでとても明るかった）、彼がほんの少し体を起こした途端、恐ろしく獰猛な馬を引いた巨大な戦車が、轟音を立てて彼に向かって突進してきた。

「主よ、イエス・キリストよ、私をお助けください！」と聖人は叫んだ。すると、たちまち大地が割れ、悪魔の力をすべて飲み込んだ。イラリオンは、まるでファラオに対する勝利を祝うかのように、次のように詠んだ[7320]：

「*『馬と騎手を海に投げ込んだ。あなたは御手を伸ばされた。地が彼らを飲み込んだ……ある者は戦車、ある者は馬に頼るが、私たちは私たちの神、主の御名を誇る。彼らはよろめき倒れたが、私たちは立ち上がり、まっすぐに立っている』*（詩編19:8–9）。」

しかし、打ち負かされた敵は、聖人に対して反抗し、敵対することをやめず、さまざまな方法で彼を誘惑し続けた。イラリオンが休んでいると、まるで恥知らずにも嘲笑うかのように、裸の女たちが彼のそばに横たわった。彼が空腹や喉の渇きを感じると、悪魔たちは彼に様々な甘い食べ物や飲み物を見せつけた。　彼が祈っている時には、時折オオカミが現れて彼の前に立ち、遠吠えをしたり、時にはキツネが跳ね回ったり、あるいは戦士たちが戦いを繰り広げ、そのうちのひとりが致命傷を負って聖人の足元に倒れ込み、自分を葬ってほしいと懇願したりした。

ある時、祈りを捧げている最中、イラリオンは気を緩めてしまい、人間の弱さに打ち負かされた彼の心は、無関係なことを考えてしまった。すると悪魔は、まるで戦士のように即座に彼の肩に飛び乗り、肋骨を足で蹴り、肩や首を鞭で打ちながら言った。

「逃げろ、逃げろ、何で寝ているんだ！」と、笑いながら尋ねた。「大麦はいらないか？」[7321]

しかし、聖人はこうした悪魔の策略をすべて無視し、十字を切ることでそれらを追い払っていた。

彼は棺のような小さな小部屋を自ら作り、そこにはかろうじて自分が収まるだけの広さだったが、そこで暮らし、目に見えない霊たちとの戦いに励んでいた。　ある夜、強盗たちは彼から何かを奪おうと襲撃を企て、一晩中彼を探し回ったが、見つけることはできなかった。翌朝、彼を見つけ、何も持っていないことを確認すると、彼らは聖人に尋ねた。

「もし盗賊に襲われたら、お前はどうするつもりだ？」

「裸の者は強盗を恐れない」と彼は答えた。

「だが、奴らは君を殺すかもしれないぞ」と、彼らは再び言った。

「私は強盗を恐れない。なぜなら、いつでも死を受け入れる覚悟ができているからだ」とイラリオンは答えた。

[7319] 古代のキリスト教徒たちは、祈りのために地面にひれ伏し、両手を広げ、その姿勢で十字架を表していた。

[7320]　出エジプト記16:1–2。この歌は、主がファラオの追撃から彼らを救い出された際、紅海を渡った後、モーセとイスラエルの民によって歌われたものである。「馬と騎手を海に投げ込み、　あなたは御右の手を伸ばされた。地が彼らを飲み込んだ」。教会の古代の教父たちやキリスト教の著述家たちにとって、ファラオとは、この世の生活において信者たちを迫害する悪魔を比喩的に指す言葉であった。この世の生活は、それらの著述家たちの言葉ではしばしば「荒野」と呼ばれている。

[7321] この「悪魔」という言葉は、明らかに聖イラリオンが自身の肉体に付けたあだ名をほのめかしていた。上記参照。

その勇気と信仰に驚嘆した強盗たちは、一晩中彼を探していたが見つからなかったことを彼に打ち明けた。そして、彼らは改心することを誓ってその場を去った。

尊者イラリオンがその荒野で長年にわたり暮らしていると、彼の聖なる生活に関する評判がパレスチナ全土に広まり、彼の聖なる祈りによる助けを求める人々が彼のもとに集まり始めた[7322]。最初に訪れたのは、エレウフェロポリ[7323]出身のある女性で、結婚生活15年を経ても子供に恵まれなかった。　不妊を理由に夫から絶え間ない非難や侮辱を受けていた彼女は、勇気を振り絞って聖人のもとへ駆け寄り、その足元にひれ伏した。イラリオンは彼女を見ると、顔を背けた。すると彼女は涙ながらにこう懇願し始めた。

「神のしもべよ、私が悲しみに暮れているのに、なぜ私から背を向けるのですか？私が泣きながら懇願しているのに、なぜ私から逃げ出すのですか？女性そのものではなく、彼女の心の痛みと涙に目を向けてください！キリストの御心にかなう者よ、私を憐れんでください！　救い主が、私たち女性から人間の肉体をまとって、私たちの性を尊ばれたこと、そしてあなた自身も女性から生まれたことを思い出してください。ですから、あなたの元へ駆けつけ、あなたの祈りによって不妊の悩みが解消されることを待ち望んでいる私を、助けも与えずに拒絶しないでください。この不妊のせいで、私の夫は絶えず私を責め、侮辱しているのです。

この言葉に、聖イラリオンは憐れみを覚え、天を仰ぎ、彼女のために祈りを捧げました。そして、彼女に家へ帰るよう命じ、こう言いました。

「恥じることのない希望を持って帰りなさい。そうすれば、主はあなたの願いを叶えてくださるでしょう。」

その女性は、喜びと聖人の言葉への信仰を胸に、家路についた。神は御自分のしもべの祈りを聞き入れられ、まもなく、イラリオンが予言した通り、その女性は身ごもり、息子を産んだ。翌年、彼女は赤ん坊を抱いて聖人のもとを訪れ、こう言った。

「これがあなたの聖なる祈りの実りです、神の御心に適う者よ。あなたが神に私のために願い求めてくださったこの息子を、祝福してください。」

聖人は赤ん坊と母親を祝福し、平穏のうちに彼らを見送った。その女性は、主を賛美し、その国中において神の御心に適う者を称えながら去っていった。

その後、アリステネタという名の別の女性が彼の元を訪れた。彼女はキリスト教徒であり、ある高官エルピディウスの妻であった。　彼女の三人の息子は、有害な空気によって感染し、ある日に一斉に重い病に倒れ、どの医師も彼らを治すことができず、死の淵に立たされていた。聖ヒラリオンという隠者について耳にしたこの女性は、自分の女奴隷や宦官たちを連れて彼の元へやって来ると、泣きながら彼の足元にひれ伏した。

「私たちの主イエス・キリストと、その尊い十字架にかけて、お願いいたします」と彼女は言った。「ガザへお越しになり、死の淵にある私の三人の息子たちを癒してください。そうすれば、異教の町においても主の御名が賛美され、異教徒たちに崇められているガザの偽りの神マルナス[7324]が恥をかくことになるでしょう。」

聖人は、自分は決して砂漠から出ず、都市どころか村にさえ近づかないと述べて、その申し出を断った。しかし、その女性は涙ながらの懇願で彼にしつこく迫り、ついに彼が日没後に彼女の元へ行くことを約束するまで、その懇願を続けた。　夜も更けた頃、聖人はガザに到着した。病に伏す若

[7322] これは、328年から始まった彼の22年にわたる荒野での苦行の末に起こったことである。

[7323] エレウフェロポリ――パレスチナ南部の都市で、エルサレムとガザを結ぶ道沿いに位置する。現在、この地には集落があり、その近くには古代都市の遺跡が残っている。

[7324] マルナスは異教徒たちからガザの都市の神であり、雨の支配者として崇められていた。干ばつの際には、彼をなだめるために厳粛な宗教的行列が行われた。ガザのマルナス神殿は、西暦401年になってようやく破壊された。

者たちに手を触れ、イエス・キリストの御名を呼びかけると、たちまち彼らの体から、まるで泉から湧き出る水のように、たっぷりの汗が流れ出した。若者たちは即座に元気を取り戻し、食事をとると、神に感謝を捧げ、治療してくれた聖人の聖なる手に口づけをした。　その噂はガザ中に広まり、それ以来、様々な病に苦しむ人々が荒野の聖ヒラリオンのもとを訪れるようになり、彼の祈りによって癒やされた。その結果、多くの異教徒が、我らの主イエス・キリストへの信仰に改宗した。　多くの人々が彼の徳高い生き方に倣おうと願い、世俗を捨てて、砂漠で彼のそばに住み着くようになった。やがて、聖ヒラリオン師の弟子たちの数は増え続け、聖人はエジプトの聖アントニオスと同様に、ガザとパレスチナにおける修道士たちの最初の指導者となった。

ある日、10歳の頃から視力を失い、医師への治療費に全財産を無駄に費やしてしまった女性が、聖人のもとへ連れてこられた。聖人は、この点において主にならって（ヨハネ9:6）、唾を吐いて彼女を癒した。すなわち、彼女の顔に唾を吐きかけたところ、彼女はたちまち目が見えるようになり、皆が神を賛美した。

ガザのある高官の奴隷であり御者であった男が、戦車を操縦中に悪霊に襲われ、全身が硬直して、どの関節も動かすことができなくなり、舌だけが自由に動く状態になっていた。この奴隷は、荒野にいる聖ヒラリオンのもとへ連れてこられた。聖人は彼を見て、こう言った。

「あなたを癒すことのできる主キリストを信じるまでは、この病から癒されることはない。」

「私は主を信じます。どうか主が私を癒してください」と、病人は熱心に答えた。

聖人は祈りを捧げ、キリストの力によって彼を癒やし、聖なる信仰を教え、洗礼を受けるよう命じた。こうして、この奴隷は悪霊の支配から解放され、心身ともに健やかな状態で家路についた。

エルサレム近郊に住むマルシトという名の別の青年は、並外れた力を持っており、15メルの小麦を持ち上げて運ぶことができ、荷物を運ぶためにロバを飼う必要さえなかった。そのような力を持つ彼の中に悪霊が入り込み、荒野や野原を駆け回らせて苦しめ始めた。　近隣の住民たちは彼を捕らえると、手足を鉄の足枷と鎖で縛り、厳重に監禁して、注意深く見張っていた。　しかし、彼は悪魔の力と自身の力が合わさった倍増した力のおかげで、足枷や扉の錠前を容易に打ち砕いて逃げ出し、道で出会った人々を皆、殴り倒した。ある者からは鼻や耳、唇を噛み千切り、ある者からは手足を折り、またある者からは目をえぐり出し、さらに　最後に、喉を噛み切って殺した。彼はその地で他にも多くの残虐行為を犯し、誰も彼を鎮めることはできなかった。大勢の民が集まり、ついに彼を捕らえ、全身を鉄の鎖で縛り、野生の牛のように聖人の元へ引きずり出した。　その憑かれた者を見たイラリオンは、彼を解き放つよう命じると、彼は子羊のように柔和になった。彼のために熱心に祈った後、聖人は彼の中に宿っていた悪霊にこう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、お前に命じる。不浄な霊よ、この人から出て、水の無い場所へ去れ。」

悪霊は、病人を激しく揺さぶり、地面に倒し、出て行った。すると、主の恵みと聖人の祈りによって、彼は即座に癒やされ、尊者イラリオンを熱心に賛美し始めた。しかし、尊者は彼やそこにいた他のすべての人々にこう言い、禁じた。

「これは私たちの力によって成し遂げられたのではなく、私たち、そのしもべたちに対する言い表せないほどの慈しみによって、私たちの苦しみを背負ってくださった救い主の愛と恵みによるものです。私たちは絶えず、主を賛美し、感謝し、称えなければなりません。」

彼がそう語っているとき、オリオンという名の別の男が連れてこられた。彼はアイラ市の裕福で高貴な市民の一人であった[7325]　。彼の中には悪霊の群れが宿っており、鉄の鎖で縛られて連れてこられた。　聖人に近づくと、彼は連れに来た者たちの手から抜け出し、背後から近づいて聖人を掴み

[7325] アイラ――パレスチナの最南端の都市で、紅海湾の奥深くに位置していた。

、自分の身長よりも高く空中に持ち上げた。皆は恐怖のあまり叫んだ。まるで彼が聖人を地面に叩きつけ、長い断食で乾ききった骨を砕いてしまうのではないかと恐れたのだ。しかし、聖人は微笑んでこう言った。

「私の敵に、私と戦わせてやりなさい。」彼は後ろ手に伸ばして、悪霊に取り憑かれた男の髪をつかみ、自分の足元に立たせ、その両手を縛り、足を踏みつけながら言った。

「苦しめ、悪魔の軍団よ、苦しめ！」

すると、その男の中にいた悪霊たちは、さまざまな声で叫び、まるで大勢の群衆のような騒ぎを巻き起こした。その時、聖人は祈り始めた。

「主イエス・キリストよ！この不幸な者を悪魔の軍団から解放してください。あなたがその一人を打ち負かすことができるのならば、多くの者をも同様に容易に打ち負かすことができるからです。」

悪魔たちは大きな叫び声を上げてたちまちその男から出て行き、彼は回復し、苦しみから解放された。そして、自分の癒やしに対して、神とその御使いである聖イラリオンに感謝を捧げた。　しばらくして、彼は妻や友人たちと共に、癒やしへの感謝の印として豊かな贈り物を携えて、再び聖ヒラリオンのもとを訪れた。しかし、聖人はそれを受け取らず、こう言った。

「ギエジウス[7326]が、ハンセン病から癒やされた男から報酬を受け取ったために、どのような苦難に遭ったか、聞かなかったのか。主の恵みは売り物ではない。行って、これをあなたの町の貧しい人々に配りなさい。私たちのように荒野に住む者にとって、財産は何の役にも立たないのだ。」

こうして、彼はその男を贈り物と共に帰した。

その後、マイユムという町から、ザナナという名の麻痺した石工が聖人のもとへ連れてこられ、聖人の祈りによって即座に癒やされた。

続いて、ガザの地方から悪霊に取り憑かれた少女が連れてこられた。彼女に悪霊が取り憑いた理由は次の通りである。ある若者が彼女に恋をし、肉体的な関係を持ちたいと願ったが、彼女は彼に抵抗し、その不純な望みには応じようとしなかった。　甘い言葉でも高価な贈り物でも成功しないことを悟った青年は、エジプトの都市メンフィス[7327]へ赴き、アスクレピオスの魔術師たち[7328]に会い、この娘への愛によって傷ついた自分の心の病について語った。　彼らから銅の板に書かれたある種の魔法の言葉を授かると、彼は家路につき、その娘が住む家の敷居の下にその板を埋め込んだ。それは賢者たちが彼にそうするよう教えた通りであった。　するとすぐに、悪魔が少女に取り憑き、彼女の淫らな欲望をこれほどまでに煽り立てたため、彼女は恥知らずにも叫び声を上げ、情熱を満たすために若者の名を呼び求め、衣服を脱ぎ捨て、裸になり、あらゆる手段で身もだえし、淫行の炎に焼かれるように暴れ回った。　これを見た彼女の両親は、その病が悪魔によるものであると悟り、彼女を修道院の聖者に連れて行った（当時、聖者はすでに多くの修道士を集め、大きな修道院を築いていた）。彼女を聖者の元へ連れて行く途中、彼女の中に宿る悪霊は叫び、泣きわめいた。

「メンフィスで人々を眠りの幻影で惑わせていた頃の方が、今こうしてここに送られてきた今よりずっと良かった」と、悪魔は言った。

そして、彼女が聖人の元へ連れて行かれると、悪魔は叫んだ。

[7326] 列王記下5:20–27。預言者エリシャの弟子ヒエジは、預言者によってハンセン病を治されたシリア人ネエマンから報酬を受け取ったため、預言者は彼とその子孫をネエマンのハンセン病に冒された。

[7327] メンフィス――かつてエジプトの古くからある強大な首都――は、中エジプトのナイル川沿い、本流とその支流の間に位置し、支流は都市の西側を流れ下っていた。かつて輝かしい古代エジプトの首都であったこの地には、現在ではメトラサニ村とモガンナン村の周辺に、ごくわずかな遺構が残るのみである。

[7328] アスクレピオス、あるいはエスクラプスは、ギリシャ・ローマ神話における医学とあらゆる病の治癒を司る神である。彼への崇拝は後にエジプトにも伝わった。キリスト教徒たちは、この名を悪魔の一人と見なしていた。

「私はこの乙女に無理やり入り込み、主君によって強引に彼女の中に送り込まれたのだ。今や私はひどく苦しめられており、銅の板に縛り付けられ、敷居の下に埋められているため、外に出ることができない。私を縛り付けた若者が解き放つまでは、私は出て行かない！」

聖人はほのかに微笑んで言った。

「そうか、悪魔よ、お前の力はそれほど大したものではないのか。糸で縛られ、銅の板で無理やり閉じ込められているというのか？　なぜ、お前を縛ったその若者の体には入り込まなかったのだ？」

「彼の中にはすでに、私の友である好色な悪魔が宿っているのだ」と、悪魔は答えた。

祈りを捧げた後、聖人はその少女から悪魔を追い出し、敵の罠に気をつけ、恥知らずな若者たちとの会話を避けるよう彼女に諭した。

ある公爵が、不浄な霊に取り憑かれて聖人のもとを訪れ、癒やされた。感謝の印として、彼は無償で治療してくれた医師である聖イラリオンに10ポンドの金を捧げ、その贈り物を受け取ってほしいと懇願した。すると聖人は、自分の大麦のパンを見せた。

「このようなパンを食する者にとって、金は沼の泥に過ぎない」と聖人は言い、金を受け取ることなく、公爵を健康なまま帰した。

聖アントニオは、イラリオンとその奇跡について耳にすると、心から喜び、しばしば彼に手紙を書いた。また、シリアから癒やしを求めてやって来る人々に対しては、こう語った。

「私の息子のイラリオンが、神からあらゆる病を癒す賜物を受けているというのに、なぜわざわざ私のもとへ長い旅をして、ご自身をこれほどまで疲れさせるのですか。

パレスチナ全土で、聖イラリオンによる祝福を受けて修道院が次々と設立され、すべての修道士たちが彼の教訓に耳を傾けるために彼のもとに集まった。そして彼は、すべての人を救いの道へと導いた。

ある日、修道者たちは、彼の祈りと祝福によって増え続けた修道院を訪れ、それらを承認し、修道生活の規則を与えるよう彼に懇願しました。彼が旅立つ準備をすると、約三千人もの多くの修道者たちが彼のもとに集まり、彼の至甘き教えに耳を傾けながら、彼の後を追いかけました。　修道院を巡り、兄弟たちを訪ねる中で、聖人は数多くの奇跡を起こした。　もてなしの心で知られたある修道士は、自分のブドウ畑を持っており、そこから毎年約100メルのブドウを収穫していた。彼は聖イラリオンを愛情を込めて迎え入れ、修道士たちに「ブドウはすでに熟しているので、私のブドウ畑に来て、各自が望むだけ房を切り取ってほしい」と懇願した。　皆が望むだけ摘み取ったが、前述の通り、修道士たちは約三千人いた。その兄弟のこのような愛を見届けた聖人は、彼のブドウ畑を祝福し、その年、その兄弟は自分のブドウ畑から三百メーター以上のブドウを収穫した。こうして、聖人の祝福は、その兄弟の旅人への愛に報いるかのように、ブドウ畑の豊作をもたらしたのである。　一方、けちで残酷な別の兄弟は、聖人とその霊的な群れが通り過ぎるのを見て、誰かがたとえ一房でも摘み取らないようにと、自分のぶどう畑に見張りを立てた。見張りは兄弟たちに石を投げつけ、「ここは他人の土地だから、誰もぶどう畑に近づいてはならない」と叫んだ。　この兄弟は聖人の祝福を失い、収穫したブドウはごくわずかだった上、それも酸っぱかった。

ある日、尊者イラリオンは、ある弟子を訪ねるためにカディス[7329]の荒野へと向かった。道中、イラリオンは異教の町エルス[7330]を通ることになった。そこでは悪魔的な祭りが行われており、周辺の村々から大勢の異教徒が集まり、歓声を上げながら、神殿で女神アフロディーテ[7331]に不敬な生贄を捧げていた。　聖イラリオンが近づいてきているという話を耳にした彼らは、妻や子供たちを連

[7329] カディス――別名カデス――は、パレスチナ最南端にある砂漠である。

[7330] エルサ――現在のエル・クラサ――は、パレスチナ南部、カディス砂漠の北端、アラビア国境近く、死海の南西に位置する都市である。

[7331] アフロディーテ――ギリシャの愛と美の女神。彼女を称える祭りは、極度の放縦と淫乱を伴うものであった。

れて彼を迎えに出た。彼が大いなる奇跡を行う者であるという噂が、とっくに彼らの耳にも届いていたからである。彼を見るや、彼らは頭を下げ、シリア語で「ヴァラフ！ヴァラフ！」と叫んだ。これは「祝福せよ、祝福せよ！」という意味である。　その後、彼らは多くの病人や悪霊に取りつかれた人々を聖人のもとに連れて行き、聖人はキリストの力によって彼らを癒した。　異教徒たちに唯一の真の神についての知識を教え、彼ら全員をキリストの信仰へと導いた。そして、彼らが偶像の神殿を破壊し、偶像を打ち砕き、聖なる教会を建て、主の御名によって洗礼を受けるまで、聖人はその町を去らなかった。彼らの信仰を確固たるものにし、祝福を与えた後、聖人はさらなる旅路へと向かった。

尊者イラリオンは、神からそのような恵みを受け、物の匂いや触感を通じて、誰がどのような情欲に囚われているかを察知することができた。　ある時、けちで金に執着する兄弟が、自分の果樹園から聖人に果物を送ってきた。夕方になり、聖人が食事の席に着くと、弟子たちはそのけちな兄弟から送られてきた果物を聖人に差し出した。それを見たイラリオンは顔を背けた。

「これをここから取り除いてくれ」と彼は言った。「この果物から漂う悪臭には耐えられない。」

彼の弟子である至福のイシキオスは、聖人にそれを一口味わい、兄弟の愛を祝福するよう強く勧めました。

「父よ、兄弟からの捧げ物を嫌がらないでください」と彼は言った。「彼は信仰をもって、自分のぶどう畑の最初の実をあなたに捧げたのですから。」

「お分かりにならないのですか」と聖人は答えた。「この果実からは、けちの悪臭が漂っているのです。

「果実が、その本来の香り以外に、何かの情念の悪臭を放つことなどあり得るでしょうか？」とイシキオスは尋ねた。

「もし私を信じないのなら、この実を牛たちに与えてみて、彼らが食べるかどうか見てごらん。」

イシキイは果実を運んで牛たちの前の飼葉桶に置いたが、牛たちは匂いを嗅ぐと激しく鳴き始め、その果実から漂う悪臭に耐えきれず、飼葉桶から飛び出して逃げ去ってしまった。

この時、聖人はすでに63歳になっていた。彼の周りには多くの修道士が集まっていたため、修道院を拡張する必要があった。数多くの雑務が、聖人の沈黙を妨げていた。さらに、癒やしを求める者もいれば、祝福を求める者もおり、多くの人々が彼を訪ねてきた。　司教や司祭、その他の教会の奉仕者たちも訪れ、多くの都市や地方から公爵や貴族たちが、イラリオンから神の御言葉を聞き、その祝福を受けるためにやって来た。　聖人は、訪れる人々が自分の沈黙を妨げることに深く心を痛め、かつて荒野で一人きりで過ごした初期の日の静寂を思い出し、涙を流した。彼が絶えず悲しみ、泣いているのを見て、兄弟たちは彼に尋ねた。

「なぜそんなに悲しみ、泣いているのですか、父上？」

すると、彼はこう答えました。

「私がこれほど悲しみ、泣くのは、再びこの世に戻り、地上で報いを受けてしまったからです。パレスチナや周辺のすべての町が私を称え、あなた方も私を主として敬い、修道院に住む者たちのすべてを『ご主人様』と呼んでいるからです。」

尊者からそのような言葉を聞いた兄弟たちは、彼が密かに彼らのもとを去ろうとしていることに気づき、彼が去らないよう注意深く見守った。長老はこうして二年間、悲しみに暮れていた。

ある日、エパルハ・[7332]・エルピディアの妻アリステネタが彼の元を訪れた。かつて聖人は、彼女の瀕死の三人の息子たちを癒やしたことがあった。彼女はエジプトへ行き、聖アントニオに参拝

[7332] エパルク――都市または地域の統治者。

するつもりだったため、旅路の祝福と祈りを彼に求めた。　アントニオスの話を聞いた聖人は、ため息をついてこう言った。

「ああ、もし私にもそこへ行き、私の聖なる最愛の父アントニオをこの目で見ることができたら。しかし、兄弟たちが私を無理やりここに引き留めているため、私は彼の元へ行くことができないのだ。」

少し沈黙した後、彼は苦々しく泣き出した。

「もう二ヶ月になる」と彼は言った。「全世界が偉大な灯火の喪失を嘆いている。なぜなら、聖アントニオはすでにこの世を去ってしまったからだ。」

これを聞いて、その女性とそこにいた者たちは皆、神から聖アントニオの帰天に関する啓示が彼に与えられたのだと悟った。アリステネータは家に戻り、数日後、アントニオの死の知らせが届いた。

世間の噂や人々の称賛に耐えかね、さらに神からの啓示によって、神が彼をその地から去らせることをお許しになっていることを知っていた聖イラリオンは、弟子たちの中から数人を呼び寄せ、自分と一緒に来るよう命じた。　ロバを用意し、老齢のためもはや徒歩で歩くことができなかった尊者をお乗せし、支えながら共に旅立った。残りの兄弟たちや、近隣の村や町の住民たちは、尊者が彼らのもとを去ったことを知ると、一万人の大群となって彼を追いかけて追いついた。　彼らは泣きながら聖人の足元にひれ伏し、自分たちを置き去りにしないよう懇願した。

「神に次いで、私たちはパレスチナにおいて、私たちを力づけ、助けてくださる父としてあなたを仰いでいました。どうか、羊飼いのいない羊のように、私たちを一人にしないでください。」

「なぜ、わが子らよ、私の心を痛めるのか」と、聖人は彼らを諭した。　「知っておいてほしい。私が去ったのは、主の御心によるものである。私は主に祈り、主は私に、神の教会に降りかかる苦難を見ず、聖なる神殿の荒廃や祭壇の冒涜、そしてわが子らの血が流されるのを見ないよう、ここから去るよう命じられたのだ。 だから、私の子供たちよ、私を引き留めないでください。

彼に迫る災難について啓示があったと聞き、彼らはさらに熱心に彼に懇願し始めた――なおさら彼らを見捨てずに、祈りによって彼らの苦難を助けてほしいと。 聖人は心を痛め、 と杖で地面を打ちつけ、こう言った。「あなたがたが私を解放するまでは、私は何も食べず、何も飲まない。もし私を死んだ姿で見たいのなら、引き留めておけ。」

七日間、人々は懇願して聖人を引き留めたが、ついにその決意が揺るぎないことを確信すると、和解して彼を解放した。大勢の民衆が泣きながら、彼を遠くまで見送った。ベフィリアの町[7333] に近づくと、聖人はひざまずき、皆と共に祈りを捧げ、彼らを主にお委ねして、帰路につかせた。　旅の苦労に耐えられると分かっていた修道者40人を選び、断食し、日没後にのみわずかな食事をとるようにして、彼らを連れて行った。5日間の旅の末、聖人はピルシア[7334] に到着した。　「リクノス」として知られる近隣の砂漠地帯に住む兄弟たちを訪ねた後、そこから立ち去り、3日後にファヴァストの町に到着した。そこで、投獄されていた殉教者ドラコンティオス司教と面会し、二人は神に導かれた対話によって互いに慰め合った[7335] 。 さらに数日にわたる旅を経て、長老は多大な苦労の末、バビロンにたどり着き、殉教者フィロン司教[7336] を訪ねた。この二人の聖人は、不義なアリウス派を支援したコンスタンティウス王によって、その地へ追放されていたのである。　至福のフィロンと再会し、彼と語り合った後、聖人は旅を続け、アフロディトポリスという町に到着した。そして、恐ろしく過酷な砂漠を三日間旅した後、聖アントニオが滞在していた高い山にたどり着いた。

[7333] ベフィリア――別名ベトゥリア――は、ガザの南に位置するパレスチナの都市である。

[7334] ピルシア、あるいはペルザ、および以下で言及されるリクノス、ファヴァスト、バビロン（エジプト；現在はカイロの一部）、アフロディトポリス、ブルヒアは、下エジプト（北部）の都市や町である。

[7335] ドラコンティオス――エルモポリス（エジプト）の司教、聖パムヴァの弟子。

[7336] フィロン――キリネの司教（キリネは、エジプトの西、アフリカ大陸北岸に位置する上リビア地方）。

そこで、聖ヒラリオンは二人の弟子、イサクとペルシアンに出会った。彼らは聖人を見て大いに喜んだ。その一帯は実に美しく、聖人は熱心にその周辺を巡った。一方、イサクとペルシアンは、聖アントニオの労苦によって聖別された場所をすべてヒラリオンに案内した。

「この場所で、私たちの聖なる父アントニオは歌を歌いました」と彼らは語った。「そして、この場所では沈黙に身を委ね、ここでは祈りを捧げ、あそこでは座って籠を編んでいました。　ここでは労苦から休息をとるのが常で、あそこでは眠っていました。このブドウやこれらの木々は彼自身が植えたもので、この脱穀場は彼の手で造ったものです。この庭の灌漑用の池は、彼が大変な労力を費やし、汗だくになりながら自ら掘ったものです。これが、聖人が長い間土を掘るために使っていた鍬です。

彼らはこれらやその他多くのものを聖イラリオンに見せた。聖イラリオンは、アントニオが休息をとっていた場所に着くと、畏敬と喜びの念を抱きながら、その寝床を口づけし、そこに横たわった。　山の上には二つの石造りの小部屋があり、聖アントニオはそこへ静寂を求めて引きこもり、訪ねてくる人々の煩わしさから身を隠していた。　弟子たちはイラリオンを階段でそこへ案内し、実がたわわに実ったブドウの木や様々な果樹を見せ、それらが聖アントニオによってわずか3年前に植えられたものであると伝えた。

ここで兄弟たちと共に休息をとった後、尊者イラリオンは再びアフロディトポリスに戻り、兄弟たちをパレスチナの自分たちの修道院へ戻るよう命じて送り出し、自身のもとにはただ二人を残した。　彼はその二人と共に、その町からほど近い砂漠へと向かい、そこに定住した。そして、沈黙と断食、祈り、そして、まるで今まさにキリストに捧げる修道生活を始めようとしているかのような、極めて偉大な修行に身を捧げた。

聖アントニオの死後、この一帯では三年間も雨が降らず、国中に飢饉が猛威を振るった。それは、土壌が炎のように灼熱の暑さで焼け焦げてしまったためであった。人々は、聖人の死を悲しんでいるのは人間だけでなく大地も同様であり、それゆえに天が雨を降らせないのだと語った。　人々も家畜も、飢えと渇きで死んでいった。その地にアントニオスの弟子である聖イラリオンが住んでいると聞きつけ、大勢の人々が妻や子供を連れて集まり、彼のもとへ砂漠へと向かった。到着すると、彼らは熱心に彼にこう懇願し始めた。

「神はアントニオの代わりにあなたを私たちに遣わしてくださいました。どうか憐れみ深く、主にお祈りください。主がその偉大なる慈悲によって、干ばつで干からびたこの地に雨を降らせてくださいますように。」

飢えと渇きに苦しむ人々の悲惨な様子を見て、聖イラリオンは天に向かって目と両手を上げ、涙を流しながら祈り始めた。するとすぐに大雨が降り出し、大地全体をたっぷりと潤した[7337]。それ以来、人々は病人を連れて聖人のもとを訪れるようになった。　ここでも人々に煩わされ、静寂を保てないことを悟った聖人は、オアシムの荒野へ退隠することを望み[7338]、身支度を整えて二人の弟子と共に旅立った。アレクサンドリアを過ぎ、ブルキアに到着すると、そこで知り合いの兄弟たちに出会い、彼らは喜んで彼を迎え入れた。　彼らのもとでしばらく過ごした後、彼は去ろうと決心したが、兄弟たちは彼を行かせようとはせず、一緒にいてくれるよう懇願した。そこで彼は夜中にこっそりと彼らのもとを去ることにしたが、弟子たちが彼のためにロバを準備していると、兄弟たちはそれを察知し、駆けつけてドアのそばに横たわった。

「あなたの足元に横たわって死ぬ方が、これほど早くあなたを失うよりはましです！」と彼らは言った。

[7337] これは359年のことだった。

[7338] オアシス――すなわち「大リビア・オアシス」は、フィヴァイダ砂漠の西に位置する。古代ギリシャの植民地であり、流刑地としても機能していた。異端者ネストリウスはここに流刑に処された。

「さあ、立ち上がってください、わが子らよ」と、尊師は彼らに懇願した。「あなたがた自身のためにも、私のためにも、私を早く送り出してくれるほうがよいのです。なぜなら、私は神からの啓示を受け、ここから去るよう命じられたからです。だからこそ、私のせいであなたがたに悲しみが降りかからないよう、私は一刻も早くあなたがたのもとを離れようとしているのです。　まことに、後になって、私が急いで、あなた方との滞在を避けているのは無駄なことではないと、あなた方は理解するでしょう。

この言葉を聞いて、兄弟たちは立ち上がり、聖人は祈りを捧げ、彼らを抱きしめて去っていった。神の恵みが、通り抜けられない砂漠を横断する彼の旅路を守っていた。

彼がブルヒアを去った翌日、ガザから現地の異教徒たちが処刑人を連れてここへやって来て、イラリオンがどこにいるかと尋ねた。彼が去ったことを知ると、彼らは互いにこう言った。

「この魔術師を見てみろ。我々が何をしようとしているかを見抜いて、逃げ出したのだ。」

ガザの不信心な住民たちは、当初から、民衆が聖人のもとへ集まり、自分たちの神マルナスを崇拝しなくなったことを妬んでいた。とりわけこのため、マルナスの祭司たちは聖人に激しい憎悪を抱いていた。彼らはあらゆる手段を尽くして聖人を滅ぼそうとしたが、周辺のすべての町や村が聖人を深く敬っていたため、その企ては失敗に終わった。　やがてコンスタンティウス王が亡くなり、悪魔に仕える邪悪な者、ユリアヌス・背教者が王位につくと、不法者たちは、この時こそが、かねてから企てていた邪悪な計画を遂行するのに好機であると見なした。　ガザの異教徒たちは不敬虔な王のもとへ赴き、聖ヒラリオンとその弟子たちを誹謗中傷し、ガザ近郊の修道院を破壊し、弟子たちを事前に殴打した上でその地域から追放し、ヒラリオン自身とその助手イシキオスを殺害するよう命じる書面による勅令を懇願した。　不信心者たちはその通りに実行した。修道院を破壊し、キリストの羊の群れを追い散らした。一方、イシキオスは、他の弟子たちよりも熱心な従順さによってイラリオンに最も愛されていたが、不信心者たちの手から逃れるため、荒野に身を隠していた。

その間、神に守られた聖イラリオンは、オアシムの荒野で暮らしていた。彼がそこに約一年滞在した頃、弟子アドリアンが訪れ、ユリアヌス帝が殺害されたという知らせをもたらした。そして、教会に再び平和が戻ったため、彼をパレスチナの以前の場所へ呼び戻そうとした。　静寂を愛する聖人はパレスチナに戻ることを望まなかったが、オアシムの砂漠でも人々から身を隠すことはできないと悟り、一人の弟子ジノンと共に砂漠を越えてリビアの地へと向かった。一方、アドリアンは別の弟子と共にパレスチナへと戻った。

海辺の町パレトン（[7339]）に到着すると、イラリオンは人間の栄光を避けるため、船に乗り込みシチリアへと向かった。船主には、悪霊に苦しめられている息子がおり、その悪霊は船の中でこう叫んだ。

「神の僕イラリオンよ！　なぜ海の上でも我々に安らぎを与えないのか？　我々が岸に着くまで我慢してくれ。そうしなければ、私はここから奈落の底へ転落してしまうのだ。」

聖人はこう答えた。

「もし神が、お前に神の被造物の中に留まるよう命じられるなら、留まりなさい。もし神がお前を追い出されるなら、それは我々には関係のないことだ。私は罪深い人間なのだから。」

これを聞いて、病の少年の父は、船に乗っていた者たち全員と共に聖人の足元にひれ伏し、息子を憐れみ、彼から悪魔を追い出してくれるよう懇願した。しかし、聖人は自らを罪人だと言い、承諾しなかった。

「もしあなたがたが、私たちが向かっているあの国で、私のことを誰にも話さないことを約束してくれるなら」と、彼はついに言った。「私は主なる神に祈り、その邪悪な霊を追い出していただけるよう願おう。」

[7339] パレトン――下エジプトの海辺の都市。

彼らは固く誓った。すると、聖人は祈りを捧げた後、少年から悪霊を追い出し、皆が神を賛美した。

船がシチリア島のピコノ山[7340] に接岸したとき、聖人は船頭に運賃として、若き日に自ら書き写した福音書を渡した。彼には他に与えるものが何一つなかった。なぜなら、彼は精神と同様に、財産においても極めて貧しかったからである。　しかし、船主は聖人が強く受け取るよう勧めたにもかかわらず、その報酬を受け取らなかった。

「あなたがご自身も貧しく、何もお持ちでないのですから、私があなたから何かを受け取るようなことは決してありません」と船主は答えた。

一方、聖人は、自分が完全に無一物であり、この世の虚しいものを何も持っていないことを悟り、心から喜びを感じていた。岸からおよそ二十ポプリシュほど離れた場所に、彼は弟子と共に住み着いた。　弟子は毎日薪の束を拾い集め、近くの村へ運び、その代金でパンを一つ買い、二人はそれを神に感謝して食べていた。

しかし、*「山の上にある町は隠れることができない」*（マタイ5:14）。ローマの聖ペテロ教会で、ある悪霊に取りつかれた者が叫んだ。

「最近、キリストの僕イラリオンがシチリアに到着した。誰も彼を知らないし、彼は身を隠せると思っている。だが、私はそこへ行って、彼を指摘してやる。」

そして、まさにその通りになった。その男はシチリアに連れて行かれ、ピコーネで聖ヒラリオンに出会い、彼の修道室の前でひれ伏すと、聖人の祈りによって癒やされた。それ以来、その地方の住民たちは彼のことを知るようになった。　多くの人々が病の癒やしを求めて彼の元を訪れるようになったが、望みを叶えられずに帰った者は一人もいなかった。一方、前述のローマからやって来て悪霊に取りつかれていた病から癒やされた男は、癒やしへの感謝の印として聖人に豪華な贈り物を捧げようとしたが、聖人はそれを受け取らず、こう言った。

「*『ただで受けたから、ただで与えよ』*と書いてある。[7341]（マタイ10:8）。

尊者がシチリアに滞在している間、彼の最愛の弟子である至福のイシキオスは、3年間にわたり、愛する霊的父である尊者イラリオンを世界中を探し回った。彼は多くの国々、山々、荒野を丹念に巡ったが、どこにも彼を見つけることはできなかった。 その後、ペロポネソス半島[7342] の海辺の町メトーンにいたとき、彼はあるユダヤ人の商人から、シチリアに多くの奇跡を行うあるキリスト教の預言者が現れたと聞いた。

「その人の名前は？　どんな風貌をしているのか？」とイシキオスは尋ねた。

「私は彼を見たこともなければ、名前も知りません」とユダヤ人は答えた。「ただ、彼の噂を耳にしただけです。」

その預言者がまさに自分が探している人物だと悟ったイシキオスは、船に乗り込み、シチリアへと向かった。同行者たちから聖人について何とか情報を得ることができたが、彼らは口を揃えて、聖人が多くの奇跡を起こし、その見返りとして誰からもパン一片さえ受け取らなかったと証言していた。　ピコネで聖人を見つけたイシキイは、その足元にひれ伏し、足を口づけし、涙で洗い清めた。長老は、喜びのあまり泣き崩れる弟子をようやく地面から起こし、魂を救うような言葉で彼を慰めた。

しばらくして、多くの人が彼のもとにやって来て彼を称賛しているのを見た長老は、弟子たちであるジノンとイシキオスにこう言った。

「ここにとどまることはできない、子らよ。誰も私たちのことを知らない別の国へ行こう。」

[7340] ピホン――シチリア島南端の岬。

[7341]　マタイ10:8。「ただで受けたものは、ただで与えなさい」。この言葉によって、救い主は聖霊から授かった恵みを売り渡すことを禁じられた。

[7342] ペロポネソス――バルカン半島にあるギリシャ南部の地域。

準備を整えると、彼は彼らと共に密かにダルマチアの町エピダウロス[7343] へと去っていった。そこは、神が多くの者を恵むために彼を導かれた場所であった。エピダウロス近郊の静かな場所に数日滞在しただけで、かつてシチリアにいた神の御使いが彼らの元へやって来たことは、すでにその地の住民たちの間に知れ渡っていた。　神は人々に御自分のしもべを現し、彼を栄光に輝かせた。互いにその話を聞き合った住民たちは集まり、彼の元へやって来た。そして、彼にひれ伏すと、自分たちの大きな災難から救ってほしいと懇願し始めた。その地方には恐ろしい大蛇が棲みついており、その大きさは巨大な雄牛さえも飲み込み、人間をも飲み込んでしまうほどであった。　こうして、その大蛇は数え切れないほどの人々と家畜を滅ぼしていた。その話を聞いた聖人は、大量の薪を積み上げて大きな炎を燃え上がらせるよう命じ、自らひざまずいて神に祈りを捧げた。神が御自分の民を憐れみ、御名の栄光のために、この破滅をもたらす大蛇から彼らを救い出してくださるよう願ったのである。 その後、彼は「 」と蛇を呼び始めた。すると、まるで何らかの力に引かれるかのように、蛇が犠牲に捧げられるために現れた。皆はそれを見て恐怖に震えた。聖人は蛇に炎の中に入るよう命じると、直ちにその言葉に従い、蛇は火の中に入り、焼けてしまった。その時、人々は神を賛美し、聖イラリオンに感謝を捧げた。

その日から、多くの人々が彼に助けを求め始めた。一方、長老は嘆き、人々から身を隠し、沈黙の中で過ごすことのできる場所をどこに見つけられるかと考えを巡らせていた。その頃、大地震が起こり、海は激しく荒れ狂い、岸を越えて押し寄せた。　波は高く立ち上がり、大きな山々さえも覆い尽くし、水に流された船は高い場所に打ち上げられた。海沿いのエピダウロスに住む人々は、この惨状を見て、第二の大洪水が起き始めたのだと思い込み、全地の滅亡と自らの避けられない死を恐れて、恐怖のあまり大声で泣き叫んだ。　聖イラリオンを思い出した人々は、老若男女を問わず、妻や子供たちも皆、彼のもとへ駆け寄り、泣きながら、神が彼らからその義なる怒りを退けてくださるよう、神に祈ってほしいと懇願した。聖人は立ち上がり、彼らと共に町へと向かった。　到着すると、彼は町と海の間に立ちました。海はエピダウロス上空高くまで押し寄せ、まるで雲に触れそうであり、今にも町を水没させようとしていました。　聖人は砂の上に三つの十字架を描き、天に向かって両手を挙げ、人愛に満ちた神に対し、御自身の被造物を憐れんでくださるよう熱心に懇願した。彼がそう祈っていると、神は御自身の愛を現された。主の御命令により、海は次第に静まり、元の岸辺へと引き返し、地震は止み、風も収まった。　この主の偉大な力と、エピダウロスにおける聖ヒラリオンによる祈りの執り成しについて、先人たちは代々、子孫たちに語り継いできた。

一方、聖イラリオンは世間の称賛を避け、夜になってその地を離れ、キプロスへ向かう船を見つけると、弟子たちと共にその船に乗り込んだ。航海中、海賊に襲われ、船に乗っていた者たちは皆、ひどく恐れたが、イラリオンは彼らを慰めた。

「海賊の数が、ファラオの軍勢よりも多いというのか？」と彼は言った。「しかし、神はあの軍勢をも海に沈めたではないか。」

海賊たちが石を投げられるほどの距離まで船に近づいたとき、聖人は船上から彼らに向かって手を振りかざし、こう言った。

「ここまで来ただけで十分だ。」

海賊船は直ちに停止し、それ以上進み、聖人が乗る船に近づくことはできなくなった。海賊たちは無駄に漕ぎ続け、多くの労力を費やしたが、神の力によって船から弾き飛ばされ、恥じ入って引き返した。

[7343] エピダウロス――アドリア海沿岸の都市で、6世紀に破壊された。現在はラグエア。

キプロス島[7344]に到着した聖イラリオンは、パフォス市[7345]から2ヴェルスタ離れた人里離れた場所に定住した。しかし、ここでも彼は身を隠すことはできなかった。人々の中に宿っていた悪魔たちが、彼の到来を人々に知らせてしまったのである。 神の御心により、国中から200人もの男女の悪霊に取りつかれた者たちが集まり、聖人のもとへやって来た。そして、彼の祈りによって、全員が悪霊の支配から解放された。ここで2年間過ごした後、聖人はこの地を離れ、静寂の中で生涯を終えることのできる人里離れた場所を探すことにした。 海から12ヴェルストほど離れたところで、彼は高い山々に囲まれた人里離れた荒涼とした場所を見つけた。その周囲には多くの果樹が生い茂っていた（しかし、彼はその果実を一度も口にすることはなかった）。山からは飲用に適した水が流れ出ており、そこには花咲く庭園と、多くの悪霊が棲みつく廃墟となった偶像崇拝の神殿があった。 この場所は、その並外れた人里離れ具合から聖人に気に入られ、彼はそこで五年間を過ごした。 悪霊たちは昼夜を問わず大声で叫び、聖人を脅かしてそこから追い出そうとした。しかし聖人は絶え間ない祈りによって彼らと戦い、静寂の中で休息をとっていた。なぜなら、そこへのアクセスが困難であり、またその場所に多くの悪霊が棲みついていたため、誰も彼のもとを訪れることを敢えてしなかったからである。

ある日、小屋から出てきた長老は、その前に横たわっている麻痺した男を見かけ、イシキアに尋ねた。

「この人は誰か。誰が彼を連れてきたのか？」

「この方は、私たちが住んでいるこの土地の所有者です」とイシキオスは答えた。

聖人は涙を流し、その男の上に手を差し伸べて言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、立ち上がって歩め！」

すると、その麻痺した男はたちまち完全に健康な姿で立ち上がり、神を賛美しながら歩き始めた。この奇跡の後、周辺の住民たちは皆、もはや敵対的な霊も、困難で危険な道も恐れることなく、聖人のもとを訪れるようになった。

パレスチナの兄弟たちのことを思い出し、尊者は至福のイシキオスを遣わして、彼らを訪ね、自身の名において挨拶を伝えるようにした。 一方、聖人は、ここでも人々に敬われ、訪れる人々によって労を強いられていることを自覚し、この世を去ることを考え始めたが、イシキイの帰還を待っていた。その頃、彼の弟子である至福のジノンが亡くなり、聖人自身にとっても、この苦労の多い地上の旅を終える時が訪れた（彼はすでに80歳になっていた）。

神のもとへ旅立つことを予感した聖人は、自らの手で兄弟たちへの遺言を書き、イシヒオスには自筆の聖福音書、羊毛の衣、そして[7346]を遺した。その後、彼の体は衰弱し始めた。

聖イラリオンが病に伏しているという噂がパファの住民の耳に入ると、敬虔な男たちは皆、直ちに彼を見舞いに駆けつけた。彼らの中には、コンスタンティアという名の信心深い女性もいた。彼女の病める娘を、聖人は聖油を塗って癒やしていたのである。

主が御自身のもとへ召されていることを悟った聖人は、訪問者たちに、自分の死後、少しも遅れることなく、彼が暮らしていたその庭に遺体を埋葬してほしいと頼んだ。すでに死の床に就いていたイラリオンは、清められた心で魂が肉体から離れる様子を見つめながら、こう語った。

「出て行け、わが魂よ、何を恐れるのか！ 出て行け、何を躊躇うのか！ 八十年もの間、キリストに仕えてきたのに――死を恐れるのか？」

[7344] 365年9月頃。

[7345] パファ――キプロスの海辺の都市で、使徒パウロの説教で知られる。ここで、彼は自分に抵抗した魔術師エリムを盲目にした。『使徒行伝』第13章。

[7346] クコール――清らかさと悪意のなさを象徴する修道士の帽子。時には、クコールに十字架が縫い付けられることもあった。

こう言い残して、彼は神に息を引き取った[7347] 。父であり師である彼を悼み、参列者たちは彼の遺言通り、その場所に遺体を埋葬した。

パレスチナから戻り、師の姿を見出せなかった聖イシキオスは、何日も彼の棺の前で泣き続けた。彼は遺体をパレスチナの兄弟たちの元へ移そうとしたが、近隣の住民たちが、その宝物を自分たちの国から持ち去られないよう遺体を厳重に守っていたため、叶わなかった。

そこでイシキオスは、この地に定住したいふりをして、こう言った。

「私が死んで、父と共にここに埋葬されるように。」

人々は彼の言葉を信じ、聖ヒラリオンが埋葬されたその場所に彼を住まわせた。そしてイシキイは、10ヶ月が経過した後、聖人の棺を開けると、まるで今亡くなったばかりのように、顔は輝き、芳しい香りを放つ聖なる遺体を見た。彼はその遺体を抱き上げ、密かにパレスチナへと去っていった。　パレスチナの修道士や信徒たちは、イシキオスが聖イラリオン聖遺物を持ち帰ったという話を聞き、あらゆる修道院や町からろうそくや香炉を手に集まり、彼らを栄誉をもって送り出した後、マイユームにある彼の最初の修道院に安置した。

前述のコンスタンティアが行ったことについても、触れておくべきである。彼女は徳高く、聖ヒラリオンに対して深い敬愛を抱いていたため、彼の死後、頻繁に彼の墓を訪れ、夜通し祈りを捧げ、まるで生きているかのように彼と語り合い、自分への祈りを求めた。　聖人の遺体が盗まれたことを知ると、悲しみのあまり倒れて亡くなり、その死によって、彼女が聖人に対してどれほどの信仰と愛を抱いていたかを示したのである。

キプロスとパレスチナの住民たちは、聖イラリオンを称え合いながら互いに議論を交わしていた。パレスチナの住民たちはこう言った。

「私たちには聖イラリオン様の遺体がある。」

「いや、我々のところには彼の霊がある」とキプロス人たちは答えた。

彼が埋葬されたキプロスでも、遺体が移されたパレスチナでも、聖人の祈りによって多くの奇跡が起こり、三位一体の唯一なる神の栄光のために数え切れないほどの癒しがもたらされた。神に、私たちからも永遠に栄光と感謝と礼拝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

あなたの涙の流れによって、不毛の荒野を耕し、深き嘆きの息吹をもって、百の労苦の末に実を結ばせ、奇跡を放つ宇宙の灯火となられた、イラリオン、わが父よ。キリスト・神に、わが魂の救いを祈り求めてください。

コンダク、第3調:

今日、私たちは、沈むことのない知恵の灯、太陽として現れたあなたを、賛美の歌をもって称えます。あなたは、無知という闇の中に真実の光を放ち、すべての人を神聖な高みへと導かれたからです、イラリオンよ。それゆえ、私たちは叫びます。「喜びなさい、父よ。すべての断食者の礎よ。」

[7347] 371年または372年10月21日に死去した。

聖イラリオン・メグリンスキーの記念日

記念日：10月21日

ブルガリアのツァール・カロイオアン[7348]（ツァール・アセニの弟）は、ギリシャの領土――フラキア、マケドニア、ネアダ、エラダ――を制圧し、メグリナ[7349]を攻略した。そこで彼は、メグリナ司教である聖イラリオン[7350]の聖遺骨を発見し、敬虔な熱意に駆られて、聖人の聖遺骨を自身の首都テルノフ[7351]へ移したいと願い、それを持ち帰った。ブルガリアの総主教は、聖人の到来を知ると、司教たちや聖職者全員、貴族たち、そして民衆を率いて、ろうそくと香を捧げながら聖遺物を出迎えた。聖人の聖遺物は10月21日、神の御加護ある都市テルノフに運び込まれ、安置された。

その後、王国の領土を大幅に拡大したヨアン・アセン2世が即位すると、王の意向により、テルノヴォに「40人の殉教者」に捧げられた教会が建設され、そこに聖イラリオン聖遺骨が安置された。

トロパリオ、第3声：

奇跡は啓示として現れ、あなたは神の美徳を輝かせ、修道者たちの群れを導き、司教の座を清め、　異端の攻撃にも動じることなく、キリストの教会を築き上げられた、尊きイラリオンよ。あなたは眠るようにこの世を去られ、その御体は完全かつ朽ちることなく守られ、様々な病に苦しむ者たちに癒やしを与え、悪魔を追い払ってくださる。それゆえ、我らはあなたに祈る：我らの魂が救われるよう、どうか祈り求めてください。

[7348] カロイオアンは、ヨアン・アセン（1186年～1196年）の2代目の後継者であった。彼は1207年に甥のボリルによって殺害され、その後、アセンの息子であるヨアン2世（1218年～1241年）が即位した。ヨアン2世は、ボリルの暴挙が行われた当時、ロシアに滞在していた。

[7349] ある説によれば、ここも古代のエデッサであると言われている。一方、他の説では、スラヴ系のヴォデナをエデッサと見なしており、メグリナはこの地から北東に30ヴェルストの地点にある。現在、この都市は存在しない。

[7350] 聖イラリオンは、裕福で高貴な両親の間に生まれた。キリスト教の教育を受けた後、18歳で世俗を離れ、修道院に籠もった。そこで、その厳格な生活ぶりが認められ、まもなく修道院長に任命された。　彼に託された人々の魂の救済を深く案じ、救いのために定められた貴重な時間を無駄にしないよう彼らを励ました。特に、酩酊を厳しく禁じた。1134年、彼はブルガリアの大司教エウスタフィオスによって、メグリンの司教に叙任された。　当時、ブルガリアではボゴミル派の異端が広く蔓延しており、彼らは善と悪が二つの独立した原理であり、その間で闘争が起きているとする二元論的な教義を説いていた。聖イラリオンは、住民たちをこの偽りの教えから遠ざけるため、使徒的な熱意と熱心な祈りを武器とした。　彼は、ボゴミル派の不敬虔さを倦むことなく糾弾し、彼らが他人を欺くために用いていた偽善的な善良さという仮面をはぎ取った。異端の指導者たちは、聖ヒラリオンと公然と論争することを敢行した。ボゴミル派の反論を退けた聖人は、次のような言葉で演説を締めくくった。　「なぜ、あなた方ボゴミル派は、自分自身や他人を欺き、キリスト教徒とは名乗りながら、実際には全くキリスト教徒ではないのか。救い主キリストの十字架に敵対し、キリスト教徒が信じるように唯一の神を認めず、主の御言葉に従ってキリスト教徒が尊ぶ古来の啓示を冒涜しているではないか。　あなたがたは、高慢に満ちているくせに、偽善的な柔和さで庶民を欺いている。自らの心の腐敗を認めず、祈りと謙遜をもって神の恵みを求めようとしない者たちに、真の敬虔などあり得ない！　あなた方の断食は何の役に立つのか。心から自らを省みれば、悪意、嫉妬、虚栄、軽薄さ、狡猾さ、嘘、欺瞞といったものは、私たちの中に潜む邪悪な本質によるものではなく、断食によって克服できるものでもないことが分かるだろう。それらは、堕落した自尊心の産物であり、それゆえに、それらを克服するには霊的な奮闘が必要なのである」。　この牧者の諭しに耳を傾け、多くのボゴミル派信徒は心を動かされ、かつての不敬虔を悔い改め、キリストの教会に帰依した。　聖イラリオンは、キリストにおいて神性という単一の性質のみを認めるモノフィシズムを信奉するアルメニア人に対しても、同様の精神で戦った。福者イラリオンは1164年に安らかに永眠した。

[7351] テルノフはブルガリアの主要都市の一つであり、古代には首都であったことさえある。

コンダク、第3調:

大司教よ、あなたの記念は光に満ちて現れ、落胆の闇を打ち砕き、天の賜物の光が満ち溢れ、あらゆる喜びを呼び集めます。なぜなら、神より、イラリオンよ、あなたは恵みを受け、修道士としての位に就かれたからです。

聖殉教者ダシウス、ガイウス、ゾティクスの記念日

記念日：10月21日

聖ダシウス、ガイウス、ゾティクスは、ニコメディアに滞在中、ある日偶像崇拝の神殿に入り、祭壇を破壊した。　そのために、彼らはあらゆる拷問と苦しみにさらされた。彼らは木に吊るされ、馬の毛でできた鉋で削られ、毛皮の布で体をこすられた。　彼らがあらゆる苦痛をものともせず、偶像の虚しさを糾弾し、父と聖霊と同一の本質を持つ神であるキリストを声高に宣べ伝えているのを見た拷問者たちは、彼らの首に石を吊るして海に投げ込み、そこで聖人たちは安息を得た[7352]。

11月4日

10月22日（旧暦）

同日は、エフェソスの七人の聖少年たち――マクシミニアン、イアムブリコス、マルティニアン、ディオニシオス、アントニノス、コンスタンティノス（エクサクストディアン）、ヨハネ――の記念日である。　彼らの記念日は8月4日にも行われる。1870年の『ミネイ』には、聖少年たちは8月4日に亡くなり、テオドシウス2世の治世中の10月22日に蘇ったと記されている。

聖アヴェルキオス（使徒に等しい者）、イェラポリス司教の記念日

記念日：10月22日

アントニヌスの息子マルクス・アウレリウス[7353]　の治世中、主に異教徒が住む都市イェラポリス[7354]においで、聖アヴェルキオスが司教を務めていた。 ある日、その地で偶像を称える盛大な祭りが行われ、すべての異教徒たちが自分たちの神殿に集まり、歓喜して、魂のない神々――偶像――を崇拝し、彼らに犠牲を捧げていた。　聖アヴェルキウスは、その光景を目の当たりにして涙を流し、狂気に目がくらんだ人々が神を見捨てて悪魔を崇拝し、創造主を忘れ、人の手によって造られたものを崇めていることを嘆いた。司教は自宅に閉じこもり、次のように祈った。

「永遠の神、慈悲深き主よ、あなたは全宇宙を創造し、それを治めておられます。あなたは、人のために御子をお遣わしになり、この世に受肉させられました。どうか今、天より慈悲深い眼差しをもって全世界を見守ってください。　また、あなたが私を、あなたの御言葉の羊たちの牧者として立てられたこの町も見捨てないでください。　迷い込んだ人々を見守ってください。彼らは、あなたにふさわしい栄光を、あなたではなく、自ら作り出した邪悪な悪魔や偶像に捧げています。　主よ、この迷える人々を滅びから救い出し、闇からあなたの真の光へと導き、あなたの選ばれた群れに加え給え！

[7352] 聖人たちは、303年のディオクレティアヌス帝の治世中に殉教した。
[7353] 在位は161年から180年まで。
[7354] イェラポルは、小アジアのフリギア地方にある豊かな都市であった。

この熱心な祈りの後、聖人はすでに夜が更けていたため眠りについた。すると、夢の中で、並外れた美しさを持つ若者が彼の前に現れた。その若者はアヴェルキイに杖を手に渡しながら、こう言った。

「行け、アヴェルキイよ。わが名において、この杖をもって、迷いの支配者たちを打ち砕け！」

眠りから覚めたアヴェルキイは、幻視の中に主ご自身が現れたことを悟り、心の中に言い表せないほどの喜びを感じた。　熱意に燃え、彼はすぐに立ち上がり、手近にあった杭を手に取り、その夜の第九時[7355] にアポロンの神殿へと向かった。そこでは前日、異教の祭りが行われ、数多くの生贄が捧げられていた。　この神殿には、多くの貴重で美しく装飾された偶像が安置されていた。神殿に近づくと、アヴェルキウスは扉が閉ざされているのを見つけた。彼が扉を叩くと、扉はたちまち彼の前に大きく開いた。神殿に入った聖なる司教は、まずアポロンの主たる偶像を打ち砕き、続いて他の偶像たちも打ち砕いた。　彼はそれらすべてを粉砕し、細かく砕き散らした。耳も口も塞がれた偶像たちは、魂もなく力も持たないため、聖人がそれらを打ち砕く際、身を守ることはできなかった。聞こえてきたのは、それらが倒れる音だけだった。

神殿の近くに住んでいた偶像崇拝の祭司たちは目を覚まし、神殿から聞こえる大きな音を聞いて、それが何を意味するのか理解できなかった。　神殿に駆けつけると、彼らは自分たちの神々の偶像が塵となって地面に横たわっているのを目にした。聖アヴェルキイは、偶像の破片を足で踏みつけ、杖で打ち砕いていた。この光景を目の当たりにして、祭司たちは恐怖に襲われた。聖人は彼らに向き直り、怒りを込めてこう言った。

「さあ、町の指導者たちや民衆のもとへ行き、こう伝えなさい。あなたがたが昨日、神々のために催した祝宴で、神々は酒に酔い、互いに争い、地面に倒れて粉々になったのだと。」

そう言うと、聖人は敵を打ち破った強き男のように、自分の家へと帰っていった。そして、多くの人間の魂を滅びへと導いた偶像たちは、まさにそのような存在であったのである。

偶像の祭司たちは、市の役人たちのところへ行き、アヴェルキイがしたすべてのことを彼らに話した。　日が明けると、この出来事の知らせは瞬く間に街中に広まり、老若男女を問わず、庶民から高官に至るまで、皆が神殿に集まった。自分たちの偶像が粉々に砕かれ、地面に散らばっているのを見て、皆は最初、驚愕した。その後、怒りに満ちて、皆が叫び始めた。

「アヴェルキーを死に至らしめよ！」

さらに、こう付け加える者もいた。

「彼を王のもとへ送れ。そこで、彼の罪に見合った苦しみを受けるだろう！」

「いや、今すぐ行って、彼とその家ごと焼き払ってしまおう」と、また別の者たちが提案した。

指導者たちは民衆を制止した。

「アヴェルキウスの家を燃やすなど、決してしてはならない。もしアヴェルキウスの家に火を放てば、街全体が火災の被害に遭うのではないかと懸念している。むしろ彼を捕らえて我々が裁くか、あるいは最高統治者に裁きを委ねるべきだ。」

民衆がこのように騒然としており、すでにアヴェルキイの家に襲いかかろうとしていた時、司教の隣人たちはこの話を聞きつけ、彼の家へ向かった。彼らは、集まった信者たちに教えを説いている彼を見つけ、民衆の間で聞かれたことをすべて伝えた。民衆は彼の家へ行き、彼を悪党として捕らえようとしているというのだ。

これを聞いた信者たちは恐れをなして、民衆の騒動が収まるまで、しばらくの間、家を出てどこかに身を隠すよう、牧者に懇願した。しかし、聖人は恐れずにこう答えた。

[7355] 時間は日の出から数えられ、9時間は現在の午前3時に相当した。

「主は御自身の使徒たちに、大胆に、恐れずに、すべての民に救いの言葉を宣べ伝えるよう命じられた。それなのに、私が、私に対して反旗を翻し、私の神への熱意ゆえに私の命をねらう人々を恐れるべきだろうか。たとえ私が人の手から逃れることができたとしても、どうして神の御手から逃れられようか。　いったいどこに、主から身を隠せる場所があるというのか。まことに、兄弟たちよ、私たちの命の守り主である主ご自身が助けてくださるのに、私たちが恐れ、身を隠すなどふさわしくない。主のために苦難を受けることは幸いであり、主のために死ぬことは、いかなる安楽な人生よりも甘美なものである。

こう語り終えると、聖人は家を出て町の真ん中へと向かい、信者たちは彼の後を追った。　人々が普段集まる場所に到着し、高台に座ると、アヴェルキイはそこにいた人々に説教を始め、彼らが真の神を知り、悪魔の誘惑と自分たちの神々の虚偽を理解し、偶像崇拝を捨て去るよう促した。　彼は、彼らが天にまします唯一の神、全世界の創造主に忠実に仕えるよう懇願した。すると、異教徒たちの一部は、市の役人や、アポロンの神殿に集まり、偶像の破壊に憤慨していた民衆のもとへ赴き、アヴェルキウスが町の真ん中で人々にキリストの信仰を説いていると告げた。　これを聞いた人々は、自分たちの偶像を打ち砕いただけでなく、人々の前で公然とキリスト教の信仰を説くという大胆な行為まで行ったアヴェルキウスに対して、さらに激しい怒りを抱いた。彼らは神殿を出ると、恐ろしい怒りを抱いて聖人がいる場所へと向かい、直ちに彼を殺そうとした。　群衆の中には、古くから悪霊に取り憑かれていた三人の少年がいた。群衆が聖人に近づき始めると、少年たちは悪霊の仕業で突然狂乱状態に陥り、恐ろしい叫び声を上げて、皆を恐怖に陥れた。

衣服を引き裂くと、彼らは自分の体を歯で引き裂き、自分の手を噛みしめ始めた。地面に倒れ込むと、泡を吹きながら転げ回り、絶え間なく恐ろしい声で叫び続けた。

「アヴェルキーよ、あなたが説く唯一の真の神の名において、時期尚早に私たちを苦しめないでください。」

このような恐ろしい光景を目の当たりにし、人々は、若者たちが受ける凄まじい苦しみを見、彼らの恐ろしい叫び声を聞いて、戦慄に襲われた。何のためにここに来たのかさえ忘れてしまい、彼らは戸惑いながら、これから何が起こるのか、そして悪霊たちが「私たちを放っておいてくれ」と懇願するアヴェルキーが若者たちに何をするのかを見守っていた。聖人は祈りを捧げた。

「愛する御子イエスの父よ、たとえ私たちの罪が数えきれないほど多くあったとしても、あなたはそれを赦してくださいます。　私たちがあなたに求める有益なものはすべて与えてくださる――今、私はあなたに願い、懇願します――この若者たちを悪霊の襲撃から守り、彼らがその後、あなたの戒めの道を歩み、あなたの聖なる御心に従うことができますように。　あなたが彼らの上に成し遂げられる奇跡的なしるしを見て、多くの人々が、唯一の全能の神であるあなたを信じ――あなた以外に神はいないことを悟るでしょう。

そう祈り終えると、聖人は悪霊に苦しめられていた若者たちに向き直り、手に持っていた杖で彼らの頭を軽く叩きながら、こう言いました。

「わがキリストの名によって、お前たち悪霊に命じる――若者たちから出て行け。彼らに少しの害も与えるな。」

恐ろしい声を上げて、悪霊たちは、まるで死人のように地面に横たわっていた若者たちから出て行った。

聖アヴェルキイは一人ひとりの手を握り、地面から立ち上がらせた。彼らはたちまち完全に健康を取り戻し、聖人の足元にひれ伏して、その尊い足に口づけをした。

民衆はこれを見て、怒りを忘れ、叫んだ。

「アヴェルキイが説く神こそ、唯一の真の神である！」そして、人々は聖人自身にこう尋ね始めた。

「神の人よ、教えてください。もし私たちが神に立ち返れば、あなたの神は私たちを受け入れてくださるでしょうか。私たちの数え切れないほどの罪を赦してくださるでしょうか。どうすれば神を信じられるのか、教えてください！」

聖アヴェルキイは口を開き、人々に神を知ることを教え始め、その教えは昼の第九時（午前9時）まで続いた。また、彼はすべての病人を自分のもとに連れてくるよう命じ、イエス・キリストの御名を呼び、彼らに手を置いて癒した。　その教えを聞き、奇跡を目撃した人々は皆、主イエス・キリストを信じ、アヴェルキウスに聖なる洗礼を授けてくれるよう懇願した。すでに夕方になっていたため、聖人は洗礼を翌朝まで延期し、皆に聖なる秘跡を受ける準備をするよう命じた。　翌朝、人々が集まると、彼は皆を教会へと導き、再び教えを説いた。その後、定例の祈りを捧げた上で、その日500人の男性に洗礼を授けた。そして、わずか数日のうちに、イェラポリスだけでなく、周辺の他の町や村々も、彼はキリストの信仰へと導き、洗礼によって神と結びつけた。　こうして、彼の名声は至る所に広まった。様々な遠方から多くの病人が彼のもとにやって来て、肉体と魂の両方において、完全な癒やしを受けた。

ある高貴な女性、フリエラという名の、東方のプロコンスルであるエウクセニアヌス・ポプリオンの母は、盲目であったが、アヴェルキウスが様々な病を癒していると聞き、自分をその聖なる人物のもとへ連れて行くよう命じた。　彼女はアヴェルキウスが人々に教えを説いている最中に彼のもとを訪れ、その足元にひれ伏して、失明した自分の目を開かせてくれるよう聖人に懇願した。　聖人は、何よりもまずフリエラの心の目が開かれることを願い、彼女に「生まれつき盲目だった者の目を開かれたキリストを信じているか」と尋ねた。フリエラが「　」と信仰を誓い、アヴェルキイの足元に涙を流してひれ伏すと、聖人は神に祈りを捧げた後、彼女の目に触れ、こう言った。

「まことの光、イエス・キリストよ、来てください。そして、あなたのしもべの目を開いてください！」

その瞬間、フリーエラの視力は回復し、彼女は聖人から洗礼を受けた。

洗礼を受けた後、彼女は自分の財産の半分を聖人に手渡し、貧しい人々に配るよう頼み、聖人から教えを受けた後、自宅に戻った。　彼女の息子であるプロコンスル、エウクセニアヌス・ポプリオンは、母が視力を取り戻したのを見て、聖アヴェルキウスの祈りによって母の目が開かれたことを知ると、彼に会って、母の癒やしに対する感謝を伝えたいと思った。聖人はエウクセニアヌスに信仰を教え、彼をキリストへと導いた。

その後、同じく失明していた他の三人の女性が聖人のもとへやって来て、彼にひれ伏してこう言った。

「私たちも、あなたが宣べ伝えているイエス・キリストを信じます。ですから、フリエッレの目を開かれたのと同じように、私たちの目も開いてください。」

すると、聖人はこう答えました。

「もしあなたがたが、言う通り真の神を本当に信じているのなら、その御光を見るでしょう。」

そう言うと、聖人は天を仰ぎ、祈りを捧げ始めた。聖人が祈っている間、天から太陽の輝きをも凌ぐ、言葉では言い表せない光の光線が降り注ぎ、聖アヴェルキイが祈りを捧げて立っていたその場所を照らし出した。　そこにいた者たちは皆、この言葉では言い表せない光に耐えられず、地面に倒れ込んだが、三人の盲目の女性だけが動かないで立っていた。その光が盲目の女性たちの目に触れると、彼女たちは目が見えるようになり、天の光の輝きは消え去った。

聖人は視力を取り戻した女性たちに尋ねた。

「視力が戻ったとき、まず何が見えましたか？」

すると、最初の女性がこう答えました：
「私は、古より[7356]、私の目に触れてくださったお方を見ました。」
もう一人はこう言った。
「私は、私の目に触れられた、この上なく美しい若者を目にしました。」
「そして私は」と三番目の女性が叫んだ。「私の目に触れたのは、まばゆいばかりの少年でした。」
これを聞いて、聖人と彼と共にいた者たちは皆、驚くべき、そして栄光に満ちた奇跡を行われる、三位一体の唯一の神を賛美した。
その後、アヴェルキイは、近隣の町や村にも様々な病に苦しむ人々が大勢いることを知ると、弟子たちを連れてそこへ向かい、主の御業に倣って町や村を巡り、人々に神の御国について教え、病人を癒やした。　「セリシェ」と呼ばれる川沿いの地を訪れたとき、彼はひざまずき、次のように祈り始めた。
「寛大なる主よ、あなたのしもべである私の声に耳を傾けてください。この地に恵みを注ぎ、ここに温水の泉が湧き出るようにしてください。そうすれば、その泉で身を清める者たちは、あらゆる病や傷から癒やされるでしょう。」
彼が祈りを終えると、突然、晴れ渡った空に雷鳴が轟いた。雷鳴の後、ひざまずいて祈りを捧げていたアヴェルキーのまさにその場所で、温かい水の泉が湧き出したのを見て、そこにいた者たちは皆、恐怖に震えた。　そこで聖人は、共にいた人々に、温水が溜まるような深い溝を掘るよう命じ、その温水で病める者すべてに身を清めるよう指示した。そして、その水に身を浸した者は皆、聖人の祈りによって癒やされた。
ある日、悪魔はアヴェルキーを誘惑しようと、女の姿に変身して聖人の元へ近づき、祝福を求めた。悪魔の顔を見た聖人は彼から背を向けようとしたが、その瞬間、右足で石につまずき、足を傷つけてしまい、すねに潰瘍ができた。　激しい痛みに耐えながらも、聖人はうめき声一つ上げることなく立ち続け、ただ手で潰瘍のある箇所を押さえていた。悪魔は笑い、本来の姿に戻ると、聖人にこう言った。
「私を、お前が追い払ってきたような取るに足らない取るに足らない悪魔の一人だなどと思わないことだ。私は彼らの長老である。そして今、お前は私からこの潰瘍を受け取った。他人を病から癒やしてきたお前が、今や自ら病に冒されているのだ。」
そう言うと、悪魔は聖人のそばに立っていたある若者の体に入り込み、彼を苦しめ始めた。しかし、聖アヴェルキイは神に祈りを捧げ、悪魔を制し、その若者から追い出した。若者から出て行った悪魔は叫んだ。
「アヴェルキイよ、お前は私に多くの悪事を働き、ここで平穏に暮らすことを許さない。必ずお前に復讐し、老いてからローマへ行かせるようにしてやる。」
自宅に戻った聖人は、七日間、飲食を一切摂らず、断食と徹夜の祈りに専念した。アヴェルキウスは、敵が悪魔の意のままに自分をどこへでも行かせることを許さないよう、神に祈り求めた。七日目の夜、主は幻の中で聖人に現れ、こう言われた。
「アヴェルキイよ、わたしの御計画により、あなたはローマへ行くことになる。そこでもわたしの御名が知られるためである。だから恐れるな。わたしの恵みがあなたと共にあるからだ。」
この幻視はアヴェルキウスを勇気づけ、彼は兄弟たちに、御前に現れた主から聞いたことを語った。その直後、アヴェルキウスをローマへ連れて行くことを自慢していた悪魔は、狡猾にその企てを実行に移し始めた。

[7356] 「古き日」とは、聖三位一体の第一位格を指す呼称である。この名称は、預言者ダニエルがバビロンでの神秘的な幻視の一つを記述する際に用いられている。「ついに私は――と聖なる預言者は語る――玉座が設けられ、古き日がそこに着座しているのを見た」。

その頃、ローマ皇帝マルクス・アウレリウスは、ルキウス・ヴェラを共同統治者に任命し、娘のルキッラを彼と婚約させた。しかし、婚礼の祝宴が行われる間もなく、悪霊がその娘に取り憑き、彼女を苦しめ始めた。　娘の病に心を痛めた父と婚約者は、領地中から経験豊富な医師や魔術師、祭司たちを集め、あらゆる手段を尽くしてルキッラを治そうと努めた。しかし、彼らの努力は実を結ばなかったばかりか、娘の容体は日ごとに悪化していった。そして、悪魔は彼女の中でこう叫び始めた。

「イェラポリスの司教アヴェルキウス以外、誰も私をここから追い出すことはできない。」

この話を娘の父である皇帝マルクス・アウレリウスが耳にするやいなや、直ちに東方のプロコンスルであるエウクセニアヌス・ポプリオン[7357]に、次のような内容の書簡を送った。

– 我が陛下は、汝の管轄下にある地域に、イエラポリスの司教アヴェルキウスという人物がいることを知った。彼はキリスト教の信仰において極めて堅固な人物であり、悪霊を追い出し、様々な病気を癒やすことさえできる。　我々は彼を必要としているため、我々の高官であるヴァレリウスとヴァッシアヌスの二人を派遣し、相応の礼遇をもって彼を我々の元へ連れて来させる。また、お前には彼を説得して我々の元へ来させるよう命じる。その功績に対し、我々はあなたに多大な報奨を与えるつもりである。

王からこのような書簡を受け取ったプロコンスルは、アヴェルキウスのもとへ赴き、王の使節たちと共にローマへ行くよう彼を説得し始めた。アヴェルキウスは、悪魔が老齢の自分にローマへの困難な旅を強いると自慢していたことを思い出し、心の中でこう考えた。

「たとえお前、人々の敵よ、その高慢さゆえに私に約束したことを実行しようと努めたとしても、お前は喜ぶことはできないだろう。　私は神を固く信頼しており、老いてからの苦労が無駄にはならないと信じている。そこで、幻の中で私に御恵みを約束してくださった私のキリストの力によって、お前の高慢を打ち砕いてやるのだ。」

旅に必要なものをすべて用意すると、聖人は全能の神に助けを求めながら旅立ちました。彼の旅の準備は次のようなものでした。彼は少量のパンを持ち、一つの革の袋にワイン、油、酢、水を注ぎ入れ、これらの液体が互いに混ざらないようにしました。　旅の途中でワインが必要になると、皮袋からはワインだけが流れ出し、酢が必要になれば酢だけが注がれ、水が必要であれば水だけが流れ出た。このように、すべての液体が同じ皮袋の中に一緒に入っていたにもかかわらず、それぞれの液体は別々に流れ出ていた。　ある日、聖人の弟子が、聖人の祝福を得ずに自分でワインを杯に注ごうとしたところ、ワイン、油、酢、水というすべての液体が一度に流れ出し、その混合物を味わうことなど到底できなかった。　恐怖に駆られた彼は聖人に自分の罪を告白し、許しを請うと、聖人の祝福により、それぞれの液体は再び別々に流れ出すようになった。

聖アヴェルキウスがローマに到着すると、皇帝は妻のファウスティナと共に彼を丁重にもてなし、悪霊に苦しめられていた娘のもとへ連れて行った。悪霊は聖アヴェルキウスが来たのを見て、笑いながらこう言った。

「アヴェルキウスよ、私が侮辱されたことへの復讐として、老いてからお前をローマへ連れてくるだろうと言ったではないか？」

「ああ、その通りだ」と聖人は言った。「だが、このことはお前にとって喜びにはならないだろう、呪われた悪魔よ。」

そして聖人は、その娘を部屋から外へ連れ出すよう命じた。　彼女を連れ出そうとしたとき、悪魔は行くのを拒んで妨害したが、それでも少女は力ずくで連れ出された。すると悪魔は彼女を地面

[7357] プロコンスルとは、ローマ帝国の属州を統治していた人物のことです。

に投げつけ、殴り始めた。一方、聖アヴェルキウスは天を仰ぎ、苦しむ少女の癒やしを主へ熱心に祈った。その時、悪魔は叫び始めた。

「お前のキリストの名によって命じる。私を奈落にも、他のいかなる場所にも送るな。これまで私がいた場所へ戻らせてくれ。」

聖人は彼にこう答えた。

「お前は、悪意の霊よ、お前の父であるサタンのもとへ行くことになる。しかし、お前はこの老いた私を煩わせ、ここへ来ることを強いたのだから、お前も苦労を免れることはできず、ここから手ぶらで帰ることもできないだろう。　ほら、ここに石がある――（宮殿の前には、大勢の民が力を合わせてもわずかな距離しか動かせないほど巨大な石があり、　聖人はまさにその石を指さした）、わが主イエス・キリストの名によって命じる。この石をわが故郷であるイェラポールへ運び、南の門のそばに置け。

すると、悪魔は、誓いによって縛られた奴隷であり捕虜として、王女の体から出て、その石を手に取り、重いうめき声を上げながら、空を飛んでヒッポドロームを通り抜けて運んだ[7358]　。そこにいた人々は皆、空を飛ぶ石を驚いて見守り、悪魔の大きなうめき声を聞いたが、悪魔そのものを見ることはできなかった。　その石をイェラポールに運び着くと、悪魔は聖アヴェルキイの命じた場所にそれを置いた。一方、イェラポールの住民たちは、空から突然落ちてきた巨大な石を見て大いに驚いたが、聖アヴェルキイが彼らの元に戻ってきたときになって初めて、この秘密を理解した。

邪悪な拷問者から解放された王女は、しかし、地面から起き上がることができず、アヴェルキイの足元に横たわり、声一つ発することなくじっとしていた。　これを見た彼女の母、ファウスティナ王妃は、娘が亡くなったと思い、泣き出したが、聖人は手を伸ばし、その娘を生き生きと、健康で、正気を取り戻した状態で立ち上がらせた。すると、娘の両親は大きな喜びに包まれ、王女の癒やしを祝って王宮は歓喜に沸いた。　両親は、当時パルティア遠征中だった義理の息子ルキウス・ヴェルスにも、この喜ばしい知らせを送り[7359]、花嫁の回復を伝えた。 また、聖人に対しては豪華な贈り物を差し出し、彼が望むものは何でも与えると約束した。しかし、アヴェルキウスは金も銀も、いかなる財産も受け取らず、こう言った。

「パンと水が、王の饗宴や盛大な宴と同じである者にとって、富など必要ないのだ。」

彼が求めたのはただ二つのことだけだった。　第一に、イェラポールにおいて、王のために徴収された貢物の中から、毎年貧しい人々に小麦を三千メルずつ配ること。第二に、王が国庫の資金を用いて、聖人が病人の治癒のために祈りによって地底から湧き出させた温水の泉のそばに浴場を建設するよう命じること。　王は喜んで聖人のこれらの願いを叶えることを約束し、そのための書面による証書を彼に授けた。

その後、聖人がローマにしばらく留まり、キリストの教会を信仰において堅く立てていたとき、キリストが幻の中で現れてこう言われた。

「アヴェルキイよ、あなたはシリアに行き、そこでわたしの名を宣べ伝え、わたしの教会を確立し、多くの病人を癒やすべきである。」

この幻視の後、アヴェルキウスは王に自分を解放するよう懇願したが、王は、聖人がいない間に悪霊が再び娘に取り憑くのではないかと恐れ、その願いを聞き入れようとしなかった。聖人は、悪霊が戻ってくることはないと断言して、王にその恐れを捨てるよう説得した。そうして初めて、王は不本意ながらも聖人を解放した。

[7358] ヒッポドローム――競馬や戦車競走が行われる場所。

[7359] パルティア人――ユーフラテス川とインダス川沿いの山岳地帯の間に位置するアジアの地域を占めていた。パルティア人は遊牧民であり、後世になってもその性質を失うことはなく、あらゆる戦争において、弓と槍を完璧に操る卓越した勇敢な騎手として際立っていた。 パルティアとの戦争は、165年にルキウス・ウェルスによって勝利裏に終結した。

船に乗り込んだアヴェルキウスは、シリア地方へと向かった。まずアンティオキアを訪れ、その後アパメア[7360]や周辺の他の都市へと赴き、マルキオニ派の異端によって揺さぶられていた教会に平和を取り戻した[7361]。ユーフラテス川を渡った後、聖人はニジビア[7362]およびメソポタミア全域の教会を訪れ、そこからキリキア[7363]とピシディア[7364]へと向かい、フリギアの都主教座であるシナド[7365]も訪れた。これらすべての地域や都市において、彼は教会に多大な恩恵をもたらし、多くの異教徒をキリストの信仰へと改宗させ、異端者たちを恥じ入らせ追放し、信者たちを信仰において確固たるものとし、迷える者たちを真理の道へと導き、多くの人々から不浄な霊を追い出し、様々な病に苦しむ非常に多くの人々を癒した。　人々は皆、彼を「使徒に等しい者」と呼ぶようになった。なぜなら、使徒たち以外で、これほど多くの国や都市を巡った者はいなかったからである。こうして聖人は、キリスト・神の栄光を広め、人々の救いと啓蒙のために多大な奉仕を果たした。その後、彼はイェラポールへと帰還した。

イェラポールの住民たちは、聖人が自分たちの元へ戻り、すでに町の近くまで来ているという知らせを聞くと、老若男女を問わず、妻や子供たちを連れて一斉に彼を迎えに出かけ、子供たちが父親に駆け寄るように彼に抱きつき、かねてより切望していた祝福を、この上ない喜びをもって受け取った。

街に入ると、アヴェルキイは教会へ向かい、自らの座に着くと、皆に平安を告げ、民に説教を始めた。

人々は皆、この聖人の帰還を喜び、とりわけ貧しい人々は大きな慰めを得た。というのも、アヴェルキイは、王室の税収から毎年三千メル分の小麦を彼らに支給するよう命じる王の勅令を携えてきたからである。この小麦の支給は、ユリアヌス・アポステートが勅令を撤回し、勅書を取り上げた時まで続いた。聖人の尽力により、王の勅命によって、温水の泉のそばに浴場も建設された。

聖アヴェルキイは、残りの生涯を敬虔さと真実のうちに過ごし、信徒たちを賢明に導いた。彼は自らの死をあらかじめ知らされていた。幻の中で主が現れ、こう告げたのである。

「アヴェルキーよ、もはやあなたが労苦から安らぐ時が近づいた。」

その後、アヴェルキイは信徒全員を集め、まもなく自分の命が終わることを告げると、慣例に従って皆に説教を始め、聴衆に対し、常に信仰において揺るぎなくあり、希望を絶やさず、偽りなく互いに愛し合うよう懇願した。　その後、自ら棺を用意し、皆に最後の牧者の祝福を与えた後、彼はその聖なる魂を主に委ねた。

こうして、聖使徒同等のアヴェルキオスは、73年の生涯を閉じました[7366]。彼を悼んだイェラポリスの住民たちは、その尊い遺体を敬虔に埋葬し、かつて聖人の命によりローマから運ばれてきた石を、多大な労力を費やして聖人の墓の上に据えました。　そして、聖人の祈りによって、その棺からも、また聖人の祈りによって湧き出た温水の泉からも、多くの癒しがもたらされた。主が、その祈りによって、私たちにも永遠に御慈悲を授けてくださいますように。アーメン。

[7360] アパメアは、シリアの都市の一つである。

[7361] マルキオニ派は、2世紀の異端者たちであり、二つの原理、すなわち善なる神と、悪魔、すなわち永遠で邪悪な悪しき存在の支配下にある物質を認めていた。

[7362] ニジビア、あるいはニジビダは、メソポタミアのミグドニア属州にある、大きく人口の多い都市である。

[7363] キリキア――小アジア南東部の沿岸地方。

[7364] ピシディア――小アジアの地域。

[7365] シナド、あるいはシンナディは、フリギア北部の山脈の近くにある都市で、そこには有名なシンナディの大理石採石場があった。現在はエスキカリ近郊のガサフにある遺跡である。

[7366] 167年頃に没した。

コンダク、第8調：

アヴェルキエよ、教会はあなたを、偉大なる司祭であり、使徒たちの同志として、すべての信徒と共に崇めている。まことに、あなたの祈りによって、祝福され、あらゆる異端から打ち負かされることなく、揺るがされることなく、汚れなき者として、永遠に記憶される者とならんことを。

聖殉教者アレクサンドロス司教、イラクリオス戦士、および四人の女性――アンナ、エリサベタ、テオドティア、グリケリア――の記念日

記念日：10月22日

聖アレクサンドルは、多くの人々をキリストの信仰へと導き、洗礼を授けた。彼はイゲモンに捕らえられ、偶像への生贄を捧げるよう強要され、多くの拷問に耐えたが、従わなかった。その忍耐を見て、戦士イラクリウスはキリストを信じ、激しい拷問の末、剣で斬り殺された。　一方、聖アレクサンドルは、神の恵みにより、傷が突然癒やされた。その後、彼はアンナ、エリサベータ、テオドティア、グリケリアという四人の女性をキリストへと改宗させた。彼女たちもまたイゲモンの前に引き出され、偶像の虚しさを糾弾したため、剣で斬り殺された。　これらすべての出来事の後に、聖アレクサンドルもまた剣によって斬り殺され、その聖なる至福の魂を主の御許に委ねた[7367]。

ボリソグレビ修道院の創設者である、ロストフの聖テオドールと聖パウロの記念日[7368]

記念日：10月22日

大公ディミトリ・ドンスキーの治世中、ロストフ公コンスタンチン・ヴァシリエヴィチ[7369]の時代に、ノヴゴロド地方から、生まれも出家した場所も不明の修道士フェオドールが、古都ロストフ・ヴェリキーの地を訪れた。

カルゴポリやベラ湖からロストフ、そしてモスクワへと続く道中、彼はロストフから18ヴェルスタ離れたウスティエ川のほとりの暗い森で立ち止まった。　森の中で木の枝で小屋を建て、彼はここに定住した。通り道沿いの木には、樹皮で作った箱を吊るしておいた。通行人や旅人は、ここに隠者が住んでいると察し、その箱にパンや野菜、その他の施しを置いていくようになった。　誰にも見られることなく、隠遁者は密かに施しを取り出し、貧しい兄弟たちと分け合った。このことを知った多くの村々から、人々が施しを求めて隠遁者の元を訪れるようになり、彼は吊るされた籠の中にあるものをすべて分け与えた。

しばらくして、パヴェルという名の修道者が彼の元を訪れ、フェオドールに喜んで迎え入れられ、彼と共に荒野に定住した。

[7367] 聖人たちは3世紀にアドリアノープルで殉教した。

[7368] ここでの記述の基礎となっているのは、「ボリソグレブ修道院の物語――その設立の年数と始まりについて、古の長老たちから最初に聞き伝え、わずかな文書を見出した」という記述に基づいている。これは16世紀にボリソグレブ修道院内で執筆され、トロイツェ＝セルギエフ修道院図書館の16世紀写本集（第782番）に保存されている。– ボリソグレブ第二級修道院は現在も存続しており、ヤロスラヴリ州ロストフ郡に位置し、ロストフからウグリチへ向かう道（現在は幹線道路）を18ヴェルスタ進んだところ、ウスティエ川沿いに位置している。この川は、ロストフから9ヴェルスタの地点でロストフ湖から流れ出るヴェルサ川と合流し、コトロスト川を形成し、ヤロスラヴリ市でヴォルガ川に注いでいる。

[7369] ディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーは1363年から1389年まで統治した。一方、ロストフ公コンスタンチン3世ヴァシリエヴィチは、兄フェオドール・ヴァシリエヴィチの死後、1331年から1365年までロストフを統治した。

大公ディミトリ・イオアンノヴィチの治世初期、全ロシア総主教アレクシオス、同時代のロストフ公コンスタンティン、そしてロストフ司教イグナティオス[7370] の治世下において、尊者セルギイ・ラドネジスキーは、大聖堂で至聖なる聖母マリアとロストフの奇跡行者たち[7371] を礼拝するためにロストフを訪れていた。　このことを知った隠者テオドールとパヴェルはロストフへ向かい、公爵と司教に、自分たちの隠れ家に教会を建て、修道院を設立する許可を請い、また聖セルギイには、教会を建てる場所を見定めて祝福してくれるよう懇願した。

聖セルギイは彼らの願いを聞き入れ、彼らと共にその隠遁地へと向かった。　彼らは長い間、荒野を歩き回った。フェオドールとパヴェルは、あちこちと場所を指し示したが、聖セルギイはすべてを丹念に視察し、ついに現在の修道院がある場所に目を留め、偉大なる殉教者ボリスとグレブの御名に因んでここに教会を建てることを祝福し、隠遁者たちにこう言った。

「主なる神と聖母マリアがこの地を見守り、キリストの偉大な殉教者たちがあなた方を助けてくださるでしょう。そしてこの地は大きく発展し、将来、偉大な修道院と並ぶほどに称賛されることになるでしょう。」

隠者たちに平安と祝福を授けた後、聖セルギイは帰路についた。

敬虔な隠者たちは、聖セルギイが教会建設のために祝福したその場所の森林を切り開き、整える作業に取りかかった。ある日、労働の合間に休息をとっていた時、テオドロスとパヴロスの前に、武器を携え、王家の紫の衣をまとった二人の輝く戦士が、かすかな夢の中に現れ、こう言った。

「この地で労苦を続けなさい。神と至聖なる聖母マリアはこの地を見捨てられることはなく、我々もこの地にとどまり、あなた方、そしてあなた方の後にこの地を整える者たちを絶えず助け続けるであろう。」

聖人たちは彼らの足元にひれ伏し、こう尋ねた。

「あなた方はどなたですか、我らの主よ？」

しかし、兵士たちは突然見えなくなり、ただ、一人を「ロマン」、もう一人を「ダビデ」と呼ぶ声が聞こえただけだった[7372] 。

大きな恐怖と戦慄から我に返ると、二人の隠者は互いに励まし合い、夢の中で見聞きしたことを、まったく同じ言葉で語り合った。

その後、彼らは新たな熱意をもって、その場所の整備に励み、尽力し始めた。

そして、兄弟たちや世俗の人々――大工たちが、その事業を手伝うために集まり始めた。

やがて兄弟たちの数は増え、皆がテオドロスに、彼らの修道院長になってくれるよう懇願するようになった。そして、その願いは叶った。

神の御加護により、修道院の建設は進められ、多くのキリストを愛する者たちが、世俗のあらゆる富を捨てて、ここで修道生活を求めるようになった。聖テオドールは彼らを喜んで受け入れ、修道院の一員とした。

ロストフ地方の多くの貴族たちは、ボリソグレブ修道院に埋葬されるよう遺言し、魂の安息を祈願して、自らの領地や村、集落、収穫物を修道院に寄進するようになった。

これにより、修道院の財源は充実し、聖テオドールは修道院の整備と修道士たちの集めにより一層尽力するようになった。彼は、共同の礼拝のために、聖母マリアの受胎告知を祀る暖房付きの教会を建立した。

長年にわたり、神の御慈悲、至聖なる聖母マリアの取り次ぎ、そしてキリストの殉教者ボリスとグレブの助けにより、聖テオドールは修道院の整備に尽力した。彼は教会を建立し、修道室を設け

[7370] イグナティイ2世司教は、1356年から1364年までロストフの司教座に就いていた。

[7371] それは1363年のことだった――尊者セルギイの両親はロストフ市出身であった。

[7372] ロマンとダヴィド――これらは、聖なる洗礼の際に与えられたボリスとグレブの名前である。

、　すべてを修道院の規律に従って整え、修道院のために畑や耕作地を取得し、修道院の運営のために多くの人々を雇い入れ、かなりの数の家畜も手に入れた。

老齢にもかかわらず、彼は働き続け、修道院の繁栄に心を配り続けた。休む間もなく、修道院の必要に備えて、漁に適した場所を探しに出かけることを思い立った。

修道院を主なる神と聖母マリアに委ね、キリストの偉大な殉教者であるボリスとグレブを守護聖人とし、修道院と修道者たちの管理を、自身の修道仲間でありキリストの兄弟であるパウロに託した後、フェオドールは弟子の中から二人の修道士を連れて、ヴォロゴダ地方へと向かった。

そこで彼は、「聖ルカ」と呼ばれる場所を見つけた。その場所をくまなく調べ、修道院の建設に適していると確信すると、その土地を占有しようとし、小さな教会を一つ建てた。

このことを知った近隣の住民、当時まだキリスト教の教えを受けていなかったチュド族の異教徒たちは、この敬虔な修道士をその地から追放した。

追放された修道士はさらに先へと進み、自分に悪を行う者たちのために祈りつつ、弟子たちを慰めてこう言った。「悲しむな、兄弟たちよ。*『神は私たちの避難所であり、力であり、患難における速やかな助け手である』*（詩編45:2）。主はご自身の弟子たちにこう言われた。*『ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい』*（マタイ10:23）」。

多くの荒野を通り抜け、必要なものを見つけ出そうとする熟練の猟師のように、聖テオドールはベロゼルスク地方へと向かい、ベロ湖周辺の荒野をくまなく巡った末、ベロ湖の対岸に、修道院の建設に適した素晴らしい場所を見つけました：　新しく開墾された土地や、コヴジ川の河口付近の休耕地[7373]。

当時、ベロエ湖は、ディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーの息子である分領公アンドレイ・ディミトリエヴィチに属していた。このような好適な場所を見出した聖テオドールは、全能の神に希望を託し、聖母マリアを助け手として、帝都モスクワへと向かい、　頭を下げて、モジャイスキーおよびベロオゼルスキーの分領公アンドレイ・ディミトリエヴィチに対し、　、聖ニコライ・チュドトヴォルツの御名に因む教会と修道院を建設するために、彼が選んだ場所を授けてくださるよう懇願した。　そして、神の御慈悲により、彼の願いは叶った。アンドレイ・ディミトリエヴィチ公は、尊者に対し、修道院の維持費、収穫物、および漁業権に関する勅許状を授けた。

勅許状を受け取った聖テオドールは、自身のボリソグレブ修道院へと戻った。

そこで彼は、自身の修道仲間であるパヴェルに修道院長としての職務を委ねた。修道院と修道院長、そして修道士たちを、至聖なる聖母マリアの庇護と、殉教者ボリスとグレブの取り次ぎに委ねた後、聖テオドールは再びベロオゼロへと向かい、そこで新しい修道院を建設することにした。

あらかじめ定めていた場所に着くと、尊者テオドールはまず聖ニコライ・チュドトヴォルツェに捧げる教会の建設にたゆまず尽力し、その後、修道院の建物も建て上げた。

聖人の働きを知った周辺の正教徒たちは、祝福を求めて長老のもとに集まり始め、中には修道誓願を受けるために訪れる者もいた。長老テオドールは皆を喜んで迎え入れた。

尊者はここで長年にわたり暮らし、教会を建立し、修道院を整え、修道士たちを集め、彼らにイグメンを任命した。そして、すでに高齢となり、自らの死が近づいていることを悟ると、最初の修道院であるボリソグレブスキー修道院へと向かった。

そこで、長老テオドールは、イグメン・パヴェルと修道者たちによって大いなる喜びをもって迎えられ、皆が霊的にも肉体的にも喜び、長老の労苦が実を結んだことを神と至聖なる聖母マリアに感謝した。

[7373] コヴジ川の河口は、ベロオゼロクから40ヴェルスタの場所にある。

聖テオドールは、ニコルスキー修道院をボリソグレブスキー修道院に併合し、彼の愛する兄弟であるボリソグレブスキー修道院の院長パヴェルに、院長、修道者たち、そして新しく設立された修道院の建設を統括するよう命じた[7374]。

これらすべての功績と指示を終えた後、ほどなくして、ボリソグレブ修道院の創設者である聖人は、1409年10月22日に安らかに息を引き取った。聖パウロ修道院長と修道士たちは、故人を悼み、その遺体を尊厳をもって埋葬した。

フェオドールの死後、生き残った彼の協力者パヴェルは、両修道院のためにさらに尽力し、世話を焼き続け、同じく高齢まで生き、信仰を貫いて主のもとへ旅立った。

ボリソグレブ修道院の設立を祝福し、その拡大を予言した聖セルギイの預言的な言葉は、まさにその通りになった。創設者である聖テオドールと聖パウロの死後、彼らの後継者であるボリソグレブ修道院のイグメンたちは、修道院の繁栄に熱心に尽力し続け、修道院は徐々に広く知られるようになった。　聖パウロの後継者である第3代イグメン、イオーン、そして第4代ピティリムの時代には、敬虔でキリストを愛する大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・テムヌイ[7375]と、その敬虔な母であるソフィア公妃が、この修道院に対して並々ならぬ熱意を示した。　彼らは修道院のためにいくつかの勅許状を発行し[7376]、大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチはこの修道院を「自分の修道院」と呼ぶようになった。このイグメン・ピティリムは、大公ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチの息子イヴァンに洗礼を授けた[7377]。

特に、パヴルの10代目後継者であるイグメン・テオフィルは、修道院のために成し遂げた功績と尽力によって名声を博し、30年間にわたりイグメン兼建設責任者として修道院を統括した。

大公ヴァシーリー・イヴァノヴィチの命により[7378]、またロストフ大司教イオアンの祝福のもと[7379]　、彼は木造の教会やその他の修道院の建造物に代わり、石造りの建造物の建設に着手した。1522年6月18日、聖ボリスとグレブの石造教会が着工され、1524年9月22日に、同大司教イオアンによって奉献された。同大司教は、同年6月8日、聖母マリアの受胎告知に捧げられた温室教会の着工をに祝福していた。　この教会は、1527年10月7日、ロストフおよびヤロスラヴリの大司教キリルによって[7380]に奉献された。

この費用がかかり困難を伴う建設工事において、熱心な建設者テオフィロスは少なからぬ困難に直面したが、神の御加護と聖母マリアの取り次ぎ、そして修道院の守護聖人である聖殉教者ボリスとグレブの助けにより、これらすべての障害を無事に乗り越えた。　ボリス・グレブ修道院の創設とその後の運命について記した古の叙述者は、次のような奇跡を伝えている。

石造りの建物を建設するにあたり、イグメン・テオフィロスは石灰が著しく不足していることに気づきました。石灰は遠くから、しかも困難な道筋を経て運ばなければならず、　具体的には、石灰を求めて船をウスチ、コトロスティ、そしてヴォルガ川を経てプレソ（コストロマ市近郊）まで送らなければならず、そこからこれらの川を遡上するのは非常に困難で、距離も遠かった。　このよう

[7374] ボリソグレビ修道院に属するコヴジのニコルスキー修道院は木造の建物で、老朽化と貧困のため、1764年の修道院定員制導入以前に廃止された。

[7375] ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・テムヌイは、1425年から1462年まで（中断期間を挟みつつ）大公であった。

[7376] 修道院の寄進台帳および食糧台帳によると、ヴァシリー・ヴァシリエヴィチは、両親および先祖である大公たちの追悼のために、修道院にシュレツ村（修道院から6ヴェルスタの距離）とその周辺の集落を寄進したことがわかる。

[7377] 後に名声を博した大公イヴァン・ヴァシリエヴィチ3世。

[7378] 1505年から1533年まで統治した。

[7379] 1520年から1526年まで主教職を務めた。

[7380] キリル3世は1526年から1529年まで主教の座に就いていた。

な窮地に立たされたテオフィルは、大公ヴァシーリー・イヴァノヴィチに対し、関税を課されることなく自由に、修道院長が修道院の土地、大公の土地、ボヤールの土地を問わず、最も近い土地で石灰の鉱床を探せるよう許可を求める嘆願を捧げた。　大公は、ロストフ県およびペレヤスラフ県全域において、石灰を自由に採掘することを認める勅許状を発行した。修道院長テオフィルは至る所に探査隊を派遣したが、成果は得られなかった。　悲しみに暮れた彼は、主なる神と、守護者である至聖なる聖母マリア、そして聖なる助護者ボリスとグレブに、熱心に祈りを捧げた。

そしてある日、テオフィロスが自分の独房でいつもの夕の祈りを捧げている最中、少し気を緩めてうたた寝をしてしまったとき、二人の輝かしいキリストの戦士、殉教者ボリスとグレブが現れ、こう言った。

「その知らせを悲しむな。至聖なる御母は、修道院の近くにある我らの領地で、あなたに知らせを与えてくださるだろう。そして、至聖なる聖母マリアの修道院における石造りの建物の建設は、あなたの時代も、あなたの後の時代も決して止むことはない。我らも、修道院の建設を助けるために力を尽くすだろう。」

そう言い残すと、彼らは姿を消した。

三日後、修道院の村コチャルキから一人の農民が、石の束（[7381] ）を修道院長のもとに持ち込み、畑の地表でそれらを見つけたと語った。修道院長は石をパン焼き場の窯に送らせた。石を焼いて修道院長に見せると、それは雪のように白い石灰であった。

修道院長は偵察隊を派遣し、指定された場所からは、[7382] の予言通り、当時の建築物だけでなく、その後の建築物にも十分な量の石灰が見つかった。

これらの教会に加え、テオフィロスとその直系の後継者たちの治世下で、修道院の周囲には、多くの塔と、ロストフ側およびウグリチ側にある二つの門を備えた、堅固で高い石の壁が築かれた。その門の上には、聖セルギイと主の受胎告知に捧げられた石造りの教会が建てられている。　これらすべての荘厳で美しい建造物は、現在もなお現存している。

聖ボリスとグレブ公に捧げられた大聖堂の北西の隅には、修道院の創設者である聖テオドールと聖パヴェルの聖遺骨が安置されている。

父である大公ヴァシーリー・イオアンノヴィチの模範に倣い、その息子であるツァーリ・イオアン・ヴァシーリエヴィチもまた、この修道院に対して多大な熱意を示し、自ら修道院を訪れ、[7383] の追悼のために、村や集落、金銭、そして高価な品々を惜しみなく寄進した。

16世紀末から17世紀初頭にかけて、聖イリナルクはこの修道院の功績によって名声を博し、またこの修道院の名声を高めました。特に「スモータ」の時代、この修道院は、　周辺の他の修道院と

[7381] この村があった場所は、今もなお「コチャルカ」と呼ばれており、修道院から7ヴェルスタの距離にある。そして今なお、石灰を掘り出した穴が見て取れる。– ゾベンカ – 古くからある粉状物の量り単位。ある伝承によれば、誰かが自分のためにこっそりと石灰を持ち帰ると、その石灰は効力を失うという。テオフィロスの後継者たちの時代に修道院の石造建築が完成した際、石灰の備蓄は底をついた。

[7382] 石灰が発見されたという奇跡について、ボリソグレブ修道院に関する古の物語の編纂者に語ったのは、ボリソグレブ教会の建築家であり、　「ロストフ出身の教会建築家、石造建築の匠」グリゴリー・ボリソフが、ボリスとグレブ聖人の幻視について、自らテオフィール修道院長から聞かされたと語った。テオフィール修道院長は、自身の死までこのことを誰にも明かさないよう命じていた。– この有名なロストフの建築家グリゴリー・ボリソフは、1543年にスパソカメンヌイ修道院（ヴォロゴダ州クベンスコエ湖畔）のウスペンスカヤ教会の建設を完了させた。同教会は、同じくロストフ出身の建築家パホミー・ゴリャイノフによって着工されたものである。

[7383] ツァーリ・イヴァン・ヴァシリエヴィチの寄進については、ボリソグレブ修道院の古い寄進台帳や供養台帳に詳しく記されている。

同様、ポーランド・リトアニアの略奪部隊による破壊の危機にさらされていたのです。　この聖人の聖遺骨は、大聖堂の南西側の小聖堂に安置されている[7384]。

11月5日

10月23日（旧暦）

聖使徒ヤコブ、主の肉親の兄弟の生涯と受難

記念日10月23日

聖ヤコブは、聖母マリア[7385]と婚約していた義人ヨセフの息子であった。彼は若き頃から厳格な生活を送り、様々な肉料理を口にすることは決してなく、油も用いなかった。彼の糧はパンだけであった。　また、ワインやその他のいかなる酒類も決して飲まず、喉の渇きは水で癒やした。風呂にも入らず――要するに、肉体に快楽をもたらすものはすべて拒絶した。彼は常に粗末な毛皮の衣を身にまとい、　彼は夜を徹して祈りに捧げ、ほんの短い間だけ眠りに落ちた。頻繁に地面にひれ伏したため、彼の膝の皮膚はラクダの皮膚のように硬くなっていた。ヤコブは生涯を通じて、その貞潔を守り抜いた[7386]。

なぜ彼が「神の兄弟」と呼ばれるのかについて、次のような伝承が伝わっている。父ヨセフが最初の妻との間に生まれた子供たちに土地を分配した際、ヨセフと婚約していた聖母マリアから生まれた主イエス・キリストにも、その一部を分け与えたいと考えた。　ヨセフの息子たちは皆、父のこの願いに反対した。ただヤコブ一人だけが、イエス・キリスト（当時はまだ幼い少年であった）を、自分の持ち分と共同所有として受け入れた。それゆえ、彼は「主の兄弟」と呼ばれるようになったのである。この呼び名は、次の出来事によってもヤコブに与えられた。　私たちの主イエス・キリストが受肉され、聖母マリアが御子と共にエジプトへ逃れた際、ヤコブもまた彼らと共に逃れ、聖母マリアと父である聖ヨセフに同行した。

イエス・キリストが成人し、真のメシアであることを示しながら民に神の御国について教えられたとき、聖ヤコブはキリストを信じ、その神聖な教えに耳を傾けるにつれ、神への愛がさらに燃え上がり、より厳格で敬虔な生活を送るようになった。　そして主は、聖ヤコブをとりわけ愛された。かくして、自発的な受難と死からの復活の後、キリストは他の使徒たちとは別に、肉親の兄弟であるヤコブに現れた。これについて使徒パウロは次のように述べている。

[7384] 聖イリナルクの記念日は1月13日に祝われる。

[7385] 聖なる義人ヨセフ、すなわち至聖なる聖母マリアの婚約者の記念日は12月26日である（マタイ13:55、マルコ6:3、ガラテヤ1:17）。教会は、一部の解釈者の見解に反して、主の肉親の兄弟である聖使徒ヤコブを、12使徒の一員であるゼベダイのヤコブ（その記念日は4月30日）やアルフェオのヤコブ（その記念日は10月9日）とは明確に区別している。　主の肉親の兄弟であるヤコブは、ヨセフの最初の妻との間に生まれた息子としてそう呼ばれている。　彼は、ヤコブの息子という呼称を受けた使徒ユダや、70人の使徒の一人であるヨシヤの実の兄弟であり、「小ヤコブ」または「若きヤコブ」という名でも知られている（マルコ15:40）。

[7386] 聖使徒ヤコブは、生まれながらにしてナザレ人、すなわち神に奉献された者であり、あらゆるワインやアルコール飲料、髪を切ることを厳格に禁じる誓いを自発的に神に立てていた。　ナザレ人の誓いは、神に選ばれた、ゆえに神聖な民であるイスラエルの民全体が持つべき、清らかで聖なる生活の表れであった。

「その後、ヤコブに現れ、またすべての使徒たちにも現れた」（Iコリント15:7）[7387]。

ヤコブの義にかなった、神に喜ばれる生き様を見て、人々は皆、ヤコブを「義人」と呼び、彼は七十人の使徒の一人に数えられました。

彼には、新たに啓蒙されたエルサレム教会が委ねられた[7388]。聖霊に導かれて、ヤコブは最初に神聖な典礼の式次第を編纂し、書き記した。それはその後、人間の弱さを考慮して、まずバシレイオス大帝によって、次いでヨハネス・クラマトルスによって短縮された[7389]。エルサレムでキリストの羊の群れを牧し、多くのユダヤ人やギリシア人をその教えによって神へと導き、正しい道へと導いた。

また、彼からはイスラエルの十二部族への公会議書簡も残されており、これは真に神の霊感を受けた、魂に有益な教えの源泉であり、キリストの教会全体が、信仰と善行を学ぶことによって、この教えによって飾られている[7390]。信者たち[7391]だけでなく、異教徒たちでさえも、聖ヤコブの徳高い生涯に対して深い敬意と尊敬を抱いていました。大祭司たちでさえ――彼らは年に一度だけ、礼拝を行うために至聖所[7392]に入ることが許されていたのですが――この義人がそこに入り、祈ることを妨げませんでした。彼の汚れなき生活の清らかさを目の当たりにし、彼らは彼の名前さえも変えた。すな

[7387] 伝承によれば、これに加えて、キリストの受難の間、聖使徒ヤコブはある洞窟に身を隠し、ヨサファトの谷にあり、主が死から復活されるまで食事を口にしないと誓いを立てていたこと、そして主はご自身の復活後、まさにこの洞窟において、彼に特別な御姿を現してくださったと伝えている。そのため、その後、キリスト教の初期の時代に、この洞窟は教会へと改築され、現在でも敬虔な信者たちに公開されている。

[7388] 使徒の時代に最も近い古代の著述家たち（アレクサンドリアのクレメンス、ケサリアのエウセビオスなど）によれば、救い主の昇天後、使徒ペトロ、ゼベダイの子ヤコブ、そしてヨハネは、主から特に選ばれた者たちではあったが、栄誉をめぐって争うことはせず、キリストご自身によるあらかじめの選びとこの奉仕への任命に従い、聖ヤコブを、キリスト教諸教会の母であるエルサレム教会の司教兼首座として、彼が生まれてから34歳の時に選出した。

[7389] 主の兄弟である聖使徒ヤコブによって制定された神聖な典礼は、今日に至るまで、この使徒の記念日にエルサレムで執り行われている。

[7390] この教会書簡は、キリスト教徒への迫害によりエルサレムを離れることを余儀なくされた、離散中のユダヤ人キリスト教徒たちに向けて、聖ヤコブによって西暦59年頃に書かれたものである。この書簡は、高尚な教えと福音の精神に満ちている。それは様々な種類の道徳的訓戒から成り立っており、その全体的な内容から見て、苦難を忍耐強く耐え忍ぶよう勧めるものと言える。正教会の礼拝において、使徒ヤコブの教会書簡は、典礼における通常の使徒書簡の朗読としてだけでなく、他の祈祷の際（例えば、聖油の塗油の際、干ばつの際の祈願、さらには徹夜祈祷において、聖句として）にも、その全文が朗読される。

[7391] 使徒たち自身を筆頭とする信者たちによる使徒ヤコブへの普遍的な敬虔な尊敬は、特に西暦60年頃にエルサレムで開催された使徒公会議において強く表れました。この会議は、異教徒から教会に改宗しようとする者たちに、割礼や旧約聖書の儀礼的な律法の遵守を強制すべきかどうか。使徒ヤコブはこの公会議の議長を務め、長い議論と検討を経て、使徒ペトロの演説、そして使徒パウロとバルナバによる異邦人への宣教の成果に関する報告の後、自身の演説をもって公会議の議論を締めくくった。その演説の中で、彼は提起された問題に対する自身の見解を明確な形で提示し、「神に立ち返ろうとする異邦人を煩わせない」とし、彼らに対して、偶像によって汚されたもの、淫行、絞め殺された動物、血を避けるよう書き送り、また「自分たちが望まないことを他人にしないように」と命じた（使徒行伝15:13–20）。この、万人に尊敬される義人ヤコブの判断は、全公会議によって受け入れられ、万人に明らかな聖霊の御心によって承認された（28節）。ほぼ同時期に、使徒パウロは自身の教えの純粋さを確かめようと、使徒たちに訴えた。ペトロ、ヨハネ、そしてヤコブ――パウロは彼らをキリストの教会の柱として尊び、その中でもヤコブを第一に挙げていた（ガラテヤ2:10）――に諮った。そして彼らは、パウロに異邦人の教師としての偉大な資質を認めた。使徒パウロはその後も、聖ヤコブに対してこれほど深い敬意を払い続けた。最初の宣教の旅の終わりにエルサレムに到着した際、彼はまず聖ヤコブのもとを訪れることを最優先の務めと考え、キリストの教会の柱であり、最も古いエルサレム教会の長である彼に、自分の奉仕によって神が異邦人の間でなされた御業について語った（使徒21:18–19）。

[7392] 「至聖所」とは、エルサレム神殿の内部にある最も神聖な部分であり、そこに入ることが許されていたのは大祭司ただ一人だけであり、それも年に一度、清めの日に限られていた。大祭司は香炉に香を載せて持ち込み、民の罪を清めるために、清めの所の上から犠牲の血を振りかけたのである。しかし、その当時、神殿には、聖物（アロンの枯れた杖、マナが入った金の壺、モーセを通じて神から与えられた十戒の石板）を収めた契約の箱は、もはや存在していなかった。そこには、ソロモンの最初の神殿から残された石が一つあるだけであり、至聖所と、その隣の聖所とを隔てていた垂れ幕は、イエス・キリストの十字架上の死の際、上から下まで真っ二つに裂けていた。

わち、彼を「オブリ」あるいは「オフリ」[7393] と呼ぶようになった。これは「人々のための防護壁、支え」を意味する。あるいは、彼を「誰よりも義なる者」と呼んだ。　ヤコブは昼だけでなく、夜でさえも頻繁に至聖所に入り、そこでひれ伏して、涙を流しながら全世界のために主への祈りを捧げていた。　民全体は、ヤコブの聖さゆえに彼を愛していた。ユダヤの長老たちの多くが、彼が説く教えを信じ、皆、彼の話を聞くことを喜びとした。大勢の民が彼のもとに集まった。ある者は彼の教えを聞きたがり、またある者は彼の衣の端に触れようとしたのである。　その頃、ユダヤ人の大祭司にアナニア[7394] が就任した。民全体が ヤコブの教えに熱心に耳を傾け、多くの者がキリストに回心しているのを見て、アナニアは律法学者やパリサイ人たちと共に、聖人への嫉妬から彼に怒りを抱き、心に悪意を秘めて、いかにして彼を殺すかを企み始めた。　そこで彼らは、聖人が説教によって人々をキリストから遠ざけるよう頼むことに合意した。また、もし彼がそれに応じなければ、彼を殺すことに決めた。

その間、過越の祭りが近づき、この祭りを祝うために、至る所から大勢の人々がエルサレムに集まってきた。

使徒パウロをユダヤ人たちの手から救い出し[7395] 、彼をローマへ送ったプロコンスル・フェストは、その時点で既に亡くなっており、ローマからはまだ後任が派遣されていなかった。この状況に乗じて、律法学者たちとパリサイ人たちは神殿でヤコブに次のような願いを申し出た。

「義人よ、どうかお願いです。各地から大勢の民が集まる過越の祭りの日に、彼らに説教をしてください。イエスを神の子だと考えるのは誤りであることを彼らに納得させ、その誤った考えを捨てさせるよう説得してください。」　私たちは皆、あなたを尊敬し、あなたの言葉に耳を傾けています――民全体も同様です。私たちは皆、あなたが真実のみを語り、人を見下さないことを固く確信しています。ですから、民が十字架にかけられたイエスに惑わされないよう、説得してください。　お願いです――神殿の高い屋根の上に立ち、誰もがあなたを見聞きできるようにしてください。祭りのため――あなた自身もご覧の通り――ユダヤ人だけでなく、他の民族からも大勢の人々が集まっているのですから。

そう言い終えると、彼らは彼を神殿の屋根に上げ、大声で叫んだ。

「おお、義人よ！　我らは皆、あなたを信じなければならない。この民は、十字架にかけられたイエスに従うことで迷い込んでいる。それゆえ、真実を語ってほしい。あなた自身、キリストについてどう考えているのか？」

これに対し、聖人は力強い声で答えた。

「あなたがたは、自ら進んで苦難を受け、十字架にかけられ、葬られ、三日目に死からよみがえられた『人の子』について、私に何を尋ねているのですか。彼は今、天において至高者の右に座しておられ、再び天の雲に乗って来られ、生ける者と死んだ者を裁かれるのです。」

イエス・キリストについてヤコブがこのように証しを語ったのを聞いて、民は大いに喜び、皆一斉に叫んだ。

「神に栄光あれ！ ダビデの子にオサナ！」

[7393] ギリシャ語で「オヴリアス」とは、民の守りや砦、そして正義を意味する。

[7394] アナニア――ユダヤ人の大祭司、ネヴェデヤの息子で、ヘロデ・アグリッパ2世から大祭司の地位を授かった。彼はキリスト教徒の執拗な敵であり、総じて傲慢で、残酷かつ不公正な人物であり、伝承を否定するサドカイ派に属していた。神の摂理、霊性、魂の不死、天使の存在――といったものを否定し、官能的な快楽や悪徳、そして地上の利益に溺れていた。使徒ヤコブの死の首謀者であったアナニアは、その後、使徒パウロに対しても不当な裁きを下し、彼を滅ぼそうとした（使徒行伝23:2、14–15、24:1–9）、しかし自らの不正のゆえに、彼自身も最も苦い運命をたどった。すなわち、そのアグリッパ王によって大祭司の地位を剥奪され、ついにはユダヤ人によるローマ人に対する反乱の際に殺害された。

[7395] フェスト（通称ポルティウス）は、ユダヤのローマ総督であり、3年以内にその職を退き、紀元62年頃に死去した。彼はパレスチナにおける秩序の回復に尽力し、そのために厳格さと正義を併せ用いた。

しかし、パリサイ人や律法学者たちは言った。

「ヤコブにイエスについて語らせるなど、我々は軽率だった。民はさらに大きな混乱に陥ってしまったからだ。」

そこで、彼らは憎悪と激怒に駆られ、民が聖人の言葉を信じないようにと、皆を威嚇するために、ヤコブを神殿の屋根から突き落とした。

「義人は惑わされたのだ」と彼らは叫んだ。

神殿の屋根から転落したヤコブは、ひどく打ちのめされた。かろうじて息のあるまま、その義人はひざまずき、両手を天に向けてこう祈った。

「主よ！　彼らにこの罪をお赦しください。彼らは、自分たちが何をしているのか分かっていないのですから。」

ファリサイ派の人々は聖人に石を投げつけ、彼に傷を負わせた。リハボブの家系に属する一人の男が叫んだ。

「やめなさい、何をしているのですか？　この義人はあなた方のために祈っているのに、あなた方は彼を石で打ち殺そうとしているのです。」

その時、白く塗るためのローラーを手にした一人の男が聖人に飛びかかり、頭部を激しく殴りつけた。その衝撃で脳みそが地面に流れ出し、この苦しみの中でヤコブは主のもとへ息を引き取った。

その聖なる遺体は、その場である教会の近くに埋葬され、信者たちは義人を深く悼んだ。聖人は30年間にわたりエルサレム教会の司教を務め、66歳の時にキリストのために殉教した。キリスト、父、聖霊に、世々限りなく栄光と誉れがありますように[7396]。アーメン。

トロパリオ、第2調:

義人よ、あなたは主の弟子として福音を受け入れ、殉教者として言葉に尽くせぬ勇気を持ち、神の兄弟として、また司教として祈りを捧げました。キリスト・神に、私たちの魂が救われるようお祈りください。

コンダク、第4調:

父なる神の独り子、御言葉よ、終わりの日に我らのところに来られた、神聖なるヤコブよ。あなたは、エルサレムの民にとって、最初の牧者であり、教師であり、また霊的な秘儀の忠実な築き手として現れた。それゆえ、我らは皆、使徒よ、あなたを崇める。

[7396] 使徒ヤコブの殉教は、西暦63年頃に起こった。彼は高齢でこの世を去った。彼は亡くなったその場所で埋葬され、神殿のそばにある彼の墓の上には、今なお記念碑が建っている。 3世紀の教会作家オリゲネスによれば、ユダヤ戦争の直前に起きた「義人ヤコブ」の死は、ユダヤ人たちに多大な衝撃を与え、それに続く戦争の惨禍やエルサレムの破壊は、この義人を殺害したことに対する神の懲罰であると彼らに受け止められた。–11世紀には、聖テオファン（聖歌作家）、ニカイアの大司教、福者ゲオルギオス・ニコミディオス、そして後にビザンティオスが、聖使徒ヤコブを称える多くの聖歌を詠み、これらは現在、彼の記念日に歌われている。　聖使徒ヤコブの聖遺骨は、1200年にロシアの巡礼者アントニオスがコンスタンティノープルを訪れた際、ハルコプラティオス教会の付属礼拝堂に安置されており、頭部は聖使徒教会に安置されていた。現在、一部の証言によれば、その聖遺骨はローマの「十二使徒教会」に安置されている。　モスクワのスタロ・イェルサリムスキー・ポドヴォリェには、1853年にアレクサンドリア総主教イエロフェイから送られた彼の聖遺物の一部が保存されている。

聖ヤコブ・ボロヴィツキーの記念日

記念日10月23日

この祝福され、義なるヤコブの出生地も、両親の名前も、[7397]、――これらすべては、神の御心によって私たちから隠されている。それは、神の聖徒たちが地上の故郷ではなく天の故郷を求め、地上の血筋を誇ることなく、天の御使いたちとの交わりを尊び、肉体的な父ではなく、霊的な父である遍在の神を称えることを、私たちが知るためである。　私たちは、この称賛に値する奇跡行者が、肉体の生まれであったにもかかわらず、霊的な生活を送り、心を神に向けて燃やし、主のために熱心に働いていたことを知っている。彼は物質的な肉体を持っていたが、その非物質的な心をもって聖なる天使たちと対話し、共に暮らしていた。　肉体は地上に留まっていたが、神の知恵に照らされたその精神をもって、天に御住まいの神の御前に立っていた。あらゆる事において、彼は常に神の忠実なしもべとしての姿を現し、忍耐の模範を示し、謙虚に苦難や労苦に耐え、絶えず祈りと断食に励んだ。　この悲しみに満ちた一時的な人生における至福の者の旅路が終わると、花嫁のように美徳で飾られたその義なる魂は、神の天使たちによって救い主の御殿へと導かれ、その尊い遺体はキリスト教の儀式に従って聖遺物箱に納められた。

ヴェリキー・ノヴゴロド地方にはムスタ川が流れており（[7398]）、そのほとりには当時、ボロヴィチという集落があった（[7399]）。聖人が栄光に包まれる時が来ると、この神に愛された者の聖遺骨が納められた聖遺骨箱は、神の御命令により、流氷に乗って前述の川の流れに逆らって上流へと漂い――それは復活祭の明るい週の火曜日であった――ボロヴィチィの荒れ狂う轟音立つ急流[7400]の近く、ボロヴィチィ集落からそう遠くない岸辺に打ち上げられた。　この集落の住民たちは疑念を抱き、神の偉大な聖人の聖遺物を受け入れず、ロープに結びつけたフックを使って川の中ほどへと引き戻した。しかし、奇跡を起こす聖遺物は、自分たちを置き去りにした人々を見捨てなかった。再び彼らのもとへ戻り、押し戻されたのと同じ場所に再び着岸した。　しかし、その時でさえ、そこに住む人々は、聖遺物が入った籠が流れに逆らって流れてくるという驚くべき奇跡に気づくことができなかった。彼らは再びそれを追い払い、聖遺物を元の場所へ戻すことで、神から与えられた宝を自ら手放してしまったのである；　彼らがそうした行為をしたのは悪意からではなく、無知によるものであった。彼らは粗野で、教えに照らされていなかったからである。　それゆえ、この行いは彼らに赦されたのである。聖遺物は三度目にも、まさに同じ場所に岸へと流れ着いた。その時、その祝福された奇跡行者自身が、敬虔で神を畏れる人々の夢に現れ、こう言った。

「なぜ、キリストの忠実な僕たちよ、私を受け入れないのか。私はあなた方と同じキリスト教徒なのだ。あなた方と同様に、私もこの世にいた間、キリストを敬虔に信じていた。もし、あなたがたが私の名前を知らないという理由だけでそうしているのなら、私がその名を明かそう。私はヤコブだ。主の兄弟ヤコブにちなんで、この名を与えられたのだ。」

これらの男たちは眠りから覚めると、聖人の言葉に心を打たれ、並外れた喜びを感じ、その幻視のことを皆に語った。　そこで、その村の住民たちは皆、急いであの場所へと向かい、かつて彼らが大胆にも聖ヤコブの聖遺体を水から押し出したその場所へ行き、それを目撃しようと努めた。聖遺体を見つけると、彼らは大いに喜び、畏敬の念を持って水から引き上げ、岸辺の同じ棺に丁重に安置し、その周囲を木造の柵で囲んだ。

[7397] 知られているのは、至福のヤコブが質素でありながらその務めに熱心な裁判官であり、過酷な聖人行を自ら選んだということだけである。彼は1540年頃、雷に打たれて亡くなった。

[7398] ムスタ川は、トヴェリ州のムスティナ湖を源流とし、ノヴゴロド州のイルメン湖に注ぐ川である。その全長は412ヴェルストである。

[7399] 1770年、ボロヴィチ村は市に改称された。

[7400] 「ポロゴイ」とは、川の流れを遮り、一連の低い滝や渦を形成する岩群のことを指す。

至福の神は、御自身の御使いを称え、聖遺物に驚くべき奇跡を起こし、様々な病を癒やす力を授けられた。これを見た人々は、彼らにこのような無償の医師を遣わしてくださった全慈悲の神に、大いなる感謝を捧げた。　あらゆる病を癒やす聖なる奇跡行者をも称えた。その聖遺骨をよりふさわしい場所に安置したいと願った人々は、大ノヴゴロドの大司教、テオドシオス大主教のもとを訪れ、聖人の聖遺骨から生じたすべての奇跡について感動を込めて語った。　テオドシウスは、全ロシアの首席主教であるマカリー大主教への書簡の中で、耳にしたすべての奇跡について記述した。まもなく彼から有益な助言を受けたテオドシウスは、病から癒やされた人々に対し、聖人の奇跡について入念に尋ね始めた。　伝えられたことがすべて真実であり、偽りではないと確信したテオドシウス大司教は、聖母マリアの降誕を称える修道院の院長コンスタンティンを、司祭や助祭たちと共にボロヴィツキーの村へ派遣した。　そこから、聖なる義人ヤコブの尊い奇跡の聖遺骨は、聖霊降臨の新しい教会へと敬意を込めて移送され、1545年10月23日、教会の南門のそばに安置された。　この日を、聖なる者たちの中で永遠に賛美されるキリスト・神の栄光のために、この祝福された奇跡行者の記念を毎年祝う日と定められた。アーメン。

トロパリオ、第1声：

神の恵みによって照らされ、死後もあなたのもとに駆け寄る者たちに癒やしを授ける、至賢きヤコブよ。それゆえ、私たちも今、尊い聖遺骨の移送を称え、魂と肉体を共に喜びで満たす。それゆえ、私たちは皆、こう叫ぶ。「あなたに力を与えた方に栄光あれ！」　あなたを冠された方に栄光あれ！　あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ！

コンダク、第8調：

信仰と愛をもって、あなたの尊い遺骸の移送を祝う者たちを、祝福された方よ、あらゆる悪意と蛇の誘惑から守り、保ってください。あなたは、万物の主であるキリスト・神に大胆に近づくことができるからです。　その御方に、正教の皇帝と、あなたに祈りを捧げる民を救ってくださるよう祈り、我ら皆があなたにこう叫びましょう。「喜びなさい、ヤコブ父よ、全ロシアの地の恵みよ。」

コンスタンティノープル総主教聖イグナティオスの記念日

記念日：10月23日

聖イグナティオスは、ミハイル・ランガヴァ皇帝[7401]　とプロコピア皇后の息子であり、テオフィロス[7402] の兄弟、そしてニキフォロス皇帝の孫であった。 15歳の少年だった彼は修道院に閉じ込められ[7403]　、その後、当初は「東の修道院」と呼ばれ、後に「サティラ」と呼ばれるようになった大天使修道院の修道院長となった。 その後、彼はコンスタンティノープル総主教に任命された（[7404] ）が

[7401] ミハイル・ランガフは811年から813年まで在位した。

[7402] フェオフィルは、829年から842年まで在位した。

[7403] これは、イグナティウスの父ミハイルを王位から追放した皇帝レウ・アルメニアヌス（813–820年）の命令によって行われた。

[7404] それは846年のことだった。

、皇帝ミカエルによって追放されるまで（[7405] ）、11年5ヶ月間その座に留まった。彼の後任として、かつては単なる修道士であったコンスタンティノープル教会のプロトスパファリオス兼プロトシンクリトス（[7406] ）のフォティオス（[7407] ）が任命された。 フォティオスが皇帝ヴァシレイオスによって追放された後[7408] 、イグナティオスは再び総主教の座に就いた――今回は10年間在任したが、皇帝ニキフォロスによって再び追放された[7409] 。ニキフォロスはその後、ブルガリア人によって殺害された。 その座には、皇帝ヴァシレイオスの息子である聖ステファノス[7410] が就き、聖イグナティオスはサティラ修道院に隠遁し、そこで89歳で安らかにこの世を去った。

11月6日

10月24日（旧暦）

聖殉教者アレファの殉教

記念日 10月24日

ギリシャの地にユスティン[7411] が、エチオピアに[7412] ――エレズヴォイが、正統かつ敬虔な王として治めていた頃、オミリトの地[7413] には、ドゥナアンという名の不法な王が即位した。彼は生まれも信仰もユダヤ人であり、キリストの御名を冒涜し、キリスト教徒を激しく迫害した者であった。彼のすべての顧問、家臣、兵士たちは、ユダヤ人か、あるいは太陽や月、偶像を崇拝する異教徒たちであった。彼は、自分の領地からすべてのキリスト教徒を追放し、オミリトの国から偉大なるキリストの御名の記憶そのものを根絶やしにしようと努めた。 神の教会を熱心に迫害し、彼の命令に従わず、ユダヤの律法に従って生きることを拒んだ信者たちを拷問し、殺害した。

[7405] 867年、イグナティウスは、ミハイルが未成年であったため帝国を統治していたヴァルダの要望――ミハイルの母テオドラ（ヴァルダの行動を多方面で制約していた人物）を修道女として出家させること――を拒否したため、王位から追放された。 イグナティウスはこれを拒否しただけでなく、ヴァルダ自身をも聖体拝領から破門した。

[7406] プロトスパファリオスとは、ギリシャ王の宮廷に存在した高貴かつ偉大な官位である。プロトシンクリトスとは、宮廷の首長であり、王の寝室に入る権利を有していた。

[7407] 彼の記念日は2月6日である。

[7408] フォティオスの追放は867年のことである。

[7409] イグナティオスの二度目の廃位は877年にさかのぼり、同年、イグナティオスは死去した。

[7410] 彼の記念日は5月17日である。

[7411] ユスティヌスはユスティニアヌスの叔父であり、518年から537年まで在位した。

[7412] エチオピア――アフリカに位置し、現在のアビシニアに相当する。ナイル川上流に位置し、北はエジプトのフィヴァイダ地方、西はリビア、南は南エチオピア、東はアラビア湾および紅海と国境を接していた。 その首都はアクスムであった。キリスト教の初期の数世紀において、エチオピアは強大な帝国であり、アラビアの一部もその領土に含まれていた。 6世紀にエデシウスとフルメンティウスによってキリスト教が伝道された。7世紀、エチオピア人はアラブ人に征服された。727年から、この地でコプト教の教階制度が始まった。

[7413] オミリテ族は、アラビア湾沿岸に居住していた南アラビアの住民である。キリスト教初期の時代、アラビアには11の部族が住んでいた。そのうち、オミリテ族とサベア族のみがキリスト教徒であり、残りの部族はユダヤ人と頻繁に交流していたため、その大部分がユダヤ教を信仰していた。 オミリ族は、エチオピアの首都アクスマの第二代司教であるテオフィロス・インディアンによってキリスト教の教えを受けた。6世紀には、彼らの中に3人の著名な司教がいた。ドゥナアン王によって殺害されたパウロ、ユスティニアヌス帝の時代に任命されたヨハネ、そして正教の擁護者である聖グリゴリオスである。

ドゥナアンが自国でキリスト教徒への迫害を始めたという知らせを耳にしたエチオピアの王エレズヴォイは深く憤り、軍勢を集めて彼に対して戦いを挑んだ[7414] ；数々の戦いの末、エレズヴォイは彼を打ち破り、彼を属国として従わせた後、自国へと帰還した。 しばらくして、ドゥナアンは再びエレズヴォイに反旗を翻し、彼との条約を破棄して軍勢を集め、都市の防衛のために残されていたエレズヴォイの部隊をすべて殲滅し、その後、キリスト教徒に対する弾圧をさらに強化した。 彼は至る所で、キリスト教徒に対し、ユダヤ教の信仰を受け入れるか、さもなければ容赦なく打ち殺されるかのいずれかを選ばせると命じた。彼の王国には、もはやキリストを公然と信仰しようとする者は一人も残っておらず、ただ一つ、広大で人口の多い都市ナグラン[7415] においてのみ、キリストの御名が賛美されていた。 この地で聖なる信仰が輝き始めたのは、コンスタンティヌス大帝の息子コンスタンティウスが、現在オミリテスと呼ばれるサヴェイ族[7416] ——彼らはアブラハムの女奴隷ヘットゥラを祖とする——に使者を派遣した頃のことである。 その地を訪れた、神に賢明で敬虔な使節たちは、この国の王をコンスタンティウスに好意的に向けさせ、住民たちにイエス・キリストへの信仰を教え、教会を建設した。 この時から、ナグランでは敬虔さが栄え、キリスト教の教えが広まり、修道者の数が増え、修道院が設立され、あらゆる階層で貞潔が保たれ、信者たちは徳を磨き、成長していった。 彼らは、異教徒——ギリシア人[7417] 、ユダヤ人、異端者[7418] ——を自分たちの間に住まわせることを一切許さず、自分たちは、唯一の母である使徒公会議の教会の子供たちとして、あらゆる敬虔さと清らかさの中に留まっていた。

この都市のこれほど偉大な敬虔さを妬んだ悪魔は、ユダヤ教に傾倒するドゥナアンをその敵として送り込んだ。 ナグラナの住民たちが自分の命令に従わず、ユダヤの律法に従って生きることを望んでいないと耳にしたドゥナアンは、全軍を率いて彼らに攻め寄せ、自分の領土内のキリスト教徒を根絶やしにし、そのことでエチオピア王エレズヴァを悩ませようと企てた。 城に近づくと、彼は大軍で包囲し、塹壕で囲み、まもなく城を陥落させ、住民を容赦なく殲滅すると豪語した。彼は市民たちにこう言った。

「もし私から慈悲を受け、生き延びたいのなら、高い神殿の頂上に掲げた呪われた象徴（この忌まわしい男は聖なる十字架をそう呼んでいた）を取り下げ、また、それらの象徴に描かれた十字架にかけられた方[7419] を否定せよ。」

その一方で、王の従者たちは街中を巡り、こう叫んでいた。

「王に従え。そうすれば命は助かり、王から賜物を受けられる。さもなくば、火と剣によって滅びるだろう。」

ドゥナアン自身も、冒涜的な言葉でキリストとキリスト教徒をこう罵った。

[7414] エチオピアの王が、オミリト人と呼ばれるキリスト教徒たちを擁護したのは、彼らがキリスト教そのものをエチオピアから受け継いでおり、おそらくアクスム大司教区の管轄下にあったからである。

[7415] ナグラン、あるいはアナグランは、アラビア湾に面し、ドゥナアンの領地と隣接する都市である。この都市は、西暦25年にアウグストゥス帝の将軍エライオス・ガッルスによって征服され、ローマ皇帝の庇護下にあった。 おそらくそのために、この都市はオミリト人の都市よりも宗教的な面でより独立していたのかもしれない。

[7416] アラビア沿岸で近隣に居住し、起源、言語、宗教において互いに親縁関係にあったサベイ人とオミリト人は、6世紀には一つの部族に融合し、しばしばどちらの名前でも区別なく呼ばれるようになった。

[7417] キリスト以前の「エリン」とはギリシャ人を指したが、聖書ではこの名称が、ギリシャ人をはじめとする異教徒全般を指すようになった。その理由は、彼らの多くがギリシャ語を話していたからである（使徒行伝11:20、16:1–3参照）。

[7418] 異端者とは、教会の教義に迷い、キリスト教の真理を恣意的に歪曲する者のことである（IIペトロ2:1、テトス3:10）。

[7419] キリスト教徒を迫害する者たちは、主イエス・キリストを——侮辱する目的で——このように呼んだ。とりわけ、十字架での死はローマ人にとって最も恥ずべき死刑とされていたからである。

「私がどれほど多くのキリスト教徒を滅ぼしたか！　彼らの司祭や修道士を、どれほど多く剣で殺したか！　火で焼き殺した者も数知れない！　キリストは、彼らを私の手から一人たりとも救い出せなかった。そもそも、キリストご自身でさえ、ご自身を十字架にかけた者たちの手から逃れることはできなかったのだ[7420]。さあ、ナグランの住民たちよ、私はあなたたちのところに来た。キリストからあなたたちを切り離すか、あるいは完全に根絶やしにするか、どちらかだ。

市民たちは彼にこう答えた。

「王よ！　あなたは全能の神についてあまりにも傲慢なことをおっしゃっています。あなたは、センナケリムの軍司令官ラプサクに似ています。彼はヒゼキヤに誇り高くこう言いました。『あなたが望みを置いているあなたの神、主が、あなたを高ぶらせることのないように！』」　しかし、そのような冒涜は罰せられずに済んだわけではない。　、そのような冒涜のゆえに、一時間のうちに何千もの軍勢が滅びたことを、[7421]、あなたは知っているだろう。さあ、私たちの主イエス・キリスト、神の御子、全能にして全知、恐るべき、そして君主たちの勇気を奪うお方を冒涜するあなたにも、同じことが起こらないよう気をつけなさい！　主はあなたをも打ち砕き、あなたの傲慢で神を冒涜する高慢を無に帰すことができる。あなたは、私たちをキリストから遠ざけるか、あるいは完全に滅ぼすと自慢している。確かに、あなたは私たちをキリスト、すなわち私たちの救い主から遠ざけるよりは、むしろ私たちを滅ぼすことの方が容易だろう。私たちは皆、その方のために死ぬ覚悟ができているのだから。

そのような言葉を聞きかねた王は、さらに激しい怒りに燃え上がり、全力を挙げて都市を包囲した。もし強襲で都市を陥落させられなければ、長期にわたる包囲戦によって飢餓で都市を疲弊させるつもりだった。　王は町の周辺や村々、荒野で多くのキリスト教徒を見つけ出し、彼らを捕らえて様々な方法で殺害し、また一部を奴隷として売り払った。　城を強襲して陥落させようとする彼の試みは失敗に終わった。市民たちは城壁の上から勇敢に防衛し、不信心者たちを打ち負かした。王は軍勢を率いて多大な労力を費やしたが、市民たちが何年分もの食糧を蓄えていたため、城を陥落させることも、飢餓で疲弊させることもできなかった。　希望を絶たれた無法な王は、鋭い剃刀のように巧妙な策略を練り、誓いを立てた上で次のような言葉を伝える使者を城へ送り込んだ。

「私は、あなた方を傷つけたり、あなた方の信仰から遠ざけたりするつもりはない。私が求めているのは、あなた方が王である私に納めるべき通常の貢ぎ物だけである。どうか城門を開き、私が中に入って視察できるようにしてほしい。　私はあなた方から通常の貢ぎ物を受け取るが、神と法に誓って、大小を問わずいかなる害も与えず、あなた方の信仰のまま、平和に暮らせるようにする。

市民たちは彼にこう答えた。

「私たちキリスト教徒は、聖書から王に従い、権威に服従することを学んだ（ローマ13:1–2）。もしあなたが、私たちに誓って約束した通り――すなわち、私たちの主イエス・キリストから私たちを遠ざけない――のであれば、私たちはあなたに城門を開く。　王として城内に入り、我らから通常の貢ぎ物を徴収してください。もしあなたが我らに何らかの害を及ぼすならば、あなたの誓いを聞き届ける神が、まもなくあなたを罰されるでしょう。そして我らは、たとえ財産を失うだけでなく、命さえ失うことになっても、救い主キリストから離れることはありません。」

王は再び、彼らに微塵の害も与えないと固く誓った。彼らはそれを信じて城門を開き、その不信心な者にひれ伏して、贈り物を捧げた。　王は全軍を率いて、まるで羊の皮を被った狼が羊の群れ

[7420] ドゥナアンは、ユダヤ人の祭司長、律法学者、パリサイ人、長老たち、さらには十字架に架けられた強盗の一人が口にした、主に対する冒涜の言葉を繰り返している（マタイ27:41–43；ルカ23:39）。

[7421] アッシリア王センナケリムの軍司令官ラプサクは、ヒゼキヤ王の治めるユダを征服するため、大軍を率いて派遣された。しかし、アッシリア軍は一夜にして天使によって撃破され（18万5千人）、生き残った者たちは恥をさらして自国へ帰らざるを得なかった（列王記下18:13–37；イザヤ書36,37）。

に紛れ込むかのように城内に入り、城壁と城門を占領し、自らの部隊でそれらを固めた。城の美しさとそこに住む多くの人々を見て、彼は彼らに優しく接したが、それは時が来るまで、心に秘めた毒を隠していたからである。　城内で少し休息をとると、彼は再び部隊の先頭に立ち、企てていた不敬な行いを始めようと、高名な長老たちや都市の指揮官たちを自分の元へ呼び出すよう命じた。彼の命令により、城内にいたすべての人々――高名な長老や指導者、尊敬される者や富裕な者たち――が彼の元へ現れた。　その中には、年齢、知恵、地位、名誉のすべてにおいて最も優れた、至福のアレファがいた。九十五歳の彼は、公爵であり、都市のすべての整備を任された統治者であった。彼の賢明な助言と理知的な統治のおかげで、市民たちは長い間、敵に対して勇敢に抵抗し続けていた。　アレファを先頭に、市民たちは無法な王のもとへ赴き、彼に相応の敬意を表し、市民に何の害も与えないと誓ったその意図に感謝した。彼らはまだ、王の狡猾さを知らなかったのだ。　しかし、彼はその内なる憎しみを長く隠し通すことはできず、すぐに陰険に秘めていた悪意を露わにした。市民たちに誓った誓いを「子供じみた遊び」と罵り、聖アレフォスと共にすべての市民を鎖で縛り、監禁するよう命じた。その後、彼は彼らの家へ使者を送り、財産を略奪した。　さらに彼は、彼らの司教であるパウロがどこにいるのかと尋ねた。[7422]　しかし、司教が2年前に亡くなっていたことを知ると、彼はその墓を掘り起こすよう命じ、死者の遺体を引きずり出して火で焼き、その灰を空中に散らした。　その後、巨大な焚き火を燃やし、多くの司祭、聖職者[7423]　、修道士、修道女、そして神に捧げられた処女たち、計四百二十七人を集め、彼らを火の中に投げ込み、焼き殺しながらこう言った。

「彼らは、十字架にかけられた方を神として崇めるよう勧めたため、他者の破滅の原因となった者たちである。」

さらに、彼は布告役たちに命じて街中を巡らせ、すべての者がキリストを拒絶し、王と同様にユダヤの律法に従って生きるよう告げさせた。

その後、牢獄に収容されていた町の有力者たちを呼び寄せ、彼ら、とりわけアレフェに向かってこう語りかけた。

「十字架にかけられた者を神として信じるなど、なんと愚かなことか！　肉体を持たない神が苦しむことなどあり得るのか？　あるいは、不死の者が死ぬことなどあり得るのか？　実際、あなた方の間には、ネストリウス[7424]　の例に倣い、キリストを神としてではなく預言者として崇めている者もいるではないか？」　私は、あなたがたに太陽や月、あるいはいかなる被造物にも拝むよう促しているのではない。私が求めているのは、異教の神々ではなく、あらゆる被造物の創造主である神のみに犠牲を捧げることだ。

この言葉に対し、聖アレファは皆を代表して次のように答えました：

「私たちは、神性が苦しみを受けることはできないことを知っています。しかし、イエス・キリストが聖母マリアから受け継いだ人間性が、私たちのために苦しみを受けました。これは、あなたも知っている預言者たちが証言している通りです。そして、主キリストは、言葉では言い表せない奇跡によって、ご自身の神性を現されました。しかし、長々とした議論に何の意味があるでしょうか？我々は、御方が神であり、神の御子であることを告白し、この町のすべての市民を代表して、我々の神であるイエス・キリストのために、我々が耐えられない苦しみなどない、と申し上げる。　聖なる

[7422] 一部の見解によれば、パウロ司教はドゥナアンの命令によって殺害されたという。彼について尋ねた王は、自分の命令が果たして確実に実行されたのかどうか、確信が持てない様子を見せた。

[7423] 聖職者――教会の聖職者団の構成員。

[7424] ネストリウス――429年からコンスタンティノープル司教を務めた。　モプスエステの司教テオドロスの教えに従い、彼はイエス・キリストは真の神ではなく、ヨセフとマリアの子である人間であり、その聖なる生涯によって神の特別な恵みにあずかり、贖いの死によってではなく、教えと生涯の模範によって私たちを救うと主張した。　この異端のため、ネストリウスは第3回全地公会議において教会から破門され、436年にフィヴァイデで死去した。

教父たちによって非難されたネストリウスについては、我々は関知しない。我々はキリストにおいて人格を区別しない[7425] 、しかし、その人性が神性とともに一つの神聖な御人格に結ばれていると信じる。一方、我らの主に対して冒涜的な言葉を吐くあなたには、この冒涜と誓いの違反の罪により、まもなく神の懲罰が下るであろう。

拷問官はこれらの言葉を寛大に聞き流した（彼はアレファの知恵と他の市民たちの気高さに恥じ入っていたからである）。そして、贈り物や栄誉を約束し、優しい言葉で彼らの心を自分に引き寄せようとした。こうして彼は、彼らのキリストに対する敬虔さと熱意を、自分の不法な行いに傾けさせようとしたのである。しかし、彼らは天を仰ぎ、まるで口を揃えてかのように叫んだ。

「私たちは、唯一の神の御言葉であるイエス・キリストよ、あなたを拒みません。聖母マリアからのあなたの至聖なる御降誕に惑わされることもなく、あなたの尊い十字架を嘲笑することもありません。」

聖なる人々の信仰の揺るぎなさを目の当たりにした王は、彼らの拷問をしばらく延期し、民衆に襲いかかり、多くの人々を容赦なく打ちのめした。王は、アレフォと共に鎖でつながれていた聖なる殉教者たちの妻や子供たちを連れてくるよう命じた。　これらの高潔な妻たちと共に、多くの他の妻たち、未亡人、処女、そして修道女たちが連れてこられた。王はまず彼女たちを甘い言葉で誘惑し、次に拷問で脅して、キリストを否定するよう説得した。しかし彼女たちはそれに同意するどころか、王を苛立たせるような言葉を返した。　とりわけ、修道生活を送る乙女たちは、王を非難し、その不敬虔さを責めた。その頑なさに耐えかねた王は、兵士たちに彼女たち全員を剣で処刑するよう命じた。彼女たちは、まるで祝祭であるかのように死へと向かった。その際、彼女たちの間で言い争いが生じた。修道生活を送る乙女たちは、真っ先に死にたいと願い、他の妻たちにこう言った。

「ご存知の通り、キリストの教会において、私たちは他の人々よりも高い地位に置かれています。私たちがどこにおいても第一の座を占めていたことを思い出してください。私たちは主の神殿に真っ先に足を踏み入れ、聖なる秘跡に真っ先に与り、神殿では最前列に立ち、座っていたのです。それゆえ、ここでも私たちが真っ先に殉教の栄誉を受けるのがふさわしいのです。私たちが真っ先に死を望み、あなた方やあなた方の夫たちよりも先に、私たちの花婿であるイエス・キリストのもとへ行きたいのです。

他の妻たちは互いに先を争うように、剣の下に頭を差し出した。同様に、幼い子供たちも母親たちの間に押し寄せ、死ぬことを急ぎ、どの子供も大声で叫んだ。

「私の首を切り落として、私を処刑してください！」

キリストのために死のうとする彼女たちの熱意は、あまりにも大きかったため、不敬虔なユダヤ人ドゥナアンとそのすべての貴族たちを驚嘆させた。そして、不義の王はこう言った。

「ああ、どうしてガリラヤ人[7426] は、人々をこれほどまでに惑わし、死など何とも思わせ、彼のために魂も体も滅ぼそうとさせるのか！」

その同じナグラネの町には、シンクリティキアという名の未亡人が住んでいた。彼女は気高く徳高く、顔立ちも美しかったが、その魂はさらに美しく、財産に恵まれていたが、徳においてはそれ以上に豊かであった。若くして夫を亡くし未亡人となった彼女は、二人の娘と共に、家で断食と祈り

[7425] 第4回全地公会議（451年）の決定によれば、イエス・キリストにおいては、二つの本性が「混ざることなく、変容することなく、分離することなく、不可分である」形で結合している。

[7426] 主は、パレスチナの他の地域よりも、ガリラヤでより頻繁に福音を宣べ伝えられた。ガリラヤからエルサレムへと旅をされ、ガリラヤ人から使徒たちを選ばれ、また、死から復活された後もガリラヤに現れた。　他のユダヤ人たちはガリラヤ人を好まず、「ガリラヤ人」という呼称そのものが軽蔑的なものでした（マタイ13:64–67；ヨハネ7:41–62）。ドゥナアンは、この点において、ユダヤ人たちや、主イエス・キリストを「ガリラヤ人」と呼んだユリアヌス・アポステート（背教者）の例に倣っています。

に時間を費やしていた。　彼女は再婚を望まず、キリストに身を捧げ、昼夜を問わず主に仕えた。若くして、主の戒めに従うことにおいては、老賢者たちよりもさらに賢明であった。　彼女のことを耳にした不信心なユダヤ人ドゥナアンは、シンクリティキアとその娘たちを丁重に自分の元へ連れてくるよう命じた。彼女が到着すると、王は優しく彼女を見つめ、甘ったるい口調でこう語りかけた。

「尊き妻よ、我々は、あなたが気高く、貞潔で、賢明であると聞いております。あなたの顔立ちやその佇まいは、あなたについて語られていることがすべて真実であることを物語っています。だから、私がその狂気ゆえに滅ぼしたあの狂った女たちを真似ようとしてはならない。また、十字架に架けられた方を「神」と呼んではならない。なぜなら、その方は食いしん坊であり、徴税人や罪人の友（マタイ11:19）であり、先祖の律法に背く者だからである。　さあ、あなたの高貴な生い立ちにふさわしい振る舞いをし、ナザレ人[7427] を拒絶し、私たちと心を一つにしてください。そうすれば、あなたは王妃と共に王宮に居を構え、すべての人から敬われ、未亡人としてのあらゆる苦難から解放され、満ち足りた生活を送ることになるでしょう。　あなたに関する称賛の評判が我々の耳にも届いており、その実情もそれを裏付けています。確かに、あなたは莫大な富を持ち、あらゆる財産や男奴隷、女奴隷を多く所有し、すべての人から尊敬され、若く美しいにもかかわらず、これほどの幸福にあっても、再婚を望まなかったのです。　さらに、あなたは徳高く、分別があるとも伝えられています。今こそ、ふさわしい行動をとってください。最後まで分別を保ち、私の賢明な助言に従い、その美貌と若さ、そして子供たちの無垢さを、苦痛よりもさらに大きな恥と不名誉をもたらす拷問者たちの手に委ねようなどとは、決して考えてはなりません。　十字架にかけられた方を賛美するのはやめ、我々の法律に従い、あなた自身と子供たちのために有益な道を選びなさい。

その祝福され、尊ばれる女性は、王に次のように答えた。

「王よ、あなたは、あなたに権力とこの紫の衣、そしてこの王冠[7428] を与えた方、それどころか、あなたに存在そのものと命さえ与えてくださった方を崇めるべきでした。その方は神の子であり、神ご自身です。それなのにあなたは、その方によるこれほど偉大な恩恵に対して恩知らずな態度を示し、大胆不敵な言葉で恩人を中傷しました。　高き所から雷があなたを打ち砕くことを恐れないのか。あなたは私に偉大な栄誉を授けようとしているが、私はあなたがたの栄誉を自分にとっての恥とみなしており、私の神を冒涜するその口から称賛されることを望まない。私は、神の敵たちと共に罪人たちの家々で暮らすほど、狂気には陥らない。

これを聞いて、王は怒りに満ち、家臣たちに向かって言った。

「ご覧なさい、この卑劣な女が、なんと恥知らずにも我々を中傷していることか！」

そして、シンクリティキアとその娘たちの頭からベールを取り除かせ、頭を露わにし、髪を解いたまま、彼女を街中を引き回して、嘲笑と侮辱にさらさせた。彼女が恥辱にまみれて街の通りを引き回されていると、多くの女性たちが、彼女に加えられる嘲笑と恥辱を嘆いて泣いているのを見た。彼女たちは彼女たちに語りかけ、こう言った。

「私の友よ、あなたがたが私のためにどれほど悲しんでいるか、私と私の娘たちが辱められていることを知っているわ！　しかし、私が喜んでいる時に悲しんだり、私が楽しんでいる時に泣いたりしないでください。この日は、私の結婚の日よりも私にとって喜びに満ちた日です。なぜなら、私は私の花婿[7429] のために苦しんでいるからです。私はその方のために、汚れのない未亡人としての身を守り抜いてきたのです。 主のために、私は 、愛する娘たちの清らかな処女性も守り抜きました。

[7427] ユダヤ人たちは主イエス・キリストをそう呼んでいた。それは、主が地上の生涯の大部分を、この小さく貧しい町で過ごされたからである（マタイ2:23）。

[7428] ポルフィラとは、長いマントの形をした高価な紫色の衣のことで、君主が祝典の際に身に着けるものである。ディアデマとは、王冠のことである。

[7429] この言葉は、当然ながら、主イエス・キリスト、すなわち御自身の教会およびすべてのクリスチャンの魂の花婿を指しています（雅歌4:9、ヨハネ3:29、マタイ25:13）。

今、私の主が私の侮辱をご覧になり、私の告白を聞き、私の熱意をご存知であることを喜びます。私は栄誉も富も望まず、この一時的な命さえも望みません。　私の唯一の願いは、キリストに遇い、聖なる殉教者たちの群れと共に御前に現れ、私の胎の果実であるこれらの娘たちを主のもとへ連れて行くことである。それゆえ、私の姉妹たちよ、私のために泣くのではなく、むしろ私と共に喜びなさい。私は、朽ちることのない天の婚約者との再会へと向かうのだから。

その後、彼女は再び王のもとに連れて行かれた。王は彼女に言った。

「キリストへの信仰を捨てれば、命は助かる。」

聖女はこう答えました。

「もし私がこの一時的な命のためにキリストを否定するなら、誰が私を永遠の死と消えることのない火から救ってくれるというのでしょうか？」

そして、天を仰ぎ見て、彼女はこう言った。

「不死の王よ、私が、神の独り子であるあなたを拒み、狡猾な手段でこの都市を陥落させ、あなたの聖なる教会を迫害する、冒涜者であり誓いを破った者の言葉に従うことなど、決してあってはなりません。」

王は激しい怒りに満ち、叫んだ。

「おお、忌まわしい女よ！今すぐお前の体を粉々に砕き、お前の腹を引き裂き、犬に食わせよう。そして、お前が頼りにしているナザレの者が、果たしてお前を私の手から救い出せるかどうか、見てやる！」

この拷問者の言葉を耐えかねたシンクリティキアの長女――彼女は十二歳であった――は、王の顔に唾を吐きかけた。すると、そこに立っていた家来たちは即座に彼女の首を切り落とし、さらにその妹も剣で殺害した。

こうして、二人の娘は、称賛に値する母の目の前で息絶えた。すると王は、彼女たちの血を集めて母の口元に差し出し、飲ませるよう命じた。血を口にした彼女は、こう言った。

「主なる私の神よ、私の貧しい娘たちの清らかな犠牲を味わわせてくださったことを、あなたを賛美します。主キリストよ、私はこの私の犠牲をあなたに捧げます。　あなたに、私の胎から生まれたこれらの殉教者たち、清らかな乙女たちを捧げます。私をも彼女たちと共に結び合わせ、あなたの御殿へと導き入れ、聖ダビデが言うように、*「子供たちを喜ぶ母」*として現してください（詩編112:9）。

その後、拷問官は剣で彼女の首を刎ねるよう命じました。こうして、母は娘たちと共に、永遠の至福の住まいに移り住みました。一方、拷問官は誓いを立ててこう断言しました。

「私はこれまでの人生で、これほど美しい女性や、美しさも自らの命も惜しまなかったこのような素晴らしい乙女たちを見たことがない。」

翌日、高台に腰を下ろした王は、アレフとその仲間たち、計三百四十人の男たちを呼び寄せた。彼らが面前に現れると、王は最年長のアレフに向き直り、こう言った。

「お前という卑劣な男は、我々の権威に反旗を翻し、街全体を我々に敵対させ、抵抗するよう命じた。お前は市民に、お前の言葉を法律であるかのように従わせた一方で、我々の法律や命令を拒絶している。　お前は民に、十字架にかけられた者を神として崇め、十字架にかけられた際に自らを救うことさえできなかった方を助け手だと見なすよう教えた。　なぜ、ナグランを統治していたお前の父のように、我々より前の王たちに服従しなかったのか？まことに、お前と、お前のすべての追随者たちは、すでに我々に処刑された男たちや女たちと同様に、苦しみを受けるに値する。彼らに対しては、マリアの息子であり大工の[7430]も、何の助けも与えることができなかったのだ。

[7430] ドゥナアンは、主イエス・キリストを、マリアとヨセフの息子である単なる人間だと考えていた。

その間、老人は思案にふけり、神を冒涜する王の傲慢な言葉に深く苦しんでいた。そして、彼は心の底からため息をつき、こう言った。

「王よ、起きたことすべてについて罪があるのはあなたではなく、私の助言に従わなかった我らが市民たちなのです。　私は彼らに、狡猾で悪辣なあなたに城門を開くのではなく、勇敢にあなたと戦うよう助言した。しかし、彼らは私の言葉に耳を貸さなかった。私はかつてゲデオンがマディアン人に対して戦ったように[7431]、少数の部隊を率いてあなたの全軍に立ち向かおうとした。なぜなら、私は私のキリストに希望を置いていたからである。　今、あなたによって冒涜されているその方だ。　主は、私がお前――神を畏れず誓いを破り、私たちが定めた、都市と市民を守るという誓約を忘れた者――を打ち負かし、打ち倒し、屈服させるのを助けてくださったでしょう。

王と共に座していた者の一人が聖人に言った。

「モーセの律法は、あなた方にそう教えているのですか？　律法は*『あなたの民の指導者を侮ってはならない』*（出エジプト記22:28）と命じています。さらに、あなた方の聖書も、善良で柔和な王だけでなく、気難しい王をも敬うよう教えているではありませんか（ペトロの手紙一2:17–18）。」

聖人は彼にこう答えた。

「預言者エリヤがアハブに語った言葉を、あなたは聞いたことがないのか。アハブがエリヤに向かって『イスラエルを惑わしているのはお前ではないか』と言ったとき、エリヤは彼にこう答えた。『イスラエルを惑わしているのは私ではなく、むしろあなたとあなたの父の家である』[7432]。見よ、彼はアハブ一人だけでなく、その家全体をも戒め、非難したが、それでも律法には違反しなかった。そして、神を畏敬する者は誰でも、不義な王――神を冒涜し、創造主を中傷することを恐れなかった王――の不義を非難する際、律法に違反することはないのだ。　しかし、私はあなたがたが神の寛容を軽んじ、私たちにもあなたがたと同じように振る舞うことを求めているのを見る。ああ、不義で、不敬虔で、非人道的な王よ！　あなたは約束した通りに私たちにそうしたのか？　そのような行いが王にふさわしいのか？　あなたより前に統治した王たちは、そのような者たちだったのか？　まことに、彼らはそうではなかった。彼らは善良で柔和、慈悲深く、正義に満ち、自らの言葉を守り、民に慈しみを示した。それなのに、誓いを破る者よ、お前は人の血を飽くことなく求めているではないか！　知っておけ、全知の神はまもなくお前を王座から引きずり下ろし、その座を信仰深く善良な者に与え、さらにキリスト教徒の血筋を確固たるものにして高め、お前が火で焼き払い、地面と同じ高さにまで平らにしてしまった教会を再建されるのだ。　私に関しては、九十五歳という深き老齢に達し、孫たちや娘たちを見届けた上で、殉教の死を迎え、故郷を神への捧げ物として共に捧げることができることを、至福と心得ている。

そして、民衆と殉教の仲間たちに向き直り、彼はこう語り始めた。

「市民の皆さん、友よ、そして私の親愛なる人々よ！我々は、この不敬虔な王の誓いと欺瞞に満ちた言葉に騙されてしまった。しかし今、我々は彼の偽りを見抜き、神を冒涜する言葉を耳にしている。もし我々が戦いで彼に抵抗し、最後まで堅く立ち向かっていたなら、どれほど良かったことか！神は我々が彼に打ち勝つよう助けてくださっただろう。　しかし、事態はそうはならなかった。今、私たちには二つの道が待ち受けている。敵に従い、この世の一時的な生活の中で悲惨に生きるか、

[7431] ゲデオン――イスラエルの士師（紀元前1245年）。神からイスラエルをマディアン人から救い出すよう召された彼は、300人の非武装の戦士を率いて夜間に敵の陣営を取り囲み、敵を大混乱に陥れた。その結果、敵は互いに殺し合いながら逃げ出し、その後全滅した（士師記7:1–25）。マディアン人はアラビアに住んでいた。アブラハムとヘッテラの間に生まれたマディアムの末裔であり、オミリ人とは血縁関係にあった。そのため、聖アレファも彼らについて言及している。

[7432] （列王記下18:17–18）。アハブはアムリの子であり、イスラエルの王であった（紀元前924–903年）。彼はイスラエルにバアルとアスタルテの崇拝を導入した。　テシュビ出身の預言者エリヤは、この不義な王を厳しく非難した（列王記下17–19）。

あるいは従わず、至福の死を迎えるか――それならば、苦しみを通じて不滅の栄光を勝ち取るよう努めよう。殉教ほど栄光に満ちたものがあり、キリストのために苦しむことほど尊いものがあるだろうか！　私はかねてより、キリストのために苦しみを受けるという思いと願いを抱いていました。今、望みを叶え、求めていたものを見出した私は、喜びに満ち、今すぐでも死ぬ覚悟ができています。兄弟たちよ、恐れてはなりませんし、気弱になってもいけません。この世の命に執着して、そのために永遠の命を失うことのないようにしてください。　また、私たちの迫害者も、脅しをもって私たちのうちの誰かを聖なる信仰から引き離すことができれば、それを誇りとするでしょう。彼は、あたかもすべての人を打ち負かしたかのように、その高慢を誇示し、神の御子に対する冒涜をさらに増すことになるでしょう。　もし、私たちの中に、死を恐れ、永遠の命であるキリストを否もうと考える者がいるならば、その者は直ちに私たちの仲間から去り、心を一つにし、考えを同じくする私たちの群れから離れ、キリスト教徒という名を無駄に名乗ってはならない。　キリストよ、神の御言葉よ、一時的な命のためにあなたを否む者は、その命を失うがよい！　もし私の親族や近親者のうち、誰かがこの世の利益への欲望に打ち勝ちきれず、創造主であるあなたを見捨て、邪悪な王の後を追うならば、王なるキリストよ、その者が善や慰めと見なすものを享受することを許さず、あらゆる災いと苦難が彼を襲うようにしてください！

聖人がこう告げると、例外なくすべてのキリスト教徒が、温かい涙を流しながらこう語りかけました。

「ご安心ください、私たちの指導者であり師よ！　誰もあなたを見捨てたり、私たちの集団から離脱したりはしません。私たちは皆、あなたより先にキリストのために死に、至福の死を迎える覚悟ができています。」

聖人はこれに対し、こう答えた。

「私はあなた方の先頭に立つ。私が真っ先に死に、あなた方の先導者となる。町であなたがたが私に指導権を委ねてくれたように、ここでも私が真っ先にキリストのもとへ赴くことを許してほしい。」

その後、聖人は次のように付け加えた：

「もし私の息子たちのうち、聖なる信仰を保って生き残る者がいれば、その者を私の財産の相続人とせよ。その中から三つの村を、まもなく再建される聖なる教会に捧げる。　なぜなら、この不法な迫害者はまもなく滅び、キリストの教会はこの都で確固たるものとなり、多くのキリストの僕たちの血で洗い清められた深紅の花のように、栄え盛るであろうからである。

こう言い終えると、聖人は民を祝福し、両手を挙げ、天を仰ぎ見て、こう叫んだ。

「主よ、起こったすべてのことに、あなたに栄光あれ！」そして王に向き直り、こう言った。

「王よ、あなたが忍耐強く、私の言葉を遮ることなく、友人たちと語り合う時間を与えてくださったことに感謝します。　もはやこれ以上遅らせるな。お望みのままにせよ。我々の決意は、お前の目にも明らかだろう。お前は我々の考えを知り、我々がキリストを捨ててお前の不敬虔に従うことなどあり得ないことも理解しているはずだ。

彼らの不屈の姿勢を見て、王は全員に死刑を宣告した。聖人たちはオディアスと呼ばれる川へと連行され、そこで斬首刑に処されることとなった。指定された場所に到着すると、聖人たちは熱心に祈りを捧げた。彼らはこう祈った。「主よ、主よ！　私たちの救いの希望よ！　あなたは戦いの日に、私たちの頭の上に御加護を授けてくださいました。今、私たちを永遠の命へと導いてください。私たちはあなた以上に愛するものを何一つ持たなかったからです。祖国も、親族も、富も、これらすべてをあなたのために捨てました。私たちの命さえも軽んじ、屠殺へと導かれる羊のようになりました。　謙虚にあなたにお願いします。あなたのしもべたちの血の報復をしてください。不義な王の傲慢に御手を下してください。あなたのために死んだ人々の子供たちを、あなたの庇護の下に受け入れてください。あなたの尊い血と十字架と受難を誇るこの都を、堅く守ってください。　あなたは、あ

なたの敵たちが彼に何をしたかをご覧になっています。彼らはその栄華を荒廃させ、あなたの聖所を汚し、あなたの聖なる神殿を焼き払いました。どうかそれを再び建て直し、キリスト教の王たちに[7433]の笏をお与えください！

この聖人たちの祈りの最中、兵士たちは彼らを処刑し始めました。まず、キリスト教徒の指導者である聖なる偉大なるアレフェの首が切り落とされ、続いて他のすべての聖なる殉教者たちも処刑されました。こうして、三百四十人の男たちが至福の死を迎えました。

そこには、この町の住民である一人の信仰深い女性がいた。彼女には、生後5歳にも満たない幼い息子がいた。聖なる殉教者たちが剣で斬り殺されるのを見て、彼女は彼らのもとへ駆け寄り、彼らの血を少し取り、それをもって自分自身と息子に塗った。そして、熱意に燃え、王を呪い、大声で叫んだ。

「このユダヤ人にも、ファラオと同じ運命が待っているだろう。[7434]。」

兵士たちは彼女を捕らえ、王のもとに連れて行き、彼女の言葉を伝えた。王は彼女に一言も語らせることもなく、何も尋ねることなく、直ちに彼女を火刑に処すよう命じた。

大きな火が焚かれ、拷問者たちがこの至福に満ちた女性を縛り上げ、火刑台に投げ込もうとしたとき、彼女の幼い息子が泣き出した。座っている王の姿を見た少年は、王のもとへ駆け寄り、その足に抱きつき、涙でいっぱいの目で、できる限りの言葉で母を救ってほしいと懇願した。

王はこの美しく、言葉巧みな少年を膝の上に抱き上げ、こう尋ねた。

「君は、僕と母さんのどちらをもっと愛しているの？」

少年はこう答えた。

「私は母を愛しています。だからこそ、あなたのところへ来たのです。お願いです、母を解き放つよう命じてください。母が、よく私に説いてくれたあの苦難に、私を連れて行ってくれるように。」

王は彼に尋ねた。

「君が言うその『苦難』とは、一体どんなものなのか？」神の恵みに満たされ、その恵みが彼の中で働いていた少年は、こう答えた。

「その苦しみとは、キリストのために死に、再びキリストと共に生きることを目的とするものです。」

王は尋ねた。

「そのキリストとは、いったい誰のことか？」

少年は答えた。

「私と一緒に教会へ来てください。そうすれば、キリストをお見せします。」それから、再び母親の方を見やり、少年は泣きながら言った。

「私を放して。お母さんのところへ行くから。」

「なぜ母を置いて、私のところへ来たのだ？」と王は反論した。「母のところへは行かず、私たちと一緒にいなさい。リンゴやナッツ、あらゆる美しい果物をあげよう。」

王は、その子が子供らしい知性しか持っていないと思い込み、まるで普通の子供と話すかのように語りかけた。しかし、その子は年齢以上の知性を持ち、真剣な口調でこう答えた。

「私はあなたたちと一緒にいるつもりはありません。母のもとへ行きたいのです。私はあなたがキリスト教徒だと思い、母のことを懇願しに来たのです。しかし、あなたはユダヤ人ですね。だか

[7433] 笏（スキペトル）とは、最高権力の象徴である短い杖のことである。戴冠式の際、君主はこれを右手に持った。

[7434] ファラオ――古代エジプトの王たちの総称である。聖書において「ファラオ」という名称は、ほとんどの場合、固有名詞を伴わずに単独で使用されている。　ここでは、当然ながら、ユダヤ人のエジプト脱出の時期に統治していた、トゥトモシス、あるいはアメンホテプという名のファラオを指している（出エジプト記5–14）。彼は全軍とともに紅海で滅びた（出エジプト記14,15:1–21）。

ら、あなたのもとにはいたくありませんし、あなたの手から何も受け取りません。ただ、母のもとへ行くことを許してほしいだけです。」

王は、幼い子供のその知性に驚いた。一方、子供は自分の母親が火の中に放り込まれたのを見て、王を強く噛みついた。痛みを感じた王は彼を突き飛ばし、その後、そこに立っていた高官の一人に、その子を連れて行き、キリスト教を憎むように、ユダヤ教の律法に従って育て上げるよう命じた。　貴族は子供を引き取り、その賢さに驚きつつ、自分の天幕へと連れて行った。道中、彼は友人と出会い、立ち止まってその子供の話をし始めた。二人は、その赤ん坊の聖なる母が投げ込まれた焚き火のすぐそばに立っていた。　二人が話している最中、少年は連れ去ろうとしていた者の手から抜け出し、素早く走り去って火の中に飛び込んだ。そこで、母を抱きしめ、母と共に焼死した。こうして母と息子は、神の前で芳しい全焼のいけにえとなった。

神に栄光あれ。神は幼子に知恵を与え、預言者の言葉が彼の上に成就された。*「あなたは、幼子や乳飲み子の口から賛美を築き上げ、あなたの敵たちのために、敵と復讐者を沈黙させた」*[7435]。

これらすべてが起こっていたとき、不義の王の諸侯や軍司令官たちは、これほど多くのキリスト教徒の血が流されたことを嘆いた。彼らは王に訴えかけ、流血を止め、毎年多額の貢ぎ物が納められていたこの都市を滅ぼさないよう懇願した。　無法者は彼らの願い通りに行動し、罪なき者の血を流すことをやめた。しかし、彼はこの都市だけでなくナグラン地方全域から、何千人もの乳児や少女を選び出し、その一部を自らの奴隷とし、残りを自身の裁量で貴族や兵士たちに分配した。　かつては自由に至聖なる三位一体を崇拝していたその町全体を、彼は過酷な奴隷制に服従させた後、自らの首都へと向かった。

この神を憎むユダヤ人が帰路についたとき、空に火が現れ、一晩中空を照らし続けた。この火の出現により、ドゥナアンとその全軍は大いに恐れおののいた。そして、火は雨のように地上に降り注ぎ、多大な被害をもたらした。　これは神の怒りのしるしであり、流された血に対する報復の始まりであった。しかし、新たなファラオは改心しようとはせず、神の力強い御手に対して謙虚になることもなかった。彼はキリスト教徒に対して狂おしいほどの激怒を燃やし、自国だけでなく、他の地域や王国においても彼らを根絶やしにしようと企てた。　すなわち、彼はペルシャ王に使者を遣わし[7436]、もし彼が「太陽と、太陽の父であるユダヤの神に恵み深く扱われたい」と望むならば、同様に自国の領土内のすべてのキリスト教徒を虐殺するよう説得した。　ペルシア人は太陽を神として崇めていた。それゆえ、ドゥナアンはペルシア王をキリスト教徒に対する敵に回そうと、ユダヤの神を「太陽の父」と呼んだのである。彼はまた、サラセン人[7437] のアラムンダル王にも書簡を送り、その支配下にあるキリスト教徒を根絶やしにすれば、多量の黄金を与えると約束した。

これらすべてを耳にした敬虔なギリシャの王ユスティンは深く悲しみ、キリスト教徒への迫害に心を痛め、アレクサンドリアの大司教アステリウスに手紙を送り、　、エチオピアの王エレズヴォイに対し、キリスト教徒の血の復讐として、不敬虔なユダヤ人に対する戦争に駆り立てるよう要請した。　さらに、彼自身もエレズヴォイ王に、オミリト地方、とりわけナグランの町でドゥナアンがキリスト教徒に対して行ったすべての行為、および彼がペルシャ王やサラセン人の首長に使者を派遣し、懇願や賄賂をもって彼らをキリスト教徒に対する戦いに駆り立てていたことについても書き送った。　これに伴い、ユスティンは、ドゥナアンと国境を接するエレズヴォイに対し、キリスト教徒の血

[7435] （詩篇8:3）。この詩篇は、主がエルサレムに入城された際、幼子たちの口から発せられた賛美を予表している（マタイ21:16）。

[7436] ペルシャは北東でアラビアと国境を接している。ここでの王とは、当然ながらユスティヌス・ギリシアスの同時代人であるホズラ・ヌギイルヴァンを指す。

[7437] サラセン人は、カスピ海とコーカサスの南方に居住し、シリアやパレスチナにまで広がっていたアラビアの部族である。その名称は、アブラハムの妻サラに由来するか、あるいはトルコ語の「シャラクン」（すなわち「東の」という意味）に由来するとされる。

を渇望するこの神を冒涜する者に対して、戦いを挑むよう要請した。　アステリウス大司教はエレズヴォイを戦争へと駆り立てると同時に、自らも熱心に神に祈りを捧げ、キリスト教徒への助けと敵の撃退を願った。また、ニトリアやスキタ[7438]にいるすべての修道士たちにも使者を送り、祈りを捧げるよう求めた。　エチオピアの王エレズヴォイは、オミリト地方で起こったすべての出来事を、ユスティヌス王やアステリウス大司教からだけでなく、以前から自らも知っていた。というのも、隣接する都市の警備に留まっていた彼の軍勢が全滅していたからである。　神への熱意に燃え、キリスト教徒たちを心から案じていた彼は、直ちにドゥナアンへ出兵しようとしたが、冬であったため叶わなかった。そこで彼は夏を待ちながら、戦争に必要なあらゆる準備を整えた。　冬が過ぎると、彼は自身の軍隊と、援軍として駆けつけた他民族の戦士たちを合わせ、12万人の軍勢を召集した。　冬の間、彼はインドの船70隻を武装させ、さらに貿易のためにやって来たペルシャやエチオピアの商人たちから60隻の船を借り受け、多くの老朽化した船を修理した。　春が訪れると、エレズワは自らの部隊を率いて戦いに赴いた。下エチオピア（[7439]）からは、軍の一部を陸路でオミリト地方へ送り込み、自身は残りの軍と共に船に乗り込み、海路で向かった。彼は、ユダヤの王を四方から包囲するため、陸と海の両方からオミリトの地に侵攻しようとしたのである。　しかし、万事を英知をもって整え、人間の意志ではなく、御自身の測り知れない御計画に従って御業をなされる神は、それが益となることを知っておられ、祝福されたエレズヴォイ王の企てを打ち砕かれた。　陸路でオミリト人へと派遣された彼の軍勢は、砂漠や山々、通行不能で水のない地帯で道に迷い、オミリトの領土にたどり着くことも、引き返すこともできなくなった。何日も彷徨った末、彼らは渇きに耐えきれず、次々と息絶えていった。　生き残ったのはごくわずかであり、彼らは故国へ戻りながら、悲報を伝えました。同様に、船で海を渡っていた王にも幸運は訪れませんでした。ダケルー[7440]という名の町に到着すると、王は船から降り、海辺に建つ教会へと向かった。そこで王は、王冠やポルフィラ、王の衣装、そして威厳の象徴となる品々を脱ぎ捨て、それらを教会の入り口に置いて、乞食のような姿で教会に入り、祭壇の前で感動に満ちて長い間祈りを捧げた。

祈りの中で、神がエジプトや荒野で恩知らずなユダヤ人たちのために成し遂げられた奇跡を思い起こし、王はこう語った。

「ユダヤ人たちは、彼らの恩人であるあなたに対して恩知らずでした。あなたがエジプトから導き出した者たちだけでなく、その子孫たち、そしてその一族全体が、今日に至るまでそうです。」主よ、あなたがご存知の通り、彼らはあなたの都ナグランにどのような悪事を働いたか。そこで彼らは狡猾な手段を用いてあなたの民を捕らえた。彼らはあなたの聖徒たちに対して不法な陰謀を企て、今なお残っているキリスト教徒を地上の面から根絶やしにしようと企んでいる。　もしこれらすべてが私たちの罪のゆえに起こっているのであれば、あなたの慈しみに訴えます。私たちを彼らの手に渡さないでください。むしろ、あなたが望まれるように、ご自身で私たちを裁いてください。なぜなら、偉大さも慈しみも、ともにあなたにふさわしいものだからです！　私たちの敵に私たちを引き渡さないでください。そうすれば、彼らがこう言うことがないように：

[7438] アレクサンドリアの南にはニトリア砂漠があり、そこではエジプトの修道士たち――フェラペウティ――が禁欲的な生活を送っていた。この地での修道生活の礎を築いたのは、聖アントニオ（3世紀）の同時代人である聖アモンであった。ニトリアの地で、聖アモンは修道院を設立し、聖アントニオスはスキト（隠遁所）の建設の礎を築いた。4世紀末には、聖パコミオスの規則に基づいて設立された修道院が60か所近く存在していた。ニトリアの南にはスキト砂漠があり、そこには多くの修道士が暮らしていた。

[7439] 「下」エチオピアとは、当然ながら北部の低地を指す。陸軍はエレズヴォイの指揮下で、フィヴァイダとエジプトを経由して、シナイ半島およびアラビア半島の北部へと進軍した。　そのどちらか（正確には不明）の北部で、軍隊は砂漠や山中で道に迷い、その大半が命を落とした。

[7440] ここでいうのは、もちろんアラビア湾の入り口にあるスキリスという都市であり、インドとの貿易の港として機能していた。

「彼らが頼りにしているキリストはどこにいるのか。彼らが誇りとしている十字架はどこにあるのか？」

こうして涙ながらに祈りを捧げた後、王は教会を出て、その街を後にした。そこへ、ジノンという名の聖なる修道士が、街からそう遠くない場所で、45年間も人里離れた独房に閉じこもって過ごしており、その徳高い生涯ゆえに、神から預言の賜物と未来を知る力を授かったという話を耳にした。王はこの修道士のもとへ、普通の兵士に扮して向かった。彼は、[7441]乳香の入った器を持ち、その下に金を隠していた。老修道士が知らずに、乳香とともに金も受け取ってくれることを期待してのことだった。　老僧のもとに入ると、王は彼に頭を下げ、持参した贈り物を手渡しながら、自分のために祈ってほしいと頼み、さらにこう尋ねた。「キリスト教徒の血の復讐を果たすために向かっているユダヤ人ドゥナアンとの戦いで、神は我らを助けてくださるだろうか？」

先見の明を持つ老僧は、彼が王であることを見抜き、また、香のなかに金が隠されていることも見抜いた。彼は贈り物を受け取らず、こう言った。

「主が*『復讐はわがもの、わたしが報いる』*[7442]とおっしゃっているのを、あなたは聞かなかったのか？　あなたは自らの破滅へと向かう戦争を仕掛けたのだ。あなたの王国は奪われ、多くの人々があなたと共に命を落とすことになるだろう。」

これを聞いて、王はひどく恐れ、泣きながら嘆き悲しんで聖人のもとを去った。深い悲しみと嘆きに苛まれ、一晩中、どうすべきか途方に暮れて考え込んだ。ついに彼は逃亡を決意した。しかし、朝になると、彼は再びその修道士のもとを訪れた。すると、修道士は彼にこう言った。

「この世に、あなたが死を免れることのできる都などない。しかし、もし生き延びて不義の王に打ち勝ちたいのなら、その後、修道者の生活を送ることを誓ってくれ。」

エレズヴォイは誓いを立ててこう言った。

「もし神が私にドゥナアンに対する勝利を与えてくださるなら、私は直ちに王位を捨てて修道士になる。」

王のこの言葉を聞き、その涙を見て、老人は王のために神に祈りを捧げ、かつてサウルがゴリアテと戦うダビデに祝福を与えたように（サムエル記上17:37）、王を祝福してこう言った。

「神があなたと共におられますように！　行け。殉教者たちの犠牲、あなたのために祈るアステリウス大司教と聖なる隠者たちの祈り、そして至福のユスティヌス王の涙に支えられて。あなたはドゥナアンに打ち勝ち、罪なき者たちの血の復讐を果たすでしょう。」

王はその悲しみを和らげ、祝福を受け入れ、喜びながら神を賛美しつつ、自らの軍勢のもとへと向かった。

その頃、オミリスの王ドゥナアンは、エチオピアの王エレズヴォイが海路と陸路の両方から自分に向かって進軍しているという知らせを聞くと、自らも大軍を集め、重装備を整えて自国の国境に陣を張り、エレズヴォイの侵攻を待ち構えた。　ところが、陸路を進んでいたエレズヴォイの軍勢が砂漠で全滅したと聞くと、彼は喜び、もはや陸からの脅威を恐れず、海からの攻撃にのみ警戒するようになった。しかし、そこにも危険はなかった。　エチオピアとオミリトス地方の間には、幅が二スタディオンに満たない[7443]という浅瀬と海峡がある。そこには、水面からわずかに顔を出している大きな鋭い岩が数多く散らばっていた。そのため、この場所は船の航行にとって極めて困難な場所であった。　これに加えて、ドゥナアンはさらなる大きな障害を設けた。彼は太く巨大な鉄の鎖を張り巡らせ、その浅瀬を塞いだ。そうすることで、散在する岩だけでなく、鉄の鎖もまたエレズバの進路を阻み、彼の船が向こう岸へ渡ることを許さなかったのだ。

[7441] 乳香は沿岸エチオピアの天然産物であり、住民たちはこれを没薬やシナモンとともに、広範な貿易を行っていた。

[7442] （ローマ12:19）。本文の意味：人々の行いに対して罰を下す権利は、主のみに属する。

[7443] スタディアは87 1/2サジェンに相当する。ここで言及されている狭い通路は、したがって1/2ヴェルスタよりはるかに短い。

しかし、*「その知恵は測り知れない」*（詩篇146:5）神は、狡猾なユダヤ人の策略を打ち砕かれた。神はその不思議な力によって、この通行不能な場所に、キリスト教徒のための快適な道を開かれたのである。

エレズヴォイがダケラという町から希望に満ちて出航すると、追い風が吹いた。　帆を張ると、彼らは非常に速く進み、数日後にはオミリトの国の境地に達した。そして、狭い浅瀬に近づいたが、まだそのことを知らなかったため、王はまず十隻の船に先んじて渡るよう命じ、その後、自らも乗った二十隻の船を渡しに送り出し、高台から渡航の様子を見守った。　残りの多くの船は、先頭グループが渡り終えるのを待つため、はるか後方に留まっていた。しかし、最初の10隻が出航するやいなや、海の道を司る主なる神は、御自身の忠実な者たちを助けに駆けつけられ、船が滅びるはずだったその場所で、予想をはるかに超える救いを主はもたらされた。　予期せぬ大嵐が海を襲い、波は山のように高く立ち上がった。波は船を捉え、その危険な場所を越えて運んでいった。ただ一隻の船だけが鉄の障壁に引っかかり、岩の上に立ち往生しているように見えたが、神の力によって水が高く盛り上がり、その船を運び去った。 こうして、預言者ダビデの言葉が成就した。「 」*「船に乗って海に出る者、大水の上で業を行う者は、深淵において主の御業と御奇跡を見る」*（詩篇106:23–24）[7444]。

このような奇跡を、神の力強い御手が成し遂げられた。神は、先頭の船たちを波に乗って、岩や鉄の鎖で塞がれた困難な場所を越えさせただけでなく、その鉄の障壁そのものを嵐と波で打ち砕き、残りの船たちのために安全な通路を設けてくださったのである。

危険な場所を最初の10隻の船が通り抜けると、波はそれらを岸辺に打ち上げ、ドゥナアン王がオミリトの全軍を率いて待機していた場所から200スタディオン離れた場所に停泊させた。 一方、エレズヴォイ王も乗っていた残りの二十隻の船は、海峡を横断したものの、風にあおられて先頭グループに追いつくことができず、波に翻弄されて海上に散り散りになってしまった。　岸に接岸した船の存在を知ったドゥナアンは、直ちに3万人の武装した戦士を馬に乗せて派遣し、キリスト教徒たちが船から陸に上がるのを阻止させた。一方、海上に散らばっていた船は、嵐が収まってからようやく先頭の10隻の船に近づいたが、　しかし、それらは停泊したものの、ドゥナアンの兵士たちが岸から激しく攻撃したため、人々は陸に上がることができなかった。残りの多数の船は、3日目にようやく危険な海域を通り抜け、海岸の近くに停泊した。しかし、先頭の船団と合流することはできず、互いに遠く離れており、互いの存在を知らなかった。

エチオピア王が、散在する多くの船が停泊している場所にいると考えたドゥナアンは、自らの軍勢を率いてそこへ向かい、海岸近くに陣を敷いて、敵が船から陸へ上陸するのを阻止した。こうして彼らは長い間対峙し続け、双方は大きな苦難に直面し始めた。　船上にいたエチオピア軍にはパンと水が不足し、岸辺に陣取っていたオミリト軍は灼熱の太陽に苦しめられていた。　そこでドゥナアンは、親族の一人の領主を、騎兵二万を率いて、最前線の船を守り、キリスト教徒が陸に上がるのを阻止していた三万の兵士を援護するために派遣した。その領主には、五本の金の槍を携えた王室の宦官一人も同行した[7445]。 彼らは、小グループに分かれて陸に上陸し、海岸沿いに野営していたキリスト教徒たちと、何日も戦いを繰り広げた。ある日、ドゥナアンに派遣されたその王子は、金の槍を携えた宦官と数人の従者を連れて、陣営を出て狩りに出かけ、そこで夜を明かした。　その夜、岸辺にいたエレズヴォイの兵士たちの一部が、飢えに耐えかねて逃走することに決めた。　彼らは馬を奪い、それにまたがって陣営から逃げ出した。偶然にも、いやむしろ神の導きにより、彼らは獣を待ち伏せしていたオミリトの王子と王の宦官に出くわし、彼らと戦いを繰り広げた。　彼らを打ち負かすと、王の親族である公爵と宦官を槍ごと捕らえ、残りの者たちは剣で斬り殺した。その後、生きた捕虜を王のもとへ連行し、金の槍を携えて自らの船へと戻った。　王は大いに喜び、聖なる十字架の敵を

[7444] （詩篇106:23–24）。これらの言葉の意味は次の通りである。神は人生のあらゆる状況において、人々の運命を導き、その道を整え、障害や危険を取り除いてくださる。

[7445] 金の槍は、王の第一の従者の地位を示す象徴であった。

自らの手に渡り始められた神に感謝し、金の槍は祭壇を飾るために神の神殿に捧げることを約束した。　早朝、王は戦士たちを戦闘態勢に整え、彼らを小さな船に乗せた。陸に上がると、彼らは主の助けを求め、オミリテ人との激しい戦いを始めた。オミリテ人は指揮官を失い、混乱に陥り、後方をさらして逃げ出した。　キリスト教徒たちは彼らを追撃し、藁の茎のように切り倒した。神は彼らを助け、敵は一人も逃げ延びることなく、全員がキリスト教徒の剣の下に倒れた。そのため、ユダヤ教を信仰する王に、自軍が全滅したことを知らせる者など一人も残らなかった。この勝利に際し、キリスト教徒たちは神に感謝の祈りを捧げた。

しかし、キリスト教徒が完全に勝利を祝う時はまだ来ていなかった。後方の船にいたエレズヴォイの軍勢の大部分は、二つの理由から大きな苦境に立たされていた。食料と飲料の備蓄が底をつきかけていたこと、さらに、先頭の船に乗った王がどこにいるのか分からなかったことである。　一方、エレズヴォイは、王の親族と宦官を人質にしていたため、オミリト地方の首都ファロへと向かった。そこにはドゥナアン王の宮殿があった。街の警備が見当たらなかったため、エレズヴォイは難なく街を制圧した。その後、彼は王の居室に入り、ドゥナアンの玉座に着いた。　そのすべての財宝を奪い取り、王妃とその側近たちを捕虜とした。一方、街から逃げ出した者たちは、　でエレズヴォイの船団との戦いを続けていた自国の王ドゥナアンの元へ駆けつけ、エレズヴォイがどのように軍勢を打ち破り、首都と王妃を捕らえたかをすべて報告した。

これを聞いたドゥナアンは激しく恐怖に襲われた。恐怖に支配され、彼は勇気を失い、どうすべきか分からなくなった。主は彼から理性を奪い、無実のキリスト教徒たちの血に対する報復を始めた。不義なドゥナアンは、エレズヴォイだけでなく、自身の重臣や親族までも恐れるようになった。彼らを信用できず、裏切ってエレズヴォイに寝返るのではないかと恐れた彼は、彼ら全員と自分自身を金鎖で縛り上げ、陣営に閉じこもって最期の処刑を待った。　この忌まわしい王がこれほどまでに正気を失ったのは、かつて聖書に記されているエドム、モアブ、カナン諸国の支配者たちと同様に、彼を恐怖が襲ったからである。*「その時、エドムの君主たちは動揺し、モアブの指導者たちは戦慄に襲われ、カナン全土の住民は皆、落胆した」*[7446]。

その間、後方に停泊していた多数の船に残っていたキリスト教徒たちは、この事態を全く知らず、王から遠く離れて大きな動揺と悲しみに包まれながら、熱心に祈りを捧げた。　船上で神聖な典礼を執り行い、聖なる秘跡を拝領した後、彼らは声を揃えて神に助けを請い求めた。すると直ちに、天から次のような声が聞こえてきた。

「ガブリエル、ガブリエル、ガブリエル！」

この声を聞いた信者たちは勇気づけられ、戦いの準備を整えて、小舟で岸へと向かった。すると、彼らの真ん中に、手に鉄の杖を持ったある戦士が現れた。その杖の先端には十字架が掲げられ、もう一方の端は槍のように鋭く尖っていた。　この武器を手に、その戦士は誰よりも先に岸へと駆け寄り、たちまち馬に乗った武装した戦士と交戦し、馬ごと彼を貫いた。馬と騎手が倒れると、たちまちすべての敵は恐怖に駆られ、岸から逃げ去った。　一方、キリスト教徒たちは岸を制圧すると、整然とした隊列を組んで不信心者たちに向かって進んだ。大虐殺が繰り広げられた。主はユダヤ人と異教徒たちを混乱させ、彼らはキリスト教徒に抵抗することができなかった。そして、神に忌み嫌われるドゥナアン王の全軍は、鎌で刈り取られた草のように倒れた。

その後、キリスト教徒たちが王の天幕にたどり着くと、そこには金鎖で縛られ、公爵や親族たちと共に、狂気の状態で座っている王がいた。そして、彼らは皆、この奇妙な光景に驚嘆した。　キリスト教の戦士たちは、彼らに対して何の行動も起こさず、捕虜たちを見張っていた。やがて、彼らの王である至福のエレズヴォイが敵の首都を陥落させたことを知ると、彼らは神から授かった、忌ま

[7446]（出エジプト記15:15）ユダヤ人による紅海の横断と、ファラオとその軍勢の滅亡は、この出来事に神が選民を助け、守ってくださったことを見たすべてのカナン諸民族に恐怖をもたらした。

わしいユダヤ人に対する勝利の知らせを王に伝えた。　王エレズヴォイは、警備のために軍の一部を街に残し、自ら急いでキリスト教徒たちの元へと向かった。ドゥナアンとその随行者たちが金の鎖につながれて座っているのを見つけると、エレズヴォイは自らの手で彼と彼と共にいた者全員を処刑した。　キリスト教徒たちの歓喜は大きく、*「義人は、報復を見る時に喜ぶ」*（詩篇57:11）という言葉に、言葉に尽くせないほどの喜びがあった。

街に戻ると、エレズヴォイは王妃と共に王宮にいたすべての異教徒を処刑し、キリストの敵を完全に殲滅した。　その後、彼はユスティヌス王とアレクサンドリアの大司教に書簡を送り、主が彼らに対して御慈悲を大いに示し、敵を彼らの足元に伏せ、キリスト教徒の血の復讐を果たされたことを伝えた。　皆が神に感謝を捧げた。大司教は直ちにオミリテ人たちの元へ司教や司祭たちを派遣し、生き残った人々に信仰を教え、洗礼を授けるよう命じた。一方、エレズヴォイは各都市に教会を建設し始め、イエス・キリストの御名の栄光を広めていった。　殉教の地ナグランに到着すると、彼は不信心なドゥナアンによって焼き払われた教会を再建し、聖なる殉教者たちの墓を華やかに飾り立て、すべてのキリスト教徒を励まし、彼らを自由の身であると宣言した。　聖アレファの生き残った息子をその町の統治者に任命し、オミリトの全土を短期間のうちに不敬虔な邪悪から清め、聖なる信仰で照らした。　その後、彼はアブラアミアという名の敬虔で徳高い人物を王に据え、キリスト教の教会法および市民法を制定し、統治体制を固めた上で、神を賛美しつつ自らの軍勢を率いて自国へと帰還した。彼の軍勢が多くの戦利品を奪取したため、彼は莫大な富を携えて帰還したのである。

自国に戻ると、エレズヴォイはすべてについて神に感謝を捧げ、王冠をエルサレムへ送った。そして数日後、エチオピア王国と自分自身を神の御心に委ね、すべてを捨てて去った。　夜、彼は王宮から、そして街から密かに抜け出した。その姿は王らしくなく、　あるいは物乞いのような質素な服装で、その近くにあった修道院の独房に身を寄せ、最期を迎えるまでそこから一歩も外に出ることなく、昼夜を問わず神のために勤勉に働いた。　彼の食事は3日ごとにパン一枚だけであり、時にはイチジクやナツメヤシの実を口にすることもあった。彼の独房には、フェルトの敷物、木製のバケツ、そして小さな籠以外には何もなかった。ワインや油は決して口にしなかった。　こうして彼はこの世とその栄光をすべて捨て去り、すべての思いを神に向け、ただ神のみに仕え、十五年間修道生活を送った。彼は至福の死を遂げ、安らかにこの世を去った。これらすべてについて、私たちの神に、今、そして常に、そして世々限りなく、栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調:

今日、光に満ちた受難者の祝日は、私たちにとって喜びの祈願の日である。この祝日を祝うにあたり、天にまします主を賛美しよう。

ペチェルスクの聖アレファの生涯

記念日：10月24日

まことにふさわしく、また正しいことである――神から授けられる恵みだけでなく、災難に対しても常に神に感謝すること。なぜなら、災難は、ヨブの場合のように、義人たちのみに恵みを増すだけでなく、大いなる罪人をも完全な聖人へと変容させるからである。　その好例が聖アレファであり、彼を直接目撃した聖シモン司教は、次のように証言している。

ペチェールスク修道院に、アレファという名の修道士がいた。彼はポロツク[7447]　の出身であった。彼は自分の独房に多額の財産を密かに隠していたが、その吝嗇は甚だしく、貧しい人々に施しと

[7447] ポロツク――現在はヴィテブスク州の県都であるが、かつてはポロツク公国の首都であった。

して一銭も与えたことはなく、自分の生活費さえも一切使わなかった。　ある夜、泥棒が押し入り、彼の全財産を盗んでいった。その時、彼は深い悲しみと嘆きから、命を落とす寸前まで追い込まれた。盗まれた品を探す過程で、彼は無実の人々を襲い、多くの人を不当に苦しめた。修道院の兄弟たちは皆、彼にそのような捜索をやめるよう懇願し、次のように慰めた。

「兄弟よ、*『あなたの悩みを主に委ねよ。主はあなたを支えてくださる』*（詩篇54:23）。

しかし、彼は彼らの言葉に耳を貸さず、辛辣な言葉で皆を苦しめた。

数日後、彼は重い病に倒れたが、それでもなお、不平や冒涜を止めようとはしなかった。　*「すべての人が救われ、真理を知るようになることを望んでおられる」*（テモテへの手紙一2:4）という、人を愛する*主は*、彼に御自身の驚くべき憐れみを示された。ある時、死人のように床に横たわっていたアレファは、何日も沈黙を保った後、皆が予想もしないことに、突然大声で叫び始めた。

「主よ、憐れんでください！主よ、お赦しください！主よ、私は罪を犯しました。すべてはあなたのものです――そして、失ったものを後悔していません。」

その後、彼はすぐに病床から起き上がり、兄弟たちにその叫びの理由を説明し、次のような出来事を語った。

「私は見たのです」と彼は言った。「天使たちが私のところへやって来たのと同時に、悪魔の群れも現れ、私から奪われた富をめぐって争い始めたのです。悪魔たちはこう言いました。『彼はこのことについて神を賛美せず、むしろ冒涜した。それゆえ、彼は我々のものとなり、我々に引き渡されなければならない』と。」　一方、天使たちは私にこう言った。「ああ、哀れな人よ。もしあなたが奪われた財産について神に感謝していたなら、それはヨブのように施しとして数えられていたであろう。なぜなら、施しを行う者は、自らの善意に基づいて行うゆえに、神の前で大きな功徳を持つからである。　しかし、もし誰かが、自らの善意に代わる感謝の心をもって、強引な奪取に耐えるならば、その人は悪魔からの試練を受けているのだ。なぜなら、悪魔は人に喪失をもたらし、その心に冒涜の念を煽ろうとするからである。しかし、感謝の心を持つ人はすべてを神の御心に委ねるものであり、そのような場合の損失は、施しと同等となるのだ。　天使たちが私にこう告げたとき、私は叫んだ。「主よ、お赦しください！主よ、私は罪を犯しました！すべてはあなたのものです――奪われたものも惜しくありません」。すると、悪魔たちは突然姿を消した。天使たちは喜び、失われた銀を施しと見なして、立ち去っていった。

これを聞いた兄弟たちは、罪人を悔い改めの道へと導き、感謝の偉大な力を彼らに告げ知らせてくださった神を賛美した。　一方、神に導かれた祝福されたアレファは、この時から知性も品性も完全に良い方向へと変わり、皆が驚嘆し、使徒の言葉*「罪が増したところで、恵みがさらに豊かに溢れた」*（ローマ5:20）を彼について語り合った。

かつては誰もその冒涜を止めさせることができなかった彼が、その後、自ら絶えず神を称え、ヨブの言葉*「主が与え、主が取り去られた。主の御名がほめたたえられますように！」*（ヨブ記1:21）。また、他の過ちについても熱心に悔い改め、偽りのない貧しさ、人々の目の前だけでなく真に実践する従順、そして外面的・内面的な清らかさにおいて、熱意を示した。　彼は絶え間ない祈り、厳しい断食、そして感謝の美徳に駆り立てられた、肉体的・精神的な多くの他の美徳に励んだ。　かつて金や銀よりも、美徳と神への献身においてさらに豊かになった彼は、多くの労苦の末、永遠の安息へと旅立った[7448]。彼は洞窟に尊厳をもって葬られ、その聖遺物が奇跡的に朽ちないことで、主の御言葉に従い憐れみ深い者たち（マタイ5:7）と同様に、憐れみを受けた者たちの至福に等しい自身の至福を証ししている。彼の聖なる祈りによって、感謝をもって生きる私たちもまた憐れみを受け、彼と共に天の御国において、聖三位一体の神に感謝を捧げることが許されますように。世々限りなく。アーメン。

[7448] 聖アレファは遅くとも1190年には亡くなった。

11月7日

10月25日（旧暦）

聖マルキアヌスとマルティリウスの殉教

10月25日の記念日

不敬虔なアリウス派の異端が広まり、キリストの教会に大きな分裂をもたらしたとき、信じるキリスト教徒たちは、アリウス派からも偶像崇拝者たちからも、激しい迫害を受けるようになった。この頃、キリストを被造物ではなく創造主として、単なる人間ではなく受肉された神として認める者たちは皆、迫害され、拷問を受け、追放され、殺害された。　とりわけアリウス派は、コンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス帝自身が同じ異端に陥り、二人の高官、エウセビオスとフィリッポス――いずれもアリウス派信徒――を宮廷に招き入れた頃から勢力を強めた。彼らは熱心に正統派を迫害し、キリストの教会に害を及ぼした。　こうして、彼らは私たちの聖なる父パウロ・イスポヴェドニク（殉教者）の追放と死の首謀者となり、同調者たちに彼を絞殺するよう指示し、彼らはその命令を実行した。彼の代わりに、彼らはマケドニオス[7449] を総主教の座に就けた。また、他の多くの殉教者や敬虔さの教師たちも、様々な方法で滅ぼした。　これらのキリストの信仰の熱心な擁護者たちの中には、マルキアヌスとマルティリウスという二人の人物がおり、彼らはその教えと著作によって神の教会を飾り立て、「まるで教会の二つの乳首のように、教えの乳を注ぎ出し、霊的な子らを養った」[7450]。 以前、彼らは前述の聖なる殉教者パウロに仕えていた。マルキアヌスは朗読者、マルティリウスは副助祭であった。 また、彼らは書記官[7451] でもあり、総主教の教えを書き留め、敬虔さを確固たるものとする行いを記していた。同時に、彼ら自身も神の御言葉の偉大な説教者であり、教会の擁護者でもあった。彼らはまるで二つの盾のように、異端の矢から教会を守り抜いた。主は、御自身の忠実な弟子たちとして、彼らに口と知恵をお与えになった。それゆえ、彼らに反対する者たちは、その言葉に反論することも、それに立ち向かうこともできなかった（ルカ21:15参照）――― アリアニ派。 聖パウロの追放と死後、異端の首謀者たちはその毒を、彼の弟子であるマルキアヌスとマルティリウスに向けました。まず第一に、彼らは悪意を狡猾さの中に、まるで灰の中の火の粉のように隠し、巧妙な諂いによって彼らを正統信仰から自らの不敬虔へと引き離そうと試みました。　彼らは神の聖徒たちに多量の金を提示し、王から大きな恩寵を請い求め、彼らを主教の座に就かせ、広大な領地の所有者にすることを約束した。ただし、彼らが自分たちが広めようとしている異端に同意することを条件としていた。　しかし、神の聖徒たちはこれらすべてを軽蔑した。金を受け取らず、約束された栄誉を拒絶し、不敬虔な者たちの狡猾さを嘲笑した。彼らは、敬虔さのために、侮辱、不名誉、苦痛、さらには死さえも受け入れることを選び、異端の中で生きて富や名声、栄誉を享受することよりも、その道を貫いたのである。　そこで異端者たちは、聖なる殉教者たちを自分たちの邪教へと誘い込むことが何一つできないと悟ると、彼らに死刑を宣告した。しかし聖人たちは、キ

[7449] マケドニオスは新たな異端の創始者であった。彼は聖霊を神として認めず、父と子の神性および栄光に参与しない被造物であると見なした。マケドニオスの異端は、381年にテオドシウス大帝の治世下で開催された第2回全地公会議において非難された。

[7450] 聖務日課、10月25日、第4歌。

[7451] ノタリオスとは、本来「速記者」を意味する。西暦1世紀には、文書に署名・捺印を行う皇帝の秘書官をそう呼んでいた。　コンスタンティヌス大帝の時代には、最も重要な国家会議の議事録を作成する公証人による秘密の事務局が設置された。同時期、コンスタンティノープル総主教の秘書たちもまた、公証人と呼ばれていた。

リストのために、その死を命そのものよりも切望していたのである。彼らが捕らえられ、処刑場へと連行されたとき、彼らは祈りのために少しの時間を求めた。天を仰ぎ、両手を挙げて、彼らはこう祈った。

「主なる神よ、私たちの心を見えざるうちに造り、私たちのすべての行いを導かれる方よ、あなたのしもべたちの魂を平安のうちに受け入れてください。私たちはあなたのために命を捧げ、屠られる羊のように捧げられたのです（詩編32:15、43:23）。 私たちは、御名のゆえにこのような死をもってこの世を去ることを喜びとします。命の源であられる御方の御許で、永遠の命にあずかる者とならせてください。

このように祈った後、彼らは聖なる頭を剣の下に差し出し、イエス・キリストの神性を告白したために、邪悪なアリウス派の手によって処刑されました。信者たちの一部は、彼らの尊い遺骨を回収し、同じコンスタンティノープル市内のメランディウス門のそばに埋葬しました。 その後、私たちの聖なる父ヨハネス・クラマトルスは、彼らを記念して教会を建立しました。そこでは、聖なる殉教者たちの祈りによって、病める人々に様々な癒しがもたらされ、三位一体において永遠に賛美される神の栄光が示されました。アーメン。

コンダク、第4声：

幼少の頃から善行に励み、マルキアヌスよ、賢きマルティリウスと共に、背教者アリウスを打ち倒し、正統の信仰を傷つけることなく守り抜き、賢き師パウロに従った。それゆえ、彼と共に永遠の命を得た。まことに、三位一体の最も立派な擁護者たちよ。

聖殉教者アナスタシオスの記念日

記念日：10月25日

聖アナスタシウス（[7452] ）は、自ら進んで迫害者たちの前に現れ、キリストを真の神であり万物の創造主であると勇敢に告白した。このような真の信仰における不屈の姿勢ゆえに、彼は剣で斬り殺され、その遺体は海に投げ込まれた。 ある敬虔な女性が、多大な努力の末、海から聖遺骨を回収し、香を塗って葬送の衣をまとわせ、自宅の礼拝堂に安置した[7453] 。聖人の棺の前では、多くの癒やしが起こった。

11月8日

10月26日（旧暦）

聖なる栄光ある大殉教者ディミトリオスの受難と奇跡

記念日：10月26日

[7452] 聖アナスタシウスは、毛織物の撹拌職人でした。アクイレイア（イタリア北部の都市）からダルマチアの海辺の町サロナへやって来た彼は、キリストを公に告白したため、ディオクレティアヌス帝の治世（284～305年）に殉教しました。

[7453] この敬虔な女性――裕福な貴婦人アスクレプシア――は、聖遺骨を取り出した者に報奨を与えると約束していた。 聖遺物がアフリカ人によって発見された際、その夫人の使用人たちは、自分たちが上司に報告したい者だけに聖遺物を引き渡すよう強要した。その際、アフリカ人たちは聖遺物の一部――おそらく頭部――を持ち帰り、アフリカへ送った。

聖大殉教者ディミトリオスは、高貴で敬虔な両親の息子であり、父が軍司令官を務めていたテッサロニキの町出身であった。　当時、不信心な王たちはキリスト教徒に対して激しい迫害を繰り広げていた。そのため、主イエス・キリストを密かに信じ、その戒めを守っていたディミトリオスの父は、異教徒たちの恐ろしい脅迫を恐れ、公然とその聖なる御名を告白することを敢えてしなかった。彼は自邸の奥深くにある密室に、金や宝石で飾られた二つの聖なるイコンを安置していた。その一つには我らの主イエス・キリストが、もう一つには至聖なる聖母マリアが描かれており、彼はこれらのイコンの前でろうそくを灯し、香を焚いていた。　この人里離れた聖所において、彼は妻と共に、天にまします真の神、その独り子、そして無原罪の御母に、しばしば祈りを捧げていた。この敬虔な夫婦は、貧しい人々に惜しみなく施しを与え、困窮している人々を決して拒むことはなかった。　ただ一つ、彼らを深く悲しませていたことがあった。それは、彼らに子供がなかったことである。彼らは主に対し、後継者を授けてくださるよう熱心に願い求め、しばらくしてその願いは叶った。

至高なる御方は彼らの祈りに耳を傾け、聖ディミトリウスという息子を授けてくださった。両親の喜びは計り知れず、彼らは主を深く感謝した。ソリュン全土が、その総督の喜びを分かち合い、総督は街全体、とりわけ貧しい人々のために宴を催した。

少年が成長し、真理を理解できるようになると、両親は彼を聖なるイコンが安置された聖堂に連れて行き、それらを指さしながらこう言いました。

「これが、天と地を創造された唯一の真の神の御姿であり、こちらは至聖なる聖母マリアの御姿です。」

両親は彼にキリストの聖なる戒めを教え、人が主イエス・キリストを知るためのあらゆる道を説明し、邪悪な異教の神々への信仰がいかに虚しく、破滅的であるかを彼に示した。

この時から、ディミトリは両親の言葉によって諭され、とりわけ天からの聖霊の導きを受けて、真理を悟った。すでに神の恵みが彼の上に宿っていたのである。彼は全身全霊で主を信じ、聖なるイコンを崇め、畏敬の念をもってそれらに口づけをした。

そこでディミトリイの両親は、司祭と知人である数人のキリスト教徒を呼び寄せ、自分たちの隠れ家である礼拝堂で、父と子と聖霊の御名によってその少年を洗礼した。

聖なる洗礼を受けたディミトリは、真の信仰を学び、年を重ねるにつれて知恵も深まり、徳の階段をますます高く登っていった――そして、神の恵みはますます彼を照らし、導いていった。

ディミトリウスが成人した頃、両親はこの世を去り、息子に神に喜ばれる生き方の模範を示し、全財産を彼に相続させた。

一方、マクシミアヌス帝は、テッサロニキ総督の死を知ると、その息子である聖ディミトリオスを宮廷に呼び寄せた。彼が聡明で戦いに勇敢であることを見抜いた帝は、彼をテッサロニキ地方全体の統治者に任命し、その職務を委ねるにあたり、こう言った。

「汝の故郷の街を守り、不敬虔なキリスト教徒を排除せよ。十字架にかけられた方の御名を呼ぶ者は、誰であれ死に至らしめよ。」

王の任命を受け入れたディミトリオスは故郷に戻り、市民たちから栄誉をもって迎えられた。彼はかねてより、故郷の街に真の信仰の光を確立することを望んでおり、テッサロニキの住民たちが無機質な偶像を崇拝しているのを見るたびに心を痛めていた。　さて、街に到着すると、彼は直ちに人々の前で、我らの主イエス・キリストを告白し、賛美し始めた。彼はすべての人にキリストの戒めを教え、異教徒たちを聖なる信仰へと導き、邪悪な多神教を根絶した。つまり、彼はテッサロニキの人々にとって、第二の使徒パウロであったのである。　この噂はすぐにマクシミアヌス帝自身の耳にも届いた。皇帝は、自らが任命した総督ディミトリオスがキリスト教徒であり、すでに多くの人々を自らの信仰へと改宗させたことを知ると、激しく怒りを露わにした。ちょうどその頃、サルマタ戦争

[7454] から帰還する途中、皇帝はテッサロニキに立ち寄っていた。 マクシミアヌスが街に到着する前から、ディミトリオスはルッポという名の忠実な家来に、両親から受け継いだ　すべての財産――金、銀、宝石、衣服――を託し、これらすべてを貧しい人々や困窮している人々に配るよう命じた。

「この地上の富を彼らの間で分け与えなさい」と聖人は付け加えた。「我々は天の富を求めよう。」

そして聖人は自ら祈りと断食に励み、そのようにして殉教の冠を受ける準備を整えた。王は直ちに、ディミトリについて聞いた話が真実かどうかを確かめ始めた。ディミトリは恐れることなく王の前に進み出て、自分がキリスト教徒であることを告白し、異教の多神教を非難し始めた。　邪悪な拷問官は直ちに、真の信仰を告白したこの聖人を牢獄に投獄するよう命じた。牢獄に入った聖人は、預言者ダビデの言葉を引用して祈った。「*神よ、急いで私を救い出してください。[急いで]、主よ、私を助けてください*」（詩編69:2）。「*主なる神よ、あなたは私の希望であり、私の若き日から私の頼みです。私は母の胎内からあなたに依り頼んできました。あなたは私を母の胎から導き出してくださいました。あなたへの私の賛美は絶えることがありません。　私があなたに歌をささげるとき、私の口は喜び、あなたが救ってくださった私の魂も喜びます。そして、私の舌は毎日、あなたの真実を告げ知らせるでしょう*」（詩編70:5, 6, 23, 24）。

ディミトリイは、まるで明るい宮殿にいるかのように牢獄に座り、神を賛美し、栄光を帰していた。悪魔は彼を脅かそうと、サソリに変身し、聖人の足を刺そうとした。　聖人は十字の印を切って身を守ると、恐れることなくサソリを踏みつけ、ダビデの言葉を唱えた。「*あなたはアスピドやバシリスクを踏みつけ、獅子や竜を踏み砕くであろう*」（詩編90:13）。

このように牢獄で時を過ごす中、聖人は神の天使の訪問を受ける栄誉に浴した。まばゆい光の中に、天の使者が美しい楽園の冠を戴いて彼の前に現れ、こう言った。

「平安あれ、キリストの苦難者よ。勇気を出し、強くあれ！」すると聖人はこう答えた。

「主を喜び、わが救い主なる神を喜び祝う！」この天使の出現は、聖なる殉教者を慰め、勇気づけた。彼は、自らの血をもってキリストの真の信仰の告白を刻み込みたいという願いを、さらに強く抱くようになった。

その間、王は競技会を催し、見世物を楽しみ始めた。王には、ヴァンダル族[7455] 出身の、リーという名の傑出した戦士がいた。　彼のために高い土台を築くよう命じたマクシミアヌスは、リーが敵と戦い、彼らを高所から槍の上に突き落として苦痛に満ちた死へと追いやる様子を、大いに楽しみながら眺めていた。観客の中には、ネストルという名のキリスト教徒の青年が一人いた。　彼は、信仰の導師であった聖ディミトリウスと、霊的な絆で結ばれていた。リーが多くの者を殺し、とりわけキリスト教徒を激しく虐殺しているのを見て――後者たちは無理やりリーとの戦いに駆り出されていた――この若者は意気込みを奮い立たせ、皇帝の格闘士と戦いたいと願った。　しかし、戦いに臨む前に、彼は牢獄にいる聖ディミトリオスのもとへ向かった。そこでネストルは、リーが行っているすべてのことを彼に語り、この容赦ないキリスト教徒の迫害者と戦いたいと告げ、聖人から祝福と祈りを求めた。ディミトリオスは彼に十字の印を授け、こう予言した。

「お前はリーに勝利し、キリストのために苦難に耐えることになるだろう！」

闘技場のそばに近づくと、ネストルは皆に聞こえるように叫んだ。

「ディミトリイの神よ、私の敵との戦いを助けてください！」

その後、リーとの戦いに臨んだネストルは、王の力士を打ち負かし、土壇から鋭い槍の先へと突き落とした。リーの死は王を深く悲しませ、王は直ちに、至福のネストルに死刑を執行するよう命じた。　しかし、それだけではマクシミアヌスを慰めることはできず、彼は一日中、そして一晩中、

[7454] 「サルマタ」という名称で知られるのは、現在のロシア南部、一部はドイツやオーストリアに居住していた様々な部族である。

[7455] ヴァンダル族は、主にバルト海沿岸に居住していたゲルマン系の民族である。

リーの死を嘆き続けた。ネストルがディミトリイの助言と祝福を受けてリーと一対一の闘いを繰り広げたことを知ると、王は聖なる大殉教者をも槍で貫くよう命じた。

「リーは」と、不法な拷問者は考えた。「ネストルの手によって槍の穂先に突き落とされた。彼が味わった死と同じ死を、聖ディミトリウスも味わわなければならない。我らが愛する格闘家リーを滅ぼしたのと同じ死で、彼も滅びさせよう。」

しかし、狂った拷問者は、義人と罪人の死は同じだと錯覚していた。彼はこの点で誤っていた。なぜなら、罪人の死は残酷であるが、聖人の最期は主の御目には尊いものだからである。

10月26日の朝が明けかけるやいなや、兵士たちがディミトリウスの牢獄に押し入った。彼らは、祈りを捧げている聖人を発見すると、即座に彼に襲いかかり、槍で貫いた。こうして、このキリストの殉教者は、その尊く聖なる魂を創造主の御手に委ねたのである[7456]。

その夜、キリスト教徒たちは、塵の中に不名誉にも倒されていた聖人の遺体を密かに運び出し、敬虔に埋葬した。

聖大殉教者の至福の死の現場には、彼の忠実な僕である前述のルッポがいた。彼は、主人の尊い血に染まった衣を敬虔に受け取り、その血で指輪も浸した。この衣と指輪によって、彼は多くの奇跡を行い、あらゆる病を癒やし、邪悪な霊を追い払った。

こうした奇跡の噂はテッサロニキ中に広まり、病める人々がこぞってルッパのもとへ集まってきた。これを知ったマクシミアヌスは、福者ルッパを捕らえ、その首を刎ねるよう命じた。こうして、この善良な僕は、主である聖ディミトリオスに続き、天の御国へと旅立った。

長い時が経ち、キリスト教徒への迫害が収まると、聖ディミトリオスの棺の上に小さな教会が建てられた。そこでは多くの奇跡が起こり、多くの病人がその病から癒やされた。あるイリュリアの貴族、レオティオス（[7457]）という人物が、重く不治の病に倒れた。 聖殉教者の奇跡を耳にした彼は、信仰をもって聖大殉教者ディミトリウスに祈りを捧げた。彼が教会に運び込まれ、聖大殉教者の聖遺骨が埋葬されていた場所に横たえられると、彼は即座に癒やされ、完全に健康な状態で立ち上がり、神に感謝し、神の御心に適う聖ディミトリウスを賛美した。

感謝の念から、聖レオティオスはこの栄光ある大殉教者を称えるために、壮大で美しい教会を建てたいと願った。　以前の小さな教会は取り壊され、基礎のための溝を掘り始めたところ、聖大殉教者ディミトリウスの聖遺骨が、全く無傷で、腐敗の跡もなく発見された。そこから芳香のある聖油が流れ出し、街全体が香りに包まれた。

この霊的な祝典には、大勢の人々が集まった。聖遺骨は深い敬虔の念をもって地中から取り出され、その際、数え切れないほどの病人が、流れ出た聖油による塗油によって癒やされた[7458]。レオティオスは、自身の癒やしよりも、聖遺骨の発見そのものを喜んだ。　まもなく彼は着手した事業を完了し、その場所に聖ディミトリウスの名に因む美しい教会を建てた。ここで、金と銀で覆われ、宝

[7456] 聖人の没年は306年頃であった。

[7457] レオンティウスは、当時テッサロニキ地方も属していたイリュリクで要職に就いていた。

[7458] 神が御自身の偉大な聖人を称えるために御許しになった最も驚くべき奇跡の一つは、その尊い遺骸から聖油が流れ出たことである。この流出は、神の恵みの驚くべきしるしである。聖油の流出は7世紀から始まった。多くの著述家や歴史家が、この不可思議な現象について証言している。　14世紀後半に生きた著述家の一人、ディミトリオス・クリソロゴスの証言を引用しよう。「それ（すなわち聖油）は、その性質上、水ではなく、水よりも濃く、地上のいかなる物質――液体であれ固体であれ、あるいは人工的に調製されたものであれ――にも似ていない……　それは、人工的に調合されたものだけでなく、神によって自然に創造されたものも含め、あらゆる香よりも驚くべきものである」。　このミロによる塗油を通じて、多くの癒やしがもたらされた。キリストを信じない民でさえ、この不思議な液体を大切にしていた。例えば、1429年にトルコ軍がテッサロニキを略奪した際、敵の中でも分別ある者たちは、その治癒力について多く耳にしていたこのミロを、ある程度の量持ち帰ろうとした。　聖教会は、聖ディミトリオスを「聖油を流す者」と呼び、このキリストの修道士を次のように称賛している。「香ばしく尊き聖油よ、ディミトリオスよ、湧き出る泉よ（カノン、第1歌）。あなたの聖油の泉は、絶えることなく流れ出ている」。

石で飾られた聖櫃の中に、大殉教者の尊い遺骨が安置されたのである。　しかし、レオティウスの配慮はさらに及んでいた。彼は村やブドウ畑を購入し、それらをこの教会の奉仕者たちの生活費として提供した。故郷に戻る時が来ると、彼は聖人の聖遺物の一部を持ち帰り、自分の街にディミトリオスの名を冠した教会を建てようと企てた。　しかし、聖人が現れて、遺骨のいかなる部分も取り分けることを禁じた。そこでレオティウスは、聖人の血に染まった埋葬布のみを持ち帰り、それを金の聖櫃に納めて、故郷のイリュリアへと向かった。　旅の途中、聖人の祈りによって、そのマントから多くの奇跡が起こった。ある時、レオンティウスが帰路の途中で川を渡らなければならなかったが、その川は激しく氾濫し、恐ろしい勢いで荒れ狂っていた[7459]。恐怖と戦慄が彼を襲ったが、突然、聖ディミトリウスが彼の前に現れ、こう言った。

「聖衣の入った聖櫃を手に取り、恐れるのをやめなさい。」

レオティウスは聖人の助言に従った。その結果、彼自身も同行者たちも全員無事に川を渡り切った。故郷に戻ると、彼はまず第一に、大殉教者ディミトリオスの名に因む美しい教会を建立した。この偉大なキリストの修道者の名を信仰をもって呼び求め、レオンティウスは聖人の祈りによって奇跡を起こした。イリュリアの統治者は重病を患っており、頭から足先まで全身が膿と痂皮に覆われていた。　しかし、レオティオスは聖ディミトリオスに祈りを捧げることで、その病人を重い病から救い出した。また、ある出血の病を患う者を驚くべきほどに癒やし、別の悪霊に取り憑かれた者を治した。聖人の祈りによって、他にも多くの奇跡がそこで起こった。しかし、とりわけ多くの奇跡が起きたのは、この大殉教者の聖遺骨が安置されていたテッサロニキであった。

ある日、この聖なる大殉教者に捧げられた教会で火災が発生した。特に、神の御使いの聖遺物の上にある銀の天蓋が甚大な被害を受け、火によって溶けてしまった。　当時、大司教であったエウセビオスは、その天蓋を新たに作り直すことに大いに心を砕いていた。しかし、彼の手元には銀があまりにも不足していた。この教会には、火災の際にも全く無傷で残っていた銀製の玉座があった。大司教はこの玉座を溶かして、聖人の棺にかかる天蓋に作り変えることを企てていたが、その意図についてはまだ誰にも明かしていなかった。ちょうどその頃、この教会にはディミトリという名の敬虔な司祭が一人いた。聖なる大殉教者が彼に現れ、こう言った。

「行って、この町の司教にこう伝えなさい。『私の教会にある玉座を鋳直そうなどとは、決して企ててはならない』と。」

ディミトリオスは直ちにエウセビオスのもとへ赴き、その企てを断念するよう告げた。大司教は当初、長老の言葉に深く動揺したが、やがてディミトリオスが何らかの形で自分の企てを知ったのだろうと考え、驚きを収めると、むしろ長老を叱責した。　数日後、大司教はすでに職人たちを自分の元へ呼び出すよう命じていた。まさにその頃、長老ディミトリウスが再びエウセビオスのもとを訪れ、こう言った。

「聖なる大殉教者が、再びこの罪深い私の夢の中に現れ、あなたにこう伝えるよう命じました。『私への愛ゆえに、玉座の水を移し替えてはならない』と。」

大司教は再びその長老を厳しく追い返したが、それでも当面は玉座の塗り替えを命じなかった。しばらくして、彼は再び玉座を譲り渡そうとしたが、聖ディミトリウスが同じ長老の前に現れてこう言った。

「落胆しないでください。私の教会と街のことは、私が自ら面倒を見ます。その世話は私に任せてください。」

その時、大司教はもはや涙をこらえきれず、周囲の人々にこう言った。

「兄弟たちよ、もう少し待とう。キリストの御心にかなう聖人が、自ら私たちを助けると約束してくれたのだから。」

[7459] それはドナウ川であった。

大司教が言葉を終えるやいなや、ミナという名のテッサロニキの市民がやって来て、75ポンドの銀を持ち込んだ。

「聖ディミトリオスは、たびたび私を危険から救い、死の淵からも救ってくださったのです」とミナは語った。「私はかねてより、この慈悲深い守護者であり、驚くべき擁護者である聖人の教会へ、献金をしたいと願っていました。今朝早くから、ある声が私にこう促していたのです。

『さあ、行って、ずっと前からしようと思っていたことをしなさい』と。銀を捧げながら、ミナはこの銀が、大殉教者の墓の天蓋に費やされることを願った。その後、テッサロニキの他の市民たちも現れ、同様に銀を持ち寄った。これらの寄付金によって、聖大殉教者ディミトリオスの墓に美しい天蓋が造られた。

マウリキウス帝の治世中（[7460] ）、アヴァール族（[7461] ）はビザンツの住民に多額の貢納を要求したが、マウリキウスはその要求を拒否した。そこで彼らは、主にスラブ人からなる巨大な軍勢を集め、広範な貿易と莫大な富で知られていたソロン（テッサロニキ）を攻略しようと決めた。 マウリキウス皇帝はこの都市に軍隊を派遣したが、その直前に猛威を振るった疫病によってテッサロニキの住民数は大幅に減少しており、さらに敵軍の兵力は10万にも及ぶほど膨大であった。 敵が到着する10日ほど前、聖ディミトリオスはエウセビオス大司教の前に現れ、この街に恐ろしい危険が迫っていると告げた。しかし、テッサロニキの人々は 敵軍が街に近づくのはまだ先のことだと考えていた。ところが突然、予想に反して、敵が城壁のすぐ近くに姿を現した。 敵は夜間に何の妨げもなく街に侵入することもできたが、聖ディミトリオスの祈りにより、全能の神の力強い御手は、不思議な方法で恐ろしい敵を街のすぐ手前で食い止めた。敵は、街の外にある要塞化された修道院の一つをソリュンそのものと勘違いし、その下で一晩中待機していたが、 翌朝、彼らは誤りに気づき、街そのものへと突進した。敵部隊は真っ直ぐに城壁への攻撃を仕掛けたが、その時、城壁の上で、皆の目の前で聖ディミトリウスが武装した戦士の姿で現れ、城壁に登った最初の敵を槍で突き刺し、城壁から突き落とした。 その男が落下する際、他の攻撃者たちも巻き込んでしまった――その時、敵たちは突然恐怖に襲われ、即座に撤退した。しかし、包囲戦は終わらなかった。むしろ、まだ始まったばかりだったのだ。数多の敵を目の当たりにし、最も勇敢な者たちでさえ絶望に襲われた。 当初、誰もがこの街の滅亡は避けられないと考えていた。しかしその後、敵の敗走と不思議な守護者の加護を目の当たりにし、住民たちは勇気づけられ、テッサロニキの守護聖人である聖ディミトリオスが、故郷の街を見捨てず、敵の手に渡ることを許さないだろうと期待を抱き始めた。 その間、敵は都市を包囲し始め、投射兵器を近づけて城壁の土台を揺さぶり始めた。投射兵器から放たれた矢や石の嵐が昼の光を覆い隠し、すべての希望は天からの助けにかかっていた。人々は聖ディミトリオスの教会に詰めかけた。 その頃、街にはイリュストリーという名の、神を畏れ、極めて徳の高い人物が一人いた。ある夜、聖大殉教者ディミトリオスの教会を訪れた彼は、教会の玄関で、街を敵から救うよう神とその栄光ある聖人に熱心に祈っていたところ、突然、驚くべき幻視を目にするに至った。 彼の前に、王の護衛のようである二人の輝く若者が現れた――それは神の天使たちであった。教会の扉は彼らの前で自然に大きく開き、彼らは教会の中へと入っていった。イリュストリーは、その後どうなるのか見届けようと、彼らに従った。中に入ると、彼らは大声でこう言った。

「ここに住む主人はどこにおられますか？」

すると、使用人のような風貌の別の若者が現れ、彼らに尋ねた。

「彼に何の用ですか？」

「主が私たちを彼のもとへ遣わされたのです」と彼らは答えた。「彼に何かを伝えるためです。」

[7460] マウリキウスは582年から603年まで在位した。

[7461] アヴァール族は、当時まだキリスト教の光に照らされていなかったスラブ人を臣民としており、ドヌーエ川沿いやカスピ海周辺に居住していた。

聖人の棺を指さして、使用人の若者は言った。

「あそこにいます！」

「彼に私たちのことを伝えてくれ」と彼らは言った。

すると、若者は幕を持ち上げると、そこから聖ディミトリが訪ねてきた者たちに向かって出てきた。その姿は、イコンに描かれている通りであり、彼からは太陽のようなまばゆい光が放たれていた。恐怖とまばゆい光のせいで、イリュストリーは聖人を見ることができなかった。訪れた若者たちはディミトリに挨拶した。

「神の恵みがあなた方と共にありますように」と聖人は答えた。「何があなた方を私を訪ねるよう促したのですか？」

若者たちはこう答えた。

「主が私たちを遣わし、あなたにこの街を離れて主のもとへ行くよう命じられました。主はこの街を敵の手に渡そうとされているからです。」

これを聞いて、聖人は頭を垂れて黙り込み、苦い涙を流した。すると、若き従者が来訪者たちに言った。

「もし、あなた方の来訪が私の主人に喜びをもたらさないことを知っていたなら、彼にあなた方のことを告げはしなかったでしょう。」

すると、聖人も語り始めた。

「わが主は、そうお定めになったのでしょうか？　万物の主の御心とは、尊い血によって贖われたこの町を、主を知らず、主を信じず、主の聖なる御名を崇めない敵の手に委ねることなのでしょうか？」

これに対し、訪れた者たちは答えた：

「もし我らの主がそうお望みになられなければ、私たちをあなたのところへ遣わされることはなかったでしょう！」

すると、ディミトリはこう言った。

– さあ、兄弟たちよ、私の主なる方にお伝えください。そのしもべディミトリはこう言っています。

– 私は、人を愛する主よ、あなたの寛大さを知っています。たとえ全世界の不義が合わさっても、あなたの慈悲に勝ることはありません。あなたは罪人のために聖なる血を流され、私たちのために御自身の魂を捧げられました。どうか今、この町にあなたの憐れみを示し、私にこの町を去るよう命じないでください。　あなたご自身が私をこの町の守護者に任命されました。私の主よ、私にあなたに倣うことをお許しください。この町の住民たちのために私の命を捧げさせてください。もし彼らに滅びが定められているのなら、私も彼らと共に滅びましょう。　主よ、皆があなたの聖なる御名を呼び求めているこの町を、どうか滅ぼさないでください。たとえこの人々が罪を犯したとしても、彼らはあなたから離反したわけではありません。あなたは悔い改める者の神だからです。

やって来た若者たちはディミトリオスに尋ねた。

「私たちを遣わした主人に、そう答えてよいのでしょうか？」

「はい、そう答えてください」と彼は言った。「主は*『怒りを最後まで保たず、永遠に憤り続けられることはない』*（詩編102:9）と、私は知っているからです。」

そう言うと、聖人は墓室に入り、聖なる聖櫃は閉ざされた。そして、彼と語り合っていた天使たちは見えなくなった。これが、イリュストリーが不思議で恐ろしい幻の中で目撃した光景である。やがて我に返った彼は、地面にひれ伏し、街を護ってくださった聖人に感謝し、テッサロニキの住民を敵の手に渡さないよう主にお願いしてくださったことを称えた。翌朝、イリュストリーは市民たちにその幻視のすべてを語り、敵と勇敢に戦うよう彼らを励ました。　イリュストリーの話を聞いた人々は皆、涙ながらに主に対し、彼らに慈悲を授けてくださるよう懇願し、聖ディミトリオスの助けを

呼び求めた。聖人の取り成しにより、街は無傷のまま保たれた。まもなく、敵は、栄光ある神の聖人が守る街を攻略する力を失い、大きな恥をさらして城壁から撤退した。 包囲の7日目、敵は目立った理由もなく、テントや投射兵器を置き去りにして、無秩序な逃走を始めた。翌日、敵の一部が戻ってきて、次のように語った。

「包囲の初日から、私たちは貴方の側に、我々の軍勢をはるかに上回るほど多くの防衛兵がいるのを見ていました。私たちは、貴方の軍勢が城壁の内に隠れているのだと思っていました。昨日、それが突然我々に向かって突進してきたので、私たちは逃げ出したのです。」

すると、驚いた市民たちは尋ねた。「誰が軍を率いていたのか？」

「我々は見たのだ」と、戻ってきた敵たちは答えた。「真っ白な馬に乗り、雪のように白い衣をまとった、炎のように輝く男を。」

テッサロニキの市民たちはこれを聞いて、誰が敵を敗走させたのかを理解した。こうして聖ディミトリオスは自らの街を守り抜いた。

敵がテッサロニキから撤退して間もなく、この街に別の災難が降りかかった。包囲戦の間、大軍を率いた敵は穀物の備蓄をすべて略奪したため、街では大飢饉が発生し、多くの人々が食糧不足で命を落とした。 故郷の街が飢餓で滅びようとしているのを見て、聖人は海を航行する船に何度か姿を現し、埠頭や多くの島々を巡り、至る所の小麦を積んだ船にソロンへ向かうよう命じ、こうして自らの街を飢餓から救った[7462]。

敬虔なユスティニアヌス帝[7463] が、神の知恵の名に因んでコンスタンティノープルに美しく壮麗な教会を建立した際、彼はソロンへ高潔な人々を派遣し、新しく建てられた教会の装飾と聖別のために、そこから聖人の遺骨の一部を持ち帰らせた。 テッサロニキに到着した使節たちは、皇帝の命令を遂行するため、大殉教者の聖遺物が安置されていた尊い聖櫃に近づいた。すると突然、聖櫃から炎の柱が噴き出し、全員に火花の群れを浴びせかけ、炎の中から声が聞こえてきた。

「立ち止まれ。決して近寄ってはならない。」

恐怖に襲われた者たちは地面に倒れ込んだ。その後、使者たちはその場所の土をわずかだけ採取して王のもとへ戻り、自分たちに起こったすべての出来事を王に報告した。その話を聞いた者たちは皆、驚きを隠せなかった。使者たちは採取した土の半分を王に渡し、残りの半分を教会の聖器箱に納めた。

ある青年オニシフォロスの務めは、聖ディミトリオス教会で蝋燭に火を灯し、ランプの油を補充することだった。悪魔にそそのかされたこの青年は、蝋燭を盗み、密かに売りさばき、その売り上げを自分の懐に入れていた。 聖ディミトリオスは、自分に捧げられた聖堂でなされるこのような悪行を看過しなかった。彼は夢の中でオニシフォルの前に現れ、極めて寛大な態度で彼を諭した。

「兄弟オニシフォールよ、あなたがろうそくを盗んでいることは、私には不快だ。それによって、ろうそくを捧げる人々に損害を与えている。それだけでなく、あなた自身にも害を及ぼしているのだ。あなたのような行いをする者には裁きが待っていることを思い出せ。この悪事をやめ、悔い改めなさい。」

オニシフォロスは目を覚ますと、恥と恐怖を感じた。しかし、しばらくすると聖人の戒めを忘れ、以前と同じように再びろうそくを盗み始めた——すると、すぐに罰が彼に降りかかった。 ある日、ある敬虔な人が早朝に起きて、聖ディミトリオスの教会を訪れ、いくつかの大きな蝋燭を持って来た。彼はそれらに火を灯し、大殉教者の棺のそばに置き、祈りを捧げて教会を後にした。蝋燭に近づいたオニシフォロスは、それを手に取ろうと手を伸ばしたその時、聖人の棺の中から突然声が響いた。

[7462] この奇跡は547年に起こった。

[7463] ユスティニアヌスは527年から566年まで在位した。

「また同じことをしているのか！」

雷鳴のようなその声に打ちのめされたオニシフォールは、たちまち地面に倒れ込み、ある聖職者が入ってくるまで、まるで死人のように横たわっていた。　やって来た聖職者は、恐怖に震える若者を起こした。オニシフォールが正気を取り戻すと、彼はすべてを語った。自分の罪深い情欲、夢の中で聖人が初めて現れたこと、そしてディミトリオスによる二度目の非難についてである。その話を聞いた者たちは皆、大きな恐怖に襲われた。

多くの捕虜が、聖大殉教者ディミトリウスによって異教徒の支配から解放された。　――ある司教が野蛮人に捕らえられ、足枷をはめられていたが、聖人が彼に現れて足枷を解き放ち、聖人の守りのもと、司教は無事にソロンに到着した。また別の時には、野蛮人たちがこの都市の境界内に押し寄せ、多くの住民を連れ去った。　捕虜の中には二人の美しい乙女がいた。彼女たちは刺繍枠を使って、布に様々な花や木、鳥、獣、そして人の顔を巧みに描くことができた。異教徒たちは彼女たちを自分たちの国へ連れ帰り、自国の君主に献上した。彼女たちの技を知った君主は、こう言った。

「お前の国には、驚くべき奇跡を起こす偉大な神ディミトリがいると聞いている。その姿を布に刺繍してくれ。そうすれば、私はその神に拝礼しよう。」

乙女たちはこう答えた。

「いいえ、公爵様。ディミトリは神ではなく、ただ神の偉大な僕であり、キリスト教徒の助け手です。あなたの要求には応じられません。あなたが彼に拝むのではなく、その像を冒涜しようとしていることを私たちは知っているからです。」

「お前たちの生と死は、私の権限にある」と公爵は答えた。「どちらを選ぶか決めなさい。私が求めることを行えば、命は助かる。もし私の命令に従わなければ、即座に処刑されることになる。」

死を恐れた捕虜たちは、聖ディミトリウスの像を刺繍し始めた。聖人の記念日が祝われる日の直前、乙女たちはその仕事を終え、10月26日の夜、刺繍枠の前に座り、自分たちが刺繍した像に身を寄せ、泣き出した。

「キリストの殉教者よ、私たちを怒らないでください」と彼女たちは言った。「私たちは、不義な公爵があなたの像を嘲笑おうとしていることを知っています。私たちはあなたの像を刺繍したくはなかったこと、残酷な死の脅迫の下でこれを強要されたことを、あなたに証人として訴えます。」

こうして聖人の像の前で泣きながら、彼女たちは眠りについた。

彼女たちが眠っている間に、聖ディミトリオスは、かつてアバクムの天使がそうであったように、奇跡的な方法で、その夜、少女たちを彼女たちの作品とともに、自身の祝祭が行われるソロンへと運び、徹夜祈祷の最中に教会内の自身の聖遺物のそばに立たせた。この奇跡を目撃した者たちは皆驚いたが、少女たちは目を覚ますと、こう叫んだ。

「神に栄光あれ。私たちは今、どこにいるのでしょうか？」

驚きで我に返れず、彼女たちはこのすべてが夢の中で起きているのだと思った。

やがて、彼女たちは自分たちが確かにテッサロニキにいて、目の前に聖人の墓があり、多くの祈りを捧げる人々が集うその教会に立っていることを、ようやく確信した。そこで彼女たちは、皆に聞こえるように、自分たちの守護聖人である聖ディミトリオスに感謝を捧げ、自分たちに起こった出来事すべてを語り始めた。　このような驚くべき奇跡に喜びを覚えたテッサロニキの住民たちは、大いなる歓喜をもって聖ディミトリオスの記念日を祝った。そして、刺繍された聖像を祭壇の上に安置すると、そこから多くの奇跡が起こり、三位一体の唯一なる神の栄光を現した。すべての被造物から、神に栄光と誉れと礼拝が永遠に捧げられますように、アーメン。

トロパリオ、第3調：

苦難の中、全宇宙はあなたを偉大な擁護者として見出した、殉教者よ、異教の勢力を打ち破る者よ。あなたはリエウスの高慢を打ち砕き、ネストルに大胆な功績を成し遂げさせたように、聖ディミトリよ、キリスト・神に祈り、私たちに偉大な慈悲を授けてくださるよう願ってください。

コンダク、第3調：

ディミトリエよ、あなたの血の奔流をもって、神は教会を染め上げ、あなたに無敵の要塞を与え、あなたの都を無傷で守り抜かれる。あなたはまさにその確固たる支えである。

- 同日は、ビフィニアのミディキ修道院で修業に励んだ聖アファナシオスの記念日である。彼は814年頃に没した。彼については、聖ニキタ・ミディキオス（4月3日）の伝記に記されている。

11月9日

10月27日（旧暦）

同日は、アジアにおいてキリストを宣教したために様々な拷問の末、マルコ殉教者および彼と共に殺害された人々の記念日である。

聖殉教者ネストルの受難

記念日：10月27日

「ヘルクレス」と呼ばれた不敬虔な王マクシミアヌスは、ディオクレティアヌスの友であり、ソロン（テッサロニキ）の街を訪れた際、キリストを告白した聖ディミトリオスを牢獄に投獄し、自身は娯楽にふけり、競技会に立ち会った。

その際、彼はヴァンダル族出身の「リエ」という名の自分のレスラーを自慢し、彼には誰も勝てないと語った。

このリーは、いわば第二のゴリアテであった[7464]：その身長はすべての人類を凌駕し、外見も性格も獣のようで、その声は咆哮する獅子の唸り声のようであった。　彼の視線と声だけで、彼を見る者は皆震え上がった。その体の強靭さは驚くべきものであり、その力は無敵であった。というのも、彼の中には不浄な精霊が宿っており、その結果、誰も彼の前に立ち向かうことができなかったからである。　彼はすでに数え切れないほどの勇敢で力強い人々を殺しており、その力ゆえに王から大いに寵愛されていた。王自身、人間の血を飽くことなく求めていたため、自らの肉体の力をすべて人間の血を流すことに注ぎ込んだ者を好んでいたのである。

この不敬虔なリーのために、王は街の中心に、柱で支えられた高く広大な高台を設け、そこでリーが皆の目の前で力の競演を行えるようにした。　その高台の下面には、数多くの槍やその他の武器が、刃先を上に向けて突き立てられていた。これは、リーが打ち負かした相手をこれらの鋭い武器の上に投げ落とし、刺さって倒れながら死ぬようにするためであった。そして実際、リーは人々と戦いを繰り広げる際、彼らを高台の下にある槍の上に投げ落とし、死に至らしめた。　王は、大勢の兵士たちと共に、この光景を喜びながら眺め、自らの格闘家を称賛していた。　この光景を、テッサロ

[7464] ゴリアテ――ペリシテ人の巨人――は並外れた身長を誇り、ダビデが投石器で倒した（サムエル記上17章）。

ニキの民もまた見守っていた。　彼らの間には多くの信者がいた。この非人道的な野獣によって流される人々の血を見て、彼らは深く嘆息した。というのも、リーはすでに多くのキリスト教徒を殺していたからである。彼らは不信心者たちによって無理やり土壇に引きずり出され、リーと戦うことを強要されていたのだ。

その町には、ネストルという名の青年が住んでいた。彼は体格がたくましく、顔立ちも美しく、顎にはかすかにひげが生え始めていた。彼は大殉教者ディミトリオスと親しく、彼から聖なる信仰を学んだのだった。無実のキリスト教徒たちが殺されるのを見て、彼は熱意に燃え上がり、力持ちのリーと戦うことを決意した。　牢獄に囚われていた聖ディミトリオスの元を訪れ、彼はその日、リーがどれほど多くのキリスト教徒を殺害したかを語った。

「神に愛される方よ、私のために祈ってください」と彼は言った。「あなたの聖なる祈りによって、神が私を助けてくださいますように。私は行って、あの敵と戦い、彼を打ち負かし、キリスト教徒への侮辱を取り除いてみせます。」

聖ディミトリオスは彼の額と胸に十字を切って祝福し、こう予言した。

「リーを打ち負かし、キリストのために殉教することになるだろう。」祝福を受けた聖ネストルは、直ちに試合の場へと向かい、皆の目の前で上着を脱ぎ捨て、大声で叫んだ。

「私はリヤと戦いたい！」

若者のその大胆さを見て、王は驚き、その美貌と若さを惜しみながら、彼にこう言った。

「リーが、お前よりも勇敢で力強い者たちをどれほど多く打ち負かしてきたか、見ていなかったのか？　お前は背も低く、若すぎるのに、この世に比類なき相手と戦うなど、よくもそんな度胸があるものだ。」

ネストルはこれにこう答えた。

「私が小さく弱くとも、私のキリストの力は偉大で無敵です。私はその方に希望を置き、その御名によって、この巨人と戦いたいのです。」

キリストの名を聞き、ネストルがキリスト教徒であることを悟ると、王は激怒し、ネストルにも他の者たちと同じ運命が待っていると思い込み、直ちに闘技場へ出るよう命じた。　聖ネストルは慎重に闘いの場へと上がった。一方、リーは冗談めかして笑いながら、聖人に向かって迫ってきた。リーが近づいてくるのを見て、ネストルは十字を切って身を守り、大きな声で叫んだ。

「ディミトリの神よ、私をお助けください！」

そして、彼は敵と組み合い、格闘を始めた。かつてダビデがゴリアテと戦う際に彼を強めた神は、不義なリーに対して、御自分のしもべネストルをも強めた――それは不義な王を恥じさせ、御自身の忠実な者たちを喜ばせるためであった。そして実際、小柄なネストルは、その勇敢さにおいて、巨体のリーよりも強かった。　鳥を捕まえるかのように彼を掴むと、ネストルは巨人を高い土台から鋭い槍の上へと投げ落とした。強靭な樫の木のように槍の上に倒れ込んだリヤは、恥辱のうちにその呪われた魂を吐き出し、こうして彼の名声は騒然として消え去り、その誇り高き力は失われ、マクシミアヌスが自らの格闘家を誇示していた虚しい自慢も終わりを告げた。　テッサロニキの民全体――とりわけキリスト教徒たちは、この予期せぬ輝かしい勝利を目の当たりにして、大声で叫んだ。

「ディミトリオスの神は偉大なり！」

王は恥じ入って立ち上がり、寵愛していたリーの死を嘆き悲しみながら、自らの宮殿へと戻った。彼は聖ネストルに激しく怒りを燃やし、彼を捕らえるよう命じた。　さらに、ディミトリオスもまた、ネストルに勝利を予言してその勇気を奮い立たせたため、リエの死に責任があることを知ると、王は二人を処刑するよう命じた。　聖ディミトリイは槍で刺し殺され、聖ネストルは剣で斬り殺された。今や二人は、殉教の模範であるキリストから、天の御国における勝利の冠を授かっている。私たちもまた、聖なる殉教者たちの祈りによって、その恵みにあずかることができるように。

コンダク、第2調:

善き殉教を成し遂げ、今や不滅の栄光を継承された。主の立派な戦士であられたあなたよ、殉教者ディミトリイの祈りによって。賢きネストルよ、彼と共に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

聖ネストル・年代記作家の生涯

記念日：10月27日

いかなる出来事であっても、もし聖書に記されていなければ、忘れ去られ、知識として失われてしまうだろう。　同様に、もし神に教えられたモーセが、世界の始まりと最初の創造、そして私たちの始祖であるアダムについての記録を、その書物の中に残していなかったならば、これらすべては時の経過によって闇のように覆われ、忘れ去られてしまったことでしょう。　しかし、人々の心に御自身の奇跡の記憶を保たれる神は、御心のままの時に、記録者を立てられ、後世の人々が彼らの記したものを読み、そこから恩恵を受けられるようになさるのです。　同様に、主は私たちのロシアの地、聖なるキエフ・ペチェール修道院においても、永遠に記憶される著述家、私たちの尊い父ネストルを現されました。彼は、私たちにとって有益なことを記すことで私たちの目を啓発し、それによって私たちに神への感謝を呼び起こしたのです[7465]。彼は、私たちのロシア世界の始まりと初期の体制について、外的なものだけでなく、とりわけ内面的で霊的な側面――すなわち、ルシにおける修道生活の確立と整備について、聖ペチェール修道院に、まるで楽園のように植え付けられたその生活について、また私たちの霊的な始祖である　聖アントニー、そして彼に続き、その精神によって生み出された他のペチェールスクの聖人たちについても記した。その一人こそが、この称賛に値する著述家であり、彼は彼らの最も完全な生涯を、単に葦の筆で羊皮紙に書き記しただけでなく、自らの汚れなき魂においても、同様の修道者の行いによって刻み込んだのである。　この労作によって、彼は自らも永遠の命の書に名を刻み込んだのであり、それゆえ彼自身も、「*あなたがたの名前が天に記されていることを喜びなさい*」（ルカ10:20）という言葉に値する者となったのである。

尊者アントニオスが洞窟で沈黙の生活に身を捧げ、至福のテオドシオスが修道院を建設していた頃、聖なる修道者の生活を受け入れたいと願って、当時まだ生後十七歳に過ぎなかったこの至福の父ネストルが彼らのもとを訪れた。　まだ修道士になる前から、彼はあらゆる修道者の美徳、すなわち、肉体と魂の清らかさへの配慮、自発的な貧しさ、深い謙遜、　無条件の服従、厳格な断食、絶え間ない祈り、眠ることのない徹夜、そしてその他の天使に等しい功業において、彼はペチェルスクの最初の聖人たち――アントニウスとテオドシウス――の生き方を熱心に模範としていた。　この聖なる二人から、彼はその花開くような若さの最中に、まるで乳飲み子が乳首から乳を飲むように、また渇き切った鹿が山々の洞窟を流れる二つの泉から水を飲むように、あらゆる戒めを同じ愛をもって受け入れた。　そして実際、彼の著作からは、この修道院の尊い創設者たちに対して、彼がどれほど偉大な愛を抱いていたかが明らかになっている。それは、「*言葉や口先ではなく、行いと真理によって*」示される愛であった（Iヨハネ3:18）。　ロシアの空に輝くこの二人の偉大な光の善行を目の当たりにし、彼は「*自分の体と魂をもって*」（参照：Iコリント6:20）熱心に神を賛美した。　主の御前で尊

[7465] 聖ネストルは17歳の時にキエフ・ペチェール修道院で出家し、1091年には聖テオドシウス・ペチェルスキーの聖遺骨発掘に立ち会い、『ロシア年代記』やキエフおよびペチェールスの聖人伝の編纂に尽力した。　彼の著作のうち、年代記の他に、ペチェルスクの聖テオドシウスの伝記および聖ボリスと聖グレブの伝記が現代に伝わっている。1114年10月27日頃に帰天した。

い父たち、アントニウスとテオドシウスが安らかに息を引き取った後、私たちの祝福された父ネストルは、世の事柄においてのみならず――それは彼が誘惑に屈することなく、それ以前にすでに成し遂げていたことである――世の在り方においても、ペチェルスク修道院の修道院長である聖ステファノから、聖なる天使のような修道者の姿を受け継ぐことで、この世から離れることとなった。　その後、彼によって彼は助祭の位にも叙任された。その時、修道者としての位と助祭としての位という二つの天使的な位を身にまとった彼は、日ごとにその徳を高め、あらゆる肉欲を死なせ、あらゆる真理を守り、肉の支配から完全に解放され、完全に霊的な者となり、また真の神の僕であり崇拝者となることを目指した。　なぜなら、彼は主ご自身がこう言われたことをよく知っていたからである。「*神は霊であり、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない*」（ヨハネ4:24）。そして確かに、ネストルは、あらゆる真理からかけ離れた悪霊の霊にどのように打ち勝ったかを、自身の著作の中で十分に明確に示している。彼は至る所で最大の謙遜を示し、絶えず自らを「不適格で、粗野で、無知であり、多くの罪に満ちている」と称して、自らを卑しめているのである。

やがて、神の導きにより、兄弟たちは評議の場で、尊者テオドシオスの聖遺骨を掘り起こし、洞窟から神によって造られた聖なるペチェルスク教会へと移すことを決定したとき、この奉仕を真っ先に引き受けたのが、至福のネストルであった。　深い信仰と祈りを込めて土を掘り進め、彼は一晩中働き続け、聖ペチェルスク修道院のために、かけがえのない宝――聖テオドシオスの聖遺骨――を掘り出した。彼はそれを洞窟から運び出し、その際に起こった偉大な奇跡を目の当たりにし、自らその証言を残した。

そして彼は、年代記の編纂に尽力しながら長きにわたり生きた。永遠の歳月を心に留め、彼は「歳月の創造主」に喜ばれ、この世での生涯を終えた後、その御許へと永遠の安息へと旅立った。彼は洞窟に葬られ、今なおその朽ちることのない尊い遺体がそこに眠り、奇跡を現し続けている。これは、聖人の伝記や年代記を編纂したこの尊者が、天に朽ちることのない住まいを得、神の御国において朽ちることのない冠にふさわしい者とされたことを証ししている。　この敬虔な著者の祈りによって、私たちもまた、その年数が尽きることのない神の子羊の命の書に名を記されるよう、恵まれますように。彼には、父なる神と命を与える聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝がふさわしいのです。アーメン。

聖殉教者カペトリナとエロティイダの記念日

記念日：10月27日

これらの聖人たちは、ディオクレティアヌス帝の治世下、カッパドキアの統治者ゼリキンティオス（[7466]）の時代に生きた。裕福で名門の家系に生まれた聖カペトリーナ[7467]は、全財産を貧しい人々に施し、奴隷たちを解放した。　キリスト教徒であった彼女は捕らえられ、牢獄に投じられたが、その後、偶像への生贄を捧げることを拒んだため、剣で斬り殺された。彼女の侍女エロティイダは、女主人をかばって統治者に石を投げつけたとして、棒による拷問を受けた。拷問の後も無傷であった彼女は、同様に剣で斬り殺された。

[7466] カッパドキア――小アジアの東部。

[7467] 聖カペトリーナの家系について問われた際、彼女はカッパドキアの大司教フィルミリアヌス（3世紀半ばに生きた人物）と同じ家系であると主張した。他の伝承によれば、彼女は単に彼の霊的な娘であると自認していたという。彼女の福者としての死は304年にさかのぼる。

11月10日

10月28日（旧暦）

聖大殉教者パラスケヴァの殉教

記念日 10月28日

不信心なディオクレティアヌス王がキリスト教徒への迫害を開始した頃、イコニアの町には、パラスケヴァという名の気高く美しい乙女が住んでいた。　彼女の両親はキリスト教徒であり、娘に聖なる信仰と主の戒めを守ることを教え育て上げた後、主のもとへ旅立った。彼らは、その祝福された娘に多大な財産を相続させた。

成人すると、パラスケヴァは両親の信仰と行いに倣うようになった。彼女は自分の財産を、若々しい美しさや若さを飾るためでも、贅沢な生活のためでもなく、裸の人々に衣服を与え、飢えた人々を養い、旅人をもてなすために使い始めた。　パラスケヴァは、彼女との同棲を迫る求婚者たちには一切目もくれなかった。彼女はまもなく、唯一の不死の花婿、神の独り子であるキリストの花嫁となり、その方のために聖さと義をもって生きたのである。　彼女は人々の前で、絶えず、毎日、その御名を告白し、それによって彼らを真理の認識へと導いた。

人々の中には、私たちの主イエス・キリストを信じる者もいれば、信じない者たちは聖女を中傷した。しかし、パラスケヴァは彼らの前で大胆に神の言葉を宣べ伝え、魂のない偶像の虚しさを暴いた。　彼女からのそのような非難を聞くことを拒んだ不信者たちは、彼女を捕らえて殴打し、その後、牢獄に投獄した。

その頃、ディオクレティアヌス皇帝によって、この地のすべてのキリスト教徒を根絶やしにするために派遣されたある軍司令官が、イコニウムにやって来た。市民たちは彼のもとに近づき、こう言った。

「尊き将軍よ、この町には、十字架にかけられたキリストを信じ、その教えを説く乙女がいます。彼女は魔術にふけり、その呪術によってすでに多くの人々を、我らの神々への生贄の捧げ物から遠ざけてしまいました。彼女は、我らの神々の像や皇帝自身に対する冒涜を絶えず口にしています。」　神々に拝礼しない者はすべて処刑せよという王の命令を耳にしたため、我々は当該の乙女を捕らえ、現在、牢獄に監禁しております。

これを聞いた軍司令官は、聖なる乙女を自分の元へ連れてきて裁くよう命じた。聖なる殉教者が法廷へ向かう途中、聖霊が彼女を包み込み、その顔は輝きに満ちた。それを見た者たちは皆、驚きながらこう言った。

「見てごらん！彼女は悲しみに打ちひしがれている様子など微塵もなく、その顔はまるで輝いているかのようだ。」

彼女が裁判官たちの前に立つと、軍司令官は彼女を見つめ、その顔の美しさと気高さに驚き、立ち会っていた者たちにこう言った。

「お前たちは、この最も美しい乙女をむやみに誹謗した。太陽のような美しさを滅ぼすことなど、到底あり得ないのだ。」

そして彼は彼女に言った。

「お嬢さん、お名前を教えてください！」

聖パラスケヴァはこう答えた。

「私はキリスト教徒、キリストのしもべです。」

軍司令官は言った。

「お前の美しい顔を見つめていると、私は柔和な気持ちになるが、お前の口から出る言葉は魂の奥底まで憤りを覚える。そんな言葉は聞きたくない！」

聖女は答えた。

「公正な裁きを行う支配者なら誰でも、真実を聞けば喜ぶものですが、あなたは私が語った真実を聞いて、怒りを露わにしました。」

これに対し、拷問官は言った。

「私が怒っているのは、あなたから答えを得られなかったからだ。私はあなたの名前を尋ねたのに、あなたは教えてくれなかったではないか。」

聖女は答えた：

「まず第一に、私は永遠の命における私の名を告げるべきであり、その後に初めて、この世の命における名を告げるべきでした。ですから、私は永遠の命における私の名、すなわち私がキリスト教徒であり、キリストのしもべであることを告げました。そして、この世の命においては、私はパラスケヴァという日に生まれたため、両親からパラスケヴァと名付けられました（パラスケヴァはギリシャ語で『金曜日』を意味します）。」

「私の両親は」と聖女は続けた。「第六の日、すなわち私たちの主イエス・キリストの自由で命を与える受難の日を、常に断食と祈りと施しをもって尊びました。　彼らはキリストを称えるためにそうしていたのです。人類への愛ゆえに、この日に主は御自身の血を流し、私たちのために十字架上で御命を捧げられたと信じていたからです。神は、彼らの高潔な夫婦生活の果実として、まさに彼らが主の受難を偲びながら徳高く敬っていたその日に、この不肖のしもべである私を授けてくださいました。　神は、この日にちなんで私にその名を授けることをお定めになり、こうしてパラスケヴァの日から、私もパラスケヴァと呼ばれるようになった――私は、キリストの受難に与る者である。

軍司令官は言った。

「そのような狂った言葉を言うのはやめ、我らの神々に生贄を捧げよ。そうすれば、私はお前を妻として迎え入れ、お前は莫大な富を手に入れ、この地で多くの人々からお前を称賛するだろう。」

これに対し、聖パラスケヴァはこう答えました。

「私には天に花婿、イエス・キリストがおられます。他の夫など必要ありません。」

すると、軍司令官は言った。

「お前の美しさを憐れみ、お前の若さを慈しんでやろう。」

「一時の美しさを憐れんではいけません」と聖女は言った。「今は咲き誇っていても、明日の朝にはしおれてしまいます。むしろあなた自身を憐れんでください。あなたには永遠の苦しみがお待ちしているのですから。」

その後、軍司令官は激怒し、彼女の衣服を引き裂き、厳しい鞭で打つよう命じた。　聖女が打たれている間、彼女は一声も声を上げなかったが、口と心で　、キリストに呼びかけ、苦しみの中での助けを懇願していた。一方、軍司令官は、依然として彼女の美しさを惜しんで（彼はその美しさに驚嘆し、魅了されていたのだ）、彼女への殴打を止めるよう命じ、穏やかにこう語りかけた。

「お嬢さん！　その若さを大切にしなさい。この最も美しい青春を台無しにしてはならない！神々に生贄を捧げれば、命は助かるし、我々からもさらに大きな敬意を払われるだろう。」

彼女はこれに対し何も答えなかった。すると、軍司令官は怒りを露わにして言った。

「この邪悪なキリスト教徒の末っ子め、私に答えもしないのか？」聖女はこれに対し、彼の顔に唾を吐きかけた。その後、拷問官は恐ろしいほど激怒し、彼女を木に吊るし、鉄の爪で容赦なく肋骨を引き裂き、山羊の毛皮で傷口をこすりつけるよう命じた。こうして彼女の肉体は骨まで引き裂かれた。　拷問官は、殉教者がもうほとんど息をしていないことから、まもなく死ぬだろうと考え、彼

女を木から降ろし、牢獄に投げ込んだ。　彼女がそこでかろうじて息をしており、残酷な傷のためにすでに声も出せない状態で横たわっていた時、真夜中に天使が現れた。その肩と胸は十字架の形をした金の帯で締められ、両手にはキリストの受難の道具――十字架、いばらの冠、槍、杖、そして唇――を握っていた。天使は彼女にこう言った。

「乙女よ、キリストの受難に共にある者よ、起きなさい！私はあなたを訪ねるために遣わされた。そして、あなたの苦しみにおける慰めとして、私は我らの主の受難の道具をもたらしたのだ。」この尊い道具たちを見よ。朽ちることのない花婿の十字架と茨の冠。命を与える肋骨を貫いた槍、全世界の罪の赦しを記した杖、そしてアダムの罪を拭い去った布を見よ。さあ、起き上がれ！主キリストがあなたを癒やしてくださる！

すると、殉教者はまるで眠りから覚めたかのように起き上がり、現れた天使が近づいて、聖なる殉教者のすべての傷を唇で拭い去った。彼女の全身は強健で健康になり、その顔の美しさはさらに際立つものとなった。彼女は畏敬の念を込めてキリストの受難の道具に口づけをし、神を賛美した。その後、その天の使者は姿を消した。

朝になると、牢屋の看守たちがやって来て、パラスケヴァが元気で祈りを捧げているのを見つけた。彼女の体には傷一つなかった。　彼らは驚き、そのことを軍司令官に報告した。司令官は彼女を自分の元へ連れてくるよう命じ、彼女が健在であるのを見て驚いた。彼は、あの恐ろしい傷を負いながら彼女が生き残るとは予想していなかったのだ。再び彼女の並外れた美しさに感嘆し、彼は彼女にこう言った。

「パラスケヴァよ、見よ、我らの神々が汝の美しさを憐れみ、汝を救い、命を授けてくださったのだ。」

聖女はこれに対し、こう言った。

「おお、軍司令官よ、私に命を授けてくださった方々を見せてください！」軍司令官は、彼女に自分たちの神々の偶像を見せるため、神殿へ連れて行かせた。彼女には偶像崇拝の祭司たちや大勢の民も同行した。彼らは皆、パラスケヴァが自分たちの神々に礼拝しようとしているのだと思っていた。　多くの偶像が安置された神殿に入ると、パラスケヴァは心の中で、至高にまじまじと御臨在される唯一真の神に祈りを捧げ、アポロンの偶像の足をつかんでこう言った：

「お前、この魂なき者よ、そしてお前と共にいるすべての朽ちゆく偶像たちよ、私はこう告げる。わが主イエス・キリストがこう命じられる――お前たちは皆、地に倒れ、塵と化せ。」

すると、聖人の言葉通り、すべての偶像は倒れ、粉々に砕け散った。その時、人々は皆、偶像の神殿から駆け出し、こう叫び始めた。

「キリスト教の神は偉大なり！」

不敬虔な祭司たちは、自分たちの偶像が破壊され滅びたのを目にして、軍司令官のもとへ駆け寄り、泣きながらこう言った。

「軍司令官よ！　我々はあなたに『この魔女を殺せ。彼女は我々の街を惑わしている』と訴えたのに、あなたは我々の言うことを聞き入れなかった。その結果、今や彼女は魔術によって我々の神々をすべて打ち砕いてしまったのだ。」

怒りに満ちた軍司令官は、聖パラスケヴァを激しく問い詰めた。

「どのような魔術を使って、このようなことを成し遂げたのか？」

聖女はこう答えた。

「私たちの主イエス・キリストの御名を口にしながら、私はあなた方の神々の神殿に入り、このように私の主に祈りました。『私の救い主よ、私に現れてください。私に命を与えてくださった方よ。』　すると、私の主であり神ご自身が私の前に現れた。しかし、あなたの神々は、主を見るやい

なや恐怖に震え上がり、地面に倒れ込んで粉々に砕け散った。これは、彼らが自分たちさえ救えないのに、どうして他人を救えるというのか、ということを示していたのだ！

そこで、軍司令官は再びパラスケヴァを木に吊るし、ろうそくの火で彼女の肋骨を焼くよう命じた。吊るされ、火で焼かれながら、聖女は神に向かってため息をつき、こう言った。

「わが主、わが神、すべての被造物の創造主であり、摂理者よ！　あなたは三人の若者の燃え盛る炉を冷やし、最初の殉教者テクラを火から救い出してくださいました。どうか、この不肖の私をも、これらの拷問者たちの手から救い出してください。」

すると突然、天使が現れ、ろうそくに触れると、非常に激しい炎が燃え上がり、多くの不義の者たちを滅ぼした。そして民は叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

そして、その時、多くの民がキリストを信じるようになった。一方、軍司令官は民衆の動揺に気づき、民衆が自分に反旗を翻すのではないかと恐れ、急いで聖女を剣で斬首するよう命じた。彼女の首が切り落とされたその時、ある者たちは天から次のような声が聞こえるのを耳にした。

「義人よ、喜びなさい。殉教者パラスケヴァが冠を授かるのだ！」

キリスト教徒たちは、敬虔な心をもって聖女の遺体を彼女の家で葬った。――こうして、殉教の業を終えた最も美しい乙女は、香油の代わりに血を携えて、その花婿のもとへと旅立った。彼女は今や、賢い乙女たちと共にキリストの宮殿に宿っている。

翌日、朝になると、不義な軍司令官は狩りに出かけたが、彼の馬が突然暴れ出し、彼を谷底へと突き落とした。転落した軍司令官は体を打ち砕かれ、かくして不運にもその呪われた魂をこの世から放った。

一方、大殉教者パラスケヴァの聖く清らかな魂は主のもとへ帰った。そして、彼女の尊い聖遺物からは、病める者たちへの多くの癒しがもたらされた。これは、我らの主イエス・キリストの栄光のためである。父と聖霊と共に、主イエス・キリストに、永遠に栄光と礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

至賢にして万人に称えられるキリストの殉教者パラスケヴァよ、男のような強さを受け入れ、女としての弱さを捨て去り、悪魔に打ち勝ち、迫害者を恥じ入らせ、叫びながらこう告げました。「さあ、　私の体を剣で切り裂き、火で焼き尽くしてください。私は喜びながら、私の花婿であるキリストのもとへ行くのです。」その祈りによって、キリストなる神よ、私たちの魂を救い給え。

コンダク、第3調：

至聖にして汚れなき殉教を、不死の花婿キリストへの尊き花嫁の贈り物として捧げ、天使たちの集いを喜ばせ、悪魔の策略に打ち勝たれた。このゆえに、我らは信仰をもってあなたを尊く崇める、多くの苦難に耐えた殉教者パラスケヴァよ。

聖なる殉教者キリアコス、エルサレム総主教の記念日

記念日：10月28日

聖キリアコスは、尊き命を与える十字架が発見された後、キリストを信じ、洗礼を受けた後、エルサレムの司教となりました。彼はユリアヌス背教者の治世まで生き延びました。　ユリアヌス帝

は、ペルシア遠征の途上、エルサレムに到着すると、そこで聖キリアコスを裁判にかけ、偶像への生贄を捧げるよう強要したが、聖人は断固としてこれを拒んだ。そこで皇帝は、彼の右手を切り落とすよう命じた。

「この手で多くの書簡を書いたな」と皇帝は言った。「そして多くの人々を神々の崇拝から遠ざけたのだ。」

その後、皇帝は聖人の口に溶かした鉛を流し込み、彼を白熱した銅の床の上に横たえるよう命じた。 殉教の現場に駆けつけた聖人の母アンナは捕らえられ、髪を掴まれて吊るされ、鉄の鉤で 引きずり回された。彼女の殉教の後、沸騰する大釜に投げ込まれ、槍で[7468] 貫かれた聖キリアコスも息を引き取った。

聖殉教者テレンティウスとネオニラの記念日

記念日：10月28日

福者テレンティウスは敬虔なキリスト教徒であり、同じ信仰を持つネオニラと合法的な結婚を結び、この結婚からサルヴィル、フォト、テオドゥル、イエラク、ニト、ヴィル、エヴニキアの7人の子供が生まれ、彼らはその子供たちを敬虔に育て上げた。 子供たちは両親と共に不信心者たちに捕らえられ、不法な裁判にかけられた際、キリストを明確に告白し、偶像を冒涜した。そのために彼らは絞首刑に処され、削り取りの拷問を受け、傷口には濃い酢を注がれ、火で焼かれた。しかし聖人たちは熱心に祈り、互いに慰め合った。 神は彼らの祈りを無視されることなく、御自身の聖なる天使たちを遣わされ、天使たちは彼らを鎖から解き放ち、その傷を癒やした。聖人たちが突然鎖から解放され、傷が癒やされたのを見て、不信心者たちは恐怖に震えた。 その後、聖人たちは野獣の餌食に投げ込まれたが、何の害も受けなかった。なぜなら、神の御命令により、野獣たちは羊のようにおとなしくなっていたからである。 そこで彼らは、沸騰する樹脂の入った大釜に投げ込まれたが、たちまち火は消え、大釜は冷め、樹脂は冷たい水のように変わった。拷問が聖人たちに全く害を及ぼさないのを見て、邪悪な拷問者たちは剣で彼らの首を切り落とした[7469] 。

コンダク、第4声：

今日、あらゆるものを喜ばせる、賢明なるテレンティウスとその仲間たちの殉教の尊い記念日が訪れました。彼らの温もりに寄り添い、癒やしを受け入れましょう。彼らは聖霊から恵みを受け、私たちの魂の病や苦しみをも癒やすからです。

11月11日

10月29日（旧暦）

[7468] 聖キリアク（洗礼前はユダ）は、聖ヘレナ皇后に聖なる十字架の場所を教えた。聖ヘレナ皇后は、聖なる命を与える十字架を見つけたいと願い、ユダヤ人たちを呼び寄せ、彼らが隠した聖なる十字架の場所を教えるよう懇願した。 彼らは脅迫されて初めて、聖なる十字架の場所を教えられるかもしれないユダという名の年老いたユダヤ人を指し示したが、ユダもまた女王の願いを聞き入れることを拒んだため、堀に投げ込まれた。そこでしばらく過ごした後、彼は話すことを約束した。 そこで、ユダが示した場所へ赴いた。そこは、ローマ皇帝ハドリアヌスが女神ヴィーナスの神殿を建設しようとしていた場所であり、そこで聖なる十字架が発見された（詳細は9月14日参照

[7469] 聖人たちはデキウス帝の治世（249～251年）に殉教した。

聖大殉教者アナスタシア・ローマ人の記念日

10月29日の記念日

デキウス帝とその共同統治者ヴァレリアヌスの時代、プロヴェ将軍の治世下、ローマ市のほど近く、人里離れたあまり知られていない場所に、一つの小さな女子修道院がありました。　そこでは数人の徳高い断食修道女たちが修行に励んでおり、その中には、年老いており、徳において完璧な修道院長ソフィアがいた。その修道院には、ローマ出身の至福の処女アナスタシアが暮らしており、彼女は両親の死後、3年間をそこで過ごしていた。 ソフィアは彼女を自らの修道院で育て上げ、あらゆる徳を教え込んだため、彼女は断食や修行、あらゆる労苦において他の誰よりも優れていた。二十歳になると、アナスタシアは並外れて美しい女性となり、その美しさを耳にしたローマの貴族たちの中には、彼女を妻に迎えたいと切望する者もいた。 しかし、聖なる処女は、 をすべて無に帰し、キリストの花嫁となり、キリストのために処女性を守りつつ、昼も夜も祈りに明け暮れた。　悪魔は、キリストの花嫁を天使に等しい生活から引き離し、世俗的な生活へと誘い込もうと、何度も企てた。不敬虔な考えや、狡猾な口調による誘惑、その他様々な策略を用いて、彼女を惑わそうとしたのである。　しかし、その戦いで悪魔は全く成功しなかった。彼女の弱き肉体にキリストの力が宿り、その乙女の足で呪われた蛇の頭を踏み砕いていたからである。この方法では無敵のキリストの花嫁に勝利することができなかった悪魔は、凶暴な拷問者たちを送り込み、公然と彼女に反旗を翻した。　当時、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われており、悪魔は、キリスト教徒に敵対する不信仰者たちの一部を唆し、彼らが軍司令官プロヴォの前でアナスタシアを誹謗中傷するように仕向けた。　この不信心な男の元へやって来た異教徒たちは、貧しい女性や夫のいない女性たちが暮らす人里離れた場所に、アナスタシアという乙女が住んでおり、その美しさはローマ全土でも比類のないものであると彼に語り始めた。

「この乙女は」と彼らは言った。「夫を持つことを拒むだけでなく、我々の生活様式を冒涜し、我々の神々を嘲笑し、十字架にかけられた方を信じているのだ。」

アナスタシアの美しさを耳にした軍司令官は、直ちに家来たちを遣わして彼女を連れてくるよう命じた。到着した家来たちは、修道院の門をなかなか開けることができず、結局、斧を持ってきて扉を壊さざるを得なかった。　断食修道女たちはこれを見て大いに恐れ、反対側にある別の扉を開けて修道院から逃げ出した。一方、修道院長ソフィアはアナスタシアを外に出さず、こう言った。

「わが子よ、アナスタシア！恐れることはない。今こそ、あなたの花婿であるイエス・キリストが、あなたに冠を授けようとしておられる、その功業の時が来たのだ。　私は、あなたが修道院から逃げ出すことを望まない。私の真珠であるあなたから、殉教の冠を奪いたくないのだ。私はあなたが三歳の時に引き取り、これまで瞳のように大切に育て、守り続けてきたのだから。

兵士たちが修道院に押し入ったとき、ソフィアが彼らのもとへ出て行き、こう言いました。

「誰をお探しですか。何を求めておられるのですか？」

彼らはこう答えた。

「老婆よ！　あなたが身元に匿っているアナスタシアという娘を、我々に引き渡せ。軍司令官プロフが彼女を要求しているのだ。」

「ええ、喜んでお渡しいたします」とソフィアは答えた。「ただ、お願いです、皆様、私が彼女を身なりを整え、ご主人様の目に留まるようにするまで、二時間ほどお待ちいただけませんか。」

使用人たちは、ソフィアが彼女を世俗的な服や装飾品で飾ろうとしているのだと思い込み、待つことに同意した。しかし、霊的な母であるソフィアは、娘を内面の美しさで飾り、天の花婿にふさわしい者にしてあげたいと願い、彼女を連れて教会へと入った。祭壇の前に彼女を立たせると、ソフィアは涙ながらにこう語りかけた。

「わが子よ、アナスタシア。今こそ、主への熱心な愛を、行動をもって示す時が来た。今こそ、あなたは最愛の花婿であるキリストのために、血を流す覚悟で立ち向かい、あなたが真の花嫁であることを証明しなければならない。わが愛する娘よ！　お願いだ。剃刀のように鋭い言葉に惑わされてはならない。この虚しい世の栄光や贈り物に心を奪われてはならない。そして、永遠の命をもたらす一時的な苦しみも恐れてはならない。　見よ、花婿の宮殿があなたの前に開かれている。見よ、あなたのために用意された永遠の安息の床。見よ、あなたのために編まれた冠。見よ、花婿がすでにあなたを婚礼へと招いている。さあ、喜びをもって彼の元へ行きなさい。血に染まって、まるで婚礼の衣装を身にまとったかのように、彼の元へ行きなさい。　お願いです、わが子よ、私の言葉に耳を傾け、あなたのために私が費やした労苦と心遣いを思い出してください。幼い頃からあなたを引き取り、栄光の王に清らかな花嫁として捧げられるよう、あらゆる努力を尽くしてあなたを育ててきたのです。　私はこのことだけを心に留め、このことだけを祈り、昼も夜もあなたに教えてきた。それは、あなたが心と魂のすべてをもって、永遠に主と結ばれるためである。だから、わが娘よ、今、主の御前で、私――あなたの母――を恥じ入らせたり、私の老いを早々に墓へと追いやったりしないでほしい。　もし、キリストの愛に反するようなあなたの話を耳にしたら、私は突然死んでしまうでしょう。しかし、もしあなたがキリストへの愛のためにしっかりと立ち、主のために自分の命を惜しまないという話を聞いたら、その時、私は娘を喜び祝う母となるでしょう。[7470]；　*「あなたは私の角を、一角獣の角のように高く上げ、私は新鮮な油を注がれる」*（詩篇91:11）。それゆえ、わが娘よ、あなたの肉体の美しさを惜しむことなく、この世の一時的な生活を愛してはならない。もしあなたが狡猾な言葉で惑わされることがあれば、　*「心が悪意ある言葉にそれることのないように」*（詩篇140:4）と祈りなさい。苦しみで脅かされたときは、「*あなたがたの恐怖を恐れることも、動揺することもない。私の神が私と共におられるから」*（イザヤ書8:12参照）と言いなさい。容赦なく打たれたときは、*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*　（マタイ10:28）と言え。もし彼らがあなたの肉体を苦しめ、削り取ろうとしても、その苦しみの中で喜びなさい。なぜなら、あなたは自分の肉体において、キリストの苦しみの欠ける部分を補っているからである（コロサイ1:24）。もしあなたが四つ裂きにされようとも、あなたの頭の毛一本までも主によって数えられていることを思い起こしなさい（マタイ10:30）。主はあなたのすべての骨を守り、その一つも失われることはない（詩篇33:21）。　もし彼らがあなたの首を切り落とそうとしても、全教会の頭であるキリストを見つめなさい。キリストこそがあなたの栄光であり、あなたの頭を高く掲げてくださる方です（詩篇3:4）。わが子よ、残酷な苦しみをおそれないでください。あなたの花婿は目に見えない形であなたの前に現れ、あなたの病を和らげ、重い苦しみからあなたを救い出してください。　そして、あなたがうめき声を上げるとき、主はあなたに慰めを与え、力尽きたときはあなたを強め、傷のために倒れたときはあなたを立ち上がらせ、激しい傷のために悲しみに満ちたときは、主はあなたの心を和らげ、あなたの魂を癒やし、　拷問者たちの手からあなたを引き離し、御自身の天の宮殿へと導き入れ、すべての天使の軍勢とすべての聖人たちの群れを呼び集めて、あなたに至福を授け、御自身の花嫁として朽ちることのない冠を授けるまで、決してあなたから離れはしない。そうしてあなたは、永遠の栄光の中で主と共に統治することになるのだ。

アナスタシアはこう答えました：

「私の心はキリストのために苦難を受ける用意ができています。私の魂は、私にとって最も愛しいイエスのために死ぬ用意ができています。なぜなら、私のすべての願いと嘆きは、私にとって愛おしい主への愛の証しとして、主のために私の魂を捧げることができるようにと向けられていたからです。　さて、今や私の願いが叶う時が来たのですから、私は喜びをもって私の拷問者の前に立ち、私の神の至聖なる御名を告白するでしょう。私の母であり、主であるあなた、私のことを心配しない

[7470] この表現は詩編112:9から引用されたものである。

でください。私の若さを疑わないでください。私は私の主イエス・キリストを信じています。主は、御自分のしもべである私を強めてくださるでしょう。　愛する母よ、あなたも主にお祈りください。私が主の御名のために殉教の業を成し遂げ、私たちに立ち向かう敵を打ち負かすまで、主が私を見捨てず、私から離れ去らないよう。

彼女たちの対話は二時間以上も続き、そのため、軍司令官から遣わされた使用人たちは、彼女たちを待ちきれず、自ら教会へと向かった。そこで彼らは、聖なる女性たちに出くわした。彼女たちは身だしなみを整えることなどせず、心を打たれながら語り合い、互いに慰め合い、主において互いを励まし合っていた。　怒りに駆られた彼らは、狼が羊を捕らえるようにアナスタシアを捕らえ、彼女の首に鉄の鎖をかけ、街へと引きずり出し、そこで軍司令官のもとへ連れて行った。彼女は彼の前に立ち、霊的な目を自分の花婿であるキリストへと向けた。　アナスタシアを見た者たちは皆、彼女の美しさ、謙虚な眼差し、そして穏やかな顔立ちに驚嘆した。軍司令官は彼女に向かってこう尋ねた。

「お前はどの家系で、どのような信仰を持ち、名前は何か？」

聖女は目を伏せ、静かな声でこう答えた。

「私はローマ市民の一人の娘で、キリスト教の敬虔さの中で育てられました。私の名はアナスタシアです。」

軍司令官は言った。

「その名はローマ人にとっては珍しいが、アナスタシアとはどういう意味か？」

「アナスタシアとは」と聖女は答えた。「『立ち上がり』という意味です。神が、私があなたの父であるサタンを打ち負かすまで、あなたに立ち向かって語れるよう、私を再び語れるようにしてくださったからです。」

軍司令官は続けた。

「お嬢さん、私の怒りを煽らないよう、穏やかに答えてくれ。私はお前の若さを憐れみ、その美しさを台無しにしたくはないのだ。賢明な助言をしようとする父親として、私の言葉に耳を傾けてほしい。」　なぜあなたは有害なキリスト教の教えに惑わされ、無駄に青春を浪費し、神々が人々の楽しみのために与えてくれた良き生活や喜びを自ら奪っているのか？人々の交わりを避け、孤独の中で人生を送ることになんの慰めがあるというのか？　十字架にかけられた者のために、自ら進んで苦しみと死を甘受することに、いったい何の得があるというのか？　むしろ、我らの不死の神々を崇め、誠実で高潔な夫を娶り、快楽の中で楽しみ、子供たちに喜びを見出し、善良な人々に囲まれて栄光と尊敬のうちに暮らし、多くの財産や　金や銀を所有し、神々が安らかな生活のために授けてくださったこの人生を、極度の貧困や困窮の中で台無しにしないことの方が、はるかに良いのではないか。それゆえ、私はあなたにこう助言する。さあ、神々に近づいて拝め。そうすれば、すぐに高貴で、名誉ある、栄光に満ち、裕福な夫を得ることになるだろう。その夫は王座に近く　、大きな権力を有している。彼と共に、あなたもまた大きな名誉を享受し、生涯を通じてあらゆる恵みを満喫することになるだろう。

聖アナスタシアは、下を向いていた目を上げ、軍司令官を見つめ、その言葉にこう答えた。

「私の夫、私の富、　命、そして私の喜び――それは私の主イエス・キリストです。あなたはその主から、あなたの誘惑的な言葉で私を引き離すことはできず、エバを惑わした蛇のように私を惑わすこともできず、あなた方の苦い破滅を私にとって甘美なものにすることもできず、また、拷問の恐怖をもって私を私の主から引き離すこともできません。その主のために、もし可能であれば、　百回でも苦しみを受ける覚悟があるのだ。

軍司令官は、傍らにいた者たちに彼女の顔を殴るよう命じ、こう言い放った。「これが、最も輝かしい君主への答え方か？」そして、彼女を辱めようと、服を引き裂いて裸にし、皆の前にさらしものにした上で、こう尋ねた。

「お嬢さん、皆の目の前で裸で立っているのは心地よいか？」

「狂人よ、恥知らずで、あらゆる不浄に満ちた者よ」と聖女は答えた。「これは私の恥ではなく、あなたの恥です。私の主は、太陽が私の裸を見たことは一度もないことを知っておられますが、あなたは私をこれほど多くの人々の目の前で裸にさらしたのです。あなたが私よりも、はるかに自分自身を辱めたことを知っておきなさい。」　何しろ、この恥のゆえに、私の花婿は私を栄光の衣で覆ってくださるでしょう。しかし、あなたは永遠にその顔の恥に覆われることになります。そして、今やあらゆる分別ある人はこう言うでしょう。『もしあの軍司令官が恥知らずで、不純な情欲に満ちていなければ、すべての人の目の前で乙女の体をさらけ出すようなことはしなかっただろう』と。

そして、彼女を裸にした者たちに向き直り、彼女はこう言った。

「もしあなたがたが私の体をさらし、私のために様々な拷問の道具を用意したのなら、なぜ躊躇しているのですか？　打て、切り刻め、引き裂け、この裸の体を傷だらけにし、露わになった恥部を血で覆え。ほら、私が苦痛に耐える準備ができているのが見えるだろう。私から、私のキリストのために死にたいと願うこと以外、何か他の言葉を聞くことを期待してはならない。

そこで、軍司令官の命令により、彼女は四本の柱に顔を下にして縛り付けられ、その下には硫黄と樹脂を混ぜた火が焚かれ、下から火と悪臭を放つ煙で苦しめられ、背中には容赦なく棒で打ちつけられた。　聖アナスタシアは、棍棒の打撃に苦しみ、煙で息が詰まり、火に焼かれながらも耐え忍び、うめき声の代わりに、最後までダビデの詩篇を唱え続けた。「神よ、私を憐れんでください……」　彼女は、処刑人たちが疲れ果てるまで打ち続けられた。その後、柱から解き放たれ、火刑台から降ろされると、車輪に縛り付けられ、車輪を回転させることで、彼女のすべての骨を砕き、筋を引き裂いた。それでも彼女は主に向かって祈った。

「わが避難所、わが守り主よ、私から離れないでください。私の魂は病に苛まれて衰え、私の骨は砕かれています。」

この祈りの後、車輪は突然止まり、目に見えない力によって縛りが解かれた聖なる殉教者は、全く無傷で健やかな姿であった。そこにいた者たちは皆、この奇跡を目の当たりにしてひどく驚嘆した。　しかし、軍司令官は、憎しみに目がくらんでいたため、改心するどころか、さらに激しい残虐さで聖女を別の拷問にかけ始めた。彼は、彼女を吊るし上げ、肋骨を削り、その肉体を苛むよう命じた。彼女はこれらすべてを勇敢に耐え抜き、ただ神のみに目を向け、こう言った。

「わが花婿よ、あなたのために私が耐えているこの苦しみをご覧になり、この不肖のあなたのしもべに憐れみをおかけください。そうして、私の血が注がれることがあなたにとって喜ばしいものとなり、私が聖なる殉教者たちの列から拒絶されることのないように。」

その後、彼女は木から降ろされ、軍司令官が彼女に尋ねた。

「アナスタシアよ！　今、気分はどうか？」

– とても心地よいわ――と聖女は答えた――なぜなら、私の命よりも深く愛する御方のために受ける苦しみなど、私にとって良きものであり、喜ばしいものでないはずがないからです。

軍司令官は続けた：

「もし、十字架にかけられた方のために苦しむことがお前の喜びであるなら、私はその苦しみをさらに増してやる。」彼は剃刀で彼女の乳首を切り落とすよう命じた。血を流しながら、聖女はひどく衰弱し、水を飲ませてほしいと頼んだ。そこに近くに立っていたキリルという名の男が、水を持ってきて彼女に差し出した。彼女は少し水を飲んだ後、水を差し出した男にこう言った。

「主からの報いを失うことはないでしょう。主はこう言われたからです。*『あなたがたがキリストに属しているゆえに、わたしの名によって水一杯をあなたがたに飲ませる者は、まことに、あなたがたに言います。その人は自分の報いを失うことはない』*」（マルコ9:41）。

軍司令官は彼女に言った。

「これだけの苦しみで十分か、それともさらに苦しみに遭いたいのか？」

「お望みのままになさい」と聖女は答えた。「私の神は力強く、この衰えかけた私の力を大きな苦しみにも耐えられるよう強めてくださり、あなたの高慢を打ち砕いてくださるでしょう。」

拷問官は、彼女の指の爪を剥ぎ取り、次に手足を切り落とし、さらにすべての歯を打ち抜くよう命じた。

聖女は再び衰弱し、水を求めたが、その口からは血の川が流れ出していた。キリルは再び彼女に少し水を飲ませた。拷問官は、キリルが殉教者に水を飲ませているのを見つけ、彼がキリスト教徒である（実際その通りだった）と思い込み、直ちに剣で彼を殺すよう命じた。　斬り殺された後、至福のキリルは、キリストの名においてキリストの殉教者に飲ませた冷たい水の一杯に対する報いを受けるため、主のもとへと旅立った。水で清められた聖女は少し休んで、こう祈った。

「神よ、わが救い主よ、私を見捨てないでください！」

やがて、軍司令官が彼女の舌を切り落とすよう命じたとき、聖女はこう言った。

「不法な血に飢えた者よ！　たとえ私の舌を切り落としても、私の心は主に向かって叫び続けるでしょう。主は、沈黙の中でさえ、主に向かって祈る者の声に耳を傾けてくださるのです。」

使用人は鉗子を手に取り、それを聖女の口の中に差し込み、強く舌を引き伸ばして切り落とした。　民衆は激怒し、このような残酷で非人道的な拷問を行った軍司令官を非難し、罵倒した。軍司令官は民衆に怒りを覚え、聖女を城の外へ連れ出し、剣でその清らかな首を切り落とすよう命じた。こうして、キリストの聖なる大殉教者アナスタシアは、殉教の偉業を成し遂げた。　彼女の聖なる遺体は、埋葬されることなく鳥や獣の餌食となるまま放置されたが、神の御加護により、無傷のまま保たれた。夜が更けると、至福の老女ソフィアのもとに天使が現れ、町の外れの野原に横たわっている聖アナスタシアの遺体を持ち帰るよう命じた。　ソフィアは清らかな布を手に取り、修道院を出たが、どこへ行くべきかわからなかった。神に熱心に祈りを捧げた後、彼女は歩き出し、神ご自身に導かれて、彼女の霊的な娘の聖なる遺体が横たわっている場所にたどり着いた。そこで彼女は、まるで水のように溢れる涙でその遺体を愛撫し、洗い清めながら、次のように語った。

「わが愛しき娘よ。私はあなたを労苦と沈黙、断食と祈りの中で育て、処女性と貞節を守り、神への畏れと神の聖なる愛を教え導いた。わが最も愛しい娘よ。あなたが最後までキリストに忠実であり続けるまで、私は常にあなたを憐れみ続けていたのだ！」　私のようなみすぼらしい母の言うことを聞き入れ、私の願いを叶えてくれたことに感謝する。私があなたのために苦労したのは無駄ではなかった。あなたは、自らの血で身を飾り、汚れなき処女の婚礼の装いをもって、あなたの花婿の前に現れたのだから。　それゆえ、今、私は娘としてではなく、母として、また私の主として、あなたに懇願します。神へのあなたの祈りによって、私の老後を支えてください。そして、主と共に至福のうちに過ごす際には、私のことを思い出してください。主が私にこの朽ちゆく肉体を離れるよう命じられた時には、主の慈しみに訴え、私の罪を憐れんでくださるようお祈りください。

そう泣きながら、彼女はこれからどうすべきか考えていた。彼女は一人きりであり、しかも非常に体が弱かった。杖をついてかろうじて歩ける程度で、その聖なる遺体を抱き上げて運ぶことも、その場で埋葬することもできなかった。そのため、どうすればよいか分からず、途方に暮れて嘆いていた。　すると、神の御心により、彼女には見知らぬ二人の男が現れた。彼らは見た目は威厳があり、言葉は優しく、キリスト教徒であった。彼らは、遺体のそばで泣いている老婆を見つけると、彼女を助け、切り落とされた手足（それらは街からその場に投げ捨てられていた）と聖なる頭部を拾い集め、　これらすべてを遺体に接合し、それぞれの部位を所定の位置に収め、布で包んである尊い場所

へと運び、そこで葬送の賛美歌を歌いながら、父と子と聖霊を賛美し、この計り知れない宝を埋葬した。

コンダク、第3調:

清らかな水によって清められ、殉教の血によって冠された聖アナスタシアよ、心からあなたに近づく者たちに、必要に迫られた者への助け、病の癒やし、そして救いを授けてください。キリストは、絶え間なく流れ出る恵みを注ぎ出し、あなたに強さを与えてくださるからです。

隠遁者アヴラミオスと至福のマリアの生涯

記念日：10月29日

至福のアヴラミイは敬虔な両親の息子であった。幼い頃から、聖なる教会を訪れ、そこで感動しながら神の御言葉を聞き、そこから教えを受けることを好んでいた。

息子を深く愛していた両親は、彼に結婚するよう強く迫りました。彼は当初拒否していましたが、その後、度重なる熱心な懇願の末、自らの望みに反して両親の言うことを聞き入れました。

結婚から7日目のこと、ある時、アヴラミイが妻と共に寝室に座っていたとき、彼の心の中に、まるで光のように神の恵みが突然輝き、誰にも何も告げずに、彼は密かに家を出た。　神の導きにより、彼は[7471]　という町を出て、そこから二千歩の距離にある無人の小屋を見つけ、そこで喜びに満ちた心で神を賛美しながら住み着いた。　両親や親族たちは、彼の行方不明を嘆き、至る所でこの福者を捜し求めた。七十日が過ぎた頃、彼らは彼が神に祈りを捧げている修道院の部屋で彼を見つけ、大いに驚いた。すると、福者は彼らにこう言った。

「驚かないでください。むしろ、私を虚しいこの世から救い出してくださった、人を愛する神を賛美し、主が私に授けてくださった善き軛を最後まで担い通せるよう、主のために私のために祈ってください。そして、神への愛のために、私がここで静寂のうちに暮らし、神の聖なる御心を全うできるよう、私をここに置いておいてください。」

至福者の両親は、彼の揺るぎない決意を見て、「アーメン」と応えた。

聖アヴラミイは、両親が訪ねてきて邪魔をしないよう懇願し、扉を閉ざして、食事を受け取るための小さな窓だけを残した。　その後、至福者の心はさらに神の恵みによって照らされ、彼は徳ある生活、厳格な節制、謙遜、愛、そして貞潔において卓越していった。彼の評判は至る所に広まり、その話を聞いた人々は皆、彼に会いに、またその言葉を聞くためにやって来た。なぜなら、彼には知恵と理性、そして慰めの言葉が授けられていたからである。　――聖人が実家を離れてから十年が経った頃、両親が亡くなり、彼に莫大な財産を残した。アヴラミイは、祈りと沈黙を捨てたくなかったため、親しい友人の一人に頼み、自分に相続された財産をすべて貧しい人々に配るよう求めた。　そうして、彼は何の心配もせずに過ごした。なぜなら、この聖人の最大の関心事は、自分の心が地上の物事に執着しないようにすることであり、それゆえ、彼は地上に、上着一枚、毛皮の衣、食事や飲み物を入れる水差し、そして寝るための藁マット以外、何も持っていなかったからである。　修道生活を送ったすべての年において、彼はその規則を変えることはなく、神への深い愛と熱意をもって、50年間修道生活を送った。

その町を取り囲む集落の中には、[7472]　という非常に大きな村があり、そこでは老若男女を問わず全員が異教徒であり、彼らを神へと導くことのできる者は誰一人としていなかった。　その国の司

[7471] テニイは、ミジア（小アジア北西部）の主要都市ランプサコス近郊に位置していた。

[7472] この集落はゲレスポント（マーブル海と群島の間にあるダーダネルス海峡）の岸辺に位置していた。

教によってそこに派遣された多くの長老や助祭たちは、彼らを偶像崇拝の惑わしから遠ざけることはできなかった。なぜなら、彼らはそこで直面したあらゆる困難や侮辱に耐えられなかったからである。　多くの修道士たちも、幾度となく異教徒たちを改宗させようと試みたが、何の成果も得られず、彼らを見捨ててしまった。ある時、司教は自身の聖職者たちと語り合う中で、至福のアヴラミオスを思い出し、こう言った。

「私はこれまで、アブラミオのような人物――あらゆる善と神に喜ばれる行いにおいて完全さを極めたこの人物――を見たことがない。」

聖職者たちはこう答えた。

「はい、主教様、彼は神のしもべであり、最も完全な修道士です。」

これに対し、司教は彼らにこう言った。

「私は彼をこの村の司祭にしたい。彼はその忍耐と愛によって、村人たちの心を自分に引き寄せ、神へと導くことができるだろう。」

そして直ちに、聖職者たちと共に、その聖者のもとへ向かった。彼らが到着して挨拶を交わすと、司教はアブラミウスにその村の話をし、彼にそこへ赴くよう懇願し始めた。これを聞いたアブラミウスは深く悲しみ、司教にこう言った。

「聖なる父よ！お許しください。ただ私の罪を嘆き悲しむことだけをお許しください。私は弱く、この務めには不向きなのです。」

「神の恵みの力によって」と司教はそれに答えた。「あなたはこれを成し遂げることができる。善き従順を怠ってはならない。」

すると、その聖人はこう言った。

「聖なるお方よ、どうか私の取るに足らない身をお見捨てにならず、私の不義を嘆き悲しむことをお許しください。」

これに対し、司教は彼にこう答えた。

「見よ、あなたは世と世にあるすべてのものを捨て、憎み、キリストと共に十字架につけられ、そのすべての戒めを果たした。しかし、従順さだけは欠けている。」

これを聞いて、アヴラミイは苦々しく涙を流し、こう言った。

「私はいったい何者でしょうか。臭い犬に過ぎません。もしあなたが私をそのようにお考えになるのなら、私の命など何の意味があるというのでしょうか？」

「ここにいる限り」と司教は答えた。「あなたは自分自身だけを救うことになるが、あちらでは、神の恵みの助けにより、多くの人々を救い、主のもとへ導くことになるだろう。」

すると、その聖人は泣きながら言った。

「神の御心に従います！ 従順のゆえに参ります。」

司教は彼を修道室から連れ出し、町へと案内し、彼に叙階を授けた後、大いなる喜びをもって聖職者たちと共にその村へと送り出した。

その道中、その福者は神にこう祈った。

「慈愛に満ちた、人を愛する御方よ！　あなたは私の弱さをご覧になっています。あなたの御名が賛美されますように、どうか私にあなたの恵みをお与えください。」

村に到着し、悪魔の惑わしに囚われ、偶像を崇める人々を見たとき、アヴラミイは痛切に泣き崩れた。天を仰ぎ見ながら、彼はこう言った。

「神よ、唯一の無罪なる方よ！御自身の御業を軽んじないでください。」

その後、彼は町にいる親しい友人に、両親から受け継いだ財産を貧しい人々に配るよう託していたが、教会を建てるための資金の一部を送ってほしいと頼んだ。　友人は、彼の必要とするだけの金額を遅滞なく送ってきた。そこで、この福者は神の聖堂の建設に着手し、短期間のうちに壮麗な教会を建て上げ、最も美しい花嫁のようにそれを飾り立てた。　教会が建設されている間、聖人は偶像

に囲まれた場所で、誰とも一言も交わすことなく、神に祈りを捧げていた。教会の建設が完了すると、彼はそこで熱い涙を流しながら、主に向かって次のような祈りを捧げた。

「主よ！　この散らばった人々を集め、この教会へと導き入れ、彼らの心の目を照らし、唯一の善き、人を愛する神であるあなたを知ることができますように。」

祈りを終えると、彼は教会から出て行き、異教の祭壇を打ち砕き、すべての偶像を倒した。その様子を見た異教徒たちは、まるで野獣のように聖人に襲いかかり、殴打して村から追い出した。夜になると、彼は戻ってきて再び村に忍び込み、教会に入ると、叫び声を上げ、泣きながら、滅びゆく人々を救ってくださるよう神に祈り始めた。朝になると、異教徒たちは教会で祈っている彼を見つけ、恐怖に襲われた。　（彼らは毎日教会に来ていたが、それは祈るためではなく、建物の壮麗さと美しさを眺めるためであった）。聖人は彼らに神を知るよう懇願したが、彼らはまるで無生物の石であるかのように、杭で彼を打ち、地面に倒すと、首に縄をかけ、村の外へ引きずり出した。　彼がすでに死んだと思い込んだ彼らは、その上に石を載せ、そのまま置き去りにして立ち去った。しかし、かろうじて息のある彼は、真夜中に意識を取り戻し、立ち上がって激しく泣きながら、主に向かってこう祈った。

「主よ！　なぜあなたは私の涙と謙遜を軽んじられたのですか。なぜ御顔を私から背け、私の手の業を軽んじられたのですか。　どうか今、主よ、あなたのしもべに目を留め、私の祈りを聞き入れ、私を強め、あなたのしもべたちを悪魔の束縛から解き放ち、彼らにあなた、唯一の真の神を知らせてください。あなた以外に主はいないからです。

その後、アブラミイは集落に戻り、教会に入って立ち、賛美を歌い、祈りを捧げた。翌朝、異教徒たちが再びやって来て、彼が生きているのを見て、最初は驚いたが、その後またこの福者を拷問し始めた。彼を地面に倒し、首に縄をかけ、集落中を引きずり回した。　こうして、聖人は三年にわたり、殴打され、迫害されながらも、信仰の堅固な岩のようにあらゆる苦難に耐え抜いた。これらすべての苦難にもかかわらず、彼は彼らに対して怒りを抱くことも、不平を言うことも、気弱になることもなく、耐え忍びながらも落胆することはなかった。むしろ、神への愛と、迷いゆく者たちへの憐れみがさらに燃え上がり、　彼は、長老たちには父のように、若者たちには兄弟のように、子供たちには自分の子供のように、懇願し、教えを説き続けた。その間、彼自身は侮辱や冒涜にさらされながらも。

ある日、その村に住む者たちは、老いも若きも皆一堂に会し、アヴラミイの生き様に驚き、互いにこう語り合った。

「この男の偉大な忍耐をご覧になりませんか？　私たちに対する彼の言葉に尽くせないほどの愛をご覧になりませんか？　彼は私たちからひどく憎まれているにもかかわらず、ここから去ることもなく、誰に対しても傷つけるような言葉を口にすることもなく、ましてや私たちから背を向けることさえせず、これらすべてを大きな喜びをもって耐え忍んでいるのです。　まことに、彼は、彼が常に語っている神から、私たちの命のために遣わされたのだ。彼は、天の御国、楽園、永遠の命が到来すると語っているが、その言葉は真実である。なぜなら、もし彼の言う通りでなかったなら、彼は私たちからこれほど多くの悪に耐えることはなかっただろうからである。　彼は、私たちの神々の無力さも暴いた。なぜなら、彼がそれらの神々を打ち砕いたとき、神々は彼を罰することができなかったからだ。まことに、彼は生ける神のしもべであり、彼が語ったことはすべて真実である。さあ、彼が宣べ伝える神を信じるように努めよう。

こうして、皆は一斉に教会へと駆けつけ、声を揃えてこう叫んだ。

「悪魔の惑わしから私たちを救ってくださった御使いを遣わしてくださった天の神に栄光あれ！」

やって来た異教徒たちを見て、聖人は大いなる喜びに満ち、その顔は朝の光のようであった。口を開き、彼は彼らにこう言った。

「わが父たちよ、兄弟たちよ、子らよ！　さあ、ここに来て、あなたがたの心の目を開き、神を知り、偶像の汚れから清められるようにしてくださった神に栄光を捧げましょう。　さあ、心を尽くして生ける神を信じなさい。神は天と地、そしてその中に存在するすべてのものの創造主であり、初めなく、言葉に尽くせず、測り知れず、光を注ぎ、人を愛し、威厳に満ち、正義に満ちた主だからです。　また、御子の御独り子、すなわち神の知恵、力、御意志そのものである御子と、万物を生かす至聖なる御霊をも信じなさい。そうして信じるならば、天の命を受けることになるでしょう。

皆はこれに答えて言った。

「私たちの父であり、人生の導き手よ！私たちは、あなたが語り、教えてくださる通りに信じ、あなたが命じられることを行う用意があります。」

その後、聖人は皆を集め、老若男女を問わず、およそ千人の人々を、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けた。そして毎日、彼らに聖書を読み聞かせ、教えを説き、天の御国、楽園、火の地獄、正義、信仰、愛について語った。　彼らはまるで、良き種を受け入れ、実を結ぶ肥沃な土地のようになった――ある時は百倍、ある時は六十倍、ある時は三十倍の実を結んだ（マタイ13:23）。　こうして彼らは、大きな熱意と勤勉さ、そして喜びをもって彼の教えに耳を傾け、その言葉に従った。まるで神の天使のような至福の者を目の前にし、愛の絆で彼に結ばれた彼らは、その聖なる教えに耳を傾けた。

聖人は、彼らが信仰を抱いた後、彼らの間で一年間を過ごし、昼夜を問わず神の御言葉を教え続けた。　そして、彼らが神への愛と揺るぎない信仰を持っていることを確信すると、彼は彼らのもとを去りたいと願った。なぜなら、彼らが自分を熱烈に愛し、深く敬っているのを見て、自分の心が何らかの地上の執着に縛られたり、修道者としての修行の途中で迷いを生じたりすることを恐れたからである。そこで、ある夜、目を覚ますと、彼は神にこう祈った。

「唯一の無罪なる方、唯一の聖なる方、聖徒たちの中に安らぐ方、唯一の人を愛し、慈悲深い主よ。これらの人々の目を照らし、偶像崇拝の惑わしから彼らを解放し、あなたを理解する知恵を授けてくださった方よ。どうか彼らを守り、保ってください。　主よ、最後まで、あなたの深い人間愛によって獲得されたこのあなたの良き羊の群れを守り、あなたの恵みの要塞で彼らを囲い込み、絶えず彼らの心を照らし、彼らがあなたに喜ばれ、あなたの天の御国にふさわしい者となるようにしてください。　弱く、不適格な私をも守り、これを罪とみなさないでください。全知なるあなたは、私があなたを愛し、あなたに慕い求めていることをご存知だからです。

祈りが終わると、聖人は十字を切って、ひそかにその場を離れ、別の場所へ行き、彼らの目から姿を隠しました。　朝になると、新しく洗礼を受けた人々は、いつものように教会に来て、聖人を探したが、見つからなかった。彼らは驚き、迷い羊のように歩き回り、涙ながらに牧者の名を呼びながら、彼を探し求めた。　彼らはあちこちを探し回っても聖人を見つけられず、深く悲しんだ。そして直ちに司教のもとへ行き、起こった出来事を報告した。　司教はこれを聞いて悲しみ、とりわけ羊たちの涙と懇願を考慮して、至福の聖人を捜すために多くの使用人を急いで派遣した。派遣された者たちは、彼を宝石のように探し求めたが、見つけることはできなかった。　司教は聖職者たちと共に村を訪れ、　、皆がキリストへの信仰と愛に堅く立っているのを見て、その中からふさわしい者を選び出し、彼らを長老や助祭に任命し、祝福を与えてその場を去った。

これらすべてを耳にした聖人は、心の底から喜び、神を賛美してこう言った。

「わが慈愛に満ちた主よ、あなたが私に与えてくださったすべてのものに対し、私はあなたに何をお返しすればよいのでしょうか。あなたの御摂理を礼拝し、賛美いたします！」

このように祈った後、彼は以前住んでいた自分の小部屋へと戻った。彼は最初の部屋とは別に、もう一つの小さな部屋を用意し、救い主なる神に喜びながら、その中に閉じこもった。　一方、悪魔はアブラミオのこうしたすべての功績を目の当たりにし、さらに憎しみに燃え上がり、あらゆる手段を尽くしてこのキリストの善き戦士を陥れようと試みた。彼に高慢の念を植え付けようと企み、あ

る日、称賛の言葉を持って彼の元を訪れた。　ある時、聖人が真夜中に祈りを捧げていたところ、突然、彼の修道室に光が輝き、まるで神から発せられたかのような次の言葉が聞こえてきた。

「アブラミイよ！　あなたは幸いである、幸いである。なぜなら、人間の中で、あなたほどにわたしの御心を全うした者はいないからだ。」

しかし、聖人は即座に、その言葉が敵意に満ちた誘惑であることを悟り、声を高めてこう言った。

「お世辞と破滅に満ちた者よ！　お前の悪意は、お前自身と共に破滅へと向かうがよい！」私は罪深い者だが、私の神の恵みと助けに希望を置いており、お前を恐れない。同様に、お前の出現も私を脅かすことはない。私にとって、打ち破ることのできない壁とは、私が愛した私の救い主イエス・キリストのお名前であり、その御名によって、不浄な犬よ、お前がこのようなことをするのを禁じる。

すると、悪魔は煙のように突然消え去った。

別の時、数日後、聖人が夜に祈っているとき、サタンが斧を手に持って現れ、それであらゆるものを切り裂きながら、彼の修道室をも荒らし始めた。そして、修道室が破壊されようとしていたその時、悪魔は他の悪魔たちに向かって大きな声で叫んだ。

「友よ、急げ、急いでここに入り、彼を絞め殺そう。」

すると、聖人はこう言った。

「*『すべての民がわたしを取り囲んだが、主の御名によって、わたしは彼らを打ち倒した』*（詩編117:10）。」

すると、サタンはたちまち姿を消し、修道室は無傷のまま残った。さらに数日後、真夜中に祈っていると、彼は自分が立っている敷物が激しい炎に包まれているのを見た。その炎の上に足を踏み入れ、彼は言った。

–*「私はアスピドやバシリスクを踏みつけ、獅子や蛇を踏み砕く」*（詩篇90:13）、そして、私を助けてくださる私の主イエス・キリストの御名によって、敵のすべての力を打ち砕く。

サタンは逃げ去り、大声で叫んだ。

「おまえを打ち負かしてやる、醜悪な者よ。おまえに対して新たな策略を編み出したからだ。」

ある日、聖人が食事をとっていたとき、悪魔は再び若者の姿となって彼の独房に入り、近づいては、彼が食事をしていた器を地面にひっくり返そうとした。これに気づいた聖人は、少しも恐れることなく器を持ち続け、食事を続けたが、悪魔は彼の前に立ち尽くしていた。　すると悪魔は燭台を置き、その上に蝋燭を灯すと、大きな声で歌い始めた：

「*『主の律法に従って歩む、その道に汚れなき者は幸いである』*（詩編118:1）」――そう言うと、彼はその詩編を最後まで歌い上げた。

聖人は、食事を終えるまで彼に答えなかった。その後、聖人は十字を切って、悪魔に向かってこう言った。

–不浄で、三度悔い改めた、無力で臆病な犬め！ もし、清き者が幸いであることを知っているのなら、なぜ彼らを煩わせるのか？　なぜなら、神を信頼し、心を尽くして神を愛する者は皆、幸いであり、三度幸いなのだから。

悪魔はこう答えた。

「私は彼らを打ち負かすために、彼らを苦しめているのだ。私は彼らを誘惑し、あらゆる善行から遠ざけるつもりだ。」

すると、聖人は彼に言った：

「呪われし者よ！　お前には何の成功も訪れないようにせよ。そうすれば、神を畏れる者を誰一人として打ち負かしたり、誘惑したりすることはできないだろう。　お前は、自らの意志で神から背いた、お前と同じような者たちに対して勝利を収めている。彼らには神がいないため、お前は彼らを惑わし、打ち負かすのだ。しかし、神を愛する者たちの前では、風による煙のように消え去る。彼らの祈り一つで、風が塵を吹き飛ばすように、お前は追い払われるのだ。　わが主は生きておられる、　、永遠に祝福された方、わが栄光と賛美よ。たとえお前がここに一年、あるいはそれ以上立ち続けていたとしても、私はお前を恐れない。不義な犬よ、お前の意のままに何一つさせはしない。私はお前を、まるで死んだ犬を軽んじるかのように軽んじる。

聖人がこう言い放つと、悪魔はたちまち姿を消した。五日が過ぎ、聖人が深夜の礼拝の歌を終えようとしたとき、敵は再び、大勢の群衆を従えて彼の元へやって来た。彼らは聖人の独房に縄をかけ、それを引きずりながら、互いに叫び合った。

「彼女を堀に投げ込もう。」

聖人は彼らを見て、こう言った。

「*『彼らは蜂の巣のようにわたしを取り囲んだが、いばらの茂みの中の火のように消え去った。主の御名によって、わたしは彼らを打ち倒した』*（詩編117:12）。」

すると、サタンはこれに叫んだ。

「もはや、どうすればよいのか分からない。お前はあらゆる手段で私を打ち負かし、私を軽んじて私の力を打ち砕いたが、私はお前を打ち負かし、屈服させるまで、決して諦めない。」

聖人は彼にこう答えた。

「呪われよ、不義なる者よ、そしてお前のすべての行いも！　しかし、私たち主、唯一の聖なる神には、お前は私たち、神を愛する者たちによって踏みにじられ、冒涜されているが、神には栄光と礼拝を捧げよう。忌まわしき、恥知らずな者よ！　今こそ知れ、我々はあなたも、あなたの策略も恐れてはいないのだ。」

悪魔は、聖人を様々な幻影で脅かし、恐れさせようと、かなり長い間このように戦いを続けたが、この揺るぎない神の御心にかなう者を打ち負かすことはできず、かえって聖人に打ち負かされたのである。　一方、この祝福された聖人は、神への愛と功績においてますます輝きを増していった。彼は心から神を愛し、神の恵みにふさわしい生活を送っていたため、悪魔は彼に打ち勝つことができなかったのだ。　修道生活を送ったすべての年において、涙のない日は一日もなく、彼は笑うために口を開くこともなく、油を口にすることもなく、一度も顔を洗うこともなかったが、まるで毎日死んでいるかのように生きていた。

この聖人には実の兄弟がおり、その兄弟には一人娘がいた。彼女の父親が亡くなると、その少女は孤児となってしまった。彼女の知人たちはこの孤児を引き取り、彼女が七歳の時に叔父のもとへ連れて行った。聖人は彼女に外側のケリアに留まるよう命じ、自身は内側のケリアに閉じこもって暮らしていた。　両方のケリアの間には小さな扉があり、彼はその扉越しに姪に詩篇やその他の書物を教えた。その少女は、彼と同様に、断食と祈り、そして修道者のあらゆる徳に励んだ。　聖人は、彼女が主を愛し、この世の虚栄に心を奪われないよう、何度も涙ながらに神に祈った。彼女の父は彼女に十分な財産を残していたが、聖人は彼女が自分のもとへ連れてこられたその瞬間、その財産を貧しい人々に配るよう命じた。――少女は叔父にこう懇願した。

「父よ、私があらゆる種類の悪魔の罠から解放されるよう、神に私のために祈ってください。」

修道生活において、彼女はあらゆる点で叔父に倣い、長老は彼女の善行、涙、謙遜、沈黙、柔和さ、そして神への愛を見て、これを喜んだ。　二十年の間、彼女は清らかな子羊のように、汚れなき鳩のように、彼と共に修道生活を送った。しかし、二十年目の終わりに、悪魔は彼女を陥れ、それによって至福のアヴラミイを侮辱し、彼の心を神から遠ざけるために、彼女の救いの道に罠を仕掛け

た。　当時、修道士の名前は持っていたものの、修道者としての行いは全くなかったある修道士が住んでいた。彼は、聖人から教えを受けるという口実で、聖人のもとを訪れていた。扉越しに聖なるマリアを見た彼は、彼女に対して不純な情欲に燃え上がり、彼女への狂おしい情熱によって、その心は炎のように燃え上がった。　こうして彼は約一年もの間、情欲に駆られ続け、ついにサタンの助けを借りて、ある日彼女の独房の扉を開け、中に入り込み、彼女を誘惑して汚してしまった。　罪を犯した後、その乙女は恐怖に襲われ、衣服を引き裂いて顔を叩き、悲しみのあまり自ら命を絶とうとさえ考えた。彼女は心の中でこう自問した。

「私は罪を犯し、魂は死に、自分の人生を台無しにしてしまった。修道生活も、私の節制も、私の涙も何の役にも立たなかった。私は神を怒らせ、自分自身を破滅させ、敬虔な叔父を深い悲しみに陥れてしまったのだから。」　私は悪魔に冒涜されたのだ。これほど呪われた身である私が、これ以上生きる意味などあるだろうか？　ああ、悲しや！　私は何をしてしまったのか？　ああ、悲しや！　私は一体どこまで堕ちてしまったのか？　気づかないうちに、私の理性が曇り、私は滅びてしまったのだ！　何という暗い闇が私の心を覆ったことか。これからどうすればいいのか、どこに身を隠せばいいのか、私にはわからない。どこへ　行けばいいのか、どの穴に身を投じればいいのか！私の敬虔な叔父の教えはどこへ行ったのか、そして彼の友人エフレムの[7473] 教えはどこへ行ったのか？彼らは私にこう言った：

「自分自身に注意を払い、不死の花婿のために魂を汚れなく保ちなさい。なぜなら、御方は聖なる方であり、真理によって裁かれるからである。」今や私はもはや天を見上げる勇気さえありません。神と人々の目には、私はすでに死んだも同然だからです。　ここに残ることもできません。なぜなら、不浄に満ちた罪人である私が、どうして再びあの聖なる父と語り合うことができるでしょうか。もし私があえてそうすれば、あの扉から飛び出した炎が、私を焼き尽くしてしまうでしょう。　むしろ、私を知る者が誰もいない別の国へ逃れるほうがよい。なぜなら、一度死んでしまった以上、もはや私にとって救いの望みは残されていないのだから。

彼女はすぐに荷物をまとめ、別の町へと去り、外見を変えて宿屋に身を寄せた。――彼女にこうしたことが起きている時、至福のアヴラミウスには幻視があった。　彼は、恐ろしく、途方もなく巨大で、見た目が忌まわしく、怒りを吐き出している大蛇が、自分の修道室まで這い寄り、鳩を見つけるとそれを飲み込み、再び元の場所へ戻っていくのを見た。眠りから覚めた聖人は深く悲しみ、苦々しく泣きながら、こう独り言をつぶやいた。

「まさかサタンが聖なる教会に迫害を仕掛け、多くの人々を信仰から逸らそうとしているのだろうか。まさか教会に分裂が生じるのだろうか？」

主に向かって祈った後、彼はこう言った。

「人を愛し、すべてをご存知なる主よ、この幻の意味を理解できるのはあなただけなのです。」

二日が過ぎた後、同じ蛇が再び幻として彼の前に現れた。聖人は、その蛇が巣穴から這い出し、自分の修道室へと入り込み、自分の足元に頭を差し出して、そこで息絶えるのを見た。その鳩が蛇の腹の中から見つかったとき、聖人は手を伸ばして、生き生きと無傷のままの鳩を手に取った。　再び目を覚ますと、聖人は自分の小部屋の扉越しに、共に修道生活を送っていた少女に向かって何度かこう呼びかけた。

「なぜ、もう二日も怠けて、主を賛美しないのか？」

しかし、返事はなかった。修道室の扉を開けてみると、姪の姿はなく、自分に現れた幻視が彼女に関するものであると悟ると、彼は泣きながらこう言った。

[7473] おそらく、その聖人の弟子の一人であった。

「ああ、私は悲しみに暮れる。狼が私の子羊をさらい去り、私の愛する子が捕らえられてしまったのだ。」そして、目に涙を浮かべて叫んだ。

「全世界の救い主よ！　あなたの羊の群れの囲いへと、あなたの小羊マリアを戻してください。そうして、私の老いが悲しみと共に地獄へ下ることのないように。主よ！　私の祈りを軽んじないでください。どうかあなたの恵みを送り、彼女を蛇の口から救い出してください。」

聖女が去ってから二日が過ぎ、その間、アヴラミイは前述の幻視を見続けていた。マリアは叔父のいない生活を送って二年が経ち、彼は昼夜を問わず彼女のために神に祈り続けた。二年が過ぎた頃、[7474] 、ある人物が彼女がいる場所や生活の様子を彼に伝えた。 聖人は知人の一人に頼み込み、彼女について詳しく知るためにその場所へ赴いてもらった。遣わされた者はその地へ向かい、マリアの消息を確かめると、戻ってきてそのすべてを聖人に報告した。　その話を聞いた聖人は、戦士の装いに身を包み、顔を隠せるように大きくて非常に高い帽子を被り、金貨一枚を手に取り、馬にまたがって旅立った。彼はマリアが滞在していた宿屋に到着し、微笑みながら宿屋の主人にこう言った。

「友よ、お前のところに美しい娘が住んでいると聞いた。彼女を見せてくれ。その姿を心ゆくまで眺めて楽しみたいのだ。」

宿屋の主人は、彼の白髪交じりの頭を見て、心の中で嘲笑した。彼が不貞な目的で彼女のことを尋ねていると悟ったからだ。そしてこう答えた。

「確かに、私のところにはそんな娘が住んでおり、彼女はとても美しい。」

その聖女は、実に美しい女性だった。その後、老人は楽しげな眼差しで彼に言った。

「彼女を私のところへ連れてきてくれ。今日、私を楽しませてほしいのだ。」

そしてマリアが招かれると、彼女は老僧のもとへやって来た。聖人が、彼女が淫らな装いをしているのを見た途端、泣き出したい衝動に駆られた。しかし、彼女に正体を見破られないように、また、彼だと気づいて逃げ出さないように 、彼は辛うじて涙をこらえた。 二人が座って酒を飲んでいると、この素晴らしい男は自ら彼女に言い寄った。すると彼女は立ち上がり、彼を抱きしめて首にキスをし始めた。　彼女が彼にキスをしている間、彼女は、清らかで、数々の武勇によって鍛え上げられた彼の体から漂う芳香を感じ取った。その時、彼女は禁欲を始めた当初のことを思い出し、ため息をつき、涙を浮かべてこう言った。

「ああ、なんて悲しいことだろう！」

ホストは彼女に尋ねた。

「マリア、君はもう2年も私たちと一緒にここに住んでいるが、君からそんな言葉やため息を聞いたことは一度もない。一体、今どうしたんだ？」

彼女はこう答えた。

「もし私がもっと早く死んでいたら、幸せだったでしょうに。」

聖アヴラミイは、マリアに自分の正体がバレないように、荒々しい口調で彼女に言った。

「君は今、私のところに来たからといって、自分の罪を思い出したのか。」

彼は硬貨を取り出し、宿屋の主人に手渡して言った。

「友よ、この娘と楽しく過ごせるよう、盛大な宴を催してくれ。私は彼女のために遠くから来たのだ。」

ああ、彼にはどれほどの英知があり、どれほどの霊的な知恵があったことか!

五十年にわたる修道生活の中で、腹いっぱいパンを食べることも、水を十分に飲むこともなかった男が、今や、滅びゆく魂を救うために、肉を食べ、ワインを飲んでいるのだ。　天国では、聖なる天使たちの位階が、この至福の父の偉業、その寛大さ、そして賢明な計略に驚嘆した。彼は、罪の汚れから滅びゆく魂を救うために、肉を食べ、ワインを飲んだのだ。

[7474] 彼女はランプサコス近郊のアッスという町へ身を隠した。

ああ、賢者たちの知恵よ！　ああ、賢明な者たちの知性よ！

宴が終わると、その娘は彼にこう言った。

「ご主人様、立ち上がって寝床へ行きましょう。そこで眠りましょう。」

彼は答えた。

「行こう。」

二人が寝室に入ると、アヴラミイは高く敷かれた大きなベッドを目にし、その上に座ってマリアに言った。

「扉を閉めて、こっちに来て、私の靴を脱がせてくれ。」

彼女は扉を閉めると、彼のところへ近づき、彼は彼女に言った。

「マリアよ、もっとここに近づいてくれ。」

彼女が近づくと、彼は彼女を掴み、逃げられないようにしっかりと抱きしめ、再び彼女に口づけをした。それから、頭から軍帽を脱ぐと、彼は泣き出し、彼女にこう言った。

「わが子よ、マリア、私を認識しないのか？　私こそがあなたを育てたではないか。どうしたのだ、わが子よ？　誰があなたを堕落させたのか？　かつてあなたが持っていた天使のような姿はどこへ行ったのか、わが子よ？　あなたの節制と涙に満ちた嘆きはどこへ行ったのか？　絶え間ない徹夜祈りと、地にひれ伏しての祈りはどこへ行ったのか？　まるで天の高みから溝へと降りてきたかのようだ、わが子よ！　罪を犯した時、なぜ私に話してくれなかったのか。そうすれば、私の最愛のエフレムと共に、悔い改めの行いを担うことができたのに。なぜこのようなことをしたのか。なぜ私を傷つけ、これほど恐ろしい悲しみに陥れたのか？　神お一人を除いて、罪のない者などいるだろうか？

これを聞いて、マリアは彼の腕の中で、まるで魂のない石のようで、恐れと恥を同時に感じていた。そして、聖人は続けた。

「答えないのか、わが子マリアよ？　私の命よ、私にさえ答えないのか？　私はお前のためにここに来たのではないのか？　審判の日に、私はお前のために神に答えるつもりだ。お前の罪の悔い改めを、私が引き受ける。」

そうして彼は真夜中まで、泣きながら彼女に懇願し、諭し続けた。一方、彼女は少し落ち着きを取り戻すと、涙ながらに彼にこう言った。

「恥ずかしくて、あなたを見ることができません――不浄な行いで汚れている私が、どうして神に祈ることができるでしょうか？」

すると彼は彼女にこう言った。

「娘よ、お前の罪は私に負わせてください。神が私の手を通じてお前の罪を裁かれるように。ただ、私の言うことを聞いて、行って、再び自分の独房に閉じこもってくれ。エフレムもあなたのために神に祈っている。私の娘よ、この老身を憐れんでくれ。お願いだ、私の命よ、私と一緒に来てくれ。」

「もしあなたが、私が悔い改める機会があり、神が私の祈りを受け入れてくださると確信しているのなら、私は行って、あなたの尊い御身にひれ伏し、聖なる御足の足元に口づけをいたします。あなたが私にこれほど慈悲深く接してくださり、この不浄な生活から私を救い出すためにここに来てくださったお礼として。」

そして、彼の足元に頭を伏せ、彼女は一晩中泣きながらこう言った。

「このすべてに対し、私はあなたに何をお返しすればよいのでしょうか？」

朝になると、彼は彼女に言った。

「娘よ、立ち上がって、行ってください。」

「ここに少しの金と衣服があります」とマリアは言った。「これらをどうなさいますか？」

「すべてここに残しておきなさい」と聖人は言った。「それは不正に得た財産だからだ。」

そして、すぐに立ち上がって、二人はその場を去った。　アブラミイはマリアを馬に乗せ、自ら馬を引いて、彼女の先頭を歩いていった。彼は喜びながら歩いていた。まるで、迷い出た羊を見つけ、喜びながらそれを肩に乗せる羊飼いのように（ルカ15:4–5）、聖人もまた、心に喜びを抱いて歩いていた。　彼が自分の場所に着くと、そこで再びマリアを、かつて自分自身が修行していた内側のケリアに閉じ込め、自身は外側のケリアに残った。マリアは、羊毛の粗布を身にまとい、柔和に神の助けを求めながら、熱心に悔い改めていた。　彼女の悔い改めと祈りは、それと比較すれば、私たちの悔い改めや祈りはまるで影のようで、何の意味も持たないほどであった。そして、誰一人として滅びることを望まず、すべての人に悔い改めを望まれる慈悲深い神は、真に悔い改めた御自分のしもべを憐れみ、彼女の罪を赦された。　そして、彼女を赦した証しとして、神は彼女に、訪れる人々の病を癒す恵みを授けられた。福者アヴラミイはさらに十年を生き、マリアの深い悔い改め、その涙、断食、労苦、そして神への熱心な祈りを見て、慰められ、神を賛美した。　その後、彼は主のもとで息を引き取った。彼は七十歳の時に亡くなった[7475]。彼の臨終の時には、街のほぼ全員が駆けつけ、誰もが熱心に彼の尊い遺体に近づき、病める者たちは癒やしを受けた。　キリストの羊であるマリアは、叔父の死後、昼夜を問わず神に懇願し、さらに五年間、厳格な禁欲生活を送った。その地に住む人々は、夜間にその前を通りかかると、何度も泣き声や計り知れないほどの嗚咽を耳にし、立ち止まって驚き、神を賛美した。　このように、真に悔い改め、神に喜ばれた聖マリアは、安らかにこの世を去り、今や、心を打つような涙の後、聖徒たちと共に主のもとで喜びに満ちて過ごしている。主には永遠の栄光あれ。アーメン。

コンダク、第3調：

あなたは地上で天使のごとく肉体を帯びて現れ、禁欲によって植えられた木のごとくあり、節制の水によって善きものへと立ち返り、あなたの涙の流れによって汚れを洗い清めた。このゆえに、アブラミエよ、あなたは神の御霊の住まいであった。

我らの尊き父、ロストフのアヴラミイの生涯

記念日：10月29日

尊い父アブラミイは、敬虔な両親の息子であった[7476]。若くして実家と世俗の喧騒を離れ、修道生活に入り、自らを神に捧げた[7477]。

肉体を霊に服従させ、苦行に身を捧げ、涙をもって魂を清め、奇跡を行う恵みにあずかるに至った。

[7475] それは360年頃のことである。

[7476] 聖アヴラミイ・ロストフスキーの生涯は、ここでは最も古い『伝記』に基づいて記述されている。この『伝記』は、『プロローグ』において要約されて再叙述され、マカリー大主教の『大ミネイア・チェチイ』には、いくつかの後世の追加が加えられている。　聖アヴラミイの最も古い『生蹟』は、その後二度にわたり補足された。主に冒頭部分において、ロストフに来るまでのアヴラミイの生涯が語られている。

[7477] 最初の補足部分によると、アヴラミイはガリツキー地方のチュフロム（現在のコストロマ県）で生まれ、ノヴゴロド管区へ赴き、現地の修道院における修道生活に触れた後、ラドガ湖畔のヴァラーム修道院で出家した。　二次的な補足によると、チュフロムに住んでいたアヴラミイの両親は、まだ異教徒であったという。アヴラミイは当初イベリックと呼ばれており、17歳になるまで病床に伏し、麻痺のため歩くことができなかった。ノヴゴロドを訪れた商人たちが、彼にキリスト教の教えの初歩を伝えた。　イベリックは深く思索を重ねた末、キリストを信じるようになり、突然病から癒やされ、ノヴゴロドの領内へと向かい、ヴァラアム島でアヴェルキイという名で洗礼を受け、その後、アヴラミイという名で修道士としての剃髪を受けた。

彼の時代、ロストフでは[7478] まだすべての人が聖なる洗礼を受けておらず、多くの人が異教徒のままでした。市のチュド地区では、石の偶像ヴェレスが崇拝されていました[7479] 。その偶像に宿る不浄な霊はすべての人に恐怖を与え、キリスト教徒たちは偶像の近くを通ることを恐れていました。聖アヴラミイは、ロストフに残る異教の痕跡を根絶しようという熱意に燃えていた。彼は、偶像を打ち砕くための力と聖霊の恵みを授けてくださるよう、主なる神に祈ったが、その祈りは長い間聞き入れられなかった。

ある日、聖アヴラミイは悲しみと困惑のうちに、偶像の近くに座っていた。すると、彼は自分に向かって歩いてくる威厳ある老人の姿を見た。アヴラミイは立ち上がり、急いでその老人を迎えに出た。互いに挨拶を交わし、祝福を授けた後、聖アヴラミイは尋ねた。

「師よ、どこから来られたのですか。どこの国の方ですか？」

「私はコンスタンティノープル出身です、父よ。この地では、よそ者であり旅人です。」「教えてください、父よ。なぜあなたは、このヴェレスの偶像のそばで悲しみに沈んで座っているのですか？」

「私は、この偶像を打ち砕く力が与えられるよう、主なる神に祈っているのです」とアヴラミイは答えた。「しかし、主は私の祈りを聞き入れられず、こうして私は悲しみに沈んで座っているのです。」

「もし望みを叶えたいのなら、父よ」と長老はアヴラミイに言った。「コンスタンティノープルへ行き、聖ヨハネ・テオロゴスの家を探し出し、そこに入って、聖ヨハネ・テオロゴスの聖像に祈りなさい。そうすれば、無駄に終わることはなく、望みを叶えられるだろう。」

聖アヴラミイは遠い道のりを前に悲しんだが、長老は言った。「主なる神が、お前の道のりを短くしてくださるだろう！」

至福のアヴラミイは、聖霊に満たされ、長老の祝福を受けて、道のりの遠さを忘れ、旅立った。

敬虔なアヴラミイが城外に出て、イシュヌ川[7480] を渡ったとき、見知らぬ男に出くわした。その男は、その姿だけで畏怖の念を抱かせるような風貌をしていた。頭髪はほとんどなく、大きな丸い顎鬚を生やし、その顔には敬虔な表情が浮かんでおり、実に美しい姿であった。その手には杖を持っていた。

至福のアヴラミイは、その男に頭を下げた。

見知らぬ男が言った。

「どこへ行くのですか、老僧よ？」

「神学者ヨハネの家を探しに行くのだ」とアヴラミイは答えた。

見知らぬ男は言った。

「さあ、老僧よ、この私の杖を受け取り、引き返して、偶像ヴェレスのもとへ行き、神学者ヨハネの名においてこの杖でそれを打ちなさい。そうすれば、その忌まわしき者は塵と化すだろう。」

そう言い終えると、その見知らぬ男は姿を消した。

至福のアヴラミイは、それが神学者ヨハネであることを悟った。

[7478] ここでいうのは、もちろん、かつて「大ロストフ」と呼ばれていた古代のロストフのことである。現在は、ヤロスラヴリからモスクワへと続く幹線道路と鉄道沿いにある、ヤロスラヴリ州の郡庁所在地である。ロストフは、ロストフ湖、あるいはネロ湖と呼ばれる湖のほとりに位置している。

[7479] 「チュドスキー・コンツ」とは、ヤロスラヴリからの道の左側にある街の一部分を指す。――古代ロシア・スラブ人の異教の神ヴェレスは、別名ヴォロスとも呼ばれ、年代記によれば家畜の守護神とされていた。

[7480] イシュナ川は、ロストフからモスクワへ向かう道を、ロストフ市のすぐ近くにあるネロ湖に注ぐ地点で横切っている。その場所は、ヴェレス像が立っていた場所から4ヴェルスタ離れたところである。

恐怖と喜びに包まれながら、アヴラミイは引き返し、何の妨げもなく偶像に近づき、神学者ヨハネの名において杖でそれを打ちつけると、その偶像はたちまち塵と化した。

アヴラミイが聖なる長老と出会ったその場所に、彼は聖ヨハネ・テオロゴスの名を冠した教会を建立した。また、ヴェレスという偶像が立っていた場所には、尊者アヴラミイは司教の祝福を得て、主の顕現の名を冠した小さな教会を建て、その傍らに修道院の部屋を設け、修道士たちを集めて共同生活を営んだ[7481]。

尊者アヴラミイは、キリストを信じない異教徒たちから多くの迫害を受けた。ある時、彼らは彼が建てた聖堂を破壊し、焼き払おうとさえしたが、神は尊者の祈りと忍耐ゆえに、それを許さなかった。

しかし、聖アヴラミイは自らの教えと忍耐によって、短期間のうちにすべての不信仰者をキリストのもとへと導いた。老若男女を問わず全員が洗礼を受け、神を賛美する礼拝や徹夜祈祷会に通い始めた。女性や子供たちでさえもそうであった。　聖アヴラミイは、聖書の朗読と霊的な教えによって、彼らの信仰の心を強めた。多くの子供たちが両親の家を離れ、密かに聖人のもとを訪れて修道生活に入った。こうして、聖人が神の御言葉によって教え導いた修道者たちの数は増えていった。

その後、聖アヴラミイは大きな教会を建立し、それをキリストの花嫁のように、素晴らしいイコンや聖書で飾り立て、荘厳な聖歌を定着させた。

ロストフの諸公は、アヴラミイ神父を深く尊敬し、彼が設立した修道院に特別な優遇措置を与えた。すなわち、修道院の建設のために多くの領地を、また修道士たちの生活費のために村々を寄進したのである。

修道院の発展と繁栄を目の当たりにしたロストフの司教は、公爵たちと協議した上で、アブラミイ修道院をアルヒマンドリトの位に昇格させ、尊者アブラミイをアルヒマンドリトに任命した。

それ以来、アヴラミイはさらに熱心に修行に励み、断食と祈りに身を捧げ、労苦に労苦を重ねた。彼は謙遜さを際立たせ、すべての人々の模範となり、訪れる者すべて――身分の高い者も低い者も等しく――に対して偽りのない愛を示した。

古来より善を憎む悪魔は、尊者アヴラミイを安らかにさせず、彼を標的にして、昼夜を問わず苦悩を与え続けた。しかし、キリストの恵みと十字架の印に守られていたアヴラミイは、恐れることはなかった。

ある日、聖アヴラミイが自分の独房で、聖体礼儀の前に、聖体拝領のための定例の祈りを読み終え、教会へ向かう前に手を洗おうとしたとき、悪魔は聖人に不快な思いをさせようと、洗面器の中に入り込んだ。　器の中に不浄な霊の存在を察知した聖人は、聖なる十字架を取り、器の上に置き、十字の印で器を囲み、そのままにしておいた。長い間、聖人はそれに触れようとしなかった。悪魔は十字架の力に打ちのめされ、苦しみ、器から出ることもできなかった。

当時、ロストフの諸侯には、城の外へ狩りに出かけ、帰路に修道院に立ち寄り、教会で祈りを捧げ、聖アヴラミイから祝福を受けるという習慣があった。今回もまた、そうであった。　いつものように公爵たちは尊者アヴラミイの独房を訪れたが、彼はそこにいなかった。というのも、彼は毎日、修道院の兄弟たちのために働くのが習慣だったからだ。修道院のパン屋のために薪を割いたり、兄弟たちの毛皮の衣を洗ったり、厨房に水を運んだりしていたのである。　公爵たちが来たという知らせを聞くと、彼は彼らに祝福を与えるために急いで独房へと戻った。

その間、修道院の部屋にいて聖者を待っていた諸侯たちは、聖十字架で覆われた器に気づき、それが何を意味するのかと首をかしげた。　ある公爵が、その器から十字架を取り外して祝福を受け

[7481] 聖アヴラミイによって創建されたボゴヤヴレンスキー修道院は、現在も同地に存在しており、ロストフのクレムリンから1ヴェルスタ、ヤロスラヴリ方面からロストフに入る入口付近、道路の左側に位置している。

ようと大胆にも手を伸ばすと、たちまち悪霊が器から、黒く悪臭を放つ煙のように飛び出し、そこにいた者全員を恐怖に陥れた。

聖人が小部屋に近づくと、入り口で邪悪な霊が彼を迎え撃ち、アヴラミイを罵倒し、こう脅し始めた。

「お前が、目に見えぬ神の力によって、私を苦しめ、十字架の力で焼き尽くしたように、私もまたお前に悪事を働き、まもなくお前を打ち負かす。お前に誹謗中傷を浴びせ、苦しみと恥辱にさらす。お前は鞍のない斑のあるロバに乗せられ、女性の赤い靴を履かされることになるだろう。　そして、私がお前から受けたのと同じように、お前も多くの苦しみを味わうことになるだろう。

聖人は十字の印で身を守ると、悪魔はたちまち姿を消した。

アヴラミイが修道室に入ると、諸侯たちは、十字架で覆われた器から立ち上った悪臭を放つ煙や、起こった出来事について尋ね始めたが、聖人はそれについて何も語らず、ただ諸侯たちに魂に益となる教えを授けて祝福し、平穏のうちに送り出した。

しばらくして、聖人に復讐しようと、悪魔はある戦士の姿をとって、ウラジーミルの大公のもとへ現れ、アヴラミイに対して重い告発を繰り広げ始めた。

「陛下、私はあなたに大きな秘密を明かしたいのです」と悪魔は言った。「あなたの領土にあるロストフという町に、アヴラミイという名の修道士がいます。彼は魔術師ですが、外見上は謙虚で聖人のように見え、人々を惑わしているのです。　彼は地中に巨大な貯蔵庫を見つけ、金で満たされた銅の器を発見しました。それは本来、 、貴方の領土に帰属すべきものです。 この貯蔵庫で見つかった金の器や金の帯、鎖の価値は計り知れず、銀やその他の宝物の数は数え切れないほどである。彼はこれらの財宝を使って壮大な教会を建てたが、あなたにはそのことを告げなかった。

大公は修道士に対して激しい怒りを燃やし、一人の凶暴な戦士を彼のもとへ送り込み、一言も話さずにアヴラミイを捕らえ、見つけたままの姿で連れてくるよう命じた。

これらすべては、悪霊の唆しによって起こったことだった。

大公から遣わされた戦士が現れた時、聖人は共同の祈りを終えた後、羊毛の衣一枚を身にまとい、靴も履かずに、独房で祈りを捧げていた。戦士は一切の慈悲もなく、聖人に一言も発させることも、服を着せることも、靴を履かせることも許さず、彼を馬に乗せてウラジーミルへと急がせた。

ロストフ湖の対岸で、彼らは、斑のあるロバを耕し、手に赤い女性の靴を持っていた男に出くわした。兵士は聖人をそのロバに乗せ、女性の靴を履かせ、その恥ずべき姿のまま、大公のもとへ急いで連れて行った。

大公は、告発した戦士も自分の前に立たせるよう命じた。

その偽りの戦士は、宝物の隠し場所について、以前と同じ言葉を修道士に対して繰り返した。

聖人はこれを聞くと、両手を天に掲げ、悪霊を戒めてこう言った。

「我らの主イエス・キリストの名によって、お前に命じる。私をこのような言葉で誹謗したお前は、一体誰なのか、答えよ。」

悪魔は震え上がり、こう言った。

「私は悪魔だ。古来より人類、とりわけ神を畏れる修道士たちの善を憎んできた。老僧よ、お気づきだろう。私が以前あなたに言った通り、実行してしまったのだ――あなたがそのみすぼらしい器の中で私を苦しめた報いだ。」

そう言い終えると、悪魔は瞬く間に姿を消した。

大公は、目の前の尊者に対する悪魔の誘惑と侮辱を目の当たりにし、大きな恐怖に襲われた。大公を取り囲んでいた者たちも皆、同様に恐怖に包まれた。そして大公は尊者に許しを請い始め、涙ながらにこう言った。

「父よ、私があなたの不本意な来訪の原因であり、私はあなたをひどく侮辱してしまいました。父よ、私があなたを怒らせたすべてのことをお許しください。敵が、父よ、私の心を曇らせ、あなたに対する怒りを私の中に煽り立て、私を罪へと陥れたのです。」

長老は言った。

「主はあなたを赦してくださいます、殿。これは古き敵である悪魔の仕業だからです。ですから、殿、これを不思議に思わないでください。悪魔は古くから人々に敵対しており、特に神を畏れる者たちに妨げをもたらすことに慣れているのです。」

公爵は、尊者（プレポボド）の謙虚さと、まるで長老が何の悪も経験していないかのような穏やかで柔和な言葉を見て、さらに彼を称え、大きな栄誉を授けた。

修道院の設立にあたり、公爵は多くの家屋、村、そして奴隷を寄進し、アブラミエフ修道院を自身の修道院とし、ロストフの他のすべての修道院よりも上位に位置づけ、これらすべてを勅許状で正式に認定した。

これらすべてを終えた後、公は尊者を見送った。

尊者アブラミイは、自らの修道院で深い謙遜のうちに暮らし、労苦に労苦を重ね、幼い頃から愛していた主のもとへ安らかに旅立った[7482]。

トロパリオ、第1声：

神の恵みによって啓発され、不信仰な人々を神の知恵の光へと導かれた。そして死後も、その輝かしい生涯の光によって、信仰をもってあなたのもとに駆け寄る者たちに癒やしを注ぎ出しておられる、わが父アブラミイよ、キリスト・神に、私たちに偉大な憐れみをお与えくださるよう祈ってください。

コンダク、第2調：

アブラミエよ、キリストの軛を受け入れ、その十字架を肩に担ぎ、主に従い、主の家に植えられ、ナツメヤシのように、またレバノンの杉のように栄え、子孫を増やし、　霊的な願いを叶える人よ。愛すべき使徒、神学者ヨハネから恵みを受け、杖で偶像を打ち砕き、それを塵のように散らした。尊き者よ、あなたは偉大な奇跡行者として現れた。それゆえ、キリストなる神に、私たちすべてのために絶えず祈り求めてください。

11月12日

10月30日（旧暦）

[7482] 聖アヴラミイは、自身が設立した修道院に埋葬された。 その聖遺骨は現在、修道院のメインとなる「主の顕現」に捧げられた石造りの大聖堂に併設された、彼の名を冠した小聖堂内の銀製の聖遺物箱に安置されており、この大聖堂はイヴァン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイ皇帝の命と資金によって建設され、1553年10月2日に皇帝の臨席のもとで奉献されたものである。 ツァーリ・イヴァン・ヴァシリエヴィチは、ロストフを度々訪れ、現地の聖地を参拝していた。 カザン攻略以前のある時、アヴラミエフ修道院を訪れた際、彼はアヴラミイの墓に安置されていた、同聖人が偶像を打ち砕いた際に用いた杖を持ち帰った。その杖の柄として用いられていた銅製の十字架は、現在も聖アヴラミイ礼拝堂の入り口にあるアーチ内の独立したキオートに保管されている。

エーゲ海主教聖殉教者ジノヴィオスと、その妹ジノヴィアの殉教

記念日：10月30日

これらの聖なる殉教者たち――ジノヴィイとその実の妹ジノヴィア――は、キリキア地方のエガスという町[7483] で、敬虔な両親の間に生まれた。彼らはそこで、神への畏敬と敬虔さの中で育てられた。　彼らがまだ幼い頃、両親は主のもとへ旅立ち、子供たちに広大な財産を残した。若さにもかかわらず、ジノヴィオスとジノヴィアは知恵に富み、徳に堅固であった。この世の虚しさを悟った彼らは、すべてを捨ててキリストに従うことを決意した。　ジノヴィアは、両親から受け継いだ財産のうち自分の分を兄に渡し、それを貧しい人々に配るよう頼んだ。そして自身は、天の花婿のために、沈黙を守り、清らかな処女性を保ちながら、自発的な貧しさの中で暮らした。　ジノヴィイは、自分と妹の財産の両方を手に入れ、それを貧しい人々に配り始め、やがてすべてを使い果たし、まるで貧しい人々の一人のようになった。しかし、孤児を顧み、御自身を信頼する者を決して見捨てない神は、貧しい人々に富を分け与えたことに対し、聖なる兄妹を天の恵みで豊かにされた。　神の力強い右の手は、ジノヴィイの生涯を通じてあらゆる災いから彼女を守り、悪魔の誘惑を追い払った。また、ジノヴィイは主から、自らの手で病を癒すという賜物を受けた。かくして、貧しい人々に惜しみなく施しを配ったその手に、神は奇跡を行う力を授けたのである。　人がどのような病に冒されていようとも、どのような病に苦しんでいようとも、聖ジノヴィイがその手に触れるだけで、癒やしを得ることができた。　この神の御心に適う者は、生涯を通じて偉大な慈善を行い、時には貧しい人々に財産を分け与え、時には神の恵みによって病める者に癒やしをもたらした。また、多くの人々から悪霊を追い払い、悲しみに沈む者を慰め、苦難にある者を助けた。　その美徳に輝き、奇跡によって称賛された彼は、故郷の町で司教に選出された。この善良な牧者は、熱心に神の教会を導き、絶えず人々に助けと恩恵を与え、病人を癒やした。ある日、アンティオキアからある女性が聖人のもとを訪れた。彼女の胸には治らない潰瘍があった。　この女性は治療のために多額の費用を費やし、医師たちに病の治癒を求めましたが、彼らは彼女を全く助けることができず、かえってその激しい病はますます悪化し、もはや死の危機に瀕していました。 彼女を見た聖ジノヴィオスは憐れみを感じ、 自らの手でその潰瘍に触れ、患部に十字の印を刻んだ。するとたちまち潰瘍は消え去り、その後完全に健康を取り戻したその女性は、大きな喜びをもってアンティオキアの自宅へと帰っていった。

キリストを信じていなかった別の女性、ある高官インディスの妻も、同じ病に苦しんでいたが、聖ジノヴィオスの治療によって彼女もまたその病から解放された。起こった奇跡に深く感銘を受けた彼女は、夫や子供たちと共に自らキリストに帰依した。　彼らは皆、聖なる洗礼によって救われた。こうして、この妻は肉体の健康と、魂の救いを得たのである。

その間、不信心なディオクレティアヌス帝は、キリスト教徒に対して恐ろしい迫害を開始した。その時、キリキア地方には、キリストの御名を告白した者たちをすべて拷問にかけるために、リシウスという領主が到着した。エガスでは、まず最初に、クラウディウス、アステリウス、ネオンという三人のキリスト教徒の青年たちが迫害を受けた。　――リシウスは彼らを捕らえ、様々な拷問にかけた末、ついに町の外で十字架に釘付けにした。聖ジノヴィオスの噂を耳にした彼は、兵士たちを遣わして彼を捕らえさせた。その修道士がリシウスの前に引き出されると、公爵は彼にこう言った。

「お前と長々と議論するつもりはない。お前たちキリスト教徒は冗長な言葉を好むと知っているからだ。手短に言う。お前には『生』か『死』の選択肢を提示する。我々の神々に拝礼すれば『生』、拝礼しなければ『死』だ。」　自分で望む方を選べ。犠牲を捧げれば、命は助かるだけでなく、我々から名誉も与えられる。あるいは、その誤った信念に固執することもできるが、その場合は恐ろしい苦痛に耐え、凄惨な死を遂げることになるだろう。

聖ジノヴィイは、公爵の言葉に微塵も怯むことなく、断固としてこう答えた。

[7483] エギはキリキア（小アジア南東部）にある都市で、ローマ支配時代には海軍の要衝であった。

「キリストなきこの一時的な人生は、生ではなく死である。いや、私はむしろ、私の創造主のために一時的な苦しみを受け入れ、その後、主と共に永遠に生きることを選ぶ。この一時的な人生のために主を捨て、その後、地獄で永遠に苦しむよりは、そうする方がましだ。」

この言葉を聞いた不信心な公爵は、聖人を裸にし、十字架に縛り付け、容赦なく打ち据えるよう命じた。

「さあ、見てみよう」と彼は言った。「キリストが彼を救いに来るかどうか！」

聖女ジノヴィアは、兄である聖ジノヴィウスがキリストのために苦しんでいることを知ると、急いで聖人が拷問を受けている場所へと向かった。血まみれで傷だらけの兄が十字架に吊るされているのを見て、彼女は心を燃え立たせ、拷問者の前に立ち、こう言った。

「私も兄と同じようにキリスト教徒です。私は、同じ唯一の神であり、私たちの主イエス・キリストを信仰しています。ですから、あなたが私の最愛の兄を苦しめているのと同じように、私をも苦しめてください。私も同じ苦難の杯を飲み干し、同じ冠を戴きたいのです。」

拷問官は、聖ジノヴィアのそのような勇気と決意に驚き、こう言った。

「女よ、自らを滅ぼそうなどとするな。恥辱にまみれ、苦しみを耐え忍ばなければならないような、あのような恥ずべき拷問を自ら進んで受けようとするな。　何しろ、裸にされるよう強要されれば、お前は大きな恥を味わうことになる。また、拷問にさらされれば、耐え難い苦しみを味わうことになるだろう。だから、こう助言しよう。神々に生贄を捧げれば、すべての災いから解放されるだろう。」

これに対し、聖女はこう答えた。

「肉体の裸よりも、魂の裸の方がはるかに私を恥じ入らせるものです。一時的な苦しみよりも、永遠の苦しみの方が比べものにならないほど重いのです。私は、キリストに身を包んでいるので、裸にされることなど気にも留めません。また、キリストと共に十字架につけられたので、拷問者の手など恐れません。」　さあ、拷問者よ、好きにせよ。いかなる手段を用いても、私を私の主キリストから背かせはできない。

そこでリシウスは、彼女を裸にし、彼女の兄である聖ジノヴィオが受けたのと同じように殴打するよう命じた。それだけでは満足せず、拷問官は、赤熱した鉄の床を用意し、その上に二人の聖人を寝かせ、その下で火を燃やすよう命じた。

「さあ、」と彼は言った。「キリストがここに現れて、あなたたちを助けてくれるがいい。」

すると、聖人たちはこう答えた。

「私たちのキリストは私たちと共にいます。あなたにはその姿が見えないでしょう。キリストは天から恵みの露を私たちに注いでくださるので、私たちはこの苦しみを感じないのです。」

その後、聖人たちは沸騰する大釜に投げ込まれたが、そこでも何の害も受けなかった。彼らはまるで冷たい水の中に立っているかのように、ダビデの詩篇を歌い上げた。「しかし、あなたは私たちを敵から救い出し、私たちを憎む者たちを恥じ入らせてくださる」。これを見た拷問官は、彼らを城の外へ連れ出し、そこで首を刎ねるよう命じた。　聖人たちは言い表せないほどの喜びをもって死へと向かい、処刑の場に着くと、次のように祈り始めました。

「主なる神よ、私たちに善き業に励み、この世の旅路を終え、信仰を守り抜くことを許してくださったことを感謝いたします。どうか私たちを御栄光の共同者とし、御心に適った聖人たちの列に加え給え。あなたは永遠に祝福されますように。」

聖人たちが祈りを終えると、天から声が響き、彼らに冠を約束し、永遠の安息へと招いた。その間にも兵士たちが近づき、彼らの首を切り落とした。このような苦難を経て、彼らはこの世を去り、天国へと移った[7484]。 聖人たちの遺体は、一日中、埋葬されることなく地上に横たわっていた。し

[7484] 彼女たちの聖なる死は、285年10月30日に訪れた。

かし夜になると、長老ヘルモゲネスが密かにそれらを運び出し、一つの棺に納めた。こうして、これらの聖人たちは今、絶えず父と子と聖霊、すなわちすべての被造物から賛美される唯一の神を、今、常に、そして世々限りなく賛美している。 アーメン。

コンダク、第8調:

真の証人であり、敬虔さの宣教者である二人は、共に神に喜ばれる賛美の歌の中でふさわしく安らぎを得た。ジノヴィイは、賢きジノヴィアと共に生き、共に歩み、殉教の朽ちることなき冠を受けたのである。

聖殉教女エウトロピアの記念日

記念日：10月30日

聖エウトロピアは、イゲモン・アペリアンの前で、牢獄に閉じ込められたキリスト教徒たちを訪ね、彼らの信仰を強めているという罪で告発された。そのために彼女は絞首刑に処され、その遺体はろうそくの火で焼かれたが、彼女はまるでそれが炎ではなく水であるかのように、その苦痛に耐え抜いた。 そして、彼女を取り囲むすべての人々、彼女を拷問していた兵士たちも含めて、皆にはっきりと、すべての人を畏怖させる一人の男が見えた。その男は火を冷やし、聖なる殉教者に露を降らせていた。そのような拷問の中、彼女は主のもとへ魂を委ねた。[7485] 。

聖使徒テルティウス、マルコ、ユストス、アルテミスの記念日

記念日：10月30日

聖テルティウスは、使徒パウロの『ローマ人への手紙』を筆写し、その中で次のように自らについて述べている。*「主にあるあなたがたに挨拶を申し上げます。この手紙を書いたテルティウスです」*（ローマ16:22）。彼はソシパトラ[7486] に次いで、イコニアの第二代司教であり、そこで殉教の死を遂げた。

聖マルコは、使徒バルナバの甥であり、アポロニア[7487] の司教であった。聖使徒パウロはコロサイ人への手紙の中で、彼について次のように言及している： *「私と共に投獄されているアリスタルコスと、バルナバの甥であるマルコ（あなたがたは、『もし彼があなたがたのところに来たら、彼を受け入れなさい』という指示を受けている）」*（コロサイ4:10）。

聖ユストはエレウフェロポリの司教であり、聖アルテマはリストラクの司教であった[7488] 。後者については、使徒パウロが『テトスへの手紙』の中で次のように言及している。「アルテマかティキカをあなたのところへ送ったら、急いで私のところへ来なさい」（テトス3:12）。

[7485] アレクサンドリアで260年頃に逝去した。

[7486] その記念日は11月10日と1月4日である。

[7487] 古代には、シチリアやイリュリア（その住民はアポロニア人と呼ばれた）、トラキア、ハルキドンなど、いくつかの都市がこの名称を持っていた。

[7488] リストラはリカオニアの都市の一つである。ここで使徒パウロは足の不自由な人を癒やし、異教徒たちはこの奇跡を目撃して、パウロとバルナバを神々として崇めた。

シラクーサの司教、聖マルキアノの記念日

記念日：10月30日

聖マルキアヌス司教は、聖使徒ペトロの弟子であり、アンティオキアからシチリア島の都市シラクーサ[7489] に到着すると、ただ一つの祈りによって偶像崇拝の神殿を破壊し、多くの人々をキリストへと導き、光の子たちとし、数多くの奇跡を成し遂げました。彼はキリストのためにユダヤ人たちによって殺害されました[7490] 。

11月13日

10月31日（旧暦）

11月

聖殉教者エピマコスの記念日

記念日 10月31日

聖殉教者エピマコスは、敬虔なキリスト教徒の息子としてエジプトに生まれ、幼少の頃から心から神を愛し、唯一の神に仕えるという善き決意を抱いた。聖ヨハネ・バプティストに倣い、彼は荒野へと赴き、ペルシウス山[7491] で長い間過ごした。

彼には聖なる教父たちによる指導者はいなかったが、この過酷で荒涼とした修道生活において、彼の導き手となったのは聖霊ご自身であった。神への愛が、この困難な修行において彼を支え、強めたのである。　なぜなら、神への愛こそが、何よりも人間に徳を教えることができるからである。その愛こそが、聖なる使徒たちを、すべてのものを捨てて、地上の富を持たなかった主に従うように駆り立てたのである。また、その愛こそが、*「荒野や山々、洞窟や地の裂け目をさまよった」*　（ヘブライ人への手紙 11:38）と記されている敬虔な父たちを奮い立たせたのである。この愛に動かされた殉教者たちは、キリストのために勇敢に苦しみを受け、「わが花婿よ、あなたを愛し、あなたを求めて苦しむ」と叫んだ。　この愛は、聖エピマコスにも、荒野での苦行や労苦に耐え、目に見えない敵からのあらゆる災難に耐え、神の御前で聖く生き、神のために死を覚悟するよう教えた。　荒野での隠遁生活をすでに長年送っていた聖エピマコスは、アレクサンドリアのキリスト教徒たちが激しい迫害に遭っていることを知った。キリストの信徒たちの中には、凄まじい拷問を恐れて山や荒野に身を隠す者もいれば、信仰から離反する者もいた。　神への熱意に燃え上がった聖なる隠者は、自らの血をもってキリストへの信仰を証しし、主のために苦難を受け、それによって弱き者たちを励ますことを願って、荒野を後にし、アレクサンドリアへと向かった。　アレクサンドリアに到着すると、彼は不敬虔な偶像崇拝者たちが信者たちにどれほど残酷な拷問を加えているかを目の当たりにした。心の底から悲しみを抱きながら、彼は悪魔的な悪行が著しく増大し、多くのキリスト教徒が揺らいでいることに気づいた。異教徒たちは、主の神殿さえも冒涜していたのである。　この光景を目の当たりにした聖人は、勇敢にも偶像の神殿へと踏み込んだ。そこでは異教の祭りのため大勢の群衆が集まっ

[7489] シチリアは、アペニン半島に近い地中海の大島の一つである。シラクーサは、島の東岸に位置する最初のギリシャ植民地の一つであり、伝承によれば紀元前746年頃にコリント人によって設立され、後に島で最大かつ最も豊かな都市となった。

[7490] 聖マルキアヌスはシチリア島に到着すると、シラクーサ近郊の洞窟に定住し、キリストの信仰を盛んに広めた。その聖遺骨は現在、ガエート（イタリアの港湾および要塞）に安置されている。

[7491] 下エジプト、ナイル川の近く。

ていたが、至福のエピマコスは、皆の目の前で勇敢にも偶像を地面に倒し、粉々に砕いた。異教徒たちは即座に彼を捕らえ、イゲモン・アペリアヌスの元へ連行した。　イゲモンが裁判の席に座り、キリスト教徒たちに拷問を科しているのを見た聖人は、その不信心者を打ち倒そうと勇敢に彼に襲いかかった。もし周囲に立っていた人々が聖人を引き止めていなければ、アペリアヌスは聖エピマコスの手から逃れることはできなかっただろう。これほどまでに、この修道士は主なる神への熱意を示したのである。　イゲモンは、ぼろ服をまとったこの男のそのような大胆さに驚いた。彼は、彼を牢獄へ連行し、どのような拷問に処すかを決めるまでそこに留めておくよう命じた。

その牢獄には当時、キリストの偉大なる御名を告白したために投獄された多くの信徒たちがいた。エピマコスは彼ら全員を殉教の業へと励まし、　彼の励ましは信者たちを勇気づけ、奮い立たせたため、彼らのうち誰一人として恐れおののくことも、信仰から離れることもなく、皆、喜びをもって真の神のために自らの血を流し、様々な残酷な拷問の末、主のもとへ魂を捧げた。　ついに聖エピマコスもまた、キリストを信じるだけでなく、彼らの祭りを妨げただけでなく、さらにはイゲモン自身に手を上げ、彼を殺そうとしたという理由で、凄惨な拷問にさらされた。　まず聖人は絞首刑に処され、鉄の爪で削り取られ、その後、石を投げつけられて骨を砕かれたが、彼は苦しみの中でこう叫んだ。

「もし私の主イエス・キリストが、私のために十字架にかけられ、槍で刺され、酢を飲まされたのなら、私もまた、その苦しみにあずかるべきではないでしょうか。　私は、あなたがたに、これらよりもさらに大きな苦しみを与えてほしい。私の耳を引き裂き、私に唾を吐きかけ、私の頭に茨の冠を被せ、私の手に葦の杖を持たせ、私の全身を胆汁で満たし、私の体を潰瘍で覆い、私を十字架に磔にし、槍で貫いてほしい。私の主が耐え忍ばれたことを、私も耐え忍びたいのです。

大勢の群衆が周囲に立ち、聖エピマコスの拷問を見守っていた。その群衆の中に、片目しか見えず、もう片方の目には白内障を患っていた一人の女性がいた。聖人の苦しみを見て、彼女は泣いていた。その時、聖殉教者の血の一滴が飛び散り、彼女の患った目に当たった。　すると、彼女の目はたちまち癒やされ、もう片方の目と同じように見えるようになった。この驚くべき癒やしを目の当たりにして、その女性は叫んだ。

「この苦しみを受ける者が告白する神は、まことに偉大である。」

その後、拷問者たちはキリストの殉教者の首を切り落とした。こうして聖エピマコスは、これほど勇敢に苦難に耐えた主のもとへ魂を捧げたのである[7492]。

聖使徒スタキオス、アムリア、ウルヴァン、ナルキッサ、アペリウス、およびアリストヴロスの記念日

記念日：10月31日

聖スタキオスは、ビザンティウムにおいて聖使徒アンドレイによって司教に任命され、彼と共にアルギロポリスに教会を建立した[7493]。そこで多くの信徒を集め、彼らにキリストの戒めを説いた。こうして彼は丸16年間尽力し、そのような功績の後に、主のもとへ魂を捧げた。　その同じ使徒アンドレイは、アンプリウスとウルヴァヌスを司教に叙階した。アンプリウスはディオスポレ[7494]で、ウルヴァヌスはマケドニアで司教を務めた。

[7492] 聖人の殉教は250年頃であった。

[7493] アルギロポリス（現在のフンドゥクリ）は、ペラとガラタに近いコンスタンティノープルの郊外にある。

[7494] ディオスポルは、エルサレムの北西にあるパレスチナに位置していた。

彼らは熱心にキリストの教えを宣べ伝え、多くの偶像崇拝の神殿を破壊した。これにより、彼らはギリシャ人やユダヤ人の敵意を招いた。

キリストの信仰に対するこれらの敵は、聖なる殉教者たちを拷問にかけたが、彼らは朽ちることのない冠を受けるにふさわしい者とされた。

ナルキス、アペリウス、アリストヴルもまた、キリストの福音を宣教した。ナルキスはアテネで、アペリウスはイラクリオで、アリストヴルはブリタニアで宣教した。これらの聖なる人々は、多くの労苦と功績を経て、その魂を主の御許に委ねた。

コンダク、第8調:

全聖なる御霊の聖なる宝、また栄光の太陽の輝きとして、我らは義務として、賢明な使徒たち——アペリウス、ウルヴァン、そしてアリストゥルロス、アンプリア、ナルキス、スタキオ——を讃え歌おう。彼らは、我らの神の恵みの集いである。

聖スピリドンと聖ニコディモの生涯

記念日：10月31日

上から恵みに照らされたあらゆる魂は、純真である（箴言 11:26）。そこには偽りもなく、諂いもなく、その魂は神ご自身の器であり、住まいである。　それゆえ、使徒もこう言っている。*「神は、この世の弱い者を選び、強い者を恥じさせるためである」*（Iコリント1:27）

そのような選ばれた者たちの仲間入りをしたのが、私たちの尊い父スピリドンでした。この祝福された方はある村の出身で、学問を修めたわけでもなく、雄弁でもありませんでしたが、霊的な知恵と神に喜ばれる行いにおいて偉大でした。　あらゆる知恵の源である主への畏れを心に抱き、彼はペチェルスク修道院を訪れ、そこで厳格な修道生活を送り始めました。読み書きができなかった彼は、すでに若くはなかったにもかかわらず、学問を学び始めました。神に霊感を受けたダビデの詩篇をすべてしっかりと学び、暗唱できるようになりました。　この聖なる修道士は、衰えることのない熱意をもって修行に励み、自らの魂の救いを求めた。彼には敬虔な習慣があった。毎日、ダビデの詩篇を詠み、その日のうちに全編を読み終えるまで決してやめないというものであった。　当時、修道院長を務めていたピメン・ポストニクは、聖スピリドンが謙遜と勤勉さを備え、絶えず断食と祈りに専念し、あらゆる点で清廉潔白であることを見て、彼に神に喜ばれる務めを課した。それは、神聖な典礼においてキリストの聖体として捧げられるパン、すなわちプロスフォラを焼くことだった。　至福のスピリドンは、パン焼き場に身を置いても、以前の霊的修行を怠ることなく、自分に課せられた務めを、あらゆる敬虔さと神への畏れをもって果たすようになった。　自分の手による労働が、司祭によって捧げられる清く汚れなき犠牲のために用いられることを知っていた彼は、その仕事を遂行する際、口をもって神を賛美した。薪を割る時も、生地をこねる時も、彼は常に口でダビデの詩篇を詠み、日課通り毎日、詩篇全巻を読み終えるようにしていた。

ある日、いつもの仕事をこなしていたこの祝福された修行者は、プロスフォラを焼くための炉に火を入れた。すると突然、火が炉の口から噴き出し、聖人がいた建物の屋根を包み込んだ。　至福のスピリドンは、自分のマントを取り、それで窯の口を塞ぎ、毛皮の衣の袖を締め直して、それを手に井戸へと急いだ。水を汲み、素早く戻ると、兄弟たちを呼び集め、修道士たちに火を消すのを手伝ってほしいと頼んだ。　集まった修道者たちは、驚くべき光景を目にした。聖人が炉の口を塞いだマントは火の被害を全く受けておらず、毛皮の衣から水も漏れていなかったのだ。修道者たちは持ち込んだ水で燃え盛る建物を素早く消し止め、喜びながら神を賛美した。　この至福のスピリドンには、

ニコディムという名の兄弟という、労苦を共にする仲間が一人いた。彼はあらゆる点で聖スピリドンと心を一つにしていた。この至福の者と同様に、聖ニコディムもまた熱心に祈りを捧げ、彼と共に肉体的な労苦を分かち合っていた。

これらの修道者たちは、30年間にわたり、聖なる心をもって神に喜ばれる働きを行い、プロスフォラの焼き上げという務めを清く、汚れなく果たしました。それゆえ、善き信仰をもってこの世を去った彼らは、[7495]、神の栄光に満たされています。彼らは、その栄光を供え物のパンという形ではなく、顔と顔を合わせて見ているのです。　彼らの聖なる祈りによって、私たちもまた、ふさわしく「いのちのパン」――イエス・キリストの恵みと栄光――に満たされますように。父なる神と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、イエス・キリストに栄光と賛美と礼拝が捧げられますように。アーメン。

11月14日

11月1日（旧暦）

聖コスマスとダミアノ、無償の奉仕者にして奇跡行者の生涯と奇跡

記念日11月1日

聖コスマスとダミアンは、血のつながった兄弟であり、アジア[7496]の出身であった。彼らの父は異教徒であったが、母のテオドティアはキリスト教徒であった。夫の死後、未亡人として過ごし、キリストへの献身的な奉仕に時間を費やし、彼女は生涯を神に喜ばれることに捧げた。　そして彼女は、使徒が称賛するあの未亡人のようであった。*「真の未亡人で、独り身の者は、神に望みを置き、昼も夜も祈りと祈願に励んでいる」*（テモテへの手紙一 5:5）。自ら神に喜ばれる生き方を実践しつつ、彼女は最愛の子供たちであるコスマとダミアンにも同じことを教えました。なぜなら、彼女は彼らをキリスト教の信仰における正しい教えと聖書の学びの中で育て上げ、あらゆる美徳へと導いたからです。　成人し、主の律法に従って清らかな生活に堅く立つようになったコスマとダミアンは、あたかも地上の二つの灯火のように、善行によって輝いていた。　彼らは神から癒しの賜物を受け、人々のあらゆる病を治し、あらゆる不調や傷を癒やし、悪霊を追い払うことで、魂と体に健康をもたらした。　彼らは人々だけでなく家畜にも助けの手を差し伸べ、その対価として誰からも何も受け取らなかった。なぜなら、彼らはこれらすべてを利益のためでも、金や銀で富を築くためでもなく、神のために、隣人への愛を通じて神への愛を表現したいと願って行っていたからである。　そして、彼らはこの人々の間の治療を通じて、自らの栄光を求めようとはせず、神の栄光を求め、彼らにそのような癒しの力を授けてくださった主の御名を賛美するために、病を癒やした。　彼らは、薬草というよりはむしろ主の御名によって病を癒やし、報酬や見返りを求めず、ただ無償で、キリストの戒め「た

[7495] 彼らの至福の死は12世紀半ば頃であった。彼らの聖遺骨はアントニオスの洞窟に安置されている。

[7496] アジア、あるいはアシア――この名称は古代において、一貫した意味で用いられていたわけではない。当初、それはリディア地方にある、水が豊かで湿地帯の広がる小さな平野、すなわち現在の小アジア半島の西部中央部、エーゲ海東岸を指していた。　ローマ人は、この半島をほぼ等しい大きさの二つの部分に分け、黒海に面した北東部を「ポントス」、南西部を「アジア」と呼んだ。　各部分はいくつかの（必ずしも同じ数ではない）属州に分かれていた。キリスト教の確立に伴い、各属州は、教会的な観点から、さらにいくつかの司教区に分かれるようになった（『ヨハネの黙示録』においても、アジアの7つの教会について言及されている――黙示録1:4–11）。　時が経つにつれ、「アジア」という名称は、現在の小アジア半島全体、そして最終的には、私たちのヨーロッパの東側、同じ大陸上に位置する世界全体を指すようになった。

だで受けたから、ただで与えなさい」（マタイ10:8）[7497] を実践したのである。それゆえ、彼らは信者たちから「無償の医師」や「金銭を求めない者」と呼ばれるようになった。　このように徳高く人生の道を歩み終えた彼らは、安らかに、敬虔にこの世を去った。彼らは生前だけでなく死後も多くの奇跡によって称えられ、今や私たちの心と体の病を癒やす、温かな執り成し手であり、慈愛に満ちた治療者となっている。

彼らの無欲さと無償の診療については、次のような伝承がある。

パラディアという名の女性が、長年にわたり病床に伏しており、様々な医師からも何の助けも得られませんでした。聖コスマスとダミアノがあらゆる病気を癒やすと聞き、彼女は死を迎える前に二人が訪れてくれるよう願いを伝えました。　聖人たちはこの願いを聞き入れ、彼女の家へ向かった。すると、その女性は信仰によって、聖なる医師たちの到来を通じて癒やされ、健康を取り戻し、神のしもべたちにこのような癒やしの恵みを与えられたことを神に賛美した。　この恩恵に対する感謝の気持ちから、彼女は医師たちに贈り物をしようと考えた。しかし、彼らは、神から授かった恵みを売り渡すことはなかったため、誰からでも、いかなるものでも決して受け取らなかった。女性は、せめて一人だけでも、ごくわずかな贈り物を受け取ってほしいと懇願しようと決心した。　三つの卵を持って、彼女はこっそりと聖ダミアンのもとへ行き、聖三位一体の名において、この三つの卵を受け取ってほしいと、神にかけて懇願した。ダミアンは、三位一体の神の名を耳にすると、彼女が彼に課したその偉大な誓いのゆえに、その女性からこのささやかな贈り物を受け取った。　聖コスマは後になってこのことを知り、深く悲しみ、臨終の前に、ダミアンを自分の隣に埋葬しないよう遺言を残した。なぜなら、彼は主の戒めを破り、治癒の対価として女性から報酬を受け取ったからである。

聖コスマは主のもとで安らかに眠りについたが、時が経つにつれ、ダミアンの死の時も訪れ、彼はこの世の生涯を終えて永遠の命へと旅立った。

人々は困惑した――ダミアンをどこに埋葬すべきか。聖コスマの遺言を知っていたため、彼の兄弟をその隣に葬ることを敢えてできなかったからである。

彼らが困惑している最中、かつて悪霊に取りつかれていたが、聖人たちによって癒やされたラクダが突然現れた。そのラクダは人間の声で語りかけ、ダミアンをコスマの近くに埋葬することを躊躇う必要はないと告げた。なぜなら、聖コスマが女性から三つの卵を受け取ったのは、報酬のためではなく、神の御名のためであったからである。

こうして、二人の尊い遺骸は、いわゆるフェレマン（[7498]）に共に安置された。

ある時、収穫の季節に、その地方の住民の一人が自分の畑へ刈り出しに出かけた。炎天下の暑さに疲れ果て、一休みしようと、彼は樫の木の下へ行き、横になってぐっすりと眠り込んだ。眠っている間に、開いた口から蛇が這い込んできた。　目を覚ました農夫は、すぐには何の痛みも感じなかったため、再び畑での作業に取り掛かった。しかし夕方になり、農夫が家に帰り、夕食を済ませて寝床につくと、蛇が内臓を蝕み始めたため、凄まじい痛みを感じた。　患者は耐え難い苦痛に耐えきれず叫び出し、それによって家族全員が目を覚ました。家族たちは患者のそばに駆け寄り、その凄まじい苦しみを見たが、どうすることもできなかった。彼らは、それが一体どのような病気なのかさえ理解できなかったのだ。　そこで、周囲から何の助けも得られなかった病人は、即座に助けとなるコスマとダミアンに助けを求め、「聖なる医師たち、コスマとダミアンよ、私を助けてください！」と叫んだ。　聖人たちは直ちに助けに駆けつけた。病人は深く眠りにつき、眠っている間に口から蛇が這い出た。この奇跡を目撃した人々は恐怖に震え、聖なる敬虔な人々を称えた。蛇が這い出たとき、その男はすぐに目を覚まし、聖なる無償の医師たちの助けにより、完全に回復した。

[7497] 「トゥネ」という言葉は、「無償で、代価なしに」という意味である。

[7498] フェレマンはメソポタミアにあり、アミド（トルコ語でディヤル・ベキルと呼ばれ、ティグリス川上流に位置する）から二日間の道のりにあったが、トルコ人による最初の征服の際に破壊された。その際、聖コスマスと聖ダミアンの聖遺物はアミドに移され、現在もそこに安置されている。

その場所には、マルクという名の別の男がいた。彼はフェレマンにある聖なる医師、コスマスとダミアンの聖堂の近くに住んでいた。遠い旅に出ようとしていた彼は、妻を聖堂へ連れて行き、こう言った。

「私はこれから遠い旅に出る。君をコスマスとダミアノの保護に委ねる。私が、君が私のものであると分かるように取り決めた合図を送るまで、家に留まっていてほしい。もし神が望まれるなら、その合図を送り、君を私の元へ連れて行くつもりだ。」

このように妻を聖人たちに託して、マルクは旅立った。数日後、悪魔はある知人の姿に変身し、マルクの妻のもとを訪れて、夫が「合図を送って、君を私のところへ連れて行く」と告げていたあの合図を彼女に見せた。

その印を見せながら、悪魔は彼女に、自分の後について夫のもとへ行くよう命じた。

「私を」と悪魔は言った。「あなたの夫が、あなたを彼のもとへ連れてくるよう、私を遣わしたのだ。」

すると、その女性は言った。

「そのしるしは知っていますが、行くつもりはありません。私は聖コスマとダミアノという無欲の聖人たちに委ねられているからです。もし私があなたと一緒に夫のところへ行くことを望むのなら、私と一緒に聖人たちの教会へ行きましょう。祭壇の端をつかみ、道中で私に何の害も与えないと誓ってください。」

悪魔はその約束をし、彼女と共に教会へと近づくと、祭壇の端を掴んでこう誓った。

「コスマとダミアンの力にかけて誓う――道中、お前を傷つけることはせず、夫のもとへ連れて行ってやる。」

その誓いを聞いた女は、見知らぬ人の姿をした偽りの悪魔を信じ、彼について旅立った。　しかし、その誘惑者は彼女を連れ去り、人里離れた人跡未踏の場所へ連れて行き、そこで彼女を辱め、殺そうとした。彼女は自分が極限の窮地に陥っているのを見て、天を仰ぎ、心の底から神に向かって叫び、こう言った。

「神よ、あなたの聖人コスマとダミアンの祈りによって、私を助けてください。そして、この殺人者の手から私を速やかに救い出してください！」

するとたちまち、迅速な助け手である、聖なる無欲の者たち、コスマとダミアンが現れた。悪魔は彼らを見ると、女性を置き去りにして逃げ去った。高い岸に登ると、彼は断崖から身を投げ下ろし、姿を消した。一方、聖人たちは女性を連れて、彼女の家へと連れ帰った。

女性は彼らに頭を下げながら、こう言った。

「私の主よ、この苦い破滅から私を救ってくださり、ありがとうございます。お願いです――あなたがたがどなたなのか教えてください。そうすれば、私が生涯を通じて誰に感謝を捧げればよいか分かるのですから。」

彼らは言った。

「我らはキリストの僕、コスマとダミアンである。あなたの夫が旅立つ前に、あなたを我らに託したのだ。それゆえ、我らは急いで助けに駆けつけ、神の恵みにより、あなたを悪魔から救い出したのだ。」

これを聞いて、女は恐怖と喜びのあまり地面に倒れ込み、聖人たちは姿を消した。　そして、その女性は、神と、神の聖なるしもべであるコスマとダミアンを賛美し、感謝して叫びました。教会に着くと、彼女は涙ながらに聖人たちのイコンにひれ伏し、主が御自身の聖徒たちの祈りによって彼女に憐れみを示してくださったという出来事を皆に語りました。彼女は次のような言葉で祈りました。

「わが先祖たち、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして彼らの義なる子孫の神よ！あなたは三人の若者のための燃える炉の炎を消し、あなたのしもべフェクレーを処刑台で救ってくださいました

。あなたに喜ばれるコスマスとダミアンを通して、罪深い私をも悪魔の罠から救い出してくださったことを、あなたに感謝いたします。　驚くべき、まことに栄光に満ちた奇跡を行われるあなたにひれ伏し、父と子と聖霊を、永遠に賛美いたします。アーメン。

聖殉教者ケサリウスとダシウスの記念日

記念日：11月1日

聖ケサリウスとダシウスは、ダマスカスで捕らえられ[7499]、さまざまな拷問を受けたが、キリスト教の信仰を捨てなかったため、剣で斬り殺され、殉教の冠を授かった[7500]。

ゴート王子の聖殉教者エルミニンゲルドの受難

記念日：11月1日

ゴート王レオヴィギルド（[7501]）の息子エルミニンゲルド（[7502]）は、スペインの司教レアンドロスによって、アリウス派の異端（[7503]）から正統信仰へと改宗させられた。レオヴィギルドは、自身もアリウス派であったため、息子がアリウス派の異端を捨てたことに憤り、彼を正統派から遠ざけ、再び自分の異端へと引き戻そうと努めた。　彼は父親として優しい言葉で説得し、カトリックの信仰を捨て、以前のように自分と同じ考えを持つよう懇願し、諭した。しかし、息子の不屈の姿勢を目の当たりにすると、拷問や傷を負わせるという脅しで彼を威嚇し始めた。だが、息子は柱のように信仰を揺るがすことなく、父親の甘言にも脅しにも一切耳を貸さなかった。　レオヴィギルドは彼に対して激しい怒りを燃やし、まず第一に、息子から王位と共同統治権、相続権、そしてすべての財産を剥奪した。その後、彼の考えに変化が見られないと知ると、首、手、足を鉄の足枷で縛り、狭く薄暗い地下牢に投獄した。　しかし、祝福されたエルミニンゲルドは、若くして生まれながらも、知恵においては老成していた。地上の王権を軽んじ、魂のすべてを天の王国に注ぎ込み、牢獄で縛られた

[7499] ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市である。パレスチナの北東、市内を流れるバラド川のほとり、アンティ・レバノンの東麓にある美しく肥沃な平野に位置している。　現在、オスマン帝国に属するダマスカスは、アジアで最も豊かな都市の一つであり、かつては15万人の住民を擁していた。

[7500] 聖人たちは、ダマスカスがイスラム教徒に占領された際（7世紀）、殉教した。聖ケサリウスおよびダシウスと共に殉教した者たちの名は、サヴァ、サヴィニアン、アグリッパ、ハドリアヌス、そしてトマスである。

[7501] ゴート族はドナウ川の東側に居住し、ドニエストル川を境に東ゴート族と西ゴート族に分かれていた。西暦3世紀以降、彼らはローマ人と接触するようになり、ローマ人に対して絶え間ない攻撃を仕掛けつつ、次第に彼らからキリスト教を受け入れるようになった。 4世紀後半、アジアから押し寄せるフン族に追いやられた西ゴート族は、全員がキリスト教を信仰することを条件として、ローマ帝国の領内であるフラキアへの定住を許可された。キリスト教は、彼らの中でアリウス派の形で広まった。 ローマ帝国の領土から追放された後、西ゴート族はアリウス派をスペインに持ち込み、そこで415年に自らの国家を築いた。ここで、後に本伝記で詳述される出来事が起こった。

[7502] 彼は6世紀後半に統治した。彼は息子の聖エルミンゲルドを共同統治者に任命し、その居城をセビリアに定めた一方、自身はトレド（いずれもスペインの都市）に居住した。

[7503] この異端の名称は、4世紀に生きたアレクサンドリアの長老アリウスに由来する。　キリスト教の「三位一体」の教義から、理性では理解できないあらゆる要素を排除したいと考えたアリウスは、神の御子は父なる神の本質から永遠に生まれ出たのではなく、時間の中で無から父によって創造されたものであり、父と同質でもなく、同等の栄光も持たないと教えた。　この異端には、イエス・キリストの神性および彼による私たちの贖いを断固として否定する意図が密かに含まれており、要するに、キリスト教全体を覆すものであった。アリウス派は、キリスト教世界において、東方でも西方でも広く普及した。　この異端は、325年にニカイアで開催された第1回全地公会議で非難された後もなお、長い間人々の心を揺さぶり、教会に混乱をもたらし続けた。この異端は、公会議中およびその後、聖アタナシオス・アレクサンドリアスという人物において、最も強力かつ熱心な敵対者に出会った。

まま、全能の神に、この苦難の中で彼を強めてくださるよう祈り続けた。聖なる復活祭の祝日が近づくと、　レオヴィギルド王は、あるアリウス派の司教を呼び寄せ、夜中に息子が入っている牢獄へ送り込んだ。それは、エルミニンゲルドが　この司教の手からアリウス派の聖体拝領を受けさせるためであった。もし彼がこれを受け入れれば、かつての父としての愛と名誉を再び与えると約束した。しかし、聖なる殉教者は、憤りを込めてアリウス派の司教を拒絶し、その邪信を勇敢に糾弾して、異端の聖体拝領を受け入れずに彼を追い払った。　キリストの御体と御血という至聖にして命を与える秘跡は、聖レアンドロス司教が密かに彼のもとへ送り込んだある正教会の司祭によって、彼に授けられた。一方、アリウス派の司教は恥をかかされて父のもとへ戻り、息子から聞いたことをすべて父に伝えた。　すると、王は言い表せないほどの激怒に駆られ、歯ぎしりしながら、直ちに自分のボヤールの中から選りすぐりの男たちを遣わし、牢獄にいる息子エルミニンゲルドを殺害するよう命じた。彼らは赴き、斧で彼の尊い首を切り落とした。　そして、聖なる御遺体の上で歌う聖なる天使たちの、この上なく甘美な声が聞こえ、夜には灯る蝋燭が見えた。信者たちはこれを見て喜び、苦難の末の死の後もこのような奇跡をもって御自身の正統な僕を称える神に感謝した。一方、不信仰者たちは恥じ入り、恐怖に震えた。　幼児殺害者であるその父は、無実の者を殺害したことを悔い改め、悲しみから病に倒れた。彼はアリウス派を捨てて正教を受け入れようとしたが、アリウス派を恐れており、そのため正信者の一員となることは叶わなかった。　やがて死期が近づくと、彼は当時司教であったレアンドル――かつては彼を嫌悪し迫害していた人物――を丁重に呼び寄せ、自分の王国の後継者に指名した末息子レハデルを、エルミニンゲルドと同様に、神に啓示された正教の教えによって導いてくれるよう懇願した。　レオヴィギルドが亡くなると、レハデルは即位するとすぐに、聖レアンドル司教の指導に従って正統信仰を受け入れ、かつてアリウス派の異端に汚染されていたゴート族の全土[7504]を正統信仰へと導いた。彼は、兄である聖エルミニンゲルドの遺体を、キリストの殉教者としてふさわしい敬意をもって弔った。彼には、福音書の言葉*「もし一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死ねば、多くの実を結ぶ」*（ヨハネ12:24）が成就したのである。　なぜなら、キリストの受難者である彼は、小麦の粒のように、ゴート族の一人としてキリストのために死んだが、その死の実りとして、その地の民全体が正教的な生活を送るようになったからである。すなわち、すべての人が、父と聖霊と同一の本質を持ち、同等の栄光を持つキリスト・神を正教的に信じるようになったのである。彼に永遠の栄光あれ、アーメン。

聖女キリエナとユリアニアの記念日。

記念日：11月1日

聖女キリエナとユリアニアは、マクシミアヌス帝の治世中に殉教した[7505]。キリエナはキリキア地方のタルサの町出身であり、ユリアニアはロッソナの町出身であった[7506]。キリスト教の信仰を告白したため、彼女たちは総督マルキアヌスに捕らえられ、キリストを否定するよう強要された。真の信仰に対する不屈の姿勢を理由に、マルキアヌスは不信心な兵士たちに、キリエナの髪を刈り落

[7504] 聖エルミンゲルドは586年に殉教し、589年のトレド公会議において、ゴート族はアリウス派を放棄し、正統派を受け入れた。

[7505] ここで言及されているのは、もちろんマクシミアヌス・ガレリウスであり、彼は当初ディオクレティアヌスの共同統治者であったが、その後305年から311年にかけてローマ帝国東部の皇帝となった。

[7506] タルススは、小アジア南東部のキリキアの古代の首都であり、現在はタッソまたはテルススと呼ばれる。この都市は使徒パウロの生誕地である。ロッソンまたはロスは、シリアのアンティオキアの少し北に位置する。

とし、まぶたを切り取り、裸にしてタルサの街中を引き回すよう命じた[7507] 。その後、彼女は聖ユリアニアと共にロッソンの街へ連行され、火刑に処された。

聖殉教者ヨハネとヤコブの記念日

記念日：11月1日

聖ヨハネと聖ヤコブは、サポーレ・ペルシャ王の治世下において、前者は司教、後者は司祭であった[7508] 。彼らは多くの人々を敬虔な信仰へと導いたが、そのために王に捕らえられ、様々な苦難と拷問にさらされた。拷問の末、彼らは剣で斬殺された。

11月15日

11月2日（旧暦）

聖殉教者アキンディン、ピガシウス、アネンポディストスの殉教

記念日：11月2日

ペルシャの王サポル[7509] が、偶像崇拝[7510] に曇らされ、あらゆる不法に満ちていたため、自国でキリスト教徒に対する大迫害を繰り広げたとき、その頃、王の側近の中には、アキンディン、ピガシウス、アネンポディストという三人の秘密のキリスト教徒がいた。　彼らは密かにキリストに仕え、その秘密の教えによって多くの人々を同じ敬虔さへと導いた。ある者たちが王の前で、この三人の聖人を誹謗し、彼らが自ら十字架にかけられた方を信じているだけでなく、他の人々にも、まるで毒のように、その信仰を広めていると告発した。

王は中傷者たちに怒りを込めてこう言った。

「なぜ、お前たちは、以前からそのような人々の存在を知りながら、私に報告せず、彼らを私の前に連れてこなかったのか？」

彼らは言った。

「威光ある王よ！ お命じになれば、直ちに彼らを御前に連れて参ります。」

王は直ちにその命令を下し、彼らは聖人たちを捕らえに行くことにした。聖人たちが滞在していた家に近づくと、扉は閉ざされていた。というのも、主の忠実な僕たちは祈りに没頭しており、神

[7507] ヴァシレイオスの暦によると、聖キリエナは裸のままロバに乗せられ、その後、遊び回っていた子供たちに棒で殴られた。しかし、聖女は自身の祈りにより、人々の目には裸には映らなかった。

[7508] 「大帝」の異名で知られるサポル2世は、ペルシャの王であり、西暦310年から381年まで在位した。ローマ人との戦いで勝利を収めたことで知られ、キリスト教に対する残酷な迫害者でもあった。

[7509] 聖書において、ペルシア人はシモの息子エラムに由来するとして「エラム人」と呼ばれている。彼らはアジアのペルシア湾（アラビア半島と本土に囲まれた海域）の近くに住んでいた。ここで言及されているサポル王は、おそらく4世紀に生きたサポレス2世である。 彼は、キリスト教徒の臣民を、敵であるローマ人の秘密の同盟者と見なす傾向があった。殉教者アキンディン、ピガシウス、アネンポディストらの死は、ある説では330年、別の説では345年に相次いで起こった。

[7510] ペルシア人は、最高神としてミトラ、すなわち太陽を崇拝していた。また、火を崇拝し、すべての善の創造主であるオルムズドと、あらゆる悪の根源であるアリマンという二つの神を認めていた。この宗教の創始者はゾロアスターとされ、ペルシア人の主要な聖典は『ゼンド・アヴェスター』である。

との対話を深めることに専念していたため、人々に扉を開けることを拒んでいたからである。　兵士たちは扉をこじ開け、聖人たちを捕らえて縛り上げ、王の御前に引き立てた。

王は聖徒たちを見ると、穏やかに尋ね始めた。

「お前たちはどこから来たのか、わが子らよ？」

聖人たちは答えた。

「王よ、あなたは私たちの故郷について尋ねているのですか？　私たちの故郷であり、私たちの命であるのは、至聖なる、同質にして不可分なる三位一体、すなわち父、子、聖霊、唯一の神です。」

王は言った。

「お前たちは実に厚かましい。傷や様々な拷問がどのようなものか、まだ味わっていないくせに、私の前で他の神を公然と告白するとは。」

聖人たちは答えた。

「我らは我らの神への希望ゆえに勇敢であり、神のためにいかなる傷や拷問も受け入れる覚悟がある。もし我らの言葉を信じないならば、実際に試してみよ。傷を負わせ、望むままの拷問を加えよ。そうすれば、我らが我らの神を捨て去るかどうか、お分かりになるだろう。」

聖人たちがさらに言葉を重ね、唯一の神を賛美し、王の多神教を非難すると、王は激怒し、彼ら一人ひとりを地面に伏せさせ、四人の者に節のある棒で打たせるよう命じた。聖人たちは、殴打されながらも神を賛美し、声を揃えてこう言った。

「主よ、私たちを見捨てず、沈黙せず、私たちから離れず、すべての者があなたの右手の力を悟り、主よ、あなたご自身が私たちを助けてください。」

聖人たちが苦しみの中でこのように歌っている間に、処刑人たちは力尽きてしまったため、王は他の者たちを差し向けて、彼らを打ち続けるように命じた。そして殉教者たちは長い間打ち続けられ、もし神ご自身が彼らの命を支えてくださらなかったならば、これほど長引く拷問によって死んでしまっていたかもしれないほどであった。　王は、彼らが叫ぶこともなく、力を失うこともないという、その揺るぎない忍耐の強さを見て驚いた。ある種の恐怖が彼を襲い、彼は王座から転げ落ちた。聖人たちは彼に向かってこう叫んだ。

「あなたに命を与えた私たちの主は、あなたが私たちを通して主の御力を目にするよう、再びあなたを強めておられます。」

周囲の人々は、王が死の淵まで追い込まれたと思い、駆け寄って彼を助け起こした。王はかろうじて息を吹き返し、ようやく意識を取り戻した。　その後、サポル王はさらに激しい怒りに駆られた。殉教者たちが何らかの魔術によって自分にこの事態を招いたのだと考えたからである。不信心者たちは、自らが悪魔の支配下に完全に置かれていたため、聖人たちが成し遂げる神の驚くべき奇跡を、常に魔術や呪術の仕業だと決めつけるのが常だったからである。　不義の王は、聖なる殉教者たちを絞首刑に処し、その足元に燃え盛る火を燃やすよう命じた。そうして、彼らは鎖と火による苦痛の中で魂を吐き出し、死に至るよう仕向けられたのである。

聖人たちは、長い間吊るされたまま、次のように讃美した。

「わが魂の灯火であり、わが創造主よ。私たちのために身を捧げ、唾を浴びせられ、侮辱を受け、悪人のように木に吊るされながらも、御右の手の内に万物を御支配される主よ！　今こそ来てください。私たちの苦しみをご覧になり、御救いを示してください。私たちの病をご覧になり、私たちを憐れんでください。私たちが天に唯一の神であるあなたを崇めていることを、すべての人に明らかにしてください。

するとたちまち、主は人の姿で、太陽のように輝く御顔をもって彼らの前に現れた。主が現れると、鎖は砕け散り、火は消え、聖徒たちは健康を取り戻した。主を見て、彼らは言い表せないほど

の喜びに満たされたが、主は再び見えなくなった。　そして聖徒たちは、まるで何の苦しみも味わわなかったかのように王の前に現れた。王は彼らが元気な姿であるのを見て驚き、こう言った。

「君たちには一体何が起きたのか？」

彼らは答えた。

「ご自分の目で見ておられる通り、私たちの神であるキリストが、あなたの拷問から私たちを救ってくださったのです。主の御力を悟り、恥じなさい。」

不義の者はキリストを冒涜し始めた。すると聖人たちは叫んだ。

「真の神を冒涜する、お世辞を並べるその口が、黙り果てよ！」

するとたちまち、王は口を閉ざし、声を出せなくなった。

聖人たちは言った。

「王よ、どうしたのですか。なぜ私たちに話しかけないのですか？まさか、最終的な判決も下されないまま、こうしてあなたの法廷を去ることになるというのですか？」

王は周囲の人々に、聖人たちを捕らえて牢獄に閉じ込めるよう、目や手で合図を送り始めた。しかし、周囲の誰も、その合図が何を意味するのか理解できなかった。そこで王は、自らの紫の衣を剥ぎ取り[7511]、それを地面に叩きつけ、狂人のように皆の前でそれを足で踏みつけ始めた。 それを見た民は驚き、王がこのような狂気に陥ってしまったことを嘆いた。

すると、聖者たちは民にこう言った。

「ああ、心眼の失われた者たちよ！　見ていながら見えず、聞いていながら聞こえない。それは、あなたがたの心が頑なになっているからだ！ ……

聖人たちがこう語っているとき、天から輝かしい天使たちの軍勢が現れ、民衆の多くがそれを見た。彼らはその姿を見るに耐えられず、恐怖のあまり倒れ込み、キリストを信じるようになった。聖人たちは歌い始めた。　*「神は私たちの避難所であり力、患難における速やかな助け手である。それゆえ、たとえ大地が揺れ動こうとも、山々が海の底で揺らめこうとも、私たちは恐れない。私たちを助けに立ち上がり、あなたの慈しみのゆえに私たちを救い出してください」*（詩編45:2–3、43:27）。

王は、声が出ないため何もすることができず、激怒して自分の顔を叩き始めた。アキンディンは、王がそのような動揺状態にあるのを見て、涙を流し、こう言った。

「私たちの主イエス・キリストの御名によって、話してください。」

するとたちまち彼の舌は解け、語り始めたが、神を賛美するどころか、むしろ心を硬くして、さらに激しく冒涜した。彼は自らの身に神の力強い御手を感じていたにもかかわらず、真理を知ろうとはしなかったのだ。　これらすべてを聖なる殉教者たちの魔術だと見なし、彼は彼らに対してさらに激しい怒りを燃やし、感謝の気持ちを示すどころか、口が解けた直後に、次のように言い放った。

「アキンディナ、ピガシア、アネンポディスタを凄惨な死で滅ぼしてやる。そして、ここにいるお前たちには、私が手振りで命じたのに従わなかったことへの報復をしてやる――この不敬虔なキリスト教徒たちを捕らえ、私のために拷問にかけよ。彼らは魔術で私の舌を縛り上げたのだ。」

そして王は、鉄の床を燃やし、その上に殉教者たちを横たえるよう命じた。彼らがその床の上で何時間も焼かれている間、彼らは熱心に神に祈りを捧げ、その時宜にふさわしいダビデの詩篇を歌った。

[7511] 紫色のマント、すなわちポルフィラ。この布の染料として用いられたのは、地中海で採れるある種の貝やカタツムリの血液であった。これは王たちの衣装であり、彼らの権力と威厳の象徴であった。もっとも、時には、贅沢を極める富裕層といった一般の人々も、このようなマントを身にまとうことがあった。

「*神よ、あなたは私たちを試み、銀を精錬するように私たちを精錬されました*[7512] 。*あなたは私たちを網にかけ、腰に足枷をはめ*[7513] 、*私たちの頭上に人を据えられました*[7514] 。*私たちは火と水の中に入りましたが、あなたは私たちを自由へと導き出してくださいました*」（詩編65:12）。 私たちに、私たちを苦しめる試練を、揺るぎない魂と勇敢な心をもって耐え抜く力を与えてください。また、あなたの御力を御業を明らかに示された周囲の人々に、あなたの聖なる御名を知らしめてください。

聖徒たちがこう語ったとき、天から声が聞こえ、こう告げました。

「あなたがたは行いによって信仰を証ししたので、あなたがたの願いは叶えられる。」

周囲に立っていた人々の多くは、この神聖な声を聞く恵みにあずかり、こう叫んだ。

「真の神はただお一人、この殉教者たちが崇めるお方のみである。お方こそが唯一の強き者、唯一の無敵なる者であり、お方以外に神はいない。殉教者たちよ、あなたがたは幸いである。主の地上への来臨の証人となり、主への愛ゆえに自らの魂を死に委ね、その死の後に永遠の命に与かる者となったのだ！ どうか、私たちのためにも御慈悲を願い、天より御手の助けを差し伸べ、私たちを滅びの深みから救い出してくださいますように。

聖なる殉教者たちは、天に目を上げ、彼らのためにこう祈りました。

「天にまします神よ！ あなたの御名を真に呼び求めるあなたのしもべたちを見守り、あなたの新しい民――今、あなたを信じた人々――に恵みの雨を注いでください。 あなたから発し、罪の弱さを洗い流す露が、彼らにとって癒しと治癒となりますように[7515] 、そしてすべての者が、あなたが唯一の神であることを知り、すべての者があなたの御権威に従いますように。

聖人たちがこのように語り、祈りを終えたとき、突然稲妻が走り、恐ろしい雷鳴が轟き、激しい雨が降り出した。不信者たちは恐怖と戦慄に駆られて逃げ去り、殉教者たちのもとに残ったのは、キリストを信じる者たちだけであった。

聖人たちは彼らにこう言った。

「恐れることはありません。これはあなた方のためであり、この雨によって、あなた方の上に洗礼の秘跡が成し遂げられるためなのです。」

皆が口を揃えて神に栄光を帰したとき、天から降りてくる多くの天使たちが目に見え、彼らは新しく洗礼を受けた人々に白い衣を着せ、それによって彼らの魂が聖なる信仰と、上から注がれた水によって清められたことを示していた。 この雨によって火は消え、熱せられていた床も冷め、聖人たちは生き生きと元気な姿で立ち上がった。ただ、彼らの体は、火で焼け焦げた木のように黒くなっていた。

王は再び聖徒たちを呼び寄せ、こう言った。

「お前たちは魔術で火を消したとはいえ、私がお前たちに神々への拝礼を強いるか、あるいは残酷な死を遂げさせるまでは、私の手から逃れることはできない。」

彼らはまるで口を揃えてこう答えた。

「どんな死に方をさせようとも構わないが、我々は、天にまします唯一の神、すなわち我々に永遠の命を備えてくださった方から離れることはない。」

7512 銀は、火で溶かされることによって不純物が取り除かれ、最も純粋な姿となる。これと同様に、殉教者たちの美徳も、火による試練を経て高められ、最も完全な姿を得たのである。

7513 ヘブライ語から：「我らの腰に（あるいは『我らの太ももに』）くびきを課した」。ここでは、火傷による苦痛を意味している。

7514 すなわち、「私たちの上にまたがった」とは、最も屈辱的な奴隷状態を表す比喩である。この表現は、聖なる殉教者たちがさらされた極度の屈辱を指し示している。

7515 時が経つにつれ、近隣諸民族の影響を受けて、ペルシア人は太陽と火の崇拝に、異国の神々への奉仕を結びつけるようになった。

王は笑いながら言った：

「わが子らよ、友よ！　もしあなたがたが唯一の神を崇めるのなら、私もまた、多くの神々ではなく、ただ一人の神――すなわち、私が崇め、礼拝するその神――を崇めるよう、あなたがたに強いているのだ。　というのも、私にも、他のどの神よりも愛し、崇める唯一の神がいるからだ。それは、すべての神々の長である偉大なるゼウスである[7516] 。私と共に、この唯一の神にのみ崇拝を捧げよ。他の神々については、お好きにすればよい。ただ、唯一の神に敬意を払えばそれで十分だ。

至福のアンポディストスは王にこう言った。

「唯一の神にどのように敬意を表すべきだとお命じになるのですか？」

王はこれを聞いて喜んだ。彼らは自分の邪悪なゼウスに礼拝しようとしているのだと考えたからである。そして王は彼らに言った。

「さあ、わが子らよ、私と共に偉大なるゼウスの神殿へ行こう。私がする通りに、あなたたちもそうし、共に私の神を礼拝しよう。」

聖者たちは言った：

「王よ、あなたはあなたの掟に従って祈りなさい。私たちは昔から教えられてきた通りに祈ります。」

王は彼らの言葉を理解せずに喜んだ。彼らはすでに自分の偶像崇拝に屈したのだと思い込み、こう言った。

「なぜ、もっと早く私たちと心を一つにしようとされなかったのか？　そうすれば、これほどの苦しみを受けることはなかっただろう。今となっては、あなた方に悲しみを与えたことをお許しください。私の熱心な愛をもって、この過ちを償うことをお約束します。」

彼は王の戦車を用意するよう命じ、それに乗り込むと、聖なる殉教者たちを呼び寄せ、自分と一緒に乗るように促した。

聖人たちはこう答えた。

「いいえ、王様、私たちは戦車には乗りません。自分の足で歩きます。」

こうして彼らはその忌まわしい神殿へとたどり着いた。王は彼らの手を握り、彼らと共に神殿に入り、こう叫び始めた。

「ゼウス神は偉大なり、その力は偉大なり！　さあ、わが愛する者たちよ、私より先に偉大なるゼウス神に祈りを捧げよ。」

聖者たちは答えた。

「お命じの通り、そういたします。」

額に十字を切ると、彼らはひざまずき、天に向かって両手を上げ、三位一体の唯一の神、父と子と聖霊に祈りを捧げ始めた。するとたちまちその場所が揺れ動き、神殿は崩れ始めた。　王は恐怖に駆られ、付き従っていた者たち全員と共に外へ駆け出した。すると、神殿は偶像と共に崩れ落ち、神殿内にあったものはすべて粉々に砕け散った。一方、聖人たちは神殿が崩れ落ちる中でも無傷のままであった。彼らはキリストの御力の現れを見て喜び、異教の神々の無力さを嘲笑った。

王は聖徒たちに対して激しい怒りを燃やし、彼らにこう言った。

「これが、あなたがたがゼウスに呼びかけ、彼を崇拝するというものか？　これが、あなたがたの祈りというもので、その魔術によって神殿を破壊し、神々を打ち砕いたというのか？」

聖徒たちは答えた。

[7516] ゼウスはギリシャ人にとって、雷を司る神々の中で最も偉大な神（ローマ人にとってはユピテル）であり、神々と人間の父として崇められていた。

「我々は古くから教えられた通り、全世界の創造主である唯一の神に祈ってきたのであり、魔術など知らない。そして、いかなる魔術によるものでもなく、我々が祈りの中で呼び求めた全能の神の御名によって、不浄な神々を祀る忌まわしい神殿が崩壊したのである。」

王は三つの大釜を用意し、それらを錫、硫黄、樹脂で満たすよう命じ、古い船を薪に切り刻ませ[7517]、それらを使って大釜の下に大きな火を焚かせた。それが行われ、激しく熱せられた大釜が沸き立ち、ぐつぐつと音を立てると、聖人たちは鎖で縛られ、大釜の上に吊り下げられた。最初は腰まで、次に胸まで、そして最後には首まで。　聖人たちは、こうした苦しみの中にあっても天を見上げ、それぞれがダビデの詩篇から自分の歌を歌った。福者ピガシウスはこう叫んだ。*「主よ、あなたにはいのちの泉があります。あなたの光の中で、私たちは光を見ます」*（詩篇35:10）。

福者アネンポディストはこう語った。*「わが足はまっすぐな道に立っている。集いの中で、私は主を賛美する」*（詩編25:12）。

至福のアクインディンはこう叫び始めました：

「死の苦しみはわたしを取り囲み、不義の奔流はわたしを恐れさせた」（詩編17:5）、しかし*「わたしたちは火と水の中に入ったが、あなたはわたしたちを自由へと導き出された」*（詩編65:12）。主よ、どうかあなたご自身が、わたしたちを安息へと導き出してください。

聖人たちは、釜の中でこのように祈り続けたため、沸騰する鉛や硫黄、樹脂によるいかなる害も受けず、鎖も自らほどけて彼らから落ちた。　聖人たちは皆の目の前で無傷で出てきました。その中の多くの人々は、この驚くべき奇跡に感嘆し、真理を悟り、キリストを賛美して、キリストを信じるようになりました。また、アフォニウスという名の拷問者の一人も、この奇跡を見てキリストを信じ、こう叫びました。

「キリスト教の神は偉大なり！」

そして王に向かってこう言った。

「不敬虔で、人を憎む王よ！　いつまでこの罪なき人々を苦しめ続けるおつもりか？　我々こそ、彼らを苦しめることで、苦しみを受ける彼ら以上に疲れ果てているというのに、あなたはまるで鉄や石のように冷たく、心は微動だにしないではないか。」

王は直ちに彼の首を刎ねるよう命じた。

アフォニウスは、自分を剣で斬首するよう命じた王の言葉を聞くと、天を仰ぎ見てこう言った。

「主イエス・キリスト、神よ、キリスト教徒が信じる御方よ、あなたに栄光あれ！私もまた、あなたを信じ、あなたを礼拝し、あなたのために死にます。あなたの偉大なる憐れみによって、この不肖の私を救ってください。」

処刑人が彼に近づき、処刑を執行するために城の外へ連れ出すため、彼の首に縄をかけた。彼は聖なる殉教者たちに向き直り、こう言った。

「私の主たち、父たちよ、不義な王の命令に従って、私があなた方を苦しめ、悪を行なったことをお忘れください。私のために神に祈ってください。神が私の多くの罪を赦し、御自身を信じる者たちの群れに加え、御国であなた方と再会させてくださいますように。」

聖なる殉教者たちは彼にこう言った。

「兄弟よ、喜びなさい。あなたは私たちより先にキリストのもとへ行くのですから。あなたがキリストの御前で憐れみを得、信仰に応じて報いを受けることを確信しなさい。」

アフォニアは聖人たちに口づけをした後、城の外へと連れ出された。イエス・キリストの至聖なる御名を呼び求めながら、彼は剣の下に首を差し出し、喜びながら主のもとへと旅立った。キリス

[7517] これは、より強い火を燃やすためである。というのも、船の底や壁は、水が浸入するのを防ぐために、通常、特に外側を樹脂で厚く覆われているからである。

ト教徒たちは彼の遺体を運び出し、清らかな布で包み、キリストの殉教者として尊い埋葬を執り行った。

その後、王はアキンディナ、ピガシア、アネンポディスタを革の袋に詰め、海に投げ込むよう命じた。　それが行われると、聖アフォニオスと、彼と共に海の上を歩く三人の天使が現れた。彼らは海から聖なる殉教者たちを引き上げ、皮袋から解き放ち、まるで少しも苦しんでいなかったかのように、生きたまま健やかな姿で陸地に立たせた。　聖なる殉教者たちが生きていることを知ると、王は、聖者たちを海の深淵に投げ込むよう命じられた兵士たちに激怒した。彼らが自分の命令に背き、聖者たちを解放したのだと推測した王は、まず、その兵士たち――その数は四人であった――の両手を切り落とし、その後、彼らを海に沈めるよう命じた。　彼らは死を目前にして、主イエス・キリストを呼び求め、その聖なる御名を告白し、主を信じ、主に祈りを捧げながら、こうして海の深みに沈められた。聖なる殉教者たち、アキンディン、ピガシウス、アネンポディストは、再び捕らえられ、牢獄に閉じ込められ、足枷をはめられ、足首を縛られた。　王は動揺しながら自室の寝室へ行き、寝台に横たわると、重臣たちを呼び寄せ、怒りを込めてこう言い放った。「お前たちは、キリスト教徒に対する裁判において、私を一人きりで苦労させ、言葉でも行動でも、　、何一つ私を助けてくれないではないか。」　彼らは、そのような裁判を行い、罪のないキリスト教徒を処刑するのは良くないことだと答えた。すると王は、さらに次のように彼らに言い放った。

「昨日や一昨日、口を手で覆って立っていたとき、お前たちは何を考えていたのだ？」

エルピディフォールという名の貴族の一人が、笑いながらこう言った。

「我々は心の中で、お前の狂気を嘲笑っていた。そして、これまでお前の言うことを聞いていた我々は、実に愚かだったのだ。」

王は、そこにいた使用人の一人に、エルピディフォルの顔を殴るよう命じた。これを見た貴族たちは皆、憤慨し、王にこう言った。

「王よ、我々はあなたの味方ではないことを知っておきなさい。」

王は、すべての貴族たちがエルピディフォルの味方であることを見て恐れをなすと、彼らをさらに怒らせたくないと、こう言った。

「深い悲しみから怒りに駆られてしまったことを、どうかお許しください。」

貴族たちは王を置いて立ち去った。何しろ、すでに夜が迫っていたからである。一方、王は、聖人たちをも滅ぼし、貴族たちに復讐する方法を考えながら、怒りに駆られてさらに心を苛まれていた。　翌朝、王は聖なる殉教者たちを毒蛇で満たされた穴に投げ込むよう命じた。しかし、そこでも彼らは無傷のままであり、天使たちの現れによって慰められ、無傷のままそこから連れ出された。その後、彼らは絞首刑に処され、その肉体は骨に至るまで削り取られたが、殉教者たちは再び傷一つない状態であった。　ついに、王はこれ以上何をすべきか分からなくなり、彼らを剣で斬首する刑に処した。聖人たちが処刑のために城の外へと向かうと、多くの信者たちが後を追い、泣きながら彼らにこう言った。

「真の神のしもべたちよ、なぜ私たちを教えなしに置いていくのですか？」

聖人たちはこう答えました：

「慈悲深い神は、ご自身の知るところと御心に従って、あなたがたに必要なことを整えてくださいます。ただ、疑うことなく神を信じなさい。そうすれば、神はあなたがたに、益となるものを与えてくださいます。」

王の家来たちの一部が王のもとへ行き、民衆全体がこれら三人のキリスト教徒に味方しており、彼らの斬首を妨げる恐れがあると報告した。

王は言った。

「武装した兵士三百人を城の外へ送り出し、この惑わし者たちに従う民も皆殺しにさせよ。」

家臣たちは、その民衆の中に高官たちも数名おり、エルピディフォールもそこにいると報告し、彼らも他の者たちと共に殺してもよいかと尋ねた。王はエルピディフォールを呼び出すよう命じた。エルピディフォールは他の三人の高官を伴って、王のもとへやって来た。　王はうつむいたまま、長い間黙り込んでいた。やがて顔を上げ、こう言った。

「エルピディフォールよ！　なぜ、先祖代々の神々を捨てて、偽りのキリスト教の[7518]に改宗しようとしたのか？　知っておけ、私は『十字架にかけられた者』を信じる者を誰一人として容赦しない。」

エルピディフォルは答えた。

「好きにしろ。我々は、十字架にかけられたキリストのために今すぐでも死ぬ覚悟がある。なぜなら、彼こそが唯一の真の、義なる神であり、彼以外に神はいないからだ。それなのに、お前の神々はすべて悪魔に過ぎず、我々はそれらを否定し、拒絶する。そして、お前――悪魔の僕――や、その卑しい偶像への生贄など、我々は一切顧みない。」

そこで王は彼らに死刑を宣告し、次のような判決を下した。「エルピディフォラとその志を同じくする者たち、すなわち、至高の神々を見捨て、この世の命よりも死を選んだ者たちについては、彼らが自ら望んだ通りの報いを受けるよう、剣で斬り殺すことを命じる。また、彼らの遺体を持ち去り、隠そうとする者は、恐れることなくそうしてもよい」。

兵士たちは直ちに彼らを連れ出し、城の外へ、聖なる殉教者たちや、キリストを信じるすべての民のもとへと向かった。そこで王の命令が皆の前で読み上げられると、人々は一斉にこう叫んだ。

「神よ、あなたに栄光あれ。あなたが私たちに善き道を示してくださったおかげで、私たちはこの暗く狡猾な世界から解放され、私たちの神であるあなたの御許にたどり着き、あなたの御座を礼拝し、近づきがたい光であるあなたを仰ぎ見ることができたのです。」

彼らは互いに口づけし始めた。しかし、兵士たちは彼らを取り囲んで殴打し、そのとき、聖エルピディフォロスを含め、キリストを信じた者たち約七千人が剣によって倒れた。

アキンディン、ピガシウス、アネンポディストは斬首されなかったが、王の命により、再び牢獄に閉じ込められた。

翌朝、王は聖なる殉教者たちを焼き殺すために、火の炉を準備するよう命じた。聖人たちが牢獄から連れ出されると、王は彼らにこう言った。

「この炉が見えるか？　これはあなたたちのために用意されたものだ。」

至福のアクインディンは言った。

「あなたのためには、火の地獄にさらに大きな炉が用意されている。そこでは、あなたと同じ名を持つ悪魔たちと共に、永遠に焼かれることになるだろう。」

王は怒りを込めて言った。

「私が悪魔だというのか？」

聖人は答えた。

「お前の行いもお前の名も、お前の中に悪魔がいることを示している。なぜなら、お前は悪魔にふさわしい行いをしているし、お前の名は『悪魔の王』を意味するからだ。お前の母がお前をサポルと名付けたのは正しかった。お前は悪魔たちと志を同じくする者だからだ。」

王は周囲の人々に言った。

「私の母をここに呼んでくれ。」

母がやって来ると、王は玉座から立ち上がり、母に敬意を表して自分の隣に座らせ、こう言った。

[7518] おそらく、王は「三位一体」の話を聞き、キリスト教徒も複数の神を崇拝しており、その中に主たる神が一人いるのだと考えたのだろう。

「母よ、私の名前は何というのか教えてくれ。」

母は答えた。

「あなたは祖父と同じ名前を持っています。あなたの祖父はサポルと呼ばれていましたから、あなたもサポルという名です。」

王は聖者たちを指さして言った。

「しかし、これらの不信心者たちは、私の名前は悪魔のようなものだと言っている。」

母はそれを聞いて笑った——彼女はすでにキリストを信じていたが、邪悪な息子にはそのことを隠していたからである。王は母が笑ったのを見て激怒し、彼女に飛びかかって顔を殴り始めた。母は聖なる殉教者たちの足元にひれ伏し、泣きながらこう言った。

「キリストの僕たちよ、この老いた身を救ってください。私は、名前だけでなく、実際に悪魔であり、忌まわしいサタンを産んでしまったと悟ったのです。」

王は、自分の母までもがキリストを信じたのを見て、彼女をも聖なる殉教者たちと共に火の炉に投げ込むよう命じた。　さらに、その場に居合わせた兵士のうち二十八人も信仰を抱き、彼らは皆、アキンディン、ピガシオス、アネンポディストス、そして王の祝福された母と共に炉に投げ込まれた。炎の中で祈りを捧げながら、彼らはその聖なる魂を神に委ねた。　高潔な人々は、炉の周りで歌いながら聖徒たちの魂を迎え入れる聖なる天使たちの群れを目撃し、殉教者たちの遺体からは言葉に尽くせない芳香が漂っていた。　炉の火が消えると、王は宮殿へ戻り、皆が散っていった。その時、信者たちの一部が炉のそばへ行き、聖人たちの遺体が火によって傷つけられることなく無傷のままであるのを見つけた。彼らは遺体を運び出し、尊厳ある埋葬を行い、父と子と聖霊、唯一の神を賛美した。神に永遠の栄光あれ、アーメン。

トロパリオ、第2調:

主の受難の殉教者たちよ、あなたがたの血に潤された大地は幸いであり、あなたがたの御体を宿したこの地は聖なるものです。あなたがたは三つの試練において敵に打ち勝ち、大胆にキリストを宣べ伝えました。その御方を、善き方として、私たちの魂が救われるよう、どうかお祈りください。

コンダク、第2調:

敬虔にして神に愛された殉教者たちよ、地上のすべてを捨て去り、御自身の善き者たちの喜びと安息を受け入れたアキンディン、ピガシオ、アネンポディスト、そして彼らと共にアフォニオとエルピディフォラよ、唯一の至善なる御方よ。

聖マルキアノスの記念日

記念日：11月2日

私たちの尊い父マルキアヌスは、キュロス出身であった。故郷と財産を捨て、人里離れた荒野へと退いた。　そこで彼は、たった一人しか収容できないほど小さな小部屋を自ら建て、粗末な羊毛の衣を身にまとい、その中に閉じこもった。彼の糧は、パン三オンギア[7519]とわずかな水のみであったが、それも日没後のことだった。　しばらくして、マルキアンは二人の来訪者を受け入れ、彼らはテントを張った。彼自身は、以前と同様に常に閉じこもったままであり、決して蝋燭を灯すことはなかった。夜には神の光が彼を照らし、その光のおかげで、彼は手元に「小さな詩篇集」を持ち、書物

[7519] オンギアとは、1ポンドの12分の1、すなわち8ゾルトニクに相当する。

の読解に励んでいた。　ある日、大きな蛇が小屋の外から身を乗り出し、断食者たちをひどく恐怖に陥れ、彼らは大いに怯えた。しかし聖人は、指で十字を切って息を吹きかけると、まるで火で乾いた葦のように、その蛇はたちまち滅ぼされた。

またある時、アンティオキアの総主教フラヴィアン[7520]やキルスクの司教、そして他の著名で雄弁な司教数名が彼のもとを訪れ、聖書の箇所を引用して、多くの人々の益のために隠遁生活を捨ててほしいと説得したが、彼はそれを聞くことさえ拒んだ。　この素晴らしい人物は、多くの者を様々な異端から真の正統信仰へと立ち返らせた。

ある時、聖人の姉が息子を連れて、様々な食べ物を携えて彼のもとを訪れた。彼は姉に会うことを拒み、彼女が持ってきたものからは何も受け取らず、甥だけを自分の元へ招き入れた。姉が「持ってきたものを受け取ってほしい」と懇願すると、聖マルキアヌスはこう尋ねた。

「ここへ来る途中で立ち寄った他の修道院で、これらを差し出したことはありましたか？」

「いいえ、どの修道院にも差し出しませんでした」と姉は答えた。

「帰ってください」と聖人は答えた。「持ってきたものはそのまま持って帰ってください。あなたは血縁の絆ゆえにこれをしたのですから。」

この偉大で驚くべき聖人は、近き者にも遠き者にも愛されていた。　多くの者が、聖人の死後、その遺体を誰が管理すべきかを巡って互いに争っていること――そのために彼らは納骨堂を建て、教会を建立していた――を知った聖人は、弟子エウセビオスに、自分の遺体を隠れて、修道室から離れた場所に埋葬することを誓わせた。このように遺言を残した後、彼は主のもとへ旅立った。[7521]。

11月16日

11月3日（旧暦）

聖殉教者アケプシム司教、ヨセフ司祭、アイファル助祭の殉教

記念日 11月3日

ペルシャの国、ナエッソンと呼ばれる町[7522]には、アケプシムという名の敬虔な司教が住んでいた。　若き日からあらゆる美徳を修め、老齢に至るまで清らかな生涯を守り通した。すでに八十歳となってもなお、多忙な日々の中で、断食と祈りの厳しい行いを成し遂げる力を保ち、自分に託された羊の群れを熱心に世話し続けた。　しかし、彼がさらに偉大な功績を示したのは、その最期の時であった。彼は主のために、血を流すことさえ厭わず勇敢に立ち向かい、長く厳しい拷問の末、その主のために自らの魂をも熱心に捧げたのである。殉教の功績を成し遂げる数年前、彼は自身の苦難について次のような預言を受けていた。

ある日、彼が自宅で横たわっていたとき、彼の少年が預言の霊に満たされ、彼の頭に口づけをしてこう言った。

「この頭は幸いである。なぜなら、キリストのために苦難を受けるからである。」

彼はこの預言を喜び、こう言った。

「わが子よ、お前の言葉どおりになるように。」

[7520] 聖フラヴィアンは381年から404年まで総主教を務めた。その記念日は2月18日である。

[7521] 聖マルキアノスの没年は388年とされる。彼の記念日は1月18日にも祝われている。

[7522] あまり知られていない都市の一つであり、教会的にはおそらくモスル（ティグリス川沿い）またはニネベの大司教区の管轄下にあったと考えられる。

その時、アケプシモスのそばには、彼の親しい友人である近隣の町の司教が一人、同席していた。少年が言った言葉を耳にした彼は微笑み、少年にこう言った。

「教えてくれ、わが子よ。私たちのことについても何か知っているか？」

神に導かれた少年はこう答えた：

– あなたはもう自分の街を見ることはないだろうが、そこへ向かう途中で、エトラダンという村で息を引き取るだろう[7523]。

この少年の預言は、二人の司教の両方に実現した。一人は道中、前述の村で亡くなり、一方、アケプシム司教は、確かに殉教の冠に与る栄誉に浴した。その経緯は次の通りである。

不敬虔なペルシャ王サポルが、自国においてキリスト教徒に対する大規模な迫害を開始した。キリストの救いの受難のまさにその日、彼は支配下のすべての国々に、ペルシア全土でキリストを信じる者たちを皆殺しにするよう命令を下した。そして当時、数え切れないほどのキリスト教徒が、都市や村々で不信心者たちによって容赦なく殺害された。

とりわけ、祭司や魔術師たち[7524]は、キリスト教徒に対して激しい怒りを燃やしていた。彼らは隠れている者たちを執拗に捜し出し、家や隠れ家から引きずり出して、残酷な死を遂げさせた。信者の中には、自ら彼らの手に身を委ね、勇敢に血を流した者もいた。　宮廷の者たちの多くも、キリストのために殺害された。王に深く愛されていた宦官[7525]のアザディスは、イエス・キリストの真の僕であり、その至聖なる御名を告白する者として、彼らと共に処刑された。

王は、愛する宦官アザディスの死を知ると、彼を深く悼み、キリスト教徒の全面的な虐殺を中止し、キリスト教の指導者や教師だけを捜し出して処刑するよう命じた。

この王の命令が至る所で布告されると、魔術師や祭司の長たちは、キリスト教の司教や司祭を探し求め、様々な方法で彼らを処刑するために、ペルシア全土を丹念に巡回した。

その頃、聖アケプシム司教も捕らえられた。捕らえた者たちが彼を家から連れ出そうとしたとき、家来の一人が聖人のそばに近づき、耳元でこう言った。

「自分の家について、何か遺言をしておきなさい。」

すると聖人は、手で家を指さしながらこう言った。

「この家はもはや私のものじゃない。私は遅滞なく天の家へ行くのだから[7526]。」

アルベルの町[7527]に到着し、アドラフという名の魔術師の首領の前に連れて行かれると、首領は聖アケプシムに尋ねた。

7523 ナエッソンの近くにある集落。

7524 「ヴォルフ」あるいは「魔術師」という名称は、古代において、高度かつ広範な知識、とりわけ自然の秘力、天体、聖典、象形文字などに関する知識を備えた賢者を指していた。彼らは自然現象を観察し、夢を解釈し、未来を予言した。その大半は同時に祭司でもあり、王宮においても民衆の間においても、大きな地位と尊敬を享受していた。　ペルシャの魔術師については、ダニエル書の（ダニエル書2:1–49　以下）に言及されており、また、生まれた救い主に礼拝するために、おそらくペルシャから魔術師たちが訪れた（マタイによる福音書2:1–23）。　賢者は他の国々にも存在し、例えばバビロン、アッシリア、メディア（ダニエル書を参照；民数記22:1–41、23:1–30を参照）やエジプト（創世記41:8、出エジプト記7:11）にもいた。「魔術師」という言葉は、当初は「賢者」と同義であったが、後に魔術師、呪術師、腹語術師、死者を呼び出す者などに用いられるようになった。

7525 「宦官」という言葉は、本来、去勢された男性を意味する。東方では、王のハーレムを管理する者たちがこれに該当し、古代においては、彼らがこの職からより高い政府の要職に就くことも珍しくなかった。　その後、「宦官」という言葉は、たとえその人物が去勢されていなくても、高い官職に就く者、宮廷人、貴族を意味する言葉として一般的に用いられるようになった。

7526 言うまでもなく、キリストの真の信徒たちが、キリストご自身の戒めに従って入る天の住まいである（ヨハネ14:2–3）。「ゴルニイ」という言葉は、「高い」、「上の方」、「天の」という意味である（エゼキエル41:7、コロサイ3:2参照）。

7527 アルベラは、ザパタ川（別名ザバタ川）の支流の一つ沿いにある都市であり、ザパタ川はティグリス川の左岸支流である。　この都市はニネベからほど近い場所にあり、その西12マイルのガウガメラ近郊で、アレクサンドロス大王がダレ

「お前は誰だ？」

アケプシムは声を大にして、自分がキリスト教徒であることを告白した。

王子は彼に言った。

「お前について言われていることは本当か――王の命令に従わず、唯一の神を説いているという話は？」

聖人は恐れずにこう答えた。

「あなたが私たちについて聞いたことはすべて真実です。私は唯一の神を説き、私のところに来る人々に、神を知り、私と共に神を信じるよう説得しているのです。」

公爵は言った。

「我々は、お前が他の者たちより賢いという話を聞いていたが、今や、お前が無分別な子供たちと何ら変わらないことが分かった。王の命令に背き、王自身が崇拝している輝く太陽や火を崇拝しないことに、いったい何の賢明さがあるというのか？」

聖人は答えた。

「あなた方の王も、あなた方も、完全に正気を失っています。なぜなら、創造主を捨てて、被造物を崇拝しているからです。」

公爵は怒りを込めて言った。

「我々は、そのような自然の力を尊び、万物を生かし照らす太陽を崇拝しているというのに、お前は我々を狂人と呼ぶのか？　偽りの老いぼれめ！　実のところ、狂っているのはお前自身だ。もし王の命令に従わなければ、お前の老いも重い苦しみから救ってはくれないし、お前の十字架にかけられた神[7528]も、我々の手からお前を解放してはくれないだろう。

聖人は言った。

「不信心者よ、わが神を冒涜するその忌まわしい口を塞がれよ！　お前は、若き日に学び、この白髪になるまで守り続けてきた先祖代々の教えから、私が背くよう、脅しで私を怯えさせようとしているのだな。　たとえお前が傲慢に私を威嚇し、老いも私の神も私をあなたたちの手から救い出せないと言い張ったとしても、私は決して良いものを悪いものと取り替えることはない。なぜなら、このわずかな日数だけあなたたちの手から解放されたところで、私に何の益があるというのか？　まもなく、あなたがたとは無関係に、死すべき存在としての普遍的な義務が、私から求められることになるのだ[7529]。私は太陽に礼拝を捧げず、火に敬意も払わない。そうすれば、誰も私の老いを嘲笑うことはできず、誰も、私にとって命が私の神よりも大切だなどとは考えないだろう。私は、この短き命のために、これほど偉大な天の恵みを売り渡すことはしない。

魔術師は直ちに、聖人を裸のまま地面に寝かせ、節の多い棒で激しく打ちつけるよう命じた。そして、彼の全身を打ち据えたため、地面は彼の血で赤く染まった。

拷問官は、長時間にわたる殴打の後、再び聖人を自分の前に立たせ、こう言った。

「アケプシムよ！　お前の神はどこにいる？　さあ、今こそその神が来て、お前を私の手から救い出してみろ。」

聖人は答えた。

「おお、不法者よ！　わが神は遍在される。神は天と地を満たし、私を汝の手から救い出す力をお持ちである。しかし、私は神の慈しみに、汝が私にもたらす苦しみから私を救い出してくれるよう願うのではなく、苦しみの中で忍耐を授けてくださるよう懇願する。そうして最後まで耐え抜くこ

イオス・コダマンを2度目に破り、その後ペルシア帝国全土を支配下に置いた戦いが繰り広げられたことで知られている。

[7528] この言葉には神を冒涜するような嘲笑が込められている。なぜなら、**磔刑は**不名誉な処刑とみなされ、最も凶悪で卑劣な者たちがそれに処せられたからである。

[7529] 言うまでもなく「死」のこと、つまり、すべての人間は本来、死すべき存在であるということである。

とで、私は命の冠を受け継ぐことができるのだ。　生ける神に反逆するお前は、土と灰に過ぎないのに、いったいどのような苦しみと死に値するのだ？　まことに、お前は今、神として崇めているその炎に焼かれるにふさわしい――お前の神が永遠にお前を焼き尽くすように。

これを聞いた魔術師たちの首領は、怒りに燃え上がり、聖人を重い鉄の足枷で縛り、牢獄に閉じ込めるよう命じた。

翌朝、七十歳の長老ヨセフ[7530]と、助祭アイファル[7531]が連行された。二人はともに義人であり聖人であり、神に対する彼らの熱意は、不敬虔を切り裂く両刃の剣のようであった。　彼らは不義な魔術師の前に引き出され、魔術師は彼らを傲慢な眼差しで見つめ、こう言った。

「ああ、滅びゆく者たちよ！　なぜ、庶民を無視して、あなたがたは不義な教えで彼らを惑わすのか？」

長老はこう答えた。

「我々は人々を惑わしているのではなく、惑わしから真の神へと彼らを導いているのです。その神こそ、太陽と火、そして目に見えるものも見えないものも含むすべての被造物の主であり、創造主であられます。そして、我々の教えが正しいのは、唯一の義なる神について教えているからです。」

魔術師は言った：

「どちらの教えがより正当なのか。王とそのすべての将軍たちが信じる教えか、それとも、お前のような、悪しき者、見捨てられた者、貧しい者、取るに足らない者たちが従う教えか？」

長老は答えた：

「その通り、私たちはこの世において貧しく、見捨てられた者たちです。なぜなら、私たちの主は、魂を滅ぼす富や世俗的な高慢に留まる者たちではなく、私たちの貧しさと謙遜に留まる者たちに御好意を注いでくださるからです。　このため、私たちの多くは自発的に貧しく謙遜な者となり、自分の財産を貧しい人々の手に分け与えています。そのことに対して、私たちは主から百倍の報いを受けることを望んでいるのです。　もし私たちが富を蓄えることに励んでいたなら、自らの手で労働することで、何もしないで他人の労働の果実を貪り、貧しい人々から不当に財産を奪い取るあなたよりも、はるかに豊かになっていたことでしょう。私たちにとっては、必要に応じて自らを養い、さらに弱い兄弟たちを養うのに、私たちの労働だけで十分なのです。

我々は、金持ちにとって天の御国への道は険しく、富を追い求める者は誘惑に陥ることを知っている。

「その長ったらしい偽りの言葉はやめて、火と太陽にひれ伏せ」と、魔術師は彼の話を遮って言った。

長老はこう答えた。

「私がいつの日か、あなた方の不法な意志に従う姿を見るなどとは期待するな。私は火と太陽を創造された方を捨てず、被造物にひれ伏すことは決してないからだ。」

これを聞いた魔術師は、聖なる長老ヨセフの衣服を剥ぎ取り、バラの木――その枝はイバラのようにとげだらけである――の枝で彼を縛り上げ、皮がすべて剥がれ落ち、肉が骨から剥がれ落ちるまで打ち据えるよう命じた。

魔術師は直ちに、聖人を裸のまま地面に横たえ、節の多い棒で激しく打つよう命じた。そして、彼の全身を打ち据えたため、地面は彼の血で赤く染まった。

全身を血に染めた聖人は、こう叫んだ。

[7530] ヨセフは、アディアベネのベト・ケトゥバ出身の長老であった。

[7531] アイファルは、バビロニアのエウフラテス川上流地域出身の助祭であった。

「わが主、わが神よ、あなたが私の血によって私の罪を洗い流してくださることを、感謝いたします。」

長い拷問の後、聖人は二つの鉄の足枷で縛られ、聖アケプシモスのいる牢獄へと送られた。そこで二人は、苦しみの中にあっても互いに慰め合い、神の慈悲への希望をもって、互いに励まし合った。

長老が牢獄へ連行されたとき、助祭アイファルは魔術師たちの首領の前に残り、縛られたまま立っていた。

魔術師は彼を見つめ、こう言った。

「お前は何を言う？ 王の命令に従うのか？ 偉大なる太陽にひれ伏すのか？ これから降りかかる災いから逃れるために、犠牲の血を口にするのか？　それとも、他の者たちと同じように、頑なで従順でないままでいるのか？」

聖なる助祭はこう答えた。

「血を飲むことなど、お前の邪悪な白髪の所業だ。お前は、神によって創造されたものを神そのものと見なしている。私はお前ほど心の目が曇ってはいないし、被造物を創造主よりも尊ぶようなことはしない。」

すると、拷問官は、彼の両手を膝の下で縛り、その縛られた両手の間に大きな杭を突き刺すよう命じた。そして、六人の処刑人――両側に三人ずつ――に、杭の両端を踏ませ、そのようにして聖人を押しつぶさせ、その間も容赦なくとげのある棒で打ち据えさせた。　兵士たちは棒の上を飛び跳ねながら、殉教者の関節を打ち砕き、鞭で打ち据え、その肉体を引き裂いた。

聖人は勇敢に耐え忍び、魔術師にこう言った。

「汝は、引き裂かれた人間の肉体を見て喜んでいるな、拷問者よ。それは、死体を見てそれを食い尽くそうと願う犬やカラスが喜ぶのと同じだ。しかし、不信心者よ、知っておけ。私はこれらの苦しみなど何とも思っていないのだ。」

魔術師はさらに怒りに燃え上がり、聖人の骨が砕け、肉が骨から剥がれ落ちるまで、より激しく打ちつけるよう命じた。　その後、殴打をやめると、彼らは聖人を牢獄へと運び込んだ。彼は酷い傷のため、全く歩くことができなかったからだ。そして、彼を連れて行くと、まるで重荷であるかのように、最初の二人の殉教者のそばに放り出した。

五日が過ぎると、聖人たちは牢獄から「楽園」と呼ばれる場所へ連行された。そこには、不信心なペルシャ人たちが崇拝する火の神の神殿があった。

魔術師たちの首領は、そこで裁きの座に就き、聖人たちにこう言った。

「直ちに答えよ。お前たちは今後もこの狂気を貫くのか、それとも改心して我々と手を組むのか？」

聖人たちはこう答えた。

「裁判官よ、知っておいてほしい。我々は当初から抱いてきた信念を今も変わらず持ち続けており、最後までそれを貫き通すつもりだ。　脅しでも、拷問でも、贈り物でも、あるいはその他のいかなる手段を用いても、あなたは我々の正しい信仰を揺るがすことはできない。唯一の神、万物の主を我々は知り、告白し、その唯一の神を信じ、唯一の神にのみ礼拝を捧げる。

魔術師はこれを聞くと、直ちに新たな拷問を考案した。彼は、殉教者たちの両腕、そして太ももやすねを縄で縛り、その縄の中に棒を差し込んで回させ、そのようにして縄で彼らを締め上げるよう命じた。　これが行われると、聖人たちは凄惨な拷問と苦痛に耐えなければならなかった。彼らの骨が折れるたびに、遠くに立っている者たちにもその骨が砕ける音が聞こえるほどであった。

拷問者たちは彼らにこう言った。

「王の意志に逆らってはならない。」

彼らはこう答えた。

「あなたがたの不法な王の意志に従う者は、すべて神に逆らう者である。」

こうして聖人たちは、第三時から第六時まで拷問を受けた[7532] 。その後、拷問官は彼らを再び牢獄へ連行するよう命じたが、聖人たちは自力で歩くことができなかったため、担ぎ上げられて、以前いたのと同じ場所に放り込まれた。 拷問官は看守たちに、誰にも彼らに会わせないようにし、もし誰かが彼らに食べ物や飲み物、あるいは衣服を与えようとした場合は、直ちに捕らえて殺すよう命じた。 こうして、キリストの殉教者たちは、この牢獄で三年間、極度の困窮の中に置かれ、飢えと渇きに苛まれ、化膿した傷による並外れた苦痛に耐え続けた。その悲惨な様子を目の当たりにした看守たちでさえ、心を動かされ、何度も涙を流した。 しかし、領主からの厳格な禁止令があったため、彼らは彼らに何らかの寛容を示すことを恐れていた。ただ、時折、看守のうちの誰か、あるいは同じ場所に囚われていた他の囚人の誰かが、密かに彼らにパンの切れ端や少量の水を渡すだけだった——こうして彼らは、キリストへの愛ゆえに耐え抜いたのである。

三年が過ぎ、ペルシャ王サポルがそこへ到着したとき、彼と共に、ペルシャのすべての魔術師を統率する大公、アルダサボルという者がやって来た。彼は、牢獄に囚われている聖なる殉教者アケプシム、ヨセフ、アイファルのことを知ると、彼らを自分の元へ連れてくるよう命じた。

聖人たちが牢獄から出てきたとき、彼らはまるで風に揺れる葦のようであった——それほどまでに衰弱していたのである。飢えと渇きに蝕まれ、彼らは干し草のように乾ききり、風で倒れそうになり、自力で歩くことさえできなかった。 彼らがアルダサボル公の元に連れて来られた時、その姿は驚くべき光景を呈していた。まるで棺の中に横たわる死人のようだったのだ。目は深く窪み、骨は皮一枚で覆われているだけだった。

公爵は彼らを見て、こう言った。

「お前たちはキリスト教徒か？」彼らは答えた。

「はい、私たちはキリスト教徒です。唯一の生ける神を信じ、その神を崇拝しています。」

公爵は言った。

「ご覧なさい、あなたの信仰がどれほどの災い、どれほどの不幸と悲しみを招いたか。多くの拷問と長い監禁のせいで、あなたは生きた人間の姿を失い、棺の中に横たわる死人のようになってしまった。私はあなたに、輝かしい太陽を崇拝するよう勧める。もし私の言うことを聞かなければ、残酷な死を遂げることになるだろう。」

聖人たちは満場一致でそのような不敬を拒み、太陽だけでなくあらゆる被造物を創造された真の神を告白し、万物の創造主のために死ぬ覚悟が固いことを示した。

長い論争の末、公爵は彼らを自分の意志に従わせることはできないと悟ると、まず聖アケプシムの背中と腹を粗い革ベルトで打つよう命じた。三十人の戦士が彼を打ち据える中、布告者はこう叫んだ。

「王の命令に従えば、命は助かるぞ。」

聖人は、まだ気力を保っていた間、こう答えた。

「私は、主から授かったすべての力を尽くして、主の御心に従おうとしているのだ。」

その後、力が尽きて、黙り込んだ。その後、彼の聖なる首は切り落とされた。こうして、以前、彼の頭に口づけをしてこう言った、神に霊感を受けた少年の預言が成就したのである。

「この頭は幸いである。キリストのために殉教を受けるからである。」

聖殉教者の遺体は通りに引きずり出され、犬に食わせられた。一方、警備兵たちは遠くから立ち、キリスト教徒たちが遺体を盗まないように見張っていた。三日が過ぎ、警備兵たちがどこかへ去った後、キリスト教徒たちはこのかけがえのない宝を回収し、尊厳をもって埋葬した。

[7532] 東方では、一日の始まりは、私たちの時間計算法で言えば、午前6時からとされていた。したがって、昼の3時間は私たちの午前9時、6時間は正午に相当する。

聖アケプシモスの処刑後、拷問者の命令により、聖ヨセフ長老への拷問が始まった。その際、告示役はこう叫んだ。

「王の意志に従えば、命は助かるぞ。」

しかし、聖人はこう叫んだ。

「神は唯一であり、神以外に、私たちが生き、動き、存在する[7533] 、神を信じ、神を崇める者にとって、他に神はいない。ゆえに、我々は王の命令を無視する。」

長時間にわたる拷問の末、彼は力尽き、まるで死んだかのようになった。拷問者たちは彼が死んだと思い込み、彼を引きずり出して市場広場に放り出した。その後、彼がまだ息をしていることに気づくと、彼を連れ戻して牢獄に閉じ込めた。

聖ヨセフが連れ去られた後、公爵は聖アイファルにこう語りかけた。

「見よ、お前の目の前には生と死、名誉と不名誉がある。より良いものを捨てて、より悪いものを選ぶな。――狂人たちが歩み、その行いにふさわしい処刑を受けたあの道を進むな。　お前は私の助言に従い、偉大な栄誉に浴し、王の手から贈り物を受け取るようにせよ。もし私の言うことを聞かなければ、自らの破滅の責任は自分にあるのだ。

聖なる助祭は答えた。

「もし私が、私の先人である父たちが歩んだのと同じ道を歩まなければ、天と地の御前で、私にとって大きな恥となるでしょう。彼らが、年老いて肉体も衰えていたにもかかわらず、あれほど勇敢に苦難に耐えたのですから、私のような、彼らより若く、肉体も強い者が、この一時的な　苦しみなど恐れるべきでしょうか？」　「私のために死んでくださったキリストのために死ぬことを恐れません。一時的な命のために永遠の命を失いたくはありません。あなたの贈り物や栄誉と引き換えに、私の敬虔さを売り渡すつもりはありません。」

すると、公爵は周囲の人々に激昂して言った。

「さあ、彼を最初の者たちよりも激しく打ちのめせ。」

聖人は言った。

「悪臭を放つ不浄な犬め！　この拷問は臆病者だけを怯えさせるものであり、キリストと一つになりたいという願いに魂が燃える強き男たちを怯えさせるものではない。」

そして、聖アイファルを激しく打ち始めた。公爵は驚いて家臣たちに言った。

「なぜキリスト教徒たちはこの世の命を軽んじ、死をこの世の幸福のように望むのか？」

周囲の人々は彼にこう答えた。

「彼らには、先祖から受け継いだ教えがあり、それによれば、この世よりも優れた別の世界があるとのことです。その教えを信じ、彼らはこの世を軽んじ、より良い世界を望んでいるため、自ら進んで死を選ぶのです。」

一方、公爵が何時間も側近たちとそのような会話を交わしている間、聖人はその間、数え切れないほどの傷を負っていた。

その後、公爵は慈悲深いふりをして、殴るのをやめるよう命じ、聖人にこう言った。

「王の意志に従えば、お前は元気になるだろう。我らには、お前の傷をすべて癒やすことのできる医師たちがいるのだから。」

聖人はこう答えた。

「たとえあなたが一言で私の傷を癒やすことができたとしても、それでも私はあなたの不法な行いに従うことはない。」

公爵は言った。

[7533] この表現は『使徒行伝』17章28節から引用されたものである。

「私はお前を試すためにそう言ったのだ。もしお前が従っていたとしても、これほど多くの傷を癒やすことはもはや不可能だっただろう。それらを癒やせるのは、ただ死だけだからだ。さあ、すべてのキリスト教徒にとっての模範となりなさい[7534] ――王に逆らったり、その公爵たちを辱めたりするようなことを、誰も敢えてしないように。」

聖人は答えた。

「不義な裁判官よ！　お前はいつも嘘ばかりを口にするが、今こそ、本意ではないにせよ、真実を語った。すなわち、私がすべてのキリスト教徒にとって、勇気と寛大さの模範となるということだ。　なぜなら、多くの信者たちは、私を生きた手本として見据え、キリストのために私が耐えている揺るぎない苦難を目の当たりにすることで、主なる神への熱意に満たされ、主のために同じような苦難へと進んでいくことになるからだ。

公爵は、彼のそのような勇気と忍耐に驚き、近くに立っていた愛する友人、アルベラ出身のアデシュハという名の男に目を向け、彼にこう言った。

「この二人のキリスト教徒、ヨセフとアイファルを、お前の町へ連れて行き、彼らを、彼ら自身のキリスト教徒たちによって石打ちの刑に処させよ。」

彼は、キリスト教の教師たちがキリスト教徒の手によって命を落とすようにするため、自ら剣で斬り殺すことを望まなかったのだ。

アデシュは彼らを家畜の背に乗せた[7535] 。まるで麦の束や生命のない木のように。というのも、数え切れないほどの拷問によって全身の筋肉が弛緩し、歩くことも座ることもできなかったからである。そこで彼は彼らを家畜に縛り付け、彼らを連れて自分の町へ向かった。　道中、休息や宿泊のために立ち止まる必要があるときは、彼らを動物から降ろし、まるで死体であるかのように地面に置いた。彼らは殴打によって力を失い、感覚が麻痺していたため、手も足も動かすことができなかったからである。　もし誰かが憐れみから彼らに食べ物や少しの水をあげようとしたなら、自分の手で彼らの口に運んでやった。そして再び、彼らを地面から持ち上げ、動物の上に載せ、死人のように縛り付けて運んだ。　そして、アルベルの町に到着すると、彼らは悪臭漂う牢獄に閉じ込められ、キリスト教徒の誰一人として彼らを訪ねたり、何か世話をしたりすることを許されなかった。　彼らの傷はひどく化膿し、潰瘍からは膿と血が流れ出ていたが、その傷に包帯を巻いてくれる者も、体を反対側に向かせてくれる者も、冷たい水を杯に注いで飲ませてくれる者も、誰もいなかった。こうして聖人たちは神のために苦しみを受けた。

その町には、スナンドゥリアという名の、信仰深く聖なる女性が一人おり、彼女はキリストのために牢獄で苦しむ者たちに密かに食事を与えていた。　ヨセフとアイファルが牢獄に囚われていることを知ると、彼女は夜、自分の使用人たちを連れてそこへやって来た。看守たちに多額の金を渡して牢獄に入り、かろうじて息をしている二人を発見した。二人はもはや何も話すことができず、かろうじて息をしているだけだった。　スナンドゥリアは、夜明けまでに再び彼らを牢獄へ連れ戻すと約束し、聖人たちをしばらくの間自分の家に連れて行かせてほしいと看守たちに懇願した。すると看守たちはそれを許した。彼女は殉教者たちを連れて、牢獄からそう遠くない自分の家へと運んだ。　寝台に寝かせると、彼女は彼らの傷口を洗い、きれいなタオルで血を拭き取り、その血を自分の体に塗り、高価な香油を塗ってあげ、かさぶたを包帯で巻き、打ちのめされた手足をキスし、彼らのために切なく泣いた。　彼らの苦しみが幾分和らいだ頃、ヨセフは意識を取り戻し、ふと目を向けると、この敬虔な女性が自分の上で痛切に泣き崩れているのを見た。彼は少しずつ彼女に語りかけた。

[7534] すなわち、王の意志に背く者がどのように罰せられるかという、恐ろしい例である。

[7535] ここでは、乗用や荷物の運搬に使われたラバやロバを指している。より重い荷物を長距離輸送するには、ラクダが用いられた。

「聖なる妻よ、あなたのこの善行は、神にも、神のために苦しむ私たちにも喜ばれるものです。しかし、私たちのためにこれほど激しく泣き崩れるのはふさわしくありません。その泣き声は、私たちのキリスト教の希望と信仰とは相容れないものです。」

すると、その女性はこう答えた。

「キリストがあなた方にこれほどの勇気を与え、激しい拷問を堅く耐え忍ばせてくださったことを、私は喜んでいます。もしあなた方が最後まで拷問に耐え抜く姿を見ることができれば、私はさらに喜ぶでしょう。泣くことは、人間の本性にふさわしいことなのですから。」

聖ヨセフは彼女にこう言った。

「しかし、私たちのことを思って泣くべきではありません。キリストのために耐えるすべての苦しみは、永遠の喜びをもたらすことを、あなたはご存知でしょうから。」

夜が明けると、聖人たちは直ちに牢獄へと連行された。六ヶ月が経過し――聖人たちは傷がいくらか癒え、立ち上がって少しずつ歩けるようになっていたが、アイファルだけは両手が動かずに垂れ下がったままだった――　――アルダサボルから処刑のために彼らを引き渡されたアデシュは、その権限を剥奪され、代わりにゼロフという名の、前任者よりもさらに残酷な別の裁判官がやって来た。彼が街に到着し、彼らの神である「火」の神殿で生贄を捧げようとしたとき、祭司たちは聖なる殉教者ヨセフとアイファルのことを彼に告げ、こう言った。

「牢獄には二人のキリスト教の教師がいます。彼らは以前アルダサボルによって拷問を受け、その後、キリスト教徒たち自身に石打ちの刑に処されるためにここに連れてこられました。彼らは傷のせいで歩くことができなかったため、我々は彼らを処刑場に連れ出すことはせず、彼らが回復するのを待っていました。そうすれば、彼らを我々と意見が一致するように説得できるからです。」

これを聞いた裁判官は、直ちに彼らを自分の元へ連れてくるよう命じ、長い間彼らと議論を交わし、甘言や脅しを用いて、火を崇拝し、生贄を口にするよう強要した。しかし、それが全く功を奏さなかったため、まず聖ヨセフを裸のまま逆さ吊りにし、牛の腱で鞭打つよう命じた。　激しく打ち据えられると、少し癒えかけていた傷口が再び開き、まるで泉から湧き出るかのように、血が勢いよく流れ出した。そこにいた賢者たちのうち数人が聖人に近づき、小声でこう言った。

「人間よ！もし人々の前で、我らの神の神殿に入り、我らと共に犠牲を捧げることを恥じるのなら、それを密かに行うことを約束せよ。そうすれば、苦しみから解放されるだろう。」

しかし、聖人は大声で叫んだ。*「詩篇6:9――『不義を行う者たちよ、みなわたしから離れよ。主はわたしの嘆きの声を聞いてくださったからである』」*。

三時間もの間、彼を殴打した後、拷問官は彼を降ろして牢獄へ運ぶよう命じた。というのも、傷口が開いてしまったため、彼は再び歩くことができなかったからである。

聖ヨセフが十字架から降ろされ、牢獄へ運ばれると、その場所に聖アイファルが吊るされ、彼もまた容赦なく長い間打ち続けられた。彼は絶えずこう叫んでいた。

「私はキリスト教徒だ。」

聖アイファルも降ろされると、その場所にマニ教の邪教徒である一人の男が吊るされた[7536]。彼もまた、皆の前で自らの邪悪な信仰を告白し、ペルシャ人の不敬虔さを非難した。　彼を吊るした

[7536] マニ教――キリスト教と、二元論（すなわち、古来より善と悪という二つの独立した原理または領域が存在するという教え）を説いたペルシャの宗教ゾロアスター教の原理とを融合させようとした試みの影響を受けて、ペルシャで形成された異端である。 マニ教の創始者マネス（3世紀に活躍）は、当初はマギ（ゾロアスター教の司祭）であったが、後にキリスト教に改宗し、長老にまでなった。しかし、まもなく異教的なペルシア宗教への傾倒を理由に教会から破門され、その後、ペルシア王ヴァラーン1世の治世下で処刑された。 彼の教えによれば、キリストは、光の父から「流出」によって生じた、単なる「光のエオン（霊）」に過ぎない。その半分は物質に飲み込まれ、可視世界の魂、いわゆる「苦悩するイエス」を構成し、もう半分は、別のゾナ、すなわち「生命を与える霊」の助けを借りて物質から解放され、太陽の中に宿った。　これがいわゆる「無情のイエス」である。キリストの受肉とは、無情のイエスが太陽から降りてきて、苦しむイエスを解放することである。苦しむイエスの光の粒子は、サタンが収集し、それらをより容易に支配するために、人間の

後、殴打が始まった。　当初、彼は加えられる傷に耐えていたが、より残酷に殴打されるようになると、大声で叫び始め、師を呪い、その信仰を放棄し、ペルシャの神々を崇拝すると誓った。そこに居合わせた聖アイファルは、これを聞いて喜びに満ち、彼を嘲りながらこう言った。

「汝はほんの少しの苦しみを受けただけで、すでに自らのマニ教を捨てたのか。私たちの神、キリストに祝福あれ。最も苛烈な苦しみの中でも私たちを強め、敬虔な信仰において不屈かつ揺るぎない者となる力を与えてくださる方よ！」

これを聞いた裁判官は聖人に激怒し、再びとげのあるバラの枝で彼を打つよう命じた。そして、彼がすでに死んだと思わされるまで打ち続け、彼を引きずり出して、死体のように放り出した。ある賢者が、裸で横たわるその姿を見て、自然な情に駆られて憐れみを感じ、シーツで覆ってあげた。彼の仲間の一部は、それを見て、彼がしたことを裁判官に告げ、彼を捕まえて容赦なく打ちのめした。　かくして、冷酷な者たちは彼の善行に対して報復した。しかし、聖アイファルがまだ息をしていることに気づくと、彼らは彼の足をつかんで牢獄へと引きずり戻した。

しばらくして、聖なる殉教者たちは再び牢獄から裁判官の前に引き出され、裁判官は彼らにこう言った。

「自分たちのことを考えてくれ、諸君。犠牲の血を味わって、苦しみから解放されよ。」

しかし、彼らは口を揃えてこう答えた。

「血を飲むのは人間にはふさわしくなく、肉食の犬だけの行いだ。だが、お前は本来は人間でありながら、気質は犬そのものであり、お前を創造した神に向かって吠えているのだから、お前自身が血を飲んで、それで満腹になればよい。」

裁判官は激怒し、再び彼らを打つよう命じた。その場にいた人々は彼らを憐れみ、こう言い始めた。

「血の代わりに、せめて茹でた生け贄の肉でも味わって、この苦しみから解放されてください。」

聖人たちは答えた。

「我々は、この汚れなき信仰を決して何ものにも穢すことはない。」

その後、裁判官は顧問たちと共に、キリスト教徒たちに聖なる殉教者たちを石打ちにするという判決を下した。

すると、聖ヨセフは言った。

「裁判官に、ある秘密を伝えたい。」

裁判官は、彼が偶像に犠牲を捧げようとしているのだと思い、すぐに彼のところへ近づいた。しかし、聖人は裁判官の顔に唾を吐きかけ、こう言った。

「非情な裁判官よ、人間の本性にこれほど残酷に逆らい、死にかけている者たちに怒りを向けることを、恥とは思いませんか？」

そして、裁判官は恥じ入った様子で自分の席に戻った。　直ちに多くの使用人がキリスト教徒の家々へ送り込まれ、彼らはキリスト教徒たちを家から無理やり裁判の場へ連行し、聖ヨセフを石で打ち殺させようとした。裁判の場から少し離れた広々とした場所へ彼を引きずり出し、腰まで埋まる穴を掘り、聖人をその中に立たせた。そうでなければ、彼は立つことができなかったからである。聖人の両手を後ろ手に縛り、周囲にキリスト教徒を配置すると、使用人たちはキリスト教徒の手に石を握らせ、聖人に向かって石を投げるよう強要した。キリスト教徒たちは、本意に反しながらも、その通りにした。また、至福のスナンドゥリアも連れてこられ、聖人に向かって石を投げるよう強要された。

姿に閉じ込めたとされる。　この教えによれば、キリストの受肉は単なる幻影に過ぎなかった（ドケティズム）。道徳的な観点からは、自らの内に肉体を徐々に死滅させることによって、物質からの解放、すなわち光の解放を目指す闘争を説いていた。マニ教の異端は、特に4世紀から5世紀にかけて広く普及していた。

すると彼女は叫んだ。

「古来より、あなたがたのように、敵ではなく私たちに対して戦いを挑み、平和な祖国を血と殺戮で満たしながら、女性に聖なる人々に手を上げさせるなどという前代未聞の行いなど、聞いたことがありません。」

不信心者たちは、長い棒の先に鉄の角を取り付け、スナンドゥリアにそれを手渡して、遠くから聖人を突き刺させようとした。すると彼女は言った。

「聖なる無垢な御体に手を触れるよりは、これを私の心臓に突き刺してくださったほうが、私にとってはましです。」

聖人の周囲には無数の石が投げ散らされ、頭部だけが覗いている状態だった。不信心者の一人が大きな石を拾い上げ、聖人の頭上にかざして振りかぶり、その石で聖人の頭を打ち砕いた。こうして、この善良な殉教者は、その魂を主の御手に委ねた。　殉教者の遺体は、まるで宝物であるかのように、信者たちに盗まれないよう、見張りが置かれた。三日が過ぎたとき、大地震が起こった。天から火が降り注ぎ、見張りを焼き尽くし、石を塵のように吹き飛ばした。　地震と雷鳴と稲妻が収まると、人々は聖人の遺体が石で埋められた場所へやって来たが、石は散乱しているものの、聖人の遺体は見つからなかった。主は、主のみが知る御心によって、聖人を未知の場所へ移されたからである。

聖なる助祭アイファルは、パトリアス[7537] と呼ばれる村へ連行され、そこでもキリスト教徒たちは強制されて彼を石で打ち殺した。しかし、その聖なる遺体は、近くに住んでいた修道士たちが夜中に密かに持ち出し、尊厳ある埋葬を執り行った。　聖アイファルが殺害されたその場所には、「メルシナ」と呼ばれる木[7538] が育ち、聖殉教者の祈りによって、あらゆる病が癒やされた。その木は五年間立ち続け、訪れる人々の病を癒やし続けた。これを見た不信心者たちは、嫉妬のあまり、その木を根元から切り倒してしまった。　多くの敬虔な人々が、その場所で天の光の輝きと、神を賛美し、神の聖人たちを称える天使たちを見ました。その聖人たちの祈りによって、私たちも天使たちと共に、天にいます神の栄光を永遠に賛美することができるよう、願います。アーメン。

コンダク、第2調:

神の知恵により、汚れなく秘かに導かれ、喜ばれるいけにえとなられた、祝福された方よ。聖アケプシモよ、あなたはキリストの栄光の杯を、あなたの殉教者たちと共に飲み干され、絶えず私たちすべてのために祈っておられる。

リッダにある聖大殉教者ゲオルギオスの聖堂の奉献式

記念日：11月3日

11月3日、ロシア正教会はリッダにある聖大殉教者ゲオルギオスの教会の再建を記念します。

聖大殉教者ゲオルギオスは、ローマ皇帝ディオクレティアヌスによる教会への激しい迫害の中で殉教しました。　苦難のさなか、牢獄に閉じ込められていた聖ゲオルギオスは、看守に自分の召使いを牢に会わせるよう懇願しました。そして、召使いが面会を許されると、彼は死後、自分の遺体を

[7537] この集落はベト・ヌガルド地方に位置していた。ヌガルドは、モスル都主教区に属する司教座のある都市である。

[7538] メルシナとは、ミルト、すなわちミルトの木のことである。この木はアジア、アメリカの熱帯諸国、アフリカ（エジプト）、そして南ヨーロッパの地中海沿岸に自生している。 この木は高さ3サジェンに達し、赤みを帯びた樹皮と、常緑の小さな葉をつけた長く丈夫な枝を持ち、5月に白い芳香のある花を咲かせる。 ミルトの木は古代の人々に最も愛され、庭園で栽培され、祝祭日には住居を飾り、特に婚礼の宴の際には頭にミルトの冠を戴いた。ミルトは古代において、愛や穏やかな幸福の象徴として崇められ、現在の喜びや未来への明るい希望を表すものとされていた。

パレスチナへ運ぶよう頼みました。　従者は主人の願いを忠実に果たした。牢獄から大殉教者の首を切られた遺体を取り出し、ラムレの町でそれを尊厳をもって埋葬した[7539]。

敬虔な皇帝コンスタンティヌスの治世中、聖大殉教者を崇敬する者たちは、リダに彼の名を冠した美しい教会を建立した。この教会が奉献される頃には、ラムレから聖大殉教者の朽ちることのない聖遺物が 移された。 この出来事は11月3日に起こった。当時すでにこの日を毎年祝う慣習が定まっていたかどうかは不明であるが、いずれにせよ、1030年のシルス教会の月暦では、11月3日が祝日として記されている。

その後、リッダ市の主要な見どころの一つであったこの大殉教者の壮麗な教会は、大きく荒廃してしまった。その中で無傷のまま残ったのは、祭壇と大殉教者の棺そのものだけであり、キリスト教徒たちはそこで礼拝を続けました。　正教会のロシアによるこの教会への関心は、19世紀後半に再び高まった。慈善家たちからの寄付と、ロシア政府から提供された多額の資金により、リダはこの教会が整備され、美しく装飾された姿を再び見ることができるようになった。　改修された教会の奉献式は、1872年11月、この教会が最初に奉献された日の記念日にあたる日に執り行われた。ロシア正教会は、今日に至るまでこの日にこの記念すべき出来事を記念しており、この祝典にちなんで、ロシア国内には多くの修道院や教会が建立されている。

コンダク、第2声調:

あなたの選ばれた、速やかな取り成しに身を委ねる信徒たちは、キリストの受難者よ、あなたを賛美する私たちを、敵の誘惑やあらゆる災い、悪意から救い出してください。そして、こう呼びかけましょう。「喜びなさい、殉教者ゲオルギイよ。」

聖アケプシモスの記念日

記念日：11月3日

聖アケプシムは、テオドシウス大帝の治世に生きた[7540]。小さなケリアに閉じこもり、そこで60年間を過ごし、酷暑や厳寒に耐え、誰とも会わず、誰とも話さず、ただ神に祈りを捧げていた。彼のケリアは地面に掘られたもので、住むには非常に不便であった；　食事は水と混ぜたレンズ豆だけであり、それも週に一度だけだった。飲むために必要な水は、誰にも見られないよう、夜間に最寄りの泉から汲んでいた。度重なる懇願の末、彼は司教の位を受け入れ、数多くの奇跡を起こした後、この世で主のもとへ息を引き取った。

聖殉教者アッティクス、アガピア、エウドクシア、カテリア、イストゥカリア、パクトヴィア、ニクトポリオンの記念日

記念日：11月3日

聖殉教者アッティクスとエウドクシウスは、デキウス帝の治世[7541]、カテリウスおよびイストゥカリウスと共に、セバスティア[7542]の兵士であった。聖人たちは、キリストへの信仰を広めたため

[7539] ラムラ――パレスチナにある、ヨッピの近くにある都市。

[7540] テオドシウス大帝――379年から395年まで在位したローマ皇帝。その治世において、キリスト教はローマ帝国で完全に確立された。

[7541] デキウス――ローマ皇帝。キリスト教徒を激しく迫害した人物。在位は249年から251年まで。

[7542] この名前で知られる都市はいくつかある。ここではアルメニアのセバスティアについて述べられている。

、軍司令官マルケルに捕らえられ、数多くの拷問にさらされた。　その後、彼らは牢獄に投じられ、そこで牛の腱で肩や腹を打ちつけられ、さらに歯を砕かれた。拷問の最中、軍司令官は聖カテリウスに向き直り、こう尋ねた。

「お前は民に、王の命令に従うなと教えたのか？」

「私は民に王に逆らうよう教えたのではなく、不死の王であるキリストを信じるよう教えたのです」と彼は答えた。

その後、聖イストカリイ、パクトヴィイ、ニクトポリオンが連行された。彼らはキリストを神として告白したため、有罪判決を受け、杭で打ちつけられるほか、数多くの拷問に耐え、ついに他の者たちと共に火刑に処され、こうして主のもとで息を引き取った。

11月17日

11月4日（旧暦）

尊き父ヨアンニキオス大聖人の生涯

記念日 11月4日

尊者ヨアンニキオスは、ビフィニア地方[7543] の、マリカティ[7544] と呼ばれる村で生まれた。父の名はミリトリキオス、母の名はアナスタシアであった。ヨアンニキオスが成長するにつれ、両親は彼に家畜の世話を任せた。　彼は学問を修めてはいなかったが、主の戒めを深く学んだため、多くの学者たちをも凌ぐ知恵を持っていた。　彼を導く聖霊の導きに従い、彼は極めて徳高く、柔和で、謙虚、忍耐強く、従順であり、祈りに対しては並々ならぬ熱意を持っており、しばしば自分の群れを置いて、一日中人里離れた場所に立ち、神に熱心に祈りを捧げていた。　彼が祈りのためにその場を離れるときは、羊の群れに十字を切って祝福し、その群れはどこにも散らばることなく、獣にも盗賊にも襲われることもなかった。そして、夕方にその静かな場所から戻ってきたこの祝福された少年は、羊の群れを家へと導き戻した。

聖人は、青年期を迎えるまでそのように生活を送っていた。当時、ギリシャでは、コンスタンティノス・コプロニモスの息子である不敬虔なレウスが統治しており、彼は偶像破壊の異端に染まっていた[7545] 。この王は、帝国全土から美貌と勇気に優れた若者たちを自らの軍隊に集め始めた。 この徴兵を行うために派遣された者たちは、ビフィニア地方にもやって来た。イオアンニキが住んでいた村を訪れた彼らは、この若者が美貌に恵まれ、背が高く、体格もたくましく、兵役に向いていることを見抜いた。そこで彼らは彼を連れ帰り、エクスクヴィトーレス（[7546] ）に編入した。 それ以来、イオアンニキは兵役を開始し、その勇猛さによって敵を恐れさせ、またその柔和さと謙虚さによって仲間たちから愛された。そして何よりも、神の聖なる戒めを厳格に守っていたため、神に最も喜ばれたのである。　しかし、悪魔は、イオアンニキのそのような徳高い生活に嫉妬し、彼を聖像破壊の異端へと誘い込んだ。当時、この異端は神の教会に大きな混乱をもたらしていた。主の聖堂からは聖なる

[7543] ビフィニアは小アジアの北西に位置する属州であった。現在はアナトリアの北部を占めている。ビフィニアにおけるキリスト教は、使徒たちの時代からすでに存在していた。現在、ビフィニア教区には、ニコミディア大司教の管轄下にある12の司教座がある。

[7544] *マリカティ*の集落は、ポンテの海岸沿いにある有名な植民地アポロニアの北、フラキアに位置していた。

[7545] レウ4世は、西暦775年から780年まで在位した。イコノボルツは、聖なるイコンの崇拝に反対した異端者たちである。イコンに対する迫害は、626年の皇帝レウ・イサウロス時代に始まった。

[7546] 王宮を警護していた近衛兵。

イコンが投げ捨てられ、それらを崇拝する者たちは迫害にさらされていた。　こうしてヨアニキは、その異端にすっかり惑わされ、聖なるイコンについて聞くことさえ拒むようになった。しかし、すべての者の救いを望まれる神は、次のような方法で彼をもその惑わしから救われた。

神の御計画により、イオアンニキは自身の部隊を率いて東方へ派遣され、そこから帰路につく際、オリンポス山[7547] を通過した。当時、その山には並外れた洞察力を持つ一人の修道士が住んでいた。　この修道士は、神の御霊によって、ヨアンニキが部隊を率いて自分のそばを通り過ぎようとしていることを知ると、荒野の修道室から出てきて、彼にこう言った。

「ヨアンニキよ！　もしあなたがキリスト教徒を名乗るのなら、なぜキリストのイコンを軽んじるのか？　正しい信仰を持たない限り、あなたの徳ある生活におけるあらゆる功績は無駄になってしまう。」

これを聞いて、イオアンニキは、自分を知らない者が自分の名前を呼び、一度も会ったことのない人が自分の行いを知っていることに驚いた。　しかし、自分に話しかけてきた者が神の御霊に満たされており、その透視能力によって自分の行いをすべて見抜いていることを悟ると、イオアンニキは彼の前にひれ伏し、頭を下げて許しを請いました。彼は、無知ゆえに罪を犯してしまったと語り、キリストのイコンやすべての聖人の像に、 にふさわしい敬意と礼拝を捧げることを誓いました。 それ以来、至福のイオアンニキは聖なるイコンを熱心に崇敬するようになり、自らの無知ゆえにそれらを軽んじていたことを深く悔い改めた。自分の罪を償おうと、彼は断食によって身を酷使し、様々な方法で肉体を鍛え上げた。　王宮の玄関ホールに身を置き、彼は裸の地面に横たわり、一晩中祈りを捧げ、ごくわずかな食事しか口にしなかった。しかし、兵士たちとの共同の食事の席に同席せざるを得ないときは、彼らに自分の断食を悟られないよう努めた。

彼がこのような苦行に丸6年間を費やしていた頃、ブルガリア軍が大軍を率いてギリシャ軍に襲いかかり、フラキア地方を荒らし始めた[7548] 。ギリシャ王は全軍を率いて彼らに立ち向かったが、その軍勢の中には当時、至福のイオアニキも加わっていた。　両軍が激突して戦いが始まり、ブルガリア軍がギリシャ軍を圧倒し始めたとき、イオアニキスは並外れた勇気を示し、まるで新たなダビデのように異民族を打ち倒した。彼は王の目の前で、敵の剣から自らの部隊を救い出し、勇敢に敵の攻撃を撃退し、葦を刈り取るかのように敵を斬り倒した。　また、彼はブルガール軍と交戦し、すでに捕虜にされかけていたある高位のギリシャ貴族をも救い出した。ブルガール軍に飛びかかったイオアニキは、ある者は自らの剣で斬り倒し、ある者は追い散らし、こうして捕らわれていた貴族を解放した。 王は彼の勇敢さに目を留め、故郷や出自、名前を尋ね、これらすべてを記念の書『[7549] 』に記録するよう命じた。それは、戦いが終わった後、この勇敢な戦士を高い位やその他の贈り物で称えるためであった。　その間、イオアンニキスは、ゴリアテのように恐ろしい姿をした一人のブルガリア人――彼がギリシャ人の進路を塞ぎ、彼らを殺害していた――を見かけると、彼に突進し、即座にその首を刎ねた。　これこそが、目に見える敵との戦いにおける至福のイオアンニキイの勇猛さであり、それは彼の将来、目に見えない敵との戦いと、それらに対する勝利を予示するものであった。

戦いの後、オリンポス山を通りかかったとき、イオアニキオスは、砂漠から彼のもとへ現れ、彼を偶像破壊の異端であると非難したあの修道士のことを思い出した。　これを思い起こし、彼は心の中ですべてを捨て、その山に定住して、ただ神との交わりの中にありながら、修道士として沈黙のうちに生きることを決意した。　彼はまもなくその決意を実行に移した。というのも、王都に到着し

[7547] オリンポス――ビフィニアにある山で、その人里離れた環境と荒々しさから多くの隠者たちを惹きつけた。

[7548] トラキア――（広義では）古代において、現在のハンガリー東部、トランシルヴァニア、ベッサラビア、モルダヴィア、ワラキア、ブルガリア、セルビア、およびルメリア東部を包含していた。しかし、狭義では、現在のルメリアの東部のみがトラキアと呼ばれていた。– ギリシャの北部に居住していたブルガール人は、当時、ギリシャ帝国に対して頻繁に襲撃を仕掛けていた。

[7549] 王室の役人たちは、帝国内で起こったすべての重要な出来事を記録する特別な日誌を持っていた。

、戦場での勇猛さにより名誉ある称号と王からの贈り物を受け取るはずだったにもかかわらず、彼はこれらすべてを軽んじ、[7550]を「塵」と見なしたからである。 戦友たちから離れ、彼は軍務25年目を迎えた年に修道士たちの元へ向かい、「天の下にある悪霊たち」[7551] に対する新たな戦いを始めることにした。　アヴガル修道院に到着し、そこに住む修道士たちに温かく迎えられたヨアンニキは、イグメン（修道院長）グリゴリウスに、荒野へ赴き、そこで孤独と沈黙の中で暮らしたいという自身の意図を打ち明けた。イグメンは当初、彼の決断を承認したが、その後こう言った。

「愛する者よ、あなたの思いは善きものだが、修道院の規律や慣習に慣れるまでは、いきなり荒野での生活を選び、人々から離れることは勧めない。　それゆえ、まずは徳高く経験豊かな修道士たちと共に暮らし、彼らから、どの時間に、どのように祈りを捧げるべきかを学び、謙遜と従順、そして柔和さを身につけてから、それからであって初めて、荒野へ行くことができるのだ。　わが子よ、教えを受けずにそのような生活を始めると、敵を傷つけ打ち負かすどころか、かえって自分自身が敵に傷つけられ、打ち負かされてしまうことのないよう、気をつけなさい。

イオアンニキは、この有益な助言に耳を傾け、ひとまずその決意を棚上げにし、敬虔な人々と共に暮らし、彼らの徳高い生活に身を慣らすことにした。　彼は三つの修道院における修道規則や生活様式を観察し、最初はアヴガル修道院で学び、その後、ウトテラスと呼ばれる別の修道院へ移り、学のない身でありながら、そこで読み書きを学び始めた。　しかし、その修道院にはしばしば信徒が訪れ、彼らのせいで修道者の沈黙が乱されているのを見て、彼は　そこから去り、三つ目の修道院であるアンティディエフの修道院へ移り、そこで二年間を過ごした。彼はそこでダビデの詩篇三十篇を学び、その地の修道士たちから修道生活において多くの恩恵を受けた。

2年が過ぎると、イオアンニキは再び荒野の沈黙の中で生きたいという願望に燃え上がり、近くにある山に登り、そこで人里離れた場所に身を置き、隠遁生活を始めようと決意した。　しかしその前に、彼は7日間断食を続け、自分が選んだ道の導き手となってくださるよう、神に熱心に祈った。　七日目のこと、この新たなモーセは天から、その山へ行くよう命じる声を聞いた。イオアンニキはアンティディエフ修道院を出て、そこからそう遠くない山へと急いだ。山に登ると、彼はそこで住む場所を探し始めた。　すると、彼は二人の隠遁修道士を見かけた。彼らは羊毛の衣を身にまとい、荒野に生える草を糧としていた。彼らの元へ近づくと、聖人は彼らに頭を下げた。すると、彼らは立ち上がり、祈りを捧げた後、彼と語り合いを始めた。　ヨアンニキスは彼らに自分のことをすべて語り、その意図を明かした。一方、修道士たちもまた、彼に助言を惜しまなかった。彼らは、彼が五十年もの間、苦行を続けた後、人生の最期に、嫉妬深い人々から誘惑を受けると予言した。「しかし」と聖人たちは言った。「その誘惑の苦い結果は、彼ら自身の頭上に降りかかるだろう。　あなた自身は、いかなる悪にも見舞われることはない」と。これは、後述するように実際に実現した。このことをヨアンニキに予言する際、それらの至福の隠者たちは、彼に「レヴィトナル」と呼ばれる羊毛の衣を与えた。　この衣は、ヨアンニキオスにとって、あらゆる敵の矢に対する、いわば貫通不可能な盾のようなものであった。彼は後に、このことを自ら語っている。　魂に益となる対話を終えると、隠者たちは散り散りになり、遠く離れた荒野へと去っていった。一方、イオアンニキオスはトリハリクスと呼ばれる山へと向かい、そこで、住居を持たず、ただ空の下で過ごした。　彼のことを知った前述のアヴガル修道院のイグメン、グリゴリイは、その山に、祝福された者が嵐や雨、雪から身を隠せるような小さな小屋を建ててあげた。そしてイオアンニキは、その小屋に閉じこもって過ごした。その後、修道院の兄弟たちが、彼の魂に益となる会話を楽しみたいと、彼を訪ねるようになった。こ

[7550] すなわち、家から掃き出される単なるゴミと見なしていたのである。フィリピ書3 – *「さらに、私は、私の主であるキリスト・イエスを知ることに勝るものはないと、すべてを無に数える。キリストを得るために、私はすべてを捨て、すべてをゴミと見なしている」*；

[7551] エペソ人への手紙　6 – *「私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配者たち、権威者たち、この世の暗闇の支配者たち、天の下の悪の霊たちに対するものだからです」*。

れは彼にとって不快なことだった。なぜなら、それによって彼の沈黙が破られてしまうからである。そのため、彼はその山を離れ、沈黙の生活を送るための別の場所を探しに出かけた。　ゲレスポンテにある村[7552]を通り過ぎたとき、彼はその近くに、通り抜けられない藪や岩場のある別の高い山を見出し、そこに定住した。そして、地面に狭く深い洞窟を掘り、そこから一歩も外に出ることなく、そこで暮らし始めた。　彼は、その山で山羊を放牧していたある羊飼いに食料を頼っていた。その羊飼いは月に一度、聖人に少量のパンと水を持って行き、その見返りとして、聖人から最高の賜物――祝福と祈り――を受け取っていた。聖人はそこで三年間、昼夜を問わず祈りを捧げ、神を賛美しながら修行に励んだ。ダビデの詩篇を詠みながら、彼は各節の後に次のような言葉を付け加えた。

「わが望みは父、わが避難所はキリスト、わが守護者は聖霊。」

聖人はこのように言葉を繰り返して慰めを得ていました。その模範に倣い、今も多くの人が頻繁にこの言葉を唱える習慣を持っています[7553]。

狭い洞窟での生活が始まって3年後、聖人はある日、その近くにある教会へと向かった。偶然にも、かつてヨアンニキオスと共に仕え、親交のあった数人の兵士たちが、その同じ教会を訪れていた。　そのうちのひとりがヨアニキウスを見て彼だと気づくと、抱きしめて喜びの涙を流し、かつての生活や戦いで示した勇敢さ、そしてヨアニキウスが王から授かった栄誉について語り合った。　その戦士は、なぜイオアニキがこれらすべてを捨てて、貧しさの中で暮らすことを選んだのかと不思議に思った。その戦士が他の者たちにイオアニキのことを話そうと振り返ったその時、イオアニキは彼らから離れ、さらに誰からも身を隠そうとして、多くの獣や蛇が生息するコントゥリウス山脈[7554]へと去っていった。　そこで聖人は、世間の名声を避けながら定住し、獣や蛇と共に暮らし、ダビデにこう語りかけた。*「私は遠くへ去り、荒野にとどまりたい。嵐や暴風から急いで身を隠したい」*（詩編54:8–9）。

しばらくして、イオアンニキはエフェソスの聖ヨハネ・テオロゴス教会へ行き、そこで祈りを捧げることにした。エフェソスへの道中、ある祈りの家[7555]のそばを通りかかったとき、日没の頃、亡くなった両親のために祈りを捧げようとその家へ向かう夫婦に出会った。　彼を見た夫婦は恐怖に襲われた。というのも、彼は恐ろしい姿をしていたからだ。背が高く、ぼろ服を身にまとい、裸足で、全身が毛むくじゃらだった。聖人は、彼らが恐怖で震えているのを見て、優しくこう言った。

「恐れることはありません、子供たちよ。ただ、この道はどこへ通じているのか教えてくれませんか？」

彼らは、その道は当時氾濫していた川へと続いているため、舟なしでは川を渡ることはできないと語った。しかし、イオアンニキは川へと向かい、川辺に着くと少し休んだ。そして真夜中に起き上がり、まるで陸を歩くかのように水の上を歩いて対岸へ渡り、足を濡らすこともなかった。　エフェソスに到着し、聖ヨハネ・テオロゴスの教会に近づくと、教会の扉が自然に開いた。　中に入ると、彼は相応しい限り祈りを捧げ、キリストの愛する弟子である聖ヨハネの聖像に頭を下げ、口づけをした。彼が教会から出てくると、扉はたちまち自然に閉まり、彼は再び旅立ち、コントゥリ山脈にある自分の住まいへと戻っていった。　その時、彼はある女子修道院の前を通りかかった。そこには、幼い娘を連れ添った一人の修道女がいた。その娘は肉欲に駆られ、修道生活と母親を捨て、世俗に戻って結婚したいと願っていた。　母親は涙ながらに、キリストへの愛のために肉欲の戦いに耐え、修道生活を捨てず、悪魔の侮辱や破滅に身を委ねないよう、娘に懇願した。しかし、情欲の炎に燃え、

[7552] ヘレスポント――現在のダーダネルス海峡。この海峡の東岸にある地域も、かつてヘレスポントと呼ばれていた。

[7553] この聖ヨハニキオスによる祈りは、現在も教会の礼拝、すなわち晩課の終わりに用いられている。

[7554] 小アジアの西部。

[7555] おそらくこれは礼拝堂である。礼拝堂や祈りの家は、教会まで遠く歩かなければならなかった隠者たち、あるいは個人、特に両親が亡くなり埋葬された場所などに建てられた。

すでに修道院から逃げ出す決心をしてしまった娘を、母親は説得することができなかった。　このことを知った聖ヨアンニキスは、その娘に憐れみを感じ、彼女を呼び寄せてこう言った。

「わが子よ、その手を私の首に置いてくれ。」

少女がそうすると、聖人は涙を流しながら、少女がその情欲と悪魔の誘惑から解放され、彼女の苦しみと肉欲の重荷のすべてが自分に移るよう、神に祈った。　そして、その通りになった。その娘はあらゆる不浄な思いや肉欲から解放され、修道院に残って、無情の生活を送り、神に奉仕し続けた。一方、イオアンニキは自分の道を進み、コントゥリアへと向かった。　道中、彼は肉欲の炎を身の中に感じ、恐ろしい嵐のように邪悪な思いが彼を襲った。不浄な情欲が彼の中で渦巻き、血は釜の中で煮えたぎるように沸き立ち、あの乙女が耐え忍んだすべての苦しみは、至福のヨアンニキオの分となった。　しかし彼は、偉大な苦行によって肉体を鍛え上げ、それらを勇敢に耐え抜いた。ある日、山の大きな裂け目でそこに巣くう巨大な大蛇に出くわしたとき、イオアニキは、不浄な考えに身を任せて清らかな肉体を穢すよりは死を選ぶと決意し、自らをその大蛇に食わせようと決心した。　彼は蛇に飛びかかり、蛇に食い尽くされるだろうと思ったが、蛇は彼に触れようとはしなかった。イオアンニキが食い尽くされたいと願い、蛇を挑発し始めたとき、蛇は突然死んでしまった。　その時から、イオアンニキイの心には邪悪な思いが浮かばなくなり、情熱は消え、情欲は静まり、彼の体には平穏が戻った。同時に、彼には目に見える蛇も目に見えない蛇も踏みつけ、その頭を砕く力が与えられた。　ある日、聖人が立ってダビデの詩篇を詠んでいたところ、突然、聖人の近くにあった石の山が揺れ始めた。　そこを見やると、聖人は石の山の中から、炎のような目をした恐ろしい蛇が現れるのを見た。聖人は杖でその蛇に触れると、蛇はたちまち息絶えた。またある時、冬の頃、聖人はある深い洞窟に入り、そこに巣くっていた蛇を見つけた。その蛇の目は、まるで火のように燃えていた。目の前にいるのが蛇だとは気づかず、それが本当に火だと思い込んだ聖人は、薪を集めて蛇の上に積み上げ、この厳しい寒さの中で焚き火で暖まろうとした。　蛇は身を震わせて薪を振り払い、その時、聖人はそこに蛇がいることに気づいた。しかし、彼は怯むことなく、洞窟の右側に身を寄せ、冬が終わるまでその場所で蛇と共に過ごした。

ヨアニキオスが荒野で過ごした12年目が終わりに近づいた頃、天からの声が彼に、エリステと呼ばれる修道院へ行き、そこで修道士の位に就くよう命じた。　彼は直ちにその修道院へ向かい、収穫の時期にそこへ到着すると、その修道院のイグメンであるステファノに自己を明かした。ステファノは、朝に定例の祈りを捧げた後、尊者イオアニキアに修道服を着せた。もっとも、彼はすでに完全な修道士であり、その修行の功績において多くの人々を凌駕していた。　修道服を身にまとった後、尊者はさらに精進を深め、一つの労苦から次の労苦へと進んでいった。彼はクリタマと呼ばれる地に定住し、長さ六肘（[7556] ）の鉄の鎖[7557] で自らを縛り、自発的な囚人でありキリストの殉教者として、三年間、隠遁生活と束縛の中で過ごした。

三年後、イオアンニキは、断食者たちの間で偉大と称されるゲオルギオスに会うため、ヘリドンへ向かうことを望んだ。　束縛を解くと、彼は旅立ち、ゴラムと呼ばれる川にたどり着いたとき、川の水をかき乱し、流れを止めていた大蛇に出会った。彼は祈りと十字の印によって、その大蛇を退治した。　そして偉大なるゲオルギオスのもとへたどり着くと、彼は三年間その傍らに留まり、彼から詩篇全巻を学び、その後、弟子パホミオスを伴って再びアンティオキアの修道院へと戻った。

尊者ヨアンニキオスの生涯におけるいくつかの出来事は、非常に教訓に富んでいる。アヴガル修道院に滞在していた頃、ヨアンニキオスはある日、他の修道士たちと共に、そこからほど近い山に建設中の新しい修道院を見に行くことにした。彼がその山に近づくと、荒野から異様に大きな山羊が現れた。　ヨアンニキオスと共に歩いていた修道士たちは、その山羊をどうやって捕まえるか考え始

[7556] 1肘は10.5ヴェルシュクである。

[7557] 苦行者たちが肉体を死なせるために自らに課した重い足枷。

めた。その皮からは良質な毛皮が得られるからだ。聖人は彼らの考えを察し、サヴァという名の修道士に、その山羊を捕まえて自分のところへ連れてくるよう命じた。するとサヴァは言った。

「もしヤギが逃げたら、どうやって追いつけばいいのですか？」

聖人は彼にこう言った。

「お前は命じられたことだけを行いなさい。そうすれば、山羊は自らお前のところへやって来て、お前の後についてくるだろう。」

それから、他の修道士たちに向き直り、こう尋ねた。

「山羊の皮は、毛皮を作るのに適しているか？」

すると、彼らはこう答えた。

「大変適しています。あなたがそうおっしゃる前から、私たちもそう考えていました。」

山羊が連れて来られると、尊者は自らの手でその体を撫でながら、その間、兄弟たちに動物の命を慈しみ、欲望を節制するよう説いた。そしてその後、彼は再び山羊を砂漠の牧草地へと放した。

聖人は先見の明も持っていた。彼はニキフォロス王の早すぎる死を予言したが、その予言は的中し、王はブルガリア人との戦いで負傷して亡くなった。　また、ニキフォロスに続いて即位したその息子、スタヴリキオス[7558] の早すぎる死も予言した。彼が、高いオリンポス山の隣にそびえるプルセンティイ山に住んでいた頃、そこにはグリーという名の修道士がいた。彼は偽善者であり、人々からの名声を求め、実際、偉大な修行者として皆から称賛されていた。　この修道士は、真に高潔な修行者である聖ヨアンニキオスにはまだ程遠いと悟り、嫉妬に苛まれた。ヨアンニキオスを滅ぼそうと、彼はユダのように、お世辞を並べて彼の元を訪れ、飲み物に毒を盛った。　聖人は、悪意のない人柄であったため、グリーが自分に対して誠実な友情を抱いていると思い込み、何も疑うことなく、その致命的な毒を飲み干した。その直後、彼は恐ろしい苦痛を感じ、自らの命さえ危ぶむようになった。　しかし、神は御自身の聖人に、そのような早すぎる死を遂げさせることはなく、御自身の聖殉教者エウスタフィオス[7559] を助けとして遣わされた。エウスタフィオスは幻視の中で彼に現れ、病を癒やし、健康を取り戻させてくれた。　その感謝の印として、尊者はその地に聖大殉教者エウスタフィオスの名を冠した教会を建立し、その隣に修道院を設けた。

ある夜、イオアンニキは祈りを捧げていると、次のような幻を見ました。山の東側から泉が現れ、豊かな水が湧き出ており、その泉の周りには多くの羊が群がり、泉から流れ出る水を飲んでいたのです。　聖人はこの幻に驚いた。なぜなら、あの荒野に泉も羊もかつて存在したことはないと知っていたからである。翌朝、彼はその場所へ向かったが、羊も泉も何も見つからなかった。しかし、その場所は住むには非常に良く、快適な場所であることがわかった。　聖人は長老たちから、かつてその場所に聖母マリアの教会があったことを知り、そこで自身の　幻視を次のように解釈した。すなわち、豊かに水を湧き出させる泉は、その場所に注がれるべき聖母マリアの恵みであり、羊たちは聖母マリアから恵みを受ける人々である。　そして、尊者ヨアンニキは、その場所に至聖なる聖母マリアの名を冠した教会を再建するために全力を尽くし、まもなくその願いを叶えることができた。彼は美しい教会を建立し、そこに修道院を設け、至福の聖母マリアの助けと加護のもと、多くの修道士たちを集めた。

教会の建設中、聖ヨアンニキオスは自ら石を運び、建設作業を手伝うなどして働いた。ある日、彼が地面から石を拾おうと手を伸ばしたとき、石の下からエヒドナが這い出し、彼の手に噛みつい

[7558] ニキフォロス1世は802年から811年まで在位した。その息子スタヴリキオスはわずか2ヶ月間在位し、廃位されてから3ヶ月後に亡くなった。

[7559] エウスタフィオスという名には、数人の殉教者（具体的には7月7日、8月20日、9月27日、10月24日など）に関する記憶が結びついている。ここでどの殉教者が指されているのかは不明である。　おそらくここでは、聖なるイコンのために殉教したキイの、あるいはプルシアダの司教エウスタフィオスを指していると考えられる。当時、イオアンニキスはプルシアダからほど近い山々に住んでいた。

た後、その手にぶら下がった。しかし彼は、あたかも新たなパウロであるかのように、そのエヒドナを振り払い、何の害も受けなかった。　「*しかし、彼はその蛇を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった*」（使徒行伝28:5）。

祈りを捧げている間、聖ヨアンニキオスは霊だけでなく肉体までもが山へと昇り、地面からかなり高いところまで浮き上がっていた。　ある日、彼の聖なる生涯を模範とし、その教えを継ぐ弟子である至福のエウストラティオスは、聖人が一人で教会へ祈りに行く際、密かに後を追い、教会の片隅に身を隠して、彼がどのように祈りを捧げているかを注意深く観察していた。　すると、尊者様が両手を天に掲げ、地面から高く浮き上がり、空中に浮かんで祈っているのを目撃し、エウストラティオスは恐怖に襲われた。祈りを終えると、尊者様は再び地面に降り立ち、エウストラティオスの存在に気づくと、憤りをもってこう言った。　「*『あなたは不法を愛さない神であり、悪しき者はあなたの御前に住むことはできない』*（詩篇5:5）と書かれている。すなわち、悪意ある者は神に守られている者のそばに近づくことはできない――それなのに、あなたは私の罪深い祈りを盗み見ようとしたのだ」。

聖人はエウストラティオスに、このことを誰にも話さないよう命じた。

驚くべきヨアンニキは多くの奇跡を行った。　彼はただ一言で人々から悪霊を追い出し、十字架の印と祈りによってあらゆる病を癒やし、多くの人々を蛇に噛まれることから救った。そのため、大勢の人々が彼のもとに集まってきた――ある者は病の癒やしを、ある者は不浄な霊からの解放を、またある者はただ祝福と祈りだけを求めに来た。　これにより、ヨアンニキが自らを捧げていた沈黙が破られてしまった。これに煩わしさを感じた彼は、再びトリハリコ山へと去り、何の避難所も持たずにそこに留まった。　一方、アヴガル修道院の修道士エウストラティオスは、この至福の父に対して熱い愛を抱き、彼に会いたいと願って、熱心に彼を探し求め、トリハリコヴァ山で彼を見つけた。いつもの祈りを終えた後、エウストラティオスは、当時ギリシャを統治していたレフ・アルメニア人[7560]について、彼がいつまで神の教会を偶像排斥の異端によって混乱させ続けるのか、と至福のヨアンニキオスに尋ねた。　聖人は即座に、レフはまもなく死ぬだろうと告げた。その通りになった。ミハイル（バルボスまたはトラボスと呼ばれた）がレフ・アルメニア人を殺害し、彼の後を継いで王位についたからである[7561]。

老齢となったヨアンニキは、杖をついて歩くのが習慣となっていた。ある日、山中の狭い峠道を歩いていたとき、杖が偶然手から滑り落ち、山から断崖の底へと転がり落ちてしまい、見つけることさえできないほどに失われてしまった。　聖人は杖を失ったことを嘆き、ひざまずいていつものように主への祈りを捧げていたところ、その瞬間、目に見えない力によって空を飛んできた杖が、聖人の手の中に現れたのである。

ある時、砂漠を歩いていた聖人は、悪魔たちが住み着いていた空き洞窟を一つ見つけました。聖人はその洞窟を気に入り、そこに住み着きました。　一方、悪霊たちは彼の存在に耐えかね、公然と彼に反旗を翻し、彼を怖がらせてそこから追い出そうと、様々な嫌がらせを仕掛けた。彼らは彼に向かって叫び、歯ぎしりし、嘲笑し、脅かし、前後に走り回り、襲いかかり、まるで洞窟全体を揺るがしているかのようだった。　しかし、聖人はパウロの言葉に従い、あたかも戦いの日のように、義の鎧を身にまとい、信仰の盾を手にし、敵の攻撃を少しも恐れることはなかった。「*それゆえ、神のすべての武具を身に着けなさい。そうすれば、悪の日に立ち向かい、すべてに打ち勝ち、立ち続けることができる。　ですから、真理を帯として腰に締め、義の鎧を身に着け、平和の福音を宣べ伝える用意をして足を履き、何よりもまず、信仰の盾を取りなさい。それによって、悪者の放つすべての燃えるような矢を消し去ることができるのです*」（エフェソ6:13–16）。一方、悪霊たちは叫んだ。

[7560] レウ5世（アルメニア人）は、813年から820年まで在位した。

[7561] ミカエル2世（口ごもる者）は、820年から829年まで在位した。

「すると、彼らは叫んだ。『神の子イエスよ、私たちとあなたと何の関係があるのですか。まだ時期が来ていないのに、私たちを苦しめるためにここに来られたのですか』（マタイ8:29）。そして、打ち負かすことのできない者を打ち負かすことができず、彼ら自身、彼に打ち負かされて逃げ去った。

その頃、あるボヤリンの娘で、真に信仰深い女性が、力尽きて寝台に横たわり、ひどく苦しんでいた。　彼女が聖人のもとへ運ばれると、聖人は直ちに彼女を迎えに出た。そして、彼女が多くの聖像破壊者たちの間にいながらも聖像を崇敬していたというその敬虔さゆえに憐れみを抱き、祈りと十字の印によって彼女の病を癒した。　たまたま、聖人の義弟――聖人の妹と結婚していた者――がそこにいた。彼は偶像排斥の異端に惑わされていたが、聖人は長い間、彼に真の信仰の正しい道を悟らせ、聖なるイコンにふさわしい敬意を払うよう説得し続けた。　しかし、聖人の教えが彼に何の影響も及ぼさなかったとき（彼はファラオのように頑なだったからである）、聖人は彼との肉親としての絆を忘れ、もしその偶像破壊者が心の目を持たないのなら、肉体の目も失うようにと神に祈った。そして、その通りになった。彼の娘婿は盲目となり、その不敬虔さに相応しい罰を受けたのである。

この偉大な聖父には、噂で自分を訪ねてくるという者なら誰に対しても、山を下りて出迎える習慣があった。山への登りは困難で不便であったため、訪問者に負担をかけないよう、彼はそうしていたのである。 ある日、ハルキドンとニカイアの二人の司教[7562]が、ペトロスとテオドロス・ストゥディテス[7563] 、そしてヨセフとクリメントを伴って、彼のもとへ向かっていた。祝福された方は山を下りて彼らを出迎え、愛を込めて歓迎した。　いつもの祈りを終え、彼らが魂に益となる会話を交わし始めたとき、聖人は訪れた者の一人、すなわちヨセフにこう言った。

「気兼ねしないでください、ヨセフ兄弟。しかし、あなたは旅立ちの準備をすべきです。」

当時、彼らはこの聖人の言葉を理解できなかった。しかし、それから十八日が過ぎ、ヨセフが他界したとき、彼らは至福のヨアンニキオスの言葉を思い出し、彼がその透徹した眼差しでヨセフの死を予見し、まさにその死について彼に告げ、旅立ちへの準備を命じていたのだと理解した。

ミハイルの治世第五年、ニキフォロス王の死から十四年が経った頃、ギリシャ軍を打ち破ったブルガリア人によって、多くの名高いボヤールや戦士たちが束縛され、牢獄に閉じ込められていた時、　聖人はそれらの捕虜たちのことを思い出し、心の中で彼らに対して特別な憐れみを感じた。というのも、彼らが極めて悲惨な状況にあり、悪臭のする薄暗い牢獄に鎖で縛られて閉じ込められており、そのような苦しみの中で生き続けるよりは、むしろ死を受け入れるほうがましだとさえ言っているという話を耳にしたからである。　彼らへの憐れみから、イオアンニキは荒涼とした静寂の生活をやめ、束縛された者たちの鎖を解き、捕虜たちを解放するためにブルガリアの地へと向かった。　ギリシャ人たちが鎖で縛られて囚われていた町に着くと、彼は牢屋の扉を見張っていた兵士たちに気づかれないよう、こっそりと牢屋に近づいた。彼は扉の前で十字を切ると、牢屋の扉はたちまち開いた。中に入ると、聖人は十字を切って全員の鎖を解き、自分の後についてくるよう命じた。　すべての囚人たちは牢獄から出てきたが、そこにいた看守たちはそれに気づきもしなかった。聖人は、ギリシャ人たちを束縛と牢獄から解放し、キリストが地獄から義人の魂を解放したように、一晩中、新たなモーセとして、奇跡の光の輝きに導かれながら彼らを率い、ギリシャ帝国の境界まで連れて行った。道中、聖人は彼らに、先祖たちのように、生まれつき反抗的で神を悲しませる者[7564] とならず、神に

[7562] ハルキドンはビフィニア地方の都市である。そこでは第4回全地公会議が開かれた。ニカイアは同じ地方の都市である。そこでは第1回全地公会議が開かれた。

[7563] ストゥディティとは、5世紀半ばにコンスタンティノープルの執政官ストゥディオスによって、洗礼者ヨハネに敬意を表して建立されたストゥディオス修道院の修道士たちのことであり、「眠ることのない者たち」と呼ばれていた。これは、彼らが3つのグループに分かれて、教会で絶え間ない礼拝を執り行っていたためである。

[7564] エゼキエル 3:9；エレミヤ 7:18–19。

信頼を置き、神の恵みと奇跡を忘れないよう教えた。そして聖人が彼らに別れを告げようとしたとき、彼らは皆、聖人の足元にひれ伏し、自分の名前を教えてくれるよう懇願して、こう言った。

「神の人よ、あなたはどなたですか？」

聖人は自分の名を隠さなかったが、その際、ただ神のみに感謝を捧げるよう命じた。その後、彼は再び静かな隠遁生活へと戻っていった。

ある日、聖人は船に乗り込み、シグリアン[7565]にある聖テオファノスの修道院へと向かい、そこで祈りを捧げた。そこから帰路につき、ファス島[7566]に寄港したとき、その島の住民たち――修道士も一般信徒も――は、イオアンニキオスが自分たちのところへやって来たことを聞きつけ、彼のもとへ駆けつけ、当時その島で異常なほど繁殖していた蛇を島から追い出してくれるよう、聖人に懇願した。　聖人は彼らの願いを聞き入れ、神に熱心に祈りを捧げると、たちまちその島のすべての蛇が一斉に集まり、海の深みへと飛び込んでいった。それ以来、その島には二度と蛇が現れることはなかった。　聖人はそこから離れ、別の僻地へと向かった。その際、ファセ島にある修道院の修道院長ダニエルも同行していた。聖人は、ダニエルの兄弟である修道士エウフィミオスに対し、まもなく死を迎えることを予言し、こう告げた。

「準備をしておきなさい、エウフィミオス兄弟よ。まもなくあなたは『天上の』[7567]へと旅立つことになるのだから。」

その後、尊者は休息をとろうと小さな洞窟の一つに入ったが、そこには以前のものよりもさらに凶暴な悪魔が潜んでいた。それにもかかわらず、イオアンニキとダニエルはこの洞窟に居を構えて住み続けた。　一方、悪魔は彼らの滞在を快く思わず、黒く恐ろしい姿で現れ、彼らを洞窟から追い出そうと激しく襲いかかったが、彼らは主を信頼し、恐れずにその場に留まった。　ついに、この古くからの殺人鬼[7568]は、彼らに飛びかかり、ダニエルの足を縛り上げ、イオアンニキには脇腹に激しい痛みを与え、彼は七日間一言も発することができなかった。悪魔自身は、神の聖徒たちと同じ場所に留まることができなかったため、洞窟から逃げ去った。　その後、尊者ヨアンニキは再びトリハリコ山に戻り、自身の救いを顧みなかったイサキイという名の修道士に、まもなく死が訪れることを予言した。さらに、ヨアンニキは祈りと聖十字架のしるしによって、ブドウ畑に甚大な被害をもたらしていた虫たちを追い払った。

ある日、クルヴィイ修道院の修道院長であるある老女[7569]が、娘を連れて祈りを求めて彼の元を訪れた。彼は、母親が手にしていた杖を取り、それを娘の手に渡した[7570]。母親は戸惑いながら言った。

「神父様、この杖は、私がすでに高齢であるため、衰えた体を支えるために必要なのです。」

しかし、彼は一言も返答することなく、その行動によって未来を予言したのである。というのも、ほどなくしてその老女は亡くなり、娘が彼女の代わりに長として選ばれたからである。その後、聖人は弟子エウストラティオスと共に、ヴォロノヴァと呼ばれる、非常に荒涼として通行不能な別の山へと向かった。　ここでしばらく過ごした後、彼はアンティディオス修道院のある山に入り、そこ

[7565] テオファン・殉教者――真の信仰を告白したため、レオン・アルメニア人によって投獄された。彼は小アジアのキジク近郊、シグリア地方の修道院長であった。その記念日は10月11日である。

[7566] ファス島、あるいはファゾス島――エーゲ海に浮かぶ島。この島の肥沃さは、古代の人々の間でことわざになるほどであった。

[7567] すなわち、天の住まいへと移り住む、

[7568] 主イエス・キリストは悪魔をそう呼んだ（ヨハネ8:44）。それは、悪魔が楽園で人々を誘惑し、彼らの霊的および肉体的死の最初の原因となったからである。

[7569] クルヴィイスキー――ギリシャ語の「クルヴォス（籠）」に由来する。一部の共同生活を行う修道院には、隠遁生活を望む者たちのための個別の部屋、すなわち「籠」があった。

[7570] 修道院の院長や女院長は、その地位の象徴として杖を持っていた。

に小さな独房を建てて、神との交わりの中で暮らした。　彼はここで多くの奇跡を行い、病人を癒やし、言葉の乱れた者の発音を正し、激昂し怒りっぽい者を柔和にし、異端者たちを迷いから正統信仰へと立ち返らせ、多くの人々にその死を予告した。それは、彼の中に宿る聖霊の恵みに満ちていたからである。

この尊者（プレポボドニー）は、霊的生活において極めて高い境地に達していたため、誰もが彼に会うことを許されたわけではなく、彼に会いたいと願って小部屋を訪れた多くの人々でさえ、結局は彼の姿を見ることができなかった。彼らが去ろうとする時、謙虚な師は弟子にこう言った。

「エウストラティオ兄弟よ！　あなたの祈りのおかげで、私は訪ねてきた者たちには姿を見せないままだったのだ。」

ある時、その山に聖ヨハネ・バプティスタの教会が建設されていた。その設計図は聖ヨハニキオスによって描かれたものだったが、遠くから何人かの兄弟――修道士たちが、神に愛されたこの聖人の輝かしい御顔を見たいと願ってやって来た。　建設中の聖堂に到着すると、彼らはそこに腰を下ろし、会いたいと願っていた尊者のお父様の到来を待った。そこへ、聖堂が設計図通りに建てられているかを確認するために、尊者ヨアンニキオスもやって来た。彼は、自分のために訪れた兄弟たちの目の前に立ち、建物を眺めていたが、 、彼らは彼を見ることができなかった。 彼らの間にかなり長い間留まった後、彼は自分の独房に戻り、彼を待ちわびていた来訪者たちの前に姿を見せることはなかった。彼の近くに住んでいたヨハネという名の修道士の一人が、この出来事を知ると、彼にこう言った。

「父よ！ あなたのためにこれほど長い旅を敢行した兄弟たちを、あなたの顔を見せることもなく、悲しみのままに帰らせるべきではありませんでした。これは痛ましいことであり、私の心を悩ませています。」

聖人は、その兄弟たちの労苦と熱意を称えた後、彼らのために祈りを捧げ、祈りが終わると、ヨハネに向き直って言った。

「兄弟よ！　私たちには自分の意志などなく、神が御心に適うように私たちを導いておられるのだ。　もし神が、やって来た兄弟たちに私を見せることをお望みであったなら、たとえ私が彼らから身を隠していたとしても、彼らは私を見ることができたはずだ。それなのに、私は身を隠すことなく、長い間彼らの目の前に立っていた。それにもかかわらず、彼らが私を見ることができなかったのなら、それは神の御心であったということだ。

またある時、数人の兄弟たちが尊者のもとを訪れ、彼のケリアの前に座って互いに話していたところ、突然、近くの野原から彼らに向かって歩いてくる、大きくて恐ろしい雌熊が現れた。それを見た彼らは、ひどくおののいた。

すると、聖人は彼らにこう言いました。

「主は、私たちご自分のしもべたちに、すべての獣の中で最も恐ろしい獅子や蛇を踏み砕く力を与えてくださったのに、あなたがたは雌熊を恐れているのか？」

聖人は、その雌熊にパンの切れ端を投げるよう命じました。雌熊はそれを受け取ると、荒野へと去って行きました。

聖ヨアンニキは、非常に霊的な人物であり、その霊的な目は極めて澄み切っていたため、天の霊や義人の魂までも見ることができた。　ある時、祈りを捧げていると、彼はあるアルヒマンドリト・ペトロの魂を目撃した。その魂は、天使たちによって栄光のうちに天へと運ばれており、並外れた光の輝きに包まれていた。彼はそのことを弟子たちに語り、彼らの教訓とした。

当時、ギリシャでは偶像破壊者テオフィロス[7571] が統治していたが、この王は二人の高貴な人物を聖ヨアンニキオスのもとへ派遣し、キリストの像を崇敬すべきかどうかを尋ねさせた。　使者た

[7571] 829年から842年にかけて

ちが聖人のもとへ来ると、彼は神に導かれた口を開き、天から与えられた知恵の力によって語り始めた。すると、その二人の男は、彼に反論する術もなく、恥じ入った。彼を通して語っていたのは神ご自身であり、その神は福音書の中で弟子たちにこう言われている。

「何を話すべきか、あらかじめ心配したり、考え込んだりしてはならない。その時に与えられることを話せばよい。あなたがたが話すのではなく、聖霊が話すのである」[7572]（マルコ13:11）。聖なるイコンに相応しい敬意を払うべきであることを明確に示し、彼は彼らを真の道へと導き、彼らはイコン破壊の異端を捨てて、キリストの御像に礼拝を捧げた。

ある日、アヴガル修道院の院長エウストラティオスが、尊者ヨアンニキオスにこう尋ねました。

「父よ、聖なるイコンが踏みにじられ、教会に返還されず、その迫害者たちが勢いを増し、キリストの羊の群れが野獣に奪い取られ続けるのは、いつまで続くのでしょうか？」

聖ヨアンニキオスはこう答えました。

「少し待て、兄弟よ。そうすれば、あなたは神の力の働きを目にするだろう。なぜなら、あるメフォディウスという者が教会の統治を自らの手に引き受けるからだ。　彼は、聖霊の導きにより、教会を立て直し、異端を根絶し、正統な信仰宣言によって教会を確立し、平穏と一致を取り戻すだろう。そして、彼の敵対者たちは、至高者の右の手によって屈服させられるだろう。

このイオアンニキオスの預言はまもなく成就した。しばらくして、聖像破壊派のテオフィロス皇帝が死去し、その息子ミハイル[7573] が帝位を継いだが、彼が幼かったため、帝国の統治は母テオドラの手に委ねられた。一方、メフォディオスは総主教に任命された。　このメフォディオスは、教会に聖なるイコンを再び導入し、正教を確立し、あらゆる論争や動揺を鎮め、混乱に終止符を打った。その後しばらくして、悪魔が再び人々を扇動し、キリストの教会を混乱させ分裂させようとしたとき、尊者ヨアンニキオスは、神の御言葉の力　によって異端者たちを打ち負かしていた至福のメフォディオスを助けに現れた。　ヨアンニキオスは、自ら直接、あるいは書簡を通じて正教を擁護し、教会から離反した者たちを再び教会へと導き戻した。また、異端者たちとの闘いで幾度も疲れ果ててしまったメフォディオス司教を、聖人は書簡によって励まし、力づけた。　ある時、公会議でヨアンニキオスの書簡が朗読されている最中、異端者たちがあらゆる手段を用いてこの聖人を嘲笑し、中傷し始めた。聖人は神の御霊によってそのことを知ると、突然公会議の場に現れ、神と神性について語り始めた。その言葉は、すべての者をその深遠な知恵と英知に驚嘆させた。　そして、神を讃えるその口から発せられた言葉は、実を結ばずにはおかなかった。かつてエルサレムの集会で使徒ペトロが説教した時と同様に、ここでも、尊者ヨアンニキオスの言葉を聞いた人々は心を打たれ、愛をもってその言葉を受け入れ、正しい信仰へと立ち返ったのである。　このように、尊者ヨハニキオスは教会の平和と人々の魂の救いを深く案じていた。やがて、彼の献身と祈りによって、異端は鎮圧され、教会には平和が戻った。一方、教会を混乱させていた悪魔は、恥じ入って逃げ去った。彼はヨハニキオスを恐れ、その祈りによって、まるで火に溶ける蝋のように消え去ったからである。

ある日、尊者のお住まいの修道院で、尊者が建てた礼拝堂の奉献式が行われていた。修道者たちが全員集まったが、聖人はまだ到着していなかった。その時、突然、まるで本物の人間であるかのように、丘から降りてくる悪魔の軍団が現れた。　皆は途方に暮れてひどく怯えていたが、聖人は、その場にはいなかったにもかかわらず、霊によってその様子を見ていた。そして直ちに祈りに身を向け、両手を天に掲げて神に願いを捧げると、その祈りは矢のように悪魔の軍勢を打ち抜き、彼らを逃げ散らせた。　一方、兄弟たちは、悪魔たちがまるで打たれて傷つけられたかのように逃げ去るのを見て、恐れを忘れ、喜びをもって祝祭を執り行った。

[7572] すなわち、権力者や高貴な人々の前で話すことになっても、特に恐れる必要はない。なぜなら、わたしがあなたがたに、賢く語る力を与えるからである。マルコ13章およびルカ21:15。

[7573] ビザンツ帝国のミカエル3世、842年から867年まで。

その頃、イズマイルの民[7574] はギリシャ人と戦っており、ギリシャ軍を打ち破って多くの者を捕虜とし、束縛下に置いていた。　ある高貴なギリシャ人の身内である若者が同じく捕虜となっていたため、その人は聖ヨアンニキオスに、かつてブルガリア人に捕らえられていたギリシャ人たちを救ったように、この身内を捕虜の状態から救い出してくれるよう懇願した。　聖人は慈悲深く、イスマイル人の地へと赴き、牢獄にたどり着くと、その若き身内だけでなく、彼と共に束縛されていた他のギリシャ人たちをも自由の身へと導き出した。その際、看守たちは何も目撃しなかった。なぜなら、聖人の前では扉が自ら開き、足枷も自ら外れたからである。　彼らがギリシャの地へ向かう途中、凶暴な犬たち[7575] が群れをなして襲いかかってきたが、聖人はそれらを盲目にしてしまい、捕虜たちは何の危害も受けずにその群れの中を通り抜けることができた。

その聖者が断食していた山には、ほど近い場所にエピファニオスという名の、その苦行で知られる一人の修道士が住んでいた。悪魔は彼の中にヨアンニキオスに対する嫉妬の念を煽り立て、彼は、神がヨアンニキオスを称えておられるその栄光を妬み、聖なる者に敵対するようになった。神はこう仰せられた。　*「主は、義人の分け前を不義の者の杖に委ねることはなさらない。義人が不義に手を伸ばすことのないように」*（詩編124:3）。すなわち、神は罪人が義人を打ち負かすことを許されない。

嫉妬から、エピファニオスは罪なく、心清きヨアンニキオスを滅ぼそうと企て、そのために、聖人が身を隠していた山に豊富にあった小枝に火を放ち、ヨアンニキオスがその炎の中で自分のケリア（修道室）と共に焼死するように仕向けた。　しかし、バビロンで若者たちを火から救われた神（ダニエル書3:1–100）は、御自身の御心に適う者、祝福されたヨアンニキオスをも無傷のまま守られた。　一方、至福のヨアンニキイは、敵の悪意を目の当たりにしても、彼に怒りを抱くことはなく、悲しむことさえなかった。むしろ、善をもって悪に打ち勝ち、悪意なき心で敵意を打ち砕こうと願い、謙虚な態度でエピファニオスのもとへ赴き、怒りの原因を尋ね、許しを懇願した。　ところが、エピファニオスが激怒して、聖人の腹を突き刺そうと、鋭い鉄の先がついた杖で殴りつけたとき、主は、*「主は、義人の分け前に対して不義の者の杖を放置されることはない。それは、義人が不義に手を伸ばすことがないようにするためである」*　（詩編124:3）と、その一撃から聖人を無傷で守られた。これこそが、先に述べた二人の隠者が、彼にレビトナーを授け、その際にこう告げていた、その聖人への試練であった。

「あなたの生涯の終わりに、嫉妬深い者たちから試練がもたらされるだろう。しかし、その試練の苦い結果は敵の頭上に降りかかり、あなた自身は何の害も被らないだろう。」

深き老齢に達したとき、私たちの尊い父ヨアンニキスは、多くの労苦と修行によってすでに肉体が衰えつつあったが、アンティディエの修道院を訪れ、そこで小さな独房を建てて、そこに閉じこもった。　もし彼が時折、独房から出ることもあったとしても、いつもの道を通りながら、会いたくない人々には姿を見せないようにしていた。

ミハイルの治世第五年、後に聖人の列に加えられたメフォディオス総主教は、ヨアンニキオスが主のもとへ旅立つ時が近づいていることを予見し、自身の聖職者たちを伴って彼のもとを訪れ、最後の祝福と祈りを求めた。　一方、尊者ヨアンニキスは、聖メフォディウスとかなり長い間語り合い、彼と共に来た者たちに正教の信仰について教えを授けた後、メフォディウスに対し、彼もまた、ヨアンニキスの死後まもなく、この世の命から永遠の命へと移ると予言した。　その後、祈りを捧げ、互いに最後の口づけを交わして別れた。パトリアルヒは自宅へ戻り、尊者ヨアンニキは自身の修道室に残り、祈りをもって死を迎える準備をした。　総主教が去ってから3日後、11月4日、生誕から94年を全うした、尊き神に愛された私たちの父ヨアンニキスは、主のもとへ召された。 その死から8ヶ月

[7574] イスマイル人、すなわちアラブ人は、アブラハムの子イスマイルの子孫である。当時、アラブ人は強大な国家を形成していた。

[7575] 東方には、極めて凶暴な野犬が極めて多く生息している。

後の6月14日、至聖なるメフォディオス総主教もまた、主のもとで安らかに息を引き取った。こうして、尊者イオアンニキオスが総主教に語った預言――すなわち、総主教もまたまもなく彼の後を追って、この世の命から永遠の命へと移る――が成就したのである。　さて、私たちの尊い父ヨアンニキスが臨終を迎えたとき、当時オリンポス山に住んでいた修道士たちは、地から天へと昇る火の柱を目撃した。その前を天使たちが歩み、その前に天国の門を開き、天上の至福へと導いていたのである。これにより、修道士たちは、尊者ヨアンニキが人生の業を全うし、天の安息へと移り行くことを知った。尊者は、生前だけでなく、その逝去後も多くの奇跡を起こした。多くの病人が彼の聖遺に触れることで健康を取り戻し、　また、悪魔に取りつかれていた者たちは解放され、麻痺した者たちは病床から立ち上がり、どのような病に冒されていようとも、その聖遺物箱に触れるだけで、誰もが即座に癒やされたのである。　このように、神は奇跡によって、生前も死後も御自身の聖人を称えられました。主が、この聖人の祈りによって、私たちにも御慈悲を示し、御自身の聖なる御名を称えるために、私たちの心と体の病を癒してくださいますように。アーメン。

コンダク、第8調：

あなたは、世界を照らし、情欲の闇の中にいる者たちを照らし出す、まばゆい星として現れました。また、最も力強い医者としても現れました。しかし、あなたは癒しの恵みを受けられたのですから、あなたに求める者たちに癒しを与えてください。そうすれば、私たちはこう呼びかけましょう。「喜びなさい、ヨアンニキエ神父よ。」

聖殉教者ニカンドロス司教とエルメアス司祭の受難

記念日：11月4日

聖ニカンドロスと聖エルメイは、キリストの教えの光に照らされ、聖使徒ティトスによって聖職に就かされた。彼らは多くのギリシャ人[7576]を異教の迷いから改心させ、キリストのもとへと導いた。このため、彼らは捕らえられ、コミトゥス・リヴァニウス（[7577]）の尋問に引き出された。リヴァニウスは、長い間彼らをキリストから引き離そうと努めたが、何の結果も得られなかったため、彼らを気性の激しい馬に縛り付け、馬を駆り立ててキリストの僕たちを引きずり回すよう命じた。このように長い間引きずられ続けた結果、彼らは自らの血で大地を赤く染めた。　彼らの体は、地面や石、切り株に打ちつけられ、傷だらけになった。人間の自然の法則に従えば、主ご自身が苦難の最中に彼らを強めてくださらなければ、彼らは死んでいたはずである。　その後、かろうじて息のある彼らは牢獄に投げ込まれ、飢えと渇きに苦しめられたが、主は彼らに天のパンを与え[7578]、その傷を癒やされた。しばらくして、彼らは再び尋問に引き出され、拷問者に従うことを拒んだため、木に吊るされ、鉄で削られ、　ろうそくで焼かれた。　その後、彼らは燃え盛る炉に投げ込まれたが、無傷のままであった。主の天使が彼らの元へ降りてきて、炉を冷やし、火から彼らを守ったからである。　ついに、拷問官は彼らの頭、心臓、腹に鉄の釘を打ち込むよう命じ、その後、彼らのために穴を掘り、まだ息のあるままそこに投げ込み、土で埋めました。　このように残酷で過酷な死を遂げた聖ニカンドルと聖エルメイは、主と共に永遠の喜びに満ちた命に至った。主には永遠の栄光あれ。アーメン。

[7576] 「エリン」とは本来ギリシャ人を指すが、聖人の伝記においては、この名称が一般に異教徒を指すこともある。

[7577] コミットとは、都市の長のことである。

[7578] 「天の糧」とは、牢獄に囚われた聖なる殉教者たちに奇跡的に与えられた実際の食物、あるいは、彼らが食物を必要とさえしなかった、天からの一般的な支えのいずれかを意味する。

至福のシモン・ユリエヴェツキーの帰天

記念日：11月4日

この至福の父は、プレススカ地区（[7579] ）のオデレヴェ村で、敬虔な両親イロディオンとマリアの間に生まれた。幼い頃から彼は聖なる狂人の道を歩むことを決意し、密かに実家を離れ、鬱蒼として人跡未踏の森へと向かった。　ある日、ポヴォルジエ地方ユリエヴェツ市のヤルナツカヤ村の村人たちが、木を切り倒したり蜂蜜を集めたりしていたところ、この聖シモンを密林の中で見つけました。彼らは彼に、自分が誰で、どこから来たのかと尋ねました。　しかし、聖人は自分の名前以外、何も答えなかった。聖シモンが非常にぼろぼろの服を着ているのを見て、村人たちは彼を不憫に思い、自分たちの村にいるヨセフという名の司祭のもとへ連れて行った。　この司祭の家で、聖シモンは働き始めた。彼は特に重労働を好んで行い、それによって肉体を律していた。彼はしばしば手回し石臼で小麦を挽き、村の住民全員のために薪を切り、誰からも報酬を受け取らなかった。　また、彼は頻繁に、そして熱心に神の教会を訪れ、そこで主への祈りを捧げ、その聖なる御名を賛美した。聖人は度々嘲笑や侮辱にさらされたが、これらすべてを柔和に耐え忍び、自分を苦しめる者たちに対して恨みを抱くことはなかった。　冬も夏も常にシャツ一枚で過ごし、靴を履くことは決してなかった。地面を寝床とし、空を屋根としていた。　ヤルナツの村で長年にわたり暮らした後、シモンはユリエヴェツの町に移り住み、ここでもキリストのために聖なる愚者の行いを続けた。しばしば善良な人々が彼に衣服やブーツを贈ったが、彼はそれらをすべて手放し、粗末な麻の衣を身にまとっていた。聖人には、宿屋に頻繁に立ち寄る習慣があった。　冬の時期には、彼はしばしばそこで夜を明かした。その間、彼は祈りを捧げ、徹夜で過ごしたが、宿の主人やそこで宿泊していた者たちに、寒さの中へ追い出されることも多かった。彼はしばしばヴォルガ川の岸辺を歩き回り、冬の間には彼の裸足の足跡を見かけることも珍しくなかった。過酷な生活のため、彼の肌はすっかり黒ずんで、骨に張り付くほどになっていた。　彼はしばしば人々の前で自らを糾弾し、罵倒した。そうして彼は自らの肉体と精神を謙虚に保っていた。その敬虔な生活により、彼は生前にすでに洞察の賜物を受け、他の人々には見えないものを見ることができた。

ある時、彼は聖なる狂人として振る舞い、トレチャク・トレグブ総督の屋敷に入った。総督は聖人に激怒し、力ずくで屋敷から追い出すよう命じた。　家を出る際、聖人は「明日、不幸な出来事が起こるだろう」と告げた。その通りになった。翌日、総督の妻が玄関を出る際に転倒し、ひどい怪我を負った。この出来事以来、総督は聖シモンを敬うようになった。

しばらくして、至福のシモンは再びその同じヴォエヴォダのもとを訪れ、街で大火災が起こると予言した。まもなく、その通りになった。すでに七十軒以上の家屋が炎に包まれていた。そこでヴォエヴォダは、至福のシモンを自分の元へ連れてくるよう命じた。彼は街の教会のひとつ前でひざまずいているところを発見された。　彼は涙を流しながら、至聖なる聖母マリアの聖像の前で祈っていた。祝福されたシモンは総督のもとへ連れて行かれた。総督は他の市民たちと共に、この恐ろしい災難から彼らを救ってくれるよう聖人に懇願した。シモンは手を伸ばして炎を指差し、狂人のふりをして総督の頬を叩くと、火事はたちまち収まった。

聖人は生前から主からそのような恵みを受けており、その祈りによって様々な奇跡が起こり、病める者たちに癒しがもたらされた。ユリエフの住民ヨシフ・ズバレフは、ヴォルガ川を渡っていた。　突然、強い風が吹き荒れ、波が小さな舟に押し寄せ始めた。恐怖に駆られたイオシフは、ふと岸辺に聖シモンが立っているのを見た。彼は心の中で聖人に懇願し、その祈りによって避けられない死から救ってほしいと願った。その時、イオシフは聖人に新しい 服と靴を贈ると約束した。　嵐はたち

[7579] プレス——現在はコストロマ州ネレホツキー郡に属する、ヴォルガ川のほとりにある町。

まち収まり、ヨセフは無事に川を渡り切った。しかしその後、よくあることだが、彼はその約束を忘れてしまった。それから何日も経ったある日、彼はその福者に出会った。

「ヨセフよ」と聖人は彼に言った。「あなたは約束を果たさなかった。ヴォルガ川で溺れかけていた時、何を約束したか覚えているか？」

その時、ヨセフは自分の誓いを思い出し、恥じ入った。聖人の足元にひれ伏し、許しを請うた。

「行け」と聖人は言った。「そして、私に約束したものを貧しい人々に与えなさい。決して彼らを忘れてはならない。なぜなら、施しは私たちを災いや苦難から救ってくれるからだ。」

ユリエフツクの聖堂、聖なる栄光ある大殉教者ゲオルギオスに捧げられた教会の司祭、アルピイという名の男は、ある日、魚を食べている最中に骨を飲み込んでしまった。その骨は彼の喉頭に詰まってしまった。彼は長い間苦しめられ、症状はますます悪化し、もはや回復を諦めかけていた。ある日、彼は至福のシモンと出会い、助けを請うた。聖人は数本の指でこの司祭の喉に触れると、彼は即座に血とともに骨を吐き出し、完全に回復した。

ある秋の日のこと、ヴォルガ川で激しい波が立ちました。ユリエフの住民の一人であるペトルは、川の岸辺の近くに住んでいましたが、ふと、誰かが波の上を歩いているのに気づきました。彼は恐怖に襲われました。しかし、見間違いだと思い、岸の端まで近づいてじっと見つめました。　すると突然、杖を手に水の上を歩いているのが、聖シモンであることがはっきりと見えた。驚きで、ペトルはその場に立ち尽くしてしまった。聖シモンは彼に近づき、こう言った。

「私が生きている間は、あなたが見たことを誰にも話してはならない。」

聖人が亡くなると、ペトロはこの偉大な奇跡について皆に語った。人々は皆驚き、この世に御自身の栄光ある聖徒たちを遣わされる主を賛美した。

この世での命が間もなく尽きようとしていることを予感した聖人は、新任の総督フェオドール・ペテリンの邸宅を訪れた。何らかの理由で怒りを募らせていた総督は、その聖人であることを知らず、彼を殴打するよう命じた。シモンは重病に陥った。　総督の屋敷の庭に置き去りにされた聖人は、一人の司祭を呼び寄せた。懺悔を終えた聖人は、深い敬虔の念をもってキリストの聖なる秘跡に与る恵みにあずかり、その聖なる魂を主の御許に委ねた。フェオドールは、この福者の死を知ると、激しく泣き崩れ、自らの罪を深く悔い改めた。　その間、町中の人々が聖人の葬儀に集まった。詩篇の詠唱と霊的な賛美歌を捧げながら、聖人の遺体はユリエフツクのエピファニー修道院に埋葬された。これは1584年11月4日のことだった。聖人の埋葬の際、フェオドール・ペテリン総督は多くの施しを配った。彼が家に戻ると、手持ちのお金が微塵も減っていないことに気づいた。彼は、これが神の驚くべき摂理によるものであると悟り、主と、我らの栄光ある父シモンに感謝を捧げた。　1619年、この福者の墓の上に、至聖なる神の母オディギトリアを称える教会が建てられ、その脇堂には預言者エリヤと聖マカリー・ジェルトヴォドスキーが祀られた。福者シモンの墓の上の場所は、誰かが知らずにその場所を踏んでしまわないよう、木製の墓標で示されていた。　その頃、サロミアという名の女性が墓を訪れ、司祭に聖人の棺の上で追悼の祈りを捧げてくれるよう頼んだ。

「私は18ヶ月以上も重い病に伏せていました。ある日、ある男が私の前に現れました。彼はシャツ一枚で、足は裸、長く黒い髪をした、中背の男でした。私の前に現れると、彼はこう言いました。『エピファニー修道院へ行き、シモン・ユロディヴィの棺の上で追悼の祈りを捧げてくれるよう頼みなさい』と。」　私はすっかり健康になったような気がし、この義人の棺の前で祈りを捧げに参りました。

そこにいた者たちは皆、彼女の話に大変驚いた。なぜなら、彼らは聖シモンを見たことがなかったからだ。何人かの年配者は、彼女に現れたのはシモン本人だと語った。その姿は、まさに彼女が描写した通りだった。

この聖人の棺の前では、他にも多くの奇跡が起こった。1635年、ヨセフ総主教は聖遺箱を建造し、神の御心にかなう聖人のイコンを描くよう命じた。その聖人は、今もなお、私たちの魂の救いを主にお祈りし続けている。アーメン。

11月18日

11月5日（旧暦）

聖ガラクティオンとエピスティマの聖徒殉教者たちの生涯と受難

記念日：11月5日

フェニキアの[7580]、エメセという町に、クリトフォンという高貴で名高く、裕福な人物が住んでいた。彼の妻レウキッピアは、[7581]の総督メムノンの娘であったが、不妊であり、そのことを深く嘆いていた。不妊のせいで、夫から頻繁に非難を浴びせられ、時には罵倒や暴行さえも受けなければならなかったからである。二人はともに異教徒であり、ギリシャの[7582]という偽りの信仰を奉じており、とりわけ女神アルテミス[7583]を崇拝していた。

当時、この街を統治していたのは、シリア人のセクンドという人物で、彼はキリストを信じる者たちに対して極めて容赦なく、残酷に振る舞っていた。彼は様々な拷問器具を考案し、キリスト教徒を威嚇するために街の中心にそれらを展示した。　このため、信者たちの多くは、激しい拷問を恐れて身を隠したが、他の人々は勇敢にキリストを告白し、自ら拷問者の手に身を委ね、主の御名のために命を落とした。　そこには、とりわけオヌフリオという名の修道士がいた。彼は、自分がキリスト教徒であることがバレないよう、修道士の身元を乞食のぼろ服の下に隠し、場所から場所へ、家から家へと移動しながら、貧しい者としてパンの切れ端を乞い求めていた。その一方で、可能な限り、真の信仰を教え、人々の魂を神へと導いていた。　こうして彼はクリトフォンの家にもたどり着き、門の前に立ってパンを乞い始めた。レウキッピアは、ぼろ服をまとってパンを乞う男を見て、女中の一人に彼の前で扉を閉めるよう命じた。その日、彼女は不妊を理由に夫から殴打されていたため、怒り心頭にあったのである。　しかし、修道士は、物乞いの常として、門の前に立ち続け、施しを乞い続けた。やがてレウキッピアは心を改め、老人を中庭に入れるよう命じ、必要なものをすべて与えた。老人は施しを受け取りながら、レウキッピアの胸の底から漏れる深いため息を聞き、彼女に尋ねた。

「お嬢様、一体どのような悲しみがおありで、それほど深くため息をつかれるのですか？」

彼女はこう答えた。

[7580] フェニキア――パレスチナの北、地中海の東（アジア側）の海岸沿いに伸びる細長い土地。この国は太古の昔から知られており、当初はユダヤ人と親縁関係にある民族が居住していた。彼らは古代世界初の海洋・貿易民族でもあり、世界各地に植民地や倉庫を設立した。　遥か昔、フェニキアの主要都市はそれぞれ独立した共同体であったが、後に連合を形成し、その指導的役割を担ったのがティルスという都市であった。紀元前8世紀、フェニキアはアッシリア人に征服され、その後、バビロニア人、ペルシア人、ギリシャ人、ローマ人、アラブ人、セルジューク・トルコ人、そしてオスマン・トルコ人といった様々な民族の支配を次々と受け、現在に至るまでオスマン・トルコ人の支配下にある。　フェニキアにおけるキリスト教の始まりは、使徒たちの時代に遡る。

[7581] エパルヒ――地方の長。

[7582] すなわち、異教の。

[7583] アルテミス――ギリシャの異教の月と狩猟の女神。小アジアのエフェソスにあった彼女の壮麗な神殿については、『使徒言行録』（使徒19:24–29）に言及されている。

「老僧よ、私には子供がいません。私は不妊なのです。そのせいで、夫に虐げられ、追い立てられているのです。医師や魔術師たちに、私を助け、不妊を治してくれるよう、多くの金を渡しましたが、彼らからは何の助けも得られず、ただますます絶望に陥るばかりなのです。」

老人は尋ねた。

「あなたはどの神に仕えているのですか？」

「私は偉大なる女神アルテミスに仕えています」と彼女は答えた。

「だからこそ、あなたは不妊なのだ。あなたの胎に実を結ばせることができる神への希望を持っていないからだ」と老人は答えた。

「では、私が『母』と呼ばれるような恵みを与えてくださる神を、一体どの神に望めばよいのでしょうか？」とレウキッピアは尋ねた。

「真の神、イエス・キリストに希望を置きなさい」と老人は答えた。「そして、キリストと、その初めなき父、そして聖霊――キリストと同質であり、命を与える御霊――を信じなさい。」

レウキッピアは尋ねた。

「あなたが私に話しているのは、ガリラヤの人々が仕えているあの神のことではありませんか？」[7584]

「まさにその方です」と老人は答えた。「なぜなら、その方は天を創造し、地を築き、人間とあらゆる生き物を造られたからです。」

「私は恐れています」とレウキッピアはそう言うと、「この私の信仰を、この地方の総督セコンドが知ってしまうのではないかと。そして、彼が他の多くの人々にしたように、私を死に追いやるのではないかと。あなたが語っているその神を信じる者たちを、彼は皆、容赦なく殺しているのですから。」

「もしあなたが地方長官を恐れているのなら」と老人は言った。「聖三位一体にひそかに仕えることもできる。　私だって、迫害者の脅しを恐れて、ひそかに私の神に仕えており、神の恵みによって救いを得られることを望んでいる。なぜなら、ご覧の通り、私はキリスト教徒であり、修道士であり、長老であるが、正体を悟られないよう姿を変えているのだ。外見上は誰の目にもただの物乞いに見えるが、実のところ、私はキリストの僕なのだ。　あなたもまた、キリストにひそかに仕えていても、それによって救いを失うことはないでしょう。

「もし私がこの信仰を受け入れたとしても、父よ」とレウキッピアは尋ねた。「夫が異教のままであるなら、不信仰な夫のせいで、私の信仰は無駄になってしまうのでしょうか？」

「ただキリストのしるし、すなわち聖なる洗礼を受け入れ、真の神を疑うことなく信じなさい。そして、もしあなたが真の信仰に堅く留まるならば、あなた自身も救われ、夫も救われるでしょう。なぜなら、私たちの聖書にはこう記されているからです：　*『なぜなら、信仰のない夫は、信仰のある妻によって聖とされ、信仰のない妻は、信仰のある夫によって聖とされるからです。そうでなければ、あなたがたの子供たちは不浄となるはずですが、今は聖とされているのです』*（Iコリント7:14）。

オヌフレイがその言葉でレウキッピアを励ますと、彼女はこう言いました。

「父よ！ 私に聖なる洗礼を授けてくださいますか？」

すると彼は答えた：

「水さえあれば、今こそその時が来ているのだ。」

使用人たちに、この出来事を誰にも話さないよう命じた後、レウキッピアは水を桶に注ぐよう命じ、そこで聖オヌフリオは彼女を父と子と聖霊の御名によって洗礼を授け、キリスト教の教えの奥

[7584] 「ガリラヤ人」とは、キリストの信者たちのことであり、彼らは「ガリラヤのイエス」と呼ばれていた（マタイ26:69）。それは、キリストが幼少期と青年期を、ガリラヤの小さな町ナザレで過ごしたためである。

義とすべての戒めを教えた。　彼が去ろうとしたとき、新しく洗礼を受けた彼女は、自分を忘れないでほしい、可能な限り頻繁に訪ねてきて、敬虔さと祈りを教えてほしいと頼んだ。

修道士が去ると、レウキッピアは夫が八日間は自分に触れないようにと、病人のふりをした。こうして、彼女は洗礼で受けた聖霊の恵みを清らかなまま守り抜いた。八日が過ぎたとき、彼女は幻の中で、十字架に架けられた我らの主イエス・キリストを見た。　そして、自分が主の足元にひれ伏し、その至聖なる御口から、不妊を癒やし、救い主の十字架の苦しみに倣い、御国に与る息子を授けるという慰めの約束を聞く幻を見た。　この幻視により、レウキッピアは大きな霊的な喜びに満たされ、神への燃えるような愛を抱くようになった。それ以来、主の受難の記憶は決して彼女を離れることはなく、彼女は常に心の中で十字架にかけられたキリストを見つめ、あたかもその方が自分の目の前に立っておられるかのように見ていた。

その直後、彼女は身ごもった。夫はこれを大いに喜び、彼女にこう言った。

「今や、君が神々に愛されていることがわかった。神々は君の胎に子を与えたのだ。さあ、行って神々に捧げ物をしよう。」

すると、レウキッピアはため息をついてこう言った。

「あなたが私を招いているあの神々ではなく、別の神が私にこの恵みを与えてくださったのです。その方は、私が身ごもる前に夢の中に現れ、十字架に釘付けにされている姿を見た方です。もしお望みなら、主よ、私たちはまさにその方に感謝の捧げ物を捧げましょう。」

「君が見たその神は」と夫は言った。「ガリラヤ人の神のことだ。多くの人から、その方が実際に十字架にかけられ、驚くべき奇跡を行っていると聞いたことがある。」

「それならなぜ」と彼女は言った。「あの方が全能であり、あなたと私に対してこれほどまでに慈悲深く、私たちの心の願いを叶えてくださった――私の不妊を治してくださった――というのに、私たちはあの方を信じないのでしょうか？」

「聞いたことがないのか」と夫は答えた。「この地方の総督が、十字架にかけられた方を信じる者たちを、容赦なく苦しめ、殺しているということを。」

「でも、もし公然と彼を信じるのができないのなら」とレウキッピアは言った。「私たちは密かに信じ、その信仰に従って、私たちの生活を善へと導いていきましょう。」

「私たちに新しい信仰を教え、あなたが夢の中で見た、そしてあなたに妊娠する力を授けてくださったその善き神に、どのように仕えるべきかを指導してくれる人は、誰もいないのだ」とクリトフォンは言った。

レウキッピアは、夫が自分の側に傾いているのを見て、自分に起こったすべてのことを彼に話し、自分はすでにキリスト教徒であり、ある修道士からキリストの信仰の奥義を教わったことを明かした。クリトフォンはそれを喜んで聞き、洗礼を受けたいと願った。　祝福されたオヌフリオスが、新しく洗礼を受けた彼女を訪ねて彼らの家を訪れるやいなや、彼女は夫に彼を紹介し、クリトフォンは聖なる長老によって洗礼を受けた。そして夫婦は、あらゆる敬虔さと清らかさの中で暮らし、ひそかに真の主に仕えた。

彼らに男児が生まれたとき、彼らは自分の霊的父であり師であるオヌフリオを呼び寄せ、彼がその赤ん坊に洗礼を授けた。その子にはガラクティオンという名が与えられた。その際、聖なる長老は彼について次のような預言を述べた。「この赤ん坊は、地上の生活よりも天の生活を愛するようになるだろう」。

ガラクティオンが成長すると、　両親は彼の教育に心を配り、神の御加護により、彼は学ぶあらゆる学問において急速に頭角を現した。そして彼が24歳になった時――すでに母は他界していた――父は彼に結婚を望み、エピスティムという名の美しい顔立ちの娘を見つけ出し、息子と婚約させた。　結婚はしばらく先延ばしにされていたため、ガラクティオンは婚約者に会おうと、頻繁に彼女の家を訪れていた。しかし、彼女は洗礼を受けていなかったため、彼は慣習通り、彼女に口づけをし

て挨拶することは決してなかった。エピスティマはこれに深く悲しんだ。　父親は娘の悲しみを目の当たりにし、その理由を知ると、ガラクティオンにこう言った。

「若き人よ、なぜ私の娘であり、お前の婚約者である彼女に、慣例通りの口づけで挨拶をしないのか？もし彼女を愛していないのなら、なぜ彼女と婚約したのだ？」

ガラクティオンは、何も答えず、その娘のところへ行き、二人きりになってこう言った。

「エピスティマよ！　なぜ私が君に口づけをして挨拶しないのか、わかるか？」

彼女は答えた：

「わかりません、ご主人様。そのことで大変悲しんでいます。」

ガラクティオンは言った。

「お前はキリスト教徒ではなく、不浄な異教の信仰によって穢れている。だから、神の御霊を冒涜することのないよう、お前の不浄に触れたくないのだ。　しかし、もし私の愛を得たいのなら、偶像を捨て、私が信じている神を信じ、聖なる洗礼を受けなさい。そうすれば、私はあなたに口づけをし、自分自身のようにあなたを愛し、あなたを私の妻と呼び、私たちは最後まで愛し合い、決して離れることなく共に生きるでしょう。

エピスティマはこう答えた。

「主よ、あなたが命じられることは何でもいたします。私はあなたの神を信じ、洗礼を受けたいと願っています。」

彼は言った：

「よし、賢明な乙女よ、今こそ私は心からあなたを愛し始めた。しかし、あなたに洗礼を授けることができる者は誰もいない。キリスト教の信仰は激しい迫害にさらされており、長老や聖職者たちは、ある者は殺され、ある者は荒野へ逃れたからだ。だから、私が自らあなたに洗礼を授けなければならない。　それゆえ、白い衣を持ってキフォス川へ出なさい――まるで水浴びをするかのように。その間、私も散歩を装って家を出て、野原へ行き、川で君を見つけ出したら、洗礼を授けるつもりだ。」

エピスティマは川へと向かい、ガラクティオンもまた川へ出て、キフォスで婚約者を「父と子と聖霊」の名によって洗礼を授け、彼女に祈りを教えた。その後、二人は別々の道へ進み、彼らの秘密を知る者は誰もいなかった。　ほぼ同じ頃、ガラクティオンは義父の奴隷の一人を真の信仰へと導き、婚約者と同様に彼にも洗礼を授けた。この奴隷、エウトルミオスという名の者は、後に修道士となり、この伝記を著した。

エピスティマは、洗礼を受けた後も実家に留まり、神への黙想と祈りに励んでいた。彼女はキリスト教の信仰を受け入れたことを父に隠していたため、それらを密かに行っていたのである。

洗礼を受けてから8日目に、ガラクティオンが彼女を訪ねてきたとき、彼女は彼にこう言った。

「主よ、あなたに驚くべきことをお話ししたいと思います。私が聖なる洗礼を受けて以来、しばしば美しい宮殿を目にし、その中には歌っている三つの姿[7585]が見えます。一つは修道士たち、もう一つは　の美しい乙女たち、そして三つ目は、翼を持ち、炎に包まれた立派な姿の人々です。この不思議な幻視と、その姿たちの甘美な歌声によって、私の心は並外れた喜びを感じています。

ガラクティオンは、エピスティマが見たものを熟考し、彼女に次のように語った。

「修道士たちとは、富や妻、友人を捨ててキリストに従い、貧しさと清らかさと忍耐のうちに、狭く苦難に満ちた人生の道を歩む者たちのことである。　美しい乙女たちとは、婚約者や両親、そして華やかな衣装や財産、その他あらゆる世俗の誘惑といったこの世のあらゆる魅力を捨て去り、キ

[7585]「リク」とは、群れ、集まりを意味する。

リストに従った者たちである。そして、翼のある男たちは神の天使たちであり、乙女たちは彼らと共に天国で喜び、歓喜し、賛美の歌をもって神を讃えているのだ。

「ああ、もし私たちにも、神が彼らと共に歓喜することを許してくださるなら」とエピスティマは言った。

「もし私たちが処女性を守り、彼女たちのようにこの世を捨て去るなら、全善なる神は私たちにも同じ報いを与えてくださるでしょう」とガラクティオンは言った。

「もしあなたが同意してくれるなら」とエピスティマは答えた。「私は処女性を守る用意があるわ。でも、あなたと別れたくはないの。だって、もし別れてしまったら、どうやって互いの喜びを分かち合えるというの？」

「今すぐ約束してくれ」とガラクティオンは言った。「処女を守り、私と共に修道者の姿を受け入れると。そうすれば、私はこの世でも、来世でも、決して君と離れることはない。」

エピスティマは、彼が求めた約束を次のようにしてした。

「私が主イエス・キリストを揺るぎなく信じるのと同じように、あなたの願いを叶えることを誓います。そして、あなたがどこへ行こうとも、あなたに従います。」

ガラクティオンは言った。

「私たちに憐れみを示し、私たちの祈りを聞き入れてくださった私たちの神に感謝しましょう！神が、私たちの誓約を最後まで揺るぎないものとして、確固たるものにして守ってくださいますように！... さて、私は自分の家に戻り、旅の準備をしよう。あなたも同様に、持っているものをすべて貧しい人々に分け与えなさい。私もそうするつもりだ。そして三日目に、私たちは共に家を出て、神が導かれるところへ歩み出そう。あなたは、召使いのエウトルミオスも連れて行きなさい。彼は敬虔な人であり、私たちと共に修道生活を送るだろう。

この話し合いの後、聖ガラクティオンと聖エピスティマは別れて、自分たちが持っていたものをすべて密かに貧しい人々に分け与え、旅の準備を整えると、約束通り夜にそれぞれの家を出て、共に歩き出した。彼らには、奴隷のエウトルミオスも同行していた。

十日後、彼らはププリオン[7586] と呼ばれる山に到着した。そこには、十人の修道士が身を寄せている修道院があった。　そこから少し離れた場所には、小さな女子修道院があり、そこには四人の年老いた断食修道女が暮らしていた。彼女たちの長老は、清く聖なる生活を送る一人のディアコニッサであった。ガラクティオンとエピスティマはエウトルミオスと共に男子修道院に入り、修道院長に礼を捧げた後、この地で修道生活を送りたいという自らの意図を伝えた。　修道院長は、彼らの中に神の召しを見出し、彼らを受け入れ、修道衣を授けた。エピスティマを4人の聖なる断食修道女たちのいる女子修道院へ送り、ガラクティオンとエウトルミオスは自身の修道院に残し、修道院で通常行われるすべての従順の務めを果たすよう命じた。　そして、尊者ガラクティオンは、修道院長と修道兄弟たちに完全に従順であり、熱心に神に仕えた。果たして、誰が彼の偉業と労苦を語り尽くすことができようか。　彼が怠けている姿を見た者は誰一人おらず、常に修道院に必要なことを行ったり、祈りを捧げたりしていた。彼の断食は並外れたもので、時には一週間も食事を口にしないことがあった。彼は貞潔と清らかさをこれほどまでに守り抜いていたため、女性の顔を見ることをあらゆる手段で避け、実際に長い間、女性の顔を見ることはなかった。　修道院の兄弟たちの何人かは、何度も彼を誘って、前述の聖なる助祭女を訪ねに行こうとしました。彼女は九十年間修道生活を送り、魂の救いに関する教えを聞くすべての人々に大きな恩恵をもたらしていました。彼女は知恵と、人を啓発する言葉、そして徳高い生活で際立っていたからです。ついでに、姉妹のエピスティマの様子を見に行くことも兼ねていました。しかし、ガラクティオンは同意せず、こう言った。

[7586] シメオン・メタフラストの証言によれば、ププリオン山、あるいはプブリオン山はシナイ山の近くに位置していた。

「聖なる父たちよ、私はあなた方の教えを受けるだけで十分です。そして、主ご自身が私に彼女と会うよう命じられる時が来るまでは、姉に会いたくありません。」　そして、キリストにあって彼の姉妹である聖エピスティマは、聖なるディアコニッサのもとで、まるで神の天使のように、ガラクティオンと同様に、修行と労苦に時間を費やし、生活において兄に何一つ引けを取らないでいた。二人は　、神への愛に燃える二つの灯火のようであり、彼らと共に修業に励む修道士たちは、その徳高い生活の模範から学び、天の父を賛美した。

その間も、キリスト教徒への迫害は止むことがなかった。彼らは皆、偶像への生贄を捧げるよう強制され、それを拒んだ者は拷問にさらされた。　山に身を隠していた修道士たちのことを知っていた異教徒の一部が、彼らをウルス地方の総督に密告した。総督は直ちに兵士たちを派遣し、すべての修道士を捕らえて、裁きのために自分の元へ連行するよう命じた。　兵士たちが到着する前のある夜、聖エピスティマは次のような夢を見た。彼女は、婚約者であり霊の兄弟であるガラクティオンと共に王宮に立っており、ある輝かしい王が二人に美しい冠を授けているという夢だった。　目を覚ますと、彼女はその夢に驚き、日が明けると、修道院長に手紙を送り、重要な話を聞くために自分のところへ来てほしいと頼んだ（通常、尼僧たちは男子修道院へ行くことはなく、その代わりに、　両方の修道院で霊的指導者を務めていた修道院長自身が、断食修道女たちの元を訪れ、彼女たちの霊的な必要を満たしていた。すなわち、彼女たちの懺悔に耳を傾け、彼女たちの前で神聖な典礼を執り行い、聖体拝領を授けた後、自身の修道院に戻っていたのである）。　修道院長はエピスティマからの手紙を受け取ると、聖なる断食修道女たちの修道院へ向かった。そこで聖エピスティマは、前夜に見た夢の幻視について彼に語った。修道院長はこう言った。

「宮殿とは天の御国であり、王とはイエス・キリストのことである。　主であり、私たちの神であり、その冠とは、わが子よ、あなたとあなたの霊的な兄弟であるガラクティオンが、その苦しみと功績に対して、まもなく受けることになる報いを意味する。しかし、その前に、あなたたちは多くの苦難に遭い、殉教の死を遂げることになるだろう。　わが子よ、どうか残酷な拷問を恐れず、拷問の最中でも気力を失わないでほしい。この苦しみによって、あなたには永遠の、言葉に尽くせないほどの祝福が待っていることを知ってください。その祝福は、あなたの兄弟と共に、[7587] の御手から授けられるのです。

エピスティマは涙を流しながら、こう答えました。

「主の御心でありますように。主がその慈しみにより、私たちに関するすべてを御心に適うように整えてくださいますように！」

修道院長が自分の独房に戻るやいなや、ウルスが送り込んだ兵士たちが男子修道院を襲撃した。すべての修道士たちは逃げ散り、荒野や山々に身を隠したが、修道院に残っていたのは敬虔なガラクティオンただ一人であり、兵士たちは彼が独房で神の御言葉を朗読しているところを捕らえた。同様に、聖なる断食修道女たちもエピスティマと共に、それぞれの独房から逃げ出し、身を隠した。聖ガラクティオンただ一人だけが、屠られる羊のように[7588] 、ウルスの元へ引きずり出され、裁きと拷問を受けることになった。しかし、他の処女たちと共に洞窟に身を隠していた聖エピスティマは、自分の婚約者であり兄弟である彼が異教徒たちに捕らえられ、拷問へと連行されたことを知ると、泣きながら聖ディアコニッサの足元にひれ伏し、こう言った。

[7587] 「競技の主催者」とは、古代ギリシャにおいて*競技*（走競、馬術、相撲など）*の運営者という*非常に名誉ある役職を意味するギリシャ語の訳語である。ここで、　言うまでもなく、主イエス・キリストを指す。主は、ご自身の十字架上の死によって、肉を死なせ、霊的に完成に至る行いの基礎と始まりを築かれた。この行いにおいて、キリスト者はキリストと共に*十字架につけられる*、すなわち、あたかも主の受難に参与するかのように、同時に、これらの行いの審判者であり、それに対する報いを授ける方でもある。

[7588] *「屠られる小羊のように」*。この言葉はイザヤ書53章から引用されたものであり、救い主の十字架上の苦難（すなわち、主がこれらの苦難を不平を言わずに耐え忍ばれたこと）についての預言そのものを内包している。

「お願いです、女主人よ、私を解放してください。そうすれば、私の主であるガラクティオンの後を追うことができます。兵士たちに捕らえられ、地方の統治者の元へ拷問のために連行されたと聞いたからです。彼から離れていられません。私の心は彼を想って痛み、主キリストのために彼と共に死にたいのです。」

ディアコニッサはこう答えた。

「いいえ、私の愛するエピスティマよ、彼の後を追ってはいけません。異教徒の手に身を委ねて、敵の罠に陥ってはなりません。あなたはまだ若く、私はあなたのことを心配しています。苦しみへの恐怖からキリストを否定し、それによってあなたの処女としての功徳を台無しにしてしまうのではないかと。　そうなれば、あなたの修道としてのすべての功績も無意味となり、あなたは救いの希望を失ってしまうでしょう。

「私はガラクティオンなしでは生きられません」とエピスティマは答えた。「彼を通して、私はキリスト、私の真の、人を愛する神を知りました。彼の手によって、私は異教の汚れから洗礼の水で清められ、彼は私を救いの道へと導き、この修道生活へと、そしてあなたの聖なる修道院へと導いてくれました。　彼の祈りは私のあらゆる必要において助けとなってくれた。彼は私の婚約者であり、兄弟であり、師であり、神における父であり、私の貞操の守護者でもある。私はこの世でも、来世でも、彼と離れることはできない。彼と共に歩み、共に死ぬのだ。　もし彼が真の神のためにその魂を捧げるなら、私もまた私の魂を捧げます。すべての創造主のために、彼の血が私の血と共に流されるように――私は彼と共に歩み、栄光の王の御座の前に進み出ます。その王は私が夢の中で見た方であり、私たち二人を共に結婚させてくださった方です……お許しください、女主よ、お許しください。そして私のために祈ってください！

助祭は、彼女の涙と、神および婚約者に対する燃えるような愛を見て、こう言った。

「主の祝福がありますように、わが娘よ。そして、あなたの歩む道のすべてが祝福されますように！　あなたが、至福のテクレのように、その苦難の業を成し遂げられますように。さあ、この至福の道へと進みなさい。そして、あなたを強める主の御手が、あなたと共にありますように！」

その後、聖エピスティマは、聖なる助祭、自身の霊的な母、そしてすべての姉妹たちに口づけをして、愛する兄の後を追って急いで出発した。

兵士たちに追いつき、縛られて連行される聖ガラクティオンを見るや、彼女は叫んだ。

「わが愛する主よ、兄弟よ！　私を救いへと導き、あなたを通して私が真の神であるキリストを知ることができた師よ、私を待ってください。この貧しい姉妹であり、あなたのしもべである私を、一人きりにしないでください！　私を拷問の場へ連れて行ってください。あなたによって偶像崇拝の迷いとこの世の虚しさから救い出された私を、あなたが修道生活の道へと導いてくださった私を、殉教の冠へと導いてください！この世でも、来世でも、私を見捨てないと約束してくださったことを思い出してください！」

ガラクティオンに付き添っていた兵士たちは、エピスティマのもとへ駆け寄り、彼女を捕らえた。ガラクティオンはエピスティマの姿を見て、キリストのために苦難を受けるという彼女の揺るぎない決意に深く喜び、その喜びのあまり涙を流した。　彼は、妹にそのような不屈の精神と神への燃えるような愛を与えてくださった神に心から感謝し、主が彼女の苦難の業を最後まで支えてくださり、彼女が過酷な拷問に怯えることのないよう、密かに彼女のために祈った。

兵士たちは、彼女を、すでに長い間霊的な愛の絆で結ばれていたガラクティオンと共に縛り上げ、地方の長のもとへ連行した。道中、ガラクティオンはエピスティマにこう説いた。

「見よ、姉妹よ。この邪悪な世のいかなる誘惑にも惑わされてはならない。また、苦しみをも恐れてはならない。我々がここで耐えなければならないのは長くはない。その代わりに、天の宮殿において、我らの主から永遠の冠を授かるのだ。」

聖エピスティマは彼にこう答えた。

「私はあなたの後を追って参ります、わが主よ。そしてあなたと同じように振る舞います。私たちの主は私たちを見捨てず、あなたを強め、弱い私にも、あなたと同じ苦しみを受け、同じように苦しみ、死ぬ力を与えてくださると信じています。そうして*『私は真実のうちにあなたの御顔を仰ぎ見、目覚めたとき、あなたの御姿に満たされるでしょう』*（詩編16:15）。

このように語り合いながら、彼らはウルスの屋敷に到着した。兵士たちを出迎えた使用人は、指揮官が朝までキリスト教徒を監視するよう命じたと告げた。そのため、兵士たちは一晩中、聖人たちを縛り続けた。

翌朝、ウルスは法廷に現れ、ガラクティオンとエピスティムが連れて来られると、彼らを一瞥してこう言った。

「お前たちは誰だ、黒人ども？」

聖ガラクティオンは答えた。

「我らはキリスト教徒であり、修道士である。」

ウルスは尋ねた。

「では、キリストとは何者か？」

「キリストは、天と地、そしてその中に存在するすべてのものを創造した真の神です」と聖人は答えた。

「もしあなた方のキリストがすべてを創造したのなら」とウルスは続けた、「では、私たちの神々とは何であり、彼らは何を創造したのですか？」

「あなた方の神々は」とガラクティオンは答えた。「石や木といった朽ちるものであり、何も創造していない。それらは人間の手に造られたものに過ぎない。それなのに、あなた方は人間の業を崇拝し、様々な物質から自分たちで作り出したものを神として崇めているのだ。」

激怒したウルスは、尋問に立ち会っていた者たちに、ガラクティオンの服を脱がせ、神々への冒涜の罪で腱で激しく打ち据えるよう命じた。

ガラクティオンが打たれている間、聖エピスティマは泣きながら、その責任者を叱責した。

「無慈悲な拷問者よ！」と彼女は言った。「何の罪もない神のしもべを苦しめ、断食で既に枯れ果てたその体を傷だらけにするなど、恥を知らないのですか？」

すると、ウルスは言った。

「彼女も服を脱がせ、もっと激しく打ちつけよ。」

恥知らずな家来たちが彼女の修道服を引き剥がし、毛皮の衣まで脱がせたとき、聖女は拷問者にこう言った。

「呪われよ、恥知らずな拷問者よ！　幼い頃から、誰も私の裸を見たことがないのに、あなたは皆の前で私を裸にするよう命じる。さあ、あなたがたの罪深い目が盲目となり、私の処女の裸を見ることができないように！」

聖女がそう言い終えるやいなや、公爵と彼を取り囲んでいた者たちは皆、目が見えなくなり、それぞれが手で壁や案内人を探り当てようとしたが、光を見ることができる者は誰一人としていなかった。皆は恐怖に襲われ、こう叫んだ。

「キリストのしもべよ、この闇から私たちを救ってください。そうすれば、私たちはあなたの神を信じます！」

そこで聖女は神に祈りを捧げると、皆の視力は回復した。そして、その場にいた五十三人は、実際にキリストを信じるようになった。しかし、ウルスは肉眼の視力は回復したものの、霊的な目ではさらに深く盲目となっていた。悪魔にそそのかされ、彼はこの奇跡を主イエス・キリストの仕業ではなく、自らの偽りの神々の仕業だと考えたのである。　「我々は――と彼は考えた――心の中で偉大なる神々を冒涜し、それに対して怒った神々は、我々がより慎重になり、神々について悪しきこと

を考えることを敢えてしないよう、我々に罰を与えたのだ……それならば、この明らかな冒涜者たちを容赦せず、我々の神々を冒涜する者たちに復讐しよう」。

そしてウルスは、殉教者たちの手と足の爪の下に、先を尖らせた針を打ち込むよう命じた。聖人たちはこの苦痛を勇敢に耐え忍び、こう叫んだ。

「我らは、唯一の真の神であるキリストに仕え、偽りの神々を拒む！」

その後、ウルスは彼らの両手を切り落とすよう命じた。彼らはこう叫んだ。

「『わが主は*祝福されよ。わが手を戦いに、わが指を戦いに備えさせ*、わが恵み、わが*守り*、わが*避難所*、わが救い主である方』（詩編 143:1–2）が、敵の手から私たちを救い出してくださる！」

すると、ウルスは彼らの足も切り落とすよう命じ、彼らはこう叫んだ。

「*私たちを助けに立ち上がり、あなたの慈しみのゆえに私たちを救い出してください*」（詩編 43:27）。　主よ、あなたはご存じです。私たちはあなたへの愛に燃え、あなたに従い、苦難の道を歩んできました。今こそ、私たちを永遠の安息へと導き、あなたの天の御住まいにおいて、あなたに喜ばれた者たちがみなあなたの御前に立っているその場所で、私たちの足が安らぐようにしてください！

そして彼らは再び声を高めて言った。

「異教の神々と、それらに仕える者たちは皆、呪われよ！」

すると、ウルスは言った。

「この不信心者どもは、いまだに我らの神々を冒涜し続けている！　二度と冒涜の言葉を口にできないよう、彼らの舌を切り落とせ！」

そこで、聖人たちの舌は切り落とされた。しかし、キリストの殉教者たちの口は黙ったものの、彼らの心は神に叫び続けることをやめなかった。ついに、拷問官は彼らの首を切り落とすよう命じた。彼らは庭の塀の外へ連れ出され、剣で斬首され、遺体は埋葬されることなく放置された。　しかし、ガラクティオンの義父の奴隷であり、二人の聖人の同志でもあったエウトルミオスは、彼らが捕らえられて裁判にかけられる際、正体を隠すために修道服を世俗の服に着替えて、遠くから彼らを追っていた。　彼は彼らの苦難と最期を目の当たりにし、密かに彼らの聖遺骨を回収して、彼らを悼み、尊厳をもって埋葬した。また彼は、読む者や聞く者の益となり、聖三位一体、すなわち父と子と聖霊に、永遠に栄光あれと称えられる神の栄光のために、彼らの生涯と勇敢な殉教の物語を記した。アーメン。

コンダク、第2調：

キリストの殉教者たちの軍勢に加わり、勇敢に戦い、輝かしく奮闘した、栄光あるガラクティオンよ。高潔な妻であり、あなたと共に苦難を分かち合ったエピスティマと共に、唯一の神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

聖イオナ、ノヴゴロド大司教の伝記

記念日：11月5日

聖イオナ（俗名ヨハネ）は、14世紀末に生まれた。彼が3歳の時、母は神の御心により主のもとへ魂を捧げ、その4年後、7歳の少年は完全な孤児となった。　しかし、主は彼を御自身の御加護なしに見捨てられることはなかった。主は、ある徳の高い未亡人ナタリア・メドヴァルツェヴァに、この貧しい孤児を引き取って育てるよう思いを起こさせた。彼女は母のような慈愛をもって、生まれつ

き体が弱く、細やかで注意深い世話が必要だった少年ヨハネの世話をした。　ナタリア・メドヴァルツェヴァは、少年に食事を与え、衣服を着せてあげた。彼女は彼に霊的な糧も与え、多くの子供たちが学んでいたある助祭のもとで彼を学ばせた。生まれつき体が弱く、貧しさゆえに内気だったこの聖なる少年は、学校に入学した当初から、同級生たちとは大きく異なっていた。　彼は騒がしい子供たちの遊びには加わらず、静けさと孤独を愛し、全力を尽くして勉学に励んだ。その急速な上達と善良な人柄によって、養母からの愛情をますます勝ち取っていった。

ある日、聖ヨハネの仲間たちが、晩課の後、路上で遊び始めた。敬虔な少年もそこにいた。彼は同年代の子供たちの遊びには加わらず、ただ彼らを見守っていた。その時、ノヴゴロドではそれまで見かけられたことのない、ある男が通りに現れた。その男は、聖人ぶった者のようだった。それは聖ミハイル・クロプスキーであった。　遠い地方からやって来た彼は、それまでノヴゴロドでは誰にも知られておらず、住民の誰とも面識がなかった。彼は、クロプスキー修道院に入る前から、ノヴゴロドを訪れたのはこれが初めてだった。　奇妙な装いをしたその人物を目にした子供たちは、群れをなして彼のもとへ駆け寄り、じっと見つめ始めた。最も活発な子供たちは聖なる人物を嘲笑し、中には彼の足元に石やゴミを投げつける者さえいた。聖ヨハネは通りの遠くに立っており、日は夕暮れへと傾きつつあった。　すでに薄暮が地上に降り、周囲のすべてが闇に包まれ始めていた。しかし、聖ミカエルは、その至福の少年の未来を明るくはっきりと見通していた。子供たちの騒ぎや悪ふざけを意に介さず、彼はヨハネのもとへ歩み寄り、その髪をつかんで自分より高く持ち上げ、こう言った。

「イワンよ、熱心に書物を学べ。お前はヴェリキー・ノヴゴロドの大司教となるのだ！」

そう言うと、彼はその子を抱きしめ、口づけをしてその場を去った。こうして聖ミハイルは、当初その子の名前さえ知らなかったにもかかわらず、50年後、すなわち聖ミハイル自身が安らかにこの世を去ってから4年後に、実際に実現することとなる未来を予言したのである。

一方、少年ヨハネは成人すると、主に仕えることに身を捧げる決意を固めた。幼い頃から彼はキリストの戒めをすべて厳格に守り、人里離れた場所を好んでいた。そして今、彼は修道者の剃髪を受けることを決意した。　ノヴゴロドから50ヴェルスタ離れた、広大な森の中に、人の住む場所から遠く離れた「オトニャ修道院」があった。聖ヨハネはここに入院した。この修道院のアルヒマンドリト（修道院長）ハリトンは、到着した彼を愛情をもって迎え入れ、修道士として剃髪し、「イオナ」という名を与えた。　聖イオナは、偉大な修道者の功業に満ちた、厳格で過酷な生活を送るようになった。彼の功業は兄弟たちを驚嘆させ、そのためハリトンの死後、修道士たちは満場一致で聖イオナを修道院のイグメンに選出した。　新たな職務において、この至福の聖人は、賢明な統治者、真の牧者、柔和な指導者、そして経験豊かな師としてその真価を発揮した。　彼の功績と偉業の評判は急速に広まり、やがてヴェリキー・ノヴゴロドでもその名が知られるようになった。ノヴゴロドや他の地域の多くの住民が聖人のもとを訪れ、その賢明な教えに感銘を受け、祈りと祝福を求めた。　多くの人々が修道院へ寄付を行うようになったため、聖イオナの賢明な統率の下、それまで資金に乏しく貧しかったオトニャ修道院は繁栄し、修道士の数も増え、彼らは皆、それぞれの力の及ぶ限り聖イオナに倣うようになった。

1458年、ノヴゴロドの聖エウフィミオスが逝去した。民衆全員に悼まれ、愛と尊敬を集めていたこの牧者は、[7589]で栄誉をもって埋葬された。

ノヴゴロドの市民たちは、聖イオナを大司教の座に就かせたいと満場一致で望んだ。静かなオトニャの修道院を離れることは彼にとって辛いことだったが、民衆の願いに逆らうことはできなかった。　1458年に彼はノヴゴロドに到着し、1459年には全ロシアのミトロポリットである聖イオナによってノヴゴロド大司教に叙任された　。新しい大司教はあらゆる美徳に恵まれており、ノヴゴロドの

[7589] その記念日は3月11日

人々は彼に、故聖エウフィミオスの後継者としてふさわしい人物を見出した。　この聖人は、信徒たちへの愛に際立っており、とりわけ、自身が孤児であったことを思い起こして、貧しい者や孤児たちを熱心に守った。彼には、ヨブの言葉がまさに当てはまった。「滅びゆく者の祝福が私の上に臨み、私は未亡人の心に喜びをもたらした。　私は正義をまとい、私の裁きはマントのように私を覆い、私を飾った。私は盲人の目となり、足の不自由な者の足となった」（ヨブ記29:13–15）。

この聖人について悪く言う者は一人もいなかった。誰もが彼を愛し、彼に会いたいと願い、彼の言葉を聞く者は皆、喜びを得た。かくも高い地位にありながら、彼は誰に対しても柔和で謙虚であった。彼はすべての人に何らかの善行を施し、賢明な助言を与えるよう努めた。　ノヴゴロドの人々だけがその司教を尊敬していたのではなく、モスクワの公たちでさえ聖イオナを愛し、敬い、しばしば彼に書簡を送り、彼から助言を受けていた。というのも、聖人はしばしば預言的に未来を予言し、その言葉は常に正確に実現したからである。　当時、モスクワの公ヴァシーリー・テムニーとその息子イオアン3世[7590]　は、かつてのモスクワからの独立を忘れられず、そのため度々皇帝の怒りを買っていたノヴゴロドの人々に対して、とりわけ不信感を抱いていた。　モスクワの大公たちからこれほどまでに尊敬されていた聖イオナは、同胞たちを守り、ツァーリの怒りを和らげた。ノヴゴロドの人々自身も、モスクワの大公たちへの取り成しを彼に懇願した。また、彼はしばしばその威厳ある言葉で、彼らの絶え間ない混乱や相互の争いを収めた。

聖人はしばしば市民の争いに介入せざるを得なかった。彼が聖座に就いて間もなく、教会内でも混乱が生じ始めた。ローマから、偽メトロポリット・イシドールの弟子がリトアニアに到着し、西ロシア教会の統治に加わった。モスクワでは公会議が招集され、そこで彼をメトロポリットとして認めないことが決定された。　ノヴゴロドの牧者は、この公会議にモスクワへ赴くことはなかった。しかし、モスクワの総主教は彼に公会議の決定文を送り、正教を堅く守り、信徒たちを真の信仰に堅く立たせ、迷い出た者たちを説得して真理へと導くよう諭した。

聖人はしばしば、同胞たちを諭さなければならなかった。1460年、モスクワ大公ヴァシーリーが、二人の息子ユーリーとアンドレイを伴ってノヴゴロドを訪れた。この時は平和的な目的でノヴゴロドを訪れた。ノヴゴロドの奇跡を行う聖人たちに敬意を表し、住民から貢ぎ物を徴収するためであった。　数年前、彼は強大な軍勢を率いてノヴゴロドの郊外にやって来て、敵に親しみを見せたノヴゴロドの人々を懲らしめたことがあった。このことを覚えていた一部の住民は、大公を殺害するという大胆な計画を立てた。聖人がこの狂気の企てを知ると、直ちに陰謀者たちの集まりへと向かった。

「愚か者どもよ」と聖人は彼らに言った。「お前たちは何を企んでいるのか？　たとえ大公を殺したとしても、それで何を得られるというのか？　ノヴゴロドに不幸と災難を招くだけだ。大公の長男ヨハネは、あなたがたの悪行を知れば、直ちに強大な軍勢を率いて現れ、この国を荒廃させるだろう。

この諭しは陰謀者たちに強い影響を与え、彼ら自身も自らの置かれた立場をはっきりと理解した。

ノヴゴロドの人々は、大公を敬意をもって迎え入れた。聖者もまた、大公に敬意を表した。大公はしばしばその至福の司教と対話し、その助言をすべて実行した。彼は大公を自分の父のように慕い、あらゆることに耳を傾けた。とりわけ、大公はその高潔な生き方を称え、聖者を深く尊敬していた。　大公がノヴゴロドに滞在している間、聖ヴァルラアム・フティンスキーの聖遺骸の棺の前で、大公の寝殿長が驚くべき癒やしを受けた。リャザン家のボヤール出身のこの若者は、突然重病に倒れた。彼の体力は急速に衰えていった。　ついに、彼は完全に息を引き取ったかのように見えた。しか

[7590] ヴァシリー・テムヌイは1425年から1462年まで大公であり、その息子ヨハネス3世は1462年から1505年まで大公であった。

し、聖ヴァルラアムの聖遺物箱のそばに運ばれたとき、彼は突然生き返り、完全に健康を取り戻した。この驚くべき奇跡は、大公自身、そのボヤールたち、そして他の者たちの目の前で起こった。ノヴゴロドを訪れた者たちは、この街が天からの特別な加護を受けていることを認めた。　聖イオナは直ちに、この奇跡を後世の記憶に残すよう命じ、聖山から到着したパホミイ・ロゴフェトにその任務を委ねた。しばらくして、大公はモスクワへと帰路についた。聖なる牧者に別れを告げる際、大公は彼をモスクワでの会議に招いた。

まもなく、聖人はそこへ向かわざるを得なくなった。大公は再びノヴゴロドの住民たちに怒りを露わにしたのである。一部の貴族たちは、大公のノヴゴロド人に対する不興をさらに煽ろうとしていた。聖イオナは、大公の怒りを鎮めようと、高齢にもかかわらず、遠路の　旅路のあらゆる困難をものともせず、モスクワへと向かった。　その都市に近づくにつれ、彼はルーシの地の偉大な守護者であるラドネジの聖セルギイを思い出し、帰還後にこの栄光ある修行者であり、神に愛された聖人の名を冠した教会を建立することを誓った。 モスクワから5ヴェルストの地点で、聖人はボヤールや数人の修道院長たちに出迎えられた。そして聖人が街に到着すると、モスクワ都主教は愛情を込めて彼を迎えた。　大公の宮廷では、すでに長い間、聖なる大司教の到着を待ちわびていた。そこで彼を出迎えたのはボヤールたちであった。大公の宮殿への階段では、ヴァシリー・ヴァシリエヴィチの子供たちが聖人の両脇を支えて案内した。大公自身も、この賢明な聖職者を目の当たりにして大いに喜んだ。彼は、聖人が自身の街から持ち込んだ貢ぎ物や贈り物を受け取った。　聖人がモスクワに滞在している間、大公は彼に絶大な敬意を払った。大公は頻繁に彼を呼び寄せ、世俗や教会に関する様々な事柄について語り合った。ある時、大公はノヴゴロドの聖人とモスクワの都主教を呼び寄せ、ノヴゴロドの人々に対する不満を口にした。　大公は聖イオナに対し、ノヴゴロドの人々がロシアの敵であるリトアニア人の側に立つ用意があり、自分――大公――に対して敬意を欠いていると訴え、さらには、反乱を起こしたノヴゴロドの人々に対して軍を率いて出撃し、彼らの騒乱と横暴に一度きりで終止符を打つつもりであるとさえ述べた。　聖イオナは、真の牧者として、自らの霊的な子らを熱心に擁護した。大公に対し、多くのことが誤って伝えられ、彼の怒りを煽ろうとしているのだと説いた。彼はヴァシリーに、嫉妬深い誹謗者たちの言葉に耳を貸さず、怒りに流されることなく、ノヴゴロドの人々を赦すよう懇願した。

「偉大なる君主よ、怒りに心を支配させず、中傷者や嫉妬深い者たちの言葉に耳を傾けず、一握りの有罪者のために多くの無実の人々を罰することなく、父のようにわが町の住民を諭し、彼らにあなたの愛と慈悲を示してください。　もし陛下が、我らの懇願に耳を傾けず、ノヴゴロドの住民を厳しく処罰されるのであれば、陛下の子供たちの間にも分裂が生じないよう、ご用心ください。　いいえ、公よ、あなたの領土に対する誹謗に駆られて行動してはなりません。どうか、あなたの民に慈悲深い眼差しを向けてください。彼らに新たな貢ぎ物や義務を課さないでください。あなたの命の日もすでに終わりに近づいていることを知ってください。あなたの息子ヨハネが、あなたの後に大公の玉座に就くでしょう。　私は信徒たちと共に、主に対して彼のために祈りを捧げます。彼が主の戒めを守り、柔和さをもってその地を治めるならば、全能なる神の右の手が、不敬虔なタタール人の暴虐から彼を救い、すべての敵の上に彼を高め、その権威を強めてくださるよう。

この言葉は、タタールの隷属からの解放を切なる夢としていた大公を大いに喜ばせた。聖なる大司教の予言が正確に実現することを知っていたヴァシリーは、聖イオーンに対し、ノヴゴロドの人々に対するあらゆる怒りを収め、彼らに平和を与えることを約束した。彼は、大司教に対し、大主教の面前でこの誓いを立てた。　この会話が終わると、ノヴゴロドの大司教は涙を流した。その理由が分からず、大公と大主教は聖イオネに涙の理由を尋ねた。

「誰が――」と聖人は答えた。「我々の街のように強大で人口の多い都市を、屈服させ、謙虚にさせることができるでしょうか？　それは市民自身が、互いに争うことによってのみです。ただ、私の存命中にそのようなことが起こらないよう、主にお祈りしているのです。」

こうして聖イオナは、ノヴゴロドの将来の没落をはっきりと予見していた。このことを知っていた彼は、ヴァシリーとその息子ヨハネに対し、愛するオトネ修道院のための裁判権を請い求めた。大公たちは聖人の願いを快く聞き入れた。彼らは、大公の印章が押された勅書を手渡した。

大公はノヴゴロドの主教の言葉を深く信頼していたため、その場で遺言書を作成した。その中で息子たちや妻に領地を割り当てるとともに、タタール人がルーシの地に権力を握っている間のみ、彼らへの貢納を納めるよう定めた。　「しかし、やがて彼らの権力が崩れ、主がルーシの諸公をその隷属から解放する時が来るだろう――その時には、諸公はもはやオルダ・ハンへの納付のために大公に貢ぎ物を納める必要はなくなる」と、ヴァシーリーはここで語った。

その後、ノヴゴロドの聖人は自らの信徒たちの元へと向かった。公爵とボヤールたちは、尊敬される大司教を栄誉をもって見送った。ノヴゴロドの市民たちも、大公の前で彼らのために熱心に執り成してくれた司教を、それと同じくらい深い愛情をもって迎えた。　自身の教区に到着すると、聖人は直ちに約束を果たし、ノヴゴロドで初めてとなる、私たちの尊い父セルギイ・ラドネジスキーを称える教会を建立した。彼は新しい教会をあらゆる装飾で美しく飾り立て、礼拝用の書物やイコンを備え付け、頻繁にそこを訪れた。　聖イオナは、自身の信徒たちの霊的啓蒙に多大な配慮を払った。自身、博識であり、聖書に対する深い知識を持っていた彼は、自身の霊的な子らも学び、ノヴゴロド地方の著名な修道士たちの記述を 教訓として読むことができるようにと願っていた。 そのため、全ロシアのミトロポリットである聖イオナとの合意に基づき、ノヴゴロドの大司教は、聖山から到着した学識ある修道士パホミイ・ロゴフェトに、いくつかの聖人の伝記を見直し、執筆するよう命じた。さらに、イオナ大司教の祝福のもとで書かれた数冊の礼拝用書物も、現在まで伝わっている。

モスクワからの帰還直後、全ロシアのイオナ都主教は、ノヴゴロドの至福の聖人に書簡を送った。死の訪れを感じていたイオナ都主教は、もう一度ノヴゴロドの主教と面会し、その霊的な対話を楽しみたいと願った。　同時に、大主教は聖イオナに対し、自分にふさわしい後継者の選出に自ら立ち会い、自身の葬儀を執り行ってくれるよう懇願した。この書簡を読んだ聖イオナは涙を流し、こう叫んだ。

– 今、モスクワは偉大な恵みを失いつつあり、それとともにロシア全土もまた同様である。

しかし、長年の歳月と足の病に苛まれていた聖イオナ自身は、モスクワへ赴くことができなかった。彼はモスクワの聖人に書簡を送り、その中で彼を慰めながら次のように記した。

– 今、私たちが顔を合わせることができないことを嘆く必要はない。なぜなら、この儚い肉体を離れた後、あの世で再び会うことになるからだ。その時の再会は喜びに満ちたものとなるだろう。なぜなら、その時、私たちは牧者たちの長ご自身から報いを受けることになるからだ。

後継者の選出については、聖イオナは主と聖なる公会議に委ねた：

「聖霊が選び、祝福される方であれば、私も喜んで受け入れる用意がある！」

聖モスクワ都主教イオナは、1461年3月31日に帰天した。その聖なる生涯を知っていたノヴゴロドの聖人は、前述のパホミイ・ロゴフェトにカノンの作成を命じた。その直後、モスクワの聖人は聖人の列に加えられた。

1462年、ヴァシーリーの死後、その息子ヨハン3世が大公の座に就いた。聖イオナは用務のため、モスクワの新大公のもとへ向かった。彼は、かつてその父に予言したことを大公に思い起こさせ、次のように付け加えた。

「主はこれほど多くの抑圧された者たちの祈りを軽んじられることはないでしょう。主はオルダを打ち散らされるでしょうが、大公殿下は敬虔さを保ち、神の戒めを堅く守り続けてください。」

同時に、聖人は大公に対し、オトネイ修道院への以前の勅書を確認し、同修道院が裁判権を持つよう要請した。聖人を深く尊敬していたイオアンは、喜んでその願いを聞き入れた。彼は父が与えた勅書を確認し、自身の肖像が刻まれた印章を押した。

その頃、ロシア正教会において悲しい分裂が起こった。ローマで司教に叙階されたグリゴリーは、自らをロシア都主教と宣言し、ポーランド王から好意的に迎え入れられると、当時ポーランド王の支配下にあったロシア南西部における教会事務を統括するようになった。　この件について、多くの正教徒や大公自身も聖人に書簡を送り、彼の協力と支援を懇願した。正教の信仰に揺るぎない聖イオナは、あらゆる手段を尽くしてこのような分裂に反対し、信徒たちに多くの教えを説き、古い正教の信仰を捨てず、モスクワ都主教の座に忠実であり続けるよう説得した。　真の牧者として、彼は勇敢かつ恐れを知らずに正教の敵たちのあらゆる陰謀を打ち砕き、言葉によって導く羊の群れを守り抜いた。

聖イオナは少なからぬ苦労を背負った。その賢明な言葉と愛をもって、彼はノヴゴロド人とプスコフ人の間の不和を幾度となく解消した。プスコフの住民たちは、ノヴゴロドの主教への従属を重荷に感じ、大公に対し、プスコフに特別な司教を任命するよう懇願し始めた。　彼らは、ノヴゴロドの大司教が所有していた土地や農地の一部さえも奪い取った。しかし、大公はその願いを聞き入れず、ノヴゴロドの至福の聖人にすべて従い、不当に奪ったものを返還するよう命じた。プスコフの人々は、その通りにした。　聖イオナ自身も、自らの模範によってこれに大いに貢献した。彼は、プスコフの人々が主教座に与えた損害に対して、いかなる補償も要求しなかった。彼の愛と無私無欲さを見て、プスコフの人々の大半は、彼をさらに深く尊敬し、相応の敬意を払うようになった。

聖イオナは、神の聖堂の建設と装飾に多大な心血を注いだ。ラドネジの聖セルギイを称える聖堂の建設に加え、聖イオナは、自身の愛するオトネ修道院――彼が修道生活と偉業を始めた場所――の整備にも尽力した。彼はここに「三聖人」の名を冠した石造りの聖堂を建設し、見事に装飾した。そのために、彼は最高のイコン画家たちを招き、自身の財産を惜しみなく費やし、　、新しい教会に聖具や聖書を豊富に備えるようにした。この教会の隣には、彼が俗世で名乗っていた「主の洗礼者ヨハネ」に捧げる別の教会を併設した。　この教会で、彼は自らの手で墓穴を掘り、ここに遺体を埋葬するよう遺言した。　オトネイの修道院では、聖なる大司教は聖ニコラスの名に因む教会をもう一つ建立した。ノヴゴロド市内では、彼はトルゴヴァヤ地区にあるドミトリエフスカヤ教会を修復・装飾した。伝承によれば、この教会はもともと、ディミトリ・ドンスキーがママイに勝利したことを記念して建てられたものである。

この賢明な聖人の敬虔な生涯は、モスクワの大公たちだけでなく、トヴェリ、スモレンスク、ポロツク、リトアニアの大公たちからも尊敬を集めた。聖イオナが統治したノヴゴロド地方は、この至福の聖人の在位中、常に平和と天からの特別な加護に恵まれていた。　市民たちは彼の教えに耳を傾け、互いに愛し合っていた。当時、大地そのものも並外れた豊穣さを誇っていた。これらすべては聖人の祈りによるものであった。ただ一度だけ、ノヴゴロドとプスコフの地が恐ろしい災難に見舞われた。　1466年の終わり頃から、「シモノフスキーの疫病」として知られる疫病が流行し始めました。患者のリンパ節は腫れ上がり、3日目か4日目には息を引き取りました。翌1467年、この病はさらに猛威を振るいました。ノヴゴロド地方全体で220,652人が亡くなりました。　大きな悲しみと動揺が住民たちを覆った。しかし、大司教自身は、自らの霊的な子らを思うあまり、さらに深い悲しみに苛まれていた。彼は彼らを慰め、この恐ろしい災いが収まるよう絶えず主へ祈りを捧げた。そして、その祈りは聞き届けられた。　ネレフ地区のズヴェリン修道院の敷地内には、死者を埋葬するための大きな納骨所が設けられていた。ある日、祈りの最中、聖師は次のような声を聞いた。

「聖なる聖職者全員を率いて、十字架を携え、ネレフ地区のズヴェリン修道院にある聖母マリアの庇護の聖堂、すなわち遺体安置所へと向かえ。聖なる義人シメオン・ボゴプリイムツの聖像が現れたその場所へ行きなさい。そこに彼を称える聖堂を建てよ。そうすれば疫病は収まるだろう。」

聖人はこのことを市民に告げ、10月1日の朝、聖母マリアの庇護の記念日に、ノヴゴロドの人々は新たな驚くべき奇跡を目の当たりにした。　この日、聖師は聖職者一同と市民を率いて指定された場所へ向かい、シメオン・ボゴプリイムツのイコンの前にひざまずき、涙ながらに天の怒りが鎮まるよう主に祈りを捧げた。　その間、民衆は丸太を運び始め、たった一日で教会が建てられた。聖イオナは同日、その教会を奉献し、そこで神聖な典礼を執り行った。その日から、疫病は収まった。翌1468年、聖イオナはこの木造の教会の跡地に、義人シメオンに敬意を表して石造りの教会を建立した。この教会は今日まで現存しており、神の言い表せない慈しみを証ししている。

その頃、ソロヴェツキー修道院の設立が始まった。聖イオナはこの新しい修道院に多大な援助と支援を惜しまなかった。彼はノヴゴロドの世俗当局と共に、聖ゾシムに勅書を与え、それによってソロヴェツキー島全体とそのすべての土地を、新しい修道院の所有として譲り渡した。

ノヴゴロドの聖人はすべての人々に多くの善行を施したが、それゆえに少なからぬ苦難も味わわなければならなかった。死の訪れを感じた彼は、遺言書に自身の遺体をオトネイ修道院に埋葬するよう記した。聖なる秘跡を受けた後、彼は1470年11月5日、安らかに主のもとへ旅立った。 ノヴゴロドの信徒たちは、敬愛する牧者、導き手、そして守護者である彼の遺体を、相応しい栄誉をもって埋葬した。その尊い遺体は、オトネイ修道院内の聖ヨハネ・洗礼者教会に、彼自身が用意しておいた墓に安置された。40日間、修道士たちはその墓を土で覆わなかった。　主は、御自身の栄光ある聖人の遺骸を腐敗しないものとして栄光を与えることを御心に留められた。オトネイ修道院の修道士たちや他の者たちは、聖人の遺体が腐敗の臭いを微塵も放っていないのを見て、深く驚嘆した。義人の死からすでに40日が経過していたが、誰も腐敗の臭いを嗅ぐことはなかった。　そこで修道者たちは、主がその御使いの聖遺を開示してくださることを固く信じ、墓を土で覆うことはせず、ただ墓の上に木で盛り土をしただけだった。この奇跡は、教会が建っていた場所が低地であり、その土地が湿って湿気ていたことからも、なおさら驚くべきものだった。

確かに、信者たちの希望は無駄にはならなかった。約100年の歳月が過ぎた頃、主は御自身の忠実な僕であり、修道士である彼を奇跡的に栄光に輝かせることをお許しになった。それはノヴゴロドの住民たちにとって、最も過酷な時代であった。　イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイ皇帝とノヴゴロド大司教レオニドの治世下、9月13日の朝、オトネイ修道院で突然パン焼き場が炎上した。強い風が火災を大いに助長した。炎は修道院のすべての教会を包み込み、抑えきれない勢いでますます広がっていった。　火は、聖イオナの聖遺物が安置された墓所がある洗礼者ヨハネ教会にまで及んだ。　このような危険を目の当たりにし、聖大司教の記憶を敬っていた二人の庶民が洗礼者ヨハネ教会へ駆け込み、墓所の上にある木製の覆いを解体して、それを修道院の広場へと運び出した。　重たい樫の棺は、彼らには信じられないほど軽く感じられた。その間にも、火は修道院の広場周辺の建物全体を包み込み、聖遺物そのものを脅かすほどになっていた。しかし、その時、皆の目の前に驚くべき光景が広がった。火は墓所をほぼ完全に取り囲んでいたが、それを少しも傷つけることはなかったのだ。　棺を運び出そうとした者もいたが、持ち上げることができなかった。その時、皆は、主ご自身が目に見えない御力によって、聖人の遺骸を炎から守っておられるのだと悟った。

慈悲深い主は、聖人の死後も彼を称えることをお許しになった。その棺からは、奇跡の川が流れ出ているのである。　その聖遺物の棺にひれ伏したり、信仰をもって祈りの中でその聖なる御名を呼び求めた者は、いかなる病に冒されていようとも、癒やしを受けた。ここで、聖イオナの最も重要な奇跡について触れておこう。

シルヴェストル修道院の修道士オトネイは、見習いのクリムと共に、かつての皇帝の勅書を確認するため、ある時モスクワへ派遣された。彼はその勅書を携えていた。　ヴィシュネヴォ・ヴォロチカから、使節たちは船でさらに先へと向かった。彼らと共に、ある裕福な商人が乗っていた。舵取りは悪魔に唆され、商人が持っていた金銭を奪おうと企んだ。川の急流の場所で、彼は船を岩にぶつけた。船は転覆し、乗っていた者たちは皆、水の中に落ちた。　船頭はその邪悪な企ての報いとして、神の公正な裁きを受け、溺死した。しかし、他の者たちは次々と岸へと泳ぎ着いた。見習い修道士クリムも助かった。ついに全員が岸に集まったが、シルヴェストルという一人の修道士だけが姿を見せなかった。彼は泳げなかったのだ。　皆がすでに彼が亡くなったと確信していたその時、突然、波に打ち上げられて岸にたどり着いた自分たちの舟と、その中にいたシルヴェストル長老の姿が見えた。この奇跡に皆は驚嘆した。修道士たちは救われたことを喜びつつも、ただ一つだけ悲しむことがあった。それは、船の沈没の際に、他の品々と共に王の勅書も失われてしまったことだった。　彼らはそのことを深く嘆き、聖イオネに助けを請うて祈りを捧げた。そして、その祈りは聞き届けられた。夕暮れ時、彼らは川面に、岸に向かって漂ってくる何かの物体を目にしたのである。　十字を切って祈りを捧げると、クリムは波の中へ飛び込み、近づいてみると、大きな喜びとともに、王の勅書を入れて運んでいた革の袋を見つけた。　不思議なことに、水は文書を傷めておらず、皇帝の署名さえも完全に無傷のままだった。主と、その御心に適う聖イオネに感謝を捧げた後、彼らは旅を続け、モスクワに到着すると、まもなく彼らに課せられた任務を無事に果たした。

ある時、動乱の時代に、ヴォルホヴァ川をカザックたちが下って来ていた。彼らは村を荒らし、住民を略奪し、誰一人として容赦しなかった。彼らは修道院の集落に近づき、すでにそこを襲おうとしていた。アタマンが「この集落は誰のものか」と尋ねると、ゲオルギーという名の農民がこう答えた。

「この集落は、オトネイ修道院、聖なる父であり偉大なる奇跡行者であるノヴゴロド大司教イオネ様の所有です。」

聖人の名を耳にしたアタマンは、仲間たちにこの集落の誰にも何にも手を出さないよう厳しく命じた。なぜそれを禁じるのかと問われると、彼はこう答えた。

「かつて、君主が私に怒りを抱き、私を死刑に処すよう命じられたことがありました。しかし、この罪深い私は、偉大で慈悲深い奇跡行者イオネを思い出し、全力を尽くして、できる限りの不遜な祈りを彼に捧げ、王の怒りから私を守ってくださるよう懇願したのです。」　まさにその瞬間、王から私の処刑を取り消すという命令が届いたのです。それ以来、私は常に、私の迅速な守護者である聖イオネに感謝し続けています。

聖イオナの聖遺物からは、他にも多くの奇跡が起こりました。私たちもまた、三位一体の神を賛美しつつ、この栄光ある聖人を常に祈りの中で呼び求めましょう。アーメン。

トロパリオ、第4調:

信仰の是正、柔和の模範、そしてまるで楽園の真ん中にある庭園のごとく、あなたの敬虔な行いによって、この世を照らしておられます。　それゆえ、私たちは愛をもってあなたの尊い御手に触れ、誠実に叫びます。「あなたの光に満ちた記憶を讃える者たちの助けとなってください、イオノ神父よ。そして、私たちの魂が救われるようお祈りください。」

コンダク、第4調:

あなたは天より神の恵みを受け、神と人との間を取り成し、大司教として供え物を捧げ、あなたの民に平和と豊かな実りをもたらしました、至福のイオネよ。あなたは偉大なるノヴァグラードの誉れであり、その地に住む者たちの喜びなのです。

聖使徒パトロス、エルマ、リナ、ガイア、フィロロスの記念日

記念日：11月5日

聖使徒パトロスは、ナポリとプテオレ[7591] の司教であり、そこで多くの人々に洗礼を授け、キリストへと導きました。 聖使徒エルムはフィリッポポリスの司教であった[7592] 。聖パトロスとエルムについては、使徒パウロが『ローマ人への手紙』（ローマ16:14）の中で言及している。

使徒パウロが『テモテへの第二の手紙』（IIテモテ4:21）で言及している聖使徒リンは、聖使徒ペトロの後を継いでローマの司教を務めました。

使徒パウロが『ローマ人への手紙』（ローマ16:23）の中で、「*私のもてなしの主であり、全教会の者であるガイオスが、あなたがたに挨拶を伝えています*」と述べている聖使徒ガイオスは、聖ティモテオの後を継いでエフェソの司教を務めました[7593] 。

使徒パウロが同じ書簡（ローマ16:15）の中で、「*フィロロガスを挨拶してください*」と述べている聖使徒フィロロガスは、聖使徒アンドレアス・ペルヴォズヴァンヌイによってシノニの司教に任命された[7594] 。

聖使徒たちは、上記の都市で司教としての務めを果たす中で、福音を宣べ伝えるために多くの苦難と悲しみを耐え忍び、多くの人々を教え、キリストへと導いた後、安らかに主のもとへ帰った。

アレクサンドリアの聖グリゴリオス司教の記念日

記念日：11月5日

私たちの聖なる父グリゴリウスは、若き頃からキリストを愛し、あらゆる美徳を身に備えていました。アレクサンドリアの教皇の死後、この機会に集まった司教たちと民衆によって、彼はアレクサンドリアの大司教に任命されました。　彼は正教の模範的な教師であり、柔和で、謙虚で、慈悲深く、孤児たちの父、未亡人の擁護者、迷える者たちの導き手、病人の医者、悲しむ者たちの慰め手であった。しかし、誘惑者である悪魔は、当時統治していたイコノクラストのレオに、グリゴリウスを縛り上げてコンスタンティノープルへ送るよう唆した[7595] 。 聖グリゴリウスはこのことを知ると、皇

[7591] ナポリは、同名のイタリア王国の州の州都であり、ナポリ湾の北岸に位置している。プテオラは、イタリア中部の海辺の町である。

[7592] フィリッポポリスは、フラキア地方にある古代の要塞都市で、現在は東ルメリアに位置し、マリツァ川沿いに位置している。

[7593] エフェソスはエーゲ海に面し、小アジアにおける重要な商業都市であった。キリスト教の信仰の礎は、ここで洗礼者ヨハネの弟子たちによって築かれた。使徒ペトロもすでにここでキリスト教徒たちに出会っていたが、主に使徒パウロによって福音が説かれた。その後、彼の弟子ティモテオがここで司教を務めた。　最後に、エフェソスは使徒であり福音記者であるヨハネの滞在地であり、彼はここで息を引き取った。現在、古代エフェソスの跡地には、アイシャ・ソリュクと呼ばれる貧しいトルコの村がある。

[7594] シノニは、黒海の南岸にある都市である。

[7595] レウ・アルメニア人――813年から820年まで。テオドロス・ストゥディテスは、この治世において教会が経験した不幸について次のように記述している。「なんと恐ろしいことか！　悪魔さえも恐れる尊い救世主のイコンが、都だけでな

帝のもとへ赴き、全シンクリトの前で[7596]、彼を異端者かつ不敬虔な者であると非難した。皇帝はこの非難に耐えかね、彼を牛の腱で鞭打ち、牢獄で飢え死にさせるよう命じた。　聖人はこれらすべてを感謝をもって耐え忍び、「私の神であるキリストと聖なるイコンのために、たとえ四つ裂きにされようとも構わない」と語った。これを知った拷問官であり不敬虔な王は、彼を流刑に処すよう命じた。この祝福された聖人は、流刑の地で三年間を過ごした後、その霊を主の御手に委ねた。

11月19日

11月6日（旧暦）

聖パウロ・殉教者、コンスタンティノープル大司教の生涯

記念日 11月6日

コンスタンティヌス大帝の息子であるコンスタンティウス皇帝[7597]の治世下、キリスト教徒たちは異端者たち――アリウス派――による迫害にさらされた。皇帝自身もアリウス派の異端に傾倒しており、彼らを支持していたのである。　当時、教会内では大きな混乱と動揺が生じていた。正教の偉大な擁護者たち――教会の支柱となっていた者たちの多くがすでにこの世を去っていたからである。正教の最も偉大な擁護者であるアレクサンドリアの大司教聖アタナシウスはその座から追放され、コンスタンティノープルの総主教聖アレクサンドルも、この頃にはすでに他界していた。

聖アレクサンドロスが臨終の際、その死の床を取り囲んでいた者たちは彼にこう尋ねた。

「父よ、あなたは私たち、あなたの霊の子らを誰に託して行かれるのですか？　あなたの代わりに、誰を私たちの牧者として残してくださるのですか？　誰がこれほど勇敢にキリストの教会を導いてくれるでしょうか？」

彼は彼らに、二人のふさわしい人物、すなわちテッサロニキ出身の長老パウロ[7598]と、助祭マケドニアを指し示したが、その際、次のように付け加えた。「もし、教訓に富み、徳高い生活を送る牧者を望むのであれば、パウロを選べ。　もし、威厳があり、外見の美しさで際立つ人物を牧者とすることを望むのであれば、マケドニアを選べばよいと。その後、永遠に記憶されるべきこの総主教は逝去した。　彼の死後に開かれた公会議において、パウロとマケドニアのどちらを総主教の座に就かせるかについて協議が行われた際、正統派と、公会議に多数参加していたアリウス派との間で論争が生じた。　正統派はパウロを望み、アリウス派はマケドニアに傾いていたが、正統派が優勢となり、聖イリナ教会において聖パウロが総主教に選出された。そして総主教の座に就くと、彼は委ねられた羊の群れを尊厳をもって牧し始めた。

く、あらゆる場所や都市で侮辱と屈辱にさらされ、祭壇は破壊され、聖なるものは冒涜されている。死の恐怖から、敬虔な者たちの口は皆閉ざされ、忌まわしく神を冒涜する言葉が飛び交っている」。

[7596] シンクリトスとは、皇帝の最も重要な顧問や高官からなる、軍事および民政の政府のことである。

[7597] コンスタンティウス皇帝は337年から361年まで在位した。

[7598] ソリュン――ギリシャ語の都市名テッサロニキのロシア語による転訛で、現代の発音では *サロニキ*。この都市は、当初フェリアと呼ばれており、ヨーロッパ側のトルコ、サロニキ湾（地中海）の北端に位置している。　キリスト教の信仰は、ここで聖使徒パウロによって初めて宣教された（Iテサロニケ1:1参照）。聖使徒パウロはソリュン住民への二つの書簡を執筆しており、これらは注釈家たちによって、この使徒の著作の中で最も初期のものとして認められている。

聖パウロの選出および叙階の際、コンスタンティウス皇帝はコンスタンティノープルに不在で、アンティオキアに滞在していた[7599] 。このため、彼は新任の総主教に対して好意的ではなかった。アンティオキアからコンスタンティノープルに戻った皇帝は、パヴェルが皇帝の意志に反して総主教の座に就いたことを理由に、総主教に対して明らかな不快感を示した。　アリウス派に同調していた皇帝は公会議を招集し、何の罪もなく、心清く、キリストの教会にとって極めて有益であった聖パウロを、全く不当に座から追放した。なぜなら、彼はその知恵と生き様によって、世にとって真の光であり[7600] 、雲の間から昇る明けの明星のように教会の中で輝いていたからである。 追放されたパウロの後任として、皇帝はニコミディアの司教エウセビオスを任命し、再びアンティオキアへと去っていった。　アリウス派の異端に染まっていたエウセビオスは、その異端的な教えによって教会を混乱させ始め、　の信仰告白から「生まれ、造られず、同質である」という言葉を削除しようと全力を尽くした。というのも、彼は神の御子が神であり、父なる神とあらゆる点で等しいことを認めなかったからである。　一方、罷免されたパウロはローマへと向かい、そこで聖アタナシウスや、エウセビオスによって追放された他の多くの司教たちと出会い、彼らと共に暮らした。　しかし、エウセビオスは、アタナシウスとパウロがローマで迫害から安らぎを得られることを望まず、彼らに対する中傷に満ちた書簡をローマ教皇ユリウスに送った[7601] 。 教皇はその書簡を全く信用せず、アタナシウスやパウロ、その他の司教たちに、それぞれの務めに戻るよう助言した。そして彼らを助けたいと願い、東方の司教たちに対し、帰還する者たちを愛をもって迎え入れ、彼らが以前の地位に就くことを妨げないようにと書き送った。

こうして、司教座から追放された司教たちは、それぞれ自分の教会に戻り、自分たちを追放した者たちに対して、ローマから持ち帰った教皇ユリウスの書簡を送りつけた。

しかし、正教の敵たちはその書簡を受け取ると、再びあらゆる手段を尽くして真実を虚偽で覆い隠そうとし、アンティオキアで公会議を招集することを企て、教皇ユリウスには特別な書簡で反論しようと試みた。　ところが、エウセビオス自身は公会議を待たずに死去した。そこで、コンスタンティノープルの正教徒たちは喜びをもってパウロを迎え入れ、彼を大司教の座に就かせた。一方、アリウス派は別の教会に集まり、自分たちの側に寝返ったマケドニオスを司教に選出した。　これによりコンスタンティノープルでは大混乱が生じ、両陣営の衝突により多くの者が被害を受け、殺害された。この噂はアンティオキアに滞在していたコンスタンティウス皇帝の耳にも届き、彼は将軍ヘルモゲンを軍を率いてコンスタンティノープルへ派遣し、パウロをコンスタンティノープル教会から追放するよう命じた。　到着したヘルモゲンは、何の罪もない聖パウロを追放するよう民衆に強要したが、民衆は皇帝の意向に従うことを断固として拒否したため、市内では激しい暴動が巻き起こった。ヘルモゲンは軍事力を行使しようとしたが、群衆は猛然と彼の邸宅に押し寄せ、それを焼き払った。そしてヘルモゲン自身も引きずり出され、殺害された。

コンスタンティウス皇帝は、ヘルモゲヌスの殺害を知ると、アンティオキアからコンスタンティノープルへ急行し、パウロを廃位して追放するとともに、自身の意志に反してパウロを受け入れたこと、ならびに反乱とヘルモゲヌスの殺害について、市民たちを激しく非難した。　これら一連の出来事に対し、皇帝はコンスタンティヌス大帝から与えられていた恩恵の半分を都市から剥奪した。具体的には、皇帝の穀物倉庫から貧しい住民に毎日支給されていたパンの量を半減させたのである。その後、マケドニウスをコンスタンティノープル総主教に任命すると、コンスタンティウスはアンティオキアへと戻った。　聖パウロは再び西へと退き、教皇ユリウスのもとを訪れて、ローマ皇帝コンス

[7599] ここでいうのは、もちろんシリアのアンティオキアであり、かつてはシリア国家の壮麗な首都であったが、現在はトルコ・アジア側の貧しい小さな町となっている。

[7600] マタイ5:14を参照。

[7601] 聖教皇ユリウスは、337年から352年までローマ教会を統治した。

タント[7602]と同様に、起こったすべての出来事を彼に語った。 コンスタンティウスの兄弟であるコンスタントと教皇は、コンスタンティウスに対し、パウロを正信者として受け入れるよう説得する書簡を書き、この書簡をパウロ本人に手渡した。パウロは再びローマからコンスタンティノープルへと向かい、そこで正教徒たちは再び彼を出迎え、大いなる喜びをもって迎え入れた。　また、コンスタンティウスと教皇ユリウスからの書簡については、ある高位の貴族を通じてアンティオキアのコンスタンティウス皇帝のもとへ送った。　しかし、コンスタンティウスはこれらの書簡を自分への非難と受け止め、パウロを受け入れなかった。それどころか、皇帝は、皇帝の同意なしに再び司教職に復帰したことに対して、さらに激怒し、まもなくコンスタンティノープルの地方長官フィリッポスに、パウロを再び罷免して追放し、マケドニアを司教に任命するよう命令を送った。　フィリッポスは、民衆の反乱や、自身がヘルモゲノスのような末路をたどることを恐れ、密かにパウロを司教の座から引きずり下ろすことを企てた。　その目的のために、彼は皇帝の命令を誰にも告げることなく、ある日、海辺にある「ゼウクシッポス」と呼ばれる、税収を徴収するために人々が集まる特別な宮殿を訪れた。　そこでフィリッポスは、税の徴収のために来たのだと述べたが、その一方で、ある公共の事柄について話し合うという名目で、パウロに秘密の会合への出席を求める丁重な招待状を送った。　パウロは、その純真さゆえに、何の躊躇もなくそこへ向かった。フィリッポスは、聖人とともに現れた大勢の群衆を恐れ、人目につく場所では彼に何もしなかったが、彼の手を取り、会話を交わしながら、中庭へと案内した。　そこで彼は、海に面した後門を開けるよう命じ、聖人をその門の外へ連れ出すと、皇帝の意志を告げ、あらかじめ用意された船に乗せ、こうして聖人は、あらゆる予防措置を講じられた上で、追放へと送られた。　彼は故郷であるテッサロニキで暮らすよう命じられ、周辺のすべての都市を訪れることは許されたが、東方の属州への立ち入りは禁じられた。

聖パウロの追放後、地方長官はマケドニオスと共に戦車に乗り、多数の兵士に護衛されて、厳かに神殿へと向かった。このことを知ったコンスタンティノープルの住民たちは大いに騒然とし、正教徒もアリウス派も互いに競い合うように急いで神殿へと駆けつけ、いち早くその場所を確保しようと躍起になった。　フィリッポスは神殿に到着したが、異例の群衆の殺到により、中に入ることができなかった。そこで彼はマケドニオスを戦車から降ろし、兵士たちは力ずくで群衆を追い払おうとしたが、場所が狭かったため、群衆の前列は後退することができなかった。　兵士たちは激怒し、武器を使って地域長官とマケドニア王のために教会への道を開こうとした。その際、3,150人が命を落とした――その一部は兵士たちの武器によるもので、一部は過度の混雑によるものであった。　これらすべては、王の意向と軍事力によって、しかし教会の規則に反して、マケドニウスが総主教の座に就いたことが原因であった。　いわゆる教会の平和が訪れたことを記念して、コンスタンティウス皇帝は聖ソフィア（神の知恵、聖三位一体の第二位格、神の子）の名を冠した教会を建設し、それをコンスタンティヌス大帝が建立したイリーナ教会と一つの共通の塀で囲んだ――　（殉教者ではなく、キリストの平和）[7603]。

テッサロニキでしばらく過ごした後、聖パウロはそこからコリントへ[7604]、そしてそこからローマへと向かった。そこで彼は再び聖アタナシウスと再会し、自身の遭遇したすべての災難について語り、二人は共に自らの運命についてコンスタントス皇帝に報告した。　皇帝は弟に対して激しく怒り、東から3人の司教を派遣するよう書簡を送った。彼らはアファナシオスとパウロの追放について

[7602] コンスタンティヌスは337年から350年まで在位した。

[7603] ギリシャ語の「イリニ」という言葉は、「平和」、「静寂」を意味します。

[7604] コリントは古代ギリシャで最も有名な都市の一つであり、ペロポネソス半島（バルカン半島の南端）のコリント湾沿いに位置しています。古代には、その教養の高さと盛んな貿易で知られていましたが、同時に、住民の風紀の緩さでも知られていました。　キリスト教は、ここで初めて聖使徒パウロとアポロによって広められた。使徒パウロは、コリントのキリスト教徒たちに向けて二つの長文の手紙を書いた。現在、この古代都市はギリシャ王国に属しており、クルントと呼ばれている。

報告するとともに、信仰告白の文書を持ち帰るよう命じられていた。　この書簡を受け取ったコンスタンティウスは、まだアンティオキアに滞在していたが、兄の怒りを恐れ、4人の司教――キリキアのナルキッソス、トラキアのテオドロス、ハルキドンのマリス、シリアのマルコ――を彼のもとへ派遣した[7605]。これらの司教たちはローマに到着し、皇帝の前に出頭したものの、アファナシウスやパウロとの対話や論争に踏み込む勇気はなく、アンティオキアで表明していた実際の異端的な信仰を隠し、別の声明を作成して皇帝に手渡した。その声明の内容は以下の通りであった。

「我らは、万物の全能の父なる神、すなわち天と地にあるすべてのものの創造主であり、その御手によってすべてのものが存在を得た方を信じ、また、すべての世の初めより父より生まれ、神より神、　光より光、御方によって天と地にある、見えるものも見えないものもすべてが造られた、まことの御言葉であり、知恵であり、力であり、命であり、まことの光であり、終わりの日に私たちのために人となり、聖母マリアから生まれ、　十字架につけられ、死に、葬られ、三日目に死者の中から復活し、天に昇り、父の右に座しておられ、世の終わりに生ける者と死んだ者を裁き、各人の行いに応じて報いを与えに来られる方であり、その御国は終わることなく、永遠に続く。　私たちは聖霊を信じます。聖霊は慰め主であり、主が使徒たちに約束され、ご自身が天に昇られた後に彼らに遣わされた方であり、聖霊によって、真に、かつ敬虔に聖霊を信じる魂は聖別されます。　しかし、御子が神なる父から出たものではなく別の存在であり、かつて御子が存在しなかった時期があったと主張する者たちについては、聖なる公会議的使徒教会は彼らを受け入れない」。

この信仰宣言を皇帝や他の多くの人々に手渡した後、司教たちはローマを後にした。　三年が経過した後、東方の司教たちは再び公会議に集まり、別の信仰宣言を策定して、それをイタリアの司教たちに送った。しかし、イタリアの司教たちは、新しい宣言が冗長で長大であるという理由から、それを受け入れず、ニカイア公会議の聖なる教父たちが定めた信仰告白に完全に満足していた。　これにより、東方教会と西方教会の間に不和と重大な誤解が生じ、その結果、両皇帝は、信仰告白を検討し、アファナシウスとパウロの問題を最終的に決着させるため、サルディクで公会議を招集した。この公会議には、サルディク[7606]　300名以上の西方司教が集まったのに対し、東方司教はわずか76名であった。　アリウス主義に染まりつつも、アファナシオスやパウロのような正統信仰の擁護者たちと対決することを恐れ、そのため彼らを公会議から排除したいと考えていた東方司教たちは、西方司教たちがアファナシオスとパウロを自分たちの仲間から追放するまでは、公会議での議論に参加することを拒否した。そこで、スレデツの司教[7607]プロトゲネス、尊者クドロヴィイらは、東方側に対し次のように述べた。

「我々がここに集まったのは、まさに、御子と御父の同質性についてだけでなく、アファナシオスとパウロの問題についても議論するためである。」

これを聞いた東方派の司教たちは、西方派から離れ、サルディカを後にし、帰路の途中でフィリッポポリスという都市に到達すると、マケドニアの[7608]で、独自の不敬虔な公会議を開き、そこで御子が父と同質であると告白されることを禁じ、同質性に関する教義を公然と破門とした。彼らはこの異端的な決定を、各教区へ特別な書簡によって通達した。

[7605] キリキアは、小アジアの南東部に位置する地域である。フラキアは、バルカン半島の南東端にあるビザンツ帝国の属州であり、*現在はトルコのルメルギ州である。*ハルキドンは、ボスポラス湾の小アジア岸、コンスタンティノープルの対岸に位置する都市で、かつて第4回全地公会議が開催されたことでも教会史において知られている。シリアは、パレスチナの北東に位置する州である。

[7606] サルディカ――ミジア州（バルカン半島中央部）の都市。

[7607] スレデツ – 現在のソフィア。ブルガリアの首都。

[7608] フィリッポポリス・マケドニア、あるいはフィリッピ――アレクサンドロス大王の父であるマケドニア王フィリッポスの名に因んで名付けられた都市。（紀元前4世紀半ば）。マケドニア――かつては強大な国家であったが、後にビザンツ帝国の属州となった。　聖使徒パウロ（ルカ、テモテ、シラを伴って）はここでキリスト教を宣教し、古代に名高いフィリッピの教会を設立し、この都市を何度も訪れた（使徒行伝16:12–40）。

この知らせがサルディキ公会議の教父たちの耳に入ったとき、彼らはまず、神の御子に関する誤った教義によって異端に陥った者たちを非難し、続いて告発者であるアファナシオスとパウロを聖職から追放した。 さらに、ニカイアで制定された信仰告白の完全な正しさを認め、御子が父と同質であることを告白しない者すべてを全面的に破門とした。 コンスタンス皇帝は、その一方で弟のコンスタンティウスに書簡を送り、アタナシウスとパウロに司教の座を返還するよう説得するとともに、直ちにパウロをコンスタンティノープルへ派遣した。彼には二人の司教を随行させ、コンスタンティウス宛ての書簡を同封した。その書簡の中で、彼はとりわけ次のように記していた。

「アファナシウスはまだ私の元にいるが、パウロはあなたの元へ送る。それは、あなたの権威によって彼が再び司教座に就くよう命じてもらうためである。アファナシウスについても同様に願う。なぜなら、彼ら二人はその敬虔さゆえに追放され、誹謗中傷を受けたと知ったからである……」

コンスタントはこれに、さらに厳しい言葉を付け加えた。すなわち、もし兄が同意しない場合、彼、コンスタント自身が軍勢を率いて兄に立ち向かい、たとえコンスタントの意思に反してでも、アファナシウスとパウロに彼らの教会を取り戻してやると述べたのである。

コンスタンティウスの元へ到着した聖パウロは、コンスタンティウスの手紙を皇帝に手渡した。兄弟の脅威に怯えたコンスタンティウスは、マケドニウスを追放し、パウロを総主教の座に就かせた。同様に、彼は手紙でアファナシウスを呼び寄せ、アレクサンドリアの総主教座へ送り出した。正教徒たちは、自分たちの牧者たちを喜び、かなり長い間、神に霊感を受けた偉大な全地教師たちの教えに慰められながら、深い平和の中で暮らした。アレクサンドリアのアファナシオスとコンスタンティノープルのパウロは、全世界にとって敬虔の灯火となり、アリウス派の闇を遠くまで追い払った。 しかし、コンスタンティウスの軍司令官マグネンティウスとその共謀者たちは、皇帝が狩りに出ている間に彼を殺害した。正教の守護者であり、敬虔なローマ皇帝コンスタンティウスが亡くなると、アリウス派は直ちに勢いを盛り返し、正教徒に対する迫害を開始した。 まず第一に、彼らは正統信仰の普遍的な擁護者たちに対して反旗を翻した。アタナシウスは、自らの死を望むアリウス派から逃れるため自ら教皇の座を退き、至福のパウロはアルメニアのククザ市[7609] へ流刑に処され、そこで隔離された小屋に閉じ込められた。 そこで、彼がある日神聖な典礼を執り行っていた際、アリウス派が彼に襲いかかり、オモフォロンで首を絞めて殺害した。

こうして、マケドニオスは再びコンスタンティノープル総主教の座に就き、正教徒を迫害し、根絶やしにすることで、神の教会にさらに多くの害をもたらした。 エパルヒのフィリッポスを強力な後ろ盾として、彼は多くの正統派の司教を罷免し、その地位をアリア派に置き換え、彼との教会的な交わりを拒んだ多くの人々を様々な拷問にかけて滅ぼし、 の女性たちさえも容赦しなかった。 彼の命令により、ある者からは乳房の乳首を引きちぎられ、ある者には鉄で口を開かされて無理やりアリウス派の聖体拝領を飲まされ、またある者からは鼻や耳を切り落とされ、さらにある者には火で烙印を押された――要するに、正統派信徒たちの血は容赦なく流されたのである。 まさにその頃、アリウス派は、聖パウロの書記官であり、正教の擁護者であった二人の聖職者、マルキアヌスとマルティリウスを剣で斬り殺した。 マケドニアによる迫害は、パフラゴニア[7610] にまで及んだ。そこに多くの正教徒がいることを知ると、彼は3つの武装兵部隊を派遣し、剣によって正教徒をアリア派との統合に強制させた。 マンティナ[7611] の住民たちは、軍隊が接近しているという知らせを聞くと、ある者は斧を、ある者は鎌を、またある者は単なる杭を手に取り、集まって接近してくる軍隊に立ち向かっ

[7609] アルメニア――小アジア北東部に位置したローマ・ビザンツ帝国の属州。紀元前70年まで、アルメニアはポンテウス王国の領土であったが、その後ローマ人に征服された。

[7610] パフラゴニア――小アジアの古代地域で、黒海南岸の中央部に位置していた。紀元前64年まではカッパドキア王国に属していたが、その時期以降、ローマのビフィニア・ポントス属州に移管され、その後ビザンツ帝国の領土となった。

[7611] マンティナは、パフラゴニアにある小さな町である。

た。その結果、内乱のような戦闘が勃発し、双方で多くの犠牲者が出た。　この流血の責任は、やはり他ならぬマケドニウスにあった。

ついに、マケドニウスは皇帝からのいかなる命令もなしに、聖コンスタンティヌス大帝の聖遺骨を地中から掘り起こし、別の場所へ移すという大胆な行動に出た。その結果、正教徒とアリウス派の間で内紛が勃発し、教会全体が、いわば血に染まることとなった。　皇帝はこの件についてマケドニウスとフィリッポス司教に強く憤り、コンスタンティウスの強い要請により、前者は総主教の座から、後者は司教職から追放された。　それにもかかわらず、アリウス派とマケドニウス派の異端は存続し続け、さらに40年間にわたり教会を分裂させ続けた。そして、テオドシウス帝の治世[7612]　に至るまで、同帝はついにコンスタンティノープルで公会議を招集し、これらの異端を最終的に断罪した[7613]。　これに続き、敬虔な皇帝は、父と子と聖霊に栄光を帰しつつ、キリストの聖なる殉教者パウロの聖遺物をククザからコンスタンティノープルへと、大いなる栄誉をもって移送した。

トロパリオ、第3調：

神聖な信仰の告白により、教会は司祭たちの中で、もう一人のパウロであるあなたを熱心な擁護者として示した。アベルも主に向かってあなたを称え、ザカリアの義なる血もまたそうするであろう。尊き父よ、キリスト・神に祈り、私たちに偉大な憐れみが与えられるよう願ってください。

コンダク、第2調：

地上で星のように輝き、今やカトリック教会を照らし出しておられます。あなたは、その教会のために苦難を耐え忍び、パウロよ、あなたの魂を捧げました。そして、ザカリアとアベルの血のように、あなたの血も主に向かってはっきりと叫びます。

私たちの尊き父、ノヴゴロドの奇跡行者ヴァルラアム聖人の生涯

記念日：11月6日

私たちの尊い父ヴァルラアムは、ノヴゴロドで敬虔で信仰深い両親の間に生まれました。彼は神を畏れる心を持って育てられ、読み書きを学びました。この聖なる少年は、神の御言葉、とりわけ王であり預言者であるダビデの神に霊感を受けた詩篇を、頻繁に、そして喜んで読みました。　幼い頃から彼は子供たちの遊びを避け、あらゆる世俗の快楽を拒み、聖霊に選ばれた器であった。彼はしばしば　次のように思索にふけった。「まことに、我らの生涯は短く、移ろいやすい。その中で万物は変わり、すべてが車輪のように回り続ける。それはまるで夢のような幻に似ている」。

聖人はこの世と、世にあるすべてのものから背を向け、人里離れた場所に身を隠した。彼に続いて、後にポルフィリーという名で修道誓願を立てたプロコピイ・マリシェヴィチ、その弟フェオドール、そして静寂と沈黙の中で修行を志すノヴゴロドの他の住民たちが彼に従った。　聖バルラアムは、ある聖職者から修道者の剃髪を受けた。彼は自分用に小さな小屋を構え、そこで昼夜を問わず絶えず主への祈りを捧げた。　聖人は断食と労働に熱心に励み、自ら薪を割り、木材を鋸で切り、土地

[7612] ここで言及されているのは、当然ながら西暦379年から395年まで在位したテオドシウス大帝のことである。

[7613]　ここで言及されているのは、テオドシウス大帝の治世下でコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議（381年）であり、この公会議はアリウス派およびそこから派生したすべての異端――とりわけ、聖霊について不敬な教えを説いたマケドニウス派の異端――を非難した。

を耕し、聖書の言葉*「私たちがあなたがたのところにいたとき、こう命じたのです。『働きたくない者は、食べることもあってはならない』」*（テサロニケの信徒への手紙第二 3:10）を実践した。

毎夜、彼は徹夜して祈り、悪霊を追い払った。不浄な霊たちは、自ら聖なる人を惑わそうとしたり、あるいは人々をそそのかしてこの至福の者に嫌がらせをさせたりした。聖人は、神の御手によって守られ、支えられながら、あらゆる試練を忍耐強く耐え抜いた。　彼の偉業の評判は至る所に広まっていった。多くの人が彼のもとに集まり始めた。公爵、ボヤール、富める者も貧しい者も。尊者バルラアムは、彼のもとにやって来るすべての人々に絶えずこう説いた。

「子らよ、あらゆる不正を避け、嫉妬せず、中傷してはならない。怒りを抑え、高利貸しをしてはならない。不当な裁きを下さないよう気をつけなさい。偽りの誓いを立ててはならず、**誓いを立てたら**それを果たしなさい。肉欲に身を任せてはならない。

常に柔和であり、すべての人を愛をもって接しなさい。この美徳こそが、あらゆる善の始まりであり根源である。

こうして、聖人は毎日、彼を訪ねてくるすべての人々に教えを説き、自らも祈りを重ね、ますます肉体を律していった。しばらくして、彼は我らの主イエス・キリストの変容に捧げる小さな教会を建てた。この時から、修道院が誕生した。　修道者の数はますます増えていった。聖人自身は、以前と同様に厳格な生活を送っていた。彼の食事は、ソチヴォか地産の果実だけであり、それもごく少量であった。他の修道士たちも同様に厳格な生活を送っていた。

ある日、ある公爵が聖人の独房を訪れ、祝福を求めた。聖人は彼を迎え入れ、息子の誕生を祝った。公爵はこれに驚いた。実際、公爵が不在の間に彼には息子が生まれ、その洗礼の代父は聖バルラアム自身であったのである。

ある男が、この聖なる人物を深く信仰しており、唯一の病める息子を連れて聖人のもとへ向かった。彼は、聖人に息子の癒やしを祈ってほしかったのだ。しかし、道中、その病める少年は亡くなってしまった。聖バルラアムが祈りを捧げると、少年は完全に健康な姿で蘇った。

ある日、主イエス・キリストの復活という大祭が近づいていた。聖人は、祭りのために魚を捕るよう漁師たちを遣わした。　漁は驚くほど豊作だった。漁師たちは大きなチョウザメを捕まえたが、悪魔にそそのかされてそれを隠し、修道院には残りの魚だけを持ち帰った。聖バルラアムは杖を手に、持ち帰られた魚をじっくりと眺めながら言った。

「子らよ、あなたがたが運んできたのは小さな魚ばかりだ。大きな魚はどこにあるのか？」

聖人のその洞察力に驚いた漁師たちは、彼の前にひざまずき、自らの罪を悔い改め、隠していた魚を返した。

神の御心により、コンスタンティノープルから同年代のアンソニーが聖バルラアムのもとを訪れた。聖人は友人の帰還を大いに喜んだ。彼はアンソニーに修道院の運営を委ね、こう言った。

「わが愛する兄弟よ！神の御加護がこの修道院に注がれている。今、私はこの修道院をあなたの手に委ねる。これを守り、世話をしなさい。私はすでに天の王のもとへ旅立つ。しかし、このことを気にするな。肉体はあなた方を離れるが、霊は常にあなた方と共にいるのだ。」

そして、兄弟たちに訓示を与え、正教の信仰を守り、常に謙遜のうちに生きるよう命じた後、聖バルラアムは主の御許に魂を委ねた。ノヴゴロドの主教は、相応しい荘厳さをもって、ろうそくと聖歌を捧げながら、彼の尊い遺体を埋葬した。　尊者バルラアムの幸いな臨終は、1192年11月6日に訪れた。今や彼は、義人たちの列に加わり、父と子と聖霊を賛美している。アーメン。

トロパリオ、第3調：

地上で断食と禁食、そして徹夜祷によって御身を酷使し、尊者よ、あらゆる肉的な思惑を滅ぼし、御遺骨の聖櫃に信仰をもって駆け寄る者たちにとって、妬みのない癒やしの泉となられた、わが父ヴァルラアムよ。キリスト・神に、我らの魂が救われますようお祈りください。

コンダク、第8調：

かつて第二のエリヤが王を驚かせたように、あなたは民を喜ばせ、祝宴を催されました。偉大なるノヴグラードは、あなたの聖遺物をその中に宿すことを大いに誇りとしています。どうか、この街を敵から揺るぎなく守り、私たちがあなたにこう呼びかけられますように。「喜びなさい、尊きヴァルラアム、私たちの父よ。」

カザン大司教聖ゲルマノスの伝

記念日：11月6日

15世紀から16世紀にかけてのモスクワ公国におけるボヤール家の中でも、スモレンスクの公爵の子孫であるポレフ家は、並外れた敬虔さと奉仕への熱意で際立っていた。この家系からは数名が修道者となり、その敬虔な生活とキリスト教的な美徳によって際立っていた。　17世紀の初頭、スタリツァの町[7614]で、フェオドール・アファナシーエヴィチ・ポレフ夫妻の間に息子が生まれ、聖グレゴリオス・デカポリトスにちなんで、洗礼名としてグレゴリーと名付けられた。この子が、後にキリストの羊の群れの偉大な導き手であり、献身的な牧者となる聖ヘルマンであった。　両親の敬虔さと、キリストの戒めに従った厳格な生活は、幼い少年に大きな影響を与えた。彼は若くして厳格な断食を守ることに慣れ、しばしば祈りにふけっていた。聖人の両親は、息子の心に神への畏れを植え付けようと努めた。幼い頃から、神の恵みは少年の上に宿っていた。　同年代の子供たちの中でも、彼は謙虚さ、柔和さ、そして才能で際立っていた。彼は子供らしい遊びや騒がしいはしゃぎを好まず、有益な思索や会話で魂を潤すことを好んだ。敬虔な両親は、当時最も重要な教育であった聖書の読み方を息子に教えた。　聖なる少年は、神に霊感を受けた書物の読解に熱心に取り組み始めた。特にダビデの詩篇を頻繁に読み、それらは敬虔な若者を力づけ、奮い立たせた。幼い頃から、彼は礼拝の時間には欠かさず教会に通っていた。　彼はしばしば人里離れた場所に身を置き、静寂の中で熱心に祈りを捧げ、人間の使命や神の摂理について深く思索にふけった。聖なる少年は、人間の命の儚さについて深く考えた。それは夢のように儚いものだと彼は考えた。人は死に、その記憶は次第に薄れていくのだ。　この世のあらゆる恵みも同様に儚い。それらは朽ちるものであり、あっという間に現れては、あっという間に消え去ってしまう。必要なことはただ一つ、神に喜ばれ、全霊を尽くして神に仕え、心を尽くして神を愛することである。敬虔な少年は、以前よりもさらに厳しい生活を送るようになった。特に断食を厳守し、その過酷な節制のせいで、かろうじて命をつないでいる状態だった。　しかし、このように肉体を死なせることで、彼は自らの魂を照らし、飾っていた。息子のそのような節制ぶりを見て、両親は彼の健康を案じ、その行いを控えるよう懇願した。しかし、彼はますますその修行を厳しくしていった。　彼の魂は、とっくの昔から孤独を求めていた。彼は、神への奉仕に全身全霊を捧げ、修道士となることを決意した。両親の祝福を請い、彼はその厳格な生活で名高いヴォロコラム修道院に入った。その修道院には、すでにグリゴリエフの父の従兄弟たちが修道士として入っていた。　当時、この修道院では、後のカザン大主教となるグリーリウスや、その教養で知られ、敵の

[7614] スタリツァ――ヴォルガ川沿いにあるトヴェリ州の郡庁所在地。

陰謀によって無実の罪でこの修道院に幽閉されていた至福のマクシム・グレック[7615] が修行に励んでいた。グリゴリーは生後約25年の時にこの修道院に入り、その後、彼の父もフィロフェイという名でここに入院した。　まもなくグリゴリーは修道士として剃髪し、ゲルマンという名が与えられた。修道生活を受け入れた彼は、さらに熱心に敬虔な行いに励むようになった。特に聖書の研究に尽力し、教養豊かなマクシムと頻繁に語り合い、その対話から多くの益を得ていた。　相変わらず彼は断食を厳格に守り、相変わらず欠かさず神の教会に通った。その修道生活をもって皆に模範を示し、並外れた謙虚さを持ち、自分に課せられたあらゆる奉仕を喜んで果たし、兄弟たちに仕えた。　特に彼は、礼拝用書の写本作業に情熱を注いでいた。「修道士たちの中で最年少」と自ら称したゲルマンの手によって、現在まで保存されている『聖母賛歌集』や『福音書』が書き写されたのである。

ゲルマンの苦行生活は、ヴォロコラム修道院の修道士たちの間で彼への尊敬を集めた。彼らはこの苦行者の労苦に感嘆し、その謙虚さに感化され、主への感謝を捧げた。　やがて、ヘルマンの敬虔な生活に関する評判は、聖人の故郷であるスタリツの町にも届いた。スタリツの聖母被昇天修道院の修道士たちは、ヘルマンの功績を聞き、彼に自分たちの修道院の院長職を引き受けるよう強く懇願した。　謙虚なゲルマンは長い間断り続けていたが、ついに兄弟たちの熱心な願いに折れ、トヴェリの大司教アカキウスのもとへ向かった。大司教は聖人を温かく迎え入れ、彼をアルヒマンドリトの位に叙し、新たな奉仕への祝福を与えた。　スタリツキー修道院の修道者たちは、かねてより自院に迎えることを切望していた新しい院長を、愛情を込めて出迎えた。　修道院の運営を引き継いだ聖ゲルマンは、牧者の熱意をもってその整備に尽力した。彼は建物を建て、教会を美しく装飾した。しかし、それ以上に彼が気にかけたのは内面の美しさであった。　彼はすべての人に敬虔な生活の模範を示し、修道士たちにとって謙遜と柔和の模範となり、皆を戒め、修道者の義務を厳格に遵守するよう諭し、自らの修道院にヴォロコラム修道院の規則を導入した――つまり、彼は真の牧者であり、慈愛に満ちた父であり、模範となるべき存在であった。　修道士たちは、聖なるアルヒマンドリートの足跡をたどろうと努め、霊的生活においてこれほど経験豊かな牧者の指導の下で、修行において目覚ましい成果を上げた。しかし、まもなく彼らはアルヒマンドリートと別れることとなった。　絶えず隠遁生活を志した聖ヘルマンは、2年後にスタリツキー修道院を去り、再びヴォロコラム修道院の静かな独房で、祈りと断食に励むこととなった。　彼は、スタリツキー修道院の指導権を、自ら出家させた修道士ヨブに委ねた。ヨブは後に、ロシアの地のために苦難を耐え抜いた著名な修道士であり、モスクワ総主教となった人物である。ヴォロコラム修道院に到着すると、聖ヘルマンは一介の修道士として修行に励み始めた。　しかし、彼が孤独と静寂の中で生活を送ることは長くは続かなかった。当時、モスクワには、聖三位一体への信仰を否定し、聖なる秘跡を認めなかった新たな異端者、マテイ・バシュキンが現れていた。1553年、彼を裁くためにモスクワで公会議が招集された。　聖ヘルマンも父と共に、この公会議の審議に召喚された。公会議はバシュキンの異端を断罪し、彼を改心させるためにヴォロコラム修道院の聖ヘルマンのもとへ送ることを決定した。こうして、キリストの信仰を熱心に守るこの人物の、苦行に満ちた聖なる生活は広く知られることとなった。

しかし、聖人を待ち受けていたのは、それとはまた異なる、より困難な試練であった。その頃、ツァーリ兼大公イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイによって、タタール人のカザン王国の主要な拠点であり要塞であったカザンが征服された。　モスクワのツァーリは、征服された国において、イスラム教徒や異教徒といった異民族の間で、キリストの真の信仰の光を広めることに心を砕いた。カザンには大司教座が設置され、その初代大司教には、かつてヴォロコラム修道院のイグメンであった聖グリーが任命された。　聖人グリーには、スヴィヤジスクの町に修道院を建設する任務が委ね

[7615] 聖マクシム・グレックは、聖山から招かれて礼拝用書物の修正にあたったが、多くの著作を残した。長期にわたる幽閉の末、1656年に聖三位一体セルギエフ・ラヴラで死去した。

られた[7616] 。グリーの指示により、この修道院の院長には、1555年にグリーと共にスヴィヤジスクの町に到着した聖ヘルマンが任命された。ツァーリと聖人たちから多額の援助を受けたヘルマンは、熱心に修道院の建設に着手した。 修道院の建設にあたっては、彼に多大な労力と努力が求められた。必要な資材の不足、工事費の高騰、異教徒たちの敵対的な態度――これらすべてが修道院の建設を困難にし、遅らせた。しかし、神の御加護により、1年半の作業を経て工事は完了した。 聖ヘルマンは、今日まで現存するニコライ教会と、それに隣接する高い鐘楼を建設し、その後、尊く栄光に満ちた神の母の御眠りを称える、現在も残る壮麗な聖堂を建立した。ヘルマンはこれらの聖堂を、イコンやその他の聖なる品々で美しく飾り立てた。

ゲルマンは、特にイスラム教徒や異教徒の間で、キリストの真の信仰を広めることに熱心に尽力した。この聖なる牧者の厳格で献身的な生活は、多くの人々を彼のもとに引き寄せた。ある者は助言を求めて訪れ、またある者は祝福を求めて訪れた。 この福者は、正教徒と非信者との間に な区別をすることなく、すべての人を愛をもって受け入れ、誰に対しても等しく助け、誰に対しても等しく慈愛をもって接した。この聖人の振る舞いは異教徒たちに強い感銘を与え、彼らはキリストの真の信仰を受け入れるようになった。聖ヘルマンは、助けを求めて彼のもとを訪れるすべての人を惜しみなく助けた。 しかし、他者に対しては寛大で慈悲深かったこの聖人は、自分自身に対しては厳格で要求が厳しかった。今でも、長さ1.5サジェニ、幅約1サジェニという、狭くこぢんまりとした聖人の独房が残されている。すべての人を助ける一方で、彼自身は他人の助けを借りずに済ませようと努め、自分の服も自分で繕っていた。 今日に至るまで、聖ヘルマンが使用していた指ぬき、針、糸が保存されている。自らの魂の救いを気遣う一方で、この善良な牧者はスヴィヤージ修道院の修道士たちのことも同様に気にかけていた。修道院長と同様に、すべての修道士は極めて厳格な生活を送ることが義務付けられていた。 聖ヘルマンは、彼らの中から、不信者たちの間で神の言葉を説くにふさわしい者を選び出し、自ら彼ら全員に模範を示した。聖人の尽力により、説教という偉大な事業に必要な、礼拝用やその他の手書きの書物が数多く集められた。 スヴィャージの聖母修道院は、キリストの信仰の光が広まっていく中心地となった。聖人のたゆまぬ配慮のおかげで、この修道院はその崇高な使命を果たし、その後も長い間、ロシア北東部の啓蒙の中心地であり続けた。 聖ゲルマンと至福のグリーは、兄弟愛の絆で結ばれていた。この大司教は、ゲルマンのような熱心な同志の功績と労苦を高く評価していた。二人は、教会教育に関する様々な事柄について頻繁に書簡を交わしていた。 一方、聖グルイは、キリストの信仰を熱心に説くこの説教者に、あらゆる面で信頼を寄せていた。彼は、スヴィヤジスク修道院だけでなく、スヴィヤジスク地方のすべての教会の裁判と管理を、ヘルマン自身に委ねた。彼のすべての功績は、ツァーリにも知られていた。こうして、聖ヘルマンは8年以上にわたり献身的に活動した。

1563年12月6日、数多くの労苦と功績を経て、カザンの大主教グリーは、その清らかな魂を安らかに主の御許に委ねた。 ツァーリ・イオアン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイとモスクワ都主教アファナシーは、聖ヘルマンをモスクワに呼び寄せ、彼をカザンの大司教の座に就かせようとした。彼らは以前から、この聖なる人物の熱心さについて多くを耳にしており、彼こそが聖グリーの後継者としてふさわしい唯一の人物であると見なしていた。 聖ゲルマンは、公会議の書簡によってモスクワへ招かれたが、当初はこれを拒んだ。しかし、やがてツァーリと聖公会の要求を受け入れざるを得なくなった。1564年3月12日、彼はカザンおよびスヴィヤジスクの大司教に叙任された。 信徒たちを導く中で、彼は偉大なる師であり導き手である聖グルイの足跡を揺るぎなくたどった。特に、キリストの信仰の普及に熱心に尽力した。そのために、彼はジラントフスキー修道院（[7617] ）に共同生活制

[7616] スヴィヤジスクは、カザン州のスヴィヤガ川沿いにある郡庁所在地である。

[7617] カザン近郊のジラントフスキー男子修道院は、カザン攻略の際に戦死した兵士たちの埋葬地に、イオアンヌ・グロズヌイの命により建立された。

を導入し、この修道院の修道士数を増やし、異民族の子供たちのための学校を拡充した。　彼の同時代人であり、ロシア史において著名なクルブスキー公は、聖ゲルマンについて次のように述べている。「ゲルマンは名門の出身であり、体格の高さよりも知性の高さが際立つ人物であった。誠実かつ聖なる生活を送る男であり、聖書の研究者であり、霊的な事柄において神に忠実な者であった。　彼はいかなる悪意ある慣習や偽善にも関与せず、素朴で誠実、揺るぎない人物であり、災いや苦難に襲われた人々にとって偉大な助け手であり、貧しい人々に対して極めて慈悲深かった」。

聖人の尽力により、当時カザンにイワノフスキー・カザン修道院が建設され、それは現在に至るまで存続している。これは、神の聖堂の美化に対する聖人の熱心な尽力の目に見える証である。こうした活動の中で、聖人は約2年間、カザンの信徒たちを導いた。 1566年、モスクワ都主教アファナシーは健康を害したため、教会の統治を辞退した。聖ゲルマンの厳格な修道生活はイヴァン雷帝にもよく知られており、彼はゲルマンに大司教の座に就くことを望んだ。ツァーリの命令により、カザンの聖人はモスクワへ召還された。　その頃、イオアンヌの性格に悲しい変化が生じていた。以前から彼に特徴的だった猜疑心が、ますます強まっていったのである。彼は、ツァーリの信頼を悪用し、不正や弾圧を繰り返す、不適格なオプリチニキたちを周囲に取り巻きとして集めた。　ツァーリの意志によりモスクワに召されたゲルマンは、当初、自分に課せられた重責を拒んだ。ツァーリは異議を許さず、ゲルマンはミトロポリトの位に叙任される前から、ミトロポリトの居室に身を置くことを余儀なくされた。しかし、彼がそこに滞在したのは長くはなかった。　彼は、王の邪悪な側近たちが人々にどのような不義を働いているかを目の当たりにし、悲しみをもって　、グロズヌイの性格がいかに大きく変化したかを指摘した――そしてそれを耐え忍ぶことはできなかった。牧者の務めに忠実な彼は、王を諭そうとし、心から悔い改める必要性、将来の苦しみ、そして永遠の至福について語った。「恐るべき」ツァーリは、この福者である聖人の非難に耐えられなかった。彼は陰鬱な表情でゲルマンの元を去った。このことを知ったオプリチニキたちは、ツァーリをなだめ始めた。彼らは聖人のことをよく知っており、この牧者が自分たちにとって恐ろしい告発者であり、ツァーリに対して絶え間なく、勇敢に真実を語り続けるだろうことを理解していた。

「偉大なる君主よ」と、狡猾なオプリチニキたちは言った。「あなたの臣下の無意味な言葉に耳を傾けるなど、あなたにはふさわしくありません。まさか、あなたが長年シルヴェストルやアダシェフのもとで過ごした時よりも、さらに過酷な束縛の下に置かれたいとお考えなのでしょうか。」

聖人に対して最も激しく反対したのは、皇帝のお気に入りであるアレクセイ・バスマノフとその息子だった。すべてのオプリチニキは、皇帝に対し、ゲルマンをモスクワの主教座に就かせないよう執拗に懇願した。グロズヌイは側近たちの言葉に従った。彼はゲルマンに次のように伝えるよう命じた。

「お前はまだ大主教に任命されていないのに、すでに私の自由を奪おうとしている。」

聖人は約2年間、モスクワで失脚したまま過ごした。彼はカザン大司教とみなされていたにもかかわらず、カザンへ戻ることを許されなかった。この間、彼は執行官の監視下に置かれ、監禁されていた。しかし、偽りのない不正の告発者である彼は、囚われの身であってもオプリチニキたちにとって恐るべき存在であった。 1567年11月6日、聖ゲルマンは逝去した。一般に、この聖なる人物を殺害したのはオプリチニキであったと考えられている。モスクワで聖人の元に仕えていたスヴィヤジスク修道院のアルヒマンドリト・イロディオンは、聖ニコライ教会（通称「モクリ」[7618] ）にて、聖ゲルマンの遺体を埋葬した。

しかし、主は御自身の聖人を奇跡や様々なしるしによって栄光に輝かせることをお望みになった。ニコライ教会の改築の際、この聖人の聖遺骨が発見された。　1592年、スヴィヤジスクの住民た

[7618] 聖ニコライ・モクロイ教会は、モスクワのキタイ・ゴロド、ザリャーディエ地区にある。

ちは、聖ゲルマンの聖遺物による奇跡の話を耳にし、ツァーリ・フェオドール・イオアンノヴィチと全ロシア総主教イオヴに対し、聖人の聖遺物をモスクワから、聖人自身が設立したスヴィヤジスク修道院へ移送することを許可してほしいと願い出た。 この願いは聞き入れられ、1592年9月25日、聖人の遺骸はスヴィヤジスクの住民たちによって盛大に迎えられた。この際、多くの奇跡的な治癒や徴が現れた。聖ゲルマンの遺骸がスヴィヤジスク修道院の聖母被昇天教会に運び込まれるやいなや、修道院全体に素晴らしい香りが広がった。 この際、二人の盲人が目を開き、他にも多くの奇跡が起こった。100年以上が経過した1696年、聖人の聖遺骨は再び確認され、この時からロシア全土で聖人の記念日が広く祝われるようになった。 1704年、聖人の遺骸は聖母被昇天教会の祭壇から教会堂本体へと移された。この移送は1704年7月23日、ティホーン都主教の在任中に執り行われた。この出来事を記念する式典は、今日に至るまで厳かに執り行われている。

これこそが聖ゲルマノスの生涯であり、その功績、そしてキリストへの信仰における不屈の精神である。私たちもこの修道者に倣い、その徳高い生涯に倣い、ロシア教会のこの偉大な聖人を常に心の眼に留め、その聖なる御名を呼び求めよう。そうすれば、彼が主に対してあなた方のために祈ってくださるだろう。主には永遠の栄光あれ。 アーメン。

トロパリオ、第4調:

偉大なる牧者に等しく、全宇宙の教師と心を一つにし、 神の教会の熱心な奉仕者であり、キリストの秘儀の敬虔な築き手である。集まった信仰深い民よ、神の知恵に満ちた創設者の聖地、そしてカザンの新たに啓蒙された聖ゲルマン聖人の羊の群れを、歌と賛美をもって称えよう。こう唱えつつ: どうか、あなたの祈りをもって、この修道院とあなたのすべての羊の群れを見守り続け、修道院を聖なる場所として、羊の群れを信仰と敬虔のうちに無傷で守り続けてください。

コンダク、第4調:

祈りに励み、従順の良き管理者となり、忍耐をもって御自身の魂を磨き、謙遜と柔和の行いを全うし、聖職の座を信仰と敬虔さで飾り立てた、聖なる指導者ゲルマンよ: キリスト・神に、この修道院とあなたのすべての羊の群れのために祈り求めてください。彼らはあなたの牧会の確固たる支えであり、あなたに続いて聖職に就く者たちにとって、輝かしい装飾となるからです。

聖ルカの記念日

記念日: 11月6日

私たちの祝福された父ルカは、シチリアの都市タウロメニア[7619] の出身でした。若き頃から彼は熱心に神の教会に通い、聖書の教えを聞くだけでなく、それを実践する者でもありました。 そして、両親が彼のために妻を探そうと考えたとき、彼は夜中に実家を抜け出し、人の足跡も届かない荒野へと向かい、そこで獣たちと共に暮らしました。 14日間の断食を続けた後、彼は神と天使の御訪れに恵まれた。やがて、彼はある修道院にたどり着き、そこで修道士となり、厳しい断食の生活に身を捧げた。3、4日に一度、わずかなパンと水を口にし、ほとんど眠ることもなかった。 こうして彼は一年半を過ごした。その後、ある修道士と共にそこからエトナ山へと移り、そこで修行に励み、その山に生える草薬だけを糧とした。休息も睡眠もほとんど取らず、常に同じ服を着て、裸足で過ごし

[7619] タウロメニアは、シチリア島の東岸にある重要な都市である。

た。　彼には、詩篇全巻を読み終えるまでは自分の独房から出てはならないという規律と慣習があった。通常、彼は第三時までにその規律を完了していた。第三時から第六時まで、尊者は労作に励んだ。そして第六時を過ぎてから、彼はわずかな食事を摂ったが、その間も労作を怠らなかった。　このようにして、彼は偉大な恵みにあずかり、あらゆる知恵を悟ったため、ある人々は不思議に思い、「彼はどうして書物を知っているのか」と口にした。かつて受けた啓示に従い、彼はある場所へ赴き、そこで12人の修道士を集め、彼らの生活環境を整えることに多大な努力を注いだ。　この目的のために、彼はビザンティウムにまで赴き、そこで修道院の運営体制を視察し、現地の修道院長たちとこのことについて話し合った。そこから彼はコリントへと向かい、ある修道院で7ヶ月余りを過ごした後、安らかに主のもとへ帰った。

11月20日

11月7日（旧暦）

聖殉教者イエロンとその仲間たちの殉教

記念日11月7日

聖イエロンの故郷は第二（大）カッパドキア[7620]であり、彼はティアネ[7621]という町で、ストラトニキという名の敬虔で神を畏れる母のもと、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の治世に生まれた。両帝は熱心な偶像崇拝者であり、キリスト教徒を迫害していた。

アルメニアとカッパドキアの住民たちが、皇帝の勅令に背いて偶像への礼拝を拒んでいるという噂が皇帝たちの耳に入ると、彼らは度重なる協議の末、狡猾で異教に忠実な、残忍な二人の男、アグリコラとリシウスという二人を指名し、前者をアルメニアへ、後者をカッパドキアへと派遣した。彼らには、第一に、　偶像への礼拝を拒む現地のキリスト教徒をすべて処刑すること、第二に、体力が強く兵役適格なすべての男性と若者を軍に徴集することを命じた。

カッパドキアに到着すると、リシウスは徴兵に適した人々をあらゆる手段で探し始めた。その過程で、彼はイェロンについても報告を受けた。イェロンは健康で力強く、並外れた勇気を備えている人物だという。リシウスは直ちに兵士たちを派遣し、彼を捕らえて連行するよう命じた。派遣された兵士たちは、イェロンが家にいないことに気づいた。彼は畑で働いていたのである。　兵士たちはそこへ赴き、彼を捕らえようとした。しかし、ヘロンは、兵役のために連行されることを知ると、キリスト教徒にとって偶像崇拝者たちと交わり、共に仕えることは有害であると考え、彼らと行くことを拒んだ。兵士たちは力ずくで彼を連れ去ろうとしたが、激怒したヘロンは手近にあった木を掴んで彼らを殴り始めた。　彼は兵士たちよりはるかに強かったため、彼らは逃げ出し、彼はまるで獅子が子山羊を追い払うかのように彼らを追いかけ回した。彼によって散らされた兵士たちは、しかし、再び一か所に集まった。彼らは、たった一人の男に打ち勝てなかったばかりか、追い払われてしまったことを互いに恥じた。　彼らは、手ぶらで派遣者に帰ることへの恐怖を抱き、互いにこう語り合った。「もしイエロンを連れ戻さずに帰れば、たった一人の男に全員打ち負かされたことで皆から嘲笑されるだけでなく、臆病さゆえに厳しく罰せられるだろう」と。　そこで彼らは仲間を呼び寄せ、さらに大勢になって二度目にイエロンの元へ襲いかかった。これを聞いたイエロンは、十八人のキリスト

[7620] 第二カッパドキア、あるいは大カッパドキアは、小アジア東部の中央部、ユーフラテス川上流の西側に位置する非常に広大な地域である。　かつてカッパドキアはアジアの主要な国家の一つであったが、その後独立性を失い、最終的にはローマ帝国の属州としてその構成の一部となった（紀元17年または18年）。

[7621] ティアナ――カッパドキア南西部に位置する都市。現在はニグリまたはニグデリと呼ばれる。

教徒からなる仲間を集め、彼らと共に近くの洞窟に身を隠し、そこから包囲してきた異教徒たちの攻撃を撃退した。　その間、異教徒たちは指揮官に、イエロンが他のキリスト教徒たちと共に洞窟に立てこもっており、彼らを捕らえることができないと報告した。指揮官はさらに多くの兵士を援軍として送り込んだが、それでも彼らは何もできなかった。イエロンを恐れて、誰も洞窟の入り口に近づくことさえ敢えてしなかったからである。　そこで指揮官は、イエロンの友人であるキリアコという男を彼らのもとへ遣わした。キリアコはその場に到着すると、兵士たちに洞窟から離れるよう勧めた。「イエロンは」と彼は言った、「柔和さと良き助言によってのみ捕らえることができ、決して力では捕らえられないのだ」。　兵士たちが立ち去ると、キリアクはイエロンの元へ入り、権力に抵抗せず、兵役登録に行くよう説得した。穏やかな語りかけで彼はイエロンを落ち着かせ、洞窟から連れ出し、老いて盲目の未亡人である母親のいる家へと連れて帰った。　母親は息子を大声で泣き悲しみ、彼を老後の支えであり、盲目の自分の目の光だと称え、悲しみに満ちた未亡人生活における唯一の慰めを失うことを嘆いた。その間、イエロンを取り囲んでいた兵士たちは、彼に自分たちと共に来るよう強要した。　泣き崩れる母や、そこに集まった隣人や知人たちに別れを告げると、イエロンはヴィクトルという名の親戚を一人連れ出し、二人の近親者であるマトロニアンとアントニウス、そして他の数人の同信者たちに付き添われて、兵士たちと共にメリティナ[7622]へと向かった。一行は日没までにメリティナに到着することができず[7623]、夜が更けた場所で一晩を明かした。夜、至福のイェロンに、白い衣をまとった人物が現れ、穏やかで愛に満ちた声でこう告げた。

「救いよ、イエロンよ、私はあなたに福音を告げ知らせる！　あなたは正しい道を歩んでいる。なぜなら、天の王のために奮闘し、すぐに消え去る地上の栄光のために戦うのではないからだ……まもなくあなたは天の王のもとへ去り、その功績に対して、王から栄誉と栄光を受けるだろう。」

その言葉を聞いたイェロンは、言葉に尽くせないほどの喜びで胸がいっぱいになった。

その姿が消えると、イエロンは目を覚まし、共にいた友人や親族たちに喜びをもってこう告げた。

「私は、神が私に注いでくださる御恵みの秘密を知りました。今や、私は喜びをもって、これから歩むべき道へと進みます。ただ一つの真の宝、ただ一つの真の遺産、ただ一つの真の富、それは天に隠されているものです。それに対し、地上のあらゆる恵みは、それを受ける者に何の益ももたらしません。　*「人が全世界を獲ても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか。また、人は自分の魂と引き換えに、どんな代価を払うことができようか。」*（マタイ16:26）[7624]。私にとって、魂ほど尊く、素晴らしいものはない……　私は人生の大半を、虚しいことに費やしてきましたが、今や神のもとへ向かいます。ただ一つ、私を悩ませているのは、老いて衰え、目の光を失い、助け手も擁護者もいない、私の母の悲しみです。しかし、私はキリストのために死へと向かい、孤児や未亡人の父であるキリストに、私の母を託します」。

そう言うと、イェロンは母を思って数滴の涙を流し、旅立った。メリティナで、聖イェロンは他の三十三人のキリスト教徒と共に牢獄に投じられた。そこで彼は、共に投獄された仲間たちにこう語った。

「友よ、兄弟たちよ、私の助言に耳を傾けてほしい。それは、この世の生活ではなく、来世においてあなた方の役に立つものとなるだろう。　神を畏れる者は皆、この世の一時的なものではなく、来世の永遠の恵みを求めるものです。明日、偽りの異教の神々に犠牲を捧げるよう強制されるという話を、皆さんは聞いたでしょう。従ってはなりません。偶像を拝んではならず、それらに犠牲を捧

7622 メリティナは、アルメニアにある都市で、現在はマラティエと呼ばれる。

7623 当時、都市の門、すなわち都市全体を取り囲む城壁に設けられた入り口は、日没とともに閉ざされ、その後はもはや都市内に入ることはできなかった。

7624 救い主の御言葉。*魂を傷*つけるとは、それを世俗の虚栄に執着させ、永遠の至福の生活を送る能力を失わせ、ひいては地獄での永遠の苦しみへとさらすことを意味する。

げてはなりません。　むしろ、私たちの真の神に賛美の捧げ物を捧げ、神に祈りを捧げよう。神はその祈りを聞き届け、私たちに苦難を毅然として勇敢に乗り越える力を与え、至福の死を授けてくださるだろう。

イエロンの聴衆たちは口を揃えて答えた。

「あなたの言葉は、私たちにとって蜜のように甘美です！あなたは、私たちにとって真に有益で救いとなることを勧めてくださっています。私たちは皆、偶像を拝んで虚しい人生を送るよりは、キリストのために死ぬことを望みます。」

牢屋の看守たちは、囚人たちのこの決意をリジア自身に報告した。翌朝、彼は聖なる殉教者たちを牢屋から自分の元へ連れてきて裁きにかけるよう命じ、彼らを自分の前に立たせ、怒りを込めて尋ねた。

「いったいどの悪魔が、お前たちを権威に反抗し、偉大なる神々に拝礼せよという王の命令に従わないという狂気の決断へと駆り立てたのか？」

「もし、神のみにふさわしい栄光を、人間の手に作られた木や石の造形物に捧げていたなら、我々は確かに狂人であり、悪魔の操り人形であったでしょう」と聖人たちは答えた。　しかし今、我々は賢明に行動している。なぜなら、御言葉によって天と地を創造し、御口の息によってそれらを無から有へと導き出された、万物の創造主に礼拝を捧げているからである。[7625]。

その時、法廷に居合わせた者の一人が、リシヤにイェロンを指さして言った。

「ほら、これがあなたの使者に抵抗した男だ。あなたが耳にしたことはすべて、まさにこの男がやったことだ。」

リシウスはイエロンを見つめ、彼がどこ出身なのかと尋ねた。イエロンが故郷と出生地を告げると、再び彼に問いかけた。

「王の命令に逆らい、自分の肉体の力に頼って、お前を追ってきた兵士たちを打ちのめしたのは、お前か？」

「はい、私です」と、勇敢なイエロンは堂々と答えた。「*『主よ、あなたを憎む者を私が憎まず、あなたに反逆する者を私が忌み嫌わないはずがありませんか』*（詩篇138:21）。だからこそ、私は彼らを殴りつけ、臆病な野ウサギのように追い払ったのです。」

この言葉を聞いて、リシウスは激怒し、イエロンの勇気と力を正当に評価することなく、その不服従を非難してこう言った。

「お前の狂気は、王の命令に背き、私の命令にも従わず、我々が遣わした者たちを打ちのめすという、このような厚かましさにまで至らせた。このため、狂気の頭に従ったお前のその厚かましい手を、肘の付け根まで切り落とすよう命じる。」

するとすぐに、聖ヒエロンの手は切り落とされ、他の聖人たちは、その拷問者の命令により、長い間容赦なく殴打された。

その後、彼らは再び牢獄に投げ込まれ、神の聖なる御名のためにこのような苦難を耐え忍ぶことを許してくださった神に感謝を捧げた。　しかし、その中の一人、前述の聖ヒエロンの親族であるヴィクトルは、受けた拷問で力尽き、将来さらに激しい拷問を受けることを恐れて、捕らえられ拷問を受けたキリスト教徒の名簿を記録していた役人を密かに呼び寄せ、へりくだって自分の名前を名簿から削除するよう懇願した。　囚人名簿から自分の名前を削除するよう、へりくだって懇願し、その見返りとして一つの領地を贈ると約束した。　約束された贈り物に買収された役人は、ヴィクトルの願いを聞き入れ、記録から彼の名前を消し、夜中に彼を牢獄から釈放した。しかし、ヴィクトルは牢獄を出て間もなく亡くなり、こうして領地も、命も、殉教の冠も失ってしまった。

[7625] 殉教者リシウスの答えは、「*主の言葉によって天は造られ、その口の息によってそのすべての軍勢は造られた*」（詩編32:6）という言葉に基づいている。

朝になると、聖ヒエロニムスはこの出来事を知り、果てしない悲しみに満ちて、親族の死を嘆き、声をあげて泣き叫んだ。

「ああ、ヴィクトルよ！　何てことをしたのだ？　なんと重い代償を払ったことか！　なぜ自ら敵の手に身を委ねたのか？　なぜ栄光の冠よりも逃亡の恥を選んだのか？　なぜ永遠の命を、一時的な命と引き換えにしたのか？　なぜ一時的な安らぎを、果てしない喜びよりも重んじたのか？　ああ、取るに足らない傷による一時的な苦しみなど、神の裁きによってお前を待ち受ける永遠の苦しみと比べれば何でもないのに、なぜそれほどまでに動揺してしまったのか！

殉教者の姿から離れた者を悼んだ後、聖ヒエロニムスは、彼に従ってきた二人の親族、アントニウスとマトロニアンを呼び寄せ、こう言った。

「私の最後の遺言に耳を傾け、ここから戻ったら、それを実行してください。ピシディアにある私の財産[7626]は、私の妹テオティミアに譲ります。彼女がそこから生計に必要なものを得て、私の死の日に私のために追悼の祈りを捧げられるようにするためです。　それ以外の私の全財産は、母が未亡人であり、孤児であるという理由から、母に遺す。また、私の切断された手も母に渡し、アンキラ[7627]の首長である高貴なルスティクスに、ヴァディサン[7628]に家を与えてくれるよう、手紙で依頼するよう母に伝えてほしい。そこに私の手を安置してほしい。

このように親族たちに遺言を残した後、至福のイェロンは、殉教による死を静かに待ち望んだ。そして五日目に、リシウスは再び裁判官の席に着き、聖人たちを呼び出して、偶像に拝むよう強要し始めた。　彼は長い間、甘言や脅しを用いて彼らをキリストから引き離そうと努めたが、全く成功しなかった。そこで、まず容赦なく棒で打ちのめすよう命じ、その後、剣による斬首を宣告した。多くの拷問を受けた後、聖なる殉教者たちは死刑を宣告された。　至福のヒエロニムスに率いられ、彼らは処刑場へ向かう道中、喜びに満ちて詩篇の言葉を歌った。

「その歩みが清く、主の律法に従って歩む者は幸いである」（詩編118:1）。処刑場に着くと、彼らはひざまずいて主に祈った：

「主イエス・キリストよ、私たちの魂をお受け入れください！」

その後、彼らの聖なる首は剣によって切り落とされた。アントニウスとマトロニアンは、親族であるイエロンの遺体を引き取ることを許してほしいとリシウスに懇願したが、リシウスが承諾しなかったため、せめてイエロンの切り落とされた首だけでも渡してほしいと懇願した。　彼は、その頭部と同等の重さの金と引き換えにのみ渡すと答えた。アントニオスとマトロニオスは、リシウスが頭部と引き換えに要求したほどの金を持っていなかったことを深く嘆いた。もっとも、殉教者の尊い頭部は、疑いなくそれよりも比べものにならないほど高価な価値があったのだが。　その時、神は、クリサフィオという名の裕福で著名な一人の男の心に、聖殉教者イエロンの首の身代金を支払うよう促された。彼はリシオに、首の重さに相当する量の金を渡し、その首を受け取ると、尊いものとして大切に保管した。　金に目がくらんだリジウスは、聖人の切り落とされた手も探し求め、それに対しても金を得られると期待した。　しかし、アントニオスとマトロニオスはこれを知ると、夜陰に乗じて聖人の手を携えて故郷へ逃げ去り、彼や彼と共に斬首された他の聖殉教者たちの遺体は、他のキリスト教徒たちが密かに運び出し、人目につかない場所に埋葬した。　前述の兄弟たちは、聖ヒエロンの手をその母ストラトニケのもとに運び、聖なる遺骸を彼女に手渡した。母は、キリストのために切断された最愛の息子の手を受け取ると、涙でそれを洗い、母としての愛を込めて口づけし、自らの目に

[7626] ピシディアは、カッパドキアの南西に位置する、ローマ帝国の小アジア内陸部の属州である。ここで、聖使徒パウロはキリスト教を宣教した。

[7627] アンキラ――ローマ帝国の小アジア属州ガラティアの主要都市で、現在のアンゴラにあたる。ガラティアは小アジア半島のまさに中心に位置していたが、アンキラは同属州の北西の辺境にあった。

[7628] 「ヴァディサノムト」と呼ばれるものが何であったかは不明である。これは、カッパドキアにある都市ヴァサドン、あるいはヴァルヴァドンと同じものであると推測されている。

当てた。　息子を喜びつつも、同時に自然な悲しみに身を委ねながら、彼女は涙ながらにこう語った。

「愛しいわが子よ、私はあなたを健やかに生み落としたのに！　今、私の手元にあるのは、あなたの亡き体のほんの一部に過ぎないが、それゆえに、私の心にはなおさら大きな悲しみが湧き上がる。ああ、わが子よ！私は病みながらあなたを産み、苦労して育て上げ、老後の支え、病の時の助け、悲しみの時の慰めとしてあなたを頼りにしていたのに、その代わりに、私の盲目の目の光であるあなたを失ってしまった。　しかし、なぜ私は泣いているのだろう。私は喜ぶべきであり、殉教者の母であること、自分の胎の果実を神に捧げたこと、そして愛する息子であるあなたが、普通の人々が死ぬのとは異なる死に方をしたことを喜ぶべきではないか。あなたが迎えたような殉教の死は、多くの偉大な恵みへと導くのだから！　しかし、私のもとを去っても、私を完全に見捨てないでください、わが子よ。そして、あなたがその血を流して仕えた主の御前で、あなたの祈りによって私のために執り成し、主が私をも、この苦難に満ち、あらゆる災いに見舞われる人生から、一日も早く解放してくださいますように。

この嘆きの後、ストラトニカは聖人が自ら指し示した場所にその手を置き、聖人が遺したすべての遺言を遂行した。　そして、聖ヒエロンの首に金銭を支払って身代金を払ったクリサフィオスは、しばらくして、聖なる殉教者たちが斬首された場所に教会を建て、聖三位一体を賛美しつつ、その中に殉教者の首を尊く安置した。

コンダク、第8調：

殉教者の御姿は清らか、その軍勢は光を放ち、知恵をもって我らの元へ下り、今日、教会を驚くべき光で照らした。それゆえ、彼らの尊い記念を祝う我らは、救い主よ、あなたに願う：彼らの祈りによって我々を災いから救い出し、我らがあなたに「ハレルヤ」と歌えるように。

聖殉教者メラシッポス、カシニア、アントニノスの記念日

記念日：11月7日

聖殉教者メラシッポス、その妻カシニア、そして息子のアントニヌスは、背教者ユリアヌスの治世下[7629]、アンキラの町[7630]で殉教した。アントニヌスは牢獄に投じられ、メラシッポスとカシニアは絞首刑に処された後、拷問者たちは彼らの遺体を削り、火で焼いた。　その際、聖カシニアは乳房を切り取られ、聖メラシッポは膝まで足を切断された。　こうした拷問が行われている最中、彼らの息子アントニヌスが牢獄から連れてこられた。両親が受ける拷問を目の当たりにすると、彼は両親を慰め、切り落とされた身体の一部を手に取り、それに口づけをした。このような残酷な拷問の中で、メラシッポスとカシニアは、その義なる魂を主の御許に委ねた。その時、アントニヌスはユリアヌスの顔に唾を吐きかけた。　残酷な拷問官は、アントニヌスを絞首刑にし、その体を削るよう命じた。彼の脛骨を砕き、足に重い石を吊るした後、木から降ろして、赤熱した鉄の格子の上に置いた。これらすべての拷問の後、殉教者の頭髪を刈り落とし、首に石を縛り付けて街中を引き回した。　これだけでは満足せず、彼は軍司令官アグリッピヌスの元へ送られた。アグリッピヌスは、彼を燃え盛る炉に投げ込み、その後、野獣の餌食にするよう命じた。しかし、最初の拷問でも、二番目の拷問でも、聖人は無傷のままであった。　こうした拷問を目撃した四十人の若者たちは、キリストを信じるよ

[7629] ユリアヌスは361年から363年まで在位した。
[7630] アンキラはフリギア（小アジア西部）の主要都市であった。

うになり、そのために斬首された。聖アントニヌスは、赤熱した鉄の床に横たえられ、鉄の棒で殴打された。しかし、ここでも聖人は無傷のままであったため、拷問官は彼の首を刎ねるよう命じた。

聖殉教者アウクタ、タウリオン、テッサロニキアの記念日

記念日：11月7日

聖殉教者テッサロニキアは、ある偶像崇拝の祭司の娘であった。　キリスト教の教えを受け、洗礼を受けて真のキリスト教徒となった彼女は、キリストを否定し偶像を崇拝するよう父から強要されたにもかかわらず、その言葉に従わなかった。そのため、不信心な父は彼女を裸にし、杭で激しく打ちつけ、肋骨を砕くほどに痛めつけた。　その後、父は彼女を家から追い出し、相続権を剥奪したため、彼女は母から与えられたわずかな資金で、町の外で暮らすことを余儀なくされた。この司祭の所業を知った二人の男、アウクトとタウリオンは、彼を非難した。　しかし、彼はその国の統治者のもとへ行き、彼らが聖テッサロニキアを擁護していると告発した。統治者は、キリストを告白したとして彼らを拷問にかけた。彼らは石で打たれ、火の中に投げ込まれ、ついには互いに縛り合わされて湖に投げ込まれたが、聖なる人々は無傷のままであった。　その後、彼らは剣で斬り殺された。テッサロニキアもまた、キリストへの信仰告白のために拷問にさらされ、そのために息を引き取った。彼女の遺体は、聖殉教者アウクトスとタウリオンと共に、アンフィポリス[7631] に栄誉をもって葬られた。

聖ラザロの記念日

記念日：11月7日

聖ラザロは、小アジアのマグネシアという町で生まれた[7632] 。彼の誕生に先立ち、神はこの世に現れるこの「灯」を、特別な奇跡によって予告された。彼の実家を包み込んだ光は極めて強烈であったため、そこにいた女性たちは皆逃げ出し、胎内に恵まれた子を抱く母ただ一人だけが残った。生まれた直後、彼は真っ直ぐに立ち上がり、胸の前で手を組んで東の方角に向かって祈りの姿勢をとった。　幼少の頃から、彼は悪意がなく、柔和で、慈悲深く、貧しい人々への愛に満ちていた。若き頃、教養を身につけていたものの、あらゆる世俗の快楽を避け、自身の魂の敬虔な志に従い、エルサレムの聖地への巡礼に出かけ、そこで聖サヴァの修道院に入門した。　そこで10年間を過ごし、従順さとあらゆる美徳において他の修道士たちを凌駕し、エルサレム総主教によって司祭の位に叙階された。聖なる四旬節の間、彼は何も持たずに修道院を出てある山へ赴き、荒野の植物を糧として過ごした[7633] 。 そこで彼は、故郷へ戻るよう命じる声を聞いた。帰路の途中、敵対する幽霊たちの妨害に遭遇したが、それらを打ち破った。故郷に戻ると母と再会したが、彼女のもとには留まらなかった。隠遁生活を志したラザロは、エフェソスからほど近い、人の住まないガリシイ山に定住した。ここで、祈りの最中、彼はある日次のような幻視に打たれた。彼は、天へと昇る火の柱を目撃し、その周囲には多くの天使たちが取り囲み、次のように歌っていた。　「神よ、よみがえり給え。その敵は散らされんことを！」。彼はこれを天からの示しと受け止め、ビザンツ皇帝コンスタンティノス・モノマコス[7634] の支援を得て、その場所にキリストの復活に捧げる教会を建立した。 聖ラザロは教会のそば

[7631] 東マケドニアにある都市。

[7632] マグネシアは、小アジア北西部のヘルメ川沿いにあるリディアの都市である。

[7633] 通常、修道士たちは聖四旬節の「乳断ちの週」に修道院を離れ、その前に別れの儀式を行っていた。このことから、この日曜日は「別れの日」と呼ばれるようになった。修道士たちは「ラザロの土曜日」に修道院へ戻ってきた。

[7634] コンスタンティン・モノマフは1042年から1054年まで在位した。

に柱を立て、その上で断食と祈りの修行に励み、酷暑や寒さ、その他柱上生活に伴う苦難に耐え抜いた。神は彼に奇跡と預言の賜物を授けたため、彼の導きを渇望する敬虔な人々が彼のもとに集まるようになった。　神は彼に死を予告されていたが、兄弟たちは、自分たちの益のために神に寿命の延長を願い出てもらうよう彼に懇願し、神は彼にさらに15年間生きられるよう約束された。15年が経過すると、彼の誕生の時と同様に、天の光が彼の柱を包み込んだ。　彼が亡くなり、兄弟たちが「遺言を残してくれなかった」と彼の遺体の上で泣いていると、彼は起き上がり、まるで生きているかのように彼らに遺言を残した。その後、横になったが、兄弟たちの願いに応じて再び起き上がり、その遺言書に署名をした。 彼は72歳で[7635] に逝去し、柱の中に埋葬され、死後、彼の聖遺物から生じた多くの奇跡的な癒やしによって称賛された。

11月21日

11月8日（旧暦）

聖大天使ミカエルおよびその他の天の無形の軍勢の祝日

記念日 11月8日

聖なる教会は、異端者や偶像崇拝者たちによって確立された、古くからの不敬虔な天使崇拝を拒絶した後、神の霊感を受けた教父たちの伝承に従い、聖なる天使たちの祝祭を敬虔に祝うことを受け入れた。 旧約聖書の時代、人々は自らの創造主である神から背き、 、神の被造物や自らの手による作品に崇拝を捧げるようになり、目に見える被造物の姿に似せて偶像を作り、太陽、月、星々に犠牲を捧げた。彼らは、それらの中に生きた魂が宿っていると信じていたからである。　この表現は出エジプト記20章に由来する。*「あなたは、天にあるもの、地にあるもの、地の下の水の中にあるものの、いかなる像も造ってはならない」*――当時、人々は天使たちにも崇拝を捧げ、犠牲を捧げていた。これについては『列王記』に次のように記されている：列王記下 23 *「そして、ユダヤの王たちが、ユダヤの町々やエルサレムの周辺にある高き所で香を焚くために任命した祭司たち――すなわち、バアルや太陽、月、星座、そして天のすべての軍勢に香を焚いていた者たち――を解任した」*。　ルカ2章――*「すると、突然、天使とともに大勢の天の軍勢が現れ、神を賛美し、叫んでいた」*、すなわち天使たちのことである。なぜなら、福音書に記されているように、彼らこそが天の軍勢だからである。このような誤った天使崇拝は、聖使徒たちの時代に広く行われていた。　聖使徒パウロは、このような誤った崇拝について次のように述べている。

コロサイ人への手紙 2:18–19 – *「だれも、独断的な謙遜や天使への奉仕によって、あなたがたを惑わしてはならない。彼らは、自分が見たことのないことに干渉し、肉的な心で無分別にも高慢になり、頭である方、すなわちキリストに従わないのである」*。　というのも、当時、外見上は謙遜であるように見せかけながら、自らの禁欲や清らかな生活によって天使たちに倣おうと高慢に思い込んでいた異端者たちがいたからである。彼らは、神ご自身と同じように天使たちを崇拝するよう教えた。　その後、別の異端者たちが現れ、天使こそが目に見える被造物の創造者であり、無形の存在として、神の御子キリストよりも高く、崇拝に値する存在であると説いた。　また、大天使ミカエルをユダヤ人の神と呼んだ者たちもいた[7636] 。最後に、魔術にふけり、人々を惑わした者たちは、天使の名

[7635] 彼の安らかな死は1053年にさかのぼる。

[7636] 上記の異端者たちについて、聖エピファニオス・キプロスは著書『異端について』の中で次のように記している。「彼らはサトルニリアンと呼ばれていた。これは、この異端の始祖であるサトルニルに由来するものである。　サトルニル

を借りて悪霊を呼び出し、それらを天使と呼んで仕えていた。　とりわけ、このような異端は、ラオディキア大司教区に属するコロサイ[7637]で蔓延し、そこでは多くの人々が、偶像崇拝に似たこのような不敬虔な天使崇拝を密かに行っていた[7638]。しかし、このような誤った天使への崇拝が非難され、拒絶されると、天使たちを神の僕であり、人類の守護者であるとして、敬虔かつ正しい崇拝と祝祭が確立された[7639]。そして、かつて天使への崇拝が秘密裏に、かつ不敬虔に行われていたそのコロス地方において、天使の総会の正統な祝典が公然と行われるようになり、天使たちの長である聖大天使ミカエルの名に因む壮麗な教会が建てられるようになった。　こうして、ホナでは、奇跡を起こす泉のほとりに、壮麗で実に美しい教会が建てられ、その教会において、聖アルキッポスに聖大天使ミカエルご自身が現れた。聖なる天使たちの集会の祝典は、世界の創造から数えて最初の月である3月から数えて9番目の月、すなわち11月に執り行われることが定められた。これは、聖ディオニシオス・アレオパゴス――　聖使徒パウロの弟子である聖ディオニシオス・アレオパゴスは、第三の天にまで引き上げられ、そこで聖なる天使たちの位階の違いを目の当たりにし、これを弟子であるディオニシオスに説明した。　コリントの信徒への手紙二12―*「キリストにあるある人を知っている。その人は、十四年前（肉体の中にいたのか、それとも肉体から離れていたのか、私にはわからない。神のみがご存じである）、第三の天にまで引き上げられた*」。

九つの天使の階級は三つの階層に分けられ、それぞれに最高、中位、最下の三つの階級がある。

第一の、すなわち最高位であり、至聖なる三位一体に最も近い階層を構成するのは、*セラフィム、ケルビム、そして御座である。*

創造主である神に最も近い位置に立つのは、*神を愛する六つの翼を持つセラフィムたちである*。預言者イザヤが見たように、彼はこう語っている（イザヤ書6章）：*「その周囲にはセラフィムたちが立っていた。彼ら一人ひとりは六つの翼を持っており、二枚の翼で自分の顔を覆い、二枚の翼で自分の足を覆い、二枚の翼で飛んでいた*」。　彼らは、次のように記されている御方のすぐ前に立つ者として、火のような姿をしている。ヘブライ人への手紙12章――*「私たちの神は、焼き尽くす火だからである*」。

そのような栄光の御前に立つセラフィムは、火のような姿をしている。それは次のように記されている通りである：

ダニエル書7章――*「やがて、私は、玉座が置かれ、古き日からの方が座しておられるのを見た。その衣は雪のように白く、その頭の髪は清らかな羊毛のようであった。その玉座は炎のようで、*

はシリアのダンフィス近郊に住み、そこで初めて自らの教義を広めた。彼の精力的な助手であったヴァシリドは、エジプトでこの教義を広めた。天使に関する彼らの教義は、次のように要約される。七人の天使が世界と、世界にあるすべてのものを創造した。　人間の創造は次のように行われた。天使たちは集まり、上空から降りてきた輝かしい姿に似せて、人間を構想し、共同で創造した……しかし、人間が創造されたとき、天使たちは自らの無力さゆえに、その創造を完成させることができなかった。　人間は地上に横たわり、這う虫のように卑しめられていたが、やがて至高の力が身をかがめて憐れみ、自らの姿と形のために、慈悲をもってその力の火花を送り、それによって人間を回復させ、生気を取り戻させたのである。この火花こそが人間の魂であり、それは必ずや救われなければならないものである」。

7637 *コロッソスは*、古代フリギア（小アジア）のリクス川（メアンドロス川の支流）沿いにあった人口の多い都市である。　西暦65年、この都市は近隣のラオディキアやイェラポリスとともに、恐ろしい地震によってほぼ完全に破壊されたが、その後再建され、12世紀まで繁栄した。その後、ホニと呼ばれた。

7638 ラオディキア公会議の第35条から明らかなように、この規定は、神ではなく、あたかも世界の創造主や支配者であるかのように天使のみに祈りを捧げる異端者たちを非難するものである。

7639 第35条において、天使への不敬な崇拝が拒絶され、正しい崇拝と天使たちの祝祭が定められたラオディキア地方公会議は、ローマ教皇聖シルヴェストルの時代、第1回ニカイア公会議の数年前に行われた。　このラオディキア公会議は319年に開かれたとされるが、他の説によれば320年または321年であった。同公会議には32人の司教が出席し、ラオディキア都主教ヌネキオスが議長を務めた。

その車輪は燃え盛る火のようであった」。 出エジプト記　24章 – *「山頂にある主の栄光の姿は、イスラエルの子らの目の前には、焼き尽くす火のようであった*」。

詩篇103篇――*「あなたは御自分の天使たちを霊とし、御自分のしもべたちを燃え盛る火として造られる*」。彼らは神への愛に燃え、他の人々にも同じ愛を抱かせる。そのことは彼らの名そのものが示している。なぜなら、「セラフィム」とはヘブライ語で「燃え盛る者」を意味するからである。

セラフィムの次に、近づきがたい光の中に住まわれる全知の神の御前に、言葉に尽くせぬ輝きを放つ多眼の*ケルビム*が立っている。彼らは他の下位の位階よりも、神を知る光、神の奥義と神の深遠な知恵の知識によって常に輝き、自らも啓発されつつ、他者を啓発している。　彼らの名である「ケルビム」は、ヘブライ語からの翻訳によれば、「多くの知恵」あるいは「知恵の注ぎ」を意味する。なぜなら、ケルビムを通じて他者へ知恵が注がれ、神を視るため、また神を知るための知的な眼の啓発がもたらされるからである。

次に、高く聳え立つ玉座に座しておられる御方の前には、（聖ディオニシオス・アレオパゴスが呼ぶところの）「神を宿す」*玉座*が並んでいる。なぜなら、それらの玉座は（聖マクシムス・殉教者が記すように）理性的であるため、神はそこに理性をもって安息しておられるからである。　それらが「神を宿す」と呼ばれるのは、本質によるのではなく、恵みと彼らの奉仕によるものである。一方、イエス・キリストの肉体（聖バシレイオス大聖人が記すように）は、神である御言葉そのものと不可分につながっているため、本質的に「神を宿す」と呼ばれるのである。　また、玉座は本質的に「神を宿す」のではなく、その奉仕のために与えられた恵みによってそう呼ばれるのである――それは、神秘的かつ不可解な形で神をその内に宿しているからである。　神は、不可解な方法でそれらの玉座に鎮座され、ダビデが語ったように、御自身の義なる裁きを行われる（詩篇9:5）――「あなたは私の裁きと私の訴えを裁かれた。あなたは義なる裁き主として玉座に着かれた」。

それゆえ、神の正義は主に彼らを通して現されるのである。彼らは神の正義に仕え、それを賛美し、地上の裁判官たちの玉座（[7640] ）に正義の力を注ぎ出し、王や支配者たちが正しい裁きを行うのを助けるのである。

中位の階層にも、三つの聖なる天使の位階、すなわち「*主権*」「*力*」「*権威*」が存在する。

「*主権*」と呼ばれるのは、彼ら自身が自由でありながら、これらの天使の位階に従う他の者たちを支配しているからである。聖ディオニシオス・アレオパゴスがいっているように、彼らは奴隷的な恐れを捨て去り、自発的かつ喜びをもって絶えず神に仕えている。　また、彼らは、神によって地上に置かれた権威者たちが、委ねられた領域を適切に統治できるよう、分別ある統治と賢明な管理のための力を授ける。さらに、彼らは、感覚を制御し、自分の中にある不適切な欲望や情熱を鎮め、肉体を霊に従わせ、自らの意志を支配し、あらゆる誘惑に打ち勝つことを教える。

神聖な力に満ちた*彼らは*、強大で力強い、至高にして全能なる主の御心を即座に遂行する。彼らは偉大なる奇跡をなし、その奇跡を行う恵みにふさわしい神の御使いたちにも、同じ奇跡を行う恵みを授ける。それによって、彼らはあらゆる病を癒やし、未来を予言することができるのである。聖なる力たちは、労苦し、自分に課せられた何らかの務めを背負って重荷に苦しむ人々をも助け――それこそが彼らの名である「力」の由来であり――弱き者の弱さを担う。　また、聖なる力たちは、一人ひとりの忍耐を強め、　悲しみの中で力尽きることなく、堅固な精神をもって、謙虚に、すべてを私たちの益となるよう整えてくださる神に感謝しつつ、あらゆる試練を勇敢に耐え抜くことができるようにします。

[7640] 「地上の裁判官の玉座」とは、地上の裁判官の権限の限界を表す比喩的な表現である。

「*権威*」と呼ばれるのは、悪魔に対する権威を持ち、悪霊の力を抑え込み、悪霊が人々に仕掛ける誘惑を退け、悪霊が望むほどに誰かに害を及ぼすことを許さないからである。　権威たちは、善良な修行者たちを霊的な行いや労苦において支え、彼らが霊的な王国を失わないよう守り抜く。*また*、情欲や欲望と闘う者たちには、邪悪な思いや敵からの誹謗中傷を追い払い、悪魔に打ち勝つ手助けをする。

下位の階層にも、三つの位階がある。すなわち、*初等天使*、*大天使*、*そして天使である*。

「*原初*」と呼ばれるのは、下位の天使たちを統率し、彼らを神の命令の遂行へと導くからである。　彼らにはまた、宇宙の統治と、すべての王国や公国、土地、そしてすべての民族、部族、言語の守護も委ねられている。なぜなら、それぞれの王国、部族、民族には、天上の位階である「原初」から、その国全体を司る独自の守護者兼統治者が与えられているからである[7641]。　さらに、この天使の位階の務め（聖グリゴリオス・デュオロゴスによる説明によれば）は、人々に、それぞれの支配者に対してその地位にふさわしい敬意を払うよう指導することにある。　最後に、この位階の天使たちは、ふさわしい人々を様々な名誉ある地位に就かせ、彼らが権力を、自らの利益や便益のためでも、虚栄や空しい名声のためでもなく、神の栄光のため、神の聖なる栄光を広め増大させるため、そして隣人の利益のために――すなわち、すべての配下の者たちの共通の必要に奉仕するために――受け入れるよう導くのである。

*大天使*とは、偉大で栄光に満ちた御業を宣べ伝える偉大な伝道者たちのことである。　彼らの奉仕（偉大なるディオニシオス・アレオパゴスが述べているように）は、預言、知識、そして神の御心に対する理解を明らかにすることにあり、彼らはこれらを上位の位階から受け取り、下位の位階である天使たちに伝え、そして天使たちを通じて人々に告げ知らせるのである。　また、聖グリゴリオス・ディオスロスは、大天使たちが人々の聖なる信仰を強め、聖なる福音の知識の光で彼らの心を照らし、敬虔な信仰の秘跡を明らかにすると述べている。

天使たちは、天上の階層においてすべての位階よりも低く、人間に最も近い存在である。彼らは神のより小さな神秘と御心を告げ知らせ、人々が神のために徳高く、義にかなった生活を送るよう導く。　彼らは、私たち一人ひとりの信者を守るために配されています。徳ある人々を堕落から守り、堕ちた人々を立ち上がらせ、たとえ私たちが罪を犯したとしても決して私たちを見捨てません。なぜなら、私たち自身が望む限り、彼らはいつでも私たちを助ける用意があるからです。

しかし、すべてのより高い天上の位階は、総称として「天使」と呼ばれています。　彼らはその地位や神から与えられた恵みによって異なる名称（例えば、セラフィム、ケルビム、玉座の天使、その他の位階など）を持っていますが、一般的にはすべて「天使」と呼ばれます。なぜなら、「天使」という言葉は存在そのものの名称ではなく、奉仕の名称だからです。聖書にはこう記されています：

「彼らは皆、救いを相続すべき者たちのために奉仕するために遣わされた、奉仕の霊ではないのか」（ヘブライ人への手紙 1:14）

彼らの奉仕は多様で均一ではなく、各階級には独自の奉仕がある。なぜなら、至高の創造主は、御自身の御計画の奥義をすべての人に等しく明らかにされるのではなく、上位の者を通じて下位の者を啓発し、御意志を明らかにしてその実行を命じられるからである。これは預言者ゼカリヤの書から明らかである。　そこには、ある天使が預言者と語り合った後、別の天使に出会い、その天使から再び預言者のもとへ行き、エルサレムの将来の運命を明らかにするよう命じられたことが記されている：　*「すると、わたしと語っていた天使が出て行くと、別の天使が彼に向かって歩いて来て、彼に*

[7641] あらゆる民族や王国にはそれぞれの天使がいるという教えは、預言者ダニエルの言葉（ダニエル書10:13）に基づいており、そこにはペルシャとユダヤの王国の天使について記されている。

言った。『急いで行き、この若者（すなわち預言者ザカリヤ）*にこう告げよ。「エルサレムは、その中に住む多くの人々と家畜のために、その周辺を埋め尽くすようになる。」　『わたしは彼のために――主は言われる――その周囲に火の壁となり、その真ん中で栄光を現す』」*（ザカリア書2:3–5）。これについて論じながら、聖グレゴリウスは次のように述べている：

「ある天使が別の天使に*『行って告げよ』*と言うとき、ある天使たちが他の天使たちを遣わし、下位の天使たちは遣わされ、上位の天使たちは遣わすのであることに疑いの余地はない」[7642]。

同様に、ダニエルの預言においても、ある天使が別の天使に、預言者に幻を解き明かすよう命じていることが記されている（ダニエル書8:16）。ここから、上位の位階にある天使たちが、創造主の御心と御意図を、下位の位階にある天使たちに明らかにし、彼らを啓発して人々の元へ遣わすことが明らかである。

正教会の戦いの教会は、天使たちの助けを必要としているため、当然のことながら、11月の8日目、すなわち　第九の月である。というのも、これら九つの天使階級はすべて、主の最後の審判の日に集まるからであり、その日は教会の神聖な教師たちによって「第八の日」と呼ばれている。彼らは、七千年の終わりに、いわば「第八の日」が訪れると説いているからである。

ダニエル書8 – *「すると、私はウライの真ん中から人の声を聞いた。その声は叫んで言った。『ガブリエルよ！　この幻を彼に説明せよ！』」*

マタイ25章 – *「人の子がその栄光のうちに、すべての聖なる天使たちを伴って来るとき、その栄光の御座に着くであろう。」* マタイ24章 – *「そして、御自分の天使たちを、轟くラッパの音とともに遣わし、四方の風から、天の果てから果てまで、御自分の選ばれた者たちを集める」*すなわち、東、西、北、南からである。

ああ、もしその時、彼らが神の選ばれた者たちと、彼らと共に栄光を称えて祝う私たちをも、その祝宴に集めてくれたなら！

上記の九つの天の天使の階級すべての上に、神によって聖なる大天使ミカエルが階級長および指導者として立てられている。彼は神の忠実な僕である[7643]。サタンが破滅的な高慢に陥り、神から背き、深淵へと堕ちた際、彼はすべての階級と天使の軍勢を集め、大声でこう叫びました：

「さあ、私たちの創造主の御前に正しく立ち、神に逆らうことを考えてはならない！」　我らと共に創造され、今に至るまで我らと共に神の光に与っていた者たちが、どのような苦難を被ったか、心に留めよう！彼らが傲慢のゆえに、いかにして突然光から闇へと堕ち、高みから深淵へと投げ落とされたか、心に留めよう！天から昇る明けの明星[7644]　がいかにして天から落ち、地上に打ち砕かれたか、心に留めよう！[7645]

[7642] 聖グリゴリオス・ドゥオスロス。『福音書注解』第4巻。

[7643] 言葉の意味から言えば、ミカエルとは、並外れて比類なき霊的な力を備えた天使である。ダニエル書においては、彼はユダヤ民族の特別な守護者かつ庇護者として描かれている（ダニエル書10:13、21、12:1）。　聖ヨハネ・テオロゴスの黙示録（ギリシャ語で『アポカリプシス』）において、大天使ミカエルはキリスト教徒の守護者であり、竜とその天使たちを打ち倒す者として描かれている。「*天で戦いが起こった。　ミカエルとその天使たちは竜と戦った。そして、悪魔、サタンと呼ばれる古の蛇である大竜は、その天使たちと共に地上へ投げ落とされた*」；その後、その悪意から、彼はキリストの教会を害し始め、今も聖徒たちとの戦いを続けている（黙示録12:1–17）；　しかし、信者たちへの慰めとして、『黙示録』には、私たちの救いの敵とのこの古来からの戦いが、小羊の完全な勝利をもって終わる（黙示録19:1–21、20:1–15）によって完全に勝利に終わるということ、そして、蛇との戦いにおいて、私たちは聖大天使ミカエルを筆頭とする最高の守護者たちと庇護者たちを持っていることが示されている。正教会における聖大天使ミカエルの崇敬は、極めて古くまで遡る。

[7644] 「明けの明星」とは、朝の暁のことである。ここで「明けの明星」とは、堕落した天使、すなわちサタンを指す。サタンは、目に見える世界が創造される以前に、神によって、まるで昇りゆく澄み切った朝の暁のような明るい霊として創造されたが、高慢になり、神に反逆したため、深淵へと堕ち、永遠の裁きを受けたのである。

[7645] 聖グリゴリオス・ドゥオスロス。『福音書注解』第4巻。

こうして天使たちの全集会に向けて語りかけると、彼は最前列に立ち、セラフィムやケルビム、そしてすべての天の位階と共に、至聖なる、同質にして不可分なる三位一体、唯一の神を賛美し始め、次のように荘厳な賛歌を唱和した：

「彼らは互いに呼びかけ合い、こう言った。『聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主よ。全地は主の栄光に満ちている』」（イザヤ書6:3）。 このような聖なる天使たちの集まりは、「天使の集会」と呼ばれるようになった。なぜなら、彼らは共に、また声を揃えて、父と子と聖霊、すなわち聖三位一体を賛美するからである。地上の私たちからも、御方に永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

天の軍勢の総司令官たちよ、常に不適格な私たちはあなた方に懇願します。どうかあなたの祈りによって、あなたの栄光の無形の翼の覆いで私たちを守り、熱心にひれ伏し、叫び求める私たちを保ってください。天の軍勢の指揮官として、私たちを災いから救い出してください。

コンダク、第2調：

神のアルキストラティスよ、神の栄光の奉仕者よ、天使たちの長であり、人々の導き手よ、私たちのために有益なことを願い、大いなる憐れみをお与えください。無形のアルキストラティスとして。

11月22日

11月9日（旧暦）

尊き母マトローナの生涯と功績

記念日 11月9日

聖マトローナは、パンフィリアのペルゲ[7646] で、敬虔な両親の間に生まれました。成人すると、彼女はドミティアヌスという名の高名で由緒ある人物と結婚し、テオドティエと名付けた一人娘の母となりました。

ある日、マトローナの夫は彼女と共にビザンティウムへ赴きました。そこでマトローナは、神の聖堂を巡り、その中で熱心に神に祈りを捧げているうちに、エウゲニアという名の乙女と知り合いました。彼女は断食と苦行によって処女性を守り、昼夜を問わず祈りに励んでいました。

エウゲニアの生き方に倣い、マトローナは教会を離れず、朝から晩までそこで祈りを捧げ、夕方には家に戻った。そして早朝には再び教会へ祈りに行き、節制と断食によって、若さあふれる自らの肉体を律していた。 当時、彼女は二十五歳であり、神がご自身の御心に従って、彼女を結婚の束縛から解き放ち、妨げられることなく主に仕えることができるようにと、熱心に神に祈っていた。夫のドミティアヌスは、妻が毎日早朝に家を出て、夕方になってようやく帰ってくるのを見て、彼女

[7646] ペルガ——小アジア南部のパンフィリア地方にある都市で、ケストラ川の右岸に位置し、古代にギリシャ・ローマの異教の女神アルテミスの神殿で有名であった。ローマ時代後期、ペルガは同州の行政の中心地であった。現在、この場所にはトルコの都市ベルガモがある。

が祈りのためではなく、何か悪いことをしに行っているのではないかと疑い始めた。そのため、彼は彼女に怒りを抱き、家から出させなくなった。　マトローナは涙ながらに、教会へ行くのを妨げないでほしいと懇願したが、願いは聞き入れられず、そのため深く嘆いた。彼女は*「不義の天幕に住むよりは、神の家の敷居に立つほうがましである」*（詩篇83:11）と願っていたからである。　ある日、マトローナは夫に、祈りのために教会へ行くことを許してくれるよう懇願した。急いで聖使徒教会に到着すると、　彼女は神の前で心を打ち明け、神に心を込めて祈り、神が彼女を、神への思索の大きな妨げとなっていたその重いくびきから解放し、虚しく騒がしい世から救い出し、彼女がただ神の御心にかなうことを妨げられることなく行える、静寂な生活へと導いてくださるよう願った。　彼女は一日中、そのような熱心な祈りに身を委ねていた。

夜も更けてきた頃、教会の門番が、教会の扉を閉めるために皆に帰るよう告げた。そこで、聖女マトローナも教会から出てきたが、彼女は家に帰ることを望まず、教会の玄関先に留まった。　そこで彼女は、スザンナという名の一人の乙女に出会った。スザンナは幼い頃からキリストに身を捧げ、断食と祈りの中で教会のそばで生活を送っていた。スザンナと知り合ったマトローナは、彼女の修道室を訪れ、一晩中彼女と語り合い、自分自身と自分の人生についてすべてを語った。　スザンナは彼女を慰め、ご自身の御心によって人々の救いを整えてくださる主に希望を置くよう説得した。

「主は、そのような人の歩みを確かなものとし、その道を喜ばれる」（詩篇36:23）と彼女は言った。

スザンナとのこの会話によって、マトローナは神への愛をさらに燃え上がらせ、夫から逃げ出し、彼から身を隠して密かに神に仕えることを決意した。

朝になると、マトローナは前述のエウゲニアのもとへ行き、自分の決意を打ち明けた。

エウゲニアは彼女にこう言った。

「姉妹よ、まずはまだとても幼いあなたの娘、テオドティアの居場所を確保しなければなりません。彼女が母親なしでどうやってやっていけるか、考えてみてください。」

マトロナはこう答えた。

「私の娘テオドティアは、神と母スザンナにお任せします。私は荒野へ行き、そこで神に導いていただくつもりです。」

密かに家から娘を連れ出し、彼女はそれを聖女スザンナに託し、フェオドティアを自分の子供として受け入れ、主を畏れる心を持って育ててくれるよう懇願した。　スザンナは、マトローナが神への愛に熱く燃え、沈黙の生活への揺るぎない志に満ちているのを見て、彼女からその子を自分の娘の代わりに引き取り、マトローナは神に、正しい道へと導いてくださるよう祈り、詩篇の言葉をもってこう語りかけました：

「主よ、私が歩むべき道を、私に示してください」（詩編142:8）。

疲れから少しうたた寝をしたマトロナは、夢の中で次のような幻を見た。彼女は、自分を追いかけてくるある人物から逃げているように見えた。その人物が追いつこうとしたとき、彼女は修道士たちのところへ駆け込み、彼らは彼女を追跡者から隠してくれた。　マトローナはこの幻を、自分が男性の装いをして、しばらくの間男子修道院に入るべきだというしるしだと解釈した。そこなら、夫や知人全員から身を隠すことができるからである。　マトローナは髪を切り、宦官の服を身にまとい、聖エウゲニアと共に聖使徒教会へ向かった。そこで祈りを捧げた後、自分の意図が神の御心にかなうかどうかを知りたくて聖福音書を開くと、そこに次のような言葉が記されていた。　*「わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従いなさい」*（マタイ16:24）。

この言葉の中に、神が彼女の助け手となってくださるという希望を見出したマトローナは、エウゲニアに口づけをし、彼女と別れて、聖ヴァッシアンの修道院へ向かった。そこで彼女は宦官として受け入れられた。名前を尋ねられると、彼女はバビロと名乗った。　修道者たちの仲間に受け入れられた彼女は、徳高く修道生活を送り、謙虚に服従を果たし、断食と徹夜祈祷によって肉体を鍛え上

げ、常に祈りに身を捧げた。マトローナは、自分が女性であることがバレないよう細心の注意を払い、そのため深い沈黙を守り、誰からも距離を置いていた。　しかし、修道院の兄弟たちは皆、彼女の偉大で徳高い生き方に感嘆し、その功績を称え、彼女を完璧な修道士と見なしていた。

こうして聖マトローナは、修道院でかなり長い間、修道士たちの間に身を置き、まるで星々の真ん中で月が輝くかのように、その徳によって輝き続けていた。ある日、彼女は他の修道士たちと共に庭で働いていた。　バルナバという名の修道士が、彼女と一緒に畑を耕していた際、好奇心から彼女の顔に目をやると、両耳に穴が開いているのを見て、こう尋ねた。

「なぜ耳に穴が開いているのですか？」

聖女は彼にこう答えました。

「兄弟よ、あなたは土を耕すべきであって、他人の顔を見るべきではありません。それは修道生活に反するからです。しかし、あなたが私の耳に穴が開いているのを見てしまった以上、その理由もお伝えしましょう。私がまだ幼い頃、私の養育者は私をとても愛し、金細工の装飾品で私を飾ってくれました。彼は、貴重なイヤリングをつけるために私の耳に穴を開けたのです。」

こうして、至福のマトローナはバルナバにそう答え、心の中に恐れを抱いた。彼女は、自分の秘密が露見することを恐れ、長い間考え込み、主に向かってこう祈った。

「主よ、あなたの御心により、私はこの修道院にやって参りました。あなたが私を召されたのですから、私は決して引き返すつもりはありません。どうか、あなたの恵みをもって私の弱さを覆い、私が歩み始めたこの生活を良い結末へと導いてください。そうすれば、あなたへの私の信頼が恥じられることがありませんように！」

しかし、人を愛する神は、その言い表し難く、測り知れない御計画により、彼女が女性であることを二つの修道院の院長たちに明かすことをお許しになった。それは、彼女の中に修道生活へのさらなる熱意が湧き上がるためであった。

ある時、尊者ヴァッシアンの夢の中に、端正で輝かしい姿の男が現れ、三度繰り返してこう告げた。

「お前の修道院で修道生活を送っている宦官バヴィラ――彼女は女性だ！」

同じ幻視を、アブラアミエフ修道院の修道院長である至福のアカキオスも見た。朝になると、ヴァッシアンは、彼に次ぐ地位にあったヨハネという名の修道士を呼び寄せ、自分が見たことを打ち明けた。 彼らが話している最中、アカキイ修道院長から使者が を携えて尊者ヴァッシアンのもとを訪れ、その夜、幻視の中で宦官ヴァヴィラが実は女性であることが明らかにされたと伝えた。　聖人は驚き、この秘密をさらに確かめたいと思った（というのも、これが敵による何らかの欺瞞ではないかと懸念し、夢の中で見た幻をすぐには信じなかったからである）。そこで彼は福音書を開き、その目が次の言葉に留まった。*「神の国を何に例えようか。　それは、ある女が取り出して、三メーラの小麦粉に混ぜ込み、すべてが発酵するまで待ったパン種のようなものである」*（ルカ13:20–21）。

その後、その幻を信じたヴァシアンは、聖女マトローナを呼び寄せ、彼女を怒りの眼差しで見つめながら、威圧的な口調でこう言った。

「なぜ我々のところへ来たのだ、女よ？　どうしてこれほど長い間、修道士たちの間に留まるという不遜なことをしたのか？　我が修道院に不名誉をもたらそうとしているのか、それとも我々を誘惑するために来たのか？」

聖女マトローナは、予期せぬ非難に打ちのめされ、修道院長のおどろおどろしい眼差しと声にひどく怯え、彼の聖なる足元にひれ伏して許しを請い、謙虚にこう答えた：

「誰かを誘惑するつもりはありませんが、私自身、敵の誘惑から逃れ、悪者の罠を避けようとして、聖なる父よ、あなたの羊の群れのもとへやって参りました。」

修道院長は再び彼女にこう言いました。

「女であるあなたが、頭巾もかぶらずに、どうして神聖な秘儀に近づき、兄弟たちの口に口づけをすることができたのか？」

マトローナはこう答えた。

「神聖な秘跡に与る際（Iコリント11:5）、私は頭を完全にさらけ出したわけではなく、ほんの少しだけでした。また、兄弟たちに口づけを捧げる際、私は人間の口ではなく、情欲のない天使たちの口に触れているのだと心に思い描いていました。」

尊師は、その賢明な答えに驚き、再び彼女に尋ねた。

「なぜ、女子修道院ではなく、男子修道院に来たのですか？」

聖女は恐れを捨て、自分のことすべてを彼に詳しく語り始めました：

「私は結婚し、一人娘の母となりました。いつも神の教会を訪れることを愛し、そこで昼夜を問わず祈りにふけっていました。　しかし、夫は私にそのような行いを禁じ、嫌がらせや暴力を用いて、私が教会や祈りに熱心に向き合うことから気をそらそうとし、あらゆる手段で私が神に近づくことを妨げました。そのため、私は神のためにより自由に奉仕できるよう、夫から逃げることを決意しました。以前見た幻が、私をあなたの元へと導いたのです。　夢の中で、私は自分を追いかけてくる夫から逃げ出し、ある修道士たちに隠されているのを見ました。　その幻視を熟考し、夫から身を隠すには修道士の姿になるしかないことを悟ると、私は女性の服を脱ぎ捨て、男性の服を身にまとい、名をバビロと改め、宦官を装ってこの修道院にやって来ました。

尊者ヴァッシアンは、至福のマトローナの言葉を注意深く聞きながら、彼女の知恵と神への熱意に深く感嘆し、彼女にこう言った。

「勇気を出しなさい、娘よ。あなたの信仰があなたを救うでしょう。」

ヴァッシアンはマトローナに心に深く響く教えを授けた後、彼女を密かに至福のスザンナのもとへ送り出し、彼女自身が変わらずキリストに仕え続ける限り、自ら彼女を世話することを約束した。

その頃、マトローナの娘テオドティアが亡くなった。彼女は娘をスザンナに託していたのだが、それは、慈愛に満ちた主が、御自分のしもべであるマトローナを心配事から解放し、娘の世話から解き放たれることで、より自由に主に仕えることができるようにと願われたからであり、主はテオドティアを御許に迎え入れ、天の住まいに住まわせられたのである。　それゆえ、マトローナは悲しみの代わりに喜びに満たされた。まだこの邪悪な世の誘惑を知ることのない娘が、主のもとへ去り、汚れなく主の御前に進んだのを見たからである。彼女自身はスザンナの元に身を隠していた——いや、むしろ、神がスザンナを通して彼女を保護しておられたのである。

一方、マトローナの夫ドミティアヌスは、彼女を至る所で探し求め、多くの都市や村、そして様々な修道院を巡り、彼女について人々に尋ね回ったが、見つけることはできなかった。　その後、彼は、尊者ヴァッシアンの修道院に、男装して宦官のように暮らしているある女性がいるという話を耳にした（というのも、この噂はまず修道者たちの間で広まり、その後、世俗の人々の間にも広まっていたからである）。　それが自分の妻であると察したドミティアヌスは、修道院へと向かい、門を激しく叩きながら、怒りを込めて叫んだ。

「修道士たちよ、お前たちは私に、大きな侮辱を与えた。お前たちは私の妻を惑わし、ここに閉じ込めている。修道士として、そんなことをしてよいものか？　それがお前たちの生き方なのか？私の妻を返せ！」 なぜ、神が善き生活のために結び合わせた者たちを、 、不法に分離させるのか？私の生涯の伴侶として私に属する彼女を、返せ。

すると、修道士たちはドミティアヌスにこう答えた。

「あなたの妻はここにはいません。なぜなら、私たちの修道院には決して女性が足を踏み入れることはないからです。かつて、バビラという名の宦官の修道士が、しばらくの間私たちと共に修行をしていましたが、その後、エルサレムの聖地を訪れたいと願い、とっくに私たちのもとを去りまし

た。それは誰もが知っていることです。　彼が今どこにいるのか、我々は知らない。それを知っておられるのは、何一つ隠されたことのない全知の神ご自身のみである。

これを聞いたドミティアヌスは、嫉妬に駆られて動揺し、同時に妻への愛ゆえの悲しみに打ちひしがれ、悲しげにその場を去った。そして、至福のヴァッシアンは心の中でこう考えた。

「神ご自身がこの女性を御自身に仕える者として選び、その慈愛に満ちた御手によって、彼女を気難しい堕落した夫から引き離し、彼女の魂を私が世話するよう、この不適格な私に託された。それなのに、私は多くの人々の前で彼女の秘密を暴露し、彼女に関するすべてを公にしてしまった。もし今、彼女の夫が彼女を見つけ出し、彼女が歩み始めた徳の道を妨げ、彼女の救いを損なうようなことがあれば、私は彼女の破滅の責任を負うことになるだろう。

ヴァッシアンは、修道院評議会を構成する長老たち数名を呼び寄せ、こう言った。

「兄弟たちよ、我々は、この修道院を去った姉妹を顧みなければならない。彼女は女性ではあるが、それでも我々の兄弟団の一員として登録されているのだから。　では、神に喜ばれる彼女の修道生活が善き結末を迎えるために、我々は何をすべきか。常に我々の堕落を企む敵が、彼女の勇気を打ち砕き、修道者の行いから彼女を遠ざけ、この世の愛へと彼女を導くことのないように――そのために、敵が彼女の夫という適切な道具を用いることを防ぐために、我々は何をすべきか。

ヴァッシアンは兄弟たちにそう語った。その中の一人、マルケルという名の、聖職としては助祭である者が、尊者に向かって言った。

「私が生まれたエメセという町には、私の姉も修道に入った女子修道院があります。ですから、父上、よろしければ彼女をそこへ送ってください。そうすれば、彼女への心配もなくなります。」

これを聞いたヴァッシアンと他の長老たちは、マルケルの助言に同意し、その国へ向かう船を探すよう命じた。　まもなく、神の御計らいにより、エメスからの船が見つかった。その船はビザンティウムで物資を調達し、再び自国へ戻るところであった。そこで、その船に聖なるマトローナを乗せ、エメスの修道院にいる修道女たちの元へ送り出した。彼女はそこで栄誉をもって迎え入れられた。　そこで、いつものように徳高く生活し、謙遜、沈黙、断食、徹夜祈祷、そしてあらゆる修道者の行いにおいて誰よりも優れており、その生き様で皆を驚かせた。それゆえ、彼女は神の御国へと続く厳しく困難な道の模範となったのである。　しばらくして、その修道院の修道院長が亡くなり、聖マトローナは、亡くなった人の後任としてふさわしい人物として、全員の推挙により選出された。修道院長として、彼女は燭台に置かれた蝋燭のように、徳の明るい光を放ち、自分に託された姉妹たちの救いを熱心に顧みた。

その頃、ある男が自分の畑を耕していたところ、ある一箇所で地面から火が出ているのに気づいた。彼はこれを一度だけでなく、何度も目撃した。何日にもわたり、地面から炎が絶えず噴き出していたからである。　その男は町へ行き、エメスの司教にこのことを報告した。司教はこれに特別なしるしを見出し、聖職者たちを連れてその場所へ赴き、祈りを捧げた後、地面を掘り返すよう命じた。　掘り起こしてみると、地中から一つの器が見つかった。その中には、金でも銀でもなく、この世のあらゆる宝物よりも尊いもの――主の洗礼者聖ヨハネの頭部が収められていた[7647]。この知らせは至る所に広まり、エメサの町だけでなく、周辺のすべての町や村から住民たちがその場所に集まった。聖女マトローナも、修道院からすべての修道女たちを連れてやって来て、発見された聖ヨハネ・バプティスタの頭部に礼拝を捧げた。　この聖なる頭部からは芳香を放つ聖油が滲み出ており、司祭たちはそれを使って集まった人々の額に十字の印を描きながら、彼らに塗油した。聖マトロナは、自分の修道院への祝福として、その聖油を小さな器に受け取った。しかし、聖油を求めて押し寄せる群衆が彼女を取り囲み、通り抜けることができないほどだった。　また、彼女の手元に聖なるミロがあるのを見た他の人々は、混雑のせいで司祭たちのところへ近づくことができなかったため、そのミロで

[7647] 明らかに、ここでは452年にさかのぼる、洗礼者ヨハネの尊い頭部の二度目の発見について語られている。

塗ってほしいと懇願した。彼女は仕方なく、その願いに応じた。そこには、　生まれつき目が見えない盲人が一人いた。彼はマトローナに、自分も聖なるミロで塗ってほしいと頼んだ。　彼女は彼の目に聖油を塗ると、彼はたちまち目が見えるようになった。この奇跡は、聖ヨハネの癒しの聖油だけでなく、敬虔なマトローナにも帰せられた。なぜなら、その場には人々に聖油を配っていた司祭が数多くいたが、生まれつき目の見えない者の視力を取り戻すことができた者は誰もいなかったからである。　こうして、敬虔なマトローナの徳高い生涯は、人々の間で称賛されるようになった。かなりの時間が経った後、マトローナの夫ドミティアヌスは彼女のことを耳にし、エメスの町へと急いだ。　しかし、聖女マトローナが住むその女子修道院には自分が入ることができず、探している妻に会うこともできないと知ると（その修道院には、男性が決して立ち入ってはならないという規則があったため）、彼は策略を用いて目的を達成しようと企てた。　ドミティアヌスは、世俗の女性数人を説得し、マトロナの元へ行って次のように告げさせた。

「ある男が、あなたの聖さと完璧な徳のある生き方を聞き、遠くからあなたに拝謁し、あなたの祝福と聖なる祈りを授かるためにやって来ました。」　どうか、神の御名において愛を示し、あなたのためにこれほど困難な旅路を耐え抜いたその人を軽んじることなく、彼のもとへ出て、魂を癒やす言葉で慰め、祝福を与えて送り出してあげてください。」

マトローナのもとへ来た女性たちは、教えられた通りに話しました。聖マトローナは、その欺瞞を見抜き、彼女たちを遣わした男の顔立ちがどのようなものか尋ねました。彼女たちはその容貌を説明しました。聖女は、それが自分の夫であることを悟り、女性たちにこう言いました。

「その男に、七日間待てと伝えてください。七日目に私が彼の前に現れ、彼が望むままに私を見ることができるでしょう。」

女性たちを帰らせた後、聖女マトローナは、主が夫から彼女を隠してくださるよう祈り始めた。夜になると、彼女は羊毛の衣と小さなパンの切れ端を手に取り、誰にも知られぬよう密かに修道院を出て、エルサレムへと向かった。　一方、ドミティアヌスは、望む女性と対面し、法律上は自分と結ばれている者として、力ずくで彼女を連れ去ることを期待して、七日間待っていた。七日目に、彼は再び同じ女性たちを聖女のもとへ遣わし、約束通り彼の前に現れるよう求めた。　修道院に到着した女性たちは、修道女たちが皆、修道院長を案じて嘆き悲しんでいるのを見つけた。彼女たちは、修道院長がどこへ行ったのか知らなかったからである。女性たちは戻ると、そのことをドミティアヌスに報告した。　すると彼は、嫉妬と悲しみにさらに駆り立てられ、彼女を探してあちこちを駆け回った。彼はエルサレムにも向かい、ある宿に泊まって、そこに住む女性たちに、ある特定の女性（その容貌を詳しく説明した）を目撃したことはないかと尋ねた。彼女たちはこう答えた。

「確かに、そのような修道女が、ここの教会の一つに遅くやって来たのを覚えています。しかし、彼女が今どこにいるのかは、わかりません。」

ドミティアヌスは、道を行き来し、宿屋を回って彼女を丹念に探し回った。ある日、二人は偶然出会ったが、マトローナは夫だと気づいたものの、夫は彼女を認識しなかった。というのも、ドミティアヌスが彼女のそばを通り過ぎたとき、彼女は顔を覆い、何かを拾うかのように身をかがめたため、その巧妙な仕草のおかげで、夫に正体を見破られることはなかったからである。　彼女は、夫がこれほど執拗に自分を探し回っていることに驚き、またどこかで夫に再び見つけられて正体を暴かれるのではないかと恐れて、シナイ山へと身を隠した。しかし、そこでも夫に探し出され、追われ続けた。 そこで彼女はベリト[7648] へ向かい、空き家となった偶像崇拝の神殿を見つけると、そこに入り、そこで暮らすようになった。　悪霊たちは、彼女がそこに留まることを我慢できず、聖女をそこから追い出そうと、様々な方法で彼女を脅かした。時には姿を見せずに彼女に向かって叫び、時にはあからさまに彼女に襲いかかった。また、マトローナが詩篇を詠むと、悪霊たちは罵声を浴びせて彼女の

[7648] ベリト――小アジアのフェニキア沿岸にある最古の港湾都市。

邪魔をした。　しかし、聖女は、十字を切るしぐさと神への熱心な祈りによって、そのような悪魔の幻や幻影をすべて追い払った。その偶像崇拝の神殿に滞在している間、聖女の糧は周辺に生えている穀物であり、飲み物は、彼女のために奇跡的に湧き出た泉の水であった。　ある日、彼女は喉の渇きを感じ、辺り一帯を探したが水は見つからなかった。大地は乾ききっており、太陽の灼熱に焼かれていたからである。彼女は小さくて尖った小石を見つけると、それを使って地面に、人の手のひらほどの大きさの小さな穴を掘り、それをそのままにして祈りのためにその場を離れた。　翌日、朝になって彼女はその場所に戻ると、勢いよく湧き出る泉を見つけました。泉の周りには、美味しい穀物が育っていました。これはキリストの花嫁にとっての食事となりました――それは、あらゆる王の饗宴の中でも最も甘美な食事でした。　彼女はそれらの美味しい穀物を味わい、水を飲みながら、神に感謝した。「」すなわち、*「あらゆる肉なる者に食物を与え、その慈しみは永遠に続く……御手を広げ、御心に従ってすべての生き物を満たしてくださる」*（詩篇135:25、144:16）。

ある日、悪魔が美しい女性の姿をとって聖女マトローナの元を訪れ、お世辞を並べてこう言った。

「なぜ、お嬢様、あなたはこのような奇妙な生き方を選ばれたのですか？　ここは人里離れた場所であり、肉体の欲求を満たすものは何もない。それに、あなたはまだ若く、顔立ちも美しい。誰かがあなたを見て、その美しさに惑わされ、あなたに暴行を加えるのではないかと心配だ。そうなれば、あなたを助け、その者の手から救い出してくれる者は誰もいなくなるだろう。　ですから、お嬢様、そのような生活はやめて、私と一緒に町へおいでください。町でも静かに暮らすことはできるのですから。私はあなたの住まいとして、必要な家を見つけて差し上げます。そうすれば、必要なものはすべて揃い、誰もあなたに迷惑をかけることはできません。近所の人たちがあなたを助け、侮辱から守ってくれるでしょう。

そのようなお世辞めいた言葉を耳にした聖マトローナは、それが敵の矢であることを悟り、直ちに*「無敵の盾――聖さ」*（箴言5:19）*を手に取り*、自ら悪者の矢から身を守るだけでなく、まるで剣のように祈りをもって矢を放つ者そのものを傷つけ、追い払った。　その後、悪魔は、目から炎を放つ老女へと姿を変えた。怒りに満ちてマトローナに襲いかかったその女は、彼女の足にしがみつき、恥知らずな言葉や脅しを吐き散らした。しかし、聖女は彼女に構うことなく、ただ立ち尽くして神に祈り続けた。すると、たちまち悪魔は姿を消した。

こうした悪魔の攻撃の後、主は神聖な啓示を通じて、至福のマトローナを慰め、彼女の心を言葉に尽くせぬ霊的な喜びと天の慰めで満たされた。　主は、御自身に仕える者たちの苦しみの中でいかに慰め、災いの中でいかに助け、彼らの悲しみを喜びへと変えるかを御存知だからである。ダビデが詩篇93篇でこう述べているように：*「わが心に苦しみが増すとき、あなたの慰めはわが魂を喜ばせる」*。

そして主は、この御心に適う女を通して多くの人々に益を与え、多くの人々を救いの道へと導こうと望まれた。それゆえ、主は彼女をベリトの住民たちに現されたのである。彼女を発見したのは三人のキリスト教徒であり、ある晩、その神殿の前を通りかかった際、彼女が祈っているのを見かけたのである。彼らはこのことを他の人々に伝え、彼女に会いたいと願う多くの人々が彼女のもとを訪れるようになった。　神から教導という恵みの賜物を受け、彼女は彼らに神の御言葉を説き、神の霊に導かれた語りかけによって彼らに大きな益をもたらし、救いの道へと導いた。また、何人かの妻や乙女たちも彼女の元を訪れ、天使のような彼女の生き方に感銘を受け、彼女の模範に従い、彼女と共に修道生活を送りたいと願った。　最初に聖女のもとを訪れたのは、ソフロニアという名の女性でした。彼女は異教徒でありながら、節制と清らかさを重んじ、修道女のように――処女として――生活しており、彼女の生き方や教えに従う他の女性たちも共に暮らしていました。　至福のマトローナと彼女の厳格な生活について耳にした彼女は、彼女に会いたいと願い、友人たちと共に彼女の元を訪れた。　聖マトローナは、神の御言葉を語る口を開き、唯一の真の神とその独り子について語り始めた

――主が、夫を持たない清らかな処女から受肉し、私たちの救いのために苦難を受け、　復活し、肉体をもって天に昇り、生ける者と死せる者を裁くために再び来られること――について語り始めた。ソフロニアにキリスト教信仰の多くの奥義を明かした後、マトローナは彼女と彼女と共にいた者たちをもキリストへと導いた。　まもなくベリトスの司教から洗礼を受けた彼女たちは、尊者マトローナと共に、かつての偶像崇拝の神殿で修道生活を送るようになり、その場所は盗賊の巣窟からキリストの花嫁たちの修道院へと変貌を遂げた。

その後、エウケイアという名の、かつて偶像崇拝の巫女であり、貞潔を守っていた一人の乙女が、尊者マトローナの元を訪れ、彼女の足元にひれ伏して、イエス・キリストへの信仰を教え、自分と一緒に暮らすことを許してほしいと懇願した。　聖女は、その乙女に神の御言葉を十分に説き、彼女の心にキリストへの愛と、この世からの離脱への情熱を燃え上がらせた。その頃、その地ではある神を冒涜する異教の祭りが行われることになり、ベリテにいた異教徒たちは、祭りを執り行うために自分たちの偶像のもとに集まった。　異教の慣習に従って犠牲を捧げる偶像の巫女が見つからなかったため、彼らは彼女がどこへ行ったのかと不思議に思った。　彼女がマトローナのもとへ行ったことが知れ渡ると、彼らの一部、とりわけその乙女の親族たちはそこへ向かい、マトローナと共に座り、感銘を受けて神の御言葉を聴き入っているエウケイアを見つけると、彼女にこう言った。

「お嬢さん、なぜ偉大なる神々を軽んじ、彼らへの生け贄を放棄したのですか？　ほら、あなたのせいで、民が私たちに反旗を翻しました。彼らは自分たちの神々に加えられる不名誉をこれ以上耐えられないのです。さあ、私たちと一緒に、今すぐ祭りを執り行いましょう！」

しかし、その乙女は彼らの言葉を聞くどころか、彼らを見ることも拒んだ。マリアがイエスの足元に座っていたように、彼女もまた、師である尊いマトローナの前に座っていた。マトローナは、やって来た者たちに穏やかに、愛を込めてこう言った。

「かつてはあなたがたの虚しい神々のしもべであったこの、真の神のしもべを、私たちと一緒にいさせてください。彼女はキリストと婚約することを望んでいるため、もはやあなたがたと交わることはできないのです。」

訪れた親族たちは、長い間、甘言や脅しを用いてマトロナからその娘を引き離そうとし、さらには力ずくで連れ去ろうとさえしたが、目に見えない神の力がそれを阻んだ。成功しなかった彼らは言った。

「もし我々の言うことを聞かず、今すぐ神々への祭りを執り行うために我々のところへ来ないなら、明日の朝、我々はここに来て、この神殿に火を放ち、そこにいる者全員、そしてお前も一緒に焼き尽くしてやる。」

そう脅して、彼らは去っていった。聖マトローナは、共にいた姉妹たちと共に多くの薪や小枝を集め、それを神殿の周囲に積み上げ、去っていった異教徒たちの後を追って、次のように告げた。

「ほら、火も薪ももう用意できた。さあ、約束を果たしなさい――私たちを焼き尽くして、私たちが私たちの神キリストへの芳しい供え物となるように。」

異教徒たちは、自分たちの神のために死ぬ覚悟でいる彼女たちの勇気に驚き、どう答えればよいか分からず、それ以来、彼女たちのところへは二度とやって来なかった。

その間、聖マトローナは司教に、長老を派遣してほしいと願い出た。長老が到着すると、彼女はあの少女を彼の世話に託し、聖なる洗礼を授けてから再び自分のもとへ連れてくるよう頼んだ。そして長老は直ちに彼女の願いを叶えた。　洗礼を受けたその少女は、聖マトローナの元にいる他の八人の姉妹たちと共に、断食と祈りにおいて徳高く精進した。彼女たちは皆、自分の灯を飾り、花婿を迎える準備をする賢い乙女たちのようであった[7649]。

[7649] キリストの「十人の花嫁」のたとえ話。マタイによる福音書25章1節。

その間、聖マトローナは、姉妹たちと共に昼夜を問わず神のために働き、多くの人々を神へと導くという生活を送っていたが、ある日、彼女は再び自分の霊的父である聖ヴァッシアンに会いたいという願いを抱くようになった。　彼女はコンスタンティノープルへ行きたいと思ったが、夫のドミティアヌスがコンスタンティノープルに住んでいるという考えがマトロナをその決意から引き止め、彼に気づかれないようにと、そこへ行くことを恐れていた。同時に、彼女は心の中でこう思索していた。

「もうここに留まることはできない。多くの人が私のところに来て、私を徳の高い者として称賛するが、私は虚栄心を恐れている。それに、夫が私のことを耳にしてしまうのではないかと恐れている。国中が私のことを知っており、誰かが彼に告げるかもしれないからだ。もし彼がここに来て私を見つけたら、私の修道生活という功績はすべて台無しになってしまうだろう。」　それゆえ、私はここから立ち去り、アレクサンドリアかアンティオキアへ向かうことにしよう。

この決意を固めた聖女は、どこへ向かうべきか、どこでより有益に暮らせるかを神が示してくださるよう、熱心に祈り始めました。その祈りを続けていると、ある夜、夢の中で三人の男が彼女をめぐって争っているのを見ました。それぞれが彼女を自分の妻にしたいと望んでいたのです。しかし、彼女はこう言って拒みました。

「私はずっと前から結婚から逃げてきました。もし今、再び結婚を望んだとしても、それでも結婚することはないでしょう。ところで、あなた方はどなたですか？」

最初の男が答えた。

「私はアレクサンドロスだ。」

もう一人は言った。

「私はアンティオコスだ。」

三番目の男は言った：

「私はコンスタンティンだ。」

そう言うと、彼らは彼女を誰が手に入れるかくじ引きを行い、くじはコンスタンティンと名乗った最年少の者に当たった。その者が彼女を連れ去ろうとした。マトローナは恐怖で目を覚まし、見た夢について考え込んだ。そして彼女は自分の夢を次のように解釈した。「三人の男――アレクサンドル、　アンティオコス、そしてコンスタンティノス――は、私が考えていた三つの都市、すなわちアレクサンドリア、アンティオキア、そしてコンスタンティノープルそのものである。そして、コンスタンティノスに当たった私のくじは、私がコンスタンティノープルへ行き、私の父――至福のヴァッシアノス――に会うことを神が御許しになったことを意味している。　私を導いてくださる主は、私が　夫に気づかれないよう、そこで私をしっかりと守ってくださる。*「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるから。あなたの鞭と杖、それらが私を慰めてくださる」*（詩篇22:4）。

そして、彼女は身支度を整え、立ち去ろうとした。しかし、姉妹たちは、彼女が自分たちから離れようとしているというその意図を知ると、彼女を離そうとはせず、涙ながらにこう叫んだ。

「なぜ、母よ、あなたは私たち――まだ主の律法に十分に根ざしていないあなたの子らを――置き去りにするのですか？　なぜ、信仰においてまだ若く、教えの恵みを十分に受け入れていない私たちを置き去りにするのですか？　どこへ行くのですか、母よ？　誰に私たちを任せるのですか？　それとも、なぜ私たちを連れて行ってくれないのですか？」

聖女は彼らをなだめると、幻の中で彼女に示された神の御心――すなわち、彼女がコンスタンティノープルへ行くべきであるということ――を彼らに告げた。　そして直ちに、彼女は司教のもとへ使者を送り、徳に熟達し、生活において完全な二人のディアコニッサを派遣するよう願い出た。それは、新しく集められたこの小さなキリストの群れを彼女たちに託すためであった。司教は彼女の願いを聞き入れ、彼女が望んだ通りのディアコニッサたちを派遣した。　まるで貴重な宝物であるかの

ように、自分の霊的な娘たちを彼女たちに託し、平安を祈って別れを告げた後、聖マトローナは、ただ一人の姉妹――至福のソフロニア――だけを連れて、彼女たちの元を去った。海にたどり着くと、彼女はコンスタンティノープル行きの船を見つけ、それに乗り込んだ。　追い風に乗ってコンスタンティノープルに到着すると、マトローナはソフロニアと共に、海辺にある聖イリナの教会へと急いだ。　教会に入ると、彼女は前述の助祭マルケッロに出会い、彼は至福のヴァッシアンに、彼女をエメセの街にある女子修道院へ送るよう助言した。聖マトローナはその助祭に自分の正体を明かし、エメセや　エルサレムやシナイでどのように迫害されたか、ベリトの偶像崇拝の神殿でどのように暮らし、姉妹たちを集めたか、主が彼女を通して多くの人々を御自身のもとに導かれたこと、そしてなぜベリトからコンスタンティノープルへと、彼女の霊的父である尊者ヴァッシアンに会うためにこのような旅に出たのか――といったことまで、すべてを語った。　マルケルは、マトローナの到着を尊者にお知らせし、彼女から聞いたことをすべて話した。尊者は直ちにマルケルに、自分の修道院の近くに静かな家を見つけ、マトローナをそこに連れてくるよう命じた。　それが済むと、聖ヴァシアンは彼女と面会し、祝福を与え、彼女の労苦を知って、その偉業と神への熱心な愛を喜びました。それ以来、聖マトローナは、夫がすでに亡くなっていたため、コンスタンティノープルで安らかに暮らすようになりました。　一方、聖ヴァッシアンは彼女に必要なものをすべて届け、ベリトに残っていた彼女の姉妹たちを彼女の元へ連れてきた。彼女の願いに応じて、彼はベリトの司教に手紙を送り、マトローナが集めた修道女たちを、彼女を霊的な母としてコンスタンティノープルへ送り出してくれるよう懇願した。　まもなく、彼女たちは全員そこに到着し、聖女マトローナと共に修業に励み、義と敬虔をもって神に仕えるようになった。マトローナは皆にとって、神に喜ばれる生活の模範であった。彼女を見習うことで、修道生活に入った者たちだけでなく、多くの信徒たちも恩恵を受けた。　彼女の美徳の評判は至る所に広まり、彼女のおかげで天の父は賛美された。

マトローナに関する噂は、当時統治していたレフ大帝の妃ヴェリーナ女王の耳にも届いた[7650]。彼女は、聖マトローナの極めて徳高い生活について聞き、彼女に会いたいと願い、自ら彼女の元を訪れた。　マトローナは皇后を丁重にもてなし、偉大でありながら何一つ所有しない断食者ならではの、できる限りのもてなしを施した。　皇后は、その生活様式に驚き、とりわけ、多くの贈り物を与えようとしていたにもかかわらず、聖女が何も求めなかったことに感銘を受けました。聖女マトローナとの生活や対話から霊的な恵みを得た皇后は、自らの宮殿へと戻りました。

多くの病人も聖女のもとを訪れ、健康を取り戻した。というのも、彼女の祈りは、肉体の病だけでなく、心の病をも癒すほど強かったからである。

ある高貴な女性、エウフィミアという名の、アンフィム総督の妻は、重く不治の病に倒れ、医師たちからも助けを得ることができなかった後、尊者マトローナの元を訪れた。　エウフィミアは彼女の手に触れ、その手を自分の痛む体の部位に当てると、その手の触れ合いによって完全な健康を取り戻した。　聖女が姉妹たちと暮らしていた家が狭く、しかも自分の所有物ではないことを知ったエウフィミアは、自分を癒やしてくれた聖女マトローナのために、広々として住みやすい修道院を建てたいと願い、まもなくその願いを叶えた。

狭い家から新しく建てられた修道院へ移り住んだ後、聖女はさらに多くの「霊的な羊」――少女や女性たち――を集め、彼女たちをキリストに捧げ、その救いのために熱心に世話をした。

その直後、聖女マトローナは、幻視の中で明らかにされた通り、まもなく神のもとへ旅立つことを予知した。彼女は、実りの豊かな木々が植えられ、その真ん中を清らかな水の泉が流れる、この上なく美しい場所を歩いているかのような幻を見た。さらに先には花咲く野原が広がり、　そこでは数多くの美しい鳥たちが、さまざまな心地よい声でさえずっていた。木々はそよ風にそっと揺れ、泉はせせらぎを響かせていた――その場所の美しさは、到底言葉では表現し得ないほどであった。それ

[7650] 聖レウ1世（大）――ビザンツ皇帝、在位457年から474年。

はまさに神の楽園だったのだ。　そこには、高潔で威厳ある妻たちが立っており、彼女たちは至福のマトローナに、人の手ではなく神の手によって造られた、まばゆいばかりの宮殿を示し、こう言った。

「これがあなたの家です、マトローナ。神があなたのために用意されたものです。さあ、ここに来て、ここで暮らしてください！」

この幻視によって、聖女は自らの最期が近づいていることを悟り、旅立ちの準備を始め、すべてを無に等しいものと見なした主のために、さらに熱心に祈りを捧げた。その後、彼女はすべての姉妹たちを呼び寄せ、救いに必要なことについて十分に教えを説いた。　彼女たちは平安を授けられ、聖女は主のもとで安らかに息を引き取り、この地上の住まいから、かつて幻視の中で見た、彼女のために用意された天の住まいへと移り住んだ。こうして、聖女マトローナは、高齢でありながらも穏やかな老後を全うしてこの世を去った[7651]。世俗の生活では二十五年、修道生活では七十五年を過ごし、その生涯は計百年に及んだ。　そして今、彼女は永遠の命の中にあり、命を与える不可分なる三位一体――父、子、聖霊――の御座の前に立ち、唯一の神に、永遠の栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第2調:

主への愛ゆえに、尊きマトローナよ、あなたは安息への望みを憎み、苦行によって御霊を照らしました。あなたは獣たちを力強く打ち負かし、またあなたの祈りによって、敵対する者たちの迷いを打ち砕きました。

聖テオクティスタの生涯。

記念日：11月9日

エーゲ海にはパロス島[7652]がある。この島には、至聖なる我らの主の母マリアに捧げられた、見目麗しい教会があった。その島全体、教会も含めて、なぜか荒れ果て、もはや人間の住処ではなく、獣たちの住処となってしまった。

ある日、エウヴェイアと呼ばれる海辺の山に住む猟師たちが、その無人島へ船で向かい、獣を狩ろうと話し合った。島には鹿や山羊が数多く生息していたからである。島に到着すると、猟師たちは武器を携えて船から降り、獲物を探して島中を歩き回った。　その中には、神を畏れ、自らの救いを切に願う一人の猟師がいた。仲間たちから離れ、彼は一人で人けのない島を歩き回り、獣の痕跡を追っていた。そして、前述の荒れ果てた神殿を見つけると、そこに入り、自分のできる限り祈りを捧げた。彼は素朴で読み書きができない人だったからだ。　頭を下げて祈っていると、彼は地面に小さな窪みを見つけ、その中に水があり、水の中には「イリオトロピオン」[7653]と呼ばれる植物の種子が浸かっていた（この植物はあの島にたくさん生えていた）。彼は心の中でこう考えた。「ここには、この種子を糧としている神のしもべがいるに違いない」。　しかし、猟師はすぐに神殿を出て、同行者たちに追いつこうと急いだ。彼の仲間たちは島に数日間滞在し、好きなだけ鹿や山羊を捕まえ、すでに大量の獲物を携えて砂漠から船へと戻りつつあった。　その時、前述の猟師は再び仲間から離れ、聖母マリアに祈りを捧げるために神殿に入った。さらに、彼は水にひまわりの種を浸していた人物に会えることを期待していた。　彼が聖堂の中央に立って祈っていると、聖座の右側に密な蜘蛛の巣

[7651] 聖マトローナ、492年に没。
[7652] エーゲ海――現在は*エーゲ諸島*。パロス島――エーゲ諸島にあるキクラデス諸島の主要な島の一つ。
[7653] イリオトロピオン――ヒマワリ。

が見え、その向こうには、まるで風に揺られているかのような何者かがいた。蜘蛛の巣の向こうで揺れているものが何なのか知りたくて、彼は近づき、蜘蛛の巣を取り除こうとしたが、その瞬間、声が聞こえてきた。

「待て、人間よ、これ以上近づくな。私は裸の女だから、恥ずかしいのだ。」

これを聞いて、猟師は恐怖に駆られ逃げ出そうとしたが、あまりの恐怖のあまり動けなかった。彼の足は震え、頭の毛は逆立ち、とげのように尖り——彼は恐怖のあまりその場に立ち尽くしていた。少し落ち着きを取り戻すと、彼は勇気を振り絞って尋ねた。

「あなたは誰ですか？　この荒野でどうやって暮らしているのですか？」

すると再び、蜘蛛の巣の向こうから声が聞こえてきた。

「お願いだ——私に服を投げてくれ。私が裸を覆ったら、主が私に命じられる限り、自分のことを話してやる。」

上着を脱ぎ、狩人はそれを地面に置き、自ら神殿から出た。妻がその服を着るのを少し待ってから、彼は再び中に入ると、彼女が以前と同じ場所に立っているのを見た。　彼女の姿は極めて恐ろしいものであった。彼女は人間の姿に似てはいたものの、生きた人間とは見えず、まるで死人のようだった。骨は皮だけで覆われ、髪は白く、顔は黒く、目は深くくぼんでおり、その全体的な姿は、棺の中に横たわる死人のようであった。　かろうじて息をしているだけで、かすれた声でしか話すことができなかった。彼女を一目見た猟師はさらに恐怖に駆られ、地面に倒れ込み、妻に祈りと祝福を懇願し始めた。　すると、彼女は東の方角に向き直り、両手を挙げて祈り始めた。狩人はその祈りの言葉を聞き取ることはできず、ただ神へと捧げられる静かな声だけが聞こえてきた。その後、彼の方を向いて、聖女はこう言った。

「神よ、この人を憐れんでください。教えて、あなたは一体何のためにこの荒野に来たのですか？誰も住んでいないこの人里離れた島で、あなたに何の用があるというのですか？しかし、主が私の謙虚さのためにあなたをここに導かれたのだと思いますし、あなたは私のことを知りたいと願っているのですから、すべてを明かしましょう。」

そして、彼女は次のように語り始めた。

– 私の故郷はレズボス島で、メフィムネという町で生まれました[7654] 。私の名はテオクティスタ。修道女として暮らしています。というのも、幼い頃に両親を亡くしたため、親戚によって女子修道院に預けられ、修道服を授かったからです。　ある時、キリストの復活祭の日、私が十八歳の時、修道院の許可を得て、少し離れた村へ、夫と共にそこに住んでいた姉を訪ねに行き、姉の家で一晩を過ごしました。　真夜中、その村は、凶暴なニザールを首領とするアラブ人たちに襲撃された。彼らは村人全員を捕虜にし、私も他の人々と共に捕らえられた。そして朝になると、私たちを彼らの船に乗せ、出航した。　丸一日航海した後、彼らは夜を過ごすためにこの島に停泊し、捕虜たちを船から降ろして一人ひとりをじっくりと観察し、誰がいくらで身代金を払うつもりなのかを見極めていた。私も他の者たちと一緒に連れ出されたが、近くに草原があるのを見つけると、そこへ向きを変えて逃げ出した。　私を捕らえた者たちは、まるで獣を狩る狩人のように私を追いかけてきたが、砂漠が私を彼らから隠してくれた。いや、むしろ、砂漠の中で神が御恵みをもって私を覆い、捕らえようとする者たちの手から守ってくださったおかげで、彼らは私を見つけ出すことも、追いつくこともできなかった。　私はこの島の奥深くにある砂漠へと逃げ込み、棘のある木々や茨、そして鋭い石によって両足をひどく傷つけるまで、恐怖に駆られて走り続けた。これ以上走ることができなくなった私は、まるで死人のように地面に倒れ込み、傷ついた足から流れ出る私の血で地面は染まった。　その夜一晩、私は激しい苦痛に苛まれながら過ごしたが、神が私を敵の手から救い出し、汚れのないまま守っ

[7654] レズヴィア – レスボス島。エーゲ海に浮かぶ島で、後に主要都市ミティリーネの名にちなんで呼ばれるようになった。 島の北側には、広大な港を持つメフィムナ（現在のモリヴォン）山があり、ペロポネソス戦争（紀元前406年）の時代にすでに衰退していた。

てくださったことを感謝した。そして、邪悪な人々の間で生き、キリストに捧げた処女性を損なうよりは、この砂漠で処女の清らかさを保ったまま、むしろ早く死んだほうがよいという思いが私の中に湧き上がった。　朝になると、不敬虔な強盗たちが島から船で去ったのを見て、彼らの奴隷状態から解放されたことに喜びに満たされ、その大きな喜びのあまり、自分の病気のことさえ忘れてしまった。そして、その時から今日に至るまで、私はこの島で三十六年間暮らしている。　私は、この島に豊富に実るイオトロピオンの種子を糧としていますが、それ以上に神の御言葉を糧としています。というのも、修道院で学んだすべての詩篇、賛美歌、聖書の朗読を今なお覚えているからです。それらによって慰められ、私の魂を養っているのです。　私の衣服は間もなくぼろぼろになり、私は裸のままとなりましたが、あらゆる悪から私を覆ってくださる神の恵みだけを覆いとしていました。

こう語り終えると、聖なる乙女は両手を天へと上げ、彼女に示された神の言い表せないほどの慈しみに感謝を捧げた。そして再び猟師に向き直り、こう言った。

「さて、私は自分のことについてすべてあなたに話しました。ただ一つ、主のために私のために叶えてほしいことがあります。来年の夏、あなたがこの島に狩りに来る時　（神の御心がある以上、あなたが必ず来られることは分かっています）、その際は、清らかな器に、至聖にして命を与えるキリストの聖体の一部を納め、ここへ持ってきてください。というのも、この荒野で暮らし始めて以来、私はそのような賜物に与る恵みにあずかることができなかったからです。　さあ、今は安らかに仲間たちのところへ戻りなさい。そして、私のことは誰にも話さないでください。

猟師はその命令を果たすことを約束し、この驚くべきキリストのしもべに頭を下げて去っていった。そして、神が彼にこのような御宝を現し、この世の誰一人として値しない彼女の姿を見、語り合い、その祈りと祝福を受けるにふさわしい者とされたことを喜び、神に感謝した。　岸に着くと、狩人は仲間たちが自分を待ちわび、遅れたことを心配して嘆いているのを見つけた。彼らは、彼が荒野で道に迷ったのだと思っていたのだ。しかし、彼は守れと命じられた秘密を彼らには明かさず、彼らは船で家路についた。　その間、その猟師は、まるで何らかの喜びであるかのように次の夏を待ちわび、砂漠の中に、あたかも宮殿のように佇む、清らかなキリストの花嫁に再び会いたいと願っていた。待ち望んだ時が来ると、彼は再び仲間たちと相談し、獣を狩るためにパロス島へ船で向かうことにした。　船出の前に、彼は長老から、聖なるテオクティスタが命じた通り、清く小さな聖櫃に収められた、至聖にして命を与えるキリストの聖体の断片を受け取り、その断片を尊く身に着けて出航した。　その島に到着すると、彼は神聖な聖体を携えて、前年に至福のテオクティスタと語り合ったあの荒れ果てた聖母マリアの教会へ向かったが、教会の中に入ってみると、聖テオクティスタの姿はなかった。　そこで彼は、修道女が遠くの荒野へ去ったか、あるいは姿を隠したのだと考えた。というのも、あの猟師と共に、彼の仲間たち数人も来ていたからである。　悲しみに暮れながら、猟師は教会を出て仲間たちの後を追った。やがて彼はこっそりと仲間たちから離れ、戻ってくると、一人で教会へと向かった——すると、たちまち聖女テオクティスタが、以前立っていたのと同じ場所に、猟師が昨年彼女に与えたその服を身にまとって現れた。　聖女の姿を目にした狩人は、地面にひれ伏して彼女に礼拝した。すると彼女は素早く彼の元へ歩み寄り、涙を流しながらこう言った。

「そんなことはしないでください、人よ。あなたは神の賜物を手にしているのですから。キリストの聖体を冒涜したり、この卑しい私を悲しませたりしないでください。私はふさわしくない女なのですから。」

そして、狩人の衣を掴んで、彼を地面から引き上げた。すると彼は、神聖な秘跡が入った小箱を取り出し、彼女に[7655] を差し出した。聖女はまず、神聖な秘跡の前で地面にひれ伏し、涙で地面を

[7655] この件について、聖ディミトリ・ロストフスキーは次のように述べている。「現在、一部のキリスト教徒は、神聖な秘跡があの狩人に委ねられ、彼が荒野へ運ぶことになったこと、また、彼が平信徒であり、聖職に就いていない身でありながら、本来は司祭のみが携えるべきであるその秘跡を敢えて携行したことに驚いている。　しかし、彼らはこれに驚いてはならない——それが初期教会の慣習であったからだ。当時、叙階を受けていない者であっても、神聖な聖体を手に取

濡らした。それから立ち上がり、聖なる賜物を両手で受け取り、聖体拝領を行い、感極まってこう言った。

「今、主よ、あなたのしもべを安らかに去らせてください。私の目は私の救いを見、私は罪の赦しを手に受けました。今、私はあなたの慈しみが命じられるところへ去ります。」

そう言うと、彼女は悲しげに両手を挙げ、長い間立ち尽くして祈り、神を賛美した。その後、祝福を授けて、その猟師を仲間たちの元へ送り出した。

荒野で数日間過ごした後、猟師たちは多くの山羊や鹿を捕まえ、船に戻った。しかし、その猟師は再び仲間から離れ、旅路の祈りと祝福を聖女から授かりたいと願い、一人で聖堂へ向かった。彼は以前彼女と語り合った場所に近づくと、聖女が地面に横たわって亡くなっているのを見た。彼女の手は胸の上で組まれており、その聖なる魂はすでに神の御手に委ねられていた[7656]。聖女の尊い遺骸にひれ伏し、狩人はその聖なる足に口づけをし、涙でそれを洗い清めた。 そして、彼はどうすべきか途方に暮れた。というのも、彼は非常に素朴な人物であり、その生涯を、人々のいる町よりも、むしろ荒野で獣たちと共に過ごすことが多かったからである。他の猟師たちのところへ行き、この出来事を伝え、彼らと共にこの聖なる遺体を尊く葬るという考えさえ、彼には浮かばなかった。 できるだけ早く掘れるだけの土を掘り起こし、彼は一人でその聖女の遺体をそこに葬った。その際、彼はその聖なる遺体から、自分への祝福として片手を切り離すことを敢えてし、その手を自分の家で尊く保管したいと願った。 しかし、彼が信仰心をもって、聖女への愛と熱意からそうしたとはいえ、その後の物語が示すように、この行いは神の御心に適わなかった。手を切り離すと、彼はそれを清潔な手ぬぐいに包み、胸元に隠して、すでに船に乗っていた仲間たちのところへ向かったが、彼らには何も言わなかった。 彼らが岸を離れ、帆を広げて順風に乗って航海を始めたのは、すでに遅い時間だった。猟師たちは皆、自分たちの船が鳥が飛ぶように速く進んでいると思い、早朝にはエヴェイ山に到着できると期待していた。 しかし、夜が明けると、彼らはまた同じ場所――パロス島の海岸――に戻っており、船はまるで錨で引き止められているか、あるいは何らかのレモラという魚に引き戻されたかのように、微動だにしなかった[7657]。皆が恐怖に襲われ、誰かが罪を犯したのではないか、そして誰の罪が彼らを縛り付けて船を動かせなくしているのかと、互いに尋ね合った。その時、聖女の手を握っていた猟師は、自らの罪に気づくと、船を降り、仲間たちに内緒で教会へと向かった。 聖女の遺骨に近づくと、彼はその聖なる手を自分の患部の関節に当て、少し祈りを捧げた後、仲間たちのところへ戻った。彼が船に乗り込むと、船はたちまちその場から動き出し、何の障害もなく航行し始め、皆は大いに喜んだ。 船が速やかに進み、すでにエウエア島に近づいた頃、その猟師は仲間たちに、自分に起こったすべての出来事を語り始めた。昨年の夏に聖女テオクティスタと出会い、今年の夏に彼女に神の賜物を捧げ、聖女の死後、彼女の手を取り、そのせいで一晩中足止めを食らったことなどである。 仲間たちは、一連の出来事を聞き終えると、心を打たれたが、同時にその猟師に対して激しく不平を言い、怒りを露わにした。彼らは、まだあの島にいた時に、猟師がこれらのことを

り、教会から遠く離れた自宅や遠方への旅路に持ち運ぶことが許されていたのである…… しかしその後、聖なる教父たちは、聖職者でない者がキリストの御体を手に取り、教会から持ち出すことを禁じた。とりわけ聖ヨハネ・クロソストモスはこれを禁じ、その理由は以下の通りである。 彼がコンスタンティノープルで総主教を務めていた頃、ある高貴な女性が教会で至聖なるキリストの御体の断片を受け取り、それを自宅に持ち帰り、魔術を行うための薬と混ぜ合わせてしまった。 このことを知った聖ヨハネス・クラマティオスは、それ以来、すべての教会において、キリストの御体の断片を手に渡すのではなく、ワインの姿を装った神聖な御血とともに、スプーンを用いて口の中に授けるよう命じました。 それまでは、教会でスプーンは用いられておらず、キリストの御体の断片は信徒の手に直接置かれ、聖血は聖杯から供されていた。 この時から、聖金口ヨハネの命により、神聖な聖体拝領はスプーンを用いて授けられるようになり、それを携行することが許されたのは聖職者に限られ、聖職者以外の者は、聖なる秘跡に対するいかなる冒涜も生じないよう、いかなる形でもそれに触れることを禁じられたのである」。

[7656] 聖テオクティストは、パロス島で36年間にわたる苦行の末、881年に逝去した。

[7657] この魚は「レモラ」と呼ばれる。それは、船の周りに大群で集まり、船の進行を妨げるからである。

話してくれなかったことを責め、「そうすれば、私たちも神の御心に適う聖女の祝福を受けることができたはずだ」と語ったのである。　船を引き返させ、彼らは大急ぎで再びパロス島へと向かい、島に到着すると、皆で一斉に教会へと向かった。　畏れおののきながら中に入り、聖女の尊い遺体が安置されていた場所へと近づいた。その場所は見つかったものの、遺体そのものは見当たらなかった——地面には、頭や足が置かれていた場所に鮮明な跡が残っており、そこに横たわっていた遺体の形がはっきりと浮かび上がっていた。彼らは皆、大いに驚き、聖女がどこへ姿を隠したのかと首をかしげた。　その中には、彼女が復活したと語る者もいれば、万人の復活に先立って復活したのではなく、かつての聖殉教者エカテリーナのように、天使たちの手によってどこか別の場所へ移され、埋葬されたのだと語る者もいた。　いずれにせよ、彼らは島中をくまなく探し回り、彼女が生きているのか、復活したのか、あるいは死んで別の場所に移されたのかを探そうとした。素朴で無知な彼らは、誰にも知ることのできない神の神秘を理解しようとしていたのだ。　至る所を丹念に捜し回ったが見つからなかったため、彼らは教会に戻り、聖女の遺体が横たわっていた場所に感極まって口づけをした。祈りを捧げた後、彼らは家路につき、聖女テオクティスタのすべてを人々に語った。人々は皆驚き、聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神を賛美した。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

聖ヨハネ・コロフの伝記

記念日：11月9日

11月9日、正教会は聖ヨハネ・コロフを称える[7658]。聖ヨハネがこの名を得たのは、その小柄な体格によるものである[7659]。彼はまだ若くして世俗を離れ、弟のダニエルと共にエジプトのスキトス修道院の荒野へと向かった[7660]。当初、彼と弟のダニエルは、修業に専念し、完全な隠遁生活を送っていたが、やがて彼は、自身の熱烈で情熱的な気質ゆえに、厳格な修業は、より経験豊富な修道者たち——長老たち——による厳格な指導があって初めて実現できると悟った。　彼自身が厳格で経験豊富な指導者を必要としているというこの認識に至ったのは、兄弟と共に荒野に来て間もなく起きた次の出来事によるものでした。ある日、彼は全く予期せず、共に修行する兄弟にこう言いました。

「もう何事も気にかけたくない。天使のように、悲しみなく荒野で生きたい。」

そう言うと、彼は衣服を脱ぎ捨て、小部屋から出て行った。その夜、激しい霜が降りた。裸のヨハネは長い間寒さと闘ったが、ついに耐えきれなくなり、小部屋に戻ることを決心した。

「誰だ？」——凍えそうになっていたヨハネが扉を叩くと、中からダニエルの声が響いた。

「私です、あなたの兄弟です。もうこの寒さに耐えられず、あなたに仕えるためにここに戻ってきました」とヨハネは答えた。

「去れ、悪魔よ」とダニエルは反論した。「私を誘惑するな。天使は自分の肉体を気にかけず、食物も求めないのだ。」

そこで、聖ヨハネは、苦しみや誘惑との闘いにおいてまだ未熟な自分の力に過度に頼りすぎていたことに気づき、自らの過ちを悟って、それを悔やんで苦々しく泣き崩れた。するとダニエルは、彼の前に修道室の扉を開き、こう言った。

[7658] 聖ヨアン・コロフは、5世紀前半に修業に励んだ。

[7659] 「コロフ」はギリシャ語から訳すと「小柄な」という意味である。

[7660] スキトス・エジプトの荒野は、単に「スキトス」とも呼ばれ、エジプト北西部のニトリウス山から一日の行程（25〜30ヴェルスト）の距離に位置していた。　そこは水のない岩だらけの砂漠であり、エジプトの隠者たちが好んで住んだ場所であり、そこで救いを求めた修道士たちの禁欲的な功績によって名声を博した。　その後、この地域にちなんで、他の修道院や砂漠の隠れ家も「スキト」と呼ばれるようになった。そこでは、最も熱心な修道士たちが、唯一の神のもとで最も厳格な隠遁生活と、決して破られることのない沈黙を求めて住み着いていたのである。

「兄弟よ、あなたは肉体を持ち合わせているのだから、衣と肉体のために苦しみを受けなければならないのだ。」

このような諭しを受けた後、彼はまもなくダニエルのもとを離れ、ある長老ピメンのもとへ向かった。彼は、あらゆる偉業に挑む覚悟があり、一度選んだ道を決して離れないような、揺るぎない意志を自らに培いたいと願っていた。一方、尊者ピメンは、まさにその意志の強さと不屈の精神で知られていた。　聖ピメンの世俗からの離脱は限りなく徹底しており、彼を訪ねてスキートに来た実の母親との面会さえも拒んだほどであった。　そのような強固な性格を持つ長老のもとへ、自ら選んだ修行を揺るぎなく歩むことにまだ完全に落ち着いておらず、せっかちで情熱的かつ熱血なヨハネが向かった。彼の元を訪れたヨハネは、長老が何を要求しようとも、すべてに従うことを誓った。　聖ピメンは彼の忍耐力を試そうと、完全に枯れた木に水をやるよう命じた。彼は三年間、その木に水をやり続けたが、木はすでにすっかり枯れており、その労苦は誰の目にも全く無駄なものに映ったに違いない。 しかし実際には、聖ヨハネの労苦と忍耐は無駄にはならなかった。3年後、枯れ果てた木は青々と茂り、豊かな実を結んだのである。　この奇跡を目撃した者たち全員によって、その木は「従順の木」[7661] と名付けられた。熱意に満ちた心で聖ピメンのもとを訪れた聖ヨハネは、彼から子羊のような柔和さと謙遜さを身につけた。ある時、一人の兄弟が彼にこう言った。

「お前の心は邪悪だ。」

「その通りです」と、ヨハネは柔和に答えた。「あなたが思っている以上に、私の心は邪悪なのです。」

彼はそのように、侮辱を柔和に耐え忍ぶことができたのである。

当初は他者の指導の下で生活していた聖ヨハネは、後に自らも他者を賢明に導く能力を身につけた。　主は、彼に聖アルセニオス・ザ・グレートの指導者兼師となるよう定められた。アルセニオスは後に、彼と同様に偉大な功績によって名声を博した[7662] 。このアルセニオスは、貴族の出身であり、テオドシウス大帝の子供たち――ホノリウスとアルカディウス――の家庭教師を務めていた皇帝の宮廷から、そのまま荒野へとやって来た。　多大な栄誉に囲まれていた宮廷を後にし、彼はまだ比較的若かった（当時40歳前後）ものの、すでに霊的に熟達した修行者として、自らの霊的成長とさらなる研鑽を続けるため、尊者ヨハネの無条件の指導下に身を委ねることを決意した。　当初、一部の兄弟たちは、これほど高学歴で、これほど高貴な　家柄の男性が、さらなる啓発を求めて、素朴で学のない長老たちの元へやって来たことを奇妙に思っていた。ある兄弟は好奇心を隠しきれず、ある日彼にこう尋ねた。

「ギリシャやローマの学問を修めたあなたが、なぜ素朴で教養のない長老に教えを請うのですか？」

「確かに私は学術的な教育を受けてはいますが」とアルセニイは答えた。「しかし、この素朴で学のない人が知っていることの基礎さえも、私は知りません。なぜなら（彼は説明した）謙遜こそがすべての美徳の始まりであり、それはまるでアルファベットが読書生活の始まりであるのと同じだからです。」

かつて情熱的で高慢だったヨハネの修道院で、謙遜が花開いていたことを、彼はかくも高く評価していたのである。　数年にわたる共同の修道生活の後、アルセニイが「沈黙こそが罪なき状態の根源である」という理由で、人々から逃れ、沈黙を守るよう促す神秘的な声を聞いたとき、尊者ヨハネは、彼が共同生活を離れ、荒野で完全な孤独と沈黙に身を委ねることを祝福した。　しかし、謙虚

[7661] この木は、402年にヨハネの同時代人が目撃したものです。「従順の木」は今もなお健在で、実を豊かに結び、鮮やかな緑に覆われています。

[7662] 5月8日、聖アルセニオス大聖人の記念日

な師やそのすべての弟子たちへの強い愛ゆえに、彼は幾度となく荒野での隠遁生活を離れ、しばらくの間修道院に戻らざるを得なかった。

自身の救いを切に願う一方で、聖ヨハネは他者の救いにも同等の熱意をもって心を配っていた。彼の時代、アレクサンドリアの街にはタイシアという名の若い女性が住んでいた。敬虔な両親に育てられた彼女は、両親の死後、相続した全財産を慈善活動に充てた。　聖ヨハネが暮らしていたスキトスの長老たちは、街を訪れるたび、彼女の家で宿を提供してもらっていた。ところがある日、長老たちの耳に、タイシアがとっくに財産を使い果たし、今や貧困と戦う力がなく、自らの美貌と若さを生計の手段に変えてしまったという噂が届いた。　高潔なタイシアのこのような堕落を知り、長老たちは深く嘆き、ついにこの孤児を破滅的な迷いから救い出そうと決意した。彼らはこの困難な任務を、聖ヨハネに託すことにした。

「神はあなたに知恵をお与えになりました」と彼らは彼に語りかけた。「ところが、私たちに多くの慈善を施してくれたタイシア姉妹が、今や極めて不品行な生活を送っているという噂が私たちの耳に入りました。アッバよ、どうか彼女のもとを訪ね、話をしてみてください。あなたの言葉によって、彼女が正気に戻るかもしれません。」

聖ヨハネは祈りを捧げ、すぐに旅立った。彼は、このような事柄において遅滞は許されないことを知っていた。時が経つごとに、タイシアはますます深い堕落の淵へと沈んでいく恐れがあった。さて、彼はタイシアの家の前にたどり着いたが、今やその入り口は長老たちには閉ざされていた。かつては、自分の必要のために何かを持ち出したいと願う者なら誰でも中に入ることができたが、今では逆に、金や財宝を携えた者だけが中に入ることが許されていた。長老は、使用人に穏やかに語りかけ、ご令嬢に自分の来訪を伝えてほしいと頼んだ。しかし、ご令嬢の気分の変化に伴い、使用人たちの態度も変わってしまっていた。　無礼な女中はその謙虚な長老が女主人とは何の共通点もないことを知っていたため、彼の願いに対して激しい罵声を浴びせた。尊い長老はその罵声を穏やかに受け止め、ただ次の一言を付け加えて再び願いを伝えた。

「さらに、あなたの女主人に、私が彼女のために貴重な品を手配できると伝えてください。」

そこで、女中はお嬢様に彼のことを報告しようと決心した。

「入らせてあげなさい」とタイシアは言った。「修道士たちは海辺を歩き回っているから、時には本当に貴重な貝殻や石を見つけることもあるのよ。」

聖ヨハネはタイシアのもとへ入り、彼女のそばに座ると、深くため息をついて泣き出した。

「何で泣いているの？」とタイシアは驚いた。

「何があなたを、不死の花婿であるイエス・キリストから遠ざけたのですか？　なぜあなたは彼の宮殿を忘れ、不浄な行いで自分を汚しているのですか？」と、尊者は彼女に尋ねた。

すると突然、その不幸な女性は、幼い頃に亡き両親から愛するよう教えられた、自分の中ですっかり忘れ去られていたキリストを思い出した。神の長老の言葉は、まるで火のように、彼女の心にずっと前に蒔かれていた善の種を覆い隠していたすべての雑草を焼き尽くした。心からの悔い改めが瞬く間に彼女の全身を包み込み、その存在を揺さぶった。

「父よ！　父よ！　教えてください。私のような者にも赦しはあるのでしょうか？」彼女は恐ろしいほどの熱狂の中で叫んだ。

「あるよ」と長老は答えた。「救い主は、真に悔い改める者を常に待ち、赦してくださる。悔い改めなさい。そうすれば、天のすべての天使たちがあなたを喜び祝うだろう！」

「さあ、私をこの場所から連れ出してください。どこへでも構いません。ただ、悔い改めるのにふさわしい場所を教えてください」と、タイシアは老僧に懇願した。

彼女は、長きにわたり罪によって穢された自宅を彼と共に去ったが、不正に得た財産については、一切の処分を行わなかった。彼女は、かつて自ら選んだ、滑りやすく無謀な人生の道を二度と歩まないという、燃えるような願いに全身を燃やしていた。　聖ヨハネは、神の恵みの驚くべき働きに

感嘆し、全能にして慈悲深い主を賛美しつつ、この旅人を、彼女が自らを破滅寸前まで追い込んだ罪深い街から遠く離れた、荒野の奥深くへと導いていった。　夜が更けた。疲れ果てた旅人のために、聖人は砂で枕を作り、「さあ、休みなさい」と言った。彼女に十字を切ってから、聖人は彼女から離れ、いつもの夕べの祈りを終えると、自らも夜の休息についた。　すると、老修道士は夢の中で、タイシアを残してきたその場所を見た。そこは、天の果てまで届くような並外れた輝きに包まれていた。そして、その輝きの中に、天の天使が彼女の傷ついた魂を主のもとへと昇らせていた。　長老が眠りから覚めるとすぐに、タイシアを置いてきたその場所へと急ぎ、そこに着くと、彼女は確かにすでに息絶えていた。

「罪人のたった一時間の心からの悔い改めが、慈悲深い審判者を満足させ、迷い出た子を愛に満ちた父のもとへと連れ戻したのだ」と、尊者は語り、夜明けまで祈りを捧げた後、朝になって至福のタイシアの遺体を埋葬した。　修道院に戻ると、彼は、皆が知るタイシアの驚くべき悔い改めと栄光について語り、すべての修道士たちに大きな喜びをもたらした。

聖ヨハネ・コロフは、作家としても知られている。他の修道士たちによって記録された彼の多くの言葉に加え、彼自身が残したのは、聖パイシオスの生涯に関する詳細かつ素晴らしい記述であり、彼自身の言葉を借りれば、「皆の益のために」彼が著したものである。　正しい道から迷い出ていたこのパイシオスに対し、聖ヨハネは彼を説得することに成功し、彼は突然、そして取り返しのつかないほどにすべての財産を捨て去り、残りの生涯を荒野で悔い改めながら過ごした。　聖パイスイが行った多くの奇跡についてその伝記に記した後、聖ヨハネは自ら次のような注釈を加える必要があると考えた。

「彼に関する栄光に満ちた超自然的な話を聞いて、疑いを抱いたり、私が親愛なる父をより称えるために何かを付け加えたなどと思わないでほしい。彼はあらゆる人間的な栄誉を超越しており、下位の者からの称賛を必要としない。なぜなら、聖なる天使たちの中でも最も高き者たちによって称えられているからである。」　私がこの話を語るのは、聞き手や、彼の美徳に倣おうとする人々のためである。私は、自分の目で見て、自分の耳で聞いたことだけを伝えているのだ。

この簡潔な注記は、著述家としての聖ヨハネの人物像をよく明らかにしている。

聖ヨハネの安らかな臨終の時期は、正確には定まっていません。おおよそ422年あるいは430年とされています。　その場所については、コルツム、すなわち現在のスエズ近郊の荒野であった。彼の聖遺骨は、エジプトの聖殉教者ミナの教会に安置されている。敬虔な古の修行者としての彼の名は、正教会の枠を超えて広く知られている。

聖殉教者オニシフォロスとポルフィリオスの記念日

記念日：11月9日

聖殉教者オニシフォロスとポルフィリウスは、ローマ皇帝ディオクレティアヌスの治世に生きていた。　この不敬虔な皇帝がキリスト教徒に対して仕掛けた残酷な迫害のさなかに、彼らもまたキリストのために激しい拷問に耐える栄誉に浴した。彼らは全身に非人道的な殴打を受け、多種多様で恐ろしい拷問にさらされた。　その後、拷問者たちはキリストの殉教者たちを長い鉄板の上に載せ、火を燃やして焼き尽くした。最後に、彼らは凶暴で野生の馬に縛り付けられた。岩だらけでこぼこした地面を馬に引きずられ、聖なる殉教者たちは完全に引き裂かれ、そのような苦しみの中で魂を神に委ねた。　信者たちは夜陰に乗じて密かに彼らの遺骸を集め、パンギアンの村「　」に尊厳をもって

埋葬した。そこでは、彼らの遺骸から多種多様な奇跡や癒しが現れ、聖なる御子たちにおいて、三位一体の神として賛美される[7663]の栄光が示された。

コンダク、第2声調:

殉教者の二人は、激しい苦難に耐え、敵の傲慢を地に打ち倒し、被造物ではない三位一体の恵みに照らされた、栄光あるオニシフォロスとポルフィリオスよ、私たちすべてのために絶えず祈ってください。

聖エウストリアとソシパトラの記念日。

11月9日の記念日

聖エウストリアは、敬虔な両親の娘として、マウリキウス帝の治世下、ローマに暮らしていた[7664]。幼い頃から清らかさを守り、断食と不眠の生活を送っていた。 成長するにつれ、彼女は敬虔な生き方を深く愛するようになり、ローマを離れてコンスタンティノープルへと赴き、そこである修道院にて修道生活の実践に身を捧げました。

ある日、マウリキウス皇帝の娘ソシパトラは、聖母マリア、私たちの至聖なる御母、永遠の処女マリアのヴラヘルン教会[7665]へと向かった。そこで彼女は、その徳高い生活がすでに街中に知れ渡っていたエウストリアと出会った。 そこでソシパトラは、至福のエウストリアに、自分の霊的な母となり、肉体の守護者となってくれるよう懇願した。エウストリアはこれに応じ、ソシパトラは修道女の位を受け、労苦と修行に励んだ。 彼女は父から適切な場所を譲り受け、そこに教会堂を建て、聖エウストリアと共に住み着いた。時が経つにつれ、敬虔な少女たちが彼女たちに、自分たちと共に過酷な修道生活を送らせてほしいと願い、自分たちをその家に迎え入れてほしいと懇願するようになった。 聖女たちは彼女たちの願いを拒むことはなかった。長年にわたる修業の末、至福のエウストリアは多くの人々を救いの道へと導き、後継者として至福の王女ソシパトラを残して、主のもとへ旅立った。 至福のソシパトラは、霊的な母の模範に従って修道院を統率し、徳のある生活において完全さを達成した後、愛し、そのためにこれほど過酷な生活を受け入れた主のもとへ、安らかに旅立った[7666]。

[7663] 聖殉教者オニシフォロスとポルフィリウスは、4世紀初頭に殉教した。パンギアン（別名パンケアン）という集落は、マケドニアのパンゲイ山の近くに位置しており、その山の名に由来してこの名がついた。 この村に聖遺骨が安置されていたこと、およびそこから現れた奇跡については、ヨセフ・ペスノピセツが作成したカノンの第9歌（トロパリオ第3番）に言及がある。

[7664] マウリキウスは582年から602年まで在位した。

[7665] 福者ソシパトラは、それ以前からすでに福音的な生活に身を慣らすよう努めていた。彼女の叔母ダミアナは、エルサレムの修道院の修道院長であり、その後、隠遁生活を送っていた。ソシパトラはエルサレムの聖地を巡礼するために旅立ち、叔母のもとで1年間過ごし、霊的生活に関する叔母の教えに耳を傾けた。 「ある時」と、至福のダミアナは語っている（ヨハネス・モスカの『霊の牧場』参照）、「私の姪、すなわちマウリキオス皇帝の娘が聖都を訪れ、ここで丸一年を過ごした。 ある日、彼女を連れて、私たちは聖コスマスとダミアノの聖堂へ向かった。聖堂に立ちながら、私は姪にこう言った。『お嬢様、年老いた女性がやって来て、あなたにヌムル（小銭）を二枚渡そうとしたら、それを受け取りなさい。高慢になってはいけません』。彼女はため息をつきながら言った。『どうして私がそれを受け取れるというのですか？』 私は彼女に言いました。「受け取りなさい。この婦人は神の前で尊い方なのです。毎週、彼女は教会にいる人々に自分のヌムラを配っているのです。その小銭を受け取りなさい。受け取ったら、他の人に渡してあげて。ただ、その老婦人の善意を拒んではいけません」。

[7666] 聖エウストリアの没年は610年、聖ソシパトラの没年は625年とされる。

聖殉教者アントニオスの記念日

記念日：11月9日

聖アントニオはシリア出身で、石工を職業としていた。神殿で生贄を捧げる異教徒たちを憐れみ、聖人は彼らにそのような不敬な行いをやめるよう懇願した。彼らがその言葉に耳を貸さなかったため、彼は人里離れた場所へと去った。　そこで彼はティモフェイという名の隠者に出会い、彼と共に2年間を過ごした。祈りによって力を得た彼は、再び 迷える民のもと、すなわち自分の街へと向かい、彼らを真理の道へと導こうとした。　彼が故郷の町に戻ったのは、住民たちが悪魔たちを称える祭りを執り行っていた時であった。彼は彼らの神殿に入り、偶像を打ち砕いた。そのために様々な拷問を受け、町から追放されることとなった。そこで彼はシリアのアパメア[7667] へ向かい、そこで司教に懇願して、聖三位一体の名による教会の建設を許可してもらった。　彼が教会の建設を始めたところ、そのことを故郷の住民たちが知り、夜になってやって来て、剣で彼をバラバラに切り刻んだ。こうして彼は神に魂を捧げた。

聖殉教者アレクサンドロス・テッサロニキスの記念日。

記念日：11月9日

聖アレクサンドルは、マクシミアヌス帝の治世下で過酷な拷問に耐えた[7668] 。キリスト教徒であることを告白したため、彼は捕らえられ、偶像への生贄を捧げるよう強要された。しかし彼は従うどころか、神への熱意を一層強め、生贄が載せられた祭壇を倒してしまった。　激怒したマクシミアヌスは、彼を斬首するよう命じた。処刑人が剣を手に取ると、突然立ち止まった。

「なぜ立ち止まっているのか」と皇帝は彼に言った。「命令を遂行しないのか。

「私は」と彼は答えた。「幻を見ました。それが何を意味するのか、理解に苦しんでいます。」

そこで聖人は、祈りのために一時間の猶予を懇願した。熱心に祈りを捧げた後、彼は斬首された。彼の魂を天使が先導しているのを見た王は、キリスト教徒たちが聖人の遺体をテッサロニキに埋葬することを許した。

11月23日

11月10日（旧暦）

聖殉教者オレストスの殉教。

記念日11月10日

ローマで不敬虔な皇帝ディオクレティアヌスが統治していた頃、ある日、マクシミンという名の高官が彼の元を訪れ、こう言った。

[7667] シリアのアパメアは、シリア南西部、シリア最大の川であるオロンテ川のほとりに位置していた。アパメアは古代、シリアのアパメナ地方の主要都市であり、その名はシリアの統治者セレウコス1世の妻アパメに由来する。

[7668] 4世紀初頭、

「偉大なる君主よ、神々に選ばれし者、至高の指導者よ。どうか、私にキリキアとカッパドキアの諸国を巡り、我らの神々やあなたの権威に敵対する憎むべきキリスト教徒たちを、様々な拷問にかけてください。　私は彼らを火で焼き、水に沈め、車輪でその肉体を粉砕し、骨を砕き、剣で斬り殺し、野獣の餌とし、あらゆる手段で彼らを滅ぼし、偉大なる神々に崇拝を捧げず、陛下の支配に従わない者たちの記憶そのものを、この地上から根絶やしにいたします。

マクシミヌスのこの演説は皇帝の意にかなったため、皇帝は彼にこう答えた。

「キリキアやカッパドキアだけでなく、わが王国の全土において、不敬虔なキリスト教をすべて根絶する権限を汝に与える。そうして、わが国の神々、すなわち全地の支配者であり守護者である神々の栄光が増し加わり、高められるように。」

皇帝からそのような権限を授かったマクシミンは、大きな誇りと憎悪に満ち、まるで羊を狙う貪欲な狼のように、あるいは最も弱い獣に向かって咆哮する獅子のように、罪のないキリスト教徒を滅ぼしに出かけた。 カッパドキアの地に至ると、彼はティアナ[7669]と呼ばれるある町に入り、そこでキリスト教徒について尋ねたところ、市民たちから、この町には　キリスト教徒の医師がおり、その名はオレステスという。彼は毎日、熱心に人々に神の御子イエス・キリストを崇めるよう教え、　「天に存在する唯一の真の神以外に神はいない」と説いていると聞いた。マクシミン公はこれを聞くと、直ちにオレステスを捕らえて、自身の元へ連れてきて裁くよう命じた。

オレステスが不敬虔な法廷に連行されると、公爵は彼を傲慢な眼差しで見据え、威圧的な口調で尋ねた。

「お前は一体何者だ？　名を言え！」

聖人はこう答えた。

「私は、私の主イエス・キリスト、万物の唯一の神のしもべです。私の名はクリスチャンです。なぜなら、私がしもべとする方の御名を、私は誇りとするからです。」

公爵は彼に言った。

「お前はキリストを神と呼ぶという不遜なことをし、自らをキリスト教徒と公言したのだから、処刑に値する。だが、その狂気を捨て、神々に生贄を捧げよ。そうすれば、苦痛に耐える必要はないだろう。」

聖オレストはこれに対し、次のように答えた。

「*『こう彼らに告げよ。天と地を創造しなかった神々は、地から、また天の下から消え去る』*（エレミヤ書10:11）。私は幼少の頃から、清い心をもって崇める生ける神に賛美の捧げ物を捧げることを学んできた。しかし、あなたが神と呼ぶ、恥知らずで虚しい悪魔たちには、決して拝することはない。」

公爵は再びオレステスに尋ねた。

「なぜ、生まれつき与えられたお前の名前を我々に告げないのか？」

「すでに申し上げた通り」と聖人は答えた。「私はキリスト教徒であり、その名は両親から与えられた名よりもはるかに栄光に満ち、この世のあらゆる著名な名よりも高貴なものです。　もしあなたが、私が生まれながらに持っているその名前を知りたいというのなら、お教えしましょう。肉体の誕生によって私はオレステスという名を受けましたが、霊的な誕生によって私はキリスト教徒と呼ばれています。そして、霊的な誕生は肉体の誕生よりも尊いものですから、私はオレステスと呼ばれることよりも、キリスト教徒と呼ばれることの方を、自分にとってより大きな名誉だと考えています。

そこで、公爵は、狡猾な手段でキリストの僕を誘惑しようと企み、彼にこう語りかけた。

[7669] ティアナは、カッパドキアの古代都市で、タウロス山脈の麓、キリキアの峡谷の近くに位置していた。

「オレストよ、お前の若さを憐れみ、お前を赦してやりたい。お前が医術にも長けていると聞いたので、お前を滅ぼすつもりはないが、王の命令に従うよう勧める。　そうすれば、あなたは私にとって息子同然となり、すべての人から尊敬され、称賛されるだろう。王もあなたのことを知り、王から大きな恩寵を受けることになるだろう。

しかし、聖人はこう答えた。

「公爵よ、あなたの狡猾な言葉に私は惑わされはしない。　私は一時的な名誉を求めておらず、主のために侮辱を受けることも厭わない。むしろ、主の御心に適い、天の御国で主の子と呼ばれることを願って、主のためにあらゆる苦難に耐える覚悟がある。なぜなら、*「御名によって信じる者、すなわち、御名を受け入れた者には、神の子となる権能を与えられた」*（ヨハネ 1:12）

これに対し、公爵はオレステスにこう言った。

「愚かで厚かましい男よ、お前は、ユダヤ人たちに悪人として十字架につけられたキリストを唯一の神だと見なして、錯覚に陥っているのだ。」

オレストは彼にこう答えた：

「もしあなたが、十字架につけられた方の偉大な力を知っていたなら、偶像への虚しい崇拝を捨て、真の目に見えない神から生まれ、御自身の御意志によって神性と人間性を結び合わせ、私たちを悪魔の破滅的な惑わしから救い出してくださった、真の神である方にひれ伏したでしょう。」

オレステスの答えを聞き終えると、公爵は彼にこう言った。

「お前の狡猾な言葉は、私の耳を苛立たせる。まさか、私までもがお前の不敬虔な信仰へと改宗させようというのか？　知っておけ、私は自分の神々を捨てず、あなた方のキリストには拝まない。むしろ、あなたにこう言おう。あなたのキリストを捨て、我々の神々に拝み、彼らに犠牲を捧げよ。そうすれば、私と同等の権力を与えよう。

しかし、この誘惑に聖人は惑わされることはなく、公爵にこう答えた。

「私は、常に私に恵みを与えてくださる永遠の神、主イエス・キリストを崇め、主に仕えている。しかし、あなた方の悪魔たちにはいけにえを捧げず、あなた方の破滅的な不敬虔には決して加担しない。」

その後、王子は聖オレステスを、金や銀で飾られ、貴重な偶像で満たされた偶像の神殿へ連れて行き、そこで彼にこう言った。

「オレストよ、これらの尊い神々にひれ伏せ。」

しかし、聖人はこう答えた。

「公よ、あなたは真理を知らず、大いに誤っている。あなたの神々は、人々を惑わすために金、銀、銅、鉄で作られたものに過ぎない。それらは人の手で作られたゆえに、見ることも聞くこともできず、自分自身を助けることも、他者に善を行うこともできない。それなのに、なぜ私がそれらに拝む必要があるのか？」

すると、公爵は再び聖人に言った。

「オレストよ、これが最後だ。神々に拝むのか、拝まないのか、答えよ。さもなくば、汝には苦痛が待っている。」

聖人は答えた。

「公爵よ、私があなたの脅しを恐れているとでもお考えですか？いいえ、拷問で私を脅かすなど期待しないでください。しかし、お望みのままになさってください。何しろ、私の助け手である主イエス・キリストが私と共におられることを、あなたは知らないのですから。」

その後、公爵は聖オレストの服を脱がせ、その場である偶像の神殿で激しく殴打するよう命じた。そして、聖人は拷問が始まると、天に向かって両手を上げ、こう言った。

「天から私を見守り、私の神よ、あなたのしもべである私を助けてください。」

聖人は、棒や縄、牛の腱など、様々な道具で容赦なく打ちのめされた。その拷問は長く続き、四十人の兵士が交代し、道具は折れたり破れたりした。聖人の体には傷のない場所が一つもなく、内臓さえも露わになってしまった。　しかし、聖オレストはすべてを勇敢に耐え忍び、その忍耐力に皆が驚嘆した。

聖人が殴打されている間、公爵は彼にこう言った。

「神々に生贄を捧げれば、お前を解放してやる。」

しかし、殉教者はこれに対して何も答えなかった。その後、公爵は聖人の肋骨を赤熱した鉄で焼くよう命じ、傷口に胆汁を混ぜた酢を注ぎ、塩を振りかけるよう命じた。　すると、聖なる殉教者は天を仰ぎ、こう祈った。*「私の上に善のしるしを示してください。そうすれば、私を憎む者たちはそれを見て恥じ入るでしょう。主よ、あなたは私を助け、慰めてくださったからです」*（詩編85:17）。　そして、そう祈り終えると、神殿に立っていた偶像たちに息を吹きかけた。すると、それらはたちまちすべて倒れ、塵と化して散り散りになった。その時、聖人は大きな声で公爵に言った。

「お前の神々の力はどこにあるのか。なぜ彼らは自分たちを助けなかったのか？」

皆、激しい恐怖に襲われて神殿から逃げ出した。聖なる殉教者も外へ出たが、彼が外に出た途端、神殿全体が揺れ動き、崩れ落ちた。

公爵は聖オレストを奥の牢獄へ連行するよう命じ、看守に対し、聖人にパンも水も与えず、飢えと渇きで苦しめるよう命じた。そして聖オレストは牢獄に入ると、両手を天に向け、こう祈り始めた。

「主イエス・キリストよ、若き日から私に敬虔さを教え、あらゆる不敬虔な欲望、迷い、誘惑を私から追い払い、人々のために天と地と海を創造し、あなたの聖徒であるアブラハム、イサク、ヤコブを御自身の安息へと導かれた方よ！　お願いいたします、私をも見捨てないでください。私は全身全霊をあなたに捧げました。どうか、私もまた、御名のために苦難を受け、御国を相続した人々の列に加えさせてください。

聖人はこのように祈り、七日間、食事も水も与えられずに牢獄にとどまりました。八日目に、領主は聖人を牢獄から連れ出し、裁きのために自分の元へ連れてくるよう命じ、そこで彼にこう言いました。

「厚かましい不敬な者よ、我らの神々の敵よ、お前は依然として頑なで、服従しようとはしないのか！　よく知っておけ、もし神々にひれ伏さなければ、私はお前を恐ろしい拷問にかけ、容赦なく命を奪い、その不敬な肉体を水に沈めるよう命じるのだ。」

聖オレストはこれに対し、次のように答えた。

「私はあらゆる苦痛に耐える覚悟がある。なぜなら、私の心には常に、私の主イエス・キリストの姿が宿っているからだ。」

すると、拷問官は激怒し、長さ一ピャデン[7670] の鉄の釘十二本を運ばせ、聖オレストの踵に打ち込むよう命じた。それが行われると、公は聖オレストを野生の馬に縛り付け、聖人が死ぬまで引きずり回すよう命じた。　激しく駆り立てられた馬は、聖人を道や野原、茨や鋭い岩の上を引っ張り回した。そして、こうした拷問の中で、聖なる殉教者 オレストは、町から二十四ポプリシャ[7671] の距離を馬に引きずられていった末、主なる神[7672] にその魂を委ねた。 拷問者は、その遺体をフィヴァと呼ばれる川に投げ込むよう命じた。しかし、突然、太陽のように輝くある人物が現れ、聖人の遺骨を集

[7670] ピャデン――古代の長さの単位。親指の先から小指の先までの長さに相当した。

[7671] ポプリシュチェ――距離の単位で、現在の690サジェニに相当する。したがって、24ポプリシュチェは33ヴェルスタ強となる。

[7672] 殉教者オレステスの死は304年頃であった。彼の記念日は7月9日にも祝われる。

めて、ティアナの町の近くにある山で埋葬した。私たちの神に栄光あれ、常に、今、そして永遠に、世々限りなく。アーメン。

この伝記の著者[7673] は、聖なる大キエフ・ペチェール修道院においてすでにその印刷準備を整え、 キリスト降誕1685年、この聖なる殉教者オレストの苦難の記述を終えたある夜、キリスト降誕前の聖なる断食期間中、早課の直前に、眠りの中で幻を見、聖なる殉教者がさらに大きな苦難に遭ったという啓示を受けた。 夢の中で、聖殉教者オレスト自身が彼に現れ、明るい眼差しで彼を見つめながらこう言った。

「私は、あなたが書いた以上に、キリストのために苦しんだのだ。」そう言うと、殉教者は胸を開き、左脇腹に内臓にまで達する大きな傷を見せながら、こう言った。

「これは鉄で焼き付けられた傷だ。」

それから、右腕を肘まで露わにし、肘のすぐそばにある傷を見せながら、こう言った。

「これは、私を斬りつけられた傷だ。」

その傷には、切断された静脈が見えていた。また、左腕を露わにすると、聖人は右腕と同じような傷を見せながら、こう言った。

「ここも、私を斬り裂かれたのだ。」

その後、身をかがめて、殉教者は片方の足を膝まで露わにし、膝の曲がり目にできた傷を見せ、さらにもう片方の足も膝まで露わにして同じ場所に同じ傷を見せながら、こう言った。

「そして、これは鎌で切り裂かれたのだ。」

それから、直立してこの伝記の著者の顔を見つめながら、殉教者はこう言った。

「見よ、私がキリストのために受けた苦しみは、あなたが書いたよりもはるかに大きいのだ。」

著者が、「このオレステスとは一体誰なのか。もしかすると、五人の殉教者の一人として苦難を受けたあのオレステスではないか（[7674] ）」と考えを巡らせていると、聖なる殉教者はその思いに答えてこう言った。

「私は、五人の殉教者の一人として苦難を受けたあのオレステスではなく、今日、あなたがその生涯を記したあのオレステスである。」

聖オレステスがそう語っている最中、早課の鐘の音が聞こえ、幻視は終わった。

殉教者ミリヤの受難

記念日：11月10日

聖ミリイ司教は、ペルシャの[7675] という地出身であった。

聖なる洗礼を受けた彼は、まだ若くして聖書の研究に励みました。成人すると、当時のペルシャ王のもとで軍人として仕えることを志しました。しかし、神からの啓示を受け、軍人となることを脅しを伴って禁じられました。 その後、彼はキリスト教教育を受け[7676] 、自身と自国民のために絶え

[7673] すなわち、聖ディミトリ・ロストフスキー

[7674] その記念日は教会によって12月13日に祝われる

[7675] ラヒジン地方出身。

[7676] 聖ミリイは、ペルシャの最も重要な都市の一つであるイスパガニから80ヴェルスタ離れたベト・ラペテで、学術教育を受けた。

間ない祈りを捧げ続け、しばらくして故郷の町を離れ、エラム地方のスーズで修道生活を送った[7677]。その後、殉教者であり信仰の証人であるゲナディオスによって司教に叙階された。　聖ミリイは、そこに住む根深い異教徒たちを言葉と行いによって糾弾するために多大な労力を費やしたが、そのために彼らから　な粗暴な侮辱を受けた。ついには、激昂した群衆に殴打され、半死半生の状態で町の外に放り出された。これにより、彼はスーズを去らざるを得なくなった。　去り際、聖人はスーズの近いうちの滅亡を予言した。

それから3ヶ月も経たないうちに、この予言は実現した。この都市に対して、[7678]　王は、都市統治者や他の高貴なエラム人たちの横暴や陰謀に激怒し、軍隊を派遣した。軍隊は都市そのものを完全に破壊し、住民たちを剣で斬り殺した。　聖人はエルサレムへ向かい、そこから偉大なるアントニオスの弟子であるアモンのもとへ、ニトリウス砂漠へと向かった。そこで2年間過ごした後、彼はペルシアへ戻った。道中、彼は洞窟に住むある修道士を訪ねた。洞窟に入ると、巨大な蛇を目にしてこう言った。

「主の御剣が、お前を滅ぼすように、大蛇よ！」

そして、十字を切って、聖人は蛇に向かって息を吹きかけると、その蛇は即座に死んだ。そこから彼は故郷の町へ向かい、そこで教会を建てた。それは、従わず、すでに厳しい罰を受けた民の赦しを請うためであった。

それから何年も経って、彼はクテシフォン[7679]へ向かった。そこでは当時、パパ[7680]という名の司教に対する公会議が開かれていた。この公会議で、ミリイはこの司教の誤った主張を糾弾した。その後、パパ司教が自らの功績を誇示して聖人を非難し、侮辱し始めたため、聖人は、まもなく彼に下される神の裁きを予言した。そして実際、翌年、非難されたパパは亡くなった。

ミリイはクテシフォンから別の都市へと向かった。その都市の領主は、すでに2年間も重病を患っていた。聖人の到来を知った領主は、使者を送り、病に苦しむ者を訪ね、彼のために祈ってほしいと頼んだ。使者がこのことを聖人に伝えると、聖人は彼にこう言った。

「行って、あなたを遣わした病人にこう伝えなさい。『司教はこう命じる。私のような不適格者が宣教するイエス・キリストの御名において、あなたの病を顧みず、腰に帯を締め、私のところへ来て、私に会わせてください』と。」

使いが戻って聖人の命令を公爵に伝えると、公爵の病はたちまち治り、まるで一度も病気になったことがなかったかのように回復した。聖人のもとへやって来ると、彼は聖人の尊い足元にひれ伏し、それを抱きしめて口づけした。　その際、彼は、この聖なる人をこのように栄光に輝かせた神に感謝を捧げた。この輝かしい奇跡により、多くの人々がキリストの信仰へと導かれた。聖ミリイはその地で、人々から悪霊を追い出し、10年間も寝台から起き上がれなかった麻痺の女性を、その手を握ることで癒やした。　また、不正な裁きを下し、偽りの誓いさえ立て、聖人の言葉を全く無視したある男を、多くの人々の戒めとするため、エリシャがギエゼヤに下したように（列王記下5:1–27）、ハンセン病に罹らせた。このため、多くの人々が彼の元を訪れ、キリスト教の信仰を告白した。　聖ミリイは他の場所でも多くの奇跡的なしるしを行った。

[7677] エラム地方は、ティグリス川の対岸、南メソポタミア、メディア、バビロニア、イランの間に位置していた。スーザは、ペルシア最古の都市であり、かつてはスージアナの豊かな首都であり、当初はエラム王、その後ペルシア王の居城であった。

[7678] ここで言及されているのは、もちろんペルシア王サポル2世である。

[7679] セレウキア・クテシフォンは、ティグリス川沿いに位置する二重都市であり、東方における最も重要な古代の交易拠点の一つであった。

[7680] それは紀元前334年のことだった。教会の分裂は、10年前にすでに司教座を辞任していたある司教パパが、教会内の権力に対して不法な主張を行ったことに起因していた。

ついに、彼は故郷に戻り、そこで多くの人々をキリストへと改宗させた。このことを耳にした、ホルミズド地方の統治者グフリズは、ミリウスとその二人の弟子を牢獄に投獄するよう命じた。その後、聖なる殉教者たちが彼の命令により裁きを受けるために彼の前に引き出されると、残酷な統治者は彼らの信仰について尋問し、もし信仰の真実性を証明できなければ死を宣告すると脅した。しかし、ミリイはこれに恐れずにこう答えた。

「私の信仰は真実であり、あなたの虚偽の言葉のためにそれを擁護するつもりはない。私の教えは清らかであり、あなたの不浄な耳のためにそれを明かすつもりはないが、真実を告げてやろう。ああ、神を冒涜する不信心な悪党よ、そしてあなたのように神を冒涜する者たちすべてに災いあれ！」　神は御自身の正義により、来世において、あなた方をゲヘナとその恐ろしい闇へと裁き、あなた方は泣き叫び、歯ぎしりしながら永遠に苦しむことになるだろう。なぜなら、あなた方は、自ら誇り、慰めとしている恵みの与え主を知ることを拒んでいるからだ。

キリストの殉教者たちの揺るぎない信仰を目の当たりにし、聖ミリイの非難に激怒したゴルミズダは、怒りに任せて飛び上がり、剣で聖人の胸を貫いた。また、統治者の弟ネルセスも、同様の狂気に駆られ、ナイフで聖人の心臓を刺した。　しかし、キリストの殉教者は、まだ息があるうちに、王とその弟にこう言った。

「あなたがたは、全く罪のない私を殺すことを謀ったのだから、明日、私を刺し貫いたのと同じ時刻に、互いに血を流し合い、あなたがたの母は子を失うことになるだろう。」

そう言い終えると、彼は息を引き取った。聖人の二人の弟子については、不義な支配者たちは石打ちの刑に処すよう命じた[7681]　。聖なる殉教者たちの遺体は、教会の聖歌が歌われる中、信者たちによって尊厳をもって埋葬された。

翌日、不義な統治者は聖人の言葉に全く耳を貸さず、弟と共に狩りに出かけた。鹿を見つけると、二人は一斉にその鹿の後を追って駆け出した。鹿を疲れ果てさせた後、彼らが鹿を狙って矢を放ったところ、誤って互いに矢を当ててしまい、その場で息を引き取った。

聖使徒オリンポス、ロディオン、ソシパトラ、エラスト、クワルトの記念日

記念日：11月10日

聖人たちは、キリストの七十人の使徒の一員であった。　その中の一人、オリンポス（あるいはオリンパン）は、使徒パウロが『ローマ人への手紙』（ローマ16:15）で言及している人物であり、使徒ペトロに続いてローマへ赴き、そこでローマ皇帝ネロの命により、聖使徒ペトロが十字架にかけられたのと同じ日に剣で斬り殺された。

同様に、聖なる首席使徒パウロの親族（ローマ16:11）であり、パトラス[7682] で神の言葉を宣べ伝え、同地の司教も務めていた使徒ロディオン、あるいはイロディオンも、使徒ペトロと共にローマへ赴き、ペトロが磔にされたその日に斬首された[7683] 。

聖使徒ソシパトルはアカイア出身であり[7684]　、使徒パウロの親族でもあった。このことについては、使徒パウロ自身がローマ人への手紙（ローマ16:21）の中で言及している。　聖使徒ヤソンと共

[7681] これは341年11月12日の出来事だったが、聖ヨハネス・クラマトルス（金口）に敬意を表して、その記念日は11月10日に移された。

[7682] パトラ（現在のパトラス）は、ギリシャ王国のパトラス湾のほとりにある豊かな商業都市である。

[7683] 使徒オリンポスとロディオンの祝福された死は、67年に訪れた。

[7684] ギリシャの州。

に、彼は使徒パウロの弟子であり、使徒の巡回旅行に同行した。その後、イコニウムの教会[7685] の司教となり、尊厳ある老齢のうちに安らかにこの世を去った[7686] 。

同様に、聖使徒エラストも安らかに主のもとへ帰った。彼についても、聖使徒パウロはローマ人への手紙（ローマ16:23）で言及している。聖使徒エラストは、当初エルサレム教会の助祭兼会計係であり、その後パネアデの司教となった[7687] 。

聖使徒クアルト（またはクワルト）は、聖使徒パウロによって言及されており（ローマ16:23）、その敬虔さゆえに多くの苦難に遭い、多くのギリシャ人をキリストへの信仰へと導き、ヴェリタ市の司教として安らかにこの世を去りました[7688] 。

今や、これらすべての聖使徒たちは、永遠の喜びのうちに神の御座の前に立ち、数多くの功績と労苦に対する報いを神から受けています[7689] 。

コンダク、第2声調：

神聖なる光で心を照らし、雄弁な言葉の織り成すものを巧みに解き明かし、あらゆる言語を掌握した、栄光ある使徒たちよ、主のもとへ人々を導き、神の三位一体を賛美することを教えた。

11月24日

11月11日（旧暦）

聖大殉教者ミナの殉教

記念日 11月11日

聖殉教者ミナはエジプト出身であり、キリスト教の信仰を公言し、コトワン地方[7690] に駐屯する軍隊で、千人隊長フィルミリアンの指揮下で従軍していた。　当時、ローマではディオクレティアヌスとマクシミアヌスという二人の不信心な皇帝が共同で統治していた[7691] 。この二人の皇帝は、偶像を崇拝しないすべてのキリスト教徒を拷問にかけ、処刑するよう命じる勅令を全土に発布した。この勅令により、キリストを信じる者たちは至る所で偶像への生贄を強要された。　その時、至福のミナは、このような災厄や、魂のない偶像への崇拝を目の当たりにしたくなく、軍人としての地位を捨てて山や荒野へと去り、神を知らない人々と共に生きるよりは、むしろ獣たちと共に生きることを望

[7685] イコニア――小アジア内陸部、タウロス山脈の麓にある、肥沃な高地の平原に位置する都市。かつてはリカオニア地方の主要都市であった。現在はコニアと呼ばれ、トルコ・小アジアのカラマニア地方の主要都市である。

[7686] 1世紀、コルフ島において、使徒イアソンと共にキリスト教を宣教した。

[7687] パレスチナ北部の都市。

[7688] ベリト――現在のベイルート――は、地中海沿岸に位置するフェニキアの古代都市である。現在はレバノンの首都である。

[7689] これらの聖なる使徒たちと共に、教会はこの日に使徒テルティウスも記念している。その記念日および肖像については、10月30日の聖使徒たちの項を参照のこと。

[7690] コトワン――フリギアにある古代都市。フリギアは小アジアの広大な地域であり、当初は半島西側の全中部、さらにプロポンティス（大理石海）の南岸からヘレスポント（ダーダネルス海峡）に至る地域を包含していたが、後にミジアに編入された。　その境界は、西はミジア、リディア、カリア、南はリキア、ピシディア、リカオニア、東はカッパドキア、北はガラティア、ビフィニアである。

[7691] 両皇帝は284年から305年まで共同統治を行い、ディオクレティアヌスは東方、マクシミアヌスは西方で統治した。

んだ。　聖ミナは長い間、山や荒野を放浪し、神の律法を学び、断食と祈りによって魂を清め、昼夜を問わず唯一真の神に仕えた。そうしてかなりの時間が過ぎた。

ある日、コトワン地方の主要都市で不敬虔な祭りが催され、多くの異教徒が集まった。彼らは自分たちの不敬虔な神々を称えて、様々な遊びや見世物、馬の闘技、相撲の試合を行い、街中の住民たちは特別に設けられた高い場所からそれらの見世物を眺めていた。　福者ミナは、聖霊によってこの祭りのことを予知すると、神への熱意に燃え上がり、山や荒野を後にして街へと向かった。　見世物が繰り広げられていた場所の中央に足を踏み入れると、殉教者は皆に見えるように高台に立ち、力強い声でこう叫んだ。「*わたしを求めなかった者たちが、わたしを見つけた。わたしについて尋ねなかった者たちに、わたしが自ら現れたのである*」（ローマ10:20）。

聖ミナがそう叫ぶと、見世物に集まっていた者たちは皆、彼に視線を向け、その大胆さに驚き、静まり返った。その場に見世物を観覧していた、ピルという名のその町の領主は、聖人を連行するよう命じ、彼に尋ねた。

「お前は誰だ？」

聖ミナは、民衆全員に聞こえるよう、大声で叫んだ。

「私は、天と地の主であるイエス・キリストのしもべです。」

公爵は再び聖人に尋ねた。

「お前はよそ者か、それともこの地の住人か。どうして、この見世物の最中に、あえてそんな大声で叫ぶほどの度胸があるのだ？」

公爵がそう言い放った時、聖人がまだその言葉に答える間もなく、公爵のそばにいた兵士たちの一部がミナを認めて叫んだ。

「この人は、ミルリアン千人隊長の配下にあった戦士、ミナだ。」

すると、公爵は聖ミナにこう言った。

「彼らが言うように、お前は本当に戦士だったのか？」

聖人は答えた。

「はい、確かに私は戦士であり、この街にいました。しかし、悪霊に惑わされ、真の神ではなく偶像を崇拝する人々の不義を目の当たりにし、私は戦士の身分を捨て、この街を去りました。それは、これらの人々の不法と滅びに加担しないためです。」　今日に至るまで、私は不義な人々、すなわち私の神の敵たちとの接触を避け、荒野をさまよってきた。　しかし今、あなたがたが不敬虔な祭りを催していると聞き、私は私の神への熱意に駆られ、あなたがたの盲目さを糾弾し、御言葉によって天と地を創造し、全宇宙を治めておられる唯一の真の神をあなたがたに宣べ伝えるために、ここへやって来たのです。

その言葉を聞いた公爵は、聖人を牢獄に連行し、朝まで見張るよう命じ、自身はその日一日中、祝祭や見世物に参加していた。

翌日朝、公爵は裁判の席に着き、聖ミヌスを牢獄から連れてくるよう命じると、贈り物を約束したり、拷問をちらつかせたりと、あらゆる手段を尽くして彼を偶像崇拝へと誘おうとした。　しかし、言葉では聖人を不敬の道に引き込むことができなかったため、王は行動で彼を強制することにした。四人の兵士に命じて聖人の服を脱がせ、四肢を広げさせ、容赦なく牛の腱で打ち据えさせた。その結果、殉教者の傷口からは血が小川のように流れ出た。その場に居合わせたピガシウスという名の男が、聖ミヌスにこう言った。

「お前の身のためにも、体が完全に破壊されてしまう前に、王の命令に従いなさい。」　「こうするのを勧める。この苦しみから逃れるためだけに、一時的に神々にひれ伏し、その後またあなたの神に仕えなさい。もし一度だけ偶像に犠牲を捧げ、この耐え難い苦しみから逃れるというやむを得ない事情のために、短期間だけ彼らに身を委ねたとしても、あなたの神は、この背信行為を咎めたりはしないだろう。」

しかし、聖人は怒りを込めてこう答えた。

「私から離れよ、不義を行う者よ。私はすでに賛美の捧げ物を捧げた。そして、再び私の神にのみ捧げるつもりだ。その神は私に御助けを授け、忍耐を強めてくださる。それゆえ、これらの苦しみは私にとって、重くはなく、むしろ極めて軽く、慰めとなるもののように思えるのだ。」

拷問官は、殉教者のそのような忍耐に驚愕し、聖ミヌスにさらに激しい拷問を加えるよう命じた。聖人は木に吊るされ、その体は鉄の爪で引っかかれた。拷問官は聖人を嘲りながら、こう言った。

「ミナよ、何か痛みを感じるか。それとも、この拷問は君にとって非常に心地よいものなのか。さらに強めることを望むか？」

しかし、聖なる殉教者は、激しい苦痛に苛まれながらも、毅然として公爵にこう答えた。

「拷問者よ、このような一時的な苦しみでは私を打ち負かすことはできない。なぜなら、君には見えない天の王の戦士たちが、私を助けてくれているからだ。」

公爵は家来たちに、聖人をさらに激しく拷問し、こう告げるよう命じた。

「ここでは、ローマ皇帝以外の王を崇拝してはならない。」

すると、殉教者はこう答えた。

「もしあなたがたが真の王を知っていたなら、私が宣べ伝える方を冒涜したりはしなかっただろう。なぜなら、その方は天と地の真の王であり、その方以外に王はいないからだ。　しかし、あなた方は知らずに御方を冒涜し、御方と、御方がすべての被造物の主であるゆえに、塵から造られ、御方から王の尊厳と権威を与えられた、朽ちゆく王たちを同列に扱っているのだ。

すると、その領主は聖人にこう言った。

「王たちに権威を与え、万物を支配しておられるその方は、いったいどなたなのか？」

殉教者は公爵に答えた。

「イエス・キリスト、神の御子、永遠に生きられる方です。天にも地にも、すべてのものがこの方に従っています。この方が王たちを王座に就かせ、統治し、権威を与え、支配しておられるのです。」

すると、拷問官は聖ミネに言った。

「ローマ皇帝たちが、キリストの御名を告白する者すべてに対して激しく怒り、そのような者たちを殺すよう命じていることを、あなたは知らないのか？」

殉教者はこう答えた。

「主は王として治められる。諸国民は震えよ。主はケルビムの上に座しておられる。地は震えよ」（詩編98:1）。もしあなたがたの王たちが、キリストや、その御名を告白するキリスト教徒たちに怒りを抱いているとしても、　、それが私に何の関係があろうか。私は彼らの怒りなど意に介さない。なぜなら、私は私のキリストのしもべであり、ただ一つの願い、すなわち死に至るまでその至聖なる御名の証人であり続け、誰も私を引き離すことのできないその甘い愛を味わいたいと願っているからだ：　*「誰が私たちを神の愛から引き離すことができようか。苦難か、窮屈か、迫害か、飢えか、裸か、危険か、あるいは剣か。」*（ローマ8:35）。

その後、拷問官は、聖人の傷を髪の毛で作られた手ぬぐいで激しくこすりつけるよう命じた。そして、それが行われている間、聖なる殉教者はこう語った。

「今、私は皮の衣を脱ぎ捨て、救いの衣をまとう。」

さらに拷問官は、火のついたろうそくで聖人を焼くよう命じたが、聖人の全身が焼かれても、彼は黙り続けていた。

すると、公爵は彼に尋ねた。

「ミナよ、この火を感じているか？」

聖人はこう答えた。*「私たちの神は、焼き尽くす火である」*（ヘブライ人への手紙12:29）。

私が苦しみを受けるその方こそが、私を助けてくださる。それゆえ、あなたがたが私を焼くこの火を感じず、また、あなたがたの様々な拷問も恐れない。なぜなら、私の主の福音の言葉を覚えているからだ。 *『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を、もっと恐れるべきである』*（マタイ10:28）。

すると、公爵は殉教者にこう言った。

「その雄弁さはどこから来たのか？ お前はこれまでずっと戦士だったはずだ。どうして、多くの書物を読んだ人のように話すことができるのか？」

聖人はこれに対し、公爵にこう答えました：

「私たちの主イエス・キリストは、こうおっしゃいました。*『あなたがたは、わたしのために、支配者や王たちの前に引き出され、彼らや異邦人の前で証しをすることになる。しかし、あなたがたが引き渡される時、何を、どのように話すべきか心配してはならない。その時には、何を話すべきかが与えられるからである』*（マタイ10:18–19）。

公爵は聖人に尋ねた：

「あなたのキリストは、あなたがたが彼のためにこれほどの苦しみを受けることになることを知っていたのですか？」

殉教者はこう答えた。

– 御方は真実なるお方であるゆえに、未来をもご存じです。存在するすべてのことを知っておられ、またこれから起こることもすべて御存知であり、私たちのあらゆる思いもあらかじめお分かりになっています。

公爵は、この聖人にどう答えればよいか分からず、こう言った。

「ミナよ、その空虚な言葉をよせ、二つのうちの一つを選べ。我々の味方になるか――そうすれば、我々は君を苦しめるのをやめる。あるいはキリストの味方になるか――そうすれば、我々は君を殺す。」

これに対し、聖人は力強い声でこう答えた。

「私はキリストのものであり、今もキリストのものであり、これからもキリストのものであり続ける。」

公爵は言った。

「もし望むなら、二、三日間は解放してやる。よく考え直して、最後の言葉を告げてくれ。」

しかし、聖人はこう答えた。

「二日でも三日でもなく、長年にわたり私はキリストの信仰を告白してきた。しかし、私の神を否定するなどという考えは、かつて一度たりとも心に浮かんだことはない。それゆえ、今さらこのことについて熟考するべきではないのだ。」 公爵よ、私から別の言葉を聞くことを期待してはならない。これが私の最後の言葉だ。私は私の神を否定せず、あなた方の悪魔に犠牲を捧げず、魂のない偶像の前でひざまずくこともない。

殉教者のこの断固とした答えに公爵は激しく怒り、地面に鉤や三叉の矛、そして様々な鉄の釘をばらまかせ、縛られた聖なる殉教者をその上を引きずり回すよう命じた。 しかし、聖人はあたかも柔らかな花の上を引きずられているかのように、異教徒たちの多神教をさらに激しく非難し、悪魔に惑わされた人々の狂気を嘲笑した。そして公爵は、引きずられている聖人を錫の棒でさらに打つよう命じた。こうして聖ミヌスは長い間拷問を受けた。

その時、その場にいた兵士の一人、イリオドールという者が、拷問官にこう言った。

「公爵様、キリスト教徒は狂気であり、拷問を恐れないことをご存じないのですか。彼らはまるで魂のない石や木のように苦痛に耐え、死を甘い飲み物とさえ考えているのです。これ以上ご自身を労わることなく、この頑なキリスト教徒を速やかに処刑するよう命じてください。」

すると公爵は直ちに、聖人に対して次のような判決を下した。「キリスト教という不敬虔に陥り、王の命令に従って神々に生贄を捧げることを拒んだ、邪悪な戦士ミヌを、我々は剣で斬首するよう命じる。そしてその遺体は、民衆全員の目の前で焼却されるがよい。」

兵士たちは聖殉教者ミヌを捕らえ、城の外へ連れ出し、そこで彼の首を切り落とし、大きな焚き火を燃やして、聖殉教者の苦難に満ちた遺体をその中に投げ込んだ。

一方、信者たちの中には、火が消えた後、この場所を訪れ、焼却後に残った聖人の遺骨を拾い集め、清らかな布に包んで香油を塗った者もいた[7692] 。そしてしばらくして、彼らはこれらの聖なる遺骨を故郷の都市アレクサンドリア[7693] へ運び、そこで尊い場所に埋葬した。 その後、この場所に聖殉教者に捧げられた教会が建てられ、聖人への祈りによって、その教会では数多くの奇跡が起こった。

アレクサンドリアの大司教ティモテオによる、聖大殉教者ミナの奇跡に関する伝承

不敬虔で神を憎むローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの死後、敬虔なコンスタンティヌス大帝が帝位に就き、その治世において、我らの主イエス・キリストへの信仰は著しく広まった。　この頃、アレクサンドリアのキリストを愛するある人々が、キリストの栄光ある殉教者ミナの尊い遺骨が安置されている場所を見つけ、その地に彼の名を冠した教会を建てた。

ある時、イサウリア地方[7694] から、商品を仕入れるために一人の敬虔な商人がアレクサンドリアを訪れた。聖ミナの教会で数多くの奇跡や癒しが起こっているという話を耳にした彼は、心の中でこう言った。

「私も行って、聖殉教者の尊い聖遺物に礼拝を捧げ、その教会に献金をしよう。そうすれば、神はその殉教者の祈りによって、私を憐れんでくださるだろう。」

そう考え、彼は金で満たされた袋を携えて教会へ向かった。ポモール湖に着き、渡し場を見つけると、彼はロゾネタと呼ばれる場所まで船で渡った。そこで岸に上がると、商人はすでに夕方になっていたため、どこで一晩過ごすかを探した。そこで、ある家に入り、主人にこう言った。

「友よ、どうかお情けをかけて、あなたの家に一晩泊めてください。太陽は沈んでしまいましたし、私を付き添ってくれる人もいないため、一人で先へ進むのが怖いのです。」

「お入りください、兄弟」と家の主人は答えた。「日が昇るまで、ここで一晩お過ごしください。」

客はその誘いを受け入れ、家に入って寝床についた。一方、家主は旅人の金入りの袋を見て欲に目がくらみ、悪霊の唆しを受けて、客を殺してその金を奪おうと企んだ。　真夜中に起きると、彼は商人を絞め殺し、その遺体をバラバラに切り刻み、かごに入れて奥の部屋に隠した。殺害後、彼はひどく動揺し、きょろきょろと辺りを見回しながら、遺体を埋めるための隠れ場所を探した。

彼がそう考えを巡らせていると、聖殉教者ミナが、まるで王から遣わされた戦士のように、馬に乗って彼の前に現れた。殺人者の家の門をくぐると、殉教者は彼に殺された客の行方を尋ねた。殺人者は知らないとごまかし、聖人にこう言った。

「何をおっしゃっているのか分かりません、ご主人様。私のところには誰もいませんでした。」

[7692] 聖ミナの殉教は304年に起こった。この日の教会礼拝では、殉教者ミナとともに、聖殉教者ヴィクトル、ヴィケンティウス、ステファニダも称えられるが、教会の聖歌の大部分は殉教者ミナに捧げられている。

[7693] アレクサンドリア――紀元前333年頃、アレクサンドロス大王によって、地中海南岸に突き出た岬（現在の同名の都市より若干南）に築かれた有名な都市である。かつては学問の中心地であり、世界一の商業都市であった。4世紀初頭にはキリスト教の中心地となり、総主教の居城となった。

[7694] イサウリア――古代小アジアの、山間に隠れた、研究が進んでいない小さな地域で、東はリカオニア、北はフリギアの一部、西はピシディアと接していた。イサウリアの主要都市はイサウラ（現在のウルブイアル）であり、非常に豊かで人口の多い都市であった。

しかし、聖人は馬から降りると、奥の部屋へ向かい、かごを手に取って外へ持ち出し、殺人者に言った。

「これは何だ？」

殺人犯はひどく恐れおののき、気を失って聖人の足元に倒れ込んだ。聖人は、切り裂かれた遺体を整え、祈りを捧げた後、死者を蘇らせ、彼にこう言った。

「神を賛美せよ。」

その男は、まるで眠りから覚めたかのように立ち上がり、家主によって傷つけられたことを悟ると、神を賛美し、現れた戦士に感謝の意を込めて頭を下げた。そして聖人は、殺人者から金を受け取ると、それを蘇生した男に渡し、こう言った。

「平安のうちに、自分の道へ行きなさい。」

その後、聖人は殺人犯の方を向き、彼を捕らえて激しく殴打した。殺人犯は悔い改め、許しを請うた。そこで殉教者は、殺人の罪を赦し、彼のために祈りを捧げた後、馬に乗り、姿を消した。

アレクサンドリアには、エウトロピオスという名の男が住んでいた。このエウトロピオスは、聖ミナの教会に銀の皿を寄進することを誓っていた。そこで、金細工師を呼び寄せ、二つの皿を作らせ、一方には「大殉教者ミナの皿」、もう一方には「アレクサンドリア市民エウトロピオスの皿」と刻ませた。　アレクサンドリアの市民」と刻むよう命じた。金細工師はエウトロピウスの指示通りに作り始め、両方の皿が完成したとき、聖ミナの皿は他のものよりもはるかに美しく、輝きに満ちていた。皿に聖ミナとエウトロピウスの名前を刻んだ後、金細工師はそれらをエウトロピウスに手渡した。

ある日、エウトロピオスは船で海を航行中に、昼食でその二つの新しい皿を使った。すると、聖ミナスへの献上品として用意された皿が、自分の皿よりもはるかに美しいことに気づき、それを聖人に献げるのを惜しみ、使用人にその皿に料理を盛って自分に供するよう命じ、　一方、自分の名前が刻まれた皿は、聖ミナの教会への献納品として送るつもりだった。食事が終わると、使用人は殉教者の名前が刻まれた皿を持ち、船の舷側にやって来て、海でそれを洗い始めた。　すると突然、彼に恐怖が襲いかかり、海から一人の男が現れて、彼の手から皿を奪い取り、たちまち姿を消したのを見た。恐怖に打ちのめされた使用人は、皿を追って海へと飛び込んだ。それを見た主人もまた恐怖に駆られ、苦々しく泣きながらこう言い始めた。

「ああ、呪われた私よ。聖ミナの皿を手に入れようとしたがゆえに、皿も、そして私のしもべも失ってしまった。しかし、主なる神よ、どうか最後まで私を怒らず、私のしもべに御慈悲をお示しください。　さあ、私は誓います。もし私の召使いの遺体を見つけたら、同じ皿を作らせ、それをあなたの聖なる御使いミナスに捧げます。あるいは、その皿の価値に相当する金を聖ミナス教会に寄付いたします。

船が岸に着くと、エウトロピウスは船から降り、海辺を見渡しながら、海に打ち上げられた使用人の遺体を見つけ、埋葬してやろうと考えていた。彼がじっと見つめていると、使用人が皿を手に海から上がってくるのが見えた。 驚きと喜びに満ちて、彼は大きな声で叫んだ。

「神に栄光あれ！　まことに、聖なる殉教者ミナよ、あなたは偉大なり！」

その叫び声を聞いた船に乗っていた者たちは皆、岸に降り立ち、皿を手にした奴隷を見て驚きに満ち、神を賛美した。彼らが奴隷に、海に落ちたにもかかわらずどうして生き延び、無傷で水から上がることができたのかと尋ねると、彼はこう答えた。

「私が海に飛び込んだ途端、立派な紳士が他の二人と共に私を助け上げ、昨日も今日も私と共に歩き、ここへ連れてきてくれたのです。」

エウトロピウスは、その奴隷と皿を連れて聖ミナの教会へ向かい、礼拝を捧げた後、聖人に約束していた皿を供物として捧げ、神に感謝し、その聖なる御使いであるミナを賛美しながらその場を去った。

ソフィアという名の女性が、聖ミナの教会へ礼拝に向かっていた。　道中で一人の戦士と出くわし、彼女が一人で歩いているのを見て、戦士は彼女を辱めようと決心した。彼女は激しく抵抗し、聖殉教者ミーナに助けを求めた。聖人は彼女を見捨てず、彼女を辱めようとした者を罰し、彼女を無傷のまま守った。　兵士が馬を右足に繋ぎ、女性に暴行を加えようとしたとき、馬は激怒し、主人の企てを阻止しただけでなく、彼を地面を引きずり回し、聖ミナの教会まで引きずり込むまで、決して止まらず、落ち着くこともなかった。　馬は頻繁にいななき、猛威を振るい、多くの人々をこの光景に引き寄せた。その日は祝日であり、教会には大勢の人が集まっていたからである。戦士は、これほどの人だかりを目の当たりにし、馬が依然として激怒しており、誰からも助けを期待できないことを悟ると、自分の馬からさらに恐ろしい仕打ちを受けるのではないかと恐れおののいた。　そこで彼は恥を捨て、人々の前で自分の不敬な意図を告白した。すると馬はたちまち落ち着き、おとなしくなった。そして戦士は教会に入り、聖人の遺骨にひれ伏して、自分の罪の赦しを祈った。

聖殉教者の教会の周りには、他の多くの人々と共に、足の不自由な者と口がきけない女性が、癒やしを受けるのを待っていた。真夜中、皆が眠っている時、聖ミナは足の不自由な男の前に現れ、彼にこう言った。

「黙って口がきけない女性のところへ行き、彼女の足をつかみなさい。」

足の不自由な男は殉教者にこう答えた。

「神の御使いよ、私が姦淫者というのですか。なぜ私にそのようなことを命じるのですか？」

しかし、聖人はその言葉を三度繰り返し、こう付け加えた。

「もしこれをしなければ、癒やしは得られない。」

足の不自由な男は、聖人の命令に従い、這って近づき、声の出ない女性の足を掴んだ。彼女は目を覚ますと、足の不自由な男に憤り、叫び始めた。　彼は怖くなって両足で立ち上がり、素早く走り去った。こうして、二人はそれぞれ癒やされたことを実感した――口がきけない女は話し始め、足の不自由な男は鹿のように素早く走り出した。そして、癒やされた二人は神と聖殉教者ミネに感謝を捧げた。

あるユダヤ人には、キリスト教徒の友人がいた。ある日、彼は遠い国へ旅立つ際、千枚の金貨が入った小箱を友人に預けた。彼がその国で長居することになると、キリスト教徒は、ユダヤ人が戻ってきた時に金貨を返さず、自分用に横取りしようと企み、実際にそうした。　ユダヤ人は帰国すると、キリスト教徒のもとを訪れ、預けていた金を返すよう求めた。しかし、キリスト教徒はこう言って拒否した。

「君が私に何を求めているのか分からない。君は私に何も渡していないし、私も君から何も受け取っていない。」

友人のそのような答えを聞いて、ユダヤ人は悲しみに暮れ、自分の金を失ったと思い、キリスト教徒にこう言い始めた。

「兄弟よ、このことを知っているのは唯一の神だけだ。もし、預けた金を返さないと言い張るなら、私から受け取っていないと断言するのなら、誓いでそれを証明してみせろ。聖ミナの教会へ行こう。そこで、千枚の金貨が入った箱を私から受け取っていないと、私に誓ってくれ。」

キリスト教徒は同意し、二人は共に聖ミナの教会へ向かった。そこでキリスト教徒は、神の前でユダヤ人に対し、預かりのために金を受け取っていないと誓った。　誓いを立て終えると、二人は一緒に教会を出た。しかし、馬にまたがった途端、キリスト教徒の馬が狂ったように暴れ出し、抑え込むのがほとんど不可能になった。馬は手綱を引きちぎり、後脚で立ち上がり、主人を地面に投げ落とした。　キリスト教徒が馬から転落した際、指から指輪が外れ、ポケットから鍵が落ちた。キリスト教徒は立ち上がると、馬を捕まえ、なだめてからまたがり、ユダヤ人と共に旅を続けた。しばらく進むと、キリスト教徒はユダヤ人にこう言った。

「友よ、ここは良い場所だ。馬から降りて、パンを食べよう。」

馬から降りると、二人は馬を草を食ませ、自分たちは食事を始めた。しばらくして、キリスト教徒がふと目を向けると、自分の奴隷が二人の前に立っており、片手にユダヤ人の箱、もう片方の手には、彼の指から落ちた指輪を握っていた。これを見て、キリスト教徒は恐怖に襲われ、奴隷に尋ねた。

「これはどういうことだ？」

使用人はこう答えた。

「ある恐ろしい戦士が馬に乗って私の女主人のところへやって来て、指輪のついた鍵を渡しながら、『あなたの夫に大きな災いが降りかからないよう、できるだけ早くユダヤ人の箱を送りなさい』と言いました。そして、あなたが命じられた通り、これをあなたのもとへ届けるよう私に命じられたのです。」

これを見たユダヤ人は、この奇跡に驚き、喜びながら友人と共に聖殉教者ミナの聖堂へと戻った。　教会で地面にひれ伏して礼拝した後、ユダヤ人は、自ら目撃したこの奇跡を信じて聖なる洗礼を願い求め、一方、キリスト教徒は、神の戒めを破ってしまったため、聖ミナに赦しを授けてくれるよう祈りました。　二人はそれぞれの願いを叶えられ――一人は聖なる洗礼を、もう一人は罪の赦しを受け――喜びながら神を賛美し、神の聖なる御使いミナを称えつつ、それぞれの家へと帰っていった。

コンダク、第4声：

この世の軍勢を打ち破り、朽ちることなき天の共同者、受難の殉教者ミーナよ、我らの神キリストは、殉教者たちに朽ちることなき冠を授け給う。

聖殉教者ヴィクトルとステファニダの殉教

記念日：11月11日

ローマ皇帝アントニヌスの治世[7695]、セバスティアヌス総督の指揮下で、イタリア出身のヴィクトルという名の兵士が仕えていた。　このヴィクトルは、我らの主イエス・キリストを信じ、人々の前で公然とその至聖なる御名を告白していた。当時、キリスト教徒に対する迫害が激化した際、軍団長は祝福されたヴィクトルを呼びつけ、こう言った。

「我らには皇帝の勅令が届いた。それによれば、キリスト教徒であるあなた方を我らの神々への生贄を捧げるよう強制し、従わない者は厳しい拷問に処すことになっている。それゆえ、ヴィクトルよ、拷問に遭わず、自らの魂を滅ぼさないためにも、神々に生贄を捧げよ。」

しかし、聖ヴィクトルは総督にこう答えた。

「私は、死すべき王の不敬虔な命令には従わず、その意志も果たしません。なぜなら、私は不死の王、　私の神であり救い主であるイエス・キリストの僕だからです。その御国は永遠であり、その御意志を行う者は永遠の命を得ますが、あなた方の死すべき王とその王国は一時的なものであり、その不敬虔な意志を行う者は永遠に滅びるでしょう。

これに対し、総督はヴィクトルに言った。

「お前は我らの王の戦士だ。王の命令に従い、生贄を捧げよ。」

[7695] アントニヌスは、マルクス・アウレリウス・フィロソフスとしてよりよく知られるローマ皇帝であり、161年から180年まで在位した。

「いいえ」とヴィクトルは答えた。「私はもはや、あなた方の地上の王の戦士ではなく、天の王の戦士です。たとえ一時的にあなた方の王の支配下で戦士であったとしても、私はそれでもなお、私の王に仕えることをやめませんでした。今、私は主を見捨てず、あなた方の偶像に犠牲を捧げることもありません。」　私を好きに扱ってくれ。私の肉体はあなたの手に委ねられており、あなたにはそれに対する権威がある。しかし、私の魂に対する権威を持つのは、ただ私の神ただお一人だけだ。

すると、総督はヴィクトルを説得し始めた。

「お前自身が、王の命令に従わないことで、自ら災いを招いているのだ。お前を待ち受ける苦しみから逃れるために、神々に犠牲を捧げることを勧める。」

「それこそが私の望みだ」と聖ヴィクトルは断固として答えた。「私の主のために苦しみを受けることこそが私の願いであり、主の御名のために苦しむことを許されることを大いに喜んでいる。」

すると、総督は直ちに、彼の指を折って関節から引き抜くよう命じた。その後、拷問担当者は炉を激しく燃え上がらせ、聖ヴィクトルをその中に投げ込むよう命じた。殉教者はその炉の中で三日間過ごしたが、バビロンの炉の中の三人の若者のように（ダニエル書3:50）、生き残り、無傷のままであった。拷問官は、聖ヴィクトルが生き残ることを予想していなかったため、三日目に炉を開け、そこから殉教者の遺灰を取り出して川に撒くよう命じた。しかし、炉が開けられると、聖人は無傷のままそこから出てきて、火が彼に触れることも傷つけることもなかったことを神に賛美した。

その失敗を目の当たりにした総督は、ある魔術師を呼び寄せ、聖ヴィクトルを毒で殺すよう命じた。魔術師は致死性の毒を混ぜた肉を調理し、聖人に食べさせた。

聖人はこう言いました。

「あなた方から不浄な肉を受け取り、食べることは私にふさわしくありませんが、それでも私はこれを食べます。そうすれば、あなた方の致命的な毒が、私の主である命の与え主の力には何ら為す術がないことを、あなた方が悟るでしょう。」

その後、祈りを捧げた殉教者は毒入りの肉を食べたが、微塵も害を受けなかった。魔術師は、聖人が毒を食べても無傷のままであるのを見て、さらに強力な毒を盛った別の肉を用意し、聖人にこう言った。

「もしお前がこの肉を食べて生き残れば、私は自分のすべての魔法や魔術を捨て、お前の神を信じる。」

聖ヴィクトルは、この最強の毒が仕込まれた肉も食べたが、無傷のままであった。すると魔術師は、大きな声で叫んだ。

「ヴィクトルよ、お前は私の魔法の力を打ち破り、とっくに滅びていた私の魂を地獄から救い出した。私は、お前が説く主イエス・キリストを信じるようになったからだ。」

その後、魔術師は自宅へ戻り、手持ちの魔法の書や護符をすべて集めて焼き捨て、真のキリスト教徒となった。

地方総督は、聖人に何の害も及ばないのを見て激怒し、殉教者の体から筋を引き抜くよう命じた。その後、殉教者を沸騰した油の中に投げ込むよう命じた。

その時、聖人はこう言った。

「この沸騰する油は、喉の渇いた者にとっての冷たい水のように、私にとっても心地よいものだ。」

聖ヴィクトルのこのような不屈の精神は、拷問者をさらに激しい怒りに駆り立て、彼は聖人を木に吊るし、ろうそくの火でその体を焼くよう命じた。さらに拷問の苦しみを増すため、灰を酢と混ぜ合わせ、その混合物を殉教者の口に流し込んだ。

しかし、彼はこう言った。

「この酢も、あなたがたの致命的な毒も、私にとっては蜂蜜や蜂の巣と同じだ。」

すると、拷問官はますます激怒し、キリストの殉教者の両目をえぐり出すよう命じた。その後、聖人を逆さ吊りにすると、兵士たちはその場を去り、彼をその状態で三日間吊り下げたままにした。　四日目に、殉教者はすでに死んだと思い込んだ兵士たちが彼を見にやって来たが、彼が生きているのを見て驚いた。このことに恐怖を覚え、彼らは盲目となり、一人ひとりが案内人を探し始めた。

聖人は彼らを憐れみ、神に熱心に祈りを捧げ、彼らにこう言った。

「わが主イエス・キリストの御名によって、目を開けなさい！」

すると彼らはたちまち目が見えるようになり、軍司令官のもとへ行って、起きたことを報告した。しかし、軍司令官はさらに激しく怒り、兵士たちに聖ヴィクトルの皮を剥ぐよう命じた。　この不敬な命令が執行されようとしたとき、聖人の拷問を見に来たステファニダという名の女性がいた。彼女はキリスト教徒であり、ある兵士の妻であったが、天から降りてくる二つの美しい冠を目にした。そのうちの片方は聖殉教者ヴィクトルの頭上に、もう片方は彼女の頭上に降りてきた。

これを見たステファニダは、大きな声で殉教者を賛美し始めた。

「幸いなことよ、ヴィクトルよ。キリストのためにあなたが受けた苦しみは幸いであり、あなたの犠牲はアベルの犠牲（創世記4:4）のように神に喜ばれる。あなたは正しい心をもって、自分自身を神に捧げたのだから！」　神は、かつて義人エノクを地上から天国へと連れ去り、彼が一時の死さえ味わうことのないようにされたのと同じように、あなたをも受け入れられた（創世記5:24）。あなたは、善行に満ち、その民の中で最も聖なる者であったノアのように義人である（創世記6:9）。あなたはアブラハムのように信仰を持ち、イサクのように自分自身を神へのいけにえとして捧げ、ヤコブのように苦難に耐え抜いた。　あなたは、未来を見通す力を与えられたヨセフのように英知に富み、多くの苦難の末に悪魔に打ち勝ち、忍耐の模範を示したヨブのように、試練に耐え抜いた（ヨブ記、ヤコブ5:10–11）！　あなたは、マナセ王の命令によりのこぎりで切り裂かれたイザヤに似ています。あなたは、ネブカドネツァルの炉の中の三人の若者のように、火に焼かれることもありませんでした（ダニエル書3:1–100）。あなたは、イッサの息子ダビデのように、神に希望を置きました。　見よ、私は天から下された二つの冠を見る。一つは大きく、最も美しく、もう一つは小さい。大きい方は十二人の天使によってあなたに運ばれ、小さい方は私に運ばれる。というのも、私もまた、たとえ弱き器であっても、殉教の業を受け入れ、私たちの主の御名のために勇敢に苦難に耐え、主のために自分の魂を捧げる用意があるからだ。

ステファニダのこの言葉を聞いた総督は、兵士たちに彼女を捕らえて自分の元へ連れてくるよう命じた。彼は彼女を鋭い眼差しで見つめ、こう尋ねた。

「お前は誰だ？」

「私はキリスト教徒です」と聖女は答えた。

その後、総督は彼女の名前や年齢を尋ね、その名がステファニダであり、生後十五年八ヶ月で、結婚して一年四ヶ月であることを知ると、穏やかにこう語りかけ始めた。

「なぜ、これほど早くこの美しい世界や、充実した生活、そして結婚生活を捨て、十字架にかけられた方のために自ら進んで死を受け入れ、若き命を台無しにしようとするのか。」

聖女はこれに対し、拷問者にこう答えた。

「私は、この一時的で虚しい世と、すべての地上の肉欲、そして私の死すべき夫を捨てて、賢い乙女たちと共に、朽ちることのない不死の花婿、私の救い主キリストのもとへ赴くのです。」

総督は彼女に言った。

「お前の神について、そんな無意味で無益な言葉を口にするな。我らの神々に帰依し、彼らに犠牲を捧げよ。」

しかし、聖ステファニダは断固としてこう答えた。

「あなたもあなたの神々も偽りに満ちている。しかし、私は真理を語っている。なぜなら、私の主は真実であり、御方には偽りがないからだ。偽りの神々に犠牲を捧げることはしない。むしろ、

天にまします真の神に喜ばれる犠牲となりたい。そうして、御国で私に用意された冠を失うことのないように。」

すると、拷問官は、そこにあった二本のナツメヤシの梢を地面に傾けさせ、聖女をそれらに縛り付けて引き裂くよう命じた。彼女の片方の足は傾いたナツメヤシの一本の梢に、もう片方はもう一本に縛り付けられ、梢が放たれると、ヤシの木は高く跳ね上がり、殉教者を真っ二つに引き裂いた。一方、殉教者の聖なる魂は、まるで引き裂かれた網から飛び出した鳥のように、天国で彼女のために用意された冠の中に、自らの巣を見出した。

その後、総督は聖ヴィクトルをも剣で斬首するよう命じた。この命令を聞いた聖ヴィクトルは、神に感謝を捧げた。首を斬られようとする直前、彼は自分の迫害者たちの死を予言し、こう言った。

「十二日後にあなたがたは死ぬだろう。そして、あなたがたの総督は二十四日後に敵に捕らえられるだろう。」

こう予言した後、聖人は祈りを捧げ、首を斬られるために頭を垂れた。そして、聖殉教者の尊い頭は剣によって斬り落とされた。

聖ヴィクトルの首が斬り落とされると、その体からは血の混じった乳が流れ出し、この奇跡を目撃した多くの不信仰者たちがキリストを信じるようになった。　とりわけ、殉教者の預言が成就するのを見たとき、多くの人々が信仰を抱いた。なぜなら、彼が予言した通りになったからである。すなわち、彼を苦しめた者たちは突然死に、総督は敵に捕らえられたのである。

聖ヴィクトルと聖殉教者ステファニダは、11月11日にダマスカスで殉教した。そして今、彼らは、太陽も月も照らす必要のない都に定住している。なぜなら、神の栄光がその都を照らし、神の子羊がその灯であるからである。

聖殉教者ヴィケンティウスの殉教。

記念日：11月11日

聖ヴィンチェンツィオの故郷はスペインであった。この聖人は若き日から神への奉仕に身を捧げ、聖書を熱心に学び、昼も夜も神の律法を修めた。　彼には、アウグストポリの司教である、英知に富み善行に満ちた師、福者ヴァレリウス[7696] がいた。この司教は、弟子であるヴィンチェンツィオが分別があり品行方正であることを見て、彼を助祭に叙階し、神の御言葉を宣べ伝える者とした。というのも、司教自身は聖書を非常に熟知していたものの、言葉遣いが不器用であったため、はっきりと話すことができなかったからである。それゆえ、彼は、有能で賢明、かつ明瞭に語る人物である自身の助祭、福者ヴィケンティウスに、教会で民衆を教え、神の言葉を宣べ伝えるよう委ねたのである。　聖ヴィンチェンツィオは、司教からこの命令と祝福を受けると、教会内だけでなく、そのために適したあらゆる場所で、熱心に民を教え導き、魂の救いの道を示した。

当時、不敬虔な皇帝ディオクレティアヌスによって、スペインにダティアンという名の裁判官が派遣された。彼はギリシャ出身で、気性が荒く、キリスト教徒を激しく迫害し、拷問を加える者であった。　ダティアヌスは、キリストの御名を告白する者すべてを容赦なく死刑に処すために派遣さ

[7696] アウグストポリス（すなわちアウグストの都市）は、紀元前27年に退役軍人らを用いてここにローマの軍事植民地を建設したローマ皇帝オクタヴィアヌス（アウグストゥス）にちなんで名付けられた。アウグストポリスはサラゴサという名でも知られている。　現在、サラゴサは、エブロ川の右岸に位置し、同名のスペイン地方の主要都市であり、かつてのアラゴン王国の首都でもあり、人口は約10万人にのぼる。

れた。この裁判官は、スペインの都市バレンシア[7697] に到着すると、狼のようにキリストの羊たちをさらい去り、そこで多くのキリスト教徒の血を流した。　そこで、アウグストポリに住むヴァレリウス司教とその助祭ヴィケンティウスについて耳にしたダティアンは、兵士たちを派遣し、二人を鎖で縛り、その状態で裁判のために自分の元へ連行するよう命じた。 兵士たちは、 ダティアンの命令に従い、二人の聖人を捕らえ、重い鉄の足枷をはめ、バレンシアへと連行した。その道中、彼らに多大な苦痛を与え、　飢えと渇き、そして速い行軍で彼らを疲れ果てさせた。というのも、兵士たちは馬で素早く進んでいたが、聖人たちは馬に乗る兵士たちに追いつくことができず、転倒しては、長い間、馬に縛り付けられた丸太のように引きずられていったからである。

彼らがバレンシアの街に連行されると、拷問官は直ちに彼らを暗く悪臭漂う地下牢に投げ込むよう命じ、そこで長い間、食事も水も与えられずに閉じ込められた。しかし、神は御自身の恵みによって彼らを強め、殉教の偉業を成し遂げるために、彼らが衰え、力を失うことのないようにされた。一方、拷問官は、囚人たちが死んでしまい、自分の怒りをぶつける相手がいなくなってしまうことを恐れ、彼らを自分の元へ連れてくるよう命じた。彼らが飢えや渇き、重い足枷によっても微塵も衰えておらず、それどころか体は強靭になり、顔色も晴れやかになっているのを見て、拷問官は牢屋の看守に言った。

「なぜ彼らに食べ物や飲み物を与えたのだ？　彼らはかなり太ってしまったではないか。」

看守は、囚人たちに何も与えていないと誓って断言した。

そこで拷問官は、厳しく司教に語りかけた。自分の厳しさで司教を威圧すれば、それによって助祭をさらに従順で臆病にできると考えたからである。　しかし、そうはならなかった。なぜなら、強者を王座から引きずり下ろし、謙遜な者を高められる主は、この傲慢な拷問官の誇りを、最も若く、位階の低い者によって恥じ入らせることをお許しになったからである。ダティアヌスはまず司教に尋ねた。

「なぜあなたは王の命令に逆らい、我らの神々に拝礼せず、あるキリストを賛美するのですか？」

司教は、あたかもある種の恐れを示しているかのように、静かな声と柔和な態度でダティアヌスに答えた。その時、聖霊に満たされた助祭ヴィンチェンツィオは、神への熱意に燃え上がり、司教にこう言った。

「父よ、なぜあなたはまるで恐れているかのように、それほど静かに話すのですか。なぜこの犬の吠え声に、大胆に反論しないのですか。　大声でキリストの力を告白し、この悪賢い者の狂気を自由に糾弾し、打ち負かしてください。彼は、自分にそのような権威を授けた創造主である神に逆らおうとし、神にふさわしい崇敬を悪魔たちに捧げようとしているのです。　今こそ、多くの人々が、キリストの御名によって、弱く臆病な存在として追い払ったあの悪魔を完全に打ち負かし、この蛇の頭を砕かなければならない。

ダティアヌスはこれらの言葉を聞き、聖なる助祭ヴィンチェンツォが自分の力や権威、脅しを何とも思っていないのを見て、立ち会っていた者たちに言った。

「司教をここから連れ出せ。私はこの若き助祭と話をしよう。」

そして、処刑人たちに振り向いて、拷問官はこう命じた。

「拷問の道具をすべて用意せよ。その言葉で我々を侮辱する者に、行動をもって応えてやるのだ。」

その後、聖人を木に縛り付け、その肉体を鉄の爪で削り、引き裂くよう命じた。　兵士たちがダティアヌスの命令を実行すると、引き裂かれた体から血が川のように流れ出し、大地は血で染まり

[7697] バレンシアは、同名のスペインの州の州都である。 この都市は、紀元前138年にルシタン人に対する勝利を収めた後、ここにローマ植民地を築いたブルトゥスによって創設された。極めて肥沃な谷の真ん中に位置するバレンシアは、ピレネー半島で最も美しく、最も注目すべき都市の一つである。

、殉教者の深い傷口からは骨が透けて見えるようになった。一方、拷問者は聖人を嘲りながら、こう言った。

「さて、ヴィケンティウスよ、今、何と言う？　お前の体がどれほど傷つき、引き裂かれているか、見えているだろう？」

しかし、聖人はこう答えた。

「私が望んだことは、まさにこれです。これは私が魂の底から望んでいたことそのものです。裁判官よ、信じてください。私にとって、主のために苦難を受けること以上に切なる願いはありませんでした。そして、あなた以外に、この恵みを私に与えてくれた者はいません。」　たとえあなたが悪意からこれをしているとしても、それでもなお、私を拷問にさらすことで、あなたは私に恩恵を施しているのです。なぜなら、あなたが私の苦しみを増すほど、私の主は天において私に報いを用意してくださるからです。　私はこれらの激しい苦しみを通じて、まるで階段を登るように、高き所におられる私の神のもとへと昇っていきます。神への希望によって、私はすでに天に触れているかのようで、王の命令を拒み、あなたの狂気を嘲笑しています。　私の苦しみを止めず、さらに大きな苦痛に私をさらしてください。お願いです、私に対してますます残酷になり、私の肉体が死ぬまで、あなたの家来たちに私を苦しめ続けるよう命じてください。私は、私の主であるキリストの僕として、御名のためにあらゆることを耐え忍ぶ覚悟があります。

拷問官は、聖人のこの言葉を聞いて激怒し、家来たちに、拷問の手を緩めることなく、キリストの殉教者をさらに激しく苦しめるよう叫んだ。しかし、家来たちが疲れ果てているのを見ると、立ち上がって彼らを殴り始めた。

しかし、聖人はその怒りを嘲り、彼にこう言った。

「裁判官よ、何をしているのか？　なぜ自分の家来たちを殴るのか？　彼らは私を苦しめているのに、あなたは彼らの代わりに報復しているではないか。」

ダティアヌスは、殉教者のこの言葉と、その不屈の忍耐に心を刺され、さらに激しい怒りに駆られた。歯を食いしばり、顔色は青ざめ、怒りで体を震わせた。その後、少し落ち着くと、彼は柔和な口調で家来たちに語りかけた。

「これはどういうことだ、我が忠実な家来たちよ。この悪党は、お前たちの力の重さを感じず、拷問を恐れるどころか、かつて誰も笑ったことのないような笑いをお前たちに浴びせているではないか？」　あなたがたが力強い手で拷問にかけてきた強盗や悪党、父殺し、魔術師は数え切れないほどいたが、今、あなたがたの手の中にあり、私やあなたがたを嘲笑っているこの男のような者は一人もいなかった。まさか、あなたがたはこのような恥辱を黙って受け入れるつもりか？　力を振り絞り、さらに激しく彼を拷問せよ。

しかし、聖ヴィンチェンツォは彼らの弱さをさらに嘲笑し、こう言った。

「拷問者よ、私はあなたに、私への拷問をやめるよう求めているのではない。むしろ、さらに大きな苦痛を考案してほしい。なぜなら、私を助けるキリストの力は、私を苦痛にさらすあなたの力よりもはるかに優れているからだ。そして私は、唯一の真の神であるイエス・キリストを告白し、賛美することを決してやめない。」　ああ、もしあなたも、この神を知ることができたなら――私という弱き者の中に現れるその偉大な力を目の当たりにし、あなたがすべての家来を総動員しても打ち勝つことのできないその力を。しかし、あなたは見ても見えず、聞いても理解せず、自らの魂を滅ぼすために、悪魔の意志を実行し続けているのだ！

拷問では何の結果も得られなかった裁判官（殉教者の関節や骨を鋭い鉄が貫き、内臓にまで達したにもかかわらず、彼は無傷のままであった）は、諂いによって聖人を自分の不義へと誘い込もうと企み、穏やかに彼に語りかけた。

「ヴィケンティウスよ、汝の若さを憐れめ。人生の花が時より早く枯れることを望まず、長い生涯を絶たぬよう、自らを憐れみ、我々に悔い改めを示せ。そうすれば、汝が完全に滅びることはあ

るまい。」　なぜなら、私はあなたを憐れんでおり、あなたが不名誉や苦しみの中にいるのではなく、尊敬と栄光の中にいる姿を見たいと願っているからだ。もしあなたが私の言うことを聞いてくれたなら、私はあなたのために大きな名誉を勝ち取ることができるだろうから。

聖ヴィンチェンツォは、ダティアヌスのこのお世辞めいた言葉にこう答えた。

「私にとって、お前の狡猾な慈悲は、お前の怒りよりもはるかに恐ろしい。なぜなら、私は苦痛を恐れるというよりは、お前の諂う言葉を恐れているからだ。　私の魂を滅ぼすこの狡猾な言葉を止め、拷問の全力を私に向け、容赦なく私を苦しめ、キリストを愛する者たちに宿るキリストの力を知れ。

この殉教者の言葉は、再び拷問者を激しい怒りに駆り立て、彼は殉教者を十字架に釘付けにし、あらゆる手段でその全身を拷問するよう命じた。使用人たちが拷問者の命令に従い、十字架に架けられた聖人を殴打し、赤熱した鉄でその傷口を焼いたとき、キリストの殉教者は突然、十字架から地面に倒れ落ちた。　下僕たちは、聖人がすでに亡くなったと思い込み、彼をそこから運び去ろうと抱き上げた。しかし、キリストの恵みに支えられた聖人は、彼らの手から抜け出し、再び十字架にぶら下がった。その際、彼は下僕たちの怠慢を責め、主人の命令を熱意なく実行していると告げた。　すると、使用人たちは激しい怒りに駆られ、自分たちが完全に力尽きるまで、全力を尽くして聖人をあらゆる方法で拷問し始めた。これらの拷問の後、拷問官の命令により、聖ヴィンチェンツォは牢獄に閉じ込められ、傷だらけで、四肢は砕け、血管は引き裂かれた状態で、鋭い陶器の破片の上に横たえられた。　夜が更け、看守たちが深く眠りについたとき、突然、牢獄の中に光が輝き、天から天使の姿が聖人のもとへ降りてきて、その苦しみを慰めた。　聖殉教者ヴィンチェンツィオは、この天使の訪問によって傷が癒やされ、言葉に尽くせない喜びに満たされ、神を賛美した。彼を見張っていた兵士たちは、彼が喜びの歌を歌っている声を聞き、牢獄の中に言い表せないほどの光を見出して、ひどく恐れおののき、ダティアンにこのことを報告しに駆け出した。　一方、ダティアンは、この打ち負かせない殉教者にさらに何をすべきか、一晩中頭を悩ませていたが、ついに次のような策略を思いついた。彼は、立派な寝台を用意させ、その上に柔らかい寝具を敷き、聖人をそこに寝かせるよう命じた。　その際、拷問官は聖人のそばに誘惑者たちを配置するよう命じ、彼らに、聖人の血を拭き、傷を包帯で巻くなど、　あらゆる世話を、あたかも聖人を憐れみ、そのことを悲しんでいるかのように振る舞い、さらに聖人の足に口づけをしながら、　彼に慈悲を乞い、これ以上大きな苦しみを受けることなく、王の命令に従うよう懇願するよう命じた。ダティアヌスのこの命令が実行されると、聖人はこう言った。

「私にとっては、陶器の破片の上での苦痛の床の方が、これよりもましだった。だから、お前たち狡猾な誘惑者どもよ、これで私を惑わそうとしても無駄だ。」

拷問官は、自分の策略では何も達成できないと悟ると、再び拷問に訴えた。彼は鉄の板を熱し、それを聖人の脇腹に当てるよう命じた。その後、彼の命令により、殉教者は鉄の格子の上に横たえられ、格子の下で大きな火を焚き、まるで食用肉を焼くかのように殉教者を焼き尽くそうとした。

しかし、殉教者はこれらのあらゆる苦痛を不動の信念をもって耐え抜き、イエス・キリストの御名を告白し、主の御手にその霊を委ねて、殉教の業を全うした[7698]。

拷問官は、聖人が亡くなったのを見て、その遺体を野原へ運び出し、埋葬せずに鳥や獣の餌食にせよと命じ、さらに遠くに番人を配置して、殉教者の遺体がキリスト教徒に持ち去られないようにさせた。しかし、神は*「義人のすべての骨を守られる」*（詩篇33:21）とあり、義人の骨をすべて守られる神は、殉教者の遺体に並外れた守護者を付け、カラスにそれを守るように命じられた。ダティアヌスが遠くに配置した見張りは、聖人の遺体に多くの猛禽類が襲いかかるのを見たが、カラスがそ

[7698] 殉教者ヴィンチェンツィオの福者としての死は304年に訪れた。聖人の遺骸はローマにある、その名を冠した教会、郊外の修道院に安置されている。

れらすべてを追い払い、一羽の鳥も殉教者の遺体にとまることを許さなかった。　カラスは本来、死骸をついばむ習性があるが、神の力に制せられていたため、自身も聖人の遺体には触れず、他の鳥たちが触れることも妨げた。　さらに驚くべきことに、狼が現れて聖人の遺体を運び去ろうとしたとき、カラスは猛然と襲いかかり、翼で叩きつけ、狼も追い払った。警備兵がこれをダティアヌスに報告すると、彼は大いに驚いたが、それでもこれを神の力とは認めようとはせず、殉教者の遺体を海に投げ込むよう命じた。　兵士たちは、ヴィケンティウスの尊い遺体を運び出し、船に乗り込んで海の彼方へと漕ぎ出し、それを海の深みに投げ捨て、自分たちは岸へと戻っていった。彼らが岸に近づくと、殉教者の遺体が岸辺に横たわっているのが見えた。　恐怖に打ちのめされた彼らは逃げ去った。一方、キリスト教徒たちは殉教者の聖なる遺骸を運び出し、父と子と聖霊を賛美しつつ、それを尊厳をもって埋葬した。

私たちの尊い父、テオドロス・ストゥディトスの生涯

記念日：11月11日

かつてコンスタンティノープルには、フォティン[7699] という名の、かつては裕福で高貴な人物が住んでおり、テオクティスタという名の貴族の女性と結婚していた。二人はともに敬虔で、神を畏れていた。その二人から、至福のテオドロスが生まれた。　両親は、聖なる洗礼によって彼を神に導き、善き教えのもとで育て上げ、学問の道へと進ませた。不敬虔な皇帝コンスタンティノス・コプロニモス[7700] の即位に伴い、偶像排斥の異端が広まり、正教徒に対する激しい迫害が繰り広げられるようになった。　このため、フォティンは自身が務めていた重要な公職を辞し、妻と相談した上で、全財産を施し、世俗を捨てて、テオクティスタと共に修道生活に身を捧げ、死に至るまで熱心に修業に励んだ。　一方、福者テオドロスは、ギリシャの学問を修め、傑出した演説家かつ卓越した哲学者となり、正統な信仰をめぐって邪悪な異端者たちと論争を繰り広げた。彼は聖書と教義に極めて精通していたため、異端者たちは決して彼に対抗することができなかった。

不敬虔な皇帝コンスタンティノス・コプロニモスの死後、その息子レウ[7701] が王位に就いた。彼もまた偶像破壊派であったが、在位期間は短く、まもなく亡くなった。　彼の後を継いで、妻のイリナ が、息子のコンスタンティノス[7702] と共に王位に就いた。「平和」を意味する名[7703] を持つ彼女は、実際に教会に平和をもたらし、偶像破壊運動による混乱に終止符を打った。　彼女は多くの敬虔な司祭たちを集め、至聖なるタラシウス総主教と共にニカイアで第7回全地公会議を招集した。そこでは、異端者たちの不敬な教義を退け、かつてのように神聖なイコンの崇敬と礼拝を再び確立した[7704] 。　公会議に集まった聖父たちは300名以上にのぼり、その中には当初オリンポス山で修業に励ん

[7699] フォティン（聖テオドロス・ストゥディトスの父）は、王室の税収徴収官であった。

[7700] コンスタンティノス5世コプロニモス、ビザンツ帝国の偶像破壊派皇帝は、741年から775年まで在位した。

[7701] レウ4世・ハザールは、775年から780年まで在位した。

[7702] 聖イリナは、レウ・ハザールの妃であり、夫の死後、息子のコンスタンティノス・ポルフィロゲネトスが幼少であったため、780年から797年まで国政を執り行い、その後も802年まで単独で統治した。

[7703] 「イリニ」は、ギリシャ語で「平和」を意味する。

[7704] ニカイア（現在のイシク）は、小アジアの北西岸、アスカニエフ湖のほとりに位置し、古代にはビフィニアの豊かで繁栄した都市であったが、現在は極めて貧しく、人口も少ない。第7回全地公会議は、タラシウス自身を議長として開催された。 第7回全地公会議の記念日は10月11日である。

でいた聖プラトンも含まれていた[7705] 。彼は至福のテオドロスの母方の叔父であり、彼の中には神の御霊が宿っていた。また、聖書に精通し、雄弁な語り手でもあったため、すべての人々にとって有益な存在であった。

公会議が終了すると、プラトンは至福のテオドールと、修道生活を送りたいと志した彼の二人の兄弟、ヨセフとエウフィミオスを連れ出した[7706] 。彼らと共にその場を離れ、サクディオンと呼ばれる人里離れた場所へと向かった[7707] 。

この一帯は極めて美しく、静寂を求める者たちにとって理想的な場所であった。山の上にあり、起伏が少なく平坦で、周囲は様々な高木に囲まれ、美味しい湧き水があり、唯一のアクセス路は小さな小道だけだった。 プラトンとその仲間たちはこの場所を大変気に入り、そこに定住して間もなく、聖ヨハネ・テオロゴスに捧げる教会を建てた。修道者の数が増えてくると、プラトンは修道院を設立した[7708] 。一方、至福のテオドロスは、プラトン自身によって修道士として剃髪された後、他の誰よりも厳しい修行と断食によって肉体を律した。 謙遜を学ぶ中で、彼は自ら最も過酷で卑しい労働と奉仕を選んだ。裕福で高貴な両親の息子であり、安楽と平穏の中で育てられた彼が、これほど過酷な修行に身をさらしていることは、多くの人々にとって驚くべきことだった。 薪を割り、水を運び、ぶどう畑の土を掘り起こし、石を運び、その他にも同様の奉仕を熱心に果たしていた。例えば、土地を肥やすために、頻繁にぶどう畑へ堆肥を運ぶ作業に従事していた。同時に、聖人は体力の弱い兄弟たちや病に伏している兄弟たちの仕事を助け、すべての人にとっての奉仕者であった。 また、彼は自らのすべての思いや行いを、霊的指導者である聖プラトンに告白することにも心を配っていた。愛を込めて彼の元を訪れ、テオドールは告白を行い、彼からの教えを熱心に受け入れた。 彼は毎日、一定時間を神への黙想に充て、この世のあらゆる俗事や虚飾から離れ、唯一の神の御前に立ち、神に対してある種の神秘的な奉仕を捧げていた。しかし、彼の徳は隠しきれるものではなかった。なぜなら、彼の目から溢れ出る涙そのものが、彼の多くの徳の疑いようのない証拠となっていたからである。 聖人の節制は驚くべきものであり、かつ賢明であった。彼は食事を拒むことはなかったが、同時に胃に負担をかけることもなく、虚栄に満ちた蛇の頭を巧みに打ち砕いた。すなわち、すべての兄弟たちのために定められた時間以上は断食せず、皆が食卓に着いている時には、彼もまた他の者たちと共に座って食事をとったのである。 しかし、その際、彼はごく少量しか口にしなかった。それは、最も必要不可欠な肉体の欲求を満たすのに必要な分だけにとどめ、同時に、自分がほとんど食事をとっていないことを知られないよう、また断食している人々に見られないよう、その節制を他者から隠そうと努めたのである。 この彼の習慣に、多くの者が競い合い、可能な限りそれを模倣しようと努めた。その中には次のような者たちがいた。 実の兄弟であるヨセフ（彼は後にその徳高い生涯により、テッサロニキ教会の牧師に任命された[7709] ）、もう一人の兄弟エウフィミオス、そしてアファナシオス、ナウクラティオス、ティモテオス、その他多くの断食者たちである。彼らは、テオドロスの思想と行動の模範 に従い、徳において優れた成果を収めた。 絶え間ない祈りと神への黙想に励みながら、至福のテオドロスは、魂を救う書物の読解に多大な熱意を注いでいた。彼は旧約聖書と新約聖書、そして聖なる教父たちの著作を熱心に読み通した。 とりわけ、彼は聖バシレイオス大主教の著作を読むことを愛しており、それらはまるで彼の魂の糧のようであり、そこから彼は大きな霊的

[7705] オリンポス――小アジアのミシア地方、フリギアとビフィニアの国境にある山。ここには、住人の苦行で名高い「シンボラ」と呼ばれる修道院があり、聖プラトン・殉教者もそこで修行に励んだ。彼の記念日は4月5日である

[7706] 聖テオドール自身が著作の一つで述べているように、彼はかつて結婚していたが、22歳の時に妻のアンナと共に修道生活に身を捧げた。

[7707] サクディオンは、後に名声を博した修道院であり、ビフィンのオリンポス山の近くにある。

[7708] この修道院は、782年に聖プラトンによって設立された。

[7709] その後、聖人として列聖され、その記念日は1月26日である。

な喜びを得ていた。 聖バシレイオスが定めた修道生活の規則と規律（[7710] ）を彼は厳格に遵守し、その一線も越えることはなかった。また、これらの規則を、最も些細な規定に至るまで遵守しない者たちを、彼は修道士ではなく、一般の信徒と見なしていた。

至福のテオドロスがこれほど徳高い生活を送っているのを見て、尊者プラトンは彼のためにこの上なく喜んだ。　聖テオドロスを聖職に就かせることを決意した彼は、彼を連れてビザンティウムへ赴き、至聖なるタラシオス総主教のもとを訪れた。総主教はテオドロスを司祭に叙階したが、それは彼の自発的な意思というよりは、むしろ強要によるものであった。　というのも、至福のフェオドールは、自らをその位にふさわしくないと考え、そのような聖職を引き受けることを望まず、それは自分の力では到底及ばないものだと語っていたからである。しかし、霊的父であるプラトンや総主教の意志、そして何よりも神の御心には逆らうことができなかったため、彼は従い、聖職を受け入れた。　その後、修道院に戻った聖人は、言葉では言い表せないほどさらに偉大な功績と労苦に邁進した。

数年が経過し、長年の労苦による老衰で体力が衰えた聖プラトンは、修道院の指導者の座を退くことを決意し、後継者として至福のテオドロスに権威を引き継がせることを望んだ。　彼はしばしばテオドロスにこのことを語り、父の重荷を軽くし、修道院の長となることに同意するよう、懇願し、諭した。　テオドロスはあらゆる手段でその地位を拒み、他人を統率するよりは、むしろ自ら他人の指導の下で暮らすことを選んだ。彼は、自ら誰かを指導するよりも、他人から指導を受けるほうが容易であり、救いにとっても有益であると信じていたからである。　聖プラトンは、テオドールがこの願いに従わないのを見て、次のような策略を思いついた。　彼は、まるで病気であるかのように――実際、彼は体調が優れなかったのだが――床に伏し、すべての修道士たちを呼び集めて、自分の死が近づいていると感じていると告げた。そして、彼らの後任として誰を院長に望むか、誰をその役目に最もふさわしいと考えるかを尋ねた。　師は、彼らが修道院長として望むのはフェオドール以外にはいないことを知っていた。なぜなら、皆が彼を愛し、その偉大な美徳を称えていたからである。案の定、皆は口を揃えてこう答えた。

「父よ！　あなたの後を継いで、私たちを率いる修道院長にはテオドロスにしてください！」

プラトンは直ちにすべての権限をテオドロスに委ね、至福のテオドロスは修道院全体の願いに逆らうことができず、自らの意志に反してその権限を受け入れた[7711] 。同時に、彼はさらに大きな功績を成し遂げ、すべての人々の模範となり、言葉と行いで教え、修道士たちによる規則違反を是正した。　というのも、当時、一部の修道士たちは修道規則、とりわけ無所有と貧困の誓いを守らなくなっていたからである。そのような者たちを憂慮した聖テオドールは、一刻も早く彼らを正しい道へと導こうと急ぎ、周辺の他の修道士たちにも恩恵をもたらした。　もし一部の人々が彼に不平を漏らしたとしても、彼はそれを気にかけなかった。なぜなら、彼は不平を言う者たちが自分について何を言っているかなどには目を向けず、ただ自分の行いが神に喜ばれるものとなるよう心を砕いていたからである。その後、不平を漏らしていた者たちも、神への畏れを抱くようになり、尊者のお望みに従い、彼に自分の本心を打ち明けるようになった。　彼らの内面を注意深く見極め、一人ひとりにふさわしい治療を施した。最も怠惰な者には奮起を促し、最も熱心な者にはその奮闘を少し和らげ、彼らが引き受けた労苦の重荷の下で疲れ果てないよう配慮したのである。　しかし、ここで、神と神の律法

[7710] 聖バシレイオス大聖人は、自らも厳格な修行者であり、修道生活における禁欲主義の熱心な擁護者であった。彼はエジプトや、修道生活が盛んだったその他の国々で、キリスト教の修行者たちの神に捧げる生活から学び、その後自らポンティウス砂漠に修道院を設立し、それが他の修道院の模範となった。　その後、彼は修道生活の指針として、いわゆる「大・小修道規則」と呼ばれる修道規律を制定し、これらは東方において修道院の法規として受け入れられ、広まっていった。

[7711] それは794年のことだった。

への熱意ゆえに聖人が耐え抜いた苦難についても、時宜を得て述べておくべきである。そうすることで、私たちは苦難の中におけるテオドロスの勇敢な忍耐を目の当たりにすることができるからだ。

当時、敬虔な皇后イリーナの息子であるコンスタンティヌス王は、成人すると、母を王位から追放し、自ら王国を統治するようになった[7712]。若くして堕落していた彼は、情欲と淫行にふけった。その結果、彼は妻のマリアを追い出すことを企て、彼女を強制的に修道女にさせた。その代わりに、彼はテオドティアという名の別の女性を妻に迎えたが、彼女は彼の父の親族であった[7713]。しかし、至聖なるタラシウス総主教は、この皇帝の姦通を是認せず、二人の結婚を祝福することを拒んだ。ところが、大聖堂の会計係であったヨセフという名の長老[7714]が、神の律法を破り、総主教の命令に背いて、二人のために結婚の秘跡を執り行うことに同意した。この犯罪的な傲慢さに対し――後述するように――彼はその直後に相応の報いを受けた。総主教はあらゆる手段を尽くしてこの姦通的な王の結婚を解消しようとしたが、王が「この結婚を禁じられれば、再び偶像破壊の異端を煽動する」と脅したため、叶わなかった。そのため、総主教は、キリストの教会に甚大な災いが降りかかることを避けるため、皇帝がその婚姻関係を維持することを容認した。皇帝の宮廷から始まったこの不法行為は、近隣の都市だけでなく、遠く離れた地域にまで広まった。同様に、ボスポラスやゴート族の地に住む諸侯や貴族たち[7715]、そして他の地域の統治者たちも、妻たちを追い払い、強制的に修道女にさせ、その代わりに他の女性を選び、彼女たちと姦淫を犯すようになった。これを耳にした聖テオドロスは、魂を痛め、あからさまに犯されているこうした罪について深く嘆息した。彼は、この姦淫が慣習となり、不法が後に法の代わりとなり、神の法が破壊されてしまうことを恐れたのである。神の律法に対する熱意に燃え上がったテオドールは、すべての修道士たちに書簡を送り、皇帝の不法行為を告げるとともに、皇帝を神の律法を破壊し、多くの人々を誘惑する者として、キリストの教会から破門された者とみなすよう諭した。このテオドールの熱意と勇気に関する噂は至る所に広まり、王自身もそれを知り、聖人に激怒した。しかし、テオドールを義人であり、万人の間で大きな名声と尊敬を集めている人物と見なしていた王は、その怒りを公には表さず、当初は優しさをもって彼を味方につけようとした。そこで、王は不貞な妻に命じ、自分と一族のために祈りを捧げてくれるよう願いながら、聖人に大量の金を贈らせた。しかし、聖人はその金を受け取らず、王の不法に加担する者たちとして、使者たちを追い返した。そこで王は別の手段を講じた。ある種の必要に迫られたかのように見せかけつつ、実際にはテオドールと会話し、彼を味方につけるために、その聖者が住む地域へと旅立ったのである。王は、テオドールが修道士たちと共に自分を出迎え、相応の敬意を払ってくれるだろうと予想していた。王がその修道院の前を通り過ぎたとき、聖者も、その修道院の兄弟たちも、王を迎えに出ることはなく、門に閉じこもって沈黙を守っていた。王の家来たちが門を叩いても、誰も応答しなかった。そこで皇帝はさらに激怒し、自室に戻ると、直ちに高位の官吏を兵士たちと共に修道院へ派遣し、聖人と彼に同調する修道士たちを様々な拷問にかけ、殴打して修道院から追い出し、流刑地に送るよう命じた。派遣された者は、出発するとすぐに修道院を急襲し、聖テオドロスをはじめとしてそこにいた者全員を捕らえ、容赦なく拷問を加えた。そのせいで、彼らの体からは肉片が剥がれ落ち、地面は血で染まった。これらの拷問の後、彼は聖テオドロスを

[7712] 790年10月、コンスタンティノスが20歳の時であった。

[7713] コンスタンティノスの最初の妻は、フィラレート・ミロスティヴィ（小アジア北東部）の孫娘で、アルメニア族出身のマリアであった。コンスタンティノスは母の意向により彼女と結婚した。皇帝の2度目の結婚は、それまで宮廷の侍女であったテオドティアとのもので、795年に結ばれた。

[7714] 「大教会」、すなわちコンスタンティノープル「教会」の「エコノム」という職は、コンスタンティノープル総主教の下で最も重要な役職の一つであった。「大教会のエコノム」は総主教庁の全財源を管理し、教会事務に多大な影響力を持っていた。

[7715] ボスポラス海峡――黒海とマルマラ海の間にあるコンスタンティノープル海峡。当時、ゴート族はドナウ川下流域に居住していた。

テッサロニキ（[7716] ）へ流刑に送り、彼と共に修道院を統率していた11人の長老たちも送った。彼らは聖テオドロスに同情し、彼と共に束縛と苦難を勇敢に耐え忍び、正義のために拷問を受け、追放されたことを喜びとした。

ヘルソネスの[7717] やボスポラス地方の長老たち、そして修道士たちは、テオドロスとその共にいる修道士たちの不屈の精神と彼らの苦難について耳にし、これを深く嘆き、彼らに倣って王の不法や教会への弾圧について語り始めたため、その多くが追放の運命をたどった。

自らも流刑の身でありながら、福者テオドールは、同じ理由で追放され、流刑に置かれている人々に手紙を書き、彼らを励まし、信仰の行いを怠らず、苦難に屈することなく、むしろさらに勇気を奮い起こし、真理のために苦難に耐えるよう諭した。 また、彼はローマ教皇[7718] にも手紙を書き、不法な王からどれほどの苦難を、どのような理由で受けたかを伝えた。教皇はこれに対し、彼の忍耐を称え、神への熱意と揺るぎない勇気を称賛して返答した。 神は、御自分のしもべたちに対する不当な侮辱に対し、王への報復を遅らせることはなかった。神は彼から命も王国も奪い取り、その邪悪な王は悲惨な最期を遂げた。母とボヤールたちは彼に反旗を翻し、彼の両目をえぐり出した[7719] 。そして彼はまもなく病により亡くなった。 彼の死後、イリーナが再びビザンツの王座に就くと、すべての者は流刑先から呼び戻され、祝福されたテオドロスはソリュニからコンスタンティノープルへ召還され、キリストの殉教者として、総主教と女王から大いに敬意を払われた。 その時、前述の司祭ヨセフは、皇帝の不法な結婚を祝福するという不遜な行為を行ったため、聖なる教父たちの規定に従って裁かれ、司祭の聖職を剥奪され、教会から破門された。 一方、聖テオドロスは自身の修道院に戻り、皆はその帰還を喜び、彼を一目見ようと駆けつけた。真理のために拷問と追放に耐えた、神の律法の熱心な擁護者が、再び自分の羊の群れのもとに戻ってきたことに慰めを見出したのである。尊者テオドールは、迷い出ていたすべての霊的な羊たちを集め、以前と同様に彼らを導き、神に喜ばれる生活を送り、燭台の上の蝋燭のように、その偉大な美徳をもってすべての人々に光を放ち続けた。

数年が経つと、アガリア人がギリシャ人に対して侵攻を行い、ギリシャの諸地域を荒らし、その支配下に置こうとした[7720] 。彼らを恐れた多くの人々は、要塞化された都市へと逃げ込んだ。 この時、聖テオドールもまた、自らや修道士たちを自発的な苦難にさらすことなく、「*さあ、わが民よ、あなたの部屋に入り、戸を閉ざし、怒りが過ぎ去るまで、ひととき身を隠せ*」 （イザヤ書26:20）という御言葉に従い、サクディオンを離れ、兄弟たちと共にコンスタンティノープルへと向かった。彼の到来は皇后と総主教にとって喜ばしいものであった。二人は彼を歓迎し、ストゥディオス修道院の運営を引き受け、そこで最良の生活秩序を確立するよう懇願した。

ここで、この修道院の由来についても触れておくのが適切だろう。かつて、ローマからコンスタンティノープルへ、ある高貴で影響力のある人物がやって来た。彼はパトリキウスおよびプロコン

[7716] これは796年のことである。――ソロウン、あるいはテッサロニキ――マケドニアの極めて重要な古代都市は、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフェルメイ湾の奥深くに位置していた。現在、この都市はテッサロニキという名で知られ、非常に多くの人口を擁している。

[7717] すなわち、クリミア半島またはタウリカ半島（その西部および東部）に居住していた人々であり、当時、その地域には太古の昔に設立された多くのギリシャ植民都市が存在していた。

[7718] 当時、ローマ教皇は聖レウ3世（796年～816年）であった。

[7719] それは797年8月19日のことでした。

[7720] アガリアン、すなわちイスラム教徒のアラブ人たちは、アラブ族の祖であるイシュマエルの母アガリの名にちなんでそう呼ばれていた。当時のアラブ人は、ビザンツ宮廷で頻発していた内乱に乗じて、ビザンツ帝国の辺境に壊滅的な襲撃を繰り返していた。

スル[7721] の位を授かっていた。彼は聖ヨハネ・バプティスタの名を冠した、大きく美しい教会を建立し、その隣に修道院を設けた。

彼は「不眠の修道院」[7722] から修道士たちを招き、自らの修道院で生活し、そのすべての規則を守るよう懇願した。 その人物の名はストゥディオスであり、その名にちなんで修道院もその名称を受け継ぎ、ストゥディオス修道院と呼ばれるようになった。修道士たちは、コプロニモス皇帝の治世に至るまで、そこで「不眠者」の規則を守りながら暮らしていた。 しかし、不敬虔なコプロニムは、偶像破壊運動によって神の教会を混乱させ、ビザンティウムからすべての修道士を追放したため、ストゥディオス修道院は荒廃してしまった。この不敬虔な皇帝の没後、迫害が終息すると、修道士たちは再びストゥディオス教会のそばで暮らすようになったが、その数はわずかであった。 尊者とその兄弟たちがコンスタンティノープルに到着した当時、修道院に残っていたのはわずか12人の修道士だけだった。イリーナ皇后とタラシオス総主教の要請により、尊者テオドロス はストゥディオス修道院の管理を引き受け、そこで暮らすようになった[7723]。 この場所が修道士たちの居住に適していると確信すると、彼は修道院を再建・拡張し、多くの兄弟たちを集めた。他の修道院の修道士たちも、彼のもとで生活し、彼を指導者兼師として仰ぎたいと願い、彼のもとにやって来た。尊者テオドールは皆を父のように迎え入れ、偽りなくすべての人を愛した。 彼のもとでは誰もが平等であり、すべての人を等しく愛し、すべての人に対して等しく配慮を払った。彼は、修道生活のあり方は、誰がそれを身にまとうにせよ同じであり、洗礼の恵みも、誰がそれを受けるにせよ同じであることを知っていた。しかし、修道士たちの徳に応じて、彼らに与えられる報いも異なるのである。 この尊い父の弟子たちは、徳において大いに成長した。そして、彼らの聖なる生活に関する評判が至る所に広まったため、多くの人が彼らの功績に倣おうと修道院を訪れ、修道士の数は急速に増え、ついに千人の兄弟に達した。 これほど多くの弟子を抱え、一人では全員を見守り、一人ひとりの行い、言葉、そして思いを見極めることが不可能であったため、尊師は、まるで第二のモーセのように、最も賢明で、経験豊富であり、かつ徳行に最も励んでいると彼が認めた修道士たちの中から指導者を任命した。それぞれの者に相応しい称号を与えた。ある者には「エコノモス」、別の者には「エクリシアルコス」[7724] 、三番目の者には「教会の規律を監督する者」などである。聖人はまた、最初の者から最後の者に至るまで、各人が自分に委ねられた務めをどのように果たすべきかに関する規則も定めた。

また、過ちに対しては、ある者には所定の回数の礼拝、ある者には厳格な断食など、それぞれの過ちに応じた罰則を定めた。 もし誰かが神聖な礼拝にふさわしく振る舞わなかったり、器を割ったり、不注意で何かを投げ捨てたり、怠慢な行動をとったり、何かで兄弟を侮辱したり、言葉の節制を欠いて余計な言葉を口にしたり、大声で笑ったり、穏やかで謙虚な態度で歩かなかったり、 あるいは食事の席で、魂に有益な朗読に耳を傾けずに会話をしたり、食事について不平を言ったり、恥知らずかつ厚かましくあちこちと視線を走らせたり、その他これに類する行為をした場合――そのような兄弟たち全員に対し、聖テオドールは彼らの過ちに相応しい悔悛の行いを課した。 また、尊者テオドールは、誰も何かを自分のものとは呼ばず、すべてが共有されるように、修道院内に共同生活制

[7721] ローマ帝国および東ローマ（ビザンツ）帝国において、「パトリキウス」とは、我々の貴族階級に相当する最高階級の者を指した。「プロコンスル」とは、各州や地域における皇帝の代理人を指した。

[7722] 「不眠の修道院」は5世紀にコンスタンティノープルで聖アレクサンドロス（430年没）によって設立された。彼の死後、この修道院の修道士たちは小アジア北西部のビフィニア地方に移住し、そこで独自の修道院を設立したが、その後再びコンスタンティノープルに戻った。 これらの修道院の修道士たちが「眠らぬ者たち」と呼ばれたのは、そこで24時間絶え間なく礼拝が行われていたからである。

[7723] 聖テオドロス・ストゥディテスは798年にストゥディオス修道院の院長に任命された。この修道院の名にちなんで、彼は「ストゥディテス」という名で知られるようになった。

[7724] エクリシアルヒ（ギリシャ語で「教会の長」の意）は、教会の規則の指示に従い、教会堂の建物とその清潔さ、ならびに修道院における礼拝の秩序を監督する義務を負っていた。

を確立した。食事も衣服も、あらゆる物が共有されていたのである。　また、聖人は、修道院の必要のために修道士たちが頻繁に修道院を出て町へ出かけることのないよう配慮した。というのも、彼は、町において修道士が一般信徒と交わり、世俗的な会話を交わすことによって、どのような危険が待ち受けているかを熟知していたからである。このため、彼は修道院内であらゆる手工芸の作業を行うことを望んだ。　ストゥディオス修道院の修道士たちは、さまざまな職人技を学び始めた。ある者は大工仕事や建築を、ある者は鍛冶を、またある者は仕立てを、さらにある者は石工を――要するに、修道院に必要なあらゆる仕事を学んだのである。　しかし、彼らは仕事に取り組みながらも、常に口にはイエスの祈りとダビデの詩篇を唱えていた。　このようなストゥディオス修道院の規律、法規定、および規則の評判は至る所に広まり、近隣の都市だけでなく遠く離れた国々の多くの修道院も、ストゥディオスの規則[7725] を採用し、それを遵守した。そして、現在に至るまでそれを守り続けている修道院もある。　また、この聖人は、魂に大いに益となる多くの著書を執筆し、主の祝日や聖母マリアの祝日に捧げる賛美の言葉を編纂し、　聖ヨハネ・バプティスタを最も美しい聖歌で称え、多くのカノンや三歌集を編纂し、あたかも知恵の水で満たされた川のように、その教えと聖歌の奔流によって、神の教会 を潤し、喜ばせた[7726]。その間、ニキフォロス・ムチテルがビザンツの王座を不法に奪い、敬虔なイリーナ皇后を強制的に王座から追放した[7727] 。同時に、至聖なるタラシオス総主教が逝去した。　その後、その位に就いたのは、その聖職にふさわしい高潔な人物であり、その名は新皇帝と同じであった[7728] 。すると、教会内で再び不和が生じた。というのも、皇帝は自らの権力によって、前述の破門されたヨセフを教会に復帰させ、彼に聖職執行の権利を回復するよう命じたからである。　総主教は可能な限り王に抵抗したが、王が激しく怒っているのを見て、以前の王たちから多くの苦難を強いられたのと同様に、教会全体が王による残酷な迫害にさらされることを恐れ、本意ではなかったものの、ヨセフを教会に受け入れざるを得なかった。　一方、皇帝は敬虔なテオドロスを苛立たせ、彼を怒らせるためにこの措置をとった。皇帝は、テオドロスがこれを容認しないことを知って

[7725] 現在、目録によれば、聖テオドロスによる修道規則や教会儀式に関する以下の著作が知られている。「スディオス修道院の規定の記述」、全修道者に対するエピティミア（懲戒）、および大斎前の七日間の規定。　スディオス修道院の規則は、他の修道院の規則、とりわけエルサレム規則とは異なり、礼拝に関する規則よりも修道生活に関する規則に重点を置いている。しかし、その一方で、この教会規則は、聖テオドロスに、礼拝の構成と円満さに関する重要な補足をもたらした。　ストゥディオス規律に基づく礼拝は、エルサレム規律によるものよりもやや短く、それほど荘厳なものではなかった。　その後、11世紀末に、この規律はロシア教会の指導原則として導入され、14世紀半ばまで維持された。その後、エルサレム式に取って代わられ始めたが、地域によってははるかに長く有効であり続け、一部のロシアの修道院では、ごく最近まで施行されていた。

[7726] この規則のほかに、聖テオドール・ストゥディトスは多くの著作を残しており、その主な目的は、救いへの魂の啓発にある。聖テオステリクト――テオドールと同時代に活躍した教会の師の一人――は、彼を「教会の熱烈な教師」と呼んだ。　聖人は説教、布告、様々な人物への手紙、エピグラム、伝記などを執筆した。彼の教義に関する著作には、聖像破壊論者に対する聖像に関する教義書、彼らに対する七つの章、そして聖像破壊運動の歴史を描いた多くの書簡などが含まれる。 さらに、聖人の著作にはキリスト教的な生活を送るよう勧める内容も含まれており、その中でも2つのカテキズム――264の訓示からなる「大カテキズム」と134の訓示からなる「小カテキズム」――が知られている。聖人はこれらの訓示や勧告を、その日その日に合わせて調整しながら、自ら兄弟たちに説いていた。　さらに、聖テオドロスからは以下の著作が残されている。主の祝日や聖母マリア、洗礼者ヨハネの祝祭を称える賛辞を収めた書物、修道生活に関する数章、エピグラム、そしてヤムブ詩。これらは、『アダムの創造と堕落』、『カインの兄弟殺し』、『エノク』、　ノアとその子供たち、そして聖ヨハネ・洗礼者への賛歌。　続いて、四旬節トリオディに収録されたカノンと、ステヒラ付きの三歌集（肉断食前の*土曜日の*「キリストの最後の審判」について、乳製品断食前の土曜日の「すべての聖なる父たち」について、大斎の第3週の「聖十字架」について、受難週を除くすべての日々のステヒラ付き三歌集、　大斎の第2、第3、第4、第5週の四歌集など）、主イエスへの感傷的なカノン「夜に歌うためのもの」。

[7727] ニキフォロス1世は802年から811年まで在位した。イリナの治世には、国庫の管理者であった。

[7728] 聖タラシアの後継者である聖ニキフォロス1世（殉教者）は、806年から815年まで主教座に就いた。826年に没。その記念日は6月2日である。

いたからであり、その通りになったのである。　テオドロスは、聖なるタラシウス総主教とその聖職者たちが全員で破門した者を、世俗の権力を用いて教会に迎え入れたことで、教会に暴力を加えたとして王を非難した。 王は聖テオドールに対して激しく怒り、彼を都の沖合にある島の一つ[7729]に流刑とした。王は、彼の兄弟ヨセフ、尊き長老プラトン、そして他にも多くのストゥディオス修道院の修道士たちに対しても、同様の措置をとった。

その間、トラキア[7730]が蛮族に襲撃され、荒らされている[7731]という知らせが王のもとに届いた。王は直ちに戦争の準備を整えた。　しかし、王が打ち負かそうとしていたのは、敵というよりはむしろ聖テオドロスであり、スキュフィ族に対して軍を率いて進軍する一方で、テオドロスに使者を送り、時には甘言を、時には脅しを用いて、彼を自分と足並みを揃えさせようとした。これに対し、テオドロスは次のように答えた。

「王よ、あなたもまた、犯した罪を悔い改め、あなたが荒廃させたものを修復してから、戦いに赴くべきである。しかし、あなたがそうしなかった以上、全知の御目は今、私のような不適格者を通じて、あなたにこう予告している。あなたが今進んでいる道からは、決して戻れないことを知れ。」

王は聖人の言葉を全く意に介さず、かえって彼に対してさらに激怒し、遠征から戻ったら聖人にさらなる苦難を与えると脅した。しかし、ニキフォロスは戻ることはなかった。聖人の予言通り、彼は野蛮人によって殺害されたからである。　彼の後を継いで王位に就いたのは息子のスタヴリキオスだったが、彼もまた、父と共に参戦した戦いで負った傷が原因で、まもなく亡くなった。彼の死後、ミハイル[7732]が王位に選出された。彼は当時、キロパラト[7733]の位にあったが、善良で正教を重んじる、まさに王権にふさわしい人物であった。　権力を掌握すると、彼は再び聖テオドロスと彼と共にいた同志たちを流刑から解放し、彼らに相応しい敬意を払い、教会の不和を収めた。一方、ヨシフは再び、不適格な信徒として教会から破門された。

その直後、聖なる尊きプラトンは主のもとへ召された[7734]。総主教は彼の帰天の報を聞くと、聖職者一同を率いてストゥディオス修道院を訪れ、その聖遺みに口づけを捧げた後、尊厳をもって埋葬した。 一方、聖テオドロスは、霊的父であるプラトンの帰天後、兄弟たちと共にわずか2年間、平穏に過ごした。その期間が過ぎると、当初は敬虔なミハイル王の軍司令官を務めていた不敬虔なレフ・アルメニア人による猛烈な嵐が、再び彼とキリストの教会全体を襲った。　野蛮人に対して東方へ派遣された彼は、そこで大軍を集め、驕り高ぶって、恩人であるミハイル王に反旗を翻した。　レフ・アルメニア人は、自分の配下にあったすべての高官や兵士たちを――ある者には約束を、ある者には贈り物を、またある者にはその他の甘言をもって――味方につけ、彼らの助けを借りて自らを王と宣言した。　このことを知った敬虔なミハイル王は、内戦を避けるため、直ちに王の紫の衣を修道士の毛皮の衣に替え、敵に王位を譲り、自ら修道生活に入った。

王権を掌握したレフ・アルメニア人は、王位を固め、不敬虔な共謀者たちを周囲に集めるまでは、当初は敬虔で謙虚な人物のように見えた。

その後、彼は聖なるイコンを冒涜し始め、それらを崇敬する者たちを「愚か者」と呼んで非難した。総主教は彼の不敬を糾弾し、聖書に基づいて聖なるイコンをめぐる論争を繰り広げたが、何の

[7729] それは809年のことだった。

[7730] フラキアは、バルカン半島の北東部に位置するビザンツ帝国の領土である。

[7731] 以下「スキタイ人」と呼ばれる「野蛮人」とは、809年にクルムの指揮下で帝国の北辺境を襲撃したブルガリア人を指す。

[7732] スタヴリキアの義兄弟であるミカイル1世・ランガヴは、811年から813年まで在位した。

[7733] ビザンツ宮廷において、キロパラタムとは宮廷警備隊の長を指す呼称であった。

[7734] 聖プラトン（814年没）

成果も得られず、狂気の王をさらに激しい怒りに駆り立てるだけだった。　レフ・アルメニア人は、著名な司祭や修道士、総主教、そして彼らと共に至福のテオドロスを呼び集め、彼らの前で露骨に悪意を露わにし、尊いイコンを崇敬する者たちを冒涜し非難する一方で、イコン反対派を称賛した。

「神の御指によって記された古の律法は――」と彼は言った、「人の手によるものに仕えてはならないと命じているではないか。『偶像やいかなる像も造ってはならない』と書かれている。　それゆえ、人の手によって作られたイコンを崇拝することはふさわしくない。どうしてイコンに『言葉では言い表せない方』を描き、小さな板に『収まりきらない方』を収め、絵の具で描かれたものを神の名で呼ぶことができるというのか？」

聖なる教父たちは、偶像破壊派の皇帝の空虚な言葉をあらゆる手段で反駁し、その冒涜的な言葉を退け、次のように語った。

「もしモーセを通して与えられた律法を私たちが完全に守り通すならば、私たちのキリスト教の信仰は無駄になり、使徒たちの説教も無駄になり、聖なる教父たちのすべての神聖な伝承も無駄になり、そして（口にするのも恐ろしいことですが）主ご自身の受肉さえも拒絶されることになるでしょう。　それによってこそ、私たちは主の人間としての姿を認識し、イコン崇拝を受け入れ、イコンに描かれた御方の御姿を崇めているのです。

聖人たちがこのように語ったとき、旧約聖書と新約聖書のすべてを熟知していた聖テオドロスは、大胆にも王にこう問いかけた。

「王よ、なぜあなたはキリストの御姿を汚し、聖なる教会にそのような異端的な思惑を持ち込み、至高の恵みと使徒および教父たちの教えによって織りなされたその衣を引き裂こうと企てたのですか？　あなたは旧約聖書に基づいて理屈をこねているが、それにはイエス・キリストを通して到来した新しい恵みが終止符を打ったのだ。もしあなたが固執する旧約聖書を遵守する必要があるのなら、割礼を受け、安息日を守り、そこに記されている他のすべてのことを実行しなければならない。王よ、律法は一時的なものであり、エジプトから出たただ一つの民のために与えられたものであるということを、あなたは理解できなかったのですか？しかし、恵みが現れたことで、その影は消え去りました。　そもそも、その律法そのものも、自らが命じることをどこでも守っているわけではありません。例えば、律法は「像を作ってはならない」「人の手で作られたものに仕えてはならない」と命じていながら、契約の箱の上にケルビムの像を置きました。あのケルビムは、人の手で作られたものではなかったでしょうか？　それにもかかわらず、それらはすべての人から崇められていました。しかし、新しい恵みが現れたとき、　主ご自身が、布に御自身の御顔を写し出し、それをアヴガルに授けられた。アヴガルはそれに触れたことで、長年の病から癒やされたのである[7735]　。その後、主の使徒であり福音記者である聖ルカは、自らの手で聖母マリアの御顔を写し取り、この像を後世に残した。 その後、フェニキアに現れた 、人の手によらずして現れた救い主の御像は、多くの驚くべき奇跡を起こした。また、他の聖なるイコンによって示される奇跡は、太陽よりもまばゆい光のように輝いており、それらに相応しい敬意を払うべきであることを示しているのではないだろうか。

しかし、王は尊者のお言葉に耳を貸さず、こう言った。

「私は、目に見えず、理解しがたい神性を絵の具で描くことを望まない。」

テオドロスはこう答えた。

[7735] アウガル――エデッサの君主。エデッサはユーフラテス川上流の左岸にある支流の一つに位置する都市である。伝承によれば、彼は救世主の存命中にその奇跡の話を耳にし、病を癒やしてくださるよう、救世主のもとへ使者を送り、来訪を懇願した。　救い主は、御自身の御顔が刻まれた布（タオル）を彼のもとへ送られた。その布に触れたアヴガル王は、癒やされた。こうして、救い主の「手造りなき聖像」が現れ、その後、944年8月16日にエデッサからコンスタンティノープルへと移された。

「王よ、私たちもまた、神性を言葉で描写するのではなく、それが言葉では言い表せないものであると告白し、信じているのです。そして、イコン画によって、私たちが受け継いだ神の御子の肉体を表現しているのです。私たちが崇拝し、敬うのは、まさにその肉体なのです。」

尊者である父が、聖書と教父たちの伝承に基づいてこれらやその他多くのことを語り、王の誤りを糾弾すると、王は激怒し、怒りを込めて尊者にこう言った。

「お前はいつも軽率なことを口にし、口論好きで、高慢であり、誰に対しても敵対的な人間だということは知っている。今また、私を中傷し、侮辱しに来たのだ。私を王としてではなく、ただの庶民の一人として扱って話しかけてくる。このことだけで、お前は多くの苦痛を受けるに値する。しかし、我々の判断が正しいことがより明白になるまでは、ひとまずお前を容赦してやる。それでもなお従わないならば、その狂気と反抗に対して相応の罰を下すことになるだろう。

この時から、敬虔な父たちは王に何も語ることを望まず、互いにこう語り合った。

「これほど堕落し、癒やされることを望まない魂に、我々は何を語ればよいのか？」

一方、聖テオドールは霊的な剣を手に取り、王にこう答えた。

「王よ、よく理解し、悟ってください。教会の規定を検討し、調査することは、あなたの務めではありません。あなたの権威は世俗の事柄を議論し、それらを統治することにあり、教会の事柄は聖職者や教会の教師たちの管轄下にあります。あなたには、ただ彼らに従い、服従するよう命じられているのです。」　使徒もこう言っています。*「神は教会の中に、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師を置かれました。さらに、ある者には奇跡を行う力、また、癒しの賜物、助ける賜物、統治の賜物、さまざまな異言の賜物を与えられました*」（Iコリント12:28）。王たちを置かれたのではありません。　また、聖書の他の箇所でも、教会の務めは王たちではなく、教会の教師たちが司るよう命じられている。

王は尊者に対し、こう尋ねた。

「では、あなたは私を教会から追放するつもりなのか？」

聖人はこう答えました。

「私ではなく、神聖な使徒たちと聖なる教父たちの伝承が追放するのです。*『たとえ私たちや、天からの天使でさえ、私たちがあなたがたに宣べ伝えたこととは異なることを宣べ伝えたとしても、その者は呪われよ』*（ガラテヤ1:8）。

もしあなたが、キリストのイコンを崇拝する私たちと共に、キリストの教会の中に留まりたいと望むなら、総主教と、その下にある正統な公会議に従いなさい！

この言葉を聞いて、王はさらに激怒し、不名誉な形で全員を追い払った。　王の元を去った後、追放された敬虔な父たちは、総主教と共に聖テオドロスの周りに集まり、彼が大きな分別と勇気をもって迫害者に抵抗し、その不敬虔さを大胆に暴いて彼を激しく恥じ入らせたことを、口と心で共に称賛した。

彼らがそれぞれの家へと散っていったとき、都の統治者から「誰も信仰について語り合ったり、議論したりしてはならず、すべての者は王の命じたことを実行せよ」という命令が下された。この命令を伝える使者は、至福のテオドロスの元にもたどり着いた。彼はこの勅令を聞くと、彼らにこう答えた。

『ご自身で判断してください。神よりもあなた方の言うことを聞くことが、果たして正しいことでしょうか。私が沈黙し、真の信仰を守らないよりは、むしろ私の舌が切り落とされるほうがましです。』

そして、尊者（フェオドール）は、聖なる信仰を揺るぎなく守り抜くよう皆に教え、ある者には自らを呼び寄せ、ある者には自ら訪ね、またある者には手紙を送り、こうして精神的に疲れ果てている者たちを励ました。　彼はしばしば総主教のもとを訪れ、良き助言者として、心が悲しみと病に苛まれているのを見て、彼を慰めた。

「父よ、悲しまないでください！」と彼は言った。「主は私たちを見捨てないことを信じてください。主は私たちの力以上の試練を許さず、悪が私たちに打ち勝つことも許しません。たとえ敵が教会に対して迫害を仕掛けたとしても、やがてその苦しみは敵自身の頭上に降りかかるでしょう。」あなたは主の御言葉をご存じでしょう。*「世はつまずきによって災いに遭う。つまずきが起こるのは避けられないが、つまずきの原因となる者には災いが及ぶ」*（マタイ18:7）。

聖なる使徒たちの時代から今日に至るまで、精神が堕落した者たちが教会に対してどれほど多くの異端を巻き起こしてきたことか。私たちより先に生きた聖なる父たちは、それらによってどれほど多くの苦難を耐え忍んできたことか！しかし、教会は打ち破られることなく残った。苦難に遭った者たちは輝かしく称えられ、栄冠を授けられたが、異端者たちは自らの行いに応じて報いを受けたのである」。

これを聞いて、総主教と公会議のすべての聖父たちは勇気づけられ、正信のためにあらゆる苦難に耐え、異端に従わない覚悟を固めた。

ほどなくして、至聖なるニキフォロス総主教は、不義の王によって総主教の座から追放され、コンスタンティノープルから追放された[7736]；また、すべての正教会の司教たちも流刑に処された。その時、不敬虔な偶像破壊者たちによって行われた、恐ろしい冒涜の光景が目の当たりにされた。ある聖なるイコンは地面に投げ捨てられ、あるものは焼き払われ、またあるものは排泄物で塗りたくられ、その他にも多くの暴挙が繰り広げられた。このような悪行を目の当たりにし、聖テオドロスは深く嘆き、神の寛容さに驚きつつ、涙ながらにこう語った。

「どうしてこの地は、このような不法を許すのか！」

しかし、密かに神を崇拝する者に留まり、沈黙のうちにこのような災難を嘆くことを望まなかった彼は、（棕櫚の主日が近づくと）修道院の兄弟たちに、聖なるイコンを手に取り、修道院の周囲を巡り、イコンを頭上に高く掲げ、大声で次のように詠唱するよう命じた：

「御身の清き御姿に拝礼いたします、慈愛に満ちた御方よ」[7737]、およびキリストを称えるその他の勝利の賛歌。このことを知った王は再び聖人に使者を送り、そのような行為を禁じ、従わなければ投獄、拷問、そして死が待っていると脅した。　しかし、聖人は信者たちをイコン崇敬へと導くことをやめるどころか、むしろその勇気をさらに強め、すべての人々に正統な信仰を守り、聖なるイコンにふさわしい敬意を払うよう公然と説き続けた。　そこで皇帝は、甘言でも脅しでも、聖テオドロスの勇気と熱意を止めることは不可能だと確信し、彼を流刑に処した。聖テオドロスは、すべての弟子たちを呼び寄せ、彼らに魂に有益な教えを授けた後、こう言った。

「兄弟たちよ！今こそ厳しい時であるゆえ、各自が自らの判断で魂を救うがよい。」

その後、悲しみと涙に暮れながら、彼は自分を見送って泣きじゃくる兄弟たちを後にし、船に乗り込んでアポロニアへと連行され、メトパと呼ばれる要塞の牢獄に閉じ込められた[7738]。しかし、そこでも彼は皆に信仰を説き続けた。ある者とは口頭で語り合い、他の者には手紙を送ったのである。　その手紙は王の耳にまで届いた。王は再び、アレクセーエフの息子であるあるニキータを遣わし、聖人をヴォニタと呼ばれるより遠隔の地[7739]へ移送し、そこで牢獄に閉じ込めた上で、彼がそこで決して誰とも話したり、イコン崇拝に関して何も書いたりしないよう、厳重に監視するよう命じた。ニキータは尊者のもとを訪れ、皇帝の意向を伝えた。尊者はこう答えた。

[7736] 聖ニキフォロス・殉教者総主教は、3月1日にプロコニス島（現在のマルマラ島、マルマラ海）へ追放された。その後、総主教の座には、宮廷高官の一人であり、偶像破壊派であったテオドトスが就いた。

[7737] 救世主の「手造りなき像」へのトロパリオ。

[7738] アポロニア――古代都市の名称としてよく見られる。ここでは、当然ながら、ローマの教養の主要な中心地の一つとして知られる、イリュリアの古代都市を指す。メトパ――アポロニアの要塞。

[7739] ヴォニタ、あるいはボニト――アナトリア、すなわち小アジアにある。

「私はこの移送を喜んで受け入れます。この世において、私には定住すべき場所などないからです。しかし、私が連れて行かれる場所こそが私の居場所であり、どこもかしこも神の地だからです。しかし、正教の信仰について沈黙し、教えないということは私にはできません。その点については、あなた方の命令には従わず、脅しにも屈しません。」

こうして聖人は、前述の場所に連行され、牢獄に閉じ込められたが、そこでも熱心に正教を告白し続けた。皇帝は、フェオドールが何一つ自分の意志に従わないことを知ると、激しい怒りに燃え上がり、同じニキタを遣わして、聖人に残酷な拷問を加えるよう命じた。　ニキタが到着すると、聖人に王の命令を伝えた。聖人はその言葉を聞くと、「私はかねてより、聖なるイコンのために苦難に遭うことを望んでいた」と言いながら衣服を脱ぎ始め、自らの肉体を拷問に委ねた。　ニキータは慈悲深い人柄であったため、断食と絶え間ない苦行によって衰弱し、裸となった聖人の姿を見て心を動かされ、神を畏れたため、聖人に手を触れることを敢えてせず、聖人に何の害も与えることなくその場を去った。 一方、聖人は 、至る所で正教の教えを広め続けた。というのも、警備兵たちでさえ彼を畏敬の念を抱いており、テオドロスに対し、誰に対しても正教を説くことを禁じるよう脅しを伴って命じられていたにもかかわらず、彼を阻止することができなかったからである。–彼はまた、さまざまな国々に散らばっている弟子たちにも手紙を書いた。彼は彼らを特に気遣い、たとえ数え切れないほど多くの回、残酷な苦難に遭うことになっても、恐れることなく真の信仰告白を守り抜くよう、彼らを導いた。　彼は彼らに、現在のこの世での一時的な苦しみは、来世において私たちの中に現れる栄光――キリストの真の殉教者たちが皆受けるであろうその栄光――に比べれば、何の意味も持たないことを思い起こさせた。[7740] また、彼は最も聖なる総主教たち――古代ローマの総主教[7741] 、エルサレムの総主教[7742] 、アレクサンドリアの総主教[7743] ――にも書簡を送り、ビザンティウムで聖なるイコンがいかに冒涜され、正教徒たちがいかに監禁や牢獄に囚われ、真理がいかに虚偽の犠牲にされているかを詳細に伝えた。　そして彼は、正教の信仰のために彼らに援助を請うた。多くの人々が、牢獄に囚われていたこの尊者のもとを訪れ、その甘美な教えに耳を傾け、自分たちにとって多くの益を得て帰っていった。

ある日、たまたま通りかかったアシア教会[7744] の聖職者が、この聖人を訪ねた。この聖職者は、正教の信仰に関する教えを耳にすると、直ちに聖像破壊の異端を拒絶し、聖なるイコンに礼拝を捧げた。　故郷に戻ると――彼は異端者である自分の司教との交わりを拒んだ――彼は友人である別の聖職者をも諭し、彼を正教へと導き、異端者たちとの交わりを断たせた。　司教は、テオドールが自身の聖職者たちのこの変化の首謀者であることを知ると、テオドールを非難する手紙を皇帝に送った。皇帝は再び、アシアの軍司令官に対し、テオドールに最も残酷な拷問を加えるよう命じた。　軍司令官は部下の一人を派遣し、テオドールに五十回の打撃を与えるよう命じた。その部下がテオドールの元へやって来て、来訪の理由を告げると、テオドールは帯と衣服を脱ぎ、自ら進んで肩を差し出し、次のように言った。

「私にとって、これらの傷を負い、この肉体さえも脱ぎ捨て、裸の魂となって一刻も早く主のもとへ赴くことが、この上ない喜びです。」

使者は聖人のその姿に恥じ入り、彼に頭を下げて許しを請い、立ち去った。

その後、アナスタシウスという名の、極めて残酷で容赦のない王の使者がやって来た。彼は自らの手で聖人を殴打し、百回もの打撃を加えた後、彼を牢獄に閉じ込めた。　彼は、師に常に従い、その苦難を共にしていた弟子ニコライに対しても同様の扱いをした。ニコライを殴打した後、アナス

[7740] すなわち、現在のこの世の苦しみは、来世において私たちの中に現れる栄光に比べれば、何の意味も持たない。

[7741] 聖パスカリウス（817年～824年にローマ教皇を務めた）。

[7742] エルサレム総主教トマス1世（820年以降没）。

[7743] アレクサンドリア総主教クリストフォロス（805年～836年）。

[7744] ここでいう「アジア」とは、小アジア、より正確にはその西部を指す。

タシウスは彼もテオドールと共に閉じ込め、看守たちに彼らを過酷な苦難の中に厳しく拘束するよう命じて、その場を去った。　この暗い牢獄で、尊者がどのような苦難に耐えたか、言葉では言い表せない。断食と修道者の苦行によって衰弱したその肉体は、腐り始め、悪臭を放つようになった。さらに、牢獄そのものも不潔さと埃に満ちていた。

冬の間、聖人は必要な衣服さえ持たず、ただ一枚の薄っぺらなぼろ服しか着ていなかったため、寒さで凍えそうになった。夏には、牢屋に風が全く入り込まず、涼しさをもたらさなかったため、暑さで衰弱していった。さらに、牢屋の中には数え切れないほどの不潔な昆虫や爬虫類がうようよしていた。　さらに、脅迫を伴う命令を受けた看守たちは、彼に対して残酷かつ容赦なく振る舞うようになった。彼らは彼を侮辱し、非難し、「狂人」や「王の敵」と呼んだ。　小さな窓からは、テオドールとその弟子にほんのわずかなパンの切れ端と、わずかな水しか投げ入れられず、それも常にではなく、一日か二日おき、時には何日も経ってからだった――そうして彼らは飢えと渇きで苦しめられていた。そこで、聖テオドールは弟子にこう言った。

「わが子よ！　私は、この者たちが、度重なる殴打やこの過酷な牢獄だけでなく、飢えと渇きによっても、私たちを死に至らしめようとしていることに気づいている。　しかし、私たちは神に希望を置こう。神はパンだけではなく、ある種のより良い食物をもって私たちを養うことを知っておられ、その御手によってすべての生き物が支えられているのだ。私にとっては、これからは主の御体の聖体拝領が、肉体と魂の糧となるであろう。

（尊者様は、どこへ行くにも、主キリストの血に浸された「命を与える御体」の一片を常に携えておられました。それは、神聖な秘跡を執り行う際に、可能であればその都度、取り分けて蓄えていたものでした）。　「ただこれだけで、と彼は言った、他の何ものも口にせず、私は聖体拝領を続けたい。そして、私たち二人のために供えられるパンは、あなた一人に譲り、水もまた同様にしてほしい。　あなた自身も見ての通り、私たちに供されるパンはごくわずかであり、あなた一人の体を支えるのにかろうじて足りる程度だ。もし神の御心により、私がこの苦難に満ちた窮屈な場所で息を引き取ることになるならば、あなたの方が生き残り、兄弟たちに私の死を告げるほうがよい。」

しばらく時が経つと、*「御手を広げ、御心に従ってすべての生き物を満たしてくださる方」*（詩編144:16）は、恐ろしい飢えに苦しみ死にかけていた御自分の御使いを見捨てず、このように彼を顧みられた。　ある王室の高官が、その修道院の前を通りかかった際、聖人がどのような迫害と飢えに耐えているかについて、すべてを知った。　神はその高官の心を憐れみに傾かせ、彼は看守たちに、テオドロスとその弟子に十分な食料を与え、今後一切彼らに害や迫害を加えず、多少なりとも安らかな生活を送れるようにするよう命じた。　こうして、神の御心により、前述の多くの苦難から幾分解放された彼らは、体力を取り戻した。しかしその後も、聖なる父は多くの試練と戦い続けた。彼は胃の病を患っており、重い病に苛まれていたからである。　こうして、キリストの聖なる御使いたちは、看守から質の悪いパンを、それも非難や罵声を浴びせられながら与えられ、三年以上も牢獄で過ごした。それでもなお、彼らは正教のために、喜びをもってこれらすべてに耐え抜いた。

彼らが悲しみや病気からまだ立ち直る間もなく、さらに重い新たな苦難に見舞われることとなった。どこからか、聖テオドロスのある書簡が皇帝の手に渡った。そこには、皇帝の不敬虔さを糾弾し、信者たちに敬虔さと正教を説く内容が記されていた。　この書簡を読んだ王は激しい怒りに燃え上がり、ある冷酷な地方長官をテオドロスの元へ遣わした。その目的は、彼にその書簡を見せ、それが彼のものであるかどうかを問い詰め、さらには息絶えるまで殴打させることだった。　地方長官が到着すると、その書簡を聖人に示したところ、聖人は確かに、この書簡が自分のものであり、他人のものではないことを認めた。そこで地方長官は直ちに、まず彼の弟子ニコライを殴打するよう命じた。ニコライはフェオドルの代理としてこの手紙を書いたため、裸のまま地面に寝かされたのである。その後、聖テオドールも服を脱がせ、容赦なく殴打し、全身に傷を負わせ、骨さえも砕きそうになった。かろうじて息がある程度まで追い込んだ後、総督は再び弟子ニコライのもとへ行き、時には甘言

で説得し、時には脅迫して、聖なるイコンへの礼拝を拒むよう迫った。　しかし、ニコライが正教への信仰を貫いたため、総督は以前以上に激しく彼を殴打し、二倍の苦痛を味わわせるべく、彼を裸のまま寒さの中、一晩中放置した。当時、ちょうど2月であったからである。　一方、聖テオドールは残酷な殴打のせいで、耐え難いほどの病に倒れ、まるで死人のように横たわり、かろうじて息をするだけで、食事も飲み物も一切口にできなかった。　ニコライは、師がこれほどまでに衰弱しているのを見て、自身も傷による恐ろしい苦痛に苛まれていたにもかかわらず、自分のことは忘れて、テオドールの回復に尽くした。　大麦の飲み物を懇願して手に入れ、それを使って聖者の乾ききった舌を湿らせ、少しずつ飲ませることで、彼に活力を与えた。聖者が少しずつ生命力を取り戻していることに気づくと、彼は腐りかけている体の他の部分も治療し始めた。　青ざめ、腐り、完全に使い物にならなくなっていた体の多くの部分を、彼は小さなナイフで切り取り、捨てた。そうすることで、残った肉がより順調に治癒するようにしたのだ。そして、聖者が少しずつ回復し始めると、彼は自分の弟子も治療した。

聖人たちが90日間にわたりこれほど苦しみ、まだ傷が完全に癒えていないうちに、王から別の厳格で非人道的な使者が派遣され、テオドールとその弟子ニコライをスミルナへ連行するよう命じられた[7745]。この使者は金に目がなく、テオドールが教えを求めに来る者たちから金を受け取っているのではないかと疑い、そのため、金を見つけることを期待して、牢獄内のあらゆる隙間を捜索し、壁を壊して土を掘り出すよう命じた。　しかし、何も見つからなかったため、彼はとりわけ残酷な方法で王の命令を実行に移した。罵倒と突き飛ばしを交えながら、尊者とその弟子を牢獄から引きずり出し、兵士たちに引き渡した。こうして彼らはスミルナへと連行された。　一方、聖人は、肉体の力が衰えていたにもかかわらず、神に支えられて、容赦のない兵士たちと共に歩いた。彼らは一日中、休む間もなく聖人を連行し、夜になると聖人の足を木に縛り付けた。こうして、聖人は　な苦労の末、かろうじてスミルナに到着し、そこで悪意に満ちた不義の擁護者に引き渡された。　その男はテオドロスを、ある低く暗い小屋に閉じ込めた。彼と共に、弟子であるニコライも閉じ込められ、こうしてキリストの祝福された僕たちは共に苦難に耐えた。　まもなく、皇帝から再び前述の冷酷なアナスタシウスが派遣され、聖人に再び百回の打撃を加えた後、立ち去った。聖人はこれらすべてを感謝をもって耐え忍んだ。

その頃、スミルナ地方の総督を務めていたのは、皇帝の甥であり、同じ思想を共有する人物であったが、彼は治癒不可能な重病に倒れ、死の淵に立っていた。　正教の教えを信奉していた彼の家来の一人が、病床の彼の元を訪れ、聖テオドールは神からあらゆる病を癒す恵みを受けていると告げた。彼は直ちに家来たちを聖テオドールの元へ遣わし、神に彼のために祈り、すでに迫りつつある死から彼を救い出してくれるよう懇願させた。聖テオドールは使者にこう答えた。

「あなたを遣わした者にこう伝えてくれ――テオドールはこう言っている――『死の日に、あなたは神の前で、自分の不敬虔な生き方と、正信者たちに与えた悪行について責任を問われることを忘れるな』と。」　あなたの数多くの他の不法行為に加え、あなたはさらに、私の修道士たちを数えきれないほどの災難にさらし、徳の高いファデオスを拷問の末に殺害した。そして今、彼は聖人たちと共に喜んでいる。さて、あなたを永遠の苦しみから誰が救うというのか？　せめて最期の時こそ、自らの悪行を悔い改めよ。

使者たちは戻ると、テオドロスの言葉をすべて病床の軍司令官に伝えた。軍司令官は、自らの犯した悪行を思い返し、大いに恐れをなした。そして再び使者を聖者に遣わし、許しを請うとともに、もし聖者が祈りによって彼を病床から立ち直らせてくれるならば、正教の信仰を受け入れると約束した。　聖人は、総督のもとへ聖母マリアのイコンを送り、生涯を通じてそれを敬虔に身に着けてお

[7745] これは819年のことである。スミルナは、小アジアの西岸に位置する古くからの有名な商業都市であり、現在では人口12万人以上を擁する、小アジアで最も繁栄している都市の一つとなっている。

くよう命じた。総督はその聖なるイコンを受け取ると、病の苦しみから解放され、回復し始めた。しかし間もなく、かつて異端者であったスミルナの司教の影響を受け、彼は以前の異端の信仰へと立ち返ってしまった。その司教から、あたかも自分への祝福であるかのように聖油を受け取ると、彼は完全な回復を期待して、その油を身に塗った。　しかし、その後、彼には以前の病が再び戻ってきた。このことを知った聖人は、その罪人に凄惨な死が訪れると予言したが、その予言は的中した――彼はまもなく苦痛に満ちた死を遂げたのである。一方、聖テオドールは、隠遁生活の中で苦しみながら、スミルナで一年半にわたり幽閉に耐え抜いた。　その後、不義の王レウ・アルメニア人は、自らの兵士たちに殺害され、強制的に命を奪われた。彼の後を継いで王位についたのは、ミハイル、通称トラウリウス、すなわちヴァルボス[7746] であった。この皇帝は不敬虔ではあったものの、正教徒を迫害することはなく、各人が望む通りに信仰することを許した。　そのため、彼の治世下では、正教のすべての聖父たちや殉教者たちが投獄から解放され、牢獄から釈放され、追放先から帰還した。その時、尊者テオドロスもまた、その苦難から救われた。　そして、かつての弟子たちの一部が彼の元を訪れた。その中には、幼い頃から徳に秀でていたドロフェイをはじめ、ヴィッサリオン、ヤコブ、ドメティアヌス、ティモフェイ、そして敬虔な生活と、霊的父であるテオドロスへの熱烈で揺るぎない愛によって際立っていた多くの者たちがいた。　スミルナには、テオドールも他の者たちと同様に、自身の修道院へ帰還することを許可するよう、皇帝からの命令が届いた。

この祝福された方が流刑先から帰還する際、正教徒たちは至る所で喜びをもって彼を出迎え、互いに知らせ合い、彼を自宅に迎え入れようと努めた。それは、彼の祈りと祝福に与り、その甘美な教えを味わうためであった。　教会全体がテオドロスの帰還を喜び、聖なるイコンのためにこれほど多くの苦難を耐え、その教えによってすべての人を正教の信仰に確固たるものにした人物として、皆が彼を称賛した。帰路、尊者テオドロスはハルキドン[7747] に到着し、かつてマギストリアンの位にあった聖なる修道士テオクティスト[7748] に会った。彼との霊的な対話に慰めを得た後、不義な王レオン・アルメニア人によって流刑に処された、同志である至聖なるニキフォロス総主教を訪ねるために旅立った。彼との霊的な対話を満喫した後、尊者（フェオクティスト）はクリスケンティエフの地[7749] へと去り、その存在で多くの人々を喜ばせ、彼らに魂を救う教えを授けた。　そこから再び総主教のもとへ戻った後、彼は総主教や他の司教たちと共に王のもとへ赴き、正教を受け入れるよう説得した。しかし、王は分別がなく、神の御言葉に無知であったため、聖なる父たちの言葉に耳を傾けることなく、ただ次のように言った。

「あなたがたが望むことを行うことを禁じるつもりはない。ただ、帝都にイコンを安置することだけは許さない。他の場所であれば、望む者はどこにでも自分たちのために安置すればよい。しかし、私はイコンを崇拝するつもりはない。」

彼がこの狂気じみた言葉を口にしたとき、敬虔な父たちはビザンティウムを去った。聖テオドロスは弟子たちと共に、クリスケンティウスの地に住み着いた。　しばらくして、王権を掌握しようとしたあるトモスによって引き起こされた戦争の最中、聖人は兄弟たちと共に再びコンスタンティノ

[7746] ミカエル2世・トラウリウス、すなわち「口先だけの者」は、820年から829年まで在位した。

[7747] ハルキドンは、小アジアの北西岸、コンスタンティノープル海峡の南端、コンスタンティノープルの対岸に位置するビフィニアの主要都市である。ハルキドンは、第4回全地公会議（451年）が開催されたことで、教会史において知られている。

[7748] 「マギストラ」という称号は、ビザンツ帝国の宮廷において、パトリキウスよりも上位の称号と結びついた最高位の宮廷職の一つを意味していた。

[7749] この地域はコンスタンティノープルからそう遠くない場所に位置していた。

ープルへ赴く必要に迫られた[7750] 。戦争が終わると、聖人は、聖像破壊の異端に染まった民衆の中に暮らすことを望まず、再びそこから去った。 コンスタンティノープルを後にした彼は、クリスケンティオスの地へは向かわず、聖トリフォンの名を冠した教会があったアクリトスのヘルソネソス[7751]に定住し、そこで弟子たちと共に、敬虔な行いを通じて神に喜ばれる修道生活を送った。 愛する友人たちと共にそのような生活を送ってしばらく経った頃、尊者テオドールは生後67年を迎え、至福の死を迎えようとしていた。死の直前、11月のこと、彼は重篤な病に襲われ、胃の痛みにひどく苦しんだ。 至福のテオドールが病に伏し、死が近づいているという知らせは、至る所に広まった。 すると、都からも、また周辺の様々な村々からも、多くの敬虔なキリスト教徒が彼のもとに集まってきた。彼らは、尊者のお話を聞き、その最期の言葉を味わうため、あるいはせめて神のもとへ旅立つ彼の姿をひと目見ようと、やって来たのである。 ただ彼に近づくことさえ、大きな恵みと見なされていた。というのも、この素晴らしい人物は、その言葉は甘美で、知恵に富み、あらゆる美徳に彩られていたからである。至福のテオドールが病床に伏し、死の床の病でひどく衰弱していたときでさえ、彼は可能な限り、弟子たちと魂に益となる対話を交わしていた。 しかし、病による高熱で舌が乾ききっていたため、彼の言葉のうち聞き取れるのはほんのわずかだった。そこで、近くで耳を傾けていた書記の一人が、その言葉を書き留めた。そうすれば、その言葉を知りたいと願うすべての人が、魂の益となるよう、この聖人の教えを読むことができるからである。 語り合いの最中、尊師の体調は回復し、立ち上がって歩き始めるほどになった。日曜日、教会に赴くと、彼は神聖な聖体礼儀を執り行い、兄弟たちに説教を述べ、彼らと共に食事をとった。 同様に、11月6日の朝――私たちの聖なる父パウロ・殉教者の記念日――にも、彼は教会で神聖な聖体礼儀を執り行い、兄弟たちに説教を行い、その日の晩課にも出席した。その後、修道室に戻り、床に就くと、再び重篤な病に倒れた。 彼は四日間病に伏していたが、五日目にしてその病は終わりを告げ、苦しみから解放された生活の始まりとなった。尊者が臨終に近づくと、多くの兄弟たちが彼の元に集まり、彼らは彼をまるで自分の父であり師であるかのように嘆き悲しんだ。彼らを見渡すと、彼は少し涙を浮かべてこう言った。

「父たちよ、兄弟たちよ！ 今や、私の生涯の終わりが訪れました。私たちは皆、この共通の杯を飲み干さねばなりません。ある者は早く、ある者は遅く、それでもなお、その時は避けられません。そして今、私は先人たちが歩んだ道を通って、永遠の命がある場所へ、とりわけ、私の魂が愛した主であり神がおられる場所へと旅立ちます。 私は心から主を慕い、主のしもべと名乗りましたが、主への奉仕を全うすることはできませんでした。しかし、私の兄弟たち、愛する子らよ、私があなたがたに伝えた言葉に忠実であり続け、正しい信仰と敬虔な生活を守り続けてください。 あなたがたもご存じの通り、私は、個別に、また皆が集まる場においても、絶えず神の御言葉をあなたがたに宣べ伝えてきました。今、私は切にあなたがたに懇願します。その御言葉を心に留め、守り続けてください。なぜなら、私は、あなたがたについて報告をしなければならない者として、あなたがたを案じているからです。ですから、あなたがたもまた、汚れのない者としてこの世を去ることができるよう、心を配ってください。 私については、もし主の御前で勇気を得ることができれば、あなたがたの修道院が 常に最良の状態に保たれ、またあなたがた一人ひとりが、神の助けにより、徳においてさらに大きな進歩を遂げられるよう、祈ることをお約束します。

[7750] 821年12月、コンスタンティノス6世の息子を名乗り、レオン・アルメニア人の治世の終わり頃にはすでに小アジアで皇帝を自称していた偽皇帝トマスが、コンスタンティノープルに迫った。 正教徒たちが彼の側に寝返ることを恐れたミカイル・コスノヤズニーは、彼らと聖像迫害者たちとの和解を図るために公会議を招集することを約束した。この機会に、テオドロス・ストゥディトスもコンスタンティノープルを訪れた。 しかし、その自称皇帝が自身の共謀者たちによって殺害されたため、公会議は開催されず、皇帝にとっての危機は去った。

[7751] アクリト――ビフィニアにある岬で、ニコメディアの近く、コンスタンティノープルの対岸に位置する。

こう語り、皆に別れを告げると、彼は弟子たちにろうそくを手に取り、退場行進を始めるよう命じました。　弟子たちは寝台の周りに立ち、次のように歌った。*「主の律法に従って歩む、その道に汚れなき者は幸いである」*（詩編118:1）。そして、歌いながら次の言葉を口にしたとき、「*あなたの戒めを、私は永遠に忘れません。それらは私を生かすからです」*（詩編118:93）と唱えたとき、聖テオドールはこれらの言葉と共に、その聖なる魂を神に委ねた。神の御使いたちはそれを受け取り、主の御座へと運び去った。これは、聖イラリオン・ダルマタ（†845年）の偽りのない証言によって明らかにされている。

聖ヒラリオンは、テオドールが帰天したまさにその日、すなわち11月11日、聖殉教者ミナの記念日に、ぶどう畑を歩きながらダビデの詩篇を歌いながら作業をしていた。すると突然、彼はいくつかの不思議な声を耳にし、言葉では言い表せない芳香を嗅いだ。　彼は驚き、立ち止まって、その音がどこから聞こえてくるのか探した。空を見上げると、白い衣をまとい、輝くような顔をした無数の天使たちが、賛美歌を歌いながら天から降りてきて、ある尊い人物に向かって歩いているのが見えた。　これを見た聖イラリオンは、激しい恐怖に襲われて地面に倒れ込み、誰かが彼にこう語りかけるのを耳にした。

「これこそ、聖なるイコンのために多くの苦難を耐え、苦難の中でも最後まで揺るぎなかった、ストゥディオス修道院のイグメン、テオドロスの魂である。今、この故人の魂は、天の軍勢に迎えられながら、喜びに満ちて山を登って行っている。」

この幻視について、至福のイラリオンは他の徳高い修道院長たちにも伝えた。彼らはその幻視があった日と時刻を記録し、しばらくして、まさにその時刻に、称賛に値するテオドール・ストゥディオスがこの世を去り、地から天へと移ったことを知った。

私たちの尊い父テオドロスは、生前も死後も多くの奇跡を成し遂げた。そのうちのいくつかを、魂の益となるよう、ここで紹介しよう。

ある宿屋の主人レオンは、聖テオドールが流刑先から戻ってくる途中、休息のために彼を自宅に迎え入れた。その後、このレオンは息子のために花嫁を見つけた。　そして、結婚式の準備が進められていた矢先、花嫁が突然重い病に倒れ、激しい高熱に襲われて床に伏したため、誰もが彼女の命を絶望視するほどであった。

一方、レオンは修道士のもとへ使者を送り、起きた出来事を伝え、祈りによって彼らを助けてくれるよう懇願した。修道士は聖油に祝福を与え、それをレオンのもとへ送り、この聖油で病人を塗るよう命じた。それが行われると、花嫁はたちまち元気になり、まるで以前病気だったことなどなかったかのように健康を取り戻した。　その同じレオンが、ある時用事で一人で遠くの村へ向かう途中、道でオコジョに出くわした。オコジョはレオンに気づくと、彼を引き裂こうと襲いかかってきた。レオンは声高らかに聖テオドール神父の名を呼びました。すると、その獣は聖人の名を聞き、立ち止まって地面にひれ伏し、道から外れて逃げ去りました。レオンは獣に傷つけられることもなく、その道を歩き続けました。

ある女性が、悪霊に取り憑かれて苦しみ、聖なる父のもとへ連れてこられた。彼女を苦しめていた悪霊は極めて獰猛で、彼女自身は痛みを感じることなく、自分の肉を噛みちぎり、食べていた。その苦しみを見て、聖人は彼女を憐れみ、自らの手で彼女の頭上に十字を切って、彼女に対して追い払いの祈りを唱えた。すると直ちに、悪霊は彼女から出て行き、聖人の祈りによって追い払われ、たちまち姿を消した。

ある名門の女性が、聖テオドールが世を去った後、至福の修道院長ソフロニオスに[7752]　次のように語った。「かつて――と彼女は語った――私の家で火災が起きたことがありました。　火は家を取り囲み、中にあるものをすべて轟音とともに焼き尽くしていました。私たちは水でも他のどんな方

[7752] ソフロニオスは861年から864年まで、ストゥディオス修道院の院長を務めた。

法でも炎の勢いを抑えることができず、どうすればよいか途方に暮れていました。その時、私は手元にあった聖テオドール様の手紙を思い出しました。それは、その少し前に彼が私に宛てて書いてくれたものでした。　私は、その手紙を火の中に投げ込もうと思いつきました。聖テオドロスの聖なる御手によって書かれたこの書簡を、火が少しでも恥じるのではないか、そしてそれが炎を少しでも鎮めてくれるのではないかと思ったのです。そう考えた通りに行動し、私はその手紙を炎の中に投げ込み、こう言いました。　「聖テオドロよ、苦難にあるあなたのしもべを助けてください！」と。するとその　、私たちは、炎の猛烈な勢いが弱まり、消え、煙の中に消え去ったことに気づいたのです」。この神の御心に適う者の名を呼び求めることには、これほど大きな力があったのです！

前述のソフロニオスは、これと似た別の出来事についても語っている。「私たちは」と彼は言った、「偉大なるテオドロスの弟子であり同志である、至福のニコライと共に、パフラゴニア[7753]へ向かっていた。旅の途中、夕暮れが迫る頃、私たちは刈り取られた干し草がたくさん積まれたある野原で休息をとった。　そこには、ある兵士たちもいた。彼らはその道を歩いてきて、時刻が遅かったため、同じ野原に立ち寄り、焚き火を焚いて夕食を準備していた。その後、夜になってその焚き火がいつの間にか勢いを増し、気づかぬうちに近づいてきて激しい火災となり、干し草をすべて焼き尽くしてしまった。　兵士たちは慌てて目を覚まし、これが私たちの仕業だと思い込み、一斉に私たちに襲いかかり、すでに手を下して私たちを苦しめようとしていた。私たちは、どうすべきか途方に暮れながら、偉大なるテオドロスに助けを求め、こう叫んだ。「尊き父よ！　どうか私たちを助け、あなたの祈りによって、不当に私たちに降りかかっているこの災いから救い出してください」と、偉大なるテオドールに助けを求めた。私たちがそう言っているとき、突然激しい雨が降り出し、火の海を完全に消し止めた。兵士たちはその奇跡を目撃すると、穏やかな態度に変わり、私たちにひれ伏して許しを請うた。

サルデーニャ島[7754]には、ある敬虔な男がいた。彼は、聖テオドールの著作を携え、熱心にそれらを読みふけっていた。また、その聖なる父が作曲し、大斎期間中に歌われる、トリオディアあるいはトリペスンツと呼ばれる聖歌も愛していた。　ある時、通りかかった不信心な修道士たちがこの男の家を訪れ、四旬節の間、彼のもとで滞在した。彼らは、聖テオドールが作曲した聖歌や教訓を目にするや、それらが理性に反して作られており、狂気に満ちていると罵り始めた。　しかし、彼らを宿したその敬虔な男は、彼らの話に惑わされ、もはや聖テオドールの有益な教訓を読むことはなくなり、以前歌っていたように、朝の賛美の後に聖テオドールが編んだ三歌集を歌うこともなくなった。彼がこのように堕落したある夜、聖テオドールが彼の前に現れた。その姿は生前の通り小柄で、高貴な顔立ちをしており、頭髪はなかった。その後ろには他の修道士たちも続いており、彼らは杖を手にしていた。聖テオドールは、不敬虔な修道士たちに惑わされたその男を、その杖で打つよう命じた。彼が打たれている間、聖人はこう言った。

「なぜ、かつて愛し、敬っていた私の被造物を、不信仰ゆえに拒んだのか。もし神の教会が彼らに益を見出さなかったならば、そもそも彼らを受け入れなかったはずだと、なぜ考えなかったのか。　それらは、巧妙な偽りの言葉や、修辞的な美辞麗句によって綴られたものではなく、すべてにおいて健全で謙虚な言葉に満ちており、心を砕き、魂を和らげることができるのだ。それらは、真に救いを望む者にとって、甘美であり、有益である。

このように罪を犯した者を懲らしめた後、聖テオドールは立ち去った。日が明けると、その男は受けた打撃で病床に伏しており、体には無数のあざができていた。彼は、自分に下された懲罰について語る際、そのあざを皆に見せて回った。　その後、彼は自分を誘惑した修道士たちを、自身の罪とそのような懲罰の原因であるとして、急いで家から追い出した。それ以来、彼は聖テオドールに対

[7753] パフラゴニア――小アジア北部の地域。

[7754] サルデーニャ――イタリアの西、地中海に浮かぶ大きな島。

する信仰を以前よりもさらに強め、聖人が著した著作や聖歌を愛を込めて読み、かつての罪を赦してくれるよう懇願した。

聖人の棺からも多くの癒しがもたらされた。ある日、ある悪霊に取りつかれた男が彼の棺を訪れた。夜、幻視の中で聖人が彼に現れ、癒やしを授けて彼を健康な体に戻した。　その男は目を覚ますと、悪魔の苦しめから解放されたのを感じ、神とその御使いである聖テオドールを賛美した。

ある人は毒入りの食べ物を口にし、内臓全体が毒に侵され、すでに死の淵に近づいていた。ところが、彼が聖人の棺のそばにあったランプの油を口に含んだところ、その致命的な毒を即座に吐き出し、健康を取り戻して無傷で済んだ。

三番目の男は胃の病にひどく苦しんでいたが、聖テオドロスのイコンを一瞥し、その名を呼び求めた途端、即座に癒やされた。　また、ある恐怖に取り憑かれた別の男は、狂気の状態にあり、すべての人を恐れ、戦慄していた。彼が聖人の棺の前に連れて行かれ、聖油を塗られたとき、　、突然その苦しみから解放され、正気を取り戻すと、神とその御使いに感謝を捧げた。

聖テオドロスの祈りによって、その棺の前で、三位一体の唯一の神の栄光のために、他にも多くの奇跡が成し遂げられた。神に、今、そして常に、そして世々限りなく、私たちからの栄光と礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

正教の導き手、敬虔と清らかさの師、全宇宙の灯火、修道者たちの神に導かれた慰め、至賢なるテオドロよ、あなたは弟子たちすべてを啓蒙された。霊の泉よ、キリスト・神に祈り、我らの魂が救われますように。

コンダク、第2調:

あなたの断食に満ちた、天使に等しい生涯は、苦難に満ちた功績によって明らかにされ、神に祝福されたテオドールよ、あなたは天使たちと共に住む者として現れました。彼らと共に、キリスト・神に、私たちすべてのために絶えず祈り続けてください。

聖ステファン・デチャンスキー、セルビア王の生涯[7755]

記念日：11月11日

ステファン・ウロシュ3世・デチャンスキーは、古代の正教国セルビアの敬虔な王たちの一人として、セルビアの王（クラル）であった。

彼は、聖王ステファン・ウロシュ2世・ミリュティン[7756] の息子であり、ステファン・ウロシュ1世[7757]

[7755] 聖ステファン・デチャンスキーの伝記は2つ知られており、現在まで残されている。1つは、セルビアの大司教ダニエルが著した『系譜』、すなわち『ツァレスタヴニク』（セルビアの王や大司教の伝記）の執筆を引き継いだ同時代人によって書かれたものである。　もう一つは、それから約60年後に、聖ステファン・デチャンスキーが創設した修道院の修道院長であり、後にキエフ都主教となったグリゴリー・ツァムヴラクによって執筆されたものである。本稿は、これら2つの伝記を基礎として構成されている。

[7756] ミリュティンは1282年から1320年までセルビアを統治した。

[7757] 1243年から1276年まで統治した。

の孫、そしてセルビア初の戴冠王である聖ステファン[7758] の曽孫であり、セルビア初代大司教である聖サヴァの兄弟、またセルビアの大ジュパンである聖ステファン （修道名はシメオン）ネマニャ[7759]の曽孫であり、古代セルビア王国の建国者である。母はミルティナの最初の妻、ハンガリー王ステファン5世の娘エリザベータであった。敬虔なセルビア王家に生まれ、ステファンは幼少期からキリスト教の信仰の中で育てられた。

幼い頃から、ステファンは多くの過酷な災難を目の当たりにし、経験せざるを得なかった。当時のセルビアでは、王族間の頻繁な動乱や内紛、貴族たちの反乱や謀反、そして隣国であるブルガリア、ギリシャ、タタールとの絶え間ない戦争が相次いでいた。

正教会の東方キリスト教の敵であるタタール人は、正教会のルーシを打ち破って征服した後、他のスラブ系正教会国家をも荒らし回り、ブルガリアやセルビアを脅かしていた。

特に、クリミアのハン・ノガイからは、バルカン半島のスラブ諸国に甚大な脅威が迫っていた。ノガイが派遣したタタール軍は、ブルガリアとマケドニアを荒廃させ、セルビアにも侵攻した。ブルガリア人は一時、タタールに服従せざるを得なくなり、セルビアにも同様の運命が迫っていた。

しかし、セルビア王ミリュティンは断固たる措置を講じた。強大なタタール・ハンに武力で抵抗することはできなかったため、彼と交渉を行い、タタールの侵攻を食い止めたが、幼い息子を数人の高位のセルビア貴族と共に人質としてタタールの陣営へ送り出さざるを得なかった。

しかし、神は敬虔なステファンが遭遇した不幸の中で彼を助けてくださった。まもなくタタール人の間で内紛が発生し、それはノガイの暗殺で幕を閉じた。ステファンはタタール人内部のこの混乱に乗じて、祖国へと帰還した。

タタール人との共同戦線を張るため、ブルガリアのツァール・スミルツェはセルビアのクラール・ミリュティンと同盟を結んだ。この同盟に伴い、ミリュティンの息子ステファン・ウロシュと、ブルガリアのツァール・スミルツェの娘との結婚が成立した。

結婚後、ステファン・ウロシュは、ゼタ、すなわちディオクレア（現在のモンテネグロ南部）という重要な地域の一つを、独立して統治する権限を与えられた。ステファンはここでしばらくの間統治を行った。

しかし、かつて頻繁にそうであったように、この時もセルビアでは動乱が生じ、それに伴い、いつものように災難や不幸が相次いだ。

ステファンの継母であり、ミリュティンの二番目の妻であるシモニダは、ビザンツ皇帝アンドロニコス1世（[7760] ）とその妻イリーナの娘であったが、セルビア王位の継承者として、義理の息子であるステファン・ウロシュではなく、実の息子コンスタンティンを望むようになった。 母イリーナに煽られて、彼女はミルティン王に息子ステファンへの疑念を抱かせ、ステファンが父から王位を奪おうとしているかのような誹謗中傷を吹き込み始めた。

一方で、セルビアの貴族の中には、ステファンに差し迫った危険を警告しつつも、その危険を取り除くには父に対する反乱を起こし、王権を奪うべきだと助言した者も少なくなかった。

その間、父ミルティンには、悪意ある者たちが「息子が自分に対して反乱を企て、王位から追放しようとしている」と吹き込んでいた。そこでミルティンは息子の領地へと向かい、彼を捕らえる

[7758] 聖ステファン・ペルヴォヴェンチャニーは1224年に帰天し、1195年から統治した。

[7759] 聖ステファン（シメオン）・ネマニャは、1159年から1196年まで統治した。

[7760] アンドロニコス・パレオロゴス（長老）は、1281年から1332年までコンスタンティノープルで皇帝を務めた。

よう命じた。派遣された者たちはステファンを鎖で縛り、スコプレの牢獄に投獄し[7761]、両目を潰した。

これは、オヴチェ・ポレと呼ばれるセルビアの地域で起こった。そこには、聖人であり奇跡行者であるニコラエに捧げられた教会があった。　両目を失ったステファンは恐ろしい苦痛に苛まれ、祈りだけが心の支えとなっていた。そのような激しい苦しみの中、半死半生の殉教者は、かすかな夢の中で、聖職者の装いを纏い、顔を輝かせた威厳ある聖なる人物を目の前に見た。その人物は右の手のひらにステファンの抉り取られた両目を載せ、こう言った。

「悲しむな、ステファンよ！　ほら、私の掌にあなたの目がある」――そう言いながら、その目を見せた。

これを幻影だと思ったステファンは、彼にこう言った。

「あなたはどなたですか、私の主よ。私にこれほどの手厚い配慮をなさる方は？」

現れた者は答えた。

「私はミリキオの司教、ニコライだ。」

眠りから覚めたステファンは、病の苦しみが幾分和らいだのを感じ、神に感謝した。

ステファンへの迫害はこれで終わりではなかった。

息子の思惑から完全に身を守るため、ミリュティン王はステファンを祖国から追放し、二人の幼い孫、すなわちステファンの息子であるドゥシャンとドゥシツェを連れて、義父であるアンドロニクス長王のいるツァルグラードへ、その監視下に置くために送り出した。

しかし、追放先においても、神は忍耐強いステファンを見捨てなかった。確かに、ステファンはそこで自由を奪われていた。　当初、彼には特別な邸宅と皇帝からの十分な生活費が与えられたが、自由に外に出ることは禁じられていた。その後、ステファンは子供たちと共に、コンスタンティノープルのパントクラトール（全能の主）修道院に移され、修道院長の監視下に置かれた。修道院長の許可なしには、誰をも迎え入れることも、誰とも会話することも許されなかった。　しかし、気高いステファンは、監禁のあらゆる苦難を従順に耐え忍んだ。彼はしばしばこう繰り返した。「耐えよ、ステファン。*『あなたがたの忍耐によって、あなたがたの魂を救いなさい』*（ルカ21:19）と、主は言われたのだ」。

彼はしばしばひざまずいて祈りにふけり、その中で慰めを見出していた。修道院の兄弟たちが定時の礼拝に集まるとき、彼は真っ先に祈りの場に現れ、礼拝が終わるまで微動だにせず立っていたため、修道院長や兄弟たちは彼の気力と熱意に驚嘆した。そのおかげで、皆がステファンを愛し、彼に敬意を払った。　また、霊的な対話を求めて彼を訪ねる者も多かった。こうしたことは、皇帝自身にも知れ渡っていた。流刑者の称賛に値する生活について耳にすると、皇帝はしばしば彼を宮殿に呼び寄せ、心の益について語り合い、共に食事を共にした。

そのような、魂の救いに関する事柄や国政について語り合う会話の一つで、当時ギリシャ王国において多くの正教徒を憤慨させていた、西からやってきた異端者ヴァルラアムの話になった。彼は、ファヴォール山での栄光に満ちた変容の際、主イエス・キリストを照らした光について誤った教えを説いていたのである。　ステファノスは次のように述べた。「キリストのこの偉大な群れの牧者である王が、その群れの中に主の敵を留めておくことは、不義であり、ふさわしくない。彼らは、魂を蝕む狼のように、追い出さなければならない」。

王とアファナシオス総主教によって招集された公会議は、ヴァルラアムの異端を非難し、この異端者はギリシャ王国の領土から追放された。

ステファノスは、その高潔な生活と知恵、そして助言によって、修道院の兄弟たちや王だけでなく、コンスタンティノープルのすべての貴族、総主教、高官たちからも、万人の愛を勝ち取った。

[7761] マケドニアのヴァルダル川沿いにある都市。現在はトルコ語でウシュクプと呼ばれている。

皇帝から支給されたものの中から、ステファンは自身の生活費としてごくわずかな部分しか使わず、残りは貧しい人々に配るよう修道院長に託した。

ステファンの同胞の一人であり、古くからの知人かつ崇拝者である人物は、無実の流刑者の境遇を少しでも和らげたいと願い、忠実な使用人を介して、様々な必要に充てるための多額の金を彼に送った。　使者はステファンに金を手渡し、友人の同情に満ちた言葉を伝えた。ステファンは施し主に感謝し、主なる神に彼のために祈りを捧げたが、イグメンを呼び寄せ、送られてきた金のすべてを、困窮している人々に配るよう彼に託した。　修道院長はステファンに対し、せめて日常の必要に充てるため、ごく一部だけでも手元に残しておくよう説得したが、ステファンはこう答えた。「神ご自身が、私に異国の地で暮らし、他人の施しによって生計を立てるよう定められたのだ。それが当然のことであり、送られてきた金は、真に困窮している者たち――すなわち貧しい人々に渡すべきである。」

ステファンは使者をもてなしてしばらく自分のもとに留めた後、彼に感謝の意を表し、主なる神に彼のために祈りを捧げつつ、友のいる故郷へと送り出した。

そのような美徳ゆえに、神の恵みはステファンから決して離れることはなかった。幽閉生活に入って五年目、主なる神は彼に偉大な奇跡を示された。

ある日、偉大なる聖人であり奇跡行者であるニコラオスの記念日を祝う日、ステファンは慣例に従い、厳粛な徹夜礼拝に参列していた。　聖人の生涯と奇跡が朗読されている間、彼はいつものように自分の席のベンチに腰を下ろし、長時間の労苦と徹夜祈祷のせいでうとうとしていた。すると、彼は目の前に、以前にも現れたことのあるあの神聖な人物を見るのである。

「覚えているか」と、ステファンに現れた方は言った。「以前、私が現れた時に、あなたに話したことを。」

ステファンは地面にひれ伏して言った。

「あなたが偉大なる聖ニコライであることはわかりますが、あなたが言われたことは覚えておりません。」

聖ニコライは言った。

「私はあなたに、『悲しむな。あなたの瞳は私の手の中にある』と言った。そして、それをあなたに見せたのだ。」

ステファンは、以前の聖人の御出現を思い出し、その足元にひれ伏して、慈悲を請い始めた。聖人は言った。

「あの時、私が君に言ったことを、今、果たしに来たのだ。」

そして、まるで視力を授けるかのように、ステファンを起こし、その顔に十字の印を刻み、目に触れてこう言った。

「生まれつき盲目だった者に目を与えた我らの主イエス・キリストが、あなたの目にも本来の視力を授けてくださいますように！」

そう言い終えると、聖人は姿を消した。

戦慄に包まれたステファノは、我に返ると、神の言い表せない憐れみにより、以前と同じように見えるようになった。

杖を手に取り、彼はいつものように教会を出て、独房に戻ると、一人きりで、自身の癒やしに対する熱烈な祈りと感謝に身を委ねた。　長い祈りの後、相変わらずタオルで目を覆い、彼は再び教会に戻り、慣例通り立ち、自分に起こった奇跡を誰にも悟られないようにしていた。そして、神が御心に適うままに、彼が故国へ戻った後、彼をセルビアの正統な王として即位させるその日が来るまで、誰も彼の視力が回復したことを知る者はいなかった。

ステファンが奇跡的に視力を取り戻してから数日後、彼の末息子である幼いドゥシツァが重い病に倒れ、亡くなった。ステファンはこの喪失を不平を漏らすことなく受け入れ、「主が与え、主が

取り去られた」という言葉を繰り返したため、周囲の者たちは皆、ステファンの不屈の精神に驚嘆した。

ステファンが異国の地で幽閉され、苦悩する日々はさらに2年間続いた。ステファンは、神の摂理によって課せられた十字架として、その流刑をどれほど忍耐強く耐え忍んだとしても、やはり祖国へ戻りたいと願っていた。

そこで彼は、アトス山のセルビア系ヒランダル修道院へ、涙に満ちた書簡を送った。そこには当時、セルビアの司教（のちの大司教ダニエル）が滞在しており、ステファンは以前から彼に対して常に愛情と友情を抱いていたのである。　その書簡の中で、彼は自らの苦境を鮮やかに描き出し、ダニエルに、アトス山の偉大な長老たちと共に、彼の父であるミルティン王に懇願し、彼への慈悲と祖国への帰還を働きかけてくれるよう求めた。

アトス山では、この件を協議するために長老たちの総会が開かれた。彼らは、セルビアの大司教ニコディムに書簡を書き、選任された高名な長老たちを伴ってセルビアへ派遣し、息子と孫の帰還を請願することに決めた。

雄弁な書簡と、ニコディム大司教および派遣された長老たちの演説は、父の心を動かした。

ちょうどその頃、ステファンとその息子が収容されていたパントクラトール修道院のイグメンが、コンスタンティノープルからセルビアに到着した。　この修道院長は、雄弁で才知に富んだ人物として、ビザンツ皇帝アンドロニコス・パレオロゴスによって、義理の息子であるセルビア王ミリュティンのもとへ派遣され、ギリシャ王国の敵に対する軍事援助を要請するよう命じられていた。

国政について協議した後、ミリュティン王は皇帝の使者であるパントクラトール修道院の修道院長を、二人きりで話し合うために招き入れ、自分の息子ステファンについて詳しく尋ね始めた。

修道院長は、息子の美徳、偉業、そして忍耐について父に詳しく語り、それらには王のすべての財宝を合わせても及ばないと叫んだ。これらの話はミリュティンの心を動かした。　さらに、その直前に、彼の義母であり、シモニダの母であるイリーナ皇后――父が息子に対して抱いていた疑惑と敵意の主たる原因であった人物――が亡くなっていた。これらすべての事情により、ミリュティンは息子を呼び戻すことを決意した。

彼はアンドロニコス皇帝に使節団を派遣し、息子のステファンと孫のドゥシャンを故郷のセルビアへ帰すよう懇願した。　ステファンを深く愛し、敬意を抱いていたアンドロニクス皇帝は、このセルビアの亡命者と別れを告げ、必要な物資をすべて用意し、惜しみない贈り物を授けて旅立ちを許した。アンドロニクスは、この苦難に耐えてきた男の視力が回復したことを知っていたが、ステファンに新たな疑惑や迫害を招かないよう、誰にもそのことを明かさなかった。

こうして、異国での8年間の幽閉を経て、ステファンは成長しつつある息子ドゥシャンと共に祖国へ帰還した。再会の場面は感動的なものだった。　父は息子と和解した。彼は息子の生計を立てるために、ディオクレア（ゼテ）にある小さなブディムル地方の統治権を与え、孫のドゥシャンは自分の元で育てた。それは、息子の忠誠の証として彼を手元に置いておくためだったのかもしれない。

その3年後、セルビア王ミリュティンが死去した（1320年10月29日）。 ステファンの継母シモニダの支持者たちは、彼女の息子コンスタンティンを擁立して騒乱を引き起こそうとしたが、セルビアの貴族の大半は、王位継承権を持つミリュティンの長男ステファンに味方した。ステファンはディオクレアから当時のセルビアの首都、 プリズレン[7762] に、1321年1月、セルビア大司教ニコディムにより、セルビア聖職者全員の参列のもと、王冠を授けられた。　ビザンツの慣習に従い、父と共に、その息子である「ステファン、若き王（スティーファン・ムラディ・クラリャ）」、通称ドゥシャンも「クラレヴストヴォ」の戴冠式を受けた。ステファンはウロシュ3世の名で統治することとなった

[7762] プリズレンは、現在はトルコに属する旧セルビアに位置し、ベラゴ・ドリナ川の近く、その左岸にある小さな支流マリツァ川沿いに位置する。

。　こうして目隠しは取り除かれ、偉大なる奇跡行者ニコラスの取り成しによってステファンが視力を奇跡的に取り戻したことは、誰の目にも明らかとなった。

ステファン・ウロシュ3世の治世は、平穏で平和なものではなかった。国内の動乱は収まらなかった。

ステファンの弟であり、ギリシャ人女性シモニダの息子であるコンスタンティンは、軍勢を集めてステファンに攻め寄せ、王位を譲るよう要求した。ステファンもまた、軍勢を集めてコンスタンティンに立ち向かった。　戦いが始まる前に、ステファンは兄に手紙を送り、異民族の軍隊を率いて祖国と戦うのではなく、　自分が兄に与える地域を平和に統治するよう説得した。「これほど広大な土地であれば、二人で豊かに暮らすことも可能だ」と。　しかし、コンスタンティンはこれらの和平提案に耳を貸さず、戦いに臨んで戦死し、その配下たちはステファンの側についた。

ステファン・ウロシュ3世に対して、彼の従兄弟であるヴラディスラフ――ミリュティノフの兄弟であるスレム王ドラグティンの息子――もまた反乱を起こしたが、この反乱もステファンに有利に決着した。ヴラディスラフは彼に服従せざるを得なかった。

最初の妻であるブルガリアの王女の死後、ステファン・ウロシュはさらに二度結婚した。一度目は、アカイア公フィリップ・タレンツィオの娘ブランカと[7763]、そしてこの二番目の妻の死後には、テッサロニキ総督ヨハネス・パレオロゴスの娘マリアと結婚した。

平時、ステファンは臣民の福祉と教会の事務に心を配った。彼は従来の勅書を確認し、教会に対する土地所有権やその他の収入を確固たるものにした。また、自国の領土内における信仰の純潔性の維持と異端の根絶にも尽力した。　ある同時代人が福音書に、ステファン・ウロシュ3世について次のように記している。

「主は彼を、祖国にとって明るく輝かしい星として選び、栄光を与えられた。彼は祖国を固め、多くの都市や地域を征服し、敵を打ち散らした。彼は不信心で不義なバブーンたちに対して、自らの息子を遣わした。　その息子は神の助けにより彼らに勝利を収め、多くの血を流し、極めて多くの者を捕虜として連れ帰り、父のもとへ戻った」。――「バブーン」とは、マケドニアのプリレプ近郊にあるバブーン山岳地帯に定住し、そこから正教徒に対して襲撃を繰り返していた危険な異端者、ボゴミル派を指す。

ステファン・ウロシュ3世の治世下、セルビアは長年にわたり完全な平和を享受していた。内乱もなく、隣国との戦争もなかった。敬虔な王ステファンは、自国のみならずその国境を越えても、慈善事業や神殿の建設・装飾に尽力した。

しかし、彼の治世の終わりに、隣国であり、同じ信仰と民族を共有するブルガリア王国との間で、激しい戦争が勃発した。セルビア王ミリュティンの治世下、ブルガリアは内乱に苛まれ、タタール人の襲撃によって荒廃し、著しく弱体化していたため、その国力はセルビアに及ばなかった。　ブディンのデスポト・ミハイル[7764]がブルガリア王に即位すると、彼は分裂していたすべてのブルガリア地域に対する権力を自らの手に集約し、セルビアに占領されていたいくつかの都市を奪還しようと望んだだけでなく、相当な勢力を築き上げてセルビアを屈服させることさえ企てた。

ブルガリア王ミハイルは、ステファン・ウロシュ3世に痛烈な屈辱を与えた。ステファンの実の妹であり、ミリュティンの娘であるアンナ（別名ネデ）と結婚していた彼は、　彼は理由もなく妻

[7763] 現在のギリシャ南部に位置する地域。

[7764]　ミハイル・ブディンスキー、あるいはヴィディンスキー（ドナウ川沿いの都市ヴィディナに由来）は、1323年から1330年までブルガリアのツァールであった。

を追い払い、幼い息子ステファンと共に彼女を修道院に閉じ込め、自身はビザンツ王位継承者アンドロニコス・ザ・ヤングの妹であり、ブルガリア王スヴィャトスラフの未亡人であるフェオドーラと再婚した。　隣接し、かつ血縁関係にある二つの部族の君主間の敵対関係は、セルビア王が、コンスタンティノープルに幽閉されていた当時からセルビア王ステファンを慕い、尊敬していた正統なビザンツ皇帝アンドロニコス長老の側に立ったこと、　一方、ブルガリアのミハイル王は、アンドロニクス長老のライバルであり、その孫であるアンドロニクス若者と親密な関係を築き、アンドロニクス若者はついに祖父から王位を奪い取ることに成功した。　アンドロニコス・ザ・ヤングとミハイル・ブルガリア王は、セルビアに対する防衛・攻撃同盟を締結した。この二人の同盟国は、1330年に一斉にセルビアを攻撃することを決めた。

ステファン・ウロシュはこうした敵対的な動きを察知し、武器や兵力を蓄えながら、徐々に祖国防衛の準備を進めていた。その頃、息子のステファン・ドゥシャンもすでに十分に成長しており、父の軍事準備を手伝っていた。

ブルガリアのミハイル王は1330年の夏に遠征に出た。彼には、ブルガリア本国の軍隊が最大1万5千人いたが、それにほぼ同数の補助部隊や傭兵――ヴァラフ人[7765]　（イヴァンカ・ベッサラビ軍司令官率いる）、黒タタール人、ヤソフ人 （現在のモルドバに居住していた）[7766] 。セルビア人は、この侵攻を、不敬虔で異教徒の侵略と見なした。

一方、協定に基づき、ビザンツ皇帝アンドロニコス2世もセルビアに対して出兵した。彼の軍勢は少なかった。彼は軍事行動を開始する決心がつかず、ブルガリアとセルビアの衝突がどう決着するかを見極めるため、マケドニアのセルビア国境に陣を敷いた。

二人の強大な王によるセルビアへの急速な進攻は、当然ながらセルビア王を不安にさせずにはいられなかった。彼はすでに準備を整えていたものの、流血を避けたいと考えていた。そこで彼は、流血を招かないよう説得するため、ブルガリア王に使者を送ることにした。その書簡の中で、彼は次のように記した。　「なぜ、ブルガリア人とセルビア人の血筋を滅ぼそうとするのか。神があなたに授けたものは、すでにあなたの手にあり、それだけで満足すべきである。他人のものを欲してはならない。神が他者に授けたものを欲してはならない。　もしそれほど好戦的であるならば、異教徒に対して武器を向けるべきであり、キリストの民に対しては向けるべきではない。私は神の恵みにより、彼らの牧者となっているが、彼らはあなたに何の害も与えていないのだ。　考えてみよ、どれほどの血が流され、どれほどの母親が子を失い、双方からどれほどの死体が鳥や獣の餌として捨てられ、神は彼らを滅ぼした者からどれほどの報いを求められるだろうか。私たちを平和に放っておいてくれ。あなた自身の所有物を手元に置き、自国へ帰れ。他人のものを奪おうとする者は、一見、確実に所有していたと思われるものさえも失うことになるからだ。全知の御目こそが、かく裁かれるのである」。

しかし、ステファンのこの雄弁な和平のメッセージはミハイルに何の影響も及ぼさなかった。それどころか、彼はこう言った。「もし明日、セルビア王が頭を垂れて私の前に現れないならば、私は彼を不名誉な縛り付けで連行させ、苦痛に満ちた死を遂げさせるつもりだ」。

ステファンには、神の助けを頼りに、敵と戦いに臨むほかなかった。

セルビア軍は、セルビア・ブルガリア国境近くのドブリチ渓谷、トプリツァ川とモラヴァ川の合流点に集結していた。この地では、かつて何度も激しい国際的な戦いが繰り広げられてきた。ここには、ブディナからブルガリア王の到着が待たれていた。　その一方で、ミハイルが自らの軍を率い

[7765] ワラキア――現在のルーマニア王国の南西部にあたる地域。

[7766] モルダヴィア――ワラキアの北に位置する。ワラキアとともにルーマニア王国を構成している。

てソフィアを経由し、[7767] マケドニアへと進軍し、おそらくは同盟者であるビザンツ皇帝アンドロニコスと合流することを狙っているという知らせが届いた。そこでステファンも急いで軍を南へと進めた。　その道中には、父が建立したナゴリチン（クマノヴァ近郊）の聖ゲオルギオス修道院と、サランダポールの聖イオアキム修道院があった。ここでステファン王は、特に、敬虔なセルビアの君主たちである先祖たちを助けてくれた聖ゲオルギオス・ポベドノスツに、熱心に祈りを捧げた。

セルビア軍は、セルビア国境にあるストルメ川沿いのゼメナという小町の付近にあるブルガリア軍の陣地に到達し、ヴェルブジュダ（現在はキュステニルと呼ばれる）のすぐそばにあるカメンチェ川沿いで陣を敷いた。

約3日間、両軍は互いに使者を送り合い、戦闘には至らなかった。セルビア王ステファンは遅れて到着する一部の領主たちを待っていたが、ブルガリア王の軍勢からは、多くの兵士が食糧を調達するために周辺地域へと散らばっていた。

ついに7月28日（土曜日）が訪れた。セルビア軍陣営では動きが始まり、全員が戦闘の準備を整えていた。ブルガリア王は、セルビア軍の遅滞ぶりを鑑みて、この日に攻撃を受けるとは全く予想しておらず、広範囲に散らばっていた自軍をまとめ上げていなかった。

セルビア軍を戦いに備えさせたのは、勇敢な王の息子、若きステファン・ドゥシャンであった。ステファン・ドゥシャンの指揮下、選りすぐりのセルビア軍は、輝かしい武装を身にまとい、独立した傭兵騎士部隊を先頭に、ブルガリア軍へと進軍した。　激しい戦闘が繰り広げられ、その中でドゥシャンは自ら勇敢な姿を見せた。まもなく、これほど組織的な猛攻を予期していなかったブルガリア軍は打ち砕かれ、敗走した。

ブルガリア王ミハイル自身も逃走した。王が乗っていた馬がつまずき、王は馬から転落して重傷を負った。そこでセルビア兵に包囲され、ステファン・ドゥシャン自らが王の首を刎ねた。

不運なブルガリア王の遺体はセルビア王のもとに運ばれ、王は敵が自身の和平提案や警告に耳を貸さなかったことを悲しんで嘆いた。

この凄惨な流血の後、ブルガリア軍全軍はセルビア王に降伏した。

戦いの翌日、日曜日、早朝、セルビア王のもとへ、ブルガリア人から奪った戦利品――武器、高価な王の衣装や調度品、見事な馬――が厳かに献上された。また、手錠をかけられたブルガリアのボヤールたちも連行されてきた。彼らは、自国の王が亡くなったことを信じようとはせず、　彼は死を免れたのだと考えていた。しかし、王の遺体の姿は、彼らの王が取り返しのつかない死を遂げたことを確信させるに十分であり、彼らに残されたのは　ただ泣くことだけだった。ボヤールたちの懇願を受け入れ、王は殺害されたブルガリア王を、セルビアのナゴリチャンにある聖ゲオルギオス修道院に、栄誉をもって埋葬するよう命じた。

与えられた勝利に対して主なる神に感謝を捧げつつ、ステファン王は直ちに、その勝利を妻のマリアと、セルビアの大司教ダニエルおよびセルビアの全聖職者団に対し、以下の書簡で伝えた。「神の御加護と、我らの聖なる主であるシメオン尊師および聖サヴァの取り成し、ならびに諸君の祈り、そして聖霊の取り成しと強めと力によって武装され、守られていることを、ここに知らしめる。私、セルビア王は、最愛の息子ステファン、そして我が祖国の子らである兵士たちと共に、多くの異民族を率いて来襲し、我が祖国を脅かした悪意に満ちた敵、ブルガリア王を、ゼムレンと呼ばれる地で起こった戦いで打ち破り、　わが王国において、その戦いで勝利を収め、その王自身を討ち取り、神の御加護により、彼らの莫大な富と栄光を奪い取った。このことを喜び、神にふさわしい賛美を捧げよ。我らは、これからさらに先へ進み、ブルガリアの地へと向かうのである」。

[7767] ソフィアはブルガリアの都市であり、現在のブルガリア公国の首都である。

この喜ばしい知らせはセルビア全土で熱狂的に迎えられ、神のこの偉大な御慈悲を記念して、すべての教会で盛大な祈りが捧げられた。

一方、ステファン王は息子と共に、ブルガリアの秩序を回復するために威風堂々と向かった。彼には、捕虜となったブルガリアのボヤールたちが随行していた。まもなく、ブルガリアに残り、都市や地方を統治していたボヤールたちも出迎えた。彼らの先頭には、殺害されたミハイール王の弟であるベラウルが立っていた。　彼らはブルガリア全土を代表して、セルビア君主の支配下に身を委ね、ブルガリアとセルビアを一つに統合することに同意していた。

しかし、ステファンはそれを望まなかった。彼は、不当な扱いを受け、辱めを受けた妹アンナとその息子ステファンを、ブルガリアの王位に復帰させたいと願っていた。　ミハイルへの勝利直後、彼は修道院に幽閉されていた彼女にこの知らせを送り、落胆せず、より良い未来を期待するよう説得した。そして今、彼は特別な使節団を通じて、彼女とその息子をブルガリアの首都テルノフへ招き、必要な軍事援助を送った。

ステファン王はブルガリアのボヤールたちに対し、自身がブルガリアの王位を辞退し、代わりに妹ステファンの息子（シシュマン2世）をブルガリアの王に据えると宣言した。ボヤールたちは彼に従うべきであり、彼ら自身は完全な安全を保ち、従来の地位にとどまることができると述べた。

このように敗者に寛大に振る舞ったセルビア王は、軍を率いて祖国へと帰還した。

ブルガリアからの帰還後まもなく、ステファン・デチャンスキーは息子のドゥシャンと共にマケドニアへの遠征を行った。王は、ミハイロ・ブルガリア王と同盟を結んだもう一人の敵、ビザンツ皇帝をも懲らしめたいと考えていた。　この遠征は一週間続いた。皇帝との遭遇や戦闘は起こらなかった。セルビア軍は、すでに逃亡していたアンドロニコスによって一時占領されていた都市や要塞を奪還し、さらにヴァルダール川沿いの[7768]、すなわちヴェレス、プロセック、シュティプといった、自発的に降伏したいくつかの都市を併合した。　これらの都市にセルビア人の総督を残し、二人の指揮官はそれぞれ帰路についた。父は自身の領地ネロディムリャへ[7769]、息子はスカダルへ[7770]。

こうして、セルビア人にとって幸いなことに、過酷な1330年は幕を閉じた。

外部の敵に対する勝利によりセルビアの武勇が輝かしい栄光に包まれた後、ステファン王は慈善活動、神殿の建設と装飾、そして常に彼の人生の喜びであったその他の神への奉仕に全身全霊を捧げた。

聖ステファンは生涯を通じて、自国だけでなくその国境を越えても、正教の聖地を敬い続けた。　以前と同様に、とりわけこの頃、彼はエルサレムや聖地全域、シナイ、エジプト、アレクサンドリア、そしてコンスタンティノープル、特に彼が幽閉中に修行に励んだ現地のパントクラトール修道院へと、惜しみなく豊かな寄進を送り続けた。また、テッサリアの や[7771]、とりわけ聖アトス山にある修道院にも慈善を行っていた。そこには、セルビアのクラリや後のツァールたちによって創設・建設された栄光あるヒランダル修道院があった。寛大な贈り物を送るだけでなく、ステファン王はこれらの修道院の多くに収益のある領地を授け、自身の勅書によってその権利を確固たるものにした。

ステファンの先祖である歴代のセルビア君主たちは皆、自らのために「ザドゥシュビン」、すなわち修道院を併設した教会を建立し、そこに自らを埋葬し、安息を祈るよう遺言していた。　同様

[7768] ヴァルダル川は、マケドニアのトルコ領内を流れ、カルカンデレンの町を通り過ぎる。

[7769] ネロディムリャは、ヴァルダル川上流の支流であるネロディムカ川沿いに位置し、ヴァルダル川が流れ込むエーゲ海と、ここで源流を持つシトニツァ川が有名なコソボ平原を通り、イバル川を経てセルビアのモラヴァ川（ドナウ川に合流）へと流れ込むドナウ川との分水界の近くにある。

[7770] スカダルは、スカダル湖の南、同湖からアドリア海へと流れるボヤナ川の源流近くに位置する。

[7771] フェッサリアは現在、ギリシャ王国の北東に隣接するトルコ領内にある。

に、聖ステファン・ウロシュ3世も、宝物を手に入れたブルガリア戦勝の後、主なる神への感謝と自身の魂の安息を祈って、主イエス・キリストの栄光を称えるために教会を建立することを決意した。

助言と協力を求めて、彼は尊敬し愛していたセルビアの大司教ダニエルに相談した。彼と、信頼するボヤールたちと共に、自身の領地内で、荘厳な教会にふさわしく、かつ適した場所を探し始めた。 彼らは多くの場所を巡ったが、ついにステファンは、プリズレンの北西、かつてセルビア総主教の居城であったペチ市から3時間の道のりにある、ベリ・ドリン川に注ぐビストリツァ川沿いの山岳地帯、デチャニと呼ばれる場所に目を留めた。 この場所は並外れて美しい。そこは、様々な樹木に覆われた小さな谷で、泉に恵まれ、清らかで健康的な水を持つビストリツァ川に潤されている。四方を、特に西側から、高い山々に囲まれている。 ステファンはまさにこの地に、栄光に満ちた聖堂を建立することを決意した。ダニエル大司教がその場所を祝福し、聖別すると、直ちに建設が着手された。

ステファン・ウロシュは、アドリア海沿岸の領地から芸術家や職人たちを招集した。多くの労働者が、様々な種類の石や、色とりどりの高価な大理石など、建築資材を運び始めた。 まず、修道院の敷地が測量され、塔を備えた高い城壁で囲まれた。南側には門があり、その上には最も高い塔がそびえ立っていた。内部では、壁に沿って、まるで鳥の巣のように修道士たちの独房が設けられた。共同食堂も設けられており、その規模だけでなく、とりわけ内装の芸術性において際立っていた。厨房とパン屋も特別に設けられていた。修道院長のためには、独立した壮麗な建物が建てられた。しかし、最大の注目と労力は、修道院の敷地中央、城壁の内側に建設される、主の昇天を祝う壮麗な聖堂の建設に向けられていた。 この巨大な聖堂全体は、色とりどりの切石大理石で建てられ、並外れた芸術性と美しさを誇る彫刻、円柱、アーチで飾られていた。この素晴らしい建物は現在まで保存されている。50年ほど前にこのセルビアの聖地を訪れたあるロシア人旅行家[7772] は、次のように記述している：

「教会は大きく、高く、十字形に建てられており、一つだけ円形の高いドームがある。 外壁そのものがその壮麗さで人々を圧倒する。下から上まで、大理石の板が水平の帯状に規則正しく配置されている。最下段は白大理石、2段目はピンク、3段目は再び白、4段目は灰色で、その後また同じパターンが繰り返される。 さらに注目すべきは、毎回、一番下の列が最も広く、2番目がそれより狭く、3番目と4番目はさらに狭いという点である。教会の屋根は鉛製であり、ドームも同様に鉛で覆われている。その鉛は非常に分厚く、「1335年の教会建設以来、ドームの屋根は一度も修理を必要としたことがない」と言われている。 ドームの鉛は、時の経過によって、銅の色に似た奇妙な色合いを帯びている。ドームの上には、無傷の大きな十字架が立っており、伝えられるところによれば、それは重厚な銀でできているという。 教会の東側には、大きな祭壇の突出した円形部分が見え、その両側には、聖ニコライと聖ディミトリウスに捧げられた二つの小聖堂、大祭壇の聖体準備室、そして聖具室がそれぞれ二つずつ配置されている。これら五つの連結した円形部分は、極めて美しい線の調和を呈している」。

その外観の壮麗さと美しさにふさわしく、本堂および付属礼拝堂の内部も、彫刻が施された石、金、その他の高価な素材を用いて装飾されていた。教会には、教会用具、金や銀の器、ビーズや宝石で飾られた高価な織物で作られた祭服などが豊富に備えられていた。

この壮麗で豪華な教会の建設を終えると、ステファンは、その敬虔な生活で知られていたイグメン・アルセニウスを主任司祭に任命し、ダニイル大司教を筆頭とするセルビア聖職者会議の出席のもと、厳粛にこの新築された教会を奉献した。 将来に備えて、ステファン ウロシュは、それぞれの

[7772] A. F. ギルフェルディング；同氏の著作集第3巻『ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、および旧セルビア』を参照。サンクトペテルブルク、1873年、129ページ。

勅書によって、広大な領地の各地にある数多くの村、農地、その他の収益をもたらす資産を修道院に譲り、その所有権を確固たるものとした。

ステファンは、本堂の南側に自身の守護聖人であり執り成し者である聖ニコラオスに捧げる小礼拝堂を設けたほか、この聖人を称えるための恒久的な礼拝が行われるよう、修道院の外、その近くに、聖ニコラオスに捧げる特別な教会をさらに建設した。

聖ステファン・ウロシュは常に貧しい人々への愛と不幸な人々への憐れみで知られていたが、この頃には特にこうした慈善活動に力を注ぐようになった。デチャニ修道院から3ヴェルスタ離れた場所に、彼は王国全土から集まる病人、身体障害者、高齢者を世話するための特別な修道院をさらに設立した。　この慈善施設の広々とした病室には、病床や病人・身体障害者に必要なものがすべて備えられていた。不幸な苦しむ人々を世話するために、多数の修道士たちが集められていた。ステファン自身も絶えずこの修道院を訪れていた。彼にとって、不幸な人々を助けることは喜びであった。時には王として堂々と病院を訪れ、言葉や会話で不幸な人々を慰め、また時には兵士の装いに身を包んで訪れ、惜しみない施しを配った。そしてこの施設は、王からの拠出金や寄付によって豊かに支えられていた。　セルビアの各地から病人や身体障害者たちがここに集まり、中には回復して他の患者に場所を譲る者もいれば、苦しみ続ける人生の最期までここに留まる者もいた。

死の直前に、ステファンには、常に彼を守り支えてきた聖ニコライ・奇跡行者が現れ、こう告げた。

「ステファンよ、最期の時を覚悟せよ。まもなく主の御前に立つことになるのだ！」

ステファン・ウロシュ3世の最期の日々は、大きな不幸――父に対する息子、「若き王」ステファン・ドゥシャンとの確執――によって暗く覆われ、その確執は、多くの苦難を背負ったステファン・ウロシュの殉教的な死をもって幕を閉じた。

ブルガリアとの戦争で勇敢な武勇を振るったステファン・ドゥシャンは、ゼト地方を統治していた。彼に仕える利己的なボヤールたちは、父から王位を奪い、セルビア全土の王となるよう彼をそそのかし始めた。　彼らはステファンに対し、幼少期に祖父ミルティンによって両目を失明させられた父と同じ運命をたどることになると脅した。野心家のステファンはその唆しを信じ込み、彼の領地では父に対する反乱が勃発した。

ウロシュは敵対を望まなかった。彼は反乱を鎮圧するための措置を講じ、長い交渉の末、息子と面会した。息子は父に対して何らの行動も起こさないと約束した。ステファン・ウロシュは再び息子を放っておき、神に希望を託した。しかし、ボヤールたちはそうは望んでいなかった。　彼らはドゥシャンに対し、父が彼に対して秘めた敵意を抱いており、彼を滅ぼそうとしていると吹き込んだ。これを信じたステファンは、故国を離れて異国へ逃れようとしたが、ボヤールたちはそれを許さず、再びステファンに父を始末するよう唆した。ドゥシャンはこの説得に屈し――こうしてセルビアで大きな悪行が犯された。

息子との和解の面会後、ステファン・ウロシュは自身の領地で平穏に暮らしていた。ある時はこの城で、ある時はあの城で、慈善活動に没頭し、自身の安全のために特別な措置を講じることもなかった。　ステファン・ウロシュがネロディムリャ近郊の僻地にある山岳の城、ペトリチェに滞在していた頃、ステファン・ドゥシャンを筆頭とするゼト地方のボヤールたちが突然そこに乗り込み、城を包囲してステファン・ウロシュとその家族全員を捕らえた。　ステファン・ウロシュ自身について

は、ドゥシャンが人里離れた、アクセス困難なズヴェチャン城[7773] へ連行するよう命じ、妻と子供たちは別の場所へ送られた。

しかし、事態はそれで終わりではなかった。老いたセルビア王を完全に始末することが決まったのである。ステファン・ドゥシャンの命令により、彼の側近数名がズヴェチャンへ向かい、ステファン・ウロシュは城内で絞殺され、殉教的な最期を遂げた[7774] 。

殉教者の遺体は、新しく建てられたデチャン修道院に運ばれ、ステファン自身が建設した「主の昇天」教会内の豪華な墓所に厳かに埋葬された。

ステファン・ウロシュは自然死したと伝えられていたが、もちろん、やがて誰もが真実を知り、故王を殉教者として崇めるようになった。

7年後、デチャンスキー修道院のエクリシアークに不思議な啓示があった。夢の中で、ある見知らぬ男が、故ステファン王の遺体を地中から掘り起こすよう命じたのである。エクリシアークはその幻視を修道院長に伝えた。慎重な修道院長は、それは単なる夢に過ぎないとエクリシアークをなだめた。 しかし、その現象は繰り返された。ついに3度目、威厳あるその男はエクリシアークだけでなく、イグメンにも現れ、同じことを要求した。

そこで修道院長は、この一連の出来事をすべて大司教に報告した。 デチャニで聖職者会議が開かれた。祈祷式の後、ステファノの棺が開かれると、教会全体とその周辺に芳香が漂い、皆が聖殉教者の朽ちない聖遺物を目の当たりにした。その際、いくつかの奇跡が起こった。殉教者の聖遺物にすがりついた盲人が目を開き、他の病者たちも癒やされた。

その後も、多くの癒やしやその他の奇跡が起こった。聖ステファンは、信仰をもって彼の取り次ぎを求めて駆け寄る者たちを常に助け、その財産を狙う敵から修道院を常に守り続けた。聖殉教者の聖遺骨が発見されて以来、デチャニ修道院は正教会のセルビア民族にとってかけがえのない聖地となった。

キリストのために聖なる狂人となったモスクワの至福のマクシムを記念する日

記念日：11月11日

慈悲深き主は、救いと永遠の至福に至るためのいくつかの道を備えてくださいました。しかし、その中でも最も困難で過酷なものは、自発的な聖なる狂人となるという偉業です。至福のマクシムはこの道を選び、その最期に至るまで揺るぎなく歩み続けました。 時が経つにつれ、このモスクワの奇跡行者の詳細な伝記は、私たちに伝えられませんでした。生活のあらゆる安楽を拒み、彼はほとんど裸同然の状態でモスクワの街を歩き回り、寒さも暑さも耐え抜きました。彼の言葉は、多くの人々を悪から遠ざけたり、苦労の中で励ましたりしました。 「たとえ冬が厳しくとも、楽園は甘美だ」と、彼はよく口にしていた。「忍耐があれば、神は救いを与えてくださる」。「神は偉大であり、偽りを暴かれる。神もあなたを欺くことはなく、あなたも神を欺くことはできない」。「誰もが洗礼を受けるが、誰もが祈るわけではない」。

福者マクシムは15世紀前半に活躍した。それはロシアの地にとって厳しい時代であった。タタール人の支配、飢饉、干ばつ、そしてペストが民を苦しめていた。聖人は自らの忍耐をもって、人々に忍耐を教えた。 自ら質素な生活を送りながら、彼は他の人々も一時的な富のために自分の魂を忘

[7773] その廃墟が現在も残るズヴェチャン城は、コソボ平原の北西、ミトロヴィツァ市の外れ、イブラ川の左岸に位置していた。

[7774] 聖ステファン・デチャンスキーの殉教は、1331年11月11日に起こった。

れないでほしいと願い、モスクワの商人たちが不当な取引を行うのを戒めた。「神殿は家にあるが、良心は売り物だ。髭はアブラハムだが、行いはハムだ」。

こうした功績を残した後、至福のマクシムは1433年11月11日に永眠し、ヴァルヴァルスカヤ通りにある聖ボリスとグレブ教会に埋葬された。主は、御自身の御心に適う者を奇跡によって栄光に輝かせることをお望みになった。こうして、1506年、聖人の棺の前で、足が不自由だった一人の男が癒やされるという出来事が起こった。 1547年8月13日、至福のマクシムの朽ちない聖遺骨が発見され、同時に聖人の記念日が制定された。聖遺骨自体は地下に安置されたままとなった。聖人を敬う信者たちは、モスクワの聖マクシムの聖遺骨の上に、敬虔なマクシム・殉教者に敬意を表して小礼拝堂を建立した。 1698年、モスクワ市民のマクシム・ヴェルホヴィティンとマクシム・シャロヴニコフの尽力により、古い教会は解体された。その際、壁から剥がれ落ちた石が、偉大な宝物――聖マクシム・ブラジェンの癒しの聖遺骨――を露わにした。 それらは敬意を込めてモスクワの大聖堂の一つに移され、新しい教会の建設期間中ずっとそこに安置されていた。現在も現存するこの教会は、聖マクシム・ブラジェンの名に因んで奉献され、マクシム・イスポヴェドニクを称える小聖堂が併設された。

約40年間、この教会で至福者の聖遺物は安置されていた。1737年、「トロイツキーの火災」として知られる大火災が発生した。炎はモスクワの至福者マクシムに捧げられた教会にも及んだ。教会は全焼し、聖マクシムの聖遺物が収められていた聖櫃も焼失した。 奇跡的に残った聖遺物の断片は、敬虔に集められ、1768年にこの教会へ移された。今日に至るまで、聖マクシムの聖遺物はここに安置され、神の栄光のために癒やしをもたらし続けている。アーメン。

11月25日

11月12日（旧暦）

アレクサンドリア総主教ヨハネス・ミロスティヴィの生涯

記念日11月12日

ヨハネはキプロス島で生まれ、エピファニオス公爵の息子であった[7775] 。若き頃から、彼は敬虔さと神への畏れの中で育てられ、それが彼にとって知恵の源となった。 成人すると、両親の意向に従って結婚し、子供にも恵まれた。しかし間もなく、ヨハネは子供たちを失い、その後妻も失った。それは、神がヨハネを肉体の束縛から解放し、霊的な生活に専念させるようお定めになったからである。 結婚生活の束縛から解放されると、彼は神に感謝を捧げ、それ以来、もはや何の妨げもなく、熱心に主に仕えるようになり、頻繁な祈りとあらゆる神に喜ばれる行いに励んだ。とりわけ、彼は貧困による苦難に耐えるすべての人々に対して、慈悲深く、慈愛に満ちていた。 これらの美徳により、神は彼を人々の間で栄光に輝かせ、同輩の間だけでなく、皇帝自身からも尊ばれ、称賛された。しばらくして、アレクサンドリア教会の総主教座[7776]
が空席となった。そこで、皇帝ヘラクレイオス[7777] は、神の御心により、ヨハネを総主教の位に任命

[7775] キプロス――地中海北東部に位置する島。――エピファニオスは、同島の最高軍事指揮官であった。聖ヨハネは、キプロス島南部のアマ・フンテという町で生まれた。

[7776] アレクサンドリア――エジプトの都市で、ナイル川の西支流沿いに位置する。紀元前331年にアレクサンドロス大王によって建設された。

[7777] 皇帝ヘラクレイオスは610年から641年まで在位した。

した。聖人はこれを望んでいなかったが、やむを得ず叙任を受け入れ、アレクサンドリア教会の大牧者となった。

総主教の座に就いたヨハネは、まず第一に、言葉の羊たちの牧者として、キリストの群れを混乱させていた異端から、自らの信徒たちを清めることに尽力した。 この異端は、フルオン、あるいはクナフェイという通称を持つ、アンティオキアの偽総主教ペトロに端を発していた。 彼は、三聖歌に対して「聖なる神よ、聖なる力ある方よ、聖なる不死なる方よ、我らのために十字架にかかられ、我らを憐れみ給え」という冒涜的な言葉を付け加えることを敢えてした。まるで、我らの主において神性が苦難を受けたかのように[7778]。

この異端の教えを根絶した後、聖ヨハネは、神の戒めを熱心に守り、慈善活動に全身全霊を捧げた。 困窮している者は、誰一人として悲しみに暮れて、あるいは手ぶらで彼の元を去ることはなかった。ヨハネは、求める者すべてに施しを与え、悲しみに暮れる者すべてを、言葉だけでなく行動をもって慰めた。彼は飢えた者を満たし、裸の者に衣服を与え、捕虜を身代金で買い戻し、旅人や病人の世話をした。彼の寛大さは、絶え間なく豊かに流れ、渇く者すべてを潤す川に似ていた。

牧会活動の始めに、ヨハネは教会の会計係たちを呼び寄せ[7779]、彼らに次のような指示を与えた。

「街中をくまなく巡り、私の主たち全員の名簿を作成しなさい。」

執事たちは彼に尋ねた。

「あなたの『主たち』とは、いったい誰のことですか？」

総主教はこう答えました：

「それは、あなたがたが『乞食』や『貧者』と呼ぶ人々だ。彼らは私の主である。なぜなら、彼らはまことに、私が救いに至るのを助け、私を永遠の住まいへと導いてくれるからだ。」

執事たちは出かけて行き、街頭や病院、そしてゴミ捨て場で発見されたすべての貧しい人々を名簿に記録した。その数は計七千五百人にのぼり、聖ヨハネは彼ら全員に、日々の糧として必要なものをすべて支給するよう命じた。

その頃、ペルシャ軍はシリアとパレスチナを襲撃し、聖都エルサレムを焼き払い、聖十字架の尊い木を奪い、多くのキリスト教徒を捕虜として連れ去った[7780]。至福のヨハネは、捕虜の身代金や

[7778] コンスタンティノープルでは、ヨハネス・クラウディオス（金口ヨハネス）の弟子である聖プロクルス（434–447年）が司教を務めていた頃、激しい地震が発生し、民衆は皆恐怖に陥った。キリスト教徒たちは、災いを止めてくださるよう神に祈り、涙ながらに叫びながら、街を巡行した。 「主よ、憐れみたまえ！」 すると突然、祈りの最中に、ある少年が不可視の力によって空中に持ち上げられ、その後地上に降り立ったとき、天使たちの姿を見たと語った。天使たちはこう歌っていたという。「聖なる神よ、聖なる力ある方よ、聖なる不死なる方よ、我らを憐れみたまえ！」 この歌が繰り返されるやいなや、地震は収まった。この神聖な天使の歌は、その後、礼拝の際に唱えられるようになった。しかし、イエス・キリストの中に、人間の性質を飲み込んだ一つの神性が密かに宿っていたと主張する単性論の異端が広まった際、あるペトルス・フルオンという人物、 彼はクナフェイとも呼ばれていた。これは「毛織物の撹拌職人」を意味し、若き日にこの職業に従事していたためである（フロンはラテン語で撹拌職人を指し、クナフェイはギリシャ語である）。彼はまだ長老であった頃、トリニタリアン賛歌に「我らのために十字架にかかられた」という一節を追加した。 その後、このペトロはアンティオキアの総主教となった（5世紀90年代）。彼はモノフェリテ派であったため、この追加句によって、救い主の受難において、その神性だけでなく、聖三位一体全体さえもが苦しみを受けたことを表現しようとしたのである。 ペトロスの追随者たちは、「テオパスキト派」という名の独自の宗派を形成し、正教界に大きな波紋を広げた。アレクサンドリアでは、ヨハネス・ミロスティヴィス（609～620年）の在位中に、多くの追随者が存在していた。

[7779] エコノモイは教会の財政を管理していた。総主教直属のエコノモイは、総主教区の教会収入を管轄していた。

[7780] ヘラクレイオスは、ペルシア王ホズロエ2世と凄惨な戦争を繰り広げた。ホズロエはシリアとパレスチナを占領し、その部隊の一つはエジプトを征服し、もう一つはコンスタンティノープルの対岸に位置するハルキドンにまで侵入した。戦争は極めて苛烈を極め、例えばエルサレム陥落の際、ホズロイは教会を破壊し、聖地を冒涜した。伝承によれば、この際9万人のキリスト教徒が虐殺され、その多くはユダヤ人によって、彼らを虐殺するという明確な目的で買い取られてい

苦境にある人々への援助のために、金と小麦を積んだ船を送り出した。　このように、その慈悲によって、彼は多くの人々を監禁から解き放ち、捕虜としての苦難から救い出した。しかし、誰もが自由に彼の元を訪れることはできなかった。というのも、彼の従者たちは、訪れる者全員を総主教に報告していたわけではなかったからである。そのため、彼は週に二日、　水曜日と金曜日を定め、これらの日には数人の敬虔な人々と共に教会の門前に座り、望む者なら誰をも迎え入れ、その願いに耳を傾け、生じた争いを話し合い、不当に扱われた者を守り、信者たちの間に平和をもたらした。その際、聖なる総主教は周囲の人々にこう語った。

「もし私にとって、私の主なる神への入り口が決して閉ざされることがなく、祈りの中で神と語り合い、望むものを神に求めることができるのなら、なぜ私は隣人が私のもとへ自由に立ち入り、その不満や困窮を私に伝え、望むものを私に求めることを許さないのか？」　「*あなたがたが人に対して用いる尺度で、あなたがたに対しても用いられる*」と仰せになった方を畏れるべきである（マタイ7:2）。

時折、聖ヨハネが教会の入り口に座り、彼に助けを求めようとする人々を待っている間、誰も願い事をしに来ないことがありました。そんな時、彼は落胆して立ち上がり、涙を流しながら家路につきました。その際、時々、ある人々が彼にこう尋ねました。

「なぜ悲しみ、嘆いているのですか？」

聖人は彼らにこう答えました。

「今日、この謙虚なヨハネは、自分の罪について、神に捧げるべきものを何も見つけられず、何も捧げることができなかったのだ。」

彼の友人である至福のソフロニオスは彼にこう言った。

「父よ、今こそあなたは本当に喜ぶべきです。あなたの霊的な羊たちは、神の天使たちのように、争いや論争もなく平和に暮らしているのですから。」

ある日、教会の会計係たちが聖ヨハネに、貧しい人々の群れの中に、身なりが立派な乙女たちが施しを求めて立っていることを伝え、その際、他の乞食たちと同様に、それらの乙女たちにも施しを与えるべきかどうかと尋ねた。総主教はこう答えた：

――もしあなたがたが真にキリストの僕であり、謙虚なヨハネの忠実な奉仕者であるならば、キリストが命じられた通りに施しを行いなさい。人を差別せず、施しを受ける者たちの生活について詮索してはならない。私たちが与えているのは、私たち自身のものではなく、キリストのものであることを知れ。それゆえ、主が命じられた通りに施しをしよう。　もしあなたがたが、これほど大きな施しを行うには教会の財産が足りないと考えているのなら、私はあなたがたの信仰の薄さに加担するつもりはない。私は神に誓って言うが、たとえ全宇宙から貧しい人々がアレクサンドリアに集まり、私たちから施しを受けようとしたとしても、それでもなお、私たちの教会の財産が尽きることはないだろう。

そして、彼らが信仰を欠くことのないよう、聖人は次のように語った。

「私が十六歳の時、まだキプロス島にいた頃、ある夜、眠りの中で非常に美しい乙女を見ました。彼女はきらびやかな衣装を身にまとい、頭にはオリーブの冠を戴いていました。私の寝台のそばに近づくと、その乙女は私に触れ、私を起こしました。　目を覚ますと、彼女はもはや夢の中ではなく、現実の世界で私の前に立っているのが見えたので、私は彼女に尋ねた。

「あなたは一体誰なのか。よくも私の部屋に入ってきたものだ」

すると彼女は、明るい眼差しで私を見つめ、穏やかな口元で微笑みながら、こう言った。

たという。 これは614年のことだった。こうした過酷な災難の中、総主教ヨハネス・ミロスティヴィオスが、キリスト教徒の悲しみを癒やす真の救い主として現れた。イラクリオスがホズロイに勝利した後、戦争は和平で終結した。　和平が締結されたのは628年のことで、その際にはすでにホズロイの息子であるシロイ王が、捕虜たちと主の尊き命を与える聖十字架を奪取していた。

「私は大王の長女であり、王の娘たちの中で一番上の者です。」

それを聞いて、私は彼女に頭を下げた。すると彼女は続けた。

「もし私をあなたの友としてくださるなら、私は王からあなたのために大きな恩寵を請い求め、あなたを王の御前に連れて行きます。なぜなら、王の前で私ほど力と大胆さを持つ者は誰もいないからです。私は王を天から地上に降ろし、人々を救うために人間の姿をとられるよう促したのです。」

そう言い終えると、彼女は姿を消した。この驚くべき幻影に驚きながら、私は心の中でこう呟いた。

「まことに、乙女の姿で慈悲が私の前に現れたのだ。それを証明しているのは、彼女の頭にあるオリーブ油の冠であり、それは慈悲のしるしである。また、その乙女が語った言葉もそれを示している。『私は』と彼女は言った、『神を天から地上に降ろし、神は受肉された』と。」　創造主は、滅びゆく人間を見て、ただ慈悲に駆られてのみ、他の何ものにも促されることなく、その者を滅びから救い出そうと望まれた。それは、ご自身の被造物を憐れもうと願われたからである。それゆえ、神の憐れみを得たいと願う者は、隣人に対して慈悲を持ち、施しをすべきである。

こうして、心の中でそう考えを巡らせた私は、急いで立ち上がり、夜明けとともに教会へ向かった。道中、寒さで震えている裸の物乞いに遭遇した。　私は上着を脱いでその乞食に渡し、「今こそ、私が見たものが真実なのか、それとも幻だったのかが分かるだろう」と自分に言い聞かせながら、さらに先へと歩みを進めた。　教会に着く前に、白い服を着た男に出くわし、彼は私に、百枚の銀貨が包まれた包みを手渡した。その際、彼はこう言った。「友よ！これを受け取り、お好きなように使いなさい」。

私は喜んでそれを受け取ったが、すぐに、その包みの中身は自分には必要ないのだと考え、受け取ってしまったことを後悔した。そこで、受け取ったものを返そうと振り返ったが、いくら探しても、包みを渡してくれた人の姿はもう見当たらなかった。　その時、私は自分が見たものが幻ではなく真実だったと悟った。それ以来、私が貧しい人に何かを施すたびに、神が言われた通り、百倍の報いを与えてくださるかどうかを試してみたくなった。そして、何度もそれを試してみた結果、それが確かに真実であることを確信した。　ついに、私は自分にこう言い聞かせた。「もうやめなさい、わが魂よ、あなたの主なる神を試すことを！」

ある日、聖ヨハネが病人を慰問するために病院へ向かっていたとき（彼は週に二、三回そうしていた）、ある旅人が彼に出くわし、施しを求めた。ヨハネは使用人に、その旅人に銀貨六枚を渡すよう命じた。旅人は銀貨を受け取ると、その場を去った。　しかしその後、聖人の寛大さを試そうと、その旅人は服を着替え、別の道を通って再び聖ヨハネに出くわすと、こう懇願した。

「主よ、この貧しい囚人を助けてください。」

ヨハネは再び、彼に銀貨六枚を与えるよう命じた。すると、使用人はひそかに総主教にこう告げた。

「大主教様、この人は、先ほど六枚の銀貨を受け取ったあの物乞いではありませんか。」

しかし、総主教はその言葉を聞かなかったふりをして、再び物乞いに銀貨六枚を与えるよう命じた。旅人は二度目の施しを受けると、また着替え、別の道で総主教に出くわし、三度目の施しを求めた。使用人は再び総主教に言った。

「ご高名な方！　最初と二度目に、あなたから銀貨を六枚ずつ受け取ったあの者が、今、三度目の施しを求めています。」

すると、聖人は使用人にこう答えました。

「彼に十二枚の銀貨を渡せ。これはキリストが私を試みているのではないだろうか？」

ある商人が、海で全財産を失い、極度の貧困に陥ったため、聖人に助けを求めた。聖人は彼に5リットル[7781] の金を授けた。 金を受け取った商人は、それを使って多くの商品を買い込み、船に乗り込んで海を渡り、他の都市へと向かった。しかし、難破に遭い、彼は再びすべてを失い、かろうじて一命を取り留めて溺死を免れた。そこで彼は再び聖ヨハネのもとを訪れ、起こった出来事を語った。ヨハネは彼にこう指摘した。

「お前には、不正な手段で集めた別の金もあり、それを私が与えた教会の金と混ぜてしまった。だからこそ、両方とも失われてしまったのだ。」

そう言うと、聖ヨハネは彼に、以前の倍にあたる約10リットルの金をさらに与えた。しかし、三度目も商人には同じ災難が降りかかった。 彼の積荷はすべて海で失われ、彼はもはや総主教の前に顔を出す勇気もなく、自宅で頭を灰で覆い、自害しようと泣き崩れていた。これを知った聖人は商人を呼び寄せ、こう言った。

「なぜ悲しみのあまり絶望に陥るのか。神を信頼せよ。そうすれば、神はあなたを見捨てない！ しかし、この不幸があなたに降りかかったのは、不正に手に入れた船を所有していたからだと私は思う。」

そう言うと、ヨハネは商人に小麦を満載した教会の船を与えるよう命じ、その後、彼を解放した。与えられた小麦を積んだ船を受け取った商人は、海へと出航した。 すると突然、激しい風が吹き荒れ、船は未知の国へと流されていった。商人は、船尾に立ち船を操る恩人であるアレクサンドリア総主教、聖ヨハネ・ミロスティヴィの幻影を目にし、聖人の祈りによって航海が無事に終わることを期待し続けた。

言い換えれば、もし人々に公正に扱われたいのであれば、あなた自身も同様に振る舞うべきだ。

二十日と二十夜が過ぎた後、彼らはブリタニアの海岸に上陸した。当時、この国では深刻な飢饉に見舞われていた。人々は、小麦を積んだ船が自分たちの街に向かって航行していることを知ると、大いに喜び、急いで小麦を買い求めた。 こうして、この商人はそこで小麦を利益を出して売り払い、売上の半分は金で、残りの半分は錫で受け取った[7782] 。帰路、彼はデカポリスに到着した[7783] 。そこで錫を売ろうとしたところ、それがすべて金に変わっていることに気づいた。 こうして富を得た商人は、喜びながらアレクサンドリアに戻り、聖ヨハネの祈りと施しによって起こったこの驚くべき奇跡について皆に語った。

ある時、聖人が教会へ向かっていたところ、ある高貴で品格のある紳士が彼に近づいてきた。その紳士は、泥棒に全財産を盗まれ、一文無しになってしまっていたのだ。 これほど高潔で著名な人物が突然極度の貧困に陥ったことを憐れんだ総主教は、こっそりと使用人に声をかけ、教会の会計係にその男に15リトルの金を渡すよう伝えるよう命じた。 しかし、会計係たちは、教会の金庫に金が残り少ないのを見て、総主教の指示に背き、たった5リットルしか渡さず、残りの10リットルは自分たちで留保してしまった。 聖なる総主教が教会から家へ帰る途中、ある非常に裕福で高貴な女性が彼に近づき、教会に500リットルの金を寄付すると記した文書を手渡した。 その文書を受け取り、読み終えた後、総主教は聖霊の恵みにより、その女性が心の中で決めていた全額を渡していないことを悟った。 主なる神は、総主教が15リットルを渡すよう命じたあの貧しい男に、すべてを渡さなかった会計係たちを暴くために、この出来事を仕組まれたのである。家に戻ったヨハネは、会計係たちを呼び寄せ、泥棒に奪われた男にいくら渡したのかと尋ねた。彼らは嘘をついてこう答えた。

[7781] リトラとは、72ゾルトニクに相当するビザンツの重量単位であり、銀では最大42ルーブル、金では最大606ルーブルの価値があった。この単位は、粉体や液体の体積を測る単位としての「リトラ」とは区別する必要がある。

[7782] ブリタニア、すなわち現在のイングランドは、古代において錫の豊富さで知られていた。

[7783] デカポリス、あるいは十都市——パレスチナ北部に位置し、ギリシャ人が定住していた都市群。

「ご命令通り、十五リットルです。」

彼らの嘘、けちさ、そして命令への不服従を暴いた聖人は、彼らにこう言った。

「神があなた方から千リットルの金を取り立てられるでしょう。あの敬虔な女性は、私たちに千五百リットルを捧げようとしていたからです。しかし、あなた方は私の言うことを聞かず、十リットルを差し引いたため、神は、その女性が千リットルを差し引くように仕組まれたのです。もし私を信じないなら、まもなくあなた方自身がそのことを確実に知るでしょう。」

その女性を呼び寄せ、会計係たちの面前で、聖人は彼女に尋ねた。

「お嬢様、神への愛から、以前、教会にどれだけの金を寄付しようとお考えでしたか？」

すると彼女は、自分の意図が聖人の目に隠れていなかったことに気づき、こう言った。

「確かに、大司教様、数日前、私はあなたの聖なる御手に1,500リトルの金を捧げることを決心し、その旨を書面でも証明しておりました。　しかし今日、それを広げてみると――どういうわけか、「千」という文字が消されており、残っていたのは「五百」だけでした。そこで私は、神がもはや五百リットルだけを聖なる場所に捧げることをお許しになったのだと心に思い、その通りにいたしました。

これを聞いた執事たちは大いに恐れ、恥じ入り、聖人の足元にひれ伏して許しを請いました。

ある時、異民族の侵攻[7784]により、アレクサンドリアには大勢の人々が集まり、その結果、深刻な飢饉が生じた。　聖ヨハネは、飢えた人々を憐れみ、教会の全財産を使い果たし、さらには千リトルの金を借りることさえありました。その時、再婚していたため聖職に就く資格がなかったある聖職者が、総主教に次のような手紙を書きました。

「私には大量の小麦がありますが、そのすべてをあなたの手を通じてキリストに捧げたいと思います。さらに、150リットルの金も約束します。ただ、私を助祭にしてください。」

聖人は彼を呼び寄せ、金で聖職の地位を得ようとしたことを叱責した。

「その罪を悔い改め、ギエジスの罰を恐れよ[7785]；神は力強く、飢饉の際にも、お前の小麦がなくても我々を養うことができるのだ。」

彼がそう語っている最中、シチリア[7786]から大量の小麦を積んだ二隻の船が到着したという知らせを伝える使者が現れた。それを聞いた総主教はひざまずき、神に信頼を寄せる者を決して見捨てない神に感謝を捧げた。

ここで、聖ヨハネの柔和さ、謙遜、そして悪意のなさを改めて思い起こしておくのがふさわしいだろう。二人の聖職者が、ある過ちにより一時的な教会からの破門という罰を受けた。そのうちの一人は悔い改めたが、もう一人は逆に、その悪意をさらに強め、総主教への怒りから、多くの悪事を働いた。　これを耳にした総主教は、彼を呼び出して、穏やかにその悪意を捨てさせるよう説得しようと考えた。しかし、万人の益となるよう、ヨハネの謙遜と柔和さが明らかにされるという神の御計画により、総主教はそれを実行することを忘れてしまったのである。　ある日曜日のこと、教会で神聖な聖体礼儀を執り行っていたとき、ヨハネは自分に怒りを抱いていたその聖職者のことを思い出し、同時にキリストの次の言葉も思い出した。　*「だから、もしあなたが供え物を祭壇に捧げようとして、そこで兄弟があなたに対して何か恨みを持っていることを思い出したなら、供え物を祭壇の前に置いたまま、まず行って兄弟と和解しなさい。それから戻って、供え物を捧げなさい」*（マタイ

[7784] ここでの言及は、当然ながら、618年にホズロイの指揮下で行われたペルシア軍によるエジプト侵攻を指している。

[7785] 『列王記下』第4巻には、預言者エリシャがシリアの軍司令官ネエマンのハンセン病を、報酬を受け取ることなく癒やしたことが記されている。一方、エリシャの従者ギエジは、主人がネエマンから何も受け取らなかったことを惜しみ、彼から多額の銀と着替え用の服二着をだまし取った。　このことを知ったエリシャは、ギエジにこう言った。「ネエマンのらい病が、あなたとあなたの子孫に永遠に付きまとうように。」そして、ギエジは預言者の元を去ったとき、らい病で雪のように真っ白になっていた（列王記下5:1–27）。

[7786] イタリア南部の地中海に浮かぶ島で、その肥沃な土壌で知られ、古代にはイタリアの穀倉地帯と見なされていた。

5:23–24）。 祭壇から降りると、彼はその聖職者を呼び寄せ、その足元にひれ伏して許しを請いました。聖職者は、総主教のそのような謙遜な姿を見て恐れをなすと、自らも彼の足元にひれ伏し、泣きながら許しを請いました。 こうして、ヨハネはその聖職者と和解し、祭壇に戻って大胆に犠牲を捧げ、清い良心をもって主の祈りの言葉を唱えることができた。*「私たちの罪を赦してください。私たちも、私たちに罪を犯した者を赦しますように」*（マタイ6:12）。

その聖職見習いは改心し、神に喜ばれる生活を送るようになり、やがて司祭の位に就くにふさわしい者となった。

聖ヨハネが示した柔和さのもう一つの例も、同様に印象的である。アレクサンドリアのある宿屋の主人が、ゲオルギオスという名の聖人の甥を、罵倒や非難の言葉で辱めた。叔父のもとへ来たゲオルギオスは、自分を辱めた男について苦々しく訴えた。

甥がひどく動揺しているのを見て、彼をなだめようと、ヨハネはこう言った。

「あの卑しい男が、よくも私の甥を辱めるなどという無礼を働いたものだ！神に誓って、この侮辱者に復讐し、全アレクサンドリアが驚愕するような仕打ちをしてやる！」

総主教のこの言葉に少し落ち着きを取り戻したゲオルギオスは、泣き止んだ。すると、心優しく謙虚なヨハネは彼にこう語りかけた。

「愛する子よ！もしあなたが私の親族でありたいと望むなら、侮辱に耐えるだけでなく、傷を負うことも覚悟し、神のために隣人をすべて赦す覚悟をしておきなさい。 「貴族でありたいと願うのか？ それなら、血筋ではなく、徳によって貴族たることを求めよ。真の貴族たるものは、先祖の栄光によって飾られるというよりは、善行と神に喜ばれる生き方によって飾られるのだ！」

こうして、甥をなだめた聖人は、宿屋の監督を呼びつけ、ゲオルギオスを辱めた男から、毎年納めるべき教会税を徴収せず、自由に暮らせるようにするよう命じた。

そして実際、ヨハネは約束通り、その侮辱者に対して、アレクサンドリア全土を驚かせるような対応をとった。すなわち、罰や復讐の代わりに、彼に恩恵を与えたのである。

絶えず死を心に留めておきたいと願った聖ヨハネは、自分のための棺を用意させるよう命じたが、装飾は施さないようにと指示した。さらに、彼は執事たちに、すべての祝祭日には自分のもとへ来て、皆の前で大声でこう言うよう命じた。

「主よ！ あなたの棺はまだ完成していません。完成させるよう命じてください。死は泥棒のようにやって来るものであり、いつ現れるか、あなたには分からないからです。」

このように、聖ヨハネは常に死を心に留め、いつでも死に備えていた。

ある日、ある裕福な貴族が聖人のもとを訪れ、薄い毛布で覆われた聖人の寝床を目にする機会があった。 家に帰ると、その貴族は総主教に三十六金貨相当の毛布を送り、その毛布で身を包むよう頼んだ。総主教は貴族を傷つけたくなかったため、彼の執拗な懇願に応じて毛布を受け取り、たった一晩だけそれを身にまとった。その際、彼は心の中でこう言った。

「ああ、哀れなヨハネよ。お前は高価な毛布に身を包んでいるのに、キリストの兄弟たちは貧しい身で寒さに震えている。どれほどの人々が、風と寒さの中で何の覆いもなく夜を過ごし、小さな藁マットやボロボロの着物を身に着けていることか！ どれほど多くの裸の者たちが、糞の山に転がり、寒さに震え、飢えと寒さの二重の苦しみに苛まれ、一晩中眠れずに、食べ物を求めていながら、寒さで死んでいくことか！

ああ、なんと悲しいことか！ラザロのように、私の食卓から落ちるパンくずでさえも腹を満たしたいと願う貧しい人々が、どれほど多いことか！ああ、なんと悲しいことか！この街には、頭を休める場所もなく、路上で夜を明かし、あらゆる苦難に耐えながらも、すべてを主キリストに感謝している旅人やよそ者が、どれほど多くいることか！ それなのに、ヨハネよ、あなたは永遠の安らぎを望みながら、ここでは贅沢と安らぎの中に身を置き、望むものはすべて手に入れている。美しい宮殿に住み、柔らかな服を着て、ワインを飲み、選りすぐりの魚を食べている。それだけでなく、あなた

は高価な毛布まで身にまとっている。　果たして、来世で何を期待できるというのか。いや、呪われたヨハネよ、そのような生活を送っていても、あなたは永遠の御国を得ることはできず、福音書に登場する金持ちと同じ言葉を聞かされることになるだろう。*「愚かな者よ！　今夜、お前の魂はお前から取り上げられる。では、お前が蓄えたものは、いったい誰のものになるのか？」*（ルカ12:20）。神は証人である。謙虚なヨハネは、次の夜にはこの毛布を身にまとうことはないだろう。しかし、毛布を売って得た金で、貧しい者や困窮している者たちが着る服が買われるのだ！

日が明けると、聖人はその毛布を市場へ急いで売り出し、その代金で貧しい人々に衣服を買ってあげようとした。しかし、毛布を売っている最中、たまたま、聖ヨハネにその毛布を贈ったあの高官が通りかかった。　それが売られているのを見て、貴族はそれを買い取り、再びヨハネのもとへ送り、彼自身でその毛布に身を包むよう懇願した。聖人は毛布を受け取ると、再びそれを売るよう手配した。　その高官は、毛布が再び売られているのを見て、二度目にそれを買い取り、ヨハネに「どうかご自身でそれを身にまといください」と懇願して送り返した。ヨハネは三度目も毛布を売らせるよう命じたが、高官は三度目もそれを買い取り、ヨハネのもとへ送り返した。　その後、ヨハネはこの貴族にこう伝えるよう命じた。

「どちらが先に疲れるか見てみよう。私が売ることに疲れるのか、それとも君が買ってまた私に返すことに疲れるのか？」

このようにして、聖ヨハネはその高官から多くの金を手に入れ、それを貧しい人々に配った。

この福者は、けちな者や金に執着する者たちさえも、施しを行うように導く術を知っていた。トロイラという名の司教が、極めてけちで金に執着していることを知っていたヨハネは、彼を病院へ誘い、病人と貧しい人々を見舞うようにした。トロイラが金を持っていることに気づくと、彼はこう言った。

「トロイラ神父よ！　今こそ、この貧しい兄弟たちに施しを与えて慰める好機です。」

トロイロは、けちだと思われるのを恥じ、本意に反して、最初の人から最後の人まで全員に施しを配り始め、三十リトルの金を費やしてしまった。　しかしその後、彼は貧しい人々にこれほど多くの金を配ってしまったことを後悔し始めた。家に帰ると、トロイルは配ってしまった金について深く嘆き、床に伏してしまった。その間、聖ヨハネは彼を呼び出し、昼食に招待した。　トロイルは病気だと言って、昼食に行くのを断った。彼が金を使い果たしたことを悔やんで病に倒れたのだと察したヨハネは、30リットルの金を手に取り、病床のトロイルを見舞いに赴いた。彼の元に着くと、こう言った。

「病院で君から借りた金を持ちました。これを受け取って、代わりに、配った金に対して君に与えられるはずだった主からの報いを、私に譲るという手紙をください。」

金を見たトロイルは大いに喜び、それを受け取るとたちまち回復し、すぐに次のように書き記した。

「慈悲深い神よ！　私が貧しい人々に配った三十リットルの金に対し、私の主であるアレクサンドリア総主教ヨハネに報いを授けてください。彼は私の金を返してくれたのですから。」

トロイロからのこの手紙を受け取ったヨハネは、彼を昼食に招いた。　彼をもてなしながら、聖人は心の中で神に祈り、トロイルをそのような金銭への執着から救ってくださるよう願った。そしてその夜、トロイルは幻視の中で、言葉では言い表せないほど美しい、実に素晴らしい家を見た。その扉の上には、「司教トロイルの住まい、そして永遠の安息の地」という金色の銘が刻まれていた。

トロイルは、自分のために用意されたこのほど美しい家に大いに喜んだ。しかし、突然、まるで王の侍従長（[7787]）のような、威厳があり威圧的な男が現れ、使用人たちにこう言った。

「全世界の主が、この銘を消し去るよう命じられた。」

[7787] クヴィクラーリウス――王宮の寝具係。

すると、使用人たちは直ちにそれを消し去った。再び現れたその男は、使用人たちにこう言った。

「こう書きなさい。『ここは、アレクサンドリアの総主教ヨハネの住居であり、永遠の安息の地である。彼は三十リトラの金でこれを自分のために購入した。』」

眠りから覚めたトロイルは恐怖に襲われ、天国で用意されていた家を失ったことを深く嘆き、金への愛を自ら責めた。　起き上がると、彼は急いで聖ヨハネのもとへ行き、見たことを話した。聖ヨハネはいつものように柔和な態度で彼に教えを授け、平穏のうちに帰した。それ以来、トロイルは改心し、非常に貧しい人々を愛し、すべての人に対して慈悲深い人となった。

かつて義人ヨブの忍耐を試された主は、聖ヨハネにも過酷な試練を与えられた。ある時、アレクサンドリア教会所有の船が、貨物を満載してアドリア海を航行していた[7788]。突然、嵐が吹き荒れ、激しい波が立ち、船は沈没寸前となった。　危険があまりにも大きかったため、積荷をすべて海に投げ捨てざるを得なかった。これは神の御許しによるものであり、*「あなたがたの信仰が、火で試される金よりも尊いものであることが、イエス・キリストの現れにおいて、称賛と栄光と誉れとなるためである」*（Iペテロ1:7）[7789]。　船は十三隻あり、それらに積まれていた商品の総額は三千三百リトラの金に及んだ。長い間、貧しい人々を養い、衣食を与えることのできたような財産を失ったにもかかわらず、聖ヨハネはこれを感謝の心をもって受け入れ、ヨブの言葉をしばしば繰り返した。　*「『私は母の胎から裸で出て来た。裸でまた戻る。主が与え、主が取り去られた。［主の御心どおりになった。］主の御名がほめたたえられますように！』」*（ヨブ記 1:21）。

やがて、悲しみに暮れる彼を慰めようと、多くの町の有力者たちが彼の元を訪れたが、彼は彼らにこう答えた。

「教会の財産が失われたのは私の責任です。もし私が、多額の施しをしていると自惚れていなければ、あれほど貴重な財産が海で失われることはなかったでしょう。私は、自分のものではなく、神のものを施すことで高慢になってしまいました。そこで神は、私を謙虚にさせようと、このような貧困を許されたのです。貧困は人を謙虚にするからです。　今や私自身も、高慢のゆえに神からの報いを失い、貧しい人々に大きな損失をもたらしてしまったことを自覚している。なぜなら、食糧を失った人々は飢えに苦しむことになるからだ。しかし、私のためではなく、彼ら自身のために、主は貧しい人々を見捨てず、必要なものをすべて与えてくださるだろう。

このように、ヨハネを慰めに来た者たちは、かえって彼から慰めと教えを受けたのである。そして主はまもなく、ヨハネに以前の二倍の恵みを送られた。

ヨハネは貧しい人々に多額の施しを行い、とりわけ何らかの不当な扱いを受けている人々を助けていた。　ある日、彼が聖殉教者キュロスとヨハネの教会へ向かっていたとき、一人の貧しい未亡人が彼に近づき、　、義理の息子から受けた大きな不当な扱いについて語り、聖なる総主教に保護を求めた。ヨハネに同行していた者たちは彼にこう言った。

「大主教様、この未亡人の願いは、家に帰ってから聞いてください！」

聖人はこう答えました。

「もし私が今すぐ彼女の話を聞かなければ、どうして神が私の祈りを聞いてくださるというのか？」

そして、彼はその未亡人の話を聞き、彼女を不当な扱いから守り抜くまで、その場から一歩も動こうとしなかった。

[7788] アペニン半島とバルカン半島に挟まれたアドリア海。

[7789] 使徒ペテロは小アジアのクリスチャンたちにこのように書き送った。苦難を喜びをもって耐え忍ぶよう勧めた（Iペテロ1:6）。それは、試練を経た信仰が、たとえ火で試されるとしても、朽ちてしまう金よりも尊いものであることが明らかになるためである（Iペテロ1:7）。

ある若者は、両親の死後、生計を立てる手段を一切失ってしまった。ヨハネはこれを知ると、傍らにいた人々に、この若者がどうして貧困に陥ったのか尋ねた（彼は、その両親が非常に裕福だったと聞いていたからである）。　神を愛する人々は、この若者の両親は非常に慈悲深く、全財産を貧しい人々に施し、息子にはたった10リットルの金しか残さなかったと彼に語った。しかし、若者の父（母は先に亡くなっていた）は、死を前にして彼を呼び寄せ、金と聖母マリアの聖像のどちらかを選ぶよう提案し、こう言った。

「愛しい息子よ！　私たちの全財産のうち、残っているのは金10リットルだけだ。残りのすべてはキリストの御手に委ねた。さあ、答えてくれ。お前はどちらを望むのか。金か、それとも、お前の助け手であり養い主である、我らの主の聖母マリアの聖像か？」

少年は金を軽んじ、聖母マリアのイコンを選び、金は貧しい人々に配るよう頼んだ。こうして、最後の財産までもが貧しい人々に与えられた。父が亡くなると、少年は貧しい身となり、今ではあらゆる苦難に直面している。それにもかかわらず、彼は毎日、昼夜を問わず、聖母マリアの教会で祈りを捧げている。

この話を聞いた聖ヨハネは、その少年の徳と知恵に感嘆し、心から彼を愛するようになった。それ以来、彼はまるで孤児たちの真の父であるかのように彼を世話し、どのような恩恵を施すべきか考え続けた。ある日、彼は密かに執事を呼び寄せ、こう言った。

「ある秘密を君に伝えたいが、誰にも話してはならないぞ。」

執事は、聖人が告げる秘密を守ることを約束した。すると、総主教はこう言った。

「行って、古い羊皮紙を取り出し、あるテオネンプトという者の名義で遺言書を書け。その遺言書からは、私とこの貧しい少年が近親者であるかのように読み取れるようにせよ。　それから、その若者のところへ行って、こう言いなさい。『兄弟よ、君が総主教の近親者であることを知っているか？　それゆえ、貧しさの中に留まるのは恥ずべきことだ。』そう言って、書き上げた文書を見せ、こう付け加えなさい。「子よ、もし君が総主教に自分が彼の親族であることを告げるのを恥じるなら、私が彼に君のことを伝える。」

ヨハネの指示を聞いた執事は、総主教の命じた通りにした。彼は古びた羊皮紙に遺言書を書き、そこからその貧しい若者と総主教との血縁関係が明らかになった。その後、若者を呼び寄せ、遺言書を見せながら、父親の古い書類の中からこれを見つけたと告げた。　遺言書を読んだ少年は、最初は喜んだが、やがて自分が非常に貧しく、ぼろぼろの服を着ていることを恥じ、執事に、自分のことを総主教に伝えてほしいと頼んだ。執事は聖人のもとへ行き、少年の願いを伝えると、聖人はこう言った。

「その若者にこう伝えてくれ。総主教はこう言っている。『私の叔父に息子がいたことは覚えているが、その子の顔は知らない。彼を私のところへ連れて来ればよい。遺言書も一緒に持って来なさい』」

執事は少年を連れてきて、その写本を聖人に見せた。総主教は愛情を込めて少年を抱きしめ、こう言った。

「お前が来てくれてよかった。お前は私の叔父の息子だからな。」

聖人はその若者に多額の財産を与え、家や生活に必要なものをすべて買い与え、高貴な娘と結婚させ、彼を裕福で、名高く、誠実な人物にするよう努めた。それは、詩篇の言葉が成就するようにするためであった。　*「わたしは若くして年老いたが、義人が見捨てられたり、その子孫がパンを乞うたりするのを見たことがない」*（詩編36:25）。聖ヨハネは病人を頻繁に訪ね、自ら世話をし、死を目前にした人々には祈りをもって導き、最期の時を助けた。　さらに、彼はしばしば死者のための聖体礼儀を執り行い、死者のために捧げられる聖体礼儀は、故人にとって大きな益をもたらすと語っていた。これを裏付けるものとして、聖人は、その少し前にキプロス島で起こった出来事を挙げた。

「キプロス出身のある捕虜が」と彼は語った。「ペルシャで過酷な監禁状態に置かれていた。キプロスに住む彼の両親には、彼がすでに亡くなったと伝えられていたため、彼らは彼を亡き者として悼んでいた。　彼らは年に三度、彼の追悼を行い、彼の魂のために教会へ供物を捧げ、神聖な礼拝を執り行っていた。四年が過ぎた頃、その息子は捕虜生活から脱走し、実家に戻ってきた。両親は彼を見て驚き、まるで死から蘇ったかのように思った。 息子の解放を喜び、両親は年に3回、彼のために追悼の儀式を行っていたことを話した。息子は、どの日に追悼の儀式を行っていたのかと尋ねた。両親は、「主の顕現の日、復活祭、そして聖霊降臨祭の日だ」と答えた。それを聞いた息子は、あることを思い出し、こう言った。

「その日々に、ある威厳ある男がランプを持って私の牢屋を訪ねてきた。すると、私の足から足枷が落ち、私は自由になった。それ以外の日には、私は囚人として再び足枷に縛られていたのだ。」

至福のヨハネは、人々の罪、とりわけ修道士たちを非難することを非常に恐れていた。ある時、彼は誤って一人の修道士を非難してしまったことがあり、それ以来、彼らに関する告発は一切受け入れず、非難もしなくなった。その出来事は次のようなものであった。　ある若い修道士が、数日間、非常に若くて美しい娘と共にアレクサンドリアを歩き回っていた。これを見た者たちは、彼が彼女と不道徳な生活を送っていると思い込み、聖なる総主教にそのことを告発した。　聖なる総主教は、直ちに二人を捕らえ、体罰を科し、互いに隔離して牢獄に閉じ込めるよう命じた。夜が更けると、その修道士は夢の中で総主教の前に現れ、殴打によってひどく傷ついた自分の肩を見せながら、こう尋ねた。

「それがお望みだったのですか、大主教様?　使徒から、強制ではなく自発的にキリストの群れを牧するよう（Iペテロ5:2）学んだというのに。信じてください。あなたは人間として欺かれているのです！」

そう言い残して、彼は去っていった。一方、総主教は眠りから覚めると、見た夢が何を意味するのか考え込み、自らの罪を自覚して、嘆き悲しみながらベッドに座り込んでいた。　朝になると、彼はその修道士を連れてくるよう命じた。夢に現れた人物に似ているかどうか確かめたかったのだ。修道士は、数多くの傷のため、かろうじて動くことができるほどだったため、大変な苦労をしてやって来た。　総主教は彼を見るや、言葉を失い、ただ手で合図して自分の隣に座るよう促した。その後、我に返ると、総主教は修道士に衣服を脱いで肩を見せ、夢で見た通り傷ついているかどうか確かめるよう求めた。　執拗な懇願の末、修道士が衣を脱ぎ始めたとき、皆は彼が宦官であることに気づいた。総主教は、傷だらけのその姿を見て、この出来事を深く悔やみ、修道士を誹謗中傷した者たちを呼び寄せ、彼らを3年間教会から破門するとともに、修道士には許しを求めた。

「兄弟よ、許してくれ」と彼は言った。「私は無知のゆえにこうしたのだ。私は神の前でも、お前の前でも罪を犯した。しかし、お前もまた、修道者の身でありながら、世俗の人々を誘惑するような形で、あのように軽率に乙女と時間を過ごすべきではなかった。」

修道士は謙虚に答えた。

「司教様、信じてください。私は嘘はつきません。真実を申し上げます。以前、私がガザにいた時[7790] 、聖殉教者キュロスとヨハネの墓に参拝しに行く途中、夕方にその娘に出くわしました。彼女は私の足元にひれ伏し、涙ながらに、私と一緒に来ることを禁じないでほしいと懇願したのです。しかし、私は彼女を突き放し、逃げ出した。すると彼女は私の後を追いかけてきて、こう言った。

「罪人を救うために来られ、生ける者と死せる者を裁こうとされるアブラハムの神にかけて誓います――私を見捨てないでください！」

これを聞いて、私は彼女に言った。

[7790] ガザ――パレスチナにある都市で、地中海の東岸、エルサレムの南西に位置する。

「お嬢さん、なぜそんなに私に誓いを立てるのですか？」

「私はユダヤ人です」と、彼女は泣きながら答えた。「父の邪悪な信仰を捨て、キリスト教徒になりたいのです。お願いです、神父様！私を拒絶しないでください。キリストを信じたいと願うこの魂を救ってください。」

これを聞いて、私は神の裁きを恐れ、その娘を連れて行き、聖なる信仰について教えを授けた。その後、聖なる殉教者たちの墓を訪れ、教会で彼女に洗礼を授け、純真な心で彼女と共に歩き、彼女を女子修道院に入らせようと考えていた。

修道士の話を聞き終えると、総主教はため息をついてこう言った。

「神がどれほど多くの隠れた僕たちを御許に抱いておられるか、我々のような罪深い者には知る由もない。」

それから、彼は周囲の人々に自分の夢の話をし、百枚の金貨を取り出して、その修道士に与えようとした。しかし、修道士は一枚も受け取ろうとはせず、こう言った。

「もし修道士が、神が自分を見守っておられると信じるなら、金など必要としない。もし金を愛するなら、神の存在を信じていないのだ。」

そう言うと、彼は総主教に一礼して立ち去った。それ以来、聖ヨハネは修道士たちをますます深く尊敬するようになった。彼は巡礼中の修道士たちが安らげるよう修道院を設立し、人を非難することを控えた。

この慈愛に満ちた牧者は、自分の霊的な羊たちに対しても、たとえ誰かの罪を知ったとしても、決してその人を非難せず、他人の罪ではなく、むしろ自分の罪に目を向けるよう教え導いた。ある時、アレクサンドリアからある若者が修道女を連れてコンスタンティノープルへ逃亡した。皆は彼を非難し、こう言った。

「彼は二人の魂を滅ぼした。自分自身の魂と、その修道女の魂を。しかも、すべての人にとってつまずきの原因となったのだ。」ところが、福音書にはこう記されている。*「つまずきがあるのは世の災いだ。つまずきが起こるのは避けられないが、つまずきの原因となる者には災いがある」*（マタイ18:7）。

すると、聖ヨハネは彼らにこう言った。

– 子らよ、非難するのはやめなさい。あなたたちもまた、二つの罪を犯しているのだから。第一に、罪を犯した者を非難することで、あなたたちは神の戒めに背いている。 *「それゆえ、主が来られるまでは、決してさきに裁いてはならない。主こそ、闇に隠されたものを明らかにし、心の思いを表わされる方であり、そのとき、一人ひとりが神から称賛を受けることになる」*（コリントの信徒への手紙一4:5）。また、他方では、その兄弟が今もなお罪を犯しているのか、それともすでに悔い改めたのかを知らずに、兄弟を中傷しているのだ。

彼らを戒めるために、彼は次のような物語を語った。

「ある修道士が、ティルスという町の通りを歩いていた[7791] 。その町で誰もが知る娼婦、ポルフィリアという名の女が彼に気づき、修道士の後ろから叫び始めた。

「父よ！キリストが娼婦を救ったように、私を救ってください！」

しかし、その修道士は人間の裁きを何とも思わずに、彼女にこう言った。

–私について来なさい！

そして彼女の手を取り、皆の目の前で街の外へと連れ出した。その後、修道士が娼婦のポルフィリアを妻に迎えたという噂が街中に広まった。修道士が彼女を女子修道院へと連れて行く途中、ポルフィリアは道端に捨てられた赤ん坊を見つけ、息子代わりに育てるためにその子を自分のものにし

[7791] ティルスは、フェニキアの古代の首都であり、地中海東岸、パレスチナの北に位置していた。

た。　しばらくして、ティルスの市民数人が、その長老とポルフィリアが住む国を訪れる機会があった。彼女が子供を連れていることに気づいた彼らは、嘲笑を込めてこう言った。

「ポルフィリア、立派な子を産んだね。」

彼らが戻ると、ポルフィリアが修道士との間に子を産んだと皆に語り広めた。「我々は自分の目でその子を見た――と彼らは言った――そして、その子は修道士にそっくりだ」。やがて、老修道士は自らの死と主のもとへの旅立ちを予感し、ペラギア（彼女が修道女となった際に彼が名付けた名前）にこう言った。

「ティルスへ行こう。今、私がそこへ行かなければならないのだ。君にも私についてきてほしい。」

長老の意志に従順なペラギアは、彼と共に旅立った。彼らは、すでに七歳になっていたその子も連れて、街へ向かった。街に入ると、長老は体調を崩し、多くの町民が彼を見舞いに訪れた。その時、長老は見舞いに来た人々にこう言った。

「香炉を持ってきてくれ。」

人々はそれを運んできた。彼は香炉を受け取ると、そこから燃え盛る炭を自分の胸の上に撒き、それが冷めるまでその状態を保った。炭は彼の体も衣服も焦がすことはなかった。これを見て、老人は人々にこう言った。

「かつて火から燃え尽きることのない荊の茂みを守られた神は、祝福された方です！神は証人であられます。この燃える炭が私の体を焦がさず、火が私の衣服に触れなかったのと同じように、私も生まれたその日から、肉欲の罪を知ったことがないのです。」

こう言い終えると、長老は主のもとへ魂を委ねた。この光景を目撃した者たちは皆、驚き、密かに神に仕える僕たちを御自身のもとに留めておられる神を賛美した。この物語を人々に語った後、聖ヨハネは次のように説いた。

「さあ、兄弟たちよ、子らよ、軽率に人を裁いてはならない。私たちは、罪を犯す人の罪にはしばしば気づくが、その人が密かに行う悔い改めには気づかないのだ。

こうして、この良き羊飼いは、言葉による羊たちを教え導き、柔和さをもってキリストの教会を治めた。

ある時、ペルシャ軍が彼らの国を襲撃した。ヨハネは、救い主の言葉を思い起こした。*「ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい。まことに、あなたがたに告げる。イスラエルの町々を巡り終える前に、人の子が来るからだ」*（マタイ10:23）という救い主の言葉を心に留め、しばらくの間コンスタンティノープルへ退避することを決意した。彼がアレクサンドリアを出航したとき、病に倒れ、床に伏していた。すると、幻の中で、彼は金色の笏を手にし、こう語るある光り輝く人物を見た。

「王の王が、あなたを御許へと呼び寄せている。」

この幻視によって、聖人は自分の人生の終わりが近づいていることを悟った。故郷のキプロスに到着した彼は、それ以上の旅を続けることができず、生まれ故郷のアマフントにたどり着くと、安らかに主のもとへ召された。臨終の際、聖ヨハネはこう語った。

「わが神、主よ、感謝いたします。あなたが私に、あなたのものであるものをあなたに捧げることを許してくださったこと、そしてこの世の恵みの中から、私に残されたものは銀貨の三分の一以外には何もなかったことを。しかし、この三分の一についても、私はそれを貧しい人々に与えるよう遺言します。」　私がアレクサンドリア総主教に任命された際、私の管区には約8,000リトルの金があ

りました。また、神を愛する者たちからの献金として10,000リトル以上を集めましたが、それらすべてをキリストに捧げました。今、私の魂もまた、キリストに委ねます。[7792]。

この福者は、故郷のアマフンテにある聖ティコノス・奇跡行者の教会に、そこに眠る二人の司教と共に埋葬された。その際、次のような出来事が起こった。　聖ヨハネを彼らと共に葬ろうとしたとき、その遺体はまるで生きているかのように広がり、互いに離れ、その真ん中にヨハネの遺体のための場所を空けたのである。この奇跡を、立ち会っていた者たちは皆、この目で目撃し、驚きと感嘆に打ちひしがれながら、神を賛美した。

また、聖ヨハネの埋葬後に起こった次の奇跡についても、触れないわけにはいかない。ある女性が重い罪を犯し、その罪を霊的指導者に告白することを恥じていたが、信仰をもって、まだ生きていたもののすでに病に伏し、死を目前にしていた至福のヨハネのもとを訪れた。　彼の足元にひれ伏し、彼女は叫び声を上げ、涙を流しながらこう語った。

「ああ、至福なる方よ！私は恐ろしい罪人であり、私の罪はあまりにも恐ろしいので、誰にも打ち明ける勇気はありません。　しかし、あなたが望まれるなら、私を赦してくださることを知っています。主はあなたにこうおっしゃいました。*『あなたが地上で縛るものは、天でも縛られ、あなたが地上で解くものは、天でも解かれる』*（マタイ16:19、ヨハネ20:23）。

聖人はこう答えました。

「もしあなたが信仰を持って来たのなら、私の前で自分の罪を告白しなさい。」

すると、その女性は言った。

「師よ、私は自分の罪を告白することができません。大きな恥が私を縛っているからです。」

聖人は彼女にこう言った。

「もし口で告白するのが恥ずかしいのなら、紙に書いて私のところへ持ってきなさい。」

すると彼女は言った。

「それさえもできません。」

すると、聖人はこう言いました。

「書き、封印して、私に渡せ。」

自分の罪を書き記した後、その女性は聖人に、封印を破ったり、その手紙を読んだりしないよう懇願した。それを受け取ったヨハネは、その5日後にこの世を去った。その手紙については、誰にも話さなかった。その時、その女性は町にはいなかった。　葬儀の翌朝、その女性は町に戻り、総主教　が亡くなり、埋葬されたことを知ると、深く嘆き悲しんだ。というのも、彼女は、彼の死後、他の人々がその手紙を手に取り、自分の罪を読み知ってしまったのではないかと恐れていたからである。聖人の棺の前に来ると、彼女はまるで生きているかのように聖人に呼びかけた。

「神の御使いよ」と彼女は叫んだ。「私はあなたご自身に自分の罪を告白する勇気を持てなかったのに、今やその罪は万人に知れ渡ってしまった。ああ、あの私の罪が記された文書をあなたに手渡さなければよかったのに。ああ、哀れな私よ、呪われた者よ！　私はあなたを恥じていましたが、今やさらに大きな恥に襲われ、皆の笑いものになってしまいました。しかし、あなたが私の書き残したものをどこに置いたのか教えてくださるまで、私はあなたの墓から離れません。だって、あなたは死んだのではなく、今も生き続けているのですから。」

彼女はその状態で、ヨハネの墓のそばに三日間留まった。三日目の夜、聖ヨハネは、共に横たわっていた二人の司教を伴って、自らの棺から目の前で現れ、泣きじゃくる彼女にこう言った。

[7792] 福者ヨハネは619年11月11日に帰天した。彼の記念日が11月12日に祝われるのは、11日がエジプトでは殉教者ミネの記念日が、コンスタンティノープルではテオドロス・ストゥディトスの記念日が盛大に祝われていたためである。　聖ヨハネ・ミロスティヴォイの聖遺骨は、当初コンスタンティノープル（1月23日）に移され、後にハンガリーのプレスブルクに移され、現在も同地に安置されている。

「女よ、いつまで私たちを放っておかず、涙で私たちの衣を濡らし続けるつもりなのか？」

そう言うと、彼は封印された手紙を彼女に手渡し、こう言った。

「この手紙を受け取り、開封して中を見てごらん。」

その後、死者たちは再びそれぞれの棺に横たわった。一方、その女性は手紙を受け取ると、自分の封印が破られていないのを見て、それを破って中を覗くと、自分が書いた文字は消されており、その代わりにこう書かれていた。

「わがしもべヨハネのゆえに、お前の罪は赦された。」

その女性は、奇跡的に罪の赦しを受けたことに大いに喜び、家へと戻り、神を賛美し、その御心に適う聖人、聖ヨハネ・ミロスティヴィイを称え、その祈りによって、主が私たちにも御慈悲を示し、私たちのすべての罪を消し去り、永遠に命の書に私たちを記してくださるよう願った。アーメン。

トロパリオ、第8調：

あなたの忍耐によって、あなたは報いを得られました、尊き父よ。絶え間なく祈りを捧げ、貧しい者を愛し、彼らを慰めた方よ。しかし、キリスト・神に祈ってください、慈悲深き聖ヨハネよ、私たちの魂が救われますように。

コンダク、第2調：

あなたは富を貧しい人々に分け与え、今や天の富を受け取られました、全知のヨハネよ。このゆえに、私たちは皆、あなたの記念を捧げつつ、同名の聖人のために施しを行い、あなたを崇めます！

敬虔なるニロス・ポストニクスの記念日。

記念日：11月12日

聖ニロスはコンスタンティノープル出身であり、そこで優れた教育を受け、あらゆる学問を修め、卓越した演説家であった[7793]。成人すると、ある徳の高い女性と結婚し、その妻との間に息子と娘の二人の子供をもうけた。 その高貴な家柄と個人的な資質により、ニロスは首都の知事に任命された[7794]。彼は神に喜ばれる徳高い生活を送っていたが、王宮に蔓延していた悪徳のため、自身の救いを危惧し、世俗を去ることを余儀なくされた。 悪に支配されているこの世の虚しさ（Iヨハネ5:19）を深く悟り、この世には不変のものも、永遠で公正なものも何一つなく、すべてが歪められ、不正に満ちているという確信を抱いたニールは、 ニールは、真の変わらぬ喜びと果てしない至福に満ちた永遠の命へと続く、狭きながらも救いのある道を志すようになった。彼は妻を説得し、世を去ることに同意させた。 全財産を貧しい人々に施し、奴隷たちを解放した後、二人は子供たちの養育を分担した。ニールの妻は娘を引き取り、彼は息子のテオドゥラスを引き取って、 世俗とあらゆる世俗的な執着を捨てて[7795]、コンスタンティノープルを去った。 ニルの妻は娘を連れてエジプトへ去り、そこである女子修道院で修道女となり、敬虔な行いを通じて熱心に主に仕えるようになった。 一方

[7793] 聖ニロスは4世紀後半に生まれ、聖ヨハネス・クロイソストモスの弟子であった。

[7794] 市の最高警察機関を統括していた最高位の役人の一人であった。

[7795] それは390年頃のことでした。

、至福のニールは息子のテオドゥロスと共にシナイ山へ赴き[7796] 、荒野に定住して、敬虔な荒野の父たちの生活に倣い、断食や修行に励み、祈りと徹夜祷に専念し、多種多様な修道者の労苦によって肉体を死に至らしめた。

そこで聖人は、自らの手で掘った洞窟に定住し、そこで40年間にわたり修行に励んだ。彼に関する評判はすぐに至る所に広まり、あらゆる身分や立場の人々が、教えや祈りを求めて彼のもとに訪れるようになった。

尊者聖ヨハネ・クラマトリオスが流刑に処されたという知らせを耳にしたとき[7797] 、彼は深く沈黙していた中から勇敢かつ恐れを知らず声を上げ、直ちに皇帝アルカディウスを非難した。そして、偉大なる聖人に対する皇帝の不正を厳しく糾弾する書簡を彼に送ったのである。

彼がこのように修道生活の業に励み、隠遁生活を送っていたとき、主への愛を試すために、さらに特別な試練が彼に与えられた。 その荒野に、野蛮人たちが襲撃を仕掛けた[7798] 。彼らはまるで野獣のように突然襲いかかり、多くの聖なる父たちを殺害し、他の者たちを捕虜とした。他の者たちと共に、彼らはニロスの息子テオドゥルスも捕虜として連れ去った。 ニロスは息子を思って痛切に泣き悲しんだ。とりわけ、息子が異教の神々への生贄として野蛮人たちに定められたと聞いたときはなおさらであった。しかし、エメス市の司教[7799] が野蛮人からテオドゥロスを身代金で買い戻し、後に彼を教会の聖職者に任命したため、神はテオドゥロスを無傷で守ってくださったのである。 このことを知ったニロスは自らエメスの街へ向かい、そこで司教から丁重にもてなされた。司教は、ニロスの意向に反して、彼を長老の位に叙階し、自分の元で暮らすよう懇願した。 しかし、至福のニールがそこに留まることを望まず、再びシナイへ去る決意を固めると、司教は彼の息子を返還し、平穏のうちに二人を送り出した。 至福のニールは、息子と共に再びシナイの当初の滞在地に戻り、そこで長年にわたり暮らした後、安らかに主のもとへ召された[7800] 。尊者ニールからは、知恵に満ちた多くの魂に有益な断食に関する言葉や、キリスト教の信仰と敬虔さに関する様々な主題について、様々な人物に宛てた書簡が数多く残されている[7801] 。

聖預言者アキアの記念日

記念日：11月12日

[7796] シナイ山は、アラビア半島の北西部、紅海の東岸に位置する。シナイは、キリスト教の修道生活が誕生して間もない頃から、東方修道界の愛好する地であり、その修道士たちの偉業で名声を博していた。

[7797] それは405年のことだった。

[7798] ここでいう「ヴレミド族」とは、当然ながらアラビアに居住していたアラブ系部族の一族を指す。

[7799] エメスは、シリア北西部で地中海に注ぐオロンテス川の東に位置するシリアの都市である。

[7800] 聖ニロス・アストニクスの死は450年頃であった。彼は砂漠でわずか60年間を過ごした。

[7801] 聖ニロスは、その偉大な師である聖ヨハネス・クラマトルスと同様に、聖書の解釈や信仰の教義の解説に多くを費やし、特に禁欲的な著作で知られている。 彼の最も優れた修道的な著作は、祈りに関する書である。続いて、『*修道士について*』、『自発的な*貧困について*』、『*隠遁生活の利点について*』、『エウロギオスへの訓示』（世を離れること、闘いにおける不屈の精神、苦難における忍耐、情欲との戦いなどについての素晴らしい考察を含む）などが挙げられる。、異教の著述家エピクテトの著作から抽出し、所々でキリスト教的な思想によって改変された実践的知恵の規則をまとめた『エピクテトの手引書』；また、聖ニロスが様々な人物や様々な機会に宛てて送った、道徳的な内容を含む書簡などがある。 聖ニロスのすべての著作は、その内容の崇高さに加え、言葉の清らかさと優雅さを特徴とし、真摯な感情に満ち、神の光のように常に明瞭な思考の力に満ちている。

聖預言者アヒヤはシロの町[7802] の出身であり、ソロモンとエレボアムの治世[7803] に生きていました。ソロモンの治世中、彼はエレボアムに対し、ソロモンの王国の分裂と、そこから離反してイスラエル王国を形成した十部族の離反を予言しました。野原でエレボアムと二人きりで出会った際、アヒヤは身に着けていた衣を十二片に引き裂き、その中から十片をエレボアムに取らせるよう命じた。これは、イスラエルの神、主がソロモンの手から王国を奪い取り、十部族を彼の手に委ね、彼が神の道に従うならば、イスラエルを彼に与えるというしるしであった。　その後、エレボアムの息子アビヤが病に倒れた際、アヒヤはエレボアムの妻に対し、エレボアムの不義のゆえにその家系全体が滅ぼされ、イスラエルの民がユーフラテス川の向こうへと散らされることを予言した。アヒヤの預言は、アビヤの即死を皮切りに成就した。

ロストフの奇跡行者、聖ヨハネ・ブラサトの生涯

記念日：11月12日

福者ヨハネは、イヴァン・ヴァシリエヴィチ・グロズヌイの治世の頃、ロストフの街に住んでいた。出身地は不明である。　ロストフでは、キリストのために「聖なる狂人」として暮らし、定住する場所を持たず、時折、敬虔な未亡人の家や、彼の霊的指導者である全聖人の司祭ペトロの元に休息のために立ち寄るだけだった。　当時、ロストフには、有名なボリソグレブスの隠者である聖イリナルクと同様に、彼と対話を交わした「大帽子」の異名を持つ至福の聖人ヨハネも滞在していたが、彼は後にモスクワへ去り、そこでポクロヴァ・ナ・ルヴァに埋葬された。

至福のヨアン・ロストフスキーは、常にラテン語の『詩篇』が記された羊皮紙の本を携え、それを読んでいた。彼がいつ、どこでこの言語を学んだのかは不明である。

至福のヨハネの死は1580年9月3日に訪れた。　彼の遺体は、前述の敬虔な未亡人と、彼の霊的指導者であった司祭ペトロの尽力により、聖ヴラシイ教会の祭壇のそばに埋葬された。埋葬の際には、激しい嵐が吹き荒れ、稲妻が走り、雷が轟くといった異変が起きた。

福者のお亡くなりになった後、多くの人々がその棺を訪れ、教会で主なる神、　至聖なる聖母マリアと洗礼者ヨハネに祈りを捧げ、聖水を清めてもらい、それを至福のヨハネの墓から取った砂と混ぜて飲んだ。また、その聖水で痛む体を塗った者もおり、それぞれの信仰に応じて様々な病気から癒やされた。

至福のヨハネの棺のそばで起こった奇跡の話を耳にしたロストフ都主教キリル（[7804] ）は、老いに苛まれ、重い病に倒れ、手足も動かせない状態であったが、自分をヴラサエフスカヤ教会へ運び

[7802] シロムは、エフライム族の領地にある町で、約束の地のほぼ中央に位置している。ここには、ヨルダン川を渡り約束の地を征服した後、契約の箱を収めたモーセの幕屋が設けられたため、この町はその名（「シロム」＝平和、安らぎ）を得たのである。　この町はイスラエルにとって極めて重要な意味を持っていたが、その後、主はイスラエルの子らの罪ゆえに、シロにある御自身の住まいを捨てられた。

[7803] ダビデの息子であり、イスラエルの第三代王であるソロモンは、イスラエルの王たちの中で最も賢明で栄光に満ちた王であったが、後に堕落と偶像崇拝によってその治世を汚し、　このため、神はイスラエルの王国を彼の家系から引き離し、かつてソロモンの奴隷であったが、ソロモンの王国の分裂後にイスラエル王国の初代王となったエロボアムに、10部族の支配権を与えた。預言者アヒヤの活動は、このように紀元前1010年から963年にかけて行われた。

[7804] 1605年からロストフ都主教区を統括していたが、大動乱の間に主教座から追放され、1612年、ポジャルスキーとミニンがモスクワの解放に向けて進軍していた際に再びその座に就いた。　キリル大主教は、ボリス・フェドロヴィチ・ゴドゥノフ皇帝の臨終に立ち会い、モスクワ近郊で、スムータ後に新たに選出されたミハイル・フェドロヴィチ・ロマノフ皇帝を出迎え、即位式を執り行った。

、聖ヨハネの聖像と、至福のヨハネ・ヴラサトの棺のそばへ連れて行くよう命じた。　祈祷会の最中、聖福音書の朗読が行われていると、病に伏していた聖職者はたちまち病の癒やしを感じ、手も動くようになったため、再び聖職の務めを果たし、ロストフ都主教区を統治することが可能となり、その後さらに1年5ヶ月を生き延びた[7805]。

至福のヨハネの棺の前では、信仰をもって駆けつけた病人たちに対して、多くの奇跡的な癒やしが起こった。これらの奇跡は記録され、ミハイル・フェオドロヴィチ皇帝にも報告された。

ある敬虔な商人は、自身と自分の家の上に神の御慈悲と多くの癒やしを目撃し、この福者ヨハネの棺の上に教会を建立した。

現在、至福のヨハネの聖遺骨は、18世紀に建設された、聖ヨハネ・洗礼者および聖殉教者ヴラシイに捧げられた小聖堂を併設する、トルグの聖母イコン石造教会の左側の聖所の下に安置されている。

墓のそばには、古くから、この福者の大きなキパリス製の十字架と、美しいゴシック体で書かれた羊皮紙の詩篇集が置かれている。　この写本にある記述の一つによると、聖ディミトリ・ロストフスキーは、1702年にロストフ都主教区に着任した際、ロストフの教会を視察し、この詩篇集に目を留め、その老朽化に気づくと、新たに装丁し直し、これまで通り至福者の墓の上に保管するよう命じたという。　ラテン語で書かれた別の記述には、「私はこの本を最大の敬意を込めて手に取り、口づけをした。ヤロスラヴリ大司教ニル。1856年5月14日」と記されている[7806]。

11月26日

11月13日（旧暦）

コンスタンティノープル総主教、聖ヨハネ・クラマトリオス（金口）の生涯

記念日：11月13日

聖ヨハネス・クラウディオス（金口）、世の灯、宇宙の教師、教会の柱であり支え、悔い改めの説教者は、シリアのアンティオキア出身で、347年頃に生まれた。両親のセクンドとアンフサは、アンティオキアの良家出身であり、キリスト教の信仰を公言していた。　セクンドは軍司令官として名誉ある地位に就いていたが、ヨハネがまだ幼い頃に亡くなったため、息子の教育に影響を与えることはできなかった。そのため、ヨハネの教育に関するすべての責任は、敬虔な母アンフサの肩にかかった。　非常に若い年齢（当時彼女は20歳前後だった）で夫を亡くした彼女は、再婚を望まず、息子の教育に全身全霊を捧げた。幼いヨハネがキリスト教の真理と敬虔さについて最初の教えを受けたのは、まさに彼女からであった。

[7805] キリル大主教の癒やしの奇跡は1618年のことである。

[7806] 17世紀からロストフで編纂・加筆が続けられてきた「ロストフの奇跡行者、至福のヨハネ・慈悲深き・髭の長い者に関する伝承」は、ヤロスラヴリ教区新聞（1860年および1877年）に2つの版で度々掲載され、また個別の小冊子（1877年および1884年）としても出版された。　（1860年および1877年）や、個別の小冊子（1877年および1884年）として度々刊行された。

息子をキリスト教の信仰にしっかりと根付かせた後、アンフサは彼をソフィストのリヴァニウスと哲学者アンドラガフィオスの元へ預け、修辞学と哲学を学ばせた[7807]。 その後、ヨハネスが18歳になったとき、彼はまだ聖なる洗礼を受けていなかったが（当時の慣習では、洗礼は成人してから受けるものだった）、修辞学と哲学をさらに磨くためにアテネへ送られた[7808]。 そこで学業に励むうちに、ヨハネはまもなく同世代の若者たちや多くの哲学者たちをその知恵で凌駕するようになった。彼はギリシャのあらゆる書物や学問を修め、賢明な哲学者であり、雄弁な演説家となったからである。

アテネでは、彼は哲学者アンフィミオスという、自身に対して極めて悪意に満ちた敵を抱えていた。アンフィミオスは、ヨハネの誉れ高い名声に嫉妬し、彼を中傷して、他の人々に彼に対する憎悪を煽った。しかし、聖人は神の助けにより、その敵を恥じ入らせると同時に、多くの人々をキリストへと導いた。 この出来事は、 、次のようにして起こった。アンフィミオスがヨハネとの論争の中で、我らの主イエス・キリストを冒涜する言葉を口にし始めたとき、突然、不浄な霊が彼に襲いかかり、彼を苦しめ始めたのである。 アンフィミオスは地面に倒れ、全身をよじりくねらせ、口を大きく開けて泡を吹いた。これを見た周囲の人々は皆、恐怖に震え、多くの者が恐怖のあまり逃げ出した。残った者たちは、ヨハネに、その悪霊に取りつかれた者を赦し、癒やしてくれるよう懇願した。ヨハネはこう答えた。

「もし彼が悔い改めず、かつて冒涜したキリスト・神を信じないならば、癒されることはない。」

アンフィミオスは即座に叫んだ。

「私は告白します。天にも地にも、ヨハネが告白する方以外の神はいないと。」

彼がそう言い終えるや否や、汚れた霊が彼から出て行き、アンフィミオスは健康な姿で立ち上がった。この奇跡を目撃した民衆は皆、こう叫んだ。

「キリスト教の神は偉大だ！ 奇跡を行われるのは神ただお一人だ！」

聖ヨハネは、アンフィミオスに神の御子を冒涜することを禁じ、彼に真の信仰を教えた後、彼をアテネの司教のもとへ送り出した。そしてアンフィミオスは、家族全員と共に、その司教から聖なる洗礼を受けた。アンフィミオスと共に、多くの名士たちも信仰を受け入れ、洗礼を受けた。 ヨハネの働きによってギリシャ人たちがキリストへと回心したことを知った司教は、ヨハネを聖職に叙任し、アテネに留めておくことを決めた。それは、すでにかなり高齢となっていた司教自身の死後、ヨハネが司教の座を引き継ぐためであった。 しかし、聖ヨハネはこの意図を察すると、密かにアテネを離れ、故郷のアンティオキアへと戻った。

この虚しい世の空しい名声や、あらゆる世俗的な栄誉を軽んじ、彼は謙虚な修道生活を送り、天使のような姿に身を包んで神のために奉仕することを決意した。聖ヨハネをそう導いたのは、同じくアンティオキア出身の友人ヴァシレイオス[7809]であった。 幼少期を共に過ごし、同じ師に教えを受け、心を通わせ、同じ気質を持っていたため、互いに深い愛情を抱いていた。このヴァシリーは、当初自ら修道者の衣をまとい、同年代の聖ヨハネに対しても修道生活を選ぶよう勧めた。

その良き助言に従い、ヨハネは直ちに修道院へ赴き、修道士になりたいと願ったが、母親に引き留められた。母親はヨハネの意図を知ると、涙ながらに彼にこう語りかけた。

7807 ソフィストとは、修辞学の教師や弁護士のことを指した。リヴァイオスは修辞学の教師として高い名声を博しており、ユリアヌス・アポステートが彼に師事した。また、教父たちの中では、バシレイオス大帝が当時の深遠で真摯な哲学者の一人として知られている。

7808 アテネは、バルカン半島の南東部に位置するギリシャの首都である。金口ヨハネの時代、この街は哲学学校や修辞学学校で名高かった。ここでは、裕福で教養のある若者たちが学んでいた。ちなみに、バシレイオス大聖やグリゴリオス神学者など、一部の教父たちもここで学んだ。

7809 このバシレイオスを、カッパドキア出身で、ヨハネスがまだ少年だった頃にすでに高い聖職に就いていた有名な教父バシレイオス大聖人と混同してはならない。彼は370年にはすでに司教となっており、379年に死去した。

「我が子よ！　あなたのお父様との共同生活は、私にとって長くは続きませんでした。神の御心によりお父様が亡くなられたことで、あなたは孤児となり、私は未亡人となりました。しかし、いかなる災難も、私を再婚へと追いやり、あなたの父の家に別の夫を招き入れるよう強いることはできませんでした。　神の御加護により、私は未亡人としての不幸を辛抱強く耐え忍び、父に似たあなたの顔を絶えず見つめることから、大きな慰めと安らぎを得てきました。その間、私はあなたの父の財産を浪費することなく、あなたの生活に必要な分としてそのまま残しておきました。　だから、どうかお願いだ、我が子よ、私を二度目の未亡人の身にはしないでほしい。また、あなたの去りによって、私の中で静まり返っていたあなたの父への悲しみを再びかき立てないでほしい。私が日々待ち望んでいる死が来るまで待っていてほしい。あなたが私をあなたの父の墓のそばに葬った後、その時はあなたの望むようにしてよい。　さあ、今は私のそばにいて、私がまだ生きている間、もう少し待っていてほしい」。

母のこうした懇願に心を動かされ、ヨハネは当分の間、家を出ないことに決めた。しかし、家に留まりながらも、彼は明るい色の服を質素な服に着替え、祈りと神の御言葉の研鑽に時間を費やす隠遁生活を送るようになった。　この頃、ヨハネは高潔な生活を送っていたアンティオキアのメレティオス司教と親しくなり、司教はヨハネに一刻も早く洗礼を受けるよう説得し、彼に洗礼を授けた後、教会の朗読者とした。ヨハネはこの職に三年間留まった。　その頃、ヨハネの母が亡くなった。母を葬り終えると、ヨハネは直ちに全財産を貧しい人々に分け与え、奴隷たちを解放し、自らも修道院（[7810]）に入会して修道士となり、昼夜を問わず主のために多大な労苦と献身を捧げて働いた。そこで彼は、『司祭職について』、『心の砕きについて』といった多くの有益な教えを含む書物や、『堕落した修道士テオドロスへの書簡』[7811]を著した。

聖ヨハネは、神から教導の賜物と聖霊の恵みを受けており、それは、その修道院で修行していたイシキオという名の修道士に明らかにされた。高齢でありながら徳に満ちたイシキオは、透視の賜物を持っていた。　ある夜、彼が眠らずに祈りを捧げていたとき、心が高揚し、次のような幻視を目撃した。白い衣をまとい、太陽のように輝きながら天から降りてきた二人の威厳ある男性が、祈りを捧げて立っていた聖ヨハネのもとへ入ってきた。　そのうちのひとりは文字が書かれた巻物を、もうひとりは鍵を手にしていた。彼らを見たヨハネは戸惑い、急いで地面にひれ伏して礼拝した。すると、その二人の男はヨハネの手を取り、彼を立ち上がらせながらこう言った。

「安心しなさい。恐れることはありません！」

ヨハネは彼らに尋ねた。

「あなた方はどなたですか、ご主人様方？」

彼らは即座にこう答えた。

[7810] この修道院はアンティオキアの近く、それに隣接する山々に位置していた。

[7811] 「聖職について」という著作は、次のような経緯で金口ヨハネスによって執筆された。聖ヨハネスが友人のヴァシレイオスと共に世俗の事柄から離れた場所で暮らしていた時、アンティオキアに集まった司教たちは、二人を共に司教に任命しようと企てた。この噂はヨハネスとヴァシレイオスの耳にも入った。　ヨハネは、キリストの教会の牧者としての職務を適切に果たす準備ができていないと考え、誰からも、さらには友人のバシレイオスからも密かに身を隠し、荒野へと逃げ込んだ。一方、バシレイオスはアンティオキア近郊のラファナ市の司教に任命された。　その後、ヨハネと再会した彼は、聖職を避けたことを友として叱責した。この叱責に対し、聖ヨハネは司祭職について六つの言葉を書いた。その中で、彼は牧会の奉仕の崇高な尊厳について雄弁に語っている。「テオドロスへの書簡」は、次のような経緯で書かれたものである。　テオドロスはヨハネの友人であり、当初は修道生活を送ることを決意していたが、後にその決意を翻し、隠遁生活を捨てて結婚してしまった。これに心を痛めたヨハネは、テオドロスに二つの極めて力強い書簡を書き送った。その中で、世の虚しさを鮮烈に描き出し、友人を修道生活へと呼びかけている。　その書簡はテオドールに効果をもたらし、彼は再び修道生活に戻り、その後、モプスエテス（小アジア南東部）の司教となった。

「恐れるな、願いを叶える者よ、心の清らかさゆえに聖霊が宿ることをお許しになった、新たなダニエルよ！我らは、偉大なる師であり、我らの救い主であるイエス・キリストによって、あなたのもとへ遣わされたのだ。」

その言葉に続き、現れた男の一人が手を伸ばし、ヨハネに巻物を差し出しながら言った。

「この巻物を私の手から受け取れ！　私はヨハネだ。最後の晩餐の際、主の胸に寄り添い、主から神聖な啓示を授かった者である。[7812] 主は、あなたにも知恵の深遠なすべてを授けてくださる。そうして、あなたが人々をキリストの教えという朽ちることのない糧で養い、神を冒涜する異端者やユダヤ人たちの口を、あなた自身の口で封じることができるように。

もう一人は、ヨハネに向かって手を差し伸べ、鍵を渡し、こう言った。

「この鍵を受け取れ。私はペトロであり、御国の鍵を託されている者だからだ。主はあなたにも聖なる教会の鍵を授ける。あなたが誰を縛れば、その者は縛られ、誰を解けば、その者は解かれるように。」

至福のヨハネは再びひざまずき、現れた使徒たちにこう言いながら礼をした。

「私のような罪人であり、すべての人の中で最も卑しい者が、どうしてこれほど偉大で恐ろしい務めを引き受け、担うことを敢えてできるでしょうか？」

しかし、現れた聖なる使徒たちは再び彼の右手を握り、彼を立ち上がらせながらこう言った。

「立ち上がりなさい。勇気を出し、力を振り絞り、私たちの主イエス・キリストがあなたに求められていることを行いなさい。それは、主がご自身の血を流して救われた人々を聖別し、確固たるものにするためです。神の御言葉を教えなさい。そして、大胆にこう言われた主を思い起こしなさい。*『恐れるな、小さな群れよ！　『あなたがたの父は、あなたがたに御国を与えることを喜ばれるからである』*」（ルカ12:32）[7813]。だから、あなたも恐れてはならない。私たちの神であるキリストは、あなたを通して多くの魂を聖別し、彼らを御自身を知るよう導くことを喜ばれるからだ。　真理のために、あなたは多くの災難や苦難に遭うでしょうが、堅固なダイヤモンドのようにそれらに耐え忍びなさい[7814]。そうすれば、その道を通じて神の御国を相続することになるのです。

そう言うと、現れた男たちはヨハネに十字の印を結び、主の御名によって彼に口づけをして、その場を去った。聖イシキオスは、この出来事を、修業に熟達した他の兄弟たちに語った。彼らは驚き、密かに修業に励む御自分のしもべたちを見守っておられる神を賛美した。　その際、イシキオスは、ヨハネがそのことを知って彼らのもとを去り、こうして偉大なる神の御心にかなう者との共同生活を失うことのないよう、この幻視について誰にも話さないよう彼らに命じた。

一方、至福のヨハネは、言葉と行いによって労苦し、怠ることなく自らの救いを求めた。自らも立派に修業に励む傍ら、他の人々を修業へと導き、怠惰な者たちを奮い立たせ、彼らが天上のものを追い求め、自らの肉体を死なせ、それを霊に服従させるよう促した。　修道院で神に喜ばれる働きに励む中、この聖人はこの期間に多くの奇跡を起こした。

アンティオキアに住むある裕福で名門の出身の男は、激しい頭痛に悩まされ、そのせいで右目が飛び出し、頬にぶら下がっていた。　彼は多くの財産を腕の良い医師たちに費やしたが、彼らからは何の救いも得られなかった。そこで、聖ヨハネの噂を耳にした彼は、修道院を訪ねてきた。聖人の前に進み出ると、その足を抱きしめ、口づけをしながら、聖人に癒やしを懇願した。

聖ヨハネは彼にこう言った。

[7812] すなわち、聖使徒にして福音記者、神学者ヨハネのことである。

[7813] この箇所において、主は弟子たちに対し、地上のものに執着することなく、まず天の御国を求めるよう諭しておられる。「小さな群れ」とは、まず第一に弟子たち、そして次にキリストのすべての信徒、すなわち天の御国へと神によってあらかじめ選ばれた者たちを指す。

[7814] アダマントとは、ダイヤモンドのことで、他の石を切り裂く最も堅い石である。

「そのような病は、人々の罪と信仰の薄さゆえに降りかかるものである。それゆえ、もしあなたが全き魂をもって、キリストにはあなたを癒やす力があると信じ、自分の罪から離れるならば、神の栄光を見るだろう。」

病人は答えた。

「信じます、神父様。あなたが命じられることは何でもいたします。」

そう言うと、彼は聖ヨハネの衣をつかみ、それを自分の頭と患部の目に当てた。すると病はたちまち治まり、目は正常な位置に戻り、その男はまるで一度も病気になったことがなかったかのように健康を取り戻した。神を賛美しながら、彼は家路についた。

また、アンティオキアの長老であるアルケライという名の男も、顔にハンセン病を患っており、癒やしを求めて聖ヨハネのもとを訪れた。　ヨハネは彼に信仰の真理を教え、修道院の兄弟たちが飲んでいる水で額を洗うよう命じた。そうすると、その病人はハンセン病から清められ、世俗を離れて修道士となった。

また、幼い頃から右目が不自由だったエウクリウスという人物が、至福のヨハネがいたその修道院を訪れ、修道者の生活を送るようになった。ヨハネは彼にこう言った。

「神があなたを癒やし、兄弟よ、あなたの魂と肉体の目を照らしてくださいますように。」

聖人がこの言葉を口にした途端、エウクリウスの失明していた右目が突然開かれ、病人ははっきりと物を見る能力を得た。この奇跡を目撃した修道者たちは驚き、こう言った。

「まことに、ヨハネは神のしもべであり、彼の中には聖霊が宿っている。」

クリスティーナという名の女性が、出血の病を患っていたため、夫に聖ヨハネのもとへ連れて行ってくれるよう懇願した。夫は妻をロバに乗せ、修道院へ向かい、修道院の門の前に彼女を残して、自ら聖人のもとへ入り、妻の病を癒やすよう懇願した。聖ヨハネはその男にこう言った。

「妻にこう伝えなさい。彼女は悪しき気性を改め、奴隷たちへの扱いを残酷にしないようにしなさい。彼女もまた、彼らと同じ土から造られたのだということを心に留めなさい[7815]。」そして、貧しい人々に施しをし、祈りを怠ることなく、自分の魂の救いを大切にさせなさい。また、断食の日や聖なる日には節制し、身を清く保ちなさい。そうすれば、神はあなたの妻に癒やしを授けてくださるだろう。

その場を離れた夫は、聖人から聞いたことをすべて妻に話した。妻は、最期の息を引き取るまで、命じられたことをすべて守ることを、全力を尽くして誓った。夫は聖人のもとに戻り、妻の誓いについて伝えた。すると聖人はこう答えた。

「平安のうちに去りなさい。主はすでに彼女を癒やされた。」妻のもとに戻ると、夫は彼女が癒やされているのを見つけ、二人は喜びながら神を賛美しつつ家路についた。

ちょうどその頃、ヨハネが修行していた修道院の近くで、凶暴なライオンが現れ、道を徘徊しながら人や家畜を食い荒らしていた。近隣の村人たちは何度も集まり、武器や矢を持ってその獣を待ち伏せし、仕留めようと試みたが、そのたびに失敗に終わった。　樫の森から飛び出してきたその獣は、猛烈な勢いで人々に襲いかかり、多くの人を殺害し、他の人々には重傷を負わせてかろうじて逃げ延びさせるにとどめ、また一部の人々を生きたまま巣穴へと連れ去り、そこで食い殺した。　ヨハネのもとを訪れた近隣の村人たちは、このことを彼に伝え、祈りによって助けてくれるよう懇願した。ヨハネは懇願する者たちに木製の十字架を与え、獣が現れる場所にそれを立てよと命じた。　村人たちはその通りに実行し、数日後、獣が現れなくなったことに気づいた。そこで村人たちは　十字架のある場所へ向かい、そこでライオンの死骸を見つけた。聖ヨハネの祈りにより、十字架の力によってこの災いから救われた彼らは、喜び、神の御使いを賛美した。

[7815] ブレニエとは、粘土、泥、大地の土のことです。

ヨハネはその修道院に4年間滞在した。その後、より深い隠遁生活を望み、密かにそこから砂漠へと去り、そこで洞窟を見つけ、2年間にわたりそこで独り暮らしをした。

二年の月日が過ぎ、過酷な修行に疲れ果て、寒さに苦しんでいたヨハネは病に倒れ、もはや自分の身の回りの世話もできなくなってしまった。そのため、彼は荒野を離れ、アンティオキアに戻らざるを得なかった。　これは、神の御摂理と教会への御計画によるものであり、そのような灯が砂漠に隠されたまま、あたかも隠し物のようにされることなく、すべての人々に光を照らすためであった。主はヨハネが病に倒れることを許され、そのようにして彼を獣たちとの生活から人々との共同生活へと導き出し、彼が自分自身のためだけでなく、他の人々のためにも役立つようにされたのである。

祝福されたヨハネがアンティオキアに到着すると、至聖なるメレティオス総主教は喜びをもって彼を迎え入れ、住居を与え、自身の元で暮らすよう命じ、まもなく彼を助祭に叙階した。　この奉仕の職に就いて六年間を過ごし、その徳高い生活と魂に益となる著作によって、神の教会を輝かせた。　助祭としての期間中、聖ヨハネは次の著作を著した。『貞潔に関する書』、『若い未亡人への手紙』、そして信仰擁護に関する『至福のバビルに関する説教、ならびにユリアヌスへの反論、および異教徒への手紙』[7816]。

この頃、聖メレティオスは、聖グリゴリオス・ナジアンゾスを総主教に就任させるため、コンスタンティノープルへ向かう必要があった。同地に到着して間もなく、聖メレティオスは主のもとで息を引き取った。　総主教の死を耳にしたヨハネは、再びアンティオキアを離れ、当初滞在していた修道院へと退いた。修道士たちは彼の帰還を喜び、霊的な祝宴を催し、彼からいつもの教えを受けた。沈黙の中で神に奉仕しながら、ヨハネはそこで3年間を過ごした。

アンティオキア教会の座にはフラヴィアンが就いた[7817]。ある夜、彼が祈りを捧げていると、主の天使が現れてこう言った。

「明日、神の御心に適う者ヨハネが滞在している修道院へ行き、彼をそこから街へ連れ出し、長老に任命せよ。彼は神に選ばれた器であり、神は彼を通して多くの人々を真の信仰へと導きたいと望んでおられるからだ。」

ちょうどその頃、聖ヨハネもまた、いつもの習慣に従って独房で夜の祈りを捧げていたところへ、天使が現れ、フラヴィアヌスと共に町へ行き、彼から叙階を受けるよう命じた。　日が明けると、総主教が修道院を訪れた。祝福されたヨハネと共に、すべての修道士たちが総主教を出迎えた。彼らは総主教に頭を下げて礼拝し、祝福を受けた後、相応しい敬意を払って総主教を教会へと案内した。　聖なる典礼を執り行い、すべての人に神の秘跡を授けた後、総主教は修道者たちに平安を告げ、ヨハネを連れて街へと去っていった。修道者たちは、神の聖なる御使いと別れることに、悲しみのあまり声をあげて泣いた。

翌日、朝、ヨハネの司祭叙階式が執り行われた。総主教が彼の頭に手を置いたとき、突然、白く輝く鳩が現れ、聖ヨハネの頭上を飛び回った。フラヴィアン総主教と教会にいた者たちは皆、驚愕し、長い間その光景に見入っていた。 この奇跡の噂は、アンティオキア、シリア[7818]、そして周辺の町々に広まり、それを聞いた人々は皆、こう言った。

「ヨハネは一体どうなるのだろうか。見よ、最初から主の栄光が彼の頭上に現れたのだ！」

[7816] 『貞潔について』および『未亡人への手紙』は、最も崇高な思想に満ちている。これらにおいて聖ヨハネは、肉体の清らかさの擁護者として立ち上がり、肉の誘惑との戦いにおいて精神を強めるための手段を示している。　ユリアヌスに対する論考において、彼は主に神の摂理について論じ、聖なる洗礼によって啓蒙されながらもキリストの信仰を裏切り、異教徒となり、キリスト教徒の敵となった皇帝ユリアヌスの背教を糾弾している。　歴史上、ユリアヌス「背教者」は、異教を熱心に擁護し、キリスト教に対して優位に立たせようとした人物としても知られている。

[7817] 聖フラヴィアヌスは、メレティオスの死後、381年から404年までアンティオキアの大司教を務めた。

[7818] シリアとは、地中海東岸に位置し、タウロス山脈、ユーフラテス川上流、およびアラビア砂漠に囲まれた沿岸地域を指す。

長老の位についたヨハネは、さらに熱心に人々の魂の救いに尽力した。　週に一度か二度、時には毎日さえ、彼は教会で民衆を教え、説教壇から説教を述べた。ある時、ある教会で説教を終えた後、彼は疲れ果てて、司教が奉仕する大聖堂へと向かっていたが、司教は皆の願いに応えて、彼に再び説教をするよう依頼した。　の司祭職の期間中、聖ヨハネは数多くの説教を行い、そのうちのいくつかは現代まで伝わっている。その際、彼は教会の説教壇の上から、熱心に聖書の解説に励んだ。彼は旧約聖書の多くの書物、マタイによる福音書とヨハネによる福音書、使徒言行録について、極めて霊的に有益な解説を著した。とりわけ、異邦人の使徒パウロの手紙を愛し、その多くを説教の中で民に解き明かした。

聖ヨハネス・クラマトルスは、しばしば即興で説教を行いましたが、これにはアンティオキアの住民全員が大変驚き、この福者を称賛しました。というのも、それまで誰も本やノートなしで神の御言葉を説教したことがなかったからです。彼らの間で、そのような説教者となった最初の人がヨハネスでした。　彼の教えはこれほどまでに力に満ちていたため、聴衆は皆、それを十分に味わうことができなかった。それゆえ、多くの速記者がヨハネの説教を羊皮紙に書き留め（[7819] ）、それを書き写して他の人々に伝えた。彼の教えは食事の席や広場でも読まれ、聴衆は詩篇のように、彼の言葉を口頭で学び取った。　ヨハネは、その雄弁さと誰に対しても親しみやすい教師としての姿から、街には彼の話を聞きたがらない者は一人もおらず、ヨハネが説教をしようとしていると知ると、皆が喜びながら教会に集まってきた。　市の役人や裁判官は職務を、商人は商売を、職人は仕事を中断し、ヨハネの教えを聞きに急いで向かい、彼の口から発せられる言葉を一つも聞き逃さないよう心を配った。　ヨハネの甘美な言葉を聞くことができないのは、皆にとって大きな損失だと考えられていた。だからこそ、彼には様々な称賛の呼び名が与えられた。ある者は彼を「神とキリストの口」と呼び、ある者は「甘美な語り手」、またある者は「蜜を滴らせる者」と呼んだ。

特に司祭職の初期には、この聖人が説教を行う際、その内容が教育水準の低い聴衆には必ずしも理解できないことがあった。ある時、ある女性が、話を聞きながらもその意味を理解できず、群衆の中で声を張り上げてヨハネにこう言った。

「霊的な師よ、いや、むしろ『ヨハネス・クラウディオス』と呼びましょう。あなたの聖なる教えの泉は深遠ですが、私たちの知恵の糸は短く、その深みに達することができません。」

すると、民の多くがこう言った。

「神ご自身が、女性の口を通してヨハネにこの名を与えられたのだ。それゆえ、これからは彼を*『金口』*と呼ぼう。」

実際、その時から現在に至るまで、教会はこの称号をヨハネに与え続けてきた。

民衆に対して難解な説教をするのは不適切であると判断した聖ヨハネは、それ以来、最も素朴な聴衆でさえも理解し、益を得られるよう、洗練された雄弁さではなく、単純で教訓的な言葉で語りかけるよう努めた。　アンティオキアの住民たちにキリスト教の信仰と生活について教えを説く一方で、聖ヨハネス・クラマトルスは、社会的な災難に見舞われた際には、同胞たちの慰め手としても振る舞った。

アンティオキアでは、貧しい市民にとって過酷な税の賦課をきっかけに、民衆の暴動が起こった。激昂した群衆は、街に立っていた皇帝とその家族の像を引き倒し、粉々に打ち砕いた。しかし、まもなく、狂乱の怒りの代わりに恐怖と絶望が広まった。　アンティオキアの住民たちは、反乱を起こした者たちに対する皇帝の怒りが下るのを待ち始めた。民衆の願いに耳を傾けた敬虔なアンティオキアの聖フラヴィアヌスは、過ちを犯した都市のために皇帝のもとへ嘆願に向かった。一方、聖ヨハネは、苦しむ魂たちを慰め、癒やすために街に残された。　四旬節が訪れ、それはアンティオキアの

[7819] 当時、筆記に用いられていた羊皮紙、皮のシート、パピルス、その他の素材の上で。

民にとって、まさに悔い改めと悲しみの時となった。　毎日、神の灯火であるヨハネは教会の説教壇に立ち、民衆に向けて力強い慰めと教訓の言葉を語った。彼は、民衆の確固たる決意と勇気を支えたり、皇帝の慈悲への希望を甦らせたり、来世への期待を掻き立てたりした。　同時に、彼は同胞たちの悪徳――富裕層の吝嗇、貪欲、放蕩、偽善、残虐、迷信――を糾弾し、こうした悪徳によってアンティオキアの人々が都市にこのような不幸を招いたと説き、改心するよう説得した。　おそらく、四旬節がこれほど厳格に守られ、すべての住民を包み込むような悔い改めの心をもって行われたことは、かつてなかっただろう。人々は群れをなして教会へ赴き、金口聖人の説教を熱心に聞き入り、その言葉の中に自らの悲しみの慰めを見出していた。　その間、聖フラヴィアヌスは皇帝のもとへ赴き、弁護の言葉を述べた。すると、キリスト教徒である皇帝は、最高権威を侮辱した者たちを赦した。恩赦の知らせは、フラヴィアヌスによって　復活祭の当日そのものに伝えられた。祝祭の初日、聖ヨハネは民にこの吉報を告げ、最後にこう語った。

「霊的な喜びをもって喜びなさい。災いが終わったことだけでなく、神がそれらを送ってくださったことに対しても、神に感謝しなさい。」

このように語った聖ヨハネは、終息した災難が、アンティオキアの人々に悔い改めの心を呼び起こし、霊的な生活を目覚めさせる上で重要な役割を果たしたことを念頭に置いていた。

この神の御使いは、言葉だけでなく行いにおいても力強い人物であった。キリストの力によって、彼は奇跡を行い、病人を癒やした。ここに、聖人の奇跡のいくつかを挙げる。

エウクリアという名の女性が、一人息子を一人持っていたが、その子は熱病にかかり、すでに死の淵に立っていた。聖人のもとを訪れたエウクリアは、病人を癒やしてくれるよう懇願した。ヨハネは水を取り、聖三位一体の名においてその水の上で三度聖十字架の印を結び、病人に振りかけた。高熱はたちまち治まり、病人は元気を取り戻して立ち上がり、聖人に頭を下げた。

アンティオキアの要塞の司令官は、マルキオニ派の異端の信奉者[7820]であり、敬虔な人々に多くの害を及ぼしていた。彼の妻は、いかなる治療法でも根治できない激しい病に冒されていた。　その凄まじい病が日ごとに悪化していく中、要塞の司令官は異端者たちを自宅に呼び寄せ、妻を助けてくれるよう懇願した。異端者たちは三日以上もの間、絶え間なく熱心に病人のために祈り続けたが、成果は得られなかった。そこで妻は夫にこう言った。

「フラヴィアヌス司教のもとに住んでいるヨハネという名の長老の話を聞いたことがあります。彼はキリストの弟子であり、もし彼が神に何かを願えば、神はそれを叶えてくださるそうです。お願いだから、私をその人のところへ連れて行って。私の回復のために祈ってもらいたい。だって、彼は多くの奇跡を起こしていると聞いたから。マルキオニ派の人たちは私には全く役に立たない。それこそが、彼らの不敬虔さを如実に示している。もし彼らに正しい信仰があったなら、神は彼らの祈りを聞き入れてくださったはずだから。

夫は妻の言うことを聞き入れ、彼女と共に正教会へと向かった。　しかし、異端者であった彼は、彼女を教会の中へ連れ込むことを敢えてせず、教会の扉の前に寝かせ、フラヴィアヌス司教とヨ

[7820] マルキオニズムの異端は、西暦2世紀に生きたマルキオンにちなんで名付けられた。マルキオンは、神だけでなく、世界を創造した物質（マテリア）とその支配者であるサタンもまた永遠であると説いた。　マルキオンは、世界の創造を神ではなく、神と物質の中間的な存在である下位の存在――デミウルゴス――の仕業であると見なした。人間の魂もまたデミウルゴスの創造物であり、そのすべての性質を備えている。すなわち、魂は目に見える世界よりも幾分霊的なものである。しかし、物質は次第に魂を飲み込み始めた。　デミウルゴスが人類をそのような飲み込みから救おうとしたあらゆる努力は、何の結果も生まなかった。そこで、慈愛に満ちた神は地上に降り立ち、幻の肉体を受け入れ、人々に慈悲と愛の神として自らを現した。　しかし、デミウルゴスはその栄光を妬み、ユダヤ人たちを扇動して救い主を十字架につけさせた。だが、救い主の苦しみは幻に過ぎなかった。なぜなら、その肉体は霊的なものであったからである。このように、マルキオンは救い主の贖いの苦しみを認めず、そのすべての業を、人々に神の真理を教えることだけに帰していた。

ハネ長老のもとへ使いを送り、重病に苦しむ妻の回復を主イエス・キリストに祈ってほしいと頼んだ。司教はヨハネと共に彼らのところへ出てきて、こう言った。

「もしあなたがたが自らの異端を捨て、聖なる使徒的公会議の教会に加わるならば、キリスト・神から癒やしを受けるだろう。」

彼らがそうすると、ヨハネは水を運ばせるよう命じ、フラヴィアヌスに水の上で十字の印を切るよう求めた。　フラヴィアヌスは聖人の願いを聞き入れた。ヨハネは、その水を病人に注ぐよう命じると、彼女は即座に立ち上がり、神を賛美した。この驚くべき奇跡の後、要塞の司令官は妻と共に聖なる教会に帰依した。　この改宗を機に、正教徒の間には大きな喜びが広がった。一方、異端者たちは大いに動揺し、ヨハネに対して怒りを抱き、至る所で彼に対する冒涜や中傷を広め、彼が魔術師であり呪術師であると主張した。しかし、神はまもなく彼らの口を封じ、彼らに厳しい罰を下された。その経緯は次の通りである。

アンティオキアで起きた大地震の際、異端者たちが集会を開いていた神殿が崩れ落ち、その瓦礫の下で彼らの多くが命を落とした。　一方、正教徒のうち、この地震で命を落とした者は一人もいなかった。これを見た生き残った異端者たちだけでなく、異教徒たちまでもがキリストの力を悟り、聖ヨハネの導きを受けて、真の神へと立ち返った。

コンスタンティノープル総主教ネクタリオス（[7821]）――ナジアンゾスのグリゴリオスの後継者――の死後、総主教の座にふさわしい人物が長い間見つからなかった。そこで、皇帝アルカディウスにヨハネのことが伝えられた（彼の名声は至る所に広まっていたからである）。　皇帝は直ちにフラヴィアヌスに書簡を送り、聖人をコンスタンティノープルへ送り出すよう命じた。これを知ったアンティオキアの民は、ヨハネへの愛に燃え、教会に集まった。　師を失いたくないと願った民衆は、皇帝の使節たちに抵抗し、自国の総主教の説得にも耳を貸さず、ヨハネを連れ去ることを許さなかった。また、神に愛された聖人自身も、自らの謙遜さから、総主教の位にふさわしくないと判断し、コンスタンティノープルへ行くことを望まなかった。　このことを知った皇帝は驚き、なお一層、ヨハネを総主教の座に就かせたいと強く願うようになった。彼は東方総督アステリウスに、ヨハネをアンティオキアから密かに連れ出すよう命じ、その命令は実行された。

ヨハネスがコンスタンティノープルに近づくと、皇帝から派遣された多くの高官たちを先頭に、街全体が彼を出迎えた。皇帝は、聖職者会議および民衆と共に、聖ヨハネスを栄誉をもって迎え、皆、この教会の灯火が総主教の座に就くことを喜んだ。

ただ、アレクサンドリアの総主教テオフィロス[7822]とその同調者たちだけは喜ばなかった。彼はヨハネの名声に嫉妬し、彼を憎み、自分の配下にある司祭イシドールを総主教の座に就かせようと企んでいた。しかし、それは公会議の招集を妨げることはなく、その決議により聖ヨハネは総主教に選出された。

この福者は、398年2月26日に総主教の座に就いた。皇帝をはじめ、すべての公爵や貴族たちがヨハネのもとを訪れ、新たに就任した総主教から祝福を受けようとした。　王と民のために祈りを捧げ、皆を祝福した後、ヨハネは神の御言葉を語る口を開き、魂に有益な教訓を説いた。その中で、王に対し、正教の道を堅く守り、異端者を遠ざけ、頻繁に教会に通い、公正かつ慈悲深い者であるよう諭した。彼はこう語った。

[7821] 聖ネクタリオスは381年から397年までコンスタンティノープル教会を統率した。司教座に選出される前は元老院議員であり、洗礼を受ける準備をしていたばかりであった。選出後、彼は直ちに洗礼を受けた。彼の記念日は「チーズの土曜日」に行われる。

[7822] テオフィロスは385年から412年までアレクサンドリアの主教座に就いていた。

「あなたの敬虔さよ、知っておいてください。必要が生じた際には、あなたの魂の益となるために、戒めや叱責を述べることを私は恐れません。それは、預言者ナタンがダビデ王の罪を叱責することを恐れなかったのと同じです[7823]。」

ヨハネはまた、すべての宗教的・世俗的な指導者たちとその部下たちに対し、誠実に職務を全うするよう諭した。彼の教えの言葉を聞く者は皆、その言葉に心を和ませた。　ヨハネが信徒たちと語り合っていたとき、群衆の中に一人の悪霊に取りつかれた者がおり、発作に襲われて地面に倒れ込み、恐ろしい声で叫び立てたため、教会にいた者たちは皆、恐怖に襲われた。　至福のヨハネは、その男を自分のところへ連れてくるよう命じ、彼の上に十字の印を結び、悪霊を追い出して、その男に健康を取り戻させた。これを見た王と民衆は皆喜び、彼らにこれほど偉大な光――心と体の医者――を授けてくださった神を賛美した。

教会の統治を引き受けた聖なるヨハネ総主教は、キリストの御言葉の群れを熱心に牧し、あらゆる身分の人々（とりわけ聖職者たち）の中から悪しき慣習を根絶し、不純さ、嫉妬、偽り、そしてあらゆる神に背く行いを一掃した。　同時に、彼は道徳の清らかさ、愛、正義、慈悲を広め、人々の心に美徳を根付かせ、その金言を紡ぐ口で、すべての人を敬虔へと導いた。道徳的な堕落は聖ヨハネを深く傷つけたが、真摯な悔い改めがあれば、彼はすべてを赦した。

ある時、復活祭を目前に控えた頃、ヨハネは、彼がこれほど愛し、その魂の安寧をこれほど気にかけていた民の、不品行な振る舞いに心を痛めていた。受難週の水曜日、恐ろしい嵐が吹き荒れた。　恐怖に駆られた民衆は、神の慈悲を求め、教会へと駆け込んだ。共同の祈りと十字架の行列が始まった。災いは過ぎ去り、すでに聖金曜日と聖土曜日に至ると、民衆は神の御訪れを忘れ、サーカスや劇場での陽気な娯楽にふけっていた。　心の底から憤りを感じた聖なる牧者（　）は、復活祭の初日、恩知らずな信徒たちに向けて、有名な説教『娯楽に反対して』を語った。「これは許されることか？　耐えられることか？　あなた方自身に対して、あなた方を訴える」――聖なる説教者はこのように説教を始めた。　彼は、劇場が道徳に及ぼす破滅的な影響を明快かつ説得力を持って描き出し、罪ある者たちには破門を宣告すると脅した。この聖なる説教者の確信に満ちた言葉は、彼を慕う民衆に強い印象を与え、心からの悔い改めを引き起こした。

コンスタンティノープルだけでなく、周辺のすべての都市や村々においても、この神に愛された聖人は、人々の魂の救いに対して深い配慮を払っていた。　彼は、自身の聖職者の中から、経験豊富で神を畏れる者たちを派遣し、神の御言葉の説教によって正教を確立させ、不敬虔や異端を根絶し、迷える者たちを救いの道へと導かせた。彼は、フィニキアに何世紀にもわたって建っていた偶像崇拝の神殿を、根こそぎ破壊した[7824]。　また、アリウス主義に染まっていたケルト人[7825]を、賢明にも正教の信仰へと導いた。そのために選ばれた長老や助祭たちにケルト語を習得するよう命じ、彼らをケルト人の元へ派遣して、彼らの母語で敬虔さを説かせたのである。　同様に、ヨハネはドナウ川沿いに住んでいたスキタイ人[7826]を啓蒙した。彼は東方諸国からマルキオニ派の異端を駆逐し、真の教えの光で全世界を照らし出した。

[7823] ダビデは、アンモン人に対する遠征に出ていた戦士ウリヤから、その妻ビルサベを奪った。このダビデの罪を暴いたのは預言者ナタンであり、彼はユダヤの王に多大な影響を与え、王は自らの罪を悔い改め、「神よ、あなたの大きな憐れみによって、私を憐れんでください」という言葉で始まる有名な詩篇を詠んだ。

[7824] フェニキアは、パレスチナの北、地中海東岸に沿って伸びる細長い土地である。ここでは、政府の禁止にもかかわらず、異教が大きな自由を享受していた。

[7825] ケルト人とは、古代に西ヨーロッパ、すなわち現在のイギリス、スペイン、イタリア、スイス、そして特にフランスに居住していた広範な民族を指す。彼らは小アジア（ガラティア地方）にも居住しており、そこではガラティア人と呼ばれていた。　時が経つにつれ、ケルト人は一部がゲルマン人や古代ローマ人と融合し（フランス人、スペイン人、イタリア人、イギリス人）、一部は今日に至るまで独自の民族性を保っている（アイルランド人、スコットランド人）。

[7826] スキタイ人――これは、アジアやヨーロッパ、黒海沿岸、とりわけ現在のロシア南部に居住していた数多くの民族に対するギリシャ語の呼称である。

特にヨハネは、病弱者や貧しい人々を慈しみ、飢えた者に食べ物を与え、裸の者に衣服を与え、孤児や未亡人の世話をした。　病人や、身を寄せる場所のない旅人たちが安らかに過ごせるよう、彼は数多くの病院を設立し、病人たちに必要なものをすべて供給し、使用人や医師を配置し、敬虔な二人の司祭に彼らの世話を任せた。　同時に、彼自身も教会の運営に熱心に取り組み、善人を慈しんで認め、悪人を懲らしめ、その過ちを糾弾した。

聖ヨハネス・クラマトルスの総主教在任中、コンスタンティノープルには依然として多くのアリウス派の異端信者が残っており、彼らは何の妨げもなく自らの信仰を告白し、礼拝を行っていた。至福の聖人は、この異端を都から一掃する方法を考え、好機を捉えて皇帝にこう言った。

「敬虔なる皇帝よ！もし誰かが、あなたの王冠に嵌め込まれた宝石の中に、ただの一つの、暗く不浄な石を混ぜ込んだとしたら、その者は王冠全体の尊厳を汚すことにならないでしょうか？」

王は答えた。

「はい、その通りです。」

ヨハネは続けた。

「それと同様に、この都市もまた汚されています。この都市は正教の地でありながら、その住民の中に異端のアリウス派をまだ抱えているのです。王よ、あなたが王冠の汚辱に怒りを覚えるのと同様に、全能の神もまた、アリウス派の異端によって穢されたこの都市に対して怒りを抱いておられるのです。」　それゆえ、陛下は異端者たちを信仰の一致へと導くか、あるいは彼らをこの街から追放すべきである。

ヨハネの言葉を聞いた王は、直ちにすべてのアリウス派の指導者を自分の元へ連れてくるよう命じ、総主教の面前で信仰告白を行うよう命じた。しかし、彼らは不敬と、我らの主イエス・キリストに対する冒涜に満ちた言葉を語り始めた。そこで王は、彼らを街から追放するよう命じた。

しばらく時が経つと、アリウス派は、王宮に仕える者たちや高官の中から支援者や取り次ぎ役を得て、再び日曜日に街に入り、異端の賛美歌を歌いながら自分たちの教会へと向かい、その賛美歌の中で至聖なる三位一体を冒涜するようになった。　このことを知った至聖なる総主教ヨハネは、庶民の誰かがそれらのアリアン派の公の礼拝に参加することを恐れて、聖職者たちに、アリアン派の冒涜的な歌に対抗して作られた、至聖なる三位一体を称える聖歌を歌いながら、聖職者の装束を身にまとって街を練り歩くよう命じた。 これらの行進のために、柄付きの銀の十字架が用意され、 の聖なるイコンと共に、灯された蝋燭を掲げて、荘厳に街中を巡行された。こうして、初めて十字架行進が生まれたのである。正教徒による荘厳な十字架行進は、広場で行われていたアリウス派の公の祈りの集いから人々の注意をそらした。　これに激怒したアリウス派は、ある巡行の最中に正教徒を襲撃し、大虐殺を引き起こした。この大虐殺で、双方から数名が死亡し、正教徒の中にいた王室の宦官ヴリソンは、石で頭を打ち砕かれた。　このことを知った皇帝は、アリウス派に対して激しく怒り、彼らに公の礼拝を行うことや都に入ることを禁じた。こうして、異端の冒涜は都から完全に追放されたのである。

コンスタンティノープルには、ガイナという名の、異民族出身の軍司令官が住んでいた。彼は戦いに勇敢で、王の寵愛を受けていたが、同時にアリウスの異端的な思想を共有していた。彼は王に対し、市内のアリウス派に何らかの教会を授けるよう熱心に懇願した。　皇帝は、どう答えるべきか迷っていた。なぜなら、気性が荒く残忍なガイナが、ギリシャ王国で何らかの騒動を引き起こすことを恐れて、断ることで彼を侮辱したくなかったからである。そこで皇帝は、ガイナの願いについて聖ヨハネ総主教に報告した。

ヨハネは王にこう言った。

「ガインが教会を求めに来た時には、私をあなたの元へ呼んでください。私があなたに代わって答えます。」

そして翌日、総主教が王宮に召され、王と共に座していた時、ガイナは王に、アリウス派の共同体のためにコンスタンティノープルに教会を授けるよう請願し始めた。彼は、戦争中に費やした労苦と示した勇気の正当な報いとして、これを求めたのである。

大ヨハネスは彼にこう言った。

「ガイナよ、もし教会で祈りたいのなら、好きな教会に入って祈ればよい。この街のすべての教会は、君のために開かれているのだから。」

これに対し、ガイナはこう答えた。

「しかし、私は別の信仰を奉じています。だからこそ、志を同じくする者たちと共に、この街に独立した神殿を持ちたいと願っており、王に私の願いを叶えてくださるよう懇願するのです。私はギリシャ王国のために戦い、多くの苦労を背負い、血を流し、王のために命を捧げてきました。」

ヨハネはこう答えた。

「その苦労に対して、あなたは報いを受けた。王からの大きな敬意、名声、地位、そして贈り物だ。かつての自分と今の自分をよく考えてみるべきだ。以前は貧しく名もなき者だったが、今では富と名声を得た。ドナウ川の向こう側に住んでいた頃の身分と、今の身分とを比べてみよ。」 当時は、あなたはごく平凡で貧しい農民の一人に過ぎず、粗末な服を着て、パンと水だけで生計を立てていた。しかし今や、あなたは尊敬され称賛される総督となり、高価な衣装を身にまとい、多くの金銀と数え切れないほどの財産を所有している――そしてこれらすべては、王のおかげで手に入れたものだ。 これこそが、あなたの労苦に対する報いである！

感謝し、ギリシャ王国に忠実に仕え続けなさい。そして、この世での奉仕に対する神からの報いを、求めないでください。

この言葉に恥じ入ったガイナは黙り込み、それ以上は神殿を求めなかった。王は、わずか数語で、傲慢で抑えきれない残虐性に満ちた野蛮人の口を封じることができたヨハネの英知に驚嘆した。

一年が過ぎると、ガイナは王に背き、大軍を率いてコンスタンティノープルへ侵攻した。 王は流血を望まなかったため、聖ヨハネに彼のもとへ出向き、穏やかな言葉で彼をなだめるよう懇願した。ヨハネは、ガインに都内でアリウス派の集会を開くことを禁じたことで彼を怒らせたことを覚えていたが、それでも羊たちのために自らの魂を捧げる覚悟で、その高慢な野蛮人のもとへ向かった。神はそのしもべを助け、ヨハネは自らの言葉で獣のような男をなだめ、彼を狼から羊へと変え、王と和解させた後、帰還した。

その後、その冬、聖ヨハネは体調不良にもかかわらず、教会の事務を整えるために小アジアへと向かった。そこでは多くの司教が聖職を売り、叙階の対価として金を受け取っていた[7827] ；そのような人物の一人が、例えばエフェソスの大司教アントニオスであった[7828]。聖ヨハネは小アジアにおいて、シモニアの罪を犯した多くの司教[7829] を罷免し、金銭と引き換えに叙任した者たちだけでなく、叙任された者たちからもその職を剥奪した。彼らの代わりに、よりふさわしい者たちを任命した。小アジアの秩序を立て直した後、聖ヨハネはコンスタンティノープルに戻った。

これほど高い聖職にありながら世俗の中に暮らしていたにもかかわらず、この福者は決して初期の修道生活における修行を怠ることはなく、教会の務めから解放された時間は、人里離れた自分の

[7827] ヒロトニア（ギリシャ語）――叙任、あるいはある役職への就任式。

[7828] エフェソスは、小アジアの西岸に位置する主要な商業都市の一つであり、古代には、ディアーナ（異教の月の女神および豊穣の女神）の有名な神殿で知られていた。ここでは、聖使徒パウロがキリスト教を説き、暮らしていた。 また、聖使徒であり福音記者である神学者ヨハネも、長い間この地に居住していた。431年には、ここで第三回全地公会議が開催された。エフェソス都主教座は、使徒座と同様に、東方において特別な重要性を有していた。

[7829] シモニアとは、ある者が聖職の位を授け、別の者がその位を、その資質によるのではなく金銭と引き換えに奪い取る行為である。シモニアという名称は、奇跡を行うために使徒ペトロから聖霊の賜物を買おうとした魔術師シモンに由来する。

独房に閉じこもり、祈りにふけるか、あるいは聖書を読みふけることに費やしていた。　常に厳格な断食とあらゆる面での節制を守り、大麦のパンと水だけを口にし、睡眠もごくわずかで、それも寝台ではなく立ったままだった。宴会や饗宴には決して出席しなかった。　彼は全精神を聖書の理解に捧げ、聖使徒パウロの書簡に対する解説の執筆を続け、その像を自身のケリヤに祀っていた。当時、彼は「異邦人の使徒」パウロのコロサイ人への手紙を人々に解説しており、少し後にはフィリピ人への手紙、テサロニケ人への手紙、そしてヘブライ人への手紙についても解説を続けた。

これらの書簡の解説を執筆している最中、聖ヨハネは次のような困惑を抱いた。

「果たして、これは神の御心にかなっているのだろうか？　私はこの聖書の真意を正しく理解しているのだろうか、それともそうでないのだろうか？」

そこで彼は、神がそのことを明らかにしてくださるよう祈り始めた。神はそのしもべの祈りを聞き入れ、彼に次のようなしるしを与えられた。　ある夜、聖ヨハネは独房に閉じこもり、灯したろうそくの明かりの下で注解を書いていた。その時、彼に仕えていたプロクルスは、助けを求めて懇願してきたある人物の依頼により、総主教のもとへ入ろうとしていた。しかしその前に、プロクルスは総主教が何をしているのか確かめるため、ドアの隙間から中を覗いた。　すると、聖ヨハネが座って何かを書いているのが見えた。その背後には、ある威厳のある老人が立っており、パトリアルヒの耳元に身を乗り出して、静かに何かを囁いていた。その老人の姿は、聖ヨハネの独房の壁に掛けられていたイコンに描かれた聖パウロの姿と、あらゆる点でそっくりだった。　プロクルスは、その人物が立ち去るのを待ち続けた。しかし、早課の鐘が鳴る時間になると、その人物は姿を消していた。プロクルスは、その後の二晩も同様の光景を目撃した。ついに彼は、勇気を振り絞って総主教本人に尋ねた。

「大主教様、夜、誰がお話しになっているのですか？」

ヨハネは答えた。

「私のところには誰もいなかった。」

そこでプロクルスは、パトリアルカが書いている最中に、井戸の穴から年老いた威厳ある人物がパトリアルカの耳元で囁いているのを見たことを詳しく語った。その際、プロクルスは現れた人物の外見や顔立ちについても説明した。プロクルスの話を聞いて、ヨハネは首をかしげた。一方、プロクルスはイコンに描かれた使徒パウロの姿を一瞥し、こう言った。

「私が見たその方は、このイコンに描かれている方によく似ていました。」

そこでヨハネは、プロクルスが聖使徒パウロその人を見たのだと悟り、自身の労苦が主の御心にかなっていることを確信した。彼は地面にひれ伏し、神に感謝しながら長く祈りを捧げた。それ以来、彼は神聖な書物の執筆に一層の熱意と情熱を注ぎ、それらを貴重な宝物として教会に遺した[7830]。

[7830] ヨハネス・クラマティオスの著作は、キリスト教世界全体において、王宮で宝物のように大切に保管され、金文字で書き写されていた。現在に至るまで、彼の著作の多くは失われてしまったが、それでも彼からは、他のどの教父や教会の教師よりも多くの著作が保存されている。　ギリシャ語の聖務日課書によれば、現代まで伝わっているヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥストスの著作は1447点、書簡は244通に上る。 ヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥストスから最も多く残されているのは、教会の説教である。聖ヨハネの説教は、その構成の整然さ、思想の深さ、そして内容の多様性によって人々を驚嘆させる。　「他の人々については言わずとも」と、聖イシドールは金口ヨハネについてこう記している。「雄弁さで名高いリヴァニウスでさえ、あの著名なヨハネの言葉、その思考の優雅さ、そして論証の力に驚嘆したのだ」。　金口ヨハネの説教の中で最も優れたものとして、アンティオキアの民に向けた彫像に関する説教、エウトロピアに関する説教、貧者への説教、首都からの追放および首都への帰還に関する説教、使徒パウロを称える説教などが、当然のことながら挙げられている。ヨハネ・金口は、自身の説教の中で、キリスト教徒の活動のあらゆる具体的な事柄について語っている。　さらに、公的な奉仕活動を行っている間ずっと、聖ヨハネは説教の中で聖書を解説していた。彼の解説説教はそれぞれ二つの部分から成っている。一つは神の言葉のテキストの解説に、もう一つは聴衆の道徳的状態への言及と

ヨハネ――全世界の偉大な教師――は、いささかの躊躇もなく不正を糾弾し、不当な扱いを受けた者たちを守り、王と王妃に対しては、誰をも傷つけず、正義に従って行動するよう説得した。他人の財産を略奪し、貧しい人々を苦しめる高官や高位の人々に対しては、神の裁きを警告した。　このため、多くの世俗の支配者たちが彼に敵意を抱くようになった。自らの良心に責められながらも、悪癖を改めようとはせず、彼らはヨハネに怒りを向けた。彼らの心は石のように硬くなり、聖人の言葉を聞くのが耐え難かった――そして、彼らは彼に対する憎しみを胸に秘めた。　憎む者たちは、あらゆる手段を尽くして聖人を貶めようとし、総主教は教会での説教において教訓を説くのではなく、王や王妃、そしてすべての権力者を侮辱し、非難していると語り広めた。さらに、彼らは次のような理由から、彼を「無慈悲」とも呼んだ。

王宮には、エウトロピウスという名の宦官がおり、彼は王の寝殿の責任者であった。彼は巧みに王の信頼を勝ち取り、寵臣となった。　敵を追い詰めるため、彼は王を説得して、ある古来の慣習を廃止する法律を制定させた。その慣習とは、次のようなものであった。市民法を何らかの形で破り、死刑を宣告された人々は、かつてイスラエル人が「避難の町」[7831] に逃げ込んだように、教会に身を隠し、そこで死刑を免れていたのである。　この慣習の廃止は聖ヨハネス・クラマトルスにとって

道徳的な訓戒に充てられている。　聖書の解説に取り組んだ聖ヨハネは、とはいえ、新約聖書に関する解説に比べ、旧約聖書に関する解説はそれほど多く残していない。『創世記』、イザヤ書8章、および詩篇36篇に関する説教や講話、サムエルとサウルに関する少数の説教に加え、現在「金口」の名で知られるものとしては、預言者ダニエル書およびヨブ書に関する注解が知られている。　新約聖書の注解において、最も重要な位置を占めるのは、マタイによる福音書に関するアンティオキアでの説教である。これと並ぶものとして、一般的な評価によれば、ローマ人への手紙に関する説教が挙げられる。使徒の言葉の解釈の正確さという点では、ガラテヤ人への手紙の解説が高い評価を得ている。　これに続いて、金口ヨハネの優れた解説としては、『コリントの信徒への第一の手紙』および『エフェソの信徒への手紙』に関する講話が挙げられる。　金口聖ヨハネの純粋な教義に関する著作は少なく、そのすべてに、信徒たちの道徳的状態に対する彼の深い配慮が滲み出ている。その中でも特に注目すべきは『スタギリウスへの書簡』であり、そこではヨハネが「神の摂理があるならば、なぜ義人が苦しみを受けるのか」という問いを解決している。　また、アノメイ派の異端者たちを糾弾するために述べられた「不可知なるものに関する六つの言葉」も注目に値する。彼らは独自の推論に基づいて、父なる神と子なる神との関係を解明しようと試み、神の子は被造物であり、父によって無から創造されたと教えていた。　「不可解なるもの」に関する言葉の中で、ヨハネはアノメイ派が三位一体の神の神秘を解明しようとする試みを打ち砕き、聖書のテキストを用いて神の不可解さを証明している。また、他の7つの言葉では、神の御子が父なる神と同質であることを証明している。　さらに、聖霊が父から発出するという教義に関する、ヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）の聖霊に関する著作も注目に値する。　ユダヤ人や異教徒に対する著作では、預言の成就や、人々の心に及ぼすキリスト教の福音宣教の働きを通じて、キリスト教の教えの神性が証明されており、また、ユダヤ人に対する8つの説教では、ユダヤ教の儀式が廃止されたことが示され、したがって、今それらを行うことは神の御心に反する行為であることを明らかにしている。　その著作で知られるヨハネス・クロイスストモスは、現在も彼の名を冠する特別な典礼形式を制定したことでも有名である。　聖プロクルス――金口ヨハネの弟子であり、後にコンスタンティノープル総主教座の後継者の一人となった人物――は、この聖人の制定について次のように記している。「聖バシレイオス（大）は、人々を病人のように扱い、簡略化された形式の典礼を提示した。　しばらくして、私たちの父であり、金口ヨハネは、一方では善き羊飼いとして羊たちの救いを熱心に顧み、他方では人間の性質の弱さを鑑み、あらゆる悪魔的な口実を根こそぎ取り除くことを決意した。それゆえ、彼は多くの部分を省略し、人々が少しずつ使徒的かつ神聖な伝承から完全に離れることのないよう、極めて簡略化された聖体礼儀を制定した」。ヨハネスによって簡略化された聖体礼儀は、当初、現在のようなすべての聖歌を含んでいたわけではなかった。　そのうちのいくつかは聖ヨハネの後に加わったが、それらは「洗礼志願者のための典礼」として知られる典礼の第一部、あるいは聖体拝領の儀式に続く部分に属するため、金口ヨハネの典礼の本質的な構成を変えることはなかった。　現在、ヨハネス・ザラトゥストスの典礼は、東方正教会のキリスト教教会において、他のどの典礼よりも頻繁に執り行われている。

[7831] ユダヤ人には六つの避難都市があった。三つはヨルダン川の東側に、三つは西側にあった。これらの都市には、過失による殺人犯だけでなく、殺害された親族の血の復讐を行う者たちも逃げ込んだ。　古代教会のキリスト教徒においては、避難の権利は当初、一部の教会にのみ認められていたが、後にすべての教会に拡大された。その権利とは、有罪判決を受けた者が教会に避難した場合、その事件が再審理されるまでは、その身の安全が保障されるというものだった。

極めて遺憾なことであり、彼はこの件を教会に対する暴行とみなして、エウトロピウスを非難し、その残虐さと教会の規定の踏みにじりを責めた。　ほどなくして、エウトロピウス自身も、他人のために掘った穴に落ち、他人のために研ぎ澄ましたその剣で自らを刺し殺した。　ある重大な過ちをきっかけに、皇帝は彼に対して激しく怒りを露わにし、エウトロピウスは死刑を宣告された。そこでエウトロピウスは教会へ逃げ込み、祭壇の下の聖座に身を隠した。　一方、至福のヨハネは、普段民衆に説教をする説教壇に座り、極めて厳格な守護者として、エウトロピウスを非難する言葉を投げかけた。彼は、新たに制定された不公正な法律を、それを考案し　制定した当の本人自身が身をもって体験するのが公正である、と語った。　ヨハネの敵たちはこの言葉を捉え、聖人を非難し、彼を無慈悲であると責め立てた。こうして、彼らは少しずつ多くの人々の心を苛立たせ、ヨハネに対する怒りを煽り立てた[7832]。

この神に愛された聖人に不満を抱く者の中には、不道徳な生活を送っていた聖職者も少なくなかった。というのも、聖ヨハネは彼らの悪行を暴き、ある者たちを教会から破門していたからである。とりわけ、彼らはあるセラピオンという助祭の行動に激怒していた。　このセラピオンは、総主教のもとで忠実に奉仕し、敬虔に暮らしていたが、ある日、すべての聖職者の面前で聖人にこう言った。

「大主教様、彼ら全員を一本の杖で追い散らさない限り、これらの人々を改心させることはできません。」

この言葉に、多くの者が激怒し、民衆の間で聖なる総主教について悪口を言い始め、あらゆる称賛に値するその方に対して誹謗中傷を浴びせた。聖ヨハネに対する不満と敵意は、最高位の聖職者たちの間でも表れていた。 聖ヨハネに不満を抱く司教の一人に、ゲヴァル大主教セウィリアン[7833]がいた。当初、彼はヨハネの寵愛を受けていた。ヨハネは小アジアへ赴き、現地の教会事務を整えるにあたり、彼に自身の信徒の統率を任せたのである。　神の御使いが不在の間、コンスタンティノープル教会を統率していたセウィリアヌスは、聖ヨハネに対する不満を煽ろうと努め、陰謀を企てて皇帝の宮廷の寵愛を得ようとし、それによって金口聖ヨハネの後任の座に就こうと企てた。同時に、彼は権限を濫用し、統治においていくつかの混乱を招いてしまった。　帰還した聖ヨハネは、直ちにセウィリアンの卑劣さと狡猾さを看破し、彼が引き起こした混乱を理由に、彼を首都から追放しようとした。　しかし、セウィリアンを擁護したのが皇后エウドクシアであり、彼女の願いに応じて、ヨハネスは心から彼と和解し、彼を許した。一方、セウィリアンは心の中では以前と変わらず、密かに金口ヨハネスに対する憎悪を抱き続けていた。　聖人は周囲の悪意を承知していたが、それを意に介さなかった。なぜなら、彼を中傷すればするほど、その名声はますます高まったからである。彼は遠く離れた国々でも知られるようになり、聖人に会ってその教えを聞きたいと願う多くの人々が遠方から訪れてきた。

これほどの名声を持つ金口聖人にとって、敵たちの憎しみは危険ではなかっただろう。しかし、聖人に敵対する者の中に、エウドクシア皇后自身が含まれていなければの話である。彼女は、神に愛された聖人にとって最も危険で、最も執拗な敵であり、魂の底から彼を憎んでいた。　ヨハネスが金銭に執着する者や他人の財産を略奪する者について語った言葉――それは本来、すべての人々に向けたものだった――を、皇后は自分に向けられたものと解釈し、ヨハネスが自分だけを非難し侮辱しているのだと考えた。というのも、彼女は極めて金銭に執着しており、金に対する飽くことのない貪欲に囚われており、多くの人々から無理やり金を奪い取っていたからである。　神に愛された聖人に怒りを抱いた皇后は、いかにして彼を総主教の座から引きずり下ろすかを考え始めた。

[7832] それにもかかわらず、ヨハネス・クラマティオスは、皇后エウドクシアの反対にもかかわらず、皇帝への嘆願によって、この時はエウトロピウスを当然の刑罰から救った。しかしその後、エウトロピウスは追放され、死刑に処された。

[7833] ゲヴァル――地中海沿岸のフェニキアにある都市。現在のシリア、ベイルートとトリポリスの間に位置していた。

当時、コンスタンティノープルには、テオドリックという名の、莫大な富を所有する高貴な人物がいた。　彼を妬み、その財産を横取りしようと、皇后は彼に対する告発材料を探したが、テオドoricは立派で誠実な人物であったため、見つからなかった。彼に暴力を振るう手段がなかったため、皇后は策略を練った。彼女はテオドoricを呼び寄せ、こう言った。

「王室の財産が絶えずどれほど大きな損失を被っているか、王国を守る軍隊にどれほど多くの金が配られているか、そして毎日王室の財宝から糧を得ている者たちが数え切れないほどいるか、あなたは知っているでしょう。だからこそ、現在、我々の国庫は少々枯渇してしまっているのです。そこで、あなたの財産の一部を王室の宝庫に貸し付けてほしい。そうすれば、あなたは我々の好意を得ることができるだろう。やがて、今差し出した分を受け取ることになるのだ。

テオドリックは、女王が彼の財産を王室の財源を補充するためではなく、自らの飽くことのない金銭欲を満たすために利用しようとしていることを悟った。そこで彼は聖ヨハネのもとへ赴き、女王のこの意図を伝え、聖人に涙ながらに助けと支援を懇願した。　ヨハネは直ちに女王に手紙を送り、優しく穏やかな言葉で、テオドリクに害を与えないよう諭した。女王は、総主教に対して怒りを抱いていたものの、その時は彼の望み通りに振る舞った。彼女は総主教の賢明な言葉に恥じ入り、テオドリクに何の害も与えないと約束した。 その後、テオドリクは、施しについて説き、「妬む者の手によって奪われる恐れのある地上の宝ではなく、誰も妬まず、奪うこともない天に宝を隠せ」と助言する聖人の金言に耳を傾け、自らの富を天の王に捧げることを決意した。　家族の生計のために財産のごく一部を残し、残りの莫大な財産をすべて、旅人や貧しい人々、病人のために教会が運営する宿舎に寄付した。これを聞いた王妃は激しく怒り、聖ヨハネに次のように伝言を送った。

「聖なる総主教よ！私はあなたの助言に従い、我が王国の必要のためにパトリキウス・テオドリクから何も受け取らなかったのに、あなたは私腹を肥やすために彼の財産を横取りしたではないか！　テオドリクは王室に仕えて富を築いたのだから、その財産をあなたではなく、私たちが受け取る方がふさわしいのではないか。なぜ私たちを見習わなかったのか。私たちがテオドリクから何も受け取らなかったように、あなたも彼の財産を受け取るべきではなかったのだ。

この言葉に対し、ヨハネスは女王に次のように書き送った。

――私が富を望んだならば、それを手に入れることを妨げるものは何一つなかったということは、あなたにとっても秘密ではないでしょう。というのも、私の両親は高貴で、身分の高い、裕福な人々だったからです。しかし、私は自らの意思で富を拒みました。あなたは、私がテオドリックの財産を自分の利益のために奪ったと主張しています。　しかし、知っておいてほしい。テオドリックは私に何も与えてはいない。たとえ与えたとしても、私は彼から受け取らなかっただろう。彼は自らの富をキリストに捧げ、貧者や困窮者に施しを施していたのだ。そして彼は正しく行動した。なぜなら、来たるべき世において、キリストから百倍の報いを受けるからである。　私もまた、あなたがテオドリックに倣い、天に財産を蓄え、貧しくなった時に永遠の住まいへと迎え入れられることを願っている。　もしあなたが、テオドリクがキリストに捧げたものをキリストから奪おうと企んでいるのなら、私たちには何の関係があるというのか。なぜなら、あなた自身もわかる通り、あなたが侮辱するのは私たちではなく、キリストご自身だからである。

このヨハネの手紙を読んだ女王は、さらに激しく怒り、聖人に復讐する機会を模索し始めた。

その頃、アレクサンドリアからカリストロパという名の未亡人が、ある件でコンスタンティノープルにやって来た。アレクサンドリアで、アウグストゥスの位を持つパヴリキウス[7834] が地方総督を務めていた頃、ある嫉妬深い者たちが、カリストロパが多くの金を持っていると彼に密告した。パヴリキウスは金に非常に貪欲であった。　カリトロパを虚偽の罪で告発し、彼はその未亡人を連行させ、500枚の金貨を支払うよう強要した。そんな大金を持っていなかった未亡人は、持っていたすべ

[7834] この称号は、下級官吏とは区別して、各地域の最高責任者に与えられた。

ての財産を隣人に質入れし、苦労の末に500枚の金貨をかき集めて、それを地方総督に手渡した。 まもなく、パヴリキウスはその不正行為のせいで職を剥奪され、尋問のためにコンスタンティノープルへ送られた。貧しい未亡人もまた、彼の後を追ってそこへ向かった。 皇帝のもとへたどり着くと、彼女は涙と叫び声を上げて皇帝の前にひれ伏し、パヴリキウスが彼女から500枚の金貨を無理やり奪ったと訴えた。皇帝はコンスタンティノープルの総督に対し、この件について調査を行うよう命じた。しかし、総督はパヴリキウスの味方につき、彼を無罪とし、未亡人を手ぶらで帰してしまった。このことにさらに屈辱を感じた未亡人は、皇后のもとへ駆けつけ、自分の不幸を語り、慈悲と助けを求めた。金に貪欲な皇后は、この機会を喜んだ。この件を通じて、自分自身のために多くの金を手に入れられると期待していたからである。 そこで、彼女は直ちにパヴリキウスを呼び出し、他人の財産を略奪し、貧しい未亡人を侮辱したとして激しく非難し、100リットルの金を支払うまで彼を拘束するよう命じた。 女王の手から逃れられないと悟ったパヴリキイは、自宅から女王が要求した分の金を持ち寄らせ、100リットルの金を女王に手渡した。しかし、その金の中から女王が未亡人に渡したのはたった36枚の金貨だけで、彼女を解放し、残りのすべてを自分のものにした。 未亡人は、このような不当な決定に傷つき、泣きながら女王の元を去った。その時、彼女は、不当な扱いを受けた者たちの守護者である聖ヨハネの話を耳にした。彼の元を訪ねた彼女は、パヴリキウスと女王が自分に何をしたかを詳しく語った。

泣きじゃくる未亡人を慰めた後、聖ヨハネはパヴリキウスを呼び寄せ、教会に招き入れてこう言った。

「我々は、お前が神を恐れず、貧しい人々を侮辱し、暴力で他人の財産を奪い、この貧しい未亡人に対しても同様の仕打ちをしたという不正行為を知っている。我々があなたを呼び出したのは、お前が不当に傷つけたその女性に、五百ズラトニツを返すためだ。 さあ、彼女に返してやれ。そうすれば、彼女は貸金業者から借りた金を返済でき、子供たちと共に極度の貧困の中で滅びることもないだろう。そうすれば、お前も自分の罪から解放され、怒らせた神をなだめることができる。もし悔い改めなければ、神は孤児たちを侮辱したお前の罪に対して報復を下されるだろう。

パヴリキウスは答えた。

「殿、この未亡人は、私が彼女にしたことよりもはるかに大きな恨みを抱かせています。なぜなら、彼女は私を女王に訴え、私から百リットルの金を奪ったからです。彼女は私から、これ以上何を望んでいるというのでしょうか? 彼女には女王のところへ行って、そこから自分の分を受け取らせればいいのです。」

聖人はこれに対し、こう言った。

「たとえ女王があなたからそれほど多くの金を奪ったとしても、未亡人はまだ自分の分を受け取っていない。それゆえ、女王があなたに与えた侮辱について、未亡人に非はない。女王があなたから百リットルの金を奪ったのは、未亡人への侮辱のためというよりは、あなたが権力の座にあった際に犯した他の略奪行為のためである。女王を誹謗してはならない。 断言するが、君が未亡人から奪ったものを、最後の金貨一枚に至るまですべて彼女に返すまでは、ここから出られない。そして、女王が彼女に与えた三十六枚の金貨は、旅費として彼女に持たせておけ。

女王は、ヨハネがパウリキアを教会に拘束していることを知ると、パウリキアはすでに彼から十分な量の金を奪ったのだから、彼女を解放するよう命じる使者をヨハネのもとへ送った。

しかし、ヨハネは使者にこう答えた。

「パヴリキアは、その貧しい女性から受け取ったものを返すまでは、ここから解放されることはない。」

女王は再び聖人のもとへ使者を送り、パヴリキウスを解放するよう要求したが、聖人はこう答えた。

「もし女王陛下が彼を釈放することを望まれるのなら、この未亡人に五百枚の金貨を送ってくださいますように。彼女にとってそれは大した負担にはならないでしょう。なぜなら、彼女はパヴリキウスからはるかに多い――百リトルの金――を奪ったのですから。」

これを聞いた女王は激怒し、直ちに二人の百人隊長と二百人の兵士を派遣して、パヴリキアを教会から無理やり連れ出させた。　しかし、兵士たちが教会の扉に近づいたとき、突然、扉の前に主の天使が現れ、手に抜刀した剣を握り、それで入り口を塞いでいた。恐ろしい天使の姿を見た兵士たちは恐れおののき、逃げ出した。彼らは震えながら女王のもとへ戻り、天使が現れたことを報告した。　女王はこれを聞いて恐怖に駆られ、もはやヨハネのもとへパヴリキウスを呼び出すことを敢えてしなくなった。女王が彼を助けなかったことを知ったパヴリキウスは、自分の家へ金を取りに行かせ、未亡人に五百枚の金貨を渡して、教会から解放された。金を受け取った未亡人は、喜びながら自分の町へと戻っていった。

一方、女王は聖ヨハネへの怒りを収めることはなく、神の御使いに対する憎しみは日ごとに彼女の心の中で増していった。ある日、彼女は聖ヨハネのもとへ自分の家来たちを遣わし、次のように伝えるよう命じた。

「私たちに逆らうのをやめ、王家の事柄には干渉するな。私たちも教会の事柄には干渉せず、その運営はあなた自身に任せてあるのだから。　私について語り、私を非難して、私を皆の笑いものにするのはやめてほしい。これまで私はあなたを父として敬い、相応の敬意を払ってきたが、もしこれから先、あなたが改心せず、私に対してより良い態度を示さないのであれば、私はもはやあなたを容認することはできない。

女王のこの言葉を聞いた聖ヨハネは、深く悲しみ、重いため息をついて、使者たちにこう言った。

「女王は、私がまるで死人のように振る舞うことを望んでいる。すなわち、行われている不正に目をつぶり、傷つけられ、泣き、嘆く者たちの声に耳を傾けず、罪を犯す者たちに対する非難の言葉を口にしないことを。　しかし、私は司教であり、人々の魂の世話という使命を託されている以上、すべてを眠ることなく注視し、すべての人の嘆願に耳を傾け、すべての人を教え、導き、戒めなければならない。　なぜなら、もし私が不法を糾弾せず、不法を行う者を罰しなければ、私自身も罰を受けることになることを知っているからです。それゆえ、預言者ホセアの言葉が私に当てはまることを恐れています。*「強盗が人を待ち伏せするように、祭司たちの集団はシェケムへの道で人を殺し、忌まわしい行いを犯している」*[7835]（ホセア6:9）。なぜなら、神聖な使徒は、他の人々も恐れを抱くように、罪を犯す者を皆の前で非難するよう命じているからである。　また、その同じ使徒は次のように教えています。「*罪を犯す者を皆の前で戒めよ。そうすれば、他の人々も恐れを抱くようになる*」（Iテモテ5:20）、*「御言葉を宣べ伝えなさい。時がよい時も悪い時も、戒め、禁じ、励ましなさい。あらゆる忍耐と教訓をもって」*（IIテモテ4:2）。　私は不法そのものを糾弾するのであって、不法を行う者を糾弾するのではない。誰に対しても、その人の不法について面と向かって語ったことはなく、　、誰をも不名誉な言葉で貶めたこともなく、説教の中で女王の名前を挙げて彼女を非難したことも一度もない。しかし、私は皆に対して、悪を避け、隣人を傷つけないようにと、全般的に教えている。　もし、私の教えを聞く者の中で、自分の犯した悪行に対して良心が咎める者がいるならば、その者は私に対してではなく、自分自身に対して怒るべきであり、悪から遠ざかり、善を行うべきである。　もし女王が、自らに悪があること、あるいは誰かを傷つけたことさえ自覚していないのなら、なぜ、あらゆる不正から遠ざかるよう民を教える私に対して怒りを向けるのか。むしろ、自分が不正を犯さなかったこと、そして私が、彼女が統治する民に対して、怠ることなく救いを説いている

[7835] エゼキエル書6:9。この言葉は、民に正しい生き方を示すべきであるにもかかわらず、それを民から隠していたユダヤ人の祭司たちを非難している。

ことを喜ぶべきである。　もし彼女が、私が教えの言葉をもって人々の心から根絶しようとしている罪を犯しているのであれば、私こそが彼女を非難したり、彼女に不名誉をもたらしたりしているのではなく、彼女自身の行いが彼女を暴き出し、その行いが彼女の魂に大きな不名誉と恥をもたらしているのだということを、彼女には知っておいてほしい。　それゆえ、女王がいくら怒ろうとも、私は真実を語り続ける。私にとって、神を怒らせるよりは、人を怒らせるほうがましだからである。*「もし私が今なお人々に喜ばれようとしているなら、キリストの僕ではない」*（ガラテヤ1:10）。

聖人は使者にこう告げると、彼らを見送った。使者たちは女王のもとへ戻り、聞いたことをすべて伝えた。すると、女王は至福のヨハネに対してさらに激しく怒りを燃やした。

聖人に敵対したのはこの女王だけにとどまらず、不義に生きる多くの者たちも同様であった。彼にはコンスタンティノープルだけでなく、より遠方の国々にも敵がいた。後者には、当初からヨハネを快く思わず、彼が総主教に叙任されることを望まなかったアレクサンドリアの総主教テオフィロス、 ベリイの司教アカキオス[7836] 、ゲヴァルのセウィリアン、プトレマイオスのアンティオコス[7837]、そしてコンスタンティノープルでは、二人の長老と五人の助祭、多くの王室高官、そして不義な生活を送っていた三人の著名で裕福な未亡人――マルサ、カストリキア、エウグラフィア――がいた。これらヨハネを憎む者たちは皆、互いに相談し合い、民衆の前で彼を誹謗中傷するために、彼に対する告発材料を探し求めた。まず第一に、彼らはアンティオキアへ使者を送り、ヨハネがたとえ幼少期であっても、何か悪事を働いていないかを探らせた。しかし、*「試みる者たちは、試みることなく消え去った」*（詩篇63:7）とあり、彼らは神の聖なる御心にかなう者に非難すべき点など何一つ見つけられなかった。その後、彼らはアレクサンドリアのテオフィロス――狡猾な嘘つきであり中傷者――のもとへ使者を送ったが、彼でさえ、太陽のように美徳を放つ聖ヨハネを非難する材料を何一つ見つけられなかった。　しかし、サタンに操られたテオフィロスは、ヨハネをその座から引きずり下ろすことに熱心に努め、女王やその他の悪人たちの助けを借りて、ついにその目的を達成した。ヨハネの追放は、次のような状況下で起こった。

アレクサンドリアには、イシドールという名の長老がいた。彼はかつてクセノドール（すなわち、巡礼者の世話役）を務めた人物で、聖なる生活を送り、極めて賢明な人であった。彼はすでに高齢で、生まれながらにして八十歳であった。長老としての任に就いたのは、アレクサンドリア総主教である聖アタナシウス大聖人によるものであった。　テオフィロスは、アレクサンドリアの長老ペトロスの件をめぐり、このイシドールに対して敵意を抱いていた。というのも、テオフィロスは、何の罪もないペトロスを聖職から罷免し、教会から破門しようとしていたのに対し、イシドールはペトロスを擁護し、彼に対する告発は不当であると主張していたからである。　そのため、テオフィロスはイシドールに対しても怒りを抱くようになり、ペトロを教会から破門した後、イシドールに対しても破門するための証拠を探し始めた。

その頃、テオドティアという名の未亡人が、イシドールに千枚の金貨を寄付し、その金でアレクサンドリアにいる乞食や孤児、貧しい未亡人たちに着せる服を用意してほしいと頼んだ。　その際、未亡人はイシドールに対し、テオフィロス総主教にこのことを話さないよう頼んだ。そうすれば、総主教が金を没収したり、自身が着手した石造建築の工事に充てたりすることを防げるからである。金を受け取ったイシドールは、テオドティアの願い通りに行動し、テオフィロスには何も告げなかった。　それにもかかわらず、テオフィロスは誰かから、イシドールがフェオドティアから千枚の金貨を受け取り、自分（テオフィロス）の知らぬ間に貧しい人々のためにそれを使い果たしたという話を耳にした。金に貪欲なテオフィロスは、このことでイシドールに激しく怒り、彼に対して「自然の理に反する罪」という不当な告発を突きつけた。　その告発を裏付けるため、テオフィロスは偽証人を

[7836] ベレア――シリアの都市で、現在のアレッポ。

[7837] プトレマイダ――シリアの都市で、地中海の東岸に位置する。

仕立て上げた。しかし、無実のイシドールは無罪とされた。とはいえ、抑えきれない悪意から、テオフィロスは結局、彼から長老の聖職を剥奪し、殴打と屈辱を伴って聖職者団から追放した。　無実の罪を着せられたイシドールは、　アレクサンドリアを去り、かつて若き日に暮らしていたニトリウス山[7838] へ隠遁生活を送るために退いた。そこで一軒の小屋に閉じこもり、神に祈りを捧げながら、その屈辱を忍耐強く耐え抜いた。

当時、エジプトの修道院には、徳高く神を畏れる四人の兄弟が住んでおり、彼らは生涯を断食と修道者の行いに捧げていた。　彼らの名は、ディオスコーロス、アモニオス、エウセビオス、エウフィミオスであり、全員が背が高かったことから、「長身たち」と呼ばれていた。これらの兄弟たちは、その徳高い生活ゆえに、アレクサンドリアの住民たちだけでなく、テオフィロス自身からも敬われていた。　そのうちのひとり、すなわちディオスコーロスを、彼は本人の意思に反してヘルモポリスの司教に任命した[7839] 。また、彼の兄弟であるアモニウスとエウフィミオスには、総主教庁に自分と一緒に住むよう懇願し、司祭の聖職に就くよう強要した。　テオフィロスの下で総主教庁に滞在する中で、彼らはテオフィロスが神の戒めに従わず、神よりも金を愛し、大きな不正を働いていることを目の当たりにした。そのため、彼らは総主教のもとにとどまることを望まず、彼のもとを去って再び隠遁生活に戻った。　彼らの去った理由を察したテオフィロスは、彼らに対して深く憤り、彼らに抱いていた愛情を憎悪へと変え、いかにして彼らに復讐するかを考え始めた。　まず彼は、ドルギエたちが追放されたイシドールと共にオリゲネスの異端を信奉しており、この異端によって多くの修道士たちを惑わしたという噂を流した[7840] 。 その後、彼は近隣の司教たちに対し、ニトリアの荒野から最年長の修道士たちを直ちに追放するよう命令を送ったが、その命令の根拠については一切示さなかった。 司教たちが総主教の命令に従い、山や荒野から[7841] すべての敬虔で神に奉仕する修行者たちを追放すると、追放された者たちは集まってアレクサンドリアの総主教のもとへ赴き、なぜ自分たちが非難され、居住地から追放されたのかを知らせてほしいと懇願した。　総主教は狂おしいほどの怒りに駆られ、まるで悪霊に取り憑かれたかのように彼らに襲いかかり、オモフォール[7842] をアモニオスの首に巻きつけ、彼を殴りつけながら叫んだ。

「異端者め、オリゲネスを呪え！」

[7838] ニトリアはアレクサンドリアの南、ナイル川の西、リビア砂漠の近くにある。この山の名前は、山に隣接する湖にニトラ（硝石）が豊富に存在することに由来する。

[7839] このディオスコーロス、すなわちヘルモポリスの司教であり敬虔な人物は、少し後に生きた異端者ディオスコーロスとは区別すべきである。後者は444年から451年にかけてアレクサンドリアの司教座に就いていた。　後者はモノフィシテ派であり、すなわち、イエス・キリストには一つの本質しかなく、その神性は人間性に吸収されていると説いた。ヘルモポリス教区はエジプト北西部、アレクサンドリアの南に位置しており、この教区にはニトリウス山も含まれていた。

[7840] オリゲネス（西暦180年頃生まれ、254年没）は、アレクサンドリア学派の指導者であり、その時代を代表する偉大な学者の一人であった。　異教の哲学者たちでさえ、オリゲネスについて、その知恵は自分たちを凌駕していると評していた。オリゲネスは多くの著作を残したが、そのうちの一部は断片として現代に伝わっている。　彼は主に、聖書の解釈で知られている。また、キリスト教の信仰の真理を擁護した『セルス反駁論』という著作も有名である。残念ながら、オリゲネスは自身の著作において、教会が認めていない恣意的な考えを時折述べることがあった。もっとも、それらを教会の公式な教義としてではなく、あくまで個人的な推測として提示していたのである。　例えば、彼は聖三位一体の各位格の関係について、必ずしも正確には教えていなかった。また、悪魔は望めば救われることができる、人間の魂は目に見える世界の創造以前に創造された、などと述べていた。アレクサンドリアやパレスチナに数多くいたオリゲネスの熱心な信奉者たちは、しばしばこれらの考えを極端なまでに発展させた。　これらの信奉者はオリゲニストと呼ばれ、彼らの見解は「オリゲネス派の異端」とされた。

[7841] ニトリウス山の西側には広大なリヴィア砂漠（現在のサハラ砂漠）が広がっており、そこには修道士たちのケリオン（隠遁所）があった。このことから、この砂漠は「ケリオス砂漠」とも呼ばれていた。

[7842] オモフォロス（ギリシャ語）とは、文字通り「肩掛け」を意味し、司教の法衣の一つで、肩にかけられ、前後に垂れ下がるものである。

アモニウスや他の者たちを殴打した後、テオフィロスは彼らの前で一言も語らせることを許さなかったばかりか、全員を不名誉な形で追い払った。一方、彼らはテオフィロスからの回答を待たずに、総主教の激怒や狂乱をほとんど意に介さず、自分たちの小屋へと戻っていった。

テオフィロスは近隣の司教たちを召集し、アムモニオス、エウセビオス、エウフィミオス、ディオスコロスの兄弟、そして前述の至福のイシドロスという四人の無実の修道士たちを、彼らの信仰告白を調査することなく破門した。 しかし、彼の悪意はこれだけでは収まらなかった。彼は自ら、異端、魔術、その他多くの重大な罪といった、彼らに対する多くの虚偽の告発を書き上げた。 その後、中傷者や偽証者を買収し、彼らにこれらの虚偽の告発を渡し、祝日に彼が教会で民衆に説教をしている際に、中傷者たちが彼の元へ近づき、前述の修道士たちに対する告発文を彼に手渡し、偽証者を立ち会わせるよう命じた。 このようにしてすべてが進行すると、総主教は、大聖堂でこれらの虚偽の告発を読み上げるよう命じた。 その後、彼はこれらの告発状を都の総督に見せ、彼から約500人の兵士 を借り受け、イシドール、ディオスコロス兄弟、および彼らの弟子全員を異端者および魔術師としてエジプト地方から追放する意図をもって、彼らと共にニトリウス山へ向かった。 テオフィロスは軍隊の力を借りて、まずディオスコロスを司教の座から追放し、その後、兵士たちにワインを飲ませて夜間にニトリウス山を襲撃し、何よりもまずイシドールとディオスコロスの兄弟たち——アモニウス、エウセビオス、エウフィミオス——を探し求めた。 彼らを見つけられなかったため（彼らは深い堀の一つに身を隠していた）、彼は兵士たちに、すべての修道士たちを襲撃し、彼らの住居を焼き払い、わずかな財産や衣服、食料をすべて略奪するよう命じた。 酔っ払った兵士たちは、至る所や洞窟へと殺到し、煙と炎の中で窒息死させ、最大一万人の聖なる断食者たちを殺害した（7月の10日、聖なる教会で彼らの記念日が執り行われる日である）。残りの修道士たちは、それぞれできる限り隠れる場所へと逃げ散った。その後、テオフィロスはアレクサンドリアへと退去した。

この大虐殺の後、生き残った修道士たちは集まり、殺された師や兄弟たちのために長く泣き悲しんだ後、それぞれが望む場所へと散っていった。 一方、ディオスコーロスとその兄弟たち、祝福されたイシドール、そして断食と徳行に輝き、神から奇跡を行う賜物を授かった多くの修道士たちは、深い悲しみの中でパレスチナへと去っていった。 彼らにとって苦しかったのは、侮辱され追放されたことではなく、何の罪もないにもかかわらず、テオフィロスによって教会から破門され、異端者と見なされたことだった。しかし、パレスチナにおいても、テオフィロスは彼らを放っておかなかった。彼は直ちにパレスチナの司教たちへ使者を送り、次のように伝えた。

「私の同意なしに、破門され、私から逃亡した者たちを受け入れてはならない。」

そこで、追放された者たちは、どこへ頼ればよいか分からず、確かな避難所としてコンスタンティノープルの聖ヨハネス・クラマトルスのもとへ向かい、彼の足元にひれ伏して、涙ながらに慈悲と助けを懇願した。 五十人の高名な紳士たちがこのような不幸に見舞われているのを見て、ヨハネは彼らを憐れみ、涙を流した。その後、彼らがテオフィロスからなぜそのような災難に遭ったのかを知ると、優しい言葉で彼らを慰め、聖アナスタシア教会に部屋を提供して安心させた。 彼らに生活費を提供したのは聖ヨハネだけでなく、聖オリンピアというディアコニッサも、自身の資金から必要なものをすべて届けていた。このディアコニッサは、貧しい人々や旅人が安らぎを得て、生活に必要なものをすべて手に入れられるよう、自身の全財産を捧げた。 彼女はまさに聖女であり、あの修道士たちもまた聖人であった。そのうち数人の記憶は、後に教会によって祝祭日として称えられた。その中でも特に際立っていたのが、イェラクという名の男で、長年にわたり荒野で孤独に暮らしていたが、悪魔たちは彼を次のように誘惑した。

「老僧よ！ お前はあと五十年も生きるのだ！ これほど長い間、砂漠でどうやって生きていくつもりだ？」

しかし彼は、その誘惑を見抜くと、こう言った。

「お前たちは、私にこれほど短い寿命を予言して悲しませるが、私はこの荒野で二百年にわたり苦難に耐える覚悟をしているのだ。」

これを聞いて、悪魔たちは恥じ入って逃げ去った。まさにこのような、悪魔たちにも動揺させられなかった父を、アレクサンドリアのテオフィロスが追放したのだ！　また、聖なる修道士たちの中には、聖書に精通したイサク長老がいた。彼は聖マカリオスの弟子であり、母の胎内から清らかであった。というのも、彼は五歳の時に荒野に連れて行かれ、そこで育ったからである。そして、テオフィロスによって追放されたすべての修道士たちは、聖なる者であり、敬虔な者たちであった。　至福のヨハネは彼らを深く敬い、教会への参拝を禁じることはなかったが、自身が彼らを教会から破門された理由を詳細に解明し、テオフィロスと和解させるまでは、聖体拝領を許さなかった。　彼は、彼らが王に自分の不満を口にしたり、テオフィロスに不満を訴えたりしないよう制止し、テオフィロスと彼らを和解させると約束した。ヨハネは実際にテオフィロスに手紙を書き、あの修道士たちがエジプトの自分の修道室で平和に暮らせるよう許可し、再びキリストの教会の懐に受け入れるよう求めた。

一方、ヨハネスが追放された修道士たちを自身の交わりに受け入れたという噂が、テオフィロスにも届いた。同時に、一部の誹謗者たちは、コンスタンティノープルの司教が彼らに聖体拝領を許したかのように彼に告げた（これは事実ではなかった）。　この件でテオフィロスはヨハネスに激しく怒り、教会規定の違反を非難する挑発的な書簡を送った[7843]。しかし、ヨハネスはその後、再びテオフィロスに和解を求める書簡を送り、怒りを収め、修道士たちが追放された地での滞在を禁じないよう懇願した。　しかし、テオフィロスは以前よりもさらに粗暴な口調でヨハネに返答し、それらの修道士たちよりもむしろヨハネに対してさらに激しい怒りを抱くようになった。その時になって初めて、修道士たちは王に嘆願書を書き、テオフィロスから無実の罪で被ったすべての　苦難を詳述した。彼らは、王が教会に滞在していた際に、その嘆願書を王に提出した。

これほど誠実で高潔な修道士たちの不幸を憐れみ、　皇帝は直ちにアレクサンドリアの地方長官に対し、たとえ強制であってもテオフィラスをコンスタンティノープルの裁判に送るよう命じた。それは、彼が総主教ヨハネスと司教会議の前で、自身の悪意の理由について説明し、その行いに対して裁きを受けるためであった。 また、皇帝はローマ教皇イノケンティウス[7844]にも書簡を送り、テオフィロスの裁判を行うための公会議に出席させるべく、教皇から司教たちをコンスタンティノープルへ派遣するよう要請した。　教皇は直ちに自国の司教たちに旅の準備をするよう命じ、東方の司教たちが集まったかどうかについて、アルカディウス皇帝からの通知を待つことにした。しかし、皇帝は二度と書簡を送らなかったため、西方の司教たちはコンスタンティノープルに現れなかった。　その間、テオフィロスはアレクサンドリアの地方長官を買収し、同長官は、彼がインドからあらゆる芳香剤や甘美な珍味を収集し、それらを船でコンスタンティノープルへ送ることができるようになるまで、アレクサンドリアに滞在することを許可した。　同時に、テオフィロスはキプロスの司教である聖エピファニオスを味方につけ、[7845]、聖ヨハネを誹謗中傷し、彼がオリゲネスの信奉者たちを受け入れ、彼らと共に聖体拝領を行っているとして、異端者であると主張した。　悪意のない人柄であったエピファニオスは、テオフィロスの狡猾さに気づかず、その嘘を信じ、敬虔さを守ることに熱心であったため、キプロスで開催された地方公会議でオリゲネスの書物を呪い、その後、ヨハネに書簡を送

[7843] 第32使徒規則は、ある司教によって破門された者は「他の司教によって交わりに受け入れられるべきではない」と定めている。第1回全地公会議の第6規則も同様の要件を定めている。

[7844] 教皇イノケンティウスは、402年から417年にかけてローマ教会を統治した。

[7845] キプロス島は、地中海東部、小アジアの南に位置している。 エピファニオスは365年から402年までキプロスの主教座に就いていた。彼は博学で、ギリシャ語、ヘブライ語、シリア語、エジプト語、ラテン語を習得していた。その聖性により深く尊敬され、死後は聖人の列に加えられた。彼の記念日は5月12日である。

り、彼にも同様に振る舞うよう勧めた。　しかし、ヨハネはこの件を急ぐことなく、聖書の研究を続け、すべての関心を、教会で民を教え、罪人を悔い改めへと導くことに注いでいた。

その間、テオフィロスはコンスタンティノープルへの旅の準備を進めながら、聖エピファニオスにも同地へ同行するよう懇願した。

「我々は」と彼は言った、「オリゲニストたちに対する公会議を開くつもりだ。」

彼の説得に納得したエピファニオスは、急いでコンスタンティノープルへと向かい、テオフィロスより先に到着した。しかし、彼がコンスタンティノープルに到着する前に、次のような出来事が起きていた。

そこにはテオグノストという名の貴族が住んでおり、彼は善良で敬虔な人物であった。彼は、王を誹謗中傷し、王妃を「金に貪欲な女」と呼び、彼女が不当に他人の財産を奪っていると語ったとして、王の前で誣告された。　王はテオグノストに激怒し、彼をテッサロニキへ流刑に処すよう命じ、その全財産と所有地を没収した。ただし、街の外れにある一つのブドウ畑だけは例外とし、王はテオグノストの妻と子供たちの生計のためにそれを残すことを許した。　テオグノストはテッサロニキへの道中で病に倒れ、悲しみのあまり亡くなった。夫を深く悼む妻は、聖ヨハネのもとを訪れ、涙ながらに自身の悲しみを打ち明けた。　聖人は賢明な言葉で彼女を慰め、その悲しみを神に委ねるよう助言した。その際、彼は彼女に、自分と子供たちのために教会の施し所から毎日食事を取ることを許可し、一方で、王に懇願して、理由もなく没収された財産を未亡人と子供たちに返還してもらうための好機を伺っていた。　しかし、王妃は悪意から、これを妨げただけでなく、聖ヨハネに甚大な災難をもたらした。

ある日、ぶどうの収穫の最中、エウドクシアは王室のぶどう畑からそう遠くない場所にあったテオグノストのぶどう畑のそばを通りかかった。その美しい景色に惹かれて彼女は中に入り、自分の手で房を切り取り、それを食べた。　一方、宮廷には次のような法令があった。もし皇帝または皇后が他人のブドウ畑に入り、房を食べた場合、そのブドウ畑の所有者はそれ以降、その畑に対する権利を失い、その畑は王室の所有物とみなされる。そして、その所有者は金銭による補償を受けるか、皇帝から別のブドウ畑を授与されることになっていた。　この法令に基づき、エウドクシアはテオグノストスのブドウ畑を王室の所有地に編入するよう命じた。　彼女がこのように行動したのは、次のような理由によるものであった。一方では、エウドクシアは、未亡人とその子供たちに恥をかかせたいと望んでいた。というのも、彼女がヨハネのもとを訪れ、自身の悲しみを打ち明けたことに憤慨していたからである。他方では、女王はヨハネを教会から追放するために、彼に対する告発材料を探していたのである。 彼女は当然、 、もしヨハネがこのことを知れば黙ってはいないだろうこと、むしろ不当な扱いを受けた未亡人を擁護するだろうこと、そしてそこから不和が生じ、自分の企みが成就することを知っていた。そして、その通りになった。

実際、不当な扱いを受けた未亡人は、聖ヨハネのもとへ駆け寄り、泣きながら、女王が子供たちを養うための最後の希望であるブドウ園を奪ったと告げた。　ヨハネは直ちに、大助祭エウティキオスを通じて女王に手紙を送り、彼女の両親の徳高い生き方を想起させ、　歴代の王たちの美徳を挙げ、神への畏れを心に呼び起こし、神の最後の審判を想起させて彼女の魂を戒め、貧しい未亡人にぶどう畑を返還するよう懇願した。　女王は、ヨハネの忠告に従わず、その懇願にも耳を貸さず、彼に厳しい返答を書き送った。その中で彼女は古代の王の法律に言及し、まるで彼に侮辱されたかのように、これ以上そのような侮辱は耐えられないと高慢に宣言した。

「あなた」と女王はヨハネに書き送った。「王の法令を知らず、その言葉の中で私を不法を行う者として非難し、私を傷つけた。しかし、私はもはやあなたの侮辱的な言葉を許さないし、私への侮辱を止めようとしないあなた自身も許さない。」

この手紙を読んだ聖ヨハネは、自ら王宮へ赴き、再び穏やかな言葉で女王を諭し、以前よりも強く懇願し、未亡人にぶどう園を譲るよう強く求めた。

女王はこう答えた。

「ぶどう畑に関して、かつての王たちが定めたことについては、すでにあなたに手紙で書いた。未亡人には、自分のぶどう畑の代わりに別のぶどう畑を選ばせるか、あるいは自分のぶどう畑の代金を支払わせればよい。」

これに対し、聖人はこう言った。

「彼女は別のぶどう園を要求しているわけでも、奪われたぶどう園の代償を求めているわけでもなく、ただ奪われたものを返してほしいと願っているのです。ですから、彼女にそのぶどう園を返してあげなさい！」

王妃はこう答えた：

「古来の王の法律に逆らってはならない。そのような抵抗は、あなたにとって何の益にもならないからだ。」

「異教の王たちが定めた古の法令や法律を盾に、自分の行いを正当化してはならない！」と、神に愛された聖人はこれに対し言った。 「敬虔な女王よ、不公正な法を廃し、公正な法を制定することに、何ものもあなたを妨げることはない。さあ、不当な扱いを受けた者にぶどう園を返せ。そうしなければ、私はあなたを第二のイゼベルと呼ぶことになるだろう[7846] 、そしてあなたは、あの不義なイスラエルの女王と同様に呪いを受けることになるだろう。」

彼がこう言い放つと、女王は激しい怒りに燃え上がり、王宮中に叫び声を響かせ、心の奥底に秘めた憎しみを露わにした。

「私自身があなたに復讐してやる。だから、あの女性にぶどう畑を返すどころか、別の畑も与えず、私が横取りした分の代金も支払わない。そして、この侮辱に対して、あなたに相応の罰を下してやる。」

そして彼女は、聖ヨハネを王宮から力ずくで追い出すよう命じた。王妃によってこれほど不名誉な形で追放された聖ヨハネは、処罰をちらつかせて、自分の大助祭エウティキオスに次のように実行するよう命じた。

「教会の門番たちに、女王が教会に近づいた際には、彼女の目の前で扉を閉ざし、彼女や彼女と共に来る者全員の教会への立ち入りを許さないよう伝えなさい。門番たちは、それがヨハネの命令であると彼女に告げさせなさい。」

「聖十字架の祝日が訪れ、民衆全員が教会に集まったとき、王も重臣たちを伴ってそこへやって来た。王妃も、その随行者全員を連れてやって来た。 門番たちは王妃の姿を見ると、総主教の命令に従い、彼女を中に入れないよう、教会の扉を閉ざした。すると、王の従者たちは叫んだ。

「皇后様、門を開けてください！」

しかし、門番たちはこう答えた。

「総主教の命令で、彼女を入れないよう命じられている！」

恥と怒りに満ちた女王は言った。

「皆、見てごらん。この頑固な男が私にどれほどの恥をかかせているか！ 誰もが何の妨げもなく教会に入っているのに、私だけが入ることを禁じられている！ 私が彼に復讐し、その座から引きずり下ろしてはいけないというのか？」

彼女がそう叫んだとき、彼女と一緒に来ていた者の一人が剣を抜き、扉を打ち砕こうと振りかぶった。すると突然、その男の手が萎えてしまい、まるで死んだかのように動かなくなってしまった。 これを見た女王と彼女の随行者たちは恐怖に駆られ、引き返した。一方、手が萎えてしまった男は教会に入り、群衆の真ん中に立ち、大声で叫んだ。

[7846] イゼベル――イスラエルの王アハブの妻であり、シドン（フェニキア）の王の娘。邪悪で権力欲の強い気性、そして異教への傾倒で知られていた。 彼女は、とりわけ、ナブフェヤという名のイスラエル人のぶどう園を不当に奪い、その男を滅ぼした。

「聖なる主よ！　私を憐れみ、聖なる神殿に手を上げようとしたこの萎えた手を癒してください。私は罪を犯しました――お赦しください！」

その男の手が萎えてしまった理由を悟った聖人は、祭壇の洗面所でその手を洗うよう命じると、手はたちまち癒やされた。この奇跡を目撃した民衆は皆、神を賛美した。　この一連の出来事は皇帝の耳にも入ったが、彼は皇后の邪悪な気性を知っていたため、この出来事を何とも思わなかった。むしろ聖ヨハネを敬い、愛情を込めてその教えに耳を傾けていた。しかし、皇后はあらゆる手段を尽くしてヨハネの追放を画策し、やがてその目的を達成した。

[7847]その頃、キプロスの司教である聖エピファニオスが、オリゲネスを批判して書かれた著作を携えてコンスタンティノープルに到着した。　船から降りると、彼は都から七スタディオン離れた場所にある聖ヨハネ・洗礼者教会に入った[7848]。そこで聖体礼儀を執り行い、助祭の叙階を行った。これは、管区主教の許可なくして、他の教区の信徒を叙階することを禁じている教会法[7849]に反する行為であった。。その後、彼はその町に到着し、ある民家に身を寄せた。この一連の出来事は聖ヨハネの耳にも入ったが、彼はエピファニオスが自分の教区で助祭を叙任したことを咎めなかった。なぜなら、彼はエピファニオスを聖なる人物であり、悪意のない人だと考えていたからである。　それればかりか、彼は使者をエピファニオスのもとへ送り、他のすべての司教たちがそうしていたように、自分のもとに来て、パトリアルヒの邸宅に共に住むよう要請した。しかし、エピファニオスはこれに同意せず、ヨハネと会うことさえ望まず、使者に対して次のように答えた。

「もしヨハネスがディオスコーロスとその修道士たちを街から追放せず、またオリゲネスの著作を否定する文書に署名しないのであれば、私は彼とは交わりを持ちません。」

ヨハネスは使者を通じてエピファニオスにこう答えた。

「公会議での審議が行われるまでは、何事も独断で決めるべきではない。」

一方、ヨハネの敵対者たちはエピファニオスの元を訪れ、聖使徒教会において、民衆全員の面前で、　オリゲネスの著作を呪い、ディオスコーロスと共にエジプトから追放されたすべての修道士たちを、オリゲネスの追随者として教会の交わりから破門し、またヨハネスがオリゲネス派を受け入れ、彼らの見解に賛同していることを糾弾するよう懇願した。　敬虔さを重んじるエピファニオスは、翌日朝、聖使徒教会へ向かい、オリゲネスの著作を呪おうとした。このエピファニオスの意図を知った聖ヨハネは、使者を彼のもとへ送り、次のように伝えた。

「エピファニオスよ！　あなたは多くの点で教会法に背いている。まず第一に、あなたは私の同意なしに、私の教区で聖体礼儀と司祭叙階を行った。次に、私たちと共に住むことを拒み、今やあなたは私の教区の教会に入り、公会議の裁きも経ずに破門を宣告しようとしている。　民衆の間に混乱を招き、自らも災いに陥ることのないよう、用心せよ。

これを聞いたエピファニオスは迷い始め、教会を退いて、テオフィロスの到着を待つことにした。しかし、主は御自身の聖徒たちの間にいかなる敵意も生じさせまいと、エピファニオスに、ヨハネが太陽のように清く、人間の嫉妬によって告発されていることを明らかにされた。　エピファニオスは、実際に多くの人々から、ヨハネの偉大な美徳、その汚れなき信仰、そして至高の生活について聞いており、多くの者がヨハネに反旗を翻し、彼に対して様々な告発をでっち上げていることに驚いていた。そのため、キプロスの聖人は、始まったこの件がどのように決着するか、辛抱強く待つことにした。

[7847] 使徒規則第35条には次のように記されている。「司教は、自らの管区の境界を越えて、自分に属さない都市や村で叙階を行うことを敢えてしてはならない。もし、それらの都市や村を管轄する者の同意なしにこれを行ったことが発覚したならば、その司教自身も、また彼によって叙階された者たちも、追放されなければならない」。 第1回全地公会議の第16規則、第3回全地公会議の使徒書簡、アンキア公会議の第33規則、サルディキ公会議の第15規則を参照のこと。

[7848] スタディオン――古代の距離単位。ギリシャのスタディオンは少なくとも100サジェンに相当した。

[7849] カノンとは、信仰、道徳、および教会の規律に関して教会によって定められた規則のことである。

エピファニオスがヨハネを避け、彼と交流を持っていないと耳にしたエウドクシア皇后は、二人の間に敵意があると推測した。エピファニオスを呼び寄せ、彼女はこう言った。

「エピファニオス神父よ！　ギリシャ・ローマ帝国全体が、私たちの権力の掌握下にあることは、あなたもご存知でしょう。さあ、もしあなたが私の言うことを聞き、私の悲しみを癒やし、私が企てたことを成し遂げてくれるなら、教会の全権をあなたに委ねましょう。」

エピファニオスは答えた。

「お話しなさい、わが子よ。我々は力の及ぶ限り、あなたの魂の救いとなるよう尽力いたします。」

そこで女王は、エピファニウスを巧みな言葉巧みに説得して自分の企てに引き込めるだろうと考え、ヨハネについて次のように語り始めた。

「このヨハネは、私や王に反抗し、私たちにふさわしい敬意を払わないため、教会の指導者として立つに値しない者となってしまった。さらに、多くの者が彼を異端者だと主張している。このため、公会議を招集してヨハネの聖職を剥奪し、その代わりに教会を適切に統率できる別の人物を据えることが望ましいだろう。」

そう言いながら、女王は神の御使いに対する激しい怒りのあまり、全身を震わせていた。その後、彼女は再び語り始めた。

「とはいえ、多くの司祭たちをここに招集して公会議を開く必要はないでしょう。聖なる父よ、あなたご自身で彼を教会から追放し、その代わりに神があなたに示される別の人を任命してください。私は私の側で、皆があなたに従うよう手配します。」

「わが子よ」とエピファニオスは答えた。「怒りを抑えて、あなたの父の言葉を聞いてください。もしヨハネが、あなたがたが主張するように異端者であり、その異端を悔い改めないのなら、彼は総主教の位にふさわしくない。その場合は、あなたが命じる通りに彼を処遇しよう。」　しかし、もし彼があなたを侮辱したとして彼を追放したいと望むのであれば、エピファニオスはこれに同意しない。なぜなら、王は恨みを抱く者であってはならず、善良で、柔和であり、自分に対する侮辱をも赦すべきだからだ。あなた方もまた、天に王がおられ、その御前からご自身の罪の赦しを求めているではないか。　他の人々に対しても同様に振る舞いなさい。*「だから、あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深くなれ」*（ルカ6:36）――と救い主は言われた。

「父よ」と、女王はエピファニオスに答えた。「もしあなたがヨハネを追い出さないなら、私は偶像の神殿を開き、多くの者が神から背いて偶像を崇拝するよう仕向けます。そうなれば、後の方が最初よりもさらにひどい事態となるでしょう。」

彼女は憤りを込めてそう語り、涙を流した。女王の狂おしい怒りに驚いたエピファニオスは言った。

「私は、そのような義人の非難からは無縁である。」

そう言うと、彼は宮殿を後にした。

女王が偉大なるエピファニオスをヨハネに対して扇動したこと、そしてエピファニオスが王宮を訪れ、総主教の追放について女王と協議しているという噂が、街中に広まった。　この噂はヨハネの耳にも届き、気性の激しい彼は教会で民衆全員を前に説教を行い、その中で聖書に記された様々な女性たちの残虐な事例を挙げた。民衆の多くは、ヨハネの女性に関する言葉を聞いて、彼が女王のことを暗に指しているのだと考えた。　ヨハネの敵たちは、彼のこれらの言葉を羊皮紙に書き留め、女王に伝えた。女王はそれを読み、彼が自分だけを指して語ったのだと判断し、涙ながらに、ヨハネが教会で自分を中傷していると王に訴えた。彼女は泣きじゃくりながら王にこう言った。

「私の屈辱は、同時にあなたの屈辱でもあることを知ってください。ヨハネスが私を中傷するとき、彼は同時にあなたをも辱めているのです。」

そう言いながら、王妃は王に、公会議を招集し、ヨハネを追放するよう命じるよう懇願した。これと同時に、彼女はアレクサンドリアのテオフィロスに、コンスタンティノープルへ来るよう手紙を書いた。

「私」と彼女は記した。「王にあなたのために懇願し、あなたのすべての敵の口を封じます。ただ、直ちに私たちのところへ来て、多くの司教を集め、私の敵であるヨハネを追放してください。」

皇后の手紙に勇気づけられたテオフィロスは、それを受け取るやいなや、インド産の香料や野菜、高価なエジプト産の絹織物や金糸織物を満載した船団を率いて、コンスタンティノープルへと向かった。　彼は、こうした財宝によって、ヨハネに対する悪意ある企てに多くの者を協力させられることを期待していた。

その頃、至福のヨハネスは聖エピファニオスに次のように書き送った。

「兄弟エピファニオよ！　あなたが私を追放するよう助言したと聞いた。それならば、あなたがもはや自分の座に就くことはないことを知っておきなさい。」

エピファニウスは彼に書面でこう返答した。

「殉教者ヨハネよ！　その苦難に耐え忍びなさい。そして、あなたが追放されるその場所には、決してたどり着けないことを知っておきなさい。」

二人の預言はともに成就した。エピファニオスは、コンスタンティノープルにしばらく留まった後、聖ヨハネに対して不当な迫害が行われているのを見た。義人に対する強盗のような裁判の共犯者となることを望まなかった彼は、側近たちと共に密かに船に乗り込み、故郷へと向かった。　道中、エピファニオスはヨハネの預言通り、故郷の町にたどり着くことなく、主のもとへ召された。　同様に、ヨハネスも二度目の追放の際、エピファニオスの預言通り、追放先の地に着く前に主のもとで息を引き取った。しかし、この件については後ほど述べることにしよう。ここでは、中断していた出来事の叙述に戻ろう。

女王の助けを期待し、何ものをも恐れることなく、アレクサンドリア総主教テオフィロスは、多くの司教を随行させ、彼らを巧みに説得して自らの考えに同調させた上で、直ちにコンスタンティノープルへと向かった。皇帝は、教皇インノケンティウスからローマの司教たちが到着するまでは、テオフィロスを迎え入れることを望まなかった。　皇帝は、ローマ人たちが公会議への出席を招請する第二の手紙を待っていることを知らなかった。一方、皇后は皇帝に内緒でテオフィロスと彼と共にやってきたすべての司教たちを呼び寄せ、ヨハネスに関する自身の意図を伝え、聖人を教皇の座から追放するよう尽力してほしいと頼んだ。　彼らは協力を約束し、その見返りとして女王から贈り物を授かった。その後、女王はエジプトからやって来てテオフィロスに不満を訴えていたすべての修道士、司祭、司教たちを呼び寄せた。その中には、テオフィロスから離反し、彼に対する裁きを求めていた司教6名と、司祭および助祭20名が含まれていた。　彼ら全員を集めると、女王はテオフィロスに対する告発を裁判に持ち出さないよう、また彼への恨みを許すよう懇願した。　王妃の言葉を聞き入れた者たちは、自らの悲しみを主に委ねて沈黙を守ったが、イシドールやイラクス（ディオスコーロスはその直前に他界していた）らを含む他の者たちは、それぞれの荒野へと去っていった。また、王妃の提案を完全に拒否した者たちもいた。　沈黙することに同意した者たちには、女王は贈り物を与えて厚遇したが、抵抗した者たちはテッサロニキへ流刑に処した。こうしてテオフィロスは、すべての敵から解放され、ヨハネに対する訴追を成功裏に開始することができた。

その頃、聖ヨハネは、いつものように教会で神の言葉を説教し、列王記第三書にある聖書の一節を次のように読み上げた。

「バアルの預言者たち、そしてイゼベルの食卓から食を得ている四百人の恥ずべき預言者たちを、わたしのところに集めよ。そうすれば、エリヤが言ったように、彼らにこう告げよう。『いつま

で両膝を震わせて跛行し続けるのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルであるなら、彼に従え』[7850]。」

これを聞いたヨハネの敵たちは、テオフィロスと彼と共にいた司教たちにこのことを伝えた。司教たちはその言葉を書き留め、それを悪意を持って曲解し、自分たちの言葉を付け加えて、ヨハネが人々の前で公然とイゼベル王妃の名を挙げ、彼らを偽りの預言者たちと呼んでいると語った。　彼らはその記録を王と王妃に提出した。すると王妃は泣きながら、再び王にヨハネの裁きを求めた。王は王妃を憐れみ、テオフィロスに対して抱いていた怒りのすべてをヨハネに向け、テオフィロスに彼に対する公会議を招集するよう命じた。テオフィロスは、志を同じくする者たち全員と共に、王がヨハネに対して怒りを向けていることを喜んだ。　ヨハネによって教会から破門されていた二人の助祭――その一人は殺人を、もう一人は姦淫を犯していた――を見つけ出したテオフィロスは、彼らがヨハネに対して偽証を行うことを条件に、彼らを司教に叙任すると約束した。　彼らもまた、聖人に対して敵意を抱き、司教の座を望んでいたため、直ちにテオフィロスの意に従うことを約束した。テオフィロスはヨハネに対する多くの虚偽の告発を書き上げ、それらの助祭たちに渡し、彼ら自身の名義で公会議に提出させた。

公会議の会場は、ハルキドンの郊外に定められていた。そこには王宮と、聖使徒ペトロとパウロの大聖堂があった[7851]。司教たちはそこに集まり、テオフィロスと共に会議を開いた。一方、至福のヨハネは、彼に従っていた四十人の司教たちと共に、自身の総主教邸で会議を開いた。　聖人は、敵の悪意が成功を収めたことを悲しみをもって見て、どうしてこのようなことが起きたのか、また、自分に対する裁判のために召喚されたはずのテオフィロスが、いかにしてこれほど早く王やすべての高官たちを味方につけ、被告から裁判官へと立場を逆転させたのか、純真な心で不思議に思った。そして、聖ヨハネは司教たちにこう言った。

「兄弟たちよ！私のために神に祈ってください。そして、もしキリストを愛するならば、あなたがたの教会を離れてはなりません。　私にとってはすでに苦難の時が近づいており、多くの悲しみを経て、まもなく主のもとへ旅立つことになるでしょう。サタンが私の教えに耐えかねて、私に対して不義の公会議を招集したことがわかります。しかし、私のことを悲しまず、祈りの中で私を覚えていてください。

これを聞いて、皆は恐怖に襲われ、泣き崩れた。　聖人は彼らに静まるよう命じ、慰めた。彼が自身の公会議と話し合っている最中、テオフィロスの公会議から使者がやって来て、ヨハネを裁判に召喚し、彼に対して提起された告発に対して答弁するよう求めた。ヨハネと共にいた司教たちは、その使者たちを通じてテオフィロスにこう伝えた。

「聖人を、カインが野原でアベルを呼び出したように呼び出してはならない。むしろ、あなたがたの方から我々のところへ来て、我々の前で無実を証明せよ。我々は、あなたが犯した不法行為に関する書面による証拠を所持している。それゆえ、ここへ来なさい。なぜなら、神の恵みによって集められた我々は、教会を破壊するためではなく、平和のために集まっているのだから。その数は、あなたがたの公会議の参加者よりもはるかに多いのだ。」

聖ヨハネは、その一方で使節たちにこう言った：

「私の明らかな敵のもとへは行けない。」

[7850] この言葉は、列王記下18章19～21節の改変された文章であり、イスラエルの民とバアルの祭司たちが、主とバアルに犠牲を捧げるためにカルメル山に集まったことについて、預言者エリヤが語ったものである。　この集会の目的は、イスラエルの神の真実さとバアルの虚偽を証明することにあった。民が集まると、エリヤは言った。「いつまで、あなたがたは両足でよろめき続けるのか？」、すなわち、いつまで神とバアルの両方に仕え続けるのか、という意味である。もし主が神であるなら、バアルではなく主を崇めよ。もしバアルが神であるなら、バアルを崇めよ。　その後、エリヤは犠牲の捧げ物による試練を提案し、その結果、バアルの祭司たちは恥をかかされた。

[7851] ハルキドンはコンスタンティノープルの対岸、ボスポラス海峡のアジア側に位置していた。

そして、行かなかった。

二度、三度と不法な裁判に召喚された聖人は、使者たちにこう言った。

「私は誰のもとへ行けばよいのか？　敵のもとか、それとも裁判官のもとか？　私は全世界の法廷に立つ用意はあるが、それは私の敵も私と共に裁かれ、裁判官が他の人々であるという条件付きだ。しかし今、私の裁判官となっているのは私の敵たちであり、彼らは私と共に裁かれることを望まず、ただ私を裁こうとしている。そのような裁判には私は行かない。　しかし、すべての教会から司教たちが集まるのであれば、その時こそ私も裁判の場に立つつもりだ。

そう言うと、彼は自分の代わりに三人の司教と二人の長老を遣わし、彼らに自分の代わりに弁明させようとした。テオフィロスの公会議は、ヨハネの使節たちを見るやいなや、彼らに一言も語らせることなく侮辱を浴びせ、そのうちのひとりに、ヨハネのために用意されていたあの鉄の鎖をはめた。　その後、この公会議の参加者たちは、無実で清らかな心を持つヨハネを告発するためにでっち上げられた虚偽の告発状を読み上げ、偽証人を引き立て、彼に対して裁判を下した。

そのとき、聖ヨハネは自身の司教たちと共に総主教座教会にいて、彼らに向かって次のように語った。

「波は高く、荒れ狂っているが、私たちは沈むことを恐れない。なぜなら、私たちは岩の上に立っているからだ。海が泡立ち、荒れ狂おうとも、岩を砕くことはできない。波が立ち上がろうとも、イエスの船を沈めることはできない。　教えてほしい。私たちが何を恐れるべきなのか？死か？しかし、*「私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」*（フィリピ1:21）。

追放を恐れるべきでしょうか、教えてください。しかし、*「地と、その中にあるすべてのものは、主のもの」*（詩篇23:1）なのです。財産を失うことを恐れるべきでしょうか？　しかし、私たちはこの世に何も持ってこなかったのですから、当然、何も持ち出すことはできません。要するに、この世に恐ろしいものなど何一つなく、私はそれを恐れることもなく、自分の持っているものすべてを軽んじます。私は貧しさを恐れず、富を望まず、死を恐れません。ただ、あなたがたが善に励むよう祈るだけです。

一方、テオフィロスは自身の司教会議と共に、聖ヨハネを聖職追放に値する者として断罪し、彼の顔を見ることなく、声も聞くことなく、その司教座を剥奪した。こうして、彼らはかねてより準備していた悪事を一日のうちに完遂し、その後、王に次のような手紙を送った。

「ヨハネは多くの罪で告発されており、裁判に出頭することを拒んだため、自らも有罪を認めた。この理由により、彼は聖職から追放された。あとは、あなたが彼を教座から追放するよう命じる以外、何も必要とされない。」

アルカディウス王は、ヨハネに対する告発状を読むこともなく、聖なる敬虔な者の弁明に耳を傾けることも拒んだ。彼は躊躇なく不正な公会議の言葉を信じ、直ちにヨハネを教会から追放するよう命じた。そのために、まるで戦争に出るかの如く、ある高官を軍勢を率いて彼のもとへ派遣した。

これを聞いた民衆は怒りに燃え上がり、数え切れないほどの人々が集まり、三日間も教会の前から離れず、ヨハネを追放することを許さなかった。その際、人々は皆、神の聖人を不当に非難したとして、王と王妃、そしてテオフィロスに対して大声で非難の声を上げた。　そこでヨハネは、王に従わないという別の罪状をでっち上げられるのではないかと恐れ、民衆から身を隠した。そして夕暮れになると、教会を後にし、密かに外へ出て、彼を捕らえるために派遣された兵士たちの手に身を委ねた。兵士たちは彼を海湾へと連行し、ニコメディアの対岸にあるプレネットへと船で向かった。

このことを知った民衆は大騒ぎを起こし、その最中に多くの住民が殺害され、さらに多くの人々が負傷した。不満を抱く者の中には、テオフィロスを石で打ち殺そうとする者さえいた。これを知ったテオフィロスは密かに街から逃げ出し、直ちにアレクサンドリアへと船出した。彼の志を同じくする他の者たちも同様に散り散りになった。　至る所で民衆の叫び声が響き渡り、教会でも広場でも、これほど偉大な「世界の灯」を転落させた不公正な裁判に対して、人々は声高に不満を訴えていた

。宮殿を取り囲んだ民衆は、恐ろしい叫び声と泣き声を上げながら、ヨハネを総主教の座に戻すよう懇願した。　その頃、ある夜、激しい地震が起こり、皆が大きな恐怖に襲われた。とりわけ女王は恐怖に震えた。彼女の宮殿は他の建物よりも激しく揺れ、一部は崩れ落ちてしまったからである。これを見た民衆は皆、大声で叫び始めた。

「ヨハネが戻らなければ、街全体が崩れ落ちてしまう！」

王は神の懲罰と民衆の反乱を恐れ、急いで王妃の宦官ブリッソンをヨハネの元へ遣わした。今や王妃もまた、地震と民衆の反乱をひどく恐れたため、王にヨハネを戻すよう命じるよう懇願していた。こうして、聖人に街へ戻るよう懇願するために使者が次々と派遣され、フラキア海（[7852]）は使者を乗せた船で溢れかえった。執拗な懇願に折れて、聖ヨハネはコンスタンティノープルへ戻ることに同意した。　この知らせを聞いた市民たちは皆、灯りをともしたろうそくを手に彼を出迎えに駆け出し、海は聖人を迎える船で埋め尽くされた。ヨハネスは都に到着したが、大公会議で自分が追放された理由について調査が行われるまでは、都に入ることを拒んだ。　しかし、民衆は、自分たちの牧者が教座の外に留まることを強く拒み、王に対して憤りを込めて不平を漏らした。民衆の強い要望に屈し、ヨハネは都市に入ることを余儀なくされた。賛美歌や聖歌が歌われる中、敬意を込めて彼は教会へと導かれた。　神への祈りの後、この神に愛された聖人は自らの座に着き、人々に平安を告げて説教を行った。その雄弁で教訓に富んだ言葉を聞き、皆は彼の帰還を喜び、ヨハネの敵の群れは散り散りになり、すべての反対者たちは逃げ去り、沈黙した。

玉座に復帰した聖ヨハネは、深い静寂の中でキリストの教会を統率し、言葉の羊たちを甘美な教えで養った。そのような牧者であり教師を擁して、教会全体はしばらくの間、栄光に包まれ、慰められていた。　しかし、二ヶ月も経たぬうちに、ひと時は収まっていた聖ヨハネに対する嵐が再び巻き起こった。その経緯は次の通りである。

聖ソフィア教会[7853]の近くには、エウドクシアの命により、女王の像が頂上に据えられた高い柱が建てられた。柱の除幕式を祝して、その周囲では様々な催しや歓喜の声が上がり、それは数日間続いた。　歓喜する人々の歓声や叫び声は聖ソフィア大聖堂にまで響き渡り、神聖な賛美歌の歌声と混ざり合っていた。　聖ヨハネは、この事態を明らかな冒涜であり、聖なる場所への侮辱であると見なし、そのため、市長の介在を通じて、柱の周囲で繰り広げられていた無秩序な歓喜の宴を止めようと努めた。しかし、市長は彼に何の　協力も示さなかった。そこで、聖なる場所への侮辱を憂慮したヨハネは、教会で鋭い非難の言葉を述べた。その言葉は次のように始まっていた。

「またしてもヘロディア[7854]が狂乱し、またしても暴れ回り、またしても跳ね回り踊り狂い、またしてもヨハネの首を狙っている！」

ヨハネの密告者や敵たちは、彼の言葉を「まるで自分がヘロディアに例えられているかのような意味」と解釈し、悪意に満ちてこれを女王に報告した。エウドクシアは激しい怒りに駆られ、泣きながら王に、再びヨハネに対する公会議を招集するよう懇願した。　こうして、再びすべての司教たちに対し、コンスタンティノープルに集まり、ヨハネに対する裁判を行うよう招く王の勅書が送られた。以前、神の聖なる御使いであるヨハネに対する不法な裁判に参加した者たちが、再び集まった。ただテオフィロスだけは不在だった。彼は前回、民衆の怒りをかろうじて免れたことを覚えており、自らコンスタンティノープルへ赴くことを恐れていたため、代わりに三人の司教を派遣した。　彼は彼らと共に、アリア派がアタナシウス大主教に対して作成した決定事項[7855]も送付した。これは、こ

[7852] フラキア海――現在のマルマラ海。

[7853] コンスタンティノープルの大聖堂。

[7854] ヘロディアは、ヘロデ・ザ・ヤングの妻である。彼女は洗礼者ヨハネを滅ぼした。

[7855] 言うまでもなく、341年にアリウス派がアタナシウス大主教に対抗して制定したアンティオキア公会議の第22条のことである。この規定によれば、公会議によって有罪判決を受け罷免された司教が、世俗当局の命令により再び司教座に就いた場合、聖職への復帰権を永久に剥奪されることとなる。

れらの決定事項に基づき、罷免されたにもかかわらず再び独断で司教座に就いたとして、ヨハネを非難するためであった。それらの不義で異端的な規範に基づき、祝福されたヨハネは有罪判決を受けた[7856]。彼に対する他の告発事項が見つからなかったからである。彼らが指摘したのは、金口ヨハネスが罷免されたにもかかわらず、新たな公会議が開かれる前に聖座に就こうとしたという一点だけだった。聖ヨハネスはこれに対し、次のように述べた。

「私は裁判に出席せず、敵対者たちと論争することもなく、私に対する告発状すら目にしていない。裁判の判決も受け入れていない。しかし、王たちは私を追放し、また彼ら自身が私を復帰させたのだ。」　あなたがたが私に対して裁判を行っているこの決定書は、正統派ではなく、アリア派によって、アタナシウス大主教を罷免するという目的で作成されたものである。

しかし、聖人のこの答弁に対し、不敬虔な集会は耳を貸さず、神の御使いを罷免した。聖ヨハネの罷免は、次のような状況下で実行された。

聖なる復活祭の祝日が訪れたとき、皇帝は司教たちの助言に従い、ヨハネに次のように伝えさせた。

「二つの公会議で有罪判決を受けた以上、教会から退去せよ。お前がそこにいる限り、私は教会に入ることはできない。」

これに対し、聖ヨハネは使者を通じて王に次のように答えた。

「私は救い主キリストから教会を受け継いだ。力ずくで追放されない限り、自らの意思で教会を離れることはできない。　この街はあなたのものだし、誰もがあなたの言うことを聞く。それゆえ、もしあなたが私をキリストの教会から引き離したいのなら、あなたの家来たちを遣わして、私を教会から引きずり出させなさい。そうすれば、私は自らの意志で教会を離れたのではなく、王の権力によって追放されたことになるため、神の前で弁明の余地はないだろう。

これを聞いた王は、当初どうすべきか迷ったが、やがてヨハネの敵対者たちの助言に従い、王妃の領地を管理していた高官マリーナを彼のもとへ遣わし、その者に、教会の栄えある教師である聖ヨハネを力ずくで聖堂から引きずり出させた。　とはいえ、聖人は当分の間、総主教の邸宅に留まることが許され、彼は自分の修道室から一歩も出ることなく、流刑の決定が下されるまでの二ヶ月間、そこに滞在した。

この間、神に愛された聖人は多くの苦難と災難に遭遇することとなった。　敵たちの悪意は極まりなく、彼らは度々聖ヨハネの命さえも狙った。彼らはある男を買収し、聖ヨハネを殺害させようとしたのである。その悪意を隠すため、買収された男は悪霊に取り憑かれたふりをし、隠した剣を持って総主教邸の周辺をうろつき、聖人を殺害する好機を伺っていた。　しかし、聖ヨハネに忠実な民衆は、その「狂人」を疑い、彼を捕らえて剣を発見した。犯人は尋問のために市長のもとへ連行されたが、この出来事を知った聖ヨハネは、共にいた司教たちを派遣し、当局の手から彼を救い出そうとした。　また別の時、長老エルピディウス（ ）の奴隷の一人が、動揺した様子で慌ただしい足取りで総主教の邸宅へと向かっているところを民衆に見つかった。ヨハネの警護にあたっていた者の一人が彼を捕らえ、「どこへそんなに急いでいるのか」と尋ねたが、その男は何も答えず、質問した者を剣で斬りつけた。　それを見た別の警護兵が悲鳴を上げた。エルピディウスはその男も剣で斬りつけ、続いてたまたま目の前に現れた三番目の男も斬りつけた。悲鳴と叫び声が上がり、その奴隷は血まみれの剣を振り回しながら、追いかけてくる群衆をかわして逃げ出した。　道中、彼はちょうど公衆浴場から出てきた一人の男に出くわした。その男は彼を捕まえようとしたが、そうする間もなく、剣の一撃を受けてその場で息絶えた。ついにこの激昂した強盗が捕らえられたとき、彼はヨハネを殺すよう50ズラトニツの賄賂を受け取ったことを自白した。　それ以来、民衆は愛する大司教の家をさらに

[7856] この非難が違法であった理由は、異端者たちによって制定されたカノンが金口ヨハネにとって拘束力を持ち得なかったからだけでなく、ヨハネが流刑先から戻った後、65人の司教からなる大公会議によって、ハルキドン公会議による彼への非難が取り消されていたからでもある。

厳重に守り、交代制の警備を敷き、一瞬たりとも警備を怠らなかった。なぜなら、ヨハネの敵たちが聖人を殺害する機会を伺っていることを、彼は見抜いていたからである。

ペンテコステが近づくと、ヨハネを流刑に処すという王の勅令が下った。ある高官は、民衆が動揺して、彼を流刑地へ連行する兵士たちに反抗して蜂起することのないよう、ヨハネに民衆の目を避けて密かに退去するよう助言した。

「そうでなければ」と彼は言った。「あなたは流血の責任を負うことになる。なぜなら、あなたを強制的に連行するよう命じられているからだ。民は抵抗し、騒乱を引き起こすだろう。」

これを聞いたヨハネは、親しい司教や聖職者たち、そして祝福された助祭女オリンピアを数人呼び寄せ、彼らに別れを告げた。別れの際、皆が悲しみに暮れて泣いた。聖ヨハネ自身も泣いていた。 側近たちと別れると、ヨハネは人目につかないように小さな扉から海の方へと抜け出し、民衆は彼の去ったことに全く気づかなかった。海辺では兵士たちが聖人を待ち構えており、彼を捕らえるとすぐに小さな舟に乗せ、その舟で聖人はビフィニアへと運ばれ、そこからさらに遠くへと連れ去られた。

聖ヨハネの追放後、コンスタンティノープルの大聖堂で火災が発生したが、これは神の怒りの明らかな表れであった。強風の中、炎は教会から飛び出し、まるで橋のように空高く舞い上がり、ヨハネに反対する集会が開かれていた宮殿の上に覆いかぶさり、それを完全に焼き尽くした。 そして、驚くべき現象が見られた。まるで生命を宿したかのように、火は蛇のようにうねりながら遠くの家々を焼き尽くしたが、教会のすぐそばにある家々は無傷のまま残ったのである。 このことから、誰もが、この火災が偶然ではなく、神の怒りによって引き起こされたものであり、その怒りの原因は聖ヨハネス・クラマトリオスの追放にあったことを悟った。

午後6時から9時までの3時間にわたり、多くの美しい古建築や、街中にあったあらゆる装飾品、そして数え切れないほどの富が灰と化した。 それにもかかわらず、民衆のうちで火事で命を落とした者は一人もいなかった。これを見て、人々は皆、神が神の御心にかなう者を不当に追放したことに対し、火をもってこの街を罰しておられるのだと口々に語った。一方、ヨハネの敵対者たちは反対の主張をし、こう言った。

「ヨハネの同調者たちが教会に火をつけたのだ」

この結果、多くの人々が捕らえられ、ギリシャ人である市長[7857] によって、あらゆる拷問や苦しみにさらされ、その中には命を落とした者もいた。しかし、それにもかかわらず、火災の犯人は見つからず、人々はなおさら、この火災が神の怒りによって引き起こされたものだと確信するようになった。

聖人が流刑地へと連行される途中、道中で兵士たちから数多くの苦痛を強いられた。女王は兵士たちに、道中、聖人をあらゆる手段で侮辱し、虐げ、一刻も早く彼を疲れ果てさせ、死に至らしめるよう命じていた。 そのため、彼らは聖人を鞍のないロバに乗せ、その動物を猛スピードで駆り立て、本来なら二、三日かかる道のりを一日で移動させた。道中、ヨハネには安らぎも休息も与えられず、質素で不潔な宿屋や、時にはユダヤ人の家で夜を明かし、彼の目の前で数多くの不浄な行為が行われた。 どこへ行っても教会に入ることを許されず、聖人がそれを懇願すると、あらゆる罵倒や侮辱にさらされた。さらに、聖人は飢えに苦しめられ、旅の途上で生活費として支給されていた金銭さえも奪われた。

聖ヨハネス・クラマティオスは、これほどまでの憎悪にさらされながら、流刑の地へと連行されたのである！ また、聖人が、敵やテオフィロスの友人たちが司教を務める町を通りかかるたびに、後者たちはあらゆる手段で彼を苦しめた。中には、町への立ち入りを許さない者もいれば、兵士たちに彼を可能な限り酷く扱うよう煽る者さえいた。 時折、聖なる荒野の父たちは、 聖ヨハネが流刑

[7857] すなわち、異教徒である。

の地へ向かうという話を耳にすると、彼を出迎え、涙ながらに見送った。このことについて、ヨハネ・クロソストモス自身も、ククズから[7858] キリアコス司教宛ての書簡の中で、次のように回想している。　「私たちは旅の途中で多くの苦難を経験したが、何一つとして心を折られることはない。私たちがカッパドキアとタウロキリキア[7859] を通り抜けたとき、大勢の教父たちや聖なる人びと、そして数え切れないほどの修道士や処女たちが私たちを迎えに出てきて、あふれんばかりの涙を流した。流刑地へ向かう私たちの行列を見つめながら、彼らは泣きじゃくり、互いにこう語り合っていた。『ヨハネの口が沈黙するくらいなら、太陽が光線を隠した方がましだ』。これは私を大きな戸惑いと悲しみに陥らせた。なぜなら、皆が私のために泣いているのが見えたからだ。しかし、私に取り巻いたその他の出来事については、私は気にも留めなかった」。

聖ヨハネは、このように自分自身について記している。

彼が「小アルメニア」のククズという町に連れて来られたとき、その地のアデルフィウス司教が彼を自宅に温かく迎え入れた。アデルフィウス司教は、ヨハネが到着する前に、神から聖人を受け入れるよう命じる幻視を受けていたのだ。ククズに滞在中、聖ヨハネはその教えによって多くの非信者をキリストへと導いた。　聖ヨハネ・クラマトルスの名声は周辺地域に広く知れ渡り、彼に会いたい、その教えの言葉を聞きたいと願う多くの人々が四方八方から集まってきた。　また、アンティオキアから、聖ヨハネを敬う者や知人たちの多くも彼を訪ねてきた。こうした噂はコンスタンティノープルにまで届き、ヨハネの敵たちは動揺した。彼らは、彼が流刑の地にあってもなお危険な存在であると考え、それゆえ、彼をさらに遠くへ追放することを決めた。　そして、ククズに皇后からの命令が届き、ヨハネをピフィウント（[7860] ）と呼ばれる人里離れた場所へ送るよう命じられた。そこはポンティウス海の岸辺にあり、粗野な野蛮人たちの住む地域の近くだった。　女王の新たな命令により、兵士たちはヨハネを別の流刑地へと連行したが、道中、以前と同様に彼に対して残虐な仕打ちを加え、一刻も早く彼を死に追いやろうとした。　彼らは雨や炎天下の中、彼を衣服も着せずに運ばせ、町や村への立ち入りを禁じ、相変わらず聖人が乗せられていたロバを猛スピードで走らせた。聖ヨハネは、追放の旅の間にこれほど過酷な道程を歩まされたのである！この旅の途中で、彼は息を引き取った。

至福の者が亡くなる少し前、彼がいつものように夜に祈りを捧げて立っていたとき、聖使徒ペトロとヨハネが彼の元を訪れた。彼らは以前、彼がアンティオキアの修道院で修行していたときにも現れていた。聖使徒たちは彼にこう言った。

「喜びなさい、キリストの御言葉の羊たちの良き牧者よ、堅固な殉教者よ。我らは、我らの共通の主イエス・キリストによって、あなたの魂の清らかさのためにあなたが負った苦難と労苦の中で、あなたを助け、慰めるために遣わされたのです。　あなたは、洗礼者ヨハネに倣い、不法を行う王たちを糾弾した。勇気を出し、力を奮い立たせなさい。天の御国において、あなたには多くの報いが用意されている。　私たちはあなたに大きな喜びを告げ知らせます。あと数日が過ぎれば、あなたはあなたの主なる神のもとへ旅立ち、天の御国で私たちと共に永遠の至福を享受することになるでしょう。ですから、希望を持ちなさい。あなたは敵に打ち勝ち、あなたを憎む者たちを恥じさせ、敵である悪魔を打ち負かしたのですから。　エウドクシアは虫に食われ、あなたに助けを求めますが、助けは得られず、恐ろしい病の中で死ぬでしょう。彼女は残酷な苦しみを味わい、一瞬たりとも安らぎを得ることはありません。なぜなら、彼女は神からこの懲罰を受けるからです。

その後、彼らは彼に何か食べられるものを差し出し、こう言った。

[7858] ククズ村は小アルメニア（小アジアの東）にあり、荒涼としたタウロス山脈の奥深い谷の一つに位置していた。そこには、周辺の集落を襲撃していたイサウリア人の盗賊部族が居を構えていた。

[7859] 小アジアの南東部。

[7860] ピフィウントの町は、黒海（またはポンテ海）の南岸、小アジアの北東部、現在のアブハジアに位置していた。

「これを受け取って食べなさい。そうすれば、この人生において、もう他の食べ物を求める必要はなくなるでしょう。これは、あなたが自分の魂を神の御手に委ねるその時まで、あなたにとって十分なものとなるでしょう。」

聖ヨハネは差し出されたものを受け取り、彼らの目の前でそれを食べ、喜びをあらわした。その後、現れた使徒たちは彼の元を去っていった。

ヨハネのそばには、二人の長老と一人の助祭がいた。彼らはコンスタンティノープルからの追放の際、ヨハネと共に歩み、愛の絆で結ばれて彼から離れなかった。彼らは、使徒たちがヨハネのもとを訪れるのをこの目で見て、彼らの言葉をすべて聞き、神の御心に適う者と共にあずかることを許してくださった神を賛美した。

数日間の旅の末、追放者たちはコマンに到達した[7861]；この町の近くには、聖大殉教者ヴァシリスク（コマンの司教）の教会があった。彼は不敬虔な皇帝マクシミアヌスの治世下[7862]で、アンティオキアの長老ルキアヌス[7863]と共に、ニコメディアにおいてキリストのために殉教した。彼らはこの教会で一夜を明かした。　翌日は聖十字架の挙揚の祝日であり、祝日の前夜、聖なる殉教者ヴァシリスクが至福のヨハネの前に現れた。

「兄弟ヨハネよ、勇気を出しなさい！　明日、私たちは共にいることになるのだから。」

その聖なる殉教者は、自身の教会の司祭にも現れ、こう言った。

「ヨハネ兄弟のための場所を用意しておきなさい。彼は我々のところへやって来るのだから。」

日が明けると、ヨハネは兵士たちに、コマナスの聖ヴァシリスク教会のそばで第五時までの間留まるよう懇願したが、彼らは彼の言うことを聞き入れず、できるだけ早く進むよう努めながら旅を続けた。彼らは水面を進み、まるで鳥のように非常に速く漕ぎ進んだ。こうして数時間のうちに、彼らは街から三十スタディオンも離れていった。

しかし、神の摂理により、彼らは再び聖ヴァシリスカの教会の近くの岸に漂着し、これに大いに驚いた。ヨハネは再び、自分が教会で祈りを捧げる間、その場所で少し待っていてほしいと彼らに懇願した。　自分たちの意志に反して、出発した場所に戻ってきたことに神の力の働きを認めた兵士たちは、ヨハネの願いを聞き入れることにした。そこで聖人は教会に入り、白い祭服を求め、靴から始めて身に着けていた服をすべて着替えた。　その後、自分の服を船に乗っていた者たちに配り、聖職者の服を着て聖体礼儀を執り行い、キリストの聖なる、命を与える御体と御血の秘跡を拝領した。そして、出席者全員を祝福し、彼らに最後の口づけを授けた後、次のように言い残して横になった。

「すべてのことについて、神に栄光あれ。」

そして直後に、神の御手にその霊を委ねた。それはまさに、主の尊き十字架の挙揚の日にあたる日であった。このように、生涯を通じて自らの十字架を背負い、世のために自らを犠牲とし、キリストと共に十字架にかけられた神の聖なる御使いは、尊き十字架を記念する日に息を引き取った[7864]。　彼は、亡くなったのと同じ教会、聖殉教者ヴァシリスカの墓のすぐ近くに埋葬された。こうして、聖エピファニオス・キプロスが聖ヨハネに語った予言が実現したのである。

「そして、あなたは追放されるその場所にはたどり着けないだろう。」

[7861] コマヌスは、小アジア北東部のポンテ州にある都市で、現在のグメネクにあたる。

[7862] ここで言及されているのは、もちろんディオクレティアヌスの娘婿であり、東方の共同統治者であったマクシミアヌス・ガレリウスである。その後、ディオクレティアヌスの死後、彼は東ローマ皇帝となった（305–311年）。ルキアヌスとヴァシリスカの死は、彼の生涯の晩年にあたる。

[7863] 聖殉教者ルキアノスの記念日は9月15日、ヴァシリスカの記念日は5月22日である。

[7864] 「主の命を与える十字架の挙揚」の祝日は、聖人が帰天した9月14日ではなく、11月13日に祝われる。 さらに、1月27日の聖人の遺骸移送の日にもその記念が行われ、1月30日には聖バシレイオス大聖人および聖グリゴリオス神学者と共に称えられます。

実際、聖ヨハネはピフィウントへと連行されたが、ピフィウントにたどり着くことなく、コマナで息を引き取った。　かくして教会の灯は消え、黄金の口は沈黙し、六年間総主教の座に就き、三年間を追放の身として場所から場所へと移されながら過ごした、この善良な修道士であり殉教者は、その偉業を成し遂げ、その生涯を閉じたのである[7865]。

聖ヨハネが亡くなると、彼の最期まで付き添っていた二人の司祭と一人の助祭は、父の死を悼んだ後、ローマへ赴き、教皇イノケンティウスのもとを訪れ、聖ヨハネが敵の悪意によって被ったすべての苦難について詳細に報告した。　彼らは、聖ヨハネの最期の様子や、その死の前に聖使徒ペトロと聖ヨハネ・テオロゴスが彼のもとに現れたこと、彼らが何と言ったか、そして聖殉教者ヴァシリスクがどのように現れたかについても語った。すべてを聞き終えたインノケンティウスは大いに驚き、真理のために苦難を受けたこの偉大な神に愛された者を悼んだ。　聖金口ヨハネの追放と死の経緯について、教皇は西ローマ皇帝ホノリウス[7866]（アルカディウスの兄弟）に伝え、二人はこれを深く嘆き、直ちにアルカディウス皇帝に書簡を送った。教皇は自ら次のように記した。

「わが兄弟ヨハネの血は、かつて義人アベルの血が兄弟殺しカインに対して叫んだように、皇帝よ、あなたに対して神に叫び声を上げている。そして、あなたが平時に神の教会への迫害を始めたゆえに、この血は報復されるであろう。　あなたはキリストの真の牧者を追放し、彼と共にキリストなる神をも追放し、その羊の群れを、キリストの真の牧者たちではなく、傭兵たちの手に委ねたからである。

インノケンティウスは、アルカディウスにこれらおよびその他多くのことを書き送って、彼とエウドクシアを神の秘跡から破門し、さらに彼らと共に、聖ヨハネの追放に加担したすべての共犯者たちをも破門した。　また、テオフィラについては、聖職からだけでなく教会からも破門し、彼が相応の罰を受けるよう、公会議の裁きに召喚した。

一方、ゴノリウスは弟のアルカディウスに次のように書き送った。

「兄弟よ、あなたはどのような誘惑に惑わされたのか。妻を信じ、彼女の執拗な要求に従って、敬虔なキリスト教の王なら誰一人として行わなかったようなことを成し遂げてしまったのだ。　ここに集う司教たちや敬虔な父たちは、あなたがたが、裁判もなしに、また神の偉大なる司教ヨハネに対する教会法に反して彼を王座から追放し、残酷な拷問で彼を苦しめ尽くし、暴力的死へと追いやったことについて、皇后と共にあなたたちを激しく非難している。

この手紙の末尾で、ゴノリウスはアルカディウスに対し、神の前で悔い改め、ヨハネの追放の首謀者たちに報復するよう呼びかけた。兄弟および教皇からの書簡を受け取ったアルカディウス皇帝は、深い悲しみと恐ろしい恐怖に陥った。　彼は都内でヨハネに反旗を翻した者たちを探し出し、彼らに様々な刑罰を下した。ある者たちは剣で斬首され、またある者たちは不名誉な形で聖職を剥奪された。　聖ヨハネを裁き、当時コンスタンティノープルに滞在していた一部の司教たちについて、皇帝は彼らを捕らえ、恥辱と共に民衆の牢獄に投獄するよう命じた。その中には、テオフィロスの兄弟の息子であるイェキリオンも含まれていた。　テオフィロス本人に対しては、非常に厳しい書簡を送り、テッサロニキでの裁判に備え、自身の悪意に対する相応の罰を受けるよう命じた。アルカディウスの怒りを免れなかったのは、彼の妻である皇后エウドクシア自身でもあった。　アルカディウスは彼女を自分の元から遠ざけ、別の宮殿に閉じ込め、女奴隷以外の誰もが彼女に会うことを禁じた。同時に、皇后と共に聖人に対して悪意を抱いていた親族たちを流刑に処し、そのうちの何人かからは財産を没収し、他の者たちは牢獄に閉じ込め、拷問と苦痛にさらした。　その後、彼は教皇イノケンティウスに、自分が行ったすべてのことを書き送り、謙虚かつ悔い改めの心をもって許しを請うた。ま

[7865] 金口は60歳で、407年に亡くなりました。大司教としての在任期間は6年半、幽閉生活は3年3ヶ月に及びました。

[7866] アルカディウスの兄弟であり、テオドシウス大帝の息子であるゴノリウスは、395年から423年までローマで統治した。

た、兄弟のゴノリウスにも手紙を書き、教皇に自分への破門を解くよう懇願するよう頼んだ。まもなく、アルカディウスは願いを叶えられた。　その謙虚な嘆願を読んだ教皇は、彼の悔い改めを受け入れ、当時キジクスの司教であった至福のプロクルス[7867] に書簡を送り、王の破門を解き、聖なる秘跡を授けるよう求めるとともに、至福のヨハネを聖人の列に加えるよう命じた。

これらすべてがそうして進行している間、全知の主ご自身が、御自分の御使いヨハネの敵たちに報復を下された。　主は彼らをこの世においてなおも残酷な罰に処し、その結果、彼らは皆、凄惨な死を遂げた。その際、聖ヨハネに対して不当に反旗を翻したすべての司教、聖職者、世俗の高官、そして一般の人々は、全身の肉を蝕み、死に至らしめる病的な膿瘍に覆われた。　ある者たちは手足が萎え、またある者たちは全身が腐り、無数の蛆が湧き出し、長い間、耐え難い悪臭を放ち続けた。この聖人を追放に処した不義な裁判官の一人は、馬から転落し、無実のヨハネに対する不当な告発に署名していた右腕を骨折して、突然死した。別の者は声が出なくなり、両手が萎えてしまい、その状態で息を引き取った。　三番目の者は、聖ヨハネを冒涜する言葉を吐き続けていた舌が肥大化し、やがて腫れ上がって話すことができなくなった。そこで彼は、その罪を紙に書き記して告白した。そして、ヨハネの追放に関与した者たちの上に、様々な刑罰として降りかかった神の恐るべき怒りの現れを、人々は目の当たりにしたのである。

アレクサンドリア総主教テオフィロスは、ローマ教皇インノケンティウスの死去により、人間の裁きと罰を免れたが、神の裁きからは逃れることはできなかった。彼は正気を失い、その病のために亡くなった。　ハルキドンのキリノス司教は、足が腐り始めた。医師たちは全身が腐るのを防ぐため、何度も足を切断したが、それでも彼の肉体は腐り続け、最終的に足が膝まで切断された後に彼は亡くなった。恐るべき神の裁きは、不運な皇后エウドクシアにも下った。　悲しみと恥に苛まれた彼女は、　、激しい出血を伴う病に倒れ、使徒たちが聖ヨハネに予言した通り、その肉体は虫に蝕まれた。彼女からは凄まじい悪臭が漂い、通りすがりの人々は彼女の肉体の臭気に耐えられなかった。多くの経験豊富な医師たちが彼女を治療し、芳香を焚いて燻したが、効果はなく、結局は無駄に終わった。そこで彼女は医師たちに尋ねた。

「なぜ、私の病を治すことができないのですか？」

しかし、医師たちは彼女にその理由を説明する勇気を持てなかった。

「もしあなたがたが」と女王は彼らに言った。「私がなぜ治らないのかその理由を知らないのなら、私が教えてあげましょう。この病は、総主教ヨハネスに与えた悪行の報いとして、神の怒りが私の上に下った結果、私を襲ったのです。」

彼女はテオグノスト派の人々の子供たちに、彼らから奪ったぶどう園を返還し、他にも多くの人々に、不当に奪ったものをすべて返した。しかし、彼女は癒やされることはなく、その病の末に亡くなった。　彼女の死後、その不法を暴くため、彼女が葬られた棺は三十二年もの間絶えず揺れ続け、聖ヨハネ・クラマトルスの尊い遺骨がコマンからコンスタンティノープルへ移される時まで、その状態は続いた。

こうして主は聖ヨハネの敵を罰された。そして、その義人自身を次のように栄光に輝かせられた。　アデルフィウス司教は、ククゼにある自身の邸宅にヨハネを温かく迎え入れていたが、聖人の帰天を聞くと、深い悲しみに沈み、涙ながらに神に熱心に祈り、ヨハネが聖人たちのどの位階に属しているかを示してくださるよう懇願した。　ある日、そのことを祈っていたとき、彼は恍惚状態に陥り、明るく喜びに満ちた若者の姿を見た。その若者はアデルフィウスの手を取り、明るい場所へと連れて行き、教会の聖なる教師たちの姿を彼に見せた。　あちこちを見回して、アデルフィウスはヨハネの姿を探したが、どこにも見当たらなかった。各教父やコンスタンティノープル総主教をアデルフ

[7867] これは、かつて聖ヨハネの侍者であったあのプロクルスその人であり、後にコンスタンティノープル総主教となった。キジクは、小アジア北西部、マルマラ海の南岸に位置する都市である。

ィウスに示した後、その若者は急いで彼をその場から連れ出した。　彼の後をついていくアデルフィウスは、聖なる教父たちの群れの中に至福のヨハネの姿が見当たらなかったため、悲しみに打ちひしがれていた。しかし、彼がその明るい場所から出て行こうとしたとき、入り口に立っていたある人物が彼の手を掴んでこう言った。

「なぜ、そんな悲しげな様子でここを去ろうとするのか？　たとえ悲しんでここに入った者でも、ここから出る時には喜びに満ちているものだが、君は逆だ。喜びに満ちてここに入ったのに、悲しんで出ていく。」

アデルフィウスはこう答えた。

「私が悲しんでいるのは、教会の教師たちの中に、私が愛してやまないヨハネの姿が見当たらなかったからです。」

「おっしゃっているのは、悔い改めを説くヨハネのことですか？」と彼は尋ねた。

「はい」とアデルフィウスは答えた。

すると、楽園の入り口に立っていた者が彼に言った。

「肉体を持つ者は彼を見ることはできません。彼はケルビムとセラフィムに囲まれた神の御座の前に立っているからです。」

聖ヨハネに関するこのような知らせを受け、アデルフィウスは喜び、この秘密を彼に明かしてくださった神を賛美した。　こうして聖ヨハネは、真理のために耐え抜いた数々の動揺、嵐、苦難、悲しみの後、静かな天の安息の地へとたどり着き、そこで天使たちと共に喜びを分かち合いながら、父と子と聖霊、　三位一体の唯一の神を賛美し、その神に、私たちからも、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れと礼拝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第8調：

あなたの口は、まるで炎の輝きのごとく、恵みを放ち、全宇宙を照らし出しました。この世の財宝を貪ることなく、私たちに謙遜の高みをお示しくださいました。しかし、あなたの言葉をもって戒めを説く、ヨハネ・ザラトウストよ、キリスト・神の御言葉に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第6調：

天より神の恵みを受け、その口を通してすべての人々に三位一体の唯一の神を礼拝するよう教えられた、ヨハネ・ザラトゥストよ、至福の聖人よ、我らはあなたをふさわしく賛美します。あなたは、神の御姿を現す導き手であるからです。

聖殉教者アントニヌス、ニキフォロス、ゲルマン、マネファの記念日

記念日：11月13日

聖アントニン、ニキフォロス、ヘルマンは、マクシミアヌス・ガレリウス皇帝の治世下で殉教した[7868]。アントニンは老人、ニキフォロスは若者、そしてヘルマンは中年の男であった。彼らはパレスチナ地方の統治者フィルミリアヌスに捕らえられ、偶像への生贄を捧げるよう強要された。　聖

[7868] 4世紀初頭、

人たちはこれを拒み、キリストを告白した。そのため、彼らはパレスチナの主要都市であるケサレアへ連行され、そこで斬首された。

スキタイ地方出身のマネファという名の乙女も、聖なる殉教者たちと共に捕らえられた。彼女は侮辱のために裸のまま街中を引き回され、その後、様々な拷問にさらされたが、神の助けにより無傷で切り抜けた。　マネファは数え切れないほどの奇跡を行い、多くの人々を偶像崇拝の不義から遠ざけ、真の信仰を教え、キリストへと導いた。このため、彼女は火刑に処される判決を受けた。炉が燃え上がったとき、彼女は自らその中に入り、そこで主の御手に魂を委ねた。主なる神に、永遠の栄光と誉れがありますように。アーメン。

11月27日

11月14日（旧暦）

聖使徒フィリッポスの生涯

記念日11月14日

ガリラヤ湖のほとり、ホラジンとカペナウムの近くには、ベツサイダ[7869]と呼ばれる町があった。この町には、キリストの十二使徒のうち、ペトロ、アンデレ、フィリッポの三人が生まれた。ペトロとアンデレは漁師であり、キリストに召されるまでその生業に従事していた。　一方、フィリポは少年時代から両親によって学問の道に導かれていました。　聖書や、待ち望まれていたメシアに関する預言を熱心に読み、研究するうちに、彼はメシアに対する熱い愛と、主と顔を合わせて会いたいという強い願望に燃え上がった。とはいえ、その当時、彼は、その到来を待ち望んでいた多くの人々が会いたいと願っていた方が、すでにこの地上に来られていたことをまだ知らなかった。

しかし、やがてキリストがガリラヤの地を訪れ、そこでメシアへのそのような愛に燃えるフィリポを見出された。*「わたしについてきなさい」*と、イエスはフィリポに言われた（ヨハネ1:43）。

フィリポは主の呼びかけを聞き、主こそが預言者たちを通して神によって約束された真のメシアであると心を尽くして信じ、主に従った。　主の至聖なる御生涯に耳を傾けながら、フィリポは主に倣おうと努め、主から神の知恵を学び、その力によって後に異教の狂気を打ち破った。　全世界が贖われることとなるこの「宝」を見出したことを喜び、フィリッポは自分だけが主から恵みを受けることを望まず、他の人々もまた同じ賜物に与ることを願った。　友人のナタナエルと出会うと、彼は喜びながらこう告げた。*「私たちは、モーセが律法に記し、預言者たちが預言した方、すなわちナザレのヨセフの子イエスを見つけたのだ。」*

ナタナエルはこれを聞いて、小さな町や平凡な家系からメシア、すなわちイスラエルの王が現れるとは信じられず、こう言った。*「ナザレから、何か良いものが生まれるだろうか？」*

するとフィリポは、何も言わずに、ただその方を見てみるよう彼に勧めた。

「行ってみて、見てごらん」と彼は言った。

彼は、ナタナエルがイエス様を見て、その救いの言葉を聞けば、すぐにイエス様がメシアであると信じるだろうと感じていた。そして、まさにその通りになった。　フィリポが彼を連れてイエスのところへ向かうと、人の心や内臓を試し、人々の隠された思いや心を読み取られる主は、自分に向

[7869] ガリラヤのベツサイダは、ガリラヤ湖の北西側（パレスチナの北部）にあり、カペナウムとホラジンという都市の近くに位置していた。

かって歩いてくるナタナエルを見て、彼を認識し、彼についてこう言われた。*「見よ、これこそ、偽りのない真のイスラエル人だ。」*

この言葉を聞いて、ナタナエルは大変驚き、イエスに言いました。*「どうして私をご存じなのですか？」*

主は彼に答えられた。*「フィリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがイチジクの木の下にいたとき、わたしはあなたを見ていた。」*

ナタナエルは、いちじくの木の下にいたとき、神のメシアについて思索にふけっていた。そのメシアへの希望こそが、神の忠実な僕たちのすべての喜びと楽しみであった。　その時、神は彼に心の砕けと温かい涙を授けられ、彼はそれを熱心な祈りに添えて、主が古くから先祖たちに約束されたことを成就し、世の救い主を地上に遣わしてくださるよう願った。　そのとき、すべてを見通す神の御目は、感銘に満たされたナタナエルを見守っておられた。それゆえ、主はナタナエルに、彼がイチジクの木の下にいたとき、御自身が彼を見ておられたと告げられたのである。

ナタナエルは、この言葉を聞いてさらに大きな驚きに包まれた。彼は、イチジクの木の下にいた時に何を考えていたか、そしてどれほど心を打たれて神にメシアの到来を祈っていたかを思い出した。そこには彼を見ている人は誰一人おらず、神以外には誰も彼の思いを見通すことはできないと、彼は知っていた。　それゆえ、ナタナエルは直ちに、イエスが人類を救うために神が遣わすと約束されたメシアであると信じ、自分の心の奥底を見抜かれたイエス・キリストに神性を認め、こう叫んだ。*「先生！あなたは神の子、あなたはイスラエルの王です」*（ヨハネ1:45–49）と叫んだのである！

その後、ナタナエルは、地上に来られた救い主について告げ、約束されたメシアへと導いてくれたフィリポに対して、どれほど感謝の念を抱いたことか！　そして聖フィリポもまた、人々が人間性の深みに隠されていた神の宝を見出したことを心から喜び、主への愛をさらに燃え上がらせた。とはいえ、聖フィリポは、その神なる師の中に、人間としての崇高な完全性しか見ておらず、まだその神性を認識していなかった。　そこで、キリストは彼を正そうとされた。ある日、主はティベリアス湖の対岸を[7870]、五千人の群衆を率いて歩んでおられ、その多くの聴衆を奇跡的な方法で養おうと望まれ、フィリポに言われた。*「彼らに食べさせるパンをどこで買えばよいのか。」*（ヨハネ6:5–6）。

主は彼を試すためにこう言われたのである。なぜなら、パンを手に入れる場所などどこにもないことを知っておられたからであり、フィリポがどう答えるかもあらかじめ知っておられたからである。主がフィリポにこう尋ねられたのは、フィリポが自分自身をより深く知り、自分の不信仰を恥じて改心するようにするためであった。　そして実際、フィリポは神の全能性を思い起こすこともなく、こう言うこともなかった。　*「主よ、あなたは全能であられます。そのようなことを誰かに尋ねる必要などありません。ただお望みになれば、皆はたちまち満ち足りるでしょう。『あなたが彼らに与えれば、彼らは受け取り、あなたが御手を広げれば、彼らは恵みで満たされる』*（詩篇103:28）。

フィリポはそうは言わず、主を神としてではなく人間として捉え、「*二百デナリオン[7871]のパンでは、一人ひとりに少しでも分け与えるには足りないでしょう」*（ヨハネ6:7）と言った。

その後、他の弟子たちと共にこう付け加えた。「*群衆を解散させて、周辺の村々へ行き、自分たちで食べ物を買うようにさせなさい」*（マルコ6:36）。

そして、主が五千人の群衆のために五つのパンと二匹の魚を裂かれたとき（ルカ9:16）、フィリポは、主の手から、まるで尽きることのない穀倉のように、すべての人が十分な食物を受け取り、

[7870] ティベリア湖は、ガリラヤ湖の別名であり、ガリラヤ湖の南東岸にあるガリラヤの都市ティベリアの名に由来する。
[7871] ディナールは、約21.5コペイカ相当の古代ユダヤの貨幣である。したがって、200ディナールはおよそ43ルーブルに相当した。

群衆全体が満腹になるまで続いたのを見た。　その時、使徒は自分の不信仰を深く恥じ、信仰を確固たるものとし、他の者たちと共にイエス・キリストにおける神の力を賛美した。

その後、フィリポは主によって十二人の選ばれた使徒の一人に数えられ、主から恵みを受け、主との親密な交わりにあずかる栄誉に与った。 ある時、祭りの期間に、エルサレムに 集まったギリシャ人たちのうち、ある者たちが、信仰を持たない異邦人であったため、イエスの近くに行くことができなかった。そこで彼らはフィリポのもとへ行き、「*先生、私たちはイエスにお会いしたいのです！*」と懇願した。

フィリポはまずそのことをアンデレに伝え、アンデレと共に、異邦人たちもまた主であり師であるイエスに会って話を聞きたいと願っていることを喜びつつ、イエスにその願いを伝える勇気を出した。　その時、彼はイエスから、異邦人について、彼らがその時点ではなく、イエスの死後にこそイエスを信じるようになるという、驚くべき教えと預言を聞いた。「*もし、*」とイエスは言われた、「*一粒の麦が地に落ちて死ななければ、ただ一粒のままである。しかし、死ねば、多くの実を結ぶ*」（ヨハネ12:24）。

これにより、キリストはあたかもこう言われているかのようであった。「わたしが地上で生きている間は、わたしを信じるイスラエルの家の一部しかいない。しかし、もしわたしが死ねば、イスラエルの家だけでなく、多くの異邦人もわたしを信じるようになる」。

また別の時、最後の晩餐の後、フィリポは、父なる神を彼らに現わしてくださるよう主にお願いした際、神性の偉大な奥義について主にお尋ねする勇気を見せ、*「主よ、父を私たちにお見せください。それだけで私たちには十分です」*（ヨハネ14:8）と語った。

この問いかけによって、彼はキリストの教会に大きな益をもたらした。なぜなら、このことから、私たちは御子と御父が同一の本質であることを知り、この神聖な真理を否定する異端者たちの口を封じることを学んだからである。　主はこれに対し、穏やかな叱責をもってこう答えられた。*「これほど長い間、わたしはあなたがたと共にいるのに、あなたはわたしを知らないのか、フィリポよ。わたしを見た者は父を見たのである。それなのに、どうして『父を見せてください』と言うのか。わたしが父の中にあり、父がわたしの中にいることを、あなたは信じないのか。わたしがあなたがたに語る言葉は、わたし自身から出るものではない。わたしの中に住まわれる父が、その業を行っておられるのだ。わたしが父の中にあり、父がわたしの中にいることを、信じてほしい」*（ヨハネ14:9–11）。

この主の答えは、聖フィリポ、そして彼と共に全使徒教会に対し、御子と御父の神性の平等を正しく信じるよう教え、また、神の御子は被造物であり、創造主ではないと主張したアリウスの神冒涜を糾弾するものである。

神の御子の自発的な受難と復活の後、聖フィリッポは他の使徒たちと共に、すでに不死の栄光に満ちた御体をとられた主を仰ぎ見、主から平安と祝福を受け、また主の昇天も目撃した。

その後、彼は聖霊の恵みにあずかり、異教徒の間でキリストの宣教者となった。というのも、彼には小アジアとシリアへ宣教に行くという使命が与えられたからである。彼はまずガリラヤで宣教を行った。　そこである日、亡くなった赤ん坊を腕に抱き、悲しみに暮れて泣きじゃくっているある女性が彼に会った。彼女を見たキリストの使徒は、彼女を憐れみ、亡くなった赤ん坊の上に手を差し伸べて言った。「起きなさい。私が宣教するキリストが、そう命じているのだ。」

すると、その瞬間、赤ん坊は生き返った。復活した息子が健やかに生き返っているのを見た母親は、喜びのあまり使徒の足元にひれ伏し、息子の復活に対する感謝を捧げるとともに、彼から洗礼を請うた。彼女は、使徒が宣べ伝える主キリストを信じたからである。　使徒は母と息子に洗礼を授けた後、異教の国々へと向かった。ギリシャで福音を宣べ伝える中、彼はキリストの力によって多くの奇跡を行い、病を癒やし、一人の死者をよみがえらせた。この奇跡は、そこに住むユダヤ人たちを驚嘆させ、　彼らはエルサレムの祭司長やユダヤ人の指導者たちに、フィリッポという名の見知らぬ

男がやって来て、イエスの御名を宣べ伝え、その御名によって悪霊を追い出し、あらゆる病を癒やし、さらにはイエスの御名によって一人の死者をよみがえらせたこと、そしてすでに多くの人がキリストを信じるようになったという知らせを送った。　まもなく、フィリッポスに対して激しい憎悪と怒りを抱いたある大祭司が、律法学者たちを伴ってエルサレムからギリシャへとやって来た。彼は大祭司の衣を身にまとい、ユダヤ人も異邦人も含めた大勢の民衆の前で、高慢かつ威風堂々と裁判官の席に着いた。　使徒フィリポもここに連行され、集会の真ん中に立たされた。大祭司は彼を威圧的な眼差しで見据えると、怒りを込めてこう語り始めた。「ユダヤ、ガリラヤ、サマリアだけでは、単純で無学な人々を惑わすには十分ではなかったのか？　それなのに、お前はここへ来て、賢明なギリシア人たちの前でも、モーセの律法に敵対するイエスから学んだ惑わしの教えを広めようとしている。そのために、イエスは有罪判決を受け、十字架に架けられ、不名誉な死を遂げたのだ。そして、当時ちょうど過越の祭りが行われていたという理由だけで埋葬されたのに、　しかし、あなた方、その弟子たちは、密かに彼を盗み出し、多くの人々を惑わすために、彼が自ら死からよみがえったと至る所で言いふらしたのだ」。

大祭司がこう言い終えると、群衆はフィリポに向かって叫んだ。「フィリポよ、これに対し、どう答えるのか？」

すると、民衆の間で大きな騒ぎが起こった。ある者はフィリポを直ちに殺すべきだと主張し、またある者は彼をエルサレムへ連行して処刑すべきだと主張した。そこで、聖なる使徒は口を開き、大祭司に言った。「あなたはむなしいものを愛し、偽りを語っている！　なぜあなたの心は石のように固まったままで、真理を告白しようとしないのか？　あなたがたこそが墓に封印を施し、見張りを置いたではないか。そして、私たちの主が、墓の封印を破ることなく復活されたとき、あなたがたは兵士たちに金を渡して、彼らが眠っている間に弟子たちが死んだ主を盗んだと嘘をつくように仕向けたのではないのか？　それなのに、今になってどうして真実を歪めることを恥じないのか。あの墓の封印そのものが、審判の日に、あなたがたの嘘を明らかに暴く証拠となり、キリストの真の復活の証人となるのだ」。

使徒のこの言葉に、大司教はさらに激怒し、狂おしいほどの憎悪に駆られて彼に襲いかかり、自ら使徒を捕らえて殺そうとしたが、その瞬間、彼は盲目となり、全身が真っ黒になった。　その光景を目撃した人々は、これを魔術の仕業だと決めつけ、フィリッポスに襲いかかり、魔術師として彼を殺そうとした。しかし、彼を捕らえようとした者たち全員に、大司教と同じ罰が下った。その瞬間、大地が激しく揺れ動き、皆は恐怖に震え上がり、キリストの偉大な力を悟った。　使徒フィリッポスは、彼らの魂と肉体の盲目さを見て、彼らのために涙を流し、神に祈りを捧げ、彼らを啓発してくださるよう願った。すると、聖人の祈りによって、天からすべての被害者たちに癒しがもたらされた。この奇跡により、多くの人々がキリストに立ち返り、彼を信じるようになった。　しかし、依然として憎悪に目がくらんでいた大司教は、自分に下った懲罰の後でも改心して真理を知るどころか、再び私たちの主イエス・キリストに対して多くの冒涜を口にし始めた。すると、彼にはさらに大きな懲罰が下った。　突然、大地はその深淵を開き、かつてダファンとアビロンがそうであったように、彼を飲み込んだ[7872]。

司教が殉教した後、聖フィリッポスはそこで多くの人々に洗礼を授け、ナルキッサという名の高潔で立派な人物を彼らの司教に任命し、自身はパルティアへと去っていった。　旅の途中、彼は自らの働きにおいて神の助けを祈った。すると、彼が祈りのためにひざまずいたその時、天から、十字架にかけられたキリストのように両翼を広げた、黄金の翼を持つ鷲の姿が現れた。　この御現れに勇気づけられた聖フィリッポスは、再び説教の旅に出発し、アラビアやカンダキアの諸都市を巡った後

[7872] ダファンとアビロンはルベン族で、エリアバの子らであった。彼らはモーセに対して陰謀を企てた裏切り者であり、その罪により神から恐ろしい罰を受けた。すなわち、大地が裂けて彼らを飲み込んだのである。（民数記 16:1–50）。

、船に乗り込み、シリアの都市アゾト[7873] へと海路を進んだ。夜になると海上で激しい嵐が吹き荒れ、皆はもはや命の安否を絶望していた。　その時、聖使徒は祈りを捧げると、たちまち空に光を放つ十字架の御印が現れ、夜の闇を照らし出した。すると海は突然静まり、波も収まった。　アゾトの海岸に近づくと、フィリッポスは船から上陸し、ニコクリダスという名の旅好きの男の家に迎え入れられた。彼にはハリティーナという娘がおり、片目の病を患っていた。ニコクリダスの家に入ると、使徒はそこにいた人々に神の言葉を説き始め、皆は喜びをもってその言葉に耳を傾けた。　聴衆の中にはハリティーナもいた。彼女は使徒の教えに霊的な歓喜に包まれ、自分の病気のことさえ忘れてしまった。使徒は、彼女が神の言葉にこれほど熱心であるのを見て、イエス・キリストの名を呼び、患っている目に手を当てるよう命じた。　ハリティーナがこれを行うやいなや、その瞬間、彼女の目は癒やされ、ニコクリド家の者たちは皆、キリストを信じ、聖なる洗礼を受けた。

アゾトから、使徒フィリッポスはシリアのイェラポール[7874] へと向かった。そこでキリストを宣教したところ、民衆の激しい怒りを買い、石打ちにされそうになった。しかし、イルという名の有力な市民の取り成しにより、彼は民衆の暴動から救われた。

「市民の皆さん！」――彼は民衆に呼びかけた。「私の助言に耳を傾けてください。この異邦人に、いかなる害も加えてはなりません。彼の教えが真実であるかどうかが判明するまでは。もし真実でないことが判明したなら、その時は彼を処刑しましょう。」

民衆はイルに逆らうことを敢えてせず、イルはその後、フィリッポを自分の家へ連れて行った。使徒はそこでいつものように説教を続け、イルとその家族全員、そして近隣の人々を聖なる信仰へと導き、聖なる洗礼の秘跡によって彼らを啓蒙した。　イルが洗礼を受けたことを知った市民たちは、夜中に集まり、彼の家を包囲した。彼らは、イルが眠っている間に、使徒やその家族全員と共に家ごと焼き殺そうと企んでいた。その企みを看破した使徒は、恐れを知らずに彼らの前に現れた。　一方、彼らは野獣のように歯ぎしりしながら使徒を捕らえ、評議会へと連行した。評議会の長であるアリスタルコスは、使徒を見るやいなや手を伸ばしてその髪をつかんだが、その瞬間、彼の手は萎え、視力と聴力を失ってしまった。　すると、民衆の心情に変化が生じた。この奇跡を目の当たりにして、彼らの怒りは驚きへと変わり、民衆は使徒に、彼らの首長であるアリスタルコスを癒やすよう懇願し始めた。フィリポは言った。「もし彼が、私が宣べ伝えている神を信じないなら、癒やされることはないだろう」。

その頃、彼らの近くを葬列が通りかかっており、民衆は使徒を侮辱しようと、「もしこの死者をよみがえらせることができれば、アリスタルコスも私たちも、あなたの神を信じる」と言った。

使徒は天を仰ぎ、長く祈った後、死者に顔を向け、穏やかな声で言った。「テオフィロスよ！」　するとたちまち、死者は担架の上で身を起こし、座って目を開いた。そこでフィリポは再び彼に言った。「キリストがあなたに命じられる。立ち上がって、私たちに話せ！」

死者は寝台から立ち上がり、使徒の足元にひれ伏してこう言った。　「神の聖なる僕よ、この時、私を大いなる悪から救ってくださったことに感謝します。二人の黒く、悪臭を放つエチオピア人が私を引きずり込もうとしていました。もしあなたがそれを防ぎ、私を彼らから救ってくださらなかったなら、私は暗黒のタルタロスへと突き落とされていたことでしょう。」

すると、この輝かしい奇跡を目撃した者たちは皆、フィリポが宣べ伝えた唯一の真の神を口々に賛美した。使徒は民にしばらく静まるよう手で合図し、イロスに、アリスタルコスの傷ついた肢体

[7873] アゾト――ヘブライ語で「*要塞、堅固な場所*」を意味する。遥か昔、ペリシテ人の豊かで堅固な都市であり、地中海の東岸に位置していた。マカバイの時代に焼き払われ破壊されたが、その後再建されたものの、かつての勢いは失われていた。現在、ここにはエズドゥドという小さな集落がある。

[7874] イェラポール――古代のいくつかの都市の名称。――シリアのイェラポール（後にギリシャ人によってバンビカと呼ばれた）；コンスタンティヌス大帝の時代からはユーフラテス州の主要都市であった；現在、現在のメンビジュ付近にその遺跡のみが残っている。

に自分の手で十字の印を付けるよう命じた。　イルがこれを行うやいなや、たちまちアリスタルコスの萎えていた手が癒やされ、彼は視力と聴力を取り戻し、完全に癒やされた。聖フィリッポスがキリストの力によって行ったこれらの奇跡は、イェラポリスの住民たちをキリストへと回心させ、皆が一斉に自分たちの偶像を打ち砕き始めた。　最初に信仰を抱いたのはテオフィロスの父であり、彼は十二体の金の偶像を打ち砕き、その金を貧しい人々に配った。使徒は彼ら全員に洗礼を授け、イラを彼らの司教に任命した。　このようにしてイェラポルの教会を設立し、聖なる信仰に新たに導かれた人々を確固たるものにした後、聖フィリッポスは他の国々へ宣教に出発した。シリアとアンティオキア地方を通り抜け、リディアとミシア[7875] に到着し、これらの国々を巡りながら、異教徒たちを真の神へと改宗させた。　そこで、当時近隣の都市で宣教を行っていた聖使徒バルトロマイが彼に合流した。彼は神によってフィリッポを助けるために遣わされたのである。さらに、フィリッポの妹である処女マリアムナも彼に従い、彼らは皆、人類の救いの業に共に奉仕するようになった。　リディアとミシアを巡り、神の御言葉を宣べ伝える中で、彼らは異教徒たちから多くの迫害、殴打、苦難に遭い、牢獄に閉じ込められ、石打ちに遭ったが、あらゆる迫害にもかかわらず、神の恵みによって、キリストの信仰を広めるという今後の働きのために生き延びた。　リディアのある村で、彼らはキリストの愛する弟子である聖ヨハネ・テオロゴスに出会い、彼と共にフリギア地方へと向かった。　イェラポリス（[7876] ）という町に入ると、彼らはそこでキリストを宣教した。この町は偶像であふれており、住民全員がそれらを崇拝していた。偽りの神々の中には、さらに一匹のヘビもおり、そのために特別な神殿が建てられ、そこへ食物が供えられ、数多くの多様な生贄が捧げられていた。　狂信者たちは他の爬虫類やエヒドナも同様に崇拝していた。聖フィリッポスはまず、妹と共に祈りを武器としてエヒドナに立ち向かい、当時彼らと共にいた聖ヨハネ・テオロゴスもこれを助けた。　彼らは皆、祈りをあたかも槍のように用いて、そのエヒドナを打ち負かし、キリストの力によってそれを滅ぼした。その後、聖ヨハネ・テオロゴスは彼らと別れ、神の言葉を宣教するためにイェラポールを彼らに委ね、自身は他の都市へと向かい、至る所で聖なる福音を広めた。　一方、聖フィリッポスはバルトロマイとマリアムナと共にイェラポールに残り、迷える者たちに真理を知る光が輝くよう、　の偶像崇拝の闇を打ち砕くことに熱心に努め、　彼らは昼夜を問わずこのことに尽力し、不信仰な者たちに神の御言葉を教え、無知な者を諭し、迷える者を真の道へと導いた。その町には、スタキオという名の男が住んでおり、彼はすでに四十年間、盲目であった。　聖なる使徒たちは、祈りの力によって彼の肉体の目を開かせ、キリストの説教によって彼の心の盲目さを照らし出した。スタキオスに洗礼を授けた後、聖徒たちは彼の家に滞在した。そして、盲目のスタキオスが目が見えるようになったという噂が街中に広まった。彼の家には大勢の人々が集まり始めた。　聖なる使徒たちは、自分たちの元へ集まってくるすべての人々に、キリスト・イエスへの信仰を説いた。そこには多くの病人も運ばれてきたが、聖なる使徒たちは皆を祈りによって癒やし、悪霊を追い出した。その結果、大勢の人々がキリストを信じ、洗礼を受けた。

　　その町の長官の妻で、ニカノラという名の女性が、蛇に噛まれて病に伏し、死の淵にありました。スタキオの家にいる聖なる使徒たちが、一言であらゆる病を癒やすと聞き、夫の不在中に、自分の奴隷たちに命じて自分を彼らのところへ運ばせ、二つの癒やしを受けました。　肉体的な癒やし――蛇に噛まれた傷からの回復――と、精神的な癒やし――悪魔の惑わしからの解放――を得て、聖

[7875] リディアとミジアは、小アジアの北西部に位置する地域である。

[7876] フリギアのイエラポルは、フリギア南部（小アジア中部）のリコス川とメアンドロス川の間に位置し、古代にはかなり重要な都市であり、特に大理石の採掘と温泉で知られていた。　現在、この地はトルコ語で「パムブク・カレシ（綿花の街）」と呼ばれている。これは、山の高みから流れ下る小川の水が堆積して形成された、白く見える岩、小丘、断崖、平野、川岸、運河が、綿花の束に似ていることに由来する。　現在、ここには廃墟しか残っておらず、この場所はハンセン病患者の避難所となっている。

なる使徒たちから教えを受け、キリストを信じるようになった。　市長の夫が帰宅すると、使用人たちは、妻がスタキオの家に滞在しているある外国人たちから、キリストを信じることを学んだと彼に伝えた。激しい怒りに駆られたニカノールは、直ちに使徒たちを捕らえ、スタキオの家を焼き払うよう命じ、その命令は実行された。　大勢の群衆が集まり、聖なる使徒フィリポ、バルトロマイ、そして聖女マリアムナは、殴打されながら街中を引き回され、侮辱を受けた末、ついに牢獄に投げ込まれた。　その後、都市の長官は裁判官の席に着き、キリストの宣教者たちを裁こうとした。すると、偶像を崇めるすべての祭司たちと、滅びたエヒドナの祭司たちが彼の元に集まり、聖なる使徒たちに対する告発を申し立て、こう言った。「長官よ！　我らの神々への冒涜に報復してください。というのも、これらの旅人たちが現れて以来、我らの町では偉大なる神々の祭壇が荒れ果て、民は彼らに恒例の生け贄を捧げることを忘れてしまったからです。我らの名高い女神エヒドナは滅び、町全体が不法に満ちています。これらの魔術師たちを殺しなさい」

そこで、町の長官は、聖フィリッポの衣服に魔術の呪文が込められていると考え、それを脱がせるよう命じたが、衣服を脱がせても何も見つからなかった。聖バルトロマイに対しても同様に扱ったが、彼の衣服からも何も見つからなかった。　彼らが同じ意図でマリアムネに近づき、衣服を脱がせて彼女の処女の体をさらそうとしたとき、突然、彼女の姿は彼らの目の前で炎へと変わり、不信心者たちは恐怖に駆られて彼女から逃げ去った。　聖なる使徒たちは、総督によって磔刑に処される判決を受けた。最初に苦難に遭ったのは聖フィリッポであった。彼らは彼の足の裏に穴を開け、そこに縄を通すと、エヒドナの神殿の門の前で、彼を逆さ磔にした。そして同時に、彼に石を投げつけた。続いて、彼らは聖バルトロマイを神殿の壁に磔にした。すると突然、大地震が起こり、大地が裂けて、都市の統治者やすべての祭司、そして多くの不信仰者たちを飲み込んだ。　生き残った者たち――信者も異教徒も――は深い恐怖に襲われ、泣き叫びながら聖なる使徒たちに憐れみを乞い、唯一真の神に、自分たちもあの人々と同じように大地に飲み込まれないよう懇願した。人々は急いで、十字架に磔にされた使徒たちを降ろそうと駆け寄った。　聖バルトロマイはそれほど高い位置に吊るされていなかったため、すぐに降ろされた。しかし、フィリッポはすぐに十字架から降ろすことができなかった。それは、彼が高く吊るされていたからであり、とりわけ、神の特別な御心によるものだったからである。すなわち、この使徒がこれらの苦しみと十字架の死を通じて、生涯その歩みを向けていた天へと、この地から移されるためであった。　そのように吊られたまま、聖フィリッポは敵たちのために神に祈り、主が彼らの罪を赦し、真理を知るよう彼らの心を照らしてくださるよう願った。主はその祈りに耳を傾け、直ちに大地に命じて、大地に飲み込まれた犠牲者たちを生き返らせた。ただし、その都市の長とエヒドナの祭司たちは例外であった。　すると、皆が大きな声でキリストの御力を告白し、賛美し、洗礼を受けたいと願った。聖フィリッポを十字架から降ろそうとしたとき、彼はすでにその聖なる魂を神に委ねていたことが分かり、死体となって降ろされた。　実の妹である聖マリアムナは、兄フィリッポスの苦しみと死をずっと見守っていたが、木から降ろされた彼の遺体を愛情を込めて抱きしめ、口づけをし、フィリッポスがキリストのために殉教する栄誉に浴したことを喜んだ。　聖バルトロマイは、主を信じたすべての人々に洗礼を授け、スタキオを彼らの司教に任命した。新たに改宗した人々は、聖使徒フィリッポの遺体を尊厳をもって埋葬した。　聖使徒フィリッポスの血が流れたその場所に、三日後にブドウの木が生え、これは聖　フィリッポスが、キリストの名のために流した自らの血により、主の御国[7877]　において、主と共に永遠の至福を享受していることのしるしである。

[7877] 聖使徒フィリッポの殉教に関するこの伝承に加え、古代の記述には、彼が亡くなる7日前に自らその死を予言したという記述も加わっている。 使徒フィリッポスは、西暦90年、ローマ皇帝ドミティアヌスの治世中に、87歳で殉教した。 その聖遺骨は560年頃にローマへ移され、現在も12使徒教会に安置されている。聖使徒の片手は、コンスタンティノープルの無原罪の聖母教会に保管されていた。　ビザンツ皇帝マヌイル・コムネノスは、1167年に姪のマリアをエルサレム王ア

一方、聖バルトロマイは、聖フィリッポの埋葬後、聖なる処女マリアムナと共に数日間イェラポリスに留まり、新たに設立された教会をキリストの信仰において確固たるものにした後、そこから大アルメニアのアルバンの町へ去り[7878]、そこで十字架にかけられた。 聖マリアムナはリカオニアへ向かい[7879] 、そこで多くの人々を聖なる信仰へと導き、安らかに息を引き取った。これらすべてについて、私たちの神に、今、そして常に、そして世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第3調:

全宇宙は美しく飾られ、エチオピアは歓喜に沸く。あなたによって冠を戴き、明るく照らされて、神の御言葉を語ったフィリッポよ、あなたの記念を祝う。あなたはすべての人をキリストへの信仰へと導き、福音にふさわしい生涯を全うしたからである。 それゆえ、エチオピアの手は神に向かって大胆に差し伸べられ、神に、私たちに大いなる憐れみをお与えくださるよう祈るのです。

コンダク、第8調:

あなたの弟子であり、友であり、あなたの情熱を模範とする者、全宇宙の神であるあなたを宣べ伝えた、神の言葉を語るフィリッポス。その祈りによって、不法な敵からあなたの教会と、あなたのすべての都市を、大いなる慈悲に満ちた聖母マリアよ、守り給え。

テッサロニキの大司教、聖グリゴリオス・パラマスの生涯

記念日：11月14日

聖グリゴリオス・パラマ[7880] 、テッサロニキ大司教[7881] は、コンスタンティノープル出身であり、高貴で敬虔な両親の元に生まれた。両親は、彼が幼い頃から、人間的な知恵はもちろん、とりわけ神の知恵とあらゆる美徳を彼に教えようと努めた。 彼は若くして父を亡くしたが、母はグリゴリオスをはじめ、すべての兄弟姉妹に対し、主の律法と聖書の精神に基づき、賢明で善良な教育を与えるよう心を配った。彼女は息子に知恵を学ばせるため、彼らを賢明な教師たちの元で生活させるように手配した。 彼自身、生まれつきの知的な才能と勤勉さを兼ね備えていたため、短期間のうちに哲学や当時知られていたその他の学問の修得において目覚ましい成果を上げた。しかし、自身の記憶を過信しなかった彼は、毎回の授業の前に、至聖なる聖母マリアのイコンの前で三度、地面に額を付けて祈りを捧げることを習慣とした。 そして、聖母マリアはこの敬虔な少年を助け、その目覚ましい進歩は人々の注目を集めた。皇帝自らが聖グリゴリーに深い関心を寄せ、父のように彼の教育に心を配った。

一方、グリゴリーは幼い頃から、この世のすべてを魅惑的な夢のように憎み、神への燃えるような愛に満たされ、すべての儚い恵みを軽んじ、あらゆる知恵の源であり、あらゆる恵みの与え主で

モリウスに嫁がせた際、この片手を聖なる貴重な証しとして彼女に授けた。1204年、この聖遺物はフィレンツェに移された。

[7878] アジア、コーカサスとの国境付近。

[7879] リカオニアは、フリギアと国境を接する小アジアの中央部にある地域の一つである。

[7880] 聖グリゴリオス・パラマは14世紀に生きた。

[7881] テッサロニキ、別名ソロウンは、マケドニアの極めて重要な古代都市であり、エーゲ海（群島）に面した広大なソロウン湾、あるいはフラキア湾の奥深くに位置していた。 現在、この都市はテッサロニキという名で、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコにおける第一の商業・製造業の都市であり、非常に多くの人口を擁している。

ある唯一の神に魂を捧げ、この世とその虚しい栄光を捨て去ろうと努めた。　こうした想いに駆られ、彼はアトス山の聖なる山に住む修道士たちとの親交や出会いを求め、彼らに助言と指導を請い、修道生活や苦行生活の様式や規則を学びながら、自分が真の修道士になれるかどうか、自らの力を試していた。　グリゴリーは愛着のある衣服を薄っぺらなぼろ服に替え、少しずつ以前の習慣や外見上の振る舞いを変え始め、世俗的な礼儀作法のすべてを捨て去った。そのため、宮廷の人々の注目を一身に集め、多くの者は彼を狂人だとさえ見なした。　こうして数年が過ぎたが、皇帝の説得も、友人たちの懇願も、周囲の嘲笑も、グリゴリーが選んだ道を止めることはできなかった。

この試練を無事に乗り越えたグリゴリーは、生後20年目に、ついに修道者の位を受け、荒野へ隠遁することを決意し、そのことを神を愛する母に告げた。　当初、母はこれに多少心を痛めたが、やがて主を喜びながら彼の決意に同意し、さらには神の助けを借りて、他の子供たちにも修道生活を送るよう説得した。そうして、預言者と共にこう言えるようにするためであった。*「見よ、私と、主が私に与えてくださった子供たち」*（イザヤ書8:18）。福音の戒めに従い、聖グリゴリイは全財産を貧しい人々に分け与え、この世の美しさ、甘美さ、栄光を心から軽んじて、キリストの後に従い、母や兄弟姉妹たちを同じ道へと導いた。　母と姉妹たちはある女子修道院に残し、兄弟たちを連れて聖アトス山へ赴き、彼らと共にヴァトペドス修道院[7882]という人里離れた修道院に定住した。そして、聖なる恵み豊かな長老ニコディムに完全に服従し、後に彼から修道士の剃髪を受けたのである。

ニコディムの元で過ごした2年目、グリゴリーは神からの御訪問に恵まれた。ある日、神を想う祈りにふけっていたとき、彼の前に光を放つ威厳ある人物が現れ、彼はその人物が聖使徒であり福音書記者である「神学者」ヨハネであることを見抜いた。　使徒はグリゴリーを優しく見つめながら、こう尋ねた。「なぜ、神に祈るたびに、いつも『私の闇を照らしてください、私の闇を照らしてください』と繰り返すのか？」

グリゴリウスは答えた。「これ以外に、私が何を願うべきでしょうか。ただ、啓発され、神の聖なる御心をどう実行すべきかを知りたいのです。」

すると、聖福音伝道者はこう言った。「万物の主である聖母マリアの御心により、これからは私が常にあなたのそばに寄り添うことにしよう。」

師である聖ニコディモ長老の死後、聖グリゴリイは聖アファナシオスの大修道院に退き、そこで兄弟たちのための共同の食事の奉仕に従事するとともに、聖歌隊長としての務めも果たした。　そこで数年間、神を畏れ、すべての人に従順に過ごしたグリゴリイは、肉欲を永遠に制し、福音的な無情と神聖な清らかさの慰めとなる模範を示した。その謙遜さ、柔和さ、そして功績により、彼は兄弟たちから普遍的な愛と尊敬を集めたが、　しかし、名声を避け、さらに厳しい生活を求めて、彼は修道院を離れ、深い荒野にあるグロシアのスキートへと赴き、そこで敬虔な長老グリゴリーの指導に身を委ね、魂も肉体も神に捧げた神への計り知れない愛に燃えながら、厳しい瞑想の生活を送った。絶え間ない祈りによって悪魔のあらゆる中傷に打ち勝ち、彼は神の恵みの賜物に与るにふさわしい者とされた。祈りの精神の深みに没入し、それに照らされるにつれ、彼は深い感極まりと心の涙に満たされ、その目からは、絶え間なく枯れることのない泉のように、涙が奔流となって流れ出た。

しかし、グリゴリーとその同志たちの沈黙は、修道院の外で沈黙を守っていた修道士たちに対するアガリア人[7883]による襲撃により、まもなく破られることとなった。このため、グリゴリーは他の修道士たちと共に、自らの荒野を離れ、テッサロニキへ退去せざるを得なくなった。　そこで聖人

[7882] アトス山は、マケドニア南部に位置する狭く山岳の多い半島で、エーゲ海に突き出し、ストリモン湾とシンギトス湾に面している。正教会の修道生活の有名な発祥地であり、修道士のみが居住し、東方の聖地であり、東方修道生活の主要な中心地である。–ヴァトペド修道院は、アトス山の北東斜面、海に近い場所に位置している。伝承によれば、その創建は東方における修道生活の黎明期（4世紀末）に遡り、テオドシウス大帝の名と結びついている。 10世紀以降、ヴァトペド修道院はアトス山において極めて重要な地位を獲得し、その地位は現在に至るまで維持されている。

[7883] アガリア人は、アラブ人、イスラム教徒である。

は、聖地を巡礼し、もし神の御心にかなうならば、そこでどこかの場所で荒野の沈黙の中で生涯を終えることを決意した。彼らの意図が神の御心にかなうかどうかを知りたかった彼は、そのことを神に祈った。　すると、夢の中で、聖大殉教者ディミトリオスが彼に現れた。その聖遺骨はテッサロニキに安置されていた[7884]。大殉教者は、テッサロニキを離れないよう彼を説得した。そこで聖グリゴリウスは、厳しい断食と祈りを経て、テッサロニキで司祭の聖職に就き、少数の兄弟たちを伴って近隣のスキートへと退き、そこで再び修行に励むようになった。　彼の生活様式は次のようなものであった。週に五日間は、彼自身もどこにも出ず、誰をも迎え入れなかった。ただ土曜日と日曜日、聖務を執り行い、神の秘跡を受けた後、兄弟たちと霊的な交わりを持ち、感動的で教訓に富んだ語りかけによって彼らを励まし、慰めた。　聖者が隠遁生活に入った後のこの時間、とりわけ聖体礼儀の後には、彼の顔に素晴らしい神聖な光が輝いていた。聖務の最中、彼は皆を涙と感動に誘った。　多くの偉大な聖人たちは、彼が神から奇跡を行う力と預言の賜物を授かったその徳高い生活に感嘆し、彼を「神の使者」および「預言者」と呼んだ[7885]。

その頃、聖グリゴリオスの徳高い母が主のもとへ召された。彼女の娘たちであり、またグリゴリオスの姉妹である彼女たちの仲間たちは、孤児となった自分たちを慰め、霊的な指導を受けるために、彼に自分たちのところへ来てくれるよう懇願した。　親族愛の呼びかけに従い、グリゴリウスはコンスタンティノープルにある姉妹のもとへ赴き、その後、再び愛する荒野へと急いで戻った。しかし、その直後、ヴェルル修道院での五年間の沈黙の生活が終わると、アルバニア人による度重なる襲撃のため、再び聖なる山へと退去せざるを得なくなり、　聖アファナシオス修道院へと再び退去せざるを得なくなり、そこで修行に励む修道士たちから深い愛情をもって迎え入れられた。　ここでもまた、修道院の外にある聖サヴァの静寂な独房に籠もり、土曜日と日曜日を除いて、どこにも出ず、誰とも会わず、また誰も彼を見ることはなかった――聖務上の必要に迫られた時を除いては。　それ以外のすべての日と夜は、祈りの修行と神への黙想に費やされた。

ある時、修道室で聖母マリアに祈りを捧げていた際、尊者様は、自身と兄弟たちから完全な沈黙を妨げるあらゆる障害を取り除いてくださるよう、また、彼らの生活上のあらゆる必要について、聖母ご自身が御自身で顧み、御手配くださるよう、聖母に懇願した。　至慈愛なる御母は、彼の熱心な祈りに応え、多くの光を放つ聖者たちを伴って、彼に御姿を現された。彼の前に現れると、御母は御自身に随行する光を放つ聖者たちに向かってこう言われた。「これからは永遠に、グリゴリーとその兄弟たちの必要を顧みる者となりなさい」。

この時から、後に聖グリゴリウス自身が語ったように、彼は確かに、どこにいようとも、常に自分に対する神の特別な御摂理を感じていた。ある時、祈りと神への黙想にふけっていたグリゴリウスは、軽くうたた寝をしてしまった。　すると、彼の手に、清らかな牛乳が入った器が置かれているのが見えた。それは溢れんばかりに満たされており、縁からこぼれ出していた。やがてその牛乳はぶどう酒へと変わり、器の縁から溢れ出て、彼の両手や衣服を濡らし、周囲に素晴らしい香りを広げた。その香りを嗅ぎ取ったグリゴリーは、聖なる喜びに満たされた。　すると、光り輝く若者が現れ、こう言った。

「なぜ、この素晴らしい飲み物を、あなたが十分な注意を払わずに放置しているのですか？これこそ、決して尽きることのない神の賜物なのですから。」

「しかし、それを必要とする者がいないのに、誰にこの飲み物を渡せばよいというのですか？」と聖グリゴリウスは尋ねた。

[7884] 彼の記念日は10月26日である。

[7885] 当時、彼は30歳を少し過ぎたばかりだった。

「確かに今はこの飲み物を渇望する者はいないが」と若者は反論した。「それでもなお、あなたは自分の義務を果たす者として、神の賜物を軽んじてはならない。その適切な用い方について、主はあなたに説明を求めるだろう。」

この言葉を以て、不思議な幻視は終わった。聖グリゴリウスは、この幻視を次のように解釈した。すなわち、牛乳は、霊的な導きを求める素朴な人々の心に理解できる、平易な「言葉の賜物」を意味し、牛乳がワインへと変容したことは、やがて至高の御心が、キリストの信仰におけるより高次の真理について、より深い教えを求めることを意味していたのである。　その直後、グリゴリウスはエスフィグメン修道院のイグメンに選出された[7886]が、ほどなくして、という荒野の静寂への渇望が彼を再び聖アファナシオス大修道院へと引き戻した。　そこで彼は、これほどまでに霊的な完成に達したため、多くの聖なる人々が彼の徳高い生活に感嘆し、神から授かった驚くべき奇跡の賜物を見るや、彼を「神の使者」と呼んだ。彼は悪霊を追い出し、実を結ばない木々に祈りによって実りをもたらし、未来を現在のことのように予言した。　しかし、神の御言葉「*キリスト・イエスにあって敬虔に生きたいと願う者は皆、迫害を受ける*」（IIテモテ3:12）の通り、この尊者もまた、様々な頻繁な試練を免れることはできなかった。　聖使徒ペトロが言うように、「*あなたがたの信仰が、火で試される金よりも尊いものであることが、イエス・キリストの現れにおいて、称賛と誉れと栄光となるため*」（Iペトロ1:7）に、彼はすべてを喜びをもって耐え忍びました。

聖グリゴリオス・パラマは、当時神の教会を揺るがし始めていた異端との闘いにおいて、多くの苦難に耐えました。 彼は特に、内なる人を照らし、時にはファヴォレ山[7887]や、シナイ山で神と対話した後のモーセの顔（出エジプト記34:29–30）のように目に見える形で現れる、霊的な恵みの光に関する正統的な教えを否定した偽教師たちを糾弾することで、教会に多大な貢献を果たした。　この頃、カラブリアから[7888]、バルラアムという名の学識ある修道士が聖アトス山にやって来た。彼はその追随者たちと共に、冒涜的な教えによってキリストの教会内の平和とアトス山の修道士たちの安寧を乱した。　その後、実に二十三年もの間、この高潔な牧者はバルラアムと勇敢に戦い続け、その間に聖グリゴリオス・パラマが耐え抜いた数え切れないほどの苦難は、詳細に描き出すことさえ困難である。　ヴァルラアムは、ファヴォルの光について、それは物質的なものであり、創造されたものであり、空間に現れ、空気を染め上げていたと説いた。なぜなら、それはまだ神の恵みに照らされていない人々の肉眼には見えるものだったからである。　彼は、神性のあらゆる働き、さらには聖霊の賜物――知恵と理性の霊など――までもが、同様に、すなわち被造物であると認めていた。彼は、神を被造物の範疇に貶めることを恐れず、天の父の御国における義人の光と至福、そして三位一体の神性の力と働きをも否定したのである。　このように、バルラアムとその追随者たちは、同一の神性を「被造物」と「非被造物」に不敬にも分割し、その神聖な光やあらゆる力、あらゆる働きを、被造物ではなく「永遠に神に内在する（[7889]）」ものとして畏敬の念をもって認めていた人々を、二神論者や多神論者と呼んだ。　それとは対照的に、アトス山の隠者たちが、肉眼で神の光を観想し、感覚的な方法でその準備を行うという信仰[7890]を迷いであると見なしたヴァルラアムは、彼らに対しても、祈

[7886] エスフィグメン修道院は、アトス山で最も古い修道院の一つであり、アトス山の北東斜面に位置している。

[7887] 主の変容の祭りの期間中。

[7888] カラブリア――イタリア南部の低地半島。

[7889] 教会の普遍的な信仰によれば、主の変容のトロパリオに明確に表現されているように、「私たち罪人にも、あなたの永遠の光が輝きますように」。

[7890] 聖グリゴリオスとそのアトス山の同志たちは、自らの生涯をもって、絶え間ない魂の浄化、感情と思考の完全な静寂、神への思索と祈りの絶え間ない実践、そして賢明な行いによって、人は上からの啓示に達することができるが、　近づきがたい光の中に宿る神の本質は、限られた罪深い人間の本性には到達できないが、沈黙を守る者に光の形で現れる神の本質の現れのみを、時には肉眼でも見ることができる。これは、ファヴォール山での主の変容や、光や火の形で現れた神

りに対しても、そして彼らの神秘的な観想に対しても、明らかに反旗を翻した。　しかし、ヴァルラアムによるアトス山の修道士たちへの誹謗中傷が公になる前に、この異端者は、その非難され、非難に値する振る舞いのため、不名誉な形で総主教によって追放された。怒りと悲しみを抱き、ヴァルラアムはテッサロニキへと去り、そこでもアトス山の修道士たちに対する誹謗中傷を広め続けた。　雄弁で学識に長けたヴァルラアムに対抗する力を持たなかったテッサロニキの修道士たちは、アトス山から聖グリゴリオスを呼び寄せることを余儀なくされた。テッサロニキに到着した聖グリゴリオスは、当初は柔和な態度で臨んだが、　しかし、教会とその法規にこれほど大きな動揺をもたらす頑固な偽教師に対して、こうした措置が効果を奏さないことを悟ると、ヴァルラアムの異議や誹謗中傷を、口頭だけでなく、崇高な真理と神聖な論証に満ちた力強い著作によっても退け始めた。　ヴァルラアム自身、それらを知り、その力を感じ取ると、アトス山の修道士たちを放っておくことを余儀なくされたが、その代わりに、神の聖人に対して全力を挙げて反旗を翻した。　しかし、これでも効果がなかったため、恥をかかされたヴァルラアムは、　コンスタンティノープルへと退去し、コンスタンティノープル総主教ヨハネス14世[7891]　に対し、聖グリゴリオスとアトス山の修道士たちについて、口頭および書面で訴えを申し立てた。

一方、聖グリゴリウスはこの間、テッサロニキに3年間留まり、正教の原理を熱心に解説し、その純粋性を力強く擁護していた。ここでも、以前と同様に、心の叫び、完全な孤独、そして沈黙が、彼の余暇の愛好する過ごし方であった。　荒野の静寂という恵みには恵まれなかったものの、同時に可能な限り世俗とのつながりや関わりを避けて、彼は家の奥まった一角に住み、そこで自分用に小さな独房を設けて、できる限り沈黙を守っていた。　そしてある日、修道生活の始祖である聖アントニオ大聖人の祝日に、他の修道士たち――至福のイシドールの弟子たち――が徹夜祈祷を行っている間、グリゴリウスは自分の隠れ家に留まっていたところ、突然、幻視の中で聖アントニオが現れ、こう言った。　「沈黙は良きものであり、完全なものだが、兄弟たちとの交わりも時には必要だ――とりわけ祈りと詩篇の詠唱の日には。それゆえ、今こそあなたも兄弟たちと共に徹夜祷に参加すべきである」。

この言葉に従い、神聖なるグリゴリウスは直ちに兄弟たちの元へ向かい、彼らは彼を喜びをもって迎え入れた。そして、徹夜祷は彼らにとって格別な祝祭の雰囲気の中で行われた。

アトス山の修道士たちを擁護し、異端の詭弁を論破するための神学論考を書き終えた聖グリゴリウスは、聖山に戻り、自身が著した敬虔に関する文章を修道士たちに示した。

その直後、聖グリゴリウスは全世界を前にして異端の詭弁と戦うことを余儀なくされ、その功績により、地上の教会において不滅の名声を得、天の教会において義の冠を授かった。　その頃、バルラアムはコンスタンティノープル総主教ヨハネス14世を味方につけることに成功し、総主教が書簡によってグリゴリウスとその同志たちを教会の裁判に召喚するに至った。　キリスト教の教義と道徳の根幹そのものを揺るがす恐れのあるアリウス派の偽りの教えを断固として許さず、聖霊に満たされた聖グリゴリウスは、正教とアトス山の長老たちを熱心に擁護するために立ち上がった。　生じた争いを解決し、正統信仰を確立するため、コンスタンティノープルにおいて敬虔なアンドロニコス・パ

性のあらゆる顕現や啓示、例えば　モーセやエリヤ、あるいはアントニオス大聖人のような古代のキリスト教の修行者たちへの顕現など、あらゆる神を仰ぎ見る者たちは、肉眼と心の目によって、神の光、すなわち神性の輝きを目撃した。このファヴォルの光と神性のあらゆる顕現は、神の存在そのものが被造物ではないのと同様に、彼らによって「被造物ではない」ものであり、「神聖な」ものと称される。　この教えは、その本質において神秘的であり、自然の知性には理解しがたいものであるが、同時に、信じる心にとっては説得力があり、揺るぎないものである。

[7891] ヨハネス14世アプレンは、1332年から1347年まで総主教を務めた。

レオロゴス王[7892] によって公会議[7893] が招集され、ヴァルラアムも弟子や信奉者たちを率いてこの公会議に参集した。　コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂で、総主教の主宰のもとに行われたこの公会議において、ヴァルラアム、その追随者アキンディン、および彼らに類する他の偽教師たちの異端的な誤謬が暴かれた。　その時、偉大なるグリゴリウスは、神に導かれたその口を開き、霊感の炎に満ちた言葉と神の聖書によって、異端を地上の塵のように吹き飛ばし、茨のように焼き払い、異端者たちを完全に恥じ入らせた[7894] 。

神の聖人の、神の霊感に満ちた非難によって恥をかかされたバルラアムは、その恥に耐えかねて再びイタリアへ退去し、そこでカトリックに改宗した。　しかし、ビザンティウムには、彼には公然たる者も秘密の者も、友人や追随者が現れ、彼は手紙によって彼らを扇動しつつ、同時に正教に反する西方教会の教義を説いた。そして、彼の偽りの教えという雑草は、彼の死後も修道士アキンディンによってまかれ、育てられた。　彼に対抗してコンスタンティノープルで新たな公会議が招集され、そこで聖グリゴリウスは、神の光に関するヴァルラアムとアキンディンの誤りを、さらに　に暴いた。　しかし、総主教はアキンディンを支持し、聖グリゴリウスを当時の教会におけるあらゆる混乱と動乱の張本人であると断じた。そればかりか、アキンディンは助祭の位に昇進させられた一方で、グリゴリウスは薄暗い牢獄に投獄され、そこで4年間にわたり苦しめられた。

しかし、総主教によるこのような不正は、罰せられることなく終わらなかった。　敬虔なアンナ皇后[7895] は、総主教の行動と、すでに二つの公会議で異端者かつ教会の敵と認定されていたアキンディンへの偏愛を知り、彼を教会の交わりと聖職にふさわしくない者と見なした。そして、異端的な思索に陥った総主教自身は、司教座と教会の交わりから追放された。　こうして教会の平和は回復され、聖グリゴリウスは不法な投獄から解放された。　正教の確立に対する聖なる熱意、および異端の偽教義や教会内の混乱の根絶への功績により、彼は、イシドール総主教[7896] および皇帝ヨハネス・カンタクゼノス[7897] の説得により、テッサロニキ教会の大司教への叙階を受け入れることになった。しかし、当時テッサロニキで発生した騒乱を機に、新任の大司教は信徒たちから受け入れられず、その結果、彼が愛してやまない聖アトス山へと退去した。その間、聖母マリアの降誕祭が訪れた。　その頃、ある敬虔なテッサロニキの司祭が、神聖な聖体礼儀を執り行う準備をしながら、主に対し、民衆

[7892] ビザンツ皇帝アンドロニコス3世パレオロゴスは、1328年から1341年まで在位した。

[7893] この公会議は1341年に開催された。その後、ヴァルラアミ派の異端は非難され、その信奉者たちは1347年、1351年、1352年、そして1368年のいくつかの公会議においても破門された（最後の公会議は、聖グリゴリオス・パラマスの死後に開催された）。

[7894] 「世俗的で虚しい知恵に満ち溢れ、――神の聖人はこう語った――霊的な教えにおいて経験豊かな人々の言葉に耳を傾けない者たちは、変容の山で主を照らし、使徒たちが見た光について聞くとき、その光の中に感覚的で被造物である何かを見出そうとし、　――それゆえ、感覚のみならず知性そのものを超える、この物質的であり、消えることのない永遠の光を、彼らは感覚的で被造物の光にまで貶めてしまうのである。しかし、ファヴォレの山で光に包まれた主ご自身が、その光を『神の御国』（マタイ16:20）と呼んで、光が被造物ではないことをはっきりと示されたにもかかわらず。　さて、神の御国とは、果たして何か被造物であり、奉仕的なものなのだろうか。主は、山の上で、それまで持っていなかった何らかの別の光を受け取られたというのか。――この冒涜が私たちから遠ざかるように。なぜなら、そう考える者は、キリストの中に三つの本性、すなわち神性、人性、そしてその光の本性を認めざるを得なくなるからである。　したがって、私たちは、主が変容において、他のいかなる光でもなく、ただ御自身の肉のベールの下に隠されていた光のみを現されたと信じる。この光こそが、神性の光であり、それゆえに被造物ではなく、神聖なものである。　このように、神学を論じた教父たちの教えによれば、イエス・キリストは山上で変容されたが、それまで持っていなかった何かを受け入れたわけでも、何か新しいものへと変化したわけでもなく、ただご自身の中にあったものを弟子たちに示されたに過ぎない……ファヴォルの光は、神性の光であった」。

[7895] この当時すでに亡くなっていたアンドロニコス3世パレオロゴス皇帝の未亡人。

[7896] イシドール1世――1347年から1349年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[7897] ヨハネス6世カンタクゼン――1341年から1356年まで在位したビザンツ皇帝。王位をめぐる混乱の結果、彼はヨハネス5世パレオロゴスと王位を分かち合うことを余儀なくされた。

が考えているように、グリゴリウスが修道生活や霊的瞑想に関する信仰において誤りを犯しているのか、あるいは主から大胆な信仰の許しを得ているのか、どうか明らかにしてくださるよう、謙虚に祈った。 司祭は、この啓示を、3年間も全く身動きもできないまま横たわっていた、衰弱した自分の娘に現してくださるよう願った。 「主よ、もしグリゴリーが真にあなたのしもべであるならば、彼の祈りによって、この不幸な私の娘を癒してください」と彼は言った。そして主は司祭の祈りを聞き入れられた。娘は突然、自力でベッドから起き上がり、それ以来、まるで最初から病気ではなかったかのように完全に回復した。

この奇跡によって聖グリゴリウスは称賛されたが、テッサロニキでは依然として教会内の混乱が続いていた。 そこで、ブルガリアの王ステファン[7898]は、聖グリゴリウスの徳と神の教会への功績を知り、ブルガリアの総主教の座に就くよう彼に切に懇願したが、神聖なるグリゴリウスをその気にさせ、説得することはできなかった。

しかし、アトス山でも聖人は安らぎを見出せなかった。まもなく、教会の必要に迫られ、彼は再びコンスタンティノープルへ呼び戻された。そこから彼はレムノス島へ退いた[7899]。 そこで彼は多くの奇跡と奇蹟を行い、絶え間なく神の言葉を説き続けた。そして、孤児と化した信徒たちのために彼の存在が必要だと感じたテッサロニキの人々が、自ら彼を呼び戻すまでそこに留まった。彼らは、聖職者やテッサロニキの高位聖職者の代表をレムノス島へ派遣し、彼を招き戻したのである。 民衆は、言葉に尽くせないほどの喜びをもって、彼らの大牧者を迎えた。 まるで天からの霊感を受けたかのように、テッサロニキ教会は極めて祝祭的な様相を呈していた。いつもの賛美の聖歌の代わりに、聖職者と民衆は復活祭の賛歌とカノンを歌い、自分たちの感情やこの並外れた祝賀の理由を、自分自身にも他者にも説明することなく、ただその喜びに身を委ねていた。 その3日後、神の聖人は、数え切れないほどの人々が集まる中、荘厳な十字架行列と聖体礼儀を執り行った。その際、神は御自身の聖人に新たな奇跡をもって栄光を授けられた。前述の敬虔な司祭の息子は、てんかんを患っていた。 聖体拝領の時が訪れると、その司祭は大司教の足元にひれ伏し、病める我が子に、大司教ご自身の聖なる御手によって直接聖体をお与えくださるよう、謙虚に懇願した。司祭の謙虚さと息子の苦しみに触れたグリゴリーは、その願いを聞き入れ――すると、その子は癒やされた。 ある時、聖母マリアの降誕の祝日に、聖グリゴリウスは女子修道院で聖体礼儀を執り行っていた。 礼拝の最中、片目が不自由なイリオドーラという名の修道女が、聖職者が聖体礼儀を執り行っていることを知ると、人目につかないように彼のそばに近づき、密かに聖職者の衣を自分の不自由な目に当てた――すると、その目はたちまち視力を取り戻した。

神聖なるグリゴリウスは他にも多くの奇跡を起こした。テッサロニキ教会は、彼の賢明な統治の下、平和と静けさに包まれていた。 しかし、グリゴリウスには新たな偉業と重い悲しみが待ち受けていた。この 時期、ヴァルラアムとアキンディノスの同調者たちは、コンスタンティノープルにおいて、その異端的な思索によって正教会を混乱させ続けていた。そこでグリゴリウスは再び、正教を守るため、邪悪な異端者たちとの戦いに果敢に立ち向かった。 彼は、神に導かれた著作を通じて、また直接対峙して、彼らとの闘いを続けた。異端者たちがキリストの教会に巻き起こした激しい動揺を受けて、皇帝と総主教は、教会の平穏を取り戻すためにコンスタンティノープルで新たな公会議を招集する必要があると認め、まず第一に聖グリゴリウスをその公会議に招いた。 真理の敵たちは、以前と同様に恥をかかされ、屈辱を味わわされた。聖人の個人的な対話も、公会議で朗読された彼の教義に関する著作も、異端者たちの口を封じたのである。 皇帝の敬意と、総主教および教会の祝福に送られ、聖グリゴリウスは名誉をもって自身の信徒たちの元へ向かったが、当時テッサロニキに

[7898] セルビア王ステファン・ドゥシャン（1336年 – 1355年）。彼の支配下にはブルガリアも含まれていた。

[7899] レムノス島 – エーゲ海（群島）に位置する島で、アトス山の東にあり、面積は6平方マイルである。

滞在していたヨハネス・パレオロゴス[7900] が彼をそこへ入らせず、グリゴリウスは聖山へ向かうことを余儀なくされた。 しかし、3ヶ月後、彼はその同じパレオロゴスによって、栄誉をもってテッサロニキへ招かれた。

そこで間もなく、聖グリゴリウスは重く長期にわたる病に倒れ、皆が彼の命そのものを危惧するほどであった。 しかし、神は新たな偉業のために彼の命を延ばされた。聖人が病から完全に回復する間もなく、ヨハネス・パレオロゴスから手紙が届いた。その手紙の中で、皇帝は、自身と義父であるヨハネス・カンタクゼンとの間の王室内の争いや不和を収めるため、コンスタンティノープルへ来るよう彼に求めていた。 グリゴリウスは旅立ったが、コンスタンティノープルへ向かう途中でアガリア人に捕らえられ、奴隷兼捕虜としてアジアへと連行された。聖人は丸一年もの間、捕虜として過ごした。彼は次々と所有者を変え、都市から都市へと売り渡されていった。 これこそが神の御心であり、彼が使徒のように町から町へと巡りながら、キリストの福音を宣べ伝え、正教徒たちの信仰を確固たるものにし、その信仰を堅く守るよう教え、疑いを持つ者たちを励まし、救いに関する神の知恵の理解しがたい奥義を解き明かすためであった。 そして、彼はまさにキリストの真の使徒であった。 聖グリゴリイは、聖なる大胆さをもって、アガリア人[7901] や、キリストの教会から離反した異端者たち――すなわち、私たちの神であるキリストの地上の奉仕、尊く命を与える主の十字架、聖なるイコンおよびそれらへの礼拝について誤った教えを説いた者たち――との信仰をめぐる論争に臨んだ。 彼は、不信仰者たちを福音の光で啓蒙し、また、奴隷とされ、捕らえられた者たちやキリスト教徒たちを慰め、励まし、天の報いと冠を待ち望みながら、自らの苦難の十字架を不平を言わずに耐え忍ぶよう説得した。 聖グリゴリオスの敵対者たちは、彼の英知と、その口から発せられる恵みに驚嘆した。しかし、そのうちの何人かは、無力な憎悪から彼に残酷な暴行を加え、もしアガリア人たちが彼を保護し、彼に対する多額の身代金を得ようとしていなければ、彼は殉教の冠に至るまで苦しむことになっていたであろう。 そして実際、一年が経過すると、ブルガリア人はアガリア人の手から彼を身代金で買い戻し、テッサロニキの教会へ連れ戻した。

捕虜から解放された聖人が、まずコンスタンティノープルに到着した際、神聖なるグリゴリオスの上空を舞う目に見えない天使たちの並外れた祝賀と、彼を称える甘美な賛美歌が響き渡り、彼が上陸するはずだった埠頭を賑わせた。 そして、聖グリゴリウスは、神に選ばれた器であった。

柔和さ、悪意のなさ、そして謙遜さを備えつつも、彼は同時に、神と正教の信仰の敵に対して果敢に立ち向かい続け、神の言葉の剣をもって異端者たちを力強く糾弾し、打ち負かした。 悪を善をもって打ち勝ち、彼は敵からの誹謗中傷を告げる者たちの言葉には決して耳を貸さなかった。あらゆる苦難や災難においても寛大で忍耐強く、迫害やあらゆる侮辱を常に自身の名誉と栄光と見なした。そして、真のキリストの弟子として、彼にとってキリストの軛は喜びであり、その重荷は軽かった。

聖グリゴリウスを称賛したのは、信者たちだけでなく、非信者たちも同様であった。彼の目は、絶え間なく流れる祈りの涙のために、常に痛んでいた。 あらゆる情欲を死滅させ、肉体を霊に服従させた聖グリゴリイは、善行によって奮闘し、異端による動乱や混乱から神の教会と正教の信仰を鎮め、その苦行に満ちた、神に喜ばれる生涯を全うした。

最後の3年間、聖グリゴリウスは神の恵みの力によって、病める者たちの上に数多くの奇跡を起こした。例えば、彼の友人である修道司祭ポルフィリウスを、祈りによって病床から二度も立ち直らせた。 至福の死を迎える少し前、彼は聖なる十字架のしるしと「 」という祈りによって、激しい

[7900] ヨハネス5世パレオロゴス――ビザンツ皇帝、在位1341年～1376年。395ページの注3を参照。

[7901] すなわち、イスラム教徒のこと。

出血に苦しみ、すでに死を宣告されていた金細工師の5歳の子供を癒やし、完全な健康を取り戻させた。

その直後、聖グリゴリウスは病に倒れ、床に伏した。死が近づいていることを感じると、彼は周囲の人々に、永遠の命へと旅立つ日を予言した。「友よ！」――聖ヨハネス・クラマティオス（[7902]）の祝日の後、彼は彼らにこう語った――「今、私はあなた方のもとを離れ、主のもとへ旅立つ。　私がそれを知っているのは、神聖なる金口が幻視の中で私に現れ、友として愛を込めて私を御自身のもとへ招いてくださったからだ。」

実際、その同じ日、11月14日、聖グリゴリーは主のもと、主の永遠の楽園へと旅立った。彼が息を引き取る際、周囲の人々は、彼の口がまだ何かを囁いているのを見たが、どんなに耳を澄ましても、聞き取れたのは「天へ、天へ！」という言葉だけだった。　この言葉を残して、彼の聖なる魂は静かに、そして安らかに肉体から離れ、天へと旅立った[7903]。彼の至福の魂が肉体から離れると、その顔は輝きに満ち、彼が息を引き取った部屋全体が光に包まれた。その光景を、最後の口づけを求めて聖人の遺骸のもとに集まった街中の人々が目の当たりにしたのである。　かくして神は、この奇跡によって、生前より恵みの輝かしい住まいであり、神の光の子であった御自身の忠実な僕を称えることをお許しになったのである[7904]。

天使のような清らかさによって輝かしく照らされたその肉体を、死後、豊かな遺産であり宝物として自らの羊の群れに残した聖グリゴリウスは、今もなお、至る所から信仰をもって彼の聖遺物に訪れるすべての病者や弱者たちに、惜しみなく癒やしを与え続けている[7905]。これは、私たちの神キリストの栄光のためであり、　御父なる神、初めなき御父と、至聖なる、善き、命を与える聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、あらゆる栄光、誉れ、礼拝が御身にふさわしい。アーメン。

[7902] 聖ヨハネス・クラマトルスの記念日は11月13日である。

[7903] 聖グリゴリオス・パラマスは、1360年頃、11月14日に63歳で死去した。――彼は70編以上の著作を残した。

[7904] 聖グリゴリオス・パラマと同時代の人物であるコンスタンティノープル総主教フィロフェイ（1376年）の言葉が、四旬節第2週のシナクサールに記されている。– 聖グリゴリオスへの礼拝式は、彼の死後まもなくフィロフェイ総主教によって編纂された。　その中で、パラマは「神学のラッパ」、「恵みの火に満たされた口」、「聖霊の誠実な友」、「教会の揺るぎない柱」、「知恵の川」などとして称えられている。– 1368年の公会議において、ヴァルラアムとその支持者たちが最終的に破門された際、他の決議事項の中でも、「これらの異端者たちを『打ち倒した』テッサロニキの大主教聖グリゴリオス・パラマへの永遠の追悼」が宣言された。– 正教の信仰に対する並外れて偉大な功績を称え、聖教会は、11月14日の聖グリゴリオス・パラマスの記念日に加え、大斎の第2週、いわゆる「光をもたらす斎」の週にも、彼を記念する祝祭日を設けた。　前週に、あらゆる異端に対する正教の勝利を祝った（正教の週）後、教会はこの週に、正教の修道的な教えが、それに反するあらゆる偽りの教えに対して勝利したことを祝う。　前者の祝典はすべての正教徒に共通するものであり、後者は主に修道者や隠遁者たちのためのものです。

[7905] 聖グリゴリオス・パラマスの死後の奇跡の中でも、特に注目すべきは、正教と神の聖人の恵み深い教えの力を刻印し、証しした次の奇跡である。 サトゥルニヌス島で、大斎の第2週にある聖グリゴリオスの記念日に、フランク族は騒ぎ立て、少年たちを連れて、完全な静寂と晴天の下、小舟で海を漕ぎ出した。　彼らがこのように楽しんでいる最中、悪魔は彼らに、自らの破滅につながる邪悪な考えを吹き込みました。彼らは狂ったように手を振りながら、子供たちと共に叫びました。「パラマに破門を！　パラマに破門を！　もしパラマが聖人なら、私たちを溺れさせてしまえ！」と叫んだ。そして、神聖なるグリゴリー・パラマは、彼ら自身の裁きに従い、彼らが望んだ報復を神に請い求めた。深淵が裂け、不幸な者たちは小舟ごと海に飲み込まれ、溺死した。

トロパリオ、第8調：

正教の灯火、教会の支え、師よ、修道士たちの慈愛、神学者たちの打ち負かすことのできない擁護者よ、奇跡を行う者グリゴリオスよ、テッサロニキの誉れ、恵みの説教者よ、どうか私たちの魂が救われるよう、お祈りください。

コンダク、第2調：

至知の聖なる神聖な器、神学の明るい調和のとれたラッパよ、我らは汝を讃える、神の言葉を語る者グリゴリよ。しかし、最初の知恵の前に立つ者として、我らの心を父なる御方へと導き、我らがこう呼びかけんことを：喜びなさい、恵みの説教者よ。

フィリッポス・イラプスキの聖人伝

記念日：11月14日

モスクワおよび全ロシアの大公ヴァシリー・イオアンノヴィチ[7906] の治世中、ヴォロゴダ地方、尊者コルニリイ[7907] の修道院の近くで、テオフィロスという名の少年が現れた。彼はヴァシリーという名の人の家に身を寄せた。彼はキリストの御名によって生計を立てていた。　その若者は、毎日神聖な礼拝に参列し、毎晩祈りに明け暮れ、絶えず目を覚ましているという敬虔な習慣を持っていた。テオフィロスの謙虚さ、その柔和さ、そして祈りへの愛を見て、皆はこの若者に驚嘆した。彼が子供たちの遊びに参加したり、笑ったりする姿を、誰も見たことがなかった。　彼のことは、尊者コルニリウスに伝えられた。尊者はその少年を自分のもとへ連れてくるよう命じた。コルニリウスは静かに、そして穏やかに、その若者に、自分が誰で、どこから来たのか、名前は何か、両親はどこに住んでいるのかと尋ねた。少年は泣きながら、聖人の足元にひれ伏し、こう言った。　「お許しください、敬虔な父よ。私は両親のことは覚えておらず、幼い頃に彼らを亡くしました。彼らは農民だったと聞いており、私の名はテオフィロスです。私は神の御名にすがりながら放浪してきましたが、どうやってここに来たのかは分かりません。今はこの家の主人のもとで暮らしています。　どうか、敬虔な父よ、私ができる限り、あなたの修道院で奉仕させてください」。聖コルネリウスは、その透徹した眼差しで、この少年が神に選ばれた器となることを見抜いた。彼はテオフィロスを修道院に受け入れるよう命じ、彼を聖具係に預けた。

当時、その少年はわずか12歳でした。修道院に入院したその日から、彼は兄弟たちに熱心に奉仕し始め、並外れた従順さと謙虚さを示しました。 彼は約3年間、そのように兄弟たちに仕えた。その熱意と柔和さを見て、聖具係はそれを聖コルニリウスに報告した。すべての修道士たちは、勤勉なその少年を愛していた。彼が16歳になったとき、聖コルニリウスは彼を呼び寄せ、こう言った。「わが愛する子よ、お前は修道服を授かるにふさわしい。」

テオフィロスは喜びながらこう答えた。「私の魂は、何よりもこれを望んでおります。聖なる父よ、どうかこの善き、神に喜ばれる行いを、遅滞なく成し遂げさせてください」。

聖コルニリウスご自身が、この祝福された若者を指導し、彼を修道士として剃髪させ、フィリッポという名を授けた。霊的な指導のため、この若い修道士は、非常に熟練し敬虔な修道士フラヴィアヌスの元へ預けられた。まず第一に、彼は聖フィリッポに読み書きを教えた。主は御自身の忠実なしもべを助けられた。　短期間のうちにフィリッポスは読み書きをしっかりと習得し、聖書の書物を

[7906] ヴァシリー・イオアンノヴィチは、1505年から1533年まで大公の座に就いていた。

[7907] 聖コルニリイ・コメルスキーの記念日は5月19日である。

素早く読むことができるようになった。尊者フィリッポスは長年にわたり修道院で精進し、あらゆる奉仕を忠実に果たした。彼は教会で奉仕したり、パン屋で働いたり、水や薪を運んだりし、昼間は兄弟たちのために様々な仕事をこなし、夜は祈りを捧げた。　特に断食を厳格に守り、真の節制の模範を示した。修道者たちは聖フィリッポのこうした修行に感嘆し、聖コルニリウスに、フィリッポを彼らの長老に任命するよう懇願した。聖コルニリウスは喜んでその願いを聞き入れた。　するとフィリッポスはその行いをさらに深め、修道士たちは彼の徳高い生き方にますます感嘆するようになった。これに気づいたフィリッポスは心を乱し、嘆き始めた。

「ああ、私は不幸だ」と彼は心の中で考えた。「私はすでに人々から報いを受けてしまった。審判の日に、主からさらにどのような報いを期待できるというのか。いや、人々の称賛は私に悲しみをもたらすだけだ」。

名声を避けたいと願った彼は、修道院を去り、主が示す場所へ向かうことを決意した。彼はこのことを至福のコルニリウスに打ち明けた。聖なる長老は、彼に魂に有益な教えを授けた後、祝福を与え、平穏のうちに修道院から送り出した。　尊者フィリッポスは、至聖なる神の母にこう祈り始めた。「速やかに助け給う御方よ、私の声を聞いてください。私の心を乱すこの悲しみから、私を救い出してください」。

ある夜、彼がいつものように修道院で祈りを捧げ、オディギトリア（[7908] ）を称えるカノンを歌っていたとき、突然、ある声が聞こえてきた。「わが愛するしもべよ、ここから出て、わたしが示すところへ行きなさい」。

聖人は自分の独房の小さな窓から外を見ると、南側に大きな光が輝いているのを見た。彼はその光景に恐怖を覚え、怯えながら独房から飛び出した。

「これこそが、天から示された場所なのだ」と彼は思った。「主の御心が成されますように」。

修道室に戻ると、彼は祈りを終え、先ほどの幻視について長い間思い巡らした。翌朝、教会へ向かう途中、再びその声を聞く栄恵に与った。「この修道院を出て、私が示す場所へ行きなさい」。

その後、聖フィリッポスは翌夜、身に着けていた衣服以外は何も持たずに修道院を出て、旅立った。彼はクベンスコエ湖[7909] にある「全き慈悲の救い主」修道院に到着し、そこからさらに旅を続け、沈黙と修道生活の修行に適した場所を探し求めた。　その際、彼は次のような思いに心を満たしていた。「かつてユダヤの民がエジプトの奴隷制から逃れたように、我々は肉欲的な生活から逃げよう。金銭への執着を避けよう。それはあらゆる悪の根源であり、始まりだからだ。主が私の導き手であり、師となられますように！」

聖フィリッポはベロオゼロのアンドグ地区にたどり着き、その地方を歩き回った末、アンドギ川[7910] のほとりの森の中で、静かで人里離れた素晴らしい場所を見つけた。「ここが私の安息の地だ。ここに住もう」と彼は叫び、主に向かって感謝の祈りを捧げた。

長い旅路で疲れ果てた聖人は、枝を広げた松の木の下に横たわり、眠りについた。夢の中で、主の天使が現れ、こう言った。「フィリップよ、主はここにあなたのために場所を用意しておられる」。

[7908] 「オディギトリア」、すなわち「道しるべ」という名称は、スモレンスクの聖母マリアのイコンに与えられたものである。　この名称について、ある説では、この聖なるイコンがギリシャ皇帝たちの遠征に同行していたことに由来すると説明している。また別の説では、聖なるオディギトリアのイコンが当初、大理石の海の岸辺にある「道しるべ」修道院に安置されており、出航する船乗りたちがこの聖なるイコンの前で祈りを捧げていたことに由来すると説明している。　さらに第三の説もある。それは、二人の盲人が聖母マリアご自身の指示によりこのイコンの前に導かれ、癒やされたというものである。至聖なる聖母マリアのオディギトリアのイコンの記念日は7月28日である。

[7909] クベンスコエ湖は、ヴォロゴダ県の南西部に位置している。

[7910] アンドガは、ノヴゴロド州を流れる川である。

聖人はすぐに目を覚まし、至聖なる三位一体に祈りを捧げた。翌朝、彼はその地域の統治者であるアンドレイ・ヴァシリエヴィチ・シェレシュパンスキー公のもとへ向かった。公のもとに着くと、聖人は幻視を受けたその場所について懇願し始めた。　公爵は福者と共にその場所へ向かい、杖でアンドギ川からマロイ・イラパまでの範囲を区切り、福者にそこで暮らすことを許した。福者はその場所を堀で囲み、川岸に小さな庵を構え、自らの魂の救いを求めて主に祈りを捧げ始めた。

アンドレイ公には、イオアンという弟がいた。アンドレイ公が、自分の領地に福者フィリッポが定住したことを弟に告げると、イオアン公は悪魔の誘惑により、兄と福者フィリッポに対して激しく怒りを露わにした。民衆や司祭たちの前で、彼は兄を非難し始めた。　「お前はこいつをここに招き入れたが、俺には一言も相談しなかった。さあ、俺が彼のもとへ行って、そこから追い出し、あそこに住ませはしない。」

アンドレイ公爵は司祭や民衆と共に、聖なる人物に害を及ぼさないよう兄を説得したが、無駄だった。ヨハネ公爵はさらに激怒し、馬に飛び乗って荒野へと駆け出し、そこから聖人を追い出そうとした。公爵がマロイ・イラップに近づいたとき、馬は立ち止まり、小川を渡ろうとしなかった。公爵は馬を鞭で打った。しかし、馬はくつわを噛みしめて引き返し、公爵を彼が住んでいた村へと駆け戻し、そこで聖ニコライ・チュドトヴォルツの教会の前で公爵を振り落とし、自らさらに走り続けて、2ヴェルスタほど先で息を引き取った。 転落した公は岩に頭を打ちつけ、息を引き取った。アンドレイ公は弟を葬り、聖フィリッポのもとへ向かった。彼は、弟の供養として、その隠者に銀を贈ろうとした。　しかし、聖人は銀を受け取らず、大イラップ川と小イラップ川の間の土地を求めました。アンドレイ公はその願いを快く聞き入れ、その土地全体を聖人に与え、自分の農民たちに聖人の言うことを聞き、あらゆる面で彼を助けるよう命じました。　この時から、アンドレイ公をはじめ、多くの人々が聖フィリッポに深い信仰を抱くようになり、彼の祈りと教えを求めるようになった。聖フィリッポは礼拝堂と修道室を建て、その後、至聖三位一体の名を冠した教会を建設することを計画した。多くの人々がフィリッポのもとを訪れ、彼の礼拝堂で祈りを捧げた。　聖人は彼らに魂の益について教え、こう語った。「さあ、父たちよ、子らよ、聞いてください。私たちの魂にとって善き、有益な行いを成し遂げましょう。聖なる、命の源である三位一体の名に因む教会を建てましょう」。

これを聞いた民衆は、喜んで聖人を助け始めた。やがて、神の御加護と聖フィリッポの祈りにより、彼らは教会を建て、力の及ぶ限りそれを飾り立てた。アンドレイ・　・ヴァシリエヴィチ公自身も、教会に書物や祭具を寄進した。　ついに、この教会は奉献され、その中で主への祈りと賛美が捧げられるようになった。新たに設立されたこの修道院は、「フィリッポ・イラプスキーのクラスノボルスク修道院」[7911] と名付けられた。聖なる修道者の名声は広まり、多くの人々が彼のもとを訪れ、祈りと教訓を求めた。　至福のフィリッポスは、すべての人を教え、すべての人に有益な助言を与え、すべての人のために祈り、すべての人を励まし、慰めた。

「平和に、そして柔和に生きよう」と、聖人は彼のもとを訪れるすべての人々に説いた。「両親を愛し、敬いなさい。平和の神が、あらゆる平和と静けさの中であなたがたを守ってくださいますように。すべての親族、すべての貧しい人々や困窮している人々を愛しなさい。彼らは私たちの隣人だからです。主ご自身が貧しい人々を愛されたことを思い起こしましょう。　兄弟たちよ、高ぶることなく、柔和で謙遜でありましょう。なぜなら、*『神は高ぶる者を敵とし、謙遜な者には恵みを与えられる』*からです（Iペテロ5:5）。

このように他者を教えながら、聖フィリッポは自らの修行をますます深め、常に神に霊感を受けたダビデの詩篇を詠み、修道生活のすべての規則を厳格に守り抜いた。　特に彼は皆に詩篇を読む

[7911] クラーズノボルスカヤ＝トロイツェ＝フィリッポ＝イラップスカヤ修道院は、現在は非活動状態にあるが、ノヴゴロド教区内にあり、チェレポヴェツ市から52ヴェルスタの距離にある。

よう勧めていました。「よく聞きなさい、子供たちよ」と彼は言いました。「ダビデの歌を歌うことほど、私たちから悪魔を強く追い払うものはないのです」。

ある日、聖人が自分の小部屋で祈りを捧げていたとき、突然、まるで軍勢のようなラッパの音と騒音が聞こえてきた。聖人は驚いて言った。「このラッパの音はどこから来るのか？　ここには戦いは起きていないのに」。

その間、この騒ぎを引き起こした邪悪な霊が聖人に近づき、こう言った。「いいえ、戦いはあります。それはあなたに対して行われているのです。もしこの戦いを望まないのなら、行って眠りなさい。そうすれば、私たちはあなたと戦いません」。

聖人は祈りを捧げ、十字を切って身を守り、こう叫んだ。*「神よ、よみがえり給え。その敵は散らされ、神を憎む者たちは神の御前から逃げ去り、煙が消え去るように、彼らも消え去らんことを」*（詩編67:2–3）。

するとたちまち、悪魔の力はすべて消え去った。この光景を見た福者フィリッポスは、「主は力強く、偉大である！」と叫んだ。

それ以来、聖フィリッポは断食と祈りに一層励むようになった。悪魔自身はもはや彼を悩ますことができなくなり、代わりに悪意ある人々をそそのかし始めた。彼らは聖なる人物に敵意を抱き、神が彼に示された場所から彼を追い出そうとした。　人々が悪魔の唆しによって自分に悪事を働いているのを見て、聖人は迫害者たちのために祈り、「主よ、これを彼らの罪とみなさず、彼らのすべての過ちを赦してください」と述べた。

すると、他の人々は彼の悪意のなさや忍耐強さを見て、互いにこう語り合った。「ほら、この聖なる人だ。恨みや憤りを抱くことなく、ただ自分を苦しめる者たちのために祈っているのだ」。

ある日、悪魔が修道士に化けて聖人の小部屋に近づき、扉を叩き始めた。聖人は言った。「祈りを捧げなさい」。

すると悪魔は、「今、そして常に、そして世々限りなく」と答えた。

そこで聖人は再び、修道士に祈りを唱えるよう求めたが、悪魔はまた同じ答えを繰り返した。聖人は三度目も修道士に祈りを唱えるよう命じたが、やはり同じ答えが返ってきた。聖人は言った。「こう言いなさい。『父と子と聖霊に、今、常に、そして永遠に栄光あれ。アーメン』」

悪魔はこれを聞くと、まるで火に焼かれるかのように、たちまち姿を消した。すると、聖フィリッポは思いにふけり、その場所を去ろうかとさえ考えたが、ある声が聞こえてきた。「恐れるな、神のしもべよ。　私が命じた通り、ここに留まりなさい。そうすれば、神の栄光を仰ぎ見ることができ、あなたの魂は安らぎを得るだろう」。

福者フィリッポは、クラスノボルスクの荒野で孤独な隠遁生活を送っていた。彼の苦行の生活について耳にした多くの敬虔な人々――修道士や信徒――が、魂の救いに関する対話を求めて各地から彼のもとを訪れ、罪から魂を救う方法を聖人に教えてほしいと懇願した。　彼の常連の訪問者や対話相手は、アンドージ地区の農民たちでした。福者フィリッポは、誰に対しても愛を込めて、簡潔でありながら力強く、心のこもった言葉で教えを説き、　修道士たちには、邪悪な力に対する支配力を与える三つの美徳、すなわち無欲、長時間の徹夜祈祷、そして熱心な祈りについて語り、修道生活の軛がいかに厳しく悲痛なものか、また、過酷な生活と沈黙をもって神に仕えることに慣れていた昔の修道士たちがどのように生きていたかを思い出させた。　世俗の人々には、隣人を愛し、とりわけ貧者や困窮者を助け、　すべての人に対して正義を守るよう説き、　先人たちの精神の強さと、現代の人々の気弱さを指摘し、苦難における忍耐の模範として、人間の限界を超えた苦しみと欠乏に耐え、人々の記憶に永遠に生き続ける聖なる殉教者や祝福された断食者たちを挙げた；　自らの思考を省み、束の間の現在ではなく、永遠の未来について思いを巡らせるよう教えた。対話者が「なぜ我々は他人を非難するのか」と問うと、至福の者はこう答えた。「他人を非難する者は、まだ自分自身を理解しておらず、自己との闘いをしていないのだ」。　好奇心旺盛な人々には、農民の息子である自分が、

幼い頃に両親を亡くし、身寄りのない孤児となって放浪し、キリストの名を頼りに生き延び、やがて尊者コルニリウスの修道院に辿り着き、修道生活になじんでいった経緯を語った。　昼間は修道院の礼拝や肉体労働に明け暮れ、夜は早課まで祈りを捧げ、教会の18段の階段のそれぞれで100回ずつ頭を下げ、やがてイラップに定住した。

ある日、メレティウスという名の村人が、至福のフィリッポスのもとを訪れ、教えを求めた。聖人への深い信仰を抱いていたメレティウスは、しばしば至福のフィリッポスの修道院を訪れていた。この時、彼は聖フィリッポスのところで一晩を過ごすことになった。夜遅くまで、聖人はその村人と語り合っていた。　やがて、聖人は夕べの祈りを捧げ始め、メレティオスは眠気に襲われてすぐに眠り込んでしまった。　真夜中頃、彼は目を覚まし、聖人に呼びかけたが、聖人は独房にはいなかった。メレティオスは小さな窓を開け、教会の方を見やると、聖人が両手を天に掲げて教会の前でひざまずき、祈っているのが見えた。その両手は、まるで火の灯ったろうそくのように輝いていた。　メレティオスは窓を閉め、この幻に驚きつつ、至聖なる三位一体に祈りを捧げた。その後、彼はこのことを多くの人々に語り、それを聞いた人々は聖人に深い信仰を抱くようになった。

こうして、尊者フィリッポスは15年間、自らの荒野で暮らし、至福の安息と魂の主への帰還を待ち望みながら、「耐えよ、フィリッポスよ、勇気を奮い起こし、強くあれ」という言葉で自らを励まし続けた。

彼は絶えず祈りを捧げ、清らかな魂の奥底からこう叫び続けた。「全能の神よ、この世に平和をもたらし、すべての正教徒を憐れみ、救い給え。彼らに平安と幸福を与え、すべての罪から清め給え。主よ、あなたは慈悲深く、忍耐強く、私たちからの悔い改めを待ち望み、罪人の死を望まれない。　あなたの慈しみは偉大であり、あなたの憐れみは限りない。そして、慈愛に満ちた御母、至聖なる神の母よ、私たちの速やかな助け手であり守護者であるあなたよ、絶えず御子に私たちのために祈ってください」。

その時、クベンスコ湖にあるスパソ・カメンヌイ修道院から一人の修道士が、尊者のもとを訪れました。その修道士の名はゲルマンというものでした。彼はやって来て、尊者フィリッポに、荒野で彼と共に暮らすことを許してほしいと懇願しました。

「ここでの生活は厳しく、悲痛なものだ、兄弟よ」と、聖人はゲルマンの願いに応えて答えた。

「忍耐こそが、父よ、救いの始まりです。キリストのために、できる限り耐え忍びます」と、彼は答えた。

それ以来、二人は共に労苦と祈りに励むようになった。多忙な隠者の生き様を見て、ヘルマンは聖フィリッポに深い信仰を抱くようになり、彼と多くの会話を交わし、かつての生活について尋ね、聖人が自らについて語ったことはすべて、後世のために記憶に留めて書き留めた。

至福のフィリッポは、その後も長い間、ゲルマンと共に修行に励んだ。死が近づいていることを予感した聖人は、ある日ゲルマンにこう言った。「お願いだ、愛する兄弟よ、私が息を引き取るまで私のそばを離れないでほしい。もう、君と一緒にいられる時間は長くはないのだから」。

それ以来、聖人は祈りをさらに深めた。彼の至福の死は、1537年11月14日の夜に訪れた。

真夜中、目を覚ましたヘルマンは、修道室全体に漂う並外れた芳香に驚いた。

聖人の寝台に目をやると、フィリップはすでに主のもとへ魂を委ねていた。義人の顔は、並外れた光に輝いていた。ゲルマンは司祭の聖職に就いていなかったため、聖フィリップの遺体を自ら埋葬することはできなかった。　神の御心により、その朝、修道女ヨブがその荒野を訪れた。彼女はゲルマンと共に、聖フィリッポを敬虔に埋葬した。これこそが、その謙遜に富み、至聖なる三位一体の栄光のために偉大な功績を成し遂げたこの聖人の生涯であった。アーメン。

敬虔なるユスティニアヌス帝とテオドラ皇后の記念日

記念日：11月14日

聖ユスティニアヌス、ビザンツ帝国の皇帝は、スラブ人であった。彼は、現在のブルガリアにあるスレドツァ[7912] の近くのヴェルディャネという村で生まれた。同じくヴェルディャネ出身の叔父ユスティンは、毛皮のコート一枚を身にまとい、徒歩でコンスタンティノープルへと向かった。　そこで彼は、その天賦の才のおかげで急速に出世し、やがて皇帝にまで上り詰めた。彼はヴェルディャネから妻のルプキニャと、その妹でウプラヴダの母であるベグリアニツァをコンスタンティノープルへ連れてきた。このウプラヴダが、ユスティンの死後、ユスティニアヌスという名でビザンツ帝国の帝位を継いだのである。

ユスティニアヌス皇帝は、ビザンツ帝国の敵に対する数々の勝利や、ローマ法の全集の編纂によって歴史に名を残している。しかしそれ以上に、彼はキリスト教教会と正教のために尽くした功績で称賛された。例えば、彼はキリスト教の普及と異教の根絶に多大な尽力を行った。　アテネの異教の学校を閉鎖し、学問の指導を修道士たちに委ねるよう命じた。異教への迫害は、彼の王国の首都であるビザンティオンをはじめ、小アジアにおいても特に激しく行われた。　異教徒をキリストへ改宗させるため、ユスティニアヌスはエフェソスの司教ヨハネを小アジアへ派遣し、彼はそこで7万人に及ぶ異教徒に洗礼を授けた。また、皇帝は改宗者のために90もの教会を建設した。

キリスト教の普及と並行して、ユスティニアヌスは正統信仰の純潔性の維持にも尽力した。彼の治世においても、キリストは神人ではなく、神性は単なる人間であるキリストの中に宿っていただけだと説くネストリウス派が、正教会を悩ませ続けていた[7913] 。 ネストリウス派以上に教会を動揺させたのは、イエス・キリストにおいて神性が人間性を吸収したと説いたモノフィシテ派であった。ユスティニアヌスは、こうした人間の理性が生み出した恣意的な虚構に対抗して、「独り子であり、神の御言葉」という賛美歌を創作し、礼拝の際にこれを歌うよう命じた[7914] 。 また、彼の尽力により、553年には第5回全地公会議が招集され、テオドロス・モプスエテス、テオドリトス・キルス、イヴァ・エデスの著作に見られるネストリウス派の思想を非難[7915] するとともに、教会内の不和を収める[7916] ことが図られた。

[7912] スレデツ——現在のソフィア、ブルガリアの首都。

[7913] この異端の創始者は、428年から431年にかけて4世紀のコンスタンティノープル総主教を務めたネストリウスであった。

[7914] 現在、この賛美歌は、小入堂の際の典礼で歌われている。

[7915] テオドール・モプスエテス——小アジアのキリキア地方にある都市モプスエテスの司教——と、中ギリシャのキルラ市の司教テオドリトスは、ともに4世紀に生きた。後者は、ネストリウスの敵対者であったアレクサンドリアの司教キリルを反駁する数編の著作を著した。　その後、テオドリトスは自身のネストリウス派的な思想を放棄し、教会と和解した状態で亡くなった。エデッサの長老イヴァは、テオドール・モプスエテスおよびテオドリトス・キルスの同時代人であった。

[7916] この公会議は、次のような理由から招集された。モノフィシテ派は、第4回全地公会議で非難された後、正教会の代表者たちをネストリウス派であると非難し、教会内で動揺を引き起こしていた。 このような非難の根拠となったのは、第4回全地公会議において、テオドール・モプスエウスの、テオドリトス・キルスの、およびイヴァ・エデスのネストリウス派的な思想が非難されなかったという事実であった。モノフィシテ派自身は、これらの思想を否定する立場から派生していたのである。　モノフィシテ派が、正統派がネストリウス派に同情していると非難する口実を奪うため、前述の教父たちの正統性に関する問題を解決する公会議が招集されたのである。　公会議では、テオドール・モプスエウスの教義および人物に対して無条件の破門宣告が下されたが、テオドリトスとイヴァに関しては、非難は彼らの著作の一部に限定された。彼ら自身は、後に異端的な思想を放棄したため、破門の対象とはならなかった。

正教と敬虔さの擁護者であったユスティニアヌスは、正教会の礼拝や、礼拝の場である教会の荘厳さに多大な配慮を払った。　彼の法典には、とりわけ、キリストの降誕、主の洗礼、復活、聖母マリアの受胎告知などの祝日を、あらゆる場所で必ず祝うことを義務付ける法律が盛り込まれていた。さらに、ユスティニアヌスは、聖母マリア、使徒たち、その他の聖人たちの栄光を称えるために、多くの美しい教会を建設した。　ユスティニアヌスの最も有名な建造物としては、コンスタンティノープルにある聖ソフィア大聖堂（神の知恵）が挙げられる。

かつて使徒同等の皇帝コンスタンティヌスによって建てられたこの聖堂は、ユスティニアヌス帝の治世中、ある反乱の際に焼失してしまった。敬虔な皇帝は最高の建築家たちを集め、金や財を惜しまず、その壮大さと美しさにおいて後世の人々を驚嘆させるような聖堂を建設した。

私生活においても、ユスティニアヌスは高い敬虔さを示した。常に信心深く、四旬節を厳しい禁欲と祈りの中で過ごし、パンを口にすることはなく、植物と水だけで満足し、それも1日か2日に1度だけだった。

このように清らかさと敬虔さをもって生き、彼は39年間統治し、主のもとで安らかに息を引き取った[7917]。教会への功績と敬虔さにより、彼は死後、聖人の列に加えられた。彼と共に、妻であるテオドラ王妃も聖人の列に加えられた。彼女は当初は罪人であったが、後に悔い改め、残りの生涯を清らかさと敬虔さの中で過ごした。

11月28日

11月15日（旧暦）

聖殉教者グリア、サモン、アビブの殉教

記念日11月15日

不敬虔な王ディオクレティアヌスとマクシミアヌスによって神の教会に激しい迫害が加えられ、教会が荒れた海に漂う船のように災難に翻弄されていた頃、エデッサの町[7918]の近くで、まるで静かな避難所のように、二人の敬虔で徳高い男たちが隠遁生活を送っていました。　グリーとサモン。エデッサの街で育った彼らは、街に蔓延していた虚栄と不法を理由に、そこに住むことを望まず、世俗と世俗の煩わしさを避けて街を離れ、不信心な人々から遠ざかり、唯一の神を求め、神を信じ、昼夜を問わず熱心に神に仕えた。　そして、彼ら自身だけが絶えず主に仕えただけでなく、できる限り多くの人々にもその道を教え導き、多くの異教徒を不敬虔な偶像崇拝から遠ざけ、真の神へと導いた。　このことを知った、当時エデッサに滞在していたローマ皇帝の代表である総督アントニヌスは、彼らと彼らの教えに従った者全員を直ちに捕らえるよう命じた。　異教徒たちに捕らえられたキリストの殉教者グリーとサモン、そして彼らと共にいた多くのキリスト教徒たちは、しばらくの間、監禁された。その後、アントニヌスは捕らえられたキリスト教徒たちを呼び出し、全員に皇帝の命令に従い、偶像に犠牲を捧げるよう命じた。しかし、彼らのうち誰一人として、主から背くことを望まなかった。　そこで彼は彼らを鞭打つよう命じたが、その後、指導者たち自身を偶像崇拝へと誘導できれば、他の人々も彼らを見て容易に同じ道へと導かれるだろうと気づき、こうした事情から、キリストの群れの指導者であるグリーとサモンだけを拷問の対象とし、　他の者たちについては、鞭打ちの刑

[7917] これは565年11月14日のことである。

[7918] エデッサはマケドニアにある都市である。

に処した後、偽って慈悲深いふりをして、それぞれの家へ帰した。そして、二人の聖なる殉教者を自分の元へ呼び出し、裁きを下そうとしてこう言った。

「我らの偉大なる王たちは、あなたがたに、偉大なる神ディウ[7919] に拝礼し、その神殿で香を捧げるよう命じている。」

サモンはこれに対し、次のように答えた。

「私たちが、不死の命を得ると期待している真の信仰から背くことなどあり得ない。私たちは、人の手によって造られたものに拝礼することはない。」

すると、アントニヌスは言った。

「いずれにせよ、王たちの命令には従わなければならない。」

「我々は、聖なる、汚れなき我らの信仰を決して捨てはしない」とグリーは答えた。「そして、邪悪で破滅的な人間の意志には屈しない。しかし、我々は主の御心に従う。主はこう言われたのだ。 *『人々の前でわたしを公に認める者は、わたしも天の父の前でその者を公に認める。しかし、人々の前でわたしを否む者は、わたしも天の父の前でその者を否む』と仰せになった方*（マタイ10:32–33）。

すると、裁判官は、王の命令に従わなければ死を宣告すると脅し始めた。しかし、聖サモンは勇敢に彼にこう言った。

「拷問者よ！我らは、我らの創造主の御心に従うゆえに、死ぬことはなく、永遠に生きるであろう。しかし、もし王の命令に従えば、たとえお前によって殺されなくとも、我らは自ら滅びてしまうだろう。」

これを聞いたアントニヌスは、聖人たちを薄暗い牢獄に投獄するよう命じた。

その頃、キリスト教徒を処刑するために王たちから特別に派遣された地方総督ムゾニウスがエデッサに到着した。彼は聖なる殉教者グリアとサモンを牢獄から引き出し、自分の前に立たせてこう言った。

「全地の王たちの命令はこうだ。ディヤの祭壇にワインと香を捧げよ。もし捧げなければ、私はお前たちに様々な拷問を味わわせる。殴打でお前たちの体を粉々にし、足や手を吊るして体のすべての関節を引き裂く。お前たちが耐えられないような、前代未聞の新たな拷問を考案してやる。」

これらすべてに対し、聖サモンはこう答えた：

「我々は、主から背いた者すべてに用意されている『眠ることのない虫』と『消えることのない火』を、お前が列挙したような拷問よりも恐れている。 なぜなら、私たちが霊的な捧げ物を捧げるお方は、まず私たちを苦しみに耐えるように強め、打ち負かされないようにしてくださり、その後、あなたの手から私たちを救い出し、すべての喜びに満ちた者たちが住む明るい住まいへと導いてくださるからです。 それゆえ、私たちはあなたの脅しを恐れません。なぜなら、あなたはただ肉体に対してのみ武装しているだけであり、魂を傷つけることはできないからです。その魂は、肉体に宿っている限り、肉体に課される苦しみによって、ますます清められ、照らされていくのです。 *「私たちの外なる人は朽ちていくとしても、内なる人は日ごとに新しくされています」*（IIコリント4:16）。*「それゆえ……忍耐をもって、私たちの前にある競技場を走り抜けましょう」*（ヘブライ12:1）。

統治者は再び言った。

「その無分別を捨て、私の助言に従い、誤った道から立ち返って、王の命令を果たしなさい。私があなたたちのために用意した苦しみは、あなたたちには耐えられないからだ。」

聖グリーはこう答えた。

[7919] ディウス、あるいはユピテルは、ローマの異教徒の信仰によれば、神々の中で最も高き存在であり、神々の父であった。

「我々は、お前の思うような迷いには陥っておらず、お前の狂った助言にも耳を貸さず、王の意志にも従わない。お前の苦痛を恐れて、我らの主を怒らせるほど、臆病で愚かになることはない。」　我らは、御自身の慈愛の豊かさを示し、我らのために御自身の魂を捧げられた方のしもべである。それならば、我らもまた、血を流すことになっても、どうして御方のために立ち向かわないことができようか。キリスト・イエスに支えられ、勇気を持って立ち向かい、敵のあらゆる策略にも動じず、我らに立ち向かう敵を打ち倒すまで、揺るぎない姿勢を貫くのだ。

彼らの信仰の揺るぎなさを目の当たりにした拷問官は、拷問を開始した。彼は聖人たちを、互いの手を結び合わせ、足に重い石を縛り付けて吊るすよう命じた。彼らはその状態で、第三時から第八時まで辛抱強く吊り下げられていた。その間、総督は他の者たちに対する裁判を行っていた。

その後、彼は聖人たちに、拷問から解放されるために王の命令に従うかどうか尋ねたが、彼らは変わらず真の信仰を告白し続けた。そこで拷問官は、彼らを解き放ち、極めて狭く、日光が決して差し込まず、風も通らない地下牢に投獄するよう命じた。 彼らは8月1日から11月9日まで、そのような牢獄に閉じ込められていた。足を木に縛り付けられたまま、彼らは激しい苦痛、飢え、渇きに耐えながらも、それでもなお、神への感謝を絶やすことはなかった。

これほど過酷で長期にわたる牢獄生活の後、彼らは再び総督の裁きを受けるために連れ出された。聖グリーは、牢獄での数々の苦難、激しい飢えと渇きにより、すでに息も絶え絶えの状態であったが、聖サモンは元気そうに見えた。総督は彼らに尋ねた。

「これほど長い間牢獄に閉じ込められて、飽きてはいないか。そして、その頑なな心を改め、賢明な助言に耳を傾け、我らの神々を崇め、この厳しい状況から解放される気はないか？」

聖人たちはこう答えた。

「以前あなたに言ったことと同じことを今言います。私たちは主イエス・キリストから離れることはありません。好きなように私たちを苦しめてください。」

そこで拷問官は、聖グリアを病人のように牢獄へ連れ戻すよう命じた。それは、彼の死を早めてしまい、いつか彼を自分の不敬虔な道に引き込むという希望を失いたくなかったからである。一方、聖サモンについては、片足から逆さ吊りにし、もう片方の足には鉄の重りを結びつけるよう命じた。　彼はその姿勢のまま、午後2時から9時まで吊り下げられていた。周囲に立っていた兵士たちは、彼への同情から、王の命令に従い、この激しい苦しみから逃れるよう説得した。しかし、彼は彼らに何も答えず、心の奥底から神に祈り、古来より行われてきた神の奇跡を思い起こした。

「わが神、主よ。御心のままに、一羽の鳥さえも網にかからない（マタイ10:29参照）。あなたはダビデの心を苦難の中で広げ（詩篇4:2）、預言者ダニエルを獅子よりも強く示されました（ダニエル6:6–18、14:32）。　私たちの性質の弱さを知っておられる主よ、私たちに襲いかかる戦いを御覧ください。　敵はあなたの所有物をあなたから引き離そうと躍起になっていますが、あなたは慈愛に満ちた御目で私たちを見守り、私たちの中にあなたの戒めの消えることのない灯を保たれ、あなたの光をもって私たちの歩みを正し、私たちに天の至福を味わわせてくださいますように。あなたは世々限りなく祝福される方です。

苦しむ者がこのように祈っている間、ある速記者がその言葉を書き留めていた。その後、総督はサモナを解き放つよう命じた。しかし、彼の膝と股関節の関節が脱臼していたため、彼は立ち上がることができなかった。そこで、拷問官の命令により、聖人は牢獄へと運ばれ、聖グリアのそばに横たえられた。

11月15日、ムゾニウス統治者は、雄鶏の鳴き声とともに起床し[7920] 、松明を掲げた者たちに先導され、武器持ちに付き添われて、裁判を行う議場へと向かった。そして、高慢な態度で裁判席に着

[7920]「雄鶏の鳴き声」という表現は、時刻を表すために用いられた。これは、夜が分けられた4つの番のうちの一つ、すなわち3番目の番、つまり真夜中から夜明けまで等距離にある時間帯を指していた。

くと、グリアとサモンを呼び出すよう命じた。　聖サモンは二人の兵士の間に挟まれ、両手で彼らに支えられながら、足を引きずって歩いていた。というのも、吊るされていた際に足が関節から伸びてしまっていたからである。一方、聖グリアは全く歩くことができなかったため、担がれて運ばれた。彼の足は、木に挟まれた結果、傷だらけになり、曲がってしまっていた。　聖人たちを見据えると、統治者はこう語り始めた。

「お前たちには、命と死のどちらを選ぶべきか、十分に議論する時間があったはずだ。さあ、何に同意したのか言ってみよ。これまでの拷問にうんざりし、王たちの命令に従って生き延び、この世の享楽を味わおうと決めたのか？」

これに対し、聖人たちはこう答えた。

「私たちは話し合い、私たちにとって有益な方を選びました。すなわち、この虚しい世での命を捨て、キリストのために死を選ぶことを選んだのです。日中の消えゆく光を十分に見てきたこれまでの時間は、私たちにとって十分です。今や私たちの魂は、決して消えることのない日へと移りゆくことを望んでいるのです。」

統治者は言った：

「あなたがたの反抗的な言葉を聞くのは、私の耳には重くのしかかる。手短に有益な助言をしよう。ディヤの祭壇に香を捧げ、家に帰れ。もし捧げなければ、今すぐあなたがたの首を刎ねるよう命じる。」

「我々が多くを語る必要はない」と聖人たちは答えた。「我々は今、あなたの前にいる。望むことを直ちに行いなさい。なぜなら、我々は、我らが主イエス・キリストの僕であり、ただ御方のみを礼拝し、偶像崇拝を拒絶することを、決して否定しないからだ。」

そこで総督は、彼らを剣で斬首するよう命じた。聖人たちはこれを聞いて、まもなく肉体から解放され、主のもとへ行くことができると、大いなる喜びに満たされた。総督は処刑執行人に、殉教者たちを戦車に乗せ、町の遥か彼方へ連れて行き、そこで首を刎ねるよう命じた。　聖人たちは北の門から街の外へ連れ出された。市民の誰もこのことを知らなかった。皆が深い眠りに包まれていたからである。　エデッサ近郊にあるある山に聖人たちを連れて行くと、兵士たちは立ち止まり、処刑人に殉教者たちの首を刎ねるよう命じた。戦車から降りた聖人たちは、祈りのために少し時間を求めて、熱心に祈りを捧げた後、ついにこう言った。

「神よ、私たちの主イエス・キリストの父よ、私たちの魂を安らかに迎え入れてください。」

処刑人に目を向け、聖サモンはこう言った。

「命じられたことを果たせ。」

こうして、夜明けとともに、殉教者たちは聖なる頭を剣の下に差し出し、斬首され、そのようにして息を引き取った。信者たちは聖なる殉教者たちの死を知ると、彼らの聖遺体を運び出し、敬意を込めて埋葬した[7921]。

かなりの年月が経過した後、不敬虔な皇帝リキニウス[7922]は、コンスタンティヌス大帝から離反し、コンスタンティヌスが彼と結んだ条約を破った。コンスタンティヌスは、自身の妹をリキニウスに嫁がせ、彼をローマ帝国の統治における共同統治者に任命し、　コンスタンティヌスは、リキニウスが信仰上は異教徒であるとはいえ、キリスト教徒に対していかなる迫害も行わず、誰もが自分の信仰に従って生きることを許し、どの信仰を好む者も、それを妨げられることなく守れるようにするという条件を課した。　しかし、リキニウスはこの協定を守らず、東方諸国でキリスト教徒に対する

[7921] 聖グリアとサモンの殉教は、293年から306年の間に起こったとされる。1200年、ロシアの巡礼者アントニーは、コンスタンティノープルで聖グリア、サモン、アヴィヴァの殉教者たちの聖遺骨と、彼らに捧げられた教会を目撃した。

[7922] リキニウスは、307年から324年まで帝国の東半分を統治していたが、324年にコンスタンティヌスの命により殺害された。

迫害を開始し、多くの信者を様々な方法で処刑した。　この頃、前述のエデッサという町――かつて聖なる殉教者グリーとサモンが苦難に遭った場所――に、アヴィヴという名の助祭が一人住んでいた。彼は町中を家から家へと巡り、人々に聖なる信仰を教え、キリストを公に告白する際に勇気を持つよう説得していた。　聖アヴィヴは、その説教によって、未信者をキリストへと導き、信者たちには神に喜ばれる生き方をするよう諭した。彼のことを知った都市長官リサニオスは、リキニウス王に書簡を送り、アヴィヴがエデッサ全市をキリスト教の偽りの教えで満たしていると告発するとともに、彼に対してどのような命令が下されるかを尋ねた。　リサニオスが王に書簡を送ったのは、本来、キリスト教徒を拷問する権限を王から得るためであった。というのも、彼にはまだキリスト教徒に対していかなる暴力も振るう権限が与えられていなかったからである。王は直ちに返書を送り、アヴィヴを死刑に処すよう命じた。　王からそのような命令を受けたリサニオスは、聖アヴィブを探し出し、拷問にかけるよう命じた。当時、アヴィブは街のある一角にある、どこにあるか分からない家で、母や親族たちと共に暮らしており、公然と行うことができない場所では密かに聖なる信仰を広めることに尽力していた。　兵士たちが街中をくまなく捜索して聖アヴィヴを探している間、彼はそのことを知ると、隠れることなく家から出て、自分を捜している兵士たちを探し出し、自ら彼らの手に身を委ねようとした。ある場所でテオテクナという名の軍司令官に出くわすと、彼はこう言った。

「あなたがたが探している者はこの私です。私は、あなたがたに探し出すよう命じられたアヴィヴです。さあ、私を捕らえて、あなたがたを遣わした者のもとへ連れて行ってください。」

テオテクンは彼を優しく見つめ、こう言った。

「おい、まだ誰も君が私のところに近づいたことに気づいていない。他の兵士に見つかって捕らえられないよう、そこから離れて身を隠せ。」

アヴィヴは答えた。

「もしあなたが私を連れて行かないなら、私は自ら行って総督の前に現れ、王や支配者たちの前で私のキリストを告白するつもりだ。」

これを聞いたテオテクンは、彼をリサニオスの元へ連れて行った。リサニオスは彼に家柄と名前を尋ねた。聖人はまず、自分がキリスト教徒であることを明かし、次に自分の名前を告げ、*フェルセイアという村の*出身であると伝えた。　リサニオスは彼に偶像への生け贄を捧げるよう強要し、脅しや甘言を用いてキリストから離れさせ、偶像崇拝へと導こうと試みたが、聖人はまるで揺るぎない柱、壊れぬ壁のごとく、キリストへの信仰を堅く守り通した。　拷問官は、言葉によって彼を自分の不義へと導くことができなかったため、行動によって彼を屈服させようと試みた。彼を吊るし、鉄の爪でその体を削るよう命じた。その後、再び彼に偶像を礼拝し、異教の神々の祭壇に香を捧げるよう説得した。しかし、聖人は断固としてこう答えた。

「たとえあなたが私に、今よりも数万倍も苛烈な拷問を課したとしても、何ものも私を私の神から引き離すことはできない。」

拷問官は彼に尋ねた。

「あなた方キリスト教徒にとって、神のために耐えているその苦しみから何の益があるというのか。また、体が粉々に砕かれ、自ら進んで苦痛に満ちた死を選ぶことに、いったい何の得があるというのか？」

殉教者はこう答えた。

「もしあなたが、拷問者よ、本当に私たちの神から約束された報いへの希望に目を向けようと思えば、間違いなく、かつて主の使徒が言った言葉を口にするでしょう。*『今の一時の苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもないのです』*（ローマ8:18）

拷問官は、まるで狂人の言葉であるかのように殉教者の言葉を嘲笑したが、彼自身こそが狂人であった。そして、この気高き殉教者を唯一真の神から引き離すことができないと悟ると、彼を火刑に処す判決を下した。

町の外には大きな火が焚かれており、殉教者は処刑場へと連行された。彼は、神へのいけにえとなり、神に捧げられることを喜びながら歩んでいった。彼の後ろには母や親族たちが続いており、彼は彼らを慰め、自分のことを悲しむのではなく、むしろ自分がキリストのもとへ行き、彼らのためにキリストに祈ることを喜ぶよう諭した。　火のそばに着くと、彼は祈りを捧げ、母や知人全員に最後の口づけを贈り、炎の中へと歩み入り、たちまち主のもとで息を引き取った。火が消えたとき、母は他の信者たちと共に、聖なる息子の遺体が火によって傷つけられていないのを見つけ、それを抱き上げ、聖油を塗って、先に殉教した聖グリアとサモンの聖棺のそばに埋葬した。というのも、聖アヴィヴもその同じ日に殉教したからである（それよりかなり前の年、先に殉教した聖人たちがいた年である[7923]）。迫害が終わり、正教の信仰が輝きを取り戻すと、キリスト教徒たちはこの三人の聖なる殉教者に捧げる教会を建立し、その中に一つの墓に彼らの聖遺骨を安置した。その聖遺骨は、病める者に癒やしをもたらし、多くの奇跡を起こしている。その中でも、ここで特に輝かしく成し遂げられた一つの奇跡について述べておこう。

かつて、ペルシアの近くに住み、「*エファリテス*」[7924]と呼ばれた不敬虔な蛮族が、東方からギリシャ王国へと進軍し、多くの都市を征服した後、他の都市を破壊したのと同様に、エデッサそのものを占領し破壊する意図をもって、エデッサのすぐ手前まで到達した。　そこで、敵から都市を守り、包囲から解放したいと願ったギリシャの王たちは、多くの兵士を集め、エデッサの救援に送り出した。エデッサに入ったギリシャ軍は、相当な期間その地に留まり、野蛮人からの都市を守り続けた。ギリシャ軍には、ゴート族の出身である一人の戦士がいた[7925]。彼はエデッサで、ソフィアという名の貞淑な未亡人の家に身を寄せることになった。彼女にはエウフィミアという名の唯一の娘がおり、ソフィアは彼女を瞳の如く大切に守り、貞節を保たせ、善良な道徳と神への畏敬の念を教え込んでいた。　ソフィアは、娘が顔立ちが非常に美しかったため、人々の目から彼女を隠そうと努めていた。男性の目に触れないよう、特別な部屋に閉じ込めておいたのである。ゴートフがこの未亡人の家に長期滞在していたある日、彼はたまたまその乙女を目にしてしまった。　彼女の美しさに心を奪われた彼は、彼女への情熱に燃え上がり、どうすれば彼女を魅了できるかということばかりを考えるようになった。彼は母親のもとへ赴き、娘を自分に嫁がせてほしいと懇願し始めた。故郷に妻や子供たちがいたにもかかわらず、望みを叶えるために、未婚であるかのように装ってその事実を隠した。しかし、母親は彼を拒んだ。

「私のたった一人の娘を異国の地へは渡さない。あなたはよそ者だ。娘をあなたの国へ連れて行けば、私は彼女を失って深い悲しみに沈むことになる。彼女以外に、未亡人となった私を慰めてくれる子供はいないのだから。彼女をあなたに渡すことはできない。彼女の顔を見ずに生きていくことはできないのだから。」

すると、ゴートフは激怒し、彼女を脅し始めた。

「もしお前が――」と彼は言った。「娘を嫁がせないなら、私はここから立ち去らない。お前を数々の災難に見舞わせ、極限の悲しみに陥れるまでだ。私は戦士なのだから、望むままに、いかなる悪事も容易にお前に加えることができる。」

一方、未亡人は、一人きりで助けに来てくれる人もいなかったにもかかわらず、彼に堂々と反論した。その後、その戦士は、時には優しく頼み込み、時には再び激怒し、懇願したり脅したりしながら、未亡人に娘を自分に嫁がせるよう説得し続けた。こうして彼は、そこに住んでいる間ずっと、彼女にしつこく迫り続けた。　彼は裕福だったため、彼女にいくつかの贈り物も差し出した――望みを叶えるために、彼女と娘のために金の装飾品や高価な衣服を買ってあげたのだ。しかし、未亡人は

[7923] 聖アヴィヴァの殉教は322年に起こった。

[7924] エファリテ族――現在のメルヴェおよびアフガニスタンに居住していたフン族の一派の呼称である。

[7925] ゴート族――ドナウ川沿いの低地に居住していた、ゲルマン諸部族の中で最も東方に位置し、最も人口の多かった部族である。

贈り物も受け取らず、彼自身からも身を引いた。そして、この無法者に娘を見られないよう、さらに慎重に娘を隠していた。ある日、彼女は彼にこう言った。

「あなたが故郷に妻と子供たちがいると聞いたわ。」

しかし、彼はその娘を自分のものにしたいという欲望に駆られ、神への畏れも持たずに、決して結婚したことはなく、彼女の娘を妻として迎え、自分の全財産の女主人にしてあげたいと、神に誓って誓い始めた。　そこで、未亡人のソフィアはついにそれを信じ、彼の願いを受け入れ、娘のエフフィミアを彼に嫁がせることに同意した。彼女は神に向かって両手を挙げ、こう言った。

「主よ、孤児の父、未亡人の裁き主よ、御自身の被造物に憐れみ深く目を留め、見知らぬ男と結婚しようとしているこの乙女を見捨てないでください。　私の孤児としての境遇を軽んじず、私を無力なまま見捨てないでください。なぜなら、あなたの善き御計画に希望を置き、私はこの貧しい娘を見知らぬ男に嫁がせるのですから。そして、あなたをその誓いと約束の証人であり保証人として仰ぎます。

その少女はこのゴート人と結婚させられ、結婚後、二人は平穏に暮らした。　エウフィミアは身ごもりましたが、彼女が出産する前に、敵は手ぶらで街から撤退しました。なぜなら、街にいた軍勢が城壁を勇敢に守り、敵と粘り強い戦いを繰り広げたため、特に聖殉教者グリア、　サモナ、アビヴァの聖なる殉教者たちの祈りが守っていたからである。敵が撤退すると、ギリシャ軍は故郷へ帰らなければならず、このゴート人もまた、急いで故郷へと向かった。　母親は娘との別れを嘆き悲しんで泣きじゃくり、ゴート人から娘を引き離そうとし、彼に娘を異国の地へ連れて行かせないようにしたが、法律によって結ばれた夫婦の絆を解くことはできなかった。　悪辣な婿が妻と共に旅立つ準備を整えた時、ソフィアは彼と娘を、聖殉教者グリア、サモン、アビヴァの教会へと連れて行き、殉教者たちの墓の前に立たせて、婿にこう言った。

「キリストのために苦難を受けたこれらの聖人たちを保証人として差し出さない限り、私は娘をあなたに託すことはできません。さあ、聖なる聖遺物箱を手に取り、私の娘に何の害も与えず、ふさわしい愛と敬意をもって彼女を守り抜くことを私に誓ってください。」

ゴットフは、それを大したことではないと考え、すぐに臆することなく聖なる殉教者たちの聖遺物箱を手に取り、こう言った。

「聖なる方たちよ、あなた方の手からこの乙女を受け入れます。そして、彼女の母の前で、あなた方を保証人および証人として、この私の妻に何の害も加えず、決して彼女を侮辱せず、愛をもって彼女を守り、生涯敬い続けることを誓います。」

ゴットフはそう語り、さらにその不法者は神に誓いを立てた。しかし、復讐の主である神が、彼の行いに応じて報いを下し、その悪巧みゆえに彼を滅ぼすことなど、考えもせず、恐れることもなかった。母は、婿の誓いを聞き終えると、叫び声を上げて聖なる殉教者たちにこう言った。

「聖なる殉教者たちよ、神に次いで、私の娘をあなた方に託します。そして、あなた方を通じて、この訪れた男に彼女を差し出します。」

こうして祈りを捧げた後、彼らは互いに親しみを込めた口づけを交わして別れた。未亡人のソフィアは自宅へ戻り、ゴートフはエウフィミアを連れて旅立った。その際、彼はこの秘密が家の中で知れ渡らないよう、同行していた奴隷を解放した。

彼らが全行程を歩き終え、ゴトフの故郷にたどり着き、すでに彼の家の近くまで来たとき、彼は敵のように妻に対して激しい残酷さをもって立ち向かった。　彼女への愛を忘れ、誓いを軽んじて、彼女の貴重な衣服や金の装飾品を取り上げ、捕虜や奴隷のように粗末な服を着せ、剣を抜き放って、彼女にこう命じた。

「生き延びたいのなら、私の家に入ったら、私たちの間で起きたことについては誰にも口外してはならない。自分は捕虜だと告げよ。なぜなら、私の家には妻と子供たちがいるからだ。　お前は私の妻の奴隷となり、彼女を主人のように敬い、すべてに従わなければならない。もし彼女や私の親

族の誰かに、私がお前と結婚したことを告げたり話したりすれば、お前の首に私の剣が突きつけられ、死ぬことになるだろう。

邪悪な野蛮人に騙され、侮辱されたことに気づき、彼の脅しを耳にしたエウフィミアは、彼にこう言った。

「これがあなたの愛というのか？　これがあなたの約束を果たすということか？　あなたの誓いはそのようなものだったのか、そして私、あなたの妻を捕虜にし、自由な身である私を奴隷にするのが、あなたの本心だったというのか？　あなたのせいで、私は母や親族、故郷を離れ、偽りのない愛をもってあなたに寄り添い、あなたが誓いで裏付けた言葉を信じてきた。それなのに、あなたは私の愛に憎しみで報い、夫や友人の代わりに、私にとっての野蛮人、敵、そして拷問者となり、私を滅ぼすために異国の地へ連れ去ったのだ。

そう言うと、彼女は天を仰ぎ、両手を上げ、心の底からため息をつき、苦々しく泣きじゃくりながら、神に向かって叫んだ。

「わが両親の神よ、私の苦難をご覧になり、私の嘆きを聞き、私の祈りの声に耳を傾けてください！この誓いを破った者が私に何をしているかご覧になり、あなたのために苦難に遭われた聖なる御使いたちの祈りによって、私をこの邪悪な災いから救い出してください。　聖なる殉教者たち、グリー、サモン、アヴィヴよ！今、私はあなた方を呼び求めます。予期せぬ災難に見舞われた私を助けてください。あなた方を信頼して、私はこのゴート人と共に歩んだのですから。どうか私のために彼に復讐し、私をこの災難から救い出してください。

彼女がこのように苦々しく泣き、心の中でひそかに祈っていると、彼らはゴート人の家に入った。彼の妻はエウフィミアを見て、その美しい顔立ちに気づくと、嫉妬に駆られた。夫が彼女と不義の関係を結んでいるのではないかと疑い、夫に尋ねた。

「この娘は一体誰なのか。どこから連れてきたのか？」

夫は答えた。

「彼女は捕虜だ。君の奴隷にするために、エデッサから連れてきたのだ。」

妻は言った。

「その美しい顔立ちは、彼女が奴隷ではなく、自由な身であることを物語っているわ。」

夫は答えた。

「確かに、彼女の風貌が示すように、故郷では自由の身だったかもしれないが、今や彼女はあなたの奴隷だ。」

エウフィミアは恐怖のあまり何も言えず、黙ってゴート人の妻に従い、主人の女中として仕えた。彼女には、降りかかった災難から自分を救うために何をすべきか、見当もつかなかった。　そして彼女は、奴隷としての務めをこなしつつ、常に聖なる殉教者たちを心に留め、涙ながらに彼らにこう呼びかけた：

「聖なる方たちよ、どうか私、あなたのしもべを助けに急いでください。どうか私に憐れみを示し、私に対してなされたこの冒涜と欺瞞を、見過ごさないでください。」

彼女の女主人は、心に嫉妬を抱いていたため、彼女に対して非常に残酷で容赦がなかった。あらゆる最も過酷な仕事を命じ、様々な方法で彼女を苦しめた。　しかし、何よりも辛かったのは、女主人が彼女と決して話そうとしなかったことだった。さらに、エウフィミアはゴート人の言葉を話せず、女主人に自分のことを何も伝えることができなかった。また、もし女主人に自分のことを話してしまったら、ゴート人が彼女を殺してしまうのではないかと恐れていたのだ。

しばらくして、ゴトフの妻はエフフィミアが妊娠していることを知り、彼女に対してさらに激しい嫉妬を燃やし、より猛烈な怒りで彼女に立ち向かい、彼女を疲れ果てさせるために最も過酷な仕事を課した。　出産の時期が訪れると、エフフィミアは男児を出産した。その顔立ちは、実の父親で

あるゴトフにそっくりだった。ゴトフの妻は、夫にそっくりな赤ん坊を見て、恐ろしい怒りに満ち、この赤ん坊をどうやって殺そうかと考え始めた。彼女は夫にこう言った。

「なぜ、あの娘と関係を持たなかったと頑なに否定するのですか？　彼女が生んだこの赤ん坊こそが、あなたの行いをはっきりと暴いているではありませんか。だって、この子はあなたとそっくりなのですから。」

ゴットフは再び否定し、こう言った。

「それは嘘だ。私は彼女と関係を持ったことは一度もない。君には彼女に対する権限があるのだから、好きにすればいい。彼女は捕虜であり、君の奴隷なのだから。」

そこで、この邪悪な女は赤ん坊を毒殺しようと企んだ。しばらくして、彼女は致命的な毒を用意し、母親を何らかの用事で赤ん坊の元から遠ざけ、赤ん坊が一人になった隙に、その口に毒を流し込んだ——そして赤ん坊はすぐに息を引き取った。　仕事から戻った母親は、死んで横たわっている赤ん坊を見て、言いようのない悲しみに打ちひしがれ、その子を思う苦しみで胸が張り裂けそうになった。女主人が赤ん坊の口に毒を注いだ時、部屋には誰もいなかったため、彼女は突然の死の原因が何だったのか知らなかった。　しかし、埋葬の準備をしていると、エフフィミアは赤ん坊の口から毒が流れ出ているのを見かけ、その時、女主人がかつて「息子と一緒に彼女も殺してやる」と脅していたことを思い出し、赤ん坊の死の犯人が誰なのかを察した。とはいえ、彼女は黙り込み、何も口に出すことを敢えてしなかった。　彼女は羊毛を少し取り、それを使って赤ん坊の口から流れ出ている毒を拭き取り、その羊毛を自分のところに隠し、この秘密を誰にも明かさなかった。赤ん坊は埋葬された。

数日後、ゴートフは友人たちを夕食に招き、エフフィミアは食卓の給仕を務めた。　女主人に杯を差し出す番が回ってきたとき、彼女は自分の赤ん坊が本当に女主人に毒殺されたのか確かめたくて、息子の口を拭ったあの羊毛を取り出し、こっそりと飲み物に浸し、それを取り出して　杯に絞り出し、その飲み物を女主人に差し出した。　女主人は何も知らずにその杯を飲み干した。こうして災いは彼女自身に降りかかった。その夜、ゴトフの妻は突然亡くなり、自ら掘った穴に落ちてしまったのである。　翌朝、ゴトフは目を覚まして妻が死んでいるのを見て、その予期せぬ死に恐怖に襲われた。家中は泣き声に包まれ、親戚や友人、近所の人々が集まり、彼女を悼んだ。その後、彼女のために豪華な棺を作り、厳かに遺体を納めた。

埋葬から七日が過ぎた頃、彼女の親族たちはエデッサから連れてこられた娘のことを思い出し、こう言い始めた。

「私たちの親族の突然の死の責任は、彼女に常に敵意を抱いていたこの捕虜以外にない。」

そこで、皆はエウフィミアに反旗を翻し、彼女を地方総督の裁判にかけ、拷問によって彼女がどのようにして女主人を殺害したかを白状させようとした。しかし、その時は総督が不在だったため、彼らは計画を変更し、エウフィミアを亡くなった女主人と共に生きたまま埋葬することに決めた。彼らは亡くなった女性の棺を開け、悪臭を放ち、蛆がうごめき、腐敗しつつある死体の横にエウフィミアを横たえた——そこで彼女が非業の死を遂げるようにと。エウフィミアの悲しみ、嘆き、恐怖と戦慄、恐れと戦慄、すすり泣きと号泣を、いったい誰が表現できようか。　誰か、生きた人間が、悪臭を放つ死体と共に棺に閉じ込められている恐怖を、ただ想像してみるだけでよい。死体への恐怖、死体からの悪臭、棺の中の暗闇と狭さ、周囲を這う虫たち、死の息吹、そして言葉に尽くせない苦しみ！　そのような極度の窮地に置かれ、エウフィミアは心の悲しみのうちに、かつて預言者ヨナがクジラの腹の中でそうであったように、棺の中から熱心に神に叫び求めた。

「天の力の主なる神よ、ケルビムの上に座し、深淵を見通す御方よ、あなたは私の心の苦しみと、この暗く悪臭漂う棺の中の窮状をご覧になっています。　あなたは、御名のゆえに私が不法なゴトフの男に嫁がされたことをご存知です。彼は私を娶る際、あなたの御名にかけて誓ったからです。どうか、あなたの聖なる御名のゆえに、私を憐れんでください。　あなたは死なせ、生かし、地獄に

下し、またそこから引き上げられる方です（サムエル記上2:6）。どうか、この苦い死から私を救い出し、この棺から、まるで地獄から引き上げられるかのように私を引き上げてください。あなたは死者をよみがえらせる力をお持ちですから、ましてや、生きているものの、死に瀕している私を、死の門から引き上げることはなおさらおできになるのです。　主よ、聖なる殉教者グリー、サモン、アヴィブのために、私を憐れんでください。彼らの流された血と死を、あなたは御自身のために清いいけにえとして受け入れてくださいました。おお、聖なる殉教者たちよ！私の敵は、あなた方を私の母の前での保証人として立てました――どうか、私を救ってください。

彼女が魂の悲しみの中でこのように祈っていると、太陽のように輝く三人の光に満ちた男たち――聖なる殉教者グリー、サモン、アヴィヴ――が現れ、たちまち棺の中の悪臭は消え去りました。エウフィミアは、現れた聖なる殉教者たちから漂う素晴らしい香りを嗅ぎ取りました。彼らは彼女にこう言いました。

「元気を出しなさい、娘よ。恐れることはない。あなたはまもなく救いを得るだろう。」

聖人たちがそう告げると、エウフィミアの心は、聖人たちのまばゆいばかりの御姿と、その慰めの言葉によって和らぎ、喜びに満たされて、彼女は意識を失い、安らかな眠りについた。　その眠りの最中、彼女は目に見えない全能の神の力によって棺から引き出され、瞬く間にエデッサにある聖殉教者グリア、サモン、アビヴァの教会へと移され、彼らの尊い聖遺骸の傍らに安置された。彼女がそこに移されたのは夜だったが、教会ではいつもの朝の礼拝が行われていた。　眠りから覚めると、彼女は再び聖なる殉教者たちを見かけ、彼らは彼女にこう語りかけた。

「喜びなさい、娘よ。今、自分がどこにいるのかを知りなさい。我々は約束を果たした。さあ、平安のうちに母のもとへ帰りなさい。」

そう言うと、彼らは姿を消した。エウフィミアは立ち上がり、自分がどこにいるのか周囲を見回した。　教会の壁やイコン、ろうそく、そして聖殉教者たちの聖遺物箱を目にし、さらに聖職者たちの歌声を耳にした彼女は、自分がエデッサにある、自分の守護聖人であるキリストの聖殉教者グリア、サモン、アビヴァの教会にいることを確信した。　その時、彼女は言葉に尽くせないほどの喜びと歓びに満たされ、聖殉教者たちの墓を愛情を込めて抱きしめながら、涙を流して、自分に示されたこのような恵みに対して、神と聖人たちに感謝を捧げた。感謝の念に駆られ、彼女はこう語った。「*私たちの神は天に[そして地にも]おられ、御心のままにすべてをなされる*」（詩編113:11）、天から私を遣わし、救ってくださった。主を信頼する者を救われる主は祝福される。「*夕べには嘆きがあり、朝には喜びがある*」（詩編29:6）。彼女が喜びの涙を流しながら、これやその他多くのことを語っていると、その言葉と泣き声を聞いた長老が、彼女のところへ近づき、こう尋ねた。

「あなたはどなたですか。なぜそんなに泣いているのですか？」

彼女は、聖人の遺骨のそばで母によってゴート人の男に嫁がされたこと、その誓いを破った男からどのような苦しみを味わわされたか、昨日棺に閉じ込められたこと、そして祈りの最中に聖なる殉教者たちが現れ、瞬く間に彼女をゴート人の地からこの教会へと運び出したことなど、すべてを詳しく語り始めた。

長老はこれを聞いて愕然とし、神の偉大な力に驚嘆した。とはいえ、彼はまだ彼女の話を完全に信じようとはせず、彼女に尋ねた。

「では、あなたの母親はどなたですか？」

彼女の母親が未亡人のソフィアであることを知ると、長老は直ちに彼女を呼び寄せ、教会に来るよう招いた。何も知らなかった母親はすぐに駆けつけ、聖なる殉教者たちの墓のそばに、粗末な服を身にまとって立っている娘の姿を見て、その予期せぬ光景に恐怖を覚えた。　娘のそばに歩み寄ると、彼女を抱きしめ、その首にすがりついて泣き崩れた。エウフィミアもまた泣き続け、二人は泣きじゃくって一言も発することができなかった。その後、しばらくしてようやく涙を拭うと、母は娘に尋ねた。

「娘よ、どうしてここにいるの？　なぜそんな粗末な服を着ているの？」

そこでエウフィミアは、異国の地で邪悪な夫から受けたすべての苦難、昨日棺に閉じ込められたこと、そして現れた聖殉教者グリー、サモン、アヴィヴによって奇跡的に救われ、運び出されたことを、詳細に語った。　これを聞いて、母は憐れみのあまり胸が張り裂ける思いになり、教会にいた人々は皆、その話を聞き終えると、深く感嘆し、全能なる神の力と慈しみを賛美した。　聖殉教者たちの墓の前にひれ伏し、母は大きな声で神と聖人たちに感謝を捧げた。そして、彼女たちはその日一日中教会にとどまり、祈りを捧げ、神に感謝し、愛と熱意をもって聖殉教者たちの聖遺物箱を抱きしめ、口づけをした。夜遅く、母は娘と共に喜びながら、神を賛美しつつ家路についた。

翌朝、この奇跡の噂は街中に広まり、四方八方から親族や隣人たちが未亡人の家に集まり、エウフィミアが語る話に驚きと畏敬の念を抱いた。皆、主の御名を賛美し、聖なる殉教者たちの助けを称え、賛美した。

ソフィアと娘は、その後の人生を神に喜ばれるように過ごした。二人は、自分たちに慈愛をもって現された神の力を皆に語った。　エウフィミアはこう語った。*「主の御手は高く、主の御手は力をなされる！」*主の御手は、ゴート族から私をエデッサへと移してくださった。*「私は死なず、生き続け、主の御業を宣べ伝える」*（詩篇 117:16–17）。

一方、誓いを破ったゴート人に対しては、神は次のように報復をなされた。

しばらく時が経つと、かつてギリシャ人と戦ったあの不敬虔な民が、ペルシャ人と手を組み、再びギリシャの地へ進軍し、エデッサの街を攻略しようと試みた。これを受けて、エデッサの防衛のため、ギリシャの皇帝たちによって再び軍隊が派遣された。　その軍勢と共に、狡猾さと諂いでソフィアから娘のエウフィミアを奪ったあのゴート人もやって来た。彼は起こった奇跡について何も知らず、エウフィミアは亡き妻と共に棺に閉じ込められて死んだのだと思い込んでいた。彼は動揺することなく、まるで自分の義母を訪ねるかのように、ソフィアの家へとやって来た。　ソフィアは彼が来たのを見て、エウフィミアを奥の部屋に隠し、婿の到着を喜んでいるかのような素振りを見せながら彼を出迎えた。その後、親族や近所の人々を集め、彼らの前でゴート人の男にこう尋ね始めた。

「神様のおかげで、ここから無事に旅を成し遂げることができたのね？　妊娠中の私の娘は、道中で体調を崩さなかったかしら。そして、無事に産んでくれたのね！　彼女は妊娠中だったから、私は彼女のことをとても心配していたの。旅の途中で何か悪いことが起きないかと恐れていたわ。

すると、彼はこう答えた。

「神は、あなたの祈りによって、私たちが無事に旅を成し遂げられるよう助けてくださいました。あなたの娘は元気で、男の子を出産しました。　彼女はあなたに挨拶を伝えています。もし、急いで向かうよう命じられたこの旅が予期せぬものでなかったなら、あなたの娘も赤ちゃんと共に私と一緒にあなたの元へ来て、あなたを慰めてくれたことでしょう。とはいえ、彼女はもっと都合の良い時期に来るでしょう。

その言葉を聞いて、ソフィアはこの邪悪な男の嘘に正当な怒りを燃やし、衣服を引き裂きながら大声で叫んだ。

「嘘つき、悪辣な男、そして殺人者よ、私の娘をどこへ連れて行ったの？」

そう言うと、彼女はエフフィミアを奥の部屋から連れ出し、ゴート人の前に立たせて言った。

「この娘を知っているか、彼女が誰なのか、どこに閉じ込めたのか知っているのか、誓いを破った者よ？　お前は彼女を死に追いやったのだ、無法者め！」

一方、彼はその言葉を聞き、エフフィミアの姿を目にした途端、震え上がり、声も出せず、まるで死人のように一言も発することができなかった。そこで、未亡人の親族や近所の人々が彼を捕らえ、部屋にしっかりと閉じ込め、ドアの前で見張りを続けた。　母と娘は書記官を呼び寄せ、自分たちに起こった出来事をすべて書き留めさせ、この驚くべき奇跡について何も省略することなく、その町の司教である至福のエウロギオスのもとへ赴き、この記録を彼に提出した。また、邪悪で狡猾なゴ

ート人が彼らの元へやって来たことについても報告した。　司教は記録を読み終えると、直ちに聖職者たちを連れて、到来したギリシャ軍を指揮する軍司令官のもとへ向かい、未亡人とその娘から渡された記録を軍司令官の前で読み上げるよう命じた。その記録には、聖なる殉教者たちによるこの驚くべき奇跡が詳細に記されていた。　総督は、読み上げられた内容を注意深く聞き、その輝かしい奇跡に驚き、恐怖に打ち震え、彼と共にいた者たちも皆、恐れに満たされた。総督は直ちに、ゴート人を自分の元へ連れてくるよう命じた。未亡人のソフィアと娘のエウフィミアも彼の前に連れてこられた。　彼は再び、彼らについて書かれた記録を皆が聞こえるように読み上げるよう命じた。というのも、総督の庭には大勢の人々、男女が集まっていたからである。そして彼はゴトフに、そこに書かれていることは真実なのかと尋ねた。ゴトフは、それは真実であり、そこに偽りは何一つないと答えた。すると総督は彼にこう言った。

「忌まわしき殺人者よ！　どうして神とその恐るべき審判を恐れず、聖なる殉教者たちの墓前で立てた誓い――お前が自らの約束の保証人かつ証人とした者たちへの誓い――を恐れることもなかったのか？　なぜ、お前の狡猾さで惑わした少女を容赦しなかったのか？　さあ、お前の行いにふさわしい刑罰を受けよ。」

総督は剣で彼の首を刎ねるよう命じた。神を愛する司教は、ゴート人を死に追いやらず、神の偉大さを称えることができるよう、彼に慈悲を示して生かしておくよう、総督に熱心に懇願した。しかし、総督は司教にこう答えた。

「これほど甚大な悪行を犯した者を赦すことは、この誓いを破った者が侮辱した聖なる殉教者たちを怒らせる恐れがあるため、恐ろしい。」

そして、総督の命により、ゴートフは斬首された。こうして、この呪われた者は報いを受けた。神は御自身の聖人たちにおいて栄光を受けられた。私たち罪人からも、今、そして常に、世々限りなく、神に栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第5調：

御自身の聖なる殉教者たちの奇跡により、私たちに破れぬ防壁を授けてくださったキリストなる神よ、彼らの祈りによって異邦人の陰謀を打ち砕き、王国の笏を強め給え。唯一の善き方、人を愛する方よ。

コンダク、第2調：

知恵の高みから恵みを受け、試練の中にあって称賛に値するお方としておられます。それゆえ、聖なる乙女を苦い死から救い出されました。まことに、あなた方はエデスの栄光であり、世の喜びであります。

聖殉教者エルピディオス、マルケッルス、エウストキオスの記念日

記念日：11月15日

福者エルピディウスは、背教者ユリアヌスの治世において、国務会議のメンバーでした。キリスト教徒である彼はユリアヌスの裁判にかけられ、釘で穴が開けられ、熱い樹脂が塗られた毛皮の服を着せられるよう命じられました。　その後、彼は殴打され、釘が至福者の体に深く食い込んだ。殉教者は勇敢に苦痛に耐え、キリストを否定するよう説得されても決して屈しなかった。そこで彼は堀に投げ込まれ、上から熱湯を浴びせられ、そのせいで体はかさぶたで覆われてしまった。　苦しみをさらに増すため、不義な統治者は、樹脂、苛性アルカリ、その他の類似物質を混ぜ合わせ、それらを

燃やして殉教者の化膿した傷口に注ぎかけ、口には熱い樹脂を流し込むよう命じた。　ついに、聖エルピディウスはエウストキオスとマルケッロと共に野生の馬に縛り付けられ、馬に引き裂かれることとなった。しかし、馬たちは彼らに何の害も与えなかった。そこで聖人たちは棒で殴打され、火の中に投げ込まれ、そこで彼らは生ける神の御手にその霊を委ねた。

彼らの尊い遺体はカルミルの山（[7926] ）に埋葬され、しばらくの間そこに安置されていた。しかしある日、キリストが天使の軍勢を率いて、稲妻の閃光と雷鳴の中、その場所に現れ、聖なる殉教者たちを歓迎された。その際、主は聖エルピディウスの遺体を蘇らせ、新たな功績を成し遂げるよう彼を遣わされた。　これらの功績の噂はユリアヌスの耳にも届いた。ユリアヌスは、エルピディウスが無傷であることを知るとすぐに、聖殉教者の体を四本の柱に縛り付けて引き伸ばし、容赦なく殴打させ、鋭い鋸で傷を負わせ、その傷を酢と塩でこすりつけるよう命じた。　その後、その遺体を熱い炭の上に広げ、その上から熱い灰を振りかけるよう命じた。聖人がこの拷問も勇敢に耐え抜くと、彼は木に吊るされ、赤熱した盾を体に押し当てられ、灰を振りかけられた。　こうした拷問の最中、驚くべき奇跡が起こった。聖人の祈りによって、近くに立っていた偶像が粉々に砕け散ったのである。これを見た六千人の異教徒たちは、キリストの信仰に改宗した。　これらすべての後、聖エルピディオスは燃え盛る炉に投げ込まれ、そこで聖人は幼い頃から愛してきた主のもとへ魂を捧げた[7927] 。聖徒たちにおいて驚くべき御業をなされる神に、今、そして常に、世々限りなく、栄光と誉れがありますように。アーメン。

聖殉教者ディミトリオスの記念日

記念日：11月15日

聖殉教者ディミトリオスは、フラキアのダブダという村の出身であり、マクシミアヌス・ガレリウス皇帝とその共同統治者マクシミヌスの治世下で殉教した。フラキアの総督プブリウスに、聖人がキリスト教徒であるとの密告があり、総督の命令により、聖人は捕らえられた。　尋問の際、ディミトリオスは勇敢にキリストを神であると告白し、聖霊について語り、イエス・キリストの受肉、その慈愛と人間愛について教えた。その後、魂を蝕む偶像崇拝の惑わしを糾弾し、それを信じる者たちがいかに盲目であり、耳が聞こえないかを示した。　その言葉は統治者を大いに激怒させ、彼はディミトリイの首を刎ねるよう命じた[7928] 。こうして聖なる殉教者は、主から天の冠を授かってこの世を去った。聖ディミトリイの尊い遺骸は、信仰深く神を畏れる者たちによって埋葬され、そこを訪れるすべての人々に癒やしをもたらしている。

11月29日

11月16日（旧暦）

聖使徒・福音記者マタイの生涯と殉教

記念日11月16日

[7926] カルメル山はパレスチナの中央部に位置し、北端は地中海に突き出し、南端はサマリア山脈に接している。
[7927] 聖殉教者エルピディウス、マルケル、エウストキオスは、4世紀半ば頃に殉教した。
[7928] それは西暦307年のことだった。

聖使徒兼福音記者マタイは、アルフェオの息子であり、別名レビとも呼ばれた（マルコ2:14、マタイ9:9、ルカ5:27）。彼はガリラヤの町カペナウムに住んでいた[7929] 。彼は裕福な人物であり、徴税人の職に就いていた[7930] 。 同胞たちは、彼のような者たちすべてと同様に、彼を軽蔑し、敬遠していた。しかし、マタイは罪人ではあったが、同時に、自らの見せかけの　外見上の義を誇りとするパリサイ人たち[7931] よりも、決して劣るどころか、はるかに優れていた。そして、主は、このようにすべての人から軽蔑されていたこの徴税人に、御自身の神聖な視線を留められた。　ある日、カペナウムに滞在中、主は町を出て、人々に囲まれながら海へと向かわれた。岸辺で、主は徴税所[7932] に座っているマタイを見かけられた。そして彼にこう言われた。

「わたしについてきなさい！」

主のこの言葉を、肉体の耳だけでなく心の目でも聞き取った徴税人は、たちまちその場から立ち上がり、すべてを捨ててキリストに従った。　マタイは、偉大なる師であり奇跡を行う方が、自分という軽蔑された徴税人を招いておられることに、迷うことも驚くこともなかった。彼は心を尽くしてその言葉に従い、何の異議も唱えることなくキリストの後を追った。喜びに満ちたマタイは、自分の家で盛大な宴を準備した。　主はその招待を断ることなく、マタイの家に入られた。すると、マタイの家には多くの隣人や友人、知人――皆、徴税人や罪人たち――が集まり、イエスとその弟子たちと共に食卓を囲んだ。そこには、律法学者たち[7933] やパリサイ人たちも何人か居合わせた。 主が罪人や徴税人を忌み嫌わず、むしろ彼らと共に食卓を囲んでいるのを見て、彼らは不平を言い、弟子たちにこう言った。

「どうして、あの方は徴税人や罪人たちと一緒に食べたり飲んだりされるのか。」

主は彼らの言葉を聞かれると、こう言われた。

「健康な人は医者を必要としない。病んでいる人こそ必要とするのだ。わたしは、義人ではなく、罪人を悔い改めに招くために来たのだ[7934] 。」

[7929] カペナウムは、ゲネサレト湖（またはティベリアス湖）の北西岸にある、ガリラヤに属する小さな町である。現在、この町の遺跡はテル・グムとして知られている。

[7930] 「徴税人」とは、ユダヤ人から税金を徴収するためにローマ人によって任命された者たちのことである。彼らは通常、これらの税金の徴収権を請け負い、自分たちに最大の利益をもたらすためにあらゆる手段を講じた。　異教の権力に雇われた利己的で横柄な代理人として、徴税人はユダヤ人からは祖国と主なる神に対する裏切り者、反逆者と見なされていた。「罪人」「異教徒」「徴税人」――彼らにとってはこれらはすべて同義であり、彼らと話すことは罪とされ、彼らと関わることは穢れと見なされていた。もっとも、彼らの間にも善良で神を畏れる人々がいたにもかかわらずである。

[7931] パリサイ派――紀元前2世紀から3世紀にかけて出現したユダヤ教の宗派の一つである。パリサイ（特別な者、分離された者）という名称は、律法に対する並外れた熱意をもって他と一線を画そうとしたことに由来する。

[7932] 関所とは、海岸沿いの道を通り過ぎるキャラバンや、海路で貨物を運ぶ船から、関税や税金を徴収する場所のことである。

[7933] ユダヤ人において「律法学者」とは、一般的に書物に関する事柄に精通した人々を指し、具体的には次のような者たちであった。すなわち、律法を解説し、公の場で民衆に律法を教え導いた、ユダヤ人の中でも最も学識豊かな者たち、いわゆるラビや律法教師たち；　また、論争の的となる問題や疑わしい事例、律法の知識と実践的な経験を要する事案の解決に従事した律法学者たち；さらに、シナゴーグやサンヘドリンで奉仕した書記や公証人たちも含まれていた。　これらの学識あるユダヤ人たちは、新約聖書においてファリサイ派とは異なる特別な階層として描かれているが、同時にしばしばファリサイ派と結びつき、大祭司たちとも関連づけられている。　彼らの大部分は特定の伝承に固執し、律法の精神を理解せずにそれを誤って解釈し、民の盲目の指導者となっていた。彼らは、人の栄光を得るためだけに、見せかけだけで偽善的に戒めを守り、自分たちは果たさない重い負担を他人に課していたのである。

[7934] ルカ 5:27–32。 マタイ9:9–13。マルコ2:14–17。このように、主はここで、律法の外的な儀式にのみ固執し、その外見を厳格に守ることで、自らを義人と見なし、悔い改めや改心の必要性を感じていなかった律法学者やパリサイ人たちの傲慢と自己満足を糾弾しておられる。　主は彼らに、外的な儀式やいけにえは、内なる感情、慈しみ、隣人への愛の表現として機能する場合にのみ意味を持ち、そうでなければその意味を失い、神を怒らせるだけであることを示しておられる（イザヤ 1:11–18）。

それ以来、マタイはすべての財産を捨ててキリストに従った（ルカ5:28）し、忠実な弟子として、それ以降は決して主から離れることはなかった。やがて彼は、選ばれた12人の使徒の一員に数えられる栄誉に浴した（マタイ10:1–42; マルコ3:13–19; ルカ6:13–16）。主の他の弟子たちと共に、マタイはガリラヤやユダヤを巡る旅に同行し、主の神聖な教えに耳を傾け、数え切れないほどの奇跡を目の当たりにし、 イスラエルの家の迷える羊たちへの宣教に同行し、救い主の十字架上の苦難と贖いの死、そして天への栄光に満ちた昇天を目の当たりにした。

主の昇天と聖霊が使徒たちの上に降臨した後、聖マタイは当初パレスチナに残り、他の使徒たちと共にエルサレムとその周辺で福音を宣べ伝えました。 しかし、やがて使徒たちがエルサレムを離れ、さまざまな民族のもとへ赴き、彼らをキリストの信仰へと導く時が訪れた。使徒がエルサレムを去る前に、ユダヤ人であるエルサレムのキリスト教徒たちは、イエス・キリストの行いと教えを文書で伝えてほしいと彼に懇願した。 この願いに応えるべく、当時エルサレムにいた他の使徒たちも同意を示した。そして聖マタイは、皆の願いを叶えるべく、キリストの昇天から8年後に福音書を著した[7935] 。

エルサレムを離れた聖使徒マタイは、多くの国々で福音を宣べ伝えました。キリストの福音を広めるため、彼はマケドニア、シリア、ペルシャ、パルティア、メディアを巡り、くじで割り当てられたエチオピア全土を巡り歩き[7936] 、その地を福音の知恵の光で照らしました。 ついに、聖霊の導きにより、彼は人喰いの地、黒く、獣のような民の住む地へと至り、ミルメネと呼ばれる町に入り、そこで数人の魂を主へと導いた後、同行者のプラトンをその地の司教に任命し、小さな教会を設立した。 自身は近くの山に登り、そこで断食を続けながら、その異教の民の回心を神に熱心に祈り求めた。 すると、主は美しい若者の姿で現れ、右手に杖を持ち、彼に挨拶を交わされた。主は右手を差し伸べてその杖を聖人に渡し、山から降りて、自分が建てた教会の入り口にその杖を立てよと命じられた。

「この杖は」と主は言われた。「わたしの力によって高い木へと成長し、その木は、大きさも甘さも他のあらゆる果樹の実を凌ぐ豊かな実を結ぶだろう。そして、その根元からは清らかな水の泉が湧き出るのだ。 その泉の水で身を清めれば、人喰い人々は美しい顔立ちを得、その実をひと口でも味わった者は誰でも、野蛮な習性を忘れ、善良で柔和な人間となるだろう。

[7935] マタイによる福音書は、西暦41年頃に使徒マタイによって書かれた。これは新約聖書の全書物の中で最も早く書かれた聖書であり、それゆえに新約聖書の中で第一の地位を占めている。 この福音書は、ヘブライ語、あるいは当時使用されていたシリア・カルデア語、すなわちアラム語の方言で書かれ、当初はユダヤ人であるパレスチナのキリスト教徒を対象としていた。 これに基づき、マタイによる福音書の記述は、主に、イエスがユダヤ民族の先祖たちに約束された真のメシアであることを示すことに重点が置かれている。これは、同胞に認められず、十字架にかけられたキリストを信じたユダヤ人たちに、特に示す必要があったことである。 そのため、マタイによる福音書では、他の福音書よりも頻繁に、キリストの生涯における出来事が旧約聖書の預言や予型と照らし合わされ、救い主キリストの全生涯の中から、ユダヤ人にとって特に重要かつ必要な物語が選ばれている。 また、マタイは自身の福音書を、ダビデの子でありアブラハムの子であるメシアの系図から始め、その福音書全体を通じて、主にダビデの子、アブラハムの子であるイエス・キリストの受肉と人間性について語っている。 この聖マタイによる福音書の特徴は、そのイコンにも表れており、そこには、彼の福音書の特徴を象徴的に表す天使のような人物と共に、イエスが描かれている。

[7936] マケドニアはギリシャの北、その北東部のテッサリア地方の北に位置していた。シリアは、地中海からユーフラテス川まで広がるアジアの西部地域である。 ペルシアは、イラン高原の南部、ティグリス川、ペルシャ湾、カスピ海の間に位置していた。メディアは、イランの西部、カスピ海の南に位置し、西はアッシリアと大アルメニア、南はペルシア、東はパルティアと国境を接していた。 パルフィアは、アジアにある広大な国で、カスピ海の南東に位置し、さらに東はインド洋まで広がっていた。エチオピアはアフリカの、エジプトの南、現在のヌビアとアビシニアにあたる地域に位置していた。

マタイは主の手から杖を受け取ると、山を下り、命じられたことを果たすために町へ向かった。その町の領主フルヴィアヌスには、妻と息子がおり、二人は悪霊に取りつかれていた。道中で使徒に出くわすと、彼らは荒々しく威嚇するような声で叫んだ。

「誰が、私たちを滅ぼすために、この杖を持ってここへお前を送り込んだのか？」

使徒は悪霊たちを戒め、追い払った。癒やされた人々は使徒にひれ伏し、従順に彼の後をついていった。　彼の到来を知ったプラトン司教は聖職者たちと共に彼を出迎え、聖マタイは町に入り、教会に近づくと、命じられた通りに、主から授かった杖を立てた。　――するとたちまち、皆の目の前で、その杖は葉の茂った枝を広げる大木へと変わり、その木には大きくて甘い美しい実が実り、根元からは泉が湧き出た。　これを見た者たちは皆、驚きに打ちのめされた。町中の人々がこの奇跡に集まり、木の果実を味わい、清らかな水を飲んだ。そして、聖使徒マタイは高い場所に立ち、集まった人々に彼らの言葉で神の御言葉を説いた。すると、たちまち皆が主を信じるようになり、使徒は奇跡の泉で彼らに洗礼を授けた。　そして、洗礼を受けた人食い族たちは皆、主の御言葉に従い、顔立ちが端正で肌が白い姿で水から上がってきた。彼らは肉体的な白さと美しさだけでなく、魂の清らかさと美しさも授かり、古い人を脱ぎ捨て、新しい人――キリスト――を身にまとったのである。　この出来事を知った公爵は、最初は妻と息子の癒やしを喜んだが、その後、悪魔の唆しにより、民衆が自分たちの神々を捨てて使徒のもとへ集まってくることを理由に、使徒に対して怒りを抱き、彼を滅ぼそうと企んだ。　しかし、その夜、救い主が使徒の前に現れ、勇気を奮い立たせるよう命じ、これから訪れる苦難の中で彼と共にいると約束された。　朝になると、使徒は教会で信者たちと共に神を賛美していたが、王子は四人の兵士を遣わして彼を捕らえさせた。しかし、彼らが主の神殿にたどり着くと、たちまち闇に包まれ、かろうじて引き返すのがやっとだった。彼らがなぜマタイを連れてこなかったのかと問われると、彼らはこう答えた。

「彼の話し声は聞こえましたが、姿を見ることも、捕らえることもできませんでした。」

フルヴィアヌスはさらに激怒した。彼はさらに多くの武装した兵士を送り込み、力ずくでマタイを連行するよう命じ、もし抵抗してマタイを守る者がいれば、その者を殺すよう命じた。　しかし、これらの兵士たちも手ぶらで戻ってきた。というのも、彼らが神殿に近づいたとき、天の光が使徒を照らし、兵士たちはその光を見ることもできず、大きな恐怖に襲われ、武器を捨てて、恐怖のあまり半死半生の状態で駆け戻り、起こったことを公爵に報告したからである。　フルヴィアヌスは激しく激怒し、自ら使徒を捕らえようと、大勢の　家来を率いて向かった。しかし、彼が使徒に近づこうとした途端、突然目が見えなくなり、案内人を求めて懇願し始めた。そこで彼は、使徒に自分の罪を赦し、失明した目を癒やしてくれるよう懇願し始めた。　使徒は、総督の目の前で十字架の印を結び、彼に視力を授けた。総督は視力を取り戻したが、それは肉眼によるものであって、心の目によるものではなかった。なぜなら、悪意が彼の目を曇らせていたからであり、彼はこの偉大な奇跡を神の力によるものではなく、魔術によるものと見なしたからである。　彼は使徒の手を取り、あたかも彼を敬うかのように自分の宮殿へと連れて行ったが、心の中では、主の使徒を魔術師として焼き殺そうと狡猾に企んでいた。しかし、使徒は彼の心の秘められた動きと狡猾な企みを看破し、王を非難してこう言った。

「お世辞を並べる迫害者よ！　私に対して企てたことを、いつ実行するつもりか？　サタンがあなたの心に吹き込んだことを実行せよ。私については、ご覧の通り、私の神のためにあらゆる苦難に耐える覚悟ができている。」

そこで王は兵士たちに命じて、聖マタイを捕らえ、地面に仰向けにして、手足を釘でしっかりと打ち付けさせた。それが済むと、使用人たちは拷問者の命令に従って、多くの枝や小枝を集め、樹脂と硫黄を持ってきて、これらすべてを聖マタイの上に積み上げ、火をつけた。　しかし、火が激しい炎となって燃え上がり、皆がキリストの使徒はすでに焼死したと思ったその時、突然、火は冷め、炎は消え、聖マタイは生き生きと無傷のままで、神を賛美していた。　これを見た民衆は皆、この偉

大な奇跡に恐怖を覚え、使徒を通して神を賛美した。しかし、フルヴィアヌスはさらに激怒した。キリストの説教者を火の中から生きたまま、傷一つ負わずに守った神の力を認めようとはせず、彼はその義人に対して不当な告発を浴びせ、彼を魔術師と呼んだ。

「魔術によって」と彼は言った。「マタイは火を消し、その中で生き残ったのだ。」

それから彼は、さらに多くの薪や枝、小枝を持ってくるよう命じ、それらをマタイの上に積み上げ、火をつけさせ、その上から樹脂を注がせた。　さらに、自分の金の偶像十二体を持ち込ませ、それらを火の周りに並べ、その力を借りてマタイが炎から逃れることができず、灰と化すよう、偶像たちに助けを求めた。　一方、使徒は炎の中で、全能の主に向かって祈り、主がご自身の無敵の力を示し、異教の神々の無力さを明らかにし、彼らに希望を置く者たちを恥じ入らせてくださるよう願った。

すると突然、恐ろしい轟音とともに炎が金の偶像たちへと襲いかかり、それらは火によって蝋のように溶け、さらに周囲に立っていた多くの不信仰者たちも火傷を負った。　溶けた偶像からは、蛇の姿をした炎が噴き出し、フルヴィアヌスに襲いかかって脅かしたため、彼は使徒に謙虚な嘆願をもって滅びからの救いを求めるまで、逃げ出して危険を逃れることができなかった。　使徒が火に命じると、たちまち炎は消え、火の蛇の姿も消え去った。フルヴィアヌスは聖人を火の中から名誉をもって救い出そうとしたが、聖人は祈りを捧げた後、その聖なる魂を神の御手に委ねた[7937]。 そこで王子は、金の寝台を運ばせ、その上に火にも傷つけられなかった使徒の尊い遺体を安置し、貴重な衣をまとわせた後、家臣たちと共に持ち上げ、自分の宮殿へと運び込んだ。　しかし、彼にはまだ完全な信仰がなかったため、鉄の箱を鋳造させ、四方を錫でしっかりと覆い、海に投げ込むよう命じ、その際、貴族たちにこう言った。

「もし、火の中からマタイを無傷で守った方が、水に沈むことからも彼を守ってくださるなら、その方はまことに唯一の神であり、火による滅びから自らを救うことのできなかった我々のすべての神々を捨てて、その方に礼拝を捧げよう。」

この尊い聖遺物を納めた鉄の箱が海に投げ込まれた後、聖人は夜、プラトン司教の前に現れ、こう言った。

「明日、公爵の宮殿の東にある海岸へ行き、そこに打ち上げられた私の聖遺骨を拾い上げなさい。」

翌朝、司教は多くの信者たちに付き添われて、示された場所へ向かい、幻視で告げられた通り、聖使徒マタイの聖遺物が入った鉄の聖櫃を見つけた。

このことを知った公爵も、家臣たちを連れてやって来て、今度はすでに主イエス・キリストを完全に信じるようになっていたため、主こそが唯一の真の神であり、そのしもべマタイを――生前の火の中においても、死後の水の中においても――無傷で守ってくださったと、声を張り上げて告白した。　そして、使徒の聖遺物が納められた聖櫃にひれ伏し、聖人に対して自身の罪を赦し求めた上で、心から洗礼を受けたいという願いを表明した。　プラトン司教は、フルヴィアヌスの信仰と熱意を見て、彼を公に認め、聖なる信仰の真理　を教え、洗礼を授けた。そして、彼の頭に手を置き、名前を付けようとしたとき、天から声が聞こえてきて、こう言った。

「彼をフルヴィアンとは呼ばず、マタイと名付けよ。」

このように洗礼において使徒の名を授かった王子は、使徒の生き方を模範としようと努めた。まもなく彼は自身の王権を他者に譲り渡し、世俗の虚栄を完全に捨て去り、神の教会での祈りに専念し、プラトン司教によって長老の位を授けられた。 そして3年が経過し、司教が亡くなると、公爵の権力を引き継いだ長老マタイの前に、聖使徒マタイが幻として現れ、至福のプラトンに続いて司教の座に就くよう彼を説得した。　司教職を受け入れたマタイは、キリストの福音を宣べ伝えることに尽

[7937] 伝承によれば、聖使徒兼福音記者マタイの死は、西暦60年頃であったとされる。

力し、多くの人々を偶像崇拝から遠ざけて神のもとへ導き、その後、長い神に喜ばれる生涯を送った末、自らも神のもとへ旅立ち、聖福音記者マタイと共に神の御座の前に立ち、　私たちのために主へ祈り、私たちもまた神の永遠の御国の相続人となれるよう願っています。アーメン。

トロパリオ、第3調:

税関から、慈愛のために人の姿でこの地上に現れた主キリストの呼び声に熱心に応え、その方に従ったあなたは、選ばれた使徒となり、全世界に福音を力強く宣べ伝えた。それゆえ、私たちはあなたの尊い記念を称える、神の言葉を語るマタイよ。　慈悲深き神に祈り、私たちの魂に罪の赦しを授けてくださいますように。

コンダク、第4調:

税吏の重荷を捨て、正義の軛を負い、最も立派な商人として現れ、高き所から知恵という富をもたらしました。それゆえ、あなたは真理の言葉を宣べ伝え、審判の時を記して、落胆した人々の魂を奮い立たせました。

11月30日

11月17日（旧暦）

聖父グリゴリオス・奇跡行者、ネオケサリアの司教の生涯

記念日11月17日

聖グリゴリオスは、栄光に満ちた偉大な都市ネオケサリア[7938]の出身であり、両親は異教徒であった。若くして両親を亡くした。ギリシャの知恵[7939]の研究に没頭する中で、彼は唯一の真の神を知ることにこそある、至高の知恵を理解し始めた。被造物から創造主を悟り、悪意を持たず、貞潔な生活を送ることで、神に喜ばれるよう努めた。　聖なる福音の教えに触れると、彼は直ちにその信奉者となり、洗礼を受けて　キリストの戒めに従い、清らかさと無欲のうちに生きようと努め、世俗の虚栄、富、高慢、名声、そして一時的な快楽のすべてを拒絶した。肉欲の満足を拒み、　グリゴリーは、自らの意志を死なせながら、大いなる節制を守り、その処女の清らかさを極めて厳格に守り抜いた。そのため、母の胎内から至福の死に至るまでの生涯を通じて、肉欲の罪を知ることなく、汚れから身を守り、唯一の清く罪なき方、罪なき処女から生まれた、　キリスト・神に喜ばれる者となるた

[7938] ネオケサリア――現在のニクサル――は、その美しさで名高い、比較的新しく築かれたポンテ・ポレモニアカの首都であり、小アジア北部のリクス川沿いに位置していた。特に（聖グリゴリオスの死後）315年にそこで開かれた教会公会議で知られている。

[7939] ここでいう「ギリシャの知恵」とは、当然ながら異教の学問、異教の教育を指す。聖グリゴリオス・ネオケサリアスの父は異教徒であり、息子を異教の教えで育てた。　父は彼を弁護士に育てようとしていたため、聖グリゴリオス（俗名テオドロス）は法律と、当時の法律の言語であるラテン語をしっかりと学び、ついにローマ法についてさらに深く学ぶためにローマへ行くことを決意した。　しかし、神の摂理は彼の人生を別の道へと導いた。彼は兄弟と共に、姉をケサリアへ付き添うことになった。そこから彼は法学を学ぶためにベリトへ赴き、さらに当時はその教養の高さで名高いアレクサンドリアへと向かった。

め、汚れから身を守り抜いた。若き日から彼に身を委ね、その助けにより、彼は力から力へ、徳から徳へと成長し、非の打ち所のない人生の道を歩んだ。それゆえ、神と善良な人々は彼を愛したが、悪しき者たちは彼を憎んだ。

彼がまだ若者の頃、アレクサンドリアで、あらゆる国から集まってきた多くの若者たちと共に哲学と医学を学んでいた時[7940]、その貞潔で清らかな生活は、同世代の若者たちの憎悪を招いた。 彼らは自制心を欠き、情欲に支配されていたため、異教の若者たちの慣習通り、娼婦の家に足を踏み入れ、不潔な生活を送っていた。一方、聖グリゴリウスは、キリスト教徒の青年として、この破滅的な道を避け、不潔さを遠ざけ、不法を憎んだ。 茨の中のユリのように[7941]、不潔な者たちの間で、彼はその清らかさによって輝いていた。多くの人が彼の清く汚れなき生活を知っており、それゆえ多くの立派な哲学者や市民が彼を深く尊敬し、称賛した。 しかし、同世代の者たちは、節制と清らかさにおいて若者だけでなく年長者をも凌駕するその青年を直視することができず、彼も他の者たちと同じように不潔に暮らしているかのような悪評を人々の間に広め、それによって彼が人々の間で正当に享受していたその良き名声を汚そうと企てた。 彼らは、ある娼婦を唆して、無実で清らかな心を持つその若者を誹謗し、悪評を広めるように仕向けた。 ある日、聖人が人々の目の前で高名な哲学者や第一級の教師たちと談笑していたとき、聖人の同輩たちから仕向けられたその娼婦が彼に近づき、あたかも彼女と肉欲の罪を犯したかのように、恥知らずにもその対価を要求した。 これを聞いた者たちは皆驚き、ある者はこれを真実だと信じて惑わされたが、他方、グリゴリウスの清らかさと無垢さを知っていた者たちは、その恥知らずな娼婦の言葉を信じず、彼女を追い払った。しかし彼女は大声で叫びながら、聖人に、犯したとされる淫行の対価を支払うよう執拗に迫った。 ああ、これほど多くの高潔な人々の面前で、明らかに罪深い女からの、あのような恥知らずで不当な非難を耳にしたとき、聖グリゴリウスはどれほど胸を痛めたことか！ まるで清らかな乙女のように、彼は顔を赤らめた。しかし、悪意がなく、柔和な人柄であったため、娼婦に厳しい言葉は一切かけず、怒りを微塵も示さず、自分を弁護したり、無実を証明する証人を呼び出したりすることもなかった。ただ、友人の一人に穏やかにこう言った。

「さあ、彼女が要求するだけの金を早く渡して、もう私たちに迷惑をかけずに立ち去らせてくれ。」

その友人は直ちに、彼女が望むだけの金を彼女に渡し、無実のグリゴリーを恥から救った。しかし、天にまみれる真実の証人である神は、この虚偽を次のように暴かれた。神は、恥知らずで媚びる娼婦に邪悪な霊を送り込まれた。そして、彼女が不正な報酬を受け取ったその瞬間、激しい懲罰もまた彼女に降りかかった。すなわち、悪霊が彼女に襲いかかり、皆の目の前で彼女を苦しめ始めたのである。 娼婦は地面に倒れ、恐ろしい声で叫び、全身を震わせ、歯ぎしりをして、泡を吹いて意識を失った。それを見た周囲の人々は皆、罪のない若者のためにこれほど迅速かつ激しい報復が下されるのを目の当たりにし、大きな恐怖と戦慄に襲われた。 そして、聖人が彼女のために神に熱心に祈りを捧げ、それによって悪霊を彼女から追い払うまで、悪霊は彼女を苦しめ続けた。これが、その美徳に長老たちさえも感嘆した若きグリゴリウスの奇跡の始まりとなった。

[7940] アレクサンドリア――エジプトの有名な首都は、当時、その広範で隆盛を極める学問で知られていた。特に当時、哲学と医学が盛んだった。異教の学問と並んで、キリスト教の神学も隆盛を極めていた。 その時代の数多くの傑出した学者を輩出した名高いアレクサンドリア学派は、キリスト教徒だけでなく異教徒からも大勢の聴講生をその門下に引き寄せていた。

[7941] クリン――白いユリ――は、ユリ科に属する美しい花である。主ご自身がユリの美しさを称え、それをソロモンのあらゆる豪華な衣よりも高く評価されている（マタイ6:28–29、ルカ12:27）。 そのため、聖書においてユリは、高い道徳的完全性の象徴として非常に頻繁に用いられており、これに従って、ここでも若きグリゴリーの徳高い生活は、聖書において不義と罪の象徴とされる茨の茂みの中に咲く美しいユリに喩えられている。

グリゴリウスには、カッパドキア出身の、分別があり品行方正な友人、フィルミアンという者がいた。すべてを捨てて唯一の神に仕えたいという秘めた思いを彼に打ち明けたところ、グリゴリウスは、フィルミアンも同じ考えを持ち、同じ道を歩みたいと願っていることを知った。　互いに相談し合った末、二人は世俗の　哲学や異教の学堂を離れ、キリスト教の知恵と聖書の奥義を学び始めた。当時、キリストの教会の教師たちの中で、著名なオリゲネス[7942]が名声を博していた。友人のフィルミアヌスと共に彼の元を訪れた聖グリゴリウスは、彼に師事し、しばらくの間彼のもとで過ごした後、故郷のネオケサリアへと戻った。　ネオケサリアの市民や彼を知る人々は皆、その偉大な英知を見て、彼が同胞たちから尊敬され、裁判官や都市統治者の職務を担うことを望んだ。しかし、グリゴリウスは、高慢や虚しい人間の栄光、そして敵が世界を縛りつける数多くの罠を避け、故郷の街を離れ、　荒野に定住し、ただ神のためだけに深い隠遁生活を送った――その偉業と労苦については、「私たちの心」を「造り」、「私たちのすべての行い」を「見通される」方（詩編32:15）のみがご存知である。

聖グリゴリウスが荒野に滞在し、神への黙想に励んでいたとき、カッパドキアの都市アマシアの司教である至福のフェディムは彼のことを知り、彼を荒野から呼び出してキリストの教会に仕えさせ、聖職者かつ教師に任命しようと望んだ。　というのも、彼は聖グレゴリオスの中に神の恵みを見出し、彼が教会の偉大な支柱となり、信仰の確固たる支えとなることを予見していたからである。聖グリゴリウスもまた先見の明という賜物を持っており、司教が彼を荒野から連れ出し、教会の奉仕に就かせようとしていることを知ると、自分はそのような聖職にふさわしくないと考え、司教から身を隠し、見つからないように荒野のあちこちを転々としていた。　至福のフェディムは熱心に彼を探し求め、懇願して荒野から呼び寄せようとしたが、荒野を愛する者をその荒野から引き離し、叙階のためにアマシアへ連れてくることができなかったため、一見奇妙で異例と思われる行動に出た。　神の御霊に導かれ、聖なる教会への熱意に燃やされた彼は、グリゴリウスが自分のもとに来なかったことや、両者の間にかなりの距離があること――アマシアの街からグリゴリウスが住んでいた砂漠までは三日間の道のりだった――を何とも思わず、　フェディム司教は、両者の間にそのような距離があることにも躊躇することなく、遠く離れた場所にいるグリゴリウスをネオケサリア教会の司教として叙階した。神に視線を向け、彼はこう言った。

「全知にして全能なる神よ、この時、私とグリゴリウスに御目を留め、御恵みによってこの叙階を実りあるものとなさってください。」

[7942] オリゲネス（254年、アレクサンドリア教会の最も著名なキリスト教の教師）は、その並外れた知性と学識の深さにおいて、その時代の奇跡とも称される人物であり、当時、アレクサンドリアの教理学校において傑出した教理指導者であった。　彼は多くの傑出した教父や教会の教師を育て上げ、その中には、異教からキリスト教への改宗を彼に負う者もいた。彼は、知識と哲学をキリスト教の信仰と調和させようとしていたのである。　特に注目すべきは、聖書の研究、その解釈、とりわけ聖書の真の本文の復元と浄化に関する著作、ならびに異端者やキリスト教の敵に対するキリスト教の擁護を目的とした著作である。 概して、彼は自身の時代だけでなく、後世のためにも多大な貢献を果たし、4世紀の教会の偉大な教師たちは皆、オリゲネスを深く尊敬し、彼の著作を大いに活用した。オリゲネスはカテキズム学校に多くの聴講者を惹きつけ、その中には、より高い教養を熱心に求めていた異教徒の若者たちも数多くいた。　聖グリゴリウスはアレクサンドリアでオリゲネスと出会い、彼の熱心な弟子となった。グリゴリウス自身の言葉によれば、オリゲネスはまず、哲学者たちの思想体系の中に散らばっている真理の種を探し求めるよう彼に促し、彼の中に真理への愛を目覚めさせた。その後、オリゲネスはキリスト教信仰の原理を説き、聖書を解説した。 オリゲネスのもとで8年間過ごした後、グリゴリウスは彼から聖なる洗礼を受け、公の場で師に感謝の言葉を述べた後、師との別れを悲しみつつ故郷へと戻った。　「私はこう考える」と、グリゴリウスは師についてこう記している。「彼がそう語ったのは、まさに神の御霊の導きによるものに他ならない。預言者となり、預言者を解き明かすためには、その力が必要だからである。　そして、神の御霊ご自身が御言葉の理解を授けてくださらなければ、誰も預言者を理解することはできない。この人は神から、神の言葉を人々に伝える者となり、神ご自身が用いた通りに神の言葉を理解し、人々が理解できる形でそれを解き明かすという、最も偉大な賜物を受けたのである」。

このことは、聖グリゴリオス・ニッサスがこの聖人の生涯を記述した際に証言している（[7943]）；また、これを裏付けるものとして、ミネイのカノンにも次のように記されている：　「神の執り成し人よ、熱意に燃え、父を亡くすことなくフェディムに油注ぎを受けたあなたは、万事を御存知なる神に敬虔に信頼し、あなたの尊い生涯に希望を置き、神の御言葉を語るグリゴリイよ」[7944]。

こうして、至福のフェディムはグリゴリウスに異例の叙階を行い、聖グリゴリウスは本意ではなかったものの、教会の統治を引き受けることに従った。なぜなら、主の御心に逆らうことなどできようか。しかし、何よりもまず、彼は祈りに身を委ね、この大業のために天からの助けを求めた。

当時、サヴェリウスとパヴェル・サモサタスの異端が広まり始めていた[7945]。聖グリゴリウスはこの件について困惑し、真の信仰が明らかにされるよう、神と神の母に熱心に祈りを捧げた。　ある夜、彼が特に熱心にそのことについて祈っていると、太陽のように輝いている聖母マリアが、司教の衣をまとった聖ヨハネ・テオロゴスと共に彼の前に現れた。　聖母は御手をもってグリゴリウスを指し示し、神学者ヨハネに、聖三位一体の神秘をどのように信じるべきかを彼に教えるよう命じられた。　そして、神の母の命により、聖グリゴリウスは聖ヨハネ・テオロゴスから、短期間のうちに神の偉大な奥義を教えられ、尽きることのない知恵の深みから神聖な知識を汲み取った。聖ヨハネ・テオロゴスが語った啓示の言葉は、次の通りであった。

「唯一の神、生ける御言葉の父、位格としての知恵、永遠の力と御姿、完全なる者の完全なる生みの親、独り子なる御子の父。　唯一の主、唯一なる者から唯一なる者、神から神、神性の姿と像、力ある御言葉、存在するすべての構成を包み込む至高の知恵、そしてすべての被造物の創造的な力、　真の父の真の子、目に見えず、朽ちることなく、不死であり、永遠に存在する父の、目に見えず、朽ちることなく、永遠に存在する子。　また、唯一の聖霊は、父からその実体を受け、御子を通して人々に現された方であり、完全なる御子の完全なる像、命、すべての生き物の原因、聖なる源、聖なるもの、聖化をもたらす方であり、その中に父なる神が御自身を現わされる方、すなわち、すべてのものの上に、またすべてのものの中にあり、御子なる神、　すべての人を通して、栄光と永遠と御国において、分割されず、分離されぬ完全なる三位一体である。したがって、三位一体の中には、創造されたもの、奉仕的なもの、あるいは以前には存在せず後に加わったような、何ものも存在しない。　したがって、御子において父に対して何ら欠けるものはなく、聖霊において御子に対して何ら欠けるものはないが、常に同じ三位一体が不変かつ揺るぎないものである。

[7943] 聖グリゴリオス・ニッサスの著作、ロシア語訳、第VIII巻、143ページ。――ところで、聖グリゴリオス・奇跡行者は、同じグリゴリオス・ニッサスの証言によれば、彼に対してすべての正当な聖職叙任の儀式が執り行われた後、かつ、彼を司教の座に選出した聖フェディモスに、信仰の秘儀を正確に理解するためのわずかな時間を求めた上で、初めて教会の最高位を受け入れたのである。

[7944] 聖グリゴリオスへの礼拝、カノン、第5歌、トロパリオ第2番。

[7945] サヴェリウスとパウロス・サモサテスは、至聖なる三位一体の神秘について誤った教えを説いた。前者は、神は一つの位格であると主張した。すなわち、父として天に、子として地に、聖霊として被造物の中に存在するというのである。サヴェリウスの教えによれば、これらは単に、神が人々に現れる際の既知の形態に過ぎない。旧約聖書では律法者として父として現れ、新約聖書では救い主として子として現れ、今もなお、人々を聖別する聖霊として現れ続けている。　パヴェル・サモサタス（出生地名）は、アンティオキアの司教であり、子と聖霊が、人間の知性と力（理性と霊）が人間の中にあるのと同様に、父なる神の中に存在すると誤って教えた。　キリストを、聖霊と神の知恵に満たされた単なる人間であると見なしたパウロは、アンティオキア教会において、イエス・キリストを神として称える詩を歌うことや、その御名によって洗礼を授けることを禁じた。　この異端の信奉者たちは「パトリパッシアン」と呼ばれた。なぜなら、彼らは神性の三位を区別せず、受肉と受難を父なる神に帰していたからである。

この幻視の後、聖グリゴリウスは、聖ヨハネ・テオロゴスから告げられた言葉を自らの手で書き記し、その文書は長年にわたりネオケサリアの教会に保管されていた[7946]。

その後、聖グリゴリウスはネオケサリアへと向かった。当時、ネオケサリア全体は偶像崇拝の闇に包まれており、この街には数え切れないほどの偶像や偶像崇拝の神殿が存在していた。　毎日、偶像への多くの生贄が捧げられていたため、生贄として屠られ、焼かれる動物たちから立ち上る悪臭が空気を満たしており、これほど人口の多い都市でありながら、信者はわずか17人しかいなかった。

聖グリゴリウスがネオケサリアへ向かう途中、ある偶像の神殿の前を通り過ぎなければならなかった。夕暮れ時で、激しい雨が降り出しそうだった。やむを得ず、聖人とその同行者たちはその偶像の神殿に入り、そこで一夜を明かすことになった。　その神殿には多くの偶像があり、そこには悪霊が宿っており、彼らは祭司たちの前に姿を現して、彼らと語り合っていた。　そこで一夜を明かした後、聖グリゴリウスはいつものように真夜中と朝の賛美歌と祈りを捧げ、悪魔たちの生贄によって穢された空気を十字の印で清めた。グリゴリウスの十字の印と聖なる祈りに恐怖を覚えた悪魔たちは、、自らの神殿と偶像を捨てて姿を消した。 朝になると、聖グリゴリウスは友人たちと共に旅を続けたが、偶像崇拝の司祭はいつもの習慣通り神殿に入り、悪魔たちに生贄を捧げようとした。しかし、悪魔たちはそこから逃げ去っていたため、その姿は見つからなかった。　彼が悪魔たちに生贄を捧げようとしたときも、悪魔たちは現れなかった――以前はいつも現れていたのに。そこで祭司は、なぜ自分の神々が神殿を去ってしまったのかと首をかしげた。彼は悪魔たちが元の場所に戻ってくるよう熱心に祈ったが、悪魔たちは遠くから叫んだ。

「昨夜、砂漠からネオケサリアへと向かっていた旅人がいた場所には、我々は入ることができない。」

これを聞いた祭司は、急いでグリゴリウスを追いかけて追いつくと、彼を止め、怒りを露わにして彼に怒鳴りつけた。キリスト教徒である彼が、彼らの神々の神殿に踏み込むという不遜な行為をしたこと、そして神々が彼のせいでこの場所を憎み、去ってしまったことを非難したのだ。　王の裁きで処罰すると脅し、直ちに彼を拷問者たちの元へ無理やり連行しようとした。聖グリゴリウスは、穏やかで賢明な言葉で祭司の怒りを鎮め、ついにこう言った。

「私の神は全能であり、悪魔たちにも命令を下される。そして、神は私に悪魔たちに対するそのような力を与えてくださったので、彼らは意に反しても私の言うことを聞くのです。」

これを聞いた司祭は怒りを鎮め、聖人に異教の神々を彼らの神殿に戻すよう命じてくれるよう懇願した。 聖人は、自分の書物から小さな紙片を1枚引き抜き、そこに「グリゴリウス、サタンよ、入りなさい」と書き記すと、その紙片を司祭に手渡し、彼の邪悪な神々の祭壇の上に置くよう命じた。するとたちまち、悪霊たちは神殿に戻り、以前と同じように司祭と語り合った。　祭司は、聖グリゴリウスの神聖な力に驚愕した。その力によって、彼は言葉一つで悪霊たちに命じ、それらが彼の言うことを聞くのだ。彼は急いで聖グリゴリウスを追いかけた。聖グリゴリウスがまだ町に着く前に追いつき、異教の神々が彼を恐れ、その命令に従うような力を、一体どこから得たのかと尋ねた。　聖

[7946] 聖グリゴリオス・ニッサスは、この信仰告白の奇跡的な由来について語った後、次のように付け加えている。「もし誰かがそれを確かめたいと思うなら、彼が説教を行い、今もなおその『祝福された御手』によって書かれた原本が保管されている教会に耳を傾けるがよい」。　聖バシレイオス大帝と聖グリゴリオス・ニッサスの祖母である聖マクリナは、その奇跡を行う者本人から直接教えを受け、その信条をカッパドキアに持ち帰り、孫たち――その中には聖バシレイオス大帝も含まれていた――にそれに基づいて教えた。聖グリゴリオス・テオロゴスもまた、この信条を指針とした。　ルフィヌスは、エウセビオス・ケサリアスの教会史の翻訳の中にこれを収録した。また、第5回全地公会議（623年）もこれを承認した。– 奇跡行者グリゴリオスの信条は、古代の最も貴重な記念碑の一つである。その内容は簡潔であるが、神の三つの位格、その同質性、各位格の属性、そして人間に対する働きについて正確な教義を包含しており、それゆえに綿密な研究に値するものである。

グリゴリウスは、祭司の心が信仰を受け入れる準備ができているのを見て、御言葉によって万物を創造された唯一の真の神について教え始め、聖なる信仰の秘義を彼に伝えた。　二人が語り合いながら道を歩いていると、祭司は聖グリゴリウスに、自分の信仰を目に見える形で証明するために、何らかの奇跡を見せてほしいと懇願し始めた。　すると、彼らは、いかなる力も動かすことなどできないと思われるほど巨大な石を目にした。しかし、グリゴリウスはキリストの名によってその石に「その場から動け」と命じると、石は動き出し、祭司が望んだ別の場所へと移動した。この輝かしい奇跡を目の当たりにして、祭司は畏怖の念に打たれ、こう告白した。

「グリゴリウスが説く、唯一の真の全能の神がおられ、神以外に他にはいない」と告白し、即座に神を信じ、この出来事の知らせを至る所に急速に広めた。その結果、ネオケサリアの人々は、グリゴリウス自身がそこに到着するよりも前に、彼の奇跡と悪霊に対する権威について知ることとなった[7947]。彼の到来を知ると、街中が騒然となり、大勢の人々が彼に会おうと出迎えた。というのも、彼が言葉だけで巨大な岩を別の場所へ移動させ、彼らの神々に命令を下すと、神々がその言葉に従うという話を聞いていたからである。

彼にとって異例の状況下で初めてこの大都市に入った聖グリゴリーは、自分のために集まったこれほどの大勢の人々に驚いた様子も見せず、まるで荒野を歩いているかのように、ただ自分自身と道だけを見つめ、周囲に集まった誰にも目を向けようとはしなかった。　そして、このことこそが、民衆にとって、聖人が石に対して行った奇跡よりもさらに崇高で驚くべきものに見えた。グリゴリウスは、随行者たちに四方から押し寄せられながら街に入っていったが、それはまるで街全体がすでに彼の聖職を敬っているかのようであった。しかし、あらゆる世俗的な重荷から身を解き放っていた聖人は、そのことに全く注意を払わなかった。　彼が町に入ったとき、安らぎを得るための住まいは、教会のものも自身のものもどこにもなく、同行者たちは　、どこに身を寄せ、誰の家に宿を借りればよいかと、当惑と不安に陥った。しかし、彼らの師である神に賢明なグリゴリーは、彼らをなだめつつ、ある意味でその臆病さを戒めるかのように、こう言った。

「何ということか。まるで神の御加護の外にいるかのように、どこで肉体を休めることができるかと心配しているのか。私たちが神によって生き、動き、存在しているというのに、神があなたたちにとって小さな家のように思えるのか。それとも、天の住まいが狭すぎて、これ以外に別の住まいを探しているのか。」　あなたがたは、ただ一つの家、すなわち、誰もが所有し、徳によって築かれ、高みへと築き上げられるその家についてのみ心を配るべきである。その家だけが、あなたがたの中で整えられていないことのないよう、ただそれだけに心を配らなければならない……

聖グリゴリウスがこのように同行者たちに説教していたとき、そこにいたある著名で裕福な市民、ムソニウスという人物は、多くの人がこの偉大な人物を自分の家に迎え入れたいという同じ願いと関心を抱いているのを見て、他の人々に先んじて、グリゴリウスに自分の家に滞在し、その訪問で家を光栄に思わせてほしいと懇願した。　他の人々も聖人に同じことを願い出ましたが、彼は最初の人物の願いを聞き入れ、ムソニウスの家に滞在することになりました。グリゴリウスがネオケサリアに入ったとき、そこにはたった17人の信者しかおらず、街全体が無気力な偶像を崇拝し、悪霊に仕え

[7947]「この奇跡の後、――聖グリゴリオス・ニッサスはこう述べている――この男は、直ちに（グリゴリオスの）言葉に信仰を置き、一族、家、妻、子供、友人、司祭職、財産を捨て、自分に属するあらゆる恵みの代わりに、その偉大な人物との交わり、そして彼の労苦や、その神聖な知恵と教えへの参与を選んだ。　ここで、驚くべき行いの規模を雄弁さで誇張する伝記作家たちのあらゆる作為的な工夫は沈黙すべきである。なぜなら、前述の奇跡は、それを語る者の雄弁の力によって、本来あるがままよりも大きくも小さくもならないほどのものであるからだ。　もし誰かが、すでに述べられたこと以上に何かを語ったとしても、この奇跡をさらに大きくすることなどできるだろうか？……石は石の中から拒絶される……、　その石は神の信仰の宣教者となり、不信仰者たちを救いへと導く案内人となる。それは、いかなる声や言葉によっても神の力を説くのではなく、その行いによって、グリゴリウスが宣べ伝えているのは、すべての被造物が等しく服従し、従う神であり、　――感覚を持ち、生き、魂を持つものだけでなく、それ以外のあらゆるものも、あたかも感覚を奪われていないかのように、彼にひれ伏して仕えているのである」……

ていました。　そこでグリゴリウスは心の奥底で神に祈り始めた。「どうか（神よ）、御自身の被造物を見守り、これほど多くの迷い、滅びゆく人々を啓発し、救いの道へと導いてください」。ムソニウスの家に滞在しながら、聖グリゴリウスは不信者たちに真の神についての教えを説き始めた。　当初、その言葉を聞く者はわずかであったが、その日が終わり、太陽が沈む前に、最初の集会にこれほど多くの人が加わったため、すでに大群衆を成していた。

神の御加護は彼にこれほどまでに味方したため、キリストの教会に人々の魂が加わらない日は一日たりともなかった。　大勢の人々が、妻や子供を連れて、聖グリゴリウスの説教を聞き、彼によって行われる驚くべき癒やしの奇跡を目撃するために、ムソニウスの家に集まった[7948]。彼は人々から邪悪な霊を追い払い、あらゆる病を癒やしたため、日ごとに信者たちが教会に加わり、その数は増え続けた。　ほどなくして、主を信じた人々の献金によって、グリゴリウスは見事な教会を建立した。人々は教会の建設のために、持っているものすべてを聖人に捧げ、宝物庫を開き、主の家の美化や孤児の養育、病人の世話のために必要なだけ、彼が取り出せるようにした。　こうしてネオケサリアにおいて神の言葉は広がり、聖なる信仰は広まり、　多神教の偶像崇拝は崩壊し、彼らの忌まわしい神殿は荒廃し、偶像は打ち砕かれた――そして、唯一全能の神、また我らの主イエス・キリストの御名はネオケサリアの地で称えられ、賛美され、神の御力によって聖グリゴリウスを通じて、驚くべき、そして畏れ多い奇跡が成し遂げられた。　聖グリゴリオス・ニッサスの証言によれば、次の奇跡的な幻視は、ネオケサリアにおけるキリストの教会の確立と、そこでの信者の数の増加に特に寄与した。

この町では、古くからの慣習に従い、ある地元の神を称えるための、民衆全体が参加する異教の祭りが行われていた。この祭りには、農村の住民も町の人々と共に祝うため、ほぼ一帯から人々が集まっていた。　祭りの最中、劇場は集まった人々で溢れかえり、皆、よりよく見聞きしようと舞台の近くへ押し寄せた。そのため激しい騒ぎと混乱が生じ、その結果、群衆から一斉の叫び声が上がった――皆、崇められている神に対し、場所を空けてくれるよう懇願したのである。　「ゼウスよ――」と異教徒たちは叫んだ。「私たちに場所をください」。この無謀な祈りを耳にした聖グリゴリウスは、使用人の一人を送り込み、彼らが祈っている以上の広々とした場所がまもなく与えられるだろうと告げさせた。　彼のこの言葉は悲痛な宣告となった。この全国的な祝祭の後、街には壊滅的な疫病が蔓延し、陽気な歌声に泣き声が混じり、彼らの歓喜は悲しみと不幸へと変わり、ラッパの音や拍手の代わりに、街は絶え間ない哀歌の連なりで満たされた。　街に現れた疫病は、予想以上に急速に広がり、火事のように家々を荒らし尽くした。その結果、神殿は治癒を願ってそこに逃げ込んだ疫病に冒された人々で溢れかえり、　泉や湧き水、井戸の周りには、無力な病に苛まれ、渇きに苦しむ人々が群がっていた。しかし、水でさえも病による高熱を鎮めることはできなかった。多くの人が自ら墓地へと向かった。なぜなら、生き残った者だけでは、死者を埋葬するのに十分な人数がいなかったからである。 そしてこの災いは人々に予期せず襲いかかったが、まるで何らかの幽霊が、まず の疫病が現れるはずの家に近づき、その後で死が訪れるかのようであった。このようにして、病の原因が、彼らが呼び出した悪魔が、病を通じてこの不運な惨状を街にもたらすことで、彼らの願いを悪意を持って叶えたことであると皆に明らかになった後、　――彼らは皆、聖グリゴリウスに助けを求め、彼が説く神の力によって病の蔓延を食い止めてくれるよう懇願した。彼らは今や、その神こそが唯一の真の神であり、万物を支配する神であると告白していたのである。　そして、その幽霊が現れて家の

[7948] 聖グリゴリオス・ネオケサリウスが成し遂げた数多くの奇跡により、彼はまもなく「奇跡行者」や「もう一人のモーセ」という称号を授けられた。これは、聖グリゴリオス・ニッサスが、聖グリゴリオス・奇跡行者の生涯について述べた説教の中で証言している通りである。

中に腫れ物が現れることを予告するやいなや、そのような災難に見舞われた者たちに残された唯一の救いの手段は、聖人がその家に入り、祈りによって家の中に侵入した病を退けることだけだった。

こうして、最初にこの方法で疫病から救われた者たちからの噂が瞬く間に人々の間に広まると、人々はかつて無知ゆえに頼っていたあらゆる手段――　神託、清めの儀式、偶像の神殿での滞在といったものはすべて放棄され、皆が偉大な聖人に目を向け、各自が自分の家族を救うために彼を自分たちの元へ招こうと努めたのである。　救われた人々からの彼への報いは、魂の救いであった。なぜなら、そのような経験によって彼の敬虔さが証明されたとき、信仰の力を実際に知った者たちにとって、キリストの秘跡を受けることを躊躇する理由はなかったからである。そして、健康であった頃、秘跡を受けることについて心の中で躊躇していた分だけ、肉体の病によって信仰が確固たるものとなったのである。　このようにして偶像崇拝の誤りが暴かれると、人々は皆、キリストの御名に立ち返った。ある者は、自らに降りかかった病によって真理へと導かれ、またある者は、キリストへの信仰を、潰瘍に対する予防薬として頼ったのである[7949]。

この後、ネオケサリアにおける聖グリゴリオスへの普遍的な畏敬の念は、さらに強まった。都市そのものだけでなく、その周辺地域の住民たちも、聖人の使徒的な奇跡に感銘を受け、彼が語ることも行うこともすべて、神の力によってなされていると信じた。　そのため、世間の争い事においても、彼以上の裁き手は存在しないとみなされ、あらゆる論争や、解決困難で複雑な事案は、すべて彼の助言によって解決された。こうして、聖グリゴリオスの恵み深い影響により、町には正義と平和がもたらされ、いかなる悪も相互の調和を乱すことはなかった。

二人の兄弟は、父の死後、多くの財産を相続し、それを互いに平和に分けた。しかし、彼らには一つの大きな湖があり、その所有権をめぐって激しく争った。というのも、二人ともその湖を独占したいと望んでいたからである。彼らは、奇跡を行う者グリゴリウスを仲裁人として選んだ。　湖のほとりに赴いた彼は、二人を和解させるために多大な努力を払ったが、全く成果は得られなかった。二人の兄弟は頑なで、互いに湖の自分の持ち分を譲りたがらなかったからである。　度重なる争いと確執の末、彼らはもはや互いに戦いを交えようとしていた。というのも、双方に多くの支持者がいたためであり、聖人はその日、かろうじて彼らを戦いの実行から思いとどまらせることができたのである。　夕方になり、皆は戦いを翌朝まで延期してそれぞれの家へ帰っていった。一方、聖人は湖のほとりに一人残り、一晩中祈りを捧げた後、主の御名によって湖に命じた。すなわち、一滴の水も、湿り気さえも残さず完全に干上がり、その土地が耕作や種まきに適したものとなるよう命じたのである。 そして、聖人の言葉通りになった。突然、水はどこへともなく消え去り、大地は乾いた。 朝、二人の兄弟は多くの武装した者たちを率いて湖へとやって来て、戦いを繰り広げてそれを手に入れようとしたが、かつて湖があった場所には一滴の水も見当たらなかった。その土地はすっかり乾ききり、草木に覆われており、まるでそこに水が一度も存在したことがないかのようであった。　この奇跡に打ちのめされた兄弟たちは、思わず互いに和解し、人々は皆、神を賛美した。これこそが、奇跡を行う者によってもたらされた正義の裁きであった。兄弟の間に平和が訪れず、戦いが避けられない状況において、彼は兄弟愛が枯渇することのないよう、湖の水を干上がらせて、争いの原因そのものを消し去ったのである。

その地方には、リコス（[7950] ）という名の川が流れていた。春になると、川は堤防を越えて氾濫し、広範囲にわたり近隣の集落や畑、菜園、果樹園を水没させ、作物を枯らし、人々に多大な被害をもたらしていた。その川のほとりに住む人々は、聖グリゴリオス、　ネオケサリウスの奇跡行者である聖グリゴリウスが水に対して権威を持っていること（彼は大きな湖に命じ、それが干上がったか

[7949] この奇跡に関する記述は、聖グリゴリオス・ニッサスが『聖グリゴリオス・奇跡行者の生涯』の中で語った内容を要約して記したものである。

[7950] リコス――ギリシャ語で「狼」を意味する――は、小アジア北部のポンテ地方を流れる川で、アルメニアの山々から湧き出ている。その名は、流れの速さ、抑えがたさ、そして周辺住民に与えた被害に由来する。

らである）を聞き、老若男女を問わず皆が集まり、聖人のもとへやって来て、その足元にひれ伏し、彼らに憐れみを示し、川の氾濫を鎮めてくれるよう懇願した。　というのも、当時、その川は異例なほど水で溢れ、多くの集落を水没させていたからである。聖人は彼らにこう言った。

「神ご自身が川に限りをお定めになった。川は神の命じられた通り以外に流れることはできないのだ。」

しかし、人々はさらに熱心に聖人に懇願した。彼らの悲しみを目の当たりにした聖人は、立ち上がって彼らと共にその川へと向かい、洪水の際ではない時に川の本流が流れる岸辺にたどり着くと、そこに自分の杖を突き立て、こう言った。

「わがキリストが、お前に命じる。川よ、お前の境界を越えてはならず、その水をこれ以上溢れさせてはならない。この両岸の間を、整然と流れよ。」

するとたちまち、聖人が突き立てたその杖は大きな樫の木へと成長し、水は両岸の間の川床に収まった。それ以来、その川は決して氾濫することはなく、水が増水して樫の木に近づくと、直ちに引き返し、人々の労苦を水没させることはなかった[7951]。

聖なる奇跡行者は、山の近くにある美しい場所に教会を建てたいと願いました。彼が基礎を築き始めたところ、その場所は狭すぎることが判明しましたが、山が邪魔になって、広げることはできませんでした。　そこで聖人は祈りを捧げ、祈りを終えると、イエス・キリストの名によって、教会を広げるのに必要なだけ、その場所から山を動かして退くよう命じました。するとたちまち山が揺れ動き、教会を広く建てるのに十分なスペースができるまで、その場所から退いていったのです。　これほどまでに、この神の御心に適う者の信仰は、山さえも動かすほどであった！多くの異教徒がこの奇跡を目撃し、主のもとへ立ち返り、聖人から洗礼を受けた。彼が満ち溢れていた神の力によって現された偉大な奇跡ゆえに、彼の栄光は至る所に広まった。

こうした奇跡の噂は国中に広まり、人々は皆、それらがキリストへの信仰の力によってもたらされるものと信じ、これらの奇跡によって証しされるこの信仰の仲間になりたいと願った。そのため、コマニ[7952]という名の近隣の町から、聖人のもとへ使節団が訪れ、彼らの地に教会を設立し、ふさわしい司教を任命してほしいと請願した。　聖グリゴリウスは彼らの願いを聞き入れ、数日間その地にとどまり、彼らの信仰と敬虔さを確固たるものにした。そして司教を選出する時が来ると、聖人は、皆の驚きをよそに、かつてはただの炭焼き職人であったアレクサンドロスという、敬虔で神に愛される一人の男を、この高い栄誉にふさわしい人物として指名した。　このようにして、聖グリゴリオス・奇跡行者は、コマナの住民たちが秘めていた宝物を明らかにし、それが後に教会の素晴らしい装飾となったことで、この町の恩人となった。[7953]

[7951] 「この川にとって――と聖グリゴリオス・ニッサスは語る――この木は流れのせき止めとなったが、その地の住民にとっては、それは見物であり、歴史的な物語の題材となっている。　というのも、その川が雨や小川の水で溢れかえり、激しい勢いと恐ろしい轟音を立てて流れ下る際、波の表面がこの木の幹にぶつかることで、再び上方に跳ね上がり、水の流れを川の中央へと導き、　まるでこの木に触れるのを恐れるかのように、水流は迂回してこの場所を通り過ぎる。これこそが偉大なるグリゴリーの力であり、いや、むしろ――彼を通じて奇跡を行われる神の力である！　なぜなら、自然の要素は、まるで奴隷のように、命令に従って思いのままに変化するからだ。それゆえ、湖は乾燥した土地へと変わり、水に浸されていた場所には人々が住み着くようになった。それは、その杖が住民にとって安全な場所にしたからである。この木の名前は今日に至るまで「*杖*」と呼ばれており、地元の人々はグリゴリウスの恩寵と力を記念して、今もなおこの木を守り続けている」……

[7952] ポンテウス地方のコマナ（またはコナニー）は、小アジアの北部、イルノエ川沿いに位置し、古代には豊かで名高い都市であったが、現在は廃墟となっており、ギュメネクと呼ばれている。

[7953] その後、コマナの司教である聖アレクサンドルは、その聖なる生涯によって名声を博し、彼に寄せられた期待を十二分に裏付け、キリストの羊の群れを立派に牧し、4世紀初頭、ローマ皇帝ディオクレティアヌスの迫害の最中に殉教の死を遂げることで、その立派な奉仕に幕を閉じた。– 教会では8月12日に彼の記念日が祝われる

聖グリゴリウスがそこから帰路についたとき、ある不信仰なユダヤ人たちが彼を嘲笑し、彼の中に神の御霊が宿っていないことを示そうと企んだ。彼らは次のように仕組んだ。聖人が通るはずの道に、ユダヤ人たちは仲間の一人を、まるで死んだかのように裸のまま横たえ、自分たちはその上で泣き叫んだ。　奇跡を行う聖人が彼らのそばを通りかかると、彼らは聖人に懇願し、死者に慈悲を示してその体を衣服で覆ってほしいと頼んだ。聖人は上着を脱いで彼らに渡し、そのまま先へ進んだ。ユダヤ人たちは喜びながら聖人を嘲り、罵り、「もし彼の中に神の御霊が宿っているなら、そこに横たわっているのが死んだ人間ではなく、生きている人間であることを悟るはずだ」と言い、仲間を起こそうと呼びかけた。しかし、神はそのような冒涜に対して報いを下し、彼らの仲間を実際に死なせてしまった。　彼らは、彼が眠っているのだと思い、起こそうと肋骨を突いたり、大声で呼びかけたりしたが、返事はない。彼は永遠の眠りについていたのだ。彼が　死んでいるのを見て、彼らは本当に泣き出した。こうして、彼らの笑い声は泣き声へと変わり、死者は死者を葬ったのである。

その後の旅の途中、その国のある場所で、青空の下、敬虔な信者たちの集いが開かれた。皆、聖グリゴリウスの説教に感嘆していたが、ある少年が突然、大声で叫び出した。「聖師はご自身で話しているのではなく、その傍らに立っている誰かが言葉を語っているのだ」と。　集会が解散した後、その少年が聖人の元へ連れて来られると、奇跡を行う聖人は出席者たちに、その少年が悪霊に取り憑かれていると告げた。そして直ちにオモフォルを外し、自らの口元に当てて息を吹きかけ、それを少年の頭の上に置いた。　すると、少年は身もだえし、叫び、地面に倒れ込み、あちこちを駆け回り始めた。まるで悪霊に取り憑かれた者のようであった。　聖人が彼に手を置くと、少年の発作は止んだ。悪霊は彼から離れ、彼は元の状態に戻り、もはや聖グリゴリウスのそばで誰かが話しているのを見たと口にすることはなくなり、完全な癒やしを得た。

不義なデキウス帝の治世[7954]、キリスト教徒への迫害が始まり、至る所でキリスト教徒に偶像崇拝を強要し、従わない者は拷問し滅ぼすという皇帝の勅令が出されたとき――その時、聖グリゴリウスは信徒たちに、激しい苦痛に耐える力や神の賜物を持たない者は皆、身を隠すよう助言した。そうすれば、誰かが大胆にも拷問者たちの手に身を委ねた後、恐ろしい拷問を目の当たりにして怯え、それを耐えられないと感じて、神から離れてしまうことを防げるからだ。「むしろ」とグリゴリウスは言った。「しばらく身を隠し、殉教の業に向けた神の召しと助けを待つほうがよい」。　信徒たちにそのような助言を与えつつ、彼自身も、自分の助祭の一人を連れて荒野へと退き、そこで異教徒たちから身を隠した。王から遣わされた拷問者たちは、ネオケサリアの町に到着すると、まず第一に、その国のすべてのキリスト教徒の代表であり、言葉の羊たちの牧者であるグリゴリウスを探し求めた。　異教徒の一人が、彼がとある山に隠れていることを知り、それを兵士たちに告げ、彼らをその山へと案内した。兵士たちは、狩りで獲物を追う犬のように、また羊をさらおうとする狼のように、急いで山へと向かった。　聖グリゴリウスは、兵士たちが近づいてきており、彼らから逃げたり隠れたりすることはできないと悟ると、両手を天に掲げて神の御加護に身を委ね、自分の助祭にも同じようにするよう命じた。　二人は両手を広げて立ち、祈りを捧げた。一方、兵士たちは山全体をくまなく捜索したが、聖人を見つけることはできなかった。何しろ、何度かそのそばを通り過ぎたときでさえ、彼を見分けることができなかったのだ。何度も捜索を重ねた末、彼らは手ぶらで戻り、山を下りながら、彼らを率いてきた者にこう言った。

「この山では誰も見つからなかった。ただ、互いに少し離れた場所に立っている二本の木を見ただけだ。」

その男は、ここに奇跡が起きたことを悟ると、彼らを残して自ら山へ登り、祈りを捧げている聖人と助祭を見つけると、グリゴリイの足元にひれ伏し、キリスト教徒になりたいという願いを口に

[7954] デキウス――キリスト教を激しく迫害したローマ皇帝で、249年から251年まで在位した。

した。その願いは叶えられ、彼は迫害者からキリストの僕へと変わり、他のキリスト教徒たちと共に身を隠すようになった。

ある日、いつものように神に祈りを捧げていた聖グリゴリウスは、戸惑いを覚え、まるで何らかの感動的な光景を眺めているかのように、恐れおののきながら長い間黙って立ち尽くしていた。やがて十分な時間が過ぎると、彼の顔は明るくなり、喜びに満ちて、大きな声で神に感謝し、荘厳な賛美歌を歌いながら、*「主は祝福される。主は私たちを彼らの牙の餌食にされなかったからだ！」*（詩編123:6）と叫んだ。

助祭は彼に尋ねた。

「神父様、どのような理由で、あなたにこれほどの変化が起きたのですか。今やあなたは喜びに満ちているようですが。」

聖人は答えた。

「子よ、私は驚くべき幻を見たのだ。小さな若者が大いなる悪魔と戦い、彼を打ち負かし、地面に倒して勝利を収めたのだ。」

しかし、助祭はその言葉の意味を理解できなかった。そこで聖人は再びこう言った。

「今、トロアディウス[7955] という名のキリスト教徒の若者が、拷問官の裁判にかけられ、キリストのために多くの厳しい拷問を受けた後、殺され、喜びに満ちて天へと昇っていったのだ。　私は当初、困惑していた。苦痛に打ち負かされ、キリストを否認してしまうのではないかと恐れていたからだ。しかし今、彼が殉教の業を全うし、天へと昇っていくのを見て、喜びを感じている。

この言葉を聞いた助祭は、聖人が遠くで起きていることを間近に見ていることに驚嘆した。そして、彼は神に愛された師に懇願し、自分の目でその出来事を確かめ、何が起きたのかを知ることが許されるよう、また、この驚くべき出来事が起こったまさにその場所を訪れることを禁じられないよう求めた。　グリゴリウスが「殺人者たちの元へ行くのは危険だ」と警告すると、助祭は信仰をもって、「それでも、あなたの祈りの助けを頼りに、勇敢に決心した」と答えた。

「私を神に委ねてください」と彼は聖人に言った。「そうすれば、敵の恐怖など私には及ばないでしょう。」

そして、グリゴリウスが祈りによって、あたかもある種の同行者のように神の助けを彼に授けたとき、助祭は自信を持ってその道を歩み、道中で出会った誰からも身を隠すことはなかった。夕方になって街に到着し、旅の疲れが募った彼は、浴場で体を洗って疲れを癒やす必要があると考えた。その場所にはある悪魔が棲みついており、その破滅的な力は夜の闇にここへ近づく者たちに作用し、多くの人々を死に至らしめていた。そのため、日没後は誰もこの風呂屋へ行き、利用することはなかった。風呂屋に近づくと、助祭は管理人に扉を開けてもらい、風呂で体を洗わせてほしいと頼んだ。しかし、管理人は、この時間に敢えて体を洗おうとした者は誰も無傷で出てこなかったと断言した。夕暮れを過ぎると、この場所では悪魔がすべてを支配し、多くの者が無知ゆえにすでに不治の病にかかってしまい、期待した安らぎの代わりに、泣き叫びながら帰ってきたのだと語った。　しかし、助祭はますますその決意を固め、管理人は彼の断固たる願いに屈して鍵を渡し、自身は浴場から遠く離れた場所に身を引いた。　助祭が服を脱いで浴場に入ると、悪魔は彼に対して様々な恐怖や戦慄を仕掛け、火や煙、獣や人間の姿をしたありとあらゆる幻影を見せつけた。しかし、助祭は十字を切って身を守り、キリストの御名を呼び求めながら、何の害も受けずに浴場の最初の区画を通り抜けた。彼が内側の部屋に入ると、さらに恐ろしい幻影に囲まれた。しかし、彼は同じ手段で、現実の恐怖も幻の恐怖も打ち払った。ついに、彼が浴場から出ようとしたとき、悪魔は扉を力ずくで閉ざして、彼を引き止めようとした。　しかし、十字架のしるしの力によって、扉は開かれた。すると悪魔は、人間の声で助祭に向かって叫び、彼が死の危機から救われたその力を自分のものだと考えないようにと

[7955] 聖殉教者トロアディオスの記念日は3月2日である。

告げた。なぜなら、彼を無傷で守ったのは、神の御加護に彼を委ねた者の声だったからである。このようにして救われた助祭は、その浴場の管理人たちを驚かせた。　その後、彼は自分に起こったすべてのことを彼らに語り、殉教者たちの勇敢な功績が、聖グリゴリオス・奇跡行者が予告したとおりにこの町で成し遂げられたことを知り、師のもとへ戻った。そして、当時の人々だけでなく、後世の人々のためにも、　「誰もが司祭を介して神に身を委ねる」という普遍的な守護の手段を遺したのである[7956]。

迫害が終わると、グリゴリウスは自身の司教座に戻り、信徒たちを集めて、乱れた秩序を再び立て直した。まず第一に、彼はかつての迫害の際に殉教した聖なる殉教者たちの記念日を祝うことを定めた。　キリストの栄光は広まり、悪魔的な多神教は聖グリゴリオスの尽力によって滅びていった。彼は最期を迎えるまでキリストの福音を宣べ伝えることをやめず、教えと奇跡によってネオケサリアとその周辺の住民を神へと導き、その地を真の信仰へと導き、偶像への生贄から清め、　血を流さない犠牲によって聖別した。生涯の終わりに近づき、彼は兄弟であるポンテの司教アフィノドールと共に、パウロス・サモサテスに対する公会議に出席した。ついに高齢に達し、彼は安らかな最期を迎えようとしていた。臨終の際、彼は傍らにいた者たちに尋ねた。

「ネオケサリアには、まだ何人の不信仰者がいるのか？」

すると、彼らはこう答えた。

「偶像崇拝を続けているのはわずか十七人だけで、街全体はキリストを信じています。」

聖人はこう言った。

「私がネオケサリアの司教として着任したとき、キリスト教徒はこれと同じ数――たったの十七人しかおらず、街全体が悪魔に支配されていた。しかし今、私が神のもとへ旅立つにあたり、残っている不信仰者は当初の信者の数と同じだけであり、街全体がキリストのものとなっている。」

そう言い終えると、彼はその魂を神の御手に委ねた[7957]。こうして、ネオケサリアの聖グリゴリオス・奇跡行者は、神に喜ばれる生涯を送り、敬虔にこの世を去った。主が、彼の聖なる祈りによって、私たちにも善き最期を迎えさせてくださいますように。アーメン。

トロパリオ、第8調：

祈りに励み、奇跡を成し遂げながら、その名にふさわしい栄誉を勝ち得た。しかし、父グリゴリーよ、キリスト・神に祈り、私たちの魂を照らしてくださり、私たちが死の眠りにつくことのないよう願ってください。

[7956] この奇跡については、聖グリゴリオス・ニッサスが、聖グリゴリオス・テオドートロス（奇跡行者）の生涯に関する説教の中で詳しく語っている。

[7957] 聖グリゴリオス・ネオケサリウスの福者としての死は、266年から270年の間とされている。死の直前に（264年）、彼は兄のアフィノドール（ポントス司教）と共に、パウロス・サモサタスに反対するアンティオキア公会議に出席した。 – その由来が奇跡的とされる信仰告白に加え、聖グリゴリオス・ネオケサリウスには、「カノニカル書簡」（ボレイ人およびゴート族によるポントスおよび小アジア全土への侵攻に関するもの）と「オリゲネスへの賛辞」がある。– 聖グリゴリオス・チュドトヴォルツの聖遺骨は、当初、彼が建立したネオケサリアの教会に安置されていたが、1587年に聖人の頭部はウリッシポーン（リスボン）へ移された。

コンダク、第2調:

数多くの奇跡を行い、恐るべきしるしをもって悪魔たちを震え上がらせ、あらゆる知恵を持つグリゴリーよ、人間の病をすべて追い払われた。あなたは奇跡行者と称され、その行いによってその名を得られた。

我らの尊き父、ラドネジの修道院長ニコンの伝記[7958]

記念日：11月17日

尊者ニコンは、聖セルギイの修道院からほど近い、ユリエフ・ポルスキー（[7959] ）という町で生まれた。彼は敬虔な両親の家に生まれ、幼い頃から神を敬う心を持って育てられた。まだ若かった頃、彼はラドネジ（[7960] ）の町近くの修道院で兄弟たちと共に修業に励んでいた聖セルギイの天使のような生活について耳にしていた。　その名声が遠くまで広まっていた聖セルギイの功績は、ニコンの魂を深く感動させ、彼の心は、この聖なる人物に会い、その生き方に倣いたいという願いで燃え上がっていた。心を痛め、あふれんばかりの涙を流しながら、ニコンは主なる神に熱心に祈った。

「神よ、主よ、永遠にして慈悲深き王よ。どうか私にこの聖なる人物に会い、生涯を通じて彼に従うことをお許しください。そうして私も彼のおかげで救われ、あなたを愛する者たちに約束されたあなたの永遠の恵みにふさわしい者となれますように。」

そしてまもなく、彼は実家を離れ、聖セルギイの修道院へと向かった。修道院に到着すると、ニコンは偉大なる修行者セルギイに会おうと急ぎ、その足元にひれ伏して、この聖なる修道院で修道士としての戒律を授けてくださるよう、熱心に懇願した。　聖セルギイは、その若者の分別と心の清らかさを見抜き、たちまち心を尽くして彼を愛した。　しかし、霊的な目で彼の中に将来、神の光を放つ灯火となる存在を見抜いたため、ニコンを試練なしに放っておくことはせず、かつてエウフィミオス大聖人が、まだ若き日のサヴヴァ・オスヴェシュチェンヌイが彼の元を訪れた際に取ったのと同じように彼に接した。 彼はサヴヴァを自分の修道院に受け入れず、遠く離れた にある修道院、すなわち彼の同修である聖テオクティスト[7961] のもとへ送り出した。 こうして、聖セルギイもまた、その若き少年を、自身の弟子であり、セルプホフ修道院の創設者であるアファナシイ・ヴィソツキー――徳高い生活で知られ、修道生活の修行に熟達した人物――のもとへ、学びのために送り出したのである[7962] 。

[7958] トロイツェ＝セルギエフ修道院の写本、モスクワ都主教フィラレートが編纂した聖ニコンの伝記、およびその他の参考資料に基づいて記述されている。

[7959] *ユリエフ・ポルスキー*は、ウラジーミル市から北西へ86ヴェルスタの地点にある。ユーリー・ウラジーミロヴィチ公によって創設され、その名に由来する。また、「*ポルスキー*」という名称は、周囲を囲む野原にちなんで付けられたものであり、リヴォニアのユリエフと区別するためでもある。現在は、ウラジーミル州の郡庁所在地である。

[7960] 古代*のラドネジ*の跡地には、現在ゴロディシュチェまたはゴロドクという村がある。この村は、トロイツェ＝セルギエヴァ・ラヴラからモスクワ方面へ12ヴェルスタの地点に位置している。

[7961] 「聖エウフィミイは、主に長老の修行者たちで構成される修道会に、時に個別の指導を必要とする年齢の若者を加えることは不適切であると考えていた。おそらく、聖セルギイも若きニコンについて同様に考えていたのだろう。彼は、ニコンを従順と謙遜の修行において試すことを決意した。　また、彼の将来の運命を見据え、年下の者がラヴラの最年長の修道士たちを統率することになる運命にある者には、少なくとも若者としてではなく、すでに司祭の位にある者として彼らの前に現れることを望んだのである。」（『聖ニコンの生涯』、フィラレート・モスクワ都主教編、4ページ）。

[7962] 聖アファナシー・ヴィソツキーは、セルプホフのヴィソツキー修道院の創建者であり、聖セルギイの最も愛された弟子の一人であった。

「何も迷わず行け」と彼は少年に向かって言った。「そして、もし神の御心ならば、そこで修道者の姿を受け入れることになるだろう」。

ニコンは、尊者からのその命令を謙虚に受け入れた。神への愛に燃え、修道士となることを切望して、彼は急いで至福のアファナシイのもとへ向かった。

彼の修道院に着くと、ニコンは謙虚にアファナシイのケリアに近づき、静かに扉をノックした。アファナシイは窓を少し開けて、彼に尋ねた。

「何の用か、誰を探しているのか？」――長老は静寂を愛し、めったに自分のケリアから外に出ることはなかった。

少年は彼に地面まで頭を下げて、こう答えた。

「偉大なるアッバよ、至福のセルギイが私をあなたのもとへ遣わしました。私に修道服を着せてくださるようお願いします。」

これを聞いて、長老は彼を見もせず、厳しい口調で言った。

「お前は修道士にはなれない。修道生活は偉大な業だ。お前は若すぎるし、長老たちの規則は厳しい。」

少年は答えた。

「父よ！人は皆同じではありません。どうか私を受け入れてください。修道生活の困難に耐えられるかどうかは、時が経てば分かるでしょう。」

しかし、長老は続けた。

「多くの者がここへやって来たが、怠惰になり、断食や禁欲の困難に耐えきれず、逃げ去っていった。お前にも言うが、ここにとどまることはできない。別の場所へ行き、断食に専念せよ。」

この言葉を聞いて、心の中に神の炎を燃やす少年は、涙ながらに、あらゆる苦難を忍耐強く耐え抜くと長老に誓った。長老は、少年の溢れる涙と修道生活への熱い志を見て、彼を自分の部屋へと招き入れ、こう諭した。

「わが子よ、私が言ったことで気を悪くしてはならない。修道者の業は偉大なものである。修道士たちは自発的な殉教者と呼ばれ、その苦しみは格別である。　多くの殉教者は、短期間の苦難を経てこの世を去った。しかし、修道士たちは生涯を通じて苦難に耐え続け、迫害者から傷を負わされることはないものの、肉体の誘惑に翻弄され、心の敵と戦いながら、最期の息を引き取るまで苦しむのだ。　それゆえ、わが子よ、もしあなたが主に仕えたいと願うなら、敵によってもたらされるあらゆる誘惑と苦しみを忍耐をもって耐え忍ぶことができるよう、あなたの魂を整えておきなさい」。

少年は老人の足元にひれ伏し、かろうじてこう言い出した。

「どうか、私を憐れんでください！」

すると、長老は彼を立ち上がらせ、こう言った。

「立ちなさい、わが子よ！主はあなたを御自身の戒めの道へと導いてくださる。私がこれらすべてをあなたに語ったのは、私自身も罪深い人間でありながら、神の御業を担うことを引き受けたからである。今、あなたの願いは叶うだろう。」

そう言うと、長老は祈りを捧げ、ニコンに修道士の装いを授けた。

アファナシイは、若き修道士に徳を教え、神へと導くあらゆる苦難を耐え忍ぶよう諭し、彼の魂を勇気と強さで満たそうと努め、あらゆる面で彼の手本となった。　一方、ニコンは彼の指導の下で祈りに励み、徳、断食の行い、絶え間ない自己省察において目覚ましい進歩を遂げた。彼は清らかさ、謙遜、柔和さを保ち、神の聖書に熱心に学び続けた。　少年のそのような勤勉さを見て、アファナシイは彼に対して父のような慈愛を抱き、さらなる修行へと励まし、彼が徐々に修道者として完成していくよう導いた。

ニコンが成人すると、アファナシイと修道院の兄弟全員の願いにより、神の御前に立つにふさわしい者として、司祭の位を授けられた。そして、高潔なニコンは、　司祭の位を受け、格別の恵みにあずかるや、敬虔な行いへの熱意をさらに強めていった。

修道院でしばらく過ごした後、ニコンは再び、偉大な長老であり修行者である聖セルギイに会いたいという抑えきれない願望に駆られた。彼から祝福を受け、神に導かれた教えを聞きたいと願ったのである。　ニコンはアファナシイに熱心に懇願し、彼のために祈った上で、修道院から平穏に送り出してくれるよう頼んだ。アファナシイはニコンを引き留めることはせず、祈りを込めて彼を見送り、去らせた。

聖セルギイの修道院に到着し、神に愛された師の姿を目にすると、ニコンは熱い涙を流しながらその足元にひれ伏し、祝福を請うた。聖人は彼を訪問者として喜んで迎え入れただけでなく、自らの修道院に留まらせた。

その後、聖セルギイはニコンに、修道院の兄弟たちに全力を尽くして仕えるよう命じ、ニコンは与えられた務めを熱心に果たし、絶え間なく祈りと徹夜祷に励んだ。　こうした功績と敬虔な生活に対し、聖セルギイはニコンに特別な愛情と信頼を寄せ、彼に自分と同じ独房に滞在するよう命じた。　ここで、神に賢明な師との対話を通じて、聖ニコンは自分にとって最高の霊的知恵の学び場を見出し、聖人の身近な模範の中に、徳の偉業に向けた新たな励ましを見出した。　また、その先見の明に満ちた導きと力強い祈りによって、ニコンは誘惑から身を守る力、弱さに対する強靭さ、そしてこの祈りの交わりにおける天国のような慰めを見出した。セルギイの愛に満ちた心は、ニコンにとって開かれた扉であり、そこから恵みの光と平安が彼に注がれた。　また、セルギウスに対するニコンの誠実な心もまた、父である彼にすべての思いや意図を打ち明けるための開かれた扉であり、いかなる疑いや動揺の霧も、彼の良心の清らかさを曇らせることのないようにしていた。　こうして、水の泉のほとりに植えられた木のように、ニコーンは師のすべての指導と教えを信仰をもって受け入れ、その行いにおいて徳の豊かな実を結んだ。

賢明な導師である聖セルギイは、内なる眼をもって、ニコンの中に輝き出ようとしている至高の恵みを見抜き、自らの後継者として彼を修道院の院長に任命することを望んだ。　当初、セルギイは兄弟たちへの配慮の一部をニコンの肩に委ね、彼を修道院長に次ぐ第二の立場に据えた。ニコンはこの新たな務めを、細心の注意と警戒心を以て全うし、任された兄弟たちに対して絶え間ない配慮を尽くし、一人ひとりに愛と父のような慈しみをもって接した。　ニコンにこれほど有能な修道士たちの指導者を見出したセルギイは心から喜び、ついに自身の死の6ヶ月前にニコンを呼び寄せ、皆の前で、有能な指導者として、修道院と修道士たちの世話の任を彼に託した。　ニコンは、修道院全体の指導という困難な責務を引き受けることを望んではいなかったが、師の命令に逆らう勇気はなく、従順な息子のように謙虚にその命令に従った。

ほどなくして、聖セルギイは主のもとへ召された[7963]　。その忠実な弟子の心は、深い悲しみに苛まれた。

心を痛め、あふれんばかりの涙を流しながら、彼はまるで聖人がまだ生きているかのように語りかけた。

「尊き父よ、あなたは去ってしまわれました。私のすべての希望でした。神の次に、私は誰に避難所を見出し、どこに慰めを見出せばよいのでしょうか？」

そして、聖人の寝台にひれ伏し、その尊い遺骨を抱きしめながら、彼は師と引き離されるよりは、むしろ師と共に埋葬されることを望んだ。

大いなる嗚咽と泣き声の中で、師の聖なる遺体を埋葬した後、ニコンは師の後を継いで修道院の指導者となった。彼は、この修道院の偉大な創設者セルギイが定めたこと、そして命じたことをす

[7963] 聖セルギイの逝去は1392年9月26日であった。

べて正確に実行し、修道院長として兄弟たちと労苦を分かち合いながら、一人ひとりを慈しみ、細やかに世話を焼いた。　主への奉仕に励む者たちには、その行いを怠らないよう励まし、怠慢で怠惰な者たちには、悲しみを込めて、彼らがこの世を捨てたことを忘れず、自らの救いを念頭に置き、永遠の報いを失わないよう、世俗の心配事に溺れてはならないと諭した。　彼は、修道院内の修道士たちが働くすべての場所を巡回し、忍耐をもって労苦に耐えるよう励まし、諭すことを常としていた。その際、自らも共同の労働に参加し、兄弟たちの模範となっていた。　その柔和さ、兄弟たちに対するな父のような思いやり、そして統治や助言における英知によって、ニコンは兄弟たちの尊敬と愛を勝ち得ただけでなく、その名声はセルギエフ修道院の壁をはるかに超えて広まり、ニコンの名は「ある種の聖化」として、都市や村々で至る所で称賛された。　多くの敬虔で名高い人々が、魂の益を得るための教えを求めて彼のもとを訪れ、彼は偉大な霊的医師として、すべての人を父のような温情をもって迎え入れた。

しかし、何よりも沈黙と孤独の中での祈りを愛したニコンは、この世的な名声に惑わされることはなく、むしろそれを重荷に感じていた。　そこで、神の御心を行おうとする者は、何よりもまずこの世のあらゆる誘惑を軽蔑し、憎むべきであるという考えから、ニコンは信徒たちを率いることを避け始め、ついには人里離れた独房に閉じこもった。　兄弟たちはこれを深く嘆き、彼が去って自分たちを指導者なしに置き去りにすることを望まず、涙ながらに、羊飼いのいない羊のように自分たちを置き去りにしないでほしいと懇願した。しかし、彼はその決意を曲げず、兄弟たちに懇願によって自分の心を傷つけないでほしいと頼んだ。　ニコンのこれほど揺るぎない意志を見て、兄弟たちは彼を引き留めることはしなかった。彼が指導者としての重責から身を引くのは、肉体の安らぎのためではなく、より高次の功徳と神を想う静寂を求めてのことだと知っていたからである。　指導者なしではいられない状況下、兄弟たちはニコンの弟子の一人であるサヴァ――徳高い生活で輝いていた人物――を選び、ニコンの祝福を得て、彼を自分たちのイグメンに任命した[7964]。

サヴァが信徒たちを熱心に導き、至福のセルギイの祈りに支えられながら、ニコンは六年間沈黙を守り続けた。しかし、六年が経過すると、サヴァも指導者の座を去った。　そこで修道者たちは、あたかも尊者ニコンに管理業務から休息を与え、彼が切望していた沈黙の生活を楽しんでもらうかのように、再び彼の元を訪れ、涙ながらに懇願し、再び彼らを指導下に置くよう説得した。ニコンが今もなお指導と権威を拒もうとしているのを見て、修道者たちは彼にこう言った。

「父よ、あなただけが自分の利益を求めるのはふさわしくありません。隣人の救いにも心を配ってください。」

修道士たちのこの執拗な懇願と彼らの愛に押され、ニコンは愛する隠遁生活と別れを告げ、兄弟たちの願いを受け入れた。ただし、彼らが毎日、隠遁の修行と祈りのために彼に一定時間を割いてくれるという条件付きであった。

聖なる修道院での生活は、静かに、神に喜ばれるように流れていた。一方、ニコンは絶え間なく祈りの徹夜を守り、神の言葉と教父たちの著作に学び続けていた。

しかし、そこへ、凶暴なエディゲイ[7965]率いる野蛮な軍勢がロシアの地に侵攻したという噂が広まった。タタール軍団の接近は、ロシア全土を恐怖と戦慄に陥れた。尊者ニコンは、　邪悪な敵からの救いを切に祈りつつ、この修道院の偉大な創設者である聖セルギイに祈りを捧げ、彼が万物の主キリストの御座の前で祈りを捧げ、聖なる修道院が不敬虔なアガリア人の手によって荒廃することなく、また、信仰の弱い者たちの信仰が異教徒の勝利によって揺るがされることのないよう、と願った。　そしてある夜、ニコンは祈りの労苦の後に休息をとろうと座り、うとうとと眠りかけていた。す

[7964] サヴァ・ドゥベンスキー（後にズヴェニゴロドスキー、あるいはストロジェフスキーと呼ばれるようになった）。彼の記念日は12月3日である。

[7965] エディゲイの侵攻は1408年の末に行われた。

ると突然、聖ペトロと聖アレクシオスが、聖セルギオスに付き添われて彼の独房に入ってくるのが見えた。聖セルギオスは彼に向き直り、こう言った。

「主の御心により、異民族の侵攻が起こり、この地にも及ぶこととなった。しかし、わが子よ、嘆くことなく、勇気を奮い起こし、心を強く持て。この試練は長くは続かず、この修道院は荒廃することなく、むしろさらに広まっていくであろう。」

その後、聖人たちはニコンに平安と祝福を授けると、姿を消した。我に返ったニコンは素早く立ち上がり、自分の独房の扉へと歩み寄ったが、扉は鍵がかかっていた。鍵を開けて外に出ると、聖人たちが彼の独房から教会へと遠ざかっていくのが見えた。その時、彼はこれが夢ではなく、真の幻視であったことを悟った。

神の御心に従順に、ニコンは予言が成就するのを待った。まもなく、その大軍でロシアの地を埋め尽くした野蛮人たちが、聖セルギイの修道院にも到達し、そこにあるすべてを荒廃と炎にさらした。　聖ニコンと修道士たちは、天からの啓示に先んじて、事前に修道院を離れ、いくつかの聖遺物や私物を持ち出した。こうして、聖セルギイの書物や祭具の一部が救われ、今日まで残されている。

危険が去ると、ニコンと修道士たちは聖なる修道院の焼け跡へと戻った。修道院は灰燼に帰し、聖地は異教徒たちによって穢されていた。　しかし、ニコンは悲しみや落胆に屈することもなく、その奮闘の勢いを弱めることもなかった。勇敢な戦士が敵に初めて敗れたとしても逃げ出さず、勇敢に力を振り絞って勝利を収めるのと同様に、彼もまた、穏やかで揺るぎない決意をもって修道院の再建に取り組み始めた。　良き羊飼いのように、彼はまず散り散りになっていた修道者たちを集め、彼らと共に修道院の建設に尽力した。3年足らずで、修道生活に必要な建物が建てられた。一方、共同の祈りの場としては、当初はおそらく食堂を礼拝堂として使用していたと思われる。　同時に、ニコンは「命の源である聖三位一体」の名を冠した木造の教会堂の建設を急ぎ、それは1411年9月25日、聖セルギイの帰天の日に奉献された。

尊者ニコンの帰還と修道院の復興の噂が周辺地域に広まると、至る所から多くの修道士や信徒が彼のもとに集まり始めた。　ニコンはすべての人を父のような慈愛をもって迎え入れ、良き羊飼いのように、誰一人としてその配慮から外すことなく、一人ひとりに有益な教えを授け、彼らの魂を啓発し、生活を送るための規範を示した。修道院は廃墟の中から再生し、ますますその規模を広げていった[7966]。

思いやりのある指導者として、聖ニコンは修道院の美化への配慮も怠りませんでした。この点における彼の最後の偉業は、師であるセルギイの棺の上に、「命の源である聖三位一体」の名を冠した石造りの聖堂を建立したことでした。

工事のまさに始まり、石造りの聖堂のための堀を掘っていた際、聖セルギイの朽ちることのない聖遺骨が発見され、その栄光が称えられました[7967]。この偉大な師の聖遺骨の発見を、ニコンは自身の労苦と忍耐に対する喜びに満ちた冠であり、甘美な報いとして受け止めました。　皆が歓喜する中、聖者の聖遺骨は新しい聖遺骨箱に納められ、石造りの聖堂[7968]内に安置される場所が整うまで、

[7966] ニコンの時代、セルギエフ修道院は、寄進や購入によっていくつかの土地を取得した。ニコンの献身的な尽力により、修道院は物質的な豊かさに加え、霊的な豊かさも増していった。　彼の在任中、また彼の指示により、セルギエフ修道院では、いくつかの礼拝用書物のほか、グリゴリー・シナイートの章を含む『天梯』の写本2部、アッバ・ドロフェイの教訓、フィリッポス・プスティニクの『ディオプトラ』にアッバ・バルソノフィイの回答およびイシキイの訓示が加えられた写本が作成された。（『セルギエフ・ラヴラ目録』、155、156ページなど）。

[7967] 聖セルギイの聖遺骨の発見は、聖人の帰天から30年後の1422年7月5日に行われ、これを記念して祝祭日が制定された。

[7968] この聖三位一体に捧げられた石造りの教会は、尊者ニコンによって建設されたものであり、現在も現存するトロイツキー大聖堂である。

一時的に木造の聖堂[7969] に安置された。偉大なるセルギイの聖遺骨の安息の地として、新しい聖堂は敬虔な愛と熱心な祈りを込めて建設され、装飾された。　この聖堂の建設にあたり、ニコンは賢明な建築家と熟練した石工たちを集め、彼らは神の御加護により、その建設を迅速に完了させた。　新しい教会は奉献され、その奉献式において、聖セルギイの聖遺骨が移され、そこに安置された。聖人の御業であり、何世紀にもわたって揺るぎないセルギイの安息の地であるこの美しい教会は、今もなおそこで祈りを捧げる人々を聖別しており、不敬虔な敵の手もこれに触れることはなかった[7970] 。

ニコンは、聖堂の内部装飾や壁面の壁画制作にも心を配った。この作業のために、彼は徳高い生活で知られ、イコン画に熟達した二人の断食修道士、ダニイルとアンドレイを招いた[7971] 。彼らの献身的な努力と指導のもと、聖堂はイコン画によって見事に装飾された。　ニコンは、教会の壁画による装飾が完了したのを見て、大いなる喜びをもって神に感謝を捧げた。

「主よ、感謝いたします」と彼は言った。「私の願いを無視されることなく、不肖の私に、このすべてをこの目で拝見する恵みを授けてくださったことを、あなたの至聖なる御名を賛美いたします。」

この頃、ニコンはすでに高齢に達していたが、熱意と気力の衰えはなく、肉体の衰えも彼の厳格な修行を弱めることはなかった。　修行において至高の境地に達した彼は、人が神において豊かになるあらゆる種類の富を備えていた。彼はまるで、神に従って生きるという驚くべき熱意に燃えていたかのようであった。彼にとっての糧は節制であり、富は貪欲のなさであった。その老いた体は、ただ一着の粗末な羊毛の衣で覆われていた。

ついに、聖ニコンは死の刻を目前にしていた。老いも一因であったが、厳しい断食の修行や長きにわたる数々の病も相まって、その肉体は消耗し、力を失ってしまった。

主のもとへ旅立つ時が近いことを予感したニコンは、兄弟たちを呼び寄せるよう命じた。兄弟たちが涙を流しながら彼の病床を取り囲む中、聖人は少し体を起こし、彼らに最後の訓戒の言葉を語った。

彼は、修道院で定められた昼夜の祈りの儀式を守ること、修道院から頻繁に外に出ないこと、誘惑に遭っても忍耐を保つこと、修道院の指導者たちへの服従を守ること、　怠惰――悪徳の巣――を憎み、勤勉を愛し、それを聖なる詩篇の詠唱と結びつけ、完全さへと導く美徳の母である沈黙を喜びをもって守るよう遺言した。これに博愛に関する訓戒を加え、彼は兄弟たちに次のように遺言した。

「もし可能ならば、誰一人として手ぶらで帰してはならない。そうすることで、乞食の姿で現れたキリストご自身を、知らず知らずのうちに軽んじてしまうことのないように。　目を覚まし、絶えず祈りなさい。そうすれば、主があなた方を敵から無傷で守ってくださり、あなたがたも私の勧めに従って、貞潔と従順の誓いを守ることができるでしょう。」

兄弟たちに対し、自分に遺されたすべての規則を守るよう訓示を終えると、ニコンは黙り込んだ。そして、魂が肉体から離れる前に、幻視の中で、彼は聖セルギイと共に過ごす将来の安息の地を

[7969] 聖セルギイの聖遺骨の上に建っていた木造の教会は、新しい場所（現在は聖霊降臨教会がある場所）に移され、石造りの教会が建設されるまでの間、その中に聖遺骨が安置された。

[7970] 聖ニコンは、諸公爵やボヤールの中にいた聖セルギイの記憶を尊ぶ人々の協力を得て、トリオツキー大聖堂を建設した。これらの人々の中でも特に重要であり、教会の建設においてニコンに最も協力したのは、聖セルギイの洗礼の息子、すなわち洗礼子であるズヴェニゴロド＝ガリチ公ユーリー・ドミトリエヴィチ （ドンスキーの息子）であった。[1422年または1423年に教会の建設を開始した聖ニコンは、亡くなる直前までその建設と整備に尽力した]。

[7971] ダニーイル・チェルニーとアンドレイ・ルブリョフ――モスクワのアンドロニコフ修道院の修道士たち――は、当時の著名なイコン画家であった。彼らが描いたイコンは、今日に至るまで高い名声を博している。現存する彼らの作品の中でも、特に注目すべきは、セルギエフ・ラヴラのトロイツキー大聖堂にある聖堂用イコンである。

示された。そのことを兄弟たちに明確に明かすことなく、自らの謙遜さゆえに、ニコンは死の直前の衰弱の中で、突然こう言った。

「私を、父の祈りによって私のために用意されたあの明るい聖堂へ連れて行ってください。もうここにはいたくありません。」

そう言うと、ニコンはキリストの聖なる御体と御血の聖餐を拝領した。その後、迫り来る自らの死を兄弟たちに告げ、彼はこう述べた。

「兄弟たちよ、私は今、この肉体の束縛から解き放たれ、キリストのもとへ旅立つ。」

彼らに最後の祝福を与え、「わが魂よ、汝に定められた場所へ去れ。喜びをもって行け。キリストが汝を呼んでおられる」と自らに語りかけた後、ニコンは最後に十字を切って、その誠実で勤勉な魂を主の御許に祈りを込めて委ねた。 それは1426年11月17日のことだった。

ニコンは36年間にわたり修道院長を務め、修道者の務めを何一つ怠ることなく、キリストから託された羊の群れを神に喜ばれるように導き、彼らに徳の至高の行いを教え込んだ。修道者たちは、父であり師である彼との別れを嘆き、涙を流した。 詩篇の詠唱と葬送の聖歌を捧げて彼を見送った後、修道者たちは、尊ばれる父にふさわしい敬意をもって、その尊い遺体を大地に委ね、聖セルギイの聖遺骸の近くへ安置した。そこでは今日に至るまで、聖三位一体の栄光を称える祈りの歌が捧げられている。 ——父と子と聖霊の栄光のために[7972] 。

その偉大な功績と聖なる生涯により、尊者ニコンは生前に主から洞察の賜物を授かり、死後は奇跡を行う賜物を授かった。尊者の数ある奇跡のうち、ここではそのいくつかを挙げておこう。

ある時、ニコンは、アカキイという名の弟子の一人を、聖セルギイの修道院に属する村の一つへ遣わそうとした。これに服従することを望まなかったアカキイは、こう言った。

「私が世俗を捨てたのは、町や村を歩き回るためではないのです。」

聖人は長い間アカキイを説得したが、彼はどうしても修道院長からの命令に従おうとしなかった。そこで聖人はこう予言した。

「よく聞け、アカキイよ。もしも君が自らの意志でそこに赴くことになれば、その不従順に対する報いを受けることになるだろう。」

その直後、聖ニコンは主のもとへ召された。一方、アカキーは聖なる父から予言されたことをすべて忘れ去り、聖ニコンが彼を送り出そうとしていたまさにその村へと向かった。 そしてそこで、聖人が予言した神の裁きが突然彼を襲った。彼は正気を失い、兄弟たちが彼を修道院へ連れ戻さなければならなかった。そこで聖ニコンが現れ、杖を手に持ち、非難の言葉を浴びせてこう言った。

「アカキイよ！ お前が世俗を捨てたのは、町や村を巡るためだったのか？」

すると、アカキイは大きな恐怖に襲われ、狂ったように叫び始めた。彼は数日間、聖セルギイと聖ニコンの聖遺骸の前で、涙ながらに自分の罪の赦しを祈り続け、修道院の兄弟たちも同様に熱心に彼のために祈りを捧げた。 そして、キリストの恵みと聖人たちの祈りによって、アカキーは罪の赦しを受け、癒やされた。彼は、このことすべてを、尋ねてくる多くの人々に、自ら涙ながらに語っていた。

[7972] 聖ニコンは、トロイツキー大聖堂の外、その南側の壁際、大聖堂内に聖セルギイが埋葬されている場所の向かい側に埋葬されている。 聖ニコンは1547年の公会議で聖人として列聖されたが、彼のための礼拝式文と伝記は、聖イオナ都主教の意向により、パホミイ・ロゴフェトによってその約100年前にすでに執筆されていた。 聖ニコンの棺の上には、1548年に教会が建てられた。1623年、すなわち76年後、この最初の教会の跡地に、新しく大きな教会が建てられた。この2番目の教会が、現在に至るまで現存している。 [聖セルギイの棺は、石の壁一つを隔てて、その弟子である聖ニコンの棺と分かれています。教会の北西の隅、北側の壁に沿って、聖ニコンの遺骨が地中または地下に安置されている棺——墓碑——が立っています]。

この世での生涯において、聖セルギイと聖ニコンは互いに特に親密な関係にあった。この相互の親密さは、永遠の命においても彼らを離れることはない。なぜなら、聖人たちの愛は、神の愛と同様に、時の法則に縛られることがないからである。二人はしばしば共に現れ、共に奇跡を行なった。

モスクワに住むシメオンという名の男は、聖人の予言通りに生まれたが、重病にかかり、身動きもできず、眠ることも、食事も取れず、まるで死人のように病床に横たわっていた。このように苦しんでいたある夜、彼は聖セルギイに助けを求めてこう叫んだ。

「尊者セルギイよ、どうか私を助けてください。この病から私を救ってください。あなたが存命の頃、私の両親に深い慈しみを示し、私の誕生を予言してくださったではありませんか。この重病に苦しむ私を、どうか見捨てないでください。」

すると突然、二人の長老が彼の前に現れた。そのうちのひとりはニコンであった。病人はすぐに彼だと気づいた。生前にこの聖人を個人的に知っていたからである。そして、現れたもう一人が聖セルギウスご本人であることを悟った。　その尊い老聖人は、病人の額に十字を刻み、その後、ニコンに、病床のそばに置かれていたイコンを取り出すよう命じた――それはかつてニコン自身がシメオンに贈ったものだった。すると、病人は自分の皮膚がすべて体から剥がれ落ちたかのように感じた。その後、聖人たちは見えなくなった。　その瞬間、シメオンは自分が完全に回復したのを感じた。彼は病床から身を起こしたが、もはや誰も彼を支えてはいなかった。そこで彼は、皮膚が剥がれたのではなく、病気が去ったのだと悟った。　彼の喜びは計り知れないものであった。立ち上がると、彼はこの予期せぬ、そしてこれほどまでに驚くべき癒やしについて、聖セルギイと尊者ニコンの両者に熱心に感謝し始めた。

特に多くの奇跡が、リソフスキーとサペガ率いるポーランド軍によるトロイツキー修道院の包囲戦の際、聖なる修道院が敵から数多くの災難に見舞われた時に、聖セルギイと聖ニコンの両聖人によって行われた。　ニコンは聖セルギイと共に、包囲された修道者たちの元へたびたび現れ、神の助けへの希望をもって彼らを励まし、勇気づけただけでなく、修道院を包囲していた敵の前にも現れ、神の怒りをもって彼らを威嚇し、脅かした[7973]。包囲軍やその指揮官たちの多くは、修道院の城壁の上を、セルギイとニコンのような二人の光り輝く長老が歩いているのを目撃した。一人は香炉で城壁に香を焚き、もう一人は聖水で城壁に聖水を振りかけていた。

ある日、敵による修道院の包囲がまだ続いており、包囲された者たちの間で飢えやあらゆる苦難による病気が蔓延していたとき、ニコンは夢の中で司祭補のイリナルフの前に現れ、彼にこう言った。

「病に苦しむ者たち全員に、今夜雪が降ると伝えなさい。そして、病から癒されたいと願う者は皆、その雪で体をこすりなさい。」

イリナルクは畏敬の念を抱きながら目を覚まし、翌朝、奇跡を行う者ニコンから告げられたことを周囲の人々に伝えた。そして実際、その夜には雪が降り、信仰を持ってその雪で体をこすった者は皆、健康を取り戻した[7974]。

ここにも、ごく最近（1846年）の事例がある。修道院の病院で、修道服を着た見習い修道士ガブリエルが神経熱にひどく苦しんでいた。彼は数日間意識を失っており、この病を乗り越えられないだろうと思われていた。　聖ニコンの記念日の夜、彼は自分の魂がまるで肉体から離れ、ある深淵へと突き進んでいるのを見た。心の中で、彼は聖セルギイと聖ニコンの両聖人に、悔い改めによって永遠の命に備えるため、再び生かされるよう祈り始めた。（その間、他の者たちが見ていたように、彼は意識も動きもなかったまま横たわっていた）。　すると突然、扉が開いたかのように見え、二人の

[7973] リソフスキーとサペガの指揮下にあるポーランド軍によるトロイツキー修道院の包囲戦は、1608年9月23日に始まり、1610年1月12日に終結した。

[7974] 『トロイツキー・セルギエフ修道院包囲の伝承』、アヴラアミイ・パリツィン著。モスクワ、1822年、157頁。

光を放つ長老が入ってきた。一人は杖を持っており、彼はその人物を聖セルギウスと、もう一人を聖ニコンと認めた。聖セルギウスは杖で病人を指し示しながら、聖ニコンに「助けてやりなさい」と言った。　聖ニコンは近づき、その姿が現れただけで、病人に力と喜びを満たした。病人は体を起こし、十字を切った。すると、聖人たちは見えなくなった。ガブリエルは意識を取り戻し、病気は去り、残ったのは衰弱だけだった[7975]。

トロパリオ、第1声：

従順の良き管理者であられた、永遠に記憶される聖ニコンよ、あなたは聖三位一体の美しい教会を、あなたの父を称えるために建て上げられました。　それゆえ、私たちもまた、あなたの愛の子らとして、あなたにこう叫びます。「あなたに力を与えた方に栄光あれ。あなたを冠した方に栄光あれ。あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。」

コンダク、第4調：

あなたの霊的指導者であるニコン神父に、あらゆる面で深く寄り添い、彼から教えを受け、すべてにおいてキリストに身を捧げ、修道士たちの長であり、敬虔な同修者であったあなたよ。彼らと共に、私たちすべてのために、キリスト・神に絶えず祈ってください。

聖ラザロ・ピセツの記念日

記念日11月17日

聖ラザロはコンスタンティノープルに暮らし、若き頃から修道生活への献身に身を捧げました。幼い頃から厳しい生活を送り、絶えず断食と祈りに専念していました。　しかし、何よりも彼は慈善の行いに励み、飢えた者に食べ物を与え、裸の者に衣服を授けた。その修道者としての敬虔な生涯により、尊者ラザロは司祭の位を授かった。これはビザンツ帝国のテオフィロス帝の治世のことである[7976]。

また、テオフィロス帝の治世下において、聖ラザロは聖像崇敬への熱意ゆえに拷問にも耐え抜いた。神への奉仕に身を捧げたラザロは、聖像画の技法を学び、神、その聖母マリア、そして聖人たちの栄光のために、熱心に聖像の制作に励んだ。　一方、テオフィロスは聖像破壊者であり、聖なる聖像を崇敬する者たちすべてを迫害し、聖像画家たちには聖像に唾を吐きかけ、足で踏みつけるよう強要した。　聖ラザロは、イコン画家として捕らえられ、信仰の試練にさらされた。しかし、彼らは時としてお世辞を交えた説得を、時として脅迫を用い、彼をイコン破壊の異端へと引き込もうと試みたが、その努力は徒労に終わった。ラザロは断固として屈しなかった。そこで、彼らは容赦なく彼を殴打し、その後、牢獄に投獄した。　しかし、牢獄の中でもこの聖人はイコンを描き続けた。そこで、無法な拷問者は、聖人がイコンを描く能力を完全に奪うため、赤熱した鉄板で聖人の指を焼き付けるよう命じた。その際、聖ラザロは死の危機さえも瀕していた。　しかし、敬虔な皇后テオドラの取り成しにより、かろうじて命は救われた。[7977]。自由の身となった聖ラザロは、聖ヨハネ・バプティ

[7975] 『修道院の手紙』、モスクワ、1863年、69–71頁。第19通の手紙、1846年11月18日付。

[7976] テオフィロス皇帝は829年から842年まで在位した。

[7977] テオドラ皇后は、正教を擁護した功績で歴史に名を残している。テオフィロスの死後、息子のミハイルが幼少であったため、皇后が帝国の摂政となった際、彼女はイコン崇拝を復活させた。　首都では、大斎の最初の日曜日に、特に厳粛

スト教会に避難し、そこで描いたイコンは、瞬く間に奇跡を起こすものとして名声を博した。　その後、テオフィロスが亡くなると、聖ラザロはすでに何の支障もなく聖像の制作に専念していた。その際、聖人はかつての悪行を微塵も恨むことなく、むしろ自分を苦しめた者のためにさえ祈りを捧げた。

テオフィロスとテオドラの息子であるミカエル3世皇帝の治世[7978]　において、聖ラザロはローマ教皇ベネディクト3世[7979]　へ派遣された使節団の一員として参加し、ローマからの帰路で逝去した。その尊い遺体はコンスタンティノープルに移送され、そこで聖エヴァンドラ教会[7980] に埋葬された。

12月

12月1日

11月18日（旧暦）

聖殉教者プラトンの受難

記念日：11月18日

聖殉教者プラトンは、聖殉教者アンティオコスの兄弟であり、ガラティア地方のアンキラ[7981] の町に、キリスト教徒の両親のもとで生まれ、敬虔な家庭で育てられた。成人する前から、彼はすでに徳において卓越していた。若年でありながら、すでに知性において成熟していた。　不信心な偶像崇拝者たちの間で、彼は大胆に、永遠の神であるキリストを宣べ伝え、迷いの中にいる異教徒たちに、真理を知り、悪魔の迷いから神へと立ち返るよう教えた。このため、彼は異教徒たちに捕らえられ、地方総督アグリッピヌスの裁判にかけられた。

その頃、アグリッピヌスはゼウス神殿にいて、そこでキリストの証人を裁くために座した。彼を一瞥すると、こう言った。

「全世界がそれぞれの神々を崇めているというのに、お前だけが迷い、神々から背を向けているではないか！」

聖人はこう答えた。

「あなた方が迷っているのです。天と地、そしてそのすべての美しさを創造された神を見捨て、石や朽ち果てる木、すなわち人の手による造り物に拝礼しているのですから。」

アグリッピンは言った。

な儀式のもとで、礼拝のためにイコンが所定の位置に安置された。この日は「正教の勝利の日」と呼ばれ、毎年教会によって記念されている。

[7978] ミカイル3世皇帝は842年から877年まで在位した。

[7979] 教皇ベネディクト3世は、866年から868年までローマ教会を統率した。

[7980] 1200年、コンスタンティノープルで、のちにノヴゴロド大司教となるロシア人巡礼者アントニーが、聖ラザロの聖遺物を目撃した。

[7981] ガラティアは、小アジア半島の中心部、フリギア、ビフィニア、ポントス、カッパドキアの間に位置する、山岳地帯ではあるが肥沃な小アジアの地域である。　この地には聖パウロによってキリスト教が広められ、彼はガラティア教会を設立し、後に、彼を「神の御使」として聞き入れたガラティア人たちに（ガラテヤ4:14）、手紙を書いた。――アンキラ（現在のアンゴラ）は、ガラティアの主要都市の一つである。

「お前の若さが、お前を傲慢で無礼にしているのだ。お前の名前を言え。何という名で、どこの町出身なのか？」

聖人は答えた：

「両親は私をプラトンと名付けました。私は母の胎内からキリストの僕であり、この町の市民でもあります。今、私は敬虔さゆえに、あなたの不正な裁判に立たされ、不当な死を待っています。私は主のために、その死を熱烈に望んで受け入れるつもりです。さあ、あなたがしようとしていることを行いなさい。」

「プラトンよ、お前は」と地方長官は反論した。「十字架にかけられた方について教えるべきではないし、その御名を心に留めてさえはならない。王の権威は、その方を告白する者を厳しい死に処し、否定する者には大きな栄誉を与えるよう命じているからだ。それゆえ、王の命令に従うことを勧める。そうすれば、お前は死を免れることができるだろう。」

聖プラトンはこう答えた。

「私は私の王である神に従います。神のために戦います。そして、永遠の御国の相続人となるために、この一時的な死を喜んで受け入れます。」

「考えてみよ、プラトン」と、これに対し地方長官は言った。「君にとって、生き続けることか、それとも過酷な死を遂げることか、どちらがよいのか？」

プラトンは答えた。

「主は、私にとって何が有益であるかを御心で定めてくださるでしょう。」

「知らないのか」と地方長官は反論した。「キリスト教徒は神々に犠牲を捧げるか、さもなくば死を遂げなければならないと命じる、揺るぎない王の法律があることを。どうして王の法律に背き、他人を惑わすようなことをするのだ？」

聖人はこう答えた。

「私は私の神の掟を知っており、神の聖なる、命を与える戒めが命じることを行っている。それらは、悪魔的な生け贄を拒絶し、唯一の真の神に仕えるよう命じている。私はその唯一の神に仕えており、あなた方の神々を軽蔑している。　しかし、王の命令に従い、お望みのままに私を拷問にかけてください。あなた方にとってキリスト教徒を苦しめることはもはや慣例であり、キリスト教徒にとってキリストのために苦しむこともまた慣例なのです。

残忍な気性で知られていた地方総督アグリッピンは、聖人が自分の不敬虔な意志に従わず、反抗しているのを見て、激しい怒りに駆られ、彼を裸のまま地面に寝かせ、十二人の兵士に交代で聖人を殴打するよう命じた。　兵士たちは長い間、容赦なく聖人の全身を打ち続けたため、殴打していた兵士たちはひどく疲れ果てたが、聖なる殉教者は耐え続けること、そして主イエス・キリストの御名を告白することに疲れを見せることはなかった。

その後、兵士たちが殴打をやめると、地方長官は、あたかも彼を憐れむかのように、優しく語りかけた。

「プラトンよ、友として忠告する。死を避けて、生を選べ。」

殉教者はこう答えた。

「アグリッピンよ、死から生へと転じるよう、あなたはよく教えてくれる。私もまた、永遠の死から逃げ、不死の命を求めているのだ。」

これに対し、アグリッピンは怒りを込めて聖人に言った。

「教えてくれ、この不幸な者よ、死はいくつあるというのか？」

聖人は答えた：

「死は二つある。一つは一時的なもので、もう一つは永遠のものだ。同様に、命も二つある。一つは短命で、もう一つは無限である。」

「その戯言はやめろ」と地方総督は反論した。「神々にひれ伏し、その激しい苦しみから逃れよ。」

聖人はこう答えた。

「火も、傷も、獣の猛威も、四肢の切断も、私を生ける神から引き離すことはできない。なぜなら、私が愛したのはこの世ではなく、私のために死んで復活されたキリストだからだ。」

そこで、地方総督は聖プラトンを牢獄へ連行するよう命じた。彼が連行される際、民衆は彼の苦しみをまるで何らかの見世物であるかのように見つめながら、その後をついていった。　群衆の中には、多くのキリスト教徒もいた。牢獄に近づくと、堅固で高潔な精神を持つキリストの殉教者プラトンは、群衆に向き直り、静粛を命じて、力強い声で語り始めた。

「真理を愛する諸君よ、私がこの苦難の業に身を投じたのは、天と地、そしてその中に存在するすべてのものを創造された神のため以外に、いかなる理由によるものでもないことを知ってください。 キリストの僕として、私はあなたがたに懇願します。今起きていることに動揺 しないでください。なぜなら、*「義人には多くの苦難があるが、主はそれらすべてから彼を救い出される」から*です（詩篇33:20）。

さあ、皆で共に、静かな避難所であり、偉大なる使徒が「*その岩とはキリストのことである*」（Iコリント10:4）と語ったその岩のもとに駆け寄りましょう。　そして、キリストへの信仰のために直面する苦難の中で、気力を失うことのないようにしましょう。*「今、私たちが受けている一時的な苦しみは、将来私たちに現される栄光に比べれば、何でもないからです」*（ローマ8:18）。

こう言い終えると、殉教者は牢獄に入り、地面にひざまずいて、神に向かって次のように祈りました。

「主イエス・キリストよ、　万物の創造主であり、摂理者であり、御自分のしもべたちに忍耐と勝利を授けてくださる方よ。この謙虚で無価値な御しもべである私にも、御名のゆえに最後までふさわしく耐え忍ぶことができるようお許しください。そして、御使いをお遣わしになり、私を、狡猾で悪意に満ちた蛇――アグリッピナ――から救い出してください。　そうして、すべての人々が、人の手によって造られたものは神ではなく、あなたこそが、忍耐深く、慈愛に満ち、永遠に賛美される唯一の真の神であることを悟らせてください。アーメン。

七日が過ぎると、拷問官は再びゼウス神殿の法廷に腰を下ろし、聖なる殉教者を連れてくるよう命じた。　まず、彼は聖人の前に様々な拷問器具を並べた。銅の釜、釘の打ち込まれた長靴、白熱した鉄球、鋭い棒、鉄製の投石器、車輪、その他多くの器具であり、それらでキリストの勇敢な戦士を威嚇しようとしたのである。それから、彼にこう語りかけた。

「愛しきプラトンよ！　お前の若さと、お前の両親の高潔さを鑑み、またお前の美しい肉体を憐れんで、再びお前を拷問し始める前に、こう助言しよう。我らの神々の供物を味わい、我らと一つになれ。私に逆らう者は誰一人として生き残れないことをよく知っておきなさい。それどころか、私に服従する者は、私が約束した名誉と恩恵を失うことは決してないのだ。そして、美しいプラトンよ、もしあなたが、良き助言を与える父として私の言葉に従うことを望むなら、私は兄弟の唯一の娘を、豊かな財産と共にあなたの妻として与え、あなたを私の息子と呼ぶつもりだ。

しかし、至福のプラトンは彼を嘲笑してこう言った。

「哀れな、人間を憎む悪魔の子、サタンの僕よ！もし私がこの世の誘惑に縛られることを決意し、妻を娶ろうとしたとしても、お前の兄弟の娘より優れた女性を見つけられなかっただろうか！実のところ、彼女よりも奴隷の女を娶ったほうがましだっただろう。ましてや、今やこの世を捨ててキリストと結ばれようとしている私が、彼女を娶ろうなどと思うだろうか?

すると、拷問官は激怒し、聖人を銅の床に寝かせ、その下に大量の炭を敷き、火に油、蝋、樹脂を注いで燃え上がらせ、殉教者の体を焼くよう命じた。さらに上から細い棒で打ちつけ、殴打と灼

熱の両方でその苦痛を増大させた。　このような長きにわたる拷問の後、アグリッピンは聖なる殉教者にこう言った。

「哀れな者よ、さあ、そろそろ自分自身を憐れんでくれ！もし神々に拝礼したくないのなら、ただ『アポロン神は偉大なり』と一言言えばよい。そうすれば、私は直ちに君への拷問をやめ、君は平穏に自宅へ帰れるだろう。」

しかし、聖人はこれに対しこう答えた。

「決して、この肉体を憐れんで、魂に燃えるゲヘナを用意するようなことはしない。」

三時間が経過し、その間プラトンはそのような拷問にさらされていたが、彼は寝台から降ろされた。しかし、彼の体は無傷で健康そのものであり、傷や火の跡さえも全くなく、まるで風呂から出たかのようであった。さらに、彼の体からは強い芳香が漂っていたため、そこにいた者たちは皆驚き、こう言った。

「まことに、キリスト教の神は偉大だ！」

すると、地方総督は聖人にこう言った。

「もし我々の神々に犠牲を捧げる気がないのなら、せめてそのキリストだけを捨てよ。そうすれば、お前を釈放してやる。」

しかし、聖人はこう答えた。

「狂人であり不信心者よ、お前の言う通り、私が救い主を拒むなどあり得ようか？　まさか、私がお前のような不信心者と同じようになることを望んでいるのか？　お前の破滅だけではまだ足りないのか？　それなのに、お前はキリストの戦士たちまでもその破滅に引きずり込もうとしているではないか！　私から離れよ、不法者よ。　私は私の神を信じている。神は私を見捨てず、お前が堕ちたのと同じように、私を堕ちさせることもないだろう。

すると、アグリッピンは玉座から立ち上がり、自ら聖人を拷問し始めた。彼は鉄の輪を熱し、それを聖人の肩の下に敷いて肋骨を焼いた。その後、殉教者の胸に二つの激しく熱した鉄の輪を載せた――すると、彼の鼻の穴から煙が立ち上った。火の力が彼の内臓にまで達していたからである。多くの者は、彼がすでに死んだと思った。しかし、しばらくして、彼は拷問者にこう言った。

「お前の拷問など取るに足らない、凶悪な血を吸う者よ！」

それから、聖人は視線を天に向け、こう語った。

「わたしは、打つ者たちにわたしの背を、殴る者たちにわたしの頬を委ねた。侮辱や唾を浴びせられても、わたしの顔を隠さなかった」（イザヤ50:6）[7982]　、*「主よ、わたしから離れないでください。苦しみはすぐそこにあるからです」*（詩篇21:12）、*「異邦人が『彼らの神はどこにいるのか』と言うのはなぜでしょうか？」*（詩篇78:10）。イエス・キリストよ、あなたのしもべである私に、敵の苦しみを完全に解き放たれ、この善き業を終えて、大胆にあなたの恐るべき裁きの御前に立つことができるよう、お与えください。なぜなら、あなたの支配のあらゆる場所で、今、そして常に、そして世々限りなく、あなたに栄光と誉れと権威があるからです。

そして彼が「アーメン」と口にしたとき、神殿が揺れ動き、皆が恐れおののいた。それにもかかわらず、残虐な者たちは神の力を知りたがらなかった。

その後、拷問官は、聖プラトンの皮膚を帯状に切り刻み、それを剥ぎ取るよう命じた。しかし、聖人は、自分の体から垂れ下がっていた帯を一本引きちぎり、アグリッピナの顔面に投げつけ、こう言った。

[7982] これらの預言的な言葉は、その全容において、私たちの主イエス・キリストの救いのための受難を指しています。しかし、キリストの殉教者たちも、自らの苦しみによってキリストの受難に参与しているという点で、ある程度の範囲において、これらの言葉が彼らにも当てはまると言うのは妥当でしょう。

「非人道的で、あらゆる獣の中で最も凶暴な者よ！　私たちを御自身の姿に似せて創造された神を知ることを拒むあなたが、あなた自身もまとうのと同じ肉体に対してさえ憐れみを抱かず、私の肢体が引き裂かれるのを見て喜びを感じているとは、どういうことか？」　しかし、私をさらに激しい苦痛にさらしなさい。そうすれば、あなたの非人道性も、私の忍耐も、すべての人々の目に明らかになるでしょう。私は、私のキリストのために、これらすべてを喜んで耐えているのです。そうして、御恵みによって、来たるべき世で安らぎを得たいと願っているのです。

「おお、お前はなんと正気を失っているのだ」とアグリッピンは反論した。「内臓がすでに肋骨の間から飛び出しているというのに、自分の体さえも顧みないとは。それなのに、なおも神々を冒涜し、私を怒りに駆り立て続けるのか？」

その後、アグリッピンは聖人を木に吊るし、まだ傷ついていない肉が骨から完全に剥がれ落ち、血がほぼすべて流れ出るまで、その体を打ち続けるよう命じた。　そして、殉教者の聖なる顔は、鉄の投石器でこれほどまでに引き裂かれたため、人間の姿の痕跡すら残らず、ただむき出しの骨だけが残った。しかし、聖プラトンは、自由な舌を駆使して、拷問者の残虐さを非難し、偶像や偶像崇拝者たちを呪い続けた。

すると、拷問官は言った。

「プラトンよ！もしお前がそれほど頑固で屈服しない者でなければ、神聖な教えを著した哲学者たちの首領である、あの至賢なるプラトンに似ていただろう[7983]。」

しかし、聖人はこう答えた。

「私はプラトンと同じ名前ではあるが、同じ思想の流派ではない。名前だけでは、信仰によって分断された者たちを結びつけることはできない。それゆえ、名前以外には、私もあのプラトンに似ておらず、プラトンも私に似てはいないのだ。　私はキリストの哲学を学び、また教えているが、彼は神の前では狂気である哲学の教師である。なぜなら、*「私は知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを拒む」*と書かれているからである（Iコリント1:19；イザヤ29:14参照）。一方、あなたが「神聖」と呼ぶプラトンに由来する教えは、偽りの寓話に過ぎず、狡猾な言葉によって、純真な愚か者たちの心を惑わすものである。

聖人が語り終えると、アグリッピンも黙り込んだ。彼には、これ以上何を反論すべきか、また彼をどうすべきか分からず、聖人の並外れた忍耐と勇敢な答えに驚嘆していたからである。彼は聖人を牢獄へ連行し、知人たちが面会に来ることを一切許さないよう命じた。　しかし、聖なる殉教者が死なないよう、拷問者は毎日、彼に少量のパンと水を与えるよう命じた。その不幸な男は、*「人はパンだけで生きるものではない。、主の口から出るあらゆる[言葉]によって、人は生きるのだ」*（申命記8:3）ということを知らなかった。　しかし、キリストの殉教者は偶像崇拝者たちの手から何も受け入れず、十八日間、食べ物も飲み物も口にせず、こうして彼には聖書の言葉*「義人はその信仰によって生きる」*（ハバクク書2:4）が成就した。　彼は、穴の中の獅子たちの間でダニエルを養ってくださった方（ダニエル書6章）が、牢獄にいる彼をも朽ちることのない糧で養ってくださることを望んでいた。一方、看守たちは、彼がパンも水も受け取らないのを見て、彼にこう言った。

「食べなさい、人よ。飲みなさい。そうすれば、あなたが死なずに済むし、私たちもあなたのせいで災いに遭わずに済むのだから。」

しかし、その聖人はこう答えた。

「兄弟たちよ、私があなたがたの食物を受け入れないからといって、私が死ぬなどと思わないでください。あなたがたはパンで養われていますが、私は永遠に存続する神の御言葉によって養われ

[7983] 哲学者――ギリシャ語で「知恵を愛する者」を意味する。これは、神、世界と人間の起源および法則、世界の存在の究極の目的など、存在に関する至高の問いを研究することに身を捧げた学者たちを指す。 – プラトン――古代（紀元前5世紀末から6世紀初頭）で最も著名かつ偉大な哲学者であり、その思想の深みにおいて極めて傑出した著作を数多く残した。

ています。あなたがたは肉で満たされますが、私は聖なる祈りによって満たされます。あなたがたは酒で楽しませられますが、私は真のぶどうの木であるキリストによって喜ばされています。」

その後、地方総督アグリッピンは、いかなる手段を用いてもプラトンをキリストから引き離すことができないと悟り、彼を剣による斬首刑に処した。殉教者は街の外へ連れ出された。祈りの時間を求めた後、彼は両手を天に掲げてこう言った。

「主イエス・キリストよ、感謝いたします。御名の御力によって、御自分のしもべである私を敵の誘惑から守り、あなたのために引き受けた戦いを立派に全うする恵みを授けてくださいました。今、あなたに願います——私の魂を安らかに迎え入れてください。あなたは永遠に祝福された方です。アーメン。」

その後、聖なる頭を垂れて、彼を斬り落とすべき兵士にこう言った。

「友よ、命じられたとおりにせよ。」——そして、その直後に首を斬られた。かくして、聖殉教者プラトンはキリストのために奮闘し、キリストと共に永遠に生き、支配するために、キリストのために死んだのである。[7984] 。

コンダク、第3声：

あなたの聖なる記念は全宇宙を喜ばせ、すべての信徒をあなたの尊き聖堂へと招き集めます。そこでは今、喜びに満ちて一つとなり、歌と光の中で賛美を捧げています。それゆえ、プラトンよ、私たちはあなたに叫びます。あなたの都を異教徒の侵攻から救い出してください、聖なる方よ。

聖殉教者ロマンと少年ヴァルルの殉教

記念日：11月18日

聖殉教者ロマンはパレスチナ出身で、ケサリア教会の助祭であった。異教徒によるキリスト教徒への迫害の際、彼はアンティオキアに居住し[7985] 、教義を説き、信者たちを励まして、彼らがキリストへの信仰告白において揺るぎないままでいられるようにした。　やがて、不敬虔な地方総督アスクリピアドが、その地のキリスト教の聖堂を根こそぎ破壊しようとしたとき、聖ロマンはキリスト教徒たちに、総督に抵抗し、聖なる聖堂を破壊させないようにするよう促しました。

「今、私たちには」と彼は同信者たちに語った。「神の祭壇をめぐる戦いが待ち受けている。アスクリピアドは祖国の敵であり、私たちから神を奪おうとしている。神の祭壇を守り抜くために、たとえ傷つき、聖なる教会の敷居で倒れることになっても、それは私たちにとって正しい行いである。」　この戦いがどのような結末を迎えようとも、私たちキリスト教徒は勝利者となるだろう。もし

[7984] 聖プラトンの殉教は、紀元前306年頃に起こった。– 彼の死後、彼に祈りを捧げた多くの人々が、彼の奇跡的な助けを受けた。　例えば、第7回全地公会議（787年）では、ヨハネス・クラマティオス（金口ヨハネス）の弟子である聖ニロスの手紙の中から、聖殉教者プラトンに関する奇跡についての一節が朗読された。
ガラティアのある修道士の息子が、突然襲撃してきた蛮族に捕らえられてしまった。その老修道士は、涙ながらに同郷の殉教者プラトンに、この窮地からの救いを祈った。すると、馬に乗った騎手が息子の前に現れ、もう一頭の馬を連れてきて、若者にまたがるよう命じた。　若者は、イコンでその姿を何度も見ていたため、その人物が殉教者であることを見抜いた。若者は馬に乗り、聖人は彼を父のもとへ送り届けると、姿を消した。　コンスタンティノープルでは、アナスタシウス1世皇帝（在位491～518年）がこの殉教者に捧げる教会を建立し、ユスティニアヌス皇帝（在位527～565年）がそれを修復した。

[7985] それは303年11月17日のことで、ローマ皇帝ディオクレティアヌスの共同統治者、マクシミアヌス・ガレリウスの治世下であった。

神の家を破壊させなければ、地上で戦う教会において勝利を収めることになる。もし聖なる祭壇のそばで殺されて倒れるとしても、天国で祝宴を催す教会において、勝利の歌を歌い上げるだろう。

彼はこうした言葉で、皆を奮い立たせ、聖なる神殿を守るために立ち上がり、死を賭して断固として抵抗し、司教が神殿に入り、それを破壊することを許さないよう呼びかけた。

その頃、ある異教の祭りが行われ、多くの異教徒たちが妻や子供を連れて異教の神殿に集まってきた。　そこで聖ロマンは神聖な熱意に燃え上がり、不敬虔な民の群れの中に踏み込み、彼らの迷いを大声で糾弾し始めた。彼は、エパルヒアスのアスクレピアダスさえも、偶像の神殿に入ろうとしたその場で引き止め、こう言った。

「総督よ、あなたは偶像のもとへ向かうことで惑わされている。偶像は神ではない。唯一の真の神は、イエス・キリストである。」

総督は直ちにロマンを捕らえ、口を激しく殴打するよう命じた。その後、裁判の席に着くと、長い間、彼にキリストを否定するよう強要したが、彼が屈服しないのを見ると、拷問を命じた。彼は絞首刑に処され、様々な道具で殴打され、鉄製の投石器で痛めつけられた。　しかし、聖ロマンはこれらの苦痛を勇敢に耐え忍び、万物の創造主である唯一の神を告白し、真理を知ろうとしないエパルハの愚かさを非難した。

聖人がこのように苦しみ、拷問に耐えながらも勇敢にキリストを宣べ伝えている間、そこには異教徒も信者も問わず、多くの民衆が立ち、キリストの殉教者の偉業を見守っていた。その近くには、ヴァルルという名のキリスト教徒の少年も立っていた。殉教者は彼を一瞥し、拷問者にこう言った。

「この幼い少年は、まだ年少であるにもかかわらず、あなたという年長者よりも賢明だ。なぜなら、彼は真の神を知っているが、あなたは高齢でありながら、神を知らないからだ。」

すると、エパルクは少年を呼び寄せ、こう尋ねた。

「あなたはどの神を崇めているのか？」

「キリストを崇めています」と少年は答えた。

司教は彼に尋ねた。

「たった一人の神を崇めるのと、多くの神を崇めるのと、どちらがよいのか？」

「唯一の神、イエス・キリストを崇めるほうがよい」と少年は答えた。

エパルヒは再び彼に尋ねた。

「キリストは、なぜ他のすべての神々よりも優れているのか？」

少年はこう答えた。

「キリストが優れているのは、キリストこそが真の神であり、私たちすべてを創造されたからです。一方、あなた方の神々は悪魔であり、誰一人として創造していません。」

少年は、まるで極めて賢明な神学者であるかのように、他にも多くのことを語った。聖霊が彼の中に働いて、不敬虔な司教とすべての偶像崇拝者たちを恥じ入らせるために、彼の口から賛美の言葉を紡ぎ出していたのである。

拷問官と彼に付き添っていた者たちは皆、少年の知性と賢明な言葉に驚嘆し、その言葉を反駁できないことに大きな恥を感じた。そこで拷問官は、ヴァルルを容赦なく鞭で打つよう命じた。　長い間鞭打たれた後、ヴァルルは力尽き始め、水を求めた。しかし、群衆の中に立ち、息子の苦しみを見て喜びを感じていた母親は、息子が力尽きて水を求めているのを見ると、厳しい口調で、最後まで勇敢に苦しみに耐えるよう命じた。　やがて、拷問担当者が少年を剣で斬り殺すよう命じたとき、母は彼を腕に抱き上げ、斬首の場へと運んだ。抱きしめ、口づけをしながら、彼女は彼を慰め、頭上に掲げられた剣を見て恐れないよう励ました。

「恐れるな、わが子よ」と彼女は言った。「恐れるな、愛しい我が子よ！死を恐れるな！あなたは死ぬのではなく、永遠に生き続けるのだ！おののくな、わが花よ！あなたはすぐに楽園へと運ばれるのだ！」　剣を恐れてはならない！　首を切られたその瞬間、あなたはすぐにキリストのもとへ行き、その栄光を目にするだろう。キリストは愛をもってあなたを受け入れ、あなたはキリストと共に言い表せないほどの喜びの中で生き、聖なる天使たちと共に至福を味わうことになるのだ。

こうして息子を慰めながら、敬虔な母は彼を処刑の場へと連れて行った。少年が斬り落とされた後、母は清らかな器にその血を集め、遺体を抱きしめて喜びの涙を注ぎ、愛を込めてその額に口づけをし、息子がキリストのために、自分から受け継いだ血を流したことを喜びとした。　その後、彼女は息子の遺体を尊厳をもって埋葬した。

聖ヴァルルの斬首の後、聖ロマンは火刑に処されることとなった。縛られ、薪に囲まれた聖ロマンは、役人たちがまだ火を点けず、薪に火をつけていなかった時、裁判官からの最後の言葉を待っていたが、焚き火の真ん中から大声で叫び、拷問者たちに向かってこう言った。

「火はどこだ？　なぜ火をつけないのか？　火をつけて、炎が私の全身を包み込むようにせよ。」

火が点けられ、四方から薪が激しく燃え上がったその時、突然激しい雨が降り注ぎ、火を消し止めた。聖ロマンは生き残り、火による被害を微塵も受けなかった。　その後、聖なる殉教者の大胆な言葉（彼は不敬虔な異教徒たちを非難し、その狂気を責め、彼らの神々を呪い、唯一の神であるキリストを賛美していたからである）に対し、拷問官は彼の舌を切り落とすよう命じた。しかし、聖人は自ら拷問者たちに舌を差し出し、切り落とさせた。　しかし、神を讃えるその舌が切り落とされても、キリストの殉教者は沈黙せず、超自然的な力によって、舌がないにもかかわらず以前と同様に明瞭に語り、唯一の神を賛美し続けた。その後、彼は牢獄に投じられ、足を枷に縛られたまま長い間そこに留められた。　やがて、舌を切り落とされてもなお明瞭に話すという彼のことがマクシミアヌス皇帝に伝えられると、皇帝は彼を絞首刑に処すよう命じた。牢屋に入った兵士たちは、彼の首に縄をかけ、[7986]。

こうして、聖殉教者ロマンは、キリストのために苦難を耐え抜く偉業を成し遂げ、今やキリストの御国において、聖三位一体を永遠に賛美しつつ栄光に輝いている。アーメン。

聖殉教者ザケイとアルフェイの記念日

記念日：11月18日

パレスチナのケサリアでは、皇帝の在位20周年が近づくと、通常、牢獄に閉じ込められていた者たちに対して罪の赦しが宣言されていた。ディオクレティアヌス帝の治世も例外ではなかった。しかし、この地域の統治者は、最も凶悪な犯罪者たちでさえ自由を許した一方で、キリスト教徒たちには最も残酷な拷問を加えた。　この頃、キリストへの信仰を告白したとして、ガダラ教会の助祭ザケイ[7987]が捕らえられた。法廷で信仰について問われた彼は、勇敢かつ恐れを知らずにキリストを告白した。　そのために、彼は残酷な拷問にさらされた。鞭で打たれ、次に爪で引き裂かれ、最後に足を足枷に嵌められて、牢獄に投げ込まれた。聖人は勇敢に苦痛に耐えた。　聖ザケイが拷問を受けている最中、キリストの御名のために証しをするもう一人の信徒、アルフェイという名の者が法廷に連行された。彼は名門の出身であり、ザケイの親族でもあった。パレスチナの都市エレウフェロポリス[7988]で生まれた。ディオクレティアヌスによるキリスト教徒への迫害が始まった時、アルフェイはケ

[7986] 303年に没。
[7987] ガダラの町は、ゲネサレト湖の南東、イエロマクス川の南岸に位置していた。
[7988] エレウフェロポリスは、パレスチナの南部、かつてのユダヤ地方に位置していた。

サリアの教会で朗読者としての職に就いていた。　キリストの信仰を告白する者たちに対する迫害は極めて苛烈であり、多くのキリスト教徒は過酷な拷問に耐えきれず、キリストの信仰から離れ、すでに偶像への生贄を捧げる覚悟をしていた。その時、アルフェイは神への熱意に駆られ、信仰を捨てた者たちの群れの中に飛び込み、彼らを偶像への生贄から引き離した。　このため、彼は捕らえられ、足枷を嵌められて牢獄へと連行された。数日後、彼は親族であるザケイと同じような拷問を受けた。鞭で打ちのめされ、爪で引き裂かれ、ついには義人ザケイと共に一つの足枷に縛り付けられた。彼らはその状態で昼夜を過ごした。　こうした拷問の最中も、そしてその後も、聖なる殉教者たちは絶えずキリストを告白し続けたため、彼らは斬首された[7989]　。こうして、聖なる殉教者たちは、キリストの御名のために多くの苦難に耐え抜いた末、この世を去った。

12月2日

11月19日（旧暦）

聖預言者アヴディアの生涯

記念日11月19日

聖預言者オディヤは、シケム近郊のビファラマ村の出身であった[7990]　。彼はイスラエルの王たちの宮廷に仕え、アハブ王の家政官を務めていた[7991]　。彼は若き頃から極めて敬虔であり、イスラエル全土が神から背き、邪悪なバアルを崇拝するようになった時[7992]　、彼は密かに、イスラエルをエジプトから救い出し、紅海を乾いた地として渡らせた、先祖たちの唯一真の神に仕え続けた。　不義なイゼベルが主の預言者たちを皆殺しにしていた時[7993]　、オバデヤは百人の預言者を連れ出し、五十人ずつ二つの洞窟に隠して、預言者エリヤの時代に起きた飢饉の間、彼らにパンと水を与え続けた。ある日、アハブはオバデヤを呼び寄せ、こう言った。

「全土を巡り、すべての水源や小川を調べてこい。馬やロバに与える草が見つかり、家畜を失わずに済む場所はないか。」

そこで彼らは、国中をくまなく探すために役割分担をした。アハブは一人で一つの道へ、オビディヤは一人で別の道へと向かった。オビディヤがその道を歩いていると、エリヤが向かってくるのが見えた。彼はエリヤだと気づくと、顔を地面につけてひれ伏し、言った。

「あなたですか、私の主エリヤよ？」

[7989] それは303年のことだった。

[7990] シェケム（現在のナブルス）は、パレスチナの古代都市の一つであり、サマリアのエフレムの山に位置し、エルサレムから18時間の道のりにあり、ガリジン山とゲバル山の間に広がる、標高が高く豊かで肥沃な谷間にあった。　現在、この都市はかつての極めて重要な地位を失っているが、数多くの最古の遺跡が保存されており、その点で豊かである。

[7991] アムリヤの息子アハブは、イスラエルで最も不義な王であり、紀元前924年から903年まで在位した。

[7992] バアルは、ヘブライ語で「主」「支配者」を意味し、フェニキア人からは至高の神として崇められ、信仰を裏切ったイスラエル人もまたこの神を崇拝していた。　異教徒たちは、バアルの姿を通じて太陽と、妻であるアスタルテを通じて作用する男性の生殖力を神格化しており、アスタルテの姿は月として崇められていた。彼らへの崇拝は、極めて卑劣な堕落と、官能的で不道徳な儀式によって特徴づけられていた。

[7993] シドンの王兼祭司の娘であり、アハブの妻であるイゼベルは、極度の不敬虔さと放蕩な生活態度で知られていた。 彼女の影響に盲目的に従ったアハブは、その不敬虔さにおいてすべての先王たちを上回り、最も恥ずべき偶像崇拝に身を委ねた。彼はサマリアにバアルの神殿を建設し、イゼベルが自分の領土にシリアやシドンの神々の祭壇を築き、多くの異教の偽預言者たちを側近に置くことを許した。　ついにイゼベルは、真の神の預言者たちに対する迫害を開始したが、王の家臣長オビディヤが、彼女の狂乱から彼らを隠していなければ、彼らは皆、命を落としていただろう（列王記下 18:4）。

すると、エリヤは彼に言った。

「そうだ。行って、あなたの主人に『エリヤはここにいる』と伝えなさい。」

彼は言った。

「私が何の罪を犯したというのですか。なぜあなたは、このしもべをアハブの手に引き渡し、私を殺そうとするのですか。あなたの神、主の御名にかけて誓います。私の主君があなたを探し求めなかった国や王国は一つもありません。そして、あなたがいないと告げられると、主君はその国や民に対し、あなたを見つけられなかったことについて誓いを立てさせたのです。　それなのに、今あなたは『行って、あなたの主君に「エリヤはここにいる」と告げよ』と言う。もし私があなたのもとを離れると、主の御霊があなたをどこへか連れ去ってしまうでしょう。もし私がアハブに知らせに行き、彼があなたを見つけられなければ、彼は私を殺すでしょう。しかし、あなたのしもべは若い頃から神を畏れてきました。　イゼベルが主の預言者たちを殺していた時、私が主の預言者百人を、五十人ずつ洞窟に隠し、パンと水で養ったことを、私の主人に伝えなかったでしょうか。それなのに、あなたは今、『行って、あなたの主人に「エリヤはここにいる」と告げなさい』と言われます。彼は私を殺すでしょう。

すると、エリヤは言った。

「私が今、その御前に立っている主サバオテの御名にかけて！今日、私は彼の前に姿を現そう。」

そこでオビディヤはアハブに会いに行き、エリヤのことを告げた。アハブがエリヤを見ると、神の預言者は彼の過ちを指摘し、その後、大きな奇跡を行った。すなわち、天から火を降らせていけにえと水に燃え上がらせたのである。これは『列王記第三』に記されている通りである（3列王記18:4–8）。これを見て、アブディは自分の神の全能の力を喜び、神への愛に燃え、神への熱意に燃え上がり、神の戒めを果たして、より熱心に神に仕えた。その後、アハブが死に、彼の息子オホジアがイスラエルの王位を継いだ時[7994]、アブディは兵役についた。聖ドロテオスと至福のヒエロニムスの証言によれば、彼はオホジアによって預言者エリヤのもとへ遣わされた五人の使者のうちの一人であった。そのうち二人は、預言者の言葉に従って天から降りた火によって焼かれたが、三人目、すなわちオビディヤは赦された。彼は謙虚に聖預言者エリヤのもとへ進み出て、懇願し、こう言った。「神の人よ！私の魂と、あなたの僕たち――この五十人――の魂が、あなたの御目の前で軽んじられることのないように。」

それゆえ、エリヤは彼を容赦し、立ち上がって彼と共に王のもとへ向かった。　それ以来、アブディヤは王に仕えることをやめ、聖なる預言者エリヤに従い、主の預言者たちを守り養い、自らも預言者に従った者として、預言の霊を受けた（列王記下1:13–15）。死後、彼は先祖たちと共に葬られた[7995]。

聖バルラアムとインドの王子ヨアサフ、およびその父であるアヴェニール王の行伝

記念日11月19日

[7994] オホジアは、アハブの後継者であるイスラエルの王であり、在位2年目に、まだ父が存命のうちに死去し、王位を弟のヨラムに譲った。

[7995] オバデヤはサマリアに埋葬された。彼は紀元前10世紀末から9世紀初頭にかけて生きた。彼が残した預言書は、いわゆる「小預言者」の書の中で第4位に位置し、1章から成っている。彼の預言のほとんどは、アドミ人、すなわちエドム人に対して向けられている。　この書の終わりには、シオンからの救いと主の御国の到来に関するメシアニックな預言があり、それは新約の教会を明確に指し示している。

東方には、インドと呼ばれる非常に広大な国があり、多くの民族が住み、あらゆる富と実りにおいて他の国々を凌駕しており、その国境はペルシャの境界に近づいている。　この国はかつて聖使徒トマスによって福音が伝えられたが、偶像崇拝を最後まで捨て去ることはなかった。なぜなら、多くの者が異教に深く染まり、救いの教えを受け入れず、悪魔の惑わしに囚われていたからである。時が経つにつれ、不義は茨のように蔓延し、敬虔という善き種を押しつぶすようになったため、インドにおける異教徒の数は、信者たちの数をはるかに上回るようになった。

その国に、アヴェニールという名の王が即位した。彼は力と富において偉大で栄光に満ちていたが、霊的には極めて貧しかった。なぜなら、彼は異教徒であり、神ではなく悪魔に仕え、魂のない偶像を崇拝し、キリストの教会、とりわけ教会の教師たち、長老たち、修道士たちを激しく迫害したからである。　彼の側近の中には、キリストを信じ、この世の虚しさを悟って、すべてを捨てて修道士となった者もいた。このため、王は激しい怒りに駆られた。多くの修道士を捕らえて処刑し、至る所でキリスト教徒に偶像への礼拝を強要するよう命じた。　また、彼は支配下のすべての国々の公爵や地方長官に対し、拷問やあらゆる種類の殺害によって、キリストを信じる者や偶像への礼拝を拒む者を皆、根絶やしにするよう勅令を下した。　その結果、多くの信者たちは動揺し、中には拷問に耐える力がなく信仰を捨てた者もいた。しかし、他の者たちは自ら進んで拷問を受け入れ、主のために激しく苦しみ、主のために自らの魂を捧げた。　一方、大多数の人々は、危険を顧みて信仰を隠しつつ、密かに主に仕え、その聖なる戒めを守り続けた。また、特に修道士たちは荒野へ逃れ、そこで山や密林に身を隠した。

その頃、王に息子が生まれ、ヨアサフと名付けられた。　その赤子は並外れて美しく、この非凡な美しさは、まるで彼の中に宿るであろう偉大な内面の美しさを予兆しているかのようであった。王は多くの占星術師や星占い師を集め、赤子が成長した際に何が待ち受けているのかについて尋ねた。　彼らは、多くの観察を重ねた末、この子がこれまでのどの王よりも偉大になるだろうと告げた。しかし、占い師たちの中で最も賢明な一人は、星の動きによるものではなく、かつてバアラム[7996]が神の啓示によって語ったように、王にこう言った。

「その赤子は、あなたの王国で成長するのではなく、別の――より優れた、比類なきほど大きな王国で成長するでしょう。また、彼はあなたが迫害しているキリスト教の信仰を受け入れるものと考えます。そして、この私の予言が誤りではないことを願っています。」

王は、自分の息子がキリスト教徒になるという話を聞き、深く悲しみ、この預言が実現しないようにするにはどうすればよいかと考え込んだ。彼は、多くの明るい部屋を備えた特別で美しい建物を建て、そこでヨアサフを育てようとした。　やがて王子が成長し、物事を理解し始めるようになると、　王は、若く容姿端麗な乳母や使用人を彼の側に付け、王子には自分たち以外の人物と会わせてはならない、また王子に外部の者が近づくことを一切許さないよう命じた。　さらに、王は彼らに対し、死、老い、病気、その他同様の悲しみといった、この世の苦しみについて王子に一切語らないよう命じた。そうした知識は王子の喜びを妨げる恐れがあったからである。代わりに、彼の注意を向けさせるのは美しく楽しいことだけにし、常に快楽と楽しみで満たされた王子の心が、未来について思いを巡らせることができないようにしたのである。　また、王は、誰もキリストについて一言も口にすることを許さないと命じた。そうすることで、ヨアサフがキリストの名さえも決して耳にしないようにするためである。王は、占星術師の予言が実現してしまうことを恐れて、何よりもこの名を彼から隠そうとしていたからである。　また、もし従者たちの誰かが病気になった場合は、その者を皇太子から遠ざけ、代わりに若くて美しい別の者を任命し、皇太子の目に悲しげな光景が映らないように

[7996]（民数記 22:1–41、23:1–30、24:1–25）。バラムは、メソポタミアのハルラフ近郊にあるペフォラという町出身の預言者である。彼については、「彼が祝福する者は祝福され、呪う者は呪われる」という噂が広まっていた。　モアブの王バラクは、イスラエル人の勝利に恐れをなして、バラムを呼び寄せ、彼らを呪わせようとしたが、神に戒められたバラムは、呪いの代わりに祝福の言葉を述べた。

しなければならなかった。　やがて王は、自分の領土にまだ数人の生き残った修道士がいることを知った。王は彼らにはもはや痕跡すらないと思っていたため、大いに激怒し、直ちに全土のあらゆる国や都市に使者を派遣し、三日が経過するまでに王国全土から修道士を一人も残さないよう布告させた。　指定された期限を過ぎてもなお発見された者は、火刑または斬首によって処刑されることとした。王は、「彼らは人々に、十字架にかけられた方を神として崇めるよう教えているからだ」と述べたのである。

こうして、王子は、彼のために設けられた部屋から出られないまま、青年期を迎え、インドやエジプトのあらゆる知恵を習得し、極めて聡明で理解力に富み、あらゆる美徳を備えていた。彼は、父がなぜ自分をこの出られない閉じ込められた場所に留めているのかと深く考え込み、そのことを乳母の一人に尋ねた。 その乳母は、少年が極めて聡明で、とても善良であることを見て、 彼が生まれた時に占星術師たちが彼について予言したすべてのこと、そして父がキリスト教徒、とりわけ修道士たちに対して迫害を開始し、その多くを殺害し、残りを自国から追放した経緯を、詳しく語り聞かせた。乳母は、「王子はキリスト教徒になるのではないかと恐れていたからだ」と語った。　これを聞いた王子は黙り込み、乳母が語ったことすべてを心の中で反芻した。

王は息子を深く愛していたため、頻繁に彼を訪ねていた。ある日、イオアサフは王にこう言った。

「父上、私が絶えず嘆き、悲しんでいることについて、あなたから何か教えていただきたいのです。」

父は胸が張り裂けるような思いで、こう答えた。

「言ってみなさい、愛しい子よ。どのような悲しみがあなたを覆っているのか。そうすれば、私は今すぐそれを喜びに変えてあげよう。」

すると、イオアサフは尋ねた。

「私がここに閉じ込められている理由は何ですか。なぜ父上は、私を城壁や門の内に隠し、ここから出る道を断ち、誰の目にも触れないようにされたのですか。」

父は答えた。

「わが子よ、私は、お前の心に悲しみを引き起こし、喜びに満ちた人生を奪い去るようなものを、お前に見せたくないのだ。お前が、絶え間ない安らぎと、あらゆる喜びと楽しさの中で、生涯を全うすることを願っているのだ。」

「それなら、父よ、知っておいてほしい」と少年は答えた。「この閉じ込められた生活は、私に喜びや楽しさをもたらすのではなく、あまりにも深い悲しみと嘆きをもたらす。そのため、食べ物や飲み物さえも、甘くはなく、苦く感じられるのだ。私は、この門の向こうにあるすべてのものを見たいと願っている。　ですから、もし私が悲しみで滅びることを望まれないのなら、私が望む場所へ出られるように許し、今まで見たことのないものを目に焼き付けて、魂を喜ばせてください。

王はこれを聞いて悲しみに打ちひしがれ、もし息子の外出を禁じれば、彼をさらに大きな悲しみと嘆きに陥れることになるだろうと考え、息子にこう言った。

「そうしよう、わが子よ、お前の望むままに。」

そして直ちに、選りすぐりの馬を連れてくるよう命じ、王の威厳にふさわしいあらゆる準備を整えさせ、もはや息子が望む場所へ出かけることを禁じることはなかった。　その際、王子は側近たちに、王子と会うまでは不適切なことや悲しいことを一切許さず、目と心を喜ばせる、良きもの、美しいものだけを見せるよう命じた。　道中、至る所に歌い手の合唱団を配置し、王子の前をあらゆる種類の音楽を奏でながら進み、様々な見世物を披露して、これらすべてで王子の心を喜ばせるよう命じた。

こうした栄誉と楽しみを伴って宮殿を頻繁に出かけていた王子は、ある日、従者たちの不注意により、二人の男を目にした。そのうちのひとりはハンセン病を患っており、もうひとりは盲目であ

った。彼は付き添っていた者たちに尋ねた　：「彼らは誰なのか、なぜそのような状態にあるのか？」付き添いたちは、もはや人間の弱さを隠しきれない状況にあり、こう答えた。

「これらは人間の苦しみであり、通常、儚い性質と、私たちの肉体の脆弱さゆえに人々に降りかかるものです。」

少年は尋ねた。

「これはすべての人に起こるものなのか？」

すると、彼らはこう答えた。

「すべての人ではありませんが、地上の恵みを濫用して健康を損なった人々には起こります。」

すると、少年は尋ねた。

「もしこれが通常、すべての人に起こるわけではないのなら、こうした災難に見舞われる人々はそれをあらかじめ知っているのでしょうか。それとも、突然、予期せずやってくるのでしょうか？」

同行者たちは答えた：

「人間の中で、誰が未来を知ることができるだろうか？」

王子はその質問をやめたが、自分にとって異例なその光景を目撃したことに心を痛め、表情が変わった。　数日後、再び旅の途中に、彼は老朽化した老人に出会った。その老人は、しわだらけの顔をし、手足はたるみ、背中を丸め、全身が白髪で、歯はなく、かろうじて言葉を紡ぐ程度だった。彼を見て、若者は恐怖に襲われ、その老人を自分のところへ連れてくるよう命じ、連れてきた者たちに尋ねた。「この人は誰なのか？　なぜこんな姿になっているのか？」彼らは答えた：

「彼はすでに高齢で、力が少しずつ衰え、体も弱っていったため、君が見ているような衰弱した姿になってしまったのです。」

若者は言った。

「では、彼がさらに長生きしたとしても、これからどうなるというのか？」

彼らはこう答えた。

「死が彼を連れ去る以外、何もありません。」

若者は尋ねた。

「すべての人間に同じ運命が待ち受けているのか、それとも一部の人だけに起こるものなのか？」

彼らは答えた：

「もし若いうちに死が訪れなければ、人は長い年月を経て、必ず同じように老衰に陥るものだ。」

少年は尋ねた：

「人はいつ頃、この運命に直面するのでしょうか。また、例外なく誰もが死を迎えるのであれば、それを避け、そのような不幸に陥らないための手段は何かあるのでしょうか？」

すると、こう言われた。

– 人は八十歳か百歳になると、それほど老衰し、やがて死ぬ。それ以外にあり得ない。なぜなら、死は人間にとって自然な宿命であり、その到来は避けられないからだ。

これらすべてを見て聞いて、賢明な若者は心の底からため息をつき、こう言った。

「もしそうであるなら、この人生は苦く、あらゆる悲しみに満ちている。死の到来は避けられないばかりか、あなたがたが言ったように、いつ訪れるかも分からないというのに、常に死を待ちながら、誰が安らかにいられるだろうか？」

そして彼は自分の宮殿へと戻り、深い悲しみに沈み、絶えず死について考えを巡らせながら、心の中でこう呟いた。

「誰もが死ぬのなら、私も死ぬ。しかも、いつ死ぬのかさえ分からない……私が死んだ時、誰が私のことを思い出してくれるだろうか？長い時が流れ、すべては忘れ去られてしまうだろう……死後の別の生や、別の世界などはないのだろうか？」

彼はこうした考えに深く悩まされていたが、父には何も言わず、ただ前述の乳母に、これらすべてについて語り、思索に疲れ果てた彼の心を安らげてくれるような人物を知らないかと、しきりに尋ねた。乳母は言った。

「以前にも話した通り、お前の父は、常にこうした事柄について思索を巡らせていた賢明な隠者たちを――ある者は殺し、ある者は怒りに任せて追放してしまった。今や、この領内には彼らの面影は残っていない。」

若者はこのことを深く嘆き、魂が激しく傷つき、絶え間ない悲しみの中で日々を過ごしていた。そのため、この世のあらゆる甘美さや美しさも、彼の目には忌まわしく、不浄なものとして映っていた。 そして、 、すべての人を救い、真理の知恵に至らせたいと願われる神は、その常なる人間愛と慈悲により、次のようにしてその若者を正しい道へと導かれた。

当時、セナリドの荒野に住む、バルラアムという名の、極めて賢明で徳に満ちた修道士がいた。彼は司祭の位にあった。 神の啓示に導かれて、彼は王子の置かれた状況を知り、荒野を出て、衣服を着替え、商人の姿に扮し、船に乗ってインド王国へと向かった。 王子の宮殿がある都市に到着すると、彼はそこで長い間滞在し、王子とその側近たちに関する詳細な情報を集めた。そして、前述の乳母が王子に最も近い存在であることを知ると、老修道士は彼の元へ向かい、こう言った。

「ご存じの通り、私は商人であり、遠い国からやって参りました。私には、これまでどこにも見当たらないような貴重な宝石があります。これまで誰にも見せたことはありませんでしたが、あなたが賢明で思慮深い方だと見抜いたため、今、このことをお話しするのです。 さあ、私を王子の元へ案内してください。そうすれば、私はその宝石を王子に差し上げます。その価値は誰にも計り知れないもので、あらゆる良きものや高価な品々を凌駕しているのです。 それは、盲人に視力を、聾者に聴力を、唖者に言葉を、病人に健康を与え、人々から悪霊を追い払い、狂人をあらゆる面で賢明にし、それを手に入れた者に望むすべての恵みを与えるのだ。

乳母は彼に言った。

「見た目は老人のようだが、そのくせ空虚な言葉を並べ、とてつもなく自慢ばかりしている。私はこれまでに数え切れないほどの宝石や真珠を見てきたし、手元に持っていたこともあるが、君が言ったような力を持つ石は、見たことも聞いたこともない。」 とはいえ、その石を見せてくれ。もしお前の言葉が真実であれば、すぐに王太子のもとへ案内してやる。そうすれば、お前は王太子から栄誉を授かり、相応の報酬を受け取ることになるだろう。

すると、バルラアムは言った。

「そのような石をどこにも見たことも聞いたこともないというのは、おっしゃる通りです。しかし、私の言葉を信じてください。それは確かに私の手元にあります。私は老いて自慢したり嘘をついたりしているのではなく、真実を語っているのです。あなたがそれを見たいとおっしゃいましたので、私の言うことを聞いてください。 私のこの宝石は、その効能や奇跡に加え、もう一つの性質を持っている。それは、健全な目と、清らかで全く汚れのない体を持たない者は、それを見ることができないということだ。もし、不意に穢れてしまった者がその石を見てしまえば、視力も理性も失ってしまうだろう。 私は医術に精通しているため、あなたの目が痛んでいることがわかります。ですから、あなたの失明の原因となってしまわないよう、この宝石をお見せすることを恐れているのです。一方、王の御子については、清らかな生活を送り、健康で澄んだ目をお持ちだと聞いています。だからこそ、彼に私の秘宝をお見せしたいのです。 どうか不注意な真似をせず、ご主人様からこのような重要な買い物を奪わないでください。

乳母は彼にこう答えた。

「もしそうなら、その石を私に見せないでください。私は多くの不浄な行いで身を汚しており、あなたが言った通り、不健康な様子をしているからです。しかし、あなたの言葉は信じますし、主人に伝えることを怠るつもりはありません。」

そして宮殿へ向かった乳母は、王子にすべてを順を追って話した。王子は乳母の話を聞き終えると、心に何らかの喜びと精神的な高揚を感じ、直ちに商人を自分の元へ連れてくるよう命じた。

バルラアムは皇太子の元へ入り、彼に頭を下げて、賢明で心地よい言葉で挨拶した。皇太子は彼に座るよう命じた。そして、乳母が退出した後、イオアサフは老人にこう言った。

「私の乳母に、あれほど偉大で不思議なことを語っていたあの石を見せてくれ。」

すると、バルラアムは彼に向かってこう語った。

「王子よ、私について語られたことはすべて真実であり、疑いようもありません。なぜなら、あなたの陛下の前で偽りのことを申し上げるのは、私にふさわしくないからです。しかし、あなたの考えを知るまでは、この偉大な秘密を明かすことはできません。私の主はこうおっしゃいました。『種を蒔く人が出て行って蒔いた。　種を蒔いていると、ある種は道端に落ち、鳥が飛んできてそれを啄み食った。ある種は岩だらけの場所に落ち、芽を出したが、水分がなかったため枯れてしまった。ある種は茨の中に落ち、茨に覆い隠されてしまった。　また、ある種は良い土に落ち、百倍の実を結んだ」（マタイ13:3–8）。それゆえ、もし私があなたの心の中に実り豊かな良い土を見いだすならば、私はあなたの中に神聖な種を蒔き、あなたに偉大な秘儀を明かすことを厭わない。　もしその土が岩だらけで茨に覆われていたり、あるいは道端にあり、通りすがりの人々に踏みつけられたりしているようなものであれば、救いの種をそこに蒔くのは全くやめて、それを鳥や獣に奪われることのないようにしたほうがよい。彼らの前では真珠を投げ捨てることは厳禁されているのだから。　しかし、私はあなたの中に最良の土壌を見出すことを願っている。そうすれば、あなたは言葉の種を受け入れ、　、かけがえのない宝石を見出し、光の曙に照らされ、百倍の実を結ぶことができるだろう。なぜなら、あなたのために私は多くの労苦を厭わず、遠い道のりを歩んできたのだ。それは、あなたがまだ見たことのないものを示し、あなたが一度も聞いたことのないことを教えるためである。

ヨアサフは彼にこう答えた。

「尊き長老よ、私は新しい善き言葉を聞きたいという言葉に尽くせないほどの渇望に駆られており、私の心の奥底には、いくつかの重要かつ不可欠な事柄を知るよう私を駆り立てる炎が燃え盛っています。しかし今日に至るまで、私の心に抱くことを解き明かし、私を正しい道へと導いてくれる人を見つけることはできませんでした。　もし私がそのような人を見つけたなら、その人から聞いた言葉を鳥や獣の餌にはせず、あなたが言ったように石のように硬く、茨に覆われたような心にはならず、感謝してそれを受け入れ、心に留めておくでしょう。　そしてあなたも、もし何かを知っているなら、私から隠さず、教えてほしい。なぜなら、あなたが遠い国から来たという話を聞いた途端、私の魂は喜びに満ち、あなたを通して望みを叶えられると期待したからだ。だからこそ、私はあなたを直ちに私の元へ招き入れ、知人や同輩の一人のように喜んで迎え入れたのである。

そこで、バルラアムは、聖霊の恵みに満ちた口を開き、万物を創造された唯一の神について、また世界の初めから成されたすべての事柄について語り始めた。アダムの堕落と楽園からの追放、先祖たちや預言者たちについて；　続いて、神の御子の受肉、その自発的な受難、そして復活について；聖三位一体、洗礼、そして聖なる信仰のあらゆる秘義について語った。というのも、バルラアムは聖書に極めて精通し、熟達していたからである。　たとえや比喩を用いて教えを解き明かし、美しい物語や格言で言葉を彩ることで、彼は王子様の心を蝋のように柔らかくした。王子様は、話を聞くにつれてますます注意深く、喜びをもってその言葉に耳を傾けていた。　ついに、王子は、その計り知れない価値のある宝石こそが主キリストであることを悟った。なぜなら、光が彼の魂に輝き、心の目を開かせたからであり、それによって彼は、バルラアムが語ったすべてのことを、何の疑いもなく信

じるようになったのである。そして、玉座から立ち上がると、彼は賢明な長老のもとへ歩み寄り、喜びのうちに彼を抱きしめて言った。

「おお、人の中で最もふさわしい方よ！　これこそが、私が思うに、あなたが秘めており、望む者すべてに見せるのではなく、心の感覚が健全な、ふさわしい者たちだけにしか見せない、あの計り知れない価値のある宝石に他なりません。　というのも、あなたの言葉が私の耳に届いた途端、甘美な光が私の心に差し込み、長い間私の魂を覆っていた重苦しい悲しみの覆いがたちまち消え去ったからです。さて、私のこの考えは正しいでしょうか。もし、これよりもさらに良いことをご存知なら、教えてください。」

そしてバルラアムは、話を続け、善き死と悪しき死、万人の復活、永遠の命、義人への報い、そして罪人への苦しみについて彼に語った。そして、その言葉によって彼を深い感動と心の砕けに導き、彼は全身を涙に濡らし、長く泣き続けた。　さらに、ヴァルラアムはこの世の虚しさと移ろいやすさ、そしてこの世の拒絶、修道生活や隠遁生活についても彼に語った。

イオアサフは、宝庫の宝石のように、バルラアムの言葉をすべて心にしまい込み、その語りかけを大いに楽しみ、彼を深く愛するようになったため、常に彼と離れず、その教えに耳を傾けたいと願うようになった。彼は、荒野での生活や食事、衣服について尋ね、こう言った。

「教えてほしい。あなたや、あなたと共に荒野に住む人々の食事はどのようなものか。衣服はどこから手に入れ、どのようなものなのか。」

バルラアムは言った。

「私たちの糧は、荒野に生える木の実や草です。もし信者の方が少しのパンを持ってきてくださるなら、私たちはそれを、神の摂理によって送られたものとして受け取ります。　私たちの衣服は、羊毛や羊や山羊の皮で作られたもので、非常に古びてあちこち繕い直されており、冬も夏も同じものです。そして、私が上に羽織っているこの服は、私が修道士だと気づかれないように、ある忠実な信徒から借りたものです。もし自分の服のままここに来ていたら、あなたのところへは入れなかったでしょう。

ヨアサフは長老に、普段の修道士の服を見せてほしいと頼んだ。するとバルラアムは上着を脱ぎ、ヨアサフの目に恐ろしい光景が飛び込んできた。　老人の体は太陽の照りつけですっかり干からびて黒ずんでおり、皮膚は骨に張り付いているだけだった。腰から膝までは、破れ、とげのある山羊の毛の粗布で締められ、肩には同じようなマントを羽織っていた。　ヨアサフはそのような過酷な修行に驚き、老人の偉大な忍耐に感嘆して、ため息をつき、涙を流し、老人に対し、自分も一緒にそのような荒野での生活を送らせてほしいと懇願した。

バルラアムは言った。

「今はそれを望んではならない。お前のせいで、お前の父の怒りが兄弟たちに降りかかることのないように。洗礼を受け、ここに残りなさい。私は一人で行く。主が望まれる時、お前も私のところに来るだろう。私は、この世でも来世でも、私たちが共に暮らすことを信じているからだ。」

ヨアサフは涙ながらに言った：

「もしそれが主なる神の御心であるならば、私に聖なる洗礼を授けてください。そして、砂漠にいるあなたの兄弟たちに、食糧や衣服として届けるために、私からできるだけ多くの金を持ち帰ってください。」

「富める者は貧しい者に与えるものであり、貧しい者が富める者に与えるのではない」とバルラアムは答えた。「それなのに、お前自身が貧しい身でありながら、どうして我々のような富める者に与えようというのか？　私たちの兄弟たちの中でも最も身分の低い者でさえ、お前よりは比べものにならないほど裕福なのだから。」　神の御慈悲により、あなたもまもなくこの真の富に恵まれることを願っている。しかし、もしあなたがまさにそのように富を得たなら、あなたはけちで、人付き合いの悪い人間になってしまうだろう。

ヨアサフは言われたことを理解できなかったので、バルラアムは、キリストのために地上のすべてを捨てた者は天の恵みを得るが、その一方で、天からの最も小さな賜物でさえ、この世のあらゆる富よりも尊い、という意味で自分の言葉を説明した。その際、彼はヨアサフにこう付け加えた。

「金はしばしば罪の原因となる。それゆえ、我々はそれを手元に置かないのだ。それなのに、あなたは、兄弟たちがすでに足で踏みつけにした蛇を、私が彼らのもとへ持ち帰れと望んでいるのだ。」

その後、彼はヨアサフに聖なる洗礼の準備をするよう勧め、長期にわたる断食と祈りを命じ、自らはその場を離れ、人里離れた場所で神に彼のために祈った。　翌日、彼は再び彼の元を訪れ、長い間、真の信仰について教えを説いた。こうして長い間、長老は毎日王子の元を訪れ、預言者や使徒たちの教え、そして教父たちの伝承を彼の前で説いた。彼がヨアサフに洗礼を授けることを決意したその日、バルラアムは彼に次のような教えを授けた。

「見よ、あなたはキリストの印を受け、神の御顔の光に照らされ、神の子となり、聖なる命を与える御霊の宮となることを望んでいる。　それゆえ、今、父と子と聖霊、すなわち聖なる命の源である三位一体を信じなさい。三つの位格と一つの神性において賛美され、位格と位格の属性においては区別されつつも、本質においては一つであるものを。　それゆえ、生れざる唯一の神である父と、唯一の主イエス・キリストとを信じなさい。キリストは光より光、真の神より真の神、すべての世より前に生じられた方である。なぜなら、至善なる父から至善なる御子が生まれ、生れざる光から永遠に存在する光が輝き出し、　真の命から命を与える源が生まれ、御父の力そのものから御子の力が現れた。御子は栄光の輝きであり、位格ある御言葉であり、初めから神と共にあり、御自身も神であり、初めなく、永遠に存在される方であり、御子を通して、目に見えるものも見えないものもすべて存在を得たのである。　また、父から出で、完全にして命を与える神、聖別する者、同じ御心を持つ、全能にして、同本質であり、ご自身の位格に留まられる、唯一の聖霊を信じなさい。　それゆえ、父と子と聖霊に、三つの位格において、異なる属性を持つが、一つの神性において、礼拝を捧げなさい。　彼らすべてに共通するのは神性であり、その本質は一つであり、実体は一つであり、栄光は一つであり、王国は一つであり、力は一つであり、権威は一つである。また、御子と聖霊に共通するのは、彼らが父から出ているということである。一方、父に固有なのは「無生」であり、御子に固有なのは「誕生」であり、聖霊に固有なのは「発出」である。　このようにこれを信じなさい。しかし、誕生や発出の様相を理解しようと試みてはならない。それは理解しがたいことだからである。むしろ、正しい心をもって、何の探究もなしに、父、子、聖霊は、無生、誕生、発出を除いて、すべてにおいて一つであることを受け入れなさい。また、独り子であり、神の言葉であり、神である方が、私たちの救いのために、　御父の御心により、聖霊の働きによって、聖母マリアの胎内で種なしに受胎し、彼女から朽ちることなく生まれ、完全な人間となられた。なぜなら、御子は完全な神であると同時に完全な人間でもあり、二つの本性、すなわち　神性と人性――という二つの本性において、理性と自由意志を持ち、行動し、それぞれの本性の性質に従ってあらゆる点で完全であり、意志、言葉、権能を備えている――神性と人性が一つの構成として一体となっている――これらすべてを、理性を働かせて探求することなく受け入れ、また、これらすべてがどのようにして起こったのか、その具体的な様相――　神の御子がいかに自らを低くされたか、また人が種なしに、かつ汚れなく処女の血から生まれたのか、あるいはその結合がいかにして起こったのかといったことである。これらすべてを、私たちは神聖な聖書に託されたものとして信仰によって受け入れるよう教えられているが、その本質そのものを理解し、表現することはできない。　神の御子を信じなさい。御子は御自身の憐れみによって人となり、罪を除く人間の性質のすべてを受け入れられたのです。　なぜなら、御子は飢えと渇きを感じ、眠り、労苦し、人類のために嘆き、私たちの不義のために死に渡され、十字架にかけられ、葬られ、　真の死を味わわれたからであり、その間も、御子の中に宿る神性は、無情で不変のままであったからである。　私たちは、苦しみに関するいかなるものも、決して御方の不死の神性には当て

はめず、御方がご自身に受け入れた人間性によって苦しみを受け、葬られたことを告白し、　また、神の力によって朽ちることなく死者の中から復活し、天に昇られ、再び栄光のうちに再臨して、生ける者と死んだ者を裁き（ヨハネ5:20）、各人にその行いに応じて正しい報いを与えられる（マタイ16:27；　黙示録22:12）：死者はよみがえり、墓にある者たちは立ち上がるからである。その際、キリストの戒めを守り、正しい信仰をもってこの世を去った者は永遠の命を受け継ぎ、罪によって自らを汚し、真の信仰から逸れた者は永遠の苦しみへと向かうのである。　また、悪という何らかの根源的な実体や王国が存在すると信じるな。そして、それが無始であるとか、自律的であるとか、あるいは神からその起源を得たなどと想像してはならない。そう考えることは無分別である。　実のところ、悪は私たち自身の過ちと、自分自身への不注意を通じて悪魔の働きによって、私たちの中に侵入してくるのである。私たちは自由意志を持っているため、自らの意志で善か悪かを選ぶことができる。また、罪の赦しのための、水と御霊による唯一の洗礼を告白せよ。　キリストの至聖なる秘跡の聖体拝領を受けなさい。それは、まさに私たちの神であるキリストの御体と御血であり、主が信じる者たちに罪の赦しのために与えてくださったものであると信じてください。なぜなら、主が裏切られたその夜、主は聖なる弟子たちや使徒たち、そして将来のすべての信徒たちに、次のように明確に遺言されたからです。　*「これを受け取り、食べなさい。これは、あなたがたのために裂かれるわたしの体である……また、夕食の後、杯を取り、こう言われた。『この杯は、わたしの血による新しい契約である。これを……わたしの記念として行いなさい』」*（マタイ26:26–28；コリントの信徒への手紙一11:24–25）。

これこそが、御自身の力によって働き、万物を創造する神の御言葉そのものであり、聖なる言葉と聖霊の降臨を通じて、捧げられたパンとぶどう酒を御体と御血へと変容させ、信仰をもって聖餐を受ける者たちに、聖化と啓発をもたらすのである。

また、信仰をもって、私たちのために受肉された神の御言葉の尊い像（御顔）を礼拝し、口づけしなさい。この像の中に、あなたが創造主ご自身を見ているのだと心に留めておきなさい。なぜなら、「像に捧げられる敬意は、原型へと移る」と聖バシレイオス大主教は述べているからです。　そして、原型とは、その顔が描写され、その描写の理由となった方である。　このように、イコンに描かれたものを見つめる時、私たちは心の目で、そのイコンが表す御方へと目を向け、私たちの肉体を身にまとわれた御方の御姿に畏敬の念をもって礼拝する。しかし、描かれた像そのものを神として崇めるのではなく、受肉された神、そして私たちのために自らを卑しめ、奴隷の姿にまで下られた御方の御姿を、深く、愛を込めて口づけするのです。　同様に、御母マリアとすべての聖人たちの像にも口づけを捧げなさい。　また、尊き命を与える十字架の像にも信仰をもって礼拝し、そこに肉をもって釘付けにされ、人類を救うために十字架にかけられたキリスト、神であり世界の救い主のために、その像に口づけをなさい。キリストは、十字架の力を恐れ震える悪魔に対する勝利のしるしとして、私たちに十字架の像を授けてくださったのです。　これこそがあなたが信じるべきことであり、この信仰をもってあなたは聖なる洗礼を受けるのです。ですから、最期の息を引き取るその日まで、この信仰を、いかなる変更や異端的な付加もなく守り通してください……この汚れなき信仰に反するあらゆる教えを憎み、それらを神に敵対するものとしてみなしてください。なぜなら、使徒の言葉にあるように：　*「たとえ私たちや、天からの天使でさえ、私たちがあなたがたに宣べ伝えたこととは異なる福音を宣べ伝えたなら、その者は呪われよ」*（ガラテヤ人への手紙1:8）。――そして確かに、使徒たちが宣べ伝え、神に愛された教父たちが様々な公会議で確立し、公会議の教会に受け継がれてきたもの以外に、別の福音も、別の信仰も存在しない。

そう語り、王子のヨアサフにニカイア公会議で定められた信仰告白を教えた後、バルラアムは王宮の庭にある池で、父と子と聖霊の御名によって彼に洗礼を授けた。こうして、聖霊の恵みがヨアサフに注がれた。　その後、ヨアサフの寝室に入ったバルラアムは、そこで礼拝を執り行い、彼に至聖にして命を与える聖体聖血を授けた。そして二人は、神を賛美しつつ、霊的な喜びに満たされてい

た。　その後、バルラアムは皇太子に、洗礼を受けた後にどのように生きるべきかを教え、徳についての教えを授けた後、自分の居所へと戻った。

一方、ヨアサフの従者や乳母たちは、長老が頻繁に皇太子を訪ねているのを見て、戸惑いを覚えた。そこで、彼らの長であるザルダンという男――王は彼の忠誠と献身ゆえに、皇太子の宮廷を監督する役目に任命していた――がある日、ヨアサフにこう言った。

「殿、私があなたの父上をいかに敬い、いかに忠実であるかは、よくご存じでしょう。だからこそ、父上は私をあなたの侍従として任命されたのです。」　しかし今、この奇妙な男が頻繁に殿の下へ訪れ、殿と語り合っているのを見て、私は彼が、殿の父がこれほどまでに敵視しているキリスト教の信仰を持つ者ではないかと恐れています。もしそうであれば、私は彼のせいで　死刑の宣告を受けることになってしまうかもしれません。　ですから、彼について王に告げるか、彼との会話を完全にやめるか、あるいは私をあなたの元から遠ざけて、私が責任を問われることのないようにしてください。

皇太子は答えた。

「ザルダンよ、まずはこうしよう。君はカーテンの陰にひっそりと座り、彼と私の会話を聞いていてくれ。そうすれば、どうすべきか教えてやる。」

そしてある日、ヴァルラアムが宮殿に現れたとき、イオアサフはあらかじめザルダンを幕の後ろに隠しておき、その長老に言った。

「あなたの教えを簡潔に思い出させてほしい。そうすれば、それが私の心に深く根付くだろう。」

ヴァルラアムは語り始め、神、敬虔、来世の恵み、そして永遠の苦しみについて多くのことを彼に語った。そしてついに、長い対話の末、立ち上がり、祈りを捧げてから、自分の住居へと戻っていった。

王子はそこでザルダンを呼び寄せ、試すように尋ねた。

「あの嘘つきの老人が、私と何を語り合っていたか、聞いただろうか。彼はその教えで私を惑わし、私のすべての喜びと楽しみを奪い、見知らぬ神へと導こうとしているのだ。」

ザルダンはこう答えた。

「陛下、このあなたの僕を誘惑なさらないでください。この男の言葉が、どれほど深くあなたの心に響いたか、私はよく存じております。そして、彼の説教が真実であることは、私たち皆が知っています。」　しかし、陛下の父上がキリスト教徒に対する激しい迫害を開始して以来、彼らの信仰は滅びる運命にあります。もしそれでもなお、その信仰が陛下の心に響き、それに伴う苦難や労苦を耐え忍ぶことができるのであれば、陛下の善き願いが叶うことを願います。しかし、私はどうすればよいのでしょうか？　私は、あのような苦しみや、彼らのあまりにも悲惨な暮らしぶりを、見ることもできません。王の怒りを恐れて、私の心は凍りついてしまいます。あの男をあなたの元へ入らせることを許してしまったことについて、王にどう答えればよいのか、私にはわかりません。

これに対し、皇太子はザルダンにこう言った。

「お前の偉大な献身と、私への忠実な奉仕に対する最良の報いは、言葉に尽くせない恵み――すなわち、お前の創造主を知る知識と、その方への信仰――を、お前に開くよう努めることだと考えた。私は、お前が正しい教えを耳にすれば、即座にそれを愛し、私と共にその道を歩んでくれると期待していた。　しかし、その期待は裏切られたようだ。お前の心は鈍くなり、真理を知ろうとはしないからだ。せめて私の願いを一つだけ叶えてほしい。当分の間、父には何も話さないでほしい。そうしても何の得にもならず、父に悲しみと嘆きをもたらすだけだからだ。

翌日、バルラアムは皇太子のもとを訪れ、彼のもとを去るつもりであることを告げた。ヨアサフは、別れを受け入れることができず、心を痛め、苦々しく泣いた。長老は彼と長く語り合い、信仰と徳を確固たるものにし、自分のために泣かないよう説得した。　また、彼は皇太子に、まもなく二

人が永遠に再会することを予言した。そこでヨアサフは、長老を悲しませたくないという気持ちと、ザルダンが長老の来訪を王に密告するのではないかと恐れたこともあり、涙ながらにヴァルラアムにこう言った。

——私の霊的な父であり、慈愛に満ちた師であるあなたが、私がこの虚しい世に残り、あなたご自身が霊的な安らぎの場へと去られることを望まれたのなら、もはや私はあなたを引き留めることはできません。　さあ、神の御加護のもと、平安のうちに旅立たれ、あなたの聖なる祈りの中で、常に私の罪深さを覚えてください。そうすれば、やがて私もあなたの元へ赴き、その尊いお顔を常に拝むことができるようになるでしょう。　しかし、どうか私にあなたの愛を示してください。あなたの修道生活と教えの記念として、またあらゆる悪魔の働きから身を守るために、この薄くて古びたマントを私に譲ってください。

長老は彼に自分のマントを授けた。ヨアサフはそれを王の紫の衣よりも尊く思った。その後、バルラアムは祈りの姿勢を取り、感動しながらヨアサフのために祈り、新たに啓蒙された若者を神の摂理と保護に委ねた。祈りを終えると、彼は皇太子に向き直り、彼に口づけをしてこう言った。

「天の父の子よ！　あなたに平安と永遠の救いがありますように。」

そして彼は、自らの道を正しく導いてくださった神に喜びと感謝を捧げながら、宮殿を後にした。

ヴァルラアムが去った後、至福のイオアサフは絶え間ない祈りと苦行の生活に身を捧げた。これを見たザルダンは極めて憤り、病気を装って自宅へと引きこもった。王はザルダンの病を知ると、彼を治療するために、非常に腕の良い王室の医師を遣わした。　医師はザルダンの病状を注意深く診察し、王に、ザルダンには何らかの悲しみに打ちひしがれていること以外に、病気の原因となるものは見当たらないと報告した。　そこで王は、息子が何らかの理由でザルダンに怒りを抱き、その結果、ザルダンが悲しみのあまり病に倒れたのだと考え、自ら病人の元を訪れて　、病気の原因についてより詳しく聞き出そうと決めた。　しかし、ザルダン自身が急いで王のもとへ現れ、王の前で地面にひれ伏し、王子を不注意に守ったことについていかなる罰も受けるに値すると認め、イオアサフに起こったすべてのことを王に語った。

「ある悪辣な男——」と彼は言った。「ヴァルラアムという名の魔術師であり詐欺師が、砂漠からやって来て、あなたの息子にキリスト教の信仰について語りかけ、今や皇太子はすでにキリスト教徒となってしまったのです。」

これを聞いた王は悲しみのあまり身震いし、やがて言葉に尽くせないほどの激怒に駆られた。王は直ちに、アラキヤという名の、最も高位の貴族であり、賢明な顧問で熟練した占星術師を呼び寄せ、一連の出来事を順を追ってすべて語った。

アラキアは王を慰めながら、こう答えた。

「王よ、悲しまれる必要はありません。もしヴァルラアムを捕らえることができれば、我々はあなたの息子をキリスト教の信仰から容易に引き離すことができます。　もし彼を見つけられなくても、私はもう一人の長老——すでに我々の信仰を奉じている——ナホラという人物を知っている。彼は砂漠に住み、占星術を修めている。私も彼に師事したことがあり、その風貌はヴァルラアムに非常によく似ている。というのも、私は以前ヴァルラアムに会ったことがあるので、その顔もよく知っているからだ。　そこで、このナホラを砂漠から呼び寄せ、ヴァルラアムになりすますよう命じ、彼と信仰について論争を繰り広げよう。彼は敗れたふりをして、キリスト教の信仰が偽りであると宣言するだろう。そして、あなたの息子はそれを見て、キリスト教から背を向け、先祖の神々のもとへ戻ることになるだろう。

王はこの策を良しとし、悲しみを幾分和らげ、虚しい期待に身を委ね、急いでアラキア自身を大勢の兵士を率いてヴァルラアムを探しに行かせた。アラキアは長い道のりを経て、ついにセナリドの砂漠にたどり着いた。　そこで彼は、道すらない場所や、かろうじて通り抜けられるような藪の中

を長く歩き回り、ある場所の山麓で少数の隠者たちを見つけ、彼らを捕らえた。　その中の一人は彼らの長老であり、かつてこの世を去った聖なる父たちの骨で満たされた毛皮の袋を携えていた――それは死を常に思い起こさせるためであった。アラキアは隠者たちに尋ねた。

「王の息子を惑わしたあの欺瞞者は、どこにいるのか？」

「彼はここにはいません」と、毛皮の袋を携えていた者が皆を代表して答えた。「そして、今後もここにはいないでしょう。彼はキリストの力に追われて私たちから逃げ回っているからです。彼はあなた方の間にいます。」

「彼を知っているか？」とアラキアは尋ねた。

「知っている」と、ある隠者は答えた。「欺く者、すなわち悪魔のことだ。彼はまさにあなた方の間に住んでおり、あなた方は彼に媚びているのだ。」

「だが、私が尋ねているのはヴァルラアムのことだ。」

「もしヴァルラアムについて尋ねるのなら」と、隠者は答えた。「『王の息子を惑わしから遠ざけた者はどこにいるのか』と言うべきだった。彼は我らの兄弟であり、修道者の禁食の修行を我らと共に分かち合っているが、もう何日も彼を見かけていないのだ。」

「彼は一体どこにいるのですか？」

「我々は荒野にある彼の独房を知っているが、その場所を君たちに明かすつもりはない。」

アラキアは激怒して彼らに死を脅したが、彼らは死の話を聞いて喜んだ。彼は彼らに数多くの傷を負わせ、激しい拷問を加え、ヴァルラアムの居場所を明かすよう迫ったが、彼らは沈黙を守った。　その後、アラキアは再び至る所でヴァルラアムを徹底的に捜し回ったが、どこにも見つけられず、何も成果を得られずに王のもとへ戻った。彼に連れ戻されたのは、前述の七十人の砂漠の修道士たちだけだった。　王はあらゆる手段を尽くして、ヴァルラアムの居場所を明かし、キリストを否定するよう彼らを強要したが、彼らは王の命令に従わなかったばかりか、その不敬虔さを非難した。そのため、王は彼らの舌を切り落とし、目をえぐり出し、手足を切り落とすよう命じた。こうして、勇敢な殉教者たちは息を引き取った。

彼らの死後、アラキアは王の命令により、夜陰に乗じて、荒野で悪霊たちと共に暮らし、魔術を働いていた魔術師ナホルのもとへ赴き、事情を詳しく説明した上で、ヴァルラアムになりすますよう懇願した。　その後、彼は王のもとへ戻り、翌日、兵士の一隊を編成して、再びヴァルラアムを探しに行くという噂を流し、再び砂漠へと向かった。　そこで、ナホルは密林から出てくる際に部隊の前に姿を現した。兵士たちは彼に気づくと追いかけていき、追いつくと捕らえてアラキアの元へ連れて行った。アラキアはナホルのことを知らないふりをして、「お前は誰だ？」と尋ねた。ナホルは「自分はヴァルラアムだ」と答えた。皆は大いに喜び、彼を縛ったまま王のもとへ連行した。　その間、ヴァルラアムが捕らえられたという知らせが至る所に広まり、ヨアサフはこれを深く嘆き、苦々しく泣いた。しかし、万人の慰め主である神は、ある啓示の中でヨアサフに、捕らえられたのはヴァルラアムではなく、その代わりに魔術師ナホルであると告げた。

王はまず息子の宮殿へと向かい、時には優しく穏やかに、時には激しく厳しい言葉で、キリスト教の信仰を捨てて先祖の神々のもとへ戻るよう説得したが、キリストへの愛を彼から奪うことはできなかった。　ヨアサフは父のあらゆる言葉に対し、偉大な知恵をもって答え、異教の神々の無価値を論証し、万物の創造主である唯一の真の神を賛美し、この神のために傷を負い、死をも厭わない覚悟を表明した。　しかし、父が息子に対して抱く自然な愛情ゆえに、王は彼を苦しめることを許さず、さらに、皇太子が説く真理を耳にするたびに、自身の良心が彼を責めたため、王はこう言った。

「わが子よ、お前はあらゆる事において父の意志に従うべきであった。しかし、お前は無礼で反抗的であり、自分こそが誰よりも賢いと思い込んで、頑なに私に逆らっている。それゆえ、無益な論争は止め、真実そのものに道を譲ろう。　さあ、私は大勢の集まりを開き、我が王国中のすべての賢者を召集する。また、キリスト教徒たちも招くつもりだ。その際、私の布告役たちに、至る所で大

声で宣言するよう命じる。キリスト教徒の誰もが何も恐れる必要はなく、恐れずに集まりに来るよう、そこで共同の裁きによって、どちらの信仰が優れているかを審理するのだ。　私の手元には、お前を惑わしたヴァルラアムも、鉄の枷をはめられて囚われている。私は彼を捕らえるまで決して諦めなかった。彼を集会に引き出し、彼に自分の信者たちと共に我々の賢者たちと対峙させ、信仰について論じ合わせよう。　もし、あなた方キリスト教徒が、そのヴァルラアムを率いて我々の者たちに打ち勝つならば、望むものは何でも与えよう。しかし、もし敗北したならば、あらゆる点において私の命令に従わなければならない。

「主の御心でありますように」と、至福のイオアサフは答えた。「すべてがあなたの望む通りになりますように。そして、真の神が、私たちが正しい道から逸れないよう助けてくださいますように！」

そこで王は、至る所に送られた書簡と、すべての都市や集落で王の意志を大声で告げる布告者たちを通じて、すべての偶像崇拝者とキリスト教徒に、一つの場所に集まるよう命じた。　――後者（キリスト教徒）は何も恐れることなく――異教の祭司や魔術師たちが率いるヴァルラアムとの論争を通じて、真の信仰に関する問題を解決するためであった。　これに伴い、王は自国にいる最も賢明なペルシャやカルデアの祭司、魔術師、占星術師たちをすべて召集し、彼らにキリスト教徒を打ち負かすよう命じた。　こうして、王のもとには、偶像崇拝者たち、悪意に満ちた賢者たち、そして嘘に長けた教師たちが大勢集まった。彼らは、*「自分たちを賢い者と呼びながら、正気を失っていた」*（ローマ 1:22）、一方、キリスト教徒たちは、異教徒たちに打ちのめされた者もいれば、山や洞窟に逃げ込んで身を隠していた者もおり、ごく少数の者しか集まらなかった。その中に、神の聖書に精通したヴァラキヤという名の者がただ一人いた。　彼こそが、偽りのヴァルラアムを助けようと立ち上がった唯一の人物であったが、実際にはそれがヴァルラアムではなく、魔術師ナホルであることを知らなかった。

王は高い玉座に着き、息子にも自分の隣に座るよう命じたが、王子はその父への敬意から、王の隣ではなく、玉座のそばの床に座った。王の御前に、すべての異教の賢者たちが列をなし、ナホル――偽りのヴァルラアム――も連れてこられた。

「さあ」と王は自らの賢者たちに向かって言った。「諸君には並大抵ではない偉業が待ち受けている。そして、二つのうちいずれかが諸君を待ち受けている。すなわち、ヴァルラアムとその同志であるキリスト教徒たちとの論争に勝利すれば、あらゆる栄誉に浴することになる。あるいは、敗北すれば、恥辱と　不名誉と残酷な処刑に処されることになる。なぜなら、もしあなたがたがキリスト教徒に打ち勝たなければ、私はあなたがた全員を容赦なく滅ぼし、その遺体を獣や鳥の餌とし、あなたがたの子供たちを永遠の奴隷とするからだ。

王がこう言い終えると、ヨアサフは叫んだ。

「王よ、今、あなたは正しい裁きを下されました！私もまた、私の師に同様の言葉を伝えましょう。」

そして、ナホルに向き直って言った。

「バルラアムよ！　あなたは、なんと栄光に満ち、なんと安らぎに包まれた中で、初めて私と出会ったことか！　しかし、あなたの長きにわたる説教によって、私は先祖の神々や律法から離れ、未知の神に仕え、父であり君主である者を怒らせることになってしまった。　それゆえ、今、自分がまるで天秤の上にいるかのように想像してみよ。もし、これから行われる論争で勝利を収め、お前の教えが真実であることを証明できれば、お前は真理の説教者として名声を博し、私はお前の教えに忠実であり続け、最期の息を引き取るまでキリストに仕えるだろう。　もしあなたが敗北し、それによって私を恥辱に陥れる原因となるならば、私は自らその屈辱に報復する。私はあなたの胸に足を乗せ、自分の手であなたの心臓と舌を引きちぎり、それらをあなたの残りの肉体と共に犬たちの餌として

投げ捨て、他の者たちもあなたの例を見て、王の子供たちを惑わすことを敢えてしないよう学ぶようにするのだ。

ナホルは、この言葉を聞いて大きな恐怖に襲われた。自分が仕掛けた罠に自ら引っかかり、自ら掘った穴に落ちてしまったことに気づいたからである。王子を怒らせれば、王子が望むままに自分を拷問する十分な力を持っているため、避けられない死が待ち受けていることを恐れたナホルは、ヨアサフの側に立ち、キリスト教の信仰を守ることを決意した。　そして、祭司たちとキリスト教徒との間の論争が始まると、ナホルは、かつて王バラクからイスラエルを呪うよう遣わされたにもかかわらず、呪いの代わりに多くの祝福を与えたことで知られるバアラム（民数記22:1–41）のように語り始めた。　まさにそれと同様に、ナホルも論争を始めると、朝から夕方までそれを続け、あたかも聖霊の導きによって語るかのように語り続けた。このように、神の恵みは、その聖なる栄光のために、時に不浄な器の中にも働くことがあるのである。　こうしてナホルは、異教の神々の虚しさと虚偽を賢明に暴き、キリスト教こそが唯一の真の信仰であることを揺るぎなく証明したので、もはや誰も一言たりとも反論することができなかった。　このナホルと偶像崇拝の祭司たちとの論争について、聖ヨハネス・ダマスコスは、聖バルラアムと聖ヨアサフに関する叙述の中で、詳しく、かつ見事に記している。

かくして、すべての異教の賢者たち、祭司たち、そして哲学者たちは、ナホルの前に意気消沈して立ち尽くし、反論する言葉もなく、恥に覆われて、まるで口がきけないかのように沈黙していた。　一方、王子は心の中で喜び、かつてサウロを、そして今やナホールを、迫害者から真理の教師かつ宣教者に変えてくださった主を賛美した。王とアラキアは、ナホールの予期せぬ変貌に驚き、彼に対して激しい怒りを抱いた。　王はナホールをキリスト教徒たちと共に拷問にかけたいとも思ったが、キリスト教徒たちに自由かつ恐れることなく信仰の論争に臨むよう招き、王として彼らに何の害も加えないと約束した自らの王としての言葉に背くことはできなかった。そこで彼は、翌朝また論争が行われることになっているかのように告げて、集まりを解散させた。

すると、王子は父にこう言った。

「王よ！この件の初めには、あなたの命令に従って裁判が正しく設けられました。ですから、最後まで正義を貫き、どちらか一方を決めてください。私の師を今夜私の元で過ごさせ、明日何を語るべきか彼と共に熟考させるか、　そして陛下も同様に、ご自身の同志たちと共にそうなさるか、あるいは彼らを私に任せて、陛下ご自身が私の師を御許に迎えてください。なぜなら、もし対立する双方が弁論までの間、陛下の御許に留まるならば、私の師は必然的に抑圧と恐怖にさらされることになり、　一方、あなたの賢者たちは喜びと安らぎの中にいることになる。そうなれば、私の考えでは、事は正しく進まず、強者が弱者を虐げる結果となり、あなたがキリスト教徒たちに与えた約束の破棄に他ならない。

王は息子の賢明な言葉に打ち負かされ、ナホルを彼に預け、残りの祭司たちを連れ去った。それでもなお、ナホルが約束（ヨアサフを異教へ戻すこと）を果たすことを期待していた。一方、王子はそのナホルを連れ去り、自分の宮殿へと向かい、救い主である神を喜び称えた。

「君は、私が君がバルラアムではなくナホルであることを知らないと思っているのか？」と、彼は自分の部屋に戻るとナホルに言った。「とはいえ、君はキリスト教の信仰の真実を証明し、偶像の無価値を暴くという立派な行いをした。それゆえ、君がこれほど勇敢に立ち向かったあの神を信じなさい。」

ヨアサフの言葉に深く心を揺さぶられたナホルは、これまでのあらゆる過ちを悔い改め、真の神に帰依することを心から願い、ヨアサフに、密かに荒野へ逃れ、そこに身を隠している隠者たちに加わり、聖なる洗礼を受けることを許してほしいと懇願した。　ヨアサフは彼に信仰を教え導いた後、平穏のうちに彼を見送った。ナホルは荒野へ逃げ、そこで聖なる生活を送る一人の司祭を見つけ、彼から洗礼を受け、悔い改めの生活を送るようになった。

翌朝、王はナホルに起こった出来事を知ると、彼に抱いていた期待を完全に失った。　自分の賢者たちが完全に打ち負かされ、絶体絶命の状況にあるのを見て、王は彼らに激怒し、彼らを恥辱的な侮辱にさらし、中には厳しい肉体的懲罰を加えた者もいた。王は彼らの顔を煤で塗りつぶすよう命じ、彼らを追い払った。　それ以来、彼はもはや祭司たちを敬うこともなく、偶像に犠牲を捧げることもなく、むしろそれらを冒涜するようになった。　しかし、偶像を崇拝せず、かといってキリスト教の信仰も受け入れない彼は、極度の困惑と思いの混乱に陥っていた。一方、ヨアサフのもとには多くの異教徒が訪れ、彼との救いをもたらす会話に心を打たれて、キリストへと回心していった。　そこで祭司たちは、自分たちの不名誉と侮辱、そして王が自分たちの神々から背を向けたことを目の当たりにし、急いで使者を、フェウデという名の有名な魔術師のもとへ派遣した。彼は荒野で悪霊たちと共に暮らしていたが、使者たちは起こったすべての出来事を彼に伝え、必死に助けを求めた。　フェヴデは、大勢の悪魔の軍勢を従えて、自らを　に知り、愛していた王のもとへ大胆に赴き、再びそのお世辞めいた言葉で王を異教へと誘い込み、偶像を称える盛大な祝宴を彼らと共に催した。　至福のイオアサフをも再び偶像崇拝へと引き戻そうと、魔術師は王に悪辣な助言を与えた。すなわち、イオアサフのそばからすべての使用人を追い払い、その代わりに、容姿端麗な女性や美しい乙女たちを彼の侍女として配置するよう勧めたのである。

「そして私は」と彼はさらに言った。「悪魔の一人を遣わして、彼の中に肉欲の炎を燃え上がらせよう。王子様が淫行の罪に陥ったその瞬間、王よ、すべてはあなたの思い通りになるだろう。」

王はその悪辣な助言に従い、多くの美しい乙女や若い女性を集め、高価な衣装や金の装飾品で飾り立て、息子のもとへ宮殿へと連れて行った。そして、すべての使用人を追い出し、宮殿には男性が一人の残らず、王子に仕えるあらゆる務めを女性や乙女たちが担うようにした。　そこへ、魔術師フェヴダが送り込んだ悪霊たちも、目に見えない形で忍び込み、若者の肉欲をかき立て、不道徳な考えを吹き込み始めた。　至福のイオアサフは、大きな誘惑と内なる葛藤に耐えていた――とりわけ、王だけでなく悪魔たちにも操られた、すべての乙女の中で最も美しい一人の娘が、その美貌という罠を彼に張り巡らせた時にはなおさらであった。　彼女はとある王の娘であり、捕虜となり、故国から連れ去られて、最も貴重な戦利品としてアヴェニール王の手に渡った。　彼女の並外れた美しさを頼りに、父は息子を誘惑するために彼女を送り出した。彼女の中に宿った誘惑の悪魔は、彼女に賢明な言葉と狡猾な会話を教え込み、同時に聖なる若者の心にも、最初は情欲を伴わない愛を植え付け、徐々に彼を自らの罠に捕らえようと画策した。　そして実際、ヨアサフは彼女の知恵と高潔な品性を愛するようになった。さらに、王女でありながら捕虜となり、故郷と高貴な地位を失ってしまった彼女を憐れんだ。彼はついに、どうすれば彼女を偶像崇拝から遠ざけ、キリスト教徒にすることができるかについても考え始めた。

そのような思いを抱きつつ、自分の中に情熱的な欲望を微塵も感じることなく、彼は彼女にこう語りかけた。

「お嬢さんよ、永遠に生きられる神を知りなさい。そうすれば、迷いの中で滅びることはないでしょう。創造主を知れば、あなたは不死の花婿と結ばれ、至福を得るでしょう。」

彼はさらに多くの同様の言葉を彼女に語りかけた。すると、不浄な霊が彼女に誘惑の業を始めさせ、無垢な魂を破滅へと引きずり込ませた。そして、その乙女は言った。

「もしあなたが、私の主よ、私の救いを案じ、私の魂を異教の迷いから救い出そうとされるのなら、私の願いを一つだけ叶えてください。そうすれば、私は直ちに祖先の神々を捨て、あなたの神に帰依し、最期の息を引き取るまでその神に仕えます。それゆえ、　あなたは私の改宗の報いを受けることになるでしょう。

「その願いとは、一体何なのか？」と、聖なる若者は少女に尋ねた。

彼女は、その眼差しと声の調子で彼を魅了しながら、こう答えた。

「私と結婚してください。そうすれば、あなたのどんな命令でも果たします。」

「そんな願いを私に持ちかけるのは無駄だ」と彼は言った。「私はあなたの救いを願ってはいるが、自らを汚すことには同意できないからだ。」

彼を罪へと誘おうと、彼女はこう言い返した。

「主よ、あなたご自身、これほど賢明でありながら、結婚を『穢れ』と呼ぶなど、むなしいお言葉です。私もキリスト教の聖書を知っています。故国で何度も読み、キリスト教徒たちとも何度も語り合いました。　あなたの書物には、*『すべての人の結婚は敬虔であり、寝床は汚れのないものであれ』*（ヘブライ人への手紙13:4）と、また*『情欲に燃えるよりは、結婚するほうがよい』*（コリントの信徒への手紙一7:9）と書かれていないのですか。 – あなたの聖書が証言しているように、古代の族長や預言者、義人たちは結婚を知らなかったというのですか？　聖書は、あなたがたが最高使徒と呼ぶペテロに妻がいたと告げていないのですか？　では、一体誰があなたに、結婚を「汚し」と呼ぶよう教えたのですか、ご主人様？　実のところ、あなた自身が、あなた方の教えの真理から逸脱してしまったのです。

– 聖書にはあなたが言ったようなことがすべて記されているのは事実です――と聖人は答えた――そして確かに、望む者には誰でも自由に結婚する権利が与えられています。ただし、キリストに処女性を守ることを誓った者たちは例外です。　私は、聖なる洗礼を受けた直後に、清らかな処女の身をもってキリストに身を捧げるという誓いを立てました。それなのに、どうして神に立てた誓いを破るなどという大胆なことをできるでしょうか？

誘惑の女は彼に言った。

「もし私を妻に迎えないのなら、私のもう一つの、簡単に叶えられ、取るに足らない願いを叶えてください。　もし私の魂を救いたいのなら、今夜、私と共にいてください。そうしてくださるなら――私はあなたに約束します　――明日すぐにキリスト教の信仰を受け入れます。そうすれば、あなたは私の回心に対して示したその思いやりによって罪の赦しを得るだけでなく、偉大な報いも受けるでしょう。なぜなら、*「天では、たった一人の罪人が悔い改めることについて、大きな喜びがある」*（ルカ15:7）と、あなたの聖書は語っています。もし罪人の回心によって天に喜びがあるのなら、罪人を回心させ、その罪人の喜びの原因となる者への報いは、さらに大きなものではないでしょうか？　疑いなく、その通りです。なぜなら、あなた方の使徒たちも、より大きな戒めのために、より小さな神の戒めを破り、自らの判断で多くのことを成し遂げたからです。キリスト教徒にとって割礼は必須ではないにもかかわらず、使徒パウロはテモテに割礼を施しませんでしたか（使徒16:3）？ しかし、彼は宣教という大義のために、そのような行動をとることを恐れませんでした。そして、これと似たような事例を、あなたの書物の中にも数多く見つけることができるでしょう。ですから、もしあなたが本当に私の魂を救いたいと願うのであれば、この私の取るに足らない願いを叶えてください。

彼女がそう語ったとき、聖人の魂は相反する思いに翻弄され、善と悪の間で揺れ動き始め、処女性を守り抜くという決意の堅さが弱まり始め、意志と理性もまるで柔らかくなっていくかのようだった。これを見た罪の種まき手――悪魔は喜びに満ち溢れ、他の悪魔たちにこう告げた。

「見よ、この乙女は、我々でさえ成し得なかったことをしようとしている！　だからこそ、今こそ特別な力をもってその若者に襲いかかろう。我々を遣わした者の願いと命令を果たすのに、これほど好都合な時は他にないのだから。」

そう叫ぶと、悪魔はその手下たちと共に、キリストの戦士に厚かましく襲いかかり、彼の精神の力をすべて乱し、その心に乙女への不純な愛と激しい情欲を燃え上がらせた。　その時、聖人は胸を打ち、心の底から神に向かって嘆息し、急いで祈りにすがり、あふれんばかりの涙を流しながら、動揺と嵐から彼を救うことのできる全能者に呼びかけ、こう語った。

– *「主よ、私はあなたに信頼します。決して恥をかくことのないように……私の敵が私の上に勝利を収めることのないように」*（詩編30:2； 詩編24:2）、あなたの御力に信頼する者を、この時、

私の守りとなってください。そして、あなたの御心に従い、あなたの聖なる、畏れ多い御名が、あなたのしもべである私の上に栄光を受けるよう、私の道を導いてください。

聖人は、涙を流し、何度もひざまずきながら長く祈り続け、ついに地面に倒れ、眠りについた。　夢の中で、彼はまもなく、見知らぬ男たちに連れ去られ、不思議な場所を通り抜け、美しく、極めて芳しい花々に覆われたある広大な野原へと導かれるのを見た。　そこでは、多種多様で美しい木々が数多くあり、それらは見た目が美しく、味わってみたいという欲求をかき立てる、未知で珍しい実をつけていた。それらの木の葉は、そよ風を受けて陽気にざわめき、静かに揺れながら、絶え間なく芳香を放っていた。　木々の下には、純金、宝石、真珠で作られた玉座が置かれており、強烈でまばゆい光を放っていた。そこにはまた、言葉に尽くせないほどの美しさと輝きを放つ様々な覆いで飾られた寝台も置かれていた。中央には、清らかで美しく、見る者の目を楽しませる水が流れていた。前述の非凡な男たちは、ヨアサフを前述の野原全体を通り抜けさせ、言葉に尽くせない光を放つ街へと導き入れた。その街は、これまで誰も見たことのない純金と宝石でできた城壁を持ち、城壁の柱や門は一塊の真珠でできていた……しかし、この街の美しさと輝きを、いったい誰が語り尽くせるだろうか？！　上空から豊かな光線が降り注ぎ、街のすべての通りを照らし出していた。そして、翼を持ち、姿が明るいような戦士たちが街を歩き回り、人間の耳がこれまで聞いたことのないような甘美な歌を歌っていた。その時、イオアサフはある声を聞いた。

「ほら、これが義人の安らぎだ！　ほら、これが生前に主を喜ばせた者たちの喜びだ。」

ヨアサフを捕らえた男たちは、彼を街の外へ連れ出し、連れ戻そうとした。しかし、彼は目の当たりにした美しさと壮麗さに心を奪われ、こう言った。

「お願いです、この言葉に尽くせぬ喜びを私から奪わず、この町のどこかの片隅で暮らさせてください。」

「今、お前はここに残ることはできない」と彼らは答えた。「しかし、多くの功績と努力を重ねれば、やがてここに入ることができるだろう。そのために全力を尽くす限りにおいて。なぜなら、*『努力する者はそれを手に入れる』からである*（マタイ11:12）。」

その後、彼らは再び彼を前述の広大な野原を通り抜けさせ、暗闇と悲しみに満ちた場所へと導き入れた。そこは、以前ヨアサフが見た光と喜びとは、あらゆる点で正反対の場所であった。そこには、希望の見えない陰鬱な闇が広がり、至る所が悲しみと混乱に満ちていた。　そこには燃え盛る火の炉があり、その周囲　には、人間の肉体を食い荒らす虫たちが這い回り、復讐の精霊たちが立っていた。ある人々は火によって残酷に焼かれており、次のような声が聞こえてきた。

「ほら、ここが罪人たちの場所だ！　ここが、恥ずべき行いで自らを汚した者たちの場所だ！」

その後、幻の中でヨアサフを導いていた者たちは彼を暗闇から連れ出し、彼はたちまち目を覚まして正気を取り戻したが、全身が震え、目からは涙が川のように流れ落ちた。そしてその時、彼を誘惑した若い女や、他の妻たち、乙女たちの美しさのすべてが、彼には泥や膿よりも醜く映った。彼はその幻を思い返すたび、明るい都にたどり着きたいという願望に駆られたかと思えば、永遠の苦しみへの恐怖に囚われたりして、力尽きて床に横たわり、起き上がることができなかった。

王は彼の病気について報告を受けると、直ちに急いで彼の元へ駆けつけ、病気の原因を尋ね始めた。ヨアサフは幻の中で見せたすべてを王に語り、次のように付け加えた。

「なぜ、私を捕らえ、私の魂を滅びへと陥れようと、罠を仕掛けたのですか？　もし神が私を助けてくださらなかったなら、私の魂は地獄に落ちていたに違いありません。しかし、罪深い私を獅子の口から救い出してくださったイスラエルの神は、なんと慈愛に満ちたお方でしょうか！」　私は動揺したまま眠りについたが、高き所から私の救い主である神が私を訪れ、神を怒らせる者たちがどのような恵みを失い、どのような苦しみをもたらすことになるかを示してくださった……　それゆえ、父よ、もしあなたが、私が真の恵みについて語るたびに、まるで耳を塞ぐかのように私の言葉に耳

を傾けようとしないのなら、せめて私だけは、正しい道を歩むことを妨げないでほしい。　私が望むのはただ一つ、すべてを捨てて、キリストの聖人ヴァルラアムが滞在する場所へ赴き、残りの生涯を彼と共に過ごすことだけです。もしあなたが力ずくで私を引き留めようとするなら、まもなく私は悲しみと落胆のあまり死んでしまうでしょう。そうなれば、あなたは息子を失い、もはや「父」とは呼ばれなくなるでしょう。

そして再び、王を激しい悲しみが襲い、彼は悲嘆に暮れて自分の宮殿へと戻っていった。キリストの無敵の戦士を、悪霊たちもまた見捨て、恥じ入ったままフェウデのもとへ戻った。フェウデは彼らを叱責して言った。

「見よ、お前たち、この忌まわしき者どもはなんと無力なことか」と彼は言った。「若者にさえ勝てなかったではないか！」

すると、彼らは神の力に駆り立てられ、意に反してこう告白した。

「我々はキリストの力に抗うことはできず、その若者が身を守るために掲げる十字の印を見ることもできないのだ。」

しばらくして、王はフェヴダを連れて再び息子の元へやって来た。今度はフェヴダが若者と語り合い、自らの神々を擁護したが、天から口と知恵――誰も抗うことのできない知恵――を授けられた者を打ち負かすことはできなかった。　打ち負かされ、恥をかかされたフェヴダは、これ以上言うべき言葉が見つからず、まるで口がきけないかのように長い間黙り込んでいた。そしてようやく我に返り、王に向き直って言った。

「王よ！聖霊はあなたの息子の中に宿っておられます。我々は確かに打ち負かされ、彼に返す言葉もありません……まことに、キリスト教の神は偉大であり、彼らの信仰も偉大であり、彼らの秘跡も偉大です！」

そして、皇太子に向き直って尋ねた。

「教えてくれ、魂が清められた者よ。もし私が悪行を捨ててキリストに立ち返れば、キリストは私を受け入れてくださるだろうか？」

聖ヨアサフは、罪人の悔い改めと、真に悔い改める者を速やかに受け入れてくださる神の慈悲について語り始めた。　フェヴダは心を打たれ、直ちに自分の洞窟へと駆け戻り、そこで魔術の修業に使っていたすべての書を焼き捨て、その後ナホルの例に倣って、聖なる洗礼を受け、悔い改めの生活を送った。

王はもはや息子をどう扱えばよいか分からなくなっていたため、アラキアは王に、王国を二つに分割し、その一つを息子に譲るよう助言した。

「もしあなたが息子を苦しめたいと望むなら」と彼は言った。「あなたは自然そのものの敵となり、父ではなく、自分の息子を苦しめる者と呼ばれることになるだろう。それだけでなく、息子を滅ぼし、あなた自身も子供を失い、さらに悲しみを増すことになるだろう。」　残された道はただ一つだ。王国の半分を分け、息子に彼のために定められた領域で統治させよ。　世俗の務めに従事するうちに、彼は少しずつ我々と同じような生活に慣れていくでしょう。そして、すべてが我々の思い通りに進むはずです。なぜなら、魂に根付いた習慣は、強制によってではなく、信仰によってこそ変えられるものだからです。　たとえ彼がキリスト教に忠実であり続けたとしても、あなたにとって、子がないわけではないこと、つまり王である息子がいるという事実そのものが、悲しみの中でのある種の慰めとなるでしょう。

アラキアの助言を受け入れた王は、その通りにした。すなわち、王国を二分し、その一方の半分にヨアサフを王として即位させたのである。　ヨアサフは、王権など考えもせず、荒野での修道生活を求めていたが、すべてがより良い方向に向かっていると判断し、自分に割り当てられた王国の半分を受け入れ、王位に就くと、まず第一に異教の多神教を根絶し、唯一の真の神への信仰を広めることに尽力した。　彼は領土全土から偶像を破壊し、その神殿を根こそぎ取り壊し、その代わりにキリ

スト教の教会を建て、あらゆる手段を尽くしてキリストの信仰を広めた。　このことを耳にしたキリスト教の司教、長老、助祭たちは、山や荒野から出てきて、敬虔な王のもとに集まった。王は彼らを喜んで迎え入れ、共に人々の魂の救いに尽力した。　やがて彼は、信仰の光をもってすべての臣民を啓蒙し、洗礼を授けた。その一方で、父の回心を願って、涙ながらに神に祈り続けることを決してやめなかった。

そして、慈悲深い神は彼の熱心な祈りと涙を見捨てなかった。神は御自身の恵みの光でアヴェニルの心に触れ、彼の心の目から闇のベールが取り除かれ、彼は真理の曙光を見出し、偽りの神々の虚しさを悟った。　アヴェニールは側近たちを集め、キリスト教の信仰を受け入れたいという心の願いを打ち明けた。皆はその決意を称賛した。なぜなら、ヨアサフの祈りによって、彼ら全員に*「天からの光が東から私たちを訪れた」*からである（ルカ1:78）。王は直ちに手紙を送り、息子を呼び寄せ、彼から信仰と敬虔さを学ぶよう求めた。父が真の神に立ち返る姿を見たとき、ヨアサフの心はどれほどの喜びと歓喜で満たされたことか！　何日にもわたって父に信仰を十分に教え、尊者バルラアムが彼自身に教えたのと同様に、聖なる信仰の奥義を伝えた後、ヨアサフは父を聖なる洗礼へと導き、自らも聖なる洗礼盤から洗礼を受けた。これはまことに新しく、驚くべき出来事であった！　彼は自らの父にとって父となり、肉親として彼を産んだ者にとって、霊的な再生の仲介者となった。王に続いて、貴族、兵士、奴隷、端的に言えば、インド全土の人々が聖なる洗礼を受けた。　その時、地と天に大きな喜びが満ちた。地では、異教徒の改宗を信者たちが喜び、天では、数え切れないほどの悔い改めた罪人たちを天使たちが喜んだのである。

洗礼の後、アヴェニールは王権のすべてを息子に譲り、自身は人里離れた場所で沈黙を守り、常に頭に灰をまき散らしながら、自らの罪を深く悔い改めた。こうして彼は四年間を過ごし、神から罪の赦しを受けた後、安らかにこの世を去った。

アヴェニール王の死後40日目に、ヨアサフは彼を追悼し、すべての貴族、顧問、軍司令官、その他の要人を召集し、自らの秘密、すなわち、この世の王国とすべての世俗的なものを捨て、荒野へ赴き、修道生活を送りたいという願いを彼らに告げた。　皆は悲しみに暮れ、涙を流した。なぜなら、彼の柔和さ、謙虚さ、そして慈善の心ゆえに、誰もが彼を深く愛していたからである。　彼は後継者として、自身の貴族の一人、すなわち、かねてよりキリスト教徒であったヴァラキヤを王に据えたいと考えていた。そのヴァラキヤこそ、信仰をめぐる論争において、すべての異教の賢者たちに対抗し、架空のヴァルラアムに味方した人物であった。ヨアサフは、ヴァラキヤが信仰において極めて堅固であり、キリストへの深い愛を持っていることを知っていた。

しかし、バラキヤは王位を辞退し、こう言った。

「王よ、隣人を自分自身のように愛しなさい。王となるのが良いことなら、ご自身が王となられなさい。そうでないのなら、なぜ私に王位を譲ろうとするのですか？　ご自身が逃れようとしている重荷を、なぜ私に負わせようとするのですか？」

すると、皆は涙を流しながら、聖ヨアサフに自分たちを置き去りにしないよう熱心に懇願し始めた。　しかし、彼は夜、全シンクリトとすべての首長たち宛てに書簡を書き、その中で彼らを神に委ね、バラキア以外の誰をも王に立ててはならないと命じた。そして、その書簡を自室の寝室に残し、自ら密かに外へ出て、急いで荒野へと向かった。翌朝、彼の退去の噂が広まった。　民衆は動揺し、悲しみに沈んだ。多くの者が泣き崩れた。ついに首都の住民全員が彼を探し求め、ある干上がった小川で、両手を天に掲げて祈っている彼を見つけた。　そこで人々は彼を取り囲み、彼の前にひれ伏して、泣きながら宮殿に戻り、自分たちを置き去りにしないよう懇願した。ヨアサフはこうした懇願に押され、戻ったが、すぐに再び皆を集めてこう言った。

「私を引き留めることは、主の御心に逆らう無駄なことだ。」

その後、彼は自らの言葉を厳粛に誓い、その瞬間から、もはや一日たりとも王の座に留まることはできなくなった。　彼はバラキヤの意に反して彼に王冠を授け、自らの玉座に就かせ、王として

の義務について適切な訓示を与えた。そして自身は民に別れを告げ、宮殿と都を後にし、急いで荒野へと向かった。 民衆は皆、ヴァラヒヤやすべての権力者たちと共に、イオアサフ が王位を退くという決意を固めていることを確信し、懇願しても彼を引き留めることはできず、また力ずくで引き返させることも敢えてできなかったため、泣きながら彼の後を追い、遠くまで見送った。　王は彼らに、自分を悲しませず、一人にさせてほしいと頼んだ。しかし、それでもなお、何人かは遠くから泣きながら彼を追いかけた。日が沈み、夜が彼らの目から最愛の君主を隠し、互いの姿が見えなくなるまで。

こうして、ヴァラキアはインド王国の王笏を受け継ぎ、ヨアサフは*「キリストを得るために、すべてのものをゴミのように見なした」*（フィリピ3:8）のである。 旅の最初の夜、彼はある貧しい人の家に入り、自分の衣服をその人に与え、かつてバルラアムから授かった毛皮の衣を身にまとい、荒野での修業の道へと向かった。　その際、彼はパンも、食事に必要な他の物も、水さえも持ち合わせていなかった。彼はすべての希望を神の摂理に託し、主への燃えるような愛に満たされていた。荒野にたどり着くと、彼はキリストに目を向け、こう叫んだ。

「わが目がもはやこの世の恵みを見ることをなくし、わが心がもはやあなた以外の何ものにも喜びを見出さぬように、わが望みよ！わが道を正し、あなたの聖人バルラアムのもとへ私を導いてください！　私の救いの源である方を私にお示しください。そして、主よ、あなたを知ることを教えてくださったその方が、私に荒野での生活も教えてくださいますように！

聖ヨアサフは、ヴァルラアムを求めて、二年間、一人で荒野を歩き回った。彼はそこに生えている草を糧とし、しばしば飢えに苦しんだ。その荒野の土壌は乾燥しており、肥沃さが乏しかったため、草そのものが不足していたからである。　彼は悪魔から多くの試練に遭った。悪魔は彼を襲い、時には様々な思いで彼の心を惑わせ、時には幻影で脅かした。時には黒く変身して歯ぎしりをし、時にはまるで彼を殺そうとするかのように剣を手に彼に襲いかかり、また時には様々な獣や蛇、アスピドの姿をとった。　しかし、勇敢で無敵のキリストの戦士は、祈りの剣と十字架の武器をもって、これらすべての幻を打ち破り、追い払った。

2年目が終わる頃、イオアサフはセナリドの荒野にある一つの洞窟を見つけ、その中で沈黙の中で身を隠していた修道士に出会った。彼から、バルラアムの居場所を聞き出した。喜びに満ちて、彼は示された道を一気に進み、バルラアムの洞窟にたどり着くと、入り口に立ち、扉を軽く押しながらこう言った。

「父よ、祝福を、祝福を！」

バルラアムはその声を聞いて洞窟から出てくると、天からの啓示により、外見からは到底見分けがつかないはずのヨアサフであることを見抜いた。ヨアサフは太陽の灼熱で肌が黒く日焼けし、髪は伸び放題で、頬はこけ、目は深くくぼんでいたからである。　長老は東に向かって顔を向け、神に感謝の祈りを捧げた。そして二人は愛を込めて抱き合い、聖なる口づけを交わし、喜びの温かい涙で互いの顔を濡らした。座ると、二人は語り合いを始め、最初に口を開いたのはヴァルラアムだった。彼は言った。

「ここに来てくれてよかった、わが子よ、神の子よ、天の御国の相続人よ！　主が、一時的な恵みの代わりに永遠の恵みを、朽ちるものの代わりに朽ちないものを、あなたに与えてくださいますように。しかし、愛する者よ、お願いだ。教えてほしい。どうやってここへ来たのか？私が去ってから、君に何が起きたのか？君の父は神を知ったのか、それとも依然として以前の迷いのままだのか？

ヨアサフは、バルラアムが去った後に起こったこと、そして主が御自身の全能の御力によって成し遂げられたことを、順を追ってすべて彼に語った。長老はすべてを聞き終えると、大いに喜び、驚き、そしてついにこう言った。

「キリストなる神よ、あなたに栄光あれ。あなたが、あなたのしもべヨアサフの魂に私が蒔いた御言葉の種を、このように成長させ、百倍の実を結ばせてくださったことを感謝します。」

その間にも夕暮れが訪れ、いつもの祈りを捧げた後、彼らはようやく食事のことを思い出した。　そこで、バルラアムは、魂を救う会話に富み、霊的な糧に満ちたが、肉体の糧は乏しい食事を用意した。というのも、その食事は、生で茹でていない野菜、少量のナツメヤシの実、そして最寄りの泉の水だけで構成されていたからである。　そのような食事で力を得た彼らは、御手を広げ、あらゆる生き物を御恵みで満たしてくださる神に感謝を捧げた。その後、彼らは夜の祈りを捧げ、再び魂を救う対話を始め、朝の賛美の時間が来るまで一晩中語り合った。

このように驚くべき、まるで天使のような生活を送りながら、ヨアサフとバルラアムは共にかなりの年月を過ごした。ついに、聖バルラアムは自らの死が近づいているのを感じ、彼が新たな命へと再生させた霊の子ヨアサフを呼び寄せ、こう言った。

「わが子よ、私はかねてより、この世を去る前に君に会いたいと願っていた。ある時、君のために祈っていたところ、我らの主イエス・キリストが現れ、君を私の元へ連れてくると約束してくださったのだ。 今、主は 私の願いを叶えてくださった。私は、あなたがこの世とすべての世俗的なものから離れ、キリストと結ばれているのを見ている。そして、私の旅立ちの時がすでに迫っているのだから、私の体を大地に委ね、塵を塵に返しなさい。そして、あなた自身はこの地に残り、霊的な生活を続け、この謙虚な私を思い出してほしい。

これらの言葉を聞いたヨアサフは、尊者との別れを嘆き悲しんで激しく泣き崩れた。長老は霊的な語りかけでかろうじて彼を慰め、その後、同じ荒野に住む数人の兄弟たちのところへ彼を送り、神聖な典礼を行うために必要なものをすべて持ってくるよう命じた。　イオアサフは急いで出向き、必要なものを手に入れ、また急いで戻ってきた。それは、自分の霊的父が自分のいない間に亡くなってしまうこと、そして彼の最後の祝福を受けられなくなることを恐れたからである。バルラアムは神聖な典礼を執り行い、二人は共に聖体拝領を行った。　その後、尊者は弟子と魂に有益な事柄について長く語り合い、自身と弟子のために心を込めて神に祈りを捧げた。祈りが終わると、父のようにイオアサフを抱きしめ、老修道士は彼に最後の口づけをして祝福し、十字の印を切って寝台に横たわった。　その時、彼の顔は、まるで何人かの友人が訪ねてきたかのように、明るく喜びに満ちたものとなった。こうして彼は、荒野で70年、生涯を通じて約100年を過ごした後、主のもとへ帰った。

ヨアサフは、彼のそばで涙を流しながら、一日中、そして一晩中、彼のそばで詩篇を歌った。翌朝、洞窟の近くに墓穴を掘り、その高潔な長老の遺体を葬り、墓のそばに座り、泣き疲れて眠りにつくまで、苦々しく泣き続けた。　夢の中で、彼はかつて試練のさなかに見たあの不思議な人々の姿を再び目にした。彼らは彼のところへやって来て、彼を連れ出し、彼が以前見たことのある広大な野原へと再び導き、そして輝かしい都へと連れて行った。彼が都の門をくぐろうとしたとき、言葉では言い表せないほどの美しさを放つ二つの冠を携えた神の天使たちが彼を出迎えた。

ヨアサフは尋ねた。

「この輝く冠は、誰のものですか？」

「どちらもあなたのものである」と天使たちは答えた。「あなたが多くの魂を救い、神のために地上の王国を捨てて修道生活に身を捧げたことへの報いである。　しかし、そのうちのひとつは、あなたの助けにより、滅びへと続く道を離れ、心から熱心に悔い改め、主と和解したあなたの父に捧げなければなりません。

「しかし、どうしてそんなことがあり得るのでしょうか」とヨアサフは反論した。「ただ悔い改めただけで、これほどの苦労を背負った私と同等の報いを受けるとは？」

そう言い終えるやいなや、彼はバルラアムが自分にこう語りかけているのを見た。

「かつて、ヨアサフよ、あなたが富を得れば、けちで頑なになるだろうと、私はあなたに言わなかったか？　それなのに、なぜ今、あなたの父があなたと同等の栄誉を受けることを望まないのか？　それどころか、彼のために捧げたあなたの祈りが聞き届けられたことを、心から喜ぶべきではないのか？」

ヨアサフは、生前いつもヴァルラアムに言っていたように、「お許しください、父よ、お許しください」と告げると、こう続けた。

「教えてくれ、あなた自身はどこに住んでいるのか？」

「私はこの美しく偉大な街に、明るい住処を授かりました」とバルラアムは答えた。

ヨアサフは、ヴァルラアムに、自分をその住処へ連れて行き、愛をもって客として迎え入れてくれるよう頼んだ。ヴァルラアムはこう答えた。

「まだ、肉体の重荷を背負うあなたにとって、ここに来る時は来ていない。しかし、もし私が命じたように、修道者の行いを最後まで勇敢に貫き通すなら、やがてここへ来て、この地での永遠の命と、この地の栄光と喜びに与かり、永遠に私と共にいることになるだろう。」

目を覚ますと、魂はまだ見た光と言葉に尽くせぬ栄光に満ちており、イオアサフは万物の主を賛美し、霊感に満ちた感謝の歌を捧げた。

聖ヨアサフは、尊者バルラアムと共生していたその場所で、最期を迎えるまで暮らした。生後25年目にこの世の生活を離れ、断食の修行に身を捧げ、荒野で35年間を過ごした後、主のもとへ帰った。

近くに住んでいたある聖なる隠者が、　聖ヨアサフの帰天を知り、彼が息を引き取ったまさにその時刻に彼の元へ駆けつけ、愛の涙を流しながらその尊い遺体の上で慣例通りの葬送の賛美歌を歌い、聖ヴァルラアム尊者の聖遺骨と共に葬った。それは、霊において不可分であった二人の遺体が、一つの場所で不可分として安らかに眠れるようにするためであった。　聖ヨアサフの埋葬後、この隠者は神からの啓示を受け、インド王国へ赴き、　のバラキア王に聖人の死を告げるよう命じられた。この知らせを受けた王は、大勢の民を率いて荒野へと向かい、聖なる父たちの洞窟に到着すると、彼らの棺を開け、聖バルラアムと聖ヨアサフの聖遺体が朽ちることなく、そこから素晴らしい芳香が漂っているのを発見した。　聖遺骨を手にしたヴァラヒヤは、それらを砂漠から故郷へと尊く運び、聖ヨアサフが建立した教会に安置し、三位一体の神を賛美した。神に、今、そして常に、そして世々限りなく、私たちからも栄光と礼拝が捧げられますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

霊的な導師から、王イオアサフよ、神を知ることを学び、洗礼によって啓発され、　民を信仰へと導き、洗礼の池のそばで父の後継者となったあなたは、王位を捨てて荒野へと赴き、そこで勤勉に修業に励まれました。あなたの師ヴァルラアムと共に、キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第8調：

幼少の頃からあなたの善き御心を御存知であった、ヨアサフェよ、心を知り尽くす唯一の神よ。　そして、この世の王権から修道生活へとあなたを導かれた大いなるバルラアムに従うことを許し、今や彼と共に、天のエルサレムという輝かしい故郷を持ち、聖三位一体の望ましい恵みを豊かに享受しておられるあなたに、王の如き美しさを持つ者よ、信仰をもってあなたを崇める私たちを覚えてください。

聖殉教者ヴァルラアムの受難

11月19日の記念日

聖殉教者バルラアムは、シリアのアンティオキア出身であった。高齢の頃、イエス・キリストの御名を告白したために捕らえられ、異教の領主の裁判にかけられた。バルラアムは偶像への生贄を捧げるよう強要された。　しかし、彼がこれを拒むと、主キリストのために多くの凄惨な拷問にさらされた。まず、牛の腱で容赦なく打ちのめされ、その後、鉄の爪で削り取られた。　その後、異教徒たちは聖なる殉教者を偶像の神殿へ連行し、そこで拷問者の命令により、燃え盛る火が灯る祭壇の上に彼の手を伸ばさせ、その手に乳香を添えた熱い炭を載せ、彼らの邪悪な神々の祭壇に香を捧げさせようとした。　拷問者たちは、殉教者が耐え難い痛みのあまり、熱した炭と乳香を偶像の前で投げ捨ててしまうだろうと考えていた。もし彼がそうすれば、彼らはこう言おうとしていたのだ。

「さあ、これであなたは我らの神々に犠牲を捧げたのだ」

しかし、異教徒たちは望んだ結果を得ることができなかった。キリストの殉教者は、燃え盛る火を手に持ち、柱のように揺るぎなく立ち続け、銅や鉄よりも強靭であったからである。彼は、指が焼け落ち、火と共に地面に落ちるまで、その火を手に持ち続けたのである。　それにもかかわらず、彼は手を動かすこともなく、偶像の前の祭壇に乳香をまぶした炭を供えることもなかった。– かくも勇敢で不屈の殉教者、そしてキリストの戦士として現れた聖バルラアムは、勇猛な信仰告白の末、その魂を主の御許に委ねた[7997]。

- 聖ヴァシレイオス大主教による聖殉教者バルラアムについての説教

かつては、聖人の死を嘆きと涙をもって称えた。ヨセフは亡くなったヤコブを嘆き悲しんで泣いた（創世記50:1）；ユダヤ人たちはモーセの死を深く嘆き（申命記34:8）、サムエルを多くの涙をもって偲んだ（列王記上25:1）。しかし今や、私たちは聖人たちの死を喜び祝う。なぜなら、十字架以降、悲しみの性質が変わったからである。もはや聖人たちの死を見送る際に泣くことはなく、むしろ彼らの棺の前で熱狂的な歓喜をもって喜ぶ。なぜなら、義人にとって死とは眠りであり、より正確に言えば、より良い人生への旅立ちだからである。　それゆえ、殉教の苦難に耐える殉教者たちは喜びに満ちている。至福の生活への渇望が、彼らの中で処刑時の苦痛の感覚を消し去るからである。殉教者は危険ではなく、栄冠に目を向ける。　は打撃に戦慄するのではなく、報いを数え上げ、この地上で鞭打つ処刑人を見るのではなく、天から歓迎する天使たちを思い描く。　目にするのは一時的な危険ではなく、永遠の報いである。そして、すでに我々の間でも殉教者たちは、栄光の輝かしい前兆を刈り取っている。なぜなら、すべての人々から熱狂的な歓迎の声を浴びながら、彼らは棺の中から、何千もの人々を自らの網に捕らえているからである。

まさにこのことが、今や勇敢なヴァルラアムの上に成就した。殉教者の戦いのラッパが鳴り響き、ご覧の通り、敬虔の戦士たちを集めた。横たわるキリストの修道士が宣言され、教会の光景を明らかにした。　そして、信徒たちの主が言われたように、*「イエスは彼女に言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる』」*（ヨハネ11:25）。

かくして、勇敢なバルラアムは亡くなり、荘厳な集いを招集し、棺に納められながらも、祝宴へと招き寄せている。

今こそ、私たちは時宜を得てこう叫ぶべきである。*「知者はどこにいるのか。律法学者はどこにいるのか。この世の論客はどこにいるのか」*（Iコリント1:20）。

今日、私たちにとって無敵の敬虔の師となっているのは、ある村人である。彼は迫害者によって、容易に捕らえられる獲物のように引きずり出されたが、試練を経て、その中に打ち負かすことのできない戦士を見出した。迫害者は彼の不正確な話し方を嘲笑したが、彼は天使のような勇気をもって相手を畏怖させた。　なぜなら、彼の品性は言葉という武器とともに荒ぶることはなく、その理性もまた、言葉に見られたような欠点を示さなかったからである。しかし彼は第二のパウロとなり、パウロと共にこう語った。*「私は言葉においては無知であっても、知識においては無知ではない」*（II

[7997] 聖殉教者バルラアムは、304年にカッパドキアのケサレアで殉教した。

コリント11:6）。彼を鞭打つ処刑人たちは呆然とさせられたが、殉教者はますます力を増していった。鞭打つ者たちの手は弱まっていったが、鞭打たれる者の理性は屈しなかった。　鞭は整然と絡み合った筋を断ち切ったが、信仰の強さはますます断ち切れないものとなった。傷だらけの脇腹から肉は消え去ったが、知恵に満ちた理性は花開いた。肉の大部分は死滅したが、殉教者は、まだ功業を始めていないかのように、冴え渡っていた。

敬虔への愛が魂に宿るとき、あらゆる種類の戦いはその愛にとって滑稽なものとなり、愛する対象のために彼女を苦しめる者たちは、彼女を傷つけるどころか、むしろ喜びをもたらすのである。このことについて、かつてユダヤ人たちの鞭打ちさえも彼らにとって喜びに変えた使徒たちの愛が、私の証人である。なぜなら、*「彼らはサンヘドリンから出て行き、主イエスの御名のために辱めを受けるに値すると認められたことを喜びとした」*と記されているからである（使徒行伝5:41）。

今、私たちが称賛する戦士もまた、その通りである。彼は苦難を喜びと見なし、鞭打たれるときは、バラの花を投げつけられていると思い、不義の傷は矢のように避け、裁判官の怒りを煙の影のように軽んじた。　武装兵の苛烈な命令を嘲笑し、危険を目にするたびに、まるで冠を授かるかのように歓喜し、殴打を栄誉のように楽しみ、最も残酷な拷問の中でも、あたかも最も輝かしい報奨を受け取るかのように跳ね回り、　むき出しの剣を軽蔑し、処刑人の手を、あたかも蝋よりも柔らかいものであるかのように受け入れた。処刑の木を救いの木のように愛撫し、牢獄の扉を、まるで色とりどりの花のように楽しんだ。彼の右の手は、敵が最後の手段として彼に対して用いた火よりも強かった。　というのも、悪魔への献酒のために祭壇に火を灯すと、彼らは殉教者を連れてきてその前に立たせ、祭壇の上で右手を広げたままにしておくよう命じ、その手を青銅の祭壇の代わりに用いて、狡猾な思惑で燃える香をその手に載せたからである。　彼らは、火の力に打ち負かされたその手が、やがてやむを得ず香を祭壇に置くことになるだろうと期待していた。

ああ、なんと悪しき者たちの狡猾な欺瞞であろうか！「何千もの傷でさえ彼の意志を揺るがせなかったのだから、と彼らは言う、『せめてこの頑なな闘士の右手を、炎で揺るがせてやろう。　様々な手段で彼の魂を揺るがせることができなかったのだから、せめて右手を火で攻撃して、それを動揺させよう」。しかし、これらの哀れな者たちは、この期待を裏切られた。なぜなら、炎が手を焼き尽くそうとも、その手は灰のように炎を自らに受け止め続け、　逃亡者たちのように、敵対する火から背を向けることはなかった。むしろ、揺るぎなく立ち続け、炎と勇敢に戦い、殉教者に預言者の言葉を語らせる機会を与えた。*「主は祝福される。わが砦。わが手に戦いを、わが指に戦いを教えられた方」*（詩篇143:1）。

火は右手と戦いを繰り広げたが、敗北したのは火の方であった。　炎と殉教者の右手の戦いは続き、その手は、これまでの戦いでは前例のない勝利を収めた。炎は手を貫いていたにもかかわらず、その手は依然として戦いのために広げられていた。まことに、これは粘り強さで火に勝る手である！　火に屈することを学ばなかった手である！　火は、その手に敗北を喫することを学ばされたのだ！鉄は火に屈し、その痛ましい力によって柔らかくされる。銅もまた、その支配に抵抗しない。しかし、あらゆるものを克服する火の力は、殉教者の差し伸べられた手を焼き尽くしながらも、その手を揺るがすことはなかった！　まさに 、殉教者はこの時、主に向かってこう叫ぶことができた。*「しかし、私はいつもあなたと共にいます。あなたは私の右の手を握り、あなたの助言をもって私を導き、やがて私を栄光の中に迎え入れてくださるからです」*（詩編72:23–24）。

キリストの勇敢な戦士よ、私はあなたを何と呼べばよいのか？「彫像」と呼ぶべきか？しかし、それではあなたの忍耐を過小評価することになる。火は、

彫像を柔らかくする。しかし、あなたの右手を、少しでも動かすことさえ許さなかった。あなたを「鉄」と呼ぶべきか？　しかし、この比喩もまた、あなたの勇気に及ばないと気づく。　あなただけが、炎にその手に暴力を振るわせないよう説得した。あなただけが、その手を祭壇とした。あな

ただけが、燃え盛る右手で悪魔たちの顔を打ち砕き、その手を炭に変えて彼らの頭を打ち砕き、今やその手を灰に変えて、彼らの大軍を踏みにじり、盲目にしてやがる。

しかし、なぜ私は幼子のようなたわごとで、この勇敢な修行者を貶めようというのか？　彼を讃える歌は、はるかに確固たる舌を持つ者たちに委ねよう。このために、教師たちの最も雄大なラッパを呼び集めよう。さあ、修行者の功績を描く名高い画家たちよ、今こそ私の前に立ち上がれ！　その芸術をもって、この不完全な軍司令官の肖像を補完せよ！　汝らの知恵の花で、私が曖昧に描いたこの冠を戴く者を照らし出せ！　汝らの筆によって、殉教者の勇猛な業に打ち負かされよう。今この時も、汝らの強靭さによるこのような勝利を、喜んで認めよう。汝らがより精緻に描いた、手と炎との闘いを見つめよう。　あなたの絵に生き生きと描かれたこの闘士を眺めよう。悪魔たちは泣け、今やあなたの中に現れる殉教者の勇猛さに打ちのめされよ！再び、彼らに、火を打ち消し、打ち勝つその手が示されるように！また、闘いにおける模範者、キリストも絵に描かれんことを。その方に、世々限りなく栄光あれ！アーメン。

- 聖ヨハネ・クロマトスによる聖殉教者バルラアムについての説教

この聖なる祝日と祝典に、至福のバルラアムは私たちを招いた。それは、私たちが彼を称賛するためではなく、彼に倣うためであり、私たちが賛美の聞き手となるためではなく、彼の偉業を模範とするためである。　世俗の事柄において、高い権力を得た人々は、決して他者が自分たちと同じ栄誉を分かち合うことを望まない。なぜなら、そこには嫉妬と憎悪が愛を損なうからである。しかし、霊的な事柄においてはそうではなく、まったく逆である。　殉教者たちは、自分たちと同じような僕たちが自分たちの恵みに与る姿を見たときこそ、特に自らの栄誉を感じるのです。ですから、殉教者を称賛したい者は殉教者に倣い、敬虔な行いをする者たちを称賛したい者は彼らの労苦に倣うべきです。それは、殉教者たちにとって、彼ら自身の武勇に劣らない喜びをもたらすでしょう。　そして、彼らが私たちが無事であることを目にする時、確かに自らの恵みを特に感じ、それを自分たちにとって最大の栄誉とみなしていることを確信するために、パウロの言葉を聞いてほしい。*「あなたがたが主にとどまっているとき、私たちは今、生きているのです」*（1テサロニケ3:8）。

また、モーセは彼に先立って神にこう言いました。「*彼らの罪をお赦しください。もしそうされないなら、あなたが御名をお書きになった御書から、私をも消し去ってください」*（出エジプト記32:32）。

「私は、彼らの不幸によって、これ以上の名誉を感じることはない」と彼は言います。「信徒の共同体は一つの結びついた体です。足が苦しめられているのに、頭だけが冠を戴いて何の意味があるでしょうか。」

では、今、どうして殉教者たちに倣うことができるというのか。今は迫害の時ではない。　私もそれを知っている。今や迫害の時代ではなく、殉教の時代だ。今やそのような偉業の時代ではなく、栄冠の時代だ。人々から迫害されるのではなく、悪霊から迫害されるのだ。迫害者が追いやるのではなく、あらゆる迫害者よりも恐ろしい悪魔が追いやるのだ。目の前には炭火は見えず、燃え盛る情欲の炎が見えるのだ。　彼らは炭火を踏みにじったが、あなたは肉欲の炎を踏みにじりなさい。彼らは野獣と戦ったが、あなたは怒りという、この野性的で手なずけられない野獣を制しなさい。彼らは耐え難い苦痛に耐え抜いたが、あなたはあなたの心に溢れる不品行で堕落した思いに打ち勝ちなさい――そうして殉教者たちに倣いなさい。　*「私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配者たち、権威者たち、この世の暗闇の支配者たち、天の下にある悪の霊たちに対するものである」*（エフェソ6:12）。

肉欲の炎は、消えることのない絶え間ない炎であり、狂暴で激しすぎる犬のようなものです。たとえあなたがそれを千回追い払ったとしても、それは千回襲いかかり、決して離れません。炭の炎は激しいものですが、この肉欲の炎はそれ以上に恐ろしいものです。　私たちにはこの戦いにおいて休戦など決してなく、現世において安息を得ることも決してない。しかし、冠が輝かしいものとなる

ためには、絶え間ない闘いが必要である。それゆえ、パウロは常に私たちに武装を命じている。なぜなら、常に戦時であり、敵は常に警戒しているからである。　「情欲が火に劣らず燃え盛る」ということを知りたいか。ソロモンの言葉を聞いてほしい。*「燃える炭の上を歩いて、　足を焼かずに済む者がいるだろうか。隣人の妻に近づく者も同様である。彼女に触れる者は、罪を免れることはない」*（箴言 6:28–29）。

ほら、情欲はその本質において、火の本質と競い合っていることがお分かりだろうか。火に触れて火傷を負わないことが不可能なのと同様に、美しい顔を見つめることは、火よりも速く、視線を制御できない魂を包み込む。そして、火にとって可燃性物質が燃料となるのと同じように、肉体の美しさは、情欲に駆られた人々の目にとっての燃料となるのだ。　それゆえ、情欲という火に「燃料」――すなわち外的な眺め――を与えてはならず、あらゆる手段を尽くしてそれを覆い隠し、敬虔な思いによって消し止め、炎のさらなる拡大を食い止め、それが私たちの精神の強さを打ち砕くことを許してはならない。　そして、情欲が優勢な時期には、あらゆる快楽が通常、火よりも激しく魂を焼き尽くしてしまう。もし誰かが、キリストの祝福され、勇敢な修道士ヴァルラアムが自らの手に対して行ったように、勇気と忍耐と信仰をもって、あらゆる情欲に立ち向かわなければ、そうなるのである。　彼は右手に燃え盛る焚き火そのものを握りしめ、痛みに屈することなく、彫像よりも無感情なままであった。あるいは――より正確に言えば――彼は肉体を持っていたため、鉄ではないが、痛みを感じ、苦しんでいた。しかし、その痛みと苦しみの中で、彼は死すべき肉体の中にあって、無形の力の英知を示したのである。

2. しかし、この物語をより明確に理解してもらうために、私はこれから彼の殉教について語り始めるが、あなたは悪魔の狡猾さに注目してほしい。ある聖人たちを鉄板の上に載せ、他の者たちを火よりも激しく沸き立つ大釜に投げ込み、ある者たちの脇腹を削り取り、　ある者たちを海に沈め、ある者たちを野獣にさらし、ある者たちを炉に放り込み、ある者たちの四肢を砕き、ある者たちからはまだ生きているうちに皮を剥ぎ取り、ある者たちの血まみれの体の下に炭を敷き、傷口に飛び込む火花がどんな野獣よりも激しく彼らを苦しめ、またある者たちにはさらに過酷な拷問を考案した。しかし、これらすべてが嘲笑の対象に過ぎず、殉教者たちが並外れた不屈の精神でこれを乗り越え、後に続く者たちにとって同じ偉業を成し遂げるための最大の勇気の源となっていたのを見て――彼は何をするのか？　彼は新たな種類の策略を考案し、その拷問の意外性と異様さによって殉教者の魂を打ち砕こうとした。というのも、私たちが知っており、耳にしたことのあるものは、たとえ耐え難いものであっても、すでに知られており予想されているものとして軽視されがちだが、予期せぬものは、たとえ軽微であっても、何よりも耐え難いものとなるからである。　さあ、新たな闘いが繰り広げられ、並外れた狡猾さが用いられよう。その新奇さと予期せぬ出来事が、修行者を動揺させ、容易に彼を陥れるのだ。　では、彼は何をするのか。彼は聖人を縛られたまま牢獄から連れ出すのだ。そして、最初からいきなり過酷な手段を用いたり恐ろしい拷問を加えたりせず、より小さなことから戦いを始めることこそが、この狡猾さの真髄であった。　その目的は何か。それは、もし修行者たちが打ち負かされた場合、些細なことにも耐えられなかったという理由で、その敗北が恥辱となるようにするためである。また、もし彼らがそれを乗り越えて勝利したとしても、些細なことに体力を消耗させておけば、より大きな試練に直面した際に容易に打ち負かされるようにするためである。　そこで彼はあらかじめ小さな試練を用い、克服できようができまいが、自分を欺かないようにした。「もし克服できれば、笑ってやる」と彼は言った。「もし克服できなければ、将来のために彼らをより弱くしてやる」。　こうして、彼は彼を牢獄から連れ出した。彼は、長い間パレストラで鍛錬を積んだ勇敢な闘士のように、堂々と出てきた[7998]　。実際、殉教者にとって牢獄は闘いの学校であり、そこで神と

[7998] パレストラとは、ギリシャ人やローマ人が体操競技や格闘を行っていた広場のことです。

一対一で語り合う中で、彼は神からあらゆる闘いの術を学んだ。なぜなら、そのような束縛があるところには、キリストもまたおられるからである。

こうして、彼は牢獄での長期の滞在によってさらに強靭になって出てきた。しかし、彼が外に出た後、悪魔はその不義の僕たちを通じて彼を広場へと連れ出したが、彼を木に縛り付けたり、処刑人たちに囲ませたりはしなかった。なぜなら、悪魔は彼がそれを望んでおり、あらかじめその刑罰という考えに心を整えていたのを見ていたからである。 しかし、この塔に対しては、その崩壊を招きかねない、ある種の異例で、新しく、予期せぬ武器を用いるのである。というのも、悪魔はあらゆる場面において、聖徒たちを苦痛で苦しめるよりも、むしろ欺きによって陥れようと努めるからである。 では、その武器とは何だろうか。彼に、犠牲台の上に手のひらを上にして伸ばすよう命じ、その上に熱い炭と乳香を置いた。もし彼が痛みを感じて手をひっくり返せば、それを犠牲の捧げ物であり、信仰からの背きであるとみなすためである。 悪魔がいかに狡猾か、お分かりだろうか。しかし、*「知恵ある者たちを、その知恵によって捕らえる」*（Iコリント3:19）様子を見てほしい。神は悪魔の策略を無に帰し、その多種多様な狡猾さの極みを、殉教者の栄光をさらに高め、増大させるために用いたのだ。 敵が数え切れないほどの悪巧みを駆使した末、敗北して退却するとき、そのときこそ、敬虔な修行者はさらに栄光に輝くものとなる。まさにここでもそうであったように。 祝福されたバルラアムは、まるでその手が鉄でできているかのように、手を曲げたりひっくり返したりすることなく立ち続けました。しかし、仮に手がひっくり返ったとしても、それは殉教者の過ちではなかったでしょう。

3. ここで、皆さん、私の話をよく聞いてください。たとえ彼の右手がひっくり返ったとしても、それは敗北ではないということを確信していただきたいのです。なぜでしょうか。それは、肋骨を刺されたり、その他の方法で苦しめられたりしている人々を私たちがどう判断するかと同じように、ここでも判断すべきだからです。 もし彼らが耐えきれずに犠牲を捧げたとしても、それは彼らの弱さのせいであり、苦痛に耐えきれずに犠牲を捧げてしまったということだ。 しかし、もし彼らが拷問に耐え、苦しみによって病に倒れたとしても、敬虔さを裏切らなければ、誰もその病を非難することはなく、むしろ私たちは彼らをさらに称賛し、苦しみで衰弱しながらも耐え抜き、信仰を捨てなかったことに感嘆するのです。 ここでも同様である。もし、至福のバルラアムが、火刑に耐えきれず、犠牲を捧げることを約束していたならば、彼は打ち負かされていたであろう； もし彼が屈服しなかったにもかかわらず、その手がひっくり返ってしまったとしても、それは殉教者の意志のせいではない。それは意志の弱さではなく、肉体の弱さによるものであり、その力の及ぶ範囲内で、聖人の意志に反して手が火から身を引いたことになるだろう。 私たちが、肋骨を拷問されている者たちを、その肉体が引き裂かれるからといって非難しないのと同じように——いや、もっと身近な例を挙げよう—— ——誰も、高熱や痙攣に苦しむ人々の手が曲がってしまうことを非難しないのと同じだ。それは彼らの気弱さによるものではなく、体液を消耗させ、神経のつながりを不自然に引き締める病的な熱によるものだからである。それゆえ、もしこの聖人の手がひっくり返ったとしても、誰も彼を非難することはなかっただろう。 高熱が、患者の意志とは無関係に、通常、四肢を収縮させ歪ませるものであるならば、ましてや右手に置かれた炭がそうさせることはあり得たはずだ。たとえ殉教者がそれに屈しなかったとしても。 しかし、彼らはそうしなかった。それは、神の恵みがその修行者に宿り、彼を強め、自然の欠点を補っていたことを、あなたが十分に確信できるようにするためである。それゆえ、彼の手そのものも本来あるべき動きを見せず、あたかもアダマントでできているかのように[7999]、ひっくり返ることなく留まっていた。 さて、これを見て驚かない者がいるだろうか。心を震わせない者がいるだろうか。天からは天使たちが、大天使たちは注視していた。その光景は輝かし

[7999] アダマント——ダイヤモンド——とは、他の石を削り、切り裂くほどの強さを持ちながら、それによって自らに損傷を受けることのない石である。教会文学において、この名は、信仰と気質の堅固さで名高い多くの聖人に与えられている。

く、まさに人間の自然を超越するものであった。　まことに、人間特有の感情を抱くことなく奮闘し、自らを祭壇であり、犠牲であり、司祭でもあったその人を見たいと願わない者がいるだろうか？それゆえ、二つの煙が立ち上った。一つは燃やされる乳香から、もう一つは焼かれる肉体からであった。そして、後者の煙は前者よりも心地よく、後者の香りは前者よりも優れていた。　ここでも、あの茂みと同じことが起こった。あの茂みが燃えながらも燃え尽きなかったように、ここでも手は燃えていたが、魂は燃え尽きなかった。肉体は消耗したが、信仰は衰えなかった。　肉体は衰えつつも、熱意は衰えなかった。灼熱の炭が手のひらを焼き尽くしながら落下していったが、魂の勇気は衰えなかった。手は傷つき、消え去った――それは肉でできており、ダイヤモンドではなかったからだ――しかし、魂はさらに別の手を求めた。その手でも自らの忍耐を示すためである。　まるで、敵の陣中に突入し、戦列を打ち破った勇敢な戦士が、絶え間ない数多くの攻撃によって剣を折られ、敵を打ちのめすことにまだ満足できず、振り返って別の剣を探すように、　――まさにそれと同じように、至福のヴァルラアム聖人の魂も、悪魔の軍勢を打ち破る際に片手を失った後、もう片方の手をも求め、その手においても自らの熱意を示すことを望んだのである。　彼が片手だけを差し出したなどと言うな。その前に、その手を差し出した者が、頭も、肋骨も差し出し、火にも、野獣にも、海にも、深淵にも、十字架にも、車輪にも、そしてこれまでに聞いたことのあるあらゆる拷問にも立ち向かい、すべてを、たとえ実際に経験したわけではなくとも、心の中で耐え抜いたのだと想像してみよ。　殉教者たちは、特定の拷問に向かっているのではなく、未知の処刑に備えているのだ。　彼らは拷問者の意志を支配する者ではなく、拷問の限界や程度を定めることもない。しかし、拷問者の非人道的で野蛮な意志が、いかなる苦難を彼らに課そうとも、彼らはそれを断固として受け入れる決意で臨む――ただ、苦痛のさなかに肉体が力尽き、拷問者の望みを果たせなくなることだけは別として。　かくして、彼の肉体は滅ぼされつつあったが、その意志はますます熱烈になり、その輝きは炭火そのものを凌ぎ、それ以上に輝いていた。なぜなら、彼の内には、その火よりもはるかに明るい霊的な火が燃えていたからである。それゆえ、彼は外側の炎を感じなかった。彼の内には、キリストの愛の明るく燃え盛る火が燃えていたからである。

4. 愛する者たちよ、私たちはこれを聞くだけでなく、それに倣おうではありませんか。　最初に述べたように、今もこう言います。誰もが、今この時だけ殉教者に感嘆するだけでなく、家に帰る際にも、この聖人を連れ帰り、彼を自分の家へ、あるいは――さらに良いことに――語られたことを思い起こすことによって、自分の心の中へと迎え入れなさい。　前述の通り、彼を受け入れ、心の中に両手を広げた姿で彼を据え、栄冠を戴いた勝利者を受け入れ、決して彼をあなたの心から追い出さないでください。それゆえ、私たちは　、あなた方を聖なる殉教者たちの墓へと導いたのです。彼らを見ることで、あなた方が徳へのある種の励ましを受け、同じ熱意に備えることができるようにするためです。　戦士を奮い立たせるのは、英雄の噂話でもありますが、それ以上にその姿や姿を見ることです。特に、戦士が英雄の天幕そのものに入り、血まみれの剣、敵の首、上方に吊るされた戦利品、トロフィーを掲げた者の手から滴り落ちる生々しい血、　至る所に散らばる槍や盾、矢、その他あらゆる武器を目にする時、なおさらである。それゆえ、私たちもここに集まったのである。　殉教者の棺とは、戦士の天幕である。もしあなたが信仰の目を開けば、ここに真理の鎧、信仰の盾、救いの兜、福音を宣べ伝えるための履物、霊的な剣、そして地に打ち倒された悪魔の頭そのものが横たわっているのを見るだろう（エフェソ6:14–17）。　殉教者の棺のそばで、仰向けに横たわり、しばしば自らを苦しめている悪霊に取り憑かれた者を見るとき、それはまさに、悪者の切り落とされた頭そのものである。　これらの武器は、今もなおキリストの戦士たちの傍らに置かれている。王たちが英雄たちを武器と共に葬るように、キリストもまた、復活に先立って聖徒たちの栄光と力をすべて示すために、彼らを武器と共に葬られたのである。さあ、彼らの霊的な全武装を知りなさい。そうすれば、あなたはここから、最大の益を得て立ち去ることになるだろう。　愛する者よ、あなたにも悪魔との偉大なる戦いがある。それは偉大で、力強く、そして絶え間ないものである。

さあ、勝利を模倣できるよう、戦い方を学べ。富や金、その他あらゆる世俗的な華やかさを軽蔑せよ。富を蓄える者を幸福だとは思わず、殉教者たちを称えよ。贅沢に浸っている者たちではなく、　むしろ、鉄板の上にいる者たちを、豪華な食卓ではなく、沸騰する大釜の中で、毎日通う浴場ではなく、残酷な炉の中で、香りのよいものからではなく、焼かれる肉から立ち上る煙と悪臭を放つ者たちを、敬うのだ。　この香りは、あちらの香りよりも優れており、有益である。あちらの香りは、それを用いる者たちを苦しみへと導くが、こちらは報いと天上の冠へと導く。そして、贅沢が、香油を塗ることや、酩酊、過度の酒の摂取、豪華な饗宴と同様に悪であることを、あなたが確信できるよう、預言者の言葉を聞いてほしい。　*「象牙の寝台に横たわり、自分の寝床でくつろぎ、群れの中から最上の雄羊を、肥えた牧場から子牛を食べ……杯からワインを飲み、最上の香油を身に塗っている」*（アモス書6:4–6）。もしこれが旧約聖書で禁じられていたのなら、なおさら恵みの時代においては、そこにはより多くの知恵があるのだから。　これは、夫たちにも妻たちにも向けられた言葉である。戦場は共通のものであり、キリストの陣営において性別による区別はなく、ただ一つの集会があるだけである。妻たちもまた、殉教の時だけでなく、大きな大胆さが求められる他の時においても、鎧を身にまとい、盾で身を守り、矢を放つことができるのである。　優れた射手がいかに巧みに弦から矢を放ち、敵の陣形全体を混乱に陥れるか――それと同様に、聖なる殉教者たちや真理の擁護者たちは皆、悪魔の策略に立ち向かい、自らの舌をあたかも弦のように用いて、　巧みに言葉を放ち、それらは空を飛ぶ矢のように、目に見えない悪魔の軍勢に命中し、その全軍を混乱に陥れる。同じことが、この祝福されたヴァルラアムにも起こった。彼は、まるで飛ぶ矢のような簡潔な言葉で、悪魔の陣営を混乱に陥れたのである。私たちもこの技を模倣しよう。　見世物から帰ってくる人々が、どれほど疲れ果てているかお気づきでしょうか。その理由は、彼らがそこで起きていることに細心の注意を払い、そこから帰ってくる際、魂の中に、目の動き、手の動き、足の動き、そして苦しみを受ける肉体のあらゆる歪んだ姿のイメージを留めているからです。　彼らが自らの魂の破滅のためにこれほどの手間をかけ、そこで起きていることを絶えず記憶に留めているのに対し、私たちはこの世の模倣を通じて天使たちに匹敵できる立場にあるにもかかわらず、教えられたことを守ることに彼らと同等の熱意を示さないなど、なんと滑稽なことでしょうか。いいえ、お願いいたします、懇願いたします。　自分の救いについてこれほど無頓着であってはなりません。むしろ、殉教者たちを、その鉄板や大釜、その他の拷問とともに、私たちの魂の中に常に留めておきましょう。そして、画家が煙や煤、長い年月によってくすんでしまった絵をしばしば磨き直すように、愛するあなたも、聖なる殉教者たちの記憶を活用してください。　日常の心配事があなたの魂を曇らせたときは、殉教者たちの記憶によってそれを清めなさい。　もしあなたがこの記憶を心に抱き続けるならば、富に驚かず、貧しさを嘆かず、名声や権力を称賛することもなく、人間の行い――輝かしいものであれ、悲惨なものであれ――のどれ一つとして、偉大なものとも、耐え難いものとも見なさなくなるでしょう。　むしろ、これらすべてを超越して、この姿を絶えず見つめることで、徳の教訓を得るだろう。毎日、戦争や戦いで勇敢に戦う戦士たちを見る者は、決して贅沢を望まず、甘やかされ散漫な生活に憧れることもなく、厳格で堅固、そして偉業に備えのある生活を愛するようになる。　そもそも、酩酊と戦い、暴飲暴食と勇気、香油と武器、戦争と饗宴の間に、いったい何の共通点があるというのか。　愛する者よ、あなたはキリストの戦士である。だから、装飾品を気にするのではなく、武装せよ。あなたは勇敢な修道士である。だから、服装を気にするのではなく、勇気を持ちなさい。そうして　これらの聖人たちに倣い、これらの英雄たち、栄冠を戴いた勝利者たち、神の友たちを敬い、彼らと同じ道を歩み終えたとき、　彼らと同じ冠に値する者となりましょう。私たち皆が、私たちの主イエス・キリストの恵みと愛によって、その冠に値する者となれますように。父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、主イエス・キリストに栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4調：

汝は、その強靭さに人々を驚かせ、レバノンの香木を自ら捧げ、キリストへのいけにえとした。そして、栄光の冠を受けたバルラアムよ、苦難に耐えた者よ、常に我らのために祈り給え。

ペチェルスクの聖バルラアム伝

記念日11月19日

当時、私たちの尊い父たちであるアントニー、テオドシウス、ニコンが、聖三位一体の御座にふさわしい三つの灯火として、キエフの洞窟で勇猛な功績を輝かせていた頃、　あるヴァラアムという人物が、彼らの甘美な対話を楽しむために何度も彼らを訪ねてきた。彼は、貴族でありキリストを愛する両親――イザスラフ公のボヤール（貴族）の中でも第一人者であるヨアンとマリア――の息子であり、栄光に満ちた勇敢なヴィシャタの孫、そして軍司令官オストロミールの曽孫であった[8000]。

若き頃からヴァルラアムは、肉体の美しさと魂の清らかさで輝き、前述の尊い父たちへの愛を抱くようになった。その愛は極めて強く、世俗の生活を捨てて彼らと共に暮らしたいと願うほどであり、名声や富を何とも思わなくなった。　とりわけ、聖人たちが彼に伝えた主の御言葉――「*金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しい*」（マタイ19:24）――に、彼は深い畏怖を抱いた。

そしてある日、彼は聖アントニオのもとを訪れ、自分の決意を打ち明けた。

「父よ、もし神の御心にかなうなら、私は修道士となり、あなた方と共に暮らしたいのです」と彼は言った。

「お前のその願いは立派だ、わが子よ」と長老は答えた。「その志は神の恵みに満ちている。しかし、この世の富や名声が、お前を元の世界へ引き戻さないよう気をつけなさい。主の御言葉にあるように、*『鋤に手をかけながら後ろを振り返る者は、神の御国に入る資格がない』*（ルカ9:62）とあります。

長老はヴァルラアムのために、魂の益となる多くのことを語り続け、彼の心は神への愛でますます燃え上がっていった。

そのような心境で、彼は家路についた。長老との対話の翌日、両親だけでなく、すでに婚約していた花嫁までも残して、彼は明るく高価な服を身にまとい、馬を引く多くの従者を従え、飾り立てられた馬を連ねて、威厳をもって洞窟へと到着した。　聖者たちが外に出て、当時貴族に対して行われていたように地面にひれ伏して彼に礼を捧げると、彼もまた（馬から降りて）彼らに礼を返した。その後、彼は貴族の衣装を脱ぎ、それを聖アントニオの足元に置き、飾りを外した馬を彼の前に並べて、こう言った。

「ほら、父よ、これがこの世の虚しい富です。これらをどうなさっても結構です。*『キリストを得るために、私はすべてを損とみなします』*（フィリピ3:8）。私はこの洞窟であなた方と共に暮らしたいのです。もう二度と故郷には戻りません。」

「よく聞きなさい、わが子よ」と聖アントニオは彼に答えた。「あなたは誰に誓いを立て、誰の戦士になろうとしているのか。見よ、今まさに、神の天使たちが目に見えない形でここに立ち、あなたの誓いを受け入れているのだ。　気をつけなさい。たとえあなたが望まなくても、あなたの父が

[8000] イジャスラフ・ヤロスラヴィチは、大公ヤロスラフ・ムドリーの息子であり、聖ウラジーミル大公の孫で、1054年から1068年までキエフを統治した。――ヴィシャタは、キエフ民兵隊の司令官であり、1042年にヤロスラフとその息子ウラジーミルと共にギリシャ人への遠征に出た。– オストロミル――ノヴゴロドのポサドニク。彼の名にちなんで『福音書』が伝承されており、これは教会スラヴ語文学の最も古い遺物の一つである。

武装した兵を率いてここに来て、あなたをここから連れ出さないように。なぜなら、私たちはあなたを助ける術がないし、そうなればあなたは神の前で偽り者であり、背教者となってしまうからだ。

「私の神を信じます、父よ！」とヴァルラアムは叫んだ。「たとえ父が私を苦しめようとも、私は世俗の生活には戻りません。ただ一つお願いがあります。どうか、一刻も早く私に修道衣を着せてください。」

そこで、聖アントニオは聖ニコーンに、ヴァルラアムに剃髪させ、修道服を着せるよう命じ、その通りに行われた。

ボヤリンのヨアンは、愛する息子が修道者となったことを知ると、聖者たちに激しく怒り、大勢の従者を連れて、洞窟に逃げ込んでいた修道士たちを襲い、全員をそこから追い出し、　さらに息子を無理やり引きずり出し、マントと修道服を引き剥がして小川に投げ捨てた。　その後、彼は息子に、その身分のふさわしい明るい色の高価な服を着せた。しかし、聖人はそれらを見るのも嫌がるほどで、すぐにそれを脱ぎ捨ててしまった。これが何度か繰り返されたため、父は息子の手を縛らせ、力ずくで再び服を着せ、その姿のまま街中を通り抜けて家へ連れ帰らせた。　しかし、ヴァルラアムは道中で汚物で満たされた穴を見つけると、素早くその中へ降りていき、急いで服を脱ぎ捨て、泥の中でそれを足で踏みつけ、それとともに悪者の策略をも踏み潰した。　家に着くと、父は彼に自分と一緒に食卓に着くよう命じた。彼は仕方なく従わなければならなかったが、出された料理は一切口にせず、うつむいたまま座っていた。食事が終わると、父はヴァルラアムを自分の部屋へ戻し、彼が逃げ出さないよう使用人に見張りをさせた。　その後、父は聖人と婚約していた乙女に対し、彼を魅了するために最高の装いを身につけ、あらゆる手段で彼に尽くすよう命じた。しかし、キリストの聖人ヴァルラアムは部屋の一つへ退き、隅の床に座り込んだ。婚約者は与えられた命令に従い、彼の後を追って行き、自分の寝床に座るよう懇願した。　その時、彼は彼女の無分別さを見て、父が自分を誘惑させるために彼女を送り込んだのだと察し、誘惑から救われるよう、心の奥底から慈悲深き神へ密かな祈りを捧げた。彼は三日間、立ち上がることなく同じ場所に座り続け、何も口にせず、服も着ずに、ただ一着の毛皮の衣を身にまとったままだった。　その間、聖アントニオスと洞窟に共にいた者たちは、彼の運命を深く嘆き、神に彼のために祈りを捧げた。そして神は彼らの祈りを聞き入れられた。なぜなら、詩篇の作者の言葉にあるように、*「[義人たちは]叫び求め、主はそれを聞き、すべての苦しみから彼らを救い出される」*（詩編33:18）とあり、聖人の忍耐と謙遜をご覧になった神は、激昂していた父の心を、息子への憐れみへと向けさせた。使用人たちはボヤリンに、息子がもう四日も食事をとらず、服も着ていないと報告した。　父は息子を憐れみ、飢えや寒さで死んでしまうのではないかと恐れ、彼を呼び寄せ、愛情を込めて口づけをしてから、洞窟へ戻らせた。　すると、その時、実に驚くべきことが起こった。家の中から、まるで死者を弔うかのようなすすり泣きと叫び声が聞こえてきたのである。皆が泣いていた。父と母は息子を失うことを、花嫁は婚約者と引き離されることを、男奴隷と女奴隷は優しい主人が去ってしまうことを嘆いていた。　そして聖ヴァルラアムは、網から抜け出した鳥のように、素早く洞窟へと向かった。洞窟にいた修道士たちは、ヴァルラアムを見て心から喜び、彼についての祈りを聞き届けてくださった神を賛美した。

洞窟の兄弟たちの数が12人に増えたとき、聖アントニオは、バルラアムの立派な修行と徳の進歩を見て、　、若き日に長老にふさわしい霊的な実が結ばれ、他者にとって人生の導き手となり得るほどの恵みが現れたことを、心から神に感謝した。そこで、洞窟に住むすべての兄弟たちと相談した上で、　彼はヴァルラアムを後継の修道院長に任命し、自身は、一人きりで暮らすことに慣れ、人々の喧騒や会話を耐えられなくなったため、新しい修道院の下にある別の丘に移り住み、そこで洞窟を掘り、沈黙に身を委ね、常に唯一の神と語り合いながら暮らした。　彼の尊い遺体は、今もなおそこに眠っている。

聖バルラアムは、修道者たちの指導者となった後、さらに厳格な修道生活を送るようになった。修道者の数が大幅に増えた一方で、洞窟内では合同の礼拝の際に20人以上を収容することができな

かったため、彼は聖アントニオの祝福を請い、　洞窟の上に、至聖なる聖母マリアの被昇天に捧げる小さな木造の教会を建てた。これは、狭さのために洞窟での礼拝の賛美に参加できなかった兄弟たちが、この教会に集まって賛美を捧げられるようにするためであった。　それ以来、それまで目立たなかった洞窟そのものの場所も、はっきりと目に見えるようになった。数年後、聖なる洗礼においてディミトリと名付けられた大公イジャスラフ・ヤロスラヴィチは、自身の名前の由来となった聖人、大殉教者ディミトリに捧げる石造りの教会を建立し、その教会の傍らに修道院を設けた。　大公は、親族であり、修道生活に精通した人物である聖ヴァルラアムを、この修道院の院長に任命した。ここで聖ヴァルラアムは、洞窟で慣れ親しんだ生活様式を送った。　また、修道者たちや のすべての人々に対しては、何よりもまず、全力を尽くして魂の救いを求め、神と隣人に対して常に清らかな良心を持つよう教え、懇願した。そして神は、聖人が修道者たちに対して抱く愛と彼らへの配慮をご覧になり、彼らがあらゆる美徳において完成されるよう助けられた。

尊者ヴァルラアムは、これまでに成し遂げた多くの偉業に加え、ここで新たな功績を一つ加えた。好機を見計らって、彼は聖都エルサレムへと旅立ち、聖地を巡礼した後、自らの修道院へと戻った。　しばらくして、彼はコンスタンティノープルへと向かい、そこにあるすべての修道院を巡り、修道院に必要な物資をすべて購入してから帰路についた。　旅の途中で彼は重い病に倒れ、ウラジーミル市に到達すると、その近郊にある「聖なる山」と呼ばれる修道院に身を寄せ、そこで主のもとで安らかに息を引き取った[8001] 。死の直前、彼は共にいた者たちに、自身の遺体をキエフの ペチェルスキー修道院に埋葬するよう、また、イコンや修道院の必要のために彼が購入したすべての品を、聖テオドシオスに譲るよう遺言した。聖人の遺言は実行され、その尊い遺骨は今日に至るまで、洞窟の中で朽ちることなく安置されている。

尊者ヴァルラアムの祈りによって、私たちもまた、この地上の生涯において主の戒めを全うし、主キリスト・イエスにおいて天の御国の相続人となることができますように。主キリスト・イエスに、父と聖霊と共に、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

聖殉教者アザと彼と共にいた150人の戦士たちの記念日

記念日：11月19日

聖殉教者アザは、ディオクレティアヌス帝の治世下、イサウリア[8002] の兵士であった。しかしその後、地上の王ではなく天の王の兵士となりたいと願い、軍人としての地位を捨てて荒野へと退いた。　そこで数多くの奇跡を行い、病人を癒やしていた彼は、熱心なキリストの信徒として捕らえられ、イサウリア地方の統治者アクイリヌスの裁判にかけられた。　兵士たちが聖人を裁判へと連行する途中、聖アザは彼らにキリストの信仰を説き、聖人が彼らの目の前で奇跡を起こした後、兵士たちは信仰を抱くようになった。殉教者を護送していた兵士たちが聖なる洗礼を強く望んだため、アザは神に祈りを捧げ、聖人の祈りによって水が湧き出た。　それにもかかわらず、聖人から教えを受けた兵士たちは、権威ある者たちに従う義務があることを聖人から説得され、アザを総督の裁判の場へ連行し、彼と共に自分たちもキリスト教徒であることを告白した。　そこで、統治者アクイリンは、他の人々を威嚇するために、殉教者に激しい拷問を加え、鉄の爪でその肉体を引き裂き、最後には車輪に縛り付けて回転させるよう命じた。　しかし、聖人は神の御加護により、無傷のままであった。これを見た総督の妻とその娘は、キリストを信じ、自らの信仰を告白した。すると総督は激怒し、直ちに妻と娘、そして彼らと共に信仰を告白した兵士たち150人全員を斬首するよう命じた。

[8001] 1065年に没。

[8002] イサウリア – 小アジア南部の小さな地域。

その後、聖アザは新たな拷問にさらされ、ついに斬首された[8003]。

聖殉教者イリオドールの記念日

記念日：11月19日

アウレリアヌス帝の治世[8004]、パンフィリア[8005]のマギディスという町で、アエティウスが統治する中、イリオドールという名の敬虔な一人の男が、恐れを知らずにキリストを宣教していた。このため、彼は捕らえられ、迫害されている教義を広めたとして告発され、統治者の元へ連行された。聖人は裁判にかけられた。　尋問の際、総督アエティウスは、イリオドールに対し、キリストを否定し、偶像に犠牲を捧げるよう、長い間説得を試みた。しかし、聖人は勇敢かつ断固として、キリストを神であると告白した。そこで総督は、彼を絞首刑に処し、鉄の爪でその肉体を削り取るよう命じた。拷問の最中、聖イリオドールは力強い声でこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ！ 私をお助けください！」

するとすぐに、天から声が響いた。

「恐れるな！　わたしはあなたと共にある！」

この声を処刑執行人たちは聞き、同時に四人の天使を目撃した。この幻視は彼らに深い感銘を与え、彼らは我らの主イエス・キリストを信じるようになり、総督を非難し始めた。　激怒した総督は直ちに、彼らを海に投げ込むよう命じた。同時に、銅の雄牛に火をつけ、そこに殉教者を投げ込むよう命じた。聖人がそこに投げ込まれると、彼の祈りによって雄牛はたちまち冷め、聖人は神に感謝の歌を歌った。

このことを知った統治者は驚き、青銅の牛に近づいて、牛が瞬時に冷めたことを確かめた。聖人に向かって、彼は言った。

「不信心者め！　お前の魔術は火さえも打ち負かしたのか！」

すると聖人はこう答えた。

「それは魔術の仕業ではなく、キリストの助けによるものです。」

そう言うと、聖人は、どうすべきかを熟考するために、迫害者から三日の猶予を請うた。

聖人が解放されると、彼は密かに神殿へと向かい、そこで祈りを捧げた。聖人の祈りにより地震が起こり、その間に偶像は倒れて粉々になった。　このことを知った総督は、聖イリオドールを再び法廷に連行するよう命じ、怒りに満ちて彼を絞首刑に処し、その頭に赤熱した釘を打ち込むよう命じた。恐ろしい痛みに苛まれながら、聖人は神に助けを求めると、たちまちその苦しみは和らいだ。そこで統治者は、彼に重い鉄の足枷をはめさせ、近隣の都市の統治者の元へ連行するよう命じた。聖イリオドールがその統治者の元へ連れて行かれると、その統治者は、彼に偶像への生贄を捧げさせることを目的として、長い間彼と語り合った。　しかし、聖人の不屈の姿勢を見て、総督は彼の手足を四つの木片に挟み込み、その後、燃え盛る大釜に投げ込むよう命じた。大釜の中にいる間、聖人は祈りを捧げると同時に、傍らに立っていた人々に「これによって害は及ばない」と言って、自分の中に入るよう呼びかけた。そして、そこにいた多くの人々が、私たちの主イエス・キリストを信じるようになった。

「まことに、キリスト教の神は偉大である」と彼らは言った。

[8003] 4世紀初頭。

[8004] *アウレリアヌス* – ローマ皇帝、270年から276年まで在位。

[8005] パンフィリア – 小アジア南部の地域。

統治者は、多くの者がイリオドロの神を信じるようになったのを見て、信者たちが聖なる殉教者を隠してしまうのではないかと恐れ、彼をマギダへ連行するよう命じた。そこで兵士たちは彼を捕らえ、共にそこへ向かった。マギダに到着すると、彼らは再び彼を裁判にかけた。　聖人を試練にさらした後、総督は彼を絞首刑にし、その体を削り、その後、首を刎ねるよう命じた。イリオドーラが城外へと引きずられていく際、聖殉教者は彼を引きずっている者たちに手で合図を送り、立ち止まるよう求めた。彼らがその願いを聞き入れたとき、彼は祈りを捧げ、その後、首を刎ねられた[8006]。

12月3日

11月20日（旧暦）

私たちの尊い父グリゴリオス・デカポリトスの生涯

記念日11月20日

[8007]聖グリゴリオスは、デカポリスのイリノポリスという町で、キリスト教徒の両親であるセルギオスと、敬虔で神を畏れる女性マルファの間に生まれた。8歳の時に読み書きを学ぶために学校へ送られ、若くしてすでに神の御言葉を深く学び、神の宮への熱心さで際立っていた。　天上のものを追い求めて、彼は地上のあらゆるものを憎むようになった。味の良い食事は口にせず、質素な　や粗末な食事のみを摂り、豪華で柔らかい衣服を着ることを拒み、自ら手仕事をして生計を立て、余った分を貧しい人々に施した。　彼はしばしば人里離れた静寂の地へ赴き、そこで神と二人きりで祈りを捧げ、神が彼を忠実なしもべとして認めてくださるよう願った。

グリゴリーが成人すると、両親は彼を結婚させようとしたが、彼は密かに家を出て、ある人里離れた修道院に身を寄せた。そこで修道士となり、断食と禁欲、祈りと絶え間ない夜通しの祈りに熱心に励み、最も厳格な修道生活におけるあらゆる苦難を自らに課した。

その間、まもなくグリゴリーの父は亡くなった。敬虔な母は、長い探しの末に彼を見つけ出すと、彼を責めるどころか、修道生活を送ろうとする彼の決意を称賛した。ただ、兄が所属している別の修道院に移るよう彼に求めただけだった。　母の意志に従い、聖人はそこへ移り住んだ。しかし、その修道院の院長が偶像破壊者であることを知ると、正教の熱烈な擁護者として、修道院の兄弟たちの前で彼を非難した。　すると、修道院長は激怒して彼を激しく殴打した。その後、グリゴリーは別の修道院へと去り、そこでは母の親戚であるシメオンが院長を務めていた。シメオンは喜びをもってグリゴリーを迎え入れ、修道生活に熟達した者として、若者にあらゆる美徳を教え導いた。　ここで約十四年間を過ごした聖グリゴリーは、皆からの尊敬を集め、誰もが彼を徳高く聖なる人物として崇めるようになった。　深い謙遜の道を歩み、完全な修道士となることを願った彼は、修道院長に、人里離れた独房に住む許可を請い、世俗の心配事から解放され、沈黙の中で時を過ごすことを望んだ。修道院長は、彼の善意を見抜き、修行のために深い切り立った裂け目にある一つの洞窟を彼に与えた。そして聖人は、その洞窟でさらに熱心に修行に励み始めた。　しかし、世間の噂に動じることなく、彼はそこで悪魔たちによる大きな悩みに耐えなければならなかった。悪魔たちはあらゆる手段で彼を苛立ちさせ、誘惑し、自分たちの住処から追い出そうとしたのである。　悪魔たちは、「我らの住

[8006] 273年頃。

[8007] デカポリス（ギリシャ語でデカポリ）とは、小アジア南部の山岳地帯にある小さな地域、イサウリアにある10の都市の同盟であり、イリノポリスはその中の1つの都市である。聖グリゴリウスは、この都市同盟の名にちなんで「デカポリタ」という称号を授かった。

処から立ち去れ。さもなくば、我らから多大な苦しみを受けることになる」と叫んで彼を脅したり、恐ろしいサソリの姿をとって彼に襲いかかったりした。しかし、彼は傷つくこともなく、恐れを知らなかった。　彼が祈りを捧げていると、悪魔たちは彼の手や足を傷つけたが、彼はその傷を何とも思わず、無視した。そして悪魔たちは恥じ入って立ち去った。数日後、彼らは戦士の姿で現れ、彼を殺すと脅したが、彼が十字を切ると、彼らは姿を消した。　その後、悪魔たちは光を放ちながら聖人の前に現れ、自分たちは四十人の殉教者であり、悪魔に対する恵みと力を与えるために来たのだと語った。しかし、聖人は彼らの策略を見抜き、彼らを退けたため、彼らは再び姿を消した。他の誘惑も同様に無力であった。なぜなら、神の恵みが彼に働きかけ、彼の中のあらゆる肉の誘惑を根絶していたからである。　その直後、主は御自身の忠実な僕に驚くべき御臨在を授けられた。グリゴリーは、ある種の恍惚状態に陥った。その間、天からまばゆい光が現れ、言葉に尽くせない芳香が洞窟を満たし、それが何日もそこに留まり続けたのである。　この奇跡について、聖人は修道院長に報告すべきだと考え、霊的生活に精通した人物である彼に、この幻視が神からのものなのか、それとも彼を誘惑し惑わすために悪魔が送り込んだものなのかを尋ねた。　グリゴリーの話を注意深く聞き終えると、修道院長は彼を安心させ、何の疑いも恐れも抱く必要はないと告げた。それは神聖な光であり、その芳香によって邪悪な霊の致命的な悪臭を追い払ったのだと。　「できる限り精進しなさい」と長老は締めくくった。「神があなたの助け手であることを信じて」。　そして実際、聖グリゴリーはその恵み深い幻視によって癒やされ、彼を苦しめていた肉体の病から、また、悪魔たちが彼を惑わそうとした肉欲の誘惑という心の病から、そして悪魔たちのあらゆる悪意に満ちた誘惑から解放された。　それ以来、この至福の聖人は、その修行と祈りをさらに深め、魂の底から絶えず主に向かって叫び続けた。このようにして悪魔の策略を打ち破った聖グリゴリウスは、その聖く汚れなき生涯ゆえに、神から奇跡を行うという恵みの賜物を受けられた。　そして、この教会の神聖な灯火が隠されたままであることはふさわしくなかったため、

主はかつて族長アブラハムに呼びかけられたように（創世記12:1）、天から彼にこう告げられた。

「グリゴリイよ！ もし完全さを望むなら、あなたの地と親族のもとを離れ、自分の益となるよう旅に出なさい。」

この神聖な御声に従い、グリゴリウスは洞窟を後にし、コンスタンティノープルへ渡る船を探すためにエフェソスへと向かった。　当時、コンスタンティノープル教会は偶像排斥の異端に揺さぶられており、神の栄光と正教の純潔を熱心に守ろうとした聖人は、　（正教）を擁護し、異端者たちの偽りの教えを暴こうと決意していた。　しかし、神の摂理は別の道を定めていた。聖グリゴリウスは、神の召しに従い、残りの生涯を放浪の旅に費やすこととなった。*「私たちは、この世に恒久的な都を持たず、来たるべき都を待ち望んでいる」*（ヘブライ人への手紙13:14）とあり、この地上を旅人として歩み、頭を横たえる場所さえ持たなかった（マタイによる福音書8:20、ルカによる福音書9:58）私たちの主イエス・キリストと同様に。

エフェソスからコンスタンティノープルへと旅立った聖人は、道中まずプロコニス[8008] に立ち寄った。そこでは、ある貧しい人が、修道士を自宅に迎え入れることを禁じた偶像破壊派の王たちの厳しい勅令[8009] にもかかわらず、主のために彼を温かく自宅に迎え入れた。その功績により、主はわずか数日のうちに彼を豊かにしてくださった。　そこから聖人はさらにビザンティウムへと向かったが、その途上で障害に遭遇し、そこから、そこへの旅には神の御心がないことを悟り、エノス[8010] へ

[8008] プロコニス――現在のマルマラ、マルマラ海西部に位置する島。

[8009] レウ3世・イサウリアヌス（716–741年）、とりわけその息子コンスタンティノス・コプロニモス（741–775年）、および後者の息子であり後継者であるレウ4世・ハザール（775–780年）。

[8010] エノス――現在のルメリア南部の、コンスタンティノープルの西に位置する海港都市。

と向かった。　そこで彼は、悪魔に煽られたある騎手から激しい殴打を受けた。しかし、この義人は打撃に耐えつつ、神にその加害者を赦してくださるよう祈った。すると、加害者は彼の柔和さを見て悔い改め、許しを請い、今後誰をも傷つけないよう、聖人から教えを受けた。　ここから船で出発した聖人は、クリストポリ[8011]に到着し、そこからソロンへ渡った。

ソロンで数日間過ごした後、聖グリゴリウスは陸路でコリントへ向かった。そこから船でローマへ向かう途中、レギア[8012]にしばらく立ち寄った。ここで、ある人々が、聖人が何も持っていないのを見て、彼に一定量の金を贈った。　聖人は、その寄付者たちのことを知らなかったものの、神の恵みにより、自分に与えられた金貨が不正な手段で得られたものであることを見抜いた。そこで、不正を慎むよう教えるため、その犯人を糾弾し、不正に得られた金銭を返還した。レギウムを後にし、聖人はさらにローマへと向かった。　道中、乗船していた者の一人が、ローマへ向かうために上陸する予定だった海岸近くの海に、船から転落してしまった。すると、聖人に神の恵みが宿っていることをはっきりと証明する奇跡が起こった。すなわち、聖人はただ一つの祈りによってその者を陸に引き上げ、避けがたい死から救ったのである。

ローマに到着すると、聖グリゴリウスは人里離れた一室で三ヶ月間沈黙を守り、誰も彼の存在に気づかなかった。しかし、ある悪霊に取りつかれた者が、彼がこの街にいることを知らしめてしまった。聖人がその者から悪霊を追い出して癒やしたため、人々は皆、彼を聖人だと見なすようになったのである。　そこでグリゴリウスはその地を離れ、シチリアに到着すると、ある塔に閉じこもり、そこで沈黙を守り続けた。そこでは悪魔たちが彼に襲いかかり、彼が眠っていた藁の敷物を引き裂き、あらゆる手段で彼を誘惑し、様々な悪意ある行為を加えたが、彼は祈りによってそれらを追い払った。　またここで、彼は一人の罪深い女性を永遠の滅びから救った。その女性は、数え切れないほどの狡猾な手口で、特に異郷からやってくる船乗りたちを、不品行へと誘惑していたのである。　聖人は彼女に永遠の苦しみがあると警告し、自らの説得によって、彼女を世俗を捨てて修道生活を受け入れるに至らせ、かつて肉欲の汚れの場であったその場所は修道院へと変貌した。その後、ある悪霊に取り憑かれた女性が聖グリゴリイの塔を訪れ、彼は祈りによって彼女から悪霊を追い払った。　彼はこの地で他にも多くの奇跡を起こした。人々がそのことを知り、彼を崇めるようになると、聖人はそこからも去っていった。

ある日、旅の途中、彼はサラセン人の軍勢[8013]に出くわした。その中の一人が井戸のそばで馬に水を飲ませていたが、聖人が近づくと、その男は彼を殺そうと槍を突きつけた。しかし、突然、その男の手が空中で止まり、下ろすことができなくなってしまった。そこで彼は聖人の後を追って行き、癒やしを懇願した。　聖人は自分の手でその男の手に触れると、彼を癒した。さらに道を進むと、聖人はひどく苦しめられている悪霊に取り憑かれた男に出会った。彼に憐れみを抱いた聖人は、神に祈りを捧げると、悪霊はその苦しむ者を放った。

ついにグリゴリウスは再びソロウンに到着し、そこで聖ミナの修道院に身を寄せた。彼は極度の貧困の中にあり、食べる物も身を覆う物もなく、昼夜を問わず一着の服だけを身にまとっていた。耐え難い空腹を感じると、彼は　の教会から外へ出て、どこかで食事をしている人々を見かければ、その輪に加わり、彼らと共に少しばかりの食事を口にした。　しかしその後、彼は、自ら働かずに他人の労苦の成果を食すべきではないと感じ、主が天から助けを送ってくださるまで、食事なしで教会に留まることを決意した。 かつて預言者エリヤをカラスを通して養い（列王記下17:6）、その他多くの徳高いしもべたちを奇跡的な方法で養ってこられた主は、この忠実なしもべを見捨てられることはなかった。天からの啓示により、ある敬虔な未亡人が毎日彼に食事を届けてくれたのである。

[8011] クリストポリ――別名エムヴォリ――は、マケドニアのストリモン川沿いにある都市で、ソリュニの北東50ヴェルスタの地点を流れる。

[8012] リギイ――イタリア南西部、シチリア海峡の岸辺にある都市。

[8013] サラセン人――アラビアの遊牧民で強盗を働く部族の呼称。後にこの呼称は、イスラム教徒全般に広まった。

まもなく、聖グリゴリーは、その奇跡によって周辺一帯で名声を博すようになった。ある時、悪霊に取りつかれた女性が彼の元を訪れ、老朽化した自分の小さな家を修復できるよう、聖人に助けを求めた。その願いに応えて、聖人はこう言った。

「行って、仕事を始めなさい。そうすれば、孤児の父である神が、あなたに助けを送ってくださるでしょう。」

女性は信仰を持ってその場を離れ、建物の基礎を築くために地面を掘り始めました。すると、その場所から計り知れないほどの量の樹脂が湧き出してきたのです。女性はそれを売り、得たお金で家を建てただけでなく、その樹脂の販売で生計を立て、他の生活必需品も賄うことができました。

聖ミナの修道院の近くで柱の上で修行していたある修道士に対し、聖グリゴリイは聖霊によってそのことをあらかじめ知り、他の何人かの人々と同様に、彼の死が近いことを予言した。　絶えず自己修養に励み、心の清らかさを厳格に守り、キリスト教の美徳を磨く中で、聖グリゴリイは主に対して大いなる大胆さを持っており、自らを聖霊の住まいとして整えた。　神の導きのもと、彼は謙遜と知恵に満ちた修業の狭き道を歩み、絶え間ない覚醒によってあらゆる怠慢や敵の誘惑を遠く追い払い、敵は夢の中でも彼の想像や思考に働きかけることができなかった。　その名にふさわしく、彼はあらゆる行いと心構えにおいて、まことに「[8014]（目覚めた者）」であり、魂と肉体をあらゆる情欲から清めた。司祭の聖職に叙階されると、彼は砕かれた心と謙遜な精神をもって神聖な礼拝を執り行い、高慢と虚栄を完全に断ち切った。　何よりも、彼は言葉と行いの両面において正教の純潔を守り抜いた。異端者たちを可能な限り打ち砕きつつ、言葉と著作を通じて、聖なるイコンを崇拝し、教会の伝承に従ってそれらを尊ぶよう教えた。　多くの都市を聖像破壊の汚れから清め、必要とあれば聖なるイコンのために自らの血さえも流すよう説き、自身もまたそれらのために死を受け入れる覚悟があり、自らの意志によって殉教者となった。あらゆる美徳の中でも、彼は絶え間ない聖なる祈りを持ち、常に心を神へと向けていた。　聖なる天使たちと共に神を賛美し、栄光を帰することで、彼はこの世にいながらにして、言葉に尽くせぬ永遠の至福の喜びの前兆を受けた。ある夜、主の天使が幻として彼に現れ、悪魔のすべての勢力を打ち破り、教会から異端の思惑を切り離し、また心から罪深い情欲を切り離すための、炎の剣を彼に授けた。

時折、神への黙想にふける聖人は、天使たちの歌声を耳にすることがあった。彼は神と天使たちにこれほどまでに喜ばれていたため、まだ死すべき肉体の中にありながら、すでに不死の、神聖な喜びに与り、人の耳には聞こえない天使たちの歌声を聴くにふさわしい者とされ、その歌声に言い表せないほどの喜びを味わっていたのである。

テッサロニキで数年間を過ごした後、聖グリゴリウスは弟子の一人を連れて、当時はまだ異教の地であったブルガリアへ向かったが、そこにたどり着く前に引き返した。弟子が、なぜそれほど早く考えを変えたのかと尋ねると、聖人はこう答えた。

「私はそこを訪れてみたかったが、そこには太陽が輝いていないことがわかったのだ。」

これらの言葉によって、彼はその後まもなくそこで発生した騒乱を予言的に予告したのであり、その騒乱の間、血は川のように流れ、国全体が焼き尽くされた。

その後、聖グリゴリウスはテッサロニキからビザンティウムへ、そしてそこからオリンポス山[8015]へと赴き、そこから再びテッサロニキへと戻った。

このように修業に励み、地上でありながら天上のことを思い巡らしていた聖グリゴリウスは、この世を去る時が近づいていた。てんかんにより重病を患い、病床に動けずに横たわりながら、神に熱心に祈りを捧げた。この病から解放し、代わりに水腫という別の病を与えてくださるよう願ったのである。　神はその祈りを聞き入れ、最初の病から彼を解放し、彼が求めた病を与えられた。こうし

[8014] ギリゴリイは、ギリシャ語で「*目覚めている者*」を意味する。

[8015] ここでいうのは、もちろん小アジア北部のビフィニアとミジアの境界に位置するオリンポス山（ビフィノ＝ミジア）のことであり、当時はそこで修道生活が盛んに行われていた。

て彼の体は膨れ上がり、 まるで空気が満たされた革袋のようであった。 テッサロニキを後にした聖人は、多大な苦労の末、コンスタンティノープルに到着し、そこで偶像破壊の異端に対抗した[8016] 。そして、二度と故郷へは戻らなかった。彼はまた、二人の弟子であり同志であるヨセフとヨハネを連れてきた。 そのうちの一人を、正教会の修道士たちの要請に応じて、聖なるイコンに対する迫害が始まろうとしていたことを受け、ローマの教皇レオン3世[8017] のもとへ援助を請うために、まもなく派遣した。しかし、その途上、皇帝――イコン破壊論者であるレオン・アルメニア人――に買収された海賊たちに捕らえられ、キプロス島に流刑に処された。

ヨセフには、もはやその偉大な師を生前に再び目にすることは叶わなかった。聖グリゴリウスはその直後、清らかな魂を主のもとに帰した。臨終の12日前に、彼は自らの死の日を予知し、自分を旅人宿へ連れて行くよう命じ、そこで11月20日、静かに息を引き取った[8018] 。 その尊い遺体を埋葬するために人々が集まったとき、ある重病の病人が信仰を込めて彼に近づいた。その人は病が重く、まっすぐに立つことができず、常に顔を地面に向けていた。すると、誰かが後ろから彼に手を置いたように感じ、彼はそばに立っていた人に、自分が触れたのかと尋ねた。 その人は否定して答えた。そこで病人は、それが聖人を包み込む神の力であり、聖人が彼に癒やしを授けてくれたのだと悟った。そして彼はまっすぐに立ち上がり、病から完全に癒やされたのである。また、別の者は悪霊に苦しめられていたが、聖人の棺に近づいた途端、悪霊は彼から離れた。 ある兄弟は肉欲にひどく苦しめられ、堕落寸前だったが、聖人の墓を訪れ、涙ながらに助けを求めたところ、肉欲の戦いは止み、彼は聖人を称え、神に感謝を捧げた。

かくして、この世での多くの苦難に満ちた旅路の末、聖グリゴリイは天国において、聖なる天使たちの間に永遠の安息を得た。彼はこの世の生においてすでに、その天使たちの姿を見、その声を聞く恵みにあずかっており、今や彼らと共に、三位一体の唯一の神を、三聖賛歌をもって永遠に賛美している。

コンダク、第3調:

教会は、あなたを輝ける太陽として認める。美徳の輝きと癒やしの光線で万物を照らす、キリストの御心に適う者よ。それゆえ、私たちはあなたの尊い記念を祝い、あなたの偉業を称える、至福の父、至賢なるグリゴリイよ。

[8016] これは、皇帝レオン・アルメニア人（813–820年）の治世中のことだった。この皇帝は、コンスタンティノープル総主教ニキフォロスを聖像破壊の異端に引き込むことができなかったため、816年3月、彼をはじめ、聖像崇拝を果敢に擁護した他の司教、 聖像の崇敬を果敢に擁護した修道院長や修道士たちも、コンスタンティノープルの牢獄に投獄するか、あるいは流刑に処した。

[8017] 教皇レオン3世（在位：795年～816年）

[8018] 聖グリゴリオス・デカポリトスの死は826年に訪れ、聖ヨセフは師の存命中に会うことはできなかった。 6年後にコンスタンティノープルへの流刑から戻った彼は、聖グリゴリオスの朽ちない遺体を自らの手で触れることだけが唯一の慰めとなり、その弟子ヨハネスと共に、聖人の墓のそばに身を寄せた。 その後、ヨハネが亡くなると、ヨセフはこの場所を離れ、聖ヨハネ・クラマトリオス教会のそばに定住し、朽ちることなく奇跡を起こすことで知られる尊い遺骨である、デカポリトの聖人とその弟子ヨハネの遺骨をそこに安置した。 しばらくして、この教会の近くで、彼は聖ニコライ・カズルスキーにちなんで修道院を設立し、そこに聖人たちの聖遺骨を移した。また、ヨセフ・ペスノピセツは、聖グリゴリウスを称える礼拝式を著した。 聖グリゴリオスの聖遺体は、現在も腐敗することなく完全な状態で、ルーマニアのリムニン教区にあるビストリツァ修道院に安置されている。

コンスタンティノープル総主教聖プロクルの伝記

記念日：11月20日

聖プロクルスは聖ヨハネ・クロマトゥス（[8019] ）の弟子であり、聖使徒パウロが不思議な幻の中で聖ヨハネの耳元でひそやかに語りかける姿を目撃する栄恵に浴した。

あるコンスタンティノープルの高官が、嫉妬する者たちによってアルカディウス皇帝[8020] の前で誹謗中傷され、宮殿から追放され、その高位を剥奪された。　聖ヨハネに助けを求めたいと願った彼は、　聖ヨハネに対し、昼間に訪れると敵の誰かに見られ、皇帝の前でさらに誹謗中傷されることを恐れたため、夜に会わせてほしいと遠隔で懇願した。　そこで聖ヨハネは、自身の側近として仕えていたプロクラ――敬虔であらゆる美徳に満ちた人物――を呼び寄せ、夜になってその高官のことを思い出させ、彼を連れてくるよう命じた。プロクラの「金口」ことヨハネのもとでの務めとは、来訪者を総主教に報告し、彼のもとへ案内することだった。　夜になると、その高官は総主教のもとを訪れ、彼と語り合い、自身の不運な出来事を詳しく語ろうとした。　するとプロクルスは、寝床から起き上がり、総主教の寝室の扉に近づき、扉の隙間から、ヨハネスが座って何かを書いているのを見た。その背後には聖使徒パウロが寄り添い、彼の右耳に顔を近づけて語りかけていた。　使徒の姿は聖預言者エリシャに似ており、前頭部の髪がなく、大きく豊かな顎鬚を生やしていた。彼らが何について話しているのかは、扉越しには聞き取れなかった。扉から離れたプロクルスは、やって来た者にこう言った。

「がっかりしないでください。少しお待ちください。あなたより先に別の人が総主教のもとに入りましたので、その人が去るまでは、あなたを中へ案内することはできません。」

実のところ、プロクルスは誰が総主教のもとを訪れたのか見当もつかず、恐れを抱いていた。プロクルス以外、誰も総主教のもとへ近づくことはできなかったからだ。そして、それが使徒パウロの御出現であるとは、彼は知らなかった。

高官は長い間座り続け、ついに再びプロクルスに、自分について総主教に伝えてほしいと頼み始めた。

「ご自分でもお分かりでしょう」とプロクルスは答えた。「私が、総主教と話し合っている人が出てくるのをどれほど長く待っているか。とはいえ、やはり行って、隙間から彼らがまだ話し合っているかどうか見てきます。」

プロクルスは行って、会話がまだ続いているのを見た。彼は戻って座った。その後、三度目に扉に近づくと、やはり同じ光景を目にした。

「神父様、私より先に誰をも中に入れてはいけなかったはずです」と、その高位の聖職者は言った。「私が大きな苦境にあり、いつ死が訪れてもおかしくない状況にあることを、あなたは知っていたはずでしょうに。」

「信じてください、兄弟」とプロクルスは答えた。「私がその人を中に入れたわけでもなく、彼が誰なのかさえ知りません。それに、ここにはこの入り口以外に、誰かが入れるような別の入り口はありません。しかし、もう少し待ってください。」

しかし、その頃、早課の鐘の音が聞こえてきたので、プロクルスは来た者に言った。

「さあ、安らかに去りなさい。この瞬間から、総主教は誰とも話さず、夜の祈りの時間に余計なことを考えることもなく、夜明けまで一人きりで、全精神を祈りに注ぎ、ただ神とだけ語り合うの

[8019] 聖プロクルスは、聖ヨハネ・クラマトルスの下で助祭を務め、その後、修道司祭となり、同時にシンケロス、すなわち総主教の私室侍従として、総主教と同じ部屋に住み、またその最も親しい弟子でもあった。

[8020] アルカディウスは、東ローマ帝国の皇帝テオドシウス大帝の息子であり、395年から408年まで在位した。

だ。　次の夜にはまた来てください。そうすれば、何があっても、誰よりも先にあなたを中へ通します。

高官は席を立ち、悲しげに、目に涙を浮かべて家路についた。

次の夜、彼は再び総主教の邸宅を訪れた。　プロクルスは以前と同様に立ち上がり、彼のことを報告しに行ったが、そこで再び使徒が聖ヨハネの耳元で何かを囁いているのを見かけ、二人の会話を遮ることを恐れ、引き返した。そして、早課の鐘が鳴ると、貴族はまたも何も得られず、悲しみに満ちて家路についた。

一方、プロクルスは、一体誰が、いつ、どのようにして総主教のもとを訪れているのか、大いに驚き、首をかしげていた。　そこで彼は、あの不運な貴族をヨハネのもとへ連れて行き、一体誰が、どのようにしてパトリアルヒのもとに入っているのかを突き止めることができるまで、食べず、飲まず、眠らず、パトリアルヒの扉から離れないと心に誓った。その夜、貴族はいつものように現れた。プロクルスは、総主教の部屋には誰もいないと確信し、彼にこう言った。

「あなたのためです、我が主よ、兄弟よ。私はこの場所から一歩も離れませんでした。さあ、行って、あなたについて総主教に報告してきます。」

そしてすぐに立ち去り、扉に近づくと、今回もまた、使徒が総主教の耳元で話しているのを目にした。そこでプロクルスは戻ってきて、訪れた貴族にこう言った。

「家に帰りなさい、わが兄弟よ。そして神があなたを助けてくださるよう祈りなさい。なぜなら、私の目には、総主教と語り合っているその人は、神から遣わされ、目に見えない形で入ってくるように見えるからです。この扉からは、総主教以外、誰も入ってきてはいません。」

貴族は涙を流して立ち去り、聖ヨハネからの助けを完全に絶望した。しかし、朝になると、ヨハネはようやくその貴族のことを思い出し、プロクルを呼び寄せて尋ねた。

「私が君に、私のところへ連れてくるよう命じたあの男は、来ていなかったか」

「はい、父上」とプロクルスは答えた。「その人は確かに、もう三晩もここに来ていましたが、あなたは他の誰かと二人きりで話しておられたので、私はあえてお部屋に入ってそのことを報告する勇気がありませんでした。」

「私が誰と話をしていたというのだ！？」とヨハネは反論した。「今夜、私のところには誰もいなかったはずだ。」

そこでプロクルスは、総主教のそばで目撃した光景と、見知らぬ男がヨハネの背後から身を乗り出し、耳元で何かをささやきながら話していた様子を説明した。その後、プロクルスはふと、ヨハネの独房の壁にかかっていた聖使徒パウロのイコンに目をやり、突然叫んだ。

「ほら、父よ、私があなたと話しているのを見たのは、まさにこの方です！これが、その方の真の姿です！」

こうして、ヨハネとプロクルスの二人は、ヨハネの前に使徒パウロが現れていたことを知り、共に神に感謝を捧げた。一人は、自らの著作において使徒から密かに霊感を受けていたことに対して、もう一人は、天にまします使徒パウロを目にする恵みにあずかったことに対してである。

その後、ヨハネは迫害を受けていた貴族に必要な援助を施し、聖プロクルスは、彼の聖なる師であり霊的父である聖ヨハネに導かれて、徳を磨き、神に喜ばれる生活においてますます高みへと至っていった。

聖ヨハネス・クラマトルスの追放と死後、プロクルスはコンスタンティノープル総主教シシニウス[8021] によって、キジカ市の司教に任命された[8022] 。しかし、司教座に着任すると、異端に陥っていた現地の聖職者たちから受け入れられず、そのためコンスタンティノープルに戻り、そこで丸一年

[8021] シシニウスは426年から427年にかけてコンスタンティノープル総主教を務めた。

[8022] キジクは、小アジアの北岸にある小さな町である。聖プロクラスの司教叙任は426年に行われた。

を過ごした。 その後、聖マクシミアン総主教[8023] の死後、その埋葬が行われる前に、聖プロクルスはコンスタンティノープル総主教に選出され、聖なる大木曜日にこの高位に就いた[8024] 。

総主教の座に就いた聖プロクルスは、生涯の終わりまでキリストの羊の群れを立派に牧した。とりわけ、彼はアルカディウス皇帝の息子であるテオドシウス皇帝[8025] を説得し、聖ヨハネス・クラマトルスの聖遺骨をコマン[8026] からコンスタンティノープルへ移すよう促した。

聖プロクルスの総主教在任中、ビザンツ帝国では6ヶ月にも及ぶ大地震が発生し、教会や宮殿など多くの壮麗な建造物や、石造りの城壁が破壊された。 多くの村落や小さな町はまるで大地に飲み込まれたかのようになり、いくつかの島は完全に姿を消し、一部の泉や川は突然干上がり、水のない場所には流れが現れた。この恐ろしい地震は帝国全土で発生したが、特にビフィニア、ヘレスポント、フリギアで激しく襲った[8027] 。 コンスタンティノープルで最も立派で堅固な建物さえも崩れ落ちる中、テオドシウス皇帝とプルケリア皇后は、総主教およびすべての住民と共に街を離れ、行列を組んで行進し、主の慈悲を熱心に懇願した。そして、偉大な奇跡が起こった。 恐怖に震える民衆が『*主よ、憐れみたまえ！*』と祈りの叫びを空に響かせているその時、 ――突然、一人の子供が目に見えない力によって群衆の中から引き上げられ、皆の目の前で、視界の届かない高みへと持ち上げられ、一時間後には無傷のまま同じように地上に降ろされた。その子は王、総主教、そして民衆全員に、天で天使たちが次のような歌を歌っているのを聞いたと語った。

「聖なる神よ、聖なる力ある方よ、聖なる不死なる方よ。」

民衆は皆、直ちにこの「三聖歌」を唱和し始め、それに次のような祈りを添えた。 「我らを憐れみ給え」と。すると地震は収まり、天から「三聖歌」をもたらした少年は、直ちに神のもとへ息を引き取り、聖イリナの教会に栄誉をもって埋葬された。それ以来、キリスト教教会全体で「三聖歌」の詠唱が定着することとなった。

聖プロクルスは、総主教の座に20年5ヶ月在任し、安らかに主のもとへ旅立った[8028] 。

コンダク、第4調:

今日、まことにすべての都において、最も尊き方よ、あなたの尊い御死を祝うにふさわしい。父たちの父、賢きプロクルよ。

聖殉教者エウスタフィオス、テスペシオス、アナトリアスの受難

記念日：11月20日

聖殉教者エウスタフィオス、テスペシオス、アナトリアスは実の兄弟であり、ニコメディアの町で生まれた[8029] 。彼らの父はフィロフェイ、母はエウセヴィアと呼ばれていた。 フィロフェイはガ

[8023] 聖マクシミアンは、431年から434年まで総主教を務めた。

[8024] それは434年のことだった。

[8025] テオドシウス2世（若き）は408年から450年まで在位した。

[8026] コマナはアルメニアにある都市で、聖ヨハネス・クラマティス（金口）が流刑の途上で亡くなり、当初ここに埋葬された場所である。

[8027] ビフィニア、ヘレスポント、フリギアは、ビザンツ帝国の小アジアの属州である。

[8028] 聖プロクルスは446年に死去した。–聖プロクルスは傑出した教会の雄弁家であった。その雄弁さには、聖バシレイオス大主教の重要性と、金口ヨハネの心地よさが融合していると見なされている。その演説は多様で、生き生きとしており、明快である上に簡潔である。さらに、*アルメニア人への信仰や典礼の伝承に関する*書簡なども知られている。

[8029] ニコメディア（現在のネミド）は、小アジアのビフィニア州の州都であり、ボスポラス海峡の南東に位置する。ここには、ビザンツ帝国のディオクレティアヌス帝と聖コンスタンティヌス大帝が居を構えていた。

ラティア[8030] 、ガングラ[8031] の出身であったが、故郷を離れ、ニコミディアに移住し、そこでエウセヴィアと結婚して、彼女との間に三人の息子――すなわち、天の都の住民と称される三人をもうけた。

当初、フィロフェイとその妻、子供たちは異教徒であった。彼は長男のエウスタフィオスを異教の学問を学ぶために送り出し、テスペシアとアナトリアには商売の道を歩ませようとしていた。というのも、彼自身も商人であり、非常に裕福だったからである。 しかしある日、末っ子のアナトリアスを連れてガラティアへ買い付けに出かけ、帰路の途中でアンティオキアの司祭である聖ルキアノスと出会い、彼からキリスト教の信仰を学び、息子と共に道中で偶然見つけた川で洗礼を受けた。家に戻ると、彼はニコミディアの司教アンフィム[8032] を捜し始めた。アンフィムは当時、ある隠れ家に身を潜めていた（当時、マクシミアヌス帝とディオクレティアヌス帝の治世下で、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われており、多くの信者たちが迫害者から身を隠していた）。そして彼を見つけると、 夜になって彼を自分の元へ連れて行き、その後、聖アンフィムはフィロフェイ家の全員に洗礼を授けた。 その後、神聖な典礼を執り行い、新しく洗礼を受けた者たちに聖体拝領を授け、フィロフェイを司祭に、その長男エウスタフィオスを助祭に叙階し、異教徒の迫害者たちから身を隠して去っていった。フィロフェイとその家族は、密かに真の神に仕え、敬虔な生活を送った。

やがて彼と妻は主のもとへ召され、三人の敬虔な若者――助祭エウスタフィオス、テスペシオス、アナトリオス――を孤児として残した。彼らは肉においても霊においても兄弟であり、心を一つにして神に仕え、熱意に燃え、徳を積んでいたからである。 ある時、アキリンという名の宮廷の高官が、自分の奴隷を遣わしていくつかの品物を買いに行かせた。その奴隷は、この三人の敬虔な若者たちが商人であり、広範で豊かな商売をしていることを知っていたので、彼らの店へ向かった。店は開いていた。 中に入っても誰もいないのを見て、彼は家の3階へと続く階段を上っていったところ、ダビデの詩篇を読んでいるエウスタフィオスの声を耳にした。奴隷は静かに階段を上り、黙って上の部屋[8033] に入り、そこで詩篇集を手に持ち、次のように読んでいるエウスタフィオスを見かけた。 「*偶像に仕える者、偶像を誇る者たちは皆、恥じよ。すべての神々よ、主の前にひれ伏せ*」（詩編96:7）。さらに、彼は壁に十字架や聖像が飾られているのを見た。 何も言わずに、彼はすぐに主人のもとへ戻り、見聞きしたすべてを報告した。アキリンは直ちにマクシミアヌス皇帝のもとへ駆けつけ、その奴隷の言葉を報告した。直ちに、エウスタフィオスとその兄弟たちを捕らえるために兵士たちが派遣された。 アキリンの奴隷を連れてその場所に着いた兵士たちは、店が閉まっているのを見つけた。その時、家の住人たちは皆、集会に集まっており、日曜日の機会に合わせてキリストの聖体拝領を行いながら、完全な沈黙を守っていた。派遣された兵士たちは扉を叩き、呼びかけたが、返事はない。

聖エウスタフィオスは、兵士たちが自分と兄弟たちを捕らえて拷問の場へ連行するために遣わされたことを霊によって悟り、兄弟たちにこう言った。

「勇気を奮い起こせ、兄弟たちよ。恐れるな。我らの主が、我らを冠へと招いておられるのだ……今夜、私は我らがマクシミアヌスの前へ、不当な裁きを受けるために連行されるのを見た。すると、黒ずんだ姿の誰かが、泣き叫びながら我らの後を追い、顔を叩きながらこう言い放っていた。

[8030] ガラティアは、ビザンツ帝国の属州の一つで、小アジア半島のまさに中心部に位置していた。

[8031] この都市は、かつてここにあった地方公会議（340年）で知られており、その規則は教会によって正統なものと尊ばれている。

[8032] その記念日は9月5日である。

[8033] 使徒の時代から、キリスト教教会には、家の上層部、すなわち人が住まない場所で礼拝集会を行うという慣習が受け継がれ、長い間維持されてきた（使徒言行録 1:13, 14、20、8参照）で礼拝集会を開く習慣がキリスト教教会に長く受け継がれてきたが、コンスタンティヌス大帝の時代になって、キリスト教徒が迫害から解放されると、公の礼拝のために教会堂が建てられるようになった（もっとも、それ以前にも各地に少数の教会堂は存在していた）。

『ああ、私は今、打ち負かされてしまう』と。そして、私たちの先頭には、三つの冠と三冊の本を手にした、輝くような若者が歩いており、私にこう言った。「エウスタフィオ、キリストの助祭よ！これこそが、慈悲の父であり、あらゆる喜びの神が、あなたがたのために用意されたものである。だから、聖ステファノが彼らを恐れなかったように、拷問者たちを恐れてはならない。」そう言うと、その若者は天に昇り、黒い姿の男はすすり泣きながら西へと去っていった[8034]。

その幻視について語ったエウスタフィオスは、兄弟たちの勇気を奮い立たせ、こう言いました。

「愛する兄弟たちよ、人々の前で私たちの神であるキリストを否定してはなりません。そうすれば、キリストもまた、御父と御自身の聖なる天使たちの前で、私たちを否定されることがないでしょう（マタイ10:32）。」

「私たちの兄弟であり、主であり、父である方よ」と、フェスペシウスとアナトリーは答えた。「私たちは、私たちの創造主のために死ぬ覚悟があります。そして、何ものも私たちを主への愛から引き離すことはできません。」

彼らがこのように語り合っている間、兵士たちは扉を激しく叩きながら、開けるよう大声で叫んでいた。ついに、フェスペシウスとアナトリーは扉に近づき、それを開けた。兵士たちは中に押し入り、他に誰が一緒にいるのかと尋ね、その後、アキリノフの奴隷の指示に従って、二階へと上がった。　祈りの部屋の扉をくぐると、彼らは聖なる福音書を手にしたエウスタフィオスを見かけた。彼は突然その本を広げ、こう読み上げた。*「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない」*（マタイ10:28）。

――兵士たちを指揮していた者が、彼に手に持っているものを置くよう叫んだ（彼自身はキリスト教徒の両親の息子であったため、聖福音書に触れることを敢えてしなかった）。エウスタフィオスは聖福音書を胸に押し当て、それに口づけをしてから机の上に置いた。すると、兵士の一人がこう言った。

「ほら、キリスト教徒たちは自分たちの本をどれほど愛しているか。そこには彼らのあらゆる魔術が込められているのだ。」

兵士たちはエウスタフィオスを捕らえ、階下へと連行した。すると彼は、周囲を見回し、聖なる書物を見つめると、まるで生きているかのようにそれらに向かってこう言った。

「あなた方に誓います！」

それから、彼らが売買していた数多くの高価な品々を見渡し、こう叫んだ。

「我らはあなた方と、あらゆる朽ちるものから離反し、キリストに従う！」

その後、全員が外へ出た。家の扉は施錠され、封印された。そして、三人の聖なる兄弟は兵士たちに縛り上げられ、マクシミアヌス皇帝のもとへ連行された。

彼らを見た皇帝は微笑んで、こう言った。

「誰がこれらの若者たちを縛るよう命じたのか？　彼らは間違いなく、我らの神々の友に違いない。」

そして、彼は直ちに彼らを解き放つよう命じ、こう尋ねた。

「まず、一人ひとり、お名前と、どこの家系の方か教えてくれ。」

「私たちにとって最も尊く、誇り高い名は『キリスト者』です」と、長兄であるエウスタフィオスが皆を代表して答えた。「私は生まれた時からエウスタフィオと名付けられ、右にいる私の兄弟はフェスペシオ、左にいるのはアナトリオです。　私たちは血のつながった兄弟であり、この地で同じ父と母の間に生まれました。そして、ガラティア出身の私たちの父は、キリスト教の長老でした。

[8034] 西は太陽が沈む場所であり、いわば闇の王国である。したがって、この「光の国」という名称は、聖エウスタフィオスにはっきりと見えていた悪魔の王国の象徴として理解することができる。

「誰が――」とマクシミアンは尋ねた。「あなた方の父を長老に任命したのですか？」

– それは――とエウスタフィオスは答えた――あなたが最近、不当にも死刑に処した方、すなわち、わが町の司教である聖アンフィムです。彼は私を助祭に任命し、神の司祭たちがキリストの至聖かつ至清なる秘跡を執り行う際に、私が彼らに仕えるようにと命じたのです。

すると、王は言った。

「馬鹿げたことを言うのはやめなさい。むしろ、兄弟たちと共に我らの神々にひれ伏せば、我が宮廷で名誉ある輝かしい地位を与えてやろう。もしそうしないなら、剣によって死を宣告する。」

聖人たちは声を揃えて答えた。

「好きにせよ。我らはキリスト者であり、天と地を創造された唯一の神、その御子である我らの主イエス・キリスト、そして聖なる命を与える御霊にのみ礼拝する。だが、汝らの卑劣で忌まわしい偶像には、決して礼拝することはない。」

この答えに激怒したマクシミアヌスは、彼らを地面に倒し、棒で打つよう命じた。長い拷問の末、聖人たちはまるで口を揃えたかのように、神に向かって叫んだ。

「主よ、御名のために苦難を受けることを許されたことを、あなたに栄光がありますように。」

そして聖エウスタフィオスはさらにこう付け加えた。

「*『若き日から、多くの者がわたしを苦しめた。イスラエルよ、こう言え。「若き日から、多くの者がわたしを苦しめたが、わたしを打ち負かすことはできなかった」』*（詩編128:2–3）、神よ、私たちの救い主よ、私たちをお助けください。」

聖人たちが極限まで打ちのめされたとき、マクシミアヌスは拷問者たちに手を止めるよう命じ、殉教者たちにこう言った。

「不信心者どもよ！　いつまでそのような苦痛に耐え続けるつもりだ。神々に犠牲を捧げよ。お前たちと同じように打ちのめされ、暴力的死を遂げた、ある人間への信仰のせいで、無駄に自らを滅ぼしてはならない。」

「私たちが救い主キリストを否定することなど決してあり得ない」と聖人たちは答えた。「その方は、私たちの救いのために十字架上で苦しみを受けられたとはいえ、真の神であることを私たちは知っているのだ。」

そこで拷問官は、彼らを牢獄へ連行し、足をしっかりと足枷に固定させ[8035]、食事も水も与えず、縄と飢えと渇きで彼らを死に至らしめるよう命じた。　そして、彼らが牢獄に閉じ込められていたある夜、真夜中に光が彼らを照らし、主の御使いが現れて、彼らを束縛から解き放ち、癒やし、マナで養い[8036]、こう言った。

「キリストのために善き業に励みなさい。私はあなた方を決して見捨てず、あらゆる苦難においてあなた方と共にいる。私は、主キリストからあなた方を守るために遣わされたのだから。」

そう言うと、天使は姿を消した。聖人たちは言い表せないほどの喜びに満たされ、神に感謝を捧げた。その際、エウスタフィオスはこう語った。*「主は囚人を解き放ち、主は盲人の目を開き、主は屈みこんだ者を起こし、主は義人を愛される。主は旅人を守られる」*（詩編145:7–9）。

[8035] 足枷――犯罪者が逃走しないようにするための器具である。 その外観は、太い丸太や板を縦に半分に割ったもので、両方の半分には、互いに向き合うように足を収めるためのくぼみが彫られていた。犯罪者の足を片方の半分のくぼみに差し込み、もう一方の半分をその上に被せ、丸太の両端をしっかりと固定した。

[8036] マナ（ヘブライ語で、「*これは何だ*」という意味）とは、イスラエル人が荒野を40年間放浪していた際、手に入れる場所のないパンの代わりに、神が奇跡的に与えた食物のことで、小さな種のような外観をしていた。　この種は、挽いたりすり鉢で砕いたりして煮込み、そこから薄焼きパンを作った（出エジプト記15:15–34、民数記11:7参照）。より広い意味では、マナとは、神によって奇跡的に与えられたあらゆる食物全般を指すこともある。

しばらくして、マクシミアヌスは再び法廷に現れ、兵士たちを牢獄へ送り、キリストの囚人たちを二度目の尋問のために連れてくるよう命じた。兵士たちは向かい、聖人たちが束縛から解放され、完全に健康で、安らかに眠っているのを見つけた。　兵士たちは叫び声を上げ、看守を罵り、誰が囚人たちを束縛から解き放ったのかと問い詰めた。看守は、誰も解き放った者はおらず、誰も囚人の部屋に入ったり、彼らに食べ物や飲み物を与えたりさえしていないと、誓って断言した。兵士たちは再び聖人たちを縛り上げ、王のもとへ連行した。

王は、彼らが元気で陽気な様子を見て、殴打も、縄も、飢えも、渇きも彼らに影響を与えていないことに驚き、こう言った。

「哀れな者たちよ！　自分たちにとって何が得策かよく考え、確信を持ったら神々に犠牲を捧げなさい。そうすれば、私はあなたたちを名誉をもって解放してやる。」

しかし、聖エウスタフィオスはこう答えた。

「お世辞でも、脅しでも、拷問でも、我々の揺るぎない決意を変えることはできない。我々は、この世の何ものにも縛られてはいない。なぜなら、母の胎内から裸で生まれたように、この虚しい人生からもまた裸で去らなければならないことを知っているからだ。」

王は直ちに彼らを野獣の餌食にするよう命じ、彼らはサーカス[8037]へと連行された。そこで野獣たちが彼らを食い尽くすことになっていたが、その後にニコメディアの民全体――その中には多くの秘密の　キリスト教徒も含まれていた――が続き、皆、殉教者たちの最期を目撃しようと望んでいた。　彼らがサーカスの真ん中に立たされると、二頭のライオンと三頭の熊が放たれ、観客たちは皆、獣たちの咆哮に恐怖に震えた。一方、聖エウスタフィオスは詩篇を詠んでいた。

「*『獅子の口から私を救い出し*、――と彼は*歌った――一角獣の角から私を救い出してください。あなたの御名を私の兄弟たちに告げ、集会のただ中であなたを賛美します』*」（詩編21:22–23）[8038]。

フェスペシウスとアナトリーは獣の唸り声を恐れていたが、エウスタフィオスは彼らの恐怖を見て、こう言った。

「兄弟たちよ、なぜこれらの獣を恐れるのですか？　私たちの主が、ダニエルの穴でそうされたように、その猛威を鎮める力をお持ちであることを、知らないのですか？　私たちのあらゆる苦難において共にいて、私たちを守ると約束された天使の言葉を、覚えていないのですか？」

エウスタフィオスがそう語っている間、獅子たちは殉教者たちに向かって突進したが、彼らに近づくと立ち止まり、主を認めた犬のように尻尾を振り始めた。エウスタフィオスは彼らの頭に手を置き、犬を撫でるように撫でてやると、完全に彼らをなだめた。　一方、熊たちは互いに組み合い、互いを地面に投げ飛ばし合い、聖なる殉教者たちの近くには全く近づこうとしなかった。　この光景を見物するために集まった群衆は騒ぎ立て、異教徒たちは「彼らは魔術師だ。魔術で獣たちを鎮めたのだ！」と叫んだ。一方、キリスト教徒たちは「キリスト教の神は偉大だ。獣たちが神の聖なる僕たちに害を及ぼせないよう、その口を塞いでくださったのだ！」と叫んだ。

ついに、王は殉教者たちを再び牢獄に投獄するよう命じたが、そこで彼らは再び天使の御出現によって慰められ、マナによって力を与えられた。

[8037] サーカス――ローマ人やギリシャ人による馬の競走が行われた建物。その名称（サーカス＝円）自体が、その円形の構造を示している。　競技そのものは円の中で行われ、観客はこの円の縁にある特別な席に収容された。迫害の時代、キリスト教徒たちはサーカスで野獣に食わせられたり、そのために特別に任命された者たちによって殺害されたりした。

[8038] 詩編2:22–23。詩編の作者は、これらの言葉を自分自身について、また自らの立場から語っている（「私を救ってください……」「私は語り告げよう……」など）。　ユニコーンとは、額に一本の角を持つ野生の危険な動物であるが、聖なる犠牲の動物とされていたため、サイではない。それがどのような動物であるかは、正確には分かっていない。「教会」とは、ここでは一般的に大勢の集まりを指す。

その間、マクセンティウス王の息子[8039] が重病に陥り、王はその病を悲しみ、心配して、殉教者たちをニカイアのコミトゥス[8040] アントニウスに託した。

「キリスト教徒たちを」と彼はコミットに言った。「お前の街へ連れて行き、そこで神々に拝ませよ。もし彼らが従うなら、栄誉をもってここへ連れ戻せ。もし従わないなら、長い拷問の末、野獣のように殺せ。」

コミトスは捕虜たちを連れてニカイアへ向かった。自宅に着くと、妻が病気になっているのを見つけた。彼は殉教者たちをその夜は牢獄に閉じ込めさせ、翌朝、彼らを自分の元へ連れてくるよう命じた。そして裁判官の席に着くと、彼らに向き直って言った。

「若者たちよ、私はあなたがたの運命を深く案じている。あなたがたを赦し、王のもとへ送り、あらゆる栄誉を受けるようにしてあげたいと心から願っている。私を友として信頼し、私の言うことを聞き、神々に犠牲を捧げなさい。」

「我々は、我らの主イエス・キリストに祈っております」と聖徒たちは答えた。「主が、主が我々に教え、我々が死をも厭わないこの信仰において、我らを汚れなく守り、主から背き、あなたがたが滅びているような破滅に陥ることを許さないよう、と。」

コミットはこれを聞いて激怒し、彼らを足から逆さ吊りにし、鉄の爪で削り取るよう命じた。長い間、彼らはこのように拷問され、血は川のように流れ、肉は塊ごとに引き裂かれ、骨がむき出しになった……ついに、聖人たちは神に向かって大声で叫んだ。

「永遠の王、神よ！　あなたの聖なる住まいから、あなたの聖なる御名のために苦しむ、この不肖の僕たちを見守ってください！」

そして、これほど残酷な苦痛を勇敢に耐え抜くために、天から聖人たちに目に見えない助けが与えられた。

拷問を受ける者たちの不屈の忍耐を見て、拷問官は彼らを降ろし、牢獄へ連行するよう命じた。しかし、聖人たちは傷と痛みのため、自力で歩くことができなかった。彼らはまるで荷物のように運ばれ、牢獄に放り込まれた。　そして再び、以前と同様に、主の御使いが大きな光を放って彼らの前に現れ、喜びに満ちた希望をもって彼らを慰め、傷を癒やした。聖人たちは神を賛美し、こう言った。

「神よ、あなたに希望を置き、あなたのために苦しむ者たちを見捨てないことを、あなたに栄光がありますように！*『主が私に与えてくださったすべての恵みに、私はどのように報いようか。誰が、私たちの神ほど偉大な神であろうか！　あなたは、奇跡を行われる神です』*（詩編115:3；詩編76:14–15）。まもなく、拷問官は再び聖なる殉教者たちを牢獄から連れ出し、自分の前に立たせるよう命じた。彼は彼らの前に自分の偶像を置き、従わなければ罰を与えると脅して、これらの偶像に拝むよう強要した。

「もしあなたがたが」と彼は言った、「王の命令に従わず、我らの神々に拝礼しなければ、私はあなたがたを剣で殺し、その遺体を猛獣や鳥に食わせよう」。

しかし、聖徒たちは声を揃えてこう答えた。

「我らは、我らの神キリストから離れることはなく、不浄な偶像――目がありながら見えず、耳がありながら聞こえず、口がありながら語らず、足がありながら歩かない、声も聞こえない、耳も聞こえない偶像――を拝むことは決してない。それらを作る者も、それらを拝む者も、すべてそれらに似るがよい。」

この言葉を聞いて、拷問官は怒りに満ちて獅子のように唸り、殉教者たちを城の外へ連れ出し、野獣のように剣で斬り殺し、その遺体を埋葬せずに野獣や鳥に食い散らされるままに投げ捨てるよ

[8039] マクセンティウスはその後、306年から312年まで皇帝となった。

[8040] コミット――都市の長。

う命じた。　聖人たちは処刑場へと連行された。その場所にはオリーブ園があり、聖人たちは処刑を行うために木々に縛り付けられた。その園に、聖人たちの親しい友人であるキリスト教徒のパラディウスとアカキウスがやって来た。　処刑人が死刑囚たちを殺そうとしたとき、駆けつけた二人は彼らの足元にひれ伏し、大量の金を差し出し、死刑囚たちと少し話をさせてほしいと懇願し、それから処刑を行ってほしいと頼んだ。　金を受け取った処刑人たちは殉教者たちから少し離れたが、パラディウスとアカキウスは彼らに近づき、愛を込めて彼らの頬に口づけをし、悲しみに暮れて泣きながら、自分たちのために祈ってほしいと頼んだ。　聖人たちが臨終の祈りを捧げている最中、天から彼らを永遠の安息へと招く声が聞こえ、たちまち彼らは喜びをもって自らの魂を神の御手に委ねた。一方、拷問者の手下たちは、殉教者たちがすでに亡くなっているのを見たにもかかわらず、主君を恐れて、すでに死んでいる者たちに対して彼の命令を実行した。　エウスタフィオスとフェスペシオスの喉を切り裂き、アナトリオスの肋骨を貫いた。そして、死者の遺体がすでに地面に横たわっていたとき、彼らの首を切り落とし、埋葬もせずにその場を去った[8041]。 すると、空から鷲の姿をした六人の天使が降りてきて、パラディウスとアカキウスが彼らを尊厳をもって埋葬するまで、遺体の上を飛び回っていた。

その同じ日、アントニウス伯は日没時に病に倒れ、翌朝、まず妻が亡くなり、続いて彼自身も妻の遺体の上に倒れ込み、苦しみの中で息を引き取った。そして今、彼は地獄で苦しんでいるが、聖なる殉教者たちは、我らの神キリストの御国で喜びを分かち合っている。彼に、世々限りなく栄光あれ。 アーメン。

聖殉教者ダシウスの記念日。

記念日：11月20日

ディオクレティアヌスとマクシミアヌスの治世、異教の都市ドロストロ[8042] では、異教の神クロノス[8043] を称える祭りの30日前に、兵士の中から美しい若者を一人選び出し、彼への生贄として捧げるという慣習があった。　生贄の祭りが始まるまでの30日間、選ばれた若者は王の衣装を身にまとい、あらゆる願いを叶えることができた。その後、その若者はクロノスへの生贄として屠られた。そしてある日、この悲惨な運命が、他の戦士たちの中でもとりわけ勇敢で美しいダシウスに降りかかった。　それまで彼は秘密のキリスト教徒であった。しかし、自分にそのくじが当たったことを知ると、聖ダシウスは、忌まわしい異教の神をなだめるために命を捧げるよりは、むしろキリストの信徒であることを公に宣言することを決意した。

「もし私が死ぬべきであるなら」と彼は仲間たちに言った。「キリスト教徒として、キリストのために死ぬほうがましだ。」

それゆえ、聖ダシウスは、異教の慣習に従って30日間享受できたはずのこの世の富や快楽を軽んじた。彼は、使徒 の*「キリストを得るために、私はすべてのものを損失と見なす」*（フィリピ3:8）という言葉を固く心に留め、異教徒たちのあらゆる慈悲深い約束を拒絶した。　歓楽や饗宴の代わりに、聖人は異教徒たちの不義や、偶像への狂信的な崇拝を糾弾し、大胆にキリストの教えを説いた。　聖霊の恵みに導かれて、キリストの殉教者は、唯一の真の神と、神の独り子イエス・キリストを信じるよう、すべての人を熱心に説得しました。　その噂が異教の支配者ディオクレティアヌスとマ

[8041] 聖殉教者エウスタフィオス、テスペシオス、アナトリアスは、312年頃に殉教した。

[8042] ドロストル（現在のスリストリア）は、古代ミシア地方のイストル川（ドナウ川）沿い、黒海沿岸からほど近い場所に位置している。

[8043] クロノス、すなわちサターン（土星）は、異教の伝承によれば、神々の中で最も残酷な存在とされる。異教徒たちは彼をなだめるために、毎年人身供犠を行っていた。

クシミアヌスの耳に入ると、彼らの命令により、聖ダシウスはミジア地方総督ヴァッシの裁判にかけられた。法廷で聖人は再び偶像崇拝者たちの愚かさを糾弾し、キリストを告白した。　このキリスト教信仰の告白により、彼は残酷な拷問にさらされ、その後、剣によって斬首された[8044]。

聖殉教者ニルサとヨセフの記念日

記念日：11月20日

聖ニルサはペルシャの地で司教を務め、弟子ヨセフをその協力者としていた。二人は、真のキリストの僕として、天と地と海、そしてそれらの中に存在するすべてのものを創造された神（詩編145:6）を畏れ、キリストの律法を遵守して徳ある生活を送るよう努めた。

弟子ヨセフの徳高い生活と、神の御名の栄光に対する彼の熱意を見て、聖ニルサは彼を司教の位に叙任した。彼らの同胞であるペルシャ人は、太陽を神として崇め、火を礼拝し、様々な悪徳にふけっていた。　聖ニルサと聖ヨセフは、彼らの迷いを嘆き、キリストの教会の益となるよう熱心に尽力した。キリストの恵みと互いの熱意に支えられ、彼らは多くの異教徒を真の神への信仰へと導き、敬虔さを教えた。

この頃、ペルシャの王サポル[8045]は、キリスト教徒に対して残酷な迫害を開始し、彼らに太陽と火を崇拝するよう強要した。ニルサ司教とヨセフがペルシャ人の迷いを糾弾し、その多くをキリストへと改宗させているという話を耳にした王は、二人を捕らえて自分の元へ連行するよう命じた[8046]。

王の前に、80歳の長老とその弟子であり同志である者が現れた。王から「火を崇拝するか、さもなくば拷問と死に備えよ」と命じられると、聖人たちは大胆にこう答えた。

「王よ、たとえ我らが死後、七度も我らを蘇らせて拷問を加えたとしても、それによってさえ、我らをキリストへの愛から引き離すことはできないだろう。」

キリストのために苦難を受けるという固い決意に満ちた聖なる殉教者たちのこの答えを耳にした迫害者は激怒し、直ちに彼らの首を刎ねるよう命じた。

こうして、これらの聖なる殉教者たちは、天において朽ちることのない冠を授かった。

聖殉教者ヨハネ、サベリウス、イサアク、イパティウス、および彼らと共に殉教した他の聖人たちの記念日

記念日：11月20日

聖殉教者ヨハネ、サベリウス、イサアク、イパティオスは、ペルシャの各地の都市で司教を務めていた。

不敬虔な火礼拝者であるペルシャ王サポルが、キリスト教徒に太陽と火を崇拝するよう強要した際、これらの聖人たちは信者たちを励まし、キリストの堅固な信徒であり続けるよう導くとともに、不敬虔なペルシャ人たちをキリストへと改宗させました。　彼らは火礼拝者たちの誤りを糾し、太陽や火は神ではなく、ただ創造主を賛美し、人々に仕えるために造られた被造物に過ぎないと説き伏せた。

[8044] 4世紀初頭、

[8045] ペルシャにおけるこのキリスト教徒への迫害は、4世紀の半ば頃のことでした。

[8046] 聖ニルサと聖ヨセフは、サポル（在位：約343～347年）によって引き起こされた迫害の4年目に、ペルシャの都市スキアガルカダテで捕らえられ、監禁され、11月20日に剣で斬殺された。

彼らの教えの噂がサポル王の耳に入ると、王は聖人たちが説教を行っていた都市へ兵士や高官たちを派遣し、彼らを捕らえるよう命じた。

捕らえられた彼らは、恐れを知らず、王自身の裁判の場に現れた。王は威圧的な口調で彼らにこう言った。

「私が神々の子孫であり、太陽に祈りを捧げ、火を崇めていることを、お前たちは知らないのか？　そしてお前たちは――一体何者だ。なぜ私の勅令に逆らい、太陽を侮り、火を何とも思わないのだ？」

聖者たちは満場一致で、唯一の神への信仰を告白した。

「私たちのために」と聖人たちは言った。「神は太陽と火を命じられたのです。真の神はただひとり、万物を創造されたお方であり、そのお方だけに礼拝と栄光がふさわしいのです。」

これに対し、王は叫んだ。

「オルムズドより栄光ある神などいるのか、あるいはアリマンより恐ろしい者などいるのか[8047]？」

そして、太陽を崇拝しない者が、どうして賢者と呼ばれることができようか？！

サベリウス司教は、再び皆を代表して信仰告白を述べた：

「王よ、私たちは、天と地、太陽と月、そして目に見えるものも見えないものもすべてを創造された神以外に、他の神を知りません。そして、ナザレのイエスと呼ばれる御子を信じます。」

すると王は、聖人の口を殴るよう命じ、その殴打は極めて残酷なもので、聖人の歯が抜け落ちてしまった。王は嘲るようにこう付け加えた。

「イエスを呼び出して、お前の歯を埋め直させろ。」

これに対し、サヴェリウスが王を不信心者と呼んだため、半死半生の状態になるまで鞭打たれ、その後、牢獄に投げ込まれた。その後、拷問官は聖イサアクを呼び出し、脅すように尋ねた。

「お前もサヴェリウスと同じ考えなのか？　それなら、お前の血も流さなければならないのか？」

サヴェリウスの揺るぎない模範と信仰の告白に勇気づけられた聖イサアクは、王にこう答えた。

「我らの志の一致こそ、王よ、あなたが理解し得ない至高の知恵なのです。」

キリスト教徒たちの不屈の姿勢に苛立った王は、そのような言葉を続けるならイサアクの舌を切り落とすと脅した。その後、王はペルシャの魔術師たち[8048]によるイサアクに対する第二の告発に移り、なぜキリスト教の教会を建てているのか説明を求めました。

これに対し、イサアクはこう答えた。

「異教徒たちの間でも神の御名が賛美されるように、私がそれをやめたことが、いったいいつあったというのですか！」

そこで王は、それ以前に王の残虐さを目の当たりにしてキリスト教を捨てた貴族たちに向き直った。王は彼らを激しく非難し、もしキリスト教の信仰に戻れば死を宣告すると脅した。そして、自分が王位にある限り、王国内に一人のキリスト教徒も許さないと誓った。　そして、恐怖で震える背

[8047] オルムズドは、古代ペルシア人の最高神の名である。彼は、太陽、月、星、空、大地、水、そして人間を創造した、全世界の創造主である賢明な神として崇められていた。彼らの信仰によれば、彼は善の友であり守護者であり、偽り者の敵であり、不正に対する復讐者である。　ペルシャの宗教において、アリマンは悪の化身である。彼は善の神オルムズドと絶えず争っており、その創造物に悪の種を植え付けようとしている。そのため、アリマンは自然界の有害な力、病気、不作、その他の災いの源となっている。

[8048] ペルシャの魔術師たちは、閉鎖的な司祭共同体の構成員である。彼らは当初、あらゆる学術教育と宗教儀式の守護者であり、星の位置から未来を予知できると自称し、民衆から多大な尊敬を集め、大きな政治的影響力を持っていた。

教者たちに、イサクを石打ちにするよう命じた。そして実際、背教した貴族たち自身が、城外の野営地で自分たちの司教を石打ちにしたのである。

この後、すべてのペルシャ人、とりわけ高貴な市民や指導者たちは、キリスト教徒に対して武装した。こうして、ヴェト・ガシタの城の地下牢で苦しめられていたセレウキアの司教ヨハネは、ガディアブ地方の首長の命令により殺害された。また、グルサリ村の長老イサクも、石打ちの刑に処された。

また、殉教者サヴェリウスは、2日後に獄中で受けた拷問の末に息を引き取った。このことが王に報告されると、王は怒りに駆られてその知らせを信じず、死者の首を切り落として自分の前に差し出すよう命じた。

サポル王の側近たちの中には、王の残虐さに怯えて信仰を捨てた者もいたが、多くの一般信徒たちは信仰を揺るがすことなく、牧者たちの模範に倣って、キリストのために苦難へと毅然と歩みを進めた。

こうして、ガディアブ総督の宦官アザトは、他のキリスト教徒たちと共に、ペルシア人が犠牲を捧げていた神殿に連行された。　しかし、幼少期からキリスト教の教えを受けて育った彼は、他の信者たちと共に不信心者たちを非難し、太陽への生贄を拒んだ。*「異教徒たちが捧げる生贄は、神ではなく悪霊たちに捧げられている」ことを*知っていたからである（Iコリント10:20；参照：申命記32:17）。

このため、彼らは様々な拷問にさらされた。

その後、アザトはある背教者の手によって絞殺された。彼と共に、サソニウスも拷問を受け、殺害された。

アブラハムという名のキリスト教徒は、赤熱した釘で両目をえぐり出され、二日後に恐ろしい苦痛の中で息を引き取ったが、その間もキリストの御名を呼び続けました。

キリスト教徒のシメオンは、ペルシャ人によって胸まで土に埋められ、露出した体を矢で貫かれた。

この迫害の際、ペルシャの地では、キリストへの愛において前述の聖なる男性たちに劣らぬ多くのキリスト教徒の妻や乙女たちも、殉教の冠を輝かせた。

こうして、処女のテクラとアンナ、そして彼女たちと共に、高貴な妻ボグータ、マミア、タトナ、ママ、ニーナ、その他多くの女性たちが、ペルシャ人の不義と迫害者の残虐さを恐れずに糾弾し、剣で切り刻まれた。　これらの殉教者たちの血で潤された大地は、あたかも迫害者を非難するかのように、癒しの力を持つイチジクの木を育んだ。　マニ教の異端者たちは、しばらくして、大地そのものがキリストの殉教者たちの正しい信仰を告げているこの奇跡を耐えかね、このイチジクの木を根こそぎに伐り倒したが、その報いとして、彼らは激しい病に襲われた。

このように、ペルシャの地においても、主はキリストのために苦難を受け入れた数多くの殉教者や信仰告白者たちを立てられた。

12月4日

11月21日（旧暦）

至聖なる神の母、永遠の処女マリアの神殿入りの伝承

記念日11月21日

至聖なる神の御子、至福の聖母マリアが誕生して三歳になったとき、その聖なる義父母であるヨアキムとアンナは、自分たちが立てた誓い――生まれた子を神の奉仕に捧げる――を果たすことを決意した。　彼らは、自分たちが住んでいたナザレに、王家や司教家の血筋を持つすべての親族――義人ヨアキム自身は王家の出身であり、その妻である聖アンナは司教家の出身であった――を呼び集め、さらに清らかな乙女たちの合唱団も招き、　多くの蝋燭を用意し、聖母マリアを王家の威光で包み込んだ。これらすべては聖なる教父たちによって証言されている。

エルサレムの大司教である聖ヤコブは、ヨアキムの代理として、次のように語った。

「ユダヤ人の清らかな娘たちを呼び寄せ、彼女たちに燃え盛るろうそくを持たせなさい。」

義人アンナの代理として、コンスタンティノープル総主教聖ヘルマンは次のように述べている。

「私は、悲しみの最中にあなたが立てた誓いを主の前で果たします。そのために、ろうそくを持った乙女たちの合唱団を集め、司祭たちを呼び集め、親族たちを招き、皆にこう言いました。『皆、私と共に喜びなさい。私は今や母となり、娘を地上の王ではなく、天の王である神のもとへ導くからです。』」

また、神の御子である聖女の王にふさわしい装いについて、ブルガリアの大司教聖テオフィラクトは次のように述べています：

「至聖なる御子女の奉献は、そのお方にふさわしいものでなければならなかった。それほど輝かしく、かけがえのない真珠に、粗末な衣服が触れることなどあってはならない。最大の栄光と装飾のためには、まさに王家の衣装で彼女を飾るべきであった。」

こうして、尊厳かつ栄光に満ちた入堂にふさわしいすべての準備を整えた後、彼らはナザレからエルサレムへと続く三日間の旅路についた。

エルサレムの街に到着すると、彼らは厳かに神殿に入り、そこに、神の生ける神殿である三歳の少女、無原罪の聖母マリアを導き入れた。　彼女の先頭には、聖タラシウス（コンスタンティノープル大司教）が証言するように、　に灯されたろうそくを手にした乙女たちの行列が歩んでいた。同大司教は、聖アンナの口に次のような言葉を託している。

「ろうそくを掲げる乙女たちよ、（行列を）始めなさい。そして、私と神の御子である幼き御子に先立って進みなさい。」

聖なる両親は、一人が片側から、もう一人が反対側から、神から授かった娘の手を取り、慈愛と敬意を込めて彼女を二人で挟んで導いた。その後ろには、親族、隣人、知人たちの大勢が喜びながら続き、手にろうそくを持ち、全エルサレムを驚嘆させるほど、星が明るい月を取り囲むように、聖母マリアを取り囲んでいた。 聖テオフィラクトは、この光景を次のように描写している。

「娘は父の家を後にして、その美しさを慕う王のもとへと導かれる――それは、単なる敬意や栄光にとどまらず、荘厳な送別式を伴って行われるのである。」　こうして彼女は栄光のうちに実家から連れ出され、その退出には皆が拍手を送った。両親の後には、親族、隣人、そして彼らを愛するすべての人々が続いた。父たちは父と共に喜び、母たちは母と共に喜んだ。少女たちや乙女たちは、手にろうそくを灯し、神の御子に先立って進んだ。　エルサレム全市は、まるで月と共に輝く星の輪のように、この前代未聞の送別行列を見守り、そのような栄光に包まれ、ろうそくの灯りに導かれて敬意を払われる三歳の御子を見ようと集まった。　そして、地上のエルサレムの市民だけでなく、天のエルサレム――聖なる天使たち――もまた、聖母マリアの栄光に満ちた入堂を見ようと集まり、それを見て、教会が次のように謳うことに驚嘆した。「天使たちは、聖母の御入堂を見て驚嘆した。いかにして処女が至聖所に入ったのか」[8049]。

[8049] カノンの第9歌の副歌。

目に見える無垢な乙女たちの合唱団と合流し、目に見えない無形の聖なる位階の合唱団は、聖母マリアを至聖所へと導き、主の御命により、神に選ばれた器として彼女を取り囲んだ。これについて、ニコミディアの大司教聖ゲオルギオスは次のように述べている：

「両親はすでに、すべての天の勢力が共に喜び祝う中、天使たちに囲まれた聖母を神殿の扉へと導いていた。なぜなら、天使たちはその神秘の力を知らなかったものの、主の御命により、彼女が神殿に入られる際に仕えていたからである。　そこで、天使たちは第一に、彼女が美徳の尊い器となり、永遠の清らかさのしるしを帯び、いかなる罪の汚れも決して触れることのない肉体を持っているのを見て驚嘆し、第二に、主の御心に従い、命じられた奉仕を全うした。

こうして、無原罪の御処女は、人々だけでなく天使たちによっても、栄光と誉れをもって主の神殿へと導かれた。それはふさわしいことである。なぜなら、マナを宿し、ただ至聖なる御処女の予型に過ぎなかった旧約の契約の箱でさえ、イスラエルの全集会において大いなる栄光をもって神殿に運び込まれたのであれば、　イスラエルの民全体が集まる中で神殿に運び込まれたのであれば、天使と人々が集まる中で、マナ――すなわちキリスト――をその内に宿した、まさにその「生ける契約の箱」[8050] である、神の母となるべく定められた至福の聖母の神殿への入堂は、なおさら大きな栄光をもって行われるべきであったのである。

旧約聖書の契約の箱が主の神殿に運び込まれた際、その先頭には、当時イスラエルを統治していた地上の王、神の父ダビデが歩んでいました。しかし、この生ける契約の箱、すなわち至聖なるおとめが神の神殿に導き入れられた際には、地上の王ではなく、私たちが毎日こう祈っている天の王が先導しました：　「天の王よ、慰め主よ、真理の御霊よ」。まさにこの王が、この王の御娘を先導されたことについて、聖なる教会は今日の聖歌の中で次のように証ししている。「聖なる者の中の聖なる者、聖なる、汚れなき御方が、聖霊によって導かれる」[8051]。聖櫃が運び込まれる際には、音楽と歌声が響いていました。なぜなら、ダビデはレビ人の長たちに、歌い手を配置し、オルガン[8052]、竪琴[8053]、キンバル[8054]、ハープ[8055]を奏でさせ、喜びの歌を歌わせたからです。また、至聖なるおとめが導き入れられる際、その喜びを盛り上げたのは、この世のものではない　音楽や歌声ではなく、その場に目に見えぬ形で臨在していた天使たちの歌声であった。なぜなら、彼女主への奉仕のために至聖所に入られる際、天使たちは天の声を上げて歌ったからであり、これを今、教会はコンダク[8056]において次のように歌って記念している：　「神の御霊の中に集う恵み、すなわち神の天使たちが讃えるもの、これこそが天の住まいである」。もっとも、聖母マリアの神殿への入堂は、人間の賛美歌なしには考えられない。なぜなら、義人アンナ（聖タラシオの説教によれば）は、先頭を歩く乙女たちにこう語りかけるからである：

– 彼女に賛美の歌を歌い、ハープの音色に合わせて彼女に歌い、霊的な歌を彼女に捧げ、十弦の竪琴で彼女を称えよ。

これと同じことを教会は次のように述べて思い出している。「ヨアキムとアンナは御霊によって喜び、主の御前に立つ処女たちは、詩篇を歌い、その母を崇め称えている」[8057]。

ここから、当時、至聖なるおとめを先導した乙女たちの合唱団が、ダビデの詩篇からいくつかの歌を歌っていたことが明らかになる。

[8050] キヴォット、聖櫃――外側が金で覆われた木製の箱。その中には、十戒の石板、マナ、そしてアロンの杖が収められていた。これは聖母マリアの原型であり、そのため聖母マリアは「キヴォット」や「聖櫃」とも呼ばれる。

[8051] 大晩課における祝日のスティヒラ。

[8052] オルガン――管楽器で、おそらく笛の一種（羊飼いの楽器）である。

[8053] プサルティール――ハープやリラに似た弦楽器。主に、聖歌や賛美歌の歌唱を伴奏するために演奏された。

[8054] キムバル――二つの幅広の金属製の円盤からなる打楽器で、互いに打ち合わせることで大きな音を響かせた。

[8055] グスリ――三角形の形をした弦楽器。

[8056] コンダクとは、祝日の本質を簡潔に表現した聖歌のことである。

[8057] 大晩課におけるスティヒラ。

これに基づき、現在のカノンの編纂者も、前述の乙女たちに次のように語っている。「さあ、乙女たちよ、ろうそくを手に持ち、歌を歌い始めなさい」[8058]。

また、聖タラシオの証言によれば、聖なる義人である両親ヨアキムとアンナ自身も、先祖ダビデの次の歌を口ずさんでいた。*「娘よ、聞き、見よ。耳を傾け、あなたの民と父の家を忘れよ。 そうすれば、王はあなたの美しさを慕うであろう」*（詩編44:11–12）。

テオフィラクトの記述によれば、この栄光に満ちた神の御子のお迎えに、神殿で奉仕していた司祭たちが外に出て、賛美の歌を歌いながら、天を通り抜けた大祭司の母となるべき至聖なる乙女を迎えた[8059]。 聖アンナは（聖タラシウスが記すように）、彼女を神殿の扉まで連れて行き、次のように語った。

「行け、わが娘よ、私をあなたに授けてくださった御方の元へ。行け、聖なる聖櫃よ、慈悲深い主のもとへ。行け、命の扉よ、憐れみ深い与え主のもとへ。行け、御言葉の箱よ、主の聖堂へ。世界の喜びと歓びよ、主の教会に入りなさい。」

また、預言者であり、大祭司であり、自身の親族であるザカリア[8060]に対しては、ヨアキムと共にこう言った。

「受け入れてください、ザカリアよ、清らかな天蓋を。受け入れてください、祭司よ、汚れなき聖櫃を。受け入れてください、預言者よ、無形の炭の香炉を。受け入れてください、義人よ、霊的な香炉を。」

さらに、聖ヘルマンが語るように、義人アンナは大祭司にこう言った。

「預言者よ、神から与えられたわが娘を受け入れなさい。そして、彼女を聖所の山、神が備えられた住まいへと導き入れ、座らせなさい。彼女をここに召された神が、彼女に関する御心を最終的に明らかにされるまで、何も詮索してはならない。」

「そこには」と至福のヒエロニムスは記している、「教会の入り口に十五段の階段があり、それは十五の段階的な詩篇の数に相当していた。というのも、礼拝のために登ってくる司祭やレビ人たちは、これらの階段の各段で、それぞれ別の詩篇を歌っていたからである[8061]。」 そこで、敬虔な両親は、汚れなき幼女を最初の段に立たせた。すると彼女は、誰にも導かれることも支えられることもなく、たちまち自らの力で他の段を素早く登り、最上段に上ると、目に見えない神の力に支えられて立ち止まった。 三歳の少女がこれほど速く階段を登り切ったのを見て、皆が驚きましたが、とりわけ大祭司ザカリアはこれに深く感嘆し、預言者として神の啓示により、この乙女の未来を見通しました。なぜなら、テオフィラクトの言葉を借りれば、彼は聖霊に満たされていたからです。 また、聖タラシウスもこのことについて、ザカリアが聖霊に満たされて、次のように叫んだと述べている。

「おお、清き乙女よ！ 誘惑を知らぬ処女よ！ 美しい乙女よ！ 女性たちの飾りよ！ 娘たちの美しさよ！ あなたは女性たちの中で祝福されている！ あなたは清らかさにおいて最も高く称えられ、処女性によって刻印され、あなたはアダムの誓いの成就である！」

聖ヘルマンによれば、ザカリアは聖母を抱きしめ、喜びに満ちた心で彼女を至聖所[8062]へと導き入れ、こう語ったという。

8058 カノン、第4歌。

8059 天を通り過ぎた「大司教」とは、言うまでもなくイエス・キリストのことである。ヘブライ人への手紙4:14。

8060 伝承によれば、これは洗礼者ヨハネの父であるザカリアその人である。福音書では、彼をアビエの系譜に属する祭司と呼んでいる（ルカ1:5）。

8061 この15段の階段は、聖所への入り口にあり、祭司と大祭司以外の誰も立ち入ることができませんでした。祭司たちは聖所へ上る際、各段で一つの詩篇を歌いました。段から段へと移るたびに、彼らは計16の詩篇を歌いました。 このことから、これらの詩篇は「階段の歌」または「階段の詩篇」と呼ばれている。番号で言えば、詩篇119〜133篇にあたる（詩篇119:1–7、133:1–3）。

8062 至聖所は、神殿の中で最も重要かつ最も神聖な部分である。そこに入ることが許されていたのは大祭司ただ一人であり、それも年に一度だけであった。

「行け、わが預言の成就ょ。行け、主の約束の成就ょ。行け、主の契約の証ょ。行け、主の御計画の顕現ょ。行け、主の奥義の成就ょ。行け、すべての預言者たちの鏡ょ。行け、罪によって朽ち果てた者たちの刷新ょ。行け、　闇の中に横たわる者たちの光ょ、行け、最も新しく、最も神聖なる賜物ょ。さあ、今、人々が立ち入ることのできる、あなたの主の神殿の下層へ入りなさい。そして、しばらくして、人々が立ち入ることのできない上層へと入りなさい。

乙女は、喜び、大いに楽しみながら、主の宮へ、まるで宮殿へ入るかのように歩んでいった。なぜなら、彼女はわずか三歳という幼さではあったが、世界の創造以前から神によってあらかじめ知られ、選ばれていた者として、神の恵みによって完全であったからである。

こうして、至聖にして至福の聖母マリアは、主の神殿へと導かれた。その際、大祭司ザカリアは、誰にとっても驚くべき、並外れた行いを行った。　彼はその少女を、「至聖所」と呼ばれる、最も奥深くに設けられた聖所へと導き入れた。そこは第二の垂れ幕の向こうにあり、四方を金で覆われた契約の箱と、聖所を覆う栄光のケルビムが置かれていた場所であった（ヘブライ人への手紙9:3–5）。　そこには女性だけでなく、祭司でさえ立ち入ることが許されず、大祭司だけが年に一度だけ入ることができた。そこで大祭司ザカリアは、聖母マリアのために祈りの場所を用意した。　一方、聖キリロス・アレクサンドリアスや聖グリゴリオス・ニッサスの証言によれば、神殿に住む他のすべての乙女たちには、教会と祭壇の間に祈りの場所が割り当てられていた[8063]。これらの乙女たちの誰一人として、いかなる形でも祭壇に近づくことは許されなかった。なぜなら、それは大祭司たちによって厳重に禁じられていたからである。　しかし、無原罪の聖母については、彼女が神殿に迎え入れられて以来、毎時、内陣の祭壇、すなわち第二の垂れ幕の向こう側に入り、そこで祈ることを禁じられてはいなかった。これは大祭司によって行われたものであり、それは神の神秘的な啓示によるものであった。聖テオフィラクトはこれについて次のように述べている：

「大祭司は、その時、我を忘れ、神の御霊に満たされ、この乙女こそが神の恵みの器であり、彼女こそが常に神の御前に立つにふさわしい者であると悟った。」　律法において、契約の箱は至聖所にあるべきであると定められていることを思い出し、彼は直ちに、これがこの乙女に関して定められていたことであると悟った。少しも疑うことなく、躊躇することもなく、律法に背いて、彼女を至聖所へ導き入れることを敢行した。

至福のヒエロニムスが語るように、義人である両親のヨアキムとアンナは、その子を天の父の御心に委ね、神に供え物、犠牲、全焼のいけにえを捧げ、大祭司とすべての祭司団から祝福を受けた後、親族全員と共に 家路につき、そこで祝宴を催し、喜びながら神に感謝を捧げた。 一方、至福の聖母は、その生涯の初めから主の家にあり、乙女たちのための部屋に預けられていた。というのも、ソロモンによって建てられ、後に破壊され、ゾロバベルによって再建されたエルサレムの神殿[8064]には、古代ユダヤの歴史家ヨセフが記しているように[8065]、多くの居住区があったからである。 外側には、神殿の壁に沿って30棟の石造りの建物が建てられており、それらは互いに離れていて、広々としていて非常に美しく、その上に別の建物が、さらにその上に三番目の建物が重なるようにして建てられていたため、総数は90棟に達し、それらには居住に必要なあらゆる設備が整っていた。　それらの高さは神殿の高さと同じで、まるで外側から神殿の壁を支える柱のようであった。これらの建物には、様々な人々のための部屋があった。ある時期まで神に仕えることに身を捧げた処女たちは別々に暮らしていた。また、ファヌイルの娘である預言者アンナのように、死ぬまで清さを保つと神に誓った

[8063] すなわち、犠牲が捧げられ、その両側に神に奉献された者たちの居住室があった「祭司の庭」と、「聖所」である。
[8064] ソロモンの神殿は、バビロンの王ネブカドネツァルによって破壊された。新しい神殿は、最初の神殿が破壊されてから62年後にゾロバベルによって建てられた。
[8065] 紀元1世紀に生きた。

未亡人たちも別々に暮らしていた。 また、ナゾレ人と呼ばれる男性たち[8066]も、修道士のように独身で生活していた。これらの人々は皆、神殿で主に仕え、神殿の収入から生計を賄っていた。残りの建物は、礼拝のために遠くからエルサレムを訪れる旅人や来訪者の宿泊用に割り当てられていた。

三歳の少女、聖母マリアは、前述の通り、少女たちのための部屋に預けられ、彼女には、年齢がやや上で、読み書きや手仕事に熟達した少女たちが付き添わされた。これは、神の御子である少女が幼少の頃から、読み書きと手仕事を共に学べるようにするためであった。 聖なる両親であるヨアキムとアンナは、しばしば彼女を訪ねた。 アンナは母親として、特に頻繁に娘の様子を見に訪れ、彼女に教えを授けていました。聖アンブロシウスと歴史家ゲオルギオスの証言によれば、聖母はまもなく旧約聖書のユダヤ教の教えを完璧に習得しました。そして、聖書だけでなく、手仕事も十分に習得していたと、聖エピファニウスは次のように述べています：

「彼女は知性の力と学問への愛に優れており、聖書に励むだけでなく、羊毛や亜麻の紡ぎ、絹の縫製にも精進していた。」 その分別深さによって、彼女はすべての人を驚かせた。主に、神殿での奉仕において司祭たちが必要とするような作業に従事していた。彼女はこれらの手仕事をこれほどまでに習得したため、後に御子と共に暮らす際、自らの生計を立てることもできた。彼女は自らの手で、主イエスのために、縫い合わせられたものではなく、すべて織り上げられたキトンを仕立てた。

（同じエピファニオスはこう述べている）至聖なる乙女には、他の乙女たちと同様に、神殿から通常の食事が供されていたが、それらは貧者や旅人たちに食べられてしまった。なぜなら、教会が謳うように、彼女は天のパンを糧としていたからである。 聖ヘルマンは、彼女が通常、至聖所にとどまり、天使から甘美な食物を受け取っていたと語っている。また、聖アンドレイ・クリツキー（[8067]）は次のように述べている。

「至聖所において、まるで宮殿のように、彼女は並外れて朽ちることのない食物を召し上がっていた。」

さらに、伝承によれば、至聖の御処女は、神殿内の乙女たちのための通常の部屋ではなく、第二の垂れ幕の向こう側にある「至聖所」と呼ばれる内陣にしばしばおられたという。というのも、彼女にはその部屋に居住場所が用意されていたものの、祈りのために至聖所へ入ることは禁じられていなかったからである。 成人すると、彼女は幼い頃から聖書を学び、手仕事を熱心にこなしていたが、さらに祈りに励み、夜通し、そして一日の大半を祈りに費やすのが常となっていた。 祈りのためには至聖所に入り、手仕事をするためには自分の住居に戻りました。なぜなら、律法によれば、至聖所では何事も行ったり、何かを持ち込んだりすることは許されていなかったからです。 そして、彼女は生涯の大部分を、彼女のために割り当てられた住居で裁縫に励むのではなく、神殿の第二の垂れ幕の向こう側、内陣において、祈りに捧げて過ごした。 それゆえ、教会のすべての教師たちは、聖母マリアが12歳になるまで、その生涯のすべてを至聖所で過ごしたと口を揃えて述べている。というのも、彼女はそこから自分の部屋へ出ることはめったになかったからである。

では、幼少期の彼女の生活はどのようなものだったのか、ヒエロニムスは次のように記述している：

– 聖母マリアは、幼少期や乳児の頃、他の同年代の少女たちと共に神殿にいた時から、厳格な規律に従って生活を送り、早朝から午後3時まで祈りを捧げていました。 午後3時から9時までは手仕事や読書に励み、9時になると再び祈りを始め、天使が現れるまでそれを絶やすことはありませんで

[8066] ナゾレ人は、結婚せず、ワインやあらゆる酔わせる飲み物を控え、髪を切らないという誓いを神に立てた人々であった。 通常、ナゾレヤの生活は一定期間続き、様々な動機から自発的に受け入れられていたが、時には両親が子供のためにナゾレヤの誓いを立てることもあった。それは、子供がいなかった両親が、神から子供を授かりたいと願った場合であった。

[8067] 8世紀に生きた

した。天使の手から、彼女は普段食事を授かっていました。こうして、彼女は神への愛をますます深めていきました[8068]。

これが、彼女がまだ同年代の乙女たちと共に暮らしていた幼少期の生活であった。日ごとに成長し、精神が鍛えられていくにつれ、彼女は行いにおいても完璧さを極め、祈りと勤勉さにおいても強さを増し、力から力へと高まっていく中で、ついに至高者の力が彼女を包み込むに至った。　また、天使が現れて彼女に食物を運んできたことは、大祭司ザカリアが自らの目で目撃したことであり、聖グリゴリオス・ニコミディオスは次のように語っている。

「彼女が日ごとに成長していくにつれ、歳を重ねるごとに聖霊の賜物も彼女の中で増し加わり、彼女は天使たちと交わりを持っていた。　ザカリアもこのことを知った。というのも、彼が祭司の慣例に従って祭壇にいたとき、異様な姿をした誰かが聖母と語り合い、彼女に食物を差し出しているのを目撃したからである。　それは現れた天使であった。ザカリアは驚き、心の中でこう考えた。「これは一体、どのような新しくも異様な現象なのだろうか。その姿は天使のようで、聖なる乙女と語り合っている。形のない存在でありながら、肉体を養う食物を差し出し、非物質的な性質を持ちながら、乙女に物質的な籠を手渡しているのだ。」　この地で天使が現れるのは、司祭たちにのみであり、それもめったにない。ましてや女性、それもこれほど若い乙女に、今こうして目に見える形で天使が現れるなど、まったく異例のことである。　もし彼女が既婚者の一人で、不妊の病に悩まされ、かつてアンナが祈ったように子授かりを願っていたのなら、私が今目撃しているこの現象にも驚かなかっただろう。しかし、この処女はそれを求めてはいない[8069]；天使は、今私が目撃しているように、常に彼女の前に現れる。それゆえ、私はさらに大きな驚きと恐怖、そして困惑に襲われる。これは一体どういうことなのか？天使は何を告げに来るのか？そして、天使が運んでくるその食物は、どのような性質のものなのか？それはどこから取り出されたのか？　　そして、誰がそれを用意したのか？どのような手がこのパンを作ったのか？　なぜなら、天使たちが肉体の必要に気を配ることは本来あり得ないからだ。たとえ多くの者が天使たちによって養われていたとしても、その食物は人間の手によって用意されていたのである。　ダニエルに仕えた天使は、全能者の力によって、他者を通さず自ら命じられたことを成し遂げることもできたはずだが、それでも、養われる者が天使の異様な姿や珍しい食物に恐怖を抱かないよう、そのためにアバクムを器と共に遣わした。　一方、ここでは御子なるお方のもとへ天使自身がやって来る――これは謎に満ちた出来事であり、私はその意味に戸惑う。彼女は幼少の頃から、無形の存在たちが仕えるような賜物に恵まれていた。これは一体どういうことなのか？預言者たちの予言は、彼女に成就するのではないだろうか？私たちの待ち望む対象は、彼女ではないだろうか？　私たちの種族を救うために来ようとしている方は、彼女から肉体を授かるのではないだろうか？　なぜなら、この神秘は以前から予言されており、御言葉はこの神秘に奉仕しうる方を求めているからだ。そして、この神秘に奉仕するために選ばれたのは、他ならぬ、私が今見つめているこの乙女に他ならないのではないか。このような種が芽吹いたイスラエルの家よ、なんと幸いなことか！　なんと幸いなことか、イッサイの根よ。そこから、世界に救いの花を咲かせるこの枝が生まれたのだ！　なんと幸いなことか、私もまた、このような光景を楽しみ、この乙女を御言葉の花嫁として備えているのだ。

これはゲオルギオス・ニコミディウスの言葉である。彼と同様に、ヒエロニムスもこう述べている：

「毎日、天使たちが彼女を訪ねていました。もし誰かが私にこう尋ねたなら：　『聖母マリアはそこで青春時代をどのように過ごされたのか』と尋ねられたなら、私はこう答えるだろう。『それ

[8068] イスラエル人は日の出から一日の時間を数え、第3時間は私たちの午前9時に相当し、第6時間の終わりは私たちの正午に相当し、第9時間からは日が暮れ始めた。
[8069] すなわち、彼女に胎内の実を授けることについてである。

は神ご自身と、彼女の絶え間ない守護者である大天使ガブリエル、そして頻繁に彼女のもとを訪れ、愛を込めて彼女と語り合った他の天使たちだけが知っていることだ』と。

このように聖所の至聖所において天使たちと共に過ごされる中で、聖母マリアは、天使のような清らかさと傷一つない処女性を永遠に保ちたいと願われました。　聖なる教師たち――グリゴリオス・ニッサス、ヒエロニムス、その他――の証言によれば、この聖母は、自らの処女性を神に捧げた最初の人である。なぜなら、旧約聖書においては、結婚が処女性よりも高く尊ばれていたため、処女が結婚しないことは珍しいことだったからである[8070]。しかし、至聖なる処女は、世界で初めて処女性を結婚生活よりも選び、神に身を捧げて、その清らかな処女性をもって昼も夜も神に仕えました。至聖なる御霊は、父なる神の御心により、彼女の中に神である御言葉の宿る場所を備えられました。それゆえ、至聖なる、同質にして不可分なる三位一体に栄光と感謝を捧げましょう。また、私たちの至聖なる御母、神の母、永遠の処女マリアに、すべての世代から永遠に栄光と賛美を捧げましょう。アーメン[8071]。

トロパリオ、第4調：

今日、神の御好意の予兆、そして人々の救いの宣教として、神の神殿に聖母がはっきりと現れ、すべての人にキリストを予告なさる。私たちもまた、大声で叫ぼう。「喜びなさい、創造主の御計画の成就よ。」

コンダク、第4調：

至聖なる救い主の神殿、尊き宮殿であり、神の栄光の聖なる宝である聖母は、今日、主の家に導かれ、神の御霊の中に恵みをもたらす。それゆえ、神の御使いたちはこう讃える。「これは天の住まいである。」

12月5日

11月22日（旧暦）

同日、聖なる信仰深いトヴェリのミハイル公の記念日

聖殉教者キキリアおよび彼女と共に殉教した聖殉教者ヴァレリアヌス、ティヴルティウス、マクシムスの殉教

11月22日の記念日

[8070] 当時、誰もが子孫を持つことを望んでいた。それは、自分の記憶が地上により長く残るようにするためであり、たとえ自分自身がそうできなくとも、子孫たちが待ち望まれるメシア・救い主の王国における恵みに与ることができるようにするためであった。

[8071] 聖母マリアがエルサレムの神殿に奉献されたことを記念して、教会は古くから11月21日を祝日として定めている。この祝日に関する言及は4世紀のパレスチナのキリスト教徒の伝承に見られ、そこでは今もなお、かつて存在した聖母マリアの入堂の教会が言及されており、その建設は聖ヘレナ皇后によるものとされている。4世紀には、グリゴリオス・ニッサス（ニッサのグリゴリオス）の言葉の中にも、この祝日に関する言及が見られる。8世紀には、前述の通り、コンスタンティノープルの総主教ゲルマノスとタラシオスが、この日に説教を行っていた。

聖処女キキリア（[8072] ）は、ローマで由緒ある裕福な両親の間に生まれた。福音の説教を聞き、キリストを信じるようになり、キリストへの心からの愛に燃え、汚れなき花婿であるキリスト・神のために、結婚せず、処女の清さを守ることを心に決めた。 しかし、両親は彼女の意志に反して、ヴァレリアヌスという名の貴族の若き異教徒と婚約させ、彼女に高価な衣服や金の装飾品を身につけるよう強要し始めた。 しかし、彼女は高価な衣服の下に粗末な毛皮の衣を身にまとい、心にはキリストを宿し、絶えず熱心に主へ祈りを捧げていた。主ご自身が、御心に適うままに、彼女を清く、汚れなく、結婚の束縛から自由なまま守ってくださるよう願ってやまなかった。 そして結婚式の日が訪れ、婚礼の祝宴が始まると、彼女は打ちひしがれた心の奥底からため息をつきながら、ひそかに主にこう叫んだ。「*私の心があなたの掟に従って汚れのないものとなりますように。そうすれば、私は恥をかくことはありません*」（詩編118:80）。

そして、涙を流しながら熱心に、自分の純潔を守るために御使いを遣わしてくださるよう、主に祈り求めた。夜が更けると、新婚の二人は新婚の部屋へと案内され、キキリアは花婿にこう言った。

「愛しい若者よ、ある秘密をあなたに打ち明けたいのです。私には、あなたには見えない、私の貞操を守る守護者――神の天使がいます。もしあなたが私に触れようものなら、その天使は即座にあなたを殺してしまうでしょう。なぜなら、彼はここに立ち、あらゆる暴行から私を守る準備ができているからです。」

これを聞いて、ヴァレリアヌスは恐怖を覚えた。というのも、キキリアのそばには、キリストの花嫁を異教の青年との結びつきから守るために天から遣わされた天使が、確かに目に見えない形で立っていたからである。彼はキキリアに、その天使を見せてくれるよう懇願し始めた。乙女はこう答えた。

「あなたは真の神を知らない人間です。ですから、異教の汚れから清められるまでは、神の天使を見ることはできません。」

「しかし、どうすれば――」とヴァレリアヌスは尋ねた。「私は清められることができるのか？」

「ある老人がいます」と彼女は答えた。「ウルヴァンという名のキリスト教の司教です。彼は洗礼によって異教徒を清め、天使を見られるようにすることができます。」 もし清められて神の天使を見たいのなら、彼のところへ行き、ここで私から聞いたことをすべて話してください。そして、彼があなたを清めたら、ここに戻ってきてください。そうすれば、あなたは天使を見ることができ、望むものを彼から授かるでしょう。

「しかし、その長老をどこで探せばよいのですか？」とヴァレリアヌスは尋ねた。

「さあ、行きなさい」とキキリアは答えた。「アッピア街道を[8073] 進み、道中で物乞いに会ったら、こう言いなさい。『キキリアが、私を通じてウルヴァンという老人に一つの秘密を伝えたいと願い、私をあなたたちのところへ送った。私を彼のところへ連れて行ってほしい』と。」

ヴァレリアンは旅立ち、アッピア街道で、婚約者の言葉通り、聖キキリアをよく知る物乞いたちに遭遇した。彼女は頻繁に彼らに施しをしていたため、彼らは彼を、迫害者から逃れるために墓や洞窟、荒廃した貧しい教会に身を隠していたウルヴァン司教のもとへ連れて行った。 ヴァレリアヌスが聖キキリアの言葉を伝えると、司教は大いに喜び、ひざまずいて両手を天に掲げ、涙ながらにこう言った。

[8072] キキリアという名は、ローマ名のセシリア（「*盲目の*」を意味する）に由来する。

[8073] アッピア街道はローマから南イタリアへと通じており、紀元前4世紀に建設者であるアッピウス・クラウディウス・スレーポスの名にちなんで名付けられた。その遺構は今日まで残っている。

「主イエスよ、これこそがあなたのしもべです。まるでミツバチのように、教会に蜜をもたらしているのです！　彼女が獅子のように受け入れたその若者を、彼女は従順な子羊のように私のところに送ってくれました。もし彼が彼女の言葉を信じていなかったなら、私のところへ来ることはなかったでしょうから。」　それゆえ、主よ、彼の心を最後まで真理を知るために開いてください。――そうして彼が、まことの神であるあなたを知り、サタンとその行いを捨て去ることができますように。

彼がそう祈っていると、突然、威厳ある風貌の老人が現れた。その老人は雪のように白い衣をまとい、手に一冊の本を持っていた。ヴァレリアンの前に立つと、彼はその本を開いて読み始めた。ヴァレリアンはその光景に恐怖を覚え、地面に倒れ込んだが、現れた老人は彼を助け起こし、こう言った。

「わが子よ、この書物に記されていることを読みなさい。そうすれば、あなたは清められ、あなたの婚約者があなたに見せてくれると約束した天使を目にするにふさわしい者となるだろう。」

ヴァレリアンはその本に目をやり、金で書かれた次の言葉を読み上げた。*「主はひとり、信仰はひとつ、洗礼はひとつ、すべての者の父である神はひとりであり、その方はすべての者の上にあり、すべての者を通して、またすべての者のうちにおられる」*（エフェソ4:5–6）。

ヴァレリアンがこれらの言葉を読み終えると、現れた老人は彼に尋ねた。

「子よ、これが真理であると信じるか、それともまだ疑っているのか？」

ヴァレリアヌスは声を張り上げて答えた：

「まことに、この世において、この言葉ほど真実なものはない。」

すると、現れたその者はたちまち姿を消し、ウルヴァン司教はヴァレリアヌスが読み上げた言葉から話を始め、彼に十分な教えを授けた後、洗礼を授けて、彼の聖なる婚約者のもとへ送り出した。

ヴァレリアヌスは自分の居所に戻ると、聖キキリアが自室で祈りを捧げているのを見つけた。そして、彼女のそばに、偉大な光と美しさを放つ神の天使が立っているのを見た。天使は、赤いバラと白いユリで編まれた、並外れた芳香を放つ二つの花冠を手に持っていた。 天使は、そのうちの1つの花冠を乙女の頭に、もう1つをヴァレリアンの頭に載せながら、こう言った。

「この花冠を大切に守りなさい。お二人は心清く、肉体も汚れのないままでいてください。私はこれらを楽園からあなた方のために持ってきました。これらは決して枯れることもなく、その芳香を失うこともないという不思議な力を持っています。そして、あなた方のように清らかさを愛する者以外には、誰もこれらを見ることはできません。」　ヴァレリアンよ、あなたは婚約者が清らかさを保つという決意に同意した。そのゆえに、神は私をあなたの元へ遣わし、あなたが神に願うものは何でも与えられるようにされたのだ。

「この世で、私の兄ティヴルティウスほど大切な人はいません」と、ヴァレリアンは天使に頭を下げて答えた。「ですから、主が私を救ってくださったように、私の兄をも滅びと悪魔の支配から救い出し、主のもとへと導き、私たち二人が主の聖なる御名を告白する行いにおいて完全なものとなれるよう、主にお願いいたします。」

天使は喜びに満ちた表情で彼に言った。

「あなたの願いは神の御心にかなっており、神はあなたの心の願いを叶えてくださるでしょう。神は、乙女を通してあなたを救われたように、あなたを通してあなたの兄弟ティヴルティウスを救い、あなたたちは二人で共に殉教の業へと歩むことになるでしょう。」

そう言い終えると、天使は姿を消し、ヴァレリアヌスは聖キキリアと共にキリストにあって喜び、魂に益となる会話を交わして時を過ごした。

その頃、ある日、ティヴルティが彼らのところへやって来て、こう言った。

「不思議だ。ここにはバラやユリの香りが漂っているが、この香りは一体どこから来るのだろう。私はその香りに心ゆくまで浸り、まるで全身が生まれ変わったかのような気分になったのだ。」

「あなたは確かにその香りを楽しんでいたのです、愛する兄弟よ」と、ヴァレリアンはティヴルティウスに答えた。「私はあなたのために神に祈っていたのです。あなたもまた、枯れることのない冠にふさわしい者とされ、その血はバラの花のようで、その肉体は白いユリのような方を愛する者となるようにと。」

「これは夢の中で聞いているのか、それとも真実を語っているのか？」とティヴルティは叫んだ。

「これまで、私たちはまさに夢の中にいるかのように生きてきました」とヴァレリアンは答えた。「私たちは偽りの神々や不浄な悪魔を崇拝していましたが、今は真理と神の恵みの中で生きています。」

「誰があなたにそれを教えたのですか？」とティヴルティは尋ねた。

「神の天使が教えてくれたのだ」とヴァレリアンは答えた。「君も、偶像崇拝による汚れを清めれば、その天使を見ることができるだろう。」

ティヴルティウスは天使に会いたいと願ったが、ヴァレリアンは、まず唯一の真の神を信じ、聖なる洗礼を受ける必要があり、そうして初めて天使の現れを期待することができると述べた。　そして聖キキリアは、ティヴルティにキリストの信仰の真理を教えることを引き受け、一方では異教の神々の虚偽や無生物の偶像の無力さを、他方では真の神、我らの主イエス・キリストの力と全能性を彼に証明した。　そして、聖なる乙女の神に導かれた語りは、ティヴルティに多大な影響を与え、彼は異教を完全に捨て去り、ある日キキリアにこう言った。

「私は、キリスト教の神以外に神はいないと信じます。これからは、その唯一の神に仕えたいと思います。」

これを聞いて、キキリアは言葉に尽くせないほど喜び、さらに熱心にティヴルティを教え導き、神の御子の受肉、その奇跡、自発的な苦難、そして人類への愛ゆえに彼が負った死について語った。　一方、ティヴルティはますます心を打たれ、主への愛に燃え上がっていった。彼の信仰の熱意を見て、その乙女は彼にこう言った。

「もしあなたが私たちの主イエス・キリストを信じるなら、兄弟と共に私たちのキリスト教の司教のもとへ行き、彼から聖なる洗礼を受けなさい。そうすれば、罪から清められ、天使を仰ぎ見るにふさわしい者となるでしょう。」

ティヴルティは兄を見やり、こう尋ねた。

「誰のところへ連れて行こうというのか？」

「私たちは神の人、ウルヴァンのもとへ向かうのだ」とヴァレリアヌスは答えた。「彼はキリスト教の司教であり、年老いて、賢明で、義にかなった人だ。その顔は天使のようで、彼の言葉はすべて真実である。」

「君が言っているのは、あのウルヴァンのことではないか」とティヴルティは続けた。「彼は二度も死刑判決を受け、今は死を逃れるためにどこかに隠れていると聞いたが。しかし、もし私たちが彼のところへ行ったら、彼を殺そうとしている者たちにそこで見つかったら、間違いなく私たちも殺されてしまうだろう。」

この問いに対し、聖キキリアがティヴルティに答えた。彼女は、天国における永遠の、もはや何ものにも動じることのない命について、また、キリストのために死を遂げた聖なる殉教者たちへの報いについて語り始めた。

すると、ティヴルティは信仰のために苦難を受けるという熱意に燃え上がり、こう言った。

「理性を失った者たちは、この儚い人生を愛すればよい。しかし、私は永遠の命を望む。兄弟よ、私を司教のもとへ連れて行ってくれ。そして、司教に私を清め、永遠の命の交わりにあずからせてほしい！」

ヴァレリアヌスはその兄弟をウルヴァン司教のもとへ連れて行き、すべてを話した。ティヴルティの改宗を喜んだウルヴァンは、彼を愛をもって受け入れ、洗礼を授け、聖なる信仰のすべての奥義を完全に教えるまで、七日間も自分のもとに留めておいた。

洗礼を受けた後、ティヴルティは聖なる天使たちを見、彼らと語り合い、神に願うことは何でも与えられるという恵みにあずかった。　彼は兄弟と共に多くの奇跡を行い、病人を癒やした。また、彼らは自分の財産を貧しいキリスト教徒や孤児、未亡人に分け与え、牢獄から囚人を身代金で買い戻し、当時数多く殺害されていたキリストのための聖なる殉教者たちの遺体を尊厳をもって埋葬した。

皇帝の命令により、キリスト教徒を容赦なく殺害し、拷問と死に追いやっていた都市の長アルマフは、密告者たちからこのことを知ると、直ちにティヴルティウスとヴァレリアヌスを捕らえて自分の元へ連行するよう命じた。

「なぜ、あなた方は自らの高貴な家柄を汚し、皇帝の命により多くの罪を犯したとして殺された者たちを埋葬し、誰もが背を向けているような人々に財産を配るのか？」と彼は尋ねた。「まさか、あなた方も彼らと同じ誤りに囚われ、彼らと同じような者になりたいと願っているのか？」

「ああ、もしそうであれば――」と、年長のティヴルティウスが答えた。「神が、私たちを、一見存在しているように見えて実際には存在しないものを拒み、その代わりに、一見存在しないように見えて実際には存在するものを発見した、神の僕たちの数に加えられるよう、お許しくださるなら。」

「それは一体何のことだ」と、彼の指導者は尋ねた。「君の言う『一見存在しているように見えるが、実際には存在しないもの』とは？　君の言っていることが理解できない。」

ティヴルティは彼にこう説明した。「この一時的な世界が、その中に持ち、人々に示し、与えることを約束しているすべてのものは、ただ実在するかのようには見えるが、実際には無に等しい。なぜなら、それは短期間で滅びてしまうからだ。　一方、この世に執着する人々の考えでは、来世など全く存在しない。彼らはそれを見ることができないからだ。しかし実際には、来世は確かに存在し、何の変化もなく永遠に続く。そこでは、義人であり信仰深い人々には豊かな報いが与えられ、悪人であり不信仰な人々には火と永遠の苦しみがあるのだ。

長官は彼らと長い会話を交わし、聖なる信仰と世への離脱に関する恵み深い教えを聞いたが、その教えには同意せず、彼らに異教の神々への生贄を捧げるよう命じた。　彼らがその命令に従うことを拒むと、彼はヴァレリアヌスを棒で激しく殴打するよう命じた。しかし、聖人は拷問を受けている間も喜び、こう言った。

「さあ、私が心の底から待ち望んでいた時が来た。これこそが私の祝日であり、私にとっての喜びの日である。」

その時、布告者が叫んだ。

「神々や女神たちを侮辱するな！」

しかし、ヴァレリアヌスもまた、周囲の人々に大声で呼びかけた。

「諸君、ローマの市民たちよ！　私の苦しみによって真理から背を向けることのないよう、勇気を奮い起こし、木や石の神々を打ち砕け。それらを崇拝する者は皆、永遠の炎に焼かれることになるからだ。」

その間、タルクィニウスという名の貴族が都市の長のもとへ近づき、ひそやかにこう告げた。

「もしお前がこれらのキリスト教徒をできるだけ早く処刑しなければ、彼らの全財産は同信者たちによって貧しい人々に分配され、お前には何も残らないだろう。」

タルクィニウスの言葉を聞いた都市の長は、殉教者たちを「パグ」と呼ばれる場所へ連行するよう命じた。その道中、彼らはユピテル神殿[8074] の前を通り過ぎることになっていた。そこで彼らは、従わなければ剣によって殺されるという脅しのもと、ユピテルに生贄を捧げなければならなかった。　その際、処刑人や兵士たちと共に、彼は自身の侍従であるマクシムスを派遣し、殉教者たちの斬首が彼の監視下で行われるようにした。しかし、道中、マクシムスは聖なる殉教者たちを見つめ、涙を流し、こう叫んだ。

「ああ、若さの尊き花よ！　ああ、兄弟愛の絆よ！　ああ、高潔で尊い二人の若き聖者よ！　なぜ、まるで盛大な祝宴に向かうかのように、それほど急いで死へと向かうのですか？」

「もし私たち――」と聖ティヴルティウスは答えた。「この死の後に待ち受けている永遠の命について確信を持っていなかったなら、この一時的な命を失うことをこれほど喜ぶことはなかったでしょう。」

「では、この世の後に待っている来世とは、どのようなものなのでしょうか？」とマクシムは尋ねた。

ティヴルティはこう答えた。

– 私たちの肉体が衣服をまとうように、魂は肉体によって覆われている。そして死後、肉体は塵と化すが――時が来れば、不死鳥のように蘇る[8075] ―― – そして魂は――もし聖く義と認められれば、直ちに（天使たちによって）楽園の宮殿へと運ばれ、そこで喜びのうちに過ごし、万人の復活を待ち望むことになる。

「私もまた」と、ティヴルティウスの言葉に心を動かされたマクシムスは言った。「もし、あなたが語っているあの命に恵まれることが確実だと知れば、この一時的な命から背を向けるだろう。」

「もし永遠の命について確信を持ちたいのなら」と、ヴァレリアヌスは彼に語りかけた。「私たちに、心から悔い改め、異教を捨てて、私たちが　で説いている神に帰依することを約束してください。　そうすれば、我々はあなたに約束する。我々が斬り殺され、魂が肉体から離れるやいなや、神は直ちにあなたの目を開き、あなたは我々に与えられる永遠の命の栄光を見るだろう。

マクシムスは誓いを立てた。

「もしその時から、この一時的な命の後に永遠の命を与えてくださる唯一の神を信じないなら、私は火の中で焼かれよう――ただ、あなたがたが約束を果たしてくれるなら」と彼は言った。

「それでは、あなたの家来たちに命じてください」と聖人たちは言った。「私たちが一時的にあなたの家に入るのを妨げないように。そうすれば、私たちはあなたの魂を啓発し、私たちが約束したものをはっきりと見ることができるような人物を、あなたのもとに招くよう努めます。」

マクシムスは喜んで彼らを家の中に招き入れた。彼らに同行していた者たちの誰も、彼に何一つ異議を唱えることを敢えてしなかったからである。そこで聖人たちは救いの説教を始め、私たちの主イエス・キリストへの信仰を教えた。家の中にいた者たちは皆、夜が更けるまで熱心に彼らの話に耳を傾け、マクシムスとその家族全員、そして多くの警備兵たちが信仰を抱くようになった。　夜になると、聖キキリアが聖職者たちと共に彼らの元を訪れ、信仰を抱いた者たちは皆、洗礼を受けた。

[8074] ユピテルは、ローマ人の主たる異教の神である。

[8075] フェニックスは、古代の伝説上の鳥である。古代の人々（エジプト人）の信仰によれば、この鳥（世界に一羽のみ）は500年ごとに自らを焼き尽くし、灰の中から再び蘇ったとされる。 この鳥については、聖クレメンス・ローマや聖キリロス・エルサレムなど、一部のキリスト教の著述家たちも言及しており、彼らは異教の伝説の中に、異教徒たちが肉体の復活を信じていたことの証拠を見出していた。古代のキリスト教の遺跡には、不死の象徴としてのフェニックスの描写が見られる。

彼らはその夜、祈りと永遠の命についての語り合いに費やし、夜明けが近づくと、聖処女はキリストの殉教者たちにこう言った。

「キリストの戦士たちよ、勇気と不屈の精神を持ちなさい！　今、夜の闇が去り、光が輝き始めている。あなた方も光の武具を身にまとい、自らの偉業を成し遂げに出かけなさい。あなた方は善き業に励み、信仰を守り抜いた――さあ、主があなた方に授けてくださる「義の冠」（参照：テモテへの手紙第二4:8）を受け取りに行こう。

そして聖徒たちは急いで指定された場所へと向かった。彼らがユピテルの神殿の前を通りかかると、その神官たちは、神の祭壇で香を焚くよう彼らに強要し始めた。というのも、そうしなければ誰もこの神殿の前を通り過ぎることを敢えてしなかったからである。神官たちは、街に入ってくる者も出ていく者もすべてを止め、ユピテルへのその犠牲を捧げるよう強制していた。　しかし、聖人たちは祭司たちの言うことを聞き入れなかったばかりか、彼らの狂気を嘲笑したため、即座に剣で斬り殺された。

処刑が終わるやいなや、マクシムスは皆の前で誓いを立てて、太陽のように輝く神の天使たちが見えることを証言した。彼らは、まるで宮殿から美しい乙女たちを連れ出すかのように、聖人たちの魂を肉体から解き放ち、栄光に満ちて天へと昇らせていくというのである。その結果、多くの異教徒がキリストを信じるようになった。　一方、都市の長官は、マクシムがキリスト教の信仰を受け入れたことを知ると、容赦なく彼を鞭で打つよう命じた。マクシムはその鞭打ちの最中に主のもとへ魂を捧げ、その遺体は聖キキリアによって引き取られ、殉教者ティヴルティウスとヴァレリアヌスの遺体と共に埋葬された。　聖マクシムスの墓の上には、彼が死者の復活を、まるで灰の中からフェニックスが蘇るようなものとして信じていたことを示すため、彼女はフェニックスの像を彫らせるよう命じた。

ティヴルティウスとヴァレリアヌスを処刑した後、都市の長は彼らの財産を没収しようと考えたが、聖キキリアがすでにすべてを貧しい人々に配り終えていたため、そのような財産は存在しなかった。そのため、彼女は都市長の命令により、その役人たちに捕らえられた。役人たちが聖女のもとに来たとき、彼女は彼らにこう言った。

「私の同胞であり兄弟である皆さん、私の言葉に耳を傾けてください！　あなた方は市長の手下ではありますが、心の中では彼の不信仰を是としていないと私は思います。　私は、私のキリストのために苦しみ、死ぬことを望みます。なぜなら、私はこの世の短い命を少しも大切にしておらず、永遠の命を求めているからです。私が一刻も早くその命へと移れるよう、私を捕らえ、私の若さを顧みず苦しめ、そして死に追いやってください。」

彼女の話を聞いた者たちは、これほど美しく、高潔で、賢明な乙女が自ら死を望んでいることを深く嘆き、その美しさを自ら台無しにしないよう懇願した。しかし、彼女は彼らにこう言った。

「私は、花開くような若さを無駄にしているのではなく、ただそれをより良いものと交換しているのです。泥を金に、粘土を宝石に、この地上の肉体の牢獄を、輝きに満ちた天の宮殿と引き換えにしているのです。このような交換が、果たして悪いことでしょうか？　皆さんにも、同じことを願っています。」

彼女は、義人たちに待ち受ける報いについて、さらに長く語り続けた。そのため、彼女の家に集まった男女を問わず、大勢の聴衆は皆、深く感動した。ついに、聖女は力強い声で彼らに尋ねた。

「私が語っていることすべてが真実であると信じますか？」

すると、皆が口を揃えてこう答えました。

「はい、信じます。そして、あなたが宣べ伝えるキリストこそが真の神であり、あなたがその真のしもべであることを告白します。」

この答えに心の底から喜びを感じた聖女は、直ちにウルヴァン司教を呼び寄せた。司教は彼女の家に到着すると、キリストを信じた男女400人余りに洗礼を授けた。こうして、キキリアの家は神の教会となった。

その後、都市長官アルマフは、このキリストの義なるしもべを裁判にかけるよう命じ、彼女の信仰について尋問したところ、彼女からキリストの御名を大胆に告白する言葉を聞いた。

「その大胆さはどこから来るのか？」と彼は怒りを込めて尋ねた。

「良心からですよ」と聖女は答えた。「そして、揺るぎない信仰からです。」

「この不幸な女よ、私が皇帝たちから市民の生と死を司る権限を与えられていることを知らないのか？」とアルマフは反論した。

「あなたは嘘をついている」と聖女は答えた。「命に対する権限があると言うが、あなたは人を殺す権限しかなく、命を与える権限はないと述べるべきだった。なぜなら、あなたは人を殺すことはできても、生き返らせることはできないのだから。」

「神々に生贄を捧げよ」と裁判官は執拗に迫った。「そしてキリストを否定すれば、お前は解放される。」

しかし、聖女はキリストのために死ぬ覚悟があると宣言した。そこで拷問官は、彼女を自宅へ連れ戻し、そこで熱く焚かれた風呂で窒息死させるよう命じた。三日三晩、熱と煙で彼女を苦しめたが、神の恵みが彼女を涼しくし、生気を与えていた。　殉教者があれほど長い間、灼熱の風呂の中に生き続けていることを知ったアルマフは、その場で剣で彼女の首を刎ねるよう命じた。処刑人が彼女の元へ現れ、三度、剣で首を斬りつけたが、首は完全には切り落とされず、彼女をその場に置き去りにして立ち去った。　信者たちはスポンジや布で彼女の血を拭い取り、聖女はさらに三日間生き続け、極めて明晰な判断力を保ちながら周囲のキリスト教徒たちの信仰を確固たるものにし、ついに祈りの最中に神のもとへ息を引き取り、信者たちによって尊厳をもって埋葬された。

聖使徒フィリモン、アルキッポス、アプフィアの記念日

記念日：11月22日

聖使徒フィリモン、アルキッポス、アプフィアは、聖使徒パウロによってキリスト教に改宗し、ネロ皇帝の治世[8076]、コロサイの町[8077]で、ギリシャ人の異教徒たちによってキリストのために殉教した。ある日、彼らが他のキリスト教徒たちと共に祈りの集いに参加していたところ、異教徒たちが突然襲いかかってきた。　集まりにいた者たちは、フィリモン、アルキッポ、アプフィアを除いて皆逃げ去り、この三人だけが捕らえられ、エフェソスの穀物管理官アルトクリス[8078]の元へ連行された。

まずアルキッポスが激しく殴打され、通りかかった人々、子供たちさえもが、彼の全身をナイフで刺し続けた。その後、聖フィリモンも容赦なく拷問され、石で打ち殺された。同様に、聖アプフィアも石で打ち殺された。

こうして、苦しみの中で、聖なる敬虔な人々は主のもとへ旅立った[8079]。

[8076] 非人道的な残虐さで知られるネロ皇帝は、54年から68年まで在位した。

[8077] コロッソスは、小アジアのフリギア地方、半島の西部に位置していた都市である。中世には、この都市はホニ（現在のホナスまたはコヌス）と改名された。使徒パウロはコロッソスの住民たちに手紙を書いた。この都市は、9月6日の大天使ミカエルの奇跡によって、教会史において知られている。

[8078] 穀物管理者――ある都市、地方、または国家が所有する穀物備蓄を統括する責任者。エフェソ――古代小アジアで最も著名な都市の一つで、半島の西岸に位置する。そこで福音を宣べ伝えた使徒パウロは、その住民たちに手紙を書いた。

[8079] これらの聖人の記念日は、2月19日にも祝われている

コンダク、第2声調:

世界の果てを照らす輝ける星のように、キリストの使徒たちを讃えよう。栄光あるフィリモン、聖なるアルキッポ、オニシモ、マルコ、アポロ、そして彼らと共に全知のアプフィアを、こう叫びながら：「私たちすべてのために絶えず祈ってください」。

義人ミカエル・ヴォイナを記念する[8080]

記念日：11月22日

聖ミカエルは、ミカエル3世の治世[8081] に生きた。彼はブルガリア人であり、当時ギリシャ王国に属していたポトゥケ[8082] という町で生まれた。 ミハイルの貴族の両親は、ブルガリアの初期のキリスト教徒の一人であり、ミハイル自身も幼少の頃からキリスト教徒でした。その敬虔さゆえに、両親や知人からは「*聖なる子供*」と呼ばれていました。 幼少の頃から彼は清らかな生活を送り、常に心に神への畏れを抱き、断食と祈りに励み、貧しい人々に施しを与え、病人を訪ね、柔和さと謙遜、そしてあらゆる美徳を備えていた。

二十五歳になると、ミハイルは軍務に就き、大規模な部隊を指揮するようになった。

当時、エチオピア人とアガリア人、すなわちイスラム教徒のアラブ人[8083] が、ギリシャ王国に対して戦争を仕掛け、ギリシャ王国の首都へと進軍した。 祖国を守るため、大規模なギリシャ軍が出陣し、数多のアガリアン軍と対峙した。エチオピア人とアガリアン人が戦力で優勢であり、勝利を目前にしていることを悟ると、ギリシャ軍は山へ逃げ込み、安全な場所に身を隠した。

ギリシャのキリスト教軍の中には、ミハイル・ヴォインもその部隊を率いていた。彼は敵を恐れず、逃げ出すこともなく、絶えず部下たちを鼓舞し、奮い立たせていた。ギリシャ人たちが一斉に逃げ出すのを見て、彼は涙を流し、地面にひれ伏して、キリスト教徒の救いを主なる神に祈った。祈りを終えると、彼は部隊を率いて敵へと猛然と突進し、エチオピア人とアガリア人の陣の真っただ中に突入し、自身や部隊に傷を負わせることなく、敵を激しく打ちのめした。 その頃、キリスト教の戦士たちを助けるかのように、突然嵐が巻き起こった。稲妻と雷鳴が敵を襲い、恐怖に陥れたため、敵は皆、逃げ惑った。神の御加護により、ミハイルはすべての敵を撃退し、彼自身も部隊も全く無傷で済んだ。

与えられた勝利に神に感謝を捧げたミハイルは、軍を解散させ、少数の従者と共に故郷への帰路についた。この旅の途中、次のような奇跡が起こった。

ミハイルは休息のため、ある場所[8084] に立ち寄った。そこには大きな湖があり、そこから恐ろしい大蛇が現れて、人や家畜を食い荒らしていた。

8080 この伝記は、第一に、スラブ語のシナクサール（聖人暦）の記述に基づいてまとめられたものであり、その古文書はフィラレート大司教閣下およびアカデミー会員A.N.ヴェセロフスキーによって編纂された。また、この記述は若干の相違点はあるものの、印刷されたスラブ語の『プロローグ』にも収録されている。 第二に、テルノフの総主教エフフィミイ（1375–1393）によって執筆され、1901年にウィーンでカルージニツキーによってエフフィミイの著作集の一部として刊行された『ミハイル・ヴォインへの賛辞』に基づいている。

8081 ビザンツ皇帝ミハイル3世は867年に死去した。

8082 これは現在のバタク、すなわちプロヴディフまたはフィリッポポリの市域内にあるとされている。

8083 おそらく、ここでは865年のミカイル3世皇帝とアラブ人との戦争を指しているのだろう。

8084 印刷された『プロローグ』において、蛇に関する奇跡の場所は「ライフの地」と記されており、フィラレート大主教は、ここがシナイから二日間の道のりにある有名なライフの砂漠を指すものだと考えている。 しかし、古写本に伝わる聖人伝では、ライフの地ではなく、スティランまたはティランの地について言及されている。ヴェセロフスキー学者の見

ミハイルの従者の一人が、湖の近くの休憩場所から煙を見かけ、急いで食料を手に取り、煙の立ち上る場所へ向かった。そこで彼は、涙を流しながら座り込み、何かを待っている少女を見かけた。　使用人は彼女に事情を尋ね始めたが、恐ろしい大蛇についての彼女の話にすっかり聞き入ってしまったため、調理しに来たはずの食事が焦げてしまった。　使用人が主人のもとに戻ると、ミハイル・ヴォインは、なぜ遅れたのか、なぜ食事が焦げてしまったのかと尋ねた。そこで使用人は、自分が目撃したこと、そして少女から聞いた大蛇についての話を詳しく語った。

聖ミハイルはその話を聞き終えると、その場所へ向かうことを決意し、家来たちを呼び集めたが、彼らは恐れて、主人に同行することを拒んだ。そこでミハイルは、主なる神に祈りを捧げ、額に十字を切ってから、最年長の家来一人だけを連れて馬に乗り、湖へと向かった。

その場所に到着すると、彼はその娘に、なぜこの場所に来たのかと尋ね始めた。

少女は最初、怪物のような大蛇に食べられないよう、戦士ミハイルに立ち去るよう説得したが、聖人の執拗な求めに応じて、町に定着している、子供たちを順番に大蛇の餌として差し出すという慣習について語った。

少女の話に驚愕したミハイルは、従者に馬を連れて遠くで待つよう命じ、自身は地面にひれ伏して主なる神に祈りを捧げた。　聖人が祈りを終えて立ち上がると、湖の真ん中に大蛇が現れ、頭を高く掲げ、尾で水面を叩きながら、三つの口を開けて岸へと近づいてきた。　聖人は盾と剣を手に取り、その邪悪な蛇が示した三つの頭を切り落とした。すると蛇は尾を巻きつけ、聖人の右頬と左腕を打ち、傷を負わせた。ミハイルは意識を失って倒れたが、すぐに目を覚まして立ち上がった。

ミカエルの従者は、この奇跡を目撃すると、急いで町へ駆けつけ、起こった出来事を伝えた。市民たちは町から出てきて、救い主を盛大に迎え、その乙女は両親のもとに引き渡された。

かくして、神はミハイル・ヴォインを、かつて聖ゲオルギオス・ポベドノスツが成し遂げたのと同じような奇跡によって栄光に輝かせることをお望みになったのである。

その後、市民たちにキリスト教の信仰を堅く守るよう訓示を与えたミハイル・ヴォインは、旅を続け、自宅へと戻った。ほどなくして、彼は安らかにその祝福された魂を主の御許に委ねた。

聖ミハイルの墓の前では、多くのしるしや奇跡が起こり、信仰を持ってその墓を訪れる人々の病が癒やされるようになった。

それから何年も経った後、第二ブルガリア王国の時代、ブルガリア王カロイオアンは、当時首都がラテン人によって占領されていたギリシャ王国の領内で戦いを繰り広げ、ポトゥクという都市を占領し、聖ミハイル・ヴォインの聖遺骨を、ブルガリアの首都テルノフへ移すことを決めた。　ブルガリアのバシレイオス総主教は、聖遺物が近づいているとの報を聞くと、聖職者全員と市民を率いて、十字架の行列、ろうそく、香炉を携え、聖遺物を出迎えた。ブルガリアの王と総主教は聖遺物を肩に担ぎ、自らの手で運び、総主教座大聖堂（[8085]）に安置した。

聖殉教者プロコピオスの記念日

記念日：11月22日

解によれば、「ティランの地」とは、アドリア海に面したバルカン半島、ドゥラッツォおよびアレッシオ近郊の都市および地域であるティランナを指しているのかもしれない。

[8085] 14世紀、聖ミカエルを称える賛辞を著したテルノフの最後の総主教エウフィミイの時代、聖遺骨はテルノフの総主教座大聖堂に安置されていた。19世紀初頭、それらはワラキアへ移された。

聖プロコピオスはエルサレム出身であった。彼は自らの生活に厳格に取り組み、多くの美徳を備えていた。ケサリアの教会（[8086] ）の朗読者としての職に任命され、聖書を深く理解する賜物を持っていたプロコピオスは、信者たちに神の御言葉を説き明かした。　さらに、彼は聖書をシリア語に翻訳する活動に従事し、生前、悪霊に取りつかれた人々を癒やし、悪霊を追い出しました。

ある時、スキフォポリへ旅した際、彼はキリスト教の教会で神の御言葉を朗読し、その朗読に解説を添えていた。ケサリアの総督が聖プロコピウスのことを耳にすると、彼をキリスト教徒として捕らえるよう命じた。 当時、キリスト教徒に対する迫害が行われていた[8087] 。ケサリアの総督は、聖プロコピオスに対し、異教の偶像に犠牲を捧げ、当時帝国を統治していた四人の王に礼拝を捧げるよう要求した[8088] 。しかし、聖人は大胆にこう答えた。

「キリスト教徒は、多くの神々や支配者を崇め、礼拝してはならない。私たちにはただ一人の主、ただ一人の王であり主、万物の創造主と造り主がおられるだけである。」

これを聞いたケサリアの統治者は聖人に対して激怒し、剣でその首を刎ねるよう命じた。こうして聖プロコピオスは地上の生涯を終え、キリスト・神から殉教者の冠を授かり、天へと導かれた。

聖殉教者メニグナの記念日。

記念日：11月22日

聖メニグンは、ゲレスポント地方のパリアという町[8089] の出身であった。生業は漂白師であり、衣服や麻布の洗浄と精練に従事していた。　川辺でこの仕事に従事していた際、聖メニグンは二度、天から「キリストの御名のために殉教せよ」と呼びかける声を聞きました。これは、キリスト教徒を激しく迫害したデキウス帝の治世中のことでした[8090] 。

王の命令により、メニグンが住んでいた町では多くのキリスト教徒が捕らえられ、拷問を受ける運命にさらされ、牢獄に投獄された。牢獄の門が封印され、兵士たちによって警備されていたとき、主の天使が牢獄の中の囚人たちの前に現れた。　天使は囚人たちの足枷を外し、彼らを無傷のまま牢獄から解放した。

拷問者たちは囚人たちの行方を捜したが、牢獄にはおらず、衛兵たちに尋ねた。しかし、門は封印されたままであったため、兵士たちも何も答えることができなかった。　異教徒たちは困惑に陥り、兵士たちからは「ナザレのイエスが夜中に牢屋に来て、囚人たちを連れ出した」という噂が街中に広まった。悪意に目がくらんだ異教徒たちは、キリスト教徒を捜し回った。一方、信者たちは、このしるしによって励まされ、喜びをもって苦難に備えていた。

聖メニグヌスは、兵士たちからこの話を聞き、キリストへの熱烈な愛に燃え上がり、自分を偉業へと招いた天の声を思い出した。　彼は迷うことなく、洗濯を依頼した客たちに、洗濯のために預

[8086] ここでいうのは、もちろんパレスチナのケサリア、すなわち地中海東岸の都市である。エルサレムの破壊（79年）後、ここはパレスチナの主要都市となり、一時はエルサレムもその管轄下にあった司教の居所となった。　その後、ケサリアは破壊され、現在では廃墟の山がそびえる完全な荒野となっている。

[8087] ディオクレティアヌス帝（294–305年）の治世下。

[8088] ディオクレティアヌス帝は、マクシミアヌスと帝国の統治権を分け合い、東半分を彼に譲った。 この際、各皇帝にはそれぞれの共同統治者がいた。ディオクレティアヌスの共同統治者はマクシミアヌス・ガレリウスであり、彼はディオクレティアヌスの死後、東方の皇帝となった。一方、帝国の西方では、マクシミアヌス・ヘルクルスとコンスタンティウス・クロルスが統治していた。このように、303年に聖プロコピオスが殉教した当時、帝国には4人の統治者がいた。　また、王たちは異教徒たちから神々と同等に崇められ、彼らの名誉のために祭壇や像が建てられ、生贄が捧げられていた。殉教者プロコピオスは、この異教徒たちの迷信に加担することを拒んだのである。

[8089] ヘレスポント――小アジア北部の、黒海沿岸の地域。

[8090] デキウス――ローマ皇帝。249年から251年まで在位した。

かっていた衣類を返却し、自らをキリストの信徒であると宣言した。彼は、説得の末にもキリストを否定しないすべてのキリスト教徒を拷問と死に処すよう命じた、不義なデキウス王の勅令を引き裂いた。その後、メニグンは捕らえられ、当局に引き渡された。　裁判官は、王の勅令を引き裂いた彼の指を切り落とすよう判決を下した。指が切り落とされたとき、そこから流れたのは血ではなく、乳であった。その後、殉教者に対し、さらなる拷問や死を免れるために偶像に犠牲を捧げるよう説得が始まった。　しかし、聖人は勇敢にキリストを告白した。そこで拷問官は、容赦なく彼を殴打し、苦しめるよう命じた。彼は処刑人たちの激しい打撃で地面に打ち倒され、その後、木に吊るされ、鉄の道具で削り取られた。しかし、それによってキリストの告白者の熱意が弱まることはなかった。　そこで、彼は木から降ろされ、首を刎ねられた。その瞬間、聖人の口から一羽の清らかな鳩が天へと飛び立った。こうして、天からの呼びかけに従い、聖メニグンはキリストのためにその偉業を成し遂げ、その魂は天へと舞い上がり、主から殉教者の冠を受け取ったのである。

聖人の死後、キリスト教徒たちは夜陰に乗じて密かに彼の殉教の現場へ赴き、その遺体を運び出した。一方、現場に残されていた聖人の首は、後に一人のキリスト教徒によって発見された。聖なる殉教者は、このキリスト教徒に幻として現れ、その人は幻を見た後、首の上で輝いていた明るい星の導きに従って、聖人の首を見つけたのである。

聖アガッヴァの記念日

記念日：11月22日

尊者アガッヴァはイスマイル出身であった。故郷、両親、そして富を捨て、ある修道士に従い、その人から修道者の生活様式を授かった。　聖アガッヴァの師は、彼と共に偉大な修道士エウセビオスのもとへ向かった。そこで聖アガッヴァは、長い　間、祈りのうちに目を覚まし続けることを学んだ。　至福のエウセビオスの死後、聖アガッヴァは彼のケリアに残り、そこで38年間を過ごした。彼は決して靴を履かず、腰には重い鎖を巻いていた。食事は水で薄めたソチヴォだけだった。　昼夜を問わず、彼はほとんどの時間を立ちっぱなしやひざまずいた姿勢で過ごし、至高なる御方への礼拝の祈りを捧げていた。座ることを完全に拒み、彼が座っている姿を誰も一度も見たことがなかった。修道者として、彼は知恵を愛し、従順であることの模範を示した。このような修行の生涯を終え、彼は安らかに主のもとで眠りについた[8091]。

12月6日

11月23日（旧暦）

同日は、ヴォロネジの初代司教である聖ミトロファンの記念日

我らの聖なる父、イコニオス司教アンフィロキオスの生涯

記念日：11月23日

[8091] 聖アガッヴァの功績と殉教の時期は、5世紀にさかのぼるとされている。

聖アンフィロキオス[8092] 、イコニウムの司教は、偉大なる全地教父である聖バシレイオス大聖人と聖グリゴリオス神学者の友人であり、カッパドキア出身で、ケサリアの町に生まれた。彼の父もまたアンフィロキオスと呼ばれ、聖グリゴリオス神学者の母である福者ノンナ[8093] の実の兄弟であった。　彼は卓越した知性と深い学識を備え、それに雄弁さを兼ね備えていた。それだけでなく、慈愛と敬虔さも兼ね備え、すべての親族の助けとなり、言葉による導き手でもあった。子供たちを大切にし、彼らに素晴らしい教育を与え、キリスト教の敬虔さの精神の中で育て上げた。

彼の末息子は、成人すると、当初は演説家および弁護士として活躍した。　しかし、彼は幼い頃から何よりも神を愛していたため、まもなく聖グリゴリオス・テオロゴスの説得に従い、世俗の煩わしさや虚しさを避けて荒野へと退き、そこで修道者としての厳格な苦行生活を送り、ただ神のみに熱心に仕えるようになった。　そこでの彼の行いは、祈り、聖書の朗読、そして断食であった。聖アンフィロキオスは、このような厳しい自己犠牲と断食の修行の中でかなり長い期間を過ごしたが、やがて主は彼に、より高き聖職としての奉仕を命じ、彼をあたかも教会の燭台に置かれた灯火のように据えられた。

イコニウム教会の司教[8094] が亡くなったとき、主の天使が夜、アンフィロキオスの前に現れ、町へ行って霊的な羊の群れを牧するように告げた。しかし、アンフィロキオスは行く決心がつかなかった。次の夜、再び天使が彼の前に現れて言った。

「アンフィロキオスよ、町へ行き、神があなたに託した羊たちを牧しなさい。」

しかし、アンフィロキオスは今回も天使の言うことを聞き入れなかった。その出現は悪霊の惑わしだと考えたからである。「サタンも――と聖人は考えた――時には光り輝く天使に変身することがあるのだ」。三夜目、天使が彼の前に現れて、こう呼びかけた。

「アンフィロキオスよ！ ベッドから起きなさい！」

素早く起き上がったアンフィロキオスは、恐れおののきながら言った。

「もしあなたが神の天使なら、二人で共に祈りを捧げましょう」。頭を垂れて、アンフィロキオスは歌い始めた。「聖なる、聖なる、聖なる主サバオトよ、天と地はあなたの栄光に満ちている」。しかし、現れた天使も彼と共に歌った。　その後、天使は彼の右手を握り、すぐ近くにあった教会へと導いた。その教会の扉は、彼らの前で自然に開いた。中に入ると、アンフィロキオスはまばゆい光と、白い衣をまとった多くの男たちを見た。彼らはアンフィロキオスを抱き上げ、祭壇へと連れて行き、聖なる福音書を彼の手に渡しながら言った。「 」 「主があなたと共におられますように！」その中の一人、おそらくは長老と思われる者が、大声で「皆で祈りましょう」と宣言し、続いてこう言った。

「聖なる恵みにより、わが兄弟アンフィロキオスがイコニアの司教に任命されました。神の恵みが彼の上にあるよう、彼のために祈りましょう。」

祈りが終わると、皆はアンフィロキオスに別れを告げて姿を消したが、彼自身は、その不思議な幻と、自分への奇妙な司教叙任に驚きつつ立ち尽くし、神の聖なる御心に身を委ねて祈りを捧げた。夜が明け始めると、彼は教会を出て、自分の洞窟へと向かった。　すると、道中で、近隣の町々からイコニウムに集まり、この町の司教を選出し、叙任しようとしていた七人の司教たちに遭遇した。彼らには、修道士アンフィロキオスを探し出すという神からの命があった。イコニウムを出て、あちこちで彼を探し回り、ついに彼を見つけると、こう尋ねた。

[8092] イコニア――小アジア内陸部の東側、肥沃な平野に位置し、タウロス山の麓にある都市。かつてはリカオニア地方の主要都市であり、中世にはセルジューク朝スルタンの首都（1096～1308年）であった。現在はトルコの都市コンヤである。この地へのキリスト教の伝道は、当初、使徒パウロとバルナバによって行われた。

[8093] 義人ノンナの記念日は8月5日である。

[8094] それは372年のことだった。

「あなたはアンフィロキオスではないか？　真実を語れ。あらゆる偽りは悪者から来るのだから。」

「私は罪深いアンフィロキオスです」と、彼は謙虚に答えた。彼らは彼を栄誉をもって教会へ連れて行き、叙階しようとしたが、彼はこう言った。

「もし神が、私のような不適格で罪深い者を、あなたがたに司教として選出するよう示されたのであれば、もはや私は神の奇跡的な御業を隠したり黙り込んだりしてはなりません。それどころか、私たちは必ずそれらを公に告げ、すべてについて神に栄光を帰さなければなりません。」

そして聖アンフィロキオスは、夜に幻の中で司教に叙階された経緯を、最初からすべて彼らに語った。　その話を聞いた司教たちは驚き、アンフィロキオスの奇跡的な叙階を神に感謝し、二度と彼を叙階しようとはしませんでした。むしろ、敬意を込めて彼に頭を下げ、愛を込めて彼に口づけをした後、彼を直ちに司教の座に着かせました（ヴァレンティニアヌスとヴァレンティスの治世下、[8095]）。

聖アンフィロキオスは、かなり長い間、キリストの羊の群れを牧した。彼は、テオドシウス大帝とその息子たちの時代まで生き延びた。

正教の信仰の導師として、彼はアリウス派の異端と闘い[8096]、異端者たちから多くの迫害や侮辱を受け、エウノミオスの神冒涜に反対した聖なる教父たちの同志であり、第二回全地公会議では、異端者マケドニウス[8097]および前述のアリウスの支持者たちに対して多大な功績を挙げた。その敬虔さへの熱意と徳高い生活により、彼は至る所で称賛され、聖なる教父たち、とりわけ聖バシレイオス大聖人と聖グリゴリオス神学者から愛された。彼らは彼を親しい友人と見なし、彼と文通を交わしていた[8098]。

テオドシウス大帝の治世中[8099]、聖アンフィロキオスはある日皇帝のもとを訪れ、すべての都市におけるアリウス派の礼拝集会を廃止するよう懇願した。しかし皇帝は、民衆の目に迫害者として映ることを避けるため、その願いを聞き入れようとはしなかった。　そこでアンフィロキオスは黙って宮殿を去ったが、数日後に再びそこを訪れ、その知恵を駆使して、記憶に残るべき行動をとった。彼は玉座に座る皇帝に頭を下げ、相応の敬意を表して恭しく挨拶したが、父の傍らに座っていた、最近王位に就いたばかりの息子アルカディウスには、　一切注意を向けず、彼に相応しい敬意も示さな

[8095] 皇帝ヴァレンティニアヌス（西部）は364年から375年まで在位し、ヴァレント（東部）は364年から378年まで在位した。聖アンフィロキオスの司教叙任は373年に行われた。

[8096] 第1回全地公会議で非難されたアリウスは、神の御子は神ではなく、神が全世界を創造するために用いた最高の被造物に過ぎないと説いた。

[8097] 第2回全地公会議（第1回コンスタンティノープル公会議）は381年に開催された。同公会議で非難されたマケドニウスは、聖霊は被造物であり、父と子の神性および栄光には関与していないと説いた。

[8098] 聖アンフィロキオスは、聖バシレイオス大主教のもとへ、ケサリアへ何度も旅をした。そうした旅のひとりで、彼はバシレイオス大主教に対し、ドゥホボル派を糾弾するために聖霊について執筆するよう懇願した。　様々な教会問題に関する個人的な協議に加え、アンフィロキオスはバシレイオス大聖人に、教会の規律に関する自身の疑問を文書で解き明かしてくれるよう、度々懇願した。アンフィロキオスの要請に応じ、この偉大な教父は、とりわけ有名な「カノニカル書簡」を執筆した。375年、聖バシレイオス大教父は再びアンフィロキオスを招き、自身の病を理由にケサリアの教会を彼に託した。しかし、アンフィロキオスは自身も病に伏していた上、バシレイオスの病状を知らなかったため、彼をイコニアの公会議に招いた。しかし、バシレイオスの病は治まらず、彼は自身の代わりに、公会議（376年；この公会議でドゥホボル派は非難された）へ『聖霊論』という書物を送った。　その後、聖アンフィロキオスは、エウノミウス派――過激なアリウス派――との闘いを成功させるため、聖バシレイオスにエウノミウス派の弁証法に関するいくつかの疑問の解決を求め、聖バシレイオスは重い病を顧みず、彼に回答を書き送った。　聖アンフィロキオスは、親族である聖グリゴリオス・テオロゴスとも同様に親密な友好関係を築いていた。彼は聖グリゴリオスの説得により当初、荒野へ隠遁したが、聖グリゴリオスはそこに手紙やパンの備蓄を送り続けていた。

[8099] テオドシウス大帝は379年から395年まで在位した。

かった。　テオドシウスは、アンフィロキオスが礼儀を忘れてしまったのだと考え、アルカディウスに相応の挨拶をするよう命じた。

「皇帝に敬意を表しただけで十分だ」とアンフィロキオスは言った。

すると、父である皇帝は激しく怒り、息子への不敬を許すまいとして、聖アンフィロキオスを恥辱のうちに宮殿から追放するよう命じた。

聖アンフィロキオスは彼にこう言った。

「ご覧なさい、王よ。あなたはご自身の息子への不敬をどれほど耐え難く思い、私に対してどれほど怒りを抱いているか。それと同じように、神である父もまた、御子への不敬を許さず、御子を冒涜する者を忌み嫌い、愛さず、冒涜者たちと交わる者たちに対して怒りを抱かれるのです。」

皇帝はそこで、アンフィロキオスがなぜ自分の息子に敬意を払わなかったのか――それは、神の御子には父と同等の栄光がふさわしいことを示そうとしたからである――を理解し、聖人の知恵に感嘆して、玉座から立ち上がり、彼に頭を下げて許しを請うた。　直ちにテオドシウスは、帝国全土に、あらゆる都市からアリウス派を追放する勅令を発布し、必要であれば武力や脅迫も用いるよう命じた。こうして聖アンフィロキオスは、キリストの教会を異端者たちから清めたのである。

ほぼ同時期に、リカオン地方にメッサリア派の異端が浸透した[8100]。聖アンフィロキオスは、この害悪からも自らの教会を熱心に守った。彼は異端者たちを、直接対峙して、また神に導かれた言葉の力によって糾弾し、その後、パンフィリアのシドス公会議[8101]に出席し、そこでこの異端は非難された。　この頃、聖アンフィロキオスはすでに霊的に大いに成長しており、自らの祈りによって病人の癒やしを求めることができるようになっていた。

深き老齢に達した聖アンフィロキオスは、安らかに主のもとで息を引き取った[8102]。

コンダク、第2調：

神聖なる雷、御霊のラッパ、信仰の園丁、異端の断ち切り手、聖アンフィロキオスよ、三位一体の偉大なる御心にかなう者よ。天使たちと共に常に御前に立ち、私たちすべてのために絶えず祈り給え。

私たちの聖なる父、アクラガンティの司教グリゴリオスの生涯

記念日：11月23日

8100　メッサリア派、別名エウキト派は、神における三位一体、秘跡、断食、外的な修行、そしてあらゆる教会の規定を否定した。彼らの見解によれば、すべての人間は悪魔の支配下にあるが、悪魔と戦うには熱心な祈りだけで十分であり、祈りを終えると、祈る者の内に至聖なる御霊が宿るとされた。　彼らは瞑想や神秘的な踊りにふけり、肉眼で神を見ることを主張した。――メッサリア派の異端は4世紀に発生し、431年の第3回エフェソス公会議で非難されたが、7世紀にはすでに完全に消滅していた。

8101 パンフィリア――小アジアの南部地域。公会議は、パンフィリアの主要都市であるシデで行われた。

8102 聖アンフィロキオス・イコニオス（395年頃）――聖アンフィロキオスは、非常に多くの多様な神学著作を残した。彼は書物、詩、書簡、説教を執筆した。その中でも最も重要なものは、正統な教義を擁護し、異端者を糾弾するために書かれた弁証論的著作であった。　その例として、聖霊に関する著作やエウキト派に対する著作（これらは現存しない）、全地公会議で朗読された『主の肉による誕生について』という著作（断片のみが現存する）、そして預言者イザヤに関する著作（これも現存しない）が挙げられる。　現存しているのは、聖オリンピアダの甥であり、トラヤヌス帝の軍司令官の孫であるセレウコス宛てに、聖アンフィロキオスが書いた333節からなる、教育的な性格を持つ長文の手紙である。　また、トラヤヌス将軍の孫であるセレウコス宛てに、聖三位一体と神の御子の受肉について記した聖アンフィロキオスの書簡や、主に聖三位一体、特に聖霊について論じたその他の書簡や手紙も知られている。　さらに、聖アンフィロキオスは、主に教義的な内容を含む多くの言葉や教えを残した。

聖グリゴリウスは、シチリア島[8103] のプレトリア村、アクラガンタ[8104] の近郊で、敬虔で徳の高い両親、ハリトンとテオドティアの間に生まれた。彼の両親は極めて裕福な人々であり、自らの財産から、困窮するすべての人々に惜しみなく施しを行っていた。

幼子グリゴリウスの洗礼の際、洗礼盤の傍らで彼の代父を務めたのは、アクラガンティウスの司教である至福のパタミオンであった。生後8年目に、グリゴリウスはダミアヌスという名の熟練した教師のもとで学問を修めるために預けられ、2年で読み書き、そして教会の聖歌を歌うことを見事に習得した。 12歳になると、彼はパタミオン司教によって聖職者候補に任命され、大助祭の[8105] ドナトゥスの指導下に置かれた。ドナトゥスは、彼の霊的修行と徳ある生活を導く役割を担っていた。少年は祈りに励み、昼夜を問わず聖書や聖父たちの伝記を読みふけった。それにより、彼が読んだ人々の足跡をたどりたいという願いが、ますます強まっていった。

22歳になったとき、彼は聖地を参拝するためにエルサレムへ行くことを決意し、神が彼の旅路を順調に導いてくださるよう、熱心に祈り始めた。ある夜、彼が大助祭の家で眠っているとき、ベッドのそばで誰かが突然彼を呼んだ。

「グリゴリー！」

彼は「はい、ここにいます」と答え、起き上がって大助祭に尋ねた。

「なぜ私を呼んだのですか、ご主人様？」

「私は君を呼んでいないよ、子よ」と大助祭は答えた。

そこでグリゴリーは立ち去り、再び横になって眠りについた。　しかし、同じ声が二度目に彼を呼んだので、彼は再び大助祭のところへ行き、なぜ自分を呼んだのかと尋ねた。すると大助祭は、誰も呼んでいないとまた答えた。しかし、この時、大助祭はグリゴリーを呼んでいるのが神ご自身であることを悟り、恐怖に震えながらその若者に言った。

「もしもう一度同じ声があなたを呼んだら、こう答えなさい。『はい、主よ。あなたのしもべに何を命じられますか？』」

グリゴリイが大助祭のもとを離れて再び寝床に横たわると、その声は三度目にして彼の名を呼んだ。呼びかけたのは主の天使であった。グリゴリイは教えられた通りに応えると、天使は彼にこう言った。

「お前の祈りは聞き届けられた。海の岸辺へ行きなさい。そこでは、お前を聖地へと連れて行ってくれる人々に出会うだろう。」

グリゴリウスはすぐに起き上がり、誰にも何も告げずに早朝に海へと向かった。海岸に着くと、そこに船を見つけ、船員たちにどこへ向かうのか尋ねた。彼らは「カルタゴへ[8106] 」と答えたので、彼は彼らに自分を連れて行ってくれるよう懇願した。　全員が船に乗り込み、三日後に無事にカルタゴに到着した。

カルタゴでグリゴリウスは数日間滞在し、その間、聖殉教者ユリアヌスの教会に頻繁に通った。ある日、彼がその教会にいて聖書を朗読していると、三人の修道士が、端正な風貌で入ってきて、祈りを捧げ始めた。　祈りが終わると、そのうちのひとりが座り、残りの二人はその傍らに立った。グリゴリウスは彼らを見て、頭を下げた。座っていた修道士は、グリゴリウスを見据えて言った。

[8103] シチリア島は、アペニン半島の南端に位置する地中海に浮かび、メッシーナ海峡によって同半島から隔てられている。

[8104] アクラガント（現在のアグリジェント）という都市は、シチリア島の南西岸に位置しています。

[8105] 「アルキディアコン」という言葉はギリシャ語に由来し、「助祭の長」、すなわち最上級または最高位の奉仕者を意味する。現在、この名称は修道者の中から奉仕において主導的な役割を果たす助祭を指す（一方、世俗聖職者の中で主導的な役割を果たす助祭は「プロトディアコン」と呼ばれる）。　しかし、古代教会において、アルキディアコンは司教のすぐそばに立ち、教会の運営において司教を補佐していた。時には、例えば公会議において、彼らは司教の代表としてさえ振る舞った。

[8106] カルタゴ――アフリカ北岸の都市。現在は廃墟と化している。

「神のしもべグリゴリーよ、主の御言葉（ルカ10:42）に従い、あなたから決して奪われることのない『良い部分』を選んだあなたが、ここで何をしているのか？」

自分の名を聞いて、グリゴリーは恐怖に襲われ、長老に地面まで頭を下げて言った。

「お許しください、父よ。罪深く、怠惰な私のために祈ってください。」

長老は答えた。

「ああ、もし私がお前の罪を背負うことができたなら、わが子よ、[8107] ！　知っておきなさい――と彼は付け加えた――慈悲深い神は、お前のことすべてを私たちに明らかにされたのだ。喜びなさい。神は、お前の望む通り、お前を連れ出し、聖地へと導くために私たちを遣わされたのだから――私たち自身もそこへ向かっているのだ。」

すると、グリゴリーは感動して叫んだ。

「すべてを我らの益となるよう導いてくださる神に、賛美あれ！」その後、四人は旅立った。道中、長老はグリゴリーを試すように、ある時彼に尋ねた。

「グリゴリょ、我が子よ！　両親のことが恋しくないか？」

「主はこうおっしゃいました」とグリゴリーは答えた。*「『わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。また、わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない』」*（マタイ10:37）。　しかし、それでもなお、父よ、神に祈りましょう。神が、私を失った両親に慰めを与え、罪深い私を敵の罠から守ってくださいますように。

数日間の旅の末、彼らは聖都に近づき、道中で出会ったある修道院に立ち寄った。　その間、聖四旬節の断食が始まったため、彼らはそれ以上先へ進むことなく、受難週までその修道院にとどまった。ここでグリゴリーは、修道士たちの厳格な断食と徹夜祷を目にした。彼らの多くは、一週間の間、食事を摂らず、眠りも取らなかった。　そこで彼は、天使のように生き、天において神が賛美されるのと同じように絶えず神を賛美する人々を見た。涙を川のように流し、昼夜を問わず祈りを捧げ続ける修道士たちを見た。また、彼らの他の労苦や信じがたい偉業も目にし、恐怖に駆られて胸を叩きながら、こう叫んだ。

「ああ、私は悲惨だ！　私は一体何者なのか？　不精で怠惰な私が、どうすればよいのか？　審判の日に、どうして聖人たちと肩を並べることができるというのか！？」

しかし、絶望の深淵に完全に沈み込むことを望まなかった私は、こう自分に言い聞かせた。

「もしダビデが言うように、*『主は、心を砕かれた者、霊をへりくだった者に近く*、彼らを救われる』（詩篇33:19）のであれば、主は、11時になってやって来た者たち（[8108] ）のように、報いに値する何事も成し遂げていない私をも救ってくださるはずだ。」

修道士たちは、彼の悲しげな顔を見て、故郷や両親を恋しく思っているのだと思い、彼を慰めた。

「子よ、私たちと一緒にここまで来てしまったことを悔やんではいけない」と彼らは彼に言った。「神の助けによって、あなたは再び故郷に戻り、両親が健在である姿を見られることを願っているのだ。」

「神にとって」と彼は答えた。「異国などありません。すべては神のものであり、神は全知の御目で至る所に浸透しておられます。私はここに来たことを嘆いているわけでも、両親を恋しく思っているわけでもありません。それどころか、父と母を離れて、私を慈しんでくださる神に出会えたことを喜んでいるのです。」　いいえ、私の心には別の悲しみが横たわっています。聖なる父たちよ、どうかこの謙虚な私のために、主にお祈りください。

この答えを聞いて、修道士たちは黙り込んだ。

[8107] すなわち：「ああ、もし私もあなたと同じように罪から解放されていれば」。

[8108] 福音書のたとえ話の意味は、悔い改めと神への回心は、決して遅すぎることはないということである。

キリストの復活の祝日が訪れると、旅人たちはエルサレムへと向かい、聖地を参拝した後、祝福を求めて総主教――聖マカリオス[8109] ――のもとを訪れました。彼らを見た総主教はこう言いました。

「主を喜びなさい、アッバ・マルクよ！　この神に喜ばれる若者グリゴリウスを、どこから私たちのもとに連れてきたのですか。」

「私たちがお連れしたわけではありません、大主教様」とマルクは答えた。「すべての人を救おうと願われる主と、あなたの聖なる祈りのおかげです。」

グリゴリウスは、総主教が自分と長老の両方の名前を呼んだことに驚き、長老の名前を知ることができて喜んだ。　それまでは、彼らとこれほど長い間共に過ごしていたにもかかわらず、長老も、他の二人の同行者も、名前が何であるか知らなかった。そして、彼らがどこから来たのか、名前は何なのかと尋ねることも、彼は敢えてできなかった――それほど彼は寡黙で、好奇心もなかったのだ。

その後、総主教は他の二人の修道士に目を向け、こう言った。

「セラピオン、そしてレオンティオ神父、お二人が来てくださってよかった。神に感謝します。神は、お二人にここへ来て、この若者を連れてくる力を与えてくださいました。この若者は、霊に燃え、主に仕え、希望に慰められ、祈りに堅固な者です。主が私に彼について明らかにしてくださった通りです。」

そう言うと、総主教は聖堂へ向かい、神聖な聖体礼儀を執り行い、すべての巡礼者たちは聖なる秘跡に与った。そして翌朝、アッバ・マルコは二人の兄弟と共に、総主教の祝福を受けて、シオン山の周辺に住む修道者たちを訪ねに行った。　グレゴリウスは彼らが去ることを知らず、取り残されて、彼らに遅れをとってしまったことを深く嘆いた。しかし、総主教は彼を慰めるために、修道士たちはまず修道院に戻らずに自国へは帰らないだろうと告げた。

そこでグリゴリウスは、総主教に頭を下げてから、この三人の偉大な人物がどこから来たのか、勇気を出して尋ねた。総主教は、彼らがローマから来たと答えた。修道士たちがエルサレムに戻ったとき、アッバ・マルクはグリゴリウスの手を取り、彼を総主教の足元にひれ伏させながら、こう言った。

「聖なる父よ！この者もまた、キリストの羊の群れの一員です。彼は教会において権威を受け継ぎ、櫂のように、霊的な教えをもって教会を善へと導くでしょう。父よ、どうか彼を慈しみ、彼が心の清らかさを完全に保ち、若さに特有の罪深い思いに汚されることのないよう、見守ってください。」

「神は彼を御自身のために選び、母の胎内から御自身の畏れをもって彼を守ってこられた。神ご自身が、彼を最後まで守ってくださるだろう」と、総主教は答えた。

それから、グリゴリウスを抱き上げ、彼が泣いているのに気づくと、総主教は彼にこう言った。

「わが子よ、もしここが気に入っているなら、私たちと一緒に留まりなさい。そうすれば、私たちの主イエス・キリストが、すべてをあなたの益となるよう整えてくださるでしょう。もし彼らと共に行きたいのなら、平安のうちに去りなさい。」

「いいえ、聖なる父よ」とグリゴリウスは答えた。「私はここから離れたくはありません。ただ、この生涯のうちに、もう一度これらの聖なる父たちに会えるよう、神に願うだけです。」

こうして、修道士たちは総主教から旅路の祝福と祈りを請い、聖都を後にした。一方、グリゴリウスはマカリア総主教のもとでエルサレムに残った。

[8109] マカリオス2世は、663年から674年までエルサレム総主教を務めた。

ローマへ向かう途中、アッベ・マルコはセラピオンとレオンティウスと共に、アクラガントのそばを船で通り過ぎなければならなかった。彼らはここで立ち寄り、パタミオン司教を歓迎し、聖使徒ペトロとパウロの祝日が訪れていたため、しばらくの間、司教館に滞在した。　祝祭が終わり、彼らがすでに旅立つ準備を整え、司教に旅立ちの祝福を求めていた時、パタミオンのもとへ、グリゴリオスの両親であるハリトンとテオドティアが、自分たちの村からやって来た。彼らは、7月の初日に息子を偲ぶ追悼の儀式を行うためであった。というのも、まさにその日にグリゴリオスが故郷を去ったからである。　テオドティアは息子を思って激しく泣き、誰も彼女を慰めることはできなかった。アッバ・マルクは司教に尋ねた。

「父よ、この人々は一体何のために、あれほど泣いているのですか？」

司教はため息をつき、涙を浮かべて答えた。

「彼らには一人息子がいました。私はその子を聖なる洗礼の泉から受け入れたのです。彼が八歳になった時、両親は彼を私のところに連れてきました。私は彼に読み書きを教えるよう命じました。すると神は彼に並外れた才能をお与えになり、わずか二年で彼は見事に読み書きを習得し、教会で賛美歌を歌うこともできるようになりました。　十二歳になった時、両親は私の罪深い手を通じて彼を神に捧げ、私は彼を聖職者候補に任命し、私の大助祭に、主の戒めの道へと彼を導くよう託しました。そしてその少年は聖書に極めて精通するようになり、シチリア全土を見渡しても、今に至るまで彼に匹敵する者は一人もいません。　ところが、彼に何が起きたのか、どこへ行ってしまったのか、私たちには分からない。彼は突然行方不明になってしまった。私たちは島中の町や村、山々、洞窟、荒野をくまなく探し回ったが、見つけることはできず、誰かに殺されて地中に埋められたのか、それとも誘拐されて異国へ連れ去られたのか、今も分からない。　今や私たち全員が彼を心底気の毒に思っており、両親は彼が姿を消したその日から、すでに彼のための追悼の儀式を執り行い始めていた。

一方、アッバ・マルクはハリトンの顔をじっと見つめ、これがグリゴリオスの父親であることを察した――グリゴリオスはあらゆる点で父親に非常によく似ていたからだ――そして、泣き崩れる両親にこう言った。

「なぜ、ご子息のことをこれほどまでに深く嘆き悲しむのですか。それどころか、神のしもべたちのためにすべてを益となるよう整えてくださる神に、喜び、感謝すべきではありませんか。」

そして、司教の方を向いて、こう付け加えた。

「あなたの首席助祭をここに呼ぶよう命じてください。」

司教は直ちに大助祭を呼び寄せるよう命じ、大助祭が現れると、マルコは彼にこう尋ねた。

「教えてくれ。お前に託された少年はどこへ隠れたのか。そして、なぜお前は主である司教に、その少年に現れた神の偉大さを明かさないのか？」

この言葉に衝撃を受けた大助祭は、長老に頭を下げて許しを請い、それから語り始めた。

「ある夜、私が自分の独房で眠っていると、少年も私のすぐそばで休んでいたのですが、突然誰かが彼を『グリゴリー』と呼びました！彼は起き上がって私のところへ来て、なぜ呼んだのかと尋ねました。　私は彼を呼んでいないと答えました。彼が横になると、その声が二度目に彼を呼び、彼はまた私のところに来て、「はい、ここです。なぜ私を呼んだのですか？」と言いました。　その時、私はその呼び声が人間のものではなく、神からのものであると悟り、もし声がまた　彼を呼んだら、「はい、主よ。あなたのしもべに何をお命じになりますか」と答えるよう彼に教えた。彼は自分の寝床に戻り、私は再び彼に語りかける声を聞いた。「グリゴリー！　お前の祈りは聞き届けられた。海の岸辺へ行け。そこには、お前を連れて行ってくれる人々がいるだろう」。しかし、私自身もその声を聞いていたものの、それが何を意味するのかよく理解できず、すぐに眠り込んでしまった。翌朝起きてみると、グリゴリーの姿はすでになく、それ以来今日に至るまで、彼は見つかっていない。私が聞いた声について、誰にも話す勇気はなかった。嘘をついていると言われ、私の言葉を信じても

らえず、私がその少年を殺したか、あるいは異国の地へ売ったのだと言われかねないのを恐れたからだ。

大助祭の話を聞き終えると、司教と両親は悲しみを和らげ、神に感謝を捧げた。そして、至福のアッバ・マルコはこう言った。

「ほら、『列王記』に記されているサムエルの話（列王記上3:3–8）のように、今日のグリゴリウスの場合も同様でした。幕屋で眠っていた少年サムエルを、主の御使いが三度『サムエル、サムエル』と呼びかけたように、　――そうして、至福の少年グリゴリウスもまた、同様の呼びかけに恵まれたのです。まことに、彼は預言者サムエルに匹敵するでしょう！さて、あなたがたの少年について、私が語ることを聞いてください。私がローマにいた時、ある時、兄弟たちと共に聖使徒ペトロとパウロの教会へ祈りを捧げに行きました。　夜が更けると、私たちはある修道士のところで一晩を過ごしましたが、その夜、使徒たちに似た二人の輝く姿の男が私の夢に現れ、こう言いました。

「さあ、セラピオンとレオティウスと共に急いで立ち上がり、船に乗り込んでカルタゴへ航海しなさい。そこでは、シチリア島から来た、アクラガントの教会に属するグリゴリウスという名の旅人に出会うだろう。彼を連れて行き、聖都エルサレムにいるマカリオス総主教のもとへ案内しなさい。　我々はすでにこの若者のことを総主教にも伝え、彼を受け入れるよう命じておいた。彼には、エリヤの霊がエリシャに宿ったように、我らの霊が宿っているからだ。

そう言い終えると、私の前に現れた者たちは姿を消した。目を覚ますと、私は兄弟たちのセラピオンとレオンティウスと共に埠頭へ向かった。そこでは、神の御計らいにより、カルタゴへ出航する準備が整った船が見つかった。私たちはそれに乗り込み、まもなくカルタゴに到着した。　船を降りると、私たちは聖殉教者ユリアヌスの教会に入り、そこでグリゴリウスが書物を読んでいるのを見つけた。私たちは彼を連れて行き、エルサレムへ向かい、そこで彼を総主教のもとに残した。

アッバの聴衆たちは皆、彼の言葉に極めて驚き、神に感謝した。一方、ハリトンとテオドティアは心の動揺から気を失って地面に倒れ込んだが、マルコは二人を起こしてこう言った。

「あなたがたの息子が生きており、徳ある生活を送っていることを、神に栄光を帰しなさい。」

そして、嘆きをやめたハリトンとテオドティアは、司教やそこにいた全員と共に神に感謝を捧げ、またグリゴリウスを気遣ってくれたアッバ・マルコにも感謝し、それ以来、もはや悲しみに沈むことはなかった。

一方、聖グリゴリウスはエルサレムで至聖なるマカリアス総主教のもとで暮らし、彼によって助祭に叙任された。しばらくして、彼は総主教に、エレオン山[8110]に住む修道士たちを訪ねるためにそこへ行くことを許可してほしいと願い出た。許可を得ると、彼は丸一年を費やして、高潔な修道士たちを訪ね歩き、彼らからあらゆる霊的な恵みを受けた。その後、彼は内陸の荒野[8111]へ向かうことを決意し、その意図を長老たちに打ち明け、彼らの祈りを求めた。長老たちは彼のために祈りを捧げた後、彼を見送りながらこう言った。

「行け、わが子よ、平安を携えて。キリストに対するあなたの信仰と愛が、あなたを救うだろう。」

エレオン山を下りたグリゴリイは、砂漠の奥深くへと進み、三日後、神の御心により、昼の第六時に祈りを捧げていた一人の修道士に出会った。若いグリゴリイが救いを求めていることを霊的に悟った修道士は、彼を呼び寄せ、こう尋ねた。

「どこへ行くのだ、子よ？」

[8110] エルサレムの東、ケドロンと呼ばれる谷を挟んだ場所にある。ここで主は、世界、エルサレム、そして神殿の滅亡を予言し、またここから天に昇られた。エレオン山は地中海面より2600フィート高い。

[8111] 内陸の砂漠はエルサレムとエリコの間に位置しており、岩だらけで荒涼とした不毛の地である。

「キリストがこの荒野のどこへ導いてくださるかに従って」とグリゴリウスは答えた。

「私と一緒に来なさい」と修道士は言った。

二十日間の旅の末、彼らはある場所にたどり着いた。そこで修道士は、遠くに立つ、前に二本のナツメヤシが植えられた小部屋をグリゴリーに指さし、こう言った。

「あの小部屋には偉大な父が住んでいる。もし救われたいなら、彼のところへ行け。私は反対方向へ行く必要があるのだ。」

そして互いに頭を下げて、二人は別れた。

グリゴリーは、偉大な長老の修道室に近づくにつれ、最初は大勢の聖歌隊の歌声が聞こえたが、さらに近づくと、歌っているのはたった三人の声に過ぎず、修道室の扉に近づいてみると、第九時課を終えようとしている一人の長老だけが歌っていることがわかった。　しかし、グリゴリーは扉を叩く勇気もなく、恐れおののきながら外で立ち尽くしていた。祈りを終えると、聖なる父は扉の外を覗き、若者の姿を見かけ、その霊によって即座に彼だと見抜くと、名前を呼んで自分のケリヤへ招き入れた。そのため、グリゴリーはさらに大きな恐怖に襲われた。　小部屋に入ると、グリゴリーは、一人の長老以外に誰もいないことに気づき、たった一人の長老が歌っているだけなのに、なぜ多くの声が聞こえたのかと不思議に思った。そこで彼は、長老と共に聖なる天使たちが歌っていたのだと悟った。彼は長老の足元にひれ伏し、涙ながらにこう懇願した。

「父よ、私を憐れんでください。そして、罪深い私のために祈り、神が私の魂を救ってくださいますように。」

「神はあなたを憐れんでくださるでしょう、わが子よ」と長老は答えた。「そして、あなたの労苦に対して報いてくださるでしょう。」

グリゴリーは四年間、聖なる長老のもとで暮らし、霊的な知恵だけでなく、修道生活の日常の作法についても多くを学び、神の霊感を受けた聖書の解釈を修め、極めて分別があり、雄弁な人物となった。　長老は、彼の知性と徳を見抜き、彼が世の偉大な光となることを予見して、もはや彼を荒野に留めておくことを望まず、隠遁生活を捨てて、戦っている教会の助けとなるよう命じた。　その際、長老はグリゴリウスに対し、嫉妬する者たちから多くの迫害を受けるだろうと予言し、忍耐強く、悪意を持たないよう諭した。そして、彼のために祈りを捧げ、祝福を与えた後、彼を見送った。

長老のもとを離れたグリゴリウスは再びエルサレムに戻り、そこで総主教に喜びをもって迎えられた。エルサレムで一年を過ごした後、聖人はアンティオキアへ赴き、そこからコンスタンティノープルへ移り、そこで聖殉教者セルギウスとバッカスの修道院で暮らした。　修道院の院長はその修道院長、一週間も食事を口にせず、常に読書や著述に励むグリゴリイの功績と節制ぶりを見て、エウティキオス総主教に彼について報告した。

「私の修道院に、驚くべき修道士――助祭がやって来ました」と彼は総主教に語った。「その風貌も生活態度も素晴らしく、偉大な断食者であり、あらゆる修道行を熱心に実践し、聖書の優れた通暁者です。今の時代、コンスタンティノープル全土を捜しても、彼のような人物は他にいないでしょう。」

総主教はこの知らせを大いに喜び、グリゴリウスを丁重に招いて語り合い、その知恵を確信すると、教会を襲った異端者たちの大動乱のさなかに、このような人物を遣わしてくださった神に感謝した。

その間、至福のパタミオンの後継者であるアクラガンティウスのテオドール司教が逝去した。アクラガンティの民の間には意見の相違と不和が生じた。ある者は長老サヴィナを司教に望み、ある者はクリスケントという人物を、またある者は当時大助祭であったパウロを推し、さらに他の人々は主の御心に従おうとした。

「主が選ばれる方が、私たちの司教となられるように」と彼らは語った。

この件に関して、すべての司祭、市当局、市民が集まり、ローマの教皇のもとへ向かった。その中には、グリゴリオの父ハリトンもいた。教皇の前に現れると、彼らは三つの派閥に分かれた。一派はサヴィノを、もう一派はクリスケントを、そして三つ目の派閥はエウプロスとハリトンを指導者としていた。　第一の派はサヴィンを司教に推挙し、第二の派はクリスケントを推挙した。一方、エウプロスとハリトン、そして残りの者たちは教皇にこう申し上げた。

「神が聖下にお示しになる方を、私たちの司教として任命してください。」

教皇は、彼らの意見の不一致と論争を見て、彼らにその場を離れるよう命じた。そして、彼がそのような苦境に立たされていた時、夜、幻の中で二人の威厳ある人物が使徒の姿で現れ、こう言った。

「なぜ、アクラグアンティの人々の意見の相違をそれほど嘆いているのか？」　彼らが連れてきた者たちは皆、司教の位にふさわしくない。しかし、ローマにはグリゴリウスという名の旅人が一人おり、彼はこれまで聖サヴァの修道院に住んでいたが、今、アクラガンティの人々の到着を聞きつけ、その修道院から逃げ出し、聖メルクリウスの修道院に身を隠している。　彼を呼び寄せ、彼らに司教として任命してください。なぜなら、アクラガントには、その司教の上に神の御霊が特に宿ることが必要だからです。

そう言い残して、現れた者たちは姿を消した。教皇は目を覚ますと、長老たちと、ちょうどその頃、自分の修道院から偶然ローマに来ていたアブ・マルコを呼び寄せ、自分の幻視について語った。そして直ちに、二人の司教と他の聖職者たちを派遣し、グリゴリウスを探し出して、栄誉をもって連れ戻すよう命じた。　彼らは聖サヴァの修道院へ向かい、そこでグリゴリウスの居場所を尋ねた。修道士たちは、二日前に彼が聖メルクリウスの修道院へ去ったと答えた。　一行はそこへ向かったが、ちょうど修道院を出ようとしていた聖グリゴリウスは、遠くから近づいてくる司教たちを目にして、以前コンスタンティノープルでの公会議で彼らを見たことがあったため、その正体をすぐに見抜いた。そして、彼らが自分を追ってきていることを霊的に悟ると、急いで塀の向こうへ逃げ戻り、修道院の庭に身を隠した。　司教たちは修道院に入り、彼について尋ねたが、修道士たちは、その日確かに修道院に何らかの巡礼者がいたが、彼がどこへ行ったかは分からないと答えた。　司教たちは修道院長に詰め寄り、もし今すぐその旅人を引き渡さなければ、厳しい罰を受けると執拗に告げた。修道院長は彼らに少し待ってほしいと頼み、自らグリゴリーを丹念に探し回り、ついに庭の草むらに隠れている彼を見つけた。彼は怒りを露わにして彼を引きずり出し、こう叱りつけた。

「お前はどこからここへ来たのだ、人間よ？　どのような罪を犯し、何をしたというのか、これほど高名な人々がお前を探し回っているのだ？　お前は我々の修道院に災いをもたらした――さあ、立ち去り、自分の罪について答えよ。」

聖グリゴリウスは何も答えず、黙ったまま、彼の手を握る修道院長についていった。　彼が司教たちの前に連れて行かれると、彼らはすぐに彼だと気づいた――彼らは公会議で、すべての司教たちが彼を称賛し、皇帝自らが彼に敬意を表していたのを見ていたからだ――そして立ち上がり、彼に頭を下げ、愛情を込めて抱きしめた。しかし、彼自身は彼らの足元にひれ伏し、こう言った。

「聖なる父たちよ、お許しください。私は罪人です。なぜ、私のような不適格者、この卑しい者を求めておられるのですか？」

「教皇様がお呼びです」と彼らは答え、彼を地面から起こして口づけをした。

修道院長は、自分が何らかの悪人だと考えていたまさにそのグリゴリウスに対して、司教たちがこれほど敬意を示したことに驚き、戸惑った。司教たちはグリゴリウスを連れ出し、栄誉をもって教皇のもとへ案内した。

グリゴリウスが部屋に入り、教皇に深く頭を下げて拝礼すると、教皇は彼にこう言った。

「グリゴリイよ、我が子よ、汝はまさに時宜を得て我らの元へ来た。汝を我らに遣わした神を賛美せよ。」

そして立ち上がると、教皇は聖なる口づけで彼に接吻し、続いてこう続けた。

「わが子グリゴリウスよ！　我らの主イエス・キリストは、アクラグアンテにある御自身の教会において、あなたを司教の座に召しておられる。それは、あなたを通して、そこに住む者たちが救われるためである。」

「お許しください、大司教様」とグリゴリウスは答えた。「私はそのような聖職にふさわしくありません。」

「不従順になってはならない」と教皇は言った。「神を畏れ、多くの者が不従順によって至高なる御方を怒らせたことを思い起こせ。」

すると、グリゴリウスはこう言った。

「尊き父よ、少しばかり熟考する時間をください。そうして、聖下へ最終的なお答えを申し上げたいのです。」

教皇は、その間、グリゴリーをアッバ・マルコに託した。アッバの姿を見たグリゴリーは、喜びの涙を流しながら彼の足元に駆け寄った。

「神に感謝します」と彼は叫んだ。「この生涯で、もう一度あなたにお会いできることを、神が私に許してくださったことを！私の愛する父よ！」

アッバ・マルクは彼を別の部屋へ連れて行き、二人は一晩中眠ることなく、霊的な対話を交わした。それ以前、グリゴリウスは、特に父ハリトンがローマに到着したことを知ると、スペインへ去るつもりだった。しかし、マルクは彼を引き留めた。

「わが子よ」と彼は言った。「神を怒らせず、神の祝福の代わりに、自らに呪いを招くことのないように。」

それ以来、グリゴリウスはその決意を捨てた。まもなく、教皇はアクラガントの住民たちを呼び寄せ、ついに自分たちの司教選びについて合意に至ったかどうかを尋ねた。

「大司教様、私たちには何とお答えすればよいか分かりません」と彼らは答えた。「私たちは神と、あなたの聖なる祈りに身を委ねております。神があなたに指し示される方なら、その方を私たちに与えてください。私たちは愛をもってその方を受け入れます。」

教皇はハリトンの顔をじっと見つめ、その酷似した容貌から、彼がグリゴリオスの父であることを察した。

「さあ、教会へ行きましょう」と教皇は言った。「そして、神ご自身がふさわしいと認められる方を示してくださるよう、神に祈りましょう。」

そして、教皇が司教たちや聖職者全員と共に、聖使徒ペトロとパウロの教会で祈りを捧げ、グリゴリウスも彼らと共にいたとき、聖なる食卓の上を飛んでいた鳩が現れ、聖グリゴリウスの頭の上に降り立った。この予期せぬ奇跡に、皆は畏敬の念を抱き、畏怖した。

「ほら、神は、司教の位にふさわしいと選ばれた者を私たちに示されたのだ」と教皇は言い、グリゴリウスをアクラガンティ教会司教に叙任した。

アクラガントの市民たちは皆これを喜び、神ご自身が選ばれた者として、愛を込めてグリゴリウスを受け入れた。そしてハリトンは自分の息子だと気づき、息子が生きている姿、しかもそのような聖職に就いている姿を見ることができたことを、神に熱心に感謝した。

数日後、アクラガントの住民たちは教皇の祝福を受け、新たに叙階された司教を伴って自分たちの街へと戻った。 彼らがパノルミア[8112] のそばを通りかかると、その町の司教が聖職者たちや民衆全員を率いて出迎え、温かく彼らを迎えた。司教はグリゴリウスの徳高い生き様を耳にしており、彼

[8112] パノルミア（現在のパレルモ）は、シチリア島の北西岸にある都市である。

に教会に入って民衆に祝福を与えるよう頼んだのである。　グリゴリウスが教会に入ろうとしたとき、重度のハンセン病に冒された一人の修道士が彼に近づき、大声でこう叫んだ。

「キリストのしもべよ、私を憐れんでください。そして、神に私のために祈り、この重い病を和らげてくださるよう願ってください。」

「主の御名によって、あなたの病から癒やされなさい」と聖人は彼に言った。

すると、その修道士はたちまち癒やされ、ハンセン病から清められ、その体はまるで幼い子供のような姿になった。

皆は、御自分の聖徒を通して奇跡を行われる神を賛美し、祝福した。

グリゴリウスは同行者たちと共にパノルミアを出て、アクラガントに近づいた。そこで、郊外にある聖母マリア修道院の修道院長が彼らを出迎えた。グリゴリウスが修道院に入ると、ある耳が聞こえず口もきけない修道士が彼の足元にひれ伏した。修道院長は彼を司教の足元から引き離そうとしたが、聖グリゴリウスは彼にこう言った。

「彼を放っておきなさい、兄弟よ。彼に、何を望んでいるのか説明させてあげなさい。」

修道院長は言った。

「彼は聖なる狂人であり、さらに耳が聞こえず、口もきけないのです、大主教様。」聖人はため息をつき、天に向かって両手を挙げ、祈りを捧げた後、その修道士を地面から起こしてこう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって――主は、耳が聞こえず口が利けない者に、神の被造物から出て行けと命じられた――兄弟よ、語り始めよ。そして、この奇跡を成し遂げてくださった神の御声を聞き、神を賛美せよ！」

すると、その修道士はたちまち話し始め、大声で叫んだ。

「主よ、この人のために成し遂げられた御業は、なんと偉大なおことか！」

聖人はその修道士に、彼が言葉を失ってからどれくらいの年月が経ったのかと尋ねた。

「覚えておりません、師よ」と、癒やされた者は答えた。「私が話したり聞いたりしていた頃のことは。」

そこで修道院長は彼に代わって言った。

「師よ、私たちが彼を修道士として剃髪させてから、すでに二十年が経ちます。彼は八歳の時に剃髪を受けましたが、今日まで耳が聞こえず、口も利けませんでした。しかし今、あなたの祈りによって癒やされたのです。」

奇跡を目の当たりにして、皆は畏敬の念に包まれ、奇跡を行う司教を授けてくださった神に感謝した。

聖グリゴリウスはこの修道院に朝まで留まり、翌朝、アクラガントへと向かった。町に残っていた住民たちは、新しい司教が来るという話を聞き、互いに「一体誰が選ばれたのか？　サヴィンか、クリスケントか、それともエウプルか？」と尋ね合った。　――そして、この三人のうち誰も司教の座に就くことはなく、グリゴリウスという名の一人の旅人が選ばれたと知ると、彼らは大いに驚いた。さらに、彼が奇跡を行う者であり、すでに耳が聞こえず口もきけない者を癒やしたという話を聞くと、畏敬の念に満たされた。　町の住民全員が彼を出迎え、彼から祝福を受け、彼は祝福しながら皆に手を置いていた。その中には、新しい司教が自分の息子であることをまだ知らなかった、彼の母テオドティアも、他の年配の女性たちと共にいた。しかし、彼を一目見た途端、彼女はすぐに彼だと気づき、こう言った。

「まことに、これは私の息子です。失われていたが、見つかったのです（ルカ15:24）。」

一方、グリゴリイは母を見て、こう叫んだ。

「こんにちは、フェオドティア様、私の母よ！」

「神を賛美します」と、彼女は大きな喜びをもって答えた。「あなたを神の民を導く者として選び、私にあなたに会わせてくださった神に感謝します。私の愛しい息子よ！」

その後、皆は歌いながら教会に入った。そして聖グリゴリウスが神聖な典礼を執り行っているとき、選ばれた者たちの何人かは、聖霊の恵みが鳩の姿で彼の上に降り、彼の頭上に留まっているのを見た。それは、彼が叙階されたときと同じようであった。　教会には多くの病人が運ばれてきたが、聖グリゴリウスは彼らに手を置いて健康を取り戻させ、それを見た人々は皆驚き、こう言った。

「まことに、彼はネオケサリウスの奇跡行者、聖グリゴリウスに似ている。」

そして、町には大きな喜びが満ち溢れた。

信徒たちの指導に就いたグリゴリウスは、貧しい人々を深く気遣い、病人を癒やし、悪霊を追い出した。彼の父ハリトンは、ほとんど教会から出ることなく、断食と祈りをもって昼夜を問わず神に仕えていた。　同様に、母のテオドティアも、世俗の心配事をすべて脇に置き、ただ自らの救いのみを願い、病人や貧困に苦しむ人々に奉仕し、自らの資金で彼らに食事や衣服を与えていた。このように、グリゴリウスは両親と共に、キリストの教会の栄光となり、すべての人にとって徳ある生活の模範となった。

ある日、聖グリゴリウスは病人と貧しい人々を訪ねるために街へ向かった。すると、病人を抱える住民たちは皆、聖なる医師が通るはずの道沿いに病人を寝かせた。聖なる医師は、手を触れるだけであらゆる病を癒やした。　ところで、サヴィン司祭には、寝たきりの娘がいた。彼女はベッドに横たわり、全く力が入らず、自力で動くことさえできず、他の人たちが体位を変えてあげなければならなかった。　彼女の母親は、司教が家の前を通ると聞き、娘を屋外へ運び出し、聖人の通る道に寝かせた。グリゴリウスが近づくと、彼女は泣きながら彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「神のしもべよ、私を憐れんでください。そして、この麻痺した娘にも憐れみをおかけください。」

聖人は彼女に、誰の妻なのかと尋ねた。すると、サヴィン司祭が家から出てきて、司教に頭を下げて言った。

「彼女はあなたのしもべであり、私の妻です、主よ。」

「お嬢さんは、どれくらい前から病気なのですか？」と司教は尋ね続けた。

「九年前から、主よ」と彼らは答えた。「彼女が力を失ってから、もう九年も経ちます。」

祈りを捧げた後、聖人は少女に十字を切ってこう言った。

「イエス・キリストの御名によって、お嬢さん、立ち上がって、自分の足で歩みなさい。」

するとたちまち、少女は完全に健康な姿で立ち上がり、自分を癒やしてくれた聖人に感謝の言葉を捧げた。聖人を追いかけていた人々は、聖人を通して行われた奇跡に驚嘆した。

しかし、数年後、あらゆる善を憎む悪魔が聖人に対して反旗を翻し、聖グレゴリウスが娘を癒したあのサヴィヌスと、前述のクリスケントを通じて、聖人をその座から引きずり下ろそうと企てた。　二人はともにアクラガントの長老であり、前述の通り、かつてはそれぞれ司教の座を狙っていたため、互いに敵対関係にあった。しかし、今や彼らは和解し、共に聖グリゴリウスに敵対する行動を取り始め、悪魔に煽られて嫉妬に駆られ、互いにこう語り合った。

「この男――魔術で奇跡を起こし、庶民を驚かせている魔術師――に、いつまで従わなければならないのか？　それとも、かつて彼がこの街から逃げ出し、ある魔術師のもとで暮らし、彼から魔術を学んだことを知らないのか。そして今、ここに戻ってきて、自分は神の僕だと主張して人々を惑わしているが、実際には、悪魔のように飲食をしない点で、まさに悪魔そのものではないか？！

彼らがこの義人に対して浴びせたこれらすべての誹謗中傷は、グリゴリウスの高い地位と名声に対する嫉妬から生じたものであった。彼らは一部の聖職者や市民をも味方につけ、グリゴリウスを町から追い出すまで決して諦めないことを互いに誓い合った。　そして、彼の代わりに司教に据えようとしたのは、あるエレウシウスという人物であった。彼は異端者であり、長老の職を剥奪され、ラ

オディキア公会議[8113] によって破門されていた。彼は密かにアクラガントに現れ、聖グリゴリウスの知らぬ間に、テオドラという名の市民の家に身を隠していた。　以前、聖グリゴリウスは東方でこのエレウシウスと出会い、神の御子の受肉について論争を交わし、彼に勝利を収めていた。まさにこのエレウシウスが、アクラガントに3ヶ月滞在する間に、サヴィヌス、クリスケント、およびその他数名に、聖グリゴリウスに対する嫉妬と敵意を煽り立てたのである。　グリゴリウスの敵たちは、互いに相談した末、エウドキアという名の若い女性を買収した。彼女は容姿は美しかったが、恥知らずで放蕩な性格であり、人前で司教に対し、彼が自分と不義の行為に及んだと告発するよう仕向けたのである。　彼女は当初、同意しようとはせず、「グリゴリウスを神の天使のように崇めているアクラガントの市民たちは、私の言葉を信じないだろう。民衆に石を投げられて殺されるのではないかと恐れている」と語った。しかし、彼らは彼女に「無傷でいられる」と説得し、多額の賄賂で誘惑して、その提案を受け入れさせた。　そこで彼らは、グリゴリウスを災いと恥辱に陥れる好機を待ち構えた。ある夜、聖グリゴリウスが教会で深夜の礼拝を行っている間、サヴィンとクリスケントは雇った娼婦を連れ出し、密かに彼女を司教の邸宅へと連れて行った。　そこで彼らは、扉の番をしていた門番を見つけ、金で口止めし、エウドキアを聖人の寝室へと案内して、彼女をそこに閉じ込めた後、その場を去った。　何も知らなかったグリゴリウスは、早課が終わるまで教会に残っていた。日が昇り、司教がようやく教会から出てくると、早課に参加していた人々は皆、彼の後をついて行った。というのも、アクラガンティの人々には、常に司教を教会から自宅まで見送るという習慣があったからである。　自宅の玄関に着くと、聖グリゴリウスは見送りの人々に語りかけ、様々な教えを与え、彼らに祝福を与えた。群衆の中には、サヴィンやクリスケント、そして他の共謀者たちもいた。彼らは司教の寝室に駆け込み、司教と民衆全員の目の前でそこから女性を引きずり出し、大声で叫んだ。

「見よ、人々よ、我らの司教が何をしているか！　これが彼の生きるべき姿なのか？　我々は皆、彼が聖人だと言っていたが、彼は実は淫乱者だったのだ。これからは、彼は司教の位にふさわしくない！」

民衆は驚きを隠せず、何を言えばよいのか分からず、皆、石のように固まってしまった。聖グリゴリウス自身も、このような予期せぬ災難に驚き、黙り込んでいた。

人々は、その女性に司教が一緒にいたかどうかを問い詰め、彼女は皆の前で、昨夜彼が自分と一緒にいたことを認めた。大助祭や司教の側近たちは、具体的に夜の何時に彼が一緒にいたのかと尋ねた。彼女は、グリゴリーの敵から事前に吹き込まれていた通り、「晩課の後」だと答えた。

「主よ、生きておられますように」と、司教の側近たちは叫んだ。「この嘘つきの女は偽りを言っている！」

しかし、彼の敵たちはこう返した。

「お前たちは彼の側近であり、主人の罪を隠そうとしているのだから、信用に値しないのではないか？」

これに対し、フィラデルフという名の若い助祭が、詩篇の言葉を用いてこう言った。*「高慢と軽蔑をもって、義人に対して悪を語る偽りの口は、黙らせられよ」*（詩篇30:19）。

クリスケントはフィラデルフに駆け寄り、彼の頬を殴り始めた。民衆の多くは、その女性が寝室から連れ出されるのを見、彼女が司教の目の前で「彼が私と関係を持った」と語っているのを耳にし、中傷に惑わされてそれを信じてしまった。しかし、他の人々は、いかなる状況にあっても彼女を信じようとはしなかった。　しかし、敵対する側が優勢となり、司教は捕らえられ、自宅から引きずり出されて、かつてリヴィアの司教であり聖殉教者であるグリゴリウスがキリストのために苦難を受けたのと同じ牢獄に投獄された。そこで敵たちはこの聖グリゴリウスも閉じ込め、彼の足を枷に縛り

[8113] ラオディキア（フリギア）公会議は、第4世紀末、第2回全地公会議の直前に開催された。 その規則（60）は、礼拝儀式の諸詳細、聖職者の規律、家庭生活や信徒の道徳、当時の悪習や誤謬、異端の教義などに関するものであり、その意味で、当時の教会の儀式やキリスト教徒の生活について、多くの特徴的な指針を示している。

付け、扉を釘で打ち付けて厳重に警備した。　その後、彼らは急いで、シチリアにいた教皇のエクザルク、[8114] に手紙を送り、この出来事を報告するとともに、グリゴリウスの裁判のためにアクラガントへ来るよう要請した。

その間、アクラガント全域だけでなく、周辺の町や村、さらにはシチリア全土にまで、グリゴリウス司教が娼婦と一緒にいたという噂が広まった。

牢屋の前には、聖人を愛し、その誹謗中傷を信じなかった大勢の人々が集まり、涙を流しながら牢屋のそばに座り込んでいた。

その間、聖グリゴリウスは、罪のないまま苦難を受けることを許してくださった神に感謝していた。　真夜中、彼が祈っていると、大きな光が牢屋を照らし、主の天使が現れて、グリゴリウスをの鎖から解き放ち、忍耐を励ます言葉をかけ、姿を消すと、牢屋の扉は自然に開いた。牢屋のそばにいた人々は聖人にひれ伏し、こう言った。

「今や、神があなたと共にあり、あなたについて語られていたことはすべて中傷であったと、私たちは完全に確信しました。」

彼らはサヴィンとクリスケントを殺しに行こうとしたが、聖人はそれを制止し、再び争いを起こしたり血を流したりすることを禁じ、彼に対する裁きが下るのを待つよう説得した。　エクザルクはアクラガントに到着すると、全市の集会を招集し、裁判官の席に着くと、グリゴリウスを連れてくるよう命じ、彼の前に立たせた。また、グリゴリウスの敵対者たちも、エウドキアと共に裁判の場に立たされた。エクザルクはエウドキアにこう尋ねた。

「司教があなたと一緒にいたというのは、本当か？」

「はい、閣下、それは本当です。彼は私と一緒にいました。」

彼女がそう言い終えるやいなや、たちまち悪霊が彼女に襲いかかり、地面に倒し、彼女は悪霊に苦しめられながら恐ろしい叫び声を上げてのたうち回った。皆に恐怖が走った。

「グリゴリイは」と、良識ある者たちは言った。「悪事には無実だ。ほら、彼を誹謗した者に神の懲罰が下ったではないか。」

しかし、聖人の敵たちは、あらゆる羞恥心を失い、こう言った。

「我々は、彼が魔術師であり呪術師だと言わなかったか？　そして、彼の魔術によって、あの女は今、悪霊に取り憑かれているのだ。」

その間、長老サヴィナの妻は、聖グリゴリーによって病から癒やされた娘を連れて、急いで集会に駆けつけ、怒りを込めて夫に向かって叫んだ。

「この惨めな悪党め！　私たちの娘を癒やしてくれたこの聖なる人の恩恵を忘れ、無実の人を誹謗中傷するなんて！　さっさと私の家から出て行きなさい。もうこれ以上、あなたと一緒に暮らすつもりはないわ！」

それから彼女は聖人の足元にひれ伏し、涙ながらにこう懇願した。

「神のしもべよ、どうか私たちを憐れんでください。そして、これらの不信心で嫉妬深い者たちがあなたに与えた悪事を、どうか忘れるようにしてください！」

群衆の間ではざわめきと騒ぎが巻き起こった。ある者はグリゴリーは無実だと叫び、またある者は誹謗中傷を信じ、彼が魔術を使って一緒にいた女性に悪魔を憑かせたと主張し続けた。　サヴィンやクリスケントに買収されていたエクザルクは彼らの味方についていたが、民衆の間で起きている騒動を見て恐れをなすと、席を立ち、裁判所を去り、「この件についてはより詳細に調査すべきだ」と宣言した。　そこで聖グリゴリウスは自ら進んで再び牢獄に戻り、裁判中の身としてそこに留まり、自身をめぐるこの事件がどのように決着するかを待った。

[8114] エクザルクとは、ただ一人の教皇にのみ従属し、どこに赴任しても管区の司教の支配を受けない司教のことである。

エクザルクは、民衆の動揺を招かずにグリゴリウスに対して何もできないと悟ると、彼をローマの教皇のもとへ送ることを決め、彼のために専用の船を用意するよう命じた。その際、彼は教皇宛てに、グリゴリウスの告発内容を記した書簡を書き送った。　同様に、グリゴリウスを誹謗する者たちも、自分たちから教皇宛てに同様の書簡を書き送った。エクザルクは夜が更けるのを待ち、サヴィヌスとクリスケントと共に、グリゴリウスを連れて密かに船へと導いた。その後を、彼の両親や家来たちが泣き叫びながらついていった；　グリゴリウスは彼らを慰め、泣かないよう説得し、まもなく元気な姿で司教の座に就いている自分を再び見られるだろうと希望を持たせた。彼を船に乗せると、敵たちはプロコピウスという名の船主に彼の監視を任せ、教皇宛ての書簡も彼に手渡した。　大助祭エウプルは他の助祭たちと共にエクザルクを取り囲み、父であり師である彼と共に旅立たせてほしいと懇願したが、彼は彼らの話に耳を貸そうともしなかった。ただ一人、助祭プラトニクスにのみ、グリゴリウスと共に旅立つことを許した。　ついに船は出航し、グリゴリウスの親族たちは両親と共に岸辺で長い間彼を嘆き、悲しみに暮れながら家路についた。

翌朝、牢獄の周りには多くの民衆と長老たちが集まった。牢獄の中にグリゴリウスの姿が見当たらないと、彼らは動揺し、泣き出し、司教に対する不当な裁判を嘆き始めた。その後、彼らはエクザルクのもとへ行き、彼を取り囲んでこう尋ねた。

「私たちの父であり、善良な羊飼いをどこへ連れて行ったのですか？まさか、彼を殺したのですか？」

「いいえ、兄弟たちよ」とエクザルクは答えた。「我々は彼に何の害も与えてはいない。ただ、彼自身が我々に求めた通り、平和のうちに教皇のもとへ送り出しただけだ。」

集まった人々は、大助祭エウプラや他の助祭たちを呼び寄せ、こう尋ねた。

「あなたたちは、私たちの聖なる司教がどこにいるか知っているはずだ。昨日、彼の牢屋にいたのだから。真実を話せ、彼は今どこにいるのか？」

エウプロスらは、夜間にエクザルクがグリゴリウスを教皇のもとへ送り出したと答えた。エクザルクは、民衆の間に動揺が広がり始めているのを見て恐怖を感じ、アクラガントから逃げ出した。激昂した民衆は、陰険な長老サヴィヌスとクリスケントスの家を焼き払い、彼ら自身を探し出して殺そうとしたが、二人は教会に身を隠していた。　民衆は彼らを追いかけたが、ハリトンは教会の入り口に立ち、怒れる人々に「私の息子のせいで血を流さないでほしい」と懇願し、もし彼らの司教である自分の息子に対する告発が正当であると判明すれば、彼ら自身も裁きを受けると語った。

民衆はハリトンの言葉に従い、散っていった。しかし、グリゴリウスの支持者たちは、シラクーサに居住していたシチリア総督と、同市の司教に書簡を送り、彼らの司教に起きたすべての出来事を伝えた。　シラクーザの総督と司教は、グリゴリウスの高潔な生き様をよく知っていたため、非常に驚き、彼を深く憐れんだ。彼らへの使者として、アクラガントの最も高名な市民たちが派遣され、グリゴリウスが教皇の前で無実を証明して戻ってくるまでの間、教会の事務は首席助祭エウプロに委ねられた。

しばらくして、グリゴリウスの敵対者たちは再び結集し、エウプラを殺害する機会を伺った。エウプラは彼らの激しい敵意を察知すると、グリゴリウスが到着するまで逃亡して身を隠した。一方、サヴィンとクリスケントは志を同じくする者たちと共に、前述の異端者エレウシオスを司教の座に就かせた。　ハリトンに説得された市政当局と長老たちは、グリゴリウスが遅かれ早かれ教皇の座に復帰するということをハリトンから知らされると、不満を一切表さず、完全に沈黙してしまった。このようにして、当時の神の教会は、牧者の代わりに野獣たちによって、彼らの気ままに牧されていた。異端者エレウシウスは、祭壇に安置されていた聖人の遺骸を持ち出し、それを焼き払おうとしたが、火は遺骸にさえ触れることはなかった。その後、彼は夜間に誰にも知られぬよう、それらを海に投げ捨てるよう命じた。

聖グリゴリウスがローマに到着すると、彼に同行していたプロコピオスは、教皇にエクザルクの書簡と、グリゴリウスを中傷する者たちの書簡を手渡した。　教皇はこれらの書簡を読み、グリゴリウスに対して激しく怒りを露わにし、彼を直接面会させることさえ許さず、自白するかどうかを尋ねることもなく、手足を鎖で縛って牢獄に投獄するよう命じた。また、助祭プラトニクスも別の牢獄に閉じ込めるよう命じた。　聖人が監禁され、祈りを捧げていたある夜、光が彼を照らし、使徒の姿をした二人の男が彼の元へやって来て、こう言った。

「喜びなさい、キリストのしもべであり、我らが愛するグリゴリイよ！主は、あなたを束縛から解き放つために我々を遣わされました。あなたがどれほど勇敢に、そして忍耐強く苦難に耐えているかを見て、我々は喜びを感じています。神は、あなたを通してこの街でも多くの奇跡を起こそうと御心をお寄せになっています。」

そう言うと、彼らは彼の束縛に触れ、たちまち鎖は彼から落ち、彼は完全に解放されて立ち上がり、現れた者たちに地面まで頭を下げて礼拝した。すると、彼らは彼に口づけをして、見えなくなってしまった。　同様に、彼らは助祭プラトニクスのところにも現れ、彼を牢獄から連れ出し、グリゴリウスのもとへ連れて行った。解放された二人は共に主を賛美し、祝福した。

囚人たちを見張っていた看守には、生後26年のひとり息子がいた。その息子はすでに6年間、悪霊に苦しめられ、道や荒野をさまよわされていた。父は何度も彼を鉄の足枷で縛り、特別な部屋に閉じ込めたが、彼は足枷を引き裂き、扉をこじ開けては、また逃げ出していた。　ある時、グリゴリーがすでに足枷から解放された状態で牢獄に収容され、プラトニックも彼と共にいたところ、その悪霊に取り憑かれた者の父親がプラトニックを捕まえ、手、足、首を柱にしっかりと鎖で縛り付けた。しかし、真夜中、その憑かれた男は鉄の束縛を打ち砕いて逃げ出し、牢屋の扉が開いているのを見つけると、中に入り、聖グリゴリーの足元で憑依の発作に襲われた。聖グリゴリーは天に向かって両手を挙げ、神に祈りを捧げた後、悪霊に向かってこう言った。

「我らの主イエス・キリストは、不浄な霊よ、その被造物から出て行けと命じられる。」

悪霊は即座に去っていった。一方、看守は行方不明になった息子を長い間探し続け、その途中で牢屋の扉が開いているのを見て、囚人が逃げ出したと思い、死の恐怖に襲われた。　しかし、中に入ると、そこにはグリゴリウスとプラトニクスが立ち、神に聖なる賛美歌を歌っており、彼らと共に、自分の息子も――完全に元気な姿で――いた。看守は聖人の足元にひれ伏し、叫んだ。

「まことに、あなたは神の人です！　あなたに手を上げ、罪を犯してしまったことをお許しください。」

その瞬間から、看守は聖人をまるで神の天使であるかのように崇め、昼夜を問わず敬虔に仕えるようになった。

その頃、体が不自由な娘を持つある女性が、聖グリゴリウスが看守の息子を癒やしたという話を耳にし、娘を連れて彼の牢獄を訪れ、彼の前にひれ伏して、娘を癒やしてくれるよう懇願した。聖人は彼女に、それは自分の力ではなく、ただ一言で万物を創造しうる唯一の神の御業であると告げた。しかし、彼女は執拗に願い続け、ついに聖人が祈りを捧げ、体の曲がった少女に手を置くと、少女はたちまちまっすぐに伸びた。　母と娘は神に感謝し、聖人に頭を下げてから、喜びながら家路についた。

「誰があなたの娘を癒やしたのですか？」と、近所の人たちは母親に尋ねた。

「この地ではないところから来たある司教よ」と彼女は答えた。「その人は、ある罪で有罪判決を受け、牢獄に閉じ込められていると言われているの。最初は看守の息子を癒やし、今度は私の娘を癒やしてくれたのよ。」

聖グレゴリウスが、一言で悪霊に取り憑かれた少女と、体が歪んでしまった少女を奇跡的に癒したとの噂はローマ中に広まり、多くの病人が彼のもとに連れてこられるようになったが、彼はそれらもすべて癒した。

グリゴリウスがローマに到着してから一年が過ぎ、教皇はようやく牢獄に囚われている司教のことを思い出し、前述の通りすでに何度も言及されたアッバ・マルクを呼び寄せた。アッバ・マルクが自分の修道院から現れると、教皇は尋ねた。

「兄弟よ、アクラグァンティの司教グリゴリウスが、第七の戒律に背く罪を犯したとして、縛られてここに連行され、投獄されていることを知らないのか？」

アバ・マルクはため息をつきながら、こう答えた。

「ああ、もし私が最後の審判の日に、彼と同じ運命をたどることができたら！」

すると教皇は表情を変え、こう言った。

「ほら、シチリアの私のエクザルクが私に何を書いているか見てくれ。」マルクはエクザルクの書簡を読み、笑い、そして大声で言った。

「主が生きておられる限り、これは無実で清らかな人物に対する誹謗中傷です。あなたご自身もご存知の通り、司教様、彼はその生涯と奇跡において、古代の偉大な教父たちに匹敵する人物なのです。」

「私は知っている」と教皇は反論した。「彼が堕落するまでは、神の恵みが彼の上にあった。しかし、彼が罪を犯したとき、その恵みは彼から取り去られたのだ。」

「神はご自身の真実をご存知だ」とマルクは答えた。

「では、我々は彼をどうすべきか？」と教皇は尋ねた。「あなたならどう助言する？」

アッバ・マルクはこう答えた。

「私の話を聞いてください、大主教様。そして私の助言に従ってください。公会議を招集し、司教たちを召集してください——西方の司教たちだけでなく、東方にも通知を送ってください。　敬虔な皇帝とコンスタンティノープル総主教の知らぬ間にグリゴリウスを裁くことはせず、彼らにも選りすぐりの人物を派遣してもらおう。また、シチリアへも使者を送り、告発者たちとあの女性をここに呼び寄せよ。そうすれば、神が示される通りに我々は行動するのだ。

教皇はマルコの助言を良しとし、直ちにユスティニアヌス皇帝とコンスタンティノープル総主教殿下宛てに書簡を書き、すべての事情を伝え、公会議に選りすぐりの人物を派遣するよう要請した。　また、シチリアのエクザルクや、アクラガントの当局者および市民たちにも書簡を送り、告発者全員と、グリゴリウスと不義の関係を結んだと噂される女性を、一人残らず遅滞なくローマの自分の元へ送るよう命じた。

皇帝と総主教は、教皇からの書簡を受け取ると、グリゴリウスに対する誹謗中傷に驚き、それを全く信用せず、何の罪もないグリゴリウスがこれほど長い間牢獄に閉じ込められていることを嘆いた。　そこで彼らは急いで、自分たちを代表して名高い人物たちをローマへ派遣した。皇帝はマルキアナという名の高官を一人、総主教はアンキラ、キジケ、コリネスの三人の司教と、コンスタンティヌスという名のハルトフィラクス[8115]を派遣した。

コンスタンティノープルからもシチリアからも派遣された使節たちは皆、聖グリゴリウスが投獄されてから2年目に、ローマに集まった。 しかし、マルキアヌスはローマまであと約18スタディオンという地点で重病に倒れ、誰もが彼の回復を絶望視し、同行していた司教たちは深い悲嘆に暮れた。かろうじて彼はローマに到着した。周囲の人々は彼を細心の注意を払って世話し、どの医師も彼を助けることはできなかった。 ——ある晩、マルキアヌスが滞在していた家（ ）の前を、聖グリゴリウスによって娘が癒やされたあの女性が通りかかった。使用人たちの泣き声を耳にした彼女は、何のために泣いているのかと尋ねた。

[8115] ハルトフィラクスとは「文書保管官」を意味する。これはコンスタンティノープル総主教のもとで務める特別な役職の名称であり、その職務には、とりわけ教会法上の裁判も含まれていた。

「それは」と彼らは答えた。「私たちの主人が死にかけているからです。」

「もしあなたがたが、ご主人様を生き延びさせ、健康に戻したいのなら」と彼女は言った。「私についてきてください。一言で彼を癒やす医師をお見せしましょう。その医師は、この町で多くの人を癒やしてきました。彼のもとを訪れて、癒やされずに帰った病人は一人もいません。」

奴隷たちは彼女の言葉を信じ、主人を寝台ごと抱え上げ、その女性の後を追って運んだ。マルキアヌスは、激しい高熱に襲われ、意識を失ったまま横たわっていたため、自分に何が起きているのか全く気づいていなかった。聖グリゴリウスがいる牢屋まで彼らを連れて行くと、彼女は言った。

「ここに、一言で病を癒やすあの医師がいます。」

奴隷たちは主人を牢屋に運び込み、グリゴリウスの足元に寝かせ、涙ながらに病人に癒やしを与えてくれるよう懇願した。聖人は二度マルキアンの名を呼んだが、彼は何も答えることができなかった。聖人は涙を浮かべながら病人の手に手を置き、すると彼はたちまち眠りについた。それまでは何日も眠れていなかったのだ。　真夜中、使用人たちが彼の元へ近づき、触れてみると、彼には微熱さえ見られず、彼らは神に感謝した。　夜が明け、聖人が早課を歌い始めると、マルキアンは目を覚まし、すっかり元気になって起き上がった。彼は自分がどこにいるのか理解できなかったが、グリゴリウスを見て彼だと気づき、聖人の祈りによって病が癒やされたことを悟ると、その足元にひれ伏した。　昼になると、マルキアノスの同行者である司教たちが彼を見舞いに来たが、家にはいなかった。彼がグリゴリオスのいる牢獄に連れて行かれたことを知ると、彼らはそこへ向かい、マルキアノスが元気な様子で座り、グリゴリオスと会話を交わしているのを見て、驚嘆し、グリゴリオスにこう言った。

「父グリゴリウスよ、あなたは祝福されています。あなたは神の恵みと、人々の病を癒やす賜物に与ったからです。」

彼らは愛を込めてグリゴリウスに口づけをし、彼がどれくらいの間牢獄に閉じ込められているのか尋ねた。彼は「二年四ヶ月だ」と答えた。司教たちは、教皇が徹底的な調査も行わずに、罪のない男をこれほど長い間監禁し続けていることに、非常に不満を抱いた。　彼らは彼を牢獄から連れ出そうとしたが、彼は「裁判も教皇の命令もない限り、この監禁場所を離れることはできない」と言ってそれを禁じた。そこで司教たちは去り、すべてを教皇に報告した。教皇は彼らの言葉に非常に驚き、当惑した。

その後、教皇は、牢獄の近くにある聖ヒッポリュトス教会で公会議を開くよう命じた。公会議には、教皇を含む154人の司教に加え、数え切れないほどのローマの修道士や市民が集まり、教会には全員が入りきらないほどだった。サヴィヌスと共に告発者たちも公会議に連行された。

教皇は告発者たちへの尋問を始めた。

「あなたがたは、ご自身の司教に対してどのような告発をなすのですか？」と彼は尋ねた。

「我々は、司教様、彼が女性と罪を犯している現場を目撃しました」と、彼らは恥じることなく答えた。

「それを自分の目で見たのか、それともその女性自身がそう告げたのか？」と教皇は尋問を続けた。

「大司教様」と彼らは答えた。「我々は慣例に従って司教に拝礼しに部屋に入ったところ、そのベッドで眠っている女性を発見し、彼女を連れ出しました。そして彼女はすでにエクザルクや民衆の前で、実際に罪が犯されたことを自白しています。」

東方から到着した司教たちは、その女性自身を法廷に連行し、全公会議の前でグリゴリウスを告発させるよう要求した。しかし、告発者たちは反論した。

「彼女が憑依されているのに、どうして彼を告発できるというのか？　彼女が司教と罪を犯して以来、悪霊に苦しめられているのだ。」

しかし、その憑かれた女は公会議に連行された。二人が彼女を支えていたが、彼女は病のせいで正気を失っており、自分がどこにいるのかさえ自覚していなかった。

「法廷では」と教皇は中傷者たちに向かって言った。「悪霊に取り憑かれた者や狂人を尋問することはない。だが、お前たち哀れな者たちは、真実を語らなければならない。」

「我々はすでに真実を語った」と彼らは答えた。「さあ、被告本人を尋問してみよ。彼なら自分自身について何かを語るだろう。」

すると、聖グリゴリウスは心の底からため息をつき、こう言った。

「不義な証人たちが私に立ち向かう。私が知らないことについて、彼らは私に問い詰める。彼らは善に対して悪で報い、私の魂を孤児のようにする」（詩編 34:11–12）。

彼がこの詩篇の言葉を口にした途端、その女は悪霊に苦しめられて倒れ、聖人の足元を転げ回り、泡を吹きながら意識を失った。そこにいた者たちは皆、恐怖に襲われた。しかし、聖人は祈りを捧げた後、こう言った。

「我らの主イエス・キリストの御名によって、またここに集まった聖なる先人たちの御名によって、神の被造物から、不浄な霊よ、出て行け。そして、この女が正気を取り戻し、私について真実を語れるようにせよ！」

するとたちまち、その霊は女性を激しく揺さぶり、彼女から出て行った。女性は死んだように横たわっていたが、聖人は彼女の手を取り、起こした。まず、彼女に名前を尋ね、それからハルトフィラックスは彼女にこう問いかけた。

「自分の司教を知っているか？」

彼女はこう答えた。

「よく知っています。彼が街を巡り、貧しい人々や病人、孤児たちを訪ね、惜しみなく施しを配っている姿を何度も目にしてきました。私自身も、この罪深い身ながら、彼から何度も慈悲を賜りました。」

「あなたの司教は、かつてあなたに対して罪を犯したことはありますか？」と、彼らは尋問を続けた。

心の底からため息をつき、涙を浮かべながら、彼女は声を張り上げて叫んだ。

「力ある主の御名にかけて――彼は私を一度も知らなかったのです。ただ、あなたの前に立っているこの二人の悪辣な男、サヴィンとクリスケントが、大金を約束して、私にこの義なる夫を誣告させたのです！」　神は、私をこのような災難に陥れたこと、そして私の罪についても、彼らに報いられるでしょう。あの狡猾な誘惑者たちが私を囲み、私が彼らの言葉に屈して以来、私は大きな苦難の中にいます。悪魔が私に入り込み、今日に至るまで私を苦しめているのです。

そう言うと、彼女は聖人の足元にひれ伏し、涙ながらにこう訴えた。

「神のしもべよ、私を憐れんでください。そして、あなたの前で重く罪を犯したこの惨めな私を赦してください！私の主なる神にかけて誓います――あなたが私に赦しを約束してくださるまで、私はあなたの足元から立ち上がりません！」

聖人は彼女にこう答えた。

「罪を赦すのは私たちの仕事ではなく、ただ唯一の慈悲深き神のみがなさることです。私たちにできるのは、ただ神に罪の赦しを懇願することだけです。ですから、私は全善なる神に、あなたの罪を赦してくださるよう祈り求めましょう。」

司教は女性を地面から立ち上がらせた。公会議に集まっていた者たち全員に驚きと畏怖が襲い、皆、神を賛美してこう叫んだ。

「主なる神を賛美せよ。御自分のしもべを現し、偽りの誹謗を暴かれた主を！」

教皇とすべての司教たちは、中傷者たちに激しく憤り、彼らを叱責し恥をかかせた後、彼らを二つのグループに分けるよう命じた。すなわち、サヴィヌスとクリスケントスと共にいた聖職者たち

と、平信徒たちである（前者は計三十人、後者は八十人であった）。　無実の人に対して嘘をついたエウドキアについては、すでに神によって罰せられていたため――神の許しにより、悪魔が彼女を2年半もの間苦しめていた――裁判所は処罰を免除し、一方、悪行の加害者たちには追放の判決を下した。サヴィヌスはフラキアへ、　クリスケントはイスパニアへ、その他の聖職者たちは不名誉な形でラヴェンナへ追放され[8116]、そこで監禁と貧困の中で暮らすことを余儀なくされた。グリゴリウスの反対者である平信徒たちについては、裁判所は皇帝から派遣された高官マルキアヌスに引き渡した。彼はその後、彼らに厳しい刑罰を科すつもりで全員を牢獄に投獄したが、兵士たちが彼らを牢獄へ連行した際、彼らは皆泣き崩れ、尊者に向かって大声で叫んだ。

「キリストのしもべよ、私たちを憐れんでください。私たちを激しい苦しみへと引き渡さないでください。」

そして、極めて寛容な人柄であった聖グリゴリウスは、教皇と全公会議の前でひざまずき、涙ながらに敵を憐れみ、自分のせいで彼らを罰しないよう懇願した。そして、全員が涙を流してこう言うまで、彼は祈りと涙を止めなかった。

「もしあなたが彼らを許し、彼らのために祈るのなら、我々は抗う術がない。」

そして、警備兵たちに彼らを放っておくよう命じた。しかし、中傷者たちが皆、公会議の前に立っていたとき、突然、激しい嵐が吹き荒れ、大地が揺れ、空が暗くなり、闇がすべてを覆った。公会議に出席していた者たちは恐怖に駆られ、大地が裂けて自分たちを飲み込んでしまうのではないかと考え、両手を挙げて叫んだ。「主よ、憐れみたまえ」！　嵐は 収まり、明るさを取り戻すと、たちまち中傷者たちには神の懲罰が現れた。彼らの顔は皆、まるで煤のように黒くなり、さらにサヴィンとクリスケントに至っては、唇が下へ引き伸ばされてしまい、もはや口を閉じたり話したりすることができなくなった。かくして、神の怒りが彼らを襲ったのである。　この奇跡を目の当たりにした全参列者は、声を揃えてこう叫んだ。*「今、私は知った。主は御自身の油注がれた者を救い、聖なる天から、救いの御右の手の力によって彼に答えてくださる」*（詩編19:7）。

その後、教皇は中傷者たちにこう言った：

– 聞け、哀れな者どもよ！ 見よ、お前たちは、義にかなった聖なる人を誹謗中傷したために、古くから闇に覆われた父である悪魔のようになるに至った。それゆえ、私はお前たちに命じる。今日から、お前たち自身、そしてお前たちの子ら、さらにはお前たちの子孫のすべてが、永遠にアクラガンティウス司教とその後継者たちの奴隷となれ。　あなた方の子孫のうち、誰も司祭になることは許されず、ましてや聖職者となることさえ許されない。そして、あなた方の現在の不法な行いを知りつつも、あえてあなた方の血筋の者を司祭、助祭、あるいは聖職者に任命しようとする司教は、すべて呪いを受けることとなる。

この教皇の判決に、公会議全体が同意した。そして、聖人を誹謗した女は地面に倒れ込み、泣きながら司教たちに訴えた。

「聖なる父たちよ、どうか私を憐れんでください。私を女子修道院へお送りください。私はもう自分の町へ戻ることはできません。」

彼女の願い通り、彼女は聖殉教者キキリアの修道院に送られ、天使のような生活を送り、22年間にわたり絶え間ない善行に励み、すべての罪を悔い改めてこの世を去った。

グリゴリオスの無罪判決は、皆に喜びをもたらした。その間、第九時が訪れ、教皇は聖人に神聖な典礼を執り行うよう命じた。その執り行いの最中、多くの司教たち――とりわけ高名な者たち――は、聖霊の恵みがグリゴリオスに降り注ぐのを目撃した。　聖体礼儀の終了後、教皇の厚意により、皆に豊かな食事が振る舞われ、皆は神の栄光を称えて食べ、飲んだ。

[8116] ラヴェンナ――アドリア海に面し、アペニン半島の北東岸に位置する、港と要塞を備えた都市。ラヴェンナは現在も存続しており、同名のイタリア地方における主要な繁栄都市となっている。

その頃、ローマでは次の奇跡が起こった。　聖使徒ペトロとパウロの教会を飾るために選ばれた10本の巨大な木々が、ティブル川を[8117] 下って運ばれてきたが、川の中ほどで、あたかも何かに突き当たったか、あるいは鉄の錨で引き止められたかのように立ち止まり、川幅のほぼ全体を横切って塞いでしまったため、上流へ向かう船の通行を妨げていた。　市民たちは何度も力を合わせてこれらの木を引き上げようとしたが、目に見えない何らかの力に阻まれて、どうにもできなかった。ついに教皇自らが聖グリゴリウスに、その祈りによってこれらの木を動かすよう頼んだ。　聖人はその願いを受け入れ、大勢の人々に付き添われて川へと向かった。川へ向かう途中、彼は赤く燃え盛る炉を目にした。道から外れて、マントの裾に熱い炭をすくい取り、それを抱えて進んだ。　先述の木々にたどり着くと、炭の上に乳香を投げ入れ、祈りを捧げながら、燃え盛るマントの裾を香炉のように振りかざした。そのマントは、モーセの葦の束のように、燃えながらも燃え尽きることなく、燃え続けていた。　その後、彼は民に木々を岸に引き上げるよう命じた。すると、木々は異常に軽くなり、まるで自力で動いているかのように、何の困難もなく川から引き上げられた。その木々には次のような刻印が見つかった。*「五本の木は聖使徒ペトロに、五本は聖使徒パウロに」*。

その後、教皇は再び司教たちを召集し、異端者エレウシウスは有罪判決を受けスペインへ追放された。一方、聖グレゴリウスは栄誉をもってアクラガントへ帰還を許されたが、彼はまずコンスタンティノープルへ向かい、そこで皇帝と総主教から相応の歓迎を受けた後、ようやくシチリアへ戻った。　アクラガントの住民たちは彼を盛大に迎えたが、聖人は異端者たちによって穢された教会や司教館に入ることを拒み、聖使徒ペトロとパウロの名を冠した美しく新しい教会を建立した。また、自身のための新しい司教館を構え、そこで長く暮らし、キリストの羊の群れを立派に牧した。

聖グリゴリウスは多くの教訓的な言葉を記し、奇跡も数多く行いました。そして、深き老齢に達してこの世の生涯を[8118] に終え、主キリストと共に永遠の天の命を受けました。主キリストに、世々限りない栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第4声：

聖霊の教会は、光り輝く輝きをもって導き、あなたの栄光ある眠りを明るく祝う、尊き父、至福のグリゴリイよ。

聖殉教者シシニオスの記念日

記念日：11月23日

聖殉教者シシニウスは、キジカの町[8119] の出身であった。彼はディオクレティアヌス帝の治世下、同町の統治者アレクサンドロスによって拷問を受けた。　キリストを告白したため、彼は野生の馬に縛り付けられ、容赦なく鞭打たれ、さらに鼻孔には強い酢を注がれました。彼は他にも数多くの拷問に耐え、集まった人々の前で偉大な奇跡を行われました。その後、彼は剣で首を刎ねられました。

[8117] テヴェレ川は、イタリア中部で最も重要な河川の一つであり、そのほとりにはイタリアの首都ローマが位置している。

[8118] 6世紀末または7世紀初頭。

[8119] キジクは、ギリシャのプロポンティス半島の一つにある都市である。

聖殉教者テオドロスの記念日

記念日：11月23日

聖テオドロスはアンティオキアの街に住み、商売を営んでいました。背教者ユリアヌス皇帝の命により[8120]、彼は次のような経緯で地元の地方長官によって拘束されました。

殉教者バビラやダフネ[8121]に眠る他の殉教者たちの聖遺骨が移送される際、聖テオドロスを含むキリスト教徒たちは、聖遺骨を運びながらダビデの詩篇の句を歌った。「*偶像に仕える者、偶像を誇る者たちは皆、恥じ入るがよい。すべての神々よ、主の前にひれ伏せ*」（詩編96:7）。

このため、聖テオドロスは捕らえられた。彼は木に吊るされ、肩を牛の腱で打たれ、鉄の鎖を嵌められて牢獄に閉じ込められた。　翌朝、ユリアヌスはエパルヒから、聖テオドロスがキリストのために耐えている拷問が、異教徒たちには非難と侮辱をもたらし、迫害されている者たち（キリスト教徒）には栄光と喜びをもたらしていることを知った。そこで、神を憎む者は、聖テオドロスを牢獄から釈放するよう命じた。　聖テオドールは、自身が耐えた残酷な拷問について問われると、最初はわずかな痛みしか感じなかったと語った。　その後、ある人物が現れ、雪のように白い香りのよい布で彼の顔の汗を拭き取りながら、勇気を奮い立たせるよう命じた。そのため、処刑人たちが拷問を中断したとき、聖人は喜ぶどころか、痛みを感じ始め、再び拷問を受けたいと願うようになった。

そして実際、拷問者たちは、聖テオドロスの元へやって来て彼を励ましている天使を目撃していた。

不信心な皇帝ユリアヌスは、その残虐行為のゆえにペルシャとの戦争中に死をもって罰せられ、聖テオドロスは喜びのうちに主のもとへ帰った。

- 同日、聖アレクサンドル・ネフスキー公の記念日

12月7日

11月24日（旧暦）

聖大殉教者エカテリーナの生涯と殉教

記念日11月24日

不敬虔なローマ皇帝マクシミヌスの治世下[8122]、アレクサンドリアの街[8123]には、王家の出身であるエカテリーナという名の乙女が住んでいた[8124]。彼女は並外れて美しく、その英知で知られていた。　わずか18歳の若さでありながら、エカテリーナは、ホメロス、ウェルギリウス、アリストテレス、プラトンなど、あらゆる異教の著作家や古代の詩人、哲学者たちの著作を完璧に習得していた。　エカテリーナは古代の賢人たちの著作に精通していただけでなく、アスクレピオス、ヒポクラテス、ガレノスといった著名な医師たちの著作も研究し、　さらに、彼女は雄弁術や弁証法のすべてを

[8120] ユリアヌス・アポステートは361年から363年まで在位した。

[8121] ダフナは、アンティオキアの郊外である。

[8122] マクシミヌスは306年から313年まで在位した。

[8123] アレクサンドリア――エジプトの都市で、ナイル川の西支流のほとりに位置する。紀元前331年にアレクサンドロス大王によって建設された。

[8124] エカテリーナは、その民族的出自からしてアレクサンドリアのギリシャ人に属していた。これは、彼女の伝記に関する最も古い記録から推測できる。また、この大殉教者の名前そのものもギリシャ語由来である（常に清らかな者）。エカテリーナという名は、すでに多少変形された呼称である。

習得し、多くの言語や方言も知っていたため、誰もが彼女の学識と知識に驚嘆した。　多くの富裕層や名門の者たちが彼女に求婚し、その目的で彼女の母親のもとを訪れました。母親は、当時マクシミアヌスによって信者たちに対して行われていた残酷な迫害を理由に、信仰を隠していた秘密のキリスト教徒でした。　親族や母は、父の王位継承権が他人の手に渡り、その結果、彼らがその継承権を永久に失うことのないよう、カテリーナに結婚するよう頻繁に勧めた。　しかし、エカテリーナは賢明な乙女として、生涯を通じて処女の清らかさを守ることを心に固く決めていたため、結婚を極めて望んでいなかった。やがて親族たちがエカテリーナに結婚を強く勧め始めたとき、彼女はこう言った。

「もし私が結婚することを望むのなら、私が、ご存知の通り他のどの娘たちよりも優れているという、あの四つの資質を兼ね備えた若者を私に見つけてください。そうすれば、私は彼を夫として選ぶことに同意します。しかし、何か一つでも私より劣り、私より身分の低い男性と結婚することなど、私は望みません。」　さあ、至る所を探し回って、家柄、富、美貌、そして知恵の点で私に匹敵するような若者がいないか探してみてください。これらの資質のどれか一つでも欠けている若者は、私にはふさわしくありません。

エカテリーナの家来たちは、そのような若者が見つからないことを悟り、王子のほか、彼女に求婚する他の貴族たちも、彼女と結婚すればさらに高貴で裕福になれるだろうが、美しさと知恵の点では誰も彼女に及ばないと指摘した。それに対し、エカテリーナはこう答えた。

「私は、学識において私と同等の者以外を、夫には望まない。」

娘の揺るぎない決意を見て、母はさらに別の手段を試すことを決意した。彼女は、街の外れの人里離れた場所に住む、敬虔で聖なる人物である自分の霊的指導者に助言を求めに行った。彼女はエカテリーナを連れて、その義人である男の元へ向かった。　その聖職者は、美しい少女の姿を目にし、彼女の謙虚ながらも賢明な言葉を耳にすると、彼女に天の王であるキリストについて教えることを決意した。

「私は知っている」と彼は彼女に言った。「ある驚くべき若者がいる。その方は、あなたのあらゆる才能において、あなたを比類なく凌駕しているのだ。　その方の美しさは太陽の光よりも明るく、その方の英知はすべての物質的・霊的な被造物を統べ治め、その方の宝の富は全世界に広がり、決して減ることはなく、むしろ分け与えるほどにますます増し加わっていく。そして、その方の高貴さは言葉では言い表せず、計り知れない。全世界に、その方に匹敵する者はいない。」

老人のその言葉に耳を傾けながら、エカテリーナは、彼が何かこの世の公爵について話しているのだと思った。彼女は戸惑い、表情を変え、老人に「あなたが話していることはすべて本当なのですか？」と尋ねた。

老人は、そのすべてが真実だと答え、さらに、その若者は他にも数えきれないほどの偉大な才能を備えていると付け加えた。少女は彼に尋ねた。

「あなたがそう称賛するその若者は、いったい誰の息子なのですか？」

老人は彼女にこう答えた。

「彼にはこの世に父はいない。しかし、最も高潔な家系の、至聖にして至清き聖母から、言葉では言い表せない超自然的な方法で生まれたのだ。彼女は、その比類なき清らかさと聖性ゆえに、そのような御子を産むにふさわしい者とされた。　彼女は魂も肉体も不死であり、天よりも高い所に昇天し、そこではすべての聖なる天使たちが、万物の女王として彼女を崇拝している。

エカテリーナは長老に尋ねた。

「あなたがこれほど多くの奇跡について語っているあの若者を、私も見ることができるでしょうか？」

「もし私が言う通りにしてくれれば」と長老は答えた。「そのとき、あなたは彼のまばゆいばかりの御顔を拝むことができるでしょう。」

エカテリーナはこれに対し、こう言った。

「あなたは賢明な方であり、尊い長老であることがわかります。ですから、あなたの言葉が真実であると信じています。あなたがそれほど称賛されるお方にお目にかかれるのであれば、あなたが命じることは何でも実行する覚悟があります。」

すると、老僧は、神聖な幼子を抱きかかえている至聖なる聖母マリアのイコンを彼女に手渡し、こう言った。

「これが、私があなたに多くの奇跡について語ったお方の、処女であり母である方の御姿です。この御像を自宅に持ち帰り、部屋の扉を閉めて、マリアという御名を持つこの処女に、畏敬の念を持って熱心に祈りを捧げなさい。そして、御方が御子をあなたに示してくださるよう、彼女に懇願しなさい。」　もしあなたが信仰をもってそのように祈れば、彼女はあなたの祈りを聞き入れ、あなたの魂が慕うお方にお目にかかれるよう、恵みを与えてくださることを私は確信している。

そこで、乙女エカテリーナは聖なるイコンを手に取り、家に戻り、夜になって自分の部屋にこもり、長老に教えられた通りに祈り始めました。　長い祈りの最中、エカテリーナは疲れから眠りに落ち、幻視の中で、聖なるイコンに描かれていた通りの姿――輝かしい光に包まれた聖なる幼子と共にいる天の女王――を目にした。エカテリーナは幼子の御顔を見ることができなかった。幼子は彼女から顔を背け、御母の方へと向けていたからである。　キリストの姿を見ようと、エカテリーナは反対側から近づいたが、キリストはそこからも彼女から顔を背けた。これが三度繰り返された。その後、エカテリーナは聖母が御子にこう言うのを聞いた。

「わが子よ、このあなたのしもべエカテリーナを見てください。彼女はなんと美しく、善良なことでしょう。」

すると、幼きキリストは聖母にこう答えられた。

「いいえ、この少女はひどく闇に覆われ、あまりにも醜いため、私は彼女を見ることができません。」

すると、至聖なる聖母は再び主に向かってこう言われました。

「この乙女は、すべての哲学者よりも賢くないでしょうか？　その富と家柄の高貴さにおいて、他のすべての乙女たちを凌駕していないでしょうか？」

しかし、キリストはこれに対しこう答えられた。

「再び申し上げます、わが母よ。この乙女は正気を失っており、貧しく、容姿も醜い。彼女が不義を改めるまでは、私は彼女を見ようとはいたしません。」

これに対し、至福の主の母は彼にこう言った。

「お願いです、わが最も愛しい子よ、あなたの被造物を軽んじないでください。むしろ、彼女を悟らせ、あなたの栄光を享受し、すべての天使たちが仰ぎ見たいと願う、あなたのまばゆいばかりの、至高の御顔を仰ぎ見るために、彼女が何をすべきかを教えてあげてください。」

すると、キリストはこう答えられた。

「彼女を、そのイコンを授けた老人のもとへ行かせなさい。そして、彼が命じることを行わせなさい。そうすれば、彼女はわたしを仰ぎ見、わたしの御前で恵みを得るであろう。」

これらすべてを見て、聞いて、エカテリーナは眠りから覚め、その幻に驚嘆した。　朝になると、彼女は数人の侍女を連れて聖なる長老の修道室へ行き、涙ながらに彼の足元にひれ伏して、その幻視について語り、彼女が切望する花婿であるキリストを仰ぎ見るために何をすべきか、教えてくれるよう懇願した。

尊い長老は、世界の創造や始祖アダムが造られたことから、主キリストの地上への再臨に至るまで、真のキリスト教信仰のあらゆる奥義を彼女に詳しく教え、また、義人たちの言葉では言い表せない天国の栄光や、罪人たちが受ける数え切れないほどの果てしない苦しみについても語った。　賢明で、神に啓発され、真理と救いを渇望していた乙女として、エカテリーナはまもなくキリスト教の

教えのすべてを理解し、心からイエス・キリストを信じ、その同じ長老から聖なる洗礼を受けた。その後、長老は彼女に、最初の夜のように聖母マリアが再び現れるよう、熱心に祈るよう命じた。

こうして、古き人（コロサイ3:9参照）を脱ぎ捨て、霊の刷新の衣をまとい、エカテリーナは自宅に戻り、 が眠りにつくまで、食事を摂ることなく、一晩中涙ながらの祈りを捧げた。 すると、彼女は再び、神聖な幼子を抱いた天の女王を目にした。幼子は、深い慈愛と柔和さをもってエカテリーナを見つめていた。聖母は御子に尋ねた。

「わが子よ、この乙女は御心に適うか？」

主は御自身の聖母にこう答えられた。

「大いに喜ばしい。彼女は今や美しく栄光に満ちており、かつてのように醜く不名誉な者ではない。今や彼女は豊かで英知に満ちており、当初のように貧しい者ではない。今、私は彼女を愛しており、彼女を私の朽ちることのない花嫁として迎え入れたいと願うほど、彼女は私に喜ばしいのだ。」

すると、エカテリーナは地面にひれ伏し、こう叫びました：

「尊き主よ、私はあなたの御国を見るに値しません。どうか、せめてあなたのしもべたちと共にいさせてください。」

その時、至聖なる聖母は少女の右手を握り、御子にこう言われました。

「わが子よ、彼女に婚約の指輪を与えなさい。彼女との婚約のしるしとして、彼女を御自身の花嫁とし、御国にふさわしい者とならせてください。」

すると、主キリストはエカテリーナに最も美しい指輪を授け、こう言われた。

「見よ、今、私はあなたを、朕の朽ちることのない永遠の花嫁として選ぶ。それゆえ、この結びつきを何としても破ることなく、細心の注意を払って守り抜き、決してこの世のいかなる花婿も選んではならない。」

主キリストのこの御言葉の後、幻は終わった。乙女は目を覚まし、右手に素晴らしい指輪がはめられているのをはっきりと見た。彼女は心の中にこれほどの喜びと歓びを感じ、その時から彼女の心は完全に神の愛に委ねられた。 そして彼女にはこれほど大きな変化が起きたため、もはや地上の何事についても考えることはなく、ただ昼も夜も絶えず、愛する花婿について思いを巡らせ、彼だけを願い、目覚めている時も眠っている時も、彼のことだけを学び続けた。

エカテリーナがキリスト教に改宗して間もなく、不敬虔な王マクシミンがアレクサンドリアにやって来た。彼は、まるで無感覚で無言であるかのように、自らの無情な神々に対して理性を超えた嫉妬を抱いていた。 これらの神々を称える盛大な祭りを催そうと、彼は周辺の国々や都市に、すべての臣民が集まって生け贄を捧げ、国民全体で神々を称えるよう命じる布告を出した。 数え切れないほどの人々が集まり、それぞれが犠牲として持てるものを捧げた。ある者は牛を、ある者は羊を、そしてそれができない者は鳥やそれに類するものを捧げた。 忌まわしい祝祭の日が訪れると、王は百三十頭の子牛を犠牲として捧げた。諸侯や高官たちはそれより少ない数を捧げ、各人ができる限りのものを犠牲として捧げた。街全体は、屠殺される動物たちの悲鳴と、捧げられる生け贄の悪臭で満たされ、 至る所で恐ろしいほどの混雑と混乱が生じ、空気は悪臭を放つ煙で満たされていた。こうした事態が繰り広げられている最中、敬虔で最も美しいエカテリーナは、人間の魂を破滅へと誘うこのような誘惑を目の当たりにし、彼らの滅びを嘆き、心に深い傷を負った。 神聖な熱意に燃え、彼女は数人の奴隷を連れて、狂信者たちが生贄を捧げていた神殿へと向かった。彼女が入り口に立つと、皆が彼女に視線を注いだ。というのも、彼女は並外れた美しさを放っており、それは彼女の内面的な心の美しさを物語っていたからである。 彼女は王に、非常に重要な言葉を伝えたいと告げさせた。王は彼女に自分のところへ来るよう命じた。王の前に立ったエカテリーナは、まず王に頭を下げて相応の敬意を表し、それからこう言った。

「王よ、あなたが悪魔たちに陥れられている誘惑に気づいてください。あなたは、朽ち果て、感覚のない偶像を神として崇め、それらに仕えています。そのような忌まわしいものに拝跪するほど盲目であり、狂気であるとは、実に恥ずべきことです。 せめて、あなたの賢者ディオドロス[8125]の言葉を信じてください。彼はこう言っています。「あなたの神々はかつて人間であり、不義のうちに生涯を終えましたが、生前に成し遂げたいくつかの行いのゆえに、人々は彼らに記念碑や像を建てたのです。」　しかし、後の世代は、先祖たちが単に追憶のためにこれらの記念碑を建てたという意図を知らず、その物自体が敬虔でふさわしいものだと考え、それらを神として崇拝し始めたのである。そして、著名なヘロネのプルタルコス[8126]も、これらの神々を嫌悪し、軽蔑していた。 王よ、どうかこの教えに従い、これほど多くの魂の破滅の原因とならないでください。さもなくば、あなたは永遠の苦しみを受けることになるでしょう。唯一の真の神、　、永遠に存在し、初めからあり、不死なる御方を知ってください。その御方は、世の終わりに、私たちの救いのために人間の肉体を身にまとわれました。　王たちはこの御方によって統治し、国々はこの御方によって治められ、全世界はこの御方によって支えられている。御方のただ一言によって万物は創造され、その存在を維持している。この全能にして至善なる神は、あなた方のような犠牲を求めず、罪なき犠牲の屠殺によって喜ばれることもない。ただ、私たちが御方の戒めを堅く、揺るぎなく守ることを求めておられるだけである。

これを聞いて、王は激しい怒りに燃え上がり、最初は長い間沈黙を守った。しかしその後、彼女の言葉に答える術を失い、こう言った。

「この数日間は、我々に犠牲の儀式を執り行わせてくれ。その後で、お前の言葉を聞こう。」

神に背く祝宴を終えた不敬虔な王は、聖エカテリーナを王宮の御殿へ連れてくるよう命じ、彼女にこう言った。

「お嬢さん、お前は誰なのか、そして先ほど我々に言ったことを繰り返してみよ」

「私は王の娘です」と聖女は答えた。「私の名はエカテリーナです。」　かつて私は深い愛をもって様々な学問に励んでいました。修辞学や哲学、幾何学、その他の学問を学んでいましたが、今ではこれらすべてを、虚しく無益な営みとして軽蔑し、主キリストの花嫁となりました。主は御自身の預言者イザヤを通してこう言われました。

「*その賢者たちの知恵は滅び、その知性ある者たちの知恵は失われる*」（イザヤ書 29:14）。

王は彼女の言葉と並外れた知性に驚嘆したが、それ以上に彼女の驚くべき美しさに心を奪われ、彼女は人間の両親から生まれたのではなく、自らが崇める神々によって生み出されたのだと考えた。　この言葉も筆舌に尽くしがたいほどの美貌を持つ乙女が、この世の者から生まれたなどとは、かろうじて信じつつも、彼はその美しさに圧倒され、恥知らずな眼差しで彼女を見つめながら、誘惑的な言葉を口にし始めた。しかし、聖女は彼の不義な思惑を見抜き、こう言った。

「あなたがたが神として崇める悪魔たちは、あなたたちを惑わせ、無意味な情欲へと誘い込んでいる。私は自分を土と塵だと考えている。　神は私を御自身の姿と似姿に造り、人々が創造主の英知に驚嘆するように、このような美しさを私に授けてくださったのです。創造主は、これほど取るに足らず儚い存在に、これほどの英知と美しさを授けることができたのです。

王は彼女のこの言葉に激怒し、こう言った。

「不滅の栄光を持つ神々について、そんな悪口を言うな。」

しかし、聖女は彼にこう反論した。

「もしあなたが、魅惑によって生じた闇と混乱を少しでも晴らしたいと望むのなら、あなたの神々の無価値さを理解し、真の神を知りなさい。その御名をただ一度口にするだけで、あるいは空中

[8125] ディオドロス・シシリアヌスは、その公平さと深い観察眼で知られた、著名な異教の著述家、歴史家、哲学者である。

[8126] プルタルコス・ヘロネアスは、著名なギリシャの歴史家である。ヘロネアは、中部ギリシャにある都市である。

に描かれた十字架一つだけで、あなたの神々は追い払われ、打ち砕かれるのです。もし望まれるなら、私の言葉の真実を明確に証明して差し上げましょう。」

王は、彼女の率直な言葉を見て、その言葉によって打ち負かされ、恥をかかされることを恐れ、彼女にこう言った。

「王が女性と語り合うのはふさわしくない。しかし、私は最も賢明な哲学者たちを集めて、お前と議論させよう。そうすれば、お前は自分の考えの無価値さに気づき、我々の教えを信じるようになるだろう。」

そう言うと、彼は聖なる乙女を厳重に警護するよう命じた。そして自ら直ちに、支配下のすべての都市へ次のような布告を送った。

「我、マクシミン王は、我が領内にいる最も賢明な哲学者および雄弁家たちに、喜びを告げる。 最も賢明なる神ヘルメス[8127] に仕える者、そして知恵の導き手であるミューズ[8128] を称える者たちは皆、私の元へ集まれ。この数日間に現れ、偉大なる神々を嘲笑し、そのすべての業を寓話や戯言と呼ぶ、ある極めて賢明な乙女の口を封じるためである。 さあ、皆の知恵を存分に発揮しに来てください。そうすれば人々は皆を称賛し、私からもその労に報いる報酬を授けるでしょう。

こうして、鋭い知性と雄弁さを兼ね備えた、選りすぐりの賢明な詩人五十名が集まった。王は彼らにこう語りかけた。

「神々をめぐる論争において、自らの論証をもって彼女を打ち負かすことができるよう、一人の乙女との立派な論戦に、細心の注意と周到さを尽くして備えよ。 若い乙女と対話することだからといって軽んじてはならない。まるで気骨ある敵や最も賢明な演説家と対峙するかのように、全力を尽くし、その知恵を示せ。なぜなら、私が慎重に探ったところによると、彼女の知恵は偉大なるプラトンその人を凌駕しているからだ[8129] 。 それゆえ、お願いである。彼女との論争において、あたかもその賢者自身と競い合うかのような熱意を示してほしい。もしあなたが勝利すれば、私は偉大な贈り物で報いる。しかし、もし敗北すれば、あなたは大きな恥を被り、贈り物の代わりに苦痛に満ちた死を迎えることになるだろう。

王のこの言葉に対し、最も名高く、最も賢明な一人の雄弁家がこう答えた。

「王よ、ご心配なさらぬがよい。私たちの相手は並外れて聡明かもしれないが、女性である以上、完全無欠の知恵を備え、雄弁の技を極めることはできない。彼女にただ我々の前に現れるよう命じさえすれば、これほど多くの哲学者や雄弁家たちを目の当たりにした途端、彼女はたちまち恥じ入るだろう。」

この哲学者の大言壮語を耳にした王は、学者たちの不敬で傲慢な言葉が、柔和さと神の英知に満ちたその乙女を打ち負かすだろうと期待し、安心して喜びを露わにした。王は直ちに彼女を自分の元へ連れてくるよう命じた。 また、キリスト教の乙女と異教の賢者たちとの論争を聞くために、大勢の民衆が集まった。しかし、使者がエカテリーナの元へ到着する前に、大天使ミカエルが天から彼女の前に現れ、こう言った。

[8127] ヘルメス（エルミウス）またはメルクリウスは、神々の使者であり、商業や演説家の守護神とされ、最も人気のある異教の神々の一人であった。 このように、リストラやリカオニアの都市に住む無知な民衆は、使徒パウロとバルナバの奇跡に深く感銘を受け、バルナバをゼウスと呼び、パウロをエルミウスと呼んだ。それは、彼が言葉において主導的役割を果たしていたからである（使徒行伝14:12）。

[8128] 科学と芸術の守護神とみなされていた女神たち。

[8129] プラトンは、紀元前4世紀の著名なギリシャの哲学者であり、同じく著名なギリシャの哲学者アリストテレスの同時代人かつ師である。プラトンは、名高く輝かしい哲学者ソクラテスの弟子である。 注目すべきは、プラトンが自身の哲学的見解、とりわけ神、世界の創造、死後の世界に関する教えにおいて、キリスト教の教えに非常に近い立場をとっていることである。

「恐れるな、主の乙女よ！　あなたの主は、あなたの知恵にさらに知恵を加えられ、あなたはあの五十人の弁士たちとの論争に勝利するだろう。そして彼らだけでなく、他にも多くの人々があなたを通して信仰を持ち、殉教の冠を受けることになる。」

そう言い終えると、天使は去っていった。

その間、王から遣わされた者たちがエカテリーナの元へやって来て、彼女を連れ出し、皆の目の前で王や哲学者たちの前に引き出した。すると、先ほどまで大口を叩いていたあの傲慢な哲学者が、高慢な態度で聖エカテリーナにこう言い放った。

「お前こそ、あのような厚かましさと狂気で、我らの神々を非難しているのか？」

「私です」と聖女は穏やかに答えた。「しかし、あなたが言ったような厚かましさや狂気からではなく、柔和さと真理への愛をもって、あなた方の神々は無に等しいと申し上げているのです。」

すると、哲学者は彼女にこう言った。

「偉大な詩人たちは、[8130] 、彼らを至高の神々と呼んでいる。それなのに、どうしてあなたは、自らその知恵を受け、その賜物の甘美さを味わった者たちに対して、これほどの大胆さで冒涜的な言葉を口にするのか？」

「私はあなた方の神々からではなく」とエカテリーナは答えた。「私の唯一の真の神から知恵を授かったのです。　神ご自身が知恵であり、命そのものであり、もし誰かが神を畏れ、その神聖な戒めを守るならば、その者は真の哲学者である。一方、あなた方の神々の行いや、それらに関する伝説は、嘲笑と非難に値するものであり、誘惑に満ちている。さあ、あなた方の偉大な詩人たちのうち、誰が、どのような言葉で彼らを神と呼んでいるのか、教えてほしい。

「最も賢明なホメロス[8131] です」と賢者は答えた。「ゼウス[8132] への祈りを捧げる際、彼は最初にこう述べています。『最も栄光あるゼウスよ、偉大なる神よ、そして他の不死の神々よ』」　また、輝かしいオルフェウス[8133] は、アポロン[8134] への感謝の言葉を捧げる際、こう言っている。「おお、ラトの息子よ、遠くから矢を放つ者よ！強き　フェーボスよ、すべてを見渡し、死すべき者と不死の者たちを統べる者よ、黄金の翼に乗って空を舞う太陽よ」。

「そうである」と、異教の賢者はその言葉を締めくくりながら言った。「最も古く、最も輝かしい詩人たちは神々を崇め、彼らを不死者であると明確に呼んでいた。それゆえ、あなたも誤って、十字架にかけられた方を神として崇拝してはならない[8135]；古代の賢者たちのうち、誰も彼を神と呼んだり認めたりしたことはなく、ましてや彼の存在すら知らなかったのだ。

聖エカテリーナはこう答えた：

――しかし、あなた方のホメロスでさえ、別の箇所で、あなた方の偉大なる神ゼウスについて、彼が狡猾で嘘つきの詐欺師であったと述べています。また、他の神々――ヘラ、ポセイドン、アテ

[8130] ここでいうのは、ホメロス、ウェルギリウス、その他の詩人たちのことである。一般的に、異教徒たちは自分たちの神々に関する伝承を、主に詩作から得ていた。

[8131] ホメロスは、紀元前に生きたギリシャの最も博学で著名な詩人の一人である。有名な叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』を著した。

[8132] ゼウス（あるいはユピテル）は、ギリシャ・ローマ神話の神であり、異教徒たちから天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。

[8133] オルフェウスは、異教徒たちから特別な敬意を払われていた伝説上の人物である。

[8134] アポロン、あるいはフェーブは、ゼウスとラトナの息子であり、最も崇敬されたギリシャ・ローマの異教の神の一人である。太陽と知性の啓蒙の神として、また社会の繁栄と秩序の神、法の守護者、未来を予言する神として崇められていた。

[8135] 異教徒たちにとって、キリスト教徒が「十字架につけられた者」を崇拝しているという事実は、とりわけ異様なものに映った。というのも、十字架での処刑は恥辱とみなされていたからである。それゆえ、使徒パウロも、十字架につけられたキリストについての宣教は、ギリシャ人（すなわち異教徒）にとっては愚かさに他ならないと述べている（Iコリント1:23）。

ナ[8136] ――が彼を縛り上げようとしたものの、彼は彼らから逃げ出して隠れることに成功したとも記されています。このように、あなた方の神々への軽蔑を招くような行為は、あなた方の書物の中に数多く記述されています。　しかし、あなたが「古代の教師たちのうち、誰一人として十字架にかけられた方を神として認めていなかった」と述べた以上、彼が真の神であり、不可解で、探究の及ばない、言葉に尽くせない天と地、海、　太陽、月、そして全人類の創造主であり、不可解で、探究の及ばず、言葉に尽くせない存在であることを証明するために、彼について深く掘り下げる必要はないはずですが、この真理に対する確信をさらに深めるために、あなた方の書物からの証言を引用しましょう。あなた方の最も賢明なシヴィラ[8137] が、彼の神聖な受肉と救いをもたらす十字架の死について、次のように語っているのを聞いてください：　「後の世に、ある方がこの地上に来られ、罪を除く肉体を身にまとう。神性の限りなき全能をもって、彼は癒えぬ情欲の朽ち果てを打ち砕き、不信仰な人々は彼を妬むだろう。そして彼は、あたかも死に値するかのように、高い場所に吊るされるであろう」。思い出してほしい。あなた方の賢者アポロニウス[8138] もまた、自らの意志ではなく、神の御力によって強制され、キリストを神であると告白している。「ただひとり――と彼は言う――天の御方が、私に彼を告白するよう促しているのだ。　その方は三つの光を持つ光であり、苦難を受けた神そのものであるが、神性そのものが苦難を受けたわけではない。なぜなら、その方にはその両方が備わっているからだ。すなわち、肉によれば死すべき者であり、同時に朽ちることのない方でもある。　そして、この方――十字架、屈辱、埋葬といった、人間からあらゆる苦難を耐え忍ばれた方――こそが神である」。アポロニウスは、御自身を産み出された方と同一の本質を持ち、同一の位格を持つ真の神について、このように語った。神は、すべての被造物の善の始まりであり、基盤であり、源である。彼は無から有へと世界を創造し、それを統治しておられる。父と同質である彼は、私たちのために人となり、地上で人々に教え、導き、恵みを与えながら生きられた。そして、古くからの裁きから私たちを解放し、かつての至福と喜びを授けるために、恩知らずな私たちのために死を受け入れられた。このようにして、御方は、私たちが堕落によって閉ざしてしまった楽園の門を、再び私たちのために開いてくださいました。三日後、御方は復活され、天に昇られ、そこから再び降りてこられ、御自身の弟子たちに聖霊をお遣わしになりました；　弟子たちは世界中に散らばり、御方の神性を宣べ伝えました。哲学者であるあなたも、この神性を信じるべきです。そうしてこそ、真の神を知り、慈悲深く慈愛に満ち、すべての罪人を招き、「*疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう*」（マタイ11:28）。それゆえ、せめてあなたの師であり神であるプラトン、オルフェウス、アポロニウスたちの言葉だけでも信じてほしい。彼らは、自らの意志に反してはいたものの、極めて明白かつ明確に、キリストを神であると認めたのである。

このように、そして他にも多くのことを、至賢なるエカテリーナは語り、哲学者を驚嘆させたため、彼は言葉を失い、彼女に返答する力もなかった。王は、彼が打ち負かされ、驚愕しているのを見て、残りの者たちに聖なる乙女との対話を始めるよう命じた。しかし、彼らはこう言って拒んだ。

[8136] ヘラ（ユノー）は、古代ギリシャ人やローマ人によって、彼らの主神ゼウスの姉であり妻として崇められ、女神の中で最も尊ばれていた。彼女は大地と豊穣の女神であり、結婚の守護神とされていた。ポセイドンは海の神とされていた。アテナは、主に軍事的な知恵の女神とされていた。　上記の箇所は、ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』から引用されたものである。概して、ローマ人やギリシャ人の信仰によれば、彼らの神々は人間と同様の情欲や犯罪的な傾向を持っていた。

[8137] 古代ローマでは、予言を行う女性たちを「シヴィラ」と呼んだ。彼女たちの予言は三冊の書物にまとめられ、最初はカピトリーノのゼウス（ユピテル）神殿に、その後パラティーノの丘にあるアポロ神殿に保管されていた。これらの「シヴィラの書」は、異教の世界で深く尊ばれていた。　キリスト教の著述家たちもその予言に注目し、そこにキリストの御国の到来をほのめかすいくつかの示唆を見出していた。

[8138] アポロニオス・ティアンスは、偽りの奇跡を行い、多くの信奉者を集めた異教の賢者である（3世紀）。特別な書物に記録された彼の格言は、特にアレクサンドリアで深く尊ばれており、そこではその書物が、ある異教の神殿の最も秘められた聖なる場所に保管されていた。

「我々は真理に抗うことはできません。なぜなら、我々のうちで最も博学な者が敗れて沈黙しているのですから、我々には何と言えましょうか？」

すると、激怒した王は、街の中心で最も激しい火を燃やし、すべての哲学者と弁論家たちを焼き尽くすよう命じた。　彼らは、王のそのような判決と命令を聞くと、エカテリーナの足元にひれ伏し、彼女に、唯一真の神に彼らのために祈ってほしいと懇願した。すなわち、神が、無知のうちに犯したすべての過ちを赦し、聖なる洗礼と聖霊の賜物を受けるにふさわしい者と認めてくださるよう願ったのである。

聖女は、至福と喜びに満たされ、彼らにこう言った。

「まことに、あなたがたは幸いであり、幸せです。なぜなら、闇を捨てて真の光を知り、死すべき地上の王を軽んじて、不死の天の王のもとへ歩み寄ったからです。　その御慈悲を堅く信頼し、不信心者たちがあなた方を脅かすその火こそが、あなた方にとって洗礼となり、天へと導く梯子となることを信じなさい。　この火の中で、あなたがたは肉と霊のあらゆる汚れから清められ、栄光の王の御前に、星のように明るく清らかに現れ、その愛する友となるであろう。

こう語り終えると、聖エカテリーナは一人ひとりに十字の印を結び、彼らは喜びをもって殉教へと向かった。兵士たちは彼らを火の中に投げ込み、こうして彼らは殉教の死を遂げた[8139]。夕方、敬虔でキリストを愛する人々が、聖なる殉教者たちの遺体を埋葬するためにやって来たが、彼らの遺体は全く無傷であり、火は髪の毛一本さえも焦がしていなかった。この奇跡によって、多くの異教徒が真理を知るよう改心し、聖なる殉教者たちの聖遺体は相応の敬意をもって埋葬された。

一方、マクシミンは、聖エカテリーナを自らの不敬虔な道へと誘い込むために、あらゆる手段を尽くすことを決意した。哲学的な論争では成功を収められなかったため、彼は甘言と狡猾さをもって彼女を誘惑し始めた。彼女を呼び寄せ、こう言った。

「私の話を聞いてくれ、愛しい娘よ。私は、子を慈しむ父として、偉大なる神々、とりわけ学問の守護神であるヘルメスに拝礼するよう、君に勧める。ヘルメスは、君にそのような哲学的才能を授けてくれたのだ。　もし君が私の提案に従ってくれるなら、私は神々を証人として、私の王国と権力を君と分かち合うつもりだ――そして君は私と共に、絶え間ない喜びの中で暮らすことになるだろう。

しかし、極めて賢明なエカテリーナは、彼の真意を見抜き、その狡猾さと諂いを見抜くと、彼にこう言った。

「王よ、その狡猾さを捨て、狐のようにはなるな。　私は断固として、一度きりで、あなたに告げた。私はキリスト教徒であり、キリストに身を捧げたのだ。私にとって、キリストこそが唯一の花婿であり、導き手であり、私の貞操を飾るものなのだ。王の紫の衣で私を惑わそうとしないでほしい[8140]――私はそれよりも殉教者の衣を選ぶ。

すると、王は再び彼女に言った。

「お前は、たとえ私の意志に反してでも、私に、お前の尊厳を汚し、その美しい体を無数の傷で覆わせようとしているのだ。」

「お望みのままになさい」と聖女は答えた。「一時的な辱めによって、あなたは私に永遠の栄光をもたらし、（私が願うように）大勢の人々が、私を通して私のキリストを信じるようになるでしょう。そして、あなたの宮殿から多くの人々が、私と共に天の聖なる宮殿へと向かうでしょう。」

聖女はそう預言した。そして、高みから彼女を見下ろしていた神は、その預言を成就させた。

すると、激しく怒った王は、エカテリーナから紫の衣を剥ぎ取り、裸の彼女を牛の腱で容赦なく打ち据えるよう命じた。家来たちは二時間にわたり、殉教者の肩や腹を激しく打ち続け、その結果

[8139] それは307年11月17日のことだった。

[8140] バグリアニツァ――紫色、血のような色に染められた長い衣で、古代において非常に高く評価され、王位の象徴と見なされていた。

、彼女の全身は傷だらけになり、姿は歪んでしまった。血は小川のように流れ出し、大地を赤く染めた。　しかし、聖女はこれらすべての苦難を、これほどまでの勇気と気高さで耐え抜いたため、それを見守っていた者たちは大きな驚きに打ちのめされた。その後、残酷な王はエカテリーナを牢獄に閉じ込め、彼女を滅ぼすための新たな拷問を思いつくまで、食べ物も飲み物も与えないよう命じた。

一方、王の妻であるアウグスタは、聖エカテリーナに直接会いたいと強く願っていた。彼女の美徳、知恵、そして勇気を耳にし、会ったこともないのに彼女を深く愛するようになったのである。ある時、夢の中で聖エカテリーナの姿を見た後、アウグスタの心は彼女への愛で燃え上がり、眠ることさえできなくなった。王がある用事で街を離れ、数日間帰還が遅れた際、王妃は自分の願いを叶える好機を見出した。　当時、宮廷には、皇帝の忠実な友人であり、軍司令官の地位にあるポルフィリーという名の貴族がいた。彼は分別のある人物として知られていた。皇后はこのポルフィリーに、自身の秘めた願いを打ち明けた。

「ある夜のことよ」と彼女は彼に言った。「私は夢の中で、白い衣をまとった多くの美しい若者や乙女たちに囲まれて座っているエカテリーナを見たの。彼女の顔からは、あまりにも強い輝きが放たれていて、私は彼女を直視することができなかった。　彼女は私を自分の隣に座らせ、私の頭に金の冠を授けてこう言ったの。『主キリストが、この冠をあなたに送られる』と。それ以来、私は彼女に会いたいという強い願いを抱き続け、心の安らぎを見出せないでいる。お願いだ、ポルフィリウス、どうか何らかの方法で、私が密かに彼女に会えるよう手配してほしい。

「女王よ、あなたの願いを叶えて差し上げましょう」とポルフィリウスは答えた。

夜が更けると、ポルフィリウスは二百人の兵士を率いて、女王と共に牢獄へ向かった。看守たちに金銭を渡すと、彼らは聖なる殉教者の元へ入った。女王が聖女を目にしたとき、神の恵みに満ちて輝いているその顔に、深く心を打たれた。　女王はすぐにエカテリーナの足元にひれ伏し、涙ながらに叫んだ。

「今、私は自分を幸せで至福に満ちた者だと感じます。なぜなら、あなたにお目にかかれるという恵みにあずかったからです。渇きを癒そうとする鹿のように（詩編41:2参照）、私はあなたにお目にかかりたいと限りなく願い、あなたの甘美な言葉を聞きたいと切望していました。　今、願いが叶った以上、たとえ命や王国を失うことになっても、もはや悲しむことはありません。あなたにお会いできて、なんと私は幸せでしょう！全能の主にお身を委ね、主からこれほど偉大な賜物を注がれたあなたは、まことに至福であり、称賛に値する方です。

聖女は彼女にこう答えた。

「女王よ、あなたもまた幸いな方です。なぜなら、私はあなたの頭上に、天使たちの手によって高く掲げられた冠を見ているからです。三日後、あなたはキリストのために耐えるわずかな苦難の報いとして、その冠を受け取ることになるでしょう。それを通じて、あなたは永遠の統治のために、真の王のもとへと旅立つのです。」

すると、女王はエカテリーナにこう答えた。

「あなたが予言する苦しみは恐ろしいですが、それ以上に、私の夫が極めて残酷で非人道的なことを恐れています。」

「恐れることはありません」と聖女は彼女に言った。「キリストご自身があなたの助け手となってくださいます。主はあなたの心を強めてくださり、いかなる苦しみもあなたの魂には及ばないでしょう。ただ、あなたの肉体だけが、ここで少しの間、一時的に苦しむだけであり、その後、それさえも永遠の安息を得るのです。」

聖女がそう語り終えると、ポルフィリウスは彼女に尋ねた。

「キリストは、御自身を信じる者たちに何を与えてくださるのですか？　私もまた、キリストを信じ、その戦士になりたいと願っているのです。」

殉教者は彼にこう答えました。

「あなたはキリスト教の聖書について、何も読んだことも、聞いたこともないのですか？」

「幼い頃から」とポルフィリウスは答えた。「私は兵士の訓練に励んでおり、他のことには一切関心を払っていなかったのです。」

聖女は彼に言った：

「至福にして人愛に満ちた神が、御自身を愛し、御命令を守る者たちのために用意された恵みは、人間の言葉では言い表せないのです。」

すると、ポルフィリウスは計り知れない喜びに満たされ、キリストを信じるようになった。彼と共に、二百人の兵士と女王もまたキリストを信じた。そして皆、殉教者に敬虔に別れを告げて、その場を去っていった。

しかし、慈悲深く、人を愛するキリストは、御自身の聖なる花嫁を放置することなく、子を愛する父のように、彼女を顧みておられた。毎日、鳩が窓から飛び込んで来て、彼女に食べ物を運んできた。　ついに、善き救い主である私たちの主イエス・キリストご自身が、偉大な栄光とすべての天の軍勢に囲まれて彼女を訪れ、彼女の勇気をさらに強め、大胆さの霊で満たしてくださった。

「恐れるな、わが愛する花嫁よ」と主は彼女に言われた。「わたしは常にあなたと共にあり、いかなる苦しみもあなたには及ばない。あなたの忍耐によって、多くの人々をわたしのもとへ導き、その報いとして、朽ちることのない多くの冠に与かるであろう。」

そのような言葉で彼女を慰めると、主は姿を消された。

翌朝、王は法廷に腰を下ろし、エカテリーナを連れてくるよう命じた。彼女は、霊的な恵みと、ある種の至福の輝きに包まれて王のもとへ入ってきた。その美しさの輝きは、そばに立っていた者たちまでも照らし出したほどであった。　王は大変驚き、誰かが牢獄で彼女に食事を与えていたため、体が衰えず、顔の美しさも変わっていないのだと考え、それゆえに彼女を護衛たちに処刑させようとした。しかし、聖エカテリーナは、他の人々が無実の罪で苦しめられることを望まず、王に真実のすべてを語り、こう言った。

「王よ、知っておいてください。私にご飯を差し入れたのは、いかなる人の手でもなく、目に見えぬところで御自分のしもべたちを慈しんでおられる私の主キリストが、私を養ってくださったのです。」

王は、聖エカテリーナの並外れた美しさに驚嘆し、再び甘言とお世辞で彼女を説得しようと、こう言った。

「お前は、太陽のように輝く乙女よ、その美しさはアルテミスそのものを凌駕している[8141]；お前は支配するために生まれたのだ、わが娘よ。さあ、来て、私たちの神々にひれ伏し、犠牲を捧げなさい。そうすれば、私たちと共に統治し、喜びに満ちた人生を送ることができるだろう。お願いだ、苦しみによって、その輝かしい美しさを台無しにしないでほしい。」

「私は土であり、塵です」と聖女は答えた。「あらゆる美しさは、花のようにしおれ、夢のように、ほんのわずかな病気や老いによって消え去り、死後は完全に朽ち果ててしまうものです。ですから、王よ、私の美しさを気にかける必要はありません。」

この聖エカテリーナとの会話の最中、クルサデンという名の貴族――残酷で容赦のないキリスト教徒の迫害者――が、王への愛と好意を示そうとして、彼にこう言った。

「王よ、私は、この乙女を打ち負かすことのできる拷問を考案いたしました。　一つの軸に四つの木製の車輪を取り付け、その周囲に様々な鉄の棘を打ち付けるよう命じてください。二つの車輪は右回り、残りの二つは左回りに回転させ、その真ん中にこの乙女を縛り付け、回転する車輪が彼女の体を粉々に砕くのです。　しかしその前に、まずこれらの車輪をエカテリーナに見せよ。そうすれ

[8141] アルテミス――別名ダイアナ――は、ギリシャ人やローマ人に広く知られ、彼らから特別な崇拝を受けていた異教の女神である。（彼女は月の女神とされ、美しく、明るい狩猟の乙女として描かれていた）。

ば、彼女はそれを見て残酷な拷問を恐れ、お前の意志に従うだろう。もしそれでも彼女が以前のように頑なな態度を貫くなら――その時は、苦痛に満ちた死を遂げさせよ。

王はこの助言を気に入り、ハルサデンが語ったような車輪を用意するよう命じた。車輪が完成すると、聖女は拷問の場へ連行され、まず彼女を威嚇するために、その目の前で車輪を激しく回転させた。その後、拷問担当者は彼女にこう言った。

「ほら、お前のためにどんな拷問が用意されているか見ただろう！　神々にひれ伏さなければ、お前はそこで最も恐ろしい死を遂げることになる。」

しかし、これに対しエカテリーナはこう答えた。

「私はすでに何度も、キリスト教徒であり続けるという決意を表明してきました。ですから、皇帝よ、無駄に時間を浪費せず、お望みのままになさってください。」

拷問官は、エカテリーナを脅かしてキリストから引き離すことができないと悟ると、彼女を車輪に縛り付け、それを激しく回転させて、彼女を粉々に引き裂き、そのようにして最も恐ろしい死を遂げさせるよう命じた。　しかし、この拷問が始まった途端、突然天から天使が降りてきて、聖女を束縛から解き放ち、車輪を粉々に砕いた。その際、激しく砕かれた車輪は横へ飛び散り、多くの不信仰者を打ち殺した。この輝かしい奇跡を目撃した民衆は皆、声をあげて叫んだ。

「キリスト教の神は偉大なり！」

一方、王は怒りに満ちて陰鬱な表情を浮かべ、殉教者に対する新たな拷問を考案して狂乱していた。

この奇跡を耳にしたアウグスタ王妃は、宮殿から出てきて、王を非難し始めた。

「まことに、」と彼女は言った。「あなたは厚かましく、正気を失っている。生ける神に立ち向かうことを敢えてし、そのしもべを不当に苦しめているのだから。」

予期せぬこの言葉を耳にした王は、狂乱のあまり激昂し、いかなる獣よりも獰猛になった。聖エカテリーナを放っておき、彼はその怒りのすべてを妻に向けた。妻への自然な愛情さえも忘れ、彼は大きな箱を持ってくるよう命じ、それが動かないように錫で満たさせ、箱の蓋に釘を打ち込み、妻の乳房を箱と蓋の間に挟み込んで、それを押しつぶさせた。　そして拷問者たちは、聖女に言葉に尽くせないほどの苦痛を与えながら、恐ろしい　痛みを伴って乳首が引きちぎれるまで、それを締め付け続けた。一方、至福の聖アウグスタは、この凄まじい痛みに耐えながらも、真の神のために苦しんでいることを喜びとし、神に、御自身の恵み深い助けを授けてくださるよう祈り続けた。　乳首が引きちぎられると、血が川のように流れ出し、周囲の人々は皆、このような恐ろしく耐え難い苦痛に耐える彼女に同情を覚え、哀悼の意を表した。　しかし、容赦のない拷問者は妻を赦さず、剣で彼女の首を刎ねるよう命じた。彼女は、この判決を喜びをもって聞き、聖エカテリーナにこう言った。

「真の神のしもべよ、私のために祈ってください！」

「平安のうちに去りなさい」と聖女は答えた。「キリストと共に永遠に君臨するためです。」

こうして、祝福された王妃は、11月23日、城の外で斬首された[8142]。一方、総督ポルフィリウスは、夜間に彼女の遺体を回収し、尊厳をもって埋葬した。翌朝、ポルフィリウス自身は、キリストを信じる兵士たちと共に王の前に進み出て、こう言った。

「我々もまた、偉大なる神の兵士たるキリスト教徒です。」

これを聞く気力すらなかった王は、心の底からため息をつき、こう叫んだ。

「ああ、私は滅びた。あの素晴らしいポルフィリウスを失ってしまったのだから。」そして、他の兵士たちに向き直って言った。

[8142] 聖アウグスタ女王（またはヴァシリスサ）の記念日は、教会によって11月24日に祝われる。同日、教会は、キリストへの信仰を告白したために斬殺されたポルフィリウスと200人の戦士たちをも記念する。

「そして、わが愛すべき戦士たちよ、お前たちも惑わされ、先祖たちが信じていた神々を捨ててしまったのか。神々はお前たちに何をしたというのか。なぜ彼らを見捨てたのだ？」

しかし、彼らは彼に一言も答えなかった。ただポルフィリウスだけが彼に言った。

「なぜ頭には目もくれず、足に問いかけるのか？　私と語り合え。」

「お前は邪悪な頭であり、彼らの破滅の原因だ」とマクシミンは叫んだ。

そして、怒りのあまり言葉を続ける力もなく、彼ら全員の首を刎ねるよう命じた。こうして彼らはその生涯を終えた。このようにして、聖エカテリーナの予言が成就したのである。彼女は皇帝に対し、彼の宮廷の多くの人々が彼女を通じてキリスト・神を信じるようになると予言していたのである。

翌日、迫害者はエカテリーナを法廷に連行し、彼女にこう言った。

「お前は私に大きな悲しみと深い苦痛をもたらした。　お前は私の妻を惑わせ、私の軍勢の全戦力であった勇敢な軍司令官を滅ぼした。他にもお前を通じて多くの災いが私にもたらされたため、容赦なくお前を殺すべきであった。しかし、これほど美しく、賢明な乙女であるお前を滅ぼす気はないので、私はお前を許す。　さあ、ついに私の望みを叶えてくれ、わが最愛の者よ。神々に生贄を捧げよ。そうすれば、私はあなたを私の王妃とし、決してあなたを辱めることはなく、あなたの助言なしには何事も行わない。そして、あなたは私と共に、いかなる王妃も味わったことのないような喜びと至福の中で暮らすことになるだろう。

このこと、そして他にも多くのことを、そのお世辞上手な者は語り、キリストに選ばれた花嫁を誘惑したが、彼女の真の愛という強固な絆で結ばれていたキリストから、そのお世辞の言葉で彼女を引き離すことはできなかった。

甘言も、約束も、脅しも、拷問も、ダイヤモンドのように堅固な[8143] 聖なる乙女を自分の意のままに操ることはできないと悟ると、彼はついに決断を下した――城の外で剣によって彼女の首を刎ねることにしたのだ。　兵士たちはエカテリーナを捕らえ、斬首の場へと連行した。多くの男女がエカテリーナに付き添い、皆が涙を流し、これほど美しく、賢明な乙女が命を落とすことを嘆いた。彼女に従う高貴で気高い女性たちの多くは、涙ながらに彼女にこう語りかけた。

「最も美しく、最も輝かしいお嬢様！　なぜご自身に対してこれほど残酷で、甘美な人生よりも死を選ぶのですか？　なぜ、若さの花を時期尚早に、そして実りのないまま散らそうとするのですか？　このような不名誉な死を遂げるよりも、王の言うことを聞き、この世の恵みを享受するほうが、あなたにとって良いのではないでしょうか。」

「その無駄な嘆きは止めてください」と聖女は答えた。「むしろ、私が今、最愛の花婿であるイエス・キリスト――私の創造主であり救い主、殉教者たちの美しさ、冠、そして栄光そのものである方――にお目にかかっていることを喜んでください。主は私を、言葉に尽くせない天国の至福へと招いておられます。　私は主と共に、果てしない永遠の間にわたって統治し、喜びを享受するでしょう。ですから、私のことではなく――あなた自身のことを嘆きなさい。なぜなら、あなた方は不信仰のゆえに、果てしない苦しみをもたらす永遠の火へと落ちることになるからです。

そして、聖女が斬首の場へ連れて行かれたとき、彼女は次のような祈りを捧げました：

「主イエス・キリスト、わが神よ！　あなたが私の足を忍耐の岩の上に据え、私の歩みを導いてくださったことを感謝いたします。今、かつて十字架上で傷つけられたあなたの至聖なる御手を広げ、あなたへの愛ゆえにあなたに捧げられる私の魂をお受けください。　主よ、私が肉と血にできた者であることを思い出してください。そして、最後の審判において、残酷な拷問者たちが、無知のう

[8143] アダマント（ダイヤモンド）とは、他の石を削ったり切ったりしても、それによって損傷を受けることのないほどの強さを備えた石である。この名称は、教会文献において、信仰と性格の堅固さで名高い多くの聖人（特に教会の教父や教師たち）に与えられている。

ちに犯した私の罪を明らかにすることを許さないでください。　しかし、私があなたのために流すこの血でそれらを洗い清め、あなたのために苦しみの中で傷つき、剣によって切り刻まれたこの肉体が、私の敵や迫害者たちには見えないものとなるようお導きください。　主よ、あなたの高みから、ここに立つ人々を見下ろし、あなたの知恵の光をもって彼らを導いてください。また、私を通してあなたの聖なる御名を呼び求める者たちの願いを、益となるよう叶えてください。そうして、あなたの偉大さが永遠にすべての人々によって讃えられますように。

祈りを終えると、聖女は処刑人にこう言いました。

「命じられたことを終えなさい。」

その時、戦士は剣を振り上げ、エカテリーナの尊い首を切り落とした[8144]、すると傷口からは血の代わりに乳が流れ出た。　その尊い遺骸は、その光景を目撃した恵まれた信者たちの目の前で、直ちに聖なる天使たちによって運び去られ、シナイ山へ移された[8145]。これは、父と聖霊と共に唯一の神性において永遠に君臨されるキリスト・神の栄光のためである。アーメン[8146]。

[8144] そして今なお、アレクサンドリアでは、敬虔な巡礼者たちに大殉教者エカテリーナの殉教地が示されており、この場所は地元のキリスト教徒たちから常に特別な畏敬の念をもって崇められてきた。　十字架にかけられた主への信仰に目覚めたアレクサンドリアの市民の中には、伝承によれば聖大殉教者の尊い首が切り落とされたとされる小さな大理石の柱を、現在に至るまで保存している者もいる。　この柱は現在も、アレクサンドリアの聖サヴァ正教会修道院で敬虔に保管されており、同聖人の名に捧げられた教会の左側の端に立っている。

[8145] 長い間、聖エカテリーナの聖遺骨は地中に埋もれたまま行方不明となっていましたが、200年余りが経過してからようやく発見されました。その経緯は次の通りです。　ある時、キリスト降誕後6世紀の30～40年頃、アレクサンドリアから800ヴェルスト離れた場所に、ビザンツ皇帝ユスティニアヌスによって設立されたシナイ修道院の修道士たちは、 天から奇跡的な啓示を受け、聖大殉教者エカテリーナの聖遺骨が彼らのすぐ近くに朽ちることなく安置されていることを知らされ、これに伴い、シナイ修道院に新しく建てられた教会へそれを移すよう命じられた。敬虔な長老たちは喜び勇んで、修道院からそう遠くない場所に示された山へと急いだ。　その高地は1200サジェンにも達していたが、宗教的な熱意に駆られ、神の恵みに支えられた隠者たちは、道のりのあらゆる困難を乗り越え、やがて頂上に到達した。そこで彼らは、聖大殉教者エカテリーナの聖遺体が朽ちることなく、芳香を放っているのを発見した。　これらをここに安置できたのは、天使たちだけだった。――聖エカテリーナの聖遺骨は完全な形ではなく、頭部と左腕のみが発見された。キリストの称賛すべき殉教者である彼女の朽ちない遺体のこれらの部分は、当時、厳かにシナイの修道院へ移送され、今なお、その古さにおいて特筆すべきこの修道院に安置されている。　1689年、ロシア皇帝ピョートル大帝は、聖エカテリーナの聖遺物のために、シナイ修道院に銀製の聖遺物箱を寄進した。しかし、この寄贈品は聖具室に保管されている。　「イスラム教徒の貪欲さや、旅行者による噂が広まることへの恐れ――」と、シナイを訪れたことのある著名なポルフィリー司教は述べている。「それゆえ、シナイの修道士たちはこの宝物を隠すようになったのである」。　現在、大殉教者エカテリーナの聖遺骨は、シナイ修道院の「主の変容」に捧げられた大聖堂の祭壇内、祭壇の右側に置かれた小さな大理石の聖遺物箱に収められている。　キリストの花嫁である聖人の頭部は、今や金の冠で覆われており、ある指には、聖エカテリーナと天の花婿であるキリストとの神秘的な婚約を記念して、貴重な指輪がはめられている。　聖遺物箱の中では、聖なる遺骨は銀の托盤の上に安置されており、その下には聖遺物の芳香が染み込んだ厚い綿の層が敷かれています。また、修道者たちの礼拝のために聖遺物が持ち出される際には、他の多くの聖遺物と共に、このために特別に用意されたテーブルの上に、聖堂の中央に置かれます。　遠方からの参拝者に対しては、聖カタリナの聖遺物はいつでも公開されていますが、修道者や近隣からの参拝者に対しては、主の祝日の早課が終わった後にのみ公開されます。

[8146] 聖エカテリーナの記念日は、正教世界全体で特別な敬虔さと厳粛さをもって祝われています。彼女に敬意を表して教会が建てられ、多くの修道院が彼女の名前を冠しています。また、正教徒や他教派のキリスト教徒の女性のうち、非常に多くの人が彼女の名を名乗っています。 この殉教者の名声は、古代においても偉大でした。386年にベツレヘムに修道院を設立した著名なローマ人女性パウラは、その修道院内に殉教者　エピファニオス聖人はパウラに、エカテリーナがキプロス島のサライナという町、すなわち彼の司教区で生まれ、そこからアレクサンドリアへ移り、エルサレムの聖地を巡礼し、ベツレヘムの馬小屋の前にて貞潔の誓いを立て、キリストから指輪を授かったと語った。　西洋では、彼女は学生、特に哲学を学ぶ若者たちの守護聖人とされている。この聖なる大殉教者は、一部の異教徒、例えばザバイカルのモンゴル・ブリアート人らからも崇敬されている。

トロパリオ、第4調：

徳を太陽の光線のようにして、不信仰な賢者たちを照らし、また、夜を歩く者たちにとってのまばゆい月のように、不信仰の闇を追い払い、女王[8147] を確信させ、さらに迫害者をも糾弾した、神に召された花嫁、祝福されたエカテリーナよ： 汝は願いにより、天の宮殿へと昇り、麗しき花婿キリストのもとへ赴き、彼から王冠を授けられた。今、天使たちと共に御前に立ち、汝の尊き記念を祝う我らのために、彼に祈りを捧げたまえ。

コンダク、第2調：[8148]

尊き神聖なる御姿よ、殉教者を愛する者たちよ、今こそ、全知のエカテリーナを崇め、その御姿を掲げよ。彼女はキリストの三つの試練において福音を宣べ伝え、蛇を踏み砕き、弁論家たちの知性を制したからである。

聖大殉教者メルクリウスの殉教

記念日：11月24日

不敬虔なローマ皇帝デキウスとワレリアヌス[8149] は、自らの諸侯や貴族たちを召集し、偽りの神々への崇拝を広め、聖なるキリスト教の信仰を根絶やしにすることについて協議した。そして、満場一致で合意に達し、彼らはカピトリーノの丘[8150] において、次のような勅令を発布した：

– ローマの王たち、無敵の征服者たち、永遠に尊ばれる者たち、偉大なる者たち、忠実なる者たち、デキウスとワレリアヌス、ならびに貴族たち： 我らは神々の恩恵と賜物を享受し、同時に、神々が敵に対して我らに授けてくださる勝利を喜び、さらに、気候の恵みを通じて神々からあらゆる種類の実りを豊かに授かっているため、神々を我らの恩人であり、共通の幸福をもたらす存在であると見なしている。 それゆえ、貴族たちとの協議を経て、我々は満場一致で、あらゆる身分の人々、自由民も奴隷も、軍人も非軍人もが、神々にひれ伏し、熱心に祈りを捧げながら、神々に犠牲を捧げるよう命じる。 もし、我らが総会議において発布したこの王命に敢えて背く者があれば、その者を縛り上げて牢獄に投じ、その後、様々な拷問に処すことを命じる。 もし悔い改めてこの命令に従うならば、我々は彼にそれに見合う栄誉を与える。しかし、もし反抗するならば、多くの拷問の末、剣で斬首するか、海に投げ込むか、あるいは鳥や犬に食わせるようにせよ。 とりわけ、キリスト教徒が一人でも見つかった場合は、このように処刑されなければならない。一方、我々の命令に従う者には、多大な栄誉と贈り物が与えられる。健やかでいられることを願う。

このような皇帝の勅令が発布されると、ローマ全土は騒然となった。というのも、この不敬虔な命令は街中に布告され、周辺の都市や諸国にも送られたからである。当時、ローマ帝国には蛮族

[8147] すなわち、マクシミアヌスの妻アウグスタのことである。

[8148] この大殉教者への礼拝や、彼女を称えて作曲された教会聖歌については、その起源は極めて古くまで遡ります。 9世紀には、著名なキリスト教聖歌作家であるテオファン・ニカイオスと、名も知れぬ修道士ヴァヴィルが、大殉教女エカテリーナを称える多くの聖歌を著し、それらは現在も正教会において、彼女の帰天の日である11月24日に歌われている。聖テオファンは、聖大殉教者を称えてカノンを著したが、その冒頭の一節には次のような考えが込められている。「エカテリーナを、歌をもって永遠に記念する」。

[8149] デキウスは249年から251年まで統治した。ヴァレリアヌスはそれより少し後（253～260年）に単独で統治した。本書の『聖人伝』では、彼がデキウスの治世の頃からすでに帝国の統治に関与していたと描かれている。

[8150] カピトリーノは、ローマ帝国の首都である古代ローマが広がる丘の一つに位置する、最高神ユピテルおよび女神ユノーとミネルヴァを祀る神殿である。この丘は神殿とともに主要な聖域であり、カピトリーノと呼ばれていた。

[8151] が反乱を起こしており、諸王は兵士を動員し、すべての都市の軍団にローマへ集結するよう命じていた。 そこで、メルクリウスが兵士として所属していた部隊も到着した。この部隊は「 マルテンセス」と呼ばれ、第一アルメニア[8152] から派遣されたもので、トリブヌス[8153] サトゥルニヌスの指揮下にあった。デキウス王が戦場へ出陣した後、ヴァレリアヌスはローマに残った。

ローマ人と蛮族との戦争中、両者の間で長きにわたる戦闘が繰り広げられていたとき、メルクリウスのもとに、偉大な人物の姿をした主の天使が現れた。白い衣をまとい、手に剣を握ったその天使は、彼にこう言った。

「恐れるな、メルクリウスよ。おののくこともない。私はあなたを勝利へと導くために、助けとして遣わされたのだ。この剣を受け取り、蛮族たちへと突き進め。そして彼らを打ち負かしたとき、あなたの主なる神を忘れるな。」

まるで恍惚状態にあるかのように、彼は現れた者をローマの貴族の一人と見なした。差し出された剣を受け取ると、彼は並外れた勇気を奮い起こして敵へと突進し、草の茎を刈り取るかのように敵を斬り倒した。 野蛮人の部隊を突き抜け、彼は野蛮人の王のすぐそばまで到達し、剣で王を斬り殺し、王と共に大勢の勇敢な戦士たちを打ち倒したため、剣は血で彼の手にべっとりとくっついてしまった。こうして野蛮人たちはローマ軍に打ち負かされ、敗走した。

そこでデキウスは、メルクリウスの並外れた勇気を知り、彼を呼び寄せ、豪華な贈り物で称えた上で、全軍の長に任命した。 デキウスは、敵が神々の助けによって打ち負かされたと考え、大いに喜び、兵士たちに多くの金を配って、一人ひとりを故郷へ帰した。そして自身はメルクリウスと共にローマへ向かう途中、各都市で盛大な宴を催した。 ある夜、軍司令官メルクリウスが眠っているとき、天使が前回と同じ姿で彼の元を訪れ、脇腹を突いて彼を起こした。起き上がって現れた者を見た彼は、恐怖のあまり言葉を失ったかのようだった。天使は彼に言った。

「メルクリウスよ！ 戦いの最中に私があなたに言ったことを覚えていないか？ 『見よ、あなたの主なる神を忘れてはならない。あなたは神のために苦難を受け、すべての聖徒たちと共に、神の栄光に満ちた御国で勝利の冠を受けるべきだからだ』」

そう言うと、天使は姿を消した。彼は我に返ると、神に感謝し始め、祖父や父から聞いていたキリスト教の信仰を思い出した。彼の父、ゴルディアンという名は、後に彼自身も所属することになる同じ連隊の兵士であり、よくこう言っていた。

「天の王の兵士である者は幸いである。なぜなら、天の御国において、その方から報いを受けるからである。この王は御言葉によって万物を創造され、生ける者と死んだ者を裁き、各人の行いに応じて報いを与えられるからだ。」

父のこの言葉を思い出し、天使の出現について深く思索を巡らせたメルクリウスは、心を打たれて泣き出し、嗚咽しながらこう言った。

[8151] ギリシャ人やローマ人は、異民族を「バルバロイ」と呼んでいた。この名称そのものが、言葉が理解できない人々を指している。ここでの「バルバロイ」とは、おそらくゴート族のことを指しており、デキウスはその後、彼らとの戦争中に戦死した。

[8152] アルメニア自体は、北はコルキス、イベリア、アルバニアと、西は小アジアと、南東および東はメディアとアッシリアと国境を接していた。 当初、この地はアッシリア人、メディア人、ペルシア人の支配下にあったが、その後、パルティア人とローマ人の間の争いの的となり、さらにローマ人とペルシア人の間の争いの的となり、交互にどちらかの支配下に置かれた。 *第一アルメニア*はエウクシノス海（黒海）の南岸東部に位置し、*第二*および*第三*アルメニアは南西に、*第四アルメニア*は第一アルメニアの南に位置していた。

[8153] トリブヌスとは、ローマにおける軍部隊長の呼称であり、現代の「大佐」と「中隊長」の中間に位置する。

「ああ、罪深い私よ！　まるで緑の木の一枝であった私が、枯れてしまった――今や、神を知るという根を失ってしまったのだ[8154]。」

彼がそう嗚咽しながら語っていると、王の侍従たちがやって来て、ある会議のためにメルクリウスを王の元へ呼び出した。メルクリウスは体調不良を理由に断り、王は会議を翌日に延期した。王はメルクリウス抜きでは何事も相談したくなかったからだ――それほど彼はメルクリウスを愛し、敬っていたのである。　翌朝、王はメルクリウスを丁重に招き入れ、ローマ帝国の利益に関わる事柄について彼と協議した。協議が終わると、王はメルクリウスにこう言った。

「さあ、一緒にアルテミスの神殿へ行き、彼女に生贄を捧げましょう。」

聖人は密かに王の目を盗んで、自分の住居へと向かった。すると、ある高官が王の前で彼を誹謗し、こう言った。

「偉大なる王よ、無敵の征服者よ、神々によって王位に選ばれた方よ！どうか寛大に私の言葉をお聞きください。あなたの王の右の手から栄誉を授かり、あなたの　な権威によって称えられ、高められたあの者が――彼は、あなたの権威のために偉大なる女神の神殿へ供物を捧げに来ませんでした。」

王は尋ねた。

「我らと心を一つにして、尊きアルテミスに供物を捧げようとしない者は、いったい誰か？」

顧問のカトゥルスは答えた。

「陛下の御恩により崇め上げられたメルクリウスこそ、我らの神々への崇拝を拒んでいるのです。」

王は言った。

「もしかすると、嫉妬から彼を誹謗しているのではないか？　私が自ら彼を試して、確かな証拠を得るまでは、お前の言葉を信じない。もしお前の言うことが事実でなければ、その誹謗の罪で多くの刑罰を受けることになるだろう。しかし、もしそれが真実であれば、神々および我が王国への忠誠に対し、我々から栄誉を授けられることになる。」

そう言うと、王は直ちにメルクリウスを丁重に招くよう命じ、彼が現れると、デキウスは言った。

「神々の助けを借りて敵を打ち破ったという理由で、あなたを私のすべての諸侯の頂点に据え、栄誉を与えたのは、他ならぬ私ではないか？　それなのに、なぜあなたは、私があなたに施したこのような恩恵に対して恩知らずな振る舞いをし、私の権威と命令を軽んじ、我々に忠実な者たちから聞いたところによれば、我々の神々に相応しい敬意を払わないのか。

キリストの勇敢な戦士は、使徒の言葉に従って、古い人とその行いを脱ぎ捨て、洗礼によって神に倣って造られた新しい人を身にまとい[8155]、大胆にこう答えた：

「あなたの栄光はあなたと共にありますように。私は、あなた方の無力な神々の助けではなく、私の神であるキリストの力によって敵に打ち勝ったのです。（しかし）あなたが私に与えたものは、私から取り戻してください。私は母の胎から裸で出てきたように、裸のまま去って行くのです[8156]。」

[8154] この表現は福音書から借用されたものである（ルカ23:31、ヨハネ15:1–6を参照）。これらの言葉において、聖メルクリウスは、父はキリスト教徒であったにもかかわらず、自分自身がこれまで異教徒のままであり、キリスト教の信仰による啓蒙を顧みてこなかったという考えを表明している。

[8155] エフェソ4:24。この表現は、洗礼を通じてキリストの恵みの力によって、聖メルクリウスの中に生じた思考と感情の変化を指し示している。かつての異教的な生活様式への執着に代わり、彼は今や、キリスト教的な自己犠牲の偉業を成し遂げる覚悟に満ちていた。

[8156] ここで聖メルクリウスは、多くの苦難に遭ったヨブ（ヨブ記1:21）の言葉を用いて、悪魔が神の許しを得て義人からすべての財産を奪った後、神の御心への献身を表明したその言葉を引用している。　その言葉の意味はこうだ。「私はこの世に何も持たずに生まれ、死ぬときにも、この世の富など何一つ必要としないだろう」。

そう言うと、彼は軍用ベルトと指揮官の服を脱ぎ捨て、大声で叫びながら王の足元に投げ捨てた：

「私はキリスト教徒だ！　皆、よく聞け――私はキリスト教徒だ。」

その時、デキウスは恐怖に襲われ、黙って聖人を見つめながら、その大胆な言葉と行動に驚き、さらにその美しい容姿にも感嘆した。というのも、聖人は背が高く、顔色は血色がよく、その眼差しそのものに勇気が輝いていたからである。その後、彼は聖人を牢獄に閉じ込めるよう命じ、こう言った。

「この男は自らの名誉の価値をわきまえていないが、不名誉と苦悩を味わえば、敬虔な考えに立ち返るだろう。」

聖人は牢獄へ連行される際、神を賛美し、感謝を捧げた。夜になると、再び主の天使が現れ、こう言った。

「勇気を出せ、メルクリウスよ。恐れるな。あなたが告白した主を信じなさい。そうすれば、主はあなたをあらゆる悲しみから救い出してくださる。」

メルクリウスは、この天使の現れによって大いに勇気づけられた。翌朝、デキウス王は法廷に座しており、メルクリウスが彼の前に現れると、こう言った。

「お前の愚かさゆえに、[8157] 、有罪判決を受けた者として法廷に立つという『栄誉』を勝ち取ったのだ。」

聖人はこう答えた。

「まことに、私の主のために、このような栄誉[8158] を受けることは、私にふさわしいことです。あなたはまもなく滅びるもの[8159] を受け取りましたが、私は永遠に続くもの[8160] を受け取るのです。」

王は言った。

「お話しください。あなたはどの家系で、どこの出身なのですか。」

聖人は答えた：

「私の家系と故郷について、もし知りたいのであれば、お話ししましょう。私の父の名はゴルディアンといい、出身はスキタイ人[8161] で、マルテンス連隊の兵士でした。そして、私が熱意をもって向かっている私の故郷とは、天のエルサレム――天の王の都[8162] のことです。」王は言った：

「なぜ我らの意志に従わないのか、なぜ我らが万人のために定めた戒めを守らないのか。なぜ神々にひれ伏して、かつての地位を取り戻そうとしないのか！　それとも、苦しみの中で死にたいのか？　早く答えよ。お前はそれのために召されたのだから。」

聖メルクリウスは言った：

「私は、あなたと、あらゆる悪の根源であるあなたの父である悪魔を打ち負かし、私の主であるイエス・キリスト、すなわち『[8163] 』から勝利の冠を受けるために（ここへ）来たのだ。」 お前の

[8157] 皮肉を込めて、「名誉」という言葉が「不名誉」の代わりに用いられている。

[8158] 聖人は、上述した拷問者の表現を用いて、キリストの名のために受ける苦しみは、彼にとって不名誉ではなく、それどころか、大きな名誉であるという考えを主張している。

[8159] すなわち、富、名声、栄誉など、人の短い地上での生涯の間だけ意味を持つもの。これらすべては、死が訪れると、人から離れ、その人にとっては失われてしまう。

[8160] すなわち、霊的な、天の恵みである。この比喩はマタイによる福音書6:19–20から引用されている。

[8161] スキタイ人――西アジアの北端、カスピ海に至る地域の一部に居住していた古代民族で、主に黒海の北岸沿いに住んでいた。なお、スキタイ人の居住域の北端は、古代人には知られていなかった。

[8162] すなわち――天の御国。この表現はヘブライ人への手紙12:22から引用されたものである。

[8163] キリストがこのように呼ばれるのは、この世での生涯、とりわけ十字架上の苦難と死を通じて、神の御心への従順と人々への献身的な奉仕という、あらゆる時代における最高の模範を示されたからである。

企むことを、遅滞なく私に対して実行せよ。私には鎧と盾があり、それによってお前が私に対して企てるあらゆる苦痛を乗り越えるからだ。

すると、王は激怒して言った。

「お前は信仰の鎧と盾を持っていると言うのだから、四本の柱の間に縛り付けて、裸のまま吊るすよう命じる。」

それが実行されると、拷問官は言った。

「今、お前の戦いの道具はどこにあるのだ？」

すると、聖メルクリウスは天を見上げ、こう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべである私を助けてください！」

王は、鋭いナイフと剣を持ってきて聖人の体を切り刻むよう命じ、その下には火を焚かせ、上からナイフや剣で傷つけられ、下からは火で焼かれることで、彼が激しく苦しむようにした。　その処刑が始まると、聖人の体からは血が小川のように流れ出し、その血のせいで火さえも消えてしまったが、聖人は勇敢にすべてに耐え抜いた。

その後、デキウスは、彼が（あまりに）早く死なないようにと、彼を縛り解くよう命じ、ある部屋に厳重に閉じ込めた。　使用人たちは、かろうじて息をしているだけで自力で歩くことのできない彼を運び出し、すぐに死ぬだろうと思いながら牢獄に放り込んだ。聖人は、ひどい傷のため、まるで死人のように横たわり、かろうじて息をしているだけだった。夜が更けると、主の天使が彼の元に来て言った。

「平安あれ、善良な苦難の者よ！」――そして、その傷を癒やした。聖人は体内に力を感じると、元気になって立ち上がり、御自身の天使を通して訪れてくださった神に感謝した。

朝になると、王は再びメルクリウスを自分の前に連れてくるよう命じた。兵士たちは彼を追って行き、彼が元気なのを見つけると、捕らえて王のもとへ連行した。王は、彼が元気で、誰の助けも借りずに歩いているのを見て、こう言った。

「昨日、死んだ者として我々の元から運び出された者が、今やまるで傷一つないかのように、自力で歩いているではないか」と言い、兵士たちにその傷を調べるよう命じた。

殉教者の遺体を調べた兵士たちは、王にこう言った。

「あなたの王権の全盛を誓って申し上げますが、メルクリウスの全身は無傷で、何の欠陥もなく、まるでいかなる拷問も彼に触れたことがないかのようです。」

王は言った。

「彼はきっと、キリストが自分を癒やしたと言うに違いない。お前たちは、彼を牢獄に連れてきた医師はいないのか？」

彼らは答えた。

「全世界を治める陛下の権威にかけて誓います。誰も彼を診察しませんでした。私たちは彼がすぐに死ぬだろうと思っていたからです。しかし、彼がどのようにして癒やされ、今こうして健在であるのか、私たちには分かりません。」

王は言った。

「キリスト教の魔術を見よ。昨日まで死んでいるように見えた者が、今日、我々の前に健やかに立っているではないか」――そして聖人に向かって激昂して言った。

「誰があなたを癒したのか、正直に言え。なぜなら、魔術以外であなたが癒されるなど、私にはあり得ないことだからだ。」

聖人は答えた。

「あなたが当初、本意ではないと述べた通り、まさにその通りです。　私たちの主イエス・キリスト、魂と肉体の真の医者こそが、私を癒やしてくださったのだ。――主は、すべての魔術師や呪

術師、そして偶像を崇める者たちを、断ち切ることのできない絆で縛り上げ、彼らを、自分たちを創造した真の神を知らなかったという罪により、ゲヘナの火に投げ込むであろう。

王は言った：

「再びお前の体を傷だらけにしてやる。そうすれば、お前が信じるキリストが、果たしてお前を癒やすかどうか見てやろう。」

聖人は答えた。

「わが主イエス・キリストを信じる。お前は、私に対して企てたあらゆる拷問をもってしても、私を打ち負かすことはできない。私はそれらを少しも恐れない。私の主の御言葉によって強められているからだ。主はこう言われた。*『体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。　むしろ、魂も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい』*（マタイ10:28）*と仰せられた*。死後、主は義の裁きが行われる恐るべき日に、私を再びよみがえらせてくださる。

王は再び彼を火と傷で拷問するよう命じた。聖人が殴打され、火で焼かれたとき、焼け焦げるその体からは、悪臭の代わりに、素晴らしい香りが漂ってきた。殉教者は非常に勇敢に耐え忍び、叫び声も、うめき声も、ため息さえも漏らさなかったため、皆がその忍耐力に驚嘆した。王は嘲笑しながら彼に言った。

「今、お前の『医者』はどこにいる？　ここに来て、お前を癒やしてみろ。お前は、その方が死後でもお前をよみがえらせることができると言っていたではないか。」

聖メルクリウスはこう答えた。

「好きにしろ。お前は私の肉体に対する権威を持っているが、魂に対する権威は神にある。たとえお前が私の肉体を殺したとしても、魂は永遠に朽ちることなく存続するだろう。」

王は、彼を逆さ吊りにし、首に大きな石を縛り付けて、石の重みで押しつぶされて死ぬように命じた。しかし、殉教者は神の恵みに支えられ、何時間もこの拷問に耐え続け、なおも生き続けていた。　その後、石を解いた王は、先端が銅で覆われた鞭で彼を打つよう命じた。彼らは彼を激しく打ち据え、その血で大地さえも赤く染まった。しかし、彼はダイヤモンドのように堅固で、勇敢に耐え忍び、こう言った。

「主よ、御名のゆえに苦難を受けることを許してくださったことを感謝いたします。」

王は、殉教者をどうやっても自分の意に屈服させることができないと悟り、またローマへ急いで向かわねばならなかったため、これ以上彼を拷問する時間がなかった――そこで、彼に対して次のような最終的な判決を下した。

「メルクリウスよ、汝は我らの神々を無に等しいものと見なし、我らの寛大さによる公正な決定を軽んじた。ゆえに、我らの権威は、汝をカッパドキアの地へ連行し（[8164] ）、そこでその首を刎ねることを命じる。これは多くの人々を戒めるためである。なぜなら、王に逆らう者は誰でも、多くの拷問の末、剣によって処刑されるからである。」

戦士たちは聖人を捕らえると、彼を動物に乗せ[8165] 、しっかりと縛り付けた（彼は多くの苦難のせいで体がひどく衰弱していたためである）。そして、カッパドキアへと連れて行った。彼らがケサリア[8166] にいたとき、主は聖人の前に現れてこう言われた。

[8164] カッパドキア――小アジアの東部地域。

[8165] ここでは、乗用や軽荷の運搬に使われたラバやロバを指す。より重い荷物の運搬には、ラクダが用いられた。

[8166] 「ケサリア」という名は、いくつかのローマの都市に付けられていました。ここでは、もちろん、ティベリウス皇帝によってその名が付けられた（以前はマザナと呼ばれていた）カッパドキアの首都、ケサリアを指しています。

「メルクリウスよ！　わたしのところに来なさい。そして安らぎなさい。あなたは使命を全うし、信仰を守り抜いた――さあ、あなたの功績の冠を受け取りなさい[8167]。なぜなら、ここであなたは息を引き取るべきだからである。」

この救い主の御出現によって大いに励まされ、一刻も早く肉体を脱ぎ捨ててキリストと共に生きたいと願った殉教者[8168]は、共にいた兵士たちにこう言った。

「命じられたことを、これ以上遅らせることなく実行せよ。すべての人を悔い改めに招かれる主が、あなたがたに御恵みをお与えになりますように。憐れみに富まれる主は、御自身のもとに来る者たちに、その賜物を豊かに与えてくださるのです。」

彼がそう語った後、11月24日、私たちの救い主イエス・キリストを告白した際、その首は斬り落とされた。聖人が亡くなってから二日目、その遺体は雪のように白く輝き、そこから貴重な香油と乳香の芳香が漂い、この奇跡によって多くの人々がキリストを信じるようになった。

その聖なる遺体は、栄光ある場所に尊く安置され、病める者たちに多くの癒やしをもたらした。この戦士、聖大殉教者メルクリウスは、すでに天国で魂を喜び祝っているが、選ばれた将軍、至聖なる神の母は、かなりの時が経ってから、彼を次の戦いの任務に用いた。

聖バシレイオス大主教[8169]が、聖母マリアのイコンの前で――そのイコンには、戦士として槍を携えた聖大殉教者メルクリウスの姿も描かれていた――不敬虔な皇帝ユリアヌス・背教者[8170]、正統なキリスト教徒を激しく迫害し、殲滅した者である、ユリアヌス・背教王　が、キリスト教の信仰を根絶やしにするためにペルシャ戦争[8171]から戻ってこないよう祈っていたところ、聖母マリアのイコンの前にある聖メルクリウスの像がしばらくの間見えなくなり、その後、血まみれの槍を手にした姿で現れたのを見た。　そしてまさにその瞬間、ユリアヌス・背教者はペルシャ戦争の戦場で、正体不明の戦士による槍で貫かれ、その戦士は直後に姿を消した。呪われたユリアヌスは、傷口から噴き出した血を空へと吐き出し、天に向かってキリストを冒涜する言葉を吐きながらこう言った。

「お前は勝った、ガリラヤ人よ！」と、憎しみを口元に浮かべて息を引き取った。

この奇跡は当時、明らかに現れた。なぜなら、聖バシレイオス大主教の祈りに応じて、至聖なる神の母御自身が、この神に愛された聖人であり、御自身の聖なる勝利の偉大なる殉教者メルクリウスを、　「祝祭の教会」から「戦いの教会」へと遣わし、神に背く背教者ユリアヌスの処刑の場に赴かせ、聖なる信仰と正教のキリスト教徒を守らせたのである。彼の聖なる執り成しと守りによって、私たちもまた、彼の助けによって打ち負かされる神に背く敵から守られ、彼と共に、世々限りなく、神と聖母マリアを賛美しましょう。アーメン。

[8167] 表現はIIテモテ4:8*による*。「*戦い*」とは、この世での人生の道のり、とりわけ殉教の苦難と死を指す。「*勝利の冠*」とは、殉教の功績によって天の御国で授かる栄光の冠のことである。

[8168] この表現はフィリピの信徒への手紙1:23から引用されたものである。使徒は、肉体を脱ぎ捨て、天の御国においてキリストと魂をより深く結びつくために、一刻も早く死にたいという願いを表明していた。

[8169] 聖バシレイオス大主教は330年、カッパドキアの敬虔な家庭に生まれ、幅広い世俗的および神学的な教育を受けた。当初は友人の聖グレゴリオス・テオロゴスと共に隠遁生活を送っていましたが、その後、まず長老に叙任され、370年にはケサリアの司教に任命されました。　聖アタナシウス・アレクサンドリアスと同様に、アリウス派の動乱の時代に正統信仰の熱心な擁護者となり、正統教義を擁護し解明するために多くの傑出した著作を著した。この功績により、教会は彼に「大」の称号を授けた。379年に死去した。

[8170] ユリアヌス皇帝は361年から363年まで在位した。皇帝に即位すると、彼はキリスト教の信仰から背き、異教の復活を人生の目標とした。そのため、彼は「背教者」と呼ばれている。

[8171] ペルシア人はアジアのペルシア湾沿岸に居住していた。時代の移り変わりに伴い、国境線は変化した。 ササン朝が彼らの間で即位すると（西暦226年）、ローマ人とは度重なる戦争を繰り広げた。ユリアヌスが殺害されたペルシア戦争は、ペルシア王サポレス2世の治世に属する。

コンダク、第4調:

戦場において無敵の戦士、苦難において恥じることなき守護者、メルクリウスの賛歌をもって彼を称えよう。彼の記念を喜びをもって祝う者たちよ、彼は私たちを苦難と悲しみから救い出してくれる。

スモレンスクの聖殉教者メルクリウスの記念日

記念日：11月24日

13世紀初頭、ロシアの地に甚大かつ悲惨な災難が降りかかった。我らの数多くの罪に対する神の許しにより、邪悪な敵――タタール人――がロシアの民を襲った。多くの住民が殺害されたり捕虜にされたりし、ロシア全土に広大な荒廃が広がった。　畑は耕作されないまま放置され、野獣だけが群れをなして野原を徘徊し、人間の死体を食い荒らしていた。当時、多くのロシアの公爵たちが祖国を守るために命を落とした。不敬虔な敵は、乳児も無防備な住民も容赦しなかった。彼らはすべての人々を殴打し、容赦なく殺害した。　多くの人々を、彼らは不名誉な悪辣な侮辱にさらした。残忍な征服者たちは、捕虜たちを自らの髪で縛り上げ、動物のように先頭に立たせて、容赦なく鞭で打ちつけながら追い立てた。聖なる教会や修道院は略奪され、修道士たちは皆殺しにされた。すでにキエフは野蛮人によって焼き払われ、廃墟と化していた。　タタールのハン、バトゥイは他の都市の征服に乗り出し、モスクワに到達してこれを陥落させた。さらに彼はスモレンスクに迫り、これを荒廃させることを企て、すでに巨大な軍勢を率いてこの都市に接近していた。野蛮人の中でも、ある巨人とその息子は、その力において特に際立っていた。彼らの力は並外れており、すでに多くの人々がこの拷問者の手によって命を落としていた。　彼は先鋒部隊の先頭に立っていた。恐怖と戦慄がスモレンスクの住民を覆った。彼らを待ち受けていたのは、避けようのない破滅だった。彼らに残された唯一の希望は、天の女王の庇護だけだった。彼らは、不敬虔な敵や邪悪な迫害者から自分たちを救い出してくれるよう、至聖なる聖母マリアに熱心に祈り求めた。　天の女王、すなわち信仰をもって彼女を呼び求めるすべての人々の無敵の助け手は、この街が敵の手に落ちることを許さなかった。敵の先鋒部隊はすでにスモレンスクのすぐ近くまで迫り、いわゆるドルゴモスティエに陣を敷いていたのである。

この頃、スモレンスクには聖メルクリウスが住んでいた。彼は西方の地で、正教の信仰を重んじる高貴な両親の間に生まれた。まだ若くしてスモレンスクに移り住み、地元の公爵に仕えるようになった。戦士として、メルクリウスはその力強さと長身で際立っていた。　それと同様に、彼は霊的な力においても偉大であった。幼い頃から敬虔な生活で人々の注目を集め、断食と貞潔に励み、毎晩、誰にも知られぬように主への感謝の賛美を歌っていた。　邪悪な敵が迫り、神の聖堂が荒らされているという知らせを耳にした聖メルクリウスは、心を痛め、魂が苦しんだ。日ごとに彼は神への熱意にますます燃え上がり、キリストの信仰のために苦難を受け、自らの魂を捧げたいと願った。そして、彼の祈りは聞き届けられた。

ある夜、大聖堂で、その教会に仕えるある聖職補佐が、至聖なる聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げていた。彼は涙ながらに、聖母マリアに、この街を敵から救ってくださるよう懇願した。すると突然、イコンの方から声が聞こえてきた。

「ポドリーエにいる私のしもべ、メルクリウスのところへ行きなさい。」

そう言うと、至聖なる聖母は、聖メルクリウスが住む家の扉を彼に示した。

「さあ、指定された家の庭へ行き、静かに彼にこう言いなさい。『メルクリウスよ！　御母様があなたを呼んでおられる。鎧を身にまとって敵へと向かいなさい。』」

聖堂の奉仕者は、聖像から聞こえてきたその声に驚いた。彼は直ちに大聖堂を出て、至聖なる聖母マリアご自身が示されたその家へと向かった。

彼は中庭で聖メルクリウスに出くわした。聖なる修道士は祈りを捧げ、両手を天に向けていた。彼は戦いの装束を身にまとっていた。というのも、聖職補佐が聖母マリアのイコンから声を聞いたまさにその瞬間、聖メルクリウスもまた、奇跡的な方法で聖職補佐が自分にやって来ることをあらかじめ知らされていたからである。

一方、聖職補佐は聖人のところへ近づき、こう言った。

「メルクリウスよ、すぐに立ち去りなさい。聖母様があなたを呼んでおられる。」

聖メルクリウスは、聖職補佐と共に、至聖なる聖母マリアの教会へと向かった。教会の中で、彼らは聖母マリアのイコンの前で灯り続けている蝋燭を見つけた。聖メルクリウスはイコンの前にひれ伏し、涙を流しながら祈りを捧げ、至聖なる御母に助けと庇護を懇願した。すると突然、イコンから声が響いた。

「わがしもべメルクリウスよ、私はあなたを遣わし、この町から敵を撃退し、この聖堂を守るように命じる。そのために、私はあなたをローマからここに呼び寄せたのだ。敵たちは今夜、密かにこの町を襲い、荒廃させようと企んでいる。　しかし、私はこの街を見捨てはしない。私の祈りによって、この街は敵の手に渡ることはないだろう。さあ、私のしもべよ、直ちに敵を迎え撃ちに出よ。「ドルゴモスティエ」と呼ばれる場所へ向かえ。そこには、邪悪な野蛮人たちの武装した軍勢が待ち構えている。恐れるな。お前は敵の将軍を打ち負かすだろう。私はお前を見捨てはしない。　この戦いで、お前は敵を打ち破り、主から勝利と永遠の至福の冠を授かるだろう。

この声を聞いて、聖メルクリウスは大きな喜びに満たされた。　天の女王ご自身が、彼が長い間魂の底から切望していたことを約束してくださったのである。なぜなら、彼は常に、　の兄弟たちとキリストの信仰のために苦難を受けるという願いに駆られていたからである。至聖なる聖母に感謝を捧げた後、彼は教会を出て、神聖な熱意に燃え、直ちに指定された場所へと向かった。

真夜中だった。敵の襲撃がこれほど早く来るとは予想もしていなかった市民たちは、深い眠りに包まれていた。聖メルクリウスは、静かに、誰にも気づかれることなく、城門の衛兵の横を通り過ぎた。ドルゴモスティエに到着すると、彼は剣を抜き、「至聖なる聖母マリアよ、私をお助けください」と叫びながら、タタール軍の群れへと突進した。　自らの力に驕っていた高慢な巨人は、聖メルクリウスの手によって真っ先に倒れた。彼がこれほどまでに誇っていた力は、キリストの戦士が目の前に現れた途端、彼を見捨ててしまったのである。先鋒部隊の他の多くの敵もまた、聖メルクリウスの剣によって倒された。生き残った敵たちは恐怖に襲われ、逃げ去った。　聖メルクリウスは一角に退き、聖母マリアの驚くべき、そして栄光に満ちた御加護に祈りを捧げ、感謝を捧げた。

「至清き、至栄えある、至祝福された御母よ！　あなたは御自身の執り成しによってこの都を救い、あなたの民がキリスト教を敵視する邪悪な敵の手に落ちることを防がれました。　今、至聖なる神の母よ、罪深く、不適格なあなたのしもべである私をも、お見捨てにならないようお願いします。私は、栄光ある殉教の冠を戴き、聖なる信仰のために血を流すべきであることを知っています。私はこれを恐れません。なぜなら、私はかねてより*「この世を去り、キリストと共にありたい」*と願ってきたからです。わが都の栄えある守護者よ、あなたの御子であり、私たちの神である御方に、私のために祈ってください。どうか御方が私を御自身の選ばれた群れに加え、その聖なる御名を永遠に賛美するにふさわしい者とさせてくださいますように。

すると、声が響きました：

「汝の願いどおりになれ。」

その間、敵は増援を得て、再び聖メルクリウスに襲いかかった。しかし、キリストの戦士は主の御名を呼び求め、再び彼らを打ち破った。敵は再び恥をさらして退却し、

「我らに災いあれ」と彼らは叫んだ。「この戦士に抗うことはできない。彼と共に、ある稲妻のような男たちが我々を打ち倒すからだ。そして彼らの頭上には、輝かしい御夫人がおられるのが見える。」

その頃、殺された巨人の息子は、父の死を仇討ちしようと、狡猾にも聖メルクリウスに襲いかかり、剣でその高潔な首を刎ね落とした。　すべての敵は大きな恐怖に襲われた。武器を投げ捨て、何らかの未知の力に駆り立てられるかのように、彼らは多くの精鋭戦士が命を落としたその都市から逃げ出し、スモレンスクの領地から立ち去った。

夜明けとともに、市民たちは至聖なる聖母マリアの驚くべき御加護を目の当たりにした。彼らの目の前には、死体で覆われた野原が広がっていたのである。彼らは感謝の念を込めて、この街の栄光ある守護者である聖メルクリウスの遺体を受け取り、至聖なる聖母マリア大聖堂の左側の聖歌隊席のそばに、栄誉をもって埋葬した。

その死後まもなく、聖メルクリウスは夢の中で前述の聖職者に現れ、こう語った。

「この町の市民たちに伝えてほしい。栄光ある守護者と聖母マリアの御加護を記念して、私の武器を私の棺の上に吊るすように。」

これに伴い、聖人は助けを求めるすべての人々に、自らの助けを約束した。市民たちは直ちに、聖人の武器をその墓の上に掲げた。

現在、聖メルクリウスの聖遺骨は、スモレンスクのアヴラアミエフ修道院にある教会に安置されている。この教会は、あらゆる病を癒やし、苦難や災いの中で助けを与える、栄光あるキリストの戦士の名にちなんで建てられたものである。彼が私たちをも助け、肉欲に打ち勝ち、絶えず父と子と聖霊を賛美できるよう導いてくださいますように。アーメン。

コンダク、第4声：

戦場において無敵の戦士が現れ、ローマ人の血を引く者、その名はスモレンスクの都に由来する。まさにこれらの人々のためにその名が与えられたのであり、聖母マリアよりこの都を守る強き守護者として遣わされたのである。メルクリウスの賛歌をもって彼を称え、その記念を喜びをもって祝おう。この戦士が、わが都を災いから救い出してくれるように。

聖シモン・ソイギンスキーの記念日

記念日：11月24日

聖シモンはソルヴィチェゴドスクの町出身であった。幼い頃から、神の恵みが彼の上に宿っていた。彼は世俗の虚栄を避けていた。若い頃、彼は実家を離れ、聖コルニリイ・コメルスキーのいる修道院へと赴いた。　聖シモンは聖人を見かけると、その前にひざまずき、涙ながらに聖人に修道士としての剃髪を求めた。聖コルニリイの鋭い眼差しには、目の前に立つのが将来の神の修道士であることが見抜かれていた。彼の願いを受け入れ、シモンを受け入れ、経験豊富な長老を指導者として与えた。　聖コルニリウスに倣い、聖シモンは断食と祈りに励んだ。彼は課せられたあらゆる務めを不平一つ言わずに果たし、並外れた謙遜さで際立っていた。こうして長年にわたり、彼はコルニリウスの修道院で絶えることなく修行に励んだ。　1537年、偉大なる師が世を去ると、聖シモンは敬虔な生活で知られた長老ロンギンと共に、故郷のソルヴィチェゴドスクへと向かった。二人の修行者は、人里離れた場所を求めていた。　町から15ヴェルスタほど離れた、コリャジェマ川の河口付近で、彼らは足を止めた。ここで、尊者ロンギンは人里離れた森の中に定住することを決意した。聖シモンは、修道生活による労苦で既に疲れ果て、高齢となっていたロンギンを助けることを決意した。二人はこ

こに小部屋と礼拝堂を建てた。　しばらくの間、聖シモンはこの地でロンギンと共に修行に励んだ。しかしその後、より人里離れた場所を探そうと決意し、聖ロンギンと別れ、ヴィチェグダ川を上流へと向かった。

コリャジェマから60ヴェルスタ離れた、ヴィチェグダ川の高台にある岸辺、ソイガ川の河口付近の荒野の森林の中で、聖人は自ら修道院を建て、その後、尊く栄光ある我らの主イエス・キリストの変容に捧げる教会を建設した[8172]。この教会は1541年5月17日に奉献された。　この荒涼とした人里離れた地で、尊者シモンは修行に励むようになった。彼の禁欲と祈りの徹夜は、まさに驚くべきものであった。

その敬虔さで際立つ聖人の指導の下、荒野で修行を志す人々が彼の元へ集まり始めた。そして、この至福の聖人は皆を導き、教えを説いた。真の牧者としての彼は、自らの模範によって、救いと永遠の至福へと至る道をすべての人々に示した。こうして、聖人は20年もの間、自らの荒野で修行を続けた。　臨終を間近に控えた頃、尊者には、彼の霊的な友であり師である聖ロンギンが奇跡によって称賛されているという知らせが届き、大いに喜んだ。そのような苦行の生涯を送った後、彼は1562年11月24日、残された弟子たちに悼まれながら、安らかにその清らかな魂を主の御許に委ねた。　その聖遺骨は、同尊者が設立し、現在は廃止された修道院内の、聖大殉教者エカテリーナに捧げられた教会に、地下に安置されている。

尊者マストリディアの記念日

記念日：11月24日

エジプトのアレクサンドリアという町に、マストリディアという名の聖なる処女が住んでいた。彼女は自らの魂を大切にし、キリストのために沈黙と断食、絶え間ない徹夜と祈りに身を捧げ、その一方で多くの施しを行っていた。　しかし、神に喜ばれる生き方を実践しようとする人々を常に妨げる悪魔は、この聖処女の美徳に耐えられず、彼女に対して次のような方法で戦いを仕掛け始めた。悪魔はある若者に、この処女に対する不純な欲望を植え付けたのである。　その若者は自ら彼女の家を訪れたり、誰かを彼女のもとへ遣わしたりして、彼女をその情欲へと誘惑したが、何の反応も得られなかった。　マストリディアが家を出て、神に祈りを捧げるために教会へ向かうとき、その間も青年は彼女から離れず、聖なる乙女に大きな苦しみを与えていた。彼は、罪を愛する者だけが好んで聞くような言葉を彼女に語りかけ、それによって聖なるマストリディアは、家からどこへも、教会へさえも出ないようにならざるを得なくなった。

ある日、マストリディアは自分の女奴隷をその若者のところへ遣わし、こう言わせた。

「おいでなさい、ご主人様があなたをお呼びです。」

青年は、彼女が自分の不敬虔な願いを受け入れてくれるだろうと思い、喜びながら彼女の元へ行った。マストリディアは、青年が部屋に入ってきたとき、布を織っていたが、彼にこう尋ねた。

「兄弟よ、なぜあなたは私にこれほど多くの苦しみと悲しみを与え、教会へ行くことさえ許さないのですか？」

「実のところ」と若者は答えた。「私はあなたをとても愛しています。あなたを見ると、まるで全身が燃え上がるような気分になるのです。」

「私に何を見出しているの？」とマストリディアは若者に尋ねた。

[8172] スパソ＝プレオブラジェンスカヤ＝ソイギンスカヤ、あるいはソエジスカヤ修道院（現在はソイギンスキー＝プレオブラジェンスキー教区）は、ヴォロゴダ州ソルヴィチェゴドスク郡に位置し、ソルヴィチェゴドスクから82ヴェルスタ離れた、ソイギ川の右岸、同川がヴィチェグダ川に合流する地点にある。　この修道院は1791年に完全に廃止され、教区教会へと改められました。

「君の瞳は、あまりにも美しく――」と若者は言った。「その美しさに、私は心を奪われてしまうのだ。」

聖なる乙女は、自分の目が人々を惑わしていると聞き、布を織っていたシャトルで、即座に自分の目を突き刺した。

青年はこれを見て、恐怖に襲われた。しかし、聖なる乙女がキリストへの熱意から、また隣人を誘惑から救うためにこの行為を行ったのだと悟ると[8173] 、彼には神への畏れが訪れ、悔い改めた。修道院へ向かった青年は、黒い衣をまとい、祈りの修行と禁欲において聖なる父たちに倣い、厳格な修道士となった。

一方、マストリディアは、主に仕えながらその生涯を閉じ、主のもとに召された。

12月8日

11月25日（旧暦）

聖クレメンス、ローマ教皇、聖司祭殉教者の生涯と受難

記念日 11月25日

栄光に満ちた偉大なる古都ローマに、ファウストという名の貴族出身の男が住んでいた。彼は古代ローマの王家の血筋を引いていた。彼にはマトフィディアという名の妻がおり、彼女もまた王家の出身で、ローマ皇帝アウグストゥスやティベリウスと血縁関係にあった[8174] 。 夫婦は熱心な異教徒であり、偶像を崇拝していた。彼らにはまず双子の息子が二人生まれ、そのうちのひとりをファウスティヌス、もうひとりをファウスティニアヌスと名付けた。その後、三番目の息子が生まれ、彼にはクレメンテという名が与えられた。

ファウストには、邪悪で道徳に欠ける兄弟がいた。彼はマトフィディアの美しさを見て魅了され、彼女を罪へと誘惑し始めた。しかし、彼女は極めて貞淑であったため、夫への忠誠を裏切ることも、寝床を汚して高貴な家系の名誉を傷つけることも望まなかった。 そのため、全力を尽くしてその誘惑者を遠ざけようとした。彼を公然と非難することを望まなかった彼女は、自分たちについて悪評が広まり、家の名誉が傷つくことを恐れて、夫でさえもこのことを誰にも話さなかった。 しかし、ファウストの兄は長い間、懇願や脅迫を繰り返して、彼女に自分の不純な欲望に従うよう強要し続けた。マトフィディアは、彼との接触を絶たなければ、その執拗な追及から逃れることはできないと悟り、次のような決断を下した。

ある朝、彼女は夫に次のように語りかけた。 「昨夜、私は不思議な夢を見ました、夫よ。尊厳に満ちた老いた男性――まるで神の一人のようでした――が現れ、私にこう告げました ： もしあなたと双子の息子たちが10年間ローマを離れなければ、あなたは彼らと共に、苦痛に満ちた突然の死を遂げるでしょう」。

[8173] キリスト・救い主は、弟子たちに邪悪な情欲に打ち勝つよう教えられ、「もしあなたの目があなたを罪に誘うなら、それを引き抜け。片目で神の国に入る方が、両目を持って火のゲヘナに投げ込まれるよりも、あなたにとってましである」（マルコ9:47）と語られた。聖マストリディアは、キリストへの熱意から自ら両目を失い、若者の誘惑の原因を取り除くことで、彼を救いへと導こうとしたのである。

[8174] オクタヴィアヌス・アウグストゥスは、ローマにおける共和制の崩壊後に即位した初代ローマ皇帝であり、紀元前30年から紀元14年まで在位した。 その継子であるティベリウスは、紀元14年から37年まで在位した。その治世の間に、我らの主イエス・キリストは苦難を受け、十字架の死を遂げられた。

この言葉を聞いたファウストは驚き、深く考え込んだ末、彼女と二人の息子を10年間ローマから送り出すことを決意し、こう考えた。「愛する妻と子供たちが、ここで突然の死を遂げるよりは、異国の地で生き延びてくれるほうがましだ」。　船を準備し、食料など必要なものをすべて備え付けた後、彼は彼女と二人の息子、ファウスティヌスとファウスティニアヌスを連れて、ギリシャのアテネへと送り出した。　彼女たちには多くの男奴隷と女奴隷を同行させ、多額の財産を持たせるとともに、マトフィディアに対し、アテネで息子たちをギリシャの学問を学ばせるよう命じた。

こうして彼らは、言葉に尽くせないほどの名残惜しさと涙の中で別れを告げた。マトフィディアは二人の息子を連れて船で出航し、ファウストは末っ子のクリメントと共にローマに残った。

マトフィディアが海を航行していたとき、海上で激しい嵐が吹き荒れ、大波が立ちこもった。船は波と風に流されて未知の国へと運ばれ、真夜中に難破し、乗組員全員が溺死した。　一方、マトフィディアは荒れ狂う波に翻弄され、アジアの国からそう遠くないある島の岩場に打ち上げられた[8175]。彼女は溺死した子供たちを思うと、慰めようもなく泣き続け、苦しみあまり海に身を投げ出そうとしたほどだったが、その国の住民たちは、裸で激しく叫び、うめき声を上げている彼女を見て憐れみ、彼女を自分たちの町に連れて行き、服を着せてやった。

旅好きの女性たちが彼女のもとを訪れ、その悲しみを慰め始めた。彼女たちはそれぞれ、自分たちの人生で経験した悲惨な出来事をすべて語り、その共感によって彼女の悲しみをいくらか和らげた。その中の一人がこう言った。「私の夫は船乗りでした。　まだ若くして海で溺死してしまい、私は若くして未亡人となりました。多くの人が私と結婚したがりましたが、私は夫を愛し、死後も彼を忘れることができなかったため、未亡人のままでいることを決心しました。もしよければ、私の家に住んで私と一緒に暮らしてください。私とあなたは、自分たちの労働で生計を立てましょう」

マフティディアは彼女の助言に従い、彼女の家に住み着いて、自らの労働で食料を稼ぎ、二十四年もの間、その生活を送った。

彼女の子供たち、ファウスティンとファウスティニアヌスは、神の御心により、難破の後も生き残った。　岸に打ち上げられた二人は、そこにいた海賊たちに発見され、彼らの船に乗せられてストラトニオスのケサリア（[8176]）へ連れて行かれ、そこでユスティナという名の女性に売られた。彼女は二人を自分の子供のように育て、教育を受けさせた。　こうして彼らは様々な異教の学問を学んだが、その後、キリストに関する福音の説教を聞き、聖なる洗礼を受け、使徒ペトロに従った。

一方、彼らの父ファウストは、クレメントと共にローマで暮らしており、妻や子供たちに降りかかった災難について何も知らなかった。一年が過ぎた頃、彼は妻と子供たちの様子を確かめるために数人の奴隷をアテネへ送り、彼らに様々な品々を託したが、その奴隷たちは戻ってこなかった。 3年目、ファウストは妻や子供たちからの便りを全く受け取れず、深く悲しんだため、必要な物資をすべて揃えて別の奴隷たちをアテネへ派遣した。　現地に到着した彼らは誰一人として見つけることができず、4年目にファウストのもとへ戻り、アテネで女主人を全く見つけられなかったと報告した。なぜなら、そこでは誰も彼女のことを聞いたことがなく、身内も一人も見つからなかったため、彼女の行方を追う手がかりすら得られなかったからである。　これを聞いたファウストは、さらに悲しみに打ちひしがれ、苦々しく泣き崩れた。彼はローマ帝国の沿岸の町や港をすべて巡り、船乗りたちに妻や子供たちの行方を尋ねたが、誰からも何も知ることができなかった。　その後、船を建造し、数

[8175] アジアとは、ローマ人によって現在の小アジア（アナトリア半島）に位置し、地中海沿岸に広がる属州のことで、その管轄下にはいくつかの都市とその周辺地域が含まれており、その首都はペルガムとされていた。

[8176] 古代には、ケサリアまたはケサリアという名の都市が数多く存在した。「ストラトニウムのケサリア」とは、地中海東岸に位置するパレスチナの都市を指し、一般には「パレスチナのケサリア」として知られている。　この都市は、ユダヤの王ヘロデによって古代都市ストラトンの跡地に建設され、カエサル・アウグストゥス（ローマ皇帝オクタヴィウス・アウグストゥス）にちなんでケサリアと名付けられた。現在、その跡地には、野生植物に覆われた廃墟だけが残っている。

人の奴隷とわずかな財産を携えて、自ら愛する妻と愛しい子供たちを探しに出かけ、末っ子のクリメントは、忠実な奴隷たちと共に家に残し、学問を修めさせた。彼は陸も海も問わず、ほぼ全宇宙をくまなく巡り、長年にわたり家族を探し続けたが、見つけることはできなかった。　ついに、彼らに会うことさえ絶望し、深い悲しみに沈んだ。そのため、愛する妻――その貞節さに深い愛を注いでいた――がいなければ、この世の恵みを享受することは重い負担だと考え、　、家に帰る気さえ失ってしまった。　この世のあらゆる名誉や栄光を拒み、彼は乞食のように異国の地を放浪し、自分が誰であるかを誰にも明かさなかった。

その間、少年クリメントは成人し、あらゆる哲学の教えを深く学び尽くした。とはいえ、父も母もいない彼は、常に悲しみに沈んでいた。母が家を出てからすでに二十四年、父が姿を消してから二十年が経過していた。

両親が生きているという希望を失ったクリメントは、彼らをまるで死んだかのように悼んでいた。　同時に、彼は自分の死についても心に留めていた。なぜなら、誰もが死ぬ可能性があることをよく知っていたからである。しかし、死後自分がどこに行くのか、この短き人生の後にもう一つの命があるのかどうかを知らなかったため、常に涙を流し、この世のいかなる快楽や喜びによっても慰められようとはしなかった。　その頃、クリメントは、キリストがこの世に来られたという話を耳にし、そのことを確実に知りたいと切望するようになった。ある時、彼は賢明な人物と会話する機会があり、その人物から、神の御子がユダヤにやって来られ、御自身を遣わされた父の御心を行うすべての人に永遠の命を与えられたという話を聞いた。　これを聞いたクリメントは、キリストとその教えについてさらに詳しく知りたいという並外れた熱意に燃え上がった。そのため、彼はキリストの福音が広まっていたユダヤへ向かうことを決意した。　自宅と広大な領地を後にし、忠実な使用人たちと十分な量の金を携えて船に乗り込み、ユダヤの地へと出航した。海上で嵐に見舞われたため、風に乗ってアレクサンドリアに流れ着き、そこで使徒バルナバに出会った。　その後、彼はストラトニオスのケサレアへと船出し、聖使徒ペトロに出会った。彼から聖なる洗礼を受けた後、彼は他の弟子たち――その中には双子の兄弟ファウスティヌスとファウスティニアヌスもいた――と共にペトロに従った。　しかし、クリメントは彼らを認識できず、兄弟たちもまた彼を認識できなかった。というのも、彼らが別れた時はまだ幼く、互いのことを覚えていなかったからである。ペトロはシリアへ向かうにあたり、ファウスティンとファウスティニアンを先遣隊として送り出し、クリメントを自分のそばに残して、彼と共に船に乗り込み、海へと出航した。

航海中、使徒はクリメントにその生い立ちについて尋ねた。そこでクリメントは、自分がどのような出自であるか、また母親が夢の影響を受けて幼い二人の息子を連れてローマへ去ったこと、父親が四年後に彼らを探しに出かけ、戻ってこなかったことなどを詳しく語った。　さらに、それからすでに二十年が経過し、身内について何も知らず、両親や兄弟は亡くなったのだろうと考えていることまで付け加えた。ペトロは彼の話を聞き、心を打たれた。

その間、神の御心により、船はクリメントの母であるマトフィディアがいた島に停泊した。何人かが生活必需品を買いに町へ出ると、ペトルも船を降りたが、クリメントは船に残った。　町へ向かう途中、ペトロは門のそばに座って施しを乞うている老婆を見かけた。それはマトフィディアであった。彼女は手の力が弱まり、もはや自分の労働で生計を立てることができなかったため、自分自身と、彼女を家に迎え入れてくれたもう一人の老婆――その老婆もまた体が不自由で、家で病床に伏していた――を養うために施しを乞うていたのだ。　使徒は座っているマトフィディアを見て、この女性が異邦人であることを霊的に悟り、彼女の故郷について尋ねた。マトフィディアは深くため息をつき、涙を流しながら言った。「ああ、私という旅人よ、なんと悲しいことか。この世に私ほど貧しく、不幸な者はいないのだから」。

使徒ペトロは、彼女の深い悲しみと心の底からの涙を見て、彼女が誰で、どこから来たのかと注意深く尋ね始めた。

彼女との会話から、彼は彼女がクレメントの母親であることを知り、次のように言って彼女を慰めた。

「あなたの末息子クリメントのことを知っています。彼はこの国にいます。」

マフティディアは息子の話を聞くと、恐怖と戦慄のあまり、まるで死人のように固まってしまった。しかし、ペトロは彼女の手を取り、自分についてきて船へ行くよう命じた。

「悲しまないでください、おばあさん」と、使徒は道中彼女に言った。「今、あなたの息子についてすべてがわかるでしょうから。」

彼らが船へ向かって歩いていると、クレメントが彼らに向かって出てきた。そして、ペトロの後をついてくる女性を見て、驚いた。一方、彼女はクレメントをじっと見つめると、父親に似ていることからすぐに彼だと気づき、ペトロに尋ねた。

「この人は、私の息子クリメントではありませんか？」

ペトロは言った。

「その通りです。」

すると、マトフィディアはクリメントの首に抱きつき、泣き出した。一方、クリメントは、この女性が誰なのか、なぜ泣いているのか分からず、彼女を自分から引き離そうとした。その時、ペトロは彼に言った。「子よ、あなたを産んだ母を突き放してはならない。」

クレメントはこれを聞いて涙を流し、彼女の足元にひれ伏して、彼女に口づけをし、泣き続けた。そして、二人は互いを見つけ出し、互いを認めたため、大きな喜びに包まれた。ペトロは彼女のために神に祈り、彼女の手を癒した。彼女は、自分が身を寄せていた老婦人の癒やしを、使徒に懇願し始めた。　使徒ペトロは彼女の家に入り、その老女を癒した。一方、クリメントは、母を養ってくれたお礼として、彼女に1000ドラクマ[8177] を贈った。その後、母と癒された老女を連れて船に乗り込み、彼らは出航した。

道中、マトフィディアは息子に夫ファウストの行方を尋ね、彼が自分を探しに出かけ、20年間も音沙汰がないことを知ると、生きている姿を見る望みはないと悟り、まるで亡くなったかのように彼を深く嘆き悲しんだ。 アンタンドロス[8178] に到着すると、彼らは船を降り、陸路で旅を続けた。ラオディキア[8179] にたどり着くと、彼らより先に到着していたファウスティンとファウスティニアンに出迎えられた。二人はクリメントに尋ねた。「あなたと一緒にいる、もう一人の老婆と共にあるこの見知らぬ女性は誰ですか？」

クレメントは答えた。「異国の地で見つけた私の母です。」

そして、母とどれほど長い間会っていなかったか、また母が双子の兄弟を連れて家を出た経緯を、順を追って彼らに語り始めた。

これを聞いて、彼らはクリメントが自分たちの兄弟であり、その女性が自分たちの母であることを悟り、大きな喜びのあまり泣きながら叫んだ。「それなら、この方は私たちの母マフティディアであり、あなたは私たちの兄弟クリメントですね。私たちは、母と共にローマを離れた双子のファウスティンとファウスティニアンなのですから。」

[8177] ドラクマ – 古代ギリシャの重量単位であり、21コペイカ相当の価値を持つ銀貨。

[8178] アンタンドロス――小アジア北西部のミシア地方、アドラミティス湾に面した都市。この古代都市の遺跡は現在も残っている。

[8179] ラオディキア――小アジア西部の古代フリギア地方の主要都市。ラオディキアの教会は、『ヨハネの黙示録』に言及されている小アジアの七つの有名な教会のひとつであった。　現在、廃墟となったエスキ・ギッサラの集落のそばにある、一つの低い丘の上にある遺跡だけが、この古代都市の記念碑となっている。 教会史において、ラオディキアは365年にそこで開かれた公会議で知られており、この公会議では、礼拝の順序、聖職者や信徒の道徳的行動、そして当時の様々な悪習や誤謬に関する詳細な規則が定められた。

そう言うと、彼らは互いに抱き合い、大いに泣き、愛情を込めて口づけを交わした。　母が、思いがけず無事でいる子供たちを見て喜ぶ姿を見、また互いに、神の御業によって溺死から救われた経緯を語り合いながら、彼らは神を賛美した。ただ一つ、彼らの心を悲しませたのは、誰も彼らの父について何も知らなかったことだけだった。その後、彼らは使徒ペトロに、母に洗礼を授けてくれるよう懇願した。　早朝、彼らは海辺へやって来た。聖使徒ペトロは別の部屋で、マフティディアと彼女に付き添っていた老女に対し、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けた。そして、彼女と息子たちを自分より先に住居へ送り出した後、自身は別の道へと向かった。

すると、道中で、白髪混じりの髭を蓄え、質素な身なりをした端正な風貌の男が、使徒ペトロを待ち受けており、彼を敬意を込めて迎えた。

「あなたは異国の人であり、並大抵の人ではないことがわかります。その顔つきからも、あなたが賢明な人であることが見て取れます。ですから、少しお話しさせていただきたいのです。」

ペトロはこれに対し、こう言った。

「どうぞ、お話しください、ご主人様。」

「私は今日、岸辺のひっそりとした場所で、あなたが祈っているのを見ました」と、その男は言った。　こっそりと様子を見てから、私はその場を離れ、ここで少しの間あなたを待っていました。天にも地にも神など存在せず、私たちに対する神の摂理など一切ないのです。この世のすべては偶然に過ぎません。ですから、神への祈りに夢中になったり、労力を費やしたりしないでください。神など存在しないのですから。」

聖ペテロは、この言葉を聞いて、彼にこう言った。

「なぜ、すべてが神の御計画や御摂理によるものではなく、偶然に起こっていると思うのか。そして、神が存在しないことを、どうやって証明するつもりなのか。もし神が存在しないのなら、誰が天を創り、星で飾ったのか。誰が地を創り、花で彩ったのか。」

その男は、心の底からため息をつきながら、こう言った。

– 私は、ご主人様、天文学を多少は知っており、誰よりも熱心に神々に仕えてきました。そして、神へのあらゆる希望は虚しいものであり、神など存在しないことを悟りました。　もし天に神がおられたなら、泣く者の嘆きを聞き、祈る者の祈りに耳を傾け、悲しみに打ちひしがれた心の苦しみを見守ってくださったでしょう。しかし、悲しみの中で慰めを与えてくれる者がいない以上、私はそこから、神など存在しないと結論づけるのです。　もし神がおられたなら、悲しみの中で祈り、泣き叫ぶ私の声を聞いてくださったはずだ。なぜなら、主よ、私は二十年、いやそれ以上もの間、深い悲しみに苛まれており、どれほど多くの神々に祈りを捧げ、どれほど多くの生贄を捧げ、どれほど多くの涙と嗚咽を流してきたことか！　しかし、どの神も私の声に耳を傾けてはくれず、私のすべての努力は無駄に終わったのです。

その後、ペトロはこう言った。

「それゆえ、あなたはこれほど長い間、聞き入れられなかったのだ。あなたは、私たちが行き着く唯一の真の神ではなく、虚しく偽りの多くの神々に祈っていたからだ。」

その男と語り合い、神について論じているうちに、ペトロは、相手がマフティディアの夫であり、クリメントとその兄弟たちの父であるファウストであることを悟り、彼にこう言った。

「もしあなたが、天と地を創造された唯一の真の神を信じたいと願うなら、今すぐに、あなたの妻も子供たちも、無事で健やかな姿を見ることになるでしょう。」

すると、彼はこう答えた。

「まさか、私の妻と子供たちが死から蘇るというのか？　私は星占いで自ら知ったし、賢明な占星術師アンヌヴィオンからも、妻と二人の子供が海で溺死したことを聞いているのだ。」

そこでペトロスはファウストを自分の住居に招き入れた。ファウストが中に入ってマフティディアを見ると、恐怖に襲われ、驚きながら彼女をじっと見つめ、黙り込んでしまった。やがて彼は言

った。「これはどのような奇跡によって成されたのか？ 今、私の目の前にいるのは誰なのか？」 そして、一歩近づいて叫んだ。「まことに、私の最愛の妻がここにいる！」

その瞬間、突然の喜びに二人は力尽き、互いに言葉を交わすことさえできなかった。というのも、マトフィディアもまた夫を認めたからである。やがて彼女が少し我に返ると、こう言った。「ああ、私の愛しいファウストよ！ あなたが亡くなったと聞いていたのに、どうして生きていたの？」

その時、皆にとって言葉に尽くせないほどの喜びがあり、その喜びから大いなる涙が流れた。というのも、夫婦は互いを、子供たちは両親を認識したからである。そして、抱き合い、泣き、喜び、神に感謝した。そこにいた者たちは皆、長い別離の後のこの予期せぬ再会を見て、涙を流し、神に感謝した。 ファウストは使徒にすがりつき、唯一の神を心から信じたため、洗礼を請い求めた。そして洗礼を受けた後、涙ながらに神への感謝の祈りを捧げた。その後、皆はその場を離れてアンティオキアへと向かった。

彼らがそこでキリストへの信仰を説いていると、アンティオキアのイゲモンは、ファウストとその妻、子供たち、彼らの高貴な家柄、そして彼らの冒険についてすべてを知り、直ちに使者をローマへ送り、皇帝にすべてを報告させた。 皇帝は総督に対し、ファウストとその家族を大いなる栄誉をもって速やかにローマへ連れてくるよう命じた。 これが実行されると、皇帝は彼らの帰還を喜び、彼らに起こったすべての出来事を知ると、長く涙を流した。その日、皇帝は彼らを称えて宴を催し、翌日、多額の金銭に加え、男奴隷や女奴隷も与えた。そして、彼らはすべての人々から大いに敬われた。

深い敬虔さの中で生活し、貧しい人々に施しを行い、老境に至って必要とする者すべてに財産を分け与えた後、ファウストとマトフィディアは主のもとへ帰った。

一方、彼らの子供たちは、ペトロがローマに来た際、使徒の教えに励み、特に至福のクレメンスは、ペトロのあらゆる旅や活動において常に付き添う弟子となり、キリストの教えを熱心に宣べ伝えた。 この功績により、ペトロはネロによって処刑される前に、彼を司教に任命した[8180]。使徒ペトロの死後、続いてリノ司教、アナクレト司教が亡くなると、 クリメントは、ローマで動乱と内紛が渦巻く中、当時迫害者たちによって揺さぶられていたキリストの教会の船を賢明に舵取りし[8181]、四方から咆哮する獅子や貪欲な狼のような、 キリストの信仰を飲み込み、滅ぼそうとした凶暴な迫害者たちによって、四方から包囲されていたのです。 このような苦難の中にありながらも、彼は人々の魂の救いについても絶えず多大な熱意をもって配慮し続けた。その結果、単なる 庶民だけでなく、王宮の貴族や高官たちの中からも、多くの異教徒をキリストへと導いた。その中には、ある高官シシニウスや、ネルワ王[8182]の一族の多くも含まれていた。 聖クリメントは、ある年の復活祭に、その説教によって424人の名門出身者をキリストへと導き、全員に洗礼を授けた。また、ローマの最高位の高官の息子アウレリアヌスと婚約していた自身の姪ドミツィッラを、貞操を守るよう奉献した。 さらに、彼はローマを7人の書記官に分け、当時キリストのために殺害されていた殉教者たちの苦難を記録させた。

やがて、彼の教えと労苦、奇跡的な行いと徳高い生活によってキリストの教会が拡大していくと、キリスト教信仰の迫害者であったトルクティアン伯爵[8183] は、クレメントによって教えられ、キリストを信じる者たちが数え切れないほど増えているのを見て、民衆の一部を扇動し、クレメントとキリスト教徒たちに対して反乱を起こさせた。 民衆の間で騒動が起こり、反乱者たちはその都市の総督マメルティヌスの元へやって来て、「クリメントはいつまで我々の神々を侮辱し続けるのか」と叫び立てた。一方、クリメントを擁護する者たちは、「この人は一体どんな悪事を働いたというのか

[8180] 67年7月29日。

[8181] 聖使徒クリメントは、91年から100年にかけてローマ教会を統率した。

[8182] ネルヴァ――西暦96年から98年まで在位したローマ皇帝。

[8183] ローマ人にとって、「コミタス」（ラテン語）とは、属州の統治者の補佐官や側近を指す言葉であった。

。あるいは、どんな善行を成し遂げなかったというのか」と語った。　病める者が誰であれ彼のところに来れば、彼はすべての人を癒やした。悲しみを抱いて彼のところに来た者は皆、慰めを受けた。彼は誰に対しても決して悪を行わず、すべての人に多くの善行を施した」。

しかし、敵意に満ちた他の者たちは皆、こう叫んだ。「彼は魔法を使ってこれらすべてを行っているのだ。そして、我々の神々への奉仕を根絶やしにしようとしている。　ゼウスを神とは呼ばず、我らの守護神であるヘラクレスを不浄な霊と呼び、高潔なアフロディーテを娼婦としか呼ばず、偉大なるウェスタについては、彼女を焼き尽くすべきだと言い、　また、アテナ、アルテミス、ヘルメス、クロノス、さらにはアレスをも冒涜し、侮辱している。我らのすべての神々とその神殿を絶えず冒涜し、非難している。それゆえ、彼には神々に犠牲を捧げるか、さもなくば罰を受けるべきだ」。

そこで、マメルティヌス総督は、群衆の騒ぎと動揺に流され、聖クレメンテを自分の元へ連れてくるよう命じ、彼にこう語りかけた。　「すべてのローマ市民が言うように、あなたは高貴な家柄の出身だが、惑わされてしまった。それゆえ、人々はあなたを容認できず、黙って見過ごすこともできない。あなたがどの神を崇めているのかは定かではない。どうやら『キリスト』と呼ばれる、我々の神々に敵対する新しい神のようだ。あなたはあらゆる迷いや妄信を捨て、我々が拝む神々にひれ伏すべきである」。

聖クリメントはこう答えた。「あなたの分別ある判断に訴える。私を聞いてほしい。私に対して無意味に反旗を翻す粗野な民衆の狂った言葉などではなく。なぜなら、多くの犬たちが私たちに向かって吠えてはいるが、彼らは私たちに属するものを奪い取ることはできないからだ。　我々は健全で理知ある人間であるが、彼らは理性を欠いた犬に過ぎず、善き行いに無意味に吠え立てているだけだからだ。騒動や反乱は、常に理性を欠き、思慮のない群衆から生じてきた。　それゆえ、まずは彼らに黙るよう命じてほしい。そうして静寂が訪れたとき、理知ある者が救いという重要な事柄について語ることができ、信仰をもって拝すべき真の神を求めることができるようにするためである」。

聖人はこれらをはじめ多くのことを語ったが、エパルフは彼に何の罪も見出せなかった。それゆえ、トラヤヌス帝[8184]　に対し、神々の件で民衆がクレメントに反旗を翻したという知らせを送ったが、彼を告発するのに十分な証拠はなかった。　トラヤヌス帝は司教に対し、クレメントは神々に犠牲を捧げるか、あるいはヘルソネスの近くのポンテの荒野[8185]　に流刑に処されるかのいずれかを選ばなければならないと答えた。皇帝からそのような返答を受けた司教マメルティヌスは、クレメントを憐れみ、自ら進んで流刑を選ぶのではなく、神々に犠牲を捧げるよう懇願した。そうすれば、流刑を免れることができるからだ。　聖人はエパルフに、追放を恐れてはいないどころか、むしろそれを一層強く望んでいると告げた。　クレメントの言葉には、神から与えられた恵みの力がこれほどまでに満ちていたため、司教でさえ心を打たれ、涙を流してこう言った。「あなたが心を尽くして仕える神が、あなたが宣告された追放の旅において、あなたを助けてくださいますように」。

そして、船と必要な物資をすべて用意して、彼を見送った。

聖クリメントと共に、多くのキリスト教徒も流刑の地へと向かった。彼らは、牧者なしで自由の身でいるよりは、流刑の地で彼と共に生きることを選んだのである。

流刑地に着くと、聖クリメントはそこで、山で石を切り出す刑に処せられた二千人以上のキリスト教徒たちを見つけた。クリメントもまた、同じ作業に就かされた。キリスト教徒たちは聖クリメントを見ると、涙を流し、悲しみに満ちて彼のもとに駆け寄り、こう言った。

「聖なる方よ、私たちがキリストの約束にふさわしい者となるよう、私たちのために祈ってください。」

聖人はこう答えました。

[8184] トラヤヌス――98年から117年まで在位したローマ皇帝。

[8185] ヘルソネス――タウリダ、すなわち黒海半島（現在のクリミア）にある都市。現在のセヴァストポリの近くに位置していた。この地で、ロシアの公であり、使徒に等しいと称されるウラジーミルがキリスト教の信仰を受け入れた。

「私は、ただあなたがたの栄冠の一端に与ることを許してくださった主のそのような恵みに値しません！」

そして彼らと共に働きながら、聖クリメントは彼らを慰め、有益な助言を与えた。彼らが水を運ぶのに大きな困難を抱えていることを知った――六ポプリシュ[8186] もの距離を、肩に水を担いで運ばなければならないため――聖クリメントはこう言った。 「私たちの主イエス・キリストに祈りましょう。主が、砂漠で渇きに苦しむイスラエルの民のために岩を打ち砕き、水を湧き出させたように、御自身の弟子たちのために生ける水の泉を開いてくださるよう。そして、その恵みを受けたら、喜びましょう。」

そして、皆が祈り始めた。 祈りが終わると、聖クリメントは、一か所に立ち、まるでその場所を指し示すかのように片足を上げている子羊を見ました。クリメントは、それが自分以外には誰にも見えない主の御出現であることを悟り、その場所へ向かいながらこう言いました。「父と子と聖霊の御名によって、この場所で掘ってください」。

そして皆は輪になってシャベルで掘り始めたが、子羊が立っていた場所を正確に見つけられず、しばらくは何も見つからなかった。

その後、聖クリメントは小さなシャベルを手に取り、子羊の足が立っていた場所を掘り始めると、たちまち美味しくて澄んだ水が湧き出し、その泉から川が流れ出した。すると皆が喜びに沸き立ち、聖クリメントはこう言った。*「川の流れは神の都を喜ばせる」*（詩編45:5）。

この奇跡の噂は周辺一帯に広まり、聖人の祈りによって予期せず奇跡的に生まれた川を見ようと、またその教えを聞こうと、大勢の人々が押し寄せた。多くの人々がキリストを信じ、聖クリメントの手によって水で洗礼を受けた。 聖人のもとを訪れる人々は非常に多く、キリストに回心する者もまた非常に多かったため、毎日五百人以上が洗礼を受けていた。ある夏には、信者の数がこれほどまでに増えたため、七十五の教会が建てられ、すべての偶像は打ち砕かれ、国中の神殿は破壊された。これは、すべての住民がキリスト教の信仰を受け入れたからである。

トラヤヌス帝は、ヘルソネソスで数え切れないほどの人々がキリストを信じたことを知ると、直ちにアウフィディアンという高官をその地へ派遣した。彼は到着すると、多くのキリスト教徒を拷問にかけ、多くの人々を殺害した。 しかし、人々が皆、喜びをもってキリストのために殉教へと向かっているのを見て、派遣された高官はもはや民を苦しめることを望まず、ただクレメント一人に対してのみ、全力を尽くして犠牲を捧げるよう強要しようとした。 しかし、彼が信仰において揺るぎなく、キリストを堅く信じていることを知ると、彼を舟に乗せ、海の真ん中まで連れて行き、そこで首に錨を結びつけ、海の最も深い場所に投げ込んで溺死させ、キリスト教徒たちが彼の遺体を見つけられないように命じた。 これらすべてが起こったとき、信者たちは岸辺に立ち、激しく泣いていた。その後、彼の最も忠実な二人の弟子、コルニリウスとフィブは、すべてのキリスト教徒にこう言った。「皆で祈りましょう。主が私たちに殉教者の遺体を明らかにしてくださるよう」。

人々が祈っていると、海は岸から三ポプリシュの距離まで引き、人々は紅海を渡ったイスラエルの民のように、陸地を歩いて渡り、神の教会を思わせる大理石の洞窟を見つけた。そこには殉教者の遺体が安置されており、その近くには、殉教者クリメントが沈められた錨も発見された。 信者たちがそこから殉教者の尊い遺体を運び出そうとしたとき、前述の弟子たちに啓示が下り、その遺体をその場に留めておくよう命じられた。というのも、毎年、彼を偲んで海は七日間、このように後退し、参拝を望む人々が訪れる機会が与えられるからである。 こうして、トラヤヌス帝の治世から、ギ

[8186] ポプリシェ――当初は「闘技場」、競技を行う場所を指したが、後に「スタディオン」と同じ意味、すなわち125歩の長さを表す単位となった。

リシャ王ニキフォロス（[8187] ）の治世に至るまで、長年にわたりその状態が続いた。主によって栄光を与えられたこの聖人の祈りによって、その地では他にも多くの奇跡が起こった。

ある日、海はいつもの時間に洞窟への道を開き、多くの人々が聖殉教者の聖遺物を拝むために集まった。　たまたま、両親が立ち去る際に忘れ去られ、洞窟に置き去りにされた子供が一人いた。海が再び元の場所に戻り始め、すでに洞窟を覆い隠そうとしていたとき、洞窟の中にいた者たちは皆、自分たちも海に飲み込まれるのを恐れて急いで逃げ出した。置き去りにされた子供の両親もまた、子供が人々と一緒に先に外に出たのだと思い込み、急いで外へ出た。　辺りを見回し、群衆の中にその子をあちこち探したが、見つからなかった。しかし、海が洞窟を覆い尽くしていたため、再び洞窟に戻ることはもはや不可能だった。両親は悲しみに暮れて泣きじゃくり、大きな嗚咽と悲しみを抱えて家路についた。　翌年、海が再び引き、子供の両親は聖人を崇拝するために再びやって来た。洞窟に入ると、彼らは聖人の墓のそばに座っている、生き生きとした健康な子供を見つけた。両親は子供を抱き上げ、言葉に尽くせない喜びの中で、どうして生き延びることができたのかと尋ねた。

子供は殉教者の墓を指さして、「この聖人が私を生かしてくださり、養ってくださり、海のあらゆる恐怖を私から追い払ってくださったのです」と言った。

すると、両親や祝祭に集まった民衆は大きな喜びに包まれ、皆が神とその聖人を賛美した。

ギリシャの王ニキフォロス治世の、聖クリメントの記念日に、海はかつてのように引き下がらず、その状態は五十年以上も続いた。　やがて、ケルソネソスでゲオルギオス・ブラジェンスキーが司教に就任すると、彼は海が引かないこと、そしてこれほど偉大な神の聖人の遺骨が、まるで水に覆われて隠されたままになっていることを深く嘆いた。

彼が教区を統括していた頃、二人のキリスト教の教師、メフォディオスと、後にキリロスと名付けられた哲学者コンスタンティノス[8188] がヘルソネスを訪れた。彼らはハザール人[8189] への布教に向かっていたが、道中で聖クリメントの聖遺物について尋ね回った。　それらが海中に安置されていることを知ると、この二人の教会教師は、聖殉教者の遺骨という霊的な宝を開示するよう、ゲオルギイ司教を説得し始めた。

司教ゲオルギオスは、二人の教師に促されてコンスタンティノープルへ向かい、当時在位していた皇帝ミカエル3世[8190] および至聖なる総主教イグナティオス[8191] にそのことをすべて報告した。皇帝と総主教は、彼と共に選りすぐられた者たちと聖ソフィア大聖堂の聖職者全員[8192] を送り出した。ヘルソネスに到着すると、司教は民衆全員を集め、詩篇と賛美歌を歌いながら、皆で望みを叶えることを願って海岸へと向かったが、海は割れることはなかった。　日が沈み、船に乗り込んだとき、突然、真夜中の闇の中で海が光に包まれた。まず頭部が現れ、続いて聖クリメントの聖遺物すべてが水から現れた。聖職者たちはそれらを敬虔に受け取り、船に載せ、厳かに街へと運び入れ、教会に安置した。　聖なる典礼が始まると、多くの奇跡が起こった。盲人は目が見えるようになり、足の不自由な者やあらゆる病人は癒やされ、悪霊に取りつかれた者たちは、聖クリメントの祈りと、我らの主イ

[8187] ビザンツ帝国の皇帝ニキフォロス（Nikiforos）は、802年から811年まで在位した。

[8188] 聖メフォディオスと聖キリル

[8189] ハザール人は、トルクメン系を起源とする民族で、カスピ海周辺、ヴォルガ川下流、およびカフカース山脈の麓に居住していた。彼らは、一部は異教徒、一部はイスラム教徒、また一部はユダヤ教を信仰していた。

[8190] ビザンツ皇帝ミカエル3世は、855年から867年まで在位した。

[8191] 聖イグナティオスは、847年から857年まで、そしてフォティオスの後を継いで867年から877年まで、コンスタンティノープル教会を統率した。

[8192] 聖ソフィア大聖堂は、コンスタンティノープルの大聖堂である。

エス・キリストの恵みによって、悪霊から解放された。主イエス・キリストに、永遠の栄光あれ。アーメン[8193]。

聖なる殉教者ペトロ、アレクサンドリアの大司教の生涯と受難

記念日：11月25日

聖ペトロ、アレクサンドリアの大司教は、幼少の頃、同市アレクサンドリアの大司教であった福者テオネに育てられ、その後、不敬虔なローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスによってキリスト教徒に対する激しい迫害が繰り広げられていた時期に、大司教の座に就いた。　当時、すべての牢獄はキリストの殉教者たちで溢れかえり、彼らの血は街路や都市、周辺の野原を染め尽くしていた。この災いと不幸に満ちた恐ろしく悲痛な時代において、聖ペトロは忍耐と多大な労苦をもって神の教会を導いた。　彼は自らの教えと揺るぎない精神の強さをもって、気弱で臆病な者たちを支え、多くの人々を背教や堕落から守り、数多くの信者を殉教の冠へと導いた。　キリストのために追放され、ティルス、フィニキア、パレスチナに滞在していた聖人は、手紙によって羊たちを支え、聖霊の力で彼らを強めた。また、誰かが拷問を恐れてキリストから離れてしまわないかと心配し、昼夜を問わず彼らのために神に祈りを捧げた。　再びアレクサンドリアに戻ったペトロは、牢獄に閉じ込められていた六百五十人の囚人たち――その中には多くの長老や聖職者が含まれていた――を助けましたが、彼らは皆、様々な拷問の末に殉教しました。ペトロは彼らの苦しみと忍耐を見て、霊において喜びました。　彼が羊の群れを善く牧していた頃、アレクサンドリアで、羊の皮を被った貪欲な狼――異端者アリウス――が立ち上がり、小麦の中に呪われた悪魔的な教えという雑草を蒔き始め、イエス・キリストの神性を冒涜し、その冒涜によって神の教会に害を及ぼした。　善き羊飼いは、しばしばこの狼の口を封じ、彼を制止し、キリストの教会に汚れなく伝えられてきた聖三位一体の正しい信仰告白を乱さないよう、懲らしめ、禁じた。　しかし、アリウスが依然として改心せず、その悪意が真理に従おうとしなかったとき、聖ペトロはこの冒涜者を呪い、不適格な一員として教会から破門した。　そして、復讐心に燃えるアリウスは、キリストの群れから追放されると、闇が光から逃れるように身を隠した。なぜなら、聖書に記されているように、悪を行う者は皆、光を憎み、その悪行が露見しないよう、光のもとには来ないからである（ヨハネ3:20）；　また、不義の者は、いかなるお世辞や巧妙な言葉でも惑わすことができなかったこの警戒心の強い牧者のもとへ、あえて近づくことはできなかった。

一方、アレクサンドリアにおけるキリストを信じる者たちの数は、過酷な時代にもかかわらず、ますます増え続けていた。なぜなら、いかなる拷問も、救いを願う者たちのキリストへの道を妨げたり、遮ったりすることはできなかったからである。多くの人々は、自分の財産だけでなく、命さえも惜しまず、偶像崇拝を捨てて洗礼を受けるために、聖ペトロのもとへと急いだ。

東方諸国を支配し、ニコメディアに滞在していた不敬虔な皇帝マクシミアヌスは、聖ペトロの教えによって多くの者が偶像崇拝からキリストへと回心していることを知ると、トリブヌスに兵士を

[8193] 聖キリルとメフォディウスは、聖クレメンスの聖遺物の一部を持ち帰り、教皇アドリアヌス2世（867年）の在位中にローマへ送ったことが知られている。しかし、聖人の遺体と尊い頭部は、この都市がロシアの大公である聖ウラジーミルによって占領されるまで、ヘルソネソスに残されていた。　聖ウラジーミルは、ヘルソネソスで聖なる洗礼を受けた後、「自らの祝福とすべての人々の聖化のため」に聖クリメントの聖遺物も持ち帰り、キエフの聖母デシャティナ教会に安置した。　聖殉教者の聖遺骨は、タタール人の侵攻までここに安置されていた。タタール人の侵攻の際、これらの聖遺骨がどこへ消えたのか、信者たちによって隠されたのか、あるいは別の場所へ移されたのかは、定かではない。現在、これらの聖遺骨の一部を見ることができるのは、例えばサンクトペテルブルクのアレクサンドル・ネフスキー大修道院にある祭壇上の十字架の中などである。

率いさせ、聖ペトロを捕らえて縛り上げ、自分の元へ連行するよう命じた[8194]。 使者たちはアレクサンドリアに到着すると、聖ペトロが多くの信徒たちと共に教会で全聖人の記念礼拝を執り行っているところを見つけ、彼を捕らえて重い足枷をはめた。すると、民衆の間で大きな動揺が起こり、多くの人が聖ペトロのために泣き、他の人々は「なぜ私たちの牧者を連れ去るのですか？」と叫んだ。 そして、師のために自らの命を捧げようと願うアレクサンドリアの民全体が集まり、民衆全員が王とその使節たちに向かって叫び声を上げた。トリブーンは、民衆の激しい動揺と憤りを目の当たりにし、聖人を教会近くの牢獄に厳重に監禁するよう命じ、起こったすべての出来事を王に報告した。 王は書簡を読み、激しく怒り、キリスト教の教師ペトロの首を刎ね、抵抗する者はすべて剣で処刑するよう書面で命じた。 トリブンは王の書簡を受け取ると、その命令を遂行しようと努め、ペトロを斬首の場へ連行しようとしたが、昼夜を問わず牢屋のそばに集まっていた民衆の群れは、自分たちの父を死の場へ連れ出すことを許さなかった。 そこには、数え切れないほどの男女、老若、修道士や修道女たちがおり、彼らは神の司教への愛に結ばれて、牢獄から離れようとはしなかった。 彼らが、ペトロを連れ出すために　から牢屋へ向かう武装した兵士たちを目にしたとき、皆一斉にこう叫んだ。「もしあなたがたが王からの命令を受けているのなら、まず私たち全員を殺し尽くしてから、それから私たちの父を連れ去りなさい。私たちは牧者から離れることはなく、私たちの魂の教師であり医者である方が苦しむことを決して許さない」。

これを知り、大勢の群衆を目の当たりにしたトリブヌスは、大規模な流血を招きたくなかったが、王の命令を遂行するため、密かにペトロの首を刎ねようと試みた。

こうした出来事が起こっている最中、アリウスは、自分を聖なる使徒的教会から破門した大司教が、牢獄で足枷を嵌められ、キリストのために処刑されようとしていることを知ると、彼のもとへ現れ、お世辞と偽善に満ちた悔い改めの態度を示した。彼は、その大司教の後を継いで司教座に就き、アレクサンドリアの大司教となることを望んでいたのである。 彼は、あたかも許しを請い、異端という罪を悔い改めているかのように現れ、数人の長老たち、とりわけアキロスとアレクサンドロスに対し、ペトロに彼のために取り成し、その罪を赦し、教会の交わりに受け入れてくれるよう懇願した。 人間の心の思いのすべてを知っておられる神は、アリウスの狡猾な心もご存じであり、ある夜、聖ペトロに現れて、その呪われた異端者のあらゆる狡猾さを明らかにし、彼を教会に受け入れないよう命じられた。 朝になると、長老アキラとアレクサンドロスを筆頭とする多くの敬虔な信徒や善良な市民たちが牢獄を訪れ、聖なる大司教の足元にひれ伏して、アリウスを赦し、その誓いを解いてくれるよう懇願し始めた。至福のペトロは、泣きながら嘆息して、彼らにこう答えた。 「愛する者たちよ、あなたがたは、誰のために懇願しているのか分かっていない。あなたがたが懇願しているのは、キリストの教会を苦しめている者なのだ。あなたがたも知っている通り、私は自分の羊たちを愛しており、そのうちのどれ一匹たりとも滅びることを望んではいない。何よりもまず、私は神に、すべての人に罪の赦しと救いを与えてくださるよう祈っている。 ただアリアスだけは拒絶する。彼は神ご自身によって拒絶され、聖なる教会から破門されたのである。それは私の裁きによるというよりは、むしろ神の裁きによるものである。なぜなら、彼は人の前ではなく、神の前で罪を犯し、ケルビムやセラフィムでさえ直視することのできない聖三位一体の神秘を冒涜し、ただ絶えずこう讃えているからだ： 「聖なる、聖なる、聖なる主サバオトよ」、天の軍勢はこう唱える。「天と地を御栄えで満たしたまえ、[8195] 」。この恥知らずな異端者は、その冒涜によって、父と子と聖霊との間に分裂をもたらそうと敢えてしている。すべての被造物が、その創造主のために彼に怒りを向けているとい

[8194] リマの住民は、太古の昔から「部族（トリブ）」と呼ばれるいくつかの集団に分かれていた。 部族の長や長老たちは、「トリブーン」という名称で呼ばれるようになった。時が経つにつれ、この名称は多くの国家公職者に用いられるようになったが、主に、我々の大佐のような軍指揮官を指すようになった。ここでの「トリブーン」とは、当然ながらそのような指揮官の一人を指している。

[8195] ここには、預言者イザヤの幻に関する言及が含まれている。イザヤ書第6章などを参照のこと。

うのに、どうして彼を赦すことができようか？　それゆえ、アリウスは今世においても来世においても呪われよ」。

至福のペトロがこう告げると、アリウスのために嘆願していた者たちは皆、彼の足元にひれ伏し、もはや彼を煩わせることを敢えてしなくなった。　一方、聖ペトロは長老のアキラスとアレクサンドロスを脇に呼び寄せ、こう言った。「私は罪深い者だが、主なる神が私を殉教の冠へと招いておられることを知っている。そして、死ぬ前に、教会の柱であるあなたがたに、今夜主が私に啓示してくださった神の奥義を告げよう。　誠実なアキッラよ、あなたは私の後に大司教の座に就き、その後にふさわしい長老アレクサンドロが後を継ぐだろう。さて、アリウスについては、私が彼に対して不公正であり、罪を犯す者たちに対して残酷であるなどとは思わないでほしい。なぜなら、弱さゆえに犯された罪は、たとえそれが最も大きなものであったとしても、アリウスの悪意よりは小さいからだ。　弱さゆえに罪を犯した者には赦しを与えることができる。しかし、あなたがたが赦しを求めているあの呪われた者については、その魂が欺瞞と冒涜で満ち溢れている以上、どうして私が赦すことができようか。　なぜなら、彼の心からは、全能の神の御子に対する冒涜の川が流れ出ているからだ。彼は、目に見えるものも見えないものもすべてを創造された方、すなわち預言者たち、使徒たち、福音書記者たちが宣べ伝えた方を、「被造物」と呼んでいるのだ。　アリウスが私の懲らしめと戒めに耳を貸さなかったというのに、どうして私にあなたの願いを受け入れ、彼を赦すよう強いることができるのか？　そして、もし私が彼を呪ったとしても、それは私自身の意思によるものではなく、この夜、私に現れた私の神、キリストの御許しによるものである。　私がいつものように祈っていると、突然、大きな光が牢屋を照らし、私は私の主イエス・キリストを目にした――十二歳の少年の姿で、その顔は太陽よりも明るく輝いており、私はその言葉では言い表せないほどの栄光に満ちた御顔を見つめることさえできなかった。　主は白いキトンを身にまとっておられましたが、それは上から下まで引き裂かれていました。主は両手で胸元を押さえ、ご自身の裸身を隠しておられました。　このすべてを目にしたとき、私は恐怖と戦慄に襲われ、恐れおののきながら主にこう祈った。「創造主よ、誰があなたのキトンを引き裂いたのですか？」すると主は答えて言われた。「狂ったアリウスが私を引き裂いたのだ。彼は、私が自分の血によって贖った人々を、私から引き離したからだ。　用心し、彼を教会の交わりに受け入れないようにしなさい。彼は、わたしとわたしの民に対して、悪意に満ちた敵対的な企みを企てている。今、彼らはあなたに彼を赦してほしいと頼もうとしているが、彼らの言葉に耳を傾けてはならない。また、羊のように狼を群れの中に受け入れないようにしなさい。　あなたの後を継いで司教となるアキレスとアレクサンドロスには、彼を受け入れず、むしろ皆の前で彼を呪うよう命じておきなさい」。これこそ、私に命じられたことをあなたがたに告げたのである。もしあなたがたがこれを聞き入れず、命じられたことを実行しなければ、私はその責任を負わない」。

そう言うと、彼はひざまずいて祈り、皆も彼と共に祈った。祈りを終えると、彼は言った。「兄弟たちよ、私のために祈ってください」。出席者たちは祈りを捧げ、「アーメン」と答えた。　一方、アキラスとアレクサンドロスは、彼の手に口づけをして泣いた。彼は彼らに、もう二度と自分の姿を見ることはないだろうと告げていたからである。そして、長老たちは、聖ペトロがアリウスについて語ったすべての言葉と、アリウスを狼であり、神の御子の敵であるとして、教会の交わりから排除するよう命じたことを、人々に告げた。

その後、聖ペトロは、キリスト教徒たちが熱烈な熱意に燃え、王の使者が彼を牢獄から連れ出して処刑しようとするのを許さない様子を見て、民衆と王の使者たちとの衝突によって大虐殺が起こることを恐れ、　さらに、自らも一刻も早く肉体を離れ、主のもとへ赴きたいと願っていたため、人々を無傷で守り、望み通りの最期を早めるために、密かに自分を拷問者たちの手に委ねようと決意した。　彼は民に知られぬよう、自分に付き添っていた信頼できる奴隷の一人をトリブーンのもとへ遣わし、こう告げた。「もしマクシミアヌス王の意にかなうことを望むなら、夜に密かに牢獄へ来て、壁を突き破り、私を連れ出し、王の命令を遂行せよ」。

そして、その通りになった。夜が更けると、キリストの羊の群れの聖なる牧者が収容されていた牢屋の扉の前には大勢の民衆が群がり、誰も彼のもとへ近づくことを許さなかった。トリブヌスは兵士たちを率いて現れ、一人通れるだけの幅で牢屋の背後の壁を突き破った。　その夜は冬で風が強く吹いていたため、キリスト教徒の誰も壁を破る音を聞くことはなかった。聖ペトロは十字架の印を自らに描いて、「すべての人々が滅びるよりは、一人の人間が死ぬほうがましだ」と言い、壁を破って牢獄から出て行ったため、信者たちの誰もそのことに気づかなかった。

トリブヌスと兵士たちは、死に向かって歩む聖人の勇気に驚き、彼を捕らえて、聖使徒マルコが殉教した場所へと連行し、そこでその尊い首を切り落とした。

聖マルコの墓の近くには、一人の修道女がいた。聖ペトロが斬首されたその夜、彼女が神に祈っていると、天から「ペトロは使徒たちの始まりであり、ペトロはアレクサンドリアの殉教者たちの終わりである」という声が聞こえてきた[8196]。

朝になると、人々は自分たちの牧者が密かに牢獄から連れ出され、マルコの墓のそばで斬殺されたことを知ると、泣きながらその聖なる遺体のもとへ駆けつけ、それを運び出して教会へと入れた。そこで、尊い頭部を胴体に合わせ、彼を玉座、すなわち高き場所に安置した。その根拠は以下の通りである。　この聖なる司教は、生前、牧会奉仕の全期間を通じて、決して高座に座ることはなく、時が来ても足元だけに座り、高座の階段そのものには決して登らなかった。このため、民衆や聖職者たちはしばしば憤り、高座に座るよう求めたが、彼は決して承諾しなかった。　ある時、聖体礼儀の後、聖職者全員を呼び集めて、彼はこう言いました。「私がなぜ自分の高座に座らず、その階段を登らないのか、ご存知ですか？　それは、祭壇に近づくと、そこに天の光と、まるでそこに宿る神聖な力のようなものが見えるからです。　恐怖に襲われ、自分はそれに値しないと思い、そこに座ることを敢えてせず、足元に、それも恐れを抱きながら座るのだ。これ以上、私を強要しないよう、こう言っておくのだ」

この言葉に基づき、彼が亡くなった後、人々は彼の遺体を高台に安置し、皆が「神に愛された聖人よ、私たちのために祈ってください！」と叫んだ。

その後、人々は聖三位一体を賛美しながら、彼を丁重に埋葬した。

父と子と聖霊、唯一の神。彼に、私たちからも栄光と礼拝を捧げます。今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

聖人たちのための共通トロパリオ、第4調:

私たちの父なる神よ、御自身の柔和さをもって常に私たちと共にいてください。御慈悲を私たちから取り去ることなく、彼らの祈りによって、この世における私たちの生涯を導いてください。

[8196] それは311年のことだった。　著名な教会史家であるエウセビオス（ケサリアの司教）、すなわち聖ペトロス・アレクサンドリアスの同時代人は、後者を「聖性においても、また聖なる務めの実践においても、司教たちの神聖な装飾」と呼んでいる。彼の勧めにより、アレクサンドリアの信者たちの大群衆が殉教の冠を戴いた。　拷問の残酷さに耐えられなかった者たちの弱さを見て、彼は306年に悔い改めの規則を配布した。この規則は古代から全地教会の規則の一部として受け入れられており、キリスト教の愛に満ち、聖書の言葉に基づいており、確固たるものである。　その際、彼は堕落した者たちを教会の懐へと導き戻すことに何よりも尽力し、堕落した者たちを種類別に分類し、堕落の事情に配慮し、すべての人に悔い改めを呼びかけ、ただ一つの罪、すなわち悔い改めの欠如のみを許されざるものとして宣言した。　さらに、復活祭に関する彼の著作や、抜粋集である『神性について』も知られており、その中から神の御子の受肉に関する素晴らしい箇所が、第3回（エフェソス）および第4回　（カルキドン）公会議で朗読されたほか、『救い主の到来について』や、その他いくつかの哲学的・神学的な著作も残している。

コンダク、第4調：

揺るぎない教会、神聖なる聖堂、敬虔さの真に堅固な柱である、クレメンテとペトロ、万人に称えられるお二方よ、お二人の祈りによって、すべてを守り給え。

聖ペトロ・モルチャニクの記念日

記念日：11月25日

私たちの聖なる父ペトロは、ポンテで敬虔な両親の間に生まれ、両親と共に過ごしたのはわずか7年間でした。その後の人生の大半を、まずガラティアで学問に励み、さらに修養を深めるためにパレスチナへ赴き、そこで祈りに専念した後、アンティオキアに定住しました。　ある納屋に閉じこもり、自らの魂を顧みながら、絶え間ない祈りに時間を費やしました。パン以外は何も口にせず、水以外は飲まず、それも2、3日に一度、ごく少量だけでした。彼は悪霊を退ける力を持っていました。ある時、聖ペトロはダニエルという名の男を悪霊から解放した。癒やされたその男は、聖ペトロの指導と教えに従い、彼の生き方を模範とするようになった。聖ペトロは盲人の目を開き、様々な病を癒やした。　彼は、書面または口頭で教えを説いた。その聖なる生涯により、彼はアンティオキア全土およびその周辺地域で名声を博した。90年を生き、多くの美徳と沈黙の功績に彩られた聖人は、429年頃、安らかに主のもとへ旅立った[8197]。

12月9日

11月26日（旧暦）

私たちの尊い父アリピオス・ストルプニクスの生涯

記念日11月26日

キリストの僕アリピオスは、パフラゴニアの都市アドリアノープル出身であった[8198]。主は、彼が生まれる前から、すでに彼を御自身の奉仕に選び出しておられた。ある夜、息子が生まれる少し前、彼の母は次のような幻を見た。彼女は、角に二つの燃えるろうそくを灯した、非常に美しい子羊を腕に抱いているように見えたのである。　アリピオスの誕生の時が訪れると、部屋は神聖な光に満たされた。これは、アリピオスが世の灯となるよう定められていたことから、彼の将来にわたる義なる人生の輝きを予兆するものであった。　アリピウスの誕生後、母親は眠りにつき、夢の中で再び次のような幻を見ました。町の住民全員が彼女の部屋に集まり、赤ん坊を取り囲みながら、詩篇や聖なる賛美歌を歌っていたのです。母親はこれらの幻を心に刻み、息子の将来の運命について思いを巡らせました。

しばらくして夫が亡くなると、彼女は再婚を望まず、未亡人としての日々を断食と祈りに捧げ、清らかな生活をもって神に奉仕し、息子と共に、孤児や未亡人の真の父である神にすべての希望を託した。

息子を育て上げ、彼を神への奉仕の道へと導いた彼女は、かつてサムエルの母アンナ（サムエル記上1:24–28）のように、息子を神の神殿へ連れて行き、アドリアノープルの司教である福者テオ

[8197] 聖ペトロ・モルチャニクの記念日は、2月1日にも祝われる。

[8198] パフラゴニアは、小アジア北部に位置するローマ帝国の属州で、首都はガングラであった。

ドロスに託した。　その少年に宿る神の恵みを霊によって悟った司教は、彼を深く愛し、聖書の教えを授け始めた。成長するにつれ、アリピウスは知恵と知性において同世代の者たちを凌駕し、その善良な行いと美徳によって、神と人々からの愛を勝ち得た。　彼の魂は神への畏れ、謙遜、そして柔和さに満ちていた。また、その知恵によって、まるで白髪の持つ知恵を体現しているかのようであり、*「知恵は人にとって白髪であり、汚れなき生活は老いの年である」*（箴言4:9）という言葉を体現していた。　これらの美徳ゆえに、彼は教会の会計係に任命され、その後、助祭の聖職に叙階され、その聖職において神への汚れなき奉仕を全うした。

しばらくして、アリピウスは、沈黙の中で独り、より熱心に神に仕え、絶え間ない神への思索に浸るために、隠遁生活を望むようになった。　彼はこの心の願いを、義なる母に打ち明けた。その母は、預言者アンナ（[8199] ）のように、教会を離れず、断食と祈りによって昼夜を問わず神への奉仕を全うしていた。彼女はとっくに自分の財産を貧しい人々に分け与え、キリストと婚約し、ディアコニッサに任命されていたのである。　聖アリピオスは、この神に喜ばれる主のしもべ、すなわち自身の母に、自分の決意を打ち明けた。

「私は東へ行きたいのです」と彼は彼女に言った。「なぜなら、あそこの荒野には、沈黙の中で多くの聖なる父たちが暮らしていると聞いたからです。私は彼らと共に暮らし、彼らの神に喜ばれる生き様を見つめながら、神の助けを借りて、彼らの徳高い生活に倣うよう努めたいのです。」　母よ、どうか私のために祈ってください。主が御自身の聖なる御心によって私の道を導き、私のこの試みが主の御心に適うものとなりますように。

息子との別れに少しも悲しむことなく、母は天に向かって両手を挙げ、神に熱心に祈った後、彼に祝福を与え、安らかに送り出した。　母以外の誰にも告げることなく、聖アリピオスは故郷のアドリアノープルを後にし、神聖な願いに燃えて、鹿が水の泉へと駆け寄るように、旅路へと身を投じた。　彼の去りゆく知らせは、テオドロス司教や聖職者、信徒たちを深く悲しませた。彼らは、その高潔で天使のような生き方の模範によって神の教会を輝かせ、多くの信徒たちに大きな恵みをもたらしていた良き同胞を失ったのである。　司教は直ちに、聖人を捜索するため、至る所に自分の従者たちを派遣した。彼らはほどなくして、聖殉教者テオドロスの記念日が祝われる日に、エウカイテ（[8200] ）で彼を発見した。懇願したり脅したりと、多大な苦労の末、ようやく彼を故郷へ連れ戻すことができた。なぜなら、パフラゴニアが、多くの人々を罪の闇から神に喜ばれる生活の光へと招くべきそのような灯火を失うことは、神の御心に適わなかったからである。　自宅に戻った聖アリピウスは、失敗に終わった旅と叶わなかった願いを深く嘆いた。しかし、あらゆる慰め主である神は、神聖な御出現によって彼の悲しみを慰められた。ある驚くべき人物、いや、むしろ神の天使が幻の中で彼に現れ、こう言った。

「アリピウスよ、切望していた旅から戻ったことを嘆くことはない。神を愛する人が、敬虔で神に喜ばれる生活を送るために選ぶ場所は、どこであれ聖なるものであると、しっかりと知れ。」

この幻視に慰められたアリピウスは、悲しむことをやめ、修道生活を送り続け、熱心に修行に励み、神に仕えた。しかし、どこか人里離れた場所に身を隠したいという願いは、彼の中から消えることはなかった。　そこで彼は何度も家を出て、周辺の山々や野原、森を巡り、神を想うのに適した場所を探した。ある日、町の南にある山に登ると、町の喧騒や雑踏から離れた、高く風光明媚な場所を見つけた。　その場所を気に入った彼は、掘削用の道具を持ち込み、そこで井戸を掘った。その際、彼は鍬で掘るというより、むしろ口をつぐんで神に熱心に祈りながら、地面から水を汲み出した。この作業を終えると、聖アリピオスは司教のもとへ行き、そこに定住し、教会を建てることを許可してほしいと願い出た。　司教は、彼の願いを拒むことはしなかったものの、密かに使用人を遣わして

[8199] 預言者聖アンナの記念日は2月3日に祝われる。

[8200] エウカイテ――小アジア北部の都市で、現在はメレイヴァンと呼ばれる。

泉を大きな石で塞ぎ、土で埋めさせた。　司教は、その聖人がその場所に定住することを望んでいなかった。なぜなら、その山は非常に高く、聖人を訪ねようとする者にとってはほとんど登り難い上、しかも街から遠く離れていたからである。司教は、アリピウスが街の近く、より便利な場所に定住することを望んでいた。　泉が埋められているのを見つけた聖人は、その山を離れ、町の周辺で別の場所を探し始めた。

町のすぐ手前には、古代に異教徒であるギリシャ人が死者を埋葬していた荒野が広がっていた。その荒野には不浄な霊の群れが棲みついており、そのため誰もがその場所を恐れ、悪霊たちが引き起こす恐怖のせいで、誰もそこを通ることができなかった。　誰もがこの砂漠を避けていることに気づいた聖アリピウスは、そこにあった棺の一つに身を寄せた[8201]；その棺の上には石の柱が立っており、柱の上には偶像が置かれていた。聖人はその偶像を土器のように打ち砕き、その場所に聖なる十字架を立てた。　こうして、悪魔の恐怖や襲撃を微塵も恐れず、彼はそこで暮らし始め、十字架という武器と祈りの矢によって、悪魔の軍勢を遠くへ追い払った。ある時、眠りの中、聖アリピオの前に、司祭の衣をまとった二人の敬虔な男が幻として現れ、彼にこう言った。

「神の人よ、なぜこれほど長く私たちをここで待たせたのか。もしあなたが、神からこの場所を聖別し、そこで神への賛美を増すよう定められたアリピオであるならば、直ちにあなたが成すべき務めに取り掛かりなさい。」

目を覚ますと、聖人は夢に現れた二人の男たちの言葉に驚き、彼らが一体誰なのか、また神への賛美を増すためにこの場所で何をなすべきなのか、と首をかしげた。　その直後、アドリアノポリスのテオドロス司教が何らかの用事で皇帝のもとへ赴く必要が生じ、聖アリピオスは聖職者として彼に同行することになった。　本心とは裏腹に、ただ司教の意志に従うのみとして、彼は旅立ち、司教がコンスタンティノープルへ向かう船に乗る予定だったハルキドンまで彼を見送った。

その間、アリピオスは海辺にあるある教会に入り、そこで祈りを捧げた後、うたた寝をしてしまった。すると、太陽のように美しい乙女が幻として彼の前に現れ、こう言った。

「さあ、早く起きなさい、アリピウス！」

その美しさに驚いたアリピウスは、彼女に尋ねた。

「お嬢様、あなたはどなたですか。なぜ私に早く起きるようおっしゃるのですか？」

「私はエウフィミア、キリストのしもべであり殉教者です」と彼女は答えた。「起きて、もし望むなら、あなたの故郷へ行きましょう！神の御心により、私はあなたの旅の伴侶であり、助け手となります。」

聖なる殉教者がそう言い終えると、アリピウスは目を覚ましたが、目の前には誰もいなかった。しかし、彼の心は霊的な喜びで満たされていた。彼は、神が自分に沈黙の生活に戻ることを望んでおられるのだと悟った。　そこで、司教のもとを後にし、聖大殉教者エウフミアの目に見えない助けと祈りに導かれて故郷へと戻った。彼は、その聖女の素晴らしい姿と優しい会話を常に心に留め、霊的に喜びを感じていた。

アドリアノープル、すなわち自身の沈黙の荒野に到着すると、彼はこの地に聖エウフィミアの名を冠した教会を建てることを思い立った。　しかし、そのための資金は彼にはなかった。というのも、彼はすべての財産を施し、私たちのために貧しくなられた主に従ったため、乞食同然で、腰には金も銀も、ましてや銅さえも持っていなかったからである。そこで彼は、知り合いの市民や隣人たちに助けを求めた。　彼の願いを知った人々は、熱心に必要とするものをすべて持ち寄った。そして間もなく、異教の墓の間に、聖殉教者エウフィミアの名を冠した教会が建てられた。基礎が掘り下げられたとき、聖アリピオスの夢に、前述の二人の男が司祭の装束を身にまとって再び現れた。　そのう

[8201] 当時の墓は通常、山中の洞窟であり、自然の洞窟もあれば、人工的に掘られたり彫り出されたりしたものもあり、そこには特別な布やシーツに包まれた死者の遺体が安置されていた。

ちのひとりは手に香炉を持ち、基礎に香を焚き、ここにどれほど偉大な教会が建てられるかを示していた。もうひとりはこう歌っていた。

「この場所にオサナあれ！」

この二人の男が誰であったかは定かではないが、しばらくして、聖アリピオの夢に二度現れたその二人の、朽ちることなく芳香を放つ聖遺骨が、その場所で発見された。彼の命により、これらの聖遺骨は、彼が建立した教会に安置された。

教会の奉献式が行われる前から、悪魔の軍勢は、聖アリピウスの尽力により、自分たちの住処の真ん中に聖人たちの集落が築かれつつあるのを見て、　かつて彼らがすべての人々に恐怖と戦慄をもたらしていた場所に、神の恵みが現れ始めているのを見て、大いなる叫びと悲鳴を上げて、新しく建てられた教会と聖人の修道室へと殺到し、建物を基礎から破壊し、聖人を恐怖に陥れてそこから追い出そうとした。　その激怒の中で、悪魔たちは、苛立った獣や怒りに燃える戦士のように、様々な声で叫び立てた。しかし、キリストの戦士である　は祈りに立ち、それを無敵の武器として手に取り、たちまち悪魔の幻影のような力を打ち破った。その結果、悪魔たちは、風で吹き飛ばされる塵のように、恥辱のうちに逃げ去った。

教会が奉献されると、人々は神を賛美し、聖人の魂に益となる教えに耳を傾けるために、街中から教会へと集まり始めた。　そこでアリピオスは、敵に対してさらに強固な備えを整え、最初の柱上者である聖シメオンのように柱の上に登り、まるで見張り人のように、遠くから迫り来る悪魔の軍勢を見据え、昼夜を問わず勇敢に彼らと戦った。　悪魔たちは、常に彼に打ち負かされていたにもかかわらず、聖人に対する恥知らずな攻撃を止めようとはしなかった。

ある夜、悪霊たちはアリピオスに石を投げつけ始め、彼に重傷を負わせた。石の打撃に耐えながら、聖人は悪霊たちにこう言った。

「人間を憎み、破滅をもたらす悪魔どもよ、私に何を求めているのか？　あなたがたが神の僕たちに憤り、悪意を持って反抗しても無駄だ。あなたがたが私に投げつけるこれらの石は、再臨の日にキリストの前で、あなたがたの恥知らずな厚かましさと悪意を証言することになるだろう。知っておけ、私はあなたがたの石投げなど何とも思っておらず、まるで子供の遊びのように考えているのだ。　さあ、私は頭上の覆いとなっていた軽い板を取り外す。そうして、より快適に打撃を受け、私の主のために、聖なる第一殉教者ステファノが耐え抜いたのと同じ苦しみを耐え抜くのだ。あなたがたはユダヤ人の手によって彼を殺した。あなたがたは彼らと共に、燃えるゲヘナを相続することになるだろう。

この言葉を聞き、無敵の殉教者が神のためにあらゆる苦難に耐える覚悟があることを悟ると、悪霊たちはその場から四方八方に逃げ去った。その夜、通りかかった何人かの通行人がこれを耳にし、また、様々な姿に変身してそこから逃げ去る悪霊たちが、大声で泣き叫び、こう叫んでいるのを見た。

「アリピオスが私たちを住処から追い出した！　どこへ行けばいい？　私たちに居場所などどこにもない！」

一方、聖人は柱の上、頭上にあった軽い屋根を取り外し、空を唯一の覆いとして立ち続け、寒さや暑さ、雨や雹、雪や霜を勇敢に耐え抜いた。　そして彼は、このような自発的な殉教者として、短期間ではなく53年間、あたかも十字架に釘付けにされたかのように、その柱の上で苦難に耐え続けた。その間、多くの民衆――男女、若者、老人――が、彼の有益な教えに耳を傾け、病の癒やしを受けるために、彼の元へと集まってきた。　彼らの多くが彼のすぐそばに定住したことを受け、聖人は男子修道院と女子修道院の二つを、一方は柱の片側に、もう一方は反対側に設けるよう命じた。彼自身は柱の中央に立ち、その教えと天使のような生き方の模範によって両修道院を啓発し、祈りによってそれらを守り続けた。　アリピオスは彼らに修道生活の規則と規律を与え、悪魔の策略から身を守るよう厳重に命じ、特に女性たちに対しては、決して男性の目の前へ現れてはならないと厳命した。

女子修道院には、至福のアリピオスの母が娘と共に暮らしており、また彼の妹である　マリアをはじめ、アドリアノープルの他の貴族の妻たち、その中にはエウフィミアやエヴヴラといった女性たちもおり、彼女たちはすべての財産、子供たち、親族や友人、そしてこの世のあらゆる虚栄や快楽を捨て去り、天使の姿に身を包み、その生き様をもって天使そのものに倣おうとしたのである。

尊者（アリピオス）の母はディアコニッサの位にあり、修道女のような生活を送ってはいたものの、剃髪することは望まなかった。

「助祭婦であることも、修道女であることも、同じことだ」と彼女は言っていた。

息子は何度も彼女に修道服を身にまとうよう懇願したが、彼女は夜の幻視の中でその指示を受けるまで、彼の言葉に耳を貸さなかった。その時、彼女は自ら息子に、自分を修道女として剃髪してほしいと頼むようになった。彼女の幻視には、豪華な宮殿が現れ、その内部からは神を賛美する甘美な歌声が聞こえてきた。　彼女がそこに入ろうとしたとき、宮殿の入り口に立っていたある立派で光に満ちた男が、彼女の行く手を阻んでこう言った。

「あなたはここには入れない。なぜなら、ここでは修道生活を通じて主に仕えた主の女奴隷たちが歓喜しているからだ。あなたには修道服を着ていない。それゆえ、ここに入って彼女たちの喜びに加わることはできない。」

この言葉に聖アリピオスの母は深く恥じ入り、目を覚ますと、息子に懺悔の衣を授けてもらうよう懇願した。懺悔の衣を授かった後、彼女は以前の労苦に加え新たな労苦を重ね、その修行を倍増させた。

その後も長年にわたり修道生活を送り、この世で主に喜ばれる生き方を全うして、主のもとへ帰った。一方、彼女の息子である私たちの尊い父アリピオスは、神にこれほどまでに愛されたため、生前から天の　光に照らされていた。彼の頭上には何度か、雲まで届く炎の柱が現れ、周囲一帯を照らし出したのである。　この現象は頻繁に起こり、時には昼に、時には夜に、しかし大部分は夜に見られ、雷や稲妻が鳴り響く時には、聖人の頭上に現れるこの天の光は、彼が立っていた石柱よりも高く輝いていた。

敬虔に生きる信者たちの多くは、この光景を目にする恵みにあずかった。一方、遠くからその光を見た人々は、聖人の柱が実在する火で燃えているのだと考えた。しかし、ふさわしい者たちは、この言葉では言い表せない天の栄光のしるしをはっきりと見ることができた。こうして神は御自身の御心に適う者を栄光に包まれたのである。

また、聖人はキリストの恵みによって多くの奇跡を行い、病人を癒やし、人々から悪霊を追い出し、未来を予言した。死去の14年前、彼の足は激しい病に襲われ、それ以来ずっと立つことができず、この世を去るその瞬間まで、片側を下にして横たわっていた。　聖人の弟子たちが彼を反対側へ寝返そうとしたとき、彼はそれを許さなかったが、第二のヨブのようにすべてを耐え忍び、神に感謝しつつ、喜びをもって神のもとへ旅立った[8202]。そして、彼の帰天後、キリスト、すなわち私たちの神の栄光のために、彼の聖遺物から病人に多くの癒しがもたらされた。キリストは父と聖霊と共に、永遠に賛美される。アーメン。

トロパリオ、第1声：

忍耐の柱であられた、熱心な先祖である尊者よ。苦難においてはヨブに、試練においてはヨセフに、そして肉体の中にありながら霊的な生活を送られたアリピエ、わが父よ、キリスト・神に、わが魂が救われますようお祈りください。

[8202] 聖アリピオスは、ヘラクレイオス皇帝（610～641年）の治世下、パフラゴニアのアドリアノポリス近郊で逝去した。その尊い頭蓋骨は現在、アトス山のクトルムシュ修道院に安置されている。

コンダク、第8調:

美徳の源であり、断食者たちの糧であるあなたを、教会は今日称え、アリピエよと讃える。あなたの祈りによって、あなたを敬う者たちに、あなたの愛と勇猛さ、そして闘いを授け、激しい罪からの解放を、同名の聖人として与えてください。

聖ヤコブ・隠遁者の記念日

記念日11月26日

私たちの尊い父ヤコブは、山で修行に励み、寝床も、小部屋も、悪天候から身を守るための覆いも持たなかった。彼がすべての人から離れて暮らしていたとき、激しい腹部の病に襲われた。しかし、誰かが彼を訪ねてくると、激しい痛みに耐えながら外に出て、訪れた人々に敬虔さについて教えを説いた。　彼は鉄の鎖を身に着け、その上に毛皮の衣をまとっていました。彼の食事は、夕方に口にする茹でたレンズ豆だけでした。このような労苦と苦難を通じて、彼は神の恵みの賜物を受け、死者をよみがえらせる力を得ました。ある日、亡くなった少年の父親が彼の元を訪れ、泣きながら聖人にこう言いました。

「神のしもべよ、あなたが祈ろうとさえすれば、あなたには何でも可能だと私は知っています。」

聖ヤコブは、父親の涙を見てひざまずき、神に呼びかけ、その少年を蘇らせ、父親に返した。この聖人は他にも多くの驚くべき奇跡を起こした。

聖ヤコブは悪魔たちから多くの誘惑にさらされたが、祈りによってのみそれらを追い払った。ある男が、週に二度、遠くから聖人に水を運んできた。　悪魔は、聖人を渇きで死なせようと企み、聖人の姿に変身して、水を運ぶ男の道中で待ち伏せ、彼から水を奪い、男を無理やり引き返させた。しかし、その男は一度だけ、妨害者を欺いて、聖なる長老に水を届けることに成功した。聖人は彼と持参された水を見て、こう言った。

「なぜ、わが子よ、長い間私に水を持ってきてくれなかったのか。そのせいで、私は喉の渇きにひどく苦しむことになったではないか。」

「父上」と彼は答えた。「私はいつも決められた日と時間に水を持って参りました。しかし、道中で誰かに出くわし、この場所までたどり着くことを許されなかったのです。」

「これからは」と聖人は言った。「もし誰かが君に出会い、先へ進むのを妨げようとしても、ここに着くまではその人に器を渡してはならない。」

このように修行を重ねた彼は、偉大な奇跡行者となり、喜びのうちに主のもとへ旅立った。[8203]。

キエフの聖ゲオルギオス大殉教者教会奉献記念日。

記念日：11月26日

ロシアの地の祝福され、永遠に記憶される公ヤロスラフは、使徒同等の公ウラジーミルの息子であり、大殉教者ゲオルギオス[8204]、すなわち自身の守護天使の名にちなんで教会を建立することを

[8203] 聖ヤコブ・隠遁者は、5世紀にシリアのキラ近郊で修業に励んだ。その没年は457年とされる。

[8204] ゲオルギオス教会については、現在に至るまで何の遺構も残っていない。

望んだ。というのも、ヤロスラフは聖なる洗礼においてゲオルギオスという名を与えられていたからである。　彼はこの教会の建設地として、ソフィア大聖堂のすぐ近く、具体的にはその西側、黄金の門の方角を選びました。

この教会の建設が始まった当初、作業員はわずかしかいなかった。

それを見たヤロスラフは、ティウンであるゲオルギイ（[8205]）を呼び寄せ、こう尋ねた。

「なぜ神の教会の建設に従事する者が少ないのか？」

ティウンはこう答えた。

「これは君主の事業（すなわち、大公自身の費用で教会が建設されている）であるため、人々は労働の対価を支払われないのではないかと恐れているのです。」

そこで公は、自分の財宝を荷車で黄金の門の下まで運び込ませ、市場で人々に、仕事をした者には誰でも公から1日につきノガテ1枚（[8206]）を受け取れると告げさせた。すると多くの労働者が現れ、工事は順調に進み、教会はまもなく完成した。

その奉献式は1051年11月26日、イラリオン大主教によって執り行われた[8207]。公は、聖大殉教者ゲオルギオスに敬意を表して、奉献の日をロシア全土で毎年祝うよう命じた[8208]。

トロパリオ、第4声：

今日、世界の果てに至るまで、神の奇跡に満ち溢れたあなたを祝福し、大地はあなたの血に満たされて喜びに沸き立つ。キエフの都に住むキリストの御名に因む民は、あなたの神聖な聖堂の奉献により喜びに満ち溢れ、　受難者ゲオルギイよ、聖霊に選ばれた器、キリストの御心に適う者よ。信仰と祈りを捧げてあなたの聖なる神殿を訪れる者たちに、罪の清めを与え、世を和解させ、私たちの魂を救ってくださるよう、彼に祈り求めてください。

コンダク、第2調：

神聖にして冠を戴くキリストの大殉教者ゲオルギオスよ、敵に対して勝利を収め、聖別された聖堂に信仰をもって集う我らは、神がその御名によって創造することを御心に適わせ、聖徒の中で唯一として安息される彼を賛美しましょう。

12月10日

11月27日（旧暦）

[8205] ティウンとは、公爵の代理として統治を行う者、すなわち下級裁判官を指すが、ここでは公爵の建設工事における監督官としての意味である。

[8206] ノガタ――古代ロシアの貨幣の一種で、チェルヴァークの半分、すなわち12.5コペイカに相当した。

[8207] イラリオン――ルーシ初の生粋のルーシ人による大主教。彼は公爵自身と司教会議によって選出され、その修道者としての生涯と教導の功績により大主教の位を授けられた。　1051年から1054年にかけてロシア教会を統率した。彼は『法と恵みに関する説教』や『信仰告白』を著し、その他にも彼の教訓的な書簡や言葉が保存されている。

[8208] 11月26日の聖ゲオルギオスの祝日は、この聖人を称えてあるギリシャの教会が奉献されたことを記念して、ギリシャでも当時から現在に至るまで祝われている。

聖殉教者ヤコブ・ペルシヤニンの殉教

記念日11月27日

聖殉教者ヤコブは、キリスト教徒の両親のもと、ペルシアで生まれ、敬虔に育てられた。キリスト教徒の女性と結婚し、ペルシア王イズディゲルドおよびその後継者ヴァラハラン[8209]の寵愛を受けていたため、富と名誉に恵まれて暮らしていた。ヴァラハランは彼を宮殿の管理者とした。　ペルシャの王たちから厚遇を受けた彼は、世俗的な栄誉に惑わされ、キリスト教の信仰から離れ、王と共に偶像に犠牲を捧げ、それらを崇拝した。このことを知った彼の母と妻は、彼に手紙を送り、その中で次のように訴えた。

――哀れな者よ、なぜあなたは人間の栄光のために、神、すなわち天の王を見捨てたのか。一時的な王に媚びることで、あなたは不死の命から遠ざかってしまった。朽ちる者に仕えることで、あなたは朽ちない者から背を向けた。　真理よりも偽りを選び、キリストへの信仰を捨てて悪魔の惑わしに陥ったのだ。死すべき王に従うことで、あなたは生ける者と死せる者の審判者を軽んじ、人間の愛を求めようとしたがゆえに、神の愛に値しない者となり、天の恵みを失ってしまった。　私たちはあなたのために泣き、嘆き悲しんでいる。かつては光の子であったあなたが、今や闇とゲヘナの息子となってしまったからだ。知っておきなさい。もしあなたが悪魔の惑わしから背を向けなければ、私たちとの交わりは持てない。なぜなら、私たちはあなたが偶像崇拝者である姿を見ることも望まないからだ。　そして私たちは涙ながらにあなたに懇願します。神の怒りを免れるために、キリストに立ち返ってください。どうか私たちの願いを速やかに聞き入れ、遅らせないでください。さもないと手遅れになります。もし神の怒りが、王やその仲間たちと共にあなたを襲ったとき、もはや後戻りはできず、あなたは火のゲヘナに身を置く自分を目の当たりにして、苦々しく嘆き悲しむことになるでしょう。

この手紙は、ヤコブの母と妻から、彼が王と共に城の外にいた時に届けられたものでした。手紙を読み終えたヤコブは心を動かされ、こう考えました。

「もし、私がキリストを拒んだという理由で、母や妻でさえ私を見放し、私と会いたがらないのなら――神が生きている者と死んだ者を裁き、それぞれの行いに応じて報いを与えられる来世において、私は一体どうなるのだろうか？」

そして再びその手紙を注意深く読み返すと、彼は苦々しく泣き崩れ、自分の罪を悔い改め始めた。その後、彼は心の中でこう言った。

「完全に滅びないために、私はこうしよう。　神の憐れみの扉が開かれるまで、執拗にその扉を叩き続けるのだ。そして、その扉は開かれると信じている。なぜなら、神は慈愛に満ち、憐れみ深い方だからだ。神は罪人の死を望まれるのではなく、*「罪人がその道から立ち返り、生き続けること」を望んでおられるのだ*（エゼキエル書33:11）。

彼が苦々しく泣きながらそう語っていると、異教徒たちの中には、彼がキリスト教徒であることを見抜いた者たちがいて、それをバラハラン王に報告しに行った。王はヤコブを呼び寄せ、こう言った。

「真実をすべて話せ。お前はナザレ人か？」

ヤコブは答えた。

「はい、私はナザレ人です。」

「では、お前は魔術師か？」と王は再び尋ねた。

「いいえ、私は魔術師ではありません」とヤコブは答えた。「キリスト教徒です。」

すると王は言った。

[8209] イズディゲルド1世は399年から420年まで在位し、その息子ヴァラフランは420年から438年まで在位した。

「恩知らずめ！　お前は私や私の父から多くの贈り物を受け取り、我々の間で敬意を払われてきたではないか？」

ヤコブは答えた。

「今、お前の父はどこにいる？　その肉体は棺の中で朽ち果て、その魂は地獄に投げ込まれている。」

「義人にとって――」と聖人は答えた。「死は安らぎであるが、あなた方のような不信仰者であり罪人にとっては、永遠の苦しみのはじまりである。」

そこで王は顧問や友人たちを呼び寄せ、ヤコブにどのような拷問を加えるかについて彼らと協議を始めた。他のペルシャ人たちがヤコブのように信仰から離れることのないよう威嚇するため、王は聖人に対して次のような処刑を考案した。すなわち、彼の体の各部位を切り離し、一つひとつを砕き散らすよう命じたのである。　こうして、処刑人たちは王の命令に従い、ヤコブを捕らえて処刑場へと連行し、彼の体の部位の数だけ、彼をバラバラに切り刻もうとした。聖ヤコブの後を追って、彼を知る多くの人々――その中には多くの兵士や高官も含まれていた――が処刑場へと向かった。彼らは皆、聖人の苦しみを見届けるためにそこへ向かったのである。

処刑場に着くと、聖人は処刑人たちに少し待ってもらい、祈る機会を与えてくれるよう懇願した。そして天を仰ぎ、次のように祈り始めた。

「主よ、わが神よ！　あなたのしもべである私の声を聞き、天の高みから私を見守り、この時に私に強さと力を与えてください。そうして、これから訪れる苦しみを受け入れ、私の血をもって私の罪を贖うことができますように。私は、私の創造主であり主であるあなたから背を向けてしまったからです。　今、私はこれを悔い改め、私の神よ、あなたに立ち返り、あなたの聖なる御名を告白し、私の魂をあなたに委ねます。　主よ、どうか私の苦しみの中に御助けをお遣わしください。そうすれば、私の敵たちは御力を目の当たりにして恥じ入るでしょう。*「主よ、あなたは私を助け、私を慰めてくださったからです」*（詩編85:17）。

聖人がこのように祈っていると、処刑人たちが彼に近づき、彼の服を脱がせて、手足を広げながら言った。

「さて、ヤコブよ、これからどうするつもりだ？　お前には慈悲はない。お前の体をバラバラに切り裂くよう命じられている。手足の指から、首からかかとまでの全身を切り刻み、最後に首も切り落とすのだ。」　よく考えろ、どちらが自分にとって良いか――王の意志に従って無傷で健やかに生きるか、それとも残酷な苦痛の中で死ぬか？

彼の友人たちの中にも、泣きながら彼にこう言う者がいた。

「なぜ、無意味に自分の魂を滅ぼそうとするのか。自分を憐れみ、若さを無駄にしないでほしい。王の命令に従い、我々の神々にひれ伏して、生き延びなさい。もし望むなら、自分の神には密かに仕えればいい。」

そのような言葉を、涙ながらに語られるのを聞いて、聖人は口を開き、こう言った。

「私のために泣くのではなく、あなた自身とあなた方の子供たちのために泣いてください。私は永遠の安息へと向かうが、あなたたちは皆、永遠の苦しみへと向かうのだ。私の体を砕くことで、あなたたちはそれによって、私に天国での言い表せない至福を用意しているのだ。一方、あなたたち自身には、地獄での恐ろしい苦しみを用意している。そこでは、今あなたがたが崇拝している悪魔たちと共に、消えることのない炎の中で焼かれることになるのだ。

聖人のこの言葉を聞いて、王の役人の一人が投機家たちを殴り始めた[8210]、こう言いながら：

[8210] ローマ帝国において、「スペキュラトーリ」とは、皇帝自身に仕えることを義務づけられた、選り抜きのプレトリアン兵の部隊を指した。　ここで「スペキュラトル」という名称は、ペルシア王の側近にいた兵士たちを指すものと理解すべきである。聖ヤコブに対し、四肢切断の刑を宣告したヴァラフランは、当然のことながら、この処刑の執行を自身の側近にいた兵士たちに命じた。

「何をしているのだ、あいつをじっと見つめて？　命じられたことを実行しろ。」

するとすぐに、処刑人の一人が聖人の手をつかみ、その親指を切り落とした。しかし、その聖人は――天を仰ぎ見て、こう叫んだ。

「主なる神よ、あなたは私の助けであり、希望です！　あなたはただ一つの神聖な御指で悪魔たちを追い払われる。どうか、悪魔の力によって切り落とされたこの私の指を、木から切り落とされた枝のように受け入れてください。そして、罪深い私に憐れみをお示しください。ぶどうの木からも枝が切り落とされるのは、木がより青々と茂り、成長し、多くの実を結ぶためなのですから。

すると、王の役人は聖人を憐れみ、彼にこう言った。

「ヤコブよ、自分の身を労わって、王の命令に従い、我らの神々にひれ伏せ。お分かりだろう、我々は皆、お前を憐れんでいるのだ。切断された指については悲しむな。医者が治してくれる。ただ、これ以上、自分の健康と美しさを損なわないように。」

聖人は彼にこう答えた。

「ぶどうの木の枝を切り落とすと、太陽の暖かさを受けると、切り口から新芽が芽吹き、やがて成長して実を結ぶことを、あなたは知らないのか。　神の忠実な子らにも、同じことが起こるのだ。　彼らは神のぶどう園に植えられ、真のぶどうの木――*「わたしはぶどうの木であり、あなたがたは枝である」*（ヨハネ15:5）と語られた主イエス――に接ぎ木されている。

彼らは一時的な死によって剪定され、来るべき世で復活し、そこで青々と茂り、朽ちることのない栄光に飾られ、永遠の報いの実を受け取るのである。

聖人がその言葉を終えるやいなや、処刑人が再び彼に近づき、二本目の指を切り落とした。しかし、聖人は苦痛を忍耐強く耐え忍びながら、こう叫んだ。

「主よ、あなたの右の手が植えられたあなたの園から、この二本目の枝も受け入れてください。」

その顔は明るく喜びに満ちており、あたかも大きな苦しみではなく、至高の喜びを味わっているかのようであった。その後、三本目の指も切り落とされたが、彼は依然として三位一体の神を賛美し続けた。

「三つの誘惑（すなわち、肉欲、目の欲望、そして世俗的な高慢）から解放され、私は父と子と聖霊を賛美し、火から救われた三人の少年たちと共に、主よ、あなたを告白し、殉教者たちの群れと共に、キリストよ、あなたの御名を賛美します。」

彼が四番目の指を切り落とされたとき、彼はこう叫んだ。

「四つの生き物から賛美を受けられた方よ、あなたの聖なる御名を告白したために切り落とされた私の第四の指の苦しみをも、あなたへの捧げ物として受け入れてください。」

ヤコブの第五の指が切り落とされた後、彼は大声で叫んだ。

「私にとって喜びの時が訪れました。それは、五人の賢い乙女たちにとっての、神聖な花婿の婚礼のようなものです。[8211] 。」すると、彼を拷問していた者たちは、彼の左手の指を切り落とす前に、彼を諭し始めた。

「ヤコブよ、今こそ自分の魂を憐れみ、自らを滅ぼすことなく、王の命令に従え。そうすれば、お前は無傷でいられる。このような苦痛に耐えて死ぬよりも、無傷のまま生き続けるほうが、お前にとって良いのではないか？」　手の損傷については悲しむ必要はない。なぜなら、片手だけで世に生き、それでもなお莫大な富や名誉を享受し、幸福やあらゆる恵みを満喫している人々は大勢いるからだ。

聖人はこれに対し、次のように答えた。

[8211] 言うまでもなく、キリストの「5人の賢い乙女と5人の愚かな乙女」のたとえ話のことである。（マタイ25:1–13）

「羊飼いが羊の毛を刈るとき、右側を刈り終えたら、左側を刈らずに置いておくものだろうか？　私はキリストの群れの羊であり、私の主のために自らをあなたの手に委ねたのです。羊毛を刈り取るように、私の肢体を切り落としていただくためです。――そして、私の右手が切り落とされたとき、果たして左手を惜しむでしょうか？いいえ、私は惜しみません。朽ちるべき体全体を惜しまず、朽ちることのない体に包まれるためです。

その後、聖人は天を仰ぎ見て、こう叫んだ。

– 主よ、私はあなたの御前では小さく、取るに足らない者です！偉大なる神であるあなたは、ご自身を低くされ、人の姿をとられ、私たちのために十字架にかけられ、刺し貫かれました。　そして、わが主よ、私はあなたの苦難に倣うことはできませんが、それでもなお、私は自らを苦しみと死に委ねます。そうすれば、万人の復活の際、あなたが私を無傷で完全な姿へと蘇らせてくださるでしょう。

聖人がその言葉を終えると、拷問者たちは再び彼に襲いかかり、左手の親指を切り落とした。

すると聖人はこう言った。

「ほめたたえられよ、主よ！　第六の日、第六の刻に、十字架の上で御自身の至聖なる御手を広げられたあなたに、第六の指をも捧げることができるようにしてくださったことを、感謝いたします。[8212]。」

その後、聖人の第七の指が切り落とされると、彼はこう叫んだ。

「かつて、一週間の七日間、私の口は預言者ダビデと共に、あなたの義なる御業を賛美しておりましたが、今日、私はあなたを告白したために切り落とされた七本の指をもって、あなたの憐れみを賛美いたします。」

そして、ヤコブの八番目の指も切り落とされた。すると彼は神に向かってこう叫んだ。

「主よ！　あなたご自身が律法に従い、八日目に割礼を受けられました。私もまた、八本の指を切り落とされる苦難に耐え、不義な人々から離れ、あなた、　私の救い主よ、そして、この肉体を脱ぎ捨てて、私の魂が、渇きに苦しむ鹿が水源へと向かうのと同じくらい強く望んでいる、あなたの至聖なる御顔を見るためです（詩編41:2参照）。

その後、聖人の第九の指が切り落とされた。その時、聖人はこう叫んだ。

「わがキリストよ、あなたは第九の時に十字架の上で御霊を御父の御手に委ねられました。そして私は、第九の指を失い、苦しみの中にあっても、あなたの聖なる御名のゆえに、私の肢体を切り落とされるために十字架に架けられることを私に許してくださったことに、あなたに感謝を捧げます。」

ヤコブの十番目の指が切り落とされたとき、彼は主を賛美して、大声でこう叫んだ。

「十弦の竪琴をもって、神よ、あなたを讃え、感謝いたします。二つの石板に記されたあなたの契約の十戒のために、両手の指を切り落とされる苦難に耐え抜く力を与えてくださったことを。」

すると、そこにいた王の重臣や聖人の友人たちの何人かが、苦々しく泣きながら、彼を諭し始めた。

– 親愛なる友よ、どうか私たちの言葉に耳を傾け、王の命令に従ってください。そうしなければ、あなたは残酷な拷問の末に命を落としてしまうでしょう。　指のことなど悲しむ必要はない。熟練した医師たちがあなたを治してくれるだろう。ただ、喜びと快楽に満ちたこの世の恵みを失わないよう、どうかご自身を労わってほしい。あなたには豊かな財産があり、それゆえ安らぎを享受できるのだ。　もしあなたが乞食であったなら、こう考えることもできたでしょう。「この人生で何を望めばよいのか、何の利益を期待すればよいのか。何もできず、したがって生計を立てることもできない

[8212] 主イエス・キリストは、日曜日から数えて週の第六日、昼の第六時（私たちの時間では午後2時）に、木に釘付けにされました。

のだから」と。　しかし、あなたは裕福で、多くの金を持っています。もしあなたが望むなら、この世のあらゆる楽しみを満喫し、妻や母、そして親しい友人たちと楽しく過ごしながら、素晴らしい生活を送ることができるのです。　なぜ、むなしく自分の魂を滅ぼそうとするのか？　さあ、王の御心に従い、ただ一言おっしゃるだけで、すぐに苦しみから解放されるだろう。

祝福された方は、彼らを見据えてこう答えられた。

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできない」（マタイ 6:24）、そして*「鋤に手をかけ、後ろを振り返る者は、神の国に入る資格がない」*（ルカ 9:62）。なぜなら、主はこう言われたからだ。*『わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない』*（マタイ10:37–38）、*『また、自分の十字架を負ってわたしに従わない者は、わたしの弟子となることはできない』*（ルカ14:27）。それゆえ、私はあなたがたの助言には従いません。あなたがたの言葉は私を滅びへと導くからです。ただ、お願いがあります。私を容赦せず、命じられたとおりに処してください。

すると、聖人を拷問していた者たちは怒りに燃え上がり、彼に襲いかかって、右足の親指を切り落とした。聖ヤコブはこう叫んだ。

「わがキリストよ、御手だけでなく御足までも刺し貫かれたあなたを賛美します。そしてあなたに願います。この私の右足――第一指を切り落とされたこの足が、後にあなたの右側に立つことができるよう、私にその恵みをお与えください。」

そして、彼らは同じ足の第二の指を切り落とした。聖人はなおも神を賛美し続けた：

「主よ、今日、私に対する御恵みと御慈悲が二倍になりました。なぜなら、この第二の指をも切断された私は、全能にして命を与える私の神、私を第二の永遠の死から救い出してくださる御方の元へ行くからです。」

そして、聖人は三本目の指も切り落とされ、その指は彼のそばに投げ捨てられた。聖人はそれを見て、喜びの笑みを浮かべながら叫んだ。

「さあ、聖三位一体のしるしとして、お前もまた、第三の指よ、兄弟たちの元へ行きなさい。三日間の死から復活されたキリストに倣い、この一時的な死を受け入れたお前は、地に投げ込まれた小麦の粒のように、万人の復活の日に、私の体の他の部分と共に大きな報いを受けるだろう。」

その後、聖人の四番目の指が切り落とされた。すると、その聖人は大声でこう叫んだ。*「わが魂よ、なぜ落胆し、なぜ動揺するのか。神を信頼せよ」*（詩編41:6）。神は四本足の十字架の力によって救ってくださる。なぜなら、私は神の聖なる御名を告白しているからだ。

ヤコブからは五本目の指も切り落とされたが、聖人は依然として主なる神を賛美し続け、こう叫んだ。

「主よ、今、私は十字架上で五つの傷を負われたあなたに感謝いたします[8213]　。あなたの助けを賛美いたします。あなたは、あなたのために苦しみ、与えられた五タラントを増やしたあなたの忠実な僕たちと同じ運命に、私をふさわしい者としてくださるからです[8214] 。」

その後、拷問者たちは彼の左足の指を切り落とし始めた。小指が切り落とされたとき、聖ヤコブは叫んだ。

「耐えよ、足の小指よ。切断される指の中で六番目である。私は、第六の日に大きな指たちと共にあなたを創造し、大きな指たちを復活させるのと同じように、小さなあなたをも復活させてくださる、私を慈しみ深く強めてくださる偉大なる神に希望を置いているのだ。　なぜなら、人の頭にある一本の髪の毛でさえ、神の御心なしには失われることがないのだから、ましてや君、小指よ、他の

[8213] 主イエス・キリストが十字架に掲げられた際、両手と両足に打ち込まれた4本の釘によって十字架に釘付けにされました。こうして、主の体には4つの傷ができました。5つ目の傷は、十字架上の死の後、兵士が槍で主の脇腹を突き刺したことによって生じました。

[8214] これは「タラントのたとえ」を指しており、その比喩は人々の霊的な賜物を意味している。（マタイ25:14–30）。

指たちから引き離されることはなく、彼らと同様に栄光を受けるだろう。君は彼らと同様に苦しんでいるのだから。

そして、聖ヤコブの第七の指が切り落とされたとき、彼は大声で叫んだ。

「七つの頭を持つ大蛇[8215] が潜むこの朽ち果てた神殿を破壊せよ。なぜなら、御業の七日目に安息された創造主が、天において、人の手によらず造られ、永遠に続く別の神殿を私のために備えておられるからだ。」

聖ヤコブの八番目の指が切り落とされたとき、彼はこう叫んだ。

「ノアの箱舟で八人の魂を水から救われた方（Iペテロ3:20）は、血を水のように流している私をも救ってくださるだろう。」　今、私の第八の指は切り落とされたが、私はまるで打たれても痛みを感じず、ただより堅く、より強くなる金床のようだ。なぜなら、私の肢体が切り落とされても苦しみを感じないからである。慈愛に満ちた医師、すなわち私の創造主ご自身が、私を強め、私の苦しみを和らげてくださるからだ。　この世での私の生涯のすべての週が過ぎ、至福に満ちた永遠の第八の日が訪れたとき、主は私を完全に回復してくださる。

その時、ヤコブの第九の指が切り落とされたが、聖人は勇敢に祈った：

「神よ、どうか私を忍耐をもって強めてください！」　わが魂は、御恵みによって、九つの天使の位階の清らかさの中に私を確固たるものとしてくださったあなたに、希望を置いています。それゆえ、この九本の足の指を切り落とされた私も、九つの天使の位階すべてがあなたと共にいるのと同様に、あなたと共にいさせてください。

そして、彼の足の十番目の指が切断された。すると、聖人は大声で叫んだ。

「イエス・キリストよ、完全なる神であり完全なる人よ、見よ、私は私の十本の指をあなたに捧げます。」そして、こう付け加えた。　*『神よ、わたしを裁き、この悪しき民との争いに立ち向かってください』*（詩編42:1）。なぜなら、不義な者たちはあなたの被造物を憐れまず、まるで邪悪な狼のように、わたしの全身を引き裂いたからです。

周囲に集まっていた多くの男女、老若は、聖人の苦しみを見つめながら、その忍耐力に驚嘆した。キリストの殉教者は、自分を苦しめる者たちを見据えて、こう言った。

「何だ、ただぼんやりと立っているのか。すでに枝を切り落とされた木を、なぜ切り倒そうとするのか。」

すると、拷問者たちは彼に近づき、彼の右足を切り落とした。聖人は叫んで言った。

「今、私は天の王に、御前に立つための私の武器を捧げ、主への愛ゆえにこの苦しみを受け入れます。そうすれば、私の切り落とされた右足が、主の御国に立つことになるでしょう。」

また、彼の左足も切り落とされた。すると彼は、天を仰ぎ見て、こう叫んだ。

– 主よ、あなたは私の祈りを聞き入れてくださいました。それは、あなたの慈しみが偉大だからです。奇跡を行われる神よ、あなたは私を左足で立つ苦しみから救い出し、それによって良い前兆を与えてくださいました。なぜなら、左側は永遠の滅びを象徴するからです[8216] 。

その後、聖人の右手は切り落とされたが、彼はこう叫んだ。

「主よ、私は永遠にあなたの慈しみを讃え、代々あなたの真理を宣べ伝えましょう。なぜなら、次のあなたの御言葉が、私の上に明らかに成就したからです。*『もしあなたの右手があなたを罪に誘うなら、それを切り落として、捨てなさい』*（マタイ5:30）。」

すると、聖ヤコブの左腕も切り落とされた。彼はこう語り始めた。

[8215] 言うまでもなく、人間の本性を罪によって堕落させた悪魔である。

[8216] 左側は永遠の滅びを象徴している。なぜなら、主ご自身が「最後の審判」の描写の中で、人の子が罪人たちを御自身の左側に立たせると語っておられるからである。

– 主よ、死者はあなたを賛美することはありません。同様に、地獄に下り、人生の道において左側、すなわち不義の行いに固執する者たちも、あなたを賛美することはありません。しかし、私たち生きている者たちは、左側（すなわち偽り）を拒み、永遠にあなたを賛美し続けます、主よ！

その後、聖人の右肩が切り落とされると、彼はこう語った。

「わが魂よ、主を賛美せよ。私は生きている限り、主を賛美し、私が存在する限り、わが神に歌を捧げよう」（詩編145:1–2）。なぜなら、主はご自身の肩に、見つけ出した迷い羊を載せ、それをご自身の右側に置かれたからである（ルカ15:4–7；　マタイ27:23）方は、私の右肩をも思い起こし、それが切り落とされているのを見て、御自身の右の側に置かれるであろう。

そして、彼の左肩を切り落とすと、聖人はこう言った。

「敵が四方から私を取り囲んでいる。しかし、主は私の助け手であり、私の誉れであり、その肩にはすべての者の運命がのしかかっている。主は私の救い主である。主は、左肩を切り落とされた私を、闇の支配へと左に逸れることを許さないだろう。」

その後、人々は聖ヤコブのすねを膝の付け根まで切り始めた。聖人は激しい苦痛に耐えながら、こう叫んだ。

「主よ、わが神よ、あなたを畏れ、あなたに望みを置く者たちを助けられる方よ、あなたのしもべである私をも助けてください。私は死に至る病に苦しめられているのです。」

これを聞いて、拷問者たちは彼に言った。

「お前は残酷な拷問と恐ろしい苦痛に耐えなければならないと、我々は言ったではないか。お前は我々を信じなかった。」

しかし、この勇敢な殉教者は彼らにこう答えた。

「私がなぜ苦しんだか、お分かりでしょうか？　それは、私が肉体であることを明らかにするためです。これまで、神の御助けにより、私は無形の者であるかのようにあらゆる苦痛を軽んじてきました。しかし今、苦しむことで、私は肉体であることを示しているのです。だがまもなく、主は私に新しい体を授けてくださいます。その体は、もはやあなた方の拷問器具で苦しめたり、痛めつけたりすることはできないでしょう。」

こうした拷問は朝から九時まで続き、その間ずっと、拷問を受けている聖ヤコブの体からは、強い芳香が漂っていた。ついに拷問者たちが聖人を苦しめるのをやめたとき、その苦しみによって悪魔に打ち勝ったキリストの戦士は、神に向かってこう叫んだ。

「聖なる、聖なる、聖なる御方よ、全能の神、父と子と聖霊よ。ケルビムに賛美され、セラフィムに栄光を与えられ、すべての天の軍勢とあらゆる被造物によって称えられる、生ける者と死せる者の神よ。　かろうじて生きている私に、どうかお助けください。私の四肢はすべて切り落とされ、私の体は死体のように横たわり、私の中にわずかに命の息吹が残っているだけなのです。主よ、私はあなたの御前に立つための足を持っていません。私の主よ、あなたに祈りを捧げるために両手を挙げる手も持っていません。　私の創造主であるあなたにひれ伏して礼拝するための膝もありません。私の手、足、肩、そしてすねは切り落とされ、私はあなたの御前に、主よ、崩れ落ちた神殿や、枝のない木のように倒れ伏しています。　それゆえ、人を愛する御方よ、どうか最後まで私を見捨てず、この牢獄から私の魂を救い出してください。

彼がこのように祈っていると、聖人の処刑に立ち会っていた者の一人が、ナイフを手に取り、その尊い首を切り落とした。こうして聖人は殉教の業を終え、その聖なる魂を神の御手に委ねた。一方、その尊い遺体は、バラバラに切り刻まれたまま、夜まで地面に横たわっていた。　夜になると、

信者たちはすべての断片を集め、それらを遺体と共に埋葬し、父と子と聖霊を賛美した。「[8217] 」。アーメン。

トロパリオ、第4声：

奇妙で恐ろしい苦難と、忍耐の勇猛さによって、すべての人を深く驚かせた、多くの苦難に耐えた御方よ。どの部位も切り刻まれるという試練の中にあっても、主に向かって驚くべき感謝の祈りを捧げられた。 それゆえ、あなたの苦難 によって冠を受け、天の王キリスト・神の御座へと昇られた、ヤコブよ。その御方に、私たちの魂を救ってくださるよう祈り求めてください。

コンダク、第2調：

忍耐強い良き妻を頼りとし、恐ろしい裁きを恐れ、ヤコブよ、あなたはペルシャの命令と恐怖を軽んじ、肉体を鞭で打ち切られるかのように、尊い殉教者となられた。

聖ロマン記念日

記念日：11月27日

至福のロマンは、アンティオキア近郊のロセ[8218] という町で生まれ、成人するとアンティオキアに定住した。そこで彼は町の外にある小さな修道室に籠もり、火を使わずに老いるまでそこに留まった。 彼の糧はパンと塩、そして水のみであり、それもかろうじて命をつなぐだけのわずかな量であった。彼は羊毛の衣を身にまとい、その下には重い鉄の足枷を嵌めていた。 これらすべてにより、聖ロマンは神からの大きな恵みにあずかり、様々な病を癒やし、彼の祈りによって、子供に恵まれなかった多くの妻たちが不妊から解放された。 聖ロマンは、その説教によって、多くの迷える人々を神の御国へと至る正しい道へと導き戻した。このようにして生涯を送り、彼は尊い老齢に達し、安らかに主のもとへ旅立った[8219] 。

ロストフの主教、聖ヤコブの記念日[8220]

記念日：11月27日

聖ヤコブはロストフ地方の出身であり、若くして修道生活に入り、その敬虔な生涯により、ミトロポリス・ピメーンおよび大公ドミトリー・イオアンノヴィチ・ドンスキーの治世下で、ロストフ

[8217] 殉教者聖ヤコブの死は421年に訪れた。 その後、ペルシャで殉教者の聖遺物を焼却する勅令が出されると、キリスト教徒たちはヤコブの聖遺物をエルサレムへ送った。そこから、マルキアヌス帝の治世（5世紀半ば）に、エデッサの司教ペトロによってエジプトのタヴェンナへ移された。 別の伝承によれば、遺骸はペルシアからイタリアへ移され、そこで聖殉教者の頭部は現在もバチカン大聖堂に保管されている。また、ポルトガルのブラガにも彼の遺骸があり、そこでは5月22日にその移送が祝われている。

[8218] ロス――シリアの都市で、アンティオキアの近くにある。

[8219] 聖ロマンが活躍した時代は5世紀にさかのぼる。

[8220] 聖ヤコブの古代の伝記は現存していない。ロストフのヤコブレフ修道院には、19世紀40年代の時点で古くからの伝記が存在しており、本書『ロストフのスパソ＝ヤコブレフ＝ディミトリエフ修道院の記述』 サンクトペテルブルク、1849年；これらの詳細は本書でも繰り返されている。聖ヤコブの礼拝式は、16世紀以前の古写本に見られ、印刷された礼拝用ミネイアでは10月28日の項目に記載されている。聖ヤコブの礼拝式の内容や、古のイコンに描かれた説明文付きの図像は、古の伝記の記述と一致している。

の司教に任命された[8221] 。しかし、彼はロストフの司教としての在任期間は短く、次のような出来事をきっかけに司教座を去った。

ある女性が不法行為を告発され、ロストフ公およびロストフのボヤールたちによって死刑を宣告された。この不幸な女性は、ロストフの聖ヤコブの足元に駆け寄り、死から救ってくださるよう懇願した。 聖ヤコブは彼女を憐れみ、自分のもとに連れてこられた姦婦を裁かなかったキリストに倣って、その有罪判決を受けた女性を処刑に引き渡すことはせず、彼女に生涯にわたって悔い改めるための特別な場所を与えた。 この行為に対し、ロストフの公爵と市民たちは聖ヤコブに激怒し、彼らの良き牧者を聖座から追放した。

街を去る際、聖ヤコブはロストフ湖の岸辺に近づき、聖職者のマントを脱いで水の上に置き、十字を切ってその上に立ち、湖の上を泳ぎ出した。 街から1.5ヴェルスタほど泳ぎ去った後、彼は現在のヤコブレフスキー修道院がある場所に再び上陸した。

この並外れた奇跡に、公爵も民衆も驚嘆した。 皆は、自分たちの聖人に対して不当かつ残酷な仕打ちをしたことを悟り、罪の赦しを請い、涙ながらに彼に の聖座へ戻るよう懇願した。聖人はその寛大さと柔和さにより、彼らの重い罪を赦した。彼は決して誰に対しても怒ることはなかったが、聖座への復帰は断固として拒んだ。

街から1.5ヴェルスタ離れた、聖ヤコブが上陸したまさにその場所[8222] で、彼は自分だけの小さな小屋を建て、そこで暮らすようになった。

聖人には多くの崇敬者がおり、その多くが彼のもとへやって来て住み着くようになった。そこで彼は修道士たちのためのケリイを建て、その後、聖アンナの受胎に捧げる教会も建立した。この修道院で、聖ヤコブは生涯を閉じた[8223] 。

ヤコブがロストフで聖職に就いていた頃、マルキアンという名の異端者が現れた。彼は聖なるイコンを偶像と呼んで崇拝してはならないと説き、その他にも不敬な思想を広めていた。その雄弁さと学識によって、彼はロストフの公、ボヤール、そして民衆の注目を集めた。 しかし、ロストフの聖ヤコブは、公爵と民衆の面前で異端者と論争を交わし、その偽りの教えを糾弾したため、異端者は恥をさらしてロストフを去った。

聖ヤコブの聖遺骨は、彼が創設した、創設者にちなんで「ヤコブレフスキー」と名付けられた修道院に安置されている。

トロパリオ、第4声:

若き日から神に選ばれ、聖ヤコブよ、このゆえに司教の位をもって尊ばれ、神よりあなたに委ねられた民を牧した。それゆえ、この世を去った後も、神から与えられた奇跡の賜物を受け、様々な病を癒やした。あなたの尊い記念を祝う私たちのために祈り、私たちが絶えずあなたを称え続けられますように。

コンダク、第8調:

聖ヤコブよ、あなたは司教たちの共同祭司であり、聖人たちの立派な擁護者であられました。どうか、あなたの故郷と、信仰をもってあなたを崇め、あなたの尊い遺骨に礼拝を捧げるこの都と人

[8221] それは1386年のことだった。聖ヤコブは、ギリシャ人であるマタイ司教の後を継いで、ロストフの司教に任命された。

[8222] また、300年余り前、異教徒によって追放された聖レオンティウスが、ロストフの街からこの地へ退いた。聖レオンティウスによって建立された大天使ミカエルの教会は、現在、ヤコブレフ修道院の塀から30サジェンの距離にある。

[8223] 聖ヤコブは1392年に逝去した。

々を絶えず守り、私たちが声高らかにあなたに叫ぶことができますように。「神に賢きヤコブよ、喜びなさい。」

エレノポリスの司教、聖パラディオの記念日

記念日：11月27日

聖パラディオスはガラティア出身であった[8224]。生後20年の時、彼はアレクサンドリアに赴き[8225]、そこで修道生活の実践に身を捧げた。当初はこの都市の近郊で、その後3年を経てニトリアの荒野[8226]およびスキトスの荒野[8227]に移り、そこで9年間にわたり厳格な沈黙を守り続けた。しかし、病のため、彼は愛してやまなかった荒野を離れざるを得なくなり、空気の変化を求めてパレスチナのベツレヘムに移り住み、1年後にはビフィニア[8228]へと移った。そこでまもなく、エレノポリスの市民たちは彼を司教の座に選出した。

聖パラディオスは聖ヨハネス・クロソストモスから特別な信頼を寄せられており、彼自身もこの偉大な全地教師の熱烈な支持者であり崇拝者であった。そのため、聖ヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥストスが不当な迫害を受けた際[8229]、神の聖人への献身で知られていたパラディオスもまた、さまざまな地域を転々として身を隠さざるを得なくなり、ついにローマに到着した[8230]。西ローマ帝国の皇帝ホノリウスは、東ローマ皇帝アルカディウスに対してヨハネス・クラウディオス・ゾラトゥス（金口ヨハネス）の救済を請願する使節団に、パラディウスも加えた。しかし、ローマの使節団は手ぶらで戻り、パラディウスは拘束されてシエナへ追放された[8231]。その後、アルカディウスの死を機に、彼はアンティノウへ移送された[8232]。ついに、さらに4年が経過した後、彼は自身の司教座に戻り、そこで、ラウサという名の敬虔な高位の宮廷高官の依頼により、同名の「ラウサイコス」と題された書を著した。この書物の中で、彼は4世紀から5世紀初頭にかけてエジプト、シリア、メソポタミア、ガラティア、カッパドキア、そしてローマに生きた敬虔な男女の偉業と奇跡について記述した[8233]。晩年、聖パラディオスはガラティアのアスプクという町にある司教座に転任し、そこで任された信徒たちを立派に導いた後、主のもとで安らかに息を引き取った[8234]。

[8224] ガラティアは、小アジアにある、山岳地帯ではあるが肥沃な小さな地域である。

[8225] それは388年のことだった。

[8226] ニトリウス砂漠は、下エジプトにあり、アレクサンドリアから70マイル離れた場所に位置し、古代キリスト教の隠者たちが好んで修行に励んだ場所である。

[8227] スキトス砂漠は、エジプト北西部に位置し、ニトリア山から一日の行程（25〜30ヴェルスト）の距離にあった。そこは水のない岩だらけの砂漠であり、エジプトの隠者たちが好んで住んだ場所として知られ、そこで救いを求めた修道士たちの禁欲的な修行によって名声を博した。後に、この地名に由来して、「スキタ」という名称が、修道院の荒野の隠れ家に与えられるようになった。そこでは、最も熱心な修道士たちが、唯一の神に留まるために、最も厳格な隠遁生活と、決して破られることのない沈黙を求めて住み着いていたのである。

[8228] ビフィニア——小アジアの北部地域。

[8229] 404年4月から

[8230] 405年

[8231] シエナ——上（北）エジプトの都市で、エチオピアとの国境に位置し、ナイル川の第一の滝の北側、ナイル川の東岸、その急流のそばにある。現在もアスワンという名で存続している。

[8232] アンティノイア——古代において中エジプトに位置する、かなり重要な都市であった。

[8233] 『ラヴサイク』は420年に編纂された。この集成の教訓的・啓発的な性質に鑑み、教会の規定により、四旬節の早課においてその朗読を行うことが定められている。

[8234] 聖パラディオス・エレノポリスは430年に逝去した。

12月11日

11月28日（旧暦）

聖ステファノ・ノヴォイの殉教

記念日11月28日

聖ステファノの出身地は、ギリシャ王国の首都コンスタンティノープルであった。彼の両親は敬虔さと貧しい人々への慈愛に富んでいた。二人の娘をもうけていたが、男子の相続人を望んでいたため、神が息子を授けてくださらないことを嘆いていた。　神の御慈悲を招き寄せようと、彼らは貧しい人々に施しを行い、男の子の誕生を願い求めて主に向かって熱心に祈りを捧げた。　とりわけ、聖ステファノの母アンナは、預言者サムエルの母（彼女と同じ名を持つ）の熱意に倣い、神の前で涙ながらに祈りを捧げ、心を注ぎ出していた。

ある金曜日、ヴラヘルナ教会[8235]で祈りを捧げていたとき、彼女は聖母マリアのイコンに視線を向け、涙ながらに息子を授けてくださるよう祈りました。　その際、彼女は神の母に誓いを立てました――もし祈りが叶うならば、その子を、聖母マリアから受肉された神の独り子であり御言葉である方に捧げると。　長い祈りと涙に疲れ果てた彼女は、教会で眠りに落ち、眠りの中で、言い表せないほどの美しさに輝く私たちの御母、至聖なる神の母を見ました。天の女王は、次のように彼女に語りかけました。

「平安のうちに去りなさい、女よ。あなたの願い通り、あなたは胎内に息子を宿しているのだから。」

そう告げると、聖母は姿を消した。アンナは、最初は恐怖で飛び上がるように身を起こしたが、やがて大きな喜びに包まれ、家に戻ると、確かに胎内に子を宿しているのを感じた。

この頃、敬虔なギリシャ王アナスタシオス（ゼノンの後に即位し、異端者であった者[8236]ではなく、後に即位した別の王[8237]）の治世下で、聖ヘルマン[8238]がコンスタンティノープルの総主教に選出され、就任した。　新しい総主教の就任の日、新任の聖人を一目見ようと、大勢の人々が聖ソフィア大聖堂に集まった。その群衆の中には、すでに身ごもっていたアンナとその夫もいた。彼女が教会の中に立っていると、ちょうど総主教が彼女のそばを通りかかった。アンナは聖人に向かってこう叫んだ。

「父よ、私の胎内に宿った子を祝福してください！」

彼女を一瞥し、内なる眼で未来を見通した総主教は、こう言った。

「主が、聖なる第一殉教者の祈りによって、その（胎内に宿った）子を祝福してくださいますように！」

この言葉をもって、彼はアンナから男の子が生まれ、その子は最初の殉教者ステファノにちなんでステファノと名付けられるだろうと予言した。　聖なる総主教の預言は、ある種の奇跡的なしるしによって裏付けられ、まるでそれを確証するかのように伴われていた。預言を語っている最中、彼

[8235] 有名なヴラヘルン教会は、コンスタンティノープルのヴラヘルン地区、ほぼマルマラ海の岸辺に位置していた。ここには、5世紀にニザニアから持ち込まれた、聖母マリアの奇跡を起こすイコンと、特別な聖櫃に収められた聖母の衣が安置されていた。

[8236] ビザンツ帝国のゼノン皇帝は474年から491年まで在位した。彼の後を継いで即位したのはアナスタシオス1世で、491年から518年まで在位した。

[8237] ここで言及されているのは、もちろんアナスタシオス2世皇帝（713～715年）のことである。

[8238] ゲルマン1世総主教は、715年から730年までビザンツ教会を統率した。

の口からは言葉とともに炎が噴き出し、アンナはそれをはっきりと目撃していた（彼女は後に、その言葉を誓いをもって裏付けた）。

定められた日数が過ぎると、アンナは男児を出産した。そして、聖ゲルマン総主教の預言に従い、その子はステファンと名付けられた[8239] 。大土曜日の夕方、その新生児は総主教自らが洗礼を授けた。

清めの日、幸せな母は赤ん坊を抱き上げ、ヴラヘルナにある至聖なる聖母マリア教会へと連れて行き、その子を腕に抱いたまま、かつて息子を授かるよう祈りを捧げた「天の女王」の尊いイコンの前に立ちました。イコンを見つめながら、彼女はこう言いました。

「至聖なる方よ、あなたが私に授けてくださったこの愛しい我が子をお受けください。私がまだ身ごもる前から、あなたとあなたの独り子に捧げると誓ったこの子をお受けください。神に次いで、私は彼をあなたに委ねます。どうかあなたが、彼にとって母であり、養い手であり、彼を見守る守護者となってください。」

このように、そして他にも多くのことを語り、聖なるイコンの前で祈りを捧げた後、彼女は自宅に戻り、全力を尽くして息子を育てた。

その間、アナスタシウスの後を継いでテオドシウス[8240] が王位に就き、さらにテオドシウスの後にはレウ・イサウリア人[8241] が即位した。この間ずっと、祝福された少年ステファノスは、神の聖書を学びながら、肉体も成長し、精神も強くなっていった。 主の恵みにより、彼は知性と神の知恵において卓越していた。というのも、聖なる書物の読解に並々ならぬ熱意を示し、昼夜を問わず神の律法を学んでいたからである。とりわけ、彼は聖ヨハネ・クロソストモスの著作を読むことを好んでいた。

神の教会には、偶像破壊の異端によって大きな混乱が訪れた。その最も熱心な信奉者は、皇帝レウ・イサウリア人自身であった。彼はユダヤ人の賢者たちの影響を受けて偶像破壊者となったが、これについては次のような伝承が残されている。

レウ・イサウリア人の治世の数年前、フィニキアのラオディキア[8242] から出てきた一部のユダヤ人たちが、アラビアの諸侯の一人であるイシフ[8243] のもとを訪れた。 彼らは偽りの預言を行い、魔術を駆使して、もし彼が領地全域の教会から聖なるイコンをすべて取り除き、それらを破壊するよう命じれば、40年の寿命とアラビア人に対する支配権を与えると約束した。イシフは彼らの言葉を信じ、至る所の教会から聖なるイコンを取り除き、火に投げ込むよう命令を下した。 しかし、復讐の主なる神は、 、彼を打ち倒し、彼は一年も生きることなく死んでしまった。彼の息子は父に代わって公国を継ぐと、それらのユダヤ人たちを偽預言者や魔術師として残酷な処刑に処そうとした。しかし、彼らは公の怒りを逃れるため、アラビアを離れ、イサウリアへと逃げ去った。

ある日、彼らはそこである泉のそばで休んでいた。すると、イサウリア人の青年、レフという名の、背が高く非常に美しい男が通りかかった。彼は、ユダヤ人の魔術師たちが座っていたのと同じ

[8239] これは715年のことである。

[8240] 言うまでもなく、715年から716年まで在位したテオドシウス3世・アドラミテスである。

[8241] レウ3世・イサウリア人は、716年から741年まで在位した。彼が「イサウリア人」と呼ばれたのは、小アジア南部に位置するイサウリア州の出身であったためである。

[8242] フェニキアのラオディキアは、地中海の海岸沿い、シリアのアンティオキアの少し南に位置していた。

[8243] アラビアは、アジア南部に位置する、紅海（または黒海）とペルシャ湾の間に挟まれた、かなり大きな半島である。アラビアの住民はセム系であり、主に遊牧生活を送っている。また、アラビアは多くの小規模な諸侯国に分かれており、その頂点にはシェイクが君臨している。 キリスト教はアラビアに非常に早い時期に伝来した（使徒行伝2:11、ガラテヤ人への手紙1:17から推測される通り）とされ、伝承によれば、使徒バルトロマイがそこでキリスト教を説いたとされている。

泉のそばで休みたいと思い、道から外れて彼らのそばに座った。　その若者を一目見た魔術師たちは、彼がギリシャの王になると予言し始めた。身分の低い上、貧しく、質素な手仕事だけでかろうじて生計を立てていたレフは、ユダヤ人たちの言葉を信じようとしなかった。　しかし、彼らは執拗に予言を繰り返して、もし王位についた際に自分たちが求めることを実行すると誓えば、必ず王になると言った。そこで彼は、その場所からほど近い聖テオドロス教会で、彼らの願いを叶えることを誓った。この誓いの後、彼らはそれぞれの道へと去っていった。

その後まもなく、その若者はパトリキウス・セシニウス[8244] によって軍に編入され、そこで急速に出世してスパファリウス[8245]　となった。その後、アナスタシウス2世皇帝は彼にパトリキウスの称号を授け、小アジアの地方総督に任命した。　アナスタシウスの死後、テオドシウスが皇帝として擁立されたが、レウスはこれを認めず、反乱を起こした。神の御許しにより、彼はテオドシウスを廃位し、自ら帝位に就くことに成功した。　当初、彼は敬虔で正統な皇帝であったが、やがて不敬虔へと堕落してしまった。というのも、まもなく、魔術によって彼に王位を予言したユダヤ人たちが彼の元を訪れたからである。彼らは、誓いをもって裏付けられたレウスの約束を思い出させ、今こそ彼らが求めることを果たす時が来たと告げた。 王は彼らに尋ねた。

「では、私に何を求めているのか？」

しかし、彼らはキリストとキリスト教の信仰の敵であったため、金も銀も、その他のいかなる財宝も求めず、神の教会から聖なるイコンを撤去するよう要求した。

「王よ！」と彼らは言った。「もしあなたがこれを行えば、神は長きにわたりあなたの王位を守ってくださるでしょう。もし行わなければ、まもなく王位も命も失うことになるでしょう。」

あの三人の賢者による「王位を得る」という最初の予言が成就したことを思い出し、レフは、もし彼らの言うことを聞かなければ、「王位と命を失う」というこの予言も成就してしまうのではないかと恐れた。　そこで彼は勅令を出し、教会や家々から聖なるイコンを追い出し、それを足で踏みつけるよう命じた。その際、この不敬虔な王は、イコンを偶像と呼び、それらを崇拝する者たちを偶像崇拝者と呼んだ。

こうして、キリストの教会には大いなる混乱が生じた。ある者たちは王の命令に従い、尊いイコンを捨てて踏みつけにしたが、他方では王に抵抗し、イコン崇拝のために多くの苦難に耐え忍んだ者たちもいた。　コンスタンティノープルの聖ヘルマン総主教もまた、皇帝の異端的な考えに同調せず、レウスの不敬虔な命令に強く抵抗した。　このため、皇帝は聖人を不名誉な形で総主教の座から追放し、その代わりに、自分と志を同じくするある異端者アナスタシオス（[8246] ）を後任に据えた。そして当時、多くの司教や聖職者たちが、聖なるイコンを崇拝したために様々な拷問に耐えなければならなかった。

コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂のそばには、「知的好奇心の園」と呼ばれる巨大な建物があった。そこには古くから、30万冊余りに及ぶ膨大な数の書物が収められていた。　これらの書物のために、その館には数多くの博学で賢明な人々が滞在していたが、皇帝は彼らを度々、自身の不敬虔な異端へと引き込もうと試みたものの、そのたびに失敗に終わった。そこで皇帝は、その館を小枝で囲み、火を放つよう命じ、こうして書物やそこにいた学者たちと共に館を焼き払った。　一方、新たに就任した総主教アナスタシオスは、皇帝に気に入られようと、前述の家の銅製の門に掲げられていた救世主の像を取り外し、地面に投げ捨てるよう命じた。

[8244] パトリキウスの称号は、当初は上院議員の子息のみに与えられ、ラテン語で「ライゲス」と呼ばれていた。その後、この呼称はローマの貴族出身者すべてに適用されるようになった。しかし、コンスタンティヌス帝はパトリキウスの称号を個人的な栄誉とし、高官に授与されるものの、世襲されないものとした。

[8245] スパファリウスとは、武器持ちであり、王の護衛官のことである。その後、スパファリウスという呼称は、軍人に与えられる単なる名誉称号となり、王の護衛という職務は伴わなくなった。

[8246] コンスタンティノープル総主教アナスタシオスは、730年から753年まで教会を統率した。

総主教の命令に従い、ある兵士が梯子をかざし、像を投げ落とすつもりでそれを登り始めた。しかし、その場に居合わせた敬虔な婦人たちたちは、信仰への熱意に燃え上がり、兵士の下から梯子を引っ張り出し、地面に叩き落とした。兵士は転落し、体を打ち砕いて死んでしまった。　、婦人たちはいそいで教会へと逃げ込んだ。そこには当時、聖なる場所に立っていた総主教がいた。彼は、聖なるヘルマンに取って代わった「荒廃の忌まわしきもの」[8247]としてそこに立っていた。 妻たちは総主教を見ると、彼を「聖なる教義を破壊する者」「傭兵」「羊を略奪する狼」であり、キリストの群れの真の牧者ではないと大声で罵り、その後、彼に石を投げつけた。　総主教は恐怖に駆られ、直ちに皇帝のもとへ赴き、妻たちが自分（総主教）にどのような不名誉な仕打ちを加えたかを報告した。激怒した皇帝は、総主教に不名誉を与えた女性たちを罰するため、剣を抜き放った兵士たちを遣わした――そして、その聖なる妻たちは皆、敬虔さへの熱意を示したために、剣によって斬り殺されてしまった。　その時、正教徒たちには大きな悲しみが訪れた。彼らの多くは牢獄に投じられ、鎖で縛られて拘束された。また、容赦ない拷問を受け殺害された者もいれば、家や村、財産を捨て、迫害者たちの手から身を隠して荒野へと逃れた者もいた。

母胎の内にあってすでに祝福されたステファノの両親もまた、自らの敬虔さを汚れなく保つために、正教徒に対する残酷な迫害を避けようとしていた。彼らは、聖母マリアに誓った通り、息子が成長するのを待ち、彼を修道者として神に仕えるよう奉献することを望んでいた。　しかし、迫害者から逃れてここに押し寄せた人々で溢れかえっていたビザンツの修道院には、ステファノを送り込みたくはなかった。 彼らは、ビフィニアにあるアウクセンティオス山（[8248]）で息子を神に捧げることを選んだ。この山は、静寂を求めて最初にそこに定住した聖アウクセンティオスにちなんで名付けられた。　この場所は人里離れた静寂に包まれ、世俗の騒動から遠く離れていた。アウクセンティウスの後、ここでは彼の弟子であり、その聖なる生涯を模範としたセルギイが修行に励み、セルギイの後は徳を磨いたヴェンディアン、続いて至福のグリゴリイ、そしてその後に尊者ヨハネスが修行に励んだ。　ステファノの両親は、16歳の息子をこの長老のもとに連れて行き、少年を聖なる長老に託して、息子を天使のような姿に変え、神への奉仕を教えるよう懇願した。ステファノを見つめ、その透き通るような瞳に神の恵みを見出した長老は、こう言った。

「まことに、神の御霊はこの若者の上に宿っている。」

そして、彼は愛をもってこの至福の少年を受け入れ、彼を修道士として剃髪させ、沈黙の生活における修行について指導し始めた。

天使のような姿となった聖なる少年ステファンは、完璧な修道士として、天使のような生活を送った。　彼は断食と祈りを怠ることなく、柔和な気性、謙虚な心、慈愛に満ちた精神を持ち、常に沈黙を守り、身体の清さと処女の純潔を保ち、その生涯において真の貧しさと隠遁者の無欲の模範を示した。　彼は修道者の従順という務めを不平一つ言わずに果たし、自分に課せられたことはすべて入念に実行し、何事にも熱心さを示し、勤勉さでも際立っていた。ちなみに、飲むために必要な水は、ステファンが修行していた洞窟からかなり離れた場所から汲み上げていた。　しかし、聖人は毎日必要な量の水を運び、そのためにかなりの距離を歩き、その後、水を携えて苦労して山を登った。水だけでなく、必要なものはすべて、彼は遠く離れた場所から運び、過酷な労働で身を疲れさせていた。　それにもかかわらず、至福のステファノは、その苦行の重さを決して嘆くこともなく、一度も不平を漏らすこともなく、従順さとともに、尊い師に対して偽りのない、心からの愛を示していた。彼が若き日から実践してきたその他の美徳や功績、労苦については、いったい誰が語り尽くせようか。

至福のステファノの師である尊者ヨハネは、修道生活における弟子の熱意を見て、心から喜び、まるで風のように、　くすぶる炭の炎を吹き上げるかのように、神に霊感を受けた言葉と教えによ

[8247]「荒廃の憎むべきもの」という表現はダニエル書9章27節に由来し（マタイによる福音書24章15節参照）、アナスタシウスについては、聖ゲルマノスの後任となるにふさわしくないことを示すために用いられた。

[8248] アウクセンティエヴァ山は、コンスタンティノープルの対岸、ニコミディオス湾のほとりにあった。

って、至福のステファノの心に、主の栄光のためのさらなる偉業への渇望、主へのより一層熱い愛、そして神への畏敬の念を燃え上がらせた。　それと同時に、彼自身も徳において完全な人物であり、神の恵みに満ちており、神から預言的な予知の賜物を授かっていた。

ある日、至福のステファンはある奉仕を済ませ、師のもとへ戻ると、師が洞窟の小さな窓に頭を預けて、苦々しく泣いているのを見た。ステファンはその窓のそばに立ち止まり、　、聖なる長老がいつものように祝福を与えてくれるのを待ち始めた。　彼は長い間黙って立ち尽くし、長老の痛ましい嗚咽に驚きつつも、その涙の理由を尋ねることを敢えてしなかった。しかし、長老は自ら彼にこう言った。

「愛する子よ、私の悲しみの原因はあなただ。あなたのために、私はこれほどまでに苦々しく泣いているのだ。主は私に、この場所があなたによって繁栄し、栄光に輝くことを示されたが、偶像破壊者たちがそれを荒廃させ、荒らしてしまうだろう。」

師からこれを聞いた聖ステファノは、深くため息をつき、こう言った。

「聖なる父よ、主が私についてあなたに啓示されたことをすべてお話しください。私には何が起こるのでしょうか？　私は、偶像破壊者たちの異端の教えに惑わされて、滅びてしまうのでしょうか？」

長老は答えた。

「いいえ、わが子よ、そのようなことは決してあなたには起こらない。ただ、使徒の言葉をもって警告しておく。エフェソ書5章*『それゆえ、注意深く行動しなさい』*、マタイによる福音書24章*『終わりまで耐え忍ぶ者は救われる』*。」

彼はステファノにこれらをはじめとする多くのことを語り、将来彼に起こるべきことすべてを告げた。

その間、聖ステファノの父が亡くなった。このことを知った聖ステファノは、霊的父から祝福を受けると、ビザンティウムへ向かい、そこで肉親の父にふさわしい葬儀を執り行った。その後、父が残した全財産を売り払い、その金を貧しい人々に施した。　これらの用事を済ませると、彼は母と姉妹の一人を連れて行き（もう一人の姉妹はすでにビザンティウムの女子修道院の一つで修道衣をまとっていた）、前述の聖アウクセンティオスによって設立され、聖別された女子修道院に彼女たちを預けた。聖アウクセンティオスはその修道院を　「トリキナリア」、すなわち「羊毛の」という意味である。この名称が修道院に付けられたのは、そこへ至る道のりの困難さと不便さによる部分もあれば、そこでの修道生活の厳しさによる部分もあった。というのも、この修道院は規則の厳格さで知られており、そこに住む修道女たちは羊毛の衣を身にまとうことを義務付けられていたからである。この修道院で、聖ステファノは自身の母と妹を修道女として剃髪させ、自身は尊敬すべき師のもとへ戻り、師と共に暮らしながら、修道者としての通常の修行と労役に励んだ。

しばらくして、至福のステファノの霊的父であり師である尊者ヨハネが、安らかに主のもとへ召された。　聖ステファノは彼の死を悼んで涙を流した後、近くに住む隠者たちにその死を告げに行きました。すると、皆が集まり、泣き叫び、嗚咽し、ふさわしい賛美歌を歌いながら、尊者ヨハネの尊い遺体を埋葬しました。　一方、至福のステファノはその後、洞窟で独り修行に励むようになった。当時、彼はまだ30歳を少し過ぎたばかりであった。

主のもとへ召された聖なる師や、かつてその洞窟に住んでいた他の敬虔な父たちの後を継いだ聖ステファノは、彼らの完全で美徳に満ちた生涯もまた受け継いだ。そのため、彼と共に暮らし、彼を導き手や師として仰ぎたいと願う周辺地域の隠者たちが、彼のもとに集まるようになった。　その中には、善良で品行方正なマリン、ヨハネとクリストフォロス、敬虔なザカリア、そして最後に、後述する悪意に満ちた二人の男、セルギイとステファンが含まれていた。さらに、キリスト・主のために働く者たちの名簿にその名が記されている他の六人の男たちも、尊者ステファンのもとを訪れた。こうして修道院が設立され、聖ステファンをイグメンとして、修道者たちは休むことなく修道生活に

励んだ。食料は皆、自らの汗と労力によって手に入れた。一方、聖ステファンは本を巧みに写本する技術に長けており、それらを写して販売することで、自身と他の者たちの生計を立てていた。　そして、荒野でイスラエルを養われた神は、これらの御自分のしもべたちにも必要なものをすべて送られた。それゆえ、彼らには福音書の言葉が成就したのである。マタイ6章*「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな、あなたがたに与えられる*」。　聖ステファノの弟子たちが増えるにつれ、彼は、自らが切望していた沈黙が乱されていることに気づいた。そこで聖人は、前述のマリーナを呼び寄せ、修道院の統率と管理を彼に委ねた。　聖人自身は、その山の別の場所へ移り、小さな修道室を建て、そこで隠遁生活を送った。当時、彼は生後42年[8249]であった。この修道室には屋根がまったくなかった。　そこでしばらくの間、完全な孤独と沈黙の中で過ごしながら、聖人は絶えず神と対話し、祈りに没頭していた。しかし、新たな修行の地においても、至福のステファノは、自分の魂の救いを求めて彼のもとを訪れる人々を避けることはできなかった。　山の頂上に立つ城が人目に留まらないわけにはいかず、香りをまとった人が隠れることができないのと同様に――――徳高い人もまた、ある山のような完全さの高みに登り、善行という香りを放っている以上、人々から身を隠したり、隠れたりすることはできない。　まさにそれが、至福のステファノにも当てはまった。彼の修道生活に関する評判は遠くまで広まり、ミツバチが蜂蜜に群がるように、救いを求める人々が四方八方から尊者のもとに集まり、彼の教訓に満ちた言葉やその生涯そのものから、自らのための教訓を得ようとしたのである。　尊者のもとに集まった人々の中には、敬虔な男性だけでなく、女性たちもいた。その中でも特に注目に値するのは、アンナという名の気高い未亡人である。　夫の死後、まだ非常に若く、子供もいなかった彼女は、すべての財産を売り払い、貧しい人々に施した。その後、聖ステファノのもとを訪れ、彼によって修道衣を授けられ、女子修道院であるトリキナリアへと送られた。

その頃、レウ・イサウリア王が死去した。その後を継いだのは、その息子コンスタンティノス・コプロニモス[8250]であり、彼は父以上に神の教会に反旗を翻し、聖なるイコンを教会から追い出し、火で焼き払った。　彼の不敬虔を糾弾したのは、修道界の多くの著名で賢明な修道士たちであり、彼らは彼の誤りを証明し、異端であると告発した。するとコプロニムは修道士たちに対して抑えきれない憎悪を燃やし、彼らを残酷に迫害し、あらゆる手段で中傷した。　彼は修道服を「闇の衣」と呼び、聖なるイコンへの礼拝を熱心に擁護した修道士たち自身を、偶像崇拝者だと名指しした。　これに加え、この無法な王は、自分の命令に従う愚かな人々を大勢集め、聖なるイコンを崇拝せず、それらを偶像と呼ぶこと、修道士たちと一切の交わりを断ち、彼らの手から聖なる秘跡を受け取らないことを誓わせ、　――そして、修道士に出くわした者は誰でも、彼を「正気を失った者」「闇の子」「偶像崇拝者」と呼び、石を投げつけることとした。

これらすべてが起こっていた頃、コンスタンティノープルの不敬虔な総主教アナスタシウスが死去した。彼は、聖ゲルマヌスの後任として、レウ・イサウリア人によって総主教の座に就けられた人物であった。アナスタシウスの後任として、コプロニムスは、彼と同じ名を持つ修道士コンスタンティヌスを総主教に任命した。このコンスタンティヌスは、彼と志を同じくする者であった[8251]。この際、不敬虔な皇帝は、公会議による選出を経ず、自らの権力だけで彼を総主教の座に就かせた。自ら彼を説教壇に上げ、自らオモフォルを彼に授け、「彼は総主教の位にふさわしい」と宣言したのである。　その後、皇帝と新任の総主教の両者は互いに協議した上で、すべての都市に書簡を送り、す

[8249] これは西暦756年のことである。

[8250] コンスタンティノス5世コプロニモス皇帝は741年から775年まで在位した。

[8251] 言うまでもなく、754年から766年までビザンツ教会を統率したコンスタンティノープル総主教コンスタンティノス2世のことである。

べての司教を帝都に招集し、聖像崇拝を非難・廃絶するための公会議を開くよう呼びかけた。　そして当時、コンスタンティノープルでは甚大な不法行為が横行した。神聖な秘跡が執り行われていた聖器でさえ、そこに聖なる像が描かれていたという理由で、足で踏みつけられた。　聖なるイコンは、あるものは沼に、あるものは海に、またあるものは火の中に投げ込まれ、さらに斧で切り刻まれ、粉々に砕かれた。また、教会の壁に掲げられていたイコンは、あるものは鉄で削り取られ、あるものは塗料で塗りつぶされた。　不法者たちは、ヴラヘルナにある至聖なる聖母マリアに捧げられた最も壮麗な教会さえも容赦しなかった。その教会は、主イエス・キリストの受肉から磔刑、そして復活に至るまで、この世での生涯のあらゆる出来事を描いた像によって豪華に飾られていた。　この教会において、不義の王コプロニムは、金や宝石で輝いていたすべてのイコンの装飾を破壊するよう命じ、まるで女王から紫の衣を剥ぎ取るかのように、教会をむき出しにした。その代わりに、彼は壁に木々、獣、鳥の絵を描くよう命じた。そして、その時にダビデの言葉が成就した。詩篇78:1–2――*「神よ。異教徒たちがあなたの嗣業に侵入し、あなたの聖なる神殿を汚し、エルサレムを廃墟と変え、あなたのしもべたちの死体を空の鳥の餌とし、あなたの聖徒たちの遺体を地上の獣の餌とした*」。

　　というのも、当時、聖像破壊者たちは聖人の遺骨を教会から投げ捨て、それを火の中や海に投げ込んだり、あるいは町の外へ引きずり出し、山から渓谷や沼地に投げ落としたりしていたからである。　一方、聖なるイコンや聖遺物の尊厳を勇敢に擁護した者たちに対しては、邪悪な異端者たちは容赦なく拷問を加え、苦痛に満ちた死へと追いやった。彼らの血を水のように流しながら、イコンのために拷問を受けた者たちの遺体は埋葬されることなく放置され、猛禽類や野獣の餌として投げ捨てられたのである。　その時、すべての正教徒にとって、世界の始まり以来かつてないほどの大いなる悲嘆が訪れた。

　　正教徒に対する迫害から逃れるため、多くの修道士たちがコンスタンティノープルを離れ、尊者ステファノのもとへ駆けつけ、彼から良き助言と魂に有益な教えを得られることを望んだ。　聖人は長い間、神に導かれた言葉をもって彼らを慰め、聖なるイコンのために自らの血を流すことさえ恐れることなく、敬虔さを堅く守るよう教えた。一方、十分な勇気がなく拷問を恐れる者たちに対しては、偶像破壊者による迫害のない他の国へ逃れるよう助言した。　こうして、ビザンツのすべての修道院は空っぽとなり、帝都ではもはや修道士たちの姿を見ることはできなくなった。　というのも、正教を堅く守り抜いた修道士たちは、殺されて命を落とした一方で、正しい信仰とともに自らの命も救いたいと願った者たちは、他の国へ逃れ、地球の隅々へと散り散りになったからである。　キリスト降誕後754年、コンスタンティノープルで偶像排斥公会議が招集され、そこには838人の東方主教が出席したが、コンスタンティノープルの偽パトリアルヒである異端者コンスタンティノス――彼は皇帝の同志でもあった――を除き、パトリアルヒは一人もいなかった。　公会議の会場として指定されたのは、ヴラヘルナ聖母教会であった。この教会は、イコンによる装飾を剥ぎ取られ、まるで荒野のようで、強盗の巣窟のようであった。この教会に、到着したすべての司教たちが、不法な皇帝と偽パトリアルカと共に集まった。　そして、長い議論と論争の末、皇帝はすべての司教たちを説得し、自分に同意させ、その不敬な冒涜に加担させた。　その際、多くの司教たちは皇帝と総主教の誤りをはっきりと見抜いていたが、皇帝と総主教の怒りを恐れ、また正教徒たちに新たな災難が降りかからないか心配したため、皇帝に逆らうようなことは何も言えず、不敬な異端に加担してしまったのである。　その後、コンスタンティノス・ザ・ヤングと彼の母イリーナの治世下で開催された真の第七回全地公会議において[8252]、彼らは偶像排斥の異端を放棄し、悔い改めをもって正信仰に立ち返ったが、

[8252] 言うまでもなく、780年から797年まで在位したコンスタンティノス6世ポルフィロゲネトスである。彼の母であり、レオ6世の友人でもあったイリナ皇后は、聖像崇拝の熱心な擁護者であり、10年間にわたり息子の代わりに国政を執り行い、その後も802年まで統治を続けた。

その時点では、彼らは不敬虔な皇帝と総主教に従い、彼らの異端的な思索に同意していたのである。そして、そこで次のような不敬で神に忌み嫌われる偽の教義が策定された：

1) 聖なるイコンを偶像として崇めるよう命じられた。

2) 聖なるイコンを崇拝する者はすべて破門とされ、その破門宣告は、異端者アナスタシウス以前にコンスタンティノープル総主教を務めた聖ゲルマヌスに対しても下された（不法な異端者たちは、自ら呪われているにもかかわらず、聖なる義人を呪ったが、 しかし神は彼を祝福されたため、聖書の言葉が成就した。詩篇108篇――*「彼らはののしるが、あなたは祝福される」*。

3) 聖人たちは死後、その執り成しによって私たちを助けることができないだけでなく、神の母ご自身も同様であることを告白するよう命じられた。

4) 使徒、殉教者、信仰の証人、聖人、および神に喜ばれたすべての人々を「聖人」と呼ぶことは禁じられた。

5) このような決定を下したこの不敬虔な公会議は、最初の六つの全地公会議に数えられ、第七回全地公会議と呼ぶよう命じられた。また、その公会議を認めない者は、アリウス、ネストリウス、エウティキオス、ディオスコロスと同様に破門に処された[8253]。

この公会議において、総主教に次ぐ最重要の司教たちは、エフェソスのテオドシウス司教、ニコミディアのコンスタンティン司教、ナコリのナコリ司教、そしてシシニウスとバシレイオスであった。

不法な行いを犯した司教たちは、作成された決定文に署名したため、聖書の言葉「*不法はバビロンから出た。それは、民を治めているように見えた長老たち、すなわち裁判官たちから出たものである」* （ダニエル書13:5）、また、*「多くの牧者たちがわたしのぶどう園を荒らし、わたしの畑を踏み荒らし、わたしの愛する畑を荒れ地にしてしまった」*（エレミヤ書12:10）という言葉が彼らに成就した。

公会議の審議が終了すると、公会議に参加した司教たちは、民に喜びをもって厳かにこう宣言するよう教えた。「『今日、世界に救いが訪れた』と。王よ、あなたの配慮のおかげで、私たちは偶像から解放されたのだから」と。

一方、不義の王コンスタンティノス・コプロニモスは、アウクセンティオスの山で修業に励んでいた聖ステファノスのことを耳にした。 王は、彼の敬虔さと徳高い生活、聖書に精通していること、そして彼の名声が遠くまで広まり、誰もが彼を古代の聖なる教父たちと同列に置いていること――さらには、 彼が熱心な聖像崇拝者であり、他の人々にも聖なる聖像を崇拝するよう教えていることまでも知らされた。これらすべてを知ったコプロニムは、至福のステファノを誘惑し、自分と意見の一致を図ろうと企んだ。もし彼を味方につけることができれば、それによって自分の異端の教えに特別な確固たる基盤と力を与えられると期待していたのである。 そこで彼は、側近の貴族の一人であるカリストを呼び寄せた。カリストは国務会議の筆頭であった。 カリストは巧みで雄弁な演説家であり、不敬虔な王は彼の弁舌の力に期待を寄せた。王は彼に、聖ステファノのもとへ赴き、聖像崇拝を放棄し、不法な聖像破壊公会議で策定された決定文に署名するよう命じる王の勅令を伝えるよう命じた。 その際、王はカリストを通じて聖ステファノに様々な贈り物を送ったが、それは金や銀

[8253] アリウス、ネストリウス、エウティキオス、ディオスコーロス――彼らは異端の指導者たちであった。アリウスは、神の御子は被造物であり、父なる神と同等の尊厳を持たない、と説いた。 ネストリウスは、イエス・キリストは真の神ではなく、聖なる生涯によって神の特別な恵みを授かった人間であると説いた。エウティキオスとディオスコーロスは、イエス・キリストにおいて神性の一つの本性が人間性を吸収したと説いた単性論の異端の代表者であった。 この考えを最初に提唱したのは、コンスタンティノープルの修道院の一つに所属するアルヒマンドリト（修道院長）であったエウティキオスであった。一方、ディオスコーロス（444年から451年までアレクサンドリア総主教を務めた）は、この考えの熱心な擁護者であった。

ではなく（聖ステファノがそれらを必要としないことを知っていたため）、聖ステファノが普段食べていた様々な果物――ナツメヤシ、アーモンド、イチジク――であった[8254]。

聖ステファノのもとを訪れたカリスト[8255]は、彼に贈り物を差し出し、その後、巧みに練られた演説で、聖人に王に従い、偶像排斥公会議の決定に署名するよう長く説得した。　カリストは、聖書の箇所を自分なりに解釈し直しながら、聖典の言葉を引用して自らの主張を裏付けようとした。しかし、聖人はカリストのあらゆる言葉に対して賢明な反論を返し、ついに大胆にもこう告げた。

「私は、偽りと不正に満ちた貴殿の公会議の決定には署名しません。なぜなら、*『苦いものを甘いもの、闇を光』*と呼ぶことを望まないからです。そうして、預言者の呪い『[8256]』を自らの頭上に招くことのないようにするためです。王の脅しなど恐れておらず、聖なるイコンのために死さえも受け入れる覚悟があります。」

それから彼は手を差し伸べ、指を握りしめて言った：

「たとえ私の血がこの一握り分しかなかったとしても、それでも私は、私のキリストの御像のためにその血を流すことを恐れないだろう。　そして、あなたがあなたの王から私に持ってきた贈り物は、持ち帰ってください。私は聖書に従って行動したいのです。聖書にはこう書かれています。*「罪人の油は私の頭に注がれず、異端の食物は私の喉を喜ばせることのないように」*（詩編140:5参照）。

何も得られずに、カリストは引き返し、ステファノから聞いたことをすべて王に報告した。王はこれを聞いて激怒し、直ちにそのカリストを兵士たちと共にアウクセンティオスの山へ派遣し、聖人を捕らえて山のふもとにあるトリキナリオン修道院へ連行し、そこで牢獄に閉じ込めるよう命じた。　カリストと彼と共に派遣された兵士たちは、その通りに実行した。彼らは聖人の独房に襲いかかり、足で扉を蹴破り、慈悲など微塵も示さずに聖人を引きずり出し、トリキナリア修道院へ連行して、そこで彼を牢獄に閉じ込めた。聖ステファノと共に、彼の弟子たちも全員捕らえられ、同じ牢獄へ連行された。　兵士たちは牢屋の入り口に立ち、王のさらなる命令を待つ間、すべての囚人を監視した。

投獄中、至福のステファノスと彼の弟子たちは皆、大胆にも次のように讃美した。「御身の至聖なる御姿に、我らは拝礼いたします、善き御方よ」[8257]。

そして彼らは六日間、牢獄に留まり、その間ずっと全く食事を口にしなかった。七日目に、ステファノスを元の修道室に戻すよう王から命令が下った。というのも、その時、王はスキュフィ族が自分の王国を襲撃したという知らせを受けたからである[8258]。スキュフィ族の侵攻を撃退しようと決意した王は、しばらくの間、聖人の迫害を先送りした。

しかし、カリストは王と同様に彼に対して憎悪を抱いており、密かにその聖人の弟子の一人、すなわち私たちが語ろうとしていたセルギイを呼び寄せた。　呼び出したカリストは、お世辞や大量の金銀で彼を惑わせ、聖人に対する様々な誹謗中傷をでっち上げるよう唆した。このようにすることで、カリストは、聖人の弟子がでっち上げた誹謗中傷の方が、ステファノの生活を知っている人物が証言していると思われ、より早く信じられるだろうと期待していたのである。　一方、セルギイは、

[8254] ナツメヤシの実――ヤシの木の実で、ベリーのような形をしています。その大きさはさまざまで、豆粒ほどの大きさのものもあれば、人の頭よりも大きなものもあります。ヤシの実が熟すと、手で摘み取るか、木を揺らして、敷かれた藁マットの上に実を落とすのです。　ナツメヤシの実は、生でも乾燥させても同様に食用とされる。イチジクはイチジクの木の実で、聖書でよく知られる木である。生の状態では、この実は洋ナシに似ている。*アーモンド*は、アーモンドの木の実である（スラブ語で「アミグダル」）。

[8255] 763年。

[8256] ここでは、預言者イザヤの次の言葉（イザヤ書5:20）が念頭に置かれている。*「悪を善と呼び、善を悪と呼び、闇を光と呼び、光を闇と呼び、苦いものを甘いと呼び、甘いものを苦いと呼ぶ者たちよ、災いあれ！」*

[8257] 「キリスト・救い主の御像の移送」の祝日に捧げられるスティヒラ。

[8258] スキタイ人――黒海の北、現在のロシア南部、およびドナウ川下流一帯に居住していた野蛮な民族。

まるで第二のユダのように、金や銀を愛し、師を裏切り、聖なる、そして何の罪もない父に対して、いかにして虚偽の中傷の網を張り巡らせるかを、あらゆる手段を尽くして考え始めた。しかし、彼の汚れなき生涯のすべてにおいて、まるで太陽のように、彼は一点の汚れも見出すことができなかった。　それゆえ、聖ステファノの修道院を出て、群れを離れた迷い羊のように、彼はニコメディアで王のために税を徴収していたアヴリカラムという名の王室高官と親交を結んだ。彼はその男を自身の悪意の共犯者とし、二人は共に聖人に対する虚偽の告発を模索した。　互いに合意した上で、彼らは詳細な記録を作成し、その中で、ステファノスが王を冒涜し、異端者として王を軽蔑しているかのように、また、民衆や彼を訪ねるすべての人々を惑わせ、王に対する反乱を煽動しているかのように主張した。　彼らはこの聖人に対して他にも多くの誹謗中傷をでっち上げたが、冗長を避け、読者の耳を不快にさせないために、それらについては言及しない（不敬な中傷者たちは、多くの下品な言葉を並べ立てたからである）。　不法な者たちは、世俗の世を捨て、聖ステファノの手によって天使のような姿へと剃髪され、トリキナリウス修道院で修道生活を送っていた至福のアンナについても書き記した。中傷者たちは、彼女が夜ごとにステファノと密会し、彼と共に不浄な罪にふけっていたかのようにでっち上げた。　彼らはこの誹謗中傷に、至福のアンナの奴隷の一人を巻き込み、彼女を説得して同じことを証言させた。その見返りとして、彼らは彼女に自由と大量の金を約束しただけでなく、王宮に仕えるある高位の男性と結婚させるとも語った。　このように、尊者に対する誹謗中傷に満ちた文書を作成し、そこにアンナの女奴隷の偽証を添えて、セルギイとアヴリカラムは、当時スキタイの地に滞在していた王のもとへ、一人の兵士を伴ってこれらすべてを送り届けた。

王は送られてきた文書を読み終えると、大いに喜び、直ちにコンスタンティノープルにいる自身の総督アンフィトに書簡を送り、アウクセンティオスの山にある女子修道院へ赴き、そこから修道女アンナを連れ出して自分のもとへ送るよう命じた。　この王の命令を受け取った総督は、まるで戦場に向かうかのように多数の武装した兵士を従えて、直ちにトリキナリウス修道院へと向かった。修道院に到着すると、彼らは剣を抜き放って襲いかかった。その時、修道女たちは皆、教会に集まって第三時課を歌っていたが、　修道院に襲いかかる兵士たちを見て、彼女たちは大きな恐怖に襲われ、中には神聖な祭壇の下に身を隠した者もいれば、山へ逃げようとした者もいたが、兵士たちは彼女たち全員を捕らえた。すると、修道院の高齢の修道院長は兵士たちのところへ出て行き、大胆にもこう言った。

「キリスト教徒を名乗るあなたがたは、一体何をしているのですか？　神に捧げられたキリストの花嫁たち――彼女たちはあなたがたに何の悪も働いていないのに、なぜ襲ったのですか。」

兵士たちは答えた。

「ステファノフ家の娼婦アンナを我々に引き渡せ。王が彼女を要求しているのだ。」

そこで修道院長は、アンナと、もう一人の修道女テオファンナを呼び寄せ、敵の誘惑から身を守り、聖なる尊い父であり師であるステファンの清らかさを恐れずに守り抜くよう、彼女たちを諭した。その後、彼女たちを神の御加護に委ね、兵士たちと共に送り出した。

兵士たちは修道女たちを拘束し、直ちに王のもとへ連行した。王は彼女たちを分離させ、それぞれを別々に監視するよう命じた。その後、アンナを呼び寄せた王は、彼女にこう語りかけた。

「君について聞かされた話は、疑いようもなく真実だと信じている。だからこそ、君を呼び出したのだ。あの魔術師であり不法な男が、いったいどのような手口で君を惑わせ、　自分の財産を捨て、高貴な家柄を何とも思わずに、庶民の服を身にまとうよう仕向けたのか、君自身が隠し事なく自発的に語ってほしい。」　私が聞いたところによれば、彼がこれらすべてを行ったのは、あなたを彼の娼婦にするためだった。一体、彼に何の良いところを見出し、彼に惑わされて、その不信心な者と不法に淫行に及んだのか？

王からそのような卑劣な言葉を聞かされたとき、至福で貞潔なアンナはこう言った。

「いいえ、王よ！私が両親から受け継いだ遺産を捨て、肉親やこの世のあらゆる快楽を捨てたのは、自分の魂を肉欲や淫行に奴隷にするためではありません。私をそのように誹謗した者たちは、ダビデの言葉にあるように、*『その舌を蛇のように巧みに操り、　彼らの口の下にはアスピスの毒がある』*（詩篇139:4）。私の肉体はあなたの目の前にあります。あなたがどれほどの拷問を加えようとも、私は真実を曲げません。私の霊がこの肉体にある限り、私が口にするのは、ステファノが聖なる義人であり、私の救いの源であるということだけでしょう。

王はこの言葉を聞くと、大いに驚き、一時間もの間黙り込んだ。その後、アンナを監禁下に置くよう命じ、テオファニアを修道院へ送り返した。修道院に戻ったテオファニアは、修道院長と聖ステファノに、起こったことすべてを語った。

しばらくして、コプロニムスは戦場からコンスタンティノープルに戻った。そこで彼は、修道女アンナを暗く恐ろしい独房に閉じ込めるよう命じ、その後、自身のクヴィクゥラリウスである[8259]を彼女の元へ遣わした。その男はアンナの元へやって来ると、こう語りかけた。

「女よ、自らを憐れみ、黒い修道服を脱ぎ捨てて、清らかな人生を選べ。そうすれば、明日、尋問の場で皆の前で、自分とステファノについての真実を告白さえすれば、宮殿で皇后と共に暮らすことができるだろう。」　ここには、すべてを知っており、あなたたちの行いを面と向かって告発する用意のある女奴隷が一人いる。もしあなたが何かを隠そうとしても、彼女はあなたを暴くだろう。そうなれば、私は裁判官として、また正義の擁護者として、あなたの体を粉々に砕き、王が何ができるか、そしてあなたを惑わしたステファンが何者であるかを、あなたに思い知らせてやる。　もし私の良き助言に従い、ステファンの不貞な行いを明かすならば、私たちから大きな栄誉を授かることになるだろう。

その言葉を聞いて、聖アンナは深くため息をつき、涙を流してから、こう答えた。

「王が望むことを、どうぞおやりください。しかし、私は聖なる、尊い父について嘘をつくつもりはありません。主の御心が行われますように！」

翌日、朝、王は宮殿から出て、集まった民衆全員の前で高台に立ち、貞淑なアンナを牢から連れ出し、皆の面前で恥をかかせるべく彼女の衣服を脱がせるよう命じた。　聖女の目の前には、束ねた棒が置かれ、その前に偽証人である彼女の奴隷が立たされた。無実の妻は、衣服の代わりに恥じらいだけを身を守りとして、皆の前で裸のまま立っていた。　彼女がどのような誹謗中傷を受けたのかと問われたとき、彼女は沈黙を守った。それは、不義な裁判官たちに対して「*答えを返さなかった*」[8260]という主の御姿に倣ったからである。一方、恥知らずな女奴隷は彼女に対して偽証を行い、嘘を裏付け、それを真実であるかのように装った。　そこで、再び聖アンナに対し、ステファノが彼女と不義の関係を結んだと供述するよう強要されたが、聖女は「毛を刈られる羊」のように沈黙を守り[8261]、口を開こうとはしなかった。

すると、拷問官は激怒し、激しい怒りに駆られた。アンナを淫婦と呼び、彼女を地面に寝かせ、棒で打つよう命じた。そしてアンナは四人の屈強な兵士によって地面に押さえつけられ、背中や腹を長く打ち続けられた。そのような拷問に耐えながらも、聖女は次の言葉以外、何も語らなかった。

「あなたがたが言うような男とは関係を持ちませんでした――いいえ！　関係はありませんでした」そして、こう付け加えた。「主よ、憐れみたまえ！」

その間、拷問者たちは彼女を激しく殴り続けたため、彼女は息を引き取りそうになった。その時、王は彼女がかろうじて息をしているのを見て、それでもなおステファノに対する非難の言葉を一切口にしないのを見て、玉座から立ち上がり、恥に満ちて急いで宮殿へと去っていった。　その後、

[8259] クヴィクラーリウス――王の寝殿長であり、大抵の場合、王に最も近い側近の一人である。

[8260] ヨハネ 19:9；参照　マタイ 26:63、27:12–14；マルコ 14:61、15:5；ルカ 23:9。

[8261] この表現は預言者イザヤの書に由来し、そこではメシア・救い主に当てはめられている（イザヤ 53:7）。

彼はアンナを、空いていた市内の修道院の一つへ連行し、そこに閉じ込めるよう命じた。そこでしばらくして、聖アンナは主のもとへ召された。

その間、王は、ステファノを犯罪者として処罰できるよう、彼を何らかの罪で告発する方法を長い間考えていた。ついに、彼は次のような策を思いついた。

宮殿で忠実に仕えていた、ゲオルギオスという名の寵愛する若者を呼び寄せ、コプロニモスは彼に尋ねた。

「ゲオルギオスよ！　私に対するお前の愛はどれほど深いのか？」

「計り知れないほどです」と彼は答えた。

「だが、私への愛ゆえに、私のために死を覚悟できるか？」

「喜んであなたのために死にます」と若者は答えた。すると皇帝は、喜びと愛情を込めて彼に口づけをし、こう言った。

「ほら、これが新しいイサクだ。」

それからゲオルギーに言った。

「だが、私はお前を私のために死にに行かせるつもりはないし、私のために苦しむことさえ望まない。ただ一つだけ頼みたいことがある。アウクセンティエフ山へ行き、名に値もしないステファンという男のもとへ行き、彼に汝を修道士として剃髪させ、弟子として受け入れてくれるよう懇願せよ。彼がそうしてくれたら、直ちに我々のところへ戻ってこい。」

若者は、王が求めたことをすべて忠実に果たすと約束した。そこでコプロニムは、彼に課せられた任務をいかにして最も円滑に遂行すべきかについて、彼に教えを授けた。そして、その教えを受けた後、若者はアウクセンティエフ山へと向かった。

夜になって、彼は聖ステファノの修道院に近づき、大声で叫び始めた。

「ここに住むキリスト教徒の皆さん、どうか私を憐れんでください！　道に迷ってしまい、どこへ行けば、深い谷に落ちたり、野獣の餌食になったりせずに済むのか分かりません。」

この叫び声を聞いた聖ステファノは、その博愛の心から、道に迷った男を憐れんだ。　修道士マリンを呼び寄せ、迷い人を探し出して修道院へ連れてくるよう命じた。マリンがゲオルギーを連れてくると、彼は尊者の足元にひれ伏し、祝福を請い求めた。尊者は、目の前に立っているのがただの人ではないと悟り、ゲオルギーに尋ね始めた。

「お前は誰だ？　どこから来たのか？」

ゲオルギーは、自分が王宮にいたことを隠さず、王が正しい道から逸れ、皆を破滅へと引きずり込んでいるため、王に仕えることを辞めたのだと語った。

「私はここに参りました」と若者は言った。「あなたが、私が強く志す天使の位に私を叙任してくださるよう、急いであなたの元へ駆けつけたのです。敬愛する父よ、どうか私を不適格者として拒絶しないでください。」

王からの何らかの不都合が生じることを恐れて、聖ステファノは当初、その若者を修道士として受け入れることに同意しませんでした。しかし、若者は「王は私のせいで怒ることはない」と彼を安心させると同時に、聖人に懇願して、自分を弟子の一員に加え、修道士として剃髪させてくれるよう熱心に祈りました。

「もし今、私を修道者に叙任してくださらなければ、あなたは私の魂について神に答えなければならないでしょう。」

聖人はその言葉に心を動かされ、悪魔の狡猾さに気づかずに、ゲオルギウスにこう言った。

「あなたが救いへの熱意に駆られてここに来たことがわかるので、私は主の戒めに背くことはせず、私たちのもとに来たあなたを追い出すつもりはない。」

そう言うと、聖人は直ちに、神の知恵に満ちた、魂に有益な言葉で彼を教え導き、その後、彼の世俗の衣服を脱がせて修道見習いの衣を着せ、完全な修道者の姿を受け入れる準備をするよう命じ

た[8262]。三日が過ぎると、聖人はゲオルギーにその姿の衣も着せた。 天使の位を受け入れた直後、この狡猾な男は、コンスタンティノープルにいる皇帝のもとへ急いだ。

ゲオルギウスが修道服を着ているのを見て、皇帝は喜んだ。それは修道生活を愛していたからではなく、ステファノスが自分の家来を引き抜いていると非難する口実を見つけたからであった。

翌朝、広場に現れた皇帝は、新たに剃髪した修道士を連れ出し、集まった民衆の前で、すべての修道士、とりわけステファンを非難し始めた。 彼は、ステファンが自らの教えで人々を惑わしていると告発し、例えば、皇帝のこの愛する家来をそうさせたのだと主張した。民衆は叫び始めた。

「忌まわしい誘惑者め、死ね！」

そこで王は、ゲオルギイから修道服を剥ぎ取り、地面に投げ捨てるよう命じた。それが行われるやいなや、民衆はその「天使の衣」を足で踏みつけ始め、修道士たちに侮辱の言葉を浴びせ、修道生活そのものを冒涜した。 その後、王は水を運ばせ、ゲオルギーを洗い清め、あたかも彼から修道者の位を洗い流すかのようにした。最後に、彼に軍服を着せ、頭に兜をかぶせ、イッポコマ[8263] の位を与えた。すべてが終わると、王は兵士たちをアウクセンティエヴァ山へ送り込み、ステファンの修道院を破壊するよう命じた。

兵士たちは、まるで狼が羊の群れに襲いかかるかのように修道院を襲撃した。すべての修道士を追い散らした後、彼らは修道院の教会に火を放ち、聖ステファノ自身を強引に独房から引きずり出し、不名誉な扱いを受けさせながらコンスタンティノープルのハルキドン郊外へと連行した。 道中、彼らは聖人に数え切れないほどの侮辱を加え、容赦なく拷問した。ある者は残酷にも彼を地面に引きずり、ある者は彼の目に唾を吐きかけ、またある者は言葉では言い表せないような侮辱を加えた。彼らが海岸にたどり着くと、兵士たちは聖人を小舟に乗せ、ビザンティウムからほど近いクリソポリス[8264] にあるフィリッピコス修道院へと連行した。そこで聖人は、70日間、手錠と鉄の鎖で縛られたまま監視下に置かれ、その間ずっと食事を口にしなかった。 皇帝は彼に数多くの食事を送らせたが、聖人は何も受け取らず、すべてを返送した。

70日が経過すると、皇帝と総主教は、最も影響力のある異端者たち――すなわち、エフェソスの司教テオドシオス、ニコミディアのコンスタンティノス、ナコリウス、 シシニオス、バシレイオス、さらにカリストスやその他の極めて巧みな弁論家たちを聖ステファノスのもとに送り込み、信仰について彼と論争させ、彼を偶像破壊主義へと誘導させようとした。 彼らはフィリッピコス修道院に到着すると、至福のステファノスを連れてくるよう命じた。彼は鉄の鎖で縛られたまま彼らの前に現れたが、その重さゆえに、他人の助けなしには立ったり動いたりすることができず、二人の男に支えられながら歩いていた。

真っ先に口を開いたのは、エフェソスの司教テオドシウスであった。彼は至福のステファノに向き直り、こう言った。

「神の人よ、いったいどのような根拠で、あなたは私たちを異端者と呼び、自らを王たち、総主教たち、司教たち、そして他のすべてのキリスト教徒よりも上に置こうとするのか？ まさか、私たち全員が誤った道を歩み、滅びへと向かっているというのか？」

これに対し、聖人は穏やかにこう答えた。

「神の御言葉に預言者エリヤについて記されていることをお聞きください。彼はある時、アハブ王にこう言いました。*『イスラエルを惑わしているのは私ではなく、あなたとあなたの父の家です』*（列王記下18:18）。 今まさにそうである。神の教会を混乱させているのは私ではなく、古の聖な

[8262] 「ノヴォナチリエ」とは、修道者となるために必要な準備期間のことであり、これなしには修道者としての剃髪は行われない。この段階にある者は、「ポスルシニク」として知られている。

[8263] イッポコム――王室の厩務官。宮廷の役職の一つ。

[8264] クリソポリスは、ボスポラス海峡の対岸、ビフィニア地方にあるコンスタンティノープルの郊外で、現在のスコダルに相当する。

る教父たちの伝承に背き、教会に新しい教義を持ち込んでいる者たちである。なぜなら、バシレイオス大聖人はこう語ったからだ。　「古来より聖なる教父たちから伝えられてきたものはすべて、崇敬に値する。しかし、新たに定められたものはすべて不適切であり、何の意味も持たない」。聖なるイコンの崇敬に反対するあなた方の決定も、まさにその通りである。それらの決定は、カトリック教会の息子たちによってではなく、不敬虔な姦淫者たちによって作成されたものである。　それゆえ、今まさに私の心に、預言的な言葉が浮かびます。（詩編　2:2）――*「地の王たちは立ち上がり、君主たちは共に主に対して、またその尊い聖像に対して、謀議をなす」*。

このような言葉を耳にしたニコミディアのコンスタンティン司教は、座から素早く飛び起き、地面に座っていた聖人に近づき、足でその顔を蹴りつけた。　同様に、その場に居合わせた従者の一人が聖人の腹を蹴りつけた。聖人は地面に倒れ、その従者は彼の胸を踏みにじり始めた。

カリストは、このような恥知らずで不法な行為に憤り、全員に沈黙を命じた。それから彼はステファノに向かって、次のように語った。

「お前には二つの選択肢がある。最近開かれた公会議の決定に署名するか、あるいは、神に教えられた教父たちの決定を拒む者として死ぬかだ。早急にどちらか一つを選べ。」

神に導かれたステファノは、これに対しこう宣言した。

「私の言葉に耳を傾けてください、パトリキウス様！私は偉大なる使徒パウロと共にこう宣言します。*『私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは』*――その尊い御像のために――*『得ること』なのです*（フィリピ1:23）。　私はすでに　、かつてあなたに一度述べたが、改めて言う。たとえ私の血が一握りしか残っていなかったとしても、キリストの聖なるイコンのためにそれを流すことを惜しまないだろう。さて、あなたがたが神聖なイコンへの礼拝を拒む理由を知るため、あなたがたの公会議の決定文を読み上げさせてほしい。

するとすぐに、コンスタンティノス・ニコミディオスはその書物を取り上げ、読み始めた。その書物の題名は『第七回全地公会議の伝承』であった。この題名が読み上げられるやいなや、聖人は手で合図をして沈黙を促し、その後、大声でこう叫んだ。

「あなたがたは、脆弱な土台の上に、その不安定な建物を築いたのだ。なぜ、あなたがたの公会議を『聖なる』と呼ぶのか？　あなたがたは『聖なる』という称号を、すべての聖人から奪い取り、使徒たちにも、殉教者たちにも、預言者たちにも、その他神に喜ばれた人々にも、そう呼ぶことを禁じているではないか。　あらゆる聖なるものを踏みにじり、汚しているというのに、どうしてあなた方の公会議が聖なるものになり得るというのか。あなた方は自分たちの公会議を『全地公会議』と呼んでいるが、そこに一人の総主教も、彼らから委任された者も、ましてや公会議の招集に同意する旨を表明した書簡さえもなかったというのに、どうしてそれが全地公会議になり得るというのか。貴殿らの公会議は偽りのものであるため、全地公会議とは呼べない。さらに、貴殿らはそれを「第七回」と呼んでいる。しかし、最初の六回の公会議と相違しているのに、どうして第七回と言えるのか。　もしそれが第七の公会議であるならば、第六、第五、およびそれ以前に開かれた他の公会議のすべてに従うべきであったはずである。なぜなら、第一、第二、第三、第四、第五、第六がなければ、第七はあり得ないからである。したがって、あなたの公会議は、以前に開かれた六つの公会議の伝統を拒絶した以上、決して第七の公会議ではない。

この言葉に対し、司教たちは反論した。

「では、六つの公会議から受け継がれたものを、我々は拒絶しているというのか？　いいえ、我々は以前の公会議やそこから受け継がれたものを拒絶しているのではなく、それらすべてを受け入れているのだ。」

すると、聖人はこう答えた。

「かつての公会議は、聖なる教会で行われたのではないのか。つまり、私が言っているのは、イコンで飾られていた教会のことだ。第一回公会議はニカイアで、その街の広大な教会で行われた。

第二回はコンスタンティノープルで、聖イリナの教会で行われた。　第三回はエフェソスで、聖ヨハネ・テオロゴスの教会で開かれました。第四回はハルキドンで、大司教座大聖堂で行われました。第五回と第六回は再びコンスタンティノープルで、前者は聖ソフィア大聖堂で、後者はトゥルロと呼ばれる宮殿内の教会で開かれました。　それらの教会はすべて、尊いイコンで飾られていなかったでしょうか？そして、過去のどの公会議も、貴方の公会議のようにそれらを拒絶したことはありません。これについて、貴方は私に何とお答えになりますか？

彼らは聖ステファノの英知に驚嘆し、彼に反論できる言葉が見つからず、黙り込んでいた。ただ、彼らと共に座っていた者の一人がこう口を開いた。

「まことに、ステファノの言ったことは正しい！」

聖人は天を仰ぎ、それから両手を挙げ、心の奥底からため息をつくと、大声で叫んだ。

「もし、人間の姿でイコンに描かれた主イエス・キリストを崇めない者がいるならば、その者は破門され、*『取れ、取れ、彼を十字架につけよ！』*（ヨハネ19:15）と叫んだ者たちと同じ運命をたどるであろう。」[8265]。

すると、不敬虔な異端者たちは、議論において聖人を打ち負かすことができないと悟り、彼を牢獄へ連行するよう命じ、自分たちは恥に満ちて、自分たちを遣わした者たちの元へ戻っていった。

彼らが王のもとへ戻ると、王は尋ねた。

「何をしたのか？」

司教たちは自らの恥を隠そうとしたが、カリストが彼らに先んじて王に真実のすべてを告げた。

「王よ！」と彼は言った。「我々はステファノスとの論争に敗れました。彼は賢明な人物であり、その言葉には言い表せないほどの力が宿っています。さらに、彼は勇敢で恐れを知らず、禁令だけでなく、死そのものでさえも恐れてはいません。」

すると、激怒した王は、聖ステファノスをヘレスポントス地方のプロコニス島[8266]へ流刑にするよう命じた。

そこへ向かう前に、聖人はフィリッピコヴァ修道院のイグメン（院長）を助けた。彼は病に伏し、すでに死の淵に立っていた。聖人は彼のそばで祈りを捧げ、手を触れると、彼を癒やし、病床から立ち上がらせた。その後、彼のために用意された船に乗り込み、追放の地へと向かった。　プロコンニス島に到着すると、彼はまず島内のすべての荒野を巡り歩き、ついに、その地の住民から「キスダ」と呼ばれる美しい洞窟を見つけた。その中には、主の肉による先祖であり、至聖なる神の母である聖アンナに捧げられた小さな教会があった。　聖人は大いに喜び、洞窟の近くに修道院を建てた。ここで、神の栄光のために生きながら、彼はその土地の植物の根を糧としていた。

一方、アウクセンティオス山にあった聖ステファノの修道院から追放された弟子たちは、羊飼いのいない羊のように、さまざまな国へと散り散りになっていた。　しかし、彼らの師がプロコンニス島に幽閉されていると耳にすると、聖なる牧者から離反した二人――ユダがキリストから、あるいはディマスとエルモゲノスがパウロから離反したように（IIテモテ1:15、4:10）――を除き、全員が彼の元へ集まった。　その二人は、尊者に対する誹謗中傷の告発文書を作成したセルギイと、当初は世俗の司祭であったが、後に聖人の手によって修道者の位に叙階されたステファノであった。

再び修道生活、ひいては神そのものを拒み、世俗の衣を身にまとった彼は、王のもとへ赴き、こう言った。

[8265] これは、主がピラトの裁判にかけられていた時のことである（ヨハネ19:15）。

[8266] プロコンニス――マルマラ海にある島。現在はマルマラ。ヘレスポント地方――古代にヘレスポントと呼ばれていたマルマラ海の真ん中に位置する地域。

「敬虔なる王よ！　あなたの御配慮により、私はサタンの束縛から解き放たれ、暗い衣を脱ぎ捨て、今や明るい衣を身にまといました。」

王は大いに喜び、彼を深く愛し、やがてソフィア宮殿の責任者に任命した。王自身もそこへ頻繁に足を運んでいた。その際、コプロニムは彼を「喜びの父」と呼んでいたが、この滅びの息子は、自分自身について涙を誘うことしかできなかった。　こうして、セルギイとステファノスの二人は、尊者（聖人）の弟子たちの仲間から離れていった。残りの者たちは皆、前述の通り、尊者ステファノスのもとへ集まり、修道院を設立した。　また、彼の母も、娘であり妹でもあるテオドティエを連れて、この至福の者に会いに来た。そして、彼の洞窟の近くに自分たちの住居を構え、そこで徳高く暮らし、時折、師である聖ステファンの蜜のように甘美な言葉に耳を傾けて喜びを得ていた。　一方、聖ステファノは自らのために柱を立て、その上に狭い小屋を築いた。柱に登ると、彼はその小屋に閉じこもった。当時、彼は生後49歳であった。　聖人の偉大な功績により、神は彼を栄光に輝かせ、奇跡を行う賜物を与えられた。こうして、至福のステファノは盲人の目を開かせ、悪霊に取り憑かれた若者を解放し、出血の病を患う女性のそばで祈りを捧げて彼女を癒やし、幾度となく海の荒波を鎮め、多くの船を沈没から救った。　さらに、船乗りたちは、彼が水の上を歩いたり、船を操縦したり、あるいは帆を広げたりする姿を何度も目撃した。

聖人がプロコンニス島でその奇跡によって名声を博していた頃、彼の母が亡くなった。それは、聖人が流刑に処されてから二年目のことだった。彼女が主のもとへ旅立つ際、娘のテオドティアは母を嘆き悲しんで激しく泣いていた。すると、ステファノの母である至福のアンナは、彼女にこう言った。

「あなたが泣くほどの理由はない。あなたも私と共に、主キリストのもとへ行くのだから。」

そして、その通りになった。聖ステファノの母である至福のアンナが亡くなってから七日目に、テオドティアもこの世を去った。

その頃、プロコンニス島には、聖ステファノと同名の（すなわちステファノと名乗る）ある戦士がいた。彼はアルメニア出身で、ヨーロッパ諸国からやって来ていた。道中、彼は恐ろしい病に倒れ、体の左半身が萎縮してしまった。　聖ステファノがあらゆる病を癒やすと聞き、彼は必死の思いで彼の元へやって来て、その前にひれ伏し、涙ながらに癒やしを懇願した。聖人は彼に、キリストと至聖なる聖母マリアのイコンに礼拝するよう命じ、彼が熱心にそれを行うと、たちまち完全に癒やされた。　この戦士が仲間の元に戻ると、彼らは彼に「どのようにして回復したのか」と尋ね始めた。戦士は、自分に示された神の恵みを少しも隠すことなく、こう語った。

「プロコンニスにいる修道士ステファノが命じた通り、キリストと聖母マリアのイコンに礼拝を捧げたとき、私は病から癒やされたのです。」

兵士たちはこのことを、フラキアを統治していた彼らの指揮官に報告した。指揮官は癒やされた戦士を呼び寄せ、どのようにして回復したのかを尋ねた後、直ちに王のもとへ送り出した。　王もまた、その兵士に回復の経緯を問い詰め、聖なるイコンに拝礼したことで癒やされたと知ると、彼を偶像崇拝者と呼び、あたかも神を冒涜する行いをしたかのように激しく非難した。　そこで、癒やされた戦士は王を恐れて恥じ入り、聖像に拝礼したことを悔い改め、人々の前で聖像崇拝を公に否定し、二度と聖像に頭を下げないという誓いを立てた。このため、不義な王は彼を気に入り、百人隊長の地位を与えた。　しかし、その不敬虔な兵士が王宮を出て、自分の馬に乗ろうとしたとき、馬は突然暴れ出し、彼を振り落とした上、その不幸な男を足で踏みつけ始め、彼が息を引き取るまで踏み続けた。この恩知らずの背教者は、このような処刑を受けたのである。

この奇跡は、至福のステファノスによって行われた他の奇跡と相まって、王を激しい怒りと憤りに駆り立てた。というのも、王は、その聖人がプロコンニスに住み、奇跡によって称えられ、すべての人々に聖なるイコンを崇拝するよう教えていることを知っていたからである。　そこで王は聖人を殺害することを企て、そのために彼を監禁先から連行するよう命じた。聖人がコプロニムのもとに

連れて来られると、不義の王はまず彼を鉄の鎖で縛り、足を足枷にはめ、フィアルス[8267] として知られる薄暗い地下牢に閉じ込めるよう命じた。　数日後、コプロニムは二人の主要な高官と共に郊外の宮殿の一軒に滞在していた際、至福のステファノを自分の元へ連れてくるよう命じた。

王のもとへ連行される途中、聖人は道行く敬虔な信者から、王の肖像が刻まれた硬貨を一つ乞い受け、それを密かに自分の修道服のフードの中に隠した。

王が聖人を見るやいなや、すぐに大声で叫び始めた。

「ああ、なんてことだ、なんてことだ！　私は一体何を我慢しているというのか？　この男は私の権威を貶め、私の名誉を傷つけ、私を何とも思っていないのだ！」

そして、聖人に対して非難や侮辱に満ちた言葉を次々と浴びせた。しかし、聖人はうつむいたまま黙って立っていた。すると、王は言った。

「なぜ、お前は私に何も言わないのだ、不信心者よ？」

これに対し、聖ステファノは穏やかにこう答えた。

「もし王よ、私を殺そうとお考えなら、今すぐ殺してください。しかし、何かを尋ねるために私を呼び出したのなら、怒りを鎮め、落ち着いて私と話し合うべきです。」

その言葉を聞いて、王は聖人に尋ねた。

「教えてくれ、なぜ我らを異端者と呼ぶのか？我らは教会の伝承のどれに背いているというのか？」

聖人はこう答えた。

「あなた方は、神を崇める先人たちが古来より私たちに伝えた、聖なるイコンへの崇敬を拒んでいるのです。」

拷問官はこれに反論した。

「それを聖なるイコンなどと呼ぶな。聖なるのはイコンではなく、偶像の像に過ぎない。聖人と偶像に、いったいどのような交わりがあるというのか？」

これに対し、聖人はこう答えた。

「イコンを崇拝する者は、その物質そのものを崇拝しているわけではない。聖バシレイオス大主教が述べているように、像に捧げられる崇拝は、原型である御方へと移るからである。」

拷問官は聖人に言った。

「理性の及ばない多くのことがあり、理解しがたいものを、物質的な絵の具で表現することなどできるだろうか？　また、その本質が誰にも知られていない存在を、感覚的な像を通じて崇拝することは、果たして正当なことだろうか？」

聖人はこう答えた。

「理性を備えた者の中で、物質的な絵の具で、非物質的な神の本質を描き表すことができると誰が言うだろうか。神の本質は、理性ですら描写することさえできない。ましてや、絵の具で描き表すことなど到底できない。　しかし、私たちがイコンにキリストを描き表すとき、描いているのは神の本質ではなく、使徒たちが目撃し、触れた、私たちに似たキリストの　な姿である。聖ヨハネ・テオロゴスが言ったように、*「私たちが自分の目で見たもの、私たちの目で注視したもの、そして私たちの手で触れたもの」*（Iヨハネ1:1）である。もしあなたがモーセの次の言葉を指摘するならば：出エジプト記20――*「あなた自身のために、偶像や、天の上にあるもの、地の下にあるもの、地の下の水の中にあるもののいかなる像も造ってはならない」*――と指摘するならば、私はあなたにこう言おう。モーセ自身、二つの金のケルビムの像を作ったのだ。このことについて、神聖な使徒は次のように語っている：　ヘブライ人への手紙　9章――*「栄光のケルビムが、聖所を覆っている」*。また、

[8267] この牢獄は、街の中心部にあった。

祭壇そのもの、幕屋、至聖所も、天の模倣を体現していた。同じ使徒がこう述べているように：ヘブライ人への手紙　8章――*「それらは、天のものの模倣と影に奉仕している*」。

では、人々の目に見えるキリストの御姿をイコンに描き、それに礼拝を捧げることが、どうして不法なことになり得るでしょうか。あるいは、何らかの物質で作られた十字架に礼拝を捧げるとき、果たして私たちはその物質そのものに礼拝を捧げているのでしょうか。　同様に、私たちが聖なる器を尊ぶとき、私たちの良心に何の罪も生じ得ない。なぜなら、器はキリストの御名が呼びかけられることによって聖別されることを知っているからである。それなのに、なぜあなたがたはこれらすべてに反発するのだろうか？　その先には、パンとぶどう酒の姿を借りて神秘的に供される、キリストの聖なる御体と御血までも否定しようとするでしょう。それらは、十字架上で苦しみを受け、今や天に御在られるキリストの御体を表しており、私たちが礼拝し、聖体拝領によって永遠の祝福の相続を受けるものなのです。　しかし、あなたは聖なるものと聖でないものの間に何の違いもないと見なし、キリストのイコンをアポロンの像と同様に、聖母マリアのイコンをアルテミスの彫像と同様に偶像として扱い、それらを足で踏みつけ、火で焼き払っているのです。

これに対し、王はこう答えた。

「まさか、愚かな不信心者よ、我々がこれらのイコンを踏みにじることで、キリストを踏みにじっているなどと思っているのか？」

そこで、神に賢明なステファノスは、熟練した格闘家の常として、敵の武器を用いて敵を打ち負かそうと望み、修道服のフードから、不敬虔なコプロニモス王の肖像が描かれた硬貨を取り出した。それは、尋問に向かう途中で、ある敬虔な人物から懇願して手に入れたものだった。　この硬貨を見せながら、聖人は、かつてキリストがパリサイ人たちに問いかけたのと同じ言葉で、王にこう尋ねた。

「*この肖像と銘文は、誰のものか？*」（マタイ22:20）。

王は驚きを隠せずにこう答えた。

「他ならぬ、王のものです。」

聖人は再び尋ねた。

「もし誰かが王の肖像を地面に投げ捨て、それを足で踏みつけ始めたらどうなるだろうか？その者は、その行為に対して罰を受けるのではないか？」

その議論に立ち会っていた人々は答えた。

「はい！　そのような者は、王の像を冒涜したことになるため、重い罰を受けるでしょう。」

すると、聖人は深くため息をついて言った。

「あなた方の盲目さはなんと深く、その狂気はなんと大きいことか！もし、この世の死すべき王の像を冒涜しただけで恐ろしい刑罰を下すというのなら、神の御子とその母の像を踏みつけ、火に投げ込むあなた方は、いったいどのような罰を受けることになるのか。」

そう言うと、聖人は硬貨に唾を吐きかけ、それを地面に投げ捨て、足で踏みつけ始めた。これを見た立ち会いたちは、聖人を宮殿から海へ突き落とそうと、猛烈な勢いで彼に襲いかかった。というのも、聖人と対話を交わしていた宮殿は、海の上にそびえ立っていたからである。　しかし、王は内心では恐ろしい怒りが沸き立っていたものの、穏やかなふりをして、彼らにそうすることを禁じ、聖人を民の牢獄へ連行し、そこに閉じ込めるよう命じた。

その牢獄に入る際、聖人はこう言った。

「この牢獄は、私の現世における安息の地となるだろう。私は最期の息を引き取るまでここに留まるべきであり、この住処を、尊いイコンへの忠誠に対する報いとして見なすつもりだ。」

牢獄の最も奥の部屋に閉じ込められた聖人は、そこに三百四十二人の修道士が座っているのを見つけた。彼らは様々な国や修道院で修行に励んでいたが、聖なるイコンを崇敬したために牢獄に投じられていたのである。　ある者たちは鼻を切り取られ、ある者たちは耳を切り落とされ、またある

者たちは両手を切断されていた。この最後の残虐な処置は、聖像崇拝を擁護する書物を著した者たちに対して行われたものである。何人かは、まだ完全に癒えていない傷によるただれを体に負っていた。　顔に火傷を負わされ、樹脂を塗られた者もいれば、嘲笑の的となるよう頭を刈り上げられた者もいた。これら　の者たちがこうした苦難に耐えているのを見て、尊者ステファノスは彼らの忍耐と功績を称え、聖なるイコンのために自らもそのような苦難を耐え忍ぶことができなかったことを深く嘆いた。　聖なる父たちは、愛をもって至福のステファノを受け入れ、彼を自分たちの指導者兼教師に選んだ。こうして、その牢獄はまるで修道院のようになり、そこでは修道院の規律と規則に従って、通常の聖歌と祈りが捧げられるようになった。

牢獄に留まっている間、尊者は、ある神を愛する女性――彼女は看守の一人の妻であった――から食事を与えられていた。　毎週土曜日と日曜日、彼女は牢屋に少量のパンと水を持ってきて、密かに聖人に差し出した。当初、聖ステファノは、彼女が敬虔な人物であるか、またイコンを崇拝しているか分からなかったため、彼女の手から差し出された食事を受け取ることを拒んでいた。というのも、彼は異端者を忌み嫌っており、彼らの手から何一つ受け取りたくなかったからである。　しかし、その女性は、自身の敬虔さを証明するために、密かに保管していた聖母マリアと、首席使徒ペトロおよびパウロの聖像を彼のもとに持ち込んだ。　聖人の御前でこれらの聖なるイコンに礼拝を捧げ、それらに口づけをした後、聖ステファノがそれらの尊いイコンを身辺に置き、聖なる祈りの中で彼女を覚えてくれるよう、彼に手渡した。

ある日、聖ステファノスは他の敬虔な父たちと、王の代官、アンフィパトス、イゲモンたち[8268]によって敬虔な者たちに課せられる、多種多様な拷問について語り合っていた。その最中、囚人の一人であるキプロス出身のアントニオスが、キプロスの修道士パウロの殉教の死を思い出した。「ラルドティロス」と呼ばれたクレタ島の教区長テオファンは、彼の目の前の地面に、片側にはキリストの磔像を、もう片側には拷問器具を置き、彼にこう言った。

「パウロよ、この二つの中から一つを選べ。キリストのイコンを足で踏みつけ、生き延びるか。さもなければ、お前の前に置かれた拷問器具で拷問され、凄惨な死を遂げるか――もし命じられたことを実行しないのであれば。」

しかし、勇敢なパウロは声を張り上げて叫んだ。

「主イエス・キリスト、神の独り子よ、私はあなたの聖なるイコンを足で踏みつけるようなことはいたしません。」

そう言うと、パウロはひざまずき、聖なるイコンに敬虔に口づけをした。これにより、彼は拷問者の脅しを恐れておらず、キリストのイコンのために死ぬ覚悟があることを示したのである。すると、拷問者は激しい怒りに駆られ、猛烈な激怒に燃え上がった。　まず、彼は二枚の鉄板で殉教者の体をしっかりと締め付けるよう命じ、次にパウロを逆さ吊りにして、鉄棒でその体を打ちのめし、最後にその下に焚き火を敷いて火をつけた。　この苦難の中で、パウロは火に焼かれて息を引き取り、主への芳しいいけにえとなった。

アントニオスがこの話をしている間、すべての修道士たちは温かい涙を流していた。その後、テオストリクトという名の別の囚人が語り始めた。彼は年老いた、長老の位を持つ尊厳ある人物であり、聖像崇拝への忠誠ゆえに鼻を切り落とされ、顔全体が沸騰した樹脂で焼かれたのだった。

「ある時、ペリキタと呼ばれる我らの修道院で」と彼は語った。「受難週の聖なる大木曜日に、血を流さない生贄の儀式が行われていた。　すると突然、拷問者ラハノドラコンが多数の兵士を率いて修道院を襲撃した。彼は厚かましくも祭壇に踏み込み、賛美歌を止めるよう命じ、聖なる、命を与えるキリストの秘跡を地面に投げ捨てた。

[8268] アンフィパト――いくつかの属州を管轄する地域の長。イゲモン――属州の長。

その後、選ばれた42人の修道士を捕らえて鉄の鎖で縛り上げ、残りの者たちの中には、体を引き裂いて残酷な傷を負わせた者もいれば、あらかじめ樹脂を塗りたくった顎鬚や顔を焼いた者もいた。また、私を含む他の者たちからは、鼻を切り落とした。　その後、彼は教会に火を放ち、修道院全体と共に焼き払った。鎖で縛られていた選ばれた42人の修道士たちを、迫害者はエフェソス地方に投獄し、入り口を板で塞いだ古びた浴場に全員を閉じ込めた。そこで彼らは皆、飢え死にした。

聖ステファノは、こうした話を聞きながら、兄弟たちに同様の勇気と忍耐を持つよう説き続けた。その後、彼自身も、ヴラヘルナに住んでいたあるペトロという人物のことを思い出した。　王の尋問に引き出されたこのペトロは、聖像崇拝への忠誠ゆえに、牛の腱で容赦なく鞭打たれたが、その際、まるで痛みを感じていないかのように、全くうめき声も叫び声も上げないほどの忍耐力を示した。　それだけでなく、彼は鋭い刃物のように鋭い非難の言葉で皇帝自身を恐れずに突き刺し、彼を「」と呼び、新たな背教者ユリアヌス「[8269] 」と名指しした。また、至福のステファノスは、皇帝がキリストと至聖なる聖母マリアのイコンを足で踏みつけるよう強要しても従わなかったあるヨハネのことも思い出した。　幾度もの無駄な試みの末、拷問官は彼を皮袋に縫い込み、その袋に石を結びつけて海に投げ込み、聖人を溺死させるよう命じた。

このような物語を互いに語り合う中で、キリストのために苦難に耐えるすべての至福の父たちと囚人たちは、聖なるイコンのために苦難を受けるという熱烈な願いに燃え上がり、互いに励まし合いながらこう語った。

「兄弟たちよ、主のために耐え忍び、最後の息を引き取るまで主のために苦難に耐えなさい。*『もし、キリストと共に苦しむなら、キリストと共に栄光を受けることになる』*（ローマ8:17）。

この世のあらゆる恵みも、私たちのために用意されているその栄光の前には、何ものでもない。

聖ステファノは民衆の牢獄に十一ヶ月間留まっていた。そこで神は、幻の中で、彼の死が四十日後に訪れることを彼に示された。その啓示の後、看守の妻が聖人に食事を届けにやって来たとき、彼は彼女にこう言った。

「主が、あなたが私にしてくださった善行に対して、あなたに報いてくださいますように。あなたは十分に私に仕えてくださいました。これからは、以前のように、あの朽ちる食べ物や飲み物を、もう私にもたらさないでください。」

その言葉を聞いて、妻は悲しみに暮れた。聖人が自分の差し入れを嫌っているのだと思ったからである。彼女の悲しみを目の当たりにして、聖人は彼女にこう言った。

「私の最期の時は近づいている。四十日が過ぎれば、私は死ぬだろう。そして私は、この残りの日々において修道者の行いをさらに深め、死に備えるために、食べ物も飲み物も一切摂らずに過ごしたいと願っているのだ。」

その後、警備員の妻を帰らせると、聖人は祈りの修行に専念し、昼夜を問わず祈りを捧げ続けた。　当時、正教を信仰していた市民の中には、彼から祝福を受けるために訪ねてくる者もいた。そのために彼らは衣服を替え、粗末なぼろ服を身にまとい、聖人のもとへやって来て、その大いに有益で神の知恵に満ちた言葉に耳を傾けた。

定められた四十日が終わりに近づき、すでに三十八日目が訪れたとき、聖人は再び前述の妻を呼び寄せ、牢獄にいたすべての聖なる父たちの面前で、彼女にこう言った。

「神が、あなたが私に示してくださったその慈愛に対して、百倍の報いをあなたに与え、御自身の高みから憐れみの眼差しであなたを見守られますように。　あなたは、*「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、すなわち最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしたのである」*（マタイ

[8269] ユリアヌス・アポステート――361年から363年まで在位したローマ皇帝。キリスト教徒として生まれ育ったが、キリストを拒絶し、熱心な異教徒となった。

25:40）と語られた方の真の弟子であることを示した。また、*「義人を、義人の名において迎える者は、義人の報いを受ける」*（マタイ10:41）とも語られた。さらに第三に、 *『また、あなたがたがキリストに属しているからといって、わたしの名によって一杯の水を飲ませてくれる者は、まことに、あなたがたに告げる。その人は、その報いを失うことはない』*（マルコ9:41）。あなたは私に奉仕することで、これらすべてを成し遂げた。それゆえ、あなたは自分の報いを失うことはない。

その後、聖人は、彼女が以前彼に持ってきた聖なるイコンを彼女に手渡し、こう言った。

「あなたの尊い宝を受け取りなさい。それはあなたにとってあらゆる悪からの守りとなり、今この世でも、来るべき世でも、あなたの正教の信仰の証となるでしょう。」

そう言い終えると、聖人は深くため息をつき、こう語った。

「明日、私はこの世を去り、天の王の御前に立つあの世へと旅立つのだ。」

聖人のこの言葉を聞いて、その女性は悲しみに暮れて泣き崩れた。その後、イコンを受け取り、聖ステファノから祝福を受けた彼女は、イコンをタオルで包み、偉大なる父であり師である彼との別れを嘆きながら、自分の家へと帰っていった。 一方、聖人は、死を迎えるまでの残りの時間を、同志たちと共に聖なる賛美歌を歌い、主なる神を賛美して過ごした。

三十九日目が訪れると、王は三番目の妻であるエウドクシアと共に、「ヴルマリア」[8270] と呼ばれる異教の祭りを祝った。というのも、この不敬虔な異端者は、数多くの 神を憎む悪行に加え、異教の祝祭も怠らなかったからである。 この祭りの最中、一部の邪悪な異端者たちは、聖ステファノが牢獄を修道院に変え、彼を訪ねてくる多くの人々をその言葉によって惑わし、偶像崇拝（彼らはイコン崇拝をそう呼んでいた）へと誘い込んでいると、王の前で告発した。 王は激怒し、直ちに執行人を遣わして、ステファノを城外へ連れ出し、剣で処刑するよう命じた。しかし、ステファノが縛られて斬首の場へ連行されるのを見て、王は、この聖人をこれほど迅速な処刑に処してしまったことを後悔し始めた。

「ステファノにとって、剣による斬首によって一刻も早くこの世を去ることほど、望ましいことがあるだろうか？」と王は語り、聖人をさらに残酷な死で葬り去ろうと、再び彼を牢獄へ戻すよう命じた。 一方、王自身はその日、自分の貴族や同志たちのために宮殿で盛大な宴を催し、彼らは楽器の演奏やトランペットの轟音に合わせ、歓喜し、楽しんでいた。 宴の最中、王は至福のステファノのことを思い出し、傍らにいた二人の若者にこう言った。彼らは容姿端麗で、勇敢さを際立たせ、王の同母兄弟であった。

「民の牢獄へ行き、アウクセンティエヴァ山にいるステファンにこう伝えよ。『王はこう言っている。彼がいかにあなたを気遣っているか、わかるか？ 彼はあなたを死の門のすぐ手前から救い出し、命を授けてくれたのだ。 さて、いつまで王の意志に従わないつもりだ？ これらすべてを彼に伝えよ。彼が私に服従せず、むしろさらに激しく私を冒涜し始めることは分かっている――その時は、彼を捕らえ、死ぬまで可能な限り激しく打ちのめせ。

王の命令を聞いた若者たちは牢獄へ向かったが、天使のような容貌をしたステファノの姿を目の当たりにし、その聖なる姿に戸惑いを覚え、聖人の足元にひれ伏して、祝福と祈りを求めた。その後、王のもとへ戻り、こう告げた。

「我々はあの修道士が従順でないと判断し、そのために容赦なく殴りつけ、かろうじて息がある程度まで追い込みました。あれほど激しく殴ったのですから、彼が朝まで生き延びることはないと考えます。」

これを聞いて、王は安堵し、志を同じくする者たちと共に、楽しげに宴を続けた。

[8270] ヴルマリアまたはブルマリア――冬至の日（ラテン語で「*ブルマ*」）に行われた異教の祭典。この祭りは、古代ローマにおいて、サトゥルヌス神（ローマの農業と作物の神）の神殿前で生贄を捧げることから始まり、そのためサトゥルナリアとも呼ばれていた。その後、上院議員やすべての高官が参加する饗宴が開かれた。

一方、聖ステファノは一晩中祈りを捧げ、死に備えていた。そして明けの明星が昇ると、彼は自分と共に投獄されていたすべての聖なる父たちを呼び集め、次のように語りかけた。

「父たちよ、兄弟たちよ、私はあなた方に最後の平和の祈りと最後の口づけを贈ります。もはや私の死の時は近づき、殉教の冠が私を待っています。あなた方は最後まで正教に留まり、揺るぎない信仰を保ってください。」

その言葉を聞いて、聖なる父たちは苦々しく泣き、温かい涙で顔を濡らした。聖ステファノは衣服を脱ぎ始めた。すると、他の聖なる父たちは彼にこう言った。

「父よ、聖なる修道服を身にまとったまま死を迎えるほうがよいでしょう。」

しかし、神に導かれたステファノはこう答えた。

「戦士は裸で戦いに臨むべきである。ましてや、修道服が不法な者たちの足で踏みにじられることなど、何の益があるというのか。」

そう言うと、聖人はすべての衣服を脱ぎ捨て、ただ一枚の革のマントだけを身にまとい、聖なる父たちと共に、死の刻を待ちながら座った。

その夜、王が宴会の後、寝台で休んでいると、常に王のそばにいた悪魔が、王にこう告げた。「王が遣わした者たちはステファノに何の害も与えず、ただ彼にひれ伏し、祝福を受けただけでした。」　すると王は眠りから覚め、宮殿の奥の部屋から出てくると、咆哮する獅子のように叫び始めた。

「ああ、悲劇だ、なんと大きな屈辱か。私には助け手も、忠実な家臣もいない。皆が私を何とも思っていない。思い出にすら値しない者たち（彼は通常、修道士たちをそう呼んでいた）を、どうすればよいのか分からない。」

王の叫び声を聞いた王宮にいた者たちは皆、動揺し、不安になり、慌てて王のもとへ駆け寄った。駆け寄ってくる者たちを見据え、王は言った。

「どこへ行くのか、誰を探しているのか？」

すると彼らは謙虚にこう答えた。

「我らは、慈悲深き主、我らの王であるあなたのもとへ参りました。」

すると、王は大きな声で叫んだ：

「私はあなた方の主でも、王でもありません。あなた方には別の王、別の主がおられ、その足元にひれ伏し、その祈りと祝福を求めているのです。そして、私の敵を滅ぼし、私の魂を慰めてくれるよう、私の言葉に耳を傾け、忠実に仕えてくれる者は誰もいません。」

コプロニモスの周囲の人々は、王自身よりも崇められているというこの敵が誰なのかと尋ね始めた。するとコプロニモスはこう答えた。

「王は私ではなく、アウクセンティオスの山にいるステファンだ。」

彼がそう言い終えるやいなや、皆は一斉に大声で叫びながら民衆の牢屋へと駆け込み、看守に向かってこう叫んだ。

「ステファン・アウクセンティアーニを我々に渡せ！」

しかし、聖ステファノは自ら、明るい表情と喜びに満ちた心で、牢獄から彼らのもとへ歩み出た。

「私が、あなたがたが探している者だ」と、彼は駆け寄ってきた者たちに言った。すると彼らは、狼が羊を捕らえるかのように聖人を捕らえ、地面に叩きつけ、彼にかけられていたすべての足枷を打ち砕くと、容赦なく広場へと引きずり出し、足で踏みつけ、棒で殴りつけた。　祝福された聖人が牢獄の門の外に引きずり出され、大殉教者テオドロスの教会の前に立ったとき、彼は両手を地面につけて、できる限り頭を上げ、その教会の前で聖殉教者に最後の礼拝を捧げ、こうして激しい苦痛の中にあっても、敬虔な行いを果たした。　これを見た、聖人を引きずっていた血に飢えた者の一人、フィロマティウスという名の男は、大きな木の塊を掴むと、それを聖人の頭部に激しく打ちつけ、そ

の頭を砕いた。そして直ちに、尊者（聖人）は神の御手にその魂を委ねた。　すると、その殺害者に対し、その場ですぐに悪霊が襲いかかった。そのため、その不信心者は恐ろしい声を上げて地面に倒れ込み、全身をよじらせ、歯ぎしりをしながら凄まじい叫び声を上げ、口からは泡を流していた。そして、その呪われた男は、激しい苦しみの中で魂を吐き出すまで、悪魔に苦しめられ続けた。

それにもかかわらず、ステファノを引きずっていた激昂した血に飢えた者たちの群れは、彼の遺体への虐待を止めず、死体に対して野獣のような残虐さを露わにし、聖人の遺体を街中を引きずり回して石で打ちのめした。　道中、聖人の体の各部位が聖なる肉体から引きちぎられ、路上に散らばった。聖人の指や両手、さらには内臓までもがそうであった。　その際、ある悪党が両手で巨大な石を持ち上げ、聖人の腹部を打ちつけたところ、たちまちその腹部が裂けて内臓が飛び出した。その結果、街の通りは、水のように流れ出る聖人の血で真っ赤に染まった。　そして、男性だけでなく、女性や幼い子供たちまでもが、学校から出てきて、聖人の遺体に石を投げつけた。　というのも、王から次のような命令が出ていたからである。「ステファノス・アウクセンティアーノスに石を投げない者は、王の敵であり、処刑に処される」。それゆえ、老若男女を問わず、不信心な異端者たちの群衆全員が、殺された聖人を打ちのめしたのである。　聖人の遺体が牛の市場へと引きずり出されたとき、ちょうどその頃魚を調理していたある酒場の主人が、引きずられてくる遺体を見て、聖人がまだ生きていると思い込み、燃え盛る炭を掴んで聖人の頭に叩きつけた。すると、その瞬間、聖人の脳髄が流れ出した。

聖人の遺体に様々な虐待を加えていた反逆者の群れの後を、テオドールという名の正教徒の男が追っていた。彼は、聖人の遺体がどこに捨てられるのかを知りたかったのだ。　頭から流れ出た脳みそを目にした彼は、つまずいたふりをして地面に倒れ込み、密かに清らかなハンカチで聖人の脳みそを包み、衣服の中に隠すと、再び聖人の遺体を冒涜する者たちの後を追った。

その頃、聖ステファノの長姉はまだ生きており、ビザンツの女子修道院の一つで修道女となっていた。聖人の遺体は、皇帝の命令に従い、その姉にも石を投げさせるために、その修道院へと引きずり込まれた。　しかし、彼女はこれを知ると、自分の独房を出て、ある棺の中に身を隠した。人々は至る所で彼女を探したが、見つけることはできなかった。そこで、聖ステファノの遺体はそこから、「ペラギアの墓地」と呼ばれる場所へと引きずり出された。そこにはかつて聖殉教者ペラギアの教会があったが、老朽化により崩れ落ちていた。　不敬虔な王は、その基礎そのものを破壊し、その場所に深い穴を掘るよう命じ、そこに殺された異教徒の死体を投げ込むようにした。聖ステファノの遺体もこの穴まで引きずり出され、そこに投げ込まれ、義人は不法者たちと同列に扱われたのである。

かくして、私たちの尊い父ステファノは、生後53年目の11月28日、この世の旅路を終えた。[8271]

その日の朝は極めて晴れ渡り、太陽が地上に明るい光を注いでいた。しかし、その日の第三時、アウクセンティオスの山がある東の方角から火のような雲が現れ、街の上空の空気が瞬く間に暗くなり、昼が夜へと変わった。その後、嵐が吹き荒れ、激しい雹が降り注ぎ、多くの人々がそれによって命を落とした。

しかし、敬虔なステファノスに苦痛を与え、その尊い遺体を冒涜した不信心者たちへの懲罰としてコンスタンティノープルに降りかかった、これら目に見える神の怒りのしるしは、邪悪な皇帝を改心させることはなかった。　そこで彼は、王の意志に背いた者として、かつて聖ステファノを殺害するよう送り込んだ自身の二人の兄弟を死刑に処すよう命じた。その後、彼は聖ステファノと共に牢獄に囚われていた他の聖なる父たちをも殺害した。

一方、聖ステファノの流出した脳みそを拾い集めたテオドロスは、聖ディイの修道院へ向かい、ステファノの死について知っていることをすべて彼に語った。　修道院長は、涙ながらにテオドー

[8271] それは西暦768年のことだった。

ルの話を聞き終えると、王を異端者かつ背教者として呪い、聖人の脳みそを貴重な宝物として受け入れ、清らかな器に納めて、聖第一殉教者ステファノの教会に隠した。しかし、このことは悪意に満ちた王の耳に入らなかったわけではない。 その経緯は次の通りである。

修道院長が聖ステファノの尊い脳を器に納め、教会に隠した際、聖ディィイの修道院に住む一人の若者がその場に立ち会っていた。しばらく時が経つと、この若者は修道院長に、自分を助祭の位に就かせてくれるよう懇願するようになった。 しかし、修道院長は彼をその位にふさわしいとは見なさず、その願いを聞き入れなかった。そこで青年は修道院長に怒りを覚え、王のもとへ赴き、聖ステファノの脳について知っていることをすべて打ち明けた。王は直ちに、聖人の尊い脳が納められていた器を運ばせ、自分の目の前で開けるよう命じた。

器を開けてみると、そこには何も入っていなかった。ステファノの脳は、神の御手によって目に見えない形で取り去られ、今日に至るまで誰にも知られぬ場所に隠されていたのである。王は激怒し、その若者は誹謗者としての罪で追放された。

ここで、ある乙女に下された神の驚くべき懲罰についても触れておく必要がある。彼女は、至福の修道女アンナの侍女であったが、彼女と至福のステファノについて、二人が夜ごとに密かに会い、不道徳な罪を犯しているかのように偽証したのである。 彼女は、ビフィニアで王のために税を徴収していたある高官に嫁がされ、双子の男の子を二人産んだ。 ある夜、彼女が子供たちと共に寝台で休んでいた時、子供たちは突然興奮し、ある不思議な力を得たかのように、激しく母親の乳首を掴み、子供らしくなく、まるで子ライオンや子熊のように吸い始めた。そのため、不幸な女性は彼らを自分の胸から引き離すことができなかった。 こうして、彼らは母の乳首を野獣のように苛み続け、ついに母を死に至らしめた。その後、彼ら自身も、エヒドナの産物であるかのように、母と共に死んでしまった。このような刑罰が、その忌まわしい偽証人に下されたのである。 一方、祝福された聖殉教者ステファノは、罪なく、心清らかな者として、三位一体の唯一の神、すなわち父と子と聖霊を仰ぎ見ており、その御名に永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第4声:

山上で断食の修行に励み、知恵をもって敵の軍勢を十字架の全武装をもって滅ぼした、至福なる者よ。また、信仰の剣をもってコプロニモスを打ち倒し、勇敢に苦難に立ち向かった。そして、この二つの功績により、神から冠を授かった、永遠に記憶される尊い殉教者ステファノよ。

コンダク、第8調:

三位一体の守護者であり、神聖なるステファノを、祝祭を愛する者たちは心から誠実に賛美の歌をもって讃えましょう。主とその御母の尊い御姿を称えたように。今、愛に満ちて彼に喜びの声を上げましょう。「喜びなさい、永遠に栄光ある父よ。」

コンダク、第3調:

不毛の地から生えた尊き根より、若き枝よ。最初の殉教者と同じ名を持つ者よ、修道士たちの偉大なる導き手である父よ、あなたは現れ、キリストの御姿を崇めることを望まぬ王の猛威をも恐れなかった。そのゆえに、あなたは殉教の冠を受け、ステファノよ。

我らの聖なる父、ロストフの大司教テオドロスの生涯[8272]

記念日：11月28日

聖テオドール、初代ロストフ大司教は、その敬虔さで名高い家系に生まれ、その家系には、ロシアの地における偉大な修行者であり祈りの人である、尊者セルギイ・ラドネジスキーも属していました。ロストフの聖テオドールは、尊者セルギイの実の甥であり、その兄ステファンの息子でした。このステファンは、聖セルギイと同様に、父であるボヤリンのキリルと共に、ロストフ地方からモスクワ近郊のラドネジ地方へ移り住み、生涯の前半を、モスクワ公イヴァン・ダニロヴィチ・カリタの息子であるラドネジ公アンドレイ・イヴァノヴィチに仕えて過ごした。　彼はラドネジ公の主要な重臣の一人であり、軍事的功績で知られていたが、とりわけその敬虔さで際立っていた。彼は結婚しており、妻アンナとの間にクリメントとイオアンという二人の子供をもうけていた。　ステファンの敬虔な妻はまもなく他界し、ステファンはそこで世俗を捨て、修道生活に入ることを決意した。彼はホトコヴォの聖母被昇天修道院で出家し、熱心に修道生活、断食、祈りに専念した。　まもなくホトコフ修道院を去り、モスクワへ赴き、聖エピファニア修道院の特別な独房に身を置き、断食と祈りの中で厳格かつ過酷な生活を送り、ワインやビールを断ち、ぼろぼろの服を身にまといました。　当時、その修道院には、後に大主教となった聖アレクシオスや、長老ゲロンティオスなど、他の著名な修行者たちも滞在していた。彼らを深く愛していた当時の全ロシア大主教テオグノスト[8273] は、しばしば彼らを自身の元へ招き、敬意を表していた。

ステファンの敬虔な修道生活を知った大公シメオン・イヴァノヴィチ[8274] （イヴァン・ダニロヴィチの息子）は、テオグノスト大主教に対し、彼を司祭の位に叙階し、その後、エピファニー修道院のイグメンに任命するよう命じ、さらに自身の霊的指導者として選んだ。　多くのボヤールや貴族たちも、ステファンの霊的子弟になりたいと願った。大公シメオンはステファンを愛し、敬い、しばしば彼と語り合った。

これが、俗名ヨハネと呼ばれた聖テオドロスの父であった。7歳になると、ヨハネは敬虔な両親によって読み書きを学ぶために預けられ、まもなく教えられたことをすべて習得した。

母の死後、若きイオアンは、修道者となった父のもとで暮らしていた。当時、ラドネジの偉大な修行者セルギイである叔父が、新たな修道院を設立し、そこへ各地から様々な身分や地位の人々が霊的な修行を求めて集まっていたという話を耳にしたイオアンは、セルギイに会い、彼に従いたいという強い願いに燃えていた。　神の御導きにより、ヨハネの父ステファンはモスクワからラドネジ地方の「命の源なる聖三位一体」修道院へと向かい、息子のヨハネも連れて行った。彼は　息子をまっすぐ教会へと連れて行き、右手を握ると、自らを実の兄弟である修道院長セルギイの手に委ねた。

わずか12歳という若さであったにもかかわらず、聖セルギイはヨハネの中に真の修行者を見出し、その場で彼を修道士として剃髪させ、 4月20日、聖テオドロス・トリキノスの記念日にあたるそ

[8272] 聖テオドールの伝記を執筆しようとしていたのは、聖セルギイ・ラドネジスキーやペルミの聖ステファノ司教の伝記を著した著名なエピファニオス・プレムードリーであったが、エピファニオスのこの計画は実現しなかった。　聖テオドロスの古代の伝記は発見されていない。17世紀に様々な資料に基づいて編纂された、テオドロスの詳細な伝記が写本として現存している（指定されたシノダル写本に基づき、この伝記は1877年にヤロスラヴリで、『　『聖人たる我らの父テオドール、ロストフ大司教、奇跡行者、シモノフ修道院の創設者の生涯』というタイトルで単行本として出版された）。本記述は、この伝記を基礎とし、年代記や文書に基づいて検証を加えたものである。

[8273] 聖テオグノストは、1328年から1353年まで大主教の座に就いていた。

[8274] シメオン・イヴァノヴィチ・ゴルディイは、1340年頃から1353年まで公爵を務めた。

の日、イオアンは彼にちなんでテオドロスと改名された。当時、剃髪式を行う際には、その日に記念される聖人の名を授けるのが慣例であったからである。

新たに修道士となったテオドロスは、その偉大な創設者の指導の下、トロイツキー修道院に留まり、修道生活を送った。彼は節制と貞潔、清らかな生活を送り、熱心に礼拝に出席し、聖書を注意深く聞き、自らも頻繁に聖書を読み耽った。　また、師である聖セルギイに対しては、あらゆることに謙虚さと柔和さ、そして沈黙をもって従った。　教会や独房での祈り、断食や徹夜祷への熱心さ、詩篇を熱心に唱える姿、そして若き修道士が流す感極まった涙は、周囲の人々を驚かせた。特に注目すべきは、彼が聖セルギイに対して何も隠さず、昼夜を問わず自らのあらゆる思いを開き示していたことである。

適切な年齢に達すると、フェオドールは司祭の聖職に叙階され、修道者の行いと霊的生活においてさらに研鑽を積んでいった。　彼が聖セルギウスと父ステファノと共に聖体礼儀を執り行っていた時、神の特別な恵みにあずかった一部の修道士たちは、これらの聖なる奉仕者たちと共に、祭壇のそばで神の天使が奉仕しているのを目撃した。

この頃、フェオドールは、自分自身の新しい修道院を設立し、適した場所を見つけ、修道共同体を築きたいという思いを抱くようになった。彼はこの思いを師である聖セルギイに打ち明け、何度も繰り返し語った。　師は、この考えがテオドールの中に確固として根付いているのを見て、そこに神の摂理の働きを見出した。

テオドールは、いつものように絶えず夜の祈りに専念していた。そしてある日、祈りを捧げていると、彼はある声を聞いた。「テオドールよ、荒野へ行きなさい。あなたは修道院を築き、そこに多くの修行者、すなわち霊的な志を持つ人々を集め、天において偉大な報いを受けるだろう」。　この言葉を**天からの啓示と**受け取った聖人は、この出来事を誰にも明かさなかった。しかし、かなりの時間が経った後、偉大な先見者セルギイが甥にこう言った。

「わが子よ、私は、お前が私の遺骨を棺に納め、私の後を継いでこの地の修道院長となることを望んでいた。しかし、もし今、お前が思い描いた事業を始めたいというのなら、神と至聖なる聖母マリアがお前を助けてくださいますように。」

甥であり弟子である彼に祝福を与えた後、彼は、彼と共に旅立ちたいと願った修道士たちと共に、彼を見送った。

聖テオドールは同行者たちと共に修道院を出て、自分にとって必要であり、修道院の建設に適した場所を探しに出かけた。そして、モスクワの街からほど近く、モスクワ川の左岸にある「シモノヴォ」と呼ばれる、修道院の建設に最適な場所を見つけた。

その知らせを受けた聖セルギイは自らその場所を見に訪れ、修道院の建設に適していると認め、テオドールが計画した事業に着手することを祝福した。

司教からの正式な許可を得た後、聖テオドールは選ばれた場所に、至聖なる我らの主の母マリア、　その尊き降誕を称える教会を建立し、修道院に必要な立派な建物を建て、各地から多数の修道士を集め、共同生活を行う修道院の厳格な規律に従って修道院を組織した。

修道院の創設者である彼自身は、厳格な修道生活の模範を示し、内面の美徳だけでなく、外見の威厳や肉体的な美しさでも輝き、同時に知恵と理性を兼ね備えていた。　これらすべての資質が、すべての人々の彼に対する尊敬と敬意を呼び起こし、その名声はますます高まっていった。そのため、彼の叔父である聖セルギイは、甥がこの名誉と名声に惑わされることを恐れ、主なる神がテオドロスが躓くことなく生涯を全うできるよう助けてくださるよう、絶えず祈り続けた。

新しく設立された修道院に多くの参拝者が集まるようになると、フェオドールは喧騒を避け、より人里離れた静かな場所を探すことにした。　彼は、修道院の近く、弓の矢が二本飛ぶ距離にある、モスクワ川にほど近い鬱蒼とした森の中、モスクワのクレムリンから五ヴェルスタの場所に、その

ような場所を見出した。そこで彼は自分用の隠遁用の小部屋を建て、新たな熱意と新たな労苦をもって修行に励むようになった。

しかし、ここにも、彼と共に修行を志す弟子たちが集まり始めた。　そしてここへも、聖セルギイが訪れ、この新しい場所が修行や修道院の建設に適していると認めた。アレクシイ大主教は、新しいシモノフに教会を建立することを祝福し、聖母マリアの降誕を祝う教会の名称は「旧シモノフ」のままであった。

聖母マリアの被昇天に捧げられた、壮麗で広大な石造りの教会の礎石は、1379年に聖テオドールによって据えられましたが、建設が完了したのは26年後の1405年、創設者がすでに亡くなってからのことでした。新しく建てられた教会の奉献式は、すでにキプリアン大主教によって執り行われました。

教会と同時に、他の新しい広大な修道院の建物、食堂、修道士室も建てられた。　新しく設立された修道院には多くの支援者が現れた。公爵やボヤール、そして大公ディミトリ・イオアンノヴィチ[8275] 自身、さらにその後を継いだその息子である大公ヴァシリー・ディミトリエヴィチ[8276] も、国庫からの資金や様々な寄付を通じて、修道院の建設に惜しみなく資金を提供した。

こうして「新シモノフ修道院」が設立され、「旧シモノフ修道院」は修道士たちの埋葬地として残された。

アレクシイ都主教の在任中に、フェオドールはシモノフ修道院のイグメンに任命された。聖セルギイはこのことに反対していた。彼は、フェオドールが自ら望んでいた隠遁生活を送ることを望んでいたのである。しかし、大公ディミトリイ・イオアンノヴィチとアレクシイ都主教の強い要望に屈せざるを得なかった。

大公ディミトリ・イオアンノヴィチは、テオドール修道院長を自身の霊的指導者として選んだ。また、多くのボヤールや貴族たちも、テオドールの霊的子弟となることを望んだ。

大公や多くのボヤールの霊的指導者として、また著名な修道士セルギイの甥として、教会当局にもよく知られていたシモノフスキー修道院のイグメン・フェオドールは、教会の諸事柄に積極的に関与せざるを得なかった。

アレクシイ大主教の死後、ロシア大主教区には混乱が生じた。　キエフには、聖アレクシイの存命中にすでにキエフ都主教に任命され、その権威をモスクワ教会にも拡大しようとしていたキプリアンがいた。一方、1380年には、モスクワ大公の知らぬ間に、またその同意も得ずに、ピメンがキエフおよび全ロシアの都主教に任命された。　大公はキプリアンを大主教に据えたいと考え、自身の霊的指導者であるシモノフ修道院の修道院長フェオドールをモスクワへ派遣して彼を招くよう命じた。フェオドールはこの任務を無事に遂行した。その後、フェオドールは同様の任務を数回にわたって遂行した。　こうして1384年、大公の意向により、彼はスーズダリのディオニシウス大司教と共に、ロシア都主教区の用務のためにコンスタンティノープルへ旅立った。当時、混乱は依然として続いており、モスクワでは都主教の座をキプリアンやピメンが交互に占めていたからである。

このコンスタンティノープルへの旅の際、イグメン・フェオドールはニロス総主教[8277] からアルヒマンドリトの位を授かり、シモン修道院は総主教直属のスタウロピギア修道院とされた。　1387年、アルヒマンドリトのフェオドールは、大主教区の用務のため再びコンスタンティノープルへ旅立

[8275] ディミトリ・イオアンノヴィチ・ドンスキーは、1363年から1389年まで公爵を務めた。

[8276] ヴァシリー・ディミトリエヴィチは、1389年から1425年まで公爵を務めた。

[8277] ニルは1378年から1388年まで総主教を務めた。

ったが、その際、ピメンとキプリアンの両大主教も同地を訪れていた。この旅から、フェオドールは大主教ピメンと共に、ロストフ大主教の位を授かって帰還した。

また、聖ヤコブ[8278] の追放後に空席となっていたロストフ大主教座への任命後も、テオドールは引き続き教会事務に積極的に関与し続けた。こうして1389年、彼は他の司教たちと共に、ピメンがコンスタンティノープルへ向かう3度目にして最後の旅路において、モスクワからリャザンまで彼を見送った。

1389年5月19日、大公ディミトリ・イオアンノヴィチが死去した。その息子であり後継者である大公ヴァシーリー・ディミトリエヴィチは、父と同様に大司教フェオドールに敬意と配慮を示し、教会事務において彼の助力を仰いでいた。

新任の総主教アントニー[8279] により、ピメンは完全に罷免され、まもなく死去した[8280] 。大公ヴァシーリー・ディミトリエヴィチは、コンスタンティノープルに滞在していたキプリアン都主教をモスクワに迎え入れることを決め、彼を招くために、すでに何度も同地を訪れていた経験豊富なロストフ大司教フェオドールを派遣した。

1389年10月1日、キプリアン都主教は、迎えに来たテオドールと共にコンスタンティノープルを出発し、キエフを経由した。彼らはそこで1390年2月まで滞在し、その年の大斎の「十字架の週」にモスクワへと向かった。

こうして、ロシア都主教区における混乱は終息し、それに伴いフェオドール大司教の放浪の旅も幕を閉じた。この間、彼は多くの労苦、陸海での危険、苦悩や不快な出来事を耐え忍ばなければならなかったが、彼は若い頃から労苦や偉業に身を慣らしており、安息などとは考えもしなかった。主なる神は、彼の精神と肉体を強めてくださった。

シモノフ修道院のイグメン兼アルヒマンドリトであったフェオドールは、教会全体の事務に気を取られることもあったが、それでも絶えず、そして弛むことなく修道院の生活を統率し、弟子たちの中から多くの偉大で輝かしい修行者を育て上げた。　彼のもとに、聖ステファン・マフリシュスキー（[8281] ）によって、貴族の家系の青年コスマが連れてこられた。彼はモスクワのボヤリン・ヴェリャミノフの家で育てられていたが、シモノフ修道院でキリルという名で出家した。　彼は後に、キリロ＝ベロゼルスク修道院の創設者として名声を博することになる人物であった。修道院での服従の最初の功績として、彼はシモノフ修道院でパン焼き場や厨房、その他の務めに励み、周囲の注目を集めた。そこを頻繁に訪れていた聖セルギイは彼に目を留め、彼と語り合うことを好んだ。　アルヒマンドリト・フェオドールがロストフ大司教に叙任されると、シモノフ修道院の修道士たちはキリルを院長に選出した。　しかし、孤独な修行を渇望していたキリルは、この地位に重荷を感じ、修道院長職を辞退して自身の独房に閉じこもった。ところが、彼の修行の評判はここにも崇敬者や訪問者を引き寄せたため、彼は北へと退去することを決意し、そこで後に名声を博すことになる自身の修道院を設立した。

ここ、シモノフ修道院では、アルヒマンドリト・フェオドールの下で、ヴォロコラム出身の若き貴族フェオドール・ポスコチンが修道誓願を立て、修道名としてフェラポントと名乗った。キリルと同様に、彼はその修行によって名声を博し、セルギイ・ラドネジスキーにも知られていた。　彼は

[8278] 聖ヤコブの記念日は11月27日に祝われる。

[8279] アントニーは1388年から1395年まで総主教を務めた。

[8280] ミトロポリト・ピメンは、1389年9月11日、コンスタンティノープルのほぼ対岸に位置する小アジアの都市ハルキドンで死去し、同地に埋葬された。

[8281] その記念日は7月14日に祝われる。

友人のキリルと共にベロゼルスク地方へ移り住み、そこで修道院を設立した。この修道院は後に「フェラポントフ修道院」として知られるようになった。　ベロオゼロを所有していたモジャイスキー公アンドレイ・ディミトリエヴィチに招かれたフェラポントは、モジャイスクに新たなルジェツキー修道院を設立し、そこで同修道院のアルヒマンドリトとしてこの世を去った[8282]。

他にも多くの人々が、アルヒマンドリト・フェオドールの指導の下、シモノフ修道院で修行に励んだ。シモノフ修道院に確立された厳格な共同生活は、かつて同修道院に住んでいたか、あるいは同修道院を訪れたことのある創設者たちにとって、他の共同生活を行う修道院の模範となった。

ロシア都主教区の務めを終えた後、テオドール大司教はロストフに到着し、聖母マリアのイコンと聖レオンティウスの聖遺物に礼拝を捧げた後、新たな牧会活動に熱心に取り組みました。　彼はロストフの公爵一家と平和と愛のうちに共に過ごし、彼らを敬虔の道へと導いた。当時のロストフ公アレクサンドル・コンスタンティノヴィチの息子イオアンは目を病み、視力を失ってしまった。　父は聖テオドールに助けを求め、病人のために祈ってほしいと頼んだ。テオドールは公爵たちをロストフの大聖堂にある聖レオティウスの聖遺物の前へと導き、祈願の儀式が行われた後、病の公爵は癒やされ、視力を取り戻した。　その後、聖テオドールが亡くなった後も、この牧師から教えを受けたイオアン公は、再び目の病に倒れた際、奇跡を行う聖レオントスに熱心に祈りを捧げ、再び癒やしを受けた[8283]。

テオドール大司教はまた、ロストフにロズデストヴェンスキー女子修道院を設立したことでその名を残しており、同修道院は現在も存続している。

聖テオドールについては、シモノフ修道院の院長であった頃、イコン画に取り組み、自身が描いたイコンでモスクワの様々な教会を飾ったことでも知られている[8284]。

ロストフの聖人の中で、フェオドールは最初に大司教の位に就いた人物であり、この位はそれまでルーシでは古のノヴゴロド・ヴェリキーの主教のみに与えられていたものであった。　聖テオドールがロストフの信徒たちを統率したのは、そう長くはなかった。彼は1395年11月28日に安らかにこの世を去った。その聖遺骨は、ロストフのウスペンスキー大聖堂の南西の隅に埋葬されている。その上には、金色の天蓋の下に、豪華に装飾された墓所が設けられている[8285]。

聖殉教者イリナルクの記念日

記念日：11月28日

聖イリナルクはセバスティアの町出身であった[8286]。若き頃、彼は聖殉教者たちの拷問の際、処刑人として従事していた。　ディオクレティアヌス帝の治世下、マクシミアヌス総督による七人の聖女たちへの拷問の際、イリナルクスは神の恵みによって啓発された。キリストのために拷問を受け、拷問者を恥じ入らせている聖女たちを見て、彼は大胆にキリストを告白し、自らをキリスト教徒であると名乗った。　その後、総督の命令により、彼は沼に投げ込まれたが、無傷でそこから抜け出し

[8282] 聖フェラポントは1420年5月27日、高齢で死去した。この日付には彼の伝記が記されている。

[8283] このことについては、聖レオティオス（ロストフの奇跡行者）の伝記にも記されている。

[8284] 聖テオドロスのイコン制作に関する活動については、『聖なるイコン画家たちの物語』（ブスラフ『歴史論集』II、379）に記されている。

[8285] 聖人としてのテオドロスは、15世紀以降の聖人伝文献に登場している。写本の中には、彼に捧げられたトロパールやコンダクが記されているものがある。

[8286] ここでいうセバスティアとは、当然ながらアルメニアのセバスティア、すなわち「アルメニアのセバスティア」を指し、カッパドキアのセバスティアとは区別される。

、続いて火の炉に投げ込まれたが、それも彼に何の害も及ぼさなかった。その後、303年に剣で斬り殺された。

聖ステファノ・ノヴォと共に、聖なるイコンのために苦難を受けた聖殉教者たちの記念日

記念日：11月28日

コンスタンティノス・コプロニモス[8287] の治世下、多くの正教徒の兵士たちが軍人としての身分を捨て、修道生活に入った。 その多くを、不法な皇帝は拷問の末、処刑するよう命じた。ヴァシリーという名の者については、まず両目をえぐり取った。しかし、聖ヴァシリーは失明後も聖なるイコンを崇拝し続けたため、拷問者はヴァシリーの腹に剣を突き刺し、その内臓をすべてさらけ出させた。 同じ頃、コンスタンティノープルでは聖ステファノスも聖なるイコンのために殉教の冠を受けた。これらに加え、二人のグリゴリオスと他の数名が流刑に処され、そこで息を引き取った。最後に、聖ヨハネスはダフヌ[8288] へ追放され、そこで王の命令により頻繁に拷問を受け、そのために息を引き取った。

12月12日

11月29日（旧暦）

聖アカキオス・シナイの記念日

記念日11月29日

至福のヨハネ・ラダー（[8289] ）は、その著書の中で尊者アカキオスについて次のように記している。「偉大なるヨハネ・サヴァイテスは、私に真実の出来事と称賛に値する物語を語ってくれた。

ある長老がいた。彼は非常に怠惰で、気性も悪かった。私は彼を非難するつもりはなく、ただ聖人の忍耐を示すためにこの話をしているのだ。さて、その話をしよう。 その長老には、アカキアという名の若い弟子がいた。彼は気立てが穏やかで、心は清らかであったが、その長老からこれほど多くの悪行に耐えさせられていたため、多くの人には信じがたいことと思われるだろう。というのも、長老は彼を叱責や侮辱で苦しめただけでなく、毎日、肉体的拷問で彼を苦しめていたからである。

[8287] コンスタンティノス・コプロニモスは741年から776年まで在位した。彼は、偶像破壊派の皇帝の中でも特に残虐な人物の一人であった。 聖なるイコンに対する迫害の際、その主な擁護者は修道士たちであったため、コンスタンティノス・コプロニモスは修道院を焼き払うよう命じ、正教会の修道士たちに対しては、彼らが守ろうとしていたまさにそのイコンで頭を打ち砕くか、あるいは他の残酷な処刑に処した。 不敬虔な皇帝の意志を実行した兵士たちは、正教徒たちの不屈の精神と、冒涜された聖像から現れる数々の奇跡を目の当たりにし、迫害者から正教徒へと転向し、聖像を熱心に崇める者となることがしばしばあった。そのため、迫害者の怒りは彼らに向けられ、彼らは残酷な処刑や拷問、さらには死さえも味わわなければならなかった。

[8288] ダフナ――コンスタンティノープルの郊外。

[8289] ヨハネス・ラスティチニク――出身は不明。20歳で修道者となり、生涯の最後の4年間はシナイ修道院の院長を務めた。6世紀末、80歳の長老として死去。記念日は3月30日。

しかし、彼の忍耐は無駄ではなかった。アカキイは、不平を言わず耐え忍ぶ忍耐強さと、恨みを持たない苦しみによって、永遠の苦しみから彼を解放する神の恵みを勝ち取ったからである。　私（ヨハネ・サヴァイテスがヨハネ・ラスティチニクに語る）は、彼がまるで買い取られた奴隷や捕虜のように、極度の苦難に耐えている姿を毎日目にするたび、わざと彼に会いに行き、こう尋ねた。

「どうしたのですか、アカキイ兄弟？　今日はどのように過ごしていますか？」

すると彼はこう答えた。

「主なる神の御前にいるように――それだけで私は幸せだ。」そして、時には青ざめた目、時には首、また時には傷だらけの頭を見せてくれた。彼が徳ある行いをしていることを知っていた私は、彼にこう言った。

「よし、よし、兄弟よ、救いに至るために耐え忍びなさい。」

そのような状況の中で、至福のアカキイはその厳格な長老のもとで九年間を過ごし、臨終の直前に少し病に伏した後、主のもとへ旅立った[8290]。彼が一族の墓所に埋葬されると、五日後、長老はそこに住んでいたある偉大な父のもとへ赴き、こう告げた。

「父よ、私の弟子であるアカキイ兄弟が亡くなりました。」

その父はこれを聞いて、こう言った。

「信じられませんよ、長老。アカキは死んでいないのですから。」

老人は言った。

「父よ、もし私を信じないのなら、ご自身で彼の棺を見に行ってください。」

すると、尊い父は急いで立ち上がり、長老と共にその祝福された殉教者の墓所へ向かい、アカキイの棺の前で、まるで生きているかのように彼に語りかけながら、大声で叫んだ。

「アカキー兄弟よ、お前は死んだのか？」

賢明な修道見習いは、死後も従順さを示し、こう答えた。

「死んではおりません、父上。なぜなら、従順を誓った者にとって、死ぬことなどあり得ないからです。」

アカキーが仕えていた長老は、これを聞いて恐れおののき、涙を流して地面に倒れ込んだ。その後、彼は修道院長に棺のそばの独房を願い出て、そこに閉じこもって、魂の救いを求めて敬虔に暮らし、多くの功績を積んだ後、永遠の栄光ある主なる神のもとへ旅立った。アーメン。

聖殉教者パラモンの記念日

記念日：11月29日

不義の王デキア[8291]の治世中、東方にはアクイリンという公爵がおり、彼はキリスト教徒を激しく迫害していた。ある日、彼は370人のキリスト教徒を牢獄に集め、ヴァルサイティの温泉[8292]へ向かう際、殉教者たちも連れて行くよう命じた。ポセイドンの偶像の神殿[8293]の前を通るつもりで、彼らに偶像への生贄を捧げるよう強要しようとしたのである。神殿に到着すると、彼は長い間、聖人たちに偽りの神ポセイドンへの生贄を捧げるよう強要したが、　優しい言葉でも脅しでも、彼らを説得することはできなかった。　その時、パラモンという名の敬虔な男性――キリスト教徒――がたまたまその場を通りかかった。死の判決を受けた多くの聖なる殉教者たちを目にした彼は、偶像の神殿の前に立ち、大声で叫んだ。

[8290] 6世紀前半に死去した。

[8291] デキウス――249年から251年までローマ皇帝を務めた。

[8292] ティブルス川の河口付近にあるヴァルサティヴの泉は、ヴィフィニア地方に位置している。

[8293] ポセイドン（ローマ人にとってはネプチューン）は、海と水源を司る異教の神である。

「ああ、不義な王は、魂も声もない偶像にひれ伏さないというただそれだけの理由で、どれほど多くの義人を無実の罪で殺していることか！」

そう大声で言い放つと、彼は自分の道へと去っていった。　一方、公爵はパラモンのその言葉を耳にすると、激怒し、家来たちに直ちに彼を追いかけ、殺すよう命じた。最も不義な公爵の不義な家来たちは、その命令を知らず、ただ自分の道を進んでいた至福のパラモンを追い詰め、捕らえた。まず、彼らは、迫害者を非難し責めた彼の舌を口から引き抜き、それを切り刻んだ。次に、彼の全身を傷つけ、最後に、槍でその体を貫いた。こうして、聖なる殉教者パラモンは、その敬虔な魂を神の御手に委ねた。

その同じ時刻、前述の聖なる殉教者たち、計三百七十名が、キリストへの信仰ゆえに、ポセイドンの神殿の前で剣によって殺害された。

聖殉教者フィルメンの記念日。

記念日：11月29日

聖殉教者フィルメヌスは、アウレリアヌス帝の治世[8294] 、リカオニア[8295] に居住し、ガラティアのアンキラ[8296] で小麦の売買に従事していた。 聖フィルメンは、地方総督フェリクスに誣告されたが、その前で自らキリスト教徒であることを告白した。そのため、絞首刑に処され、体を削られ、その後火の中に投げ込まれたが、神の恵みにより無傷でそこから生還した。　その後、頭、手、足に釘を打ち込まれ、30ポプリシュ[8297] を引きずられて行き、聖人は力尽きて、神に息を引き取った[8298] 。

12月13日

11月30日（旧暦）

12月

聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの功績と受難

記念日11月30日

聖アンドレイ、キリストの第一使徒は、イオニという名のユダヤ人の息子であり、聖なる首席使徒ペトロの兄弟で、ベツサイダ[8299] の出身であった。 この世の虚栄を軽んじ、結婚よりも独身生活を重んじた彼は、結婚を望まなかったが、聖洗者ヨハネがヨルダン川[8300] で悔い改めを説いていると

[8294] アウレリアヌス・ドミティウスは270年から275年まで在位した。

[8295] リカオニアは、小アジアの古代の国である。紀元前25年から、この国はローマのガラティア属州の一部となった。その首都は当初、フリギアの都市イコニオン（現在のコニア）であった。

[8296] アンキラは、ガラティア州の都市の一つである。

[8297] ポプリシュチェとは、走競技が行われた競技場の距離単位である。1ポプリシュチェは、現在の690サジェンに相当する。したがって、30ポプリシュチェは40ヴェルストを超える。

[8298] 聖殉教者フィルメナの死は、274年頃に起こった。

[8299] ベツサイダは、ティベリア湖の北西岸にある都市であり、聖使徒ペトロ、アンデレ、フィリッポの生誕地である。その湖岸の近くで、5千のパンによる奇跡の食糧供給が行われた（ルカ9:10）。

[8300] ヨルダン川――聖地を北から南へと流れる主要な川であり、レバノン山脈およびアンチレバノン山脈の支脈を源流とし、死海に注いでいる。

聞き、すべてを捨てて彼の元へ赴き、弟子となった。 聖ヨハネ洗礼者が、 通りかかったイエス・キリストを指さして、「見よ、神の小羊」[8301] と告げたとき、聖アンドレイは、洗礼者のもう一人の弟子（福音書記者ヨハネとされている人物）と共に、洗礼者を離れ、キリストに従った。彼は兄弟のシモン（ペトロ）を見つけ、彼にこう言った。 「私たちは、キリストと呼ばれるメシアを見つけた」と言い、彼をイエスのところへ連れて行った（ヨハネ1:41–42）。その後、彼がペトロと共にガリラヤ湖の岸辺で魚を捕っていた時[8302] 、イエスが彼らに呼びかけ、「*わたしについて来なさい。あなたがたを人の漁師にする*」（マタイ4:19）と声をかけられたとき、アンデレは主の呼びかけに従い、直ちに網を捨てて、兄弟のペトロと共にキリストに従った（マタイ4:20）。アンデレが「第一に召された者」と呼ばれたのは、すべての使徒に先立って、イエス・キリストの弟子となり、従者となったからである。 そして、主が自発的に苦難を受けられ、復活された後、聖アンドレイは他の使徒たちと同様に、 火の舌のような姿で彼の上に降りた聖霊（使徒2:3）を受け入れ、地域が割り当てられた際、くじ引きによってビティニア地方[8303] とプロトンティス地方[8304] 、ハルキドン[8305] とビザンティウム[8306] 、トラキア[8307] とマケドニア[8308] 、これらは黒海[8309] とドナウ川[8310] に至るまで広がっており、さらにテッサリア[8311] 、エラダ[8312] 、アカイア[8313] 、アミントス[8314] 、トラブゾン[8315] 、イラクリオ[8316] 、アマストリダ[8317] も含まれていた。

聖アンドレイは、キリストの信仰を説きながらこれらの都市や国々を巡り、どの都市でも多くの苦難と苦痛に直面した。しかし、全能なる神の助けに支えられ、彼はキリストのためにあらゆる災

[8301] ヨハネ1章——イエス・キリストが「神の小羊」と呼ばれたことは、彼が人類のために自らを犠牲として捧げるために受肉されたことを示していた。

[8302] ガリラヤの海、あるいは湖は、ゲネサレト湖またはティベリアス湖とも呼ばれていた。パレスチナの北部（ガリラヤ）に位置し、長さ約30ヴェルスタ、幅約8ヴェルスタで、ヨルダン川が湖を横切っている。

[8303] ビフィニアは、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に位置していた地域である。紀元前75年からローマ帝国に編入され、ブルッサ（古代のプルシアダ）とニコメディアを主要都市とする二つの属州に分かれた。

[8304] すなわち、マルマラ海の沿岸に位置していた地域である。

[8305] ハルキドンは、コンスタンティノープル海峡のアジア側岸、マルマラ海に近い位置にある都市である。

[8306] ビザンティウム——コンスタンティノープル海峡の入口近く、ヨーロッパ側の岸に位置する。330年、聖コンスタンティヌス大帝はこの都市を帝国の首都とし、自身の名（コンスタンティノープル）を冠した。現在はトルコの首都である。

[8307] トラキアとは、マケドニア、エーゲ海（群島）、およびマルマラ海の北側にあるバルカン半島の一部を指し、現在ではハンガリー東部、トランシルヴァニア、ベッサラビア、モルドバ、ワラキア、ブルガリア、セルビア、およびルメリア東部を含む地域である。

[8308] トラキアの南西に位置し、エーゲ海の北西岸に沿った地域。

[8309] 地中海の一部——バルカン半島とコーカサス地峡、ロシアの南端、および小アジア半島の北岸の間に位置する。

[8310] ヨーロッパ有数の大河の一つで、ヨーロッパ中部を源流とし、オーストリアを流れ、バルカン半島の北端に沿って西から東へと流れ、黒海に注ぐ。

[8311] テッサリアは、エーゲ海西岸に位置する地域であり、オリンポス山脈によって北側のマケドニアから隔てられていた。

[8312] エラダはバルカン半島の南部に位置し、コリント地峡（現在のモレア）を介して半島とつながっていた。西はイオニア海に面し、東はアカイアおよびアルカディアと国境を接していた。

[8313] アカイアは、コリント湾の南岸に位置する地域である。

[8314] 以下に挙げる都市の位置を考慮すると、ここでの「アミン」あるいは「アミア」とは、黒海南岸、ポントス州にあり、ガリサ川とイリス川の河口の間にある都市を指すものと考えるべきである。現在はサムスンと呼ばれている。

[8315] 黒海の南岸、パフラゴニアとアルメニアの間に位置していたポントス州の都市。トラペズントは海沿いにあり、アミスよりかなり東に位置していた。

[8316] この名を持つ都市は各地にいくつか存在した。ここでは、黒海南岸、後述するアマストリダよりやや西に位置するイラクリウスを指すものと理解すべきである。

[8317] 黒海南岸、ポントスとビフィニアの間に位置するパフラゴニアの都市、アマストリダ——別名アマストリス。

難を喜びをもって耐え抜いた。 とりわけ、シノプと呼ばれる町[8318]で、彼は激しい拷問にさらされた。そこでは、地面に投げつけられ、手足を掴まれて引きずり回され、丸太で殴られ、石を投げつけられ、指や歯を引き抜かれた。しかし、彼は救い主であり師である方の恵みにより、傷から再び健やかに回復した。 そこから出発し、彼はいくつかの国々を巡った。ネオケサリア[8319]、サモサタ[8320]、アラン[8321]、アバスコ[8322]、ジグ[8323]、ボスポロ[8324]。

その後、彼はフラキアの都市ビザンティウム[8325]へと向かい、そこで初めてキリストを宣教し、多くの人々を教え導いた上で、教会の長老たちを任命した。また、聖使徒パウロが『ローマ人への手紙』（ローマ16:9）で言及しているスタキオスを、ビザンティウムの司教として按手した。彼自身は、キリストの福音を宣べ伝えるにあたり、使徒たちの苦難と労苦を背負い、ポントス[8326]、黒海沿岸、スキティア[8327]、そしてヘルソニトス[8328]を巡った。神の摂理により、彼はドニエプル川[8329]、ロシアの地[8330]に到達し、キエフの山々[8331]に差し掛かると、そこで一晩を過ごした。 朝、眠りから覚めると、彼は傍らにいた弟子たちにこう言った。

「私を信じてほしい。この山々には神の恵みが輝き渡るだろう。ここに偉大な都市が築かれ、主はそこに多くの教会を建て、聖なる洗礼によってロシア全土を照らすだろう。」

山に登ると、聖人はその山々を祝福し、十字架を立てた。これは、ここに暮らす民が、ビザンティウムに設立された自身の使徒座[8332]からの信仰を受け入れることを予言するものであった。 さらに北に位置するロシアの都市――現在のヴェリーキー・ノヴゴロドがある場所[8333]――を通り過ぎ、ローマ[8334]も訪れた後、彼はギリシャのエピルス地方[8335]に戻り、再びトラキアを訪れて、キリスト

8318 当初はパフラゴニアに属し、後にポントスに編入された都市。黒海南岸、海によって形成された小さな半島と本土を結ぶ細い地峡に位置していた。

8319 ポントス地方の都市で、聖グリゴリオス・テオロゴス（奇跡行者）が生まれ、紀元240年頃に初代司教となった場所である。

8320 サモサティ、別名：セミサト、シマサト――ユーフラテス川上流に位置するシリアの都市。

8321 アラン――同名のサルマタ族が居住していた国で、現在の北カフカス、黒海とカスピ海の間に位置し、カスピ海に近い。

8322 アバスキ族――アラン族の西側、黒海に近い地域に居住していた部族であり、現在のアブハジアの名前の由来となった。

8323 ジギ族は黒海の沿岸、アバスキ族のすぐ隣、その北側に住んでいた。

8324 ここでいうのは、現在のタウリダ半島に位置し、キメリウス海峡（現在のケルチェン海峡）に近いボスポラス王国を指す。

8325 つまり、黒海を渡って、ビザンティウムがあったフラキアのボスポラスへと向かったのである。

8326 ネロの治世（1世紀）に、ポントスはローマの属州となり、ガラティア、ポレモニア、カッパドキアの3つの地域に分割された。

8327 スキティアとは、一部は現在のロシアの南部に、一部はカスピ海周辺に位置する土地を指した。スキティアの北側および東側の正確な境界は、古代人には知られていなかった。

8328 「ヘルソネス」という名称は、古代において多くの場所に用いられていた。ここでは、タウリスのヘルソネス（現在のクリミア）に居住していた民族を指すものと理解すべきである。

8329 現在のロシア南部を流れ、黒海に注いでいる。

8330 これは、スラブ族の「ルース」に由来する、後世の名称である。

8331 すなわち、ドニエプル川を遡り、後にキエフという都市が築かれたある山岳地帯まで到達したということである。

8332 この予言は成就した。ロシア人はギリシャ人から洗礼を受け、コンスタンティノープルから派遣された教会の教師たちによって啓蒙された。

8333 ヴォルホヴァ川沿いにある、最も古いルーシの都市の一つ。キエフの北における使徒の移動範囲の境界を示している。

8334 古代ローマ帝国および現在のイタリア王国の首都で、テヴェレ川沿いに位置する。

8335 エピロス――イオニア海沿岸に位置するギリシャの地域で、ピンドス山脈の東側に広がっていた。

教徒を励まし、彼らに司教や指導者を任命した。 多くの国々を巡った後、彼はペロポネソス半島[8336]に到達し、アカイアの都市パトラ[8337] に入ると、ソシアという名の高名な人物の家に滞在した。彼はその人物を病床から立ち直らせ、その後、パトラの街全体をキリストへと導いた。 その頃、地元の統治者エゲアトス・アンティパトスの妻マクシミラも、重い病の束縛から解放され、速やかに癒やされたことで、キリストを信じるようになった。 また、アンティパトスの兄弟である賢明なストラトクリオスや、さまざまな病に苦しんでいた多くの人々も、使徒の手を置かれたことによって癒やされた。すると、エゲアトス・アンティパトスは激怒し、聖なる使徒を捕らえて十字架に釘付けにした。これについて、アカイア地方の長老たちと助祭たちは次のように記している。

「私たち、アカイアの諸教会のすべての長老および助祭は、自らの目で目撃した聖使徒アンドレイの受難について、東、西、南、北にあるすべての教会に書き送ります。 あなたがた、そして唯一の神、三位一体において完全なる、真の父（無生）、真の子（有生）、父から発し、 子に宿る真の聖霊を信じるすべての信徒に、平安がありますように。 この信仰は、イエス・キリストの使徒である聖アンドレイから学んだものであり、私たちが直接目撃した彼の受難について、ここに記述するものである。

エゲアト・アンティパトスは、パトラの町にやって来ると、キリストを信じる者たちに偶像への生け贄を捧げるよう強要し始めた。聖アンドレイは、彼の行く手を阻んでこう言った。

「人々を裁く者よ、あなたは天にいらっしゃるご自身の裁き主を知り、それを知った上で、その方にひれ伏すべきである。真の神にひれ伏したならば、偽りの神々からは背を向けるべきである。」

エゲアトスは彼に言った。

「お前こそ、神々の神殿を破壊し、ローマの王たちが根絶を命じた、最近現れたあの不思議な信仰へと人々を誘っている、あのアンドレアスか？」

聖使徒アンドレイはこう答えた。

「ローマの王たちは、人類の救いのために地上に降りてこられた神の御子が、これらの偶像が神であるどころか、人類に敵対する不浄な悪魔であり、人々に神を怒らせ、神を自分たちから遠ざけて、神が彼らの声に耳を傾けないように仕向けることをはっきりと示されたことを、理解していなかったのです。 そして、神が怒りを抱いて人々から背を向けられたとき、悪魔たちは彼らを捕らえて自らの隷属下に置き、彼らの魂が裸のまま[8338] 、自らの罪以外の何物も持たずに肉体から抜け出すまで、彼らを惑わし続けるのである。

エゲアトは言った：

「あなたがたのイエスが、こうした女々しく空虚な言葉を説いていたとき、ユダヤ人たちは彼を十字架に釘付けにした。」

アンドレイは答えた：

「ああ、もしあなたが十字架の神秘を知ろうとするなら――人類の創造主が、私たちへの愛ゆえに、自ら進んで十字架上の苦しみを受け入れられたのは、御自身がその苦しみの時期を知っておられ、 また、三日後の復活についても預言し、最後の晩餐で私たちと共に座っていた際、裏切り者について告げ、未来のことをまるで過去のことであるかのように語り、自ら進んで、ユダヤ人の手に引き渡されることになるその場所へ向かったのだ。

[8336] 現在のモレア。コリント地峡を介してバルカン半島とつながっている。

[8337] 別名パトラス――コリント湾の入り口に位置する都市。

[8338] すなわち――善行を積んでいない者たち。

「君には驚かされるよ」とエゲアトは反論した。「君は賢明な人間であるにもかかわらず、十字架に架けられたと告白するその方の後を追うとは――それが自発的であれ、否応なしにであれ、[8339]。」

使徒は答えた。

「十字架の秘儀は偉大だ――もし聞きたいのなら、話してやろう。」

「それは神秘などではなく、悪党への処刑だ」とエゲアトは反論した。聖アンドレイは答えた：

「この処刑こそが、人間が生まれ変わるための秘義なのだ。どうか辛抱強く私の話を聞いてほしい。」

「辛抱強く話を聞くよ」と裁判官は言った。「だが、もし私の命令に従わなければ、お前もまた、その十字架の神秘を自ら背負うことになるだろう[8340]。」

使徒はこれに対し、こう答えた。

「もし私が十字架の刑を恐れていたなら、決して十字架を賛美することはなかったでしょう。」

エゲアトは言った。

「お前は狂気ゆえに十字架を称賛しているが、死を恐れないのもまた、その厚かましさゆえだ。」

使徒はこう答えた：

「私が死を恐れないのは、傲慢からではなく、信仰によるのだ。なぜなら、敬虔な者たちにとって死は尊いもの[8341]であり、罪人にとっては死は恐ろしいものだからである。私は、あなたが私が語る十字架の神秘に耳を傾け、真理を知って信仰を持ち、信仰によって自分の魂を救う[8342]ことを願っている。」

エゲアトは言った：

「失われたもの[8343]を、人は取り戻す[8344]。果たして私の魂は失われてしまったというのか。あなたが信仰によってそれを取り戻せと言うが、どのような信仰なのか、私には分からない。」

聖アンドレイは答えた：

「それは、あなたが私から学ぶことのできる事柄である。私は、人間の魂の滅びが何であるかをあなたに示そう。そうすれば、あなたは十字架によって成し遂げられたその救いを知ることができるだろう。最初の人間は、罪の木[8345]を通じて死をもたらした。そして、人類にとって、苦難の木[8346]を通じて死が滅ぼされる必要があったのだ。　そして、罪の木によって死をもたらした最初の人間が清らかな土から造られたように、清らかな処女から、完全な人間であるキリストが生まれることがふさわしかった。キリストは、最初の人間を創造した神の御子でもあり、すべての人々が失った永遠の命を再び取り戻してくださる方である。　また、最初の人間が善悪の知識の木に手を伸ばして罪を犯したように、人々の救いのために、神の御子は十字架の上で、人間の自制を欠いた手のために御自身

[8339] 磔刑は最も恥ずべき刑とみなされていた。この刑に処されるのは、奴隷や、一般的に最も軽蔑され、犯罪的な者たちだけだった。

[8340] すなわち――あなたは磔にされるだろう。

[8341] すなわち、神に喜ばれる義人たちのことである。

[8342] つまり、魂を救うということです。この表現は（マタイによる福音書16:25–26）から引用したものです。

[8343] 言い換えれば：見つけ出す。

[8344] 言い換えれば：失われ、消え去った。

[8345] 言うまでもなく、善悪の知識の木（創世記2:16–17）のことである。この木がそう呼ばれるのは、人が神によって禁じられたこの木の果実を口にしたことで、罪を犯したからである。

[8346] 言うまでもなく、キリストが苦しみを受け、死なれた十字架の木であり、（ご自身の）死によって死を打ち破られた。

の両手を広げ、禁断の木の実という甘い食物の代わりに、苦い胆汁を味わわなければならなかった[8347]。

これに対し、エゲアトは言った：

「その言葉を、お前の話を聞く者たちに語れ。もしお前が私の命令に従わず、神々に犠牲を捧げることを拒むならば、棒で打ちのめした後、お前が称賛するその十字架に、お前を磔にしてやる。」

アンドレイはこう答えた：

– 私は毎日、唯一にして真なる、全能の神に、香炉の煙でも、雄牛の肉でも、山羊の血でもなく、十字架の祭壇で犠牲として捧げられた汚れなき小羊を捧げている[8348]。 すべての信者は、その至聖なる御体を聖餐として受け入れ、その御血を味わう。しかし、この小羊は、確かに屠られているにもかかわらず、完全かつ生きたままである。確かに、すべての者がその御肉を味わい、その御血を飲むが――しかし、私が言うように、彼は常に完全で、汚れなく、生きたままである。

エゲアトは言った：

「どうしてそんなことがあり得るのですか？」

アンドレイは答えた：

「知りたいのなら、弟子となり、あなたが尋ねていることを学べ。」

エゲアトは言った：

「私は拷問で、その教えを君から引き出してみせる。」

使徒は答えた。

「君が賢明な人間でありながら、無意味なことを言うことに驚いている。なぜなら、苦痛を通じて私から神の秘密を知ることができるだろうか？君は十字架の神秘について聞いたことがあるだろうし、犠牲の神秘についても聞いたことがあるはずだ。 もし、ユダヤ人によって十字架につけられた神の御子キリストが真の神であると信じるなら、私はあなたに、彼が死なれたにもかかわらずいかにして生きておられるか、また、いけにえとして捧げられ、食されるにもかかわらず、いかにして御国において完全なままおられるかを明らかにして差し上げよう。

エゲアトは言った：

「もし彼が死なれ、あなたが言うように人々によって食べられたのなら、どうして彼は生きていて、なお完全であり得るのですか？」

「もしあなたが心を尽くして信じるならば」と使徒は答えた。「この奥義を理解することができるだろう。しかし、もし信じないならば、この奥義を決して悟ることはないだろう。」

すると、エゲアトは激怒し、使徒を牢獄に投じるよう命じた。聖人が牢獄に投じられると、その国中から大勢の民衆が集まり、エゲアトを殺し、アンドレイを牢獄から解放しようとした。しかし、聖なる使徒は彼らを制止し、諭してこう言った。

「私たちの主イエス・キリストの平和を、悪魔の反乱に変えてはならない。なぜなら、私たちの主は死に引き渡されたとき、あらゆる忍耐を示され、反論もせず、叫びも上げず、その声は街路に響き渡ることもなかった。それゆえ、あなた方も黙って、静かにしていなさい。 私の殉教を妨げることはもちろん、むしろ、善き修道士として、またキリストの戦士として、あらゆる拷問や傷を自らの体に忍耐強く受け入れる準備をしておきなさい。 もし苦痛を恐れる必要があるとすれば、それは終わりのないものだけである[8349]。一方、人間による威嚇や脅しは煙のようなもので、現れてはたち

[8347] ある植物の汁で、味は極めて苦く、意識を朦朧とさせる作用がある。預言（詩篇68:22）の成就として、酢と混ぜられた胆汁が、十字架に架けられた主に飲ませられた（マタイ27:34–48）。

[8348] すなわち、主の贖いの十字架の苦難の力に基づいて築かれた犠牲の祭壇の上で。

[8349] すなわち――最後の審判における裁きのことである。

まち消え去る。また、苦しみを恐れるのであれば、一度始まれば決して終わることのないものを恐れるべきである[8350]。一方、一時的な苦しみは、それが些細なものであれば容易に耐えられ、たとえ大きなものであっても、やがて魂が肉体から離れることで、それ自体も終わる。しかし、永遠に続く苦しみこそが最も苛烈である。それゆえ、一時的な悲しみを乗り越えて、永遠の喜びへと至る準備をしておきなさい。そこでは、あなたがたは喜び、常に繁栄し、キリストと共に永遠に君臨することになるのだ。

このように人々に教えを説きながら、聖アンドレイは一晩中を過ごした。朝になると、エゲアト・アンティパトスが法廷に着席し、使者を送って聖アンドレイを呼び寄せ、こう言った。

「この世で我々と共に楽しむために、その狂気を捨ててキリストを宣教しないことに決心したか。自発的に拷問や火刑に身を投じるなど、それは大きな狂気ではないか？」

聖人はこう答えた。

「あなたがキリストを信じ、偶像を捨て去った時、私はあなたと共に楽しむことができるでしょう。なぜなら、キリストは私をこの国へ遣わされ、私はそこでキリストのために多くの人々を導いたからです。」

エゲアトは言った：

「私は、お前に惑わされた者たちが、お前の教えという虚しさを捨て、神々に喜ばれる生け贄を捧げるように、お前に生け贄を強いているのだ。アカイアには、神々の神殿が荒廃していない町など一つもないのだから。　それゆえ、今こそあなたを通じて神々の名誉が回復されなければならない――あなたによって怒りを買っている者たちが、あなた自身によってなだめられ、あなた自身も私たちと友愛のうちに共にいられるように。もしそうしないならば、神々への不敬の罪により、あなたは様々な苦痛を受け、あなたが賛美する十字架に吊るされることになるだろう。

聖アンドレイはこれにこう答えた。

「聞け、死の子よ、永遠の苦しみへと定められた者よ、私、主のしもべであり、イエス・キリストの使徒である私の言葉に耳を傾けよ！　これまで私は、あなたに聖なる信仰を教え、理性を備えた者として真理を知り、偶像を捨てて、天にまします神を礼拝するようにと願って、穏やかに語りかけてきた。　しかし、お前は依然として恥知らずな態度を改めず、私がお前の拷問を恐れていると思っているようだから、お前が知っている中で最も過酷な拷問を私に課せ。なぜなら、主のために耐える苦しみが増せば増すほど、私はわが王に喜ばれることになるからだ。

そこでエゲアトスは、彼を縛り付けて殴打するよう命じた。殴打する者たちが三人ずつ交代で七回殴り終えると、聖人は立ち上がらせられ、裁判官のもとに連れて行かれた。

裁判官は彼に言った。

「アンドレイよ、私の言うことを聞きなさい。むやみに血を流してはならない。もし私の言うことを聞かなければ、お前を十字架に磔にするぞ。」

聖アンドレイはこう答えた。

「私はキリストの十字架の僕であり、十字架上の死を望む。」　お前も、私の忍耐を目の当たりにしてキリストを信じるならば、永遠の苦しみから逃れることができる。なぜなら、私は自分の苦しみよりも、お前の滅びを深く嘆いているからだ。私の苦しみは一日、長くても二日で終わるが、お前の苦しみは千年の後でも終わりを迎えない。　それゆえ、自らの苦しみを増大させたり、永遠の炎を自らに招いたりしてはならない。

激怒したエゲアトスは、聖アンドレイを十字架に磔にするよう命じ、その手足を縛らせた。それは、彼がすぐに死んでしまわないように、また縛られたまま吊るされ、より多くの苦しみを受けるようにするため、釘で打ち付けようとはしなかったからである。

[8350] すなわち――地獄における罪人たちの永遠の苦しみ。

拷問者の手下が彼を磔場へと連行すると、人々が集まり、こう叫んだ。

「この義人であり、神の友である人は、いったい何の罪を犯したのか。なぜ彼を十字架へ連れて行くのか？」

一方、アンドレイは民衆に対し、彼の苦しみへの妨げとならないよう懇願し、教えを説き続けながら、喜びをもって苦難へと向かった。彼が磔にされる場所に到着すると、遠くから自分のために用意された十字架を見て、大声で叫んだ。

「喜びなさい、キリストの御肉によって聖別され、その御肢体によってまるで真珠のように飾られた十字架よ！主があなたの上に磔にされるまでは、あなたは人々にとって恐ろしい存在であったが、今や人々はあなたを愛し、喜んで受け入れている。なぜなら、信者たちは、あなたがどのような喜びをその内に秘めているか、そしてあなたのためにどのような報いが用意されているかを知っているからだ。　私は大胆さと喜びをもってあなたのもとへ向かう。どうか喜びをもって私を受け入れてほしい。私は、あなたに架けられた方の弟子だからだ。　私を受け入れてください。私は常にあなたを愛し、抱きしめたいと願ってきたのです。主の御体から美しさと栄光の装飾を授かり、古くから慕われ、熱烈に愛され、私が絶えず探し求めてきた、尊き十字架よ。私を人々の間から連れ出し、私の師に委ねてください。そうすれば、あなたを通して、あなたによって私を贖ってくださった方が、私を受け入れてくださるでしょう。

そう言いながら、彼は衣服を脱ぎ、それを拷問者たちに手渡した。彼らは彼を十字架に上げ、手足を縄で縛り、磔にして吊るした。彼の周りには、約二万もの大群衆が立ち並んでいた。その中には、エゲアトの兄弟であるストラトクリオスもおり、彼は群衆と共にこう叫んだ。

「聖なる人がこのように苦しむのは不当だ。」

一方、聖アンドレイはキリストを信じる者たちを励まし、一時的な苦しみには耐えるよう説き、その苦しみは、その見返りとして与えられるものとは比べものにならないと教えた。

その後、民衆全員がエゲアトの家へと向かい、声を上げてこう叫びながら言った。

「聖なる人、誠実な人、善良で、品行方正で、柔和で、英知に満ちた教師が、このように苦しむべきではない。彼を十字架から降ろすべきだ。なぜなら、彼は二日もの間十字架に吊るされたまま、真理を説き続けているからだ。」

そこでエゲアトは、民衆を恐れ、直ちに彼らと共にアンドレイを十字架から降ろしに行った。アンドレイはエゲアトを見て、こう言った。

「なぜ来たのか、エゲアトよ？もしキリストを信じるつもりなら、私が約束したように、恵みの扉があなたに開かれるだろう。　もし、ただ私を十字架から降ろすためだけにやってきたのなら、私は生きている限り、十字架から降ろされることを望まない。なぜなら、私はすでに私の王を見、すでに御前にひれ伏し、すでに御前に立っているからだ。しかし、私はあなたのために苦しんでいる。あなたには、あなたのために用意された永遠の滅びが待っているからだ。　まだできるうちに、自分のことを考えなさい。そうすれば、もう力尽きてしまった時に、[8351] を始めたいなどとは思わなくなるだろう。

僕たちが彼を十字架から解き放とうとしたとき、彼に触れることさえできなかった。他にも大勢の人々が次々と彼を解き放とうとしたが、彼らの手は麻痺してしまい、できなかった。その後、聖アンドレイは大きな声で叫んだ。

「主イエス・キリストよ！　御名のゆえに私が掛けられたこの十字架から、私を降ろすことをお許しにならないでください。しかし、私が愛し、知り、告白し、お目にかかりたいと願う、私をあるがままにしてくださった私の師よ、どうか私をお迎えください！」　主イエス・キリストよ、私の霊を平安のうちに受け入れてください。もはや、私があなたのもとへ行き、私がこれほど強く望んで

[8351] すなわち――キリストに立ち返ること。もう力尽きたとき――死の直前、死が迫ったとき。

いるあなたを仰ぎ見る時が来たのですから！　慈愛に満ちた師よ、私を受け入れてください。そして、私の霊を受け入れてくださるまで、決して私を十字架から降ろさせないでください！

彼がそう語ったとき、皆の目の前で、稲妻のような天の光が彼を照らし、その周囲を輝かせた――そのため、儚き人間の目には、彼を見つめることなど到底できなかった。この天の光は彼の周囲で30分ほど輝き続け、光が引いたとき、聖なる使徒は息を引き取り、光の輝きの中に包まれて、主のもとに召された。　キリストを信じる貴族出身の女性マクシミラは、貞潔で聖なる生活を送っていたが、聖アンドレイが主のもとへ旅立ったことを知ると、彼の遺体を大いなる敬意をもって運び出し、貴重な香油を塗って、自身が埋葬される予定だった自身の棺に納めた。　エゲアトスは民に怒りを覚え、彼らに報復し、自分に反旗を翻した者たちを公然と処刑しようと企てた。また、マクシミラについては王の前で誹謗中傷しようとした。彼がそう考えていると、突然悪霊が彼に襲いかかり、その苦しみに耐えかねて、エゲアトスは町の真ん中で息を引き取った。　このことを、キリストを信じる弟のストラトクリュスに伝えると、彼はその遺体を埋葬するよう命じ、自身は彼の財産を一切求めず、こう言った。

「わが主イエス・キリストよ、私が兄弟の財宝に手を触れることのないようお守りください。そうして、彼の罪によって汚されることのないように。彼は、虚しい財産を愛したゆえに、主の使徒を殺すという大胆な行いに及んだのですから。」

これは11月の最終日、アカイアのパトラという町で起こったことである。そこでは今もなお、使徒の祈りによって、人々に多くの恵みが与えられている。人々は皆恐れを抱き、すべての人を救い、真理を知らしめようとする私たちの救い主なる神を信じない者は一人もいなかった。[8352]　、御名に世々限りない栄光がありますように、アーメン。

長い年月が経った後、この聖使徒アンドレイの聖遺骨は、殉教者アルテミオスによってコンスタンティノープルへ運ばれ、 偉大なる皇帝コンスタンティヌスの命により[8353]、聖福音記者ルカおよび聖使徒パウロの弟子である聖ティモテオと共に、至聖なる使徒教会内の聖なる祭壇の中に安置された。

キリストなる神よ、あなたの使徒の祈りによって、あなたの信徒たちを正教の信仰に堅く立たせ、私たちを救ってください。アーメン。

- *聖ヨハネ・クロマティスによる、聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイへの賛辞*

使徒の漁の網は強固である[8354]　、アンドレイの記憶は素晴らしく、彼が諸民族をキリストの信仰へと導き、惹きつけるために用いた網の記憶もまた素晴らしい。なぜなら、これらの不滅の死者が用いた引き網は、決して忘却によって破られることはないからである。　人間の技ではなく、神の恵みによって造られたこれらの漁具は、時が経っても朽ちることはない。漁師たちはすでにこの世を去ったが、彼らが用いた道具、すなわち世界そのものを包み込んだその網は、決して朽ちることはなかった。　彼らが網を投げ入れ、引き上げる時、彼らは目に見えないが、彼らの網は満ち溢れている。彼らが手に取ったのは[8355]　、時とともに朽ちていく葦の杖ではなく、古びて腐る亜麻の糸を水に沈めたわけでもない。　彼らは、錆びてしまうような釣り針を作ったわけでもなく、魚を捕まえるための餌[8356]　を針に付けたわけでもなかった。彼らは、水が触れる岩の上[8357]　に座ったわけでもなく、波に打ち砕かれるような舟に乗って航行したわけでもなかった。　彼らが捕らえたのは、理性を持ち合わ

[8352] この表現は（Iテモテ2:4）から引用されたものである。

[8353] 言うまでもなく、ローマ帝国において初めてキリスト教を国教とした聖コンスタンティヌス大帝（324–337年）のことである。

[8354] 「捕らえる」とは、聖使徒たちが人々をキリストへの信仰へと導いたことを指す。

[8355] ここでいう「杖」とは、釣り竿のことを指す。

[8356] 餌とは、釣りの際に釣り針に付けるもの（ミミズ、昆虫、パンの切れ端など）を指す。

[8357] 釣り人は通常、川岸の水辺にある岩の上に座って釣りをする。

せない魚などではなかった。彼らが用いた技法がいかに驚くべきものであったか、彼らの道具もまた斬新で並外れたものであった。　なぜなら、彼らは葦の代わりに説教を用い、漁網の代わりに記憶を用い、釣り針の代わりに力[8358]を用い、餌の代わりに奇跡を用い、石の代わりに天を用い、そこからそのような漁を行っていたからである。　舟の代わりに祭壇を持ち、魚の代わりに王たちさえも捕らえ、引き網の代わりに福音を広め、技の代わりに神の恵みを用い、海の代わりに人間の命を導き、網の代わりに十字架を、あたかも引き網であるかのように用いることに慣れている。

そして、死んだ漁師たちが、魚のように生きた人々を捕らえるのを、いったい誰がこれまで見たことがあるだろうか？　おお、十字架にかけられた方の偉大なる力よ！　おお、神聖な威厳の至高の美しさよ！　人生において、使徒の恵みの高みに匹敵するものなど何一つあり得ない。人間の生活は、実に驚くべき、理性を超えた多くのものを目にしてきた；　流された血が叫び、言葉を持たずに語る殺人、嫉妬によって自らと分かれた本性[8359]、同じ母胎から生まれた兄弟が兄弟に死をもたらす姿、そして嫉妬の傷によって開かれた死の扉を目撃してきた。世界の洪水と人類の滅亡の際、ノアの箱舟が水に沈まないのを目撃してきた。　信仰によって自らの胎内、すなわち息子に対して武装した老人と、殺されずに、あたかも犠牲として捧げられるかのようにされた者[8360]　を目にした。盗み[8361]を通じて得られた祝福　　と、創造主なる神と奴隷[8362]　　との闘いを目にした。兄弟たちの間に生じた嫉妬[8363]、そして王国をもたらした奴隷状態[8364]を見た。夢を通じて用意された王座[8365]、そして飢えに駆られて兄弟を裏切った者たち[8366]を見た。奇跡を起こす杖[8367]、そして露のように火に覆われた荊の茂み[8368]を見た。自然の力を支配する立法者モーセ[8369]を見た。石のように固められた水、底が露わになった深い海、突然用意された道[8370]、そして昼は雲の柱、夜は火の柱となり、多くの人々の導き手として与えられたもの[8371]を見た。土のない場所で生い茂る杖[8372]を見た。パンの代わりに天から降らされたマナ[8373]を見た。人間の祈りによって、あたかも手綱で引き止められたかのように、太陽が止まるのを見た[8374]、また、不妊の女性の祈りによって願い出られた預

[8358] すなわち――恵み深い。

[8359] すなわち、自分自身に反旗を翻した（この比喩はマタイによる福音書12章25～26節から借用された）。ここでは、カインが嫉妬から弟のアベルを殺害した事件（創世記4章1～12節）を指す。この兄弟殺しにおいて、人間の本性は自分自身に対する罪を犯したのである。

[8360] 言うまでもなく、アブラハムの信仰の偉業――神の言葉に従い、息子イサクを犠牲として捧げようとしたこと（創世記22:1–13）。

[8361] 言うまでもなく、生まれながらにエサウに与えられていた長子の祝福が、欺瞞によってヤコブに奪われたこと（創世記27:1–40）である。

[8362] もちろん、兄エサウとの対面を控えたヤコブを励ますために、神が「神秘的な格闘者」の姿で彼に現れた出来事（創世記32:24–32）。

[8363] 言うまでもなく、父がヨセフを特に愛していたことに対する、彼の兄たちによる嫉妬（創世記37章以降）。

[8364] もちろん、ヨセフがエジプトで奴隷として過ごした期間も、その終わりに彼は最高位の宮廷官吏――ファラオに次ぐ王国一の地位――にまで昇進した（創世記39–41）。

[8365] ヨセフは、神からの特別な啓示によってファラオの夢を解き明かしたことで、エジプトで地位を高めた（創世記41:1–37）。

[8366] ヨセフの兄弟たちは、パンを買うためにカナンの地からエジプトを訪れた（創世記42、43）。

[8367] モーセの杖は、神の特別な力によって、蛇に変わり、また元の姿に戻った（出エジプト記4:1–5）。

[8368] いばらの茂み。

[8369] 言うまでもなく、エジプトの十の災い（出エジプト記7–12）。

[8370] もちろん、ユダヤ人による紅海横断の奇跡を指す（出エジプト記14:1–31）。

[8371] ユダヤ人の放浪の旅の間、彼らの先頭に立ち、道しるべとなった火の柱と雲の柱（出エジプト記13:21–22）。

[8372] 一夜のうちに幕屋の中で奇跡的に芽を出したアロンの杖は、アロンの祭司職が神によって定められたことのしるしであった（民数記17:1–13）。

[8373] （出エジプト記16:1–36）。

[8374] カナン人を完全に打ち破るために一日を長くしたいと願ったヨシュアの祈り（ヨシュア記10:12–13）。

言者の受胎を見た[8375] 。穀倉よりも多い一握りの小麦粉と、泉よりも豊かな一瓶の油を見た[8376] 。空中に浮かぶ戦車と、それに乗って天に上げられる預言者を見た[8377] 。 その後、死者の骨が命の癒やしとなるのを見た[8378] 。――人間の生涯は、これほど偉大で驚くべき多くのものを見てきたが、それらは草のように過ぎ去り、日の出とともに灯火が消えるように消え去った。使徒たちのような存在は、かつてなかった。 彼らは、神の御言葉の奉仕者[8379] として、神として形を持たない方[8380] が受肉された方と交わりを持っていた。彼らは、遍在する方[8381] の後を追った。いかなる場所にも収まりきらない方と共に横たわった。御言葉によって万物を創造された方の声を聞いた（ヨハネ1:3、 詩篇32:6）。彼らは、あたかも網のように、その言葉をもって世界そのものを包み込んだ。彼らは旅の途中で、地の果てを巡り歩いた。彼らは迷いを――まるで蛹のように――根絶やしにし[8382] 、神殿を――まるで茨のように――切り倒し[8383] 、偶像を――まるで野獣のように――殲滅し、悪魔を――まるで狼のように――追い払った。 彼らは教会を――ある種の群れのように――結びつけ、正信者たちを――小麦のように――集めた。彼らは異端を――雑草のように――引き抜き、ユダヤ教を――草のように――枯らし、ギリシャの彫像を――ある種の植物のように――火で焼き払った。 彼らは十字架を鋤として人間の性質を耕し、神の言葉を種として蒔いた。ついに、彼らのすべての行いは、星のように輝いた。それゆえ、主は彼らにこうはっきりと告げられた。*「あなたがたは世の光である」*（マタイ5:14）。

なぜなら、キリスト教徒にとっての東とは、処女から生まれた御方である。朝とは、洗礼の礎を築かれた御方である。輝きとは、十字架につけられたキリストの恵みである。光線とは、この驚くべき舌である[8384] 、日とは、この来るべき世である。正午とは、主がまさに十字架にかかっておられた時である。 西は、墓の中での滞在である。夕方は、この束の間の死である。太陽の輝きは、死者からの復活である。「あなたがたは世の光である」と、主は言われた。

これらの星を見よ、そしてその輝きに畏敬の念を抱け。それゆえ、今ここに記念されるアンドレイは、万物の主を、ある種の光の宝物として見出したとき、兄弟であるペトロに向かってこう叫んだ。

「我らはメシアを見出した。」

ああ、兄弟愛の素晴らしさよ！ ああ、秩序の逆転よ！ ――アンドレイはペトロより後にこの世に生まれ、最初にペトロを福音へと導き、そして――彼を捕らえると、「見つけたぞ」と語った。「メシアを見つけたのだ」。それは喜びから発せられた言葉であり、見つけ出したものについての、歓喜に満ちた福音の知らせであった。 「我々は見つけた――と彼は言った――この宝を。避けよ、 ペ

[8375] 預言者サムエル（サムエルは「神に願い求めた者」を意味する）の受胎は、それまで不妊であった母アンナの祈りによるものであった（サムエル記上 1:1–28）。

[8376] サラプテの未亡人への奇跡は、預言者エリヤの言葉によるもの（列王記下17:10–16）。

[8377] 言うまでもなく、預言者エリヤが火の戦車に乗って生きたまま天に上げられたこと（列王記下2:8–12）。

[8378] もちろん、以前に亡くなった預言者エリシャの遺骨に触れることによって死者がよみがえった出来事（列王記下13:20–21）も挙げられます。

[8379] 聖書において、イエス・キリストはこのように呼ばれている（ヨハネ1:1–14；黙示録19:13；ヨハネ5:7）。この呼称の根拠は、主に、イエス・キリストが人々に神の御心を告げられたことにある（ヨハネ15:16）。

[8380] すなわち、その神性は測り知れず、表現し得ないイエス・キリストのことである。

[8381] 神性において。

[8382] 畑の端や穀物の間に生える雑草（ヨブ記31:40）。

[8383] 「カピシュ」とは、本来、偶像が安置されていた異教の神殿を指す。しかし、異教徒たちは日陰の茂みや森の中にそれらを建てることを好んだため、ここでは、こうした聖なる森が最も直接的に意味されている。

[8384] すなわち、聖霊降臨の日（使徒行伝2章）に使徒たちの上に輝いたもの。

トロよ、割礼の貧しさを避けよ[8385] 、律法のボロボロの衣から解放されよ[8386] 、文字のくびきを振り払え[8387] 、これを取るに足らないものと見なし、現世を――まるで夢のように――軽んじ、ベツサイダを――ある種の悪しき、見捨てられた場所として――嫌悪せよ。 網を――貧困の道具として、舟を――大洪水の時の住処として、漁を――海の荒波に翻弄される生業として、魚を――食欲を満たすための商品として、ユダヤの民を――神の前での驕りとして、カイアファを――邪悪な一味の父として、捨て去れ。 私たちは、預言者たちが予告し、律法がまるでラッパのようにその教えを通じて私たちに告げ知らせていたメシアを見出した。私たちは律法の宝を見出したのだ。 ペトロよ、文字による飢えを避けよ。私たちは、古くからしるしによって予表されていたメシア[8388] 、ミカが栄光の御座の上で見たメシア（ミカ4:1–3）、 イザヤがセラフィムの上で仰ぎ見た方（イザヤ6:1–3）、エゼキエルがケルビムの上で見た方（エゼキエル1:1–28）、ダニエルが雲の上で仰ぎ見た方（ダニエル7:13–14）、 ネブカドネツァルがあの炉の中で見た方（ダニエル3:92）、アブラハムが天幕に迎え入れた方、ヤコブが彼から祝福を受けるまで離さなかった方（創世記32:24–32）、 モーセが岩の上でその背中を見た方[8389] ――この方こそ、私たちが発見した、初めから存在し、終わりの日に現れた方[8390] である。なんと偉大な宝物であろうか、その豊かさは尽きることがない！これは物質の法則に縛られない富であり、その存在には始まりがなく、その存在そのものが新しいものである。 「私たちはメシア、すなわち『キリスト』を見出した」。多くのキリストたちがいる[8391] 、しかし彼らは皆、死すべき者である。アブラハムはキリストであったが、墓の中で朽ち果てた。イサクもまたキリストであったが、その骨は墓に横たわっている。ヤコブはキリストであったが、死すべき者であった。 モーセもキリストであったが、埋葬された――その場所がどこかは分からない。同様に、ダビデもキリストであったが、彼らすべては死の餌食となり、すべてが死の捕虜であった。 ただキリストのみが、本質において真の神であるが、人々に示された御慈悲により、御自身の降誕をもって処女の胎をある種の印として刻み、またこれらの漁師たちを御自身の癒しの源とされた。 御身にこそ、権威と御国と栄光と礼拝があり、汚れなき、同一の本質を持つ、同じ存在である父と聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく、アーメン。

8385 すなわち、旧約聖書の割礼はそれ自体では人に救いをもたらすことはできないことを覚えておきなさい。

8386 律法のくたびれた衣――キリストの到来によって古びてしまった、すなわちかつての意義を失った旧約の律法のことである。

8387 律法のくびき――すなわち、モーセの律法の規定や命令であり、人間にとって重いくびきとなっていた。特に、律法は、例えばキリスト教において与えられるような（IIペテロ1:3）、それゆえ「良いくびき」であり「軽い荷」と呼ばれるような、それらを履行するための恵みの力を人間に与えていなかったからである （マタイ11:30）。このように書かれた律法のくびきは重かったにもかかわらず、それは人間に、それを通じた救いの喜びの自覚を与えることはなく、人間の霊的な飢えを満たすこともなかった（それゆえ、後に「文字による飢え」について語られているのである）。

8388 言うまでもなく、旧約聖書の予型は、多かれ少なかれ明確にキリストを指し示していた。例えば、アブラハムによるイサクの献げ物、モーセへの燃え尽きない荊の茂みの出現、過越の小羊、 雲と火の柱、マナ、アロンの枯れた杖、青銅の蛇、預言者ヨナがクジラの腹に三日間留まったことなどである。

8389 モーセは神の栄光を見たいと願った。しかし、主は彼に、神の御顔を見ることはできないと告げられた。 その後、主は彼を岩の裂け目に立たせ、御自分の右の手で預言者を覆い、その傍らを通り過ぎる際にその手を退けた。こうしてモーセは神の「後ろ姿」、すなわち何らかの外的形態や象徴として神を目撃したのである（出エジプト記33:18–23および関連箇所）。

8390 旧約聖書において、イエス・キリストの到来の時期を示す際によく用いられる表現（民数記24:14、出エジプト記2:2、ミカ書4:1など多数）。

8391 ここで「キリスト」という言葉は、一般的な意味で「油注がれた者」、すなわち神によって特別な奉仕に召された者を指して用いられている。

トロパリオ、第4調：

使徒たちの筆頭であり、万物の主の最愛の兄弟であるアンドレイよ、祈り給え。全世界に平和を授け、我らの魂に大いなる憐れみを施し給え。

コンダク、第2調：

神の御言葉を宣べ伝える同名の勇者、そして教会における至高の模範であり、ペトロの親族である彼を賛美しよう。かつて彼に、そして今、私たちにこう呼びかけているからである。「来なさい、私たちは望みどおりの者を見つけた。」

インドの大司教、聖フルメンティウスの記念日。

記念日：11月30日

コンスタンティヌス大帝の治世の終わり頃、メロピウスという名のキリスト教徒の商人が、インド[8392]や、黒海沿岸の他の国々へと旅に出た。 メロピウスにはフルメンティウスとエデシウスという二人の甥がおり、彼は彼らを連れて行った。それは、これらの若者たちに、彼らにとって未知の国々や、異なる自然、そして他民族の風俗や習慣を知ってもらいたいと願ったからである。

彼らが海を航行していたところ、逆風と激しい波のため、船は野蛮な異民族が住むエチオピアに漂着し、旅行者たちは捕虜となってしまった。 ある者は殺され、ある者は海に沈められた。メロピウス自身も殺害されたが、その甥であるフルメンティウスとエデシウスは生かされ、エチオピア王への献上物としてアクスムという都市へ送られた。王は二人の若者を気に入り、彼らを宮廷に残しておきたいと望んだ。 王の命令により、若者たちの教育のために特別な監督官と教師が付けられ、教育を終えた後、彼らに宮廷での役職を与えることができるようにした。

幼い頃からキリスト教の教えを受けていたフルメンティウスとエデシウスは、知性と教養において王を取り巻く者たちの中で急速に頭角を現し、やがて宮廷において強大な影響力を持つ人物となった。

王の死後、その幼い息子アイザンがエチオピアの王位に就いた際、彼らはさらに大きな栄誉に浴した。アイザンの教育担当としてフルメンティウスが選ばれたのである。こうしてフルメンティウスは弟のエデシウスと共に、国全体に大きな影響力を持つようになり、自由に自らの信仰を告白することができた。 当時、エチオピアとは、主にキリスト教徒である一部のローマ人やギリシャ人の商人たちが貿易関係を築き始めていた。エデシウスとフルメンティウスは、商売のために訪れてきた商人たちと親交を深め、彼らと共に礼拝の集いを開いた。そのために、彼らは小さな教会を建てた。同時に、エチオピアの人々も、フルメンティウスとエデシウスを通じて少しずつキリスト教の信仰に触れ、キリスト教の真理と道徳を徐々に身につけていった。

その間、アイザンは成長した。そこでエデシウスとフルメンティウスは、王に故郷へ帰らせてほしいと願い出た。アイザンは少し迷ったものの、彼らにエチオピアを去ることを許可した。許可を得たフルメンティウスとエデシウスは、最初の船でギリシャへと出航した。 エデシオスはギリシャに到着すると、故郷のティルスへと向かい、両親を探し求め、残りの生涯を二度と彼らと離れることなく共に過ごそうとした。しかし、フルメンティウスがエチオピアを去ったのは、そのような意図か

[8392] ここでいう「インド」とは、一般に黒海およびインド洋の沿岸に位置する諸国を指す。この総称には、エチオピア、アラビア、およびバラモン教のインドが含まれていた。 そのため、序文において聖フルメンティウスは、エジプトの南に位置する、本来はエチオピアであるインドの伝道者として、インドの大司教と呼ばれている。より正確には、現在のヌビアとアビシニアにあたる。

らではなかった。彼はこの国に愛着を抱くようになっており、神の御心により、この国は彼にとって第二の故郷となっていた。　彼は、この国が信仰の面でも自分にとって親しいものとなることを切に願っていた。それゆえ、フルメンティウスは、親族との再会の喜びよりも、キリストにアビシニアの新しい教会を捧げるという、より高次の霊的な喜びを選んだのである。

そのような聖なる思いに導かれて、フルメンティウスはティルスではなくアレクサンドリアへと向かった。そこでは当時、キリストの教会の熱心な擁護者である聖アタナシウス大司教が司教を務めていた。　聖アタナシオスの元を訪れたフルメンティウスは、メロピオスや彼らと共にいた他のキリスト教徒たちを残忍に虐殺した野蛮人たちに捕らえられた際、彼らに与えられた奇跡的な御手配から始まり、アビシニアの地でエデッシウスと共に経験したすべてのことを、詳細に語った。　彼は偉大なる聖人に、これらの野蛮人たちはもはやキリスト教徒を敬遠しておらず、むしろ彼らの生活や教えに深く関心を寄せているため、今やキリストの真理の光によって容易に啓蒙されるだろうと説明した。そのための土壌はすでに整っており、この国は種を蒔く者が現れることを切望している。　そこでフルメンティウスは、聖人に今すぐエチオピアへ司教と聖職者たちを派遣するよう熱心に懇願した。

フルメンティウスのこの話を聞き終えると、聖アタナシウスは、エチオピア人をキリストへと回心させるために、これらの兄弟たちの運命の中に神の驚くべき摂理を見出した。　その際、聖アタナシウスの心に、エチオピアの住民の気質や習慣、言語を間近で学び、現地で尊敬と愛を勝ち得ていたフルメンティウス自身を、エチオピアの司教に任命するのが最善であるという考えが閃いた。

そこで、至福のアタナシウスはフルメンティウスにこう言った。

「我々のうちで、あなた以上に異教の闇を払いのけ、そこに神の福音を届けることができる者がいるだろうか。」

その後、フルメンティウスは聖アタナシウスによって司教に叙階され、使徒のような熱意をもって再びエチオピアへと向かい、異教徒たちを啓蒙した。まず第一に、彼はアイザン王自身に聖なる洗礼を受けるよう説得し始めた。　フルメンティウスの助言を頼りにする習慣があり、心の奥底では師の信仰を受け入れる傾向にあった若き王は、復活された主についての彼の説教に心からの信仰をもって耳を傾け、キリストの御名によって洗礼を受けた。王に続いて、王の側近の多くも洗礼を受けた。　主はこの使徒に等しい聖人に、奇跡を行う賜物を授けられた。聖フルメンティウスは、キリストの御名の力によって、悪霊に取りつかれた者や様々な病に苦しむ人々を癒した。　一方、自らの思索によってキリストの教えを否定し、聖フルメンティウスの福音を信じようとしなかった者たちについては、使徒の言葉を引用して*「その霊が救われるため」*に、彼らをサタンの手に委ねた（[8393]）；また、頑なな者たちの中には、全身を枯れさせる者もいれば、目を失明させる者もいた。　神の御心にかなう者の言葉によって起こった、こうした突如として現れた恐ろしいしるしを目の当たりにして、異教徒の中でも頑なな者たちでさえ、彼の前にひれ伏し、キリストを神の子として告白することで、フルメンティウスから癒やしを受け、洗礼を受けた。

人々は説教者の福音を伝える力に驚嘆し、王自身も思わずこう叫んだ。

「これほど長い間、あなたは私たちと共に暮らしてきたのに、あなたからいかなる奇跡も見たことがなかった！　いったいどこから、今になってこのような恵みが、しかも短期間のうちに与えられたのか！？」

そこで、福者フルメンティウスは、王や周囲の人々、そして彼をよく知る者たちすべてにこう答えた。

「これは私の賜物ではなく、キリストの誠実な友たちよ、主キリストご自身からの聖職の賜物なのです。　私はかねてより、あなたがたがキリストを受け入れるという善意と心構えを持っている

[8393] すなわち、教会からの破門（Iコリント5:5）である。

のを見ていました。それゆえ、故郷を離れ、血縁関係も顧みず、私は主の御声に従ってアレクサンドリアへと向かい、アレクサンドリア教会の教父である偉大なるアタナシウス様ご自身に、あなたがたの霊的な渇望について申し上げました。　彼は私に聖なる叙階の栄誉を与え、使徒の恵みによって私を啓発した上で、祈りと祝福を込めてあなた方の元へ遣わしてくださいました。この神からの聖なる賜物が、私を通して、福音の言葉を信仰をもって受け入れたあなた方の間で、あなた方が目にするようなしるしを現しているのです。

このようにしてエチオピアにキリストの教会を設立した聖フルメンティウスは、その外面的・内面的な整備に熱心に取り組みました。彼は国中に新改宗者のための教会を建設し、至る所で礼拝を執り行いました。

同時に、彼は聖書をエチオピア語に翻訳することにも力を注ぎました。その後、エチオピアにおける福音の宣教は、さらに大きな成功を収めるようになりました。

こうして、聖フルメンティウスは長きにわたり神に喜ばれる生涯を送り、自らの模範と言葉をもって信者たちが神の戒めを守るよう励まし、その後、360年頃、エチオピア教会を堅固に築き上げたまま、安らかに主のもとへ帰った[8394]。聖人の尊い遺骨からは、、信仰と祈りを込めて彼に助けを求めたすべての人々に、尽きることのない様々な癒しがもたらされ、私たちの真の神であるキリストの栄光が示されました。アーメン。

12月14日

12月1日（旧暦）

聖預言者ナウムの記念日

12月1日の記念日

聖預言者ナウムは、いわゆる「十二小預言者」の一人であり、ガリラヤのエルコシャという村[8395]の出身であった。

ナウム書の主な内容は、ニネベの没落と滅亡に関する預言[8396]であり、義なる主がこの都市にもたらす災いの予言、そしてこの偉大で堅固に要塞化された都市の最終的かつ完全な破壊を生き生きと描いた描写である。　預言者ナホムは、ニネベの不法、とりわけイスラエル王国の滅亡と、センナ

8394 現在のアビシニアは、古代エチオピアの一部を構成しており、このようにして、聖フルメンティウスによってもたらされたキリスト教の信仰の継承者となっている。アビシニア教会はアレクサンドリア教会と密接な関係にあり、アビシニアの司教はその総主教の管轄下にあった。　そのため、アリウス派の動乱や論争のさなかにあっても、アビシニア教会は聖アタナシウス大主教の伝統に忠実であり続け、アリウス派の教義に傾倒していたコンスタンティウス皇帝が、アビシニア人の間でアリウス派を広めるために様々な手段を講じたにもかかわらず、正統派の立場を堅持した。　しかし、アレクサンドリア教会とのその結びつきゆえに、アビシニア教会は5世紀に同教会とともに単性論の異端へと傾いたものの、その他のすべての教義および礼拝においては正統な教えに忠実であり続けた。

8395 なぜ預言者は自らをエルコシェヤ人、あるいはエルコセヤ人と呼んでいるのか（ナウム書 1:1）。スラブ語訳やその他の翻訳によれば、預言者ナウムはエルケシエの息子とされているが、大多数の注釈者（例えば、至福のヒエロニムス、聖キリロス・エルサレムス、　エピファニオスら）は、ヘブライ語の「エルコシ」（スラブ語では「エルケシエフの息子」と訳されている）を、ナウムの出生地の名称であると見なしている。至福のヒエロニムスが記録した伝承によれば、エルコシャの集落はガリラヤの北、イスラエル王国にあった。

8396 ニネベはアッシリア人の主要都市であり、当時ユダヤ人は彼らと敵対関係にあった。ニネベはメソポタミアのティグリス川東岸に位置していた。そこは古代世界でもっとも人口が多く、最も豊かな都市であり、周囲は約84ヴェルストあった。

ケリムによる主への冒涜[8397] に対する罰として、ニネベの破滅を予言している[8398] 。 このように、ナウムは預言者ヨナによってニネベに対して語られたあの恐ろしい預言を繰り返している。ニネベの滅亡に関するヨナの預言（ヨナ書2:2）は取り消されたのではなく、単に延期されたに過ぎない。 ニネベの人々は、預言者ヨナの説教の後、一時的に悔い改めたものの、その預言が自分たちに実現しなかったのを見て、再び以前の悪行に逆戻りした。これにより、彼らは再び神を怒らせ、神の寛容さを侮ったのである。

この預言のきっかけとなったのは、次の出来事であった。センナケリムの軍勢がエルサレムの城壁の下で奇跡的に全滅し、センナケリムが脅しを放って撤退したとき、 ユダヤ人たちは、この解放を喜んだものの、セナヒリムが失敗に激怒して、以前よりもさらに大規模な軍勢を再び集め、脅した通り、再びエルサレムの城壁の下に現れるのではないかと恐れていた。 ユダヤの民を安心させ、勇気づけるために、預言者ナホムは演説を行い、その中で、ニネベが激しい洪水によって破壊され、その財宝が略奪され、火によって焼き尽くされるという、ニネベの最終的な滅亡をすでに予言していた[8399] 。

預言者ナホムの書全体は、ニネベから主（すなわちセナケリム）に対して悪を企てた者が現れたことに対する、ニネベの滅亡に関する神の恐るべき裁きを一貫して述べたものであり、ユダ王国にはアッシリアの支配からの解放が予言されている。 続いて、ニネベの包囲と破壊の様子が描写され、最後に、ニネベがその偶像崇拝、とりわけ諸国民を隷属させていた淫乱や魔術によって、このような運命を十分に招いたことが明らかにされる。 したがって、いかなる防衛手段もニネベを救うことはできず、すべての民は、このような残酷な圧制者から解放されたことを喜ぶことになる[8400] 。

預言者ナウムの活動時期は、ユダ王ヒゼキヤの治世の後半、すなわち紀元前745年から714年（イスラエル王国の滅亡後）にあたる。

預言者の生涯に関するその他の事情については何も知られていない。伝承によれば、彼は45歳で亡くなり、故郷の地に埋葬されたという。

[8397] *センナケリム*はアッシリアの王であり、イスラエル王国を滅ぼしたサルマナッサーの息子であり後継者である。

[8398] エホバ（スラヴ語で「存在する者」）は、神の御名の一つである。これは、神の存在の独自性、永遠性、不変性を意味し、聖書において唯一の真の神を指して常に用いられている。

[8399] *水と火によるニネベの滅亡*に関するこの預言は、文字通り成就した。敵（紀元前600年頃、メディア王キアクサルとバビロン王ナボパラサル）に包囲されたニネベは、 3年間にわたり包囲に耐え抜いたが、ティグリス川の氾濫によって城壁が浸食されたため、ニネベの人々が新たな城壁を築き上げる前に、敵が城内に入り込み、街を根こそぎ破壊する機会を与えてしまった（ナホム書3:14）。 ニネベの王サルダナパルは、自らの救いを絶望し、捕虜となることを恐れて、宮殿の真ん中に大きな焚き火を築かせ、そこにすべての財宝を集め、すべての側室たちと共に自らを焼き殺した。 こうして、ナウムと、もう一人の偉大な預言者イザヤの恐ろしい言葉が成就した（イザヤ書 30:33）

[8400] ニネベの滅亡に関する預言に加え、預言者ナウムの書にはメシア的な特徴も見出される。「ナウムはこう語っている——と聖テオドリトスは言う——」 テオドリトス聖人は言う——ニネベとその軍勢、そして都市の滅亡は、彼らがヨナの説教の後で悔い改めたにもかかわらず、すぐにそれを忘れ、武器を手にイスラエルに攻め込んだことによるものである。しかし——彼は続ける——この書には、救い主に関する次のような預言もある。 *『破壊者があなたに立ち向かう。要塞を守り、道を警戒し、腰を強め、力を結集せよ』*（ナホム書2:1） （スラブ語訳：「あなたの顔に向かって息を吹きかける者が立ち上がる」）、なぜなら、神がアダムに命の息を吹き込まれたように、主キリストもまた、この姿を再現して、使徒たちに*「息を吹きかけ」、彼らに「聖霊を受けなさい」と言われたからである*（ヨハネ20:22）。 それゆえ、ナウムの書に記されている「打ち砕かれたアッシリアの王国」とは、主キリストによって打ち負かされた悪魔の権勢を意味し、「喜び躍るユダ」とは、救いを喜ぶ全宇宙を意味するのです」。——正教会の礼拝において、預言者ナウムの書は用いられません。

コンダク、第4声調：

御霊に照らされた汝の清き心は、預言の最も輝かしい住処となった。汝は、今ここにあるものが遠くにあるかのように見通したからである。このゆえに、我らは汝を崇める、祝福された預言者よ、栄光あるナウメよ。

聖なる義人フィラレート・ミロスティヴィイの生涯

記念日：12月1日

「憐れみ深い者は幸いである。彼らは憐れみを受けるからである」（マタイ5:7）と、主は言われた。この言葉は、貧しい人々に対するその偉大な慈悲ゆえに、現世においても来世においても神から豊かな報いを受けた、至福のフィラレート・ミロスティヴィイに実現した——彼の至福に満ちた生涯が、これを証ししている。

福者フィラレートは、パフラゴニア（[8401]）の、アムニエ（[8402]）と呼ばれる村に住んでいた。貴族の両親であるゲオルギーとアンナは、幼少の頃から彼を敬虔さと神への畏れをもって育て上げ、彼の生涯は貞潔やその他あらゆる美徳によって彩られていた。　成人すると、フィラレートはテオズヴァという名の高貴で裕福な娘と結婚し、彼女との間に3人の子供——息子のヨハネスと、2人の娘のイパティアとエヴァンフィア——をもうけた。　神は、かつての義人ヨブのように、福者フィラレットを祝福し、その財産を増やし、豊かな富を授けられた。　彼には数多くの家畜や村、実り豊かな畑があり、あらゆるものが豊かであった。彼の宝物庫はあらゆる地上の恵みで満たされ、大勢の男奴隷や女奴隷が彼の屋敷に仕えていた。　そしてフィラレートは、その国の著名な貴族の一人として知られていた。これほど大きな富を手にしながら、同時に多くの人々が貧困や極度の困窮に苦しんでいるのを見て、彼は彼らに憐れみを感じ、心を動かされ、こう自問した。

「まさか、私が主の御手からこれほど多くの恵みを受けたのは、ただ自分一人だけでそれらを享受し、快楽に浸り、自分の腹を満たすためだけだったのだろうか？　神から授かったこの莫大な富を、貧者、未亡人、孤児、旅人、そして困窮している人々と分かち合うべきではないだろうか。主は、天使や人々の前で、最後の審判の日に、彼らを「わたしの兄弟」と呼ぶことを恥じられない。主はこう言われているからだ。「　*『あなたがたが、これらのわたしの兄弟たちのうちの一人にしたことは、わたしにしたことである』*」（マタイ25:40）[8403]？　そして、もし私が自分のけちさゆえに、すべての財産を自分だけのために取っておいたとしたら、最後の審判の日に、それらの財産が私に何の益をもたらすだろうか。なぜなら、その審判において、憐れみを示さなかった者たちは、憐れみを受けることはないからである（ヤコブ2:13）。私の財産は、来世において、私にとって不朽の糧や飲み物となるだろうか。そこで、私の柔らかな衣は、朽ちることのない衣として私を包んでくれるだろうか。いいえ、そんなことはない！　なぜなら、使徒はこう言っているからだ。*「私たちはこの世に何も持って来なかった。明らかに、何も持って行くことはできない」*（テモテへの手紙第一6:7）。それゆえ、もしこの世の財産を何も持ち去ることができないのなら、それを神に、いわば借り物として、貧しい人々の手を通じて捧げるほうがはるかに良い。　神は決して、私をも、妻をも、子供たちをも見捨てられることはない。預言者ダビデはこう語り、私に確信を与えてくれる。「*私は若かったが、年老いた。義人が見捨てられ、その子孫がパンを乞うのを見たことがない*」（詩篇36:25）。

[8401] *パフラゴニア*——小アジア北部の地域で、ビフィニアの東に位置する。

[8402] アムニア——同名の川の風光明媚な河岸に位置する村。

[8403] マタイ25:10。——人が地上の生涯において隣人やキリストの弟子たちのために行ったすべての行いを、主はご自身への行いとして受け止め、あたかもご自身に対して行われたかのように報いてくださる。

このように心の中で思索を重ねた聖フィラレートは、父親が自分の子供たちに対してそうするように、貧しい人々に対して慈愛を注ぐようになった。飢えた者に食べ物を与え、裸の者に衣服を着せ、旅人を自分の家に迎え入れ、愛をもって彼らにあらゆる安らぎを与えた。　そして、この義人は、古の旅人をもてなしたアブラハム[8404]や、貧しい人々を愛したヨブに似ていた。それゆえ、慈愛の行いで飾られたこのような光は、隠されたままではいられず、彼は山の上にある町のように（マタイ5:14）、国中にその名を知られるようになった。彼の家は、頼もしい避難所として、すべての貧しい者や困窮した者たちが身を寄せようと駆けつけた。そして、彼らが何を求めてきたとしても――食べ物であれ、衣服であれ、馬、牛、ロバ、あるいはその他の何であれ――フィラレートは親切で寛大な心をもって、それを与えたのである。

しかし、やがて、人を愛する主が、　すべてを人の益となるよう整えてくださる方が、義人フィラレートをも、古の御心に適う者ヨブと同様に、試練に遭わせることを許された。それは、聖人の忍耐がヨブの忍耐のように現れ、また彼が試練によって、炉の中の金のように精錬され、神にふさわしいしもべとして現れるためであった。　まず、至福のフィラレートは貧困に陥り始めましたが、それにもかかわらず、貧しい人々に対する彼の同情と慈悲は微塵も変わることなく、彼は手元に残ったものを、困窮している人々に配り続けました。

その頃、神の御許しにより、フィラレートが住んでいたその国にイスマイル人たちが襲来した[8405]。彼らは、打ち砕く旋風や焼き尽くす炎のように、国全体を荒廃させ、多くの住民を捕虜として連れ去った。　フィラレトの羊や牛、馬、ロバの群れもすべて奪われ、彼の奴隷の多くも捕虜として連れ去られた。こうして、この慈悲深い男は、ついにただ二人の奴隷、一組の牛、一頭の馬、そして一頭の雌牛だけが残るほどに、破滅的な状態に陥った。　フィラレートの残りの全財産は、彼の寛大な手によって貧しい人々に分け与えられたか、あるいはイスマイル人たちに略奪された。また、彼の村々、果樹園、畑は、周辺に住む農民たちによって、ある者は懇願によって、ある者は暴力によって奪い取られた。こうしてフィラレートに残されたのは、彼が住んでいた家と、たった一つの畑だけとなった。　このような貧困や剥奪、そして数々の災難に耐えながらも、この善良な男は決して嘆きも不平も漏らさず、第二の義人ヨブのように、神の前で何一つ罪を犯さなかった――「口をもって罪を犯さなかった」[8406]。しかし、ある人が自分の富の多さを喜ぶのと同じように、彼もまた自分の貧しさを喜び、それを偉大な宝と見なしていた。　貧しさこそが富よりも救いへのより確かな道であることを理解していたのである。主もまた、「*富める者が天の御国に入るのは難しい*」と仰せられたように（マタイ19:23）[8407]。

8404　すなわち、旧約聖書の族長アブラハムのことである。アブラハムは、その生涯において、例えば、博愛、柔和、正義、忍耐、平和愛、寛大さ、無私、もてなし、そしてとりわけ――敬虔さ、　揺るぎない神への信仰と希望、神に対する最も深い謙遜と畏敬の念、神への完全な服従、そして神の御心への全き献身――である。（創世記11:1–32）およびそれ以降を参照。

8405　ここでいう*イシュマエル人*（すなわちイシュマエルの子孫）とは、アラブ人――イスラム教徒――を指しており、彼らの勢力は西暦8世紀に全盛期を迎えていた。イスラム勢力の急速かつ並外れた台頭は、ビザンツ帝国にとって不幸であった。　イスラム教徒たちはギリシャ人に対して絶え間なく、壊滅的な戦争を繰り広げた。有名なアラブのカリフ、ハルーン・アル＝ラシードは、ビザンツ帝国に対して8回にわたり壊滅的な遠征を行った。これらの襲撃により、とりわけ常に被害を受けたのは、義人フィラレートが住んでいた小アジアの地域であった。　凶暴な敵が近づくと、住民たちは家や家財を運命に任せたまま、山間の峡谷や森へと急いで避難した。敵が去った後、かつて繁栄していた地域が荒野と化すことも珍しくなかった。まさにそれが、義人フィラレートの時代にも起こったことである。

8406　*「果たして、私たちは神から良いものだけを受け取り、悪いものは受け入れないというのか。ヨブはこれらすべてにおいて、その口をもって罪を犯さなかった」*（ヨブ記2:10）――すなわち、神に対する冒涜の言葉を一切口にしなかった。

8407　この救い主の言葉について、聖ヨハネ・クロソストモスは次のように述べている。「キリストはこれらの言葉で富そのものを非難しているのではなく、富に執着する者たちを非難しているのだ。」

ある日、フィラレートは自分の牛二頭を連れて、残っていた畑を耕しに出かけた。　働きながら、彼は神を賛美し、喜びをもって感謝した。神の聖なる戒めに従い、自分の額の汗をもってパンを得る（創世記3:19）ことを始められたこと、そして労働が、あらゆる悪の源である怠惰や無為から彼を救ってくれることを。

彼はまた、怠惰で無為を好む者*に対して「働きたくない者は、食べることも許されない」*（テサロニケの信徒への手紙第二 3:10）と戒めた使徒の言葉を思い起こした。そして、祝福されたフィラレートは、自らのパンを食べるに値しない者とならないよう、自分の土地を耕した。

その日、ある村人も自分の畑を耕していた。　すると突然、彼の所有する牛の一頭が病気になり、倒れてしまった。農夫は苦々しく泣き、慰めようのないほど嘆いた。とりわけ、その牛たちは彼自身のものではなく、畑を耕すために隣人からかろうじて借り受けたものだったからだ。その時、彼は至福のフィラレートを思い出し、こう言った。

「ああ、もしあの慈悲深い貧者愛好家が自ら貧しくなっていなければ！　今なら彼のところへ行って、きっと一頭だけでなく、二頭もの牛をもらえたはずだ。しかし、彼自身も今は大きな困窮の中にあり、たとえ心からそう願っていたとしても、他人を助ける余裕などないのだ。」　しかし、それでもやはり彼のところへ行こう――少なくとも彼は私を憐れんでくれ、たとえ言葉だけであっても私を慰め、この重い悲しみと嘆きを和らげてくれるだろう。

杖を手にした村人は、聖フィラレトのもとへ向かい、畑で働いている彼に出くわすと、頭を下げて、涙ながらに自分の悲しみ――予期せぬ牛の死――について語った。　聖フィラレートは、その男がどれほど悲しんでいるかを見て、すぐに自分の牛の一頭を軛から外し、村人に渡し、こう言った。

「兄弟よ、この私の牛を受け取って、主を賛美しながら自分の土地を耕しなさい。」

村人は、その寛大な施しを受け取りながら、感謝の意を込めて至福のフィラレートに頭を下げ、こう言った。

「ご主人様！　あなたの決断は偉大で、驚くべきものであり、あなたの慈悲は神に喜ばれるものですが、共に働いてきた二頭の牛を引き離すのは良くありません。一頭だけでは、あなたご自身もやりくりするのが難しいでしょう。」

「兄弟よ、私があなたに贈るこの牛を受け取って、安らかに去ってください。私には家にまだもう一頭の牛がいますから」と、義人は彼に答えた。

農夫は聖人に地面まで頭を下げ、牛を受け取ると、神を賛美し、慈悲深い施し主に感謝しながら立ち去った。

フィラレートは、残った牛を連れて、軛を肩に担いで家路についた。彼が家の門に近づくと、妻は、牛が先を歩き、夫が軛を肩に担いでその後をついているのを見て、彼に言った。

「ご主人様！もう一頭の牛はどこへ行ったのですか？」

フィラレートは彼女にこう答えた。

「仕事が終わって休んでいる間に、牛たちを放牧していたところ、一頭が逃げ出して迷子になってしまったのです――あるいは、誰かが連れて行ってしまったのかもしれません。」

これを聞いたフィラレートの妻はひどく悲しみ、急いで息子を遣わして行方不明の牛を探させた。多くの畑を巡った末、若者はついに、ある農夫の軛に引かれた自分の牛を見つけた。その牛だと確認すると、彼は怒りを込めて農夫に言った。

「悪辣で不誠実な男め！　よくも他人の牛を軛につないで、それを働かせたものだ。この牛をどこで、どうやって手に入れ、自分の牛と一緒に軛につないだのだ？　これこそ、私の父のところで行方不明になったあの牛ではないか？　それなのに、お前はそれを見つけると、まるで狼のように奪い取り、自分のものにしたのだ。　その牛を私に返せ。もし返さなければ、泥棒として法廷でその責任を問われることになるぞ！

農夫は穏やかにこう答えた。

「若き聖人の息子よ、私に怒らないでください。私が何の罪もないのに、私を責めないでください。実は、あなたの父は、私の不幸と貧しさを憐れんで、自発的にこの牛を私に与えてくださったのです。私の牛が軛の下で働いている最中に、突然倒れてしまったからです。」

これを聞いて、若者は自分のむやみな怒りを恥じた。急いで家に戻り、このことをすべて母に話した。母はそれを聞き終えると、涙ながらに叫んだ。

「ああ、なんてこと！ 冷酷な夫を持つこの哀れな妻よ！」

そして、髪を引きむしり、叫び声を上げて夫のもとへ駆け寄り、こう責めた。

「あなたは非情で、石のような心を持った人間だ！　なぜ私たちを時期尚早に飢え死なせようとしたのか？　私たちの罪のせいで、すでにすべての財産を失ってしまったが、罪人をも憐れむ主は、私たちがその助けを借りて子供たちを養えるよう、二頭の牛を残してくださった。　それなのに、かつては莫大な富に恵まれ、自分の手で働いたことなど一度もなかったあなたが、今や貧困に陥り、怠惰になって働きもせず、土地を耕そうともしない。ただ自分の部屋で安らかに休みたいだけなのだ。　それゆえ、あなたが自分の牛を村人に譲ったのは、神のためではなく、自分自身のためだったのです。つまり、その牛を軛につなぐ労苦を避け、怠惰と無為に生きるためでした。しかし、もしあなたの怠惰のせいで、私があなたの子供たちと共に飢えで死んでしまったら、あなたは主に対してどのような答えを出すつもりですか？

妻を見つめ、至福のフィラレートは柔和にこう答えた。

「聞いてください。恵みに満ちた神ご自身がこうおっしゃっています。*『空の鳥たちを見なさい。彼らは種を蒔くことも、刈り取ることも、倉に蓄えることもない。それでも、あなたがたの天の父は彼らを養ってくださる。あなたがたは、彼らよりもはるかに尊いではないか』*（マタイ6:26）。鳥たちよりも比べものにならないほど神にとって大切な私たちを、神が養ってくださらないはずがあるでしょうか。神は、御自身と福音のために財産を貧しい人々に分け与える者たちに、百倍の報いを与えると約束しておられます。ですから、考えてみてください。一頭の牛に対して百頭を得るのであれば、なぜ私が主の御名によって困っている人に与えたその一頭の牛について、嘆く必要があるでしょうか？

この慈愛に満ちた夫がそう語ったのは、この世の生活において百倍の報いを受けるという希望で自分を慰めるためではなく、気弱な妻を安心させるためであった。そして妻は、夫の賢明な言葉に反論の余地を見出せず、黙り込んだ。

それから五日も経たないうちに、聖なるフィラレートが村人に贈ったあの牛が、有毒な植物を食べて倒れてしまった。これには村人も困惑し、再びフィラレートの元を訪れて、こう言った。

「ご主人様！私はあなたとあなたの子供たちの前で罪を犯しました。あなたの牛のペアを引き離してしまったのです。きっと、そのせいで、義なる神は私にあなたの牛の恩恵を受けることを許さなかったのでしょう。あの牛は何か毒草を食べて死んでしまったのですから。」

一言も発することなく、聖なるフィラレートは素早く最後の牛を連れてきて、それを村人に手渡しながら言った。

「兄弟よ、この牛を受け取って連れて行ってくれ。私は遠い国へ旅立たねばならず、働き牛が私の家に私なしで無駄に放置されるのは望まないのだ。」

至福のフィラレートがこう言ったのは、その男がもう一頭の牛を受け取ることを拒まないようにするためであった。村人は牛を受け取ると、その至福の男の偉大な慈悲に驚きつつ、自分の家へと戻っていった。一方、フィラレートの家では、すぐに皆が彼の行いを知ることになった。子供たちは母親と共に泣き出し、こう言った。

「まことに、私たちの父は慈悲深くなく、子供たちを愛していない。なぜなら、私たちの最後の財産を浪費しているからだ。私たちが飢え死なないために残っていたのは、たった二頭の牛だけだったのに、父はそれを他人に与えてしまったのだ。」

子供たちの悲しみと涙を見て、聖フィラレートは彼らにこう語りかけた。

「子供たちよ！　なぜ悲しみに沈むのか？　なぜ自分たちも、そして私をも苦しめるのか？　まさか、私を冷酷な者だと思っているのか？　まさか、私が本当にあなたたちを滅ぼそうとしているとでも思っているのか？」　安心しなさい。あなたたちには知られていないある場所に、私がこれほど多くの富と宝を蓄えている。たとえあなたたちが何もしないで、何の心配もせずに過ごしたとしても、一生の百年間は十分に足りるほどだ。あなたたちのために用意したその宝の数を、私自身でさえ数えきれないほどなのだ。

こう語ったとき、義人フィラレートは子供たちを欺いていたわけではなく、後に実現することとなる未来を、まさに霊的な目で見通していたのである。

その直後、その国には皇帝の勅令が届き、すべての兵士がそれぞれの連隊に集結し、ギリシャ帝国に反旗を翻した不敬な野蛮人たちに立ち向かうよう命じられた。その際、すべての兵士は完全な武装を備え、二頭の馬を連れて現れることが求められた。 その連隊の一つに、 と、ムシリウスという名の貧しい兵士が配属されていた。彼には馬が一頭しかなかったが、まさにその矢先に、その馬が突然病気になり、倒れてしまった。馬を買う資金のない貧しい兵士は、至福のフィラレトのもとへ行き、こう言った。

「主よ！私を憐れんで、助けてください。あなた自身も極度の貧困に陥り、馬をたった一頭しかお持ちでないことは承知しています。しかし、慈悲深い主のために、どうかお願いです。千人隊長の手に落ちず、彼に酷く殴られることのないよう、あなたの馬を私に譲ってください。」

これに対し、至福のフィラレートは彼にこう言った。

「兄弟よ、私の馬を受け取って、安らかに旅立ってください。ただ、私がこれをあなたに与えるのは、千人隊長からの罰を恐れてのことではなく、神の慈しみのゆえであることを知っておいてください。」

兵士は聖人から馬を受け取ると、神を賛美しながらその場を去った。こうして、聖フィラレートの全財産は、雌牛と子牛一頭、ロバ一頭、そして数個の蜂の巣箱だけとなった。その頃、遠く離れた土地に住むある貧しい男が、慈悲深いフィラレートの噂を聞きつけ、彼の元を訪れてこう懇願した。

「ご主人様!　あなたの群れから子牛を一頭ください。そうすれば、あなたの賜物が私にとってもあなたからの祝福となります。なぜなら、あなたの施しは家に祝福をもたらし、あらゆる面でその家を豊かにすると私は知っているからです。」

そこで、至福のフィラレートは喜んで自分のたった一頭の子牛を連れてきて、懇願する者に渡し、こう言った。

「主があなたに御祝福をお与えになりますように、兄弟よ。そして、あなたが必要とするすべてのものに豊かさをお与えになりますように。」

その男はフィラレートに頭を下げ、子牛を連れてその場を去った。一方、母牛は自分の子牛が見当たらないと気づき、探し回ったがどこにも見つからず、庭中に響き渡るほど悲しげな鳴き声を上げた。　フィラレートの家族は皆、その雌牛を深く気の毒に思ったが、とりわけフィラレートの妻は心を痛めた。彼女は涙ながらに夫を責め立て、こう言った。

「いつまでお前のこうした振る舞いに耐え続けなければならないのか？お前の無謀さを笑わない者などいるだろうか？今や私にははっきりわかった。お前は私――お前の妻――のことを微塵も気にかけておらず、子供たちをも餓死させた。そして今や、子牛に乳を与える言葉も話せない家畜さえも憐れまず、慈悲もなく母牛から子牛を奪い取ったのだ。　一体誰のために、そんな善行をしたとい

うのか？　あなたは自分の家を失い、悲しませただけでなく、子牛をねだったあの男をも豊かにすることはできなかった。なぜなら、彼の子牛も母を失って死んでしまうだろうし、私たちも子牛を失った牛が悲しんで鳴き続けるからだ。それならば、私たちにとっても、あの男にとっても、いったい何の益があるというのか？

妻からそのような言葉を聞くと、義人フィラレートは柔和にこう答えた。

「今こそ、あなたは真実を語った、わが妻よ！　確かに私は慈悲深くもなく、憐れみ深くもない。小さな子牛をその母から引き離してしまったのだから。しかし、これからはもっと良い行いをするつもりだ。」

そして、子牛を連れ去った男のあとを急いで追いかけたフィラレートは、彼に呼びかけた。

「戻ってきてくれ、兄弟よ、子牛を連れて戻ってきてくれ。子牛のいない母牛は私たちを安らかにさせてくれず、家の門の前で鳴き叫んでいるのだ。」

貧しい男は、フィラレートからこう聞くと、彼が自分に贈ってくれた子牛を取り上げようとしているのだと思い、心の中でこう言った。「どうやら私は、この義人からも、この小さな家畜一頭さえも受け取るに値しないらしい。おそらく彼は子牛を気の毒に思い、私から取り上げるために呼んでいるのだろう」。　その男がフィラレートのもとに戻ると、子牛は母親の姿を見て駆け寄り、母親もまた喜びの鳴き声を上げながら子牛のもとへ駆け寄った。　子牛は母牛の乳首に吸い付き、長い間母牛から離れようとしなかった。フィラレートの妻テオズヴァはそれを見て、子牛が家に戻ってきたことを喜んだ。一方、至福のフィラレートは、悲しげに立ち尽くし、一言も口に出すことさえできない貧しい男を見て、彼にこう言った。

「兄弟よ、私の妻は、私が子牛をその母から引き離したことで罪を犯したと語っているが、彼女の言うことは真実だ。だから、子牛と一緒に母牛も連れて行き、安らかに帰れ。主があなたを祝福し、かつて私の群れをそうであったように、あなたの群れも増やしてくださいますように！」

すると、その男は雌牛と子牛を受け取り、喜びながら家路についた。そして神は、御自身の聖人フィラレトのゆえに、その男の家を祝福された。彼に与えられた雌牛と子牛のおかげで、数年後には、彼はすでに二群以上の雄牛と雌牛の群れを所有するようになっていた。

その直後、その国に飢饉が訪れ、義人フィラレートは極度の貧困に陥った。妻や子供たちを養うものが何もない中、フィラレートは、自分に残されていたたった一頭のロバ　を手にして、別の方向にある友人のところへ向かった。 その友人から小麦を6メーラ借り受け、それをロバに積んで、喜びながら自宅へ戻り、妻と子供たちを満腹にさせた。フィラレートが旅の疲れを癒やして自宅で休んでいると、ある物乞いがやって来て、小麦を一ふるい分けてほしいと頼んだ。

「妻よ！」――その時、このアブラハムに倣うにふさわしい男は、小麦を蒔いていた妻にこう言った。「この物乞いに小麦を一メーラあげたいのだ。」

妻は彼にこう答えた。

「待って、まずあなたと子供たちが腹いっぱいになるまで待って。そして、まず私に一メーレ、子供たちにも一人ずつ一メーレずつ、それに私たちの使用人にも一メーレずつあげて。残った分は、好きな人にあげればいいわ。」

彼は彼女を見て、笑いながら言った。

「俺には何も残さないのか？」

「ええ、だってあなたは天使ですから」とフェオズヴァは反論した。「人間ではなく、食べ物など必要としないでしょう。もし食べ物が必要なら、借りた小麦を他人に配ったりはしないはずです。」

フィラレートは黙って小麦を二メーラ量すくい取り、それを乞食に渡した。すると、フィラレートの妻は悲しみと悔しさのあまりついに我を忘れ、彼に向かって叫んだ。

「もう三メーラの小麦をその乞食にあげなさい。あなたには小麦がたくさんあるんだから。」

フィラレートはさらに一メーレを量り取り、その貧しい男を見送った。彼に腹を立てたフェオズヴァは、残りの小麦を自分と子供たちで分け合った。ところが、借りた小麦はすぐに底をつき、フェオズヴァと子供たちは再び飢えに苦しむことになった。

そこで彼女は隣人のところへ行き、パン半斤を借り、それにヒユを煮込んで空腹の子供たちに与え、自分も子供たちと一緒に腹を満たしたが、その老人を食事に招くことなど全く思いもよらなかった。

そんな中、フィラレートの窮状を、彼の古くからの友人であるある裕福な男が耳にした。彼は、小麦を積んだ荷車四台――それぞれ十メルずつ――を彼のもとへ送り、次のような手紙を添えた。「愛する兄弟よ、神の御使いよ！　あなたとあなたの家族が生活できるよう、小麦40メールを送ります。もしすべて使い切ってしまったら、また同じ量を送ります。どうか私たちのために神に祈ってください」

この贈り物を受け取ったフィラレートは、主の慈しみに感謝して地面にひれ伏した。そして立ち上がり、天に向かって両手を広げながら、こう言った。

「主よ、わが神よ、あなたにすべての望みを託したこのあなたのしもべを見捨てずにおられたことを、感謝いたします。」

このような神の慈しみを目の当たりにして、フィラレートの妻は安心し、柔和な口調で夫に言った。

「夫よ、必要だと思うだけの小麦を私と子供たちのために分けてください。そして、隣人から借りた分も返してください。あなた自身は自分の分をとり、それを好きなようにしてください。」

フィラレートは妻の言葉通りにし、小麦を分け、自分用に五メルを残した。そして、その五メルを二日かけて貧しい人々に配った。このことが再びテオズヴを憤らせ、彼女は夫と一緒に食事をすることさえ拒み、子供たちと別々に、夫に内緒で食事をとった。　ある日、聖なるフィラレートは偶然、子供たちが食事をしているところを目撃し、こう言った。

「子供たちよ！　私を、たとえ父親としてではなくとも、客や旅人として、この食卓に迎え入れてくれ。」

子供たちは笑いながら彼を受け入れた。彼らが食事をしている最中、妻が夫にこう言った。

「ご主人様!　あなたが言うには、どこかに隠しているというその宝物を、いつまで私たちから隠し続けるおつもりですか？　もしかすると、あなたは私たちをからかって、愚かな子供たちを偽りの約束で弄んでいるのでしょうか？もしそれが本当なら、その宝を見せてください。そうすれば、私たちはそれを手に入れて食料を買い、以前のようにまた一緒に食事をしましょう。」

「もう少し待ってください」と、至福のフィラレートは答えた。「そうすれば、まもなく、その偉大な宝物があなた方に示され、与えられるでしょう。」

ついに、聖フィラレートは極度の貧困に陥り、自分や妻、子供たちの糧となっている数個の蜂蜜の巣箱以外、もはや何も持たなくなってしまった。しかし、そのような困窮の中でも、困っている人々が彼を訪ねてくると、パンがない代わりに、蜂蜜を分け与えた。　家族たちは、この調子では最後の糧までも失ってしまうと悟り、こっそりと蜂の巣へと向かい、残りの蜂蜜をすべて掻き集めようとしたが、見つかったのはたった一つの巣箱だけで、そこから残りの蜂蜜をすべて持ち去ってしまった。そして翌朝、 、また一人の物乞いがフィラレットのもとを訪れ、施しを求めた。 フィラレートは蜂の巣箱へ向かったが、そこにはもう何も残っていなかった。乞食に与えるものがないと悟ると、聖フィラレートは上着を脱いで彼に与えた。下着一枚で家に戻ると、妻は彼にこう言った。

「あなたの服はどこへ行ったの？まさか、それも乞食にあげたの？」

「蜂の巣のあたりを歩いていたんだ」とフィラレートは妻に答えた。「そこで置いてきたんだ。」

すると、息子がその場所へ行って、父の服が見つからないのを見て、そのことを母に告げた。母は、夫がふさわしくない姿でいるのを見るのが恥ずかしく、自分の服を男性の服に作り直して、フィラレートに着せた。

当時、ギリシャ王国の王座には、キリストを愛するイリーナ女王とその息子コンスタンティノス[8408]が就いていた。 彼はすでに成人していたため、若き皇帝コンスタンティノスと結婚するのにふさわしい、美しく、徳高く、高貴な乙女を見つけ出すべく、選りすぐられた信頼でき、分別のある人々がギリシャ王国全土に派遣された。 派遣された使者たちは、王の命令をより成功裏に遂行しようと、すべての地方、都市、さらには人里離れた村々までも入念に巡った。その過程で、彼らはパフラゴニアのアムニウスの村にもたどり着いた。

その村に近づくにつれ、彼らは遠くからでも、他のどの家よりも美しく、フィラレートの美しく堂々とした邸宅を目にした。 そこには、その地方の何らかの由緒ある裕福な地主が住んでいるのだろうと考え、彼らは使用人を送り込み、宿泊場所と食事を用意させようとした。しかし、皇帝の使節に同行していた兵士の一人が、彼らにこう言った。

「諸君、あの屋敷には行かないでください。外見は大きく美しく見えますが、中は空っぽで、快適な設備はおろか、必要最低限の物さえ見つかりません。そこには、この地方で誰よりも貧しい一人の老人が住んでいるのです。」

しかし、王の使節たちはその兵士の言葉を信じず、家来たちに命じて、与えられた任務を遂行させた。

一方、聖フィラレートは、自分の家に向かってくる人々を目にするやいなや、杖を手に取り、彼らを迎えに出た。地面にひれ伏して礼を捧げると、喜びをもって彼らを迎え入れ、こう言った。

「主が、確かに、皆様をこの僕のもとへ導いてくださったに違いありません。この粗末な住まいに、このようなお客様をお迎えできることを、この上ない光栄と存じます。」

その後、急いで妻のもとへ駆け寄ると、聖人は彼女にこう言った。

「愛するテオズヴァよ、遠くから来てくださった尊い客人をもてなすために、美味しい夕食を用意してくれ。私は彼らをとても気に入ったのだ。」

テオズヴァはこれにこう反論した。

「一体何を使って美味しい夕食を作ればいいのですか？この家には子羊も、鶏さえも一羽もいません。私たちが普段食べているヒユを茹でるくらいしかできませんし、それも油なしです。油やワインがいつこの家にあったか、思い出すことさえできません。」

しかし、夫は再び彼女にこう言った。

「せめて火を起こして、上の部屋を整え、私たちの古い象牙の食卓を洗ってくれ。あらゆる生き物を養ってくださる主が、私たちにも、あの男たちをもてなすための食事を与えてくださるだろう。」

フェオズヴァは夫の命令と願いを遂行し始めた。一方、その村の裕福な住民たちは、王の使節団がフィラレートの家に滞在していることを知ると、羊や雄羊、鶏や鳩、パンやワインなど、これほど多くの客をもてなすために必要なあらゆるものを急いで持ち寄った。 これらの供え物を受け取ったフェオズヴァは、それらを使って様々な料理を作り始め、二階の部屋で夕食会を催した。王の使節たちはここに集まって夕食をとりながら、極めて貧しい人の家にある部屋の豪華さや、金で輝きを放つ象牙製の豪華な食卓に驚嘆した。 しかし、何よりも彼らの心を打ったのは、主人の心の底から湧

[8408] イリナ皇后は、偶像破壊主義者であるレウ4世・ハザールの皇后である。熱心な聖像崇敬のため、彼女は夫から迫害を受けた。夫の死後、イリナは幼い息子コンスタンティノスと共に王位に就いた（780年）。 彼女の治世下で聖像崇拝が復活し、彼女の強い要望により第7回全地公会議が招集され、そこで聖像崇拝の正統性が宣言され、聖像破壊運動が非難された。 [公会議は787年にニカイアで開催された] イリーナとレウ4世の息子コンスタンティノスは、コンスタンティノス6世「ポルフィロゲネトス」皇帝として797年まで在位した。イリーナは息子の死後も802年まで統治を続けた。

き出るようなもてなしの心であった。その風貌も振る舞いも、　まさに「もてなしの父」アブラハムそのものだった。　客たちが食卓に着いていると、至福のフィラレートの息子ヨハネ――父にそっくりな青年――が部屋に入ってきて、さらに至福のフィラレートの孫たちも集まり、食卓で客たちに熱心に給仕を始めた。彼らを見つめながら、客たちはその礼儀正しく品のある振る舞いに感心し、フィラレートに尋ねた。

「教えてください、誠実な方よ、あなたには奥様がいらっしゃいますか？」

「はい、皆様」とフィラレートは答えた。「そして、この若者たちは私の子供たちと孫たちです。」

すると、王の使節たちは彼にこう言った。

「それでは、あなたの奥様をここへお呼びいただき、私たちにご挨拶をさせてください。」

フェオズヴァが現れた。彼女を見て――まだ美しいものの、すでに年配の女性であった――使節たちは尋ねた。

「娘はいますか？」

「私の長女には」と、至福のフィラレートは答えた。「三人の娘がいます。」

すると、客たちは続けた。

「そのお嬢様たちをここへ連れてきて、私たちに見せてください。というのも、私たちを遣わした王たちから、ギリシャ全土の若い娘たちをすべて見極め、その中から王の嫁にふさわしい最も美しい者を選び出すよう命じられているからです。」

すると、聖フィラレートはこう言いました。

「この言葉は私たちには当てはまりません、主君たち、支配者たちよ。私たちは、貧しく、みすぼらしい、あなた方のしもべに過ぎないからです。しかし、今は神が与えてくださったものを食べて飲んで、喜び、旅の疲れを癒やし、眠りについてください。そして明日は――主の御心が行われますように！」

朝、太陽が昇ると、フィラレートの高貴な客たちは目を覚まし、彼にこう言った。

「ご主人様、お孫娘たちを私たちのところへ連れてきてください。彼女たちに会いたいのです。」

「ご命令通り、皆様」と、至福のフィラレートは答えた。「ただ、その際、どうか私の言葉を寛大に聞いていただきたい。どうか皆様ご自身で、私の家の奥の部屋までお進みください。そこで、私たちの娘たちをご覧いただけます。彼女たちは、この貧しい住まいからまだ一度も外に出たことがないのですから。」

客たちはすぐに立ち上がり、フィラレットの後を追い、彼の家族の居間へと向かった。そこでは三人の娘たちが彼らを出迎え、謙虚かつ丁重に客たちに頭を下げた。　そこで、王の使節たちは、フィラレートの孫娘たちが、ギリシャ全土で目にしてきたどの娘たちよりも美しいことを目の当たりにし、感嘆と驚きを隠しきれず、こう言った。

「我々に望みを叶えてくださった主を感謝します。この娘たちのうちの一人が、我らの王にふさわしい花嫁となるでしょう。たとえ全宇宙をくまなく探したとしても、彼女たち以上に優れた者など見つからないでしょう。」

そして、王の身長にふさわしいとして、彼らは至福のフィラレートの長女であるマリアを王の嫁に選んだ。彼女は他の姉妹たちよりも背が高かったのだ。　この成果に満足した王の使節たちは、マリアとその父、母、祖父、そして親族全員――計三十人――を招き、彼らと共に王都コンスタンティノープルへと向かった。　彼らと共に、他の地域から選ばれた十人の乙女たちも同行した。その中には、ある高位の貴族ゲロンティオスの美しい娘もいた。この旅の途中、賢明で謙虚な至福のフィラレートのお孫娘は、友人である他の乙女たちに次のように語りかけた。

「ああ、私の姉妹たち、乙女たちよ！　私たち全員が、王に紹介されるという同じ目的のためにここに集まっているのですから、天の王が私たちのうちの一人に地上の王国を与え、王の妃として選ばれたとき、どう振る舞うべきか、互いに話し合っておきましょう。　私たち全員がこの高みに登ることは不可能であり、ただ一人だけが選ばれるのだから、その人は王としての威光の中で私たちを思い出し、その庇護の手を私たちから離さないでいてほしい。

貴族ゲロンティウスの娘は、マリアのこの言葉にこう答えた。

「皆さんに知っておいていただきたいのは、私以外の誰一人として、王の妃に選ばれることはあり得ないということです。なぜなら、私は高貴な家柄、富、美しさ、そして知性において、皆さん全員よりも優れているからです。あなたがたは貧しく、容姿も醜く、素朴な身でありながら、顔の美しさだけを頼りにして、どうして王宮に入ることができると期待できるというのでしょうか？」

この狂気じみた傲慢な言葉を耳にしたマリアは黙り込んだが、神の御心に身を委ね、祖父である聖なる長老の祈りに頼ることにした。

ついに使節団はコンスタンティノープルに到着し、乙女たちは王宮へと案内された。そこでは、彼女たちの到着が直ちに王の側近であり、宮殿を統括するスタヴリキオスに報告された。　真っ先にスタヴリキオスに紹介されたのは、ゲロンティオスの娘だった。彼女の傲慢さは、経験豊富な宮廷人の鋭い目からは隠しきれず、彼は彼女にこう言った。

「お嬢さん、あなたは美しく魅力的だが、皇帝の妻になることはできない。」

そして、彼女に惜しみなく贈り物を与えて、家に帰した。こうして、聖書の言葉*「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」*（ルカ18:14）が実現したのである。

その後、義人フィラレートの孫娘マリアが、母、祖父、そして親しい者たち全員と共に紹介された。彼らを見た王も、王母も、スタヴリキも、その心の優しさと品行の良さに深く感銘を受けた。また、皆はマリアの美しさにも大いに驚嘆した。彼女の顔には、柔和さ、謙遜、そして神への畏敬といった、その善良な資質がはっきりと表れていた。マリアは控えめに目を伏せて王の前に立っていたが、その頬には鮮やかな紅潮が広がっていた。王は彼女を大いに気に入り、彼女を自分の花嫁として婚約させた。 一方、彼女の次女は、王の側近である高貴なパトリキウス、[8409] コンスタンティキウスによって花嫁に選ばれ、三女はロンゴバルド族の統治者[8410] に嫁がされた。この血縁の結びつきを通じて、王と至福のフィラレートのお孫娘との結婚が盛大な祝宴を伴うものとなるよう配慮されたのである。　その祝宴には、王の重臣たちや民衆、そして至福のフィラレートの一族全員が参加した。王は至福の長老を心から愛し、親しみを込めて抱きしめ、その尊い頭に口づけをした。　フィラレートとその家族全員の敬虔さを称賛した王は、彼ら全員に多大な栄誉を授け、銀、金、宝石、豪華な衣服、大きくて美しい家屋、その他の財産を贈った。　このように聖なる長老を敬い、口づけを交わした後、王は彼と家族を、王が与えた壮麗な住居へと送り出した。

これほど豊かな贈り物を受け取ったフィラレートの妻や子供たち、そして家来たちは皆、フィラレートが何度も「神が彼らのために用意してくださった宝物を、秘密の場所に隠している」と語っていた言葉を思い出した。聖人の足元にひれ伏し、彼らはこう言った。

「お許しください、私たちの主よ、私たちは皆、あなたに対してどれほど愚かな罪を犯してしまったことか！　貧しい者や困窮している者たちへのあなたの寛大な施しを非難し、責めたことをお許しください。今になって初めて、私たちは*「貧しい者[と困窮している者]を思いやる者は幸いである！」*（詩編40:2）ということを確信しました。 まことに、人が困窮する兄弟に与えるものはすべて、神ご自身に与えるものであり、神はこの世で百倍の報いを与え、永遠の至福の命を授けてくださる

[8409] *パトリキウスの*称号*は*、当初は上院議員の子息のみに与えられ、ラテン語で「ランゲア」と呼ばれていた。その後、この呼称はローマ貴族の血筋を持つすべての人々に適用されるようになった。しかし、コンスタンティヌス皇帝はパトリキウスの称号を個人的な栄誉とし、最高位の官吏に授与されるものとしたが、世襲されることはなかった。

[8410] *ロンゴバルド族は*、ゲルマン系部族の一つである。

のです。神の御使いよ、あなたが貧しい人々への施しを行ったゆえに、主はあなたに、そしてあなたを通じて私たちすべてに、豊かな御恵みをお与えになったのです。

すると、その祝福された長老は天に向かって両手を広げ、こう叫びました。

「これを御心に適わせた神を賛美します。*『主の御名が、今より永遠に祝福されますように』*（詩編112:2）。

それから、フィラレートは家族の方を向き、こう言った。

「私の助言に耳を傾けてほしい。素晴らしい昼食を用意し、私たちの王であり主である方と、そのすべての重臣たちが、この宴にやって来てくださるよう懇願しよう。」

「お望みの通りです」と彼らは答え、「そのようにしましょう！」

宴会の準備がすべて整うと、聖人は家を出て、町やその周辺を歩き回り、物乞いやハンセン病患者、盲人、足の不自由な者、老人、体の不自由な人々を探し求めた。二百人ほどを集めると、彼らを自分の家へ連れて行き、最初は門の前に置いておき、一人きりで家族のもとへ戻ってこう言った。

「わが子らよ！ 王が重臣たちを連れて近づいてきている。もてなしの準備は万全か？」

「すべて準備は整っております、敬愛する父よ」と彼らは答えた。

聖人は乞食たちに手で合図を送ると、家来たちが言葉にできないほどの驚きを隠せない中、大勢の乞食や貧しい人々が家の中に入ってきた。そのうちの何人かをフィラレートは食卓に着かせたが、他の者たちは　場所が足りなかったため、床に座らざるを得ず、その最後列に家主自身も加わった。　これを見て、フィラレートの家族は、彼が「王」と呼んだのは、今や乞食の姿で彼らの家に現れたキリストご自身を指していたのだと悟った。そして、天の王の貴族たちとは、その祈りによって神に大きな影響力を持つ、すべての貧しい兄弟たちのことである。　そして、家来たちは、これほどの高名な地位に達し、女王の祖父であるにもかかわらず、施しへの愛を忘れず、今や乞食や貧しい人々の間に身を置き、まるで奴隷のように彼らに仕えている父の偉大な謙虚さに驚嘆した。そして彼らは言った：

– まさにこの方は、神の人であり、キリストの真の弟子である。キリストが「*わたしから学びなさい。わたしは心優しく、へりくだっているから*」（マタイ11:29）と仰せになった戒めを、しっかりと学んだ方である。

また、この福者は、すでにスパファリオス（[8411] ）であった息子のヨハネや、孫たちに対しても、食卓に付き添い、横たわっている兄弟たちに奉仕するよう命じました。その後、家族全員を呼び集め、福者はこう言いました。

「さあ、わが子らよ、私が神の憐れみを信じて約束した通り、あなたがたはまったく予期せぬ形で神から富を授かった。この約束は果たされた。教えてほしい、私にまだ果たすべき義務は残っていないだろうか？」

すると、彼らは以前の彼の言葉を思い出し、涙を流して、皆一斉にこう言った。

「まことに、主よ、あなたは神の御心にかなう者として未来を見通しておられます。しかし、私たちは愚かにも、尊い長老であるあなたを怒らせてしまいました。どうか、私たちの無知による罪を思い出さないでください！」

すると、聖人は彼らにこう言いました。

「主は慈悲深く寛大であられ、私たちが主の御名によって貧しい人々に施したわずかなものに対して、百倍の報いを与えてくださいました。もしあなたがたが永遠の命を受け継ごうとするなら、一人ひとりがこの貧しい兄弟たちのために金貨十枚ずつを捧げなさい。そうすれば、主はそれを、未亡人の二レプタのように、あなたがたから受け入れてくださるでしょう。」

[8411] *スパファリウス*とは、武器持ちであり、王の護衛である。

彼らは心を込めて、その願いを急いで果たした。そして、福者フィラレートは、貧しい人々に十分に食事を振る舞った後、一人ひとりに金貨を一枚ずつ与えて、彼らを見送った。

しばらくして、聖フィラレートは再び妻と子供たちを呼び寄せ、こう言った。

「我らの主は、*『私が戻ってくるまで、これを運用しなさい』*（ルカ19:13）とおっしゃいました。　そして、私もこの神聖な教えに従いたい。王から授かった財産の一部を売りたい。あなたたちはその一部を私から買い取り、私に金を渡してほしい。私にはそれが必要だからだ。もし買うことに同意しないなら、私はすべてを私の兄弟たち――貧しい人々――に配るつもりだ。私にとっては、女王の祖父と呼ばれるだけで十分なのだ。

彼らは彼の財産を点検し、評価した上で、60リトル[8412] の金でそれを買い取った。この金を受け取った聖人は、それを貧しい人々に配った。このことを王とその重臣たちが知ると、フィラレートの寛大さに大いに満足し、それ以来、この義人に貧しい人々に配るための多くの金を与えるようになった。　ある日、フィラレートは、大きさも外観も全く同じ三つの箱を用意し、そのうちのひとつには金貨を、もうひとつには銀貨を、そして三つ目には銅貨を詰め込んだ。　その管理は、彼の忠実な召使いカリストに任せた。貧しい人が助けを求めてやって来ると、フィラレートはカリストに、その願いを聞き入れるよう命じた。召使いが、どの箱からその人に施すべきかと尋ねると、聖人はこう答えた。

「神が命じられる箱から与えなさい。神は貧しい者も富める者も、すべての人の必要を知っておられ、御心のままにすべての生き物を満たしてくださるからである（詩編144:16）。」

この義人は、施しを求める貧しい人々同士の違いを示すために、このように語ったのである。というのも、かつては裕福であったが、様々な災いや逆境によって破産し、すべての財産だけでなく、パンさえも失ってしまった物乞いがいるからだ。しかし、彼らは以前の衣服を多少残しており、その下で自分の困窮を恥じて隠し、やむを得ない状況になって初めて助けを求めているのである。　また、わざと粗末な服を着て、自分の富を隠し、貧しさを装って施しをだまし取る物乞いもいます。こうした者たちは、すでに強奪者や偶像崇拝者と呼ぶことができます。これらすべてを心に留め、慈悲深いフィラレートはこう語りました。

「神は一人ひとりの困窮を知っておられ、御心のままに、施しをする者の手を導かれるのだ。」

そうして、この至福の貧者愛好家ご自身も、施しをする際、中身を確認することなく手を宝箱に差し入れ、箱から偶然取り出したもの――銅貨、銀貨、あるいは金貨――をそのまま求めている者に手渡していた。　そして、この尊い長老は、神を証人として呼び、誓いを立ててこう語った。身なりの整った人を見かけるたびに、その人は服の見た目から貧しいとは考えられなかったため、銅貨を取り出そうと心に思いながら箱に手を伸ばしたが、　そのたびに、彼の手は思わず銀や金の入った箱に伸びてしまい、その施しを乞う者に渡していた。　また時には、ぼろ服をまとった全く異なる人物がフィラレートに助けを求め、彼はより寛大な施しをしようと手を伸ばそうとしたが、その瞬間、まるで手が止まるかのようにして、ごくわずかな額しか取り出さなかった。　しかし、これらすべては偶然に起きたのではなく、私たちの真の必要を知っておられる神の摂理によって導かれていたのだ。

四年に一度、至福のフィラレートは孫娘である女王を訪ねるために王宮を訪れましたが、そこで紫の衣に金の帯を身に着けることは決してありませんでした。もし彼がそのような豪華な衣装を身に着けるよう強要されると、彼はこう言いました。

[8412] リトラ――ポンド。ビザンツの重量単位で、72ゾルトニクに相当する。銀では最大42ルーブル、金では最大606ルーブルの価値があった。この単位は、粉体や液体の量を測る単位としての「リトラ」とは区別する必要がある。

「私を放っておいてください。私は、神が私を貧困と無名からこのような高みへと引き上げてくださったことを、神に感謝し、その偉大で驚くべき御名を賛美します。女王の祖父と呼ばれるという名誉だけで、私には十分ではないでしょうか。それだけで、私にはすでに十分なのです。」

そして、この聖人はこれほどまでに謙虚であり続けたため、いかなる聖職の位や称号も望まず、単に「アムニアトスのフィラレート」と名乗っていた。このように、生涯を謙虚さと慈善に捧げて過ごしたフィラレートは、その生涯の聖なる終わりに近づいた。　神からそのことを告げられた聖フィラレートは、まだ健康なうちに、誰にも知られぬよう、忠実な使用人を一人連れて、コンスタンティノープルの修道院の一つ、「ロドルフィア」と呼ばれる場所へと向かった。そこでは、修道女たちが苦行の生活を送っていた。　修道院の必要のために多額の金を修道院長に託した後、彼は新しい棺を用意するよう頼み、こう言った。

「私は、あなたがたに知ってほしいが、誰にもこのことを漏らさないでほしい。数日後には、私はこの世の命を離れ、別の世界、別の王のもとへ移り住むことになる。そして、私の遺体をこの新しい棺に納めてほしいとお願いする。」

また、彼は自分の使用人に対し、自分から明かすまでは、このことを誰にも話さないよう命じた。その直後、フィラレートは全財産を貧者や困窮者に施し終えると、その修道院で病に倒れ、床に伏した。　九日目に、彼は妻や子供たち、そして家族全員を呼び寄せ、穏やかで優しい声でこう語った。

「わが子らよ、知っておいてほしい。今日、聖なる王が私を御許へと呼んでおられる。だから私はあなたたちを後にし、王のもとへ行くのだ。」

しかし、彼らはその言葉を理解できず、フィラレートが地上の王のことを言っているのだと思い込み、こう反論した。

「あなたは今、病気で寝込んでいるのだから、今日王のもとへ行くことなどできません。」

するとフィラレートは彼らにこう答えた。

「私を連れて行って王に謁見させようとする者たちは、すでに準備を整えているのだ。」

その時、彼らはフィラレートが天の王のもとへ旅立つことを告げているのだと悟り、古の時代にヨセフとその兄弟たちが父ヤコブのためにしたように（創世記50:1, 10）、大声で泣き叫んだ。　フィラレートは彼らに手で静まるよう合図を送ると、こう語りかけ、彼らを慰め、教え始めた。

「わが子らよ、あなたがたは、私が若き日からどのような生活を送ってきたかを知り、見てきた。神もご存知の通り、私は他人の労苦に頼って生きたのではなく、自らの労苦によって糧を得てきた。　また、神が私に与えてくださった富によって、私は高ぶることなく、高慢を避け、謙遜を愛した。それは、「*この世の富める者たちには、自分を高く思わないようにと戒めよ*」（テモテへの手紙一6:17）と命じられた使徒の言葉に従うためであった――自分を高く思わないこと、高ぶらないこと。　また、私が貧困に陥ったときも、嘆いたり神を非難したりはせず、義人ヨブのように、神が御愛ゆえに私を懲らしめてくださったことを感謝し、　そして、私の感謝の念に満ちた忍耐をご覧になり、再び私を貧困から救い出し、王や諸侯たちとの名誉ある交わりと親交へと引き上げてくださった。そして、そのような高みに引き上げられたときでさえ、私の心は常に深い謙遜の中に留まっていた。*「主よ！　私の心は高ぶらず、私の目は上向きにならず、私にとって、手の届かない偉大なものには踏み込まなかった」*（詩篇130:1）[8413]。そして、地上の王が私に授けてくださった富を、私は地上の利益のために用いることはせず、貧しい人々の手を通じて天の王に捧げました。　ですから、愛する皆さん、この模範に倣ってください。もしさらに多くの善行を積むならば、さらに大きな至福に与か

[8413] この詩篇の節において、ダビデは神の前で、自分には高慢な心も傲慢な目も持たず、心が謙虚であったのと同様に、目にもその謙虚さを表していたと証言している。「偉大で驚くべき事柄を歩む」とは、偉大で栄光ある行いを誇示することを意味する。　詩篇の作者は、高い地位にありながらも、高慢よりも謙遜を重んじていたことを謙虚に認めている。それゆえ、言葉でも行いでも、自分以上の存在であるかのように振る舞うことはなかった。

ることでしょう。はかない富を大切にするのではなく、私が今向かっているその場所へ送ってください。あなたの財産をここに置き去りにしてはいけません。そうすれば、見知らぬ人々や、あなたを憎む敵がそれを悪用することになります。　旅人へのもてなしを忘れないでください（ヘブライ人への手紙13:2）。未亡人を擁護し、孤児を助け、病める者や牢獄に閉じ込められた者を訪ねてください。教会との交わりを避けず、他人のものを奪わず、誰をも傷つけず、悪口を言わず、たとえ敵の悲しみや災いであっても、それを喜んではなりません。　死者を葬り、聖なる教会で彼らの追悼を行ってください。また、私のような不適格者についても、あなたがた自身が至福の永遠の命へと移るまで、祈りの中で覚えていてください。

魂に有益な教えを終えた後、至福のフィラレートは息子のヨハネにこう言いました。

「あなたの息子たち――すなわち私の孫たちを、私のところへ連れてきてくれ。」

彼らがやって来ると、彼は彼らに、今後の人生で何が起こるかを告げた。長男の孫にはこう言った。

「お前は遠く離れた土地から伴侶を選び、彼女と敬虔かつ賢明に暮らすことになるだろう。」

次男にはこう言いました。

「お前は24年間、修道士の身として、キリストの軛を立派に担い、神に喜ばれる生き方をしたのち、主のもとへ旅立つだろう。」

また、三番目の孫に対しても、この聖人は未来を予言した。　そして、この聖人の予言はすべて、後にその子孫たちにおいて実現した。古代のパトリアルヒ・ヤコブと同様に、この聖なる人もまた、預言者のように未来のすべてを見通し、孫たちの運命を明確に予言したのである。フィラレートのもとには、他の者たちと共に、二人の孫娘たちもやって来て、彼にこう言った。

「父よ、私たちにも祝福をお与えください！」

「主があなた方を祝福してくださいますように」とフィラレートは彼らに言った。「あなた方は、この罪に満ちた世から離れ、その肉欲に汚されることなく、貞潔のうちに生涯を過ごし、短い間ではあるが、神に喜ばれるように主に仕えた後、主から偉大な恵みを受けるにふさわしい者となるでしょう！」

そして、この義人の臨終の言葉はすべて実現した。　というのも、この二人の敬虔な乙女たちは、コンスタンティノープルにあった聖母マリア女子修道院に入り、12年間にわたり、処女の清らかさ、断食、祈りの徹夜、その他の修道生活の中で精進した後、二人とも同時に、主のもとで安らかに息を引き取ったからである。

妻や子供たち、すべての親族、そして全世界のために祈りを捧げた後、至福のフィラレートは、その顔を太陽のように輝かせ、喜びに満ちてダビデの詩篇を歌い始めた。「[8414]」（詩篇100:1）。

詩篇を唱え終えると、部屋全体が（まるで香油が注がれたかのような）不思議な芳香に満たされた。その詩篇の後、聖人は「*天にまします我らの父よ*」と祈りを唱え始め、　「*御心が行われますように！*」と唱えた時、天に向かって両手を挙げ、寝台の上で体を伸ばすと、主のもとへ魂を委ねた。その時、彼は生後90歳であった。しかし、その高齢にもかかわらず、彼の顔は変わることなく、熟したリンゴのように、言葉では言い表せない美しさで輝いていた。

聖人の帰天の報を耳にした皇帝と皇后、そして貴族たちは急いで修道院へと駆けつけ、フィラレート聖人の聖なる御顔と御手に口づけをした。そして皆、彼の死を悼んで涙を流し、彼の追悼として貧しい人々に惜しみない施しを捧げた[8415]。

フィラレートの棺が埋葬の地へと運ばれたとき、すべての人の目に、驚くべき、そして胸を打つ光景が飛び込んできた。　彼の埋葬に際し、様々な都市や村々から数え切れないほどの乞食や貧し

[8414] 「主よ、私はあなたへの慈しみと裁きを歌います」

[8415] 聖フィラレートは、788年に孫娘が結婚した後、4年間生き、したがって792年に亡くなった。

い人々が集まり、彼らは皆、叫び声を上げ、泣きじゃくりながら、まるで蟻のように棺の周りに押し寄せ、ある者は足を引きずり、ある者は這いずりながら、こう叫んでいた。

「おお、主よ、神よ！　なぜあなたは、私たちからこのような父であり、養い主である方を奪われたのですか？彼がいなければ、誰が私たち裸で飢えた者たちに食べ物を与え、衣服を着せてくれるのでしょうか？誰が旅人を自分の家に迎え入れてくれるのでしょうか？誰が、路上に放置された死者を拾い上げ、尊厳ある埋葬を施してくれるのでしょうか？私たちの恩人を失うくらいなら、私たち全員が彼より先に死んだほうがましでした！

これらの貧しい人々の涙を見て、その叫び声を聞いて、王と王妃、そして棺の後ろを共に歩いていた貴族たちまでもが心を動かされ、涙を流した。

聖フィラレートの遺体を用意された墓所へと運んでいる最中、突然、群衆の中にカヴォココスという名の貧しい男が現れた。彼は聖フィラレートから頻繁に施しを受けていた人物であった。　この男は生まれつき邪悪な霊に取り憑かれており、新月の夜に憑依されるたびに、何度も火の中や水の中に投げ込まれていた。この貧しい男は、フィラレートが亡くなり、その聖なる遺体がすでに埋葬の地へと運ばれていると聞くや、すぐに棺の後を追って駆け出した。　そして、彼が棺のそばまで駆け寄ったとき、彼の中に宿っていた悪霊は、聖人に対する彼のそのような熱意を我慢できず、彼を苦しめ始め、聖人を冒涜するように煽り立てた。病人は犬のように吠え、故人の遺体が横たわっていた棺に強くしがみつき、そこから引き離すことは不可能だった。　やがて、その寝台がすでに用意された墓まで運ばれると、悪霊は苦しむ者を地面に倒し、彼の中から出て行った。すると、その男は健康な姿で立ち上がり、神を賛美し、栄光を帰した。　民衆は皆、この奇跡に驚き、そのしもべフィラレートにこのような恵みを授けてくださった神を賛美した。その後、彼の尊い遺体は、女子修道院の、生前に自ら選んだまさにその場所に用意された棺に納められた。

このように、神は慈悲深い者を、現世においても（先ほど読んだ箇所から見てとれるように）、また来世においても（これから述べる通り）祝福してくださる。

フィラレートの親しい友人の一人である、賢明で敬虔、そして神を畏れるある人物は、神を証人として呼び、次のように誓いを立てて語った。

「ある時、至福のフィラレートが亡くなってからしばらく経ったことですが」と彼は語る。「夜、私は恐怖に駆られ、言葉では言い表せないような場所に運ばれたのを感じました。　そこで私は、輝かしい姿をしたある人物を見かけました。その人物は、轟音と威圧感を伴って流れる炎の川を私に見せましたが、その光景は人間なら誰一人として耐えられないほどでした。一方、川の向こう岸には、言葉では言い表せないほどの喜びと歓びに満ち、言葉では言い表せない香りを放つ、美しい楽園が見えました；　巨大で美しく、実りの多い木々が、そよ風になびいて、不思議なざわめきを奏でていた。*「神を愛する者たちのために神が備えてくださった」*（Iコリント2:9）その楽園のすべての恵みを、言葉で伝えることさえ不可能である。

そしてそこで、私は白い衣をまとった多くの人々が、喜びながらその楽園の木々の実を味わっているのを見ました。その人々を注意深く見ていると、ある一人の男性（それはフィラレートでしたが、私は彼だと気づきませんでした）が、明るい色の衣を身にまとい、その庭園の中央にある黄金の玉座に座っているのが見えました；　その片側には、手にろうそくを持った、新たに救われた子供たちが立っており、もう片側には、白い衣をまとった多くの貧しい人々や困窮した人々が、一人ひとりが彼に近づきたいと願って、彼の周りにひしめき合っていた。　すると、そこに、顔色は明るいものの恐ろしい風貌をしたある若者が現れ、その手には金の杖を握っていた。そこで私は、恐れと戦慄を抱きつつも、あえて彼に尋ねた。

「主よ！　あの光り輝く玉座に、あの光のような姿の男たちの真ん中に座っているのは、いったい誰でしょうか？　それはアブラハムではないでしょうか？」

すると、その明るい若者は私にこう答えました：

「あれはフィラレート・アムニアテスです。彼は、貧しい人々への深い愛と施し、そしてアブラハムのように誠実で清らかな生涯を送ったゆえに、ここに留まっているのです。」

その後、この新たなアブラハム、聖なる義人フィラレートは、その明るい眼差しで私を見つめると、私を呼び寄せ、静かにこう言った。

「子よ、あなたもここに来て、同じ恵みを味わいなさい。」

すると私はこう答えました。

「できません、至福の父よ。あそこまでたどり着くことはできません。あの燃える川が私を恐れさせ、立ちはだかるからです。その川を渡る道は狭く、橋も渡りにくく、多くの人がその中で火に焼かれています。私も同じ場所に落ちてしまうのではないかと恐れています——そうなったら、誰が私をそこから救い出してくれるのでしょうか？」

すると、聖人はこう言われました。

「恐れるな、勇気を持って渡りなさい。今ここにいる者たちは皆、同じ道を通ってここに来たのだ。この道以外に道はない。だから、子よ、何の恐れもなく私たちのもとへ渡ってきなさい。私が助けてあげよう。」

そして、聖人は私を呼び寄せようと、手を差し伸べた。　私は勇気を奮い起こし、無事に川を渡り始めた。そして聖人の手に近づき、それに触れた瞬間、この不思議な幻影はたちまち消え去った。私は目を覚まし、苦々しく泣きながら、心の中でこう呟いた。「果たして私は、あの恐ろしい川をどう渡り、天国の住処にたどり着くことができるのだろうか？」

この物語は、至福のフィラレートの親族の一人が誓いを立てて裏付けたものであり、神の御名によって貧しい人々に施しを行う者が、神からどのような恵みを受けるかを知らせるためである。

一方、聖テオズヴァは、　聖フィラレートの妻は、夫の尊い遺体を葬った後、コンスタンティノープルから故郷であるパフラゴニアの地へ戻り、そこで皇帝と皇后から授かった富を、かつてペルシャ人によって焼き払われた神の聖堂の建設と修復に費やした。　また、彼女はそれらの教会に聖器や祭服を寄進した。　さらに彼女は、その地に修道院や旅人宿、貧者や病人のための避難所を設立し、その後再びコンスタンティノープルへ赴き、孫娘であるマリア皇后のもとを訪れた。そこで、残りの生涯を神への奉仕に捧げた後、彼女は安らかに主のもとで息を引き取り、その義なる夫の墓の傍らに埋葬された。

彼らの祈りによって、私たちも審判の日に、唯一の寛大で慈悲深い主イエス・キリストから憐れみを受けられますように。主と、その初めなき父と聖霊に、世々限りなく栄光と誉れがありますように。アーメン。

トロパリオ、第4調：

アブラハムの信仰に倣い、ヨブの忍耐に続き、フィラレート神父よ、あなたは地の恵みを貧しい人々と分かち合い、その欠乏を勇敢に耐え忍ばれました。このゆえに、私たちの神、キリストは、あなたを輝かしい冠で飾られました。どうか、キリストに祈り、私たちの魂が救われますように。

コンダク、第3調：

まことに、あなたの選択はすべてにおいて完全であり、すべての賢者たちによって賢明であると認められています。あなたは、天上の永遠のものを求め、この世の短命なものを捨て去ったからです。それゆえ、慈悲深いフィラレートよ、あなたは永遠の栄光をふさわしく獲得されたのです。

12月15日

12月2日（旧暦）

聖預言者アバクムの記念日

12月2日の記念日

聖預言者アバクムはアサファトの息子であり、シメオンの部族の出身であったと、聖エピファニオス・キプロス人は著書『預言者たちの生涯』の中で述べている。聖なる教父たちによって記録された伝承[8416] によれば、アバクムの故郷はベツゾハルという小さな村であり、別名ヴィエザヒルとも呼ばれていた。

アバクムという名[8417] ——は、彼が生まれた際に与えられたものであり、彼が精神的に強靭な修行者となることを予兆していた。成人すると、彼は神の御名の栄光のために、自国民の不法を糾弾することに熱心に立ち上がった。　彼自身も、主への熱意に燃え、神の戒めを厳格に守り、徳の道を堅く歩み、主から預言の賜物を授かった。

アバクムは、敬虔なユダヤの王ヒゼキヤの治世の後、不義な王たち——ヒゼキヤの息子マナセ、そしてその後マナセの息子アモン——が王位に就いていた時代に、預言を行い、生きた[8418] 。聖書の証言（歴代誌下33:9；　列王記下21:2–10）の証言によれば、マナセの治世下のユダヤの民の間には絶え間ない争いと悪行が横行していた。強い者が弱い者を虐げ、公正な裁きを求める場所などどこにもなかった。　マナセ王自身も、無実の人々を迫害した最初の者であった。彼は非常に多くの無実の血を流し、その血でエルサレムを端から端まで満たしたほどであった（列王記下21:16）。　伝承によれば、この頃、罪のない者たちの中には聖なる預言者イザヤも含まれており、王や民の不正や不義を糾弾した他の多くの者たちと同様に、彼もまた苦難に遭った。

その後、神に罰せられ、アッシリア人に捕らえられたマナセ王は、悔い改め、真の神に立ち返った。　しかし、彼が蒔いた悪は、すでにユダヤ人の民の間に深く根を下ろしていた。マナセの後を継いだのは不敬虔な息子アモンであり、彼は父と同様に、粗野な偶像崇拝に没頭していた。

預言者ハバククは、同時代の人々の堕落を深く嘆いた。どこにも正義を見出せず、彼は主に向かって叫び、その悲しみを吐露した。

「主よ、いつまで私は叫び続けても、あなたは私の声を聞かれないのでしょうか。暴力を訴え続けても、あなたは救ってくださらないのでしょうか。　なぜ、私に悪行を見させ、災いを見させられるのですか。略奪と暴力が私の目の前にあり、敵意が湧き上がり、争いが起こっています。それゆえ、律法は力を失い、正しい裁きはありません。不義な者が義人を打ち負かすため、裁きは歪められているのです（ハバクク1:2–4）。

こうして預言者は、人々の不法を目の当たりにし、神ご自身による正しい裁きを待ち望みながら、主に叫び求めた。これに対し、主は御自身の選ばれた者に、普遍的な不義に対する懲罰がまもなく訪れることを告げられた。　神の御命により、預言者ハバククは、当時では信じがたいほど恐ろし

8416 キプロスのエピファニオス福者およびイスパリアの聖イシドール。

8417 アバクム——ヘブライ語で本来は「抱きしめる者」「包み込む者」を意味し、後に「強き闘士」「修道士」を意味するようになった。

8418 アバクムの預言者としての活動の始まりは、マナセの治世の、この不敬虔な王がアサルガドンの手に捕らえられ、監禁中に謙虚になり悔い改めた時期に遡る。 アバクムの預言は紀元前660年から始まり、アモンの後継者である敬虔な王ヨシヤの治世を経て、紀元前611年までを網羅している。

い出来事、すなわち神殿とエルサレムそのものの破壊、そしてバビロン捕囚[8419] をユダヤ人たちに予言した。

預言者は、この懲罰の道具として、主がカルデア人を選ばれたことを明確に指摘した[8420] ——彼らは獰猛で手に負えない民であり、他者の集落を支配するために地の果てまで素早く駆け巡る。

恐ろしい侵攻を戦々恐々と待ちわびながら、預言者ハバククは困惑した。果たして、義なる主は、高慢で不義なカルデア人たちに、御自身の選民を完全に滅ぼすことを許されるのだろうか。 この懲罰が一時的なものであることを願い、彼は主からの新たな啓示を待ち望み、その祈りの待ち望みの中で、敵の接近を知らせるために城の塔から遠くを鋭く見張る見張り番のようであった[8421] 。 彼は、かつて主がエジプトの奴隷状態から救ってくださったように、バビロンの奴隷状態からユダヤの民を救ってくださるよう、熱心に主に祈り、主が彼に語りかけてくださるのを待ち望んだ。

すると主は御自分の預言者に、これらの災いの中における選民の救いはすべて信仰にあること、そして高慢で抑制のきかないカルデア人たちは、彼らが敗北した諸国民に用意したのと同じ運命を自ら味わうことになることを明らかにされた（ハバクク2:4）。 その後、預言者ハバククは、神から課せられる試練を前にして同胞を絶望に陥らせないよう、カルデア人の滅亡に関するたとえ話を語り、抑圧者たちに五倍の災いを告げた（ハバクク書2:9–19）。 このたとえ話の中で、彼は、御自分の民を救うために歩まれる真の神の偉大さの前において、偶像やカルデア人の力のすべてがいかに無に等しいかを示した。預言者は、天からの啓示により、神が御自分の民を救うために、木陰の茂る山（ファラン）から来られること、 御自身の油注がれた者を救うために来られ、やがて全地が、水が海を満たすように、主の栄光の知識で満たされる時が来ることを予告した（ハバクク3:13）[8422] 。

[8419] 預言者ハバクク書（ハバクク 1:6–12）。マナセとその息子の治世における民の不義に対するこの懲罰については、列王記下 21:12–14にも記されている。

[8420] カルデア人——ヘブライ語では「*ハシディム*」——は、アブラハムの兄弟ナホロの息子ヘセダに由来する（創世記22:22）。セム語族に属するカルデア人は、当初、メソポタミア北部の山岳地帯、アルメニアに近いヴァン湖の南方に居住していた。 この古代の地から、カルデア人はユーフラテス川沿いに、南および東へとメソポタミア全域やバビロニアへと移住し、やがて支配的な民族となった。 アッシリアの支配下では、彼らはアッシリアと共に多くの征服を行い、バビロニアがアッシリアから分離した後、ナボポラッサル、とりわけネブカドネザルの治世下で、多くの民族や王国を打ち破った。征服の際、カルデア人は至る所で極めて残忍かつ好戦的であった。

[8421] （ハバクク書 2:1）。 この比喩は、山や高台に見張り塔を築き、見張りが集落への危険をいち早く察知し、敵の接近や勝利・敗北を告げ知らせるという慣習に由来する。聖なる預言者たちは、いわば神によってある高みに置かれた見張り役であり、神の御心を観察し、告げ知らせるために遣わされたのである。 *この神聖な*見張り役として、聖預言者ハバククは、この世のあらゆるものから身を切り離し、霊を覚醒させ、神の民に対する御心を明らかにしてくださるよう、神に熱烈に祈り続けた。そのような状態にある中、彼は、神の光の束が自分の心に差し込み、心の目を照らし、主が彼に何を告げられるかを、畏敬の念を持って待ち望んでいた。

[8422] ここでは、ユダヤ人がバビロン捕囚から解放されることだけでなく、人類全体の救いも予言されている。このように、この預言はメシア的な性格を持つものである。 パレスチナに対して南に位置し、木陰の深い森に覆われたファラン山があった地域を指し示しながら、ハバククはユダヤ人たちに、南の方からやって来る民によって、彼らがバビロンの奴隷状態から解放されることを明らかにした。 実際、ペルシャの王キュロスは、パレスチナに対して南に位置する地域からメディア人とペルシャ人を率いてきて、バビロニア人を征服し、ユダヤ人を解放した。しかし、預言者の視線は、さらに別の奴隷状態——すなわち、全人類が罪によって縛られている状態——からの解放、すなわち人類の再生をも予見していた。聖 テオドリトスの解説によれば、アバクムはこれらの言葉をもって、「エルサレムの南に位置するベツレヘムで成し遂げられた、神であり我らの救い主の受肉を予告している」のである。聖なる教会は、神の御母を、あたかも聖霊に覆われた美徳の山であるかのように、その「神の恵みに覆われた山」と理解している。 「神の恵みによって覆われたその山を、洞察力あるアヴァクームは鋭い眼差しで見抜いた」——教会はカノンの中でこう謳う——「『あなたからイスラエルの救い主が現れる』と聖なる方に告げ、私たちの救いと刷新をもたらした」。 「来たるべきキリスト、我らの神は、遅れることなく来られ、聖霊に覆われた森の山から、汚れなき処女より生まれ出でられる。古の預言者はこう告げている」（ヴァイの週の第4歌）。 「キリストよ、あなたは処女より生まれ、称賛すべき山、木陰に覆われた森より来られた」（キリスト降誕の第4歌）。概して、すべての教会カノンの第4歌の基礎には、主が御自身の民を救うために来られること、すなわち「御自身の油注がれた者たちを救う」というアバクムの預言が据えられている。 アバクムの預言がこのよう

ネブカドネツァルがエルサレムに迫ったとき、伝承によれば、預言者ハバククは都を離れた。災難がもはや避けられず、これほど強力な征服者に対する抵抗は無益であることを知っていた預言者は、故郷の荒廃を目撃せず、また征服者の残虐さを免れるために、悲しみを抱きつつ故郷を去った。神の御指示により、ハバククはアラビアの地、オストラキネという町[8423] に定住し、敵が故郷から退去するまで、自ら進んで亡命者としてそこで暮らした。

カルデア人が去った後、彼は故郷に戻り、その惨状を嘆き、生き残った民と共に農耕に従事した。民のために神に祈りを捧げながら、彼はバビロンから捕囚たちが帰還するのを待ち望んでいた。

ある日、収穫の最中、預言者はスープを煮込み、パンを手に取って、刈り取り人たちにこの昼食を届けるために畑へ向かった。しかし、道中で主の御使いが現れ、こう言った。

「この食事をバビロンのダニエルのところ、すなわち獅子の穴へ持って行きなさい。」

その頃、実際に、バビロンの王の宮廷にいた預言者ダニエルは、不敬虔なバビロニア人たちの憎しみにより、獅子の穴に投げ込まれていた。

しかし、アバクムはバビロンの街を知らなかったため、天使にこう答えた。

「主よ！　私はバビロンを一度も見たことがなく、獅子の穴も知りません。」

すると、主の御使いは御霊の力によってハバククを捕らえ、髪をつかんでバビロンへと運び、ダニエルが投げ込まれた穴の真上に立たせた。

すると、アバクムは叫んだ。

「ダニエルよ！ダニエルよ！神があなたに送ってくださった食事を召し上がってください。」

するとダニエルは神に感謝し、こう言った。

「神よ、あなたは私を覚えておられ、あなたを愛する者を見捨てられませんでした。」

ダニエルは立ち上がり、その食事を口にした。すると、主の御使いは瞬く間にアバクムを元の場所に戻した。

ダニエルへのこの奇跡的な訪問の後、預言者アバクムは、収穫作業中の仲間たちのところへ戻り、起こったことを誰にも話さなかった。彼は、ユダヤの民がバビロンからエルサレムへ主によって連れ戻されることを悟った。それは、彼自身がバビロンへ奇跡的に移され、そこから連れ戻されたのと同じように。　しかし、この神の民に対する試練は70年間続き、ハバククはユダヤ人が捕囚から帰還するのを生き延びることはできず、老衰で亡くなり、自身の畑に栄誉をもって埋葬された[8424] 。

コンダク、第8調:

南より全宇宙に、処女からなる神の到来を告げ知らせた、神の御言葉を語るアバクムよ。神聖なる守護者の御前で、光を放つ天使の言葉を聞き、キリストの復活を世界に告げ知らせた。それゆえ、我らは喜びをもって汝に呼びかける。「喜びなさい、預言者たちの輝ける慈愛よ。」

に明確なメシア的意味を持つことから、キリスト教会は彼に「神に語りかける者」という称号を与えた。（賛美カノン、第4歌、イルモス）。– 上記のハバククの祈りの歌は、神の全能性と神への揺るぎない希望を描き出す、教会カノンの第4歌の基礎となっている。

[8423] オストラキナは、アラビア、パレスチナ、エジプトの国境に位置する都市である。

[8424] 預言者アバクムの死は、紀元前約600年に起こった。4世紀の教会史家エウセビオス・ケサリウスによると、預言者アバクムの墓は、ユダ族の領地にあるケイラ、あるいはキレにあるとされていた。 5世紀の教会史家ソゾメンの証言によれば、この聖預言者の聖遺骨は、神の啓示により、テオドシウス2世（408–450年）の治世中に、聖預言者ミカの聖遺骨と共に発見された。　両預言者の遺体は、当時エレウフェロポリス教会の司教であったゼヴェンヴが、神からの夢によってその場所を告げられた。

聖殉教者ミロピアの受難

記念日：12月2日

聖処女ミロピアは、エフェソス[8425] の出身であった。彼女の両親はキリスト教徒であった。父が亡くなった後、彼女は聖なる洗礼を受けた。　母によって神を畏れる心で育てられた彼女は、聖使徒フィリッポスの娘の一人である聖殉教者エルミオニアの墓を訪れることに熱心でした。彼女は聖エルミオニアの聖遺物から滲み出る癒しの聖油を取り、それを病人に与えて癒やしました。

当時、デキウス帝が統治していた[8426] 。彼がキリスト教徒への迫害を開始すると、ミロピエの母は彼女を連れて、一族の領地があったヒオス島[8427] へと移り住んだ。そこで彼女は娘と共に、自宅に閉じこもって神に祈りを捧げながら暮らしていた。ある日、ヌメリアヌス公がこの島を訪れた。彼の命令により、キリストの信仰を告白したとして、兵士という身分でありながら、素晴らしく敬虔な人物であった至福のイシドールが捕らえられた。彼はキリストを否定することを拒み、偶像崇拝を拒絶したため、公爵は彼に様々な拷問を加えた後、剣による処刑を宣告した。　その後、彼の遺体は野獣や鳥に食われるよう荒野に投げ捨てられ、キリスト教徒たちが殉教者の遺体を盗み出さないよう、少し離れた場所に見張りが配置された。　神聖な熱意に満たされた聖処女ミロピアは、夜、侍女たちを連れてやって来て、密かに殉教者の遺体を運び出し、尊厳をもって葬儀の祈りを捧げた後、あらかじめ用意された場所に彼を葬った。

イシドールの遺体が盗まれたことを知った公爵は、警備兵たちを鎖で縛り上げ、島中を引き回して拷問するよう命じ、定められた時間までに盗まれた遺体を見つけ出さなければ、彼らの首を刎ねると宣言した。

聖ミロピアは、鎖で縛られ引き回される衛兵たちの苦しみを見、彼らが死刑に処されることを耳にすると、心を動かされ、こう考えた。

「もし、私が密かに遺体を持ち去ったせいで、これらの衛兵たちが苦しみを受け、処刑されるのであれば、神の裁きの日、私は悲しみに暮れることになり、あの人々を殺害した罪を背負った私の魂は苦しむことになるだろう。」

そして、皆が予想もしないことに、彼女は兵士たちに向かって叫んだ。

「友よ！　あなたがたが眠っている間に、私はあなたがたが殺したその遺体を持ち去ったのです。」

これを聞いた兵士たちは、直ちに彼女を捕らえ、ヌメリアヌス公の前に引き出し、こう言った。

「殿、死体を盗んだのはこの女です。」

公爵は聖女に尋ねた。

「彼らがあなたについて言っていることは本当か？」

「その通りです」と聖女は答えた。

「この忌々しい女め、よくもそんなことをしたな！」と公爵は叫んだ。

[8425] エフェソスは、小アジアのアシア州の主要都市であり、エーゲ海からほど近い、小アジア西岸のカイストル川沿いに位置している。エフェソスは商業の中心地として名高かった。ここには、有名な異教の神殿、アルテミス（あるいはディアナ）神殿もあった。　キリスト教は使徒たちの時代にはすでにこの地に浸透していた。最初は洗礼者ヨハネの弟子たちがここで教えを説き、その後、使徒パウロが福音を宣べ伝え、この都市の住民たちに手紙を書き送った。さらにその後、聖ヨハネ・テオロゴス（福音記者）もそこで宣教し、暮らした。　そのため、聖イリネイの言葉を借りれば、エフェソスの教会は使徒的伝承の真の証人であった。現在、古代エフェソスの跡地には、貧しいトルコの村、アヤ・ソリュクがある。

[8426] デキウス――ローマ皇帝。249年から251年まで在位した。

[8427] ヒオス――エーゲ海（群島）にある島で、スミルナの対岸に位置する。

ミロピアはこう答えた。

「大胆だったのは、あなたの忌まわしい行いと不敬虔さを軽蔑し、唾を吐きかけるからだわ。」

この言葉を聞いて、高慢な公爵は激しい怒りに駆られ、即座に容赦なく彼女を棒で打ち据えるよう命じた。そして、彼女を長い間打ち続けた。その後、髪を掴んで島中を引きずり回し、体のあらゆる部位を拷問した。ついに、かろうじて息のある状態で彼女を牢獄に閉じ込めた。　真夜中、聖女が祈っていると、光が牢獄全体を照らし、彼女の前に天使たちの姿が現れた。その真ん中には聖イシドールがおり、彼らは皆、「三聖歌」を歌っていた。殉教者を見つめ、イシドールは言った。

「平安あれ、ミロピアよ。あなたの祈りは神に届いた。さあ、あなたは私たちと共にあり、あなたのために用意された冠を受け取るだろう。」

聖イシドールがこう語っている間、聖殉教者ミロピアは喜びのうちに、その魂を神に委ねた[8428]。すると、牢獄は言葉に尽くせない芳香に満たされ、それを見た看守たちは恐怖と驚愕に襲われた。　その中の一人は、この一連の出来事をはっきりと目撃し、耳にしていたため、急いで司祭のもとへ駆けつけ、すべてを詳しく語り、聖なる洗礼を受け、その後、自らも殉教の冠に与る栄誉に浴した。聖ミロピアの遺体は、キリスト教徒たちによって引き取られ、神を賛美しつつ、尊厳をもって埋葬された。

ペチェルスクの聖アファナシイの伝記

記念日：12月2日

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」（ヨハネ11:25）。　救い主は、四日目に甦ったラザロについて語られたこの御言葉を、私たちの尊い父アファナシイ――ペチェルスクの隠遁者――において成就させられました。それは、私たちもまた、貧しいラザロについて語られた「富める者の言葉」――*「もし死者の中から誰かが彼らのところに来れば、彼らは悔い改めるだろう」*（ルカ16:30）――を成就させることを望まれたからです。

この聖アファナシイは、ペチェールスクの聖なる修道院の修道士であり、聖なる、神に喜ばれる生活を送っていた。長い病の末、彼は亡くなった。兄弟たちは彼の遺体を清め、亡くなった修道士にふさわしいように、布に包んだ。手配に多少の遅れがあったため、故人は二日間、埋葬されずに横たわっていた。 その夜、修道院長に御出現があり、彼は次のような声を聞いた。

「神の僕アファナシイが二日間も埋葬されずに横たわっているのに、お前はそれを顧みないのか。」

朝が明けるとすぐに、修道院長は兄弟たちと共に故人の元へ行き、埋葬を執り行おうとした――すると突然、彼らが目にしたのは、故人が座って泣いている姿だった。皆は彼が生きているのを見て恐怖に襲われ、彼に尋ね始めた――どうして生き返ったのか、何を見たり聞いたりしたのかと。しかし彼は、ただ一言だけ答えた。

「逃げなさい！」

しかし、彼らは自分たちにとって有益な何かを聞きたいと願い、さらに強く彼に問い詰めた。すると彼はこう言った。

「もし私が話したとしても、君たちは信じず、私の言うことを聞かないだろう。」

兄弟たちは、彼が言うことはすべて守ることを彼に誓った。すると、復活した彼は彼らにこう言った。

[8428] 聖ミロピアの死は、デキウス帝の治世中の251年頃であった。

「あらゆる事において修道院長に従い、刻一刻と悔い改め、主イエス・キリストと、その聖母マリア、そして聖アントニオと聖テオドシオの両聖父に祈りなさい。そうすれば、この修道院で生涯を終え、聖なる父たちと共に洞窟に埋葬されるにふさわしい者とされるだろう。　なぜなら、これら三つの美徳は他のすべてに勝るからである。そして、もし誰かがこれらすべてを、その規律にふさわしく果たすならば、高ぶることさえなければ、その人は幸いである。それ以外のことは私に尋ねないでほしい。ただ、お願いだ。私を赦してほしい。

そう言うと、彼は洞窟に入り、扉を閉ざして、そこから二度と出ることなく十二年間を過ごした。それ以来、彼は二度と太陽を見ることはなく、昼夜を問わず絶えず泣き続け、わずかなパンと水だけを、それも一日おきにしか口にせず、その間ずっと誰にも一言も話さなかった。　やがてアファナシイの臨終の時が近づくと、彼は兄弟たちを呼び寄せ、以前語っていた「　」の従順と悔い改めについてすべてを語り、主のもとで安らかに息を引き取り、[8429] として修行に励んだその洞窟に、栄誉をもって葬られた。

その死後、聖アファナシオスは奇跡を通じて、兄弟たちに自身の至福の状態を知らせた。　ヴァヴィラという名の修道士の一人は、長年にわたり足の病に苦しんでいたが、この至福のアファナシイの聖遺物の前に連れて行かれ、その遺体に触れた途端に癒やされ、それ以来、亡くなるまでいかなる病気にも悩まされることはなかった。　この尊い癒やし主による奇跡について、ヴァヴィラは、聖シモン（この伝記の著者）も含まれていた兄弟たちに、次のように語った[8430]：

「私が痛みに耐えかねて叫びながら横たわっていた時、突然、この至福のアファナシイが入ってきて、私にこう言った。『私のところに来なさい。そうすれば、あなたを癒やしてやる。』　私は、彼がどのようにして、いつここに来たのか尋ねようとした。しかし、彼は突然、姿が見えなくなってしまった。私に現れたその方を信じ、私は自分をかれのもとへ運んでくれるよう頼み、こうして今、癒やしを受けたのである。

この時から、皆は、敬虔な隠遁者アファナシイが主に喜ばれ、至福に与ったことを悟った。その聖なる祈りによって、私たちもまた、罪の死からよみがえり、神に喜ばれるように悔い改めながら生き、やがて私たちの命の与え主であるキリスト・イエスにおいて永遠の命を得ることができますように。彼に、父なる神と、命を与える聖霊と共に、今、そして常に、世々限りなく栄光がありますように。アーメン。

セルビア王聖ステファノの伝[8431]

記念日：12月2日

聖ステファン・ウロシュは、著名なセルビアの君主ステファン・ドゥシャン[8432] の息子であった。ドゥシャンは、ほぼすべてのセルビアの領土を自らの支配下に統合し、ギリシャ王国に属していたいくつかの地域を征服した後、自らをセルビア人とギリシャ人の王と宣言した。　ステファン・ウ

[8429] 福者アファナシオスは、1176年頃に主のもとへ召された。その聖遺骨はアントニオスの洞窟に安置されている。

[8430] 聖シモン――当初はキエフ・ペチェールスク修道院の修道士であり、後に1220年にウラジーミル司教となった。友人であるペチェールスクの修道士ポリカルプに宛てて書いた、8人のペチェールスク修道士に関する8つの物語や、『ペチェールスク修道院の創設に関する物語』の著者として知られている。 記念日は5月10日

[8431] この伝記は、古くからのセルビアの聖人伝、『セルブヤク』（セルビアの聖人たちの礼拝式を収録した印刷物）に掲載されている教会礼拝式、およびセルビアの年代記に基づいて編纂された。

[8432] ステファン・ドゥシャンは1331年から1355年まで統治した。

ロシュは、ドゥシャンとブルガリア王アレクサンドル・アセンの妹エレナとの結婚により、[8433] に生まれた。ウロシュの幼少期は、父が最も精力的に活動していた時期に重なっていた。　王の称号を授かったステファン・ドゥシャンは、1346年に妻と共に王冠を戴き、わずか10歳だった息子のウロシュには王冠を授け、公文書では「クラリャ（王）」の称号で呼ぶようになった。　このようにして、幼少期からウロシュは「若きクラリ」となり、この異名は彼に永遠に付きまとうことになった。

1355年に父ステファン・ドゥシャンが死去すると、18歳だったステファン・ウロシュは王位に就き、広大なセルビア王国を統治することとなった。これは極めて困難な任務であった。　ステファン・ドゥシャン自身、多様な民族（セルビア人、ブルガリア人、アルバニア人、ギリシャ人）が混在する数多くの地域を統治するため、それらを貴族たちの支配下に委ねていた。貴族たちは、ギリシャの慣習に従い、王から「ケサール」や「デスポト」などの様々な称号を授かっていた。　これらの貴族たちは、ほぼ完全な自治権を享受していたため、王に抵抗することもあり、彼らを服従させ続けるにはドゥシャンの強固な統治力が必要とされた。

ドゥシャンの若き後継者、ステファン・ウロシュは、生まれつき容姿端麗で、心優しく、気質も素朴であった。広大な国家を統治することは彼にとって困難であった。　父の例に倣い、彼は貴族たちを介して統治しなければならなかったが、彼らを適切な服従の下に置くための強固な性格や手腕を欠いていた。　各地域の統治者たちは、王の指示ではなく、自らの恣意に任せて行動するようになった。特に、マルニャノヴィチ家の貴族であるヴォルカシン、ウグレシャ、ゴイコの兄弟たちが、国内で大きな権力を握った。ヴォルカシンは王からまず「ケサール」の称号を授かり、その後「セルビア王」の称号も与えられたため、 自身の名前で王の勅書まで発行するようになった。 ステファン・ウロシュには実権はなく、彼は「ツァール」という称号だけに甘んじていた。彼は多くの苦難、困窮、屈辱を経験せざるを得なかったが、すべてを柔和に耐え忍んだ。

しかし、野心的な貴族たちにとっては、それだけでは不十分だった。彼らはウロシュを完全に排除したいと望んでいた。特に、兄弟たちの支持を受けたヴォルカシン王は、これを強く望んでいた。　権力を奪われたウロシュは、セルビアのさまざまな都市や地方を転々として暮らしていた。ある時期、彼はラザール公の元に身を寄せていた。ラザール公はヴォルカシンと同様にポドゥナイスカという特定の地域を統治していたが、ウロシュに対しては好意的に接していた。

表向きは、ヴォルカシンもウロシュに対して好意を示し、息子の運命を案じていた、ステファン・ドゥシャン亡き後の未亡人であるウロシュの母エレナをなだめようとしていた。　ウロシュへの好意を示すため、ヴォルカシンはある日、彼をコソヴォ・ポリェ近郊の山岳地帯への狩猟に同行するよう誘った。その狩猟の最中、ヴォルカシンは好機を捉え、裏切り行為としてウロシュを殺害した。遺体は夜陰に乗じて、ペトリチャ城の近くにある「聖母マリアの被昇天」教会に用意されていた墓所に密かに安置された。この城は、しばしばセルビアの君主たちの居城として用いられていた[8434] 。

ヴォルカシンは、ウロシュが狩りの途中でどこかで取り残され、その行方は分からないと装った。悲しみに打ちひしがれたウロシュの母エレナと妻アンナ[8435] は、行方不明の王を探すためにあらゆる手段を講じたが、無駄に終わった。しかし、明らかにならない秘密などない。　ペトリチャ近郊の聖母被昇天教会で、夜間に誰かが埋葬されたという噂が広まった。

[8433] 彼の生年は1337年である。

[8434] ペトリッチは、ネロディムリャの上流、*エゼルスカ・プラティナ*、すなわちプリズレン市に隣接するポドリニエ地方とコソボ平原を隔てる山脈に位置していた。

[8435] 彼女はヴァラシュの総督アレクサンドル・バサラバの娘であった。

墓の石板を取り外すと、無実の罪で亡くなった殉教者、ステファン・ウロシュ王の遺体が現れた。　母と妻、そして周囲の人々は皆、故人を深く悼み、その同じ聖母被昇天教会で、王にふさわしい荘厳な葬儀を執り行った。ステファン・ウロシュは最後のセルビア王であり、名門ネマニッチ家の最後の君主であった。

ステファン・ウロシュ王の聖遺体は、彼が埋葬されたその教会に長い間安置されていたが、その後、イスラム教徒による冒涜を恐れて、トルコから移住してきた正教会のセルビア人らによって、オーストリア領スレムにあるヤサック修道院へと移された。

他のすべてのセルビアの君主たちと同様に、ステファン・ウロシュもまた、スコプレ市に「聖母マリアの降誕修道院」という自身のための安息の地を築いた。　ステファン・ウロシュを称える教会礼拝では、彼は「若き日から主に献身し、未亡人や孤児を父のように慈しみ、争いを和解させ平和を確立し、貧しい者を憐れみ、虐げられた者を守った」聖人として讃えられている。

聖ヨハネ、イラクレモン、アンドレイ、テオフィロスの記念日

記念日：12月2日

聖なる父たち、ヨハネ、イラクレモン、アンドレイ、テオフィロスは、オキシリコス[8436]の出身で、キリスト教徒の両親の子供たちであった。幼い頃から彼らは魂に有益な書物を読むことに励み、その後、神に喜ばれる人生を送りたいという願いに駆られて、自国の内陸の荒野[8437]へと退き、そこで神から教えを受けた。　そこで、砂漠の中で、彼らはすでに高齢に達していたある聖なる人物に出会い、彼から霊的な教えを受けながら、一年間を共に過ごした。　その聖人が亡くなると、彼らは同じ荒野の地に残り、60年間にわたり、厳しい断食を守りながら修道生活を送った。彼らは野生の野菜と水で身を養ったが、それも週に2回しか口にしなかった。平日は互いに離れ、それぞれが周辺の山々や洞窟で孤独な時間を過ごした。 土曜日と日曜日には共に集まり、 神に感謝の祈りを捧げ、神の御使いから聖体拝領の恵みを受け、こうして安らかに息を引き取った。このことを語ったのは、偉大なるパフヌティオス（フィヴァイの隠者）であり、彼は自らその二人の男たちを目撃し、彼らの生涯を[8438]に記した。

12月16日

12月3日（旧暦）

聖預言者ゾフォニアの記念日

12月3日の記念日

[8436] 中エジプト、ナイル川の左岸。

[8437] すなわち、フィヴァイド地方である。フィヴァイド砂漠は上（南）エジプトに位置し、古代の隠者たちが功績を成すのに好んだ場所であった。

[8438] 4世紀に。

聖ソフォニアは、十二小預言者の一人[8439] であり、フシヤの息子、ゴドリアの孫、アモリアの曽孫、エゼキヤの玄孫である。伝承によれば、彼はシメオンの部族に属し、山岳地帯のサラヴァファ、あるいはヴァラファ[8440] の出身であった。 彼は名門の家系に生まれ[8441] 、ユダヤの王ヨシヤ（アモンの子）の治世に生きており、その時代は、私たちの主イエス・キリストがこの地上に来られる600年余り前のことだった。　その時代、敬虔な王ヨシヤは、ユダヤ人によってほとんど忘れ去られていた真の神への崇拝の回復に熱心に取り組み、民の中から偶像崇拝を根絶した。　彼は、完全に荒廃していたソロモンの神殿をかつての威厳を取り戻すように修復し、異教の祭壇を破壊し、偶像崇拝の祭司たちを処刑し、すべての人々にモーセの律法を厳格に守るよう命じた。　しかし、真の信仰の回復に対する王のこのような熱意にもかかわらず、すでに不義に深く染まってしまった民を神へと立ち返らせることは困難であった。ユダヤ人たちは、王の権威を恐れて、公然と偶像を崇拝することはやめたが、心の中では異教の不義への執着を秘めていた。　それゆえ、聖書はこう述べている。「主は、ユダに対して燃え上がった御自身の激しい怒りを、遅らせることはなかった」（列王記下23:29）。民は、まもなく彼らの上に降りかかるはずの神の裁きを受ける準備が整いつつあった。そのような不義と異教の闇の中で、ソフォニアは、夜空の明るい星のように、敬虔さをもって輝いていた。　真のイスラエル人として、彼は自国民の不義を深く嘆き、また主の番人であり、神の奥義を仰ぎ見る者[8442] として、心と精神を清め、同胞たちが真理の道に立ち返り、滅びから救われるよう熱心に祈った。　そして、まるでその祈りに応えるかのように、「主の言葉がゾファニヤに臨んだ」（ゾファニヤ1:1）。人の心を見通す神は、彼を御自身の預言者として選び、不義と偽りの神々への礼拝のゆえにユダヤ人を待ち受ける恐ろしい懲罰を、彼らに告げ知らせるよう命じられた。　主の命令に従い、ソフォニアはユダヤの町や村を巡り、至る所で民に改心と悔い改めを促した。彼の説教は長々としたものではなかったが、その力と深みにおいては、偉大な預言者イザヤやエレミヤの熱烈な演説を彷彿とさせるものであった。

「主はこう言われる」――ソフォニアはこうして預言を始めた。「わたしは地上のすべてのものを根絶やしにする。人と家畜、空の鳥と海の魚を根絶やしにし、不義な者たちを地上の面から一掃する。　そして、わたしはユダとエルサレムのすべての住民に手を下し、主から離れ、主を求めない者たちを滅ぼす。それゆえ、主の御前にあって、あなたがたは皆、恐れおののくがよい。主は犠牲を準備しておられ、その日はすでに近づいている。　それは怒りの日、悲しみと苦難の日、混乱と動揺の日、暗闇と闇の日となる。その時、人々は主に対して罪を犯したゆえに、盲人のように歩むことになる。彼らの血は砂のように流れ出し、その死体は糞のようになるであろう（ソフォニア書1:2–4, 14–18）。

ユダヤ人たちにこのような懲罰を告げると同時に、ソフォニアは異教の諸民族の差し迫った滅亡も予言した。「ペリシテ人、モアブ人、アンモン人、エチオピア人、アッシリア人[8443] ――」と彼

8439 預言者を「*大預言者*」と「*小預言者*」に分類するのは、彼らの個人的な資質や精神的な資質に基づくものではなく、彼らが著した書物の長さに基づくものである。

8440 サラヴァエ山があったシメオンの部族は、パレスチナの南西の国境地域を占めていた。

8441 これは、ソフォニアが書の冒頭で自身の先祖を列挙していることに基づいて断言できる。当時の慣習によれば、これは由緒ある家系の者だけが許されていたことだった。

8442 ソフォニア（「密かに見る者」）という名は、ヘブライ語の動詞「ツァファ」（観察する、見張る）に由来するか、あるいは「ツァファン」（隠す、覆い隠す）に由来すると解釈されている。

8443 *ペリシテ人は*、ユダヤ人の隣国であり、パレスチナの西部、地中海の海岸沿いに住んでいた民族である。彼らは、エジプト人の祖であるハムの息子ミツライムの息子たち、ファスルヒムとカフトリムに由来する（創世記10:14；申命記2:23；　歴代誌上1:12；エレミヤ書47:4；アモス書9:7）。彼らはパレスチナの先住民ではなく、移住者、すなわち「*ペリシテム*」（ペリシテ人）という言葉自体が示すように、「放浪する」「移住する」者たちであった。　北エジプトのどこかに住んでいたカスルヘ族やカフゴレ族を祖先とするペリシテ人は、はるか古代に、まずクレタ島へ、その後パレスチナへと移住した。　*モアブ人は*、セム系部族に属する民族であり、ロトの長女との間に生まれた非嫡出子モアブの子孫であ

は語った。「彼らは滅ぼされ、彼らの地は荒廃し、ソドムやゴモラのように、とげのある草が生い茂る野原となり、永遠の荒野となる。　これは、彼らが傲慢であり、神の民をののしり、見下したためである」[8444]。その後、再び故郷のエルサレムに目を向けた預言者は、不義な異教の民への懲罰の例に教訓を得ず、依然としてその迷いから抜け出そうとしないことを嘆きつつ見ている。　預言者の言葉によれば、エルサレムは「戒めを受け入れず、声に耳を傾けず、主を信頼せず、自分の神に近づこうともしない」。　その君主たちは咆哮する獅子であり、その裁判官たちは夕暮れの狼であり、民は高慢であり、祭司たちは聖所を冒涜し、律法を破壊している。このため――と預言者は語った――この不義の都は荒廃し、それに伴ってユダの地も滅びるだろう」[8445]。

しかし、ソフォニアは悲観的な予言だけに留まらなかった。彼の預言的な視線は、イスラエルの慰めであり、諸国の望みである方が現れ、その方とともに全地への喜びと平和がもたらされるはずの、あの恵み深い時代へと及んでいた。　こうした時代の到来を予見して、ソフォニアは、主の偉大な裁きの日に、イスラエル全体も、全地も滅ぼされるわけではないと語った。恐ろしい懲罰の後、主は残された民に清い口を与え、彼らが主の御名を呼び求め、心を一つにして主に仕えるようにされる。 そしてイスラエルからは、主を畏れ敬う柔和で謙遜な人々だけが残される。 このイスラエルの残された者たちは、もはや不義を行うことはなく、そのおかげで安らぎを得て、いかなる敵にも脅かされることなく暮らすことになる[8446]。これらの恵み深い時代を指し示しながら、預言者は予言された恐ろしく差し迫った災難のことを忘れ、歓喜のうちにこう叫ぶ。

「喜びなさい、シオンの娘よ。エルサレムの娘よ、喜びを告げよ。身を飾り、心から喜び祝いなさい。主はあなたのすべての不義を取り除き、敵の手からあなたを救い出されたからである。主はあなたのただ中に王として君臨され、あなたはもはや悪を見ることはない。」　その日、主はエルサレムにこう言われる。「勇気を出せ、シオンよ。あなたの腕が弱まることのないように。あなたの神、主はあなたの中にいるからだ。主は力強い方であり、あなたを救い、あなたに喜びをもたらし、御自身の愛によってあなたを新たにしてくださる」（ソフォニア書3:14–17）。

聖なる教会は、これらのソフォニアの言葉の中に、恵みに満ちたメシアの時代全般への明確な示唆、そして特に、主イエス・キリストがエルサレムに荘厳に入城された時、シオン全体がヤシの枝を手にし、熱狂的な叫び声で：「オサナ、ダビデの子よ」と叫び、御民のただ中に おられる王とし

る（創世記19:30–37）。彼らは、死海の東側に位置する山岳地帯でありながら、豊穣で美しい土地を占めていた。　西側の境界は死海、東側は砂漠であった。*アンモン人は*、モアブ人と親族関係にある民族であり、ロトの息子アンモンと、その末娘ベン・アンマに由来する（創世記19:38）。 彼らはヨルダン川の東側、ガリラヤの山々の近く、ヤボク川とアルノン川の間に住んでいた。*エチオピア人*、*あるいはクシュ人は*、ハムの息子クシュ（またはフシュ）に由来する。　古代において、「エチオピア人」という名称は、肌の色が濃いすべての民族（北東アフリカおよび南西アジア）に与えられていたが、その後、この名称は、エジプトの南、紅海、リビアの草原、アビシニア高地の間に位置するエチオピア本国の住民を指すようになった。　*アッシリア人は*、ノアの子シムの子アッスルに由来するセム族の民である。彼らの王国は、アジア全土で最も強大なものの一つであり、ティグリス川沿いの、アルメニア、メソポタミア、メディア、バビロニアに挟まれた地域を占めていた。

[8444] ソフォニア書2:1。これらの預言は、バビロンの王ネブカドネツァルの時代に成就した。彼はユダ人だけでなく、モアブ人、アンモン人、ペリシテ人も征服した。一方、アッシリアはネブカドネツァルの父ナボパラサルの時代に滅びた。

[8445] 確かに、不義な者たちへの懲罰は遅れることなく訪れた。ヨシヤの治世のうちに、当時強大だった敵であるエジプト人が侵攻してきた。彼らの王、ファラオ・ネハオは、メギドの戦い、すなわちエズレロン谷（パレスチナ南部）において、ユダ人を打ち破った。　敬虔なヨシヤはこの戦いで戦死した。この不運な日を境に、ユダヤ人への懲罰が始まり、預言者たちの警告が現実のものとなった。ヨシヤの死後まもなく、ユダヤ人はエジプト人に隷属させられ、過酷な貢納を課せられ、その後、バビロニア人がユダに侵攻し始めた。 紀元前607年、彼らの王ネブカドネザルはエルサレムを陥落させ、これを破壊し、民を捕囚として連れ去り、そこで彼らは70年間を過ごした。こうして、不義に対するユダヤ人への懲罰に関する預言が成就したのである。

[8446] ソフォニア書3:9–14。イスラエルの残りの民に関するソフォニアの預言について、聖テオドリトスは、心優しく謙遜であった使徒たちを指していると解釈している。

て主を迎えたのです。それゆえ、棕櫚の主日には、聖ソフォニア書のパレミア、すなわち預言者がシオンを待ち受ける喜びの日について語る箇所を読むことが定められています。

このように、ソフォニアは、罪人を悔い改めに駆り立てるために神の恐るべき裁きを予言し、また、メシアの時代に地上で神の王国が築かれるという主の限りない慈しみを告げ知らせることで、その希望によって謙遜な人々を慰め、強めるために預言したのである。

彼は万人の復活を待ち望みながらこの世を去り、伝承によれば、自身の家に埋葬された。

コンダク、第4声調:

神の御霊に照らされ、預言者ゾフォニアよ、あなたは現れ、神の御出現を告げ知らせた。「シオンの娘よ、大いに喜びなさい。エルサレムよ、宣べ伝えよ。見よ、あなたの王、救い主が来られる。」

私たちの尊い父、ヨハネ・沈黙者の生涯

記念日：12月3日

沈黙の[8447]、絶え間ない賛美にふさわしい、聖なる尊い父ヨハネは、アルメニアのニコポリス[8448] にて、父エンクラティオスと母エウフミアの間に、敬虔な皇帝マルキアヌス[8449] の治世4年、1月8日に生まれ、聖なる洗礼によって啓蒙された。 ヨハネの両親は敬虔なキリスト教徒であり、その富と地位によってアルメニア全土で名声を博していた。父は軍司令官であり、皇帝から絶大な寵愛を受けていたため、皇帝のもとで大きな権力を握っていた。このほどほどに名高い父の息子こそが、至福のヨハネであった。 これを述べるのは、ヨハネの身分の高さを称賛したり讃えたりするためではない（聖人たちは身分ではなく、その徳によって称賛されるからである）。むしろ、この神に愛された者が、どのような栄光から、いかに深い謙遜へと至ったのかを知ってもらうためである。

ヨハネは兄弟たちと共に良き模範のもとで育てられ、聖書を十分に身につけていた。彼がまだ若かった頃、両親は主のもとへ旅立ち、子供たちに多くの財産を残した。 その財産が兄弟たちの間で分配された際、至福のヨハネは自分の取り分を用いて、ニコポリの町に、無原罪の聖母マリアに捧げる教会を建てた。 その後、世俗の生活を捨て、18歳の時に修道者の衣をまとい、この教会のそばで他の10人の修道士たちと共に暮らし、善行に励んだ。 青年期を通じて、彼は肉体を霊に服従させ、腹の奴隷とならず、情欲、とりわけ高慢に支配されないよう、多大な努力を払った。そして彼は徳において驚くべき人物であり、兄弟たちにとって善良で巧みな指導者、そして修道院長であった。

ヨハネが二十八歳になった時、コロニオス市の司教[8450] が亡くなった。市民たちはセバスティアの総主教[8451] のもとへ赴き、新たな司教の任命を懇願した。 この聖職にふさわしい人物を選出する

[8447] 「沈黙者」あるいは「無言者」とは、自発的な沈黙の誓いを立て、それを果たした敬虔な人々のことである。 厳格な沈黙の守り手としては、聖ヨハネの他に、アトス山のイシヒト派修道院の創設者である聖イシキオスも知られており、彼は12年間にわたり沈黙を守った（彼の記念日は10月3日、言葉の節制についてはマタイ1:36、 エフェソ4:29、5:3–4、ヤコブ3など参照）。

[8448] アルメニア——小アジア半島の西、イベリア（またはコーカサス）の南、ティグリス川とユーフラテス川の北に位置する地域。ニコポリス——アルメニアの主要都市の一つ

[8449] マルキアヌスは、東ローマ帝国の皇帝であり、450年から457年まで在位した。したがって、ヨハネは454年に生まれたことになる。

[8450] コロニアは、ローマ支配下のアルメニアにある都市である。

[8451] セバスティアは、ガリオン川の源流の近くに位置していたアルメニアの主要都市である。

際、コロニウス教会の座に就くにふさわしい者として、ニコポリス修道院の修道院長ヨハネの名が、皆の口に上った。　彼の並外れた謙虚さを知る者たちは、彼が司教の位を受け入れることを望まないだろうと考えていた。そのため、大主教はある教会事務を口実に彼を呼び出し、聖人が来ると、司教になるよう説得した。そこで彼は叙階され、コロニア教会の座に就いた。　教会の統治を引き受けた後も、ヨハネは自身の修道規則や修行の行いを変えなかった。例えば、彼は決して風呂に入らず、外部の者が自身の裸体を見ることを恐れるだけでなく、自分自身でさえも裸の姿を見ることを避けるため、体を洗うことさえしなかった。彼はアダムの裸を心に留めていたからである[8452]。断食や祈り、肉体的・精神的な清らかさによって神に喜ばれ、自らのあらゆる思いをかたずけ、神の御心に逆らうあらゆる高慢を自らに謙遜させ、心をキリストに従わせる（IIコリント10:5）こと――これこそが、ヨハネのすべての心遣いの本質であった。　このように徳高く生きることで、彼は他者にとっても善き生活の模範となった。彼を見習って、他の人々も改心し、徳ある生活を送り始めたのである。その一人に、彼の肉親の兄弟であるペルガミオスがいた。彼は立派な人物であり、ゼノン王からも、またゼノンの後に即位したアナスタシウス王からも大いに敬われていた[8453]。兄弟である至福のヨハネが聖なる生活を送っているのを見て、ペルガミオスは心を打たれ、神に喜ばれるよう多大な努力を払った。　また、ヨハネの甥であるテオドロスも、後に敬虔なユスティニアヌス帝から大いに重用されたが[8454]、彼の叔父の天使のような生き方が、彼にとって大きな助けとなった。テオドロスは家族全員と共に神に喜ばれる生活を送り、その徳は極めて高かったため、皇帝自身や貴族たちでさえ、彼の清らかな生活や知恵、正しい信仰、そして慈悲深さに感嘆した。テオドロスがこれらすべてにおいて成功を収められたのは、至福の叔父ヨハネの汚れなき生き方を手本としていたからである。

神聖にして神を宿す父ヨハネが、キリストの教会を善き方向へと導きながら司教職に就いてからすでに10年が経っていた頃、彼の姉マリアの夫であるパシニクがアルメニアの統治者となった。悪魔の唆しにより、彼はヨハネに委ねられた教会を混乱させ、教会に害を与え、また至福のヨハネに苦悩をもたらし始めた。すなわち、教会の事柄に干渉し、罰から逃れるために教会に身を寄せようとした者たちを、力ずくで教会から引きずり出し[8455]、教会の奉仕者や建設者たちが教会の事柄に専念することを許さなかった。　至福のヨハネは何度も謙虚に彼に懇願した――教会の事柄に干渉せず、教会に害や暴力を及ぼさないでほしいと。しかし、統治者は容赦なく、改める気配を見せなかった。そして、至福のヨハネの姉妹がこの世を去ると、その振る舞いはさらに悪化した。　教会に加えられる悪に心を深く痛めた聖人は、コンスタンティノープルへ赴き、ゼノン皇帝に謁見せざるを得なかった。そこで彼は、コンスタンティノープル大司教エウフィミオス[8456]の支援を得て、その大司教の取り成しによって皇帝のもとで助けを得た。

この世の虚しさと混乱を目の当たりにし、至福のヨハネは司教職を辞し、聖都エルサレムへと退き、沈黙の中で神のために奉仕することを決意した。　神聖な礼拝を執り行った後、彼は共にいた司祭や聖職者たちを帰らせ、自身は誰にも知られぬよう密かに海辺へと向かい、船に乗り込んで聖都エルサレムへと旅立った。　聖都の最初の病院――そこには聖大殉教者ゲオルギオスの名を冠した礼拝堂があった――に到着すると、彼は乞食を装ってしばらくそこに滞在した。人々の喧騒を目の当たりにして、ヨハネは深く嘆き、静寂な場所を望み、涙ながらに神に、安らぎがあり、救いに適した場所を示してくださるよう祈った。　ある夜、そのことについて熱心に祈っている最中、彼は上を見上

[8452]（創世記3:7, 10, 11）アダムが裸であることを自覚したのは、堕落の結果であった。アダムの子孫にとって、それは先祖の罪と、その罪が全人類にもたらした悲惨な結果についての戒めとなっている。

[8453] ギリシャ皇帝ゼノンは474年から491年まで在位し、アナスタシウスは491年から527年まで在位した。

[8454] ユスティニアヌス大帝は527年から566年まで在位した。

[8455] これは、古代に存在した、迫害され有罪判決を受けた者たちが教会に避難を求める権利について言及している。

[8456] エウフィミオスは、490年から496年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

げると、突然、十字架のような形をしたまばゆいばかりの星が現れたのを見た。その星は彼に近づいてきて、星の輝きの中から、彼は「救われたいなら、この輝きに従え」という声を聞いた。

聖人は直ちに喜びながら歩き出し、その星に導かれて、聖なる神を崇める私たちの父サヴァの大修道院へと至った。それは彼が39歳の時、サリュスティウスがエルサレム総主教を務めていた頃のことである[8457]。

ヨハネは、肉体的には極度の貧しさの中にありながらも、精神的には豊かな恵みに満ちた、百四十人の隠遁者たちの先頭に立つ聖サヴァを発見した。 そして、尊者サヴァは至福のヨハネを受け入れ、経済担当者に彼に修道院の務めを課すよう命じたが、ヨハネの中にどのような神の恵みの宝が隠されているかを知らなかった。 聖サヴァは透視の賜物を持っていたが、神は、ヨハネが司教であり、神のためにその司教職を捨てて、一介の者として彼の元へ来たという秘密を、彼から隠しておられたのである。 透視の力を持つ者でさえ、常にすべてを見通せるわけではないことに、誰も驚いてはならない。なぜなら、彼らは神が彼らに明らかにされることのみを見通し、預言するのであり、神が明らかにされないことについては、知る由もないからである。 それゆえ、預言者エリシャ（ ）も、ソマニの女について自分の僕にこう言ったのである。「*彼女を放っておきなさい。彼女の魂は悲しみに満ちているが、主はそれを私から隠し、私に告げられなかったのだ*」（列王記下4:27）[8458]。

修道院に受け入れられたヨハネは、完全な従順と熱意をもって、会計係から割り当てられた様々な務めを遂行した。 当時、修道院には旅人受け入れの宿が建設されており、至福のヨハネはそこで働く人々の世話をするよう任命された。彼は彼らのために食事を調理し、水を運び、石を運び、建物で行われるあらゆる作業に参加した。

修道院に到着してから2年後、ヨハネは巡礼者たちの受け入れを任され、そこで謙遜と柔和さ、そして愛をもって隣人に仕えた。 その後、聖サヴァは、修道生活に入る者たちのためにキノヴィア（[8459] ）の建設を始めた。これは、世俗を捨てようとする者たちが、まずキノヴィアで指導を受け、その後でラヴラに受け入れられるようにするためであった。

「実には花が先立つように」と聖人は語った。「修道生活には、キノヴィアの生活が先立つべきである。入修者は、キノヴィアでの労苦の始まりによって、植えられた木のように実り豊かに成長し、ラヴラにおいて完全な功徳の実を結ぶように。」

聖人のラヴラは荒野にあり、キノヴィアは世俗の世界により近かった。その建設の際、至福のヨハネは再び作業の奉仕に任命された。その時、勤勉な聖人は二つの奉仕を同時に果たした。すなわち、旅人宿で旅人たちに奉仕すると同時に、キノヴィアの建設者たちのために、自らの肩にパンや様々な料理を運んだのである。 キノヴィアは、旅人宿から十スタディオン以上離れていた[8460]。彼がこのような奉仕に一年間励み、兄弟たちに良く仕えた後、聖サヴァは彼に沈黙を守るための独房を与えた。そこで、至福のヨハネは三年間を過ごした。 週に五日間、彼は修道室から一歩も外に出ず、その間は何も口にせず、誰にも姿を見せず、ただ神とのみ交わりを深めていた。一方、土曜日と日曜日には誰よりも早く教会にやって来て、畏敬と感銘の念を抱きながら立っていた。 聖なる礼拝の間、

[8457] サリュスティウス – 486年から494年までエルサレム総主教を務めた。

[8458] 列王記下4:27。ソマンのある女性が預言者エリシャをもてなしていたところ、その息子が亡くなった。悲しみに打ちひしがれた彼女は、カルメル山にいる預言者のもとへ向かった。遠くから彼女を見かけたエリシャは、自分の僕ギエジーを遣わして彼女を迎えさせ、夫と子供たちの安否を尋ねさせた。 彼女が近づくと、一言も発することなく、深い悲しみに暮れてエリシャの足元に倒れ込んだ。ヒエゼキヤが彼女をどかそうとしたとき、エリシャは彼に前述の言葉をかけ、預言者がその女性の悲しみは見ていたものの、その原因については知らなかったことを示した。

[8459] キノヴィア（ギリシャ語の「共同の、生活」に由来）とは、共同生活を行う修道院のことで、そこでは修道士たちは、食事だけでなく衣服なども、修道院長の方針に従って修道院から支給され、その見返りとして、自らの労働とその成果のすべてを、必ず修道院の共同の必要のために捧げなければならない。 これらの修道院での生活は、あらゆる快適さを完全に断ち切る砂漠での生活ほど厳しくはない。

[8460] スタディオンは、ギリシャの長さの単位であり、私たちのサジェン約88本に相当する。

彼の目からは絶え間なく涙が溢れ出し、修道院の兄弟たちは皆、彼に与えられたこの涙の賜物に驚嘆した。その二日間は、彼は兄弟たちと共に食事もとった。　三年後、至福のヨハネは会計係に任命された。神の祝福のもと、彼の労苦と奉仕によって、修道院の繁栄は著しく増大した。なぜなら、神はあらゆる面で彼を助けてくださったからである。

ヨハネスが会計係としての務めを立派に果たしているのを見て、尊者サヴァは、彼を、ふさわしい修道士であり、完全さを極めた者として、司祭に任命したいと考えた。　彼はヨハネを連れて聖都エルサレムへ赴き、パトリアルヒ・イリア[8461]（サリュスティウスの後継者）にヨハネの徳高い生活について語り、ヨハネを司祭に叙階するよう懇願した。　総主教はヨハネを教会に呼び寄せ、叙階しようとした。これを避けられないと悟ったヨハネは、聖なる総主教にこう言った。

「最も尊き父よ、私はあなたの聖なる御前において、ある秘密の言葉を申し上げたいのです。私を一人きりであなたと話し合うようお許しください。もしあなたが私を長老の位にふさわしいと認めてくださるなら、私は断るつもりはありません。」

そこで、総主教が彼を人目につかない場所へ連れて行くと、尊者ヨハネは神に奉仕するイライアの足元にひれ伏し、これから話す言葉を誰にも漏らさないよう懇願した。総主教は秘密を守ることを約束した。ヨハネは言った。

「父よ！私はかつてコロニアの司教でした。しかし、数多の罪ゆえに司教職を捨て、逃亡しました。そして、体が丈夫であったため、兄弟たちに奉仕することを自らに課し、彼らの祈りが私の弱き魂を助けてくれるようにと願ったのです。」

これを聞いて、総主教イリヤは愕然とし、聖サヴァを呼び寄せて言った。

「ヨハネは、自分が長老となることを妨げている自身の秘められた行いについて私に打ち明けた。これからは彼に沈黙を守らせ、誰も彼を煩わせてはならない。」

そう言って、総主教は二人を帰した。

聖サヴァは深く悲しんだ。彼は自らの偉大な修道院から三十スタディオン離れたある洞窟へと退き、涙を流しながら神の御前で地にひれ伏し、こう語った。「主よ、なぜあなたは私を軽んじ、ヨハネの命について私に隠されたのですか。私は彼を長老の位にふさわしい者と見なして、誤っていました！　主よ、せめて今、彼について私に明らかにしてください。*『わが魂は死の苦しみにある』*（マタイ26:38、マルコ14:34）。まさか、私が選ばれし者、聖なる者、必要とされる者、そして聖油を受けるにふさわしいと見なしていた器が、あなたの御威光の前では、不適格でふさわしくないというのでしょうか？」

こうして、聖サヴァは一晩中、涙ながらに祈り続けた。すると、神の御使いが現れて言った。「ヨハネは不適格な器ではなく、選ばれた器である。しかし、彼は司教であり、長老に任命されることはできない。」

天使はそう告げると、姿を消した。そして、聖サヴァは喜び勇んでヨハネの独房へと駆けつけ、彼を抱きしめて言った：

「ヨハネ神父！あなたは、ご自身の中にどのような神の賜物があるかを私から隠しておられましたが、神がそれを私に明らかにしてくださいました。」

「そのことが悲しく思います、父よ」とヨハネは答えた。「私はこの秘密を誰にも知られたくなかったのですが、あなたはそれを知ってしまったのです。私はこの国にはいられません。」

サヴァはヨハネに、その秘密を誰にも明かさないことを誓った。それ以来、至福のヨハネは独房に籠もり、沈黙を守り始めた。彼は教会へさえ出ず、誰とも会話を交わさず、彼に仕える一人の修道見習い以外、誰も彼の部屋に入ることはなかった。　ただ一度だけ、永遠の処女マリアの聖母の祝日に、その御名によってラヴラの教会が奉献された際、祝祭のためにイリヤ総主教がラヴラを訪れた

[8461] 494年から517年にかけて

とき、ヨハネは総主教に敬意を表すために自分の独房から出てきた。総主教はヨハネを愛し、その謙遜さを大いに称えていた。 ヨハネは4年間、沈黙を守った。その後、聖サヴァ神父はスキフォポリス地方[8462] へと旅立ち、そこでしばらく滞在したが、至福のヨハネは、より人里離れた隠遁生活を求めて、 生後50年の時、ルヴァと呼ばれる荒野[8463] へと赴き、そこで9年間を過ごした。その間、その荒野に生える「メラグリア」と呼ばれる草[8464] を糧としていた。 荒野での生活が始まった当初、ある時、自分の糧となるこの草を摘んでいたヨハネは、藪や急流の中で道に迷い、自分の隠れ家を見つけることができず、歩き疲れて、かろうじて息のある状態で倒れてしまった。 しかし突然、目に見えない神の力によって、かつての預言者ハバククのように、彼は天に引き上げられ、自分の隠れ家に運ばれた。 時が経つにつれ、尊者はその荒野の道を調査し、自分の隠れ家から道に迷った場所までの距離が五ポプリシュ[8465] であることを知った。その後、ある兄弟が彼のもとを訪れ、しばらくの間彼と共に暮らした。復活祭が近づくと、その兄弟は長老にこう言った。

「父上、修道院へ行きましょう。そこで復活祭を祝い、その後戻ってきませんか。これほど偉大な祝日なのに、ここにはこのメラグリ以外の食べるものが何もないのですから！」

聖ヨハネは、尊者サヴァがまだスキフォポリス地方から修道院に戻っていなかったため、行くことを望まず、兄弟の呼びかけにこう答えた。

「兄弟よ！ 私たちはここから離れてはならない。四十年にわたり荒野で六十万のイスラエルの民を養ってくださった方が、ここにいる私たちをも養い、復活祭には必要なものだけでなく、豊かな恵みをも与えてくださることを信じよう。」 聖書にはこう記されている。*「わたしはあなたを見捨てず、あなたを離れない」*（ヘブライ人への手紙13:5）。また福音書にはこうある。*「だから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと心配してはならない……あなたがたの天の父は、あなたがたがこれらすべてを必要としていることを知っておられるからだ。 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる」*（マタイ6:31–33）。耐え忍びなさい、わが子よ、そして苦難の道を歩みなさい。この世における肉体の安らぎと弛緩は永遠の懲罰を生むが、肉体を死に至らしめることは、果てしない安らぎを備えるのである。

その兄弟は、尊者からのこの諭しに耳を貸さず、彼を置いて修道院へと去っていった。彼が去った後、尊者の元にある全く見知らぬ男が現れた。その男のロバには多くの品物が積まれていた。そこには、焼きたてで温かいパン、ワインとオリーブオイル、新鮮なチーズ、卵、そしてバケツ一杯の蜂蜜があった。 その男はこれらすべてをヨハネの目の前に置き、すぐに立ち去った。聖人はこの出来事を神の御訪れと見て、喜びをもって神に感謝した。 一方、修道院へ向かったその兄弟は道に迷い、三日間も荒野や通行不能な場所をさまよい、ひどく疲れ果て、空腹と渇きに苛まれ、過酷な歩行による疲労で、かろうじて聖人の住処を再び見つけることができた。 彼は、祝日に神から聖者に授けられた豊富な食事と飲み物の多さに驚き、自分の信仰の薄さを恥じ、聖なる長老の目を見ることもできず、その足元にひれ伏して許しを請いました。聖人は彼を許し、こう言いました。

「兄弟よ、神は砂漠においても御自分のしもべたちに食事を用意してくださることを、よく心に留めておきなさい。」

[8462] スキフォポリス――エルサレムから620スタディオン離れた場所に位置していた都市。当時は繁栄を極め、「楽園の門」、あるいは「ヤシとオリーブの街」と呼ばれていた。現在では、不毛の砂漠に囲まれた貧しい村となっている。

[8463] ヨハネが身を隠したユダヤの荒野は、いくつかの区域に分かれていた。その内陸部、死海の北西岸付近は「ルヴァ」と呼ばれていた。

[8464] メラグリア――パレスチナに自生する、苦味のあるあまり知られていない砂漠の植物である。

[8465] ポプリシェ――私たちのヴェルスタより少し長い距離。

その頃、ペルシャの支配下にあったサラセン人の首長アラムンダル（[8466]）が、アラビア（[8467]）とパレスチナに侵攻し、住民を激しく襲撃して捕虜として連れ去っていた。　その時、多くの蛮族がヨハネが滞在していた荒野に散らばり、修道院々には蛮族の侵攻に備えるよう知らせが伝わった。大修道院の修道士たちは、ヨハネ・沈黙者に蛮族の到来を伝え、修道院に戻って自分のケリアに留まるよう勧めた。　しかし、至福のヨハネは、多少は蛮族を恐れていたものの、それでも荒野での沈黙の生活を手放すことを望まなかった。彼は心の中でこう語った。「*主は私の光、私の救い。私が誰を恐れるべきか。主は私のいのちの砦。私が誰を恐れるべきか。*」（詩編26:1）。もし主が私を守ってくださらず、私のことを気にかけてくださらないのなら、私が生きる意味などあるだろうか？」

そして、至高者による助けへのそのような信頼をもって、彼は迷うことなくその場に留まった。　しかし、常に御自分のしもべたちを慈しみ、彼らのすべての道を守ってくださる神は、この御自分の愛する者をも健やかで無傷のまま守りたいと望まれ、彼を守るために巨大で恐ろしい一頭のライオンを送られた。そのライオンは昼も夜も絶えず彼を見守り、　異教徒たちが何度聖人に襲いかかろうとも、この獅子は常に激しい怒りを込めて彼らに襲いかかり、打ち倒して逃げ散らせた。そして、至福のヨハネは神に感謝した。*「主は、義人の分け前を不義な者の杖に委ねられることはないからである」*（詩編124:3）。

尊者サヴァが自身の修道院に戻ると、荒野にいる至福のヨハネのもとを訪れ、こう言った。

「見よ、主はあなたに目に見える守護者を与えて、野蛮人の襲来からあなたを守られた。しかし、それでもあなたは他の人々と同じように振る舞わなければならない。他の荒野の父たちがそうしたように、荷をまとめて逃げなさい。」

尊者サヴァはヨハネを説得するために他にも多くのことを語り、彼に荒野を去るよう説得した。彼を大修道院へ連れて行き、一室を与えた――こうして、至福のヨハネは生後56年目に、再び修道院での生活を送ることとなった。

至聖なるイリヤ総主教と尊者サヴァを除き、ヨハネが司教であるという秘密を知る者は誰もいなかった――そして彼らはそのことを隠していた。しかし、長い時が流れ、神はすべての兄弟たちにそのことを明らかにすることをお許しになった。その経緯は次の通りである。　アジアの国から、エフェリウスという名の、大司教の位にある高名な人物がやって来た。彼は、命を与える主の十字架と聖地を礼拝し、貧しい人々や修道院に多くの金を施した後、故郷へ帰ることを決意し、聖都を後にして船に乗り込んだ。　しばらく航海したあと、海上で逆風が吹き荒れ、エフェリウスはアスカロンへ引き返すことを余儀なくされた[8468]。そこで二日間過ごした後、彼は再び航海を始めようとしたが、主の天使が夢の中に現れてこう言った。

「故郷へ航海する前に、あなたは聖都に戻り、アッバ・サヴァの修道院（[8469]）へ行くべきである。そこでは、アッバ・ヨハネ・沈黙者という、義に満ちた高潔な人物、すなわち神のためにすべてを捨て、自発的な貧しさと従順によって自らを謙遜に保った司教に出会うだろう。」

目を覚ますと、エフェリウスはエルサレムに戻り、聖サヴァの修道院を訪れて「沈黙のヨハネ」について尋ねた。すると、ヨハネの独房が示された。彼は中に入り、二日間そこに留まり、神の御名によって　、自分の出自、故郷、そして司教職について明かしてくれるよう、ヨハネに懇願し、懇

[8466] サラセン人とは、通常、アラビアを遊牧するアラブの盗賊部族を指す。また、時にはこの名称でイスラム教徒の民族全般を指すこともある。

[8467] アラビアは、ペルシャ湾に面したアジア南西部の広大な半島を占めている。

[8468] アスカロンは、地中海東岸に位置し、エルサレムから520スタディオン離れた場所にある、港を持つパレスチナの都市である。

[8469] アッバ――「父」の意。この称号は主に修道院の長に与えられていた。

願し続けた。　これに神の御心を見出したヨハネは、すべてを詳しく語った。それ以来、ヨハネ・沈黙者が司教であることが修道院全体に知れ渡り、人々は皆、彼の偉大な謙遜さに深く感嘆した。

ヨハネ・[8470]　の生涯の70年目、12月5日、尊厳なる神に愛された父サヴァは主のもとへ旅立った。ヨハネは、サヴァ尊者が魂を肉体から離れる瞬間に立ち会うことはできず、そのことを心から深く悲しみ、涙を流した。しかし、サヴァ尊者は幻の中で彼に現れ、こう言った。

「私の去りゆくことを悲しむな、ヨハネ師よ。たとえ肉体的にはあなたと離れていても、霊においてはあなたと共にいるのだ。」

ヨハネは彼に言った。

「父よ、主にお祈りください。私もあなたと共に召し上げてくださいますように。」

「今はそれは叶わない」とサヴァは答えた。「この修道院には大きな試練が待ち受けているからだ。神は、あなたが敬虔な信仰のために異端者たちに立ち向かう者たちを力づけるために奉仕することを望んでおられるのだ。」

この幻視とサヴァ聖人との対話は、至福のヨハネを霊的な喜びで満たしたが、彼の心は迫り来る試練を思うと悲しみに満ちていた。　その後、彼は魂が肉体から離れる様子を見たいという願いを抱いた。そして、そのことを神に祈っていると、心は聖なるベツレヘム[8471]　へと引き上げられ、その地の教会に暮らしていた巡礼者の死の瞬間を目撃した。その巡礼者の魂は、天使たちが甘美な歌声を響かせながら天へと導いていたのである。至福のヨハネは、心の目でこの光景を目撃した。　彼は直ちにベツレヘムへと向かい、幻で示された通り、教会のそばに横たわっているその男の遺体を見つけた。この男は、ヨハネが修道室に座って、天使たちが賛美の歌を歌いながらその魂を天へと昇らせていくのを見たまさにその瞬間に、この世を去ったのである。　愛を込めて遺体を抱きしめ、口づけをした後、ヨハネはその場で遺体を埋葬し、自分の修道室に戻った。

至福のヨハネの二人の弟子、テオドールとヨハネは、彼の行伝を記した修道士キリルに、次のように語った。

「尊者サヴァの帰天後、私たちは父から一つの用事を託され、リヴィアドへ遣わされました[8472]　。ヨルダン川を渡っているとき、ある人々に遭遇し、『気をつけなさい、前方にライオンがいる』と言われました。しかし私たちはこう考えました。『父の祈りによって、私たちを守ってくださる神は力強い。私たちは父の命により旅をしているのだから』と。そう言い、私たちは先へ進みました。　すると突然、恐ろしいライオンがこちらに向かってくるのが見えました。私たちは恐怖に襲われ、力が抜け、逃げることさえできず、まるで死んだかのようでした。　すると突然、私たちの間に父である聖ヨハネが現れ、恐れるな、と命じられた。その時、ライオンはまるで鞭の一撃で追い払われたかのように私たちから逃げ去り、父の姿は見えなくなった。　一息ついて、私たちは無傷のまま旅を続けた。命じられた従順を果たし、父のもとへ戻ると、父は私たちを迎えてこう言った。「見よ、子らよ。私もまた、あなた方と共に従順を尽くしていたのだ。ここでもあなた方のために熱心に神に祈っていた。そして神は、あなた方に恵みをお与えになったのだ。」

ヨハネの弟子の一人がキリルにこう語った。この偉大な禁欲者は、長年にわたりパンだけを食べており、塩の代わりにたいてい灰を使い、その灰を混ぜてパンを食べていた。　ある時、彼は食事の最中にケリアの小さな窓を閉め忘れた。弟子が窓に顔を近づけると、ヨハネが灰をまぶしたパンを食べているのが見えた。　長老は、自身のそのような苦行が見られてしまったことを悲しんだが、弟子は彼を慰めようと、「父よ、そうしているのはあなただけではありません。この修道院の多くの長

[8470] 聖サヴァは532年に帰天した。

[8471] ベツレヘム――イエス・キリストが生まれた町で、エルサレムの南に位置する。

[8472] リヴィアダ――ヨルダン川の東側にある地域。

老たちも、『*私は灰をパンとして食べる*』（詩篇101:10）という聖書の言葉を実践しています」と言い、こうして長老を慰めた。

その頃、オリゲネスの異端が台頭した。　多くの者がそれに惑わされ、神の教会を混乱させたが、他方では異端に断固として反対する者たちもおり、彼らは尊者ヨハネ・沈黙者に支持を見出した。彼はその時、沈黙を捨て、その口の言葉をもって剣のように異端者たちを打ち倒し、オリゲネスの冒涜的な教えを切り裂き、根絶した。　この試練――修道院を襲うこととなっていたもの――こそ、聖ヨハネ・サヴヴァに幻の中で予言されていたものであった。というのも、異端者たちによる修道院への迫害は甚だしく、多くの修道士たちでさえ異端の教えに染まり、疑念を抱き、心が揺らいでいたからである。　まさにそのために、神は、気弱な者たちを慰め、弱き者たちを強めるために、ヨハネがその修道院に留まることをお許しになったのである。その頃、スキフォポリス地方からキリルが彼のもとにやって来た。彼は後にヨハネの伝記を著した人物である。キリルは自分自身について次のように語っている。

「私が家を離れ、聖都エルサレムへ向かい、そこで何らかの修道院で修道生活を送ろうとしたとき、キリストを愛する私の母は、至福のヨハネの助言や命令なしに、私の魂の救いのためになんらかの行いを始めてはならないと私に命じました。　『そうすれば、オリゲネスの異端に惑わされることなく、修業の初めに転落することもないだろう』と彼女は言った。エルサレムに到着すると、私は聖サヴァの修道院を訪れ、尊きヨハネに拝礼し、自分の思いを打ち明け、有益な助言を求めた。彼は私にこう言った。

「救われたいのなら、偉大なるエウフィミオスの修道院へ行きなさい。」

私は彼のもとを後にしたが、若く分別がなかったため、その指示に従わなかった。そしてヨルダン川にたどり着くと、アルンディニトス（葦の）と呼ばれる修道院に入った。　私の道は順風満帆とはいかず、重い病に倒れ、旅人であり、体が弱々しいことへの悲しみと憂いに苛まれた。その時、夢の中に尊者ヨハネが現れ、こう言った。

「お前は私の言葉に背いたから、この病によって罰せられたのだ。さあ、立ち上がってエリコへ行きなさい[8473]；そこにあるアッバ・エウフィミオスの宿屋で、ある年老いた修道士に出会うだろう。彼に従ってエウフィミオスの修道院へ行けば、救われるだろう。」

すぐに目を覚ますと、私はすっかり健康になったのを感じ、聖なる父の命に従ってエリコへ向かった。そこで、彼が私に告げた通り、高潔で分別のある年老いた修道士を見つけ、その人に連れられて偉大なるエウフィミオスの修道院へ行き、そこで暮らすことになった。　私はしばしば聖サヴァのラヴラを訪れ、尊者ヨハネのもとへ行き、彼から私の魂に大きな恵みを受けた。ある時、私はサタンの誘惑に惑わされ、重荷を背負わされていたが、それを尊者に告白すると、彼の聖なる祈りによって直ちに安らぎを得て、私の心には再び平安が戻った。

このように、修道士キリルは自らについて語った。このキリルを、尊者ヨハネは書物と共に、スキイの修道院にいる隠遁者キリアク尊者のもとへ遣わした[8474]。

ある日、キリルは聖ヨハネのケリアの窓辺に座っていた。すると、ゲオルギーという名の男が、悪霊に苦しめられている息子を連れてやって来て、その子を窓辺の前にひれ伏させ、自らその場を離れた。　聖ヨハネは、横たわって泣いているその少年が邪悪な霊に取り憑かれていることを悟った。慈悲に動かされて、彼は祈りを捧げ、聖油を塗ると、たちまち邪悪な霊は少年から離れ、少年はその時から健康を取り戻した。

[8473] エリコ――パレスチナで最も古い都市の一つ――は、エルサレムから6時間の道のりにあり、ヨルダン川の西岸に位置していた。

[8474] 9月29日の記念日であるスキーのラウラ（シリア語では「スキー」、ギリシャ語では「旧ラウラ」と呼ばれる）は、4世紀前半に聖ハリトンによって設立され、ユダヤの砂漠の荒涼とした人里離れた地域に位置していた。

セルギイの後を継いで、聖サヴァの洞窟で修行に励んだアッバ・エウスタフィオスは、霊的かつ敬虔な人物であり、次のように自らについて語った。

「かつて、私を冒涜の霊が襲い、神や神聖なるものに対する冒涜的な思いで私を大いに悩ませ、私は深い苦悩の中にありました。私は至福のヨハネ・沈黙者に訪ね、自分の苦境を語り、彼の聖なる祈りの助けを求めました。ヨハネは私のために神に祈り、その後、私にこう言いました。 『神は祝福された、わが子よ！ 冒涜的な思いは、もはやあなたに近づくことはないだろう。』長老の言葉は実現し、それ以来、私は自分の中に冒涜的な思いを抱くことはなかった。

カッパドキア[8475]出身のある女性、ヴァシリーナという名の、コンスタンティノープル聖教会[8476]のディアコニッサが、甥である高貴な人物と共にエルサレムを訪れた。その甥は、実に徳の高い人物であったが、北方の異端[8477]に傾倒していたため、聖なるカトリック教会とは交わりを保っていなかった。敬虔なディアコニッサは、彼を正信仰へと導き、聖なる教会に迎え入れるために多大な努力を払い、聖なる父たち一人ひとりに、彼のために神に祈ってくださるよう熱心に懇願した。 聖ヨハネの話を耳にした彼女は、彼にも拝礼したいと願った。しかし、女性が修道院に入れないことを知ると、ヨハネの弟子であるテオドロスを呼び寄せ、彼女と一緒に来た男を聖なる長老のもとへ連れて行ってくれるよう頼んだ。 彼女は、神がヨハネの祈りによって、誤った教えに囚われた者の冷酷な心を和らげ、彼をカトリック教会との交わりにふさわしい者にしてくださると信じていた。テオドロスは、異端によって心を傷つけられたその男を連れて長老のもとへ行き、慣例に従って礼拝を捧げ、こう言った。

「父よ、私たちを祝福してください！」

すると、長老は弟子にこう言った。

「お前には祝福を与えるが、お前と共に来た者には祝福はない。」

「いいえ、師よ」と弟子は反論した。「私たち二人を共に祝福してください。」

長老は答えた。

– いいえ、あの者が邪悪な異端の思索を捨て、カトリック教会に加わることを誓うまでは、彼には祝福を与えない。

誤った考えを持っていたその男は、長老の神に導かれた洞察力に驚嘆した。この奇跡は彼に変化をもたらし、彼は実際に正信者たちに加わることを誓った。 そこで長老は彼を祝福し、神に導かれた教えによって彼の心のあらゆる疑いを解き、聖なる秘跡に与え、正信仰へと立ち返らせて平和のうちに彼を見送った。 このことを知った敬虔な助祭女ヴァシリーナは、聖なる長老をこの目で見たいという、さらに強い願望に駆られた。彼女は男装をして、修道院へ赴き、自分の思いを打ち明ける

[8475] カッパドキアは小アジアの最東端の州であり、教会の偉大な教父や教師たちの故郷である。例えば、ネオケサリアの司教グリゴリオス・ナジアンゼンなどが挙げられる。

[8476] ディアコニッサ――ギリシャ語に由来する。これは教会における特別な奉仕者の呼称であり、その制度は使徒の時代にまで遡る（ローマ 16:1；Iテモテ 5:3–10）。 ディアコニッサの職には、年配（40歳以上）の未婚の女性または未亡人が選出された。彼女たちの職務は、改宗した女性や少女たちに、洗礼の際にどのように振る舞うべきかを指導すること、洗礼の際、司教を補佐すること、そして司教に代わって額以外の体の部位への塗油を行うことなどであり、 礼拝中の女性たちの秩序と品行を監督し、病人、困窮者、投獄された者を訪問し、拘束されている懺悔者や殉教者に奉仕し、貧しい人々を助けることなどが挙げられる。 コンスタンティノープル教会では、最大40人のディアコニッサが認められていた。ディアコニッサに関しては、いくつかの教会法上の規定があり、具体的には、第4回全地公会議の規則第15条、第4規則第14条、および聖バシレイオス大主教の規則第44条である。

[8477] セヴェロス（512年から518年までアンティオキア総主教）は、モノフィシテス派の異端の中でも穏健派の一人であり、キリストにおいては神性というただ一つの本性のみを認め、それがキリストにおいて人間性を完全に吸収したかのように考えていた。 しかし、セウェルスはキリストの単一の性質を主張しつつも、その中に神性と人間性の性質の違いを認め、復活前のキリストの肉体は、私たちの人間のように朽ちるものであったと認めていた。

ことを企てた。天使からヴァシリーナの意図を告げられた長老は、彼女のもとへ使いを送り、こう伝えた。

「もしあなたが計画通りに私のところへ来ても、結局私の姿を見ることはできないだろう。だから、無理をせず、今いる場所に留まりなさい。私が夢の中に現れて、あなたが私に伝えたいことを聞き、神が私に告げられたことを、自らあなたに伝えるだろう。」

助祭婦人は、聖ヨハネが遠くからでも人の思いを見通すというその透視力に恐れをなして、彼の現れを待ちながらその場に留まった。ある夜、聖ヨハネは彼女の夢の中に現れて、こう言った。

「見よ、神が私をあなたのところへ遣わされた。さあ、あなたが何を望んでいるのか、私に告げなさい。」

彼女は自分の思いを彼に打ち明け、彼からふさわしい魂の癒やしを受けた。彼女に教えを授けた後、聖人は姿を消し、ヴァシリーナは目を覚ますと、神に感謝を捧げた。

聖人の修道室があった場所は、岩だらけで乾燥していた。水分を全く含まない硬い土壌のため、そこには木も草も育たなかった。ある日、聖人はイチジクの種[8478] を取り出し、弟子であるテオドロスとヨハネにこう言った。

「よく聞きなさい、子らよ。もし、神の恵みによって、この種がこの硬い岩の上で芽を出し、枝を伸ばし、実を結ぶならば、神が私に天の御国における安息の場所を授けてくださることを知れ。」

そう言い終えると、彼は自分のケリアの近くの岩の上に種を蒔いた。神は、その御心によってアロンの枯れた杖を緑豊かにさせたのと同様に、その堅い岩に潤いを与え、イチジクの種に成長を授けられた。それは、神の忠実なしもべが神からどれほどの恵みを受けているかを示すためであった。大地からイチジクの木が芽吹き、少しずつ伸びて修道室の屋根にまで達し、やがてその枝で修道室全体を覆い尽くし、やがて三つのイチジクの実を結んだ。それらを収穫すると、長老は涙ながらに神に感謝し、実を舐めてから弟子たちと共に味わった。　そのイチジクを味わった後、彼はすでに高齢であったが、死を迎える準備を始めた[8479] 。

生涯104年を全うし、彼は[8480]　、我らの救い主である主の御許に召された。主には永遠の栄光あれ。アーメン。

聖サヴァ・ストロジェフスキーの帰天

記念日：12月3日

[8478] イチジクの木は、ユダヤ地方で非常に広く見られる木で、広い葉を持ち、とても美味しい果実――イチジク――を実らせていた。

[8479] 聖ヨハネ・沈黙者は558年に逝去した。12世紀初頭、サヴァ・オスヴィャシェンヌイ修道院を訪れたロシアの巡礼者、イグメン・ダニイルは、あたかも生きているかのように見える彼の聖遺物を目撃した。

[8480] 聖人が極老齢に達したとき、弟子の一人が彼に仕えるためにその独房の扉を開けた。「その時、私は――と彼は語る――彼の元へ入り、その植物に関する驚くべき奇跡を目撃し、それがどのように根付いたのか、また石にひび割れはないかと注意深く考察したが、見つけることができなかったので、驚きながらこう言った。　*『ああ、神の富と知恵と知識の深淵よ！　いかにその御計画は測り知れず、その御道は探り知れないことか！』*（ローマ11:33）。というのも、修道院に長く住む者たちは、修道院の激しい暑さと空気の乾燥のため、屋外でも屋内でも、イチジクの木やその他の木が育たないことを知っているからだ。　もし誰かが、道沿いにある修道院の小さなキノヴィアの木々を指摘するならば、それらは、深い土壌と冬の小川の豊かな水を見つけた聖サヴァの祈りの賜物であり、また、今に至るまで冬の間ずっと小川の水でこれらの木々に水をやり続けているキノヴィアの先人たちの功績であることを知っておくべきである。　さらに、多くの者が、土壌が深い小川沿いの木々の世話に尽力し、冬の間ずっと水をやり続けても、乾燥と酷暑のせいで、ようやく1年で成長が見られる程度であった」。

私たちの尊い父サヴァは、幼い頃からキリストを愛し、この世を憎みました。彼は尊者セルギイ・ラドネジスキーのもとを訪れ、彼から修道衣を授かりました。　修道者として、主の御心に適う者たちに主が備えてくださった天の恵みを求めて、彼は並外れた熱意をもって情欲と戦い、徳を磨きました。　彼は悪魔による誘惑や惑わしに何度もさらされましたが、神の助けにより、それらすべてに打ち勝ち、絶えず断食、徹夜祈祷、祈り、その他の霊的修行に励みました。

徳を確固たるものとした聖サヴァは、高い名声と諸公爵からの尊敬を勝ち取った。キリストを愛するゲオルギー・ディミトリエヴィチ公[8481] は、聖サヴァの修道院を訪れ、至福のサヴァに、自身の領地内の適した場所に修道院を建立するよう懇願した。　そこでサヴァは、聖セルギイの修道院を離れ、ズヴェニゴロドの近く、モスクワ川上流にある「ストロージ」と呼ばれる山の荒野に定住した。そこはモスクワの都から50ヴェルスタ離れた場所であり、彼はこの地を将来の修道院の建設地として選んだ。　ここで聖サヴァは、寒さや暑さに耐えながら、完全な沈黙と孤独の中で暮らした。しかし、尊者一人で暮らす期間は長くは続かなかった。彼の偉業と聖なる生活に関する評判が急速に広まり始め、聖サヴァのもとには、霊的生活の導きを求める修道士や信徒たちが四方八方から訪れるようになった。　聖人は、彼を訪ねてくるすべての人を愛をもって迎え入れ、謙遜と修道者の労働において模範を示した。自ら川から水を汲み、それを肩に担いで高い山へと運び、その他必要な作業もこなした。これにより、彼は兄弟たちを労働に慣れさせ、あらゆる悪徳の母である怠惰の中で日々を無駄にしないようにと願ったのである。

その後、キリストを愛するゲオルギー・ドミトリエヴィチ公が、聖人に教会建設に必要な資金を提供し、サヴァは尊く栄光に満ちた聖母マリアの降誕を称える教会を建立し、修道士たちが魂を救うために暮らすための、素晴らしく偉大な修道院を築き上げた。

尊者は、この修道院に集められたキリストの羊の群れにとって良き牧者となり、彼らを霊的な牧草地へと導き、多くの美徳において彼らを確固たるものとした。　高齢に達した聖サヴァは病に倒れ、兄弟たちを呼び集めて聖書について教え、肉体の清さを保ち、互いに愛し合い、謙遜を身に着け、絶えず断食と祈りに励むよう説いた。　その後、聖人は弟子の一人を修道院長に任命し、すべての兄弟たちに、修道院長に対して従順と服従を尽くすよう命じた。皆に平安と最後の口づけを授けた後、聖サヴァは、良き信仰告白のうちに、12月3日[8482] に、その魂を神の御手に委ねた。

この聖なる御使いの帰天の知らせは瞬く間に周辺一帯に広まり、ズヴェニゴロドのキリストを愛するすべての市民――貴族も庶民も――は、深い愛を込めて、病弱な者や病人を連れて、亡き聖人の葬儀に集まった。　故人のために墓前での賛美を捧げた後、彼が建立した聖母マリアの降誕教会に、彼を尊厳をもって埋葬した。　尊者サヴァの聖遺骨は、今日に至るまで、信仰をもってそこへ駆け寄るすべての人々に、数多くの多様な癒やしをもたらしている。これは、　、御自身の聖徒たちを通して、また彼らの死後も、輝かしい奇跡をなされる、私たちの神キリストの栄光によるものである。私たちの主よ、今、そして常に、そして世々限りなく、栄光がありますように。アーメン。

- 聖サヴァの奇跡に関する伝承

聖サヴァの死後、長い年月が経ったある日、彼の修道院のイグメンであるディオニシウスは、ある夜、いつもの祈りを終えて眠りについた。すると、高潔で端正な風貌、白髪に彩られた修道士が現れ、彼にこう言った。「ディオニシウスよ、急いで起き上がり、私の肖像を描きなさい」。

ディオニシウスはその長老に尋ねた。

「師よ、あなたはどなたですか。お名前は？」

威厳ある長老は答えた。

[8481] ズヴェニゴロド公は、モスクワ大公ディミトリ・ドンスキーの次男である。

[8482] 1407年のことである。

「私はサヴァ、この地の長である。」

眠りから覚めたディオニシオスは、直ちにアヴヴァクムという名の長老を呼び寄せた。彼は尊者サヴァの弟子の一人であり、ディオニシオスは、至福のサヴァがどのような人物であったかを尋ねた。アヴヴァクムは、イグメンに、彼のアッバであり師であった人物がどのような人物であったか、また何歳で亡くなったかを語った。イグメンは彼に言った。

「まさにその姿で、今夜、尊者サヴァが私の前に現れ、自分の姿をイコンに描くよう命じたのだ。」

ディオニシウスは自らもイコン画家であったため、急いで聖サヴァのイコンを描き上げた。

聖サヴァの修道院には、ユダという名の悪霊に取り憑かれた者が連れてこられた。聖サヴァへの祈祷が行われている最中、その男は叫んだ。

「つらい、燃え尽きそうだ」と叫び、その瞬間、彼は癒やされた。

なぜそんなに大声で叫んだのかと尋ねられると、彼はこう答えました。

「私は威厳ある長老を見ました。その方は聖サヴァの棺の上に立ち、十字架を手に持ち、それで私に十字を切ってくださいました。その十字架から大きな炎が現れ、私の全身を焼き尽くしました。だから私は叫んだのです。そして、その炎によって、私から不浄な霊が追い払われたのです。」

ある日、聖サヴァ修道院の修道士たちが、彼らのイグメン（修道院長）であるディオニシウスに不満を募らせた。彼らは大公ヨハネに対し、彼に対する虚偽の告発をでっち上げた。大公はその誹謗中傷を信じ、イグメンに直ちに自分の元へ来るよう命じた。このことを知ったイグメンは、深い悲しみに沈んだ。 するとある夜、夢の中で至福のサヴァが現れ、こう言った。

「なぜ悲しんでいるのか、兄弟よ。大公のもとへ行き、恐れることなく彼に語りなさい。疑いに屈してはならない。主なる神があなたと共にいて、助けを送ってくださるからだ。」

神の御心に適う聖人は、修道院長に不平を漏らしていた者たちの一部にも現れ、こう言った。

「あなたがたは、不平を言いながら修行をするために、この世から離れたのか。あなたがたは不平を言っているが、修道院長は涙を流してあなたがたのために祈っている。果たして、あなたがたの誹謗中傷が勝つのか、それともあなたがたの父の祈りが勝つのか。」

修道院長と修道士たちが公爵の前に現れ、法廷で事情を説明すると、中傷者たちは恥をかかされ、修道院長は名誉を保って修道院へと戻った。

聖サヴァの修道院の修道士の一人は、長い間、重い目の病に苦しみ、光を全く見ることができなかった。彼は聖サヴァの棺の前に来て、その前でひざまずき、涙ながらに癒やしを懇願した。　そして、聖人の棺の上に敷かれていた覆い布で、自分の痛む目を拭き始めた。それを見た、そこに立っていた別の修道士は、彼を罵り始め、こう言った。

「お前は癒やされるどころか、砂で目をさらに痛めるだけだ。」

聖サヴァの棺に信仰をもってひれ伏した修道士は癒やされたが、彼を嘲笑った兄弟は突然失明し、次のような声を聞いた。

「お前は望んだ通りの報いを受けた。これによって、他の人々も、神の御使いから生じる奇跡を嘲笑したり冒涜したりしてはならないと学ぶためだ。」

すると、失明した男は大きな恐怖と泣き叫びとともに、聖サヴァの棺の前にひれ伏し、許しを請いました。そして、その許しは、即座には得られませんでしたが、多くの祈りと涙、そして悔い改めの末に与えられました。

ある夜、盗賊たちが修道院に侵入し、聖母マリア教会から盗みを働こうとした。しかし、彼らが聖サヴァの棺の上にある窓に近づいたとき、突然、彼らの目の前に登ることは到底不可能な巨大な山が現れた。　たちまち彼らを恐怖と戦慄が襲い、彼らは手ぶらで立ち去った。この一連の出来事は、後に盗賊たち自身が悔い改めて修道院を訪れ、自ら語ったものであり、彼らは残りの生涯を悔い改めの中で過ごした。

その後、あるボヤリン、イワン・ルティシェフが、病床にある息子のゲオルギーを寝台に乗せて修道院を訪れた。ゲオルギーは極度の衰弱のため、もはや話すこともできなかった。修道士たちはゲオルギーの回復を祈る祈祷を捧げた後、病人の口に修道院のクワスを注いだ。　病人はたちまち言葉を話し始め、修道士たちの食事からパンを口にし、健康を取り戻した。息子の治癒に大いに喜んだ父親は、神とその御使いである聖サヴァに深い感謝を捧げ、まるで生きているかのように尊者に向かってこう言った。

「尊い父よ！私の家には、様々な病に苦しむ多くの奴隷たちがいます。もしお望みならば、彼らをも癒やしてくださることを信じております。」

イグメンにクワスを頼んだ後、ボヤリンは癒やされた息子と共に帰路についた。自宅に着くと、彼はイリーナという名の、耳が聞こえず目も見えない女奴隷を一人呼び寄せ、修道院のクワスを彼女の耳に注ぎ込み、そのクワスで彼女の盲目の目を塗った。　するとすぐに、イリーナは目が見え、耳が聞こえるようになった。　皆は畏怖の念を抱きつつ、神の偉大さに驚嘆した。また、ボヤリンは、7年間耳が聞こえなかった自分の奴隷の一人、アルテミイを呼び寄せ、彼の耳にも同じクワスを注ぎ込んだところ、その奴隷も癒やされた。その後、彼はキキリヤという名の盲目の娘を連れてきたが、彼女の目にクワスが塗られるやいなや、彼女も癒やされた。　しかし、こうした奇跡はすべて、クワスそのものによるものではなく、聖サヴァの祈りと、ボヤリン・イワンの深い信仰によってもたらされたものであった。しばらくして、ボヤリン自身も病に倒れた。同じ薬を用いると、彼もまた癒やされた。

聖サヴァ・ストロジェフスキー修道院のイグメン、ミサイルは重病に陥り、回復への希望をすべて失い、死の淵にありました。ある日、修道院のポノマリ（聖職助手）であるグリーが、早課の鐘を鳴らしに歩いていました。彼が教会の扉の前を通りかかったとき、威厳ある長老が彼に近づき、こう尋ねました。

「修道院長の体調はいかがですか？」

グリーはイグメンの病状を話した。すると、威厳ある長老はこう言った。

「行って、イグメヌにこう伝えなさい。聖母マリアと、この地の長である長老サヴァに助けを請うよう。そうすれば彼は回復するだろう。そして、兄弟よ、私に扉を開けてくれ。そうすれば私は教会に入る。」

グリーは疑念を抱き、鐘が鳴る前に扉を開けることを拒んだが、その長老が誰で、どこから来たのかと尋ねる勇気もなかった。現れた長老は、それ以上一言も発することなく、教会の扉へと向かった。　すると、扉はたちまち自然に開き、長老はそこから教会の中に入った。グリーは恐怖に駆られて独房に戻り、助手に対してこう叱責した。

「なぜ昨晩、教会の扉を閉めなかったのだ？　今、見知らぬ男が開いた扉から教会に入っていくのを目撃したぞ。」

しかし、グリーの助手は、夕方に教会の扉をしっかりと施錠したと断言した。　そこで彼らはろうそくに火を灯し、急いで教会へ向かったが、扉はしっかりと施錠されていた。グリーの助手は確かに夕方に扉を閉め、入念に施錠していたのである。早課が終わると、グリーは兄弟たちに、自分が見聞きしたすべてを語った。　皆は満場一致で、現れた長老こそが聖サヴァその人であると結論づけた。イグメン・ミサイルはこれを聞くと、自分を聖人の棺の元へ運ばせ、熱心に癒やしを願い求めたところ、至聖なる聖母マリアと聖サヴァの祈りによって、完全に健康を取り戻した。

この神の御使いの棺からは、他にも多くの奇跡や癒しが起こった。　そして今なお、信仰をもって訪れる者たちには、神の恵みと、至聖なる聖母マリアおよび聖サヴァの祈りによって、これらの奇跡が授けられています。私たちもまた、聖サヴァに祈りを捧げ、彼が私たちの心と体の病を、主な

る神キリストへの温かい執り成しによって癒やしてくださるよう願います。神に永遠の栄光がありますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

尊き者よ、あなたは荒野に現れた善き光なり。若き日から清らかな生活を選び、あなたの霊的師に従い、その教えによって心を天へと向け、あなたの群れにとって賢明な導き手となられた。 それゆえ、キリストは、あなたをまばゆいばかりの灯として、奇跡を豊かに授けられました。サヴォ、わが父よ、わが魂が救われるようお祈りください。

コンダク、第2調:

主の御心によって燃え上がり、肉欲を節制によって振り払い、神の光の沈むことのない輝きとして現れたあなたは、御遺骨の聖櫃に駆け寄るすべての人々を、奇跡の光線で照らし出しておられます。サヴォ、尊き父よ。

12月17日

12月4日（旧暦）

聖大殉教女バルバラの生涯と殉教

記念日 12月4日

不敬虔なローマ皇帝マクシミアヌス[8483] の治世に、東方のイリオポリス[8484] に、ディオスコーロスという名の、高貴な家柄で富と名声に恵まれた一人の男が住んでいた。彼は生まれも信仰も異教徒であった。彼にはバルバラという娘がおり、彼女を瞳の如く大切にしていた。というのも、彼女以外に子供がいなかったからである。 彼女が成長するにつれ、その顔立ちは極めて美しくなり、その一帯で彼女に匹敵する美貌の乙女は一人もいなかった。そのため、ディオスコルスは彼女のために高く、精巧に造られた塔を建て、その塔の中に豪華な居室を設けた。 そこで彼は娘をその中に閉じ込め、信頼できる乳母や侍女たちを付けました。というのも、彼女の母親はすでに亡くなっていたからです。彼がそうした理由は、その美貌を庶民や身分の低い者たちに見せないためでした。彼は、彼らの目には娘の美しい顔を見る資格がないと考えていたのです。 塔の高き宮殿で暮らす少女は、この高みから、天と地にある神の被造物——天の星々や地上の世界の美しさ——を眺めることに慰めを見出していた。 ある日、空を見上げ、太陽の輝きや月の満ち欠け、星々の美しさを眺めながら、彼女は共に暮らしていた乳母や侍女たちに尋ねた。

「これを創造したのは誰ですか？」

[8483] ここでいうのは、もちろんマクシミアヌス・ガレリウスである。彼は、ローマ帝国東部においてディオクレティアヌス帝の娘婿兼共同統治者であり、その後305年から311年にかけて後継者となった人物である。

[8484] ここで言及されているのは、パレスチナの北に位置するフィニキアのイリオポリスであり、 ケレシリアに位置し、現在のトルコ・アジア側のシリア地方にあたる。太古の昔、異教のフェニキアの神バアルを崇拝する主要な場所であり、東方の異教全体の中枢であったが、4世紀末にはキリスト教の温床となり、その後、この都市は徐々に荒廃していった。

また、地上の美しさ――緑に覆われた野原や林、果樹園、山々や水辺――を眺めながら、こう尋ねた。

「これは誰の手によって造られたのですか？」

彼女たちはこう答えました。

「これらはすべて神々が創ったのです。」

少女は尋ねた。

「どんな神々ですか？」

侍女たちは彼女に答えた。

「あなたの父が敬い、宮殿に祀っている神々――金や銀、木でできた神々――そして父が崇拝している神々こそが、あなたの目の前にあるすべてのものを創り出したのです。」

その言葉を聞いて、乙女は疑念を抱き、心の中でこう考えた。

「父が崇めている神々は、人の手によって作られたものだ。金や銀の神々は金細工師が、石の神々は石工が、木の神々は木彫師が作った。それなのに、足で歩くことも、手で物を作ることもできない、こうした作られた神々が、どうしてこれほど明るく広大な空や、この地上に広がる美しさを創造できたというのか？」

このように考えを巡らせながら、彼女は昼も夜も頻繁に空を見上げ、その創造物を通じて創造主を知ろうと努めた。　ある日、彼女が長い間空を見つめ、このほど美しい高み、広大さ、そして明るさを備えた空を誰が創造したのかを知りたいという強い願望に駆られていたとき、突然、彼女の心の中に神の恵みの光が輝き、天と地を至高の知恵をもって創造された、唯一にして目に見えず、知られず、理解しがたい神を知るために、彼女の心の目が開かれた。 彼女は心の中でこう語った。

「そのような神はただひとりしかいないはずだ。それは、人間の手によって造られたのではなく、独自の存在を持つ御自身が、御自身の御手によってすべてを創造された方である。　天の広さを広げ、地の基を据え、上からは太陽の光線、月の輝き、星々の煌めきをもって全宇宙を照らし、下からは様々な木々や花で大地を飾り、川や泉で潤してくださるお方が、ただお一人おられるに違いない。　すべてを支え、すべてに命を与え、すべてのことを導かれる神は、ただひとりであるに違いない。

こうして、乙女バルバラは被造物を通して創造主を知ることを学び、ダビデの言葉*「あなたのすべての御業を思い巡らし、あなたの御手のわざを熟考する」*（詩篇142:5）が彼女に実現したのである。　そのような思索の中で、バルバラの心には神への愛の炎が燃え上がり、その魂を神への熱烈な憧れで燃え立たせた。そのため、彼女は昼も夜も安らぎを得ることができず、ただ一つのことだけを考え、ただ一つのことだけを願い続けた。それは、神、すなわち万物の創造主について正確に知ることだった。　人々の間には、聖なる信仰の奥義を彼女に明かし、救いの道へと導いてくれる師を見つけることはできなかった。というのも、彼女の父ディオスコーロスが彼女を厳重に警護させていたため、付き添いの女中たち以外、誰も彼女の部屋に入ることを許されていなかったからである。　しかし、至高の師であり導き手である聖霊ご自身が、内なる啓示によって、目に見えない形で彼女に御自身の恵みの奥義を教え、その心に真理の知識を授けてくださった。　そして、その乙女は、屋根の上の孤独な鳥のように、自分の塔の中で暮らしていた[8485] 。彼女は地上のことではなく、天上のことを思索していた。なぜなら、彼女の心は地上の何ものにも執着せず、金も、高価な真珠や宝石も、華やかな衣装も、いかなる乙女らしい装飾品も愛さなかったからである。　結婚のことなど決して考えず、彼女のすべての思いは唯一の神に向けられており、彼女は神への愛に心を奪われていた。

その乙女を嫁がせる時が来ると、多くの裕福で高貴、名門の若者たちが、バルバラの驚くべき美しさを聞きつけ、ディオスコーロスに彼女の嫁入りについて申し入れた。　バルバラのいる塔に登

[8485] 詩篇の句 参照：詩篇101

ったディオスコーロスは、彼女に結婚について語り始め、様々な立派な求婚者たちを挙げながら、その中から誰と婚約したいかと尋ねた。父からそのような言葉を聞かされ、貞淑な乙女は顔を赤らめ、結婚の話に耳を傾けることだけでなく、考えることさえ恥ずかしく思った。　彼女は父の望みに屈することなく、あらゆる手段でそれを拒んだ。なぜなら、自身の純潔の花を枯れさせ、処女というかけがえのない真珠を失うことは、自分にとって大きな損失だと考えていたからである。父が執拗に自分の意志に従うよう説得する中、彼女は何度も反論し、ついにこう宣言した。

「父よ、もしあなたがまだこの話を持ち出し、私に婚約を強いるようなことがあれば、もう二度と私を『父』とは呼ばないでください。私は自ら命を絶ち、あなたは唯一の娘を失うことになるでしょうから。」

これを聞いて、ディオスコルスは恐怖に駆られ、もはや彼女に結婚を強いることを敢えてせず、その場を去った。彼は、無理やりではなく、彼女の自発的な意思で婚約させたほうがよいと考え、やがて彼女自身が考えを改め、結婚を望む時が来ることを期待していた。　その後、彼は用事で遠方へ旅立つことを企てた。バルバラは自分がいないと寂しがるだろうと考え、自分が戻った時には、彼女の心を動かして自分の命令や助言に従わせるのが容易になるだろうと見込んでいたのだ。　旅立つ際、ディオスコルスは、庭にある水浴び場に豪華な浴場を建設するよう命じ、その浴場には南向きの窓を二つ設けるよう指示した。また、娘の世話を任された者たちには、彼女が塔から自由に降りて好きな場所へ行き、好きなことをするのを妨げないようにと命じた。　ディオスコルスは、娘が多くの者と会話を交わし、多くの乙女たちが婚約したり結婚したりしているのを見て、自らも結婚を望むようになるだろうと考えていた。

ディオスコーロスが旅立った後、バルバラは家を出たり、誰とでも自由に話したりできる自由を利用して、何人かのキリスト教徒の娘たちと親しくなり、彼女たちからイエス・キリストの御名を聞いた。彼女はその御名に心を躍らせ、彼女たちからキリストについてより詳しく知ろうと努めた。彼女の新しい友人たちは、キリストについてすべてを語ってくれた。すなわち、その言い表せない神性、聖母マリアによる受肉、自発的な受難と復活、そして将来の審判、偶像崇拝者たちの永遠の苦しみ、そして天の御国における信じるキリスト教徒たちの尽きることのない至福についてである。　これらすべてを聞きながら、バルバラは心に甘美さを感じ、キリストへの愛に燃え上がり、洗礼を受けたいと願った。　ちょうどその頃、ある長老が商人を装ってイリオポリスを訪れた。そのことを知ったバルバラは彼を自宅に招き入れ、古くから切に願っていた、万物の唯一の創造主であり全能の神への知識と、我らの主イエス・キリストへの信仰を、彼から密かに学んだ。　長老は、聖なる信仰のすべての奥義を彼女に説き明かし、父と子と聖霊の御名によって彼女に洗礼を授け、彼女を指導した後、自らの国へと帰っていった。　洗礼によって啓発された聖バルバラは、神への愛をさらに燃え上がらせ、昼夜を問わず断食と祈りに励み、主に仕え、主への純潔を誓い、処女としての清らかさを守ることを誓った。

その間、ディオスコーロスの命令に従い、浴場の建設が進められていた。ある日、聖バルバラは建設の様子を見るために自分の塔から降りてきたが、浴場に窓が二つあるのを見て、作業員たちに尋ねた。

「なぜ窓を二つしか設けなかったのですか？　三つにしたほうがよいのではないでしょうか？そうすれば壁も美しくなり、浴場も明るくなるでしょう。」

労働者たちはこう答えました。

「あなたの父が、南側に窓を二つ設けるよう命じたのです。」

しかし、バルバラは（聖三位一体に倣って）3つの窓を設けるよう強く要求した。彼らが彼女の父を恐れてそれを拒むと、彼女はこう言った。

「私が父の前であなたたちを擁護し、責任を負うから、私の言う通りにして。」

そこで職人たちは、彼女の願い通り、浴場に三つ目の窓を設けた。そこには、前述の通り、浴場が建てられた場所のすぐそばに水浴び場があった。　この浴場は、切り出された大理石で覆われていた。聖バルバラはある日、この浴場を訪れ、東の方角を見つめながら、指で大理石の上に聖十字架の図を描くと、それはまるで鉄で打ち込まれたかのように、石に鮮明に刻み込まれた。　さらに、その同じ浴場の石の上には、彼女の乙女の足の跡も刻まれ、その跡から水が湧き出し、その後、信仰を持って訪れる人々に対して、この場所で多くの癒やしがもたらされた[8486]。

ある日、父の宮殿を散策していた聖バルバラは、名誉ある場所に置かれた父の「神々」、すなわち魂のない偶像たちを目にし、偶像を崇める人々の魂の滅びを深く嘆いた。そして、彼女は偶像の顔に唾を吐きかけながら、こう言った。

「あなた方を崇拝し、あなた方のような無情な者たちから助けを期待している者たちが、皆、あなた方のようになれますように！」

そう言うと、彼女は自分の塔へと登った。そこで彼女は、いつものように祈りと断食に身を捧げ、全精神を神への思索に没頭させた。

その間、彼女の父は旅から戻ってきた。家の建物を点検していた彼は、新しく建てられた風呂屋に近づき、壁に三つの窓があるのを見て、なぜ自分の命令に背いて窓を二つではなく三つ作ったのかと、使用人や作業員たちを怒って叱りつけた。彼らはこう答えた。

「それは私たちの意志ではなく、あなたの娘バルバラの意志です。私たちが望んでいなかったにもかかわらず、彼女が三つの窓を設けるよう命じたのです。」

ディオスコルスは直ちにバルバラを呼びつけ、こう尋ねた。

「なぜ、浴場に三つ目の窓を設けるよう命じたのだ？」

彼女はこう答えた。

「三つの方が二つより良いのです。父上は、私の考えでは、天の二つの光、太陽と月[8487]に倣って、浴場を照らすために二つの窓を作るよう命じられました。しかし私は、三位一体の光に倣って、三つ目の窓も作るよう命じたのです。なぜなら、近づきがたく、言い表せず、沈むこともなく、揺らぐことのない三位一体の光、 三つの窓[8488]があり、それによってこの世に生まれるすべての人間は照らされるのです。

父は、娘のこの新しく、実に驚くべき、しかし彼には理解できない言葉に戸惑いを覚えた。聖バルバラが指で石に刻んだ十字架――彼はまだそれをよく見ていなかった――が描かれている浴場のその場所へ娘を連れて行くと、ディオスコルスは彼女に尋ね始めた。

「一体、何を言っているのだ？　三つの窓からの光が、どうしてあらゆる人を照らすというのか？」

聖女はこう答えた。

「よく耳を傾けて、私の言うことを理解してください、父よ。父、子、聖霊――三位一体の神の三つの御姿は、近づきがたい光の中に住まわれ、あらゆる息吹を照らし、生かしておられるのです。」　だからこそ、私は浴場に三つの窓を設けるよう命じたのです。そのうちのひとつは父を、もう

[8486] また、聖三位一体を模して建てられた三つの窓を持つ浴場、泉のそばにある十字架の像が刻まれた大理石、そして聖バルバラの足跡――これらすべては、ヨハネス・ダマスコスに続いてこの聖なる殉教者の苦難を記述したシメオン・メタフラストの時代まで、そのままの状態で保存されていた。彼は自身の歴史書の中で、次のように述べている。　「今日に至るまで、この泉はキリストを愛する人々のあらゆる病を癒やし続けている。もし誰かがこれをヨルダン川の流水やシロアムの泉、あるいはベテズダと比較したとしても、それは真実を誤るものではない。なぜなら、この泉においても、キリストの力は同様に多くの奇跡を成し遂げているからである」。

[8487] フェニキア人は主に天体の神々を崇拝していた。彼らはバアル、すなわちモロクを主神と認め、その姿を通じて太陽を崇拝し、またアスタルテを主神と認め、その姿を通じて月を崇拝していた。

[8488] 言うまでもなく、三位一体として崇められる唯一の神の三つの位格、すなわち三つの御顔のことである。

ひとつは子を、三つ目は聖霊を表すようにし、壁そのものが聖三位一体の御名を賛美するようにするためです。

それから、大理石に描かれた十字架を指さして、彼女はこう言いました。

「私はまた、神の御子のしるしも描いたのです。父の御心と聖霊の助けにより、人々の救いのために、御子は聖母マリアから受肉され、御自身の意志によって、あなたが今見ているこの十字架の上で苦難に遭われました。私はここに十字架のしるしを描いたのは、十字架の力がここからすべての悪魔の力を追い払うためです。」

このほかにも、この極めて賢明な乙女は、冷酷な父に対し、聖三位一体、キリストの受肉と受難、十字架の力、そして聖なる信仰のその他の奥義について語り続けた——それによって、父を激しい怒りに駆り立てたのである。

ディオスコルスは怒りに燃え上がり、娘に対する自然な愛情を忘れ、剣を抜き、彼女を刺し貫こうとしたが、彼女は逃げ出した。剣を手にしたディオスコルスは、狼が羊を追うように彼女を追いかけた。　彼はすでに、キリストの汚れなき子羊に追いつきかけていたが、その時、突然、岩山が彼女の行く手を塞いだ。聖女は、父——いや、むしろ彼女を苦しめる者——の手や剣からどこへ逃げればよいのか分からなかった。彼女にはただ一つの避難所、すなわち神しかなく、心と体の目を神に向け、助けと保護を懇願した。　至高なる御方はすぐに御自分のしもべの祈りを聞き入れ、かつて最初の殉教者テクラが好色な者たちから逃れた時のように、岩山に彼女の前に二つに割れるよう命じ、彼女に先立って助けを与えられた。　聖女バルバラはその裂け目に身を隠すと、たちまち岩は彼女の背後で閉じ、聖女が山の頂上へと向かう道を切り開いた。頂上に登ると、彼女はそこにある一つの洞窟に身を隠した。残酷で執念深いディオスコーロスは、目の前から娘が逃げ去ったのを見かけず、驚いた。　彼女がどのようにして自分の目の前から姿を消したのか理解できず、彼は長い間懸命に彼女を探し回った。山を回りながらバルバラを探していると、彼は山の上で羊の群れを放牧している二人の羊飼いを目にした。　その羊飼いたちは、聖バルバラが山に登り、洞窟に身を隠すのを目撃していた。彼らに近づいたディオスコーロスは、逃げた娘を見かけなかったかと尋ねた。羊飼いのうちの一人、思いやりのある男は、ディオスコーロスが怒りに満ちているのを見て、罪のない乙女を売り渡すことを拒み、こう言った。

「彼女を見かけませんでした。」

しかし、もう一人の羊飼いは、黙って、聖女が隠れている場所を手のひらで指し示した。ディオスコルスはその場所へ駆けつけたが、聖女を密告した羊飼いは、その場で神の裁きを受けた。彼自身は石の柱へと変わり、彼の羊たちはイナゴへと変貌した。

洞窟で娘を見つけたディオスコルスは、容赦なく彼女を殴りつけ、地面に投げつけると、足で踏みつけ、髪をつかんで自分の家へと引きずっていった。　その後、彼は彼女を狭く暗い小屋に閉じ込め、扉と窓を固く閉ざし、封印を施して見張りを立て、囚人を飢えと渇きで苦しめた。その後、ディオスコルスはその国の統治者マルティアヌスのもとへ赴き、娘についてすべてを語り、彼女が自分たちの神々を拒み、十字架にかけられた方を信じていると告げた。

ディオスコルスは統治者に、様々な拷問をちらつかせて、娘を父の信仰へと従わせるよう懇願した。その後、彼は聖女を監禁場所から連れ出し、統治者の元へ連れて行き、彼女をその手に委ねながらこう言った。

「私は彼女を拒絶する。彼女は私の神々を拒んでいるからだ。もし彼女が再び我々の元に戻らず、私と共に神々にひれ伏さないのであれば、彼女はもはや私の娘ではなく、私も彼女の父ではない。尊き統治者よ、お望みのままに彼女を苦しめてください。」

目の前の乙女を見て、統治者はその並外れた美しさに驚き、彼女の美しさと気高さを称えながら、優しく親しみを込めて語りかけた。　彼は、先祖代々の父の掟から逸脱せず、父の意志に逆らわず、神々に拝礼し、あらゆる点で親の言うことを聞くよう彼女を諭した。そうしなければ、父の全財

産を相続する権利を失うことになるからだ。 しかし、聖バルバラは、賢明な言葉をもって 異教の神々の虚しさを暴き、イエス・キリストの御名を告白し賛美するとともに、地上のあらゆる虚栄、富、世俗の快楽を拒絶し、天の恵みを求めた。 統治者は依然として、彼女に一族の名誉を汚さず、美しく花開く青春を台無しにしないよう説得し続けた。ついに、彼は彼女にこう言った。

「美しい乙女よ、どうか自分を憐れんで、熱心に我々と共に神々への生贄を捧げるよう急いでくれ。私はお前を憐れみ、お前を赦したいのだ。これほどの美しさを苦痛や傷にさらすことは望まない。しかし、もし私の言うことを聞かず、従わないのであれば、たとえ私の意志に反してでも、お前を残酷に苦しめることを余儀なくされるだろう。」

聖バルバラはこう答えた。

「私は常に私の神に賛美の捧げ物を捧げており、私自身も神への捧げ物となりたいと願っています。なぜなら、神こそが唯一の真の神であり、天と地、そしてその上に存在するすべてのものの創造主だからです。しかし、あなたの神々は無に等しく、何も創造していません。彼らは魂もなければ力もなく、それ自体が人間の作り出したものに過ぎません。神の預言者がこう言っている通りです：*『彼らの偶像は銀や金、人の手による造り物である。諸国民の神々はすべて偶像であるが、天の主は創造された』*（詩編 113:12； 詩篇95:5）。私はこの預言者の言葉を認め、万物の創造主である唯一の神を信じます。そして、あなた方の神々については、それらが偽りであり、それらへのあなた方の希望は無駄であると告白します。

聖バルバラのこのような言葉に激怒した統治者は、直ちに彼女を裸にするよう命じた。この最初の拷問――多くの男たちの目の前で、恥じることなく、その裸の処女の体を執拗に見つめる者たちの前で、裸で立たされること――は、貞淑で清らかな乙女にとって、傷そのものよりもさらに辛い苦しみであった。 その後、拷問担当者は彼女を地面に寝かせ、長い間、牛の腱で激しく打ち据えるよう命じ、地面は彼女の血で赤く染まった。統治者の命令により鞭打ちを止めた後、拷問担当者は彼女の苦しみをさらに増すため、聖処女の傷口を羊毛の衣や鋭い陶器の破片でこすり始めた。 しかし、若くもろい乙女の体に、嵐や風よりも激しく襲いかかったこれらすべての拷問も、信仰に揺るぎない殉教者バルバラを動揺させることはなかった。なぜなら、その信仰は岩――主キリスト――の上に築かれており、彼女はその主のために、喜んでこれほど過酷な苦しみに耐えたからである。

その後、統治者は、彼女に対して最も残酷な拷問を思いつくまで、彼女を牢獄に閉じ込めるよう命じた。 過酷な拷問でかろうじて息をしているだけの聖バルバラは、牢獄の中で愛する花婿であるキリスト・神に涙ながらに祈り、このような激しい苦しみの中に彼女を見捨てないでくださるよう願い、ダビデの言葉を引用してこう語った。*「主よ、わが神よ、私を見捨てないでください！ 私から離れないでください。主よ、私の救い主よ、急いで私を助けてください！」*（詩編37:22–23）。彼女がそう祈っていると、真夜中に大きな光が彼女を照らした。聖女は心の中に恐れと喜びを同時に感じた。朽ちることのない花婿が、花嫁を訪ねようと彼女に近づいてきたのである。 そして、栄光の王ご自身が、言葉に尽くせぬ栄光のうちに彼女の前に現れた。ああ、彼女が主を見たとき、どれほど霊を喜ばせ、心にどれほどの甘美さを感じたことか！主は、愛を込めて彼女を見つめながら、その最も甘美な口調でこう言われた。

「勇気を出しなさい、わが花嫁よ。恐れることはない。わたしはあなたと共にいる。あなたを守り、あなたの奮闘を見守り、あなたの病を和らげてあげる。」 あなたの苦しみに対して、わたしは天の宮殿で永遠の報いを用意している。だから、最後まで耐え忍び、やがてわたしの御国で永遠の恵みを享受できるようにしなさい！

主キリストの御言葉に耳を傾けた聖バルバラは、火に溶ける蝋のように、神と一つになりたいという願いに心を溶かされ、氾濫する川のように、神への愛に満ち溢れた。 最愛の花嫁であるバルバラを慰め、御自身の愛で彼女を甘やかした後、至甘きイエスは彼女の傷を癒やし、その体に傷跡さ

えも残らないようにされた。その後、主は姿を消され、彼女を言葉に尽くせぬ霊的な喜びの中に残された。　そして、聖バルバラは、まるで天にいるかのように牢獄にとどまり、セラフィムのように神への愛に燃え、心と口をもって神を賛美し、御名のために苦しむ御自分のしもべを見捨てず、訪れてくださったことに対して、主に感謝を捧げた。

その町には、ユリアニアという名の、キリストを信じ、神を畏れるある女性が住んでいた。聖バルバラが拷問者たちに捕らえられて以来、ユリアニアは遠くから彼女を見守り、その苦しみを見つめていた。そして、聖女が牢獄に投げ込まれたとき、彼女は牢獄の窓に顔を寄せ、若さと美しさの絶頂にあるそのような若い乙女が、自分の父を、　一族全体、富、そしてこの世のあらゆる恵みと喜びを軽んじ、自らの命さえ惜しまず、熱心にキリストのためにそれを捧げたことに驚嘆した。　そして、キリストが聖バルバラの傷を癒やされたのを見て、彼女自身もキリストのために苦難に遭いたいと願い、その偉業に備え始め、苦難の模範であるイエス・キリストに、苦しみの中で忍耐を授けてくださるよう祈った。　日が明けると、聖バルバラは新たな拷問を受けるため、牢獄から不敬虔な裁判の場へと連れ出された。　ユリアニアは遠くから彼女の後を追った。聖バルバラが総督の前に立つと、総督と彼と共にいた　は、驚愕して、その乙女が完全に健康で、顔色は明るく、以前よりもさらに美しく、そして彼女の体には受けた傷跡が一切ないのを見た。これを見て、総督は言った。

「ほら、乙女よ、我らの神々がどれほどあなたを慈しんでいるか、わかるか？　昨日、あなたは残酷に拷問され、苦しみで衰弱していたのに、今や神々はあなたを完全に癒やし、健康を授けてくださった。この神々の恩恵に感謝しなさい――神々にひれ伏し、供物を捧げなさい。」

聖女はこう答えた。

「何をおっしゃるのですか、統治者よ。あなたの神々は、自らも盲目であり、口がきけず、感覚もないというのに、私を癒したなどとおっしゃるのですか。　彼らは、盲人に視力を、口がきけない者に言葉を、耳の聞こえない者に聴力を、足の不自由な者に歩く力を与えることはできません。病人を癒やすことも、死者をよみがえらせることもできません。それなのに、どうして彼らが私を癒やすことができ、なぜ彼らに拝む必要があるというのですか？　私を癒やしたのは、あらゆる病を治し、死者に命を与える私の神、イエス・キリストである。私は感謝を込めて彼に礼拝し、自分自身を彼への捧げ物とする。しかし、あなたの心は盲目であり、この神聖な癒やし主を見ることもできず、その価値もないのだ。

聖なる殉教者のこの言葉に、統治者は激怒した。彼は、殉教者を木に吊るし、鉄の爪でその体を削り、燃えるろうそくで肋骨を焼くよう命じ、さらにハンマーで頭を打ちつけるよう命じた。　聖バルバラは、これらすべての苦難を勇敢に耐え抜いた。そのような拷問から生き延びることは、彼女のような若い乙女だけでなく、強靭な男でさえも不可能であったはずだが、キリストの羊である彼女を、目に見えない神の力が支えていた。

聖バルバラの拷問を見守る群衆の中に、ユリアニアも立っていた。聖バルバラの甚大な苦しみを見つめ、ユリアニアは涙をこらえきれず、激しく泣き崩れた。　熱意に駆られた彼女は、群衆の中から声を張り上げ、非情な統治者の非人道的な拷問を糾弾し、異教の神々を冒涜し始めた。直ちに彼女は捕らえられ、どの信仰を奉じているかと問われると、自分はキリスト教徒であると宣言した。すると統治者は、バルバラと同じように彼女を拷問するよう命じた。　ユリアニアはバルバラと共に絞首刑に処され、鉄の櫛で髪を引っこ抜かれた。そして、聖大殉教者バルバラは、この光景を目の当たりにし、自らも拷問に耐えながら、悲しみのうちに神へと視線を向け、こう祈った。

「人の心を試される神よ、私が全身全霊をあなたに捧げ、あなたの全能の右手の御手に身を委ね、あなたを慕い、あなたの聖なる戒めを愛してきたことを、あなたはご存知です。　主よ、私を見捨てないでください。私と、私の同胞であるユリアニアに憐れみ深く目を留め、私たち二人を強め、

この真の偉業を成し遂げる力を与えてください。「*霊は熱心ですが、肉体は弱いのです*」（マタイ26:41、マルコ14:38）。

聖女はそう祈り、苦難を勇敢に耐え抜くための天の助けが、目に見えない形で殉教者たちに与えられました。その後、拷問官は二人の乳房を切り落とすよう命じました。それが実行され、殉教者たちの苦しみが増したとき、聖バルバラは再び、自らの医者であり癒し主である御方に目を向け、こう叫びました。 *「あなたの聖霊を私たちから取り去らないでください。主よ、あなたの救いの喜びを私たちに返してください。そして、主権ある御霊によって、私たちをあなたの愛の中に堅く立たせてください！」*（詩編50:13–14）。

このような拷問の後、統治者は聖ユリアニアを牢獄へ連行するよう命じ、聖バルバラについては、彼女を大いに辱めるために、裸のまま街中を引き回させ、嘲笑と殴打にさらさせた。聖処女バルバラは、恥をまるで衣のように身にまとい、最愛の花婿であるキリスト・神に向かって叫んだ。

「神よ、天を雲で覆い、地を霧で包み、まるで産衣のように[8489] を包む御方よ。御自身こそが王であられる。どうか私の裸と、大殉教者バルバラの苦しみを覆い隠してください。不義なる者たちの目が私の体を見ることなく、御自分のしもべが最後まで嘲笑されることのないよう、お導きください！」

主イエス・キリストは、御自身の聖なる天使たちと共に天上から御自分のしもべの偉業を見下ろし、直ちに彼女を助けに駆けつけ、光り輝く衣をまとった明るい天使を遣わして、聖なる殉教者の裸身を覆わせた。 その後、不信心者たちはもはや殉教者の裸の体を見ることはできず、彼女は拷問者の元へと連れ戻された。彼女の後に、同じく裸のまま、聖ユリアニアが町中を引き回された。 ついに、拷問官は、彼女たちをキリストへの愛から遠ざけ、偶像崇拝へと導くことができないと悟ると、二人を剣による斬首に処した。

バルバラの冷酷な父ディオスコルスは、悪魔にすっかり心を蝕まれており、娘が激しい拷問を受けるのを見て悲しむどころか、自らその処刑人となることさえ恥じなかった。 娘を掴み、鞘から抜いた剣を手にしたディオスコルスは、彼女を処刑場へと引きずっていった。その場所は、町の外れにあるある山の上、 に定められていた。そして、兵士の一人が聖ユリアニアを彼らの後ろから連れていた。彼らが歩いている間、聖バルバラは神にこう祈った。

「始まりなき神よ、天を覆いとして広げ、水の上に地を築き、御自身の太陽に善人も悪人も等しく照らすよう命じ、義人にも不義な者にも等しく雨を降らせられる方よ[8490] 、今、あなたに祈るこのしもべの声を聞き入れてください。聞き入れてください、 王よ、私と私の苦しみを思い起こすすべての人々に御恵みをお与えください。そうすれば、突然の病が彼らに近づかず、予期せぬ死が彼らを奪うこともありません。主よ、あなたはご存知です。私たちは肉と血であり、あなたの至聖なる御手によって造られた被造物なのですから。

彼女がそう祈っていると、天から声が聞こえてきた。その声は、彼女とユリアニアを山上の集落へと招き、願いが叶うことを約束するものであった。こうして、二人の殉教者、バルバラとユリアニアは、この世の肉体から一刻も早く解き放たれ、主の御前に立つことを願って、大きな喜びをもって死へと向かった。 定められた場所にたどり着くと、キリストの羊であるバルバラは剣の下に頭を差し出し、無慈悲な父の手によって首を刎ねられ、聖書に記された*「父は子を死に渡す」*（マタイ10:21、マルコ13:12）という言葉が成就した。 一方、聖ユリアニアは兵士によって首を刎ねられた。こうして彼女たちはその偉業を成し遂げた[8491] 。彼女たちの聖なる魂は、天使たちに出迎えられ、主ご自身に愛をもって迎え入れられ、喜びをもって花婿であるキリストのもとへと旅立った。ディオス

[8489] 聖書から引用された表現：参照 詩編146:9；ヨブ記38:10。
[8490] 聖書の表現：参照 詩編103:2、135:6；マタイによる福音書5:45。
[8491] 聖大殉教者バルバラとユリアニアの幸いな死は、306年に訪れた。

コラと統治者マルティアンには、突然、神の裁きが下った。　処刑が行われた直後、二人は雷に打たれて殺され、その遺体は稲妻によって灰と化した。

その町には、ガレンティアンという名の敬虔な人物が住んでいた。　彼は聖なる殉教者たちの尊い聖遺骨を収め、それを町へ運び、相応しい敬意をもって埋葬し、その上に教会を建てた。そこでは、三位一体の唯一の神である父と子と聖霊の祈りと恵みにより、聖なる殉教者たちの聖遺骨から多くの癒しがもたらされた。彼に永遠の栄光あれ。アーメン。

- 大殉教女バルバラの尊い遺骸について

その後、聖大殉教者バルバラの尊い遺骸は、ギリシャからロシアのキエフへと移送された。これは、ロシアの地が聖なる洗礼によって啓蒙された後、ロシアの諸公爵がギリシャの王たちと特に親密かつ友好的な関係を築き、彼らの姉妹や娘たちを妻として迎えていた時期のことである[8492]。ギリシャとロシアの統治者たちの間にこのような親密で友好的な関係があった時期に、キエフはギリシャから計り知れない価値のある贈り物――聖大殉教者バルバラの癒しの聖遺物――を受け取った。このことについては、1670年にキエフのミハイロフスキー・ズラトヴェルヒ修道院のイグメンによって書かれた伝承[8493]、修道司祭テオドシイ・サフォノヴィチ[8494]によって記された伝承によると、彼は信頼に足る人物であった。

キエフ大公スヴィャトポルク・イジャスラヴィチ[8495]（聖洗礼名ミハイル）の最初の妻は、ビザンツ皇帝アレクシオス・コムネノス[8496]の娘であるギリシャの王女バルバラであった。コンスタンティノープルからロシアへ旅立つ前、ヴァルヴァラ王女は父に、聖大殉教者ヴァルヴァラの聖遺物を授けてくれるよう懇願し、それをキエフへ持ち帰った。　彼女の夫である大公ミハイルは、1108年にキエフに、自身の守護聖人である聖大天使ミハイルに捧げる石造りの教会を建立し、そこに大殉教者の聖遺骨を尊く安置した[8497]。タタール人のハン、バトゥイ（ ）によるルーシの地への侵攻（[8498]）の際、聖大殉教者の聖遺骨は、教会関係者によって、聖堂の上階へと続く石段の下にある秘密の場所に隠された。　バトゥイの略奪から長い年月が経った後、神の御許しにより、聖遺骨は発見され、隠し場所から取り出され、同じ教会に公に、かつ尊厳をもって安置された。

[8492] こうして、使徒に等しい聖ウラジーミル大公は、ギリシャ皇帝ヴァシリーとコンスタンティンの妹である王女アンナを妻に迎えた。　彼の孫であり、ヤロスラフの息子である大公ヴセヴォロドは、兄のイジャスラフ・ヤロスラヴィチに続いてキエフを統治し、同じくギリシャ皇帝コンスタンティノス・モノマホスの娘を妻に迎え、その間には息子ウラジーミル・モノマホスが生まれ、後にキエフ大公となった。

[8493] ミハイロフスキー・ズラトヴェルヒイ男子修道院は、古くからの伝承によれば、ロシアにキリスト教が導入された当初、キエフおよび全ルーシの初代大司教ミハイルによって建立されたとされる。ミハイルは、ペルーンの主神像が立っていたまさにその場所で、ドニエプル川にてキエフ市民に洗礼を授けた。　しかし、初期の年代記の記述によれば、同修道院は1108年にキエフ大公スヴィャトポルク・イジャスラヴィチによって創設されたとされる。

[8494] フェオドシー・サフォノヴィチは、キエフの教師兼説教者であり、1665年からはズラトヴェルヒイ・ミハイロフスキー修道院のイグメンを務めた。

[8495] スヴィャトポルク・イジャスラヴィチ――ヤロスラフ・ムドリーの孫であり、聖使徒同等のヴラディミール大公の曽孫――は、1093年から1114年までキエフ大公国を統治した。

[8496] アレクセイ1世コムネノス――ビザンツ皇帝。1081年から1118年まで在位した。

[8497] ズラトヴェルヒ・ミハイロフスキー修道院には、1847年に豪華な銀製の金メッキを施した聖遺物箱に納められ、今日に至るまで聖大殉教者バルバラの聖遺が安置されている。

[8498] バトゥの侵攻は1240年であった。

1644年、正教の偉大な擁護者であるキエフ都主教ペトル・モギラ[8499] の在任中、ポーランド王国の宰相ゲオルギー・オソリンスキーがキエフを訪れた。彼は大殉教女バルバラの尊い遺骨に礼拝するため、ミハイロフスキー修道院の教会を訪れ、次のように語った。

「私は聖大殉教者バルバラの助けを深く信じています。なぜなら、多くの人々が、彼女の取り次ぎに身を委ねる者は、悔い改めと神の秘跡の聖体拝領なしに死ぬことはない、と証言しているからです。　私はローマや西欧諸国を訪れ、至る所で、聖大殉教女バルバラの聖遺骨が西側にあるのか、それとも東側にあるのかと尋ねて回りました。　そこで聞いたところによると、西側には聖大殉教者の聖遺物は見当たらず、東側にも、現地にいた人々の証言によれば存在しないが、それらはこの地の国々に留まっているとのことでした。今や私は、まさにここキエフに、聖大殉教者バルバラの真の聖遺物があることを信じています。

熱心な祈りを捧げて聖遺物に頭を下げ、畏敬の念をもってそれらに口づけをした後、首相は、この聖遺物の一部を授かるよう願い出た。彼の深い信仰に鑑み、聖大殉教者の右手の指の一部が授けられ、彼はそれを深い感謝の念をもって受け取った。

1650年、キエフ都主教シルヴェストル・コッソフ[8500] の在任中、リトアニアのヘトマンであるヤヌシュ・ラジヴィル公がキエフを急襲して占領した。彼の希望により、聖大殉教者バルバラの聖遺物の中から、胸と肋骨の一部が彼に授けられた。　大殉教者の胸から採取された聖遺物の片方を、ヘトマンは妻であるマリア公妃――モルドヴァ・ワラキア公ヴァシリーの敬虔な娘――に贈った。　その後、マリアが亡くなると、彼女が保管していた聖遺物の一部は、キエフ都主教ヨシフ・トゥカルスキー（[8501]）の手に渡り、彼によってカネフ（[8502]）へ運ばれた。そして、彼の死後、バトゥリン（[8503] ）へ移され、現在も聖ニコライ・チュドトヴォルツ修道院に安置されており、敬虔に崇められ、奇跡的な治癒をもたらしている。　一方、大殉教者の肋骨の別の部分は、同じラジヴィル公が、ヴィリニュスのカトリック司教ゲオルギー・ティシュケヴィチへの贈り物として送りました。これは、司教の願いと熱心な懇願に応えるためでした。この贈り物を受け取った司教は、豪華に装飾された聖櫃の中に、それを尊く保管していました。　しばらくして、司教の邸宅は焼失したが、聖大殉教者バルバラの聖遺物の一部を収めた聖櫃は、無傷のまま残っていた。このことを知った人々は皆、大いに驚き、神と聖大殉教者バルバラを賛美した。　この奇跡の知らせは、1657年にミハイロフスキー修道院にもたらされた。そしてその1年前、1656年には、アンティオキア総主教マカリー[8504] がキエフを訪れていた。彼は深い信仰と愛、そして涙を込めて、聖大殉教者の尊い聖遺物に拝礼し、次のように語った。

「私の総主教区にある、アンティオキアからそう遠くない場所にイリオポリという町があり、そこで聖大殉教者バルバラは苦難に遭いました。　私がそこで彼女の聖遺物について尋ねたところ、太古の昔から、そこだけでなく東方のいかなる場所にも聖遺物は残っておらず、それらは一部の人々

[8499] 正教の著名な擁護者であるペトル・モヒラは、1631年から1646年までキエフ都主教を務めた。 カトリックやユニエート派との正教擁護の闘い、キエフ・ブラトスカヤ学校の設立、礼拝用および教化用の書籍の刊行、説教やその他の著作などで知られている。

[8500] シルヴェストル・コッソフ――キエフ都主教――は、1647年から1657年までキエフで司牧を行った。

[8501] ヨシフ・ネリュボヴィチ＝トゥカルスキーは、1663年からキエフ都主教を務め、正教の熱心な擁護者として知られたが、後にポーランド人によって投獄され、チギリンで死去した。

[8502] カネフ――ドニエプル川沿いにあるキエフ州の郡庁所在地。

[8503] バトゥリン – チェルニヒウ州コノトプ郡の都市。

[8504] マカリイ――1648年から1672年までアンティオキア総主教を務めた。

から『ヴァルヴァルスカ』と呼ばれるロシアの地に安置されていると告げられました。　今や私は、ここに聖大殉教者の真の聖遺骨が安置されていることを疑いなく信じている。

総主教は、これらの聖遺物の一部を授かるよう熱心に懇願した。その願いはキエフ都主教シルヴェストルによって叶えられ、総主教は大きな喜びと感謝の念をもって聖遺物の一部を受け取った。

ミハイロフスキー・ズラトヴェルヒ修道院では、この大殉教者の聖遺物による多くの奇跡と癒しが起こり、今もなお起こり続けている。これらの奇跡は、轟くラッパの声よりも力強く全世界に響き渡り、聖遺物の真実性と、それを通じて働く恵みの力をすべての人に確信させている。ここでは、そうした奇跡のうちいくつかについて、簡潔に紹介したい。

チェルニヒウの大司教ラザール・バラノヴィチ[8505] は、司教の座に就く前から、1640年より神の御言葉を宣教することに尽力していた。　とりわけ、聖大殉教者バルバラの祝日に、彼女の尊い聖遺物の前で説教を行った際、彼は深い感謝と感動をもって、その聖遺物によって重い病から癒やされた自身の奇跡を称えました。　そして、この奇跡を絶えず称えつつ、1674年に刊行された自身の著書『祝祭の著作』の中で、次のように記している。　「重い病に冒されていた私は、他のいかなる医師にも頼ることはせず、聖大殉教者バルバラの聖遺物に祈りを捧げ、大殉教者の手が浸された水を信仰をもって飲み、その水の杯こそが私の救いとなったのである」。

聖ミハイル・ズラトヴェルヒ・キエフ修道院の院長である修道士フェオドシイは、キエフ都主教シルヴェストル・コッソフの祝福を受け、　1655年に修道院の院長職に就いた際、その年にスルツキーという市民が訪れ、銀で作られた手を持ち込み、聖大殉教女バルバラの聖遺物のそばに吊るしてほしいと頼んだ。訪ねてきた男に、なぜそうしたのかと尋ねると、彼は率直に次のように語った。

「私の手は重い病に冒され、ひどく曲がってしまい、まっすぐに伸ばすことさえできませんでした。このような不治の病に苦しむ中、聖大殉教者バルバラの尊い遺骸から生じる奇跡のことを思い出したのです。　私は聖大殉教者バルバラに、私の手の治癒を祈り、その聖遺物を拝むためにここへ参拝することを誓願しました。　すると、聖バルバラの御加護により、私の曲がった手は癒やされました。私はその誓いを果たすため、感謝の念を込めてここを訪れ、手の癒やしの証として、この銀の手を大殉教者の聖遺物の前に捧げました。

同じテオドシウスは、1660年、当時起こっていた内戦の間、自身の修道院の貧しさや、健康と生命に対する危険を深く嘆いていたと語っている。ある夜、眠りの中で、彼は聖大殉教者バルバラの聖遺物の前に立っているのを見、その聖遺物の傷跡が聖油で満たされているのを見た。　聖大殉教者は彼にこう言った。

「恐れることはない、私はあなたと共にいる。」

目を覚ますと、彼はその幻視について考えを巡らせ、聖書において聖油が「恵み」を意味することを思い出し[8506]、こう自分に言い聞かせた。

「聖油で満たされた岩窟――そこに大殉教者が横たわっているのを見た――は、彼女の聖なる祈りによって、この修道院からもはや貧困や災難がなくなるというしるしである。」

そして、実際にその通りになった。

1666年、聖大殉教者の記念日が祝われるクリスマス断食の期間中、アンドレイとフェオドールという名の二人の兵士が、大殉教者の聖遺物の上に置かれていた貴重な装飾品を盗み出そうと企てた。　夜になって修道院に忍び込んだ彼らは、ミハイロフスカヤ教会の南側の扉をこじ開け、聖バルバラの聖遺物へと駆け寄った。彼らが聖人の聖棺に近づいたとき、突然恐ろしい雷鳴が轟き、聖人の聖

[8505] ラザール・バラノヴィチ――1647年から1693年までチェルニヒウ大司教を務めた。ロシア正教会の指導者であり、イエズス会との論争やその他の著作、そして説教活動で知られている。

[8506] エレオス（Eleos）――ギリシャ語で「慈悲、憐れみ」を意味する。

棺から火の粉が彼らに降り注いだ。　恐怖に駆られた盗賊たちは、まるで死人のように地面に倒れ込み、そのうちのひとりは即座に耳が聞こえなくなり、もうひとりは正気を失った。少し正気を取り戻した耳の聞こえなくなった男は、自分自身が神と聖大殉教者からの懲罰を受けたことを悟り、正気を失った仲間を教会から連れ出し、教会の扉を再び閉め、何も奪わずに家路についた。　この奇跡について、七日後、耳が聞こえなくなった男は、心を痛めながら、仲間と共にミハイロフスカヤ教会を訪れ、自身の霊的指導者である修道士シメオンに告白した。　霊的指導者は、できる限り彼らに真の悔い改めを行うよう導き、聖大殉教者からの助けと癒やしへの希望を託して彼らを送り出した。その後、シメオンは聖なる祭壇の前で神聖な聖体礼儀を執り行うにあたり、この出来事を自身の修道院長であるテオドシオスに語った。

1669年8月12日、ある兵士が聖大殉教女バルバラの尊い聖遺物が安置されている教会を訪れ、深い敬虔の念をもってそれに礼拝を捧げた後、ため息をつきながら、教会係や他の多くの人々に次のように語った。

「私は聖大殉教者の偉大で奇跡的な御加護を授かりました。ある時、連隊に所属していた私は、他の仲間たちと共に干し草刈りに出かけましたが、そこでタタール人に襲われ、仲間たちは全員捕虜にされ、私だけが生き残りました。　私が救われたことを神に感謝し、仲間たちのことを悼んでいた時、聖女バルバラが、まさにここに安置されているのと同じ衣装と冠を身にまとって私の前に現れ、こう言いました。「私は殉教者バルバラである。タタール人からあなたを救い出したのは私だ。」そこで私は、彼女の奇跡的な加護に感謝し、またこの奇跡を皆様にお伝えするために、ここへ彼女の聖遺物の元へ参りました。

翌1670年、キエフのヨアンという男が、最初はただの庶民だったが、後に市長となった人物が、高熱に倒れました。長い間この病に苦しんでいた彼は、その尊い遺骨から奇跡的な癒やしをもたらす聖大殉教者バルバラのことを思い出しました。　病気のため、ベッドから起き上がって教会まで行く力もなく、彼は癒やしを信じてミハイロフスキー修道院に使いを送り、聖バルバラの聖遺骨に注がれた水を分けてくれるよう頼んだ。その間、彼自身はひどい高熱にうなされ、舌が乾ききっていた。家族は、熱を冷ますために何か飲むよう彼に勧めた。しかし、彼はこう答えた。

「たとえ死ぬことになっても、聖大殉教者の聖遺骸の箱から運ばれてくる水がもたらされるまでは、何も飲まない。」

それほどまでに、聖大殉教者への彼の信仰は深かった。やがて、その聖遺物から汲み出された水が運ばれてくると、ヨハネは喜びをもってそれを受け取り、信仰を込めて祈りを捧げた後、飲み干した。　するとすぐに、それまで全く眠ることができなかった彼が、ぐっすりと眠りについた。そして夢の中で、まるで聖大天使ミカエルの教会にいるかのように感じ、美しい乙女が彼にこう言った。

「私が誰か、知っているか？」

彼が「知らない」と答えると、その乙女は再びこう言った。

「私は殉教者バルバラであることを知っておきなさい。ミハイロフ修道院に私の朽ちない聖遺骨が安置されていることを信じない人々が大勢いる。今、あなた自身で私の聖遺骨の真実性を確かめ、皆にこれを信じるよう説き、このしるしとして、これからは健康でいなさい。」

そう言うと、彼女は装飾された場所に置かれた自身の聖棺に横たわり、ヨハネはたちまち目を覚まし、まるで一度も病気になったことがないかのように、完全に健康になったのを感じた。　神と聖バルバラに感謝を捧げた後、彼は長兄であるミハイロフ修道院の修道院長テオドシオスだけでなく、すべての人々に、聖大殉教者の助けによる自身の奇跡的な治癒と、彼女の聖遺物の真実性についての証言について語った。

ここで、聖大殉教者の左腕についても触れておくべきである。それは古くから、彼女の朽ちない遺体とは別々に保管されており、ギリシャに残されていたのである。　長い年月が経った後、キエフ都主教ペトル・モギラの時代、ギリシャからポーランドに移住したモゼルという人物によって、そ

の左手はポーランドへ持ち込まれた。彼はカンタクゼス王家の出身であり、医学の熟練した教師でもあった。　彼が持ち込んだその手は、ヴォルィーニ地方の都市ルツクに、主の十字架の挙揚を記念して彼が建立した石造りの修道院教会に安置された。それから何年も経った後、正教会のルツク司教ゲデオン（チェトヴェルティンスキー公爵家出身、後にキエフ都主教となった[8507]）の在任中に、ユダヤ人たちがルツク教会を襲撃し、銀の聖櫃に納められていたその聖なる右手を、他の教会用具と共に奪い取り、燃え盛る蒸留炉に投げ込んだ。しかし、その右手は一日中、一晩中、炎にさらされながらも無傷のままであった。　これを見た不信心な盗賊たちは、燃え盛る炉から奇跡的に無傷のまま残っていた聖なる御手を引き出し、夜陰に乗じて密かに鉄の槌でそれを砕こうと試みた。そして、執拗な努力の末、それを小さな破片に砕き、再び同じ燃え盛る炉に投げ込んだ。

神の驚くべき御業により、この不信心なユダヤ人たちの悪行は、盗難事件の徹底的な調査と、夜間にハンマーの音を聞いたという近隣住民の証言によって、まもなく発覚した。拷問を受けた誘拐犯たちは、自らの悪行を認めようとしなかった。　そこで、取り調べ官たちは、炉から灰をかき出し、ふるいにかけるという敬虔な考えを思いついた。すると直ちに　、大殉教者の砕かれた手の小さな断片が発見され、その手につけていた珊瑚の装飾品もそこで見つかった。それは灰にはなっておらず、火によって白く変色しただけだった。　その後、再び拷問を受けた不信心なユダヤ人たち自身も、自らの悪行を自白した。ゲデオン司教の許可を得て、悪党たちによって砕かれた大殉教者の聖なる手は、発見されたすべての断片や珊瑚とともに、このために特別に作られた壮麗な聖櫃に納められた。この聖櫃は、十字架の行列と蝋燭を伴い、聖別された大聖堂の全信徒と大勢の民衆に護衛され、栄光のうちにルツクの大聖堂である聖ヨハネ・テオロゴス教会へと運び込まれた。　数年後、正教に対する迫害のため、ゲデオン司教はルツクからマロロシアへ移住する際、大殉教者バルバラの砕かれた聖なる御手が入ったその聖櫃も共に持ち出した。　彼がキエフ都主教座に就いた際、その聖なる御手は、同じ聖櫃に収められたまま、聖ソフィア――神の英知――に捧げられたキエフ都主教座大聖堂の祭壇に、相応しい敬意をもって安置され、現在もそこで敬虔に崇められている[8508]。

[8507] ルツク–ヴォルィン州の県都。ゲデオンは1685年から1690年までキエフで司教を務めた。

[8508] さらに、聖大殉教者バルバラの聖遺物の一部――指――は、モスクワのバルバルカ地区にある同聖人の名を冠した教会に保管されている。また、アトス山にも聖バルバラの聖遺物の一部がいくつか存在する。前述の彼女の祈りの取り次ぎによる奇跡に加え、後世の奇跡も付け加えるべきである。　例えば、1710年、10ヶ月以上にわたり猛威を振るい、キエフおよび小ロシア全土を恐ろしいほど荒廃させたペストの流行の際、彼女の奇跡的な取り成しにより、聖バルバラの聖遺骨が安置されているズラトヴェルヒイ・聖ミハイル修道院には、この死をもたらす疫病が及ばず、　修道院の門は、祈りの慰めを求めるすべての人々に常に開かれていたにもかかわらず、この病気で亡くなった修道士は一人もいませんでした。この恵み深く奇跡的な加護は、1770年に南ロシアを再び荒廃させたペストの際にも、また現代において数回発生したコレラの流行の際にも、聖大殉教者バルバラによって示された。 毎年12月4日、聖大殉教女バルバラの祝日にあたるこの日、大勢の人々が集まる中、彼女の尊い聖遺骨はミハイロフスキー修道院の教会周辺を厳かに巡行される。　18世紀初頭、キエフ都主教イオアサフ・クロコフスキー（1708～1718年）によって、聖大殉教者バルバラへのアカフィストが作成され、それは現在も聖遺物の前で歌われている。　民間の信仰によれば、聖大殉教者バルバラには、神から特別な恵みが与えられており、それは予期せぬ無益な死や疫病、その他の突発的な災難から人々を救う力である。　このような信仰は、一部には彼女に関する伝記そのものに根拠がある。それによれば、彼女は、自分と自分の苦難を祈りを込めて思い起こすあらゆる人々を、突発的な病気や予期せぬ死から救うよう神に祈ったとされる。また、一部には、疫病が流行した際に聖ミハイロフ修道院で起こった前述の奇跡にも根拠がある。　ローマ・カトリック教会では、聖バルバラには、突然の死や暴力的な死から救う力に加え、海上の嵐や陸上の火災から救う力も帰せられており、カトリック教徒からは砲兵の守護聖人としても崇められている。

トロパリオ、第8調:

聖バルバラを崇めよう。敵の罠を打ち砕き、鳥のようにそこから逃れ、十字架の助けと武器によって、至聖なる方よ。

コンダク、第4調:

三位一体を敬虔に讃える者に倣い、神に従った殉教者よ、あなたは偶像崇拝の聖所を無力化した。苦難の真っ只中で苦しみながらも、バルバラよ、あなたは賢明にして、迫害者たちの報復を恐れず、常に大声でこう歌った。「私は三位一体を崇め、唯一の神性を讃える。」

私たちの尊き父ヨハネス・ダマスキノスの生涯

記念日：12月4日

尊者ヨハネス・ダマスキノスは、シリアの首都ダマスカス[8509] で、高貴かつ敬虔な両親[8510] の間に生まれた。彼らのキリストへの燃えるような信仰は、苦難と試練の中で試され、滅びゆく金――たとえ火で試されたものであっても――よりも強固で 、より尊いものであることが示された。当時は厳しい時代であった。 サラセン人はその国を征服し、この栄えある都市を陥落させると、キリスト教徒にあらゆる災いをもたらした。ある者は殺し、ある者は奴隷として売り払い、誰にも公然とキリストを信仰することを許さなかった。この時、ヨハネの両親は神の摂理に守られ、全財産とともに安全と健康を保たれた。 彼らは聖なる信仰も守り通した。なぜなら、神はかつてヨセフがエジプト人の中で[8511] 、またダニエルがバビロニア人の中で[8512] そうであったように、サラセン人の好意を勝ち取る機会を彼らに与えてくださったからである。その結果、邪悪なアガリア人[8513] は、聖人の両親がキリストを信じ、その聖なる御名を公然と賛美することを禁じなかった。 さらに、彼らは聖ヨハネの父を市の裁判官および公共建築の責任者に任命した[8514] 。このような安寧の中で暮らしながら、彼は同じ信仰を持つ兄弟たちのために多くの善行を行った。捕虜を身代金で買い戻し、牢獄に閉じ込められた者を鎖から解き放ち、死の危機から救い出し、苦しむすべての人々に援助の手を差し伸べた。 この聖人の両親は、ダマスカスに住むアガリア人の間で、まるで夜の灯火のように、イスラエルの種のように、灰の中の火花のように輝いていた。それゆえ、彼らは神によって守られ、彼らを通してキリストの教会に、全世界を明るく照らす灯火――至福のヨハネス・ダマスキヌス――が灯されることとなったのである。 彼を肉において産み落とした後、両親は急いで彼を光の子とするべく、洗礼を授けようとした。それは当時、極めて困難なことであった。アガリア人は誰にも洗礼を受けるこ

8509 ダマスカスは、シリアの主要かつ最も豊かな商業都市であり、世界でも最も古い都市の一つである。パレスチナの北東、アンチ・レバノン山脈の東麓にある美しく肥沃な平野に位置し、市内を流れるバラデ川沿いに広がっている。 現在、オスマン帝国に属するダマスカスは、人口15万人以上を擁するアジア有数の豊かな都市の一つである。

8510 聖ヨハネス・ダマスコスは680年頃に生まれた。彼の家系の通称はマンスールであった。

8511 創世記41:37。

8512 ダニエル書 2:48。

8513 アガリア人、あるいはサラセン人と呼ばれる人々は、アラビアのベドウィンである。「アガリア人」という呼称は、当初はこの遊牧部族を指していたが、後にキリスト教の著述家たちによってすべてのアラブ人に広められ、やがてはイスラム教徒全般を指すようになった。 アラビアのベドウィンが「アガリアン」と呼ばれたのは、ユダヤの伝承によれば、彼らがアブラハムの女奴隷ハガルの息子イシュマエルの子孫であったためである。

8514 聖ヨハネス・ダマスコスの父、セルギウス・マンスールは、ダマスカスのカリフ・アブド・アル＝マリク（686～705年）の治世下で、首席ロゴフェト、すなわち国庫管理者、財務官の職を務めていた。

とを許さなかったが、聖人の両親は妨げられることなく、洗礼によってその子を新たに生かし、神の恵みを意味する「[8515]」という名を授けた。 少年の父は、息子が正しい教えの中で育てられ、サラセン人の慣習や、戦士の勇猛さ、獣の狩猟、あるいはその他の世俗的な技芸ではなく、柔和さ、謙遜、神への畏敬、そして聖書の知識を学ぶよう、細心の注意を払った。　それゆえ、彼は神に、息子に賢明で敬虔な人物を送ってくださるよう熱心に祈った。その人物は、少年にとって善行における良き教師であり、導き手となるはずだった。聖人の父の祈りは神に聞き入れられ、こうして願いが叶えられた。

ダマスカスの海賊たちは、陸からも海からも近隣諸国へ頻繁に襲撃を仕掛け、キリスト教徒を捕虜として連れ去り、自分たちの街へ連れてくると、ある者は市場で売り払い、ある者は処刑した。ある日、彼らはコスマという名の、容姿端麗で心も美しい、イタリア出身の修道士を捕らえた。他の捕虜たちと共に、彼を市場で売り払うことにした。　しかし、海賊たちに剣で斬り殺されようとしていた者たちは、この修道士の足元にひれ伏し、涙ながらに自分たちの魂のために神に祈ってほしいと懇願した。死を宣告された者たちが修道士にこれほど敬意を払っているのを見て、サラセン人たちは、彼が故郷のキリスト教徒の間でどのような聖職の位や名誉を享受していたのかと尋ねた。すると彼はこう答えた。

「私には何の位階もなく、司祭の聖職に就くことさえ許されませんでした。私はただ、キリスト教の哲学だけでなく、異教の賢者たちが編み出した哲学までも学んだ、罪深い修道士に過ぎません！」

そう言うと、修道士は苦々しく泣き出した。その近くにはヨハネの父親が立っていた。彼は泣いている老人の姿を見て、その服装から修道士だと気づくと、彼に近づき、その悲しみを慰めようとこう言った。

「神の僕よ、あなたが世の喪失を嘆いて泣くのは無駄です。あなたの様子や服装から見て、あなたはとっくにその世を捨て、そのために死んだのですから。」

「私は泣いているのです」と修道士は答えた。「この世を失ったからではありません――あなたが言ったように、私にとってこの世はすでに死んだも同然です――また、この世の何事にも心を留めてはいません。なぜなら、キリストの僕たちのために用意された、より良く、不死で永遠の別の人生があることを知っているからです。私も神の御加護によって、その人生を得られることを願っています。　泣いているのは、後継者を残すことなく、子なしのままこの世を去らなければならないからだ。

ヨハネの父は修道士の言葉に驚き、こう言った。

「父よ、あなたは清さを保つために、子供をもうけるためではなく、神に身を捧げた修道士ではありませんか。なぜ子供のことを嘆くのですか？」

修道士は答えた：

「ご主人、あなたは私の言ったことを理解されていません。私が語っているのは、肉的な息子や地上の遺産のことではなく、霊的なものについてなのです。あなたご自身もお見受けの通り、私は貧しい修道士で何も持っていませんが、若い頃から神の助けを借りて努力を重ね、得た知恵という大きな富を持っています。　私は様々な人間的な学問――修辞学、弁証法、スタギラ出身の哲学者およびアリストンの息子[8516] が教えた哲学――を学び、測量学や音楽にも精通し、天体の動きや星々の運

[8515] 「ヨハネス」は、ヘブライ語から訳すと「神の恵み」を意味する。

[8516] スタギラは、ハルキドン半島にある都市であり、ギリシャの哲学者アリストテレス（紀元前4世紀）が生まれた地であるため、彼は「スタギラ人」と呼ばれた。また、ギリシャの哲学者プラトン（紀元前4世紀）も、ここでアリストンの息子として名を残している。　哲学とは、存在に関する究極の問題、すなわち神、世界と人間の起源・本質・法則、人間の使命、そして世界の存在の究極の目的などについて研究する学問である。修辞学と弁証法とは、思考の法則とその表現方法を研究する学問である。

行についても深く研究しました。それゆえ、被造物の美しさとその至高の仕組みから、創造主ご自身をより明確に知ることができるのです。　最後に、ギリシャやローマの神学者たちが編纂した正教の秘義に関する教義についても、十分に研究しました。　私自身、こうした知識を持っているものの、誰にもそれを教えたことはなく、学んだことを今、誰にも教えることはできません。なぜなら、時間も弟子もいないからです。そして、私はここでアガリア人の剣によって死ぬことになり、実を結ばなかった木のように、主人のタラントを地中に隠した奴隷のように、私の主の御前に現れることになるだろうと思います[8517]。これこそが、私が泣き、嗚咽する理由である。肉親の父たちが、夫婦でありながら子供に恵まれないことを嘆くように、私もまた、私の知恵という富を継ぐべき霊的な息子が一人もいないことを嘆き、悲しんでいるのである。

このような言葉を聞いて、聖ヨハネの父は、かねてより望んでいた宝物を見つけたことを喜び、長老にこう言いました。

「悲しまないでください、父よ。神はあなたの心の願いを叶えてくださるでしょう。」

そう言うと、彼は急いでサラセン人の君主のもとへ行き、その足元にひれ伏して、捕虜となった修道士を彼に譲ってほしいと熱心に懇願し、断られることはなかった。君主は彼にこの贈り物を与えたが、それは確かに他の多くの贈り物よりもはるかに貴重なものであった。　ヨハネの父は喜びながら、至福のコスマを自宅に連れ帰り、長い苦難の末に彼を慰め、安らぎと安息を与えた。

「父よ」と彼は言った。「どうかこの家の主となり、私の喜びも悲しみもすべてを分かち合ってください。」

そしてさらにこう付け加えた。

「ほら、神はあなたに自由を授けただけでなく、あなたの願いも叶えてくださった。私には二人の子がいる。一人は私の肉親の息子であるヨハネ、もう一人は、私が息子代わりに引き取った少年で、エルサレム出身、幼い頃から孤児だ。彼はあなたと同じ名前を持っている。というのも、彼もコスマと呼ばれているからだ。　父よ、どうか彼らに知恵と善良な品性を教え、あらゆる善行へと導いてください。彼らをあなたの霊的な息子とし、教えによって再生させ、育て上げてください。そして、誰にも奪うことのできないその霊的な富の相続人として、彼らをあなたの後継者に残してください。

至福の老僧コスマは喜び、神を賛美し、二人の少年を熱心に育て、教え始めた。　少年たちは聡明で、師が教えることをすべて吸収し、順調に学んでいった。ヨハネは、空を舞う鷲のように、教えの崇高な奥義を悟り、その霊的な兄弟であるコスマは、追い風に乗って速やかに進む船のように、知恵の深みをすぐに理解した。　熱心に、そして懸命に学ぶことで、彼らは短期間のうちに深い知恵を身につけ、文法、哲学、算術を修め、ピタゴラスやディオファントスに匹敵する存在となった[8518]。また、測量学も習得し、新たなユークリッドと見なされるほどであった[8519]。彼らが詩の分野でいかに研鑽を積んだかは、彼らが作曲した教会聖歌や詩が物語っている。彼らは天文学も疎かにせず、神学の奥義についても深く学んだ。さらに、彼らは善良な品性と徳ある生き方を身につけ、知識と、霊的・世俗的な知恵において完全に完成された存在となった。　とりわけヨハネは傑出していた。彼には、ある分野の知恵において師さえも凌駕するほどであり、師自身も彼に驚嘆した。そしてヨハネは偉大な神学者であり、そのことは、神の霊感に満ち、神の知恵に満ちた彼の著書が証明している。しかし、彼はその知恵を誇りにはしなかった。　実りの多い木が、実を多く結べば結ぶほど、枝を地面へと低く垂らすように、ヨハネもまた、　知恵においてますます秀でるほど、自分自身を過大評価

[8517] 『マタイによる福音書』25章16節にある、タラントのたとえ話に由来する表現。

[8518] ピタゴラス――紀元前6世紀の著名なギリシャの哲学者。ディオファントス――紀元4世紀のアレクサンドリアの数学者。

[8519] ユークリッド――紀元前3世紀の数学者。

することはなく、若さゆえの虚しい夢想や情熱的な思いを抱くことを自ら抑え込み、　自らの魂を、油で満たされた灯台のように、神聖な渇望の炎で燃え立たせる術を身につけていた。

ある日、コスマの師はヨハネの父にこう言った。「ご主人様、あなたの願いは叶いました。あなたの弟子たちはよく学び、すでに私をも知恵において凌駕しています。そのような弟子たちにとって、師と同等であるだけでは不十分です。優れた記憶力と絶え間ない努力のおかげで、彼らは至高の知恵の深遠さを完全に理解しました。　神は彼らの才能をさらに豊かにされた。もはや私が彼らを教える必要はない。彼ら自身、すでに他者を教えることができるのだ。　それゆえ、先生、どうか私を修道院へ送り出してください。そこで私は自ら弟子となり、完成された修道士たちから至高の知恵を学びたいのです。私が学んだこの世俗の哲学は、私を霊的な哲学へと導いてくれます。それは世俗の哲学よりも尊く清らかなものであり、魂に益をもたらし、救うものだからです」。

これを聞いたヨハネの父は、これほど立派で賢明な指導者を失いたくないと、悲しみに暮れた。しかし、長老を悲しませないよう、彼を引き留めることは敢えてせず、その願いを叶え、惜しみなく報いを与えて、平穏のうちに送り出した。　その修道士は、聖サヴァの修道院へと去り、そこで安らかに生涯を全うして、至高の英知である神のもとへと旅立った。数年後、ヨハネの父もこの世を去った。　サラセン人の公爵はヨハネを呼び寄せ、自身の首席顧問になるよう提案した。ヨハネは、沈黙の中で神に仕えるという別の願いを持っていたため、これを拒んだ。しかし、彼は従わざるを得ず、本意に反して要職を受け入れ、ダマスカスで父よりも大きな権力を手に入れた[8520]。

当時、ギリシャではレウ・イサウリア人が統治していた[8521]。彼は、咆哮する獅子のように残忍に、神の教会に反旗を翻した。聖なる教会からイコンを追い出し、それらを炎に投げ込み、正教の信者や聖なるイコンを崇拝する者たちを、容赦なく凄惨な拷問で苦しめた。　これを耳にしたヨハネは、テスビのエリヤや、自身と同じ名を持つキリストの先駆者に倣い、敬虔への熱意に燃え上がった。神の御言葉という剣を手に取り、彼はそれをもって、不敬虔な王の異端的な思惑を、あたかも首を切り落とすかのように断ち切り始めた。　彼は、聖像の崇敬について、自身が知る正信者たちに多くの書簡を送った。これらの書簡において、聖書と神を宿した教父たちの古来の伝承に基づき、聖像にふさわしい崇敬を捧げるべき方法を賢明に示した。　ヨハネは、手紙の宛先となった者たちに、正教の信仰を確固たるものにするため、他の同信の兄弟たちにもその書簡を見せるよう求めた。こうして

[8520] 聖ヨハネス・ダマスコスは、カリフ・ヴェリデ（705–716年）の治世下で宮廷における最高権力に達し、同カリフの最も親しい顧問兼大臣を務めた。　しかし、新たな地位に伴う責務を引き受けた後も、彼は自らの最高の奉仕対象であるイエス・キリストを決して忘れず、常にキリストの真理に忠実であり、聖なる教会に役立つよう努めた。キリストの真理を宣べ伝え、偽りの教えを糾弾することが、ヨハネにとって人生の主要な使命となった。　そして彼は、活動を始めた当初から、当時の異端者たち――シリアで庇護を受けていたネストリウス派、すなわちイエス・キリストの人間性と神性を分離し、聖母マリアから生まれたのは人間イエスであり、　そのイエス・キリストの受胎の瞬間から、神である御言葉がその恵みによって彼と結びつき、まるで神殿のように彼の中に宿ったと説いた者たち、そして、キリストの中に一つの神性のみを認め、それがまるで人間性を飲み込んだかのように主張したモノフィシテ派、すなわちヤコビテ派との戦いである。　後者に対して、ヨハネス・ダマスコスは、純粋な正教の信仰を擁護するために、かなり長大かつ綿密な論考を著した。　さらに、彼は、モノフィシズムから派生したモノフェニズム――キリストにおいて神の意志のみを認める教義――や、マニ教の偽りの教えと結びついた古代のグノーシス主義の残滓、すなわちいわゆる「パヴリキアン」の異端とも戦った。　彼らは、純粋な霊を創造し、キリスト教において現れた善なる神のほかに、さらに悪なる原理――目に見える世界と人間の体を創造し、ユダヤ教や異教において現れたデミウルゴス――を認めていた。　パウリキア派の教えによれば、神の御子の受肉は単なる見せかけに過ぎず、彼らは教会のあらゆる儀式や外的な制度を否定した。最後に、ヨハネス・ダマスコスは、当時シリアで勢力を誇っていたイスラム教に対する弁明書も著した。

[8521] レウ・イサウリアヌスは、716年から741年までビザンツ帝国で統治した。

聖人は、神に霊感を受けた自らの書簡で全宇宙を満たそうと努めたのである[8522]。 ギリシャ王国全土に広まったこれらの書簡は、正信者たちの敬虔さを確固たるものとし、異端者たちをあたかもの棘[8523]で突き刺すかのように打ちのめした。この噂はレオン王の耳にも届き、王は自らの不敬虔さを糾弾されることを耐えられず、自分と志を同じくする異端者たちを呼び寄せ、彼らに偽りの敬虔さを装って、　正教徒の中から、ヨハネが自筆で書いた手紙を何通か探し出し、あたかも自分たちのためにと称して拝読させてほしいと頼むよう命じた。幾多の努力の末、この悪辣な企てに加担した者たちは、信者たちの間でヨハネの自筆の手紙を一通見つけ出し、媚びを売ってそれを手に入れ、王の手に渡した。　王は、熟練した筆記者たちに、ヨハネの手紙を参考にし、聖人の名において、あたかもヨハネ自筆でダマスカスから送られてきたかのように、王レフ宛ての書簡を同じ文字で書くよう命じた。その書簡の内容は次の通りであった。

「王よ、喜びなさい。私も、私たちの共通の信仰の名において、あなたの権威を喜び、あなたの王の威厳にふさわしい崇敬と敬意を捧げます。お知らせしますが、サラセン人の手に落ちている私たちの都市ダマスカスは、防衛が不十分で、堅固な守備隊を全く有しておらず、その軍勢は弱く、数も少ないのです。　どうか、神の名において、この都市に慈悲を垂れてください。貴殿の勇敢な軍隊を派遣してください。他の場所へ向かうふりをして、不意にダマスカスを襲撃すれば、貴殿は容易にこの都市を掌握できるでしょう。私もその件で大いに協力いたします。なぜなら、この都市とこの国全体は私の手中にあるからです。

ヨハネの名を借りてこのような書簡を書き上げた狡猾な王は、サラセン人の領主に対して次のように書き送るよう命じた。

「平和を保ち、友好関係を築くことほど良いことはないと思う。平和の誓いを守ることは極めて称賛に値し、神の御心にかなうことだからだ。それゆえ、君と結んだ平和条約を、最後まで誠実かつ忠実に守り続けたいと願っている。　しかし、あなたの国に住むあるキリスト教徒が、頻繁に私宛てに手紙を送り、私に平和を破るようそそのかしており、もし私が不意に軍隊を送れば、ダマスカスという都市を何の苦労もなく私の手に渡すと約束している。　このキリスト教徒が書いた書簡の一つを貴殿に送る。これによって私の友情を確信していただけるだろう。また、私にこのようなことを書くことを敢えてした者には、裏切りと敵意があることがお分かりいただけるはずであり、彼をどのように処刑すべきかお分かりいただけるだろう。

この二通の手紙は、不敬虔な皇帝レウスが、側近の一人を伴ってダマスカスのサラセン人の領主のもとへ送ったものである。領主はそれを受け取り、読み終えると、ヨハネを呼び寄せ、皇帝レウス宛てに書かれたその偽りの手紙を見せた。ヨハネは手紙を読み、じっくりと眺めながら、こう言った。

「この文書に書かれた文字は、私の筆跡に多少似ているが、これを書いたのは私ではない。なぜなら、ギリシャの王に手紙を書くなどという考えは、私には一度も浮かんだことがないからだ。私が主君に裏切り行為をするなど、あり得ないことだ。」

[8522] 聖ヨハネス・ダマスコスは、聖像を擁護する論考を執筆し、それをコンスタンティノープルに送った。その中で、彼は次のように記している。　「自らの不甲斐なさを自覚している以上、疑いなく私は沈黙を守り、ただ神の前で自らの罪を嘆くべきである。しかし、神の教会が激しい嵐に揺さぶられているのを見て、今は沈黙を守る時ではないと考える。私は地上の君主よりも神を畏れているが、一方で君主の権力は極めて大きく、民衆を容易に惑わすことができるからだ」。しかし、この著作において、聖ヨハネスは皇帝レオンに対して侮辱的なことは何も述べていない。　友人の要請に応じて、ヨハネスは聖像擁護のために、次々と二通の書簡を執筆した。ヨハネスの書簡はコンスタンティノープルやその他の地域で熱心に読まれ、信仰の弱い者たちはそれによって正教の信仰に支えられ、強い者たちはその信念をさらに強固なものとした。

[8523] オステン、オストナ、オスン――ロバや牛に速く歩かせるために用いられた、先端が尖った杖。

ヨハネは、これが敵対的で邪悪な異端の策略によるものであると悟った。　しかし、公爵は激怒し、罪のないヨハネの右手を切り落とすよう命じた。ヨハネは公爵に、自分の無実と、邪悪な異端の王レウが自分に対して抱いている憎悪を明らかにするための時間を少し与えてほしいと切に懇願したが、その願いは聞き入れられなかった。　激しく怒った公は、直ちに処刑を行うよう命じた。そして、ヨハネの右手――神について正信者たちを励ましたその手――が切り落とされた。この手は、その著作によって主を憎む者たちを糾弾し、イコンの崇敬について記すために用いたインクの代わりに、自らの血で染め上げられたのである。　処刑後、ヨハネの右手は町の中心にある市場に吊るされ、ヨハネ自身は痛みと失血で衰弱したまま、自宅へと連れ戻された。夕暮れが近づき、公爵の怒りがすでに収まったことを知ると、聖人は彼に次のような願いを送った。

「私の病は悪化し、言葉に尽くせないほどの苦痛に苛まれています。切断された私の手が宙にぶら下がっている限り、安らぎを得ることはできません。どうか、主よ、私の手を返してくださるよう命じてください。そうすれば、それを地中に葬ることができます。なぜなら、それが埋葬されれば、私の病の苦しみは和らぐと信じているからです。」

拷問官はこの願いを受け入れ、公共の場からその手を持ち去り、ヨハネに手渡すよう命じた。切断された手を受け取ると、ヨハネは自分の祈りの部屋に入り、幼子イエスを抱く聖母マリアの聖像の前で地面にひれ伏し、切断された手を関節に当て、心の奥底から湧き上がる涙と嘆息を込めて祈り始めた。

「聖なる母よ、わが神を産み出された方よ、ここに、神聖なイコンのために切断された私の右手がございます。何がライオンを怒らせたか、あなたはご存知です。どうか急いで助けに来て、私の手を癒してください。　あなたから受肉された至高者の右の手は、あなたの祈りによって多くの奇跡を成し遂げておられます。それゆえ、私は、あなたの取り成しによって、主が私の右手をも癒してくださるよう祈ります。おお、神の母よ！　この私の手が、あなたご自身が許されるままに、あなたと御子を賛美する言葉を書き記し、その文章によって正教の信仰を支える助けとなりますように。あなたが望めば、すべてを成し遂げることができます。なぜなら、あなたは神の母だからです。

涙ながらにこう語り終えると、ヨハネは眠りにつき、夢の中で、イコンから明るく慈悲深い眼差しで彼を見つめ、こう語りかける聖母マリアを見ました。

「あなたの手は今や癒やされた。残りのことについては悲しむな。私に約束した通り、その手を熱心に働かせ、それを速記者の筆とせよ。」

目を覚ますと、ヨハネは自分の手を触れてみると、それが癒されているのを見た。彼は、全能の神が自分にこのような奇跡を起こしてくださったことを、救い主なる神と御母マリアに心から喜びを捧げた。　起き上がって天に向かって両手を挙げ、神と聖母に感謝を捧げた。そして、彼は一晩中、家族全員と共に喜び、新しい賛美歌を歌った。

「*主よ、あなたの右の手は力によって栄光を受けた*」（出エジプト記15:6）；　あなたの右の手は、私の切断された右手を癒やし、あなたの尊き御像とあなたの無原罪の御母の御像を敬わない敵たちを打ち砕き、あなたの栄光を称えるために、その手でイコンを破壊する敵たちを滅ぼすでしょう。」

ヨハネがこのように家族と共に喜び、感謝の歌を歌っていると、近所の人々がそれを聞き、彼の喜びと歓喜の理由を知って、大いに驚いた。まもなくサラセン人の領主もこのことを知り、直ちにヨハネを呼び寄せ、切断された手を見せよと命じた。　手が切断された関節には、聖母マリアの御意志によって形成された、赤い糸のような痕跡が残っており、かつて手が切断されたことをはっきりと示していた。これを見た王子は尋ねた。

「どの医師が、どのような薬を用いて、手を関節にこれほど見事に接合し、まるで切断されて死んでいたことなどなかったかのように、これほど早く治癒させ、蘇らせたのか？」

ヨハネはこの奇跡を隠さず、皆が聞こえるようにこう語った。

「わが主、全能の医師よ。御母マリア様を通じて私の切実な祈りを聞き入れ、その全能の御力によって私の傷を癒やし、あなたが切り落とすよう命じられたこの手を健やかにしてくださったのです。」

すると、公爵は叫んだ。

「ああ、なんと不幸なことか！　誹謗中傷を吟味せず、私は不当にあなたを断罪し、罪のないあなたを処刑してしまった。善良な人よ。私たちがこれほど早計かつ無分別にもあなたを断罪してしまったことを、どうかお許しください。かつての位と名誉をあなたに返還し、私たちの首席顧問となってください。これからは、あなたとあなたの助言なしには、この国で何事も行われないようにします。」

しかし、ヨハネは公爵の足元にひれ伏し、自分を解放し、自己を捨てて主の軛を負った修道士たちと共に、自分の主に従うことを妨げないでほしいと、長く懇願した。　しかし、公爵は彼を手放す気はなく、ヨハネに対し、自分の家の長として、また国全体の統治者として留まるよう説得しようと努めた。そして二人の間には長い議論が交わされた。一方がもう一方に懇願し、一方がもう一方の願いを退けようと努めたのである。　ヨハネは苦労の末、ようやく目的を成し遂げた。時間はかかったものの、ついに公爵を説得し、自分の望むことを行う自由を与えられたのである。

自宅に戻ると、ヨハネは直ちに数え切れないほどの財産を貧しい人々に分け与え、奴隷たちを解放し、自らも同門のコスマスと共にエルサレムへと向かった。　そこで聖地を参拝した後、聖サヴァの修道院を訪れ、修道院長に、迷い出た羊として自分を受け入れ、選ばれた羊の群れに加えてくれるよう懇願した。　修道院長とすべての修道士たちは、聖ヨハネをすぐに見分けました。彼はすでに名声を博しており、その権威、栄誉、そして偉大な英知のおかげで、誰もが彼を知っていたからです。修道院長は、そのような人物が謙遜と貧しさの中へと身を置き、修道士になろうとしていることを喜びました。　愛をもって彼を受け入れた修道院長は、兄弟たちの中で最も経験豊富で、修行に励んできた一人の修道士を呼び寄せ、ヨハネをその指導下に委ね、霊的な知恵と修道生活における修行[8524]を彼に教え込ませようとした。しかし、その修道士は、学識において多くの人々を凌駕するそのような人物の師となることを望まず、断った。　修道院長は別の修道士を呼びましたが、この者も望まず、同様に三人目、四人目、そして他の者たちも皆断りました。彼ら一人ひとりは、そのような極めて賢明な人物の指導者となるには自分にはふさわしくないと自覚していた上、ヨハネの身分の高さに気後れしていたのです。最後に、気取らないが聡明な一人の長老が呼ばれました。　彼はヨハネの指導者となることを拒まなかった。ヨハネを自分の独房に迎え入れ、彼に徳ある生活の基礎を築かせようと願った長老は、まず第一に、彼に次のような規則を与えた。すなわち、自分の意志で何事も行わないこと。労苦と熱心な祈りを、ある種の捧げ物として神に捧げること。　過去の人生における罪を清めたいと願うならば、目から涙を流すこと。なぜなら、これは神の前において、いかなる高価な香よりも尊いからである。これらの規則は、肉体的な労苦によって行われる行いの基礎となった。また、魂にふさわしいこととして、長老は次のような規則を定めた。すなわち、ヨハネは心の中に世俗的なものを一切抱いてはならないこと；　不適切なイメージを想像に浮かべないだけでなく、あらゆる虚しい執着や空しい高慢から心を清く保ち、無傷にしておくこと；自身の知恵や学んだことを自慢せず、すべてを完全に理解できるなどとは決して思わないこと；　いかなる啓示や秘められた神秘の認識をも求めず、生涯を通じて、自分の理性が揺るぎなく、罪を犯したり迷いに陥ったりすることはないと期待することもなく；　それどころか、自らの思いは弱く、理性も過ちを犯し得ることを自覚し、それゆえに、思いが散漫になるのを防ぐよう努め、それらを一箇所に集中させることに心を

[8524] 聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの規則によれば、新しく入った者は皆、試練、監督、そして教化のために、霊的生活に熟達した長老に委ねられていた。ヨハネに対しても、彼の敬虔な生活と広範な学識が東方全土に知られていたにもかかわらず、同様に扱われた。

配り、それによって神から知恵を授かり、魂が聖別され、肉体があらゆる汚れから清められるようにせよ；　その肉体と魂が知性と結びつき、聖三位一体の如く三つとなり、人は肉的なものでも魂的なものでもなく、すべてにおいて霊的な者となるように。すなわち、人の二つの部分――肉体と魂――を、善き意志によって、第三の、そして最も重要な部分、すなわち知性へと変容させるのである。
このように、霊的父は自分の霊的な息子に、また師は弟子に、規則を定めて、さらに次の言葉を付け加えた。

「誰にも手紙を書くことはもちろん、世俗の学問についてさえ口にしてはならない。思慮をもって沈黙を守れ。なぜなら、我々の哲学者たちが沈黙を教えるだけでなく、ピタゴラスもまた弟子たちに長期にわたる沈黙を遺言として残したことを、あなたは知っているはずだ。そして、時機を逸して善を語ることは善であるなどと考えてはならない。」　ダビデの言葉を聞きなさい。*「善いことさえも黙っていた」*（詩篇38:3）。彼はそこからどのような益を得たのか。聞いてごらん。*「わが心はわがうちに燃え上がった」*（詩篇38:4）、すなわち、神について思索することで預言者の内に燃え上がった神の愛の炎のことである。

長老のこれらの教えはすべて、良き土に蒔かれた種のようにヨハネの心に深く根を下ろし、芽を出し、しっかりと根付いた。なぜなら、ヨハネは　神に霊感を受けたその長老のもとで長い間暮らし、そのすべての教えを注意深く実行し、その命令に耳を傾け、偽りなく、反論も不平も一切なく従った。思考の中でさえ、長老の命令に逆らうことは決してなかった。　彼は自分の心に、まるで石板[8525]に刻むかのように、次のように書き記した。「『使徒の教えに従い、父のあらゆる戒めは、怒りや疑いなく実行されなければならない』」（参照：テモテへの手紙I 2:8）。そもそも、従順であるはずの者が、手には行いを持ちながら口には不平を、命令には従いながら舌や心で反論しているとしたら、そのような者に何の益があるというのか。そのような者がいつ完全になれるというのか。決してない。そのような人々は、徳ある生活を送っていると信じて徒労に労し、考えを巡らせているに過ぎない。従順と不平を結びつけることで、彼らは心の奥底に蛇を宿しているのだ。

一方、祝福されたヨハネは、真の従順な者として、彼に命じられたあらゆる務めにおいて、不平を言わずに従った。

ある時、長老はヨハネの従順と謙遜を試そうと、彼らが日頃編んでいた多くの籠を集め、ヨハネにこう言った。

「子よ、ダマスカスではパレスチナよりも籠の値段が高いと聞いた。一方、ここ修道院の部屋には、君自身も目にする通り、必要不可欠な物さえ不足している。さあ、これらの籠を持って、急いでダマスカスへ行き、そこで売ってこい。ただし、決められた値段より安く売ってはならないぞ。」

そして、長老はかごの価格を、実際の価値よりもはるかに高く設定した。真の従者は、言葉でも心の中でも異議を唱えることはなく、そのかごが指定された価格に見合わないことや、道が非常に遠いことなどとは言わなかった。　また、誰もが自分をよく知っているその街、かつては自分の権勢で知られていたその街へ行くのが恥ずかしいなどとは、微塵も考えなかった。彼はそのようなことを一切口にも出さず、心にも留めず、死に至るまで従順であった主キリストの模範に従う者としての姿を現した。

「父よ、祝福をください」と言い、霊的な父から祝福を受けたヨハネは、すぐに籠を肩に担ぎ、ダマスカスへと急いだ。ボロボロの服を身にまとったヨハネは、街を歩き回り、市場で自分の籠を売った。　その籠を買おうとする人々は、値段を尋ね、その高値を知ると、罵り、嘲り、ヨハネを侮辱し、非難した。　聖人の知人たちは彼を認識できなかった。かつて金糸で織られた服を着ていた彼が、今や乞食のぼろ服を身にまとい、断食によって顔つきが変わり、頬はこけ、美しさは色あせてい

[8525] 「石板」とは、古代に文字を刻むために用いられた石の板のことであり、シナイ山では、神の律法の十戒が石板に刻まれた。比喩的な意味では、石板は人間の心を指す。

たからである。しかし、かつてヨハネの召使いだったある市民が、彼の顔を注意深く見つめると、聖人であることを見分け、その乞食のような姿に驚いた。　憐れみを覚え、心の底からため息をつくと、彼はヨハネに、まるで見知らぬ人のように近づき、聖人が定めた通りの代金をすべての籠の代金として支払った。それは彼が籠を必要としていたからではなく、かつての偉大な名声と富から、神のために、　このような謙遜と貧しさへと身を投じた人物への憐れみからだった。籠の代金を受け取ると、ヨハネは彼を送り出した者のもとへ戻った。それはまるで、従順と謙遜によって敵である悪魔を打ち倒し、それとともに虚栄と空しい栄光をも打ち砕いた、戦場から帰還した勝利者のようであった。

しばらくして、その修道院の修道士の一人が亡くなった。彼の実の兄弟は、死者の後、独り残され、悲しみのあまり泣き崩れていた。ヨハネは長く熱心に彼を慰めたが、限りなく悲嘆に暮れ、悲しみに打ちひしがれた兄弟を慰めることはできなかった。　彼は涙ながらにヨハネに懇願し始めた。自分の悲しみを和らげ、慰めてくれるよう、何か心を打つ追悼の歌を書いてほしいと。ヨハネは、長老の戒めを破ることを恐れ、断った。長老は、自分の命令なしには何事もしてはならないと命じていたからだ。しかし、嘆き悲しむ兄弟は、ヨハネに懇願することをやめず、こう言った。

「なぜ、私の悲しみに満ちた魂に憐れみを示さず、この大きな心の病に、せめてわずかな薬さえ与えてくれないのですか？もしあなたが肉体の医者であり、私に何らかの肉体の病が起きて、私が治療を求めたとしたら、治療する能力があるにもかかわらず、あなたは私を拒絶し、私はその病で死んでしまうことになるのでしょうか？」　あなたは、私を助けることができたにもかかわらず拒んだとして、神に対して私のために弁明するのではないだろうか？　今、私は心の病により一層苦しんでおり、あなたからほんのわずかな助けを求めているのに、あなたは私を軽んじている。もし私が悲しみで死んでしまったら、あなたは私のために神に大きな説明を求められるのではないか？もしあなたが長老の命令を恐れているのなら、私はあなたが書いたものを、あなたの長老が気づかず、耳にすることもないよう、しっかりと隠しておこう。

ヨハネはついにこうした言葉に心を動かされ、次のような墓碑のトロパリを詠んだ。

–「この世の甘美よ」、「人間のあらゆる虚しさ」、「むなしくも奔走する人間たちよ」などであり、これらは現在でも、死者の葬儀の際に教会で歌われている[8526]。

ある日、長老が小部屋を離れてどこかへ出かけた際、ヨハネは小部屋に座って、自作のトロパリを歌っていた。しばらくして長老が戻り、小部屋に近づくと、ヨハネの歌声が聞こえてきた。長老はすぐに小部屋へ駆け込み、怒りを込めて彼にこう言った。

「なぜそんなに早く自分の誓いを忘れてしまったのか。泣くべきところを、喜んだり楽しんだりして、何か歌を口ずさんでいるのか？」

ヨハネは歌った理由を語り、兄弟の涙に駆られて歌を書かざるを得なかったと説明し、地面にひれ伏して長老に許しを請いました。しかし、堅い岩のように容赦のない長老は、直ちにこの聖人を共同生活から破門し、小部屋から追い出しました。　追放されたヨハネは、不従順のゆえに楽園から追放されたアダムのことを思い出し、かつてアダムが楽園の前でそうであったように、長老の修道室の前で苦々しく泣いた。　その後、彼は徳において完全であると認めていた他の長老たちのところへ行き、彼らに、その長老のもとへ行って、自分の罪を赦してくれるよう懇願してほしいと頼んだ。彼らは　へ向かい、長老に弟子を赦し、自分の小部屋に戻してくれるよう懇願したが、長老は彼らの願いを聞き入れようとしなかった。ある長老が彼に言った。

[8526] 例えば、「世俗的な執着があるところ」、「預言者たちは叫んで言った：『私は土であり、灰である』」、「私は泣き、嗚咽する」など、いわゆる「自叙詩」がそれにあたる。　それらはすべて並外れた感動を覚えさせ、アダムの子らの棺の前で、土の息子の運命や、この世のすべての虚しさと儚さが自然かつ力強く描かれており、故人の安息を願う心温まる祈りが神へと捧げられている。　これらはすべて、故人の埋葬の儀式に取り入れられ、現在に至るまで正教会で用いられている。

「罪を犯した者に悔悛を課しなさい[8527] 、しかし、あなたとの共同生活から追放してはならない。」

長老は言った。

「もし彼が不従順の罪を赦されたいというのなら、私が彼に課す懺悔はこうだ。彼自身の手で、すべての小部屋の通路を掃除し、修道院内の悪臭のする場所をすべて洗い清めさせよ。」

父たちはそのような言葉に恥じ入り、戸惑いながら立ち去った。長老の厳格で妥協を許さない気性に驚いていたのである。彼らに出会い、慣例通り頭を下げた後、ヨハネは父が何と言ったのか尋ねた。 長老の厳しさについて語ったものの、彼らは長老が試練として課した内容については口にする勇気がなく、そのような長老の命令を伝えることを恥じていた。 しかし、ヨハネは父が自分に何を命じたのか、執拗に尋ね続けた。そしてそれを知ると、彼らの予想をはるかに超えるほど喜び、たとえそれが恥を覚えるようなことであっても、喜んでその任務を引き受けた。 すぐに器や掃除道具を用意すると、彼は熱心にその命令を遂行し始めた。かつて様々な香油で塗られていたその手で不浄な物に触れ、聖母マリアによって奇跡的に癒やされたその右手を、不浄な物で汚していったのである。 なんと深い謙遜さであろうか、この驚くべき人物、真の従順な修道士よ！長老は、ヨハネのそのような謙遜さを見て心を打たれ、彼のところへやって来て、彼を抱きしめ、その頭、肩、そして手に口づけをしながら、こう言った。

「ああ、私はキリストのために、なんと苦難に満ちた者を育ててしまったことか。これこそ、真の従順の息子である！」

一方、ヨハネは長老の言葉に恥じ入り、神の前であるかのように彼の前にひれ伏し、父の称賛の言葉に驕ることなく、むしろさらに謙虚になり、自分の過ちを赦してくれるよう懇願した。 長老はヨハネの手を取り、彼を自分の小部屋へと案内した。ヨハネは、まるで楽園を取り戻したかのようにこれを大いに喜び、以前と同じように長老と和やかに暮らした。

しばらくして、世界の女王、至聖にして至福の聖母マリアが夜の幻視の中で長老の前に現れ、こう言った。

「なぜ、甘く豊かな水を湧き出させる泉を塞いでしまったのか。その水は、荒野の岩から湧き出た水よりも優れているのだ[8528] 、ダビデが飲みたいと願った水[8529] 、キリストがサマリアの女に約束した水[8530] であるのに。」 泉が流れるのを妨げてはならない。そうすれば、それは豊かに流れ出し、全宇宙を潤し、異端の海を覆い、それらを驚くべき甘美さへと変えるだろう。 渇く者たちはこの水へと向かい、清い生活の銀を持たない者たちは、自らの情欲を売り払い、ヨハネの徳を模範として、教義と行いにおいて清さを得よ。 彼は預言者たちの竪琴、ダビデの詩篇を取り、主なる神に新しい歌を歌い、モーセやマリヤムの歌[8531] をも凌駕するであろう。寓話に語られるオルフェウスの無益

[8527] 「エピティミア」は、ギリシャ語で「報い、罰、禁止」を意味する。エピティミアは、遥か昔に悔い改める者のために教会で定められたものであり、使徒パウロの言葉に基づいている。パウロはコリントの信徒たちに、悔い改める者の罪を赦し、彼らを共同体に受け入れるよう助言あるいは規則（カノン）を与え、次のように述べている。 「そのような者には、禁制（エピティミア）で十分である」――と述べ、さらに、もし彼らが愛をもってその者を受け入れるならば、その者もまたそうなるだろうと付け加えています。典礼書において、エピティミアは「償いの規範（規則）」と呼ばれています。 このように、使徒の指示によれば、エピティミアとは、罪を犯した者が一定期間、教会との交わりを持つことを禁じることにあり、それゆえにそれは懲罰である。しかし同時に、それは懲罰的な措置や教会会員としての権利の剥奪を意味するものではなく、あくまで「霊的な治療」に過ぎない。 教会の規範において、エピティミアとは、懺悔者が司祭の指示に従い、自発的に特定の敬虔な行い（長時間の祈り、施し、厳格な断食、巡礼など）を行うことを意味する。

[8528] 民数記 20:11。ここでは、モーセが杖で岩を打つことで奇跡的に水を湧き出させたことが記されている。

[8529] 列王記下 23:15。

[8530] ヨハネ 4:14。主はサマリアの女に、永遠の命へと流れる「生ける水」、すなわち聖霊の恵みを約束された。

[8531] 出エジプト記 20。周知の通り、イスラエル人が紅海を渡った際のモーセとマリヤムの賛歌は、ヨハネス・ダマスキノスの多くの賛歌に取り入れられ、とりわけカノンの第1歌の基礎となった。

な歌[8532] など、彼に比べれば何の意味もない。彼は霊的な天の歌を歌い、ケルビムの賛美歌に倣うであろう。　彼はエルサレムのすべての教会を、あたかもティンパニを奏でる乙女たちのようにし、キリストの死と復活を告げ知らせて主に歌わせるだろう。彼は正統信仰の教義を記し、異端の偽りの教えを糾弾する。*「わが心から善き言葉が溢れ出た。　私は言う、『わが歌は王についてである』」*（詩編44:2）。

翌朝、長老はヨハネを呼び寄せ、こう言った。

「キリストに従順なわが子よ！　霊を引き寄せるために口を開き、心で受け入れたことを口で語れ。神について思索することで学んだ知恵について語らせよ。　あなたの口を開くのは、物語のためではなく、真理の言葉のためであり、占いのためではなく、教義のためである。神を仰ぎ見るエルサレムの心、すなわち平安に満ちた教会に向かって語りなさい。空中に放たれる空虚な言葉ではなく、聖霊があなたの心に刻まれた言葉を語れ。　神を仰ぎ見るシナイの山、そして神聖な奥義の啓示の地に登りなさい。そして、あなたが最深の深みまで降りていったその偉大な謙遜によって、今や教会の山に登り、エルサレムに福音を宣べ伝えなさい。あなたの声を力強く上げなさい。なぜなら、神の母は、あなたについて私に多くの栄光あることを語ってくださったからです。　私については、私の無作法と無知ゆえに、あなたにとって妨げとなってしまったことを、どうかお赦しください。

それ以来、至福のヨハネは神聖な書物を執筆し、甘美な賛美歌を詠み始めた。彼は『オクトイヒ』を編纂し、それはまるで霊的な笛のように、今に至るまで神の教会を喜ばせ続けている。　ヨハネは最初の著書を、次のような言葉で書き始めました。「あなたの勝利の右の手は、神聖な力強さをもって堅く称えられました」[8533]。

[8532] オルフェウス――ギリシャ神話の英雄である歌い手。その歌声の力は極めて強大で、木々や岩を動かし、野獣を従わせた。

[8533] オクトイヒ第1声の第1イルモス。オクトイヒは、聖ヨハネス・ダマスキノスの最初の聖歌集の一つであった。 エルサレム総主教ヨハネの言葉を借りれば、聖ダマスコスは、聖像崇敬のために揺るぎない信仰の証人であり、殉教者であったが、信仰の敵によって切断された自身の腕が奇跡的に癒やされたことに勇気づけられ、この荘厳な賛歌を歌った。　「汝の勝利の右の手は、要塞において見事に栄光を受けた」と。この賛歌の基礎となったのは、イスラエル人が紅海を渡った際のモーセの勝利の感謝歌であり、　その後、一連の他の聖歌が続き、それらが「オクトイヒ」、すなわちオスモグラス（8つの声部に分けられた日曜日の礼拝）を構成し、その登場は教会礼拝の全構成に変化をもたらした。 聖ダマスキノスの存命中に、彼のオクトイヒは東方全土で受け入れられ、しばらくして西方にも広まった。その後、オクトイヒは他のキリスト教の聖歌作家たちによる聖歌によって充実していったが、現在の形における日曜日の礼拝の主要な構成は、依然として聖ヨハネス・ダマスキノスに帰属している。 オクトイヒには、週の各日に行われる、8つの声調（ナペヴ）のいずれか一つに基づいて執り行われる礼拝、すなわち平日用の晩課、晩祷、早課、および聖体礼儀の儀式順序が含まれており、日曜日の場合は、それに加えて小晩課と深夜の礼拝も含まれている。　オクトイヒの詠唱は、諸聖人の主日（週）の翌平日より始まり、肉断食週の土曜日の前日に終了する。一方、日曜日については、諸聖人の主日の翌週の日曜日から始まり、大斎の第6週まで続く。 指定された期間のほか、十二大祝日およびそれらの前祝日が平日である場合にも、礼拝においてオクトイヒは用いられない。　オクトイヒは、教会礼拝に大きな明確さと統一性をもたらした。聖ダマスキノスは、教会聖歌に正しい統一性と、キリスト教の奉仕にふさわしい感情を吹き込むことで、それまでの教会聖歌に蔓延していた無秩序に、自らのオクトイヒによって歯止めをかけたのである。　多種多様な旋律の中から、彼は教会賛美歌として、主にキリスト教徒にふさわしい感情を表現できるものを選び出し、キリスト教の重要性にそぐわない感情を煽りかねないものは用いませんでした。　彼は、祈る者たちが旋律の多様性や頻繁な変化に気を取られないようにするため、また、限られた数の旋律によって、誰もが理解できる品位ある旋律に注意を向けさせ、それによって特定の品位ある資質を喚起し、歌われる祈りの精神と内容を皆の注意の中で確固たるものにするために、八つの声部に限定した。　この旋律の明確さは、洗練され、散漫で、敬虔さを欠いた芸術による恣意的な創作に終止符を打ち、また、オスモグラスニクの旋律の簡素さは、キリスト教の祈りの謙虚な簡素さを表現することで、魂を同様の祈りへと導き、　世俗の喧騒から魂を引き離し、あたかも神の御座へと捧げ上げるかのようです。同時に、八つの声部は、絶えず神を賛美する天の階層の八つの声を指し示しているかのようです：　神の母、天使たち、預言者たち、使徒たち、聖人、殉教者、敬虔な者たち、そして義人たちの声であり、それゆえ、オクトイヒの歌唱は、天の御座の前で永遠に喜び歌う聖人たちに倣い、絶えることのない祈りの歌声

また、自身の右手の奇跡的な癒やしについて、彼は喜びに満ち溢れ、聖母マリアに向かって次のように叫んだ。「恵み豊かな方よ、あらゆる被造物があなたを喜び祝う」[8534]。

ヨハネは、切断された自分の手を包んでいた布を、聖母マリアの驚くべき奇跡を記念して、頭上に掲げていた。彼はまた、いくつかの聖人の伝記を執筆し、祝祭日の説教や様々な心を打つ祈りをまとめ、信仰の教義や神学の多くの秘儀を解説した。　また、異端者、とりわけ偶像破壊者たちに対する論駁も執筆し、その他にも魂に有益な著作を著した。それらは今日に至るまで、信者たちが霊的な糧として養われ、まるで甘い小川から水を飲むかのようにそこから潤いを得ている[8535]。

聖ヨハネのこうした著作を奨励したのは、彼と共に育ち、同じ師に学んだ至福のコスマであった。彼はヨハネに神聖な書物の執筆や教会賛美歌の編纂を促し、自らも彼を助けた。　その後、コスマはエルサレム総主教によってマユム司教に任命された。その後、その同じ総主教は、聖ヨハネを呼び寄せ、彼を司祭に叙階した。　しかし、ヨハネは長く世俗の世界にとどまることを望まなかった。

を、霊的かつ神秘的に象徴しているのです。　聖ヨハネス・ダマスコスのオクトイコスの楽譜は、フック記号で記されていた。

[8534] その後、この至聖なる神の母を称え、賛美する荘厳な聖歌は、バシレイオス大聖人の典礼の一部として、ザドスティニク（賛美の歌）として組み込まれた。　聖ヨハネス・ダマスコスの数多くの聖歌の中でも、特に聖母マリアを称える聖歌が多く作曲されており、彼は聖母マリアの特別な恵み深い庇護と執り成しのもとにあったのである。　例えば、受胎告知、聖母の被昇天、聖母の降誕を祝うカノンや、「慈悲の扉を我らに開いてください」、「栄光に満ちた永遠の処女、神であるキリストの母よ、我らの祈りを御子にお届けください」、「我がすべての望みをあなたに託します」などが挙げられる。　概して、教会聖歌作家としてのダマスキノスは、他のあらゆる面において彼よりも優れており、まさに比類のない存在である。それゆえ、彼の聖歌によって「*黄金の泉*」と称され、この名は彼にふさわしいものである。彼の聖歌はすべて、模範的な歌と呼ばれるに値する。それらすべてに、優れた聖歌家に特有の、驚くべき魂のこもった表現が見て取れる。　彼が作曲した64の*カノン*の中で、最も崇高で、荘厳かつ明るく喜びに満ちたものは、聖復活祭の*カノン*である。　聖ヨハネス・ダマスコスによって、復活祭の礼拝全体が編纂されたが、その後に続く人間の創造物の模範の中で、これほどまでに生き生きとして高尚な感情、聖なる、そして真にこの世のものとは思えない歓喜に満ちた歌は他に類を見ない。キリストの降誕、主の顕現、主の昇天のためのカノンとステヒラは、復活祭のものに匹敵する。彼の日曜日の礼拝は、詩的な力においても、教義的な内容においても、同様に卓越している。また、ダマスコスは「あなたの至聖なる御姿に拝礼いたします、慈愛に満ちた方よ」という美しいトロパールを著した。　また、彼のアンティフォナや墓前の歌も傑出しており、悔い改める魂の模範的かつ感動的な歌である。ダマスキノスはさらに、多くのステヒラやその他の教会聖歌も作曲した。総じて、ダマスキノスは、教会の歴史において、彼以前にも以後にも比類のない聖歌作家である。

[8535] 自身の聖歌に加え、聖ヨハネス・ダマスキノスは神学著作によっても名声を博し、それにより教会の偉大な教父たちの間に名誉ある地位を占めている。ギリシャの哲学者アリストテレスの哲学を綿密に研究したことで、彼は明確な思考を持ち、概念や言葉において正確な思想家となった。　聖ヨハネは、教会の教父たちの中で初めて、正教会の神学的教義を整然とした体系的な順序で体系化した人物であり、これこそが彼の揺るぎない栄光である。その著作において、ダマスコのヨハネは教義学者であり論争家、歴史家であり哲学者、雄弁家であり教会詩人としての姿を見せている。　主題が全く異なる三つの主要な著作、『弁証法』、『異端論』、『信仰論』に対し、彼は「知識の泉」という一つの共通の名称を与えた。　その中でも最も重要なのは『正教の信仰の解説』であり、これは啓示の観想的真理について整然と一貫して述べられた体系的な教義を構成しており、東西の神学者たちの模範となった。　さらに、聖ヨハネは同様の厳格な順序で『聖なる対比』を著した。これは、信仰と敬虔に関する聖書の言葉と、教会の教父や教師たちの言葉を対比させたものであり、一般の人々の理解を助けるために、項目はアルファベット順に並べられている。　『手引書』――古代においてその誤った理解が異端の原因となっていた、最も重要な神学的用語の解説；教義学に関するいくつかの小論：『正しい思索について』――六つの全地公会議の教義の解説を含む；『聖三位一体について』、　『人間における神の像について』、『人間の本性について』など。聖ヨハネの異端者に対する著作の中で、第一に挙げられるのは、聖像を非難する者たちに対する三つの論説である。また、彼にはイスラム教徒に対する弁明書や、ネストリウス派、単性論者、単フェリテ派、マニ教徒に対する著作もある。　さらに、使徒パウロの書簡に関する簡潔な解説、聖殉教者アルテミオスに関する詳細な回想録、そして主の変容、キリストの降誕、聖母マリアの被昇天などの祝日に際しての説教、信仰をもって亡くなった者たちに関する説教、八つの邪念についての訓戒などが挙げられる。　最後に、ダマスキノスは、聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイによって編纂されたエルサレム典礼規則を見直し、補足し、また月暦を編纂することで、礼拝の儀式に多大な貢献を果たした。

世俗の名声を避け、彼は聖サヴァの修道院に戻り、自分の独房にこもって、まるで巣の中の鳥のように、神聖な書物の執筆と自らの救いの業に熱心に打ち込んだ。　以前に執筆したすべての書物を集め、ヨハネはそれらを改めて読み返し、特に言葉や表現において、不明確な点が残らないよう、修正が必要だと考えた箇所を入念に訂正した。　このように、自身にとって有益であり、キリストの教会にとって重要なこれらの労作や、修道者としての修行に多くの時間を費やし、ヨハネは完全な修道生活と聖性を達成した。 神に喜ばれた彼は、キリストとその聖母マリアのもとへ旅立った[8536] 。そして今、イコンを通してではなく、天の栄光の中に輝く御顔を直視して彼らを崇め、私たちもまた、彼の聖なる祈りとキリストの恵みによって、その神聖な御顔を見ることができるようにと、私たちのために祈っている。　彼と、その尊き、また至福に満ちた御母とには、永遠に栄光と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第8調:

正教の導き手、敬虔と清らかさの師、全宇宙の灯火、修道者たちの神に霊感を受けた糧、至賢なるヨハネよ、あなたは弟子たちすべてを照らし出しました、霊的な泉よ。キリスト・神に、私たちの魂が救われるよう祈ってください。

コンダク、第4調:

賛美歌作家であり、敬虔な神の御言葉の語り手、教会の懲戒者であり教師、そして敵との闘士であるヨハネを讃えよう。彼は主の十字架という武器を手に取り、あらゆる異端の惑わしを退け、神への温かな執り成し手として、すべての人に罪の赦しを授ける。

聖ヨハネ・ポリヴォツキーの記念日

記念日：12月4日

聖ヨハネは若い頃から、味覚を喜ばせるような食事を控え、世俗の快楽を避け、断食、貞潔、そして慈悲をもってその生涯を彩った。それゆえ、彼はポリヴォツクの司教に任命される栄誉に浴した[8537] 。もっとも、その前に、彼は正規の手続きを経て、教会のすべての位階を順に経ていた。 このようにして、人々に対する最高位の統治と世話の任を託されると、彼は自らの功績をさらに高め、これまでの労苦に新たな労苦を加えました。 当時、皇帝レウ・イサウリア人[8538] は、不適格なまま王位に就き、聖なるイコンを冒涜し始めた。尊い父は、王のこのような不敬を強く非難し、自らの信仰告白によって、信徒たちを異端の迷い――イコン破壊運動――から守った。　また、同時期に、ある時、アガリア人がアモリアの町[8539] を包囲したが、神の御加護により撃退された。敵に捕らえられたすべてのキリスト教徒は、この聖なる人物の尽力により、その際に自由を取り戻した。　その遺体は今なお朽ちることなく保存されており、聖霊降臨祭の日には毎回、聖棺から取り出され、司教の法衣を

[8536] 聖ヨハネス・ダマスキノスは777年頃、104歳で死去し、サヴァ・オスヴェシュチェンヌイ修道院の聖創設者の聖遺骸の傍らに埋葬された。 ビザンツ皇帝アンドロニコス2世パレオロゴス（1282年～1328年）の治世下、聖人の遺骸はコンスタンティノープルに移された。

[8537] 8世紀、アジアのフリギアにて。

[8538] 717年から741年まで在位した。

[8539] フリギア地方にて。

まとわせた後、まず聖座へと運ばれて直立させられ、その後、高い場所に掲げられ、神聖な礼拝が行われている間、常に二人の司祭に支えられながらそこに安置される。　また、この尊い父によって行われた奇跡、すなわち悪霊に取りつかれた者たちの癒やしや病人の治癒については、その数があまりにも多いため、書き記すことさえ不可能である。

12月18日

12月5日（旧暦）

我らの尊い父、聖サヴァの生涯と功績

記念日12月5日

聖サヴァは、ギリシャ皇帝テオドシウス2世の治世31年目[8540]　、カッパドキア地方のムタラスカと呼ばれる村で生まれた。この村はケサリア[8541]の管轄下にあった。 当初はこの村は知られていなかったが、後にサヴァがそこで生まれたことで、神の預言者サムエルが育ったアルマフェム（サムエル記上1章以降）よりも有名になった。 至福のサヴァの両親は、高潔で敬虔なヨハネとソフィアであった。子供が五歳になった時、彼らは アレクサンドリア[8542]へと向かった。というのも、ヨハネは王に仕えており、高い軍階を持っていたからである。神の摂理により、サヴァは両親の財産と共に、母の兄弟であるエルミアの元に預けられた。　しかし、エルミアの妻は意地悪で口うるさかったため、少年は多くの苦難に耐え、ついに、スカンダ[8543] という別の村に住んでいた父方の兄グリゴリイのもとへ逃げ出した。この結果、サヴァの叔父たちの間に不和が生じた。　彼の両親は長い間アレクサンドリアに留まっていたが、エルミウスとグリゴリウスは互いに争い、二人とも少年を自分のもとに引き取りたいというよりは、むしろ彼の父の財産を横取りしたいと考えていた。　幼い頃からすでに成熟した知性を備えていたこの祝福された少年は、叔父たちの争いや不和を目の当たりにし、すべての財産を放棄して、ムタラスキから3.5ヴェルスタ離れたフラヴィアヌス修道院[8544] へと身を寄せ、生後8歳で天使のような生活を送り始めた。 そこで生活するうちに、彼はまもなく詩篇やその他の聖書を学び、善行に励み、あらゆる点で修道院の規則に従った。　しばらくして、至福のサヴァの叔父たちは互いに和解し、修道院を訪れて彼を誘惑し始め、聖なる修道院の塀の外に出て、妻を娶り、父の領地で暮らすよう勧めた。 しかし、彼は神の家に留まり、罪人たちの集落で暮らすことを望まず[8545] 、また世俗の生活よりも修道院の生活を愛していたため、叔父たちの言葉に従わず、彼らの誘惑的な提案を拒絶した。

「蛇から逃げるように」と彼は言った。「私は、神の道から外れるよう勧める者たちから逃げます。なぜなら、悪い交わりは善き品性を損なうからです（Iコリント15:33）。そして、預言者が放

[8540] テオドシウス2世、あるいは「若きテオドシウス」は、テオドシウス大帝の孫であり、ビザンツ皇帝として408年から450年まで在位した。聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの誕生は439年にさかのぼる。

[8541] カッパドキア――小アジアの東部地域。ケサリア――カッパドキアの主要都市。ムタラスカ――現在のタラシ――ケサリアから8ヴェルスタ離れた村。

[8542] アレクサンドリア――アフリカの、エジプト北岸に位置する港湾都市。かつては広範な貿易を行い、異教の学問の拠点であったが、その後、キリスト教神学の中心地となった。

[8543] スカンダという集落は、ムタラスカから3スタディオン、すなわち*12ヴェルスタを*少し超える距離に位置していた（*ローマのスタディオンは86サジェンに相当した*）。

[8544] 現在、岩の端には聖ヨハネ・バプティスタ修道院がある。

[8545] 詩篇の引用。詩篇83:11。

蕩に走る者たちを呪うその呪いを、自ら招くことを恐れるのです：　*『あなたの戒めから逸れる者たちは呪われている』*（詩編118:21参照）。そう言って、彼は叔父たちを何も持たせずに追い返し、自らさらに熱心に修行に励み、労苦と節制によって肉体を死なせ、それを霊に服従させた。

財産や結婚という誘惑で、まるで楽園のような修道院を去るよう彼を誘惑していたこの蛇が打ち負かされると、別の誘惑者――過食の悪魔――が聖人を誘惑し始めた。ある日、修道院の庭で働いていたサヴァは、木に実った美しいリンゴを目にした。　彼は我慢できず、そのリンゴを摘み取り、定められた時や通常の祝福を受ける前にそれを食べようとした。しかし、この果実によって、楽園で蛇が最初の人間を罪へと誘い込んだことを思い出し（創世記3:1–24）、サヴァは自制し、それを食べず、自らを責めながらこう言った。

「アダムを死に至らしめたあの果実も、目には美しく、味も良かったのだ。」

そして、リンゴを地面に投げ捨て、足で踏み潰し、それとともに自らの思いも踏みつけ、さらに、暴食という悪魔の頭を打ち砕き――生涯、リンゴを食べないという誓いを立てた。　それ以来、彼はあらゆる肉欲を節制によって克服し、食事も睡眠も控え、絶えず労働に励み、その手は祈りか仕事のためにしか伸ばされなかった。

そして間もなく、聖人はその若さにもかかわらず、その修道院にいたすべての長老たちに匹敵するほどの徳を身につけた。

ある時、その修道院の兄弟の一人で、パンを焼く務めを担っていた者が、雨に濡れてしまった。冬の間で太陽も照らず、服を乾かす場所もなかったため、彼は服を薪の積まれたパン焼き窯の中に置き、そのことを忘れてしまった。　しばらくして、修道士たちはパンを焼くために集まり、窯に火を入れたが、パン焼き担当の修道士が服を乾かすためにそこに置いていたことを知らなかった。薪が激しく燃え上がった頃、パン焼き担当の修道士は自分の服のことを思い出し、それを深く嘆いた。そこに、聖サヴァもいた。兄弟の悲しみを目の当たりにすると、彼は自分のことは顧みず、十字を切ってから、燃え盛る窯の中へと入っていった。そして、なんと奇跡が起きたことか！　かつてバビロンの炉の中で若者たちが信仰ゆえに焼かれなかった（ダニエル書3:1–100）ように、サヴァ少年もまた、兄弟への愛ゆえに、火に焼かれずに炉から出てきて、火に傷つけられていない兄弟の服を手に持ち、彼自身の服もまた焼けずに残っていた。

兄弟たちはこの奇跡を目撃して驚愕し、互いにこう語り合った。

「若くしてすでに神からこのような恵みを授かっているこの少年は、将来、どのような人物になるのだろうか！」

その修道院で、この祝福された者は十年間を過ごし、力から力へ、栄光から栄光へと高まっていった。　その後、彼はエルサレムへ赴き、聖地を参拝し、その周辺の荒野に住む修道者たちを訪ね、彼らの教えに耳を傾け、そこで自らも隠遁生活を送る場所を見つけたいと願うようになった。彼はアルヒマンドリトに、祈りと祝福を込めて聖都へ送り出してくれるよう懇願した。しかし、アルヒマンドリトは彼を送り出すことを拒み、こう言った。

「君のような若者が放浪するのは良くない。一か所に留まっていたほうがよい。」

しかし、万事を善き方向へと導かれる神は、アルヒマンドリトにサヴヴァを引き留めないよう命じられた。

「サヴヴァを放して、荒野でわたしに仕えさせよ」――神は幻の中でアルヒマンドリトにそう告げられた。

そこで、アルヒマンドリトは聖人を呼び寄せ、彼に祝福を与え、祈りを込めて旅立ちを許した。そして彼は、至高者の御手によって導かれ、生後18年目の時、マルキアヌス帝の治世の終わり[8546]

[8546] マルキアヌス――ビザンツ皇帝、在位450～467年。聖ユヴェナリウスは420～458年。 聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイがアッバ・パッサリオンの修道院へ追放されたのは456年のことである。聖パッサリオン――エルサレムの修道院の

、聖都におけるユヴェナリウス総主教の在位中に、エルサレムへとたどり着いた。　彼は冬の時期に聖パッサリオンの修道院に到着し、アルヒマンドリト・エルピディオスに迎え入れられ、あるカッパドキアの長老の指導下に置かれた。サヴァは彼のもとで冬を過ごし、かねてより魂の底から切望していた、沈黙に満ちた隠者の生活を夢見ていた。　エルサレムの東にある荒野で、徳と奇跡に輝いていた偉大なるエウフィミオス（[8547]）の話を耳にしたサヴァは、彼に会いたいと願った。上長たちに祝福を請うと、彼は旅立ち、偉大なるエウフィミオスのラヴラに到着すると、そこで数日間滞在し、彼に会える時を待った。というのも、その聖人は常に大聖堂に来るわけではなく、週に1、2回、決まった日にしか現れなかったからである。　安息日になると、サヴァは教会へ向かう聖エウフィミオスを見かけ、彼のもとにひれ伏して、自分のラヴラに受け入れてくれるよう熱心に懇願した。　しかし、エウフィミオスは彼の若さを見て、エルサレムからさらに遠く離れた場所にある修道院へ、至福のテオクティスト[8548]の指導下へ彼を送り出し、この若い修道士を世話するよう命じ、――そして彼について、まもなくキリストの恵みによって、他の多くの者たちよりも修道生活において輝き、パレスチナのすべての隠者たちにとって輝かしい模範となり、その国のすべての修道院よりも大きな修道院を築き上げると預言した。

テオクティストによって修道院に受け入れられたサヴァは、全身全霊を神に捧げ、すべての修道院の務めを、不平を言わず、従順に、謙虚さと熱意をもって果たした。神への奉仕を行う能力に恵まれ、また非常に熱心であった彼は、誰よりも早く教会に入り、誰よりも遅く教会を出た。　偉大な精神力に加え、彼は体も大きく力強かった。そのため、砂漠で他の修道士たちが籠用の小枝をたった一束だけ切り、キノヴィア（修道院）へ運んでいたのに対し、サヴァは三束も切り、運んでいた。さらに、時には水や薪を運ぶこともあり、そのようにして皆に奉仕しようと努めていた。彼はかなり長い間、ロバの世話係を務め、その他にも様々な役職をこなしたが、これらすべてを非の打ち所がなく、非の打ち所なく遂行したため、キノヴィアの修道院長たちは、若きサヴァのその並外れた熱意と奉仕の精神に驚嘆していた。

そこで、悪魔は彼を妨げようと、次のような策略を練った。その修道院には、アレクサンドリア出身のヨハネという名の修道士が一人いた。この修道士は、両親の死の知らせを受けた。　そこで悪魔は、修道士としてふさわしくない「両親の遺した財産の整理をしなければならない」という考えを彼に植え付け、彼はテオクティスト修道院長に対し、アレクサンドリアへ帰らせてほしいと頻繁に懇願した。さらに、体力の強いサヴヴァも同行させてほしいと頼んだ。道中、サヴヴァなら彼に大きな助けとなるだろうからである。　テオクティストは修道士の執拗な願いを聞き入れ、彼を故郷へ送り出した。また、彼の願い通りサヴヴァも同行させ、こうして二人は旅立った。　彼らがアレクサンドリアに到着し、亡くなった者たちが残した財産の整理に奔走し始めたとき、たまたまそこにいた（サヴァの父は軍人としての職務上、皇帝の命令により頻繁にアレクサンドリアへ派遣されていたため）、至福のサヴァの両親、ヨハネスとソフィアが彼を認めた。　そこで、至福のサヴァには新たな試練が訪れ、　、以前よりもさらに大きな葛藤が生じた。叔父たちが彼を修道院から世俗の世界へ、修道生活から結婚へと引きずり出そうとしたのである。　サヴァの両親は、時には涙ながらの懇願を、時には優しく魅力的な言葉を交えながら、彼に黒い修道服を脱いで明るい服を着るよう、自分たちの

一つを創設した人物であり、司教、そして聖エウフィミオス大聖人の師――の記念日は8月11日および「チーズ週間」の土曜日に行われる。

[8547] 473年に逝去した聖エウフィミオス大聖人の記念日は、1月20日にエリコ周辺で祝われる。エウフィミオスが友人であり同志である聖テオクティストに管理を委ねた最初の修道院は、エルサレムから北東へ14ヴェルスタの場所にあった。2つ目の修道院は、聖エウフィミオスによって最初の修道院から4ヴェルスタの場所に設立され、彼自身の管理下にあった。

[8548] 聖エウフィミオス大聖人の同伴者である聖テオクティストの記念日は9月3日に祝われる。聖テオクティストは467年に帰天した。

生き方に倣って軍務に就くよう、さらに強く説得した。　しかし、祝福された彼は、敵の誘惑によって両親と出会い、彼らに正体を見破られたことを悟ると、自らの生来の感情に頑なに抵抗した。彼は両親に対する自然な愛情を抑え込み、彼らの執拗な懇願や涙を拒絶し、その善き決意を揺るがすことなく、両親にこう答えた。

「*『わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。自分の十字架を負ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない』*と仰せになった方を、私は恐れています」（マタイ10:37–38）。どうして私が、神よりもあなた方を、あなた方の虚しい人生よりも自分の十字架を、この世の兵役よりも霊的な戦いを優先できるでしょうか。もし地上の王たちでさえ、部隊から逃げ出した兵士を罰するのなら、ましてや天の王は、御自身の栄光ある軍勢に加わったにもかかわらず、その後、選ばれた部隊から逃げ出す者たちを容赦されるはずがありません。

最後に、聖サヴァはさらにこう付け加えた。

「もしあなたがたが、この素晴らしいキリストの軍勢を去るよう私に説得し続けるなら、私はもはやあなたがたを私の両親とは呼ばない。」

そこで、ヨハネとソフィアは、息子の心が揺るぎないことを悟ると、説得をやめ、苦々しい涙を流しながら、心を固めて彼を見送った。別れ際、彼らは旅の途中で必要なものは何でも持って行くようにと頼み、四十枚の金貨を渡した。　しかし彼は何も受け取りたくなかったが、両親を完全に傷つけないようにと、三枚の金貨だけを受け取り、帰還後にそれらを修道院長テオクティストの手に渡した。

サヴァが修道院に滞在して10年目の終わり頃、聖テオクティストは世を去った。彼の後任として、聖エウフィミオスによって、マリンという名の徳の高い修道士が任命されたが、彼もまた2年後に亡くなり、その後、ロンギンという名の徳の高い修道士が修道院長に就任した。　その頃、至福のサヴァは生後30年を迎えていた。彼はロンギン修道院長に対し、より隠遁的な生活を送るために、修道院の南側にある岩山の上の洞窟に籠もることを許可してほしいと願い出た。　ロンギンはこの願いを、偉大なるエウフィミオスに報告した。エウフィミオスは、サヴァの清らかな生活、断食と祈り、柔和さと謙遜、そしてその他の神に喜ばれる行いについて多く耳にしていたため、ロンギンに次のように書き送った。

「サヴァが望むように修行することを禁じてはならない。」

当初、この聖人は週に五日間、洞窟に滞在するよう命じられていたが、その後、彼の願いにより、五年間その洞窟に滞在することが許された。洞窟での彼の生活は次のようなものであった。五日間は断食し、何も口にせず、洞窟から一歩も外に出なかった。　そこで彼は籠編みに取り組み、一日に十個ずつ編んでいた——その間も、彼の口と心には常に神への祈りが満ちていた。安息日になると、早朝に五十個の籠を携えて洞窟から修道院へと出て行った；　土曜日と日曜日には共同の祈りに参加し、食事をとって体を養った後、日曜日の夕方には、50個の籠を編むのに必要なだけのナツメヤシの枝を手に、再び洞窟へと戻っていった。 彼はそのような労苦と断食の中で、その洞窟に5年間留まった。その後、偉大なるエウフィミオスは、彼を完全な修道士として、自身の修道生活への労苦に連れ出した。彼は若年にもかかわらず、徳によって老いた長老たちに匹敵する存在となっていたからである。　そのため、エウフィミオスは彼を「若き長老」と呼んだ。肉体は若かったが、霊的な知恵においては白髪のように白く、汚れなき生活においては老いた者と同等であったからである。 1月14日

、偉大なるエウフィミオスは、のちに至福のドメティアヌス[8549] も連れ出し、彼と共にラヴラを出発し、大斎期間の全期間、棕櫚の主日まで、広大なルヴの荒野[8550] へと向かった。

ある日、長老は死海より南に位置する砂漠を端から端まで横断しようと決意し、二人の弟子、ドメティアヌスとサヴァと共に、水のない地へと向かった。 灼熱の暑さが照りつけ、至福のサヴァは疲れ果て、渇きに耐えきれず、これ以上歩けなくなって倒れてしまった。エウフィミオスは彼を憐れみ、石を投げられるほどの距離まで離れて立ち、次のように祈り始めた。

「主なる神よ、この水のない地に水を授けてください。衰え果てた兄弟の渇きを癒やしてください。」

祈りを終えると、彼は手近にあった棒で地面を三度突くと、たちまち泉の水が湧き出た。サヴァはその水を口にし、力を取り戻し、それ以来、荒野で渇きに耐える神聖な力を授かった。棕櫚の日曜日が訪れると、彼らはラヴラに戻った。

しばらくして、尊者にして神に愛されたエウフィミオスが世を去った。それはエルサレム総主教アナスタシオスの治世中のことだった[8551] 。 エウフィミオスの帰天と、ラヴラの他の数名の長老たちの死後、サヴァは修道院の規律が変容しつつあるのを見て、ヨルダン川近くの東方の荒野へと去った。その地は当時、尊者ゲラシモスが、まるで輝く星のように、その生涯をもって照らしていたのである。 至福のサヴァは、生後35年の時、荒野に独り住み着き、断食と絶え間ない祈りに励み、自らの心を神聖な事物の清らかな鏡とするよう努めていた。その時、悪魔は彼に対して陰謀を企て始めた。 ある夜中、聖人が労苦の後に地面で眠っていたとき、悪魔は数多くの蛇やサソリに変身し、サヴァに近づいて彼を脅かそうとした。しかし、聖人は直ちに立ち上がって祈りを捧げ、ダビデの詩篇の言葉を唱えた。*「夜の恐怖も、昼に飛ぶ矢も恐れない……アスピドやバシリスクを踏みにじる」*（詩篇90:5–13）。この言葉を聞いた悪魔は、その恐ろしい姿とともにたちまち姿を消した。 数日後、悪魔は恐ろしい獅子に変身し、まるで聖人を食い尽くそうとするかのように彼に襲いかかった。襲いかかるたびに後ずさりし、また襲いかかり、また後ずさりした。獣が襲いかかっては後退する様子を見て、聖人は彼にこう言った。

「もし神から私を食い尽くす権能を与えられているのなら、なぜ後ずさりするのか。もしそうでないのなら、なぜ無駄な労力を費やすのか。私のキリストの力によって、私はお前を打ち負かすのだ、獅子よ！」

するとたちまち、獣の姿をとっていた悪霊は、恥をさらして逃げ去った。それ以来、神はサヴァにすべての獣や蛇を服従させ、彼はまるで柔和な羊の群れの中を歩くかのように、それらの間を歩き回るようになった。

荒野を歩いていたサヴァは、ある日、ひどく空腹で疲れ果てた四人のサラセン人[8552] に出会った。彼は彼らに座るよう命じ、自分の服から、自分自身が食べていた「メラグリア」と呼ばれる根菜と、葦の芯[8553] を取り出して彼らに与えた。 彼らはそれを食べて元気を取り戻し、サヴァがいた場所を覚えてから立ち去った。そして数日後、彼らは飢えの日に自分たちを養ってくれた彼の親切への感

[8549] 聖ドメティアヌス・パレスティヌスの記念日は、乳製品を禁じる土曜日に祝われる。

[8550] ルヴァの荒野は、死海の北西岸、死海と現在のエルサレム街道、および聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイのラヴラとの間に位置していた。

[8551] 473年、アナスタシオス1世――468年から478年までエルサレム総主教を務めた。

[8552] サラセン人――すなわちアラブ人。アラビア半島やシリア、一部はパレスチナにも居住していた。

[8553] メラグリア――パレスチナに自生する、苦味のあるあまり知られていない荒野の植物。――ここでいう「葦」とは、いわゆる「芳香葦」を指す。これは、芳香があり心地よいが、味は苦い根を持つ植物である。 これは通常、礼拝用の香（フィミアム）や、治療用の芳香油・軟膏の調合に用いられたが、砂漠の隠者たちはこの植物の新芽や柔らかい芯を食用としてもいた。

謝の印として、パン、チーズ、ナツメヤシを持って彼の元を訪れた。サヴァは心を打たれ、涙を流しながら心の中でこう呟いた。

「ああ、悲しや、わが魂よ！この人々は、たった一度受けたささやかな恩恵に、これほどまでに感謝しているではないか！それなのに、私たちは、刻一刻と神の計り知れない恵みを受けているにもかかわらず、恩知らずであり、怠惰と無関心に生き、神の聖なる戒めを果たそうともしないではないか！」

その後、アンフ[8554]という名の徳高い修道士がサヴァのもとを訪れた。彼は以前、聖テオドシオスと共に長く暮らしていたが、祝福されたサヴァを深く愛し、彼に心を寄せ、共に暮らすようになった。ある日、アガリア人[8555]が彼らを襲い、その中から一人を先遣して彼らを殺そうとした。しかし、尊い父たちの祈りにより、突然大地が裂けてそのアガリア人を飲み込み、残りのアガリア人たちはこの奇跡を目撃して恐怖に駆られ、逃げ去った。

同居人のアンファを通じて、至福のサヴァは後に聖テオドシウスと知り合い、二人は互いに深い愛を育んだ。荒野での生活4年目の終わり頃、聖サヴァは荒野を巡る旅の途中、ある高い丘[8556]に登った。そこはかつて、テオドシウス2世の妃である至福の王妃エウドキアが、偉大なるエウフィミオス[8557]から、魂に益となる教えを喜びをもって受けた場所であった。そこでサヴァは、いつものように祈りを捧げながら一夜を過ごした。すると、彼に幻が現れた。彼は　、神の輝く天使を見、その天使はかつてシロアムの南を流れていた小川[8558]が通っていた谷を指し示し、こう言った。

「もしこの荒野を町のように住みやすい場所にしたいのなら、この小川の東側に向き直りなさい。そうすれば、あなたの目の前に、誰も住んだことのない洞窟が見えるだろう。そこへ登って、そこに住みなさい。*「家畜にその糧を与え、御自分に呼び求める鴉の雛にも与える」*（詩篇146:9）お方が、あなたをも養ってくださるでしょう。

幻が消え、日が明けると、サヴァは神の助けによりその丘を下り、幻の中で天使に示された洞窟を見つけ、そこに住み着いた。当時、彼は生後四十歳であった。　この年、エルサレム総主教アナスタシオスが死去し、聖座にはマルティリウスが後を継いだ[8559]。また同年、ゼノン皇帝は迫害者ヴァシリスコスを殺害し、王権を取り戻した[8560]。

聖サヴァが住み着いた洞窟は、入り口が非常に使いづらかった。そのため、彼はロープを吊るし、それに伝って洞窟から降り、エプタストと呼ばれる湖まで水を汲みに行っていた。その湖は洞窟から15スタディオン離れていた[8561]。この洞窟で生活する間、聖人は当初、洞窟の周辺に生えている草を糧としていた。しかし、サヴァにそこに住むよう命じた神は、かつてホラフで預言者エリヤにカラスを通して食物を送ったように（列王記下17:5–6）、[8562]、異教徒たちを通じて彼に食物を送った。しばらくして、4人のサラセン人が通りかかり、聖サヴァの洞窟を見つけ、中に入ろうとしたが、

[8554] その記念日は12月12日である。

[8555] アガリア人、別名サラセン人は、アラビアのベドウィンである。彼らがアガリア人と呼ばれたのは、ユダヤの伝承によれば、アブラハムの女奴隷ハガルの息子イシュマエルの子孫であったことに由来する。この名称は、当初はこの遊牧部族を指していたが、後にキリスト教の著述家たちによってすべてのアラブ人に広められ、やがてはイスラム教徒全般を指すようになった。

[8556] この丘は、現在のムンタルである。

[8557] テオドシウス2世の妻であるエウドキア皇后は、460年にエルサレムで死去した。

[8558] シロアム――シロアムの泉、あるいは水場、およびそのそばに設けられたシロアムの浴場は、エルサレムの南東側、シオン山とモリヤ山の麓に位置していた。

[8559] これは478年のことだった。マルティリウスは、478年から486年までエルサレム総主教を務めた。

[8560] ゼノン――474年から491年まで在位したビザンツ皇帝。475年、ヴァシリスクが彼から皇帝の権力を奪い、477年末まで統治したが、その後ゼノンによって要塞に幽閉され、そこで家族全員と共に餓死した。

[8561] エプタストは、ギリシャ語から訳すと「七つの口」を意味する。16スタディオンは、約4ヴェルストに相当する。

[8562] すなわち、野蛮な異民族のことである。この場合は、遊牧民のサラセン人を指す。

入り口があまりにも狭くて入ることができなかった。上から彼らを見た聖人は、彼らがそのロープを伝って自分のところに来られるよう、ロープを差し出した。　洞窟に入ったサラセン人たちは、サヴァのところに何も見つからなかった。彼らは彼の生き様と敬虔さに驚き、憐れみを感じて、彼に食料を届けることに同意した。こうして彼らは頻繁に彼を訪れ、パン、チーズ、ナツメヤシ、その他の食料を届けた。　そして、聖人は五年間、洞窟で独り過ごし、ただ神と対話し、たゆまぬ祈りによって目に見えない敵に打ち勝った。その後、神は彼に多くの人々の魂を託すことをお許しになり、彼を言葉の羊たちの導き手であり牧者となさった。　すなわち、洞窟での五年間の沈黙の生活が過ぎると、彼の元で暮らしたいと願う多くの人々が各地から訪れ始めた。彼は皆を喜んで受け入れ、一人ひとりに住みやすい場所を割り当てた。彼らは自分たちのケリイを建て、尊者サヴァの徳高い生活を模範として、神に喜ばれるように暮らした。　短期間のうちに、彼のもとに70人もの兄弟たちが集まった。その中でも特に際立っていたのは、後に新しいラヴラのイグメンとなったヨハネ、後にヨルダン川沿いに「ピルギオン」[8563]と呼ばれるラヴラを建立したヤコブ、フィルミンとセウィリアン――このうち一人はマフマースにラヴラを[8564]、もう一人はヴァリケに修道院を建立した――、ヨリアン――ヨルダン川沿いに「ネスクレラヴァ」[8565]と呼ばれるラヴラを建設した者――、そしてその他多くの聖なる人々、その名は永遠の命の書に記されている――、これらすべての人々を、聖サヴァが指導していた。　彼のもとを訪れる者一人ひとりに、彼はふさわしい場所を与え、そこには小さな洞窟と修道室があった。神の恵みにより、天使に等しい生活を目指す修道者の数は七十人にまで増え、その全員の指導者、導き手、そして牧者となったのがサヴァであった。　彼は、修道院の要塞となる塔を山の上に建設しようと決意し、弟子たちを集めてその建設に着手した。この塔は、彼の偉大なラヴラの礎となった。

このようにして兄弟たちの数が増え、小川の北側にある丘の上にラヴラ[8566]が整い始めた頃、尊者サヴァは、干上がった小川　の真ん中にある谷間に小さな教会を建てた。そして、司祭の聖職に叙階された者が彼を訪ねてくると、　彼はその者に聖なる典礼を執り行うよう頼んだが、自身は謙遜のゆえに叙階を受けることを拒み、兄弟たちの誰一人として司祭の位に就かせることはなかった。泉がその場所から遠く離れていたため、水が不足していた。ある夜、聖人は祈りながらこう言った。

「主なる全能の神よ！もし、この地が御名の栄光のために満たされることが御心であるならば、御自分のしもべである私たちに御目を留め、私たちの渇きを癒やす水を授けてください！」

この祈りの最中、聖人は小川の方から何らかの声のようなものを耳にしました。彼はそちらを見やると、満月の光の下で、野生のロバが足で地面を掘り、穴に口を付けて水を飲んでいるのを見ました。　聖人は直ちに下りて行き、ロバを見たその場所で自ら掘り始めました。少し掘ると、サヴァ

[8563] この修道院の名称は、その要塞化された塔に由来しており、ギリシャ語の「ヤオルト（塔、要塞）」に由来する。「ピルギオン」とは、塔のある修道院を意味する。

[8564] 現在のミフマス。

[8565] ヴァリヒまたはカルパヴァリヒにある修道院――現在のベニ・ナイム、ヘヴロイアの南に位置する。これらすべての修道院は、ヨルダン川沿いの砂漠、その川からそう遠くない場所に位置していた。

[8566] 現在の聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイのラヴラ。――この修道院が「ラヴラ」と名付けられたことについては、その意味は次のように考えられる。「ラヴラ」とは、ギリシャ語で「都市の一部」、すなわち小路を意味し、具体的には、修道院長の住居を取り囲むように、都市の小路のように配置された一連のケリヤ（独居室）のことで、柵や壁で囲まれている。　ラヴラに住む修道士たちは隠遁的な生活を送り、それぞれ自分の独房で修行に励み、週の最初と最後の日に礼拝のために集まる以外は、残りの日は厳格な沈黙を守っていた。ラヴラでの生活は、他の修道院よりもはるかに厳しいものであった。　太古の昔から、「ラヴラ」という名称は、多くの修道士を擁し、その意義において重要な修道院を指して用いられてきた。この名称は最初にエジプトで現れ、その後パエオティプでも用いられた。現在、ロシアでは「ラヴラ」という名称は、もっぱら名誉称号としての意味で使用されている。

は湧き水を見つけ、そこにはラヴラ全体に十分な豊富な泉が湧き出し、その水量は決して減ることはありませんでした[8567]。

またある夜、サヴァが小川のほとりを歩きながらダビデの詩篇を歌っていると、小川の西側にある断崖の端に、地面にしっかりと根ざし、その頂が天に届くような火の柱が現れた。聖人は夜明けまでその場で祈りを捧げていた。　夜明けとともに、彼はその柱を見た場所へ向かい、教会のような、人の手ではなく神の手によって造られた、大きくて不思議な洞窟を見つけた。その入り口は南にあり、太陽の光が差し込み、内部は十分に明るかった。　サヴァはその洞窟を美しく飾り立て、そこに教会を設け、兄弟たちに毎週の土曜日と日曜日に礼拝のためにそこに集まるよう命じた。彼自身もそこへ移り住み、この人の手によらずして造られた教会の近く、高い岩壁の上に自分の修道室を設け、教会へと通じる秘密の通路を作った。 その通路を通って、昼夜を問わず教会へ祈りに行っていた。

修道者の数は日々増え続け――その数は約百五十人に達した――小部屋はすでに小川の両岸に建てられていた。　同時に、修道士たちは、ラヴラの建設のためだけでなく、その他の必要にも備えて、作業用の家畜も飼い始めた。というのも、サヴァは、ラヴラに必要なものがすべて揃うよう配慮し、それによって修道士たちがラヴラから外の世界へ出ざるを得なくなり、世俗の騒動や虚栄にさらされることがないようにしたからである。　一方、尊者たちによってよく導かれた修道士たちは、その名にふさわしい実を結び、来世で得られると期待する朽ちることのない命に先立ち、自らの肉体を霊的なものへと変えていった。　しかし、前述の洞窟、すなわち神によって造られたその教会の奉献を、サヴァは先送りしていた。彼は長老の聖職に叙階されることを望まず、自らの謙虚さゆえに、聖職者の一員に数えられたいという願望こそが、虚栄心の源であり根源であると見なしていたからである。　教会の上にそびえ立つ高く険しい岩山に、聖サヴァは自らのための塔を築き、洞窟の内部には、まるで貝殻のように、塔へと続く隠れた道を見つけ出し、修道規則と断食の修行を行うために、その塔へと引きこもった。　聖サヴァの誉れは高まり、神を愛する人々が彼に多くの金を捧げたが、彼はその金をラヴラの建設に充てた。また、エルサレムの至聖なる総主教マルティリウスもサヴァを深く愛し、敬い、彼に必要な物資を送った。

至福のマルティリウスは、総主教就任から8年目に世を去り、その後、サリュスティウス[8568]が総主教の座を引き継いだ。当時、聖サヴァは48歳になっていた。この頃、ラヴラには、堕落し、肉欲に溺れ、*「霊を持たない」*（ユダの手紙1:19）――聖書に記されている通り――が現れ、彼らはかねてより聖人を不当に非難し、あらゆる手段で彼を苦しめていた。小麦の中に雑草が生え、ぶどう畑に茨が生えることがよくあるように、使徒たちの中にも裏切り者が一人現れた[8569]、またエリシャには不忠実な弟子ギエゼイがいた[8570]。 これらの堕落した兄弟たち、いや、むしろ「偽りの兄弟」たちは、聖人に対して悪意を抱き　、聖都へ赴き、総主教に修道院長を任命してほしいと請願した。彼らがどこから来たのかと問われると、彼らはこう答えた。

「私たちは、ある人里離れた小川のほとりに住んでいます。」

この答えで、彼らは至福のサヴァの名を隠そうとしたのである。彼の名が称えられ、誰もが愛を込めて彼を覚えていることを知っていたからである。

総主教は何度も彼らに尋ね、どこから来たのか答えを引き出そうとした。彼らは不本意ながらも、ある修道士サヴァの名を冠した小川のそばから来たのだと答えた。総主教は尋ねた。

[8567] 聖サヴァの伝記を著した修道士キリルは、弟子たちの証言に基づいてサヴァの生涯を描写し、次のように付け加えている。「それゆえ、今日に至るまでラヴラの真ん中には水がある。それは修道士たちに大きな慰めをもたらし、冬になっても増えず、夏になっても減らない。ほとんどすべての人がその水を汲んでいるにもかかわらずである」。

[8568] サリュシウス――486年から494年までエルサレム総主教を務めた。

[8569] すなわち、ユダ・イスカリオテのこと。

[8570] 列王記下5:20–27。預言者エリシャがネエマンのハンセン病を癒やした見返りとして、欺瞞によって銀二タラントと着替えの服二着を受け取ったギエゼイは、その貪欲のゆえに自らもハンセン病に冒され、預言者から追放された。

「サヴァはどこにいるのか？」

しかし、彼らはその問いに答えることなく、その福者に対する誹謗中傷を始め、彼は粗野で無能な人間であり、これほど多くの修道士たちを率いることはできず、その粗野さと無知ゆえに、そのようなラヴラを管理することなどできないと語った。　彼らはその誹謗中傷に加え、サヴァは自ら聖職叙階を受けることを望まず、兄弟たちの誰にもそれを許していないとまで言い加えた。彼らが総主教の前でこのような誹謗中傷を繰り広げている最中、キリクという名の、高潔で尊い人物がそこに居合わせた。彼は、栄光に満ちたキリスト復活教会の司祭であり、主の命を与える十字架の守護者であった。 その誹謗中傷を耳にした彼は、こう尋ねた。

「あなたがたがサヴァをその地位に迎えたのか、それともサヴァがあなたがたを迎え入れたのか？」

彼らは答えた。

「サヴァが私たちを受け入れたのです。しかし、彼は粗暴で、私たちの人数が増えた今、私たちを統率することができません。」

するとキリクは彼らにこう言った。

「もしサヴァがあの荒野の地にあなた方を集めることができたのなら、なおさら神の助けを借りて、あなた方を導くこともできるはずだ。」

彼らはこれに対し何も答えることができず、黙り込んでしまった。そして総主教は、試練を翌朝まで先送りすると、直ちに聖サヴァを呼び寄せ、あたかも別の用件であるかのように、敬意を込めて彼を招いた。　聖サヴァが到着したが、総主教は中傷者たちについて彼に何も語らず、中傷者たちに対しても何も言わず、彼らを非難することもなかった。しかし、聖サヴァの意思に反して、直ちに彼を司祭に叙階した[8571]。叙階を終えると、総主教は中傷者たちにこう言った。

「ほら、これがあなたがたの父であり、あなたがたのラヴラのイグメンである。彼は人間によってではなく、天上の神によって選ばれたのだ。私はただ、その神聖な選定を承認したに過ぎない。」

こう言うと、総主教は聖サヴヴァと修道士たちを連れてラヴラへ向かい、神によって築かれた教会を聖別し、ラヴラ全体を祝福し、すべての修道士たちに、彼らのイグメンである至福のサヴヴァに従うよう命じてから、帰路についた。

至福のサヴァが五十三歳になった時、ゼノンの死後、アナスタシオス[8572] が即位した。その同じ年、アルメニア出身の敬虔な男、イェレミヤという名の者が、二人の弟子ペトロとパヴロを連れてラヴラを訪れた。　聖サヴァは彼らを大いに喜び、かつて自分が小川で独り暮らしていた頃に最初に住んでいた洞窟を彼らに与え、小さな教会で土曜日と日曜日にアルメニア式の祈りの儀式を行うことを許可した。こうして、ラヴラにおけるアルメニア人の数は徐々に増えていった。　その頃、ラヴラには「沈黙者」と呼ばれた私たちの尊者ヨハネもやって来た。彼はコロナス市の司教であったが、神のために司教職を捨て、聖職者であることを隠して、ラヴラで一人の修道士として勤勉に働いた。

聖サヴァは、毎年1月14日に砂漠へ赴き、そこで大斎の期間全体を過ごすのが常であった聖エウフィミオス大聖人に倣った。 彼に倣い、聖サヴァもまた同じ1月に同様の行いをしたが、同じ日ではなかった。というのも、彼は20日を待って、ラヴラで聖エウフィミオスの記念礼拝を執り行うためであったからである。　その記念式を終えると、彼は荒野へと向かい、人々から離れ、思いと祈りをもって神に近づきながら、棕櫚の土曜日までそこに留まった。

[8571] ここから彼は「聖別された者」、すなわち現在の用語で*言えば修道司祭という*名称を得た。当時、修道士や修道院長は、一般的に極めて稀な場合を除いて司祭職に就くことはなかったからである。

[8572] アナスタシオス1世・ディコル、あるいはフラキア人と呼ばれるビザンツ皇帝は、491年から518年まで在位した。

ある日、いつものように彼はラヴラを出て、死海のほとりを歩いていると、小さな人里離れた島[8573]を見つけた。そこで彼はその島で断食の日々を過ごそうと願い、そこへ向かった。しかし、悪魔の嫉妬　が彼を妨げ、彼は道中で出くわしたある穴に落ちてしまった。その穴からは、まるで暗い炉から出るかのように、煙と炎が立ち上っていた。サヴァは顔と髭に火傷を負い、体の他の部分も傷つけられ、重病に陥った。　彼が修道院に戻ったとき、兄弟たちはその声でしか彼だと気づかなかった。それほどまでに彼の顔は焼け焦げていたのだ。　彼は声が出ないまま何日も横たわっていたが、やがて天より神の力が彼に降り注ぎ、彼を癒やし、不浄な霊に対する権能を授けた。しかし、彼の髭はその後、以前のような姿には生え戻らず、短くまばらなものとなった。彼は、その美しさに驕ることのないよう、髭が薄くなったことを神に感謝した。

翌年、彼はまた例年通り、弟子アガピトと共に荒野へと向かった。数日後、アガピトは疲労と飢えのため砂の上に横たわり眠りについたが、至福のサヴァは彼から少し離れた場所に立ち、祈りを捧げていた。　すると突然、巨大なライオンが現れ、眠るアガピトの真上に立ち止まり、足から頭まで彼を嗅ぎ回った。弟子の上にライオンがいるのを見た聖サヴァは、眠っている弟子が食べられてしまうのではないかと恐れ、直ちに熱心に祈りを捧げ、神が弟子をその獣から守ってくださるよう願った。　神はそのしもべの祈りを聞き入れ、獅子の口を塞がれた。すると獅子は、アガピトに何の害も与えることなく、まるで鞭で打たれたかのように、荒野へと駆け去っていった。

逃げ去る際、獅子は尾で眠っている少年の顔を叩いた。少年は目を覚まし、獅子の姿を見て震え上がり、聖なる父のもとへ駆け寄った。サヴァは、いつか獣、とりわけ目に見えない獣の餌食にならないよう、長く眠り込まないよう彼に諭した。

その後数年が経ったある日、この祝福された聖人は、いつものように同じ弟子を連れてヨルダン川の北にある荒野を歩き、ある山で洞窟を見つけ、その中に先見の明のある隠者を発見した。彼が祈りを捧げ、会話を始めると、隠者は驚いて尋ねた。

「素晴らしいサヴァよ、何があなたを私たちのもとへ来させたのか？　それとも、誰があなたにこの場所を教えたのか？　ほら、私は神の御慈悲により、ここ三十八年も住んでいるが、一人の人間にも出会ったことがない。どうしてあなたはここへ来られたのか？」

すると、至福のサヴァはこう答えた。

「あなたに私の名をお示しになった神が、この場所も私に示してくださったのです。」

魂に益となる対話を交わした後、二人は互いに口づけを交わし、サヴァは弟子を連れて荒野へと去っていった。ラヴラへ戻る時が近づき、サヴァは弟子に言った。

「さあ、兄弟よ、洞窟にいる神のしもべに別れを告げに行こう。」

そこに着くと、彼らは彼が東を向いてひざまずいているのを見つけた。彼らは彼が祈っているのだと思い、長い間待った。日が暮れ始め、サヴァは長老がまだ祈りから立ち上がらないのを見て、「父よ、私たちを祝福してください」と言った。

しかし、返事はありませんでした。

サヴァは彼に近づくと、彼が息を引き取っているのを見た。そこでサヴァは弟子にこう言った。

「近づきなさい、わが子よ。聖人の遺体を葬り送ろう。神は、そのために私たちをここに遣わされたのだ。」

故人に対して慣例通りの葬送の歌を捧げた後、彼らはその体を同じ洞窟に葬り、入り口を石で塞いでから、ラヴラへと戻った。

[8573] これは、ヨルダン川の河口から西へほど近い、死海にある唯一の島である。

神によって建てられた教会が奉献されたその年、アレクサンドリアで、イサウリア地方で大きな権勢を誇っていた[8574] の聖ヨハネの父が亡くなり、すでにかなり高齢となっていた彼の母ソフィアは、全財産を売り払い、多額の金銭を携えてエルサレムにいる息子サヴァのもとを訪れた。　サヴァは彼女を迎え入れ、修道女となるよう説得した。彼女はしばらく修道生活を送った後、主のもとへ召された。彼女が持参した金銭については、サヴァは修道院の必要経費や旅人宿の建設に充てた。　一つはエリコ近郊に[8575] を、もう一つはラヴラに建設した。前者は一般の旅人のため、後者は修道者のためのものだった。ラヴラに宿泊施設を建設中、聖サヴァは修道院の家畜を連れて一人の修道士をエリコへ派遣し、建設用の木材を運ばせた。　帰路は酷暑で、その修道士はひどく喉が渇いた。しかし、その一帯は人里離れた水のない荒野であったため、どこにも水がなく、彼は暑さで力尽きて地面に倒れ込んだ。その時、彼は聖なる長老のことを思い出し、こう唱えた。

「主よ、わがアッバ・サヴァの神よ、私を見捨てないでください！」

するとたちまち、彼の頭上に雲が現れ、露を降らせて彼と、丸太を運んでいた家畜たちを涼しくしてくれた。その雲は、ラヴラに着くまで彼の頭上を漂い続け、彼を覆い、暑さから守ってくれた。これは、彼が苦難の中でその名を呼び求めた、聖なる父サヴァの祈りによって起こったことである。

ある時、断食の期間中、尊者サヴァは、ラヴラから北へ二十スタディオン離れたカステリイ山に登ろうとした[8576] 。その山は人々が立ち入ることのできない場所であり、その危険で険しい入り口や、そこで起こった恐ろしい出来事によって恐れられていた。多くの悪魔がその山に巣くっており、通りかかる人々を様々な現象で脅かしていたのである。

しかし、聖人は、詩篇の作者の言葉に従い、 至高者を自らの避難所として選び（詩編90:9）、その山に登り、聖なる十字架のランプから取った聖油を四方八方に振りかけ、十字の印を不抜の壁のように身を守りとして、四旬節の間ずっとそこに住んだ。　しかし当初、彼は毎日悪魔たちと戦わなければならなかった。悪魔たちは、時には獣の姿に、時には爬虫類に、また時には鳥の姿に変わり、叫び声や悲鳴、騒音を立てながら彼に襲いかかった。そのため、聖人は人間として恐怖を感じ、山を下りようかとさえ考えた。　しかし、かつてアントニオス大聖人が悪魔との同様の闘いにおいて力を与えられた方[8577] が、この聖人の前にも現れ、十字架の力を頼りに勇敢であるよう命じられた。こうして、この聖人は恐れを知らずに暮らし、祈りと十字架の印によって、悪魔たちがもたらすあらゆる恐怖を自分から遠く追い払った。　四旬節の終わりに、聖人が夜、この場所に巣食う不浄な霊たちを祓うために祈りを捧げていたとき、悪魔たちは突然、彼に対して最後にして最も恐ろしい戦いを仕掛けてきた。　彼らは、いつものように獣や爬虫類、鳥の姿をとって大群で現れ、轟音のような叫び声を上げて聖人に襲いかかった。まるで山全体が震えているかのようだった。しかし、聖人は微塵も怯むことなく、神への祈りを続けた。すると、悪魔たちは叫んだ。

「ああ、サヴァよ、お前のせいで我々はどれほどの苦しみを味わわされていることか！　渓流のほとりの谷に住むだけでは足りなかったのか、洞窟や岩場だけでは足りなかったのか。お前は通り抜けた砂漠までもが住みやすい場所にしてしまったではないか！　お前は我々をここから追い出すために、我々の住処であるここへまでやって来たのだ！」　さあ、我々はもうここから立ち去る。神があなたを助けておられるのだから、我々はあなたに逆らうことはできないのだ！

[8574] イサウリアは、小アジア南部に位置する小さな山岳地帯である。

[8575] エリコ――ヨルダン川の西岸、エルサレムからほど近い都市。

[8576] カステリイ――現在のヒルベット・ミルド。聖サヴァ修道院から約3.5ヴェルストの距離にある。

[8577] すなわち、主イエス・キリストのことである。主は、最も過酷な試練の最中、聖アントニオス大聖人に明るい雲の姿で現れ、神聖な声で「私は常にあなたと共にいる」と励まし、彼を力づけた。

そしてその瞬間、泣き叫びと悲鳴、轟く声と恐ろしい騒音と共に、彼らはカラス姿となって、その夜、山から飛び去っていった。その山の近くで、羊飼いたちが群れと共に夜を明かしていたが、彼らは悪霊たちが山から飛び去るのを目撃し、その叫び声を聞き、聖サヴァのもとへ駆けつけてこのことを報告した。聖サヴァは、悪霊を追い払ってくださった神に感謝を捧げ、断食の期間が過ぎると、ラヴラに戻り、兄弟たちと共に迫り来るキリストの復活祭を祝った。　祝祭の日々が過ぎると、彼は数人の兄弟を連れて再びカステリイへ赴き、その場所を整備し、修道室を建て始めた。作業中、彼らは丘の下に、美しい石で丁寧に積み上げられ、住むのに適した大きなアーチ型の家を見つけた。彼らはその家を整備して美しく飾り、そこに教会を設け、聖別した。　こうして、尊者（プレポボド）はここに修道院を設立した。この修道院の整備中、ある時、食糧がすべて尽きてしまった。すると、主の天使が、聖ベツレヘム近郊の修道院の院長[8578]　、名もマルキアヌスに幻として現れ、こう言った。

「見よ、マルキアヌよ、あなたは安らかに座り、必要なものはすべて揃っている。しかし、神の僕サヴァは、神への愛ゆえにカステッリで兄弟たちと共に労苦している。彼には必要な食べ物も飲み物もなく、それを届けてくれる者もいない。それゆえ、彼らが飢えで力尽きることのないよう、遅滞なく彼らに食料を送りなさい。」

マルキアンは直ちに家畜に様々な食料を積ませ、それをカステッリの聖サヴァのもとへ送った。聖サヴァは送られてきたものを受け取ると、御自分のしもべたちを顧みてくださる神に感謝を捧げた。

サヴァはキノヴィア（共同生活区）を設け、そこに十分な数の修道士を集め、それを、弟子テオドールと共に長い間暮らしていた一人の隠者パウロに任せた。　しかし、パウロはしばらくして世を去り、結局、テオドールが運営を引き受けた。彼は、自分の兄弟セルギイと、もう一人のパウロ、である自分の叔父を修道院に招き入れた。彼らはその後、カステッリで指導的立場にあり、やがてアイルとアマフンテの司教となった[8579]。

カステッリにキノヴィアを設立した聖サヴァは、徳高く、修行に励み、試練を経た修道士たちでそこを埋めるべく、あらゆる努力を尽くした。一方、出家を希望する世俗の人々や、ひげの生えていない若者たちについては、カステッリのキノヴィアにも、大修道院にも住むことを許さなかった。彼らのために、彼は北側にさらに小さなキノヴィアを建設し、初心者に修道院生活の規則を教えるために、経験豊富な指導者を配置した。初心者はまず第一に、詩篇と祈りの歌の全儀式を習得し、また修道規則のすべてを学び、　その後、修行と労役に慣れ、世俗の虚しい思いから心を遠ざけ、邪悪な考えに抗い、意志を律し、従順で、柔和で、謙虚で、沈黙を守り、活気に満ち、慎重であり、敵の誘惑から身を守るよう求められた。　これらの修道生活の基礎をうまく身につけた者については、尊師は彼らを大きなキノヴィア修道院やラヴラ修道院へ移し、　また、修道生活を始めたばかりの者たち、特に若い者たちの一部については、当時すでにカフィスマトナ教会を離れ、ラヴラから西へ35スタディオン離れた場所に修道院を設立していた聖テオドシオス神父のもとへ送り出した[8580]。

サヴァとテオドシオスの両者は、あらゆる点で意見が一致し、互いに調和していた。そのため、エルサレムの人々は彼らを、ペトロとパウロの二人組に喩えて、「新たな使徒の二人組」と呼んだ。彼らには、すべての修道者たちを統率する権限が委ねられていた。その経緯は次の通りである。

[8578] ベツレヘム――ユダ族の領地にある小さな町で、エルサレムから南へ2時間の道のりにあり、キリストの降誕の地である。

[8579] アマフント――キプロス島にある都市で、現在はパレオ・リーソオと呼ばれる。アイラ――パレスチナの最南端の都市で、紅海湾の奥深くに位置していたが、現在はアカビア近郊の遺跡となっている。

[8580] カフィスマタ教会は、ギリシャ語から訳すと「座」を意味する。エルサレム近郊の「古い座」と呼ばれる場所に、ある敬虔な未亡人が聖母マリアを称えて建立したものである。　この場所は、「座」あるいはコンスタンティヌス大帝によってそこに築かれた高台に由来する名称であり、その後長い間、主の十字架の挙揚の儀式がそこで執り行われていた。

至福のアルヒマンドリト・マルキアノスの死後、ラヴラや修道院、山々や荒野からすべての修道士たちが、当時病に伏していたパトリアルヒ・サリュスティオスの司教邸に集まり、　全員の合意のもと、テオドシオスとサヴヴァを彼に推薦し、聖都周辺にあるすべての修道院のアルヒマンドリトおよび長として任命するよう求めた。というのも、この二人の聖なる人々は隠遁者であり、一切の財産を持たず、その生活と言葉は美しく、神の賜物に満ちていたからである。　それ以来、聖テオドシオスは共同生活の修道院を統括し、聖サヴァは隠遁者の父たちを統括することとなった。

パトリアルヒ・サリュスティウスが逝去し、後任としてイリヤが教皇の座に就いた時[8581]、その頃、至福のサヴァは、自身のラヴラに隣接する一区画の土地を売買していた。彼はその土地に、遠方から訪れる修道士たちのためのケリイを建設しようとしていた。　しかし、土地の所有者は多額の金を要求した。当時、長老の手元には半金貨[8582]しかなかった。それでも、深く愛して信じていた神に希望を託し、サヴァは売り手にこう言った。

「兄弟よ、これを受け取って、朝まで手付金として置いておいてくれ。もし朝になっても全額を支払えなかったら、この手付金は没収されても構わない。」

夜が更け、明け方近くになった頃、聖人は祈りを捧げていた。すると突然、見知らぬ男が入ってきて、彼に百七十枚の金貨を手渡すと、自分が誰でどこから来たのか一言も告げずに、すぐに立ち去った。　神の御摂理に驚き、神に感謝を捧げた後、聖人はその金を売り手に返し、遠方からやってくる修道士たちを収容するための第二の宿舎を建設した。また、カステリのキノヴィアのためにも、二つの宿屋を購入した。一つは聖都のダビデの塔の近く[8583]に、もう一つはエリコにあった。

この頃、聖テオドシオス大聖人はこの教会を離れ、約700人の修道士たちが修行に励む共同生活修道院を設立した。その修道院は、聖サヴァのラヴラから6ヴェルスト余りの距離にあった。

その頃、イサウリア出身のテオドゥルとゲラシウスという実の兄弟二人がラヴラを訪れた。彼らは、あたかも第二のベセレエルとエライアブ（出エジプト記31:2–6）のように、幕屋を巧みに築く建築家であり、神によって聖サヴァ（　）のもとへ遣わされたのである。彼らの助けを借りて、聖サヴァはラヴラの再建を完了させた。　彼はさらに修道室を増築し、病院やパン屋、小川のほとりの洗礼槽、そして聖母マリアに捧げられた大きな教会を建てた。というのも、神が火の柱によって聖人に示された、人の手によらない教会はすでに手狭になり、礼拝の際には、すでに非常に多く集まっていた修道者全員を収容できなくなっていたからである。　そのため、サヴァはその近くに、聖母マリアの名を冠した、より大きく広々とした別の教会を建てた。その教会はイリヤ総主教によって奉献された。　サヴァは、この至聖なる聖母マリアの教会に、神を賛美するために集まるよう命じ、一方、エピファニー教会にはアルメニア人修道士たちを移し、そこで日曜日や主要な祝日に徹夜礼拝を行うように定めた。

当時、アルメニア人の修道士たちの中には、ペトロ（通称フルロン）[8584]の虚妄で異端的な教えに従う者もいた。彼らは「天使の三聖歌」に次の言葉を付け加えた。

[8581] イリア2世――494年から517年までエルサレム総主教を務めた。

[8582] ズラティツァ – 金貨、チェルヴォネツ。

[8583] ダビデの塔は、シオンの北端、すなわちシオンが山脈を通じて北方の丘陵地帯とつながる地点に位置しており、ヤッファ門の近くにある。現在、その場所にはエル・カラー要塞があり、大小さまざまな不規則な形状の塔がいくつか並んでいる。

[8584] モノフィシテス派の異端が広まった時期（5世紀後半）、イエス・キリストの中には、人間の性質を吸収した一つの神性が密かに宿っていたと主張していたが、あるペトロ・フッロンという人物、　別名クナフェイ（これは「毛織物の撹拌職人」を意味し、彼が若き日にこの職業に従事していたことに由来する。フルオンはラテン語で撹拌職人を指し、クナフェイはギリシャ語である）は、まだ長老であった頃（後に彼はアンティオキアの偽総主教となった）、「トリニタリアン」の祈りに　（「聖なる神よ、聖なる力ある方よ、聖なる不死なる方よ、我らを憐れみ給え」）に、「我らのために十字

「我らのために十字架にかかられた方よ、我らを憐れみ給え。」

修道院内のこの誤りを正すため、至福のサヴァはアルメニア人に対し、トリスアギオスをアルメニア語ではなくギリシャ語で歌うよう命じた。

こうして彼らは、礼拝全体をアルメニア語で、三聖歌だけはギリシャ語で歌うようになり、その結果、フルオンが三聖歌に付け加えた誤った言葉は、もはやアルメニア人によって唱えられることはなくなった。

サヴァはこのようにすべてをうまく統治していた。　しかし、前述した中傷者たちは、悪魔の唆しにより、サヴァの優れた統治を妬み、憎しみをもって彼に反旗を翻した。彼らは、修道院生活に不慣れで、品行が乱れ、分別のない四十人ほどの兄弟たちを味方につけ、聖人に多くの苦難をもたらした。　そこで、悪魔に対しては闘争心を燃やすが、人に対しては柔和であったサヴァは、彼らの不当な怒りに屈し、ラヴラを去ってスキフォポリス地方[8585] へと向かい、ガダリナ川[8586] と呼ばれる川のほとりの荒野に身を寄せた。　彼はライオンの洞窟を見つけ、そこに入り、祈りを捧げた後、夜が更けていたため、ライオンの寝床で眠りについた。真夜中、ライオンが現れ、自分の寝床で眠っている長老を見つけると、その衣服を歯で掴んで洞窟の外へ引きずり出し、その場所を譲らせようとした。　しかし、聖人は目を覚ましても、恐ろしい獅子を見て怯えることはなく、すぐに立ち上がって真夜中の祈りを捧げ始めた。獅子は外に出て、彼が定められた祈りを終えるのを待っていた。　真夜中の祈りを終えると、長老はライオンが横たわっていたのと同じ場所に再び座った。するとライオンが再び洞窟に入り、服の端を歯で掴んで、聖なる父を洞窟の外へ引きずり出そうとした。その時、長老はライオンにこう言った。

「獣よ！この洞窟は広々としており、私たち二人には十分な広さがある。私たちは共に暮らすことができる。私たちを創造したのは同じ創造主だからだ。もし私と一緒にいたくないのなら、ここから立ち去ったほうがよい。私はあなたよりも尊い存在だ。なぜなら、私は神の御手によって創造され、神の御姿に似せて造られた者だからだ。」

これを聞いたライオンは、長老に恥じ入り、立ち去った。

スキフォポリタンの人々とガダラの人々は、その聖人がその洞窟に住んでいることを知り、彼のもとを訪れるようになった。その中には、ヴァシリーという名の若者がいた。彼は世俗を捨て、尊者サヴァの元で修道衣をまとい、彼と共に暮らすようになった。　ヴァシリーの修道入りを耳にした山賊たちは、この若者が貴族で裕福な家柄だったことから、彼が多くの金を携えて聖サヴァのいる洞窟へ持ってきたに違いないと考えた。夜、山賊たちは彼らを襲ったが、何も見つからず、彼らの無欲さに驚いて立ち去った。　すると突然、　、彼らに向かって二頭の大きく恐ろしいライオンが歩いてくるのが見えた。彼らは、神の僕たちに襲いかかるという不遜な行為をしたことに対する神の罰だと考えた。そして、彼らは大きな声で獣たちに叫んだ。

「聖サヴァの祈りによって、お前たちを命じる。道から退き、我々と遭遇するな！」

架にかかられた」という一節を加えた。　彼はモノフェリテ派（すなわち、キリストにおいて二つの意志ではなく、一つの神の意志を認めていた）であったため、この追加によって、救い主の苦難において、その神性だけでなく、聖三位一体全体さえもが苦しみを受けたことを表現しようとしたのである。　ペトロの追随者たちは、正教界に大きな動揺をもたらした「テオパスキト派」という独自の宗派を形成した。　その後、この付加表現は、東方正教会の信徒たちを惑わすものとして、ギリシャ語の用語や表現に対する誤解や理解不足の結果、正教に忠実であり続けたアルメニア教会にも浸透し、そこでは現在もなお礼拝において用いられている。

[8585] スキフォポリス（現在のベイサン）は、 パレスチナの都市は、ダマスカスからエジプトへと続く古代の主要なキャラバン街道沿いに位置していた。この街道はゲネサレト湖の東岸を通り、ヨルダン川を渡り、さらにエジプト方面へと延びていた。スキフォポリはエルサレムから100ヴェルストの距離にあった。

[8586] ヨルダン川東岸、現在のムケサ近郊のヤルムーク川沿い、現在のシェリアト・エル・メナディール、ゲネサレト湖畔のガダラ市の近くにあった。

聖サヴァの名を耳にすると、ライオンたちはまるで鞭で追い払われたかのように逃げ去った。強盗たちはこの奇跡に驚き、尊者のもとへ戻って起こったことを話し、自らの悪行を悔い改め、強盗を止め、自らの労働で生計を立てるようになった。

この出来事の噂が広まると、多くの人々がサヴァのもとを訪れるようになった。というのも、彼はわずか数日で自分用の小部屋を建てていたからである。しかし、サヴァは世俗の人々が自分を煩わせ始めたのを見ると、孤独と静寂を求める鳥のように、密かに別の荒野へと身を隠した。　兄弟団については、修道院長を任命して主の御手に委ねた。かなり長い間沈黙の中で過ごした後、尊者は再びラヴラに戻った。不満を抱く者たちが不平を言い、悪意を抱くのをやめたことを期待してのことだったが、彼らは改心しておらず、依然として悪意に満ちており、その数はさらに増え、計六十人にもなっていた。　彼は彼らを滅びた者たちとして嘆き、父のように諭した。彼らの傲慢さには忍耐を、憎しみには愛を対抗させ、その言葉には霊的な知恵と誠実さを込めた；　しかしその後、彼らがますます悪に固執し、恥知らずな振る舞いを続け、謙遜の道を歩もうとしないのを見て、サヴァはラヴラを去り、ニコポリス地方へ退いた[8587]；そこで彼は、いわゆる「ロシュコフの木」の下に定住した[8588]。サヴァはその木の果実を糧とし、その枝の下に身を隠した。　その土地の所有者はサヴァの話を聞きつけ、彼の元を訪れてその場所に小部屋を建ててあげた。そして数日後、キリストの恵みにより、修道士たちが尊者のもとに集まった。こうして、その場所にキノヴィアが形成されたのである。　至福のサヴァはそこで暮らしていたが、ラヴラにいる彼の敵対者たちは、兄弟たちの間に「サヴァは荒野で獣に食い殺された」という噂を流した。彼らは至福のイリヤ総主教のもとへ赴き、こう言った。

「私たちの父は、死海周辺の荒野を巡礼中に獅子に引き裂かれてしまいました。どうか、あなたの聖なる御許から、私たちに修道院長をお与えください。」

しかし、若き日からサヴァの生涯を知っていた至福のイリヤは、修道士たちにこう言った。

「私はあなた方の言葉を信じない。主は正義であられることを知っているからだ。主は、あなた方の父のこれほど多くの善行を軽んじたりはせず、獣に食い殺されるようなことも許されないだろう。さあ、行ってあなた方の父を探しなさい。あるいは、自分のケリアに留まり、神が彼を明らかにしてくださるまで静かに待ちなさい。」

こうして、サヴァの敵たちは恥をさらして引き返した。

エルサレムにある主の復活聖堂の改修記念祭が訪れ、パレスチナのすべての司教と修道院長たちが集まった。ニコポリス修道院から数人の兄弟たちを伴って、聖サヴァもやって来た。　総主教は彼を見て大いに喜び、二人きりになると、再びラヴラに戻るよう説得し始めた。しかし彼は、これほど多くの修道士たちを統率し世話をするのは自分の力では及ばないと述べ、辞退して許しを請うた。すると総主教は言った。

「もし私の願いと助言に従わないのなら、私の前に現れるな。お前の労苦を他人が独占することを、私は許すことはできない。」

そこで、至福のサヴァは、本心とは裏腹に、ラヴラを去った理由を総主教に打ち明けた。

「兄弟たちの間の争いや分裂の原因とならないように」と彼は付け加え、自分に反旗を翻す敵対者たちについて語った。

サヴァは総主教の命令に逆らうことができず、従った。彼はニコポリの修道院に、ニコポリから共にやって来た自分の弟子を修道院長に任命し、自身は自分のラヴラへと向かった。総主教は彼と共に、兄弟たちへの次のような布告を送った。

[8587] 現在のアムワスで、ロムリからエルサレムへ向かう道沿いにある。

[8588] シリアや東方で非常に有名なロジュコヴォエの木、あるいはロジェチニクは、ざらざらとした太い幹を持ち、灰色がかった灰色の樹皮と、分厚い葉に覆われた、曲がりくねって広がった多くの枝や小枝がある。その果実は、乾燥した状態で「ツァレグラードのさや」という名前で我々の間でも知られている。

「キリストの兄弟たちよ、あなたがたの父サヴァは健在であり、あなたがたが耳にし、語り合っていたように獣に食われたわけではないことを告げる。彼は祝祭の日に私のところへやって来たが、私は彼を留めた。神の助けと自らの労苦によって築き上げた自身のラヴラを離れることは不当であると考え、そこへ戻るよう説得したのである。」　それゆえ、あなた方の父を温かく、また相応の敬意をもって迎え入れ、あらゆる点で彼に従いなさい。あなた方が彼を選んだのではなく、彼があなた方を集めたのだから。もし、あなた方のうち、高慢で不従順な者たちが、謙虚になり、彼に従うことを拒むならば、我々は彼らに対し、直ちにラヴラを去るよう命じる。この父が、その地位に就かないなどということはあってはならない。

この書簡がラヴラ内の教会の真ん中で読み上げられると、憎悪に目がくらんだサヴァの敵たちは、無実で清らかな心を持つ聖なる父を非難し、叫び声を上げ、騒ぎ立てた。ある者は彼を責め立て、罵り、中傷し、またある者は衣服や持ち物を手に取り、ラヴラを去ろうとした。　また、ある者たちは斧やバールを手に取り、聖サヴァ自身が建てたケリアへと駆けつけ、狂乱のあまりそれを基礎まで破壊し、木材や石を下の小川へと投げ捨て、スクイのラヴラへと去っていった[8589]。一方、そのラヴラのイグメンであるアクイリンは、神に喜ばれる人物であり、彼らの悪意を知っていたため、彼らを受け入れず、自らのラヴラから追い出した。そこで彼らはフェコイの川[8590]へと向かい、そこで自分たちのケリヤを建てて定住した。　こうして、これらの雑草は修道院から引き抜かれたが、残った兄弟たちは、小麦のように神に喜ばれる実となり、その数を増やしながら、妨げられることなく神に清らかな心を捧げた。しばらくして、聖サヴァは、修道院を去った者たちがどこにいるか、そして彼らが大きな困窮に苦しんでいることを知った。　そこで彼は、ラヴラの馬やロバに大量の食料を積ませ、彼らのもとへ向かった。一方では彼らの怒りを鎮め、他方では彼らの困窮を助けたいと願ってのことだった。しかし、彼らの中には、至福のサヴァが自分たちのもとへやってくるのを見て、こう言い出した者もいた。

「ほら、この偽善者がここへもやって来た！」

そして彼らは怒りと憤りの中で、他にも悪口を並べ立てた。しかし、彼は悪意を持たず、愛を込めて彼らを見つめ、優しい言葉をかけ、食糧で慰めた。　彼らの窮状、困窮、そして混乱――彼らはまるで羊飼いのいない羊のようだった――を目の当たりにした彼は、そのすべてを総主教に報告し、彼らを世話するよう懇願した。総主教は彼らを彼に託し、建設費として1リトラの金[8591]　と、その他多くの必需品を与えた。　サヴァは彼らの元へ向かい、五ヶ月間滞在して、教会とパン屋を建て、新しい修道院を設立した[8592]。彼は古い修道院から、ヨハネという名の経験豊富な修道士――先見の明があり、預言の賜物を持つ人物――をそこに移し、彼らに修道院長として任命した。その後、彼は自身の修道院に戻った。

ヨハネはこの新しい修道院を7年間統率し、主のもとへ召された[8593]　。臨終の前に、彼は新しい修道院の未来を予言した。彼は涙を流し、周囲の人々にこう言った。

[8589] スキイのラヴラは、聖ハリトン（記念日は9月28日）によって、ベツレヘムの南にある洞窟のそばに設立された。彼は当初、その洞窟で隠遁生活を送っていた。現在はモガレット・ハレイトゥンと呼ばれている。スキイのラヴラはシリア語での名称であり、ギリシャ語では「古いラヴラ」と呼ばれていた。

[8590] フェコイの川は、スキーのラヴラの南に位置し、広大なユダヤの荒野の一部をなすフェコイの荒野を流れていた。

[8591] リトラとは、72ゾロトニクに相当するビザンツの重量単位であり、金では506ルーブルの価値があった。

[8592] 現在のヒルベット・エル・クセイールで、ムフタ・エル・ジュス川とワディ・ムアレン川が合流する地点である。この修道院の創建は507年にさかのぼる。

[8593] それは514年のことだった。聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの伝記を著した修道士キリルの記述によれば、このヨハネは奇跡を行う者であった。彼の記念日は「チーズの土曜日」に行われる。

「まもなく、この地の住民たちが正しい信仰から離れ、高慢のあまり自分たちを過大評価する日が来るだろう。しかし、彼らの傲慢は打ち砕かれ、その威光は突然失われ、彼らは追放されることになる。」

ヨハネの後を継いで修道院長となったのは、ローマ出身のパウロであった。彼は心根が極めて純朴で、神聖な美徳に輝いていたが、在任期間はわずか6ヶ月にとどまり、不和に耐えかねてアラビアへ逃れ、そこでセヴィリアノ修道院[8594]で息を引き取った。 パウロの逃亡を知ったサヴァは、新しい修道院の修道院長として、自身の弟子であるアガピトを任命した。アガピトは、一部の修道士たちがオリゲネスの教えに固執していることを発見した[8595] ：それは、彼らの口の中では蛇の毒のようであり、舌の下には痛みを伴う潰瘍のようであった。 その中でも筆頭だったのは 、ノンという名のパレスチナ人で、彼は真のキリスト教徒のように見え、外見は敬虔であったが、内面は異教やユダヤ教の偽りの教えや有害な異端――マニ教[8596] 、ディディモス派、エヴァグリオス派[8597] 、そしてオリゲネス派――で満ちていた。 そのような兄弟たちを見つけたアガピトは、他の者たちも同じ異端に染まってしまうことを恐れ、彼らについて総主教に報告し、総主教の助言に従って、彼らを修道院から

[8594] あるいは、ヴァリヒ、あるいはカルパルヴァリヒの修道院ともいう。

[8595] オリゲネスは自身の著作において、いくつかの非正統的な思想を抱いていたが、それらを不変の真理として表明することはなかった。しかし、彼の教えの過激な信奉者たちは、それらを執拗に説き広めることで、正統派を惑わせ、キリストの教会を動揺させた。 例えば、オリゲネスはキリストについて誤った考えを抱いていた。すなわち、魂の先在に関する非正統的な教義を展開し、神が同等の尊厳を持つ一定数の霊的存在を創造したと主張した上で、 さらに、これらの被造された霊のうちの一人が、これほどまでに熱烈な愛をもって神性へと向かい、神の御言葉と不可分の一体となり、その被造物としての器となったと主張した。そして、それがあたかも まさに、神である御言葉が地上に受肉することを可能にした人間魂そのものであり、なぜなら、神性の直接的な受肉は、いわば考えられないことだからである。 さらに、オリゲネスはキリストの十字架上の死についても正統的ではない意味で理解し、それを霊的世界において霊的に再現されるものであり、そこで天使たちの解放に作用するものとして描き、救いの業において、私たちの自然が授かっている通常の力の働きに過大な役割を帰していた。 オリゲネスは、復活と来世に関する教義のいくつかの点、例えば悪魔も救われるという主張においても誤った考えを持っており、聖書の解釈においても、神秘的・秘儀的な意味を過度に誇張して理解し、それによって聖書の真の歴史的意味を損なっていた。

[8596] マニ教は、二元論、すなわち「善」と「悪」という二つの独立した原理または領域が太古から存在するという教えを説いたゾロアスター教の原理とキリスト教を融合させようとした試みの影響を受けて、ペルシャで生まれた異端である。マニ教の創始者マネス（3世紀に活躍）は、当初は異教の魔術師であったが、後にキリスト教を受け入れ、さらには長老にまでなった。しかし、まもなく異教的なペルシャ宗教への傾倒を理由に教会から破門された。彼の教えによれば、キリストは単に「光のエオン（霊）」に過ぎず、光の父から「流出」によって生じたものである。 その半分は物質に飲み込まれ、可視世界の魂、いわゆる「苦悩するイエス」を構成し、もう半分は別のエオンである「生命を与える霊」の助けを借りて物質から解放され、太陽の中に宿った。これがいわゆる「無情のイエス」である。 マニ教の教えによれば、キリストの受肉とは、苦悩するイエスを解放するために、無情のイエスが太陽から降臨したことである。苦悩するイエスの光の粒子は、サタンによって集められ、それらをより容易に支配するために、人間の姿に閉じ込められたとされる。この教えによれば、キリストの受肉は単なる幻に過ぎなかった（ドケティズム）。 道徳的な観点からは、物質との闘いを説き、自己の肉体を徐々に死に至らせることによって、物質から光を解放することを提唱した。マニ教の異端は、特に4世紀から5世紀にかけて広く普及した。

[8597] ディディムスとエヴァグリオスは、その教えにおいていくつかの非正統的な見解を支持していたものの、厳密には異端者ではなかった。

ディディム――4世紀の極めて傑出した古代の神学者――は、失明していたにもかかわらず、同時代の最も偉大な学者の一人であり、50年以上にわたり、有名なアレクサンドリアのカテキズム学校を統括した。 文法、修辞学、弁証法、地理学、天文学、聖書、そして神学における彼の知識は、まさにその時代の奇跡であった。同時に、彼は厳格な修道者でもあった。 ディディムスはアリウス派やマニ教徒と闘った。しかし、彼はオリゲネスの熱心な信奉者であり、そのために非難を浴びた。また、彼はオリゲネスの非正統的な見解のいくつかを支持していた。

エヴァグリオスは、ディディモス・スレプツの弟子であり、聖グリゴリオス・テオロゴスの下で助祭を務め、後にエジプトの修道士、そして隠遁者となった。 彼は極めて博学で厳格な人物であり、修道生活の中で多くの有益な著作、主に禁欲主義に関する著作を残したが、オリゲネスへの敬意ゆえに多くの人々から評価を損なった。

追放した。5年後、アガピトは世を去った。彼の後を継いで、あるママントという人物が修道院長に就任した。　一方、ノンヌスは、アガピトスの死を耳にすると、志を同じくする者たちと共に新しい修道院に戻ったが、サヴァを恐れて、自らの異端の真意を隠していた。　一方、聖サヴァはこの頃、かつての修道院から北へ10スタディオン離れたカステッリア付近に一つの洞窟を見つけ、そこに「洞窟修道院」[8598] と名付けた修道院の建設に没頭していた。彼を、聖シオンの長老マルキアヌスが自身の資金で支援し、その息子たちであるアントニオスとヨハネスも加わった。　このヨハネは、エリヤの後を継いでエルサレムの総主教となった[8599]。

東部の荒野にある、エウドキア女王が塔を築いた山[8600] には、ネストリウス派の異端を信奉する二人の修道士が住んでいた[8601]。聖サヴァは、彼らが正しい道から逸れたことを深く嘆き、自身の三つの修道院のすぐ近くに彼らが居を構えていることを、大きな悲しみをもって耐えていた。　その頃、彼には次のような幻視が現れた。まるで自分が聖復活教会にいて、人々の集まりの中にいるかのように感じられ、その中にあの二人のネストリウス派の者たちを見出したのである。　聖体拝領の時が来ると、すべての修道士たちは何の妨げもなく神の秘跡に近づき、聖体を受けました。ところが、この二人の異端者が聖体拝領に近づこうとしたとき、突然、恐ろしい戦士たちが現れ、彼らを聖体拝領から追い払い、教会から追い出しました。　聖人は兵士たちに、この二人の修道士を兄弟たちと共に教会に残し、聖体拝領を許すよう懇願した。しかし兵士たちはこう答えた。

「彼らに神聖な秘跡を授けることは許されない。彼らは明らかなユダヤ人であり、キリストを神として認めず、また聖母マリアを神の母として認めていないからだ。」

この幻を見た後、聖人は彼らの魂の滅びを嘆き、さらに深く悲しんだ。彼は彼らのために断食し、神に祈りを捧げ、神が真理を知る光をもって彼らを照らしてくださるよう、多大な労力を費やした。 そして彼はしばしば 彼らのもとを訪れ、教え、導き、懇願し、諭し続けた。ついに、神の恵みによって彼らを再びキリストの正教会へと導き戻すことに成功した。かくして彼は、人々の魂の救いを深く気遣ったのである。　彼は彼らをその丘から連れ出し、テオドシウス修道院に預け、その丘は彼らの代わりに、自身の弟子の一人であるヨハネス・ビザンティウスに与えた。そこでは、神の助けにより、しばらくして修道院が設立された。

その大修道院には、ヤコブという名の、エルサレム出身の修道士が一人いた。彼は傲慢で高慢な気性を持っていた。　彼は自分と同じような数人の修道士と結託し、当時、大斎期間を自らの慣習に従って荒野で完全な沈黙の中で過ごしていた至福のサヴァが不在の隙に、ラヴラを抜け出し、前述のヘプタストメ湖のほとりに自分専用の修道院を建設し始めた。それは、尊者サヴァに肩を並べたいという願望からであった。　しかし、修道院の修道士たちがこれに憤り、彼の計画を妨げようとすると、彼は彼らを欺き、聖なる父がそう命じたと告げた。　荒野から戻り、ヤコブの行いを知ったサヴァは、彼の元へ赴き、傲慢と高慢から生じることに何の益もないと説き、その企てを諦めるよう説得した。しかし、ヤコブは長老の言葉を聞き入れず、従おうとしなかった。そこで聖人は彼にこう言った。

「もし従わないなら、罰を受けることのないよう気をつけなさい。」

[8598] 現在はビル・エル・ケティヤール。

[8599] 517年から524年にかけて、ヨハネス3世の名でエルサレムの総主教を務めた。

[8600] これは、東部の砂漠全体で最も高い山であった。現在はムンタルと呼ばれる。

[8601] かつてコンスタンティノープル総主教（428～431年）を務めたネストリウスは、聖母マリアから人間イエスが生まれたと説き、その受胎の瞬間から、神の御言葉がその恵みによってイエスと結びつき、神殿のようにイエスの中に宿ったと教えた。　そのため、彼は聖母マリアを「キリストの母」と呼び、「神の母」とは呼ばなかった。このように、ネストリウスはキリストにおいて神性と人性とを分離した。ネストリウスの異端は、431年の第3回全地（エフェソス）公会議において教会によって非難された。

そう言い残して、彼は自分の小部屋へと戻っていった。するとヤコブは恐怖と戦慄に襲われ、重病を患い、六ヶ月もの間、ほとんど一言も発することができない状態で床に伏していた。もはや生きることを諦めた彼は、死の前に許しを請うため、自分を至福のサヴァのもとへ運ぶよう命じた。サヴァは彼を見ると、父のような教えを授け、それから手を差し伸べてベッドから起こした。ヤコブは、まるで病気など全くなかったかのように、元気な姿で立ち上がった。サヴァは彼に聖なる秘跡を授けた後、食事を与えた。ヤコブは二度と、その新しい建設現場には戻らなかった。

一方、この出来事を耳にしたイリヤ総主教は、ヤコブの建造物を破壊するよう命じた。　一方、聖サヴァは、修道院から数人の力強い修道士を連れて、破壊された建物から北へ約五スタディオン離れた場所へ赴き、礼拝堂とその周囲にケリイを建て、そこに大修道院の修道士であるパウロとアンドレイを住職として任命し、　さらに他の兄弟たちもそこに住まわせ、この地に修道院を設立し、それを「七口（セミウストナ）」[8602] と名付けた。

大修道院に戻った彼は、前述の場所に滞在する兄弟たちに聖体と祝福されたパンを送り、この場所を深く慈しんだ。

しばらくして、前述のヤコブは、旅人たちのための宿屋で奉仕するという務めを任された。彼は自分の務めを疎かにしており、ある時、必要以上に多くの豆を茹でてしまった。昼食の残りの豆は、翌日の昼食にも余裕で足りるほどあったが、彼は残りを窓から小川に捨ててしまった。そして、彼はこれを一度だけでなく、何度も繰り返していた。　これを見た聖サヴァは、人目につかないように小川へ下り、捨てられた豆を拾い集め、自分の独房に持ち帰り、太陽の下で少し乾かした。しばらくして、聖人はその豆を茹で、料理にして、ヤコブを食事に招いた。食事の席で、長老はヤコブにこう言った。

「兄弟よ、申し訳ない。私が望んでいたようにもてなせなかったし、料理も君の好みに合わなかったかもしれない。私は料理が得意ではないのだ。」

するとヤコブは言った。

「いやいや、師よ、この豆は素晴らしく調理されています。こんな料理を食べるのは久しぶりです。」

老人は答えた。

「信じてほしい、わが子よ。これは、君が小川に撒いてしまったあの豆そのものだ。覚えておきなさい。豆の一鍋を、無駄にしないよう適量で調理することさえできない者は、修道院を管理し、兄弟たちを導くことはできないのだ。」　使徒もこう言っている。*「自分の家を治めることさえできない者が、どうして神の教会を顧みることができるだろうか」*（テモテへの手紙I 3:5）。これを聞いて、ヤコブは以前の独断専行と怠慢な奉仕を恥じ、悔い改め、許しを請うた。

このヤコブは、自分の修道室で、肉欲と不浄な思いによって悪魔に誘惑されていた。この誘惑は長く続き、もはやヤコブは耐えられなくなった。彼はナイフを手に取り、自ら去勢した。激しい痛みが襲うと、彼は近くに住む兄弟たちに助けを求めて叫び始めた。　兄弟たちが駆けつけ、何が起きたかを知ると、できる限りの薬で彼の痛みを和らげようとした。長い時間が経ってようやく、　彼を治すことができた。この件は聖サヴァの耳にも届き、長老はすでに傷から回復していたヤコブを、恐ろしい犯罪者のように修道院から追放した。　ヤコブは聖テオドシオスのもとへ行き、自身の不幸と追放の経緯を語り、聖サヴァに懇願して、再び修道院の独房に受け入れてもらえるよう頼んでほしいと懇願した。テオドシオスは兄弟の願いを聞き入れ、聖サヴァのもとへ赴き、追放された兄弟のために取り成しを頼んだ。　そのような偉大な父であり友人である彼の願いを受け、サヴヴァはヤコブを受け入れたが、彼に次のような戒めを課した。すなわち、彼に仕える者以外とは誰とも話してはならない、兄弟たちと交わってはならない、自分の独房から出てはならない、そしてさらに、聖なる神の

[8602] ヘプタストマ湖、すなわち「七つの口」を持つ湖の名に由来する。

秘跡の聖体拝領から彼を排除した。　こうしてヤコブは沈黙を守り、悔い改めのうちに過ごし、神の前で多くの涙を流していた。やがて天より赦しが与えられ、至福のサヴァには、神の啓示によってヤコブの罪が赦されたことが告げられた。　ある日、聖サヴァは幻の中で、すぐそばに立つ光を放つ人物と、ヤコブの足元に横たわり、その復活をヤコブが祈っていたある死者を目にした。すると、天から声が聞こえてきた。

「ヤコブよ！　お前の祈りは聞き届けられた。その死者に触れ、彼を起こしなさい。」

ヤコブがその命令に従って死者に触れると、たちまち死者は蘇った。すると、光を放つ男はサヴァに言った。

「見よ、死者がよみがえった。さあ、よみがえった者に課せられた束縛を解いてやりなさい。」

これを見たサヴァは直ちにヤコブを呼び寄せ、彼から悔悛の衣を脱がせ、公会議への出席を許可し、兄弟たちと共に至聖なる秘跡を受けることを許した。赦しを受けてから七日後、ヤコブは主のもとへ帰った。

大修道院には、ザンとベニヤミンという名の実の兄弟が二人おり、彼らは神聖な美徳に飾られ、心を一つにして神への謙虚な奉仕に専念していた。　二人は心を一つにして、聖サヴヴァに、彼が自らラヴラからリヴィア方面へ約十五スタディオン離れた場所に建てたあの荒野の小部屋を、彼らに与えてくれるよう懇願した[8603]。彼らが真の神の働き手であることを知っていた長老は、彼らの願いを受け入れ、その小部屋を彼らに与えた。　こうして、彼らは荒野に一つの小部屋を持ち、もう一つは修道院内に持っていた。　荒野の修道室では、彼らは偉大なる師の助けを借りて、自らの労力によって共同生活共同体を設立した。というのも、師は彼らに生活費やその他の必要な物資を供給していたからである。この場所に兄弟たちが増え始めると、サヴァは自らの配慮をもって教会を建設し、それを聖別し、他の共同生活共同体で定めていた規則をこの共同生活共同体にも導入した。

そして、私たちの尊い父サヴァは、美しい枝が生い茂る素晴らしい木に似ていた。すなわち、彼は自らの聖なる生活の模範と、神への熱心な祈りによって、自身の修道院における聖なる父たちや修道者の数を増やしていった。彼らは、聖書にある「*根が聖なるなら、枝も聖なる*」（ローマ11:16）。これらの聖なる枝の中から、ビフィニア出身の至福の長老アンフィモスを特に挙げなければならない。彼は多くの修道的な苦行に身を捧げて生涯を送った。修道院での生活の初め、彼は東側の小川の向こう岸、聖サヴァの柱の向かい側に小さな独房を建て、そこで三十年を過ごした。　老齢になり、体力が衰え、病に倒れて床に伏すようになった。彼がこれほど衰弱し病に伏しているのを見て、至福のサヴァは、兄弟たちが容易に面会し、世話をできるよう、教会近くの修道室の一つに彼を移そうとした。しかし、彼は、最初に定住した場所で死ぬことを許してほしいと懇願した。　こうして、彼は病身のまま自分の小部屋に留まることになった。ある夜、聖サヴァはいつもの習慣通り、朝の賛美の前に祈りのために起き上がると、まるで大勢の人が歌っているかのような美しい歌声を耳にした。彼は教会で早課が歌われているのだと思い、自分やいつもの祝福がないのに、どうして早課が歌われているのかと不思議に思った。しかし、すぐに教会へ近づいてみると、そこには誰もいず、扉も閉ざされていた。　彼は、あの声が何だったのかと不思議に思いながら戻ったところ、突然また同じ美しい歌声が聞こえてきた。彼らは次のように歌っていた。*「わたしは群衆の中にあって、喜びと賛美の声を上げる祝祭の群れと共に、神の宮に入った」*（詩編41:5）。

これらの不思議な声が、至福のアンフィムの修道室がある方向から聞こえてきたことを悟り、サヴァはアンフィムが天に召されたのだと察した。直ちに教会係を起こし、兄弟たちが集まるよう鐘を鳴らすよう命じた。そして、数人の兄弟を連れて、ろうそくと　の乳香を手に、長老の修道室へ向

[8603] 現在のデイブ・エス・センネは、ベイト・サウル・エル・アティカの向かい、エルサレムから聖サヴァ修道院へと続く道の左側に位置する。

かった。　中に入ると、そこには誰もいなかった。ただ、至福のアンフィムの遺体が横たわっており、その魂は天使たちの歌声とともに主のもとへと旅立っていた。彼らはその尊い遺体を運び出し、教会へ持ち込み、葬儀の儀式を執り行った後、聖なる先人たちと共に埋葬した。

テオドシオス修道院の兄弟の一人、アフロディシウスという名の力強い男[8604]が、用事で遣わされた。道中、彼は小麦を運んでいたロバに腹を立て、激しく殴りつけた。ロバはその一撃で倒れ、息絶えてしまった。　この件により、アフロディシイは聖テオドシオスによってその修道院から追放された。そこで彼は聖サヴァのもとを訪れ、自分の行いを打ち明け、助言を求めた。聖サヴァは彼に独房を与え、こう言った。

「自分の小部屋に住み、他の小部屋には移らず、修道院の外に出ず、舌を慎み、食欲を節制すれば、救われるだろう。」

アフロディシウスはこの戒めを受け入れ、決してそれを破ることなく、三十年にわたり修道院から一歩も外に出ず、食事用の器や寝床さえも持たず、藁の敷物を敷いて木の枝の上で眠り、野菜を煮た栄養価の低い残飯を糧としていた。　彼の夜ごとの嗚咽は、周囲の人々の眠りを妨げていた。ついに彼は予知の賜物を受け、自らの死の日を一週間前に予知した。その後、彼はサヴヴァに、至福のテオドシオスの修道院へ自分を遣わしてくれるよう懇願した。聖人は彼と共に二人の兄弟を送り出し、テオドシオスにこう伝えるよう命じた。

「ほら、かつて私があなたから人間として受け入れた、私たちの共通の兄弟アフロディシオスを、今やキリストの恵みにより、天使としてあなたのもとへ送る。」

テオドシオスは愛をもって彼を受け入れ、赦し、平安のうちに送り出した。アフロディシオスは聖サヴァのもとに戻り、短期間の病の末、主のもとで安らかに息を引き取った。

ヨルダン川の対岸にあるメダヴァ[8605]の住民たちは、しばしばこの尊者のもとを訪れ、彼から非常に大きな霊的な恵みを受け、修道院に穀物や野菜を捧げ、彼から祝福を受けていた。　その中には、ゲロンティウスという名の高名な紳士が一人いた。彼は聖都を訪れたが、そこで病に倒れた。オリーブ山へ行って祈りを捧げようとした際、馬から転落して体を打ち、病状はさらに悪化し、もはや生き延びる望みはないと絶望していた。　聖サヴァは彼に聖油を塗って癒やした。ある日、ゲロンティウスの息子トモスと食事をしていた際、サヴァは酢を良質のワインに変えたが、突然ワインがなくなってしまった。ちょうどその頃、労働者たちのために調理されたカボチャが苦かったのだが、サヴァは十字を切ってそれを甘くした。　ある時、聖人は若い弟子を連れてエリコからヨルダン川へ向かっていたが、多くの町民に出くわし、その中には美しい娘もいた。彼らがその横を通り過ぎた時、長老は弟子を試そうとしてこう言った。

「今通り過ぎた娘はどうだったか？　私には、彼女が片目が不自由なように見えたのだが。」

弟子が答えた。

「いいえ、彼女の両目とも見えます。」

「お前は間違っている」と長老は言った。「あの娘は片目しか見えないのだ。」

しかし、弟子は彼女の目は健常だと主張し続けた。老僧は尋ねた。

「どうしてわかったんだ？」

「師匠、」と弟子は答えた。「彼女の顔をじっくりと見て、両目とも見えることがわかりました。」

すると、老僧は彼にこう言った。

「もしそんなに注意深く彼女の顔を見ていたのなら、どうして聖書の戒めを思い出さなかったのか。*『その美しさを心に望んではならない。[あなたの目が惑わされないように、]また、そのまつ*

[8604] 12月24日は、聖アフロディシオス・パレスティヌスの記念日である。

[8605] 現在はヨルダン川東岸のメデバである。

げに心を奪われてはならない』（箴言6:25）。知っておけ、これからは私と同じ修道室にはいられない。お前は自分の目を守っていないのだから――そう言って、彼を懲罰としてファステリイへ追放した。

彼がそこでしばらく過ごし、あらゆる面で自分の目を戒め、自分の思いに警戒することを十分に学んだ後、サヴァは彼を再び修道院に迎え入れ、独房を与えた。

ある日、尊者が「ルヴァ」と呼ばれる荒野にいたとき、道中で前足に棘が刺さったライオンに出くわした。そのライオンは聖人の足元に倒れ込み、咆哮を上げて前足を差し出し、まるで治療を求めているかのように見せた。 聖人はライオンの前足から棘を取り除き、その痛みを和らげた。その後、ライオンは聖人の後をついて回り、 彼に仕えるようになった。 当時、長老のもとにはフライスという名の弟子がおり、彼らはロバを一頭飼っていた。サヴァが弟子を何らかの用事で遣わす際、ライオンにロバを見張るよう命じた。ライオンは口で手綱をくわえ、そのようにしてロバを牧草地へ連れて行き、夕方には水を飲ませてから、再び長老のもとへ連れ戻した。 数日後、フライスは用事で遣わされたが、悪魔の誘惑によって不浄な罪を犯してしまった。ちょうどその時、牧草地でライオンがロバを食べてしまったのである。フライスは、自分の罪を暴くためにライオンがロバを食べたのだと悟り、長老の前に出るのを恐れた。 彼は悲しみに暮れてある村へと逃げ去ったが、長老は長い間彼を探し続け、ついに見つけ出して自分の元へ連れ戻し、小部屋に閉じ込めて悔い改めを課した。彼は心からの悔い改めを捧げ、人間の魂の救いを深く気遣う聖なる長老の祈りの助けにより、多くの涙を流して自らの罪から清められた。

サヴァが、教会の用事でコンスタンティノープルへ赴いた際、神の教会の繁栄に尽くした功績をここに記しておくべきである。彼がそこへ派遣されたのは、次の理由によるものであった。 異端者であるアナスタシウス皇帝は、ハルキドンにおける聖なる教父たちの第四回全地公会議[8606] を拒否し、当時、教会に大きな混乱をもたらした。 彼はコンスタンティノープル総主教エウフィミオスを追放し[8607] 、また、アンティオキアのフラヴィアヌス[8608] とエルサレムのイリアスに対しても怒りを抱き、彼らが自身の異端を是認しなかったため、彼らもまた追放しようとしていた。 皇帝に教会の和解を促そうと、イリヤはパレスチナの修道院の修道院長たち――その中にはサヴァもいた――を皇帝のもとへ遣わし、次のような書面による請願を提出させた：

「神に選ばれた僕たち、善良で忠実な隠遁者たち、そして彼らと共に、全砂漠の指導者であり、全パレスチナの灯台であるサヴヴを、祈りを込めて貴殿の御前へお送りいたします。 王よ、どうか彼らの労苦と献身を受け入れ、教会内の不和を鎮め、悪が蔓延することを許さないでください。私たちは、あなたに王冠を授けられた神に喜ばれることを、あなたが切に願っておられることを知っています。」

修道院長たちはコンスタンティノープルに到着し、王宮に入ろうとしたとき、サヴァは皆の後ろを歩いていた。扉のそばに立っていた衛兵たちは、痩せこけて繕い縫いの服を着た彼を見て、物乞いだと勘違いし、中へ入ることを許さなかった。 王は、自分のもとを訪れた修道院長たちを丁重にもてなし、総主教の書簡を読み上げた後、総主教が書簡の中でこれほど称賛しているサヴァは、彼らの中で誰なのかと尋ねた。修道院長たちは周囲を見回し、彼は自分たちと一緒に来ていたが、どこにいるのか分からないと答えた。 王は直ちに彼を探すよう命じ、ようやく隅のどこかでダビデの詩篇を読んでいるサヴァを見つけた。彼を王のもとへ連れて行くと、王は自分の前を歩く光を放つ天使を見て、サヴァが神の人であると悟り、玉座から立ち上がって彼を敬い、その後、皆に座るよう命じた。 長時間にわたる対話の中で、至福のサヴァはそこにいたどの長老たちよりも熱心に尽力し、神の

[8606] この公会議において、キリストに一つの神性のみを認め、イエス・キリストにおける人間性は位格的結合において神性に吸収されると主張したエウティキオス（単性論）の異端が非難された。

[8607] エウフィミオス – 490年から496年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

[8608] フラヴィアヌス – 506年から512年までアンティオキア総主教を務めた。

霊感に満ちた言葉で王に教会を和解させるよう諭し、その見返りとして神から敵に対する勝利が与えられると約束した。　派遣された教父たちはほとんど成果を上げられず、故郷へ帰されたが、聖サヴァは、王を説得し、彼とイリヤ総主教との和解を成し遂げるまで、その地に残った。聖サヴァはビザンティウムで冬を過ごし、頻繁に王のもとを訪れて、正教やエルサレム総主教について語り合った。彼は宮殿への自由な立ち入りを許されており、望むときはいつでも、警備員によるいかなる遅延や尋問もなく出入りすることができた。そしてこの期間のうちに、王に総主教に対して怒りを抱かないよう説得し、パレスチナの教会たちに平和を与えるよう促した。　その後、彼はエルサレムへ戻り、王から旅費として多額の贈り物を受け取った。王から最大二千枚の金貨を受け取り、それを持ち帰って自身の修道院に分配するとともに、その一部を自身の生まれ故郷であるムタラスクの村へ送り、実家で聖殉教者コスマスとダミアンの名に因む教会を建設させた。

聖サヴァのおかげで、パレスチナの教会と自身のために平和を勝ち取った至福のイリヤ総主教だったが、平穏な生活は長くは続かなかった。異端者たちは、王に悪口を吹き込み、キリストの教会とその牧者たちに対して王を扇動し続け、彼らを悩ませようとしたのである。　そのため、王はシドンで公会議を招集し[8609]、、その議長に、エウティキオスとディオスコロスの異端を支持していた二人の司教[8610]、すなわち、カッパドキアのケサリアの司教ソテリコスと、イェラポリスのフィロクセノス[8611]である。その目的は、その公会議においてカルキドン公会議を破門し、フラヴィアヌスとイリヤを司教の座から追放することにあった。　そして、その通りになった。不法な公会議が開かれ、不敬虔な者たちは王の力を借りて、彼らの公会議に加わることを拒んだアンティオキア総主教の福者フラヴィアヌスを不名誉な形で追放し、その代わりに不敬虔なセヴェルが座に就き、彼との交わりを望まなかった正教徒たちに多くの苦難をもたらした。　彼は、公会議で採択された自身の信仰告白を、エルサレムのイリヤにも送った[8612]。しかし、イリヤは異端的な規定を受け入れず、それらを返送した。　このことを知った皇帝は、聖イリヤに対して激しく怒り、直ちにセヴェルの信仰告白を、数名の聖職者と相当規模の軍隊を伴ってエルサレムへ送り、武力によってエルサレム総主教にシドン公会議の規則の受諾を強要させた。　彼らがエルサレムに到着すると、大混乱が生じ、総主教は大きな苦境に立たされた。そこで、聖サヴァは自身の修道院からすべての修道士を集め、聖都に入り、北方の王が送り込んだ聖職者たちと軍勢を追い払い、セヴェロス自身とその同調者たちを衆人の前で破門した。　異端者たちは恥をさらして派遣者に帰還し、正教徒たちの並外れた勇気と自らの不名誉について語った。そこで皇帝は、筆舌に尽くしがたい怒りに駆られ、パレスチナの[8613]管区長オリンピアを大軍を率いてエルサレムへ派遣し、いかなる法や裁判も経ずに、皇帝の権威をもって、イリヤ総主教をその座から追放するよう命じた。　オリンピアスは大軍を率いて到着すると、直ちに皇帝の命令を実行し、裁判を経ずに総主教を罷免してアイルへ流刑に処し、その代わりに、長老マルキアノスの息子ヨハネス[8614]を後任に据えた。ヨハネスは、ハルキドン公会議を呪い、セヴェロスと交わりを持

[8609] それは511年の終わり頃のことだった。――シドン――地中海沿岸、レバノン山脈の近くにある、美しい港を持つフェニキアの最古の都市。　キリスト教はシドンに非常に早くから伝わり、イエス・キリストが地上にいた頃、すでにそこには多くの弟子がいた。その後、シドンは何度か破壊され、再建されたが、ついに完全に陥落した。現在はサイダという名で知られ、人口は1万人で、その大半がイスラム教徒である。

[8610] 単性論の代表者および異端の指導者たち：エウティキオス――コンスタンティノープルの修道院の一つで院長兼大修道院長を務めた人物、ディオスコーロス――444年から451年までアレクサンドリア総主教を務めた人物。

[8611] モノフィシズムの最も熱心かつ狂信的な信奉者たち、とりわけイェラポリスの司教フィロクセン（通称クセナイアは、自分に忠実な狂信的な修道士の一団を通じて、地元の住民に力ずくでモノフィシテ派の異端を受け入れさせ、その過程で正統派のアンティオキア総主教が拷問の末に死亡した。

[8612] 513年のことである。

[8613] 地方長官。パレスチナの教区は他の教区に比べてより大きな権力を有しており、また「イゲモン」（ギリシャ語の呼称）や「プロクゥラトル」（ローマ語の呼称）とも呼ばれていた。

[8614] 517年から524年にかけて、ヨハネス3世の名で総主教を務めた。

つことを約束していたのである。　このことを知った至福のサヴァは、前回と同様に再び自身の霊的な軍勢を集め、将軍として聖都へと向かったが、そこにはすでにエパルヒのオリンピアの姿はなかった。彼は命じられた悪行を遂行し、満足して王のもとへ戻っていたのである。　聖サヴァは、罪のないイリヤが追放されたことを深く嘆き、彼のために涙を流した。　新しい総主教ヨハネスが異端的な考えを弄しているのを見て、サヴァは彼に対し、セヴェロスと交わりを断ち、カルキドン公会議を擁護し、最後の血の一滴に至るまでそれを守り抜くよう熱心に説得した。もし彼がそうしなければ、異端者としてすべての隠遁の聖父たちから呪われることになるだろうと。　ヨハネは恥じ入ると同時に、聖サヴァと共にやってきたこれほど多くの神に霊感を受けた聖父たちを恐れ、セヴェロスとその異端のすべてを拒絶し、カルキドン公会議で確立された正統信仰を受け入れた――こうして聖父たちは安堵した。

まもなく、新たに任命された総主教ヨハネスがシドン公会議を拒絶し、カルキドン公会議を受け入れていることが皇帝の耳に入った。　皇帝はオリンピアに激怒し、そのような総主教を選出したことを理由に彼を聖職から追放した。そしてオリンピアの代わりに、あるアナスタシウスを全パレスチナの教区長に任命し、彼をエルサレムへ派遣して、総主教ヨハネスをセウェルスとの交わりに誘導するか、あるいはその座から追放するよう命じた。　アナスタシウスが到着すると、直ちに総主教を捕らえ、牢獄に閉じ込めた。　総主教は、エパルヒに慈悲を乞い、すべての命令に従うことを約束した。ただし、皇帝の意志を強制されて従っているように見えないようにするため、翌週の日曜日、教会で民衆全員の前でハルキドン公会議を呪い、シドン公会議を称賛し、セウェルスと交わりを持つと約束した。　総主教は牢獄から釈放されると、聖なる父たちであるサヴァとテオドシウスに密かに使者を送り、すべての司祭たちを集めて、日曜日に教会へ彼のもとへ来るよう手配するよう依頼した。ちょうどその頃、王族の親族であるイパティオスも巡礼のためにエルサレムに滞在していた。日曜日になると、サヴァとテオドシオスの両修道院長が、彼らと共に1万人もの修道士たちを率いて教会にやって来た。[8615] 教会[8616] には、エパルヒのアナスタシオスや 、王族のイパティオスも兵士を率いてやって来て、大勢の民衆が集まっていた。そこで、総主教はサヴァとテオドシオスと共に説教壇に上がった。すると、民衆と修道士たちは一斉に総主教に向かって叫んだ。

「異端者たちを呪い、ハルキドン公会議を擁護せよ！」

総主教は意気込みを奮い立たせ、力強い声でこう言った。

「エウティキオス、ネストリウス、セウェロス、ソテリコスと同じ考えを持つ者は、破門されよ！」

また、至福のテオドシウスと尊者サヴヴァも大声で叫んだ。

「四つの公会議を、四人の福音書記者と同様に受け入れない者は、呪われよ！」

これを見たエパルヒのアナスタシオスは、大勢の修道士や民衆を見て恐れをなすと、急いで教会を出て、ケサリアへと逃げ去った。　一方、王の親族は、司祭たちに、セヴェロスの教義を支持するために来たのではなく、聖地を参拝し、聖なるカトリック教会に加わるために来たのだと誓った。そして彼は、サヴァとテオドシオス両聖者に多量の金を贈り、彼らと共にやってきた修道士たちの間で分配するようにと命じた。　その後、尊い父たちは全公会議を代表して、王に次のような書簡を送った。「私たちの主イエス・キリスト、万物の永遠の王であり神は、その慈しみにより、地上の王国の笏をあなたの支配下に委ねられました。それは、あなたを通して、すべての教会、とりわけ教会の母である聖シオンに、この世の真の恵みをもたらすためです。　この教会において、正統な信仰の偉

[8615] それは517年の初めのことだった。

[8616] 現在のダマスカス門の北に位置する、聖ステファノ（第一殉教者兼大助祭）の教会において行われた。この教会は、その広さゆえに、大聖堂では集まった大勢の人々を収容できなかったため、大司教によってこの行事の会場として選ばれたのである。

大な秘跡が始まり、地の果てまで広まったことは、誰もが知るところである。　私たち、この神聖な地の住民は、聖なる使徒たちからそれを受け継ぎ、今日に至るまで完全かつ無傷のまま守り続けてきました。そして、キリストの恵みによって永遠に守り続け、敵に正しい道から逸らされることなく、彼らの卑劣で虚しい言葉に惑わされることもありません。この汚れなく、損なわれていない信仰の中で、王であるあなたもまた育ち、成長されました。　――それゆえ、私たちは今、聖なる都エルサレムにおいて、あなたの治世の時代に、これほどの大騒動と動乱が起こり、若き日から徳を愛し、沈黙のうちに穏やかな生活を選んだ神の奉仕者たち、長老たち、修道士たちさえもその影響を免れなかったことに驚嘆しています。　ユダヤ人やその他の異教徒たちの目の前で、彼らは最も聖なるシオンから街の通りへと引きずり出され、不毛の地へと追放されています。彼らは、正しい信仰にふさわしくない行いを強要さえされており、その結果、祈りのためにここを訪れる人々は、魂の益を得るどころか害を受け、誘惑にさらされたまま帰らざるを得なくなっています。　それゆえ、我らは貴殿の権威に懇願する。これほど多くの悪から我々を救い出してください。その原因は「北」にあり、我らの罪ゆえにアンティオキア教会は彼に委ねられ、彼自身の魂の滅びとなり、すべての教会にとって誘惑となっているのです。我々エルサレムの人々が、今や誘惑を受けることなく、いかにして信仰を学ぶことができるでしょうか？　あたかも、かつてはすべての人にとって敬虔の教えにおける父であり導き手であった私たちが、今になって、これほど遅くになって初めて、正しい信仰告白を知ったかのように！　しかし、私たちは知らないのでしょうか。先人たちが遺した正しく健全な信仰に対する、この新たに現れた偽りの「修正」は、実際には修正ではなく、堕落と破壊であり、それを受け入れる者には、報いとして魂の滅びが待ち受けているということを。　私たちは、ニカイアの三百十八人の聖なる教父たちおよびその後の三つの全地公会議[8617]によって定められた信仰告白に、いかなる追加も、またいかなる変更も決して容認せず、このために私たちの魂を捧げ、もし可能であれば数えきれないほどの死をも受け入れる覚悟である。 そして、あらゆる知性を超える神の平和[8618]が、我らの聖なる信仰を守り、それに立ち向かう嵐を、御自身の聖なる栄光と、貴殿の王国の栄光のために鎮めてくださいますように」。

聖なる父たちからのこのような書簡を受け取った王は、激しく怒り、エルサレム総主教ヨハネスと、二人の修道院長、サヴヴァとテオドシオスを、エルサレムの領土から追放することを決めた。しかし、神の摂理はこの悪行が実行されることを許さなかった。　ちょうどその頃、ある野蛮人との戦争が勃発したため、王は教会や敬虔な父たちへの迫害を当面見送り、野蛮人との戦いの準備に取りかかった。

聖イリヤ総主教が不当に追放された後、神の義なる裁きにより、預言者エリヤの時代（列王記下17章；　ヤコブ5:17–18）のように、パレスチナ全土に飢饉と干ばつ、そして大不作が訪れた。天は閉ざされ雨は降らず、泉も干上がってしまった。さらに、大量のイナゴが現れ、大地を覆い尽くし、野の草や木々の葉をすべて食い尽くした。このような神の懲罰は5年間続き、多くの人々が飢えと渇きで命を落とした。　そして、エルサレムの住民たちは、神がパトリアルヒ・エリヤを不当に追放した報いとして、パレスチナを飢饉で罰しておられるのだと語った。その頃、聖サヴァは、自身が建立した七つの修道院の院長たちを召集し、彼らに肉的な事柄については一切気にかけるなと命じ、　、福音書の言葉を彼らに思い起こさせた。　*「だから、心配して、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』などと言ってはならない。こうしたものはすべて異邦人が求めているものであり、あなたがたの天の父は、あなたがたがこれらすべてを必要としていることを知っておられるからだ*

[8617] 言うまでもなく、全地公会議とは、325年の第1回（ニカイア公会議）、381年の第2回（コンスタンティノープル公会議）、431年の第3回（エフェソス公会議）、および461年の第4回（カルキドン公会議）を指す。
[8618] 使徒の言葉。フィリピ4章を参照。

。　*まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる*」（マタイ6:31–33）。

そして、彼らは神の全能の摂理によって養われていた。

ある時、復活祭の前、大修道院の執事が尊者に向かってこう言った。

「神父様、今週の土曜日と日曜日の礼拝の鐘を鳴らすことはできません。神父様方が集まられた際に振る舞う食べ物がないだけでなく、聖なる供え物用のパンさえ見つからないほど、私たちは貧しくなってしまったからです。」

すると聖人はこう答えました。

「食糧不足を理由に礼拝を中止することはない。明日を心配するなと言われた方は公正な方であり、飢饉の時にも私たちを養ってくださる。教会係に、器や衣服を町へ売りに行き、聖なる典礼に必要なものを買い求めるよう命じなさい。」

聖人はそうして会計係に答え、神に希望を託して待った。　そして、日曜日が来る前に、神の摂理によって遣わされた若者たちが突然彼のところへやって来た。彼らは、パン、小麦、ワイン、油、その他様々な食料を積んだ三十頭のロバを連れてきて、これらすべてを尊者にお渡しした。彼は神に感謝し、会計係にこう言った。

「兄弟よ、どう思うか。集まった修道士たちに振る舞うものが何もないのだから、今週の土曜日と日曜日は鐘を鳴らすのを禁じるべきではないか？」

会計係は、聖人の偉大な信仰と、彼らに対する神の偉大な摂理に驚き、自身の不信仰を詫びた。

その後、聖人は、追放中のエルサレム総主教イリヤを訪ねたいと望んだ。当時、サヴヴァは八十歳であった[8619]。彼はステファノスとエウファリオスという二人の修道院長を伴い、旅立った。サヴヴァと彼と共に訪れた者たちを見て、イリヤは喜び、彼らを数日間自分の元に留めた。　その間、彼は毎日第九時に自分の独房から出てきた[8620]。というのも、晩課の終了から第九時まで、彼は誰にも姿を見せず、扉を閉ざして沈黙を守っていたが、第九時になると彼らのところへ出てきて、共に食事をし、霊的な対話を楽しんだからである。　そして、晩課の終了後には、再び沈黙の独房へと戻っていった。ある日、7月9日、彼はいつものように彼らのところへ現れなかった。彼らは一日中彼を待ち続け、食事も口にしなかった。夜6時[8621]、総主教は涙を浮かべた目で現れ、彼らにこう言った。

「皆さんは召し上がってください。私には時間がありません。ある用事に追われているのです。」

なぜこれほど長く現れなかったのか、そしてなぜそんなに泣いているのかという彼らの心配そうな問いかけに、彼は深くため息をつき、涙を流しながら聖サヴァにこう言った。

「至福の父よ、ああ、今まさにアナスタシウス皇帝が亡くなられました。十日後には、私もこの世を去り、神の恐るべき審判の座で彼と共に裁かれることになるでしょう。」

そして、その通りになった。十日後、至聖なるイリヤ総主教は、死の直前に少し病に伏した後、この世を去った[8622]。尊者サヴァは彼を栄誉をもって葬り、自らの修道院へと戻った。 一方、アナスタシウス王の死については、次のように伝えられている。イリヤ総主教に王の幻影が現れたその夜、雷鳴が轟き、稲妻が王の寝殿を直撃した。稲妻は王をあちこち、部屋の隅から隅へと追い回し、ついに片隅で王を追い詰め、殺害した。かくして、この邪悪な王は、邪悪な死を遂げたのである。

[8619] これは518年のことでした。

[8620] キリスト教の礼拝慣行にも受け継がれているユダヤ式の時間計算によれば、第九時は午後三時に相当した。

[8621] 12時。

[8622] 517年7月20日。

不敬虔なアナスタシウス王の死後、敬虔なユスティヌス[8623] が王位に就き、王国の隅々まで勅令を発して、正教徒を流刑先から帰還させ、 の者たちがそれぞれ再びその位階と地位を取り戻し、ハルキドン公会議の決定が聖書に記され、キリストの教会に平和がもたらされるようにと命じた。この皇帝の勅令が聖都エルサレムに届くと、人々は皆大いに喜び、総主教ヨハネスは聖サヴヴァに、ケサリアとスキフォポリス[8624] へ赴き、この皇帝の勅令を公布し、ハルキドン公会議の決定を教会の記録に記すよう依頼した。 尊者サヴヴァは、すでに老齢により体が弱り、数多くの修道生活による労苦で疲れ果てていたものの、 しかし、キリストの教会のため、この命令を拒むことはなく、それほど困難な旅路を厭うことなく、他の数名の指導的な修道士たちと共に旅立ち、ケサリアでは当時その地の主教であった聖ヨハネス・ホゼヴィトスに出迎えられた。 スキフォポレでは、尊者テオドシオス大主教とすべての市民から栄誉をもって迎えられ、そこで奇跡を起こした。 彼は、キリスト教徒に反旗を翻していたある高貴なサマリア人シルヴァネについて、彼が町の真ん中で火に焼かれるだろうと予言した——これについては後述する——。また、出血の病を患う女性や悪霊に取り憑かれた少女を癒やし、このようにして教会に多大な恩恵をもたらした後、エルサレムへと戻った。

前述のユスティノスの決定書がエルサレムに運ばれると、数え切れないほどの修道士や一般信徒が集まり、聖サヴァや多くの司教たちも到着した。そして8月6日、主の変容の祝日に、聖サヴァの伝記の著者の指摘によれば、四つの（全地）公会議の決定が聖なる規定として採択された。 サヴァ・オスヴィャシェンヌイの指摘に基づき、四つの（全地）公会議の決定が聖なる決議として採択された。「このようにして」と伝記の著者は結論づけている、「神聖な長老の預言は、アナスタシウス皇帝において成就したのである」。

パレスチナで4年目の干ばつが終わりに近づき、水が著しく不足していたため、修道士たちは解散しようとし、聖人に彼らを解放するよう懇願した。聖人は彼らの焦りを戒め、神に希望を置くよう命じた。すると3日目に、修道院の上に雨雲が現れ、雨が降り、修道院の堀は水で満たされた。 この雨は修道院内だけで降り、周辺地域には露の一滴さえなかった。すると、周辺の修道院のイグメンたちが長老のもとを訪れ、こう言った。

「父よ、私たちはあなたに対してどのような罪を犯したのでしょうか。なぜ私たちのことを忘れ、神に雨を願う際、ご自身の修道院だけに雨を降らせたのですか？」

彼は優しく彼らを慰め、神がパレスチナ全土に雨を降らせてくださるまでは、彼らの修道院の水も尽きることはないだろうと希望を持たせた。 五度目の飢饉の年が訪れた。水は著しく不足し、聖都では貧しい人々が渇きで死んでいくほどであった。干ばつと降雨不足により、泉は枯れ、井戸や池、小川も干上がってしまった。 総主教ヨハネは深く嘆き、かつては湿地帯で湿気が多かった場所を訪れては、水を見つけるために堀や井戸を掘るよう命じたが、水は見つからなかった。 シロアムの泉があった場所では、多くの労働者が大変な苦労の末、40サジェーンまで掘り進んだが、水は見つからず、総主教は絶望のうちに街全体を襲う大災害を嘆き悲しんだ。 時は9月、**刷新の祭りが**近づいていた。聖サヴァが祈りによって修道院に雨を降らせたことを知った総主教は、彼を呼び寄せ、神が御自分の民を憐れみ、飢えや渇きによって滅ぼさないよう、神に祈ってほしいと懇願した。しかし、聖サヴァは次のように言ってこれを拒んだ。

[8623] ユスティヌス——518年から527年まで在位したビザンツ皇帝。ユスティヌスによるこの決定がエルサレムに届けられると、数え切れないほどの修道士や一般信徒が集まり、聖サヴァも 多くの司教も参集し、8月6日の主の変容の祝日に、聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイの伝記の著者の指摘によれば、四つの（全地）公会議の決定が聖なる決議として採択された。 「このようにして」と、その伝記の著者は結論づけている。「神聖な長老の預言は、アナスタシウス皇帝において成就したのである」。

[8624] ここで言及されているのは、もちろんパレスチナのケサリアである。

「私が何者というので、神の怒りを鎮めることができるでしょうか。私自身も罪人なのです。」

しかし、総主教はさらに強く懇願した。そこで聖サヴァはこう言った。

「従順のゆえに、私は独房へ行き、神の慈しみを祈り求めましょう。もし三日が過ぎても雨が降らなければ、それは神が私の祈りを聞き入れられなかったということだとお分かりください。私の祈りが神に届くよう、あなた方も祈ってください。」

そう言って、彼は去っていった。翌朝は酷い暑さだった。大勢の労働者たちが一日中、前述の堀を掘っていたが、夕方になると、翌朝また仕事に来られることを期待して、すべての器や籠をその場に置いていった。　夜になると、南から風が吹き、雷雨が降り出し、一晩中激しい雨が降り続いたため、排水溝は満水となり、至る所から水が溢れ出した。　掘っていた場所には水が流れ込み、長い間苦労して堀から掘り出した土はたちまち元の場所に戻り、器や籠を覆い隠し、その場所は地面と同じ高さになったため、どこを掘っていたのか見分けがつかなくなった。　聖都のすべての貯水池は、聖サヴァの祈りによって水で満たされ、人々は皆、喜びのうちに神に感謝を捧げた。

聖サヴァの86歳の時、総主教ヨハネスが逝去し、後継者として高潔な人物であるペトロス・エレウフェロポリトス[8625]　を指名した。それから3年後、皇帝ユスティヌスは老齢と病のため王位を退き、王国を甥のユスティニアヌス[8626] に託した。 ペトロス総主教は、かつての総主教たちと同様に、聖サヴヴァを愛し、敬い、しばしば荒野を訪れて彼に会っていた。総主教にはイシキアという名の妹がおり、彼女は敬虔で徳の高い女性であった。彼女は重病に倒れ、医師たちも治すことを諦めてしまった。　そこで総主教は、聖サヴヴァに病人の家へ来て、彼女のために祈ってほしいと頼んだ。聖サヴヴァは訪れ、病人に三度十字を切ったところ、彼女は即座に起き上がり、神を賛美した。

聖サヴァの生涯の91年目の初めに、聖アッバ・テオドシオス[8627] が逝去した。この頃、パレスチナに住んでいたサマリア人[8628] は、ギリシャ王の支配から離反し、自分たちの部族からユリアヌスという名の王を選び、キリスト教徒に対して反乱を起こし、多くの悪事を働いた。　多くの教会を占領して焼き払い、村や都市を襲撃し、多くのキリスト教徒を虐殺した。特にナポリ地方[8629] では、現地の司教サモンが捕らえられて剣で殺害され、彼と共にいた司祭たちは四つ裂きにされ、聖殉教者たちの聖遺骨と混ぜ合わせて焼かれた。　このことを知った皇帝は、サマリア人に対して大軍を派遣し、サマリアの王ユリアヌスは戦いで殺された。その際、聖サヴァが死を予言していたシルヴァンも、キリスト教徒たちに捕らえられ、スキフォポレの町の真ん中で焼き殺された。　その息子アルセニオスはコンスタンティノープルへ向かい、まもなく――その経緯は不明だが――皇帝の寵愛を得て、宮廷で厚く敬われ、皇帝の信頼を勝ち取った後、パレスチナのキリスト教徒たちに対して誹謗中傷や虚偽の告発を繰り広げた　（彼自身はサマリア人の不敬虔な信仰を奉じていた）、あたかも彼らがサマリア人の反乱や皇帝への忠誠を裏切ったことに関与しているかのように。　王はサマリア人アルセニ

[8625] エルサレム総主教ヨハネは524年に死去した。後継者のペトロ総主教は、524年から544年まで総主教職を務めた。エレウフェロポリス出身であり、その名は故郷である南パレスチナの都市エレウフェロポリスに由来する。

[8626] ユスティヌスは、生前、老齢と体の衰えを理由に、元老院全体の同意を得て、コンスタンティノープル総主教エピファニオスによる叙任式を経て、以前から国政を執っていた甥のユスティニアヌスを皇帝の座に就かせた。ユスティニアヌスは527年から565年まで在位した。

[8627] 529年1月12日。

[8628] サマリア人――パレスチナ中央部、ヨルダン川の西側に位置するサマリアの住民であり、その名は首都サマリアに由来する。サマリア人はユダヤ人に敵対する宗派であり、聖書のうちモーセ五書のみを真の神の啓示として認め、　聖書の他のすべての書物やユダヤ人の伝承を拒絶し、メシア、天使、死者の復活、来世などについていくつかの誤った考えを主張していた。

[8629] ネアポリス――現在のナブルス――は、古代のシケムであり、サマリアの神殿があったガリジン山とゲバル山の間の谷に位置する都市で、今日でも花々が美しく咲き誇る地域である。

ウスの誹謗を信じ、パレスチナ人たちに怒りを抱いた。このことを知ったエルサレム総主教ペトロスと、その管轄下にある司教たちは、至福のサヴァに、王の怒りを和らげ、教会および市民の多くの必要について王に請願するため、コンスタンティノープルへ赴くという重責を引き受けてくれるよう懇願した。　尊者サヴァは、すでに非常に高齢であったにもかかわらず、教会の必要を自身の安らぎよりも優先し、急いで旅立った。彼の到着を知ると、敬虔な皇帝ユスティニアヌスとコンスタンティノープル総主教エピファニオス[8630]は、彼を出迎えるために高官たちを派遣した。彼が皇帝のもとへ入ろうとしたとき、神はかつてアナスタシウスにそうされたように、ユスティニアヌス皇帝の目を開かれた。すると皇帝は、聖サヴァの頭上に明るく輝き、太陽の光を放ち、まるで冠のようにその頭を包み込む神の恵みを見たのである。　驚いた皇帝は玉座から立ち上がり、頭を下げて祝福を請うた。そして、聖人の頭を抱きしめ、愛と喜びをもって彼に口づけをし、長老に、自分と皇后フェオドラにも祝福を与えてくれるよう懇願した。皇后は聖サヴァを見ると、彼に頭を下げてこう言った。

「父よ、私が子供を授かるよう、お祈りください。」

すると、長老はこう言った。

「万物の主なる神が、あなたの王国を守り給わんことを。」

女王は再びこう言った。

「父よ、神に祈ってください。私の不妊を癒やし、息子を授けてくださいますように。」

老僧は再びこう言った。

「栄光の神が、あなたの王国を信仰のうちに守り、敵に対する勝利をお与えになりますように。」

三度目、女王は長老に不妊の解消を願い出たが、以前と同じ答えを聞き、困惑した。長老が女王の元を去ると、同行していた司祭たちは彼に尋ねた。

「父よ、なぜ女王を悲しませ、彼女のために祈ることを拒まれたのですか？」

長老は彼らにこう答えました。

「信じてください、父たちよ。彼女の胎からは、セヴェロフの教えに染まらず、アナスタシアがキリストの教会をこれ以上混乱させないような子は生まれはしないのです。」

この言葉によって、尊者は、女王が密かに異端を信奉していたことをほのめかした。　王は尊者の願いを受け入れ、パレスチナのキリスト教徒たちへの怒りをサマリア人へと向け、サマリア人が集会を開かないよう、また彼らの子供たちが親の遺産を相続できないよう、そして最後に、反乱の首謀者たちを死刑に処すという法律を公布した。　そこで、サマリア人であるアルセニウスも、王から処刑を命じられたため身を隠したが、その後、聖サヴァのもとへ駆けつけ、その足元にひれ伏して、王の怒りを免れ、死を逃れるために洗礼を請うた。こうして、彼自身と彼の家族全員が洗礼を受けたのである。

王は、聖サヴァへの好意を示し、彼を喜ばせたいと願い、必要なものは何でも自分に求め、修道院の必要に応じて好きなだけ金を受け取るよう命じた。　しかし、聖人は自身の富ではなく、キリスト教徒の利益を願って、サマリア戦争で人々が荒廃していることから、パレスチナで王のために徴収されている貢納を免除するよう王に懇願し、サマリア人によって焼かれた教会を王の費用で再建し、聖都に宿屋を建設して、　主の聖墓を礼拝するために遠方から訪れるキリスト教徒を保護するため、同地に旅人のための病院を建設し、そこに医師を配置すること、総主教イリヤによって設立された至聖なる聖母マリア教会の建設を完成させること、彼の修道院の下流にある砂漠に都市を建設し、野蛮人の侵攻から守るためにそこに警備部隊を配置すること；　とりわけ彼は、王に対し、自らの王国において、アリウス派、ネストリウス派、オリゲネス派、および神の教会を動揺させるその他の異端者たちを根絶するよう尽力するよう懇願した——そしてこれらすべてに対し、彼は王に、神の御名に

[8630] 聖エピファニオス——520年から535年までコンスタンティノープル総主教を務めた。記念日は8月25日。

おいて、かつての王たちが失った地域であるギリシャのローマ王国およびアフリカへの再併合を約束した。　王はこれらすべてに同意し、聖人の願いを叶えるよう命じ、自らも尊者様の望みがすべてにおいてできるだけ早く実行されるよう尽力した。王が顧問や財務官たちと聖人の願いについて協議している間、尊者様は少し離れた場所で、第三時課を執り行いながらダビデの詩篇を読み始めた。　すると、彼の弟子の一人、エレミヤという者が彼のところへ近づき、こう言った。

「敬愛すべき父よ、王があなたの願いを叶えるためにこれほど尽力しているのに、なぜ王の元を離れて、脇に立っておられるのですか？」

すると、長老は彼にこう言った。

「子よ、彼らは彼らの務めを果たし、我々は我々の務めを果たすのだ。」

その後、王は聖人に書面による証明書を与え、平穏のうちに彼を見送った。神は、至福のサヴァに示された慈悲と、彼の願いを叶えたことに対し、王に千倍の報いを与えられた。　老僧の予言は的中した。しばらくして、王は確かに敵に対して二つの輝かしい勝利を収め、ローマとアフリカを征服し、ローマのヴィッティガ王[8631] とカルタゴのヘリメル王[8632] が捕虜としてコンスタンティノープルに連行されてくるのを目にしたのである。　一方、聖サヴァはエルサレムに戻り、総主教と司教たちの要請に応じて再びケサリアとスキフォポリへ赴き、皇帝の勅令[8633] を布告した。そこで彼は、幼い少年キリル（この伝記の著者）を見かけ、彼を自分の弟子とし、彼が自分の修道院で修道士になるだろうと予言した。

そこから戻って間もなく、サヴァは病に倒れた。これを知った総主教ペトロスは彼を見舞いに訪れ、長老の独房には、わずかな豆のさやと古くなったナツメヤシの実以外、病気の彼にとって必要不可欠な物さえ何もないのを見て、彼を担架に乗せて自身の司教館へ運び、自ら　彼を世話し、自分の手で世話をした。　数日後、聖サヴァは、自身の死が間近であることを告げるある神聖な幻視を受けた。

彼はその幻視について総主教に語り、自分の独房で息を引き取れるよう、修道院へ帰らせてほしいと願い出た。総主教は、あらゆる手段を尽くして彼の望みを叶えようと、病人の安らぎに必要なものをすべて揃えて、彼を独房へ送り出した。　長老は自身の独房に横たわり、すべての修道士たちを呼び寄せ、彼らに最後の別れを告げ、後任の修道院長としてメリタという名の立派な人物を任命し、修道院の伝統を揺るぎなく守り抜くよう遺言した。　四日間、彼は何も食べず、誰とも話さなかった。土曜日の夕方、彼は聖体拝領を願い、聖体を受けると、最後の言葉を口にした。

「主よ、私の霊を御手に委ねます！」

こうして彼は12月5日、94年の生涯を全うして息を引き取り、神の天使たちと聖なる殉教者たち[8634] に付き添われて、朽ちることのない命へと移っていった。

エルサレムの全域に、この尊者のお亡くなりになったという知らせが広まり、あらゆるラヴラや修道院から数え切れないほどの修道士たちが集まった。また、総主教も司教たちや世俗の指導者たちと共に駆けつけた。　葬儀が執り行われた後、その遺体は両教会の間、かつて尊者が火の柱を目撃

[8631] ヴィッティグ――493年にテオドリック大王によって建国された、イタリアの東ゴート王国の最後の王の一人。ヴィッティグは537年から538年にかけて在位した。東ゴート王国は、ビザンツ皇帝ユスティニアヌスの名将ヴェリザリウスによって征服され、564年にはナルゼスによって完全に制圧された。

[8632] ヘリメルは、北アフリカの古代カルタゴの地に存在したヴァンダル王国の最後の王である。ヴァンダル王国は531年にビザンツ帝国の将軍ヴィルディザリウスによって滅ぼされ、征服された。　捕虜となったヘリメルはコンスタンティノープルへ送られ、そこでヴェリザリウスの凱旋行進に随行した。

[8633] 皇帝の勅令は、主にアリウス派、単性論派、ネストリウス派、オリゲネス派、およびサマリア派の異端や偽りの教えを根絶し、正統派を確立することを目的としていた。

[8634] 聖サヴァ・オスヴィャシェンヌイは532年に帰天した。

したその場所に、栄誉をもって埋葬された[8635] 。そして、その聖なる魂が天使たちと殉教者たちによって天へと導かれたことは、次の出来事から明らかになった。　聖都には、ダマスカス出身の銀細工師が一人住んでいた。その名はロムルスといい、聖ゲフシマニヤ教会で奉仕する助祭たちの筆頭であった。　彼自身が、尊者サヴァの臨終の際、泥棒たちが彼の家の下を掘り進み、彼自身のものや預かっていた他人のものを含め、計100リットルもの銀を盗んだことを語った[8636] 。深い悲しみに沈んだロムルは、聖殉教者テオドロスの教会を訪れ、五日間、祭壇の前で泣きながら蝋燭を灯し続けた。 5日目の夜、彼は眠りにつき、聖殉教者テオドールが現れてこう尋ねた。

「どうしたのだ、兄弟よ？　なぜそんなに嘆き、泣いているのか？」

彼は答えた。

「私の銀と他人の銀が失われてしまいました。泥棒に盗まれてしまったのです。だから私は泣き、嘆き、祈っていますが、聞き届けられず、あなたは私の声に耳を傾けてくれません。」

すると聖人は言った。

「信じてくれ、兄弟よ。私はここ数日、ここにいなかったのだ。私たち、すべての殉教者たちは、肉体を離れた聖サヴァの尊い魂を迎え、安息の地へ送り届けるよう命じられていたのだ。さあ、もう泣くのはやめて、あの場所（聖人はその場所を指定した）へ行けば、盗まれたものが見つかるだろう。」

ロムルスはすぐに立ち上がり、知り合いを数人連れて、指定された場所へ向かい、聖テオドールが現れて告げた通りのものをすべて見つけた。

また、尊者サヴァの死後に起こった他のいくつかの奇跡についても、触れておかなければならない。旅人を好んでもてなす二人の兄弟がブドウ園を所有しており、至福のサヴァ修道院からやってくる修道士たちにしばしば宿を提供していた。　彼らはブドウの収穫の真っ最中に何らかの重い病に倒れ、ワインを得ることも、生き延びることさえも絶望するほどであった。彼らは聖サヴァの天上の執り成しを信じ、助けを求めて頻繁に彼を称えていた。すると聖人はすぐに彼らの祈りを聞き入れ、一人ひとりに個別に現れてこう言った。

「私はあなたがたの健康を神に祈った。神はあなたがたの願いを聞き入れられた。さあ、立ち上がって、仕事に戻りなさい。」

正気に返ると、彼らは健康を取り戻したのを感じ、神を賛美し、聖人に感謝した。それ以来、毎年、この奇跡が起こったその日に、彼らは盛大な祝祭を執り行った。

ギナラという名の敬虔で徳の高い女性が、カステッリイと洞窟の教会を飾るために二枚のカーテンを寄進すると誓っていたが、織工の怠慢のせいで、そのカーテンはなかなか完成しなかった。ギナラはこれを大変嘆いていた。その時、聖サヴァが現れてこう言った。

「悲しむな。明日には事が順調に進むだろう。あなたの捧げ物は神に喜ばれるからだ。」

聖サヴァは織工の女性のところにも現れ、その怠惰を怒りを込めて叱責した。翌朝、二人は互いに見た夢について語り合い、その仕事はまもなく完成した。

[8635] 聖サヴァの遺骸について、その伝記の著者である修道士キリルは、かなり後になって次のように記している。「彼の遺体は今日に至るまで、棺の中で完全な状態で、腐敗することなく保存されている。これは私が前回のインディクティオンに、この目で実際に見たことである。　至福のカッシアノスの遺骸を納めるためにその尊い棺が開かれた際、私は神聖な長老の聖遺物に礼拝を捧げるために棺の中へ降りていったが、それらが完全な状態で、なおも朽ちていないのを目にした」。7世紀（？）初頭のロシア人巡礼者であり、修道院長ダニイルは、聖サヴァの修道院において、まるで生きているかのようにその聖遺物を目撃している。　彼の修道院は今もなお、エルサレムの東約13ヴェルストにあるケドロン川沿いに建っており、東方世界において広く知られ、修道士たちの厳格で苦行に満ちた生活で名声を博している。その後、聖サヴァの聖遺骨はラテン系の人々によってヴェネツィアに移され、現在はサン・マルコ教会に安置されている。

[8636] リトラは、72ゾロトニクに相当するビザンツの重量単位であり、銀では42ルーブルの価値があった。したがって、100リトラの銀は1,000ルーブルをはるかに上回る価値があった。

大ラヴラの管理人は、死海から購入した小麦を運ぶためにサラセン人のラクダを雇った。ラクダたちが小麦を積んでラヴラに到着したとき、そのうちの1頭が道から右に外れ、荷を積んだまま岸から小川に転落し、泥沼に横たわってしまった。そのラクダの飼い主であるサラセン人は叫んだ。

「サヴァ神父様、どうか私のラクダを助けて、死なせないでください。」

するとたちまち、一瞬のうちに、彼は誠実な老人がラクダに乗っているのを見た。彼は別の道へ駆け下り、小川へ降りていくと、自分のラクダが無事であるのを見つけたが、その上に座っていた老人の姿はもう見当たらなかった。小麦もまた無傷であった。それ以来、このサラセン人は毎年、聖サヴァの棺を拝むために修道院を訪れるようになった。

ある日、オリゲネスの信奉者たちは、あるレオンティウスという人物の指揮の下、各地から集結し、偉大なるラヴラに奇襲を仕掛け、聖サヴァの正統な信徒たちを追い散らし、ラヴラを根こそぎ破壊しようと企てた。 そのために多くのバールやその他の鉄製の道具、さらには武器も用意し、彼らは大いなる怒りを抱いて大群となって向かった。午後2時頃、道中で突然、暗闇と霧に包まれた。彼らは一日中さまよい、ラヴラを見つけることはできず、むしろ通行不能な場所に入り込んでしまい、そこで夜が更けてしまった。苦労の末、翌日、彼らは聖マルキアノス修道院の近く[8637] にたどり着いた。自分たちの企てが失敗に終わることを悟ると、彼らは恥をさらしてそれぞれの場所へと散っていった。そして、預言者イザヤの言葉が彼らに実現したのである。 *「彼らの道には荒廃と滅びがある……盲人のように壁を摸索し、目がない者のように手探りで歩き、真昼にさえつまずく」*（イザヤ書59:7, 10）。 しかし、神は御自身の御愛する者、この修道院で輝かしい功績を残した聖サヴァのために、この修道院を守られた。その聖なる祈りによって、三位一体の至聖なる唯一の神、父、子、聖霊が、私たちをもあらゆる悪から守ってくださいますように。神に永遠の栄光あれ、アーメン[8638] 。

コンダク、第8調:

幼少の頃から、徳によって神への汚れなき捧げ物となられた、至福のサヴァよ、敬虔の園を耕した者よ。それゆえ、あなたは敬虔な者たちの糧となり、荒野の住人として称賛に値する者となった。それゆえ、我らはあなたにこう呼びかける。「喜びなさい、サヴァよ、至福に満ちた者よ。」

聖カリオーン修道士とその子ザカリアの記念日

記念日：12月5日

エジプトの[8639] に、カリオンという名の男が一人住んでいた。彼には二人の子供がいたが、それらを妻に託し、自身は[8640] のスキートへ赴き、修道士となった。 しばらくして、エジプトに飢饉が

[8637] 聖アバ・マルキアノのキノヴィアはベツレヘムの近くに位置していた。

[8638] 聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイは、エルサレム式として知られ、パレスチナのすべての修道院で採用された、教会礼拝の順序に関する最初の規則を著した。シメオン・ソロンスキの証言によれば、 「我らの神聖なる父サヴァは、聖エウフィミオスと聖テオクティストス（サヴァの荒野での修行における最初の指導者たち）から受け継いだ規則を定めた。そして彼らもまた、自分たちより以前の者たち、および270年に没した殉教者ハリトンから受け継いでいた」とあり、すなわち伝承によれば使徒時代よりさらに遡るものである。 その後、聖サヴァの規律は、敬虔さの要求に従って、多くの必要かつ重要な補足が加えられた。さらに後になってそれは失われてしまったが、エルサレム総主教ソフロニオスによって復活させられた。

[8639] エジプトは、アフリカ北東部に位置し、ナイル川沿いに広がる国である。

[8640] 「スキト」はエジプト語で、「天秤」や「心の試練」を意味する。また、ギリシャ語の「スキトス」（皮）に由来するという説もあり、この語源は、初期のスキトの隠遁者たちが、きちんとした住居を持たず、野生の獣の皮で作った覆いで満足していたことを示唆している。 スキトスとは、孤独な隠者たちのための個別の小部屋という意味で、特殊な修道

訪れた。カリオンの妻　は、極度の貧困に耐えかねて、子供たち――一人の男の子ザカリアと一人の女の子――を連れてスキートへ向かい、泉のほとりの木の下に座り込んだ。　その隠修院には、女性が修道士と話すために訪れた場合、川を挟んで遠くから会話しなければならないという慣習があった。そこで、その女性は川を挟んでカリオンにこう言った。

「あなたは修道士ですが、今は大飢饉です。一体誰があなたの子供たちを養うのですか？」

カリオンは妻に言った。

「女の子供を連れて行ってくれ。男の子は私に任せてくれ。」

こうしてカリオンはザカリアという子を自分のもとに引き取り、スキートで育て上げた。そして、それが彼の息子であることは誰もが知っていた。少年が成長すると、彼を巡って修道士たちの間に不満が生じた。これを耳にしたカリオンは、ザカリアにこう言った。

「立ち上がって、ここから去りなさい。お前のせいで、長老たちが私に不平を言っているのだから。」

するとザカリアはこう答えた。

「私はあなたの息子です。あなたのもとを離れて、どこへ行きましょうか？」

そこで、父カリオンと息子の二人は、フィヴァイダ[8641]へと向かい、そこで数日間、小部屋で過ごした。しかし、そこでも不平の声が上がり、彼らは再びスキートに戻ったが、兄弟たちはここでも不平を言い続けた。　そこでザカリアは、有毒な水のある湖へと向かい、鼻の穴まで水に浸かり、一時間ほどそのままでいた。その後、彼はハンセン病患者のようになり、父でさえ彼をようやく見分けられたほどであった。彼が聖体拝領に訪れたとき、聖イシドール司祭はザカリアに関する啓示を受け、彼にこう言った。

「わが子よ、先週の日曜日、あなたは人間として聖体拝領に来たが、今は天使として来ている。」

カリオンが神のもとへ召される準備をしていたとき、兄弟たちにこう言った。

「私は多くの労苦を成し遂げ、わが子ザカリア以上に精進したが、彼ほどの謙遜と沈黙の境地には至らなかった。」

そして、その長老は息を引き取った。その後、モーセ神父はザカリアにこう言った。

「教えてくれ、私が救われるためには、何をすべきか？」

ザカリアは彼の足元にひれ伏し、こう言った。

「父よ、私に尋ねるべきことでしょうか？」

すると、長老は彼にこう言った。

「信じてくれ、ザカリアの子よ。私は聖霊があなたの上に降りるのを目撃した。だからこそ、あなたに尋ねたのだ。」

するとザカリアは頭から修道服のフードを取り外し、その足元に置き、踏みつけながら言った。

「もし人がこのように自分を踏み砕かなければ、修道士にはなれないのだ。」

ザカリアが世を去ろうとしていた時、モーセは彼に尋ねた。

「何が見えるのか、兄弟よ？」

すると彼は答えた。

「黙っているほうがよいのではないでしょうか、父よ？」

院の一種を指す言葉であった。この名称は、まず第一に、エジプト北西部、ニトリア山から25～30ヴェルスト離れた有名な地域に付けられたものである。

[8641] フィヴァイダとは、古代に名高いエジプトの都市フィヴァイの地域を指す。また、この主要都市の名にちなんで、上エジプト（南部）全体も同様に呼ばれていた。フィヴァイダ砂漠は、古代キリスト教の修道士たちが最も好んで修行を行った場所の一つであり、

するとモーセは言った。
「そうだ、わが子よ、黙っていなさい。」
そして、彼が息を引き取るまさにその瞬間、父イシドールは天を見上げ、こう言った。
「喜びなさい、わが子ザカリアよ。あなたには天国の門が開かれたのだ！」
そしてザカリアは、その魂を神に委ね[8642]、修道院の敬虔な修道士たちによって埋葬された。

12月19日

12月6日（旧暦）

聖ニコラオス、ミルリキの大司教、聖人かつ奇跡行者の生涯

記念日 12月6日

キリストの聖人ニコライ、偉大なる奇跡行者、迅速な助け手、そして神の御前で立派な執り成し手は、リキア地方で育った。彼はパタラという町で生まれた[8643]。彼の両親、テオファンとノンナは、敬虔で、高貴かつ裕福な人々であった。　この祝福された夫婦は、神に喜ばれる生活、数多くの施し、そして偉大な徳により、聖なる枝を育て上げ、「*水のほとりに植えられた木のように、その実を時宜にかなって結ぶ*」（詩編1:3）という栄誉に浴した。

この祝福された幼子が生まれたとき、彼には「*諸国民の征服者*」を意味する*ニコライという*名が与えられた。そして彼は、神の祝福により、まさに悪意の征服者となり、全世界の益となった。彼の誕生後、母ノンナは直ちに病から解放され、それ以来、亡くなるまで不妊の状態を保ちました。このことによって、自然そのものが、この妻には聖ニコライに匹敵する他の息子は生まれ得なかったことを、いわば証明したのです。彼こそが、最初であり、最後であるべき存在だったのです。　母の胎内において、神の霊感による恵みによってすでに聖別されていた彼は、この世に生まれる前から神を畏敬する者としての姿を現し、母の乳を飲むようになる前から奇跡を行い、食物を口にすることに慣れる前から断食を実践していた。　誕生後、洗礼の浴槽の中で、彼は誰にも支えられずに三時間も立ち続け、それによって至聖なる三位一体に栄光を捧げた。彼は後に、その三位一体の偉大な奉仕者であり、執り成し手となる運命にあったのである。彼が母の乳首に顔を寄せる様子からも、将来の奇跡行者であることが見て取れた。　というのも、彼は右の乳房からのみ乳を飲み、それによって将来、義人たちと共に主の右座に立つことを示していたからである。彼の並外れた断食の精神は、水曜日と金曜日には母の乳をたった一度、それも両親がいつもの祈りを終えた夕方にのみ飲むということに表れていた。　父と母はこれに大いに驚き、息子が生涯を通じてどれほど厳格な断食者となるかを予見した。幼少の頃からそのような節制に慣れ親しんだ聖ニコライは、生涯を通じて、最期を迎えるまで水曜日と金曜日は厳格な断食を続けた。　年を重ねるにつれ、少年は知恵も深まり、敬虔な両親から教えられた美徳を磨き上げていった。彼はまるで実り豊かな畑のようで、教えという良き種を受け入れ、育て上げ、日々、高潔な行いの新たな実を結んでいた。　聖書を学ぶ時が来ると、聖ニコライは、その知性の力と鋭さ、そして聖霊の助けにより、短期間のうちに多くの知恵を体得し、キリストの船の良き舵手、そして言葉の羊たちの熟練した牧者にふさわしいほど、学問において優れた成果を収めた。　言葉と学問において完成の域に達した彼は、その生活そのものでも完璧であることを示し

[8642] 聖ザカリアは、西暦4世紀末に逝去した。
[8643] パタラは、小アジアのリキア州（現在のアナトリア）にあった海辺の商業都市であった。フェニキア人によって建設され、現在は廃墟となっている。

た。彼はあらゆる手段を尽くして、虚栄に満ちた友人や無益な会話を避け、女性との会話を避け、彼女たちを見ることさえしなかった。　聖ニコライは真の貞潔を守り、清らかな心で常に主を仰ぎ、熱心に神の宮を訪れ、詩篇83篇で「*神の家の門に立つことこそ、私の望みである*」と歌う詩人の言葉に従った。

神の宮において、彼は昼も夜も、神を想う祈りと聖書の読誦に没頭し、霊的な知恵を学び、聖霊の神の恵みによって豊かになり、聖書の言葉にあるように、御自身にふさわしい住まいを自らの内に築き上げていた。　*「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたのうちに住んでおられる」*（Iコリント3:16）。

神の御霊は、まことにこの徳高く清らかな若者の内に宿っており、主に仕える中で、彼は熱意に燃えていた。彼には、若さに特有の習慣は微塵も見られず、その気質は老人のようであったため、誰もが彼を尊敬し、驚嘆した。　年老いた者が若者のような熱狂を見せれば、誰からも笑いものになる。逆に、若者が老人のような気質を持っていれば、皆から驚きをもって敬われる。老いて若さを見せるのは不似合いだが、若くして老人のような気質を持つことは尊敬に値し、美しいことである。

聖ニコライには、パタラ市の司教である叔父がいた。その叔父は甥と同じ名前で、甥に敬意を表してニコライと名付けられたのである。この司教は、甥が徳ある生活に励み、　あらゆる面で世俗から距離を置いているのを見て、両親に対し、息子を神に仕えさせるよう助言し始めた。　両親はその助言に従い、自分たちが神からの賜物として授かったその子を、主にお捧げした。古の書物には、彼らが不妊であり、もはや子供を持つことを望んでいなかったが、数多くの祈りと涙、そして施しによって神から息子を授かり、今やその子を、彼を授けてくださった神に捧げることを惜しまなかったと記されている。　司教は、*「知恵の白髪と老いの年、汚れなき生涯」*（箴言4:9参照）を持つこの若き長老を受け入れ、彼を長老の位に叙任した。

聖ニコライを司祭に按手した際、聖霊の導きにより、教会にいた民衆に向かって、預言的にこう語った。

「兄弟たちよ、私は、地の上に昇り、悲しむ者たちにとって慈愛に満ちた慰めとなる新しい太陽を見る。　彼を牧者として迎えるにふさわしい羊の群れは幸いである。なぜなら、彼は迷える魂をしっかりと導き、敬虔の牧草地で彼らを養い、苦難や悲しみの中で慈悲深い助け手となるからである。

この預言は、後の物語から明らかなように、後に実際に成就した。

司祭の位を受けた聖ニコライは、労苦に労苦を重ねた。徹夜し、絶え間ない祈りと断食に身を捧げ、彼は、死すべき身でありながら、無形の存在に倣おうと努めた。このように天使に等しい生活を送り、日ごとに魂の美しさをますます花開かせていった彼は、教会を統率するのにふさわしい人物であった。　その頃、ニコライ司教は聖地巡礼のためにパレスチナへ赴きたいと願い、教会の統治を甥に委ねた。この神の司祭である聖ニコライは、叔父の地位を引き継ぎ、司教自身と同様に教会の務めを全うした。その頃、彼の両親は永遠の命へと旅立った。　両親の遺産を受け継いだ聖ニコライは、それを貧しい人々に分け与えた。彼は、はかない富には目を向けず、その増大を気にも留めなかった。むしろ、あらゆる世俗的な欲望を捨て去り、全力を尽くして唯一の神に身を捧げようと努め、次のように叫んだ。「詩篇24篇――　*「主よ、私はあなたに私の魂を捧げます」*。詩篇 142–*「あなたの御心を行うことを私に教えてください。あなたは私の神だからです」*；詩篇 21–*「私は母の胎内からあなたに委ねられました。母の胎内から、あなたは私の神です」*。

そして、彼の御手は困窮する者たちへと差し伸べられ、彼らに、水流が溢れ出る豊かな川のように、極めて豊かな施しを注ぎ出した。ここに、彼の多くの慈悲の行いのうちの一つがある。

パタラという町に、ある高貴で裕福な男が住んでいた。極度の貧困に陥り、彼はかつての地位を失ってしまった。この世の生活は移ろいやすいものだからである。この男には三人の娘がおり、彼女たちは皆、非常に美しかった。　必要なものをすべて失い、食べるものも着るものもない状態にな

ったとき、彼は極度の貧困ゆえに、娘たちを売春に差し出し、自宅を売春宿に変えて、その収入で生計を立て、自分と娘たちの衣服や食料を手に入れようと考えた。　ああ、極度の貧困とは、なんと不名誉な考えへと人を駆り立てることか！この不浄な考えを抱いた男は、すでにその邪悪な企てを実行に移そうとしていた。　しかし、人間が滅びるのを望まず、私たちの苦難の中で慈愛をもって助けてくださる全善なる主は、御自身の御心に適う者である聖ニコライ司祭の魂に善き考えを植え付け、秘密の啓示によって、魂が滅びようとしているその男の元へ彼を遣わし、貧困の中で慰めを与え、罪を犯すのを防ごうとされた。　聖ニコライは、その男の極度の貧困について聞き、神の啓示によって彼の邪悪な企みを知ると、彼に対して深い憐れみを感じ、自らの慈愛に満ちた手で、娘たちと共に彼を、まるで火の中から救い出すかのように、貧困と罪から救い出すことを決意した。　しかし、彼はその男に対して公然と善行を行うことを望まず、密かに寛大な施しを贈ることを企てた。　聖ニコライがこのように行動したのは、二つの理由があった。一方では、福音書の言葉（マタイ6章）「*人々の前で施しをするようなことがないように気をつけなさい*」に従い、虚栄に満ちた人間的な名声を自ら避けようとしたからである。

他方、かつては裕福であったが、今では極度の貧困に陥ったその男を傷つけたくなかったからである。なぜなら、富と名声から貧困へと転落した者にとって、施しを受けることがいかに辛く、屈辱的なことかを彼は知っていた。それは、かつての豊かさを思い起こさせるからである。　それゆえ、聖ニコライは、キリストの教えに従うのが最善だと考えた。「*あなたが施しをするときは、左の手が右の手のしていることを知らぬようにしなさい*」（マタイ6:6）。

彼は世間の名声をこれほどまでに避けていたため、恩恵を与えた相手からさえも、自分の正体を隠そうと努めた。彼は大きな金の袋を手に取り、真夜中にその男の家へ行き、窓からその袋を投げ入れると、急いで自宅へ戻った。 朝、その男は起き上がり、袋を見つけて紐を解いた。 の金を見たとき、彼は大きな恐怖に襲われ、自分の目を信じられなかった。どこからもこのような恩恵を受けるとは予想もしていなかったからだ。しかし、指で硬貨を数えてみると、目の前にあるのが確かに金であることを確信した。　心を躍らせ、この出来事に驚きつつ、彼は喜びの涙を流し、誰が自分にこのような恩恵を与えてくれたのかと長い間考え込んだが、思い当たる節はなかった。これを神の摂理の仕業だと考え、彼は心の中で恩人に絶えず感謝し、すべての人を慈しむ主を賛美した。　その後、彼は長女を嫁がせ、奇跡的に授かったその金を嫁入り道具として与えた。聖ニコライは、この男が自分の願い通りにしたことを知ると、彼を深く愛し、次女に対しても同様の慈しみを施すことを決意した。合法的な結婚によって、彼女をも罪から守ろうとしたのである。　最初のものと同じもう一つの金の袋を用意し、夜、誰にも知られぬよう、同じ窓からそれを夫の家の中に投げ入れた。朝起きてみると、貧しい男はまたしても自分の家に金があるのを見つけた。彼は再び驚き、地面にひれ伏して涙を流しながら、こう言った。

「慈悲深き神よ、我らの救いの築き手よ、御自身の血によって私を贖い、今や金によって私と子供たちの家を敵の罠から贖ってくださる方よ。どうかあなたご自身が、あなたの慈悲と、人を愛するあなたの慈愛の僕を私に示してください。　私たちを罪による滅びから守ってくださるこの世の天使を、私に示してください。そうすれば、私たちを苦しめる貧困から救い出し、邪悪な考えや意図から解放してくださる方が誰であるかを知ることができるでしょう。　主よ、あなたの慈しみにより、私にとって未知のあなたの聖徒の寛大な御手によって密かに行われる御業により、私は法に従って次女をも嫁がせることができ、それによって、すでに甚大な私の破滅を、不義の利益によってさらに増大させようとした悪魔の罠を免れることができます。

このように主に祈り、その恵みに感謝を捧げた後、その男は次女の結婚式を祝った。神を信頼して、父は、神が三女にも合法的な配偶者を与え、再び密かに恵みの御手によって、そのために必要な金を授けてくださるという揺るぎない希望を抱いていた。　誰が、どこから金を運んでくるのかを知るため、父は夜も眠らず、恩人を待ち伏せし、その姿を見ようと待ちわびていた。ほどなくして、

待ち望んでいた恩人が現れた。　キリストの聖人ニコライは、三度目も静かにやって来て、いつもの場所に立ち止まると、同じ窓に同じ金の袋を投げ入れ、すぐに自分の家へと急いだ。窓に投げ込まれた金の音が聞こえると、その男はできる限り速く、神の聖人の後を追って走り出した。　彼に追いつき、その徳と高貴な家柄から聖人であることを見抜くと、その男は聖人の足元にひれ伏し、その足を口づけしながら、聖人を「極限の破滅に瀕していた魂たちの救い主、助け手、そして救い主」と呼んだ。

「もし――」と彼は言った。「あなたの寛大さによって、慈悲深き主が私を救ってくださらなかったなら、この不幸な父は、とっくに娘たちと共にソドムの炎の中で滅びていたことでしょう。しかし今、私たちはあなたによって救われ、恐ろしい罪の堕落から免れたのです。

そして彼は、涙ながらに聖人に、このような言葉をさらに多く語った。聖人は彼を地面から立ち上がらせると、生涯を通じて、自分に起こったことを誰にも話さないという誓いを彼から取り付けた。さらに多くの有益な言葉を彼に告げた後、聖人は彼を自分の家へと送り出した。

神に愛されたこの聖人の数ある慈悲の行いのうち、私たちはただ一つだけを紹介した。それは、彼が貧しい人々に対してどれほど慈愛深かったかを知ってもらうためである。もし、彼が困窮している人々に対してどれほど寛大であったか、どれほど多くの飢えた人々を養い、どれほど多くの裸の人々に衣服を与え、どれほど多くの人々を高利貸しから買い戻したかを詳細に語ろうものなら、私たちの時間は到底足りなくなるだろうからである。

その後、聖ニコライ神父は、私たちの主なる神、イエス・キリストが御自身の清らかな足跡を残された聖地を拝観し、礼拝するために、パレスチナへ赴くことを望まれた。　船がエジプト沖を航行していた時、旅人たちは自分たちに何が待ち受けているのか知らなかったが、その中にいた聖ニコライは、まもなく嵐が吹き荒れることを予見し、同行者たちにこれを告げた。彼は、彼ら全員を海の深みに沈めるために、悪魔そのものが船に乗り込んできたのを見たと語ったのである。　まさにその瞬間、予期せず空は雲に覆われ、激しい嵐が海に恐ろしい波濤を巻き起こした。旅人たちは大きな恐怖に襲われ、救いを絶望し、死を覚悟して、海の深淵で滅びようとしている自分たちを助けてくれるよう、聖ニコラスに懇願した。

「もしあなた、神の御心にかなう者よ」と彼らは言った。「主への祈りによって私たちを助けてくださらなければ、私たちはすぐに死んでしまいます。」

聖人は彼らに勇気を奮い立たせ、神に希望を置き、疑いなく早急な救済を待つよう命じると、主に向かって熱心に祈り始めた。するとたちまち海は静まり、大いなる静寂が訪れ、皆の悲しみは喜びへと変わった。

喜びに満ちた旅人たちは、神とその御使いである聖ニコラスに感謝を捧げ、嵐の予言と悲しみの終焉に、二重の驚きを覚えた。その後、船員の一人がマストの頂上へ登らなければならなかった。そこから降りようとしたとき、彼は足を滑らせて、マストの頂上から船の中央へと転落し、即死して息絶えて横たわっていた。助けを求められる前からすでに助けようとしていた聖ニコライは、直ちに自らの祈りによって彼を蘇らせ、その男はまるで眠りから覚めたかのように立ち上がった。　その後、すべての帆を揚げ、旅人たちは順風に乗って無事に航海を続け、平穏にアレクサンドリアの岸に接岸した。そこで多くの病人や悪霊に取り憑かれた者を癒やし、悲しむ者たちを慰めた後、神の御心に適う者、聖ニコライは、再び予定された道筋に従ってパレスチナへと向かった。

聖地エルサレムに到着すると、聖ニコライはゴルゴタへと向かった。そこは、私たちの神であるキリストが、十字架の上でその清らかな御両手を広げ、人類に救いをもたらされた場所である。そこで、神に愛された聖人は、愛に燃える心から温かい祈りを捧げ、私たちの救い主に感謝を捧げた。

彼はすべての聖地を巡り、至る所で熱心な礼拝を捧げた。そして夜、祈りのために聖なる教会「[8644]」に入ろうとしたとき、閉ざされていた教会の扉が自ら開き、天の門さえも開かれた者に対して、妨げられることのない入り口を露わにした。　エルサレムにかなり長い間滞在した後、聖ニコライは荒野へ退くつもりでしたが、天からの神聖な声によって止められ、故郷へ戻るよう勧められました。主なる神は、すべてを私たちの益となるよう整えてくださる方であり、神の御心によりリキア都主教区を照らすべきその灯が、砂漠の奥深くに隠されたままであることを望まれなかった。船に乗り込んだ神の御使いは、船乗りたちと取り決め、故郷へと運んでもらうよう頼んだ。　しかし、船乗りたちは彼を騙そうと企み、船をリキアではなく、別の国へと向かわせた。埠頭を出航したとき、聖ニコライは船が別の航路を進んでいることに気づき、船乗りたちの足元にひれ伏して、リキアへ向かうよう懇願した。　しかし、彼らは彼の懇願に全く耳を貸さず、予定された航路を進み続けた。彼らは、神が御自身の御使いを見捨てないことを知らなかったのだ。すると突然、嵐が襲い、船を別の方向へと転じさせ、リキアの方角へと急速に運び去り、邪悪な船乗りたちに完全な破滅の脅威をもたらした。こうして神の力に導かれて海を渡り、聖ニコライはついに故郷に到着した。彼はその寛容さゆえに、悪意に満ちた敵たちに対して何の悪行も働かなかった。怒りを露わにすることも、一言たりとも非難することもなく、むしろ祝福を授けて彼らを自国へ帰した。　彼自身は、叔父であるパタラの司教によって設立され、「聖シオン」と名付けられた修道院を訪れ、そこで修道者たち全員にとって歓迎すべき客となった。　彼らは彼を神の天使として深い愛をもって迎え入れ、その神に霊感を受けた説教に心を満たされ、神がその忠実なしもべに授けた善良な品性を模範とし、天使のような彼の生き方から教訓を得た。　この修道院で、静寂に満ちた生活と、神を想うための穏やかな安息の地を見出した聖ニコライは、残りの生涯をここで尽きることなく過ごすことを望んでいた。　しかし、神は彼に別の道を示された。なぜなら、世界が豊かになるべきであるような、この豊かな美徳の宝が、まるで地に埋められた宝のように修道院に閉じ込められたままになることを望まず、むしろそれがすべての人々に開かれ、多くの魂を救う霊的な取引が行われることを望まれたからである。　そしてある日、聖人は祈りを捧げていると、天から声が聞こえてきた。

「ニコライよ、もしあなたがわたしから冠を授かりたいと望むなら、行って、世のために尽力しなさい。」

これを聞いた聖ニコライは恐怖に襲われ、この声が自分に何を望み、何を求めているのか考え込んだ。すると再び声が聞こえてきた。

「ニコライよ、あなたがわたしが待ち望む実を結ぶべき畑はここではない。さあ、振り返って世へと行きなさい。そうすれば、あなたを通してわたしの御名が栄光を受けるであろう。」

そこで聖ニコライは、主が彼に沈黙の修行を捨て、人々の救いのために奉仕へと向かうことを求めておられるのだと悟った。

彼は、故郷であるパタルという町へ向かうべきか、それとも別の場所へ向かうべきか、考え始めた。同胞たちの間で虚栄的な名声を避けるため、またそれを恐れて、彼は誰も自分のことを知らない別の町へ身を隠すことを企てた。　そのリキア地方には、かつてリキア全土の大主教座であった栄えある都市ミラがあった[8645]。聖ニコライは、神の摂理に導かれて、この都市へと向かった。ここでは彼は誰にも知られておらず、頭を休める場所もなく、物乞いのようにこの都市に滞在していた。主の家においてのみ、彼は安息を見出し、神を唯一の拠り所としていた。その頃、その町の司教であ

[8644] それはシオン山にある小さな教会で、当時、異教徒が住み、「エリア・カピトリナ」と呼ばれていたエルサレム全市で唯一の教会であった。伝承によれば、この教会は、主イエス・キリストが聖体拝領の秘跡を制定された家、そして後に使徒たちの上に聖霊が降臨した場所に建てられたものである。

[8645] ミリス（現在のミリ、トルコ語ではデムブレ）は、古代リキアの主要都市であり、海に近いアンドラク川沿いに位置し、その河口にはアンドリアケ港があった。

るヨハネ――リキア全土の大司教であり首席司教――が世を去った。そのため、空席となった司教座にふさわしい人物を選出するため、リキアのすべての司教たちがミレに集まった。　ヨハネの後継者として、尊敬され、分別のある多くの人物が候補に挙がっていた。選出者たちの間には大きな意見の相違があり、そのうちの何人かは、神聖な熱意に駆られて、こう言った。

「この座への司教の選出は、人間の決定に委ねられるものではなく、神の御計画によるものである。私たちには、主ご自身が、誰がそのような聖職に就き、リキア全土の牧者となるにふさわしいかを明らかにしてくださるよう、祈りを捧げるべきである。」

この賢明な助言は全員の賛同を得て、皆は熱心な祈りと断食に専念した。　主は、御自身を畏れる者たちの願いを叶えてくださる方であり、司教たちの祈りに耳を傾け、その中での最年長の者に御自身の御心を示された。その司教が祈りを捧げていると、彼の前に光のような姿の御方が現れ、夜になって教会の扉へ行き、誰が誰よりも先に教会に入るかを観察するよう命じられた。

「この人こそ、」と主は言われた、「わが選んだ者である。彼を敬意をもって迎え入れ、大司教に任命せよ。この人の名はニコライである。」

この神聖な啓示について、司教は他の司教たちに告げると、彼らはこれを聞いて、さらに熱心に祈りを捧げた。　啓示を受けた司教は、幻視で示された場所に立ち、待ち望んでいた人物の到来を待った。朝の礼拝の時間になると、聖ニコライは御霊に導かれて、誰よりも先に教会へやって来た。というのも、彼は真夜中に起きて祈りを捧げ、他の人々より早く朝の礼拝に参列するのが習慣だったからである。　彼が玄関ホールに入った途端、啓示を受けた司教は彼を呼び止め、名前を尋ねた。聖ニコライは黙っていた。司教は再び同じことを尋ねた。聖人は穏やかに、そして静かにこう答えた。

「私の名はニコライです。私はあなたの聖職の僕でございます、司教様。」

敬虔な司教は、その簡潔で謙虚な言葉を耳にすると、幻視の中で告げられた「ニコライ」という名そのものからも、またその謙虚で穏やかな答えからも、目の前にいるのが、神がミール教会の首席司教となることを御心に留められたまさにその人物であることを悟った。　なぜなら、彼は聖書から、主が柔和で、沈黙を守り、神の言葉の前に畏れおののく者を顧みられることを知っていたからである。彼は、あたかもある種の秘められた宝を手に入れたかのように、大いなる喜びに満たされた。そして直ちに聖ニコラオスの手を取り、彼にこう言った。

「私について来なさい、わが子よ。」

彼が聖人を威厳をもって司教たちの元へ連れて行くと、司教たちは神聖な甘美さに満たされ、神ご自身が指し示された人物を見出したという霊的な慰めを得て、彼を教会へと導いた。その噂は至る所に広まり、鳥よりも速く、数え切れないほどの人々が教会へと集まってきた。　幻視を授かった司教は、民衆に向かってこう叫んだ。

「兄弟たちよ、聖霊ご自身が油を注ぎ、あなたがたの魂の世話をお任せになった、この牧者を受け入れなさい。　彼は人間の集まりによって任命されたのではなく、神ご自身によって任命されたのである。今や、我々は望んでいた者を手にし、探し求めていた者を見つけ、受け入れた。彼の統治と導きのもと、我々は、神の現れと啓示の日に神の御前に立つという希望を失うことはないだろう。

民衆全体が神に感謝を捧げ、言葉に尽くせぬ喜びに包まれました。聖ニコライは人々の称賛に耐えかね、長い間聖職の位を受けることを拒み続けましたが、司教会議と民衆全体の熱心な懇願に屈し、自らの意志に反して主教の座に就きました。　彼をそうさせたのは、大司教ヨハネの死の前から彼に与えられていた神聖な幻視であった。この幻視について、コンスタンティノープル総主教聖メフォディオスが語っている。 ある夜――と彼は語る――聖ニコライ は、御自身の栄光に満ちた救い主が目の前に立ち、金と真珠で飾られた福音書を差し出しているのを見た。　聖ニコライは、自分の反対側に、聖母マリアが司教のオモフォルを彼の肩にかけられているのを見ました。この幻視から数日後、ミール大司教ヨハネが亡くなりました。

この幻視を思い返し、そこに神の明らかな御好意を見出し、また主教会議の熱心な懇願を拒むことを望まなかった聖ニコライは、その信徒たちを受け入れた。主教会議は教会の聖職者全員と共に彼への叙階式を執り行い、神から授けられた牧者、キリストの聖人ニコライを喜び祝って、明るく祝賀した。　このようにして、神の教会は、隠されたままにされることなく、彼にふさわしい司教および牧者の地位に据えられた、輝かしい灯火を受け入れたのである。この偉大な位階に就いた聖ニコライは、真理の言葉を正しく説き、信仰の教えにおいて信徒たちを賢明に導いた。

牧会活動のまさに始まりに、この神に愛された聖人は、こう自問した。

「ニコライよ！　あなたが受けた聖職は、あなたに新たな生き方を求めている。それは、自分のためではなく、他者のために生きるということだ。」

自分の霊的な羊たちに美徳を教えたいと願った彼は、もはや以前のように、自らの徳高い生き方を隠すことはしませんでした。というのも、以前は、ただ神のみがその功績をご存知である中、密かに神に仕えて人生を過ごしていたからです。　しかし、司教の聖職に就いた今、彼の生活はすべての人々に公開されるようになった。それは人々の前で虚栄心を満たすためではなく、彼らの益となり、神の栄光を広めるためであり、福音書の言葉（マタイ5章）が成就するためであった。*「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。そうすれば、人々はあなたがたの善行を見て、天におられるあなたがたの父を賛美するであろう」*。

聖ニコライは、その善行によって、いわば自分の羊の群れにとっての鏡であり、使徒の言葉（テモテへの手紙第一4章）にあるように、*「言葉、生活、愛、霊、信仰、清さにおいて、信徒たちの模範となりなさい」*というものでした。

彼は気性が穏やかで悪意がなく、謙虚な心を持ち、あらゆる虚栄を避けていました。彼の服装は質素で、食事は断食食であり、それは常に一日に一度、それも夕方にのみ摂っていました。彼は一日中、その聖職にふさわしい務めに従事し、訪ねてくる人々の願いや必要に耳を傾けていました。彼の家の扉は誰に対しても開かれていた。彼は誰に対しても親切で親しみやすく、孤児たちにとっては父であり、貧しい人々にとっては慈悲深い施し手であり、泣く者たちにとっては慰め手であり、不当な扱いを受けた者たちにとっては助け手であり、すべての人々にとっては偉大な恩人であった。教会の運営を補佐するため、彼は高潔で賢明な二人の助言者を選び、彼らに長老の位を授けた。彼らはギリシャ全土で名高い人物、パヴェル・ロドススとテオドロス・アスカロンスであった。

こうして、聖ニコライは、彼に託されたキリストの「言葉の羊」の群れを牧した。しかし、嫉妬深い狡猾な蛇は、神の僕たちへの攻撃を決してやめることなく、人々の間で敬虔さが栄えることを決して許さず、不義な王ディオクレティアヌスとマクシミアヌスを通じて、キリストの教会への迫害を仕掛けた[8646]。まさにその頃、これらの皇帝から帝国全土に向けて、キリスト教徒はキリストを捨てて偶像を崇拝せよという勅令が出された。この勅令に従わない者に対しては、投獄や過酷な拷問によって服従を強要し、最終的には死刑に処すよう命じられた。　闇と不義の熱心な擁護者たちの執拗な働きかけにより、この悪意に満ちた嵐はまもなくミールスクの街にも到達した。その街で全キリスト教徒の指導者であった聖ニコライは、自由かつ大胆にキリストの教えを説き、キリストのために苦難を受ける覚悟を固めていた。　そのため、彼は不敬虔な拷問者たちに捕らえられ、多くのキリスト教徒と共に牢獄に投じられた。そこで彼はかなりの期間を過ごし、激しい苦しみ、飢えと渇き、そして牢獄の狭さを耐え抜いた。　彼は仲間の信徒たちを神の言葉で養い、敬虔の甘い水で潤した。彼らの中にキリストなる神への信仰を確固たるものとし、揺るぎない土台の上に彼らを強め、キリストを告白することに堅く立ち、真理のために熱心に苦難に耐えるよう説き続けた。　その間、キリスト教

[8646] ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝（284年から305年）は共同統治者であり、前者は東方、後者は西方で統治した。ディオクレティアヌスによって引き起こされた迫害は、とりわけ残酷なものだった。　それはニコメディアの町で始まり、復活祭の当日、教会で最大2万人のキリスト教徒が焼き殺された。

徒たちには再び自由が与えられ、敬虔さは暗い雲の後の太陽のように輝き、嵐の後の静かな涼しさのようなものが訪れた。　なぜなら、人を愛するキリストは、ご自身の民に目を留め、不義な者たちを滅ぼし、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスを王座から引きずり下ろし、ギリシャの不義を熱心に擁護する者たちの権力を打ち砕かれたからである。　主は、ローマの支配権を委ねることを御心に適ったコンスタンティヌス大帝（　）に御自身の十字架を顕現させ、主なる神は御自分の民のために*「救いの角」を「立てられた」*（ルカ1:69）。コンスタンティヌス帝は、唯一の神を知り、その神にすべての希望を託し、尊き十字架の力によってすべての敵を打ち破り、偶像崇拝の神殿を破壊し、キリスト教の教会を再建するよう命じることで、先王たちの虚しい希望を打ち砕いた。　彼は、キリストのために牢獄に閉じ込められていた者たちをすべて解放し、彼らを勇敢な戦士として称え、大いなる賛辞を捧げた上で、これらのキリストの殉教者たちを、それぞれ故郷へと帰した。その頃、ミレの町もまた、殉教者の冠にふさわしい偉大な司教ニコライを、再びその牧者として迎え入れた。　神の恵みをその内に宿していた彼は、以前と同様に、信者だけでなく異教徒までも含め、人々の情欲や病を癒やした。彼の中に宿る神の偉大な恵みのゆえに、多くの人々が彼を称え、驚嘆し、皆が彼を愛した。　なぜなら、彼は心の清らかさで輝き、神のあらゆる賜物に恵まれ、敬虔さと真実をもって主に仕えていたからである。当時、まだ多くのギリシャ式の神殿が残っており、不信心な人々は悪魔の唆しによってそこに引き寄せられ、ミールスの住民の多くは滅びの中にいた。　至高の神の司教は、神への熱意に燃え、これらすべての場所を巡り、偶像崇拝の神殿を破壊して灰と化し、自分の羊の群れを悪魔の汚れから清めた。　このように悪の霊たちと戦いを繰り広げながら、聖ニコライはアルテミスの神殿[8647]　へとたどり着いた。その神殿は極めて巨大で豪華に装飾されており、悪霊たちにとって好ましい住処となっていた。　聖ニコライはこの不浄な神殿を破壊し、その高い建物を地面と同じ高さまで平らにし、地中にあった神殿の土台そのものを空中に吹き飛ばした。彼は神殿そのものよりも、むしろ悪霊たちに対してより激しく立ち向かったのである。　悪霊たちは、神の御心にかなう者の到来に耐えかね、悲痛な叫び声を上げたが、無敵のキリストの戦士である聖ニコライの祈りの武器に打ち負かされ、自らの住処から逃げ去らざるを得なかった。

敬虔なコンスタンティヌス帝は、キリストの信仰を確立しようと願い、ニカイア市で全地公会議を招集するよう命じた。　公会議の聖なる父たちは正しい教義を明文化し、アリウス派の異端およびそれと共にアリウス自身を呪いとした[8648]　。そして、神の御子を父なる神と同等かつ同質であると告白し、聖なる神聖使徒教会に平和を取り戻した。 318人の公会議の聖父たちの中には、聖ニコライもいた。彼はアリウスの不敬虔な教えに勇敢に立ち向かい、公会議の聖父たちと共に、正教の信仰の教義を確立し、すべての人々に伝えた。　スタディオス修道院の修道士ヨハネは、聖ニコライについて、預言者エリヤのように神への熱意に燃え、公会議において言葉だけでなく、頬を打つという行動によっても、異端者アリウスを恥じ入らせたと伝えている。　公会議の聖父たちは聖人に憤りを覚え、その大胆不敵な行為を理由に、彼から司教の位を剥奪することを決定した。しかし、我らの主イエス・キリストご自身と、その至福の御母は、天上から聖ニコライの偉業を見下ろし、その勇敢な行いを是認し、その神聖な熱意を称賛された。　というのも、公会議の聖なる父たちのうち数名は、聖ニコライ自身が司教に叙任される以前から授かっていたのと同じ幻視を、この時受けたからである。彼らは、聖ニコライの片側に福音書を持った主キリストご自身が、もう片側にオモフォロンを携えた至

[8647] アルテミス――別名ダイアナ――は、月を象徴し、森と狩猟の守護神とみなされていた有名なギリシャの女神である。

[8648] アリウスはイエス・キリストの神性を否定し、キリストが父なる神と同質であることを認めなかった。 使徒同等の皇帝コンスタンティヌスによって招集された第1回全地公会議は、325年に皇帝自らが議長を務めて開催され、教会において「使徒信条」が採用された。この信条は、その後、381年にコンスタンティノープルで開催された第2回全地公会議において補足・完成された。

聖なる聖母マリアが立っており、聖ニコライに、彼から剥奪されていた司教の位を示す印を授けているのを見たのである。　このことから、聖人の大胆な行動が神に喜ばれるものであると悟った公会議の聖父たちは、聖人を非難することをやめ、彼を偉大な神の御心にかなう者として敬意を表した[8649]。公会議から自分の信徒たちの元へ戻った聖ニコライは、彼らに平和と祝福をもたらした。　蜜を滴らせるようなその口調で、彼は民全体に健全な教えを説き、誤った考えや思惑を根絶やしにし、そして、凶暴で無情、悪意に染まった異端者たちを糾弾して、キリストの羊の群れから追い払った。　賢明な農夫が、脱穀場や選別場であらゆるものを清め、最良の穀粒を選び出し、籾殻を振り落とすように、 それと同様に、キリストの脱穀場において で賢明に働く聖ニコライは、霊的な穀倉を良き実で満たし、異端の惑わしの籾殻を吹き飛ばして、主の小麦から遠くへ払い除けた。それゆえ、聖なる教会は彼を、アリウス派の籾殻のような教えを吹き飛ばす「鍬」と呼んでいるのである。　そして、彼はまことに世の光であり、地の塩であった。なぜなら、その生涯は輝かしく、その言葉は知恵の塩で味付けられていたからである。この良き羊飼いは、自分の群れを深く慈しみ、あらゆる必要に配慮し、霊的な牧草地で養うだけでなく、肉体の糧についても気遣った。

ある時、リキア地方で大飢饉が起こり、ミラスの町では食糧が極度に不足していた。　飢えで死にゆく不幸な人々を憐れみ、神の司教は夜、夢の中でイタリアにいたある商人の前に現れた。その商人は船いっぱいに小麦を積み込み、他国へ航海しようとしていた。　聖人は彼に三枚の金貨を担保として渡し、ミラスへ航海してそこで小麦を売るよう命じた。目を覚まして手に金貨があるのを見つけた商人は、金貨という奇跡的な現象を伴うそのような夢に驚き、恐怖に襲われた。　商人は聖人の命令に背くことをためらい、ミレの町へ向かい、住民たちに穀物を売り尽くした。その際、彼は夢の中で聖ニコラオスが現れたことを住民たちに隠さなかった。　飢えの中でこのような慰めを得て、商人の話を聞いた市民たちは、神に栄光と感謝を捧げ、彼らの奇跡的な糧の与え手である偉大なる司教ニコラオスを称えた。

その頃、偉大なるフリギアで反乱が起きた。これを知ったコンスタンティヌス帝は、反乱の地を鎮めるため、三人の軍司令官とその軍勢を派遣した。彼らはネポティアン、ウルス、エルピリオンの各軍司令官であった。　彼らは急ぎ足でコンスタンティノープルを出航し、リキア教区にある「アドリア海沿岸」と呼ばれるある港に停泊した。そこには町があった。激しい波浪が航行の妨げとなったため、彼らはこの港で天候が落ち着くのを待つことにした。　停泊中、一部の兵士たちは必要な物資を購入するために上陸する際、多くの物を強引に奪い取っていた。このようなことが頻繁に起こったため、その町の住民たちは憤りを募らせ、その結果、「プラコマタ」と呼ばれる場所で、住民たちと兵士たちの間で論争や争い、罵り合いが繰り広げられるようになった。　このことを知った聖ニコライは、内紛を収めるために自らその町へ向かうことを決めた。彼の到来を耳にした市民たちは、将校たちと共に彼を出迎え、頭を下げて敬意を表した。　聖人は将帥たちに、どこから来てどこへ向かうのかと尋ねた。彼らは、フリギアで発生した反乱を鎮圧するため、王から派遣されたのだと答えた。聖人は、兵士たちを服従させ、民を虐げないようにと諭した。　その後、聖人は軍司令官たちを街に招き入れ、温かくもてなした。軍司令官たちは、過ちを犯した兵士たちを懲戒し、騒動を鎮めた上で、聖ニコラオスから祝福を受けた。その最中、ミールから数人の市民が、嘆き悲しんでやって来た。　聖人の足元にひれ伏し、彼らは不当な扱いを受けた人々を保護してほしいと懇願し、涙ながらに

[8649] A. N. ムラヴィエフの証言によれば、ニカイアでは今日に至るまで、トルコ人の間でもこの伝説が語り継がれている。同市の射撃口の一つには、聖ニコラオスの牢獄が示されている。　伝承によれば、彼は公会議でアリウス派を論破したためにここに投獄され、天からの裁きによって無罪が証明されるまで、鎖で縛られたまま拘束されていたという。その裁きは、聖人のイコンに描かれているように、福音書とオモフォルの出現によって示された（『東方からの手紙』、SPV. 1851年、第1部、106–107頁）に記されているように、福音書とオモフォルの出現によって示された天の裁きにより、無罪が証明されるまで、鎖で縛られたまま収監されていた。

こう語った。「あなたが不在の間、統治者エウスタフィオスは、嫉妬深く邪悪な者たちに買収され、何の罪もない私たちの町の三人の男を死刑に処してしまったのです。」

「私たちの町全体が」と彼らは言った。「嘆き、泣き、あなたの帰還を待ち望んでいます、大主教様。もしあなたが私たちと一緒にいたなら、総督はこのような不当な判決を下すことなどできなかったでしょう。」

これを聞いた神の司教は心を痛め、地方長官たちに付き添われて、直ちに旅立った。その地、通称「レフ」に到着すると、聖人はある旅人たちに会い、死刑判決を受けた男たちについて何か知らないかと尋ねた。彼らは答えた。

「私たちは、処刑場へと連行される彼らを、カストルとポルックスの野原に置いてきました。」

聖ニコライは、あの男たちの不当な死を阻止しようと、足早に歩みを進めた。処刑場に着くと、そこには大勢の群衆が集まっているのが見えた。両手を十字に縛られ、顔を覆われた死刑囚たちは、すでに地面にひれ伏し、むき出しの首を伸ばして、剣の一撃を待っていた。　聖人は、厳格で狂気じみた処刑人がすでに剣を抜き放っているのを見た。その光景は、すべての人を恐怖と悲しみに陥れた。　聖人は、柔和さと激しさを併せ持ち、人々の間を堂々と通り抜け、何の恐れもなく処刑人の手から剣を奪い取り、それを地面に投げ捨て、そして死刑囚たちの縛りを解いた。　彼はこれらすべてを大いなる大胆さをもって成し遂げ、誰も彼を止めることはできなかった。なぜなら、彼の言葉には威厳があり、その行動には神の力が現れていたからである。彼は神の前でも、すべての人々の前でも偉大であった。　死刑を免れた男たちは、死の淵から思いがけず生へと引き戻されたことを悟り、熱い涙を流し、喜びの叫び声を上げた。そして、そこに集まった民衆全員が、自分たちの聖人に感謝の祈りを捧げた。　ここに総督エウスタフィオスも到着し、聖人に近づこうとした。しかし、神の御心に適う者は軽蔑の眼差しで彼から背を向け、彼が足元にひれ伏すと、彼を突き放した。　聖ニコライは、彼に神の報復を呼びかけ、不正な統治に対する苦しみで脅し、その行いを王に告げると約束した。　良心の呵責に苛まれ、聖人の脅しに怯えた統治者は、涙ながらに慈悲を請うた。自身の不正を悔い改め、偉大なる父ニコライとの和解を願って、彼は罪を都市の長老たち、シモニデスとエウドクシオスに押し付けた。　しかし、その嘘は露見せざるを得なかった。聖人は、統治者が金で買収され、無実の人々を死刑に処したことをよく知っていたからである。統治者は長い間、赦しを懇願し続け、彼が深い謙虚さと涙をもって自らの罪を認めたとき、初めてキリストの御心に適う聖人は彼に赦しを与えた。

一連の出来事を目の当たりにした、聖人と共に来た軍司令官たちは、この偉大なる神の司教の熱意と慈愛に驚嘆した。聖人の聖なる祈りを授かり、旅路への祝福を受けた彼らは、王から下された命令を遂行するため、フリギアへと向かった。　反乱の現場に到着すると、彼らは素早くこれを鎮圧し、王の命を果たして喜びをもってビザンティウムへ戻った。王とすべての貴族たちは彼らに多大な称賛と栄誉を捧げ、彼らは王の評議会に参加する栄誉に浴した。しかし、悪意ある者たちは、将軍たちのそのような栄光を妬み、彼らに対して敵意を抱いた。　彼らに悪意を抱いた彼らは、都市の統治者エウラヴィオスの元へ赴き、その男たちを誹謗中傷してこう言った。

「総督たちの助言は良きものではありません。私たちが聞いたところによると、彼らは新しい制度を導入し、王に対して悪事を企んでいるのです。」

統治者を味方につけるため、彼らは彼に大量の金を贈った。　統治者はそのことを王に報告した。これを聞いた王は、彼らが密かに逃亡して邪悪な企てを実行するのではないかと恐れ、何の調査もせずに、その地方総督たちを牢獄に投獄するよう命じた。監禁生活に苦しみながらも自身の無実を自覚していた地方総督たちは、なぜ自分たちが牢獄に放り込まれたのか理解に苦しんでいた。　しばらくして、誹謗者たちは、自分たちの誹謗中傷や悪意が露見し、自分たちが被害を受けるのではないかと恐れ始めた。そこで彼らは総督のもとへ赴き、あの男たちをこれ以上長く生かしておかず、速や

かに死刑に処すよう熱心に懇願した。金への欲望という罠に絡め取られた総督は、約束したことを最後までやり遂げざるを得なかった。　彼は直ちに王のもとへ赴き、悪の使者として、陰鬱な表情と悲しげな眼差しで王の前に現れた。同時に、彼は王の命を深く案じ、忠実に仕えていることを示そうとした。無実の人々に対して王の怒りを煽ろうと、彼は諂いと狡猾さを交えた言葉を並べ立て、こう言った。

「王よ、牢獄に閉じ込められた者たちは、誰一人として悔い改めようとはしません。彼らは皆、邪悪な企みに固執し、あなたに対する陰謀を企て続けています。ですから、彼らが私たちに警告したり、総督たちやあなたに対して企てた邪悪な計画を遂行したりすることがないよう、直ちに彼らを拷問にかけるよう命じてください。」

そのような言葉に動揺した王は、直ちに総督たちを死刑に処した。しかし、すでに夕方であったため、処刑は翌朝まで延期された。このことを牢屋の看守が知った。罪のない者たちに降りかかるこの災難を思うと、彼は人知れず多くの涙を流し、総督たちの元へ行ってこう言った。

「私にとって、あなた方を知らず、あなた方との楽しい会話や食事を共にしなかった方が、むしろ良かったでしょう。そうすれば、あなた方との別れも容易に受け入れられ、あなた方に降りかかった災難をこれほどまでに心から悲しむこともなかったでしょう。朝が来れば、私たちには最後にして恐ろしい別れが訪れます。　私はもう、愛おしい皆様のお顔を見ることも、お声を聞くこともできなくなるでしょう。王が皆様を処刑するよう命じられたからです。まだ時間があり、死が皆様の意思表明を妨げていないうちに、ご財産をどう処分すべきか、私に遺言を残してください。

彼は嗚咽を漏らしながら言葉を途切れさせていた。自らの恐ろしい運命を知った将帥たちは、衣服を引き裂き、髪を引きむしりながら、こう叫んだ。

「いったいどの敵が我々の命を妬んだというのか。なぜ我々は、まるで悪人のように死刑を宣告されなければならないのか。我々は一体何をしたというのか。それゆえに死に値するほどの罪を犯したのか？」

そして彼らは、親族や友人の名を挙げ、神ご自身を証人として、自分たちは何の悪も犯していないと訴え、苦々しく泣き崩れた。　その中の一人、ネポティアンという者は、聖ニコラオスがミラスに現れ、輝かしい助け手であり、慈愛に満ちた守護者として、三人の男を死から救ったことを思い出した。そして、将校たちはこう祈り始めた。

「ニコライの神よ、三人の男を不当な死から救われた方よ、今こそ私たちにも御目を向けてください。人間からは助けを得ることができません。私たちに大きな災いが降りかかり、この災難から救い出してくれる者は誰もいません。　私たちの声は、魂が肉体から離れる前に途絶え、舌は心の悲しみの炎に焼かれて乾ききっており、あなたに祈りを捧げることもできません。詩篇78篇：*「どうか、あなたの恵みが　私たちに速やかに先立ってくださいますように。私たちはひどく衰え果てているからです*」。　明日、彼らは私たちを殺そうとしています。どうか急いで私たちを助けに駆けつけ、罪のない私たちを死から救い出してください。

御自身を畏れる者たちの祈りに耳を傾け、父として御自身の子供たちに恵みを注がれる主なる神は、死刑判決を受けた者たちを助けるために、御自身の聖なる御使い、偉大なる大司教ニコライを遣わされました。その夜、眠りの中、キリストの聖人が王の前に現れ、こう言いました。

「急いで起き上がり、牢獄で苦しんでいる地方総督たちを解放しなさい。彼らはあなたに誣告され、無実の罪で苦しんでいるのだ。」

聖人は王に事件の全容を詳しく説明し、こう付け加えた。

「もしあなたが私の言うことを聞かず、彼らを釈放しなければ、私はフリギアで起きたような反乱をあなたに対して起こし、あなたは悲惨な死を遂げることになるだろう。」

そのような大胆不敵な言葉に驚いた王は、この男がどうして夜中に内殿に踏み込むことを敢えてしたのかと考え込み、彼にこう言った。

「お前は一体何者だ。我々や我が王国に脅しをかけるなど、よくもまあそんなことが言えるものだ」

すると、その男は答えた。

「私の名はニコライ。ミール大主教区の大主教である。」

王は当惑し、立ち上がって、この幻視が何を意味するのか考え込んだ。その間、同じ夜に聖人は統治者エウラヴィウスの元にも現れ、王に告げたのと同じことを、彼にも告げた。眠りから飛び起きたエウラヴィウスは恐怖に襲われた。　彼がその幻について考えを巡らせている間、王から遣わされた使者がやって来て、王が夢で見たことを彼に伝えた。急いで王のもとへ駆けつけた総督は、自分の幻について王に語り、二人は同じものを見たことに驚いた。王は直ちに、監獄から総督たちを連れてくるよう命じ、彼らにこう言った。

「どのような魔術を用いて、我々にこのような夢を見させたのか？　我々の前に現れた男は激しく怒り、まもなく我々に戦いを仕掛けると豪語して脅してきた。」

総督たちは戸惑いながら互いに顔を見合わせ、何も知らないまま、困惑した眼差しで顔を見合わせた。それを見た王は心を和らげ、こう言った。

「いかなる悪も恐れるな、真実を語れ。」

彼らは涙とすすり泣きながら答えた。

「王よ、我らはいかなる魔術も知らず、あなたの王国に対していかなる悪も企てたことはありません。その証人として、全知の主ご自身がいてくださいますように。もし我らがあなたを欺いており、あなたが我らについて何か悪いことを知ったならば、我らにも、我らの子孫にも、いかなる慈悲も容赦もありませんように。」　私たちは先祖から、王を敬い、何よりもまず王に忠実であるよう教えられてきました。今こうして、私たちは忠実に王の命を守り、私たちの身分にふさわしく、王からの命じられたことを揺るぎなく遂行してまいりました。　熱心に陛下にお仕えする中で、我らはフリギアの反乱を鎮圧し、内紛を終わらせ、その行動そのもので我らの勇気を十分に証明しました。これは、その事情をよく知る者たちが証言している通りです。　かつてあなたの権威は私たちに栄誉を惜しみなく与えてくださいましたが、今やあなたは激しい怒りを抱いて私たちに牙をむき、容赦なく苦痛に満ちた死を宣告されました。それゆえ、王よ、私たちはただあなたへの献身ゆえにのみ苦しんでいると考えます。その献身ゆえに私たちは裁かれ、期待していた栄光や栄誉の代わりに、死の恐怖に襲われているのです。

こうした言葉に、王は心を動かされ、自身の軽率な行いを悔い改めた。なぜなら、彼は神の裁きを前に戦慄し、他者にとっての立法者であるにもかかわらず、自ら不法な裁きを下そうとしていたことに気づき、王の紫の衣を恥じたからである。彼は死刑囚たちを慈愛に満ちた眼差しで見つめ、穏やかに彼らと語り合った。　その言葉を感動して聞いていた将帥たちは、ふと、王の隣に聖ニコライが座り、身振りで彼らに赦しを約束しているのを見た。王は彼らの話を遮り、尋ねた。

「このニコライとは誰か。彼はどのような人々を救ったのか。そのことを私に語れ。」

ネポティアンは順を追ってすべてを語った。すると王は、聖ニコライが神の偉大な御使いであることを知り、その大胆さと、不当な扱いを受けた者たちを守るための並外れた熱意に驚き、その地方長官たちを釈放してこう言った。

「あなたがたに命を授けるのは私ではなく、あなたがたが助けを求めた主の偉大な僕、ニコライである。彼のところへ行き、感謝を捧げよ。そして、私があなたの命令を果たしたことを、私からも伝えてほしい。そうすれば、キリストの聖人が私に怒りを抱くことはないだろう。」

そう言いながら、王は彼らに金の福音書、宝石で飾られた金の香炉、そして二つの燭台を手渡し、これらすべてをミールスクの教会に捧げるよう命じた。奇跡的な救いを受けた軍司令官たちは、直ちに旅立った。　ミールに到着すると、彼らは再び聖人にお目にかかれることを喜び、歓喜した。彼らは聖ニコライに、その奇跡的な助けに対して深い感謝を捧げ、詩篇34篇を詠んだ。*「主よ！　弱*

き者を強き者から、貧しき者と乞食をその略奪者から救い出されるあなたに、誰が比肩し得ようか？」

彼らは貧者や困窮者たちに惜しみない施しを分け与え、無事に家路についた。

これこそが、主が御自身の御心に適う者を高められた神の御業である。　その栄光は、まるで翼に乗ったかのように至る所に広まり、海を越えて全宇宙に広がった。そのため、全能の主から授かった恵みによって偉大な司教ニコライが成し遂げた、偉大で驚くべき奇跡を知らない場所など、どこにもなかった。

ある日、エジプトからリキア地方へと船で向かっていた旅人たちが、激しい荒波と嵐に見舞われた。帆はすでに暴風で引き裂かれ、船は波の衝撃で激しく揺さぶられ、皆、救われることを絶望していた。　その時、彼らは偉大なる大司教ニコライのことを思い出した。彼らは彼に会ったことは一度もなく、ただ「苦難の中で彼を呼び求める者すべてに、速やかに助けを差し伸べる」という噂を耳にしていただけだった。彼らは彼に祈りを捧げ、助けを求めて呼びかけた。すると、聖人はたちまち彼らの前に現れ、船に乗り込み、こう言った。

「あなたがたが私を呼び求めたので、助けに参りました。恐れることはありません！」

皆が、彼が舵を握り、船を操り始めたのを見た。　かつて私たちの主イエス・キリストが風と海を静められたように（マタイ8:26）、聖人は主の御言葉――ヨハネ14章*「わたしを信じる者は、わたしが行う業を、その者も行うであろう」*――を心に留め、直ちに嵐を静めるよう命じました。

かくして、主の忠実なしもべは海と風にも命じ、それらは彼に従った。その後、旅人たちは順風に乗ってミラムという町に上陸した。　岸に上がると、彼らは自分たちを災いから救ってくれた人物に会いたいと願い、町へと向かった。教会へ向かう途中で聖人に遭遇し、彼こそが自分たちの恩人であると気づくと、その足元にひれ伏して感謝の意を表した。　尊きニコライは、彼らを災いと死から救っただけでなく、彼らの魂の救いにも心を配った。その透視の力により、彼は霊的な目で、人間を神から遠ざけ、神の戒めを守ることを妨げる淫行の罪を彼らの中に見抜き、こう言った。

「子らよ、どうか懇願する。心の中で深く考え、主を喜ばせるために、心と思いを改めなさい。たとえ多くの人々から身を隠し、自分たちを義人だと思い込んでいたとしても、神から身を隠すことなどできないのだから。　それゆえ、あらゆる熱意をもって、魂の聖さと体の清さを保つよう努めなさい。神聖な使徒パウロがこう言っているように、*「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の御霊があなたがたの中に住んでおられることを知らないのか。もしだれかが神の神殿を破壊するなら、神はその人を罰される」*（Iコリント3:16–17）。

聖人は、その人々に心に響く言葉を授けた後、彼らを平安のうちに送り出した。というのも、聖人の人柄は子を愛する父のようであり、その眼差しは神の天使のように、神聖な恵みに満ちて輝いていたからである。　その顔からは、モーセの顔のように、まばゆい光が放たれており、ただそれを見つめるだけで、人々は大きな恵みを受けた。　何らかの情欲や心の悲しみに押しつぶされそうになっていた者にとって、聖人に視線を向けるだけで、その悲しみの中に慰めを得ることができた。また、聖人と語り合った者は、すでに善の道を歩み始めていた。　そして、キリスト教徒だけでなく、異教徒でさえも、聖人の甘美で蜜のように滑らかな言葉を耳にすることがあれば、心を打たれ、幼い頃から根付いていた不信仰の悪意を振り払い、心に真実の正しい言葉を受け入れ、救いの道へと踏み出したのである。

この偉大な神の御使いは、聖書の言葉にあるように、神聖な慈愛を放ちながら、ミラスという町で長きにわたり暮らした。　*「雲の中の明けの明星のように、昼の満月のように、至高者の神殿の上に輝く太陽のように、荘厳な雲の中に輝く虹のように、春の日のバラの花のように、水の泉のほとりのユリのように、夏の日のレバノンの枝のように」*（シラ書 50:6–8）。

深き老齢に達した聖人は、人間としての使命を全うし、短期間の肉体の病を経て、この世の生涯を安らかに終えた。喜びと詩篇の賛美を捧げながら、聖なる天使たちに付き添われ、聖人たちの御

顔に迎えられて、永遠の至福の命へと移り行った。　その葬儀には、リキア地方の司教たちや聖職者、修道士たち、そしてあらゆる都市から集まった数え切れないほどの人々が参列した。聖人の尊い遺体は、12月6日[8650]に、ミール大聖堂のミトロポリスに、栄誉をもって安置された。この神に愛された聖人の聖遺物からは、数多くの奇跡が起こった。というのも、その聖遺物からは芳香を放ち、癒しの力を持つ聖油が滲み出ており、病人はそれに塗られることで癒やされたからである。このため、病の癒やしを求めて、地の果てから人々が彼の棺のもとに駆けつけ、その恵みを受けていた。　その聖なる香油によって、肉体の病だけでなく、心の病も癒やされ、邪悪な霊も追い払われた。聖人は、生前のみならず、この世を去った後も、悪魔たちと戦い、彼らを打ち負かしており、今もなおそうしているからである。

タナイス川の河口に住む敬虔な男たちは、リキアのミールに安置されている、聖ニコライの聖遺骨が聖油を流し、癒しの力を持つと聞き、その聖遺骨に礼拝するため、海路でそこへ向かうことを決意した。　しかし、かつて聖ニコライによってアルテミスの神殿から追放された悪霊は、船がこの偉大なる父のもとへ向かう準備をしているのを見て、神殿の破壊と自身の追放を恨み、聖ニコライに怒りを抱き、これらの男たちが計画した旅を妨害し、彼らから聖遺物を奪おうと企んだ。　彼は、聖油で満たされた器を運んでいる女性に姿を変え、こう言った。

「私はこの器を聖人の墓に捧げたいのですが、航海をとても恐れています。なぜなら、弱く、胃の病を患っている女性にとって、海を渡るのは危険だからです。ですから、どうかお願いです。この器を受け取り、聖人の墓まで持って行き、その聖油をランプに注いでください。」

そう言い終えると、悪魔は敬虔な信者たちにその器を手渡した。その聖油にどのような悪魔の呪いが混ざっていたのかは定かではないが、それは旅人たちに害を与え、破滅をもたらすために用意されたものだった。　その油の致命的な作用を知らず、彼らはその願いを聞き入れ、器を受け取ると岸を離れ、丸一日無事に航海を続けた。しかし朝になると北風が吹き始め、航海は困難を極めるようになった。

不順な航海に何日も苦しめられた末、彼らは長引く荒波に耐えきれず、引き返すことを決めた。すでに船を帰路に向けようとしたその時、聖ニコライが小さな小舟に乗って彼らの前に現れ、こう言った。

「どこへ航海するのだ、諸君。なぜ、これまでの航路を捨てて引き返すのか。君たちは嵐を鎮め、航海に適した道を作ることができる。君たちの航海を妨げているのは悪魔の策略だ。なぜなら、聖油の入った器は女性からではなく、悪魔から与えられたものだからだ。その器を海に投げ捨てよ。そうすれば、たちまち君たちの航海は順調になるだろう。」

これを聞いた男たちは、悪魔の壺を海の深淵に投げ捨てた。するとたちまち、そこから黒い煙と炎が噴き出し、空気がひどい悪臭で満たされ、海が裂け、水は底まで沸き立ち、ゴボゴボと音を立て、水しぶきはまるで火の粉のようだった。　船に乗っていた人々は大きな恐怖に襲われ、恐怖のあまり叫び声を上げたが、現れた助っ人は、彼らに勇気を奮い立たせ、恐れるなと命じ、荒れ狂う嵐を鎮め、旅人たちの恐怖を取り除き、リキアへの旅路を安全なものにした。　するとたちまち、涼やかで芳しい風が彼らを包み込み、彼らは喜びながら無事に待ち望んでいた街へとたどり着いた。迅速な助け手であり守護者である聖人の聖遺物に礼拝を捧げた後、彼らは全能の神に感謝を捧げ、偉大なる聖ニコライへの賛美の歌を唱えた。　その後、彼らは自国へ戻り、旅の途中で体験したことを至る所で、あらゆる人々に語り聞かせた。この偉大なる聖人は、陸でも海でも、数多くの偉大で輝かしい奇跡を起こした。　彼は苦難にある人々を助け、溺れ死の危機から救い出し、海の深みから陸へと運び上げ、捕虜から解放して解放された人々を故郷へ連れ帰り、束縛や牢獄から解き放ち、剣による斬殺

[8650] 聖ニコラオスの没年は正確には不明である。ある説によれば、神の御心に適う者は341年に亡くなったとされるが、別の説では、その没年は346年から352年の間とされている。

から守り、死の淵から救い出し、多くの人々に数多くの癒やしをもたらした。盲人には視力を、　足の不自由な者には歩行の力を、耳の聞こえない者には聴力を、口のきけない者には言葉の力を授けた。彼は、貧困と極度の困窮に苦しむ多くの人々を豊かにし、飢えた者には食物を与え、あらゆる困窮において、誰に対しても頼りになる助け手、温かい擁護者、迅速な取り成し手、そして守護者として現れた。　そして今なお、彼は自分を呼び求める者たちを助け、彼らを災いから救い出しています。彼の奇跡を数え尽くすことは不可能であり、そのすべてを詳細に記述することもまた不可能です。この偉大な奇跡行者は東も西も知っており、地の果てに至るまで、彼の奇跡は広く知られています。三位一体の神、父と子と聖霊が、聖ニコラオスにおいて栄光を受け、その聖なる御名が、すべての者の口によって永遠に賛美されますように。アーメン。

- 聖ニコラオスの死後に起こった奇跡

聖ニコライは、生前だけでなく、死後も多くの奇跡を起こしました。その驚くべき奇跡を聞いて、誰が驚かないでしょうか！　なぜなら、一つの国や一つの地域にとどまらず、天下の至る所が聖ニコライの奇跡で満ち溢れているからです。　ギリシャ人のところへ行けば、そこでも人々はそれらに驚嘆し、ラテン人のところへ行けば、そこでも人々はそれらに驚嘆し、シリアでもそれらを称賛している。全地において、人々は聖ニコラオスに驚嘆している。ルーシに来れば、聖ニコラオスの奇跡が数多く見られない町も村もないことがわかるだろう。

ギリシャの皇帝レウスの治世、そして総主教アファナシオスの時代に、聖ニコラオスの次のような輝かしい奇跡が起こった[8651]。偉大なるニコラオス、ミールの大司教は、真夜中に、テオファンという名の、敬虔で貧しい者を愛し、旅人を温かく迎え入れるある老人に幻として現れ、こう言った。

「目を覚ませ、テオファンよ。起き上がって、イコン画家アゲイのもとへ行き、彼に三つのイコンを描くよう命じなさい。すなわち、天と地を創造し、人間を造られた我らの救い主イエス・キリスト、至聖なる聖母マリア、そしてキリスト教徒の代祷者である、　ミールの大司教ニコラオスのイコンを、三枚描かせなさい。私はコンスタンティノープルへ赴かねばならないからだ。これら三枚のイコンを描き終えたら、それらを総主教と全聖会に献上しなさい。急いで行き、この言葉に背いてはならない。

そう言い終えると、聖人は姿を消した。眠りから覚めた神を愛する男テオファンは、その幻影に恐れをなして、直ちにイコン画家アゲイのもとへ行き、キリスト・救い主、聖母マリア、そして聖ニコラオスの三つの偉大なイコンを描くよう懇願した。　慈悲深き救い主、その聖母マリア、そして聖ニコラオスの御許しにより、アゲイは三つのイコンを描き上げ、それらをテオファンに届けました。テオファンはイコンを受け取り、自室に安置すると、妻にこう言いました。

「我が家で食事を用意し、自分の罪について神に祈ろう。」

妻は喜んで同意した。テオファンは市場へ行き、30ズラトニク分の食べ物と飲み物を買い、家に持ち帰って、総主教のために豪華な食事を用意した。その後、彼は総主教のもとへ行き、総主教と聖職者全員に対し、自分の家を祝福し、食事と飲み物を召し上がってくださるようお願いした。　総主教は承諾し、聖職者たちと共にテオファンの家へやって来て、部屋に入ると、そこに三つのイコンが掲げられているのを見た。一つには我らの主イエス・キリストが、もう一つには至聖なる聖母マリアが、そして三つ目には聖ニコライが描かれていた。最初のイコンの前に進み出て、総主教はこう言った。

「すべての被造物を創造されたキリストなる神よ、あなたに栄光あれ。この像を描くことはふさわしいことでした。」

[8651] これは8世紀半ば、レウ・イサウリアヌス帝の治世のことである。

続いて、二番目のイコンに近づき、こう言った。

「この、全世界のために祈りを捧げる至聖なる聖母マリアの像が描かれたことは、実に喜ばしいことです。」

三番目のイコンに近づくと、総主教はこう言った。

「これはミールの大司教ニコラエの像である。これほど偉大なイコンに彼を描くべきではなかった。何しろ彼は、農民出身のテオファンとノンナという庶民の息子であったのだから。」

家主を呼び寄せ、総主教は彼にこう言った。

「テオファンよ、アゲイにニコラオスの像をこれほど大きなサイズで描かせるべきではなかった。」

そして、聖人の像を運び出すよう命じ、こう言った。

「キリストや聖母マリアと並んで描かれるのは、彼にとってふさわしくない。」

敬虔な男テオファンは、深い悲しみを抱きながら聖ニコラオスのイコンを部屋から運び出し、納屋の名誉ある場所に安置した。そして、聖堂からカリストという名で、素晴らしく賢明な聖職者を選び出し、イコンの前に立ち、聖ニコラオスを称えるよう懇願した。　彼自身は、聖ニコライのイコンを寝室から運び出すよう命じた総主教の言葉に深く悲しんでいた。しかし、聖書にはこう記されている。『列王記上』2章――*「わたしを賛美する者を、わたしは賛美する」*。主イエス・キリストはそう言われたが、後で見るように、聖ニコライ自身もこの主によって栄光を受けることになるのである。

神と聖母マリアを賛美した後、総主教は全聖職者たちと共に食卓に着き、食事が供された。食事が終わると、総主教は立ち上がり、神と聖母マリアを称え、ワインを飲みながら、聖職者たち全員と共に楽しんだ。一方、カリストはこの間、偉大なる聖ニコラオスを賛美し、称えていた。　ところが、ワインが底をついてしまったが、総主教と随行者たちはまだ飲み続け、楽しみたいと願っていた。すると、集まった者の一人が言った。

「テオファンよ、総主教にさらにワインを運んで、この宴を楽しいものにしてくれ。」

すると彼は答えた。

「もうワインはありません、ご主人様。市場でももう売っていませんし、買う場所もありません。」

悲しみに沈んだ彼は、聖ニコラオスのことを思い出した。聖ニコラオスが幻視の中で彼に現れ、救世主、聖母マリア、そして自身の三つのイコンを描くよう命じたのだ。密かに納屋に入り、彼は聖人のイコンの前にひれ伏し、涙ながらにこう祈った。

「おお、聖ニコライよ！　あなたの誕生は不思議であり、生涯は聖なるもので、あなたは多くの病人を癒やされました。お願いです、今、この貧しい私のところに奇跡を起こし、私にワインを足してください。」

そう言って祝福を受けた後、彼はワインの壺が置かれている場所へ向かった。すると、聖ニコライの奇跡の力により、それらの壺はワインで満たされていた。テオファンは喜びながらワインを受け取り、それを総主教のもとへ持っていった。総主教はそれを飲み、こう称賛した。

「こんなワインは飲んだことがない。」

そして、酒を飲んでいた者たちは、テオファンが宴の最後に最高のワインを取っておいたのだと語った。しかし、彼は聖ニコラオスのこの驚くべき奇跡を隠しておいた。

祝宴のあと、総主教と聖職者たちは聖ソフィア大聖堂の住居へと戻った。　翌朝、ミール島にあるシエルダルという村から、テオドールという名の貴族が総主教のもとを訪れ、総主教に自分のところへ来てほしいと懇願した。彼の唯一の娘が悪魔に取り憑かれており、彼女の頭上で聖福音書を朗読してほしいと願ったのである。　総主教は承諾し、四福音書を手にして、聖職者一同と共に船に乗り込み、出航した。彼らが外洋に出たとき、嵐が激しい波を巻き起こし、船は転覆し、全員が海に投

げ出され、神、聖母マリア、聖ニコラオスに叫び、祈りを捧げながら漂流した。　すると、聖母マリアは御子であり、我らの救い主であるイエス・キリストに、聖職者たちが滅びることのないよう、聖職者団のために懇願された。すると船は元通りになり、神の御慈悲により、聖職者団全員が再び船に乗り込んだ。　溺れかけていたアファナシイ総主教は、聖ニコラオスに対する自身の罪を思い出し、叫びながら祈り、こう言った。

「おお、キリストの偉大なる聖人、ミールの大司教、奇跡行者ニコライよ。私はあなたの前で罪を犯しました。私という罪深く、嘆かわしい者を赦し、憐れんでください。海の深淵から、この苦難の時から、そして無益な死から、私を救ってください。」

なんと輝かしい奇跡であろうか――高慢な者は謙虚になり、謙虚な者は驚くべきほどに高められ、真に称賛されるようになったのである。

突然、聖ニコライが現れ、海の上を陸地のように歩いて近づき、総主教の手を取りながらこう言った。

「アファナシイよ、それとも、庶民の出身である私からの助けが、この海の深淵で必要だったのか？」

一方、疲れ果ててかろうじて口を開くことしかできなかった彼は、苦々しく泣きながらこう言った。

「おお、聖ニコライよ、偉大なる聖人、助けの速き方よ。私の邪悪な傲慢さを思い出さないでください。この海の深淵での無駄な死から私を救い出してください。そうすれば、私は生涯、あなたを賛美し続けます。」

すると、聖人は彼にこう言った。

「恐れるな、兄弟よ。見よ、キリストが私の手によってあなたを救い出しておられる。これ以上罪を犯してはならない。さもないと、さらに悪いことが起こるだろう。あなたの船に乗りなさい。」

そう言うと、聖ニコライは総主教を水の中から引き上げ、船に乗せながらこう言った。

「あなたは救われた。コンスタンティノープルに戻り、再び務めを果たしなさい。」

そして聖人は姿を消した。総主教の姿を見た人々は皆、声をあげて叫んだ。

「栄光あれ、救い主キリストよ。そして、私たちの主を溺死から救い出された、至聖なる女王、主の母マリアよ。」

まるで眠りから覚めたかのように、総主教は彼らに尋ねた。

「兄弟たちよ、ここはどこだ？」

「ご自身の船の上です、閣下」と彼らは答え、「私たちは皆、無事であります」と付け加えた。

涙を流しながら、総主教は言った。

「兄弟たちよ、私は聖ニコラオスに対して罪を犯してしまった。彼はまことに偉大だ。海の上を陸の上を歩くかのように歩き、私の手を引いて船に乗せてくれた。まことに、彼は信仰をもって彼を呼び求めるすべての人々に、速やかに助けを差し伸べてくださるのだ。」

船はあっという間にコンスタンティノープルへと戻ってきた。　総主教は聖職者一同と共に船から降りると、涙を流しながら聖ソフィア大聖堂へと向かい、テオファンに使いを送り、聖ニコラオスのその奇跡のイコンを直ちに持ち込むよう命じた。テオファンがイコンを持ってくると、総主教は涙を流しながらその前にひれ伏し、こう言った。

「聖ニコライよ、私は罪を犯しました。罪深い私を赦してください。」

そう言うと、彼はイコンを両手で抱き上げ、聖職者たちと共に敬意を込めてその表面に口づけをし、聖ソフィア大聖堂へと運び込んだ。翌日、彼はコンスタンティノープルに聖ニコラオスに捧げる石造りの教会を建立した。教会が完成すると、総主教自らが聖ニコラオスの記念日にその教会を奉

献した。　そして、その日、聖人は*40*人の病める男女を癒やした。その後、総主教は教会の装飾のために30リットルの金と、多くの村や果樹園を寄進した。また、その教会に隣接して立派な修道院を建立した。そこには、盲人や足の不自由な者、ハンセン病患者など、多くの人々が訪れた。　聖ニコラオスのそのイコンに触れると、彼らは皆、健康を取り戻して帰っていき、神とその奇跡を行う御方を賛美した。

コンスタンティノープルには、ニコライという名の男が住んでおり、手仕事で生計を立てていた。彼は敬虔な人であり、聖ニコライを記念する日には、必ずこの神の御心にかなう聖人を思い起こすことを誓った。彼は聖書の言葉、箴言3章—— *「あなたの財産と、すべての収入の初穂をもって、主を敬え」*という聖書の言葉に従い、常にこれを堅く心に留めていた。こうして彼は高齢に達し、働く力がなくなると、貧困に陥った。聖ニコラオスの記念日が近づき、どうすべきか考えを巡らせていた老人は、妻にこう言った。

「我らが敬う、キリストの偉大なる司教ニコラスの日が近づいている。しかし、私たちのような貧しい者たちが、この乏しい身で、この日をどのように祝えばよいのだろうか？」

敬虔な妻は夫にこう答えた。

「ご主人様、ご存知の通り、私たちの人生も終わりに近づいています。あなたも私も老い　てしまいました。たとえ今この瞬間に命を終えることになっても、あなたの決意を曲げず、聖人への愛を忘れないでください。」

彼女は夫に自分の絨毯を見せ、こう言った。

「この絨毯を持って行って売って、聖ニコラスの記念日をふさわしく祝うために必要なものをすべて買ってきなさい。私たちには他に何もありませんし、この絨毯も必要ありません。私たちには、これを残せるような子供たちがいないのですから。」

これを聞いた敬虔な老人は妻を称え、絨毯を持って出かけた。聖コンスタンティヌス大帝の柱が立つ広場を通り、聖プラトンの教会を過ぎたとき、常に助けを惜しまない聖ニコラオスが、高潔な老人の姿で彼に出迎え、絨毯を運ぶ男にこう言った。

「親愛なる友よ、どこへ行くのですか？」

「市場へ行かなければならないのです」と彼は答えた。

近づいてきて、聖ニコライは言った。

「それは良いことだ。だが、この絨毯をいくらで売りたいのか教えてくれ。私は君の絨毯を買いたいのだ。」

老人は聖人にこう言った。

「この絨毯はかつて8ズラトニクで買ったものだが、今は君がくれるだけ受け取るよ。」

聖人は老人に言った。

「6ズラトニクでどうだろうか？」

「もしその額を与えてくれるなら」と老人は言った。「喜んで受け取ります。」

聖ニコライは服のポケットに手を入れ、そこから金貨を取り出し、6枚の大きな金貨を老人の手に渡しながら、こう言った。

「これを受け取ってくれ、友よ。その代わりに絨毯をくれ。」

老人は喜んで金貨を受け取った。絨毯の値段はそれより安かったからだ。聖ニコライは老人の手から絨毯を受け取ると、その場を去った。二人が別れた後、広場にいた人々は老人にこう言った。

「老翁よ、あなたは幽霊でも見ているのか？　なぜ一人で話しているのだ？」

というのも、彼らには老人しか見えず、その声しか聞こえなかったからだ。聖人は彼らには見えもせず、聞こえもしなかった。その頃、聖ニコライは絨毯を持って老人の妻のもとへやって来て、こう言った。

「あなたの夫は私の古くからの友人だ。私と出会ったとき、彼は私にこう頼んだ。『私を愛しているなら、この絨毯を私の妻に届けてほしい。私には別のものを届ける用事があるからだ。あなたはこれを自分のもののように大切に保管しておいてほしい』と。」

そう言うと、聖人は姿を消した。光に包まれた高潔な男性を見て、彼から絨毯を受け取った女性は、恐怖のあまり、彼が誰なのか尋ねることもできなかった。夫が自分の言葉や聖人への愛を忘れてしまったのだと思い込んだ女性は、夫に怒りをぶつけ、こう言った。

「ああ、哀れな私よ。私の夫は法を犯し、嘘に満ちている！」

こうした言葉やそれに類する言葉を口にし、聖人への愛に燃えていた彼女は、絨毯を見ることも拒んだ。

何が起きたのか知らず、夫は聖ニコラスの記念日を祝うために必要なものをすべて買い揃え、絨毯が売れたこと、そして自分の敬虔な習慣から逸脱しなくて済むことを喜びながら、自分の小屋へと向かっていた。彼が家に帰ると、怒り狂った妻が彼を待ち構え、こう言い放った。

「これからは私の元を去りなさい。あなたは聖ニコラウスに嘘をついたのだから。神の御子キリストは、ルカによる福音書9章でこうおっしゃった。*『鋤に手をかけながら後ろを振り返る者は、神の御国に入る資格がない』と*。」

こうした言葉やそれに類する言葉を述べた後、彼女は夫のもとへ絨毯を持って行き、こう言った：

「ほら、これを受け取りなさい。もう二度と私に会うことはないでしょう。あなたは聖ニコラオスに嘘をついたのですから、その記念を祝うことで得たすべてのものを失うことになるでしょう。なぜなら、*『律法のすべてを守りながら、ただ一つの点で罪を犯す者は、すべてにおいて罪を犯した者となる』*（ヤコブ2:10）と書かれているからです。」

妻からこの言葉を聞き、自分の絨毯を見て、老人は驚き、妻に返す言葉が見つからなかった。彼は長い間立ち尽くしていたが、ついに聖ニコラオスが奇跡を起こしたのだと悟った。心の底からため息をつき、喜びに満たされると、彼は両手を天へと上げ、こう言った。

「キリストなる神よ、聖ニコライを通して奇跡を行われるあなたに、栄光あれ！」

そして、老人は妻にこう言った。

「神を畏れる心をもって、教えてくれ。この絨毯を運んできたのは、男か女か、老人か若者か？」

妻は彼にこう答えた。

「明るく誠実な、白い服を着た老人がこの絨毯を届けてくれ、私にこう言いました。『あなたの夫は私の友人です。だから、私を見かけたとき、この絨毯をあなたに届けてほしいと頼んできたのです。受け取ってください』と。絨毯を受け取ったとき、その人が光に包まれているのを見て、私は誰なのか尋ねる勇気がありませんでした。」

妻の話を聞いた老人は驚き、手元に残っていた金の一部と、聖ニコラスの記念日を祝うために買い揃えたもの——ごちそう、ワイン、プロスフォラ、そしてろうそく——を彼女に見せた。

「主は生きておられる！」と彼は叫んだ。「私から絨毯を買って、再び私たち貧しく謙虚なしもべたちの家へ持ち帰ってくれたその人は、まことに聖ニコライその人である。というのも、私が彼と話をしているのを見た人々が、『あなたが見ているのは幽霊ではないか？』と言ったからだ。彼らは私一人しか見ていなかったが、彼は見えなかったのだ。」

すると、老僧とその妻は共に声を上げ、全能の神に感謝を捧げ、信仰をもって彼を呼び求めるすべての人々の迅速な助け手である、キリストの偉大なる司教ニコライを賛美した。　喜びに満ち溢れた二人は、直ちに聖ニコラオスの教会へと向かい、金と絨毯を携えて、教会で起こった出来事を、聖職者全員とそこにいたすべての人々に語った。そして、その話を聞いた人々は皆、神と、そのしもべたちに慈悲を施す聖ニコラオスを賛美した。　その後、彼らはミハイル総主教のもとへ使者を送り

（[8652] ）、すべてを報告した。総主教は、聖ソフィア教会の財産からその長老に援助を与えるよう命じた。そして、彼らは賛美と聖歌を捧げ、尊い祝祭を執り行った。

コンスタンティノープルには、エピファニオスという名の敬虔な男が住んでいた。彼は非常に裕福で、コンスタンティヌス王[8653] から大きな栄誉を授かり、多くの奴隷を所有していた。 ある日、彼は自分の使用人として少年を買いたいと思い立ち、12月の3日、72ズラトニク分の金1リトラを手に取り、馬に乗って、ルーシからやって来た商人たちが奴隷を売っている市場へ向かった。しかし、奴隷を買うことはできず、彼は家に戻った。　馬から降りると、彼は居間に入り、市場へ持っていった金をポケットから取り出し、居間のどこかに置いたが、どこに置いたのか忘れてしまった。これは、古来よりの邪悪な敵である悪魔の仕業であった。悪魔は、地上の栄華を増すために、絶えずキリスト教徒と戦っているのだ。　その男の敬虔さを許せなかった悪魔は、彼を罪の深淵へと陥れることを企てた。朝、貴族は自分に仕えていた少年を呼び寄せ、こう言った。

「昨日お前に渡した金を持ち来い。市場へ行かなければならないのだ。」

これを聞いて、少年は恐れた。主人は彼に金を渡していなかったからだ。そしてこう言った。

「ご主人様、あなたは私に金を渡していませんでした。」

主人は言った。

「ああ、邪悪で嘘つきの奴め。私がお前に渡した金をどこに隠したのか、言え。」

少年は何も持っていなかったため、主人が何を言っているのか分からないと誓った。貴族は激怒し、使用人たちに少年を縛り上げ、容赦なく打ちのめし、足枷をはめるよう命じた。

そして、ご自身でこう言われました。

「聖ニコラスの祝日が過ぎたら、彼の運命を決めてやろう」――というのも、その祝日は翌日に迫っていたからである。

神殿に独り閉じ込められた少年は、涙ながらに、苦難にある者を救い出される全能の神に向かって叫んだ。

「わが主なる神、イエス・キリストよ、全能者よ、生ける神の御子よ、近づきがたい光の中に住まわれる方よ！　私はあなたに叫びます。あなたは人の心を知っておられ、孤児の助け手であり、苦難にある者の救いであり、悲しむ者の慰めだからです。この私にも理解できない災いから、私を救い出してください。　憐れみ深い救いを施し、私の主人も、私に与えられた罪と不正から解放され、喜びに満ちた心であなたを賛美し、また、私という取るに足らないあなたのしもべも、不当に降りかかったこの災いから救われ、あなたの慈愛に感謝を捧げることができますように。

涙ながらにこうした言葉やそれに類する言葉を語り、祈りに祈りを重ね、涙に涙を重ねながら、少年は聖ニコライに向かって叫びました。

「ああ、尊き父よ、聖ニコライよ、この災いから私を救ってください！主人が私について言っていることについて、私が無実であることは、あなたもご存知でしょう。明日はあなたの祝日ですが、私は今、大きな苦難の中にいます。」

夜が更け、疲れ果てた少年は眠りについた。すると、信仰をもって呼び求める者すべてに常に速やかに助けを差し伸べる聖ニコラオスが彼の前に現れ、こう言った。

「悲しむな。キリストは、御自身のしもべであるわたしを通して、あなたを救ってくださる。」

するとたちまち、彼の足から足枷が外れ、彼は立ち上がって、神と聖ニコライに賛美を捧げた。その同じ時刻、聖人は彼の主人にも現れ、こう叱責した。

[8652] ミハイル・ケルラリウスは1043年から1058年まで在位した。

[8653] 言うまでもなく、1042年から1060年まで在位したコンスタンティノス・モノマコスである。

「なぜ、あなたのしもべであるエピファニオスに不当な仕打ちをしたのか。あなた自身に非がある。あなたは金をどこに隠したかを忘れてしまったのに、罪のない少年を苦しめた。彼はあなたに忠実であるというのに。」　しかし、これはお前自身の思いつきではなく、古来からの邪悪な敵である悪魔にそそのかされたことである。だからこそ、お前の神への愛が枯渇しないよう、私が現れたのだ。立ち上がって、その少年を解放せよ。もし私の言葉に従わなければ、お前自身に大きな不幸が降りかかるだろう。

そう言って、聖ニコライは指で金が置かれていた場所を指し示し、こう言った。

「立ち上がり、その金を受け取り、その少年を解放しなさい。」

そう言うと、彼は姿を消した。

貴族エピファニオスは戦慄しながら目を覚まし、聖人が宮殿内で指し示した場所まで行き、自分自身が置いた金貨を見つけた。その時、恐怖に駆られながらも喜びに満ち溢れ、彼はこう言った。

「キリストなる神よ、全キリスト教徒の希望よ、あなたに栄光あれ。絶望する者たちの希望、見捨てられた者たちの速やかな慰めよ、あなたに栄光あれ。　栄光あれ、全世界に光を示し、罪に陥った者たちの速やかな立ち直りを示してくださった聖ニコライに。彼は肉体の病だけでなく、魂の誘惑をも癒やしてくださる方です。

涙に暮れながら、彼は聖ニコラオスの尊い御像の前にひれ伏し、こう言った。

「尊き父よ、感謝いたします。あなたは、不適格で罪深い私を救い、この卑しい私のところへ来て、私の罪を清めてくださいました。私のところへ来て、私を見捨てずにいてくださったことに対し、私はあなたに何をお返しすればよいのでしょうか。」

このように語り終えると、貴族は少年のところへ行き、手錠が外れているのを見て、さらに大きな恐怖に襲われ、深く自分を責めた。　彼は直ちに少年を解放するよう命じ、あらゆる方法で彼を慰めた。そして自身は一晩中眠らずに、このような罪から救ってくださった神と聖ニコラオスに感謝を捧げた。早朝の礼拝の鐘が鳴ると、彼は起き上がり、金貨を手に取り、少年と共に聖ニコラオスの教会へ向かった。　そこで彼は、神と聖ニコライが自分にどのような恵みを授けてくださったかを、喜びをもって皆に語った。そして皆は、御自分の聖人を通してこのような奇跡を行われる神を賛美した。早課が終わると、主人は教会の中で少年に向かってこう言った。

「子よ、罪深いのは私ではなく、天と地を創造されたあなたの神、そして神の聖なる御使いである聖ニコライが、あなたを奴隷の状態から解放してくださるだろう。そうすれば、私が無知のゆえにあなたに対して犯してしまった過ちも、いつか赦されることになるだろう。」

そう言うと、彼は金を三等分した。第一の分は聖ニコラオスの教会に捧げ、第二の分は貧しい人々に配り、第三の分をその少年に与えながら、こう言った。

「これを受け取りなさい、我が子よ。そうすれば、あなたは聖ニコライお一人以外に、誰にも借りを作ることはないだろう。私は、子を愛する父のように、あなたを大切に守ってやる。」

神と聖ニコラオスに感謝を捧げた後、エピファニオスは喜びをもって自宅へと戻った。

ある日、キエフで、聖殉教者ボリスとグレブの記念日に、多くの人があらゆる町や村から聖殉教者たちの祝祭に集まってきた。　聖ニコライと聖殉教者ボリスおよびグレブに対して深い信仰を抱いていたあるキエフの住民は、聖殉教者ボリスとグレブの聖棺に拝礼するため、[8654] 蝋燭、香、プロスフォラ――祝祭をふさわしく祝うために必要なものをすべて携えて、舟に乗り込み、ヴィシュゴロドへと向かった。　聖人たちの遺骨に拝礼し、心躍らせた後、彼は帰路についた。ドニエプル川を舟で下っている最中、子供を抱いていた妻がうたた寝をしてしまい、子供を水の中に落としてしまい、その子は溺れてしまった。父親は頭を抱えて髪を掻きむしり、こう叫んだ。

[8654] 当時、聖ボリスと聖グレブの聖遺骨は、まだキエフのヴィシュゴロドに安置されていた。ここで言及されている奇跡は、1087年から1091年の間に起こったものである。

「ああ、聖ニコライよ、私があなたに深い信仰を捧げてきたのは、私の子供が溺れるのを救ってくださらないためだったのでしょうか！　誰が私の財産を相続するのでしょうか。私の守護者であるあなたを偲んで、この輝かしい祝祭を執り行うよう、誰に教えればよいのでしょうか？」　わが子が溺れ死んだ時、あなたが全世界と、この貧しい私にも注いでくださったその偉大な慈悲を、いかにして語り伝えればよいのでしょうか。私は、あなたの奇跡によって彼を啓蒙し、育て上げ、死後、わが子が聖ニコラスの記念を執り行う者として、私が称賛されることを望んでいたのです。　しかし、聖なる方よ、あなたは私にのみ悲しみを授けたのではなく、あなた自身にもそれを授けたのです。まもなく、私の家におけるあなたへの追憶そのものが途絶えてしまうでしょう。私は年老いており、死を待っているからです。もしあなたがその子を救おうと望まれたなら、救うことはできたはずです。しかし、あなたご自身がその子が溺れるのを許し、私のひとり子を海の深淵から救い出さなかったのです。　それとも、あなたは私があなたの奇跡を知らないとお考えでしょうか？　その数は数えきれず、人間の言葉では語り尽くせません。聖なる父よ、私は、あなたが望むことは何でも可能であると信じています。しかし、私の不義が勝ってしまったのです。　今、私は悲しみに苛まれながら、もし私が神の戒めを汚れなく守っていたならば、堕落前の楽園におけるアダムのように、すべての被造物が私に服従していたであろうことを悟りました。　しかし今や、すべての被造物が私に反旗を翻しています。水は私を溺れさせ、獣は私を引き裂き、蛇は私を飲み込み、稲妻は私を焼き尽くし、鳥は私を突き落とし、家畜は凶暴になってすべてを踏み荒らし、人々は私を殺し、私たちに糧として与えられたパンは私たちを満たさず、神の御心により、私たちにとって破滅となるでしょう。　私たちこそ、魂と理性を授かり、神の御姿に似せて造られた者であるにもかかわらず、創造主の御心を本来あるべきように果たしていない。しかし、聖なる父ニコライよ、私がこれほど大胆に語っても、私を怒らないでください。あなたを助け手として持っている以上、私は自分の救いを絶望してはいないのです。

一方、彼の妻は髪を引きむしり、頬を叩いて嘆いていた。やがて、彼らは町に到着し、悲しみに暮れながら自宅に入った。夜が更けると、助けを求めるすべての人々に速やかに駆けつけるキリストの司教ニコライは、かつてないほど驚くべき奇跡を起こした。　夜、彼は川から溺れていた子供を救い出し、聖ソフィア教会の聖歌隊席に、生きて無傷のまま寝かせた。朝の祈りの時間になると、教会の奉仕者が教会に入り、聖歌隊席から子供の泣き声を聞いた。彼は長い間、考え込んで立ち尽くした。

「誰が女性を聖歌隊席に入れたんだ？

彼は聖歌隊席の秩序を司る者のところへ行き、叱りつけた。その男は何も知らないと主張したが、聖職助手はこう責めた。

「お前は現場を押さえられたのだ。聖歌隊席で子供たちが泣いているのだから。」

聖歌隊の責任者は恐怖に駆られ、鍵の所へ近づくと、鍵がかけられたままであることに気づき、子供の声を聞いた。聖歌隊席に入ると、聖ニコラスの像の前で、全身が水でびしょ濡れになった子供がいるのを見つけた。　どう考えればよいか分からず、彼はこのことを大主教に報告した。早課を終えた大主教は、人々を広場に集め、聖ソフィア教会の聖歌隊席に横たわっている子供が誰の子なのか尋ねるよう命じた。　市民たちは皆、聖ソフィア教会の聖歌隊席に、なぜ水でびしょ濡れになった子供が現れたのかと不思議に思いながら、教会へと向かった。その子の父親も、この奇跡を目の当たりにしようとやって来て、子供を見てすぐにそれが自分の子だと気づいた。しかし、自分の目を信じられず、彼は妻のもとへ行き、一連の出来事をすべて話した。すると妻はすぐに夫を責め立て、こう言った。

「どうしてわからないの？　これは聖ニコラオスによってなされた奇跡なのよ」

彼女は急いで教会へ行き、自分の子供だと気づくと、子供には触れずに聖ニコラオスの聖像の前にひれ伏し、感動と涙を流しながら祈りを捧げた。夫は遠くに立ち、涙を流していた。このことを

聞いた人々は皆、奇跡を見ようと集まり、町中の人々が集まって、神と聖ニコラオスを賛美した。また、大主教は、聖ニコラオスの記念日にふさわしい尊い祝祭を執り行い、聖三位一体、すなわち父と子と聖霊を賛美した。アーメン。

トロパリオ、第4声調：

信仰の規範、柔和と節制の模範を、汝は汝の群れに示した。汝こそは真の真理である。それゆえ、汝は謙遜によって高き地位を、貧しさによって富を得た。聖なる指導者ニコラエよ、キリスト神に祈り、我らの魂が救われるよう願え。

コンダク、第3調：

あなたは聖なる世界において、聖職者として現れました。キリストの尊き福音を果たし、あなたの民のために御魂を捧げ、罪なき者たちを死から救われたからです。このゆえに、あなたは神の恵みの偉大な秘儀執行者として聖別されました。

12月20日

12月7日（旧暦）

私たちの聖なる父、ミラノの司教アンブロシウスの生涯

記念日 12月7日

聖アンブロシウス（[8655] ）は、ガリア[8656] およびその他の西方諸国のローマ総督であった貴族アンブロシウスの息子であった。この貴族は息子への愛から、自らと同じ名を彼に与えた。

聖人がまだ乳児であった頃、将来彼がキリストの教会にどのような霊的な喜びをもたらすかという前兆がありました。ある日、昼間、おくるみに包まれた赤ん坊のアムブロシウスが屋外に寝かされ、口を開けたまま眠っていました。　すると突然、蜂の群れが飛来し、赤ん坊の顔や口全体を覆った。蜂たちが赤ん坊の口の中に入り込み、そこから出てきて、舌の上に蜂蜜を残していく様子が見て取れた。乳母はこれを見て、蜂が子供に危害を加えるのではないかと恐れ、蜂を追い払おうとした。しかし、その光景を目の当たりにしていたアンブロシウスの父は、この奇跡がどうなるのか見届けたかったため、乳母を制止した。すると、しばらくして、ミツバチたちは飛び立ち、上空へと舞い上がり、やがて視界から消えていった。赤ん坊の父は驚き、こう言った。

「もしこの子が成長すれば、人々の間で偉大な存在となるだろう。」

このように、主は御自分のしもべがまだ幼い頃から、すでに彼の上に聖書の言葉が成就することを示しておられたのである。箴言16章――*「愛すべき言葉は、蜂の巣の蜜のようで、魂を甘くする*」。

[8655] アンブロシウス・メディオランスキスは、340年頃、当時両親が住んでいたトリールという町で生まれた。

[8656] 古代世界では、「ガリア」という名で、現在のフランスに加え、ベルギー、オランダの一部、ドイツのザイン川流域、そしてスイスの大部分を包含する広大な国が知られていた。　さらに、聖アンブロシウス・ミラネンシスの父（同じくアンブロシウスという名）は、スペインの総督も務めていた。彼にはアンブロシウスより年上の子供たちもおり、娘のマルチェッリーナと息子のサティルがおり、彼らも西方教会によって聖人の列に加えられている。

なぜなら、その蜂の群れは、聖アンブロシウスの甘美な教えや著作を象徴していたからである。彼はそれらによって、人々の心を喜ばせ、地から天へと引き上げる霊的な蜂の巣を築き上げていたのだ。　彼が成長し、すでに未亡人となり、神に貞潔の誓いを立てていた母と共にローマで暮らしていた頃、ある時、司教の手がキスされているのを目撃した。その後、実家で遊んでいた彼は、家族に向かって手を差し伸べ、こう言った。

「口づけしなさい。私もまた司教になるのだから」[8657]。

この言葉は、未来を予兆するものとして聖霊が彼を通して語ったものだったが、大人たちは、その少年に宿る神の恵みが彼を聖職へと導いていることを理解せず、まるで彼が軽率なことを言っているかのように、彼を制止した。

聖アンブロシウスの父が亡くなると、母はローマに移り住み、彼と兄のサティロスに最高水準の教育を受けさせ、また、処女であった妹は、彼の中に貞潔への愛を育んだ[8658]。

雄弁術を学んだアンブロシウスは、説得力に富んだ著名な演説家となった。彼は不当な扱いを受けた人々を擁護し、不幸な人々を助け、不正を行う者を糾弾し、法廷での真実の解明に貢献した。その英知を認められ、ローマ市の最高責任者プロブスは彼を顧問として側近に迎えた。　その後、アンブロシウスはローマ管区の総督――リグリア[8659] およびエミリア[8660] ――に任命された。この頃、メディオラン[8661] では、かつてアリウス派であったアウクセンティウス司教が死去した。彼は、投獄中に亡くなった正統派のディオニシウス司教の後を継いで司教座に就いていた人物であった。　正統派とアリウス派の間では、双方ともメディオランで空席となった司教座に、自派の信条を持つ司教を就かせたいと望んでいたため、大きな争いや不和が生じていた。　メディオランの住民の間では、混乱と動揺が絶えなかった。このことを知ったローマ市の長官プロブスは、アンブロシウスにメディオランへ赴き、そこで発生した反乱を鎮圧するよう命じ、次のように告げた。

「そこへ赴き、裁判官としてではなく、司教として振る舞え[8662]。」

メディオランに到着したアンブロシウスは、選挙が行われていた教会に入り、その雄弁を尽くして民衆を説得し、対立していた者たちを和解と平和へと導こうとした。すると突然、まだ言葉を話せない乳児が、群衆の中から叫んだ。

「アンブロシウスを司教に！」

これを聞いた教会にいた民衆全員が、その赤ん坊の言葉を繰り返して、声を揃えて大声で叫び始めた。

「アンブロシウスは司教だ！ アンブロシウスは司教だ！」

8657 聖アンブロシウスの伝記を著した、彼の助祭兼秘書であったパヴリヌスの言葉によれば、この時「彼の中には、彼を聖職へと備えさせていた主の御霊が語っていた」という。

8658 ローマのカピトリーノの丘の近くには、今もなお、聖アンブロシウスが育った家が見学できる。その家は教会に改築され、彼の名に因んで名付けられた女子修道院となっている。

8659 リグリアは、西側のガリアとの国境をヴァルス川と海岸沿いのアルプス山脈、南東側のイタリアとの国境をマクラ川、北側をパドゥス川、南側をリグリア湾で囲まれた地域である。　このように、この地域は、イタリアと国境を接する現在の南フランス、および北西イタリアの一部、ニース、ジェノヴァ、南ピエモンテ、ならびにパルマとピアチェンツァの西部を包含していた。

8660 エミリアは、リグリアとフラミニアの間に位置するガリアの州であり、現在の北イタリアのおおよそ中央部に当たる。

8661 メディオランは、いわゆる「キザルピナ・ガリア」、すなわち現在の北イタリアに位置する古代都市であり、科学と芸術が栄えた中心地であった。現在では、イタリアのロンバルディア州において、人口の多い主要な繁栄都市となっている。

8662 これらの言葉は、あたかも預言のように、この都市における聖アンブロシウスの将来にわたる輝かしい聖職の奉仕を予兆していたかのようである。

こうして、神の恵みによって、まだ話す時期にも達していない乳児が言葉を語り、対立していた両陣営――正統派もアリウス派も――は平和と和解に至り、アンブロシウスを司教に迎えることだけを望んだ。彼はまだ聖なる洗礼を受けておらず、単に洗礼の予告を受けたに過ぎなかったにもかかわらずである。　民衆の叫び声を聞いたアンブロシウスは、教会から出て行き、これほど偉大な聖職にふさわしくないことを示すため、裁判官の席に座ると、普段の自分とは異なり、一切の慈悲も示さずに犯罪者たちを苦しめ始めた。　彼は、市民たちがその無慈悲な姿を見て、自分を憎み、司教として迎えることを望まなくなるようにと、この行為を行ったのである。　しかし、民衆はアンブロシウスを司教に望んでいると叫び続けた。アンブロシウスはあらゆる手段で拒み、自分は大いなる罪人であり、いまだ洗礼を受けていないと宣言したが、皆はそれに対してこう答えた。

「あなたの罪は私たちに降りかかるでしょう。」――彼らは、聖なる洗礼が人をすべての罪から清めることを知っていたからである。

アンブロシウスは当惑して家に戻り、当時の多くのギリシャの哲学者たちがそうしていたように、自分の職を捨てて、物乞いの放浪者としての生活を送ろうと決意したが、その意図を実行に移すのを阻まれた。　そこで彼は、司教の位を避けるために別の策略を思いついた。すなわち、公然と放蕩な女性たちを自宅に連れ込むよう命じたのである。そうすれば、メディオランの住民たちはそれを見て彼に嫌悪感を抱き、淫乱者として彼を見放すだろうと考えたのだ。しかし、民衆はさらに強くこう主張した。

「あなたの罪は私たちに負わせてください。ただ、洗礼を受け、司教の職に就いてください。」

民衆全体の願いを拒むことは不可能だと悟ったアンブロシウスは、街から身を隠すことを決心した。 夜、誰にも知られぬよう、彼は街を出て、ティチヌスという別の街[8663] へ向かっていると思い込み、その道をすでに遠くまで進んだと思っていたが、夜が明けると、自分が「ローマの門」と呼ばれる、まさにそのメディオランの門の前にいることが判明した。　これは、アンブロシウスを自らのカトリック教会にとって、いわば敵に対する防壁として備えていた神が、彼の逃亡を阻み、御自身の力によって彼を当初の予定していた道から引き戻されたためであった。メディオラヌスの市民たちはこの企てを知ると、アンブロシウスが逃げ出さないよう彼を見張るようになった。　同時に、彼らは皇帝ヴァレンティニアヌス1世に[8664]　を送り、アンブロシウスに司教の位を受け入れるよう命じるよう要請した。皇帝は、自分が世俗の役職に任命した人物が、偉大な聖職に選出されることに喜びを覚えた。　ローマの最高責任者プロブスもまた喜んだ。というのも、彼がアンブロシウスをメディオランへ送り出す際に語った予言が実現したからである。すなわち、プロブスは彼に対し、民衆に相互の調和を説く際には、裁判官としてではなく、司教として振る舞うよう告げていたのだ。　メディオランの住民たちが、皇帝のもとへ派遣された使者の帰還と皇帝の返答を待っている間、アンブロシウスは再び逃亡し、レオティウスという高官の邸宅に身を隠した。しかし、皇帝の勅令が届くと、レオティウスはアンブロシウスの居場所を明かし、彼をメディオランの民のもとへ連れ出した。　このように、神が聖職の位に就かせ、*「山の上にある町」*（マタイ5:14）や「燭台の上の灯」（マタイ5:15）のように、御自身の羊の群れの牧者とすることを御心に適わせた者にとって、どこにも身を隠すことは不可能であった。　そこでアンブロシウスは、自分が司教となることが神の御心にかなうことを確信し、皇帝の命令と民衆の願いに従った。しかし、彼はアリウス派の司教から洗礼を受けることを拒み、正統派の司教から洗礼を受けることを望んだ。それは、アリウス派の異端の信仰を深く警戒していたからである。　聖なる洗礼を受けた後、彼は七日間で教会のすべての段階を経て、八日目に司教

[8663] ティチーノは、キザルピナ・ガリアに位置し、ローマからガリアへと続く主要道路沿いにある古代都市であり、現在はパヴィアとして知られ、ティチーノ川沿い、同川がポー川に合流する地点からほど近い、北イタリアの重要な都市である。

[8664] ヴァレンティニアヌス1世、あるいは「長老」と呼ばれる西ローマ帝国の皇帝は、364年から375年まで在位した。

の位に叙任された[8665]　。これは民衆全体にとって言葉に尽くせない喜びであった。テオドリトス[8666]が記しているように、叙任式には皇帝自らが臨席し、喜びのうちに次のように述べた。

「全能の主よ、我らの救い主よ、感謝いたします。私が臣民の肉体の命を託したその人物に、あなたは魂をも委ねられ、それによって、私が彼について下した判断が正しかったことを示してくださいました。」

数日後、聖アンブロシウスが皇帝との率直な会話の中で、都市の裁判所の不正な行為を糾弾する出来事があった。皇帝は彼にこう答えた。

「汝の言辞に込められた真実の勇気は、かねてより私にも知れ渡っている。それゆえ、私は汝の司教選出を妨げるどころか、自らそれを後押ししたのだ。さあ、神の律法が命じる通り、我らの過ちを正し、我らの魂の不正を癒やしてくれ。」

司教就任当初、アンブロシウスはローマ教皇ダマスス[8667] に対し、教皇が自ら選んだ分別ある人物を助っ人として派遣してくれるよう要請した。　教皇は司祭シンプリキアヌスを彼のもとへ遣わした。アンブロシウスはこの司祭を父のように敬い、その助言に従った[8668]。家庭の 事務については、アンブロシウスは弟のサティルスに任せた[8669] 、自身は教会業務に全身全霊を捧げ、毎日礼拝を執り行い、民衆に聖書を説いた[8670]。

聖アンブロシウスは、教会の聖職者の資質向上にも多大な配慮を払った。彼らの中に身を置きながら、厳格な修道生活と教会の牧者としての義務をいかに両立させるかを、自ら模範を示して示した。彼は、節制に徹し、長時間の徹夜祈祷と労苦に励む人物であった。　毎日、断食によって肉体を

8665 それは374年12月7日のことだった。聖アンブロシウスは当時、わずか34歳であった。アンブロシウスの叙階は、その功績が並外れたものであるとみなされ、東方教会と西方教会の両方の司教たちから等しく承認された。　確かに、この叙階は厳密にはカノニカルなものではなかったが、ニカイア公会議のカノンでは、今回のケースのように、叙階が至高の神の御指示によるものである場合には例外が認められていた。聖バシレイオス大主教は、アンブロシウスの叙階を知らせる知らせを受け、その選出について神に感謝する手紙を書いた。　「羊飼いのアモスを預言者にされた神は」と、この手紙の中で教父は記している。「今や、高貴な家柄、高い地位、高潔な人格、そして驚くべき雄弁さを備えたアンブロシウスを司教にされた。彼はそれにもかかわらず、キリストを得るために、これらすべての地上の栄誉を軽んじた……　さあ、勇気を奮い立てよ、神の御使いよ」。

8666 テオドリトス、キルスの司教――5世紀の教会史家。

8667 ダマス1世――366年から384年までローマ教皇を務めた。教会史において、アリウス派やその他の異端との闘いにおいて、正統信仰を守るための熱心な活動で知られている。

8668 聖アンブロシウスは、このシンプリキアヌスから口頭による教えを受けていた。彼はシンプリキアヌスを父親のように慕っており、シンプリキアヌスはアンブロシウスの信仰における形成に多大な影響を与え、後にメディオラヌス（ミラノ）の司教座において彼の後継者となった。　さらに、アンブロシウスは、著名なオリゲネス、ディディムス、親しい友人関係にあった聖バシレイオス大主教、聖グレゴリオス神学者、およびその他の傑出した教父や教会の教師たちの著作を熱心に読み、研究した。　のちにヒッポの司教となり、聖アンブロシウスによって異教からキリスト教へと改宗させられた著名な教父である聖アウグスティヌスの言葉によれば、アンブロシウスは自宅にこもり、絶え間ない勉学に没頭する短い間、本に目を釘付けにし、周囲で起きていることすべてを忘れていたという。　このような熱心な研鑽に加え、卓越した才能と世俗の学問、とりわけギリシャ文学に関する知識を兼ね備えていたアンブロシウスは、短期間のうちにキリスト教の学問においても驚くべき成果を上げた。

8669 サティルスはこの偉業の最中に世を去った――ある説では378年、別の説ではそれより後である（ローマ教会は9月17日に彼を聖人として崇敬しており、同様に聖アンブロシウスの姉マルチェリーナも7月17日に聖人として崇敬されている）。　――アンブロシウス自身は、司教の座に就くやいなや、自身の財産を適切に分配することで、あらゆる世俗的な心配事から解放された。銀や金は貧しい人々のために寄付し、財産は教会に譲り渡したが、その一方で、姉にはそれらを生涯にわたって利用する権利を与えた。

8670 聖書と聖なる信仰の真理を心と知性で深く理解したアンブロシウスは、大きな熱意をもって民に説教を始め、日曜日も祝日も教えを欠かすことなく、あらゆる機会を捉えて説教を行い、時には一日に何度も説教壇に上った。　彼の言葉は聞き取りやすく、声は穏やかであったため、教会では彼の説教の間、驚くべき静寂が支配し、プレフェクト・アンブロシウスを慕っていた民衆は、司教アンブロシウスの言葉に一層耳を傾けた。また、彼は洗礼を受ける準備をしている人々への指導にも、並々ならぬ熱意を注いだ。

律し、それを中断したのは土曜日と日曜日、そして著名な殉教者たちの祝日のみであった。彼は昼夜を問わず祈りに励み、肉体の病に阻まれない限り、自ら筆を執って書物を執筆する労を厭わなかった。　自らには厳しかったが、すべての人に対しては親切で、温厚であり、親しみやすかった。貧しい人々は彼に守護者であり友人を見出した。彼は喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣いた。もし誰かが過ちを犯して彼に罪を告白すれば、彼は激しく泣き、その相手をも涙に駆り立てた。

聖職者たちの世話をしながら、聖アンブロシウスは修道士たちを庇護し、メディオラン近郊にある彼らの修道院を愛した。彼はまた、女子修道院の設立にも尽力し、彼の叙階からわずか3年が過ぎるやいなや、処女たち[8671]が、プラチェンツァ[8672]、ボローニャ[8673]、さらにはマウリタニア[8674]からメディオランにやって来た。

数年が経過した後、アンブロシウスは故郷のローマへと向かった。そこで彼は、姉と、かつての家の使用人だった一人の女奴隷がまだ生きているのを見つけたが、母親はすでに亡くなっていた。彼女たちが彼の手を口づけすると、アンブロシウスはほのかに微笑んで、その女奴隷にこう言った。

「ほら、かつて私が言った通り、君は司教の手を口づけしているね。」

こうして、先に触れたアンブロシウス自身の予言が成就した。すなわち、彼はまだ子供の頃、家来たちに右手を差し伸べてこう言っていたのである。

「口づけしなさい。私も司教になるのだから。」

アンブロシウスがローマに滞在していた際、ティブルス川の向こう岸に住むある高貴な女性[8675]が、自分の家で聖体礼儀を執り行ってほしいと彼に依頼した[8676]。　このことを知った別の女性――中風を患っていた――は、自分をその場所へ運ぶよう命じた。そして、神の聖人が祈っている最中、彼女は聖人の衣の端に触れ、それを口づけすると、たちまち健康を取り戻した。この奇跡の噂はローマ中に広まった。

8671 古代教会においては、女子修道院が出現する以前から、またその初期の頃にも、神への奉仕に全身全霊を捧げ、貞潔の誓いを立てた乙女たちの特別な階級が存在していた。　こうした人々は「処女」と呼ばれ、教会内で大きな尊敬を集め、教会の栄光と見なされていた。彼女たちは皆、霊的生活に熟達した年長の指導者である「長老」たちの指導の下、私邸に集まり、沈黙、神への黙想、そして祈りに励んでいた。　教会は、しばしば最も尊敬されるディアコニッサたちに、彼女たちの指導と監督を委ねていた。聖アンブロシウス・ミラネンシスの時代、処女たちの共同体は全盛期を迎えており、彼の妹であるマルチェッリーナ自身も処女であった。というのも、当時の女子修道院は、まさに誕生し始めたばかりだったからである。

8672 プラチェンツィア――現在のプラチェンツァ――は、チザルピナ・ガリア（現在の北イタリア）にあるローマの植民都市で、ポー川の右岸、トレビア川との合流点からほど近い場所に位置していた。その重要性は、主にメディオランからパルマへと続く街道沿いにあったことに基づいていた。

8673 ボローニャ――同時代のイタリア属州の主要都市であり、太古の昔に設立され、北イタリアから中部イタリアへと続く街道上の好立地のおかげで、今日に至るまでイタリアの文化と商業の中心地の一つとして大きな重要性を保っている。

8674 マウリタニア――現在のフェズ、モロッコ、およびアルジェリア西部――は、北アフリカに位置するローマの属州であった。

8675 ティベリス川――ローマ市が位置する川で、古代イタリアの地域であるエトルリアの北東にあるアペニン山脈から源流を発している。

8676 聖アンブロシウス・メディオランシウスの時代には、使徒時代の慣習に従い、民家での典礼の執り行いがまだ許されていた。使徒行伝（第20章7～8節）に見られるように、聖使徒たちは上階の部屋で集まり、聖体礼儀を執り行っていた。迫害の時代のキリスト教徒たちは、公の礼拝堂を持つことができず、民家や地下の洞窟――カタコンベ――、あるいは殉教者の墓のそばに集まっていた。　教会史家エウセビオスは、聖ディオニシオス・アレクサンドリアスの次の証言を伝えている。「迫害の時代、野原、船、宿屋、牢獄といったあらゆる場所が、私たちにとって賛美すべき集いの場であった」。

ヴァレンティニアヌス1世皇帝の死後、西ローマ帝国の統治権は息子のグラティアヌスに移った[8677] 。彼がゴート族との戦争の準備を進めていた際[8678] 、聖アンブロシウスに対し、聖なる信仰の告白を文書にまとめてほしいと願い出た。 聖アンブロシウスは皇帝のために信仰に関する書物[8679] を執筆し、敵に対する勝利を予言するとともに、キリストの御名が記された皇帝の軍旗に祝福を与えた。そして、神の御心に適う者の祈りと祝福により、グラティアヌスはゴート族に対して輝かしい勝利を収めた。

亡きヴァレンティニアヌス長老の妻であり、グラティアヌスの継母であるユスティナはアリウス派信徒であり、聖アンブロシウスを憎み、彼に害をなしていた。 そこで、シルミア（[8680] ）で司教が亡くなると、ユスティナは、自分と同じ信仰を持つアリウス派の者を司教の座に就かせようと、その地へ向かった。聖アンブロシウスもまた、その都市が彼の管轄下にあったため、同地を訪れた。 彼女は女性の怒りをものともせず、アンエミウスという名の敬虔な男性を司教に選出するよう尽力した。ある日、皆が教会に集まり、聖アンブロシウスが説教壇に立ったとき、そこにいたユスティナ皇后は、 あるアリウス派の女性を送り込み、司教の衣服をつかんで席から突き落とし、女性たちが立っている場所へ引きずり込み、女性たちが自らの手でアンブロシウスを殴りつけ、教会から追い出すよう命じた。 しかし、この恥知らずな女が、命じられたことを実行しようと厚かましく聖アンブロシウスに近づいたとき、聖人は彼女にこう言った。

「私はこの聖職にふさわしくない者ではあるが、それでも、あなたは神の司祭たちに対して決して手を上げてはならない。神の裁きを恐れよ。さもないと、予期せぬ不幸があなたを襲うことになるだろう。」

聖アンブロシウスのこの言葉は、まさにその厚かましい女に現実のものとなった。翌朝、彼女は突然亡くなり、聖アンブロシウスは自ら彼女を葬り、悪に対して善をもって報いたのである。 この奇跡に恐怖を覚えたアリウス派の人々とユスティナ女王は、聖アンブロシウスがあの立派な男性を司教に叙任することを、もはや妨げることを敢えてしなかった。こうして、アンブロシウスは何の抵抗もなく、まさに望んでいた人物を司教に叙任し、その後、メディオランへと戻った。

ある時、グラティアヌス王の侍従たちである他の二人のアリウス派信者が、聖アンブロシウスと信仰に関する問題をめぐって公の論争を行いたいと申し出た。論争の主題は、主イエス・キリストの受肉であるはずだった。 定められた時刻、聖アンブロシウスは民衆と共に教会で彼らを待っていた。彼は神の御霊を宿していたため、彼らと論争する準備ができていた。 しかし、前述のアリア派の人々は、その高慢さと聖人を侮辱したいという欲望から、論争の場には現れず、代わりに馬に乗り、街を出て野原へと向かった。彼らが高台に差し掛かったとき、馬が突然怯え出し、アリア派の人々は山から転落して、その場で命を落とした。 一方、聖アンブロシウスはこの出来事について何も知らず、長い間彼らを待ち続けたが、ついに彼らが現れないのを見て、説教壇に上がり、次のような言葉で始まる有名な説教を民衆に向けて語った。 「兄弟たちよ、私は当然の帰還を待ち望んでいるが、昨日の 貸主たちが見当たらない」（以下、聖アンブロシウスの著作『主イエス・キリストの受肉について』に記されている通り）。

[8677] グラティアヌスは、皇帝ヴァレンティニアヌス1世の長男であり後継者で、367年から父の共同統治者となり、376年から388年まで在位した。

[8678] ゴート族は、ドナウ川以東に居住し、東ゴート族（東部）と西ゴート族（西部）に分かれていた、ゲルマン系部族の多民族集団である。

[8679] 聖アンブロシウス・ミラネンシスの著書『信仰について』は、5巻から成っていた。

[8680] シルミウスは、現在のイリリアにある、ドニエプル川の支流サヴァ川沿いの下パンノニア地方の古代の主要都市であった。

その直後、グラティアヌスは、ガリアで彼に反旗を翻した軍司令官マクシムスによって裏切り的に殺害された[8681] 。その後、ローマの皇帝の座には、ヴァレンティニアヌス・ジュニアが母ユスティナと共に就いた。しかし、軍司令官マクシムスはすでにイスパニアとガリアを掌握していたため、彼に抵抗することは不可能であった。 そのため、アリウス派のユスティナは、聖アンブロシウスに助けを求めるしかなかった。彼女は、アンブロシウスにマクシムのもとへ赴き、慈悲を請い、幼い息子のために和平を懇願してほしいと頼んだのである。この慈愛に満ちた牧者は、反乱者のもとへ向かった。彼は、言葉によって導く羊たちのために、自らの命を捧げる覚悟さえあったからである。

アンブロシウスは、その賢明かつ謙虚な言葉によってマクシムスを説得し、その結果、マクシムスはその年、イタリアへ進軍することなく、ガリアにとどまった。

しかし、ユスティナは、この神の聖人のような労苦に対して、恩知らずな報いをした。彼に対する敵意を絶やすことなく、彼女は息子の名においてアンブロシウスに要求を送り、ミラノの大聖堂とそこに収められていたすべての宝物をアリウス派に譲り渡すよう求めた。 しかし、聖アンブロシウスは勇気をもって皇帝の命令に反対した。彼はこう答えた。

「私に属するものは、皇帝に拒むつもりはありません。皇帝のために私の健康さえも犠牲にする覚悟があります。しかし、神に属するものを差し出すことはできません。そもそも、皇帝でさえそれを奪うことは許されません。」

その後、皇帝の名においてユスティヌスから軍隊が派遣され、武力によって教会を奪い取り、そこから司教を追い出すよう命じられた。このことを聞いた民衆は教会に駆けつけ、聖アンブロシウス司教と共に教会内に立てこもり、兵士たちを中に入れないようにした。 信者たちは三日間、教会に閉じこもったまま、神を賛美し、栄光を称え続けた。彼らはアリア派に断固として抵抗し、司教を追放させたり、教会を奪わせたりすることを許さなかった。そして聖アンブロシウスは、王から遣わされた使者の要求に応えて、次のように繰り返した。

「私は自発的に教会から出て行くことも、ここを去ることもない。キリストの羊の群れを、裏切り者の狼たちに引き渡すこともなく、神を冒涜する者たちに神の教会を乗っ取らせることも許さない。 もし私を殺すことが許されるのであれば、この聖堂の壁の中で、剣や槍に貫かれても構わない。私はそのような死を喜んで、愛をもって受け入れる用意がある。

ユスティナ女王は、これらすべてのことを報告されると、恥じ入ると同時に、正教徒たちの勇敢な抵抗に恐れをなして、もはや公然と教会に対する闘争を煽ることを敢えてしなくなった。しかし、自らの敗北を恥じて、彼女は密かに殺し屋をアンブロシウスの邸宅に送り込み、聖人を殺害させようとした。 その悪党は、抜刀したまま司教の寝室に忍び込み、聖なる人物を剣で斬りつけようとすでに手を上げようとしたその時、突然その手が萎えてしまい、下ろすことができなくなってしまった。彼は捕らえられ、誰から、どのような目的で遣わされたのかを自白した。 聖アンブロシウスは、その寛大さゆえに、彼の萎びついた手を癒やし、平和のうちに彼を解放した[8682] 。

[8681] それは383年のことだった。

[8682] それは385年の復活祭の前だった。 翌386年にも同様の出来事が繰り返された。ユスティナがヴァレンティニアヌスにアリウス派に有利な法律を公布するよう説得し、その後、復活祭の頃、聖アンブロシウスに対して極めて苛烈な迫害を仕掛けたため、彼は教会に閉じこもり、祭壇の前に横たわって天からの助けを懇願した。 民衆は、彼が力ずくで連れ去られることを恐れ、彼を取り囲み、昼夜を問わず教会で彼と共に祈りを捧げた。この間、神の聖人は、聖書の朗読やその解説、そして詩篇や賛美歌の詠唱によって民衆を慰めていた。 この時から、東方の教会に倣って聖アンブロシウスが西方教会に導入した、いわゆるアンティフォナ唱、すなわち二声の歌唱が、ミラノの教会でも行われるようになった。一方、ユスティヌスによって派遣された兵士たちは、民衆を教会内に入れるようになったが、教会から出ることは許さなかった。 彼らは正信者たちの歌声に深く感銘を受け、外から自らそれに呼応して歌い始めた。その間、至聖三位一体を讃える聖アンブロシウス自身による崇高な賛美歌も唱えられていた。信徒たちの祈りは聞き入れられ、聖人はその信徒たちの元に残されることになった。

その頃、[8683] 、神は御自分の聖人アンブロシウスに、地中に眠る聖殉教者プロタシウスとゲルヴァシウスの聖遺骨について、幻の中で啓示された。　これらの聖遺骨が発掘されると、そこから多くの奇跡が起こった。例えば、セヴェルという名の盲人が殉教者たちの衣に触れた途端、たちまち目が見えるようになった。また、悪霊に取りつかれた人々から多くの悪霊が追い出された。

一方、王宮では、ユスティナ王妃をはじめとする多くのアリウス派信徒たちが、私たちの主イエス・キリストが聖なる教会に、　において御自身の殉教者たちを称えるという形で授けられた神の恵みを嘲笑し、侮辱していた。　アリウス派の人々は、アンブロシウスが金で人を雇い、彼らに悪霊に取り憑かれたふりをさせ、殉教者の墓に連れて行き、その偽りの悪霊に取り憑かれた者たちが癒されたかのように見せかけ、その後、そのような偽りの奇跡の評判を民衆の間に広めていると主張していた。

こうした宮廷の人々が互いにこのような不敬な会話を交わしている最中、突然、神の御許しにより、そのうちのひとりに悪霊が取り付き、彼を苦しめ始めた。苦しめられている男は恐ろしい悲鳴を上げ、こう叫んだ。

「私と同じ運命が、聖なる殉教者たちを冒涜する者たちすべてに、また、アンブロシウスが信じるよう教えている三位一体を信じない者たちにも降りかかりますように！」

その場に居合わせた者たちは皆、恐怖に襲われたが、悔い改めて信仰を持つどころか、苦しめられている男を捕らえ、湖に投げ込んで溺死させた。　またある時、これらの不敬虔なアリウス派の一人が、聖アンブロシウス司教が教会で民衆に説教をしている最中に、教会に入ってきた。すると、そのアリウス派の男は、神の天使がアンブロシウスの耳元で何かをささやいているのを見た。　この幻視によって、聖なる司教が天使から啓示された言葉を民に説いていることが明らかになった。これを見たアリウス派の男は、直ちに正統派に改宗し、全能の神の恵みにより、かつて迫害していたその信仰の擁護者となった。

一方、ユスティナ女王は聖人に対する敵意を絶やすことなく、彼を滅ぼそうと画策する中で、エウフィミオスという名の貴族を味方につけた。彼女は贈り物で彼を買収し、アンブロシウスを密かに捕らえて、どこか遠い国へ流刑に送るよう説得した。　女王の望みを実現しようと、エウフィミオスは、適切なタイミングを見計らって神の聖人を捕らえやすくするため、教会の近くに家を建てた。彼は聖アンブロシウスを流刑地に連行するために特別な馬車を用意したが、神の裁きにより、*「その悪意は彼自身の頭上に返り、その悪行は彼の頭頂に降りかかる」*（詩篇7:17）こととなった。

すなわち、エウフィミオスが聖アンブロシウスを捕らえようとしていたまさにその日、予期せず皇帝の命令が届き、エウフィミオスは直ちに追放されることになった。そして、彼、この不信心な者が聖アンブロシウスを追放するために用意していたまさにその戦車に乗って、彼は追放の地へと運ばれたのである。

反乱者マクシムスが再びイタリアに対して軍事行動を開始すると、ユスティナは急いでアンブロシウスと和解し、息子と共に、彼に再び反乱者を説得しに行くよう懇願した。　悪意を忘れ、聖アンブロシウスはマクシムのもとへ向かったが、今回は、この無情で高慢な反逆者に対する嘆願は全く実を結ばなかった。　その頑なな態度を見て、聖アンブロシウスは並外れた勇気を示し、人々の面前で、無実の君主を陰険な手段で殺害した殺人者として彼を呪い、聖なる教会から破門した。マクシムスはイタリアに侵攻し、次々と都市を制圧していった。　若き皇帝は彼に抗うことができず、母と共

[8683] その同じ386年のことである。

にテッサロニキ[8684] へ、ギリシャの東ローマ皇帝テオドシウス大帝[8685] の元へ逃れ、彼に援助を請うた。テオドシウスは軍を召集し、マクシムスに攻め寄せ、彼を打ち破った。マクシムスは殺害された[8686]； その死は、グラティアヌス皇帝の無実の血に対する報いであった。しかし、皇后ユスティナはこの幸先の良い勝利を目にすることは叶わなかった。彼女はギリシャに到着して間もなく亡くなってしまったからである。一方、彼女の息子ヴァレンティニアヌスは、テオドシウス皇帝の説得に従い、正教に改宗した。

ユスティナの死後、ある時、一人の魔術師が裁判にかけられ、拷問を受けた。拷問の最中、彼は、処刑人自身よりも聖アンブロシウスの守護天使の方が自分をもっと苦しめていると叫んだ。一体どのような罪でその天使に罰せられているのかと問われると、魔術師は次のように自白した。

「ユスティナ皇后が生きていた頃、私は魔術を用いて、メディオランの民衆の中に、この都市の司教であるアンブロシウスに対する敵意を煽ろうとしていた。その目的のために、真夜中に私は教会の屋根に登り、そこで悪魔たちに生贄を捧げていた。 しかし、邪悪な策略によってアンブロシウスを民衆に憎まれるようにしようとすればするほど、私の目の前で、民衆のその牧者に対する愛と親しみがますます深まり、その信徒たちは正統かつカトリック的な信仰においてますます繁栄していった。 自分の努力が実を結ばないのを見て、私はアンブロシウスの家へ悪魔を送り込み、彼を殺させようとした。しかし、悪霊たちは私にこう告げた。「司教本人だけでなく、彼の家の戸口にさえ近づくことができない。なぜなら、その戸口から炎が出てきて、私たちを焼き尽くしてしまうからだ。」

これが、拷問の最中に魔術師が告げたことであり、実にアンブロシウスは悪魔たちにとって恐るべき存在であった。 ある時、ある人々が、悪霊に取り憑かれた少年を聖アンブロシウスのもとへ連れて行った。彼らがその少年を連れてメディオランにたどり着く前に、悪霊は憑かれた少年から出て行き、少年は癒やされた状態で神の司教のもとへやって来た。この少年は、かなり長い間、聖アンブロシウスのもとにとどまった。 その後、彼はメディオランを後にし、故郷へと向かった。すると、かつて悪魔が彼を置き去りにしたまさにその場所で、狡猾な敵が再びその少年を襲い、苦しめ始めた。呪術師たち[8687] が悪霊に、なぜメディオランでは少年を苦しめなかったのかと尋ねると、悪魔はこう答えた。

「私はアンブロシウスを恐れていたため、メディオランにたどり着く前に少年から逃げ出し、彼を置き去りにしたまさにその場所で待ち伏せていた。彼が引き返すのを見て、再び彼の中に乗り移ったのだ。」

反逆者マクシムスの死後、テオドシウス皇帝がメディオランに到着した。一方、聖アンブロシウスは当時アクイレイアに滞在していた[8688] 。そして、次のような出来事が起こった。 東方のとある都市で、ユダヤ人が修道士たちに侮辱を加えたことを理由に、キリスト教徒たちによってユダヤ教の

[8684] テッサロニキ、あるいはソロンは、ソロン湾、すなわち大フェルメイ湾に面した、マケドニアの重要な古代都市である。テッサロニキは、聖使徒パウロによって設立されたキリスト教共同体の中心地であった。現在のテッサロニキは、コンスタンティノープルに次ぐ、ヨーロッパ・トルコにおける第一の商業都市であり、非常に多くの人口を擁している。

[8685] テオドシウス大帝――東ローマ帝国の皇帝であり、後に西ローマ帝国もその支配下に組み入れた。在位は379年から395年まで。

[8686] 388年。

[8687] 最も初期のキリスト教会には、「悪魔祓い人」という特別な下級聖職が存在した。悪霊に取り憑かれた者から悪霊を追い出すというこの任務は、キリストの教会が悪魔の虚しい力に対して抱く軽蔑を示すことを目的として、下級聖職者に課されていた。 呪文師たちは、洗礼の準備をしている者、すなわち聖なる洗礼の秘跡を受ける準備をしている者に対しても、禁制の祈りや呪文の祈りを唱えなければならなかった。現在では、聖なる洗礼の秘跡に先立って行われるこれらの呪文の祈りは、洗礼を執り行う司祭自身によって読まれている。 ペトル・モギラの典礼書には、悪霊に取りつかれた者から不浄な霊を追い出すための特別な儀式が記載されている。

[8688] アクイレイアは、アドリア海沿岸からほど近いナティソン川沿いにある重要な商業都市である。

シナゴーグが焼き払われた。東方の総督がこれを皇帝に報告すると、皇帝は直ちに、その都市の司教に対し、ユダヤ人のために新しいシナゴーグを建設するよう命じた。　聖アンブロシウスはこの命令を知ると（自ら直ちに皇帝のもとへ赴くことはできなかったため）、皇帝に手紙を送った。その手紙の中で、彼は皇帝に対し、その決定の不当性を論じ、勅令を取り消し、キリスト教徒をユダヤ人による侮辱にさらさないよう懇願した。　しかし、テオドシウスはアンブロシウスの手紙を無視した。そこで、神の司教はメディオランに戻ると、説教の最中に教会で皇帝を公然と非難した。アンブロシウスは皇帝に向き直り、神の名において次のように告げた。

「わたしはあなたを無名の人から引き上げ、王とした。あなたの敵をあなたの手に委ね、そのすべての軍勢をあなたに服従させた。あなたの子孫に王位を授けた。あなたが容易に勝利を収められるようにしたのに、あなたはわたしの敵たちに、わたしを嘲笑する口実を与えている。」

テオドシウス皇帝は、この言葉に心を動かされ、決定を翻し、キリスト教徒によるユダヤ教のシナゴーグの修復を命じた勅令を取り消した。

その頃、別の事件も起こった。テッサロニキの民衆が、その統治者ボテリヒス（[8689] ）に反旗を翻し、彼を殺害したのである。皇帝は激しい怒りに駆られ、その都市に軍隊を派遣し、その結果、七千人もの住民が殺害された。　その際、多くの無実の人々が剣の刃によって命を落とした。というのも、兵士たちは都市への襲撃の際、統治者の殺害に関与した者を特定しようとは全くせず、街頭で老若男女を問わず、さらには乳児に至るまで、すべての人々を殺害したからである。

アンブロシウスはこの話を耳にすると、深く悲しみ、このような無謀な流血に対して、王に対して正義の怒りを抱いた。　そしてある日、祝祭の日、皇帝が厳かに教会へと向かっていたとき、神の司教は恐れを知らず皇帝のもとへ歩み寄り、教会の入り口を塞ぎ、次のような言葉で不当な殺害について皇帝を非難し始めた。

「王よ、あなたがそのような殺戮の加害者となり、そのことについて悔い改めも示さなかった以上、忠実なキリスト教徒たちと共に聖体拝領に与るべきではありません。　どうして、無実の血で染まったこの手（[8690] ）で、キリストの御体（ ）を受け取ることができるというのか。あるいは、人々を残酷に殴打するよう命じたその口で、どうして主の血を飲むことができるというのか?

「しかし、ダビデも罪を犯したではないか」と皇帝は反論した。「彼は殺人と姦淫を犯したが、それでも神の憐れみを失うことはなかったではないか。」

しかし、聖人はテオドシウスにこう答えた。

「もしあなたがダビデの罪を模倣したのなら、悔い改めにおいても彼に倣うべきだ。」

皇帝は当惑し、自らの罪を嘆きながら宮殿へと戻った。そしてまもなく、聖アンブロシウスが彼に課した通りの悔い改めを行った。彼は庶民のように公然と悔い改め、教会の前でひれ伏し、他の悔い改める者たちと共に立ち、あふれんばかりの涙を流した。　その間、キリストの降誕祭が訪れたが、テオドシウスは宮殿で涙を流しながら座り込み、神の神殿は家来や貧しい者たちには開かれているのに、自分にはこのような時でさえも立ち入ることができないと嘆いていた。　皇帝から特別な寵愛を受けていた大臣ルフィンという人物が、彼の涙の理由を知ると、聖アンブロシウスのもとへ駆けつけ、皇帝に対する懺悔の罰を解くよう説得した。その後を追い、テオドシウス自身も教会へと向かった。　神の聖人は当初、彼を厳しく迎え、その短気な性格を知っていたため、死刑や財産没収に関する裁判所の判決が30日後に確定するという法律を制定するよう要求した。王はこれに同意し、神殿に迎え入れられた。　皇帝はそこで深い悔恨のしるしを見せた。両手で髪を引きむしり、額を床に打ちつけ、涙の川を祭壇の床に流し続けた。その後、アンブロシウスはついに皇帝を聖体拝領に許した。皇帝は、聖職者たちと共に聖体拝領を行うつもりで、祭壇に入ったようであったが、　しかし、聖

[8689] ボテリヒ――テッサロニキの統治者であり、テオドシウス大帝の友人であった。

[8690] 当時、信徒も聖なるキリストの秘跡に与る際、キリストの御体を手に受けていた。11月9日の「レズヴィアの聖テオクティスタの生涯」を参照のこと。

アンブロシウスは大助祭を皇帝のもとへ遣わし、他の信徒たちと共に祭壇の前で聖体拝領を待つよう命じた。「なぜなら――聖人は言った――紫の衣は王としての威厳を示すだけであり、司祭としての位階を示すものではないからだ」。　皇帝は謙虚に司教の命令に耳を傾け、祭壇から退出した。「コンスタンティノープルには、皇帝が司祭たちと共に祭壇で聖体拝領を行うという慣習がある」と彼は述べた。しかしその後、テオドシウスは教会内で他の信徒たちと共に聖体拝領の時を待った。　その後、テオドシウス皇帝がすでにコンスタンティノープルにいた際、彼は聖体拝領のために聖所に入らなかった。そして、ネクタリオス総主教から「[8691]」と、なぜ王の慣習に従わず、聖所の外で一般の人々と共に聖体拝領を待っていたのかと問われると、ため息をつきながらこう答えた。

「かつては王と司教の違いを知らなかったが、今や真理の師であるアンブロシウスから学び、その違いを知った。彼こそが、司教と呼ばれるにふさわしい唯一の人物である。」

アンブロシウス司教の名声は至る所に広まっていった。そうして、ペルシャから二人の極めて博学な賢者がメディオランを訪れた。聖アンブロシウスの深遠な知恵について多くの噂を耳にしていた彼らは、その真偽を確かめようと、多くの質問を用意し、彼に解答を求めた。　彼らは彼と長い間語り合い、その神学の深遠さと知性の高さに感嘆した。彼らは皇帝の前で、アンブロシウス一人に会うため、またその卓越した知恵を目の当たりにしてその深遠さを味わいたいという願いから、東から西へとこれほど遠い旅路を敢行したことを証言した。

テオドシウス皇帝がイタリアからコンスタンティノープルに戻った後、ヴァレンティニアヌス2世は、護衛隊長 ――アルボガスト――の唆しにより、ヴィエンナで殺害された後[8692]、皇帝の座に就いたのはエウゲニウス[8693]であった。彼は名目上はキリスト教徒であったが、その内面は偶像崇拝者であり、異教の迷信や魔術を愛好する者であった。　彼はローマ当局に気に入られたいと願い（当時、ローマにはまだ多くの偶像崇拝者や悪魔の僕たちがいた）、偶像の神殿を開き、悪魔への生贄を捧げるよう命じた。　彼がメディオランに近づいたとき、聖アンブロシウスは、表向きはキリスト教徒を装いながら、実のところ不道徳な不信心者であるような皇帝に会うことを望まず、メディオランの からボノニア[8694]へ、そしてトスカーナ地方にあるフィレンツェ[8695]へと退去した。 彼は不義な支配者の悪意を恐れたのではなく、彼と会うこと自体を嫌悪していた。彼は恐れることなく彼に手紙を書き、諭し、神の裁きを警告したが、無情な心を持つエウゲニウスを改心させることはできなかった。　フィレンツェで、この神の御使いはしばらくの間滞在し、デセンタという名の敬虔で正統な信者の家に身を寄せた。その家には、幼い少年パンソフィウスという息子がおり、彼は邪悪な霊に苦しめられていた。聖アンブロシウスは、祈りと按手によってその少年を癒した。　数日後、その少年は突然病に倒れ、亡くなってしまった。信仰深く、神への畏れに満ちた敬虔な母親は、息子をアンブロシウスの部屋へ運び込んだ。聖人はその場にいなかったため、彼女は我が子を聖人の寝床に寝かせ、その場を離れた。　聖アンブロシウスは、自分が使っていた部屋に戻ると、亡くなった少年が自分の寝床に横たわっているのを見た。　そこで彼は扉を閉め、祈りを捧げた。その後、預言者エリシャ（列

[8691] 聖ネクタリオスは、381年から397年までコンスタンティノープルで総主教を務めた。

[8692] ヴィエンナ（現在のウィーン）は、ローマ時代の植民地であり、後にゲルマン諸部族によって設立された様々な国家の首都となった。ローヌ川の左岸に位置する。現在、この都市にはローマ時代の遺跡が数多く残されている。

[8693] エウゲニウスは、身分の低い家系の出身であり、ヴァレンティニアヌス2世皇帝の秘書を務めていたが、同皇帝の暗殺後、アルボガストによって帝位に就かされた。しかし、テオドシウス大帝は自らの軍を率いてアルボガストに反旗を翻し、彼を打ち破ってエウゲニウスを処刑させた。

[8694] ボノニア――北イタリア、キサルピナ・ガリア地方、いわゆるエミリア街道沿いに位置する非常に有名な都市。現在はボローニャと呼ばれ、同名のイタリア属州の州都であり、その教養の高さと盛んな商業で知られ、非常に多くの人口を擁している。

[8695] トゥスキア――別名エトルリア――は、イタリア中部の西部に位置する古代の地域であり、ティレニア海とアペニン山脈に挟まれ、ローマの北に位置していた。――アルネ川沿いのフィレンツェは、科学と芸術の発展で名高いイタリアの都市である。

王記下4:32–35）のように、寝台に近づき、少年の上に身を屈めて息を吹きかけた。少年は蘇り、アンブロシウスは彼を生きたまま母親に返した。

その間、エウゲニウスはメディオランから皇帝テオドシウスに対する遠征に出発した。街を出る際、不敬虔なエウゲニウスは、勝利して帰還した際には、メディオランの教会を馬小屋に変え、聖職者たちを剣で斬り殺すと豪語した。　しかし、これらの脅しに込められた並外れた悪意は、結局無力に終わる運命にあった。エウゲニウスはフェオドシウス皇帝に敗れ、戦場で不名誉な最期を遂げたのである。　神の聖人は、敬虔なテオドシウス皇帝を勝利者として厳かに出迎えたが、テオドシウスは聖アンブロシウスの足元にひれ伏し、自らの勝利を聖人の祈りによるものだと述べた。

しばらくして、テオドシウス皇帝は安らかにこの世を去った[8696] ；彼は神に喜ばれる統治を行い、終わりのないキリストの御国へと旅立った。そして、この世の王位は彼の息子たち、すなわち東方のアルカディウス[8697] と西方のゴノリウス[8698] が引き継いだ。 ゴノリウスの治世中、聖アンブロシウスによって殉教者ナザリウスとケルシウスの聖遺骨が発見されたが、これについて長老パヴリンは次のように伝えている。

当時、アンブロシウスは、郊外の庭園で発見された聖殉教者ナザリウスの聖遺骨を、聖使徒教会へと移した。我々は、殉教者の聖遺骨が安置されていた棺の中に、まるで今まさに流れ出たかのような血を見た。　髪と髭の生えた頭部は、まるで今まさに棺に納められたばかりであるかのように、腐敗することなく保存されており、殉教者の顔は、まるで今洗われたばかりのように明るく輝いていた。しかし、主ご自身が御自身の福音書の中で、*「あなたがたの頭の毛さえも、すべて数えられている」*（ルカ12:7）。私たちは、あらゆる香りを凌ぐような芳香を感じ取った。聖殉教者ナザリウスの聖遺骨を戦車に移した後、私たちは直ちに聖アンブロシウスと共に、同じ地域に安置されていた聖殉教者ケルシウスの聖遺骨へと向かった。　この庭園の所有者たちから、先祖から「この場所を離れてはならず、代々守り続けよ」と命じられていたことを聞きました。なぜなら、ここに偉大な宝が納められているからです。　そして、まことに、これらの宝は偉大であり、虫も錆もそれを滅ぼすことはなく、盗人も掘り起こして盗むこともない（マタイ6:20）。 それらの守り手は主であり、人生はキリストであり、死は得るもの（フィリピ1:21）である者たちのための場所は、天国に定まることである。　聖なる殉教者たちの遺骨が使徒教会に運ばれたとき、聖アンブロシウスは民衆に説教を語った。その時、民衆の中にいた、不浄な霊に取りつかれた者が、大声で叫んだ。

「アンブロシウスが私を苦しめている！」

しかし、聖人はその者の方を向き、こう言いました。

「黙れ、悪魔よ！　アンブロシウスではなく、殉教者たちの信仰が、そしてあなたの嫉妬が、あなたを苦しめているのだ。なぜなら、あなたは人々が、あなたが追放されたあの場所へと昇っていくのを見ているからだ。アンブロシウスは、高慢になることなどできないのだ。」

聖アンブロシウスのこの言葉の後、悪魔は黙り込み、憑りつかれていた男を地面にひれ伏させた。

聖アンブロシウスの評判は、マルコマニ族の女王[8699] ——フリティギルダにも届き、彼女はアンブロシウスに、キリストへの信仰を教えてほしいと懇願する使者を送った。アンブロシウスは彼女にキリスト教の信仰に関する詳細な教訓を書き送り、キリスト教の真理を納得させた。　フリティギルダは夫をもキリストへの信仰へと導き、さらに彼を説得してローマ帝国との和平条約を締結させた。　フリティギルダは、自身の導き手である聖アンブロシウスにぜひとも会いたいと強く願い、その

[8696] 395年。聖アンブロシウスは、テオドシウス大帝の追悼の言葉を捧げた。

[8697] アルカディウス——東ローマ帝国の皇帝。在位は390年から408年まで。

[8698] ゴノリウス – 西ローマ帝国の皇帝。在位は390年から423年まで。

[8699] マルコマニ族——ボヘミアに居住し、ローマ帝国の辺境の属州に対して度々壊滅的な襲撃を仕掛けたゲルマン族。

意図を胸にメディオランへと向かったが、聖人はその直前に主のもとへ召されていたため、すでにこの世にはいなかった。

聖アンブロシウスは、節制と勤勉に富み、霊的な活気に満ちた人物であった。彼は、土曜日、日曜日、祝日、そして殉教者の記念日を除き、常に断食を行っていた。昼も夜も絶え間なく祈りを捧げ、　務めには熱心に取り組み、肉体の病に阻まれない限り、自ら筆を執って書物を著した。彼は教区内のすべての教会に対して慈愛に満ちた配慮を注ぎ、神から委ねられた責務を果たすために多大な労力を費やしたため、彼の死後、五人の司教でようやくその業務をこなすことができたほどであった。　また、貧者、困窮者、そして捕虜たちに対する彼の慈愛は、言葉では到底言い表せないほどであり、彼は自分の残りの財産をすべて彼らのために費やした。　司教の位に就いた直後、アンブロシウスは、神の聖堂の装飾、貧者や孤児の養生、そして捕虜の身代金のために、自身が所有していた金、銀、その他の財産をすべて分配した。　財産のごくわずかな部分だけを妹の生活費として取り分け、自身には何も残さなかった。それは、あらゆる財産から解放されることで、私たちのために貧しくなられ、その貧しさによって私たちを豊かにしてくださった（IIコリント8:9）主キリストに従うことをより容易にするためであった。　神の御心に適う者アンブロシウスは、*「すべての人のために、すべての人となった」*（Iコリント9:22）のであり、喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣いた。　もし誰かが自分の罪を告白するために彼のところへやって来ると、アンブロシウスはその人のために自ら深く嘆き、心が石のように硬くなった罪人でさえも悔い改めへと導き、心を動かして涙を流させるほどであった。

聖アンブロシウスが老齢に達したとき、神のもとへの旅立ちを予感し、司祭団にこう語った。

「私はイースターまで、皆さんと一緒にいます。」

前述のパヴリン司祭は、聖アンブロシウスの生涯を記した際、自身が目撃した次の出来事についても語っている。　「病に倒れる少し前、聖アンブロシウスは詩篇第43篇の解説に没頭しており、私――パヴリンは――彼の言葉を書き留めていた。というのも、アンブロシウス自身は老いと衰弱のため、もはや多くを書くことができなかったからだ。　すると突然、彼を見上げると、彼の頭の周りに盾のような炎が見えた。その炎は徐々に渦を巻いて彼の口の中へと入っていった。その時、アンブロシウスの顔はまるで雪のように白くなった。この幻視に私はひどく恐怖を覚え、怖くて筆を動かすことさえできなかったが、その後、アンブロシウスの顔は再びいつもの様子に戻った。　私はこのことを尊敬すべき助祭カストルに報告したところ、神の恵みに満ちた彼は、私が目にしたのは、かつて聖使徒たちの上に降りたように、火の姿で私たちの司教の上に降りた聖霊であったと説明してくれた。

将軍スティリコ[8700]は、アンブロシウスが死の床にあると聞き、こう叫んだ。

「この聖人が亡くなれば、イタリアは滅びてしまう！」

そして、病床にある聖人に、聖アンブロシウスが愛していると知っていたミラノの尊敬すべき市民たちを遣わし、他者のためにこの世での命の延長を主から請い願うよう、聖人に懇願させた。アンブロシウスはこれに対し、次のように答えた。

「私はあなたがたの中で、これ以上生きることを恥じるような生き方をしてきたわけではない。しかし、私は死をも恐れない。なぜなら、私たちには全善なる主がおられるからだ。」

アンブロシウスが病床に伏している間、その寝台からかなり離れた部屋の入り口には、助祭のカストゥルス、ポレミウス、ヴェネリウス、フェリクスが座っていた。彼らは互いに語り合っていたが、ささやき声で、しかも非常に静かに話していたため、その会話は彼ら自身にしか聞こえなかった。　彼らは、アンブロシウスの後を継いで司教となるべき人物について議論しており、その際、長老

[8700] スティリコ――ゴノリウス帝の宮廷に仕えた西ローマ帝国の名将で、幾度となく帝国を滅亡の危機から救った。ヴァンダル族の出身であったが、後に国家への功績にもかかわらず、宮廷内の陰謀により、架空の反逆罪の容疑でゴノリウス帝の命令により処刑された。

シンプリキアヌスの名が挙がった。 すると突然、彼らから遠く離れた場所に横たわっていた聖 アンブロシウスが声を上げ、まるで彼らと会話を交わすかのように三度、「彼は年老いているが、精神は明晰だ」と繰り返した。この言葉によって、彼は自身の死後、長老シンプリキアヌスが司教職を引き継ぐことを定めたのである。

病床にあった聖アンブロシウスは、祈りの最中に、愛に満ちた微笑みを浮かべて彼のもとへ歩み寄る我らの主イエス・キリストを目撃し、その神聖な御顔を彼に示された。アンブロシウスは、その時彼の傍らに座っていたラウディウス司教[8701] ヴァッシアンにこのことを語った。 聖アンブロシウスの魂が肉体から離れる時が近づくと、ヴェルツェル教会の司教[8702] ゴノラトゥスは、家の上階で休んでいたところ、上空から三度、次のように告げる声を聞いた。

「急いで起き上がり、アンブロシウスのもとへ急げ。彼は今まさにこの世を去ろうとしている。」

そこで司祭は立ち上がり、至聖なる秘跡を携えて、病人のもとへ下りていった。聖アンブロシウスは祈りを捧げ、神の賜物を聖体として受け、聖なる復活祭の日の夜明けに、その聖なる魂を主の御手に委ねた[8703] 。 その聖なる遺体はミラノの大聖堂に安置され、その魂は天使たちと共に、聖三位一体――父と子と聖霊、唯一の神――の御座の前に現れた。神に永遠の栄光あれ、アーメン。

コンダク、第3声：

神聖な教義を説き、アリウス派の惑わしを打ち砕いた、聖なる秘儀の守り手であり牧者であるアンブロシウスよ。御霊の力によって奇跡を行い、様々な病を癒やした。尊き父よ、キリスト・神に祈り、我らの魂が救われますように。

[8701] ラヴド――北イタリア、メディオランとクレオンの間に住む民族。現在のロディ・ヴェッキオ。

[8702] ヴェルツェッラ――メディオランの西にほど近い都市。

[8703] それは397年4月4日のことだった。聖アンブロシウスは67歳でこの世を去った。彼の伝記作者である長老パヴリンは、これに付け加えて、当時（復活祭の夜に）洗礼を受けた多くの子供たちが、水から上がった後、アンブロシウスを見たとしている――ある者は彼が説教壇に座っているのを見、 またある者は、歩いているかのように彼を指さして両親に示したが、両親は目が清められていなかったため、見ても彼を認識できなかった。多くの人が、彼の遺体の上に星を見たと言っていた。教会は、彼が司教に任命された日である12月7日に彼の記念日を祝う。おそらく、彼の没日が断食期間や復活祭の期間と重なっていたためであろう。–聖アンブロシウス・ミラネンシスは、数多くの著作を残した。その中には、聖書の解説に関するものもあれば、聖なる信仰の教義を明らかにしたもの、高潔な道徳的教訓を説くものなどがある。 その例として、ルカによる福音書の注解、六日創造に関する六巻、信仰に関する五巻、使徒信条の解説、受肉に関する一巻、聖霊に関する三巻、秘跡に関する一巻、 悔い改めに関する2巻、復活に関する教義（弟の死について記した2巻および皇帝ヴァレンティニアヌスとテオドシウス大帝の死に関する2つの説教に詳述）、世俗からの離脱、貞潔、寡夫、ヤコブ総主教、そして至福の生活について、 エリヤと断食、節制を称えるもの、貞潔およびその他の美徳の模範としてのヨセフ総主教に関するものなど。アンブロシウスの全著作の中で、彼の『職務について』（教会の長老たち）という3巻の著作が第一の地位を占めている。 また、聖アンブロシウスの礼拝の編成に関する著作も極めて重要である。彼は自身の教会のために、聖体礼儀をはじめとする諸礼拝の儀式を整備し、それは北イタリア全土に広まった。 この典礼形式はミラノで現在も守られており、ミラノの典礼は今日でもローマの典礼とは多くの点で異なっており、そこにはアンブロシウスが東方教会の儀式との接近を明確に望んでいたことがうかがえる。典礼の形式において、聖アンブロシウスは以下のものを導入した：1) 福音書、使徒書簡、預言書の朗読の開始と終了を定めた「レクショナリウム」；2）祈りと序文を伴う聖体礼儀の式次第；3）東方から取り入れられた全く新しい制度である「アンティフォナリウム」。聖アンブロシウスは、アンティフォナリウムのための楽譜と賛美歌の両方を執筆した。 聖アンブロシウスの真作である賛歌の中でも、特に「*神よ、あなたを賛美します*」という賛歌は特筆すべきである。この感謝と祝賀に満ちた歌は、今日に至るまで主へのあらゆる祝賀の感謝礼において繰り返し歌われており、聖アンブロシウスがアリウス派に対して完全な勝利を収めた後に作曲されたものである。

聖ニラ・ストロベンスキー、ノヴゴロドの奇跡行者の生涯

記念日：12月7日

尊者ニルは、ノヴゴロド州のデレフスカヤ・ピャティナ[8704]、ジャベンスキー教区[8705]にあるある村で生まれた。両親が誰であったかは不明であるが、彼がプスコフ州にある「クリペツ」[8706]と呼ばれる修道院の一つで出家したことは知られている。　彼はこの修道院を後にし、ルジェフ郡の荒野へと向かい、そこでチェレムヒ川[8707]のほとりに定住した。彼はそこで草や樫のドングリを糧とし、断食と祈りに時間を費やした。悪魔はこれを耐えられず、聖人をその場所から追い払うべく、激しい憎悪を胸に聖人に対して攻撃を仕掛けた。　悪魔は、様々な幻影でニルを脅かし、獣やあらゆる爬虫類の姿となって彼の前に現れ、狂ったような鳴き声や叫び声を上げながら聖人に襲いかかった。しかし、聖人は祈りを剣のように用いて、これらの誘惑や敵の邪悪な策略をすべて退け、十字の印で自らの身を守り、絶えず神に祈りを捧げた。ニルはこのような生活を送り、多くの苦行と荒野での労苦に身を捧げながら、十三年間を過ごした。

ある日、長時間の祈りの後、ニルは眠りにつき、ある声が彼に命じるのを耳にした。

「ニールよ！ここから出て、ストロベンスキー島へ行きなさい。そこなら、あなたは救われるだろう。」

この命令を受けた聖人は、主が自分の祈りを軽んじなかったことを悟り、大きな喜びに満たされた。ニールは、自分を訪ねてくるキリストを愛する人々に、その島について尋ね始めた。彼らは、その島がセリゲル湖にあり、トヴェリ州のオスタシュコフの町から七ヴェルスタの距離にあると彼に伝えた。　聖人はそこへ向かい、島にたどり着くと、その美しさに喜びと驚きを覚えた。島全体を巡り歩いたニールは、そこが隠遁生活に非常に適していることを知り、心の中で喜び、大いに歓喜した。その島には山と広大な森があった。山に登ると、ニールは祈りを捧げ、こう言った。

「ここが私の安息の地だ。ここに永遠に身を置くのだ。」

そして、この場所を導いてくださった神に感謝を捧げた。そこで彼は山の中に洞窟を掘り、その洞窟で最初の冬を過ごした。その後、そこに修道室と礼拝堂を築いた。　ニールは島で、偉大な修行と祈り、断食と労働に明け暮れる生活を送った。彼の糧は、島に自生する穀物やベリー類、そして自らの手で耕した土地から採れる野菜や果実であった。しかし、悪魔はここでも聖人への攻撃を止めず、あらゆる幻影で彼を脅かした。　ある時、悪魔は悪霊の大群を率いて現れ、聖人が祈りを捧げていた修道院を包囲した。悪魔はロープで修道院を囲み、狂ったような叫び声を上げてそれを湖に引きずり落とすと脅したが、聖人は祈りによって悪霊の大群を追い払った。

また、聖ニロスに対する人々の憎しみも実を結ばず、かえって彼の栄光をさらに高める結果となった。　ある日、ストロブヌイ島の近くに住む不信心な住民たちは、聖人を島から追い出そうと企み、そのために薪を切り集めて森に火を放った。彼らは、火が聖人の庵に燃え移り、それを焼き尽くすだろうと考えていた。これを見た聖人は祈りを捧げ、多くの涙を流しながら、この災難からの救いを懇願した。　慈悲深き主は、御自身を信頼する御自分のしもべの祈りを聞き入れられ、御自身の恵

8704 「*ピャティナ*」とは、ノヴゴロド地方が五つの区域に分けられていたことを指す名称である。それらの名称は、ヴォツカヤ、シェロンスカヤ、オボネシュスカヤ、デレフスカヤ、ベジェツカヤであった。

8705 これは現在、ノヴゴロド州ヴァルダイ郡に位置する。このポゴストは現在もノヴゴロド地区にあり、尊者ニルがこのポゴストの出身であったことを記念して、今もなお尊者ニルに捧げられた付属教会が建っている。

8706 この修道院は廃止され、その跡地には現在、「ロジェク」と呼ばれるポゴストがある。

8707 チェレムハ川、あるいはセレムハ川はヴァルダイ郡にあり、ニロヴァ・プスティニに属している。今日に至るまで、樹齢数百年の木々に囲まれた彼の礼拝堂とケリアは、チェレムハ川における聖ニルの滞在の記念碑として残っており、近隣住民から敬虔な敬意を払われている。

みによって彼を守られた。炎は山に到達するやいなや、たちまち消え去ったのである。聖人は、神の速やかな御慈悲を目の当たりにして心から喜び、敵たちは恥じ入って家路についた。

ある時、聖人がケリアの外で作業をしていると、強盗たちが聖人に襲いかかり、脅して自分の宝物を渡すよう要求した。すると聖人は彼らにこう言った。

「私の宝物はすべて、ケリヤの隅にある。そこに入って、それを持ち去りなさい。」

その隅には、聖母マリアと永遠の御子を描いたイコンが置かれていた。強盗たちは修道室に入ると、突然目が見えなくなってしまった。そこで彼らは涙ながらに聖人に許しを請い始めた。聖人は神に祈りを捧げると、強盗たちの目は再び見えるようになった。　その後、聖人は彼らに魂の救いについて説き、自分たちに起きたことを誰にも話さないよう命じた。彼らはその時は黙っていたが、聖ニロスの死後、すべてを語り明かした。

その功績と苦難に耐えた忍耐により、聖ニロスは人々の隠された行いを見通し、罪を犯す者を真理の道へと導く賜物を受けた。

ある男が、肉欲の汚れにまみれた状態で聖人のもとを訪れた。聖人はその罪を指摘し、二度とそのような行いをしないよう戒めた上で、平安のうちに帰した。それ以来、その男は神を畏れるようになり、神に喜ばれる生き方を送った末、この世を去った。

島の近くで漁業を営む敬虔な住民たちは、聖人を崇敬し、獲れた魚を彼の糧として送っていた。ある日、彼らは仲間のひとりを魚を携えて聖人のもとへ遣わした。　聖人は、その漁師が姦淫によって身を汚していることを霊眼で見抜くと、彼の目の前で修道室の窓を閉ざし、魚を受け取らなかった。　漁師は仲間のもとへ戻り、起こったことを話した。仲間たちは別の者を魚を持って聖人のもとへ遣わした。すると聖人は喜んでその魚を受け取り、祝福して彼を帰した。

またある時、ある男が島で家を建てるために木を切り倒そうとしたが、突然恐ろしい雷鳴が轟き、木を切ることを禁じる声が聞こえてきた。しかし、その男はこれを恐れず、木を荷車に積み始めたが、馬は荷車を動かすことができなかった。　この奇跡を目撃したその男は、二度とそのようなことをしないと誓い、恐れおののきながらその場を去った。

その聖人はストロブノイ島で二十七年を過ごし、亡くなる前に自らの手で地中（礼拝堂内）に埋葬の場所を掘り、そこに棺を置いた。毎日そこを訪れると、彼はその棺の前で泣きながら、こう自分に言い聞かせていた。

「これこそが私の安息の地、私の住まいだ！」

ついに聖人が死の訪れを感じると、主に対し、聖体拝領を許してくださるよう祈った。聖人の祈りに応じ、その願いは叶えられた。ニコルスキー修道院のイグメン、セルギイが島にやって来て、ニルに聖体拝領を授けた。　その後、尊者は独房に入り、いつもの祈りを捧げ、香炉を手に取って聖なるイコンと独房全体に香を焚いた。そして、肉体の疲れを癒やすために普段頼りにしていた木製の松葉杖に両手を預け[8708]、1554年12月7日[8709]、主のもとへ召された。

私たちの神に栄光あれ、今、そして常に、世々限りなく。

[8708] これらの「フック」あるいは松葉杖は、聖ニロスのケリアの壁に打ち込まれており、彼にとっては椅子の代わりとなっていました。彼はこれらに寄りかかりながら、束の間の休息をとっていたのです。

[8709] 聖ニロスの功績の地において、1594年に修道士ゲルマンによってニロフ・ストロベン修道院が設立された。――聖ニロスの聖遺骨の発見は1667年5月27日に行われ、この日は毎年祝われることとなった。 現在、聖人の聖遺骨は銀製の聖遺骨箱に安置されている。聖人の聖遺骨の傍らには、彼が私室に祀っていたウラジーミル（いわゆるセリゲル）の聖母マリアのイコン、そして奇跡で知られる、112年間地中に埋もれていた彼の修道服が保管されている。　5月27日、聖遺骨が公開される日には、毎年、オスタシュコフ市からニロヴァ修道院へと、大勢の人々が集まる中、聖十字行進が行われる。

トロパリオ、第4調：

セリゲル湖の島において、まことに輝かしい灯火として現れた尊き父ニレよ。あなたは若き日からキリストの十字架を肩に担ぎ、熱心にそれに従い、清らかさをもって神に近づき、それゆえに奇跡の賜物によって豊かにされた。　それゆえ、私たちもあなたの聖遺物の御前に駆け寄り、心を込めてこう祈ります。「尊き父よ、キリスト・神に、私たちの魂が救われますようお祈りください。」

コンダク、第8調：

尊き父よ、故郷を離れ、荒野に身を置き、セリゲル湖の島へと上り、厳しい生活を送り、多くの人々をその徳で驚かせ、キリストから奇跡の賜物を受けられました。あなたの記念を称える私たちを覚えてください。私たちはあなたにこう呼びかけます。「喜びなさい、ニロ、私たちの父よ。」

聖殉教者アフィノドールの記念日

記念日：12月7日

聖殉教者アフィノドールは、シリアのメソポタミア[8710] 出身で、幼い頃から修道者の生活を送っていました。　密告により捕らえられ、国の統治者エレウシオスの前に引き出されると、そこでキリストを告白したため、直ちに残酷な拷問に処された。彼は二本の柱の間に引き伸ばされ、全身のあらゆる部位が燃えるろうそくで焼かれた。　脇の下には赤熱した鉄を押し当てられ、鼻の穴は鋭い針で貫かれた。その後、彼は燃え盛る銅の板の上に横たえられたが、その板は奇跡的に冷め、　さらに、彼は赤熱した銅の雄牛の中に投げ込まれ、他にも多くの拷問にさらされたが、聖なる殉教者は天使たちの取り成しによって守られ、無傷のままであった。　このような奇跡的な出来事は、異教徒たちをも神の信仰へと導いた。聖アフィノドールは、まず五十人の異教徒をキリストのもとへ導き、その後さらに三十人を導いた。　このため、彼は剣による斬首刑に処せられた。しかし、処刑人がその務めに取り掛かろうとした途端、つまずいて死人のように倒れ、剣を持ったその手は肩から引きちぎられてしまった。それ以来、もはや誰も聖人に近づくことを敢えてせず、彼は祈りを捧げた後、主なる神に息を引き取った[8711]。

聖パウロ・ポヴィンニクの記念日 [8712]

記念日：12月7日

聖パウロの両親は十分な財産を持っており、幼い頃から息子を聖書について熱心に教育した。聖人が成人すると、世俗の生活を捨てたいという志が湧き上がった。　そこで彼は、自らが住む町の修道院の一つに入り、そこで聖なる天使の位を受け、あらゆる徳に励む中で、修道院のすべての兄弟たちを凌ぐほどの完成度に達し、徳の宝庫となったため、偉大で驚くべき奇跡を行う賜物を受けたのである。

[8710] シリアのメソポタミア――メジュレチエ――は、ティグリス川とユーフラテス川の間に広がる広大な地域であり、アルメニア、パレスチナ、フェニキアからペルシャ湾に至る。

[8711] 304年頃。

[8712] 「ポヴィンニク」とは「従順な者」という意味であり、深い謙遜と自らの意志からの完全な放棄により、聖パウロに与えられた称号である。

ある日、聖パウロは他の兄弟たちと共に、鍛冶場で樹脂を煮ていた。　樹脂が溶けて沸騰すると、ぐつぐつと音を立てて釜の縁から溢れ出し始めた。聖人は、沸騰する樹脂をかき混ぜるための道具を何も持っていなかったため、素手を露わにして釜の中に差し入れ、樹脂をかき混ぜると、たちまちぐつぐつという音は止んだ。　聖人の手は傷一つなく無事で、彼自身の顔色も変わらず、何の被害も受けなかった。それを見た修道士たちは恐怖に震え、そのうちの何人かは彼を「神を宿す者」と認めたが、他の人々はそれを大いに疑った。一方、パウロ自身は自分を塵や灰と見なし、自らを「悪臭を放つ犬」と呼んでいた。　しばらくして、彼には別の務めが与えられた。その頃、修道院の院長が兄弟たちを召集し、彼らと共に何日も祈りと断食に費やした。その後、彼らは神にこう叫んだ。

「主よ、私たちはこれに値しない者ですが、私たちの悟りのために可能な限り、私たちの兄弟パウロとはどのような者なのか、明らかにしてください。彼は霊的な完成においてどの程度に達しており、何に値する者なのでしょうか？」

神は、御自身を畏れる者たちの願いを聞き入れ、彼らの祈りを叶えてくださった。　ある夜、兄弟たちが眠っている間に、神の御業によって、彼らは美に満ちた楽園へと連れ去られた。彼らがこの輝かしい奇跡に驚いていると、突然、修道士パウロが彼らの前に現れた。兄弟たちは彼を歓迎し、この現象が何を意味するのか説明を求めた。パウロは深い謙虚さをもって答えた。

「あなたがたが見ているのは神の楽園であり、これらすべてはあなたがた修道士たちのために起こったのです。なぜなら、あなたがたは熱心な祈りの中で、私がたどり着いたこの場所に到達することを願っていたからです。」　さあ、ここから各自、望むもの、気に入ったもの、欲しいものを自由に持ち帰り、平安のうちに去ってください。そして、修道院で私が任されていた務めについては、他の誰かを任命してください。なぜなら、皆さんはもう二度と私を見ることはないからです。

パウロに別れを告げると、兄弟たちはその場を去り、聖なる楽園から、ある者は花を、ある者は小枝を、またある者は美しい葉を、さらに別の者は草を手に取って持ち帰った。

眠りから覚め、集まった兄弟たちは互いにその幻視を語り合い、喜びをもって神を賛美した。ある者は楽園から持ち帰った花を見せ、ある者は「私はヤシの枝を持ってきました」と言い、ある者はこの世のものとは思えない香りを語り、またある者は美しい葉を手にしていた。そして皆、神を賛美した。

その後、聖パウロはエルサレムへ向かった。そこで聖地を巡礼し、祈りを捧げた後、キプロス島へと向かった。そこで彼は高い山に登り、長年にわたり霊的な修行に励み、隠遁生活を送った。しかし、彼の聖なる生活に関する評判がその周辺に広まり、多くの人々が彼のもとに訪れるようになったため、彼はそこを離れ、ビザンツの領土に定住した。　そこで神に喜ばれる生活を送る中、彼は、かつて神を見たモーセが聞いたのと同じように、神の御声を聞く恵みにあずかり、*「この山に登れ……そして、あなたが登るその山で死ね」*（申命記32:48–50）と招かれた。

そして、至福のパウロは、神の御命により、パリゴリアと呼ばれる山の一つに登り、しばらくして主のもとで安らかに息を引き取った。

12月21日

12月8日（旧暦）

私たちの尊い父パタピオスの生涯

記念日 12月8日

エジプトのナイル川沿いに、テーベと呼ばれる町があった[8713] 。この町で、至福のパタピオスは生まれた。彼の両親はキリスト教徒であり、息子を敬虔さと神への畏れをもって育てた。成人すると、彼はこの世の虚しさを軽んじ、家や両親、友人を残して、修道生活に入った。 エジプトの荒野へと身を隠し、彼は神のために生き、断食、祈り、そして様々な隠遁者の務めに励んだ。彼のことが知れ渡り、多くの人々が彼のもとを訪れ、その徳高い生き方を称賛するようになると、彼は、自らの沈黙が破られ、人間の口によって称賛されていることを嘆いた。 エジプトを後にし、彼はコンスタンティノープルへと向かった。そこで彼は、ヴラヘルン[8714] の近く、城壁のそばに小部屋を設け、そこに閉じこもり、まるで荒野にいるかのように沈黙を守り、唯一の神以外には誰にも知られず、絶え間ない祈りの中で神とだけ語り合っていた。 しかし、山の頂上に立つ町が隠れることができないように[8715] 、完全な聖性に達した徳高い人もまた、知られずにいることはできない。 神ご自身が、御自身を賛美し、御恵みに満ちた者たちを称え、他の人々の益となるようその存在を明らかにされる。それゆえ、聖性に完璧であり、奇跡を行う恵みに豊かに満たされ、神によって明らかにされ、称えられていたこの人物は、まもなく、畑に隠された宝物のように発見されたのである[8716] 。 というのも、あるキリスト教徒の若者が、生まれつき盲目であったが、神ご自身に導かれて、尊者パタピオスの修道室を訪れ、神のすべての被造物を見ることができるよう、またそれを通じて創造主ご自身を最も完全な形で知り、神を賛美できるよう、視力を授けてくださるよう神に祈ってほしいと、この尊者に懇願したからである。 聖父は、その若者の信仰を見て憐れみを覚え、こう言った。

「盲人に光を与え、死者に命を与えるイエス・キリストの名によって、目を開けなさい。」

するとたちまち、生まれつき目の不自由だった青年の目が開かれ、彼は見えるようになった。そして、神を賛美し、感謝を捧げた。その青年は多くの人々に知られていたため、彼が目が見えるようになったのを見て、皆が驚き、どうしてそうなったのかと尋ね始めた。彼は、神から の癒やしを受けた、その奇跡を行なう者であり恩人である人物の名前を隠さなかった。 この奇跡と尊者に関する評判は民衆の間に広まり、それ以来、多くの人々がパタピオのもとを訪れ、彼の祈りを求めた。

ある高貴なビザンツ人は水腫を患っており、全身が腫れ上がっていた。 彼は医師たちに多額の金を費やし、癒やしを求めたが、得られなかった。聖パタピウスのことを耳にすると、彼は自分をその元へ運ばせるよう命じ、涙ながらに聖人に、神の癒やしの恵みによって自分の身体の病を癒やしてくれるよう懇願した。 無償で治療を行う聖人は、まず神に彼のために熱心に祈りを捧げ、次に十字の印を切って祝福し、聖油を塗った。すると、彼の体を重くしていた水分がすべて自然な経路から流れ出し、内臓がすべて浄化され、彼は完全に健康を取り戻した。

もう一人の若者は、邪悪な悪霊に苦しめられていた。その悪霊は彼を山や荒野に追い回し、時には彼を滅ぼそうとして火や水の中に投げ込み、時には彼の全身を打ち砕き粉々にしようと、高く険しい山から突き落としていた。 もし神の守りとなる力が、敵の絶え間ない悪意と完全な破滅から彼を守っていなければ、その若者はとっくに命を落としていたであろう。 ある日、悪魔は恐ろしい速さでこの若者を海辺へと追い立て、深淵に沈めて溺死させようとしたが、その途中で、神の御命により、神の御姿に似せて造られた被造物を悪魔の奴隷状態から解放するために、自らの修道室から出てきた聖パタピオに出くわした。 遠くから聖人を目にした悪魔は、目を回して泡を吹き、歯をぎしぎしと鳴らし、彼を殴り倒すと脅しながら、聖人に向かって突進した。聖人に近づくと、悪魔は叫んだ。

[8713] テーベ――上（南）エジプトの古代の首都。

[8714] ヴラケルナは、コンスタンティノープルの西端にある地区であり、ビザンツ帝国の全盛期には、その聖地によって東方全土にその名を知られていた。

[8715] 福音書の表現。マタイ5:14。

[8716] 福音書のたとえ話に由来する表現。マタイによる福音書14章44節。

「ああ、悲しや！　またここにもパタピオか！　どうすればよいのか、どこへ逃げればよいのか、これほどの苦労の末、私はどこに住めばよいのか？　ようやく住処を見つけたばかりなのに、今や力ずくでそこから追い出されようとしている。まことに、あなたは恐ろしい方だ、ナザレ人よ[8717]、あなたの御力は至る所にあり、すべての人を支配している。」　私はどこへ行けばよいのか？　砂漠へ行こうと、町へ行こうと、あるいは他のどこへ行こうと――あなたは私より先にそこにいて、ただ一つの十字の印と、ただ一つの御名によって私を追い払うのだ。私は打ち負かされ、打ち砕かれ、追放されたのだ！

そう言いながら、悪霊はその若者を空中に放り投げた。すると、奇跡を行う者パタピオスは、空中で指で十字の印を描き、その霊にこう命じた。

「出て行け、汚れた霊よ。荒野へ去れ。キリストが、私を通してそう命じられるのだ。その御力を、お前は知らず知らずのうちに認めてしまったではないか。」

聖人がそう言い終えるやいなや、悪霊は若者を地面に叩きつけ、煙のように口から彼の中から出て行った。正気を取り戻した若者は喜びの涙を流し、悪霊から解放されたことを何よりもまず神に、そして尊者パタピオにも感謝した。

ある女性が胸の病を患っていた。医師たちから手遅れと宣告されていた彼女は、病状が悪化し、傷口に無数の虫が現れたとき、尊者のもとを訪れた。彼の足元にひれ伏し、泣きながら熱心に懇願して、癒やしを求めた。　聖人は、その傷に十字の印を刻むと、その瞬間に彼女を癒やした。他にも数多くの奇跡を成し遂げた後、私たちの尊い父パタピオは、至福の死を迎えようとし、高齢のうちに、生涯を通じて仕えてきた神のもとへ旅立った[8718]。彼は、聖ヨハネ・洗礼者教会に栄誉をもって埋葬された。これは、聖徒たちの中で賛美される、私たちの神キリストの栄光のためである。キリストには、父と聖霊とともに、永遠に栄光と礼拝がふさわしい。アーメン。

コンダク、第3調：

聖なるあなたの聖堂は、霊的な癒やしを見出した人々が、熱心にそこを訪れ、病の治癒を願い求め、また罪を犯した者たちの生活の解決を請う場所である。あなたは、あらゆる困窮にある者たちの執り成し手となられた、敬虔なるパタピエよ。

聖使徒ソスフェン、アポロ、キファ、ティキコ、エパフロディト、ケサリの記念日

記念日：12月8日

聖使徒ソスフェン、アポロス、　キファ、ティキコ、エパフロディト、およびケサリは、主イエス・キリストによってキリストの福音を宣べ伝えるために選ばれた70人の使徒の一員であり、十二使徒が選ばれ、宣教の使命を帯びて派遣された後、しばらくして選ばれました（ルカ10:1–24）。

[8717] 言うまでもなく、私たちの主イエス・キリストのことである。ユダヤ人、そしてそれに続いて異教徒たちがこの名称を彼に当てはめた。

[8718] 聖パタピオスは7世紀初頭に逝去した。聖アンドレイ・クリテウスによる、彼の奇跡と永眠についての記述がある。彼の生涯は、聖アンドレイが夢の中でパタピオスに現れたことを受けて記されたものである。というのも、聖アンドレイは当初、パタピオスに関する多くの奇跡的な話を耳にしていたものの、軽蔑と不信の念を抱いていたからである。

使徒パウロがコリントに滞在していた際（[8719] ）、使徒ソスフェンはユダヤ人の会堂の長であった（[8720] ）。そこで使徒に対して、彼の有罪判決を求める者たちによる騒動が起こった際、プロコンスル・ガリオ（[8721] ）は、この件を自身の管轄外であると判断し、 告発者たちを法廷から追い出したところ、彼らを追い出した者たちや、そこにいたすべてのギリシア人たちは、会堂の長であるソスフェンを捕らえ、法廷の前で彼を殴打した（使徒行伝18:12–17）。しかしその後、彼は使徒によってキリストへの信仰へと導かれ、キリストの福音を宣べ伝える働きにおいて使徒の協力者となった。その後、ソスフェンはコロフォンの司教となった[8722] 。

使徒アポロはアレクサンドリアの出身で、雄弁かつ博学であり、聖書に精通していた。当初はキリストの教えの初歩しか学んでいなかったが、熱意に燃えて主について正しく語り、教えた。しかし、彼はヨハネの洗礼しか知らず、キリスト教の洗礼がもたらす再生の力については知識を持っていなかった。 ほどなくして、アポロがキリストについての説教を携えてエフェソに到着すると、アキラとプリスキラ[8723] は彼のことを知り、愛をもって彼を迎え入れ、主の教えについて詳細に指導した。 その後、彼がアカイアへ行くことを決意したとき、兄弟たちは現地の弟子たちに使者を送り、彼を受け入れるよう手配した。そして彼がそこに到着すると、信仰を持った者たちに恵みをもって大いに貢献した。 彼はユダヤ人たちを激しく論破し、聖書を用いてイエスがキリストであることを公の場で証明したからである（使徒18:24–28）。その後、アポロはコリントで異邦人の回心のために多大な労力を費やした（使徒19:1；Iコリント3:6）。 コリントでは、弟子たちの彼への愛が教会に多少の分裂さえも引き起こしたが、それは後に使徒パウロによって非難された。*「ある者は『私はパウロの者だ』と言い、またある者は『私はアポロの者だ』と言う。それなら、あなたがたは肉的な者ではないか。 パウロとは誰か。アポロとは誰か。彼らは、あなたがたが信仰を持つようになったための奉仕者に過ぎず、それも主がそれぞれに与えられた分に応じてである。私は植えた者、アポロは水を注いだ者だが、成長させたのは神である。それゆえ、植える者も水を注ぐ者も無に等しく、すべては成長させてくださる神によるのである」*（Iコリント3:4–7）。

使徒パウロがコリントの信徒への第一の手紙を書いた当時、アポロはエフェソでパウロと共にいて、都合の良い時に彼らのところへ訪ねようとしていた（Iコリント16:14）。

その後、アポロスはクレタに滞在し[8724] 、さらにその後、ケサリアの司教となった[8725] 。

[8719] コリント――古代ギリシャで最も古く、著名で豊かな都市――は、アカイア地方、ペロポネソス半島 （南ギリシャ）と中部ギリシャを結ぶコリント地峡に位置し、イオニア海とエーゲ海の間に広がるコリント湾の南東端にある、美しく肥沃な平野に位置している。 コリントにおけるキリスト教の始まりは、使徒パウロによって、現在のコリントの近く、クルントと呼ばれる、人口わずか約5,000人の町で築かれた。

[8720] シナゴーグ（ギリシャ語で「集会」の意）は、ユダヤ人の宗教的集会の場であり、公の礼拝や説教、教会内の論争の解決、裁判を行うための開放的な建物であった。これらの建物は、討論の場、子供たちのための学校、図書館としても機能していた。

[8721] ガリオン――クラウディウス帝の治世下、アカイアのローマ総督（プロコンスル）であり、ローマの哲学者セネカの兄弟である。

[8722] コロフォン――小アジア北西部に位置するリディアの古代都市。近年、この都市の遺跡が発見された。

[8723] アクイラ――ポンテ出身のユダヤ人。プリスキラは彼の妻である。二人はテント作りを生業として暮らしていたが、使徒パウロによってキリスト教に改宗し、彼の忠実な弟子となり、福音の普及に大きく貢献した。 その後、彼らはコリントに移住し、そこからエフェソへと移った。アキラは70人の使徒の一人に数えられている。

[8724] クレタ島――地中海東部、エーゲ海の南に位置する大きな島である。その広大さと肥沃さから、かつては地中海の「島の女王」と呼ばれていた。 キリスト教の最初の礎は、聖霊が使徒たちの上に降臨した出来事の目撃者たちによって築かれた。というのも、その場にクレタ人もいたからである（使徒行伝2:11）。その後、キリスト教は使徒パウロによってこの地で確立され、広められた。15世紀、クレタ島はトルコ人の支配下に入った。

[8725] ケサリアは、地中海東岸に位置するパレスチナの都市である。この地におけるキリスト教の始まりは、聖使徒ペトロが百人隊長コルニリウスとその家族全員を改宗させたことに遡る（使徒行伝 10:1–48）。 エルサレムの破壊後、ケサリアはパレスチナの主要都市となり、エルサレムを管轄する司教の居所となったが、最終的に第4回全地公会議（ハルキドン

使徒キファは、他の使徒たちと共にキリストの福音を宣べ伝えることに多大な労力を注ぎ、コロフォンの司教であった。

使徒ティキコスは小アジア出身で、聖使徒パウロの弟子であった。パウロは書簡の中で、彼を「愛する兄弟」であり、「主において忠実な奉仕者であり協力者」と呼んでいる（コロサイ4:7、6:21）。聖使徒パウロの第三回伝道旅行の際、彼がマケドニアとギリシャからエルサレムへ戻る途中、ティキコスは彼に同行し、その労苦を分かち合った（使徒行伝20:1–5）。　その後、彼は使徒パウロの最初の投獄中もローマに同行し、そこからパウロは、エフェソの信徒たち（エフェソ6:21）やコロサイの信徒たち、その他の教会（コロサイ4:7–9,16）へ、自分からの手紙を携えてティキコを遣わし、自身の近況を伝え、彼らの心を慰めるようにした。　また、パウロはティキコをクレタへ派遣し、自身の任務を遂行させた（テトス3:12）。ティキコスは、使徒がローマで二度目の投獄に遭っていた際もその傍らにいて、別の時には使徒が彼をそこからエフェソへ遣わした（IIテモテ4:12）。その後、聖使徒ティキコスは、使徒ソスフェンの後を継いでコロフォンの司教となった。

使徒エパフロディトは、聖使徒パウロの最も親しい協力者の一人であり、同志であった。使徒がローマで投獄されていた間、聖エパフロディトはフィリピの教会から、聖パウロへの支援物資を携えて派遣された。　この献身的な働きは使徒にとって大変喜ばしいものであった。その主な理由は、フィリピの人々が使徒への愛と、彼の苦難に対する心からの共感を示したことであり、それが彼らの信仰そのものへの熱意を裏付けていたからである（フィリピ4:10–17）。　使徒にとって残念なことに、エパフロディトは彼の元にいる間に危険な病に倒れてしまった。しかし、主は使徒の悲しみにさらなる悲しみを重ねることを望まれなかった。病人は回復し、使徒からの感動的な手紙を携えて、フィリピの人々の元へと送り戻されたのである。　その後、聖エパフロディトスはアドリアキアのエピスコポスとなった[8726]。

また、福音宣教の事業に多大な労力を注いだ使徒カエサルは、ディラキアの司教となりました[8727]。

キリストの群れを立派に牧したこれらすべての聖なる使徒たちは、安らかにその魂を主の御許に委ね、今や、神の御座の前に立ち、永遠の喜びのうちに、自らの数多くの功績と労苦に対する報いを神から受けている[8728]。

アフリカにおいてアリウス派の手によって殉教した聖なる殉教者たちの記念日。

記念日：12月8日

これらの聖なる殉教者たちは、ギリシャの王ゼノン[8729]の時代に生きていた。当時、父ゲンゼリヒの死後、信仰上アリア派であったグンネリヒ[8730]がアフリカを統治していた。彼は、志を同じく

公会議、451年）において、エルサレムは独立した総主教区となった。 – 現在、古代のケサリアには遺跡すら残っていない。

8726 アドリア、あるいはアドリアカは、トラキア地方の黒海沿岸にある都市で、トラキアとの国境に位置していたマケドニアの都市フィリッポスからほど近い場所にある。

8727 ディラキア――ベオティア、すなわち古代の中部ギリシャ地方にある都市。

8728 これらの聖使徒たちとともに、教会はこの日、使徒オニシフォロスも記念している（詳細は9月7日を参照）。今日の礼拝では、7人の聖使徒全員を称える賛美歌が歌われる。

8729 ゼノン – 474年から491年まで在位したビザンツ帝国の皇帝。

8730 ゲンゼリヒ――北アフリカのヴァンダル王国の王であり、建国者。その息子グンネリヒは、477年から485年まで在位した。ヴァンダル族はゲルマン系部族であり、バルト海沿岸から到来し、その後パノニア地方、ドナウ川の右岸へと移り、さらにピレネー半島を征服し、最終的に北アフリカに定住した。

するアリウス派の司教キリルとヴィディマンディスと協議の上、正教徒に対して、ディオクレティアヌスやマクシミアヌスの時代をも凌ぐほど残酷な迫害を加えた。　彼は支配下のすべての都市や地方に1万5千人の兵士を派遣し、あらゆる場所から正教会の司祭たちをすべて追放するよう命じた。その頃、正教徒たちはある教会に集まり、そこで密かに神聖な礼拝を行っていた。　これを知った野蛮人たちは、密かに剣を抜き放ち、神を賛美し、称える信者たちを皆殺しにした。彼らは、アリウス派の洗礼を受けていない者をすべて即座に殺害せよというグンネリヒの命令を実行していたのである。苦難に耐えきれなかった者たちは、家や村を後にし、逃亡して救いを求めた。一方、正統信仰に堅固な者たちは、自ら進んで苦難に身を委ねた。こうして、真の信仰に立ち、アリウス派の教えに従うことを拒んだ300人が、、剣によって斬り殺された。一方、司祭たちは正統信仰に対する熱意をさらに燃え上がらせ、そのためにさらに過酷な迫害を受けた。そのうち二人は火あぶりにされ、最も雄弁な六十人の舌は、その根元から切り取られた。その後、彼らはギリシャ全土に散り散りになった。　すると、彼らには神の偉大で奇跡的な力が現れた。舌を奪われたにもかかわらず、彼らは大胆に説教し、明瞭に語り、アリウス派の誤った教えを打ち砕いたため、彼らを見て聞いた者たちは皆、驚嘆した。そして彼らは、ヴァンダル族の前で、父と同質である神の御子を告白した。

その頃、ローマでは、ローマ総督の妻である　アリウス派の異端に染まっていたスニルダは、アンフィスという名のローマの貴族の妻に対し、アリウス派の洗礼を受けるよう強要したが、彼女を説得することはできず、返ってきたのは「水と御霊によって」ミラノのアンブロシウス司教から洗礼を受けたという答えだけだった。　そこでスニルダは怒りに駆られ、聖アンフィサを焼き殺した。聖殉教者の夫は恐怖に駆られ、自ら進んでアリウス派の洗礼を受けた。　その直後、彼は乗馬を楽しもうと馬に乗ったが、移動中に町の教会の前を通った際、突然、彼に稲妻が降り注ぎ、彼を焼き尽くした。彼は馬から投げ出され、焼死した。こうして、来たるべきゲヘナの永遠の火に先立ち、彼の上に神の裁きが下されたのである。

12月22日

12月9日（旧暦）

聖母アンナの受胎。この日、彼女は聖母マリアを身ごもった。

記念日 12月9日

私たちの主であり神である方は、ご自身のために生ける教会と、ご自身が宿られる聖なる住まいを築こうと望まれ、御使いを義人ヨアキムとアンナの元へ遣わされました。神は彼らを通して、御自身の母を肉において備えようと望まれ、子を持たず不妊であったアンナの受胎と、彼女から処女が生まれることをあらかじめ告げられました。　こうして、聖なる処女マリアは、神からの約束により、たとえ肉的な結合を通じてではあったものの、受胎し、誕生した。なぜなら、ただひとり、主であり神であるイエス・キリストのみが、夫もなく、結婚もせず、言葉では言い表せない、言い尽くせない方法で、聖霊によって至聖なる処女マリアから生まれ、完全なる神であり、完全なる人として誕生されたからである。　主は、ご自身の受肉のために、人間の性質に必要なすべてのものを完全に受け入れた。それは、主が初めから人間の性質そのものを創造し、形造られたのと同様である。　ある者たちは、至聖なる処女が7ヶ月で出産した、あるいは夫なしに生まれたなどと語っていたが、それは不当である。彼女は確かに9ヶ月を経て、人間的な結合によって出産したのだ。受胎を祝う祭りは、

エヴォラニアにある、聖なる大教会「[8731] 」の近くにある、至聖なる我らの主の母マリアの尊き聖堂で執り行われる。

トロパリオ、第4調:

今日、不妊の束縛は解かれる。神はヨアキムとアンナの祈りを聞き入れ、彼らの望み以上に、神の子を産むことを約束されたからである。その御子こそ、言葉では言い表せないほど偉大なる方であり、人となられた御方は、天使を通じて彼女にこう告げられた。「喜びなさい、恵まれた者よ。主はあなたと共におられる。」

コンダク、第4調:

今日、全宇宙は、神によるアンナの受胎を祝う。彼女は、言葉そのものを産んだ者だからである。

聖預言者アンナの記念日、預言者サムエルの母

記念日：12月9日

聖なる祝福された預言者アンナは、エフライムの子らの領地の高地にあるアルマエフマの町[8732] に生まれ、レビ族の男エルカナ[8733] と結婚していた。 彼女は不妊で子供を産めなかったため、夫のエルカナは別の妻、フェナナを娶り、彼女は彼に子供を産んだので、彼は彼女と共に喜びを分かち合った。 子がないことによる侮辱に心を痛め[8734] ——それは、ライバルであるフェナンナからだけでなく、彼女を愛していた夫や、近所の人々、親族からも向けられていた——アンナは深く嘆き、神に熱心に祈り、神の律法の戒めを忠実に守り続けた。 毎朝、毎晩、主がこの侮辱から彼女を救い、子宝を授けてくださるよう、聖なる供え物を捧げていた。エルカナは毎年、家族全員を連れて、律法で

[8731] 至聖なる神の母の受胎と誕生に関する詳細な伝承は、9月9日の聖ヨアキムと聖アンナの聖人伝に記載されている。 エルサレムの神殿における義人ヨアキムとアンナの喜び、そして不妊を癒やし、近隣の人々からの侮辱を取り除いてくださった神への彼らの心からの感謝こそが、受胎の祝祭の始まりであった。 受胎された聖母において、その義なる両親だけでなく、全世界が贖いの確かな保証を得たのである。なぜなら、聖母の受胎は、神の特別な恵み深い御摂理によるものだったからである。 しかし、聖母マリアの受胎を祝う教会的な祝祭の始まりを正確に特定することは、文献資料の不足から困難ですが、この祝祭が古代から始まっていたと確信を持って推測することは可能です。なぜなら、正教会の古代のキリスト教徒にとって、聖母マリアの生涯のあらゆる出来事は重要かつ神聖なものだったからです。 7世紀の聖アンドレイ・クリツキーは、聖母の受胎の日に際して、カノンと説教を著した。受胎の日は12月9日と定められている。これは、この日が聖母の降誕の日から9ヶ月前にあたるためである。 コンスタンティノープルでは、この日の聖母受胎を祝う祝祭が、聖ソフィア大聖堂に近いエヴォラニア（別の読み方ではウラナ）で行われていた。ここには、コンスタンティヌス大帝の治世中に、ある上院議員によって聖母マリアの教会が建てられた。

[8732] アルマフェム、別名ラマ——ツフ地方にある、ベニヤミン族の領地に隣接する都市。 この町には、サムエルがイスラエルの民の士師であった頃、彼の家があり、彼は当時ここに居住し、サウルに王の油を注いだ（サムエル記上7:17、9:5–27、10:1–2）。

[8733] レビ族には独自の領地がなく、レビ人は他の部族の中に住んでいた（申命記18:1–2）。

[8734] ユダヤ人にとって、子宝に恵まれることは神の祝福のしるしとされ、逆に子宝に恵まれないことは、神の不興のしるしと見なされ、人々から軽蔑の対象とされた。

定められた時期に、自分の町からシロ[8735]へと赴き、大祭司エリヤ[8736]の手によって、全能の神[8737]に犠牲を捧げていた。

そしてある日、神へのいけにえを捧げた後、エルカナは家族の間でいけにえの残りを分け、その一部をフェナンナとその息子たちや娘たちに配り、もう一部をアンナに与えた。彼は、アンナには子供がいないにもかかわらず、フェナンナよりもアンナを愛していたからである。このことで、フェナンナの心は嫉妬と悔しさで満たされ、　一方、アンナにとっては、これが新たな、さらに大きな悲しみと屈辱の源となった。嫉妬に満ちた非難に心を乱され、彼女は泣き続け、食事も口にせず、愛する夫の慰めにも安らぎを見出せなかった（サムエル記上1:5, 8）。彼女の顔は悲しみに曇り、どうすればよいか分からなかった。　犠牲の食事が終わると、アンナは夫と家族を見送ると、一人で幕屋へと急ぎ、地にひれ伏して、神の前で心の悲しみを打ち明け、次のような誓いを立てた。

「主サバオトよ、もしあなたがこのしもべの悲しみに目を留め、私を覚えてくださり、このしもべを忘れず、このしもべに男の子を授けてくださるなら、私はその子を、その生涯のすべての日々、主にささげます。」

アンナが長い間このように祈っている間、幕屋の入り口に座っていた大祭司エリは、彼女に目を留め、彼女の唇が動いているのに声が聞こえないことに気づき、彼女にこう言った。

「いつまで酔っているつもりか。酒の酔いを覚まして、主の御前から立ち去れ。」

「いいえ、主よ」とアンナは答えた。「私は心に悲しみを抱く妻であり、酒は飲んでいません。ただ、神の御前で私の魂を注ぎ出しているのです。このあなたのしもべを、無価値な女だとは思わないでください。私の大きな悲しみと苦しみゆえに、今こうして語っているのです。」

すると、エリは言った。

「平安のうちに帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの願いを叶えてくださるでしょう。」

そして神は確かにアンナの祈りを拒まず、エリヤの口を通して彼女に子を授けるだけでなく、後に彼女から生まれた息子に預言の賜物をも授けられた。

神の約束を揺るぎない信仰をもって受け入れたアンナは、喜びをもって夫のもとへ戻り、しばらくして身ごもり、サムエル[8738]を産んだ。彼は後に預言者となり、イスラエルの民の指導者となった。　赤ん坊が母乳で育てられるようになると、アンナは適切な時期に彼を連れて、夫に付き添われてシロへ向かった。そこで彼女は再び主なる神の御前にひれ伏し、神に感謝を捧げた。いけにえを捧げた後、父と母はサムエルを大祭司エリヤのもとに連れて行き、アンナは彼にこう言った。

「主よ。私は、かつてここに立ち、この子について主に祈っていた女です。主は私が願ったことを叶えてくださいました。ですから、私はこの子を、その生涯のすべての日、主に仕える者として主に捧げます。」

エリヤはアンナを祝福して言った。

「主が、サムエルの代わりにあなたに子供たちをお与えになりますように。」

[8735] シロンは、エフライム族の領地にある町で、約束の地のほぼ中央、ヨルダン川のこちら側に位置していた。 ここには、ヨルダン川を渡り、約束の地を征服した後、モーセの幕屋（ユダヤ教の移動式聖所）が設けられた。ユダヤ人たちはここで祈りを捧げ、祭りを祝い、会議を開いた。現在、この古代都市には廃墟だけが残っている。

[8736] エリは、大祭司であり、同時にイスラエルの裁判官でもあった。彼はアロンの末子イファマルの家系に属し、精神的権威と世俗的権威を自らの身に初めて統合した人物である。彼は穏やかな性格で、人々から愛と信頼を寄せられ、偽りのない正義を貫いたため、民は彼を称賛した。　しかし、その優しさは弱さにもなり得て、それは特に息子たち――オフェニとピネハス――に対する態度に顕著に表れていた。彼らは祭司でありながら、幕屋で様々な不品行を働いていたため、主は度重なる戒めにもかかわらず、彼らを捕虜として恥辱にまみれた死で罰された。

[8737] モーセの律法によれば、出エジプト記23:17を参照。

[8738] ヘブライ語から：「神に聞き入れられた」、「神から請い求めた」。

アンナは喜び、聖所の前でひれ伏し、心からの喜びをもって祈りの歌を歌った。「*わが心は主において喜び、わが角はわが神において高められた。わが口は敵に向かって大きく開かれた。主よ、あなたの救いを喜び祝うからである*」[8739]（サムエル記上2:1）。

その後、エルカナは敬虔な妻と共にアルマフェムへ戻ったが、サムエルは幕屋に残り、主に仕え続けた。その後、アンナはさらに三人の息子と三人の娘をもうけ、すでに高齢となった頃、永遠の住まいへと旅立った[8740]。

聖ステファノス・ノヴォシヤテル（新光者）の記念日[8741]

記念日：12月9日

聖ステファノはコンスタンティノープルで生まれ、そこで教育を受けた。彼の両親であるザカリアとテオファニアは、敬虔さとキリスト教の美徳に優れており、聖　、すなわち首席執事ステファノの殉教者聖堂の近くに住んでいた。　聖人の母テオファニアは、妊娠中、食事に関して厳格な節制を守っていました。出産直前まで、彼女はパンと野菜、そして水だけを口にし、母胎の中ですでに聖人を育てていたのです。　そして、赤ん坊が生まれたやいなや、その胸には美しい十字架の印が現れた。それは、彼がその後の人生で示した「情欲や欲望による肉の十字架」（ガラテヤ5:24）の、目に見えるしるしであった。　彼はまだ乳飲み子の頃、母の乳房から栄養を摂っていた時期からすでに節制を実践し始めていた。母がたっぷりと食事を摂った後に授乳をしようとしても、彼は母の乳を受け入れなかった。このようなことは何度も起こり、そのたびに二、三日も続くことがあったため、聖なる乳児の親族たちはそれを見て困惑し、心を痛めていた。　しかし、それは幼子の健康に何ら害を及ぼすことはなかった。その幼子は洗礼を受け、成長し、母の乳房から離された。少年期に達すると、彼は両親への従順を守りつつ、進んで熱心に学問に励んだ。　やがて聖メフォディオスが主教の座に就くと、神の御計画により、ステファノの父である敬虔なザカリアは、大コンスタンティノープル教会の聖職者団に加わる形で長老の位を授けられた。　同時に、神に賢明なステファノスも修道誓願を立て、同教会の聖職者の一員となり、その際、父の死が間近であることを予言した。　18歳の時、父

[8739] この驚くほど崇高で、預言的な洞察に満ち、深い謙遜に貫かれた、神の摂理による神殿建設の神秘を謳った歌は、『列王記上』第2章に記されており、次のように読まれます。「わが心は主において喜び、わが角はわが神において高められた。 私の口は敵たちに向かって大きく開かれた。私はあなたの救いを喜ぶからである。 主ほど聖なる方はおられず、あなた以外に他におられる方はいない。また、私たちの神ほど堅固な砦はない。高慢な言葉を重ねてはならない。あなたの口から傲慢な言葉が出てはならない。主は知恵の神であり、その御業はすべて秤にかけられているからだ。強者の弓は折れ、弱者は力に帯を締められる。　満ち足りた者はパンを求めて働き、飢えた者は安らぐ。不妊の女でさえ七度も産むが、多くの子を産む女は力尽きる。主は死なせ、また生かし、陰府に下し、また上げられる。主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高める。　主は貧しい者を塵の中から引き上げ、困窮する者を塵芥の中から高め、貴族たちと共に座らせ、栄光の御座を嗣業として与えられる。主は地の基を据え、その上に宇宙を確立されたからである。主は御自身の聖徒たちの歩みを守られるが、不義な者たちは闇の中に消え去る。人の強さは力によるものではないからである。　主は、御自身に逆らう者たちを打ち砕き、天から彼らに向かって雷鳴を轟かせる。主は聖なる方である。賢い者は自分の知恵を誇ってはならない。強い者は自分の力を誇ってはならない。富める者は自分の富を誇ってはならない。しかし、誇りたい者は、自分の理解力、すなわち主を知っていることを誇りとするがよい。　主は地の果てを裁き、御自分の王に力を与え、御自分の油注がれた者の角を高められる」。メシアの名が初めて語られた。それは王の称号に相当し、天から聖霊の特別な賜物を受けた「*油注がれた者*」を意味する。　ここで「*メシアである王*」、すなわち「*キリスト*」と呼ばれているのは、ヤコブがユダの祝福の中で「和解者」という名で予言し、諸国民が服従すべきであるとされた約束の救い主であり（創世記4:10）、　また、神ご自身がモーセとの対話の中で、その兄弟たちのうちから現れる*預言者と呼びました*（申命記18:18–19）。

[8740] キリスト降誕の1100年前。

[8741] 聖ステファノが「新光」と称されるのは、古の修道者たちと同様に、聖なる生涯によって輝いていたからである。

の死後、聖ステファノは隠遁の修行に身を投じた。聖なる首席使徒ペトロの教会に籠もり、そこで絶え間ない祈りに専念し、野菜のみを糧として過ごした。

そこで彼はまもなく、その修行において天からの励ましを受けた。ある夜、キリストの使徒が現れ、こう言った。

「平安あれ、わが子よ。この徳ある生活の始まりが、あなたにとって益となるように。そして、主があなたをその道において強めてくださいますように。」

そのように三年間を過ごした後、ステファノは聖殉教者アンティパスの幻視にも恵まれた[8742]。アンティパスは彼に現れて、こう言った。

「平安あれ、わが子よ。自分自身に注意を払いなさい。私はあなたを見捨てはしない。」

この啓示により、聖人は祈りと断食における修業の労をさらに強める決意を固めた。それ以来、彼は週に一度か二度、塩を加えずに野菜を口にするだけとなった。このように生活を送る中で、ステファノスは高い道徳的清らかさを達成し、聖職の位に就き、多くの奇跡を成し遂げた。

敬虔なヴァシリー王の治世12年目[8743]、すなわちステファノの生涯40年目に、大地震が発生し、当時その聖堂に居住していた聖アンティパの教会が完全に崩壊した。 そこで、聖人はその地を離れ、ある墓穴に身を寄せ、そこで12年間を過ごした。この間、頭髪や髭、さらには歯までもがすべて抜け落ち、その洞窟は湿気がひどかったため、全身の筋肉が萎えてしまった。こうして聖人は、肉体の死に至る極限の状態に達したのである。 このようにして肉体を極限まで消耗させた後、彼は洞窟から出たが、その後も、硬いぼろ布を敷いた単純な板が彼の寝床であった。その後、彼は天使のような修道者の姿をとって、主の祝日においてのみ、神聖な礼拝を終えた後に、野菜をひと口と少量の水を口にした。 このようにして、この天の祖国の至福の市民は、五十年にわたり、厳格で苦行に満ちた人生の道を歩み続け、生涯の七十三年目、すなわち[8744]、より正確には肉体の死に至り、その霊を神に委ねた。

キプロス大司教、聖ソフロニオスの記念日

記念日：12月9日

聖ソフロニオスは、キプロス島に住む敬虔なキリスト教徒の両親の息子であった。彼は優れた教育を受けたが、聖父たちの著作を好んで読み、昼夜を問わず神の律法を学びつつ、同時に主の戒めに従って自らの生活を整えていた。 そして、彼は敬虔さと善行においてこれほどまでに卓越していたため、主から奇跡を行う賜物を授かり、多くの奇跡を成し遂げた。キプロス教会の主教である聖ダミアノが死去すると、聖公会および民衆全員によってソフロニオスが選出され、その地位に就いた。主教の座につき、故郷の教会の統治を引き受けた聖人は、真の羊飼いの父としての姿を現した。未亡人や貧しい人々を憐れみ、孤児や無力な人々を助け、迫害され、不当な扱いを受ける者たちを守った。こうして神に喜ばれる生涯を送り、安らかにこの世を去った[8745]。

[8742] 殉教者アンティパ、アジアのペルガモの司教は、95年に逝去した。その記念日（4月11日）は、テオドシウス大帝（379–395年）の治世下、聖アンティパが焼かれた牛がペルガモからコンスタンティノープルへ移送されたことから、同地で特に崇敬されていた。

[8743] バシレイオス・マケドニア人、すなわち879年。

[8744] 912年。

[8745] 6世紀に。

12月23日

12月10日（旧暦）

聖殉教者ミーナ、エルモゲン、エウグラフの殉教

記念日12月10日

ローマ皇帝ディオクレティアヌスとマクシミアヌスが、地上のキリストの聖なる信仰を根絶する力がなかったため、自発的に王位を退いた後、王位に就いたのは：
ローマにはマクセンティウス[8746] 、東方にはマクシミン[8747] 、そしてガリアにはコンスタンティヌスが即位した。コンスタンティヌスは後にキリストを信じるようになり、キリストの信仰の光をもって全世界を照らした。　キリスト教徒への迫害は彼らの治世下でも止むことはなく、とりわけ東方では、まるで大地と海が揺れ動き、激昂して、増え続けるキリストの教会に反旗を翻しているかのようであった。　しかし、キリストの教会が迫害されればされるほど、それはますます成長し繁栄していった。まるで茨の中に咲くユリのように、殉教者の血に染まりながら。一方、不敬虔な王マクシミンは、自らの多神教的な不敬虔を熱心に擁護し、キリスト教の敬虔さを激しく憎み、迫害した。　彼のもとに、エジプトで最も栄える都市アレクサンドリア全体が、キリスト教徒の増加と、彼らと異教徒との間で起きた騒動をきっかけに、騒然としているという報告が届いた。　自らそこへ赴くことはできず、ビザンティウムに留まらざるを得なかったマクシミンは、代わりに、アテネ出身で、分別があり、ギリシャの学問に精通し、雄弁な演説家であるミヌという名の重臣を派遣した。　マクシミンは彼に、アレクサンドリアで起きた騒動を鎮圧し、乱れた秩序を回復するよう命じた。すなわち、市内のキリスト教を根絶し、彼らの不敬虔な先祖代々の信仰を確立し、異教からキリストへと改宗した者たちを再び異教へと戻すことである。　ミナは外見上、王の信仰を支持し、その邪悪な意志を実行する用意があるように見えた。しかし、心の中では真のキリスト教徒であり、神の戒めを守る者であった。ただ、神からの召命と殉教の冠を受ける時が来るまで、自分の真の信仰を隠していたのである。

王の命令を受けると、彼は速やかにアレクサンドリアへ赴き、そこで起きた騒動を難なく鎮めた。賢明な説得によって、対立する双方――キリスト教徒と異教徒――を和解させ、誰もが罰せられることなく自らの信仰を告白できるようにした。その後、法律上の不当な規定を是正し、ミナはこれらすべてを文書にして王に報告した。　そして彼は直ちに、これまで隠していたキリストへの信仰を、人々の前で公に告白することを決意した。それは、他者にとって敬虔の模範となり、救いの源となることを目指すと同時に、自らも殉教の偉業に身を投じるためであった。彼は心の中でこう語った。

「もし私が別の時期に殉教の道を選んだなら、報いを受けるのは私一人だけだろう。しかし今なら、他の人々をも殉教の冠へと導くことができる。」

そこでミナは、イエス・キリストの御名を公然と賛美し、聖なる信仰を教え始め、不信仰者たちを言葉だけでなく行いによっても説得した。というのも、彼には天から、キリストの御名を呼び、聖なる十字架を掲げることで病を癒す賜物が授けられていたからである。　ある日、ミナが町の中心を歩いていると、人々が彼の後をついてきた。その道中で、彼は多くの不具者、足の不自由な者、盲人、貧しい者、耳の聞こえない者、そして悪霊に取りつかれた者たちを目にした。異教徒たちを信仰へと導くために、神が彼の手を通して御力を現してくださるよう祈った後、彼はキリストの御名を呼び求めた。　その後、病人に両手を置き、一人ひとりに聖十字架の印を刻むと、たちまち全員が癒や

[8746] 305年から312年にかけて。

[8747] マクシミヌス・ダザ – 305年から313年まで帝国の東半分を統治した皇帝。

された。盲人は目が見えるようになり、口がきけない者は言葉を話し、足の不自由な者はまるで鹿のように跳び上がり、悪霊に取りつかれた者たちは不浄な霊から解放された。　これを見た民衆は驚きを隠せず、多くの者がキリストを信じるようになった。そして聖ミナは、彼らに真の信仰を教え、キリスト教会へと導き入れた。

しかし、不信仰と悪意に目がくらんだ異教徒の中には、飲食、酩酊、淫行にふける悪魔的な祭りを好む者たちがおり、彼らは清く節制ある生活を好まなかった。　彼ら自身が悪意の息子であり、光を憎み、自分たちの神々への冒涜や、神々を称える祭りの貶めを耐え忍ぶことを望まなかったため、密かに王に告げ口した。ミナが自ら十字架にかけられたガリラヤ人[8748]を信じているだけでなく、アレクサンドリアの民全体をその信仰で堕落させ、すでに古代の神々の神殿は閑散としていると。これを知った王は激しく怒り、貴族や顧問たちを召集して、ミナが自分の命令に背き、アレクサンドリアでキリスト教を根絶するどころか広め、古来の先祖伝来の法に忠実なギリシャ人[8749]を、新しいガリラヤの信仰[8750]へと改宗させてしまったと、彼らに不満を訴え始めた。貴族たちは王に、ミーナによって乱されたすべてを元通りにし、彼自身を説得するか、あるいは強制して再び異教の神々へと立ち返らせることのできる人物をそこに派遣するよう助言した。　また、その任務に就かせる人物として、貴族たちは、王に特に忠誠を尽くし、忠実に仕え、命じられたことをすべて正確に守り、実行しようとする者を推挙した。彼らが互いに協議し、そのような人物を探し始めたところ、この目的に最もふさわしいと皆が認めたのは、エルモゲンという名の、名門出身で尊敬されている都市の長であった。　王から命じられることはすべて遂行できる人物として、皆が彼を派遣することに合意した。そして直ちに、マクシミンはエルモゲンをアレクサンドリアへ派遣し、ビザンティウムから軍隊を率いさせて、ミヌスを裁きにかけ、彼が誤りだと考えていたキリスト教の迷信を都市から一掃するよう命じた。　エルモゲンは、まさにアテネの出身であった。彼はギリシャの異教の中で生まれ育ったが、性格は善良で温和であった。　キリスト、すなわち真の神を知ってはいなかったものの、キリスト教徒にふさわしい行いによってキリストを敬っていた。*「なぜなら、律法を持たない異邦人が、生まれながらにして律法にかなう行いをするなら、彼らは律法を持たないにもかかわらず、自分たち自身が律法となっているからである」*（ローマ 2:14）。

エルモゲネスが軍を率いてエジプトへ向かう途中、ある夜、夢の中に三人のまばゆいばかりの光に包まれた人物が現れ、彼にこう告げた。

「エルモゲンよ、知っておきなさい。たとえごくわずかな善行であっても、神によって軽んじられることは決してない。それゆえ、あなたの善行も神は受け入れられる。そして、多くのキリスト教徒を滅ぼす意図で企てられたこの旅も、神は天におけるあなたの栄光と報いの源へと変えてくださるだろう。　さあ、我々の言葉を忘れるな。この旅を通じて、あなたは真の、永遠の王を知るようになるからだ。そして我々は、あなたをその祝福された王の友とするような人物をあなたのもとに遣わす。そうすれば、あなたは、今のあなたの主君があなたに与えることのできないような栄誉を、その王から授かることになるだろう。

眠りから覚めたエルモゲンは、恐れと驚きをもって、自分が見たものを考え始め、自分に何が起こるのかと戸惑った。　彼は何らかの最高の栄誉を受けることを望んでいたが、それは地上に一時的に君臨する王たちからのものであり、まだ知らなかった至高の王からのものではなかった。というのも、彼の霊的な目はまだ開かれていなかったからである。

[8748] すなわち、異教徒たちが、イエス・キリストが幼少期をすべて過ごしたガリラヤのナザレで生まれたと誤って考え、この名称を彼に与えた。

[8749] キリスト以前の「エリン」とはギリシャ人を指したが、聖書ではこの名称はギリシャ人をはじめとする異教徒全般を指す。なぜなら、彼らの多くはギリシャ語を話していたからである

[8750] すなわち、キリストへの信仰において。

長い航海を経て数日後、エルモゲンはアレクサンドリアの街の岸辺に上陸し、ティンパニとトランペットの音色に包まれて栄光のうちに街に入城した。そして、民衆全員が彼を出迎え、王宮まで敬意を込めて付き添った。 夕方になり、人々が散っていった後、聖 ミナがエルモゲンのもとを訪れた。彼は、真の神と聖なる信仰について、二人きりで語り合いたいと願っていた。そのような状況であれば、助言はよりよく聞き入れられ、受け入れられやすいことを知っていたからである。また、もしその際に不快なことが語られたとしても、人々の前よりも受け入れやすいと考えたからである。

エルモゲンの元へ入ると、ミナはこう言った。

「唯一にして偉大なる神に栄光あれ。その御導きにより、あなたはここへ来られたのだ！」

一方、エルモゲンは「唯一の神」という言葉を耳にし、そこに立っていた数人の宮廷人を見て、王の前で「王の敵を密かに招いて話し合っている」と誹謗されることを恐れ、直ちにミナを拘束するよう命じた。そして、立ち会っていた者たちに向かってこう言った。

「明日、この秘密の同調者であるガリラヤ人は、私がいかに王の敵の味方であるかを思い知らされ、神は唯一なのか、それとも多数なのかを悟ることになるだろう。」

朝、広場に裁判の場が整えられ、大勢の民衆が集まると、エルモゲンは武器持ちたちに囲まれて裁判官の席に着き、聖ミヌを裁判のために自分の前に連れてくるよう命じた。

キリストの戦士は、明るい表情と恐れを知らぬ魂を携え――神への熱意に燃えながら――彼の前に現れた。そして裁判官は彼にこう言った：

「ミナよ！　あらゆる人は、王や王の神々を敬い、その恩恵に感謝するのが当然である。しかし、お前は神々も王も敬わず、その恩恵を忘れてしまっている。」

聖人はこう答えた。

– 裁判官よ！恩人への感謝を表すのは、それが恩人にとっても、恩恵を受ける者にとっても有益である限り、ふさわしいことである。しかし、それが双方に害をもたらすならば、有害な恩恵も、その恩人も拒絶すべきである。　王たちを敬うことは、彼らの権威と統治のためには神聖な行いである。しかし、王たちが万物の源である神を正しくも敬虔にも崇めず、神にふさわしい敬意を払わない場合、王たちを敬うことは不当である。　とりわけ、彼らの神々を軽率に崇めるべきではない。まず、それらが真の神と同じくらい力強いのかどうかを吟味しなければならない。それらは無始であり、無限であり、不死であるのか。もしそれらに、たとえ一つの性質でも欠けているのであれば、軽蔑すべきである。なぜなら、不完全なものがどうして神であり得ようか。　それゆえ、善意と清らかな心をもって、誰が真の神であるかを吟味すべきである。私――あなた、裁判官様もご存知の通り――がアテネにいた頃、先祖の律法を遵守していた。　若くして両親のもとを離れ、強い意欲と熱意をもって書物に没頭し、虚偽の神話に基づいたギリシャの教えを、少なからぬ苦労の末にすべて学び通した。そして、キリスト教徒にもいくつかの書物があることを知ると、それらも読んでみたいと思った。そしてそれらを読んだとき、その中に秘められた心の益を、言葉では言い表せないほど強く感じました。キリスト教の聖書とギリシャの教えを比較してみると、両者には大きな相違があり、まるで互いに相反しているかのように思えました。前者には力と真理を見出し、後者には迷いと欺瞞を見出したのです。　なぜなら、キリスト教の聖書に記されていることは、神にふさわしいキリストの力を示しているのに対し、ギリシャの著作は、神を人間の弱さや情欲、欲望を持ち、嘘や動揺、自制心の欠如、そして恥知らずさに満ちた存在として描いているからである。　それらは、神々が互いに争いを繰り広げ、さらには死すべき人間にさえ打ち負かされ、傷つけられる様子を描写している。これらの著作は、その他あらゆる悪、虚偽、そして作り話で満ち溢れている。　概して、キリスト教の聖典を読むことは、真理の認識を通じて救いへと導くが、ギリシャの著作は、疑いようのない破滅、不敬虔への堕落、邪悪な情欲、そして迷いへと導く。　しかし、キリスト教の聖書がこれほど救いをもたらすものであるにもかかわらず、私はすぐにその教えに従う決心はつけず、自らの経験を通じて真理を学ぶために、実際にキリストの力を試してみようと考えた。そして、ある麻痺した人に出会ったとき、

その人の上にキリストの御名を呼びかけたところ、その病人はたちまち癒やされた。　そして私は、唯一にして全能の神を知り、ギリシャの迷いを捨て、聖なる洗礼を受けて、キリストに身を捧げた。それ以来今日に至るまで、私は重篤な病気や不治の苦しみ――神のみが癒やし得るもの――を、ただキリストの御名のみを呼び求めることによって、迅速かつ容易に癒やしている。　私が語ったことすべてを証しするのは、この広場の周囲に立っているこの民全体であり、私の言葉が虚偽であり欺瞞であるとは誰も言うことはできない。なぜなら、私が語ったことはすべて、実際にあなた方自身で検証することができるからである。

聖人がキリスト・神についてこれやその他多くのことを語っている間、周囲の人々は第三時から第七時まで熱心に耳を傾け、さらに彼の言葉を聞きたいと願っており、ましてや彼が苦しむ姿など見たくはなかった。ついに、民衆全員がまるで口を揃えたかのように、エルモゲンにこう叫んだ。

「もうお疲れにならないでください、善良な裁判官よ！　なぜなら、私たち皆は、キリストの力によってなされた奇跡の証人だからです。彼は偽りの言葉を一つも語らず、その口には欺きがありません。もしあなたがその時にここにいたなら、あなたもまた真理を知り、ミナが説くお方以外の神を崇めるべきではないと確信したことでしょう。」

エルモゲンは、民衆の大胆さを見て、皆がミナの教えに耳を傾けキリストに心を傾けていることを悟り、彼を拷問にかけることを恐れた。　しかし、真理に対して反論する術がなく、恥じ入った彼は、ミナを牢獄へ連行するよう命じ、自らも立ち上がって悲しみに暮れながら自室へ去った。民衆は聖ミナを称えながら、それぞれの家へと散っていった。

牢獄に閉じ込められた聖人は、次のように詠んだ。

「あなたは私たちを敵から救い、私たちを憎む者たちを恥じ入らせ、たとえ話の中で私の口を開かせ、古の預言を語らせてくださった（詩編43:8、77:2参照）。」

一方、エルモゲンは悲しみと不安のあまり、食事も取らず、夜も眠れなかった。彼は王と民の両方を恐れていたのだ。民については、ミナのせいで騒動や混乱を引き起こさないか、そしてさらに王については、ミナを苦痛に満ちた死に追いやらなければ、王の怒りを買うのではないかと恐れていた。　そして翌朝、再び裁判の席に着き、拷問の道具を準備すると、聖人を縛られたまま連れてくるよう命じ、彼にこう言った。

「言え、不信心者よ。何を期待して、お前は民を扇動し、王に従わないよう仕向け、恥知らずにも神々を冒涜したのか。そしてなぜ、民に、お前の虚偽の言葉に従い、お前の奇妙な信仰を受け入れるよう説得したのか？」

これに対し、聖人はこう反論した。

「民を煽って不義な王の命令に従わないようにさせているのは私ではなく、神への熱意である。民は、しるしと奇跡を通して知った彼らの主のために熱意を抱いているのだ。」　もし私が民の前で、あなたの王の神々について悪く語ったとしても、物事について正しい見方と健全な判断力を持つ者なら誰でも、目にして偽りであると認めたものを愛さず、憎むのが当然であり、真理を愛し、尊ぶべきなのです。 そして、人々にとって疑いの余地のない真理とは、キリストご自身なのです！

裁判官はこれに対し、こう答えた。

「愚か者よ、真理がキリストであるというのはお前の思い込みに過ぎない。しかし、今すぐお前に、十字架にかけられた者に崇拝を捧げるべきではないこと、そして　昨日お前が語ったことはすべて偽りであることを、今すぐ見せてやる。もし私がお前の体の部位の一つを切り落としたり、焼き尽くしたりしたら――キリストを崇拝するお前は、その切り落とされたり焼き尽くされたりした部位を再び健全な状態に戻すことができるか！もしお前にはそれができないのなら、他者にどのような癒やしを与えるというのか？

すると、聖人は再びこう言った。

「裁判官よ、私は、キリストのためにあらゆる拷問を受けることを望みます。そうすれば、あなたも今持っているこの一時的な栄光を捨て去り、私のキリストが支配する者たちのひとりとなることを願っています。」

この言葉に激怒した裁判官は、ミナの両足を切り落とし、すねの皮を剥ぎ取り、その姿のまま自分の前に立たせるよう命じた。そうすれば、傷の痛みで苦しむ彼は、もはや神々に関する質問に答えることができなくなるだろうと考えたからである。　しかし、聖人は、足から肉が削ぎ落とされ、むき出しの骨の上に立ったとき、こう歌い上げた。*「わが足は正しい道に立っている。集いの中で、主を賛美しよう」*（詩編25:12）。

彼の足からは血が大量に流れ出ていたが、殉教者は喜びに満ちた表情で、勇敢に苦しみを受け入れた。そして、その舌はさらに自由に雄弁を振るい、唯一の真の神を賛美し、不敬虔を糾弾した。これを見た裁判官は、ミネの舌を切り落とすよう命じた。そして、役人たちがその命令を実行しようとしたとき、聖人は拷問者にこう言った。

「もしあなたが私の舌を切り落とすだけでなく、目をもえぐり出すとしても、それによって私を打ち負かすことはできない。なぜなら、私の足の灯はキリストの律法だからである（詩編118:105参照）。むしろ、あなたが私の舌を切り落とした後、あなた自身が私のキリストの偉大さを語り広めることになるだろうとさえ期待している。」

そして実際、ミナの舌が切り取られ、口から血が流れ出たときでさえ、聖人はその勇気を失うことなく、その眼差しをもって、キリストのために体のあらゆる部位を犠牲にしてでも苦難に耐える覚悟があることを示した。

そこで裁判官は彼の両目をえぐり出すよう命じ、それが実行されると、聖人は頭を垂れ、神が彼に御名のためにこのような苦難に耐えることを許してくださったことへの感謝を、せめてそれによってでも表そうと努めた。そして彼は再び牢獄に投じられ、裁判官は広場を去りながらこう言った。

「明日、この男の体を鳥の餌にしてやる。」

聖人は牢獄に横たわり、傷のせいで力尽き、苦しみでかろうじて息をしている状態だった。その夜、第三の刻に、突然、まるで稲妻のように光が牢獄を照らし、主キリストご自身が現れた。　殉教者が横たわっている場所のそばに近づくと、主はまず聖人の心を喜びと勇気で満たし、次にその舌を癒やし、目を明かし、足を元通りにし、まるで死からよみがえらせたかのように、彼を完全に健やかで無傷の状態にされた。そして、主は殉教者にこう言われた。

「よく聞きなさい、ミナよ！　私はイエス・キリストである。あなたが私のために苦しんでいるその方だ。私はあなたを訪ねて来た。以前もあなたのそばにいて、あなたの偉業を見守り、裁判官や権力者たちがあなたの中にある私への愛を知るのを待っていたのだ。しかし、彼らはすでにそれを知ったのだから、これからは私が公然とあなたを守ってやる。」　一方、わたしに敵対し、わたしの名を愛さないエルモゲナについては、明日、彼が謙虚になり、あなたに懇願している姿を見るだろう。そしてまもなく、彼は修道生活においてあなたの友となるだろう。　なぜなら、彼はあなたと共に苦しみ、共に冠を受けることになるからだ。彼の無知のせいで、彼の多くの善行が失われてしまうなどということは、わたしの慈愛に反するからである。

こう語ると、救い主は聖霊をミナに吹きかけ、彼を言い表せないほどの喜びで満たされた。

一方、エルモゲンは床に横たわりながら、聖ミナの生い立ちや故郷、その英知と勇気、そしてかつて王のもとで大きな権力を持ち、多くの人々のために王の恩寵を請い求めていた頃の栄光について思いを巡らせていた。　これらすべてを思い巡らせながら、彼は、そのような人物に拷問を加えたことを悔やみ、自らを「呪われた者」と呼んだ。そして、その人がすでに激しい苦しみの中で亡くなったのだろうと推測し、彼のために涙を流し、その遺体を尊厳をもって埋葬することを決心した。

その日が訪れ、アレクサンドリア全市から人々が集まると、エルモゲンは再び裁判官の席に着き、目の前に立っていた兵士たちに、拷問室から殉教者の遺体を広場へ運び出すよう命じた。　出向

いた兵士たちは、以前は極めて薄暗かった牢獄が天の光で満たされているのを見つけ、聖人のそばには、兵士に似た美しく輝かしい二人の男が、敵を防ぎ撃退する準備を整えているのを見た。　聖人の姿を見ると、彼は生きているだけでなく、完全に健康で、はっきりと物を見、流暢に話し、次のように歌っていた。*「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるから」*（詩編22:4）。

驚きあまり、彼らはまるで口を閉ざされたかのように黙って立ち尽くしていた。自分たちが目撃しているのは幻ではなく、神の力によって成し遂げられた現実そのものであることを完全に確信すると、彼らは叫んだ。

「キリスト教の神は偉大だ！」

そして彼らは即座にキリストを信じ、自分たちを送り出した者のもとへは戻らなかった。一方、裁判官は民衆と共にその兵士たちを長く待ち続けた末、当惑し、さらに多くの兵士を送り出し、殉教者の遺体を持ち帰るように命じた。彼は、その殉教者がすでに死んだと思っていたからである。しかし、彼らもまた、最初の者たちと同じ光景を目の当たりにして、キリストを信じ、彼らに加わった。一方、聖人は、兵士たちから、街中の人々が広場に集まり、裁判官がすでに法廷に座っていることを知ると、キリストを信じた兵士たちに付き添われて、自ら裁判官と民衆のもとへ向かった。広場に近づくと、彼はこう歌い始めた。

「たとえ軍勢が私に対して立ち向かおうとも、私の心は恐れない」（詩編26:3）。するとたちまち、皆が彼に目を向け、驚嘆した。昨日までは半死半生で、目も失い、言葉も発せなかった彼が、今や生き生きと健在で、歩き、物を見て、話しているのを見たからだ。そして皆が声を揃えて叫んだ:

「キリストの力は偉大なり、死そのものを打ち破る！アレクサンドリアの街よ、幸いなるかな。この一人の人を通して、悪魔の惑わしを見抜き、キリストの真理を知ったのだ。まことに、これこそが神の御力であり、神の御力である！唯一の真の神であり救い主である方の宣教者、そして献身者よ、喜びなさい！喜びなさい！」

裁判官はこの新しく驚くべき出来事にさらに驚愕し、民衆が自分に反旗を翻すことを恐れて、広場から立ち去ろうとした。しかし、民衆は彼に向かって叫んだ。

「去らないでください、尊き裁判官よ。そして、今日、唯一真の神を知り、真理の光へと向かう正義の道を歩むという、この街の幸福を妬まないでください。」

そこで裁判官は、民衆に静まるよう合図を送ると、聖人に自分のところへ近づき、もっと近くに立つよう命じた。というのも、彼はキリストについての知識を持たなかったため、自分の目に映る光景を依然として欺瞞だと考えていたからである。彼は聖人を注意深く見つめ、手で触れて確かめ、これが本当にミナなのか、そして傷が本当に癒えたのかを確認した。　すべてが事実であることを確認すると、エルモゲンは驚き、その驚きから言葉を失った。そして、ようやく我に返ると、こう口を開いた。

「教えてくれ、人よ。一体、この驚くべき、予想外の出来事は何なのか？　神はあなただけのものなのか、それとも他の神もこれを行うことができるのか？」

これに対し、聖人はまず、初めなき神についての教えを詳しく説き、次に人間の創造と堕落について、さらにキリストの受肉、人類の贖い、十字架上の自発的な苦しみについて語り、最後に、その説教の締めくくりとして、こう付け加えた。

「神は慈愛に満ち、憐れみ深いお方であり、人々を救うためにこの地上に降りてこられた。神は、誰に対しても滅びや永遠の祝福の喪失を望んでおられない。まるで母親が息子を慈しむように、息子から受ける悲しみや侮辱に耐え、　息子への自然な愛に打ち勝たれ、たとえ息子が不適切なことをしたとしても、それは無知からであり、悪意がないため、怒ることはなく、忍耐強く息子が成人し成長するのを待ち、彼が立派な男となり、人々から敬われ、尊重される姿を見たいと願うのです。

私たちを創造された私たちの神もまた、このように私たちを慈しみ、愛に満ちた父として、私たちが無知のゆえに犯すあらゆる悪を、ご自身の慈愛によって乗り越えてくださる。　神が何よりも望んでおられるのは、私たちが神の栄光を相続し、霊的な成長に応じて、完全な大人へと成長することである。しかし、あなたがたが悪魔に滅ぼされ、真理を知るに至らず、偶像礼拝や偽りの神々への崇拝によって神を怒らせているのを見て、神はあなたがたの滅びを嘆いておられる。　同時に、神はあなたがたを御自身の子供たちとして慈しみ、今や私を通してあなたがたを戒め、あなたがたの迷いと無分別な嫉妬に打ち勝たれた。これは、私を見つめる者すべてが認めていることである。　あなたがた一人ひとりが、私の中にキリストの力を認めることができるように、すでに老齢に達し、昨日まで傷だらけで、すべての肉体の力を失い、ほとんど死人のように牢獄に投げ込まれていたこの私が、今や無傷で健全な姿であなたがたの前に立っているのです。まるで今日、再び生まれ変わり、この世にさらに健康な姿で現れたかのようです。　そして、もし誰かが真の神とは誰であるかを知りたいと願うなら、その人は、私に言葉と目と足、そして完全な健康を取り戻してくださった方が、まさにその方であると信じなさい。この世界とその中にあるすべてのものを初めから創造し、被造物に命を与えられた方を、その人は信じなさい。　裁判官よ、あなたもこれを理解し、あなたを顧み、あなたの回心を待ち望んでおられる方を、知らない者であってはならない。私自身がキリストご自身から告げられたように、あなたもまたキリストに立ち返るべきである。さあ、あなたが全善にして永遠の王のもとへ行き、私と共に殉教の業に加わることを喜びなさい！

裁判官は、善良で恵みに開かれた魂を持つ者として、聖人の言葉と、起こった奇跡の両方を通じて、神の光が彼の心の目に触れた後、真の神を知り始めたのである。　そして今、彼は船に乗っていた時に見たあの幻を思い出し、神が自分を御自身の忠実なしもべや友の仲間に加えようとしておられるのだと感じた。　それゆえ、彼はあたかも何か偉大な恵みを得たかのように喜び、ただ、これほど長い間不信心のうちに過ごしてきた自分が、いかにして神の恵みにふさわしい者となれるかということについてのみ、疑念を抱いた。

彼がこれについて思索にふけっていると、彼を真理へと招く神の恵みが、彼に驚くべき幻を授けた。彼は友人たちと共に、聖ミーナのそばに立つ二人の男を見た。彼らは稲妻のように輝き、翼を持ち、殉教者の頭上に冠を掲げていた。　彼らを見て、彼はひどく恐れをなして、共にいた友人たちに、自分が見ているものが見えるかどうか尋ねた。友人たちは、自分たちも同じものが見えると答えた。そこでエルモゲンは、座から立ち上がり、聖人を指さしながら、民衆に向かって大声で叫んだ。

「まことに、この方は真の神のしもべであり、彼が私たちに敬うよう教えているその神は偉大である。なぜなら、神は天から御自分のしもべたちに奇跡的な助けを与え、彼らを守り、敵に打ち勝つ力を与えてくださるからだ。　私は今日まで正気を失っていた。自ら悪魔に仕え、キリストを正しく信じようとするあなた方を、彼らへと引き込もうとしていたのだ。

そう言うと、彼は殉教者の足元にひれ伏そうとしたが、天使たちの姿を見て、近づくのを恐れた。やがて天使たちが姿を消すと、エルモゲンは聖ミネに近づき、その尊い足を抱きしめて口づけしながら、こう言った。

「私のために祈ってください、真の神の僕よ。どうか、あなたが説くその真理の名において、私のような不適格な者にも、あなたの神に仕える者となる恵みが与えられるよう、祈ってください。そして、もし私が神の恵みにあずかることができれば、かつての私の迷いと狂気を悔い改め始めます。」

聖人はこれに対し、こう言った。

「落ち着いてください、善良な裁判官よ。神の慈悲を疑ってはなりません。　なぜなら、私は神が慈愛に満ち、憐れみ深い方であることを知っており、神のもとに来るあなたを拒むどころか、の命の書にあなたの名を記してくださることを信じているからです。神へのあなたの熱心な信仰を受

け入れ、神は私にこう告げられました――神は、あなたにも殉教によって神の御名を栄光に輝かせたいと望んでおられる、と。

そう言うと、聖人は、民衆が一日中空腹のまま過ごしていることに気づいた。なぜなら、皆、目の前で起きている出来事に驚き、それに見入っていたため、食事のことをすっかり忘れてしまい、その驚くべき奇跡を目の当たりにし、キリストの証人の甘美な言葉に耳を傾けていたため、誰も広場から立ち去ろうとはしなかったからである。　これを思い起こした聖人は、自ら広場から立ち去り、民衆に解散するよう命じた。そして、翌朝再び広場にやって来て、聖なる信仰についてさらに詳しく語り、彼らがなすべきことを教えることを約束した。一方、エルモゲンは聖ミナから離れず、一晩中彼と共に過ごし、真の神とキリストの信仰の奥義について教えを受けた。

朝になると、広場にはアレクサンドリアからこれほど多くの人々が集まり、広場全体でも収まりきらないほどだった。聖ミナとエルモゲネスが広場に近づくと、彼らを出迎えた大勢のギリシャ人たちは、声を揃えてこう叫んだ。

「我らは皆、あなたが説く神を信じ、ただその神のみに仕えることを誓い、これまでの誤った道をすべて否定します。」

これに対し、聖人は、頑なな異教徒たちを御自身へと導き、迷える者たちを真理の道へと導いてくださる神に感謝を捧げた。そして、彼らが速やかに神へと回心したことを称え、神の知恵に満ちた教えをもって慰め、聖なる洗礼によって授かる神の慈愛に希望を置くよう説いた。　広場に足を踏み入れ、その場に立った聖人は、民衆全員に向かってこう語った。

「神が、その御しるしによってあなたがたを完全なものとし、あらゆる善行に熱心な者とならせてくださいますように！」

その後、聖人は一人ひとりに、神について尋ね、各自が望むことを学ぶよう命じました。裁判官は民衆全員を代表して、次のように答えました。– 神の最も聖なる御方よ！ あなたの神について、私たちには何の疑いもありません。私たちは皆、明らかに神を知りました。それゆえ、あなたが語られたことすべてを信じ、ただ一つ、洗礼を通じて神と結ばれることを願うのみです。

一方、民衆の中には、エルモゲネスがキリストに帰依する姿を見て、こう付け加えた者もいた。

「まことに、神には偏りなどありません。異教徒でさえも、神は御自身を知らしめ、貧しい人々への大いなる寛大さゆえに彼を憐れんでくださったのです。」

まもなく、近隣や荒野から、[8751] といった司教たちがアレクサンドリアにやって来た。ある者は自分の牧会の羊たちを訪ねるため、またある者は殉教者たちの偉業をこの目で見たいと願ってであり、その数は約30人に上った。そこで、水を用意すると、聖ミナはエルモゲンに、司教たちの前で頭を垂れるよう命じた。 そして、彼らはエルモゲンの頭に水を注ぎながら、こう言った。

「エルモゲンは、父と子と聖霊の御名において、再生の洗礼を受ける[8752]。」

[8751] 当時、迫害のため、教会の司教たちは、教会の必要に応じて、常に信徒たちのそばに留まっていたわけではなく、時には、信徒たち自身の益のため、また彼らから霊的な導きを奪わないようにと、荒野に身を隠し、信徒たちを啓発し、その信仰を強めるために時折姿を現すだけでした。　しかし、自らの模範によって信徒たちの衰えつつある精神を奮い立たせるべき時には、聖人たちは拷問者たちの苦痛に身を委ねた。

[8752] この種の聖なる洗礼（浸礼ではなく、水を注ぐ形式によるもの）は、古代教会では一般的ではなく、必要な量の水を確保できない場合、特に今回の事例のように大勢の人々に対して、あるいはその他の同様の極度の困難が生じたような例外的な場合にのみ行われ（現在もなお行われている）。–「再生の洗礼を受ける」という表現は、一般的な「洗礼を受ける」という表現と完全に同義である。　これは使徒パウロの手紙（テトス3:5）から借用されたもので、洗礼の水が身体を洗い流すと同時に、肉体の風呂が身体の汚れを洗い流すのと同様に、人の罪を消し去り、霊的にも人を再生させるという考えを表している。

こうして、裁判官は民衆全員の前で洗礼を受け、人々は皆、キリスト・神を賛美した。多くの民も洗礼を受け、街全体に大きな喜びが広がった。信者たちは、自分たちの主なる神を喜び祝ったからである。

数日後、エルモゲンはアレクサンドリアの司教に任命され、その際、自身の全財産を貧しい人々に施した。　彼は、すべての信徒たちと共に、悪魔との断固たる戦いを始めた。短期間のうちに悪魔の礼拝所を破壊し、偶像を滅ぼし、その跡地に教会を建立して、数え切れないほどのギリシャ人を洗礼し、彼らをキリストへと導いた。　キリストの御名を呼び、その聖なる十字架を掲げることで、彼はあらゆる病を癒やし、人々から不浄な霊を追い出した。また、すべての者に敬虔と清らかさ、謙遜と愛、柔和さ、その他の美徳を教え、自身の生き様を通じて の信徒たちに模範を示した。 こうした出来事が起こっている最中、ルスティクという名の冷酷なギリシャ人――彼は王のシンクリト[8753]の一員であった――が王のもとへ赴き、アレクサンドリアで起きたすべての出来事を王に報告した。エルモゲネス司教がミーナの教えに従ってキリスト教徒となり、アレクサンドリアの民全体がエルモゲネスとミーナに従い、同じ信仰を受け入れたことについて。　マクシミン王はこれを聞くと、エルモゲネスとミーナだけでなく、アレクサンドリアの街全体に対しても激しく怒りを燃やした。直ちに軍勢を召集し、1万人の武装兵を率いてアレクサンドリアへと向かった。 街に到着すると、彼は直ちにミーナとエルモゲンを捕らえ、裁判の場が整うやいなや、街の全住民に広場に集まるよう命じ、自ら裁判官の席に着いた。聖人たちが裁判のために彼の前に引き出され、しかも彼の命令により裸にされた姿で現れると、拷問官は彼らを見て大声で叫んだ。

「おお、神々よ！　これはどういうことか。我々が特別な栄誉を授けた者たちが、それを自ら軽んじ、卑しく不名誉な人生を選び、まるで道化師のような姿になってしまったとは？」

それから彼はエルモゲンに語りかけた。

「言ってみよ、この不幸な者よ。私がこの地と海全体の支配権を君に委ねたのは、君自身が我らの神々と我らに忠実であり続け、迷い込んだミヌを祖先の宗教へと立ち返らせるため以外の何のためだったというのか。それなのに君は、彼を迷いから立ち返らせなかったばかりか、自らも彼の同調者となってしまったではないか。」

高慢な王がこのように怒り狂い、復讐心に燃えていたとき、全善なる天の王は高みから御自分の僕たちを憐れみ深く見下ろされた。すると突然、天使たちが彼らの前に現れ、彼らに勇気を吹き込み、苦難に備えさせ、王の怒りを恐れるなと命じた。なぜなら、最終的な勝利は彼らの側にあるからである。 そこで、エルモゲンは王にこう答えた。

――王よ！もしあなたが忍耐強く私の話を聞いてくださるなら、なぜ私が、あなたにとって至上の幸福と思われるものを自ら拒み、いわば愚かな乞食となり、侮辱され、名誉を奪われることを選んだのか――つまり、キリスト教徒となり、キリストのために火の中へも進んで行く覚悟をし、　剣、獣の牙に身をさらし、さらにはキリストのために死ぬことを、生きるよりも望むようになったのか――その理由をあなたに明かしましょう。ただ、よく聞いてください。

王はこれに対し、彼にこう言った。

「もし真実を語るなら、私は耳を傾ける。だが、真実の代わりに嘘を語ることは慎め。」

そして、エルモゲンは王の前で次のように語り始めた。

「王よ！私はかつて、キリスト教徒とその教えを迫害し、異教の神々を崇め、あなたの意志に従うことを熱望しておりました――あなたはそれをご存知でしょう。なぜなら、あなたご自身が、誘惑や脅しを用いて、賢明なるミヌスを古の信仰へと回帰させるために、私をこの街へ遣わされたのですから。　そのために、あなたは私をこれほど巨大な軍勢を率いてここに遣わしたのです。それゆえ、あなたご自身でさえ、今やより少ない兵力でここに来られたのです。この街のすべての住民が、私

[8753] シンクリトスとは、最も重要かつ影響力のある顧問や高官からなる、軍政および民政の政府のことである。

が当初どのような者であったかを、あなたの前で私の証人となってくれるでしょう。私は、甘言や脅し、その他あらゆる手段を用いて、ミヌスをキリスト教から遠ざけようと努めていました。　愚かな私は、恐れを知らず勇敢な人物に出会ったことを知らなかった。彼は常に反論の準備ができており、キリストを否定するよりは、苦痛やあらゆる残酷な苦難に耐えることをむしろ望む心を持っていたのだ。　彼が神々にひれ伏すことを拒み、権力を恐れず、拷問を怯えず、諭しにも耳を貸さないのを見て、私は彼を拷問にかけた。なぜなら、彼の振る舞いは神々への侮辱のように思えたからであり、ましてや民衆までもが彼に共感し、信仰に関する彼のあらゆる思索を共有していたからである。

まず、私は彼の足の裏を骨まで切り落とすよう命じ、次に舌を切り落とし、目をえぐり出すよう命じた。そして、彼が傷のせいで力尽き、かろうじて息をしているだけになったとき、私は彼を牢獄に放り込むよう命じた。　実を言えば、私は同胞として、あれほど賢明で雄弁な人物が命を落としたことを、心の底から痛ましく思っていた。朝、私は彼がすでに死んだものと思い、遺体を運び出すよう命じた。すると突然、彼が生きているのを目にした――しかも、自ら私のところへ歩いてきて、目を見開き、言葉を話しているのだ。　彼を見て、私はそれが幽霊だと思い、神々の敵であった者の姿さえ見ないようにと、目を閉じた。しかしその後、私は席から立ち上がり、他の人々と共に現れた者を注意深く観察し始めた。そして、自分の目だけを信用せず、手で触れて確かめた結果、それが確かにミナであることを確信した。 そして私は即座に、 、真実によって打ち負かされた。私の良心こそが、偽りのない証人であったからだ。ところで、王よ、彼自身が今、あなたの前に立っているではないか！　彼の苦しみを見た民もここにいる。彼らにあなたの前で証言させてもよいし、あるいはあなたが望むように自ら確かめてもよい。これが果たして奇跡であるかどうかを。　さあ、教えてほしい――あなたの神々にかけて誓うが――もし誰かが、私のように、キリストがこれほど突然に人を癒やし、蘇らせ、そのような奇跡の中で御自身の力を現すのを見たら、その人は、それが唯一の真の神であることを理解するだろう。　その方は、最初の人間を創造された唯一の創造主であり、御自身を信じる者たちに天における永遠の御国を約束された。　もし誰かがこれらすべてを目撃し、その真意を理解したなら、果たしてそのような神を拒み、その友となることを望まないだろうか？そして、果たして神ご自身のように、盲人に視力を与え、足の不自由な者を癒やし、　山を動かしたり、死者をよみがえらせたり――そして、あらゆる被造物を、ただ一言や手のしぐさ一つで動かすことのできる――そのような恵み深い力を、果たして拒むだろうか？しかも、永遠の至福と天の御国への希望を抱きながら。　果たして、そのような神を見捨て、そのような至福を軽んじ、むしろあなた方の神々を崇め、支配者や王となることを選ぶ者がいるだろうか。あなたは、そのような人間をどう思うだろうか。その人は、善とは何か、真の益とは何かについて何の理解も持たない、狂人であり無知者であると思われないだろうか？　それゆえ、王よ、私もまた、あらゆる迷い、あなた方の寓話、あなた方の忌まわしい神々、そしてすべての儚く空しい一時的な恵みを拒絶し、唯一の真の神に帰依したのです。あなた自身が私をそう呼んだように、あなた方の目には狂人に見えることを選び、不運に耐えることを選んだのです。あなた方の間で賢明で選ばれた者と見なされるよりは、むしろそうするほうがましだと考えたからです。　さて、私たちのことについては、あなたはすでにすべて耳にしているはずだ。もしあなたがキリストの力を理解したいと望むなら、直ちにそれを実際に試してみよ。私たちのために、何らかの最も過酷な拷問を考案してみよ。　もし思いつかないのなら、私自身があらゆる種類の拷問をあなたに示し、その実例をあなたの前で挙げさせてほしい。というのも、私は長い間、裁判官であり拷問執行人であったからであり、この分野において極めて熟練しているからだ。私たちを野獣の餌食にせよ、山から渓谷へと突き落とせ、　海に投げ込み、生き埋めにし、剣で切り落とし、火で焼き尽くし、私たちの体の各部位ごとにふさわしい拷問を考案してください。というのも、私もかつて不義によって目がくらまされていた頃、真理へと導いてくれた私の導き手である聖ミーナに対して、これらすべてを行っていたからです。

聖エルモゲネスが王の前でこれほど恐れを知らずに語っている間、民衆は彼の果敢で勇敢な演説に驚き、聖ミナスに起こった奇跡が、確かに皆の目の前で起こったことを認めた。一方、王はエルモゲネスに対して一言も返すことができなかった。　もしエルモゲネスと長引く論争に踏み込んだとしても、自分が恥をかき、神々が辱められるだけだと悟った王は、直ちに彼の手を肩まで、足を膝まで切り落とし、殉教者の目の前で火の中に投げ込み、自らの肉体が燃え上がる様子を彼自身に見せつけるよう命じた。　しかし、殉教者は少し頭を上げ、炎の中に投げ込まれた自分の手と足を見て、こう言った。

「かつて偽りの神々に祈りを捧げるために掲げていたこの両手、そして迷いの道を歩んでいたこの両足を、神がご自身への犠牲と捧げ物として受け入れてくださるなんて、なんと私は幸いなことか！」

その後、彼の腹は槍で貫かれ、そこから内臓がすべて飛び出し、かろうじて息をしている彼の遺体は、王の命令により、処刑人によって川に投げ込まれた。　聖ミナの件については、王は彼を口頭で試すことを恐れていた。それは、すでに確かな耳で聞いていた奇跡について、彼が大胆に語るのを聞いて恥をかかされることを避けるためであり、それによって、自分と同じ信仰を持つ残りの人々を、自らの神々への信仰から遠ざけてしまうことを防ぐためであった。　そこで王は、何の尋問もせずに、ミナを薄暗い地下牢へ連行し、そこで両手を縛って吊るし、足には非常に大きな石を縛り付けるよう命じた。王がこうしたのは、ミナを長時間吊るし続け、その体のあらゆる部位が極度の重みによって引き伸ばされた後、強制的な死に至らせるためであった。　しかし、聖ミナはこれらすべてに耐えながら、口には詩篇の言葉を唱えていた。「*わが苦しみを、わが衰えを、見守ってください*」（詩編24:18）、そして使徒の言葉「*今この世で受ける一時的な苦しみは、私たちの中に現れる栄光に比べれば、何でもない*」（ローマ8:18）を口にしていた。

その後、聖なる殉教者の体のあらゆる部位がその場所から引き剥がされ、全身が弦のように引き伸ばされ、それによる苦痛が極めて激しくなったとき、彼は沈黙した。　しかし、御自身の聖徒たちの中に驚くべき御力を現わされる神は、殉教者たちを苦しみの中に見捨てなかったばかりか、彼らと共に驚くべき奇跡をなされた。神の御意志により、かろうじて息のある聖エルモゲネスが川に投げ込まれると、直ちに聖なる天使たちが現れた。　彼らは彼を水の中から引き上げ、岸へと運び出した。切断された手足は癒やされ、彼はまるで　今まさに新しい人間として生まれ変わったかのように、完全に健康で無傷となった。そして夜が訪れると、彼らは彼を聖ミーナのもとへ連れて行った。聖ミーナは牢獄に吊るされ、かろうじて息をしている状態であったが、　そこで聖ミナの足枷も解き放ち、彼を癒やした後、天国で彼らを待つ報いについて二人を慰めた。そこにはすでに彼らのための冠が用意されており、殉教の導き手ご自身が、彼らが勇敢にその業を成し遂げるのを待っておられるのだと。こうして苦難に耐える彼らの心を強めながら、天使たちは朝まで殉教者たちと共にいた。

日が明けるとすぐに、王は極めて早い時間に、民衆全員を広場に集めるよう命じた。その後、王自身も現れて玉座に着くと、すでに街全体がキリストを信じていることを知っていたため、心の中で葛藤し、こう独り言をつぶやいた。「市民たちを罰せずに放っておくのも良くないが、全員を死刑にするのも無意味だ」。　そこで、まるで彼らがキリストを信仰していることを何も知らないかのように装い、民に向かって次のように語りかけた。

「あなたがたは皆、我らの偉大なる神々に犠牲を捧げ、崇拝し、また王たちにはあらゆる面で畏敬の念を持って相応の服従を示していることを、私は知っている。　しかし、当初から、十字架にかけられた者の教えを広めようとしたこの忌まわしい者たちに反抗せず、我々がここへ来るまで彼らを石で打ち殺さなかったため、それによって諸神の激しい怒りを招いてしまったのだ。　私自身は、あなたがたの誰一人として、神々が許容するいかなる災いにも陥ることを望んではいないが、それにもかかわらず、あなたがたを何の罰も与えずに放っておくことはできない。　それゆえ、神々を怒らせたことへの報復として、私はあなたがたの都市から古くからの名誉を剥奪するよう命じる。これに

より、今後、あなたがたのうち誰も、最高位の地位を得ることも、高い権力を授かることもできなくなるのだ。　また、十字架にかけられた方は、誰をも災いから救うどころか、むしろ、彼を信じる者たちをあらゆる不幸や不名誉な死へと追い込むことさえある、ということを知っておきなさい。　そして、私が述べたことがすべて真実であることは、昨日の二人の魔術師、エルモゲンとミナが証人となるだろう。彼らは拷問を受ける前、死者を蘇らせると約束していたが、自らの過ちにより私から厳しい拷問を受けた際、自分たち自身を救うことさえできなかったのだ。さて、この惑わし者、キリストの力は一体どこにあるというのか?

王がこのような恥知らずな言葉を語り、キリストの名を冒涜している間、民衆は皆、憤慨し、互いに不平を漏らし、王自身に対して新たな策を企てていた。　しかし、告示役が民に静まるよう合図を送り、王が再び民に向けて演説を始めようとしたまさにその瞬間、聖ミナと聖エルモゲネスが突然王の前に現れた。皆は驚きをもって彼らに視線を向け、まるで一つの舌、一つの口で語るかのように叫んだ。

「まことに、神はただひとり――キリスト教の神のみである!」

彼らを見た王は、大きな驚きと恐怖に打ちのめされた。

その時、民衆の中に立っていたエウグラフという名の男が、　ギリシャの学問に精通し、かつて聖ミナが裁判官として街を治めていた時代に、彼自身も書記官の一人であったこのエウグラフは、聖なる殉教者たちが健在であるのを見て、神への熱意に満たされ、十字を切ってから、大胆にも広場の真ん中へと進み出て、王の前に立ち、こう言った。

「王よ!　私もまた、あなたの命令を認めないキリスト教徒です。今、私はあなたの前に立ち、キリストのために自分の体を惜しみません。脅しや甘言で私を屈服させようなどと考えてはなりません。私一人だけでなく、私たちキリスト教徒の誰一人として、あなたには打ち負かすことはできません。なぜなら、私たちにとって、あなた方と共にいることは死に等しく、キリストのために死ぬことは、真に命を得ることだからです。　あなたは、キリストの群れを食い尽くし、聖なる信仰を偶像崇拝によって根絶やしにしようと、獅子のように我らの街にやって来た。しかし、我らはあなたの猛威を軽蔑し、敬虔さのために死を厭わず、あなたを、お世辞を並べる狐のように嘲笑している。

これを聞いて、王は怒りに燃え上がり、素早く玉座から飛び降りてキリスト教徒たちに襲いかかった。目の前に立っていた者の一人から剣を奪い取ると、自らの手で聖エウグラフを切り裂き、激しい怒りから彼をバラバラに切り刻み始めた。　一方、聖人は切り刻まれながらも、できる限り、拷問者を不敬虔であると非難し続け、同時に、他の人々より先に神のもとへ赴くこと、そして一撃で死ぬのではなく、神から多くの冠を授かるという希望を彼に抱かせる数多くの傷を負って死ぬことを、神に感謝し続けた。　こうして、彼は広場の真ん中で切り刻まれながら、自らの魂を神の御手に委ねた。

王は再び玉座に着くと、聖なる殉教者ミネとエルモゲンに向き直り、こう言った。

「わが神々の力にかけて誓うが、これほどの手練れの魔術師たちを、私はこれまで一度も見たことがない!」　庶民が彼らの言葉に耳を傾けるのも不思議ではない。彼らは、無知な者たちを狡猾な魔術で惑わせ、　の神々から引き離し、十字架にかけられた方のために死ぬ決意を植え付けているからだ。それゆえ、今すぐお前たち、この忌まわしき者たちを暴いてやる――お前たちは、ただ目を眩ませるだけの幻影なのか、それとも実際に再生した肉体なのか。

これに対し、聖人たちはこう答えた:

――お前の知性は無知であり、魂は盲目であり、心は頑なであるゆえに、現実の物事さえも幻のように見えてしまうのだ。太陽そのものよりも明るく輝く事実を信じないお前は、実のところ盲目なのではないか?　もし疑うのであれば、これが本当に我々であるかどうかを、あらゆる手段を尽くして確かめてみよ。もし怒りに任せて脅すのであれば、再び苦痛や傷を通じて我々を試してみよ。そうすれば、我々が幻影ではなく、生身の人間であることを悟るだろう。　もし一時的な恩恵を約束し

て我々を誘い込もうとするのなら、知っておきなさい。たとえあなたが、あなた方の間で何よりも尊ばれているその王国そのものを我々に与えたとしても、それをもってしても我々を誘惑することはできないのだ。さあ、我々に対して最終的な判決を下しなさい。そして、あなたが何によっても我々を打ち負かすことはできないということを知っておきなさい。

王は、これが幻影ではなく生身の人間であることを悟った。多くの者が彼らに手を触れて、その体に傷一つないことを確かめたからである。そこで王は彼らの首を刎ねるよう命じ、自ら立ち上がって自室へと退いた。キリストの戦士たちを何一つ打ち負かすことができなかったことに恥じ入っていたのである。　聖人たちが処刑場へと連行されると、民衆も皆、その後を追った。聖人たちは天を仰ぎ、長い間その場に立ち尽くし、神に、教会とキリスト教世界全体に平和と安らぎを授けてくださるよう、また、彼らに助けを求める者が誰一人として無力なまま帰ることのないよう祈り続けた。その後、互いに抱き合い、別れを告げると、彼らはその尊い頭を剣の下に差し出し、兵士によって首を刎ねられた。偉大なるミナは、生前、王に対し、自身の遺体をビザンティウムに埋葬するよう懇願していた（彼は臨終の際、傍らに立っていた信者たちに対し、この願いを叶えるよう改めて命じていた）。　そこでマクシミン王は鉄の棺を作らせ、その中に聖なる殉教者たちの遺体を納め、キリスト教徒たちが彼らを崇敬する機会を奪うべく、海に投げ込むよう命じた。王自身は、民衆の噂や自分に対する大きな不満の声を耳にし、反乱が起きることを恐れて、急いで都を脱出し、ビザンティウムへと向かった。

ところが、聖殉教者たちの遺骨を納めた鉄の棺は海に沈むことなく、神の御力によって海を導かれるかのように、皇帝自身よりも先にビザンティウムへと急ぎ着き、まるで飛ぶ鳥のような速さで駆け抜けた。　一方、ビザンティウムの司教は夜、ある神聖な啓示を受け、直ちに海岸へ向かい、聖人の遺骨を納めた聖櫃を敬意をもって迎え入れるよう命じられた。　司教はその夜、聖職者たちと、信者である市民の中から選ばれた数名の著名な人々を召集し、彼らと共に海へと向かった。すると、彼らは皆、天から海へと柱のように降り注ぎ、ある小舟へと降りていく光を見た。　その舟には、光を放つ二人の男が座っており、司教と聖職者たちが待つ岸に向かって進んでいました。

船が岸に近づくと、岸に立っていた者たちは、それが単なる船ではなく、二人の光を放つ天使によって水上で操られる箱舟であることを悟った。天使たちは箱舟を岸に下ろすやいなや、たちまち姿を見えなくしてしまった。　司教と民衆は、喜びをもって聖櫃を受け取り、それが鉄製であることを知ると、これほど巨大な鉄の重さが海の深淵に沈むことなく、まるで軽い木のように水の上を漂っていたことに大いに驚いた。彼らは聖なる殉教者たちの尊い遺骸に口づけを捧げ、当面の間、秘密の場所に安置した。

一方、まだ旅の途上にあったマクシミヌス王には、神の懲罰が下った。すでに長い間心の目が見えなくなっていた彼は、肉体の目までも失ってしまった。その際、彼は自ら家臣や友人たちに、誰か見えない手によって罰せられたのだと語った。それから数日後、この不信心な王は息を引き取った。　王の死後、司教は聖なる殉教者たちの聖遺物を、大いなる敬意をもって城壁のそばに埋葬した。それらが、あたかも都市の守護者となり、海を航行する者たちの守護者となり、病に苦しむ者たちの癒やし手となるように――偉大なる神、そして我らの救い主イエス・キリストの栄光のために、今、そして常に、世々限りなく。アーメン[8754]。

[8754] 聖殉教者たちは313年頃に殉教した。聖殉教者ミナの聖遺骨発見（11世紀後半）は2月17日に祝われる。聖ミナは、その雄弁さから、カリケラダ（雄弁な者）という名でも知られている。 – 9世紀、ヨセフ・ペスノピセツはこれらの殉教者を称えるカノンを著し、そこには彼らの聖遺物による癒やしの奇跡についても記されている。

トロパリオ、第8調:

情欲を断ち切り、燃えるような視線と動きを死滅させたキリストの殉教者たちは、病を追い払い、弱者を癒やす恵みを受け、生前も死後も奇跡を行ない続けている。まことに、その奇跡は栄光に満ちている。裸の骨から癒しが湧き出ているのだから。唯一の創造主なる神に栄光あれ。

コンダク、第1調:

驚くべきミヌス、神聖なるエルモゲノス、そしてエウグラフを共に、聖なる甘美な賛美をもって皆で称えよう。彼らは主を崇め、主のために苦難を耐え忍び、天の無形の者たちの列に加わり、奇跡を現し続けているからである。

聖ヘメルの記念日

記念日：12月10日

聖ヘメルはパフラゴニア地方[8755] の出身であった。背教者ユリアヌス皇帝[8756] がガラティアの都市アンキラ[8757] にいると聞きつけ、彼はそこへ向かい、皇帝の前に進み出て、恐れを知らず、その背教と聖なるキリスト教信仰に対する敵意を糾弾した。 ユリアヌスは激怒し、彼に残酷な拷問を加えた。ゲメラには、燃えるような火花を散らすほどに熱せられた鉄の輪がはめられ、殉教者の体からは血が流れ出した。その姿のまま、彼はエデス[8758] へと送られ、そこへ背教者自身も到着した。 聖なる殉教者がこの町に連行されると、白熱した鉄の杭で肩を引き裂かれ、頭には鉄の釘が打ち込まれた。その後、地面に引き伸ばされ、足から頭にかけて皮を剥がされた。 ついに彼は磔にされ、その足は十字架に釘付けにされた。こうして、この多くの苦難に耐えた聖人は、神に感謝を捧げながら息を引き取った[8759] 。

聖トマス・デフルキンの記念日[8760]

記念日：12月10日

聖トマスはビフィニアで生まれた[8761] 。彼の両親は身分の低い者であり、質素ながらも満ち足りた生活を送っていた。しかし、トマスは幼い頃から、あらゆる世俗的で虚しい快楽を嫌悪し、修道生活への強い志を示していた。 近隣の修道院の一つで修業に励んでいたある修道士の模範的な生活に感化され、彼はその聖なる修道院に心を惹かれた。幼い頃から断食を守ることに慣れ、子供の年齢にふさわしい書物の学習に熱心に取り組み、詩篇、使徒書簡、そして教会の礼拝のすべてを学んだ。このように、トマスの幼少期は平穏かつ敬虔に過ごされ、彼の魂に蒔かれた善の種は、やがて根を下

[8755] パフラゴニアは、黒海の南岸に位置する小アジアの古代地域である。

[8756] ユリアヌス皇帝は361年から363年まで在位した。皇帝に即位すると、彼はキリスト教の信仰から背き、異教の復興を人生の課題としたため、「背教者」として知られている。

[8757] アンキラは、小アジアのガラティア地方の主要都市であり、現在のアンゴラにあたる。人口3万人を擁する小アジアの主要都市である。ガラティアは小アジア半島のまさに中心に位置していたが、アンキラは同州の北西端に位置していた。

[8758] エデス——キリキアの都市——は、小アジア南東部の地域にある。

[8759] 聖ヘメルの殉教は、361年頃に起こった。

[8760] これは、聖トマスに与えられたあだ名であった。

[8761] ビフィニアは、小アジアの北西部に位置し、黒海、ボスポラス海峡、コンスタンティノープル海峡の沿岸に広がっていた。

ろし、さらに成長していくこととなった。　やがて、神を畏れるこの少年が成人すると、修道服を身にまとい、揺るぎない確固たる決意をもって、救いの敵との霊的な戦いに身を投じた。そして、彼はその魂をもって徳ある生活においてこれほどまでに確固たるものとなり、完成されたため、その霊的な美しさは誰の目にも明らかであった。

その頃、ガロリクトという名のビザンツの高官が、サガリスの川沿いに新しい修道院を設立し、その地域の司教に対し、この修道院に最もふさわしく、賢明な人々を集めるよう依頼した。　この新しい修道院の院長として選ばれ、就任したのは、経験豊富な修道士であり、霊的生活に確固として根ざし、節制を堅く守る尊者トマスであった。　このことは司教会議にも報告され、トマスはすでに長年にわたり霊的な行いに励んできたこと、そして彼自身は謙遜ゆえにそれを他者から隠そうとしていたものの、誰もが彼を様々な美徳に満ちた器として敬っていることが説明された。

ところが、悪魔の唆しと、神の摂理による許しによって、至福のトマスが修道院の長に任命されたというこの予期せぬ出来事は、ある種の不和を引き起こすきっかけとなった。これに心を痛めたトマスは、自らを責め、自責の念を抱きながらこう呟いた。

「私はなんと自分を過大評価していたことか！」

そして、長年の願いが叶う時が来たことを悟ると、兄弟たちに別れを告げ、彼らの前で心の悲しみを打ち明け、霊的な慰めを与えた後、沈黙を求めてある荒野へと修道院を去った。　指導者を失い、まるで羊飼いのいない羊のようになった修道士たちは、尊者様の帰還を願った。彼らは尊者様を探しに出かけ、長い間探し続けた末、ついに尊者様が住み着いたあの荒野にたどり着いた。そこでは、尊者様は沈黙を守りながら、冬の寒さも夏の暑さも耐え忍び、前者を暖かさとして、後者を涼しさとして受け入れていた。　そして彼らは尊者に対し、修道院に戻るよう懇願し、その悲しみを和らげるためにこう言った。

「なぜ、これほど過酷な生活で自分を疲れさせるのですか？考えてみてください。私たちは土の塵から造られた存在であり、それゆえにすでに弱さを宿しているのです。ですから、私たちに本来備わっているこの弱さから完全に離れることなど、到底できないのです。」

しかし、トマスは断固として譲らず、ただ修道士たちの願いを聞き入れ、彼らのために小さな独房を用意することを許した。それが整うと、聖人はその中に入り、地面にひざまずいてこう言った。

「主よ、これが御心に適うものでありますように。また、この不肖の身のもとを訪れた者たちが、無事に帰還できますように。」

修道士たちは、彼らの霊的指導者を荒野の孤独の中に残して立ち去った。しかしその後、まるで意図的に知らせられたかのように、聖なる修行者のもとへ四方八方から敬虔な人々――修道服を身にまといたいと願う平信徒たち――が訪れ始め、尊者に対し、彼の元で従順に暮らすことを許してほしいと懇願した。　聖人は、主への奉仕にやって来た者たち全員に修道服を着せ、そのうち二人をキリストの最初の弟子たちとして、使徒の名を授けた――一人はヨハネ、もう一人はペトロと名付け、彼らと共に神へ最も熱心な祈りを捧げた。

しかし、悪の張本人である悪魔にとっては、自らの策略や悪意が打ち砕かれるのを見ることは耐え難いことだった。　そこで悪魔は、まず第一に、聖人に蚊を大量に送り込んだ。その数は、聖人が話すことさえできないほどであった。蚊は、彼が横になっている時も、祈りのために立ち上がる時も襲いかかり、口の中に群がり込み、喉頭にまで入り込んでいた。　また、わずかな食事や聖人の独房にあるすべての物も、常に無数の蚊で埋め尽くされていた。このような災いは三年間続いたが、聖人は不平や嘆きも漏らさずこれを耐え忍んだだけでなく、神に感謝し、自らの罪の赦しを請い求めた。　その後、神の御心により蚊の襲撃が止んだ頃、大きなハエが現れ、聖人を刺し、まるで鋭い矢のように、禁欲によって衰弱したその体を貫いた。この災難もまた、同じく3年間続いたが、やがて過ぎ去った。　しかしその後、尊者には蟻が襲いかかり、目や鼻の穴にまで這い込んできたが、彼は強

靭な樫の木のように、自ら掲げた忍耐の業において揺るぎない姿勢を保ち続けた。　この九年にわたる試練を、あたかもつかの間の、一日限りのことであるかのように耐え抜いた聖なる長老のその不屈の精神を見て、誘惑者はさらに激しく、狂おしいほどの悪意をもって彼に襲いかかった。　人間は、神の御姿に似せて創造された尊い存在として、最初の罪の道具である蛇に対して、本来、嫌悪感を抱くものであることを知っていた（創世記3:1–6、14–15）という事実を知っていた悪賢い者は、聖人の心の平安を破壊し、彼の心にも、また彼の同志たちの心にも憎悪の感情を植え付けるために、彼に無数の蛇を送り込んだ。これは多くの人にとって信じがたいことかもしれないが、それは単なる幻影などではなかった。　蛇たちは聖トマスの想像の中に現れたのではなく、実際に這い寄ってきて彼を取り囲み、一度や二度ではなく、絶えず現れていたのである。

聖人は、1年や2年どころか、実に11年間もそれらに囲まれていましたが、一度も不平を漏らすことはありませんでした。彼の寝床でさえ蛇から免れることはなく、休息の時間にもそこへ巣くっていました。しかし、神の御加護に守られていたため、聖人は蛇たちから無傷でいられました。

ある時、至福の父は神の無血の礼拝を執り行っていた。礼拝が終わりに近づいた頃、どこからともなく巨大な蛇が這い出し、まるで輪のように、聖務が行われていた教会全体を巻き込んだ。　聖者に仕えていた修道士は、礼拝に必要な温め物を運ぶために先に教会を出ていたが、当初は教会を環のように取り囲んでいたかのようなその大蛇は、その間に教会の入り口で丸くなり、巨大な塊となっていた。　そして、驚くべき奇跡が起こった。礼拝を執り行っていた聖人は、なぜ慣例通り定時に温められた水が運ばれてこないのかと不思議に思い、振り返ると、入り口に横たわる怪物と、戦慄の恐怖に震えながら立っている侍者の修道士を目にした。そして、聖霊に満たされて、その兄弟にこう言った。

「入ってきなさい。恐れることはない。」

一方、聖人は聖なる務めを続けました。父のような言葉に勇気づけられた修道士は、まるで翼を得たかのように蛇を飛び越え、教会の中に入りました。神聖な礼拝が終わると、聖なる衣をまとった祝福された長老は、怪物が横たわっていた入り口へと歩み寄り、こう言いました。

「もし、この場所に現れたことが、我が神の御力によってお前の死を意味するのなら、私について来なさい。」

蛇は聖人の衣の端を歯で噛みしめ、彼の後を追った。一方、トマスは教会から弓矢が飛ぶほどの距離まで離れ、深い穴のある藪の中へと入り、立ち止まって祈りを捧げ始めた。彼は数多くの祈りに、次のような祈りも加えた。

「神よ、あなたを信じる者たちに蛇やサソリを踏む力を与えてくださった方よ、主よ、どうかこの小さな私にも、あなたの御言葉に従って、蛇の喉を踏むことをお許しください！（ルカ10:19）」

尊者がこの祈りを口にした途端、蛇はその場から飛び上がり、深淵へと転落した。それに伴い、その深淵の縁も崩れ落ち、その場所には平らな窪地が形成された。　神に感謝を捧げた後、長老は自分の小部屋に戻った。そしてその後、新たな驚くべき奇跡が起こった。長老の小部屋の地下に巣くっていた蛇たち――長年にわたり彼を恐怖に陥れていた者たち――は、その聖なる御顔を見るや、まるで炎の灼熱から逃れるかのように、一斉に、あの怪物のような蛇が滅びた場所へと逃げ去ったのである。　そこで、神の御心により、蛇たちは大挙して死に絶え、鳥たちが襲いかかってそれらを食い尽くした。

それ以来、聖トマスは誘惑や災難から解放され、神から癒やしと予言の賜物を受けたが、それと同時に、なお一層の熱意をもって自らの霊的完成に励み、とりわけ沈黙の修行を守ることへと注意を注いだ。　しかし、教えを求める者たちが絶え間なく彼のもとに訪れ、沈黙を破らざるを得ない状況に追い込まれたため、彼は通常、自分の荒野にある高台へと身を引くようになった。　彼が選んだ親しい弟子たちは、彼の遺言に従って、兄弟たちや訪れる人々を導いた。ヨハネは祈りと教会の礼拝

を司り、ペトロは神から授かった透視の賜物によって人々を戒めた。　このようにすべてが整ったとはいえ、父なる師の霊的な力はそれによって弱まることはなかった。なぜなら、すべてにおいて一つの意志が表れていたからである――長老である父の意志がすべての人を養い、その愛によって皆は勇気づけられ、救いの道へと導かれていたのだ。

このように、人里離れた修道院ですべてが定まった秩序のうちに進んでいたある日、敬虔なギリシャの王レウ、バシレイオス[8762]の息子である敬虔なギリシャ王レウが、心に何らかの疑問を抱き、それを手紙に綴り、王の印章を押して、特別の使者を伴ってその手紙を尊い長老のもとへ送り、彼からその疑問の解決を得ようとした。　王の使者は旅立ち、聖なる父の修道室の入り口に近づいた途端、聖なる父は彼を迎えに出て、封印された手紙を手渡し、こう言った。

「これを受け取れ、兄弟よ。そして、あなたを遣わした者のもとへ戻れ。」

この出来事に使者は恐怖を覚え、戸惑いながらこう反論した。

「あなたが王の書簡を手にすら取らないというのに、私を遣わした者に対し、その書面による問い合わせについて、一体どのような返答をすればよいというのですか？」

それに対し、聖人はこう答えた。

「それでよい、わが子よ。それが神の御心なのだ。」

聖トマスから書簡を受け取った使者は帰還し、王に起こった出来事を報告して、王を大いに驚かせた。王は長老の返答を読み、そこに自身の困惑の解決を見出したとき、自らその尊者にお目にかかりたいという強い願望を表明した。　しかし、トマスは世俗を避け、その謙虚な知恵により、王への謁見を辞退した。このことについては、もっとも、後になって、しかも簡潔に、彼の弟子の一人によって伝えられたに過ぎない。　心の何らかの悩みを抱える者は誰でも、距離や時間の隔たりを恐れず、躊躇することなく尊師に助けを求め、期待通りの霊的な慰めと、同様に肉体の健康も授かった。こうして長年にわたり多くの人々を霊的生活において導き、深き老齢に達した尊師は、短期間の病の末、その霊を神に委ねた[8763]。

12月24日

12月11日（旧暦）

私たちの尊い父ダニエル・ストルプニクの生涯

記念日12月11日

私たちの尊い父ダニエル・ストルプニクは、この楽園の枝として、メソポタミアで育ちました[8764]。彼は、サモサトの町の近くにあるヴィファラという村[8765]で、キリスト教徒の両親イリヤとマルファの間に生まれました。　彼の母は不妊であり、子を産むことができなかったため、夫からの非難や、親族たちからの侮辱など、多くの苦難に耐えなければならなかった。　ある夜、真夜中、心の

[8762] レウ6世「賢王」は、バシレイオス・マケドニア人の息子である。ビザンツ帝国の皇帝であり、886年から911年まで在位した。

[8763] 聖トマス・デフルキンは10世紀に没した。

[8764] メソポタミア（ギリシャ語で「二つの川の間の地」の意）――ティグリス川とユーフラテス川の間に位置する地域。聖書の記述や他の民族の伝承によれば、まさにこの地に、原初の人類が住んだ楽園があったとされる。

[8765] サモサタは、ユーフラテス川の西岸に位置するシリアのコムマゲナ州の主要都市である。

苦悩に苛まれていた彼女は、こっそりと家を出て、天に向かって両手を広げ、涙ながらに次のような祈りを神に捧げた。

「主なる王よ！　あなたは初めから夫と妻を創造し、彼らに『生めよ、増えよ』と仰せになりました。あなたはサラに老いてからイサクを（創世記1:28）、アンナにサムエルを（サムエル記上1:20）、エリサベトにヨハネを（ルカ20:60）授けられました。　どうか、私のような不幸にも憐れみをお示しください。そして、私を慈しみの眼差しで見守り、私の不妊を癒やし、この恥を取り除き、不妊の私の胎に実を授けてください。そうすれば、かつてアンナがサムエルをあなたに捧げたように、私もあなたが与えてくださったものをあなたに捧げることができますように。

このように、砕かれた心と謙虚な精神をもって祈った後、マルタは自分の家に戻り、一人で眠りについた。すると夢の中で、皿のような形をした二つの大きく、非常に明るい灯りが、天から彼女の頭の上へと徐々に降りてくるのを見た。　朝、起きると、彼女は夫や親族たちにその幻視について話した。彼らはそれぞれ、自分なりの解釈で彼女の夢を説明しようとした。ところが、この不思議な夢は、彼女から息子が生まれ、その美徳の輝きがまるで星々さえも凌駕するだろうという前兆であった。　その直後、マルファは身ごもり、息子を産んだ。この出産によって、彼女はこれまで深い悲しみをもたらしていた不妊という苦しみから解放されたのである。至福のダニエルの地上での人生の始まりはこれほどまでに象徴的であり、後に真に「光の子」となる者が、かくも奇跡的にこの世に現れたのである。

五歳になるまで、その少年は名前を持たずに育った。両親は自ら息子に名前を付けることを望まず、神の賜物として生まれた者が、神からその名を受け取ることを願っていたからである。そこで彼らは、神への捧げ物も携えてある修道院へ息子を連れて行き、修道院長に息子の名前を付けてくれるよう頼んだ。　神に導かれた修道院長は、神ご自身が明らかにされる名で彼を呼ぶべきだと答えた。 少年を見つめながら、彼は教会の祭壇から一冊の本を持ってくるよう命じ、それを開くと、聖 預言者ダニエルの言葉がいくつか記されていた。これによって、神ご自身がこの預言者の名を少年にも与えることをお許しになったのだと悟り、彼はその子をダニエルと名付けた。　これは、この少年が、その名においても、また敬虔さにおいても、偉大な預言者に似るようになるという前兆であった。両親は、息子が直ちにこの修道院で神に仕えるために奉献されることを望んだが、修道院長は、少年がまだあまりにも幼かったため、これに同意しなかった。　そこで両親は、神の御計画により、少年を連れて家に戻った。それは、この少年が後に、他人の望みではなく、自らの判断と自発的な意思によって、善き生き方を選ぶためであった。　しかし、この少年の幼少期の成長ぶりを見ても、彼が将来、徳の高い人物になることがうかがえた――それは、良質な木が植えられたその日から、すでに将来の結実の兆しを見せるのと同じである。彼は神の恵みの光の中を歩んでいたため、至る所で徳の輝きに包まれていた。

少年が12歳になったとき、彼は父の家を去った。その出発や意図について誰にも告げなかったが、その間にも、彼はキリストのために両親、故郷、親族、友人を完全に捨て去ることを決意し、故郷の村から20スタディオン[8766] 離れた場所にある修道院へと向かった。 イグメンの前にひざまずき、ダニイルは修道院の一員として受け入れられ、天使の修道服を授かることを懇願した[8767] 。

しかし、修道院長は、申請者の体力の弱さと若さを理由に、ダニエルに対し、彼はまだごく幼い少年であるため、成人にとっても容易ではない多くの修道生活の労苦――例えば、絶え間ない徹夜祈祷、地面への拝礼、　断食、肉体の節制、そして自らの意志やあらゆる肉欲からの完全な放棄といった、成人にとっても容易ではない修道生活の多くの労苦に耐えられないだろうと答えた。そのため

[8766] スタディオンは約88サジェン、20スタディオンは3.5ヴェルストを少し超える距離である。

[8767] これは修道士としての剃髪式を指す名称であり、修道生活の主たる目的は、祈りと苦行を通じて無形の存在に倣うことにあるからである。

、修道院長は少年に、両親のもとに戻り、しばらくの間そこで過ごすよう勧め、彼の若き体力では到底及ばないような労苦に手を出さないようにと助言した。

「私がここに来たのは、キリストのために生き、この世のために死ぬためです」とダニエルは修道院長に答えた。　たとえ最も完全な修道者の行いによって死を迎えることになろうとも、それでもここから何も得ずに去るよりは比べものにならないほどましであり、――福音書の言葉を借りれば――*『鋤に手をかけ、後ろを振り返る者は、神の御国にふさわしくない』*（ルカ9:62）。

イグメンは再び、ダニイルにその決意を撤回するよう長く説得したが、彼からも多くの反論を耳にした。　ついに、ダニイールの決意を翻させることはできず、彼の中に揺るぎない決意と神への真摯な愛を見出した修道院長は、修道士たちを召集し、これほど幼い少年を修道院に受け入れることができるかどうかを相談した。　修道者たちは、少年の勇気と不屈の精神に驚き、彼の中に神の召しを見出し、彼を仲間に迎え入れることを快諾した。ダニエルは熱意に燃え、徳と神にかなう生活において目覚ましい進歩を遂げた。

やがて時が経つと、ダニエルの両親は、彼がその修道院にいることを知った。彼らは喜びつつも、これほど幼い少年が自ら進んで神に仕える道を選んだことに驚きを隠せなかった。　彼のもとを訪れ、まだ剃髪もされておらず、修道服も着ずに修道士たちの間を歩いている姿を見て、両親は修道院長に、自分たちの目の前で息子を剃髪させ、修道服を着せてくれるよう懇願した。　日曜日の日、修道院の兄弟たちと協議した後、修道院長はダニエルを修道士として剃髪させたが、その際、両親には息子のもとへ頻繁に訪ねてくることを禁じた。その後、両親は喜びながら自宅へ戻った。一方、至福のダニエルは、歳を重ねるだけでなく、徳も高めていき、霊的に成長し、強くなっていった。

この尊い生涯の始まりであり、そこから生じたすべての出来事の源となったのは、次の出来事であった。　ダニエルの心は神への愛に燃え上がり、彼は、私たちのために苦難を受けられた主イエス・キリストが、埋葬され、復活し、そして天に昇られた聖地を参拝したいという、抑えきれない願望を抱いた。　同時に、彼は当時の偉大な修道士である聖シメオン・ストルプニクに会いたいという熱意に燃えていた。修道院長のもとを訪れ、彼はその願いを打ち明け、自ら選んだ旅に出ることを許可してほしいと懇願した。　修道院長は、その時はダニエルを引き留めた。しかしその後、教会の必要に迫られ、自らも アンティオキア[8768] へ赴く必要が生じたため、ダニエルと修道会の兄弟たち数名を連れて行った。　彼らがティラニッサと呼ばれる集落にたどり着くと、そのすぐ近くで聖シメオン・ストルプニクが修行に励んでいたため、彼らは彼の柱へと向かった。　彼らはその土地の過酷さと柱の高さを目の当たりにし、この修行者がいかなる状況下でも、冬の寒さ、夏の暑さ、風や雨に耐えながら、その柱の上で修行を続けていることを知った。　一部の愚かな者たちは、聖人が虚栄心からこれらすべてに耐えているのだと考えたが、至福のダニエルは、その忍耐に驚嘆しただけでなく、自らも彼に倣おうと奮い立たされた。　やって来た修道士たちが下から声をかけると、聖シメオンは上から彼らを見下ろし、梯子をかざし、望むなら自分のところへ入ってくるように命じた。　そこで、各人が尊者に対してどのような態度をとっているかが明らかになった。ある者は足が痛いと言い、あ

[8768] シリアのアンティオキアは、シリアで最も古く、最も豊かな都市の一つであり、同国の首都である。オロンテ川沿いに位置し、同川が地中海に注ぐ地点から10ヴェルストほど離れた、レバノン山脈とタウロス山脈の間に位置する。　紀元前300年にセレウコス・ニカトルによって建設され、その父アンティオコスの名にちなんで名付けられた。キリスト教教会にとって、アンティオキアはエルサレムに次ぐキリスト教の第二の偉大な中心地として、また異教徒から生まれたキリスト教諸教会の母として、特別な重要性を持ちます。　名高いアンティオキア教会は、当初、聖使徒パウロとバルナバによって設立され、その後、使徒ペトロによっても確固たるものとなった。アンティオキアでは、異端（アリウス派やネストリウス派）の争乱のさなかに、教会の牧者たちによる数多くの重要な公会議が開かれた。　アンティオキア教会は古来より、アレクサンドリア、エルサレム、コンスタンティノープル、ローマの各教会と並ぶ特別な特権を享受しており、その首座司教たちは現在に至るまで、総主教の称号と特権を有している。　現在、アンティオキアはトルコの支配下にあり、人口1万人足らずの小さく貧しい町となっている。

る者は年老いていることを理由に断り、またある者は他の様々な体の不調を理由に退いた。しかしダニエルは、はしごに登ると、素早くその上へと進み、偉大なるシメオンを喜びをもって迎えた。　そして、彼の労苦は無駄にはならなかった。まず、彼は修道士からの教えに耳を傾け、それによってさらに徳のある生活へと励まされた。次に、ダニエルは彼から、按手によって与えられる祝福を受けるに値し、最後に、彼から自分の来世について聞かされたのである。　修道士は彼に語りかけ、預言者のようにこう言った。

「勇気を出しなさい、わが子よ。そして、あなたの心を強めなさい。なぜなら、あなたはキリストのために、耐え難いほどの試練を背負わなければならないからです。しかし、キリストご自身が、あらゆる事においてあなたの助け手となってくださいます。主はあなたの霊を強め、慰めてくださるでしょう。」

聖人との、愛に満ちたこのかなり長い対話を終えた後、至福のダニエルは下山し、その後修道院に戻った。

しばらくして、その修道院の修道院長が主のもとへ召されたとき、兄弟たちはダニエルに、後任として修道院長の職を引き受けるよう迫った。しかし、彼は自分の代わりに別の人物を指名し、自ら静寂を求める生活を始め、心の中でこう語った。

「さあ、ダニエルよ、お前は自由になった。かつてこれほど切望していたことを成し遂げる時が来たのだ。だから、望み通りの道を歩み、その決意を貫き通せ。」

そう決心したダニエルは、密かに修道院を出て、聖シメオンの柱の近くにある塀へと向かった。そこで十四日間過ごした後、彼はもう立ち去ろうとしていた。しかし、聖シメオンはダニエルを愛していたため、彼に自分と一緒に留まるよう勧めた。　一方、ダニエルは、エルサレムの聖地を訪れ、沈黙の修行のために内陸の荒野へ赴きたいという強い願望を抱き、パレスチナ方面へと旅立った。当時、パレスチナでは戦争が起きていた。サマリア人がキリスト教徒に対して反乱を起こしていたため、その地域の道は危険を伴っていた。　ダニエルはこれらすべてを知っていたが、それらをすべて顧みず、確固たる決意と恐れを知らぬ心で、死をも恐れず、かねてから定めていた旅路を成し遂げたいというただ一つの強い願いに全身を委ねて、旅を始めた。　かなりの距離を進んだところで、彼はある高貴な修道士に出会った。その修道士は高齢で、風貌は端正、白髪混じりの髪を持ち、その姿はまるで聖シメオン・ストルプニクそのもののようであった。　ダニエルを抱きしめると、その老僧はシリア語で、どこへ向かっているのかと尋ねた。ダニエルは、もし神の御加護があれば、聖地へ向かうのだと答えた。老僧は言った。

「『神の御加護があれば』というのは正しい言葉だ。しかし、今、はっきり知っておきなさい。お前の今回の旅は、神の御加護によるものではない。パレスチナでの反乱や争いについて、聞いたことがないのか？」

ダニエルは答えた。

「聞いてはいますが、私は神を信頼しています。神が私の助けとなってくださるでしょうから、私に悪いことは何も起こらないと思います。もし何かそのようなことが起こったとしても、私は恐れません。なぜなら、*『生きても死んでも、私たちは主のものだからです』*（ローマ14:8）からです。」

しかし、長老はこれに対し、ダニエルに預言の言葉を引用した。「*主はあなたの足を揺るがせることはなく、あなたを守る方は眠られることはない*」（詩篇120:3）。天使。

ダニエルは長老に反論し、この旅の途中でキリストのために死ぬことさえ厭わないと表明した。

すると、長老は怒りを露わにして彼から顔を背け、こう言い放った。

「神は、*『ある町で迫害されたら、別の町へ逃げなさい』*（マタイ10:23）と仰せになったとき、時期尚早に自ら死を招いたり、いわばやむを得ず確実な死へと向かうよう命じられたわけではない。」

ダニエルは長老の助言に傾き始め、こう言った。

「もし、父上、そうお考えなら、私は引き返す用意があります。」

すると、長老はこう答えた。

「私は、あなたの決意を完全に捨てよと勧めているのではなく、ただ、この不吉な時期にそこへ向かうのは賢明ではないと指摘しているだけだ。　さあ、今こそビザンティウムへ行きなさい。そこは聖地の多さゆえに「第二のエルサレム」とも呼ばれ、今や神の御心によりその上に神の恵みが注がれている。そこでは数多くの教会を訪れ、多くの聖地を仰ぎ見ることで心を満たすことができるだろう。　もし、上フラキアであれ、海の河口付近であれ、沈黙の修行に身を捧げることを決意するなら、それはあなたにとって救いとなり、神もそのことを助けてくださるでしょう。そもそも、愛する者よ、エルサレムでは神を見出せても、ビザンティウムでは見出せないなどと考えてはなりません。神は、いかなる空間にも制限されないからです。

彼らがこのように語り合っているうちに、太陽が沈み始め、道中で一晩泊まるために道から外れて向かうべき修道院に出くわした。そこで彼らはその修道院へと向かった。長老はダニエルに言った。

「君は先に行ってくれ。私は君の後から行くよ。」

ダニエルは、長老が何か用事で立ち止まる必要があるのだろうと考え、先へ進み、修道院の門に着くと、長老を待つために座った。しかし、長老が現れないため、ダニエルは彼が別の場所で一晩過ごすために去ったのだと思った。　修道院に入ると、彼は修道院長や修道士たちに挨拶をし、差し出された食事を口にした。その後、眠りにつくと、再びその老人が夢の中に現れ、道中で彼に告げたことを実行し、一刻も早くビザンティウムへ向かうよう、改めて助言した。　眠りから覚め、周囲に誰もいないのを見て、ダニエルは、自分に現れたのが人間なのか、それとも天使なのかと考え込んだ。しかし、それはシメオン、あの偉大な柱上者であった。

この幻視の後、ダニエルは朝の祈りを捧げ、その修道院に住む修道士たちに平安を祈ってから、ビザンティウムへと向かった。

[8769]海岸に着くと、聖人は天の軍勢の司令官である聖大天使ミカエルの教会に入り、そこで七日間を過ごした。そこで彼は、アナプラ[8770]に、空き家となった偶像崇拝の神殿があり、そこには多くの不浄な霊が棲みついており、誰もその場所を通り過ぎることができないという話を耳にした。船で渡ろうとする者を水中に沈め、通りかかる者には強盗のように襲いかかり、殺害していたのである。　これを聞いた聖人は、そこへ向かい、そこで暮らすことを決意した。悪魔たちから多くの苦難を耐え抜き、ついに神の助けによって彼らに打ち勝ち、偉大な栄誉に浴した偉大なアントニウスを思い起こしながら。　そこでダニエルは、唯一無敵の武器である聖十字架を手にし、同時に「*主は私の光、私の救い。私が誰を恐れることがあろうか？*」（詩編26:1）。そして戦いが始まる前から、悪魔の軍勢はすでに恐怖に震えていた。この霊的な戦士は、神殿の隅々を巡りながら、その都度ひざまずいて神に祈りを捧げつつ、十字の印でそれらを護っていた。　夕方になると、悪魔の首領が現れ、聖人に石を投げつけ始めた。すると、恐ろしい咆哮と悲鳴が聞こえ、騒ぎが巻き起こった。しかし、ダニエルは恐れを知らず祈りを捧げながら、こう言った。*「たとえ軍勢が私に対して立ち向かおうとも、私の心は恐れない。たとえ戦いが私に対して起ころうとも、その時こそ私は希望を持つ」*（詩篇26:3）。こうして彼は、一晩目と二晩目を　過ごした。しかし三晩目、彼は、巨大な巨人たちの姿をした

[8769] これは、5世紀後半、ビザンツ帝国の皇帝レウス1世の治世下でのことである。

[8770] アナプルスはコンスタンティノープルの郊外である。

無数の悪魔たちを見た。彼らは陰鬱な顔つきで、人喰い鬼のように恐ろしく、歯ぎしりしながら、聖人に対して怒りに燃え、こう言い放った。

「この場所には、我々が古くから住み着き、この地の主となっているというのに、一体誰が、お前という哀れな者に、ここへ来るよう勧めたのだ？」

そう言いながら、彼らはダニエルに襲いかかった。ある者は彼を海に投げ込もうとし、ある者は石で打ち殺そうとしたが、しかし、その誰一人として聖人に近づくことを敢えてしなかった。一方、聖人は主の御言葉、「*この種は、祈りと断食によってしか追い出せない*」（マルコ9:29）という主の言葉を思い出し、次のように行動した。神殿のすべての入り口を閉ざし、小さな窓一つだけを残して、自ら断食と祈りを始めたのである。ほどなくして、悪魔の軍勢はすべて、神の力によってそこから追い払われ、人々はもはや何の危険もなくその場所を通り過ぎられるようになった。　このことは至る所で知られるようになり、近隣の住民の多くが聖ダニエルのもとを訪れるようになった。彼らは、かつて悪霊の住処であったまさにその場所で、昼夜を問わず神への賛美の声が響き渡っていることに驚嘆した。　しかし、悪魔は善を憎み、聖人に打ち負かされるのを嫌ったため、一部の聖職者に嫉妬心を植え付けた。そして彼らは互いにこう語り合った。

「一体どこから彼がここへ来たというのか。皆が彼のもとへ行き、至る所で彼を称賛しているではないか。さあ、総主教のもとへ行って彼を告発し、ここから追い出してもらおう。」

彼らはコンスタンティノープルの総主教アナトリアス[8771] の元へ赴き、聖人について誹謗中傷した。しかし、総主教は彼らにこう答えた。

「なぜ、その人がどこから来たのか、どのような生活を送っているのかも知らないのに、中傷するのですか。もし彼が正しい生活を送っているのなら、私たちも彼の聖性を模範とすべきです。もし不義な生活を送っているのなら、疑いなく追放に値します。しかし、すぐに追放するのではなく、事前の綿密な審査を経た上で判断すべきです。」

総主教のこの答えに恥じ入った中傷者たちは、黙らざるを得なかった。

一方、悪魔は自らの策略が失敗に終わったのを見て、以前よりもさらに強烈な幻影や恐怖で聖人を苦しめ始め、まるで全軍を率いて彼に襲いかかるかのように、時には海に沈めようと試み、時には彼を殺すと豪語した。　しかし、悪魔は聖人に少しも害を与えることはできなかった。ダニエルは祈りを捧げ、神にこう叫んだ。

「わが主イエス・キリストよ、私が信じるその方が、あなた方を地獄の深淵に沈めてくださるでしょう。」

彼がそう言い終えるやいなや、まるで泣いているかのような叫び声や悲鳴が響き渡り、聖人は悪魔たちがコウモリのように飛び回り、その場から遠ざかっていくのを見た。しかし、その後も悪魔たちは聖人に苦痛を与え続けることをやめなかった。彼らは再び、聖人に対する中傷者たちを煽り立て、その者たちは総主教のもとへやって来て、こう言った。

「大主教様！ダニエルは魔術師であり、欺瞞者です。彼は魔術で民を惑わしており、それゆえ我々は彼を許容できません。」

総主教はダニエルを呼び寄せ、彼が誰であり、どこから来て、なぜこの地を訪れたのか、そしてどのように神を信じているのかを尋ねた。ダニエルは直ちに正教の信仰を告白し、続いて自分の国や出自について語り、また神の啓示によって召されてビザンティウムに来たことについても述べた。これを聞いた総主教は立ち上がり、彼を神の御使いとして敬い、抱擁した後、平穏のうちに彼を見送った。数日後、その総主教は重い病に倒れた。直ちにダニエルを呼び寄せ、自分、すなわち総主教が癒やされるよう、神に祈ってほしいと頼んだ。　聖人が祈りを捧げるやいなや、総主教はたちまち元気になって立ち上がった。そして、無償で治療を行ったその聖人は、癒やしへの見返りとして、総主

[8771] アナトリアス――449年から458年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

教に対し、総主教の前で自分を誹謗中傷した者たちを赦してほしいとただ一つだけ求めた。総主教は言った。

「私をあなたにお目にかからせていただき、あなたを通して癒やしを得ることができたという、これほど大きな恵みのきっかけとなった者たちを、どうして赦さないことができようか。」

総主教は聖人に自分と共に留まるよう頼んだが、ダニエルは自分の住処へ戻ることを選び、そこへ着くと再び扉を閉ざし、訪ねてくる人々のために小さな隙間だけを残した。

このような厳しい生活が9年を経た後、神は尊者に対し、最も完全な功業へと召そうとされた。 そのために、彼には特別な神の啓示が与えられた。彼は幻の中で、雲よりも高い柱が自分の前に立っているのを見た。柱の頂上には聖シメオンと、彼と共に二人の輝く若者が立っていた。そして彼は、柱の頂上から柱上者の声がこう言うのを聞いた。

「ダニエルよ！ ここへ、私のところへ来なさい。」

ダニエルはこう答えたという：

「先生！ こんな高いところへ、どうして私が登れるでしょうか？」

すると、聖シメオンは二人の若者に自分のところへ降りてくるよう命じ、ダニエルを連れてくるよう指示した。若者たちは直ちにその命令に従い、ダニエルをシメオンの前に立たせた。聖シメオンはダニエルを抱きしめると、大声で彼に呼びかけた。

「勇気を出せ、ダニエルよ！ 寛大で、強靭であれ！ しっかりと、勇敢に立ち続けよ！」

聖シメオンがこう語ったとき、その声は雷鳴のようであり、その声によってダニエルは目を覚ました。この幻視は、ダニエルもまた、聖シメオン・ストルプニクと同様に、柱に登り、肉体と魂をもって彼に近づくべきであることを予示していた。

その頃、アンティオキアから聖シメオン・ストルプニクの弟子セルギイが王のもとを訪れ、あらゆる悪から王を守るための贈り物として送られてきた、聖シメオンのククル[8772]を王に捧げた。 しかし、王の魂は世俗的な事柄に心を奪われており、彼は世俗の務めにすっかり没頭していたため、セルギイは王のもとを去り、元の地へ戻ることを決意した。そして、彼は「眠らぬ者たちの修道院」[8773]を訪れてみたいと思った。 彼が他の者たちと共に、尊者ダニエルが修行に励んでいた場所のそばを船で通りかかったとき、何人かが彼を思い出し、彼がどれほどの忍耐をもって生活を送っているか、また、神から病を癒やし、悪霊を追い払う賜物を受けていることを思い出した。 これを聞いたセルギイは、船を岸に寄せさせ、尊者ダニエルのもとへ向かった。ダニエルは彼を温かく迎え入れ、セルギイはかなりの時間をかけて語り合った後、ダニエルにシメオンの霊が宿っていること――それはエリヤの霊がエリシャに宿ったように（列王記下2:15）が宿っていることを確信すると、自身が携えていた贈り物、すなわちシメオンのククルを彼に授けた。それは、ダニエルこそが、他の誰よりもその贈り物にふさわしい人物であったからである。

その後、セルギイは夢の中で、三人の若者が自分のところに来てこう言うのを見た。

8772 ククル――ギリシャ語から訳すと「帽子」を意味し、当初は修道者全般が着用する頭巾であり、沈黙、清らかさ、悪意のなさ、神への黙想に没頭すること、そして自己への細心の注意の象徴として機能していた。時には、ククルに十字架が縫い付けられることもあった。 その後、現在と同様に、ククルは「大修道服（スキマ）」を授かったスキムニク（大修道士）のみが着用する装具となった。 これは、修道入会の初期の儀式でカミラフカの上に被せられるクロブクの代わりに用いられ、頭と肩をぐるりと覆う点でクロブクとは異なる。その頭巾は尖った形をしており、5つの十字架があしらわれている。

8773 「不眠者」と呼ばれる共同生活修道院は、4世紀末に聖アレクサンドロスによって設立された。当初はユーフラテス川のほとりの人里離れた場所にあったが、後にコンスタンティノープルに移転された。この修道院の規律と修道生活は、特に厳格なものであった。 この修道院の名は、修道士たちが昼夜の24時間に合わせ24の組に分かれ、二交代制で絶え間なく主を賛美し、ダビデの詩篇を長く歌い続けたことに由来する。そのため、この修道院での礼拝は途切れることなく、決して止まることがなかった。

「起きなさい、セルギイよ。ダニエルに、あの神殿での彼の生活はすでに終わったと伝えなさい。」セルギイは、その幻についてダニエルに伝えた。

目を覚ますと、セルギイはこれをダニエルに伝えた。ダニエルは、神が自分に聖シメオンの生き方に倣うよう命じていることを悟り、セルギイに砂漠へ行き、柱を立てられる適切な場所を探してきてほしいと頼んだ。　セルギイは、神の導きに従って一つの丘を回り込み、柱を建てるべき場所へとたどり着いた。過酷な旅路の疲れを癒やすためにそこで立ち止まると、ある幻を見た。頭上を白い鳩が飛んでいき、セルギイはそれを捕まえようとした。すると突然、天から声が聞こえてきた。

「網で鳩を捕まえようなどとは思っていないか？　鳩は素手で捕まえるべきだ。」

しかし、鳩は空高く飛び去り、その後は姿が見えなくなった。このことから、神がここに柱を建てる場所を示しておられるのだと悟ったセルギイは、ダニイールのところに戻り、自分が見聞きしたすべてを彼に伝えた。　喜びに満ちたダニエルは、友人のマルコという人物に、柱を建ててくれるよう頼んだ。マルコは神の助けにより、すぐに柱を建て上げた。建設と屋根の工事が完了すると、聖ダニエルは誰にも知られないよう、夜その教会を抜け出し、柱のところにやって来て、神にこう祈った：

「キリストなる神よ、私にこのような生き方を許してくださり、あなたに栄光がありますように！主よ、あなたが私を支えてくださっていることをあなたはご存知です。あなたを頼りに、私はこの柱に登ります。どうか私の捧げ物を受け入れ、この行いを成し遂げる力を与え、私の企てを成就させてください。」

そう祈り終えると、彼は柱に登り、唯一の神のために、天と地の間の静寂な孤独の中で暮らし始めた。この世のあらゆるものから身を遠ざけ、肉体と魂を天上のものへと近づけていった。しかし、常に神の僕たちを妬む悪魔は、ここでも聖人を悩ませ始め、その場所の所有者であるゲラシアという男を彼に敵対させた。　このゲラシアは、自分の所有地に自分の同意なしに柱が建てられ、しかも自分の知らぬ間に何者かの修道士がそこに住み着いていることを知ると、激しい怒りに駆られ、このことを王と、アナトリーの後継者である総主教ゲナディオスに報告した。　王はこれに全く注意を払わなかったが、総主教は彼を柱から降ろすよう命じただけでなく、ゲラシウスに恥をかかせて柱から追い出すことを許し、彼を罰さえしようとした。　ゲラシウスは激怒し、すでにその意図を実行に移そうとしていたが、神は彼の邪悪な企てを阻止するため、晴れた日に突然、雨と激しい雷雨、雷鳴と稲妻を降らせた。しかし、ゲラシウスは怯むことなく、その邪悪な決意を翻さなかった。　彼の心は憎悪に燃えていた。それは、悪魔そのものが彼の中に怒りを煽っていたからである。柱に近づくと、ゲラシウスは苛立ちと非難の言葉を浴びせながら、聖人に直ちに柱から降りるよう叫び、そうしなければ力ずくで引きずり下ろすと脅した。ゲラシウスに同行していた者たちの何人かは、彼を止めようとしてこう言った。

「彼を放っておきなさい。彼はあなたに何の害も与えていないではないか。そもそもこの柱はあなたの土地にあるわけでもない。あなたに何の損害もないばかりか、むしろ、あなたのために祈ってくれるような隣人がいるほうが、あなたにとって良いことではないか。」

しかし、ゲラシウスは彼らの言葉に耳を貸さず、怒りを露わにして聖人に、二度と柱に登らないよう命じた。聖人が降り始め、すでに六段目の階段まで下りたとき、皆は彼の足がまるで丸太のようになり、昼夜を問わず立ち続けたためにこわばって動けなくなっているのを見た。　そこで皆は彼を憐れみ、ゲラシウス自身でさえも心を改め、聖人に再びその場所に戻るよう懇願し、自分、ゲラシウスが聖人を侮辱する不遜を働いたことを許してほしいと頼んだ。　その後、ゲラシウスは聖人のためにさらに高い柱を用意し、それ以来、彼に敬意を表すようになり、王の面前でさえ、この敬虔な男の徳を称賛するようになった。

ある日、フラキア[8774] から、ある年老いて威厳のある人物が聖人のもとを訪れ、唯一の息子である悪霊に取りつかれた少年を連れてきた。その少年を柱のそばに寝かせると、父親は涙ながらに聖人に憐れみを持ち、彼を赦してくださるよう懇願した。

「ほら」と彼は言った。「もう三十日も、この子は悪霊に取り憑かれて、神に愛されるあなたのお名を絶えず口にしているのです。」

聖人は慈悲深く、彼にこう答えました。

「もしあなたが、私の主イエス・キリストが私を通してあなたの息子を癒してくださると信じるなら、あなたの信仰どおりになりますように！」

その後、彼はその憑かれた者に聖油を塗るよう命じた。それが行われると、悪霊は彼を地面に倒し、激しく揺さぶりながら「出て行く、出て行く」と叫び、そして実際に出て行った。父は息子が元気になったのを見て、彼を修道院に預け、そこで彼は熟練した修道士となった。　その後、キルという名の別の男が現れた[8775] 。彼は聡明で雄弁な人物であった。この男にはアレクサンドラという名の娘がおり、彼女は悪霊に苦しめられていたため、彼もまた娘を聖人のもとへ連れて行った。聖人が神に祈りを捧げ、悪霊に取り憑かれた娘に手を置くと、悪霊は即座に彼女から出て行き、彼女は健康を取り戻した。　それ以来、キルはその聖人に対して深い愛情と熱意を抱くようになった。ある日、彼は自分の部下の妻――彼女もまた悪霊に取りつかれていた――を聖人のもとへ連れて行き、その女性は聖人の祈りによって癒やされた。これに感謝して、キルは聖人の柱に次のような詩を刻んだ。

――ここに、四方八方から吹き荒れる風にあおられながらも、しっかりと立ち続ける男がいる。しかし、彼は風も悪天候も恐れない。彼の糧は、血を流さぬ天のマナである。シメオンの子孫は、二つの壁を二重の柱で支え、結婚を知らぬ母の御子を賛美している。

ギリシャの王、レウス大帝（[8776] ）は、後継となる息子がいなかったが、それを切望していたため、尊者ダニエルに、神からその願いが叶うよう取り成しを頼んだ。尊者は、母の祈りによって生まれた「祈りの子」であり、すでに自らの祈りによって、他の人々にも子供を授かるという神の恵みをもたらしていた。　そのため、今回も神に祈りを捧げた後、彼は皇帝に対し、来年には息子が生まれるだろうと予言した。この予言は確かに的中した。皇帝は息子の誕生を喜び、聖人の祈りに感謝して、彼のために三本目の柱を建立した。

聖ダニエルの名声が至る所に広まると、かつて統治していたテオドシウス・ザ・ヤングの王妃エウドキア[8777] が彼を訪ねてきた。彼女はダニエルに、柱から降りて自分の領地へ行くよう頼んだ。彼女の言葉によれば、そこには多くの人里離れた場所があったという。　聖人は、彼女の善意と熱意を称えたものの、主が彼に命じられた場所から離れることを望まなかった。皇后を祝福して平穏に送り出した後、彼はゲラシオスが築いた最も高い柱へと登った。

その頃、ビザンティウムにいたある異端者たちは、多額の金でヴァッシアナという名の娼婦を唆し、聖人のもとへ行き、聖人自身か、あるいはその弟子たちの誰かを、不道徳な行いに誘惑するよう仕向けた。　彼女は、恥知らずで不潔な身でありながら、貞潔で聖なる聖人のもとへ向かった。聖人が彼女を一目見ただけで魅了され、彼女と罪を犯したいという欲望を抱くだろうと想像していたのである。というのも、彼女は金で織られた衣を身にまとい、様々な装飾品で身を飾っていたからである。　到着すると、彼女は病人を装い、柱の向かい側にある野原、善き羊飼いの「言葉の羊」たちの

[8774] 古代のトラキアは、現在のハンガリー東部、トランシルヴァニア、ベッサラビア、モルダヴィア、ワラキア、ブルガリア、セルビア、およびルメリア東部をその範囲に含んでいた。

[8775] キル――著名なキリスト教の詩人・聖歌作家であり、テオドシウス2世の治世（5世紀前半）にコンスタンティノープルの総督を務め、後にスミルナの司教となった。

[8776] 聖レウ1世――467年から474年までビザンツ帝国の皇帝を務めた。

[8777] 408年から450年まで

囲いの近くで暮らした。彼女が病人を装ったのは、聖人自身でなくとも、少なくともその弟子たちに精神的な害をもたらすためであった。　そこでかなりの時間を過ごしたが、何の成果も得られないことに気づいた。なぜなら、この世に執着することなく、常に天の神と共にあったその知性を、どうやっても惑わすことができなかったからである。彼女は手ぶらで立ち去った。　その後、彼女を雇った異端者たちの元へ戻ったその不幸な女は、ダニエルが自分に誘惑され、その美しさを強く欲しがり、弟子たちに彼女を柱の上へ連れてくるよう命じたと嘘をついた。　「しかし私は」と彼女は付け加えた、「それに同意しなかった。彼らは、その不敬虔な欲望が民に知られるのを恐れ、私を殺そうと企んだ。私はかろうじて彼らの手から逃れ、逃げ出したのだ」。

こうして、その不幸な娼婦は聖人を誹謗し、異端者たちは彼女の言葉を民衆に広め、無実で清らかなダニエルを中傷し、民衆を彼から遠ざけようとした。　しかし、神の裁きは、その偽り深く卑劣な誹謗者に下った。彼女に突然悪霊が襲いかかり、苦しめ始めたのである。すると彼女は思わず、異端者たちにそそのかされていたことを自白してしまった。こうして、神の御使いを誹謗した者たちは恥をかかされた。そして民衆は彼女を捕らえ、聖人のもとへ連れて行き、悪霊の苦しめから彼女を救ってくださるよう懇願した。　そこでダニエルは、敵を愛し、罪を犯す者を七十七回まで赦すよう命じられた（マタイ18:21–22）キリストの真の弟子として、悪に対して悪で報いることはせず、むしろ自分を害そうとした彼女に善を行なった。　彼は彼女のために神に祈りを捧げ、聖油を飲ませるよう命じた。すると彼女は癒やされ、聖人の柱に口づけをし始め、皆の前で自分の罪を公然と告白し、許しを請うた。それ以来、彼女は罪深い生活を捨て、貞潔な生活を送るようになった。

この聖人は、神から悪霊を追い出し、病を癒やす力を与えられていただけでなく、預言の賜物、すなわち未来を予見し予言する力も備えていた。　神の怒りと、その都市に降りかかるであろう懲罰を予見した彼は、このことをゲナディオス総主教とレウス王に知らせる使者を送り、神の義なる怒りを防ぐために、週に二回祈りを捧げるよう助言した。　しかし、聖人の助言には全く耳を貸さなかったため、彼らは自らの罪のゆえに、実際にその預言が成就するのを目の当たりにすることになった。これについては後述する。その頃、皇帝は神の御霊に導かれて、総主教に対し、偉大なるダニエルのもとへ赴き、彼を司祭に叙階するよう命じた。　総主教は聖職者たちを率いて出発し、柱の場所にたどり着くと、尊者に対し、かねてより彼に会いたいと願っていたが、教会の務めに追われていたため、それを実現できなかったと語った。

「さて、今こそ」と彼は言った。「私はあなたに会い、あなたの祈りと対話を賜るために参りました。」

その後、総主教は彼に、はしごを立てさせて自分のところへ上がらせてほしいと頼んだ。しかし、聖人はこう答えた。

「あなたを我々のところへ遣わした者は、あなたにこれほど大きな苦労を強いる必要などなかったのです。」

聖人がそう言い放つと、総主教は驚き、また戦慄した。どうして聖人は、自分、すなわち総主教の来訪が自発的なものではなく、強制されたものであることを見抜いたのか。もし王に説得されていなければ、彼は聖人のもとへ行くことはなかったはずだからである。　長い間、総主教は同行者たちと共に、聖人に梯子を用意して自分たちが登れるように命じてくれるよう懇願したが、聖人はあらゆる手段でそれを拒んだ。　その間、猛暑が続き、太陽は容赦なく照りつけていた。総主教は、多くの者が暑さと渇きで衰弱しているのを見て、下方に立っていた大助祭に、叙階の際の慣例的な祈りを唱え始めるよう命じた。　自ら祈りを捧げ、司祭叙階の際に定められた祈りを唱えながら、聖ダニエルを長老に叙階した。聖ダニエルは柱の上という高い場所にいたにもかかわらずである。

そこに集まった民衆は皆、「アクシオス」[8778]と叫んだ。その後、至福のダニエルは、この出来事を神の御心と見なし、柱に梯子をかざすよう命じ、総主教の手から司祭の祭服を受け取り、彼と共に至聖なる神の秘跡を拝領し、柱に集まったすべての人々のために祈りを捧げた後、皆を平安のうちに送り出した。　王は、尊者ダニエルが叙階を受けたことを知ると、大いに喜び、急いで柱へと向かった。王は王の衣を脱ぎ捨て、謙虚な心で尊者のいる柱へと登り、その足元にひれ伏した。　しかし、長い間立ち続けていたため、聖人の足が腫れ上がり、腐敗しているのを見て、その偉大な忍耐に感嘆し、祝福を受けて喜びながら家路についた。その間、聖人がその都市を襲うであろう神の怒りについて語った預言が成就する時が訪れた。9月、ビザンティウムで通常厳かに祝われていた聖殉教者ママンタの記念日に、彼の名を冠した教会で夕方に徹夜祈祷が始まろうとしていたその時、巨大な首都で突如として激しい火災が発生した。　この火災は急速に拡大し、いわゆる「船の城壁」と呼ばれる海沿いの城壁から始まり、コンスタンティノフ市場を経て、さらにはユリアノフの岸辺[8779]にまで達し、こうして街の中心部全体を包み込むほどになった；　神の激しい怒りが住民を襲った。火は、多くの大きな家屋や家財、美しい宮殿、聖なる教会を焼き尽くしただけでなく、数え切れないほどの人々をも飲み込んだ。ある者は火によって灰と化し、ある者は体の半分まで焼け焦げ、またある者は手や足、目や頭を傷つけられた。　そして、その火を消し止めることは到底できなかった。消そうとすればするほど、炎はますます燃え広がった。それは、神がご自身の民の罪を罰されたからである。

こうしてコンスタンティノープルは、かつてソドムの町が滅びたのと同じような炎によって、ほぼ同じ規模で焼き尽くされていった（創世記19:24–25）。その時になって初めて、人々は聖ダニエルの預言を思い出した。彼はこの懲罰を予言し、民に祈りと悔い改めを呼びかけていたのだ。人々は涙ながらに彼のもとへ駆けつけ、自らの祈りによって神をなだめ、炎を鎮めてくれるよう懇願した。聖人は涙ながらに、彼らがこの災難を予言した当時、その言葉に耳を傾けず、週に二度、共同の祈りを捧げるという彼の助言に従わなかったことを叱責した。　その後、天に向かって両手を挙げ、彼は心を込めて神に町と住民のために祈りを捧げ、祈りの後、七日後には火事が収まると宣言した。そして、まさにその通りになった。王自身も神の怒りを恐れ、王妃と共に聖者に訪れ、聖者の取り成しによって神の慈悲を請うた。

夏が過ぎると、その厳しさを言葉では言い表せないほど寒い秋が訪れた。しかし、その寒さは勇敢な修行者を打ち負かすどころか、かえって彼に打ち負かされた。4日間にわたり、まるで空から川が流れ落ちるかのような雨が降り注ぎ、　多くの山々は数多くの水流によって浸食され、村々は水没した。絶えず強い向かい風が吹き荒れ、まるで互いに争っているかのようだった。竜巻や嵐は極めて激しく、その勢いで、聖者の二本の柱を支えていた鉄のフックさえも折れてしまった。　しかし、聖人は柱が揺れる中、高みで忍耐強く立ち続け、風によってまるで木の枝のように柱の上でよろめいていた。一方、聖人の弟子たちは下から涙を流しながら彼を見上げ、彼がこの極寒で命を落としたり、柱と共に地面に落下したりしないかと恐れていた。　しかし、聖ダニエルの主への希望は揺るぎないままであり、彼は恐れを知らずに柱の上に立ち続け、まるで石の土台のようにその上にしっかりと身を据えていた。　なぜなら、この世の生涯を束縛や牢獄と見なし、死を解放と自由と捉え、ダビデの言葉を繰り返していた者――すなわち、*「牢獄から」*、つまり肉体から*「わが魂」を導き出してください*（詩編141:7）――にとって、死を恐れる理由は何があっただろうか。　尊者ほど厳しい寒さに耐えれば耐えるほど、彼はなお熱烈な祈りを込めて主に向き合った。そして実際、義人は叫び、主は彼の声を聞き入れられた[8780]　。かつて舟の上から（マタイ8:26）そうであったように、今や天の高みから、主は風を静められ、たちまち大いなる静寂と晴天が訪れた。

[8778] アクシオス（「ふさわしい」）――叙階を受ける者の聖職就任に対する信徒の同意を示す叫び。

[8779] 皇帝にちなんで名付けられた地域：使徒同等の聖コンスタンティヌス大帝、ユリアヌス背教者。

[8780] 詩篇33:18の表現。

その後、王は聖人のもとを訪れ、先ほどの雨や風によって何らかの被害を受けていないかを確認した。そして、鉄のフックが折れているのを見ると、柱を可能な限りしっかりと補強するよう命じ、聖人から祝福を受けてその場を後にした。　ところが、帰路で彼に次のような出来事が起きた。彼が乗っていた馬が何かに驚いて後脚を立て、後ろに倒れ込んだため、王は馬から振り落とされた。その結果、王の頭から王冠が遠くまで飛び散って砕け、王冠に飾られていた真珠や宝石も散り散りになった。　王の馬丁には、アリウス派の信仰を持つヨルダンという者がいた。馬から王が転落するのを目撃した彼は、この件の全責任を問われ、処刑されるのではないかと恐れた。　そこで彼は引き返し、聖人のもとへ赴き、涙ながらに王への取り成しを懇願した。その際、彼はアリウス派の異端を放棄し、正教に帰依させてほしいと願った。　聖人は、彼の敬虔さを尊重し、ヨルダンがアリウス派の邪説を放棄してキリスト教の正統信仰に帰依した以上、彼は赦しに値すると王に書き送った。これに対し、王は聖人にこう答えた。

「私の転落の原因は、他ならぬ私自身に他ならない。なぜなら、私はあなたの目の前で、あなたの聖なる柱から徒歩で少しも離れることなく、あえて馬に乗ってしまったからだ。　それゆえ、ヨルダンに対しては怒るどころか、私が馬から落ちたことが、彼にとって心の堕落から立ち直るきっかけとなったことを喜んでいるのだ。」

その後、王は聖人を非常に敬い、自ら彼を崇敬しただけでなく、他の人々の目にも、彼を天の力の持ち主として見せるようになった。　例えば、グバジウという名の異民族の王が、休戦協定を結ぶためにギリシャ王レウのもとを訪れた際、王は彼を聖ダニエル・ストルプニクのもとへ連れて行き、彼を指差してこう言った。

「ほら、これがわが王国における奇跡だ！」

グバジウスは、聖人の忍耐力に驚き、聖人本人だけでなく、彼が立っていた柱にも頭を下げ、涙ながらにこう言った。

「天の王よ、感謝いたします。地上の王のもとへ来た私に、天の御人とその住まいを拝見する恵みを賜りました。」

自国に戻ったグバジイは、側近たちの前でしばしばその聖人のことを語り、自分の王国を守るための聖なる祈りを捧げてくれるよう、彼に手紙を送った。　そして、その聖人は、近き者も遠き者も、自国の人も異邦人も、王も庶民も、ギリシャ人もローマ人も異民族も、すべての人々にとって大きな驚嘆の的であった。彼らは彼を神の天使として訪れ、去り際には自らの助けとして彼を呼び求めた――そして、その聖なる祈りによって、彼らは皆、願いを叶えられたのである。

柱の上に立ち、あらゆる天候の変化に耐え抜いた聖人の不屈の忍耐は、前述の雨や嵐によって十分に証明されている。しかし、この聖人の記憶に値する事柄を何一つ見落とさないよう、さらに次の出来事を振り返っておこう。

ある時、極めて厳しい冬が訪れ、前述のものよりもはるかに耐え難い猛烈な風が吹き荒れた。雪も、氷も、凍てつく寒さもあった。　しかし、尊者は柱の上に屋根がないばかりか、頭にかぶっていた革製のフードさえも風によって奪われ、それは風に乗って遠く砂漠へと吹き飛ばされてしまった。こうして、自発的な殉教者は一晩中、冬の厳しさと猛烈な寒さに耐えながら立っていた。　昼になると、猛烈な吹雪が吹き荒れ、聖人の弟子たちは柱の方へ目を向けることさえできず、聖人に何の助けも差し伸べることができなかった。一日が過ぎると、さらに厳しい夜が訪れ、その後また同じような日と夜が続き、三日目になってようやく嵐が幾分収まった。　その時になって初めて、弟子たちは梯子を立てかけ、柱の上の尊者のもとへ登った。すると、尊者は頭からつま先まですっかり凍りつき、かろうじて息をしている状態だった。弟子たちは温かい水とスポンジで体を拭きながら、ようやく尊者の体を温めた。意識を取り戻した尊者は、弟子たちにこう言った。

「なぜ私の周りであれこれと世話をするのか？　なぜ私を甘い眠りから起こしたのか？　私はちょうど祈りを口にしながら眠りについたばかりだが、それでも、私の子らよ、あなたがたが私、すなわちあなたがたの父を気遣ってくれたことに感謝する。」

キリストを愛する王は、このことを知ると、涙を流して地にひれ伏し、柱にせめて屋根だけでも付けることを許してほしいと、長い間聖人に懇願した。

「どうかご自身を労わってください」と王は言った。「たとえご自身のためでなくとも、せめて私たちのために。あなたが早すぎる死を遂げ、私たちを孤児にしてしまわないように。」

王の涙ぐましい懇願を見て、聖人は自分の柱の上に屋根を設けることを許した。しかし、それは自身の安楽のためではなく、王の熱心な願いのためであった。王は聖人に対してこれほど深い愛と敬意を抱いており、聖人を訪ねてくる使節や大公たちを皆、聖人の柱のもとへ連れて行き、　――時には自ら、時には宮廷の重臣たちを伴って――聖人の柱へと連れて行った。訪れる者たちは、昼夜を問わず寒さや暑さに耐え抜く聖なる父のその並外れた勇気に驚嘆し、たいていは霊的な感動と、自分たちにとって大きな霊的益を得て、その場を後にした。

しばらくして、ヴァンダル王ゲンゼリヒがギリシャ人に対して宣戦布告し、大軍を率いてアレクサンドリアに迫った。この異邦人の侵攻に動揺したギリシャ皇帝は、聖ダニエル・ストルプニクのもとへ自身のシンクリトを伴って訪れ、彼の聖なる祈りによる助けを求めようとした。　未来を見通していた聖人は、ゲンゼリヒがアレクサンドリアを陥落させるどころか、あらゆる企てで失敗し、何の成果も得られずに帰国することになると王に予言した。　聖人が予言したことはすべて実際に実現し、これに感謝して敬虔な王は、聖人の柱のそばに弟子たちを収容するための修道室を設けることを望んだ。しかし聖人は、その代わりに聖シメオン・ストルプニクに捧げる教会を建設し、アンティオキアから彼の聖遺骨をそこへ移すよう王に願い出た。　王は直ちに、聖ダニエルの柱の北側に聖シメオンを称える教会を建立し、その教会に隣接して旅人宿を設けた。そして、聖ダニエルの願いに従い、聖シメオンの尊い遺骨を相応の敬意をもって新しく建てられた教会へ移した。　聖ダニエルはこのことに深く喜び、聖遺骨の移送に際して、民衆にふさわしい教訓を説いた。

聖人はその人柄において悪意がなく、敵に対しても愛をもって接した。ある時、ある者が聖人を誹謗したが、それを聞いていた民衆がこれに憤慨すると、聖人は焼き魚を見せながらこう言った。

「ほら、これがあなた方の断食者が食べているものだ！」

その後、聖人自身も妻や子供たちと共にその魚を食べたところ、彼らはすぐに重い病に倒れてしまったが、聖人は悪を忘れ、侮辱に対して侮辱で報いることなく、自らの祈りによって彼らを癒やした。　彼らに対するこの寛大な父の偉大な慈悲への感謝として、彼らは銀で彼の像を造り、その像には彼らが聖人の足元に横たわっている姿が表現され、彼らの名前が記されていた。彼らはこのイコンを、天の軍勢の総司令官聖ミカエルの教会に安置した。

聖ダニエルは、その寛容さに加え、非常に恵み深い言葉という偉大な賜物も持っていた。そのため、彼の教えを聞く者たちは深い感銘を受け、非常に多くの人がそこから大きな霊的な恩恵を得て、自らの生活を改めたのである。　王宮には、エドランという名の著名な戦士がいた。彼はガラティア出身で、健やかな体と武勇に優れていた。　彼は聖ダニエルのもとを訪れ、その魂に益となる教えを耳にすると、心から感動し、直ちに世俗を捨て、二人の友と共に聖人の弟子たちに加わった。　このことを聞いた王は、勇敢な戦士である彼を大いに惜しみ、宮殿へ戻ってくるよう説得するために使者を遣わした。しかし、彼は王の配慮を退けた。

「*人が全世界を得ても、自分自身を滅ぼしたり、傷つけたりするならば、何の益があるだろうか*」（ルカ9:25）。

その後、聖人の手によって修道衣を授かると、彼は聖人の節制を模範とし、飢え死なないために必要な分だけの食事を摂るようになった。同様に、睡眠もごくわずかで、それも立ったまま、ある

いは吊り下げられたロープに少し腰掛けて眠っていた。　その後、その徳高い生活により、彼は王の寵愛を勝ち取り、王は聖ダニエルを訪ねる際に彼にも立ち寄るようになった。このようにかなり長い期間を過ごした後、彼は安らかにこの世を去った。その後、この修道者の生き様、すなわちティトという名の修道生活を手本としたのは、彼の従者アントニオスであった。

しばらくして、レウ王は娘のアリアドネをゼノン・イサウリア人[8781] に嫁がせ、彼を軍を率いてフラキアに侵入した蛮族に対して派遣した。　遠征に先立ち、ゼノンは聖ダニエル・ストルプニクを訪ねた。聖人は彼に戦争の全容を予言し、彼は無傷で帰還し、その後、義父であるレウ王に続いて王位を継ぐが、親族の嫉妬によって王権を失い、やがて再び王位を取り戻すだろうと告げた。これらすべては、やがて現実のものとなった。 レウスの死後、ゼノンが即位して3年間統治していたとき、故レウス王の妻ヴェリーナの兄弟であるヴァシリスク[8782] が彼に対して反乱を起こした。 ゼノンを追放した彼は、ギリシャの王位を奪取し、エウティキオスの異端の信奉者として、ハルキドン公会議[8783] を否定し、異端の教義を広めることで、キリストの教会に大きな混乱を引き起こした。 そこで、コンスタンティノープル総主教アカキオス[8784] は、正統派の司教たちを集め、恐れつつも皇帝に反対したが、何の成果も得られなかった。そこで彼は、数人の司教を尊者ダニエルのもとへ遣わし、涙ながらに柱から降りて首都へ赴き、戦いの教会を助けてほしいと懇願した。　聖人は、たとえ短時間であっても、その場所から降りることを非常に嫌がっていた。しかし、教会の窮状を目の当たりにし、さらに天からの神の声によっても招かれたため、柱から降りて都へ赴き、総主教および彼のもとに集まっていた司教たちの前に現れた。　彼は司教たちから栄誉をもって迎えられ、言葉に尽くせないほどの喜びをもって受け入れられた。聖人の到着を聞き、彼と会うことを望まなかった皇帝は、首都近郊にある自身の別荘へと都を離れたが、聖人は彼を追ってそこへも向かった。　しかし、長時間の立ちっぱなしで足が腫れ上がり、数多くの傷で覆われていたため、自力でそこへたどり着くことはできなかった。そこで、信者たちが彼を肩に担いで運んだ。道中、一人のハンセン病患者が彼らとすれ違った。その男は聖人を目にするやいなや、泣きながら癒やしを懇願し始めた。　彼を憐れんだ聖人は、彼のために祈りを捧げ、近くにある海で身を清めるよう命じた。その男は身を清めると、すっかり清らかで健康な姿で現れた。この奇跡の噂はたちまち至る所に広まり、聖人のもとには病人を連れた大勢の人々が押し寄せ、聖人の祈りによって癒やされたのである。　奇跡を求めて集まった大勢の人々に囲まれながら、聖人は領地内にある王宮へと近づいた。あるゴート族の男が、窓から身を乗り出して、人々に担がれて運ばれる聖人を見て、笑いながらこう言った。

「また新しいアンフィパトが現れたな！」[8785]

彼がそう言い終えるや否や、即座に神の懲罰が下った。彼は突然、上階から地面に転落し、粉々に砕けて死んでしまった。一方、王は聖人の到着を知ると、彼を自分の元へ通さないよう命じた。そこで聖人は、足についた塵を払い落とすと、その場を去った。　しかしその後、王はすぐに聖者を呼び戻そうと使者を送った。聖者に対する不敬のせいで、自分である王に何らかの不幸が降りかかるのではないかと恐れたからである。そして聖者に、自分のもとへ戻ってくるよう懇願した。しかし聖者は王の言うことを聞き入れなかったばかりか、王の破滅さえ予言した。

「天の王を怒らせる者は」と彼は言った。「自らに数多の災いを増し加え、審判の日に向けて怒りを蓄積しているのだ。」

[8781] その後、ビザンツ皇帝 – 474年から491年まで。

[8782] 474年から477年まで在位した。

[8783] カルキドン公会議――第4回全地公会議。454年に開催され、キリストにおいてただ一つの神性のみを認め、それが人間性を吸収したとするエウティキオス派（別名：単性論）の異端が非難された。

[8784] アカキオスは471年から489年まで総主教を務めた。

[8785] アンフィパトス――地方長官、時には都市の統治者。

そう言い終えると、彼は自分の道へと旅立った。使者が戻り、聖者の言葉を王に伝えるや否や、突然、宮殿の柱の一つが倒れ落ちた。　王とそこにいた者たちは皆、大いに恐れた。かくして、無生物でさえも、神の御心により、聖人の預言が揺るぎないものであることを証しし、その倒壊によって王が王座から引きずり下ろされる日が近いことを示したのである。　町へ戻る途中、聖ダニエルは道中で二人の悪霊に取り憑かれた若者たちと、ある未亡人の娘を癒やした。また、不意に自分の足に巻きついた蛇を、一言で追い払い、それによって何の害も受けなかった。　街では、イライダという名の、不妊に悩んでいたある高貴な女性がダニエルの元へやって来た。彼女は涙で彼の足を洗いながら、聖人に祈りによって不妊を治してほしいと懇願した。聖人は、彼女に息子が生まれること、さらにはその子の名前までも予言した。　「あなた、女よ」と彼は彼女に言った。「あなたは息子を産み、その子をゼノンと名付けるでしょう」。

一方、王は、ダニイルの返答が伝えられた際に宮殿で柱が倒れた出来事に深く恐怖を覚えたため、どうすれば和解し、尊者から許しを請うことができるか、機会を窺い始めた。当初、彼は高名な人物たちを通じて尊者に懇願したが、その心は依然として不法な行いに傾いていたため、その願いは不誠実なものだった。　その後、彼は自ら聖者の元へ赴き、その前にひざまずいて許しを請うた。しかし、聖者は霊的な眼で彼の邪悪な思惑を見抜き、同席者たちにこう告げて彼を糾弾した。

「彼のこの謙遜と悔い改めは偽りである。彼の中には、羊の衣の下に狼の残虐性が隠されている。しかし、あなたがたはまもなく、彼の上に神の正義の怒りが下るのを見るだろう。全能なる至高者の右の手は、高慢な者たちを王座から引きずり下ろすからだ。」

これら一連の出来事の後、聖人は自身の柱へと戻った。そして間もなく、聖人の予言通り、ヴァシリスコスは確かに王座から引きずり下ろされた。一方、ゼノンは再び王笏を手にし、聖人の予言が成就したのを見て、妻と共に聖人の元へ参り、彼に敬意を表した。

その後、聖人は生涯の残りを柱の上に立ち続け、数多くの奇跡を成し遂げた。　しかし、その謙虚さから、また人々からの称賛を避けるため、彼は奇跡の力を自身の徳によるものではなく、聖シメオンの祈りによるものと見なしていた。そのため、彼のもとにやってくるすべての病人を、シメオンの教会にある聖人の聖遺物の元へと送り返した。　ある金細工師が、生まれつき足が不自由で、一歩も歩くことさえできず、まるで虫のように腹這いで地面を這っていた息子を、尊者のもとに連れてきた。　彼を聖シメオンの教会へ送り出した後、至福のダニエルは、聖シメオンの聖遺骨を足の不自由な少年の足に当てるよう命じた。そうするやいなや、少年は跳び上がり、喜びながら神を賛美しつつ、自らダニエルの柱まで歩いて行った。

また別の人物は、東方から帰途につく途中、強盗たちの手に落ちた。彼らは彼を激しく殴打し、膝を砕き、略奪した後、かろうじて息のある状態で彼を残して立ち去った。通りかかった旅人たちは、傷のために衰弱している彼を見て憐れみ、アンキラの町へ運び込んだ[8786]。その町の司教は、病人に全力を尽くして世話をし、最も経験豊富な医師たちを呼び寄せ、彼の傷を治した。しかし、傷は治ったものの、彼は歩くことができなかった。足がひどく損傷しており、傷はすべて癒えていたものの、歩くのに十分な力がなかったからである。　足を動かすことができなくなった患者は、司教に、自分を聖ダニエルのもとへ連れて行ってほしいと懇願した。彼は丸太のように動かない状態で荷車に乗せられ、その姿のまま、この無償の医師の柱のもとへと運ばれた。　ダニエルは、その足の不自由な者を聖シメオンの教会へ送り、聖遺物から取り出した聖油を塗るよう命じ、それによって即座に彼を癒した。　彼のすねと足はたちまち力強くなり、彼は自ら立ち上がって歩き始め、神と、神に愛された聖人であるシメオンとダニエルに感謝を捧げた。

[8786] アンキラ――現在のアンゴラ。ガラティア（小アジアの中央部に位置する小さな地域）の古代都市であり、現在は小アジアの州の一つで、人口3万人の州都である。

あるスペイン人の百人隊長は、この聖人に深い信仰を抱いており、使用人や親族、知人の誰かが病に倒れるたびに、聖人に手紙を書き、病人を癒やすよう懇願した。その後、聖人からの返事が届けられると、彼はそれを病人の上に置くと、その病人は即座に癒やされた。

ある貧しい女性が、生まれつき口がきけない12歳の息子を連れて、聖人の柱のところにやって来て、柱のそばに息子を置くと、その場を去った。聖人は柱の上からその少年を見て、弟子たちに彼を連れてきて、自分たちの間で暮らさせるよう命じた。　しかし、弟子たちは、その少年が母親に教えられて黙っているのだと思い込み、貧しさを理由に、あるいは生計を立てやすくするために、口がきけないふりをしていると疑い、彼に多くの苦痛を与えた。恐怖や殴打で何かを言わせようとしたり、　時には、眠っている間に鋭い道具で刺したり、とげのある枝で叩いたりして、突然目を覚ました際に何か言葉を口にさせるよう仕向けた。　しかし、彼らが彼の無言であることを完全に確信すると、そのことを尊師に報告した。尊師は、その無言の少年の舌に聖油を塗るよう命じた。そして日曜日、聖なる典礼の最中に、助祭が聖福音書を朗読しようとしたとき、参列者たちは慣例に従って次のように歌った。「主よ、、あなたに栄光あれ！」――と唱えたとき、その少年ははっきりと大きな声で「主よ、あなたに栄光あれ！」と口にした。それ以来、彼は正常に話すことができるようになった。

高齢に達した聖人は、至福の死を目前に控えていた。そのことを予見して、彼は弟子たちにそのことを告げ、次のような遺言を残した。

「わが子ら、そして兄弟たちよ！　あなたがたは、私にとって真に子である――なぜなら、私は霊的にあなたがたを産み出したからであり、また兄弟でもある――なぜなら、私たち全員に共通する父は神であり、私もその共通の父のもとへ旅立つからである。　しかし、私は、私との別れを嘆き、孤児のように泣く愛するあなた方を置き去りにするのではなく、あなた方を、あなた方と共に私をも創造されたあなた方の父に託します。　それゆえ、御父は、知恵と英知をもって万物を創造し、その後、天を低くして地上に降り、死を味わい、私たちのために復活されました。どうか、御父が、悪魔からあなた方を守る英知ある守護者として、あなた方と共にありますように。　主として、主はあなたがたを御自身の聖なる御心への従順の中に保たれ、またあなたがたの父として、あなたがたが罪を犯し、倒れるたびに、憐れみと広げた腕をもって、主はあなたがたを御自身のもとに招いてくださいます。　私たちのためにご自身を死に委ねられた主として、主があなたがたを互いの心を一つにして結び合わせ、天の父のもとへと引き寄せてくださいますように。　謙遜を求め、従順であり、客人を歓迎し、断食、徹夜祈祷、貧しさを愛し、とりわけ、第一にして最も重要な戒めである「愛の戒め」を守り、また敬虔な人々にふさわしいすべてのことを実践しなさい。　真の信仰を守り、異端の偽りの教えを避け、何事においても、あなたがたの母である聖なる教会から離れることのないように。これらすべてを実践すれば、あなたがたは徳において完全となるでしょう。

尊者様は、霊的な子らにこのような霊的な遺言を書き残し、それを彼らに読み上げさせた。すると、彼らは尊者様との別れを前にして涙を流した。

尊者のお亡くなりになる三日前の真夜中、最も立派な弟子たちの一部は、ダニエルを訪ねて現れたすべての聖なる御使いたち――預言者、使徒、殉教者たち――を目撃する栄に浴した。彼らはダニエルに挨拶を捧げた後、神聖な秘跡を受けるよう命じた。　そして、尊者のお亡くなりになる当日、アカキイの後継者であるエウフィミオス総主教[8787]　が、その聖職者一同を率いて到着した。また、前述の敬虔な女性イライダ――ダニエルの祈りによって不妊が癒やされた女性――は、聖人の尊厳ある埋葬に必要なすべての準備を整えた。　その頃、この地に一人の悪霊に取りつかれた男が現れ、柱のそばに立ちながら、天使たちや多くの聖人たちが天から尊者のもとへと歩み寄ってくるのを見たと語り、さらには自分が見た聖人たちの名前を一つひとつ挙げていた。　一方、尊者にして神に愛され

[8787] 聖エウフィミオス――490年から496年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

た我らの父ダニエルは、自らの死を喜びつつ、生後80年3ヶ月[8788]　の時点で、その尊く聖なる魂を神の御手に委ねた。

ダニエルの逝去直後、前述の悪霊に取りつかれた男は、悪魔による苦しみから解放された。尊者がお亡くなりになった時、天には彼の柱の向かいに、十字架のような三つの星が現れ、それらは昼間、太陽の光の下でも言い表せないほどの力を持って輝き、尊者の聖なる遺体がその場所、すなわち彼の柱のそばに埋葬されるまで、目に見えていた。　また、聖人の臨終の遺言に従い、バビロンの三人の聖なる少年、アナニア、アザリヤ、ミサイアの聖遺骨も彼と共に埋葬された。これは、彼の墓に参拝に訪れる人々が、彼の聖遺骨ではなく、それらの聖なる少年たちの聖遺骨に敬意を捧げるようにするためであった。　このように、生前に謙虚であった彼は、死後もなお謙虚であり続け、人間による称賛を避けましたが、神ご自身が、地上で人々の前で奇跡によって、また天で御自身の天使たちの前で、御自身を賛美する者を称賛されました。そして、神ご自身もまた、すべての被造物によって永遠に賛美されています。アーメン。

トロパリオ、第1声：

忍耐の柱であられた、熱心な先祖である尊者よ。苦難にあるヨブ、試練と無形の住まいにありながら肉体に宿るヨセフ、そしてダニエルよ、わが父よ。キリスト・神に、わが魂の救いを祈り求めてください。

コンダク、第8調：

まことに、輝きに満ちた星のごとく、あなたは、祝福された者よ、柱の上に昇り、その敬虔な行いによって世を照らし、誘惑の闇を追い払われました、父よ。それゆえ、私たちはあなたに祈ります。今この時も、あなたの僕たちの心に、沈むことのない知恵の光を注いでください。

ペチェルスクの聖ニコン・スホイの伝記

記念日12月11日

「囚人たちのことを思いやりなさい。あたかもあなたがたも彼らと共に囚われているかのように」（ヘブライ人への手紙13:3）――主の御名において囚人となった聖使徒パウロは、このように戒めました。　この戒めに従い、祝福された囚人ニコンの奇跡を思い起こそう。彼の生涯には、御自身の囚人たちを束縛から解き放つ主の力が、疑いようもなく現れていた。

福者ニコンはキエフの出身で、高貴な両親の息子でした。ペチェールスク修道院に入門すると、彼はまず自発的に自らの知性と全身全霊をキリストへの従順に委ね、熟練した修道士となりました。その後、邪悪なポロヴェツ族の侵攻[8789]の際、彼は聖エウストラティオス・ペチェルスキーと共に彼らに捕らえられ、修道院から彼らの国へ連行され、そこで監禁された。　キエフのキリストを愛するある市民が、捕虜の身代金を支払うためにその地を訪れたが、至福のニコンはその人物を拒んだ。

[8788] 聖ダニイル・ストルプニクは、489年または490年12月11日に帰天した。彼は30年以上にわたり柱の上で修行を続けた。1200年、コンスタンティノープルで、ロシア人巡礼者である修道士アントニオスが彼の聖遺物を目撃した。

[8789] ハーン・ボニャクの率いるポロヴェツ族によるキエフへのこの侵攻は、1096年に起こった。– ポロヴェツ人は、11世紀後半にカスピ海以東の草原から南ロシアの草原へ大挙して押し寄せたテュルク系遊牧民族であり、それ以来13世紀20年代に至るまで、ルーシ、とりわけその南部に対して絶え間ない壊滅的な襲撃を繰り返した。

そのキリスト愛好家は、ニコンがキエフに裕福な親族をもち、彼らに身代金を支払ってもらいたいがためにそうしているのだと考えた。　多くの捕虜を身代金で買い戻した後、その男はキエフに戻り、至福のニコンのことを語った。これを聞いた彼の親族たちは、ニコンを買い戻すために莫大な財宝を携えてポロヴェツ人の元へやって来たが、至福のニコンは彼らにこう言った。

「私のために、あなたがたの財産を無駄にしないでください。もし主が私の自由を望んでおられたなら、私をこれらの不法者たちの手に渡すことはなかったでしょう。主ご自身が、お望みの者を捕虜にされるのです。そして私たちは、*『神から良いものを受け取り、悪いものは受け入れないというのでしょうか』*（ヨブ記2:10）。

親族たちは聖人を責めたが、身代金を支払わずに、奪われた財産のすべてを携えて引き返さざるを得なかった。その後、聖人を捕らえた者たちや他のポロヴェツ人は、目的を達成できなかったことを悟ると、神の僕を容赦なく苦しめ始めた。 そして丸3年間、聖人は絶えず彼らに苦しめられ、縛られ、手足を鎖で拘束され、火で焼かれ、刃物で切り刻まれ、飢えと渇きに苛まれ、1日、2日、3日、あるいはそれ以上も食事を与えられませんでした。 夏には3日間、灼熱の太陽の下に晒され、冬には雪と寒さの中に放り出された。不信心なポロヴェツ人たちは、彼が身代金を払って身を引き取ることを狙って、これらすべての苦行を彼に強いたが、至福のニコンは、そのすべてに対してただ主に感謝し、絶えず主に祈りを捧げた。　しばらくして、彼は拷問者たちに、キリストが彼らの手から彼を無償で解放してくださることを告げ、その知らせをすでに受けたと伝えた。

「私の兄弟エウストラティオスが私の前に現れた」と彼は言った。「あなたがたは彼をユダヤ人たちに引き渡し、十字架にかけさせたのだ[8790] 。その罪により、かつて『その血は私たちと私たちの子孫の上に降りかかれ』と叫んだ彼らの先祖たちと共に、彼らも裁かれることになるだろう[8791] 。」　しかし、あなた方不信心な者たちは、主を十字架の苦しみへと引き渡したユダと共に苦しむことになるだろう。現れた殉教者は私に、聖アントニオとテオドシオ、そしてその他のペチェールスクの聖人たちの祈りによって、三日目に私はペチェールスクの修道院へと戻されるだろうと告げた。

これを聞いた、尊者をお捕らえにしたポロヴェツ人は、彼が逃げ出そうとしていると思い込み、逃げられないように膝の下の腱を切断し、さらに警戒を強めて彼を見張った。　そして三日目の午後六時、まさに全警備兵が武器を手に　聖人を取り囲んでいたその時、その祝福された囚人は姿を消し、彼を見張っていた者たちは、「天の主を賛美せよ」と歌う彼の声だけを耳にしたのである。

こうして、聖人は、神聖な典礼において聖体拝領の詩が歌われ始めたまさにその瞬間に、誰の目にも見えないまま、奇跡的にペチェルスクの聖母マリア教会へと移された。すると直ちに、修道者たちが彼の周りに集まり、どのようにしてここに来たのかと尋ね始めた。　当初、彼はこの驚くべき奇跡を隠そうとしたが、周囲の人々は、彼が重い鎖で縛られ、治る見込みのない傷や、全身を覆う膿んだかさぶた、とりわけ切り裂かれたすねから流れ出る血を見て、あらゆる手段で彼に真実を語らせるよう迫った。　そこで、本意に反して、彼はついにありのままのすべてを彼らに語ったが、手足の枷を外すことは許さなかった。それに対し、修道院長は彼にこう言った。

「兄弟よ！もし主があなたのこの束縛を望んでおられたなら、あなたを捕らわれの身から解放することはなかっただろう。だから、我々の願いに従いなさい。」

その後、修道士たちは尊者から手足の枷を外し、それを祭壇に必要な品々に作り直した。

しばらくして、ポロヴェツ人との和平が結ばれた頃、かつて至福のニコンを捕虜としていたあのポロヴェツ人がキエフにやって来た。キエフに到着すると、彼はペチェールシク修道院に入った。そこでかつて捕らえていた人物、至福のニコンを見かけ、彼だと気づくと、修道院長や修道士たちに

[8790] 聖エウストラティオスはポロヴェツ人によって、あるヘルソンのユダヤ人に売られた。そのユダヤ人は、同信者たちと共に、恐ろしい拷問によって彼にキリストを否定させようとしたが、それが叶わなかったため、彼を十字架に磔にした。そこで聖殉教者は、ユダヤ人たちの槍に貫かれながら、神に魂を捧げたのである。

[8791] 言うまでもなく、彼らはピラトに救い主の死を要求したユダヤ人たちである（マタイ27:26参照）。

そのことを詳細に語り、もはや自国へは戻らず、　一連の出来事に心を打たれ、聖なる洗礼を受け、同じくキエフにやって来た他の親族であるポロヴェツ人とともに修道士となり、彼らと共に、かつての捕虜であった至福のニコンに仕えながら、同じペチェールシク修道院で悔い改めのうちに生涯を閉じた。

この至福の聖なる父ニコンによる驚くべき奇跡は他にも数多くあったが、その中から以下のことを述べておこう。

ある時、至福の者がまだ捕虜であった頃、捕虜たちは飢えと欠乏のあまり、死にかけるほど病に倒れた。彼らと共にいた至福の者は、不信心者たちの食物を一切口にしないよう禁じ、自らの祈りによって彼ら全員に回復をもたらし、誰にも気づかれることなく監禁から解放される機会を与えた。

またある時、この聖人がまだ捕虜であった頃、彼を捕らえたポロヴェツ人が病に倒れた。死が目前に迫った彼は、妻や子供たちに、自分が捕らえたニコンを自分の墓の上に礫にするよう遺言した。　しかし、この祝福された囚人は、霊的な目で、そのポロヴェツ人が人生の終わりに悔い改めることを予見し、彼のために祈り、彼を癒やした。こうして、彼は自分自身を肉体の死から救い、そのポロヴェツ人を肉体の死だけでなく、霊的な死からも救ったのである。

この至福のニコンは、「乾いた」と呼ばれている。それは、彼がまだ生きている間に血を流し尽くし、数多くの傷によって腐り、苦しみによって干からびてしまったためであり、捕虜となって失われた自身の健康について、預言者ダビデの言葉「*私の力は、陶器の破片のように乾き果てた*」（詩篇21:16）、*「わが骨は、燃えさしのように焼け尽くした」*（詩篇101:4）と語ることができたのである。私たちもまた、彼の驚くべき力――それは肉体的なものではなく、天の無形の力に固有のものである――に感嘆しつつ、使徒の言葉以外でこれをどう表現できようか。　*「この宝を、私たちは土の器に納めている」*（IIコリント4:7）。まことに、この囚人は、その肉体の弱さにもかかわらず、奇跡的に束縛から解放され、神聖な炎に燃え、その善行と神に喜ばれる行いによって輝いていた。　それゆえ、彼は肉体の束縛から解放され[8792]、この世におけるはかない、すぐに衰えていく健康の代わりに、神から決して衰えることのない、朽ちることのない肉体を与えられ、その肉体は今もなお洞窟の中に留まっている。　また、その霊においては、*「朽ちることなく、汚れなく、しおれることのない、天に蓄えられている御国」*（Iペテロ1:4）を、永遠のいのちの泉のほとりで授かり、しおれることのない栄光の冠を受けました。　この冠を、神に愛された聖人ニコンの祈りによって、私たちもまた、栄光の王であるキリスト・神から授かることができますように。キリスト・神に、その始まりなき御父と、至聖なる、善き、命を与える御霊と共に、今、そして常に、そして永遠に、栄光がありますように。アーメン。

聖殉教者アケプシオスとアイファロスの記念日。

記念日：12月11日

聖殉教者アケプシウスとアイファルはペルシャの出身であり、そこで殉教しました。　アケプシオスは当初、アルベラ[8793]の異教の祭司であったが、後にキリストの信仰について耳にし、当時彼を苦しめていた病の癒やしを得られることを期待して、キリスト教の司教のもとを訪れることを決意した。司教は彼に信仰とキリスト教徒としての生き方について教えを授け、その祈りによって彼の病を癒やした。　その後、アケプシウスはアルベラに戻り、長老の聖職に叙階された後、同胞たちの間

[8792] 聖ニコン・スホイ・ペチェルスキーの幸いな死は、12世紀初頭に訪れた。

[8793] ペルシャの都市――現在のエルビル、小アジアに位置する。

で説教者および敬虔さの教師として現れた。このことが地方長官の耳に入り、長官はこのキリストの新たな伝道者を呼び出し、耳を切り落とすよう命じ、牢獄に投獄した。

一方、聖アイファルはアルベル教会で助祭を務めていた。　キリストへの信仰を告白したために捕らえられた彼は、残酷に殴打され、祭司長たちによってアケプシオスの牢獄へと送られた。その後、二人の聖人は再び地方総督の前に引き出され、彼の前でキリストへの信仰を改めて告白したため、首を切られる刑に処された。

聖殉教者ミラクスの記念日

記念日：12月11日

聖殉教者ミラクスはエジプト出身であり、テネステイア[8794]の町でキリスト教徒の両親の間に生まれ、洗礼を受け、真の敬虔さの中で育てられた。　しかし、若さゆえの軽率さから、彼はあらゆる善の敵（悪魔）の影響に屈し、アミール[8795]のもとへ現れて、キリストを否認した。腰の帯[8796]を外し、聖なる十字架を直すと、彼は軍用剣を手に取り、絶望的なほど大きな声で叫んだ。

「私はアガリア人だ。これからはもはやキリスト教徒ではない。」

このような背教によって、ミラクスはアミールとその側近たちから敬意と尊敬を勝ち取った。そして、軽率な若者が虚栄の栄光に夢中になり、自らの救いについて考えることさえやめてから、長い時が流れた。　一方、息子の堕落を嘆きつつも、両親は絶望することなく、道を踏み外した背教者が敬虔な道へと立ち返るよう、神に熱心に祈り続けた。そして、彼らの祈りは実を結んだ。　主は両親の熱心な願いに目を留め、絶え間ない祈りに耳を傾けてくださった。神の恵みがミラクスの心を照らし、彼は悔い改めた。その後、彼は両親のもとへやって来て、こう言った。

「尊き、愛すべき両親よ！私は正気を失い、かくも恐ろしい行いを犯してしまいました。しかし今、私はそのことを深く悔い、再びキリスト教徒となり、あなた方と共にいられるよう祈っています。」

これに対し、両親は彼にこう答えた。

「我が子よ、あなたがアガリア教に堕ちて以来[8797]、私たちはあなたのために多くの涙を流し、神に絶えず祈り続けてきた。神があなたに真理の知識を授け、キリストのもとへ戻してくださるよう願って。　そして今、神が私たちの微力な祈りを拒まれなかったという、神の慈愛と寛大さに感謝している。しかし、あなた自身も理解している通り、愛する我が子よ、私たちはアミールの怒りを恐れ、あなたのために私たちにも何らかの災いが降りかからないよう、あなたを受け入れることを躊躇している。　それゆえ、もしあなたが、恐ろしい過ちによって重くのしかかる良心を和らげ、神の憐れみを得、私たちの安全を守り、そしてすべての隣人のために執り成しをしたいと願うのであれば、アミルのところへ行き、ここで私たちに密かに告白したことを、あたかも私たちの知らないことであるかのように、そこで公然と告げなさい。主が、御自身の善き御心に従って、あなたに関するすべてを導いてくださいますように！　さあ、行け、わが愛する子よ。私たちも、神の憐れみに値しない者ではあるが、慈愛に満ちた神が私たちの祈りを聞いてくださることを願っている。

[8794] テネスティア、あるいはテネス。タニスの北に位置し、アラビアからアレクサンドリアへ向かう途中の海辺の都市。

[8795] サラセン人のアミールとは、おそらく639年にオマルによってエジプト征服のために派遣され、643年にアレクサンドリアを攻略したアムルのことである。また、エジプトの統治者全般もアミールまたはエミールと呼ばれていた。

[8796] なお、キリスト教徒は常に、霊的な敵との戦いにおいて彼らを強める恵みの力の象徴的な意味を心に留めてきた。（エフェソの信徒への手紙 4:14）

[8797] すなわち、イスラム教（すなわちアガリアン、本来はアガリとその息子イシュマエルの子孫であるアラブ人を指すが、後にすべてのイスラム教徒に広く適用されるようになった）。

ミラクスは両親の言葉に耳を傾け、気力を取り戻し、彼らの祈りの効力を信じて、その場で父と母の助言に従うことを決心した。帯を手に取ると、彼は直ちにアミールとそのアガリア人の顧問たちの元へと向かった。　アミールとその側近たちの前に立つと、ミラクスは帯を締め、聖十字架を頭上に掲げてそれに口づけをし、大声で叫び始めた。

「主よ、わがキリストよ、私を憐れみ、救ってください！」

その大胆不敵な振る舞いに、皆は恐怖に襲われた。アミールはミラクスを捕らえ、こう尋ねた。

「お前、一体どうしたのだ？」

それに対し、彼はこう答えた。

「私は、自分を取り巻いていた悪魔の惑わしから正気に戻り、私の神であるキリストのもとへ立ち返り、以前と同じように再びキリスト教徒となりました。そして今、私は『正気に戻った』のです[8798]、あなたとあなたの顧問たち、そしてすべての者の前で主キリストを告白し、あなた方全員とあなた方の信仰を呪うことを告げるために。」

これを聞いたアミールは、ミラクスを牢獄に投獄するよう命じ、3日間食事を与えずに閉じ込めた後、裁判にかけた。裁判でミラクスは再びキリストを告白し、そのために殴打された後、再び牢獄に投獄された。3日後、彼は再び法廷に連行され、さらに激しく殴打された。 六日が過ぎると、殉教者は再び法廷に連行され、恐れを知らずにキリストを告白した。そのために、以前の拷問で体にできた傷跡の上に、牛の腱で作られた鞭で打ち据えられた。その後、アミールは彼に斬首刑を宣告した。　そして、アミールの家来たちは聖なる殉教者を連れ出し、自分たちの船に乗せると、海岸から九ポプリシュの距離まで彼を連れて航海した。　そこで彼は神に祈りを捧げ、首を斬り落とされ、海に投げ込まれた[8799]。その後、殉教者の遺体がどうなったのか――海から浮上したのか――は不明のままである。しかし、その尊い首は海から現れ、敬虔なキリスト教徒たちによって発見され、彼らはそれを貴重な贈り物として保管した。 このことがアミールに報告されると、聖人の崇敬者たちは100ズラトニツの身代金を支払い、発見された殉教者の頭部を妨げられることなく保管する許可を得て、銀の聖櫃を用意し、そこに相応の敬意を込めて頭部を納めた。　それ以来、今日に至るまで、この聖なる殉教者の頭部は芳香を放ち、主であり私たちの救い主であるイエス・キリストの栄光のためにあらゆる癒やしをもたらし、聖なる殉教者について疑いや誘惑的な困惑を抱きかねない人々の信仰を確固たるものにしている。

聖ルカ、新柱頭者の記念日。

記念日：12月11日

聖ルカ・柱頭者は、ギリシャ王ロマノス[8800]の治世下、またロマノス王の娘婿であり、レオ・ザ・ワイズ王[8801]の息子であるコンスタンティノス・ポルフィロロドス[8802]の治世下で生きた。当時、総主教の座にはロマノス王の息子テオフィラクト[8803]が就いていた。 その頃、ブルガリア人がギリ

[8798] 悔い改めた放蕩息子の福音書のたとえ話に表れている。（ルカ15:17）
[8799] 640年頃。
[8800] ロマン1世・ラカペノスは919年から944年まで在位した。
[8801] レウ6世「賢王」は、886年から911年まで在位した。
[8802] コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトスは912年から959年まで在位した。
[8803] テオフィラクト――933年から956年までコンスタンティノープル総主教を務めた。

シャ帝国に侵攻した[8804] 。ルカは皇帝の命により民兵に徴集され、敵から祖国を守る戦いに参加した。戦闘中、ギリシャ軍は混乱に陥り、数千人が殲滅されたが、ルカは神の御加護により無傷で生き残った。 その後、彼は修道生活に入り、修道者として優れた行いを重ね、司祭に叙階された。 至高の霊的完成を熱望して、彼は自らの体を鉄の鎖で縛り、柱の上に登って極めて厳しい禁欲を守り、一週間のうち六日間は一切の食物を口にせず、七日目にのみ捧げられたプロスフォラと少量の野菜を口にした。こうして彼は柱の上で三年間を過ごした。 その後、神の啓示に導かれて、彼はオリンポス山[8805] へ向かい、そこからコンスタンティノープルへ移り、沈黙の誓いを破らないよう口の中に石をくわえ、ついにハルキドン[8806] へと退いた。 そこで彼は再び柱の上に登り、多くの奇跡によって称賛されながら、その上で45年間を過ごした。こうしてこの世の生涯を敬虔に全うし、聖ルカは天の父の御許へと旅立った[8807] 。

12月25日

12月12日（旧暦）

聖スピリドン・トリミフントスの生涯

記念日 12月12日

驚くべきスピリドン聖人の生誕地はキプロス島であった[8808] 。質素な両親の息子であり、自身も純朴で謙虚、かつ徳の高い人物であった彼は、幼少の頃から羊飼いをし、成人してからは正当な結婚をし、子供にも恵まれた。 彼は、ダビデの柔和さ、ヤコブの心の純真さ、そしてアブラハムの旅人への愛に倣い、清く神に喜ばれる生活を送りました。 結婚生活を送って数年が経った頃、妻が亡くなり、彼はさらに妨げられることなく、より熱心に善行をもって神に仕えるようになり、すべての財産を旅人の受け入れや貧しい人々の糧に費やした。 こうして彼は、世俗に生きながらも神に深く喜ばれ、神から奇跡を行う賜物を授かった。彼は不治の病を癒やし、一言で悪霊を追い出した。この功績により、スピリドンはコンスタンティヌス大帝の治世下で、トリミフンタ市の司教に任命された。そして司教の座に就いてからも、彼は偉大で驚くべき奇跡を起こし続けた。

ある時、キプロス島では雨が降らず、恐ろしい干ばつに見舞われ、それに続いて飢饉が訪れ、飢饉の後に疫病が蔓延し、多くの人々がこの飢饉によって命を落とした。天は閉ざされ、祈りによって天を開く第二のエリヤ、あるいは彼に匹敵する人物が必要とされていた（列王記下17章）： その人物こそが聖スピリドンであった。彼は民を襲った災難を目の当たりにし、飢餓で死にゆく人々を父のように憐れみ、熱心に神に祈りを捧げた。するとたちまち、四方から雲が空を覆い、大地には数日間絶えることなく豊かな雨が降り注いだ。聖人が再び祈ると、晴れ間が訪れた。 大地はたっぷりと潤され、豊かな実りを結んだ。畑は豊作をもたらし、果樹園やブドウ畑は果実で覆われ、飢饉の後、神の御心に適う聖人スピリドンの祈りによって、あらゆるものに大きな豊かさがもたらされた。 し

[8804] 927年に没したブルガリアのツァール・シメオンは、ギリシャ人と戦いを繰り広げ、917年にはギリシャ帝国をほぼ壊滅寸前まで追い込んだ。

[8805] ビフィニア、小アジア北西部の地域。

[8806] ハルキドンは、小アジアにある都市で、コンスタンティノープル海峡の岸辺、コンスタンティノープルの対岸に位置する。

[8807] 970年頃。

[8808] キプロス——地中海東部、小アジアの南に位置する大きな島。

かし、数年後、人々の罪ゆえに、神の許しにより、再びその国に飢饉が襲い、裕福な穀物商人たちは、数年の豊作の間に蓄えた小麦を手にし、物価の高騰を喜んだ。そして、穀物倉庫を開け放ち、高値で売り始めた。　当時、トリミフントには、金銭への飽くなき貪欲と、快楽への抑えきれない情熱に苛まれていたある穀物商人がいた。　各地で大量の小麦を買い付け、船でトリミフントに運び込んだ彼は、しかし、当時の街の相場での販売を拒み、飢饉がさらに深刻化するのを待つために倉庫に貯蔵し、その時に高値で売ってより大きな利益を得ようとした。　飢饉がほぼ全土に広がり、日ごとに深刻化するにつれ、彼は自分のパンを最高値で売り始めた。　すると、ある貧しい男が彼のところへやって来て、へりくだって頭を下げ、涙ながらに慈悲を乞い、自分という貧しい者が妻や子供たちと共に飢え死なずに済むよう、少しばかりのパンを分けてほしいと懇願した。しかし、無慈悲で貪欲な金持ちは、その貧者に慈悲を示すことを拒み、こう言った。

「さっさと行って、金を持ち帰れ。そうすれば、買えるものは何でも手に入るだろう。」

飢えに耐えかねた貧しい男は、聖スピリドンのもとへ行き、泣きながら自分の貧しさと、金持ちの冷酷さについて打ち明けた。

「泣かないで」と聖人は彼に言った。「家に帰りなさい。聖霊が私に告げている。明日、あなたの家はパンで満たされ、あの金持ちはあなたに懇願し、パンをただでくれるだろう。」

貧しい男はため息をついて家路についた。夜が明けるやいなや、神の御心により激しい雨が降り出し、その雨によって冷酷な金に執着する男の穀物倉が浸水し、彼の持っていたパンはすべて水に流されてしまった。　穀物商人は家族を連れて街中を駆け回り、皆に助けを懇願し、自分が金持ちから乞食にならないよう頼んだ。その間、貧しい人々は、川のように道に流れ出たパンを見て、それを拾い集め始めた。　昨日、その金持ちにパンをねだったあの貧しい男も、たっぷりとパンを手に入れた。自分の上に神の明らかな懲罰が下っているのを見て、金持ちは貧しい男に、望むだけ無料でパンを持っていくよう懇願し始めた。

こうして神は、金持ちの無慈悲さを罰し、聖人の預言通り、貧しい人を貧困と飢餓から救い出した。

ある聖人に親しい農夫が、同じ金持ちのもとを訪れ、同じ飢饉の最中に、食いつなぐためのパンを貸してほしいと頼み、収穫の時期が来たら、貸してもらった分以上に返すと約束した。　その金持ちには、雨で流されてしまったもの以外にも、パンで満たされた穀物倉が他にもあった。しかし、彼は最初の損失から十分に教訓を得ておらず、けちさから抜け出せていなかったため、この貧しい人に対しても同様に無慈悲であり、彼の話を聞くことさえ拒んだ。

「金がないなら」と彼は言った。「お前に一粒の穀物も渡さない。」

すると、貧しい農夫は泣き出し、神の聖人スピリドンのもとへ向かい、自分の苦境を打ち明けた。　聖人は彼を慰めて家に帰らせたが、翌朝、自ら彼のところへやって来て、山ほどの金を持ち込んだ（その金をどこから手に入れたのか――それについては後で述べる）。聖人はその金を農夫に渡し、こう言った。

「兄弟よ、この金をあのパン商人のところへ持って行き、それを担保として渡せ。そうすれば、商人は今、君が生活するために必要なだけのパンを貸してくれるだろう。収穫の時期が来て、君に余剰のパンができたら、その担保を買い戻し、また私のところへ持って来なさい。」

貧しい農夫は聖人の手から金を受け取ると、急いで金持ちのところへ向かった。金に目がくらんだ金持ちは金を喜んで受け入れ、すぐに貧しい農夫に必要なだけのパンを貸した。　その後、飢饉は去り、豊作となった。収穫が終わると、その農夫は借りたパンを元金以上の額で金持ちに返し、質入れしていた品物を取り戻すと、感謝の気持ちを込めて聖スピリドンのもとへ持っていった。聖人は金を受け取ると、農夫を連れて自分の庭へと向かった。

「さあ、兄弟よ、私と一緒に来て、私たちにこれほど寛大に貸してくださったお方に、これを一緒に捧げましょう」と彼は言った。

庭に入ると、彼は金を柵のそばに置き、天を仰いでこう叫んだ。

「わが主、イエス・キリストよ、御心によって万物を創造し、変容させられる方よ！かつてエジプトの王の目の前で、モーセの杖を蛇に変えられた（出エジプト記7:10）あなたよ、――かつてあなたが動物から変えたこの金にも、再び元の姿を取り戻すよう命じてください。そうすれば、この人もまた、あなたが私たちをいかに慈しんでおられるかを知り、聖書に記されている「主は御心のままにすべてをなされる」（詩編134:6）という言葉を、実体験を通じて学ぶことになるでしょう！

彼がそう祈っていると、金の塊が突然動き出し、蛇へと変わり、うねりながら這い始めた。このように、最初は聖人の祈りによって蛇が金に変わり、その後もまた奇跡的に金から再び蛇へと戻ったのである。　この奇跡を目の当たりにした農夫は恐怖に震え、地面にひれ伏し、自分に与えられたこの奇跡的な恩恵に値しない者だと嘆いた。その後、蛇は自分の巣穴へと這っていき、農夫は感謝の気持ちでいっぱいになり、自宅へと戻り、聖人の祈りによって神が成し遂げられた奇跡の偉大さに驚嘆した。

ある高潔な男性、聖人の友人が、悪人たちの嫉妬により、市の裁判官の前で誣告され、牢獄に投じられ、やがて何の罪もないにもかかわらず死刑を宣告された。　このことを知った聖スピリドンは、友を不当な処刑から救い出すために出かけた。当時、その国は洪水に見舞われており、聖人の行く途中にあった小川は水が溢れ、堤防を越えて渡れなくなっていた。　奇跡を行う聖人は、ヨシュアが契約の箱を携えて、氾濫したヨルダン川を乾いた地を歩いて渡ったことを思い出し（ヨシュア記3:14–17）、神の全能を信じて、その流れに召使いのように命じました。

「止まれ！　全世界の主が、私が渡り、私が急いで向かっているその人のために、その人が救われるようにと、あなたに命じられるのだ。」

彼がそう言い終えるやいなや、川の流れはたちまち止まり、聖人だけでなく、彼と共に歩んでいたすべての人々のために、乾いた道が開かれた。　この奇跡を目撃した者たちは急いで裁判官のもとへ駆けつけ、聖人の到来と、彼が道中で成し遂げたことを報告した。すると裁判官は直ちに死刑囚を釈放し、無傷のまま聖人に引き渡した。

また、尊者は人々の隠された罪も見抜いていた。ある時、旅の疲れを癒すためにある宿屋に泊まっていた際、不法な同棲関係にある女性が、その地の慣習に従って聖人の足を洗おうとした。しかし、彼女の罪を知っていた聖人は、彼女に自分には触れないようにと告げた。　彼がそう言ったのは、その罪深い女性を嫌悪し、拒絶したからではない。税吏や罪人たちと共に食事をし、酒を飲んだ主の弟子が、どうして罪人を嫌悪できようか？（マタイ9:11）いや、彼はその女性に自らの過ちを思い起こさせ、不純な思いや行いに恥じ入らせたかったのだ。　そして、その女性が執拗に聖人の足に触れ、それを洗おうとし続けたとき、聖人は彼女を滅びから救い出そうと願い、愛と柔和さをもって彼女を戒め、彼女の罪を思い起こさせ、悔い改めるよう促した。　その女性は、一見最も秘密にされているはずの自分の行いや思いさえも、神の人の透徹した目からは隠れていないという事実に驚き、戦慄した。　恥の念に襲われた彼女は、砕かれた心で聖人の足元にひれ伏し、もはや水ではなく涙でその足を洗い、自ら、指摘された罪を率直に告白した。彼女は、かつて福音書に記された娼婦と同じように振る舞い、聖人は主に倣って、慈愛に満ちた口調で彼女にこう言った。「ルカ7章――*「あなたの罪は赦された」*と、さらに*「見よ、あなたは癒された。もう罪を犯してはならない」*（ヨハネ5:14）と。それ以来、その女性は完全に改心し、多くの人々にとって有益な模範となった。

これまで、聖スピリドンが生前に成し遂げた奇跡についてのみ語られてきたが、ここでは正教の信仰に対する彼の熱意についても述べる必要がある。

キリスト教徒として最初の皇帝であるコンスタンティヌス大帝の治世下、西暦325年、 ニカイアで第1回全地公会議が開かれた。これは、神の御子を「被造物」と呼び、万物の創造主ではないと不敬にも主張した異端者アリウスを糾弾し、御子が父なる神と同一の本質であることを告白するためであった。　アリウスのこの神への冒涜は、当時有力な教会の司教たち――ニコミディウスのエウセ

ビオス、ハルキドンのマリス、ニカイアのテオグニオスなど――によって支持されていた。一方、正統信仰の擁護者たちは、その生涯と教えによって輝かしい功績を残した人物たちであった。　聖人の中でも偉大なアレクサンドロス――当時まだ長老であり、病床に伏していたため公会議に出席できなかったコンスタンティノープル総主教聖ミトロファノス[8809] の代理を務めていた――と、まだ長老の位にも就いておらず、アレクサンドリア教会で助祭の務めを果たしていた名高いアタナシオスであった。　この二人は、まだ司教の位に就いていないにもかかわらず、信仰の真理に対する理解において多くの人々を凌駕していたという理由から、異端者たちの間で特に強い憤りと嫉妬を煽っていた。
彼らと共に聖スピリドンもおり、彼の中に宿る恵みは、異端者たちを説得する上で、他の人々の言葉や論証、雄弁さよりも有益かつ強力であった。 王の許可を得て、ペリパトス学派[8810] と呼ばれるギリシャの賢者たちも公会議に出席していた。その中で最も賢明な者がアリウスを擁護して立ち上がり、その特に巧みな弁舌を誇り、正教徒の教えを嘲笑おうとした。　「祝福されたスピリドン」は、学識のない人であり、ただイエス・キリスト、*それも「十字架につけられた方」*（Iコリント2:2）のみを知っていたが、この賢者との論争に参加することを父たちに懇願した。しかし、聖なる父たちは、彼が素朴な人であり、ギリシャの知恵に全く無知であることを知っていたため、それを禁じた。　しかし、聖スピリドンは、天からの知恵がいかに力強く、それに対して人間の知恵がいかに無力であるかを悟り、その賢者にこう語りかけた。

「哲学者よ！ イエス・キリストの名において、私の言うことを聞いてほしい。」

すると、哲学者が彼の話を聞くことに同意すると、聖人は語り始めた。

「神は唯一である」と彼は言った。「天と地を創造し、土から人間を造り、目に見えるものも見えないものも含め、すべてのものを御言葉と御霊によって整えられた方である。　そして我々は、この御言葉こそが神の御子であり、神ご自身であると信じる。御子は、迷い出た我々を憐れみ、処女から生まれ、人々と共に暮らし、　、我々の救いのために苦しみ、死に、復活し、全人類を御自身と共に復活させてくださった。　私たちは、御自身が再び来られ、私たちすべてを正しい裁きをもって裁き、一人ひとりにその行いに応じて報いることを待ち望んでいる。また、御自身が父と同一の本質を持ち、父と等しい権威と栄光をお持ちであると信じる……　このように私たちは告白し、好奇心に駆られた知性でこれらの神秘を探求しようとはしません。あなたも、これらがいかにしてあり得るのかを探求しようなどとは決して思わないでください。なぜなら、これらの神秘はあなたの知性を超えており、あらゆる人間の知識をはるかに凌駕しているからです。

それから、少し間を置いて、聖人は尋ねた。

「哲学者よ、あなたもそう思うのではないだろうか？」

しかし、哲学者はまるでこれまで一度も論争をしたことがないかのように沈黙していた。聖人の言葉にはある種の神聖な力が宿っており、聖書に記されている*「神の国は言葉によるのではなく、力によるのである」*（コリントの信徒への手紙一 4:20）という言葉を体現していたため、彼は聖人の言葉に反論する言葉を見つけることができなかった。

ついに、彼はこう言った。

「私も、あなたが言う通りだと考えます。」

すると、長老は言った。

「それなら、行って、聖なる信仰の側に立ちなさい。」

[8809] 聖ミトロファン 315–325年。聖アレクサンドルは彼の後継者であり、325年から340年まで総主教を務めた。

[8810] ペリパトス学派とは、アリストテレスの哲学の追随者たちを指す。この哲学学派（流派）は紀元前4世紀末に現れ、約8世紀にわたって存続した。この哲学的流派は、後にキリスト教徒の間にも信奉者を持つようになった。 ペリパテティクスという名称は、この学派の創設者テオフラストスが、祭壇と屋根付きの回廊（ペリパトン――列柱廊、屋根付き回廊）を備えた庭園を学派に寄贈したことに由来する。

哲学者は、友人や弟子たちに向き直って言った。

「よく聞け！　私との論争が証拠によって行われていた間は、私はある証拠に対して別の証拠を提示し、議論の腕前を駆使して、提示されたあらゆる主張を退けてきた。　しかし、理性の証明の代わりに、この老人の口からある種の特別な力が発せられ始めたとき――人間は神に逆らうことはできないため、その力に対してはいかなる証明も無力である。もしあなた方のうち、私と同じように考える者がいるなら、キリストを信じ、私と共に、その口を通して神ご自身が語られたこの老人に従うがよい。

そして、その哲学者は正統なキリスト教の信仰を受け入れ、聖人との論争に敗れたことが、かえって自分自身の益となったことを喜んだ。すべての正教徒も喜び、異端者たちは大きな恥辱を味わった。

公会議の終了後、アリウスが非難され破門されると、公会議に出席していた者たち、そして聖スピリドンもまた、それぞれの家へと帰っていった。その頃、彼の娘イリーナが亡くなった。彼女は青春の最盛期を清らかな処女として過ごし、天国の御国に迎え入れられたのである。　その頃、ある女性が聖人のもとを訪れ、泣きながらこう語った。「私は娘のイリーナに、保管のためにいくつかの金の装飾品を預けたのですが、彼女が間もなく亡くなってしまったため、預けた品が行方不明になってしまいました。」　スピリドンは家中のあちこちを探し、装飾品がどこかに隠されていないか確認したが、見つからなかった。女性の涙に心を動かされた聖スピリドンは、家族と共に娘の棺の前に進み出て、まるで生きているかのように彼女に語りかけ、こう叫んだ。

「わが娘イリーナよ！　お前に預けた装飾品はどこにあるのだ？」

イリーナは、まるで深い眠りから目覚めたかのように、こう答えた。

「ご主人様！ 家のこの場所に隠しておきました。」

そして、その場所を指し示した。

すると聖人は彼女にこう言った。

「さあ、娘よ、万人の復活の時、主があなたを目覚めさせるまで、眠りなさい。」

その驚くべき奇跡を目の当たりにした出席者たちは皆、恐怖に襲われた。そして聖人は、指し示された場所に隠されていたものを見つけ出し、その女性に手渡した。

コンスタンティヌス大帝の死後、その帝国は二つに分かれた。　東半分は、長男のコンスタンティウスに引き継がれた。アンティオキアに滞在中、コンスタンティウスは重病に倒れ、医師たちも治すことができなかった。そこで皇帝は医師たちを離れ、魂と肉体の全能の癒し主である神に、自身の治癒を願って熱心に祈りを捧げた。　するとある夜、皇帝は幻視の中で天使を見ました。その天使は、大勢の司教たちの群れを彼に示し、その中でも特に、他の者たちの指導者や長であると思われる二人の司教を際立たせました。天使は同時に皇帝に、この二人だけが彼の病を癒すことができると告げました。　目を覚ましてその幻について考えを巡らせたが、彼は自分が見た二人の司教が誰なのか見当もつかなかった。彼らの名前や出自は彼には不明のままであり、しかもそのうちのひとりは、当時まだ司教にすらなっていなかった。

王は長い間困惑していたが、ついに誰かからの良き助言に従い、周辺のすべての都市から司教たちを召集し、その中から幻視で見た二人の司教を探したが、見つからなかった。 そこで 、彼は二度目に司教たちを召集した。今度はより多くの数を、より遠方の地域からも招集したが、その中にも彼が夢で見た二人は見当たらなかった。ついに、彼は帝国全土の司教たちを自分の元へ集まるよう命じた。　皇帝の命令、というよりむしろ嘆願は、キプロス島やトリミフンタの町にも届いた。そこでは聖スピリドンが司教を務めており、彼にはすでに皇帝に関するすべてが神によって明らかにされていたのである。　聖スピリドンは直ちに、弟子トリフィリウスを伴って皇帝のもとへ向かった。トリフィリウスは、以前、聖スピリドンと共に幻視の中で皇帝の前に現れた人物であり、その当時は、前述の通り、まだ司教にはなっていなかった。アンティオキアに到着すると、彼らは宮殿へ赴き、皇帝

のもとへ入った。　スピリドンは粗末な服を身にまとい、手にはナツメヤシの杖を持ち、頭にはヤシの葉で編んだミトラを被り、胸には小さな土器の壺を下げていた。これはエルサレムの住民の慣習によるもので、彼らは通常、この壺に聖十字架の聖油を入れて持ち歩いていたのである。　聖人がその姿で宮殿に入ろうとしたとき、豪華な衣装をまとった宮殿の召使いの一人が、彼を物乞いだと見なし、嘲笑して、中に入ることを許さず、頬を叩いた。　しかし、聖人はその温厚さから、また主の御言葉（マタイ5:39）を思い起こし、もう一方の頬を差し出した。使用人は、目の前に立っているのが司教であることを悟り、自分の罪を自覚して、謙虚に許しを請い、許しを得た。

聖人が王の御前に足を踏み入れるやいなや、王はすぐに彼だと気づいた。というのも、まさにその姿で、聖人は以前、王の幻視の中に現れていたからである。コンスタンティウスは立ち上がり、聖人の元へ歩み寄って頭を下げ、涙ながらに神への祈りを願い、自身の病の治癒を懇願した。　聖人が王の頭に手を触れた途端、王は即座に回復し、聖人の祈りによって与えられたこの治癒を大いに喜んだ。王は聖人に多大な敬意を表し、その良き医師への深い敬意を込めて、喜びのうちにその日一日を聖人と共に過ごした。

一方、トリフィリウスは、王の威光、宮殿の美しさ、玉座に座る王の前に立つ多くの高官たち――そのすべてが素晴らしい光景を呈し、黄金に輝いていた――そして、明るい衣装を身にまとった使用人たちの巧みな奉仕に、深く感銘を受けていた。スピリドンは彼にこう言った。

「兄弟よ、なぜそんなに驚いているのか？　まさか、王の威光と栄光が、王を他の人々よりも義なる者にするというのか？　王もまた、最下層の乞食と同じように死に、葬られるのではないのか？　王もまた、他の人々と同様に、恐るべき審判者の御前に立つのではないのか？　なぜ、朽ち果てるものを不変のものよりも重んじ、取るに足らないものに驚嘆するのだ。何よりもまず、非物質的で永遠なるものを求め、朽ちることのない天の栄光を愛すべきではないか？

尊師は王自身に対しても、神の恵みを心に留め、自らも臣民に対して慈愛深くあり、　罪を犯す者には慈悲深く、何かを懇願する者には好意を持ち、求める者には寛大であり、すべての人にとって愛に満ちた善良な父となるよう――そう教えた。なぜなら、そのように統治しない者は、王とは呼ばれず、むしろ拷問者と呼ばれるべきだからである。　最後に、聖人は王に対し、敬虔の掟を厳格に守り、神の教会に反するものを決して受け入れないよう命じた[8811]。

王は、聖人の祈りによって癒やされたことに感謝し、彼に大量の金を差し出そうとしたが、聖人はそれを受け取ることを拒み、こう言った。

「王よ、愛に対して憎しみで報いるのは良くありません。私があなたのためにしたことは、愛そのものだからです。実際、家を離れ、これほど広大な海を渡り、厳しい寒さと風を耐え抜いた――これこそが愛ではないでしょうか？　それなのに、あらゆる悪の根源であり、あらゆる真実を容易に滅ぼしてしまう金を受け取って、その報いとするなど、果たしてよいことでしょうか？」

聖人はこのように語り、何も受け取ろうとはしなかったが、王の執拗な懇願によってようやく説得された――ただし、王から金を受け取るだけで、それを手元に残すことはせず、受け取ったものはすべて直ちに求めた人々に配ったのである。

さらに、この聖人の勧めに従い、コンスタンティウス皇帝は、司祭、助祭、そしてすべての聖職者や教会の奉仕者たちを税から免除した。不死の王に仕える者たちが、死すべき王に税を納めるのはふさわしくない、と判断したからである。　皇帝と別れて帰路についた聖人は、道中でキリストを愛するある信者から家に招かれた。そこへ、ギリシャ語を話せない異教徒の女性が一人やって来た。彼女は亡くなった息子を腕に抱えてきて、悲しみに暮れて泣きながら、聖人の足元にその子を横たえた。　彼女の言葉を理解できる者はいなかったが、その涙そのものが、彼女が聖人に死んだ子供を蘇らせてくれるよう懇願していることをはっきりと物語っていた。しかし、聖人は虚栄を避けようとし

[8811] なお、コンスタンティウス皇帝はアリウス派の異端者たちに好意的であったことに留意すべきである。

て、当初はこの　奇跡を行うことを拒んでいた。それでもなお、その慈悲深さゆえに、母親の痛ましい泣き声に心を動かされ、助祭のアルテミドトスにこう尋ねた。

「兄弟よ、我々はどのようにすべきか？」

「なぜ私に尋ねるのですか、父上」と助祭は答えた。「あなたの祈りをこれほど多く叶えてくださった『命の与え主』であるキリストに呼びかける以外に、他に何ができるというのですか？　王を癒やしたあなたが、貧しい者や困窮している者たちを拒むなどということがあるでしょうか？」

この善き助言によってさらに憐れみに駆り立てられた聖人は、涙を流し、ひざまずいて、主に向かって心からの祈りを捧げた。そして、エリヤとエリシャを通して、サレプタの未亡人とソマニテの未亡人の息子たちに命を取り戻された主（3サムエル17:21；　列王記下4:35）を通して、スピリドンの祈りも聞き入れ、異教徒の赤ん坊に命の息吹を吹き返させられた。その赤ん坊は生き返ると、すぐに泣き出した。　母親は、自分の子が生きているのを見て、喜びのあまり気を失って倒れてしまった。人を死に至らせるのは、重い病気や心の悲しみだけではない。時には、過度の喜びもまた、同じ結果をもたらすことがあるのだ。　こうして、その女性は喜びのあまり亡くなり、その死を目撃した人々も――赤ん坊の復活という予期せぬ喜びの直後に――予期せぬ悲しみと涙に打ちひしがれた。そこで聖人は再び助祭に尋ねた。

「我々は、どうすればよいのか？」

助祭は以前の助言を繰り返すと、聖人は再び祈りに頼った。天を仰ぎ、心を神へと向け、死者に命の息吹を吹き込み、御自身の唯一の御心によって万物を変える御方に祈りを捧げた。そして、地面に横たわっていた亡き女性に向かってこう言った。

「よみがえり、立ち上がれ！」

すると彼女は、まるで眠りから覚めたかのように立ち上がり、生きている息子を腕に抱き上げた。

聖人は、その女性やそこに居合わせたすべての人々に、この奇跡を誰にも話さないよう命じた。しかし、助祭アルテミドトスは、聖人の死後、神の偉大さと力――神の偉大な御使いスピリドンを通して現されたもの――を黙って見過ごすことを望まず、信者たちに起こったすべてのことを語った。

聖人が家に戻ると、ある男が訪ねてきて、彼の群れから山羊百匹を買いたいと申し出た。　聖人は、決められた代金を全額置いてから、購入したものを持ち帰るよう彼に命じた。しかし、その男は99頭のヤギ分の代金を置き、1頭分の代金を隠した。聖人は心の純真さゆえに、世俗的な心配事とは全く無縁であったため、このことが聖人に知られることはないだろうと考えていたのだ。　二人が家畜の囲いの中にいたとき、聖人は買い手に、支払った金額分のヤギだけを持っていくよう命じた。買い手は100頭のヤギを分け、柵の外へ追い出した。しかし、そのうちの1頭は、まるで賢く善良な奴隷のように、自分が主人によって売られていないことを知っていたかのように、すぐに戻ってきて、再び柵の中へ駆け込んだ。　買い手は再びそのヤギを捕まえて引きずり出そうとしたが、ヤギはもがいて逃げ出し、また囲いの中へ駆け込んだ。　このように、彼女は三度も買い手の手から抜け出して囲いへと駆け戻ったが、買い手は力ずくで彼女を引き離し、ついには肩に担いで自分のところへ運んだ。その間、彼女は大声で鳴き、角で買い手の頭を突いたり、暴れたり、もがいたりしたので、それを見た人々は皆驚いた。　そこで聖スピリドンは、事態の真相を悟りつつも、人々の前で不誠実な買い手を非難したくなかったため、彼に静かにこう言った。

「ほら、わが子よ、この動物が君のもとへ連れて行かれるのを拒んで、このように振る舞っているのには、きっと理由があるはずだ。その適正な値段を隠してはいないか？　だからこそ、君の手から逃れ出し、柵の方へ走っているのではないのか？」

買い手は恥じ入り、自分の罪を打ち明けて許しを請い、その後、代金を払い、山羊を受け取った――すると、山羊は自ら、新しい飼い主の前を先導するように、おとなしく従順に買い手の家へと歩いていった。

キプロス島には、フリエラと呼ばれる村があった。ある用事でそこを訪れた聖スピリドンは教会に入り、そこにいた助祭の一人に短い祈りを捧げるよう命じた。聖人は長い旅路で疲れていた上、当時は収穫の時期で猛暑が続いていたからだ。　しかし、助祭は命じられたことをゆっくりと実行し始め、わざと祈りを引き延ばし、まるである種の誇りを持って賛美を唱え、歌い、明らかに自分の声を自慢していた。聖人は、本来は温厚な人柄であったにもかかわらず、彼を怒りの眼差しで見つめ、叱責して言った。「黙れ！」　すると、その瞬間、助祭は声を失った。声だけでなく、言葉を話す能力そのものを奪われ、まるで舌を持たないかのように立ち尽くしていた。そこにいた者たちは皆、恐怖に襲われた。この出来事の知らせは村中に瞬く間に広まり、住民たちは皆、この奇跡を見ようと駆けつけ、戦慄した。　助祭は聖人の足元にひれ伏し、身振り手振りで言葉を話せるようにと懇願した。同時に、助祭の友人や親族たちも司教に同じことを懇願した。　しかし、聖人はすぐにはその願いを聞き入れなかった。彼は高慢で虚栄心の強い者たちに対しては厳しかったからである。そしてついに、過ちを犯した者を赦し、 彼の舌を解き、言葉を話す能力を取り戻させた。 しかし、その際、聖人は彼に懲罰の痕跡を残し、その舌に完全な明瞭さを取り戻させず、生涯にわたって声を弱く、言葉遣いが不器用で、吃音のあるままにしておいた。それは、彼が自分の声に驕ったり、明瞭な話し方を自慢したりしないようにするためであった。

ある日、聖スピリドンは自分の街の教会に、晩課のために足を踏み入れた。たまたま、教会には聖職者たち以外、誰もいなかった。しかし、それにもかかわらず、彼は多くの蝋燭やランプを灯すよう命じ、自らも祭壇の前に立ち、霊的な感銘に浸っていた。　そして、定められた時刻に彼が「すべての人に平安あれ！」と宣言したとき――聖人が告げる平和の祝福に対して、いつものように応答する民衆は一人もいなかったが――突然、上の方から「あなたの霊にも」と叫ぶ無数の声が聞こえてきた。　その合唱は壮大で調和が取れており、いかなる人間の歌声よりも甘美であった。エクテニアを唱えていた助祭は、各エクテニアの後に上から「主よ、憐れみたまえ！」という不思議な歌声が聞こえるたびに、恐怖に襲われた。　この歌声は教会から遠く離れた場所にいる人々にも聞こえ、その多くは急いでその声の方へと向かった。そして、彼らが教会に近づくにつれて、その不思議な歌声はますます彼らの耳を満たし、心を和ませた。　しかし、彼らが教会に入ると、聖人と少数の教会奉仕者以外には誰も見当たらず、もはや天からの歌声も聞こえなかったため、彼らは大いに驚いた。

またある時、聖人が夕べの賛美のために教会に立っていた際、ランプの油が底をつき、火が消えかけていた。聖人はこれを憂い、ランプが消えれば教会の賛美も途絶え、通常の教会の規則が守られなくなるのではないかと恐れた。　しかし、神を畏れる者たちの願いを叶えてくださる神は、かつて預言者エリシャの時代に未亡人の器に油が溢れ出たように（列王記下4:2–6）、ランプの油が縁から溢れ出るよう命じられた。教会の奉仕者たちは器を持ってきて、ランプの下に置き、その器を奇跡的に油で満たした。　この物質的な聖油は、聖スピリドンが満ち溢れていた神の豊かな恵みを明らかに示すものであり、それによって彼の言葉の群れも養われていたのです。

キプロス島にはキリーナという町がある。ある日、聖スピリドンは用事のためにトリミフントから、当時すでにキプロス島のレフクシオス司教となっていた弟子トリフィリウスと共に、この地を訪れた。　彼らがペンタダクティル山を越え、パリムナ（その美しさと豊かな植生で知られる）と呼ばれる場所にいたとき、トリフィリウスはこの場所に魅了され、自身の教会のために、この地域に何らかの土地を購入したいと願った。　彼は長い間、心の中でこのことを考え続けていたが、その思いは、洞察力に富んだ偉大な父の霊的な目からは隠し通せなかった。父は彼にこう言った。

「トリフィリイよ、なぜあなたは絶えず虚しいことを考え、実際には何の価値もなく、ただ何か重要なもののように見え、その幻のような価値によって人々の心にそれを所有したいという欲望を

かき立てるような、荘園や庭園を望むのか。私たちの失われることのない宝は天にある（Iペテロ1:4）。　私たちには*人の手によらない神殿*がある（IIコリント5:4）。それらを追い求め、あらかじめ（神を想うことで）それらを味わいなさい。それらは一つの状態から別の状態へと移り変わることはなく、一度それらを所有する者となった者は、決して失うことのない相続財産を得るのだ。」

これらの言葉はトリフィリウスに大きな益をもたらし、その後、彼は真にキリスト教的な生活を送ることで、使徒パウロのようにキリストの選ばれた器となり、神から数え切れないほどの賜物を受けるにふさわしい者となった。

このように、聖スピリドンは、自ら徳を備えていただけでなく、他の人々をも徳へと導いた。彼の勧告や教えに従った者たちにはそれが益となったが、それらを拒んだ者たちには悲惨な結末が待っていた。それは、以下の話からも明らかである。

トリミフントに住むある商人が、商売のために異国へ船出し、そこで12ヶ月間過ごした。その間、彼の妻は不倫に走り、身ごもってしまった。　家に戻った商人は、妻が妊娠しているのを見て、自分がいない間に彼女が不貞を働いたことを悟った。彼は激怒し、妻を殴りつけ、彼女と一緒に暮らすことを拒んで家から追い出した。その後、彼は神の聖人スピリドンのもとへ行き、この一連の出来事をすべて話し、助言を求めた。　聖人は、女性の罪と夫の深い悲しみに心を痛め、妻を呼び寄せた。妊娠そのものと、不義によって宿した胎児がすでに罪を物語っていたため、彼女が実際に罪を犯したかどうかを問うことなく、率直にこう言った。

「なぜあなたは夫の寝床を汚し、その家を辱めたのか？」

しかし、その女は羞恥心を完全に失い、他の誰からもではなく、まさに夫から身ごもったのだと、あからさまに嘘をつくことを敢えてした。その場にいた者たちは、この嘘に対して、不倫そのものよりもさらに激しく彼女を非難し、こう言った。

「夫が十二ヶ月も家を空けていたというのに、どうして夫の子を身ごもったなどと言えるのか？　身ごもった胎児が十二ヶ月、いやそれ以上も胎内に留まることなどあり得るのか？」

しかし、彼女は自分の主張を曲げず、お腹の子は父親の帰りを待ち、彼の目の前で生まれるのを待っていたのだと断言した。この嘘やそれに類する嘘を主張し、皆と議論を交わすうちに、彼女は大騒ぎを起こし、自分が誹謗中傷され、不当な扱いを受けたと叫んだ。そこで、聖スピリドンは彼女を悔い改めさせようと、穏やかにこう言った。

「女よ！　あなたは大きな罪を犯した。それゆえ、あなたの悔い改めもまた大きなものでなければならない。なぜなら、あなたにはまだ救いの希望が残されているからだ。神の慈悲を超える罪などないのだから。」　しかし、私は、あなたの中に姦淫によって生じた絶望、そして絶望によって生じた恥知らずさを見ている。あなたに相応しい、そして速やかな罰を下すのが公正であろう。　それでもなお、あなたに悔い改める余地と時間を残すべく、我々は公にこう告げる。あなたが真実を語り、いわゆる「盲目の人でも見抜ける」ようなことを嘘で覆い隠さない限り、その子はあなたの胎から生まれはしない。

聖人の言葉はまもなく現実のものとなった。その女性が産む時を迎えると、彼女を襲ったのは、胎内に胎児を留め置くことで彼女に多大な苦痛をもたらす激しい病であった。しかし、彼女は意地を張り、自らの罪を認めようとはせず、結局、産むことなく、苦痛に満ちた死を遂げたのである。このことを知った神の聖人は涙を流し、その罪人をそのような裁きで裁いてしまったことを悔やみ、こう言った。

「私の言葉がこれほど早く現実のものとなるのなら、私はもう二度と人々に裁きを下すことはしない。」

ソフロニアという名の、品行方正で敬虔な女性がいたが、彼女の夫は異教徒であった。彼女はたびたび神の聖人スピリドンに助けを求め、夫を真の信仰へと導いてくれるよう熱心に懇願していた。　彼女の夫は神の聖人スピリドンの隣人であり、彼を尊敬していた。時には隣人同士として、互い

の家を訪ね合うことさえあった。ある日、聖人の隣人や異教徒たちが大勢集まり、彼ら夫婦もその場にいた。すると突然、聖人は使用人の一人に向かって、皆が聞こえるようにこう言った。

「ほら、門のところに、私の群れを飼っている使用人から遣わされた使者が立っている。その使用人が眠り込んだ間に、家畜がすべて山で迷子になり、いなくなってしまったという知らせだ。さあ、行って彼にこう伝えなさい。彼を遣わした使用人は、すでにすべての家畜を無事で無事なまま、ある洞窟で見つけたのだと。」

使用人は行って、使者に聖人の言葉を伝えた。その直後、集まっていた人々がまだ食卓から立ち上がる間もなく、羊飼いのところから別の使者がやって来て、すべての家畜が見つかったという知らせをもたらした。 これを聞いて、異教徒は、聖スピリドンが目の届かないところで起きていることを、まるですぐそばで起きていることのように知っていることに、言葉にできないほど驚いた。彼は、聖人が神々の一人であると想像し、かつてリカオニアの住民たちが使徒バルナバとパウロに対して行ったこと[8812] ――すなわち、生け贄の動物を連れてきて、花輪を用意し、生け贄を捧げようとした。しかし、聖人は彼にこう言った。

「私は神ではなく、ただ神のしもべであり、あなたと何から何まで同じ人間に過ぎない。私が目に見えないところで起こっていることを知っているのは、私の神が私に与えてくださるからである。もしあなたも神を信じるなら、その全能と力の偉大さを知るようになるだろう。」

一方、異教徒ソフロニオスの妻も、好機を捉えて、夫に異教の迷いを捨て、唯一の真の神を知り、その神を信じるよう説得し始めた。 ついに、キリストの恵みの力によって、その異教徒は真の信仰へと回心し、聖なる洗礼によって啓発された。こうして、聖使徒パウロが言うように、*「信仰を持たない夫」*[8813]（Iコリント7:14）は救われたのである。

また、至福のスピリドンが、聖人であり偉大な奇跡行者でありながら、言葉を持たない羊の世話を厭わず、自ら羊の世話をしていたという謙遜なエピソードも伝えられている。ある夜、泥棒たちが囲いの中に忍び込み、数頭の羊を盗んで逃げようとした。 しかし、神は御自身の御使いを愛し、そのわずかな財産を守られたため、目に見えない鎖で盗人たちをしっかりと縛りつけ、彼らが囲いから出られないようにされた。そして、彼らは意に反して、その状態で朝までそこに留まらざるを得なかった。 夜明けに、聖人は羊たちのところへやって来て、神の力によって手足を縛られた盗人たちを見ると、自らの祈りによって彼らを解き放ち、 他人のものを欲しがらず、自らの労働で生計を立てるよう諭した。 その後、聖人は彼らに雄羊を一頭与え、彼自身の言葉によれば、「彼らの労苦と眠れぬ夜が無駄にならないように」と述べ、彼らを平穏のうちに送り出した。

トリミフントのある商人は、商売の運転資金として聖人から金を借りる習慣があった。用事で旅から戻り、借りた金を返すと、聖人はたいてい、その金を借りた時の箱に自分で入れるようにと彼に言った。 聖人は一時的な利益をほとんど気にかけず、債務者が正しく返済しているかどうかさえ、一度も確認しようとはしなかったのだ！ 一方、その商人はすでに何度も、聖人の祝福を得て自ら聖櫃から金を取り出し、持ち帰った金を再びそこに納めるという行為を繰り返しており、その商売は繁盛していた。 しかしある日、彼は貪欲に駆られて、持ち帰った金を箱に入れずに手元に留め、聖人には「箱に入れた」と嘘をついた。 ほどなくして、彼は貧困に陥った。隠し持った金は利益をもたらさなかったばかりか、商売の成功を奪い、まるで火のように彼の全財産を焼き尽くしてしまった

[8812] リカオニア地方のリストラ（小アジア）の住民たちは、使徒パウロとバルナバを、異教の神々であるゼウスとヘルメスだと見なした。（使徒行伝 14:13）

[8813] パウロはこれらの言葉において、異教徒である父親の不浄さが、キリスト教徒である母親の清らかさによっていわば洗い流され、そのような結婚から生まれた子供たちには受け継がれない、ということを意味している。 しかし、それと同時に、異教徒（男性または女性）にとって、キリスト教徒（男性または女性）との結婚は、完全な聖化、すなわち彼ら自身がキリストの信仰を受け入れることへの自然な段階であることは言うまでもない。

からである。そこで商人は再び聖人のもとを訪れ、金を貸してほしいと頼んだ。　聖人は、自分で取り出すようにと、彼を自分の寝室にある箱のところに送り込んだ。そして商人にこう言った。

「行ってお前が自分でしまったものなら、取りなさい。」

商人は行ってみたが、箱の中に金を見つけられず、手ぶらで聖人のもとへ戻ってきた。聖人は彼に言った。

「しかし、兄弟よ、その箱にはこれまで、君の手以外、誰の手も触れていなかったではないか。つまり、もしあの時、君が金を入れれば、今またそれを取り出すことができたはずだ。」

商人は恥じ入り、聖人の足元にひれ伏して許しを請いました。聖人は直ちに彼を許しましたが、その際、教訓として、他人のものを欲しがらず、欺瞞や嘘によって自分の良心を汚してはならないと告げました。そう、不正によって得た利益は利益ではなく、結局のところ損失なのです。

ある時、アレクサンドリアで司教会議が招集された。アレクサンドリア総主教は、自身の管轄下にあるすべての司教を召集し、共同の祈りによって、当時まだ非常に多く存在していたすべての異教の偶像を打ち倒し、粉砕しようとしたのである。　そして、神への数多くの熱心な祈り――公の祈りも個人の祈りも――が捧げられていたその時、市内および周辺のすべての偶像が倒れたが、異教徒たちから特に崇められていた一つの偶像だけが、その場に無傷のまま残った。　総主教がこの偶像の破壊を長く熱心に祈り続けた後、ある夜、彼が祈りを捧げていると、ある神聖な幻が現れ、偶像が破壊されないことを嘆くのではなく、　むしろ、速やかにキプロスへ使者を送り、そこからトリミフントの司教スピリドンをお招きするよう命じられた。というのも、その偶像は、この聖人の祈りによって打ち砕かれるために残されていたからである。　総主教は直ちに聖スピリドンへの書簡を書き、その中で彼をアレクサンドリアへ招き、自身の幻視について語り、その書簡を直ちにキプロスへ送った。書簡を受け取った聖スピリドンは船に乗り込み、アレクサンドリアへと出航した。　船がネアポリスと呼ばれる埠頭に停泊し、聖人が上陸したその瞬間、アレクサンドリアの偶像とその数多くの祭壇が崩れ落ちた。それゆえ、アレクサンドリアの人々は聖スピリドンの到着を知ることとなった。　というのも、偶像が倒れたと総主教に報告されると、総主教は他の司教たちにこう言ったのである。

「友よ！ スピリドン・トリミフントスが近づいている。」

そして皆は準備を整えて聖人の出迎えに出向き、彼を丁重にもてなして、これほど偉大な奇跡行者であり、世の光である方が彼らの元へ来られたことを喜び祝った。

教会史家ニキフォロス[8814] とソゾメノス[8815] は、聖スピリドンが教会の儀式の厳格な遵守と、聖書の言葉の一語に至るまで完全な無傷の状態で保存されることに並々ならぬ配慮を払っていたと記している。ある時、次のような出来事があった。　キプロス島では、教会に関する事柄について、島全体の司教たちが集まる会議が開かれていた。司教たちの中には、聖スピリドンと、前述のトリフィリウスもいた。トリフィリウスは、若き日にベリト[8816] で長年にわたり聖書と学問を学んでいたため、書物による知恵に精通した人物であった。

集まった司教たちは、彼に教会で民衆に向けて説教を行うよう依頼した。彼が説教をしている際、キリストが麻痺した人に語った言葉、*「立ち上がって、あなたの寝床を持ちなさい」*（マルコ2:12）に言及せざるを得なかった。トリフィリウスは*「寝台」*という言葉を「床」に置き換え、*「立ち上がって、あなたの床を持ちなさい」*と言った。これを聞いた聖スピリドンは席から立ち上がり、キリストの言葉を改変したことに耐えかねて、トリフィリウスにこう言った。

[8814] ニキフォロス・カリストスは、14世紀に活躍した教会史家である。彼の『教会史』（全18巻）は、ビザンツ皇帝フォキス（611年）の死までを扱っている。

[8815] ソゾメン――5世紀の教会史家。323年から439年までの教会史を著した。

[8816] ベリト（現在のベイルート）は、地中海沿岸にあるフェニキアの古代都市である。 特に5世紀に繁栄し、修辞学、詩学、法学の高等教育機関で名高かった。現在は、トルコ領シリアのアジア側における主要な行政都市であり、人口8万人規模のシリア沿岸部における最重要拠点である。

「まさか、あなたが『寝台』と言った方よりも優れているというのか。なぜ、主が用いた言葉を恥じるのか？」

そう言うと、彼は皆の目の前で教会から出て行った。彼がこのように行動したのは、悪意からでも、また自身が全く無学だったからでもなかった。雄弁さを誇っていたトリフィリウスを少し恥じ入らせ、彼に謙遜と柔和さを教えたのである。　さらに、聖スピリドンは（司教たちの間で）最年長であり、その生い立ちも立派で、司教職において第一人者であり、偉大な奇跡行者であったことから、大きな尊敬を集めていた。そのため、彼の人格への敬意から、誰もが彼の言葉をも尊重することができたのである。

聖スピリドンには、これほどまでに偉大な神の恵みと憐れみが注がれていたため、収穫の最盛期、一日の最も暑い時間帯に、彼の聖なる頭は、天から降り注ぐ涼しい露に覆われたことがあった。それは、彼の生涯の最後の年のことでした。彼は刈り取り人たちと共に畑へ出ました（彼は謙虚で、自身の位の高さを誇ることなく自ら働いていたからです）。　すると、彼が自分の畑を刈り取っている最中、突然、最も暑い時間帯に、かつてゲデオンの羊毛に起こったように（士師記6:38）、彼の頭は露に濡れ、畑にいた者たちは皆、それを見て驚嘆した。　その後、彼の頭の髪は突然変化した。ある部分は黄色くなり、ある部分は黒くなり、またある部分は白くなった。それが何のためであり、何を予兆していたのかは、神ご自身のみが知っておられた。　聖人は手で頭を触りながら、傍らにいた人々に、自分の魂が肉体から離れる時が近づいたと告げ、皆に善行、とりわけ神と隣人への愛について教え始めた。

数日後、聖スピリドンは祈りの最中に、その聖なる義なる魂を、生涯を通じて義と聖さをもって仕えてきた主[8817] に委ね、トリミフントの聖使徒教会[8818] に栄誉をもって埋葬された。 そこで、毎年彼の記念式が執り行われることとなり、その棺の前では、聖徒たちを通して賛美される驚くべき神、すなわち父と子と聖霊の栄光のために、数多くの奇跡が起こっています。神に、私たちからも、永遠に栄光と感謝と誉れと礼拝がありますように。アーメン。

トロパリオ、第1声：

第一公会議において、あなたは擁護者であり、奇跡を行う者、神を宿すスピリドン、我らの父として現れた。それゆえ、あなたは棺の中の死者を呼び起こし、蛇を金に変えた。そして、聖なる祈りを捧げるとき、あなたと共に奉仕する天使たちを、最も神聖な者として持っていた。　あなたに力を与えた方に栄光あれ、あなたを冠した方に栄光あれ、あなたを通してすべての癒やしを行われる方に栄光あれ。

[8817] 聖スピリドンは348年頃に亡くなった。

[8818] 神の恵みにより、聖スピリドンの尊い遺骸は朽ちることなく保存されており、特に注目すべきは、その皮膚が人間の身体に通常見られるような柔らかさを保っていることである。トリミフントでは7世紀半ばまでその遺骸が安置されていたが、野蛮人の襲撃を理由にコンスタンティノープルへ移された。　12世紀末あるいは13世紀初頭、聖地を巡礼したノヴゴロドの大司教アントニイの証言によれば、聖人の尊い頭部はコンスタンティノープルの聖使徒教会に安置されており、その手と遺骸は聖母オディギトリア教会の祭壇の下に安置されていた。　一方、14世紀および15世紀のロシア人巡礼者たち――　ノヴゴロド出身のステファン（1350年）、助祭イグナティウス（1389年）、聖歌隊長アレクサンドル（1391年～1395年）、修道助祭ゾシマ（1420年）は、コンスタンティノープルの聖使徒教会で聖スピリドンの聖遺物を目撃し、それに口づけをした。 1453年5月29日、ゲオルギーという名の司祭（通称カロヘレット）が、聖人の聖遺物を携えてセルビアへ向かい、そこから1460年にコルフ島へと向かった。　18世紀前半、ロシアの巡礼者バルスキーはこの島、同名の町にある聖スピリドンの教会でそれらを目撃した。聖遺物はすべて揃っていたが、右手の指を除いており、それはローマのパスクイーノ広場近くにある「新しい」と呼ばれる聖母マリア教会に安置されている。

コンダク、第2調:

キリストの愛に深く打たれた至聖なる方よ、御霊の曙に心を注ぎ、その鋭い洞察力によって神に喜ばれる行いを見出し、神聖な祭壇となり、すべての人々に神の輝きを願われた。

聖なる殉教者アレクサンドロス、エルサレム司教の記念日

記念日：12月12日

聖なる司祭殉教者アレクサンドロスは、キリストの信仰のために勇敢に奮闘し、殉教した。彼は、3世紀の教会における最も著名な教師であるアレクサンドリアのクレメンス[8819] がアレクサンドリアで周囲に集めた数多くの弟子の一人であり、オリゲネス[8820] と親密な友情を育んでいた。 3世紀初頭、聖アレクサンドルはカッパドキアのフラヴィアで司教に任命された[8821] 。セプティミウス・セウェルスの迫害[8822] の際、キリストへの信仰への熱意ゆえに、彼は牢獄に投獄され、そこで数年間を苦しみながら過ごした。 投獄から解放された後、聖人はエルサレムの聖地を参拝したいという願いを抱いた[8823] 。そこでは、天から彼の到着を告げられていた民衆や隠者たちに出迎えられ、明確な天の啓示により、高齢のエルサレム総主教ナルキッソスの共同統治者に選ばれた[8824] 。 一世代にわたり、38年間にわたり、聖アレクサンドルはエルサレム教会を賢明に統治した[8825] 。彼は教育への愛で知られていた。

エルサレム教会において、彼は私費を投じて、聖書や当時存在していたキリスト教作家たちの著作からなる大規模な図書館を整備した[8826] 。デキウス帝による迫害の際、聖アレクサンドルは裁判を受けるためパレスチナのケサレアへ召喚され[8827] 、そこで再びキリストを告白した。 牢獄に投じられた彼は、かなり長い間そこに留まり、その地で主のもとへ息を引き取った[8828] 。

[8819] アレクサンドリアのクレメンス――初期キリスト教界で最も傑出かつ著名な学者の一人――は、217年、 著名なアレクサンドリアのいわゆる「カテキズム学校」のカテキスト（教師）であった。同校は、世界的な教養と学問の中心地という立地から、神学・学術的な教育機関としての性格を帯び、多くの教養ある聴講生をその門下に集めていた。

[8820] オリゲネスは、アレクサンドリアのクレメンスの弟子であり、3世紀で最も著名なキリスト教の教師の一人で、当初はアレクサンドリアの「カテキズム学校」の傑出した講師の一人であった。 その後、聖アレクサンドロスはエルサレム教会を統率する立場となった際、オリゲネスへの敬意と友情から、エルサレム教会において自身の面前で説教を行うことを彼に許可した。しかし、この許可――すなわち、平信徒が司教の面前で教会にて説教を行うこと――により、彼はオリゲネスの敵対者である オリゲネスの敵であるアレクサンドリアの司教ディミトリオスから非難を受けたが、聖アレクサンドロスは他の教会の例を挙げて彼に指摘し、その後、オリゲネスを長老に叙階したため、彼とディミトリオスの間で再び論争が勃発した。

[8821] カッパドキア――小アジア東部に広がる広大な地域。フラウィア――カッパドキアの都市の一つ。

[8822] 209年から210年頃。――セプティミウス・セウェルス――ローマ皇帝――は193年から211年まで在位した。

[8823] それは212年のことだった。

[8824] ナルキッソスは196年頃に、そして212年に再び総主教を務めた。

[8825] 212年から250年にかけて。

[8826] ちなみに、この図書館は、かつて（4世紀に）著名な教会史家エウセビオスも利用しており、彼は自身の歴史書の中で、聖アレクサンドロス・エルサレムスの生涯に関する記録を残している。

[8827] パレスチナのケサリアは、地中海の東岸に位置し、パレスチナで最も豊かで壮麗な都市の一つであった。この都市名は、ユダヤ王ヘロデによって、カエサル（オクタヴィウス）・アウグストゥスに敬意を表して名付けられた。ヘロデは至る所にカエサルを称える都市や神殿を建設し、ケサリアを美しく装飾した。 現在、かつての壮麗な都市があった場所には、廃墟の山ばかりが広がる完全な砂漠となっている。

[8828] 聖アレクサンドロス・エルサレムは251年に帰天した。

聖殉教者ラズムニクの記念日

記念日：12月12日

聖殉教者ラズムニク[8829] はローマ人であり、若き頃に両親によってローマ司教のもとへ預けられ、聖書の学びを授けられた。書物の学びに加え、善良な人柄も示したため、教会の朗読者という職に就いた。　この職務に就いている間、彼は多くの人々に敬虔さと真の信仰を教え、異教の神々への崇拝を糾弾し、偶像を崇拝する者たちを非難した。やがてそのことが王の耳に入り、聖ラズムニクは尋問のために王のもとに連行された。 そこで彼は王の前でも、大胆にキリストを告白した。 このため、彼は残酷な拷問にさらされたが、揺るぎない信仰を保ち、キリストを否定しなかったため、長い拷問の末、斬首の刑に処された。こうして聖ラズムニクは息を引き取った[8830] 。

12月26日

12月13日（旧暦）

聖殉教者エウストラティオス、エウゲニオス、アウクセンティオス、マルダリオス、オレストスの殉教

記念日12月13日

ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の治世において、異教はローマ帝国全土に支配的であり、偶像への奉仕において、いわば普遍的な競争が繰り広げられていた。とりわけ、–すべての都市や集落に、地方長官や裁判官宛ての皇帝の勅令が送られ、特定の日に神々へ豊かな供物や犠牲を捧げるよう命じられていた。これらの勅令により、神々に熱心に奉仕する者には、皇帝の感謝、栄誉、そして国家における高位が約束されていた。　一方、偶像への礼拝を拒んだ者には、まず財産の没収が脅かされ、その後、あらゆる拷問を経た末、死刑が宣告された。キリスト教徒への迫害は至る所に広がり、各地の地方長官や当局は、キリストの信仰をこの世から完全に抹消しようと努めた。

その一方で、皇帝たちは、大アルメニアとカッパドキア[8831] の全土が彼らの命令に反抗し、十字架にかけられたキリストを一致して信じ、キリストへの揺るぎない希望を抱き、あたかもローマ帝国から離反しようとしているかのように振る舞っているとの報告を受けた。

この知らせに憤ったディオクレティアヌス皇帝は、すべての重臣を召集し、朝から晩まで三日間、キリスト教をいかにして完全に根絶やしにするかについて彼らと協議した。　その後、彼はまず、アルメニアとカッパドキアの総督たちを、任された地域を統治する上で未熟で不器用であり、民を服従させることができなかったとして、その地位から解任した。　彼らの後任として、彼はリシアと

[8829] ローマ人からはシネシウスと呼ばれ、ギリシャ人からはシネトス（賢明な者）と呼ばれた。

[8830] この賢者は、教皇シクストゥス（257–258年）の時代に朗読者として仕え、アウレリアヌス帝（270–275年）の治世下で殉教した。――その聖遺骨は830年にローマからライヒェナウ島および同地の修道院へ移された。

[8831] ここでいうのは、もちろんいわゆる「小アルメニア」――ユーフラテス川とガラサ川の上流の間に位置するローマの属州であり、これは「大アルメニア」と区別してそう呼ばれていた――である。大アルメニアとは、小アジア半島の西側、クラー川とティグリス川・ユーフラテス川の上流の間に位置する広大な山岳地帯であり、　紀元前2世紀から5世紀にかけて、同族の王たちによって統治されていた。――カッパドキア――小アジア東部の中央、ユーフラテス川上流の西側に位置する非常に広大な地域であり、　かつてはアジアの主要な国家の一つであったが、独立性を失い、最終的にはローマ帝国の属州としてその領土に組み込まれた（紀元17年または18年）。カッパドキアは小アルメニアと国境を接しており、後者は長い間前者に属していた。

アグリコラという二人のギリシャ人を選んだ。彼らは厳格で残酷な人物であり、両地域を統治するよう任命された。リシアには国境の監視と警備を、アグリコラには教区全体の統治を任せた。また、両地域のすべての軍隊も彼らの指揮下に置かれた。

二人の新しい統治者が赴任地に到着すると、あらゆる年齢層の人々に対する容赦ない虐殺が始まった。それは、嫉妬深い敵がキリスト教徒の誰かに対して投げかけた、根拠のない中傷のみを根拠として、いかなる調査も行われずに実行された。毎日、キリスト教徒は捜し出され、捕らえられ、まるで肉食獣のような血に飢えた統治者たちに処刑のために引き渡された。 サタリオン[8832] に駐在していたリシウスは、どこかでキリスト教徒――男性であれ女性であれ――を見つけると、 ――数々の拷問と苦痛を与えた後、彼らを縛り上げ、厳重な警備の下でアグリコラのもとへ送った。それは、彼らが故郷で死んで、キリスト教の慣習に従って親族や知人によって埋葬されることを防ぐためであり、異国の地で殺された彼らは、まるで行方不明になったかのように消え去るためであった。 アグリコライも同様に、セバスティアの で捕らえられたキリスト教徒を[8833] のサタリオンにいるリシウスのもとへ送った。というのも、両指揮官は深い友情と完全な協調関係にあり、記述された方法をとることで、キリスト教徒を故郷の外で殺害し、さらに大きな苦痛を与えるという一つの目的を共有していたからである。

当時、サタリオンにはエウストラティウスという人物が住んでいた。彼は、その高貴な家柄と地位――軍司令官の職に就いていた――において、町で誰よりも優れているとして、すべての市民に知られていた。同時に、敬虔さと神への畏敬の念、そして非の打ち所のない生活態度でも際立っていた。 絶え間なく続くキリスト教徒への激しい迫害を目の当たりにし、彼は心を痛め、悲しみに暮れていた。 苦々しくため息をつき、涙を流し、断食と祈りに時間を費やしながら、彼は我らの主イエス・キリストに、主が御自分のしもべたちに憐れみを示し、御自分の民に憐れみ深く接して、彼らを災いから救い、彼らを脅かす破滅を退けてくださるよう懇願した。 同時に、エウストラティオス自身も、聖なる殉教者たちのような偉業を成し遂げ、彼らの苦難に加わるにふさわしい者とされたいと願っていた。しかし、多種多様な拷問や拷問者たちの残虐さを思うと、彼は恐怖を覚えた。 しかし、結局、彼は次のような決断を下した。彼は自分の帯を忠実な使用人に渡し、それをアラヴラキアの教会へ運ぶよう命じた。そこは彼自身の出身地であり、当時、すでに真の神への忠誠を証明していたアウクセンティウスが長老を務めていた場所であった。 エウストラティオスは使用人に、その帯を密かに祭壇に置くよう命じ、自身は教会に身を潜めて、訪れた者の中で誰が最初にその帯を手に取るかを見守るようにした。もし、祈りのために訪れた長老アウクセンティオスがそれを手に取ったならば、使用人は彼に何も告げずに家へ戻らなければならない。 もしそれより先に他の誰かが取りたがった場合は、使用人はいかなる場合でもそれを許さず、帯を持ち帰らなければならない。そのような命令を下して使用人を送り出した後、エウストラティオスは心の中でこう決心した。 「もし長老自身が帯を受け取れば、それは神ご自身が、エウストラティオスがキリストのために殉教することを御許しになったというしるしとなる。もし他の誰かが受け取ろうとしたなら、それは彼が殉教すべきではなく、聖なる信仰を密かに守るべきであることを意味するのだ」。

ほどなくして、使用人が戻ってきて、主人にこう報告した。「私が帯を祭壇に置いた途端、まるで誰かがわざと送り込んだかのように、直ちに長老アウクセンティウスがやって来て、祭壇に入り、帯を取り上げたのです。」 これを聞いて、エウストラティオスは大いに喜び、その顔は喜びに輝いた。それを見て、エウゲニオスという名の友人の一人は、大いに驚いた。

その直後、祝福されたアウクセンティウスは他の者たちと共に捕らえられ、法廷で尋問を受け、拷問に遭い、牢獄に投獄され、そこで鎖で縛られたまま収容された。その後、街の中心にある高台

[8832] サタリオン（別名サタラ）は、アルメニアにある都市である。

[8833] セバスティア――アルメニアにある都市で、小アジアの北東に位置する。

に再び法廷が設けられ、リシウスは高慢な様子で裁判官の椅子に座り、尋問のために囚人たちを連れてくるよう命じた。　聖エウストラティオスは牢獄に到着すると、キリストのために鎖につながれているすべての囚人たちに、自分のために祈ってほしいと頼んだ。というのも、彼自身の言葉によれば、その日、彼らと同じ苦難を分かち合うつもりだったからである。すると、聖なる囚人たちは皆、ひざまずいて、神に彼のために祈りを捧げた。　彼らが祈りを終えると、エウストラティオスの指揮下にある兵士たちは、彼らを牢獄から法廷へと連行した。兵士の一団が慣例に従って裁判官の前に立ち止まると、リシウスは、最初の尋問を受けた者たちを一人ずつ、自分の前に連れてくるよう命じた。裁判が始まると、エウストラティオスはこう言った。

「以前発布され、今この法廷で再び読み上げられた皇帝の勅令により、すべてのキリスト教徒は、どこにいようとも、国家においてどのような地位にあろうとも、裁判の対象となる。　この勅令に基づき、ここにアウクセンティウスが連行された。彼は以前からその出自と敬虔な生活で知られていたが、今や、自らを天の王キリストの僕であると宣言した際の勇気と不屈の精神によって、さらに名声を高めたのである。　この法廷に立つ中で、彼はすでに不死の偉業を成し遂げ、言葉と行いによって証しし、苦難を勇敢に耐え抜くことで、裁判官であるあなたの不敬虔さを暴いた。　その日から、彼は悪党として牢獄に閉じ込められていたが、今日、あなたは彼をその聖なる仲間たちと共に尋問のために連れてくるよう命じた。そして今、彼ら全員が私と共に立っており、揺るぎない精神を持ち、あなたの父である悪魔が彼らに対して教唆するあらゆる狡猾な企みを恥じさせ、打ち砕く用意ができているのだ！

これを聞いて、リジウスはエウストラティオスの予想外の勇敢さに動揺した。彼を睨みつけ、怒りで息を詰まらせながら、彼は威嚇するような声で叫んだ。

「今日、この卑劣な不信心者が私の前で大言壮語を吐くなど、これほど厳しい裁きを下したことはかつてない！」 さあ、彼から帯と軍服 を剥ぎ取り、彼がこれまで持っていた地位を剥奪されたことを万人に知らしめよ。そして、裸にされ、手足を縄で縛られ、地面に倒された状態で、彼に演説を続けさせよ！

従者たちはリジアの命令を急いで実行し、それから彼はエウストラティオスにこう言った。

「その破滅的な意図を悔い改めないのか？　そうすれば、私の好意を得て、罰を完全に免れることができる。いずれにせよ、拷問を始める前に、自分の名前と出身地を告げ、我々に自分の信仰を明かしてくれ。」

聖人はこう答えた。

「私はアラヴラケという町で生まれ、名はエウストラティオス、母国語ではキリシクである。私は万物の主――父なる神、その御子である主イエス・キリスト、そして聖霊――の僕であり、三位一体の唯一の神を礼拝し、神を信じることを、幼い頃から教えられてきた。」

リシウスは言った：

「兵士たちに、彼がどれくらいの間、兵役についているか言わせてみよ。」

兵士たちは答えた：

「彼がまだごく若い頃、兵役を始めたのが今から二十七年になります。」

すると、リシウスは聖人にこう言った。

「エウストラティオスよ！　お前の不従順がどれほどの災いをもたらしたか、お前自身も目に見えているはずだ。さあ、今こそその狂気を捨て、正気に戻り、長年の軍務の苦労によって得た名誉と地位を台無しにしないようにせよ。神々の慈悲と威力を認め、王の寛大さと裁判の慈悲を味方につけよ！」

「忌まわしい悪魔や、耳の聞こえない偶像――すなわち人の手によって造られたもの――に対して」と聖人は答えた。「健全な判断力を持つ者なら、誰もそれらを崇拝する必要などない。なぜな

ら、我らの聖書にはこう記されているからだ：　*『天と地を造らなかった神々は、地から、また天の下から消え去るであろう』*（エレミヤ書10:11）。

裁判官は言った。

「十字架にかけられた神を崇拝する者こそ、あなた方のように完全な迷いの中に陥っている者たちとは異なり、健全な判断力を持っているのではないのか？！」

「もしあなたの霊的な感覚が――」と聖エウストラティオスは答えた、　「虚栄への奉仕によって歪められておらず、もしあなたの魂が地上の事柄への思いに完全に沈んでいなければ、私はあなたに、この十字架にかけられた方が、真の救い主であり、主であり、すべての被造物の創造主であり、世の初めから父の内に存在し、その言い表せない知恵によって、再生を通して私たちの死んだような状態を生き返らせてくださった方であることを証明したであろう。」

この言葉を聞いて、裁判官は聖人の演説を遮り、こう言った。

「この厚かましい者を縄で吊るし、その下で麻の束の焚き火を燃やさせ、上から三本の棒で同時に肩を叩かせよう。そうすれば、彼がどれほど雄弁になるか見てみよう！」

これが実行されると、聖人は長い間、下から火を点けられ、上から残酷に殴打され、苦しめられた。しかし、そのような苦しみの中でも、彼は痛みの叫び声を一つも上げず、表情を変えることもなく、まるで苦しんでいるのは彼ではなく、他の誰かであるかのように見えたため、拷問者自身さえも驚愕した。　ついに、リシウスは拷問を中断させ、悪意に満ちた笑みを浮かべて聖人にこう言った。

「どう思う、エウストラティオスよ。君に負わせた傷の痛みを、少し和らげてやろうか？」

そして彼は直ちに、酢を混ぜた塩水を運ばせ、火傷を負った箇所にたっぷりと注ぎかけさせると同時に、鋭い陶器の破片で殉教者の体を激しくこすりつけるよう命じた。　しかし、殉教者はまるで痛みなど全く感じていないかのように、この苦痛も勇敢に耐え抜いた。拷問者は、聖エウストラティオスが何らかの魔術によって、自分自身を痛みに無感覚にしているのではないかとさえ考えた。その時、聖エウストラティオスは彼にこう言った。

「私にこのような拷問を加えることで、あなたは自らの意志に反して、私に恩恵を与えてくれたのです。なぜなら、これらの拷問によって、あなたは私の魂の肉欲的な荒廃に起因する、私を取り巻いていた闇を追い払い、長い間私を悩ませてきた独断的な心の誘惑に打ち勝つ者にしてくれたからです。　あなたは、私を支配していたあらゆる情欲の衝動や心の動揺を克服する機会を私に与えてくれた。　あなたは、いかなる誘惑にも侵されることのない内なる精神の強さを、私の中に保たせてくださいました。それは、すべての信者のために朽ちることのない富が集められている不死の命の保証であり、また、この朽ちゆく肉体の中にあってさえ天使のような生活に到達し、永遠においては天の至福に到達できる、短く、苦しみから解放された道を私に示してくださいました。　今、私は自分が、私の中に住まわれる生ける神と聖霊の教会であることを知っています（参照：Iコリント3:16）。それゆえ、*「不義を行う者たちよ、みな私から離れよ。主は私の嘆きの声を聞き、主は　私の祈りを聞き入れられた。主は私の祈りを受け入れてくださる」*（詩編6:9–10）。まことに、*「わが魂は主を喜び、主による救いを喜ぶ。わがすべての骨は言う、『主よ、弱き者を強き者から、貧しき者と乞食をその略奪者から救い出されるあなたに、誰が比肩し得ようか』」*（詩編34:9–10）。

さあ、悪魔の僕よ、急いで、お前の手元にあるあらゆる拷問の道具を一つも残さず使い尽くし、私を炉の中の金のように、あるいはそれ以上に激しく試練にかけてみよ。しかし、お前は私の中に、お前がこれほど崇め、その行いそのもので仕えている不義など、決して見出すことはできないだろう。　お前と、お前の狂気の王を支配している偽りの神々への奉仕は、まさに忌まわしいものである。

拷問官は反論した。

「激しい痛みのせいで、お前の正気が狂ってしまったのだろう。だから、あれほど多くの馬鹿げたことを口にするのだ。もし、お前が言うところの『神』が、お前を不死にする力を持っていたのなら、この傷からもお前を救ってくれたはずだ。　さあ、叶わぬ希望に惑わされるのはやめて、私が与えてくれる救いの機会を急いで利用しなさい。

「もし望むなら」とエウストラティオスは答えた。「あらゆる感覚に惑わされたお前よ、私の神にとって不可能なことは何一つないということを、身をもって確かめてみるか？　よく聞いて、そして私をよく見ておけ。お前は、自作自演の拷問によって、私を殺し、滅ぼそうとしているのだ！」

すると、皆が聖人に大きな関心を寄せて見つめている最中、突然、彼の体からかさぶたが、まるで鱗のように剥がれ落ち、彼は完全に健康を取り戻し、体には傷跡さえも残らなかった。　そして、この奇跡を目の当たりにした者たちは皆、唯一真の神を賛美した。一方、エウストラティオスの友人であり、同郷人であり、職務上の同僚であるエウゲニオスは、大声で叫んだ。

「リジウスよ！　私もキリスト教徒だ。お前の信仰を呪い、私の主エウストラティオスと同様に、皇帝の勅令にも、お前にも従うことを拒む！」

激怒したリジイは、直ちにエウゲニイを捕らえて法廷の中央に立たせるよう命じ、彼にこう言った。

「彼ら全員を取り調べるには多大な時間と労力を要するが、その一方で、私は今、他の公的な業務に取りかからなければならない。　したがって、私はこの魔術師であり呪術師であるエウストラティオス、そして本日、彼と志を同じくしたことが判明したエウゲニオスに対し、しっかりと鎖で縛り上げ、他のキリスト教徒たちと共に牢獄に投獄し、次回の尋問までそこに監禁するよう命じる。

そう言い終えると、リシウスは席から立ち上がり、裁判を終了させた。一方、聖人たちは、エウストラティオスの勇気と忍耐、そして彼の上に現れた我らの主イエス・キリストによる救いの奇跡に喜び、牢獄へと連行された。彼らがそこに到着すると、皆が声を揃えて、次のように始まる詩篇を歌った。

「兄弟たちが共に住むことは、なんと良く、なんと楽しいことか！」（詩編132:1）と歌い、祈りを捧げた後、席に着いた。聖エウストラティオスは彼らに教えを説き、これから待ち受ける試練に備えさせた。

こうしてその日は終わった。夜になると、リシウスは、ニコポリス[8834]へ向かうつもりだったため、同行していた兵士たちに出発の準備をするよう命じた。兵士たちが出発の準備をしている間、リシウス自身は牢屋へと向かい、エウストラティオスを自分のところへ連れてくるよう命じ、偽善的な笑みを浮かべて彼にこう言った。

「やあ、親愛なるエウストラティオスよ！」

聖人はこう答えた。

「私が仕える全能の神が、裁判官よ、あなたのその挨拶にふさわしい報いを与えてくださいますように！」

「神に喜ばれることなど気にするな」とリジウスは言った。「さあ、この長靴を受け取って履き、楽しげに我々と共に旅に出よう。」　その長靴は鉄製で、長く鋭い釘が打ち込まれていた。それらは革紐で聖人の足にしっかりと縛り付けられ、リジウスはその結び目を自分の指輪で封印し、他の囚人たちと一緒に縛られた聖人を後ろから連行させ、道中ずっと殴り、急がせるよう命じた。　リジウス自身は兵士たちを率いて先頭に立った。二日後、彼らはエウストラティオスとエウゲニオスの故郷であるアラヴラクという町に到着した。　アラヴラクに近づくと、住民たちは皆、至福のエウストラティオスを見ようと出迎えたが、友人や知人の誰も、リシオスがすでにそのように命じていること

[8834] ニコポリス――古代史において頻繁に見られる都市名である。ここでは、ポンテとの国境、イリス川の支流リクス川沿いにある小アルメニアの都市を指す――現在のエンデレスである。

が知られていたため、捕らえられることを恐れて彼に近づくことを敢えてしなかった。　ところで、アラヴラクへの道沿いには、マルダリウスという人物が住んでいた。彼は身分の低い貧しい男だったが、自分の境遇に十分に満足していた。エウストラティオスや他のキリスト教徒たちが連行されていく際、彼は 、新しい家の屋根の工事に忙しくしていた。 通り過ぎる聖なる囚人たちに目をやると、彼はその中に、まるで明るい星のように輝く聖エウストラティオスを見出し、すぐに屋根から降りて、妻にアルメニア語でこう言った。

「妻よ、見てごらん。この国の高官の一人で、名門の出身であり、富を誇り、軍務の功績によって栄誉を授けられた人物が、あそこにいる。彼がすべてを顧みず、神に喜ばれる犠牲となるために歩んでいるのが見えるか？　この世でも栄光に輝いた者は幸いであり、我らの主キリストのもとで偉大な報いを受け、天使たちと共に言い表せないほどの至福に与るであろう。敬虔な妻は夫にこう答えた。

「愛する夫よ！　あなたが彼と同じ道を歩み、彼と共に聖なる最期を迎え、天国で私や私たちの幼い子供たち、そしてあなたの家系全体のために執り成し手となることを妨げるものは何でしょうか？」マルダリウスは彼女に言った。

「靴をくれ。そうすれば、私は切望するその道へと旅立つ。」彼女は喜びながら彼の願いを叶えた。マルダリウスは靴を履き、服を着て帯を締め、二人の幼い息子を抱きしめ、東を向いて祈りを捧げ始めた。

「主なる神、全能の父、主イエス・キリスト、そして聖霊よ」と彼は言った。「唯一の神、唯一の力よ！　罪深い私を憐れみ、慈悲を注ぎ、このあなたのしもべと、この二人の幼子たちの守り手となってください――あなたは、未亡人の擁護者であり、孤児の守り手です！そして私も、主よ、大きな喜びと心からの願いを胸に、あなたのもとへ向かいます[8835]。

それから彼は子供たちに口づけをし、こう言いました：

「妻よ、元気でいてください。悲しんだり泣いたりせず、喜び、楽しみなさい。なぜなら、あなたと私たちの子供たち、そして私の魂を、全能にして至善なる私たちの神に委ねるからです。」

そう言うと、彼は急いで家を出て行き、妻は喜びながら彼を見送った。マルダリイは、アヴラキンの著名な市民であり、裕福で高貴な人物であるムカロルの元へ向かい、彼に挨拶してこう言った。

「私は今、あなたの友人であり親族であるキリシクのもとへ向かうところだ。もし神の御心ならば、私は彼の伴侶となり、彼と共に殉教の業を成し遂げるつもりだ。　神に次いで、この世において私の妻と子供たちの守り手となってください。そして、もし私が神の御心に適うならば、私たち全員が神の御前に立つその日、あなたを助け、あなたが報いを受けることができるようにします。

「安らかに旅立ちなさい、わが子よ」と、敬虔なムカロールは彼に答えた。「善き道を全うし、何事も心配する必要はない。私があなたの妻と幼い子供たちの父となるから。」

そこでマルダリウスはムカロルに別れを告げ、立ち去って、すでに町のすぐ近くまで来ていた聖者たちに追いついた。彼はエウストラティウスに向かって大声で呼びかけた。

「キリシク様！　羊が羊飼いの元へ来るように、私もあなたのもとへ参りました。皆様と共に歩みたいと願って。どうか私を受け入れ、聖なる仲間の一員に加えてください。そして、たとえ私がその資格に値しないとしても、主イエス・キリストの証人となるために、殉教の業へと導いてください。」

そして、彼はさらに大きな声で叫んだ。

[8835] 聖殉教者マルダリウスのこの祈りは、第3時の締めくくりと深夜の祈りにおいて、次のように唱えられる：　「全能の父なる神よ、主なる独り子イエス・キリストよ、そして聖霊よ、唯一の神性、唯一の力よ、罪深い私を憐れみ、御心のままに裁き、この不適格な御僕を救い給え。まことに、あなたは世々限りなく祝福されますように。アーメン」。

「聞け、悪魔の僕たちよ、聞け！私も、私の主エウストラティオス様と同様に、キリスト者である。」

直ちに兵士たちは彼を捕らえ、縛り上げて、他のキリスト教徒たちと共に牢獄に投げ込み、そのことをリジアに報告した。リジアは直ちに裁判を開いた。兵士たちは、慣例に従って、牢獄からキリスト教徒たちを連行し始めた。　その中に、アウクセンティウスもいた。彼は裸で、両手を縄で縛られていた。他のキリスト教徒たちはその周りに立ち、その様子を見守っていた。

裁判官は聖人にこう言った。

「アウクセンティウスよ！　我々を苦労から、そしてお前自身を苦しみから救うために、こう言え。お前は、無益で自分にとって破滅的な不従順を捨て、我々の慈悲深い神々のもとへ戻ったのではないか？」

「少しばかり聞いてくれ、リシウス」と聖アウクセンティウスは答えた。「万物の上にあり、すべてを見通すあの真理に誓って、私の心は変わらず唯一の神を知り続け、ただその神のみに礼拝を捧げるだろう。　たとえお前が私に数え切れないほどの傷を負わせ、以前よりも大きな苦痛に私をさらしたとしても。」　たとえあなたが剣や火によって私を殺したとしても、いかなる場合でも私の考えを変えることはできない。それゆえ、お望みのままになさってください。

すると、拷問官は次のような死刑判決を下した。

「アウクセンティウスは、数々の拷問を経てもなお、今に至るまでその狂気を改めようとはしない。ゆえに、彼にふさわしい刑罰として、剣による斬首によりその命を絶つべし。この判決の執行は、人里離れた森の中で行われなければならない。そうすれば、その卑しい遺体が相応の形で埋葬されることはないだろう。」　そして、つい先日、囚人たちに加わることを敢えてした者は、ここに中央へ連れ出され、今すぐ、彼が求めている「栄誉」を受けるがよい。

兵士たちがマルダリウスを縄から解き放っている間、彼は聖エウストラティウスにこう語った。

「キリシク様！お願いです、私のために神に祈ってください。そして、この破滅者に対してどう答えるべきか教えてください。そうすれば、この残酷な拷問者が、私のような素朴で学のない者を、どうにかして惑わさないようにできるでしょう。」

聖エウストラティオスは彼にこう言った。

「私の兄弟マルダリウスよ、ただ一つだけ、変わらず繰り返せ。『私はキリスト教徒です』、『私はキリストの僕です』と。彼があなたに何を言おうと、何をしようとも、それ以上は何も答えるな。」

兵士たちがマルダリウスをリジアの面前に連れて来たとき、彼らは言った。

「ここに、つい先ほど捕らえた囚人がいます。」

リジウスは言った。

「彼に、自分の名前、出身地、職業、居住地を名乗り、どのような信仰を持っているかを言わせなさい。」

「私はキリスト教徒です」とマルダリウスは答え、拷問者たちが彼の名前や出身地について問うすべての質問に対し、こう叫び続けた。

「私はキリスト教徒だ！私はキリストの僕だ！」

それ以上、彼から何も引き出すことはできなかった。　リジウスは、彼の揺るぎない姿勢を見て、鉄の杭で彼の足を貫き、縄を通して逆さ吊りにし、その後、赤熱した鉄の釘で全身を突き刺し、焼くよう命じた。マルダリウスは長い間吊るされ、苦しめられた末、ついにこう叫んだ。

「主よ！　私にこれらの恵みをお与えくださったことを感謝いたします！　私が望んだのはただ、あなたによって救われることだけであり、そのことだけを目指してきました。どうか、私の魂を平安のうちに受け入れてください。」

そう言い終えると、彼は息を引き取った。

マルダリウスの遺体が拷問の場から運び出されると、リジウスは言った。

「エウストラティオスの尋問中に、ここに踏み込むことを敢えてしたサタラ出身のエウゲニオスを連れて来い。彼らが口々に言うように、彼がキリスト教徒だとは断言しないが、極めて有害な人物だと見なしている。」

エウゲニウスが法廷に引き出されると、役人たちは言った。

「こちらがエウゲニウスです。」

裁判官は言った。

「言ってみよ、卑劣な男よ。一体どの邪悪な悪魔が、お前を唆し、このような厚かましさへと駆り立てたのか。この厳正な裁判を何とも思わずに、恥じることなく我々を非難するとは、何たる厚顔無恥か。」

聖エウゲニウスはこう答えた：

「神よ、あなたが崇める悪魔たちを打ち倒す方――その方が私に力を与え、勇気と言葉の自由を授けてくださった。それゆえ、私はあなたという卑しい者、悪臭を放つ犬、サタンの器を嘲笑うのだ。その者はあなたと共に滅びへと追いやられるだろう。」

拷問官は叫んだ。

「あの冒涜的な舌を切り落とし、両手を切り落とし、脛を砕いてやれ。そうすれば、我々に従順になるだろう！」

この拷問の最中、聖エウゲニオスは神のもとへ息を引き取った。

その直後、リシウスはある日、軍隊の検閲を行うために城外へと出かけた。　検閲中、すべての兵士が武器の扱いの腕前を披露していたとき、オレステスという名の、背が高く堂々とした風貌の兵士が、階級に従ってリシウスに自己紹介することになっていた。彼を見たリシウスは彼を称賛し、「真の戦士」と呼び、槍で的を射るよう命じた。　オレステスが的を狙って槍を振りかぶったとき、胸につけていた金の十字架が衝撃で外へ落ちてしまった。この出来事は、　、全員とリシウス自身にも見逃されなかった。オレステスは直ちにリシウスの元へ呼び出され、リシウスは彼の胸から十字架を取り上げて手に持ちながら、こう尋ねた。

「これは何だ？　まさか、お前もまた、十字架にかけられた方を崇める者の一人なのか？」

「私は、私の主であり神である十字架にかけられた方の僕です」とオレステスは答えた。「そして、私に迫るあらゆる悪を追い払うために、この御方のしるしを身に付けているのです。」

「この立派な戦士もまた、」とそこでリシウスは言った、「裁判待ちのエウストラティオスと共に縛り上げ、ニコポリスまで同行させよ。そこで時が来れば、彼らに対する尋問が行われるだろう。」

リシオスがニコポリに到着すると、その都市に駐屯していた連隊から大勢の兵士たちが彼の元へ現れ、皆一斉にこう叫んだ。

「リジウスよ！　我々もまた、我らの主イエス・キリストの戦士である。我々をどうしようと、お望みのままに！」

リジウスは最初、戸惑った。彼は、現れた者たちが自分に対して何か企んでいるのではないかと恐れた。　しかし、彼らが腰帯を外し、まるで無防備な羊のように自らを明け渡しているのを見て、リジウスは彼ら全員を捕らえ、縛り上げ、牢獄に投獄するよう命じた。同時に、名乗り出た者全員を処刑しつつ、彼らの同胞や親族からの反発を招かないようにするにはどうすればよいかと考え始めた。　とりわけ彼が恐れていたのはエウストラティオスであり、具体的には、このキリスト教徒が拷問の最中に、以前と同様の奇跡を再び起こし、それによってキリスト教徒の信仰を確固たるものにするだけでなく、異教徒をも偶像崇拝から遠ざけて自らの信仰へと改宗させてしまうことだった。　そ

こでリシウスは、翌朝、聖エウストラティオスと聖オレストスをセバスティアの統治者アグリコラのもとへ送り出すことに決めた。

こうして彼は夜が明けるとそのように手配し、アグリコラに次のような手紙を送った。

――アグリコラ総督殿下へ、リシウス首長はご健勝をお祈り申し上げます。 我らの神聖なる皇帝たちは、全宇宙において、あなたほど未知の事柄を見抜くことができる者を他に知らず、あなたにこれらの国々を統治する権威を与えられた。なぜなら、あなたが昼夜を問わず公共の事務に尽力し、決して眠ることのない星々でさえ、あなたの目よりも先に眠りに落ちるほどであり、 あなたが公共の利益のために成し遂げようと努めていることが実現するまでは、眠りにつくことはないことをご存知だからです。要するに、彼らはあなた一人にのみ偉大な美徳を見出し、あなたが今享受しているような偉大な栄誉をあなたに授けたのです。 それゆえ、私もまた、あなたにこれほど多くの優れた資質を目の当たりにした者として、キリスト教という病に冒されたこの囚人エウストラティオスをあなたの元へ送る。とりわけ、私自身、彼をその迷いから引き離すような方法を何も思いつくことができなかったからである。 私の配下の軍隊で名誉ある地位を与えられたにもかかわらず、彼はますます傲慢になり、我々に多くの悩みの種をもたらした。私が脅しをかけたにもかかわらず、彼はその高慢さゆえに、自らの魔術を頼りに未来を予言さえするのだ。 また、彼は他の者たちが拷問にさらされているのを目の当たりにしたにもかかわらず、その傲慢さを改めるどころか、その拷問そのものを苦痛というよりはむしろ幸福であるとさえ考えていた。そこで、彼と、彼と同じ考えを持つオレステスを、皇帝の命令に従い、あなたの英明な裁きに委ねることにした。

この手紙と、聖なる殉教者たちへの尋問記録を携え、兵士たちは聖人たちを連行して旅立った。道中、聖エウストラティオスとオレストスはこう歌った。「*私はあなたの戒めの道を歩みます……私を悟らせてください。そうすれば、あなたの戒めを学びます*」（詩編 118:32, 73）。

その後、エウストラティオスはこう言った。

「兄弟オレストよ！ 聖アウクセンティウスはどのように、またどこで亡くなったのか、教えてくれ。」

聖オレストは言った：

「裁判官が判決を言い渡した後、 彼は、法廷から連れ去ろうとしていた兵士たちに、あなたに会いにいき、最後にもう一度あなたに口づけをさせてほしいと懇願しましたが、誰もその願いを聞き入れようとはしませんでした。ちょうど昼食の時間であり、腹を空かせた奴隷たちは、命じられたことを一刻も早く遂行しようと急いでいたため、アウクセンティウスは直ちに「*オロリイ*」と呼ばれる森の場所へと連行されたのです。 道中、聖人は詩篇を歌った。「*その歩みが清く、主の律法に従って歩む者は幸いである*」（詩篇118:1）など、最後まで歌い続けた。 それから彼はひざまずいて祈りを捧げ、あたかも何らかの供え物を受け取るかのように両手を広げ、「アーメン」と告げると、周囲を見回した。そして、近くに立っていた私を見つけると、呼び寄せてこう言った。

「オレスト兄弟よ！ エウストラティウス様に、私のために祈ってくださるよう伝えてください。そして、彼はまもなく私と再会することになり、私は彼を待っていると伝えてください。」

その後、彼の首は斬り落とされ、処刑現場からは、キリスト教徒であると疑われた者たちがすべて追い払われた。その聖なる遺体は、夜間にアラヴラキアの司祭たちによって密かに運び出された。しかし、彼らは 聖人の首を見つけることができず、泣きながら神に祈り、聖なる殉教者の首の在りかを示してくださるよう願った。 すると、神の御計らいにより、ある樫の木の上でカラスが鳴き声を上げた。長老たちはその声の方へ行き、カラスが止まっていた木の枝の間に、聖人の頭部が横たわっているのを見つけた。長老たちはそれを手に取り、遺体に合わせ、清らかで尊ばれる場所へ運び、そこに埋葬した。

これを聞いて、エウストラティオスは涙を流し、神に祈りを捧げた後、オレストスにこう言った。

「兄弟よ、私たちも聖アウクセンティウスの後を追うよう努めよう。」

五日が過ぎると、聖人たちはセバスティアへ連行され、総督アグリコライはリシオからの手紙を受け取ると、囚人たちを最も厳重な警備下に置いた。　翌日、彼は民衆の見守る中、広場の裁判所に登り、キリスト教徒を自分の前に連れてくるよう命じた。そして、裁判に先立ち、リシウスから送られてきた手紙と、囚人たちに対する最初の尋問記録を、皆が聞こえるように読み上げるよう命じた。手紙の朗読が終わると、彼はこう言った。

「エウストラティウスよ、ここでリシウスから受けたのと同じような拷問が待っているなどと考えてはならない。むしろ、あらかじめ皇帝の命令に従い、神々に犠牲を捧げよ。そうすれば、残酷な死を免れることができるだろう。」

聖エウストラティオスは彼に尋ねた。

「裁判官よ！ 法律は王たちに対しても効力を有するのか、それともないのか？」

「はい」と統治者は答えた。「王たちもまた法律を遵守しているのだから。」

「では」とエウストラティオスは続けた。「あなたにとっては、法律とは単に紙に書かれたものに過ぎず、実際には遵守すべきものではないというのか？」

「なぜ、不信心者よ、そんなことを言うのか」と統治者は言った。「誰が、いつ、何において、あえて法律に背こうとしたというのか？」

聖エウストラティオスはこう答えた。

「帝国の法律には、次のように記されている。言葉によっても行為によっても暴力を振るってはならず、民は主に諭しによって統治されなければならない、と。」　次の二つのうちのいずれかが不可欠である。すなわち、上司が部下に対し、彼から相応の行動を引き出すことを望んで諭すか、あるいは、すでに正しいことを教え込まれた部下が、自由かつ自発的に法の命令を履行するか、である。さらに、法律には次のような箇所もある：　「裁判官は、厳格さと慈悲を併せ持った裁きを行うよう命じる。そうすることで、裁かれる者が脅威に怯えて裁判官に憎しみを抱いたり敵対したりすることがなく、また、その寛大さに頼って誰も法を破ろうとはしないようにするためである。」――「裁判官よ、そう書かれているか、そうでないか？」

「はい」と統治者は答えた。

「お願いだ」と聖人は言った。「私に対しても、そのような裁判の在り方を守ってほしい。」

「あなたに対しても、すべての人に対しても」と統治者は答えた。「法律は、それに対するべき敬意を払って、決して破ることなく遵守されなければならないのです。」

「それゆえ、お願いだ」と聖人は言った。「あなたの厳格さに慈悲を併せ持ち、最も賢明なあなたには、自ら説教するよりも、あらゆる事柄を理性的に議論しながら、他者の忠告に耳を傾けることを好んでいただきたい。」　そうでなければ、いかなる議論や法律もなしに――苦しめ、殺せ、好きなようにすればよい。

「遠慮なく、自由に言いたいことを言ってくれ」と統治者は答えた。「裁きは、恐怖よりも説得に基づいて行われるだろう。」

聖エウストラティオスは尋ねた。

「どの神々に犠牲を捧げるよう命じられるのですか？」

「まずはゼウスに――」と統治者は答えた。「その次にアポロンとポセイドンに[8836]。」

「では、どの賢者や歴史家、あるいは預言者から、ゼウスやその他の架空の神々に拝むべきだと聞いたのですか？」

[8836] ゼウス、あるいはユピテルは、ギリシャ・ローマ神話の神であり、異教徒たちから天と地の支配者、すべての神々と人間の父として崇められていた。　アポロンは、古代ギリシャ人やローマ人に最も崇敬された異教の神の一人で、太陽と知性の啓蒙、さらには社会秩序の神、法の守護者、そして未来を予言する神とみなされていた。　ポセイドン（ネプチューン）は、ゼウスの兄弟であり、海、川、そしてあらゆる水源や貯水池の絶対的な支配者として崇められていた。

「プラトン、アリストテレス、ヘルメス[8837] といった哲学者たちから聞いたのだ」と統治者は言った。「もし君が彼らを知っていたなら、エウストラティオスよ、神に啓示を受けた偉大で驚くべき人物たちとして、彼らの記憶を称えていたはずだ。」

「彼らの教えについてはよく知っています」と聖エウストラティオスは答えた。「私は幼い頃からそれらに親しみ、ギリシャの学問や芸術を深く学んできたからです。もしお命じになるなら、まずはプラトンから始めましょう。」

統治者は、プラトンの著作『ティマイオス』[8838] に言及し始めた。そこからは、プラトンが異教の神々や女神たちを熱心に崇拝していたことがはっきりと見て取れるというのだ[8839] 。 エウストラティオスは、同じく賢明なるプラトンのその著作に基づき、異教徒たちが神々と人間、天と地の支配者と見なすゼウスそのものを、プラトンが明白かつ強く非難していたことを立証し、神こそがあらゆる善の源であり、その原因であると主張した。異教の神話によれば、ゼウスは決してそのような存在ではなかったのである。　その際、聖人は異教徒の様々な神話を指摘し、その裏付けとして、ホメロスやエスキロスといった最も著名な異教の詩人たちの言葉も引用した[8840] 。

「私はお前のその厚かましさを許している」と、統治者はこれに対し言った。「それは、私自身も議論するのが好きだからに他ならない。さて、教えてほしい。お前が神として崇めるその方が、かつては人間であり、有罪判決を受け、十字架に釘付けにされたというのに、どうしてその方を神として認めることができるのか？」

聖人はこう答えた。

「もしあなたが辛抱強く私の話を聞いてくださるなら、まず私があなたに尋ねようとしていたいくつかの事柄についてお聞きし、その後で、あなたが私に尋ねたことすべてを順を追って説明させていただきます。」

「お望みのことは何でも、遠慮なく話してよい」と総督は言った。

「健全な精神を持つ者なら誰でも」とエウストラティオスは続けた。「神を、正義に満ち、測り知れず、言葉では言い表せず、不可解であり、不変であり、その神聖な性質によってあらゆる存在を超越する存在として捉えなければならない。賢明な裁判官よ、あなたもそう思わないか？」

「はい、そう思います」と裁判官は答えた。

「これに付け加えるべきは」と聖人は指摘した。「神にはいかなる欠点や不完全さもなく、神はすべてにおいて完全である、ということではないか？」

[8837] プラトン――紀元前4世紀の著名なギリシャの哲学者であり、名高く輝かしい哲学者ソクラテスの弟子である。注目すべきは、プラトンが自身の哲学的見解、とりわけ神、世界の創造、来世に関する教えにおいて、キリスト教の教えに非常に近い立場をとっていることである。– *アリストテレス*――著名なギリシャの哲学者であり、プラトンの弟子かつ同時代人、マケドニア王アレクサンドロス大王の教育者。その知性は、古代世界に知られていたあらゆる学問を網羅していた。– *ヘルメス*、いわゆるトリスメギストス（すなわち「*三度偉大なる者*」）は、西暦3世紀に生まれた、有名な古代の異教的、いわゆる神智学的な哲学的教義の架空の著者である。　異教徒たちからは、至高の神の啓示を受け、三人の息子を通じてそれを人々に伝えた賢者として描かれていた。

[8838] 『ティマイオス』は、プラトンの傑作の一つであり、その中で彼は、著名で尊敬される哲学者ピタゴラスの教えを知るために探し出した弟子ティマイオスとの対話という形式を通じて、存在に関する多くの至高の問いについて自身の考えを述べている。

[8839] アグリコライはこれについて、至賢なるプラトンが、ある異教の女神を崇拝するためにわざわざピレウス（テッサリア）へ赴いていたことを引き合いに出した；　しかし、プラトンの見解や信仰は異教の迷信とは無縁ではなかったものの――いずれにせよ、その全体的な性質はそれらをはるかに凌駕しており、時にはキリスト教の教えにかなり近いものさえあった。

[8840] ホメロス――ギリシャ最古の著名な民衆詩人であり、その人物像については伝説的な語り部のみが残されている――は、古代古典文学における二大傑作、　『イリアス』と『オデュッセイア』の著者であり、これらには古代ギリシャ人の信仰が鮮やかに描かれている――*エスキロス*――偉大なギリシャの悲劇作家の中で最も古く、その作品によって世界的な名声を勝ち得た人物である。

「疑いようもなくその通りです」とアグリコライは同意した。

「では、どうでしょうか？」とエウストラティオスはさらに続けた。「私たちもまた、完全で朽ちることのない神聖な本質を持つ、他のいくつかの神々が存在することを認めなければならないのではないでしょうか？」

しかし、それは不合理なことだ。なぜなら、もし彼らに、たとえごくわずかなものであっても、神聖な完全性や属性が欠けていたとしたら、彼らはもはや人間から神として崇められるに値しないと思うからだ。先に述べたように、神には何の欠点もなく、すべての人間は神を信じ、崇拝すべきである。

アグリコライは言った：

「確かに、その通りだ。」

「では、どうでしょうか。もしかすると、これらの神々は、朽ちることのない不滅の本質の属性そのものであり、唯一の存在のさまざまな現れに過ぎず、すべてが一つの点――すなわち神性――に収束しているのでしょうか？」　しかし、それならば、それらを大小さまざまな神々と呼ぶのではなく、唯一の神、　と呼ぶべきでしょう。その神こそが、その比類なき全能性ゆえに唯一「神性」という名を持つのであり、あなたがたが考えているように――ある神は天に、別の神は地上に、また別の神は海に棲んでいる――というわけではないのです。――そうではありませんか、裁判官？

アグリコライ統治者は、これに対して反論する術がなく、長い間沈黙を守り、ついにこう言うことしかできなかった。

「その論証や長々とした反論はよして、ただ尋ねられたことだけに答えてください。どうして、十字架にかけられた方を神として崇めることができるのですか？」

「まず、」と聖人は答えた。「貴方の詩人ヘシオドスの言葉から始めよう。『[8841]』：初めにはエレボスとカオスがあった。『[8842]』――すなわち、闇と水の深淵である。 そして神が、すでに存在していた物質からではなく、無から有へと導き出し、世界を秩序ある美しい存在へと整えられたとき、神はご自身の姿と似姿に従って人間を創造された（創世記 1:1–31）。　しかし、他の天使たちの群れを統べる権威を授かっていた邪悪な天使[8843] は、自らの意志で自分を創造した方から背き、高慢になり、その尊厳を剥奪され、神によって天から追放された（ヨブ4:18；　IIペテロ2:4；ユダ1:6）。一方、神は人間をエデンの園に住まわせ、園のあらゆる恵みを享受する一方で、ただ一つの「知恵の木」には触れてはならず、その実を食べてはならないという戒めを与えられた（創世記2:1–25）。 神が人間にこの試練を与えたのは、人間が神の戒めを破らず、あらゆる面で人間に罠を仕掛ける悪魔の誘惑に従わず、その偉大な栄光を妬む敵を恥じさせ、朽ちることのない不死の者となることができるようにするためであった。　そうでなければ、人間はもはや楽園で暮らすことはできず、そこから追放され、地上で一定期間を過ごした後、死ぬことになっていた。　そこで、悪意に満ちた悪魔は、人間に対する嫉妬を武器に、その狡猾さを総動員し、蛇を通じて最初の人間の妻を惑わし、彼自身をも戒めの違反へと導いた。その結果、人間は神によって楽園から追放され、額に汗して働くことと朽ち果てる運命を宣告された（創世記3:1–24）。 このようにして、あらゆる悪意に満ちた悪魔は勝利を収め、人間の罪によって人間を自らの支配下に置いたことを自慢した。そしてその後、人類が増え広が

[8841] ヘシオドス――古代ギリシャの著名な詩人で、古代人の一般的な見解によれば、ホメロスと同時代、あるいはそれ以前に生きたとされる。彼の作品に残された断片には、古代ギリシャ人の神々に関する多くの異教的な寓話や伝説が伝えられている。

[8842] 古代ギリシャ人の信仰によれば、カオスは、何よりも先に存在した、底知れぬ広大な宇宙空間であり、世界におけるあらゆる生命の源となる暗く生命を育む原初的な源であり、そこからエレボス――原初の闇と夜――*を生み出し*、さらにエレボスを介して後に昼が生まれ、その後、大地（ゲイア）、　空（ウラノス）などが現れた。古代人はこれらすべてを神々の姿として想像していたが、粗野な異教の迷信によって曇らされていたこれらの信仰においても、彼らは世界の創造に関する真の教えに幾分近づいている。

[8843] すなわち、悪魔、サタンである。

ると、拷問者たる悪魔はあらゆる魂を自らの隷属下に置こうと努めた。　大多数の人々が不義に陥った後、神は洪水によって世界を懲らしめましたが、その一方で、邪悪な悪魔に対して勇敢に戦い、彼に打ち負かされることなく、妻や子供たちと共に箱舟で救われた義人ノアを救われました（創世記 6:1–22, 7:1–24, 8:1–22）。大洪水の後、神は地を元の姿に回復させ、ノアを、いわばその地の新たな住人としてそこに住まわせた（創世記 9:1–29）。　長い年月が過ぎ、人々は再び増え、彼らの間にはあらゆる不法が再びはびこった。そして、彼らは皆、罪の重荷を負い、死後は地獄の鎖に縛られ、狡猾な悪魔に誘われて滅びへと導かれた。　そこで、私たちの創造主である神は憐れみ深く、御自身の御業を助けなしに放置することを望まれず、まずギリシア人たちに知恵を授け、彼らが全能の神を知り、敵である悪魔に打ち勝つようにされた。しかし彼らは、一見すると多少は分別を身につけ、真の神への崇拝の道に近づいたかのように見えたものの、　しかし、ある種の迷いの中にあって、言葉の上では論じているだけで、実際には再び先祖たちの迷いに陥り、偽りの神々への信仰に打ち負かされ、真の道から遠く迷い出て、さらに大きな不敬虔へと逸れてしまった。　しかし、それでもなお、神の偉大な憐れみの力は、人々が完全に堕落することを許さず、神は彼らに律法を与え、預言者たちを遣わし、さまざまな方法でユダヤの民に救いの道を示された。それにもかかわらず、人々はますます堕落し、先祖たちの罪を再び繰り返して、その罪ゆえに死に値する者となってしまった。　ついに、私たちの主なる神、御言葉は、私たちと同じ苦難を背負うことをお許しになり、罪を除いてはすべてにおいて私たちと同じようになられ、敵である悪魔に対する勝利を私たちに示してくださいました。御自身を低くしてしもべの姿をとり、処女から生まれ、神性においては変わることなく、貪欲な狼である悪魔の力を奪うための小羊となられたのです。さて、裁判官よ、私の物語にふさわしい一つの例えを用いましょう。 仮に、あなたがこの町の統治者として、 熊やその他の強力な獣が町の住民を襲っているのを目撃し、その獣を殺すために自分の奴隷を遣わしたとしましょう。その奴隷はあなたの命令に従って獣に立ち向かいましたが、不慣れで力が足りず、獣を打ち負かすことができず、獣に打ち倒されて　死んでしまい、食い殺されてしまったとしよう。果たして、あなたは、同じように未熟で力の弱い別の奴隷に、その獣と戦うよう命じることを決心するだろうか？　そして、もしあなたがたくましく力強く、獣と戦う術を十分に心得ていたなら、熟練した勇敢な戦士として自ら獣に立ち向かい、それを倒すはずではありませんか。しかも、主人としてではなく、ただ戦う術を知っているだけの、ごく普通の奴隷として、まさにそのように振る舞うはずではありませんか？　そして、あなたは自らの模範によって、他の奴隷たちにも、もし強い獣に出会ったならば、それを打ち負かし、殺すよう教えたに違いない。まさにそれと同じように、万人の救い主である私たちの主も、御自身の奴隷たちが悪魔との戦いで敗れ、打ち負かされ、滅ぼされたとき、　御自身の言い表せないほどの憐れみによって、御自身を低くされ、至聖にして無原罪の聖母マリアを通して受肉し、奴隷の姿をとり、罪を除いてはすべてにおいて私たちに似せられ、公の奉仕に就かれた際、あたかも御自身の自発的かつ至賢なる謙遜をもって、悪意に満ちた悪魔から身を守り、彼を打ち負かされたのです。　悪魔は主を、ただの人間であるかのように襲いかかったが、主は救いをもたらす十字架の苦難によって敵のすべての力を打ち砕き、私たちにも——主の偉業に目を向け、同じように悪魔と戦い、悪魔の力を打ち破るよう——教えられたのである。　御自身で私たちの罪を背負い、私たちには御自身の無情を授け、地獄に囚われていた者たちを復活させ、私たちに神の子となる機会を与えてくださいました。私たちは御方にあって無敵の支えを持ち、その功績によって天の冠を望む者たちなのです。　私たちは肉体においては敗れることがありますが、霊においては勝利します。朽ちるものと死にさらされながらも、同時に朽ちることなく不死でもあります。それゆえ、私たちはあなたがたの節制を欠いた生活や獣のような生活から離れ、天使に等しい生活と永遠の存在へと向かおうとするのです。　私たちは、まるで動物のように下を向くのではなく、天を見上げ、肉体にありながらも、その生き方において無形の者たちに倣う。　私たちは、自らの霊が絶えず肉と戦っていることを知っており、知恵と節制をもって、この死すべき肉体への執着から身を遠ざけ、その快楽や情欲的な欲望を断固として拒み、　絶

えず思いを天へと向けることを学び、忍耐と節制をもってこの地上の肢体を死に至らしめている。私たちは、至聖なる主についての思索を糧とし、私たちの信仰は揺るぎない。人間としての肉体をまといた神ご自身が、このような、そしてさらに大きな恵みを私たちに授けてくださったのである。　しかし、あなたがたは、周知の通り、肉に支配されており、それゆえ、あなたがた自身の言い伝えによれば、不浄で恥知らずな行いを犯した者たちを神と呼び、彼らのために神殿を建て、敬意を捧げているのです。　あなた方は天との交わりを避け、常に不安の中にあります。それは、何らかの災難への恐れだけでなく、一時的な幸福を必死に追い求め、現実の世界で夢を見るかのように空想にふけっているからです。あなた方は肉体だけでなく魂までもが死に、自らを永遠の滅びへと委ねています。しかし、われらは主イエス・キリストから、普遍的な朽ち果てと死の法則に従って朽ち果て、塵と化したこの肉体が、再び魂と結びついて蘇り、朽ちることのない性質を得ることを教えられている。――これらすべてを、私が簡潔に語ったのは、あなたが私から真理を学び、自らの偽りの神々を捨て去るためである。

総督アグリコライは、聖エウストラティオスの極めて賢明な演説を最後まで辛抱強く聞き終えると、こう言った。

「我々には皇帝たちの決定や意志を議論する権利はなく、ただその法律に従い、命令を遂行するのみである。それゆえ、無駄な戯言はやめて、さっさと行って神々に犠牲を捧げよ。もしそうしなければ、お前はこれまで聞いたこともないような苦痛を味わうことになるだろう。」

聖エウストラティオスは答えた。

「それなら、なぜ私たちにこれほど無駄な苦労を強いたのか。とっくに私たちを拷問し始めてもよかったのではないか？」

その後、拷問官は鉄の床を運び込ませ、それを極限まで熱し、まず聖オレステスをその上に載せるよう命じた。そして聖エウストラティウスにはこう言った。

「お前はまず、その上で自分待ち受けている拷問を見届けてから、それからお前自身もそれにさらされるのだ。」

その間、聖オレストは、赤く燃え盛る火床に近づくと恐怖を感じ、聖エウストラティオスを見つめながらこう言った。

「私のために祈ってください。恐怖が私を支配しようとしているのです。」

「気落ちしてはならない、オレスト兄弟よ」と聖エウストラティオスは答えた。「これらすべてはただ恐ろしく、苦痛に満ちているように見えるだけだ。実際には、勇気を持って火床に横たわり、神への希望を抱いていれば、肉体的な痛みは一切感じないだろう。主ご自身が、私たちの助け手であり、守り手となってくださるからだ。」　聖アウクセンティウスや他の聖人たちの不屈の精神を思い出し、彼らに劣らないようにしなさい。この世での苦しみはすぐに終わるが、天国では永遠の報いが私たちを待っているのだ！

これを聞いた聖オレストは、勇敢かつ毅然として灼熱の床へと歩み寄り、その上に立ち、十字の印を掲げると、直ちに灼熱の床に身を横たえた。そして、彼は力強い声でこう叫んだ。

「主イエス・キリストよ！　私の霊を御手に委ねます！」

そして彼はその聖なる魂を主に委ね、聖エウストラティオスはこう叫んだ。

「アーメン！」

その直後、アグリコライは聖エウストラティオスを牢獄へ連行するよう命じた。そこでエウストラティオスは、慣例に従って神に祈りを捧げた後、共にいた奴隷を呼び寄せ、こう言った。

「わが子よ、紙を持ってきてくれ。遺言書を作成しよう。明日には、私も主であるキリストの御前に立つことを望んでいるからだ。」

紙が運ばれてくると、彼は遺言書を作成し、その中で、自分の遺体をアラヴラクへ移すこと、そして誰もその遺骨から何かを持ち去ろうとはせず、遺体全体がそのままの状態で、アナリコゾラと呼ばれる場所に、聖アウクセンティウス、　オレストス、マルダリウス、エウゲニオスといった聖人たちと共に、「アナリコゾラ」と呼ばれる場所に、遺体全体がそのまま安置されることを望んだ。というのも、これらの聖人たちは、自らの死後、遺体が手つかずの状態でエウストラティオスの遺体と共に安置されるよう、彼に懇願していたからである。　聖エウストラティオスは、自身の全財産を教会の奉仕者たちの生活費として遺贈し、動産については均等に分割するよう命じた。第一に、貧者や困窮者へ、第二に、自身の姉妹たちへである。また、所有するすべての奴隷を解放するよう命じ、彼ら全員に報奨を与えた。

遺言書を作成した後、聖人は一日中断食し、その翌夜は一晩中祈りに費やした。その夜、警備兵に与えられた金銭を頼りに、当時キリスト教徒への迫害を逃れて隠遁していたセバスティアの司教、至福のヴラシイが彼の元を訪れた。　彼はエウストラティオスの偉大な英知と、彼が支配者とその神々を恥じ入らせたことを聞いていた。牢屋に入ると、彼は地面にひれ伏して聖人に礼拝し、こう言った。

「わが子エウストラティオよ、全能の神があなたをこのように強めてくださったとは、なんと幸いなことか。どうか、あなたの祈りの中で、私をも覚えていてください。」

「私に頭を下げないでください、霊的な父よ」と聖エウストラティオスは答えた。「しかし、あなたに授けられた聖職を念頭に置き、私たち平信徒から、あなたにふさわしい礼拝を期待してください。」

その後、二人は席に着き、エウストラティオスは司教にこう言った。

「神の御心により、明日、昼の第三時に、私に明らかに示された通り、私は主キリストの御前に立つことになる。だから、この私の遺言書を受け取り、読んでほしい。」

司教がそれを読み終えると、聖人は司教と彼と共に来た聖職者たちに遺言書に署名するよう求め、司教から、彼自身で聖人、　エウストラティオス、そして聖オレストスの遺体を自ら引き取り、遺言書に指定された場所で埋葬し、そこに記されたその他の事項をすべて履行するよう努めることを誓わせ、その労苦と配慮に対して、来世において我らの主イエス・キリストからの報いがあることを約束した。　同時に、聖エウストラティオスは、拷問を受けた時からこの聖なる秘跡を受けていなかったため、司教に神の秘跡を授けてくれるよう懇願した。礼拝に必要なものがすべて運ばれ、血なき犠牲が執り行われると、エウストラティオスは進み出て、聖なる秘跡を受けた。　すると突然、牢獄の中に稲妻のような光が輝き、声が聞こえてきた。

「エウストラティオよ！　汝は立派に奮闘した。さあ、進み出て天に昇り、汝の冠を受け取れ！」

その声をそこにいた者たちは皆聞き、恐怖のあまり一斉に地面にひれ伏した。そして司教はその夜一晩中、聖エウストラティオスと共に過ごし、彼との会話を楽しんだ。夜明けが近づくと、遺言に書かれたことをすべて忠実に実行すると約束して、その場を去った。

朝になると、アグリコライは市内のいつもの場所にある裁判官の椅子に座り、聖エウストラティオスを連れてくるよう命じた。エウストラティオスが現れると、総督は彼を呼び寄せ、他の人々の耳に入らないようにこう言った。

「エウストラティウスよ、全知の真理を証人として誓うが、私は心から、あなたが皇帝の命令に従おうとしないことを深く嘆いている。　しかし、せめて見せかけだけでも、民衆の前では、我らと同じ信仰を持っているふりをし、表面上は神々に礼拝を捧げよ。心の中では、お前の神を信じ、祈り続けよ。そうすれば、お前の意志ではなく、強制によって行った行いを、神は赦してくださるだろう。　これほど学識豊かで賢明なあなたが、まるで悪党のように滅びることを望んではならない。もし私自身がこの件で危険にさらされていなければ、あなたにそのような要求をすることなどなかった

だろう。　私はあなたの同信者たちを数多く処刑し、その誰に対しても憐れみを示さなかったが、あなたに対しては極めて深い憐れみを抱いている。そして、あなたのために、この一晩中、眠れず、深い悲しみに苛まれていたのだ。

「そのことは気にするな」と聖エウストラティオスは答えた。「私のせいで災いを招くことなく、王たちから命じられたことを行いなさい。　私は、偽善的にも、その他のいかなる方法によっても、あなたの神々を崇拝することはない。むしろ、すべての人の前で私の神を告白し、皆の真ん中で神を賛美し続けるつもりだ。あなたが私に課す拷問は、私にとって至福であることを確信してほしい。もし望むなら、実際にそれを試してみてもよい。

統治者は両手で顔を覆い、長い間泣き続けたため、周囲にいた人々も皆それに気づいた。そして皆、彼が無実のエウストラティオスを憐れんでいることを悟り、声をあげて泣き出した。街中に大きなすすり泣きが響き渡った。ついに、聖エウストラティオスは裁判官にこう言った。

「至高の神が、あなたの父であるサタンの邪悪な策略を滅ぼしてくださいますように！　サタンは、私を誘惑し、私を待ち受ける報いへの道を阻むために、この泣き声を仕組んだのだ。お望みのままにせよ。私は主キリストのしもべであり、皇帝たちの命令には従わず、偶像の忌まわしさを憎む。偶像そのものも、それに拝む者たちも、私にとっては忌まわしいのだ！

アグリコライは、エウストラティオスのキリスト教への揺るぎない献身と、キリストへの偉大な愛を目の当たりにし、彼に対する以下の最終的な判決を、かろうじて口にすることができた。

「皇帝たちの命令に背き、神々への生け贄を捧げることを拒んだエウストラティウスを、その頑なさゆえに火刑に処し、炎の中で滅びるよう命じる。」

そう言うと、彼は立ち上がり、急いでプレトリアムへと退いた[8844]。聖人が火刑の場へと連行される際、彼は皆が聞こえるようにこう祈った。

「主よ、あなたが私の謙遜に目を留め、私を敵の手に委ねることなく、私の魂を災いから救ってくださったことを、私はあなたを賛美し、称えます！　そして今、主よ、御手が私を覆い、御慈悲が私の上に臨みますように。私の魂は、この呪われた、汚れた肉体から離れゆくことに動揺し、苦しんでいるからです。　敵の悪意ある企みに決して遭遇することなく、この生涯において私が犯した、知られざる罪や知られた罪のゆえに、暗闇の中で足止めされることのないように！主よ、私に憐れみをお示しください。私の魂が邪悪な悪魔たちの陰鬱な姿を見ることはなく、あなたの明るく、まばゆいばかりの天使たちがそれを受け入れてくださいますように！　御名の聖なる御名を賛美し、御力によって私を御自身の神聖な裁きの座へと導き上げてください。私が裁かれるとき、この世の支配者の手が私を受け入れ、罪人である私を地獄の深淵へと突き落とすことのないよう。どうか私の前に現れ、私の救い主であり、擁護者となってください。なぜなら、これらの肉体の苦しみは、御自分のしもべたちにとって喜びであるからです。　主よ、この世の情欲によって汚された私の魂を憐れみ、悔い改めと告白によって清められたその魂をお受けください。まことに、あなたは世々限りなく祝福された方です。アーメン[8845]。

[8844] これは古代において、陣営内の軍司令官や裁判官の私室を指す名称であった。

[8845] 聖エウストラティオスのこの臨終の祈りは、教会で採用され、土曜日の深夜の礼拝において、次のように唱えられている。「主よ、私はあなたを大いに賛美します。あなたは私の謙遜に目を留め、私を敵の手に委ねることはされませんでした。しかし、あなたは私の魂を苦難から救ってくださいました。　今、主よ、あなたの御手が私を覆い、あなたの憐れみが私の上に臨みますように。私の魂は動揺し、　この呪われ、汚れた肉体ゆえに、その動きは痛みに満ちております。悪しき者が陰謀を企て、この世の生活において、知られざる罪や知られた罪のゆえに、暗闇の中で私の魂を躓かせることのないよう。　主よ、私に憐れみをお与えください。私の魂が、邪悪な悪魔たちの陰鬱な視線を見ることはありませんように。むしろ、あなたの輝かしく、まばゆい天使たちが、私の魂を迎え入れてくださいますように。　御名の聖なる栄光を現し、御力によって、私が裁きを受ける時、御自身の神聖な裁きの座へと私を導き、この世の支配者の手が私を受け入れ、罪人である私を地獄の深淵へと引きずり下ろすことがないようにしてください。　どうか私の前に現れ、私の救い主であり守護者となってください。この肉体の苦しみも、御あなたの僕にとっては喜びなのです。主よ、この世の情欲によ

聖人が祈りを終え、炉がすでに熱く燃え上がっていたとき、彼は十字を切って炉の中に入り、歌いながらこう言いました。

「主イエス・キリストよ！　私の霊を御手に委ねます！」

こうして彼は息を引き取った。火は彼の聖なる体を傷つけることはなく、その体の一本の髪の毛さえも傷つけなかった。彼は12月13日に亡くなった。　そして、セバスティアの司教である祝福されたヴラシイは、聖 エウストラティオスおよびオレストスの聖遺骨を受け取り、殉教者の遺言[8846] に記されていたすべてを遂行し、父と子と聖霊、三位一体の唯一の神を賛美した。その神に、永遠の栄光と権威がある。アーメン。

- 五人の聖殉教者たちの奇跡

コンスタンティノープルの近くには、「オリンポス」と呼ばれる修道院があり、そこには五人の聖殉教者、すなわちエウストラティオス、アウクセンティオス、エウゲニオス、マルダリオス、オレステスの名に因んで建てられた教会があった。　そして古くから、聖殉教者たちを記念する祝日には、皇帝と総主教がこの修道院を訪れ、修道士たちの生活費として必要なだけ献金をするという慣習が定着していた。　というのも、修道院の創設者は、修道士たちが農作業やブドウ栽培に従事することなく、聖殉教者たちの取り次ぎに完全に身を委ね、ただ自らの救いのみを心に留めるよう命じていたからである。　そして、修道士たちが創設者のこの戒めを厳格に守っていたため、聖なる殉教者たちは修道院の必要を絶えず顧みていた。しかし、神の慈悲は通常、試練と切り離せないものであり、それは、神に希望を置き、神を求める者たちが、自らの富に頼る者たち以上に、いかなる恵みも失うことがないという事実をより明らかにするためである。

そこで、万物の摂理者である神は、殉教者たちに捧げられたこの場所をさらに栄光に輝かせ、また、ここで苦難と悲しみの中で精進する崇敬者たちに御慈悲を注ごうと、祝祭の日に海から恐ろしい嵐が吹き荒れ、激しい雨と寒さが襲うように仕組まれたため、祝祭のために町から誰もやって来なかった。　修道院の修道士たちは、晩課とカノンを唱え終えた後、食べるものが全くないため落胆し、聖殉教者たちのイコンの前でこう言いながら、彼らを責めさえした。

「明日、私たちはここから去り、それぞれが生き延びるための糧を求めて散っていくのだ。」

夕暮れが迫った頃、門番が修道院長のもとへやって来て、こう言った。

「父上、王様から遣わされた人物を、荷を積んだ二頭のラクダと共に、あなたの元へ連れて行ってもよろしいでしょうか。」

修道院長が祝福を与えると、ある威厳のある男が彼の元へ入ってきて、こう言った。

「王様が、食料とワインをお送りになりました。」

修道士たちは祈りを捧げた後、送られてきた品々を運び込み、皆で食べたり飲んだりし、残りは備蓄として取っておいた。　彼らがまだ各自の部屋に戻る間もなく、門番が再び入ってきて、女王陛下からの使者が到着したと告げた。その使者は中へ案内されると、イグメンに、女王陛下が選りすぐりの魚と金貨十枚を送られたと伝えた。　使者がまだ言葉を終える前に、再び門番が入ってきて、

って汚された私の魂を憐れみ、悔い改めと告白によって清められた魂を受け入れてください。あなたは世々限りなく祝福されますように、アーメン」。

[8846] 聖殉教者エウストラティオス、アウクセンティオス、エウゲニオス、マルダリオス、オレストスは、4世紀初頭に殉教した。その後、彼らの故郷であるアラヴラコスでは、尊い聖遺骨が埋葬された場所に、彼らを称えて教会が建てられ、その聖遺骨からは奇跡が起こった。　ツァレグラードの門の前には、これらの殉教者に捧げられた「オリンポス」という名の修道院があった。ここでは毎年、彼らの記念日に総主教が礼拝を執り行っていた。現在、彼らの聖遺骨はローマの聖アポリナリオ・ラヴェンナ教会に安置されている。

総主教からの使者が現れたと報告した。新しい使者が案内されると、彼は修道院長に教会の器を手渡し、「総主教は明日、ここで聖体礼儀を執り行うことをお望みです」[8847]と述べた。

修道院長は、訪れた者たちに向かってこう言った。

「神の御心にかなうことは、神ご自身が成し遂げられる。さて、あなた方はここで一晩泊まるのか、それとも今すぐ立ち去るのか？」

彼らは答えた。

「もし泊まる場所があれば、朝までここに留まります。」修道院長は彼らを教会の玄関に寝かせるよう命じ、一晩の宿泊を許可する際、彼らの名前を尋ねた。皇帝から派遣された者はアウクセンティウスと名乗り、皇后からはエウゲニウス、そして総主教から聖具を運んできた者はマルダリウスと名乗った。

早課の賛美歌が歌われている最中、二人の男が教会に入ってきた。カフィズム「[8848] 」の後、修道院長は聖殉教者たちの苦難について定められた箇所を読むよう命じたが、修道士たちはこう言った。

「読まないでおこう。だって、祝祭のために町から誰も来ていないのだから。」

すると、教会に入ってきた見知らぬ男が言った。

「その本をください。私が読みます。」

彼らは本を渡した。そして、彼が「エウストラティオスは鋭い釘のついた鉄のブーツを履かされていた」と書かれた箇所に差し掛かると、彼はため息をつき、手に持っていた杖で教会の床を叩いた。すると、床に突き刺さった杖から枝が生え、木へと変貌した。

後ろに立っていた者たちは、目の前にいるのが誰なのかを悟り、尋ねた。

「エウストラティウスよ、これは自分のためにやったのか？」

「いいえ」と彼は答えた。「私のこれまでの苦しみは、それに対する報いに比べれば取るに足らないものです。これは、私たちの祝祭に町から訪れる人々がいないという事態を避けるために行ったのです。」

彼がそう言い終えるやいなや、五人全員が姿を消した。そして、教会から戻ってきた修道院長は、修道院の貯蔵室がパンと魚で満たされ、空になっていたすべての器がワインで満たされているのを見つけた。　この奇跡が起こったことを、人々は急いで王と総主教に知らせた。二人は修道院に駆けつけ、皆で神を賛美し、神の聖なる殉教者たちを称えた。また、木に変わった杖は切り分けられ、祝福として配られた。その日、聖なる受難者たちの祈りによって、多くの病人が癒やされた。

殉教者エウストラティオスのコンダク、第2調：

殉教者よ、あなたは無知の闇の中に座する者たちにとって、最も輝かしい灯火となられた。信仰を盾として身を守り、敵の誘惑を恐れなかった、雄弁な弁論家エウストラティオよ。

[8847] 貧しいオリンポス修道院には、当然ながら、パトリアルヒによる荘厳な礼拝に必要なものがすべて揃っていたわけではなく、パトリアルヒがそこで礼拝を行いたいと望むならば、当然ながら、自ら教会用器や祭服などをそこへ送らなければならなかった。

[8848] カフィズムは朝の礼拝に欠かせない要素であり、詩篇の朗読とそれに続く短い賛美から成っている。150篇の詩篇を含む詩篇集全体は20のカフィズムに分けられ、それぞれが3つの賛美に分かれている。この区分は古代に確立されたものである。

殉教者エウストラティオスのもう一つのコンダク、第3声調：

神聖なる御前で不法を行う者たちと弁論を交わし、最も勇敢な心をもって拷問に耐え、驚くべき神のしるしをもって彼らを論破し、高慢な誘惑の炎を消し去った。このゆえに、我らは汝を、キリストの至福の殉教者エウストラティオよ、称える。

聖女ルキアの殉教

記念日：12月13日

聖殉教者アガフィアの栄光がシチリア全土に広まり、シラクーサの住民たちが[8849] カターニア[8850] に集まり、殉教者の聖なる棺を礼拝していた頃、ルキアという名の、高貴な家柄でシラクーサのすべての人々から尊敬されていた一人の乙女が、 他の者たちや、すでに4年間も出血に苦しみ、いかなる治療法でも治癒できなかった母エウティキアと共に、この祭りに参加することになった。 殉教者の聖棺の前で行われた礼拝の最中、キリストの衣の端に触れて癒やされた出血の病を患う女性の物語が記された福音書が朗読された。福音書の朗読中、ルキアは母にこう言った。

「お母様、今読まれていることをお信じになるのなら、キリストの御名のために苦難を受けた聖アガフィアが、その御名のゆえに苦難を受けた御方の御前に立つ栄誉に浴したことも信じてください。さあ、信仰をもって彼女の棺に触れてください。そうすれば、あなたも癒やされるでしょう。」

礼拝が終わり、人々が散っていった後、母と娘は聖殉教者の棺の前にひれ伏し、涙ながらに助けを懇願し始めた。 二人は長い間祈り続け、ついにルキアは眠りに落ち、夢の中で、天使たちに囲まれ、宝石で飾られた聖殉教者アガフィアを見ました。彼女はルキアにこう言いました。

「わが姉妹ルキアよ、主の乙女よ！ なぜ、今すぐにあなた自身が与えることのできるものを、私に求めるのですか？ あなたの信仰があなたの母を救い、彼女はすでに元気になっています。そして、私がカターナ（ ）という町を栄光に包んでいるように、シラクーサもあなたを誇りとするでしょう。なぜなら、あなたは処女として、キリストに喜ばれる住まいを用意したからです。」

ルキアはたちまち目を覚まし、震えながら立ち上がり、母にこう言った。

「お母様、お母様！あなたは癒やされました！どうか、その祈りによってあなたを癒やしてくださった聖女の名にかけてお願いいたします。もう二度と、婚約者（彼女はすでに婚約していた）のことは私に言わないでください。そして、私の罪深い体から生まれる死すべき子を望まないでください。 しかし、私がこの世の人と結婚するために、あなたが私に与えると約束したものはすべて、私の処女性を守ってくださる不死の花婿、主キリストのもとへ行くために、私に与えてください。

母は彼女にこう答えました：

「九年間、あなたの父から残されたものをすべて大切に守ってきたおかげで、私はあなたの遺産を減らすどころか、むしろ増やしたのです。そして、私が自ら得たもの、またこれから得るであろうものも、すべてあなたの自由に使ってよいのです。ただ、まずは私を葬り、それからすべての財産を、あなたの望むままに扱ってください。」

「お母様、私の助言に耳を傾けてください」とルキアは言った。「神に捧げるものが、自分自身で持ち去ることも、自分のために使うこともできないものであれば、それは神に特に喜ばれることではありません。しかし、もしあなたが本当に神に喜ばれる行いをしたいのなら、自分のために使えるものを神に捧げなさい。」 あなたが死の床につく時、この世のものはもう何一つ必要とされませ

[8849] シラクーサは、シチリア島東岸に設立された最初のギリシャ植民地の一つであり、後に島で最大かつ最も豊かな都市となった。

[8850] カターニアは、シチリア島の東岸に位置する古代都市であり、現在では教育と商業が盛んで、人口10万人を超える大都市となっている。

んし、その時に与えるべきものは、もはやあなた自身が持ち去ることはできません。ですから、あなたがまだ健在であるうちに、キリストに財産を捧げ、私に与えようとしていたものすべてを、今からすぐに神に捧げ始めてください。」

こうしてルキアは、ついに財産の分配が始まり、貧しい人々の必要のために毎日それが使われるようになるまで、毎日母にそう言い続けた。ルキアの婚約者は、領地や貴重な調度品、宝石が売却されたことを知り、これに心を痛め、婚約者の乳母に問い詰めた。

「これはどういうことなのか」と彼は尋ねた。「突然、領地や宝石が売却されたという話を耳にしたのだが」

乳母は賢明な女性であったため、こう答えた。

「あなたの婚約者は、1000ズラトニツ以上で売りに出されているある相続地があることを知りました。彼女はそれをあなたのために買いたいと願っており、そのための資金を集めるために、いくつかの品物を売っているのです。」

花婿は彼女の言葉を信じ、それが物質的な購入のことだと考え、何も異議を唱えず、むしろ自らも花嫁とその母親に財産を売却するよう促した。 しかし、その財産がすべて貧者や困窮者、未亡人や孤児たちに配られ、旅人や神の僕たちのために費やされたことを知ると、彼は直ちに市長のパスカジウスのもとへ行き、自分の婚約者がキリスト教徒であり、したがって王の命令に背く者であると告発した[8851]。

パスカシウスはルキアを呼び出し、最初は口頭で彼女を説得し、偶像に犠牲を捧げるよう促した。

聖ルキアは彼にこう答えた。

「生ける生け贄、そして神であり父である御前における清く汚れなき敬虔とは、悲しみに暮れる孤児や未亡人を慈しむことにあるのです。この三年間、私は生ける神に生け贄を捧げること以外、何もしてきませんでした。 今や、私に彼に捧げるものは何も残っておらず、私は自分自身を彼に捧げます。どうか、彼がその捧げ物をもって、御心に適うままになさってください。」

「その言葉は」とパスカシウスは言った。「あなたと同じようなキリスト教徒たちに語る分には構わないが、王の法律の執行を見守る私に対して、それを語っても無駄だ。」

「あなたは王の法律に従っている」とルキアは答えた。「しかし私は神の法律に従っている。あなたは王たちを恐れているが、私は神を恐れている。あなたは王たちを怒らせたくないが、私は神を怒らせないよう細心の注意を払っている。あなたは王たちに気に入られようとしているが、私は唯一のキリストに喜ばれたいと願っている。」 それゆえ、あなたが最も有益だと思うことをすればよい。私は、それが私にとって有益であると知っていることを行うつもりだ。

「あなたは自分の遺産を使い果たし、同居人たちと共に浪費してしまった」とパスカシウスは言った。「それゆえ、あなた自身も娼婦のように語っているのだ。」

「私は自分の遺産を良い場所に預けておいたわ」とルキアは答えた。「そして、魂や肉体を堕落させる者たちを受け入れるようなことは、決して許さなかったの。」

パスカシウスは尋ねた。

「では、あなたが『魂と肉体を堕落させる者』と呼ぶのは、いったい誰のことか？」

ルキアはこう答えた。

– あなた方は、使徒が*「悪い交わりは善き習慣を損なう」*（Iコリント15:33）と語っているような、魂を堕落させる者たちです： あなたがたは、人々の魂に姦淫[8852]を吹き込み、――彼らが天の花婿、すなわち自らの創造主を捨て、無力かつ魂のない偶像への奉仕を通じて悪魔に従うように仕向

[8851] すなわち、すべてのローマ市民が異教の神々に犠牲を捧げるよう命じたローマ皇帝の勅令のことである。

[8852] 教会用語における「姦淫」とは、単に夫が他人の妻と結ぶ不法な関係や、第七の戒めに反する恥ずべき行為、邪悪な思いだけでなく、時には（ここでも主にそうであるように）不敬虔や偶像崇拝も指す。

けているのです。　そして、肉体を堕落させる者たちとは、永遠の至福よりも一時的な快楽を優先し、はかない享楽を無限の喜びよりも重んじる者たちである。

パサキオスはこう言った。

「拷問や傷が及ぶようになれば、お前の大言壮語も止み、沈黙するだろう。」

ルキアはこう答えた。

「神の言葉は決して沈黙することはない。」

「まさか、お前が神だというのか？」とパスカシウスは反論した。

「私は神のしもべです」とルキアは言った。「だからこそ、神ご自身が*『あなたがたが語るのではなく、あなたがたの父の御霊があなたがたの中で語られるのです』*（マタイ10:20）と仰せになったように、神の言葉を語ったのです。」

パスカシウスは言った。

「では、果たしてあなたの中にも聖霊がおられ、聖霊があなたを通して語っておられるというのか？」

ルキアは答えた。

「使徒は、清い生活を送る者たちは神の宮であり、神の御霊が彼らの中に住まわれる、と語っています（Iコリント3:16）。」

パスカシウスは言った：

「それなら、私はお前を淫らな家に連れて行くよう命じる。そうすれば、お前が汚されたとき、神の御霊はお前から離れていくからだ。」

「御霊の御心なしには、決して肉体は汚されることはありません」－ルキアは答えた。「たとえあなたが私の手に香を載せ、その手で無理やりそれを偶像の祭壇に投げつけたとしても、神はその光景を見てただ笑われるだけでしょう。なぜなら、神は私たちの思いや自発的な行いを裁かれるのであって、他人に無理やりさせられた行為を裁かれるわけではないからです。　また、処女を無理やり奪うことについても、神は誘惑や強盗、異教と同様に、ただ許容されているに過ぎない。それゆえ、たとえあなたが私を辱めるよう命じたとしても、それによって私の清らかさに対する報いはさらに大きくなるだけである。

「王の命令に従わないなら、死ぬまでお前を辱めさせる」とパスカシウスは言った。

ルキアはこう答えた。

「すでに言った通り、私の意志を罪に同意させることなど決してできない。私の身体に何をしようとも、キリストのしもべである私はそれをすべて軽蔑する。」

すると、パスカシウス――この放蕩で不義な裁判官――は、売春宿の経営者たちを呼び寄せ、聖女を彼らに引き渡しながら言った。

「民衆を集め、彼女が死ぬまで彼女を罵倒させよ。」

聖女が侮辱のために引きずり出されたとき、神は彼女に、その場から動かすことのできないほどの重さを与えられた。拷問者の命令により、大勢の人々が彼女を引きずり、その場から動かそうと試みたが、試みた者たちは皆、力尽きて汗だくになった。しかし、主の乙女は揺るぎなく立ち続けていた。　縄が持ち出され、彼女の腕と足に巻きつけられた後、再び全力を尽くして彼女を引きずろうとしたが、彼女はまるで山のように微動だにしなかった。　パサキオスは当惑し、どうすればよいか分からなくなった。彼は占い師や魔術師、そしてすべての偶像崇拝の祭司たちを呼び集め、ルキアを動かすために彼女の周りで魔術を執り行うよう命じたが、彼らは何の成果も得られなかった。彼女はまるで地面に釘付けにされたかのように立ち尽くしており、一歩たりとも動かすことはできなかった。　彼女を動かして引きずり出すために、数多くの牛のつがいが連れてこられたが、それでも彼女は微動だにしなかった。

ついに、パスカシウスは彼女に尋ねた。

「一体、どんな魔術を使っているのだ？」

「これは私の魔法ではありません」と彼女は言った。「神の恵みの力なのです。」

「では、なぜ、あなたのような弱々しい少女を、千人の男たちでさえ動かすことができないのか？」

「もしあなたが少なくとも一万人の人を連れてきたとしても、彼らもまた、聖霊が私にこう語っているのを感じるでしょう。*『あなたの右には千人、十万人が倒れるが、あなたには近づかない』*（詩篇90:6）。

哀れな裁判官は、その不敬虔な魂の中で激しく苦しんでいた。彼には動揺が襲いかかった。

「なぜ苦しんでいるのですか」と聖なる乙女は彼に尋ねた。「何に戸惑っているのですか？あなたはすでに、私が確かに『生ける神の宮』であることを体験したのですから、そう信じてください。もしまだ確信が持てないのなら、そのまま続けてください。」

パサキオスは、聖女が自分の策略を嘲笑っているのを見て、さらに激しい憤りと動揺に駆られた。彼は、彼女の周囲に巨大な焚き火を囲ませ、彼女に樹脂、硫黄、そして沸騰した油を注ぐよう命じた。しかし、彼女は私たちの主イエス・キリストの御名によって身を守り、微動だにせず無傷のままで、拷問者にこう語った。

「私は、この火が私に権威を持たないよう、また、キリストを信じる者たちがあなたを嘲笑うことができるように、私たちの主イエス・キリストに祈りました。信者たちを拷問の恐怖から救い、不信者たちがキリスト教を罵る機会を奪うために、私の拷問を続けるよう願ったのです。」

すると、パスカシウスの側近のうち数人が、彼をこの重く困惑した状況から救い出そうと、聖女の喉を剣で斬るよう命じ、その後、パスカシウスと共に家路についた。しかし、聖女は、どれほど深く傷つけられても力を失うことなく、民衆に語りかけ、こう言った。

「あなたがたに福音を告げます。神の教会には平和が与えられています。なぜなら、ディオクレティアヌスは王位を退き、マクシミアヌスは今や亡くなったからです。　そして、カタナという町が、神の前で私の姉である聖アガフィアをその守護者として持っているのと同様に、この町についても、あなたがたが神の御心に従ってこれを信じるならば、神によって私がその守護者として与えられていることを知ってください。」

ルキアが剣で喉を貫かれた状態でこれらの言葉を語っていると、突然、彼女の目の前を、鉄の鎖で縛られたパスカシウスが引き回された。　実は、シチリアの人々は、自らの統治者に内緒で、パスカシウスがあらゆる暴力を用いて住民から財産を奪い、いかに容赦なく国を荒廃させていたかという告発をローマに送っていたのである。　そしてまさにその時、ローマから、パスカジウスを手錠をかけたまま連行し、裁判にかけるようという命令が届いた。そこで彼は尋問の末、死刑を宣告され、剣による斬首によって処刑された。　手錠をかけられた彼が聖女のそばを通り過ぎたとき、彼女はまだ生きており、致命傷を負いながらも動かないで立っていた。そして、司祭たちがやって来て、彼女がキリストの聖なる命を与える聖体拝領を受けるまで、命は彼女を離れなかった。そして、聖体拝領が終わり、皆が「　「アーメン」と口にしたとき、聖なる殉教者はその清らかな魂を主の御手に委ねた[8853]。彼女は殉教の地で栄光のうちに埋葬され、その聖遺骨の上には、彼女の名と、三位一体の唯一なる神、すなわち父と子と聖霊の栄光のために教会が建てられた。神に永遠の栄光あれ。アーメン。

[8853] 聖殉教者ルキアは、304年に殉教した。 彼女の聖遺骨はシラクーサから、まずイタリアへ、その後メッツ（かつてはロレーヌ地方の重要なフランスの都市であったが、現在はドイツ領ロレーヌにある一級の要塞）へと移された。コンスタンティノープルにあった聖遺骨の一部は、ヴェネツィアへ移された。

聖アルセニオス・ラトルスキスの記念日

記念日：12月13日

聖アルセニオスはコンスタンティノープル出身で、高貴かつ敬虔な両親の間に生まれた。彼は皇帝の寵愛を得て、キヴェリオスの軍司令官兼パトリキウスに任命された[8854] [8855] 。ある日、彼は軍勢を率いて海を渡っていたが、恐ろしい嵐が吹き荒れ、船に乗っていた者たちと共にすべてが沈没し、彼だけが生き残った。 その後、アルセニウスは世俗を捨て、修道者となり、祈りの修行に身を捧げ、断食、絶え間ない徹夜祷、そして重い 鎖で肉体を苦しめた。ある荒野で多大な修行を積んだ後、 彼は小アジアのラトゥル山[8856] にやって来た。そこで祈りと十字の印によって致命的なアスピドを退治し[8857] 、その後ケリヴァル修道院[8858] に移り住んだ。そこで修道院長に任命されたが、そこからある洞窟へと退き、そこから祈りによって侵入してくる野獣たちを追い払った。 兄弟たちが彼の元に集まり、彼は自らの救いとなる生き様と、魂に有益な教えによって彼らを導いた。聖人は通常、一週間の間、狭い独房に閉じこもり、深い沈黙と孤独の中で過ごしていたが、日曜日には兄弟たちに教えを説き、食事をとった。 これほど過酷で困難な修行と徳高い生活を通じて、彼は至高の境地に達し、天使に養われ、杖で苦い水を甘い水に変え、その他多くの奇跡を起こした後、兄弟たちの囲みの中で安らかに息を引き取った[8859] 。

12月27日

12月14日（旧暦）

聖殉教者フィルス、レウキオス、カリニコス、フィリモン、アポロニオスおよび彼らと共に殉教した者たちの殉教日

記念日12月14日

聖殉教者フィルス、レウキオス、カリニコスは、ビフィニア地方[8860] で生まれ、ケサレア[8861] で育った。彼らは、デキウス皇帝の治世[8862] において、次のようにキリストのために殉教した。

クムブリキウスという名の地方総督の一人が、ニコメディア[8863] からケサリアにやって来て、そこで熱心に偶像崇拝を推し進め、偶像の神殿や生贄、そして人類の敵である悪魔を喜ばせるあらゆる事柄に熱心に心を配っていた。 さらに彼は、ある者には優しさで誘い、ある者には脅しで威嚇し

[8854] パトリキウスとは、ローマ帝国およびその後のビザンツ帝国における最高階級を指し、現代の貴族階級に相当する。

[8855] カリア――小アジア南西部の地域。

[8856] ラトラ山――本来はライモス山、カリア地方にある山脈で、ミレトスやアミソンの各都市付近において、地中海沿岸地帯と小アジアの内陸部を隔てている。「奉仕の山」を意味する「ラトロス」という名称は、中世に1人のアルヒマンドリトによって統括されていた11の正教会修道院がここに存在していたことに由来する。 トルコ支配下で、これらの修道院は破壊された。

[8857] アスピドとは、毒が非常に強く、しばしば致命的となる特殊な種類のヘビである。

[8858] 小アジア南西部のカリア地方で

[8859] 聖アルセニオス・ラトルスの生没年は正確には不明だが、およそ8～10世紀の間と推定されている。

[8860] ビフィニア――小アジア北西部に位置するローマ帝国の属州。

[8861] ここでは、当然ながらパレスチナのケサリアを指す。

[8862] 249年から251年まで在位した。

[8863] ニコメディアはビフィニアにある都市である。後に、ディオクレティアヌスやコンスタンティヌス大帝の時代には、ローマ皇帝の居城となった。

、すべての地元住民を強制した。一方、ケサリアの市民の中には、レウキウスという人物がいた。彼は誠実で、賢明で、学識豊かで、高潔な人物であった。行われている不法行為を目の当たりにし、彼は深く心を痛め、神への熱意がますます燃え上がった。　ついに、彼はもはや心に燃え盛る熱意を隠し通すことができなくなり、自らが信じる真の信仰をこれ以上隠そうとはしなくなった。彼は突然、総督のもとへ現れてこう言った。

「なぜ、クムブリキよ、この不幸な者よ、無感覚で耳の聞こえない偶像を崇め、自らの魂を傷つけるようなことをし、さらに多くの人々をその悲惨な迷いへと引きずり込もうとするのか？」　そのような人々は、石や木よりも無感覚である。なぜなら、彼らは自らの真の神であり救い主である方を知ることを拒み、迷いの闇を捨てて光の中を歩むことを望まないからだ。

狂気の支配者は、自分に告げられた真理に耐えられず、この言葉に激怒し、何の尋問もなしに、即座にレウキオスに鞭打ちの刑を科すよう命じた。　しかし、レウキオスは自ら進んで苦しみを受け入れ、神に感謝を捧げた。それによって拷問者はさらに激しい怒りに駆られ、その結果、彼を殴打していた者たちが力尽きるまで、レウキオスは拷問にさらされ続けた。　殴打によって打ちのめされたその体は力尽き、彼は主のもとへ召されたいと願い、肉体からの完全な解放を祈った。この願いが叶うよう 、統治者自身が手を貸し、殉教者を城の外へ連れ出し、首を刎ねるよう命じた。 拷問者たちが聖人を処刑場へと連行したとき、彼は何の恐れも動揺も見せず、その顔には痛みや苦しみの一切を露わにすることなく、まるで処刑ではなく戴冠式へと導かれているかのように、喜びと至福に満ちて輝いていた。　町のはるか彼方で彼の首は斬り落とされ、彼は天国へと旅立ち、その功績に対して朽ちることのない冠を授かった。

クムブリキウスの残虐さに関する噂はすぐに周辺の国々に広まり、キリスト教徒たちはその凶暴さを恐れて身を隠すようになった。　しかし、至福のフィルス（彼はまだ洗礼を受けておらず、単に求道者の身であったが）は、神への熱意に燃え、その迫害者の前に現れてこう言った。「ご機嫌よう、最も輝かしい統治者よ！」

すると、その者が同じ挨拶で応じると、フィルスはこう続けた。

「貴殿方の前で、誰もが言いたいことを自由に語ってもよいのでしょうか。それとも、貴殿方の命令を待ち、それまでは一言も発してはならないのでしょうか？」

統治者は、レウキオスに何をしたかをまるで忘れてしまったかのように、こう答えた。

「構わない。今日に至るまで、この発言の自由は誰からも奪われたことはない。とりわけ、公共の利益につながることを述べる場合はなおさらだ。」

すると、フィルスは言った。

「魂にとって有益なこと以上に有益な言葉などあるだろうか？　見よ、お前は多くの人々を苦しめ、救いから遠ざけている。彼らを真の信仰から逸らし、自らの悪意によって偶像崇拝へと引きずり込んでいるのだ。　それによって、あなたは自らの魂のために、燃え盛るゲヘナ全体を煽り立てているのだ。それゆえ、私は勇気を持って自由にあなたに語りかけ、あなたがなぜ――天と地、そしてすべての人々を創造した創造主を捨てて――人間の業を崇拝することを律法としたのか、あなたから聞き出そうと決心したのだ。まるで木に向かって　『お前は私の父だ』（聖なる預言者エレミヤも偶像崇拝者をこのように非難している（エレミヤ2:27））と、また石に向かって『お前が私を産んだ』と言うのか？　そして、なぜあなたは（もしそれが可能であるならば）すべての人々を説得し、あなたと同じ破滅的な考え方を共有させようと、これほどまでに心を砕いているのか？

これに対し、統治者はこう言った。

「お前のこの場違いで不適切な発言は、お前がキリスト教に染まっていることを示している。とはいえ、こうした虚しい問いやその誤った答えは、学校に閉じこもって民の事柄を顧みない者たちに任せておきなさい。今は皇帝の命令に従い、神々に犠牲を捧げなさい。もしこれを果たさなければ、お前の言葉に対する報いとして、お前のために用意された拷問を受けることになるだろう。

「あなたがたは神の創造した理性ある存在であるのだから」と聖人は答えた。「不合理なことや、綿密な調査なしに何かを行うべきではない。しかし、もしあなたが自分の王の狂った命令に従いたいというのなら、命じられた通りにすればよい。」

クムブリキウスは言った。

「お前をそれほど傲慢にしているのは、我々の寛大さだと思う。だが、お前が分別があり賢明な人間であることがわかったので、従順を示し、それによって苦痛を避けるよう勧める。　さあ、祭壇へと向かい、神々に敬意を捧げなさい。そうすれば、これまでの罪は赦され、偉大なる王の友となり、残りの生涯を我々と共に大いなる名誉のうちに過ごすことができるだろう。

「私はこの件について深く考え抜いてきた」と、その聖人は答えた。「あなたが私を不意を突いたとか、事前にすべてを熟考していなかったなどとは思わないでほしい。　というのも、私はまず長い間、自分自身と議論を重ね、入念な調査の末、あなた方の神々は魂のない偶像であり、その神殿は不浄であると確信したからだ。そして私はそれらを嘲笑し、清く真のキリスト教の信仰を選んだ。それゆえ、王から私たちキリスト教徒に関して命じられたことを、遅滞なく実行せよ。」

聖人のこの言葉に拷問官は激怒し、直ちに、力に優れた数人の家来に命じて、聖人を拳で激しく殴らせ、その後、その手足に革紐を結びつけ、全力を挙げて四方八方に引っ張らせた。　それが行われると、聖人の体の部位は関節から外れ、引きちぎられそうになったが、殉教者は忍耐強く、穏やかな眼差しでそれを耐え抜いた。拷問官は、釘で聖人の目をえぐり出し、顎を砕き、銅のハンマーで歯を打ち砕くよう命じた。しかし聖人は、拷問の最中でさえ拷問官を嘲笑し、それによって彼をさらに苛立たせた。　クムブリキウスは、鉛を溶かし、鉄の寝台を用意して、その上に殉教者をうつ伏せに寝かせるよう命じた。そして自ら、魔術師や説得者たちを呼び寄せ、　彼らに言葉で殉教者を惑わすよう促した。彼らは聖人に、たとえ一時的で表面的なものであっても、統治者に服従するよう説得し始めた。

「そうすれば」と彼らは言った。「あなたは激しい苦しみから解放され、多くの恵みを受けることになる。そして、あなたの神は人間の弱さを知っておられるから、あなたを赦してくださるだろう。また、私たちが聞いたところによれば、神は慈愛に満ち、慈悲深いお方であるから、怒られることはないだろう。」

殉教者はこう答えた。

「私が神のために苦しみを受け入れているのは、まさに神が慈愛に満ち、憐れみ深いお方だからです。なぜなら、あなたがたは、自分たちを待ち受ける果てしない苦しみについて聞いているにもかかわらず、迷いから真の道へと立ち返らないのです。それならば、天の御国という報いを得るために、私が一時的な苦しみを勇敢に耐え抜くことが、どうして悪いことでしょうか。」

殉教者がこのように語った後、彼に沸騰した鉛が注がれた。しかし、大釜から運ばれてきた鉛は瞬く間に流れ出し、その場に立っていた多くの異教徒たちを火傷させ、死に至らしめた。一方、聖人は傷一つなく、完全に健やかな状態で寝台から立ち上がり、その目は再び以前のように見えるようになった。 この奇跡を目の当たりにして、皆は恐怖に襲われ、統治者自身も極めて驚嘆した。 しかし、彼はすべての被造物を創造された方を知るべきであったにもかかわらず、自らの過ちによって心の目が曇ったままであった。こうして、聖書の言葉*「あなたは多くのものを見たが、気づかなかった。耳は開かれていたが、聞かなかった」*（イザヤ書42:20）が、彼の上に成就したのである。

そして彼は殉教者に対してさらに激怒し、彼を魔術師や呪術師と呼んで、さらに過酷な拷問を加えた。しかし、聖人はすべてを勇敢に耐え抜いた。そして、上空から、修行者を力づけるある声が聞こえ、それによって異教徒たちは大きな恐怖に陥り、信者たちは信仰を確固たるものとした。

恥をかくことを恐れ、拷問を続けるのをためらった拷問官は、殉教者を縛って牢獄に投げ込むよう命じ、自身は家に帰り、フィルスをさらにどのような残酷な拷問で苦しめるか考えを巡らせた。その間、聖人は牢獄の中で、神が彼に聖なる洗礼を授けてくださるよう熱心に祈っていた。　すると

突然、神の恵みにより、夜中に彼の縄がほどけ、牢屋の扉が自然に開いた。牢屋から出た聖人は、当時迫害から身を隠していたケサリアの司教のもとへ向かった。　司教は殉教者を見ると、すぐにその足元にひれ伏した。彼はすでにその勇気と忍耐について聞いており、彼を極めて敬っていたからである。しかし、殉教者は司教を助け起こし、自らその足元にひれ伏して、こう言った。

「そのようなことはなさらないでください、尊き父よ！　私があなたに捧げるべき礼拝を先取りなさらないでください。私は祝福を与えるために来たのではなく、祝福を受けるために来たのです。」

司教は彼にこう言った。

「あなたこそ、私たちを祝福すべきです。あなたは、これほど激しい苦痛に耐え抜いたことによって、徳の偉大な力をはっきりと示し、御霊の最も輝かしい衣を身にまとったのですから。」

「それゆえ、私はここに来たのです」と殉教者は答えた。「水と御霊によって再生し、朽ちることのない衣をまとうためです。私はまだ聖なる洗礼を受けるに値する者ではありませんから。どうか、直ちに私の願いを叶え、私に洗礼を授けてください。」

司教は直ちにフィルスを洗礼し、フィルスは洗礼槽から上がると、こう叫んだ。

「主イエス・キリスト、わが神よ、水と御霊によって私を新たに生まれ変わらせてくださった方よ！　どうか、私も苦難を通して、あなたが受けた洗礼に与ることを許し、あなたの苦難の杯を飲み干して、あなたの死に与る者とならせてください。」

その後、司教と語り合い、別れを告げたキリストの殉教者は牢獄へと戻った。その際、彼の前には不思議な光が輝き、その後ろには聖なる天使たちが従っていた。これは、ある数人の尊い者たちがはっきりと目撃した。牢獄の中で、彼はいつものように祈りに時間を費やした。

その頃、シルヴァンという名のペルシャ出身の高官がいた。彼は残酷で容赦のない人物だったが、皇帝の支持者であり同志であることを示そうと、皇帝に対し、キリスト教徒を滅ぼすために任命された拷問官たちが、果たして皇帝の命令を忠実に実行しているかを調査する権限を、自分であるシルヴァンに与えるよう懇願した。 この権限を得た彼は、ニカイア[8864] やケサリアへと赴き、至る所で偶像に生贄を捧げ、異教の祭りをキリスト教徒の血で彩った。とりわけ、偉大なるフィルスについては、いかなる拷問[8865] によっても屈服させることができず、同時に しるしや奇跡によって人々を驚かせているという報告が彼のもとに届いた。　シルヴァンは直ちに彼を自分の元へ連れてくるよう命じ、自身は異教の主神ゼウスへの生贄の儀式を執り行った。翌日、彼はクムブリキウスと共に裁判官の席に着き、フィルスを呼び寄せると、まず以前の尋問記録を公の場で読み上げさせた後、殉教者にこう言った。

「フィルスよ、これまでと同じような苦しみを受けるだけだなどと思ってはならない。もしその頑なな態度を貫くならば、さらに過酷な拷問を受けることになるだろう。」

殉教者はこう答えた。

「これまでのあらゆる苦痛に耐える力を与えてくださった方、私の主イエス・キリストが、今まさに私の前に立ち、あなた方の手から私を救い出してくださいます。なぜなら、私はただ御方のみを仕え、御方のみを神と認めるからです。あなた方の異教の偶像や神々は、完全な迷いであると私は考えています。」　とはいえ、もしあなたが、強制や暴力ではなく、賢明な助言によって、私が自発的に犠牲を捧げるよう説得したいのであれば、誰に、どのように犠牲を捧げればよいのか、教えてほしい。そうすれば、私はあなたの言葉の正しさを認め、喜んで従い、真理に無駄に逆らうことはしない。

すると、シルヴァンは聖人の手をとり、こう言った。

[8864] ニカイア――ビフィニア西部の都市。ここでは第1回および第7回全地公会議（325年および787年）が開催された。

[8865] つまり、彼に偶像への生け贄を捧げさせることは不可能である。

「神殿へ行こう。そこで、誰に犠牲を捧げるべきかが示されるだろう。」

彼らが近くにあるアポロンの神殿に着くと、シルヴァンは手で偶像を指さしながら言った。

「ほら、これが我々が崇める神だ。もし君、フィルスよ、この神に祈りを捧げ、犠牲を捧げれば、偉大な守護者を獲得し、他の神々からも恩寵を受けるだろう。」

殉教者は言った。

「さあ、私がどのような供物を捧げ、どのように彼に懇願するか、見ておけ。」

そして、皆が注目して彼を見つめていると、彼は両手を挙げ、天を仰ぎ見て、神の測り知れない力を呼び求めた。すると突然、雷鳴が轟き、アポロンの偶像は地面に倒れ、塵と化した。聖なる殉教者は、周囲に立っている者たちに向かってこう言った。

「ご覧なさい。あなたがたの神々は、ただ人間の作り物に過ぎず、真の神の名さえも耐えられないのだ。」

これに激怒したシルヴァンは、こう言った。

「お前の魔術を根絶やしにして、完全に滅ぼしてやる。」そして直ちに、鋭い鉄の櫛で殉教者の体を骨まで引き裂くよう命じた。聖人の肉は塊となって地面に落ち、拷問者はこう言い放った。

「お前の助け手である神はどこにいるのだ？　お前が崇め、頼りにしているその神は？」

殉教者はこう答えた。

「まさか、私の中で働いているキリストの力が、あなたたちの攻撃に対して私を明らかに強めているのを見ないのか？もし天からの神の助けが与えられていなければ、この地上の弱々しい肉体が、どうしてこのような苦痛に耐えられようか？」

するとシルヴァンは、巨大な大釜を持ってくるよう命じ、それを水で満たし、その下に火を焚かせた。大釜が激しく沸騰すると、殉教者の両足を縄で縛り、頭を下にして沸騰する湯の中に沈めた。しかし聖人はキリストの御名を呼び求めると、大釜は砕け散り、湯はこぼれ出ましたが、聖人自身は無傷のままでした。　拷問官は恥をかかされ、激怒したが、他にも公的な用事があったため、殉教者を牢獄へ連行するよう命じた。

まもなく、シルヴァンはクムブリキウスと共に、海辺の都市アパメア[8866]へと向かい、縛られた聖人を従わせるよう命じた。都市に近づくと、彼は立ち止まり、殉教者を呼び寄せてこう言った。

「ここだ、フィルスよ。神々に犠牲を捧げることを誓えば、お前は生き延びられる。さもなければ、残酷な方法で命を奪われることになる。」

聖人はそれに対し、以前と同じ言葉を返し、最後にこう付け加えた。

「むしろ、あなたたちの魂が体から引き裂かれるだろう。」

拷問者たちはフィルスに対してさらに激怒し、彼を殴打しながら街へ引きずり込み、そこで、彼らが言うところの「魔術」の罪により海に投げ込み、苦痛に満ちた死を遂げさせ、死後も通常の埋葬さえ受けられないようにせよと命じた。　しかし、彼らがまだ町に入る前に、殉教者の預言が成就し始めた。シルヴァンは突然力尽き、クムブリキウスは熱病に倒れ、四日目に二人は惨めな最期を遂げた。　伝えられるところによれば、聖なる殉教者がそのことを祈るまで、大地でさえ彼らの不浄な遺体を受け入れなかったという。そして聖人は、新しい総督が到着するまでの二十三日間、アパメアで鎖につながれたまま過ごした。

ヴァヴダという名の新しい総督が到着したが、その性格やキリスト教徒に対する憎悪は、前任者たちと同様であった。

彼は前任者たちの事案を検討し、殉教者フィルスのことを知ると、彼を尋問のために呼び出した。聖人は相変わらずキリスト教の信仰において揺るぎなく、異教の不敬な要求に従うことを依然と

[8866] アパメア――ビフィニアにある都市で、キアニス湾の南岸から15分の距離にあり、港を備えている。

して拒んだ。ヴァヴダは、縛られた彼を皮袋に詰め、海岸から三十スタディオン[8867]離れた海に投げ込むよう命じた。しかし、皮袋は突然破れ、縄がほどけ、海の上を歩く多くの光を放つ人々が現れ、彼らは殉教者を抱き上げ、陸へと連れ出した。　この光景を目にした統治者の家来たちは恐怖に駆られて彼の元へ駆け寄り、起きた出来事を報告した。すると彼は自ら岸へと向かい、そこで一人立っていた殉教者を見つけると、こう言った。

「確かに、あなたのキリスト教の魔術や呪術は驚くべきものだ。私の目に見えているように、海さえもあなたに従い、自然の法則そのものから力を奪い取っているのだから。しかし、それにもかかわらず、いかなる魔術もあなたを助けることはなく、かえってさらに残酷な拷問と凄惨な死をもたらすだけだろう。」

殉教者は答えた。

「お前はいつまで目が見えないままでいるつもりか。自分の神々のように、目があるのに何も見えないままでいるつもりか。いったい誰が、魔術によって自然の法則を自分の意のままに操ることができるというのか。　あなた方の魔術師や、あなた方が崇める神々――そのすべてが魔法による惑わしと欺瞞に過ぎない――のうち、誰が、海に投げ込まれた人間を天使たちの手によって引き上げさせ、無傷で健やかなまま、まるで陸を歩くかのように海の上を歩いて陸地に上陸させたというのか？

統治者は、殉教者を捕らえ、縛って引き連れ、その間ずっと棒で激しく殴打するよう命じ、自身はケサリアへと向かった。　ケサリアの住民たちは、新しい総督が聖なる殉教者フィルスを連れてやって来ると知ると、総督を出迎えるかのように一斉に街へ繰り出したが、実のところ、皆が見たがっていたキリストの殉教者を見物するためであった。一行が街に入るとすぐに、殉教者は直ちに牢獄に投げ込まれた。　総督は、殉教者にどのような処刑を課すべきか長い間熟考し、ついに、この死が最も苦痛を伴うものであると判断して、彼を野獣に食わせることとした。彼は、あらゆる種類の最も獰猛な野獣を集め、それらが死刑囚を貪り食うためにより激しく襲いかかるよう、飢えさせておくよう命じた。

30日かけて獣たちの準備が整うと、拷問官は民衆全員をゼウス神殿に集め、神への厳粛な生贄を捧げた。その後、獣に食い殺される刑に処されたフィルスを牢獄から連れ出すよう命じた。

その間、統治者の秘密の命令により、多くの友人や知人が聖人を牢獄に訪ね、彼に憐れみを持って自らを救い、要求されたことを遂行して恐ろしい死を免れるよう懇願した。

「そうすれば」と彼らは言った。「あなたは破滅を免れ、栄誉に浴し、王の御心に適うことになるでしょう。」

しかし、聖人はダビデの言葉通り、*「耳の聞こえない者のようで、聞こえず、口のきけない者のようで、口を開かない」*（詩編37:14）のようであった。

やがて、当時犠牲を捧げていた統治者の前に連れて行かれると、統治者は彼にこう言った。

「我々は、君にこれほど長い熟考の時間を与えたのだから、あまりにも慈悲深すぎたのだ。さあ、もし自分のためを思うなら、今、祖国全体が偉大なる神ゼウスに犠牲を捧げているのを見ているのだから、あなたも前に進み出て、犠牲を捧げ、滅びから逃れなさい。もしそうしなければ、獣の爪と牙があなたを引き裂き、誰もあなたを助けず、災いから救う者もいないだろう。

殉教者は同意したふりをして、こう言った。

「私はとっくに、同胞たちと共に犠牲を捧げる決心をしていた。しかし、アポロンを無視してゼウスだけに犠牲を捧げれば、アポロンが怒るのではないかと心配だ。」

これを聞いて、統治者は喜び、こう言った。

[8867] スタディオン――長さの単位で、およそ88サジェンに相当する。30スタディオンは4ヴェルストを少し超える距離である。

「ゼウスだけに犠牲を捧げなさい。他の神々があなたに怒りを向けることなどないと、私が保証しよう。」

殉教者は皆の目の前でゼウスの偶像に近づき、心の中で真の神に祈りを捧げたとき、恐ろしい地震が起こり、ゼウスの偶像は地面に倒れた。　異教徒たちは恐怖に駆られて逃げ散り、聖人ただ一人だけが神殿に残った。激怒した拷問官は、聖人を野獣の餌食にするよう命じた。

この光景を見ようと大勢の民が集まり、聖人のところに獣たちが放たれたとき、彼は獣たちの真ん中に一人ではなく、他の三人の人物と共に立っているように見えた。そして獣たちは彼の周りを回り、まるで昔から彼を知っていたかのように、おとなしく彼に寄り添っていた。彼は両手を天に掲げ、こう言った。

– 主イエス・キリストよ、あなたが私のうちに御名を栄光に輝かせ、私に御慈悲を示してくださったことを感謝いたします。かつてあなたのしもべダニエルの前でそうであったように、私の目の前で獣たちの口を封じてくださったことを感謝いたします。　主よ、当時も今も奇跡を行われるあなたは、これらの野獣たちが、ここにいる誰にも害を及ぼすことなく、それぞれ自分の住処へと去っていくようにしてください!

そして、祈りを捧げた後、彼は獣たちにこう言った。

「真の神の名において、あなたがたは砂漠へ、それぞれが連れ出された巣穴へと戻り、誰にも害を与えないようにしなさい。」

するとたちまち、獣たちは逃げ去り、その際、扉は自ずと彼らの前で開いた。その場にいた者たちは皆、逃げ出した獣たちを恐れて、それぞれできる限り遠くへ逃げ散った。しかし、獣たちは自らも猛スピードで砂漠へと駆け去っていった。この奇跡を目撃し、多くの異教徒がキリストに改宗した。

ヴァヴダは、どうすべきか分からず、再び聖人を縛り上げ、牢獄に投獄するよう命じた。しかし数日後、ケサリアからそう遠くないアポロニアという町へ向かう際、フィルサにも自分の後を追ってそこへ連れて行くよう命じた。　アポロニアに到着すると、ヴァヴダはそこでアポロンの神殿にて、民衆を招いた祝祭を催した。その神殿は偶像で埋め尽くされていた。　ヴァヴダはフィルスをそこに連れて行くと、偶像の前で棒で激しく打つよう命じた。しかし、聖人は、あたかもそれが現実ではなく夢の中で受けているかのように、打撃を忍耐強く耐え忍び、一振りで深淵を干上がらせ、山を倒す神に祈りを捧げた。

「主よ、あなたの御手が私の上にありますように。あなたの助けを私から遠ざけないでください。どうか私を見守り、私を守ってください。私があなたを呼び求めたのですから、恥をかかされないようにしてください」と彼は言った。

彼がこのように祈ると、突然、街で地震が起こり、支配者は病に倒れ、聖人を殴っていた者たちの手は力尽き、多くの偶像が地面に落ち、粉々に砕けて転がっていた。そして、神への喜びに満ちたフィルスは、偶像や迫害者を嘲り、こう言った。

「なぜ、地上でこれほど不名誉な姿で転がり、あなたに助けを求めている自分の神々を助けようとしないのか。それどころか、皆の目の前で、見捨てられたままにしておき、目が見えている者たちの笑いものにしてしまうのか？」

統治者は重い病に苦しんでいたが、その悪意は依然として全盛期を保っていたため、こう言った。

「忌まわしきフィルスの魔術は、私にとって死よりも辛い人生をもたらしている！」

その頃、アポロニアには異教の祭司カリニクがいた。聖殉教者フィルスが行う奇跡を最初から目撃していた彼は、自らの神々の無力さを自覚し始めた。真の信仰の種を心に受け入れた彼は、心の中でこう語った。

「神よ、フィルスによって宣べ伝えられ、驚くべき栄光ある奇跡を行われる方よ！　私をも、新たに選ばれた戦士として受け入れ、あなたの真理に反旗を翻す者たちに対して、私を強め、確固たるものにしてください！」

このように神と密かに語り合った後、彼は統治者の前に現れ、狡猾に彼を嘲笑した。

「最も輝かしい統治者よ」と彼は言った。「あの男は、凄惨な拷問に耐えながらも、至高の神ゼウス、太陽を背負うアポロンを打ち倒し、すでに三度目となる、戦いに無敵のヘラクレス[8868]を、手でも、武器でも、剣でもなく、ただ一つの言葉と、十字架と死を耐え抜いたキリストへの呼びかけによって、打ち倒したのです。　それゆえ、もし御力のお許しをいただけるなら、苦難にある者たちを助ける神ヘラクレスを復活させ、かつての勇気を思い起こして、ゼウス父と神聖なるアポロン――彼らは今、深い眠りについているように思われる――を助けるために来てくれるよう、彼に懇願しましょう。

統治者は、その皮肉に気づかずに言った。

「私は病気だから、お前一人で行き、神々に我々のために祈り、この魔術師フィルスに対して、一刻も早く神々を奮い立たせてくれ。」

カリニコスは続けて言った。

「しかし、私は、彼らを打ち倒した神の力は偉大であると考えます。そして、私たちの神々でさえ、自分たち自身を助けることさえできないのではないかと恐れています。」

すると、統治者はようやくカリニクの言葉の真意を理解し、こう言った。

「まさか、カリニクよ、お前までもがこの魔術師の魔術に惑わされたのか？」

カリニクは、始めた会話を続けることも、もはや自分の信仰を隠し続けることも望まず、直ちに家へ戻り、頭髪と髭を剃り落とし、聖職者の服を脱ぎ捨て、それらすべてを統治者の元へ持ち込み、その足元に投げ捨てた。

「受け取ってください、統治者よ」と彼は言った。「犠牲の悪臭と煙、流された血、そして悪魔的な秘儀によって穢された私の髪と衣を。これらとともに、私はかつての迷いを捨て、新たな人生を始めます。なぜなら、私はすでにキリスト教徒だからです。」

統治者は、カリニコスのこの予期せぬ変貌に極めて驚いた。

「どうしたのだ、カリニク」と彼は言った。「まさか、あの魔術師の奇跡が、お前にこれほどの力を及ぼし、お前の高貴な魂――神々から多くの恩恵を受けた神官の魂さえも、先祖の信仰から遠ざけ、究極の破滅へと引きずり込んだというのか？」

カリニクは言った。

「私の変節の最大の責任は、ヘラクレス自身にある。彼は、伝えられるところによれば数多くの勝利を収めたにもかかわらず、今やこの男のたった一言に抗うことができず、これほど惨めな姿で倒れてしまった。それは、人々の中で彼や他の神々について語られている神話が、いかに笑いものかということを示しているのだ。」

「とんでもない」と統治者は反論した。「だが、お前はフィルスの魔術に惑わされ、自分だって魔術によって同じような奇跡を起こせるだろうと期待しているのだ。しかし、お前が悔い改めず、以前のように神々に敬意を払わなければ、あの魔術師にも、お前にも、キリスト教の魔術は何の役にも立たないだろう。」

カリニクスは、統治者の愚かさをはっきりと恥じ入らせたいと願い、また、フィルスのように自分、カリニクスにも神が味方してくださると固く信じて、こう言った。

[8868] ヘラクレス――古代ギリシャ人の信仰によれば、並外れた力と勇気を持ち、数多くの偉業を成し遂げ、死後に半神となったギリシャの英雄の一人。

「統治者よ、あなたは現在病に伏しており、私を魔術に惑わされた者と見なしている。それならば、もしよろしければ、偉大なるアスクレピオス（[8869] ）のもとへ赴き、共にあなたの回復を祈りましょう。そうすれば、私がいかなる魔術にも惑わされていないことがお分かりになるでしょう。」

統治者は、カリニクスの言葉を正しく理解できず、祭司がまた自分の神々について語り始めたのだと思い込み、すぐに彼と共に神殿へ向かった。彼らが中に入ると、カリニクスは心の中で祈り始め、こう言った。

「主イエス・キリストよ、あなたのしもべフィルスを通して、私が真の神として知った方よ。私は数え切れないほどあなたを怒らせたにもかかわらず、それでもなお私を見捨てなかった方よ！今こそ、私の助けとして立ち上がり、私の中にあなたの力を現してください！」

彼がそう心の中で語っていると、上からある声が聞こえてきて、彼を力づけ、偉業へと駆り立てた。そして彼は、大胆さにあふれ、キリストの御名を呼びながら、アスクレピオスの偶像を罵り始めた。するとたちまち、その偶像は、まるで力強い手に打ち倒されたかのように、彼の足元に倒れ落ちた。 すると、カリニクスは統治者を見据え、嘲るようにこう言った。

「お前の神が、お前自身が持ち上げない限り立ち上がれないことは、お前自身も目に見えているだろう。これは魔術ではなく、私を通して働く神の力であることを、よく確かめておけ。」

しかし、統治者は、心の中ではそのことを嘆き、カリニクを憐れんでいたものの、彼を牢獄に閉じ込めるよう命じ、翌朝、彼とフィルスに対して次のような言葉で死刑判決を下した。

「神々への奉仕と崇拝から背き、キリスト教の虚偽に身を投じたカリニカを、剣で斬り殺すよう命じる。また、自らの奇跡を誇り、それによって堕落したカリニカを惑わしたフィルスについては、木箱に入れ、のこぎりで切り裂くよう命じる。」

カリニカは直ちに兵士たちによって処刑場へと連行された。彼は祈りの時間を求め、長い祈りを捧げた後、剣で斬り殺された。　その後、拷問者たちが聖フィルサを箱に入れ、のこぎりで切り裂こうとしたところ、のこぎりは彼らの手の中で異常に重くなり、かろうじて持ち上げて動かすのがやっとだった。一方、箱の木の部分では、のこぎりは驚くほど軽く、歯の跡さえ残らなかった。　拷問者たちは長い間、汗だくになるまで苦労したが、何の成果も得られなかった。ついに、箱が突然開き、聖人は明るい表情でそこから出てきた。その心は、この世のものとは思えないほどの喜びで満たされていた。　周囲に立っていた者たちは恐怖に襲われ、起こった奇跡のゆえに、誰も聖人に触れることを敢えてしなかった。そして、天から声が聞こえ、殉教者を天の報いへと招いた。苦行の終わりが来たことを悟ると、聖人は両手と心を天に向け、こう叫んだ。

「主イエス・キリストよ、感謝いたします。私のような不適格な者を、御恵みの相続人として受け入れ、御心に適う者たちの列に加えてくださいました。どうか今、私の魂を平安のうちに受け入れ、御自身の聖なる住まいへと導き、御自身が賜る言葉に尽くせぬ至福へと至らせてください！」

その後、十字架の印を自らに描いて、フィルスはその聖なる魂を神の御手に委ねた。こうして、数多くの残酷な拷問や虐待によっても殺すことができなかった彼は、自然死をもってその生涯を閉じた。

それから何年も経ち、残忍なディオクレティアヌスが即位した[8870] 。そして再び、すべての者が偶像崇拝に参加するよう命じる皇帝の勅令が至る所に発布され、これを拒む者は死刑に処されることとなった。当時、フィヴァイデ[8871] の統治者は、あるアリアンという人物であった。 この残忍な皇帝の不敬な命令を忠実に実行しようと、彼はアンティノエに滞在中に、アスカロンとレオニダスとい

[8869] アスクレピオス（エスクラプス）――遥か昔に生きたギリシャの医師。ギリシャ人の信仰によれば、彼は死後、ヘラクレスと同様に神々の列に加えられた。

[8870] 284年から305年まで在位したローマ皇帝。

[8871] フィヴァイダ――エジプト南部の地域。

う二人の高位のキリスト教徒を捕らえ、様々な拷問を加えた後、彼らを処刑した。その後、彼はそこにいたすべてのキリスト教徒を捕らえるよう命じ、彼らの前に拷問器具を並べ、こう言った。

「さあ、あなたたちには二つの運命が待っている。神々に生贄を捧げれば、無傷で自由の身でいられる。しかし、従うことを拒めば、拷問にさらされ、さらには死に至るだろう。」

統治者がそう言い終えるやいなや、たちまち三十七人の男たちが勇敢かつ一致団結して前に進み出て、不敬虔な命令に従うよりはむしろ死を選ぶ覚悟であることを表明した。　しかし、数々の拷問を受けた後、そのうちのひとり、アポロニウスという名の教会の朗読者（レクター）は、多種多様な拷問の光景に恐怖を覚え、これから待ち受ける苦痛を思うと震え上がり、またキリストから離れて魂を滅ぼしてしまうことを恐れた。　彼は、偶像への生贄と凄惨な拷問を避け、魂を悪魔の支配から救い、体を拷問者たちの手から逃れるにはどうすればよいか、考え始めた。彼がこのように迷っている間、彼のそばには、フィリモンという名の異教徒が立っていた。彼は統治者の元で音楽家として仕えていた。

アポロニウスは彼に気づくと、呼び寄せ、もし彼がアポロニウスのふりをして、正体がバレないよう彼の服を身にまとい、犠牲を捧げれば、金貨四枚を与えると約束した。フィリモンは承諾し、アポロニウスの服を着て顔を隠し、祭壇へと向かった。　しかし、すべての人々の救いを驚くべき御計画をもって導かれる神は、アポロニウスを通じてフィリモンを、またフィリモンを通じてアポロニウスを御自身のもとに引き寄せようと望まれた。そして、アポロニウスの衣装を身にまとったフィリモンが偶像の祭壇に近づいたとき、彼の心の中に主の恵みの光が輝き、真理を知るために彼の霊的な目が開かれた。　キリスト教徒のように十字を切ってから、彼は統治者の前に立った。統治者は周囲の人々に尋ねた。

「あれは誰だ？」

彼らはこう答えた。

「キリスト教徒の一人です。」

総督は彼に犠牲を捧げるよう命じたが、彼は大声で叫んだ。

「捧げはしない！　私はキリスト教徒であり、生ける神であるキリストの僕だ。」

統治者は言った。

「つい先日、アスカロンとレオニドがどのような拷問に耐え、いかに凄惨な死を遂げたか、お前は見ていないのか？」

フィリモンはアポロニオスのふりをして、こう答えた。

「まさにその通りです。最近キリストのために苦難に遭ったアスカロンとレオニドは、私たちに勇敢な忍耐の模範を残してくれました。それこそが、私が恐れずに苦難へと向かう原動力となったのです。」　さらに、あなたが川を渡ろうとした際、あなたの舟が川の中ほど、最も深い場所で立ち止まり、岸にたどり着けなかったあの奇跡も、私をそうさせる動機となった――それは、あなたがキリストを神と呼ぶことを拒んだためである[8872]。

そこで総督は、音楽家のフィリモンを呼び寄せるよう命じた。彼は、フィリモンが笛の演奏でキリスト教徒の心を魅了し、その精神を和らげ、容易に考えを別の方向へと導き、偶像への生贄を捧げるよう説得してくれることを期待していたのである。　その狂人は、目の前にいるのがフィリモン本人であり、彼が本来の声で話していることを知らなかった。というのも、以前、総督が耳にしていたのは様々な楽器の演奏だけであり、今、聖霊に導かれて発せられた明瞭な言葉だったからだ。一方、フィリモンは至る所で捜索されたが、見つからなかった。　そこで、彼の兄弟であるフェオンを呼

[8872] この奇跡については、『ミネイア・チェティイ』の5月20日、聖殉教者アスカロンの項に詳しく記されている。　その奇跡とは、アスカロンの祈りにより、統治者を乗せた舟が神の力によって二度も立ち止まり、彼が聖人の要求――唯一真の神を告白すること――に従うことを拒んでいた間は、川を渡ることを許されなかったというものである。　そして、アリアンが、たとえ不本意ながらも、そのことを紙に署名したとき初めて、舟は動き出し、統治者は対岸へと渡った。

び寄せ、フィリモンがどこにいるのか尋ね始めた。フェオンは、アポロニオスの服を着た兄弟だと気づいたものの、何が起きたのかは全く知らなかったため、こう言った。

「ほら、フィリモンがあなたの目の前に立っていますよ。」

総督は、立っている者の顔を明かすよう命じ、フィリモンを見ると、フィリモンがキリスト教徒を嘲笑し、出席者を楽しませるためにこうしたのだと思い、大声で笑い出した。その後、彼はフィリモンに他人の服を脱ぎ捨て、自分と一緒に祭壇へ行くよう命じた。　しかし、フィリモンは自分が真のキリスト教徒であると宣言し、異教の神々を嘲笑し始めた。裁判官はこれに極めて驚き、フィリモンを見つめながら叫んだ。

「ローマ国民の幸福のために――フィリモンよ、今お前の言動は真実なのか、それともキリスト教徒を嘲笑するためにでっち上げたものなのか？」

フィリモンはこう答えた。

「ローマの繁栄ではなく、私自身の救いと、私の主であるキリスト王に誓って申し上げます。私はキリスト教徒を嘲笑しているのではなく、私の心に起こった真の変化を宣言し、キリストへの信仰を告白しているのです。そして、この告白のために、一度だけでなく、千回でも死ぬ覚悟があります。」

この言葉に統治者は激怒し、周囲の人々に振り向いて、フィリモンが公然と神々を冒涜したとして直ちに処刑すべきか、それとも反省と悔い改めの時間を与えるべきか、と尋ねた。　フィリモンの見事な笛の演奏を愛していた民衆は、街全体の楽しみを奪わないよう、統治者に懇願した。すると統治者はフィリモンにこう言った。

「見よ、民がどれほどお前を愛しているか。お前は『皆の楽しみ』と呼ばれているのだ。　それゆえ、せめてその恩に報いるためにも、お前の慣れたことを行いなさい――この街の守護神である神々に犠牲を捧げなさい。さあ、今まさに盛大な祭りが迫っている。その祭りで、お前もまた、ラッパや笛を用いて神々に賛美を捧げ、それによって自らも喜び、我々の耳を楽しませてほしいのだ。

「この祭りは、あなた方のものですが」とフィリモンは言った。「それは私に、天で行われる祭りを思い起こさせ、ラッパの音は、天使たちの賛美歌を聞きたいという欲求を私の中に掻き立てます。　知っておいてほしい。私の信仰から私を引き離そうと努力しても無駄だ。その方法では、何の成果も得られないばかりか、かえって私の心にキリストへのさらなる憧れを呼び起こすだけだ。

統治者は言った。

「しかし、たとえお前が約束通り、キリストのためにあらゆる苦難に耐えたとしても――彼らの律法に則った洗礼を受けていない以上、完全なキリスト教徒とは言えないお前に、それで何を得られるというのか？」

これを聞いて、フィリモンは叫んだ。

「ああ、私の心に灯された霊の火が、どうか私と共にありますように！総督よ！あなたが、たとえ本意でなくとも、聖なる洗礼のことを思い出させてくださり、私に恩恵を与えてくださったことに対し、私はどれほど感謝すべきでしょうか！」

そう総督に告げると、彼は集会の真ん中へと進み出て、大声で叫んだ。

「もしあなたがたの中にキリスト教の司祭がいて、もし彼が真の信仰のために苦難を顧みないのなら、彼に懇願します。どうかすぐにここへ来て、私に聖なる洗礼を授けてください！」

皆が恐怖に囚われ、誰も彼に近づいてキリスト教の司祭であると名乗る勇気を持たないのを見て、彼は心を痛め、ついに熱い涙を流しながら神にこう叫んだ。

「わが神、主イエス・キリストよ、憐れみ深く私を見守り、迷いの深みから私を呼び出してくださいました！私を聖なる洗礼なしに放置しないでください。どうか、御心に従い、司祭と水を送り、他のキリスト教徒たちと同様に、私も洗礼を受けさせてください！」

その祈りが終わるとすぐに、上空から雲が降りてきて、三度彼を取り囲んだ後、雨を降らせて彼に聖なる洗礼を授けたことを示し、その後再び上空へと昇っていった。皆は驚愕したが、怒りに目がくらんでいた統治者は、これは魔術であり、目の錯覚に過ぎないと述べた。

その後、聖人は、当時アポロニウスと服を交換していた際に彼に預けていたすべての笛とトランペットが焼き尽くされるよう祈った。そうすることで、彼の虚しい芸術の記憶が一切残らず、異教徒の誰ももうこう言えなくなるようにするためであった。

「これがフィリモンのトランペットだ」

そして実際、天から降り注いだ炎が、アポロニオンの目の前でそれらすべてに火をつけ、焼き尽くした。

その間、アポロニオス自身にとっても苦難の時は近づいていた。フィリモンの兄弟テオンが統治者の元へ現れ、アポロニオスがフィリモンに自分の服を着せ、自分の代わりに殉教の業に就かせるよう強要し、彼の破滅の原因となったことを詳細に語ったからである。　直ちにアポロニウスも連行され、総督アリアンは激しい怒りと威嚇の眼差しで彼を見つめ、こう言った。

「これは一体どういうことだ、この最も卑劣な人間よ？　お前は我々や、この街全体、そしてこの哀れな男に何をしたというのか？　お前は、傲慢さゆえに神々や法律を軽んじ、臆病さゆえに苦痛を避けようとして、彼と服を交換し、何らかの魔術で彼の心を歪め、この街全体から彼の偉大な喜びを奪ったのだ。　もし苦痛を恐れていたのなら、私のところに来て、心を打ち明けるべきだった。そうすれば、私は人間愛の法則に従い、すべてを許し、お前を自由で安らかなまま生きさせてやっただろう。

この統治者の言葉に対し、アポロニウスはこう答えた。

「私を非難し、悪口を言うのは、あなたにとって正しく妥当な行いだ。私はそれに対して何も反論しない。　私自身も有罪だと認めている――しかし、それは私がフィリモンにこれほど大きな恩恵をもたらしたからではなく、まず自分自身のためにその恩恵を請い求めたからであり、また彼が私の服を着ていたからではなく、私自身が彼の服の下に身を隠していたからである。　しかし、私たち二人は神の御心により、救いの衣を身にまとったのだから[8873]、フィリモンもアポロニウスも、決してあなた方の神々に犠牲を捧げることはないということを、疑いなく知っておいてほしい。かつて私は拷問を恐れていたが、今や私の神の助けにより、それ以上の勇気を示すだろう。

この言葉に激怒した拷問官は、アポロニオスを縛り上げ、さらに残酷な拷問に備えてその状態で放置するよう命じ、その間、三人の兵士にフィリモンの顔と目を殴打するよう命じた。　民衆はフィリモンが殴打されるのを見て憤慨し、兵士たちにやめるよう叫んだ。その後、統治者はフィリモンにこう言った。

「フィリモンよ、自分のことを憐れめ。あるいは、せめて、お前のせいで心を痛めている民を憐れめ。民が、このわずかな拷問を見ただけでこれほど激怒しているのだから、もしお前がさらに大きな苦痛にさらされたら、どうなるかよく考えてみるべきだ。」　「フィリモンよ、生贄を捧げよ。そして、　この現在の苦しみに対して、その後続く快楽をもって自らを報いてくれ。我々はセラピス神殿で[8874]宴を催し、あらゆる快楽にふけるのだから。」

「私には天国で夕食が用意されている」とフィリモンは答え、それから民衆に向かってこう言った。

「なぜ、私が殴られているのを見て悲しむのですか？私がまだあなた方の間で笛吹きをしていた頃、支配者の側近たちが私たちを殴らなかったでしょうか？　時にはそれ以上にひどい仕打ちを受けたこともあったが、皆さんは大声で笑っていたではないか。なぜ今は笑わないのか？　しかし、皆

[8873] つまり、二人はすでに洗礼を受けていた――一人は通常の方法で、もう一人は奇跡的な方法で。

[8874] セラピスは古代エジプトの異教の神であり、死者の魂の神として崇められ、病気や死からの救い主として呼び求められていたため、多くの人々によってアスクレピオスと同一視されていた。

さんが悲しんでいるこの時、天使たちは、私がキリスト教徒であり、真の信仰を尊ぶ者であることを見て、私のために喜んでいるのだということを知っておいてほしい。

拷問官は、フィリモンの不屈の姿勢を見て、彼とアポロニオスのすねに穴を開けさせ、縄で縛り上げ、殉教者たちを街中を引きずり回すよう命じた。　その後、フィリモンはオリーブの木に吊るされ、弓矢を射かけられたが、矢は彼には当たらず、そのうちの1本が跳ね返って統治者の右目を射抜き、失明させた。　片目を失い、激しい痛みに苛まれた彼は、キリストやキリスト教徒に対して数多くの冒涜や悪口を吐き散らしたが、ついに痛みに耐えかねて、殉教者の縄を解くよう命じ、目を癒やしてくれるよう懇願した。しかし、聖人はこう答えた。

「今、あなたを癒やすことはしない。そうすれば、あなたが受けたこの恩恵を魔術のせいにしようなどとは考えないだろうから。しかし、私がこの肉体を離れる時――私の終わりは近い――あなたは私の墓を訪れ、そこから土を採取して目に当て、キリストの御名を呼び求めれば、即座に目は癒やされるだろう。」

その後、総督の命令により、二人の殉教者、フィリモンとアポロニオスは首を刎ねられ、その尊い遺体は聖アスカロンと聖レオニドの殉教者のそばに葬られた。　そして、耐え難いほどの目の痛みに苦しんでいた拷問官は、本意ではなかったものの、聖人たちの墓を訪れ、フィリモンの言葉通り、そこから土を採取して自分の痛む目に当て、こう言った。

「イエス・キリストよ、御名のゆえに、これらの殉教者たちは進んで死へと向かった。その御名によって、この土を私の目に当てます。もし癒やされて物が見えるようになれば、私もまた、あなた以外に神はいないと告白します。」

彼がそう言い終えるやいなや、即座に目と魂の二重の癒やしを受けた。目には太陽が見え、魂には太陽よりも輝かしい真理を悟り、彼は喜びの声を上げながらこう叫んで去っていった。

「私はキリスト者だ！」

彼は多くの証人の前でこれを告白し、家族全員と共に聖なる洗礼を受け、キリストのために投獄されていた三十六人のキリスト教徒を平穏のうちに解放した。　その後、埋葬用の布[8875]と貴重な香[8876]を携え、大勢の民衆と二人の司教を伴って聖なる殉教者たちの墓を訪れ、彼らを尊厳をもって埋葬した。

その間、異教徒であったアリアンがキリスト教徒となり、もはや神々に犠牲を捧げることを拒んでいるという噂が、ディオクレティアヌスの耳に届いた。皇帝はケサリアに四人のプロティクター[8877]を派遣し、アリアンを連行するよう命じた。皇帝自身、彼に関する噂が真実であるかどうかを調査しようとしていたのである。　プロクティコイたちはアリアンを捕らえると、一刻も早く旅立つよう急かしたが、彼は聖殉教者たちの墓を訪れさせてほしいと懇願した。彼らが承諾しなかったため、彼は彼らに金貨八十枚を渡して、ようやく墓へ向かうことを許された。　そこに着くと、彼はひれ伏して、聖なる殉教者たちに、この偉業を成し遂げるための助けを懇願した。すると、墓の中からフィリモンの声が聞こえてきて、こう言った。

「勇気を出せ、アリアンよ。恐れるな。主ご自身があなたを御許へと呼び寄せ、殉教の業へと導き、殉教の冠をあなたのために用意しておられるのだ。そして、あなたを連れ去りに来たあの四人のプロトクターたちこそが、あなたの殉教の業と、それに対する報いに共に参加する者となるだろう。」

[8875]「聖骸布」とは、死者の遺体を包む大きな亜麻布のことである。

[8876] 東方では、香油を用いて故人の遺体に塗布する習慣があり、例えばヨセフとニコデモが主の聖なる御遺体にそうしたように。

[8877] プロティクターとは、武器持ちのことです。

この声を聞いたアリアンは恐怖に襲われ、家に戻ると、主の恵みに導かれて、家族たちに自身の殉教の時期と様相を予言した。彼は使用人たちを呼び寄せ、こう言った。

「君たちは私たちと共にアレクサンドリアまで同行し、その後、私は皇帝のもとへ連行され、神の御加護により、私は自分の偉業を成し遂げるだろう。ファメノフ月の8日目[8878]、私は皮袋に詰められて海に投げ込まれるだろう。そして、あなたがたは同月の11日、第6時に岸へ出なさい。そこでは、イルカによって陸に打ち上げられた私の遺体を見つけるだろう。それを拾い上げ、他の殉教者たちと共に安置しなさい。

その後、アリアノスは護衛たちと共に旅立ち、王のもとへ到着すると、当初は王から温かく迎えられた。しかし、彼の到着後まもなく、皇帝のために浴場が用意された。その建物の前にはアポロンの像が立っており、王はそこへ向かう際、アリアンも連れて行った。入浴を終え、浴場から出て像に近づくと、皇帝はアリアンにこう言った。

「偉大なる神アポロに供物を捧げよ。そうすれば、心軽やかに夕食へと向かおう。」

アリアノスはこう答えた。

「真の神であるキリストによって成し遂げられた、これほど偉大で数多くの奇跡――それらは単なる伝説ではなく、疑いようのない真実である――を目の当たりにした後、どうして私がそのようなことをできるでしょうか。私の目こそがその証人なのです。それなのに、どうして魂も感覚もない偶像に供物を捧げることができるでしょうか？」

激怒した王は、直ちにアリアノスの両手を鉄の鎖で縛り、足に大きな石を縛り付け、深い穴に投げ込み、土と石で埋め尽くして、その盛り土を地面と同じ高さにするよう命じた。そして、土で埋められた穴の上には自分の玉座を置かせ、そこに座ると、兵士たちに自分の周りでラッパを吹くよう命じ、こう言った。

「さて、彼のキリストが来て、この穴から彼を救い出すかどうか、見てみよう。」

その後、彼は宮殿へ戻り、自室に入ると、アリアノに縛り付けられていた鉄と石が自分の寝台の上にぶら下がっているのを見、アリアノ自身が寝台に横たわっているのを見た。

この光景を目の当たりにして、皇帝は恐怖と動揺に襲われ、自分の側近の誰かが裏切り、密かに陰謀を企てているのではないかと考えた。しかし、聖アリアンは彼にこう言った。

「心配するな。誰もあなたに背いたり、反旗を翻したりはしていない。しかし、私はまさにあのアリアンだ。私を穴に投げ込んだ時、あなたは『彼のキリストが彼を救いに来るかどうか見てみよう』と言ったではないか。そして今、キリストは私を救い出し、あなたの寝台に横たわるよう命じたのだ。」

驚愕したディオクレティアヌスは長い間黙って立ち尽くし、ようやく我に返ると、恐怖と動揺のあまり大声で叫んだ。

「おお、狡猾な魔術め！これまで誰も、このようなものを見たことがない！」

彼は他にも多くのことを語り、叫び続け、ついに聖人を砂の入った袋に詰め、海の深い場所に投げ込むよう命じた。その間、前述の四人のプロティクターたち――その最年長者はエフォティクスであった――が皇帝のもとに現れ、自分たちがキリスト教徒であることを告げた。彼らもまた砂の入った袋に詰められ、アリアンと共に海に投げ込まれた。すると、イルカたち[8879]が彼らの遺体を引き取り、アレクサンドリアの海岸へと運んだ。そこでは、アリアンの遺言に従い、彼の使用人たちが岸辺で彼らを待っていた。彼らは水の中から主人の遺体と四人のプロティクターたちの遺体を引き

[8878] ファメノフは、私たちの3月に相当する。

[8879] イルカ――哺乳類に属する海洋生物。

上げ、それらをすべて一緒に[8880] 、神――父と子と聖霊――を賛美しつつ、尊厳をもって埋葬した。神に、私たちからも永遠の栄光がありますように。アーメン。

コンダク、第2声調:

信仰の敬虔さの擁護者たちよ、不義な支配者を唾棄し、その獣のような流血を糾弾した。そして、キリストの助けによって強められ、その激しい抵抗に打ち勝った、フィルセとレフキエよ。殉教者たちと共に、私たちのために祈ってください。

12月28日

12月15日（旧暦）

聖司祭殉教者エレウフェリウスとその母アンフィアの殉教

記念日12月15日

熱心な偶像崇拝者であったエライアス・ハドリアヌス[8881] の治世の頃、素晴らしいエレウフェリウスが、まるで明るい星のように輝きました。彼はローマで、高貴で裕福な両親の間に生まれました。　聖エレウフェリオスの父は三度にわたり軍司令官に任命され、一方、その母はさらに大きな名誉と栄光に値する存在となった。というのも、聖使徒パウロの教えを受け、彼から洗礼を受け、アンフィアと名付けられたからである。　彼女は息子をエレウフェリウスと名付け、厳格な敬虔さの中で彼を育て上げた。そして彼が成長するにつれ、ローマ教皇アナクレトスの手を通じて[8882] 、彼を神に捧げ、まさに主に見合うにふさわしい捧げ物としたのである。　大司教は、エレウフェリウスが品行方正な若者であることを見て、彼を聖職者団に迎え入れ、彼が十五歳になった時に彼を助祭に叙階し、その後、十八歳の時に司祭に叙階した。　聖人が二十歳になった時、ニキタ大司教は彼をイリリカの司教に任命した[8883] 。そこで聖なる司教は、燭台の上の灯火のように輝き、神の言葉の光で照らし、多くの人々を唯一の主への認識へと導いた。　しかし、憎しみに満ちた悪魔はこれを許すことができず、殺意に満ちた憎悪をもって聖人に対して猛烈に立ち向かった。

悪魔は、不義な王アドリアヌスに、真理に反旗を翻し、キリスト教徒を迫害し、とりわけエレウフェリウスを殺害するよう唆した。また、キリストの栄光の最良の果実である、敬虔さの優れた教師たちをもすべて滅ぼそうとしたのである。　そこで王は、恐ろしい書簡を携えたある地方総督フィリクスを派遣し、エレウフェリウスを力ずくで王の法廷へ連行させた。　フェリクスはイリュリアにたどり着くと、善良な牧者が主の神殿で教えの言葉を説き、信徒たちを養っている時機を見計らい、

[8880] 聖殉教者たちは287年頃に殉教した。397年頃、コンスタンティノープルの城壁の外にフラウィウス・ケサリウスによって壮麗なフィルス神殿が建設され、その中に彼の聖遺骨が安置されていた。　その後、彼は幻視の中で皇后プルケリアに現れ、地中に隠されていたセバスティアの40人の殉教者たち（記念日は3月9日）の聖遺骨をその神殿の近くに安置するよう命じ、その指示に従って450年に発掘された。 もう一つの神殿は、ユスティニアヌス大帝によって、いわゆるテオドシウス市場からほど近い場所に彼のために建てられた。

[8881] ハドリアヌスはローマ皇帝であり、西暦117年から138年まで在位した。彼はキリスト教徒に対して特別かつ長期にわたる迫害を行ったわけではないが、異教の不義を熱心に擁護し、その治世下で多くのキリスト教殉教者が犠牲となった。

[8882] 聖アナクレトスは、79年から91年までローマ教皇を務めた。

[8883] イリリック、あるいはイリリアは、アドリア海沿岸の東部全域とその背後の地域（現在のダルマチア、ボスニア、アルバニア）を網羅していた。

兵士たちで教会を取り囲み、怒りに満ち、悪意に満ちた眼差しを向けながら神殿内に乱入した。　そこで、エレウフェリウスが純粋な教えを溢れんばかりに語り、聴衆を甘美な声で教えているのを見ると、彼自身も立ち止まって注意深く耳を傾け、彼が説くキリストの力に驚嘆し、　そしてたちまち、怒りを柔和さに変え、神の言葉の種を受け入れる準備ができた心の畑を持ち、まるで羊のようになり、迫害者からキリストの弟子へと変わった。まるで過去のすべてを忘れたかのように、彼は強盗から、キリストの善良で忠実な僕へと変わったのである。　王の命令を無視して、彼は聖なる司教の足元にひれ伏し、それ以来、師のそばを離れず、その説教によって啓発され、敬虔さを深めていった。

こうしてフェリクスは、異教の不敬虔から敬虔へと立ち返り、もはや自分を遣わした者のもとへ戻ることを考えもしなかった。一方、聖エレウフェリウスは、キリストの聖なる信仰のために殉教することを望み、急いで旅路についた。　フィリクスも彼と共に歩いたが、もはや囚人を連行する総督としてではなく、羊が羊飼いに従うように、聖人の後を追った。　道中、泉にたどり着いたとき、フィリックスはまるでカンダキアの第二の宦官のようになり、使徒フィリポから洗礼を受けたあの宦官（使徒行伝8:30–39）のように、神聖なるエレウフェリウスから洗礼を受け、偶像崇拝という闇を、あたかも腐った衣服を脱ぎ捨てるかのように振り払った。

その後、フィリックスはエレウフェリウスと共に旅立った。

彼らがローマに到着すると、キリスト教徒たちはフィリクスがキリストの教会に加わったことを知った。フィリクスは彼らにエレウフェリウスについてすべてを語った。そして、王の命により、エレウフェリウスは法廷に召喚された。彼は、まるで裁判ではなく祝祭に招かれたかのように、勇敢かつ恐れを知らずにそこへ現れた。　王は彼を一目見て、彼がまだ若く、端正な容姿で、あらゆる天賦の才に恵まれていることに気づき、こう言った。

「エレウフェリウスよ、お前は先祖代々の信仰を捨て、我々の神々への崇拝を何とも思わずに、ある新しい神を崇めている。その神は、人々の目の前で死んだだけでなく、最も残酷な死を遂げたのだ。」

エレウフェリウスは、苦しみの中にあってもピラトの前では何も語らず、ヘロデにも何も答えなかったキリストに倣い、この言葉に対して何も答えることを拒んだ。すると王は再びこう言った。

「さあ、答えよ。なぜ、お前はこれほどまでに正気を失い、狂気じみたキリスト教の信仰に身を投じたのか？　私に服従し、我らの無敵の神々に犠牲を捧げよ。もし私の言うことを聞き、これを実行すれば、私はお前を大いなる栄誉で称える。しかし、もし実行しなければ、お前に激しい苦痛を科すことになる。」

エレウフェリウスは、*「だから、答えるべきことをあらかじめ考えようとしないように心に留めておきなさい。わたしが、あなたがたに、反論できないような口と知恵を与えるからである」*（マタイ10:19、21:15）と言われた主を呼び求め、こう答えた。

「どうして私がそのような神々に仕えたり、彼らに仕える者たちに同意したりできるでしょうか。　むしろ、あなたがたにそれらから離れるよう勧めるほうがよいのではないか。しかし、あなたがたは私の言うことを聞こうとしないのだから、あなたがたの愚かさを嘆くほかない。あなたがたは神から知恵を授かっているにもかかわらず、木や石よりも劣る存在となってしまった。なぜなら、全宇宙を御自身の知恵によって創造された真の神を捨て、それらを自分たちの神と見なすようになったからだ。　天と地は御手の業であり、私たちこそ、神が創造されたものの中で、最も優れた、最も高貴な被造物だからです。それにもかかわらず、私たちは無知のゆえに迷い、あたかも闇の中を歩むかのように、主の御心に適うか否かを知らずに、主に対して戦いを挑んでいるのです。　それなのに、真に私たちの敵であり、対立者である者たち――すなわち悪魔たち――を、自分たちの主や神と見なし、彼らに敬意や犠牲を捧げるなど、なんと狂気なことであろうか！　私は主につかまり、常に主に忠実であり続け、私のキリストに仕えるつもりだ。　それにもかかわらず、あなたがたが与えるもの――それが栄誉であれ、不名誉や苦痛であれ――を、私は子供の遊びや脅しに過ぎないと見なす。私

の師である聖パウロが言うように、「*私にとって、この世は十字架につけられ、私もまたこの世に対して十字架につけられた*」（ガラテヤ6:14）のであり、キリストのために死ぬことは、私にとって喜びであり、至福である。

すると、王は怒りに満ち、青銅の床を運ばせ、その下に大量の熱い炭を敷かせ、その床の上に殉教者を裸のまま横たえさせ、彼が死ぬまで火を絶やさないよう命じた。床の準備が整うと、殉教者は自ら全身をその上に横たえた。　この光景を見物するために集まった民衆は、この拷問に対して拷問者たちを非難し、こう言った。

「なぜ、この誠実で高潔、かつその知恵で知られるこの男が、まるで悪党のように残酷に死ななければならないのか？」

しかし、天の御手によって殉教者の苦しみは和らげられ、彼はまるで露に冷やされているかのように喜び、まるで咲き誇るバラの上に横たわっているかのように安らぎを感じていた。そこで王は、怒りを少し鎮めると、殉教者がすでに死んだと思い込み、火床からその遺体を降ろすよう命じた。しかし、殉教者は火の被害を微塵も受けず、生き生きと健やかな姿で寝台から立ち上がり、喜びに満ちて歓呼しながらこう歌った。*「わが神、わが王よ、私はあなたを賛美し、あなたの御名を永遠に、永遠に祝福します…… 代から代へと、あなたの御業を賛美し、あなたの御力を宣べ伝えるでしょう」*（詩編144:1,4）。

このように神を賛美した後、エレウフェリウスはさらに大胆に拷問者の前に進み出て、こう言った。

「おお、王よ、あなたが火で焼かれたと思っていたこの私を見よ。そして、私が宣べ伝えているキリストなる神を知り、あなたの神々の無力さも知れ。」

王は、殉教者のこの大胆かつ率直な言葉を自分への侮辱と受け止め、自ら敗北したと感じ、さらに過酷な拷問を考案し始めた。そこで、再び中央に鉄の格子が運び出された。その下には火が焚かれ、上からは油が注がれ、こうして格子は激しい炎に包まれた。　しかし、殉教者がこの格子の上に置かれるやいなや、火はたちまち消え、炭は冷め、鉄の格子も、あたかも油ではなく水をかけられたかのように冷たくなり、こうして殉教者は無傷のまま守られた。しかし、果たして王の怒りはこれで収まっただろうか？　全くそうではなかった。　激しい怒りに駆られた王は、決して良心を取り戻すことはなかった。まるで盲目であるかのように、彼にはただ一つの意図しかなかった――聖人を拷問することで、本質的には悪魔であり人殺しである自らの神々を喜ばせることだった。

その後、王はフライパンを持ってくるよう命じ、その上で蝋、樹脂、豚脂を溶かし、強火で熱して、再び聖人をその上に載せるよう命じた。これらすべてが実行され、フライパンが熱くなり、蝋が沸騰したとき、殉教者はすべての苦痛に耐え抜こうと、その上に立った。しかし、王は彼にこう言った。

「エレウフェリウスよ、生死の境に立たされている今、急いで自分にとって有益な道を選びなさい。私は、あなたが残酷な死を遂げないよう深く心を配っており、実の息子のようにあなたを愛しているのだ。 また、―― ――神々に誓って言うが、これほど高潔で、品行方正で、雄弁で、素晴らしい人物が、無謀にも自ら破滅へと身を投じることを望まない。それも、他の何のためでもなく、ただ高慢で、虚栄心に満ち、無益な不服従のためだけに。

一方、殉教者は王の前に立ち、大胆に語りかけた。王の狡猾な諂いに対して、彼は王を「キリストの羊に襲いかかる狼」と呼んで罵倒した。そして、こう付け加えた。

「お前が何をしようとも、私がこの敬虔な生き方を捨てるよう説得することはできない。」

すると、ハドリアヌスは激怒し、言葉を切り上げて行動に移した。彼は再び、聖人を鉄板の上に載せるよう命じた。　それが実行されると、以前と同じことが起こった。火は露へと変わり、涼しい風が聖なる殉教者を冷やし始めた。一方、ハドリアヌスは、すべてが自分の意志に反して進んでいるのを見て、どうすべきか分からず、座ったまま考え込んだ。その時、コリヴという名の都市の総督

がそこにいた。　彼は神に選ばれた人物であった。すでにキリスト教の教えをある程度知っており、総督フェリックスがどのようにしてキリスト教徒になったかを知っていた。そして、まるで種のように、すでに心の中にキリスト教信仰の萌芽を受け入れていたが、依然として異教の不敬に従い、王に非常に迎合していた。

王がひどく当惑し、殉教者をどう扱えばよいか分からずにいるのを見て、彼は王に、鋭い鉄の棒が散りばめられた銅の炉を燃え上がらせ、エレウフェリウスをその中に投げ込むよう命じるよう助言した。　炉が白熱すると、殉教者は肉体の目と魂の目を天に向け、全精神を天に注ぎ込み、言い表せないほどの喜びに満たされて、こう述べた。

「主イエス・キリスト、わが神よ、あなたに感謝します。あなたは私にこれほど大きな恵みを与え、御力によって私を固め、あなたの聖なる御名のゆえにこの苦難に耐え抜く力を与えてくださいました。　今、天より御目を向けて、私を憎む者たちが私に対して謀議を練っている様子をご覧になり、彼らの策略と、血にまみれた者たち[8884] から私の魂を救い出してください。あなたは慈愛に満ちておられるからです。私を守り、宇宙の果てに至るまで、すべての者が唯一の神であるあなたを知ることができますように。

その後、自分を石で打ち殺そうとする者たちのために祈った聖なる初殉教者ステファノのように、エレウフェリウスは自分の迫害者たちのために次のように祈り始めました：

「おお、至慈愛なる主よ。彼らの心に触れ、御自身の聖なる御名を知らしめ、唯一の真の神であるあなたを知り、偶像への破滅的な崇拝を捨てさせてください。あなたは永遠に祝福された方です。アーメン。」

殉教者がこのように祈っていると、コリヴはその祈りの言葉に注意深く耳を傾けていた。すると、その敬虔な言葉がまるで燃える炭のように、彼の心を瞬く間に燃え上がらせ、彼はすっかり心変わりした。彼は王のもとへ歩み寄り、こう言った。

「なぜエレウフェリウスは、何の罪もないのに、あたかも何らかの悪行を犯したかのように、このような苦痛にさらされているのですか？　そして、どのような罪のために、これほど残酷な死に追いやられているのですか？」

王は、コリヴのこの予期せぬ言葉を聞いて心を憤らせ、彼を睨みつけながら言った。

「お前こそ、我ら皆が知るコリヴか？　どうしたのだ？　それとも、彼の母から奪った金に惑わされ、これほど突然に変わってしまったのか？　ローマ全土で名を轟かせた、私の賜物、富、名声、名誉、そして財産に、お前は満足していないというのか？　それとも、私からさらに多くを望んでいるのか？　それは君にとって自由だ。ここに私のすべての財宝を君の前にさらけ出そう——両手で好きなだけ掬い取れ。だが、取るに足らない金のために、密かに女に買収されるような真似はするな。

コリヴは、善意に奮い立ち、殉教者の祈りに導かれて、こう叫んだ。

「その金は、お前に破滅をもたらすだろう。なぜなら、そこから永遠の火が燃え上がるからだ！」　なぜ、あなたは勝手にそのように目を曇らせ、揺るぎないものを揺るがそうとするのか？　あなたの神々のうち、ここに立っている者たちを火から守ることのできる者は一人もいないことを、あなたはよく知っているはずだ。しかし、エレウフェリウスが崇める神は、彼を火よりも強く、いかなる苦しみよりも高き存在にされたのだ。

この言葉を聞いた拷問官は、言い表せないほどの激怒に燃え上がった（まことに、深い友情は時に激しい憎しみを生むものである）。彼はその夜、エパルカを、エレウフェリウスのために準備す

[8884] 「血に飢えた者たち」とは、詩篇の作者による表現（詩篇5:7, 54, 54; 58:3など）であり、血に飢え、凶暴な人々を指す。

るよう彼が勧めたまさにその炉に投げ込むよう命じた。　コリヴがすでに炉のそばに立ったとき、彼は殉教者エレウフェリウスに向かって叫んだ。

「私のために祈り、あなたが総督フェリクスを武装させたのと同じキリストの武器で、私をも武装させてください。」

そして、殉教者から十字の祝福を受けた後、彼は炉に投げ込まれたが、無傷のままであり、一時間後に神を賛美しながらそこから出てきた。　ついに、アドリアヌスは怒りに耐えきれず、コリヴに首を斬るよう命じた。こうして彼は殉教の死を迎え、短期間のうちに、多くの人々がこれほどまでに渇望する宝を手に入れたのである。

その同じ夜、エレウフェリウスもまた炉に投げ込まれた。炉の中では、鋭い鉄の棒の上を彼を引きずり回そうとしたが、火は以前と同様に消え、炉は冷め、鉄の先端はまるで殉教者の遺体に敬意を表するかのように折れてしまった。　これらすべては、拷問者の心の盲目さを暴き、すぐそばに立っていた人々を、これほど輝かしい奇跡をなされた主を知るよう導いた。

すると、そこに立っていた者たちは皆、こう叫んだ。

「エレフフェリウスが宣べ伝えたキリストの神は偉大なり！」

そして再び、拷問官はどのようにすべきか大いに困惑し、殉教者を牢獄へ連行するよう命じた。一方、彼は側近たちを集め、一日中、エレウフェリウスをいかにして滅ぼすかについて協議を重ねた。　一方、聖なる殉教者エレウフェリウスは、牢獄の中で飢えに苦しんでいた。しかし、かつてアバクムを通じてダニエルを、またカラスを通じてエリヤを養われた方（ダニエル書14:37、列王記上17:6）――その方が、エレウフェリウスを飢え死なせることを許されなかった。主は天使の糧を与え、鳩を通じてそれを牢屋に送られた。ついに、拷問官は野生の雄牛を連れてくるよう命じ、殉教者をそれらに縛り付け、雄牛に引きずられ、苛まれることで、彼を殺そうとした。

こうした出来事が繰り広げられている最中、主の天使が天から降りてきて、聖人を雄牛から解き放ち、拷問者たちの手から救い出し、町の近くにあるある山へと連れて行った。そこは人里離れた場所で、多くの獣が生息していた。　しかし、聖殉教者エレウフェリウスは、主に賛美を捧げながら、まるで羊たちとでもいるかのように、それらの獣たちと共に暮らしていた。ライオンやクマが彼のそばを通り過ぎ、さらには彼に寄り添うことさえあった。まるで彼の声を認識しているかのように、彼らは主人の従者のように、どこへでも彼に従い、彼に仕え、彼を守っていた。　しかし、しばらくして、聖人の存在が獣狩りをする者たちの耳に入り、その知らせはハドリアヌス帝の耳にも届いた。そこで彼は、エレウフェリウスを捕らえるために兵士たちを派遣した。　兵士たちが聖人を見つけたとき、獣たちはまるで主人の敵であるかのように兵士たちに襲いかかり、彼らを噛み殺そうとしたが、エレウフェリウスはそれを制止し、獣たちに荒野へ退くよう命じた。　一方、聖人自身は、まるで招待された宴会に向かうかのように、喜びをもって兵士たちと共に処刑の場へと向かい、彼らに神の御国や、偶像崇拝者たちのために用意された火の地獄について語りかけた。

道中、エレウフェリウスは彼らにキリストの教えを説き、洗礼を授けた。彼らと共に、さらに五百人もの信者たちも洗礼を受けた。ローマに到着すると、彼は野獣に食われる刑に処された。　聖人が処刑場へ連行されると、まず雌ライオンが放たれ、次に雄ライオンが放たれた。しかし、それらはまるで羊のように柔和で、彼の足を舐め始めた。神の御心により、荒野でこれほど多くの獣たちが主人のように彼に仕えていたのだから、彼らがどうして彼に触れることができようか。これを見た民衆は皆、声をあげて叫んだ。

「エレフテリオスの神は偉大なり！」

一方、聖なる殉教者を非難し、彼を魔術師や呪術師と呼ぶ者たちもいたが、彼らには突然、神の懲罰が下った。その中の一部は、言葉を失ってしまった。拷問官は、これ以上どうすべきか分からず、剣で聖人の首を刎ねるよう命じた。　それが実行されると、息子の偉業をずっと喜びながら見守っていたエレフテリオスの母アンフィアは、息子の遺体を抱きしめ、その頬に口づけをし始めた。キ

リストのために、彼女から注がれた尊い血が流されたことを喜び、神に感謝しつつ、彼女自身も剣で首を斬られ、息子の遺体の上に倒れて息絶えた。　ここにいたイリュリク出身の信者たちやローマの信者たちは、神の聖徒たちの聖なる遺体を運び出し、主を賛美しつつ、尊厳をもって彼らを葬った。主よ、永遠に栄光あれ、[8885]。アーメン。

聖殉教者のコンダク、第2調:

尊き司祭の模範であり、受難者の前兆であるあなたを、我らは皆称え、聖殉教者エレフフェリイよ、あなたに願う。あなたの記憶を愛をもって祝う我らを、様々な苦難から解き放ち、絶えず我らすべてのために祈り続けてください。

聖ステファノ・イスポヴェドニク、スロジ大司教の伝記

記念日：12月15日

私たちの尊い父ステファノは、大カッパドキアで、キリスト教徒の両親の間に生まれ、彼らは彼を正しいしつけで育てました。幼い頃から彼は品行方正で、普通の子供たちの遊びからは距離を置いていました。　七歳の時、両親は彼を文字を学ぶために学校へ預けました。彼は学習の才能に恵まれており、間もなく聖書に精通するようになりました。そして十五歳になると、彼は故郷を離れ、コンスタンティノープルへ赴き、そこで学業を完成させたいと願いました。　これは、テオドシオス・アドラミテネス[8886] 皇帝と聖ゲルマン総主教の治世下でのことだった。そこで聖ステファノスは熱心に学び続け、哲学を修めた後、その知恵において多くの人々――教師たち自身さえも――を凌駕し、誰もが彼の卓越した知恵に驚嘆した。

ステファノスの評判を耳にしたコンスタンティノープル総主教聖ゲルマノスは、彼を呼び寄せ、祝福を与えた後、どこの国から来たのかと尋ねた。ステファノスは自分のことをすべて語った。総主教は彼の高潔な品性、卓越した知恵、そして謙虚さを気に入り、ステファノスを自分の元で暮らすようにした。　至福のステファンは数年間、総主教のもとで過ごし、聖なる教会に仕え、節制と清らかな良心をもって生活した。その後、誰にも知られぬままコンスタンティノープルを去り、ある修道院にたどり着くと、そこで修道士の剃髪を受け、徳を磨いて修行に励んだ。　その後、沈黙に満ちた生活を求めるようになり、修道院を離れ、人里離れた誰にも知られていない場所を見つけ、そこでかなりの期間を過ごし、断食と祈りをもって神に仕えた。

その頃、スローシュの町にいた司教が世を去った[8887]。そこで、スローシュの住民たちはコンスタンティノープルへ赴き、聖なる総主教ゲルマンのもとを訪れ、スローシュのために司教を任命するよう懇願した。司教の任命について協議が行われた際、ある者はこの人物を、別の者はあの人物を望んだため、意見の相違が生じた。　一方、スロジェの住民たちは、皇帝と至聖なる総主教に対し、

[8885] 聖殉教者エレウフェリウスとその母アンフィアは、西暦120年頃に殉教した。聖殉教者エレウフェリウスの聖遺骨は現在、ローマの殉教者ソサナ教会に安置されている。 4世紀末、アルカディウス帝の治世下、コンスタンティノープルのキシロロフ近郊に（ヴァシレイオス・パトリキオスによって）彼に捧げられた教会が建立された。聖ヨセフ・ボスノピストは、この聖殉教者を称えてカノンを編纂したが、その第8歌には、彼の聖遺骸から癒しと奇跡の川が流れ出ていると記されている。

[8886] テオドシウス3世・アドラミテネス – 715年から716年まで在位したビザンツ皇帝。

[8887] スロジ、あるいはスグデア――クリミア半島の南岸に位置する古代ギリシャの都市。現在はスダク――タウリカ州の集落。

教会を適切に統率できる司教を授けてくれるよう懇願した。「なぜなら、」と彼らは言った、「わが町では異端が蔓延しているからだ」。

ある夜、聖ヘルマンが祈りを捧げていたとき、主の天使が現れてこう言った。

「明日、神の選ばれし者ステファノが住むあの荒野へ行きなさい。彼をスローザの司教に任命しなさい。彼はキリストの羊の群れをうまく牧し、異端者たちを真の信仰へと導くことができるからだ。わたしもまた、神から彼のもとへ遣わされた者であり、彼があなたの言葉に何一つ背かないよう命じられているのだ。」

「ああ、主よ」と総主教は言った。「神に選ばれたステファノが住んでいる場所を、どうすれば知ることができるのでしょうか？」

すると天使は、総主教の従者の一人を連れて行き、聖人の居場所を示した。その従者は戻ってくると、このことを総主教に伝えた。

一方、その頃、隠れ家で神に祈りを捧げていた聖ステファンの元には、白い衣をまとったその主の天使が現れた。聖ステファンは恐れおののき、戦慄して恐怖のあまり地面にひれ伏した。

天使は聖人の手を握り、次のように言って彼を落ち着かせた。

「私は主の天使であり、救い主キリストから遣わされ、あなたに喜びを告げ、スロジの町へ行き、人々にキリストの信仰を教えるよう命じるために来た。明日、総主教はあなたを呼び出し、叙階して大司教としてそこへ遣わすだろう。あなたは彼の言葉に背かず、神を怒らせないようにしなさい。」

その後、天使は彼に平安を授けて、天に昇っていった。

翌日、総主教は使用人と共に二人の司祭を聖ステファノのもとへ遣わし、彼らは彼を大いなる栄誉をもって総主教のもとへ連れて行った。

総主教は聖ステファノを喜びをもって迎え、叙階してスロジの大司教に任命し、船で彼に委ねられた教区へと送り出した。

スロジの街に到着し、大司教の座に就くと、聖ステファノスは聖書に基づいて人々に教えを説き始め、5年間にわたり、スロジの街全体とその周辺地域の人々をすべて洗礼した。

その頃、コンスタンティノープルではレウ・イサウリア人が即位し、二人のユダヤ人から教えを受けたことをきっかけに、聖像破壊運動を巻き起こした[8888] 。彼はまず、聖なる聖像を高い場所に掲げるよう命じ、こう言った。

「清らかな者は、それらに口づけせよ。」

その後、聖像を壁に釘付けにしてはならないと説明し、聖像を空中に掲げるよう命じました。そして、この忌まわしい王は、聖なる聖像の崇敬に対して他にも多くの悪行を働きました。 聖なる総主教ヘルマンは、聖典[8889] に基づいて説き、彼にその邪悪な企てを止めるよう繰り返し諭した。しかし、その諭しに激怒した聖像破壊者は、それまで心に秘めていた憎悪を露わにし、聖なる聖像を激しく追放し、冒涜し、侮辱し始めた。

その後、レフは街全体および多くの周辺地域に布告を送り、聖なるイコンに対して同様に扱うよう命じ、次のように述べた。

「もし私に逆らう者がいれば、その者を様々な拷問にかけて、死刑に処す。」

[8888] ビザンツ皇帝レウスは、小アジアのイサウリア地方にその家系を遡り、717年から741年まで在位した。彼は特に726年に、聖像崇拝に反対して立ち上がった。これが、彼に対する民衆の反乱を引き起こした。

[8889] この際、ゲルマン総主教は、全地公会議なしに信仰に関する事柄に新たなものを導入することはできないとして、聖像崇拝に反対する皇帝の勅令への署名を拒否した。

当時、都では正教徒たちが様々な拷問にさらされている光景が見られた。また、不敬虔な王は総主教ゲルマンを流刑に処し、その代わりに、自身の異端思想に同調するシリア出身のアナスタシオスを総主教に任命した。

その後、王と総主教は、スローシュにいる聖ステファノ大司教のもとへ使者を派遣し、イコンや十字架を崇拝してはならないという邪悪な命令を下した。聖ステファノは大使たちにこう答えた。

「そのようなことはあってはならない。私は民がキリストの律法から背くことを許さない。王の命令も、あの忌まわしい総主教の命令も聞き入れない。」

夜、彼は使節たちの乗る船を訪れ、彼らと共にコンスタンティノープルへと向かった。

聖職者の装いを身にまとった聖ステファノは、皇帝の前に進み出た。皇帝は彼に尋ねた。

「お前は誰だ？」

聖人はこう答えた。

「私はスロジの大司教ステファノスです。」

すると皇帝は言った。

「この公会議を見よ。彼らは私と共に大いなる栄誉の座に就いている。彼らはイコンを焼き払い、切り刻んだ。お前も私の言うことを聞けば、我々と同じ大いなる栄誉に浴することになるだろう。」

聖ステファノは答えた。

「そのようなことは決してありえません。たとえあなたが私を焼き殺そうとも、切り刻もうとも、あるいは他のいかなる拷問で苦しめようとも、私は聖像と主の十字架のために、あらゆる苦難に耐える覚悟があります。」

その後、聖人は王にこう言った。

「我々は書物の中に、コンスタンティノープルに、聖なるイコンを焼き払う不敬虔な王、すなわちイコン破壊者が現れるという預言を見出した。しかし、神があなたの治世において、そのようなことが起こらないようお守りくださいますように！」

「その王の名前はわかったか？」と王は尋ねた。

「その名はコノプです」とステファンは答えた。すると王は言った。

「その通りだ、ステファン。お前は私の名前を当てた。父と母は私をコノプと名付けたのだ。」

するとステファンは言った。

「おお、王よ！　どうか、あなたの治世において、このようなことが起こりませんように。もしあなたがこれを成し遂げれば、あなたは反キリストの先駆者となるでしょう！」

聖人からこの言葉を聞いた呪われた王は、鉄の手袋でステファンの顔、口、歯を殴りつけ、こう叫んだ。

「よくも私を反キリストの先駆者などと呼んだな！」

そして王は、ステファンを髪と顎鬚をつかんで引きずり回し、殴打し、地面を引きずり回して、牢獄に投げ込むよう命じた。拷問者たちに引きずられながら、聖人は神に感謝を捧げ、他の聖人たちも収容されていた牢獄に投げ込まれた。その後、王は再びステファンを自分の元へ連れてくるよう命じた。

「スロジの司教め、よくも私をそんな風に呼んだものだ！」と王は言った。「殴りながらここに引きずって来い。」

聖人は七人の司教たちと共に王の前に現れた。王は、主、聖母マリア、そして洗礼者ヨハネのイコンを手に持ちながら、聖人にこう言った。

「なぜ私を反キリストの先駆者と呼んだのか？」

聖人は答えた。

「お前は彼の行いをしているからだ。私はすでにそう言ったが、改めて同じことを繰り返す。」

すると王は聖像に唾を吐きかけ、それを踏みつけながらステファノに言った。

「お前もこの聖像に同じことをしろ。」

聖人は涙を流しながら言った。

「神の敵よ、王位にふさわしくない者よ！　なぜお前の狂った目は盲目にならず、不法なお前の手は萎え果てないのか？　神がまもなくお前の王位を奪い、お前の命を絶たれるように。」

これを聞いた王は怒りに駆られ、聖ステファノを鞭打つよう命じた。その後、彼は馬の尾に縛り付けられ、牢獄へと引きずり込まれたが、聖人は神に感謝を捧げていた。　牢獄に囚われていた者たちは皆、神に祈りを捧げた。そして、聖人たちの祈りによって、まもなく不義な王は死に、その息子コンスタンティノス・コプロニモスが王位についた。　王妃は、聖ステファノの徳行と奇跡を耳にすると、夫であるコンスタンティノス王に、聖人を自分の教区へ帰すよう懇願した。ちょうどその頃、王に息子が生まれ、聖ステファノがその子の洗礼を執り行った。王はステファノに贈り物を授け、大いなる栄誉をもって彼を自分の信徒たちの元へ送り出した。　こうして、この善良な牧者は再び自身の司教座に就き、長い間、彼に託されたキリストの羊の群れを献身的に導いた。その後、神のもとへの旅立ちを予感した彼は、自身の後任として、スローシュの大司教に自身の聖職者フィラレートを任命し、12月15日、[8890] に、神のもとへ永遠の命へと旅立った。

スローシュには、エフレムという名の男がいた。彼は母の胎内から盲目であったが、聖ステファノは彼に食事や飲み物、衣服を与えて助けていた。恩人の死を耳にした彼は、泣きながらこう言った。

「今、誰が私の面倒を見てくれるのだろう？　私を連れて行ってください。そうすれば、彼の聖なる足に口づけをすることができるでしょう。」

そして、彼が亡くなった聖ステファノの遺体の前に連れて行かれると、泣き叫びながらその足元にひれ伏した――すると、たちまち目が見えるようになった。この奇跡によって、神は御自身の御心に適う者が、聖人たちと共に奇跡行者および殉教者の列に加えられたことを示されたのである。そして、その聖なる遺体は、聖職者たちおよびスロジの民全員によって、多くの涙とともに、栄光のうちに埋葬された。これは、万人が賛美し、称え続ける神の栄光のためであり、永遠に続くものである。アーメン。

トロパリオ、第4調：

聖ステファノよ、聖なる殉教者よ、あなたは霊なる者たちと共に住まわれた聖人として、十字架を武器として受け取り、私たちの神キリストの至聖なる御像を崇拝しない偶像破壊者や異端者たちに断固として立ち向かい、悪しき者たちのあらゆる異端を断ち切られました。　それゆえ、殉教の冠を受け、あなたの都スロジをあらゆる敵意から救い出されました。今、私たちは聖なるあなたに祈ります。あらゆる邪悪な誘惑、災い、そして永遠の苦しみから私たちを救い出してください。

コンダク、第3調：

至高者の力によって聖なる強さを得て、あなたは王の偶像破壊的な迷いを打ち倒されました。今日、スローシュと私たち信徒には、栄光と富、すなわちあなたの聖遺物が与えられています。それ

[8890] 聖ステファノスは8世紀半ば頃に死去した。

らは天上の天使の位階によって運ばれ、賛美の歌と歌声をもって、偉大なる聖なるステファノよ、あなたを賛美しています。

聖パウロ・ラトルスキの記念日

記念日：12月15日

尊者パウロ・ラトルスキは、エレア[8891]の町で、高貴な両親の間に生まれました。幼い頃に父を亡くした彼は、フリギアの聖ステファノ修道院[8892]で育てられた。その後、間もなく母も亡くし、まだ少年であった彼は、ミレトスからほど近いラトレ山にあるある修道院で、神への奉仕に全身全霊を捧げた。　肉体を律するため、この聖なる修道士は決してベッドや藁の敷物の上に横たわることはなく、木や石にもたれかかり、わずかな眠りに身を委ねるだけだった。　しばしば、眠気を振り払うために、彼は背中に二つの大きな石を背負い、早課の時間まで修道院の周囲を歩き回ったり、あるいは近くを流れる小川の岸辺へと退き、木陰で涙ながらの祈りと神への黙想にふけったりした。　これらの修行にも満足せず、キリストに全身全霊を捧げるため、聖パウロは洞窟に籠って沈黙の生活を送り、その後、高い山に登ってそこに住み着いた。ある羊飼いが、偶然その隠遁生活を送る聖パウロを見つけ、彼に食料を届けていた。　霊的な完成へと歩みを進める中で、パウロは神から目に見えない世界を見通す賜物を受け、奇跡を行なった。　聖人の驚くべき功績と聖なる生涯の評判は、多くの修行者たちを彼のもとに引き寄せ、彼らは岩山のふもとに定住して修道院を築いた。コンスタンティノス・ポルフィロゲネトス皇帝[8893]は、しばしば彼に手紙を書き、祈りと助言を求めた。ブルガリア王ペトロスやローマ教皇[8894]も、彼の神に喜ばれる生き方を称えた。多くの訪問者によって静寂が乱されることを苦にしていた聖パウロは、二度、サモス島[8895]へと退去した。そこで彼は修道院を設立し、アガリア人によって荒廃させられた三つの修道院を再建した。　ラトルへの二度目の帰還後、彼は自らの死の時刻を予言した。その後、山を下り、兄弟たちを祝福し、安らかに主のもとへ息を引き取った[8896]。

トロパリオ、第4声：

無形の同住者であり、すべての聖人たちの協力者である、栄光に満ちたパウロよ、我らは汝を讃え、汝に祈る：我らが恵みを得んよう、常に我らのために祈り給え。

コンダク、第8調：

若き日から、賢き者よ、あなたは知恵を男らしく渇望し、世俗の騒動を捨て去り、三位一体の御住まいのために神聖な住まいとなり、あなたのもとに来る者たちを信仰によって照らしました。それゆえ、私たちはこう呼びかけます。「喜びなさい、パウロよ、至福なる者よ。」

[8891] エレアは、ペルガムの近くにある小アジア北西部のミシア地方にある都市である。

[8892] フリギアは小アジアの広大な地域であり、当初は半島西側の全中部を網羅していたほか、後にミジアに編入されたプロポンティス（大理石海）の南岸からヘレスポント（ダーダネルス海峡）に至る地域も含まれていた。

[8893] コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトス――ビザンツ皇帝。912年から959年まで在位した。

[8894] ここでいうのは、当然ながら946年から955年までローマ教皇の座にあった教皇アガピト2世のことである。

[8895] サモス島――エーゲ海（群島）の主要な島の一つで、小アジアの西岸に近い。

[8896] 聖パウロ・ラトルスキーは、956年12月16日に逝去した。

聖殉教者エレウフェリオス・クヴィキュリアリウスの記念日[8897]

記念日：12月15日

聖エレウフェリウスはビザンティウムの出身であり、その生涯を敬虔の花々で見事に彩りました。彼は王宮で教育を受け、まもなく名誉ある地位に就きました。当時、彼は富と名声において誰よりも優れていましたが、それにもかかわらず、この世の虚栄に惑わされることはありませんでした。朽ちることのない永遠のものを心に留め、この世のすべてを無に等しいものと見なしたエレウフェリウスは、*「不義の天幕に住むよりは、神の家の戸口に立つこと、」*を好んだ（詩篇83:11）と選び、その内なる知的な視線を神に向け、日々聖なる賛美歌を歌い、あらゆる美徳をもって自らの生涯を飾り立てた。これは、魂を蝕む敵にとって耐え難い光景であった[8898]、そこで彼は、この福者の奴隷の一人に、王の前で主人の悪口を言うよう唆した。

その奴隷は王のもとへ現れ、次のように告発した。

「私の主人は洗礼を受け、教会を建て[8899]、十字架にかけられた方を信じ、王の勅令を冒涜しています。彼は多くの聖像を手に入れ、キリスト教の神への礼拝を行い、断食や涙、地面への拝礼によって、自らの体を酷使しています。」

この主に対する使用人の告発を聞き、王は激しく怒り、聖人を呼び出した。しかし、聖人が現れると、王は怒りを隠して、あたかも穏やかな口調でこう言った。

「エレウフェリウスよ！　どうしてこのようなことになったのか。なぜあなたは私たちから遠ざかり、私たちを置き去りにし、宮廷の人々に対する私たちの愛、とりわけあなたに対する私の特別な配慮を軽んじているのか？」

これに対し、聖人はこう答えた。

「王よ！　私の体の様々な病が、私にそうせざるを得なくさせているのです。」

すると、王はこう言った。

「なぜ、あなただけが自分の邸宅で心地よい空気を満喫しているのですか？私たちもあなたを訪ねて、あなたと一緒に田園生活の恵みを味わうことはできないのでしょうか？」

聖人は、この王の言葉に特に注意を払わず、それ相応の重要性を与えなかった。　夕方になると、彼は愛する別荘へと引き上げ、いつものように個室に閉じこもって神への瞑想にふけった。そして眠りにつくと、夢の中で井戸のように深い淵を見、その中へと降りていくと、そこには美しい教会があった。　その幻視に戦慄を覚えたエレウフェリウスは、翌朝再び王のもとへ向かった。　王は再び優しい言葉で彼を誘惑し、キリストへの信仰を揺るがそうと試みた。しかし、言葉を無駄に費やし、聖人を堕落させることのできなかった王は、剣で彼の首を切り落とし、その尊い遺体を犬や鳥の餌として投げ捨てるよう命じた。　こうして、至福のエレウフェリウスは神に息を引き取った。その遺体は放置されていたが、ある司祭の位にあるキリスト教徒がそれを拾い上げ、聖油を塗り、香を焚いて、[8900]という特別な場所に埋葬した。

[8897] クヴィキュラリウスとは、王室の寝具係のことである。

[8898] すなわち、悪魔のことである。

[8899] ボスポラス海峡のアジア側、ビフィニアのサンガレ川沿いにある自身の領地にて。

[8900] 聖エレウフェリオスの埋葬地は、ビフィニアにある彼の領地であるとされている。この聖殉教者は、4世紀初頭のマクシミアヌス帝の治世下で殉教した。

聖パルド・隠者の記念日

記念日：12月15日

聖パルド[8901] はローマ出身で、若き日には荷馬車引きの仕事をしていた。ある日、彼は自分のラクダを連れてエリコへ向かい、そこで宿屋に身を寄せた。　するとある日、神の御許しにより、人類の敵の仕業、そしてパードの不注意によって、小さな少年がラクダの足元に巻き込まれ、ラクダに踏みつぶされて亡くなってしまった。　この不幸な出来事に深く心を痛めたパルドは、アリオン山へと身を隠し、そこで修道士となり、絶えず悔い改め、泣きながらこう繰り返した。

「私は少年を死なせてしまった。殺人者として裁かれるべきだ。」

パードが住んでいた場所からそう遠くない谷には、一頭のライオンが棲んでいた。聖なる父はライオンの巣穴へ赴き、投石器で獣を突いて、怒り狂わせて自分を引き裂かせようとした。しかし、ライオンは彼に何の危害も加えなかった。　そこで老聖人は、自分の目的が達成できないと悟ると、ライオンが水を飲みに川へ向かう道に横たわって眠ることにした。獣が通りかかり、自分を見て引き裂いてくれることを期待し、こうしてここで苦しみを受けることで、少年を殺した罪による来世の苦しみから解放されることを願ったのである。　聖人はそう決心した通りに行動した。道に横たわり、衣服を脱いで自分のそばに置いた。すると、その小道を通りかかったライオンは、まるで人間であるかのように、聖人の上を飛び越え、黙って彼に触れることもなく通り過ぎていった。　その時、老修道士は、主が　その罪を赦してくださったことを悟り、山の上の住処に戻り、その後の生涯を通じて、死に至るまで、常にすべての人々に対して高潔な人物の模範を示し続けた。

12月29日

12月16日（旧暦）

聖預言者ハガイの記念日

12月16日の記念日

聖預言者ハガイはレビ族の出身であり[8902] 、バビロン捕囚の時代に生まれた[8903] 。まだ若き頃、彼はバビロンからエルサレムに戻り、そこで聖預言者ザカリヤと共に三十六年間預言を行った。二人はともに、キリストの受肉より500年余り前に生きていた。 聖アゲイは、最初の神殿――ソロモンの神殿――の跡地に建てられた第二エルサレム神殿の建設と同時代の人物であった。この神殿の建設は、バビロン捕囚から帰還した後、ユダヤ人の指導者ゾロバベルによって着手された。ゾロバベルは、ペルシャ王キュロスによって故郷への帰還を許されたユダヤ人の指導者であり、キュロス王は彼をユダヤの統治者に任命していた。　神殿の建設は大きな困難を伴いました。なぜなら、サマリア人たちがこれを妨害したからです。ユダヤ人たちは、不浄なものや異教的なものから礼拝の清さと神聖さを守りたかったため、サマリア人の神殿建設への参加を拒否していたのです。　サマリア人は、いくつかのペルシャの地方の首長を買収し、彼らにペルシャ宮廷の前でユダヤ人を誹謗中傷させた。

[8901] 聖パルドは6世紀、パレスチナで修道生活を送った。

[8902] レビは、ヤコブとリアの間に生まれた三男である。

[8903] カルデア王ネブカドネツァルは、紀元前587年にエルサレムを攻略し、これを破壊した。選りすぐりの市民とその家族（1万4千人から1万8千人）は、捕虜としてカルデアの首都バビロンへ連行された。　ユダヤ人たちはバビロン捕囚の状態に538年まで置かれていたが、その年、カルデア王国を打倒したメディア・ペルシャの王キュロスが、捕囚となっていたユダヤ人（約4万人の男性）を故郷へ帰還させた。

しかし、神殿建設の成功に対する最大の障害は、かつてのユダヤ人たちの熱意が冷めてしまったことでした。彼らは活動の矛先を他に向け、自分たちの家の建設や装飾に没頭し、「神の家を建てる時機はまだ来ていない」と考え、自らの無頓着さを正当化するために他の言い訳も並べ立てました。　そこで、この時、主はユダヤ人たちに預言者ハガイを遣わし、非難と警告、そして最高の助けの約束、さらには第二神殿が第一神殿よりも優れており、偉大であるという輝かしい預言をもたらした。　神の助けと、預言者ハガイおよびゼカリヤの協力により、ゾロバベルは敵の陰謀とユダヤ人たちの怠慢を克服し、紀元前520年に着工された神殿は、紀元前516年、ペルシャ王ダレイオスの治世の第六の夏に完成した。　「『主は言われた。「*ゾロバベルの手がこの家の礎を据えた。その手によって完成される。そうすれば、万軍の主がわたしをあなたがたのもとに遣わされたことを、あなたがたは知るようになる』」*（ゼカリヤ書4:9）。　神殿の建設に関する預言者ハガイのすべての言葉は、計四つである[8904]。その中で預言者は、ユダヤ人たちが神の家に対して無関心で怠慢であることを非難し、それゆえに彼らの行いが実を結ばず、土地が不毛となり、その他の神の懲罰が下っていることを指摘することで、彼らを建設へと奮い立たせた。　また、建設の安全性と適切な時期、この事業における神の臨在と庇護の確約、新しい神殿の偉大さと卓越性、彼らにとってのその必要性、そして主の御心を行うことに対する神の祝福の約束によっても、彼らを奮い立たせました。　預言者は、この神殿の将来の栄光と、地上の揺るぎない王国、すなわちキリストの王国の確立を、威厳をもって描いている。*「万軍の主はこう言われる。あと一度、それはまもなくのことだが、わたしは天と地、海と陸を揺るがし、すべての民を揺るがす。そして、すべての民が待ち望む方が来られ、わたしは、この家を栄光で満たす、と万軍の主は言われる。わたしの銀と、わたしの金、と万軍の主は言われる。　この最後の神殿の栄光は、以前のものよりも大きくなる、と万軍の主は言われる。そして、この場所で、わたしは平和を与える」*(ハガイ2:6–10)。

さらに、主は預言者にこう言われた。*「ユダの統治者ゾロバベルにこう告げよ。わたしは天と地を揺るがし、諸王国の王座を転覆させ、異邦の諸王国の力を滅ぼし、戦車とその乗る者をひっくり返し、馬とその騎手たちは互いに剣で打ち倒される。　その日、万軍の主はこう言われる。『わたしは、わたしのしもべ、サラフィヤエルの子ゾロバベルよ、あなたを、わたしの印として保つ。わたしはあなたを選んだからだ』と、万軍の主は言われる」*（ハガイ書2:21–24）。

聖アゲイは、その死後、祭司の家系に生まれたため、祭司の墓の近くに栄誉をもって埋葬された。彼は徳に満ちた人物であり、輝かしく偉大な預言者として、すべての人から愛され、敬われていた。 その名は、ヘブライ語からロシア語に訳すと、「祝日」または「祝う者」を意味する[8905]である。

聖アゲイは、丸い顎鬚に縁取られた端正な顔立ちの老人として描かれ、頭頂部は部分的に髪が薄くなっている。

至福の女王テオファニアの生涯。

記念日：12月16日

福者テオファニアはコンスタンティノープルで生まれ、王家の出身であった。彼女の父コンスタンティンはイリュストリアの位[8906]にあり、母アンナは誠実な夫婦生活を送っていたが、長い間子宝に恵まれず、子供がいなかったことを常に嘆いていた。　夫婦の結びから子宝に恵まれることを切

8904　ハガイ書 1:2–15、2:1–9、10–19、20–23。ハガイは、いわゆる「小預言者」12人のうちの1人であり、2章からなる彼の書は、これらの預言者の書の中で10番目の位置を占めている。

8905　預言者ハガイの名は、聖書において、いくつかの詩篇の題名（詩篇 137:1–8、145:1–10、147:1–9）、エズラ第一書（エズラ第一 1:1、5:1、6:1、14:1）や、使徒パウロの『ヘブライ人への手紙』（ヘブライ12:26）にも見られる。

8906 ビザンツ帝国では、王宮の最高位の高官をこのように呼んでいた。

に願い、彼らは聖母マリアに祈りを捧げ、フォラキア[8907] にあった聖母の尊い聖堂に頻繁に足を運び、熱心に祈りを捧げながら、聖母の前で心の内を打ち明けていました。

「どうか、世界の御母よ、あなたの慈悲によって私たちの不妊が解消され、あなたの取り成しによって、創造主から子宝を授かりますように！」と彼らは祈りました。

そして、彼らが信仰をもって願い求めたゆえに、熱心に祈りを捧げた御方からの恵みによって、その願いは叶えられた。彼らは不妊の悩みから解放され、女児を授かり、その子をテオファニアと名付けた。

六歳の頃から、テオファニアは読み書きを教えられ、あらゆる善行を導かれた。まだ幼い頃から、彼女の将来における偉大な美徳と聖性の明らかな兆しが見て取れた。　彼女の品行と聡明さを見て、テオファニアの両親は大変喜び、将来は彼女の敬虔さによって慰めを得られることを期待した。そのため、彼らは彼女を法に則って結婚させるべく、家柄、品行、知性の点で彼女にふさわしい若者を求めた。というのも、彼女はすでに結婚適齢期を迎えており、同年代の少女たちよりもあらゆる才能に恵まれていたからである。

その頃、バシレイオス・マケドニア王[8908] は、息子のレウ・ムドリー[8909] と結婚させるために、美しく徳の高い乙女を探していた。テオファニアを他のどの乙女よりも優れていると見なした王は、すでに王位継承者と宣言されていた息子と彼女を結婚させた。王室の婚礼は、万人の喜びと歓呼の中で執り行われた。

しばらくして、狡猾な敵が王宮に父と息子の間に不和の種をまき、父は激しい怒りを抱いて息子に立ち向かった。彼は息子とその妻テオファニアを捕らえ、牢獄に閉じ込め、厳重な警備を配置した。　これは、エウハイトの司教テオドロス・サンタヴァリン――皇帝レウが嫌っていた魔術師――の秘められた悪意と狡猾な策略によって引き起こされたものであった。

事の始まりはこうだった。ヴァシリー王の長男であり、レフ王の兄であるコンスタンティンが亡くなったとき、ヴァシリー王は彼を深く愛していたため、その死を深く嘆き、慰めようのないほど泣き続けた。　その時、前述の魔術師は、深い悲しみに沈む王を見て、彼を慰めようと、その魔術によって、亡くなった息子コンスタンティンが、馬にまたがり、王に向かって駆け寄ってくる姿を生き生きと見せつけた。 王は息子を両腕で抱きしめ、 な愛情を込めて彼に口づけをしたが、魔法の幻影と夢は消え去り、王は再び彼の姿を見失ってしまった。王は驚き、恐怖に駆られ、その幻影を現実だと信じ込み、サンタヴァリンを深く崇め、彼を真の友とみなして、彼の言うことすべてに従うようになった。　一方、若きレフ王は分別があり、神を畏れる者であったため、その魔術師を嫌悪し、神の敵として憎み、軽蔑した。フェオドールは、そのような軽蔑に対してレフ王にどう報復すべきか考え、次のような狡猾な策略を練った。　好機をうかがって、彼は王レフに二人きりで近づき、親しみやすく好意的なふりをして、こう言った。

「お前はまだ若く、父上と共に狩りに出ている。万が一に備えて、小さな剣を密かに携行しておくべきだ。時として獣を仕留めるために使い、また時として必要な時に父上に差し出すため、あるいは、父上に数多い家内の敵のうちの誰かが、　　が予期せず突然お父さんに襲いかかってきた場合――その時は、君がすぐに密かに持ち歩いている剣を取り出し、敵を打ち倒して、お父さんの命を救うことができるだろう。

この敵の狡猾な助言に従い、その悪巧みを疑うこともなく、レフは父と狩りに行くときや、どこかへ出かける際に、ブーツの中に小さな剣を密かに持ち歩くようになった。

[8907] フォラキア――コンスタンティノープルにある地域。

[8908] バシレイオス1世・マケドニア人――ビザンツ皇帝。867年から886年まで在位した。

[8909] バシレイオス1世・マケドニア人の後継者であるレウ6世「賢王」は、886年から911年まで在位した。

その後、狡猾なサンタヴァリンは密かにヴァシリー王にこう告げた。

「あなたの息子レフは、独り王位に就くために、あなたを不意に殺そうとしています。彼の邪悪な企みの証拠は次の通りです。あなたが狩りに出かけ、彼も同行する際、彼は足元のブーツの中に剣を隠して持ち歩いています。それは、好機を捉えて不意にあなたを刺し殺すために用意されたものです。　それを確かめたいのなら、実際に試してみてください――彼を連れて狩りに出かけ、野原に着いたら、彼のブーツの中身を調べさせてください。

まもなく、ヴァシリー王は息子の若き王を連れて狩りに出かけ、野原に着くと、レフ王がブーツの中に何を持っているか調べるよう命じた。すると、そこには隠された小さな両刃の剣が見つかった。　するとヴァシリーは、息子が自分を殺そうとしていたというサンタヴァリンの話を真実だと信じ込み、息子に対して言い表せないほどの激しい怒りと憤りに燃え上がった。

「だからこそ、彼は剣を用意していたのだ」と彼は言った。

一方、何の罪もないレフは、その剣を父を殺すためではなく、父の命を守るために携えていたのだと主張した。　しかし、激しく怒った父は、息子の言葉を一切聞く気もなく、直ちに彼と、その妻である聖なるテオファニアを、王宮内にあるある秘密の部屋に閉じ込め、厳重な警備を配置した。こうして、狡猾な魔術師サンタヴァリンはレフ王に復讐を果たした。そして、この件で最も恐ろしかったのは、そのサンタヴァリンの唆しにより、父が息子の目をえぐり出して取り除こうとしたことである。もし総主教と聖職者会議全体が王を制止していなければ、この計画は間違いなく実行されていただろう。

三年以上もの間、何の罪もないレフ王と聖なるテオファニアは、何の悪事も犯していないにもかかわらず、監禁されたままだった。そこで彼らは、監禁を嘆き、全知の神に自らの無実の証人となってくださるよう呼びかけながら、祈りと断食に専念するほか、何事にも従事しなかった。　シンクリトは何度か、王に息子のために取り成しを頼もうとしたが、適切な機会が見つからなかった。ついに、そのような願いを申し出ることができる機会が訪れた。その経緯はこうである。王の居室には、人間の声でいくつかの言葉を話すように調教されたオウムがおり、その発声で王や、その声を聞く者たちを楽しませていた。　ある日、王は聖預言者エリヤの祭りを執り行い、すべての廷臣を王宮の晩餐会に招き、盛大な宴を催して、皆に自分と共に喜び、楽しもうと呼びかけた。その鳥は、しばしば人間の言葉で、誰かに教えられたのか、それとも偶然なのかは定かではないが、次のような言葉を繰り返していた。

「ああ、ああ、ライオン様！」

これを聞いた宮廷の人々は皆、食事や飲み物を手につけたまま、当惑して座り込んでしまった。宮廷の人々が当惑し、食事も酒も口にしない様子を見て、王はなぜ彼らがそれほど悲しんでいるのかと尋ねた。すると彼らは、時機が適切だと判断し、涙を流しながら立ち上がり、こう言った。

「もし、理性を持ち合わせない鳥でさえ、無実の苦しみを受けるご主人様を悼み――泣きながらその行方を探し求め、『　『ああ、ああ、ライオン様！』――と叫ぶのです。それなのに、私たちのような、理性を持ち言葉を操る生き物たちが、あなたの息子であり、私たちの主である方が、悪意によって無実の罪を被り、誹謗中傷のせいであなたの父としての怒りにさらされていることを、疑いようもなく知っているのに、どうして私たちが楽しんだり、食べたり飲んだりできるでしょうか？！むしろ、私たちはさらに深く嘆くべきではないでしょうか？王よ！もしあなたの息子が、父であるあなたに対して何らかの罪を犯し、あなたに手を上げようとしたのなら、彼をここに連れてきてください――　――私たちは彼を四つ裂きにしてやります。もし彼が何の罪もないのなら――私たちが疑いなく知っているように――なぜあなたは自分の血を苦しめるのですか？

この言葉に王は心を動かされ、情に駆られて、直ちにレフ王を牢から連れ出すよう命じ、監禁中に伸びた髪を刈り、王の衣装を身にまとわせ、栄誉をもって自分の元へ連れてくるよう命じた。

それが実行されると、王は涙を流しながら立ち上がり、息子を抱きしめて頬にキスを繰り返し、かつての王位を彼に返した。

その後しばらくして、ヴァシリー王は病に倒れ、息子に王位を譲ってこの世を去った。一方、レフは父の死後、魔術師サンタヴァリンを捕らえ、彼を鞭打たせ、両目をえぐり出し、アテネの街へ流刑に処した[8910]。

こうして、魔術師の悪意は彼自身の頭上に降りかかったのである。このサンタヴァリンは、信仰上はマニ教徒、教義上は魔術師、外見上はキリスト教徒、地位上は司教であり、バシレイオス王からは、魔術によって行われる奇跡ゆえに聖人と見なされていた。

一方、投獄後に王室の生活に入った至福のテオファニアは、王室の栄光を無に等しいものと見なし、世の甘美さや虚栄を塵や夢のように軽蔑し、自らの魂の救済に熱心に努めた。　彼女は昼も夜も絶えず、口ずさむのは詩篇や霊的な歌、そして祈りであり、生涯を神に喜ばれるよう努め、神の慈悲の業を追い求めて過ごした。　彼女は王にふさわしい身だしなみには関心を示さず、たとえ外見上は多少の華やかさを帯びて装っていたとしても、その一方で、衣服の下には粗末な毛皮の衣を身にまとい、それによって肉体を死に至らしめていた。　彼女の生活は禁欲的なものであり、素朴なパンと乾燥した野菜を糧とし、豪華な食事は完全に排除されていた。

彼女の手に渡った富や宝石は、困窮する貧しい人々や困窮者、孤児や未亡人に配られ、高価な衣服や品々も同様に彼らに与えられた。修道者たちの質素な独房や修道院は、彼女によって改修され、財産や必要な物資で充実させられた。　これこそが、そのキリストを愛する女王の、すべての人々に対する献身と配慮であった！彼女は自分の使用人や女中たちを、兄弟や姉妹のように見なし、誰一人として単に「名前」で呼ぶことはなく、主における地位によって皆を尊び、一人ひとりの名、位階、職責を重んじた。　また、彼女は口から誓いを立てたことはなく、その口からは、嘘も中傷も、そもそも不適切な言葉など、いかなる腐った言葉も発せられなかった。彼女はすべての人を愛をもって接し、泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜んだ。 彼女の寝床はビッソン[8911]で敷かれ、金の装飾で飾られていたが、彼女はそこで眠ることはなく、床に動物の鋭い骨や歯を覆う清潔な藁マットを敷き、その上で眠りについた。そして、預言者ダビデの言葉通り、毎晩その寝床を涙で濡らした（詩編6:7）し、ごく短い眠りの後、直ちに神を賛美するために起き上がった。　これほど過酷で、あらゆる苦難に満ちた生活のため、テオファニアは重い肉体の病に倒れたが、絶え間ない祈りによって魂は衰えることなく、聖書を読み、そこに書かれたことを実践しながら、神の律法を学び続けることをやめなかった。　彼女のすべての配慮は、不当な扱いを受けた人々を助け、未亡人を擁護し、孤児を世話し、悲しむ者を慰め、泣く者の涙をぬぐうことに向けられていた――そして彼女は、住む場所も助けもないすべての人々にとっての母であった。　この世に生きながらも、彼女は世俗のすべてを拒み、結婚生活を送りながらも、キリストの善き軛を愛し、十字架を肩に担いでそれを背負い、こうして神に喜ばれた。

魂が肉体から離れる時を予感して、至福のテオファニアは、皆が別れを告げるために自分のもとに来るよう命じた。　その後、すべての人に最後にして究極の口づけを授けた後、彼女は地上の王国から天の王国へと移り、栄光の王の御前に現れた。その身は、王の紫の衣[8912]のように、彼女自身

[8910] アテネ――古代ギリシャ国家の首都であり、その建築物、芸術作品、貿易や産業の発展、とりわけ学校や哲学の学派で名高かった。アテネは、アルキペラゴス地方に面した中部ギリシャの東端に位置していた。

[8911] ヴィッソン――貴重で、薄くて柔らかく、光沢のある亜麻織物。

[8912] バグリアニツァ――深紅色の儀式用衣装であり、王家のポルフィラは、ビザンツ帝国の皇帝にとって不可欠な装身具であり、その王権の象徴であった。

の数多くの　美徳によって飾られていた。それゆえ、彼女は美徳によって神に喜ばれた聖人の列に加えられ、その尊い遺体は栄誉をもって埋葬された[8913]。

テオファニアの夫であるレウ・ムードリー王は、彼女が存命のうちに、その偉大な聖性を目の当たりにし、彼女を単なる配偶者としてではなく、主君であり、神の御前で執り成しをしてくれる方として敬い、早々に彼女の名を冠した教会を建設しようと計画した。　しかし、聖女はこのことを知ると、これを承諾しなかったばかりか、厳しく禁じた。そのため、すでに建設が始まっていた彼女に捧げられた教会は、すべての聖人の名に改められ、同王は教会全体の助言に従い、ペンテコステ後の最初の週に「諸聖人の祝日」を制定した。王は次のように語った。

「もしテオファニアが聖人であるならば、彼女の記念もすべての聖人と共に祝われよう。すべての聖人によって賛美される神の栄光のために！

彼に、そして私たちからも、永遠の栄光がありますように。アーメン。

聖殉教者マリーナの記念日

記念日：12月16日

聖マリンは、カリン王の治世[8914]に生き、高貴な家柄に生まれ、若年にもかかわらず、シンクリティクス（上院議員）の称号[8915]を帯びていた。キリスト教徒であった彼は捕らえられ、偶像への生贄を捧げるよう強要された。　しかし、彼は従わず、その要求を拒んだため、絞首刑に処され、剣で切り刻まれた後、火に投げ込まれた。その後、彼は赤熱した鉄板の上に投げ込まれ、さらに沸騰する大釜の中に放り込まれたが、神の恵みにより、マリンはこれらすべての拷問を受けても無傷のままであった。　そこで、聖人のところに野獣――ライオンや熊――が放たれたが、それらも彼には手を出さなかった。その間、異教徒たちのキリストの信仰を堅く告白する聖人に対する憎悪はさらに強まり、彼らは彼を無理やり偶像の神殿に連れ込み、犠牲を捧げさせようと決心した。その時、聖人はこう言った。

「私は神々に犠牲を捧げたい。」

殉教者のその言葉を聞いて、王と周囲の者たちは皆、喜びに沸いた。しかし、マリンは皆と共に神殿に入ると、主イエス・キリストに祈りを捧げたところ、偶像たちは倒れて粉々になった。　王は、この予期せぬ出来事に愕然とし、直ちに殉教者の首を刎ねるよう命じた。こうして聖マリンは主のもとへ魂を捧げた。そして、その聖遺骨は、神を畏れるキリスト教徒たちによって敬虔に埋葬された[8916]。

[8913] 福者テオファニア皇后は893年頃に逝去した。彼女は、夫によって建設された「諸聖人の教会」に埋葬されており、その教会は聖使徒たちの聖堂の近くに位置し、後にその場所には女子修道院が設けられた。　1342年、ロシアの巡礼者ステファン・ノヴゴロデツはこの修道院を聖コンスタンティノス修道院と呼び、また、修道助祭ゾシマ（1420年）はフィロストラトス修道院と呼んでいる。 両者とも、この修道院に聖テオファニア女王の聖遺骨と、1月23日に教会で記念される殉教者クリメント・アンキルスキの聖遺骨が安置されているのを見ていた。現在、テオファニアの聖遺骨はコンスタンティノープル総主教庁に安置されている。

[8914] カリン――282年から283年まで在位したローマ皇帝。

[8915] シンクリティコイとは、シンクリトス（皇帝の諮問機関）を構成する、最も重要な皇帝の顧問や高官たちのことを指した。

[8916] 聖マリンは283年頃に殉教した。

12月30日

12月17日（旧暦）

聖預言者ダニエルと、彼と共にいた三人の聖なる少年たち、アナニア、アザリヤ、ミサイアの生涯

記念日12月17日

聖預言者ダニエルは、ユダ族の王家の出身であった。若き頃、彼はネブカドネツァルによって捕虜とされ[8917]、ユダ王ヨアキムと共にエルサレムからバビロンへと連行された[8918]； そこで彼はまだ若くして神から授かった才能によって名声を博し、とりわけ、不義で不法な裁判官たちを賢明に糾弾し、罪のないスザンナを死の危機から救ったことで知られた。

当時、バビロン捕囚下にあったユダヤ人たちは、彼らの間で起こる争いを裁くために選ばれた二人の長老――裁判官――を置いていた。決まった日には、これらの長老たちは、ある高貴で裕福な男ヨアキムの家に集まり、そこでユダヤ人の民の間で生じた争いを裁いていた。

ヨアキムには、ヘルキヤの娘であるスザンナという妻がいた。彼女は非常に美しく、神を畏れる人であった。 彼女の両親は義人であり、娘をモーセの律法のすべての掟に従って育て上げた。一方、それらの長老たちは不法な者たちであった。裁判を装って不正を行い、その結果、聖書の言葉「*不法はバビロンの長老たち、すなわち裁判官たちから出た*」（ダニエル書13:5）が彼らに成就したのである。

これらの長老たちは、毎日夫の庭に出入りするスザンナを見て、彼女への情欲を抱くようになった。 そして彼らは心を歪め、天を見上げたり、正しい裁きを思い起こしたりしないよう目をそらしたが、その情欲を互いに打ち明けることはなかった。なぜなら、それを認めることを恥じていたからである。 彼らはそれぞれ、自分の情欲を満たすのに都合の良い時機を伺っていた。そして毎日、スザンナを見るために注意深く見張りを続け、互いにこう言い合った。

「さあ、家に帰ろう。もう昼食の時間だ」と言って、その場を離れて互いに別れたが、戻ってくるとまた同じ場所へやって来た。そして、互いにその理由を問い詰め合った末、自分の欲望を打ち明けた。そこで彼らは、彼女を一人で見つけられる時間を一緒に決めた。

8917 ネブカドネツァル――ナボポラッサルの息子、バビロンの王（紀元前607年から564年まで在位）、歴史に名を残す最も著名な征服者の一人。 彼はエジプトの王ファラオ・ネハオの軍勢を打ち破り、アジアにおけるエジプトの勢力を終焉させた（エレミヤ書45:2；列王記下24:7）。その後、彼はその属国であるユダ王国の王、ヨアキムに目を向けた。 短期間の包囲の末、エルサレムを陥落させると、ヨアキムを王の座に留め置き、自らの属国とした。また、神殿の器の一部を奪い取ってバビロンへ送り、さらに王族や貴族の家系から美貌と才能に恵まれた若者たちを選りすぐり、バビロンへ移住させ、宮廷での奉仕のためにそこで育て上げた。 そして、3年後にヨアキムが彼への服従を撤回したため、ネブカドネザルは再びユダに侵攻し、3,000人以上のユダ人を移住させた（紀元前597年）。翌年には王（ゼデキヤ）自身を捕虜とし、鎖で縛り上げた（歴代誌下 36:6）。

8918 バビロンは、世界最古の都市の一つである。ハムの子孫であるフシャの息子ニムロドによって建設され、彼はこの都市を自らの王国の首都とした（創世記 10:6–10）。 この都市の名にちなんで、この地全体がバビロン、あるいはバビロニアと呼ばれるようになった。また、この地はカルデア人の地とも呼ばれている（エレミヤ書 24:5；エゼキエル書 12:13）。これは、古くから北方のアルメニアの山々からこの地に移住し、この地にその名を冠したカルデア族が、この地を支配していたことに由来する。 この地は、ティグリス川とユーフラテス川の流域にある、肥沃なセナアル平原に位置していた。バビロンはユーフラテス川の両岸に広がり、バグダッドから15マイル、ペルシャ湾から40マイル、エルサレムから130マイルの場所に位置していた。 富は四方八方からバビロンに集まり、こうしてバビロンは東方で最も偉大で、最も著名で、最も豊かな都市の一つとなった。ネブカドネザルの死後、バビロン王国は急速に衰退の一途をたどった。現在、古代バビロンの跡地には廃墟しか残っていない。

ある日、彼らが好機を待っていたところ、スザンナはいつものように二人の侍女だけを連れて入ってきて、暑かったため庭で体を洗おうとした。そこには、隠れて彼女を待ち伏せしていた二人の老人のほかには誰もいなかった。スザンナは侍女たちに言った。

「油と石鹸を持ってきて、私が体を洗えるように庭の扉を閉めておいてください。」

彼女たちの言う通りに、侍女たちは庭の扉を閉め、命じられたものを持ってくるために裏口から出て行った。老人は隠れていたため、侍女たちは彼らに気づかなかった。そして、侍女たちが去ると、二人の老人は立ち上がり、スザンナに近づいてこう言った。

「庭の扉は閉ざされ、誰も私たちを見ていない。私たちはあなたに欲情している。だから、私たちの願いを聞き入れ、私たちと一緒にいてほしい。もしそうしなければ、私たちはあなたに対して、若い男があなたと一緒にいたから、あなたが侍女たちを追い払ったのだと証言するつもりだ。」

すると、スザンナは嘆き声を上げて言った。

「私は四方八方から追い詰められています。もしこれに応じれば、私は死にます。もし応じなければ、あなた方の手から逃れることはできません。神の前で罪を犯すよりは、これに応じず、あなた方の手に落ちるほうが、私にとってはましです。」

そしてスザンナは大きな声で叫んだ。二人の長老もまた、彼女に向かって叫んだ。そのうちの一人が駆け寄って、庭の扉を開けた。

家の中にいた者たちは、庭からの叫び声を聞くと、スザンナに何が起きたのか確かめようと、脇の扉から飛び出した。そして、長老たちがその言葉を口にしたとき、彼女の使用人たちはひどく恥じ入った。なぜなら、スザンナについてそのような話はこれまで一度も聞かれたことがなかったからである。

翌日、人々が彼女の夫ヨアキムのもとに集まったとき、二人の長老も、スザンナを死に追いやろうという不義の企みを胸に抱いてやって来た。そして彼らは人々の前でこう言った。

「ヘルキヤの娘、ヨアキムの妻であるスザンナを呼び出せ」と命じ、人々は彼女を呼び出した。

すると、彼女と、彼女の両親、子供たち、そしてすべての親族がやって来た。スザンナは極めて優しくて、顔立ちも美しかった。そして、これらの不法な者たちは、彼女の美しさを存分に堪能しようと、（彼女の顔は覆われていたが）顔を覆いを取り除くよう命じた。　一方、親族や彼女を知る者たちは皆、泣き崩れた。すると、二人の長老は民衆の真ん中に立ち、彼女の頭に手を置いた。彼女は涙ながらに天を見上げ、その心は主を頼りにしていた。そして長老たちは言った。

「私たちが二人きりで庭を歩いていたとき、この女性が二人の侍女を連れて入ってきて、庭の扉を閉め、侍女たちを追い返した。すると、そこに隠れていた若者が彼女のもとに来て、彼女と寝たのだ。　私たちは庭の隅にいて、そのような不義を目撃したので、彼らのもとへ駆け寄ると、二人が一緒にいるのを見ました。しかし、その若者は私たちより力強かったため、抑え込むことができず、庭の扉を開けて飛び出していきました。そこで私たちはこの女性を捕らえ、『あの若者は誰だったのか』と問い詰めました。　しかし、彼女は私たちに名乗り出ようとしませんでした。私たちはこのことを証言します。

そして、集まった人々は、彼らを民の長老や裁判官として信じ、スザンナに死刑を宣告した。その時、スザンナは大きな声で叫び、こう言った。

「永遠の神よ、隠されたことを知り、彼らの存在以前からすべてをご存知の方よ。あなたがたが私に対して偽りの証言をしたことを、あなたはご存知です。そして今、私は、この人々が私に対して悪意を持ってでっち上げたことなど何一つ行っていないのに、死になろうとしています。」

そして、主は彼女の声を聞かれた。

彼女が死刑の場へ連行されたとき、神は聖霊によってダニエルという名の若者を奮い立たせられた。そして彼は大声で叫んだ。

「私は彼女の血には無関係だ！」
すると、民全体が彼の方を向き、言った。
「お前が言ったその言葉は、一体どういう意味だ？」
するとダニエルは、彼らの真ん中に立ち、こう言った。
「イスラエルの子らよ、あなたがたはそれほど分別がないのか。真実を究明もせず、確かめもしないまま、イスラエルの娘を断罪したのか。裁判の場に戻れ。これらの長老たちは、彼女に対して偽りの証言をしたのだ。」
すると、たちまち民全体が戻ってきて、長老たちはダニエルに言った。
「私たちの真ん中に座り、私たちに告げてください。神があなたに長老の地位を与えられたのですから。」
そこでダニエルは民に言った。
「彼女たちを互いに離して、遠くに置け。そうすれば、私が尋問する。」
彼らが互いに引き離されると、ダニエルは彼らのうちの一人を呼び寄せ、こう言った。
「悪しき時代に老いた者よ！今、あなたの以前の罪が明らかになった。あなたは不正な裁きを行い、無実の者を有罪とし、有罪の者を無罪としてきた。しかし、主はこう言われている。『無実で正しい者を殺してはならない』（申命記25:1）。さて、もしあなたがこの女性を見かけたのなら、どの木の下で二人が話し合っているのを見たのか、教えてほしい。
彼は言った。「マスティクの木の下だ」[8919]。ダニエルは言った。
「お前は間違いなく嘘をついた。見よ、神の御使いが神からの裁きを受けて、お前を真っ二つに切り裂くであろう。」
彼を退けた後、ダニエルは別の者を連れてくるよう命じ、彼に言った。
「お前はユダ族ではなく、カナンの子孫だ！　美しさに惑わされ、情欲があなたの心を堕落させた。あなたがたはイスラエルの娘たちにそう振る舞い、彼女たちは恐怖のあまりあなたがたと交わった。しかし、ユダの娘はあなたがたの不法を許さなかった。さあ、教えてくれ。どの木の下で、彼女たちが互いに話しているのを目撃したのか？
彼は言った。
「緑の樫の木の下で[8920]。」
ダニエルは彼に言った。
「確かに、あなたは自分の命をかけて嘘をついた。神の御使いが剣を手に、あなたを真っ二つに切り裂き、あなたたちを滅ぼそうと待ち構えているからだ。」
すると、集まった者たちは皆、大声で叫び、神を信頼する者を救う神を賛美し、二人の長老たちに立ち向かった。ダニエルが彼らの口を通して、彼らが偽証をしたことを暴いたからである。　そして、モーセの律法に従い、彼らが隣人に対して悪意を抱いたのと同じように彼らに報い、彼らを殺した。その日、無実の者の血は救われたのである。　ヘルキヤとその妻は、娘のスザンナと、その夫ヨアキム、そしてすべての親族のために神を賛美した。彼女には恥ずべき行いが何一つ見出されなかったからである。
そして、ダニエルはその日から、またその後も、その知恵と彼の中にあった神からの賜物ゆえに、民の間で偉大な存在となった[8921]。
その頃、バビロンの王ネブカドネツァルは、宦官の長アシュペナズに命じて、捕虜となったイスラエルの王族や貴族の子らの中から、身体に何の欠陥もなく、　容姿端麗で、あらゆる学問を容易に習得でき、聡明で、王宮に仕えるのにふさわしい若者たちを連れてくるよう命じた。また、彼らに

[8919] スラブ語の「トゲのある木の下」は、ギリシャ語の「スキノス」（マスティックの木）に由来する。
[8920] スラヴ語の「チェレムハの下」は、ギリシャ語の「ムリノス」（いわゆる「石の樫」）に由来する。
[8921] このスザンナの物語は、預言者ダニエルの書第13章に収録されており、聖書の非正典部分に分類される。

カルデアの書物と言語を教えるよう命じた。王は彼らに、王の食卓からの毎日の食事と、王自身が飲んでいたぶどう酒を与え、三年間彼らを教育するよう命じた。その期間が満了すれば、彼らは王の前に進み出ることになっていた。　その中には、ユダの子孫であるダニエルと、彼と共に王族出身の他の三人の若者、すなわちアナニア、アザリヤ、ミサエルがいた。そして、宦官長は彼らの名を次のように改名した。ダニエルをバルタサール、アナニアをセドラク、ミサエルをミサク、アザリヤをアブデナゴとした[8922]。ダニエルは三人の仲間と共に、王の食卓の料理や王が飲む酒によって身を汚さないことを心に決めていた。そこで、宦官長に、それらによって身を汚さないよう願い出た。神はダニエルに恵みを与え、宦官長の好意を勝ち取らせた。宦官長はダニエルにこう言った。

「私は、あなた方の食事と飲み物を自ら定めた私の主君、王を恐れています。もし王が、あなた方の顔が同年代の若者たちよりもやつれているのを見たら、あなた方のせいで、私が王の前で罪を問われることになるでしょう。」

そこでダニエルは、宦官長がダニエル、アナニヤ、アザリヤ、ミサエルに付き添わせたアメルサルにこう言った。

「十日間、この僕たちを試してみてください。野菜を食事とし、水を飲み物として与えてください。その後、私たちと、王の食事を摂っている若者たちの顔をあなたの前で比べ、それからこの僕たちを、あなたが適切と思われるように扱ってください。」

彼はその言葉に従い、十日間彼らを試した。十日が過ぎると、彼らの顔色はより美しく、体つきも王の御馳走を食べていた若者たち全員よりもふっくらとしていた。そこでアメルサルは、彼らの食事と飲み物のワインを取り上げ、代わりに野菜を与えた。　そして神は、この四人の若者に、あらゆる書物と知恵に関する知識と理解力を授け、さらにダニエルには、あらゆる幻や夢を理解する力も授けられた。その期間が満了し、王が彼らを召し出すよう命じたとき、宦官長は彼らをネブカドネツァル王の前に進み出させた。　王は彼らと語り合ったが、すべての若者の中で、ダニエル、アナニア、アザリヤ、ミサイヤに匹敵する者は一人もいなかった。こうして彼らは王の御前で仕えるようになった。また、あらゆる知恵を要する事柄について、王が彼らに何を尋ねても、王は彼らを、自分の全王国にいたすべての占星術師や魔術師たちよりも十倍も優れていると認めた[8923]。

ナブコドノソル王は、即位二年の年に夢を見た。王の心は動揺し、その夢は王の心から去ってしまった。そこで王は、占者、占い師、魔術師、カルデア人を呼び集め[8924]、彼らに自分の夢を解き明かすよう命じた。彼らは来て、王の前に立った。王は彼らに言った。

「私は夢を見たが、心が動揺している。その夢の意味を知りたい。」

すると、カルデア人たちは王に言った。

「王よ、永遠に生きられますように。その夢をあなたのしもべたちに告げてください。そうすれば、その意味を解き明かしましょう。」

王は答えて、カルデア人たちに言った。

[8922] それらは、ネブカドネツァルへの従属の印として改名された。

[8923] ダニエル、アナニア、アザリヤ、ミサイアが王宮で教育を受けたという物語は、ダニエル書1:3–20に記載されている。

[8924] 魔術師（ロシア語：秘術師）、占星術師（ロシア語：占い師）、魔術師、カルデア人。これらは、高度かつ広範な知識、特に自然の秘力や神聖な文字（象形文字）、さらには天文学や医学の分野における知識を備えた賢者たちに対する様々な呼称である。彼らの主な活動は、自然の研究、天体の現象の観測、夢の解釈、未来の予知であったが、　同時に、彼らの多くは祭司でもあった。ヨセフ（創世記41:8）やモーセ（出エジプト記7:11）の同時代人である賢者たち、そしてイエス・キリストを礼拝しに来た賢者たち（マタイ2:1–2）も、その類に属する。ここには、バラム（民数記22:5）やシモン（使徒行伝8:1）も含まれる。彼らの多くは、この言葉の最も良い意味において賢明で学識豊かな人々であり、時にはバアラムやイエス・キリストを礼拝しに来た東方の三博士のように、神からの特別な啓示を受けることさえあった。一方で、他の者たちは、学問的な活動に加え、魔術という卑しい手仕事、　占い、呪文、様々な欺瞞などを組み合わせていたに違いない。それゆえ、彼らはおそらく、とりわけ「魅惑者」や「魔術師」とも呼ばれているのだろう

「私の口からは言葉が消え失せてしまった。もしあなたがたが、その夢とその意味を私に告げなければ、あなたがたは切り刻まれ、あなたがたの家は廃墟と化すだろう。」

カルデア人たちは王に答えて言った。

「この世に、王にこのことを解き明かすことのできる者は一人もおりません。それゆえ、いかなる偉大で力ある王でさえ、占い師や予言者、カルデア人に対して、このようなことを求めたことはありません。王が求めておられることはあまりにも難しく、肉体を持たない神々以外には、誰も王にそれを解き明かすことはできません。」

王はこれを聞いて激しく怒り、バビロンのすべての賢者を皆殺しにするよう命じた。　賢者たちを殺すという命令が出ると、ダニエルとその仲間たちを探し出し、彼らを殺そうとした。そこでダニエルは、バビロンの賢者たちを殺すよう命じられていた王の近衛隊長アリオクに、助言と知恵をもって語りかけ、王がこの恐ろしい命令を下した理由を尋ねた。　するとアリオクは、その件のすべてをダニエルに語った。ダニエルは王のもとへ入り、夢の解釈を提示するための猶予を王に懇願した。願いが聞き入れられると、ダニエルは自分の家に戻り、仲間のアナニヤ、アザリヤ、ミサエルにすべてを話し、この秘密について神の憐れみを祈るよう頼んだ。そうすれば、ダニエルと仲間たちが、他のバビロンの賢者たちと共に滅びることを免れることができるからである。　すると、ダニエルは夜の幻の中でその秘密を啓示され、神を賛美した。その後、ダニエルは、王からバビロンの賢者たちを処刑するよう命じられていたアリオクのもとへ行き、彼にこう言った。

「バビロンの賢者たちを殺してはならない。私を王のもとに連れて行ってくれ。そうすれば、私はその夢の意味を解き明かす。」

アリオクは直ちにダニエルを王のもとに連れて行き、王にこう言った。

「ユダヤ人の捕虜の中から、王に夢の意味を解き明かすことのできる人物を見つけました。」

王はダニエルに言った。

「私が見た夢とその意味を、私に告げることができるか。」

ダニエルは王に答えた。

「王が尋ねられているその秘密については、賢者も、魔術師も、占い師も、予言者も、王に解き明かすことはできません。　しかし、天には秘密を明らかにされる神がおられます。その神は、終わりの日に何が起こるかをネブカドネツァル王に明らかにされました。そして、私たちのへりくだりに憐れみをおかけになり、私たちにもあなたの夢を明らかにしてくださいました。というのも、私がこの夢を知ったのは、私自身の特別な知恵によるのではなく、憐れみ深い神の啓示によるものだからです。　あなたの夢と、寝台の上で見た幻は、次のようなものでした。王よ、あなたは寝台の上で、この後どうなるか（すなわち、あなたの後に誰が王となるか）を考えておられました。すると、秘密を明らかにされる方が、これから起こることをあなたに示されたのです。王よ、あなたには次のような幻が見えました。見よ、ある巨大な像が立っていました。　その像はとてつもなく大きく、まばゆい光を放ちながらあなたの前に立っており、その姿は恐ろしいものでした。その像の頭は純金で、胸と腕は銀、腹と太ももは銅、すねは鉄、足は一部が鉄で、一部が粘土でできていました。　あなたはそれを見ていたが、やがて、人の手を借りることなく山から石が飛び出し、その像の鉄と粘土の足に当たり、それらを粉々に砕いた。　すると、すべてが一斉に砕け散った。鉄、粘土、銅、銀、そして金は、夏の脱穀場にある塵のようになり、風がそれらを吹き飛ばし、跡形もなく消え去った。一方、像を砕いた石は大きな山となり、全地を満たした。　これがあなたの夢です、王よ。その意味はこうです。金の頭は、あなたと、あなたより前にいたバビロンの王たちを表しています。銀は、あなたの後に、あなたの王国より劣る別の王国が興ることを意味しています。　その後、第三の王国――銅の

王国――が現れ、全地を支配するでしょう[8925]。続いて第四の王国が現れます。それは 鉄のように強固なものであり、鉄がすべて（銅、銀、金）を打ち砕き、粉々に砕くように、この王国もまたすべてを粉々に砕き、打ち砕くでしょう。　また、あなたが足と足の指の一部が鉄で、一部が陶土であるのを見たのは、その王国が分裂し、その一部には鉄のような堅さがある一方で、ある部分は脆いものもあることを意味している。　また、鉄と粘土が混ざり合うことについては、彼らが婚姻関係を通じて結びつこうとするが、鉄が粘土と固く結びつかないのと同じように、互いに結びつくことはないことを意味する。[8926]。これらの王たちの時代に、天の神は、永遠に滅びることのない王国を築き上げられる。それは、これらすべての王国を打ち砕き、滅ぼし、それ自体は永遠に存続し、その支配権は他の民に移ることはない。これが夢の意味であり、その解釈は正しい[8927]。

そこで、ネブカドネツァル王は顔を地面につけてダニエルにひれ伏し、彼に贈り物と香を捧げるよう命じた。そして王はダニエルに言った。

「あなたがこの秘密を解き明かすことができたのだから、まことに、あなたがたの神は神々の神、主たちの主、王たちの主である。」[8928]。

そこで王はダニエルを高く評価し、多くの高価な贈り物を与え、バビロンの全地域を統治する権限を与え、バビロンのすべての賢者たちの最高責任者に任命した。また、ダニエルの願いに応じて、ダニエルの仲間であるアナニヤ、アザリヤ、ミサエルをも大いに栄誉を与え、バビロンの地方長官に任命した[8929]。

[8925] この王国は預言者によって名前で呼ばれてはいないが、注釈者たち（聖ヒエロニムス）の見解によれば、この王国とはマケドニア王国であり、その輝きは以前の王国には及ばなかったものの――それはまるで銅が金や銀に及ばないのと同じである――その一方で、力においてはそれらを凌駕していた。それは、銅が金や銀よりも堅牢であるのと同じ程度に。このような解釈は、ダニエル書の他の箇所によっても裏付けられている。そこでは、メディア・ペルシャ王国の後の最初の王国として、まさにそれに取って代わったギリシャ王国が挙げられている（ダニエル書8:31–22、11:2–4）。

[8926] 第4の王国とは、シリア・エジプト王国を指すものと理解すべきである。文脈から判断すると、ここでは歴史的な順序においてマケドニア王国の後に続き、メシアの王国に先立つ王国、すなわちシリア・エジプト王国を指していると解釈する根拠がある。　マケドニア王国は、周知の通り、その創始者アレクサンドロス大王の死後、シリア、フラキア、マケドニア、エジプトの四つに分裂した。互いに分離したこれらの王国は、像の足のように、互いに結合することなく並行して存在していた。　この第4の王国の特徴こそが、鉄と粘土の結合不能性を指し示している。預言者が指摘したもう一つの特徴は、シリア・エジプト王国に最もよく当てはまるものであり、それはこの王国が神の民に対して抱く特別な敵意である（ダニエル書7:21–25、11:28）。　実際、歴史が示すように、異教の王たちによるユダヤ人への憎悪は、シリアやエジプトの王たちに支配されていた時期に、とりわけ激しさを増した。とりわけ敵対的だったのはシリア王国であり、その王たちの中でもアンティオコス・エピファネスが際立っていた。

[8927] 人の手によらず山から転がり落ちて、偶像を打ち砕いた石とは、教会の教えによれば、清く、汚れなき処女から、夫なしに生まれ出る神の子、キリストのことである。　キリストは、すべてのこの世の王国を打ち砕き、滅ぼした後、永遠に滅びることのない王国を築き上げられる。その王国は霊的なものである。

[8928] ネブカドネツァルが見た夢は、単なる夢ではなく、神の御心を彼に啓示するものでした。他の異教の王たちも、同様の形で神からの啓示を受けています。例えば、ゲラルの王アビメレク（創世記20:3）、　エジプトの王ファラオ（創世記41:1–9）、テマンの王エリファズ（ヨブ記42:12–18）などが、同様の形で神からの啓示を受けていた。異教の王たちが天からの啓示を受けることは、決して奇妙なことではない。　諸国民の運命を司った異教の王たちは、神の御心の実行者であり、神の全能の道具であり、神からその高貴な地位を授かり、その行動において神によって目に見えない形で導かれ、支えられていたのである（イザヤ書44章など）。　これこそが、彼らが時に神からの直接の啓示を受けるに値した理由を説明している。

[8929] ネブカドネツァルの夢と、預言者ダニエルによるその夢の解釈に関する記述は、ダニエル書2章1節～49節に記載されている（第2章からは、キリストの降誕に関する聖句が読まれる：ダニエル書2章31節～36節、44節～45節）。

バビロン捕囚の十八年、バビロンの王ネブカドネツァルは、高さ六十キュビト、幅六キュビトの金の像を作り、それをバビロンの地方にあるデイレの野に立てた[8930]。 そこで、ネブカドネツァル王は、サトラップ[8931]、総督、軍司令官、最高裁判官、財務官、法学者、裁判官、およびすべての地方の統治者たちを召集し、ネブカドネツァル王が立てた像の除幕式に出席するよう命じた。 そこで、サトラップ、総督、軍司令官、最高裁判官、財務官、法学者、裁判官、およびすべての地方の統治者たちが、その像の除幕式のために集まり、その像の前に立った。 その同じ広場に、ネブカドネツァルは、王の命令に従わない者を滅ぼすために、火で焼かれた炉も設けていた。すると、布告者が大声で叫んだ。

「諸国民、諸部族、諸言語の民よ、告げる！ 角笛、笛、琴、篳篥、ハープ、およびあらゆる種類の楽器の音が聞こえた時、ひれ伏して、 ネブカドネザル王が立てた金の像を礼拝せよ。 もしひれ伏して礼拝しない者がいれば、その者は直ちに、火で熱せられた炉に投げ込まれる。

そこで、すべての民がラッパ、笛、琴、ハープ、ハープ、およびあらゆる種類の楽器の音を聞いたとき、すべての民、部族、言語の者たちはひれ伏し、金の像に礼拝した。

ちょうどその時、カルデア人の中から数人が近づき、アナニア、アザリヤ、ミサエルについて王に告発し、こう言った。

「彼らはあなたの神々を崇拝しておらず、あなたが立てた金の偶像にも拝礼していません。」

そこで王は彼らを呼び寄せ、彼らについて語られていることが真実かどうか尋ねた。すると彼らは答えた。

「私たちが仕える神は、火で焼かれた炉からも、王であるあなたの手からも、私たちを救う力をお持ちです。もしそうならなければ、王よ、あなたが知っておいてください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが立てた金の像にもひれ伏しません。」

すると、ネブカドネツァルは激怒し、炉を普段よりも七倍も激しく燃え上がらせ、縛られたアナニヤ、アザリヤ、ミサエルをその中に投げ込むよう命じた。 王の命令は忠実に実行された。これらの人々は縛られ、衣服を身にまとったまま、灼熱の炉の真ん中に投げ込まれた。その際、王の命令が極めて厳しく、炉も並外れて熱くなっていたため、この処刑を執行した者たちさえも火によって命を落とした。 しかし、この三人の男――アナニア、アザリヤ、ミサイア――は、縛られたまま炎の真っただ中に投げ込まれたにもかかわらず、何の害も受けなかったばかりか、炎の中を自由に歩き回り、神を賛美し、主を賛美していた。 その間も、彼らを投げ込んだ王の家来たちは、油、樹脂、麻の繊維、小枝を使って炉に火をくべるのをやめなかった。炉の上には四十九キュビトもの炎が立ち上り、その炎は飛び出して、炉の近くにいたカルデア人たちのうち、炎が届く者たちを焼き尽くした。しかし、主の御使いがアザリヤと彼と共にいた者たちと共に炉の中に降りてきた。 そして、炉から炎を追い出し、炉の真ん中にあたかもざわめく湿った風のようなものを起こした。火は彼らに少しも触れず、傷つけることもなく、動揺させることもなかった。そこで、この三人は、あたかも一つの口から語るかのように、炉の中で歌い、神を賛美し、栄光を帰した。

「主よ、私たちの先祖の神よ、あなたは祝福され、永遠に賛美され、称えられますように。……」。[8932]

8930 この像にどのような意味が込められていたかについては、預言者は明言していない。おそらくそれはバビロニア人が崇拝していた神々のうちのひとりの偶像であったかもしれないし、あるいはこの像はネブカドネツァル自身を称えて建てられたものだったのかもしれない。

8931 サトラップとは、ペルシャ宮廷における最高位の重臣であり、王国の各地域を統治していた。

8932 この賛美の歌は同じ書物、ダニエル書3:52–90に収録されており、この歌は教会カノンの第7および第8の歌の基礎となっている。 バビロンの炉に投げ込まれた三人の若者の物語は、当教会の礼拝賛美歌において、救い主が墓の中で朽ちることなく留まられたことの予型として理解されている。それゆえ、預言者ダニエル書の第3章は、教会において――聖大土曜日の晩課の際に――朗読されるのである。

ネブカドネザル王は、彼らが歌っているのを聞いて驚き、急いで立ち上がり、家臣たちに言った。

「縛られた三人の男を火の中に投げ込んだのではないのか？」

彼らは王に答えて言った：

「その通りです、王よ！」

すると王は言った。

「見よ、縛られていない四人の男が火の中を歩き回っている。彼らには何の害もなく、四人目の姿は神の子のようだ。」

そこで、ネブカドネツァルは、炎で赤く燃え盛る炉の口に近づき、こう言った。

「セドラク、ミサク、アベデナゴよ、至高の神のしもべたちよ、出てきて、ここへ来なさい！」

すると、アナニア、アザリヤ、ミサエルは火の中から出てきた。そこで、サトラップ、総督、軍司令官、そして王の顧問たちが集まって見ると、これらの者たちの体には火の力が及んでいないことがわかった。彼らの頭の毛は焼け焦げておらず、衣服も変わっておらず、彼らからは焦げた臭いさえしなかった。 そこで王は彼らの前で神にひれ伏し、こう言った。

「シェドラク、ミサク、アベデネゴを祝福する神よ。御自身の御使いを遣わし、御自身を信頼した御自分のしもべたちを救い出された神よ。　そして、わたしから命じる。あらゆる国民、部族、言語の中から、シェドラク、ミサク、アベデネゴの神を冒涜する者は、切り刻まれ、その家は廃墟とされなければならない。なぜなら、このように御自分のしもべたちを救うことのできる神は、他にいないからである。

その後、王は三人の若者をさらに高い栄誉をもって称え、彼らをすべての者よりも高く上げ、王国内の他のユダヤ人たちを統べる地位に就かせた[8933]。

一方、ネブカドネツァルは王位で繁栄を極め、非常に高慢になったが、しばらくして、自身の没落と屈辱を予兆する別の夢を見た。

彼は夢の中で、地の真ん中に一本の木を見た。その木は大きく、強靭で、その高さは天にまで達し、地の果てまで見渡せるほどであった。　その葉は美しく、実も豊富で、すべての者がそれで養われるほどであった。その木陰には野の獣たちが身を寄せ、枝には空の鳥たちが巣を作り、あらゆる生き物がそこから養われていた。すると、天から「目覚める方」であり「聖なる方」が降りてこられた。大声で叫ばれ、こう言われた。

「この木を切り倒し、その枝を切り落とし、葉を振り落とし、その実を散らしなさい。　その木の下から獣を、枝から鳥を追い払え。しかし、その主たる根は地中に残し、鉄と銅の束縛の中で、野の草の中にあって天の露に潤され、地上の草の中で獣たちと共に住まわせよ。　人の心は彼から取り去られ、獣の心が与えられ、七つの時が彼の上を過ぎ去るであろう。

この夢に王は戸惑い、再びバビロンのすべての賢者、占い師、魔術師たちを呼び集め、その夢の内容を語り、その意味を解き明かしてもらうよう求めた。しかし、神の御霊が宿っていたダニエルが呼ばれるまでは、誰もそれを解き明かすことができなかった。王の夢を聞き、考えを巡らせたダニエルは言った。

「わが主よ。この夢は、あなたの憎む者たちに向けられたものであり、その意味はあなたの敵に向けられたものです。あなたが見たその木は、あなた、すなわち王ご自身を表しています。あなたは高ぶって強大になり、あなたの偉大さは増し加わり、天にまで達し、あなたの権威は地の果てにまで及んでいます。　しかし、まもなくあなたは王位を失うでしょう。あなたは人々から隔てられ、野

[8933] この奇跡は、ナブコドノソルとその高官たち――彼らが王の前で義人たちを誹謗中傷した者たち――に対して明白な証しとなったのと同様に、あらゆる時代のすべての人々に対しても、神に守られ、神に希望を置く義人にとっては、いかなる危険も恐れるに足らないことを証ししている（イザヤ書43:2、詩篇90:1–7など）。

の獣たちと共に暮らすことになります。牛のように草を与えられ、天の露に濡らされ、七年間その状態が続きます。それは、至高者が人間の王国を支配し、御心に適う者にそれを与えることを、あなたが悟るまでの間です。　また、木の主幹を残すよう命じられたのは、あなたが天の権威を悟るまで、あなたの王国があなたのもとに残ることを意味しています。ですから、王よ、私の助言を聞き入れてください。正義をもってあなたの罪を贖い、貧しい人々への慈しみをもってあなたの不義を償いなさい。そうすれば、神はあなたの罪を赦してくださるかもしれません。

こうして聖ダニエルは王にその夢を解き明かし、彼の語ったことはすべて実現した。

十二ヶ月が過ぎたある日、バビロンの王宮を歩き回っていた王は言った。

「これこそが、わが力と威光をもって、王国の都に築き上げた、あの壮麗なバビロンではないか！」

王がまだその言葉を口にしているうちに、天から声が響いた。

「王ネブカドネツァルよ、あなたに告げる。王権はあなたから取り去られた！あなたは人々から隔てられ、野の獣と共に住むことになる。牛のように草を与えられ、七つの時期[8934] があなたの上を過ぎ去るまで、至高者が人間の王権を支配し、望む者にそれを与えることを悟るだろう。」

その言葉は直ちにネブカドネツァルに実現した。彼の心は曇り、狂乱に陥った。　そこで、彼は鎖で縛られた。宮殿の屋根の下では安らぐことができなかったため、彼は野天に放置され、人々から隔離された。彼は牛のように草を食べ、その体は天の露に濡れ、その結果、髪は獅子のようになり、爪は鳥のようになった。　七年の期間が満ちたとき――その間、他の誰も彼の王国を継ぐことを敢えてしなかった――ネブカドネツァルは天に目を上げ、その正気を取り戻した。　彼は至高者を祝福し、永遠に存在される方を賛美し、栄光を帰した。その方の支配は永遠の支配であり、その方の王国は代々続くのである。　「地に住む者たちは皆、取るに足らない存在だ」と王は考えた。「御心により、主は天の軍勢においても、地に住む者たちの中においても御業をなされる。そして、主の御手に逆らい、『なぜそのようなことをなさったのか』と問うことのできる者は、誰一人としていない。」その時、王の正気は戻り、王国の栄光とともに、王の威厳と以前の姿も取り戻された。　そこで、王の顧問たちや高官たちが王を求め、王は王位に復帰し、その威光はさらに高まった[8935] 。

そしてネブカドネザルは、天の王を賛美し、祝福し、栄光を帰しながら暮らした。　彼は計43年間統治し、安らかにこの世を去った。ネブカドネツァルの死後、バビロニア王国は息子のエビルメロダクが継承した。彼は、牢獄に囚われていたユダヤの王エホニアを、そこから解放した。　そして彼と親しく語り合い、バビロンにいた他の王たちの玉座よりも高い地位を与え、彼の囚人服を取り替え、彼は生涯を通じて常に王の食卓で食事をとった（列王記下25:27–30；エレミヤ書52:31–34）。

エビルメロダクの死後、ネブカドネツァルの娘婿であるナボニドが王位に就き、その息子バルタサールを共同統治者に任命した。彼の治世において、預言者ダニエルは多くの幻を見させられ、その中には様々な獣の象徴を通じて、後の王たちや王国、反キリスト、世の終わり、そして最後の審判が示されていた[8936] 。

「私は見た」とダニエルは言う。「玉座が設けられ、古き者がそこに座しておられた。その衣は雪のように白く、その頭の髪は清らかな羊毛のようであった。その玉座は炎のようで、その車輪は

[8934] すなわち、年。

[8935] ネブカドネツァルの高慢に対する懲罰に関する記述は、ダニエル書4:1–34にある。

[8936] ダニエルの大いなる戦いに関する幻（ダニエル書 10:1–21、11:1–45、12:1–13）は、同書自身の解説によれば、ユダヤ人の最悪の敵であるアンティオコス・エピファノスに言及しており、彼がユダヤ人に対して行った迫害と、彼自身の最終的な滅亡を意味している。　一部の解釈者によれば、この預言は、いくつかの点においてアンティオコス・エピファノスには当てはまらないものの、反キリスト、その信者に対する迫害、そして滅びについて予表的に語っている。　また、使徒パウロは、世に現れる反キリストについて予言する際、預言者ダニエルがアンティオコスに当てはめた特徴（ダニエル書8:9–12、11:28–31、36–39）と類似した特徴をもって彼を描写している（テサロニケの信徒への手紙第二2:4）。

燃え盛る火のようであった。　炎の川が流れ出て、御前の前を通り過ぎた。数えきれないほどの大群が御前に仕え、無数の者たちが御前に立っていた。裁判官たちは裁きの座に着き、書物が開かれた。

そして、彼らには他にも恐ろしく、ぞっとするような啓示が見られたが、それについては彼の著書『[8937]』に十分に記されている。

ある時、バルタサール王は千人の高官たちのために盛大な宴を開き、彼らの目の前で酒を飲んだ。　ワインを味わった後、バルタサールは、祖父であるネブカドネツァルがエルサレムの神殿から持ち出した金や銀の器を運ばせるよう命じ、王自身、高官たち、妻たち、そして側室たちがそこからワインを飲むようにした。　そこで、金や銀の器が運ばれてくると、王と高官たち、王妃たち、側室たちはそれらから酒を飲んだ。彼らは酒を飲みながら、金、銀、青銅、鉄、木、石でできた偶像を賛美したが、それらを支配する永遠の神を賛美することはなかった。　まさにその瞬間、人の手の指が現れ、燭台の光が照らす王宮の壁に文字を書き記した。王はその文字を書く手の筆を見た。すると、王の顔色は一変し、思いに惑わされ、腰の帯が緩み、膝がぶつかり合うほど震え出した。　王は大声で叫び、占い師やカルデア人、予言者たちを連れてくるよう命じ、バビロンの賢者たちにこう言った。

「この文字を読み解き、その意味を私に説明できる者は、緋色の衣をまとい、首には金の鎖を掛けられ、この王国において第三の支配者となるであろう。[8938]。」

そこで、王のすべての賢者たちが入ってきたが、そこに書かれた文字を読み解くことも、その意味を王に説明することもできなかった。バルタサール王はひどく動揺し、その重臣たちも当惑した。その時、宴会場に王妃――バルタサールの祖母であり、　ネブカドネツァルの妻である王妃が宴会場に入ってきて、ダニエルについて彼に語った。ダニエルは神の霊を宿しており、彼の祖父ネブカドネツァルの時代、その卓越した知性と英知、そして夢や幻を解き明かす能力ゆえに、すべての賢者、魔術師、カルデア人、占い師たちの長に任命されていたのである。　そこでダニエルが連れて来られると、王は彼に言った。

「お前はダニエルか。私の祖父であるネブカドネツァル王がユダから連れ帰ったユダヤ人の捕虜の一人か。お前のことについては、神の霊がお前に宿っており、光と知恵と高い英知がお前にあると聞いた。」　さあ、見えない手の指で壁に書かれた文字を読み上げ、その意味を解き明かしてくれ。これまで私のところに来た多くの賢者や魔術師、占い師たちには、それができなかったのだ。　さ

[8937] ダニエル書7:9–10。「古き日からの者」とは、すなわち永遠なる方（すなわち神）のことである。

[8938] このように、目に見えず、公平であり、罪人に対する神の恐るべき裁きを人間のような姿で表現したものは、聖ヨハネ神学者の『黙示録』（黙示録4:1–4など）にも見られる。　最も明確かつ正確なメシア的預言は、ダニエルの第三の預言的幻（ダニエル書9:1–27）にあり、そこには、第二神殿の建設に関する勅令が発布された時（紀元前453年）から、キリストの出現と新約の成就に至るまでに経過すべき70の七週間について記されている。　ダニエルに大天使ガブリエルが与えた説明によれば、キュロスの勅令から神殿が完成するまでに7週が経過し、その後の62週の後に「油注がれた者」が殺され、新約が確立され、いけにえが廃止され、その後、聖なる場所に「荒廃の憎むべきもの」が現れることになる。　ここで描かれているこの「油注がれた者」の特徴は、まさにイエス・キリストに完全に当てはまる（ダニエル書7:24–27と使徒行伝20:43、ルカによる福音書3:24、マタイによる福音書11:16、ルカによる福音書24:25–27、21:20を参照）。　「七」とは、七年間を意味するものとしか解釈できない。なぜなら、そう解釈して初めて、ダニエルの預言と後の歴史との間に完全な一致が見られるからである。すなわち、最初の7つの「七」は、キュロスの勅令からエルサレムの都と神殿の建設が完了するまでの49年に完全に一致する。　続く62の七は434年に相当し、これは最初の七の49年と合わせると483年となり、ティベリウス帝の治世15年に、イエス・キリストが人類への奉仕の業のために現れるまでの期間と完全に一致する。預言によれば、キリストの殺害は最後の七週の半ば、すなわちその出現から3.5年後に行われることになっており、実際、福音書記者たちの記述通りであった。　この半週の後、聖なる場所に「荒廃の憎むべきもの」、すなわちエルサレムの破壊が訪れるはずであり、これはダニエルの言葉を指し示すものとして、救い主もまた予言していた（マタイ24:15）。そして、ティトゥスとウェスパシアヌスによるエルサレムの破壊の際に、これらすべてが実際に成就した。

あ、もしその文字を読み解き、その意味を私に説明できるなら、あなたは紫の衣をまとい、首には金の鎖がかけられ、わが王国で第三の支配者となるであろう。

そこでダニエルは答えて、王に言った。

「王の賜物は王の元に留めておき、栄誉は他の者に与えてください。私は王にその文字を読み解き、その意味を説明いたします。」

王にこう告げた後、聖ダニエルはまず、王の祖父であるネブカドネツァルが、その高慢さゆえに神から罰を受け――人間の姿を失い、人々から隔てられ、草を食べて生きなければならなかった――ことを王に思い起こさせた。　さらにダニエルは、王の傲慢さを非難し始めた。王は、先祖が受けた神の懲罰を忘れ、主の前で心を謙虚にせず、むしろ天の主に対して反抗し、高官や側室たちとの宴会で酒を酌み交わし、神殿の器を汚してしまったのである。　また、ダニエルは、王が金、銀、銅、鉄、石、木でできた、何も見ず、聞かず、理解もしない神々を崇め、自らの息と運命のすべてを握っておられる神を賛美しなかったことについても、王を非難した。これらすべてについて王を非難した後、ダニエルは壁に書かれた文字に目を向け、読み始めた。　そこに書かれていたのは、「メネ、テケル、パレス」という言葉であった。ダニエルは、この文字を次のように解説した。「メネ」とは、神があなたの王国を数え上げ、その終わりを定めたことを意味する。「テケル」とは、あなたが天秤にかけられ、非常に軽いと判定されたことを意味する。「パレス」とは、あなたの王国が分割され、メディア人とペルシャ人に与えられたことを意味する。　これを聞いた王は、自らの約束通り、悲観的な予言に心を乱されながらも、ダニエルを尊んだ。そして、ダニエルに紫の衣を着せ、首に金の鎖をかけ、王は彼を自分の王国の第三の支配者とすることを宣言した。

ダニエルの予言は的中した。その同じ夜、バビロンの王バルタサールは殺害され、メディア人のダリウスは、ペルシャのキュロスと共に、六十二歳の時に王位を継承した[8939]。

ダリウスは在位中、王国に百二十人のサトラップを任命し、その上に三人の公爵を置いた。そのうちのひとりがダニエルであった。これらのサトラップは、王に何の負担もかからないよう、彼らに報告を行うことになっていた。　ダニエルは他の諸侯やサトラップたちよりも優れていた。彼には高潔な精神があったからであり、王はすでに彼を全王国の長に据えようと考えていた。

そこで、諸侯やサトラップたちは、ダニエルの国政運営について告発する口実を探し始めた。しかし、彼は忠実であったため、いかなる口実も過ちも見つけることができなかった。そこで、彼らは言った。

「ダニエルに対する口実を見つけることはできない。彼の神の律法の中に、彼に対する罪を見出さない限りは。」

そこで、これらの貴族やサトラップたちは王のもとへ進み出て、こう言った。

「ダリウス王よ、永遠に生き給え！　王国のすべての君主、総督、サトラップ、顧問、そして軍司令官たちは、互いに合意し、王の布告を定め、次のような命令を発布することにした。すなわち、三十日間の間に、王であるあなた以外のいかなる神や人間にも祈りを捧げる者は、ライオンの穴に投げ込まれ、食い殺されることとする。」　どうか、王よ、この決定を承認し、勅令に署名なさってください。そうすれば、それはメディアとペルシャの法律のように不変のものとなり、破られることのないものとなるでしょう。

ダリウス王は、彼らの悪意に気づかずに、その勅令と命令に署名した。ダニエルは、そのような勅令が署名されたことを知ると、自分の家へ帰った。　彼の部屋の窓はエルサレムの方角に向かって開かれており、彼は一日三度、ひざまずいて自分の神に祈り、以前　にそうしていたように、神を賛美した。すると、あの者たちはこっそり覗き見し、ダニエルが自分の神に祈り、憐れみを求めているのを見つけた。その後、彼らは王のもとへ行き、王の命令についてこう申し上げた。

[8939] すなわち、ナボニド王とバルタサール王に次ぐ最初の王である。

「王よ、三十日間の間に、王であるあなた以外のいかなる神や人をも祈る者は、すべて獅子の穴に投げ込むという勅令に署名されたのは、あなたではありませんか？」

王は答えて言った。

「その言葉は、変更を許さないメディアとペルシャの法律のように、揺るぎないものだ。」

すると彼らは王に答えて言った。「ユダの子らの捕虜であるダニエルは、王にも、王が署名した勅令にも目もくれず、一日に三度、自分の祈りを捧げています。」　王はこれを聞いて深く悲しみ、心の中でダニエルを救おうと決意し、日没に至るまで懸命に彼を救おうと努めた。しかし、その者たちは王のもとに近づき、こう言った。

「王よ、知っておいてください。メディアとペルシャの法律によれば、王によって承認されたいかなる決定や法令も、変更することはできません。」

そこで王はダニエルを連れてきて、ライオンの穴に投げ込むよう命じた。その際、王はダニエルにこう言った。

「お前が絶えず仕えているお前の神が、お前を救うだろう！」

その後、大きな石が運ばれてきて、穴の上に置かれた。王は、ダニエルの敵たちが彼にさらに悪いことをしないよう、自分の指輪と重臣たちの指輪でそれを封印した。王は、悪人どもを猛獣以上に信用していなかったからである。　その後、王は宮殿へ戻り、夕食も取らずに寝床についた。食事を運ばせることさえ命じなかったが、眠気は彼から遠ざかった。

しかし、神は獅子の口を封じられたので、獅子たちはダニエルに何の害も加えなかった。

朝、王は夜明けとともに起き上がり、急いで獅子の穴へと向かった。そして王は大きな声で叫んだ。

「ダニエルよ、生ける神のしもべよ！　あなたが絶えず仕えているあなたの神は、あなたを獅子たちから救うことができたのか。」

するとダニエルは王に言った。

「王よ！　永遠に生きられますように！　私の神は御自分の天使を遣わし、獅子の口を塞がれました。それゆえ、獅子たちは私に害を及ぼしませんでした。私は神の御前で清かったからです。また、王よ、私はあなたに対しても罪を犯していません。」

そこで王はダニエルを大いに喜び、彼を穴から引き上げよと命じた。ダニエルは穴から引き上げられたが、彼には何の傷もなかった。　王は命じ、ダニエルを告発した者たちを連れて来させ、彼ら自身だけでなく、その子供たちや妻たちまでもが獅子の穴に投げ込まれた。彼らが穴の底にたどり着く前に、獅子たちは彼らに襲いかかり、その骨をすべて砕いてしまった。　その後、ダリウス王は、全地に住むすべての民、部族、言語の者たちに次のように書き送った。

「あなたがたに平安が満ち溢れますように！　私は、わが王国のあらゆる地域において、ダニエルの神を畏れ敬うよう命じる。なぜなら、その方は生ける神であり、永遠に存続する方であり、その御国は揺るぎなく、その支配は限りないからである。　神は救い、救い出し、天と地において奇跡としるしを行われる。神はダニエルを獅子の力から救い出された[8940]。

そしてダニエルは、ダリウス王のもとで誰よりも大きな栄誉を授かり、王は彼を自らの最も親しい友と宣言した。ダニエルの三人の仲間、アナニア、アザリヤ、ミサイエルもまた、同様の栄誉を授かっていた。

ユダヤ人の歴史家ヨセフス・フラウィウスは、ダニエルについて、彼が第一の重臣としてペルシャ王国で大きな権力を持ち、エクバタナという都市[8941]に有名な塔を築いたと記している。その塔

[8940] バルタサルの饗宴、その滅亡、およびバビロニア王国の崩壊に関する記述は、ダニエル書5:1–31にある。

[8941] エクバタナ――メディアの主要都市であり、ペルシア王、そして後にパルティア王たちの夏の離宮であった。この都市は非常に古く、要塞化された城と並外れた豪華さで知られていた。

は、同歴史家の時代、建設から数百年が経過していたにもかかわらず、あたかも今建てられたばかりであるかのように新しく見えたという。　この塔にはメディアとペルシャの王たちが埋葬され、その警護はユダヤ人の祭司の一人に委ねられていた。

ダレイオス王の後、キュロス王も聖ダニエルを大いに尊び、彼を自身の側近とし、民との仲介役とした。そしてダニエルは王と共に暮らし、王の友人たちの中で最も名高かった。

バビロニア人には「ビル」[8942] という名の偶像があり、その偶像のために毎日、小麦粉二十メーラ、羊四十頭、そしてワイン六メーラが供えられていた。王はその偶像を崇め、毎日参拝しに行っていたが、ダニエルは自分の神を礼拝していた。そこで王は彼に言った。

「なぜ、ヴィルに礼拝しないのか。」

彼は答えた。

「私は人の手で作られた偶像には拝礼せず、天と地を創造し、あらゆる肉なるものを支配しておられる生ける神にのみ拝礼するからです。」

王は言った。

「ビルは生ける神ではないとでも思っているのか？　彼が毎日どれほど食べ、飲んでいるか、見ていないのか？」

ダニエルは微笑んで言った。

「王よ、惑わされてはなりません。あの像は内側が粘土で、外側が銅であり、一度も食べたり飲んだりしたことはありません。」

すると王は激怒し、自分の祭司たちを呼び寄せて言った。

「もし、誰がこれをすべて食べているのか私に告げなければ、お前たちは死ぬことになる。もし、これを食べているのがヴィルであることを私に証明できれば、ダニエルが死ぬことになる。彼はヴィルを冒涜したからだ。」

するとダニエルは王に言った。

「王の仰せの通りになさってください。」

ヴィルの祭司は、妻や子供たちを除いて七十人いた。王はダニエルを連れてヴィルの神殿へ行き、ヴィルの祭司たちは言った：

「さあ、私たちはあちらへ出て行きます。王よ、あなたは食事を用意し、ワインを注いでから、扉を閉め、あなたの指輪で封印してください。もし明日、あなたが来て、すべてがヴィロによって食べ尽くされているのを見つけられなかったら、私たちは死にます。あるいは、私たちについて嘘をついたダニエルが死ぬでしょう。」

彼らはこれを気にも留めなかった。というのも、テーブルの下に隠し扉を設けており、そこからいつでも入り込んで食事を平らげていたからである。　彼らが退出した後、王はヴィルの前に食事を置いた。一方、ダニエルは自分の使用人たちに命じ、彼らは灰を持ってきて、王一人だけが見ている前で神殿全体にそれをまき散らした。そして外に出て扉を閉め、王の指輪で封印して立ち去った。一方、祭司たちはいつもの習慣通り、夜になって妻や子供たちを連れてやって来て、すべてを食べ尽くし、飲み干した。

翌日、王は早起きし、ダニエルも王と共に起きた。王は尋ねた。

「封印は無事か、ダニエルよ？」

「はい、王よ」とダニエルは答えた。

そして扉が開かれるやいなや、王は食卓を一瞥すると、大声で叫んだ。

「ヴィルよ、お前は偉大だ。お前には欺きなど微塵もない！」

ダニエルは微笑みながら、王が中に入らないよう制止し、こう言った。

[8942] ヴィルまたはベル（フェニキア語のバアル）は、バビロンの主なる太陽神の名称である。

「床を見てください。これは誰の足跡か、お気づきでしょうか？」

「男、女、そして子供たちの足跡が見える」と王は言った。そして怒り狂った王は、祭司たちとその妻、子供たちを捕らえるよう命じた。すると彼らは、自分たちが中に入って食卓のものを食べていた隠し扉を明かした。　そこで王は彼らを処刑するよう命じ、ヴィラをダニエルに引き渡した。ダニエルはそれを破壊し、その神殿も破壊した[8943]。

その場所には大きな竜がおり、バビロニア人たちはそれを崇めていた。

王はダニエルに言った。

「これについても、それが青銅だと告げるのか。見よ、これは生きており、食べ、飲んでいる。この神が生きているのではないとは言い切れないだろう。それゆえ、これにひれ伏せ。」

ダニエルは言った。

「私は、私の神、主を礼拝します。主こそが生ける神だからです。しかし、王よ、お許しいただければ、私は剣も杖も使わずに、その竜を殺して見せましょう。」

王は言った。

「許そう。」

そこでダニエルは、樹脂と脂と毛を集め、それらを煮て一つにまとめ、塊にして竜の口の中に投げ込んだ。すると竜は腹を裂いて死んだ。そしてダニエルは言った。

「ほら、これがあなた方の聖なる品々です！」

バビロニア人たちはこの話を聞くと、激しく憤り、王に反旗を翻して言った。

「王はユダヤ人になってしまった。ヴィラが竜を打ち倒し、殺し、祭司たちを処刑したのだ。」

そして王のもとへやって来て、こう言った。

「ダニエルを引き渡せ。さもないと、我々は王と王の家族を皆殺しにする。」

王は彼らが強く迫っているのを見て、やむを得ずダニエルを引き渡さざるを得なかった。彼らはダニエルを獅子の穴に投げ込み、彼はそこで六日間過ごした。　穴の中には七頭の獅子がおり、毎日二体の死体と二匹の羊が与えられていたが、この間、獅子たちがダニエルを食べてしまうことのないよう、餌は与えられなかった。しかし、神は以前と同様に獅子の口を封じられた――そしてダニエルは、まるで柔和な子羊たちと共にいるかのように、獅子たちと共に穴の中に座っていた。

ユダには預言者ハバククがいた。彼はスープを煮て、皿にパンを砕いて盛り、それを刈り取り人たちに届けるために野原へ向かっていた。すると、主の御使いがハバククに言った。

「あなたが持っているこの食事を、バビロンのダニエルのいる獅子の穴へ持って行きなさい。」

アバクムは言った。

「主よ！　私はバビロンを一度も見たことがなく、その穴も知りません。」

すると、主の御使いは彼の頭頂を掴み、髪をつかんで持ち上げ、御霊の力によってバビロンの獅子の穴の上に立たせた。そこでアバクムは声を上げて言った。

「ダニエルよ！ダニエルよ！神があなたに送られた食事を取ってください。」

ダニエルは言った。

「神よ、あなたは私を覚えておられ、あなたを愛する者たちを見捨てられませんでした。」

そしてダニエルは立ち上がり、食事をとった。すると、神の御使いは瞬く間にアバクムを元の場所に戻した。

七日目に、王はダニエルを悼むためにやって来て、堀に近づき、中を覗き込んだところ、見よ、ダニエルが座っていた。王は大きな声で叫んで言った。

[8943] ヴィルと竜に関する物語はダニエル書14章3節～23節に記されており、この物語は同書の非正典部分に該当する。

「ダニエルの神、主よ、あなたは偉大であり、あなた以外に神はいない！」

そして、ダニエルを引き上げさせ、彼を陥れようとした者たちを堀に投げ込むよう命じた。すると、彼らは王の目の前でたちまち食い尽くされてしまった[8944]。

ダニエルとその三人の友は、長寿を全うした。

聖キリロス・アレクサンドリアスや他の何人かは、ダニエルとその仲間たちを重用していたネブカドネツァルや他の王たちの死後、カンビゼスという名の別の王が即位したと伝えている[8945]。彼らの信仰を知り、自らの不義を彼らに指摘された王は、まずアナニアの首を刎ねるよう命じた。 アザリヤは自分の衣を差し出して、その首を受け取った。アザリヤの首はミサイエルが受け取り、ミサイエルの首はダニエルが衣を差し出して受け取った。最後に、ダニエルの首も切り落とされた。 伝えられるところによれば、彼らの首が切り落とされた後、それぞれの首は自分の体に再びくっつき、主の御使いが聖人たちの遺体を受け取り、ゲバル山（[8946]）へと運び、そこで彼らは岩の下に安置された。そして四百年後、我らの主イエス・キリストの復活の日に、他の数人と共に彼らも復活し、多くの人々の前に現れて、再び安息に入った[8947]。 聖なる父たちは、キリストの降誕の七日前に彼らの記念を執り行うよう定めた。というのも、彼らもまたユダ族の出身であり、私たちの救い主もその血筋を引いておられるからであり、その意味で、救い主は肉親としてこれらの聖人たちと縁があるからである。

これらの聖人たちの祈りによって、私たちの神キリストが、この世における私たちの生活を整えてくださいますように。キリストに、父と聖霊と共に、世々限りなく栄光がありますように。アーメン[8948]。

トロパリオ、第2調:

信仰の偉大な導き手よ[8949]：炎の泉において、安らぎの水の上のように、三人の聖なる少年たちは喜び、預言者ダニエルは、羊の群れを守る羊飼いとして、獅子に現れました。彼らの祈りによって、キリストなる神よ、私たちの魂を救ってください。

預言者のコンダク、第3調:

御霊によって照らされた汝の清き心は、預言の最も輝かしい住処となり、汝は遠く離れた未来を今ここにあるかのように見通した。獅子の穴に投げ込まれながらも、汝は獅子を鎮めた。このゆえに、我らは汝を崇める、幸いな預言者よ、栄光あるダニエルよ。

[8944] ダニエルが6日間、獅子の穴に閉じ込められたという物語は、ダニエル書14:28–42に記載されている。

[8945] カンビセス――ペルシャの王、キュロスの息子（529–522年）、残虐さで知られていた。

[8946] ゲバル――エフライム族の領地にある山で、シケムの町の北側に位置する。

[8947] 福音書記者マタイの証言によれば、我らの主イエス・キリストの死の際、*「墓が開き、多くの聖徒の遺体がよみがえり、主の復活に際して墓から出て、聖都に入り、多くの人々の前に現れた」*（マタイ27:52–53）。

[8948] 聖ヘレナ皇后は、預言者ダニエルの聖遺物をコンスタンティノープルに持ち帰り、聖ロマン教会の近くに安置した。これらを目撃したのは、1200年のロシア人巡礼者アントニー、1342年のノヴゴロド出身のステファン、14世紀の聖職者アレクサンドル、そして1420年の修道助祭ゾシマである。彼の棺は今もなお、ペルシャ王国の首都スーズで公開されており、異教徒たちからも崇敬されている。

[8949] 「是正」とは、成功や偉業を意味する。

少年へのコンダク、第6調：

描かれた像を尊ばず、言葉に尽くせぬ実体によって身を守り、三度の祝福を受けたあなたは、火の試練において栄光を得、耐え難い炎の中に立ちながら、神にこう呼びかけました。「速やかに、おお、寛大なる方よ、憐れみ深い者として、御力ある限り、我らの助けに駆けつけてください。」[8950]

聖ダニエル・殉教者の記念日

記念日：12月17日

聖ダニエルは当初、ガディール近郊にあるニヴェルティ、あるいはヴェロイと呼ばれる島の領主であった[8951]。当時、主要な航路に位置するという自領の恵まれた立地を活かし、ダニエルは多くの富を築いた。しかし、キリスト教の敬虔さの中で育てられた彼は、マモン（マタイ6:24）や人間の欲望よりも、神に仕えることを選び、ついには*「すべてを捨て、キリストを得るために、すべてを屑と見なした」*（フィリピ3:8）、権力と財産を子供たちに遺し、自身はローマへ赴き、そこで修道生活に入った。ローマからコンスタンティノープルへ向かい、そこでローマ皇帝ロマンとコンスタンティヌス[8952]と対談し、彼らからエルサレムを訪問する許可を求めた。エルサレムで聖地を参拝した後、ダニエルは現地の総主教クリストドゥロス[8953]から「ステファノス」という名の修道服を授かったが、そこで彼は不信心なサラセン人たちから多くの嫌がらせや、さらには暴行さえも受けなければならなかった。そこから彼はエジプトへと向かったが、　そこで彼は捕らえられ、牢獄に投獄された。そこでは、彼と共に投獄された二人の司祭と共に、飢えと渇き、そしてあらゆる苦難に苛まれながら、六ヶ月間を過ごした。その後、この永遠に記念される聖人はエジプトのアミール（総督）の前に引き出され、アミールは彼に重い足枷をはめ、キリストを否定するよう強要した；　しかし、聖人は揺るがず、臆することなく大胆に、私たちの主イエス・キリストこそが真の神であると告白した。そのために、彼は多種多様な苦難にさらされ、その苦しみにより衰弱し、ついに息を引き取った。ダニエルは、自らの死について神から予言を受けていた。

12月31日

12月18日（旧暦）

聖殉教者セバスティアンとその仲間たちの生涯と殉教

記念日12月18日

[8950] ライオンの穴からのダニエルの奇跡的な救出に関する物語は、ダニエル書第6章に記されている。

[8951] ガディラ――スペイン南部のカディス、ジブラルタル近郊。

[8952] ロマン1世・ラカペノス――917年から944年まで在位したビザンツ皇帝。コンスタンティノス7世――912年から959年まで在位したビザンツ皇帝で、ロマン1世と同時期に統治した。

[8953] クリストフォロス、あるいはクリストドゥロスは、947年から967年までエルサレム総主教を務めた。

聖セバスティアンはナルボンヌの町[8954] で生まれ、メディオラン[8955] で教育を受け、学問を修めた。 不敬虔な王たち、ディオクレティアヌスとマクシミアヌス[8956] は、彼を深く愛し、宮廷警備隊の指揮権を彼に委ね、常に彼らの面前に立つよう命じました。というのも、彼は勇敢で聡明な男であり、知恵に満ち、　言葉は真実で、裁きは公正であり、助言には先見の明があり、職務や任されたあらゆる事柄において忠実かつ勇敢で、その美徳と誠実さによって誰よりも際立っていた。兵士たちは彼を父のように敬い、宮廷の者たちは皆、彼を深く愛し尊敬していた——彼は真の敬虔さを備えていたからである。　当然のことながら、神がその賜物を授けた者を、すべての人々は愛し、敬ったのである！彼は常にキリストのために熱心に働き、祈り、その聖なる戒めを守った。しかし、不信心な王たちが彼のキリストへの信仰を知ることを避けるため、これらすべてを密かに行っていた。　彼がこの世の権力の仮面の下で、キリストの戦士であることを隠していたのは、拷問を恐れたり、名誉や富を愛し、それを失うことを恐れたからではなく、当時、残酷に迫害され、苦しめられていたキリスト教徒たちを助けるためだけであった。　また、束縛や拷問からの解放を懇願したり、その苦しみを和らげたりすることができなかった人々に対しては、彼らを励まし、助言し、説得して、自分たちを贖ってくださった主のために勇敢に命を捧げ、一時的な苦しみを経た後に永遠の報いを期待して自らの血を流すよう促した。　こうして彼は、悪魔が神から引き離し、自ら奪い取って滅ぼそうとしていた魂を、神のために獲得しようと努めた。　彼は聖書の言葉に従って行動した。すなわち、信者たちの垂れ下がった手と弱った膝を強め（イザヤ35:3–4参照）、気弱な者や疑い深い者、また苦痛を恐れる者たちに対しては、諭しによって勇気を奮い立たせ、偉業へと駆り立てたのである。　多くの聖人たちが、善き業に励み、苦難に耐え、残酷な拷問の中でもキリストへの信仰を守り抜き、この世を去った後に永遠の命の冠を受けた姿を目の当たりにして、セバスティアン自身もまた、キリストのために苦難を受けるという熱意に燃え上がり、主がそのための適切な時を告げてくださるのを待ち望んでいた。　そしてついに、彼の中に燃え盛る神への愛と熱意の炎をこれ以上隠し通すことのできない時が訪れ、彼は万人に自らの正体を明かした。光はもはや闇の中に隠れることはできなかったのだ。

当時、マルケリンとマルクという、誠実で高潔な二人の実の兄弟が、キリストの御名を告白したために捕らえられ、長い間牢獄に閉じ込められていた。祝福されたセバスティアンは頻繁に彼らを訪ね、聖なる信仰について語りかけ、はかない地上の恵みを捨て、拷問を恐れないよう説得して、彼らを慰めた。　彼らはその賢明な助言に従い、拷問者たちから与えられた傷を勇敢に耐え抜き、信仰を揺るがすことなく、剣による斬首の刑に処された。しかし、彼らが死を覚悟して剣の下に頭を垂れたまさにその瞬間、両親や妻、子供たちの元へ帰すよう命令が下った。　彼らの年老いた両親、トランキリンとマルキアはまだ生きていた。　両親をはじめ、家族全員がローマの総督アグレスタ・クロマティウスに、マルケッリヌスとマルクスの命を30日間延ばしてほしいと懇願した。その間に、彼らを説得して異教の神々を崇拝させるつもりだった。というのも、両親も妻たちも、そしてすべての親族も異教徒だったからである。

願い通りの猶予期間が与えられると、両親、妻たち、子供たち、親族、友人たちはマルケリンとマルクを取り囲み、泣きながら、自分たちと彼ら自身を憐れんでくれ、その決意を捨てて王たちの意に沿うよう懇願し始めた。　父は、白髪や老い、そして体の病を挙げながら、自分が死ぬまでは信仰を曲げず、慣習に従って自分を葬ってほしいと懇願した。彼はすでに死を目前にしており、自力で歩くこともできず、常に他人に支えられたり運ばれたりしていた。　母は、彼らを育てた自身の胸を

[8954] ナルボン（現在のナルボンヌ）は、古代ガリア人の繁栄した商業都市であり、その後（2世紀初頭）ローマの植民地となった。ガリア南東部、アタック川沿いに位置し、　現在はフランスの比較的さほど重要ではない都市であり、リヨン湾からほど近く、地中海と大西洋を結ぶ同名の運河沿いに位置している。

[8955] メディオラン（現在のミラノ）は、古代のキザルピナ・ガリア、すなわち現在の北イタリアに位置する重要な都市であった。

[8956] ディオクレティアヌスとマクシミアヌスは、284年から305年まで在位したローマ帝国の共同皇帝である。

指さし、彼らに相応の敬意と息子としての従順を求め、自分のために自分の命を救い、自ら進んで死を選ぶようなことはしないよう懇願した。幼い子供たちは両親に手を伸ばし、足元にすがりつき、涙ながらに自分たちを孤児にしないでほしいと懇願した。 一方、まだ おむつを穿いていて言葉を話せない他の子供たちは、その姿だけで孤児になることを思い起こさせ、両親の憐れみを誘った。妻たちは自身の未亡人となる運命について語り、熱い涙を流しながら、自ら死を選ぶことで自分たちを道連れにせず、未亡人としての生活における様々な苦難にさらさないでほしいと懇願した。 一方、親族たちは、自らを不名誉な死に追いやることで、家や一族全体にそのような不名誉をもたらしたり、近隣から侮辱を受けたりしないよう説得した。そして、皆が泣きじゃくっていた。さて、その聖なる大胆さにおいて誰にも打ち勝てない男たちには、他に何ができるというのだろうか？ いかなる苦しみも、これらの誘惑ほど彼らを揺るがすことはできなかった。年老いた両親、妻、子供たち、そして親族への自然な愛情が彼らを打ち負かし、憐れみが心を打ち砕いた。そして彼らは、風になびく葦のように疑い、揺らぎ始め、火に溶ける蝋のように心が溶けていった。 彼ら自身も家族と共に涙を流し、もはや彼らの懇願に屈して聖なる信仰を捨てようとしていた。

その時、そこにいた聖セバスティアンは、彼らが信仰を捨て、自らの魂を滅ぼそうとしているのを見て、彼らを憐れんだ。そして、他者を助け、自らも苦難の業に身を投じる時が来たことを悟り、出席者たちの真ん中に立ち、皆に沈黙を命じて、こう語り始めた。

——おお、キリストの勇敢な戦士たちよ！ 神の軍勢の最も熟練した戦士たちよ！ あなたがたは、その寛大さによってすでに勇ましく勝利に近づいているというのに、今や、不義な誘惑に惑わされた隣人たちのせいで、永遠の冠を捨て去ろうとしている。 そうしてはならない。今こそ、キリストの戦士たちに、自らの功績をもって勇気を教えよ——彼らに、鉄よりも信仰をもって武装するよう教えよ。女たちの涙のために勝利の旗を捨ててはならない。また、あなたがたの足元に打ち倒された敵の首領を弱体化させてはならない。そうしなければ、彼が再び力を取り戻し、あなたがたと戦いを始めかねないからだ。 なぜなら、たとえ以前の反乱が猛烈であったとしても、再び挑発されれば、敵はさらに激しい怒りに駆られるだろうからである。さあ、地上の情欲の上に、あなたがたの功績の栄光ある旗を掲げ、無益な子供じみた涙のためにそれを捨ててはならない。 あなたがたが泣いているのを見ている者たちは、もしあなたがたが知っていることを知っていれば、今頃は喜んでいるだろう。なぜなら、彼らは、命は地上にのみ存在し、それが終わり、肉体が死ねば、魂の生き残った部分は一つも残らないと考えているからだ。 もし彼らに、不死で苦痛のない、絶え間ない喜びが満ち溢れる別の人生があることを知っていたなら、きっとあなた方と共にそこへ入ろうと願い、この一時的な人生を軽んじて、永遠の命を得ようと努めたことでしょう。 この世の生活ははかなく、あまりにも移ろいやすく、不確かなものであるため、それに執着している人々でさえ、やがてその信頼を失ってしまう。 世界の始まりから、この人生は、それに希望を託した者、それを望んだ者を皆破滅させ、それを誇りに思う者たちを嘲笑し、すべての人に嘘をつき、希望を固く持ち、信頼を損なわれない者を一人も残さず、極めて虚偽に満ちたものであることが明らかになった。 ああ、もしこの嘘が単なる夢の中だけのことであり、実際には苦い迷いへと導くものではなかったなら！ しかし、さらに悪いのは、この一時的な人生が、その信奉者たちをあらゆる不法へと導くことである。食に溺れる者たちを過食と酩酊で甘やかし、快楽を好む者たちを淫行やあらゆる不潔な行いに引き込み、盗人に盗みを教え、短気な者に怒りを覚えさせ、嘘つきに欺くことを教える。 夫と妻を引き裂き、友人の間に敵意をまき散らし、柔和な者たちの間に争いを、正義な者たちの間に不義を、修道者たちの間に誘惑をもたらす。裁判官からは正義を、清らかな者からは貞節を、芸術家からは芸術を、そしてすべての人々から善良な道徳を奪い去るのだ。 また、彼女が信奉者たちを駆り立てて行う最も凶悪な行いについても思い起こそう。兄弟が兄弟を殺し、息子が父を殺し、友人が友人を殺す——誰がこれを教えるのか？ そのような不法行為を行うとき、彼らは何を望んでいるのか？ これほどまでに愛されている「生命」のために、人々は互いに憎み合い、それぞれが自分にとってより良い生活を築こう

と努めているのではないだろうか？　なぜ強盗は旅人を殺し、金持ちは貧しい者を虐げ、高慢な者は謙虚な者を傷つけ、罪ある者は無実の者を迫害するのか？まことに、これらすべての悪を行うのは、この現世に執着し、長くこの世を愛し、それを享受し続けようとする者たちである。　そしてこの世は、その信奉者や僕たちに悪を教え込み、彼らを自らの娘――すなわち、最初の人間たちも投げ込まれたあの永遠の死――へと引き渡す。なぜなら、彼らは永遠の命を得るために創造されたにもかかわらず、一時的な人生に惑わされ、腹の欲、快楽、目の欲望にふけったからである（Iヨハネ2:16）。　それゆえ、彼らは地上の恵みを何一つ持ち去ることなく、地獄へと転落したのです。愛する友よ、この地上の生活こそが、あなた方をこれほどまでに惑わし、永遠の命へと向かう友人たちを、あなた方の不義な助言によって、再びこの世へと引き戻そうとさせているのです！　この世は、尊敬すべき親御さんたちよ、あなたがたに、天の軍勢、朽ちることのない栄光、そして永遠の王の慈しみへと向かう息子たちを、狂おしいほどの泣き叫びで惑わすよう教唆しています。　彼女は、聖徒たちの貞淑な妻たちよ、あなたがたに、その愛撫によって殉教者たちの心を堕落させ、彼らの善意を捨てさせ、命の代わりに永遠の死を、自由の代わりに奴隷の身を受け入れるよう説得するよう仕向けている。もし彼らが　あなたの助言に従うならば、彼らはあなたたちと長く共に暮らすことはなく、やがてあなたたちと別れることになり、　――しかも、互いに顔を合わせることのできないような別れとなる。すなわち、不信仰者の魂を焼き尽くす炎が燃え盛る場所、神を冒涜する者の口を地獄の蛇が食い尽くす場所、偶像崇拝者の胸をアスピッドが苛む場所、苦しみの中で苦々しい泣き声、重いため息、絶え間ない嗚咽が聞こえる場所での別れである。　どうか彼らにこれらの苦しみから逃れさせてやり、あなた自身もそれらから解放されるよう努め、彼らが再び、彼らのために用意された天の冠へと歩みを進めるのを妨げてはなりません。恐れることはありません。彼らはあなたと引き離されることはなく、それどころか、天国であなたのために明るい住まいを用意してくれるでしょう。そこでは、あなたも彼らやあなたの子供たちと共に、永遠の恵みを享受することになるのです。　もしあなたがたが、この世で美しい建物を賞でさえいるのなら、なおさら、あの天上の住まいが持つ美しさに心を奪われることでしょう。そこでは、食卓は純金で輝き、宮殿は宝石で造られ、　真珠で飾られ、栄光に輝き、庭園には枯れることのない花が永遠に咲き誇り、実り豊かな野原は甘い小川に潤され、空気は常に清々しく、生き生きとした風が言葉に尽くせない香りを運んでくる場所。そこには、決して暮れることのない日、沈むことのない光、そして尽きることのない喜びがあり、　そこには嘆きも、泣き声も、悲しみも、いかなる不完全さもなく、罪深いものは何一つ見えず、悪臭も感じられず、悲しく、嘆きに満ちた、恐ろしい声も聞こえない。ただ美しいものだけが目に映り、すべてが芳香を放ち、喜びに満ちた音だけが聞こえる。　そこでは、天使たちと大天使たちが絶え間なく歌い、不死の王を賛美している。[8957] 。このような命を軽んじ、一時的なものに執着するなど、どうしてあり得ようか？富のためか？しかし、それらはすぐに消え去ってしまう。　そして、それらを永遠に手元に置いておきたいと願う者たちは、その富が彼らに告げていることに耳を傾けるがよい。「あなた方は私たちを、まるで決して私たちと別れることのないかのように愛しています。あなたがたが死ぬ時、私たちはあなたがたの後を追うことはできません。しかし、あなたがたが生きている間は、あなたがたが命じたり、私たちを先に行かせたりさえすれば、私たちはあなたがたに付き添うことができます。　貪欲な金貸しと勤勉な農夫を、あなたの手本としてください。前者は人から金を借りて、その二倍を受け取るために貸し出し、後者は様々な種を地に蒔いて、百倍の収穫を得るのです。借主は金貸しに二倍の金を返し、大地は種を蒔いた者に百倍の穀物を返します。　もしあなたがたが自分の富を神に委ねるな

[8957] 同様の比喩的な特徴をもって、楽園は礼拝の聖歌や、その他の聖人伝（例えば、聖アンドレイ・ユロディヴィの楽園の幻視）および教会の聖父たちの著作、　例えばエフレム・シリンなどに見られる。なお、エフレム・シリンは、感覚的な描写の性格を持つこれらの楽園の至福に関する特徴やイメージはすべて、霊的な意味で理解されるべきであり、未来の至福は人間の言葉では表現できず、人間の感覚や地上の知覚では捉えられないものであると付け加えている。

ら、神はそれを何倍にも増やしてくださるのではないでしょうか。あなたの宝もそこへ送り、あなた自身もそこへ来るよう努めなさい。　この一時的な人生に、いったい何の益があるというのか。たとえ誰かが100年生きたとしよう。最期の時が来れば、過ぎ去ったすべての年や、この世のあらゆる快楽が、まるで最初から存在しなかったかのように思えるのではないだろうか。そこから残るのは、まるで一日だけ私たちと共に過ごした旅人の足跡のような、わずかな思い出だけではないだろうか。まことに、真の恵みを知らぬ狂人だけが、来るべき最も美しい来世を愛さないことができるでしょう！　まことに、愚かな者だけが、つかの間のこの世の命を失うことを恐れ、永遠の命を得ることを恐れるのです。その永遠の命においては、喜び、富、そして楽しみが始まり、決して終わることはなく、永遠に続くのです。　永遠の命の奉仕者になりたくない者は、この一時的な命をも無駄に滅ぼし、永遠の死を受け、地獄に縛り付けられることになる。そこには、消えることのない炎、絶え間ない悲しみ、永遠の苦しみがあり、筋肉が蛇の頭となり、目から火の矢を放ち、　歯は象のように大きく、サソリの毒針のように噛みつき、声は獅子の咆哮のようで、その姿を見るだけで大きな恐怖を覚え、激しい病と最も苦い死をもたらす。このような恐怖と苦しみの中で死ぬことは、恐ろしいことではないだろうか？　しかし、さらに恐ろしいのは、彼らが絶えず死ぬために生き、終わりのない苦しみを受けるために朽ちることなく、永遠に蛇に食い荒らされ続けるために無傷であり続け、食い尽くされた肢体が再び再生し、毒蛇や休むことのない蛆の餌となるためである。　ああ、友よ、両親よ、聖人たちの尊い妻たちよ！この聖なる二人を、永遠の命から、このような恐ろしい永遠の死へと陥れることのないよう願ってください。彼らを喜びから嘆きへと追いやってはなりません。光から闇へと向かうよう勧めてはなりません。甘美な安らぎから苦い苦しみへと誘ってはなりません。

おお、聖なる二人、マルケリンとマルクよ！　狡猾な敵に惑わされないでください。その敵は、あなた方の家族を通じてこのような誘惑を仕掛けています。自らを果てしない苦しみへと陥らせず、悪魔の手に落ちず、一時的な人生への愛や、目に見える世界の美しさ、そして世の虚しい　快楽に惑わされないでください。両親の懇願や、妻たちの泣き声、　子供たちの涙、親族や友人たちの優しさに負けてはなりません。主の御言葉を思い出してください。*「人の敵は、その家の者たちである」*（マタイ10:36）という言葉を思い起こしなさい。彼らは私たちを神から引き離し、私たちの友ではなく敵であり、彼らの私たちへの愛は真実ではなく偽りである。なぜなら、彼らは私たちからこれほど大きな恵みを奪い、神の愛と、神を愛する者たちのために用意された天の御国を私たちから奪い去るからである。　あなたがたがこれほどまでに労苦してきたその報いを、あなたの手から奪い取られることのないようにしなさい。なぜなら、あなたがたはすでに、まるで手の中に、あなたのために用意された恵みを握っているかのように、天の宮殿の門の前に立っているからです。今や、あなた方のための冠はすでに編み上げられており、功労の与え主であるキリストは、あなた方に冠を授け、聖なる天使たちの前であなた方を栄光に輝かせるのを待っておられます。　今や、あなたがたの道の終わりが訪れました。ロトの妻のように後ろを振り返って、魂のない石柱となってはなりません（創世記19:26）。そうすれば、あなたがたの魂を滅ぼしてしまうことになるからです。　両親や妻、子供たちへの過度な愛に惑わされてはなりません。そうすれば、*「父や母をわたしよりも愛する者は、わたしにふさわしくない。また、息子や娘をわたしよりも愛する者も、わたしにふさわしくない」*（マタイ10:37）と仰せになったキリストにふさわしくない者となってしまいます。　霊によって始めたのに、肉によって終わるような愚かな者になってはなりません（ガラテヤ3:3参照）。ああ、私の神であるキリストが、私があなたがたの前で御名のために血を流すことを許してくださいますように。そうすれば、あなたがたは私の苦しみを見ることができ、私の死が、あなたがたと私の神のために魂を捧げるべきであるという模範となるでしょう。

聖セバスティアンがこのような教えや、その他多くの訓示を説いていたとき、突然、神の光が彼を照らし、その顔は天使の顔のように輝き、不信仰者たちはその顔の栄光に恐れおののいた。　ま

た、ある者たちは、七人の天使が至福のセバスティアンに明るい衣をまとわせているのを見、そして最も美しい若者が、次のように言いながら彼を祝福しているのを見ました。

「あなたはいつも私と共にいるだろう。」

これらすべては、プロトスクリーニアリウスであるニコストラタ（[8958] ）の家で起こった。マルケリンとマルクは、その家で監禁されていたのである。　ニコストラトの妻ゾエは、重い病気のためすでに6年間口を利くことができなかったが、知性と聴力は損なわれていなかった。彼女はセバスティアヌスの語った言葉をすべて聞き取り、理解し、彼の顔の周囲に輝く光を見て、彼の足元にひれ伏し、身振りで自分の舌を解いてくれるよう懇願した。至福のセバスティアヌスは言った。

「もし私が真にキリストの忠実な僕であり、この妻が私から聞き、信じたことがすべて真実であるならば、かつて洗礼者ヨハネの父である預言者ザカリヤのときのように（ルカ1:64）、主が彼女の口を開き、舌を解いてくださいますように。」

そう言うと、彼はその女性の口に十字の印を結び、彼女はたちまち大声でこう言った。

「あなたは幸いである。あなたが語った言葉は祝福され、あなたを通して生ける神の御子キリストを信じる者たちは幸いである。なぜなら、私は天からあなたのもとへ降りてきた天使を見たからである。その天使は、あなたの前に開かれた書物を掲げており、あなたはそれに基づいて、今語ったすべてのことを読み上げたのだ。」　あなたの語ったすべてを信じる者たちは祝福され、あなたから聞いた言葉のうち、たった一つでも疑う者は皆、呪われよ。　昇る夜明けが闇を追い払い、目に光を与えるように、あなたの言葉の光は、私の無知と盲目という闇を追い払い、真の信仰という明るい日差しで私を照らし、六年間の沈黙の末、神を賛美するために私の口を開かせてくださいました。

この奇跡を目撃し、そこにいた者たちは皆、キリストを信じるようになった。　ゾエの夫ニコストラトも、キリストのこのような力を見て、聖人の足元にひれ伏し、王の命令によりマルケリンとマルコを拘束していたことを詫び、彼らの手から鉄の足枷を外すと、彼らの膝を抱きしめて自由の身となるよう懇願し、こう言った。

「ああ、もし私が、あなた方の解放のために束縛に耐えるほど幸せであればいいのに！　あなた方のために私の血を流すことで、私は自分の罪を洗い流し、永遠の死を免れて、神がセバスティアヌスの口を通して私たちに告げ知らせてくださったあの命を得ることができるでしょう。」

すると、ニコストラトスが聖人たちにそれぞれの家へ帰るよう頼むと、彼らは彼にこう言った。

– 私たちは、この苦しみの杯をあなたに負わせたくはありません。私たちの主キリストは寛大で慈悲深い方であり、御許にやって来て願い求めるすべての人に、御自身の天の恵みをお与えになるからです。　もしあなたが心からそれを望むならば、主は力強く、あなたにも同じ杯を授けてくださるでしょう。なぜなら、もしあなたがた、かつては信仰を持たなかった者たちに、真理を知る光が与えられたのであれば、　、ましてや今、あなたがたが信仰を持った今、求めるものはすべて与えられるからです。神の恵みは常に、人々が求める助けを差し伸べる用意ができており、とりわけ、何の疑いもなく主を信じる者たちに対してはなおさらです。　あなたがたの信仰は今日の教えから始まり、たった一時間で、誰であれ一年かけても学べなかったであろうことを学びました。そして、私たちが見ているように、主への信仰において、主のために死を覚悟するあなたがたを、何ものも――両親であれ、子供であれ、富であれ――妨げることはありません。　突然、あなたがたはかつて愛していたものを軽んじ、かつて知らなかったものを求め始めた。未知の道を歩み、たちまちキリストのもとへたどり着き、もはや地上のいかなる慰めも求めないため、あなたがたの願いはすでに天へと向けられている。なんと称賛に値する偉大な行いだろうか！　なんと模範となるべき美徳の例であろうか！　あ

[8958] プロトスクリーニアリウス――エパルヒ（地方総督）の下で大きな権力を有していた宮廷の財務官であり、そのため皇帝から特別な信頼を寄せられ、様々な重要な職務を任されていた。

なたはまだ洗礼の水によってキリストと結ばれておらず、戦いの始まりさえ見ていないのに、すでに真の王のために武器を掲げ、キリストの戦士たちを束縛から解放するために、自ら囚人となり、裁かれた者たちのために自らを殺されることを恐れてはいない。

皆、心を打たれて涙を流し、かつての無知と、キリストの戦士たちの善き功績を妨げようとしたことを悔い改めた。マルコはこう言った。

「学びなさい、愛する両親よ、妻たちよ、友たちよ！　信仰の盾を手に取り、悪者の燃え盛る矢を消し去ることができるように（エフェソ6:16）、敵に勇敢に立ち向かうことを学びなさい。悪魔の僕たちが立ち上がり、私たちに対して武装しようとも――私たちの体を、彼らが望むような苦痛で苛もうとも構わない。彼らは体を殺すことはできても、信仰のために戦う魂を打ち負かすことはできない。体の殺害や引き裂きなどには、私たちは目を向けない。王のために受けた傷は、戦士たちに栄光をもたらすのだ。　悪魔は、彼自身にとっても苦痛となる怒りを私たちに向けて激昂している。なぜなら、私たちの忍耐を見ることで、彼自身も苦しんでいるからだ。彼は私たちに様々な苦痛を与え、多様な死を脅かす。それは、恐怖によって私たちを善き行いから引き離そうとするためである。しかし、苦痛が功を奏さないところでは、彼は讒言を用いて行動する。命を奪うために命を約束し、富を約束して貧困へと導き、栄光を与えて恥を被らせ、安楽な生活を約束して、その代わりに私たちを災いと永遠の悲しみへと陥れる。これこそが彼の攻撃の策略であり、これこそが彼の狡猾な企みである――肉体を苦しみから解放し、魂を罪によって死に至らしめることである。　さあ、彼に立ち向かおう。魂を助けるために、肉体を軽んじよう。永遠の命を望む我々が、なぜ一時的な死を恐れる必要があるだろうか！　より良い命を得られると期待しているのに、なぜこの世の命を惜しむ必要があるのか？　来世を見る希望を持たない者たちこそ、死を恐れるべきである。　ああ、この世の奉仕者たちのうち、どれほど多くの者が不慮の事故によって滅ぼされたことか。稲妻に打たれたり、海に飲み込まれたり、深淵に飲み込まれたり、剣に斬り殺されたりしたのだ！そして、この不幸な者たちは、悲しみと共にこの世の命さえ失い、来世の命を得ることもできなかったのだ！　彼らにはこの世の命を嘆き、死を恐れていればよい。しかし、私たちにとって、死が何の悲しみであろうか。キリストによって私たちのために用意された、目には見えず、人の耳には聞こえず、知性では理解できないほどの恵みに満ちた、永遠の至福の命を待ち望む私たちにとって、この世の命を気にかける必要などあるだろうか。

聖マルコがこのように語ると、皆は来世への憧れに満たされ、現世を嫌悪するようになった。皆はキリストへの愛に燃え上がり、この世を憎み始め、神が彼らの闇を照らし、心の目を開き、救いの道を示して滅びから救い出してくださったことを感謝した。　このようにして、聖なる殉教者たちをキリストから引き離そうとして来た者たちは、自らキリストへと回心し、他者を滅ぼそうとしていた者たちは、かえって自ら救われた。そして、ニコストラトスは妻と共に聖人に切に懇願して言った。

「もし私にキリスト教の信仰の秘跡が授けられなければ、私は飲食を拒みます。」

「あなたの務めを変えなさい」とセバスティアンは答えた。「そして、エパルホスとしてではなく、むしろキリストの首席執事として奉仕し始めなさい。　私の助言に耳を傾けよ。汝が束縛し、牢獄に閉じ込めている者たちをすべて集めよ。私は神の司祭を呼び寄せ、汝もまた、信仰を持った者たちと共に、彼から聖なる秘跡を受けるにふさわしい者となるだろう。　もし悪魔が、キリストの聖なる僕たちをキリストから引き離そうとしているのなら、我々は、悪魔が滅ぼそうとしている者たちを悪魔から引き離し、彼らを我らの創造主へと立ち返らせるために、いかに心を尽くすべきだろうか！

ニコストラトスは反論した。

「聖なるものが、悪人や死刑に処せられた犯罪者たちに授けられることがあるでしょうか？」

セバスティアンはこう答えた：

「私たちの救い主は、私たち罪人のためにこの世に来られ、洗礼の秘跡を授けてくださいました。それによって、人々の罪と不法は取り除かれ、神の恵みが与えられるのです。あなたが改心したばかりのこの時　、この賜物をキリストに捧げ、他者の救いを顧みなさい。そうすれば、多くの美徳という枯れることのない花で編まれた殉教者の冠が、あなたへの報いとなるでしょう。」

これを聞いたニコストラトスは、クラウディウスの執事（[8959] ）のもとへ行き、有罪判決を受け、鎖でつながれている者たち全員を自分の家へ送るよう命じた。それがすべて行われ、鉄の鎖でつながれた囚人たちが集まったとき、　聖セバスティアンは彼らに救いに関する教訓的な言葉を語りかけ、彼らがキリストの信仰を受け入れる準備ができており、神の恵みを受け入れる能力があることを見極めると、全員を束縛から解放するよう命じ、迫害のために自身の身分を隠していた長老である聖ポリカルプのもとへ行き、起こっていることすべてを彼に語った。　このことを神に感謝した後、聖ポリカルプはセバスティアンと共にニコストラトの家へ向かい、集まった信者たち全員に向かってこう語った。

「『疲れた者、重荷を負う者は、みなわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。わたしは心優しく、へりくだっているから。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎを見いだすだろう。　わたしのくびきは心地よく、わたしの荷は軽い」（マタイ11:28–30）。しかし、兄弟たちよ、あなたがたはバプテスマの水によって清められ、聖別されて、神の愛される子とされるのですから、過去の罪の赦しを受けるためには悔い改めが必要です。　さて、あなたがたは今、私たちの神であるキリストに対して、彼を信じ、彼のために死ぬ覚悟さえあるほどの熱意を示しており、かつては他の人々を遠ざけようとしていたそのことを、今や自ら望んでいるのです。それゆえ、あなたがたはすでに赦しを受け、目に見えない敵に対する勝利を勝ち取っているのです。　私たちの主キリストは力強く、闇の中から光を引き出し、見捨てられた器から選ばれた者たちを造り出されます。そうして、サウロをパウロへと、背教者を使徒へと、迫害者を教師へと造り変えられたのです。　それと同じように、今日、主はあなた方を異教から御自身の教会へと召し出し、不信仰者から御自身の忠実なしもべへと、敵から御自身の友へと造り変えてくださいました。あなた方の回心について、悪魔の群れ、すなわち闇の子らは皆、泣き叫び、嘆き悲しんでいます。　それに対し、天の聖なる天使たち、すなわち光の子らは、あなたがたの啓蒙を喜び、歓喜している。さて、あなたがた一人ひとりが自分の名前を書き、私に提出しなさい。洗礼を受ける前には断食をなさい。夕方まで断食しなさい。物質的な光が沈むとき、非物質的な光が洗礼の中であなたがたを照らすであろう。

皆は喜びに満たされ、一人ひとりが洗礼の準備を始めた。こうしたことが起きている最中、クラウディウス・コメンタリシスがニコストラトの家にやって来て、彼をエパルフのもとへ呼び出し、こう言った。

「お前がすべての囚人たちを自宅に集めたと知り、エパルコスは激怒し、お前を呼び出すよう命じた。どう答えるかよく考えておけ。」

ニコストラトスは、総督の邸宅に着き、総督が囚人たちのことを尋ねると、こう答えた。

「閣下の命令により、私は二人のキリスト教徒、マルケリンとマルコを我が家に収容いたしました。そして、彼らをより一層恐れさせるため、重く足枷を嵌められ、しっかりと縛られた他の囚人たちを彼らに加えたのです。そうすれば、彼らを見て、自分たちも同じような苦しみを味わうことを予期し、それによって閣下の命令に従うようになるだろうと考えたからです。」

長官は彼を称賛し、次のように言って彼を帰した。

[8959] コメンタリシウス――ローマ帝国の刑務所長であり、裁判における書記官でもあった。被告、とりわけキリスト教の殉教者たちに対する予備調査を行っていた。

「もし彼らが、あなたを通じて心を一つにし、無傷で無事に我々の元から解放されるならば、あなたは彼らの両親から大きな報いを受けるだろう。」

クラウディウスと共に家路につく途中、ニコストラトスは彼に聖セバスティアンについて語り始めた。彼は王の友人であり、キリスト教徒であり、神の教えに精通し、キリスト教徒たちの心を信仰へと導き、この世の生活を一時的で儚いものと説き、死後には、より良く永遠なる別の命があると告げている、と。 さらに、セバスティアヌスの顔が天の光に照らされた様子や、6年間も口が利けなかった妻を癒やし、彼女がはっきりと話せるようになったことについても語った。ニコストラトからこれを聞いたクラウディウスは言った。

「私の二人の幼い息子は重病だ。一人は水腫を患い、もう一人は全身に傷を負っている。彼に私の息子たちを癒やしてほしい。あなたの妻の失語症を治した者が、私の子供たちも癒やせることは間違いない。」

そう言うと、クラウディウスは急いで自宅へ戻り、二人の子供を抱き上げ、彼らを連れてニコストラトの家へ向かった。そこで彼は、神の聖人セバスティアンとポリカルプの足元にひれ伏し、こう言った。

「あなたがたが崇めるキリストこそが真の神であることを、私は疑いなく、心から信じています。そして、この病に伏している私の息子たちを、あなたがたに死から救っていただくためにここに連れてきました！」

聖なる人々は彼にこう言った。

「いかなる病を患っている者も、聖なる洗礼槽に入ったその瞬間、今日この日に癒やされるであろう。」

クラウディウスは再び、キリストを信じ、キリスト教徒になりたいと語った。彼らは皆、聖なる洗礼の準備を始め、自分の名前を書き記して長老に提出した。最初に名前を提出したのは、マルケッリーナとマルクの父であるトランキリンであり、その後に彼の友人六人――アリストン、 クリスケンティアン、エウティキアン、ウルヴァン、ヴィタリウス、ユストス、続いてニコストラトとその弟カストリオス、そしてクラウディウス・コメンタリシウス、その後に彼の二人の息子シンフォリアヌスとフェリクス、マルケッリーナとマルクの母マルキア、 クラウディウスの妻シンフォロサ、ニコストラトスの妻ゾエ、そしてニコストラトスの一家全員――男女合わせて33名――、そして最後に、牢獄から連れてこられた16名であった。こうして洗礼を受ける準備が整った者は計64名となり、全員が聖ポリカルプによって洗礼を受けた。 洗礼盤の代父は聖セバスティアンであり、女性たちの代母はベアトリスとルキナであった。真っ先に洗礼盤に導かれたのはクラウディウスの子供たちであり、彼らは即座に病から癒やされ、かつての潰瘍の痕跡さえも体には残らなかった。彼らの後にトランキリンが連れてこられた。 彼は老齢による衰弱だけでなく、手足の痛みにも苦しんでおり、かろうじて抱えられて運ばれるほどだった。洗礼の前に衣服を脱がされた際、彼は激しい苦痛に苛まれた。聖ポリカルプは彼に尋ねた。

「神の独り子、私たちの主イエス・キリストが、あなたに健康を与え、罪を赦す力をお持ちであることを、疑うことなく信じていますか？」

トランキリンはこう答えた。

「キリストが神の御子であり、神は万事をなすお方であると信じております。しかし、私は神の慈しみから、ただ罪の赦しを求めます。肉体の病については、気にかけておりません。」

その場に立っていた者たちは皆、喜びの涙を流し、主が殉教者の信仰の結実を示してくださるよう祈り求めた。洗礼が始まり、トランキリンに「父と子と聖霊なる神を信じますか」と問われたとき、彼が 「信じます」と答えたとき、その言葉がまだ彼の口から消え去る間もなく、手足の痛みを

伴う束縛が解け、足と膝がしっかりとし、老いの衰えはすべて彼から去り、*「鷲のように、あなたの若さは新しくなる」*（詩篇102:5）[8960] ――と、彼は叫んだ。

「あなたは、この堕落した世界が知らない、唯一の真の神です！」

彼の後、残りの者たちは一人ずつ洗礼を受けた。そして、マルケリンとマルコに与えられた期間の残り16日間、彼らは昼夜を問わず教会の賛美歌や詩篇をもって神を賛美し、信仰を確固たるものとし、キリストの御名のために殉教の業に備えた。

30日間の期限が終わりに近づくと、ローマ市の司教アグレスティウス・クロマティウスは、マルケリンとマルクの父であるトランキリンを呼び出し、息子たちについて――彼らがキリスト教から離れることに同意したかどうか――を尋ねた。

トランキリンはこう答えた。

「あなたの恩恵に感謝する言葉が見つかりません。もしあなたが、その寛大さによって、私の息子たちの死刑判決をこれほど長い間差し止め、延期してくださらなかったならば、私も彼らを失い、息子たちも父を失っていたことでしょう。　すべての親族、愛する友人たち、そして、おそらく閣下も私と共に喜んでくださるでしょう。死者に命が与えられ、悲しむ者たちに喜びがもたらされ、嘆き悲しむ者たちに再び喜びが戻ったのですから。

そこで、エパルクスは、トランキリンの息子たちが神々に礼拝を捧げようとしているのだと思い、こう言いました。

「最終日に来てください。そうすれば、あなたの息子たちが神々にふさわしい香を焚くでしょう。」

これを聞いて、トランキリンは言った。

「おお、最も高貴な方よ！もしあなたが、私と私の息子たちに起こったことを公正に判断してくだされば、キリスト教徒という名の偉大さと力強さを理解していただけるでしょう。」

エパルクは言った。

「トランキリンよ、お前は正気を失っているのではないか？」

「これまで私は、肉体も魂も狂気に囚われていました」とトランキリンは答えた。「しかし、キリストを信じた途端、魂も肉体も癒やされたのです。」

「どうやら」と司教は言った。「私がお前の息子たちの処刑を延期したのは、お前が彼らをその迷いから引き離すためではなく、彼らがお前を自分たちの迷いへと引きずり込むためだったようだ！」

トランキリンはこう答えた。

「どのような行いを『迷い』と呼ぶべきか、閣下のご判断をお願いいたします。」

司教は言った。

「何が『迷い』と呼ばれるべきか、お前自身で言ってみよ。」

「第一の迷いとは」とトランキリンは答えた。「いのちの道を捨て、死の道を進むことにあるのです。」

「では、死の道とはどのようなものか？」とエパルクは尋ねた。

「死の道とは、死すべき人間に神々の名を授け、木や石で造られたその像を崇拝することではないでしょうか？」とトランキリンは答えた。

司教は反論した。

「私たちが崇拝している者たちは、神ではないのですか？」

[8960] 詩篇102:5の表現。――この表現は、長老トランキリンがキリストへの信仰を告白した後、まるで若者のように力強く、活気に満ちた状態になったことを示している。この再生を鷲の再生に例えるのは、鷲の生命力、鋭い視力、力強さ、そして高い飛翔能力に基づいていると考えられる。

トランキリンは答えた。

「まことに、あなた方の書物にも記されているように、罪の中に生まれ、不義で邪悪かつ不法な両親を持ち、自らも不義に、不法に、偽りをもって生き、罪の中で死んだ者たちを、神とみなすのはふさわしくありません。　自らの息子たちの肉を食らったクロノスがクレタ人を支配していた時代よりも前から、天には神はおられなかったのだろうか？　それとも、クレタには王がいたが、天には神がいなかったのだろうか？　クロノスの息子ディオス――彼は悪意と肉欲に支配された人間であった――が、雷を操り、稲妻を放つと信じている者たちは、大いに誤っている。　彼は、自らの父さえも容赦しなかったのだから、誰を追い払わなかったというのか。また、実の妹を妻に迎えたのだから、どのような罪で身を汚さなかったというのか。市場や街角、家々、そして至る所で、不義のヘラが、ディオスの姉であり妻であることを自慢していることが語られ、書物にも記されているのだ[8961]。最も高貴なる御方よ、ローマの法律が死刑に処するほどの悪行に満ちた神々を崇拝していることは、御自身が誤っていることだとお気づきではないのですか？　それなのに、あなたはそうした神々を崇め、天に君臨する全能の神を捨てて、石に「お前は私の神だ」と言い、木に「助けてくれ！」と叫んでいるのです。

エパルクスは言った。

「神々を冒涜し、その崇拝から背を向けるようになって以来、ローマ帝国は多くの災難に見舞われている。」

「それは誤りだ」とトランキリンは言った。「リウィウスの10巻[8962]を読んでみよ。そうすれば、悪魔に生贄を捧げていたローマ軍から、たった一日のうちに4万2千人以上が死んだことを知るだろう。フランク族がカピトリーノの丘を占領し、ローマの力を嘲笑した[8963]ことは、君にとって秘密だろうか？」 かつて、人々がまだ 真の神を知るに至っていなかった頃、ローマ市は数多くの災難、前代未聞の捕囚、そして様々な殺戮に見舞われました。しかし今、信者たちが目に見えない真の神を崇めるようになった今、ローマ帝国は平穏を保ち、恥をかくこともありません。それは、神が御自身の選民のために、この帝国を平和で守ってくださっているからです。　しかし、あなた方は、これほど慈悲深い神を認めようとはせず、創造主から送られるあらゆる恵みを、その被造物のせいにしているのです！

[8961] 古代ギリシャ人は、彼らが後に崇拝する神々よりも前に、クロノスやその他のタイタンたち――半神半人の存在――が世界を支配していたと信じていました。ギリシャ人は彼らに、より人間らしい性質を帰していたのです。　彼らの信仰によれば、クロノス（あるいはサターン）は最年少のタイタンであり、ウラノス（天）とゲイア（地）の息子で、クレタ島を統治した後、全世界の支配権を掌握した。彼は姉のレイアと結婚し、彼女との間に数人の息子と娘をもうけたが、しかし、ガイアから「自分の子供たちに王位を奪われる」と予言されていたため、彼は子供たちが生まれるやいなや彼らを飲み込んでしまった。ただし、レイアによって救われたゼウスは例外であり、彼は後にクロノスを打倒し、飲み込んだ子供たちを吐き出させた。　ゼウス、あるいはディオスは、ギリシャ人によって神々と人間の父、天と全宇宙を支配する強大かつ威厳ある統治者として崇められ、雷と稲妻を地上に送り下す存在とされていた。ヘラは、ギリシャ人の信仰によれば、最高位の女神であり、ゼウスの妻であると同時に姉妹でもあり、その高貴な品格と妻としての権利を誇っていた。しかし、それだけでなく、ギリシャ神話では、ゼウスが他の多くの二流の女神たち、さらには人間の女性たちとも肉欲的な関係を持っていたとされている。同様に、他のギリシャの神々や女神たちも、粗野で官能的な特徴をもって描かれており、ギリシャ人は彼らに人間的な性質、情熱、そして悪徳をすべて投影していた。　概して、古代ギリシャ人やローマ人の宗教においては、不道徳の発展を助長する要素がすべて揃っており、その不道徳に没頭するための手本が至る所に示されていた。

[8962] ここで言及されているのは、もちろんティトゥス・リウィウス――紀元前1世紀末から紀元1世紀初頭にかけてのローマを代表する歴史家である。彼の『ローマ史』は142巻から成るが、現存するのはそのうち35巻のみである。

[8963] カピトリーノは、ローマの中心部にある要塞である。「フランク人」とは、キサルピナ・ガリア（北イタリア）に居住していたガリア人を指す。 ガリア人の侵攻は紀元前4世紀後半に起こり、当初はローマ人の完全な敗北とローマ共和国の荒廃をもたらし、ローマは長い間その打撃から立ち直ることができなかった。

こうして、彼らの対話の最中に、キリスト・イエスについての話題が持ち上がり、トランキリンは、神の御子がどのように、またどのような目的で天を離れずに地上に降り、人間の魂を滅びから救うために肉体をまとわれたかを語った。　そして、トランキリン自身が聖セバスティアンと聖ポリカルプから学んだこと、さらに、信じる者を啓発する主の恵みによってさらに教えられたことすべてを、彼は司教に伝えました。その際、主ご自身が彼の言葉を助け、彼の敵が反論できないような知恵を授けてくださったのです。　また彼は、長い間手足の痛みに悩まされていたが、キリストを心から信じたまさにその瞬間に、キリストの恵みによって突然癒やされたことについても語った。　以前から足の激しい痛みに苦しんでいた司教は、傍らにいた者たちにトランキリンを連れ去るよう命じた。それはあたかも翌日彼を取り調べるためであるかのように見えたが、その夜、密かに彼を呼び寄せ、贈り物を差し出しながら、自分が癒やされた方法を明かすよう求めた。するとトランキリンはこう言った。

「閣下、どうかご承知おきください。私たちの神は、御自身の恵みを売り買いしようとする者たちに対して、激しく怒っておられます。　もしあなたがご自身の病から癒されたいのなら、神の御子キリストを信じなさい。そうすれば、私が見られるように癒されるでしょう。というのも、私は運ばれていた当時でさえ苦しんでおり、11年間、私のすべての筋と関節は言葉に尽くせない病に縛られ、他の人々が私の口元に食べ物を運んでくれるほどでした。　しかし、私が神であるキリストを信じたとき、即座に癒やされ、今や私の真の救い主の恵みによって、健全で健康である。

司教は言った：

「お願いだ、あなたの癒やしの仲介者となった者を私のところへ連れてきてほしい。もし彼が私に癒やしを与えてくれるなら、私もキリスト教徒になる。」

トランキリンは直ちに聖ポリカルプを呼び寄せた。　聖セバスティアンもまた呼び出され、エパルフのアグレスティウス・クロマティウスとその息子ティブルティウスに、主キリストへの聖なる信仰を教え、彼の家にある200体以上の偶像を打ち砕いた——木製のものは焼き払い、石製のものは打ち砕き、金や銀のものは細かく切り刻んで貧しい人々に施した。

偶像が打ち砕かれ、粉々になったとき、エパルフの前に輝かしい若者が現れ、こう言った。

「あなたが信仰を置いた私たちの主イエス・キリストが、あなたのすべての家来たちに健康を授けるよう、私を遣わされました。」

その瞬間、クロマティウスは健康を取り戻したのを感じ、すぐに立ち上がり、現れた若者の足元にひれ伏してその足をキスしようとしたが、若者は言った。

「見よ、私に手を触れてはならない。あなたは偶像の悪臭から聖なる洗礼によって清められていないからだ。」

そう言うと、彼は姿を消した。

そこでクロマティウスは息子のティヴルティウスと共に聖人の足元にひれ伏し、大声で叫んだ。

「私たちの真の神はただひとり、主イエス・キリスト、全能の神の独り子であり、あなた方、慈愛に満ちた師たちよ、その方を宣べ伝えているのです！」

聖人たちはクロマティウスに、病気を口実にエパルヒの職を辞するよう助言した。それは、キリスト教徒を拷問し、裁き、苦しめる裁判を行わず、不敬虔な見世物にも出席せず、霊的な知恵を得るためにすべてから解放されるためであった。こうして彼はまもなくその通りにした。

クロマティウスが洗礼を受けようとした際、「唯一の神を信じますか？」という問いに「信じます」と答え、「偶像を捨てますか？」という問いに「捨てます」と答えた。

その後、司祭は彼にこう尋ねた。

「あなたは自分のすべての罪を捨てますか？」

クロマティウスは司祭にこう言った：

――そのことについては、最初から私に尋ねるべきだった。私は再び自分の服を身にまとい、自分の罪を悔い改めるまでは聖なる洗礼を受けない。敵対していた者とは和解し、怒りを向けていた者たちを愛する。そして、私に怒りを抱いている者たちには、許しを請うつもりだ。　借金のある者たちにはすべての借金を免除する。もし私自身が誰かから無理やり何かを奪ったのであれば、その者には倍返しで返す。 妻の死後、私には 二人の側室がいたが、彼女たちを嫁がせ、結婚の贈り物を与えて報いる。男奴隷と女奴隷を解放し、神の御心に従って私のすべての職務と家事を整え、それから大胆にこう言うだろう。「私はすべての罪を捨て、聖なる洗礼を受ける」。

聖人たちはクロマティウスのこの言葉を喜ばれ、彼が約束したすべてを果たすまで、洗礼は延期された。

その後、アグレスティウス・クロマティウスは、息子のティブルティウスと一家全員と共に、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受け、こうして新たに信仰に導かれた人々は男女合わせて1400人に達した。

当時、キリスト教徒に対する激しい迫害が行われていた。彼らは、どこでも広場や　通り、井戸のそば、泉や小川のほとりなど、至る所に不信心者たちの命令により小さな偶像が設置され、その傍らには警戒の厳しい警備が配置されていた。これは、何か食べ物を買ったり水を汲んだりしようとする者が、まずそこに立つ偶像に礼拝を捧げるようにするためであった。　不信心者たちは、キリスト教徒を容易に見分け、拷問にかけるために、このような策を講じたのである。この光景を目の当たりにした信者たちは皆、悲しみに打ちひしがれた。偶像に拝礼しなければ、食べ物や飲み物を手に入れることが不可能だったからである。彼らは、偶像に拝礼するよりは、飢えと渇きに耐えるほうがましだと決意した。　そこでクロマティウスは、ローマのすべての信者たちに、自分の家から密かに食べ物や飲み物を受け取るよう命じた。彼は非常に裕福であったため、彼の家にはすべての信者たちが集まり、神を賛美していたのである。

当時、ローマの司教はディオクレティアヌスの親族であり、ダルマチア出身の福者ガイウス[8964] であった。彼はクロマティウスの家で典礼を執り行い、新たに改宗したキリスト教徒たちに聖体拝領を授けていた。 激しい迫害のため、クロマティウスはローマを離れ、カンパニア[8965] にある自身の領地へ移らざるを得なかった。ローマではキリストへの信仰が露見することを恐れたからである。そこなら、そのような恐れを抱くことなく生活し、より自由に聖なる信仰を告白することができた。彼はすべてのキリスト教徒に対し、迫害から身を隠して平穏に暮らしたい者は自分の領地へ来てもよいと告げ、必要な糧を与えることを約束した。クロマティウスと彼に従うキリスト教徒たちには、信徒たちを慰め、信仰を強めるために、セバスティアンかポリカルプのどちらか一人が同行することが必要であった。　この件をめぐって、二人の聖人の間で敬虔な議論が交わされた。というのも、二人とも殉教の冠を受けるためにローマに残りたいと願っていたからである。彼らが議論している最中、至聖なるガイウス司教はこう言った。

「もしあなたがた二人が、キリストのために死を望んで迫害者たちの手に身を委ねるならば、キリストの民は霊的な慰めを失うことになる。　それゆえ、私は、兄弟ポリカルプよ、あなたが司祭の位にあり、神の知恵に満ちている者として、クロマティウス氏と共に赴き、教えによって信徒たちを慰め、疑いを持つ者たちを神の秘跡によって強め、養うべきだと考えます。

これを聞いた聖ポリカルプは、司教の命令に従い、クロマティウスや他のキリスト教徒たちと共にローマを去った。日曜日に聖なる典礼を執り行った後、司教は信者たちにこう語った。

[8964] 聖ガイウスは283年から296年までローマ教皇を務め、296年8月11日にキリストへの信仰のために殉教した。

[8965] カンパニアは、古代イタリアの沿岸地域であり、ローマの南、アペニン半島の西岸に位置する。

「私たちの主イエス・キリストは、私たちの人間の弱さを知っておられ、御自身を信じる者たちに二つの道を示されました。一つは殉教の道、もう一つは信仰告白の道です。殉教の道を歩むことができない者は、信仰告白の道を歩みなさい。　あなたがたのうち、私たちの霊の子であるクロマティウスとティヴルティウスと共に歩みたいと願う者は、そうしなさい。一方、この街で私たちと共に留まりたいと願う者は、留まりなさい。キリストの恵みによって結ばれた者たちを、いかなる距離も引き離すことはできない。たとえ私が肉眼であなたがたを見ることができなくても、私の霊の目には、あなたがたは常に現れ続けるだろう。

司教がこう語っているとき、ティヴルティは叫んだ。

「父よ、どうか私をここから去らせないでください。もし可能であるならば、たとえ千回でも神のために殺されることを切に願います。ただ、神から永遠の、決して失われることのない命を得られるためなら！」

彼の信仰と神へのそのような熱意を喜び、司教は涙を流し、彼と共に残った者たちが皆、善き行いに励み、殉教の栄光に与かることができるよう、神に祈った。　至聖なる司教のもとには、マルケリンとマルク、そして彼らの父トランキリン、聖セバスティアン、肉体は美しく、魂はさらに美しい若きティヴルティウス、　プロトスクリーニアリオのニコストラトスとその弟カストリオス、妻ゾエ、そしてクラウディウスとその弟ヴィクトリヌス、水腫から癒やされた息子シンフォリアヌスであった。ローマに残ったのは彼らだけであり、残りの者たちは皆、クロマティウスとポリカルプと共に去っていった。

彼らの去った後、至聖なる司教はマルケリンとマルコを助祭に任命し、彼らの父トランキリンを司祭に叙階し、聖セバスティアンを、武器を携える者として教会の守護者に任命した。　彼らは神聖な礼拝を行うことのできる秘密の場所を持っていなかったため、カストゥラという名の王室高官の邸宅に身を寄せた。　この家が選ばれたのは、カストゥルとその家族が密かにキリスト教徒であったこと、また、偶像崇拝に関する法律が至る所に広まっていたものの、王宮に住む者たちには全く適用されていなかったからである。なぜなら、キリスト教の信仰がここに浸透するとは、誰も想像だにしなかったからである。　そのため、聖人たちはカストゥルの元で、神への礼拝を執り行いながら、安心して身を隠すことができた。そこで彼らは昼夜を問わず、祈りと涙と断食に明け暮れ、あらゆる苦難に耐えつつ、神に殉教の冠を授けてくださるよう懇願した。　彼らが行う癒やしの奇跡を目撃した男女が、密かに彼らの元を訪れた。聖人たちの祈りによって、病人は健康を取り戻し、盲人は視力を回復し、人々から不浄な霊が追い出されたからである。そのおかげで、多くの人々が密かに聖人たちからキリスト教の信仰を受け入れた。

ある日、聖ティヴルティウスは道を歩いていたところ、自宅の屋根から転落して命を落とした男と、その死を嘆き悲しむ両親や家族たちを見かけ、自らの祈りによってその男を癒やした。すると、その男は家族全員とともにキリストを信じ、洗礼を受けた。

やがて、聖人たちの殉教の時が訪れ、最初に殉教の道へと歩み出したのは、ニコストラトスの妻である至福のゾエであった。彼女は、聖使徒ペトロの墓前で祈りを捧げていた最中に、不敬虔な監視官たちに捕らえられ、裁判所に連行された。そこで、異教の神アレイス（[8966] ）への偶像への生贄を捧げるよう強要された。 彼女はこれに従わなかったため、薄暗い牢獄に投じられ、そこで6日間飢えさせられた。その後、ゾイアは牢獄から引きずり出され、腐敗した廃棄物から立ち上る悪臭のする煙の上で髪を掴まれて吊るされ、息絶えた。その遺体はティベリス川に投げ捨てられた。

聖女は幻視の中で聖セバスティアンに現れ、自身の死を告げた。セバスティアンはこれをトランキリンに伝えると、彼はこう叫んだ。

「妻たちは私たちより先に冠へと向かっている！　なぜ我々は待っているのか？」

[8966] アレス（ローマ神話のマルス）は、古代ギリシャ人やローマ人の信仰において、戦争の神とされていた。

そして、彼は同じ場所、使徒の墓へと向かった。そこで不信心者たちは彼を石で打ち殺し、テヴェレ川に投げ込んだ。一方、ニコストラトス、カストリオス、クラウディウス、ヴィクトリヌス、シンフォリアヌスは、聖人たちの遺体を探してテヴェレ川の岸辺を歩いていた際に捕らえられ、ファヴィアヌスという都市の総督のもとに連行された。　十日間にわたり、地方総督は甘言や脅迫、拷問を用いて彼らを偶像への生贄にさせようと試みたが、それが叶わなかったため、彼らの首に大きな石を縛り付け、海に沈めるよう命じた。　一方、聖ティヴルティウスという若者は、羊の皮を被った狼のような偽キリスト教徒トルクヴァトによって、密かに異教徒たちに引き渡された。彼らはティヴルティウスを捕らえ、縛り上げた上で、トルクヴァトと共に、同じファヴィアヌスの裁判にかけられた。　法廷で、トルクヴァトは直ちに自らの狡猾さを露わにし、自分はキリスト教徒を名乗っているだけで、心の中では不敬虔に満ちていることを明かし、ティヴルティウスがローマの神々を悪魔と呼んでいたと告発して、彼に対して証言した。　一方、聖ティヴルティウスは、法廷においてイエス・キリストの御名を真摯かつ勇敢に告白する者であることを示した。裁判官は彼にこう言った。

「お前の名門の家系に恥をかかせるな。お前はあれほど名高い父の息子でありながら、不名誉と苦しみ、死と不名誉が待ち受ける、これほど過酷で恥辱に満ちたキリスト教徒の生活を選んだのだ。」

聖ティヴルティウスはこう答えた。

「賢明なるローマの裁判官よ！　あなたは、私が快楽の女神ウェヌス[8967]、近親相姦の神ディウス、偽りの神エルミウス[8968]、そして子食いの神クロノスを神として崇め認めようとしないことで、我が家系に不名誉をもたらしていると言う。しかし、私は、天に君臨する唯一の真の神を崇め、礼拝し、そのしもべと名乗ることで、我が家の名誉を高めているのだ。お前は私に拷問をちらつかせているのか？　しかし、私たちキリスト教徒にとって、神のために苦難に遭うことを恐れる必要があるだろうか？剣による斬首か？そうすれば、私たちは肉体の牢獄から解放され、天の自由を得るのだ。火による拷問か？しかし、私たちは肉体の中で、情欲というより大きな炎を消し去ったのだから、この火を恐れることはない。追放か？しかし、私たちの神は至る所にいらっしゃり、私たちが神と共にいるところこそが、私たちの居場所である。

そこでファヴィアンは、燃え盛る炭を運ばせ、その上に聖人を裸足で立たせ、こう言った。

「この炭の上に、神々への香を捧げるか、あるいはお前自身が裸足でその上を歩け。」

聖ティヴルティウスは十字を切ってから、裸足で燃え盛る炭の上に立ち、それを踏みしめながら、まるで柔らかく香る花の上を歩くかのようにその上を歩いた。

「その不信仰を捨てなさい」と彼は裁判官に言った。「そして、自然の要素（[8969]）とすべての被造物を支配する私の神が真実であることを確かめなさい。　もしできるなら、お前のディヤの名において、沸騰する湯に手を入れ、無傷であるか確かめてみよ。私は、私の主イエス・キリストの名において、まるで水で潤された花の上を歩くかのように、火の上を歩いている。あらゆる被造物が、私たちの創造主に従っているのが見えるか。

[8967] ヴィーナス（ギリシャ神話のアフロディーテ）は、ゼウスとディアナの娘であり、異教の愛と美の女神である。ローマ帝国の衰退期――殉教者セバスティアンとその妻たちの殉教もこの時期に当たる――には、肉欲を煽り、不純な快楽の女神とも見なされていた。　彫像では恥知らずなほど裸の姿で表現され、彼女を称えるために、不道徳な儀式を伴う乱れた祝祭が行われていた。

[8968] エルミウス――別名ヘルメス（ローマのメルクリウス）――は、古代ギリシャ人やローマ人によって、ゼウスとマイアの息子、神々の伝令、ゼウスの意志を遂行する使者、神々と人間との仲介者、そして多様な発見、発明、工芸の神として崇められ、　産業と商業の神でもあり、これらは、たとえ盗みや偽りの誓いであっても、ある種の正当性を装っている限り、狡猾さや欺瞞と手を組んで初めて富をもたらすものとされていた。　このことから、ヘルメスは時に窃盗や欺瞞の守護神ともなり、あらゆる種類の嘘や誓約違反を容認する存在である。

[8969] 元素とは、あらゆる物体の基本となる物質であり、例えば、火、土、空気、水などである。

裁判官は言った：

「あなたのキリストがあなたたちに魔術を教えたことを知らない者などいるだろうか！」

「黙れ、この忌まわしき者よ」と聖人は言った。「その毒を帯びた口で、この偉大かつ畏れ多い御名を冒涜して口にするなど、決して許さない！　私の神の御名を冒涜して、私の耳を汚すな！」

ファヴィアンは彼に激怒し、死刑を宣告した。ティヴルティウスは、街から3ヴェルスタ離れたラヴィカンの道[8970]へと連行され、そこで神への祈りを捧げている最中に、剣で斬り殺された。あるキリスト教徒が彼の死の現場に彼を葬り、ティヴルティウスの墓を訪れる人々には、彼の祈りによって主の恵みが与えられた。

その後、同じ偽りのキリスト教徒トルクヴァトが、カストゥルス、マルケッリーナ、マルコについて不信心者たちに告げ口した。聖カストゥルスは、三度にわたる尋問、絞首刑、そして拷問を受けた後、堀に投げ込まれ、そこで生きたまま土に埋められて息を引き取った。　一方、マルケッリーナとマルコについては、ファビアンは二人を同じ切り株の上に立たせ、足に鉄の釘を打ち付けてこう言った。

「神々にひれ伏すまで、このままで立っていなさい。」

しかし、二人は一つの木に釘付けにされながらも、*「兄弟たちが共に住むことは、なんと良きことか、なんと楽しいことか！」*（詩編132:1）と歌った。こうして彼らは昼夜を問わず神に祈り続け、朝になると槍で肋骨を貫かれた。こうして彼らは苦難の最期を迎えた。

これらの聖人たちの苦難と死の後、聖セバスティアンも捕らえられ、地方総督は彼についてディオクレティアヌス帝に報告した。ディオクレティアヌスは彼を呼びつけ、こう言った。

「私はお前を宮廷の第一人者と見なしていた。それなのに、お前は私に反旗を翻し、私と私の神々の敵となり、これまでその悪意を隠し通していたのだ。」

聖セバスティアンはこう答えた。

「私は常にキリストにあなたの健康を祈り、ローマ帝国全体に平和が訪れるよう願ってきました。しかし、石を崇拝し、そこから助けを求めることは不当であると悟ったため、私は天の王を崇拝しています。それは明らかに、狂人たちの発明に他なりません。」

激怒したディオクレティアヌスは、彼を城外へ連れ出し、野原の真ん中で裸のまま木に縛り付け、矢で射抜くよう命じた。セバスティアンがまるで的のように立てられると、大勢の兵士たちが四方八方からその聖なる体に矢を放ち、彼の全身を矢で貫いた。　セバスティアンはすでに死んだと思い込んだ彼らは、矢が体中に刺さったまま木に縛られた彼を置き去りにして立ち去った。　聖殉教者カストゥルの妻イリーナは、夜になって聖セバスティアヌスの遺体を回収し埋葬しようと訪れたところ、彼がまだ生きているのを見つけ、自宅へ連れ帰った。そこで聖人は数日後に傷が癒え、完全に健康を取り戻した。　密かに彼を訪ねてきたキリスト教徒たちは、多くの信者たちがそうしたように、再び異教徒の手に落ちないよう、ローマを去るよう彼を説得した。しかし彼は、神に祈りを捧げた後、ヘリオガバルの階段（[8971]）へと向かい、そこに通りかかった王たちを見て、こう言った。

「王たちよ、あなたがたの神々の祭司たちは、不敬虔な魔術によってあなたがたを惑わせ、キリスト教徒がローマ国家の敵であると偽って告げている。　しかし、キリスト教徒たちはあなたがたのために多くの有益なことを行っていることを知ってください。彼らは絶えず、あなたがたの統治とローマ軍全体の安寧を祈り続けており、その祈りによってこの都市は繁栄しているのです。

聖セバスティアンがこう語ったとき、ディオクレティアヌスは彼を見据えて言った。

「お前こそ、我々が先ごろ銃殺するよう命じたセバスティアンか？」

聖人はこう答えました。

[8970] この道は、ローマから南東へとベネヴェントの街へと続いていた。

[8971] ヘリオガバル――ローマ皇帝で、西暦218年から222年まで在位した。彼は、神として、ローマの丘の一つであるパラティーノの丘、皇帝宮殿の隣に自身の神殿を建立した。「ヘリオガバルの階段」とは、その神殿の階段のことである。

「私の主イエス・キリストは、私があなたの元へ来て、すべての人々の前であなたの不正を証しし、あなたがキリスト教徒に対して不当に迫害を加えていることを糾弾できるよう、私を復活させてくださいました。」

ディオクレティアヌスは彼を捕らえ、ヒッポドロームへ連行するよう命じた[8972]；そこで、聖なる殉教者は、キリストを大声で賛美し、偶像やローマの迷いを糾弾しながら、棒で打ち殺された。彼は喜びの叫びを上げて、その功績に対する勝利の冠を受けるために、殉教の主であるキリストのもとへと旅立った。一方、その聖なる遺体は、不信心者たちによって夜中に深いゴミ捨ての堀[8973]に投げ捨てられ、キリスト教徒の誰にも発見されず、持ち去られないようにされた。しかし、聖人は敬虔なルキネの夢に現れ、彼女にこう告げた。

「サーカスの近くにあるゴミ捨て場まで行け。そこでは、私の遺体が横木に吊るされているのを見つけるだろう。それを持ち帰り、カタコンベ[8974]へ運び、使徒の道の途上にある洞窟の入り口に埋葬せよ。」

その祝福された妻は直ちに自分の奴隷たちを連れて、真夜中に指定された溝へと向かい、敬虔に殉教者の遺体を受け取り、指定された場所[8975]で尊厳をもって埋葬し、永遠の栄光ある私たちの神キリストに賛美を捧げた。アーメン。

エルサレムの大司教、聖モデストの記念日

記念日：12月18日

聖モデストは、セバスティアの町[8976]で、敬虔で神を畏れる両親の間に生まれた。幼い頃から主への心からの惹かれを感じ、世を捨てて厳格な修道生活を送った。その後、彼はパレスチナにあるテオドシオス修道院の院長となった。　この頃、ペルシャ王ホズロイがシリアとパレスチナに壊滅的な侵攻を行った[8977]。ペルシャ軍には、パレスチナのキリスト教徒を皆殺しにすることを目的として、4万人のユダヤ人も加わった。キリストの御名に敵対する者たちの残虐さは、エルサレムとその周辺にその全勢力をもって降り注いだ：　数千人の修道士や聖職者が命を落とし、聖墳墓教会を含むす

[8972] ヒッポドロームとは、馬の競走や野獣との闘い、いわゆる剣闘士同士の戦いが行われた闘技場であり、ローマ人にとって最も好まれた娯楽の場であった。また、残虐な皇帝たちは、キリスト教徒をここに連れ出し、野獣の餌食にしていた。

[8973] 聖セバスティアヌスの遺体は、都市の汚水を流すための堀、いわゆる「マクシムスのクロアカ」に投げ込まれた。この堀は、「チルクス・マクシムス」、すなわち「最大のサーカス」と呼ばれる競技場の近くに位置していた。– 聖殉教者セバスティアヌスの殉教は、287年12月18日に起こった。

[8974] カタコンベとは、初期のキリスト教徒たちがローマ近郊（ナポリ、シラクーサ、その他多くの都市でも）で、故人を埋葬するために掘った地下通路や洞窟のことを指す。以前は別の名称で呼ばれていたが、「カタコンベ」という名称が定着したのは、4世紀に聖ステファノが埋葬された場所にちなんでのことである。　これらの通路の壁にはくぼみが設けられ、そこに棺なしで故人の遺体が安置され、その後、石で塞がれた。まれに、個別の墓室が造られることもあった。カタコンベの照明は、ランプや天井の開口部によって行われていた。　信者たちは、親族、友人、聖人、殉教者たちの墓を訪れ、彼らの記念日を祝い、神への共同の祈りを捧げ、イエス・キリストの晩餐に倣って、共同の晩餐と結びついた聖体拝領の秘跡を執り行いました。　聖人や殉教者の墓の上にある大理石の板は、聖体拝領の秘跡を行う際の祭壇として用いられていた。

[8975] 聖殉教者セバスティアヌスの聖遺骨は、ローマにある同名の郊外の教会に安置されている。

[8976] ここでいうのは、もちろん、小アジア東部、アルメニアとの国境にあるカッパドキアのセバスティアのことである。

[8977] ペルシャ王ホズロ2世は、西暦590年から628年まで在位した。彼がシリアとパレスチナに侵攻したのは614年のことである。

べての教会が荒廃し、焼き払われた。ザカリア総主教[8978] は、大勢の民衆や主の聖十字架と共に、ペルシアへ捕虜として連行された。ユダヤ人たちはペルシア人から数千人のキリスト教徒を買い取り、彼らを処刑した。 殺害されたキリスト教徒の総数は9万人に達した。聖モデストはこの苦難の時期に難を逃れ、 の侵攻が終結した後、総主教不在のため、「総主教座の守護者」の名のもと、パレスチナ教会を統率するよう任じられた。 聖モデストがまず行ったのは、聖サヴァ・オスヴェシュチェンヌイの修道院で虐殺された修道士たちの遺骨を集め、それらを尊厳をもって納骨堂に安置することでした。その後、彼は全力を尽くして、冒涜された聖地の修復に取り組みました。 ユダヤ人たちの悪意も、ペルシャ当局の横暴も恐れず、聖人は聖墳墓教会、ゴルゴタ教会、ベツレヘム教会を修復したが、その際、アレクサンドリア総主教ヨハネス・ミロスティヴィが彼を大いに助けた。 ペルシャ人に捕らえられていたエルサレム総主教のザカリアは、聖モデストと信徒たちに対し、自身の近況を記した手紙を送り、信仰を堅く保つよう励ますことで慰めを与えた。 14年後、ザカリア総主教は主の十字架を伴って捕囚の地から帰還した[8979] 。しかし、苦難に疲れ果て、同年中に逝去した。彼の死後、聖モデストが総主教の座に就いた[8980] 。聖モデストは総主教として、5年足らずの間、エルサレム教会を統率した。 聖モデストは、託された信徒たちを立派に導きながら、多くの驚くべき奇跡や癒やしを成し遂げた。高齢に達した聖モデストは、97歳の時に安らかに主のもとへ魂を委ね、永遠の天の住まいへと旅立った[8981] 。

アミイの司教、聖フローラの記念日

記念日：12月18日

聖フロルは、ギリシャ皇帝ユスティヌス、ティベリウス、マウリキウスの治世に生きた[8982] 。父も同じフロルという名を持ち、母はエウフィミアと呼ばれていた。両親は彼に良質な教育を与えた。その後、彼は宮廷に仕え、パトリキウスの称号を授かった[8983] 。結婚し、子供にも恵まれた。 妻が亡くなり、その後、子供たちも天然痘で亡くなると、彼は深く悲しんだ。そして、こうした人生の状況の中に、自らの救いを考えるべきだという神の摂理の示唆を見出し、王宮の役職を辞してアナプレに定住した[8984] 。 そこで敬虔な生活を送ったフロルは、アミンズ[8985] の司教に任命された。キリストの羊の良き牧者として、彼は自分に委ねられた群れを良く牧し、信徒たちに正教の信仰を教え、神の御心に従い戒めを守るよう導き、こうして主の御許に召された[8986] 。

[8978] 聖ザカリアは、609年から633年までエルサレムで総主教を務め、そのうち614年から628年まではペルシアに捕虜として囚われていた。

[8979] それは628年のことであり、ビザンツ帝国の皇帝ヘラクレイオスと、彼が打ち負かしたホズロイの後継者であるペルシア王シロエスの治世下で、

[8980] 633年。

[8981] 634年12月18日。

[8982] ビザンツ皇帝――ユスティヌス2世（565年～578年）、ティベリウス（578年～582年）、聖マウリキウス（582年～602年）。

[8983] パトリキウス――ビザンツの官職階層においてかなり高い地位であり、シンクリティクス（元老院議員）の称号を得る権利を与えられた。

[8984] アナプル – コンスタンティノープルの郊外。

[8985] アミンズまたはアミスという都市は、小アジア東部のカッパドキア地方にある。

[8986] 7世紀初頭。

聖ミハイル・シンケルの記念日。

記念日：12月18日

聖ミカエルはエルサレム出身であった。敬虔な両親は彼に素晴らしい教育を与えた。彼は古代ギリシャ文学に精通しており、キリスト教の神学者たちの著作も深く研究し、若くして修道生活に身を捧げた。

父の死後、母と姉妹たちはある修道院で修道女となった。　厳格な禁欲を守りながら、善良で神に喜ばれる生活を送ったミハイルは、司祭の位を授かった。その謙虚さと神への深い愛ゆえに、彼は人里離れた場所に身を隠したが、そこにはテオドールとテオファンという殉教者たち[8987]　が、共に神学を学ぶために彼を訪ねてきた。しかし、エルサレムの総主教[8988]は、教会の必要のために彼の才能を活用したいと考え、彼をその地から呼び戻し、シンケラ[8989]　の位に任命した。その後、彼には当時特に重要な任務が与えられた。　当時、ローマでは偶像排斥の異端をめぐって激しい論争が巻き起こっていた[8990]　。これらの論争は、私的な場である家庭内だけでなく、街頭でも公然と繰り広げられ、民衆の騒動を伴っていた。　ローマ教皇は、エルサレム総主教トマスに対し、公会議および教父たちの伝承に従って、異端の根絶と正教の信仰の確立に協力するよう要請し、この件に関していくつかの質問を投げかけた。　この教皇の要請を受け、教会を和解させ、異端を糾弾するため、エルサレム総主教からシンケル・ミハイルが、その同僚であるテオドロス、テオファンらと共に派遣され、偶像破壊派の皇帝レウ・アルメニア人[8991]に対し、正教に対する迫害を控えるよう懇願した。しかし、レウスは彼を拷問にかけ、流刑に処した。　その後、彼はこの流刑から解放されたものの、聖なるイコンへの崇拝を完全に否定し、神の教会に対して残酷な迫害を繰り広げた、異端排斥派の皇帝テオフィロス（[8992]）の治世下において、聖ミカエルとその同志たちは新たな苦難にさらされた。真理を告白したために、テオドロスとテオファンは次のような侮辱を受けた。不敬虔な皇帝の命令により、彼らの顔には、赤熱した鉄の烙印で、[8993]という侮蔑的な言葉が刻み込まれた。また、彼らが正教の迫害者たちから隠そうと努めていたにもかかわらず、所持していたエルサレム総主教とローマ教皇との間の書簡も没収された。　しかし、尊厳かつ輝かしい父たちは、それを少しも恐れず、自らの信念を揺るがすこともなかった。むしろ、堅固なダイヤモンドのように[8994]　、偶像破壊者の要求に抵抗し、正

[8987] テオドールとテオファン――いわゆる「刻まれた者たち」、実の兄弟である双子は、当時、修道司祭の位にあった。前者の記念日は12月27日。

[8988] エルサレム総主教トマス1世。

[8989] シンケル――教会行政を司る総主教評議会のメンバー。シンケルたちは総主教からの様々な指示を遂行し、常に総主教の傍らにいてその生涯を間近で目撃し、死後はしばしば後継者となった。

[8990] 偶像破壊の異端は、聖像の最初の迫害者であった皇帝レウ・イサウリアヌス（717–741年）の治世に明らかになった。その後を継いだのは、イコン反対派の皇帝コンスタンティノス・コプロニモス（741–775年）とレウ4世・ハザール（775–780年）であった。　この異端は、コンスタンティノス・ポルフィロゲネトスの治世下、第2ニカイア公会議（787年）において非難された。当時、皇帝が幼少であったため、その母イリナが政務を執っていた。　しかし、公会議による非難後も、この異端は842年にイコン崇拝が最終的に復活するまで、長い間存続した。

[8991] レウ・アルメニア人は、813年から820年まで在位した。聖ミカエル・シンケルは、817年にコンスタンティノープルへ派遣された。それ以前にも、彼は当時の他の異端者たち、すなわちパヴリキア派、単性論者、ネストリウス派との闘いにおいて、正教の熱心な擁護者としてその名を知られていた。

[8992] テオフィロスは829年から842年まで在位した。

[8993] ここから、彼によって記された名称が取り入れられた。

[8994] アダマント（ダイヤモンド）とは、他の石を削り、切り裂くほどの強さを持ちながら、それによって自らに害を受けることのない石のことである。この名称は、教会文学において、信仰と性格の堅固さで名高い多くの教父や教会の教師たちに与えられている。

教の教義を勇敢に擁護した。　彼らは度々、正教の信仰について長々と語り、聖像破壊派の皇帝に対して演説を行ったため、彼によって追放の判決を下された。　至福のミハイルは、まず弟子であり同志であるヨブと共に宮殿の牢獄に投獄され、そこで重い足枷を課された後、同じくヨブと共に、ある修道院（パヴシアド修道院）へ流刑に処された。　この間、聖人は多くの苦悩の涙を流した。苦難は彼の健康を損ない、体は猫背になったが、信仰の証人としての精神は揺るぎない強さを保ち続けた。その後、テオフィロスの死後、その妻であるテオドラ女王[8995] が息子ミカエルと共に即位し、聖像崇拝が最終的に承認され[8996] 、正統教義の擁護者たちが流刑先から帰還し、以前の職位に復帰すると、テオドラ女王は、正教の信仰を貫いたミカイルに対し、廃位された偶像破壊派の総主教ヨハネス・グラマティコス[8997] の後任として、コンスタンティノープル総主教の座に就くよう提案したが、彼はこれを辞退し、正教の著名な擁護者である聖メフォディオスが総主教に任命された。　一方、ミハイルはシンケラという位階にあり、コンスタンティノープルの大聖堂の管理を任されたことで、　で経験した過酷な試練からようやく安らぎを得た。彼は敬虔かつ神に喜ばれる生き方を貫き、85歳まで生き、安らかに主のもとへ旅立った[8998] 。

[8995] テオドラは849年から855年まで在位し、「酔っ払い」と呼ばれたミカイルは855年から867年まで在位した。

[8996] イコン崇敬の復活は842年のコンスタンティノープル公会議で決定され、この正教の勝利を記念して、当時、教会に特別な「正教の儀式」が制定された。この儀式は現在も、四旬節の最初の日曜日に執り行われている。

[8997] ヨハネス7世は、その学識から「グラマティコス」と呼ばれ、832年から842年まで総主教を務めた。

[8998] 聖ミハイル・シンケルは、845年頃12月18日に帰天した。コンスタンティノープルのパントクラトール修道院にある彼の聖遺物は、1342年にノヴゴロド出身のステファン、そして1420年に修道助祭ゾシマといったロシア人巡礼者たちによって目撃された。　聖ミハイル・シンケルにはいくつかの著作が残されており、その中でも最も優れたものは『信仰告白』である。その他の著作は、いくつかの賛辞や賛美歌であり、その中にはイコン崇拝の復活を訴えるものも含まれている。